光と影に咲き誇る英雄譚

トラソティス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超人社会。

光の脚光を浴び、世界に名を輝かせる。誰もが憧れる一つの職業、その名も「ヒーロー」

影に生まれて、影で散る。忍の定めは死ノ定――影で世を支え、誰も知られることなく、お伽話として生きて来た「忍」

光と影があってこそ、世の中は成り立つ。

汝、其れを忘れるなかれ

光と影が交差した刻、世界は変わり――少年少女は前へ進む。

光を浴び憧れた少年は何を目指すか――

影に浸り夢見た少女は何を目指すか――

泣いて、笑って、傷付き合って、其れでも他が為を想い惹かれ合う者たちは、ナニカの為に動き出す。

何が人を突き動かすか、何が人を変えるのか――

これは少年少女達が己のなりたい、成し遂げたい目標への道を突き進む、そんな夢のような光の証明。

光の証明に、影の存在あり――

光に焦がれ、望み羽ばたく少年少女達の物語に、影は在り。

この世界で何者でも無い者達は、光と影を知り、希望と絶望を見る。

希望は人々の心を救うか、絶望は理不尽か――少年少女達は、希望

か絶望か、まるでパンドラのようだ。
白と黒で彩られた世界に色が染まり、眠り続けていた歪を引き起こす。
希望で在り続けた少年を救う為に戦う少女――
日常を壊され、大切なモノを失った少年――
光と影、善と悪、人と妖の争いの火種が呼び覚ました新たな存在が全てを狂わせ、現実は壊れゆく。
新たな脅威が、少年少女達に矛を向き、奪われた希望を取り戻すべく、大いなる厄災と立ち向かう。
これは、この世界に私／僕達が居たという、影の存在。

??現在、裏ストーリー完全修復中。
故に閲覧注意に加え、非推奨。修復後、活動報告有。

※初期、文書力皆無、駄文。
現在成長中、読者の想いに応えて執筆を頑張っています。
裏ストーリー有り。
何かしらリクエストや質問があればどうぞ。

目次

プロローグ　始まり ―― 1
忍とヒーロー入門編
1話「飛鳥」 ―― 4
2話「雄英高校」 ―― 24
3話「戦闘訓練」 ―― 34
4話「まだまだ続くぞ！戦闘訓練!!」 ―― 48
5話「飛鳥とカエルの蛙吹梅雨」 ―― 67
6話「爆豪のスタートライン、そして不穏の幕上げ」 ―― 84
7話「蛇女の襲撃！」 ―― 94
8話「半蔵ＶＳ蛇女」 ―― 102
9話「飛鳥と緑谷の涙」 ―― 119
ＵＳＪ襲撃編
10話「宣戦布告、そして飯田くん頑張れ！」 ―― 139
11話「ＵＳＪ」 ―― 161
12話「ゲームスタート」 ―― 180
13話「敵（ヴィラン）との戦い」 ―― 195
14話「敵の脅威」 ―― 211
15話「ゲームオーバーｏｒコンティニュー」 ―― 233
16話「ヒーローリターンズ！」 ―― 266
17話「平和の象徴ＶＳ『対』平和の象徴」 ―― 286
18話「動け」 ―― 308
19話「各々の想い。そして…」 ―― 330
秘立蛇女子学園編

２０話「ＴＨＥ・紹介」―――――――

４４話「なりたい自分」995
４５話「決勝戦開始」1010
４６話「雄英体育祭終了」1028
学炎祭編
４７話「斑鳩と村雨」1051
４８話「学炎祭開始」1067
４９話「亀裂」1092
５０話「勝負」1094
５１話「恥じるな頑張れ叢！」1109
５２話「ＴＨＥ・お話ししましょう？」1124
５３話「二つで一つ、一つで二つ」1139
５４話「新・秘立蛇女子学園」1160
５５話「かっちゃん」1175
５６話「悪悪悪」1189
５７話「善善善」1209
５８話「雪泉　オリジン」1233
５９話「正義に輝く忍の少女たち」1257
６０話「焔の決意」1271
６１話「伊佐奈という支配者」1289
６２話「復讐に染まった姉妹」1311
６３話「復讐、終末の日」1335
６４話「ＴＨＥ・姉」1353
６５話「相性バカ」1370
６６話「ぶちかませ拳」1386
６７話「雅緋　オリジン」1402
1416

６８話「紅蓮の焔」――――――

９１話「善悪の語らい」 1935
林間合宿編
９２話「林間合宿・スタート！」 1963
９３話「洸汰くん」 1980
９４話「波乱の予感」 2000
９５話「グッドイブニング」 2030
９６話「黒佐波」 2049
９７話「守る盾と、壊す刀」 2074
９８話「やりたい事」 2101
９９話「ヒーローになれる」 2114
１００話「飛鳥・オリジン」 2136
１０１話「反撃・逆転」 2162
１０２話「救けるからね」 2180
１０３話「拳拳拳」 2195
１０４話「奇々怪々」 2222
１０５話「会敵」 2238
１０６話「決着」 2250
善悪頂上決戦編
１０７話「救ける、救けない」 2268
１０８話「動き出す運命」 2289
１０９話「バカばっか」 2310
１１０話「突入!!」 2323
１１１話「絶対正義は勝つ」 2349
１１２話「巨悪、起動」 2367
１１３話「オール・フォー・ワン」 2391

114話「掴め友の手」
115話「平和の象徴」
116話「負けないんだよ」
117話「残り火」
118話「次世代へ」
119話「終幕」
仮免取得編
120話「始まるぞ寮」
121話「部屋決めやろう」
122話「お部屋披露大会」
123話「圧縮訓練」
124話「一息吐く裏で」
125話「仮免試験」
126話「白熱、各々の実力！」
127話「君のこと」
128話「通過」
129話「二次試験」
130話「三つ巴」
131話「夜嵐イナサと千歳」
132話「挽回せよ」
133話「試験終了」
134話「合否その後に」
135話「自由を求めた開放」
136話「善と悪の師匠」
137話「喧嘩」

253 372 511 249 624 612 435 241 4
287 228 572 841 282 528 102 793 277 527 552 741 271 927 002 680 265 726 382 617 259 125 782 557

１３８話「意味のない戦い」 28
１３９話「喧嘩の結果」 99
蛇女躍進編
１４０話「喧嘩の後に…」 28
１４１話「飛来して来たモノ」 92
１４２話「正しく害獣」 91
１４３話「悪夢」 94
１４４話「禍魂」 29
１４５話「欠けてた記憶」 75
１４６話「お前は…」 29
１４７話「そして、深淵へ…」 56
１４８話「Ｒｅ：雅緋」 29
１４９話「ただいま」 42
１５０話「妖魔との終戦」 29
１５１話「原初」 52
インターン編
１５２話「インターン、始動！」 30
１５３話「無敵と対立」 00
１５４話「オーバーホール」 53
１５５話「新たな因縁を」 02
１５６話「後継者」 30
１５７話「事務所へ」 35
１５８話「雪泉ちゃん!!」 30
１５９話「個々の行動」 49
１６０話「芽生える因果」 30
１６１話「ヒーローの日」 63
１６２話「ヒーローの日２」 30
１６３話「ヒーローの日３」 74
１６４話「ヒーローの日４」 30
１６５話「ヒーローの日５」 31
１６６話「ヒーローの日６」 87
１６７話「ヒーローの日７」 31
１６８話「ヒーローの日８」 99
１６９話「ヒーローの日９」 32
１７０話「ヒーローの日１０」 12

１６１話「焦燥」――――――

186話「ルミリオン」――――557
187話「連合暗躍」――――583
188話「通形ミリオ」――――589
189話「追跡」――――593
190話「変身」――――602
191話「見えない希望」――――615
192話「救う人、救われる人」――――626
193話「救われる人の力」――――639
194話「無限∞」――――653
195話「善悪の恩情」――――665
196話「終了」――――680
197話「次は俺たちだ」――――694
198話「明るい未来を」――――709

焔紅蓮隊編

199話「初めての忍務」――――720
200話「妖魔の巣」――――737
201話「この私、美怜と…」――――753
202話「ベルゼ兄さん」――――766
203話「警告」――――778
204話「化け物は死ね」――――790
205話「穴の貉」――――805
206話「分かち合えないのよ」――――816
207話「守るために…」――――828
208話「謝罪と感謝と愛情と…」――――841
209話「それから日常へ…」――――861

２１０話「まさかの再開」 392
２１１話「交渉」 139
２１２話「紅蓮隊日常２」 033
真紅京都編 888
２１３話「そうだ、京都へ行こう」 937
２１４話「ＴＨＥ・新幹線」 493
２１５話「ＴＨＥ・新幹線２」 339
２１６話「奈楽を追う者」 396
２１７話「話が合わない」 783
２１８話「邪見」 978
２１９話「柳生と雲雀と、邪見心傷」 398
２２０話「まったりと温泉で」 933
２２１話「少女達の語らい」 400
２２２話「京都の夜」 184
２２３話「忍の支配者とは」 040
２２４話「かぐらとは」 404
２２５話「一旦、全部、絶望に、染めて」 064
２２６話「憑黄泉とは、私とは…」 083
２２７話「かぐらと、忍商会と、妖魔と…」 409
２２８話「日影と美怜」 441
２２９話「嘘月妄語」 254
２３０話「焔ＶＳ嘘月」 341
２３１話「暗雲」 243
２３２話「足手纏い」 415
２３３話「悠久の狭間」 634
２４２ 175
２４１ 192
２４０ 044
２３９ 120
２３８ 242
２３７ 212
２３６ 422

２３４話「ざわめく京都」――――――

プロローグ　始まり

現代社会は、『個性』という特殊能力を持つ人間が世界の人口約８割を占めている。
そのなかで『個性』を人の為に、正義の為に、救ける為に使う者。夢が現実となった憧れの職業「ヒーロー」。
逆に、力を悪用し、己の為に振るう者。「敵（ヴィラン）」。
これがこの社会の表側。そしてその裏には…今やおとぎ話と言われ人々の心から消え去ってしまった翳（かげ）の存在。Ｎｏ．１ヒーローしか知らない…闇で与えられた仕事を全うする、「忍」がいる。それは時代が変わろうとも、今も存在する…
表側と裏側。二つの大きな存在が交わり深く関わる物語が今、幕を上げる！
〝人は生まれながらに平等じゃない。〟それは、緑谷出久という少年が齢４歳で知った社会の現実。
〝忍びの運命（さだめ）は死の定め、そして命を賭けて仕事を全うしている〟…それは、忍びの善忍になると決めた、飛鳥という少女が知った、定めの現実。

緑谷出久はあれから高校生となり、今は…あのヒーロー育成最高機関である雄英高校に居るのである。
緑谷は４歳までには発達するという個性が出ないことから、無個性と呼ばれてた。
そしてアレから中学生となり、将来を考えて決める時期になった時だった。皆んなから、幼馴染である爆豪勝己、緑谷の渾名は「かっちゃん」とよばれる人から大きく見下されては馬鹿されてきた。
自分の体など分かっている…だけど諦めきれなかった、憧れのヒーロー、平和の象徴オールマイトみたいなカッコ良いヒーローになりたかった…
あのオールマイトとの出会いが、緑谷出久の人生が大きく変わった

のだ。『ワン・フォー・オール』という個性を手にし、受け継がれた緑谷は…なんだかんだと色々な事があり、オールマイトの出身校であった雄英高校に入る事が出来たのだ。
そして今…！
「行ってきます！」

場所は変わり、東京の港にて。
海の上を泳いでいる船は、そろそろ浅草が見える港えと到着しようとする。
「わあー！浅草が見えてきた!!」
活気盛んな声で叫ぶ少女の名は飛鳥。その少女は忍びであり、規律を守り、正義として振る舞う善忍である。しかし今の姿は、学生の白い制服であり、首には赤いスカーフを纏い付けている。
見た目はただの学生だが、これは忍びである。飛鳥はまるで懐かしい物を見るような目で見ている。
「そういえば…最近は全然此処には来てなかったからなぁ…どうなってるんだろ？」
そもそも飛鳥は忍びであり、表の社会の、現在の超人社会はあまり知らないのである。
忍びの任務が忍びの全て、そのため他のことは考えなくて良い…と。
飛鳥の祖父は半蔵という伝説の忍びである。そしてその孫である飛鳥は、半蔵の名に恥じない為に立派な忍びになるのである。
「じっちゃん…今頃元気にしてるかなぁ…？」
そう呟くと、そろそろ到着の様子だ。
そしてそんな飛鳥の後ろ姿を見ている、黒いセーラー服を着たもう一人の少女が居ることは、飛鳥自身知らないのである。

この社会は、この世界は一見通常に見えるし、まず日々平凡とした普通の日常なのかもしれない…だが、少年少女達の出会いが、大きく変わりだし、『今』動き出そうとしている。

ヒーローとは何か…敵（ヴィラン）とは何か？
正義とはなにか…悪とは何か？
二つの物語が一つとなり、始まる。

忍とヒーロー入門編

1話 「飛鳥」

曇りなき青空と、強い光の日差しが差し込む。そんな春の暖かい季節のなか、緑谷は学校へと向かっている。

電車の中ではほぼ満員で、やはり朝はキツい…しかしそれはいずれ毎日そうなることであり、慣れなければいけないのだ。

「毎日朝はこんな感じになるのか……ハァ…朝から疲れるなぁ…」

そんな独り言を言ってると、ケータイからふとニュースがやってる。

「ん？ 敵（ヴィラン）出現？」

この時間帯で敵（ヴィラン）が暴れてるらしい、何よりこの世代で敵が暴れるのもどうかという話だが…

この社会は今、オールマイトが存在してること事態で犯罪の抑止力となっている。

圧倒的な実力のヒーロー、平和の象徴。その男がそう呼ばれたのは最近のようで、昔の話…

そんな考えことをしてながら緑谷はニュースを見ていると…

「あれ、ヒーローが苦戦している…？ 状況？」

思わず声に漏らして呟いた。

時と場所は遡り

水上バスにてその少女、飛鳥が空を眺めていると…

「やあ、元気そうじゃないかい？」

不意に声が聞こえたので、後ろを振り返るとその女子は黒い髪を束ね、ポニーテールの格好をした褐色の女の子であった。

年齢的には飛鳥と同じであろう…

飛鳥はその女子の存在に気づくと、頬を真っ赤に染める。

「わあ！ あの、いえ…あっ！ すいません！ つい大声で…！ ここに来る

のは久しぶりなものでして…」
「ははは…！お前面白いヤツだな、まあいいさ…ところで君ももしかして修学旅行でここに？」
「い、いえ！私は久しぶりの学校の登校で、家の事情で離れちゃってたから！」
「ああ、そうだったのか…まあそれなら、また会えたら良いね」
「？」
（また？）
　飛鳥が首を傾げると、その女子は水上バスの扉を開け、なかに入り消えていった。

　水上バスは到着して、船から降りると…
「ふわあぁ～!!久しぶりに帰ってきたあぁ～！」
　飛鳥は満面な笑みを浮かべて走り出し、学校へと向かっていく。
　すると向こう側で何やら目線を感じる、その視線を向けてる主に振り向くと、頭が紫色のもぎもぎみたいなのが出来てる、小さな男が興奮しながら血走った目で見つめている。
　いや、アレは何か怖い以前に危険っぽさそうだ。だってその人の口からは、唾液が垂れてるもの…
「ひょーーー！あの子ヤベェ…！発育の暴力じゃねーか、オイラ今日入学の日にこんなの観れるなんて…ひょーー!!」
（いや、聞こえてるよ…）
　飛鳥はその低身長の少年に苦笑いをしながらも学校へと走っていく。

　国立半蔵学院、それが飛鳥の通ってる学校である。
　一見ごく普通の学校に見えるが、生徒の数が多いマンモス学校である。
　そしてそのなかに飛鳥を含めて忍学生は5人存在する。
　当然他の学生達は忍がいることも知らないし、まず存在そのものが秘密のため知られてない。

気を隠すなら学校を装い、そのなかに忍学生が訓練をしているのだ。
「ふう、なんとか間に合ったなー…」
そう言いながらも教室に入ると、他の四人と先生は既に教室に入っていた。
「あっ！飛鳥ちゃんだ、おかえりなさ～い！」
「雲雀ちゃん、ただいま！」
飛鳥におかえりと、元気で明るいまったりとした声の主は雲雀。一年生であり、髪はピンク色である。目は華眼という目でとても綺麗な目をしている。
「遅かったな…モグモグ」
スルメイカを食べている少女は、眼帯をして、白くて長いツインテールの髪型をしているのは、雲雀と同年齢である柳生。
「まあ、まだ時間に間に合っただけあって良いじゃねーか」
軽く気遣ってくれる活気盛んな姉貴派の三年生、葛城。
「いいえ、五分前には既に教室に入っていなければ…いくら忍務に当たってたとはいえ、ルールは守るべきです！」
きちんとした真面目な女子は、長髪がよく似合い、礼儀が正しい葛城と同年齢の斑鳩。
「飛鳥、戻ってきたか…」
何やら深刻そうな顔をしている、忍学科の先生、霧谷
「あ、あの～…どうしたんですか？」
飛鳥が神妙そうに尋ねると、霧谷は
「お前達五人で、直ちにパトロールに向かってほしい…最近妙な噂を聞く事件が起きてな…」
「妙な事件？」
「なんでもある忍が、他の者と関わり一般人を傷つけてることがあるそうだ」
「そ、それって…悪忍!?」
飛鳥が驚く様子で反応する。
悪忍　　それは善忍とは違う相反する反対の存在。規律を破

り、悪事を働き、忍務の為ならどんなこともしやらかすものだ。それに本来忍びは関係のない者に忍びのことを言うのは禁止されている。
　ましてやそれが善忍だろうと悪忍だろうと、上層部から命令が出されれば、即処分命令が出されるわけなのだが…
「いや、それは分からない…何しろ上層部や他の忍達も心当たりがないと言っている…何より情報が不十分だからな…」
　どうやら分からない様子であった。ただそれが噂に流されてるっていうことは、相当デカイ事件である。
「だからこそのパトロールだ…いいか、くれぐれも気をぬくな」
「「「「はい!!!!」」」」
　五人がそう返事をすると、すぐさま外に出る。
「それにしても一体誰がこんなことするんだろうなぁ…?」
「私にも分かりません…ただ、その話がもし本当だとしたら、一体なぜそんなことを…」
　葛城や斑鳩が考えていると、柳生が口を挟み出す。
「とにかく、ここは別れて探したほうが手っ取り早いんじゃないか?オレは雲雀と一緒に探す。もし何かあったら報せればいい…」
「柳生ちゃん…雲雀ちゃんとは一緒なのね…」（汗
　柳生のサラッとした発言を逃さななかった飛鳥は、顔に苦笑を浮かべる。
「んじゃあまた!」
　葛城がそう言うと、５人（柳生と雲雀はペアとなり）別れた。

「はぁ～…それにしてもこんな事件初めてだよ～…」
　飛鳥は独りで呟いてると…
「アレ?君は確か、水上バスにいた…」

「ん？あっ、あーーーー!!!あなたは！」
飛鳥に声を掛けたのは、前に水上バスに乗っていた黒髪のポニーテールの女子だった。
「また会えたね」
「う、うん!!まさか貴方もここに来てたなんて！」
「ははは！こっちは修学旅行で来ててね」
「そ、そうなんだ…それにしてもすごい偶然…あっ、そうだ貴方名前は…？」
飛鳥が尋ねるとその女子はこういった。
「…焔だ」
「そう、焔ちゃんって言うのね！あっ、私は飛鳥！普通に飛鳥って呼んでいいよ！」
飛鳥は嬉しそうに答えると、焔も笑みを浮かべた。
「そうか！ってあれ？そういえば君はここで何を…？」
「あっ!!え、え～っと…」
焔に問われた飛鳥は、汗を出しながらも何をどう言えばいいのかを考えている。
（あ～～…!!な、なんて言えば…そうだ！学校で少し料理学校がどーのこーのって言えば…！）
その時だった…

ドゴオオオオオオオオーーーーーーンン!!!!!

「え？」
「!?」
突然なる大爆発。
ついさっきまでは平凡で何ともなかったその街は、被害が出た。
一般人達は逃げ、もう一方は事件に集まっていく人たちも見えてい

る。
「と、とりあえず…行ってみよう！」
「あっ！飛鳥!!　わかった…」
　飛鳥は真剣な顔立ちで、焔は少し意外な顔をしていた。
（あの大爆発は…？もしかして悪忍が一般人に…？）
　胸騒ぎがする。それがもし本当なら最悪な状況だ。
　だがしかし、それは違った。

「え？何あれ!?」
　それは
「オラオラァ!!サッサトドケヨヒーロー共ォ！邪魔ナンダヨ！」
　黒い装甲を纏った凶暴なロボットであった。
　見るからに硬そうであり、赤い目らしきものは三つ。そして鼻や指先の爪はドリルになっている。
　そのロボットはもう片方の手で、小さな子供の体を掴んで誘拐している。
「お母さん!!だずげてよ!!怖いよ…！」
「…！華子!!」
　大量に溢れんばかりの涙を流す子供は、救けを求め、その親も号泣で走り向かいに行くが…
「お、落ち着いて下さい！」
　しかし警察に止められる。警察は他の人たちを包囲して、敵からの襲撃を守っている。
「離して！私の娘が…!!」
　そんな悲惨な状況を見てる二人は、顔に大きな黒い暗雲を浮かばせてた。
　正直焔も驚きを隠せてない。
（何…あれ……）
　飛鳥は心のなかで言いきかした。なぜならこんな状況を目の前で見るのは初めてなのだから…
（た、救けなきゃ…!!）

と思い、飛鳥は巻物を取り出すが…
(!!でも…これ、もし私が…)
もしここで忍として知られてしまったら、自分は忍の権利は愚か…退学か、最悪の場合は処分されることになる。
(だけど…あの子が…!!)
逆にもし自分が救けに、戦わなければ、あの子共は殺される。
しかし敵は興奮状態、人質に取ってる上に少しでも刺激を与えれば、あの子供は助からないし危険すぎる。
他のヒーロー達も黙ってはおられず、なんとか打開策を持とうと考えてみるが…
「オイ、ソコノヒーロー!!変ナコト考エテンジャネーダローナァ!?アアン!?ブッコロスゾコノガキヲ!!」

ウイィィーーーーーーーーーン!!

指先に付いたドリルの回る音が嫌に響き、人質の顔に近づかせると子供はさらに泣き出す。
「クソ!この状況解決できるの他に居ねえぞ!!シンリンカムイもいないし…!」
「応援が来るのを待つしかない!あの子には辛い思いをさせちゃってるが…ことが事だ、仕方がない!」
「必ず他のヒーローがやってくるから、待っててくれ!」

ヒーロー達は弱音を吐き、なんとかその場を解決する事を考えている。突然なる理不尽が、この場を襲い込んだ。
手も足も出ないヒーローは、ただ人質にされてる幼い、小さな少女を、見守ることしか出来なかった。
「……」
焔はそんな軟弱なヒーロー達を睨みつける。それだけでなく、この悲惨な状況に陥ってるにも関わらず、「頑張れヒーロー!」や「ヴィラン強くね?どーなんだろ〜」と他人事を呟いてる一般人達にもだ。

どうせ誰かが救けてくれる、そのうちきっとヒーローがやってくるから、まあ大丈夫だろ。
そんな考えを持つ者達に対して焔は怒りを露わにしているのだ。すると焔は、小声でこう言った。
「…『春花』、予定変更だ。その場を離れろ…今回は一時撤退だ。私は後でいく…」
焔はそう言うと通信を切った。隣にいる飛鳥は、人質の事が心配で焔のことは気づいてないようだ。
（クソッ…伝説の忍、半蔵の孫だと聞いてどんな者かと来てみれば…とんだ誤算だ…！）
焔はチッと舌打ちをして敵（ヴィラン）を睨む。元はと言えばあの敵がこんな事をしなければ…『忍務』を遂行出来たのだ。それをこんな身勝手な奴のせいで周りを巻き込むのに対し少々殺意を芽生えさせる。
（だいたいあんなヤツに何苦戦をしてるんだ…私ならもっとこう…）
この少女が一体何者かは置いといて…現在、飛鳥はずっと考えている。
自分が何をどうすれば、どうやってあの子を救け出せるのかと…見捨てたりなんて出来ないし、それにまず救けてあげたい事に精一杯だ。
（どうすれば…あの子を…あの子を救けてあげる事が出来るの…!?）
自分は忍だという事を世間にバレらしてはいけない、かといってこのまま何も出来ずにあの子が死んだらきっと…
（考えるんだ…考えるんだ…！決めたじゃない、私は忍の道を極めるまではって…!!なのに…なのに！）
何も救けてあげずに何が正義を語れる？それは自分が立派な善忍になっても、あの子を救けてあげられなかった事に大きな悔いが残る。
「そもそも…なんなの、コイツは…？」
「黒機械　ハードウェア　っていう敵（ヴィラン）らしいな……」

恐るおそる振り絞ると横にいた焔が口を開けた。
「え？知ってるの!?」
「知ってるも何も…しの…ゴホン!!　新聞とかに載ってるぞ、犯罪歴としてチヤホヤしてるヤツだ…」
「犯罪って、機械が…？」
「いや、アレは人さ、そう言った『能力』なんだろ？」
「の、能力？『個性』の事だよね？」

飛鳥は個性がない分忍びのため、個性なくとも強く、何より対人として身体を鍛えてるため、そういうのはあまりよく興味がなかったのだ。ハードウェアと呼ばれるヴィラン、あの機械の姿は個性が発現した、異形型の類に入る個性なのだろう。

「どうしよう…あの子このままじゃ…可哀想だよ……」
「……」

飛鳥の弱々しい声に、焔は無言で見つめている。
（さあ、伝説の忍び…半蔵の孫、どう出る？）
飛鳥が顔を上げて人質として取られてる小さな子供を見つめると…
「五月蝿エンダヨチビ!!!余リニ煩イト殺スゾ！」
「!!」
「う、うわあああーーーーーーーーーー!!!」

敵（ヴィラン）のハードウェアが怒鳴り声を出すと、小さな子供は更に泣き出した。
「もう…ダメだよ…そんな！」
飛鳥はやめてほしいという顔をすると、敵は子供を見て吐き捨てるように言った。

「モウイイヤ、コイツウルセェ、コロソ」

無慈悲な言葉が掛けられ、手の指先のドリルを回転させて子供に近づかせる。

次の瞬間。

小さな子供は涙を流した目で、飛鳥の方角に向かってこう言った。

「誰か…救けて……」

その時。

「!!!」

バッ!!

「え？」

「な!?」

「は？」

飛鳥は人混みを脱して飛び出た。敵と人質の子供の方角に。

「!!!」

その場にいた全員が驚いた。

「あ、飛鳥!?」

焔自身も驚きを隠せない様子だ、何よりも飛鳥の予想もしてない行動により…またヒーローたちは
「馬鹿野郎！何してんだ止まれとまれ!!」
ヒーロー達は必死に呼び止めようとするも、飛鳥は振り向こうとすらしない。ただ、今の彼女の頭の中では…
「はぁ…はぁ…！待ってて…ね!!」
困ってる人を救けることで精一杯だ。
「ナンダアノガキ!?」
「お、お姉さん?!」
敵（ヴィラン）の動きが止まるが、動揺して直ぐさまドリルを回転する。
「タダノガキノ分際デ！オレニ楯ツクンジャネエ!!ブッコロサレタイノカ！」
「今！救けるから待っててね!!」
「ナッ!?!」
「お、お姉ちゃん!!」
ハードウェアの脅しが全く効かない飛鳥にたじろいでしまう、むしろ人質は希望を見ているかのような目で飛鳥に眼差しを向ける。
「コンノガキィ……!!オレヲ無視シヤガッテ…ダッタラ今スグブッコロシテヤルヨ!!」
ハードウェアは回転してるドリルで飛鳥の頭目掛けて振り被るが…飛鳥は地面に転がるよう右横に回転して避けては立ち上がり子供にタッチ出来るところまでやってきた。
「もう、もう大丈夫だから!!ね！　ね！」
「お、お姉さん…どうして!?危ないのにどうして救けてくれたの!?」
「それはね…」
ある少年は、中学の時にこれと少し似た事件があった。ヘドロ事件として有名だった時の話…
その時の少年はこう言った。
そして今この少女もこう言った。

「君が救けを求める顔してた!!」

「!!!」

その子供は涙溢れていた。救けてくれるのが嬉しくて、どうしようもなくて…見ず知らずの人なのに、自分のように心配して、救けてくれる飛鳥のその姿に、涙を流してられずにはいられなかったからだ。

しかし、そんな彼女たちを殺意が許さなかった…

「イイ加減ニ…シヤガレエェーーーーー!!!!」

ウイィィーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!

殺意が具現化したかのように思わせるその悪意溢れるドリルが、人質の子供と飛鳥を殺そうと向けられた。

「大丈夫だからね…!絶対、あなただけは!!」

飛鳥は力ずくでその子供を回収し、守るように、包み込むように抱きしめて目を瞑った。

その時だった。

ドゴオオォォーーーーーーンン!!!

「!?」

「アァァッ!ナンダ!?」

敵の後ろに何かが降ってきた、その場の皆が視線を集める。もちろん敵も動きを止めている。するとその影はムクッと上半身を起き上がりこう言った。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡーーーーー!!　もう大丈夫!何故って!?」

その心強い声を聞いた敵は、ビクゥッと身体を震わせた。飛鳥は目

を開き、その人物を見つめる。その男は笑顔でこう言った。

「私が来た!!!!!」

その男の名は…

「オ、オールマイトォォーーーーー!!!!!」

観客の大勢は一気に歓声を挙げた。それを見た焔は…

「なぁっ!? チッ…クソが…邪魔が入った…私はここで引くとするか…」

焔はビュッ!とその場から姿を一瞬で消した。

「なんてこだと…少女達が…怖い思いをして、涙を流してる子もいるってのに…!!私は…!」

「ナ、ナナナ!!オ、オールマイトォ…!?ク、クソガァ!!」

その敵はオールマイトの表情を見ただけで後ずさり、怯えているものの、力ずくでも威勢を取り戻す。

敵は子供を人質として見せるか、それともオールマイトを迎え撃つか…敵は迷ったが後者を選んだ。

「覚悟シロヨ!!オールマイトォォ!!!」

敵がそう叫ぶと…

「デトロイト…」

拳を思いっきり握りしめて、壮絶なるスピードで一気に間合いに詰めて…

「ハ、ハヤィッ…!!!コン!n」

「スマーーーーーッシュ!!!!!」

ドオオオオオオオーーーーーーーンンン!!

機械の装甲が一気に破壊されたような音を出し、アッパーのように殴られた敵は一発でＫＯした。その敵は空に舞い、地面に打つと、もう既に意識を失っていた。
そしていつの間にかもう既に飛鳥と子供はオールマイトに救出されていた。オールマイトは皆んなに向けて、笑顔でガッツポーズをすると、更に歓声が挙げられた。

ウオオオーーーーーーーーーーー!!!!

その後敵は移動式牢（メイデン）で拘束され、速やかに警察に連行された。まあ当たり前だよね。
小さな子供は親を抱きしめてワンワン泣いた。怖くて、ましてや殺されそうになったのだ、泣いてられない方がおかしい…
一方、飛鳥は他のヒーローたちに怒られた。

「君が勝手な行動なんてしなくても良かったんだ!!」
「何でこんな無茶をするのかな君はぁ!!」
「ご、ゴメンナサイ…」

飛鳥はショボーンとした顔で頭を下げる。まあ確かに大人たちからすれば悪いことしたように見えてしまうが…飛鳥にとっては正しいことをしたまでだ。

何やかんやでヒーローたちに怒られて1時間が経った。
「ふわあぁ～…もう最悪…ひどい目にあっちゃった…」
ため息をしながらも帰ってると、ふとあることに気づいた。
「あっ!そういえば、焔ちゃん!!…」
だが気づいた時には彼女の姿はなかった。すると
「飛鳥さん!」
斑鳩の声がしたので振り返ると、四人が駆けつけてきてくれたの

だ。
「み、皆んなぁ…！」
皆んなが来てくれたことにホッとした。
「それで、そっちの方はどうだったの？」
飛鳥が尋ねると、四人とも首を横にふる
「いや、全然だ」
「全く手掛かりがつかめない」
「雲雀お腹減ったよぉ～…」
「引き続きパトロールを続行したほうが宜しいですね…」
どうやら四人ともその忍びとやらは見つけれなかったようだ。
「飛鳥の方はどうだったんだ？」
「ふえっ!?」
そう聞かれるとつい身体を震わせた。
（どうしよう…別の事件を言っちゃったらそれはそれでなんか…）
ハッキリ言ってまた変なことを言われてしまう。いや、変というより面倒くさいと言った方がハッキリしてるだろう…ここは取り敢えず…
「ううん、特には…何も……」
飛鳥はそう言った。
「そうですか…なら仕方ありませんわね、では引き続き調査に当たりましょう」
斑鳩がそういうと、葛城は面倒くさそうに「ちぇ～…」と小声で呟く。そして再び渋々と調査を続けるのである。
また一人となった飛鳥はため息をついた。
「ハァ～…でもその忍びの特徴くらい分かればなぁ…」
そんなことを考えてる時だった。
「お姉さん!!」

お姉さん、その声は聞き覚えのある声だった。振り返ると、そこには小さな子供と母親が飛鳥に駆けつけて来た。
「あ、あなたはあの時の…」
飛鳥が不思議そうな顔をすると…

バッ!!

「!?」

母親は頭を下げた。
「娘を…救って下さり、ありがとう御座います!!このお礼をなんと言えば良いか……私は、このことを一体なんてお礼をすればいいか…!」

母親は涙を流しながら飛鳥にお礼を言っている。
「い、いえ…!別に、私は……気にしないでください!無事で何よりですよ…!」
飛鳥は大丈夫そうな表情でそういうと、小さな子供がトコトコと飛鳥に近づいてこう言った。
「えっとね、お姉ちゃん…、あの時…救けてくれてありがとう!!私、嬉しかった!!救けにきてくれた時が嬉しかった!だから、ありがとう!!!」

「……」

ありがとう。

その単直な言葉が、何故か心に刺さったような感じがしてならなかった。
仲間とお互い助けあって言われた言葉ではあるし、聞きなれたような言葉であるのに…しかし何故か、どうしてもそれが嬉しくて、気持

ちが抑えられない…
　自分は忍びだ、与えられた忍務を全うするのが忍びの役目…出来ることは当たり前だし、まずそれが普通だと思う。けど…与えられた忍務でもないのに……
　だから飛鳥は、目からふと涙が零れ落ちてた。そんな飛鳥は満面な笑みでこう言った。
「いいえ…どういたしまして…!!」
　飛鳥はその小さな子供の頭を優しく撫でた。するとその子も満面な笑みを返した。
　ここからが全ての始まりであり、それと同時に…全ての戦いが始まる……

　ビルの屋上にて…
「それにしても、焔さん。なんで伝説の忍びの孫の飛鳥っちゅう女の調査…中断したんや?」
「邪魔が入ったんだ…仕方ないだろ、日影」
　その日影という女子は、蛇のような目つきをしており、全く感情というものがない。
「うふふ、それで、見た目ははどんな感じでしたの?焔ちゃん」
「期待はずれの忍だったよ…あいつは」
　満面な笑みを浮かべるその女性は、何か裏を感じており、ドス黒い感情を持たざるをえないような気がしてならない。
「まあいいわ…どのみちアタシ達のほうが上だということを分からせてやるんだから!」
　ゴスロリを着ては傘を持っている身長が少し小さい女子が得意げ

にそう語る。
「まあそれはそれとして、焔ちゃん…それで見つかった？忍びの存在を他者に知れ渡してる謎の忍とやらは？」
「いいや、それがまだ見つからないんだ…春花、その忍についての情報はまだ来ないのか？」
「ええ、まだ来ないわ…少し特徴くらい分かれば良いんだけど…」
ピンク色の衣装とリボンを纏い、白衣のコートを着てる女性。
春花が考え事をしてると、焔は…
「まあいいさ、それは焦らずとも直ぐに見つけ出すさ…とにかく今は半蔵の連中だろ？　お前ら、帰るぞ」
みんなに命令すると、皆んなは帰ろうとする。その時だった、春花は何やら街の角で異様な気を感じたのだ。
（ん？何かしら…？）
「どうした春花？」
「ああ、なんでもないわ焔ちゃん。先行ってて、私は少し後で」
「？分かった…」
焔は疑問な表情を出すと、すぐさま帰ろうとする。
春花は誰にも見つからないように、その異様な気を感じた街角を覗いてみた。
その光景は…
「えっ??!!」

ヒーローと、忍？らしきものが横たわっていて、その場は血の海で溢れている。ヒーローの数は四人、忍びも四人…計８人。
血の海と言ってもそこまで大げさのようには見えないが…倒れてる忍は見る限り悪忍に見える。
「な、何が…起きたの……コレ？」
（私も悪忍だけど、このケースは初めてね…）
驚きの表情を隠せない…それ故に忍が殺られるとなると、恐らく焔達の探してる謎の忍とやらだろうが…しかしその考えは否定される。
「う、うぅ…あぁ…！」

「！」
まだ意識があった、四人倒れてるうちの一人の忍がやっと目を開けて、息を切らしながらも立ち上がろうとする。春花はその悪忍に駆けつける。
「大丈夫!?どうしたの？何があったの?!」
そう聞くとその悪忍は、何か怖いものでもみるかのような顔でこう言った。
「に、逃げて……！はやく…　アイツに殺されそうになる……！斬られた時に、身体が動かなくなって……うぅぅッ！」
「大丈夫よ、私が蛇女子学園に連れていくから…それで、何があったの？もしかして例の謎の忍にやられたの？」
「い、いいや…ヤツは忍じゃない……！アンタも悪忍なら、恐らくヤツに狙われる…!!」
「ヤツ？」
そう言うとその悪忍は再び気を失った。
「一体…誰がこんなことを？」

ましてや忍びでない者がこんなことを出来るなど、今までにない出来事故に、初めて起きる現象だった。
（つまり、その犯人も忍の存在を知ってるってこと？ソイツ…一体何者なの？）
倒れてるヒーローと忍…そして春花を見下して眺めている者が一人いた。
その男は焔達といたビルとは違う、廃墟になったボロボロなビルの上でニヤリと笑っている。
「は、ハァ……力を悪戯に振りまく者も…そして、己のために力を振るおうとする者も…全ては、粛清対象だぁ…」
血に染み付いたナイフを、ペロリと舐めると…その男はこう言った。

「ヒーローや敵(ヴィラン)はさておき、まさか忍?とやらも粛清する対象になるとはな…だが、粛清する人間が如何にどれ程増えようと変わらない…俺を殺していいのはただ一人…」

目をギラリと開く。

「平和の象徴、オールマイトだあぁ…!!」

その男はそう言うと、違う建物の屋上へと飛びながら移動し立ち去った…

2話「雄英高校」

あれから時間が経ち、飛鳥たちはパトロールを終えると、学校に戻り霧谷先生に伝えるのであった。
「そうか…報告感謝する。引き続き忍務を続行してくれ。頼んだぞ」
「あ、あの～…霧夜先生！」
「どうした？飛鳥」
飛鳥の声に霧夜が反応すると、彼女は疑問な表情で質問する。
「そもそも、その忍が他の人へと言いふらしてたりしたら…世間では大変なことになってるんじゃないんですか？」
確かに忍という存在そのものが世間に知れ渡れたら、忍の存在に気付かれ、今頃社会そのものが問題になってるだろう。だが今のところそのような変化は起きていない…そのことから誰かの悪戯なのでは？との線も考えられる。
「確かにそうだな…今頃現代社会そのものがおかしくなっても仕方がない……だが今のところは上層部がそれを揉み消している。手っ取り早くその忍とやらを見つけなければなるまい…ソイツは不確かな情報故に神出鬼没のようでな、滅多に姿を現さないんだ。今のところはおいおい良いとするが…相手の目的が分からない以上危険するぎるからな……お前達も会えば直感で分かるはずだ」
「な、なるほど…」
飛鳥がそう頷くと、霧夜はまたふとある事を思い出したように口を開く。
「ああ、そうそう…お前達。それともう一つ重大なことがある。」
「？なんですか？」
「悪忍の四人が何者かにやられたそうだ…」
「!!???」
五人は一斉で驚きの様子を見せる。その悪忍とやらが誰だかは知らないが…
「やられたって、誰にですか？」
「今のところはまだ分からん…他の重傷者の意識が回復するまでな

…」
「……」
「ただ、事をやらかしたのは敵(ヴィラン)だそうだ」
「えっ!?!!」
　飛鳥がつい咄嗟に声を上げてしまう。前に飛鳥も敵とはあったし、つい声を上げてしまうのも仕方がない。
「それで、その敵は現在逃走中…お前達もやられるようなタマではないのは分かってはいるが…くれぐれも気をつけるようにな」
「はい!!」
　そう返事をすると…

「ああ、あとお前達…何度も呼び止めてすまないが…これは重要な話だ…よく聞け。お前達…『雄英高校』と共同してもらう」
「!!????」
!!突然なるその言葉が飛鳥たちに投げられた。
「なっ、ええっ!?ど、どうして?」
　葛城がたじろぐと、霧谷は話を続ける。
「本来ヒーローと忍びは表と裏で出来ている。本来なら学校を卒業したものしか知れ渡ることしか出来ないのだが…今回は事情が事情だ。さっき俺が言った謎の忍びについてのこともそうだが…やはり敵(ヴィラン)が忍に危害を加えた以上、上層部も黙ってはいられなくてな……現在ヒーローたちもその敵(ヴィラン)を追っているそうだ。安心しろ、向こうの学校側は承諾済みだ。あの半蔵様が頭を下げてたくらいだからな……」
「じ、じっちゃんが!!?」
　飛鳥のじっちゃんとは、祖父である伝説の忍び…半蔵である。その半蔵がその雄英高校で頭を下げるとなると、相当凄いところなのだろう…
「わ、分かりました…しかし柳生さんに雲雀さん、飛鳥さんならまだ分かりますが…私たちは三年生……その場合はどうされるのですか?」
　斑鳩の問いに、霧谷は

「そうだな…確かにお前たちには忍びの卒業試験のこともある……なら、飛鳥、雲雀、柳生は雄英高校と共同を。斑鳩と葛城はここで訓練を、それで良いか？」
「アタイは別に問題ないけど…ただ、飛鳥たちの胸を揉めれねえのが少し残念だなぁ…」
「もー！胸は良いってば葛姉!!って、私も柳生ちゃんたちと？」
「飛鳥、お前は一年のふりをしてくれ…そして雄英高校で共同を」
「分かりました…」
　こうして彼女たちは雄英高校に行くのであった。

　場所は変わり。
　雄英高校、休憩室――
「いやぁ…話を聞いてもらい有難うございますのぅ、校長」
「いやいや、伝説の忍が現在こうして生きてるんだ、それに半蔵の願い事にはむしろこっちも好都合だよ！」
　半蔵が嬉しそうにしてると、校長はグッドなポーズを取っている。校長の身体はとても小さく、犬なのか、ネズミなのか分からない外見をしている。毛の色は白。
「しかし校長、良いんですか？幾ら我々が良いとしても、生徒が…」
「ああ、その点については心配要らないよ相澤くん。そのことは雄英側の生徒たちにも言い付けるし、まず忍の事を他の人に漏らさなければ良いんだよ、まあ何がともあれ彼女たちの担任は君に任せるよ！1ーA組担任相澤くん！」
「クラスの名前まで言わなくても良いじゃないですか…まあ、分かりました……その代わり俺の指導は厳しくしますよ？」
　やる気のないような、目が死んでるような、合理性を求めると人間こうなってしまうのかという位に疑ってしまう教師、相澤がそう答えると、扉を開けて出て行った。
「……わしゃあ心配でなりませんなぁ…忍が世間でどう見られていくのかを…」
「上層部たちは企業秘密として忍の存在を隠しているからね。けど、

こうも事件が連なると、こうなって出てしまうのは仕方ないことさ」
「一刻も早く見つけなければのぉ…」
半蔵のため息に、お茶を淹れてたしなめる校長。
「それに、君の孫もここに来るんだろ？なら丁度良いじゃないか！」
「まあその点についてはワシもそう思っておる」
「なら今のところは問題は見受けられないね、大事なのは対策とこれからどう活動していくかが我々の課題かな」
校長がそう言うに対して頷く半蔵であった。

飛鳥たちは霧谷に言われた通り、
「ふわぁ…ここがその雄英高校なんだね、大きいね！雲雀、こんなに大きな学校だとは思わなかったよ！」
「そうだな…まあオレたちは霧谷先生の言われた通りにやれば良いだけだ…」
（ひ、雲雀があんな笑顔を…!!やはり雲雀は雲雀だな…）
「??柳生ちゃん、どうしたの？」
「！あ、ああなんでもない飛鳥…それで会議室って何処なんだ？」
「うーん…確かここのはず……」
門をくぐり中に入った飛鳥たちは、会議室を探している。この学校は無駄に広い故に色々な室内があってよく分からないのだ。
「えーっと、あっ!!此処かな？」
上の横札には『会議室』と書いてある。間違いないだろう…そこで話をするという段階なのだ。
「あの～…すいません！私たち半蔵学院の生徒たちなんですけど…」
すると会議室にいたのは、半蔵と校長、そして相澤と先ほど来たと思われるオールマイト（マッスルフォーム）の４人であった。
「おお！飛鳥か！」
「じっちゃん！やっぱり霧谷先生の言ってた通り、本当だったんだ！」

飛鳥が満面な笑みを浮かべると、半蔵は飛鳥の頭を優しく撫でる。
「ん？アレ？この少女何処かで…」
オールマイトは少女をみて首を傾げた。
「まあとにかく三人とも、そこのソファに腰掛けなよ！」
そう言うと三人は言われた通りに座る。すると雲雀は柳生の耳に近づき…
「ねえ、柳生ちゃん。あの人ネズミみたいだね？ネズミさんなのかな？」
「雲雀、一応この人は校長だ。もし聞こえたら失礼だぞ」
「いやものすごく聞こえてるからね？うん」
柳生と雲雀の会話を聞いてた校長は表情を変えずとも話し出す。何やら顔に影が浮かんでいるのが逆に怖いが…
「さて、君たちが此処に来てくれたのは嬉しいよ、学校側としても大きく感謝してるんだぜ。ところで、君たちのいう半蔵学院の先生から話は聞いたとは思うんだけど、此処に来なければならない理由は知ってるかい？」
「も、勿論です！」
飛鳥がそう返事をすると、校長はそれなら話は早いと、手をポンと叩く。
「では君たちは、この相澤先生が担当してるクラスにいけば良い。君たちが合同で行くには彼が適任してるからね、よろしくね相澤くん」
「分かりました校長…ではこちらの三名をクラスにおけば良いのですね？となるとA組のクラスだけ人数が…」
「大丈夫さ！確かにA組の生徒の数は二人多いが、君の合理性を信じてるからこそ頼んでるのさ、それに今回の事件についてだけ彼女たちは此処にいるんだからさ。問題ないよ」
すると相澤はしばし間を置き、「分かりました」と答えた。
（それにしても全員女子か…男子はいねえのか？）
相澤は心の中で疑問を思い浮かび言い聞かせるのであった。
「よ、宜しくお願いします！相澤…さん？」
「一応先生は付けろ、それにこの事は勿論秘密なわけだが…お前たち

もなるべく他の奴らとは関わらないようにしろよ…」
「は、はい…！」
「うわぁ…柳生ちゃん、霧谷先生とは違ってなんか暗くて厳しいね～…」
「雲雀、言うな。聞こえるぞ」
「……」
　柳生と雲雀のやりとりに、もはや言葉を失う相澤である。するとオールマイトは…
「ん？あっ、あぁぁーーーーー!!キミは確か、この前の誘拐事件の時にいた!!」
「!!??」
　オールマイトは突然飛鳥に人差し指を向けた。そして突然大声で叫び、指さされた飛鳥は体がビクりと反応し、背筋が一瞬ゾッとした。
「え、えぇ!?」
「どうしたんですオールマイト…あと煩いですよ」
（ていうかこの人なんで居るんだよ……つうか今更かよ）
「いやいや違うんだよ!!ホラ、前に敵が小さな子供を誘拐してた事件があってさ!!そんで…」
　オールマイトは、この間の事を話し出した。
「なるほど、既に会ってたんだね」
「え、あ、は…はい……」
「いや、オレたちは知らないぞ…お前がそんな事になってたのは」
「雲雀も～」
「私もだ!!」
「オールマイトは少し黙ってて下さい」
　柳生と雲雀は飛鳥にこの事を聞かされてなかったので、知らないのも無理はない。オールマイトは此処でボケて相澤に止められる。
「ご、ゴメンね皆んな…このこと言ってなくて……」
「まあ、もう過ぎた事だ…余り気にするな」
「雲雀は気にしてないよ～」
「ＨＡＨＡＨＡーーー!!随分と良い仲じゃないか!!」

「オールマイト、良い加減にして下さい」
「いやぁ、相澤くん！ゴメンごめん、私も女の子と喋りたくなっちゃってね!!ホラ、最近のガールズトークって何なのか、先生気になっちゃうしさ」
「……」
　オールマイトの言葉にまた言葉を失う相澤であった。そして、「貴方の場合は犯罪と勘違いされます」と心の中にその言葉をそっと閉まった。
（まあ…この子らとも一緒に訓練できりゃあ、ウチらも強くなるだろ…一応合理的とも言えるな）
　相澤はそう解釈すると、三人を直ちにクラスへと連れて行くのである。

　長い廊下を歩いていると、雲雀は小さな声で柳生に話しかける。
「ねえ、柳生ちゃん…」
「？どうした雲雀、トイレか？トイレなら一緒に連れてってやるぞ」
「いやトイレじゃなくて…　あのね、ヒーローと忍って何が違うの？」
　雲雀の突然の質問に柳生は少し考える、それを聞いてた飛鳥も実際問われるとよく分からない…まあ忍びのことは知っててもヒーローの事など考えた事もないから仕方ないといえば仕方ない…すると相澤がふと口を開く。
「ヒーローとは、常にピンチを乗り越えてくもの……違いと言ってもそれは活動だけだ…ヒーローは人を救けるのが常に仕事、災害救助、事故、それと身勝手なヴィラン達…そんな理不尽から人を救うのがヒーロー…一方忍びは、影に隠れながら活動する事だ…決して人の目には触れてはいけない仕事があるからな……まあそれだけではないが、お前達はこの社会を影で支える側だ…」
「な、なるほど……」

相澤の長い説明に飛鳥はそう言うが…雲雀は首を傾げたまんまである。
「まあぶっちゃけ言えば変わらないのは…『規律を守る』と『命懸け』というところだな…」
「！」
言われてみれば確かにと思う。悪忍は規律を守らないが、善忍は規律を重んじて、守る。
命懸けは、忍はいつどんな忍務でさえも、命を賭けてまでやらないと出来ない事だってある。それはヒーローも同じなのだ。
「アンタらにゃああの生徒達と一緒に強くなってもらう…この事件は社会にはバレてないが、一刻も早く見つけ出さんと…どうなるか分からん」
謎の忍に、忍すら危害を与える人物…一体何者なのだろうか…
話していると、1ーAと書いてある扉がある。というより扉がでかい…
「まあとっとと入るぞ」
ガララと音が鳴ると、教室の生徒達は一瞬で静まり返った、そして…
「はいお前ら待たせたな…さっき話した通り、お世話になる生徒達を紹介する…入れ」
「ふぇっ？あ、は、はい！」
飛鳥がたじろぐと、クラスの中の少しの男子は…
ウオォォーーー!!
と声を上げる。特にあの紫色でもぎもぎの頭をした男と、金髪の男がそうだ。
「ひょーー！あの子オイラ知ってんぜ!!前に会った子だ!!」
峰田が言ってるのは飛鳥の事である。
「はぁ!?峰田まじかお前！羨ましいコンチクショー!!」
「お前ら除籍処分にされたいか？本気で…」
「……」
そして相澤の睨む眼光によって一気に沈黙と化した。

「え、えーっと…いつまで一緒に居られるか分からないけど…あ、飛鳥です…宜しくお願いします～…」
「柳生だ…」
「雲雀だよ！皆んな宜しくね～！」
ウワァァァァァーーー!!!
またもや歓喜の声が上がる。
「おいおい、女のパレードじゃねえか…!!なあ緑谷!!」
「ええ!?／／な、なんで僕?!」
「オイ峰田、良い加減にしろよ？大事な時間が無駄になる…」
「あっ、スイマセン…」
峰田が謝罪するとその三人は席に座る事になる。蛙吹の後ろが飛鳥の席で、雲雀は爆豪の後ろ、柳生は八百万の後ろになる。
まず飛鳥は…
「宜しくね！えと…」
「蛙吹梅雨よ、梅雨ちゃんと呼んで」
「え、あっ！うん！宜しくね梅雨ちゃん!!」
雲雀は…
「宜しくね～！前の人！」
「アァ!?気安く喋りかけんじゃねえよ殺すぞ!!」
「ふえええぇーーーーん!!!酷いよ!!」
柳生は…
「オイ、雲雀を泣かせたのは貴様か…首を出せ、切る…」
「お、落ち着いて下さいまし柳生さん!!」
なぜか峰田は血走った目で緑谷を睨みつける。
「オイ、緑谷…そこ代われ、今すぐ…速攻で!!!」
「えぇ!?な、な、なんで!?というより峰田くん、目！目！目が怖いから!!」
他にも…
「何か分からないことがあったら僕に聞くんだ！飛鳥くん!!」
「くん!?!さんじゃなくて!?」
飯田の真面目さに驚く飛鳥。

緑谷は泣いてる雲雀を慰めてる。
「だ、大丈夫？雲雀さん…？」
「ふえぇ～…もう嫌だよ～…!!」
「うーわ、爆豪女の子泣かした～…サイテー」
「ハァ!?勝手にコイツが泣いたんだろーが！つか耳野郎は黙ってろ！」
耳郎の挑発に切れる爆豪。
「オイ、貴様…雲雀に謝ることも出来ないのか？」
「だ、だから待ってください!!」
「オイラを襲ってくれ柳生!!」
「お前は帰れ」
「……」
柳生を止めてる八百万の間に、峰田が入り込むと軽く流されショックを受ける峰田であった。
ワイワイガヤガヤしてる教室の中で、ただ一人相澤は思った。
（マジで面倒くせぇ…）

3話「戦闘訓練」

飛鳥たちが入る前の1ーAたちは、体力テストが終わり教室で待機してる時のことだった。

「えーお前ら…早速だが、今日は入学もあって転校者もくる…つってもまあ一時的だがな…」

「「「エエエエーーーーーーー!!???」」」

突然たる相澤先生の宣言に、皆は驚く。普通は入学式と一緒にするはずなのだが、雄英高校ではそんなもの要らないようだ。気になった瀬呂は相澤に質問をする。

「つっても…一時的って、ソイツ等誰なんです?」

「忍だ」

「……はい?……」

相澤の即答に、皆んなは一瞬固まった。

忍…忍…シノビ!?

いやいや可笑しいでしょ!!え?なに、まだエッジショットなら分かるよ!?Ｎｏ．５ヒーローのね?

生徒でしょ?つまり同級生…それってかなり不味くね?つか忍ってそもそも存在するのか?と皆がざわめきだす。まあ今回ざわめくのも無理はない…何しろ忍だなんて言われて混乱するだろう…すると峰田は真剣な顔つきで相澤に質問する。

「先生!ソイツ等はくノ一ですか?」

「お前は何を期待してるんだ…」

「男のロマンです」

「いや知らねえよ」

峰田はヨダレを垂らしながら血走った目で興奮している。いやもう危険だ…隔離しておいた方が身の安全である。

「本来忍の存在は上層部、あるいはプロヒーロー達にしか知られてないことだ…企業秘密だからな…だからこのことは決して他言するな…いいな?もしお前達の仕業だと分かったら……除籍処分なんてレベルじゃ済まねえぞ?」

「!!!」
相澤の重い言葉にゾッとする皆んなは静まり返る。
「まあとりあえず今日すぐに紹介する…向こうで話もあるし、お前等は待っててくれ…それじゃあ」
ガララ!と扉が開くと、皆んなは一斉にして騒ぎ出す。
「うおぉーー!!まじでか!誰なんだろうな?誰なんだろうな!?緑谷!!」
「え?あ、う、う～ん?想像できないな?」
「お前なんか巨乳好きそうだろ」
「!?／／／そ、そんなことないよ!それに峰田くんヨダレ!ヨダレ!!」
「緑谷、これは涎じゃねえ、男の喜びに満ち溢れた結晶d」
「うん、涎だね」
峰田は論外として他の者はどうであろうか…
「フッ…まさか初日で転校者が来るとはな…」
鴉のような外見をした生徒、常闇がそう呟くと、前の席の瀬呂も身を乗り出す。
「けど忍って、聞いたことねえよな?エッジショットのようなのとは違う感じなわけだし…そもそも秘密にしろって、あっ…なんかバレちゃいけねー感じのこととかあるからか?」
「ぶっちゃけ聞いたことはありませんが、それほど重要な人物が来るということは、何かしら事件みたいなものが関わってるのでしょうか?」
八百万も難しい表情を浮かべながら考えていると、扉が開いた。

んで現在放課後。今日は入学式のため、特にこれといった授業は明日からなわけだが…
三人もどうやら授業を受けるらしく、教材などは先生達から支給してくれるようだ。
クラスでまだ三人の話をしてる者が、多々見える。
「それにしても飛鳥に雲雀に柳生か!お前ら忍なんだろ?普段は何

やってんだ？」
「ええっ!?え、えーっとそれは…」
「やめなよ瀬呂、忍だから言えない秘密とかあるし…それに対応に困るじゃん」
「あ、そ、そっか…確かに耳郎の言う通りだな。スマねぇ飛鳥」
「あっ、う、ううん！良いの別に、気にしないで！」
　飛鳥が微笑むと、峰田は目から涙を流して迫ってきてる。
「やべぇ、やべぇよあの子！いや、あの三人！女子とは思えねえほどバカでかい胸してるぞ！なあ上鳴!!」
「た、確かに!!この世とは思えねえ…忍ってみんな巨乳なのか？」
「オイラヒーロー科より忍学科ってところに行きゃあ良かった」
「いやいや、忍学科なんて普通にねえだろ」
「分かんねえじゃねえか!!もしかしたら存在してるかもしれねえじゃねえか!!あー！あの子達の胸を独占してえ！てかオイラのもぎもぎより大きいんじゃねーか？いや、バレーボールやバスケットボールよりも…！ヤオヨロッパイよりも!!!」
「峰田、アンタもう危険よ…？」
「五月蠅えちっぱいは黙ってろ」
「はぁ?!?!?」
　峰田のエロ危険度に呆れてた耳郎が言うと峰田が反論して、逆鱗に触れた耳郎は怒りでもはや怖いだなんてレベルじゃない。
「あはははは!!なんか皆んな面白いね～～!!」
「あはは！確かに雲雀ちゃんの言う通り、なんか好きだ私！」
　雲雀の楽しそうな満面な笑みを見たお茶子も楽しそうな表情を浮かべる。
　一方盛り上がってる方とは反対に、常に冷静な者もいる。柳生、轟、常闇は互いに意見は交わさず、沈黙の雰囲気が続くのである。口田は「……」
　あれは三人とは違うが、あまり話すタイプではないのだろう…
「アレ？そういえば爆豪のヤツは？」
　切島が爆豪を探してると、緑谷が

「かっちゃんはもう先に帰ったよ」
「ちぇー、なんだよ、アイツ乗り気じゃねーなぁ…」
　爆豪が居ないと知った切島は楽しくなさそうに呟く。
「爆豪？爆豪ってあの怖い人？雲雀ただ挨拶しただけなのになんであんな風に言われたんだろ…」
　雲雀は完全に悪くないが、爆豪の性格上仕方ない。逆に「うん！宜しく！」なんて言ったらそれはそれで怖い…
「うーむ、爆豪くんは人とのコミュニケーションはあまり得意ではないようだな…！コミュニケーションも大事だというのに、彼の言動は危なっかしいところがある！」
「な、なんか思ったけど…飯田くんって…斑鳩さんに似てるほど大真面目だよね…」
「んん、誰だい？ぼ…、俺に似てる人がいるのかい？是非とも聞きたい飛鳥くん！」
「く、くん!?本当に大真面目するぎるよこの人…」
　初めてくんって言われる飛鳥は慣れないのか、なんだか少し難しい顔をする。
「まあとにかく俺たちもアンタらが忍だってことはバラさねーし、まずこの中にそんなこというやつなんざ居ねえよ！だから、宜しくな三人共!!」
　男気溢れる切島は三人に声を掛けると、三人は嬉しそうな顔をしてくれた、いや…柳生はそうでもないが…
「うん！ありがとう！えっと、切島くん！」
「おう！」
　そんな二人の微笑ましいやり取りを、峰田がジッと見つめている…
「オイ、切島…なんでテメェがカッコいいこと言ってんだーー!!カッコつけてんじゃねぇーーー!!」
　峰田が叫ぶと切島は首を傾げて「なんのことだ？」という表情を浮かべる。
　緑谷は保健室に行き、リカバリーガールに治癒を施してもらった。

リカバリーガールとは、雄英高校の医者でありながらヒーローでもある。体力テストが終わり、指を怪我してしまったため、治療を受けたのだが、リカバリーガールの個性で回復は出来たものの、治癒力の活性化のため、体力を消費してしまった。

現在下校中。

「はぁ～…1日からどっと疲れが……」

「やあ、緑谷くん。怪我の方はどうだい？」

「あっ！飯田くん!!」

飯田が緑谷の方へと駆け寄り話しかけてきた。

「ぼ、僕は全然大丈夫だよ！ほら、リカバリーガールに治癒で治してもらったし！」

「そうか、それなら良かった…しかし今日は色々驚かされたよ…教師が除籍処分で脅し、結局騙されてたことと、例の三人についてもだ」

「あ、ああ…確かに…！」

そもそも今まで忍だなんて存在は知らなかったのに、急に忍は存在するなどと言われた挙句、証明すらされた…今日一番に驚かされたのがそこだ。

まあ本当に忍？と思ってしまうような子もいるが…

二人が話し合ってると…

「あっ！お二人さん駅まで？待って～！」

「あー！真面目な…ええっと飯田くんと、もう一人の男子の人だ!!」

後ろからお茶子と飛鳥が駆け寄って走ってきた。

「君は確か…飛鳥くんと∞女子！」

「無限女子!?」

お茶子は個性把握テストのソフトボール投げで記録が∞（無限）といった新記録を達し一位をとった女子である。

「えーっと、君は確か飯田くんと…デクくん!!」

「デク!?」

「あれ？違うの？」

お茶子は首を傾げると緑谷は自分のちゃんとした名前と、なぜデクとなったのかを話した。

「ええー!!蔑称で付けられてたの?酷いよ…爆豪くんって人…」
飛鳥は緑谷を可哀想な目で見てる。
「ゴメンねデ…出久くん!」
「麗日さん??」
完全にデクといいかけたお茶子であった。
「で、でも…デクッて…なんか頑張れって感じで、なんか好きだ私!!」
お茶子が輝かしい笑顔でガッツポーズをすると、緑谷の顔は真っ赤に染まった。
「デクです!!///」
「「緑谷くん!?」」
緑谷は顔を手で覆い隠すようにする。
「……あっ」
飛鳥はふと思ったことがあった。
これが、これが忍じゃない普通の人が送る、日常っていう生活なんだと。
忍は常にいつ死ぬか分からない世界、日常なんてものは忍びにとっては生ぬるいもの…だが、飛鳥はここに来て初めて、日常というものを知った。
皆んなと笑って笑顔で、確かに仲間たちとはそんな感じで話し合っていた。
けど、それはあくまで忍であり…実際それ以外の人とは関わりがなかったのだ…だから飛鳥は今
「なんだか、嬉しいな…」
ポツリと、皆んなに聞こえない声でそう呟いた。
緑谷も…今まで皆んなからは無個性だと馬鹿にされて生きてきた…皆んなからは見下された目で見られてた。だから、初めて…こうして笑い合うことが出来た。
それが緑谷はとても嬉しいのだ。
(オールマイト…友達ができたことくらいは…喜んで良いですよね!)
翌日。

朝の授業は終えて、昼はランチラッシュが作る高級メニューを、安価でたべれることが出来る。
そして午後の授業はヒーロー科の授業。
「わーたーしーがー!!」
「きっ!!」
バアーーン!と勢いよく扉が開く。
「ドアから普通にきーたー!!!」
オールマイトが豪快の笑みで教室に入ってくる。
「オールマイトだあぁ!!スッゲェ!!シルバーエイジのコスチュームだ!!!」
皆んなが盛り上がると、オールマイトはプラスチックに書いてあるカードを取り出した。
「今日君らがやって行うのは…!戦闘訓練!!!」
「戦闘訓練!」
爆豪は席に立ち上がり、血が喚くような顔でウズウズしている。飛鳥、柳生、雲雀のこの三人は半蔵学院で日々戦闘訓練を行っているためそこまで実感は沸かない…が、忍びの実践と、ヒーローとは何が違うのかは確かめたかった。
こうしてヒーロー科の生徒たちは更衣室に行き、それぞれ自分で考え志望したコスチュームに着替える。
飛鳥たちは勿論女子更衣室で着替えるのだが…
「忍!転・身!!」
三人は忍転身で着替えることにする。ヒーローでいえばコスチューム。忍びでいえば忍装束だ。
飛鳥はブレザーの姿になり、柳生は黒い制服を纏う。雲雀はピンクのブルマだ。
「うわあ!!すごい三人とも一瞬で着替えちゃった!!」
お茶子はものすごく目を光らせている。
「え、えへへ…／／まあ、こう見えても忍びですから!」
「良いなぁ〜!!すごく便利じゃん!しかも巻物て、本当に忍びだ〜!

凄い！」
「アレは一体何で出来てるのでしょうか…？」
芦戸は感心してる中、八百万は首を傾げる。
「チャクラだ…チャクラを使って忍転身をしてるんだ」
八百万の疑問の声が聞こえた柳生は教えてくれた。
チャクラとは、忍びが持つ精神エネルギーであり、それを具現化して忍装束を纏うことが出来る。忍装束は、防御力も高いのである。
「な、なんかカッコいい!!」
ブンブンと腕を振るわす葉隠。そもそも彼女は透明人間だ…個性のため仕方ないのだが…
「けど、皆んなの忍転し…コスチュームもカッコいいよ！」
「えへへ／／なんか飛鳥ちゃんと一緒にいると元気が出てくるよ…！」
「！　ありがとうお茶子ちゃん!!」
お茶子と飛鳥はお互いえへへと笑顔で返す。
「そろそろ時間よ…ケロ」
蛙吹が皆に言うと、更衣室から出たのである。

「さア！有精卵共ォ!!始めようじゃないか!!君たち最っっ高にカッコいいぜ!!!」
オールマイトは少年少女を見渡して大声をかける。皆んなもお互いのコスチュームを見あって話し始める。
「あー！デクくん足に地ついた感じ？カッコいい!!」
「あっ、麗日さ…ってうおぉぉーー!!?／／／」
お茶子のコスチュームを見て顔が赤くなる緑谷。
「私のパツパツスーツんなった…恥ずかしいや…／／」
（や、ヤベェーー!!麗日さん…!!）
緑谷はお茶子に直視出来ず、つい目を逸らしてしまう。それにしても最近の女子は凄いな…
「ヒーロー科最高!!」
「え、ええ!?」

峰田は恥じらうお茶子を見て緑谷に向けて親指を立てる。今度はお茶子だけでなく、飛鳥たち三人も見ると。
「なあ緑谷…お前あの三人の中どっちが好みだ？」
「え？」
「はぁ～…だーかーらー！どっちが好みかって聞いてんだ!!オイラは全員と言いたいな！あの飛鳥って子はスタイルも性格も程よい…もはや理想の女の子だろう…一方雲雀は純粋すぎるし…いやもう可愛すぎるし!!あの柳生ってヤツは何故か眼帯をつけてる故に危険だが…まあスタイルは悪くない……ああ!!よりどりみどりだぜ!!」
「峰田ちゃん、捕まるわよ？」
峰田に冷たい声で言う蛙吹。
「おおー！やっぱお前らも派手でカッコいいなあ!!」
熱くなる切島。
「僕のはカッコいいという次元を超えてるよ～!!」
キラキラと自己アピールする青山。
「さあそろそろ始めるぞ!!まず今回の授業についてだが…」
「先生！その前にペアはどうするのでしょうか?!」
手をあげ白いアーマーを着ている、見た目では分からないが声で分かった、飯田である。
「…ブッとばしても良いんですか？」
不機嫌な爆豪
「相澤先生みたいな除籍処分とかはあるんですか？」
心配するお茶子
「実技訓練とはどのようなことをするんですか？」
八百万百
「雲雀、痛いの嫌だよ怖いもん!!だから暴力とか受けたくない!!」
純粋な雲雀
「このマントやばくない？☆」
キラキラ青山
「うう～んん!!聖徳太子ぃ～～！」
拳を強く握りしめ、冷や汗をかくオールマイトは一気に説明する。

まずペアはクジで引いてもらう。もし余りが出た場合は最後にもう一回誰とあたるかクジを引き、訓練を行ってもらう。
戦闘は屋内戦闘で、２つのチームに分かれて戦う仕組みになる。
「ヴィラン」チームは核を守りきり、「ヒーロー」チームは核の回収、または捕縛テープで相手を捕縛する。
時間切れは敵チームの勝ち。
核の回収、または敵チーム全員を捕縛すればヒーローチームの勝利になる。
他の人たちはビルの地下のモニター室で観測することになっている。
またヒーローも敵もお互い建物の見取り図を所持すること。
そして戦闘の場合、度が過ぎたら中断とする。
制限時間は１５分。
「と、いうわけで!!今からクジ引いて貰うよ!!」
ペア決めのため、クジを引いて貰うことにする。
「皆んな決まったな!よし、余ったのは飛鳥くんか!!ＨＡＨＡＨＡーー!!では君はゆっくり皆んなの実践を見てるといい!」
「はい!」
「えへへ、雲雀は柳生ちゃんとペアだね!宜しくね!!」
「カハっ!　ひ、雲雀と一緒になれるとは…!!」
雲雀と柳生は同じペアになれたらしい、その上柳生は嬉しさのあまり鼻から血を流している。オールマイトは引き続きそれぞれ戦うチームを発表する
「えー、まずは…Ａコンビがヒーローチーム!!そしてＤコンビが敵（ヴィラン）チーム!!」
Ａコンビ　緑谷出久＆麗日お茶子
Ｄコンビ　爆豪勝己＆飯田天哉
「!」
緑谷と爆豪はとっさに顔を合わした。
「デクぅ……!!!!」

爆豪は物凄い目で睨みつける。
「っ…」
緑谷は爆豪の目つきについ目を逸らしてしまう…緑谷と爆豪は昔ながらの幼馴染だが、個性がないと分かった時の爆豪はそこから性格が悪くなっていき、いつしか見下し馬鹿にされるようになったのだ。
「あっ、緑谷くん…」
そんななか、飛鳥は緑谷と爆豪の背中を後ろで見ていた。事情は昨日の帰りに少し聞いた。苦手意識があるのも仕方がない…
(緑谷くん…困ってる…助けてあげなきゃ可哀想だよ…ね?)
飛鳥は心配していたが、緑谷は負けまいと言わんばかりに睨み返す。
「!」
緑谷に睨まれた爆豪は、少し反応が意外だったのか、少したじろぐ。
「本当にテメェはぁ…ムカつくなぁオイ……」
爆豪は怒りを噛み殺しながら低い声で唸ると、飯田と同じペアであるため指定された建物のなかに入っていく。
「はぁ〜…苦手意識が…もうこれ本当にクセになっちゃってる……」
「大丈夫?」
ポンと肩に手を置く飛鳥を見て緑谷は「うおぉー!?///」と大きな反応をしてしまう。
「うわぁ! ビックリした〜…そんなに驚いた?」
「あっ、いや別に…!」
突然の声掛けに驚いたというのもあると思うが、やはり女子に話しかけられるのは滅多にないためつい驚く反応をしてしまう。
「それにしても、爆豪くんってヤケに緑谷くんにつっかかるというか…態度が悪いよね…」
「……た、確かに…かっちゃんは性格悪いし…正直苦手だし嫌だけど……でも凄いんだ」
緑谷はふと爆豪に色んなことを言われたことを思い出した。

『テメェに何が出来るんだ？』
『雄英受けるな、ナードくん…！』
『クソナードがぁ！俺はテメェに助けられてねえ！あぁ!?救けも求めてねぇ…見下すなよ俺を！クソナードがぁぁ!!!』

「僕よりもずっと強いし、目標も、個性も…とにかく凄いんだ…だから…！」
色々あった…でも、だからこそ。
「負けたくないなって…思って」
「緑谷くん…」
緑谷のことを見てて思ったことがある、自分はこの人と似てるって。周りや仲間は自分より強い、もっともっと強いから、負けたくない気持ちがある。だから多分似てるんだと思う。
「その気持ち、わかるよ緑谷くん…頑張ってね!!応援してるよ！」
「あ、飛鳥さ…うおぉぉーーー!!／／／／」
嬉しくてつい大声を出してしまう緑谷であった。

場所は変わり、敵チームの爆豪&飯田ペアは…
「なあオイ眼鏡!!デクは…個性があるんだよなぁ？」
「め、メガネて…!!　君が何を言ってるか分からんが、昨日見ただろう、体力テスト。　何故か個性を使用したら怪我してしまうといった変わった個性を持ってはいるが……」
「……」
爆豪はしばし黙り込んだ後、緑谷が爆豪に今まで無個性だと騙してたと勘違いしてしまう。
（この俺を…騙してたのか……!!）
「クソナードがあぁ!!」
一層怒りを奮発させる爆豪であった。

モニター室では…

「さあ有精卵共!!しっかりと見ておくんだぞ!!」
オールマイトはモニターを見ながらペンと紙を持っている。
(緑谷少年、授業の採点は差別なく厳しくするからな…!!)
今のオールマイトは雄英の教師として勤めている。まあそもそも命に関わる危険なことはさせない為、そこについては大丈夫だろうが……
モニター室では向こう側の声は聞こえなく、また音声はオールマイトのみに繋がっている。
(緑谷くん…頑張って…!)
飛鳥は心の中で応援をしていると。
「うお!スゲェ緑谷のやつ!爆豪に背負い技かませたぞ!!」
「うわっ!緑谷のヤツ個性使わずして入試一位と渡り合ってる!何者だアイツ!?」
モニター室では緑谷と爆豪が戦ってるシーンであり、今まさに逃げ出したところだ。何やら爆豪はイラついてる様子だ。
「何イラついてんだあいつ?怖えー…」
「雲雀、あの人不良みたいに見える…」
まあ事実将来有望不良少年だから仕方がない…
一方…
「おっ、麗日のヤツは核フロアに着いたな!」
「あー、飯田に見つかっちゃったぁ~…まあでもここからどうするのかが見物だね!」
どうやら二手に分かれて勝負をするそうだ。まあ元はと言えば爆豪が勝手に飛び出したせいだからこうなるのは必然なのだろう…
「あっ!爆豪のやつ緑谷を見つけたようだ!!」
切島が吠えるが、しかし何やら様子がおかしい。さっきの爆豪の様子なら怒りで直ぐにでも殴りかかりに来るハズだが……爆豪は右腕の籠手を緑谷に向けた。
次の瞬間、オールマイトの表情が一気に強張った。
「ストップだ爆豪少年!!」
「ん?」

皆んなは疑問な表情を浮かべるが…次の瞬間、皆んなは動揺することになる…

「爆豪少年!!緑谷少年を殺す気か!!??」

「えっ!?」

ドガアアアアアーーーーーーーーンン!!!!

爆豪が放った爆発で、モニター室が少し揺れる。建物には風穴が空いてる。

「み、緑谷くん!?」

「授業だぞコレ!!」

飛鳥と切島は大きく動揺し、慌てふためく。心配と焦りの気持ちでいっぱいだ。

「緑谷少年!!大丈夫か!?」

オールマイトが耳につけてる回線から、爆豪の声が聞こえた。

『個性使えよデク…!!!!俺は全力のテメェを、ねじ伏せる!!!』

爆豪勝己　個性『爆破』掌からニトロのような汗を流して爆破させる、汗が溜まれば溜まるほど威力も増して強くなる。その威力は絶大。

４話「まだまだ続くぞ！戦闘訓練!!」

爆発が起きた後、皆んなの表情は焦りと不安でいっぱいになる。なかには雲雀なんかはウルウルと涙目になってる。青山はビクッ！と体を震えてる…

「緑谷少年!!」

オールマイトはマイクを持って必死に緑谷の名前を呼んでいる。

戦闘訓練、ましてや授業なのにも関わらず大規模な被害…これは流石に危険だ。建物に風穴を開け、モニター室にすら振動が来るほど巨大な攻撃…生身で当たったら無事では済まないだろう…

大爆発が起きた同時刻、５階の核フロアにいる飯田とお茶子は

「な、なんだ!?今の爆発…爆豪くんは何をやらかしたんだ!!?」

今の状況が理解できないためか、で焦っている飯田の隙を突こうとお茶子は

（今だ！）

思いっきり核のほうへと走っていく。それに気付いた飯田は

「待て！そうはさせんぞ！」

両腕を広げて立ちふさがるが、お茶子は自分の体にタッチして体を浮かせる。

「ほいっ！」

「なっ!?まさか自身も浮かせれるのか!!」

予想外の出来事で一瞬戸惑う飯田にお茶子は両手の指先をふれて解除させる。

「負担の大きい超秘です！」

（核さえタッチすればこっちの勝ち！貰った）

次の瞬間

ブロロロロォォォーーン!!

エンジンの起動、飯田は猛スピードで核をなんとか避難させて守りきった。
「なーーーーーーー!?うわっ！」
お茶子もこれは予想外なのか、着地できず転んで頭を壁にぶつける、そしてヘルメットが取れて転がっていく。
「君の個性は大体分かった!!個性、そして弱点さえ見極めれば此方は有利な立場となる！だからこのまま時間切れまで粘らせてもらうぜ！グへへへ～！」
完全に悪になりきっている飯田。
「ぬうぅ～…！デクくん頑張ってるのに…！こんな所で…！」
悔しそうに歯を食いしばり、飯田を見つめるお茶子であった。さて、これからどうしようか…策も何もないお茶子は、この状況をどうすれば良いか、苦悩する。

一方、爆豪と緑谷は、被害が出たビルの中でただ、睨み合っていた。爆豪の強さに、ただただ恐怖を植え付けられる緑谷、それに対してまだねじ伏せんと言わんばかりに、歪んだ不敵な笑みを浮かべ此方に一歩ずつ近づいて来る爆豪。
「ははは…なぁ、スッゲェだろコレ？コスチュームの要望で、ここまで派手に個性が使えるんだぜ??なあデク、個性使ってこいよ…！全力のテメェをねじ伏せてやるからよぉ!!」
被害が大きく出て、緑谷の顔のマスクがなくなっている。どうやら

さっき爆豪が使った最大火力の爆破によるものだろう。緑谷はすぐに冷静さを取り戻す
「麗日さん！状況は!?」
「こんな時に無視かよスッゲェな…!!」
緑谷の対応に気にくわなかった爆豪は怒りを通りこし、逆に感心している。
爆豪は残ってる左手を使おうとする。

「先生！コレやべぇって!!爆豪のやつ相当イカれてやがる!!この授業死人が出るぞ!?」
「こ、これって…ほ、本当に戦闘訓練なんだよね…？授業…何だよね？流石にこれはやり過ぎじゃ…」

オールマイトにこの戦いを止めさせようとする切島、未だこの状況が信じられない飛鳥。そう、これは戦闘訓練とはいえ授業の一環なのだ、今回はかなり危険な行為だったため心配するのも、止めに入るのも当然無理もない。何よりあの爆豪の攻撃はとてもじゃないが危険すぎる。
本当ならここで中断をするべきなのだが、オールマイトはマイクを握り、中断をしない。

「……爆豪少年、次それ打ったら強制終了として君たちの負けとする」
「ハァ!?」

オールマイトの突然な宣言に納得しない爆豪は、更に苛立ち反応する。

どうやら音声はオールマイトにしか聞こえないようになっているらしい、そのためなのか、モニター越しでは緑谷、お茶子、飯田は反応しない。

「建物にすら被害を及ぼすのはヒーロー側としても、ヴィラン側としても愚策だ!!大幅減点だからなコレは!!」

爆豪がさっきの爆破を使ったため、建物に穴が空いてる。
真に賢しい敵(ヴィラン)は建物(闇)に潜むものだ、隠れるところがなくなれば意味がない。
ますます気に入らないのか爆豪は苛立ちながら
「…ーーー!あーもー!んじゃあ…」
爆豪は両手を後ろにかまえて
「殴り合いだ!!」
大きく叫ぶ爆豪は両手を爆発させてスピードを加速、そして真正面から向かってくる。
緑谷は反撃のタイミングを計った。
「タイミング…タイミング…!ここ!」
緑谷は拳を向けるが爆豪にあたることはなかった、なぜなら目の前にいないから。
爆豪は右手を下にむけて爆破させて、上へとジャンプしたのだ。
からのもう片方の左手で自分の反対の方に爆破させてからのさっきの右手で緑谷に思いっきり

ボオオオォーーーン!!

「っつあ!!」
爆破させ、悲鳴をあげる緑谷。
「すげー!どうなってんだ!?アレ!」
モニター室で興奮する切島に
「目くらまし」

そこでつぶやいたのはコスチュームのせいか、左側が氷みたいなもので覆い隠されてる男、轟が答えた。
「攻撃するフリをして上へとジャンプしてから反対に爆破させて威力を高めてからの攻撃…考えねえタイプに見えて意外と繊細だな」
解説していると、相変わらずポニーテールが似合う八百万も話し出す。
「それだけではありません、機動力や力を微量に調整してますわ。それはかなりの技術が必要とされますね。計算に技量も重ね、思いつきでもそう簡単に出来るものではありませんから」
「さすがは八百万だな！」
丁寧に解説している八百万に親指を立ててほめる峰田。
「でもアレ痛そう…爆豪くんのあの爆破って、当たると火傷するのかな？」
「するんだろうな？受けたことないから分からないが」
雲雀の僅かな疑問に柳生も少し首を傾げる。
「才能マンだ才能マン…やだやだ…」
上鳴は爆豪のセンスに呆れて、思わず声に出して呟く。
「けどよ上鳴！凄くね？」
と、ツンツンとした髪が特徴的で男熱さを感じさせる切島はモニターに映ってる爆豪を見つめ、興奮し、モニターに指差す。
「ほらよデク!!テメェの大好きな、いつもの右の大ぶり!!」
爆豪は思いっきり右手で緑谷に殴りかかる。
「ぐっ!!」
またもや悲鳴をあげてしまう緑谷。
爆豪の手は、手榴弾をモチーフにしているグローブ。爆発にも耐える硬さで出来てるため普通に殴るよりも痛いのだ。そのため緑谷にダメージが増したのだ。
「うわぁ…痛そうだよ柳生ちゃん…!!」
「大丈夫か雲雀、見たくないなら無理に見なくても良いんだぞ…」
柳生は雲雀の頭を優しく撫でる。雲雀は純粋故に、幼い子供じみた部分がある。そんな子に喧嘩を見せても恐怖でしかない。爆豪なら

尚更だ。もし自分もあんなことされたらなんて考えただけで、雲雀にとってはトラウマレベルだ。
（緑谷くん……！）
飛鳥はそっと、やられっぱなしで、立ち向かう彼に対し、じっとを見守るのであった。

「テメェは俺より下だ!!!」
爆豪は先ほど緑谷が彼に背負い投げをやったように、思いっきり緑谷を地面に叩きつける。
背中を思いっきり打ったため、更に苦痛を感じ、背中の骨が打撲し悲鳴をあげる。
「ぐっ、あっっ！うぅっ……！」
近づく爆豪に緑谷は思わず逃げてしまう。
「緑くん、逃げてるよアレ！」
「男のするような事じゃねえけど…仕方ねーぜ…爆豪相手なら尚更…」
モニター室でおどろく芦戸、仕方ない顔をする切島。
「リンチだよ！テープ巻きつければ勝ちなのに！」
「それが出来れば緑谷はこんなことになっていない…あの爆豪というヤツの実力が本物だからこそ、より強いからこそこの状況になってるんだ」
「ヒーローの所業にあらず…」
それぞれ皆ザワザワとした空間でつぶやく。今この状況を見て批判されても仕方がないであろう。何にせよ、ヒーローがヴィランに向けて背中を見せるのは、最もヒーローとして遠い姿であり、爆豪は緑谷に対する対抗心の余り、やり過ぎなんて言葉に言い表せないような暴走を見せている。
「緑谷もスゲェって思ったけどよ…戦闘能力において爆豪は間違いなく、センスの塊だぜ」

「アイツは正直、正義なのか悪なのか見分けがつかない男だな……そこまでして何故あの緑谷とやらをそこまで…」
爆豪の考えが分からなく、考えている柳生。
だが

「しかし、変だよな」

今度は不思議そうな顔をする切島。

「オイどうしたデク?!?!
なんで個性を使わねえ?いい加減にしやがれ!俺を舐めてんのか!?ああ?!」
緑谷は壁に追い詰められ、一歩ずつ近づくたびに苛立つ爆豪。
「ガキの頃からずっとそうやって!!」
緑谷は首を横に振り
「ちがうよ…かっちゃん…」
否定する緑谷。
「俺を舐めてたんかテメェはァ!!!!」
(本当ならここで止めるべき!だが…止めてあげたくない…なぜなら)
熱き魂を震わせる二人の少年の闘いに、震えるオールマイト。
「君が…凄い人だから勝ちたいんじゃないか!」
涙を浮かべる緑谷

「勝って!超えたいんじゃないかバカヤロー!!!!!」

「そのツラやめろやクソナード!!!!!」

怒りぶつけ合う緑谷と爆豪。

「爆豪の方が余裕なくね？」

ポツリとつぶやく切島。皆んなはいっしか静まり緑谷と爆豪の戦いに釘付けになっている。

（「ヒーローになる」以外に初めて見せる激情!!）

オールマイトは心のなかで言い聞かせる。

（きっと君の見据える未来に、これは必須なんだろう!?）

心で緑谷にそう言い聞かせて、緑谷と爆豪の戦いを見守る。それは…

飛鳥も同じであった。

（緑谷くんの、あの表情…初めて見る…！）

今まで見てきたのは、地味っぽくて、大人しくて、優しくて、時々オドオドして…でも、今はとても男らしくて、熱意がある。

（頑張れ…!!!）

飛鳥の心の叫び。

「ＤＥＴＲＯＩＴ…」

緑谷の右腕の袖はバッとやぶけて

ボボボボボボボ!!!

爆破を重ねながら右腕で殴りかかる爆豪

「先生！ヤバそうだってコレ!!」

止める切島、さすがの危険を感じたのかオールマイトは震えながらマイクを握り

「双方…中止」

言いかけた瞬間

「麗日さん行くぞ!!」

「！」

突然の緑谷の声におどろくオールマイト

「はい！」

「？」

柱にくっつく麗日をみて首をかしげる飯田。

（タイマンじゃ、まだ到底かなわない…）

お互い右腕をむけて、しかし

（でも!!）

「ＳＭＡＳＨ!!!」

緑谷の叫び。

ボーーーーーーン!!!

緑谷は爆豪の本気をもろに食らったが、爆豪は緑谷の拳が当たることはなかった。

緑谷は上へと方向を変えて天井に穴をあける

ボゴオオォーーーーン!!!

その威力は５階の核のあるフロアにまでとどいた。すると、お茶子がくっついてた柱の地面は壊れ、コンクリートの柱を無重力にして持ち上げた。

「ごめんね！即興必殺！彗星ホームラン!!」

コンクリートの柱を野球のバットのように振り、壊れた地面の破片を飯田目掛けて打った。

一振りで何個ものコンクリの破片が飯田に襲いかかる。

「ホームランじゃなくないか!?それ以前にこれは……やり過ぎではないかあぁぁぁ!?!」

と身を守りながらツッコミを入れる飯田、すると
ぴょん！っと音がして
「回収ーー!!」
お茶子は核に飛び込みくっついた。
「あーーーーー!!!核ーーーーー!!!」
大きな声をあげる飯田、それは下の1階のフロア、緑谷と爆豪にも声が届いた。

爆豪はパラパラと穴の空いた天井から破片が降ってくるのを見つめてワナワナと震えながら、憤る気持ちを腹の底から振り絞る。
「デク…テメェ…やっぱハナっから舐めてたんじゃねーかテメェは…!!」
「使わない…つもりだったんだよ……これ、本当は人に使っちゃいけないんだ……だって、使ったら、死人が出ちゃうし……」
弱々しい声で反論する緑谷の右腕は腫れ上がっていた。見てるだけで痛々しい、ボロボロなんて言葉で表せるものではなかった。
そして左腕で爆豪の攻撃を防いだためか火傷を負っている。
「力の調整ができなくて…それで…相澤先生にも言われてたんだけど…勝つのは…これしか思いつかなかった…」
「……!!」
驚愕する爆豪
緑谷は倒れた。

「ヒーロー…」
爆豪は膝を地面につけて
「ヒーローチーム！ウィーーーーーン!!」
オールマイトは大きく叫ぶ。

緑谷チームの勝利、そして
爆豪チームの敗北
その時か、初めて緑谷は爆豪に勝った。

モニター室では皆その観戦をみて
「スッゲェ、勝ったチームがボロボロで…負けたチームは無傷だ…」
モニターに映ってるのは倒れてる緑谷の前に地面に膝をつけた爆豪。一方お茶子は酔ってるのか、思いっきり手を口に抑えてそれを飯田がお茶子の背中をさすってる。
「試合に勝って、勝負に負けたというところか」
常闇はそう言うと
「つまり、ルールで言えば勝ってるが、勝負では負けたということ…だな…」
柳生は納得したようにうなずく。
「み、緑谷くん…大丈夫かな…??」
(緑谷くんの戦い…凄かったな……なんか熱い感じが伝わって…でも、大丈夫だよ…ね?)
緑谷の腕と、爆豪の爆破を食らった怪我を心配する飛鳥。
「どちらにせよ、戦闘訓練としてはよく頑張ったさ!」
とオールマイトは緑谷チームと爆豪チームに向かう。
「はぁ…はぁ…」
息切れしてる爆豪は自分の右手をみて
(右手、デクは俺が右手をだすことを読んでた上でやったんだ…俺は本気をだしても…じゃあ、じゃあ…!ということは)
考えれば考えるほど自分に絶望が襲いかかってくる。

（俺！デクに!!完全に!!!）

ポン！

「！」

「爆豪少年！考えるのはひとまずやめてまずはモニター室に戻ろう」

爆豪の肩に手を置いたのはオールマイトだった。

「まあ、勝ったにせよ負けたにせよ…経験ってのは活きるもんなんだぜ!!」

「……」

緑谷は搬送用ロボのハンソーロボに保健室へと運ばれた。

緑谷を除いて全員がモニター室に集まった。

「まあ、と言っても今回もっとも良かったのは飯田くんだけどな！」

「なっ！」

驚きと嬉しさが混じった声で飯田はなぜ？と言わんばかりの顔をする。

「勝った緑谷ちゃんとお茶子ちゃんじゃないの？」

と首をかしげるカエルの女の子

「さて何でっかなー!?わかる人！」

「はい、オールマイト先生」

そこで手を挙げたのは八百万だ

「まず爆豪さんは飯田さんとは協力しずに独断先行…さらに屋内における大きな被害。協調性も悪いゆえに自分勝手の行動。もし多対一の戦闘となった場合、圧倒的に不利となり、守るものや目的も達成出来ません。普通は仲間同士で作戦を立てるのが常識です。緑谷さんも同様。動きは良かったものの最後の攻撃は大きく愚策…本番の場合、核だけでなく人質がいれば死人が出ます。守るべきヒーローが壊し、殺してどうするのです？そして麗日さんの場合は中盤からの気の緩み、そして最後の核に対する派手な行動…もしあれがハリボテの核だと扱っていなければそんなこと出来ませんわ、それはヒーロー側も

なるべく避けたい行動。一方飯田さんは状況を整理してから自分がどう立ち回ればいいのかを把握し、相手に対する対策もあったからこそ飯田さんは最後の対応に遅れた。」
まだ下を向いてる爆豪、お茶子は申し訳なさそうな顔をして飯田は嬉しそうな顔をしている。
「……」
モニター室が静かになった。
「……う、うん！八百万くんの言うとおり！大体全部正解だよ!!ま、まあ飯田くんも堅いところはあるがね！うん！」
（うわ！思った以上に言われた！というか全部持ってかれたよ！）
オールマイトは独特な笑みを浮かべて
「常にトップヒーローを目指すものとして当然ですわ!!」
エッヘンと言わんばかりの顔立ち
八百万百　推薦入学者一位
「……」
顔を黒めて下をみる爆豪。

「おい爆豪」
爆豪を呼んだのは柳生だった。
「……あぁ…？」
爆豪は顔は上げてはないが、静かに反応する。
「お前が何をもってヤケに緑谷につっかかってるのかオレには分からない…こんな後にはあまり言いたくはないが、この時だからこそ言わせてもらうぞ…」
「……何だよ……」
柳生は真剣な顔でこう言った。
「ヒーロー、やめたほうが良いぞ」
「「!?!」」

柳生の突然な大胆なる言葉に皆は驚く。
「ちょっ、柳生ちゃんどうしたの!?喧嘩はやめなよ！」
「飛鳥、これは喧嘩ではない…むしろこれは爆豪の為でもある」
飛鳥が止めに入ろうとするが、柳生はそれを制する。
「確かにお前の戦いとしては良かったかもしれない…だがチーム、仲間と連携を取れないはおろか、仲間のことをちゃんと大切に思わないお前はいずれ命懸けの戦いになった時に死ぬぞ……それに、あの時のお前は何処か歪んでた…その歪んだ気持ちのまま進んでいくのは危険だ……いずれ戦いで命を堕とす危険性だってある」
柳生の言ってることは最もだった。柳生の言うあの時とは、爆豪が緑谷に巨大爆発を食らわせた時だった。
その時の爆豪の表情は、一言で言えば歪んでた。その歪んだ表情には、何処か危険性があったのだ。
「相澤先生が言ってた、ヒーローは常に命懸けと…そこはオレたち忍びも同じだ。だからだ、だからこそ命とは大切にするものだ。これ以上大切な命を失わない為にも……」
爆豪に話していると、ふとある記憶が柳生の脳裏に浮かんだ。
それは病院のベッドの上で小さな女の子が治療を受けながらも、それでも…その子は命を落とし、息を引き取った。そんな残酷な思い出を……

「っ……!!」
柳生はふと我に帰ると、片方の手で頭を押さえる。
「だ、大丈夫!?」「おい、どうした柳生大丈夫か!?!」
葉隠と切島は急に様子が変わった柳生を見て心配する。
「あ、ああ…大丈夫だ。問題ない…」
直ぐに元の様子に戻ると、柳生は自分に一切目もくれない爆豪に背中を向けた。
「お前は強いんだ…だから自分のことをちゃんと考えろ」
柳生はそう言うとオールマイトの目の前にやって来た。
「オールマイト…すまない、少し話が長くなった。続けてくれ」

「えっ？　あ、あっ！　えっと、うん…え～～っと、そ、そだね…」
（いやいや！今空気凄く重たいんだけど!!そんな状況で、「始めるよ～！」なんて言えないし!!柳生くんは空気の重さは気にしないのか!!!全く、とんだ凄い子だな！）
　オールマイトは内心突っ込んでは感心してる。
（まあ…柳生くんはしっかりとヒーローとは何か、忍とは何かのことはちゃんと学んでるようだな…！）
　ニカッと笑みを浮かべながらオールマイトは引き続きチーム決めを続行する。

「さて！気を取り直して次はBコンビがヒーローチーム！そしてIコンビが敵（ヴィラン）チームだ!!」
　屋内にて
　敵チームは
「尾白くん！私本気出すわ！手袋もブーツを脱ぐわ！」
「う、うん…そっか！」
（葉隠さん、透明人間としては正しい選択だけど…精神的にこれはヤバイ状況だぞ）
　太くて筋肉のある尻尾をもつ尾白猿夫
　そして透明人間の葉隠通
「あっ、見ないでね！」
「いや、見えないし」
　恥ずかしそうな声をする葉隠にツッコミを入れる尾白。
　開始時間になったため、ヒーローチームも敵チームも動き始める。
　ヒーロチームは
「行くか轟」
「…おう」
　障子目蔵と轟が動き出す。
　屋内に入ると
「ふん…！」
　障子は腕からさらに腕を生やして耳と口を複製させる。

「北側に４階、素足で降りてきてる…伏兵として捉えるようだ…５階の方は核フロア、守備として守ってるな」
障子目蔵『個性』複製腕　腕を複製させて体の部位をも複製させることが出来る。また、複製できるものには制限がある。
「外でてろ、危ねえから…向こうがどういうつもりだろうが…」
するとパキパキ…と凍結の音が聞こえる。
障子は外に出ると建物が氷で覆われる。
「俺には関係ねえ」
「いってて～…」
素足を凍らされた葉隠は動くことが出来ない。
轟は５階の核フロアについた。
「…!!」
当然尾白も動くことが出来ない
「…動かねえ方が良いぞ？足の皮剥がれちゃろくに満足に戦えねえぞ？」
フッと不敵な笑みを見せる轟、こうなってしまった以上尾白も動くことが出来ない。
モニター室でも影響があったらしく皆は震えている。
「さ、寒いよ～……！何あの人…強そう！」
ブルブルと体を震わす飛鳥、その横でウトウトする蛙吹。さすがのオールマイトもこの寒さは効くらしい。
「核や仲間にダメージを与えず、敵を弱体化させる…」
「最強じゃねえか!!」
身を震わすオールマイトと切島は叫んだ。
「ひ、雲雀寒い……ホットなココアを飲みたいよ……風邪ひいちゃう…！」
寒そうに体を震わす雲雀を見て柳生は鼻の下を伸ばしながら自分の上着を雲雀に被せてくっつく。
「ひ、雲雀～…もう大丈夫だぞ、オレが、オレが雲雀の体を温めてやるからな～…ア、アハハハ～……」
「柳生ちゃん？なんか怖いよ??」

「先ほどまでの柳生とは思えんほどの変わりっぷりだな……」
隣の常闇はポツリと呟く。
轟は核にタッチする
「ヒーローチームＷｉｎ！」
またもやオールマイトの叫び
「悪いな」
と轟はそう言うと今度は一気に暖かい空気になった。水蒸気、そして温度が上がってく。
「これは…熱?!」
尾白は早く気づいた。
葉隠は
「アツアツ…！氷の次は…熱って！」
氷は熱で溶かされ、熱い水となって建物の中は熱い水になっている。
轟焦凍　『個性』半冷半燃　　左側から炎、右側から氷が出る。ちなみに範囲も限度も未知数、フレイザードと呼んではいけない。
ちなみに推薦入学者二位。
「……」
爆豪は歯ぎしりしながらまた、挫折を。

時間は大分経ち…
雲雀、柳生のコンビと飛鳥を除き、皆は戦闘訓練を終えた。
「よーし！それじゃあ最後は飛鳥くんだが、コンビが居なかったね！クジを引いて貰おうか！」
「は、はい！」
飛鳥はクジを引いた、飛鳥と当たるのは…
「飛鳥と蛙吹梅雨がコンビだ!!」
「なるほど、分かりました！えっと、梅雨ちゃん、宜しくね？」
「ええ、宜しくね飛鳥ちゃん」
飛鳥は梅雨ちゃんになぜか触ろうとしないが、それでも友達のため余り嫌そうな顔はしていない。

「アレ？飛鳥ちゃん、梅雨ちゃんを少し避けてるみたいだね？」
「ん？　ああ、成る程…そう言うことか」
雲雀は首を傾げたまんまだが、柳生は納得したように頷く。
「さて次のコンビは～…！これだ!!」
Ｋコンビ　柳生＆雲雀　敵チーム
Ｌコンビ　飛鳥＆蛙吹梅雨　ヒーローチーム

「では君たちも所定の位置へ!!」
オールマイトは飛鳥たちにビルを指定していかせる。そこは問題ないのだが…さっきから飛鳥がソワソワしてる様子だ…その様子に気付いた蛙吹は首を傾げて質問する。
「ねえ、飛鳥ちゃん。さっきからソワソワしてるけどどうしたの？」
「ふええっ!?あっ、な、何でもないよ!!気にしないで!!」
「ケロ？そう…」
飛鳥は慌てて質問に答える…が、やはり何処か様子がおかしい。
柳生たちは建物の中に入り核のあるフロアへとたどり着く。
「さて雲雀、オレたちはこの核を守る訳だが…油断は禁物だぞ」
「うん…それはそうなんだけど…飛鳥ちゃんなんか元気ないように見えるんだ…大丈夫かな？」
「大丈夫…とは言えないな…飛鳥は」
「えっ？どういうこと？」
雲雀は柳生の言ってることが分からないので、質問すると、逆に柳生は少し意外な顔になる。
「雲雀、もしかして知らないのか？」
「う、うん…」
「飛鳥はな…」

外
「ケロ…本当に大丈夫？お腹が痛いんじゃないかしら？」
「だ、だだ大丈夫だよ!!気にしないで…良いからね…？」
飛鳥は大丈夫だよと伝えるが…

「いいえ、気にしない訳にはいかないわ…だって同じコンビなんだもの。何か困ったことがあって助け合うのが仲間よ。無理にとは言わないけど、教えてくれるかしら？」

蛙吹は飛鳥のために心配する、やはり同じコンビを組む以上、お互いのことを知り合うのも大事だ。蛙吹の正論に負けたのか、飛鳥はなぜそんなにも元気がないのかを話し出す。

「あ、あのね…梅雨ちゃん。わ、私、さっき梅雨ちゃんの戦闘訓練の見てようやく気付いたから敢えて後には言いたくなかったんだけど…」

「??」

「わ、私…」

「カエルが苦手なの!!!」

「ケロ!?」

5話「飛鳥とカエルの蛙吹梅雨」

「私、カエルが嫌いなの!!!」
「ケロ!?」
　飛鳥の苦手なもの、それがカエルと知った蛙吹は初めて驚きの様子を見せた。蛙吹は本来、あまり感情を表に出さないのだが…今回、飛鳥がカエルが嫌いと聞いて、驚くのも無理はない。何故なら、蛙吹もカエルと似たようなものだからだ。

　モニター室では、オールマイトも冷や汗を流してる。
(うう～ん…まさか飛鳥くんの苦手なものがカエルだとは……まあ先ほどの戦闘訓練を見ればそりゃあ仕方ないが……また緑谷少年とは違った苦手意識を感じるな…)
　緑谷は爆豪のことを嫌ってはいたが、飛鳥のとは、それはまた違う。だが…
(しかし飛鳥くん…これを乗り越えなければ、どうすることも出来ないぞ!!さあ、頑張れ!!)
　オールマイトは、ギュッと拳を握り締めるのであった。
　建物の核フロア。
「まさか、飛鳥ちゃんの苦手なものがカエルだったなんて…」
「仕方ない…嫌いなものはしょうがないのだからな」
　飛鳥の嫌いなものを知った雲雀は、意外そうな顔をしている。
「けど、梅雨ちゃんはいい人だよ?」
「ああ、そうかもしれないな…だから蛙吹のことは嫌いじゃないと思うぞ」
「??どういうこと?」
「つまり、アイツはカエルが嫌いでも蛙吹とは友達だ。飛鳥は友達だけは何があっても嫌いにはならない…」
　蛙吹は確かにほぼカエルと言っても過言ではないが、それでも飛鳥は蛙吹の個性がカエルだとは知らなかったのだ。気づいた途端に蛙吹にカエルの苦手意識が強くなった…だがそれは蛙吹の個性だから

だ。個性が蛙であるだけで、蛙吹はちゃんとした人間だ。それは飛鳥も気づいている。だが、カエルに苦手意識がある飛鳥にこれを克服しろというのは難しい。

一方、蛙吹チームは…

「ケロ…まさかカエルが嫌いだとは思わなかったわ…今まで接してくれたんだもの…」

「ゴメンね梅雨ちゃん…決して梅雨ちゃんが嫌いとか、そういう事じゃないからね…??梅雨ちゃんとは大切な友達だし、ただ…やっぱり梅雨ちゃんが戦ったのを見ると……ちょっと…ね」

飛鳥は蛙吹に申し訳ない様子で頭を下げる。そんな飛鳥に気にしないで、と蛙吹は気を使う。

「仕方ないわよ、嫌いなものならね…それにしてもなんでカエルが嫌いなのかしら？」

蛙吹は首を傾げて尋ねる。

「だ、だって!!皮とかジメジメ、ヌメヌメしてるし…!!なんか気持ち悪いような感じがして!!」

「……」

「いや、だから梅雨ちゃんじゃないからね!?」

飛鳥のカエル苦手話に、言葉を失う蛙吹であった。

「そ、それに……」

「？それに…？」

飛鳥が言おうとした途端。

『さあ時間だ！制限時間はもちろん15分制限時!!少女達よ、頑張ってくれよ!!ではスタート!!!!』

飛鳥が何かを言おうとした途端にオールマイトからの戦闘訓練開始がかかった。

「ケロ、取り敢えずまずはどうするかを考えましょう…苦手なものは仕方ないわ」

「うぅ～…本当にゴメンね梅雨ちゃん……」

「気にしなくていいわ、例え苦手意識があっても、まず目的はクリアす

ることよ。第一優先そこをどうするか考えましょう」
「う、うん！」
蛙吹のサポートで、飛鳥は少し様子を取り戻す。蛙吹は感情こそあまり表に現さないが、相手のことをちゃんと思いやる心はある。蛙吹の良いところはそこなのだ。
蛙吹は建物を指差す。
「取り敢えず私は上からの様子を見てみるわ、飛鳥ちゃんは中をお願いね」
「うん！って、でもどうやって…あっ、そっか！」
蛙吹が一体何をするのかというと、まず建物にひっついてヒタヒタとよじ登っていく。そして核フロアの中の様子を見ては無線で飛鳥に連絡すると言ったところだろう。そもそも柳生と雲雀は忍びであるため、下手に動いて戦うよりもまずは飛鳥に中を行かせた方が安全だと判断したからである。忍びの力はヒーローたちは知らない…忍びは個性がない代わりに身体能力は非常に高く、また秘伝忍法という技を使う事が出来る。それに個性に似たような能力も出す事が出来るため、忍びもまた非常に戦闘力が高いと言える。ただ強いて言えば…ヒーローと忍びの違いにはもう一つある。

「さて、５階のフロアの様子はどうかしら？」
蛙吹はすぐ５階のフロアまで登りつめると、柳生と雲雀は何処からでも来ても良いように核を守る態勢に入っている。
「二人とも守備に入ってるわね…飛鳥ちゃんに報告しないと」
蛙吹は、敵の状況を教えるため無線で飛鳥と連絡する。
「飛鳥ちゃん聞いて、核フロアに柳生ちゃんと雲雀ちゃんを見つけたわ、今何処にいるかしら？」
「うん、私も５階のフロアに到着したよ！今扉の前にいるよ！」
飛鳥も同じくフロア近くに着いたらしい…蛙吹は「そう、なら合図を出した時に突入しましょう」と伝える。
「分かった…！」
飛鳥が返事をして、合図をする。

「行くわ！」
「うん!!」
二人は合図を終えた瞬間に、核フロアに突入した!!

バァン!!
扉の開く音
ガシャアアァン!!
窓が破れる音。

フロア内にいた柳生と雲雀は、待っていましたと言わんばかりのように、瞬時に素早く二人の方に向く。
「来たぞ雲雀、遠慮はせず、本気で行くぞ」
「うん！雲雀、分かってるよ!!」
柳生と雲雀はお互い背を向き合い、戦闘態勢に入ると、柳生は飛鳥に…雲雀は蛙吹に向ける。

「つ、梅雨ちゃん…！頑張るね！」
ぎこちない返事をしながらも、なんとか刀を抜く飛鳥。
「ええ…頑張って、私も頑張るわ飛鳥ちゃん」
蛙吹も油断ない戦闘態勢に入る。

モニター室

「スゲェ！早速入って来たな！　つか忍びの戦いって見るの初めてだよな～…三人ともどんな戦いなんだろ？」
上鳴はモニターの三人を見て言った。
「確かアイツらは個性がない代わりに、身体能力及び技や個性らしい能力が出せるんだろ？だったら個性を知って戦うよりも難題だ…立ち回り方を考えない限り…な」
轟は目を細めて呟く。轟は今だに忍びを目の前にしてもなんの驚く表情も見せていない。気にしてないのか、無反応なのかは分からな

いが…

フロア内

「行くぞ！雲雀!!」

「うん！柳生ちゃん!!」

「あ、飛鳥！正義のために舞い忍びます!!」

「ケロ、飛鳥ちゃん気合い入ってるわね、私も負けてられないわ」

四人ともそう言うと、柳生は番傘で飛鳥を攻撃する。右に回避して刀と傘がぶつかり合う。柳生は刀を払いのけようとするものの、飛鳥が刀で防いでいる。

「梅雨ちゃん！早く!!」

飛鳥が横目で蛙吹に叫ぶが、蛙吹は雲雀と戦っている。

「えい！やあ！とう!!」

見え見えな動きで、殴る、蹴ると言った攻撃で蛙吹に攻撃するも、難なく躱される。

「今よ！」

蛙吹はピョンっ！と跳ねて核にタッチしようとするが…

「しまった…！だったら、お願い！忍兎～!!」

雲雀も諦めず、大声で叫んだ。すると、先ほど蛙吹が破った窓から、ぬいぐるみのような兎が飛び出てきた。

「ケロ!?!」

流石の蛙吹も驚きを隠せないのか、大きな声でつい叫んでしまった。すると忍兎と呼ぶぬいぐるみ？みたいな兎は蛙吹に襲いかかる。

「雲雀ちゃん、こんな事が出来るのね…まずいわ…考えたら敵の数が三人になったわ！」

忍兎の殴る蹴るなどの攻撃を避けながらも小声で呟く。雲雀も加わり二人の攻撃を避けている。

「つ、梅雨ちゃん!!」

飛鳥はピンチな蛙吹に叫ぶが…

「よそ見をするな!!」
ドガッ!!
「かはっ…!」
柳生は飛鳥の横腹に番傘で横殴りをする。態勢が崩れた飛鳥にさらに追い討ちを試みる柳生はつかさず番傘を向けるが、直ぐに態勢を取り戻した飛鳥は、壁に足をつけて上へと飛び跳ねることで、柳生の攻撃をなんとか回避することに成功した。だが…
「秘伝忍法…!」
「あっ、しまっ…!」

柳生は秘伝忍法を使う。すると巨大な烏賊を召喚させる。
「薙ぎ払う足!」

ズドドドォォーーーーーン!!
「キャアアアアアアーーーーーー!!!」
柳生は巨大な烏賊と共に回転し、周辺を巻き込んでいる。飛鳥はなす術もなくもろに受けてしまう。
「ケロ…!柳生ちゃんは、大きい烏賊を呼び出したわ…!!飛鳥ちゃんもろに攻撃を受けたようにみえるけど…大丈夫かしら…?」
巨大烏賊の攻撃で、煙が上がってしまう。煙の中に飛鳥はいるのだが、視界が入らないのである。

モニター室
「柳生のやつスッゲェ!!巨大な烏賊出てきやがった!!」
「ああ、烏賊か…確かに良いな」
切島が叫ぶ横で障子は、柳生の烏賊を微笑ましい表情で見つめる。障子はタコやイカなどといった軟体動物が好きなため、柳生とも話が合いそうだと、この時そう思ったのである。
「けど雲雀ちゃんのあの兎も良いよな〜!」
上鳴が可愛いものを見るような目で、指差している。口田も可愛いものを見るような目でコクコクと頷いている。口田は喋るところは

見たことはないが、何やら忍兎を見て表情が柔らかくなっている。口田は障子とは少し違って、動物が好きなため、雲雀の忍兎が可愛らしくてたまらないのであろう。
だがしかし、モニター室でそんな悠長な話をしているのも今のうちなのであった…

フロア内
「ケロ…煙が減って視界が見えてきたわ…飛鳥ちゃんの影もあるし無事のようね…!」
蛙吹は雲雀の攻撃からもなんとか回避しながら飛鳥の心配をしている。
「いったた～…」
飛鳥は後頭部に手を置いて立ち上がると、煙の中から出てきて、柳生に襲いかかる。その時だった
「てええぇ～～い!!」
「ケロ!?」
蛙吹は見てしまった…飛鳥の服がビリビリになり、下着姿であるのを……
それはモニター室では大きな大混乱の状態であった。

「えええ～～!!??」
服がビリビリなのも無理はないと思うかもしれないが、それでも下着姿はほぼモニター室ではキッチリ映っていた。
「ちょっ!?飛鳥ちゃん!隠さないと!」
芦戸は顔を真っ赤に染めて叫んでいる。
「自覚がないのか…?戦闘の真っ最中だから気づいてないのかもな」
轟はなんの動揺もせず曇りない表情でいる。
「飛鳥ちゃん!?ヤベェよコレ!え?なに…破れるもんなの!?」
流石のチャラい上鳴も、飛鳥の姿に動揺を隠せないのであった。
「ひょーー!!神回ぃ～!!最高だぁー!!飛鳥の姿が…これは…これは…!!」

「ちょっ…！峰田見んな!!」
　バチィん！
「へぶうっ!?」
　飛鳥の姿を見て興奮する峰田に、耳郎は思いっきり頬を叩いた。
「八百万！峰田の目隠すためになんか『作って』くれない!?」
「え、ええ！勿論ですわ！」
　八百万は耳郎の意見に賛同し頷くと、体から目隠しの布が出てきて、拘束させておき、それを峰田の目に巻きつける。
「うおぉぉーーーー!!八百万！耳郎！離せ…離せよおぉーーーー！コンチクしょーー！オイラはもっと飛鳥の姿を！胸を、山を、オッパイを見てえんだあぁーーー!!」
　峰田は暴れるが、八百万と耳郎二人が拘束してるため、手も足も出ない様子だ。
「てか、先生！これ完全なる事故じゃん！止めた方が良いんじゃないっスか!?」
　切島は、モニターに注意しながら見ないようにオールマイトに語りかける。
「う、ううむ～…確かにそうだが…まだ戦闘訓練の途中だし、そんな事言っても…それにそれだったら緑谷少年の場合もコスチュームが半分やられたわけだ…もしここで飛鳥くんの戦闘訓練を中止にさせたら悪いしな…」
「あっ、それもそうだ…不公平だしな…くぅぅ…!!」
「というか別の意味での事故だよなコレ」
　紳士ある男性たちは、ろくにモニターを見ることすら出来ない状況でいる。オールマイトを除いて…まあオールマイトは先生のため、ちゃんとモニターを見なければならないのでコレは仕方ないのだが……耳郎は飛鳥をじっと見つめている。
「……デカい……」
　耳郎は自分の胸に目をやって、小声で呟いた。

フロア内

「てやああぁ〜!!」
ガキィィン!!
飛鳥の二つの刀と柳生の番傘がぶつかり合い、鋭い金属音が鳴り響く。
「飛鳥も…随分と腕が上がったようだが……まだ召喚獣がいないんだろ？」
「…!!そ、それは…」
「その理由は…知ってるだろ？」
「…っ！」

飛鳥が召喚獣が使えない理由…それは、心を通わせれる動物がいないからだ。それは飛鳥自身の悩みでもあった。召喚獣、すなわち秘伝動物のことである。それを習得できれば、更に強くなれるのだが…召喚獣とは忍びの家系にまつわり、その家系が使ってた召喚獣が忍びに引き継がれ、使えることが出来るのだ。だが飛鳥の家系での召喚獣は…

ガマガエルなのである。
半蔵はガマガエルを使っていた、だが飛鳥はカエルが嫌い。そのため召喚獣は出せないのだ。

「知ってる…けど…でも!!」
ガキィィン!!
なんとか薙ぎ払い、柳生との距離をとる。
「いずれ、召喚してみせるもん!!」
飛鳥がそう言うが、柳生はため息をつく。
「……どうやってだ？」
「え？」
柳生の答えに飛鳥は戸惑う。
「いまだに苦手を克服出来そうにもないお前が、一体どうやって、いつ召喚できるんだ？」
「そ、それは…」

「それになぜそこまでカエルが嫌いなんだ？」
　すると飛鳥は少し下を向いてこう言った。
「だって…戦闘中にカエルが死んだりしたら…嫌だもん…可哀想だから……」
「……そうか」
　飛鳥は戸惑う素振りを見せると…柳生は今度は蛙吹に目をやる。
「もういい、さっさと終わらせる」
　柳生は素早く蛙吹の方へと向かう。
「あっ……！待って!!」
　飛鳥は少し遅れて柳生を追いかけようとするが、もう遅い。柳生は直ぐに雲雀との戦闘に加わる。

「ケロ…不味いわね……柳生ちゃんまで来ちゃったわ…」
　蛙吹は弱々しい声で呟く。
「さあ！覚悟してよ梅雨ちゃん!!」
　雲雀も真剣な眼差しで蛙吹を睨み、追撃を仕掛けてくる。当然避けるが…
「掛かったな！」
　柳生がそう叫ぶと、クナイを投げ蛙吹に襲いかかる。そして番傘で突こうとする。が…この時ピンチな状況に陥ってるにも関わらず、蛙吹は不思議そうな顔で疑問を抱いていた。
（そういえば…どうして柳生ちゃんは飛鳥ちゃんを見逃して私と戦う方を選んだのかしら…？）
　雲雀は蛙吹に攻撃を受けてはいないが、それでも充分蛙吹の足止めとしてはいい線が通っている…だから柳生は飛鳥の足止めをすることだって出来るのだ。時間さえ切れれば敵チームの勝利になる。だが柳生と雲雀が蛙吹の相手をしていたら、その隙に飛鳥が核を触る危険性だってある。
（柳生ちゃんの考えなら、飛鳥ちゃんを止めて核に触れさせずに時間切れにすることだってあるのに…一体何が目的なのかしら？）
　蛙吹はクナイに当たるが、あえて対人用としてなのか、切れ味はさ

ほどない。だがそれでも蛙吹にダメージを与えることはできた。
「ケロッ…」
「すまんな蛙吹、やらせてもらうぞ」
番傘が蛙吹を襲いかかる。その時蛙吹は、瞬時に意味がわかった。
(!!そう言うことね…分かったわ柳生ちゃん!)
柳生と雲雀がやってること、それを瞬時に理解した蛙吹は、柳生の番傘の突きに当たってしまう。
「ああっ!梅雨ちゃん!!」
飛鳥は柳生の攻撃が、蛙吹に当たったことにより、大きく動揺してしまう。
「ケロ……不味いわ…」
蛙吹はお腹を押さえて少し態勢を崩してしまう。雲雀はなんとかその場を動かず、固唾を飲み見守っている様子だ。そんな蛙吹に、柳生は再び番傘を向ける。
「では、さらばだ…!」
柳生が蛙吹に攻撃しようとしたその瞬間。
「させるもんかあぁぁぁーーーーーー!!!!」
飛鳥が叫ぶと、咄嗟に体が動き、柳生と蛙吹の場に割り込んだ。すると柳生の番傘は蛙吹に当たることはなかった。
「いたたた〜…梅雨ちゃん…大丈夫?」
「え、ええ…大丈夫よ…それより、飛鳥ちゃん、ようやく私に触れることが出来たわね」
「え?あっ…」
今、飛鳥は蛙吹の体を掴んでいる。柳生の攻撃から庇ったためだ。普通今の状況なら「絶対に無理!」というだろうが…今の飛鳥は。
「全然…怖くない……」
飛鳥は蛙吹の頭を撫でると、蛙吹は「ケロ」と嬉しそうな声を出した。
「やっと、苦手を克服することが出来たな」

「柳生ちゃん!?」
「良かったね飛鳥ちゃん！」
「雲雀ちゃん…」
　柳生は飛鳥に向かって微笑むと、雲雀も飛鳥の苦手を克服出来たことを満面な笑みを浮かべる。
「私も、もっと早く飛鳥ちゃんの『こと』を気づくべきだったわ…」
　梅雨ちゃんも少し頬を赤く染める。
「どういうこと…？」
　そんな飛鳥は何がなんだか分からず、ケロ？っとした顔を浮かべている。
「お前はあの時言ったな…カエルが死んだりしたら嫌だって」
　そんな疑問な表情を浮かべる飛鳥に、柳生は説明する。
「蛙吹の個性はカエルだ…だがそれでも友達でもある。お前はたとえ相手がカエルでも、友達が目の前で傷つく姿は嫌なハズだ…だからもしその友達の蛙吹が傷ついたらお前は必ず守ろうとするからだ」
「あっ…そっか…」
　飛鳥はなるほどという顔で頷くにつれ、雲雀も答える。
「だから雲雀と柳生ちゃん、フロア内で考えてたの、どうしたらカエルを克服することが出来るのかって…！」
　どうやら柳生と雲雀がフロア内にいたのは、飛鳥の苦手を克服するために残ってたのである。
「あっ、でもなんで梅雨ちゃんはこのことを知ってたの？ずっと、私と一緒にいたし…その考えは分からないはずじゃ…」
　確かに、飛鳥とペアを組んでいたら分からないはず…すると蛙吹も説明する。
「それはあの時、柳生ちゃんと飛鳥ちゃんの会話を聞いてたからよ、それに柳生ちゃんはとても賢いもの…普通に勝つことを考えるなら、柳生ちゃんは飛鳥ちゃんを止めて、雲雀ちゃんは私を止めていれば、時間切れで柳生ちゃんたちの勝ちだもの。なのに柳生ちゃんは敢えて飛鳥ちゃんから私に戦う方を選んだ、だからもしかしてって思ったのよ」

「す、すごい頭の回転の速さ……」
蛙吹の冷静な判断が出来たからこそ、彼女にしか出来なかったのかもしれない。あの時飛鳥が蛙吹に言いかけたのは、カエルが可哀想という話だったのだろう。
「これで飛鳥ちゃんは大丈夫そうね」
「み、皆んなあぁ～…」
飛鳥は、三人の思いやりにあまりに嬉しくて、思わず涙が出てきそうだったのをなんとか堪えた。
「さて、話は終わりとして…まだ戦闘訓練は終わってないぞ…」
「あっ、そうだったね！あと少しだと思うけど、頑張ろう！」
柳生と雲雀は、再び戦闘態勢に入る。また飛鳥と蛙吹もだ。
「頑張ろう！梅雨ちゃん!!」
さっきまでの飛鳥とは違う、一歩成長した飛鳥は、いつもの元気いっぱいな女の子に戻った。そんな飛鳥の姿をみて、内心嬉しく思う蛙吹も
「ええ、勿論よ！」
態勢を整える。

モニター室
「アレ何があったんだろうな？さっきまで話してたようで、そんで急にまた戦闘になったぞ」
「よくわかんねーけど…けど飛鳥ちゃん様子変わったよな」
瀬呂と上鳴は首を傾げながら呟いている。
「……」
（わお、なんだよ柳生くんに雲雀くん…！そんで蛙吹くんまで……カッコいいじゃないか!!）
オールマイトは沈黙しつつ、内心はものすごく感激している。

フロア内
「てやぁ!!」
ガギィン！キィン!!カキン！

飛鳥は先ほどまでの様子とは違い、素早く刀で柳生に攻撃をかますが、柳生も飛鳥の動きに負けられないと、番傘で防御する。
「先ほどまでとは違うな…飛鳥」
吹っ切れたようなその様子に、柳生は少し安堵の息をつく。
「うん!!そして、『今度はこっちの番』だよ!」
「!?」
飛鳥の言葉の意味を分かった柳生は、直ぐに距離をとろうと番傘で刀を払いのけようとするが…遅かった。
「秘伝忍法!二刀繚斬!!」
パワーアップした飛鳥は、蛙の如く前方に跳躍して交差状に斬りつけていく。
「うあああっっ!!」
ドガアアアアン!!
もろに食らった柳生は、前方に吹き飛び、壁にめり込んだ。
「ああ!柳生ちゃん!!」
柳生が倒されたことに気づいた雲雀は、咄嗟に柳生の方に振り向いた。だがそれが蛙吹の隙となった。
「甘いわ雲雀ちゃん!」
蛙吹は長いベロを出して、雲雀を巻きつく。
「うわあ!捕まっちゃった!!」
雲雀は半泣き状態で必死にもがくが、蛙吹のベロは頑丈なため、身動きは出来ない。
「飛鳥ちゃん!核!」
「うん!」
蛙吹の言葉に飛鳥が頷くと、核に近づきタッチする。
「やった!」
触れた途端。
『ヒーローチームウィィーーーーーーン!!』
突如オールマイトの声が響く。

モニター室

「おお！飛鳥たちが勝った!!」
「おお…それにあの技も凄いな…」
切島と常闇は、飛鳥たちが勝ったのをみて内心感激している。だがその反面…
「……っ!!」
爆豪は更に表情を暗くし、歯ぎしりをする。

フロア内
「やったやったー！梅雨ちゃんやったよ！」
「ええ、やったわね飛鳥ちゃん」
雲雀の拘束を解除すると、飛鳥は蛙吹を抱きしめてその場でぴょんぴょん跳ねている。
一方柳生たちは。
「……負けてしまったな…」
「ふえぇ～ん！ゴメンね柳生ちゃん！雲雀がもっと強くてしっかりしていれば…！」
柳生は泣いてる雲雀の頭を優しく撫でる。
「いいんだ…雲雀は良くやった…俺が甘かっただけだ…あの時飛鳥の動きをいち早く読み取っていれば…」
柳生は少し悔し混じりの表情を浮かべる。
飛鳥たちと柳生たちはモニター室に行き、皆んなの前に集合する。
「飛鳥！ただいま戻りました～！」
「ケロ…」
「俺たちも戻ったぞ…」
「雲雀疲れたよ～…」
四人が戻ってくると、他の皆んなやオールマイトは何故かまごまごとして、なかなか飛鳥を見ようとしてない。皆んなの異変に気づいた飛鳥は首をかしげる。
「皆んな、どうしたの？」
「いや、飛鳥……お前、服」

「え？」

自分の体を見てみると…下着の姿であった。

「あっ…」

「……」

飛鳥はポカーンとした様子で、皆んなは見ていない。峰田なんかはほぼ見えない状態だ。数秒ぽかんとしてると、ようやく自分と皆んなの立場、そしてモニターを見て、顔を真っ赤っかに染める。

「い、いやあああぁぁぁァァァァァァァァーーーーーーーーーーーー!!!!」

羞恥心の激しい余り、飛鳥の顔は赤面し、目がぐるぐる状になり、その場に座り込み身体を隠す。もう遅いが…

「と、とりあえず飛鳥さん…これを着てくださいまし…！」

八百万は、忍装束の時の飛鳥が着てた服を差し出す。すると飛鳥は涙を直ぐに服を取り、ドアの方に隠れて服を着た。

「あ、ありがとう…八百万ちゃん／／／」

「い、いえ…気にしないでください！それにしてもとんだ災難でしたわね…」

八百万は心配そうに飛鳥に気遣う。

「ま、まあ何はともあれ…皆んな上出来だったぜ!!」

オールマイトは親指を立てると、皆んなを見つめた。

「さて、どうだったかな皆んな？初めての戦闘訓練は？先生としては皆んな良かったぜ!!それに忍の戦いもまた、我々ヒーローとは違ったところはあるが…こういうのを見て強くなるのも、一つのヒーローとしての成長なんだぜ!!」

オールマイトは皆んなに笑顔を見せて言うと…

「では戦闘訓練はこれにて終了!!お疲れさん！みんなこれから教室に戻ってね！」

そういうとオールマイトはアデュー！とだけ言ってその場を去った。

「オールマイト…なんであんなに急いでんだろ？にしてもカッケェ…！」

峰田は平和の象徴の後ろ姿を、輝く目で見てそう言う。オールマイトは走ってるなか爆豪に目をやり

「…爆豪少年…」

（生まれながらに才能に恵まれた彼は自尊心の塊のようなもの…膨れあがって爆発する自尊心はとても脆い……ヒーローとしてだけでなく、教師として彼のことをもっと見てやらねば……！）

オールマイトは内心そう呟いたのであった。

6話「爆豪のスタートライン、そして不穏の幕上げ」

オールマイトは保健室にはいるともうトゥルーフォームの姿になっている。
せきばらいするオールマイトにリカバリーガールは怒鳴り散らかす。
「オールマイト！入学して間もないってのにまたケガをしてるよこの子！何で止めてあげなかったんだい!!」
杖を地面にバシバシと叩くリカバリーガールは、気絶して寝ている緑谷に向かっていうとオールマイトは
「も、申し訳ありません…」
深々と頭を下げてそういうしかなかった。
「全く…昨日に今日だ！そう一気に治癒してやれん…！点滴を打ちながら少しずつ回復を待つしかないよ！」
呆れた顔をしているとリカバリーガールは不意にこんなことを言った。
「いくら自分の愛弟子だからってね…ワンフォーオールの調整がまだじゃないか！」
「リ、リカバリーガール！このことは決して他言しないで下さい！ワンフォーオールを知っているのは、緑谷少年とリカバリーガール、校長に私の親友、私の相棒（サイドキック）、そして『伝説の忍の半蔵』にしか話してないのですから…」
そういうとリカバリーガールは
「…はいはい、ナチュラルボーンヒーロー様…平和の象徴ってのはそんなに大事かね…」
そういうと今度は揺るぎない決意の目で
「もし平和の象徴がいなくなれば…この社会は悪に染まります…！」
そういうとリカバリーガールはため息をして
「だったら…導く立場ってもんを学びんしゃい…！この子のことを本気で大切に思ってるならね」
「承知の上です」

オールマイトはそう言った。

「はあ、はあ…みんなどうしてるかな？」

ようやく治療に回復した緑谷は、右腕に包帯を巻いている。もう外はすでに夕方になってるようだ。それより緑谷はクラスに入る

ガララッ

「おっ！緑谷じゃんかお疲れ！」

そう言ったのは赤髪の熱血少年たること切島だ

「いやー！緑谷暑かったよなー！」

「よく避けたよー！」

「ねえキミ☆今日の僕の活躍どうだった？」

「ちょっ…青山、緑谷気絶してたんだぞ？」

「よく避けたよ～！」

「わ！わわわっ！」

大勢の生徒が緑谷に集まり聞いてきたため緑谷は動揺する

「俺、切島鋭児郎！よろしくな、今みんなで今回の戦いのミーティング開いてんだよ！」

「蛙吹梅雨よ…梅雨ちゃんと呼んで」

「俺！砂糖！」

「アタシ芦戸三奈！よく避けたよ～！」

「僕は青山優雅！きらめきが止まらない男だよ～☆」

「俺、瀬呂範太！よろしくな緑谷！」

腕がセロハンテープみたいな男、瀬呂範太

「あ、え、え～っと…よろしく？」

とりあえず返事をする緑谷

「全く…騒々しい…」

「全くだな…」

常闇と柳生は机の上に腰がけていると

「常闇くんに柳生くん！机は乗るものじゃないぞ今すぐ降りたまえ！」

独特な手の動き方で常闇を説得するが

「いや、つうか別によくね？」
　耳郎がそういうと
「そうそう、お前は堅いところあるよな飯田は」
　尾白は苦笑してそう言うと
「…君たち～…！」
　飯田は怒鳴り声で
「この机は雄英の先輩たちが使ってきた机だ！もっと丁寧に」
「ま、まあまあ！飯田くんも硬いこと言わないで…ね？」
　飛鳥が落ち着かせるように飯田を制する。
　もう１つの後ろ扉が開いた、すると上鳴とお茶子と雲雀が書類をもって教室に入りだした。
「なあ麗日と雲雀ちゃん、今度飯食いに行かね？何好きなん？」
「お餅…！」
「お、お餅…!?　あー、んじゃ雲雀ちゃんは何好きなん？」
「美味しくて甘～いお菓子全部!!」
「お、おお…！そうか!!」
（本当に子供らしいな…おい）
　上鳴は内心そう言い聞かせた。
　上鳴が答えると、麗日は緑谷に目がはいり心配そうにすぐに駆けつけに行くと
「わあ！デクくんうで大丈夫!?リカバリーガールのところ治してもらわなかったの？」
「い、いやこれはその～…僕の体力的な問題で…」

　緑谷は赤面してお茶子とは視線を逸らす。
　緑谷は辺りを見回すが、１人だけ姿がない。爆豪勝己のことだ。
「あっ、ねえ…かっちゃんは？」
「１人で出て行ったぞ…」
　柳生はスルメイカを食べながら答える。
「み、みんな止めたんだけど…！勝手にだまって出て行っちゃって…」

お茶子はそういうと緑谷はすぐに教室を出て外に向かう。
「あっデクくん！」
「オイ緑谷!?」
お茶子と切島は止めようとするがムリだった。
「……」
柳生は窓ガラスの方に目をやって…

それは少し前の時間だった…
「おい、爆豪…皆んなお前が戻ってこいって言ってるぞ、さっさと戻ってきたらどうなんだ？」
柳生は廊下で爆豪を見つけて声をかけた、すると爆豪は睨みながら振り返る。
「……いいだろうが別に……」
「よくないから言ってるんだ…いつまでも意地張ってないで、さっさと戻って…」
「んなもん知ったことかよ!!!!」
「!?」
爆豪の咆哮とも言える怒鳴り声に、少し身体を反応する柳生であった。
「忍びだが何だか知んねーけどなぁ…!!オレはテメェに何かを言われる覚えはねぇ!!それにオレは確かにデクの野郎に負けた…けどなぁ！」
バッ!!
「っ!?」
すると爆豪は柳生の胸柄を掴む。
「だったら更に上に行ってデクも！『お前』や『飛鳥』ってヤツにも!!全員に負けねえヤツになってやる!!忍びってヤツにもな！だからオレは、ヒーローを『やめねえ』!!お前ら全員追い抜いてやるからな!!」
爆豪は悔し混じりの顔で柳生に吐き捨てるようにそういうと、掴ん

でた胸柄の手を離し、去っていこうとする。
「だから…覚えとけよ……クソがあ!!」
そんな爆豪の後ろ姿をみて、柳生は
「アイツのようなヤツを見るのは…初めてだな…いい意味でも、悪い意味でも……」
良いか悪いかどうかは分からないが、少なくとも柳生のあの時の言葉は、爆豪にとってはとても大きく響いたそうだ。

緑谷は廊下を走り、くつを履いて外に出た。外はもう夕焼けで、空はオレンジ色に染まってる。
すると校門前にはバッグを背負ってる爆豪の後ろ姿がある。
その姿はどこか寂しくて、物静かだ。
緑谷は爆豪のあとを追い声をかける。
「かっちゃん!!」
「…ああ?」
顔はどこかまだ暗くて煮えきらない感じだ。
爆豪はまだ勘違いしている、緑谷は爆豪に個性がないと騙してるということを。
緑谷は自分がいま言わなければならないことを、ここで言う。
(言わなきゃ、言わなければ…!)
「これだけは君には、言わなきゃいけないと思って!」
覚悟をきめて緑谷は爆豪に言う。だが次のそれは、とんでもない爆発発言…イレギュラーが発生した。
「この個性は、人から授かったんだ」
「…?」
「誰からかは絶対にいえない!言わない…でも　コミックみたいな話なんだけど本当で…」
「…!?」
わけの分からないとする爆豪に緑谷はそのまま話をすすめる。
「正直、実はこの話はみんなに秘密で…言っちゃダメなんだけど…おまけに力の調整もまだ扱えなくて、全然モノに出来てない状態の借り

物で！」
　爆豪は少しずつイライラを溜めている。
「だから君に個性を使わずに勝とうとしたけど…勝てなくて…ソレに頼った…！だから」
　さすがの爆豪もわけの分からない状況でイライラがたまり、とうとう怒り出そうとするが
　緑谷は
「だから、この力（個性）を自分のものにして…僕の力でキミを超えるよ」
「……」
　爆豪がたまってた怒りが一気に冷めた、まるで爆発したものが冷気で固まったように。
「……ハッ！」
（しまった、騙してたんじゃないって言いに来たのに何を僕は…）
　言おうとしたが、全く違うことを言ってしまった。
「……」
　爆豪は緑谷の方に向いて
「何だそれ…借りモノ？　分けのわかんねぇこと言って、これ以上おれをコケにしてどうするんだ…なあ!?」
　再びイライラし始める爆豪
「だからなんだ!?今日…俺はテメェに負けた、そんだけだろうが！そんだけ…!!」
　すると爆豪はイライラの怒りではなく自分の気持ちを、言いたいことを言う感じの雰囲気になる。
「半分野郎をみて、敵わねえんじゃって思っちまった！ポニーテールのやつの言うことに納得しちまったし…クソ!!あの眼帯野郎の正論にも何も言い返せなかったし、半分野郎と同じ敵わねえと思っちまった!!　あのカエル怖がり野郎の飛鳥ってヤツのこと…『デク』みたいで…んでもって強くて!!クソが…クソ!!!!」
　爆豪は怒りというより哀しみのようなものを感じる。負けて悔しい気持ちがある。

手を目にあてて隠すように…感じたのだ、爆豪は上より上がいたことを。
八百万百　飛鳥　柳生　轟焦凍のことを。
「クソが！クッソ!!なあ、テメェもだデク!!」
するとバッと手を下ろす、顔には目に涙が浮かんでいた。
「こっからだ！俺は…！こっから…いいか!?俺はここで1番になってやる!!アイツらより上に登って、俺が1番に…!!」
すると緑谷に背中を向き
「俺に勝つなんて…二度とねえからなクソが!!」
そう言ってその場を立ち去ろうと再び歩を進める。
その後ろ姿はまるで昔の幼い頃の爆豪を見ているかのようだった。
「……」
緑谷はフラッとよろめいてしまうが次の瞬間
「爆豪ーーー!!」
バヒューーーン!!
と轟音が緑谷の頭上を通り越して
「少年!!!!」
と大きな声が響く、爆豪の肩をつかんでいるのはもっとも他でもない…オールマイトだった。
「言っとくけどなぁ、自尊心ってのは大事なもんだ！君は間違いなくプロになれる能力を持っている!!君はまだまだこれから…」
「放してくれよオールマイト…歩けねえだろうが」
爆豪の声は普通だった。
「言われなくとも…俺はアンタをも超えるヒーローになる!!だから離せっつってんだろ！」
（アレーーーーーーーー!?）
爆豪はさっきので涙が出ていたので腕で涙を拭いてたのだ。
意外な答えにオールマイトは多少驚きを隠せないでいる、ぎこちない返事で「あ、うん」とだけ言った。
（た、立ち直ってた…ていうか、教師って難しい…!!）
オールマイトはそんな彼の背中を見ながら心のなかでつぶやいた。

かっちゃんの導火線に再び火が付いた　　やることは変わらない…僕は背中を追うだけ

「あれ？緑谷少年！爆豪くんと何か話してたように見えるが～…何を話してたんだい!?」

「あ！お、オールマイト…！えっと、その～…」

これからまだまだ何か起こるか分からない。

だが…僕らはこれから知ることになる、その大きな事件を…これから知っていくことになる。

半蔵学院にて

「ふう～…！今日の修行も終わったあぁ～!!」

男気、姉貴のような葛城は、疲労から解放されたような声を出す。

「そうですね、それにしても…飛鳥さんたちは上手くやっているのでしょうか…？」

斑鳩は心配そうに飛鳥たちのことを心配する。

「ダイジョーブだろ！アイツらの実力は、アタイたちが知ってんだ。それに忍びの存在を誰かに言いふらすような輩じゃねーよ」

「そ、それは確かにそうなんですが…ですが、何やら胸騒ぎがするんです……」

「胸騒ぎ？」

「はい……」

場所は変わり…山の奥。

気味悪い、山奥には天守閣がそびえ立っている。そのなかで、何やら大きな事件を起こそうとしているそうだ。

「集まったか…お前たち」

「はっ！鈴音先生…焔以下４名、仕り参りました」

黒髪のポニーテール、焔とその四人は頭を深々と下げて、顔こそは隠されて見えないが、鈴音と呼ぶ先生の前に並んでいる。

「今回は最も他でもない…半蔵学院にて襲撃をしろ。」

「ちょっかいを出せってことかしらね…」
眼帯をしたゴスロリ衣装の小さな女はそう呟く。
「今回襲撃するのは最も他でもない、ヤツらにお前たちの実力を試してやるのだ」
「はっ!!」
焔とその４名がそう叫ぶと、鈴音はさらに焔たちに言う。
「そして、忍びのものではない悪党に忍びの存在、及び手を組んでいるというその忍びも、探し出し、見つけ次第始末しろ」
「はっ!!!」
焔たちは更に声を張る。
（伝説の忍び、半蔵の孫…！飛鳥、覚悟しろ…!!）
焔は、炎の如く、煮え滾る殺気と悪意を宿して…

そして、雄英高校にいる飛鳥たち三人と、半蔵学院にいる斑鳩と葛城はその事件を目の当たりにする。

そして、その彼女たち悪忍にすら後々知らされるさらなる事実。先ほど斑鳩の言っていた胸騒ぎ、大きな大事件…忍びの大事件が、少しずつ、少しずつ始まろうとしている。

夜の街。
もちろん雄英のみんなはすでに登校時間は過ぎてる時間だが…今回はその場所ではない。
サロン、バーなどといった看板がある建物、その建物はそれほど派手で凄そうではない。
だが、建物の中では
ある男が新聞を読みおわって投げ捨てるようにバーのカウンターに置く。
その男の顔は、なにやら手のマスクで覆われて見ることが出来ない。
新聞の上にはオールマイトの記事がある、『雄英高校の教師を務め

る!?』という大きな記事が、そしてオールマイトの顔写真の上に氷とウィスキーが入ったコップを置いて。
「見たかコレ、教師だってさ…なぁ」
するとバーの定員らしき人物は、カウンターでつぶやいた男を見つめる。
その男は、身体が黒い霧で覆われていて。その手のマスクの男は話を続ける。
「どうなると思う?」
部屋の隅にはなにやら奇妙な姿、巨大で脳が飛び出てる化け物も居て。この部屋はただの客が来る場所ではない雰囲気だ。
手のマスクで顔を覆われて見えないが、狂気な笑みを浮かべて、静かに悪意を宿した目で、男はこういった。
「平和の象徴が…敵（ヴィラン）に殺されたら」
オールマイトが言ってた真に賢しい敵（ヴィラン）の恐怖を。半蔵の言ってた謎の忍びとやらも…この事件に関わっていくのを。

7話「蛇女の襲撃！」

「それじゃあ皆んなさようなら～！」
「じゃーね！飛鳥ちゃん、雲雀ちゃん、柳生ちゃーん！」
「また明日ね」
　飛鳥はクラスの皆んなに言うと、芦戸と蛙吹は手を振った。

「それにしても、普通の学校ってこんな感じなのかな～…？楽しいね！」
「飛鳥、忘れるな…オレたちは忍びだ……」
「でも柳生ちゃんも楽しいでしょ？」
「うっ…雲雀にそう言われると…否定できない……」
　飛鳥たち三人は、話しながら長い道のりを歩いている。
「そうだ！久しぶりに半蔵学院に戻ろうよ!!」
「といっても、すぐに戻れるわけだし…それにオレたちが戻ったら他の連中にバレる可能性があるだろ？」
「気を隠せば大丈夫だよ」
　飛鳥たちはそんな話のやり取りをしていると…
「ん？…ねえ、アレって緑谷くんじゃない？」
「本当だな…何やら少し落ち込んでたように見えるが…」
「お～い！緑谷くん～!!」
　雲雀が大声で叫ぶと、「わっ!?」と声をあげ反応した緑谷は振り返ると、三人が駆けつけてきてくれた。
「ど、どどどどしたの!?／／／」
（やべぇ…可愛い…!!）
　緑谷は照れながら内心可愛いと思っていると、柳生が質問する。
「それで、爆豪はどうだったんだ？」
「あっ、いやぁ…それが相変わらずで……はは…」
「そうか」
「…ん？」
　緑谷が苦笑いをしていると、雲雀は半蔵学院の方角に目をやる。

「あれ…気が強いのが感じる…」
「え？」
「そこって、確か半蔵の…！」
「は、半蔵…？」
　緑谷は三人の顔が険しくなっている理由が分からなかったが、それでも何やらただ事ではないような雰囲気を出している。
「私たちも行こう！」
「ええっ!?あっ、ちょっと…」
　飛鳥たちは素早く半蔵学院にへと向かう。緑谷も渋々とついていくことにする。
「……」
　そして、その物影で見ている、轟もまた……

「はぁ…はぁ…着いた！」
　飛鳥は息切れをしながらも、他の二人もその場に着いた。
「確かに…強い気だな…」
「これ、霧夜先生や葛姉に斑鳩さんとは…違うよね？」
　柳生と雲雀もそれを前に冷や汗を流している。
「も、もしかして…悪忍…!?」
　飛鳥がそう叫ぶと、急ぐかのように学校に駆けつける。
　本来飛鳥たちが居るのは、本学校とは違う、使い古びた旧校舎を使っている。『関係者以外の立ち入りを禁ず』という立て札がある。そここそが、本来飛鳥たち忍びがいる場所だ。
「葛姉に、斑鳩さんは!?」
「分からない…今のところ見かけてはないが……いるはずだ…」
「ふえええ～…雲雀、怖いよ柳生ちゃん!!」
「雲雀、オレの後ろに隠れてろ！」
　柳生は番傘を開き、周囲を見渡す。すると…
「飛鳥さん！柳生さんに雲雀さん!!」
　飛鳥たちの名前を叫んだのは、斑鳩であった。
「斑鳩さん！それに葛姉!!」

「お前らも無事だったか！」
葛姉たること、葛城が斑鳩と同じ、心配そうに駆けつけると飛鳥たちはホッとした。
「よかった～…アレ？霧夜先生は？」
「霧夜先生を見なかったのですか!?」
「えぇ!!見なかったよ!?」
斑鳩の問いかけに、飛鳥たちは驚く。
「となると…何処に……」
「ね、ねえ…コレッて……何があったの…？」
「それは…つい先ほど……」
飛鳥が不思議そうに問いかけると、斑鳩は先ほどあった出来事を話し出す。

二人が修行を終えて、時間が経った時、警報が鳴った。
「なっ!?んだこりゃ！」
「これは…侵入者の…！」
葛城と斑鳩は直ぐに警戒態勢に入る。霧夜はレーダーみたいなもので、様子を見ると…
「ふむ…ただの普通科の学生のようだな……俺が行ってくる」
そう言うと、直ぐに向かうのであった。
「ちぇっ、んだよ…ただの普通科の学生か……」
葛城がつまんなさそうに呟くと、少し時間が経った時…奇妙な気が教室を包んだ。
「なっ!?これは…!!」
「なんだこれ…忍結界!?」
二人は周囲を見渡し警戒した。
「そうだ…霧夜先生は!?」
「霧夜先生は何を…!?」
一方に帰ってこない霧夜に、斑鳩と葛城も動揺を隠せない…教室から出て、辺り一面探してみるものの、霧夜の姿は見えなかった。その

時、物影が出てきて、その正体が飛鳥たちだったのだ。

「そ、そんなことが…」

「恐らく霧夜先生もまた…忍結界に？」

確かに考えられる。外にいた飛鳥たちは見なかったのだ…それに斑鳩たちも中を探してもいない…となると、間違いなく忍結界に入れられたと考えられる。

「とりあえず…皆様気をつけて下さい……これは間違いなく、悪忍の仕業です!!」

斑鳩がそう叫ぶと、五人は警戒態勢に入る。が、次の瞬間…

「う、うわっ!?」

「皆さん!?」

「くっ！んのやろぉ!!」

「雲雀!!」

「柳生ちゃん！」

飛鳥、斑鳩、葛城、雲雀、柳生の順に突如、光が包まれ違うそれぞれの忍結界に吸いこまれた…

「いたたた…ここ何処？柳生ちゃんは…？」

雲雀が周囲を見渡すと、その忍結界の中には、ケーキやお菓子、リボンなどといったものがある忍結界。そこには…

「ふふふ…可愛い子兎ちゃんね…」

ピンクのリボンを髪に結んだ女性、春花が雲雀を見つめて呟く。

「あ、貴方は…!?」

「私は秘立蛇女子学園の、春花よ」

「へ、蛇女って…あの悪忍の…!?」

「雲雀！何処だ!!雲雀!!」

雲雀の名前を必死に叫ぶ柳生、柳生の周囲は戦場…戦争の兵器がいっぱいある忍結界。そこには…

「アンタが私の相手って訳ね…いいわ、悪忍の力、思い知らせてやるから！私は秘立蛇女子学園、未来よ！」
　眼帯をつけ、ゴスロリ衣装を見に包んだ悪忍の未来だ。
「雲雀ー！何処だ、居たら返事をしてくれ!!」
「私を無視するなあぁーーー!!!!」

「クソッ！なんだここ…！」
　葛城の周囲は鬼の面や土偶、龍の顔など様々なものがいっぱいある忍結界。そこには…
「アンタが相手か…」
「誰だ!?」
「わしは秘立蛇女子学園…日影や、命令やから相手したるわ」
　緑色の短髪の女性、悪忍の日影。葛城は日影をみると、ニッと、不敵な笑みを浮かべる。
「へっ、丁度良いね…アンタみたいな強いヤツとは一戦交わりたかったんでね！」
「ほう？」

「完全にハメられましたね…」
　斑鳩の周囲には、緑色の空間にもやし？が沢山ある忍結界。そこには…
「あら、流石はお嬢様ですわね…」
「誰です!?」
　声がする方に振り返ると、そこには長い金髪の女性は笑みを浮かべている。
「お金持ちは裕福で良いですわね…そう甘やかされて育ってきたのですね。鳳凰財閥のお嬢様…」
「な、何故それを…？」
　斑鳩は、忍びでもあり鳳凰財閥のご令嬢でもあるのだ。しかしその女性に驚いてるのは、何より何故そのことを知ってるのか…だ。
「貴方のことは既に分かっていますわ、この薄汚れた善忍…！」

「質問に答えなさい!!」
　その女性は敵意と殺意、なにより憎悪を宿した目で斑鳩を睨む。
「その上からの物言い…ますます気に入りませんわね…まあ良いですわ、私は秘立蛇女子学園の詠ですわ!!」
「やはり、悪忍がここに…」
「さあ、お覚悟!!」

　そして…飛鳥は。
「み、皆んなは…それより此処って……」
　飛鳥の周囲は、まるで戦国にでも居るかのような場所の忍結界。そして…そこには。
「やあ、随分と元気そうじゃないか」
「え…?貴方は…水上バスにいた……」
　声がする方に振り返ると、そこには、水上バスで知り合いになった…焔だった。それがまさか、こんな形で再開するとは思わなかったのだ…
「ああ、何を今更驚いている?お前だって忍びだろ、なあ?伝説の忍びの、半蔵の孫よ…」
　すると焔は笑みを浮かべながら睨みつけている。
「そんな…貴方が悪忍だったなんて……」
　飛鳥は未だに信じられない表情でワナワナと震えている。
「あの時は邪魔が入ったしな…それに刀を抜く価値すら無かったが、今回は仕事なんでね」
　あの時、それは前に街中で敵（ヴィラン）が暴れていた時だ。焔はそう言うと、一本の刀を抜く。その刀は、炎を纏わせて……
「なっ……」
（す、凄い殺気…!）
　飛鳥がそう思った瞬間、
　シャッ…!
「え?」
　目の前には焔の刀が…飛鳥に襲い掛かる。

「っ!!」
飛鳥は間一髪避けた…が、
「怖いのか…？」
焔は飛鳥の耳元でそう囁くと…
ザシュ!!
「きゃあっ!!」
飛鳥は背中を斬られ、忍装束が破れる。そんな飛鳥をみて、焔は「ハッ」と小馬鹿にするように笑う。
「情けないな!!お前、伝説の忍びの孫なんだろ？だったらその価値の片鱗くらいは見せてもらわないとな!!」
再び追撃をする。
「そうだ…私は……！」
飛鳥は刀を抜き、焔の攻撃を防ぐ。
「じっちゃんの孫なんだ!!」
すると忍装束が一気に敗れ、弾け飛ぶ。
「ほう…いきなり命懸けで来るか…その意気は認めてやろう…」
命懸け。それは忍装束をなくし、防御が落ちる代わりに、一気に攻撃力を高めるもの。此処ぞという時に使うものだ。
「たあああぁーー!!!」
ガキィン!!
焔は刀で飛鳥の二刀の攻撃をたやすく防ぐ。
「焔ちゃん…私、わたしはもしかしたら、友達になれるかもって、良い人だって思ったのに…なのに、なのに…焔ちゃん!!!!」
「お前…何処まで甘いんだよ!!!!」

飛鳥の言葉を聞いた焔は大きく怒り、上昇すると、飛鳥を払いのける。
「忍びの定めは死の定めだ…忍務が下れば、例え相手が親だろうと子供だろうと切り捨てる…それが、忍びだああァァァァーーーーー!!!!」
「そんなことない!!!」
お互いの刀が交差する。焔は飛鳥の背中を斬ろうとすると…

「タァッ！」
飛鳥はしゃがみ、蹴りで焔の持ってる刀を弾け飛ばした。その刀は宙に舞い、少し離れたところで地面に刺さる。
「や、ヤッタァ！」
飛鳥がやったという歓喜な顔を浮かべると…
「ふ、ふふふ…はははは！」
焔は不意に笑い出した。そしてニカッと飛鳥に笑みを浮かべると、突如背中に五本の刀が現れては抜き取る。
「やっと、本気を出せるな…」
「えっ…」
飛鳥は驚愕な表情で、焔を見つめる。刀一本がやっとだと言うのに、それが残り五本…その事実に飛鳥は戦慄した。

「クソっ…斑鳩に葛城は無事か？」
忍結界にハメられた霧夜は周りを見渡す。その忍結界とは…
「それにこの忍結界…前にも……何処かで」
その忍結界は、鈴がいっぱいある空間だ。
「たしか…前に、『凛』に忍結界を教えた時に似てるな…」
凛とは、前に霧夜が育てた忍び生徒だ。だが、ある忍務の失敗の際に、死んでしまったのだ。霧夜はその事実がどれだけ苦しんだか…そんな時に、女性の声が聞こえた。
「その通りよ」
「誰だ!?」
霧夜が振り返ると、そこには…紫色の髪に、メガネをかけた女性。秘立蛇女子学園の先生、鈴音だった。だが、霧夜はこう言った。
「お前は…バカな……『凛』!?」
その女性は霧夜が育てた忍び生徒であり、そして忍務に失敗し死んでしまったと思われてた凛であった。そう、鈴音ではなく、凛。それが彼女だ。
「お久しぶりね、霧夜先生」

8話「半蔵VS蛇女」

大分昔の話…

「霧夜先生!」

紫色の髪にポニーテールの女性は、先生に手を振っている。いつも明るく元気で、「スーパー忍者」になることを目指している。

「忍結界って凄いね!これならどんな敵が来ても邪魔されずに戦える、無敵だね!」

「いや、そんなことはないぞ。忍結界を破れるほどの強さを持つものがいれば簡単に侵入されてしまうからな」

「え?そうなの…」

鈴音は少し気を沈めると「そっか~…」と呟く。

「あっ、そうだ!」

すると彼女はまた霧夜に顔を戻す。

「連動忍結界というのはどう?それぞれ複数の忍結界を作って、一つにするの!それなら簡単に破れないんじゃない?」

鈴音がそう言うと、霧夜は苦笑した。

「確かに面白いが、そんな話聞いたことないぞ?」

「やれるよ!だって私は……」

スーパー忍者になるんだもん

現在。
「なぜだ！凛…なぜお前が悪忍に……」
霧夜は死んだと思ってた生徒…凛が生きてたこと事態驚きだが、なにより善忍だった凛が悪忍になってたことが驚きだった。
「ふふ、それは後にしましょう…貴方たち半蔵の、善忍の生徒たちが心配でしょ？私が育てた悪忍の選抜メンバーたちに襲撃されてるものね」
凛がクスっと笑みを浮かべながら話しだす。焔たち五人は選抜メンバーであり、凛が鈴音として直々に鍛え上げた生徒らしい。
「今回の襲撃の目的はなんだ!?」
霧夜が凛に問いだす。
「それは、半蔵か蛇女のどちらが強いかの勝負をするの。そうすれば善か悪、どちらが強いか…それが悪だと証明することよ」
凛は微笑みそう言うと、ここから真剣な顔つきになる。
「それはまあいいとして…問題があるの霧夜先生」
「なんだ…凛」
「貴方たちと私たちが探してる悪党と手を組み、一般人そのものに危害を与えてる謎の忍び…もしかしたら姿を現すかもしれないの…」
「何!?」
霧夜は驚愕すると、凛は話を続ける。
「理由は、私たちに関係してるわ…」
「関係？」
凛の答えに、眉をひそめて首をかしげる霧夜に、凛は話しだす。
「善忍と悪忍による大きな抗争が始まれば、ソイツは必ず出てくる可能性があるわ…これは大きな戦いになるんですもん」
「大きな戦い…だと？」
大きな戦い…その意味が分からなかった。善忍と悪忍が戦うのはよくある話だ。特に忍務なら尚更…だがしかし、善忍と悪忍の抗争はまた違うものなのだ…何よりその大きな戦いというのが引っかかる。
「まあそれも後ほど分かるわ…とにかく、あの謎の忍びは恐らくだけど…なにか企みがあるのだと思うわ……さて、話はこれまでにして生

徒たちの戦いを観てましょう先生。それに、忍び『以外』の人間もここに来たわけだし…」
「なに…？」
凛は…いや、鈴音はそう言うのであった。
「こ、ここが…半蔵学院ってところ？」
地味でボサボサの緑髪たること、緑谷は半蔵学院を眺めるのていた。
「さっき、飛鳥さん達が血相変えて行ってたけど…てかここ、立ち入り禁止？みたいだね…？」
立て札には、『関係者以外の立ち入りを禁ず』と書いてある。
「入ったら怒られるかな…？でも、ここで飛鳥さんの声が聞こえたから、ここに居るのは間違いないと思うんだよなあ…」
緑谷は心配そうに呟き、入るかどうかは迷ったが…なぜか、何故かここが怪しいと思ってしまうのだ。まるで長年の経験かのような……そんな感じの…やめておこうとも考えたのだが、内心こうも思ったのだ。
（それにしても静かすぎるよな…もしかしたら、敵（ヴィラン）に!?）
そう思うのであった。もし今思ってることが本当だとしたら、間違いなく危ない。それに緑谷は飛鳥たちの力はまだ知らないのだ。戦闘訓練では爆豪との戦いで気絶してしまい、飛鳥たちの戦いは見ることが出来なかったため、どれほどの実力なのか分からないのである。だからこそ心配なのだ…敵に殺されるような事でもあったら…と。何よりも…
「いても経ってもいられない…！怒られるのは怖いし仕方ないけど、でも！」
友達だから…
緑谷は決心して、直ぐに走り出した。
「……緑谷のヤツ、本当に入ってったな…」

緑谷に気づかれずに後を付けてきた轟は呟いた。

柳生ＶＳ未来

柳生はそっと腕を伸ばして空間に触れてみた。

「やはり、脱出不可能となると…」

柳生が呟いた途端…

バキュン！

銃声音が鳴り響き、柳生の横に銃弾が通り過ぎる。

「はあ…はあ……逃げ回っても無駄よ！さっさと私と戦いなさ…」

未来が言いかけた途端、柳生は番傘を未来に向けた。

「な、何よ…！あっ、分かった……フン！やっと戦う気になったわね…いいわ、勝負してあげ…」

「オイお前、オレは雲雀を探してる…だからお前はさっさとやられろ」

「は、はあ!?」

敵である柳生に散々無視された挙句、やられろと言われた未来は、完全に堪忍袋の緒が切れた。

「散々無視しといてその言い草…！絶対許さない!!秘伝忍法!!」

怒りで荒ぶる未来は、スカートをめくると中に銃が出てきた。

「『バルキューレ!!』絶対に…許さない!!!」

葛城ＶＳ日影

「でやあ!!」

ブオン！

「フン…」

ボロボロの葛城は気合よく具足で蹴り上げるものの、無傷の日影は軽く鼻で笑いながらも冷静に避ける。だが葛城はまだ諦めてない様子だ。そんな日影に葛城は笑みを浮かべる。

「嬉しいね…」

「嬉しい…？なにがや？」

葛城の不敵な笑みに、首を傾げる日影。
「アタイはアンタみたいな強いヤツと戦いたかったんだ！」
葛城がそう熱くなると、低い体勢に入る。
「秘伝忍法！『トルネードシュピンデル！』」
そう叫ぶと、体を逆さまにしては足をグラグルと回しては、龍の如く竜巻が発生し、日影に襲い掛かる。
「どうだ!?」
土埃で見えないが、それでも人影がある。確かに手応えはあった、が…日影はムクッと立ち上がり、不敵な笑みを浮かべて軽く首の骨を鳴らす。
「う…そだろ……直撃したハズなのに…！」
葛城は驚愕する、日影は直撃したにも関わらず、未だ無傷でいるのだから。
「分かったやろ？アンタがなにをどうしようと無駄やで」
日影はそれが当たり前と言わんばかりに言いだす。
「いや…まだだ!!」
葛城が向かってくると、日影は突如ナイフを取り出す。
「秘伝忍法、ぶっさし！」
日影は殺意溢れたナイフで一閃突きする。葛城はなんとかバックし日影の手を止めるようするものの、当たってしまい吹っ飛んでしまう。
ズシャアアアーーーーー!!
「ぐわっ！」
葛城は身体に地面に擦り付けながらも倒れてしまう。
「ほな、勝負あったな…まあ、命までは取れとは言われてないからな…見逃したるで」
日影は葛城に吐き捨てるようにそう言うと
「まだ…だ」
葛城は、息を切らしながら立ち上がる。額には血が流れており、見るからに大丈夫ではない。
「諦めな、アンタはわしには勝てん…アンタの負けや」

ナイフを再び葛城に向ける。だが…葛城は何も臆することなく日影に歩み寄る。
「諦める？アタイに限ってそんなものはあり得ないぜ…！負けるのはアタイが負けたって決めた時だけだ！」
「負けは負けだっちゅーねん！」
日影が思いっきりナイフを突き出すと、葛城はしゃがみ込み、頭突きを食らわす。
ドガッ！
「がっ…！」
もろに葛城の頭突きを食らった日影は、少したじろぎ額から血が流れる。
「へへっ…今のは効いただろ」
「こんの…よくも…！」
葛城が得意げそうにニヤリと笑みを浮かべると、日影はそんな葛城を横目で睨む。

斑鳩ＶＳ詠
ドガアアアアーーーーーーーーンン!!!
猛烈なる爆発が起きた。詠は腕に付いてるボウガンを構えて斑鳩を撃ってたのだ。
「フフ…所詮はお嬢様方、チョロいものですわ」
詠は得意げそうにニヤリと微笑みそう言うと、煙が晴れて出てきたのは…斑鳩の服であった。
「なっ…!?しまっ」
「はあああぁぁーーー!!」
詠が上に振り向くと、突如上から斑鳩の声がした。斑鳩は命懸けの状態であり、太刀である飛燕を振る。灼熱とも呼べる熱き炎が詠に襲い掛かる。
「キャアアーーーーーーー!!」
詠は斑鳩の攻撃をもろに浴びてしまい、悲鳴を上げてしまう。吹っ飛ばされるもなんとか着地し再び大剣を握りしめる。

「こんな…こんなこと！」
　すると斑鳩は直ぐに詠に間合いを詰め、大剣に乗る。
「お覚悟！」
「フン…　お嬢様はどうしても、上から見下すのがお好きのようですわね！」
　詠は下から目線で斑鳩に何か恨みでもあるかのように睨むと、再び腕のボウガンから爆弾を出す。
「くっ！」
　斑鳩は間一髪それを避けるものの、詠は追撃をして、大剣を振るう。
「でやあっ!!」
　ガキィン！と斑鳩の飛燕と詠の大剣がぶつかり合う。
（飛燕が…！）
　飛燕が折れそうになると分かった斑鳩は表情を曇らせる。すると詠は睨みながら話し出した。
「生きていく…たったそれだけのことが一体、どれだけ惨めで辛いことか…貴方には一生分かりませんでしょうね!!」
　詠は斑鳩を睨みながら吐き捨てると、斑鳩はふとある過去を思い出した。
　それは斑鳩が養子として拾われた時のこと。鳳凰財閥にて、義理の兄である村雨という男が本来家系として忍びを継ぐのであった。だが、村雨には忍びの才能が無く、不採用とされてしまったのだ。だから養子である斑鳩は忍びの才能を認められ、義理の父親に飛燕を託された。だが義理の兄である村雨は、斑鳩を認めてはいなかった…むしろ妬んでいたのだ。
『お前…父さんに拾われたんだろ？』
『血の繋がってないお前が、俺の妹だと？笑わせるな…』
『元々飛燕は俺のもんなんだ…俺がどうしようと勝手だろ？』
『まだ家族なんて言うのか？よくもまあ抜けぬけと…』
　数々の兄の罵声とも呼べる言葉が、斑鳩の心を苦しんでいた。だが…飛燕との出会いが、彼女の心の支えだった。
『これは？』

父親は斑鳩に刀を渡すと、斑鳩は不思議そうな表情で首を傾げていた。
『それは飛燕だ…我が家に代々まつわる名刀だ。お前を我が娘として、これを託そう』
それが斑鳩と飛燕の出会いなのであった。これを託されたこと、それは家族として認めてもらえたことであり、また斑鳩にとって、忍びとしての原点（オリジン）なのだ。

「ハアアアアアーーーーーーーーーーーー!!」
斑鳩は飛燕を力強く押し返すと、詠はその斑鳩の力に耐え切れず、吹き飛ばされてしまう。
「キャアアーーーーー!!」
ドサッ!!と、地面に着く鈍い音が響く。斑鳩は詠に飛燕を向ける。
「一つ、貴方に言っておきましょう！」
「な、なんですの？」
詠はなんとか立ち上がると、詠もまた大剣を斑鳩に向ける。
「私は、自分の惨めさも苦しさも…全てはこの飛燕に封じ込めました。あるのはただ一つ、飛燕を託された誇りのみ!!」
すると詠に走っていく。
「秘伝忍法！『飛燕鳳閃・壱式』!!」
斑鳩は鳳凰とも思わせる炎を刀に纏い、振りかざすと、その炎は詠を飲み込むかのように襲い掛かる。詠は避けきれまいと、大剣を盾にするものの、防ぎれなく吹き飛ばされるのであった。
「アッ…!!アアアアアアアーーーーーーーーーーーー!!!!」
詠はその場に倒れこむが、まだまだと言わんばかりか、なんとか立ち上がる。だが忍装束はもうほぼ破れている。
「よくも…よくもよくも!!」
「秘伝忍法が…効いてない…!?」
秘伝忍法をもろに食らった詠は、斑鳩をより一層強く睨むが…斑鳩は、秘伝忍法で本気の一撃を食わらせたのにも関わらず、まだ意識があること自体が驚きであった。

一方、またの柳生ＶＳ未来にて
ドドド

忍結界へと引きずり込まれたのであろう…だが、柳生は雲雀の微かな気を感じ取っている。
「待ってろ雲雀…！今すぐ、救けるからな！」

雲雀ＶＳ春花
「ふふ、本当に可愛いわね…子兎ちゃん♪」
「こ、この人を早くやっつけないと…！頑張れ雲雀！」
雲雀は決心すると、目をつむって腕を振り回す。
「え～～い!!」
向かっていくが、春花に簡単に避けられ尻で雲雀を倒す。
「うわっ!?」
雲雀はその場に倒れこむと、春花は雲雀の上に乗った。
「ふふふ…本当に可愛いわ、雲雀。お人形さんにしてみたいは♪」
春花はいやらしいように雲雀のお尻を触ると…
「ひ、秘伝忍法…！」
「えっ？」
その途端、巨大な兎のぬいぐるみ？らしきもの…忍兎を呼び出すと、全力疾走で走ってくる。
ドガッ！
春花に体当たりを食らわすと、雲雀は忍兎の背中に乗り、忍兎は金斗曇に乗り春花に突撃してくる。
「『忍兎でブーン』!!」
ドオン!!
「カハッ…！」
春花が声を出し吹き飛ばされる。雲雀は忍兎に下りて手を振っている。
「忍兎～！ありがとう～!!」
雲雀は満面な笑みで手を振っていると、後ろから声が聞こえた。
「ありがとう…中々ファンシーでキュートな技ね……」
「ひっ…!?」
振り返るとそこには、忍装束がボロボロの春花が立っていた。

「お礼に蛇女の力…思い知らせてやるわ……」
「あっ、えと……け、結構です～…」
　雲雀は苦笑いの表情を浮かべていると、春花の猛撃が繰り出される。
「ハアアアアアアーーー!!」
　ドガッ!バキッ!ドゴッ!!ベシッ!
「キャアアーーーーーーー!!」
　雲雀は、春花の荒ぶる攻撃を全て食らってしまい、その場に倒れこむと…
「や、柳生ちゃん…」
　そう呼ぶのであった。春花は少しニヤリと笑みを浮かべて雲雀に近づいていく。
「アラあら…ちょっとおいたが過ぎたかしら?」
　そう言った途端…
『雲雀…雲雀!!』
「え?」
　その途端、空間から強烈な歪みが生じて、空間から穴が開くような形になる。
「えっ、もしかして……柳生ちゃん!?」
「なっ…!嘘でしょ…未来は!?まさかやられたの?」
　さっきまでの春花の表情は一気に変わる。柳生が春花の忍結界に入り込んだのだから。
「大丈夫か?雲雀…?」
「柳生ちゃん……」
　だが柳生の姿はボロボロであり、傷が付いている。雲雀を駆けつけてきた柳生を見て、春花は苛立つ。
「なあに貴方?大事なお人形さんに割り込んできて…」
「お前が…雲雀を…!」
　柳生はボロボロな雲雀をそっとして、春花を睨みつける。
「雲雀をこんな目に…お前は、許せない…!」
「許せない?悪いわね、アタシそう言うの大っ嫌いなんだけど…?」

春花は鼻でフッと笑うとクナイを取り出し柳生に投げつける。普通の柳生なら避け切れるが…もろに食らってしまう。
「グアッ…!」
「や、柳生ちゃん!」
ふらつく柳生を見た雲雀は、身体を引きずりながらも駆けつける。そんな二人を見て春花は笑い出す。
「アラあら…忍結界を破って体力が尽きたようね…忍結界を破るとどうなることかも分からなかったのかしら?」
「えっ?」
雲雀は確信した、柳生のこの傷は悪忍にやられた傷ではなく、雲雀を救けようとして傷ついたものだと。
「ご、ゴメン…ね…?柳生…ちゃん……雲雀がもっと…強ければ……ゴメンね……ゴメンね……!!」
雲雀は涙を流しながら必死に柳生に謝る。だが雲雀は柳生の頬に手を置く。
「いい…んだ…雲雀のせいじゃない…多分、オレじゃなくてもそうしていたはずだ……だから、雲雀が悪いわけじゃ…ない…っ…」
柳生は、声を振り絞りそう言うと、目を閉じ気絶した。
「や、柳生ちゃん!!」
「とどめよ…」
春花はクナイを握りしめて、柳生に振りかざそうとすると、雲雀は止めた。
「やめて!柳生ちゃんには手を出さないで!!」
雲雀は泣き叫びながらそう言うと、春花はニコッと笑みを浮かべていうクナイをしまった。
「分かったわ」
「えっ?」
そう言うと春花は雲雀に歩み寄る。
「私も、貴方とはお友達になりたいもの…だから、それに免じてこの子は見逃してあげるわ…その代わり…」
すると春花は雲雀に緑色の巻物を渡した。

「これは…？」
「これは友達の証よ…大切に持っててね」
春花はそう言うのであった。

飛鳥ＶＳ焔
ガキィン！キィン!!ギャリン!!
刀と刀の擦れ合う音、お互いの刀が交差する。
「はあぁーーー!!」
ガキィン!!
渾身とも思わせる一撃、だが焔はそれをあっさりと六爪（刀）で受け止めた。
「でやあっ！」
ジャギィン！
焔は飛鳥と距離をとり、地面に刺さってた刀を蹴ると、刀が飛鳥目掛けて襲ってくる。
「せいっ！」
反撃として刀で打つと、焔はその刀をあっさりと手に持ち、左腕の三本の刀で飛鳥を襲うが、なんとかそれを防ぐ。
ギギギィィーーーッ!!
金属音の鋭い音が、響き渡る。
「でりゃあっっ！」
もう片方の腕の三本刀でまた襲うが、それも防がれる。ほぼ攻撃を防ぐだけで精一杯の飛鳥は、手も足も出ない状況だ。すると焔は、そんな飛鳥の腹に蹴りを入れる。
ドゴッ!!
「かはっっ!!」
飛鳥は吹っ飛び、地面に擦れるよう転がっていく。それを見た焔は「フッ」と鼻で笑う。
「なんだお前…その程度か？」
焔はまだまだ余裕があるのか、飛鳥に少しずつ距離を詰めていく。
「ま…まだまだ…!!」

飛鳥は諦めない眼差しで、焔を見つめると…
「秘伝忍法！」
飛鳥は二つの刀を抜きとり、構える。
『二刀繚斬!!』
飛鳥は二つの刀を構えながら、前方へと跳躍しながら交差状にし、焔に斬撃を飛ばす…が。
「っ!!」
焔はもろに食らうが、服が破れただけで全くダメージを与えてたようには見えなかった。
「ふん！所詮はその程度か…」
「う、嘘でしょ…？」
飛鳥は驚愕していた。戦闘訓練での本気は柳生すらも壁に吹き飛ぶほどの強さだったのだ…今回も戦闘訓練の時と同じ力を出したにも関わらず、焔は平然とその場に立っている。むしろニヤリと笑みを浮かんでいて……
「これで分かっただろ？お前たちと私たちとでは鍛え方が違うんだよ!!」
今度は自分の番だと言わんばかりに、炎を纏わせた刀で飛鳥を斬りつける。
ザシュッッ!!!
「キャアアアアアアアアーーーーーー!!??」
飛鳥は焔の攻撃を受けてしまい、炎を浴びせられたと同時にその場に倒れこむ。
「ハッ！弱いな…お前たちでは私たちに勝てない…理解したか？まあ今日のところは命までとは言わんがな…」
焔はフッと笑うと、今度は周囲を見渡す。
「それにしても忍結界の様子が少しおかしくなったな…歪んでるようにも見えるが……まあいい、私の役目は終わったからな」
焔は満足したような顔で、飛鳥に背を向けると、その飛鳥はなんとか立ち上がり、微かな声でこう言った。

「み、皆んなは…大丈夫かな……？」

ピタッ…

「なん…だと？」

焔は歩みを止めると、再び飛鳥の方に振り向く。ボロボロで傷ついた飛鳥を…

「蛇女の人たちが、こんなに強いなら……皆んなが危ない…！」

「お前…何処まで甘いんだ……？」

弱々しい声を出しながら、仲間たちを心配する飛鳥に、焔は更に苛立つ。

「それが甘いって言うんだよ!!頼れるのは自分だけだ!!!」
「それで!!!焔ちゃんは幸せなの!?!」
「なっ…」
敵である飛鳥に、逆にものを言われることに、怒りが込み上がる。
「今度は私に説教か…?何処まで舐めてるんだ私を…!!」
焔は刀を握りしめて、飛鳥に向ける。怒り溢れる目で…
「さっきまでは命はとらないと言っていたが…前言撤回だ!」
凶器とも呼べるその六爪を、飛鳥に振りかざすように向ける。
「お前は私の神経を逆なでするヤツだな…目障りなんだよ!!消えろ!!!」
「うぅっ…!!」
飛鳥はとっさに目を瞑った。

(ゴメン…!皆んな…じっちゃん!!それに、新しい友達も…ごめんね…ゴメンね!!)

その時だった…

「ＳＭＡＳＨ（スマッシュ）!!!!!」

ドゴオオオオォォォーーーーーーーーーンンン!!!!!

「なっ!?」

「えっ!?」

途端、巨大な爆発と、飛鳥は聞いたことのある声が聞こえた方向に目をやると…そこには……

「いっっづっっっ…!!!あ、う、腕が壊れた…!!」

涙目になりながらも、壊れた腕を手で押さえてる…

「え、そんな…!みみ、緑谷くん!?」

緑谷出久であった。

9話「飛鳥と緑谷の涙」

「はぁっ…ああっ…いっっづぅ!!!」
　涙を流しながらも、壊れた腕を押さえてる緑谷出久であった。
「み、緑谷くん…？どうしてここに!?」
「あ、飛鳥さ…ってうおおぉぉーーーー!!!??」
　緑谷は飛鳥に振り向くと、下着姿のままの飛鳥を見て赤面する。
「あっ…って、今はそんなことよりも…なんで此処が分かったの？」
「あっ、いや…それは……」

　ちょい前
「待ってろ雲雀！今すぐ救けるからな!!」
　柳生が雲雀を救けるために、自らの力で空間を歪ませ、その歪んだ空間を壊し、雲雀がいると思われる忍結界に入って行った時だ。そう、気付かれずに物影で見ていた緑谷は柳生を見ていたのだ…
「えええ～～～!!?」
　突如空間に入り姿を消した柳生を見た緑谷は早速混乱していた。
「な、何あれ!?柳生さんなんか変なのに入ってっちゃったよ…？もしかして柳生さんの個性…いやいやいや、忍びに個性なんかないしな……」
　緑谷は顔を横にブンブン振ると、周囲を見渡した。
「柳生さんは見るからに無事だったな…まあ下着姿にも驚いたんだけどね……って、そんなことよりも、まず僕がどうするかが問題なんだよね…」
　緑谷は、これから一体何をどうすれば良いのかを…
（待てよ…柳生さんが雲雀さんを救けにってことは…やっぱり敵（ヴィラン）かなんかが攻めて来てるんだよな…え？じゃあ…もう既に）

　皆んなが危ない。

現在置かれてる状況に、緑谷はだんだん青ざめていく。
（ま、まずいまずいぞ…!!てか皆んなどこにいるの!?!?それが分からないと手の打ちようがない…！）
緑谷は焦りだし、アワアワと慌てていると…緑谷は不意におかしな点に気付いた。
「ん？アレッて…」
緑谷は一つだけ気になるところがあった。それは、廊下の窓側近くに空間が歪んでいるということを。
「なんで彼処だけ？」
首を傾げながら近づいていき、手で触れようとすると…
バチィン！
「いたっ！」
まるで静電気が走ったかのように思わせるビリビリとした感触が、指に残った。と言っても然程ダメージもない。
「これって…まさか！」
緑谷は瞬時に理解した。この空間に誰かがいると…誰がいるかまでは分からなかったが、先ほどの柳生のやり方を見て、緑谷はこの空間を壊せば誰かがいると分かったのだ。
（一体誰がいるか分からないけど…とりあえず思いっきり殴ってみよう！）

ゴン!!バチィン！
「いたい!!」
さっきよりも少し痛撃が増した。まあそれも当然なのだが…
（これ、普通に破るのは無理だな…じゃあ…）
緑谷は腕を見つめた。片方の腕はさっき使ってた腕。もう片方は包帯を巻いている。戦闘訓練にて爆豪と戦った時に使い、腕が壊れてしまったのだ。
（もう片方は使えるけど…こっちは使えないな……でも）

もし腕を犠牲にしたら、両腕は使えない。ただでさえ怪我をしているんだから…じゃあ、腕は犠牲には出来ない…となると、となると…（どう…すれば…！）

緑谷はこの先戦うことも考えている…腕を犠牲にすれば戦えない…だからこそ悩んでいるのだ。

「いや…そんなことよりも…!!」

誰かが傷ついている…柳生は無事だとしても、あの冷静な柳生が焦るとなると相当なる敵なのだろう……いても経ってもいられなかった…

「自分の怪我なんかよりも…」

だからこそ

「救けなきゃいけないだろ…!!」

「待っててね…ＤＥＴＲＯＩＴ（デトロイト）……」

一気にワンフォーオールの力を集中して…そして…

今!!

「ＳＭＡＳＨ（スマッシュ）!!!!!!!!」

ドゴオオオオオオオーーーーーンンン!!!!!

瞬間、歪みが掛かってる空間が一気に開いた。
「やった…!!開い…っづぅ!!」
「み、緑谷くん!?」

現在。
「と…いう事なんです…!!はあ…はぁ…」
「そ、そんな…危ないよ緑谷くん……」
どうして自分がここへやって来たかを、全て話し終えた緑谷に、飛鳥は自分がボロボロで傷ついてるにも関わらず、緑谷を心配する。だが、緑谷もそんな激痛にあってるにも関わらず、飛鳥を心配している。そして緑谷は涙目になりながらも…飛鳥に微笑んだ。
「大丈夫だから!それに…飛鳥さんだって危ないじゃないか…」
「えっ…?」
初めて誰かに心配されたような顔をする。飛鳥は嬉しかった、緑谷が自分がボロボロになりながらも救けに来てくれた事を……
それを見ていた焔は、状況が整理できなかった。
「な、んだアイツは…!?」

焔は訳が分からない様子で、飛鳥と緑谷を見つめている。本人はその緑谷が誰なのかは分からないが…

（アイツも忍びか…？いや、そんな気を感じない…何よりも忍結界は一般人では破ることは不可能だ…！それをどうやって…？）

冷や汗を流しながら考えている。

（いや、そもそもコイツが一体何者かは知らない…が。飛鳥はコイツの知り合いなのか？となると…忍びの存在を知っている…!?）

焔は少し混乱はしているが、飛鳥の仲間なのだろうと判断した。

（いや、まあ…何方でも構わん…！）

自分は悪忍…規律を破ることや違法を犯すことが悪忍…ならば、どの道自分の存在が知られた以上、殺すしかないと…

「おい！お前!!」

焔は刀を握りしめては、緑谷に向ける。焔の声に反応した緑谷は振り返ってみると。

「ふぇっ!?あっ、は…いいいいいいーーーー!!?」

緑谷はまたもや赤面する。何故って？焔も下着姿だからだ。焔は一瞬疑問を抱く様子を見せると、自分が下着姿であること…緑谷に見せられたことに恥ずかしくなる。

「…っ！　うわぁ！見るなあ！」

「ご、ゴメンなさいぃ!!」

緑谷は手で顔を覆い隠すと、焔は殺意溢れた目で緑谷を睨む。

「まったく…それにしてもまさか飛鳥の他にも仲間がいたとはな…まあいい、どの道お前も始末してやるさ」

「えっ…となるとこの人ってヴィ…」

「緑谷くん！逃げて!!その人は悪忍なの！」

「えっ！悪忍…？」

緑谷は悪忍と聞いて半分はギョッとするが、もう半分は悪忍についてよくわからなかった。敵（ヴィラン）とは何が違うのか？と…

「ふん…ソイツ本当に大丈夫なのか？そもそも傷ついてるじゃないか」

焔はいつしか自然と、元の様子に戻ってきた。緑谷も勿論図星だった。もう腕は残ってないのだから。
「だらしないな…救けに来たと思ったら所詮はボロボロでやられてるただの『デク』人形じゃないか」
焔は緑谷に吐き捨てるように言った。すると緑谷はデクという言葉に反応し、不意に下をみる。
「デク…ね」
緑谷はそうポツリと呟くと、焔の言葉に一つ、ある人物を思い出した。それは…

『出久って、デクとも呼べるんだぜー!』
『デクがどんな個性でも俺には一生敵わねーっつーの!』
『おいコラ!デクてめぇ!!』
『デクぅぅ!!死ねカス!』
いつもバカにしてくる爆豪。
そして…

『デクって、頑張れって感じで…なんか好きだ私!響きが!』
散々デクというあだ名で爆豪にバカにされ続けて来た緑谷。だがそんなある日、麗日に言われた言葉がとても嬉しくて、どうしようもなかったのだ。

「貴方の言う通り…僕はデクだ…今の僕の姿を見てデク人形って呼ばれても仕方ないのかもしれない…」
「緑谷くん!?」
「……?」
自分のことをデク呼ばわりされて、認める緑谷に動揺を見せる飛鳥。そして意外な反応を見せられた焔。

「でも、いつまでも弱いデクじゃないんだ……僕は、『頑張れって感じのデク』なんだああ!!」
涙目になっても、震えてる緑谷は焔に一喝する。その言葉は、前にも…爆豪の時にも言った言葉だ。
「だから…戦う!!」
「お前も…その飛鳥と同じムカつくなぁ!!」
焔は六爪に炎を纏わせる。
「だ、だめだよ緑谷くん…焔ちゃんには、多分勝てないよ…!」
飛鳥の叫びに振り向く緑谷。
「焔ちゃん?焔って、あの人だよね…」
緑谷は再び焔を見つめる。焔は緑谷を見ていると、怪我をしてる腕と、包帯が巻かれてる腕を見つめた。
「なんだお前?私に勝てるとでもいうのか?いや、それとも本気で戦えるとでも思ってるのか?そんな体で、腕で?」
焔の言い方はキツイが、しかしそれは事実と言わざるを得ない。緑谷の腕は両方とも使えないのだから…
「ハッ!ただの威勢のいい奴で、大したことないんじゃないか? まあいい…悪忍である私を見られたんだ、生かして帰す訳には行かないからな…」
焔は緑谷を煽るように何度も罵声を浴びさせる。それでも緑谷は挫けず、壊れてる拳を握りしめて…
「確かに、僕は今両腕壊れてて使えないし、正直言えば戦えない…ここに何しに来たんだって話だよ……でも!」
バッ!と拳を構える。
「誰かが傷ついて、倒れてて…殺されるかもって考えたら、いても経ってもいられなかった!!」

震えながら歩み寄る。

「だから…腕を壊してでも、救けに来たんだろ!!」

「っ！」

「なっ…!!」

飛鳥は、緑谷のその勇敢とも呼べる姿に、感動した。傷ついてまでも、そこまでしてでも救けようとする姿に。飛鳥はあの時の緑谷の姿を思い出した。

自分が嫌いな人に、爆豪に立ち向かったその姿を。

「緑谷…くん」

掠れながらでも、僅かな声でも声を振り絞り、名前を呼んだ。

「お前みたいなのに…何が出来るっていうんだ！お前みたいな弱いヤツが…綺麗事を言うな!!」

焔も怒声で言い返す。焔は勢いよく前方へと飛び、緑谷目掛けて刀を向く。

「くっ…！まずい！」

早い…それ以前に力が出ない。先ほどのワンフォーオールで、緑谷はもう既に体力が限界に達していたのだ。

「さあ、死ね！」

「緑谷くん避けて…!!」

飛鳥が叫んだ時はもう既に遅かった、避けれるタイミングすらない…そして刀が緑谷を…斬り裂くことはなかった。

パキイィン!!!

「っ!?」

「えっ…?」

突如、地面から氷が伝わり、焔と緑谷の間に氷の壁が出てきた。そのため焔の刀が、緑谷に当たることはなかったのだ。して、その氷とは…

「これって一体…」

緑谷は首を傾げる。

「悪いが…」

振り向くと、そこには…

「テメェの目的が何かは知らねえが…とにかく、コイツ等は殺らせねえぞ」

氷を纏った男、轟焦凍がいた。

「と、轟くんまで!?」

「あ、アレ?と、轟くんなんでここに!?」

緑谷自身知らなかった様子で、飛鳥と同様に驚いている。

「何で此処にって…それはお前もだろ。俺はたまたま緑谷を見かけたから後追ってみたんだ」

轟は緑谷達に振り向き答える。

「立ち入り禁止の立て札があるのに、真面目なお前が入って行った…何かあると思って駆けつけてみたらこの様な状況だ」

どうやら轟も、心配だったようで駆けつけに来てくれたそうだ。この忍結界は緑谷が壊したために歪みが開き、暫く忍結界に穴が空いてたそうだ。

「す、凄いや轟くん…てか、気付けなかったんだけど僕……」
緑谷は安心した様子で轟にそういう…が。いつまでも焔（敵）は待ってはくれなかった…

ジュワアアアア〜〜…

「な、何!?」
氷が溶け、蒸発する音が聞こえる。振り返ってみると、そこには焔が炎を纏わせた刀で、氷に火あぶりをさせてる姿であった。

「お前ら…!どこまで来やがるんだ…」
焔は殺気立つ目で、三人を睨む。その殺気に緑谷は少し体を震わせ、飛鳥は負けまいと気を放つ。轟は至って普通に冷静だ。
「まあいい…所詮一人増えても問題ない…!」
焔は低く姿勢を構えて刀を向ける。緑谷と戦う時と同じだ。
「チッ…炎使いか…嫌なもんを見てる気分だ…『アイツ』を思い出しちまう…」
轟は少し顔を黒く染め、苛立つ様子を見せる。そんな様子をお構いないしに、焔は轟を見つめる。
「お前は、傷がないようだな…フン。そうでなくては面白くない…お前もその緑谷とか言うヤツみたいに、情けないようなことにはならないでくれよ?」
焔がフン…と鼻で小馬鹿にするように笑うと、轟は首を傾げる。
「情けない…?何処がだ?」
「なに?」
轟の質問に、焔も首を傾げる。
「緑谷は自分がそうなるって分かってたのにも関わらず、怪我してまでソイツ（飛鳥）を救けようとしたんだろ?命を賭けてまでも…救けようとすることの何処が情けないって話なんだよ」
「っ…」
轟の正論に、焔は少したじろぐ。もう話すらも聞き飽きたのか、刀

を構えて切り掛かる。

「だから…怪我して何も出来ないことが…情けないんだよ!!!」

パキイィーーーン!!!

ギャリイィン!!

轟の氷の壁、焔の刀がぶつかり合う。氷にヒビが入るが、轟が更に氷を出して埋め尽くしていく。

「でやあぁぁぁーーーーーーーー!!!」

焔は身体中に炎を身に纏うと、埋め尽くそうとする氷とぶつかり合う。

「クソ…このままじゃ埒があかねえ……強えな、忍びってヤツは」

(これでも充分警戒してるし、忍びの強さは百も承知だったが、他にもこんな強い忍びが居たなんてな……)

轟は氷を作りながらも、心でそう呟いた。

「ハッ!氷使いとは驚いたが…此処までだな!」

バガーーーーーン!!!

瞬間。氷が割れて、そこから焔が飛び出てきたのだ。

「チッ…」

轟が舌打ちしたその時だった。

『皆んな、此処まで…撤退よ』

何処からか、不意に声が聞こえた。女性の声が。

「なっ……春花、どういうことだ?!」

その声の主は春花だった……焔がそう叫ぶと、春花は話を続ける。

『未来がやられたわ…そのため連動忍結界に歪みが生じたの。それだ

けじゃなく、焔ちゃんの忍結界も、大きな衝撃で大きく歪んじゃったのよ…だから此処までよ』
春花がそう言うと、焔は信じられんと言わんばかりの顔になる。すると、飛鳥、緑谷、轟を睨みつける。
「チッ…クソ！　今回は此処までだお前たち!!次会った時はそうはいかないからな？」
「…おう」
（いや、おうじゃないよ…!?）
轟が返事をすると緑谷は突っ込むように、心の中で呟いた。
続いて焔は、飛鳥に振り向く。
「そして飛鳥…これだけは言わせてもらうぞ！お前のようなヤツが忍びを名乗ることは、私は認めない…絶対に許さない！」
憎しみに近い目で飛鳥を睨むと、歪んだ空間に入っていき、その場から消えた。するとそれと同時に忍結界が消えて、元の場所に戻っていた。
「あれ？ここは…元の場所……？」
緑谷は辺りを見渡すと、旧校舎の廊下に窓などといったものがあり、来た時と同じ場所だ。
「らしいな…忍びって色んなことが出来るんだな……」
轟も周囲を見渡し、納得したような頷く。
「み、皆んな…ありがとう…！」
飛鳥は嬉しくて、涙をこらえて二人に頭をさげる。
「い、いいよ！当然のことだし…それに、間に合ってよかったよ」
「ああ、お礼は別に良い…それよりさっきのあの焔とかいうヤツ、相当強えぞ…悪忍ってのはこんなヤツらばっかなのか…」
緑谷はううん！と飛鳥にニコっと優しい笑顔で大丈夫だと言い、轟は焔のことを気にしている。
「分からない、それよりも皆んなは……あっ！柳生ちゃん!?」
飛鳥が指差すと…そこには、雲雀が泣きながら倒れてる柳生を抱きかかえている姿だった。
「柳生ちゃん…柳生ちゃん!!」

「なっ、や…柳生さん…!?」
「くそ…遅かったか…!」
飛鳥たちは駆け走る。飛鳥は何度も名前を呼び続け、緑谷は柳生の傷の深さを見て驚愕し、轟に至っては悔やんでいる様子だ。

忍結界にて、霧夜、凛サイド
「どうやら終わったようね、どう?霧夜先生、私の生徒たちは」
凛は我が自慢の愛弟子たちと言わんばかりか、微笑んでいる。
「ああ、確かに強いな…だが、これがお前のやりたかったことなのか?」
霧夜が問うと、凛は沈黙し、また話し始めた。
「……ええ、そうよ。だけど、まだやるべきことが出来た訳じゃないわ…」
「なに?」
霧夜は眉をひそめると、凛はその場を立ち去ろうとする。
「答えはいずれ分かるわ…それに、貴方の生徒と、『雄英高校』の生徒たちのところにも駆けつけた方が良いのでは?」
「なっ!?」
どうやら凛は、半蔵と雄英が繋がっていることに気づいてた様子だ。
「なぜそれを…?」
霧夜が問うと凛は…
「それくらい分かるわ、だって私は…霧夜先生の生徒ですもの…それじゃあ」
凛は忍結界から出ると、霧夜も元の場所に戻る。
「……凛…」
霧夜はそう呟いたのであった。

この後、蛇女と名乗る悪忍たちは、撤退して半蔵から姿を消したのであった。そして柳生は、忍び専用の病院に連れてかれ、明日には退院出来るそうだ。一方、飛鳥と共にいた緑谷と轟は、霧夜に呼び出され、事情調査されたのであった。

「なるほど…大体君たちの話は分かった。それに飛鳥にも聞いたしな…」

「は、はい…本当にすいませんでした!!」

「……すいません…っした…」

緑谷と轟は正座で謝ると、霧夜は「気にするな」という顔で二人の頭を上げさせる。

「雄英の生徒で、君たちが飛鳥たちと同じクラスなら、忍びのことも知ってるとなるからな」

霧夜は苦笑しながら言う。

「や、柳生さんは明日退院出来るとして…僕またやっちゃったよ……」

緑谷は腕を見つめて、悩むように呟く。

「まあ、今回のような事件は仕方がない…上層部からも極力、協力して欲しいと言われてるしな」

「あの、ちょっと良いですか?」

霧夜がそう言うと、轟が手を上げ質問する。

「どうした?」

「悪忍は何で半蔵学院に攻め込んだんですか?」

ピタッと霧夜は止まる。数秒、間が空くと答え出す。

「現在俺もよく分からん…調査中だ」

霧夜は難しそうな顔をする。

「分かりました…」

轟はそう呟くのであった。

緑谷と轟が帰っていくと、霧夜はそのまま動かずにこう言った。

「斑鳩、葛城、出てこい」

シュバッ!と音を立てて二人は姿を現す。

「け～っ…結局バレちった」

「霧夜先生…」

「いや何、お前たちが隠れるのも無理はない…忍びのことは秘密だからな。だがアイツらは別だ。今回の件については雄英高校の生徒たちとも協力しなければならないしな」

霧夜がそう言うと、斑鳩は納得がいかない様子だ。

「しかし…良いんですか?もし万が一この事が世間に晒されたりでもしたら…それに、今回のような悪忍の事件もあるんですよ?もしも殺されていたら…」

完全に世間にバレてしまう。それどころか、命そのものも、この世間にバレてしまうのだから。忍びの存在は死んでも世論には公表されないが…ヒーローの誰かが忍びによって殺されたとなると、命そのものを消すことはどうしても出来ないのだ。これがこの社会の表と裏の姿である。

「確かに斑鳩の言う通りだ…でもな、だからこそなんだよ」

「?どういう意味です?」

斑鳩は、霧夜の言ってることがサッパリ分からなかった。

「ヒーローと言うのは、ピンチを乗り越えていくものだ…それに、雄英高校は一番厳しいヒーロー育成学校だ。俺は見ただけで分かる。あの子達は簡単に死ぬようなたまではないとな」

霧夜は、まるで自分の生徒のように思えるように言うと、斑鳩も納得した様子だ。

「は、はあ…」

「ったく、斑鳩ももう少しは信じろよ～…あそ～れ揉みもみ～♪」

「キャアアァ～～!!／／／か、葛城さん!やめて下さい!!／／／／」

葛城はセクハラモードになり、斑鳩の胸を揉みだす。そんな二人を見て苦労するような顔で、ため息をする霧夜であった。

あれから遅くなり、半蔵学院の旧校舎から出る緑谷と轟。
「それにしても災難だったね…」
「ああ…」
緑谷と轟はあまり話すことなく答えるのであった。すると…
「緑谷くん！轟くん!!」
振り返ると、二人の名前を呼んだのは飛鳥であった。もちろん服は元に戻っており、ちゃんとしている。
「あっ、飛鳥さん！そういえば、ケガは大丈夫？」
「うん！大丈夫…それよりもゴメンね二人とも…危険な目に合わせて……」
飛鳥はシュン…と気を沈めると、二人に謝る。
「いやいや、全然大丈夫だよ!!気にしないで！」
「ヒーローは常にいつピンチが起きるか分からねえぞ…？だからこういう非常時な場合は仕方ねえ、謝るな。救けるのがヒーローなんだから」
緑谷と轟はそう言うと、飛鳥は「ありがとう…」といった。すると飛鳥は今度はもじもじとした恥ずかしい様子になる。
「…緑谷くん…あのね」
「ん？」
緑谷は首をかしげると、飛鳥は話を続ける。
「あたし、やられそうになった時、緑谷くんが怪我してまでも駆けつけに来てくれて…心配してくれて…そして救けてくれて嬉しかった…だから」
すると飛鳥は満面な笑みで、涙を流してこう言った。

「救けてくれてありがとう！」

「飛鳥…さん…」

緑谷はその飛鳥の気持ちを聞いて、色々な感情が溢れ出した。突然、不意に、何故か、あることを…オールマイトに、あの日、あることを言われたことを思い出す。

『君は、ヒーローになれる』

それが緑谷出久の原点（オリジン）であり、ヒーローを目指す時で、初めて…憧れの人から言われた言葉であった。そして、人生が変わった。
瞬間、緑谷の目からも、涙が溢れ出てきた。
それを見た飛鳥は「クスッ」と笑みを浮かべて話し出す。
「あれ…？どうして緑谷くんが泣いてるの…？」
「あ、あれ…おか…しいな…涙が止まらなくて……」
お互いは涙を流しながら話している。緑谷は飛鳥の背中をさすり、飛鳥は緑谷の涙を指で拭いている。
「……」
轟は、そんな二人を静かに見つめているのであった。

一方、蛇女子学園では…
「今回の戦いで、ヤツらの秘伝忍法が通用しないと思い知らせることが出来たか？」
「ハッ！」
「よし、それで良い」
焔たちが返事をすると、鈴音はコクリと頷く。
「しかしこちらも全員を倒すことは出来ませんでした…そして、負傷者も一人…」
「っ…！」
焔は横目で未来を見ると、未来は目を細めるて、罪悪感を感じたのか、申し訳なさそうな顔になる。

「わきまえろ焔！倒すことが今回の忍務ではないのだ」
「ハッ！」
鈴音がそう言うと、焔は返事をする。

自室に戻った焔は、部屋で一人になり、紅い刀をじっと見つめている。
「……」
『一人が良いなんて、焔ちゃんはそれで、本当に幸せなの!?』
『だから…腕を壊してまで、救けに来たんだろ!!!』
『情けない？何処がだ？』
焔は、ふと三人の言葉を思い返していたのだ。自分は本当にこれで良いのかと、考えてしまう。

「あの子…あの子…絶対に許さない!!」
銃の手入れをしながら、怒りでいっぱいの未来は一人で怒鳴っている。柳生のことが相当許せなかったのだろう…

「あの大金持ちのお嬢様！見てて下さい…今度こそ『もやし』の味を、思い知らせてやりますわ…！」
スポットライトをもやしにあてて、ジョウロでもやしに水をやっている詠。もやしを栽培しながらも、「ふふふ」と笑うのであった。

「……」
日影は屋上で寝転びながら、自分の額に手を置いている。葛城に頭突かれた傷はもう治っていた。
「やっぱり…考えてもよう分からんは…」
日影はポツリとそう呟いたのである。

「あの子、私の人形にしちゃおうかしら…フフフ」
春花は、雲雀にあげたもう一つの巻物を胸から取り出して…

そして…
「へえ～…ここが蛇女子学園ね」
水色の長髪の謎の女性は、クスっと笑みを浮かべて、蛇女子学園を見つめるのであった。

ＵＳＪ襲撃編
１０話「宣戦布告、そして飯田くん頑張れ！」

朝　　大型自動車が次々と道路を走っていき、目的地に着いたようだ。そう、そこはあのヒーロー学校、雄英高校だ。
「カメラ回すぞ」
「早く！行くぞ！」
そういったかけ声が交じり合い、雄英の生徒一人一人に声をかける。

「オールマイトの授業はどんな感じです!?」
マイクを向けた先は、ボサボサとした緑色の髪の緑色出久だった。
緑谷はビクッと体を固めた。なにを言えばいいのか分からない様子で
「え?!あっ、いやスミマセン…僕、保健室に行かなきゃいけなくて…あの…本当にすみません！では！」

「平和の象徴の授業はどんな感じでしょうか?!」
次にマイクを向けたのは、天真爛漫で元気いっぱい、スタイル抜群で誰もが見たら一目惚れするだろう美女、飛鳥。
「ふえっ!?　あっ、わ、私急いでるので～！それじゃあ！」
逃げるように走って行った。そりゃ当然だ…

「平和の象徴が教壇に立つのはどんな感じですか?!」
マイクを向けたのは茶髪で頬は赤らむ麗らかな女の子、麗日お茶子。　お茶子は考えながら
「えーっと…筋骨隆々？って感じです！ムキムキマッチョで、アメリカンで～…なんか、面白いです！」

「教師オールマイトについてどう思ってますか？」
マイクを向けたのはメガネをかけた大真面目な飯田天哉。
「最高峰の教育機関に自分は在籍していると事実をことさら意識させられますね。風格はともかくユーモラスな部分など様々なものを感じますね。トップヒーローとは常にトップヒーローであり、トップヒーローとは、何がヒーローであるかを意識させ、ヒーローなるもの…」
長々と話し出す飯田、マスコミは話し相手を選ぶ相手を間違えたという表情でため息をつく。

「オールマイ…あれ!?君確かヘドロのときの…」
「やめろ！」
マイクを向けようとした先は、グギギと歯ぎしりする爆豪勝己。黒歴史を掘り起こされては当然の反応だ。無理もない…
ある意味ニュースにされ、騒ぎを起こした彼は有名人といっても間違いではない。

「オール…小汚！なんなんですかあなた!?関係者ですか!?」
マイクを向けた先は1ーAの担任、相澤消太だ。
相澤はマスコミに手をしっしと払いのける感じに
「彼は今日非番です、授業の妨げになるので帰って下さい」
早口で、でもってやる気も何も感じられない声でそう言うと、校門をくぐりマスコミから去っていく。
「あっ！ちょっ、待ってくださいよ！貴方雄英の関係者か何かでしょ!?オールマイトについて一言だけでいいですので聞かせて下さい！」
「あなた小汚すぎませんか!?」
「どっかで見たことあるよな」
「なんだっけ？忘れた」
「思い出せそうで思い出せないこの曖昧とした感覚……誰だったかな～…？」
マスコミはぞろぞろと聞いてくるが相澤は相手にしてない、相澤の

性格からはそんな感じだろう。
（めんどくさいな…あの人は、よくこの中でヒーローなんざやれたな…平和の象徴と呼ばれるだけのことはあるけど…こりゃあ生活に支障が出そうだぞ……）
　オールマイトが雄英の教師に就任したというニュースは、全国を驚かせ連日マスコミが波のように押し寄せる騒ぎになっている。
「ちょっとでもいいので話くらい聞かせて――」

　瞬間

　ピーー!!
　ガガガガガガガガ!!!

「うわぁぁ！何!?」
　マイクを持って校門をくぐろうとするマスコミは、校門のセンサーに触れてセキュリティが動いたのだ。
　そのため門は完璧に閉まっている。
「雄英バリアーだよ、俺らはそう呼んでいる」
「ネーミングセンスダサくない!?」
　雄英バリアーとは、学校のものでない限り入ることは出来ないのだ、またセキュリティは門だけでなく所々に設置してある。
　マスコミは満足してないのか、欲求不満がいっしか怒りの声を上げた。
「何よそれ！一言くらいいただければいいのに!!」
「そうだよ本当にもー！一言さえくれりゃあ問題解決なのによー！」
「問題を増やしてどーすんだよ本当にさ～！何で取材させてくれねーんだか…」

　マスコミ怒り狂う嵐のブーイングの中、
　ザッザッと足音を立てる人影が…どっからどう見てもマスコミではない者が後ろから歩み寄り。

そして、誰もが聞こえない声でこう言った。
「…オールマイト、オールマイトって…そんなにあのゴミが凄いか…？雄英高校…気に入らないな、だったら」
するとその男は再び歩き出し、マスコミの波に紛れて…
「壊してやるよ」
そう言った。

会議室
「なるほど…半蔵の言ってることはわかったよ」
半蔵は昨日起きたことを校長に話した。半蔵は霧夜から昨日の襲撃事件のことを聞き、秘伝忍法が通用しなかったことを知らされた。それどころか悪忍の方がよほど強いと思い知らされたのである。
「うむ…悪忍が攻めてきた、これがどういう意味か、校長もお分かりであろう……」
半蔵は、いつものエロスな半蔵ではなく、真剣な顔で話している。
「あれはあくまで宣戦布告。ここからはわかるさ…君ら代々伝わる超秘伝忍法書だろ？それが今回のカギとなる…って」
「うむ、そろそろ超秘伝忍法書の後継者を見つけ出さねばな…」
そう言うが、校長はそれを制するかのように手を挙げる。
「いや、暫くはこのままで良い。確かにこれは充分緊急事態だけど、無理に焦っても仕方がない、むしろ向こうの思うツボだ。それに超秘伝忍法書は、『人を選ぶ』んだろ？」
校長は忍びについてはよく知っている。何しろ忍びの世界の上層部と同じくらい偉い人なのだから。
「問題はそこじゃ、もし悪忍に超秘伝忍法書を取られるようなことでもあれば…事態は悪化する」
半蔵はそう言う。すると二人の話を聞いていたオールマイト（トウ

ルーフォーム）はため息をつく。
「全く…己が情けない…!!悪忍が雄英の生徒たちに手を出し……そんななか私は全く知らなかった……!今すぐ蛇女っていう悪忍養成学校に殴り込みに行きたいくらいのね…!!」
　オールマイトは怒りを込み上げる。すると校長はオールマイトを落ち着かせる。
「よしなよ、ヒーローは忍びの存在を知らない者だっているんだ…それをやったら下手すれば全面戦争になり兼ねないよ、それはいくら平和の象徴とも謳われるオールマイトでもそれはやっちゃあいけないよ」
「はい……そんなことは分かっています…」
　オールマイトは悔しかったのだろう…悪忍が緑谷や轟に接触し、殺そうとしたことを。いや、そもそももしオールマイトが殴り込みに行ったら、逆に死人が出そうだ。
「まあ暫くは様子を見よう!半蔵、君はもしまた何かあったら連絡を」
「うむ!それにしても…まさかこんなことが起きるとはのう…」
「うん…超秘伝忍法書の誰かが引き継ぐのは、いつかそうなると分かってはいたが、まさか悪忍が此処までやるとはね、気をつけていこう。この事件を解決しないと、いつか雄英やヒーロー…何より社会全体に影響が出るよ」
　校長はそう言うのであった。
　場所は変わり、1ーAの教室
　教室の中では相澤先生が書類を手にもっている
「言いたいことは山ほどあるが…まずは、お前ら昨日の戦闘訓練お疲れ。Vと成績を見させてもらったぞ、んで爆豪」
「?」
　相澤はため息をして
「お前もうガキみたいなマネするな、能力あんだから…勿体ねえ」
　爆豪はどこかふてくされた顔で、渋々と
「わかってる…」とだけ言った。
　すると今度は緑谷を睨み

「んで緑谷は腕壊してまた一件落着ってか？個性の調整、個性使用後の怪我、いつまでも出来ないなんてのは通じねーぞ？この先どんどん訓練が厳しくなってくんだから…」
緑谷は恐縮する。だが相澤の声は見込みゼロと判断した声ではなく、むしろ可能性を信じて、先を見込んでのことだった。
「俺は同じことをいうのは嫌いだが、逆にお前が問題をクリアさえすればやれること、可能性は多い…焦れよ緑谷」
「…はいっ！」
そう言うと緑谷は光を篭った目を開き、大きな声で返事をした。
「まあいい、そこで本題だ…昨日、『半蔵学院』の忍学生の先生から連絡があった」
「え!?」
「っ…！」
「……」
緑谷、轟、飛鳥、雲雀以外の皆んなは驚く様子でいる。
「え、待って下さい…柳生さんは!?」
お茶子が叫ぶと、相澤は
「柳生はもうじき来る…そろそろか？」
すると言ってるそばから、扉が開いた、そこには、顔にシップやバンソウコなどを貼ってる柳生の姿であった。
「…おはよう、遅れて申し訳ない」
「「柳生ちゃん（さん、くん）!!!」」
柳生がやって来たことで、皆んなはヤッターという顔をする。相澤はため息をついて、柳生に振り向く。
「おい柳生…遅れて申し訳ありませんだ。遅れてるのに偉そうに見えるぞ……いつからお前は偉くなった、言葉遣い気をつけろ」
「…はい」
柳生は少しふてくされたような表情で返事をし、席に着く。
「んでお前ら、さっきの話の続きだが、その半蔵学院に悪忍ってヤツらが攻め込んできたらしい」
「ええっ!?!」

「先生！悪忍も飛鳥たちと同じ巨乳なんですか!?」
「峰田、廊下に立たずぞ」
　皆んなは驚く表情で、峰田は「ちぇ～っ…」とした様子でいるがまだ早いと言わんばかりなのか、皆んなの様子を御構い無しに話を続ける。
「その悪忍と対峙したのは、当然その三人は当てはまる訳だが…緑谷、轟が半蔵学院に行き、悪忍と戦ったそうだ」
「!!????」
!!皆んなは一斉に振り向く、爆豪なんかは「クソデクがぁ～…！」みたいな目つきで緑谷を思っきし睨みつける。
「あっ、だから柳生はケガしてんのか…！」
　切島は納得したように、手の内をポンと叩く。
「お前たち二人とも、もしこれが運が悪ければ最悪死んでたわけだ…その場合、それだけじゃ済まねえぞ？何よりお前たちが事故で死んだ…なんて済まねえこともあり得る。忍びの存在は消せても、お前たちの存在は消せないからな」
「うっ…」
「ちょっと待って下さい！」
　緑谷は絶句すると、飛鳥は席に立ち上がる。
「私は、もしこの二人が駆けつけに来てくれなければ死んでたんですよ!?だから…二人のことはどうか……」
　飛鳥が反論すると、相澤は「落ち着け」と飛鳥を席に座らせる。
「だから処罰とかはしない…今回は事情が事情で仕方ないからな…俺たち表側の『ルール』に反していても、相手が忍びなら、告発したところで逆にお前たち忍びの存在を明かしてしまう事になるからな…だから、お前たちこれから気をつけろってことだ…以上。これから徹底的に悪忍には気をつけてほしい。」
（ちょっと待って！朝からこんな話されたら重い!!）
　皆んなはそう思うのであった。

これは皆んなはすごく分かりづらかったが、柳生だけは相澤の言ってることを解釈した。最初にわざわざ怒ったような言い方をしたのは、緑谷と轟に何かあったらいけないという心配からくるものと、最後は二人の命に別状がなかったことに安心したものだと…

「先生は大人だな…本当に」

柳生はポツリと呟くのであった。

かれこれ時間はＳＨＲの時間だ、連絡事項や生徒の出席の確認…様々だ。

「さてホームルームの本題はここからだ、早速で悪いが君らにどうしてもやって貰わなければいけないことがある」

「うわ！もしかして抜きうちテストとか!?」

「うわー！マジ最悪！相澤先生の場合、赤点の人は除籍処分とかされそー！」

相澤は発狂する芦戸と上鳴に

「お前ら除籍処分にされたいか？」

「嫌っす聞きます」

怒れる相澤を前に２人は恐縮している。

「それで、本題とは？」

柳生がそう聞くと

「ん、お前ら…今から…」

みんなはゴクリと唾を飲み相澤は雰囲気をまとってこう言った。

「学級委員を決めてもらう」

「クソ学校ッぽいのキターーー!!」

ヒャッホーイと歓喜の声をあげるみんな、みんなが予想してたのとは違ったため良かったのであろう。

ホッと一息つくと同時に、異常気象で突然嵐が発生したかのように、一気にクラスの皆んなが大きく騒めき出す。

「皆んな手を挙げてるんだな」

と呆れたように柳生は言う

「いや、オメーもな柳生」
と手を挙げてる柳生に瀬呂はツッコミを入れる
「ケッ……!テメーもやるんじゃねーかよクソが!」
仲が悪いのか、爆豪は柳生に舌打ちをする。
「いや、オメーもだろ爆豪!なんなんだよこの流れ!」
手を挙げてる爆豪に2連続でツッコミを入れる瀬呂
普通科なら雑務でそんなことはやらないが、ヒーロー科ではかなり重要な役割だ。なぜならヒーローは集団を導く立場、つまり学級委員はそんなヒーローたちを導く存在になるのだ。
だから皆は今、学級委員になり皆んなをまとめる人間になりたいと思っているのだ。
「君たち静粛にしたまえ!」
大声を出したのは飯田であった。皆んなは飯田の方を見やり
「多をけん引する重大な役割だ!『やりたい者』がやれるモノではないだろう!」
真面目な飯田なら言うことだ、彼の真面目さはもはや凄いというレベルを超えてるかのような。
「だからこそ、多数決の票で決めるべきではないか!?」
手を挙げて
「3連続!!お前らなんなんだ飯田!」
瀬呂はもう飽きたのかなんというか、全力でツッコむ
「日が浅いのに信頼もクソもないわ飯田ちゃん」
「んなもん皆んな自分に票を入れらあ!!」
「だからこそ複数の票に入ったものが、多数決で決めるというのはどうだろうか?それでこそ真の学級委員に相応しくないか!?というわけで先生!票で決めて宜しいでしょうか!?」
皆んなを説得する飯田は、先生の方向に振り向く。ここでキャンプでもするのかとツッコミを入れても良いのだろうか、相澤先生は寝袋に入っていた。それも睡魔に襲われてるのか、眠たそうな顔をして。
「うん、まあ制限時間内に決めりゃあなんでもいいよ」
やる気のない、ダルい声でボソリと呟くと、ゼリー状の栄養食品を

飲みはじめた。

３分後
票が多かった数
緑谷出久　４票
八百万百　２票
その他１票、あるいは０票
「ぼ、ぼ、僕３票ーー!?」
その声の正体は、緑谷出久だ。
「雲雀!なんでお前は自分に票を入れなかった!」
柳生は前の席にいる雲雀に言うと、雲雀は満面な笑みで柳生にこう言った。
「えっ?私やるとは言ってないよ?柳生ちゃんはしっかりしてるから柳生ちゃんに入れちゃった。えへへ♪」
「なっ!」
雲雀の笑顔に気持ち、柳生は嬉しいという気持ちを通り越し、目をクラクラさせる。
「雲雀、お前はどこまで優しいんだ…」
「な、何でデクに…一体誰が…!」
ありえないと言う様子の爆豪
「まー、オメーに入れるよりかはマシかもな!」
「あぁ!?しょうゆ顔今なんつった…?」
「あ、いや…」
つい言ってしまったと後悔する瀬呂にキレる爆豪。
「……」
横目でなるべく爆豪を見ないようにしてるのはお茶子であった。

（爆豪くんにバレたら怒りそうで怖いな～…）
心のなかでそっと言い聞かせるお茶子
「くっ…やはり誰も入れてくれなかった…！」
「他に入れたのね…」
と言う蛙吹に砂糖は
「飯田、お前やりたかったのに誰に入れたんだ？」
と聞く。
ちなみに飯田はこの通り、他の人に票を入れたため当然０票。
時間が来たため委員長決めは終わったことを確認し相澤は学級委員決めを締め切ることにした。
「学級委員は緑谷、副委員長は八百万だ、これで決まりだ」
相澤がそう言い終わると八百万は
「んー、なんかちょっと悔しいですわ……」
「ま、ままママママ、マジでか!!?」
横目で見やる八百万に緑谷は動揺を隠せない。
（ま、まさかぼ、ぼぼぼ僕が…！うおおぉぉ―！）
皆んなはどう反応するのか、飽きられたり、批判されたりしてしまわれるのか…そんなことを緑谷は考えていたが、それは大きく外れた。
「へー、けど緑谷いいんじゃね！なんだかんだ訓練の時熱かったし！」
「八百万は講評のとき凄かったからな！」
切島に続き、上鳴も納得したかのように声に出す。この二人は単細胞な為か、疑うことや否定論は全くない。寧ろ相手の良いところを見つけ褒める長所のある良い二人だ。
「…くっ！」
飯田は正直、少々心苦しいような、誰も選んでくれなかったような寂しさと悔しさの顔が浮かび上がる。
「チッ…クソナードが!!」
爆豪は緑谷が委員長になったことに悔しさ、怒り、ありとあらゆる感情が心の底から込み上げて来て、思わず掌から爆破を出すのを何とか我慢している。

昼食　　食堂メシ処

「お米がうまい！」
ホクホクの白いご飯が盛られてるお茶わんを持って箸でお米を口に入れるお茶子。美味しそうに食べてるのが分かる。食堂では、緑谷、お茶子、飯田、飛鳥の四人が来ている。
ここはランチラッシュが安価で一流の料理をふるまってくれるので、食堂は快適だ。
だがその分雄英高校では人が多く、食堂は常に混雑しているのだ。
「それにしても…学級委員だなんて僕が務まるのかな～…」
心配する緑谷に
「ツトマル！」
とカタコトでいうお茶子に飯田は
「うん、緑谷くんなら出来るさ！とっさな判断力と胆力があるから僕は君に票を入れたのさ！」
（あの1票僕に入れたのか！）
ついとっさに答えた飯田に緑谷はえー！っというような顔をする…当然本人にそんなことは言えない。
「あっ、そうだったの！私も緑谷くんに入れたんだ！」
（ふぁーーー!!??）
まさか飛鳥までも緑谷に票を入れたのは驚きだった。ふぁーーー!!
「けど飯田くんなら迷わず自分に票を入れるかと思った！だってメガネだもん！」
（理由そこ!?ていうか相変わらずざっくりくるよな麗日さん…裏表ない証拠なのかな？）
メガネだからと言うお茶子は自分の口元についてるお米をとって。
飯田は少々目をつむり、考えるように

「ぼ、僕はぼくの正しいことをやったまでで…」
ん？
ぼく？
僕??
「…」
「ん？どうしたんだい三人とも固まって？」
二人は意外みたいな顔をしているに対し飯田は不思議そうな顔をする。
そんな飯田にお茶子は
「飯田くん…前々から気になってたんだけど…もしかして、坊っちゃん!?」
「坊!!」
吹き出しそうになる飯田はなんとか堪え、首を横に振り否定する。
坊ちゃん、言われてみればそんな気もしない。
「そ、そう言われるのが嫌だから一人称を変えてたんだ！つい癖で言ってしまった…ああもう！恥ずかしい…！」
「けど飯田くんオレンジジュースもいっつも飲むしね！」
飛鳥が笑顔でそう言う…するとそこは違うのか飯田は反論する。
「いや、これは違うんだ…俺の個性はエンジンで、オレンジジュースはエンジンのガソリンとなるんだ！」
「へぇ！なるほど…！あとでメモしておこっかな…」
ボソリとつぶやく緑谷。
まさかオレンジジュースが飯田のエンジンのガソリンになるとは知らなかった。飯田は観念したかのような顔でこういう
「実は俺の家は代々ヒーローの一家なんだが、俺はその次男だ」
「ええーーーー!!」
緑谷とお茶子、飛鳥は驚きのあまり大声をあげてしまう。
「し、知らなかった…！ちなみにどんなヒーローの!?」
興奮して飯田に食いついてくる緑谷。
「…ターボヒーロー、インゲニウムは知ってるかい？」
「知ってるよ！たしか事務所で６５人もののサイドキックを雇ってる

大物プロヒーローだよね！飯田くん、まさか…！」
　緑谷はもしやと飯田家のことを予想した。
「ああ、それが俺の兄さ！」
「あからさま凄いや！」
　飯田は自慢気にいうと緑谷はなお一層目をキラキラさせている。
　だが飯田は
「俺の兄は人々を導く存在だ、だから俺はそんな兄に憧れた…だけど俺にはまだ人を導く立場は早すぎるんだと思う」
「飯田…くん」
（僕のヒーロー像がオールマイト…だけど飯田くんの場合はインゲニウム、飯田くんのお兄さんなんだ）
　緑谷は、飯田の気持ちがよく分かった。
　幼いころ緑谷はオールマイトにずっと憧れてた、何度も何度もネットの動画でオールマイトの活躍を観るくらいに。けど
（飯田くんは真面目だし…それに人の立場や状況を分かってる…飯田くん考えすぎなのかな、飯田くんは十分に人を導ける立場なのに……勿体無いな…）
　声に出して言いたかったが、出すことが出来ずつい心のなかでそう呟いた。
「なんか飯田くんって凄いこと考えるんだね！凄いやすごいや！」
「す、凄いこと？ぼ…俺は兄と俺のことを言ったまでで別にそんな」
　苦笑する飯田にお茶子はまた
「あー！飯田くん笑うところ初めて見た！」
「お、俺だって笑うときはあるぞ！」
　お茶子と飯田はそんなやりとりをしているのに対し緑谷は安心、暖かい目で二人のやりとりを見守る。
「飯田くん…その気持ちは分かるなあ…」
　飛鳥がそう言うと、飯田は首を傾げて飛鳥に質問する。
「ん？君も俺と同じなのかい？」
「うん…まあなんというか、此処だけの話なんだけど、皆んなに言わないでね？」

コクコクと三人は頷き、飛鳥に真剣な眼差しで聞く。
「私の家は代々忍びの家系なんだけど…祖父…じっちゃんはね、伝説の忍びの、半蔵なんだ」
「「「ぶっ!!!!!!」」」
瞬間、三人は衝撃の事実を知った顔になり、思わず吹き出しそうになる。
「は、半蔵って、飛鳥くん……あの？」
「うん！」
「ま、ま、マジで…まじでか!!!!」
飯田と緑谷はガクガクと震えてる。お茶子は
「となると…半蔵学院…半蔵……あっ！もしかして、あの学校て伝説の忍の半蔵って人の由来で？」
「うん！」
「えええええーーーーーーーー」
二人は唖然としているのか、口を開いてる様子だった。
「えへへ…♪なんかこういう話するの、久しぶりだな…」
飛鳥は照れてるのか、手を頭の後ろに置いている。
「で、でもヤバ…すご!!」
緑谷はガクガクと汗を滝のように流しながら呟いている。飯田は驚いていたが、それも納得とした顔で、飛鳥に頷き話し出す。
「なるほど…だから君はそんなに強いのか！納得した！」
そう言うが、飛鳥はどこかショボンとして寂しいような顔に変わる。
「ううん…私なんか全然！　それに悪忍の焔ちゃんに『弱い』って言われてるし、全く歯が立たなかったし……あと、じっちゃんの名に恥をかかせてるって、つい思っちゃうんだ…」
飛鳥は真剣な顔で、申し訳ないように呟く。
「飛鳥さん…」
緑谷は飛鳥の気持ちもなんとなく分かった。そりゃ自分だってそうだ、オールマイトからこの個性を貰い、オールマイトに託されたのだ。自分も早くオールマイトみたいにならなきゃって何度思ったこ

とか…すると飯田は飛鳥の肩にポンと手を置いた。
「いいや、そんなことはないぞ飛鳥くん」
「えっ？」
飛鳥は飯田に振り向く。
「実力がどうとかそんなの関係ないさ！まあ、実力も大事だが…誰かに弱いと言われたり、バカにされても自分は堂々と胸を張ればいいんだ！俺の言える立場じゃないけど、でも…俺は飛鳥くんは素晴らしい忍びだと思う。もっと自分に自信を持てば良いと思うぞ」
飯田の正論に、飛鳥は元気を取り戻したのか…「ありがとう飯田くん！」と答える。
「飯田くん男前～！」
「麗日くん、俺はそんなに言われるほどではないぞ？ただ、俺は自分の意見を主張したまでで…それに俺は男だ！第一緑谷くんも凄いと思うぞ？昨日、悪忍と交戦したんだろ？もし君が無理をしてでも駆けつけなければ飛鳥くんはどうなってたことか…！」
「も、もう！その話はいいよ～…！それに話すり替えたよね!?」
「す、すり替えてないぞ飛鳥くん！俺はただ、それほど緑谷くんが学級委員長として務まると言ってるだけで…」
照れてる飛鳥に、飯田は指で鼻をすすりながら話している。
（飯田くん…）
飯田のリーダーらしい風格に、緑谷は少し憧れに似た目線を向けるのであった。

その瞬間。

ヴヴヴヴヴヴーーーー!!!
警報がなった。
「な、なんだ!?」
突然の出来事に驚く飯田にお茶子は驚きのあまり飲んでた味噌汁を吹き出してしまう。
緑谷なんかは食べてたカツ丼を途中で喉に詰まったために、水を飲

んで腹を手で叩いている。
「これは警報…？けど一体何で」
首をかしげる飯田
『セキュリティ3が突破されました』
どうやらアナウンスがそういうと食堂にいたみんなは慌てて一斉に逃げるようにする
「セキュリティ3？何ですかソレは!?」
「学校の中のセキュリティだよ！誰かが潜入したんだ、今まで3年間そんなことなかったのに！君たちも早く逃げるんだ！」
3年生の先輩が逃げるようにそういった。
侵入者？一体誰が??
「また悪忍…とかじゃないよね？」
飛鳥はそうでないことを祈っている。自分が雄英と繋がってると蛇女は知ってるなら、またの襲撃もあり得る。
数分すら経たないうちにあっという間にギュウギュウ状態。逆に逃げる人が波打つように押してくるため今はまさに苦しい状態だ。
「飯田くん！」
「麗日くんに緑谷くん！飛鳥くん！」
どうやらこの荒れ狂う行列の波で離ればなれになったらしい、それでもなんとか見えるくらいだ。
「みなさん落ち着いて対処してください！」
そこは大きな声で叫ぶ八百万だった。かけ離れたところで叫んではいるが皆は止まらない。
「雲雀〜！おいお前そこどけ！」
「柳生ちゃん！落ち着いて、柳生ちゃんが落ち着いて!!雲雀大丈夫だから！」
柳生は、人混みの中で人を押し退けるが、雲雀は逆にそれが危険だと制止する。まあそりやあそうだ。
おかし、押さないかけない喋らないだから…
「み、みんな落ち着いて！」
「んだよコレ…」

切島に上鳴も叫んでいる。
飯田は窓ガラスのところに近づくと外で何が起きてるか確認する。
「なっ…！これは…」
飯田が目にしたのは、学校内に押し寄せてくるテレビ局…マスコミ集団だった。
マスコミ集団を対処してるのはプレゼント・マイクに相澤先生だ。
「マスコミ…？何でそんな…けどこれを早くみんなに知らせて落ち着かせないと…！」
いくら非常事態とはいえ、あまりにも押し寄せる波の行列。押して人が転んで踏まれたりしたらひとたまりもない、この状況こそもピンチなのだ。

外では

「オールマイト居るんでしょう!?出してくださいよ一言いただけたら帰りますから！」
「だから非番だっつーの！」
しつこいマスコミに舌打ちするプレゼント・マイク。
「だから一言いただけたらもう帰りますから！」
「一言とって二言欲しがるのがあんたらマスコミだ」
両手でなんとか落ち着かせるようにする相澤先生。
だが一向におさまらないマスコミ、流石に限度が過ぎてるので、プレゼント・マイクは相澤に舌打ちする。
「なあ、もうこれ不法侵入だ…ヴィランだぜこれ？ぶっ飛ばしてもいいかな…？」
「やめろマイク…あることないこと書かれるぞ、取り敢えず警察を待とう……連絡しておいた」
キレるマイクを止める相澤、相澤がとても大変そうだ。

学校内では

（先生方がマスコミを止めている…となるとみんなはこのことに気付いてない…そうだ！）
飯田はふと閃いた。自分が今取るべき行動を、自分が何をすべきか、どうすれば皆んなをまとめれるのか。
「麗日くん！俺を浮かしてくれ！」
「え？う、うん…分かった！」
するとなんとか、お茶子の手がギリギリ飯田の手に触れることが出来た。
（飯田くん…何をする気なの!?）
飛鳥は内心そう思うのであった。
するとお茶子の個性で飯田を浮かして、なんとかこの波の行列から抜けることが出来た。
（目立つ場所で）
足のエンジンを使って
ドロロローーーン!!
エンジンの音が皆の頭上で響く。
すると回転するように扉の上の壁になんとかくっつき。
（短く！正確に！大声で！大胆に！）
そして大きな声で
「皆さん！大丈ーー夫!!」
するとようやく飯田に注目した。
今の飯田はまさに非常口の看板だ。
「皆さん落ち着いて下さい！ただマスコミが校内に入っただけです！」
そうすると
「なんだよ…」
「ビックリした～」
「驚いたぜ」
「押して悪かったな」
皆んながそう声を交わっている。

「まあ、それにしても飯田スゲェな！なんだそれ、非常口の看板じゃんか！」
感心する切島は飯田に指をさしてものを言う。
上鳴は飛鳥に
「なあ、飛鳥ちゃん食堂で何食ってたん？今度飯食いに行かね？」
「え？え～っと私は～…あははっ……」
飛鳥は上鳴の誘いに気不味そうに返事をする。
その時だった。
「ん？あれは…？」
飛鳥は窓ガラスの方に目をやる、そこにはマスコミが退散している様子
どうやら警察が来て、相澤が警察を呼んだそうだ。
窓ガラスの方を見てる飛鳥に上鳴は
「ん？どうかした？あっ、警察来てマスコミ退散してんだなー」
上鳴は納得したように頷く。
が、飛鳥が見てるのはそこじゃなかった。
「あの人…マスコミの人……じゃないよね…？」
飛鳥が見たのは警察がマスコミを対処してる反対に、一人の男が、マスコミ集団の反対に歩んでいき帰ってるように見える。
その男はどっからどう見てもマスコミではないようだ。
（…なんだろ？……この胸騒ぎは……）
飛鳥は少しながらも不安になった。
「どうしたんだ？飛鳥、早く教室戻ろうぜ？時間だし」
上鳴がそういうと、ようやく我に帰ったのか。
「う、うん…」
飛鳥はそう呟いて教室に戻ることにした。
「…」
外ではマスコミが騒ぎを起こした為に、校舎は警察とマスコミで荒れている。
そんな反対方向にむかって歩いている、一人の不気味な男はこう

言った。
「待ってろよヒーロー…社会のゴミが…」
そういうとその男の前に黒い霧の空間が現れて、そのなかに入るように闇のなかに消えていった。

「クラス委員長、早く初めて」
教室内では、今度は委員決めを行うそうだ。カチコチしてる緑谷に八百万がそういうと
「で、では他の委員決めを行おうと思います…が、その前に…」
すると緊迫してた緑谷は、すぐに緊張を解きほぐし飯田をみる
「クラスの委員長は、飯田くんがやるべきだと思います」
「！」
緑谷の発言に飯田はおどろき固まってしまう。
緑谷は話を続けて
「だって…飯田くんは皆んなをまとめれることが出来たんだもん…僕は飯田くんがやるべきだと思います！」
「緑谷くん…」
緑谷に続き
「あっ、確かにそれいいな！緑谷もいいけど食堂のときの飯田カッコよかったしな！」
「非常口みたいだったしな」
納得する切島と上鳴に続きほかの皆んなも
「おー！確かにその方がいいよな！」
「非常口飯田頑張れよ～！」
砂糖に瀬呂
そして飯田の後ろのお茶子は
「良かったね、飯田くん！」
「私も賛成で～す！」
ニカッと天真爛漫な微笑みを浮かべるお茶子と飛鳥に、飯田はクスッと微笑んだ。
「クラスの委員長である緑谷くんが言うなら仕方ないな！では俺がク

ラスの委員長になろう！」
　飯田はみんなにそういうと
「おう！頑張れよ非常口飯田！」
「非常口～！」
　飯田の名前はいつしか非常口などと名付けられたが飯田自身は嫌がってない様子だ。
「オイ…何でもいいが早くしろ…時間ないんだから」
　ギロッとみんなを睨む相澤にみんなは静まり返る。
「では、まずほかの委員決めだが…！」

　校門では
「……ねえ、普通に考えてさ…ただのマスコミに…こんなこと出来るかい？」
　静かな声だが、そこには裏付け…まるでその原因を探るような、怒りを隠す声がそう響く。
　身長は低く、白いネズミみたいな人が、そう、校長であった。
　その他の雄英教師や半蔵が校門を見つめている。半蔵が言うには、これは忍…悪忍の仕業ではないと言う。
「そそのかした者がいるね…」
　他の教師たちも『ソレ』を見てうなずくと
「邪（よこしま）な者が入り込んだか…あるいは…」
『ソレ』は今、目の前の校門の現状…校長先生はこう言った。
「宣戦布告の腹づもりか」
　校門のセキュリティバリアーが崩壊されていた。まるで枯れ葉を粉々にしたようなそのバリアーに、殺意と悪意が込められていた。

11話「USJ」

翌日の朝。雄英の教師であり平和の象徴と謳われているオールマイトは、先ほど子供を人質に脅してたヴィランを通勤がてら難なく倒し、ひき逃げ犯を捕らえ、引きこもり事件を解決…今日で一気に三件もの事件を見事解決したオールマイトは、いつものように跳躍力で空を飛ぶ。そびえ立つビル、その窓ガラスが反射してオールマイトの姿を映し出す。太陽の光が眩しく思える位、清々しい空の下、オールマイトは不安と疑問を抱いていた。それは学校に遅れるという、子供が寝坊して学校へ行くような感覚ではなく、個性のワンフォーオールのことだった。

（…パワーやスピードが落ちてる…やはり、もう…）

ワンフォーオールは聖火の如く受け継がれてきたもの、緑谷に個性を渡したため、オールマイトは日に日に弱くなってきてるのだ。つまり、今のオールマイトに残ってるこのパワーは、ワンフォーオールの残り火…という訳だ。

（……まあ、それは想定内…だが、緑谷少年が、まさか爆豪くんにこの事を言ってしまうとはね……）

それは戦闘訓練が終わり、爆豪が帰るところを緑谷が呼び止めたあの日の事だった。

「なに？緑谷少年、ワンフォーオールのことを爆豪少年に話したのか!?絶対に秘密だと言っただろう！何故話してしまったんだ!?」

「ご、ゴメンなさいオールマイト！ぼ、僕は…ただ止めようとしたけど…そんなこと言うつもりは…それに、個性について、オールマイトからっていうことは一切言っていません！」

「うむむ…」

目をつむり、反省をしている緑谷をみやりオールマイトは考えるような仕草をし、難しい顔を立てる。
（…緑谷少年は、あえて人にものを言うような子ではないと思ってたんだが…どうやら緑谷少年の優しさが逆に…）
緑谷の優しさが、逆に爆豪に言ってしまったのだと見解するオールマイトは、「もし自分が早く爆豪少年の所へ駆けつけていたら…」と心の中で呟く。そうすればその秘密を言わせることなく守ることが出来たのかもしれない。
「緑谷少年、今回は特別に大目でみるぜ…爆豪少年もただの気のせいだと思ってるからね、けど…次はよしてくれよ…この力をもつには責任が必要なんだ…いいね？」
オールマイトはあえて怒りはしなかったが、厳しく注意した。それもそうだ、この話は全国には知られていない、この秘密を知ってるものは数少ないのだから。だからこの話をいつ誰が聞いててもおかしくはないし、そこから情報が漏れてしまうケースだってある。だからこそ、弟子である緑谷に対し、オールマイトは心を鬼にし注意した。

（私がいる範囲で、彼を育てなければな！）

しかし、気づかないであろう……そう思ってる間にも、見えない悪意が…着々とヒーローの卵達に危害を加えようとしていることを…少女達に待ち受ける悲惨な出来事も……
この時は、まだ誰も知らなかったんだ。

マスコミ集団の件から一夜明け、破壊されてたセキュリティーバリアーはなんとか修復されていた。
その理由は生徒たちには『何かしらの故障』と言ってはいるが、現在、教師側は原因を探っているようだ。
「はいお前らおはようさん」
「おはようございます！」
教室に入ってくる相澤にみんなは挨拶をする。
「先生、あの後のセキュリティーバリアーとマスコミ集団はどうなったのでしょうか？」
心配の色に染める飛鳥は手を挙げ相澤に質問する。
「アレはなんらかの原因で故障…まあ今も教師側はそれを探って調査している、マスコミはあの後警察きたから退散したよ…別にお前が気にすることじゃない」
「だ、だと良いのですけど…」
相澤が説明すると、飛鳥は多少安心できないと言った、曖昧な表情を浮かばせた。
「やっぱり悪忍の仕業なのかな～…？」
雲雀は、半蔵学院を襲ってきた蛇女と名乗る悪忍、その選抜メンバーの一人、春花のことを思い出しながら心配そうに呟くと、前の席の爆豪は舌打ちをする。
「チッ…ビビってんじゃねーよ、例え敵だろうと悪忍とやらが来ようと俺がフルボッコにするっつーの」
「び、ビビってないもん！雲雀、頑張るもん！」

「ああっ!?誰もテメェの意見なんざ聞いてねえ！少し黙ってろ!!」
「うわああーーーーーーん!!」
爆豪のブチ切れ…いや、爆切れに雲雀はまたしても泣き出してしまう。流石に慣れすぎて皆の反応は薄い。ただそれはある人物を除いての話…
「おい貴様…死ぬ前に何か言い残すことはあるか？」
「ハアッ!?テメェも何なんだ!!殺すぞ！」
「よし、殺るか…」
それは、雲雀大好き１００％の柳生であった。もし雲雀かイカ、どちらが好きかと聞かれたら迷わず雲雀を選ぶであろう…それ位柳生は雲雀のことが好きであり、百合の世界に行ってるのではないかと思わせてしまうほどに柳生は雲雀への愛が強いのだ。
そんな雲雀を傷つけられて柳生が黙っているわけがなく、彼女は番傘から刀を取り出し、爆豪は掌を爆破させる…と相澤は目を赤くして、爆豪と柳生を睨む。
「オイお前ら…そろそろ良いか？」
「……」
相澤の威嚇に、先ほどまで戦争でも起きてしまうのではないか？という緊迫した空間から、一気に静寂な空気に一変し、柳生と爆豪はその場で黙り込む。

話は戻り、相澤はみんなに午後の授業、ヒーロー基礎学について連絡をする。
「よしお前ら、今日の午後のヒーロー基礎学は…災害救助なんでもござれ…人命救助（レスキュー）訓練だ」
寝袋のポケットのなかから『ＲＥＳＣＵＥ』という文字が書かれてるプラスチックカードを取り出した。

教室内がザワザワと騒ぎ出す。
「うわ～…レスキュー訓練か…嫌だな」
「バッカお前、こういうのこそヒーローの本格的なヤツだぜ！」
多少嫌がる上鳴に切島は男魂、ヒーロー魂が燃えている。どっちなんだよ、と言ったら両方だぜ！と、答えてしまいそうだ。
「レスキュー訓練…そんなのやったことないなぁ～…一体どんなことするんだろう？」
「水難なら私の独壇場…ケロケロ」
飛鳥は苦笑しながらも、レスキュー訓練について考え込む。そう、忍の訓練では対人戦闘、精神修行、傀儡戦闘、ｅｔｃ……しかし災害救助はやった事がないためか、一体どんな訓練をすれば良いのかなど、彼女だけではなく、三人とも分かる訳がない。ここぞと言わんばかりに静かに燃える蛙吹は、ケロケロと声を出す。
蛙吹はみたまんま蛙だ、だから水中に関しては得意とするのだろう。
「なんでも良いが、午後から始めるんだからな？」
相澤も静かに燃える…色んな意味で。
その気圧にはたまた皆は黙り込む。
皆んなは静寂な空気と共に、燃えるものが消えて塵と化した。

朝１１時２５分
今日のニュースは一気に３つの事件が放送された。
１つ、連続殺人強盗犯の僧坊ヘッドギア逮捕
２つ、ひき逃げ事件解決
３つ、立てこもり事件解決
テレビでも放送され、街でもその情報が流れて市民はその噂話しをしていた。

「いや～今回もオールマイト凄かったよな！俺身近で見てたけど」
「スピード解決だね、今日で一気に3件も事件解決してんだもん」
そんな噂話の声が、街では騒がしく響きわたっていた。
「……」
一人の女性は、そんな街中を不機嫌そうに歩いている…まるで呆れてるような表情だ。その女子は見るからに学校の制服らしき服を着ている。ただ一人、人目につかない建物の路地裏に行きため息をつく。
「あーあ…もっと刺激が欲しいなぁ……あんなつまらないニュースとかじゃなくて、例えばテロリスト集団みたいなのとか…」
と言いながら途方もなく消えていく…
女性は見るからに水色の長髪であり、蛇女子学園を見つめていた者でもある。
しかしその女性の思ってることが、まさか本当になるとはまだ誰も知らなかった、この社会そのものも。
「あっ、そうだ！アイツ、上手くやってるかな？暇つぶしに様子を見に行こっと…！」

ＰＭ　０時２０分
「よし、お前ら集まったな」
時間内に全員教室に着席していると相澤は時間通りに動き始めた。
「お前ら朝でも報告したと思うが、災害救助訓練をやってもらう…そのためにまず」
相澤は寝袋のポケットからリモコンを取り出しポチッとボタンを押す。

すると左側の壁から番号が書かれてるバリアフリーみたいなのが出てきた。これはコスチュームである。
「訓練用の施設に向かうからお前らコスチューム持ってくるかは個人の自由だ」
そういうと皆んなはそれぞれのコスチュームを取り出す。

グラウンドに出るとそこにバスが待っている、どうや移動用のバスだそうだ。
雄英はグラウンドだけでなく、他にも様々な施設やグラウンドがあるため、移動はバスで行うそうだ。
皆んなそれぞれコスチュームを着用し集合している。
「あれ?デクくんコスチュームは?」
首をかしげるお茶子に緑谷は
「あ、ああアレ戦闘訓練の時に壊れちゃったからサポート会社に頼んで直してもらってるんだ!」
「あ、そっか〜!」
成る程という顔で納得するお茶子。緑谷のコスチュームは、この前爆豪と戦ったため大分コスチュームが痛んでしまい、修復を頼んだのだ。
「やっぱコスチュームカッコ良いっつったら、轟とか爆豪とか…そこらへんだよな」
「あと柳生って、眼帯してるけどアレもコスチュームかなんか…じゃないよな?飾りかな?それとも…厨二なだけだったり…?」
上鳴と切島は、コスチュームの話題にハマっている。すると近くにいた峰田は、思い出したかのように、手の内をポン!と叩いた。
「そうだ!八百万と飛鳥、柳生、雲雀のコスチューム鑑賞しに行こっと」
「やめとけ殺されるぞオイ」
と、止める瀬呂に峰田はどこ吹く風か、瀬呂の言葉など耳もくれず小憎たらしい顔を立てる。
「あっ!いたぜ八百万と飛鳥に柳生、雲雀が話しながら歩いてきてる

…よし、準備完了だ…出動」
何処その兵隊か知らないがとりあえず峰田は手遅れだと、この時見ていた男子達は心の中で悟った。動いてしまった彼など、馬の耳に念仏。
四人が通り過ぎ、峰田の視界に映らなくなった途端、四人の身体をマジマジと見つめている。
(うわあ～…)
峰田のゲスい行為に、それを見てる者たちは心の中で気持ち悪いものを見てるかのような目で彼を見て、思わずドン引きしてしまい、心の中で本音を吐いた。
「へへへっ…ヒーロー科最高！」
つい大声で叫ぶと…四人が振り向いた。
「…峰田さん？後ろでコソコソと何してるのですか？」
八百万は顔を黒く染めて、まるで汚物を見るような目で、それに続き、柳生も
「ヒーロー科最高？一体何してたんだ…言え、内容次第ではどうなるかは分からんがな…」
見下す…そして八百万同様顔を黒く染めて、赤色の瞳が峰田を睨む。飛鳥は呆れて雲雀は何のことか分からない表情でいて、気にしてない。
「あ、え、ええ、えと…これから災害救助訓練できるから、ヒ、ヒーロー科最高～…って」
今の峰田は二匹の狼に睨まれた子ウサギ。峰田は二人の恐怖で動くことできず硬直している。
「あー…だから言ったのに…」
と呆れていう瀬呂。止めたのに聞かなかった峰田に非があるし、責められても何をされようとも、彼自身のせいであり、自業自得と言っても過言ではない。
「君たち早くバスに乗るんだ、番号順に乗ろう！」
ピッピッとホイッスルで皆んなをまとめ上げる飯田。

バスの中

「クソ！失敗だ！」
バスのなかは皆んなが知ってる席順ではなかったため、この場合は早い者勝ち、すなわち席は自由に座ることにした。
そのことに絶句する飯田。
飯田もさすがにこれは予想してなかったようだ。
まあまあと背中をポンっと優しく叩く芦戸。
「まあ、何だかんだ言って飯田はやっぱり堅いよな～、神経が」
ドンマイというような顔をする切島。
すると突然緑谷の横に座っている蛙吹が
「私ね、思ったことを何でも言っちゃうの緑谷ちゃん」
「ど、どうしたの蛙吹さん？」
「梅雨ちゃんと呼んで」
どうやら梅雨ちゃんと呼んで欲しいらしい…が、次の言葉に緑谷は驚愕することになる。
「あなたの個性、オールマイトに似てる」
「!!!!!」
微笑んで、頬が少し赤くなる。緑谷はあまりの驚きに硬直している。
緑谷は正直このことを何と答えればいいか考えているが…
「おいおいそれは違うぜ梅雨ちゃん、だってオールマイト怪我しないし、何より似て非なるアレだぜ。まあパワーは納得だけどな！」

すると突然、切島が話に入りこみ一気に雰囲気が変わった。ホッとする緑谷に切島は緑谷をみて
「けど、単純な増強型の個性か～！正直派手で可能性も増えるし結構いいよな！」
緑谷を誉めたたえると、自分の腕をガッチガチに固めて見せびらかす。
「俺の硬化なんかは対人じゃ強えけど、いかんせん地味なんだよなー…」
「そ、そんなことないよ！凄くカッコいい個性だし、何より単純で出来ることも多いと思うよ!!例えばホラ、その気になれば倒れてきたものとか、自分が硬くなれば自分に危害はないし、落下してきても何も問題ないし…あとは対人だと硬めて攻撃するだけで普通の人がパンチを食らわすよりも何倍もダメージが与えると思うし……盾にもなれば武器にもなる……凄い個性だし何よりプロにも匹敵するし、スカウトされたりとかするんじゃないかな?!」
「プロなー！やっぱヒーローっったらそういうもんあるからな！人気商売とかもあるぜ?そういうお前こそ、調整できりゃあよ…」
緑谷の長いセリフに感心しながらも、切島も緑谷の個性について話し出す。切島は根も心も良い少年なので、緑谷とは相性が良いのかもしれない。
「けどやっぱり派手で強えっっったら飛鳥と柳生と轟と爆豪だよなー！」
というと爆豪と飛鳥、柳生の三人は反応するが、轟は眠っているため反応していない。
「これが忍だ…」
「そ、そんなことないよ…！私はまだ…」
「ケッ……！」
柳生は物静かに目を閉じ、轟と同じく睡眠をとろうとする。と言っても距離はそこまで遠くないので、うたた寝くらいだろう。飛鳥は自分の実力などまだまだだと言わんばかりか、謙遜する。爆豪は平常運転なのか、そっぽを向くだけで噛み付いてこない。

「まあ、あの巨大イカとか飛鳥ちゃんの凄い二刀流見せられたらな～…派手だし！カッコいいしよ！爆豪のはあんなん見せられたら誰だって派手だって思うよな、轟は派手だっつうよりも瞬殺だけど…」
「けど爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気でなさそうだわ」
　蛙吹は思ったことをそのまんま言った。ここで今まで黙っていた爆豪がようやくキレだし蛙吹に噛み付いてきた。
「ハァ!?何言ってんだテメェは！普通に出すわ舐めんなやクソが!!」
「ホラね、ケロケロ」
　何の悪そびれもなく、ベロを出して指差す蛙吹に続き、上鳴も弄りたいのか、爆豪の神経を煽り出す。
「けどさ、この付き合いの浅さですでにクソを下水で煮込んだような性格と認識されるってお前は本当にスゲェよ。いよっ、流石は有名人だ！」
「テメェのボギャブラリーは何だコラ殺すぞ!!」
　そんなやりとりをしている中、緑谷は恐るおそる震えながら心で呟いた。
（かっちゃんがイジられてる…信じられない光景だよ…流石は雄英だ…！）
「全く…低俗な会話ですこと」
　目を細めてつぶやく八百万に、隣に座ってる雲雀は天真爛漫な笑顔を向ける。
「けど、なんかすっごく楽しそうだよ！」
　雲雀と同様、お茶子も麗らかな笑みを浮かべる。
「こういう明るいのなんか好きだな私！」
　そしてそれを遠くで見て、緊張が解け思わず微笑んでしまう緑谷は、「本当に良い人だなぁ～」と心の中で呟く。もしここで今口に出してしまえば、告白に近いものとなってしまう。
「爆豪くん君は本当に口悪いな！直したまえ！」
「俺に指図すんじゃねえよクソメガネ!!」
「もう着くぞお前ら…いい加減にしとけよ」
　すると相澤の低い重圧の声がバスの中に響き渡る。

「ハイ！」
そんな相澤から放たれるプレッシャーに、一同は又しても静まり返った。

バスから降りて施設の中に入ると、そこにはとても広い面積を持つ訓練所、様々な災害ゾーンが設置されていた。しかし見た目からしてそれは、娯楽場…いいや、ＵＳＪとも思わせるような施設なのであった。
「スッゲー！ＵＳＪかよ！」
「わあ～！ＵＳＪみたい！アトラクションとかあるかな？雲雀はジェットコースター乗りたい！皆んな三回乗ろうよ！」
「普通に吐くわ」
皆んな（特に雲雀）が大きな声で叫んでいると。
宇宙飛行士のようなコスチュームを着用した人が人差し指を立てて説明する。
「水難事故、土砂災害、火事…ｅｔｃ．　あらゆる事故や災害を想定し…僕がつくった演習場です。その名も…ウソの災害や事故ルーム！略して…」
「ＵＳＪだったー!!」

みんなは頭文字を英語にして、略してＵＳＪと見抜いた。確かにこの施設内はまさにＵＳＪだ。
緑谷は宇宙飛行士をみて感動するような目で説明する
「スペースヒーロー『１３号』だ！災害救助でめざましい活躍をしてい

る紳士的なプロヒーロー！」
「わーー私好きなの１３号！サイン欲しい！」
「うん！僕も！」
うおおおー！と大きく叫び興奮する、その余り腕をブンブンと振っている。
そんな皆んなの状況をおかまいなしに相澤先生は後輩である１３号に話しかける。
「１３号…オールマイトは？ここで待ち合わせてるハズだが」
「先輩…それが」
１３号は指を３つに立てて説明する。
「どうやら通勤時に制限ギリギリまで活動してしまったみたいで、仮眠室で休んでます。あと少しだけなら顔を出せると言ってますが…」
「不合理の極みだなオイ…あの人本当にここでやってけれるのか？」
誰にも聞こえない小さな声で二人は話し合っている。相澤はイラつく余りか顔をしかめているが、直ぐに生徒たちを見て
（まあ、念のための警戒態勢だ）
「仕方ない…始めるか」
切り替える。
「先生、今日は全部で何人ここに教師が来るのですか？」
と質問する八百万。
「俺と１３号にオールマイトの３人だ」
「そうですか…ですが何故オールマイトがここに居ないのでしょうか？」
もちろん二人は皆んなが聞こえない程度で会話をしていたので、当然オールマイトについては知るはずが無い。
「連絡をとってる、そんなことより今は授業に集中しろ」
「分かりました」
なんとか切り替えることに成功した相澤。
「えー、では！始める前にお小言を一つ二つ…三つ…四つ…」
（増えてる…）
指を立てるのも増えていく１３号に対し皆んなは心の中でつぶや

く。
「えー、まず皆さんは僕の個性をご存知だとは思いますが…僕の個性は『ブラックホール』どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます」
　１３号は災害救助といった人助けを主に働くヒーローであるが、実際彼の持つ個性は、とてもじゃないが残酷で、驚異的で、その気になれば災害すら起こせるような個性だ。
「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね！例えばそこらに倒れてる危険なものや、瓦礫、雪崩や土砂崩れと言ったものとか…火まで簡単に！」
　ヒーローを研究し尽くしたヒーローオタクの緑谷は、熱心に１３号の個性を語り出す。横にいるお茶子は高速で顔を縦に振ってる。まるでシェイクを振ってる時の感じだ。緑谷の解説に頷く１３号は、「ええ」と一言頷く。
「しかしそれと同時に簡単に人を殺せる強力な力です…皆んなの中にもそういう個性がいるでしょう。超人社会は個性の使用を資格制にし厳しく規制することで、一見成り立っているように見えますが一歩間違えれば簡単に人を殺せる『いきすぎた個性』を持っていることを忘れないで下さい」
　この社会では個性の使用を厳しくしているため、ある意味犯罪の抑止力にもなっている。しかひ難しい先はまた先の話になるであろう…
「相澤さんの体力テストで自身の秘められている力の可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います」
　相澤は入学初日に個性把握テストを、オールマイトは初めてのヒーロー基礎学にて戦闘訓練を。
「そして飛鳥さん、柳生さん、雲雀さんは忍と呼ばれる、裏社会の人間です。そう、非常に戦闘力が高いと思われますが…もしその力を、使い道を間違えれば、先ほど私が申し上げた通り、簡単に人を殺せてしまいます」

飛鳥、柳生、雲雀の三人は真剣な顔で１３号の話を聞いている。
「もし関係のない人を殺してしまえば、貴方たちは処分されるどころか、それすらも背負えなくなるほどの責任を負ってしまいます…そうならない為にも、貴方たちにもこの災害救助をやって欲しいとのことです！」
三人にも、命の大切さを知って欲しい。人の命とは何なのか…なぜ忍は影で人を支えるのが……改めて考えるにはこの授業は正に絶好なチャンスとも言えるだろう。
「この授業では心機一転！人命のために個性をどう使うのかを学んで行きましょう！」
さっきの真剣な雰囲気を一気に解きほぐし、明るい雰囲気に変えた。
「君たちの力は人を傷つける為にあるのではない」

１３号…！

「救けるためにあるのだと心得て下さいな！」

カッコいい!!

「そうだよね…」
飛鳥は小声で自分の手を見つめた。
（私の力は、皆んなのためにあるんだ…皆んなが傷つかないで欲しい…そして誰かを守るために……ん？あっ、そっか…これって）
飛鳥は何かを思い出したような表情に変わる。
「じっちゃんの言ってた…刀と盾…」
ポツリとそう呟いた。誰もが聞こえないような声の大きさで。どうやら皆んなは聞こえてないため１３号は一度ペコリとお辞儀をする。
「以上！ご静聴ありがとう御座いました」
「１３号ステキー！」

「ブラボー！ブラーボー!!」
感激して満面な笑みを浮かべるお茶子に飯田はパチパチと壮大な拍手をする。
「よし、そんじゃあまずは」
相澤が生徒たち皆んなに今回の授業で一体何をやるのかを、個々人で一体どう立ち回るのかを教える。

その時だった。

ズ…ズズ…

黒い何かが動いて…

中央の噴水広場で
「……？」
何かの異変を感じた相澤は振り向く。
（んだあの黒いの…って）

ズズズ…ズズ…

その黒いものは次第に広く、デカくなってきて…

「！」

（まさか…！）

ハッと何かに気づいたような相澤。

その時

黒い空間の中から掌が顔についてる男が覗き込むように、相澤と目が合った。危険を察知した相澤は皆んなに振り向く。

「一かたまりになって動くな！」

大声で叫ぶ、初めて皆んなにみせる相澤の焦りの表情に…生徒たちは棒立ちで不思議そうな顔をする。

「１３号！生徒を守れ」

「先輩…？」

ヘルメットを被ってて分からないが不思議そうな顔をしているのだろう、首をかしげる１３号。

皆んなは相澤の向いている噴水広場に目をやった。

「オイオイ、何だアレ」

砂糖はそう言うと

「なに…これ……なんなの……？」

飛鳥は、何が起きてるか分からない様子でもあるが、この異常とも呼べる出来事に混乱している。

隣にいた緑谷は飛鳥の表情に目をやる

「…飛鳥…さん？」

皆んなに見せたことのない焦りの表情。飛鳥自身なにをそんなに恐れてるのかは分からない…

ただ、飛鳥が見ているその先の人物は、掌が顔に張り付いていて、髪が薄い水色、服が黒い男のことだった。

飛鳥はその人物を見ていると、気味が悪い、関わりたくない、怖い、など…ついそう思ってしまうのだ。
その黒い空間からは次々と何者かが現れる。
脳が出ている大男。
骸骨のようなマスクをした男。
カメレオンの男。
いかにも普通の人ではない、続々と出てくる。

奇しくも

「もしかしてもう入試ん時と同じもう始まってんぞパターン？」
「違う…なんだあの殺気は…？」
とぼけてる切島に柳生は否定する。柳生の表情も、段々と険しくなっていく。焦り、不安、恐怖、それらの感情が柳生の心を揺さぶる。
「ふええ～…！柳生ちゃん!!なんか怖いよ!!何なのあれ!?明らかにおかしいよね…？」
「分からない…が、雲雀！取り敢えずオレの後ろに隠れろ！」
雲雀は涙を流しながらも柳生の後ろに隠れる。柳生は雲雀を守るように前に立ち、番傘を開く。
「アレは…敵（ヴィラン）だ！」
相澤は黄色のゴーグルを装着して生徒たちに伝えるよう、大声でそう答える。

プロが何と戦っているのか

すると今まで開いていた黒い空間は閉じ、黒い霧を全身にまとっている男は不思議そうに呟いた。
「13号にイレイザーヘッドですか…先日頂いたカリキュラムでは、オールマイトがここに居るはずなのですが…何か変更があったのでしょうか？」
「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」
舌打ちする相澤先生。
飛鳥と柳生は皆んなよりも早く警戒態勢に入り、こう言った。
「アレが…敵（ヴィラン）……」
「飛鳥は前に遭遇したことがあるんだったな…」
飛鳥は前に一度会ったことはあるが、しかし、今回のソレとは比にならない…

何と…向き合っているのか

「どうします？死柄木弔」
その黒い霧の男は、掌が顔についてる男　、死柄木弔にそう聞くと、死柄木は呟く。
「…どこだよ…せっかくこんなに大衆引き連れてきたのにさ、オールマイト…平和の象徴…いないなんて…」
顔を見上げて、死柄木は子供たちを見てこう言った。

「子供を殺せば来るのかな？」

それは…途方もない悪意

12話「ゲームスタート」

ゾロゾロと敵（ヴィラン）たちは黒い空間から現れて、広場に散り、各々のやるべきことをやろうとしている。
そんななか、戦おうとしない者が3名。
黒い霧で覆われた男。
脳が飛び出てる大男。
そして、掌のマスクが顔についてる死柄木弔という男。
そしてその男は…

「平和の象徴を…殺せ」

不気味と悪意をもった声で、そう言った。

「敵（ヴィラン）!!バカだろオイ!雄英高校に攻めてくるなんて…いくら何でも馬鹿げてる!」
叫ぶ切島に八百万は13号に確認する
「先生!ここの防犯センサーは?!」
「も、もちろん…ありますが…」
しかし防犯センサーがあるのに対して警報が鳴らない、これは非常事態だ。
「そう言えば…あの真ん中の手?みたいな人…確か昨日のマスコミ集団で…」
飛鳥が呟くと、近くに居た轟はいち早く理解したのか、納得したように頷く。
「なるほど…つまりコイツらは先日のマスコミ集団を利用して、セキュリティの警報が鳴ったところで隙を見せてから、カリキュラムを奪ったっつーことか…俺たちがここに来ること、時間まで知ってやが

る…おまけに警報も鳴らないということは…向こうには電波を妨害する個性があるからだ…」
　轟は一つ一つ丁寧に整理してまとめると、ため息をつく。
「バカだがアホじゃねえ…コイツらは、何らかの目的があってここにやって来てる用意周到の襲撃だ」
「どのみち敵である事実に変わりはない…」
　いつもの冷静でクールな柳生はそう答える。
「や、柳生ちゃん…大丈夫？いくら何でも多すぎるよ…それに…」
　と雲雀は何かを言いかけたように見えるが、柳生は振り向き、笑顔を見せる。
「大丈夫だ雲雀、オレを信じろ」
「柳生ちゃん…！うん!!」
　雲雀は頷くのであった…
　しかし飛鳥は冷や汗をかいている。特にあの死柄木を見つめて。
（あの人…なんなの……殺気が凄い…あの時よりも…焔ちゃんよりも！）
　焔と戦った時よりも、死柄木という得体の知れない存在が大きい。そして何より死柄木を見て感じ取れるのが…
　怒り溢れる憎悪
　ドス黒い殺意
　恐怖という存在
　純粋な歪み
　とにかく、アレが危険だと感じ取れる。

「…13号、生徒たちを守れ、俺がアイツらを食い止める。それと教師たちに連絡試してみたがダメだった…上鳴！お前も個性使って連絡試してみろ」
「ッス…！」
　上鳴もこの状況に動揺している…相澤がそう言うと緑谷は心配しながら言う。
「せ、先生は…！あくまで奇襲からの短期戦です！多対一は先生とし

て不向きなんじゃ…」
と言うと
「…ヒーローは一芸だけじゃ務まらん」
そう言って敵の集団に真正面で飛びかかる。

「射撃隊出動!」
噴水広場にて、工事のヘルメットを被った男が大声でそう叫ぶと合計3名が束になって相澤をみてる。
「誰だアイツ、情報では13号とオールマイトじゃなかった?」
「が、知らねえあんなヤツは…まあ何がともあれ真正面から突っかかってくるなんて…」
すると3人同時に射撃攻撃しようとする。
「おお間抜け!」
叫ぶが、銃弾や個性が発動してないようだ。
「アレ?出ねぇ」
皆んなは「可笑しいな…」というような顔をすると捕縛用の布は3人を巻きつけ一気に頭をカチ割るようにお互いの頭を頭突きさせる。
相澤が個性を消したために、発動しなかったのだ。
「バカ野郎!アイツはもっとも他でもねぇ、個性を消すっつう…抹消ヒーロー、イレイザーヘッドだぞ!!」
敵がそう叫ぶと、腕が四本ある異形型の男は眉をひそめる。
「個性を消すぅ〜?グヘヘ…だったら俺のような異形型のも消してくれんのかぁ〜?」
「いや無理だ」
相澤は、敵の顔面を思っきしぶん殴り、そしてまた捕縛用の布で拘束してから他の敵にも投げつける。
「発動系や変形系の個性しか消すことはできない…だから、お前らのようなやつは対策している」
戦いながら解説する相澤、しかし死柄木は静かに相澤、イレイザーヘッドについて解説し始める。

「…イレイザーヘッド…個性を消すことによって仲間との連携を取り乱しているな…しかもゴーグルを付けてることによって…一体誰に見られて個性を消されてるのかもわからない…」
首を掻きはじめる。
「いやだなぁ…プロヒーロー…有象無象じゃ、歯が立たない」
「……」
黒い霧の男は相澤と生徒たちを見つめて。

「す、すごい…！相澤先生の得意戦闘は多対一だったんだ！」
「感心してる暇はないぞ緑谷くん！早く13号先生に従って避難するんだ！」
意外な顔をする緑谷に飯田は早く避難するように声をかける。が、一人だけ立ち止まっていた。
「……私は…避難よりも、戦う!!」
「!!」
この現状で戦うことを決意する飛鳥に飯田は飛鳥のやろうとしてることを止める。
「何を言っている飛鳥くん！相澤先生も言ってただろう？生徒たちの避難と言ってい…」
「皆んなが避難出来るようにするために、私は…皆んなを守るために戦うんだ!!」
「…っ！」
飛鳥の決意に、飯田はたじろいでしまう。飛鳥の目つきはいつになく真剣で、本気の目だ…
「それに、相澤先生の為にも！」
確かに相澤先生は、個性を消せる個性を持ってるとはいえ、敵の集団の集まり…何が起こるかわかったものでは無い。
「し、しかし…」
「飛鳥さん！委員長の言う通り避難を」
13号が呼び止めたその時。

「させませんよ?」
ズズズと黒い霧が広がり、13号と生徒たちに忍びたちの前に突如姿を現した。
「!!?」
まるで行く手を阻むかのように、生徒たちと13号の前に立ち塞がる。
この男が敵（ヴィラン）たちを移動させた男だ、イレイザーヘッドの隙を見て、空間を使ってここまで来たらしい。
（…しまった!1番厄介そうな敵が…）
イレイザーヘッドは後悔するような思いをしたが、これは仕方ないことでもある。
黒い霧をまとってる男は、目は黄色いゆえに細く、眼球はない…生徒たちを見つめて自己紹介する
「初めまして、私は黒霧と申します。そして我々は敵連合…僭越ながらも、ヒーローの巣窟である雄英高校に攻め込んで来たのは…」
黒霧と名乗る紳士的な敵の発言に、皆んなの心臓は高鳴る…一体何の目的か。
次の言葉は、皆を凍りつかせるに充分だった。
「平和の象徴であるオールマイトに、息絶えて頂きたいとのことでして」

「は？」
緑谷は顔を真っ黒にする、まるで絶望を目の前にしてるように。

コイツは、なにを言ってるんだ？

皆んなの表情もおかまいなしに黒い霧の男は話を進める。
「本来ならばここにオールマイトが来るのですが…」

その次の瞬間。

「たあああーーー！」
「っ…！おっと危ない…」
黒霧に二つの刀で斬りつけに来たのは、飛鳥であった。だが黒霧はなんとか飛鳥の攻撃を躱す。
「ちょっ、飛鳥ちゃん!?」
突然なる驚きの行動に慌てるお茶子。だが飛鳥の顔はとても真剣で怒りの表情を出している。
「なんで…なんでそんなことを!? 一体なんのために…どういう理由で!?!」
飛鳥の激情に、黒霧は何故か逆に感心したのか、薄い笑みを浮かべている。
「これはこれは…随分と活発で正義的な女性なのですね…あなたのような心構えある女性が居るなら、生徒たちにこのことを言っても問題ないはず…」
「このこと？」

飛鳥は眉をひそめると…次の言葉も、その場の全員を凍りつかせるに充分な理由でもあった。

「この学校に繋がり、存在している…『忍』とやらも、オールマイト同様に息絶えて頂きたいとのことです……」

「え？」

は？

その場の全員は、思考そのものが止まったかのように、目の前が真っ白になる。

意味が分からない…

なんでコイツらが忍の存在を知ってるんだ？…と。

いつバレてしまったのだ？

頭の中で色々な事が湧き上がり、混乱している。

そんな、真っ先に掛けられた理不尽の問題に、黒霧は目をニヤリと細める。

（なるほど、やはり先生の仰る通り…この学校には忍びが関わっているそうだ。何ゆえに彼らはまだ子供…この表情さえ見れば、関わっていることを見抜くなど簡単だ…）

黒霧は冷静な判断で、心の中で状況を読み取り、整理をする。

「おや？おかしいですね…？皆さま顔色が悪いようですが…」

黒霧は意地悪そうに、質問する。分かっていることなのに…そして御構い無しに話を続ける。

「まあ良いでしょう…それに問題なのはオールマイトがここに居ないこと…おかしいですね、カリキュラム通りならここに居るはずなので

すが…何かあったのでしょうか？」
首を傾げるものの、皆は動かない。
「ああ、それよりも…」
すると黒い霧を増幅させる。
「私の役目は…コレ」
黒霧は、まず目の前にいる飛鳥に黒い霧で襲おうとしたその瞬間。

ボーーーーーーーン!!!!!

爆発の音が響き渡る。煙が上がり、よく見えないが、人影が二つある。
「顔色が悪いだぁ？寝言は寝て言いやがれ！何処が顔色悪いんだ？ああ!?このモヤモブが！」
「その前に俺らにやられることは考えてなかったのか!?」
切島と爆豪は大きく叫ぶ。
「ふう…危ない危ない…！本当に油断も隙もありませんね貴方たちは…流石と言ったところですかね」
しかし黒霧は何ともなかったかのように言う。
「なっ、き…効いてない…!?」
切島は驚愕する。いや、その場の全員もそう思うだろう…物理攻撃が効かない敵と思わざるを得ない。
「そんな…攻撃が効かないなんて、どうやって倒せば良いの…!?」
雲雀の言う通りだ。黒霧を倒す方法が分からない限り、この敵は何かしやらかすだろう。何より敵の出入り口なのだから…黒霧は
「おっと、忘れてました…そう、あなた達も優秀なヒーローの、金の卵…まずは」
すると身体の霧を大きく膨らませて襲いかかる

散らして

「っ…！」

轟はいち早く回避するが……遅かったようだ。

なぶり

「クッ…」

飯田は砂糖とお茶子二人を腕で抱えて、障子は芦戸と瀬呂を庇い、柳生は雲雀の前に立ち、番傘を開きガードしている。

殺す

「皆んなーーー!!!」

飯田は叫ぶが、返事はない…おそらく何処かへ飛ばされたのであろう。

「…ん？」

目を開ける飛鳥…しかしその先に映っていた光景は、水面だ。

「え!?あっ、ちょっ…！キャアアアアーーーーーーー！」

ジャバーーーーーン!!

水に落ちた時の大きな音が鳴り響く。どうやら飛鳥は水難ゾーンに飛ばされたようだ…飛鳥は水中から上がろうとするが…

「おっ!キタキタ」

顔がピラニアのような敵は飛鳥を見て、まるで待ちきれんばかりの様子で殺す気満々のようだ。敵は口を大きく開けて

「オメェに恨みはねーけど…サイナラ!」

飛鳥めがけて突撃してくる…突然のことに身体が硬直して動けれない…つい目を閉じてしまう、その時

ドゴッ!

水中で何やら鈍い音がした。目を開けてみると

「あ、梅雨ちゃん!」

「飛鳥ちゃん!」

その姿は足で敵の横顔面を蹴ってる蛙吹、ついでに回収したのか、峰田と緑谷を抱えている。蛙吹は舌を伸ばしてグルグルと飛鳥の身体を巻きつけて、物凄いスピードで水中を泳ぎ去っていく。

……ジャパーン!

水中から出た飛鳥、緑谷と蛙吹に峰田４人は、水難ゾーンにある救出用の船にベロで飛鳥と緑谷を横に置くようにすると、横で気絶している峰田が呟いた。

「クッ…カエルの割になかなかどして…オッパイが…」

「…!!」

頬を赤らむ蛙吹は峰田を思いっきり船に叩きつけるように投げ捨てる。

「ガハッ!」

船の地面に思いっきり背中を打ったために、正気に戻ったようだ。

「あ、ありがとう…蛙吹さん…!」

「梅雨ちゃんと呼んで、しかし大変なことになったわね緑谷ちゃん」

蛙吹梅雨　『個性』蛙　　見たまんま、カエルっぽいことは大体出来

る。水中戦では彼女の独壇場。
「敵が襲撃して来るなんて…考えてもない、予想外な出来事が起きたわ…」
　蛙吹が呟くと、飛鳥は目を細めて心の中で呟く。
（確かに…襲撃……か。昨日、焔ちゃん達が攻めてきた時とは違う…でも、何処か似てるんだ……やり方とか、それに…焔ちゃん達とはろくに戦えなかったのに、戦えるのかな……私…）
　不安で胸がいっぱいな飛鳥は、表情を曇らせる。
「学校に襲撃が来るなんて、昨日の悪忍が襲撃して来たばかりなのに…これで二度目だよ…」

「う、うん…言われてみれば確かに……それに、僕たちを飛ばして…オールマイトと飛鳥さんたちを殺す…なんて、随分と無茶なことをやらかすよね…一体なんの目的で」

　冷静に状況を整理しようとする緑谷に峰田は体制を整えて、ボクサーの仕草をしながら
「けどよ、オールマイトだぜ…！アイツらなんか屁でもねーよ、オールマイトさえ来ればあんな奴らケチョンケチョンに」
「峰田ちゃん」
　興奮している峰田を蛙吹は止めて冷静に言う。
「オールマイトを殺せる算段があるから、連中…こんな無茶してるんじゃないの？」
「……え？」
「そこまで出来る連中に、私たちなぶり殺すって言われたのよ？」
「……」
「オールマイトが来るまで私たち持ちこたえられるのかしら？オールマイトが来たとしても、無事に済むのかしら？」
「……！」
「それだけじゃないわ、向こうは忍び……飛鳥ちゃんたちそのものを狙ってるもの。忍びの存在がどうしてバレたのかは知らないけど、そ

れでも向こうは知ってる上で宣言したのよ?･それにさっきも言ったけど私たちだって無事という保証はないわ、それでも…私たち無事で済めるのかしら??」
「みみ、緑谷ぁ!･んだよアイツぅ!･」
蛙吹の正論にたじろぎ、緑谷の袖に捕まって指差す峰田。
「……」
「……」
緑谷と飛鳥は正直認めざるをえない顔だ。
飛鳥は何かを考えている。
(皆の様子から見れば、誰かがこのことを漏らした、なんてことは考えにくいし…となると、一体なにを…)
そんな彼らのやりとりの中、さっき蛙吹に蹴飛ばされた敵が水中から出て再び殺しにかかろうとする。

群れで
「んのヤロォ!･ガキが!･殺してやる!･」
「大漁だあああぁぁぁぁ!!」
「…」
緑谷は状況を整理しながら物事を考えている。
(奴らはオールマイトを倒す算段がある、多分その通りだ…それ以外考えられない…でも)
なんで殺したいんだ?
敵(ヴィラン)…悪への抑止力となった人だから?
平和の象徴だからか?
(それにもう一つ、何で飛鳥さんたちを??バレるどうこう以前に…一体何の理由で?)
忍びの存在を知ってどんなものなのかを知りたいから?･善忍が目障りだから?
「ていうか…今、理由なんて…理由なんて…」
日々重なるオールマイトと過ごしてきた思い出。
短いようで長いように感じる汗と涙の、緑谷にはかけがえのない輝

かしい思い出。

それが、それが…

『平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいとのことでして』

「知るか!」

大声で叫ぶと蛙吹と峰田、飛鳥の三人は緑谷に振り向く。

「奴らに、オールマイトと飛鳥さんたちを殺せる算段があるなら…僕らが今から…」

僕らが

土砂災害ゾーン

パキパキと氷の音が聞こえる。

轟はどうやら土砂災害ゾーンに飛ばされたようだ、当然そのゾーンにも敵の群れはいるが、一瞬にして凍らして一瞬で勝負を決めた。

「子供一人に情けねぇなオイ…」

「…っ!」

凍らされた敵を、冷たい目で睨みこう言った

「しっかりしろよ…大人だろ?」

僕らがすべき行動は

火災ゾーン

「う、うぐおっ…んだよコイツ…強え!!」

「ほ、本当に子供か!?あ、あの眼帯野郎が特に……こ、怖え…」

ほぼボロボロになってる敵たちは、柳生を見て恐れている。柳生はここに飛ばされた瞬間、秘伝忍法で勝負を決めたのだ。尾白も柳生の光景に固唾を飲んでいる。

「す、スゲェ…戦闘訓練で分かってはいたけど……」

尾白が呟く中、柳生は敵たちに近づく。

「オイ、お前たちに聞きたいことがある」
すると番傘を敵の顔に近づける、敵の顔は化け物でも見てるかのように怯えてる様子だ。
「何でオレたち忍の存在を知ってる？それと、その理由は？あと、雲雀は何処だ、言え」
こんな時にも雲雀を心配する柳生に、尾白は感激している。いや、この時だからこそであろう。
「戦って、阻止（勝っ）すること!!」
緑谷は大きくそう叫ぶ。

１３話「敵（ヴィラン）との戦い」

同時刻、０時５０分
仮眠室でトゥルーフォームのオールマイトは相澤と１３号に電話をかけてるものの、
『現在、電波が届かない場所にいるため…』
電話は繋がらないようだ。
オールマイトはため息をつきながら呆れた声でこう言う。
「全く…私は愚かしいことをした…通勤時間ギリギリにまで個性を使い、今はこんなザマだとは…今から行って間に合うか？しかしなにを出来るだろう？あと後半くらいで１０分だけモノを語れることかな？半蔵さんはそう簡単に出てもらうことなんか出来ないし…むむむ～…！よし、決めた！」
するとムキッ！と身体の筋肉が一気に膨らみ、マッスルフォームの状態のオールマイトとなった。
「私が！行くっ!?」
その際につい吐血してしまった…その時
「待ちなよ！」
「ｏｈ！」
トビラが開き声を出す、その声の主は
「こ、校長先生！」
「Ｙｅｓ！犬なのか、熊なのか、ネズミなのか、かくしてその正体は…校長さ！」
「相変わらず今日も毛並みが整ってますね」
「秘密はケラチンさ！君たち人間にはこれほどのツヤは出せやしないよ！」
大きな声で叫ぶとオールマイトはしゃがんでジリジリと近づいてきている。
「そ、それで今日はどういった？」
すると校長は背中から
ジャジャーン！とｉＰｏｄを取り出し今日のニュースを出してい

る。
「見てみなよ、コレだよ！今日は一気に事件を3件解決させたんだよ！」
校長は嬉しそうな顔をしている。
「平和の象徴と謳われる君がいるのにも拘らず犯罪を犯す輩は大きく大概だけどね！」
人差し指を立てて
「ワンフォーオールの後継者の育成、謎の忍びを探すこと、そして君が平和の象徴として生き続けるためにはココがうってつけだろ？」
小声でそういう。
ワンフォーオールの事は校長も知っているが、あえて他人にはバラさないようにしている。
「ありがたいです…校長には感謝しきれません」
「いや、それは僕たちの方さ！君は平和の象徴として生き続け、この平和に暮らす社会の人々たちを支えてるんだ、感謝するのは此方のほうだよ！」
するとソファに乗り、お茶を入れている。
（むむ！校長先生がお茶を淹れている…となると、これはかなり時間が掛かりそうだ…何より話しだしてから4、5時間も話し出すんだよな～…）
「君はいつも無茶ばっかするよね、でもそれが君の長所でもあるのさ！さて、まずは僕の教育機関なんだけど」
「…校長、相変わらずですね」
トホホとつぶやくオールマイト、その反面心配を隠せない。
（電話に出ないというより、繋がらないのが気掛かりだが…）

場所は変わり、入り口にて。
「忍の存在を知ってるだなんて…一体何者!?ただの敵じゃないよね…？」

お茶子は怖いものを見てるかのように、怯えながら黒霧を見つめている。お茶子の発言を聞いた黒霧は、ニヤリと目つきを細めて話し出す。
「おかしいですよね？この現代ヒーロー社会に忍びなんてものがいるのは……おとぎ話のような存在が実現するだなんて考えても想像できない…しかし貴方たちの表情を見てハッキリと分かりました…『あの中』に忍びは存在する……とね」
黒霧は黒いモヤを揺らぎながら、大きく膨らませている。
「クッ…！障子くん、皆んなはどうだ!?」
「皆んなこの施設の中にいる、ちり散りになってはいるが今のところ全員無事だ！」
「そうか…それは良かった」
メガネの委員長、飯田は生徒の確認をするため障子に頼んで複製腕で皆んなの様子を調べたようだ。
「や、柳生ちゃんは…？障子くん、柳生ちゃんは無事なの!?」
「詳細は知らない…敵が各施設内にいることは確かだ。だが心配するな、柳生はコイツらにやられるようなたまではないハズだ。それは親友であるお前が一番知ってるハズだ雲雀。だから柳生を信じろ」
「そっか…うん！そうだよ…柳生ちゃんを信じないで友達なんて言えないよ…！雲雀、柳生ちゃんを信じる！」
「ああ、まさにその通りだ…！」
障子の言うことに雲雀は、強い眼差しで頷く。それを聞いてた飯田も雲雀と同じ、安心したように頷く。
「それが聞けただけでも安心した…ありがとう障子くん！」
「なに、大丈夫さ…それより、まずはコレをどうするかが問題だろ？」
今入り口の前にいるのは13号に、雲雀、お茶子、芦戸、砂糖、瀬呂、障子、飯田…そして目の前に黒い霧を纏う敵（ヴィラン）の黒霧。13号は皆んなを非難するように言う。
「みなさん！下がってください…そして委員長、学校まで駆けつけこの事を伝えて下さい」

「!?」

「警報ならず、電話も圏外、警報器は赤外線式…先輩、イレイザーヘッドが下で個性を消し回っているのにも拘らず無作動なのは、恐らくそれを妨害可能な個性を持つ人間を即座に隠したのでしょう…するとそれを見つけ出すより君が駆けつけた方が早い！」

「し、しかし…クラスを置いていくなど委員長の風上にも」

「行けって非常口飯田！」

１３号の案を否定する飯田に砂糖は飯田の肩を掴んで話し出す。

それに続き瀬呂も

「考えてみろ、物理攻撃無効でワープって…最悪な個性じゃねーか！」

確かに瀬呂の言う通りだ。

ワープの上に物理攻撃無効など、もはや無敵レベルだ…対処の使用がないが、今はそんな事を言っている暇はないのだ。

「外に出れば警報がある！だからコイツらはこん中だけで事を起こしてんだろ!?」

「外にさえ出られりゃあ追っちゃこれねえ！お前の個性はスピード型だろ!?モヤを振り切れ！」

叫ぶ砂糖にコスチュームで顔を隠されてる瀬呂。障子は小声で話し出す。

「行け！飯田…！それに、雲雀は俺たちに任せろ！アイツらの目的は、俺たちよりも忍び…飛鳥たちを優先するはずだ…！」

そして１３号は飯田に全てを託した。

「救うために、個性を使ってください!!」

「…っ!!」

１３号先生…！

「食堂の時みたくサポートなら私超出来るから、する！から！」
するとお茶子がガッツポーズで飯田を励ます。
「お願いね、委員長!!」
「麗日くん…」
「雲雀も、いつまでも柳生ちゃんの後ろに隠れてるばっかじゃないんだ…だから、雲雀も戦うよ！飛鳥ちゃんたちのように、皆んなを守るために!!」
雲雀はいつでも柳生の後ろに隠れていた時があった。でも今は違う、友達を守るために、仲間を守るために雲雀は、飯田の前に立ち守るように腕を広げる。
「雲雀くん…皆んな…!!」

しかし、時間も敵もそれは待ってくれない。
「やれやれ、本当に貴方たちヒーローには呆れる…さっきの子供達といい…手段がないとはいえ、敵前で策を語るアホがいますか」
すると１３号は、皆んなを庇うように前に出て、指をさし向ける。
「バレても問題ないから…語ったんでしょうが!!」
黒霧の、黒い霧が吸われていく。
「クッ…！１３号の個性…ブラックホールですか…!!驚異的な個性ですね、何より厄介だ…！」

火災ゾーン
「なるほど、コイツらはオレたち忍びの存在を知らなかったようだな

…まあ、コイツらはどうせただの戯言だと思っている、それに急に忍びだなんて聞いても分からないからな…」
全員気絶している敵に、柳生は呆れたように言うと、尾白はまあまあと柳生を落ち着かせる。
「とにかく、柳生のお陰でこのフロアの敵たちはなんとか全員倒すことは出来たな…あとは他の皆んなが心配だ。柳生はどうする？」
尾白は柳生にそう言い聞かせると、柳生は眼帯に触れながら、施設のゲートを見つめる。
「決まってる、オレは雲雀を救けに行く」
「えっ!?でも、場所は分かるのか？皆んな飛ばされたように見えるし…」
尾白がそう言うと、柳生は静かに首を横に振る。
「いや、オレには分かる。雲雀が一体何処にいるか、気配を探ればな…」
柳生は、悔しそうな顔で、己の手を握りしめる。
「オレがいない間に、雲雀がボロボロに傷ついてた時があった…もうあんな思いをするのは嫌なんだ…これ以上は…」

もう二度と大切なものは失いたくない。

柳生の表情は何処か悲しくて、淋しくて…それでいて可哀想とも思えるような、そんな表情で、少し目に涙が溜まるようでもあった。
「そっか…わかったよ。それにアイツら、忍びを殺すとか言ってたからな…雲雀一人より二人の方が少しは安心するだろうし…けど、くれぐれも気をつけろよ？柳生がそう簡単にやられるようには見えないけど…」
「分かってる、お前はどうするんだ？尾白」
「俺は他の皆んなが心配だから駆けつけに行くよ…じゃあ！」
「ああっ…！」
柳生と尾白は、お互い背中を向け合い、走り出した。自分が何をすべきかを…

水難ゾーン
「何が戦って勝つだよバカかよ!!オールマイトと飛鳥たちを殺せるかもしれねえ奴らに勝てるわけねえだろ俺ら学生なんだぞ!!」
峰田は泣き叫んでるが三人は冷静に状況を考えている。
「蛙吹さん、どう思う?」
「梅雨ちゃんと呼んで、けど…これを突破しないと私たちも無事では済まないということだわ」
「となると、正面突破は避けられない感じかな〜…?」
「オイお前ら三人無視すんなよ〜!」
三人は峰田を無視しながら緑谷はこの戦略を考えている。
「…考えてみれば…相手は警戒して船に登ろうとしない…となると」
「だから何なんだよ緑谷!?それがどうしたってんだ!」
「僕たちのことや、個性までは、分からないんじゃないかな?」
「!!」
緑谷は説明と立場を分析している。
「確かに相手は雄英のカリキュラムを奪ってここにやって来てる…となると、それで来たなら僕たちの個性だって分からないはず…何より向こうがこっち側に来てないのがその仮説を裏付けている…」
すると蛙吹も納得したらしく、うなずく。
「そうね…確かに、もし私の個性を知ってたら、水難ゾーンではなく、あっちの火災ゾーンに移るはずだわ……知られてないとなると、当然緑谷ちゃんの言う通り個性は知らないことになるわね」
火災ゾーンはドームで覆い隠されてるため、今現在どういった状況かは分からないが、カエルの蛙吹にとっては苦手とする災害ゾーンだ。
「それに、よくよく考えてみれば…あの黒霧とかいう敵は、飛鳥さんが

忍なのにも関わらず忍だと反応はしなかったってことは…こうも言える…！」
　緑谷の言ってることを理解した飛鳥も口を開く。
「私たちのことは完全に分かっていない…そして、私と柳生ちゃん、雲雀ちゃんも忍だということが分からない…！ただ、忍が存在してるというのが分かってるだけ…ってことだよね？」
「そう！まさにその通りだよ飛鳥さん！」
　緑谷はそうだと言わんばかりに人差し指を立てる。

「皆んなもバラバラに飛ばされたなら…僕たちと同じくゾーンに居るはず…！」
　緑谷は敵の集団に顔を覗き込む。
「つまり、僕たちの個性が分からない…それは僕たちの勝利のカギなんだけど、けど僕たちの立場だって…向こう側もまた同じ！」
　向こうは緑谷たちの個性は知らないが、それはまた逆も然り、緑谷たちも向こうの敵の個性は知らない。
　緑谷は敵に聞こえない程度で作戦を行なう、そのためにはまずみんなの個性を知らなければいけない。
「ぼ、僕の個性は…すごい超パワーを出せるけど、でももろはの剣みたいに…てんで扱えなくて…まあ戦闘訓練でも見たとは思うけれどね……力の調整が出来てないんだ…」
　緑谷は自分の手を見つめてそう言うと、蛙吹は
「私の個性は見たまんまカエルよ…出来ることは…そうね、舌を２０ｍまで伸ばせたりとか、跳躍、壁に張り付く、あとは…胃袋を取り出せるのと、毒を…といってもピリッと痺れさせる程度の毒を分泌出来るわ、特に飛鳥ちゃんはもう大丈夫だしね。最後の二つは要らないから気にしないでちょうだい」
「うん!!あの時カエルを克服できて良かったよ！」
「ぶ、分泌…！」
　何故か峰田は顔を赤らむ、何故かは知らないが蛙吹の方をしばらくじっと見つめて「分泌…！」と呟いている。飛鳥は満々な笑みで蛙吹

を見つめている。
緑谷は感心するように
「お、思ったよりすごい個性だね、あす…！梅雨ちゃん！」
「…！」
蛙吹は顔のほっぺをちょっぴり赤く染めてる、どうやら梅雨ちゃんと呼んでくれて嬉しかったようだ。
「あ、いや…ゴメン！」
「自分のペースで良いのよ」
反射的に謝ってしまう緑谷に蛙吹はなんともないようだ。
今度は飛鳥の番なのか、自分のことを話し出す。
「み、皆んなのような特殊能力を持ってる訳じゃないけど、大体忍なら…戦闘力が高いのもそうだし…あっ！秘伝忍法使えるよ！刀で斬撃を飛ばすことも出来るし、そのまんま斬りつけることも出来る…って、まあ斬撃を飛ばすならともかく、この状況で近接戦は無理だからな～…カエルは、まだ小さいのしか召喚出来ないし…」
「お、思ったより凄いね！忍って個性とは違うところあるけど、それでも充分戦闘では凄いよ！カエルも召喚出来るなんて、本当に忍者らしいや！」
「えへへ～…そうかな？」
飛鳥は照れくさそうに自分の頭に手を置くと、三人とも今度は峰田を見る、峰田も緑谷、蛙吹、飛鳥の考えてることに気付いたようで、自分も説明する。

が…
モギッと紫色の頭のボールをもぎ取って壁に貼り付ける。
「オイラの個性は『もぎもぎ』…自分の頭のボールみたいなもぎもぎをもぎ取って、相手に貼り付けることが出来る、超くっつく。自身にはくっつかず、体調によっちゃあ一日中くっつく事だって出来る、ただしもぎり過ぎると頭から血が出る、そのためもぎりすぎ注意な？」
ブニブニともぎもぎをくっつかせてはぶよんと揺れ反応する。
峰田は三人を見つめる

緑谷、飛鳥、蛙吹も何も言わずに見つめる
「……」
「……」
「……」
「……」
とうとう峰田はウルウルと目に涙を浮かべて、身体を震わす。そして次の瞬間、峰田爆発。
「だから言っただろ!!応援を待とうって!お前らオイラをバカにしたような目で見るなよ!!オイラの個性は戦闘不向きなーーー!!」
「お、落ち着いて!き、君の個性は凄いから今ちょっと考えてたんだよ…」
「そ、そうだよ!そんなに怒らないで……凹んじゃダメだよ…」
「うるせー!!」
すると峰田は涙を流しながら自分の頭のボール部分をもぎとって相手に投げつける。
「うわあああああーーー!!」
ポポポポーーーン!!
と投げつけるが相手に当たらない。
「うわあああーー!!」
泣き叫んで相手のほうに指をさす。
「ああ…ホラ…!バレちゃったじゃん…向こうに個性が知れ渡ってしまう…」
が、しかしそうでもなかった。
「ん?」
敵はプカプカと浮かぶボールをみて気味が悪いように近づこうとせず払い避ける
「んだコレ?さっきのガキの?キメェな…!」
警戒して触ろうとしない。
「……!」
(警戒して触ろうとしない…これは完全に…!)
思い当たるような事があったらしいのか、だが峰田は興奮を、自分

の内に沸く恐怖から涙を流している。
「ダメだあ～！もうオイラたちおしまいだーー!!死にたくないよ～!!」
「峰田ちゃん、あなた本当にヒーロー志望で雄英きたの？」
「うるせー!!」
　蛙吹の正論に峰田はさらに激怒する。
「オイラたち前まで中学生で、つい最近雄英高校に入学したばかりだぞ!!それなのに殺される状況なんだぞ！この状況で逆に落ち着いてるお前らがクレイジーだろ頭イカレてるだろ!!俺ら死ぬかもしれねーんだぞ!!ああ！せめて八百万のヤオヨロッパイに！三人のくノ一忍び！飛鳥たちのオッパイに触れてから…!!」
「ちょっと峰田くん！ドサクサに紛れて破廉恥なことを言わないで!!あと私の胸デカくて今も気にしてるんだから！」
「うるせーー!!どうせ揉んでも減らねえだろ！むしろデカくてなにが悪いんだ逆にメリットが増えるだろ!!」
　飛鳥は赤面して峰田に反論するが、峰田はさらに激怒してこっちも反論してしまう。

　すると突然…

　ドガアアアアーーーーン!!
　巨大な水の手が、船を壊しにかかった。
「ひぃっ!?」
「きゃっ！」
「凄い力だわ！」
「うわっ！」
　さっきの振動でようやく峰田は落ち着きを取り戻したようだ。
　それと飛鳥と蛙吹と緑谷はなんとか船の柵にしがみついている。
　が、船が沈んでいく…おそらくさっきの攻撃でやられたのだろう。
「ゴチャゴチャと目障りだ！さっさと終わらそうぜ！」

顔が白くてエイリアンのような顔をしている敵はそう言う。
さっきの攻撃はこの敵がやったのだ…おそらく水を吸収して手を形成してから攻撃しに来たのだろう。
「ピーピー喚いてやがる…雄英生とは言えガキだな」
「バカ野郎、見た目で判断するんじゃねーよ…それに『死柄木』さんも言ってただろ？油断するなって…見た目で判断するんじゃねえ、個性で判断するんだ…一般常識だろ。まああの可愛らしい女の子がいるから戦いにくいってのも分かるけどよ…ククッ…」
「まあ、なんにせよ…ガキに蹴られたんだ…それくらいの落とし前はつけて貰わなくちゃヨオ…！」
蛙吹に蹴られたピラニア型のヴィランは口を開けて生徒たちを睨む。
「水中じゃあ俺らが１００％有利なんだからさ、何にせよアイツらは負け確定だ」
「た、確かにいぃ～～～!!」
涙流して叫びだす峰田は敵の会話を聞いてたようだ。
「なあ！これ絶対無理だって!!殺される～！俺たちもうお終いだぁーー!!」
「たった一人…」
「!?」
声を出した緑谷。
「情熱大陸で、オールマイトが言ってたよ…敵が勝利を確信した時が、大きく勝負を左右するって」
「緑谷…お前何言って…っ!?」
「勝つ方法は、これしか…ない！」
緑谷が震えてるのを、峰田は知った。
「蛙吹さ…梅雨ちゃん！飛鳥さん！僕が飛び出て個性を使うから、そうしたら…！」
「分かったわ緑谷ちゃん！」
「うん、分かった！」
すると緑谷は大きくジャンプして敵に飛び込むようにして、声を荒

げる
「うおおおオォォォーーーーー!!!」
「!?なんだ？」
突然の緑谷の叫びにビクリと反応する。
「死ぃねえええぇぇーーーーー!!!!」
（かっちゃん的に!!）
「やっぱガキだ」
どうやら敵は緑谷がやけっぱちを起こしたと思い込んでいる。
が、しかしこれはあくまで敵に油断させることと、狙いがある。それは
（卵が…爆発しない、イメージ!!）
すると水中にデコピンを仕掛ける

「ＤＥＬＡＷＡＲＥ　ＳＭＡＳＨ!!」

ズッドッパーーーーーーーンン!!!!

「うっ！なんだぁ!?!」
敵は訳も分からず波に飲まれる。
緑谷のＤＥＬＡＷＡＲＥ　ＳＭＡＳＨは、指先に力を入れて発動させる。
そのため直接じゃなくとも、とても強い衝撃波を出せるため…着地する前に、遠距離攻撃を仕掛けた。
当たった水面は大きく溝が出来て、敵のみんなは波に飲まれているのだ。
だが緑谷の個性ワンフォーオールは、力の調整が難しいために、ケガをしてしまう。
緑谷はこの先の戦いでは、まだまだ敵が居るためあえて腕は温存していたのだ。そう前の時みたく、焔の忍結界を壊した時にはならない為にも…

個性把握テストとおなじ、指が腫れ上がっている。
「緑谷ちゃん！」
すると蛙吹はベロで峰田と飛鳥を巻きつけ、一気に跳躍する。
そんな中、飛鳥は…
（敵…か）
心の中で、何やら思ったことがあるようだ。飛鳥の脳裏に浮かぶのは、蛇女子学園の悪忍の生徒たちの、焔たち五人の選抜メンバーと戦った時だ。
（あの時とは完全に違う…戦い方も、敵も…焔ちゃんも……でも、私も前とは違うんだ…！）
飛鳥は刀を抜き出す。飛鳥がやろうとしたことに気づいたのか、船に攻撃をした敵は飛鳥を睨み出す。
「ええい！女だからって容赦しねえぞ！オラ死ねえ!!」
巨大な水の手を作り出し、飛鳥目掛けて襲い出すと、飛鳥は構える…
「秘伝忍法！『二刀繚斬』！」
大声で叫ぶと、二つの刀で斬撃を飛ばし、水の手を斬り裂く。
ジャパーーーーーーーーン!!
「うおお!!俺の個性が…！全く歯が立たねえ!?」
その敵は飛鳥の力に驚いたのか、呆然とした顔でいる。そして飛鳥の斬撃の威力で、更に波が強くなり、飲まれていく。
「やったー！」
飛鳥は満面な笑みを浮かべている。それを見た峰田は…
（なんだよ…飛鳥、お前女なのに…女なのに…どうして…どうして!!）
「…緑谷…飛鳥…んだよオメェら…！」
峰田は、あの時緑谷が震えてたのを知っている。すると今度は緑谷を見つめる。
（お前だって、オイラと同じ泣き叫びたいのに、怖いの分かってるのに…なのに、なのにお前ってやつは…！飛鳥も…!!）
緑谷は峰田とおなじ怖くて怖くてどうしようもなかったはず、だが

緑谷はそんな怖い思いの中、勇気を振り絞り飛び出したのだ。ましてや飛鳥は、女性なのにも関わらず、男の自分とは違って、怖がることなく立ち向かった。そんな二人の姿に、峰田は涙を浮かべる。
（お前らカッケェじゃねえかぁーーーーー!!!!）
「うおおおオォォォーー!!!」
泣き叫びながらも、頭のもぎもぎをもぎ取っては敵に投げつける。
「オイラだってぇーーーーーー!!!」
ポポポポポポポポポポポポ
「オイラだってえぇぇーーーーーーーーー!!!!」
ポポポポポポポポポポポーーーーーン
峰田のもぎもぎボールは全て水に落ちたり敵に当たったりしている。
「!?んだコレ…取れねえ!?」
ボールが敵にくっつき、取ろうとするものの手がくっ付いて手も動くことが出来ない。
殺傷力は0だが、それでも超くっつく…敵とおなじボールも波に飲まれてボールがどんどん敵にくっ付いていく、そのため敵と敵が一緒にくっ付いていき、それがどんどん一点集中し完全に身動きが取れない状態となった。
「さっきの僕と飛鳥さんの衝撃で水が一気に溝に吸い込まれて、峰田くんのボールで身動きが取れなくなるから…」
「一網打尽」
パアァァーーーーーーーン!!!!
ボールにくっ付いたままの敵が上へと弾け飛ぶ。
峰田と緑谷の活躍に笑顔で見つめる飛鳥、苦痛の余り指をケガして抑えている緑谷に、ベロで緑谷を回収した蛙吹、そしてとても役に立った峰田。
「第一難問突破って感じね、凄いわ三人とも…!」
表情はとても普通に見えるが、とても感心している蛙吹は、三人を見つめて。

次々と状況は転がりながらも戦い続ける。噴水広場では相澤が敵の集団と戦っている、状況は見た目では相澤が有利なように見えるが、体力は減らしつつある。敵たちも負けられまいと立ち上がり殺しにかかるが返り討ちにされる。

そんな状況の中、二人の敵はずっと動かずに立ち止まっている。脳が飛び出てる大男は表情を変えずにただ相澤を見つめているように見える。

死柄木は、指で少し首を掻き…そして、小さな声でこう言った。

「そろそろ殺るか…」

１４話「敵の脅威」

なんとか敵との遭遇を乗り越えた、緑谷、飛鳥、蛙吹、峰田の四人は、陸に向かっている。
「オイラ体調良かったし朝のトイレ快便だったからあのもぎもぎ、体調によっちゃあ一日中くっ付いたまんまだぜ!!」
峰田は動けれない敵の集団に指をさして言っている。
「思ったよりも大したことなかったね」
峰田同様、敵の集団に目を向けてる飛鳥。
「なんとか勝てた…けど敵も一瞬油断した、だから勝てたんだと思う…これからこの先にももっと敵だっているはずだ…だからあえて指を残した…けど他にどうするか…４人だけでは無理があるしブツブツ…」
「やめて緑谷ちゃん怖い」
三人を巻きつけてたベロを元に戻して、峰田の襟と、緑谷の袖を掴んでいる。
「次、どうするかじゃないかしら?」
緑谷たちは、敵の集団に見事撃破しその場を退くことが出来たのだ。
だが、それで終わりではない…敵はどんどん減ってってはいるが、何より目的が分からない以上…どう対応すれば良いか分からないのだ。
ただ一つ…自分たちがやるべき行動とは、このことを学校側に知らせることだ。
緑谷たちは、水難ゾーンから上がる前に何かを考えている。
「緑谷、どうした?」
それに気づいた峰田は、緑谷に訪ねる。
「いや…僕たちよりも先に早く、そしてずっと戦ってるのは相澤先生だ…個性を消し回ってるのに警報が鳴らないってのも可笑しいけど、

それより体力もそろそろ限界に近づいてきてると思うし…」
「ケロ…」
「緑谷…お前、まさか…馬鹿バカばかっ…!!」
「緑谷くん…もしかして…!」
「で、出来るだけ邪魔になるようなことはしないよ!でも…ただ、出来れば」
緑谷のやろうとしてることをいち早く気づいた蛙吹と飛鳥と峰田三人は、緑谷を止めようとする。
「ただ、邪魔になるようなことはしないよ…!」
緑谷たちはあくまで勝ったのではない、この場の状況を退けたまで。
「出来れば…相澤先生の負担を減らしたいとは…思っているよ…!」
初戦闘にして初勝利…自分たちの力が敵に通じたんだという、仮説全ては…圧倒的敵（ヴィラン）の眼の前で帳消しにされてしまう。
緑谷たちは、飛鳥たち忍びは、敵の本当の恐ろしさを…まだ知る由もない。

「散らして…なぶり殺す…か」
轟は歩きながら敵を見回している。
「っ…てぇ～、体全身ズキズキしやがる…!」
「飛ばされた途端にコイツ…一瞬で…!本当にガキかよ!」
敵の悲鳴が聞こえる、ここのゾーンの敵全員を凍らして、動きを封じている。もちろん顔までは凍らしてはいない。
「言っちゃ悪いが…アンタらどう見ても個性を持て余した輩…とは見受けられねぇよ」
そうつぶやき敵の前で足を止める。
（…コイツらはオールマイトと飛鳥たちを殺す奴らじゃねぇ…蓋を開

けてみりゃあ、俺たち生徒用のチンピラのコマ…寄せ集めじゃねーか…見たところ本当にヤバそうなのは…3～4人位か？）
轟の脳裏に浮かぶのは実にヤバそうな奴らのことだ。
掌のマスクで顔を覆われている不気味な男。
脳が飛び出てる奇妙な大男。
先ほど、生徒たちを散りちりにした黒い霧の敵。
そして、この防犯センサーの警報ならずの電波を妨害している敵。
（恐らくだが…まあいい、今、俺のやるべき行動は…！）
「なあ、アンタらはみるみると氷で体が壊死していく訳なんだが…俺だってヒーロー志望、そんな真似はしたくねえ…」
そして手で顔を氷漬けするように敵に近づく
「ひっ…!?」
「なあ、お前らオールマイトを殺す手段…策ってなんだ…？」

噴水広場
相澤は敵の集団を食い止めている、緑谷たちは相澤の戦闘を見ている。
「クッ…キリねーなクソ…！」
相澤が呟いた時だ。
「27秒」
声の主を見てみると、死柄木は時間を数えながら、相澤の方に向かってきてる。
「23秒」
「本命か！」
捕縛用の布を使って拘束しようとするも、簡単に手で捕まってしまい、捕縛することが出来なかった。
「20秒」
次第に近づいてきてる
「17秒」

「15秒」
が

ドッ!!
相澤は隙を突いて右の肘を食らわす。
「……」
だが、しかし…
「動き回るので分かりづらいけど…髪、下がる瞬間がある」
「!?」
相澤の攻撃を食らった死柄木は突然、何ともない様子で呟いた…相澤の肘を掴んでいる。
「1リアクション終えるごとにその感覚は段々短くなってきてる」
「!?」
相澤が驚いたのは死柄木の解析ではなく、手に触れられてる肘だった。
肘はボロボロと音を立てて崩壊されていく、そして触れられてる皮膚は崩壊し、血の色の皮がみるみると見えていく。
死柄木の顔は掌のマスクで覆われて見えにくいが、目は見える…だから目を見て分かった、楽しんで、笑っている。

「無理をするなよイレイザー・ヘッド」

そう言われると相澤は残ってる左腕で顔を殴る。

「っ!!」
死柄木はその場に倒れるが、他の敵たちも黙ってはおらず相澤を殺しにかかる。
相澤もやられずにはいられず、回避して敵の隙を突き次々と倒していく。
「イレイザー・ヘッド…お前の普段の戦闘は奇襲からの短距離戦闘じゃないか？一対一の戦いが向いてるんじゃないか？」
「っ!!」
（コイツ…！）
倒れてる死柄木は何とか立ち上がり、解析を続ける。
「大胆なる真正面から突っ込んで大勢の敵と戦うのはあまりにも勝手が違うんじゃないか？それでも向かってくるのは、生徒に安心を与えるためか？ましてや…影でのうのうと仕事をしてる、忍者…『忍学生』っていうヤツらを庇うためか？殺させないためか??」
死柄木は緑谷と同じようにブツブツと独り言を呟く。
「アレ？おかしいな？忍学生って言った途端、表情が強張ったぞ？息遣いもさっきより荒い、乱れてる…何よりもその動揺…ハハッ！忍学生がいるって言ってるようなものじゃん！」
立ち上がり、手を広げて感心している。
「カッコイイなぁ…カッコイイなあ…！あっ、ところでヒーロー」
死柄木は何かを思いついたように、そして何かを見ている。相澤の背後の『何か』を。
相澤を覆うほどの影が出てきたので、振り返ると
そこには。

「……」

脳が飛び出ている大男の、奇妙な敵（ヴィラン）が立っていた。
そして
「本命は…俺じゃない」

死柄木がそう言った途端…

その大男は相澤を狙って。

ドグシャッ…!!!

嫌な音を立てた、それを見ている緑谷たちは、とんでもない恐怖を見ているかのような目で

「相澤…先生…っ！」

「う…そ……で…しょ……？」

飛鳥は顔を青ざめて、緑谷はそう呟いた。

出入り口にて

「流石は13号、とても強力な個性だ…あなたのような個性を持つものはあまり居ないでしょう」

黒霧はそう呟くと、生徒たちの顔は一気に暗闇に染まっていた。

御構い無しに黒霧は話を続ける。

「ですがね、あなたがどれ程強力な個性を持っていようと、個性には『相性』というものがある…あなたの個性がブラックホールで、私の個性がこのようなものならば…ね？貴方を簡単に倒すことが出来る」

そう言うと13号の背中から黒い霧のゲートが出てくる。

そして

「っ!!!」

13号の背中は吸い込まれていくように、背中はほぼチリヂリの裂傷を負った。

「ましてや、自分で自分を塵にしてしまった」
「先生ーーーー!!!」
そう、黒霧はゲートを開き、13号の個性、『ブラックホール』をワープで作り吸い込み、13号の背中にもワープを作り出すことで、カウンターをすることが出来る。
そのため13号の個性、ブラックホールはワープゲートで自分を攻撃してしまったのだ。
「ワープゲート…っ！ヤられた…」
「貴方にとって、私の個性とは相性が悪かったようだ」
13号を倒した黒い霧の敵は、子供達を飛ばした時と同じ感心している。
「せ、先生…せんせい、先生!!そんな…」
雲雀は泣きじゃくりながらも、その場に倒れた13号の背中をさすっている。
「さて、と…13号は行動不能に出来たとして…あとは問題なのが忍びについてですね、存在そのものは知ってるとはいえ、どのような力を持っているのかは不明…ましてや個性の代わりこそがその驚異的な力なのですから…そしてその忍が何人いて、誰なのかが分からない以上また我々の難題でもある…一刻も早く見つけ出し殺さねばなりませんが、まあ生徒一人一人殺していけば、どの道問題ないでしょう」
黒霧は生徒たちを睨むと砂糖は、黒霧のやろうとしてることを察知し、叫び出す。
「走れって！飯田!!」
すると我に返った飯田は再び動き出す。
「う、うおおぉぉー！」
物凄いスピードで走り出す飯田をみた黒い霧の敵は
「散らし漏らした子供…あくまで待つべきはオールマイトのみ…」
急に飯田の前に黒いワープゲートが出てきた。
「!?」
「こちらも他の教師を呼ばれては、大変ですので！」

飯田の行動を阻止する敵。
すると、ワープゲートを体で覆うように庇う障子
「ハァっ！」
「!?」
「行け！飯田！早くしろ!!」
「障子くん！皆んな…すまない！」
そう言うと、飯田は再び走り出す。
が
「行かせると思いますか？邪魔なんですよ…！」
すると自身をワープで飛ばして一気に飯田に追いつく。それを見たお茶子はふとあるモノを見た。
「…っ?!」
それは黒い霧の中に服らしきものがあることを…それはお茶子だけが気づいた。
「クッ！僕は…ぼくは…！」
託された…皆んなに！みんなが、僕を!!
迫り来る黒い霧、飯田は振り切るよう全力で走り出す。

そして相澤が居る噴水広場では。
緑谷たちは絶望を見るような顔で恐縮していた、その圧倒的なる敵の存在に…
（僕らはまだ…何も…何も…見えちゃ居なかったんだ…）
みんなは一斉にそう呟いた。
「教えてやるよイレイザー・ヘッド…」

死柄木は脳が飛び出てる大男に抑えられてる真っ赤な血に塗れたイレイザー・ヘッドを見下すような目でこう言った。

「ソイツが、対平和の象徴…『改人脳無』」

その脳無こそが、敵連合の切り札であり、最恐であると……

引き続き、出入り口

「ええい！ちょこざいな…外へは出させん！」

少し荒ぶる様子を見せる敵、だが飯田も諦めずに出入り口の扉に駆けつける。そこへお茶子は走り出す。

「お茶子ちゃん!?」

芦戸が叫ぶとお茶子は敵に指をさす。

「皆んな！アレ!!」

それは先ほどお茶子が見つけた敵の服だ、霧で物理無効なら何故服を着ているのか？

何か理由があるのではないかと、

「生意気だぞメガネ」
黒敵は次第に飯田との距離も身近くなり、そして黒い霧に覆われ吸い込まれていくように…
「消えろ！」
その時だった。

「タッチ！」

「!?」
黒霧は飯田から次第に離れていく。
「なっ…これは…っ?!」
「理屈は知らへんけど、これ着てるってことは何か理由があるんじゃないかな…?」
お茶子は黒霧が着ている服を掴んで上へと投げ、さらに個性、『無重力』でさらに上へと飛ばす。
「なっ!?しまった…身体を…！」
黒霧は直ぐに体を持って行きながら下に行こうとするが…
「忍兎～!!お願い！」
雲雀が大声で忍兎を叫ぶと…

ドドドドドドドドドドドドドド…!!

「?」
黒霧は、音がする方向に顔を向ける。
「なっ!?」
忍兎は黒霧目掛けて走り出し、空中で体を捕まえる。
「んな…！クソ!!離しなさい！なんですかコレは…まさか、あのピンク髪の少女の『個性』ですか!?」
黒霧は驚いた様子で雲雀を見つめる。黒霧は、雲雀の忍兎のことを個性だと勘違いしてる様子だ。
つい先ほど、威勢がよくて13号がやられたと分かった途端大泣き

する雲雀に、まるで使い物にならないと思っていた黒霧は、雲雀の得体の知れなさに驚愕しているのだ。
雲雀の忍兎が拘束してると、敵の服にテープみたいなのが付く。
それは瀬呂の個性だ。
「行け！飯田!!」
そしてテープを千切ると、砂糖の怪力でハンマーを投げるようにグルグルと回しさらに遠い方へと飛ばす。
「行けえぇぇぇーーーー!!!」
「ぬっ…くっ！追いつかない…！」
「うおぉぉーー!!」
「飯田くん!!頑張れ～！」
雲雀は大声で、懸命に飯田を応援する。黒霧はそれでも追いかけようとするものの間に合わず、飯田は扉に出て、猛スピードで学校へと走る。
飯田の個性があっても、学校にたどり着くのはさぞや少し時間掛かるが…外にはセキュリティーセンサーがあるため、敵は追いかけることが出来ないのだ。
「っ!!……逃げられた」
黒霧は、悔しそうに目を細めてこう言った。
「応援が呼ばれる…ゲームオーバーだ」
途端に、黒霧は自身をワープさせて、その場から消えた。
「ふう～…なんとか撃退できたなー…あとは飯田が教師たちを連れて行けば、なんとか間に合える!!」
砂糖はホッと一息つくと、雲雀は中央広場に目をやる。

「雲雀は、相澤先生のよう…す…を……」
「ん？雲雀ちゃん、どうしたの？」
雲雀の声のおかしい様子に、お茶子は首をかしげながら心配する。
雲雀は、途端…『何か』を見て、急に涙目になり、冷や汗をかき、手で口を押さえながら呟いた。
「なに…あの人……アレって!!大変!!」
「ちょっ!?雲雀ちゃん!!」
急に走り出す雲雀に、お茶子は止めようとするのであったが、もう手遅れだった。そうこの時、雲雀は今なにが起きてるのか…分かってしまったのだ…相澤先生がやられてるということも……

噴水広場。
「…っ!!」
相澤は脳の飛び出てる奇妙な大男の敵、改人、脳無に腕を握られ、押し倒され上に腰掛けるように乗られている。腕や体は普通の人間とは明らかに違うゆえに、オールマイトよりも少しデカイと思われる。
相澤がやられたのだ、この圧倒的な強さを持つ敵に、なす術もなく。
死柄木はとても嬉しそうに、満足しながら意地悪そうに、相澤に吐き捨てるように呟く。
「個性を消せる…なんて、素敵な個性なんだけど、何てことないね、だって圧倒的なる強さではただの無個性…なんだもの」
ニヤリと笑っている様子だ。

相澤は脳無を睨むが、脳無は何の表情も変えることなく相澤の顔をつかみ、

ドッッ!!

地面にめり込ませる。

「っ!!」

「ははは!いいね良いね!その調子だ脳無、あとは…オールマイトを待つのみだな…それと13号も厄介だが…まあ、黒霧がなんとかやってくれてるだろうな」

死柄木はゲームの攻略をしているように楽しみながら呟いている。

そんななか、緑谷たちはただ恐怖を埋め尽くされ、呆然と見てるしかなかった。

「なあ、緑谷…もうさすがに考え改めたろ…?」

手で口を押さえて涙を流す峰田に蛙吹も飛鳥も認めざるを得ない様子だ。

「ケロ…」

「……っ!相澤、先生が…」

「なんなの…なんなのアレ?」

向こうの敵は今までとは明らかに違うと判断したからだ。

緑谷たちが相手にしたのはただの雑魚…本当のヴィランはコイツ等だ。コイツ等が一番危険な存在なのだ。

「それにしてもオールマイト遅いなあ、早く来ないとコイツら本当に死ぬぞ?まあ、殺す気でやってるんだけども、ははは…」

死柄木は笑いながらそう言うと

「死柄木弔」

空間から黒霧が現れる。死柄木のところにワープ来たらしい。

「あっ、黒霧」
振り返ると、相澤の顔を潰そうとする脳無の動きも止まった。
「なあ、13号はやっつけたのか？」
そう聞くと、少し気まずそうに黒霧は答える。
「……行動不能に出来たものの、散り損ねた生徒たちがおりまして…一名逃げられました、応援が呼ばれるかと」
そう言うと
「は？」

さっきの嬉しい様子が一瞬にしてドス黒いものへと変わった。
「…はー」

死柄木は指で首を掻きはじめる
「はーーー…」
ガリガリガリ
「はーーーー……」
ガリガリガリガリ
「黒霧…お前…！お前なにやってんだよ!!なにやらかしてんだよ!!お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしたよ…！」
怒りをぶつけて、ましてや同志である仲間すら殺そうとする。
そして、指の動きが止まった。
「……」
「死柄木弔、申し訳ありません」
「お前さ、ワープゲートじゃん？出入り口じゃん？何でガキどもに遅れを取ってんだよお前…」
死柄木は意地悪そうに黒霧を睨みつけ、吐き捨てる。
「…何十人ものプロ相手じゃ敵わない、あーあ…ゲームオーバーだ、今回はゲームオーバー…」

すると死柄木は…脳無、黒霧に向かってこう言った。
「帰ろっか」

「は？」
向こうで見てた緑谷はとっさに声を出してしまったが、あえて死柄木達には声は届いてないようだ。それに緑谷達の存在にも気付いてない様子。
死柄木はまるで、ゲーム感覚で遊んでるような…戦場を、ましてや誰かが殺されるにも関わらず、死柄木は遊び感覚で戦ってたのだ。
「なあ、帰るっつった？アイツらカエルっつったよな？」
「え、ええ…」
蛙吹は不安な顔で様子を見ているに対し、峰田は歓喜の顔に変わる。
「や、やったー！オイラ達助かるんだ！」
「ええ、でも…はっ！」
峰田が蛙吹に抱きつき、そして…胸を触ってしまった。
ほっぺを赤らむ蛙吹は峰田を水に沈める。
「気味が悪いわ緑谷ちゃんに飛鳥ちゃん」
「う、うん…」
正直緑谷も飛鳥も状況を飲み込むことは中々難しかった。
（帰る？何言ってんだコイツら？オールマイトを殺しに来たんだろ？なのに何で…余計雄英の危機意識が高まるだけだ…なのに何で…でも）
緑谷は呼吸を整える。
（これで帰ってくれるなら、余計な被害は出さずに済む…僕たち、助かったのか？）
そんなことを考えている緑谷。その反面、飛鳥は…
（なに…？何を考えてるのあの人たち…私たちは？あの仲間たちは？まさか、私たちにこんなことしといて、仲間は置き去りなの？なんで

…そんな酷いこと……）
飛鳥は死柄木に怒りを覚えた。飛鳥たちが命懸けで戦ってきたことを、死柄木にとってはただのゲーム…つまり、殺しあうことがゲームであって、死柄木自身何とも思わないのだ。それが、ヒーロー社会が生み出したモンスターなのだということを知らずに……
死柄木が黒霧に話しているようだ。
「あっ、そうだ…なあ、黒霧」
「何でしょう死柄木弔？」
「…オールマイトがこれ見たら、どう反応するかな？」
「？」
死柄木の発言に黒霧は首をかしげる。
「だってアイツは平和の象徴だろ？なのにアイツが来てからみんなが殺られてたって聞いたらさ、アイツどう反応するのかな？なあ、平和の象徴と呼ばれてる男が、自分の命を狙われてるせいで、関係ないソイツらの命が、人生が潰されたらさ……！なあ！アイツ怒るかな？嘆くかな？泣くかな??あっははは！っということで」
歪んだ感情で高笑いすると死柄木は水難ゾーンの、緑谷達を一瞬で睨み。

「コイツらをへし折って帰ろう!!」

一瞬で間合いを詰める。
全く追いつけない速度で、死柄木は蛙吹の顔を手で触れようとする。
緑谷と飛鳥は動くことが出来なかった、そのスピードについてこれなく、ただ立って見ることしか。
緑谷はとっさに脳裏にあるものが浮かんだ、それは…肘が崩壊された相澤の姿。
そして、今度は蛙吹の顔が…崩壊されそうになる。

いや、なる…なってしまう、死の手が蛙吹の全てを壊そうとする。
そして
ピタッ…
触り捕まってしまった…が
「……」
「……チッ…」
死柄木は舌打ちをした、崩壊してないからだ。
すると死柄木は後ろを見て吐き捨てるように言った。
「本当…カッコイイぜ…」
「ハァ…ハァ……クッ…!」
「イレイザー・ヘッド」
相澤の顔は血だらけで、目は赤く充血している。ほとんど見るからに重傷なレベルだ…なのにも拘らず、相澤は生徒を守るために、息を切らしながらもその目で、個性で、生徒の命を守ったのだ。
が、死柄木は
「脳無」
残虐な命令を下すと、脳無は相澤の顔を掴んでまた、思いっきり地面に食い込ませた。

ドッッ!!
という嫌な音を立てて、そして血が広がり取れ落ちたゴーグルにまで血が染まる。
そんな様子をみて楽しんでいる死柄木に、緑谷と飛鳥の二人は思いっきり飛び込んだ。
(ヤバイやばいやばいやばいヤバ)
「っ!!!」
拳を握りしめ。刀を握りしめて。
(コイツら、さっきの敵とは明らかに違う…!!というか早いしその手

は危険！）

（この人だけは…この人だけは絶対に!!許さない!!!）

緑谷は死柄木の脅威を、その危険性を肌身で感じ取り、即座にワンフォーオールを使おうとする。飛鳥も同じく、何より…自分の担任の先生じゃないとは言え…人を苦しめ傷つけたことに、飛鳥は許せなかった。

「「手…離せっ!!」」

大声で叫ぶ緑谷と飛鳥に死柄木は振り返る

「ＤＥＴＲＯＩＴ…！」

「秘伝忍法!!」

緑谷は思いっきり死柄木を殴りかかり、飛鳥は死柄木目掛けて斬りに行く。

「ＳＭＡＳＨ!!」

「二刀繚斬!!」

ズドオオオオオオーーーーーーーーンン!!

ズバアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーン!!!!

強烈なる一撃、飛鳥の秘伝忍法の力で、衝撃波がブワーッ!と広がる。

緑谷は自分の腕を見る、すると

(…!!あれ?ケガしてない!?ということは…)

無意識に調整が出来たのだ、今までは個性を使えばケガをしていたが…今回は上手く調整がいったようだ。

(やった…やった!!まさかこんなにも早く調整が上手くいくなんて…!やったぞ僕!やっ…)

前を見た瞬間、

希望の顔が、

絶望へと変わった。

目の前には表情を変えてない無傷の脳無が立ちはだかっている。

「……」

(は?)

(え?)

緑谷と飛鳥は目の前にいる脳無を見て理解不能になった。

個性と飛鳥の秘伝忍法が効いていないからだ、なんの表情も変えることなく。

(なんだこいつ、つかさっきまで其処にいたのに…ていうか早すぎ、効

いてない？まさか…）

（嘘でしょ？そんな…そんなのって…）

飛鳥は認めたくなかった、脳無と呼ばれるこの男に、忍びの力が通用しないというのは。いや、信じられなかったのだ。

緑谷は蛙吹の言ってた言葉を思い出す。

『オールマイトを殺せる算段があるから、連中、こんな無茶してるんじゃないの？』

（まさか…まさか…!!）

緑谷は全て悟った、だがもう遅かった…死柄木は緑谷と飛鳥を見つめる。

「…良い動きをするね君たち、特にその地味そうな君、スマッシュって、オールマイトのフォロワーかい？」

首をかしげて言う死柄木は

「まあ、いいや君……脳無」

すると脳無は目をギュルリと変えて、緑谷を見つめる。そして緑谷の腕を掴んで

「…っ!!」

「緑谷ちゃん！」

蛙吹は死柄木の腕を払いのけ、ベロで緑谷巻きつける、水から上がった峰田は、もぎもぎをもぎ取って、死柄木の手に投げようとする。

「させるもんですか!!」

飛鳥がそう叫ぶと…

「しつこいなぁ……俺そういうのつい殺したくなっちゃうんだよね…なぁ、脳無？」
死柄木がそう言うと、脳無は飛鳥の目の前に現れて、顔を覆うほどの手の大きさで、飛鳥の頭を潰しにかかる。
「そ、そんな……！というか、早すぎ…」
飛鳥は絶望な顔を浮かべるものの、諦めまいと、回避しようと試みる…だが、それは既に手遅れだ。
「さあ…君たち四人、へし折って帰ろう!!」
死柄木はゲーム感覚で、子供を殺そうとする。
死柄木と脳無が、蛙吹と峰田を、緑谷と飛鳥を殺そうと迫り来る。
二つの敵の死そのものが…今まさに…
その時だった。

「秘伝忍法！」

「は？」

死柄木の近くに、誰かが駆けつけに来た。

「忍兎でブーン！」

瞬間、死柄木は咄嗟に…

「脳無!!」

そう言った…

ドガアアアアーーーーーーン!!

「うわあああぁぁーーー!!!!」

緑谷と飛鳥、蛙吹に峰田は吹き飛ばされる。なぜなら、脳無は咄嗟に緑谷を掴んでた手を離し、飛鳥を殺そうとしたが、死柄木を守ることに変更したため二人は無傷。蛙吹と峰田は、衝撃波のあまり、飛鳥たちの方と同じ、吹き飛ばされる。

「よかった…間に合った!!」

煙が上がってるため、現在視界は最悪である。

飛鳥たちは…

「プハッ!!ここは…水…さっきのところ?」

どうやら四人とも水難ゾーンに吹き飛ばされ、その真ん中にいる。四人ともなんとか無傷である。

「な、何が起こったんだ!?」

「さあ、私にも…ただ、あの声は…!」

「間違いないよ…!うん!」

雲雀だと…そう確信した。

１５話「ゲームオーバーｏｒコンティニュー」

水難ゾーンに飛ばされた四人は、中央広場で大きく引き離された。そのため大分距離がある。
「それにしても、殺されるかと思ったわ…」
「ああ、アレはマジでヤベェよ…オイラたち助かったんだな…えっと、雲雀だよな？アレって」
「うん！間違いないよ！だって雲雀ちゃんは忍兎を使うから！」
飛鳥はそう言うと、峰田は歓喜な顔を浮かべる。
「よかったあああーー!!さっきの攻撃でもうアイツら死んだんじゃねーのか!?」
「それは流石に言い過ぎよ峰田ちゃん」
はしゃぐ峰田を見て、蛙吹はベロで額を鋭く突く。
「いっでぇぇーーー!!!」
峰田は自分の額を抑えて涙を流している。
そんなやりとりの中、飛鳥は…
「……」
（初めて…はじめて、死ぬのが怖いと思った……）
飛鳥は死を恐れてしまった。忍びは常に死が隣り合わせでもある。死なないためにも必死に訓練し、強くなる。だが…今回はその比ではなかった。死柄木と脳無という無慈悲で歪んだ殺意が、飛鳥に死の恐怖を与えたのだった。
（ううん…！怖がるな私!!命懸けで戦わないと…勝てないよ！）
飛鳥は頭の中の雑念と恐怖を振り払う。
皆んなは先ほどの場所には戻らずに、遠回りする方へと向かっていく。その方が殺されるリスクは低くなるからだ…アイツらなら、必ず殺しにかかる。

一方、雲雀は
「飛鳥ちゃんたち間に合って良かったよ～♪」
雲雀は安心した様子で、水難ゾーンを見つめている。確かに、もし彼処で雲雀が来なければ確実に殺られていただろう…忍びを殺すと言ってる連中だけのことはある。
「よし！あの人たちも倒すことが出来たし、あとは柳生ちゃんを探せば…」
しかし、此処からが本当の恐怖が始まることになる。雲雀は周囲を見渡して、土煙の方に目をやると、なんと……人影が三つあるのだ。
「えっ!?」
雲雀は驚いた様子で、その場に恐縮している。そして土煙がやがて晴れて、その光景は…
無傷の三人の敵。死柄木弔、脳無、黒霧であった。
「そ、そんな……」
雲雀は声を振り絞るのにやっとだった。ただでさえ、蛇女の悪忍の春花にさえダメージを与えたのに、忍でない連中はなんともない様子で、無傷で平然と立っている。それは、雲雀が攻撃することをいち早く知った死柄木は脳無に自分を守るように命令し、身代わりとして前に立って、雲雀の攻撃を受けたのである。にも関わらず、脳無は傷一つ付いていない。それどころか、埃のような痕跡も見えない…黒霧もとっさに脳無の後ろに隠れた為に無傷である。そのため誰一人としてやられてないのだ。そんな死柄木は、首を掻き毟る。

「はあーー……ったく、あんのガキが……ガキぃ!!なんだアイツ…!俺の邪魔をしやがって!折角さ、あのガキ四人の血に染まった死に顔を見れると思ったのにさ……あと少しってところでアイツ、俺に歯向きやがって…!」

死柄木は苛立つ様子で、雲雀を睨みつける。その死柄木の、様々な負の感情が、雲雀を更に恐縮させるのであった。

「うそ…でしょ?雲雀の攻撃が通用してないよ…?」

雲雀はとにかく怯えながら、大量の涙を零しながら、死柄木たちを見つめるのであった。黒霧は、そんな雲雀を敵視しながら、死柄木に注意深く話し出す。

「死柄木弔、あの少女は中々見ない…いや、見たことのない個性を持っています…幾ら子供とはいえ、充分に気を付けてください…!」

「分かってるよ!んなことは……さぁてと、んじゃあ俺たちの反撃ターンと行くか……」

死柄木の狂気な笑みに、軽くたじろいでしまう雲雀。雲雀はなんとか立ち向かおうと、構え、自身の心を強く持つ。

「ううん、負けちゃダメだ!雲雀は、いつまでも失敗ばかりする、ダメな雲雀じゃないんだ!やれば…出来るんだ!!」

雲雀は大きな声で叫び、死柄木たちに立ち向かおうとする…それを聞いた死柄木は、残虐で、満面な笑みを浮かべる。

「……やれば出来るか……いいこと言うじゃないか…!!けど分かんないかなぁ……そう言う心掛けが、勇気が、命取りになるってこと……それで自分の全てが無駄になるってことをさ……

脳無、殺れ」

死柄木はそんな雲雀を馬鹿にするように、鼻で笑い、脳無に雲雀を殺すよう命令する。死柄木が命令した途端に、脳無は猛スピードで雲雀との距離を詰める。
「お願い…忍兎!!」
雲雀が叫ぶと、忍兎は直ぐに雲雀に駆けつけて、雲雀を守るように脳無に立ち向かう。
脳無の拳とと忍兎の拳がぶつかり合う……

「え?」

だが……忍兎は脳無の一撃を喰らっただけで、後方に吹き飛ばされた。忍兎のパワーも充分に凄いものの、そんな脳無は全てを無にすると思わせるような力で、忍兎を吹き飛ばし、無表情で雲雀の前に立っている。
「え…ええ!!?って…あ、あれ?」
雲雀は、いつの間にか自分の目の前に居る脳無のスピードに驚いたの。だが雲雀は何やら脳無を見て思ったことがあるようだ。
(こ、これって…?まさか!)
だがしかし、脳無を見て疑問と恐怖の感情に支配されて、その場から動くことが出来なくなってしまった。なにより…その脳無という存在の不気味さに、圧倒的強さに、そして…『忍学生』など比にならないと思わせてしまう、今まで自分たちがやって来たことが、否定されてしまってるかのような…雲雀はただただ立ち止まることしか出来なかった。
そんな…姿を見てる死柄木は自分の思ってることが上手くいったのか、えらく感心している。
「ははは!はははははは!!!!オイおいどうした?あのクソ兎吹っ飛んじまったぞ??お前の相棒く!!んはもう居なくなっちゃったなぁ……脳無」

瞬間、脳無の手が雲雀の顔を鷲掴みしようとする。だが、雲雀はまだ最後まで諦めてなかった…

「うわっ!?」

ビュオン!!!と脳無の手を間一髪避けることが出来た。さっきまでの雲雀は、完全に絶望していたが、だがそれでも目の前の死を錯覚し本能のまま、体を動かした。死にたくない…それでも、アイツらには殺されたくない。そう思ってしまう。

「チッ……あいつ思ったよりも早いな…オールマイト並みスピードにした筈なのに……こいつ、本当にヒーローの生徒か?」

さっきまで思い通りにことが運んでいたのに、雲雀の反射神経及び、一発で脳無に殺されなかったことから、また苛立つ様子を見せる死柄木。そして、死柄木も少しずつ疑問を抱いてきてる。コイツはヒーローの卵なのか?と。当然、黒霧同様…死柄木も雲雀が忍だとは気付いていない。

「はぁ…はぁ……」

息が切れてきたのか、大分ペースが落ちてきてる。そう、たったの脳無の数十発の攻撃を避けただけなのにも関わらず…スタミナが限界に達していた。

(この人……強すぎるよ!!いや、ううん…この人のことを…はやく、はやく皆んなに言わないと……!!)

雲雀の忍装束は、少しやられている…なにより雲雀が驚いたのは、脳無の拳圧である。かわしたとはいえ、衝撃波と突風、向こうから離れた壁がめり込むほどなのだ…もしこんなのが暴れたら……忍学生も絶対にただでは済まない。蛇女の悪忍は強いと思ってたが、現在、戦ってる脳無の方は最早レベルが違う。上回ったのだ。

雲雀のスピードが落ちてきたところを、ほんの僅かな一瞬の隙を、

脳無は見逃さなかった。死柄木の命令には絶対に従うと言わんばかりか、命令に忠実に動き、そして…雲雀を殺せという残虐な命令が、雲雀を襲う。

その時

「秘伝忍法！」

『薙ぎ払う足!!』

脳無は吹き飛ばされた。

ドオォォーーーーーーーーーーーーーン!!!!!!

「!?」

「え?」

突然の出来事に、雲雀と死柄木たちは呆然とその場を立ち尽くしている。

「……は?」

死柄木もワケが分からんという顔をしている。

何故ならそこには、巨大な烏賊が周囲をなぎ払い、脳無が吹き飛ばされて、雲雀の目の前には…

「すまない、遅くなったな…雲雀」

「や、や…柳生ちゃん!!!!」

柳生という少女が立っている。

水難ゾーン

「な、なんだあの爆発!?」

「まさか敵じゃないわよね…?」

四人は一斉に爆発した場所に目をやる。

「アレって…烏賊?となると、柳生ちゃんだ!!」

飛鳥はホッとした様子で一息つく。雲雀だけでは殺されると心配してたのだが、柳生が来てくれたならよかったと。これで殺される危険性は低くなった訳だし、あとは自分たちがもう一度さっきの場所に戻れば、六人になってなんとか戦えるだろう…と、飛鳥はそう思ったのであった。

しかし緑谷は…

「……本当に大丈夫……なんだよね?」

一人だけ、心配していた。　ワンフォーオール、オールマイトの力が通用しなかった敵が、彼処に居るんだから…

中央広場

「雲雀の気配を頼って探していた…無事かどうかは分からなかったが、間に合ってよかった…!」

柳生は雲雀を守ろうと、番傘を開き盾にしている。

「柳生ちゃん!!柳生ちゃん…柳生ちゃん!!」
雲雀は泣いた、ただただ泣いた。怖くて…殺されそうになって…辛くて…苦しくて…でも、柳生が来てくれて嬉しくて…頼もしくて…だから雲雀は泣いているのだ。

柳生は雲雀を見つめて、「もう大丈夫だ…」と微笑みを見せたあと、死柄木たちに物凄い殺気で睨みつける。

「お前たち…オレがいない間によくも雲雀を…!!」

許せなかった。とにかく許せなかった…
自分が雲雀の側に居てあげられず、怖い思いをさせてしまったことを。
もし自分がここに居なかったら、雲雀は殺されていただろうと…
そして…
コイツらが雲雀を殺そうとしたことを…
雲雀に怖い思いをさせたこと。

ガリガリ…ガリガリガリ…
「……」
ガリガリガリガリ…ガリガリガリガリ…
「……!!」
思い通りにならなかった。また、また!また思い通りにならなかった!死柄木は、首をひたすら掻き毟っている。
「なんだよ…なんだよアイツ!!?急に現れやがって……なんであんな

ガキに脳無が吹き飛ばされたんだよ!!意味がわからないぜ…しかもアイツなんか変なの出してなかったか？」
　死柄木は柳生を見ながら捲したてる。その隣にいる黒霧は目を細めて柳生を見つめる。
「恐らくアレはイカでしょう…ふざけてるように見えますが、まさか脳無が吹き飛ばされたとは……あの雲雀という少女に続き、あの眼帯をしてる少女もまた生き物を呼び出した…先ほどの兎の存在に大きく驚愕しましたが…あのバカでかいイカも……本当に個性でこんなものがあるのでしょうか？」
「知らねえよ!!何でお前はそんなに冷静でいられるんだよ!!ああもう！クソ！クソガキ共の分際で、俺に歯向かいやがってぇ…！」
　死柄木はガリガリと嫌な音を立てながら、首を掻きまくり、黒霧に大きく怒鳴る。
　死柄木と黒霧の会話のやり取りを見ている柳生は、番傘を死柄木たちに向ける。
「おい、お前ら…雲雀を殺そうとしたんだ。それなりの覚悟は出来てるんだろうな？」
　柳生は怒りを込めた声で言うと、死柄木は柳生に反応し振り向く。
「なんなんだお前……俺に歯向いやがって、タダで済むかって話しだ……気に入らないなお前。気に入らないものは全部ぶっ壊す……!!」
「歯向かうもなにも、雲雀は俺の大切な存在だ……大切な仲間で…俺の親友だ……だから、誰にも殺させはしない、雲雀は俺が守る!!」
「柳生ちゃん……」
　柳生の優しさに、守ろうとするその後ろ姿に、雲雀は表情を緩める。だがその反面、死柄木弔は…
「……こんな状況なのに人助けか…流石はヒーローの巣窟雄英高校！最近の子供は教育が成ってるんだな!!
　……でも、気に入らないんだよお前。と言うわけで、お前を壊してやるよ…大切なお友達ごとな……」

死柄木は気味の悪い笑みを浮かべると、柳生は「そうか…」と呟く。柳生は死柄木の思ってることがわかった。
コイツは見たいんだ、自分が怒ったところを。嫌がらせをやりたいんだ。人が嫌がることを平気でやって、上から笑って見下ろして。死柄木はそういうヤツなんだと…
無邪気な笑顔で平気で人を傷つけ、苦しめる存在。まさに敵と呼んでも過言ではない。曇りなき純粋な悪だ。

柳生はそれでも表情に出さないよう静かに怒りを燃やしている。態勢を低くし、番傘を構えて相手を睨みつける。一気に間合いを詰めて攻撃し、勝負を決めるのだろう。

「お前のようなクズとは二度と会いたくないな…消えろ」

柳生は死柄木に吐き捨てるように言った途端、猛スピードで死柄木に走り出し、番傘で死柄木の腹を突こうとする。

「脳無!!!!!」

その名前を呼んだ瞬間…

ドン!!!!!

柳生の攻撃が死柄木に当たることはなかった。

「……」

「なっ…」

柳生は完全に勝負を決めたと思った。いや、例え急所が外れても、仕留めれなかったとしても、死柄木にはダメージを与えれると思ってた……だが、そんな考えは目の前で否定された。

死柄木が大声で名前を呼んだ途端に、先ほど柳生が秘伝忍法で吹き飛ばした脳無が、無傷で目の前に立ち止まり、無表情で柳生をじっと見つめているからだ。

「バカ……な……こんなことが……」

初めて見せる柳生の絶望した顔に、死柄木は歪んだ笑顔で柳生を見つめている。

そして…

「脳無、殺れ」

死柄木がそう言うと、脳無は拳を握りしめて柳生目掛けて殴り掛かる。間に合わないと判断した柳生は、番傘でガードするが…

ドガアアアアアアーーーーーーーーーーーーンン!!!

渾身。ともよべるその一撃に、柳生の番傘は壊れてしまい、一気に吹き飛ばされてしまう。

「えっ…」

雲雀は絶句した。目の前にいた柳生が、頼もしくて、カッコよくて、最高の友達の柳生が…吹き飛ばされてしまった。

「あ……ああ……ああああ……!!!!」

希望が、絶望へと染まり…雲雀の周りには、頼れる友達が居なくなってしまった。そんな悲しみに覆われてる雲雀を見て、無慈悲な死柄木は大声で笑った。

「あっははは!!!なにが守るだよ!守るとか言ってアイツ結局死んでやがるぜ!守れてねえじゃん…ざまあみろ、ザマァみろォ!!!会えないどころか会いに行けないなぁ!!だって死んじゃったんだもんなぁ!!はははははは!よくやった脳無!!」

人の不幸は蜜の味。死柄木は、柳生の死と、雲雀の絶望を見てゲラゲラと笑っている。正に最悪の状況だ。

「そんな……柳生ちゃん……柳生ちゃん!!」

雲雀は必死に柳生の名前を呼んだ。守ってほしいなんて言わない…助けてなんて言わない…だからせめて、せめて…生きてほしい…生きてて欲しい。お願いだから…

「柳生ちゃん!柳生ちゃん柳生ちゃん柳生ちゃん

「おいおい悲しむなよ……そんなに泣いてたらお前のお友達の柳生ってガキは、あの世で悲しんでると思うぜ？あっ、でも…どうせお前も直ぐに会えるよ、柳生に…

あの世でな」

死柄木は、雲雀の目の前にゆっくりと辿り着き、雲雀の顔を掴むように手で、顔に触れようと…壊そうとする……

ことが出来なかった。

ドシュッ！

「いっ…!?」

死柄木の手首に、何かが刺さったような嫌な音がした。死柄木は咄嗟に手を引っ込めて、傷で血が流れてる手首を見ると、それは…

「……クナイ…？」

「死柄木弔、大丈夫ですか!?」

「ってぇなぁ…!!今度は何だよ！ったく！」

怒り荒ぶる死柄木は、心配する黒霧の声が聞こえなかったのか、黒霧に反応はしなかった。手でクナイに触れた瞬間。クナイは一気に崩壊し、粉々となった……しかし、死柄木の手首に投げられたクナイ、アレは一体誰のものなのか…それは、

「ひ、雲雀から……離……れ……ろ!!」

「えっ…?う、嘘……ほん……とう……なんだよ……ね?」

その声は…

「んだこの聞いたことのある声は……なんでだ……なんで、何で!!お前!」

鼻と頭から血が流れてる

「信じて……いいんだよね?……もう、死んじゃったかと思ったよ……!!」

「雲雀、オレは……絶対に……死なない……!!」

「うん……うん!!」

もう無理だと思ってた、死んでしまったかと思ってしまった。もうだめだと……

だからこそ、雲雀は疑ってしまうほど彼女が来てくれて嬉しかった。涙が溢れるほど…それほど、本当に、生きてて、本当に。

「ありがとう…

柳生ちゃん!!!!」

脳無に殺されたと思われてた、柳生の姿であった。

水難ゾーン

「おい…さっきのまた爆発したぞ!?大丈夫なのか…?雲雀と柳生のヤツは…!」

「ケロ…」

再び大爆発が起きた中央広場に、段々と心配してきた峰田と蛙吹。柳生がいても無事では済まないどころか、むしろ殺される確率が高いとも思われる。柳生と雲雀は忍学生だ。もし向こうがそのことに気付いたら、絶対に、迷わず殺すだろう…いや、もうバレてるのかもしれない…

それ以前に相手が忍学生であろうと雄英生徒であろうと、先生であろうとも、誰が相手でも殺すハズ。

「と、とにかく、僕たちも早く合流しよう!」

緑谷は二人に声をかけると、表情こそは不安に満ち溢れてるが、それでも頷く。ある一人の少女を除いて…

「……」

(まさか……まさかだとは思うけど、柳生ちゃん、死んでない……よ

ね？殺されてない……よね？大丈夫……だよね??」
　飛鳥は不安と恐怖で心が一杯だ。柳生と雲雀は忍びとはいえまだ一年生…それに柳生と雲雀が生きてて欲しいとは思ってはいるが…それでも疑ってしまう。殺されてるかもしれない…と。それが嫌だった。二人は飛鳥にとって仲間であり、友達でもある。飛鳥、斑鳩、葛城、柳生、雲雀の五人揃ってこその、選抜メンバーであり、皆んなで立派な善忍になると決めたのだ。
　それなのに、こんな所で…二人は終わってしまうのが嫌だ。殺されて欲しくない…死んで欲しくない……
　飛鳥はそんな気持ちで胸がいっぱいだ……

　中央広場にて。

「はあ……はあ……はあ……」
「や、柳生ちゃん……」
　柳生の息遣いは荒く、目を細めながらも、ヨロヨロになってでも、雲雀の目の前に立ち、守っている。傷や、出血の量は酷いが…それでも雲雀を守るために柳生は再び、戦闘態勢に入る。番傘は壊れてしまってるため、持つことは出来ない。

「大丈夫か……？雲雀……オレは……オレは……」
「大丈夫だよ……大丈夫だから……逃げて!!」
「……雲雀？」
　柳生は首を傾げるのであった。雲雀は涙を流しながらも、柳生の身体を支えるようにして、逃げるように言う。
「もう、そんな傷じゃ戦うことなんて出来ないよ!!雲雀のために戦ってくれるのは嬉しいよ？でも、でも…柳生ちゃんが死んだら嫌なんだもん！死んで欲しくないもん!!」

「……雲雀」
柳生は雲雀の言葉を聞いて、涙を溜めた。死んだら嫌だ、死んで欲しくない。それは柳生だけでなく雲雀も嫌なんだと。だから雲雀の気持ちを聞けて、柳生はとても嬉しいのだ。

だが、ある人物はそんな二人を忌々しく睨んでいる。

「ハァーー……黒霧、どういうことだ？」
「私にも分かりません…ただ、あの少女は渾身とも呼べるような脳無の一撃を食らったにも関わらず、それでも彼女は生きている……おかしいですね…先生のおっしゃる通りならば、脳無の一撃だけで子供は仕留めれると……」
「だよな!?何であのガキ生きてるんだ!?それよりさっき吹っ飛んだだろ？あの一瞬で一体どうやってあんな傷で此処まで来たんだ?!」
柳生は攻撃を食らったものの、直ぐに回避するよう避けたのだ。その為脳無の拳が僅かに顔をかすっていたのだ。それでもこのダメージ。吹っ飛んだと言っても、番傘で地面を削り、威力を少しでも殺していたため、なんとか最善を尽くすことが出来た。そして、全力で、今ある力全てを振り絞り、やって来たのだ。雲雀の思いがそれほど強いのだろう。
いつの間にか、柳生はクナイを構えていた。
「雲雀、逃げてくれ……アイツらはオレが」
「ダメだよ!!」
「!?」
雲雀は首を横に振る。
「仲間を…友達を置いて逃げられないよ!!ソレは柳生ちゃんだってそうでしょ？」
「確かにそうだが……でも、でもオレは!!」

雲雀を失いたくない。

だが

死柄木は…

消そうとした。

「脳無！」

その瞬間。脳無は…柳生の目の前に辿り着いた。

「……」

「クッ…！」

柳生は避けようとするが、重傷で無理に走ってしまった為か、なかなか体が言う事を聞かない。もうダメだ…おしまいだ……そんな時だった。

ドン！

「え？」

雲雀は柳生を抱きしめ、押し倒した。

ブオオオォーーーーーーーーーンンン!!!

空振っただけで、大きな音を立てる脳無の拳。脳無の本気の一撃を躱した。もし雲雀が柳生を押し倒さなきゃ、今度こそ確実に死んでいた。

「ひ、雲雀……お前」

柳生は感謝の言葉を言おうとしたが、雲雀は柳生から脳無を見ると、柳生に話し出す。それは、雲雀が『このこと』を皆んなに言わなければならないものを。

「柳生ちゃん、この人気をつけて！可笑しいんだよ！」

「雲雀？……どういうことだ？」

「この人…心がない!!!!」

「なに!?」

「は？」

雲雀の言葉に、その場の全員は凍りついた。脳無を除いて…

「ひ、雲雀……どういうことなんだ……コイツは……」

「よく分からないけど、でも…心がないんだ……愚術みたいなものでもないし、忍びのような独特とした気配はないけど……でも！この人から心を感じないし、まず心が存在してない！」

「なっ……」

雲雀の言うことは信じられなかったが、それでも確かに本当だろう。筋が通っている。脳無が喋ってる姿も、自分で判断し行動するよ

うなことも、見たことがない。改めて言うが、雲雀の言ってることは本当だと言える。今戦ってるこの敵には、心がないのだから…驚くのも無理はない。
「じゃあ……コイツは、何なんだ？一体……コイツは……」
愚術で操られてるわけでもないなら、コイツは一体何者なのか？そんな疑問が浮かび上がってきた。
そう思っている二人に、脳無は攻撃しようとしない。雲雀が駆けつけに来たことで…柳生か雲雀、誰を殺せばいいのか分からないのだろう。そして、死柄木が動揺してることで……

「おい、黒霧…どう言うことだよ!?なんでアイツ…脳無のことを知ってやがる!?お前何か話したか？」
「いえ、私はなにも……しかし彼女には何か特別なものを感じます」
「特別なもの？」
死柄木は首を傾げる。
「はい…脳無に心がないなどと見極めたり、それに先ほどの兎といい、身体能力も高い……もしかしたら、彼女こそが…我々が殺すべき敵、忍なのでは？」
「!!」
死柄木は、「そういうことか」という顔で何度も何度も…感心するかのように頷く。まるで今まで解けなかった問題を解決したような……
「確かに黒霧の言ってることには筋が通ってるな…道理ですばしっこくて、なかなか殺せなかったのか！」
「はい、恐らく…それにあの柳生とかいう少女もまた忍である可能性が高いかと…脳無の一撃を喰らってもまだ生きてるそのタフネスさもまた、忍ならば納得がいく…」
「なるほど…なるほど…ああ、そっか…そっかそっか!!そういう事だったんだな！よく分かったよ！」
死柄木は納得した様子で微笑む。

「あーあ、何だよ…コイツら忍だったのかよ…でも黒霧の言ってる事で納得がいったな……よし、そうと分かれば……

脳無！そのガキをやれ！」

死柄木は柳生に指差すと、脳無は指差してる方向の、柳生に襲い掛かる。

「や、柳生ちゃん！」

すると雲雀は柳生の目の前に立つ…だが柳生は必死に雲雀を止めようとする。

「よせ雲雀！お前が目の前に立つと、アイツは雲雀を……！」

雲雀は柳生に振り向き、満面な笑みを浮かべる。

「柳生ちゃん、いつもありがとね。痛い思いをしてでも雲雀のことを守ろうとしてくれて」

脳無は雲雀の目の前にやってきた。それでも雲雀は脳無に振り向く事なく話しを続ける。

「雲雀、ずっと嬉しかった。いつも柳生ちゃんの背中をみて、とてもカッコいいと思ったんだ」

「……」

「だから…だから雲雀もいつまでも守られてるだけじゃダメなんだ…今度は雲雀の番だよ…雲雀が、柳生ちゃんを守ってみせる!!」

（雲雀…！）

雲雀は脳無に臆することなく、手を広げて柳生を守ろうとする。

しかし、そんな雲雀の頑張りを、無に、変えようと、否定するように、死柄木はこういった。

「そうかそうか、じゃあ…俺が雲雀くんを殺れば良いんだな？」

「え？」

雲雀は死柄木の言葉を聞いて、目を丸くした。

「脳無、柳生ってヤツを抑えとけ。せっかく大切なお友達が勇気を振り絞って守ろうと頑張ってるんだ……俺がそれを壊そうとしないでどうするんだ？」

最悪だ。そう思わせる程に死柄木は歪んでいた。

性格も、やることも、何もかも全て…

これが悪。これがプロが相手にするヴィラン、圧倒的絶対的暴力。理不尽なる悪意。

死柄木は狂気とも呼べる満面な笑みで、雲雀に近づいてく。

「あ……あああ……!!!!」

こんなことじゃなかった。雲雀はただ、柳生に死んでほしくない…ただそれだけなのに、死柄木はそんな二人を引き剥がすかのように、滅茶苦茶にするかのように、何もかも塵にしてしまうかのように、壊しにかかってくる。

「ひ…ひ…雲雀ぃ!!!」

柳生は全力で声を振り絞り、今ある力全てを使って雲雀を守ろうと身体を動かすが……

ドッ!!!

脳無は先ほど死柄木から言われた命令に従うため、柳生の身体を両手で掴み、思いっきり地面に押し付ける。相澤の時のように…

「ガァッ…　ハッ!!」

すると柳生の口から血が出てきた、そして脳無は体を抑えてた柳生の頭を鷲掴みにし、今度は身体を持ち上げると死柄木の方へと向ける。

「よし、良いぞ脳無…そのままにしとけ」

死柄木は脳無にそう言うと、脳無はピタリと動きを止める。柳生は掠れた目で、雲雀を見つめている。

「待ってくれ……雲雀だけは……雲雀だけは……!!」

柳生は僅かな声でそう言うが、死柄木と雲雀には声が届いていない。そのため二人は柳生に反応していない。

雲雀は死柄木を見ている。戦いたいが…雲雀は恐怖と、今起きてる残虐な状況で、体が動かない。

「そんな…そんな……!!もうやめて！柳生ちゃんには…もう手を出さないで!!お願いだから…もう」

「そう言ってやめるとでも思うか?俺たちはヴィランゼ?殺してなにが悪いんだ…??」

死柄木はこれでもかと言わんばかりなのか、怯える雲雀をニヤリと見下し、そして、とうとう手が、崩壊する絶望の手が…悪意溢れる死柄木の死の手が……少しずつ、少しずつ…雲雀の顔に近づいてきてる。

それを見ている柳生も涙を流した。大量の涙を…

「やめてくれ…」

柳生は微かな声で叫んだ。

「お願いだから…」

ふと柳生の脳裏にある人物が、そして言葉が浮かび上がってきた。

「頼む……頼む……!!」

『柳生ちゃん!』

『柳生ちゃん、どうしたの?』

『ねえ、貴方も雨が好き?一緒に行こ!』

『柳生ちゃん…ありがとう!』

『柳生ちゃんとは、お友達だよ!!』

「やめろ……」

死柄木の死の手があと僅かな距離で、雲雀の顔に触れてしまう……

『柳生ちゃん、大好きだよ！』

（『望』のように、もう大切なものは失いたくないんだ！！！！！）

『お姉ちゃん！立派な忍びになってね！』

「やめろおおおーーー

もう終わりだ…

「二人とも…ゲームオーバーだ……!!」

死柄木は叫んだ。

そう思った。

「たあああああーーーーーーーーー!!」

「!?!?!」

「えっ!?」

「あっ…」

勢いよく叫んでいる、聞き覚えのあるその声は…

「柳生ちゃんと雲雀ちゃんは…殺させない!!」

「「飛鳥（ちゃん）!!」」

飛鳥の姿であった。

死柄木が振り向くと、もうすぐそこに飛鳥が、二つの刀で振りかざそうとする。飛鳥の刀が、死柄木を襲う…それでも、刀は死柄木に当たらなかった。

ズオン！

飛鳥の目の前に現れたのは…

「えっ…！」

「させませんよ？」

ワープゲートの黒霧だった。

「死柄木弔と脳無が二人の相手をしてるのに、私がただ棒立ちしてる

とでも思いますか？貴方達が来るのも分かってましたよ。といっても…あの『三人より』も早く駆けつけたのは貴方ですがね」

「あっ……！あああ！」

『三人よりも』…それはつまり、緑谷、蛙吹、峰田の三人を置き去りにしてしまったのだ。飛鳥は柳生と雲雀のことを心配してここまで駆けつけに来たのだが……飛鳥は「しまった」という顔をすると、黒霧は微笑みながら、黒い霧を膨張していく。

「死柄木は今、ゲーム中です。邪魔はしないで欲しい…さて、貴方はいずれ殺すとして、他の場所へ飛ばしますか」

黒霧は黒い霧を飛鳥に襲わせる。飛鳥を飛ばそうとし、脳無と死柄木は二人を殺そうとする。絶体絶命だ…

「あ、飛鳥さん…！」

「ケロ！これは不味いわ…！峰田ちゃんも早く！」

「クソォ…！まて！はぁ……はぁ……くっ、そぉ!!」

緑谷、蛙吹、峰田の三人は、飛鳥達を助けようと走ってはいるが…もう間に合わない。

（くそ…！くそくそ!!こんな時に、僕は何も出来ないのか……!!こんな状況なのに……誰も、救えないのか…!!）

緑谷は心の中でそう言い聞かせる。しかし、どんなに心の中で叫んでも、敵も時間も待ってはくれない…

凶悪で、残虐で、無慈悲な三人の敵（ヴィラン）は、飛鳥達を殺そうとする。

バアアアァーーーーーーーーン!!!!

そんな暗闇のなか…

たった一つの、希望とも呼べる

光が…

「もう大丈夫!!!!」

差し込んで…

「私が来た!!!!!」

扉を開け、希望…光とも言えるその姿は…その人は…平和の象徴オールマイトであった。

「お、お、オールマイトぉ!!!!!」

「ケロ…!」

峰田は涙目になって歓喜の声でオールマイトの名前を呼ぶ。

「オール…マイト!!」

緑谷は、何処か不安そうな顔で、怒りに満ち溢れてるオールマイトを見つめる。

蛙吹は表情こそは変わりないが、ホッと安心する。

「あ、あの人は…!」

「っ…!!」

飛鳥はオールマイトに希望な眼差しを向け、黒霧は目を細めてオールマイトが来たことに驚く。

「救けが…きたのか……?」

「……」

柳生はもう声が出ないのか、弱々しい声でオールマイトを見つめてる。脳無はオールマイトに振り向くことなく、ただ止まってるだけだ。

「ああ…ああああ!!やった…やった!!やったよ…!!!」

雲雀はさっきの絶望の顔から、希望の顔へと一変した。そして、そんな雲雀を殺そうとした、死柄木は…殺意ある目で、ニヤリとしながら睨みつける。

「あ、コンティニューだ…」

１６話「ヒーローリターンズ！」

平和の象徴。
悪の抑止力の存在、絶対的正義の力。誰もが憧れ、尊敬する。
彼がその場にいる時は、救えなかった人間はいないとも言われてる。そして…いつも、どんな時も、笑顔で人の心すらも救け出す。

「嫌な予感がしてね、校長の話を振り切りやって来たよ」

出入り口の前では、その男がやって来たことで、大きく喜んでいる生徒も居れば、安心からくるものなのか、救けに来てくれたことにより嬉しい気持ちから来るものなのか、涙を流してる生徒もいる。

「来る途中で飯田少年とすれ違って…今起きてることを、あらまし聞いた…!!」

ギリッ…！
己の内から湧く怒りに、思いっきり歯ぎしりさせる。

「全く己に腹がたつ!!子供らが、どれだけ怖かったか!!!!」

歩きながら、自分がここに居なかった悔しさで、怒りが溢れて…それでも、生徒達には優しい目で、暖かい声で話し出し、黒霧によって倒された１３号に目を向ける。

「後輩らが、どれだけ頑張ったか!!!!」

そして、１３号から中央広場に目を移し…圧倒的な敵三人と、忍学生に、ヒーローの卵…生徒たちを見つめる。

「この子らが…どれだけ苦しい思いをしたか!!!!」

（しかし、だからこそ……言わねばならんのだ…!!）

「もう大丈夫!!!!!!」

ブチッ!!!

ネクタイを思いっきり握りしめては、破き、投げる。そして全ての感情を混ぜ合わせてこう言った。そして…平和の象徴とも呼ばれる……

「私が来た!!!!!!!!」

その男の名は…

「オールマイトぉ!!!!!!!!!」

平和の象徴オールマイト。

中央広場。

「やったよ…やったよ……よかったぁ…本当に…本当によがっだよ……」

雲雀は死の恐怖と、仲間が…友達が殺されるという絶望から解放されて、その場に座り込んでは思いっきり泣いた。とにかく泣いた。雲雀は手で涙を何度もなんども拭うが、それでも涙ら止まらなかった。今日でどれほど泣いたか分からない…多分今日ほど泣かされる日はないと思うくらいだ。

「来た……か……」

柳生はオールマイトを見て、少し微笑む。もうダメかと思った。自分は圧倒的なる力を持つ敵に、何もできずに雲雀を守れず殺されると……

でも…そんな暗闇のなかで、希望と呼べる光が見えた。だから嬉しかった…自分の未熟さに情けないと思うが、それでも救けが来てくれて嬉しい。

「……」

改人。と呼べるだけのことはある脳無は、オールマイトが来たにもかかわらず、微動だにしない様子であり、振り向いてすらいない。そう、柳生の頭を鷲掴みにし、体を掴んでいる状態で……

「オール…マイトって、前に私を救けてくれた……」

ポツリと呟いた少女、飛鳥はオールマイトを見つめている。前に敵が人質に囚われていて、救けに行ってはその敵に攻撃されそうになり、人質を庇ってたところにオールマイトが現れたのだ。

「ようやく、来ましたか!!」

飛鳥の目の前にいる黒霧は、まってましたという顔をしながら、動揺してるのか、それとも嬉しいのか…先ほどまでとは違い、気持ちが高ぶっている。

「ケロ…」

「やったぁ!!オールマイトだあぁ!!」

蛙吹はケロ?とした顔で、峰田は涙を流しながら歓喜な声でオールマイトの名前を叫ぶ。

「オール……マイト…!」

そんななか、緑谷だけはまだ拭いきれない不安な表情でオールマイトを見つめている。そして…

(笑ってない……!)

今まではどんな時でも、笑顔で人を救けていた。幼い頃からオールマイトのデビューや活躍動画を何度も見ている緑谷だから分かる。今のオールマイトは、尋常じゃないほど怒っている。そして、初めて…怒ってる姿を見た。と…

そして…最後に、肝心の死柄木は……

「ヒーローは遅れてやってくるってか…?まあいいや、とにかく……」

雲雀の顔から手を離れさせ、感心してるのか、薄気味悪い笑い声を出しながら喋り出す。

「待ったよヒーロー…！社会のゴミめ」

顔は掌マスクで見えないが…完全に笑っている。それは、ようやくオールマイトを殺せるといった喜びから来るものなのか…それとも、この悲惨な姿を見たオールマイトが怒ってるのに満足しているのか…

残ってる部下達は、オールマイトを見て驚愕している。

「あ、あれが…スゲェ、生で見るの初めてだ…！」

「馬鹿野郎！アレをやって俺たちが…」

そう言いかけた途端…

ドッカカカカカカカーン!!

「っっ!!??」

いつの間にか中央広場に姿を現して、部下達をチョップだけで一気に殲滅させたのだ。気絶した敵達はもはや動かなくなり、全員その場に倒れこむ。

そしてその場の近くに、重傷を負ってるイレイザー・ヘッド…相澤先生を見つける。

「相澤くん……ケガが酷い、それになんてことだ……生徒を守るためにここまで…よく頑張ってくれたよ……!!」

オールマイトは悔やみ、心を痛めながら、気絶してる相澤の労をねぎらう。

相澤を肩に乗っけると、今度は死柄木たちを睨みつける。死柄木はそんなオールマイトを見て何も臆することなく、平然と立っている。

次の瞬間…オールマイトは、緑谷、蛙吹、峰田、飛鳥、雲雀、そして脳無に身体を掴まれてる柳生を助け出し…

ドッ!!

「っっ…!!」

死柄木の顔を殴った。

そして…

顔を覆っていた手を落として……

「大丈夫かい…皆んな!!」

死柄木たちから距離を離したオールマイトは皆んなを降ろし、生徒たちの安否を確認する。

「……え?・オールマイ…ええ!?」

峰田は何が起きたか分からない顔でオールマイトを見つめている。また飛鳥も蛙吹も同じ様子だ。よく分からないが、これだけはハッキリ分かった。自分たちは助かったんだってことを……

「柳生ちゃん…!・大丈夫…?・柳生ちゃん!!」

「柳生くん!?」

泣きながらも柳生を抱きかかえる雲雀の声に、オールマイトは柳生と雲雀に振り向く。そしてオールマイトは知った。柳生も相澤と同じく、重傷であることを…

「柳生くん……!」

オールマイトは柳生の側に駆けつけ、傷を見てみる。

(頭部に…鼻からも……)

心配そうに見ているオールマイトに気付いたのか、柳生はオールマイトに話し出す。

「オール……マイト……!・オレのことはいい……あいつらはヤバイ

……特にあの脳無という奴が……!!」
「脳無…？」
その名前を聞いて首を傾げるオールマイトに、柳生は脳無に指をさす。
「アイツ……だ……しかもアイツらは、オレたち……忍びの存在を……知っている……！」
「!?」
それを聞いたオールマイトは驚愕した。このことはバレていない筈なのにだ…
「アイツらの目的は……オレたち忍びだけじゃない……オールマイト……お前も狙われている……オレたちとオールマイトを殺す……ことが、ヤツらの目的……」
「柳生くん…」
するとオールマイトは柳生を包み込むように抱きしめた。
「……！」
「ありがとな……!!そんなヤツらに、君は、君たちは立ち向かって、友を…少年少女たちの命を守ろうと…!!そして貴重な情報を……教えてくれて……！柳生くん…心から礼を言う、ありがとう！」
そして最後に頭を撫でた。優しく、暖かくて、心強くて……柳生は再び目から涙が流れてきた。オールマイトの優しさが、十分に伝わり、とても嬉しくて…あまりの嬉しさで…柳生は目を瞑った。
柳生に続くように、雲雀もオールマイトに話しかける。
「オールマイト先生！気をつけて!!柳生ちゃんの言ってたあの脳無って人…心が無いの!!」
「なに…!?」
心がない、オールマイトは意味が分からないような顔をする…確かに、オールマイトが駆けつけ、柳生を救けたのに…脳無はまだオールマイトに振り向いていないのだ。
「よく分からないが……ありがとう雲雀くん！」
「いえ、良いんです！それより、柳生ちゃんを、私の大切な友達を救けてくれて……ありがとう!!」

雲雀は頭をオールマイトに下げる、するとオールマイトも雲雀の頭を撫でた。
「辛かったろうに…怖かったろうに……もっと早く駆けつけに来なくて、ゴメンな!!本当に…!!だから、もう安心して良いんだぜ…」
オールマイトは優しい声でそういった。雲雀はもう安心したのか、頭を上げる。
飛鳥はそんな二人を微笑ましく見ると、今度は柳生と雲雀を傷つけた死柄木たちを睨みつける…が、死柄木たちは攻めに来ない…そこに少し不安を持ったのだ。
(攻めに…来ない…?)

死柄木は手で顔を隠すように覆うと、死柄木がオールマイトに殴られたことに気づいた黒霧は心配そうに近づく。
「あの、大丈夫ですか…?死柄木弔…」
「……」
しかし反応がない、その時…死柄木は急にワナワナと震えだす。
「あ…ああ…ああああ…!駄目だ…ああ!ダメだ駄目だ…!ゴメンなさい…ゴメンなさい!!」
何度も誰かに謝罪をしながら、先ほど落ちた手に近づく。
「『お父さん』…!」
手を拾い顔に付けると、落ち着いてきたのか、体の震えが止まった。
「救けるついでに殴られた……ははは、国家公認の暴力だ…!けど、思ったよりスピードは速くないし、パワーも全然…あれ?じゃあじゃあ…この話も本当なのかな……?」
ブツブツと独り言を呟いていると、手のマスクと顔の僅かな隙間から、オールマイトに満面な笑みで睨みつける。その死柄木の目を見ただけで悪寒が走った。

「『弱ってるって話』」

誰もが聞こえない声でそう言った。

「向こうは三人…見るからにそこらの敵（ヴィラン）ではないようだな……」

オールマイトが呟くと、側にいた緑谷が話し出す。

「気をつけて下さいオールマイト!!僕のワン…！　腕が折れないほどのパワーであの脳みそ敵（ヴィラン）を殴ったんですが…効かなくて……！」

緑谷は不安の表情でそういうと、オールマイトはくるりと回り

「ダイジョーブ！それより緑谷少年たちよ、相澤くんを…早く！」

ピースをしながらそう言った。いつの間にか怒りの表情から、笑顔の表情に変わっている。いや…表情が変わっただけで、内心は怒ってるんだろう。顔に出してないだけで、冷静を保ち、静かに怒りのコスモを燃やしている。緑谷と蛙吹、峰田は相澤を担ぎ、飛鳥と雲雀は、柳生を担いでいる。

オールマイトは緑谷にそう言い、再び死柄木たちに振り向くと、オールマイトは態勢を低く構えながら、腕をクロス型にして走り出す。

「ＣＡＲＯＬＩＮＡ（カロライナ）…!!」

死柄木に走りながら、オールマイトが叫ぶと。

「脳無」

死柄木は脳無の名前を呼ぶ。

「ＳＭＡＳＨ（スマッシュ）!!!!!」

ズドオオオオーーーーーーーーーーーーーーーーーーーンン!!!!!

強烈な一撃を食らわせた。死柄木の命令で動きだし、オールマイトのパワーをまともに食らっても、表情を変えない脳無に。オールマイ

トの攻撃から死柄木を守るために脳無は、オールマイトの前に立ち塞がり、死柄木を庇ったのだ。そのため死柄木にダメージはない。
「なっ……!」
流石のオールマイトも顔色が変わる。
「なるほど…マジで全然…効いてないな!」
何度かオールマイトの技「ＳＭＡＳＨ」を繰り出すものの、脳無は効いていない。
体、腕、そして脳がむき出しになってる頭部にまで、だが…
「顔面すら効かないか…!」
オールマイトは叫ぶが、脳無もやられてるばかりではないのか、オールマイトに反撃する。オールマイトはスピードで直ぐに脳無から距離を離すが、脳無は一瞬でオールマイトの間合いを詰め、再び反撃しにくる。
「しかも、早い…!?」
オールマイトはますます表情を曇らせる。それを見た死柄木はさぞ満足してるのか、手を広げて話し出す。
「効いてないのは『ショック吸収』の個性だからさ…脳無はお前のパワーにも耐えれるように『改造』してある、脳無にダメージを与えたいなら肉をゆっくりとえぐり取るとかが効果的だね…まあでも…それを、させてくれるかは別として…」
オールマイトや、柳生、雲雀、飛鳥、緑谷の攻撃全てが効いてないのは、脳無の個性『ショック吸収』だからである。柳生の秘伝忍法で巨大なイカを召喚し、脳無に薙ぎはらったため、吹っ飛んだだけであり、あくまでダメージは無かったのだ。しかしここで可笑しいのは、飛鳥の攻撃だ。飛鳥の攻撃は二つの刀を構えて、斬り刻むこと…にも関わらず脳無は無傷であった。
だが個性というものは簡単に人にバラすものではない…なぜなら向こうがその個性の事を知れば、対策や立ち回りを考えるからだ。それを死柄木は自慢したいがのためか、脳無の個性を棚に上げ、得意げに話し出す。
それが逆にヒーロー、オールマイトは有利になる。

オールマイトは一瞬で脳無の背後に回り、両腕で体を掴む。
「わざわざｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！そういうことなら!!やりやすい!!」
バックドロップを決めさせる。
ズドオオォォーーーーーーーーンン!!!!
巨大な爆発が中央広場に轟いた。
死柄木はなんとかその場に耐えながら、オールマイトと脳無の戦いをみて
「おいおい…」
呆れた声で呟いた。

爆発が巻き添えにならない程度の離れた場所で、峰田、蛙吹、緑谷は相澤を担いで、飛鳥、雲雀は柳生を担いぎながら、オールマイトの戦いを見ている。
「オールマイト…あのバックドロップが爆発みてーになってる！さすがだ…やっぱスゲェや！」
峰田は相澤を担ぎながら感心している。
「先生としては新米なのにね…本当に凄いわ…!!」
蛙吹も指をほっぺに当てる。
「見て、柳生ちゃん…凄いよ、オールマイト先生の力は分からなかったけど、とても強いね…!!」
雲雀は脳無とオールマイトの戦いをみて、目をキラキラさせながら。まるで戦隊モノを見てるかのような、そんな目で…
「お、オレたちを殺そうとしてた脳無とやらが…あんな呆気なく……」
柳生は特に脳無が恐ろしいと思ってしまった。死柄木自身、やることが恐ろしいが…脳無に心がないなど、無表情でいるなど、そして自分が今まで磨いてきた力が通用しなかった…だからこそ怖いのだ。もしそんな敵がこれから現れたらと思うと……考えるだけで恐ろしい。
「凄い…ね！あんなに強いなんて…私たちよりも強い…ううん、じっ

ちゃんよりも…なのかな?」
飛鳥はその場でオールマイトの力がどれ程凄いのかを見ている。自分たちよりも遥かに強いんじゃないのか?と……飛鳥の祖父は伝説の忍びの半蔵。忍びの世界で名を轟かせたのだ。そして忍びである半蔵は、裏の社会を支えている。
表の社会ならオールマイト。
裏の社会なら半蔵。
ヒーローと忍びはどこか同じように見えて、似ているのだ。表と裏…社会を支え、平和の象徴と言われるだけのことはある。それに、それ程の実力があるならじっちゃんである半蔵のことを知ってるのも大いに納得がいく。
しかし、そんな緑谷は…緑谷だけは、皆んなの考えとは違った…
「オール……マイ……ト……」
(僕、だけが知っているんだ……オールマイトの…ピンチ…)
数々の言葉が思い上がる。
『5年前、この傷は敵の襲撃で受けてね…ヒーロー活動は今の所3時間が限度だ』
僕…だけが
『プロは何時だって…命がけさ…』
知っている
『平和の象徴とは、決して悪に屈してはいけないんだ』

秘密（ピンチ）

土煙が晴れていく、そして姿がみるみると見えていく…その姿は、オールマイトが脳無にバックドロップで決めて、地面に埋めている姿。

ではなかった…

「…ック！」

オールマイトは口から少し血を吐き、バックドロップを決めている姿ではあるが…しかし脳無は、オールマイトの体を掴んでいる。

そしてその地面は、二つのワープゲートが繋がっていて…

「そ、そういう感じか！」

「!!」

皆んなはその姿に驚く。

オールマイトが脳無の体を掴み、バックドロップで地面にめり込ませるハズだったが、ワープゲートが発生し、脳無の体がそれに繋がりオールマイトの体をつかむといった状況だ。

それを見ている死柄木は満足そうに呟く。

「深くコンクリに突き刺して動きを封じる気だったか？それじゃあ脳無を倒すことなんざ出来ないぜ？脳無はお前並みの『パワー』になってるんだからさ…」

「!?」

オールマイトは俄然驚く表情を浮かばせる。

脳無がオールマイト並みのパワー…それはすなわち、オールマイト級の敵だと言うことになる。それなら柳生がボロボロになるのも無理はないだろう…死柄木は続けて話し出す。

「あっ、そうだオールマイト。分かっちゃいると思うが念のために言っとくな？あの柳生ってヤツをボコったのは脳無だ。アレは面白かったぜ？良いもの見れたな……俺に歯向かった罰だからああなって当然なんだけど……忍学生でも、オールマイト並みの強さを持つ脳無にはなんてことなかったなぁ…」

死柄木はオールマイトに煽りまくり、言いたいことを言ってその場を楽しんでいる。相当気に入らなかったのだろうか、子供のように根に持ってるようだ。すると死柄木は黒霧に振り向く。

「いいね良いね！黒霧、さっきの失敗を成功に活かしてる…期せずしてチャンス到来だ！」

「……」

黒霧はオールマイトを睨みつけている。

「あいたっ!?」

脳無はオールマイトの体を掴んでいる手の指で、体を突き刺し、服に血が滲む。オールマイトは離させようと脳無の指を掴む…が

（…!?離れん……！全く動かん……！）

オールマイトの全力の力でも、脳無の指は動かない。
（そ、『そこ』は弱いんだ…やめてくれ！）
『そこ』とは、オールマイトが５年前、敵の襲撃で受けた傷のことだ。肺の呼吸器官はやられたものの、幾多ものの手術でなんとか治療は成功したが、それでも後遺症は今も残っている。
オールマイトは死柄木、黒霧、脳無の三人を睨みつける。
「初犯でコレは…！君たち覚悟しろよ！」
オールマイトの怒り…だが死柄木は何の悪そびれもない様子を見せる。
「……黒霧、殺れ」
そう言った途端、ワープゲートが少しずつ縮まり閉じようとしている。オールマイトは敵が何をやらかすのか分かったため、なお焦り、脳無に離れようとするが…やはり動かない…無口の脳無は少しずつオールマイトをワープゲートに引き込ずりこみ、脳無は少しずつ下半身で地面に足を着いているワープゲートから段々と体を戻してきてる。
そんなオールマイトの様子を見てる黒霧は話し始める。
「目にも止まらぬスピードを拘束するのが、脳無の役目…そして半端な状態でゲートを閉じ、貴方の体を引きちぎるのが…私の役目」
「クッ……！」
オールマイトは悔し混じりで絶句すると、黒霧はさぞ感心して、嬉しそうに目を細める。
「本来ならば、血や臓物が溢れ出るので嫌なのですが…貴方ほどの人間ならば喜んで受け入れる」
黒霧はグロテスクな発言を言いながらも、少しずつ…少しずつ、ワープゲートを閉じてきてる。

「……」
遠くでそれを見ている緑谷は、焦りながら、蛙吹に話しかける。
「あす…っ！　梅雨ちゃん……！」

「頑張ってくれてるのね、どうしたの緑谷ちゃん？」
「ゴメン、相澤先生…担ぐの任せたよ…」
「？良いけど…どうしたの？」
首をかしげる蛙吹、すると緑谷は思いっきりオールマイトの方へと走り始めた。
（嫌だよオールマイト…！）

緑谷は涙を堪えながらも

（だってオールマイトと、まだ話したいことが…！）
目の前で苦しんで、殺されそうになってるオールマイトを助けるために
（!?緑谷少年…本当に…君ってヤツは！）

オールマイトは、緑谷が何をするのかが分かった。
（教えて貰いたいことが！まだ…）
次第にオールマイトとの距離が近づいて…

（沢山あるんだ…!!!!）

緑谷の救ける思いが…進むたびに強くなって……

ズオン…！

「!?」
緑谷の目の前に、黒霧がワープゲートを使って現れる。
「浅はか…そして、さようなら」

黒霧は緑谷を包み込むほどの…スポッと入れるくらいの大きさにワープゲートを開き…緑谷を飛ばそうとしたその時だった。

ボオォォーーーーーーーーンン!!!

「!?」

突然黒霧の右横から爆破が襲いかかってきた。そしてその爆破の主はこう言った。

「退け！邪魔だ!!デク!!」

その正体は

「か、かっちゃん…！」

緑谷はさっきの絶望の顔色が反転し、希望の顔色へと変わった。爆豪は黒霧を思いっきり『掴んで』地面に伏せるように

ドン!!

叩きつける。それだけではなかった…

パキパキ…!!

「!?」

その場の全員が驚いた、何故なら脳無の左側が凍りついたからだ、その氷の主は

「テメェらがオールマイト殺しの実行犯だと聞いた…」

冷気を纏い…冷たい声で、正体は勿論。

「と、轟少年！」

オールマイトは轟を見て名前を叫ぶ。

轟は、飛鳥たちの方に目をやる。

「おいおい…柳生のヤツが重傷じゃねえか、となると、アイツをあんな目にしたのも…この脳無っつー化け物がやったってワケだな……」

視線を再び死柄木たちに向ける。

死柄木の後ろから
「でりゃあーー！」
血気盛んな声に、死柄木は振り向くことなく、難なく避けた。
「クッソ…イイとこねーな！」
ガチン！と拳と拳を打ち付ける切島。緑谷は皆んなが無事で、そして集まってきてくれたことに、感動する。
飛鳥たちは…
「……皆んな……」
飛鳥は皆んなが来てくれたことが嬉しかった…そして飛鳥は…
「ゴメン、雲雀ちゃん…柳生ちゃんのことを、頼んだよ!!」
「えっ？飛鳥ちゃん!?」
（柳生ちゃんや雲雀ちゃんも…命懸けで戦ったんだ！自分も…戦わなくちゃ!!）
動揺する雲雀を御構い無しに、飛鳥は強い決意を持ちながら走り出し、皆んなと合流する。

「皆んな、無事だったんだね!!」
飛鳥が声をかけると、四人は振り返る。
「あ、飛鳥さんまで!?」
「飛鳥か、これでまた戦力が増えたな……形勢逆転と言ったところか…」
「ハッ！どの道俺らが勝つ！以上!!」
「よお飛鳥！よく来たぜ、男らしいな!!あっ、男じゃねえけどな？」
四人はそう言うと、飛鳥はそんな四人の言葉を聞いて、クスッと笑みを浮かべた。さっきの状況がまるで嘘のように思えてしまうかのような…そして飛鳥も加わり、刀を構える。
「残りの敵は…あの主犯格だね!!」
「スカしてんじゃねーぞ！モヤモブが!!」

「テメエら如きに…平和の象徴は殺れねえよ」
「よっしゃあ!!気い引き締めて行くぜ!!」
飛鳥、爆豪、轟、切島がそう叫ぶ。
「かっちゃん…皆んな…!」
その嬉しさで、涙が出そうになる緑谷。
その一方。

「あーあ……」

爆豪に抑えられてる黒霧、左側が凍らされてる脳無…そして黒霧、脳無の二人と気絶している手下たちを見渡す死柄木。
ガリガリと指で首を掻くのであった……

１７話「平和の象徴ＶＳ『対』平和の象徴」

「これは…氷結…！」
（轟少年！）
　オールマイトは、脳無の腕を掴んだ。
（私を凍らせない程度に調整して、敵の左側だけを凍らせて…手が緩んだ、お陰で出れやすくなった！）
　拘束していた脳無の腕から逃れることが出来た。
　横腹のところに血がさっきよりも滲んではいるが、オールマイトはまだなんとか戦えそうだ。
　生徒たちの前に立ち、守るように…。
「……」
　死柄木は、一人一人の子供達を見渡す。特に黒霧を抑えつけてる爆豪に…
「黒霧よ…出入り口が防がれた…こりゃあ…ピンチだなぁ……」
　死柄木はなんの緊張感も危機感すら感じない声でそう言った。
　爆豪は黒霧を押さえつけながら、キシシと薄い笑みを浮かべる。
「ハッ！油断しやがって、ザマァ見やがれこのウッカリやろーが!!」
「…貴方は、私がワープで飛ばした…！」
　上から目線で物語る爆豪に、一瞬油断していた黒霧は悔やんでいる様子だ。爆豪は黒霧について説明し始める。
「やっぱ思った通りだ…テメェ、実は実体あるんだろ？このモヤはワープゲートになってて、それで実体部分を覆ってた…そうだろ？だってよ…」
　すると黒霧が前に言ってた言葉を思い出す。

『フゥ…危ない危ない』

「もしテメェが物理無効人生送ってんなら…あの時危ないっつー発想

は出ねぇもんなぁ!!アア!?なぁ、そうだろ!?」
「クッ…!!」
爆豪の指摘に大きく動揺し、自分が言った言葉をさらに悔やむ黒霧は、爆豪に気付かれないようワープゲートで逃げようとするものの…
「オイ!動くな!!」
服を掴んでいる手を少しだけ爆破させる。
「少しでも怪しい動きをしたと俺が判断したら…迷わず爆破する…良いな!?」
「…っ!」
「ヒーローらしかぬ言動だな…爆豪の場合」
さらに警戒する爆豪に黒霧は観念したのか、抵抗する素振りも動きも見せない。
「な、なんか流石だなって感じかな…?」
爆豪の態度に苦笑する飛鳥。
「だが、何にせよ出入り口は防いだ…強敵(脳無)の動きも防いだ…残るはあの死柄木っつーヤツだ」
轟は敵に目をやり答える。

「アイツらオールマイトを舐めすぎだぜ!」
入り口で砂糖達は、オールマイトの戦いを眺めている。
「ん、あ!アレッて…相澤先生じゃない!?」
「柳生もいるぞ!」
お茶子と瀬呂は峰田と蛙吹の二人が相澤先生を担いでる所に、雲雀が柳生を担いでる所に指を指して言う。
「おーーい!!峰田!梅雨ちゃん!」
大声で叫ぶと、二人も気付いて反応したようだ。
「残ってる人たちは無事そうね」
「オーーイ!運ぶの手伝ってくれ~!重い~!!」
「皆んな!手伝って!お願い!!」
蛙吹と峰田と雲雀は大声で相澤と柳生を担ぐのを手伝って欲しい

と叫んでいる。
砂糖とお茶子の二人は担ぐのを手伝いに行く。
障子と瀬呂は、万が一の時があった時に待機をしている。
芦戸は倒れている13号の体を支えている。心配そうな目で皆んなを見ていると…
「大丈夫……」
「あっ…!13号先生!?」
13号は弱々しい声で、芦戸に声をかける。ケガは酷いが、どうやらまだ意識はあったようだ。
「オールマイトが居るなら…よかった…後はあの人に任せれば……良い…皆んなは……避難……を」
自分はこの状態で苦しんでるのにも拘らず、生徒達の安全を唯一先にする。さすがは災害救助のヒーローだ。
「…はいっ!」
芦戸は大声で返事をする。

「攻略された上にほぼ無傷…か。流石はヒーロー…折角良いところまで行ってたのに……清々しいほど俺の邪魔をしやがって……最近の子供は凄いんだな…恥ずかしくなってくるぜ敵連合…!!」
死柄木は薄い笑みを浮かべながら呟く。それはまるでゲーム感覚で遊んでるような、そしてまだ自分は負けてないと思ってるのか、平然と立っている。
「相手は一人だけど…柳生ちゃんや雲雀ちゃんがあんなボロボロになったんだ……残るは、一人だけど…何が起こるか分からない…!皆んな気をつけてね!」
飛鳥は皆んなにそう言うと、緑谷、轟、切島は頷き、爆豪は「ケッ…」と呟く。それを聞いた死柄木は面白くないのか、飛鳥を睨んでいる。

「アイツ…俺ら舐めてんのか？誰が一人なんだよ……まあ良いや、こうして俺たちが攻めに来た時点で勝負は付いてるしな……」

死柄木がそう言うと、脳無に振り向いた。

「オイ脳無、命令だ…動け」

「!?」
「えっ…!?」
「今あいつ、何つった…?!」
　飛鳥と切島は、死柄木の言葉に耳を疑い、その場にいる緑谷たちは驚愕した、普通なら苦痛に満ちた表情を浮かべて動くはずだ…また動くことすらできないレベルの傷。なのに脳無は、なんの表情も変えずに、ワープゲートから出て来ては氷が割れ、左側の肉体…足と腕が壊れ無くなる。それでも尚、脳無は動いている。ここまで来るとそもそも脳無は生きてるのかどうかすら疑ってしまう。

「なっ…!ウソ…だろ」
　轟自身も驚きを隠せない、最強とも思われてた轟の個性、氷攻撃が効かない…そんな皆んなの様子を御構い無しに、脳無はバランスをとって立ち上がる。
「皆んな離れろ!」
　声を掛け注意したのはオールマイトだ。
「なんだアレは…『ショック吸収』がヤツ(脳無)の個性ではないのか!?」
「別にそれだけとは言ってないだろ?」
　死柄木は狂気の勝ち誇った顔で、満足そうに皆んなの表情を見渡して解説する。

「この個性は…『超再生』だな」
「!!?」
なんと脳無は『ショック吸収』の個性だけでなく、『超再生』といった個性を持っていたのだ。
『ショック吸収』でガードの役目を、『超再生』でダメージを0に戻す…すなわち回復の役目を、そして個性ではない素の力がパワー&スピード。オールマイトよりも強力なのではないかと思ってしまう。
ここで飛鳥は思ったのだ。どうしてショック吸収の個性なのに、刃物が通じなかったのか……実は通用していたのだ。ただ、斬りつけた後、凄まじいスピードで超再生し、体に斬り刻まれた傷は元に戻ってたのだ。

脳無は正に、得体の知れない化け物だ……

「ウソ…だろ、あんなの…チートじゃねえか」
絶望な顔を浮かべながら、切島は呟いた。
「嘘でしょ……なんなのアレは?!本当に人間なの!?あんな体になっても……そんなの……ありなの…?」
飛鳥は目の前の光景に、信じられないという顔で脳無を見ている。
オールマイトは冷や汗を流し、ふと、雲雀の言ってたことを思い出した。

『この人、心がない!!!』

(心がない敵、脳無。複数の個性。本来ならば個性は一つしか発生しないはず……まさか…!!)
信じたくないような顔で、オールマイトは脳無と死柄木を睨みつけ

る。何か最悪なものを目の前にしてるかのような…そう思わせてしまうほど、オールマイトの表情は曇っていた。
いつの間にか脳無の無くなった肉体は既に再生されており、さっきまで何ともなかったような状態でいる。
「脳無はお前（オールマイト）への１００％対策となっている…お前の攻撃にも耐えれるよう改造してある、超高性能サンドバック人間さ…！」
死柄木は吐き捨てるようそう言った。脳無、いや…まるで殺戮兵器だ。死柄木の命令に従い、表情は変えず、心がない、喋らない。得体の知れない化け物、殺戮兵器だと思われても無理はないだろう…
どうりで緑谷のワンフォーオールや、忍学生の飛鳥たちの力を持ってしても、勝てなかったわけだ。
脳無の強さを知った皆んなは全員言われるまでもなく、警戒態勢に入ってる。
「オイオイ…もうコイツら、そこらにいる敵じゃねえレベルだな…」
轟はなんとか平心を保ってるようだが、冷や汗が出てる…今も完全に驚きは隠せれてない。

そんな殺戮兵器と思わせる脳無に、死柄木は命令をする。

「脳無、出入り口の奪還だ…爆発小僧をやっつけろ」

すると脳無は拳を握りしめ、目で追えない程の物凄いスピードで爆豪に迫り来る。

（まずい…！爆豪少年!!!!）

オールマイトは焦るものの、爆豪は脳無のスピードに反応できなく、そのまま呆然と脳無を見つめて……

ドゴオオオオオオオオーーーーーーーーーーーン!!!

「かっちゃん…?」

そう呟いたのは緑谷だった。今の爆音は?何が起きた?かっちゃんは?

そんなことが頭のなかに思い浮かんだ、いや…それしか思い浮かばなかった。

今緑谷達の目の前には、爆豪が拘束していた黒霧は脳無に掴まれ救けられた形となり、土埃が撒いている。

爆豪の姿はもう何処にもない。

「ま…さか…?」

絶望…真っ暗な顔で、恐るおそる緑谷はつぶやくと、死柄木は突如笑い出す。

「あっはははは!いいぞ脳無…黒霧救出成功…そしてヒーローの卵、一名を殺したっと…オールマイトが、平和の象徴が此処に居るのに、誰も救けることは出来なかったなぁ〜…」

目障りとも思える死柄木の言葉に、皆んなはもはや言葉を失う。

これは皆んなへの嫌がらせであり、また…オールマイトに対する嫌がらせでもあった。オールマイトが近くに居て、救えなかった人間はいなかった。だが、オールマイトがそばに居たのに、爆豪は救えなかった…死柄木はそこが狙いだったのだろう…黒霧を救ける『ついで』として…

緑谷達は絶句した、目の前の惨劇に…目の前にいるのに、救けられなかった。しかし、緑谷達の絶望も、死柄木の歓喜の声も止まることになる。

「ケホケホ…！土埃が……何が、起きたんだ？」
「えっ？…え?!かっ…ちゃん？」
　緑谷の隣には、腰が地面についている…吹っ飛ばされたハズの爆豪だった。
「は？」
　死柄木は何があったのか分からない表情を浮かべている。緑谷達は安心した顔で、爆豪に話しかける。
「かっちゃん…!!よく避けれたね！」
「わ、私でも、目で追えなかったのに…」
　緑谷と飛鳥は、爆豪に感激してる。しかし爆豪は何が起こったか分からないような表情を浮かべている。
「違えよ…黙れカス共」
「ええっ!?」
「ちょっと、爆豪くん！なんでそんなこと言うの!!人が心配してるのに…」
「なにも…」
「？」
　爆豪の発言に頬を膨らませて怒る飛鳥の発言に、爆豪は表情が強張っていく。
「なにも…見えなかった…！」
「えっ？」

その言葉を聞いて、頭の中が真っ白になった。
「じゃあ一体……誰が……」
その正体は土埃が晴れるとともに明かされる。緑谷は恐るおそる吹き飛ばされた方に振り向くと…吹き飛ばされた人物は。
「ゲホ…ゴホ…！加減を、知らんのか」
血を吐きながらもガードする態勢でいる…
「オールマイトお!?」
オールマイトであった。
緑谷は大きく叫んだ。オールマイトは土埃に紛れていたのだ。死柄木は軽く「チッ」と舌打ちする。
（なるほど…あの時子供を庇ったか）
すると死柄木は脳無、黒霧の前に出て腕を大きく広げるように話しだす。
「…仲間を救ける為さ、仕方ないだろ？ホラ、だってそこのー、あー…地味めの！」
死柄木は緑谷に指をさす。
「アイツは俺を殴ろうとしたんだぜ？他の為に暴力を振るうのは美談になる、そうだろヒーロー？そんで…あとコイツ」
今度は飛鳥に指をさした。
「こいつ、刀を持って俺に斬りかかろうとしたんだぜ？危うく殺されるところだったよ……まあ俺も人のこと言えたもんじゃないけどさぁ……でもさ君、『忍学生』だろ？」
「えっ……？」
飛鳥は死柄木に指をさされ、なぜ自分が忍びだと気づかれたのか疑問に思った。
「あの柳生ってヤツや雲雀ってヤツを通じて分かった……なんとなく雰囲気がソイツらと同じだったし……素人っぽい動きでもなかったんだよなぁ……あと攻撃する際になんか叫んでたし。まあこれで今のところ忍学生が雄英と繋がってて、三人いるってのは分かったさ……」

死柄木が話してると、飛鳥は刀を向き話しかける。
「貴方は…あなたたちは……なにが目的なの!?!私たちのことを知って て、私たちを殺そうとして……何が目的なの?!」
飛鳥の声には溜め込んでた怒りが混じっていた。敵意ある目で質問する飛鳥に、死柄木は答える。
「……試してみたいからだよ」
「……え?」
死柄木の答えに理解できず、飛鳥は首を傾げる。そんな飛鳥に、いや…その場の全員に死柄木は話し出す。
「ここはヒーローの巣窟、雄英高校だ。その中で忍学生が…ましてや子供が死んだら、どうなるんだろうって、試してみたいからさ……!!忍びの存在が世の中に知らされ、全く違う存在に、敵(ヴィラン)に、俺たちに殺されたらどうなるのかを、俺は見てみたいんだ!!お前たちが此処で俺らに殺されて死んでも、この社会は忍の存在を隠し続けるかどうか、試してみたいのさ!!!」
「貴方っ……!!」
死柄木のぶっ飛んだ理由に、飛鳥は頭に血が登る。そう…死柄木はたったそれだけの理由で、飛鳥たちを、大切な仲間たちを殺そうとしたのだ。確かにそうなればこの社会は大きく影響が出る。だが、死柄木は別にこの社会の影響が見たいのでなく、ただ忍びを殺してみたかった。そうなれば忍びたちはどう出るのか、どんな反応をするのか…そんな歪んだ心と純粋な思いから来てるのだ。
すると今度はオールマイトに振り向く。
「俺はなオールマイト、怒ってるんだ!!同じ暴力がヒーローと敵(ヴィラン)でカテゴライズされ、良し悪しが決まる!この世の中に…!」
相澤やオールマイトに倒され、苦しみ横になって倒れてたり、気絶している敵たちに吐き捨てるよう言い放つ。
「何が平和の象徴…!お前なんて所詮ただ単なる暴力装置だお前は!暴力は暴力でしか解決できないのだと、お前を殺して世に知らしめるのさ!!」

半分興奮しているようにも見える死柄木の台詞に、オールマイトは血を「ペッ！」と吐き捨てる。
「…滅茶苦茶だなオイ。そういう思想犯の目は静かに燃えるもの」
拳を握りしめて。
「本当は、自分だけが楽しみたいだけだろ…嘘つき野郎め!!」
オールマイトはそう言うと、死柄木はニヤリと狂気の笑みを浮かべた。
「バレるの…はや」
その薄気味悪い声は、誰もが聞けば背筋が凍りつくようなものだった。

死柄木弔は危険だ。
その場の皆んなはそれだけはハッキリした。この男は確実に捕まえないと何をしやらかすか分からない。この男なら、忍学生どころか、オールマイトすら殺しかねないと…
「向こうは…三人になっちまったがこっちは六人！」
「かっちゃんが黒霧の弱点を暴いた！あとは…」
「うん！あの脳無って人と、あとは死柄木って人は要注意だから、上手く戦えば…！」
ポキポキと指を鳴らす切島、黒霧を見る緑谷、脳無と死柄木を睨む飛鳥、三人はすでに攻撃態勢に入っている。
だがオールマイトは…

「ダメだ！君たち逃げなさい！」
　そう答える。
「今のは俺がサポートに入らなきゃまずかったでしょう？」
「だ、ダメですよ！さっきだって殺されかけてたじゃないですか!!私たちが、私たちが戦います！」
「お、オールマイトが目的なら…なら僕たちがここで…!!」
　轟、飛鳥、緑谷の順に、オールマイトにそう言うと、親指を立ててグッドポーズする。
「轟少年、飛鳥くん、緑谷少年……サンキューな！けどもう大丈夫…プロの本気を見ていなさい…！」
　そう言うとオールマイトは一人、死柄木たちに振り向く。

「脳無、黒霧…殺れ、俺は子供と忍学生をあしらう…」
　死柄木がそう言うと、黒霧と脳無はオールマイトに向き。死柄木は生徒たちに向く。
　そんななか、オールマイトは自分の拳を見つめている。
（残り少ない時間…確かに1分たりとも時間はない…！）

呼吸を整える。
（だからこそ…やらなければ…何故なら私は！）
「さて、このゲーム…クリアして帰ろう！」
死柄木は走り出す。相変わらずスピードが早い。
「オイ！やるっきゃねーよ！」
切島は大きく叫ぶと、皆んなが動こうとしたその時。

「平和の象徴なのだから!!!!」

ゾッ…！

その男（オールマイト）の気迫は、敵もヒーローも震わせた。
「…っ!?」
（なに…あの気……!!）
飛鳥はオールマイトのその気迫を生で感じて、体が動かなくなる。

「なっ、オール…マイト…！」
緑谷の前にオールマイトが通り過ぎ。
「はっ!?」
死柄木の前に脳無が通り過ぎる。

オールマイトは皆んなの為に。
脳無は死柄木の為に。
そして、オールマイトと脳無は拳を打ち合わせる。

ズドオオオオォォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーンンン!!!!!
「フンッ！でりゃあああああああああーーーーーーーーーーーーーー!!!!」
ズドドド

飛鳥は冷や汗を流しながらも、オールマイトを見ている。自分たちの強さが、まるでヒヨッ子みたいに思えてしまう程の……

一方、死柄木は…

「オイオイ…ショック吸収ってさっき自分で言ってたじゃんか…もう忘れちゃったのかよ……」

死柄木は呆れながら上手く衝撃波に乗って、体が浮きあがり、なんとか地面に着地した。

確かに脳無は『ショック吸収』を持ってるため、オールマイトの攻撃は全て無効だろう…と思ってしまうのも無理はない。

「そうだな！」

オールマイトは笑顔で殴り合いながら答えている。

「だが…君（脳無）の個性が『無効』ではなく『吸収』ならば、限度があるんじゃないか!?」

「は…!?」

それを聞いた死柄木はさっきまでの余裕の表情から、此処で初めて驚愕する。

「うっ…クッ…！近づけん…！」

「黒霧…！」

死柄木は黒霧を見つめると、黒霧は目を細めて頭をさげる。

「申し訳ありません死柄木弔…オールマイトと脳無の殴り合いにより、衝撃波が強すぎて…近づくことすら出来ません…!!」

そう言った黒霧に、死柄木は再びオールマイトと脳無に視線を戻す。

「私対策…私の１００％のパワーを耐えるなら…」

ドドドドドドドドドド
次第に殴り合う音が大きくなり、脳無は少しずつ後ろに下がってきてる。
「さらに上からねじ伏せよう!!」
「!?」
死柄木は『ありえない』という顔でオールマイトと脳無の戦いを見て固まる。
勿論、その場の全員はヒーローも敵も棒立ち…固唾と息をこらしている。
緑谷は心の中で悟った、オールマイトの力を。
(ただデタラメに殴り合ってるんじゃない…一発一発が、１００％以上の…!)
「そして!!君たちが少年少女たちを!忍学生の少女たちを殺そうというのなら…!!」
ドドドドドドドドドドドド!!!!!!
オールマイトは更にスピードを加速させ、脳無のスピードを上回った。
「私が全て!守ってみせよう!!!!」

オールマイトは一度脳無を雑木林へとぶっ飛ばした。脳無はバックステップで威力を殺して手や足を地面に蹴りながら走っていく。
オールマイトは戦いながら大きな声で叫びだす。
「ヒーローとは…!常にピンチをぶち壊していくもの!!」
脳無の腕を掴み、上へと投げる。オールマイトは地面を蹴り、脳無に追いつき空中で殴り合う。
「ヒーローよ…!」
そして殴り合いながら今度はまた腕を掴んで地面に思いっきり飛ばす。
「敵(ヴィラン)よ…!」

着地して脳無に隙が出来た途端。オールマイトは

「そして！忍学生よ!!!!」

脳無に向けて。

「こんな言葉を知ってるか!?!!」

拳を握りしめ、１００％以上の力で思いっきり脳無の腹に拳を入れて、大きな声でこう叫んだ。

「Plus（プルス） Ultra（ウルトラ）更に向こうへ！」

ズバコオォォーーーーーーーーーーーーンン!!!!

脳無は思いっきり吹き飛ばされ、災害救助のドームに穴が空いた。
その穴からは、オールマイトを照らすように光が差し込む。
それを見ていた生徒たちは、オールマイトの戦闘が終わるまで棒立ちしていて、いつしか戦闘体制が解けていた。
腰を落としてる爆豪はポツリと口に声を出した。
「コミックかよ…『ショック吸収』をないことにして、『超再生』が追いつかないほどのパワーで倒した…デタラメだ」
冷や汗をかきながら
(これがトップ…) 轟
(プロの世界か…!) 爆豪
「あれが、ヒーローで……平和の象徴、オールマイト……!!」
飛鳥はオールマイトのその姿を見て、胸が高鳴った。自分もあの人のように、誰かを救けて見せたい。守って見せたい。と……飛鳥にとって、ヒーローとは何なのか…それが、分かってきた気がして…その存在が、段々大きくなってくるようで……

出入り口では…
「な、なんだありゃ!?」
「爆発…?」
砂糖と障子は、穴が空いたドームを見つめている。
「一体誰が…」
瀬呂が呟くと、その場に居る雲雀は、嬉しそうな顔で、柳生を見つめる。
「ねえ、柳生ちゃん!アレって、間違いないよ!やったよ!!オールマイト先生が、柳生ちゃんを傷つけた敵さんをやっつけたんだよ!!」
満面な笑みでそう言うと、傷だらけの柳生も満面な笑みを返す。
「ああ……やったな…残るは……あとは、アイツだ……最も危険なアイツだけだ……」

最も危険なヤツ、それは言うまでもない……

シュウウウウウウ…

強敵。そう呼べるほど強力な敵である脳無を倒したオールマイトは、身体から煙を纏いながら小さな声で呟く。
「やれやれ衰えた…ぜんせいきなら五発も撃てば充分だったろうに…」
拳を胸に当てて、口から血を流している。
「三百発以上も撃ってしまった」
笑顔でそう言った。
一歩だけ歩み寄り、死柄木たちの方に振り向いた。
「さてと敵（ヴィラン）…お互い早めに決着つけようか…!」
無敵とも思えた脳無が倒された。その事実を知らされた死柄木は、体をワナワナと震わせて、涙を浮かべて、悔しさと怒り混じった目でオールマイトを睨みつけてこう言った。
「この……チートが……!」

指で首をガリッ…とかいた。

１８話「動け」

「お前ら、絶対に動くなよ？」
　その男、骸骨マスクの敵は、アホ状態となってる上鳴の襟首をつかんで、手からビリビリとした電気を纏って人質に取っている。
「か、上鳴！」
「や、やられましたわ…まさか、伏兵が居たなんて…！」
　両腕を挙げてる耳郎と八百万は為す術もなく、ただただ人質に取られてる上鳴を心配そうに見つめる一方、電気個性と思われる敵（ヴィラン）を睨むことしか出来なかった。
　その男は嬉しながら少しずつ近づいてきてる。
「まあ、俺と同じ電気個性は殺したくはねえが…死柄木さんの為だ、しょうがないよな？」
「耳郎さん…この敵は恐らく…轟さんの言ってた…電波を妨害してる個性をもつ男…！」
　八百万はいち早く気付いたようだ。その敵は現在も、勝ち誇った顔で二人を見つめている。「それにしても」と小声で呟き、ＵＳＪ内の噴水広場に目をやる。
「まさか、ヒーローの巣窟である雄英高校に侵入し、生徒を思う存分に殺すことが出来るなんてな！しかも死柄木さんの計画も全部完璧だ……これなら殺れるぜ…！」
　ハハハと高笑いする、確かに上鳴達は八百万の耐電シートで耳郎と一緒に身を守り、上鳴の無差別放電で敵を全滅させたかと思ったが…どうやら伏兵が居たようだ。耳郎はその男の隙が見えたとたん、耳のイヤホンをスピーカーに繋げようとする。
（今だ！）
　だが
「おおっと！何してる？」
　敵はビリビリと上鳴の首に近づけている…まだ警戒は解けてなかったようだ。
「分かってるよな？個性を使うのは禁止だ、使ったら即コイツを殺す

…まあこう言った展開は子供でも分かるよな？」
「クッ……上鳴もそうだけどさ…アンタ、なんでそんないい個性あるのに、敵（ヴィラン）になったの!?」
「耳郎さん!?」
八百万は一瞬、耳郎の言ってることが分からなかったが、直ぐに分かった。話をしてる状態なら、敵も必ず何処か隙が出てくるだろうと…そうすればなんとかこの状況を打開することが出来ると。
しかし、その敵はまたまた高笑いする。
「は？何言ってやがる、別に理由はどうだって良いだろ？それに…話をして俺に隙を作らせるつもりか…」
「……！」
バレた。この敵もまた、そこらにいる敵とは格が違う。
「ははは!!子供の考えることなんざお見通しなんだよ！それにさ、敵（ヴィラン）ってのは、法律破ってでも、自分のやりたい事をしたから敵（ヴィラン）になったんだろ？それ以外になんか理由いるか？」
敵は殺気立つ目で二人を睨みつける。
「ヒーローのガキが！人質を軽視するなよ！お前らが余計なことさえしなけりゃあこのガキは見逃してやるぜ？他人の命か、自分の命か…どっちが大切か…」
その敵は、ヒーローに言い返すと
「さあ…動くなよ？」
敵と耳郎、八百万に少しずつ、少しずつ近づいてきてる。

中央広場

「やった…やったよ!!オールマイト、あの化け物を倒しちゃった…!」

飛鳥は活気で元気溢れる声でそう言うと、切島も頷く。

「ああ…スゲェや…!!これが、Ｎｏ．　１なんだな……テレビとかで観てたから、オールマイトの強さは分かってたけど、此処まで来ると…レベルが違う…!!」

切島はオールマイトの強さに感激してると、爆豪は黙り込んでいる。オールマイトをジッと見つめて…

「オール…マイト…」

微かな声でそう言った。爆豪は昔、オールマイトさえも超えると宣言した。でも、今は違う。

知らされた。トップの実力を…そして、自分が本気で一位（トップ）になるなら、オールマイトという最大の壁を超えなければならないと……

「アレが……平和の象徴……」

轟は冷や汗を流しながら、その身でオールマイトの実力を、肌で感じた。

「す、凄い……でも、もう…」

（活動限界が……!!）

緑谷は、オールマイトが最恐とも呼べる脳無を倒した事に半分感心するが…もう半分は、オールマイトの活動時間の事で心配だ。オール

マイトは脳無との戦いで一気に体力やパワーを消費した…だからこそ心配でならないのだ。もしオールマイトの『本当の姿』をここで皆んなに見られたら……と。

ガリガリガリ…

「……!!」

ガリガリガリガリ…

ある一人の危険人物。死柄木弔は、そんな喜ばしい顔で歓喜の声を上げる生徒達、そして、笑顔でこちらを見つめてるオールマイトに、悔し混じりの顔で、忌々しい目で睨みつける。先ほどの余裕はもう死柄木には無い…むしろ怒っているのだ…本気で。

「脳無がやられた…?衰えた?嘘だろ…?完全に気圧されたよ…よくも俺の脳無を…チートがぁぁ!!」

ガリガリと首をかく不愉快な音を立てる。

「あの脳無は…!オールマイトを殺せるハズだった……!!個性も完璧、正に無敵だったのに!!なんで、なんで俺の思い通りに事が運ばないんだよ!!!」

苛立つ死柄木は、興奮しながら早口で喋っている。

「オールマイトが、よもや此処まで…!平和の象徴の名は伊達ではないと……しかし、まさか先生が造って下さった脳無がやられてしまうとは……」

黒霧も強力な戦力である脳無を失ったことに悔やんでるようだ。

ありえない…脳無は最強無敵。個性も素晴らしく、パワーもスピードもオールマイト並みの力を持っていた。勿論それで忍学生を全員殺すつもりだった。死柄木の思ってた事はどれも完璧だった、負ける要素など何処にもなかった。なのに完璧な『上位級』脳無を、オールマイトが倒してしまったのだ。

「何だよ…全然弱ってないじゃないか……!!アイツ…俺に嘘教えたのか!?」

「……」

脳無が倒されたことで荒ぶる死柄木、悔やむ黒霧に対し、会話こそは聞こえてないが、オールマイトはジッと見つめている。

「おい、どうした?飛鳥くん達を…忍学生と私を殺すのではなかったのか?クリアとかなんとか言ってたが……」

オールマイトのセリフに、死柄木と黒霧は黙り込む。

「出来るものならしてみろよ…!!!!」

ゾワッ!!!

「う、うわあぁっ……!!」

「うっ……!!」

死柄木は思わず体を震わせて弱々しい声を上げ、黒霧はオールマイトの威勢にたじろぐ。

皆んなは少しずつ希望の顔色に変わる。

「すげえよオールマイト…!あんなチート野郎を倒すなんざ…!」

「だが俺たちが下手に動けば逆に人質になる可能性がある…あのワープゲート…黒霧とやらが何をしやらかすか分からないからな」
歓喜の声をあげる切島に、轟は避難するように皆んなに声をかける。
確かにワープゲートは一変、戦闘不向きゆえに地味なように思われるが、だが使い道を、可能性を探ればかなり強力な個性でもある。

「……」
突然、飛鳥は決意ある目で、前に…オールマイトの方に歩いていく。
「あ、飛鳥!?何してんだ?!」
切島がそう叫ぶと、飛鳥は振り向かずに話し出す。

「ゴメン、切島くん……私、まだ傷はないから…それに、『戦える』から……!!」
「戦えるって…バッ…!!おい飛鳥!!」
切島は止めるよう叫ぶが、それでも振り向かない。
「おい、飛鳥…マジでどうなるか分からねんだぞ?」
轟はため息をついてそう言うと…
「うん、知ってるよ…だからだよ」
「?」
轟は飛鳥の答えに首を傾げる。
「柳生ちゃんがあの脳無って人の攻撃をくらってあんな重傷なんだ…オールマイト先生も、あれ程の攻撃をくらってるから、相当ダメージがあるんだと思うんだ…だから……」
すると飛鳥は轟に振り向き、ニコッとした満面な笑みを向ける。

「私が、動かなきゃ!!」

「…！」

轟は暫く飛鳥の笑顔を見て、硬直した。その笑顔に、強さを感じたのだ。

飛鳥はオールマイトの方へ振り向くと、走り出していく。

「い、いいのか？」

切島が尋ねると、轟は、ため息をついた。

「……今のアイツに何言っても無駄だ……それに、アイツは忍びだ。そう簡単に殺られるとは思ってねえ……」

轟は、飛鳥を信じるような目でそう言った。

「オールマイト先生！」

飛鳥はオールマイトの方へ駆けつけ名前を呼ぶと、オールマイトは飛鳥に振り向く。

「飛鳥くんっ……！駄目だ、逃げなさ」

「大丈夫です!!」

オールマイトは飛鳥を制するが、飛鳥は刀を取り出し戦闘態勢に入る。

「柳生ちゃんや、雲雀ちゃんも…辛くて…苦しくて…怖い思いしてでも戦ったんだもん……なのに私だけ……皆んなに顔向けできないから……！」

（飛鳥くん……君は……）

オールマイトにそう言うと、飛鳥は死柄木たちに視線を移す。

「あのガキ…何しに来やがった？まさか…」

「ねえ…」

「っ…!?」
死柄木は飛鳥を見て呟くと、不意に飛鳥から声をかけられた。死柄木は少し驚いたように体を震わせる。そんな死柄木を御構い無しに、飛鳥は話しかける。
「貴方達は、柳生ちゃんと雲雀ちゃんを傷つけて、殺そうとした。傷ついてる人に笑顔で笑って殺そうとして……仲間に頼ってばっかで、自分は何もせずに安全なところから見下ろして!!!あなたのやろうとしてることも、やったことも…絶対に許せない……!!だから……」

ジャキッ!!

刀を向ける

「死柄木(貴方)は私が倒す!!!」

ゾッ!!

「う……うう、うおおおぉぉぉぉぉーーーーーーーーー!!!」

飛鳥の決意ある眼差しに、敵意に、正義に、死柄木は声を上げる。

「飛鳥のヤツ、マジになってる！」
切島はそう言うと、轟はふと緑谷を見る。緑谷は冷や汗を流しながら、ブツブツと呟きながら、オールマイト、飛鳥を見つめている。
「緑谷…？」
轟は首を傾げながらも、緑谷を呼ぶが反応しない。何か考え事をしてるようだ。
「客観的に考えて、危険度で考えればモヤの方だ……飛鳥さんも…さっき死柄木って敵に攻撃しようとした時、あのモヤの敵は飛鳥さんを飛ばそうとした……」
緑谷は最悪の予想を思い浮かんだ。
もし飛鳥が黒霧のワープゲートに翻弄されたら？死柄木の性格から考えて、飛鳥に触れただけで重傷を負わせれる……その気になれば殺せると言うわけだ。かと言ってオールマイトが駆けつけても、黒霧は上手く個性を使ってカウンターするだろう……そうなれば、二人の命が危ない。

一方、死柄木は
「～～～～!!!!」
ガリガリガリガリと指で首を掻きまくっている。相当ヤケを起こしてるようだ。
「黒霧……脳無を!!脳無を連れてこい！もう一度戦わせるぞ！無理矢理にでもだ!!!!」
死柄木は落ち着いてないせいか、飛鳥の言葉に苛立ち、興奮しながらも脳無を出せと言っている。脳無はショック吸収と超再生の個性を持ってるのに、オールマイトに倒されたのだ。そんな脳無が戦える

ことはまずほぼ不可能だ。

「そ、それは……死柄木弔、申し訳ないのですが…脳無は何処かへと吹き飛ばされてしまったため、場所が分かりません！」

黒霧は目を細めて謝るように言うと、死柄木はまたまた苛立つ。

「クッソがぁぁ!!何でこんな時に…とんだ誤算だぜ!!こんなハズじゃ無かったのに……！脳無さえいれば、ヤツなら!!何も感じずに立ち向かえるのに!!あの飛鳥(ガキ)を、殺すことなんて……容易いのに!!あの脳無さえいれば!!」

「落ち着いて下さい！死柄木弔！」

黒霧は冷静に死柄木を落ち着かせるようにする。

「よく見れば先ほど脳無との戦いでオールマイトにはダメージが残っている。何よりアレほどのパワーとスピードを持ってるのにも関わらず、こちらに攻めて来ないのがその仮説を裏付けている…」

「！」

死柄木は黒霧を見つめて、真剣に話を聞いている。

「確かにあの飛鳥とかいう少女は忍学生…今相手となるのはアレとオールマイトですが、ご安心を…あの少女は私がなんとかしておきます。それに他の子供達も棒立ちの様子……子供達の相手は残ってる部下達で充分でしょう。数分もしない内に増援が来ると思いますが、私と死柄木で上手く連携をすれば、まだ殺せる算段は充分にあるかと……」

「……」

死柄木は指の動きを止めて、首を掻くのを止め、暫くすると、うん

うんと頷く。
「そうだ……そうだな……うん、そうだ…そうだよ……そうだよな？」
途端。態度が変わり、ギラリとした鋭い目付きで、飛鳥とオールマイトを睨みつける。
「折角さ、此処までやって来たんだもん……目の前にラスボスと中ボスが居るんだ。やるっきゃないぜ…俺たち、敵連合!!　それに脳無があそこまでやってくれたんだ……その成果を俺たちで成功にいかそう…!!」

死柄木はニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべ、走り出した。
「って…」
（来るんかい!!）
オールマイトは心の中で叫ぶと、死柄木は血走った目で襲い掛かる。

「何より脳無の仇だあぁーーーーー!!!」

死柄木が殺気立つ声で叫ぶにつれて、黒霧も後を続ける。相澤に倒された敵達は、気絶から回復して生徒達を殺そうとする。

「来る…！」
飛鳥は素早く死柄木に斬りに掛かる。

黒霧は離れた所で飛鳥目掛けて、黒い霧を襲わせるが…
「それはもう効かないよ!!」
飛鳥は斬撃を飛ばして、襲い掛かってくる黒い霧を払う。しかし黒霧はそこが狙いだったのだ…

「今です死柄木弔!!」

「なあっ!?しまっ…」
黒霧の狙いは、飛鳥の足止めであった。ほんの少しの隙が命取り。飛鳥が黒霧の黒い霧を払ってる間こそが隙と呼べる。
「遅えんだよ!!お前は後で殺す…ぶっ殺す!!!!まずは、お前からだあぁ!平和の象徴オールマイト!!」
(マジで時間ないんだ…!!くそ!早く、皆んな、来てくれ!!!!)
活動時間がそろそろオーバーしそうになり、最早一歩も動くことすら出来ない。一歩動いてしまうだけで、変身が解除されてしまうからだ。そんなオールマイトは焦り、心の中で思いっきり叫んだ。救けが来るのを……

その瞬間…

「僕が動かなきゃ…!ダメだろ!」
「は?」
「えっ!?」
その男は足がフラフラしながらも、苦痛の顔で黒霧に殴りかかろう

とする少年が一人。それは

「緑谷少年!!」

「緑谷くん!?」

（アイツいつの間に…？）

死柄木は緑谷のスピードに動揺する。確かに緑谷はそこには居なかった…どうやら超スピードで黒霧たちの方に突っ込んだ様子だ。

（足が…バッキバキに折れた…さっきは調整できたのに…でも、あった…！体の実体部分！）

足が折れた緑谷は、爆豪が見つけた黒霧の弱点を見つけて、そこに目掛けて…拳を握りしめて、殴りかかる。

「オールマイトから!!離れろ！」

だが、その拳は当たることはなかった。

ズズズ…！

突如緑谷の目の前にワープゲートが出てきた。

「!?」

突然の出来事に、緑谷は絶望の顔色へと変えた。

「二度目は、ありませんよ！」

黒霧は緑谷を睨みつける。

そしてそのワープゲートからは

「ははは！壊してやるよお前の全て!!」

死柄木の死の手が、緑谷の顔に目掛けている。
（やばいヤバイ！この手は…相澤先生の肘を…!!）

もう駄目だ、今度こそ…救からない。

「緑谷くん!!」
飛鳥は叫び出し、死柄木の方へと走って斬りつけようとする。

ズオン!!

「!?」

しかしそこからもワープゲートが出てきては、死柄木の死の手がやって来る。

「お前もだ!!予定変更……今すぐお前も殺してやるぜ飛鳥!!」

飛鳥も腕を引っ込めようとするが、もう既に手遅れだ。飛鳥のスピードよりも、死柄木の方が上であり、そして顔面目掛けて……触れようと……死を錯覚させた。目の前の死を認識した。

ズドキュン！

銃声が鳴った途端。
「痛…!?」
死柄木の死の手は、二人に触れることはなかった、むしろ死柄木の手は血に塗れていた。
「き、来たか！」
「飯田くん……!!」
オールマイトと飛鳥は入り口の方に目をやると、そこには
「ゴメンよ皆んな」
校長の声がＵＳＪ内に響き渡る。

ズドンズドンズドンズドン！

帽子を被った男は、銃を持って適当に山岳ゾーンに撃つ。

「んなっ!?」
上鳴を人質にしてた敵は、銃を撃たれて血を流し、気絶して倒れた。
「こ、コレは…さっきの銃声は…まさか…！」
八百万と耳郎は入り口に向くと。
「遅くなったね」
その声は、生徒達を安心させる声だった。
そして
「皆んなぁ!!1ーA委員長！ただいま戻りました！」
メガネをかけた、あの委員長は生徒達に大声で叫ぶ。先生達は大胆襲撃を仕掛けた敵達に、怒りの目線を向ける。
「わああ!!救けが来たよ！柳生ちゃん!!ホラ見て、こんなに！」

「ああ……本当だな……オレたちは忍びなのに……色んなヤツに救けられるとはな……」
雲雀は増援が来てくれたことに喜んでいる。柳生は悔しい声で呟くが、その声には安心したような声も混ざっていた。

「辛かったよな皆んな、本当にゴメンよ」
先ほど、銃で緑谷と、数百メートル先にある山岳ゾーンの八百万と耳郎を救った男の名はスナイプ。
他にもプレゼント・マイクに、メガネと極薄タイツを着てるミッドナイト。他にも不気味で無愛想な、表情が読み取れないエクトプラズムに、機械のコスチュームを着ているパワーローダーなど。そして『ある人物』も…
数々のプロヒーロー達は、敵の手下共を一気に一掃仕掛ける。
「生徒達の安全と保護を!」
校長の根津が声をかけると、皆んなは「はい!」と、まるで生徒が号令を受けた時と同じ声を出して救出に赴く。

「あーあ、来ちゃったよ…ゲームオーバーだ…」
死柄木は怪我をした手を抑えながらも、忌々しい目線でプロヒーロー達を睨みつけると、黒霧に振り向く。
「黒霧、帰って出直すか」
するとその途端。
「そうはさせんぞ!!」
「!?」
シュルルルーーーーーーーーー!!!
瞬間、何十本、何百本のワイヤーが死柄木の体に巻きつける。

「はあ!?なんだこれ…」
死柄木はワケが分からない様子でワイヤーを見つめてると…飛鳥はそのワイヤーを巻いた『ある人物』を見て、驚きの顔と満面な笑みを向ける。その人とは……

「じっちゃん?!?」

怒りで顔を黒く染め、死柄木を見つめる半蔵であった。あの距離で、半蔵は一瞬で飛鳥たちのところに駆けつけたのだ。流石は伝説の忍びを名乗るだけはある。
飛鳥の言葉を聞いた死柄木は、この老人と飛鳥に血が繋がってるのを知り驚愕する。勿論、その老人が半蔵であり、伝説の忍びだということは知らない。
「は？コイツあのガキの…？今度はジジイか……!!」
死柄木は抵抗するものの、どんどん体に食い込んでいく。
「無駄じゃ、諦めなさい…それに、ワシの大切な孫や生徒たちに手を出したんじゃ……それなりに覚悟して貰うぞ？お主や」
それを聞いた途端。今度は……
ズドンズドンズドン！
「いっつっ……!?あっ…くっ！」
スナイプの銃弾が、死柄木の両腕両足を狙い撃ち、その場に倒れこむ。
「っ！死柄木弔！」
黒霧はスナイプの銃弾から、死柄木を守るように、黒い霧を大きくして包み込む。
「この場で捕獲可能なヤツは…」
ズドンズドンズドンズドン！
「僕だ…！」
「！」
スナイプが銃を撃ち続けていると、不意に聞こえた声はとても弱々

しい声だったが、声の主を見ると、意外な人物であった。
「いってぇ～……！」
「死柄木、大丈夫ですか!?」
ワイヤーで巻きつけられ拘束された挙句に、ケガを負った死柄木の安否を確認するべく黒霧は心配そうに聞くと、突如死柄木と黒霧は『何か』に吸い込まれる。
「な!?んだコレ！」
「この個性は…まさか！」
黒霧はその吸い込む主を見ると、その人物は。
「僕が彼らを捕まえる！」
「バカな…13号!!!」
瀬呂と障子に支えられてる13号は、五本の指のブラックホールで吸い込んでいる。だがそれよりも、黒霧のワープゲートが早く閉じろうとする。そして死柄木はワープゲートからオールマイトを覗き込むように睨みつける。
「今回は、生意気なガキ共のせいで失敗して負けたけど……」
「……」

「今度は殺すぞ、平和の象徴オールマイト!!」

ズズズ……

殺気立ち、血走った目でオールマイトに残すようにそう言うと…闇のように見える黒霧のワープゲートと共に消えた。

…その後プロヒーロー達の手によって、生徒達は無事に保護され、残ってる敵は全員捕まえることが出来た、ある『2名』を除いて。

「じっちゃん……」

飛鳥は申し訳なさそうな顔で、半蔵の名を呼ぶ。自分は立派な善忍になるのに、伝説の忍びに救けられて、死柄木たちを捕まえることが出来なかったことに、飛鳥は悔やんでる。

「飛鳥よ……」

「ゴメンね…救けられちゃって……私は…」

「よくやったぞ……」

「えっ？」

半蔵の答えに、飛鳥は顔を見つめて目を丸くする。その瞳には、暖かさと優しさが含まれてて、見てるだけで安心する。

「飛鳥が命懸けで友を救おうと頑張る姿に、ワシは感激じゃ……それに、飛鳥が無事で良かった……飛鳥よ、よくやったぞ…!!」

「じ……じっちゃん……!!」

飛鳥は半蔵の言葉が嬉しくて、涙が出るのを堪えた。

一方、緑谷は…

「ハァ……はぁ……また、何も出来なかった…!」

緑谷は悔し混じりの声でそう呟くと、近くにいたオールマイトは、マッスルフォームから、半分くらいトゥルーフォームになっており、

体から水蒸気を出しながらも、笑顔で緑谷に話し掛ける。
「そんなことは…ないさ」
「！」
「君が動いていなければ…恐らく私と飛鳥くんは殺られていた……あの数秒がなければ…私はまた、ニセ筋になるところだったよ……」
それを聞いた緑谷は、目に涙を浮かべる。
「まあ何がともあれ…また君に、救けられちゃったな…」
「オールマイト…無事で…何よりです！」
緑谷は、声を震わせながらそう言った……
そう、この襲撃が後に起こる大事件の始まりにすぎなかった。

１９話「各々の想い。そして…」

「逃げられちまった…何てことだ、こんだけ派手に侵入されたにも拘らず…クソッ！」
　悔しげに声を上げるスナイプは銃を降ろし、生徒達が傷ついてることを知らなかったことに対して後悔してる。
「うーん…とりあえずセキュリティ強化が必要だね。皆んな、反省は後だ。取り敢えず警察を呼ぼう、パワーローダー。連絡しくれ」
「はい、分かりました」
　パワーローダーは頷くと、直ぐに警察に連絡をする
「ワープだなんて個性…ただでさえ希少なのに、よりによって敵側だなんて…」
　横にいるミッドナイトはポツリと呟いた。

　飛鳥と半蔵は…
「あっ、そうだ！オールマイト先生…大丈夫かな？」
　飛鳥は思い出したかのように、オールマイトに振り向き駆けつけようとすると…半蔵は飛鳥の肩を掴んだ。
「じっちゃん？」
「オールマイトについてはワシに任せてくれないか？それにちと話もあるしのう……出入り口の方で先生たちが生徒を集めてるそうじゃ、何やら生徒の安否を確認したいと言っておったの……飛鳥、行ってくれないか？」
「そうなんだ……うん！分かったよじっちゃん!!」

　そう言うと、飛鳥は頷き出入り口の方へと駆けつける。

　一方オールマイトの方では…ある先生がコンクリートを操り、オールマイトと緑谷を隠すように壁を作り出す。

「さあ、生徒の皆んなは無事かどうかの安否を確認したい…だからゲート前に集まってくれ」
「はい！」

残ってる生徒、切島、爆豪、轟にそう言うと、三人はゲートに向かって行った。その様子を見た先生はオールマイトと緑谷に振り向く。

「いやぁ、それにしても毎度無茶しますねオールマイト」
「やあ、助かったよセメントス！」
「ええ、俺も一応アンタのファンですから」

ニー…っと笑顔を見せるその男は、体は角々ではあるが、心優しそうな一面も見える。

セメントス　個性　『セメント』触れたもののコンクリートを操ることが出来る、柔らかくしたり、硬くしたり…現代社会では鬼強いぞ！

「オールマイト、無事か？」
「!!半蔵さん！さっきは助かったよ」
オールマイトは半蔵を見て驚いた後、死柄木を拘束して、動けなくしたことにお礼を言う。
「なに、気にすることはない……孫と生徒たちの受けた傷を、ちと返してやりたかったもんでな」
「あ、あの～……」
「ん？」

オールマイトと半蔵の話を聞いてる緑谷は、手をあげる。

「あ、あなたは……？しかもオールマイトの知り合い、なんですか……？」

「！ああそっか…!!緑谷少年には話してなかったな！」

何が何だか分からない様子でいる緑谷を見て、オールマイトは半蔵を見て紹介する。

「この人が、伝説の忍びの……半蔵さ!!」

「本来ワシが自己紹介するのじゃが……まあ構わんわい」

オールマイトがそう言うと、緑谷は「ええ!?」とした顔で驚愕している。

「は、は、半蔵って……飛鳥さんの……それに半蔵学院の……」

「なんじゃ、飛鳥から話は聞いておったのか？」

「あ、いいえ!!詳しくは聞いてなくて……忍びの事情もあると思いますし……ただ孫だということと、半蔵学院を作ったというのは聞いたことがあります……」

緑谷は敬語で話しながら、半蔵を見つめていると、「ガハハハハ!!」と豪快に笑う。

「そうかそうか！なら話は早いわい……どうじゃ？飛鳥の体は？胸がデカイじゃろ？」

「は!?ふへええ?!な、ななに言ってるんですか!?／／／／／」

「ははは！冗談じゃジョーダン!!まあ本題じゃが、お主がオールマイトの個性（力）、ワンフォーオールを引き継いでることは知っておる

ぞ」
「え!?!」
緑谷は一瞬焦り、動揺するが、二人は緑谷に話し出す。オールマイトと半蔵が深く関わっており、同じ社会を支えて守ってきたことを説明すると、緑谷は「なるほど…」と呟き納得した。
半蔵はオールマイトの姿を見てため息をつく。
「それにしても……お主も毎回無茶するのぅ……まあ、ワシも人のことは言えんがな…」
半蔵がそう言うと、オールマイトの表情は険しくなっていく。
「あの、数秒がなければ…殺られていた…そう思わせるほど…敵は強かった…!それに……ヤツらは、忍びの存在を知っていた!!」
「っ!なんと……!!」
オールマイトは顔についてる血を拭い、そう言うと、半蔵もオールマイトと同じように表情が険しくなる。

場所は変わり、とある「バー」にて……

ズズズ

何もないバーの中から、突如ワープゲートが現れ、そこから縛られ、苦しんで倒れてる死柄木と悔しい様子を見せる黒霧が現れた。
「いってぇ〜〜……」
ワープゲートから出てきた場所から、死柄木の両腕両足からは、血が流れていた。

「クソジジイにワイヤー巻かれて縛られた挙句、両腕両足撃たれた……完敗だ……!!子供は強かった、手下共も瞬殺だ、脳無もやられた、平和の象徴は健在だった……

全然話が違うぞ『先生』!!!!!」

死柄木は物凄い殺気立つ、血走った目でバーの中にある一つのパソコン画面を睨みつけて怒鳴り散らした。

『ううん、違わないよ』

『ふむ、けど舐めすぎたな…敵連合なんちうチープは団体名で良かったわい……』

パソコンの画面から二人の声が出てきた。一人は優しい声が、もう一人は老人の声が……二人の映像はパソコン画面には映し出されてない。音声のみだ。

『ああ、そう言えばワシと『先生』の共作脳無は？』
『回収してないのかい？』

脳無がいない事に気付いた先生と老人は尋ねると、数秒間を空き、黒霧は口を開く。

「……吹き飛ばされました……」
『なんと!?あのオールマイト並の脳無が…!?そんなバカな……』

黒霧の発言に驚きの声を上げる老人。黒霧は話を続ける。

「いくら私がワープゲートとはいえど、正確な位置座標さえ分からなければ探すことは出来ないのです…そのような時間は取れなかった！」

黒霧は悔しそうに声を上げる。

『折角オールマイト並みのパワーとスピードにしてやったのに…!!残念じゃな……』

老人はため息をつくと、今度は先生と呼ばれる人物が話し出す。

『なるほど…では、弔と黒霧、どうだったかい？

『忍学生』は存在してただろう？』

「……はい……」

「……」

黒霧は返事をし、死柄木は無言で見つめている。死柄木と黒霧も、最初は忍びなんてものは存在しないと思ってたし、おとぎ話だと思っていた。忍びは大昔に存在してたもので、そんな古いものが今も居るだなんて信じてなかった。

だが今回の襲撃でハッキリ分かった。忍びはこの世に存在すると……奇妙な技を使ったり、個性らしきものは見なかった。何より身体能力が高かった。それに先生が言っていた。今回忍びを殺せばこの社会は大きな悪影響を与えれることだ。と……

『僕の言った通りだろう?忍学生の強さはどうだった?』

そう聞くと、まず黒霧が喋り出す。

「弱かったようで、強かったです……彼女たちの秘められた強さに、正直驚きを隠せません……脳無が居たからこそ、我々は有利でしたが、もしあの場に脳無が居なければ我々は確実にやられてたでしょう……」

『なるほど…弔はどう思った?』

先生と呼ばれる者の質問に、死柄木は暫く黙って地面を見つめている。

「気に入らない……が、第一印象だな。でも…確かに黒霧の言う通り、アイツらは弱かったようで強かった。あの柳生とかいうヤツは脳無の一撃食らったのに生きてやがったし……雲雀とかいうヤツは脳無に心がないと見抜かれた……まあそれは別にどうでも良いんだけどさ。後は変な動物みたいなのも召喚してたな……」

『心がないと見極めた？その忍学生の特徴は？』

死柄木がそう言うと、先生と呼ばれる人物は疑問を持った声で尋ねる。

「ピンク色の髪に、目には華のような綺麗な瞳でした……それに兎らしきものを召喚してましたが……先生、何か知っているのですか？」

黒霧は不思議そうにそう聞くと、先生と呼ばれる人物は少し沈黙して答え出した。

『……華眼だね』

「華眼？」

『うん、だけど今の弔たちはこのことはまだ知らなくて良い……弔、君は自分が一体何をやるべきことなのかを考えなくてはね』

死柄木と黒霧は首を傾げてそう聞くと、先生は何も答えてくれなかった。そして先生は意味深な台詞で話を流した。死柄木はつまらなそうな顔をするものの、「だったら早くワイヤー外せよ」と呟く。

『ははは、ゴメンごめん…では黒霧、僕のところへ』

「かしこまりました」

黒霧はワープゲートを開くため、黒いモヤを揺らがずと、死柄木は突然何かを思い出したように言った。

「あっ、そうだ先生……」

『ん？』

「パワー…スピード……一人だけオールマイト並みの速さを持つ『子供』がいたな…」

『……へぇ……』

先生と呼ばれる人物は、何か興味深い声で反応すると、死柄木はワイヤーで拘束されてながらも、手を地面に向けて掻き始める。爪が傷つくほど…

「あのガキさえ居なけりゃあ、オールマイトを殺せたのかもしれないのに……なのに、なのに…!!ガキが…ガキ!!クソが、クソぉぉ!!!」

突然。死柄木は怒り混じった大きな声で叫び出すと、先生と呼ばれる人物は『まあまあ』と死柄木をたしなめる。

「あとよ先生……あの飛鳥ってガキも気に入らなかった……なんかあのオールマイト並みのスピードを持ってたガキと似てるんだよ……それにこのワイヤー…アイツのジジイのせいでこうなっちまったよ……」

死柄木はまた思い出したようにそう言うと、先生は何も言わなかった…まるで何かを見据えてるような……

「くそ、クソぉ!!!どいつもこいつも俺の邪魔ばっかしやがって!!アイツら今度あったら絶対にぶっ殺してやるぜ……殺して殺して殺して殺して殺しまくって……それで…それで……

……アアアアアアーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!」

死柄木は余りの怒りに、精神が限界まで達したのか、狂い始めるように叫び出す。

『まあ、悔やんだって仕方ないさ!今回の戦いだって無駄ではなかっ

たはず…それどころかいい経験になったハズだ。我々は動けない、だから…

悪のシンボル死柄木弔、君という名の恐怖をこの世の中に知らしめろ』

プツン！

パソコンの音声は消えた。

そして先生と呼ばれる人物は、もう一人の老人に話しかける。

「ドクター、弔の傷を治してやってくれ、僕はワイヤーを切るよ」

「ええ、分かりましたよ」

老人…ドクターと呼ばれる人物は、救急箱や、応急処置に必要な道具を整理し準備している。

「……」

先生は暫くパソコン画面を見つめている。

「華眼に、飛鳥という人物の……なるほど、やっぱりか」

先生は何か納得した様子で頷くと、ニヤリとした笑みを浮かべる。それは、死柄木と同じようで、何処か似ていて……

「となると……華眼を持つ少女と、飛鳥の『祖父』、半蔵がオールマイトと繋がっているから、恐らくもう気づいてるだろうね…『僕の存在』を……それにしても『久しぶり』かな、半蔵という名前を呼ぶのは…」

そう言うと、カチカチとパソコンのキーボードを打っている。そしてその画面には、まだ見ぬ犯罪者たち、そして……

「うん、次は『彼』の出番かな、そして上手く事が運べば……忍びの存在を言い渡している『彼女』もまた、死柄木率いる敵連合の仲間に入れよう」

先生は、そう言った。

その頃雄英高校では…
ＵＳＪ内に襲撃してきた敵（ヴィラン）は、警察とヒーローの協力により捕まえた。そしてオールマイトによって雑木林に吹き飛ばされた一人の敵、脳無も逮捕された。警察からの話によると、脳無に外傷はなく、無抵抗で大人しいそうだが、いくら話しかけても一切反応がないそうだ。７２名の敵が逮捕され、残りの２名は今も現在逃走中だ。
また重傷を負った人は、相澤、１３号、柳生、緑谷、オールマイトの計５人。柳生は今回忍び専用の病院ではなく、リカバリーガールに診てもらう事になった。
柳生は頭部に重い打撃を打たれ、傷が酷く、血の量も酷かったが、リカバリーガールの治療で命に別状はない。
相澤先生は両腕の損害骨折…そして顔面骨折…眼窩底骨が粉々になって、目の後遺症は残るが…命には別状はない。
１３号も背中から上腕にかけての裂傷が酷いが…リカバリーガールの治癒でなんとか命に別状はない…と

保健室にて……
「……」
頭に包帯を巻いてる柳生は、ベッドの上で眠っていた。
リカバリーガールに治療して貰った後、疲れが出てきて寝てしまったのだ。
柳生の夢の中に、聞きたくも無い声が聞こえてきた。

『脳無、殺れ』

『そうかそうか、じゃあ俺が雲雀くんを殺せば良いんだな？』

『せっかく大切なお友達が勇気を振り絞って守ろうと頑張ってるんだ……俺がそれを壊そうとしないでどうするんだ？』

『俺たちは敵（ヴィラン）だぜ？殺してなにが悪いんだ…??』

『二人とも…ゲームオーバーだ……!!』

「っ……!!」

ハッ！と目が覚めると…

「柳生ちゃん…？」

雲雀がいた。ベッドの横の椅子に座って、ずっと柳生を看病してくれたのだ。

「ああ、雲雀か……良かった…」

柳生は嬉しそうに一安心すると、目に涙を浮かべる。そんな柳生を見た雲雀は、首を傾げる。

「どうしたの？何か怖いものでも見たの？」

「怖い……かな……雲雀が消えてしまうのは……」

「え？」

柳生の答えに、雲雀は驚いたように目を丸くする。

「オレは、怖かった……あの時、雲雀が死柄木に殺されそうになったのを……オレは直ぐに救けに行きたかった……でも、オレの弱さのせいで、身体は動くことが出来なかった……どんな理由であろうとも、オレは雲雀を」
「それは違うよ柳生ちゃん」
「雲雀？」

柳生が話してると、雲雀は首を横に振り、柳生の手を優しく握る。

「雲雀ね、柳生ちゃんが来てくれて嬉しかった。あんなにボロボロになってるのに、雲雀を守ってくれて…もし本当に弱かったら、柳生ちゃんは雲雀のことが友達でも、守ろうとはしなかったよ。強さは力だけじゃないんだ……だから、柳生ちゃんは強いよ。ずっと強い…!!自分を責めなくて良いんだよ」

雲雀はニコッと笑顔を向けると、柳生の頬から涙が伝わった。堪えてて、溜めてた涙が一滴一滴溢れ出た。

「ひばり…雲雀……!!」
「うん、うん……それに雲雀と柳生ちゃんはお友達だもん…雲雀は消えないから…死なないから大丈夫だよ」

雲雀は柳生を包み込むように抱きしめ、優しく頭を撫でた。
柳生は、雲雀と初めて会った時の頃を思い出した。それは入学式の頃だった。
雨が降っており、傘で学校に入って行こうとした時だった。柳生の目の前には、水たまりで遊んでる雲雀だった。雲雀は自分を見ている柳生に気づき、初めて会うと言うのに笑顔で話しかけてきた。

「ねえ、貴方も雨が好き？一緒に行こ！」
「あっ…」

雲雀は柳生の手を握り、一緒に学校にまで走って行った。柳生はその時嬉しかった。雲雀を見てて、心が温かくなるような優しさに包まれて……『氷のように悲しみに固まった』柳生の心を溶かしてくれた。

柳生には『望』という妹がいた。望のことが大好きだった。望がいたから、柳生は立派な忍になれるよう頑張れた。どんな辛い時があっても、苦しい時でも、望が側に居てくれた。望の輝かしい笑顔……そして望は、忍びの修行をしている柳生にいつもこう言ってくれた。

「お姉ちゃん！立派な忍びになってね！」

その言葉を聞けて、柳生は幸せであった。しかしそんな幸せも、長くは続かなかった。

ある日、望は交通事故で死んでしまった。

ツバサ医院に望は居ると聞いて、柳生は駆けつけ、見た時はもう遅かった。両親は泣きながら死んでしまった望を見つめていた。柳生は目の前の出来事を受け入れることは出来なかった。

「せん…せい……望は…？望は……!?」

柳生はツバサ医院の院長に尋ねると、柳生を落ち着かせるようにして、こう言った。

「諦めた方が良いね……」

「え…」

「辛いのは分かるけどね……君の妹の望くんはもう……救からないよ……」

そう言われた途端、目の前が真っ暗になった。

「う　…　あ　…　あ　……　あ　あ！　あ　あ　あ

その時に決めた、ならば片方の目に眼帯をしようと……視界は半分になり見えずらいが、それなら望の死は忘れられないと……そう思えたからだ。視界が見えずらいと思えば思うほど、望のことを思い出せる。そうすれば忘れない、絶対に。

望が使ってたリボンで、眼帯を結んだ。これが、柳生が眼帯をし始めたキッカケであり、これこそが、柳生の原点（オリジン）なのだ。

柳生は決心した。

自分は雲雀を守れるくらい強くなって、そして二度と望を失った時のような思いはしないと……。

だから、自分はもっと強くなろう……

二度と大切なものを失わないためにも……

場所は変わり……

緑谷とオールマイトは……

ベッドは二つ、体に包帯を巻いてるトゥルーフォームのオールマイトと、足に包帯を巻いている緑谷は、横たわっていた。

「いやあ、何がともあれ…無事で良かったな緑谷少年…」

「オール…マイト」

オールマイトは緑谷を不安な気持ちにさせない為にと笑顔を作って見せるが、緑谷はオールマイトの秘密（ピンチ）を知ってるのであんまり安心する事は出来ない。

オールマイトは、天井の真上…真ん中を見上げてポツリと呟く。

「私また、活動出来る時間が短くなったかも…」

「！あ、あの…ゴメンなさ」

「いやいや謝らなくても良いさ！君と私は本当にそういう所って似たところあるよな！」

不安と罪悪感を感じた緑谷に対して、ハハハと豪快に笑う。オールマイトは緑谷を一度も責めたことなど無い。これは自分でやった事だからというようにしているが、やはり緑谷の心のには、罪悪感がある……安心できないのだろう。

オールマイトと緑谷の間にしばらく沈黙が漂うと、リカバリーガールは、渋々と仕方なさそうな顔で緑谷とオールマイトの顔を見つめる。

「今回は仕方ないよ…事情が事情でね、この子（緑谷）には一気に治癒してやれんから、少しずつ点滴で回復していくしかないさね」

目を細めてそう言うと、コンコンと扉のノックが鳴る音が聞こえる。

「すみません」

扉の向こうから声が聞こえ、反応を待たずして警察が入ってきた。

「おお、塚内くん！君もこっちに来てたのか！」

塚内は帽子をとって「久しぶりだな」と小言で言うと、緑谷は慌てた様子でオールマイトと塚内を見る。

「え、ええ!?良いんですかオールマイト…姿が」

オールマイトはニッとした笑顔を見せて「安心しな緑谷少年！」と、親指を立てると塚内に目を向けて紹介する。

「彼は私の最も仲良し、塚内直正くんだ！」

「ははっ、何だその紹介」

軽く笑う塚内、どうやらオールマイトの仲だそうだ。緑谷はホッとすると、塚内はオールマイトに事情調査を始める。

「それでオールマイト、早速で悪いが…まず敵（ヴィラン）について詳しく」

「待ってくれ塚内くん！生徒たちは…？」

オールマイトは生徒たちの安否を確認すると、塚内はニコッと笑顔

を見せて。

「そこの彼、緑谷くん以外全員無事さ。彼女、柳生さんって子は頭部をケガしてしまったが、先にリカバリーガールの治癒で命に別状はないさ」

「おお…良かった…」

生徒たちが全員無事だと聞いたオールマイトは、ホッと胸を撫で下ろすと、塚内はオールマイトに話しかける。

「三人のヒーローが身を挺してなければ、彼らは殺されてたかもしれないな…」

「それは違うぜ塚内くん」

「？」

オールマイトは真剣な眼差しを向けて物語る。

「今までの雄英で…子供達は先に大人の世界を体験し、恐怖を感じ、乗り越えた…そんな一年生なんて今まであったか？しかも、忍学生とヒーローの学生が、共闘なんて……そんな事あったか？光と影が、表と裏が一緒に強敵に立ち向かった……!!」

「敵（ヴィラン）も随分とバカな事をした！これから強くなるぞ、生徒たち1ーAは！そして、半蔵学院の忍生徒達もな!!!」

フッと塚内が感心する表情を見せると、オールマイトは緑谷に振り向きニコッとした強さを感じる笑顔でガッツポーズを見せる。

「私は、そう思うよ…なあ？緑谷少年」

「オール…マイト！」

緑谷は嬉しさのあまり、涙が出そうになる。緑谷は涙ボロいとはいえ、やはり憧れの人からそう言われると嬉しくなってしまう。

それから塚内はオールマイトに敵たちの事情調査を聞き、緑谷は足に包帯を巻いて、帰る支度をしている。
治癒は体力を消費するので、使いすぎないように点滴を淹れるには、明日また淹れなければならない。
そして、しばらくして緑谷は保健室から出た。

「ありがとうございました！」
「はいよ、お大事に～」

緑谷は一礼すると、リカバリーガールは手を振る。オールマイトは塚内と話してるのを見て、緑谷は夜遅くまで大変だな…と思うのであった。
リュックを背負い、外に出るともう真っ暗だ。

「うわ、もう外暗いな…お母さんになんて言ったら…」

と呟きながら校門を出ようとすると。

「「緑谷くん！」」
「デクくん！」

振り向くとそこには

「あれ!?飯田くんに麗日さんに飛鳥さん、どうして此処に?もう時間…あっ、まさか」

緑谷はハッとした顔を三人に見せると、三人は当然と言わんばかりの顔をする。

「緑谷くん、君を待ってたんだ」
「お疲れ様！一緒に帰ろ！」
「うんうん！帰ろ帰ろう！」
「うん……！」

二人の優しさに緑谷はジーん…としみじみする、雄英に通ってから緑谷は友達ができた。今まで中学の頃は無個性だとバカにされて、そして幼馴染には酷い仕打ちすら受けた。だから緑谷にとって友達とは、人生の中では宝物のような存在なのだ。

（オールマイトの言う通り…これからも強くなるんだ……！）

オールマイトは緑谷に力を託した、それがどれ程重いか…より身を感じた。

そして襲撃の事件は終わった。しかし、次に新たな事件が、起ころうとしている。

蛇女子学園にて…

治療室で治療を受けた意識不明の悪忍の四人は、二人は回復し、もう二人は手遅れで死亡してしまった…その頃にはもう、間に合わなかったようだ。回復した二人は、命に別状はないが、再起不能となり、腕が動かない、足が動かないと言った後遺症が残った。その悪忍は、

泣きながら嘆いていた……
四人を蛇女に連れてきた春花はあの時何があったのかを聞く。
「貴方が悲しむのも無理はないわ……だから教えて、もう二度と貴方達みたいな悲しみが増えないためにも……貴方達を襲ったのは誰？」
「そ……それは……」
女性二人は一斉に口を開き、その名前を言った……

同時刻。
夜の街に、パトカーや救急車が駆けつけている。何やら物騒な事件があった様子だ。
現場は建物と建物の間の路地裏でヒーローが四人とも重傷を負い、手酷くやられ…出血も凄い。
犯人とも思えるその人物は、現場を上から見下ろしている。
長い刃物を持ち、血の色に染まってる赤いバンダナ、そして顔の目線部分は包帯で覆われている。黒い髪は少し長い。この犯人は前に、悪忍を倒した男でもある。
「金に名誉……下らないな…ハァ…お前らがヒーローを語るんじゃねえよ」
狂気とも呼べる声を出しながら、舌舐めずりりする。

「ハァ……お前らは『間違っている』。本物の英雄を知らない限り……誰かが血に染まるのだ……ハハァ……」
「あー、やってるね！」
「！」

独り言を呟いていると、不意に後ろから女性の声が聞こえた。その男は聞いたことのある声なのか、「お前か……」と呟き、後ろを振り向く。

「お前か、とは何よ～…むぅ……ねえ、今度は誰を殺ったの？」
「ハァ……その前にオレをただ力を悪戯に振りまく敵（ヴィラン）と一緒にするなよ…？お前のその発言から……オレがただ単に人殺しをしてるように聞こえるぞ……」
「ハハハ…！違うって、ちゃーんと分かってるよ！貴方のこと……壊したいんでしょ？この『現在の社会』を……」

その女性は、ニコニコしながら真剣に話をしている。その男はそんな彼女に、ため息をつく。

「……分かってるなら良い……お前も……オレと同じ、この社会を壊そうとしてるからこそ…敢えてお前を殺さなかったからな……」
「うん、だから私は『忍びの存在』を貴方に教えたんだよ？それに『忍びの存在』は本来、人に教えないようにって、裏の社会が決めたんだけどね」
「ハァ……忍びとやらも……この間違ってる社会を支え、悪戯に力を振りまく者も、この世に生きる偽善者も……『粛清対象』だ……」
「うん！さっすがだね!!貴方に話してよかったよ……

『ヒーロー殺しステイン』!!」

「ああ……抜忍『漆月』」

秘立蛇女子学園編
２０話「ＴＨＥ・紹介」

「死柄木弔という名前、個性は恐らく、触れたものの対象を粉々にしてしまう個性と推測。２０～３０代の個性登録を洗ってみましたが、該当せず。また黒霧というワープゲートも同じです。」

襲撃後の翌朝、雄英高校では会議室で教師達はもちろん。そして塚内刑事が敵連合について調べた情報、資料を読み取っている。

塚内は警察としてはかなりの歴然を誇るプロの警察だ。特に情報収集などはとても得意とするらしい。

「ですが…これは無戸籍かつ偽名ですね」

死柄木と黒霧の名前が偽名であると断言した。続けて

「個性届けを提出していない…裏の人間ですねコレは」

塚内は最前で重要な情報をまとめて任務を遂行するといった感じが伝わってくる。

だが相手が無戸籍ゆえに偽名。さらに相手が何処にいるのかも分からない故に、攻め立てる理由すらもわからないままでは最善たる策などは最早皆無に過ぎない。

「何もわからねえってことだろ?だったら早く見つけないと死柄木とやらは厄介になるぞ…主犯の銃槍が治る前にな」

帽子に手を当てるスナイプに、オールマイトは遠いおぼつかないような目を細めてため息をつく。

「それにしても、忍びの存在を知ってたのは大きいね。まあ学校に襲撃してくるのもそうだけど……となるとこちら側の情報が漏れたか、信じたくはないがあるいは生徒たちの可能性もあるかもね」
「いいや、それはないと思います校長」

校長がそう言うと、オールマイトは首を横に振る。

「緑谷少年と、障子少年が言っていました。もし本当に生徒たちが情報を漏らしたとなると…忍学生の存在のみならず、名前や数まで知っているハズ……だが向こうは存在を知っていただけで完全には知らなかった……」

オールマイトはそう言うと、根津は「う～ん」と難しい顔で考える。

「確かにオールマイトの言う通りだが……となると、一体誰が……

っ！もしかして……」

「何か知ってるのか!?」

スナイプは慌ただしい様子で校長に聞くと、数秒間を空き、何かを思い出したようだ。

「あくまで私の推論なんだけど、忍びの存在を他者に知れ渡し、悪党と危害を加えている『謎の忍び』とやらがそうなんじゃないかな？そして死柄木という主犯に動かせた……とか？」
「……！なるほど…それは一理ありますね」

塚内が納得したように頷くと、オールマイトは何か嫌なものでも思い出したのか、ため息をつく。

「主犯…か」
「オールマイト?」

オールマイトの呟きが聞こえた根津は振り向く。

「思いついてもふつう行動に移そうとは思わぬ大胆な奇襲、私対策の脳無という得体の知れない人物までもが襲いかかってきた。そして向こうは、我々と塚内くんとヒーロー科の生徒しか知らないハズの忍生徒がいる事も分かってた……忍びの存在そのものを知っていた……!!用意は周到にされていたにも拘らず!」
「突然それっぽい暴論をしまくったり、自身の個性を明かさず他人の個性を自慢気に話したり、思い通りに事が運ばないと露骨に気分が悪くなる!」

オールマイトは、政治家が話すような体制をとり、話を続ける。

「それと何が関係があるというんだ?!」

オールマイトに抗議する雄英の一年B組ヒーロー科の担任ブラドキング。外見からして熱血漢であり、力強さが伝わるのが印象だ。
オールマイトはこう言った。

「子ども大人だ」

「!?」

一瞬どういう意味かと悩んだが、オールマイトが言ってることを皆、直ぐに察知した。

先ほど死柄木の言動の説明からして『子ども大人』というのは、幼稚的万能感の抜け切らない人間、大人の力を持った子どもということだ。

「なるほどね…オールマイトの言葉に一理あるね。でも、個性不明というアドバンテージを放棄するのは愚かだね」

冷静な様子で話し出す根津校長。

「小学生時の一斉個性カウンセリング、アレ受けてないのかしら？」

疑問に浮かぶミッドナイトの意見はご尤も。

本来なら小学時に保険調査によるカウンセリングを受けるよう義務付けられてる。

個性という規制化が厳しい今の世の中なら当然、尚のことだ。

「個性登録を洗っても出てこないんだ、完全に裏の人間さ。受けてないことには確かだな。何しろこんなにややこしい事件なんざ初めてだぜ……」

帽子を深く被るスナイプ先生。

「先日のＵＳＪで検挙した敵の数７２名」

「!?」

抗議が続いてる中、声を出したのが塚内刑事。資料を見ながら説明をしている。

「どれも路地裏に潜んでいるような小物ばかり、そして大物が脳無と呼ばれる男でした。問題はそういった『子ども大人』に賛同して付いてきたということです。」

先生たちも固唾と唾を飲む様子で静かになり、塚内に視線が集まる。

「ヒーローが飽和した現代に抑圧されてきた悪意たちは、そういう無邪気な邪悪に魅かれてるのかもしれない」

オールマイトの存在そのものが悪の抑止力となり、今まで悪事を働く事が出来なかった敵たちは、死柄木弔という無邪気な悪意に引き寄せられ、協力、仲間などと言ったものが集まってくる。それは平和という光から生まれる影に隠れて悪を培ってきた者こそが敵連合を率いる死柄木ではないのかということだろう。そして、死柄木弔はこの社会から生み出された歪みを持つ化け物とも言える。

「何がともあれヒーローたちのお陰で、こうして我々警察は地道な調査に専念出来る。引き続き調査網を拡大し、犯人たちの逮捕に尽力を尽くします！」

塚内は一礼すると、根津は深刻そうな顔で呟いた。

「子ども大人…か」

「校長？」

根津の様子に首をかしげるオールマイト。根津はこういった。

「子ども大人ということは逆にこうも言えるよ、敵もまた生徒たちと同じ成長する余地がある。生徒たちが成長すればするほど、敵もまた強くなる…考えたくないものだね。」

「……ごもっともです」

一方、半蔵学院の方にて…

飛鳥たち三人は朝早く半蔵学院に着き、昨日起きた事件を霧夜先生

に伝えた。

「なるほど…それは災難だったな……それにしてもまさか忍びの存在を知っているとは……ソイツら何者だ？上層部もまた調査を続けろとは言っているが……」

「わ、私にも…それは……でもまだ世間には知れ渡ってないなら、私たちはまだバレてないという事だよね？」

霧夜の言葉に飛鳥は首を横に振る。また、忍の存在が世間にバレてしまってるかどうかについて不満を持っている。

「ああ、それについては心配ないのだが……問題はその敵が、何故忍びの存在を知ってるかだ……上層部は謎の忍びと関わりがあると推測しているが……現在詳細不明だ」

「う～ん……そっか……」

飛鳥がそう言うと、葛城は口を開く。

「とにかくよ先生！飛鳥たちがあんな酷い目に遭わされたんだ……アイツらほっといたらになにしやらかすか分かんねーぞ！探そうぜ、そんでアイツらを…」

「落ち着きなさい葛城さん……行方が分からない以上、手の打ちようがありません！私だって許せませんよ……後輩である飛鳥さんたちが酷い目に遭わされて…」

「だったら早く探せば良いじゃねーか!!」

「そういう訳にはいけません!!無理に探せば、向こうの思う壺になるだけです！私たちは向こうについては一切何も知らないのに、何の根拠もなく探せますか？」

「うっ……そりゃあそうだけどよ……」

怒り荒ぶる葛城は、斑鳩の正論にたじろいでしまう。そんな二人を見た柳生は話し出す。

「よく分からないが……これだけは言える。敵は結構強かった。只者ではない……何より雲雀が言ってた、敵に心がないものもいたと……」

「なに？心が……ない？」

霧夜は柳生の言葉に耳を疑い、眉をひそめると、雲雀に目を移した。すると雲雀も真剣な眼差しで頷いている。

「……その敵については、今後忍たちも調査を続けよう……」

霧夜はそう言うと、柳生はまだ脳無にやられた事が悔しいのか、眼帯を撫でるように触り、殺気立った目で……何もない場所に目を向ける。

「うぅ～……もしあんなのが攻めてきたら……雲雀嫌だよ……それにまだあの二人の敵さんは逃走中なんでしょ？」

敵連合の主犯格、死柄木弔

出入り口の黒霧

この二人はかなり厄介な敵だ、今後鉢合わせたくない。

そんな雲雀は縮こまるように目をうるうるさせると、柳生はソッと雲雀の頭を撫でる。

「大丈夫だ雲雀……オレももう二度とあんなヘマはしない……そのためにはオレたちはもっと強くならなければならない……そうだろ？霧夜先生」

柳生がそう言うと、霧夜は頷いた。

「ああ…まあとにかく、お前たちが無事でよかった…！柳生は、ケガこそしてしまったが、回復して復帰したしな……」

「……はい……」

柳生は小さく頷くと、霧夜は話し出す。
「そして今回、お前たちに更なる命令が下された……」
「新たな？」
「命令？」

雲雀と柳生は首を傾げると、霧夜は真剣な表情で話を続ける。
「『ヒーロー殺しステイン』を捕らえよ……との事だ」
「!!!」
「ヒーロー殺し？」

斑鳩はその名を聞き驚いた様子で顔を青ざめ、それ以外の４名は首を傾げる。
「斑鳩は流石だな……酷ではあるが……」
「……はい」
「「「斑鳩（さん）？」」」

四人は斑鳩を見つめている。霧夜は斑鳩の様子に気づいたようだ。分からない四人に霧夜は説明する。
「お前たち…前にも話した通り、敵が忍学生に危害を加えたことは知ってるな？」
「は、はい……それは……」
「……まさか」

柳生も三人よりいち早く気付いた様子だ。
「忍に危害を加えた敵……ソイツがヒーロー殺しステインであると分

かった」
「「!!??」」

飛鳥、葛城、雲雀の三人はその真実を知り驚きを隠せない。

「多くのヒーローを再起不能…更には殺人を繰り返してきた最悪の敵……そしてその名が全国に広まり、全国指名手配された敵ですね？」

斑鳩はそう言うと、霧夜は頷く。

「ああ…被害が出た四名の悪忍は、二人は極上忍、もう二名が特上忍だそうだ……極上忍は再起不能となり、二名の特上忍は……殺されたそうだ……」

「そ、そんな……なんなの……ソイツ……」

飛鳥はヒーロー殺しステインの強さに驚愕する。

忍にはランクが存在する。

下忍、中忍、上忍、隠密、特上忍、天上忍、極上忍。

他にも一般的に知られてないのも存在する。

餓忍、絶忍、轟忍、虚忍、影忍、殲忍、卍忍、朧忍、秘忍など。

だがそれでも充分、特上忍や極上忍は強い。にも関わらずステインと呼ばれる敵は一人で殲滅したそうだ。その敵になす術もなくやられたと報告があった。

「襲撃してきた敵より強いのかな……？」

飛鳥はステインとやらの強さのあまり、自信をなくしてしまう。

「そこまではよく分からんが……だが、お前たちもくれぐれも気を付けてくれ…この忍務はお前たちだけじゃない、全忍に命令が下されて

いる」
「ま、マジかよ……」
全国指名手配されてる敵に、忍にも指名手配されてることを聞き、葛城は目を丸くする。
それほどヤバい敵だと、この場の皆んなは分かった。
そんななか、霧夜は飛鳥たちの緊張を解くために、笑顔で生徒たちに気合を入れる。
「まあ何がともあれ！敵の襲撃でお前たちは本当に良くやった！くれぐれも注意し、気をつけながら、続けて調査をしてくれ！以上だ！」
「「はい!!!」」
五人は、霧夜の気合を受けて、活気な声で返事をする。
そんなことから飛鳥たち三人は、半蔵学院から雄英高校に登校し、1ーA組のクラスに入ると、昨日襲撃が起きたのが嘘みたいに賑わっている。飛鳥たちがクラスに入ってきたことに気付いた上鳴は飛鳥たちに振り向く。
「おお！飛鳥たちおはよう！」
「おはよう！上鳴くん達、昨日の襲撃あったのに随分と賑やかなんだね…？」（汗
飛鳥はそんな上鳴たちに苦笑いを浮かべる。
「いやー！だってさ、朝の登校中から殆どの皆んなが俺ら見に来てさ!!『敵の襲撃大丈夫だった!?』とか、『敵が来たのに乗り越えられたなんて凄い！』とかって言われるんよ！なんかそう言う風に褒められた

りすると、俺らちょっと有名人っぽい感じがしてさ……！」

上鳴は嬉しそうな顔で自慢げに話す。飛鳥たちは忍であり、存在そのものは秘密のため、皆から褒められるような事はないし、まず襲撃があったことを知るものは裏の社会の忍だけだ。

「有名人か～……雲雀もなってみたいな～!!あっ、でも忍だから無理だ……」

「でもでも、忍の世界だと褒められたりするんだろ？そんで実績積み上げていけば有名になれるし……ある意味有名人にはなれるんじゃねーか？そう言うところはヒーローと忍は変わらないよな！有名人にはなれるぞきっと！」

落ち込む雲雀に瀬呂が励ますと、雲雀は「う～ん？」とイマイチ納得できないのか、曖昧な返事をする。

すると、突然チャイムが鳴り始めた途端に…

「おはよう…」

顔中に包帯を巻いてる相澤がやって来た。

「「「お、おはようございま～す……」」」

皆んなは相澤の顔を見て、声低く挨拶をする。

「うわあ…顔中包帯だらけ、大丈夫かなあ？ミイラみたいだね」

「ひ、雲雀さん……!!余計なことは……！」

「え～？だって～……」

雲雀の突然な答えに緑谷は慌てて雲雀に注意する。

「相澤先生、ケガは大丈夫ですか？」
「大丈夫だ……てか俺のことは気にしなくてもいい……あのバアさん、大袈裟過ぎるだろ」

蛙吹が手を上げてそう言うと、相澤はため息をつき蛙吹にそう言った。ぶっちゃけ言えば大袈裟ではない、何しろオールマイト並みのパワーを持つ敵に、顔掴まれて地面に何度も埋められるよう叩きつけられたのだ。逆に包帯を巻いてない方が可笑しいくらいだ。

「ぶっちゃけ言えば、お前らご苦労様だ……特に今のところ飛鳥たちの存在は世間にはバレてねえ…それに国家機密の忍び組織や上層部もなんとか事件を揉み消してる……だが、いつバレるかは分からねえ…昨日の襲撃みたいに敵に襲われる可能性も無いわけじゃない……だから、お前らもくれぐれも気をつけろよ」

「はい！」
「分かってる…」
「うん！」

相澤のセリフに、飛鳥、柳生、雲雀の三人は頷くと相澤は納得したのか、話を続ける。

「んで、本題なのが最も他でもない、大きな事件がある訳なんだが……」
「お、大きな事件…？」
「また、敵の襲撃かぁーーー!??」
「おいそこの紫チビ、煩いぞ」
「……」

相澤の大きな事件という言葉に、緑谷は眉をひそめ、峰田は手で頭

を押さえながら叫び出す。そして柳生が峰田にそう言うと、峰田は柳生を無言で虚しく見つめる。そんな彼ら、彼女らのざわめきも御構い無しに、相澤はこう言った。

「『雄英体育祭』が迫ってきてる」

「クソ学校っぽいのキターーー!!!!!!やったー!!!」

クラスは歓喜の声で溢れ返った。

「雄英…？」
「体育祭？」
「運動会〜？」

飛鳥と柳生は何のことか分からない様子で、雲雀は運動会と勘違いしている。

雄英体育祭。それは日本に於いて、かつてのオリンピックに代わる大規模な行事だ。
全国のヒーロー達がスカウトするために観に来る場所でもある。しかもソレはネットやテレビなどで放送されるので、ヒーローのみならず一般人の市民も見ることが出来るのだ。

「という訳だ、分かったか？敵の襲撃如きで中止にする訳にはいかないからな」
「いやそこは中止にしよ!?」

顔が包帯で巻かれてる、ミイラ化した相澤が言うと峰田は冷や汗を垂らしながら中止にして欲しいと願っている。

「峰田くん、もしかして体育祭知らないの!?」
「いや、知ってるよ…！ただ、敵が襲撃して来たのにまた襲撃して来る場合も考えられるだろ？」

心配する峰田がそう言うと。

「その心配は要らん、多くのヒーロー達がスカウト目的で観に来るんだ。またコレは敵への警戒する立場になると言っても良い」

相澤はサラッと解説をした。
毎年恒例としてやっている基本中の基本のため、敵が来る心配はないとのこと。

「まあけど、確かに体育祭だったら尚更良いとこ見せねーとな！ヒーローの本性だぜコレ！」

漢気熱く燃え上がる切島は、両拳をガチン！と打ち付け金属音を鳴

らす。

「ふむ、となると『兄さん』が来るなら良いところを見せないとな…！これも飯田家の名を恥じない為にも！」

飯田は腕を変な感じにグネグネと動かす。飯田家は代々伝わるヒーロー家であり、あの有名なヒーロー、インゲニウムの弟だ。つまり飯田の兄も来る可能性が高いと思われる。

だからこそ飯田はいつも以上にテンションが高いのだ。

「なるほど……オレたちはどうするんだ先生？」

疑問を感じた柳生は手を挙げる。

「お前たち三人は残念ながら出ることは出来ない……そのためお前たちは応援側として居てくれりゃ良いよ」

相澤はそう言った。

「え～!!雲雀も運動会やりたいよ！」

「雲雀、運動会と体育祭は違えからな？」

「でも体育祭と運動会って何が違うんですか先生??」

雲雀の子供じみた発言に注意する相澤に、雲雀は運動会と体育祭の違いが分からず首をかしげる。

「お前……本当に忍学生なんだよな？……まあいい、いいか？体育祭と運動会の違いってのは、『やること』『目的』『主体性』だ。あと『教育課程』によって違う」

「雲雀、そんなの分かんない!!」

「オイ、最後まで聞け」

雲雀は目をつむってそう言うと、相澤はため息をつきながらも、手に頭を置く。

「運動会は体を使い、動かすのが目的だ。だが体育祭は体育の授業の成果を発揮させることが目的だ。まあ雄英からすりゃあ、今までの訓練と己の努力を発揮させる事だな。あと運動会では、先生が主に主体となって開催し、運営を行うんだ…だが体育祭は生徒が主に主体となり、運営を行うことだ。分かったか？」

「へえ～～…そうなんだ……ふう～～ん……」

（なんだそのつまらなさそうな反応は…）

相澤の説明が面白くないのか、雲雀は口を尖らせる。相澤は心の中で雲雀の反応に突っ込んだ。

「まあなんだ、とにかくだ。何がともあれ体育祭までには二週間ある。時間は有限、合理的にその時間内で準備しとけよ。年に一回…計三回だけのチャンス　ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ！まあ以上だ次の授業の用意しとけ」

相澤はそう言うと皆んなは渋々頷いた。ただでさえ昨日の敵の襲撃があったと言うのに、体育祭をやらなければならないのか…と。

放課後。

「なんやかんやで体育祭か…!!燃えてくるな!!」

「けど体育祭か～…雲雀出たいって言ってるけど、仕方ないよな～」

切島は拳を天にかざすように腕を上げ、尾白は体育祭に出れなく

て、悲しい顔をしている雲雀を見つめる。
「うう～…雲雀、運動会出たかったよ……」
「いや、だから運動会じゃないからな？」
また運動会と言った雲雀に、瀬呂は突っ込む。
「心配するな雲雀、体育祭の時は一緒にお弁当食べよう」
「柳生ちゃん…！　うん!!」
柳生が雲雀を励ますと、雲雀は一気に様子が変わった。そんなやりとりをしてると、話を上鳴は話を変える。
「なあ、前々から思ったんだけど…オレたち飛鳥たちのこと知らなくね？」
上鳴の発言に、皆は三人を振り向く。確かに忍びという存在を知っただけで、彼女たちのことは余り知らない。
「確かに、言われてみれば……」
「……」
砂糖と口田は頷き、峰田は血相を変えた目で三人をギロ目してる。
「それはそうだけど……っていうか、凄い今更な感じだね」
「た、た、確かに…」（汗
飛鳥の発言に、頷く緑谷。すると爆豪は席に立ち上がる。
「ケッ……クソ下らねえ……お前らモブ共はモブ同士でバカやってろよ……」

爆豪は吐き捨てるようにそう言い、荷物を持って帰ろうとすると……

「でもさ！飛鳥とか柳生とか超えたいって言ってたし、知るのも良いんじゃねーか爆豪！」

「五月蝿えぞクソ髪!!余計なこと言ってんじゃねえ!!!」

切島の清々しい表情に、爆豪は思わず掌を爆破させ怒鳴る。

「わ、分かったから二人とも、そろそろ良いかな？」

「おう良いぜ飛鳥！」

「わーったから早よしろやデカ乳女!!」

「で、デカ乳女!?なんでそんな酷いこと言うの？爆豪くんはもう！」

「はぁ!?酷くねーよ!!それがテメェの名前だ!!」

「そんな名前じゃないもん!!私には飛鳥っていう名前があるんだから!!」

「知るかあぁぁぁーーーーーーーー!!!!!!」

切島は親指をグッと立てるが、爆豪の発言に、飛鳥と爆豪はお互い反論し合っている。

そんなやりとりがあって、落ち着くと飛鳥たち三人は改めて自己紹介をする。飛鳥は自己紹介に慣れてないのか、顔を少し赤く染めて緊張している。

「い、今更ですが……わ、私は飛鳥です…！最初に名前を言うことは定番…だからね??あっ、ええっと……誕生日は9月8日。趣味は修行で、好きな食べ物はじっちゃんの太巻き!!です！改めて宜しくね！」

飛鳥は満面な笑みを向けると、皆んなはどっと声を上げた。

「おおお!!修行か…!飛鳥って努力家なのな!オレも好きだぜそういうの!!」
切島は拳を握りしめ、熱くなる。
「うえええいい!!」
上鳴は発狂、そして…
「じっちゃんの……太巻き……じっちゃんの太巻き……?じっちゃんの……?じっちゃんの!?!?」
峰田は目が充血し、鼻血は出てるわ口からヨダレは出てるは、まじまじと飛鳥の身体中を見ながら、息遣いは荒く、えらく興奮している。そして次第にじっちゃんの名前を連呼している。峰田の様子に気付いた飛鳥は、首を傾げる。
「え、ええっとね〜…?峰田くん、なんでそんなに息遣いが荒いの?あと鼻血……出てるよ?」
「これは鼻血じゃねえ…アレだよ…今日の朝、パい…じゃなかった、パンにチーズのっけてケチャップ大量にぶっかけたせいで、ケチャップ摂取し過ぎで鼻からケチャップが出てきたんだよ……」
「ケチャップって何回言うんだよ」

峰田の言葉に、瀬呂は突っ込む。
(……待って?オレ突っ込んでしかなくね!?)
瀬呂は心の中でそう叫んだ。突っ込みを入れて…

「ところで、飛鳥。太巻きってデカイのが好きなのか?」
「うん!大好きだよ!!私ね、おっきいのが欲しいの!!」
「ブハッ!!」
飛鳥に質問した峰田は、鼻から血を出して卒倒する。

「み、峰田くん!?大丈夫?」
「あ、飛鳥……ヤベェ、ハードル高えよお前……」
「な、何言ってるの…?」
峰田の意味深な発言に気づかない飛鳥は、首を傾げて峰田を心配す

る。そんな峰田は飛鳥にすがるように目を向ける。

「あ、飛鳥…」

「な、なに？どうしたの？」

「オイラ…大量出血で死にそうになったら…飛鳥……抱きしめて…お前のおっぱいで、オイラの顔に押し付けるよｕ」

「峰田ちゃん、いい加減にして貰えないかしら？」

ドシュッ!!

「グハァ!?」

突如、正義の鉄槌の如く、蛙吹は自分の舌で峰田の額を高速で突くと、峰田は額を押さえてうずくまってる。

「飛鳥ちゃん大丈夫？」

「あ、ありがとう…蛙吹さん……」

飛鳥は蛙吹にそう言う。蛙吹なら風紀委員とかやってくれそうな感じが伝わる。

「自業自得…」

「葛城を見てるみたいだ……」

常闇と柳生は、峰田を見て呆れている。

「そ、そんなことより…続きしよ？次は雲雀ちゃん！」

飛鳥は話を戻すと、今度は雲雀に振った。

「私か～！うん、私は雲雀だよ!!誕生日は２月１８日、趣味はテレビゲーム！好きな食べ物は甘い食べ物全般！お菓子とか色々だね！雲雀も改めて宜しくね!!」

雲雀も飛鳥同様に満面な笑みを向けると、おおお！と歓喜な声を上げる。

「甘いものか…！オレも好きだぜ甘いの！てか、むしろ俺のパワーになるし、雲雀と俺だとなんとなく相性いいかもな！今度お菓子ご馳走するぜ！」
「砂糖くん！本当にいいの!?」
「お、おう！／／」
砂糖は雲雀の小動物系の可愛さに、頬を赤く染める。

砂糖力道　個性『シュガードープ』
糖分１０ｇにつき3分間パワーが5倍。しかし糖をパワーに使うと、次第に脳機能がダウンしてくのが欠点、パワー増強系の個性

「オイ、そこのデカ物」
「なあ、砂糖…」
砂糖は振り返ると、柳生と峰田が血相変えた恐ろしい目で、砂糖を睨みつける。
「で、デカ物!?待て柳生、俺は砂糖だ！いや知ってると思うが……あと峰田までどうした!?」
砂糖は冷や汗流しながら、怖いものを見てるかのように後ずさりする。

「雲雀を……オレの雲雀をおぉーーー!!許さん…貴様は許さん……!!」
「へっ、柳生…今回は気が合うな……オイラも、さと…いや、このデカ物を許せねえぜ!!雲雀を物で釣ってカップル誕生させんじゃねえ!!!」
「ま、待ってくれ！俺はそんなつもりじゃ……てか柳生！雲雀はお前のものじゃねーぞ?!あと峰田、さっき飛鳥にセクハラ発言したお前がなに言ってんだ?!あとさり気なく砂糖とデカ物言い換えてるし！」

柳生と峰田が襲いかかるのを避けながら的確に突っ込む砂糖。雲雀は遊んでると勘違いして、ニコニコな笑みを浮かべている。

「チッ……オレの真逆じゃねーか、甘いものとかクソ下らねえ……てか要らねえ……」

「!?」

ここで以外な人物、爆豪が呟くと、雲雀は頬を膨らませて反論する。

「ひ、雲雀は好きなものを言ったまでだもん！好きなものをとやかく言わなくてもいいじゃん!!」

「アァ!?そんなの知ったことか！俺は辛い食べ物が大好きなんだよ!!ただ真逆だって言っただけじゃねーかピンク野郎!!」

「雲雀にだってちゃんとした名前があるもん！雲雀っていう名前が！ピンクなんてそんなの皆んな見れば分かるよ!!そんなに怒らないでよ！」

「だぁかぁらぁ!!んなもんクソどうでも良いんだよ!!テメェがオレの神経逆撫でするからだろ!!爆殺すっぞ!!」

「やっぱり雲雀この人嫌い!!大っ嫌い!!べ～!!」

雲雀は舌を出して、馬鹿にするような仕草をとると…爆豪爆発。

「だったら今すぐテメェを兎のミンチカツにしてやろうかあぁ!!??」

ボーーーン!!と掌を爆破させて威嚇すると、やはり雲雀は震えて泣き出す。

「もう嫌だこの人～!!」

うえええぇ～～～ん!!と泣く声が、部屋中に響いた。緑谷と八百万

は泣き出す雲雀を慰める。と、同時に…

「爆豪よ…お前はオレに、雲雀にやってはいけないことをやってしまった」

柳生は怒りの目で爆豪を睨む。

「はぁ!?なんでテメェは毎度毎度、話に割り込んでくるんだ!!その眼帯もぎ取ってテメェもミンチにしてやろうか!?」

「やれるものならやってみろ……」

「ちょっと待って!落ち着いて二人とも!!ね?ね?自己紹介なんだしさ……柳生ちゃんも気持ちは分かるけどさ……」

飛鳥が二人の喧嘩に止めに入りそう言うと、爆豪と柳生はお互い背中を向ける。

「えっと…次はってよりも最後かな…柳生ちゃん!」

飛鳥はそう言うと、柳生はこくりと小さく頷く。

「改めての自己紹介…柳生だ。誕生日は12月23日…趣味は寝ること。好きな食べ物は、ひば……イカ、スルメ。以上だ…」

柳生のクールな答えに、皆んなはおおお…と驚くように答える。

「いやいやいや、柳生…さり気なく好きな食べ物雲雀と言いかけたろ…」

「そんなことはない…」

瀬呂がそう言うと、柳生は否定する。

「ひ、雲雀を食べるって……エロいよね……」
「ふえ?どうしたの峰田くん?雲雀の顔に何かついてる?」

峰田は雲雀をいやらしい目で見つめると、雲雀はそんな峰田に首を傾げる。そして、それを見た柳生はそんな峰田を番傘でホームラン。

ぎゃあああぁあーーー!!という悲鳴が教室中に響いた。

「寝ることかー!!でも寝てると気持ち良いよねなんか!」

芦戸は元気な声でそう叫ぶ。

「イカとスルメ……か、柳生…イカスミパスタは食べるか?」
「イカ系なら全て食える……」
「そうか…!俺もタコとイカは好きでな……今度良ければイカ系の料理食べに行かないか?」

障子がそう言うと、その話を聞いた雲雀は目を輝かせて「雲雀もいくいくー!」と言いだした。すると柳生は意外な表情を浮かばせた後、咳払いする。
「ひ、雲雀が行くというなら…お、オレも仕方なく行こう……」
「うわぁ!障子のヤツ先越しやがっな!!ナンパ何気に上手いよなアイツ…なあ耳郎」
「いや知らないし……たまたま好みで気が合ったんじゃない?」

上鳴はちぇ〜と呟くと、、耳郎は呆れた顔で上鳴にため息をつく。もちろん障子本人はナンパという意味で誘ったわけではないが…

「だったらオレも連れてけよ!!障子!」
「??別に、構わんが…?」
(((良いのかよ!!??)))

上鳴自身も、皆んなは心の中でそう叫んだ。

「ちょっと待て！まだ自己紹介で皆んな言ってねえことがあるぞ！」

「??」

三人は峰田に首をかしげる。やってない事？それは

「お前ら、スリーサイズの紹介もしてく」

「峰田いい加減にしろ！」

ベチッ！

「あだぶっ!?」

耳郎はセクハラ峰田にビンタする。

「あっ、そうだ！」

すると突然芦戸が飛鳥に声をかける。

「なあに？芦戸ちゃん？」

「突然だけどさ！皆んなで半蔵学院に行かない？」

「!!??!!」

芦戸の突然な提案に、皆んなは驚く。

「ど、どした芦戸？そんな急に……」

切島は芦戸にそう言うと、芦戸は満面な笑みで、腕をブンブン振り回す。

「だってだって!!私半蔵学院知らないもーん！それに飛鳥ちゃんたちのクラスとかも知らないし…それにどんな学校かも見たことないしさ！てか流れ的に有りじゃね？」

「そ、そりゃあそうだけどよ…」

芦戸の言葉に、切島は反論できない。

「で、でもさー!忍とかだから無理なんじゃねーか?」

「確かに瀬呂の言う通りだな……」

瀬呂の言葉に同意する障子。しかし…

「ええーー!だって忍のこと知ってるの私達だけじゃん!それに前に緑谷くんと轟くんだって半蔵学院に行ってたわけでしょ!?二人だけなんてそんなのズルイずるい!!」

「え、ええ!?」

「……」

芦戸の正論に皆んなは反論できず、緑谷は突然自分の名前を呼ばれて驚き、轟は真顔で無言だ。

「ま、まあ……でも、良いかな?別に……皆んなにあんまり気付かれないように……または一般の人たちが下校したらなら良いのかも……」

「後者だな…」

飛鳥がそう提案すると、常闇は後者の方が良いと言う。確かに気付かれないようにとはまず無理だろう。葉隠なら問題ないが……雄英で敵の襲撃があった連中は、かなり人気者になっている。その為、次世代のヒーロー達?などと言われてることもある。そんな有名な生徒達が、一般生徒達が多い時に半蔵学院に行けば必ず目立つ。

「まあ、それなら良いんじゃね!?あっ、でも忍学生もそのくらいの時間で下校しちゃうんじゃね?」

「その点については心配いらん……オレたちは本校の生徒にして、生徒であらずだからな」

「お、おう!?よく分かんねーが…つまりだ柳生、大丈夫って事なんだな!?」

柳生の言葉にイマイチよく理解できてない切島は、なんとか納得した。

「となると、時間は何時からだ？」
「5時くらいが丁度良いだろう……」
「よし、その時間に皆んなで行こうぜ!!」

瀬呂がそう言うと、皆んなは納得したようだ。

んで5時、半蔵学院。

一般生徒達が少なくなった半蔵学院の校門前で皆んなは驚いている。

「う、うおおぉーーー!!!デケェ！」
「こ、これが……半蔵学院？」
「おお、雄英高校に負けないくらいデカイな…！」
「一般生徒たちも飛鳥達みてえなデケェ胸のあるヤツいねえのか!?」
「峰田ちゃん、通報するわね」
「なんやかんやで凄そう！」

皆んながワイワイ騒いでるのを見て、飛鳥は何処となく微笑ましい気持ちになった。

「皆んな喜んでるみたいだね！連れてきて良かったよ」

「まあな」
「えへへ！こう言うのって、なんかイイね！」
三人はそう呟くと、皆んなは中に入っていく。
アレから色々な場所を回ると、飛鳥たちは、最期の部屋…忍学科の教室に行く事にする。そのため隠し通路で行く事に決めた。
「おお！こんなところに隠し通路とか……マジで忍びって感じだな！いや、忍びなんだけどよ……！」
「フッ……隠し通路か……良い」
切島は興奮して、常闇は隠し通路が気に入った様子だ。
「フーン……忍びってんな面倒くせえことしなきゃならねえのかよ……」
「おーおー爆豪ー、どした？なんか気に触る事でもあったか？」
「ねーよクソ髪!!別に何だって良いだろうが!!」
爆豪は軽く怒るように怒鳴る。でも確かに爆豪の性格だと、面倒くさいと思われても仕方ない事だろう
「そろそろ着いたよ！」
飛鳥がそう言うと、目の前には何もない壁がある。
「??何もねーぞ飛鳥ちゃん？」
「黙れアホ面、何もねえわけねーだろ」
何もないと言う上鳴は、爆豪にアホ面と言われ、かなりのショックを受けて落ち込む。

「お前、意外と分かってるんだな……見た目は単細胞に見えるが、案外繊細なんだな……」
「アア!?んだとゴラぶっ殺すぞ眼帯やろう!!」
爆豪は柳生の胸ぐらを掴むと、柳生は睨みつけ、爆豪はさらに睨む。
「あ、あのね!?そろそろ良いかな二人とも!!」
「爆豪くん!本当にやめたまえ!男性が女性に手を挙げるなど、承知の沙汰じゃないぞ!!」
「は!?問答無用だメガネ!!」

……そして、彼らの言い争いが終わり、忍学科の教室に入った。
「うおお!スゲェ……中こんな風になってるんだ」
「和室か」
上鳴が感心するよう呟くと、轟は自分の家のように見渡してる。
「アレ?葛姉に斑鳩さんがいないな……まだ修行中なのかな?」
「だろうな…」
飛鳥は周りを見渡してそう言うと、柳生は軽く頷く。
その時だった。
ドロン!!
「!!??」

部屋に煙が巻き起こる、その正体は……

「おお飛鳥たち、帰ってきたのか」

「き、霧夜先生!?」

「こ、この人が!?!?」

「飛鳥たちの担任か」

皆んなは霧夜先生を見て驚いている。何より登場の仕方と、突然現れた事だろう。霧夜は皆んなに頭を下げて挨拶する。

「初めまして、雄英生徒の諸君たち」

「は、は、初めまして……!」

「オレと緑谷は初めましてじゃねえけどな」

皆んなは驚く様子で挨拶し、轟は冷静だ。

「ちっ、女教師かと思ったがや……」

「峰田ちゃんサイテーね」

「なっ!じょ、ジョーダンだよ!!」

峰田の煩悩溢れた言葉に、蛙吹は睨むと峰田は慌てて言い訳をする。

「それにしても、なんかスイマセン!お邪魔してしまいまして!」

「ハハッ、気にするな。飛鳥たちの仲間とあれば問題ないさ」

切島の礼儀正しい姿に、霧夜は感心する。するとそこへ…

「アラ？飛鳥さんたち…それにその人たちは…」
「おっ!?飛鳥たちの友達か？」
飛鳥たち皆んなは振り返ると…
「あっ！斑鳩さんに葛姉!!」
「「「ええええーーー!!!???」」」

飛鳥以外の忍学生がいた事に、皆はその場で驚愕した。

雄英の生徒たちの説明が終わると、三人は納得した。

「なるほど、そう言う事だったのか」
「それで此処に…」
「良い乳持ってる奴が一人いるじゃねーか!!」

霧夜と斑鳩はまともだが、葛城はよだれを垂らして宝物を見てるかのような目で、八百万の胸をマジマジとみている。

「な、な、何ですの……!?」

八百万も流石に葛城の態度にたじろぐ。

「葛城さん、おやめ下さい！」
「ちぇ～……」

斑鳩の注意に、つまらなさそうに反応する葛城。

「おい、やべえ……やべえよ……!!金髪美女に黒髪ロングの美女……二人とも巨乳だ!!よりどりみどりだぜぇ……」
「皆さん、峰田ちゃんを煮るなり焼くなりして下さい」
「待てよ蛙吹！何言ってんだよ!!」

峰田の言葉を聞いた蛙吹は、無表情でそう言う。

「アレ？けどなんでその二人は雄英に来なかったんスか？」

切島は首をかしげる。

「ああ、コイツらは3年だからな…卒業試験も待ち構えてるしな」
「「「!?!」」」

皆んなは二人が3年だと知り驚いた。

「な、なるほど……だから此処で授業受ける仕組みだったんですね……」

八百万は納得したように頷く。

「てか、この二人のことも知らないよな……」
「確かに……」

そう言うと、斑鳩は咳払いをする。

「そ、それなら私たちが自己紹介しましょう……！」

「「待ってましたあぁぁーーーーー!!!」」

「!?」

皆んなは自己紹介して欲しかったのか、みんなの大声に斑鳩はたじろいでしまう。

「ええっと…初めまして、私は斑鳩と申します。誕生日は7月7日、趣味は読書で、好きなものは懐石料理と日本茶です……因みに私は学級委員長です！もし今後とも協力する機会があれば、宜しくお願いしますね」

おお～…!!と皆は感心する。

「ほほう……なるほど、同じ学級委員長として、是非とも!!」

飯田は斑鳩が学級委員長だと知り、大きく感激する。

「貴方も同じなのですか？」

「はい！雄英高校1ーA組学級委員長!!飯田天哉と申します！此方こそ何卒宜しくお願いします!!」

「はい!!」

「おい、意気投合してるぜ飯田の奴……」

瀬呂は指をさして呟く。

「次はアタイか……アタイは葛城だ!!誕生日は11月5日！好きなものはラーメンで、趣味はセクハラだ!!」

ブーーーーーッ!!!!と皆んなは葛城の大胆発言に吹き出してしまう。

「か、葛姉……皆んな見てるんだから……!!／／／」
「ありり～？飛鳥、セクハラやって欲しいのか～？」
「そんなことありません!!」

飛鳥は赤面する。それを見た峰田は、この時。

（オイラも、あの人みたいにセクハラしてえ……!!頼めば師匠にしてくれるかな？）

良からぬ方向へＰｕｌｓｕｌｔｒａしてしまったのである。

皆んなも自己紹介するも、もう時間は大分経ち…すっかり暗くなってしまった。皆んなは一礼すると、その場で帰る事になった。

「それにしても、雄英の生徒たちは個性溢れる人たちばかりだったな…」

霧夜は生徒たちに感心する。

「それにしても、中々いい生徒たちでしたわね……特に飯田さんのような真面目な生徒が居ればもっと良いのですが」

斑鳩は飯田とはウマが合うようだ。

「アタイはあの八百万って奴が気に入った！」
「貴方の場合は胸でしょ！」
「シシシ～！バレた？」
「バレバレです！」

斑鳩は葛城に突っ込む。

「あっ、そうだ雲雀先に部屋に戻ってるね～！」

雲雀はそう言って部屋に戻ったのである。

今日は何気ない平和な日常であった。しかし、まさか次の日から…とんでもない事件が起こるとは、まだ誰も知らなかった……

蛇女子学園にて

凛…いいや、鈴音はお面と鎧を着て、最上階に居る蛇女の投資者であるオーナーに頭を下げている。道元は、右目に刀の傷痕が残っているのが特徴だ。

「道元様……指揮官である私に無視をして、『春花』に独断命令を出したと？」

道元と呼ばれる男に、鈴音は声には出してはいないが、静まる怒りを心の中に湧かせている。

「『超秘伝忍法書』を略奪するのは重要なる忍務だ……私が命令を出しても問題あるまい？」

道元はニヤリと笑みを浮かべながら呟いた。

「此方には超秘伝忍法書の選ばれし者が出ていません…それは善忍である向こうもまた同じです！それなのに何故…」

「別に超秘伝忍法書を略奪するのは、早くたって良いじゃないか？どうせやる事は同じだ……それにオーナーである私の言うことが聞けないのか？鈴音よ…」

「……っ!!」

鈴音は噴火する怒りを堪える。そんな鈴音に、道元は話し続ける。

「それに手遅だ……今頃春花は『半蔵学院』に潜入している」

「!?!?!?」

道元の言葉に鈴音は驚愕する。もうそんなに早く春花と道元が動いていたことに、鈴音は驚きを隠せない。

「も、もし……隠と陽の超秘伝忍法書が合わされば……とんでもないことになるんですよ!?」

「安心しろ鈴音、そのために私が『管理』をするのではないか……」

道元は勝ち誇った笑みを浮かべてそう言った。

そして鈴音はこの時確信した……道元という外道な男が何をしやらすのかを……

（俗物が……!!こうなれば……私は、ある手段を使うしかないな……）

鈴音は心の中でそう言うと、「かしこまりました…失礼します」と言い、その場を去った。

そしてこの夜……雲雀の部屋。

雲雀は疲れてしまったのか、ベッドの上で眠っている。そして机の上には春花に貰った巻物がある。その巻物が妖しく光る。そしてその巻物から……

『さあ……約束の時よ……動きなさい、私の可愛いお人形さん……』

ドクん……!!

そして……超秘伝忍法書が奪われた。

21話「蛇女子学園と雲雀」

翌日。飛鳥たち半蔵学院の生徒たちは、霧夜の話により収集させられた。その話とは……

「「「「ええ!!??超秘伝忍法書が奪われた!?!?」」」」

五人は大きな声で叫び出し、霧夜は生徒一人一人を見渡す。

「ああ、先日の夜中にな。警備は以前より強化してあり、そして警報鳴らず…となると、信じ難いが超秘伝忍法書が奪われたのは、お前たち五人の誰か……という訳になる」

「わ、私達はそんなことしません!!!それは絶対に!!!」

「分かっている、飛鳥……その気持ちは俺も同じだ。だが奪われたのも事実だ……」

飛鳥は霧夜に真剣な眼差しを向けると、霧夜も真剣な眼差しで飛鳥を見つめる。

「となると、一体誰が……？まさかだとは思いますが、雄英高校の生徒たちでは？」

斑鳩がそう言うと…

「でもよ、雄英の奴らは此処に来るのは初めてなんだぜ？だったら超秘伝忍法書が何処にあるか分からねえだろ？第一分かってたとしても、認証とか必要だし……」

「葛城の言う通り、確かにまず雄英の生徒達はあり得ないだろうな……」

葛城が反論すると、霧夜は納得したかのように頷く。

「でも、何のために……？」

雲雀は首を傾げる。

「とにかく、一時期自室に戻って部屋で待機だ!!それと飛鳥達三人もだ……このことについては勿論半蔵様も知っている、そして雄英の関係者にだけ伝えるように言っている、だから雄英のことは心配するな」

「ええ…？あっ、はい……」

霧夜がそう言うと、飛鳥たちは頷いた。

雲雀は……

「う～ん？部屋で待機って言っても何すれば良いんだろ？いつもなら柳生ちゃんや飛鳥ちゃんだけじゃなくて、梅雨ちゃんと麗日ちゃん、芦戸ちゃんと楽しくお喋りしてるのに……」

雲雀はベッドの上に座り込み、ウサギの人形を抱きかかえて呟くと、ふと足元に何かが当たった。

「ん？何だろ？」

手を当てて取ってみると、それは…

超秘伝忍法書であった。

「え…？　ええ!?何でこんな所に!?!?!」

雲雀は慌てて部屋に出ようとしたその時。

バシュン！

長い鞭が超秘伝忍法書に巻きつき、雲雀の手から離れてしまう。

「ご苦労様……よくやってくれたわ、雲雀」

その聞いたことのある声は……

「ええ!?うそ…なんで此処に……

春花さん!?」

雲雀は驚くと、春花はニヤリと笑みを浮かべて、雲雀に近づく。

「『あの時』の約束、果たしてくれたみたいね」

「え?約束って……あっ」

雲雀は机の上にある巻物に視線を移した。そう、この巻物は『あの時』蛇女の選抜メンバー達が半蔵に攻め込んだ時に、春花から『お友達の証』として貰ったものであった。

「か、返して!!」

雲雀は手を出すものの、超秘伝忍法書は春花の胸に埋まれてしまい、消えてしまった。

「これで貴方は半蔵学院の、いえ……善忍全ての裏切り者になったわね……」

春花がそう言うと、雲雀は恐るおそる下を向いて、絶望な表情を浮かべる。

「別に良いじゃない?貴方はどうせ落ちこぼれなんだし……」

春花は雲雀の顔に近づきそう言う。

「ど、どうすれば……わたし、どうしよう……雲雀は……なんてことを……」

雲雀がそう言うと、春花は白衣のコートのポケットから、紙を取り出して雲雀に投げる。それを取った雲雀は、紙を見てみると…

「これって……蛇女子学園の？　」
「無理にとは言わない……でも、貴方にその気があるなら来なさいな……」
春花はそう言うと、大量の花びらを巻き起こして、その場で消えた。

そして３０分後
「大変だよ皆んな!!」
飛鳥は大声で部屋にいる皆んなが集まるように収集をかけた。皆んなは何事かと思い、部屋に出て集まる。
「雲雀ちゃんがいなくなった!!!」
「「「!?!?!?!?!」」」
三人は一斉に驚く。

それから霧夜も来て、雲雀の部屋に集まり中を見てみると、手紙とある巻物が置いてあった。その巻物は春花から貰った巻物だ。霧夜はそれを手に取ると……
「これは……念波発信器!?」
その巻物は念波発信器である。念波発信器とは、主が強い念を込め、相手に送ることで、愚術のように操ることができる。

「ま、まさかそれで雲雀ちゃんが操られてたって訳だったの!?」

飛鳥はそう言うと、柳生は机の上に置いてある手紙を取り読む。その手紙にはこう書いてあった。

『ごめんなさい…全部雲雀の所為です。悪忍に操られていたとは言え、私はとんでもないことをしてしまいました。でも超秘伝忍法書は必ず取り戻しに来ます！例え……この命に代えても……!!』

瞬間、柳生の脳裏には…

雲雀が死んでしまった姿が映し出された。蛇女の悪忍に、そして以前襲撃してきた敵に、雲雀が何度も殺され、死んでしまった姿を、脳裏に浮かんでしまった。内に沸く恐怖から生まれた残酷な幻覚が……柳生の心を……

「!!!」

瞬間。柳生は忍転身しその場から去るように飛び出した。

「「柳生（さん）（ちゃん）!!!!!!」」

三人は大声で柳生を呼び止めた、だがもう手遅れだ。だが三人も黙ってはおられず、忍転身し柳生を追う。

「柳生ちゃーん!!」
「おい柳生出てこい!」
「柳生さん!!」

飛鳥、葛城、斑鳩は柳生の名前を叫ぶものの、返事はない…

「どこに行っちゃったんだろ?」

飛鳥が辺りを見渡すと、ふとある物影が遮った。

「!?アレッて……柳生ちゃん……?!」

飛鳥はその物影を追った。

そしてかれこれようやく飛鳥は柳生を捕まえることに成功した。

「柳生さん!」
「そこに居たのか…」

斑鳩と葛城も、飛鳥と柳生に合流した。だが見るからの様子だと、柳生は涙目になりながら、必死に抵抗している。それを飛鳥は抱きしめ止めている。

「離せ……離せ……!!雲雀を……救けるんだ……!!!」

「落ち着いて柳生ちゃん!!それは私たちも一緒だよ!!」
「うるさい……煩いうるさい……!!!」

柳生は何度もそう言う。

「柳生落ち着けって！」
「柳生さん！ひとまず落ち着いて下さい!!」

斑鳩と葛城も止める。だが柳生は何度も何度も、必死に抵抗する。

「雲雀を守ると……あの時から……そしてあの後もずっと、ずっと誓ったんだ……!!!なのに、なのに……！オレはまた……雲雀を……」

柳生はとうとう泣き出してしまった。そしてもう体に力が入らなくなったのか、その場で泣きじゃくる。

「うううっ……っっ！　くっ……雲雀……雲雀ぃ……!!!!オレは……また、同じことを……」
「柳生ちゃん……」

柳生の泣く姿に、三人もしんみりとした状況になる。すると、飛鳥はポン！と柳生の頭を優しく撫でる。

「柳生ちゃん……ひとまず戻ろう？まずは落ち着いて……そこから探せば良いよ……なにも、柳生ちゃんの所為じゃないもん……」
「飛鳥……」
「だって…私たちが居るじゃない。なにも柳生ちゃんだけじゃないん

だよ？雲雀ちゃんを大事に思ってるのは私達だって同じだもん。大切な仲間だから」
「仲間……」
柳生はその言葉を聞いて、涙が溢れ出た。その優しさはまるで……雲雀が握ってくれた、優しい暖かい手のような……

一方、雄英高校では。
「「「「ハアアアアアアアアーーー

相澤はそう言うと、教室から出る。

皆んなは更に騒ぎ出し、クラス中が煩くなる。

「マジでヤバくね!?それ！」

「ああ、俺もそう思うよ……」

切島と尾白はお互い顔を見合わせて話し合っている。

「……秘立蛇女子学園か、前に半蔵に攻めてきたヤツらだよな？つーことは、あの悪忍も……」

轟は目を細めて呟く。あの悪忍、それは焔のことだろう。何故かは知らないが、轟にとって、焔という人物は印象強いようだ。

「雲雀さん……」

緑谷は窓から空を見つめて、小さく呟くのであった。

放課後。

「なあ皆んな」

声を掛けたのは切島であった。皆んなは切島の発言に振り向く。

「どした？切島」

蛇女子学園にて…

殺風景で、薄暗い空に、薄気味悪い森。雲雀はその中に歩いていくと……

「着いた……ここが秘立蛇女子学園……!!」

雲雀は春花から貰った手紙を頼りに、ここまでやって来た。すると……

「あら、思ったより早かったわね…雲雀」

そこには…

「は、春花さん!?」

物影に背を合わせて、嬉しそうな顔で雲雀を見つめている、蛇女の制服を着ている春花であった。

「私の話したこと、ちゃんと分かってくれたのね……嬉しいわ」

春花は感心して、優しい瞳で雲雀を見つめてそう言うと、

「雲雀はもう…半蔵学院には戻れないから……」

雲雀は下を向いて、寂しい目でそう言うのであった。

「でも、雲雀は半蔵学院の生徒だったんだよ? 蛇女子学園に入っても良いの?」

「心配しなくても大丈夫よ……悪いようにはしないわ…だから、安心しなさい。貴方の制服もあるから、それを着てから校内を見回りましょう」

春花は優しい笑みを浮かべて、雲雀の手をつなぎ歩いていく。

（雲雀、絶対に超秘伝忍法書を取り返すね!!絶対に……!!）

雲雀は心の中で、強くそう言うのであった。

しばらく経つと、春花と雲雀は外の大広場に出ていた。

「ここが訓練場よ、蛇女は莫大な財産で日本中から能力の高そうな生徒をスカウトするのよ、まあその分ハズレも多いけどね」

春花と雲雀は、ボロボロな武器の山を見つめる。

「これは珍客だな……」

「!?」

突然後ろから声がしたので、雲雀は振り返ってみると、そこには…蛇女の選抜メンバーのリーダーである焔と、詠、日影、未来の姿であった。

「誰やと思うたら、半蔵の生徒やないか」

「警備担当は懲罰ものですわね……」

日影と詠はそう言うと、春花はフフフと笑うと、雲雀の肩に手を置く。

「安心して皆んな、この子は私がスカウトしたの。今日からこの子は蛇女子学園の生徒よ」

「「「!!!??」」」

焔、詠、未来は、春花の言葉に驚く。日影は感情がないため、驚かないが……

「また……春花姉さまの悪い癖が……」

未来は呆れた様子でため息をつき、焔はジッと雲雀を見つめながら歩いていく。

「……お前、本気なのか?」

焔は真剣な眼差しで雲雀を見つめると、雲雀も臆することなく見つめる。

「ほ、本気です!もう……半蔵学院には戻れないし…居場所なんてないから……」

雲雀は寂しげを含ませた声でそう呟くと、焔は雲雀を見つめて、フッと笑うのであった。

「そうか、ではお前は今日から私たちの仲間だ」

「えっ!?」

雲雀は焔の言葉に驚き、ふと冷や汗が垂れた。そこには何の警戒心もなく、また敵意も感じないからだ。焔が笑顔で見つめると、残りの三人(日影以外)も笑顔で見つめる。

「え、ええっと……」

「どうした?」

「ひ、雲雀を疑わないんですか？」
「疑うって…何を？」
雲雀は焔の寛大さに、驚きを隠せないでいると、焔は雲雀の態度に不思議に思った。そんな焔に雲雀は質問すると、春花も首をかしげる。
「貴方…今まで敵だったヤツが簡単に受け入れすぎる……とか思ったでしょ？」
未来が眉をひそめてそう言うと、焔は真剣な目つきで物語る。
「善というのは、窮屈で差別的でしかない……だが、悪は善よりも寛容だ」
「それが善忍と悪忍の違いなのですわ」
焔の言葉に、詠もそう言う。
すると未来は目の前に出てきて雲雀に指をさす。
「とにかく私を無視したら、殺すから……」
「し、しませんしません！無視なんてしません！」
雲雀はそう言うと、「フン…」と未来はそっぽを向く。そして今度は詠は雲雀をまじまじと見ながら側に駆け寄る。
「ところで貴方…もやしはお好きですか？」
「え？」
「もやしよもやし!!」

詠の急なる質問に、雲雀は首を傾げる。

「え、あ…は、はぁ……別に嫌いではありませんけど……」

「そうですか！いえ、そうですわよね!!」

詠は目をキラキラと輝かせて、雲雀にもやしについて話し出す。

「良かったわ～…もやし話に付き合ってくれる人がいて」

日影は横目で雲雀を見つめてそう呟いた。

「……ん？」

「？どうした？」

詠が話してる中、雲雀が何やら思い当たるようなことに気づいた五人は、雲雀を見つめる。

先ほど、焔の悪の寛大の話を聞いて、雲雀は少し冷や汗を垂らして、思い出したくもないある人物を思い出した。

『子供を殺せば来るのかな？』

『同じ暴力が、ヒーローと敵でカテゴライズされる!!この世の中に!』

『俺たちは敵（ヴィラン）だぜ?殺して何が悪いんだ?』

それは危険人物である死柄木弔は、悪なんてレベルじゃない、もはや歪みと呼ぶべき人物だ。なら蛇女はこの人物も受け入れることができるのか?ましてやそれが、残虐だとしても??と考えてしまった。

「あ、あの……焔さん」

「なんだ?」

雲雀の呼びかけに、焔は首をかしげる。

「歪みを持った純粋な悪意ある人間でも、その人の大切なもの全てを壊そうとする人も、貴方たちは受け入れるんですか？」

「「「「「?????」」」」」

雲雀の言葉に一同は首を傾げている。

「どういう意味だ？」

焔は雲雀の言ってることが分からず、首を傾げている。

「あっ……！いえ！何でもないです、気にしないで下さい……」

雲雀はそう言うと、下を向く。

（どうして雲雀、こんなこと言ったんだろ??）

雲雀自身よく分からない様子でいる…が、それほど雲雀にとって、悪の歪みそのものである死柄木弔の存在は大きな影響を受けたという事だろう。

「まあ良いさ……とにかく、そろそろ修行の時間だ。行くぞお前たち」

焔は皆んなにそう言うと、雲雀に背を向けるのであった。そして雲雀は再び、春花に校内を案内される事になった。

同時刻、半蔵学院。

「ん～……悪忍養成機関だからな…　山奥ってのは分かったが……一体何処に蛇女があるかが問題なんだよな…」

「そうですね…」

斑鳩と葛城は山奥の、色んな地図を見て考えている。流石は3年生と言ったところだ。

「斑鳩さんに葛姉凄いなぁ……」

飛鳥はそんな二人をみて、何処か微笑ましくもあり、尊敬もしている。

「……」

ようやく落ち着いたのか、柳生はずっと黙っていて、涙はもう止まっている。皆んなが雲雀を探すように頑張っていると……

「お前ら！よく聞け!!」

ガタン！と隠し扉が開いた。見てみると、そこには紙切れ一枚を持っていて、息遣いが荒い霧夜の姿であった。

「き、霧夜先生!?どうしたんですか！」

飛鳥は、そんな霧夜にそう聞くと……霧夜はこう言った。

「秘立蛇女子学園の居場所が分かった」

「「「!!!???」」」

三人は驚く様子で霧夜を見つめるのであった。

数十分後

「ここに、雲雀が居るのか……」

紙切れの山奥には、赤いバッテン印が書かれている。どうやらそこが蛇女子学園で間違いはないようだ。そこには立ち入り禁止と書いてあり、蛇女子学園の関係者がそうするようにしたのだろう。

「でもさ霧夜先生、どうしてそれを知ったんすか？」

「うっ……それは聞くな……ただ、これからどうすればいいか…が問題だ」

葛城の質問に答えれない霧夜は、葛城にそう言う。

「そんなん突っ込んで行けば」

「ダメだ…上からの命令もなしに攻めに行くなど無謀だ…!!」

「けど向こうだって攻めてきたじゃないっすか!!!」

確かに蛇女子学園は、半蔵に攻めてきた。なのに半蔵学院だけ攻めに行ってはいけないなどと、向こうとしては勝手が過ぎる。何処その敵連合でもあるまいのにだ……

「確かにそれはそうだが……」

霧夜がそう言うと……

「ええじゃないか、これも子供のいさかいじゃ!!」

後ろから突然、半蔵の声が聞こえた。

「じ、じっちゃん!?」

「半蔵様!?」

飛鳥たちは半蔵が居たことに驚く。

「お主らも、好きなだけ行けば良い…」

「しかし半蔵様！それでは……」

霧夜がそう言いかけると、半蔵は覚悟を決めた目で、答える。

「全ての責任は、このワシ…半蔵が負う…！誰にも文句は言わせん……！」

半蔵がそう言うと、霧夜はもう何も言わなかった。すると今度は半蔵は、柳生の方に歩み寄り、頭に手を置く。

「それに……たった一人の仲間も救えんで、何が正義か……のう？柳生よ」

「は、はい……！」

いつも冷静でクールな柳生は、目の前の半蔵の優しさに、真っ直ぐ頷く柳生であった。その優しさは、平和の象徴オールマイトに似てるようで……

「よし！そうと決まれば……早速乗り込もうぜ!!」

葛城はそう言うのであった。そして四人は一斉に蛇女に乗り込む準備をしている。

「ほ、本当に宜しかったのでしょうか？半蔵様」

霧夜は心配そうにそう聞くと、半蔵は表情を強張らせる。

「安心せい…ヤツらだけじゃない……それに」
「それに…？」
霧夜は半蔵の様子に首をかしげる。
「何か不穏な気が感じるのじゃ……いや、飛鳥たちに行かせないといけない気がしてならないのじゃ……」
「半蔵様……」
半蔵は真剣な目つきでそう言うと、霧夜は、半蔵が何を言ってるのか分からないまま、ただ見つめるのでしかなかった。

そして、場所は変わり……
ある街の何処となく普通な建物、そこの建物中はバーとなっており、殺風景である。
オールマイトのポスターはビリビリに破れている。
その中には当然というべきか、以前ＵＳＪを襲撃した敵連合のリーダー、死柄木がある写真を二枚持っている。

「……」

死柄木はボリボリと首を掻きながらも、写真を見つめて…いや、睨んでいる。

そのカウンターで食器やグラスなどを洗っているのは、黒霧。ワープゲートの敵だ。黒霧は心配そうに死柄木に尋ねる。

「あの、死柄木弔。怪我は大丈夫でしょうか？」

「うるさい黒霧、つか今両腕両足包帯巻いてる…」

「それは失礼いたしました…」

心配する黒霧に、鬱陶しいと反応する死柄木。黒霧はそんな死柄木をたしなめる存在なのだ。

そんな時に……

コンコン

「？」

死柄木はノックが鳴った方に振り返ると、ガチャと音が聞こえた。

「アラ、こんにちは」

扉を開け、来たのは…水色の長髪をした少女だ。

二人はとにかく？を浮かべるしかなかった。なぜこの女性がここに来ているのか、どうしてこんな時間に？などと疑問を抱いている。

「あなたは一体…？」

「いやぁ悪いね黒霧くん、久しぶり」

するとそこへやって来たのは、メガネをかけた白髪のおじさんだった。

「…！『ブローカー』…！お久しぶりです。どうして此処に？まさか…」

「そうそう、アンタらの騒動で早速注目を浴びてるさ、『こっち側』ではね。その騒動でアンタら敵連合に入りたいってこのお嬢ちゃんが言うのさ」

視線を少女に向けると、黒霧たちも注目する。

「それにしても、此処が敵連合のアジトか……確かにアジトっぽい感じ満々だね!!」

その女性は、敵連合のアジトに感心する。

「オイオイ、そもそも誰なんだよお前は。勝手にはしゃぐな……」

死柄木は指を少女に向ける。

「ああ、言ってなかったね。私の名前は…

抜忍『漆月』よ」

漆月はクスっと笑みを浮かべる。

「抜忍？なんだそれ？」
「んーとね…元・忍び！いや、忍びかな？ある意味」
「はあ？なんで忍びがここに来てんだよ……マジでざけんな……オレは飛鳥ってガキとそのジジイに散々ウザい目に遭わされてんだ……黒霧、コイツお帰りだってさ、飛ばせ」
「まあまあ落ち着きましょう、死柄木弔」

ビリビリとした死柄木に、黒霧は面倒くさくなる前に止めに入る。ブローカーなんかはハハッと笑っている。

「人にはそれぞれ事情があります。彼女は何かしらの事情があって此処へやって来たのでしょう、何よりあのブローカーが一緒にいるという事は、我々の組織に力を貸してくれるという意味では？」
「まあそりゃあそうだな」

死柄木は冷静になると、抜忍の漆月は二人を見つめて言う。

「私は貴方たち敵連合に入りたいの、仲間になりたいってことよ」
「まあそれは分かりましたが…しかし抜忍とは何でしょうか？先生から聞いてるのは忍びという存在だけであって……」

黒霧が神妙にそう聞くと、漆月はハハハと優しい目で黒霧を見つめる。

「その点は今後教えるよ、ただ……仲間にしてくれるかどうかが今は大事じゃない？それにホラ、私さ…貴方たちの騒動を聞いて…あっ、自分はここに居た方が良いのかも！って思ったのよ！」
「随分と漠然とした理由だな」

死柄木はポツリと呟く。

「死柄木弔、前にも先生が言ってた通り精鋭を集めなければ…」
「分かってるよ……」

黒霧の話に面倒くさそうに反応する死柄木。

「話はまとまったかい？黒霧くん」
「ええ、我々に協力して頂き有難う御座います」

黒霧はブローカーと呼ばれる男に軽く一礼する。

「まあとゆー訳で、宜しくね！黒霧に、死柄木弔！」

満面な笑みを浮かべる漆月に二人は賛成する。

「ええ、心強い仲間が一人増えた事ですし。宜しくお願いしますね漆月」

「まあ…別に…」

敵連合は一度退けられては、また悪意を募らせ互いに成長し、強くなる。
敵連合のこれからの行動、この組織がこれから大きくなっていく事は、まだ誰も気付く余地はない。
パソコンの画面越しで敵連合の様子を見て、微笑ましい気持ちで見ている先生を除いて。

２２話「突撃！」

雲雀は春花に校内を案内された後、一人になった雲雀は、最上階にある超秘伝忍法書がある場所へと向かっていった。その場所には当然、ある男が居るのだが……話し声が聞こえた為、雲雀は耳を壁に当てて、話を盗み聞きする。

「どういうつもりだ……鈴音！裏切るつもりか！」

その男は、蛇女の投資者である学園のオーナー……道元であった。道元は、鈴音に激情している。

「仰る意味が分かりません……」

「とぼけるな……半蔵の連中に蛇女子学園の『居場所』を教えたことを、裏切りでないで何と言う!?」

「……」

時は遡り……

気配を出しながら、半蔵学院に寄った鈴音は、『立ち入り禁止』と書かれてる看板の前に立つと……

「何者だ!?」

声が聞こえた。その声は……霧夜先生であった。鈴音……いや、凛だと知った霧夜は、直ぐに刀を収める。

「ふふ、また会いましたね、霧夜先生」
「凛……何しに来たんだ？戦い…という訳でも無さそうだが……」
「私は霧夜先生の生徒よ？それに、今日はその話に来たんじゃない……貴方の生徒について話に来たのよ」
「!?!雲雀は…雲雀は無事なのか!?」
「それは……」

雲雀のことに霧夜は動揺すると、鈴音は紙が巻かれたクナイを投げる。霧夜はそれを普通に受け止めた。

「これは……」
「その中に答えが載ってあるわ……生徒が無事かどうかは、自分自身の目で確かめたら？貴方の大切な生徒たちと……ね？」

凛は微笑みながら、どこか怒りの感情を抑え込んでるようにも見えた。蛇女はどうなってるのやら……そんなことを考えながらも、霧夜は一刻も早く生徒たちに報告しに行くのであった。

んで現在。

鈴音はしばし沈黙した後、立ち上がる。

「超秘伝忍法書は、入手しただけでは無意味……選ばれし者が手にした者にこそ意味を成すと以前にも申し上げた筈ですが？私はその手助けをしたまでです……」
「……わざと半蔵の連中を呼び込み、そして戦うよう仕向けたと？」
「御意……隠と陽。二つの超秘伝忍法書は悪忍のみならず、善忍…即

ち半蔵学院の忍生徒たちを呼び込むのは必然…」

「え？」

鈴音の言葉を聞いて、雲雀は驚いた。その言葉、それはつまり半蔵学院の忍生徒たちがこの蛇女子学園に乗り込むという訳だ。それを知った道元は堪忍袋の緒が切れたのか、血相を変えて怒り溢れる表情で椅子に立ち上がり、鈴音を睨む。

「正気か貴様!?上層部にそのようなことが耳に入れば……」

「自らの欲望に溺れ、独断専行をしたのは貴方でしょう？」

「なっ……!?!」

「晒すなり、逃げるなりと……ご自由になさればいい!!止めは……致しませんので……」

鈴音はそう言うと、道元に背中を向け、その場を去ろうとする。しかし道元はそれを許さなかった。

「裏切り者の鈴音を捕らえよ!!」

その途端…１０人位の忍びに包囲された。そして気の所為なのか、鈴音は口の端を僅かに上げた。

（皆んなが……ここに……？）

雲雀は心の中で心配そうに、そう呟いた。

半蔵学院にて……

飛鳥たちは準備し終えると、忍装束を纏い、霧夜先生の前に並ぶ。

「飛鳥、斑鳩、葛城、柳生、今回の忍務は雲雀の救出と、超秘伝忍法書の奪還、この二つだ。その為にまず、秘立蛇女子学園に乗り込むのだ！」

「「「はい！」」」

「最優先としては……雲雀、五人合わせて生きて帰ってこい……それがお前たち忍びとしての、最前線だ」

「「「はい!!!」」」

霧夜の言葉に、四人は一斉に声を出すと、ムササビを纏って出動する。

斑鳩、葛城、柳生は出動すると、飛鳥はふと不安に思うことがあった。

（敵地……か……）

飛鳥はこの短期間で命懸けの戦いをして来た。

蛇女の襲撃、そしてＵＳＪ襲撃の時。

（蛇女の悪忍との戦いでは、焔ちゃんには手も足も出なかったしな……）

その時の焔は、飛鳥の力よりも遥かに強く、足元にも及ばなかった。

だがあの時…緑谷と轟の助けが来なければ、きっと殺られてただろう。

（それだけじゃない……あの時、死柄木って言う人達3人にすら……ろくに戦えなかった……）

敵連合のリーダー、死柄木弔。
心がない謎の改人、脳無。
ワープゲートの、黒霧。
この三人には、攻撃を与えることすら出来なかった。焔との戦いでは、ダメージこそ与えれなかったが、それでも攻撃はすることが出来た。一対一だからかもしれないが、死柄木たちの場合は集団で攻め、しかも相手の力（個性）が分からない故に、得体もしれなかった。だが……今は違う。

（私だって、いつまでも弱い私じゃないんだ……!!あの時とは違う……もう、あの時よりも強くなっているんだ!!）

自身に湧く恐怖を、心で振り払った。

「飛鳥！飛びます!!」

飛鳥は叫ぶと、三人と同じく出動した。

（私は一人じゃない……大切な仲間たちがいるんだ!!）

飛鳥は心の中で強く、そう言った。

飛鳥たちが去った後、霧夜と半蔵は夜空の月を眺めていた。
「霧夜よ、お主も行くのじゃろ？凛のことを……」
「半蔵様……やはり知っておられましたか…」
半蔵は、霧夜と凛のことを既に知っていたようだ。
「うむ、別に構わんがな……凛とお主の関係ごとなら……ただ」
「ただ？」
半蔵は、先ほどのように難しく、強張った表情を浮かべる。
「凛ならまだ良いのじゃが……不穏な気配を感じるのじゃ……まるでよからぬことが起こるようなの……」
半蔵はそう言うと……半蔵の足に、黒猫が近づいてきた。すると…木の影から人影が見えた。その人物は…
「大導寺…!?」
「霧夜先生……それに半蔵殿、恐らくその不穏な気とは、凛さんの気配ではない……」
見るからに高校生とは思えない身長に、圧倒的な強さを感じる、学ランを着た女性は大導寺と呼ぶ。
昔、大導寺は過去に凛とよく組み手をしていた。だが、大導寺は凛を倒すことなど出来なかった。その理由は、凛は「まいった」なんて言わなかったから……どれほど辛くて苦しい時になっても、必ず「まいった」とは言わなかった。そんな大導寺は、凛に一本取るまでは、卒業しないと決めたのだ。だが凛は重要な忍務に当たり、死んでしまっ

たと思われていた。だから大導寺は、卒業しないまま、ずっと三年生として生きているのだ。

「事は単純ではない……それにその不穏な気配……それはとても禍々しい気なり……！」

「どういうことだ？大導寺？」

「それは……」

大導寺の次の言葉が、大きな戦いが始まるのだと知った。そして蛇女の全員が、外法を掛けられてると……

蛇女子学園ｓｉｄｅ

雲雀は再び春花と共に、校内を見回し、案内をされる。勿論春花やここにいる蛇女の生徒全員には、鈴音が裏切ったことは知らせてない。

春花と雲雀は橋を渡ると、その真ん中ら辺に止まり、川を見る。川には水遁の術の訓練を受けている忍生徒たちの姿であった。

（訓練……）

雲雀はあることを、思い浮かんだ。それは……柳生と雲雀一緒に、水遁の術を学んだこと。

雄英高校の生徒たちとで、戦闘訓練をやったこと。ついでに爆豪が怖かったこと。とにかく色々だった。それでも雲雀にとっては、訓練が楽しいものだと思えてきたのだ。そんな事を考えてると……

「こらそこ！乱れてる!!」

上忍の一人がクナイを川に投げると、そこの川には赤い血が染まり、苦しい顔でクナイに刺された腕を、手で抑えてる。春花は何ともない表情で見ているが、雲雀はワナワナと体を震わせながら、心配そうに見つめてる。

「い、いくら何でも……こんなことしなくたって！」

雲雀がそう言うと…

「心配しなくてもいいわ、その子は下忍の下っ端で訓練を受けているから。訓練を受けている間は、体で覚えないといけないものよ」

春花はこれが当たり前と言わんばかりにそう言うと、雲雀は可哀想だと思う目つきで、その生徒を心配する。

「な、仲間が……ケガしてるのに、誰も助けようとしないなんて……」

「何言ってんだお前？」

「!?」

突然の声に雲雀は後ろを向くと、そこには焔と詠が立っていた。焔は雲雀の言葉が気に入らなかったのか、眉をひそめている。

「仲間っていうのは、お互いを高め合う存在だろ？交渉だけの仲間なんて、何の役にも立たん……」

「で、でも……！」

「ふふ、これだから裕福育ちのお嬢様はいけませんわ……」

焔の言葉に、詠も満面な笑顔でそう言う。詠は笑顔こそは良いが、言葉と笑顔が合わないためか、逆に怖さを感じる。

雲雀は何も反論できないのか下を向くと、そんな雲雀に心配してるのか、春花は雲雀の頭を優しく撫でる。

「ここの修行は厳しいわ……でも、だからこそ必死に上を目指すよう頑張るのよ。皆んなそうやってるのよ」

春花は雲雀にそう言うと、雲雀は春花を見つめる。

（上を目指して……そっか、皆んな思いは違えど……純粋に目標を目指して頑張ってるんだ……!!）

雲雀が空を見上げてると、春花は壁のスイッチを押す。

「午後は校舎内で座学よ……さあ、行きましょう」

「うん！」

春花がそう言うと、雲雀は頷き進んでいく。転んでスイッチのある場所に頭をぶつけてしまったが……

ムササビで飛行してきた飛鳥たちは、ムササビを外すと、視界が広がる山岳に行き、一通り景色を見てみる。

「彼処が……蛇女子学園ってわけか……!!」

「夜になるまで待ってみましょう……それまで様子を見てみるのも良いかもしれません……」

葛城と斑鳩がそう言うと、飛鳥と柳生は頷いた。

一方、雄英教師たちは……

「半蔵くんが言ってたけど、蛇女子学園の居場所は分かったそうだ。でも問題はここからだね」

校長の根津は考えるようにそう言うと、相澤はため息をつく。

「無理に出るより、大人しくしといた方が身のためなんじゃないですか？」

「それはそうだけど……でも向こうが何をしやらかすか分からないだろ？」

「オールマイトさん、森で居場所探した結果、『あの姿』になって仮眠室で休憩してる始末ですよ？」

「……」

こんな感じで会議が行われている。オールマイトはトゥルーフォームで休んでいるそうだ。確かにそうなれば下手に出るより、大人しくしておいた方が身のためであろう……

「だけど、これは善忍と悪忍の全面戦争になり兼ねないよ？となると……戦争に於いて、裏の社会から崩壊されたら、表の社会も壊れ兼ねないということにもなるよ」

「しかしそれだと……」

校長の言うことも納得できるが、スナイプは異論する。

「はぁ……そもそも超秘伝忍法書をとって何がしたいんだ向こうの奴らは……？」

相澤は皆んなが聞こえない範囲で、舌打ちをした。

一方、蛇女子学園にて……

夜、焔たち選抜メンバーの五人は、学園のオーナーである投資者、道元の呼び出しに呼ばれ、最上階に向かった。当然、雲雀は呼ばれてはいないが、超秘伝忍法書があるかどうかを確かめるため、盗み聞きをする。

「焔、以下四名が仕り参りました」

焔と他の四人は、深々と頭を下げ、道元の前に並ぶ。

（やっぱりここに秘伝忍法書が……！絶対に取り返さないと！）

雲雀は心の中でそう言うと、気を隠しながらも、警戒して耳を壁に当てる。話し声が聞こえるため、ここだとバッチリなようだ。

「鈴音先生が裏切った!?」

焔と他の四人は驚きを隠せない様子でいる。自分たちを育て上げてくれた、あの鈴音先生が裏切るなど、あり得ないと……道元はそんな五人にお構いなく話し出す。

「鈴音は半蔵学院に、蛇女子学園の居場所を漏らしたのだ……」

「どうして？先生がそんなこと……？」

（あらあら……私が雲雀にそうしたように、同じことをしたってわけ

?）

鈴音が自分たちを裏切ったことに、腹が立っている未来に、春花はニヤリと目を細める。

「不覚だった……！鈴音が半蔵学院の生徒だったなどと……」

「鈴音先生が!?元善忍!?!」

焔は大声を出してしまうくらい、衝撃だった。焔は正義そのものが嫌いだ…『その所為で苦しめられた』のだから……正直オールマイトという名前すらも聞くだけだ吐き気がする位だろう……

「半蔵学院の連中は恐らく、ここに奇襲をかけて来るだろう……だから、お前たちの力で迎撃し、攻めてくる善忍全てを、殲滅するのだ！」

「「「「御意」」」」

選抜メンバーの五人は、闘志を燃やして返事をするのであった。

「これは我々悪忍だけの問題ではない……悪忍そのものの全てが掛かってる……敗北は決して許さん！」

「無論!!」

道元の言葉に熱くなる焔は、拳を強く握りしめる。焔の威勢に、ニヤリと口の端を上げる道元。

「その意気やよし、もし仮にお前たちが敗北した折としては……即首切の術を発動させる」

首切の術　　それは術者に、術を掛けられた者の生死を操ること

が出来る。

「忍びの戦いは常に命懸け……この秘立蛇女子学園の代表者として、不満はあるまい？」

道元がそう言うと、皆は死の覚悟が出来てるのか、ニヤリと笑みを浮かべる。

「背水の陣　ってヤツね」

「ふっ…お戯言を……我々に敗北などない…！」

「せやな……」

「むしろ張り合い甲斐があるというものですわ」

「まあ何にせよ……私たちはこの首切の術には逃れられないんだから……」

未来、焔、日影、詠、春花は、既に勝ち誇った笑みを浮かべて言った。

「ま、まずいよ……このことを早く皆んなに知らせなきゃ!!」

雲雀は全ての話を聞くと、その場を去ろうとする…が。

「あら雲雀、何処に行くの？」

「え？」

その瞬間。雲雀はロープで体を縛られ、身動きが出来なくなり、捕まってしまう。

「な、何するんですか春花さん!?」

「悪いわね、貴方に邪魔されると厄介になるの……」

春花は悪意ある目でそう言うと、残りの四人も雲雀を睨む。

「貴方やっぱスパイだったのね……」

「これは拷問ものですわね……」

「……

未来と詠は呆れた声でそう言うが、日影は無表情で何も言わない。

「全ては、自己責任だ……」

焔は雲雀を見下すようにそういった。

飛鳥たちは蛇女子学園に乗り込むと、天守閣へと繋がる通路を探している。勿論見回りに来てる悪忍全ては倒した。

「さて、ここからが問題だな……!増援が来る前に、早く辿り着くぞ!」

葛城がそう言うと、残りの三人も頷く。

だが通路が何処にも見当たらない……そんな状況に皆んなは焦っている。

「通路がない……?!」

「クソ！マジでどうすりゃいいんだこれ！」

葛城が沸騰すると、柳生はふと壁をジッと見つめている。そんな柳生に飛鳥は気付いた。

「どうしたの柳生ちゃん？」

すると……

「これは……雲雀の匂いだ……!!」

「!?」

あの時、雲雀は転んで頭を打ってしまったのだ。その際に匂いが付いてたのだろう。柳生はその壁に手を置くと、そこからスイッチが出てきた。

「これって……」

三人は驚いていると、柳生はそのスイッチを押す。するとその途端……何もない壁が動き出し、通路となった。

「隠し通路!?!」

三人は驚くと、柳生は「行こう」と言った。その言葉に、三人は頷き進んでいく。

「この先に雲雀さんが……！」

斑鳩はそういって進むのであった。

雲雀は捕まってしまった為、牢獄に入れられてしまった。

「残念ね、でも此処で大人しくしててくれるかしら？」

「春花さん！お願い、此処から出して！春花さんたち戦いに負けると死んじゃうの?!」

「ええ、そうよ」

雲雀の問いに春花はそう返すと、雲雀は目をうるうるさせる。

「そんなの……可笑しいよ!!」

雲雀がそう言うと、春花は首切の術について話し出す。

首切の術とは、本来学校を逃げ出す者…裏切る者などと、そして学園の秘密を知らせようとする者に対して首切の術が発動される。だが、道元は違う。道元は術者であり、意のままに人の生死を操ることが出来るのだと……

「そんな……春花さんたちは、死ぬのが怖くないの…!?」

「当然よ？死を恐れるものは失敗を恐れる者……ね？『先生』」

「えっ!?」

雲雀は横を見ると、雲雀の牢獄の隣には、鈴音が捕まっていた。

「……」

天守閣最上階、道元がいる部屋では…

「道元様！侵入者あり!!半蔵の忍生徒たちと思われております！」

「むっ……！やはりか……」

道元は、ふと超秘伝忍法書の隠と陽の二つを見つめるのであった。

（もしこの失態を上に知らされれば……今の地位どころか、私の命そのものも……こうなったら、この力で組織そのものを我が手中に……）

道元はニヤリと笑みを浮かべるのであった。

飛鳥たちが走っていくと、そこには大広間があった。

「ここは……？」

飛鳥が周囲を見渡した途端、１０人くらいの忍びが登場し、飛鳥たち四人を囲い込む。そして……

「ふふふ、やはり来ましたか……半蔵学院のお嬢様方たち……」

「あ、貴方は!?」

斑鳩はその人物を見て驚愕した。それは、以前斑鳩と戦った、詠だった。

詠は斑鳩を睨みながら大剣を持ち、その場に立ち塞がる。

斑鳩は詠を睨みながら飛燕を持ち、その場に立ち向かおうとする。

そんなやり取りの中……飛鳥たちが見晴らしていた山岳では……

ズズズ…ズズ……

闇とも思わせる、黒い空間が現れた。

２３話「若き有精卵、ヒーロー突入！」

敵地である蛇女子学園に乗り込んだ飛鳥たちの前に立ちはだかるのは、蛇女子学園の選抜メンバー、詠であった。

「待ち伏せ……？」

「此処まで来たことを褒めてあげましょう半蔵学院のお嬢様方たち……ですが、もう終わりにしてあげましょう……!!」

詠が合図を出すと、さらに何十人もの悪忍たちが駆けつけてきた。

「私たちは超秘伝忍法書と、仲間を取り戻しに来ました！」

「他人の家に踏み込んでその大某なる言い草……ますます気に入りませんわ……鳳凰財閥のお嬢様……」

詠は憎悪溢れる目で斑鳩たちを睨むと、腕に付いてるボウガンで迎え撃つ。

「次は札束で頬でも叩きます……？」

「皆さん！先に行ってて下さい!!」

「「「!?!?!」」」

斑鳩の言葉に、三人は驚く。それは勿論詠も同じである。

「で、でも……!!」

飛鳥たちは早くも、何十人の悪忍を倒すと斑鳩の方に振り向く。だが柳生は、先に階段で次に行こうとしている。

「柳生ちゃん!?」

「信じろ飛鳥、斑鳩はそう簡単には死なない……」

「柳生ちゃん……」

柳生の信じる心に、飛鳥は柳生を見つめていた。

「だな！アタイたちが仲間を信じないでどーすんだよ！」

葛城がそう言うと、飛鳥は「うん！」と頷く。

「クッ……！逃がしませんわ……!!」

詠はボウガンを飛鳥たちに向けるが……

「させません！」

斑鳩は飛燕で、詠の隙ある部分を狙う。

「っっ……!!」

詠は回避できなかったのか、もろに斑鳩の攻撃を食らってしまう。

「さあ！皆様！」

「斑鳩さん！後は……頼みます!!」

飛鳥はそう言うと、皆んなは斑鳩を信じ、背中を向ける。

「よほど……自信があるようですね……舐めてるのですか？」

「いいえ、貴方が強いからこそです!!」

斑鳩は飛燕を構えると、詠は大剣を握り、構える。

牢獄では……

「どうやら半蔵学院の連中が此処に攻めてきたようね……」

牢獄で捕まってる雲雀と鈴音にそう言うと、雲雀は「出して!」と何度も叫んでいる。だが春花は何の表情も変えずに雲雀を見つめている。雲雀はそれでも蛇女子学園の皆んなは戦って欲しくないと願っている。

「春花さん……この戦いで負けたら死ぬんでしょ!?そんなの……ダメだよ!!」

「安心して雲雀、半蔵学院に私たちは負けないわ……」

「そうかしら?」

「あら、鈴音先生……話せるんじゃない」

春花は横目で鈴音を見つめると、鈴音は話し出す。

「霧夜と、半蔵学院の生徒たちは甘く見ないほうが良い……霧夜は生徒たちの弱点と欠点をなくすように訓練をさせている。そして、そこの雲雀もそうだけど、下級生も急激に成長しているわ……一目見れば分かる……彼女たちは、修羅場を潜り抜き、強くなってる」

下級生、それは飛鳥たちのことだ。今の所、上層部と凄腕の忍びにしか伝えられていないが……鈴音は知っている。飛鳥たちが『敵連合』という強敵に立ち向かったのを……その戦いを通し、彼女たちはまた強くなった。

「あら？じゃあ私たちは半蔵学院の連中と戦わせる為に育ててきたってこと？」

「超秘伝忍法書の継承者として、それに見合う者にならなければならない……」

「貴方の目的は……なんなの？」

春花は表情を黒く染め、鈴音を睨む。すると鈴音は不敵な笑みを浮かべる。

「目的……なら、複数あるわ……ただ私が言えることは……今の貴方たちは

確実に死ぬわ…」

「!?」

鈴音がそう言うと、自分たちは負けると言われてるのか、春花は怒りをこみ上げる。

「私たちが、負けるっていうの？」

「認めたくはないが、『今の』お前たちならな……」

「……そう」

鈴音はそう言うと、春花は鈴音の話を聞きたたくないのか、鈴音と雲雀に背中を向ける。

「春花さん!?」

「私は行くとするわ……そして、またあった時こそ、お人形にしてあげる……何より先生は、私の『命の恩人』だもの……」

「え？」

雲雀は目を丸くした。

先を急ぐ中、飛鳥たちは…また次の階に行くと……

シュン！

「!?」

葛城目掛けてナイフが飛んできた。葛城は瞬時に躱し、振り返って見てみると、そこには……

「避けられた……」

「ちょっと日影、なに呑気なこと言ってんのよ……」

ナイフを持っている日影と、傘を持っている未来であった。

「クッ……！んなとこにまた……！」

葛城は焦る気持ちでいっぱいだ。それは柳生も同じだろう……強敵が二人現れた。

「飛鳥……悪いが先行っててくれ！」

「!?」

葛城の言葉に、飛鳥は驚く。

「どうやらコイツらはアタイたちに用があるみたいだからな……」
「ああ、だからお前は先に行け……」

葛城の言葉に、柳生もそう言う。

「フン……」
「あたしは前々からアンタのことが気に入らなかったのよ!!」

日影は鼻で笑い、未来は柳生を睨んで怒鳴る。

「皆んな……!」

「早くしろ!!」
「行け！飛鳥……!!」

葛城と柳生は、飛鳥に背中を向けてそう言った。

「……分かった……」

飛鳥はそう言うと、走って行った。

再び牢獄では……

雲雀は隣の牢獄で捕まっている鈴音を見つめる。

「あ、あの～……」

「……」

雲雀は声をかけるが、鈴音は振り向かない。聞いてはいるようだが、返事はしない……それでも雲雀は話しかける。

「鈴音先生って、半蔵学院の生徒なんですよね……？どうして悪忍になったんですか？」

雲雀がそう聞くと、ようやく答える気になったのか、鈴音は話し出す。

「……私は忍務に失敗し死にかけた時、蛇女子学園に命を救われた。私が善忍であるにも関わらず……私は気づいたの、本当の強さは、その悪にこそあるのだと……それを証明させるためには、超秘伝忍法書は必須だった。だから半蔵学院を襲ったのよ……」

鈴音はそう言うと忍転身し、牢獄を壊す。勿論騒動を嗅ぎつけた見回りがやって来るが、鈴音の腕なら、殲滅させることくらい容易いものだ。そんな鈴音は雲雀を見つめる。

「欲しいものがあるならば、命懸けで取りに来なさい……それが忍びよ……」

鈴音はそう言うと、その場から姿を消した。

「欲しいもの……あっ」

雲雀は自分がどうすればいいのか悩んでると、牢の前に鍵が落ちていた……

中部の広間では……飛鳥は最上階に繋がる通路を探してると、階段のところで座っている女性が一人……それは……

「焔ちゃん!?」

飛鳥は驚愕する。焔はまるで、まってましたということ様子でいたのだ。そんな焔はフッと笑うと、飛鳥を睨みつける。

「なんだ、お前一人か……」

焔はそう言うと立ち上がり、飛鳥に近づいてくる。

「焔ちゃん……」

「さあ、刀を抜け……半蔵の孫!!」

焔はそう言うと、背中の六本の刀を抜き出して構える。

飛鳥は目をつむって、深呼吸してから、刀を抜く。

「……焔ちゃん、私ね…あの時とは違うんだ……」
「ほう?ようやく自分の甘さが、仲間を心配するというのが、脆弱で愚かだという事を知ったか……」
「違うよ」
「なに……?」

煽る焔に、飛鳥は真っ直ぐな目で、顔を横にふる。

「私は、色んな仲間たちに会えて、恵まれて……そして強くなれた。正義とは何か、色んなことが知れた」

飛鳥は、ニカッと笑みを浮かべる。

「だから、負けない……絶対に!!」

飛鳥がそう言うと、半分飛鳥の言葉に苛立ちを覚え、もう半分は、以前の時よりも違うと分かり、微笑む。

「いいだろう……こい!その正義とやら、私が叩き斬ってやる!」

お互いは刀を向きあった。

雲雀は牢獄の鍵を取ろうと、必死に腕を伸ばして、掴もうとすると……

「あら残念でした～♪」

ヒョイっと鍵が取られた。その人物は春花出であった。

「は、春花さん!?どうして……」

「地下室の牢獄で騒ぎが起きたから、来てみれば案の定ってワケね……」

春花は、突き破られてる隣の牢獄に目をやる。鈴音が脱走したことは知っていたようだ。

「まあ、命の恩人だし……逃がさないわけにはいかないものね……」

「命の……恩人……？」

春花はそう呟くと、雲雀は首を傾げた。

「ええ……そうよ……」

春花は過去にあったことを雲雀に話した。

家は裕福な医者の家庭で育ち、友達からも羨ましがられてた。しかし父は脱税・医療ミスの揉み消し・不倫などを何度もやらかす最低な人間であった。そのせいで、母はストレスを溜め、娘である春花をお人形にしていた。母の歪みが続き、春花が中学生になるまでもずっと続いていた。そんな苦しむ春花に、手を差し伸べたのは、師である鈴音先生であった。春花には才能があり、傀儡の術を教えた。そんな苦しむ春花を救けてくれた鈴音は、正に命の恩人そのものであった。

「そんな……ことが……」

春花の話に、雲雀は見つめる。優しいお姉さんのように見える春花に、そんな残酷な事があったなんて……と。

春花は雲雀に話を終えると、鍵を使って牢獄を開けた。

「!?!」

雲雀は驚いた。先ほどまで、出さないようにして、雲雀の言うことに全く耳を傾けなかった春花が、鍵を使って牢獄を開けたのだ。

「貴方がそこまで、私たちを止めたいのなら、やってみなさいな……さあ」

春花は雲雀に近づいてくる。

(雲雀は……もう負けないんだ……!!柳生ちゃんにも、もう二度と、あんな酷い目にはさせない!!)

「忍・転身!」

雲雀は忍装束を纏うと、戦うのである

出入り口の場所にて、詠は大剣で斑鳩を斬りつけようとするものの、斑鳩は難なく避ける。詠は更に斑鳩に敵意ある目で睨みつける。

「貴方は本当にいちいち不愉快ですわ!!ずっとずっとそうでした……」

「……『ずっと』……?」

斑鳩は、詠の言葉が理解出来なかった。自分は詠に恨まれるようなことはしてないと言うのに……次の言葉で、斑鳩は知ることになる。

「あの高いお屋敷から……ずっと見下されて生きてきました……」

「!?!」

高いお屋敷、それは……鳳凰財閥のお屋敷、斑鳩が住んでいる所だ。

詠は過去にあった話を、斑鳩に話し出した…

貧民街で生きてきた自分は、あの屋敷にずっと見下されて生きてきて、誰も救けてくれなかったこと…毎日が、生きてるだけで辛かった。家もない、何もない、『大切な友達』も失い…そして、家族まで……両親は、詠のために、自分が辛い思いをしてでも育ててきた。ある時、あの屋敷の鳳凰財閥は、莫大な資金を海外に援助し、両親は誰の救けを得ることなく死んでしまった……　側に苦しんでる人が居るにも関わらず。そして、そんな残酷な世界で、一人となってしまった……

詠の心境を知り、斑鳩は罪悪感を感じた。そして分かった、どうして自分が憎まれていたのかを……だが詠は斑鳩を許さない。

「善忍？笑わせないで下さい！善忍の善は、偽善の善……!!貴方の両親はその代表ですわ!!」

ガギィン!!ギギギィギギギ……!!!

大剣と飛燕がつばぜり合いをする。だが詠の憎しみの力が強いのか、斑鳩が押されている。斑鳩は、飛燕が折れそうになるのをその目で見た。

（飛燕が……!!うぅ……っ！まずい……もう、もう……!!）

「さあ……お覚悟!!」

詠がそう叫ぶと、最後の攻撃で仕留める気なのか、気を大きくためて大剣を押し、斑鳩ごと飛燕を斬ろうとする。

ズバゴオオオオオオオーーーーーーーーーーーーーーーーンン!!!!!ン

瞬間。

「えっ!?」

「なっ……!?」

斑鳩と詠は、爆発した出入り口に目をやると、その光景は……土埃のなか、悪忍の何十人かはボロボロになっており、中には火傷などを負っているものが倒れていた。

「こ、これは……?」

詠と斑鳩はその突然なる光景を見て驚き、大剣と飛燕の力を止めた。土埃が晴れていく、その光景は……

「ゲホ、ゲホ!!お前マジで加減知らんのか！」
「うるせぇぞ!!今度は景気付けにテメェをぶっ飛ばしてやろうか!?
『クソ髪』野郎が!!」
「ったく……俺らは殺しに来たんじゃねえ、救けに来たんだぞ……」
「君たち！喧嘩はやめたまえ！今は俺たちがどう動くべきかだ!!」
「正にその通りよ……ケロ」
「せっかくここまで来たんだもん……負けられへんよ！皆んなで頑張るよ!!」
「よっしゃあ！この日のために、糖分摂取したんだ、パワーなら任せろ！」
「……！」（うんうん！）
「全員の位置を特定するのなら俺に任せろ」
「隠密行動ならこの透明人間たる私に任せて！」
「僕のキラメキは止まらないよ!!」
「おっしゃあ!!おっぱいランド！いざ、女の花園へ……ヒャッホーイ!!でも、オイラ殺されるのはゴメンだからな！」
「だったら何しに来たのよアンタは！心臓に爆音流すよ!?」
「じゃあ私は目に酸を掛けてやるーー!!」
「皆さま！落ち着いて下さい！今この状況を考えて下さい！」
「俺たちは盟友を取り戻しに来たのだ……黒影（ダークシャドウ）行くぞ!!」
「アイヨ!!」
「俺たちがやるべきことは、USJの時と少し違う……『火災ゾーンでは柳生がいたから』救かったけど、今度は俺もちゃんと戦うんだ……！」
「ビリビリにしてやるぞーー！アレだぞ!!悪忍のなんたらかんたら！俺はピカ〇ュウ並みの電撃の強さ持ってんだぞ！」
「まあ俺はテープで縛って敵を拘束出来るから、楽々だけどな！」

「皆さん!!もう大丈夫!!」

斑鳩は、何処かで聞いたことのある２０人の声を聞き、振り向くと……

「僕らが来た!!」

「雄英の皆さん!?」

それは…

切島、爆豪、轟、飯田、蛙吹、麗日、砂糖、口田、障子、葉隠、青山、峰田、耳郎、芦戸、八百万、常闇、尾白、上鳴、瀬呂、そして……緑谷の、雄英高校１ーＡ組全員は、コスチューム姿で蛇女と半蔵の目の前に現れるのであった。

時間は遡り…

「なあ皆んな」
声を掛けたのは切島であった。皆んなは切島の発言に振り向く。
「どした？切島」
轟は首を傾げてそう聞くと、切島はニガ虫をかじったような顔で、冷や汗を垂らしながら、皆んなに提案をする。
「飛鳥たちんところ、行こうぜ……」
「!!??」
皆んなは一斉にして驚く。
そして……
「そんで……雲雀救けに行こう」
「「「「!!!???」」」」

それを聞いた皆んなは更に驚いた。

「き、切島……？何言ってんだ？」

「だってよ」

「！」

瀬呂は落ち着かせるように切島に聞くが、切島は真剣な眼差しで話し出す。

「悪忍ってヤツら、半蔵学院に攻めてきたんだろ？なのにさ、雲雀がそんな所に行ってさ……無事で済むと思うか？いても経っても心配で、その場で待機なんざしてらんねえよ！」

切島は悔しそうな顔でそう言うと、轟は頷く。

「切島、お前がそれ言わなきゃ俺が言おうと思ってた」

「!?!」

切島は轟の顔を見て驚いた。まさか轟も切島と同じ考えを持っていたとは思わなかったのだ。

「何しろあの悪忍には強えやつが居る……雲雀が何されるか分かったもんじゃねえからな」

「俺も、行きたい…」

尾白も拳を握りしめ、そう答える。

「ぼ、僕も…」

緑谷が言いかけた瞬間。

「君たち！落ち着きたまえ!!」

飯田は止めにはいる。それだけでなく障子も意見を出す。

「辛い気持ちは皆も同じだ切島……」

「飯田……障子……」

「切島くん、その考えは僕だってそうだ……だが、相澤先生にも言われてただろう！プロヒーローが駆けつける、だから待機していろと」

「けどよ！んなこと言ったって仕方ねえだろ!!確かに俺らのような子供が、大きな社会で忍びの事情首突っ込むのは可笑しいしダメかもしれねえ……けどよ!!」

すると切島は皆んなを見渡した。

「雲雀は、俺らの仲間だろ!?」

「!!!」

皆んなは切島の言葉に固まる。切島はそれでも皆んなに話し出す。

「忍びの事情で、こっち来て……俺らと同じようにヒーロー目指してるわけじゃねーけどさ、でも俺たちと一緒にクラスで頑張ってきたろ?!敵(ヴィラン)が襲撃してきた時だって、一緒に戦ってきたじゃねーか!!なのに、悪忍に良いように利用されて……そんなん嫌だろ!!」

切島は、今までの怒りと不安を爆発したように叫ぶ。

「切島くん……」

緑谷は切島の名前を呟くと、切島は再び話し始める。

「無理にとは言わない……でも、俺がお前らに言ったのは、やっぱり皆んなも同じ辛い思いしてるからだと思うから……それに、それがどれ程危険なのかってのも分かってる……でもさ、ソレって『雲雀も同じ』だろ?」

「……」

皆んなは切島の正論に、頷いてしまう。正直言って、皆んなも駆けつけに行きたい。すると爆豪は舌打ちをする。

「フン……クソ下らねえな……心配なんざしてねーよ『舐めんな』クソ髪が……」

「!?!??」

爆豪の発言に、皆んなは振り向く。

「おい爆豪、どういう意味だよ……」

「そのまんまの意味だ、考えろボケ」

「っ!!」

途端、切島は爆豪に近づき、胸ぐらを掴む。

「切島!!」

「本気でそれ言ってんのかよ!!」

切島は初めて爆豪に怒鳴った。それも怒りあふれんばかりの……

「ちょっと！落ち着いて……！」

「止めんなお前ら！爆豪、その言い方はねえだろ!!お前と雲雀は仲悪いの分かってたから、意識的に嫌いなのは仕方ねえ……けどよ!!嫌な奴だから救けねえのかよ！救ける事が下らねえ……？お前……それでも男かよ!!ヒーローかよ!!」

「……」

するとそんな切島に爆豪は無言で、胸ぐらを掴んでる手を離させる……

「ああ……下らねえよ……『雲雀を救ける』とか、『心配する』とかな……けどよぉ、何も蛇女っつーところに『行かない』とも言ってねえだろうが……」

「!!!??」

皆んなは爆豪の言葉に目を丸くする。爆豪はそんな皆んなの様子も御構い無しに話し続け、さっきのお返しと言わんばか切島の胸ぐらを思いっきり掴む。

「勘違いして一丁前に怒鳴ってんじゃねえぞクソ髪がぁ!!『雲雀』は死なねえよ……悪忍とやらに良いよう利用されて、簡単にくたばるような雑魚じゃねーだろアイツは……心配するっつーことは、アイツを信

じてねえ証拠だ……雲雀を『舐めんな』。テメエらがピーピー喚いて心配すりゃあ、アイツも俺たちを心配するだろうが……心配されるとか一番嫌いなんだよ俺は…」

「爆……豪……」

「かっちゃん……」

爆豪は切島の胸ぐらを掴んでた手を離す。爆豪の言葉に皆んなは黙り込み、落ち着きその場で動きが止まってしまう。『舐めんな』とは、雲雀のことを甘く見るな……という訳であった。切島は、爆豪に向けた発言に、申し訳なさそうな顔で頭を下げ、謝ろうとすると……

「んじゃさっさとデカ乳女共に場所聞いてくるぞ」

「えっ!?」

切島が頭を下げようとしたタイミングで、爆豪は背中を向けて、半蔵学院に向かおうとする。

「頭下げんなクソ髪、いつも通りのテメェで居ろ」

爆豪は振り向く事なくそう言った。爆豪は粗暴で、周りからは嫌な印象を受ける体質ではあると思うが、意外と繊細で、一人一人の心をちゃんと分かってくれてる爆豪に、切島は頬が緩む。

「おう……ありがとな、爆豪」

切島は誰もが聞こえない、小さな声でそう呟いた。

「それにしても、半蔵学院の皆んなやプロヒーローたちも探してると聞いたぞ！まだ分からないんじゃ……」
「確かにそれもそうね、ケロ」

飯田と蛙吹はそう言うと、扉が開いた……その人物は。

「がっはははは!!随分と賑やかじゃな！」

「「「!?!」」」

その扉からは、髪を束ねた老人が立っていた、勿論雄英の教師ではない……では一体誰か？それは勿論……

「は、半蔵さん!?!」

緑谷は半蔵を見て叫んだ。
半蔵だということに気づいた麗日と飯田は、お互い顔を見合わせてから、「えっ?!」という顔になる。飛鳥から話は聞いていたが、見るのは初めてであり、ＵＳＪの時は教師たちが生徒たちの安否を確認するべく、見る事は出来なかったし、正直いた事すら分からなかった。

「お主ら、蛇女子学園に向かうのじゃろ？」

半蔵は眉をひそめてそう聞くと、爆豪は半蔵の気を感じ取り、ただ

者じゃないと知ったのか「おう」と頷く。それに続き、切島も出てくる。

「止めないで下さい！俺は……俺たちは……!!」

切島の言葉に、半蔵は優しい笑顔で頭を撫でる。

「ええよ、行ってこい」

「!?!?
!?!?」

半蔵の行ってこいという言葉に、皆んなは目を丸くし驚いている。それは勿論その場に居るもの全員もだ。

「場所はこの地図に載っておる、行ってくるが良い……お主ら、特に爆豪よ……仲間を想いやる強さ……しかと受け取ったぞ。これも『子供達のいさかい』じゃ……!!」

半蔵はそう言い、皆んなは蛇女子学園に行く許可を得ると、地図を受け取り見てみる。

「場所は分かったけど、でもこれってさ…どう行けば良いんだ？」
「そこだと確か、電車で山の近くに行く事が出来ますわ」
「そこで降りて、俺の個性の複製腕を使って位置を辿っていけば…」
「まあ私のイヤホンジャックも活躍できるね、些細な音も見逃さないから！」

皆んなはもう直ぐにワイワイと作戦を立てている。そんな個性あふれる皆んなに、半蔵は感心する。

「がっはははは!!流石は雄英じゃのう!考える事が早い、のう緑谷よ」

「えっ？あ、はい……」

半蔵の言葉に、緑谷は爆豪をみたまんま、曖昧な返事をする。

「ん？どうしたんじゃ？」

半蔵がそう聞くと……

「初めて……かっちゃんが、ちゃんと人の『名前』を呼んだ……」

「……」

緑谷は半蔵の　にだけ聞こえる小さな声で、そう呟いた。

場所は分かり……皆んなはコスチュームに着替えてから、誰もいない電車に乗り、蛇女子学園が存在する山の近くにまで行くことになった。それでも時間は充分に掛かる。

「電車の中は誰もいませんね……気味が悪いほどに……」

「八百万よ……ホラー系なのとか言うなよ？」

八百万は周囲を見渡しそう言うと、切島は寒気を感じるのか、身震いする。

「けど、蛇女子学園だなんて聞いたことないよな～……あっ、忍学生教育機関だから当然か！」
「だ、大丈夫さ☆きっと……ね？口田くん……？」
「……っ」
「いやいや待って！なんで口田くんに振るの青山くん!?」

瀬呂が呟いてるのを聞いた青山は、震えながら口田に話を振る。そんなやりとりにお茶子は突っ込む。口田も困ってる様子だ。

「はぁ～……」
「ど、どうしたの峰田くん？」

峰田のため息に、緑谷は心配そうに聞いてみる。

「悪忍養成学校って聞いてさ、ヤベー所なんじゃねーか！って思ったんだけどさ……けどよくよく考えてみ？」
「？」

峰田の言葉に、緑谷は首をかしげることしか出来なかった。

「蛇女って、蛇に女って書くだろ？そんで学園ってことは、女子校みたいなもんだよな？しかも飛鳥たちは忍びだろ？忍びって皆んな胸がデカイ訳だろ？ということは……ひょおおおぉぉぉーーーーー!!!!／／／／やべぇ！やべぇぞ緑谷!!これぞ正に桃源郷だ！オイラたちは今、悪という非合法な女の花園へ向かってるんだ!!」

峰田は変なことを考えているのか、ヨダレを垂らし、息も荒い……かなり興奮している様子だ。

「おっぱいが一つ、おっぱいが二つ…おっぱいが三つ……おっぱ」

スパァン!!と蛙吹の伸びる舌が、峰田の頬を叩いた。
「峰田ちゃんはあんなこと言ってるけど、私たちのやってることはとても危険だわ……だって飛鳥ちゃん達のような忍学生が何人もいる学校なのでしょ？ＵＳＪ襲撃の敵とまではいかないけど、相当強いわよ……」
「ああ、蛙吹の言う通りだ」
轟は蛙吹や皆んなの顔を見ず、下を向いたまんま話しだす。
「俺たちのやってることは相当危険だ……俺たちは学生……命を落とす危険性だってある。引き戻るなら今だぞお前ら」
轟がそう言うと、爆豪は舌打ちする。
「ケッ！氷野郎が、怖気付いてんのか？」
「違えよ、ただ向こうには相当強いやつが居るって訳だ。飛鳥でさえ殺されかけたヤツが、向こう側に居るんだ……忠告するのは当然だろ……」
「ハッ……！別にどうだって良いだろ、第一命を落とす危険性を考えるなら雲雀のヤツも一緒だろうが……」
「けど爆豪ちゃん、切島ちゃんにあんなこと言っておいて、結局は雲雀ちゃんを救けるんじゃない」
「はあ?!救けねえよ何言ってんだこんのクソカエル!!俺はその為にここに来たんじゃねーよ！」
爆豪は蛙吹に怒鳴り散らかすと、蛙吹は不思議そうに首を傾げる。
「ケロ？じゃあ爆豪ちゃんはどうして蛇女に向かうの？」

「……んなもん、決まってんだろ……俺は……」

静かな電車は止まり、目的地に着いた。爆豪の言葉と共に。

現在！

「雄英の皆さん……」

斑鳩は、皆んなが来てくれたことに一安心したが……

（っ！いけない、ここだと悪忍である彼女が殺しにかかってくる……!!）

「皆さん！逃げてください!!それにどうして此処が……？」

「半蔵さんに教えて貰ったんです！」

「「??
!!」」

斑鳩と状況を飲み込めてない詠は、その名前を聞き驚愕した。

伝説の忍びの半蔵は、忍びの世界で知らないものはいない。むしろ普通の忍びならば、頭を下げるだろう……それほど半蔵は凄いのである。

「半蔵様が……」

斑鳩はその話を聞くと、直ぐに解釈した。皆んなは半蔵に信頼されてるのだと……だからこそ此処の場所を教えて、行かせたのだと……斑鳩は、そんな心強い彼らを見て涙が出そうになるのを堪えた。自分一人では、どうなるか分からない……でも、個性あふれる雄英生徒の皆んなが来てくれれば、忍びの死の恐怖も、何処かへ吹き飛んでいく。何より少年少女たちの、助けに来た姿に……

「斑鳩さんが戦ってる!?」

「な、なんだあの金髪美女のバカでけぇ剣は!?モン〇ンの大剣かよ！」

飯田と上鳴は、斑鳩と詠を見てそう言う。

「み、皆さんが助太刀に参るのなら……まずは先に行っててください!!私はこの方を止めていますから！」

斑鳩が叫ぶと……

「なら俺が斑鳩さんの助太刀に参る！」

「貴方は……この声、まさか！飯田さん!?」

飯田はヒーローコスチュームの白アーマーを着用しているため、斑鳩は見ただけでは分からなかったが、声を聞いて直ぐに分かった。前に一度紹介としてあったことがあるからだ。

「さあ皆んな！早く！」

飯田は皆んなが行けるよう誘導をする。

「けど飯田は……」

「さっきから黙って聞いてれば……随分と仲が良さそうですわね！」

「!?!?!?」

切島が飯田を心配すると、今まで黙ってた詠はとうとう動き出す。

「貴方たちは見たところ忍びではないようですが……まあ良いでしょう！貴方たちがどういう理由で来たのかは分かりませんが……この学園を知られた挙句、私たちの存在を知った以上、生かすわけにはまいりませんわ！」

詠はニヤリと雄英の生徒たちを睨み、大剣を向ける。

「ひぃ！怖えよあの人！笑顔で大剣向きに来てっぞ!!完全にモン〇ン感覚かよ！」

「笑顔という皮を被りし悪……」

上鳴と常闇はそんな詠を見て警戒態勢に入る。

「ふふ、見せてあげましょう……私たち悪忍の力を……！貴方たちはヒーローの子供達なのかもしれませんが構いませんわ、貴方たちのようなヒーローもまた、正義ならば、貴方たちもこのお嬢様方たちと同じ偽善ですわ!!『私たち悪忍の方が強い』と、ここで証明して差し上げましょう!!」

詠は人差し指を皆んなに向けると……

ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーーン!!!!

「「「!?!?!?」」」

突然詠に襲い掛かる爆破に皆んなは驚き、詠自身も運が良かったのか、ギリギリ避けることが出来た。それでも僅かにカスってしまい、当たった忍装束は見るからに焦げてしまった。

「なっ……にが……?」

詠は突然の出来事にワナワナと震えると……

「黙って聞いてりゃあお嬢様口調でベラベラと駄べりやがって……!!悪忍?善忍?ヒーロー?正義?偽善?んなもんなぁ……

どうでも良いんだよ!!!」

ボオオオオオオオオオオオーーーーーン!!!

掌で爆破を起こし、詠を威圧する。

「かっちゃん!?」

隣にいた緑谷は、突然の爆豪の行動に驚く。いや、斑鳩や皆んなも棒立ちだ。

「な、なな……なんですの貴方は……!」
「オイそこの金髪もやし野郎!!」
「なぁっ……!?も、もやし……野郎……?」

爆豪の名付けるネーミングセンスに軽くたじろぐ詠は、爆豪を睨むことしか出来なかった。そんな詠を御構い無しに爆豪は溢れ出んばかりの怒りを噛み殺しながら声を荒げる。

「テメェ今なんつった？悪忍の方が強えだぁ？それはつまり俺より強えってことを言ってんだよなぁ？……ふざけんなよ……」

ボオオオオオオン!!!!

両手の掌を爆破させ、更に威嚇する。

「ふざけんじゃねーぞゴラァ!!俺よりテメェらが上だぁ!?!寝言は寝て言いやがれ!!テメェらより

俺の方が上だ!!」

爆豪はゆっくりと歩き寄りながら、不敵な笑顔で進んでいく。

「俺はなぁ……ここに来たのは雲雀救けるためなんかじゃねえ……俺は」

あの時、電車の中で爆豪が言いかけたその言葉は……

「お前らぶっ飛ばす為に来た!!!」

「!!!!?????」

ヒーローらしかぬ正義でない爆豪の発言に詠は驚き、斑鳩自身も驚く。斑鳩なんかは刀を下ろして皆んなを、爆豪を見てるだけだ。それは勿論雄英生徒のみんなもだ。

そして……

「お前ら全員ねじ伏せて……そんで……

俺がてっぺん[一番]をとる…!!!」

２４話「各々の戦い。半蔵と雄英ＶＳ蛇女子学園」

俺は……

『大丈夫？立てる？』

石ころに……

『勝って！超えたいんじゃないか!!馬鹿やろーーーーーー!!!』

クソナードに……

『君が……救けを求める顔してた!!!』

デクに……

爆破で威圧する爆豪……それを見て、斑鳩も、雄英生徒の皆んなも……固唾を飲んでいる。

「あ、貴方が……私たちを倒す……？」

「ああそうだよ……ぶっ倒すんだよ……」

不敵な笑みを浮かべる爆豪に、詠はそんな爆豪が気に入らないのか、ボウガンを向ける。

「随分と舐められたものですわね……忍びならまだしも……貴方のような子供に…」

「テメェもガキじゃねーか!!舐めてんのはテメェだろ、俺を舐めてっとぶっ殺すぞ!!」

「っ!!……貴方……本当にヒーローなのですか……？こんな偽善……お嬢様以外見たことありませんわ……！」

「はあ？知るかんなもん!!

……」

詠の言ってることの半分は分からない訳ではない……しかしそんな爆豪は、何度もお嬢様という言葉を聞き斑鳩の方に振り向く。

「……お嬢様って、あの黒髪パッツン野郎か」

「ええ……そうですわ、彼女のせいで……私はどれ程辛い思いを、苦しい思いをしたか……」

詠の言葉に斑鳩は顔を伏せてしまい、詠を見ることは出来なかった。そんな斑鳩の様子を御構い無しに、詠は斑鳩と爆豪を睨みながら話し出す。

「お金があれば何不自由なく生きていられる……ぬくぬくとぬくぬくと、家族の愛情を注がれ、苦しむ思いなく生きていられるのですわ……そして、そばに誰かが苦しんでることも知っており、救けようとしない……正義と名乗るものは全員偽善ですわ!!」

そう言うと、雄英の皆んなは詠の言葉を聞き黙り込んでしまう。この人はただ単に悪いことをしたいから悪忍になった訳ではないと……

（あの人……）

緑谷は可哀想な目で、詠を見つめる。

「貴方も……何も辛い思いなどしていないから、そんな事が言えるのですわ……!!私は貴方のような人間も大っ嫌いですわ!!」

「……」

爆豪は平然としているが黙り込み、詠はボウガンを構えて爆豪目掛けて撃とうとする。

「か、かっちゃん!!」

「おい言わんこっちゃない！爆豪狙われた！」

「だ、だ、ダイジョウブさ……ムッシュ爆豪は……う、美しい女性には負けないさ☆　ね？口田くん！」

「……っ！」

「だから何で話を振るうん青山くん!?」

「んなこと言ってる場合じゃねーぞオイ！爆豪！」

切島は体を硬くして突っ込んでいく。

瞬間。

「レシプロバースト!!!」

ドッ!!

「!?」

飯田の叫びに詠は咄嗟にボウガンから、大剣に武器を替えようとするものの、飯田の個性のスピードに追いつくことが出来なく、蹴りをもろに食らってしまう。

「ガッ……!!」

詠は転がるように倒れこむと、飯田は呆然としてる雄英の生徒達に、そして爆豪にも声をかける。

「皆んな!!先に行っててくれ！爆豪くんも早く！」

飯田は皆んなにそう言うと、「ああ……頼んだぜ飯田！非常口！」と言い、階段の方へ行き先を急ぐ。

「飯田くん！でも……」

「心配は要らないさ緑谷くん！いいや、むしろやらせてくれ！」

飯田は心配する緑谷にそう言うと、緑谷は飯田を信じて、背中を向ける。

「頼んだぞ飯田……」

轟は飯田に目をやって呟く。だが、爆豪だけは納得がいかなかった。

「待てコラ、クソメガネ!!コイツら全員倒すのは俺だ!!俺の獲物を横取りしてんじゃねえ！今良いところなんだよ!!」

「横取りなどしてない！君が彼女の『考え方』が嫌なのも分かってる！俺たちだって君の考えも少しずつ分かってきてるんだ……だから……」

「ああ!?だから何だよ!?」

「この戦い、斑鳩さんと俺に任せてくれ」

飯田はコスチュームのヘルメットを被っている為、顔の表情は見えないし分からないが……それでも真剣に、戦う決意がある事は伝わってくる。そんな飯田は詠に振り向くと、「さあ、早く！」と爆豪に言った。

「……チッ、分かったよ……クソが……」

爆豪は舌打ちをしながらも、皆んなと同じく向かって行く。

「飯田さん……」

「斑鳩さん、大丈夫ですか……？」

「な、なんとか……それにしても飯田さんでも無茶です、だから！」

斑鳩は飯田にも皆んなと一緒に付いて行って欲しいと言おうとすると、飯田は斑鳩の顔を見て首を横に振る。

「いいや、俺は行かない……前に俺達は敵の襲撃を受けた。皆んなは殺されそうになったハズだ……なのに、なのに俺は皆んなを置いて先生を呼びに行くことしか俺には選択肢が無かった……！皆んな怖くてどうしようも無かったハズなのに……だから……」

そう言いかけた瞬間。

ドヒュウン!!

「っ!!」

鋭い刃物が、飯田のヘルメットに擦り取れ落ちてしまう。

「クッ……」

「飯田さん！」

斑鳩は飯田の方に駆けつける。

「ふん……貴方もお嬢様と同じく舐めてらっしゃるのですか？皆さんで私に攻めにこれば、倒せる算段があるのに……」

詠は飯田を見下して、鼻で笑うと…そんな飯田はヘルメットを取り、見つめている。まるで、何かを見つめているような……

「…いいや、舐めてなどいない……俺は常に本気でやっているぞ……!!」

飯田は詠を見つめる。その目は、真っ直ぐな……決意ある目で。

「それに、俺は貴方を倒さない……」

「なっ!?」

「…?」

飯田の言葉に、詠は驚愕し、斑鳩は飯田の言葉に首を傾げる。納得のいかない詠は、飯田を睨みつける。

「貴方……何を仰っていますの!?私は貴方たちを殺そうとしてるんですよ……?殺そうとしている相手を何故倒そうとしないのですか!?」

詠は大剣を握りしめ、飯田に向ける。

「何故って？決まっている……俺は……

ヒーローだからだ!!」

「！」

飯田の叫びに、詠は驚く。

「俺たちはヒーローを目指してるんだ！ヒーローは、人を倒すため

じゃない……人を守るために……救ける為にあるんだ！それを、俺が貴方を殺してどうするんだ!?」

飯田は曇りのない、純粋な目で詠にヒーローとは何なのかを語りかけ……そして…飯田の脳裏には……

『天哉！お前ヒーローになるんだって？　頑張れよ！応援してるからな！』

『自分の働きが、沢山の人間の為になるのは、嬉しいよ』

『お前は優秀だからな、だからお前は立派なヒーローになれる！俺が言うんだ、お前は絶対になれるさ！だから……

皆んなを導けるような、カッコいい人間になれよ！』

優しい兄の、インゲニウムの言葉。

「1ーA組学級委員長、飯田天哉!!俺はこのクラスを、皆んなを導けるような人間になるんだ!!だから、皆んなの為に俺は貴方と戦う!!

そして、俺がヒーローを目指す理由は!!皆んなを導く『兄』に憧れたからだ!」

「っ……!!」

「兄…!?」

詠は飯田の言葉に、軽くたじろいでしまう。そんななか、斑鳩は飯田の兄という言葉を聞き、あることを思い出した。

それは

斑鳩の義理の兄だ。

斑鳩の義理の兄である村雨は、斑鳩を軽蔑していた。恵まれた忍びの才能に妬み、いつも罵声を浴びせられていた。自分の存在そのものが許せないような……そんな斑鳩はいつも兄に罪悪感を感じていた。だから正直、才能を認められ、褒められる人間をつい妬んでしまう。

だが……だが……

飯田だけは違った。

何故か飯田だけは、妬まなかった。

「飯田さん……」

（恵まれた才能に、皆んなから信頼されて、認められて……でも、真っ直ぐで……何処か私と同じで……）

斑鳩はそんな飯田を見て微笑む。

「飯田さん……助太刀ありがとうございます……!!是非、協力して下さい！私も学級委員長ですもの、皆を導くのは私も当然です！」

「斑鳩さん……！」

飯田と斑鳩はお互い詠に立ち向かう。

「クッ……！なんですの……この感覚は……まあ良いでしょう……一人増えたところでやることに変わりはありません……お二人とも死んでもらいます！」

詠は大剣を握りしめて、飯田と斑鳩に向けるのであった。

階段を上ってるなか、皆んなは先を急いでいる。

「オイラ斑鳩先輩も良いと思うんだけどさ、あの金髪美女もスゲェ良いよな！胸はデカイ、美女……蛇女万々歳だぜ!!」

「峰田だけ置いてこれば良かった……」

「ねーー！飯田くんの気持ちを馬鹿にしてるよ！」

「し、してねーよ！勘違いすんなよ芦戸……あと此処が巨乳だらけだからって嫉妬すんなちっぱい耳郎」

「瀬呂、テープで峰田巻いて？蛇女に置いていこ？」

「冗談ですジョーダンですマジでゴメンなさいいいぃ!!」

峰田は涙目で、怒りがぶっ飛んで無表情になってる耳郎に何度もなんども謝っている。そんなやり取りを見てる瀬呂は困惑している様子だ。

「それにしても、この屋敷よく出来てるよな～……そう考えると雄英と同じくらいなんじゃねーか？」

「まあ何処の高校も同じなんじゃない？」

瀬呂と葉隠が呟いてるなか、耳郎はイヤホンジャックで雲雀を探している。

「うん……よし！雲雀の位置が分かった！」

「本当か耳郎!?やるじゃねーか！」

耳郎の個性の活躍に親指を立ててグッドポーズする切島を見て、耳郎は少し頬を赤く染め照れている。

「褒められると調子狂うな……んっとね、地下室に居る…でももう一人誰かが居るから恐らくだけど悪忍ってヤツだと思う……行くなら誰かが行かなきゃ」

そう言うと

「ハイハイ!!おいらオイラ！オイラ行きたい！」

「へっ！それなら俺も行きたいぜ！」

「アンタら二人は地下室に行って捕まれば？」

「……」

「……」

峰田と上鳴は呆然と耳郎を見つめることしかできなかった。

「まあまあ耳郎ちゃん……あっ！そうだ、ウチやるよ！けど戦闘だとアレだから、瀬呂くんに砂糖くん、口田くん、一緒に来てくれないかな？」

「おう、任せろ！」

「へっ！勿論だぜ！」

「……！」

お茶子がそう言うと、三人も頷く。

「耳郎も一緒に付いてった方が良いんじゃないか？ここ罠だらけだぞ？」

尾白がそう言うと、皆んなは「確かに」という顔をする。障子と耳郎が個性で辿っていくから罠は一度も引っかかってはいないが、地下室の方にも罠がないとも言い切れない。

「分かった、尾白の言う通り私も付いてった方が良いね」

と言うと、耳郎も付いて行くことになった。

「それじゃあお前ら上手くやれよ！俺たちは他のところ行って助太刀しに行くは！」

切島がそう言うと、お茶子達も頷き「任せて！」と言い、雲雀救出の為地下室に行った。

「さて、引き続き俺らも行きますか……！」

切島がそう言うと、ふと爆発音が二つ聞こえた。それも上の方で……

「なっ!?んだ、何が起きてやがる？」

「二人が、悪忍と思われる奴と交戦している！俺たちも駆けつけるぞ！」

動揺する切島に、個性の複製腕を使う障子はそう言うと、皆んなは頷き走り出す。

「……皆んな、待っててね！」

緑谷は、オールマイトが人を救ける姿を思い出しながら、そう呟いた。

あの優しくて、心強くて……正義感溢れる……誰もが憧れる最高のヒーローを……

葛城と日影はお互い傷つきながらも、それでも戦いを続けている。

「前より強くなったのに……お前、なかなかやるじゃねーか……！」

「ほな、そっちこそな……けど勝つのはウチらや」

息切れの葛城に、日影はナイフをペロリと舐めながら見つめる。

一方、柳生と未来は

「はあああァァァァーーー

だぞ」
「アタシが……勝てないとでも言いたいの!?ふざけんな…ふっざけんなぁぁーーーーー!!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドド!!!

「アタシに、守りたいものがないとでも思ってるの……!?私にだって……あるんだからあぁぁぁぁーーーーー!!」

「っ……!?」

未来の攻撃力が強くなる。未来のその目には憎しみが篭っていた。

未来は過去にあったことを、柳生に話し始めた。
元は未来は立派な善忍の家系であった……だが未来は中学生の頃、イジメを受けていた。机の上には暴言とも呼べる数々の言葉が刻まれてて、紙にも暴言を書かれている悪質な悪戯……そして皆んなからは無視されてきた。自分は泣いてるにも関わらず、皆んなから笑われて、見て見ぬ振りをされて生きてきた。
未来はそれが許せなかった、もう二度とあんな嫌な思いはしたくない、嫌なものは見たくない。なら見なければ良い……だから未来は眼帯をした。視界は半分になるけれど、それでも構わない……そして未来は善忍になることを辞めて、悪忍になる道を選んだ。善は差別的で窮屈で、正しいことしかやれない……だが悪は違う。悪は善よりも寛大で、どんなものも受け入れ、やることが出来る…そう、『復讐』が出来る。自分をイジメたヤツら全員に復讐を……
それが未来の原点(オリジン)だ。

話を終えると、未来は再び銃で乱射し始める。だがそんな中でも柳生は未来に話しかける。

「成る程……それがお前が悪忍になった理由か……だが、それ程の強さを持っても、オレは負けたぞ……圧倒的な強さに敗北した……」

「……えっ？」

その言葉を聞き、未来は初めて驚いた。半蔵学院の誰かが敗北したなど、聞いたことがないからだ。鈴音や道元からも一度も聞いたことがない。そんな驚く未来に、柳生は何処か寂しく、怒りを持っている声で話しかける。

「お前は知ってるか？大切な存在が消えてしまう苦しみを……圧倒的強さを持つヤツを……　目の前に守りたいものが、消されようとする姿を……俺は『あの時』何も出来なかった。だから……

だから……

もう二度とあんなことにならないように、オレはもっと強くならなければならないんだ!!」

「っ!!」

未来は柳生の覇気に、たじろいでしまう。

「な、なによ……前とは全然違う……アンタを、そんな風に変えたのは……一体……」

未来が呟いた時だった。

「黒影(ダークシャドウ)」

「アイヨ!!」

「ふぇっ!?」

突如未来に襲いかかる黒い影のモンスターに未来は驚き、とっさに傘でガードする。

バチィン!!

「な、なに!?」

「アレは……まさか!」

それと同時に……

「でりゃああぁぁぁーーーーーーーー!!」

「っ!」

日影に襲いかかる人物、……日影は難なく避けた。

「ケロ、やっぱり硬いわね……舌切れそうだわ」

「っ!!テメェら何で此処に!?」

柳生と葛城の前に現れたその人物は……

「フッ……やはり障子の言う通り、此処に居たな……助太刀参る……」
「クソっ!!あの緑色の短髪の女性……早え!てか当たんなかったよクソぅ!」
「落ち着いて、これから私たちがどうやって戦うのか……じゃないかしら?」

先に駆けつけに来た、常闇、切島と蛙吹であった。

「お前ら……どうして此処に?」
「お前らここが何処だか分かってんのか!」

柳生と葛城がそう言うと、切島は拳を打ち鳴らす。

「へへっ!分かってますよ……分からなくて乗り込む馬鹿なんざいないでしょう!」
「切島ちゃんの言う通りだわ、私達は救けに来たのよ」
「我らが盟友を取り戻しに……な。それに何も俺たちだけじゃない」

そう言うと、後ろから……

「待ちやがれモブ共ぉぉーーーーーーーーーーーー!!!」

爆発を起こしながら突っ込んできてる爆豪に、他の皆んなも来ている。

「み、皆んな！」

「半蔵さんに許可を得ました!!ですから、もう大丈夫です！」

緑谷は大声で叫ぶ。それを聞いた二人は、斑鳩が下にいるのに皆んなを止めに入らなかったのと、此処に来た理由を瞬時に理解した。

「へっ……それなら心強いぜ」

「ふん…俺一人で十分だ」

柳生は偉そうにしているが、それでも助太刀に来てくれて嬉しいのか、頬が緩んでしまう。

しかしそんな二人は、皆んなを見つめている。

「なんや……アレ。半蔵以外の誰かが来たで」

「どんどん侵入者が来てんだけど……まあいいわ……どの道コイツらは殺さないとね！」

日影と未来は武器を構えて皆んなに向ける。

「さっきのヤツもそうだが……コイツらもヤバそうだな……」

「ねえ、忍びって皆んなそう言うもんなの!?!なんか皆んなイレギュ

ラーなんだけど！思ってたのと違う！」

轟と上鳴は、日影と未来を見てそう叫ぶ。

「ふむ……胸は、当たりが居て…ハズレがいるか……まあ仕方ない……」

「ちょっとそこの紫チビ！聞こえてるわよ!!私をバカにするとぶっ殺すわよ!?」

「ん～……、あのちっぱいレベルは、耳郎か？それ以下か……？どっちだろ？」

「ハァ!?!?!?私を無視するなあぁぁーーー!!」

峰田は日影と未来の胸を見てそう言うと、峰田の呟きが聞こえた未来は殺気立つ目で睨むものの、峰田は未来の胸と耳郎の胸を比べている。未来の言葉に傾けない峰田に、未来は更に激怒する。そんなやり取りを見てる轟は、皆んなに振り向く。

「取り敢えずアイツらが戦ってる内に、俺らも先に上行くぞ、まだ飛鳥を見てねえ……となると当たってるのは……」

「僕らと対立した…悪忍…！」

焔である。

緑谷と轟はお互い顔を見合うと、冷や汗が流れ落ちた。

「こうしちゃいられねえ……オイ！お前ら早く行くぞ！」

轟がそう言うと……

「ハッ!!モブ共ならまだしも、俺に指図すんじゃねえ!!」

爆豪が反論する。

「お前、今そう言ってる場合じゃねえんだぞ！周り見て考えろ！」

「うるせぇぞ半分野郎!!どの道全員ブッ殺せば問題ねえよ!!」

爆豪と轟が言い争ってると……日影と未来は二人のやり取りに目をやる。

「なんやあのうるさいの……」

「私たちを舐めてるのかしら……」

すると爆豪は大声で轟に怒鳴る。

「そもそもこの蛇野郎とチビ眼帯なんざ俺一人で充分なんだよ!!言っただろ！全員ぶっとばすって！だから邪魔すんじゃねえ!!」

ピタッ……！

その言葉に二人は反応する。

「蛇野郎って、ウチのことか？わし感情っちゅーもんはないけど、なんとなく馬鹿にされてるって事くらいは分かったわ……」

「ち、ち、チビ眼帯ぃ!!?チビ眼帯って私のこと?ねえ、アイツ私たちに言ってんの!?」

日影と未来は殺気立つ目で爆豪を睨む。標的が柳生と葛城から、爆豪に変わった。

「しまった、アイツ!」

「……」

葛城は爆豪に振り向く、日影が何をやろうとするのか察知したのか、日影を止めようとするが…もう遅い。未来も同様…傘から剣に変えて爆豪に突っ込む。

だが、柳生は止めなかった。

「オイ爆豪…!うし…」

「もう遅いで、秘伝忍法…『ぶっ刺し』!」

日影のナイフが爆豪に襲いかかるが…爆豪に当たる事はなかった。二つの影が目の前に遮ったからだ。

ガギィィィンン!!

「!?」

「っっでぇぇ!!」

その影とは…体を硬化させて自らが盾となり爆豪を庇う切島と、長い舌を伸ばして切島を巻きつけ、猛スピードで移動させた蛙吹であっ

た。

「お、お前ら……てか大丈夫かお前!?」

葛城は一瞬二人の行動に感心したが、直ぐに切島の苦痛の顔を見て驚く。

「へへっ……ぶっちゃけ言えば超痛えっす！なんかこー……爆豪に腹パンされた感じ！」

「切島ちゃん、大丈夫？けど……切島ちゃんを信じるわ……！だから葛城ちゃんも切島ちゃんを信じて！」

二人は問題ないという顔で葛城に返事する。

一方未来は……

ボオオォォーーーン!!

「カハッ……!?」

「ケッ！所詮テメェは刃物で突っ込んでくる猪やろうか!?」

未来は爆豪を甘く見てたのか、もろに爆破を食らった。未来は爆豪に突っ込むように剣で襲いかかったが、爆豪は瞬時にしゃがむように避け、足払いをし未来が転けたところを爆豪は思いっきり爆破を食らわした。以外と繊細な行動だ。そして今度は剣を離すように手にも爆破を食らわせる。

ボオオォォーーーン!!

「いっっ……くっ!!」

未来は苦痛の顔で爆豪を睨むが、爆豪は不敵な笑みを浮かべてる。

(なんなの……!?コイツ一見馬鹿そうに見えるのに……!こ、こんなのに……)

屈辱を味わう未来は、傘を持って銃を撃とうとするが……

「させる訳ねえだろがボケェぇ!!」

ボオオォォォォーーーーーーーンン!!!

「っっああ…!!」

爆豪の渾身とも呼べる爆破をくらい、未来は吹っ飛んだ。未来に攻撃する隙すら作らせないのか、未来は爆豪に手も足も出ない。

「爆豪のやつ、女相手にここまでやるか!」

「まさかアイツ……ロリコンドS野郎?!」

「いや違うだろ」

尾白は爆豪の容赦無さに驚き、峰田は何か変なことを言い、それを障子が突っ込む。

距離を離させる事に成功した爆豪は、もういっちょと言わんばかりか、突っ込んで行こうとするが……

「よせ爆豪……」

常闇は爆豪を止める。

「ああ!?なんだよこのクソカラス!!止めんな!」

爆豪は掌を爆破させ、目をギラつきながらそう言うと…常闇は爆豪を見ずに話し出す。

「お前は轟と同じく先に行った方がいい……これは命令ではない……」

「何でだよ…!」

「轟が警戒する悪忍だぞ?それ程の者が此処に居るならば……俺たちに任せて強者であるお前が行け……皆の負担も少ならからず軽くなる……お前にとっても悪い話ではないはずだ……」

「〜〜〜〜っっっ!!!」

常闇は爆豪にそう言うと、爆豪は反論できず苛立ち、髪をくしゃくしゃと掻き、常闇を睨みつける。

「わーったよクソが!!」

そう言うと、爆豪は轟に振り向く。

「行かせるわけ……ないでしょ!!」

未来は爆豪の爆破をくらい、少しボロボロになりながら、傘で爆豪目掛けて銃を撃つが……

「黒影(ダークシャドウ)!」

「アイヨウ!」

ドドドドドドドドドドドドドド!!

突如爆豪の前に黒い影が立ち塞がる。

「ええっ!?」

未来は目の前の状況に驚きの顔を見せる。爆豪も突然の出来事に後ろを振り向いた。常闇は

「お前たち……行け！此処は俺と青山、峰田に任せろ！」

「えっ!?」

「オイラも?!」

青山と峰田にそう言うと、峰田と青山は「何で!?」という顔で常闇に目をやる。

「何を言ってる……峰田は先ほど、あの悪意満ちた少女に宣戦布告のようなものを言ったではないか……それより早く皆んなは……先に！」

「おう！」

「ケッ……！」

「わ、分かった！ありがと常闇くん！」

残りの皆んなは頷き、先に行くと……

「あの～……オイラは宣戦布告じゃなくてだな……その～……」

峰田と青山は置いてかれた。

「待って、僕何もしてなくない？☆」

「すまん青山……悪いが力を貸してくれ……柳生が居るから問題はないが……ここは『薄暗い』……もし完全に『暗闇の場所』で戦えば間違いなく『危険』になる！だから青山、お前の個性が必要なんだ」

常闇がそう言うと青山は、自分の力が必要と聞き嬉しいのか、さっきの青ざめた表情は一変し、キラキラと輝かしくなった。

「理由は知らないけど、僕の力が必要なら仕方ないね！☆」

そう言うと青山も戦闘態勢に入る。

「なんだかよく分からないんだけど……敵が増えたんだけど！あと超ムカつくんだけど!!あーーもーー！こうなったら、ギッタンギタンにしてやるんだから!!」

未来は皆んなに怒鳴りながら、武器を柳生、常闇、青山、峰田に向ける。

「おいぃぃーー!!常闇のバカ！オイラ戦えねーぞ！」
「フッ…☆僕の力が必要なら仕方ないよね！」
「二回言ってるぞお前……常闇、俺一人で十分だ……」
「ああ知ってるさ……俺は俺のやりたいようにしてるだけだ…だからお前は気にしず戦えば良い……」

四人は未来を、未来は四人と対立する。

「常闇の奴ら、上手くやってくれてるようだな……俺らも先急ぐぞ…！」

轟は常闇達が未来と戦うのを見てから声を掛ける。皆んなが自分たちの為に戦ってくれる背中を見て、一刻も早く行かねばという気持ちでいっぱいになる。だが轟たちの行動を、日影は見逃さなかった。

「逃がさへんよ……」

日影はぬらりと体を低い態勢に入ると、走り出して轟たちにナイフを刺そうとする。

「だからさせねえって！」

ガキィィィイン！

「っ…！　ホンマにしつこいな」

「へっ！それがヒーローってもんよ！あと超痛えからなコレ？」

庇う切島に苛立つ日影は、激痛で苦しむ顔をしながらもなんとか笑顔で応える切島に、日影は睨むしかなかった。そして……

「でりゃああぁぁーーーーーー!!!」

ドカァッッ!!

「っっ!?」

突如、日影の腹に葛城の蹴りが入る。

「助かったぜ切島！お前男って感じだな！」

「当然ッス！」

葛城がそう叫ぶと、切島は男気溢れる声で答える。

そして…

「でりゃっ！」

「っ!?」

日影に太い筋肉ある尻尾が襲いかかる。日影はなんとかその攻撃を避けることが出来た。その正体は勿論尾白だ。

そして…

ガシッ……!!

「！な、なんやこれ？」

日影の体が突然動かなくなった。まるで誰かに抱きしめられてるような……その正体は……

「さあ皆んな！早く行ってーー!!」

透明人間たる葉隠であった。葉隠は透明のため何処にいるか分からないが、日影を拘束しているため今は分かる。

「っし！葉隠ナイス！」
「葉隠ちゃんよく捕まえたよー！」
「敵が食い止めてる内に、残りの我々が向かいましょう！」
「ああ、先急がねえと、死んでましたなんて展開は嫌だからな……」
「ハッ！あんなデカ乳女も雲雀もクッソどうでも良いんだよ！早くその悪忍とやらぶっ潰して、コイツらも、下にいた奴も俺がぶっパする！そんだけだ!!」

「か、かっちゃんらしいや……本当に…」
「あぁ!?デクは喋んな!!」
「ええっ!?」

上鳴と芦戸が感心してる中、先を急ぐようにと声を掛ける八百万と轟に、爆豪がキレてると、隣の緑谷は勝己らしいやと呟いてるところを更にキレられた。そんなやり取りをしながらも、皆んなは先を急いだ。

「ハッ…爆豪のヤツ、相変わらずだな……」
「ケロ、そうね…けど何時ものことよ、それより葉隠ちゃんと尾白ちゃんも手伝ってくれるなんて嬉しいわ」
「ああ、当然だ！」
「ふっふーー！どうだ！」

二人は自信満々にそう言うと、葛城はそれを見て少し頬が緩んだ。だがそれも束の間だった。日影は力を入れて、直ぐに葉隠を離させる。

「っ……！っ、強!?力入れてたのに直ぐに剥がされた！」

葉隠は全力で力を入れていたが、日影は圧倒的な忍びの強さで葉隠の拘束を剥がすと、直ぐに後ろに振り向きナイフを振るが、葉隠は不幸中の幸いだったのか、剥がされた時に尻もちついてしまい、日影の攻撃に当たらず済んだのだ。

（あっっぶなあぁぁ～～……!!これあの人の攻撃食らってたら即あの世逝きだったよ……）

葉隠は今真っ裸のため、日影の攻撃を食らってしまったら死んでしまうのも無理はない。忍びから見てみれば、ある意味葉隠は常に命懸けの状態だ。

「葉隠大丈夫か!?って、何処にいるか分からないけど……取り敢えず血が出てないということは大丈夫……なんだよな？」

尾白は葉隠が無事かどうかが心配の様子だ。そんな尾白に、日影は振り向く。

「なんや？友達が心配なんか？ワシ感情っちゅーもんが無いでよう分からんから心配ってのがよう分からんは……」

日影はナイフを尾白に向ける。

「なっ……!か、感情が……ない？」

「ケロ……私ね、あの人見てるとなんか怖くて動けないわ……生命の本能がね、逃げろって言ってるのよ、でも逃げれないの、切島ちゃんどうすれば良いのかしら？」

「それ蛇に睨まれた蛙じゃねーか！」

確かにそうだ。日影はヘビとも思わせるような目で皆んなを睨み

つけてるのだ。そんな目で睨まれると動けないというのも無理は無い。

「んなこと言ってる場合じゃねーだろお前ら!!とにかくアタイたちはこの日影ってヤツを倒すぞ!」

「おっス!」
「ええ…そうね」
「ああ!」
「うん!」

四人は葛城の言葉に反応する。葉隠はいつの間にか側に居たようだ。すると日影は鼻で笑うように葛城たちを見下す。

「……忍びならまだしも、アンタらのようなヒーロー学生がなんで雲雀とやらを助けるん?そないまでして命懸ける価値あるんか?」

「……ああ…?」

葛城は日影の言葉を聞き、頭が熱くなり、物凄い殺意で睨むが……

「おい、それどーゆーことだよ……」

「っ…?」

葛城の隣に居た切島が日影に話し出す。切島は怒りを押さえ込みながらも話し出すが、日影は何も臆することなく話し出す。

「そのまんまの意味や……アンタらがコイツらとどーゆー関係があるかは知らへんが、少なくともここに来なければ死なんくってもええ話しってことや。そないまでして何で助けるん?」

日影は感情というものがない。だから切島たちが助けに来た理由はわからないし、まずなぜ誰かを助けたくなるのかが分からないのだ。感情がないから……

「……お前……それ、本気で言ってるのか……？」

尾白は震えながらも、拳を握りしめて、切島同様に怒りを押さえている。

「わし、感情っちゅーもんが分からんからな……だから助けたいって考えもよー分からんのや……わしはただ忍びとして生きてくだけや」

日影はなんの悪そびれもなくそう言うと、蛙吹は表情を少し強張らせている。普段はお淑やかで感情がないと思われてる蛙吹が、日影に語りだす。

「私はね、感情がないんじゃない？って皆んなからよく言われてたわ……でもね、感情はあるのよ、生き物には何だって…貴方は感情を知らないだけだわ……だから、感情が無いっていう言い訳で……

友達を悪く言うのはやめて!!」

「……」

蛙吹が初めて見せる激情に、日影はふとあるものが脳裏に浮かんだ。

『日影よ、感情を捨てろ……ただ冷静に標的を仕留めれば良い……ただそれだけだ』

「なんや……この感じ……なんで何も知らん奴に……こんなこと……」

「梅雨ちゃんのいう通りだぜ」

「？」

切島は前に出る。

「アンタがどういう理由で感情ないのか知らねえけどさ……でもさ、俺らは感情あるんだよ……なんで助けるかって？決まってんだろ……

ヒーローだからだよ!!」

「っ…！」

切島の叫びに、日影はまた脳裏にあるものが浮かんだ。それは

かつて、日影にとっての憧れの人物…

日向であった

そして……惨たらしい死体が発見された…

日向の姿が…

ドッ!!

「!!??」

日影は二人の攻撃を食らい、地面に転がるように吹っ飛んだ。

それは……

「何ボヤっとしてんだ!!」

「葛城さんの言う通りだぜ!まだ話は終わってねえんだよ!!」

「……なんやこれ……」

日影は葛城と切島を睨みつける。何処かへと忘れていった思い出が、二人と向き合うことで思い出していくのだ。

自分は感情を捨てたのに…

「俺はっすね、助ける価値とか死ぬとかどうこう以前に……困ってる友達(ダチ)いたらほっとけねーんすよ……そりゃあ俺は忍びの社会なんざ分からないし、俺たちのようなヒーローの学生が首突っ込むのは可笑しいかもしれねえ……けどよ…だからって…

友達(ダチ)見捨てる理由にはならねえだろうが!!!嫌なんだよそういうの!助けれるのに助けに行かないとかってのが俺はどうしても嫌なんだ!俺が俺じゃいられなくなるんだよ!!テメェはなにか?感情がないからって仲間見捨てるのか?違えだろ!!」

そして…日影の前に歩み出す。

「仲間の意味考えろ!!!!」

「っ!!」

一喝する切島。それに続き、蛙吹も頷く。

「切島ちゃんの言う通りだわ……確かに雲雀ちゃんとは日の付き合いは浅いわ……正直まだまだ知らないことばかり……でもね、それでもやっぱり同じクラスで過ごしてきた仲間だもの…友達だもの……心配しないなんてことは絶対にないわ…!だから、貴方もきっと同じ立場になったら分かるはずだわ、感情というものが!!」

『日向…』

「俺もそう思う…感情が無いからって何でもやって良いとは違うだろ!!そんなの理由にはならない!アンタの身に何が起きたか分からな

い…けどさ、それって当たり前だろ？俺たちは人間だ、分からないことがあるのは誰だってそうだ。感情が分からないなら……知れば良いじゃないか！」

『日向……！』

「うんうん、私もそう思うよ！貴方たちは私たちの敵だけどさ、でも仲間の意味と感情の意味、両方大事だからよく知ってほしいんだ！……この先生きてく上で、それを知らないときっと後悔すると思うから…さ」

『日向!!』

尾白に葉隠も日影に語りだす。それを聞くたび、日影の表情は険しくなり、何処か悲しくなってしまう。

「なんや……なんでアンタら敵なのに、わしにそんな熱く語れるん？わしらアンタら殺そうとしてるんで？なのに……なんでそんなこと言うんや……」

「まだ分からねーのか」

「っ!?」

葛城の声に振り向く日影。

「コイツらはな、お前の為にと思って言ってんだよ……　お前に知ってほしいんだよ。感情ってのと、仲間って意味をな!!」

葛城がそう叫ぶと、切島、蛙吹、尾白、葉隠は戦闘態勢に入る。

そして……春花と雲雀との戦いでは…

「ふふ、もうお終い？」

「はあ…はぁ……はぁ……」

春花は自信満々に立ち、やられてる雲雀を見下す。雲雀はボロボロになって倒れている。それでもなんとか意識はあるようだ。雲雀は春花を見つめて、立ち上がろうとする。

「うぅ……いっ……！」

「今度こそ、私のお人形にしてやるんだから……」

「そ、そんな……」

雲雀が震えてるその時だった……

シュルルルルーーーーーーー!!

「えっ!?」

春花はなんとかギリギリ避けた。そのセロハンテープに…

「これって…セロハンテープ?」

「あっ!まさか……」

突然セロハンテープが襲い掛かってきたことで驚く春花に、察した雲雀は目をキラキラさせる。そうそれは…

「オラオラァ!!コレでも食らいやがれ!」

そこらじゅう地面をえぐり取り投げつけてくる地面の岩盤や、巨大な木材などが春花に襲いかかる。

「クッ…!こんなの……これでどうかしら!?」

春花は怪しい薬品を取り出し、襲いかかる岩盤や巨大な木材に投げると…

ボオオォォーーーン!!

爆発した。

土煙が巻き起こるなか、人影が見えた。春花は一気に警戒態勢をとる。

「なんなの貴方たち?」

「み、皆んなぁ!!」

土煙が晴れると、そこには…

「お待たせ!雲雀ちゃん!!」
「あの女はや!俺のセロハンテープが……」
「……」
「ちっ、あの女何者だ!?あと早くケリつけないとヤバイ!頭が…!」
「うぉい!?砂糖待って、まだ時間あと少しあるから!だから頑張れ!!」

雲雀救出隊とも呼べる、お茶子、瀬呂、口田、砂糖、耳郎であった。
その五人を見た春花は、話し出す。

「なんなの貴方たち…?今お取り込み中なの、邪魔よ…!まあけどどの道生きては返さないけどね!」

クナイと薬品を取り出し、そして傀儡を呼び出した。

「オイ何だあの女の衣装!痴女か!?」
「てかなんか色々スゲェぞあの人!逆に戦い辛そう!」
「あーもーー!アンタら男なんだから黙って戦いなさい!ホラ口田を見習って…って、まあ取り敢えず雲雀は居たけど無事じゃないみたい…となるとこの人との戦闘は避けられないようね…」
「……」
「サポートなら私たちに任せて!」

五人は春花と立ち向かう。

「み、皆んな……!ダメ……はやく、このことをみんなに伝えないと……!」

そして……

飛鳥ＶＳ焔　　ｓｉｄｅでは…

「でりゃあ!!」

飛鳥が攻めに入る。飛鳥は二つの刀で焔を斬りつけようとするが、焔も負けまいと、六爪でガードする。そして膝蹴りを食らわせようとするものの…

「とうっ!」

「なに!?」

二つの刀を一気に押して、上へ回避するようジャンプする。そして更に上から斬りおろす。

ガギイィィーン!ギチギチ

「くっ……!」

焔は守るのに手一杯だ…

(何だこいつ……!?以前とは全く違う……短期間で急成長して強くなったというのか!?!?)

焔は内心驚いていた。まさか飛鳥がここまで飛躍的に成長して強くなっているとは思わなかった。正直言って飛鳥を甘く見ていた。だから驚いてるのだ、自分とここまでやり合えるのを見て……だが、焔も何時までも押されてるようなヤワな相手ではない…

「図に……乗るなあああぁぁぁぁーーーーーー!!」

ズガアアァァーン!!

「きゃっ!?」

押された飛鳥は思わず態勢を崩してしまう。そして、隙だらけで反撃出来ない飛鳥に焔は襲いかかる。

「少しはやるようだが……ここで終わりだ!!」

焔が刀を向けたその時。

ボ　オ　オ　オ　オ　オ　オ

オオオオオオーーーーー

巨大な爆発。その派手な爆破は言うまでもない……

「ケホ…ケホ……本当に強すぎでしょ！どんだけの瞬間火力これ!?」
「流石と言ったところなのか、それとも無茶だと言ったところなのか…だな」
「オールマイト先生にも言われてたでしょう!?屋内戦闘において大規模で派手な攻撃は愚策だと、もう忘れてしまったのですか!?」
「うるせえな!!忘れてねえよ、どうせここはカラクリ屋敷だろ！また何処かのモブが直せばいい話だクソが!!」
「ヤベェ…！ここ冗談抜きで煙いはコレ！ゲホ、ケホ！」

その土煙が晴れていくと、そこには…芦戸、障子、八百万、爆豪、上鳴が姿を現した。

そして…

「やっぱ居やがったな……炎使いの悪忍……！」

「飛鳥さん！大丈夫ですか!?」

轟と緑谷の姿も現れる。

「み、緑谷くんに轟くん……皆んなまで!?」

飛鳥は皆んなが駆けつけに来てくれたことが嬉しくて、笑顔を浮かべる。そして緑谷が飛鳥に、どうして此処が分かったのかの訳を言うと、「じっちゃんが!?」と驚く顔で反応する。まあそれでも助けに来てくれることには感謝している。

そして肝心の焔は…

「くそっ！コイツら二人ともまた私たちの邪魔をするか！それに……見たことのない奴等も居るな……」

焔はそういうと再び武器を構えて皆んなを睨みつける。

「まあいいさ…ここは秘立蛇女子学園…ここに入った以上生かすわけにはいかん……お前たちを倒すことなど容易いか…」

焔がそう言うと、皆んなは焔に振り向く。そんな皆んなも……また。

「ひぃぃ！なんかあの人一番強そうじゃね!?六爪て…ティガ○ックスかよ！」

「さあ、此処が正念場だ行くぞ!!」

「一番強い人と当たったね！」

「呑気なこと言わないで下さいまし！皆様は早くこの方とどう対峙するかが問題ですわ！」

「だな…八百万の言う通りだ」

「ハッ！んなもん俺一人で十分だ馬鹿やろう共が！」

そして……

「これにより!!雄英高校１ーＡ組、半蔵学院の忍生徒と共に蛇女子学園の悪忍と対峙する!!」

緑谷は拳を握り締めると、皆んなも戦闘態勢に入る。

善忍とヒーローの、二つの正義の光が今…輝いて、悪忍と戦うのである。

２５話「二つの力」

天守閣の最上階では……道元は超秘伝忍法書の隠と陽を持ち

「クックック……隠と陽が、激しく揺らいでいる。それで良い……これで良い……これで私は……」

この男は欲に溺れた人間であり、悪忍の地位を独占し、忍びの社会そのものを統括しようとしている男であった。それが例えどんな犠牲が出ようと……蛇女子学園がどうなろうと……全てはただの駒、使い物でしかないと思っている。そんな道元は、飛鳥と焔の戦いを、楽しむように利用しているのだ。利用されているという事はまだ、誰も知らない……

その焔と飛鳥たちは……

焔は飛鳥と増援に来た雄英の生徒たちを睨みつける。もちろん飛鳥と緑谷、轟に爆豪も焔を睨みつける。

「ふん、雑魚が何人来ても同じこと！かかって来い、１００％返り討ちにしてやるがな！」

「ハッ！俺をこんな雑魚どもと一緒にすんなガングロ野郎が!!１００％返り討ち？だったら俺は更に上からねじ伏せてやんよ!!」

「なんだと……？」

「か、かっちゃん……！敵を余り刺激させないほうが……」

「うっせぇ!!デクは黙って死んでろ！」

焔が皆んなを煽ると、爆豪は焔に煽りだしては怒りの矛先を向ける。そんな焔は爆豪の言葉に眉をひそめ、静かに怒りを燃やす。緑谷は敵に刺激させないよう声を掛けるものの、爆豪には無意味だ。

「オイオイお前らさ！こんな時でもよくそんな状況で居られるな！」

「爆豪一先ず落ち着け！」

「爆豪さん気をつけて下さいまし！この人、見るからに先ほどまでの敵とは違いますわ！」

「なんかあの人怖いよー!!」

上鳴、障子、八百万、芦戸が叫んでる中、轟は無言で焔を見つめている。そんな焔は皆んなを見て嫌気が刺したのか、刀を飛鳥から雄英の生徒に向ける。

「まずは目障りな雑魚から殺って行くしかないようだな……!!」

炎を刀に纏わせ、戦闘態勢に入る。

「ま、まずい……みんな！」

飛鳥がそう叫ぶが…その心配は無用だった。

パキイィーーーン！

ボオオォォーーーン!!

「……っ!!」

氷に爆破の二つの攻撃が焔に襲いかかる。焔は前に轟と交戦したため、個性は分かってたので回避することは出来たが、それでも爆豪の爆破は避けれなかったようだ。

「くっ……!お前たち……」

「ハッ!言ったろ、テメェの１００％を更に上からねじ伏せるってな!!」

「……」

爆豪は自慢げに掌を爆破させ、轟は焔を睨んでいる。それもこれまでにない憎しみが篭っており。そしてふと、脳裏にあるものが浮かんできた…

『立て焦凍、お前は俺を超えるためにもっと強くならなければならない、泣くな、立て…掛かって来い……』

『いいか?お前はオールマイトを越える為だけに造ったんだ!!余計なことは考えるな!!』

「お前の炎を見てると…

イラつくんだよ……!!」

轟は焔を見てそう呟いた。決して焔に対しての怒りではなく、『ある人物』に対しての怒りであった。焔が悪いわけではないが、炎を見てるとつい嫌でも思い出してしまう。思い出したくもない……『父親』を。

「轟…くん？」

飛鳥は苛立つ轟を見て、心配そうに見つめている。まるで何か思い出したくもない、嫌なものを見てるかのような轟に……

それは飛鳥だけでなく、敵である焔も気付いたようだ。

「なんだ…お前？私が気に入らないのか？」

不意に質問してきた焔に、轟はジッと見つめる。

「悪いな……そういう事になる。別にお前自身、気に入らない訳じゃないが…お前のその炎を見てると、嫌なものを思い出すんだよ……!!」

轟は声を荒げ、苛立つ様子で氷を出して、室内を一気に氷漬けにする。だが…焔も轟に負けまいと炎を出して氷を溶かしていく。

「そう簡単にやられるわけないだろ!!!」

焔も声を荒げて対立している。

「クソ！早く倒れろよ…倒れろ倒れろたおれろ……!!これ以上、俺に『クソ親父（アイツ）』を思い出させんじゃねえ!!」

轟は憎悪を浴びせた、大声で怒鳴るように焔に叫び出す、だが焔は攻撃をやめない。

「フン！そんなに嫌なら、今すぐ楽にしてやるさ……！死ねええ!!」

「と、轟くん！」

飛鳥は轟を叫ぶが、遅かった。焔の刀が轟の近くにまで斬りにかかる。

ボオオオオオオオオンン!!

「ガッ……!?」

「なっ…」

「退け!!何ボサッとしてんだ半分野郎が!!」

爆豪は横から焔を殴るよう爆破攻撃を食らわせた。そして、隙が出来たところに更に爆破攻撃を食らわす。

ボオオオォォォーーーーーンン!!!

「っ……!!」

焔は吹っ飛び壁に当たる。

「カッ…ハッ!ゲホ…ケホ…!」

焔は強く背中を打たれたせいか、むせ込む。焔は爆豪を思いっきし睨む…が、爆豪は焔にではなく、轟を睨みつける。轟は自分を救けてくれた爆豪を見つめている。

「爆豪……」

「何やられそうになってんだテメェは!!こんな所でお前が負けてんじゃねえよ!テメェぶっ潰すのは俺なんだからよォ!!」

爆豪は轟に吐き捨てるようそういうと、再び焔に視線を向ける。

「なあ？悪党とやら……」

「お前……!!」

いちいち自分に煽ってくる爆豪のスタイルに、焔は苛立ち爆豪を殺意ある目でジッと見つめている。

「ハッ！ようやくいいツラになったじゃねえか……それでこそブッ殺し甲斐があるってもんだ……それにあの半分野郎が言ってた強え悪忍ってのはテメェの事だろうよぉ、まあどっちにしろ俺が全員テメェらブッ殺す!!だからさっさと倒れろや！」

「っ!!私を、舐めるなあああぁぁぁーーーーーーーー!!!」

爆豪の言葉に、焔はとうとうキレてしまったのか、怒りを爆発させる。

爆豪は焔の刀による攻撃をかわすが…

ザシュッ！

「って…!?」

爆豪は確かに避けたのだが、もう片方の六爪で攻撃してきたのだ。爆豪はそれも分かってた上で避けたのだが、ギリギリカスってしまい、攻撃を食らってしまった。

「ホラもう一丁だぁ!!」

「チッ…！」

焔は六爪で下から上へと斬りあげると、地面に這うような炎を出す。爆豪は掌を爆破させ、上へと回避するものの、少し炎を食らってしまった…

「掛かったな雑魚が!!」

焔は上へと跳躍し、爆豪に斬りに掛かる。だが爆豪もやられてるばかりでは無い。

「いいや、掛かったのテメェだガングロ雑魚野郎がああぁぁぁーーーーーーーー!!!」

ボオオオオオオーーーーーーーーン!!!
ボオオオオオオーーーーーーーーン!!!

「ぐっぅっっっ!?!!あっ……!」

爆豪は両手の掌を焔に向けて、爆破攻撃を食らわす。焔は直ぐに反撃しようと試みるが…

「ホラァ!!もう一丁行くぞぉ!」

ゴンッ!!

「っっっっ!!」

爆豪の腕に付いてる手榴弾のような鈍器を、焔の頭に思いっきし強く打つ。強く打たれたことに、焔は苦痛の顔を浮かべるものの、爆豪は決して容赦しない……そんな二人の戦ってる姿を見て、皆んなは呆然と立っている。

「す、すげぇ……爆豪のヤツ、本当に才能マンだ……」
「わ、私たちの出る幕ないね？」
「す、凄い……焔ちゃんとあそこ迄渡り合ってるなんて……」

上鳴、芦戸、飛鳥は感心しているが、その反面に、八百万たちは…

「……」
「爆豪さん……アレは…」
「ああ、八百万も気付いたようだな…」
「かっちゃん…」

四人は爆豪の様子を見て分かった。
爆豪は焦っている。と……

一見、見た目では爆豪が有利に見えるが、焔も負けてはいない。何より焔は蛇女子学園の選抜リーダーなのだから。それはつまり、詠、日影、未来、春花よりも強いとも言える。

そんな選抜リーダー相手に爆豪は戦ってる、となると爆豪もいつ殺られるか分からない…そんな敵と戦ってるのだ。力は五分五分と言ったところ……

「くっ……！お前は、かなり厄介だな……！一気に勝負を終わらす!!」

焔は六爪を爆豪に向けそう言うと、最大火力で、全力で爆豪に向かってくる。

それは…爆豪も同じであった。

「上等だゴラアアアアーーーーーーーーーーーー!!!」

ボオオオオオーーーーーーーーーーーーーーーーン!!!

ブワアアアアアーーーーーーーーーーーーーーーーーーン!!!

強力な爆破と炎のぶつかり合い。

「う、うわぁっ！」

「クッ……そ！爆豪のヤツ躊躇ねえ!!部屋ごと潰れるぞ!!」

「う、うわああぁぁーーー!!爆豪強すぎーー！」

「あ、芦戸さん!!しっかりして下さい！」

「部屋に炎が移る！轟！」

「分かってる！」

「……っ！爆豪くん、焔ちゃん！」

二つの強力な力がぶつかり合い、煙が巻き起こり、吹っ飛ばされてしまいそうになる。それでも皆んなはなんとか堪えることに成功した。衝撃波が止むと、轟は氷を出して、燃え上がってる炎を氷で消している。緑谷たちと飛鳥は煙が巻き起こってる方を見つめる。先ほど爆豪と焔がいた場所だ。そこに人影が、一つしかなかった。煙が晴れていく…

その姿は……

「はあ……はぁ……」

焔の姿であった。

「えっ…？かっ……ちゃんは？」
「……爆豪くんが、やられた……？」

緑谷と飛鳥は、爆豪がやられた事実に驚き、焔は皆んなの顔を見て、勝ち誇る。

「ふっ……ふふふ、はは……ははは……はははははは!!」

焔は笑いが止まらないのか、みんなを見下ろす形で笑っている。

「そんな……!!」

飛鳥も驚愕している。そんな焔は飛鳥を横目で睨みつける。

「何が正義だ……仲間？そんなもの要らないさ！一人で強く生きて、強くなる……それだけだ!!飛鳥、これで分かっただろ？悪が強いということが！」

焔は勝ち誇った顔で、皆にそう言った……

地下室では雲雀を救けるべく、お茶子たちが駆けつけに来たのだが…目の前にはボロボロの雲雀と、立ち塞がる春花が居た。そして今…

「爆音ビート!!」

「っ!?」

耳郎はイヤホンジャックをスピーカーに繋ぎ、大音量を春花に向ける。だが…

「なるほどね、音が貴方の武器ってわけ……けど避ければ意味ないわ!」

「クッ!…コスチュームで指向性のやつに改善しとけば良かった!」

上にジャンプする春花に、耳郎は悔し混じりな顔で睨みつけることしか出来なかった。

「だったら俺の個性で!」

今度は瀬呂がセロハンテープを出して、春花を拘束する感じであったが……

「私の傀儡、出ておいで！」

春花がそう叫ぶと、足のない空中浮遊の傀儡がやってきて、瀬呂に襲いかかろうとすると思いきや、春花を庇うべく身代わりとなり瀬呂のセロハンテープに巻きつかれてしまう。

「しまった……！」

「ふふ…貴方たちが、私たちに勝てると思ったら大間違いだわ……」

「そんなんやらなきゃ分からねえだろ！」

「っ!?」

大声で叫ぶ砂糖は、木の柱を掴んではもぎ取り、思いっきり投げとばす。

だが春花は難なく避けて着地する。

「だから言ったでしょ？貴方たちが私たちに勝つなんて…」

その時だった…

「ううん！違うよ！」

「えっ？」

後ろから声がして、春花はある女子に手で触れられた…それは…

「一人の力は無理でも、皆んなの力合わせれば、勝てなくもないんじゃないかなーー!?」

麗日お茶子であった。

お茶子はそう叫ぶと…春花は浮いてしまう。これがお茶子の個性の無重力だ。

「な、何よこれ!?着地…出来ない……?」

春花は驚愕した、お茶子の個性に……そう、今の春花は正に宇宙空間に居るようなものなのだから……

麗日お茶子　個性『無重力』　触れたものを浮かすことが出来る。ただし本人に限界があり、使いすぎると個性の負担により寄ってしまう。因みに自身を浮かすことも出来るし、解除させることも出来る。

（くっ……まさか、私がこんな…なす術もなく浮かれるなんて……！）

春花は心の中で呟くと、そんな春花に、瀬呂はもう一度セロハンテープを出して巻き付けようとする。

「そう簡単に捕まる訳ないじゃない！」

春花は巨大な爆弾を取り出して投げつける。

「おいマジかよ!!」

「そんなんありか!?」

「待って、あの爆弾何処から出したの!?」

瀬呂、砂糖、耳郎が驚愕する…そんな時だった。

雲雀は皆んなのピンチに、念を強くし忍兎を呼び出そうとする。

「お願い、忍兎…！皆んなを救けて!!」

その時だった。

ガキィィン！

忍兎は突如姿を現し、爆弾を蹴り跳ね返す。その爆弾は春花目掛けて襲いかかる。

「えっ!?」

ドガアアアアアアーーーーーーーーーーーン!!!

爆弾が春花にあたり、爆発した。その爆発の勢いで、瀬呂のテープもヘロヘロ状態になる。

「オイアレって…すげぇ！」

瀬呂は忍兎を見て感心している。煙が晴れていくと、そこにはボロボロになった春花が落ちてきた。

「油断したわ……完全に…」

春花は皆んなを見つめてそう言うと、目を閉じて倒れこむ。

「た、倒したんだよね…？やった、やったあぁー!!」

「ふいぃぃーー！一時はどうなるかと思ったぜ…」

お茶子はガッツポーズで皆んなに笑顔を送り、瀬呂は大きなため息をつく。だが皆んなは笑顔で雲雀を見つめる。

「とにかく、雲雀はちょっとボロボロになっちゃったけど、それでも命に別状は無さそうだね…よかった……」
「ありがとう！耳郎さんに皆んな、心配掛けてゴメンなさい……って、あっ！そんなことよりも早く皆んなに『このこと』を伝えないと！」
「ん？このことって何だ雲雀？」

雲雀の『このこと』という言葉に首を傾げる砂糖、すると雲雀は更に念を強く込めて、蛇女と半蔵＆雄英の生徒の皆んなに聞こえる声で話し出す。

『皆んな!!よく聞いて!!』

「!?」

あらゆる場所からは、疑問の声が上がってる。

「雲雀!?」「雲雀くん!?」「雲雀ちゃん!?」

そんな声が多々上がっている。そんな皆の疑問も御構い無しに、雲雀は話を続ける。

『皆んな！蛇女の人たちとは戦っちゃダメ!!戦って負けると命を失っちゃうの!!そう言う術が掛けられてるの！だから、戦っちゃダメ!!』

「「「「「!!!!!?????」」」」」

その場の全員は驚いた。この状況に置かれてることを……

「はあ…はあ……」

雲雀は強い念を使いすぎたのか、少しバテている。

「え?う、嘘でしょ……」
「そんな……!」
「ま、マジかよ!?」
「オイオイなんじゃそりゃ!?」
「……!?」

地下室で、雲雀と倒れてる春花を見て驚愕するお茶子たち。

焔と飛鳥たちでは…

「この声は…雲雀さん!?」
「負けたら死ぬ!?んだそりゃ、雲雀ドユコト!?あれ?ちょっと待って、これテレパシーみたいな感じで返信できない感じ?おーーい?」

上鳴は突然の雲雀の言葉に理解できなく、どういうことか返事を求めるが、返ってこない。
八百万はなんとか冷静を保ちながら、今置かれてる状況を一つ一つ整理していく。

爆豪がやられた。
突然聞こえてきた雲雀の声。
術者が蛇女にいて外法が掛けられてること。
雲雀の声があるということは、雲雀は無事で、お茶子たちの作戦行動は成功し救出できた可能性が高いと考えられること。

今わかるのはせめてこのことだ。

「なんて強い念話だ……これが本当にあの雲雀なのか?」

焔は信じられないという顔で聞いている。

「そ、そんな……!ねえ、焔ちゃん…負けたら死ぬってどういうこと!?」
飛鳥は訳の分からない状況に混乱しながら、この状況がどういうことかを聞く。すると焔はフッと鼻で笑い、話し出す。

「正しくは首切の術と言うんだがな……」

「っ!?」
「なんだそりゃ……」

緑谷と轟は、聞いたことのない術に驚く。ただ皆んなが分かったことは…もし悪忍と闘って殺さずに勝ったとしても、蛇女の皆んなはその術に殺されてしまう。ようは術者と同じく、飛鳥たちも焔たちを殺したことになると気付いたのだ。

「焔ちゃんはそれを承知の上で？」

飛鳥がそう聞くと、焔は「当然だ」とさも当たり前のように頷く。

「忍びは失敗すれば死ぬ…それが忍びの定めであり掟だろ？何よりそれが忍びの生き様だ……何今更寝ぼけたことを言ってるんだお前？」

「そんなの…」

「？」

飛鳥と緑谷は焔を見つめて

「「間違ってる!!」」

二人は同時にそう叫んだ。

「ハッ！間違ってるって思うのならどうするんだ？」

焔がそう聞いた時だった…

「んなもんテメェぶっ飛ばしゃあ良いだけの話だろうがあぁーーーー!!!!」

「「っ!?!」」

ボ　オ　オ

オオオオオオーーー

「おおー！よく生きてたよー！」
「流石だぜ爆豪！」
「ったく…心配掛けんな…」
「だが、よく戻ってきてくれたな！」

皆んなは爆豪が生きてたことにより喜びが溢れてきた。そんな爆豪は皆んなに振り向き「勝手に俺を殺すな！」と一喝する。そんな爆豪は不機嫌そうに、それでも何処か不敵な笑みを浮かべて焔を睨みつける。

「それにしても、あんの雲雀の野郎……！悪忍に捕まったと思ったら今度は戦うなだぁ～？負けたら命を落とすだぁ～？ワケの分からん事言い出しやがってェ……俺の一番嫌いな面倒タイプじゃねえかクソが!!」

爆豪は焔と雲雀に怒鳴り散らかす。焔は何とか立ち上がり、爆豪を睨みつける。

「お前は……私が倒したと思ったが……まさか生きてたとは……」
「ハッ！テメェが思った通りに殺られるほどヤワじゃねーんだよ！あとテメェに一つ言っとくことがある…」
「何だ…？」

「テメーらより俺の方が上だ!!」

「「率直だな!!」」

芦戸と上鳴は今の立場を忘れて同時に叫んだ。

「テメェ、さっき悪の方が強いとか言ってたよな？それが大間違いっつってんだ!!」
「何だと…？お前、私たち悪が強いのが間違ってると言いたいのか!?」
「その考え方の時点で間違えてんだボケェ!!」
「!?」

爆豪は厳つい顔で、爆破しまくりながらジリジリと焔の前に歩み寄る。

「大事なのは勝つことだろうが!!!勝つ奴こそが強えんだよ……テメェは雑魚に勝って強さ見せびらかして満足かよ？それ本当に強さって言えんのか？つまらないことで命かけてんじゃねえ！ようは失敗したら二度と勝つ気持ちも自信もないから、忍びの掟だのなんだので言い訳してるだけだろォが!!テメェはたったそんだけで終わっちまうようなヤツなのか？そんなんだったらテメェは１００％俺には勝てねえ、デクにも、デカ乳女にすらなぁ…

だから邪魔だ退けモブ!!」
「っ!!!お前…お前ぇぇぇーーーーーーーーーーーー!!!!!!」

爆豪に散々言われたことで、焔は堪忍袋の緒が切れ、お互い怒りぶつかり合う。

斑鳩＆飯田ＶＳ詠ｓｉｄｅ

斑鳩は飛燕を詠に向けながら闘志を燃やしている。それは勿論飯田もだ。

「負けたら……死ぬだと!?なんという事だ……！彼女たちにそんな術が掛けられてるなんて……」

「ええ…なんという非人道な!!」

二人はそんな理不尽な状況に怒りを燃やしている。何よりその術者に対して…だが。

「ふふ、心配要りませんわ……私たちが負けるなんてありえませんし……」

「ふざけるな!!!!」

「っ!?」

詠がそう言った時。飯田は怒りの目で詠を一喝する。詠は飯田の怒りに少し体を震わせる。

「心配要らないだと?君はこの戦いで負けたら死んでしまうんだぞ!?何でそんな平然としていられるんだ!!僕は…いいや、俺はそんなの絶対に許せない!!そんな非人道なやり方で命を落とすなど……そんなこと俺が、俺たちが絶対にさせない!!斑鳩さん！」

「ええ！」

斑鳩は飛燕を、飯田は脚のエンジンを…力を溜めている。

葛城＆切島、蛙吹、尾白、葉隠ＶＳ日影ｓｉｄｅ

「オイオイマジかよ！」

「負けたら死ぬだぁ!?そんなんマジもんのゲームオーバーじゃねえか！テメェら戦いを何だと思ってやがんだ！」

「ケロ……とんでもないわね！」

「そ、そんな術に掛けられて…何も怖くないのか…？そんなの、冗談じゃない！」

「なんて術……彼女たちはその術のせいで死んじゃうの!?」

葛城、切島、蛙吹、尾白、葉隠は今の立場に驚愕するが…日影は何ともない顔をしている。

「気にすな……そんなん知ったところでどうにもならん……アンタらがそれ知ったところでどうするん？」

日影がそう聞くと…

「んなもん……!!」

「決まってんだろうがぁぁ!!」

葛城と切島は日影を見つめ……

「「その術者ぶっ倒す!!」」

同時に叫ぶ。それに、

「私たちはヒーローよ…!」

「ヒーローは人を守り、救けるんだ!」

「貴方だって忍びどうこう以前に一人の人間なんだから、死なれちゃこっちだって困るんだからね!」

蛙吹、尾白、葉隠も叫び出す。

「……ほんま、よう分からんわ……」

日影は皆んなを見て、不思議に思った。今まで戦闘マシーンと恐れられてきた殺人鬼に対して、ましてや敵であり殺そうとしてるのに、向こうは自分のように心配し熱くなり、死んでほしくないなどと……日影にはどうしても理解できなかった。

柳生＆常闇、峰田、青山ＶＳ未来ｓｉｄｅ

「チッ…あの子ったら余計なことを……」

未来は舌打ちをすると…柳生は

「雲雀！雲雀が無事だった！良かった……！」

「ちょっと！私へのリアクションは!?本当に貴方は無視するのが好きなようね……！」

未来がそういうと…常闇は首を横に振った。

「何を言っている、アイツは無視などしていない……柳生がもしお前を本当に無視してるなら、お前とは戦わないハズだからな……」

「えっ…？それって…」

常闇の発言に、未来は目を丸くする。そして…

「だがその話は別として……まさかお前のような強者が、悪に魂を売るとはな……ならばこの哀れな少女に魂の救済を……！」

「おいおいオィィーーー！負けたら死ぬのに何でお前は平然と無視とかどーのこーの言うんだよ!!忍びってヤツら死の感情だけは鈍いのな！てかオイラたち、間違えて倒しちゃったらオイラたちが殺したようなもんになんだろ!!冗談じゃねーぞ！」

「まあまあ落ち着いて峰田くん☆ねえキミ、今すぐそんな下らないこ

とは止めた方が良い、自殺行為と一緒だよ？ホラ、このキラキラしてる輝かしい僕を見て、戦いなんて忘れちゃおう！そして『明るい未来』を目指そうじゃないか☆」

「アンタ何意味わかんないこと言ってんのよ!!あと最後私をディスってない？明るい未来って完全にギャグよね？ねえ？上手くないのよ!! アンタ何なのよ……ったく…」

「僕は僕さ☆僕の名前は青山優雅！キラメキが止まらない男だよ～☆」

「そういう意味で言ったんじゃない!!」

青山と未来の講義に、「いやどうでも良いだろ」と呟く峰田であった。

そんなやり取りを見てる柳生は番傘を未来に向ける。それに気付いた未来は少し驚いた。

「な、何よ……？」

「どうやら俺たちは戦う訳にはいかなくなったようだ……」

「ああ、ただ……可能性があるとすれば、その術者を倒せば、彼女たちに掛けられてる外法が解けれることもあるという訳だ。俺たちが戦うべき真の敵が見つかったという訳だな…」

「うおおぉーーーー！オイラ達ようやくこの殺伐とした所から出れるぜ！早くソイツ倒そう!!」

「麗しきレディにそんなことさせるなんて、正気の沙汰じゃないよね☆」

柳生、常闇、峰田（早く出たい）、青山は戦闘態勢を取り、未来を見つめる。

雲雀達ｓｉｄｅ

皆んなは雲雀の忍兎に乗り、術者の元へと向かっている。

「この最上階に術者と超秘伝忍法書があるの!!だからそこを目指せば…」

「なるほどね!この忍兎とかいうスピードなら、直ぐそこに行ける!」

雲雀がそう言うと、耳郎は「よっしゃ!」という顔で天井を見上げると…

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!

「ん?待ってなんだありゃ?」

後ろから誰かがこっちに向かって走って来てるような音が聞こえてきたので、振り返ってみるとそこには…

「そうはさせないわ!!」

倒したハズの、ボロボロの姿の春花であった。春花は忍兎よりも早いスピードで追い抜く。

「マジかヤツ！」

「雲雀の忍兎を追い抜きやがった！」

「なんなんあの人!?」

瀬呂、砂糖、お茶子はそんな春花に驚愕する。春花は余裕に距離を開ける。そして…

「秘伝忍法！『ＤＥＡＴＨ×ＫＩＳＳ』!!」

周囲に投げキッスをすると、大量のハートを撒き散らし、忍兎に襲いかかり…爆発する。

ドガアアアアアアーーーーーーーーーーンン!!

「キャアぁぁぁーーーーー!?」

皆んなは吹き飛ばされてしまう。

「ったた！もうチョイだったのに！」

「あの痴女マジで強え！」

お茶子は悔しい顔で春花を睨みつけ、瀬呂は春花の強さを見て、驚いてる。そんな春花は皆んなを見て不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ、貴方たち全員…本気でお人形にしてあげるわ…」

春花は黒い影を浮かべてそう言った……まるで母親のような歪んだ感情で…雲雀とその他の皆んなを見つめる。

詠との戦いでは…

「秘伝忍法!!」

「レシプロ……!」

斑鳩は、秘伝忍法の力全てを飛燕に注げ…
飯田は、一撃で仕留めるために、いつ攻撃をするかのタイミングを見極めている。

そして、斑鳩の飛燕が動いた途端…飯田の脚はトルクオーバーを引き起こす。

「『飛燕鳳閃・壱式』!!」

「バーーーーストオォ!!!!!」

斑鳩の飛燕と、飯田の個性、エンジンの脚が…線を描くよう交わり、飛燕の斬撃と飯田の蹴り、二人の連携攻撃が目にも追えない素早さで、詠に襲いかかる。

「っっっっっ　っ!!!?　キャッ　…　アァ　ア　ア　アァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!?」

二人の最大火力の攻撃に、詠は忍装束が完全に破け、倒れた。

そう…斑鳩と飯田の二人の、互いを大切に尊重し合う想いの力が一つとなり、詠を倒した。

忍びの強さは心の強さ…

日影との戦いでは……

「秘伝忍法!!」

「蛙吹ぃぃ!!!!頼む!!」

「ケロ!!任せて!!」

葛城は秘伝忍法の力全てを溜め込み、切島が叫ぶと、蛙吹は舌を伸ばしては切島に巻きつける。

そして、葛城が日影に飛び出た瞬間…蛙吹は思いっきり切島を日影に投げとばす。

(俺の個性の硬化で、この一撃に全て込める!!)

体全体から、腕のみに硬化を移し溜める。それは、渾身の一撃に掛けるため…全ての力を振り絞る。

「『トルネードシュピンデル』!!」

「どうううんりゃぁあぁぁぁぁあーーーーーーーーー!!!!」

葛城は、龍が如く足に竜巻を起こしながら、切島と共に、日影の頬に蹴りを入れる。切島は腹にパンチを打ちかます。

「っっっっっ!!!!!ああっ!!?」

二人の渾身とも呼べる連携攻撃の一撃を食らい、日影は忍装束が破けて、思いっきり地面に転がるように吹き飛ばされ、倒れた。

二人の男気ある勇敢さに、お互い仲間を大切に想う強さが一つとなり、日影を倒したのだ。

ヒーローの強さは心の強さ…

未来との戦いでは…

「秘伝忍法！」

「行くぞ！」

柳生はその場を回転し、常闇は黒い影のモンスターを出す。

『薙ぎ払う足!!』

「黒影（ダークシャドウ）!!」

黒い影のモンスターは「アイヨ！」と声を出すと、柳生が回転しながら召喚した巨大な烏賊と共に攻撃する。

巨大な烏賊の足と、常闇の黒影の手が、未来を襲う。

「っっっつ!!キャアアアアアアアーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!??」

二人の強力な攻撃に、未来は忍装束が破け、倒れた。二人の物言わぬ相性により、言葉が無くとも、想いの強さが一つとなり、未来を倒したのだ。

お互いの存在が心を交わし、強くなる。

忍びは何かを思う時、その時こそ強さを発揮する。

ヒーローは何かを思う時、その時こそ、個性の強さを発揮する。

日影と未来は、ボロボロの状態でもなんとか立ち上がり、戦おうとするものの…先ほどの攻撃を食らったため、直ぐに戦うことは出来ない。そんな二人の内一人に、葛城は日影の肩を掴み、揺さぶる。

「オイ!その術者は誰だ!何処にいる!?ソイツを倒せばお前らは元に戻るんだよな!?」

「それで……アンタらに何の得が?」

葛城がそう聞くと、日影は掠れた目で葛城を見つめてそう答える。そんな日影に葛城は、熱意ある目で日影の目を見つめながら話し出す。

「アタイたちは忍びだ…!命のやり取りは承知の上だ……!けど、他人に生き死を左右されるなんざ可笑しいだろ!!」

「葛城さんの言う通りっス!」

葛城の言葉に切島も頷き、日影を見つめる。

「なあ、俺たちは忍びのことよく分からねーけどさ……けどコレだけはハッキリと言える。忍びとヒーローは同じだってことが!!俺たちヒーローだって常に命懸けだ、命賭けてまでも人を救けたりするんだよ!死んじまう話だって聞かない訳じゃねえ、それは何とも言えねえよ……けど、失敗したから死ぬだなんてそんなの嫌だろ!!何でそんな事されなきゃならねーんだ!それは命懸けって言わねえんだよ!!もっと自分の命の事考えろよ!!」

切島も一喝する。それも怒気を含んだ声で。

「……」

日影はそんな葛城と切島を、見つめることしか出来なかった。何も反論できない…感情がないからそう言った概念がよく分からない……わからないが…それでも、それでも日影に少しずつ、感情が芽生えてきてるように見えるのだ。

「ねえ常闇くん、これ僕要らなかったんじゃない?ねえ?」
「スマンな…だが、決して悪くはないだろ?もしもの最悪の事態を予測して、お前を呼び止めたのだ」
「まっ、盟友の頼みは願い下げることは出来ないからね☆」

青山は、目障りとも思える輝かしい?ウィンクを常闇に向ける。

「そ、そんな……アタシが負けた……?そんな、そんな……　これで、私は死ぬどころか…また一人に……なる、皆んなから見捨てられて……無視されて……そんな……」

未来は自分が負けてしまったという罪悪感に、目から涙が溢れそうになる。そんな未来を見てる柳生は歩み寄る。

「……お前があの時言ってた、守りたいもの……」

「!?」

突然の柳生の発言に、未来は驚いてしまう。

「それはオレには分からない……だがこれだけはハッキリ言える……お前は強かった。それに、お前は一人ではない……」

「えっ？」

柳生の発言に、未来は目を丸くする。

「お前には、オレという『ライバル』が居るんだからな……」

「……柳生……」

「フッ…ライバル…か。良き者に会えたな…」

柳生は初めて、未来を『ライバル』と呼んだ。そして、柳生に初めて『ライバル』が出来た…そんな二人に常闇は口の端を少しあげるのであった。すると、柳生は未来に背中を向けた。

「だから……もっと強くなれ……」

そう言った……柳生の言葉に未来は、眼帯をしてる目から、一滴の涙が零れ落ちた。

「……なん…なのよ……本当に……もう……もう……うっ……うううっ……」

未来は必死に零れ落ちてくる涙を拭く。涙が止まるまで……ずっと…

そう、初めて未来は悪以外の人から無視しずに、見てくれた。そのことが嬉しくて、ライバルだと言ってくれて、一人じゃないと言ってくれて、嬉しかった。

柳生と常闇たちは、葛城と切島たちの方に駆けつける。

「お前たち、終わったようだな…」

「おっ！柳生たちもか！ご苦労さんだな…後は、上に行って術者を倒さねーと…」

「オレは雲雀を救けにいく！」

「!?」

柳生の言葉に、皆んなは一斉に振り向き、「分かるのか？」という顔をする。

「さっき地下室で雲雀の声が聞こえた…もしかしたら雲雀がそこにいるかもしれない…だからオレは行く…！」

柳生がそう言うと…常闇も頷く。自分も柳生の意見に賛同するのかついて行くそうだ。

「ならば、俺も行こう…」

「大丈夫だ常闇…オレ一人で充分だ…」

柳生がそう言うと、常闇は柳生を見つめると、柳生の考えてることはお見通しなのか、知っているという顔をする。

「そう言うと思っていた。だが安心しろ、俺は盟友を救けに行くだけだ…雲雀救出作戦に赴いた麗日達の救出にな…」

そう言うと柳生は常闇に、「フッ」と笑みを浮かべた。

「ああ…そうだな…」

「そんじゃあ俺たちは、先に行ってるぜ!!」

「ああ、柳生!上手くやれよ!」

切島と葛城はそう言うと、葛城たちは最上階へと向かうことになった。

出入り口近くの方では……

「ま、まさか…お嬢様にこんな力が…」

詠は飯田と斑鳩の二人の攻撃をもろに食らったため、日影や未来同様ボロボロで、直ぐに戦うことは出来ない。そんな詠は、悔しい目で斑鳩と飯田を睨むことしか出来なかった。

「いいえ、私の力だけではありません…飯田さんの力があったからこそ出来たことです。それに、私たちが真に戦うべき敵は、貴方たちに外法を掛けてまで戦わせる、歪で邪悪な何か…その時私は…友の為に、誰かの為にと思うその想いの強さが、私の力の全てを引き起こしてくれたのです…」

「い、斑鳩さん…!」

斑鳩の言葉に、ジーン!と感激する飯田。斑鳩の言うその歪で邪悪な何か…それは蛇女のスポンサーであり投資者、道元のことだ。勿論、超秘伝忍法書を奪取せよと命じたのも道元である。この男を倒さない限り、間違いなく蛇女の皆が危ない。

「フン…ようは善人はお人好しってワケですのね…」

詠は下を向いて、吐き捨てるようにそう言うと…斑鳩はそんな詠を真っ直ぐな目で見つめる。

「貴方が見たというあのお屋敷…私は確かに彼処に住まわれておりました…ですがそれはあくまで『養子』として……私は忍びの才能があったため引き取られたまでです……」

「「!!??」」

詠と飯田は斑鳩の真実を聞き、驚いてしまう。そう、斑鳩は鳳凰財閥のお嬢様ではなく、忍びの家系として引き継がれたまで…家族の縁も血の繋がりもない、ただ忍びとしての素質を認められたまで。たったそれだけで引き取られたのだ。

「貴方の家族を思う愛情は、痛いほど分かりました…ですが、私にとっての家族は半蔵学院の皆様です!!」

「っ!!」

斑鳩の言葉に、軽く戦慄し、むしろ罪悪感が湧いてしまう。自分は彼女を憎んでいた。お金持ちの偽善者…今までずっとそう思っていたから。だが彼女は養女だった…その真実は、詠にとっては一番衝撃的なものであった。

斑鳩が行こうとした時…飯田は詠に駆けつける。それに気付いた斑鳩は立ち止まり、飯田に振り向く。詠は飯田を見つめ、飯田は詠を見つめて話し出す。

「俺には、貴方の身に一体何があったか分からない…君が先ほど爆豪くんの発言に対して怒りを覚えたのなら、クラス委員長である俺が謝罪しよう、申し訳ない…」

「貴方……」

「だがこれだけは言っておく…貴方が先ほど言ってた辛い思いとやら……それを抱えてるのは君だけではないということだ。皆んな、人間誰だって辛い思いをして生きてるんだ!」

「……貴方の言う事はつまり、人は見かけで判断するな…そして辛い思いは私だけではない……と、言いたいのですね…」

詠はそんな真面目な飯田に半分呆れて視線を下に移すと、飯田は「うむ！」と返事をする。

「だから、何ですの……？」

詠は掠れた声で飯田にそう聞いた。すると飯田は…

「だから今、君が辛い思いをしてるなら、俺は貴方を救けたい」

「えっ……？」

真っ直ぐ透き通った目でそう言った。

「言っただろ？ヒーローは人を守り、救ける為にあるものだと。もし側に、近くに誰かが困ってる人間が居れば迷わず救ける。きっと俺だけじゃなく、兄もそうするだろう…」

飯田がそう言うと、詠はそれでも首を横に振る。だがその顔には嬉しさを堪えてる様子だった。もしそんな人が居れば誰もが苦労しない、そんな人が居れば自分はこんな思いをしずに済んだと…何度もそう思いながら……

「あ、貴方に…何が…何が分かると言うのですか……？辛い思いをしてでも、救けてほしくて、でも、でも救けてくれなかった……だから私は……！」

「ああ…君の身に何が起こったか分からない、知ったとしても多分俺が背負えるものではないと思う……今まで救けてくれなくて、今更何

を言ってると思われても仕方がないと思う……じゃあ、

君が今まで辛かった分、今、救けられても良いじゃないか！自分で自分を、縛らなくても良いんだもう。側にヒーローが居るのだから！」

「っっ!!」

飯田の優しさ溢れる言葉を聞き、詠はジッと、真剣な目で飯田の顔を見つめる。その目には、今まで耐えてきた苦しみや、自分で自分を縛ってたものが、少しずつ時剥がれていくような…そんな感覚だった。そして詠は思った。本当にお金持ちだけが全て悪い訳ではない……少なくとも、この人たちは偽善者ではない…本物とも呼べるような正義を感じた。

「だから俺たちは、術者を倒しにいく！それまで、待っててくれ！俺の脚も…保ってくれよ！」

飯田はそう言うと詠から斑鳩に振り向き、お互い顔を見て頷き合う。そして、少年と少女は走り出した。詠はそんな二人の背中を、ただただ見つめてた。

「どうして……どうしてそんな話するのよ……なんで……貴方たちは……そんなに優しい言葉を……そんなこと言われたら……貴方たちを…

憎めなくなっちゃうじゃない!!!!」

今まで耐えて、堪えてた大量の涙が溢れ、詠の頬に伝わり、零れ落ちた。

友を守り人を救けようとする、ヒーローと忍び、絆の想いの強さが、少年少女を強くした。

２６話「予期せぬ出来事」

斑鳩と飯田は、天守閣の最上階へと向かうべく、焦る気持ちを抑え込み、走り出している。

「それにしても斑鳩さん…まさか、貴方が養女だったとは……」
「その事は後にしましょう飯田さん、今私たちがやるべきことは…！」
「はい！真に倒すべき敵…ですね！」

飯田は手や腕で変な動きをしながら話し出す。当然斑鳩も飯田のその癖に少し驚き二度見してしまうが…そんな飯田は御構い無しに話し出す。

「こんな時に障子くんと耳郎くんが居れば…なんとか上へまで行けるが、ここの屋敷内全く謎だ!!あちこちに罠もある、階段が何処にあるかが分からないな…」

飯田は周りをキョロキョロしながら走っていると、斑鳩の方に、不意に矢文が飛んできた。

「っ!?　こ、これは？」
「矢文…読んでみましょう」

飯田は矢文が飛んできたことに驚き、斑鳩は冷静な状態で読み始める。

「これは……屋敷内の見取り図!?」
「！一体誰が…？」
「分かりません…その者が一体なぜ私たちに…敵意は感じられませんが、それでも私たちは最上階へと向かわなければなりません…」

斑鳩はそう言うと、見取り図を見ながら最上階へと走っていくのであった。

焔ＶＳ爆豪たちは…

「ハァッ！」
シュッッ！
「チィ…！」

焔の攻撃や動きを予測し、なんとか躱してる爆豪、逆にこっちも反撃するものの、爆豪と同じく動きを読み取られ、躱されてしまう。そんな焔は、憎悪溢れた目で爆豪を睨みつける。

「なかなかやるじゃないか…！」
「なかなか？お前、使う言葉間違えてんぞ？なかなか、じゃねえ…強えだクソがぁ!!」

爆豪はまた焔に煽るようにそう言うと、焔は殺気立ち、一呼吸してから刀を向ける。だが爆豪は真っ直ぐと臆することなく焔の目を見つめている。そう、真っ直ぐ……

「…お前みたいな奴は一々ムカつくんだよ!!飛鳥も、あのデクの棒も！」

デクの棒、それは緑谷のことだろう。爆豪は「ハッ！」と小馬鹿にするように鼻で笑う。

「デクの棒、クソデクか!それについては俺も同意見だ…あんのデクいつもバカにしやがるしな…」
「煩い!!お前たちは、何の苦労する思いも…辛さも…『裏切られた』人間の気持ちも知らずに、ただただ正義とやらを名乗り出る!そんなお前たちを見てるだけで腹ただしい……だから、正義なんてのは嫌いなんだよ!」
「?お前…何のこと言ってんだ?」

爆豪がそう聞くと、焔は過去にあったことを話し出す。
自分は元は立派な善忍の家系だった。親からも期待されており、自分もその両親の期待に応えようと、必死に努力してきた。小学校の時から個人授業制の塾に通わされてた。ある時中学二年生の頃、担任で仲良くしてもらっていた小路という男に進路を聞かれた。そして自分は、忍びの一族だと明かした。その途端、小路の態度は急変した…
そう、小路は悪忍だったのだ。その理由は、焔の忍家系の一族を抹殺するためであった。

『私を利用してたの?どうして?』

誰もいない部屋に追い詰められた焔は、恐るおそる小路に尋ねた。殺すのであればどうして早くそんな事をしなかったのか?何より仲良くしてた担任が、そんなことをする訳がない…と。
疑問と焦り、恐怖…様々な負の感情が焔の心を蝕んでいた。そんな焔を見下して、小路はフッと鼻で笑った。そして、学校から善忍をあぶり出す為に利用してたと。

『う、嘘……わ、私は……貴方のこと、信じてたのに……し、信じてたからこそ……私の家系が忍びだってことも教えたのに……なのに、何で…なんで!!』

認めたくなかった。とにかく認めたくなかった……その為だけに利用してたなんて、今まで仲が良かった。殺す相手を仲良くするなんてことは想像できない。だからそれが嘘であって欲しいと思ってた。しかしそんな焔に、小路は悪意溢れた目で見つめていた。

『信頼させてから殺すのが一番良いんだよ。出来ればそうだなぁ～…淡い恋心を抱かせたりとかな』

パリン……!

小路の言葉を聞いた焔は、心の何処かが割れるような音がした。今までのことは全て嘘、たったそんだけの為に自分は相手の都合、感情次第で利用されていた。それに気付けなかった己の怒りと、小路に対する怒りが溢れ、頭の中が真っ白になり、近くにあったクナイを抜いて、小路を刺して半殺しにした。それによって善忍の忍学校の受験資格を失い、両親は勘当されて家を追い出された。

生きる希望もなく、誰にも受けいられずに町中を歩いてる中、蛇女子学園という存在を知り、悪忍となった。小路を半殺しにしたにも拘らず、むしろ蛇女の皆んなは大歓迎してくれた。何よりも悪は善よりも寛大だと言う。だから自分は悪忍として生きてく道を選んだ。

それを話し終えた焔に、皆んなは黙り込むことしか出来なかった。

(焔ちゃん……)

飛鳥はそんな焔に、受け入れたいと思う眼差しを向けた。もしこん

な事が無ければ、きっと焔は飛鳥の仲間だったと思うからだ。

（……『アイツ』も、そうなのか……）

轟は黙り込みながら、いつの間にか憎悪溢れる目が消えていた。むしろ焔の苦しみ同情している。それは、『自分』も家族に『苦しめられた』から、分かるのである。

「そん……な……」

緑谷にとっては、焔は何処か寂しいようで、悲しいような雰囲気が伝わってきた。どうにか出来ないのか…でもそれは幾ら力があったとしても無理だろう……今まで緑谷は敵（ヴィラン）に対して、何かを思う感情はあんまりなかったし、敵の考え方もよく分からなかった。

だから緑谷は黙り込んでしまった、そんな辛い過去を背負って生きていく悪もいるのだと…その時、緑谷は焔を見て初めて分かった。こういう悪もいるのだと。

緑谷や飛鳥のように思う人も、その場に居るだろう…

だが、爆豪だけは違った。

「だから、何だ？」

「「「??
!!」」」

「かっちゃん!?」

その場に居る皆んなは、爆豪の言葉にドキッと心が揺れ、目をまん丸と見開く。焔自身も、意外な答えだった為か、爆豪の言葉に驚きを隠せれない。

「善忍になれなかった？だから何だよ？それで俺らぶっ潰す理由なんざ見えねえが？つかそれってぶっちゃけ言えば、唯の八つ当たりだろうが!!!」

爆豪がそう言うと、焔は歯ぎしりしながら、これまでにない怒りの

目で爆豪を睨みつけ、六爪を向ける。

「……人の気持ちすら分からないのかお前は……!!名のある家柄に生まれ、人を疑うことも知らずに育ったお前らに!この私が負けるハズがない!!」

焔はそう言うと、斬撃と高火力の炎が、爆豪に襲いかかる。

「っっ!」

これは効いたのか、爆豪は斬撃こそ避けたものの、炎そのものを諸に食らった。

そんな爆豪が苦戦してる姿に、緑谷は冷や汗を垂らし、爆豪に近づき助太刀しようと足を踏み出す。

「か、かっちゃ…」
「来んなデクぅ!!!」
「!!」

緑谷が助太刀するのが分かったのか、爆豪は姿勢を立て直し、視線を焔から緑谷に移すと、吐き捨てるように言った。

「救けなんざ要らねえ!俺のことよりテメェらはさっさと上へ行けや!!」
「で、でも!かっちゃん一人でも無茶だよ…!だから」
「テメェが来ても足引っ張るだけだ!!さっさと行け!俺も『直ぐ』行く、さっさと術者ブッ飛ばせ!そうすりゃあ後は雲雀連れて此処出てきゃ問題ねえだろ!!そんだけだろ、クソナードの分際で俺のこと心配すんじゃねえ!!」

爆豪の荒々しい言葉に、緑谷は「うっ…」と目を細めるものの、仕

方なく向かうことにした。しかしそれを焔は許さなかった。

「逃がすかあぁぁーーーーー!!」

「っ!う、うわあ!?」

「み、緑谷くん!?」

飛鳥が振り向くと、焔は緑谷目掛けて刀を向け、斬りかかろうとしている。自分も刀を抜くが、間に合わない…そう思った時だ。

「余所見してんじゃねえええぇぇーーーーーー!!!」

ボオオオオオオオオオーーーーーーーーンン!!

「あがっっ……!」

焔は緑谷目掛けて攻撃したため、横から来る爆豪の攻撃を防ぐことは出来ず、諸に食らってしまったのだ。爆豪の見た目からして、火傷の跡が多少あるが、それでも爆豪は諦めず、真っ直ぐな目で焔を見つめている。助けられた緑谷は、爆豪に「あ、ありがとう…」とお礼を言うと…思いっきり睨まれる。

「ああ!?助けてねえよクソが!俺ァただあのガングロ野郎がムカついたからぶっ飛ばしたまでだ!変な勘違いしてっと逆にテメェから殺すぞ!」

「り、理不尽!」

こんな状況の中でも、爆豪は緑谷に怒鳴り散らかす。それに理不尽な爆豪に向かって理不尽と言っても何の意味もないが…

焔はさっきのは効いたのか、忍装束が爆破で焦げてはボロボロになり、頭を強く打ったため、少し血が出ている。

皆んなはそんな焔から逃げるように走り出し、階段を登っていき、

最上階へと向かっていく。皆んなの後ろ姿を見た爆豪は「ケッ…」と呟いた。

「はぁ……はぁ……クソ！お前みたいなヤツに…私が……！もうこうなったら…力ずくでもアイツらの所に行くしかないな……」

焔がそう言った途端、爆豪は不敵な笑みを浮かべる。

「……なあ、『まだ分からねえ』のか？」

「なに…？」

まだ分からない？考えてみたものの、一体どういう意味か分からず、首を傾げてしまう。そんな焔を御構い無しに、爆豪は話し出す。

「何で俺がわざわざアイツ等を先に行かせたか分かるか？俺の個性は爆破で、派手な攻撃バッカだ…クソ髪が要りゃあ話は別だが、俺が戦うとあのモブ共は巻き添え食らっちまうっつーことだ、だからさっきまでただ殴ってボンボン爆破打つ攻撃しかやらなかった訳だ……」

「つまり、さっきまで本気ではなかったと言う訳か？図に乗るのも大概にしろよ…！お前…」

焔は怒りを抑え、噛み殺すように、低く唸りながらそう言うと、爆豪は「は？」というようなトボけ顔をする。

「誰がいつ本気ではなかったって言ったよ…？本気だったぜ？最初っからよ！」

「だったらお前は何が言いたいんだ!!さっきから遠回りするような言い方で…！巻き添えだの何だのと…」

「ああ、だってよ…『コレ』使うの…オールマイトに止められてたから

よ!!何が言いてえかって?さっきの攻撃を超えるんだよ!!体で覚えろや!!」

爆豪は焔に叫ぶようそう言うと、腕に付いてる大きな手榴弾に付いてるコテとピンを抜いた。

焔はその攻撃を警戒してた。だが、そんな焔の想像を軽く超える攻撃が…

今起きた…

ボ　ガ　ア　ア　ア　ア　ア

アアアアアアアアアアアアアアアーーー

巨大な爆発が焔と部屋中を飲み込み、焔はその攻撃を防げることなく食らい、悲鳴を上げながら大きく吹き飛ばされる。そしてこの爆発により、地震で天守閣が揺れる。その天守閣は外から見たら突き出したように爆発が出てきた。当然、階段を登っている緑谷たちも揺れた。

「っ!?なに、この爆発！」
「まさか！」
「爆豪さん、もしや先生に止められてた『アレ』を使ったのでは!?本来は屋内でやるのは愚策ですが…まさか私たちが出たのを見計らって…アレを…？」
「おいおい爆豪のヤツ！術者を倒す前にあの女の人殺す気か!?」
「いいや、それより早く行かないとマズイんじゃないのか!?」
「慌てるなお前ら…！一番大事なのはパニックにならず、落ち着くことだろ！こういう非常時な時にこそ人は落ち着かなきゃならねえ……落ち着きながら、冷静になって、なるべく急いで咲き進むぞ！」
「うっ、うん！そうだよね！轟くんの言う通りだ！」

飛鳥、芦戸、八百万、上鳴、障子が眉をひそめると、轟は皆を落ち着かせるよう声をかけ、緑谷は頷くよう納得する。そんな緑谷は、ふと爆豪のことを思い出した。

『当たんなきゃ死なねえよ!!』

『なあ！騙してたんだろ!?楽しかったかぁ？ずっと俺のことを騙してよ！』
『アァ!?随分と派手な個性じゃねえか！舐めてたんだろ?!そうやっていつもいつも！何で個性使わねえんだ！』
『使ってこいやぁ!!俺の方が上だからヨォ！』
『個性使えよデクぅ！俺は全力のテメェを、ねじ伏せる!!!!』

戦闘訓練で爆豪に言われてた言葉だ。あの時は騙してた訳ではなく、ただただ心が痛むだけだった。だが爆豪はあの戦闘訓練の後、少なからず変われたんだと思う。だから、爆豪は無闇に『アレ』を使った訳じゃなかったと思う。ちゃんと、戦闘訓練での失敗を活かして、自分たちに巻き添えを食らわせないよう、皆んなを先に行かせたんだ。一見ただ単に怒ってるだけで、口が悪いように見えるが、爆豪は爆豪なりの考えがあり、皆んなの負担を掛けない為に、焔を止めてるんだろう。そう考えると爆豪は本当に意外と繊細だ。

「待ってて、みんな！」

緑谷は呟くと、皆んなの背中を見て走り出した。

部屋中が煙立ち、視界が完全に悪くなっている。だが爆豪は腕で煙を払いのけ、階段を探す。

「チッ！コレ撃った後だと煙が邪魔で鬱陶しくなるな!!……人影は見えねえ、あの野郎はまだやられてねえとは思うが…アイツが来る前に最上階に行かなきゃならねえな！」

爆豪は周囲を見渡し、誰も居ないと分かったら、緑谷たちを追いかけるように、最上階へと進んでいくよう走り出した。

一方、焔は…

「ゲホ！ケホ…！アアッ…ハッ！　……はぁ…はぁ……アイツ、こんな奥の手があったとはな…！」

焔の忍装束は完全に消えており、体は爆破を食らってボロボロ…そんな体でなんとか立ち上がり、周囲を見渡す。

「これは…っ！ちっ、大分引き離されたな……さっきの爆破で壁が壊れて、外まで見えるな……巻き添えとは、そういうことか…」

焔は爆豪の言ってることがよく分かった。確かにこれ程の大規模攻撃は屋内戦闘において愚策…また、仲間にダメージを与えてしまうなど論外だ。なら皆んなが逃げて、自分一人になったところを、先ほどのアレを撃てば、敵に大ダメージを与えて、仲間は無傷となる。屋内がボロボロになるのは充分愚策ではあるが、焔の足止めには十分だろう。

「クソ！……そう言えば、よくよく思えばあんなヤツ…今まで会ったこと無いな……」

焔は爆豪を思い出してそう呟いた。口は悪く、すぐキレ煽りだし、派手で怒ってばっかでいるが…

臆することなく立ち向かったり、折れない心を持ってたり、勝つことを目指してるあの男の姿は見たことがない。それは蛇女の皆んな、選抜メンバーの皆を見ても、爆豪のような人間は見たことがなかった。ヒーローであるのに悪人っぽい言い方で……よく分からない人間だ。

「……だからなんだ……もういい、今は戦いに集中しろ！」

焔は頭のなかの雑念を振り払うと、直ぐに気を取り直して、最上階へと向かうのであった。

斑鳩&飯田side

斑鳩と飯田は見取り図を見ながら、最上階へと進んでいる。するとそこへ会ったのは…

「おっ！斑鳩！」

「飯田ぁ！」

「葛城さん！」

「切島くん！葉隠君に尾白君も無事だったか！」

少し傷だらけの葛城達と合流したのだ。

「おう！柳生と常闇、青山は雲雀を救けに行くっつってた！あっ、峰田は無理やり連れてかれたけどな、緑谷たちは先行ってるから分かんねーけど！」

「そうか…他のみんなも無事だと良いが、先ほどの爆発が気になるな…爆豪くんの仕業なのだろうか？それとも悪忍との戦いでの爆発か……」

そんなことを考えていると、斑鳩は葛城に見取り図を渡した。

「っ！これって、見取り図じゃねーか！一体誰が…？」

「さぁ…私には…」

一体誰が見取り図を、半蔵に渡したのかは不明だが、それでも最上階へと向かうのであった。例えそれが罠だったとしても…

場所は変わり、天守閣の頂上では…下を見つめている、たった一人の女性が立っていた。それは一体誰なのか？言うまでもない、鈴音だった。

「それで良い…皆の者、超秘伝忍法書の元にやって来なさい…」

凛がそう呟いた時だった。

「凛…それがお前のやりたかった事なのか？」

後ろを振り向くと、その人物は…飛鳥達の担任の霧夜先生であった。

「自分の教え子が心配なようね…まあ、忍生徒ではなく、雄英高校の生徒たちまで来たけど…それでもやるべきことは変わらないわ…」

鈴音、いや…凛はそう言うと、霧夜は凛を見つめている。

「……俺は、お前に会いに来たんだ。以前、半蔵学院に攻め込んだ時に、お前は俺に会いに来た。そしてお前は俺にこう言ったな？まだやるべき事が出来た訳ではないと…ならそのやるべきこととは……」

霧夜が考えてると、凛は「クスッ」と笑みを浮かべ、霧夜に話し出す。

「流石は霧夜先生、分かってるじゃないの…そう、これは証明。善と悪の何方が強いか…もちろん私は悪だと思うわ…何故なら、私は悪忍に命を救われたんですもの」

「だからと言って、上層部に何の許可も得ることなくこんなことをして許されるとでも…！」

そう聞くと、凛は首を横に振った。

「いえ、それは違うわ霧夜先生。超秘伝忍法書を奪取せよと命じたのは私じゃない…自ら欲望に落ちた、学園の投資者である道元よ…」

「なんだと…!?」

初めてその真実を知った霧夜は、道元による何かしらの罠だと思い、生徒達に駆けつけようするが、凛がクナイを投げて、動きを止める。

「子供のいさかいなのでしょう?なら、大人である私たちが出るのは感心できないわ…それに、あの子達は急激に成長している。まあ、半蔵学院の内の誰かは雄英高校で修行し、もっと強くなったのだと思うけれど…」

凛がそういうと、霧夜はそんな彼女に目を細める。すると、霧夜の足になついてる黒猫がいた。

「これは…大道寺!?」

「あら、貴方も居たのね…」

霧夜の後ろに、大導寺は仁王立ちしていた。そんな大導寺はニヤリと笑みを浮かべる。それは、凛に会って嬉しいのか…それとも…

そんな凛は眉を細めて話し出す。

「貴方は優秀な後輩だった……まだ私に勝負を挑むのかしら?」

「……否!」

大導寺は目をカッ!と開き、凛に話し出す。

「この勝負の行く末…勝つのは我でわなく、我らの後輩なり!!そして真に友を思い、英雄を背負いし者達…雄英の生徒達である!!」

大導寺はそう言った…

詠は…

「先ほどの爆発…上に一体何が…？」

先ほどの爆豪の爆発により、この天守閣そのものは大きく揺らいだのだ。それは出入り口付近にいる詠にすら響くほどだ。

「わ、私も急ぎませんと!!」

詠は走り出した。

日影は…

「なんや…今の爆発……上で何が起きてるん？未来さんは下に行って柳生とかいう奴らは追ってったしな…こりゃワシも黙ってられへんは…」

日影はそんな皆んなの動きに、熱が入ったのか、走り出す。

「……」

（そう言えばワシ…熱くなるんやな……今までこんな感情…なかったのに……ん？感情…感情……）

日影は疑問を抱いたまま走り出し…そして……気づいた…

（これが、感情っちゅーもんか……悪くないな……）

日影は心の中で、そう呟いた。

地下室、春花と雲雀は…

「あら？もう諦めちゃうの雲雀？」

「う…うぅ……」

春花は鞭で壁に何度も叩きつけ、それを目の前にしてる雲雀は、恐怖のあまり体の震えが止まらなく、涙目になっている。

「ひ、雲雀ちゃん！」

雲雀の名前を叫ぶお茶子。

「くっ！私たちも縛られるなんて！」

悔しい顔で、見ることしか出来ない耳郎。

「……」

無言のまま、雲雀同様に震える口田。

「ダルい…眠い…うぅ～…!!」

個性のシュガードープの効果が切れ、頭が悪くなってる砂糖。
「おおい砂糖しっかりしろ！肝心な時にお前がバカになった所為であの痴女になす術なく捕まったんだからな!!」
砂糖に必死に声をかける瀬呂。
「ふふふ、次は貴方を痛めつけて、お仕置きしてあげるわね♡」
「ふぁっ!?怖えよガチめに!!」
瀬呂の言葉を聞いた春花はウィンクすると、瀬呂はガクガクと震えて恐縮する。
雲雀以外の皆んな、お茶子たちは春花の鞭で縛られてしまい、身動きが取れないのだ。
「とにかく、まずは雲雀からお人形に…」
その時だった。
ウイイイイイーーーーーーーン!!!
天井からドリルが回るような音が響いてくる。その場の全員は動きが止まり、天井を見てみると…
バガアアン！
天井に穴が出来る。そこから現れたのは…
「柳生…舞しのぶ…」
柳生であった。
「「「「柳生（ちゃん）!!!!!」」」」

春花以外の皆んなはそう叫び、柳生を見つめてる。忍びではなく、まるでヒーローみたいだ。

「やっぱり来たのね…救けに来たつもりなんだろうけれど、雲雀は渡さないわ…！」

春花が柳生に吐き捨てるようそう言うと、高速の鞭で柳生を巻きつける。

「くっ…！」

柳生は呆気なく捕まってしまった。

「柳生ちゃん！」

「おいいぃーー！来て早々捕まったぞ!?」

雲雀は柳生が捕まってしまったことに心配し、瀬呂は直ぐに捕まってしまった柳生に大声で叫ぶ。

そして…

ドドドドドドドドドドドドドドドド!!バガン！

突如、壁には銃弾が撃ち込まれ、壊れた。そしてそこから現れたのは…

「ふふふ…逃がさないんだから！」

未来であった。

「あらあら未来、せっかく此処からが面白くなるところなのに…」
「春花様だけ楽しむったって、そうはいかないわ！」

春花がそう言うと、未来は春花に振り向き反論する。そして傘を雲雀の方に向ける。

「さあ、覚悟しなさい！」

すると雲雀は「ブチッ！」という音を立てた。堪忍袋の緒が切れたのか、とうとう怒り出す。

「だからぁ…こんなことしてる場合じゃないんだってばあぁぁーーーーー!!」

雲雀がそう叫ぶと、突如天井から忍兎がやってきた。

ドガァァァンン!!

「!?」

そして…

「待たせたな！」
「ふっ☆ヒーローとは遅れてやってくるもの！それ正に僕のこと！」
「うおおぉぉーーー！常闇ぃ！おちる、落ちる!!」

常闇、青山、峰田の姿も見られる。常闇の個性の黒影（ダークシャドウ）で、片方は青山と峰田を持ち、もう片方は壊れてない天井に突き刺し、なんとか保っている。

「なっ…」
「あ、アイツら！」

春花と未来は、またもや増援が来たことに驚いている。それは無理もない…

「常闇達が来てくれた！ナイス！」

耳郎がそう叫ぶと、皆んなも「やった！」という眼差しで見つめる。それを見た青山は

「フフフ☆今僕が更に輝き出す瞬間見せてあげるね！」

おへそからレーザービームを出し、皆んなが傷つかないよう、鞭を狙った。一瞬にして切れて、皆んなは直ぐに動けるようになった。

「やったぁ！青山くんナイス！」
「ノンノン、それを言うならグレイトだよ☆」

お茶子がガッツポーズをすると、青山は指を振りながらウィンクを向ける。

青山優雅　個性『ネビルレーザー』おへそからレーザーを放出することが出来る。ただし1秒以上撃つとお腹を壊しちゃうのがデメリット。

「っ!!」

柳生は命懸けの状態になると、忍装束が破けては下着姿になり、鞭が破ける。すると、柳生は雲雀に近づくと、雲雀も柳生に近づき抱きしめる。

そして…

「「合体秘伝忍法!!」」

「兎さん、お願い！」

「蹴散らせ…！」

そう言うと、またもや天井から巨大な烏賊が出現した。忍兎はそんな巨大な烏賊の上に乗る。また常闇たちも上に乗り、青山と峰田を離す。すると常闇は皆んなを救けるために、常闇の黒い影が皆んなを掴もうとする。だが、春花と未来もそう何時までも黙っていられない。

「はあっ！」

「でりゃあ！」

春花の鞭と、未来の傘で、救けに来た黒影を攻撃する。そのためか、お茶子たちを掴むことが出来ない。

「クッ…！踏ん張れ黒影（ダークシャドウ）！」

常闇は苦虫でも噛むような顔で、なんとかお茶子たちを助けようとするものの、なかなか上手くことが行かない。

「むむむ～！こうなったら私たちでなんとかあの人たちの動きを止めれば…！」

お茶子がそう呟いた時だった…

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!

「??」

突然、何かが此方に来るように走り出す音が聞こえてくる。しかもそれは一人ではなく、何十人ものが走ってきてるような…

「今度は何なの!?」

春花がそういった瞬間だ。

ドガアアアアアーーーーーーーーーン!!

「!?!」

地下室の扉が壊れた、その正体は…

「え…?動物?」

未来は首を傾げて、ポツリとそう呟いた。そう、その正体は人ではなく、動物なのであった。

「ワン!ワン!」
「カァー!カァー!」
「シャアァァ〜〜…!」
「ウガァーー!」
「フゴッ!フゴッ!プギャー!」
「グ・グ・グ・グ!!」

そこには…野良犬、大群のカラス、蛇、熊、猪、鹿などの大群の動

物たちが、春花と未来を睨みつけている。

「な、なんダァ!?何で動物が…けどスゲェ！」

瀬呂や皆んなも驚いている半面、感心している。するとそんな瀬呂の肩にポン！っと手を置くように叩かれたので、振り返ってみると…

「……」

口田が無口で、どこか照れながら瀬呂を見つめている。

「どした口田？そんな照れてるような顔で……ん？この動物たち呼んだの、まさか…お前!?」

「「「!?!」」」

皆んなは驚き、一斉に口田に振り向く。そんな口田はやはり何処か照れてる。

「まさかあの無口な口田くんが！」

「スゲェ！見直したよ口田！」

「これが口田の個性か…！」

口田甲司　個性『生き物ボイス』声に意思を乗せて、生き物を操れることが出来る。

皆んなが感心してるのを見てる春花は、目障りと判断したのか、もう一度鞭で縛ろうとする。だが…

ジュワッ！

「えっ!?」

突然レーザービームが出てきたため、鞭が切れてしまった。それは勿論青山の仕業である。そして…

「うおおおおぉぉーーーーー!!アイツらぁ、あの未来っていうちっぱいの隣に、オイラ好みの痴女がぁぁ!!アレは間違いなくミッドナイトと競い合えるほどの……チクショーーーーーー!!!瀬呂ん所に行けば良かった!!」

峰田は目は充血し、大量の涙を流している。そんな悔しさの余り、峰田はもぎもぎをもぎ取って投げまくる。

「オイラだってモテたいんだよおおおぉぉーーーーーーー!!!」

煩悩の塊とも呼べる峰田は春花と未来に向かってもぎもぎを投げ飛ばす。

「な、何よアレ!?」

「し、知らないよ!てかキモ!本当になにあのボール!アイツの頭のアレって取れたんだ……」

そう言いながら、春花は足の無い空中浮遊の傀儡を出し、未来は傘で撃ち込まくるが…傀儡はボールを殴ろうとすると、くっついてしまい、大量のもぎもぎが傀儡にくっついてしまったため、身動きすら取れずブドウみたいになってしまった。

「なっ!あの子のもぎもぎ…粘着性が強いの!?私の可愛い傀儡がこうもあっさりと…」

「し、しかもなんかこれくっ付いたら取れなさそう…なんか意外と意地悪な個性ね!」

春花は峰田の個性に驚愕し、未来は峰田を睨んでる。だが、彼女た

ちの動きを止めるだけではなかった。

「回収成功だ…！」

「!?」

春花と未来が振り向くと、そこにはお茶子たちはもう居なかった。そう、青山と峰田が食い止めてる内に、常闇の黒影（ダークシャドウ）で救出したのだ。

常闇踏影　個性『黒影（ダークシャドウ）』影っぽいモンスターをその身に宿している。因みに喋ることが可能。昼や光には弱く、その状態だと弱ってしまい、威力は中の下といった所…また暗闇の中だと、威力は莫大に上がり、制御が難しくなってしまうので要注意。

「ありがとう常闇くん！」

「助かったよ常闇、ありがとね」

お茶子と耳郎は常闇を見て感謝する。

「……」

口田は無口ではあるが、お互い無口なため、言葉は不要。そのため口田がありがとうと感謝しているのも一目見れば直ぐに分かる。

「ん？うぅ…なんかようやく眠気と頭のダルさが、解放されてきたような…」

砂糖は頭を押さえつけ、周囲を見渡す。

「おいおい今頃か、まあいいけどな」

瀬呂はそんな砂糖に半分呆れてはいたが、個性の影響の為仕方ないと思い、半分は納得した。

「しまった…！」

「そんな…」

春花と未来は悔し混じりな顔で、常闇たちを睨みつける。するとも

う要件は済んだのか、巨大なイカと兎が、天井を突き破り、そのまま最上階へと向かう。それと同時に…口田は…

「良いですか皆の者！今こそ友のために、悪に染まった彼女たちを止めるのです！出撃！」

「メッチャ喋るじゃねーか口田ァ!!」

口田の個性のためか、意思を乗せた声で喋ると、生き物たちは一斉に頷き、春花と未来に突進するように襲いかかる。

「なっ！」

「ふえっ!?あっ、ちょっと！」

振り向いた時には遅かった。大群の動物たちが攻めてきて、なす術もなく邪魔をされてしまった。それにしてもさっきの口田、思ったより喋ってた。

動物たちが去ると、いつの間にか皆んなは消えていた。

「こ、こんなことがあるのね…」

「しかもさっきの柳生と雲雀のアレ、合体秘伝忍法なんて聞いたことがないわ…それに皆んなも色々な個性持ってて…」

未来がそう言うと、春花は「クスっ」と笑みを浮かべた。

「彼女たちとあの子たち、多分お互い成長し合ってるのよきっと…それに二人とも羨ましいわ…不可能を可能にしてしまう程、仲が良いのかしら？」

「うん…なんか羨ましいな…それにアイツらも、何だかんだ言って、一人一人個性溢れてて、私たち悪忍を目の前にしても、決して諦めないで立ち向かって……自分のように一生懸命頑張って…なんかアイツらも羨ましくなってきたよ…」

春花と未来は、何処か微笑みながらそう言うと…

「……追うわよ未来！」

「うん！春花様！」

春花がそう言うと、未来はニコッと笑みを浮かべて頷いた。

飛鳥たちは階段を登り、最上階の部屋に入った。

「こ、ここが…最上階？」

飛鳥は周囲を見渡す。

「なんか広い部屋だな！」

上鳴は感心している。

「最上階は良いんだけどさ、ここの部屋って何するところなんだろ？」

芦戸は首を傾げている。

「とにかく皆様！十分に気をつけて下さいまし！雲雀さんが言ってた通り、ここに術者がいるのなら、間違いなく油断は出来ません。それ

にその術者が一体どう攻めてくるか分かりませんわ！」
八百万は飛鳥と同じく周囲を見渡しながらそう叫ぶ。
「ああ、まずその術者が一体誰なのか分からない以上、此方がどう攻めに入るのか…そしてどう対策をとれば良いのかも考えなくてはな…」
障子は頷きながらそう言う。
「おい、彼処の奥に扉があるな…彼処にその術者ってのが居るんじゃねーのか？」
轟はそう言うと、緑谷は納得したように頷いた。
「なるほど！確かにその可能性はありそうだよね…でももし違ったらどうしよう？それに部屋に罠が貼ってあるかもしれないし…そう考えると無理に進むのは危険だ…やっぱり慎重に進んでいく方が…あっ、でもそれだと…」
「緑谷？」
「ん？ふぁっ!?あっ、ご、ごめん轟くん…なに？」
「いや、別に…独り言がスゲェと思って…」
「…！」

轟の指摘に、顔を真っ赤に染める緑谷。独り言を聞かれて恥ずかしいと思ってしまう。すると障子は個性の複製腕を使う。
「…なるほど、あの奥部屋に一人誰か居るぞ、もし轟の推測通りなら術者はそこに居る」
障子がそう言うと、上鳴は「よっしゃ！」と活気な顔で進んでいくと
「お待ち下さい上鳴さん！」
八百万に止められる。
「んだよ八百万！」
「無闇に進んではやられてしまう危険性がありますわ！此処は慎重に

…」

そう言った時だった。後ろから階段を登る足音が聞こえた。

「誰!?」

飛鳥は咄嗟に二つの刀を構えて階段に目をやると、そこに現れたのは…

「あ?」

爆豪であった。

「おっ!爆豪オメェ無事だったのか!良かったぁ!」

「はぁー…ビックリした、てっきり焔ちゃんかと思ったよ…」

上鳴と飛鳥はホッと一息をつく。

「ああ!?何だお前ら!何でホッと一息ついてんだ!」

爆豪はよく状況が分からないため、取り敢えず怒鳴る。

「つーかここが最上階のようだな…んでその術者はどこに居やがるんだ?まさか怖じ気付いて逃げたりしてねえよな?」

爆豪はそう言うと、飛鳥は首を横に振る。

「ううん、術者ならあの奥の部屋に居るよ」

「だったら何で攻めに行かねんだクソカス共!とろとろしてんじゃねーぞ!さっさとブッ飛ばせば良いだけだろうがぁ!」

「そう言う訳には行かないよ!その術者が何しやらかすか分からないんだよ!?だったら無闇に突っ込むより、どう攻めに入れば良いか考え

てるの！」
「あーもーー！面倒くせえなぁ！じゃあよ…」
　すると爆豪は扉の方に歩み寄り、片方の手を扉に向ける。
「最大火力でブッ飛ばせば問題ねえだろ」
「待って！それやったら俺たち巻き添え食らうだろ！」
「知るか！てか食らわねえよ、テメェら俺の後ろに居るんだから巻き添えもクソもねえだろ考えてモノ言えアホ」
「……」
　爆豪の口悪い論破に黙り込み、手で顔を隠す上鳴を御構い無しに撃とうとする。が
「お待ち下さい爆豪さん！」
「ああ!?今度はなんだポニテ野郎！」
　八百万が止めに入る。
「確かに爆豪さんの爆破攻撃は食らいません…ですがもしそれを撃ったとしても、私たちは本当に無事なのでしょうか？屋内での大規模攻撃、それを撃てばその方向にのみ被害が出る…そうすれば術者は倒せますが…ですがもしそれを撃ったとして、その爆発の威力の余り、ここの部屋が崩れてしまったらどうするのですか？」
「何で俺が一々テメェらモブ共の心配しなきゃならねえんだよ！つかポニテ野郎、お前何でも物作れるだろ？だったら被害が出ない何かを作って守れや」
「そうなるとかなり時間を食らってしまいますわ…巨大な物を造るのには時間が少しかかります…そして次には原子などを分析し、爆破対策の道具を造るものを考えて、そこから…」
「何だこのクッソ面倒くせえの!!そんなに時間ロスすんのかクソが!!あーもーー！だったら殴り込みに行きゃ問題ねえだろ！」

時間がロスし、不合理的だと判断した爆豪は、そのまま奥の部屋に行こうとすると…

「秘伝忍法！『魁』!!」

ズドオオォーーーーーン!!

「っっ！がハッ!?!?!?」

突如襲いかかった炎の六爪は、爆豪に直撃した。

「か、かっちゃん!!」

「爆豪くん!?それにこの技…まさか！」

そう、それは…

「ふん！つくづく甘いやつだお前らは！順路が一つだけだとは思うな！」

爆豪の爆破で吹き飛ばされたハズの焔であった。

焔は飛鳥たちを睨むと、皆んなは戦闘態勢に入る。

「嘘だろ!?爆豪のアレ食らってもまだ…化け物じゃねーか！」

「大丈夫爆豪？斬られた傷が…！」

上鳴は手からビリビリと雷を纏い、芦戸は先ほど焔に受けた傷を見て大丈夫かどうか心配してる。

「チッ…！クソがぁ！」

爆豪は焔を睨む。今の焔は完全に殺気立っている。ドス黒いような、赤黒い闘気を纏い、左右の三本の刀を構えながら、今度は飛鳥に振り向く。

「まずは飛鳥…お前からだ！」

「クッ！」

焔の殺気に、飛鳥も二つの刀を構える。

「あ、飛鳥さん！」

緑谷が叫んだその時だった。

「フフフ…選ばれし者たちよ、よくぞ来た！」

ふとその扉から光が差し込み、男の声が聞こえた。

「道元様⁉」

「道元…じゃあ、あの人が術者…？」

焔は後ろを振り向き、飛鳥は道元が焔たちに外法を掛けた術者だと分かったようだ。

「あの人が…？」

緑谷は首を傾げる。

「ただのオッサンじゃねーか！」

爆豪はもう痛みのことなど知ったことではないのか、立ち上がり睨

みつける。

そんな緑谷たちを御構い無しに、道元は話を続ける。

「焔よ…超秘伝忍法書の導きのままに、飛鳥という少女を連れてくるのだ！」

「道元様、どういう事です？」

焔は眉をひそめ、納得がいかない様子でそう聞くと、道元はニヤリと口の端を上げる。

「お前たち選ばれし者を依り代として超秘伝忍法書の隠の巻と陽の巻…二つの秘伝忍法書の力を我が手中に収めるためだ…」

「なっ！そんな事が許されるわけガッ…!?」

焔が反論したその瞬間、静電気が走ったかのように、体がバチバチと音を立てる。焔は苦痛の顔で体を手で押さえてる。

「抗ってはならんよ焔…元より蛇女子学園など、私にとってはただの『手足の道具』に過ぎん……クックック……私はこの力で悪忍組織…いや、忍びの社会を己が者とし忍びの存在全てを超越するのだ！」

道元は勝ち誇った顔でそう言った。それを聞いた焔は苦痛の顔でも道元を睨みつける。

「組織を…裏切るつもりか！」

「元よりそうするつもりだったが？」

道元がそう言うと、他の皆んなも黙っては居られない様子でいる。

「おいおい、これって…」

「どうやら焔ってヤツや、他の奴らもこの道元って野郎に良いように利用されてたようだな…」

上鳴は冷や汗を垂らし、轟は道元を睨みつける。

「おいオッサン！んなこと言ってねえでさっさとかかって来いやァ!!忍び全てを超越するダァ？んな事言って来てねえテメェは何だゴラ取り敢えず殺すぞ！」

「か、かっちゃん…」

敵であるものに対して取り敢えず煽る爆豪に、緑谷はもはや言葉が出ない。

「クックック……貴様らヒーローの卵共が、図に乗ってはならんよ……それにまさか忍びがヒーローの卵たちと繋がっていたとはな…まあ良い…どちらにせよ、バレてしまったならば貴様らも生かしては帰さぬ…」

「ハァ？何でこのオッサンは偉そうなんだよ!!」

「爆豪落ち着け！取り敢えず状況が分からん…裏切った？どういう事だ？」

苛立つ爆豪を落ち着かせる障子。それは皆んなも同じだった。一体何がどうなってるのやら…そして焔を裏切った理由がその超秘伝忍法書とどう関係してるのか…と。

そんなやり取りの中、階段が登る足音が聞こえてきた。

「お前ら！」

それは半蔵と雄英の皆んなが駆けつけに来たのだ。

「みんな！」

飛鳥は皆んなの方に振り向く。
「どーなってんだ？」
「今はどういう状況なんだ！」
皆んなは今起きてる状況が掴めず動揺している。
そして…
「「焔（ちゃん）!!」」
詠、未来、春花が駆けつける。
「これって一体…どういう事!?」
体を手で押さえてる焔を、三人は支える。そんな三人も勿論状況が掴めず、道元を見つめる。それを察した焔は、道元を睨んでいる。それも今まで自分たちが良いように利用されてた事に、組織そのものを裏切った事に大きな怒りを溜めて…
「道元は、自分の欲望のために私達を…そして、悪忍組織そのものを裏切ったんだ！」
「えっ!?」
詠と未来は焔の言葉を聞き驚愕し、春花は睨んでいる。
「なるほど…そういう事だったのね…」
「なんかよく分かんねーけど…」
「取り敢えず、なんかヤバいことは分かったっす！なんかややこしく

なっちまったぞ！」

葛城と切島も道元を睨みつける。

すると…そこへ現れたのは…

「つまり、標的は道元っちゅう訳やな…」

「日影！」

後ろから日影が現れ、葛城の肩に手を置き、道元を睨みつけている。これで全員揃い始めた。

雄英、半蔵、蛇女の皆んなは、真に倒すべき敵、道元を睨みつける。今まで自分の都合の良いように利用されてきたことを知った焔たちは、勿論道元を許すはずなどない。

「ふっ、こうなれば…！」

そんな道元は、二つの超秘伝忍法書を使うと、飛鳥と焔は空間に飲まれるように消えてしまった。

「「「飛鳥（ちゃん）（くん）!?」」」

「「「焔（ちゃん）!?」」」

皆んなは飛鳥と焔の二人が光の粒子のように消えた事に驚きを隠せない。道元の仕業だということは勿論わかっているのだが…

「クソが！どこ行きやがったアイツら!!」

二人がいなくなったことに、何故かと怒る爆豪。

「チッ…あのオッサン……飛鳥と焔をどうするつもりなんだ？」

轟はそんなグニョグニョと歪んでる空間に眉をひそめる。

「忍結界に取り込まれた!?」
斑鳩は、飛鳥と焔が忍結界に取り込まれたことに気づいた。
「取り敢えず、私たちでどうすべきかを考えましょう…」
詠がそう言ったその瞬間。

良からぬ出来事が起きた。

ドガアアアアアアアアアアアンンン!!!

突然の大爆発。

「えっ!?」
「なっ!?」

皆んなはその爆発が起きた方に振り向く。してその爆発から煙が巻き起こり、見てみるとその中から人影が二つ存在する

「だ、誰でしょう…?人影が二つ?」

斑鳩は首を傾げてる、それは一体誰なのか?煙が晴れると共に明かされるその正体とは…

「っ!!?なっ、な、なな……何ですの…?アレは……?」
「これは…!まさか!」

詠はその正体を見て、手で口を押さえつけ、己のうちに湧く恐怖をなんとか抑え込む。
緑谷は目を擦り、その二つの人物を見て驚愕する。
（嘘だ…嘘だろ?!なんで、なんでこんなところに！）
それは緑谷だけではなかった。
「!!や、柳生ちゃん！柳生ちゃん!!」
「そんな…バカな……なんで、なんで…！」
雲雀はそれを見てガクガクと体を震わせ、柳生ですら微かに震えている。
「なんや…アレ?なんかヤバそうなのが来よったで?」
日影は首を傾げて見つめる。
「おい…嘘……だろ?」
切島の表情は絶望に覆われる。
「チッ……！クソ！何がどーなってんだオイ」
「知るかぁ！……マジで何なんだよコイツら！」
轟と爆豪は苛立ちながら見つめる。
そう、その二つの人影とは?
「何で…なんで……！」
緑谷は恐怖に耐えながらも、叫び出す。

「脳無（ヴィラン）が此処に!!?」

「ホホホゥホォーーーーウゥ!!!」

「ネエアエエェェーーーーーエェ!!!」

二体の脳無が奇声を上げ、部屋を壊しながらやってきた。

突然やってくる理不尽…

ヒーローとは何か…忍びとはなにか?

そして、善忍とは、悪忍とは何か…彼らは彼女らは、この戦いで互いに思うことがあっただろう…

では、敵（ヴィラン）とはなにか？

そんな中…

天守閣の最上階へと一人で向かっている水色の長髪の女性…漆月はこう言った。

「さあーってと…私たちもひと暴れしますか…！クフフ…ウフフ…!!あっはははははは!!」

漆月は、暗闇の階段を登りながら、残酷な笑みを浮かべて笑い出すのであった。

２７話「悪忍と敵」

時間は遡り。飛鳥たちが居た山岳地帯では、闇とも思わせる黒い靄の空間が開くのであった。

そしてその中から、悪巧み…悪意があると思わせる笑顔で、空間から現れた水色の長髪をした女性、漆月が現れた。

「ん～！そうそう此処だよココ！ここはいつか私が潰そうと思ってマークしてたんだよね」

その女性は当然だと言わんばかりの顔立ちで語りだす。そしてその黒い空間からは、歪みそのものとも言える、ＵＳＪ襲撃の主犯の敵連合のリーダー……死柄木弔が現れた。

「随分とテンション高いんだなお前……ガキかよ…」

「むっ！ガキじゃないよ、むしろワクワクするのは当然でしょ？これはあくまで『見せしめ』としての襲撃なんだからさ」

そう言うと、ワープゲートを閉じた黒霧は漆月に話し出す。

「しかし、まさかこんな所に悪忍養成学校があるとは……山中にもあるものなのですね、驚きました」

「まあね、本来立ち入り禁止区域になってるからここ…だからこんな所に悪忍養成学校があるだなんて誰も思わないよ」

漆月は黒霧にそう言うと、再び蛇女子学園に目をやった。

「まあ、悪は善より寛大ってのは、良いことだよ…けど、悪忍と善忍って何だかんだで繋がってて、結局どうしても守らなければならない掟が存在するんだよね…

それに忍びはやる事が善と悪で批判されるから、善忍と悪忍ってのが出来たんだよね……」

「急なことを言い出すなオイ…お前が言うのは、善忍と悪忍は批判されてるだけで、中身は変わらないっていう訳か」
「そうそう、そういう事！……私さ、悪忍になれば自由になれると思った。悪い事は何でも出来るって、だけどそんなのタダのまやかしだった、善忍と悪忍は結局何処か繋がってて、そして悪忍としてのルールもあった…命令も無しに他人を『傷つけ』てはいけないとかね……結局『善忍』にも『悪忍』にも迫害されたよ」

漆月のさっきの笑みは消え、何処か寂しく、何処か殺気と怒りを溜め込み、燃やしてるような目であった。

「本当に寛大なら私のやってる事も許される事なのに……あーあ、本当に煩わしい！」
「善忍にも迫害された？」

漆月の発言に、黒霧は首を傾げて目を細める。

「ん？…あっ、ああ、ゴメン…それは気にしなくて良いから……ってなんか私一人でベラベラ喋っちゃったね…」
「どんだけ忍びを怨んでるんだよ…まあ俺もあの善忍とかが気に入らないからな……気に入らないものは何でもぶっ壊せば良いんだよ…なあ？黒霧」

死柄木がそう言うと、黒霧はこくりと頷き、ワープゲートを作り出す。

「気に入らないものは何でもぶっ壊せ…か。ハハ…流石は死柄木、今までこんな人間あった事ないや。まあ私としては嬉しいんだけどね」

漆月はさっきの表情から少しずつ変わっていき、死柄木に笑顔を見せる。

「漆月…俺が言った事と、『先生』の言ったこと、忘れてないだろうな？善忍と悪忍の抗争か、良いじゃねえか」
「うん、大丈夫ダイジョーブ！覚えてる覚える！まあ、『もう一つ』は私もその気だったから大丈夫だよ」
「クッハハハハハ！何だか楽しくなってきたぜ!!さぁてと、勝つのはどっちだ？善忍か悪忍か？それとも…

俺たち敵（ヴィラン）かな？」

ズズズ…

死柄木が笑い出すと、黒霧のワープゲートから異形な姿をした二体の脳無が現れた。

「ネエアーーーーエア!!」
「ホホゥホーーウオウ!!」

奇声を上げるその二体の脳無。
一体の脳無は足が少し太く、目が三つあり、所々にトゲのような突起物がある。
体は緑色でＵＳＪの脳無と比べて同じ位の大きさに見える、充分に強力だと感じさせられる。
下半身は、黒いジャージを着ていて上半身は裸で筋肉…腹筋が割れている。
もう一体の脳無は、口がゾウの鼻みたいになっている、見るからに不気味な脳無。身体は赤色でいてとても強靭っぽく、見るからに強そうに見える。肩は歪な形をしており、穴が空いている。下半身は白の

ジャージを着ている。
二体の脳無を出した黒霧は、ワープゲートを閉じた。
「死柄木弔、貴方も漆月と同じく参戦なさられるのですか？」
「ハ？お前バカかよ。俺は以前、学校襲撃の時に傷負ってんだよ…まだ完璧に回復してない状態で出たら１００％ゲームオーバーになるだろうが……しかもヒーローとは違って忍学生が戦ってんだろ？以前の対平和の象徴、脳無が居るならまだしも、こっちには襲撃程の強力な脳無は居ねえ…まあコイツらも充分強いけどさ」
死柄木が吐き捨てるようにそう言うと、漆月は二体の脳無を見つめてる。
「前から思ってたんだけど…この脳無ってヤツら、一応人間なんだよね？」
「はい、先生が貴方の為に作って下さったそうです。勿論漆月の命令に従えるよう改造しておりますので、ご心配なく」
異形な姿の脳無を見て、冷や汗を垂らす漆月に黒霧はそう言うと、「なるほどね」と頷いた。
「さて、少々スタート時点から遅れたが……ゲームスタートだ…！」
死柄木がそう叫ぶと、漆月はニヤリと笑みを浮かべ頷き、蛇女に乗り込んだ。勿論二体の脳無も…

んで現在…

「ネエエーーーーアアエア!!」
「ホーーーーウオウホウホウ!!」

二体の脳無は気味の悪い、不気味な鳴き声をあげている。そんななか、皆んなは今の状況を飲み込めないでいる。勿論皆んなは驚愕と、恐怖、などと言った様々な負の感情を顔に出している。日影は表情には出してはないが、内心驚きを隠せない。

「なんだよ……これ!なんで、なんで脳無が此処に!?脳無の兄弟かなにかか!?」

緑谷は目の前にいる脳無を見て驚愕する。それと同時に頭のなかに色々な疑問が浮かび上がってきた。

どうして此処が敵にバレた?
何の目的で此処に?どうして?
そもそもコイツは人間なのか?
なんでまた脳無が…?

ＵＳＪ襲撃の時の脳無と同じ、脳が飛び出てる人間なんてそうそう

居ない…となると兄弟かなにかかと思ってしまう。訳の分からない事だらけだが、間違いなくこれだけは言える…

敵連合が再び攻めてきた。

そうなると…間違いなく主犯は此処にきてる確率が高い。それは、ＵＳＪ襲撃を受けた者、脳無を知ってる者だけが考えた。

「な、な…な……んですか……アレ……」

詠は脳無を見て口を押さえつけながらも、必死に己に湧く恐怖を抑えつけてる。声を振り絞るのがやっとだ。

「間違いなく、とんでもないヤツだってのはわかったで…」

日影は冷静に脳無を睨みつけ、ナイフを握り構える。

「な、何なのよアレ!!あんな脳みそ丸出しなの…見たことないんだけど!ていうか、生きてるの…?アレ…」

未来は恐るおそる声を張りながら、傘を構えて脳無に向ける。

「これも…道元の仕業なのかしら?……いえ、どっちにしろ戦わなければならないようね…」

春花は冷静さを保ち、不敵な笑みで脳無を睨みつける。

柳生と雲雀は脳無との戦いで、コイツらがどれだけ強いのかは十分知っている。だから、柳生も雲雀も震えてるのだ。

自分の力が通じなかったコイツらが此処に来たことを。

柳生と雲雀はともかく、斑鳩と葛城は知らない。脳無という存在を…

「な、何ですのアレは…!?こんなの…見た事がない…」

斑鳩も詠と同じく恐縮している。化け物とも思わせるその脳無に…

「取り敢えず…ガチめにヤベエってのは分かったぜ…！」
葛城は戦闘態勢に入り、脳無と対峙しようとする。
だが…
「お前ら逃げろ!!」
柳生は皆んなにそう叫んだ。
「「柳生（さん）??」」
葛城と斑鳩は首を傾げ、柳生に振り向く。
ズドオォン!!
突如、大きな音を立て、斑鳩を覆う影が現れる。
「えっ？」
振り返るとそこには…
「ネエアーーア」
三つ目の無表情の緑脳無が、斑鳩の目の前に立っていた。
「!!?」
（まず…!?）
「お嬢様！」
「斑鳩さん!!」
詠と飯田が叫ぶと、斑鳩は必死に横に転がるよう避けようとする…

だが…

ボオオオォォォォーーーーーーーーーーンン!!

脳無が掌を斑鳩に向けた途端。強力な衝撃波が、その方向に思いっきり放出され、余りの衝撃に土埃が巻き起こる。

「……え?」

突然の出来事に、皆んなは固まってしまう。その敵が、一瞬で斑鳩を吹き飛ばしたことに、皆んなは今起きてる事が、頭について行けれなかった。

だが、斑鳩は傷を負う事はなかった。

「……ケホッ…!ケホ…　い、今のは一体…?」

斑鳩は突然の出来事に目を瞑ってしまってしまい、何が起きたか分からなかったのだ。これだけは分かる…あの敵は、斑鳩を目掛けて殺そうとしたことを。

だから直ぐに避けようとして、結局間に合わなかったのだ…だが斑鳩は攻撃を食らっていない…では一体なぜ自分は無傷なのか?恐る恐る目を開けると、全てを知った。

「ハァ……ハァ……大丈夫ですか?斑鳩さん……」

「い、飯田さん!?」

飯田は危ないと判断した途端、個性のエンジンを使って、猛スピードで斑鳩に駆けつけて、脳無の攻撃をかわしたのだ。

もし飯田が駆けつけなければ、確実に斑鳩は無傷では済まなかった。飯田は倒れてるが傷はない、脚のエンジンがプスんプスンと音を立てている。

「だ、大丈夫ですか？」
「ああ…俺は大丈夫だ……！それより、斑鳩さんこそ、大丈夫ですか？」
「わ、私はなんとか……」
「そうですか、それは良かった…！だが俺の脚は……あの時一回使ってしまった為か、今ので大分無理をしてしまった…」

どうやら飯田は先ほど、個性の反動によりエンストしてしまったようだ。エンストしてしまうと暫く動けなくなってしまう。

なんとか斑鳩を助けることに成功した飯田は一息ついた。だが恐れるなかれ、此処は戦場。今度は脳無は飯田に近づいた。

「!?飯田後ろ！避けろ！」
「なっ…!?」

尾白が叫ぶと、後ろを振り向いた。飯田は倒れてるため、立ち上がろうとするものの、脳無は地面をめり込むような勢いで飯田に殴りかかる。

「ええぃ！こうなったら俺の個性で！てか皆んなも戦うぞ！」
「「「っ！おう！」」」

瀬呂が個性のセロハンテープを出して、大声で皆んなに叫ぶと、皆んなもハッと我に返り、反応する。

「取り敢えず捕まってろ！」

瀬呂のセロハンテープが脳無の腕に巻きつけようとすると…

ズバッ！

「っ!?」

だが瀬呂の個性、セロハンテープが刃物で切られたのだ。その主は…

「ホホゥホーオウ」

赤色の体をした脳無であった。その脳無の手は刀になっており、その手の刀でセロハンテープを切ったのである。

「この野郎！」

「させねえ！」

葛城は飯田を殴ろうとする脳無を…切島は手が刀になってる脳無を狙う。

「でりゃあ!!」

葛城は脳無の体に蹴りを入れる。すると脳無はその蹴りで体が少し後ろに下がり、脳無の拳は空ぶる。

「どうだ！」

「た、助かった…ありがとう…！」

「へっ！気にすんな！」

感謝する飯田に、葛城は自慢げに脳無に不敵な笑みを浮かべるが、そんな葛城の自慢も、恐怖の顔に変わる。

脳無はなんの表情も変えずに、無表情で葛城を見つめてるのだ。

「なっ…　あ、アタイの攻撃が効いてねえってのか？」

葛城がそう呟くと、脳無は今度は葛城をターゲットにしたのか、襲いかかる。

「うお!?なんだコイツ…今度はアタイに？」

一方切島は…

「き、切島くん!!」

緑谷は驚愕の顔で、切島に声をかけた。そう、なぜなら…

「っっっあ!!?」

赤色の脳無は切島に、ゾウの鼻のような口から炎を出して襲い掛かっている。鼻から炎が出るのは思ってなかったのか、モロに食らってしまった。切島は一旦その場を転がるように距離を置いた。

「くそっ…！何なんだよコイツら！」

切島が睨むと…

「うわあっ!?」

ドン！

「った!?」

突然、緑脳無と戦ってた葛城が吹き飛ばされ、切島に当たって二人まとめて壁まで吹っ飛ばされてしまう。

「チッ！クソが!!」

「コイツらも相当ヤベェな！」

爆豪と轟は怒気を浴びた声でそう叫ぶ。それを見てる皆んなもなんとか戦闘に入る。……蛇女の皆んなを除いて。

「……どういうことですの？」

詠は疑問を抱いていた。本来ならば自分も戦わなければならないのに、余りにも突然の出来事が連続で起きてるため、訳の分からない感情が溢れ出ていて、戦いたくとも戦えない…それは詠だけではなかった。今は半蔵の敵ではない。だがそれは今の場合だ…また敵同士になることだってある。今は闘う理由はないが、だからと言って半蔵や雄英の生徒たちの助太刀に入る理由もないからだ。

すると…

「詠さん！危ないで！」

「えっ？」

詠は日影の言葉に耳を疑い、後ろを振り向くと…

「ネエアーエ」

斑鳩と飯田、葛城を襲った緑脳無が今度は詠の後ろに立っていた。

「!?」

詠は無意識に大剣を握り、脳無に向ける。

「な、な、なんですか貴方たちは?!い、一体何の目的で…」

詠は体を僅かに震わせながら、脳無にそう聞いた。だがそれは無意味、何故なら脳無は無表情のままジッと詠を見つめ、喋れないのだから。

だが、脳無は…詠を襲わなかった。

「……」

脳無は詠をジッと見つめた後、クルッと後ろを振り向き、今度は雄英の生徒に襲いかかった。

「ふぇ…?どういうことですの……?」

詠はワケが分からず、その場に立っていた。攻撃しに来ると思いきや、脳無は詠を見つめては無視をして違う所に向かっていった。

一方、雲雀は…近くにいた春花に、今この状況で何をするのが得策かを話すため、声をかける。

「春花さん!」

「どうしたの?雲雀…?」

春花も若干落ち着きを取り戻してないのか、ぎこちない返事をする。

「春花さんあのね、落ち着いて、よく聞いてね?」

「?」

春花は首を傾げて雲雀の話すことを聞いた。

「あの脳無っていう二人の敵さんにも…心がないの！」

「えっ？」

春花は雲雀の言葉を聞いて、目を丸くした。心がない、勿論傀儡のような忍術など、この二体の脳無には感じられない。そう、この二体の脳無も、ＵＳＪの襲撃してきたあの敵と同じく意志のない怪物なのだ。

「じゃあ、コイツらは…一体何者なの？」

「分からない…でも、確かに心がないんだ！そして、もし『あの人』が此処に居たら…皆んなが危ない!!皆んな死んじゃうかもしれない！だから、このことを皆んなに、早く！」

「…どういう……こと？」

春花は雲雀の言ってることが分からず、受け止めきれていない。そんな話をしてると…

「ホオウオーウ」

「っ！」

雲雀の後ろに、赤色の脳無が立っていた。その脳無は刀状の手で雲雀に向かって斬り掛かろうとする。

「なっ！」

春花も突然脳無が襲いかかるのに驚き、対応が遅れてしまう。そのため当然、脳無の動きを止めることは出来ないし、雲雀を助けること

も出来ない。その刀が次第に雲雀を斬るよう降りかかる。

「う、うわっ…」

「ハァ！」

すると柳生は番傘を開き、カウンターを決め、脳無の体を後ろに押すことができた。そのため柳生も雲雀もダメージ０だ。勿論、これも当然というべきか、脳無は無表情のまま柳生をジッと見つめている。

「くっ…！コイツも一筋縄ではいかないようだな…」

柳生は脳無を睨みつけるようそう言った。すると脳無は直ぐに柳生に襲いかかり、柳生も攻めにかかる。

雲雀は「ありがとう」と言うと、直ぐに春花に視線を移した。

「分かったでしょ春花さん、アレが敵なの…アレが、『私たち』を殺そうとした脳無っていう化け物なの…！」

「アレが……脳無……」

それを知った春花は固唾を呑む。今までこんな敵は見たことがない。ましてや心がないうえに、感情もないように見受けられる。そう、感情……

切島と葛城は、吹き飛ばされてしまい…なんとか態勢を整える。

「ってて、なんだよあの化け物…アタイの攻撃にビクともしねえ…」

「マジで…なんなんだありゃ……しかも脳無だって？ＵＳＪに攻めてきた敵じゃねえか！」

切島がそう叫ぶと、葛城は驚いた様子で振り向く。

「なん…だって？お前らを襲ったのって…まさか…！」

葛城は瞬時に理解した。飛鳥と柳生と雲雀を襲った敵、それはコイツらのことだろう。それを知った葛城は怒りがこみ上げる。

「そうか、コイツらが飛鳥たちを…！」

その時だった。

「そうそう、さっきの緑脳無は『衝撃波（ソニックブーム）』という個性に他にも色んな個性がある、『私専用』脳無なんだよ」

「は？」

葛城の目の前に、突如現れたその女性は、満面な笑みを浮かべて葛城に刀を向ける…そして…

「秘伝忍法…『破壊と混沌の二刀両断』!!」

闇が刀を纏い、負のオーラが具現化したかのように、凶々しい刀が

葛城を斬りつける。そして…斬ると同時に破壊をすることが出来る、凶悪な秘伝忍法を使った。

ズバドゴオオオオオオオーーーン!!

「ガハァッッ……!!」

「か、葛城さ…」

突然、葛城はその女性の攻撃をくらい、斬撃と破壊攻撃を食らってしまう。それを食らった葛城は、口から血を吐き出し、更に吹き飛ばされてしまう。切島の言葉も途絶えてしまう。

「脳無!」

その女性はそう言うと、緑脳無は直ぐに駆けつけ切島の首を掴み、思いっきし地面にめり込ませる。

ドゴオン!!

「がッッ!?」

切島は個性の硬化でガッチガチに体を硬めた為に無傷だが、多少痛みはある。そんな苦痛の顔を出す切島を見てる女性は腹を抱えて笑い出す。

「あっはははははは!!すごい凄い!やっぱり死柄木から貰った脳無はこうもスペックが高いなんて!流石は敵連合!これならサクッとゲームクリアね!」

残虐の笑みを浮かべるその女性は…

「!?誰だ!!」

皆んなはその嘲り笑う声を聞いて、叫び出し振り向く。…水色の長髪、そして忍転身をしたのか、灰色のブレザーを着ていて、赤いスカートを履いてる。そう、その女性は言うまでもない…

「はーい、半蔵学院と蛇女子学園の皆さんが探してる、抜忍の漆月で～す！♪」

敵連合所属の、抜忍・漆月であった。

「「「「!!??」」」」

半蔵学院の皆んなと蛇女子学園の皆んなは、突然現れた抜忍の漆月を見て驚愕した。その抜忍が何故こんな所に?どうして?などと、表情を曇らせていた。

そう、この彼女こそ…今忍びの者たち全員が捜索して、探してる抜忍なのだ。

「こ、コイツが…私たちが探してた…」

「何だ…こいつは…」

未来は漆月の姿を見て、驚いた様子でいて、柳生は不愉快な物を見るような目で睨んでいる。

「皆んなタコが豆鉄砲食らったような顔してるなぁ～…まっ、無理もないか」

漆月は満面な笑みでそう言うと、刀を抜き、雄英の生徒と半蔵学院の生徒たちに向ける。

「な、な、何だよぉアイツ!!?ワケの分かんねえヤツがやって来たぞぉ!?」
「なんか怖え!!」

峰田と上鳴は、突然漆月が乱入したことに大声で叫び出すと、漆月は二人に目をやり首をかしげる。

「それにしても…可笑しいな?なんで雄英の生徒たちが此処に居るんだろ?まあいいや、こーろそっと」

ただなんとなく殺そう　という考えを持つ漆月が刀を振り下ろそうとしたその瞬間。

「ハァッ！」
「でやぁ！」

「!?」

斑鳩と詠が、漆月の間合いを詰めて、飛燕と大剣で斬りに掛かる。此処で初めて、蛇女は動き出した。だが、漆月は難なく刀で受け止める。

「なっ！効いてない…？」
「っ！」

斑鳩と詠は漆月の力に驚いた。一人の力を受け止めるならまだしも、斑鳩と詠の本気の一撃を、何の表情も変えることなく受け止めてるのだ。

「ちょっと、半蔵が攻めてくるなら分かるけど、悪忍は邪魔しないでよ

ね！」

すると漆月は斑鳩を蹴り飛ばした。

「がっ……！」

「お嬢様！」

詠は倒れ転がる斑鳩の方に振り向くと、漆月は満面な笑みで詠に話しかける。

「ねえねえ、君蛇女の選抜メンバーでしょ！丁度良かったぁ～、貴方たちのこと探してたのよね」

「……貴方、他人の家に踏み込んで……何しに来たのですか？」

「まあまあそんなに怒らなくても良いじゃん！同じ悪なんだから…」

漆月はそう言うと、詠は更に怒りのコスモを燃やし出す。

「貴方…!!貴方みたいな得体の知れない人間が、私たちをバカにするのですか!?私たちと一緒にしないで下さいまし！」

「バカになんてしてないよー？それに寧ろ感謝して欲しいよこっちは…なんで脳無が貴方たちを攻撃しないか分かる？」

「!!?」

詠は漆月の言葉を聞き、驚愕する。そう、あの脳無はワザと、詠を攻撃しなかったのだ…　すると漆月は詠の大剣を払いのけ、距離をとる。

「それはねー、貴方たち蛇女の選抜メンバーの皆んなは…私たち敵連合の仲間になって貰いたいから！」

「「「は？」」」

蛇女の皆んなは、そんな満面な笑みを浮かべ、ふざけてる漆月の言葉を聞いて頭が真っ白になった。

コイツは今なんて言った？というか何を言ってる？

仲間にする？

敵連合？

突然襲いかかってきた抜忍が、仲間になってよ　だなんて、余りにもおかし過ぎる。皆んなはとにかく驚かされるばかりだ…

それは勿論蛇女だけでなく、半蔵や雄英の皆んなも驚愕している。

「敵連合…って、やっぱり!!」

緑谷たち雄英の生徒たちは直ぐに理解した。この抜忍と敵連合は繋がっていると…どういう理由で此処にやって来たかは知らないけど、少なからず彼女たちを仲間にするためにやって来たと考えられる。そしてここに半蔵学院の生徒たちが攻めてくるのは分かってた、だが雄英高校の生徒たちが攻めに来たのは漆月たちも予想外だったんだろう。半蔵学院の忍生徒を始末するために脳無が送られたと考えられる。

「それにしても…肝心のリーダーが居ないじゃん…んぇっと、焔だっけ？アイツとかは絶対だよね……まあ選抜メンバーは良いとして、飛鳥って女の子居ないな？」

「は？」

緑谷たちはそれを聞いて更に驚愕し、耳を疑う。

何故飛鳥が？と…疑問を抱いた。だが理由は直ぐに分かることになる。

「死柄木から言われてたんだよねー…もしあのガキが居るなら殺しとけって、優先順位付けられてる位だし…」

「死柄木…弔！」

死柄木弔。飛鳥を殺せと言ったのも、蛇女の選抜メンバーを仲間にしろと言うのも、危険人物である彼の仕業だろう…

柳生は怒り混じりの声で低くそう言った。漆月が考えるように呟いてると…

「秘伝忍法！『薙ぎ払う足』!!」

「っ！」

巨大な烏賊の足が、漆月を襲いかかる。だが漆月は反射的に攻撃が食らわない範囲にまで距離をとる。その結果、柳生の秘伝忍法は当たらなかった。

（コイツ…早い…）

「うわー…急に攻撃してくるとか…！」

「ここは戦場だ…不意打ちだろうとなんだろうと関係ない…」
「まあ、そりゃそうだよねー」

漆月は全く危機感のない顔を浮かべると…刀が闇に包まれ、闇の刀を軽く振るうように柳生に斬りつける。

ガギィン！

「……お前、舐めてるのか？」
漆月の信念なき軽い攻撃に、柳生は睨む目付きでそう聞くと、漆月は表情を変えずに話し出す。

「この闇はね、ちょっと特殊なの」
「!?」

柳生は驚きと『苦痛』の顔を浮かべる。気づいた時にはもう遅かった。その闇はゆらりと柳生の身体を纏わりつく。

「この闇は生あるものに襲いかかる……その闇は、私以外の誰かが触れるだけで苦痛が走りだし、私が何の攻撃をせずとも相手にダメージを与えれる…その闇は次第に体を蝕んでいき、死にたくても死ねれない激痛を浴びせられる…

無理をしないでよ♪柳生ちゃん♡」

漆月の笑みを見た柳生は、闇の気に身体が苦痛で蝕んでいき、発覚した。

コイツ、死柄木弔に似てると。

柳生は危険を察知したのか、漆月を蹴り飛ばす。

「たっ！　…あーもー、折角良いところだったのに…」
「はぁー……はぁ……はぁ……っ…ふざ……けるな、なんで抜忍が敵連合に……」
「別に何でも良いじゃん、まあいいや…じゃあまず貴方から…」

そう言った時だった。

「死ねえええええええええええええ!!!!!」

「っ!?」

ボオオオオオオオオオオオオン!!

瞬間、怒鳴り声とともに、漆月の顔面に爆破が発生した。

「ば、爆豪!」

「テメェもベラベラ喋り野郎かクソが!!あとオマエ、何苦虫かじったような顔してんだクソ眼帯!!ついでにテメェらもボサッとしてねえでなんかやれやゴラァ!!」

「「「!」」」

爆豪は柳生に吐き捨てるようにそういうと、今度は蛇女の皆んなに怒鳴るようそう言った。そんな爆豪の言葉に、皆んなは体を震わせた。

「いつまでもアホみてえにつったってんじゃねえ!!けどコイツぶっ殺すのは俺だからテメェらは脳筋野郎どもの相手しとれや!!」

「な、何よ……なんでアンタにそんなこと言われなきゃ」

未来は、爆豪に言われたことが何処か悔しくて、目を細めて反論する。だがその時だった。

「こんの……っっでりゃあ!!」

ザシュッ!

「ガッ!?!」

漆月は闇を纏った刀で爆豪に斬りつけ、思いっきり蹴り飛ばした。

そのことに未来も驚き、言葉が途絶えた。

「ハァ…いつつ、空気読んでよヒーロー……本当に邪魔!!」

「ハァ…!?　…ハァ…ハァ……んなもん…知ったことがぁ…!!ボゲェ!!げほ!げほげほ!!オェっ…!」

爆豪は先ほどの攻撃を食らい、漆黒のような闇の気が、爆豪の傷口にみるみると蝕んでいく。蝕んでいけばいくほど、爆豪は苦痛の顔を浮かべる。まるで体が熱で熱くなるようで、喉の呼吸器官は寒くなっていく。咳は酷く、目がクラクラし始め、体が少し震え始め、吐く息が熱くて、体がダルくて、口から胃液が少し出る。

「チィ…グッゾがぁ!!んだごれ、マジで……気持ぢ悪い……」

「爆豪!」

切島は緑脳無に捕まられてながらも、声をかける。だが、緑脳無は切島の顔を鷲掴みにして、思いっきり地面にめり込ませる。

ドゴオン!!

「この、野郎!!」

「もうこれ以上貴方たちの好き勝手にはさせませんわ!!」

「でりゃあああーーー!!」

先ほど壁の向こうまで吹き飛ばされ、傷つき口から血を流しながらも、戦おうとする葛城に、緑脳無に殺されかけた斑鳩、爆豪を傷つけたことに怒りが頂点へと達した緑谷。半蔵と雄英の皆んなが全方向から漆月に襲いかかる。すると…

「脳無、命令よ。蛇女以外の全員を吹き飛ばせ」

すると緑脳無は切島を離し、漆月の前に出ると、漆月は真上にジャンプする。皆んなは勢いのあまり、止まることが出来ず、脳無目掛けて攻撃してしまう。だが、脳無は次の瞬間、掌と口を開けてクルクルと回り出す。

ボ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ
オオオオ

分からなくなってしまった。今この場にいるのは、緑と赤の二体の脳無。その主である抜忍、漆月。そして蛇女の四人だった。

「なっ……お嬢様…それに、他の皆様が……」

「な、何なのよ！アイツ……み、皆んなが……アイツ、あんなに強いの…？」

詠と未来がワナワナと震えだすと、漆月は満面な笑みで着地しては嘲りだすように、見下すように笑い出す。

「あっはははははは!!みーんな吹き飛んじゃった!!忍びもヒーローも、脳無の強さに気圧されたようね！これで全員は倒したし、やったやったぁーー！まさかこんなに呆気なく終わっちゃうなんて、さっすがは死柄木！そして『先生』が作ってくれた二体の脳無は驚異的ね！あはははははは!!」

漆月は幼い子供のようにピョンピョン跳ねて、手をパチパチさせながら喜んでいる。二体の脳無は漆月に振り向かず、ただただ命令通りに動き、命令がなければ動くことはない、正にこの脳無たちも殺戮兵器そのものだ。

そんな漆月を見て、春花は睨みつける。

「喜んでるところ悪いんだけど、貴方抜忍なのよね？それで何しに来たと思ったら、私たちを仲間にするためにやって来たわけ？残念だけど私たちは蛇女の生徒…そして貴方の命を狙ってるんだけど？」

春花がそう言うと、詠、日影、未来も武器を構える。だが、そんな話に漆月は首を傾げる。

「？うん、それがどうしたの？」

「えっ？」

そうだけど？その言葉を聞き、四人は固まる。分かってるなら何故仲間に引き入れたいのだろうか？と。

「けどさ、悪忍だからなんだって言うの？善忍だからなんだって言うの？所詮貴方たちは命令通りに動くだけの、ただのロボットみたいなものでしょ？そんなのって本当に自由なのかな？それは生きてると言える??私は貴方たちを自由にしてあげたいからこそ、勧誘してるんだけど？ホラ、貴方たちは私と敵連合に似てるし！」

「なっ、ふざけないで下さいまし！さっきも言いましたが、私たちと貴方たちを一緒にしないで下さいませ！」

「なによ、貴方たちは命令なら例え誰であろうと簡単に殺す癖に」

「っっ!!!!」

漆月の言葉に、詠は軽く戦慄する。

「ねえ、そう思わない？なんで貴方たちのやってることが、忍びの世界では許されて、ヒーローの世界では許されない!?表の社会でことを起こせば敵になる、けど…裏の社会でことを起こしても悪忍だの善忍だという理由で、上層部の命令だからと、罪が無くなる。逆に命令されてもないのに人を傷つけて殺してしまえば、その裏の社会から忍びは追放され、死が待ってる！忍びの社会？下らない…くっだらない!!」

漆月はさっきの笑みから、闇、悪意、憎悪、怒りが混ざった表情に変わり、早口で喋り出す。だがここで日影は臆することなく反論する。

「仕方ないやん、それが忍びっていうもんやから」

「そうだね、だから私は抜忍になったんだよ？」

「えっ？」

漆月の言葉に、未来は目を丸くする。

「ハッキリ言えば、貴方たちは本当に変わらないよ？やってることも…例えば…そこにいる二体の脳無とかね。コイツらは命令さえ出れば忠実に従うの、それって貴方たちも同じよね？だからやってることは貴方たちとまんまだよ？」

「っっ!!」

それを聞いた四人は、自分の誇りが傷つけられたのか、あるいは漆月の言葉が気に入らなかったのか、四人は怒りと殺意の目で漆月を睨みつける。

「いい加減にしなさい！私たちは貴方たちと違うわ……私たちには心がある。雲雀の言ってた脳無とやらとは違うもの…」

「春花様の言う通り…私には守りたいものがあるんだもん!!守りたいものがないように見える貴方たちとは違うんだから！」

春花と未来は漆月に一喝する。

場所は変わり、忍結界では…

「…ここは？」

急に忍結界に飲み込まれた飛鳥は、周囲を見渡す。そばには焔がいる。だが焔も飛鳥と同じく周囲を見渡している。すると…焔は何かを見つけたように、忍結界の壁になってるところに駆けつけた。

「あれは…何だ!?」

焔がそう言うと、飛鳥も駆けつける。

「アレは…うそ?……脳無!?それに、皆は!?」

飛鳥と焔が見たものは、二体の脳無に謎の忍び。そして蛇女の四人が謎の忍びに武器を向けてること。ここだと皆んなを見ることが出来るようだ。

飛鳥と焔は、今起きてる状況を理解することが出来てないが、とりあえず分かることは、敵連合が攻めに来た。分かるのはそんなところだろう。だが飛鳥は脳無を見た途端、ＵＳＪのことを思い出した。対平和の象徴と呼ばれてた最恐の脳無を…もし、この二体の脳無が、襲撃の時と同じ個体だったら間違いなく皆んなが死んでしまう。飛鳥は直ぐにでも駆けつけに行きたいくらいだ。その時だった。

「ハーーーハッハッハッ!!」

そんな二人を、嘲笑うような笑い声が聞こえた。その声の主は道元であった。二人は道元を睨むように振り向く。

「二つの超秘伝忍法書を手に入れた私の力、見せてやろう…秘伝忍法！『怨櫓血』!!」

その瞬間、最恐とも思わせる不気味は古代の怪物。今は妖魔、怨櫓血が出現した。

「ウオオオオオオオオーーーーオオオーーーーーーン!!」

「「っ!!」」

気味の悪い怨櫓血の叫び声に、二人は咄嗟に刀を抜いた。

場所は変わり…

漆月は、不愉快そうな顔で、四人を見つめてる。

「心？守りたいもの？へぇー…私も人のこと言えた口じゃないけど、悪忍の分際で心とか守りたいものとかを云々語るの？貴方たちが??はぁー…まあ何でも良いんだけどさ、アンタらが仲間になってくれればこっちとしては万々歳なのよ、ミッションクリアなのに…」

漆月は面倒くさそうにため息をつきながら死柄木と同じくゲーム感覚で独り言を呟いている。そんな漆月に、日影は話し出す。

「なんやよう分からんが…なんでそんなにワシらを仲間に入れたがるん？誰かからの命令か？」

「ん？ああ、まあ命令…といえば命令だけど、その半分…私の意志でもあるかな、貴方たちは他の忍とは違う雰囲気があるし。まあ、あの半蔵の連中もだけど」

漆月は再び話し出す。

「貴方たちは何かしらの理由で蛇女に入ったワケでしょ？それで皆からも信頼されて、強いわけじゃん？ただ単に雑魚どもを仲間にしたって意味がない、貴方たちを仲間に入れたいのは、それほど実力があるから…また、貴方たちは苦しめられた筈だ…綺麗事に、正義とやらに」

「……」

皆んなはジッと漆月を見つめて黙り込む。

「今まで苦しんだ貴方たちの気持ち、ソイツらに分からせてやりたいでしょ？殺したいよね？壊したいよね？」
「……」
「だから早く私たちの仲間に…」

ドヒュウン！
ピッ…！

突如、刃物が漆月の頬に擦り、血が一滴頬に伝わるように流れた。
その刃物は漆月の後ろの壁に突き刺さる、漆月は、ゆっくりと後ろを振り向き、刃物を見つめる。

「……は？」

漆月は刃物を飛ばしたのが誰なのかを確認するため、蛇女の四人に睨みつけるよう視線を戻す。

「私たちは、貴方たちの仲間になるほど落ちこぼれてはおりません！」

その正体は詠であった。詠は腕に付いてるボウガンを漆月に向かい、刃物で撃ったのだ。
詠の様子は、まるで自分たちがバカにされた事が許せない様子で荒だち、両腕のボウガンを構えて向ける。

「そもそも貴方が何を言い出すのですか！私たちの事を何にも知らない癖に…いけしゃあしゃあと喋り出して…ふざけるのも大概にして下さいまし！」
詠は今まで溜めてた怒りをぶちまけるように漆月に吐き捨てるようそう言った。
「せやな、詠さんの言う通りや…ワシらはアンタらの仲間にはなれへ

んな、感情っちゅーもんはないけど、こんな派手なことやってくれたんや、アンタが何言おうとワシらは入る気はないし、それにさっき春花さんが言ってた通りワシらはアンタの命を狙ってんや、残念やが覚悟して貰うで」

日影は無表情ではいるが、内心は怒ってるのだろう…怒気が伝わる。自分たちのことを何も知らずに、分かったような振りをする漆月に、ナイフを突き刺そうとするように構える。

「そうそう、それに私たちにだって悪忍の誇りがあるもの…そう簡単に自分たちが信じた忍びの道を捨てるほど、ヤワではないわ…分かったかしら？お馬鹿さん♡」

春花は漆月をお馬鹿呼ばわりすると、横にいた未来も頷く。

「そうよ！そもそもアンタの発言からして、私たち悪忍が不自由だって言いたいの？違う、悪は自由だから良いんだ…！アンタたちの仲間になるなんて真っ平ゴメンよ！そもそもアンタらの事なんて知らないし、忍びとして裏切ったアンタに誰が仲間になるかって話よ！」

未来は怒鳴るような声で、漆月に吐き捨てるようそう言った。四人は敵連合に入る気など毛頭ない。それが例え相手がどれほど強かろうと関係ない。もし向こうが殺しに来ても、こっちは命を賭けて阻止するまで。皆んなはもう覚悟は出来ている。漆月の戦いを…敵に散々こんなことを言われて黙ってるハズがない。

そう…そんな漆月は、下を向いていた。

「……」

漆月は、無言でずっと下をむいている。勿論蛇女の皆んなの言葉はちゃんと聞いていたし、無視するなんてことはもう彼女の頭の中には入っていなかった。
敵である蛇女の四人の詠、日影、春花、未来に散々言われたことにより、怒り、憎悪、悪意、様々な感情が溢れ出していて、今でも怒りが爆発的に噴火しそうな感じだ。
「はぁ……あーあ…やっぱりそうなんだね……貴方たちなら仲間に出来ると思ったんだけどね……断られた挙句に傷付けらて、オマケに罵声すら浴びせられる始末……ねえ、これ何の罰ゲーム……？」
この場に現れて、今まで見せたことのない漆月の様子に、皆んなは少し引いてしまうが、それでも四人は後ずさりしずに武器を構えている。そんな四人を、漆月は睨みつけた。
「じゃあもういいや……殺す!!!」
ゾワッ！
「「「！」」」
漆月のドス黒くて禍々しい殺意に、四人はゾッ！とした。そして漆月は二つの刀を向けて
「脳無！命令よ！アイツら一人残らず殺しなさい！殺して殺して、完璧に息の根を止めろ！殺せ！」
漆月が今まで溜めてた怒りを解き放つように、残虐な感情で何度も何度も殺せと脳無に命令すると、漆月の気持ちを答えるよう、二体の脳無は身体が反応し、直ぐに蛇女の四人に姿勢を向けて突進するよう無表情のまま、攻撃しにかかる。

「ネエエーーーーアアエエ!!!」
「ホオウオーーーウオウオウ!!!」

二体の脳無は気味の悪い奇声を叫びながら四人目掛けて殺しに掛かってきてる。

「来る！皆んな！」
「ええ！」
「分かっとるで」
「了解よ春花様！」

春花が、叫ぶと皆んなは脳無を攻撃しにかかる。詠と未来は赤色の脳無を、日影と春花は緑脳無を狙う。

「私たちも、リーダーの焔さんが居なくたって戦えますわ！秘伝忍法！『ニブルヘイム』！」
詠は腕に付いてるボウガンを赤脳無目掛けて、刃物、爆発物、矢など、様々な凶器を最大火力で撃ちまくる。

「私だって、焔たち皆んなを守りたいもん！半蔵と雄英がやられたかどうかは知らないけど、私たちは貴方たちになんかやられないんだから!!秘伝忍法！『ヴァルキューレ』!!」
未来はスカートをめくると、そこには銃があり、脳無目掛けて詠同様に最大火力で撃ちまくる。

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!
二人の最大火力の遠距離連携攻撃が、赤脳無に襲いかかる。だが…

「ホホホーーウオウ！」

ズドドド

ハートは緑脳無に当たることなく、壁に向かっていき、爆発した。

「ネエエーーーーアア!!」

緑脳無は大きな声で奇声を叫びながら、空中を蹴るかのようにもう一度ピョーーーン!と音を鳴らして春花目掛けて突っ込んでくる。

「不味いわ…!」

緑脳無の素早いスピードに春花は舌打ちする。緑脳無が春花に突っ込んでくると、春花はバックして回避する。そして緑脳無は地面にズバコオォォン!!と響く音を立てながら着地した。着地した緑脳無は直ぐに春花に視線を移し、殴りかかろうとする。

「今やで!秘伝忍法!『ぶっ刺し』!」

すると日影はナイフを思いっきり突き刺すような気迫で、緑脳無目掛けて突進する。日影も脳無もお互い無表情、ある意味日影と脳無はそう言った線では同じなのかもしれない。そんな脳無は、日影が攻撃することが分かった途端。

ブワッ!

「っ!なんやコレ!」

脳無の体の外側から、とても鋭利で細長い無数の棘が突き出てきた。そのことに日影は驚き、足を止めてギリギリ棘に当たらずに済んだ。すると脳無は、両手の掌を春花と日影に向ける。

ボオオオオオオオオオオオオオオン!!
ボオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

「っ!?」
「ガハッ…!!」

二つの衝撃波(ソニックブーム)が放出され、その襲撃波が二人を襲った。
春花はなんとか緑脳無との距離があり、脳無の動きを警戒してたため、ギリギリ避けることが出来た。だが日影は脳無の素早い攻撃に、もろに食らってしまい吹き飛ばされてしまった。
ドオォン!ドオォン!と、何度も壁が壊れる音が天守閣に響いた。それは衝撃波が貫くよう壁を壊してる音なのか、それとも日影が吹き飛ばされて壁が壊れてく音なのか…それは誰も知る由も無い。

「そん…な!なんなのコイツ…それに日影ちゃんが…!」

春花は緑脳無の衝撃波に吹き飛ばされた日影を心配する。そんな春花の様子を御構い無しに、緑脳無は殴りかかるように春花に襲いかかる。

「クッ…!貴方、そもそも何なの…!?雲雀の言ってた通り、確かに心がないように見えるけど…!」
「ネネーーエエーーアア!」

春花の言葉など通じてはない、緑脳無はただひたすら、漆月の命令通りに動いてる。

(問題は…コイツをどう倒すかが問題ね…見たところ個性だと見受けられるのは、衝撃波、トゲ…スピード?　傀儡はあの紫の子にやられたから……となると、打開策が出てくるまで持ち堪えなきゃならないってことになるわね…!)

春花は命がけで、緑脳無の一つ一つの動きを見極め、避けながら、な

んとか打開策を打つことを考えた。

一方で、吹き飛ばされた緑谷たちは、天守閣の何処かの部屋に居る。その部屋にいるのは、緑谷、斑鳩、爆豪、柳生、轟の五人だ。

「ゲホ、ケホ…大丈夫かな皆んな…？」

緑谷は少し傷はついてるものの、咳払いしながらキョロキョロと周りを見渡してる。

「え、ええ…なんとか…」

斑鳩も緑谷同様、傷はついてるものの、なんとか大丈夫なようだ。

「クソが…はぁ…ハァ…なんとか痛みや気分がさっきよりかはマシになったぜ…けど、まだ痛みや気分が悪い…あの喋り野郎が…!!次はゲホゲホっ！必ずぶっ殺す…！ごほゲホ！」

咳が酷く、口から唾液を垂らしてる。漆月の攻撃を食らった傷は、赤紫色に染まっており、見るからに痛々しく思えてしまう。この紫色は闇の色と同じなので、多分だがこの色がある限り、闇によって侵された症状は治ることはないだろう。

「オイ、無理するな…ハァ…ハァ……あんまりはしゃぐと悪化するぞ爆豪……ごほっ！ゴホゴホ！はぁー…はぁ、アイツの秘伝忍法…今まで見たことのない型だったな……ハァ…ハァ……　それにあの闇なんて、秘伝忍法ではなく、ただの気や何かから出てる能力なのか？クソ…オレが遅れを取るとはな……ゲホゲホ…！」

柳生も爆豪と同じく咳払いして、お腹を両手で押さえており、あの柳生も苦痛に満ちた顔をしている。この不明な能力により、爆豪と柳生は苦しんでるのだ。

「オイ、柳生もあんま無理すんじゃねえよ、問題なのは俺らがどう動くかの問題だろ。皆んな何処かへ吹き飛ばされちまったし、それにあの悪忍とやらも気にかかる。それとあの漆月とかいう奴、まさか忍びが先日襲った敵連合と繋がってたとは驚きだ。となると、あの黒霧とか

いう奴と主犯の死柄木とかいうヤツも見てねえ…もしアイツらも此処に乗り込んできたら最悪だぞ」
轟は冷静さを保ちながら、表情は曇っている様子だ。自分たちはどう動くのか、どうするのかを考える。

「た、確かに…この前学校に攻めてきたばかりなのに…なんでこんな……こんな…」
緑谷は悔しそうな表情を浮かべて、風穴が開いた部屋を見つめる。すると、此処である幾つかの疑問が浮かび上がる。
（こんな……ん？待てよ…そもそも敵連合はなんでこの場所を知ってるんだ？半蔵さんはこのことを僕たちに知らせてくれたから知ることが出来た…そんで、半蔵学院の皆んなも同じだろう…蛇女子学園の居場所なんてオールマイトや教師陣ですら手を焼いて探してるんだぞ？分からないんだぞ？それなのに何で…）
それは漆月が蛇女子学園の居場所を知ってたからだ。漆月は敵連合に入り、死柄木と通じたから、攻めに来たのだ。
（それだけじゃない…問題は敵の目的。蛇女子学園の選抜メンバー？の皆んなを仲間に入れること…次には飛鳥さん…死柄木の性格から考えて、殺すよう命令したんだきっと！あとは半蔵学院の皆んなも狙われてる…じゃなきゃあんな脳みそ丸出しの敵なんてワザワザ出さないだろ！そもそもアイツらもアイツらで……どうなってんだよチクショう！ちくしょう!!）
緑谷は目を瞑って、涙を浮かべる。
突然敵連合が攻めてきた、もしＵＳＪに攻めてきた脳無が、此処に来てる脳無たちと同じ強さなら、間違いなく皆んなの命が危ない。そへにまだ敵が何を仕掛けてくるか分からない。そう考えていくと、手の打ちようがない…
（いや、待てよ…？一番問題なのは、どうして敵連合は悪忍を仲間に入れるんだ？　アイツらは打倒オールマイトが目的のハズ…此処に僕たちが来てることだって想定外だったんだ…なんで…？）

緑谷はそこが一番気がかりだったのだ。悪忍…規則を破る存在だから？悪だから？

緑谷は心の中で呟いてると、爆豪はふらふらとしながらも、気合いでシッカリと態勢を整え、歯ぎしりを立てながらも、風穴が開いてる方に向かってく。その風穴は、先ほど皆んなが飛ばされた時に空いた穴だ。勿論柳生も爆豪と同じく、息を荒くしながら向かっていく。そんな二人を見て斑鳩は止めるよう呼び掛ける。

「ま、待って下さい爆豪さん？に柳生さん…！その体だと…」

「五月蝿え黒髪パッツン野郎がぁ…!!ゲホゲホ！ごほ！オェっ！……はぁー…ハァ……こんなんなぁ…寝たら直ぐ治るような軽いもんだろうがぁ……体がなんだ……今んなこと気に来てる場合じゃねーだろぉ…がぁ…」

「黒髪パッツンて…でも！」

「大丈夫だ…斑鳩……ゲホゲホ！げっほゲホ！ゴホッ！　オレも爆豪と同じ意見だ……それに、忍びは何時だって命懸けだ……ハァ…ハァ……こんなんで弱音を吐いてどうするんだゲホ！　ハァ……はぁ……仲間なら、信じろ…！それに、オレは念を頼りに…雲雀を…探しに行く……だから、お前たちはなるべく……敵連合を…！」

「柳生…さん…」

苦しむ爆豪と柳生に、斑鳩は胸が痛くなる。それは斑鳩だけでなく、緑谷も轟も同じだ。友が、仲間がこんなことになってるのに心配しない人なんて居ないだろう…轟は「分かった」と頷くと、斑鳩は振り向く。

「轟さん…分かりました。では私たちも向かいましょう！」

斑鳩、轟、爆豪は、漆月と脳無の敵連合を阻止するため、立ち向かおうとする。そんな三人の後ろ姿を緑谷は、ハッとした表情を浮かべる。

（……うん、そうだよ、そうだよ！今は考えることよりも…僕たちのやるべきことは……！）

「アイツらの目的を阻止して、勝つこと!!」

緑谷も入り、四人は向かいに行く。

２８話「勧誘」

場所は変わり、先ほど漆月たち敵連合が現れた山岳地帯では、死柄木と黒霧は蛇女子学園を見つめている。そんななか、黒霧は死柄木に質問する。

「死柄木弔。本当に抜忍である彼女を行かせて良かったのでしょうか？」

「あ？ああ良いんだよ別に、ホラ…俺たちはまだまだ忍びのことは無知識だろ？だからこそだよ…それに抜忍だとしても、アイツの力は敵連合に必要だ」

死柄木は黒霧から天守閣がそびえ立つ蛇女子学園へと視線を戻し、ニヤリと相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべては見下してる。

少なからず死柄木と黒霧は忍びについて理解して来るのだ。

敵連合はたった一人の抜忍漆月と通じて、

抜忍とは何なのかを教えてもらった。

抜忍とは忍びの組織、集団を脱退した者の事である。それが例え善忍であろうと悪忍であろうと、脱退したものは上層部からの命令により殺害されたりする忍びの事だ。元いた組織や仲間に始末されたりすることもあるらしい。

今もこの世界のどこかで、まだ命懸けで逃げ回り、苦しんでる抜忍もいるという事だ。では何故始末しようとするのか？それは忍の存在を世間に知らされてしまうのを回避するために始末することだそうだ…また、裏切りや脱退を処分するのは、忍の掟だからでもあるらしい。それがこの社会で起きてる裏の社会、忍の世界だ。

「影に隠れ、逃げながら生き…しかもルールや掟によりその抜忍は命を狙われてる…そう考えると先生が何故我々敵連合に忍の存在が必要になると仰ってたのも、分かってきました」

「ハッ…皮肉なもんだぜ忍ってヤツは……この先死ぬことしか見えない未来に生きてるだなんて言えないね」

黒霧は先生の考えに納得、同意し、死柄木はブツブツと小声で呟いてる。

「これからゲームを攻略してく上ではアイツら善忍との戦いは避けれないし、勝つためには向こうの情報を知る事が大切だ。だからこのゲームを攻略する上では、忍の実力がある漆月が適任だ。そして先生が言ってた通り、精鋭を集める。悪忍ってのは規則を破り、違法を繰り返し、煽り、騙し、壊し、そして殺すんだろ？まるで俺たち敵(ヴィラン)じゃねえか…ハハッ。それならいっその事、アイツらを俺たち敵連合に入れて、オールマイト殺すための戦力として使えば良いだろ？それにホラ、言うじゃないか…忍は命令さえ出れば何でもやるってさ」

死柄木の何処かズレてる正論に、黒霧は黙り込む。敵連合の三人は蛇女子学園に来る前に、話し合っていたのだ。先生と…

敵連合のアジトのバーでは、死柄木はこれから自分たちがどうするのかを考えるべく話し合っていた。

「なるほどね…オールマイトを殺すことが目的で、ついでには気に入らない子供たちを殺すことが目的と…」

死柄木の話を聞いた漆月は「なるほど…」と真剣な表情で頷く。そして彼女が見てるものとは、二枚の写真だった。一枚目の写真は飛鳥という少女。死柄木曰く、散々癇癪を起こすようなことを言われて、殺すことすら出来なかったと言っている。

そしてもう一枚の写真は緑谷出久の写真だ。

「あの子供さえ居なければオールマイトは殺せたんだ！」と、叫びだし、苛立っては指で首を掻き毟る。癇癪を起こす死柄木を黒霧はたしなめている。そんなやり取りを見てる漆月は苦笑した。

「貴方たちがやることは分かったよ。けど、これからどうすれば良いの？」

「それを考えるために話し合うんだろうが……まあ俺は暫く動くことは出来ないな。傷があって今治療中だしさ…」

そんな中、話し合いをしてると…

『やあ、漆月くん』

「!?」

ふとパソコンから声が聞こえた。音声のみのため相手が誰なのかは分からない。急に誰かも分からない人に声をかけられ、困惑の色を浮かべる漆月。

「「先生!?」」

（先生!?この声の人が?）

突然の声に死柄木と黒霧も動揺してる様子だ。漆月は二人の発言に目を丸くする。敵連合のボスが死柄木かと思っていたが、そうではなかったらしい。この先生と呼ばれる人こそが敵連合のボスなのだろうと考えた。それぞれ戸惑う三人に、先生は話し出す。

『敵連合に入ってくれて嬉しいよ。君のような忍が必要だったんだ』

「は、はあ……貴方が、敵連合のボスなんですか？」

『うん、今はね。君に折り入って頼みたいことがあるんだ。君が居る

からこそ成し遂げれる事さ』
（今は？）
　先生の発言に何処か引っかかり、首を傾げてしまう。だがそんな疑問も直ぐに消え、話に戻す。
「…成し遂げれるものとは？」
『うん、それは…』

　現在に戻り、死柄木は両腕を広げて語りだす。
「やっぱりあの人の考えることは違うぜ！ヒーローは忍と交わってるヤツだって居る…だったら敵（ヴィラン）も忍と交われば良い！そうだよなぁ…向こうに忍が居てこっちには忍が居ないなんて、不公平だもんなぁ！クッハハハハハ！どんなヤツらが仲間になるんだろうな？」
　死柄木はまるで幼い子供が、待ち望んでたものを楽しみに待ってるような様子で喋り出してる。
「……」
　そんな死柄木を、黒霧はジッと見つめるのであった。

　蛇女子学園の居場所をしってる漆月が居たからこそ、乗り込むことが出来て、忍を仲間に入れることが出来る。これが今回の事件で敵連合が動き出した流れであった。
　だが、そう易々と自分の思い通りに事が運ぶのは出来ないだろう。何故なら、今蛇女子学園の、天守閣の中で一体何が起きてるのか、二人は知らないのだから。

天守閣の中では、緑谷達は先ほど漆月と二体の脳無が暴れてた部屋に向かっていく。一方、緑谷たちとは違う他の人たちは…

「いたたた…ここ何処？」
「どうやら奥まで吹き飛ばされてしまったな…」
「クソ！まじかよ…強すぎだろあの脳無ってヤツ！」

雲雀、常闇、上鳴もそれぞれ傷は見受けられるが、命に別条はない。雲雀の忍装束は既にやられており、下着姿になっている。それを見た上鳴は「ひょおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」と、つい大声で変な声をあげてしまう。

「皆の安否を確認したいところだが…場所が分からない以上、詮索するのは危険だな…こういう時に障子と耳郎が居てくれれば良いのだが…」

常闇は周りを見渡し、障子と耳郎が居ないことを悔やんでると、雲雀が「大丈夫だよ！」と声をかける。

「皆んなはまだ誰もやられてないよ！雲雀、分かるもん。皆んなの心を感じ取ることが出来るから…！」
「す、スゲェ…雲雀そういうもんが分かるのか…」

雲雀の能力に、上鳴は感心する。だが雲雀の決意ある目も、表情も少し曇ってしまう。

「けど…あの抜忍の漆月っていうのがね、とても怖いんだ…」

「恐怖を感じるのか？」

雲雀の言葉に、常闇は首を傾げて聞くと「うん」と答える。

「どんな人でも悪意を感じたり、善意を感じるんだ。人にはそれぞれ感情があって、善意があれば悪意があったりとか、それがどれだけの気なのか、この人は今善意があるなとか、自然と見極めることが出来るんだ。でもね…あの漆月っていう人の感情が物凄く嫌なんだ…気味が悪くて、悪意の感情しかなくて、むしろ善意が悪意に染まってて…まるであの死柄木っていう人みたいな…そんな感じ…」

雲雀はまるで、自分の最も嫌いなものを見てるかのような目で、うるうると涙を浮かべる。それはその人の悪意が怖いのか…はたまた得体の知れないことに恐怖を感じるのか…恐らく両方だろう。

「なるほど、雲雀の言ってることはよく分かった。なら、尚更俺たちは探さないとな…友を。もしソイツがそれ程、危険な歪みを持つならば、間違いなく此処に居る皆んなを殺しにかかり、死ぬぞ」

常闇は、風穴が空いた方に目をやると、走り向かっていく。

「あっ！待てよ常闇ぃ！」

上鳴も常闇の後ろを追うよう走っていく。それを見た雲雀は、両手で頬をパンパン！と気合をいれるように叩くと、「うん！」と頷き、常闇たちと共に走っていく。

時間は遡り、天守閣の外では、霧夜、大導寺、鈴音は、天守閣の中に響き渡る轟音と、ただ者ではない何者かが侵入しに来た事により、表情が険しくなってる。

「な、なんだ!?」
「この気は…!」
「これは、善忍でもない、悪忍でもない…抜忍と、敵の気!?」

霧夜と大導寺は、その不穏で禍々しい気を感じ取り、触発され、気持ちが高鳴る。鈴音はこの気が善でも悪でもない何者かと分かり、動揺する。抜忍が来ることは鈴音は予想してたようだ。そう、それはあの時半蔵に攻めに行き、霧夜にあった時に勘付いていたのだ。だが…

「蛇女子学園のことは半蔵と雄英側にしかバレてないはず…なんで?」
鈴音はこれは流石に予想外の出来事なのか、冷や汗を垂らしてる。
「……大導寺の言ってた禍々しい気…そして、半蔵様の言ってた良からぬ出来事…それはまさか…」

敵連合の襲撃。それが半蔵が言ってた良からぬ出来事…大導寺が言ってた禍々しい気とはこのことだったのだ。

「……直ぐに止めないと…!」
「ああ…!」

鈴音と霧夜はお互いを見て頷き、直ぐに駆けつけようとすると…

「待て…これは子どものいさかいだと、先ほど言ったはずだ…！」

「「大導寺！」」

大導寺は二人を呼び止める。だが、今は非常事態だ、そんなこと言ってる場合ではないと言うと、大導寺は「フッ」と不敵な笑みを浮かべる。

「非常事態…上等だ。生として生きるもの…世の中常に何が起こるか分からぬ…　だが、そんな非常事態な出来事だからこそ、我らは後輩たちを信じるべきでは？」

大導寺は信じる目で、二人に語る。

「その良からぬ出来事…我らの後輩が打ち勝ってみせる！言ったはずだ…この勝負、勝つのは英雄を背負いし者たちと我らの後輩たちだと！」

例えどんな非常事態な事が起きようとも、少年少女…忍学生もヒーローも壁を乗り越えると断言した。そう、信じよう…皆んなが敵を打ち勝つことを。ピンチを乗り越えることをを。二人は、大道寺の言葉に頷き、この場で生徒たちを信じ、待つことにした。

最上階の部屋では、激戦とも言える状況のなか、蛇女の四人は敵連合の二体の脳無を対峙てる。

「秘伝忍法！『ジグムンド』！」
詠は大剣を巨大化させ、エネルギーを纏わせ、赤脳無目掛けて大きく振りかぶる。
遠距離射撃がダメなら、近接戦闘を試みる詠。だが…
「ホウオーウホウ!!」
ガギイィィン!!
赤脳無は普通の手から刀へと変えて、詠の大剣を両手で受け止める。
「なっ…！なんという力…私の秘伝忍法を使って、素で受け止めるなんて…」
詠は赤脳無の強さに驚愕した。なんの表情も変えず、ただただ標的を見つめてるその姿は正しく不気味…その言葉に尽きる。
一方未来は詠の援護と赤脳無の妨害のため、遠距離射撃をする。だがそれは詠の援護になるだけで、赤脳無を妨害するには遠かった。
先ほど、詠と未来の二人の遠距離連携攻撃で、赤脳無の個性『バズーカ』をやっと相殺できたのだ。赤脳無は、未来目掛けて両肩の穴から火薬性の硬い角質の弾を飛ばしてる。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!

気は的中した。
「ホオオオオォォォォ!!」
赤脳無は大量の空気を吸った後、詠目掛けて大量の炎を吐く。その赤い炎は、詠に襲いかかる。
ボオオオオオオオオオオオオオーーーー!!!
「っっ!?!!キャアアあああああぁぁぁーーぁぁ!!」
詠は赤き炎に身を包まれ、つい大剣を離してしまい、そこで赤脳無は二つの刀でクロス型に斬る。防御も出来ず、忍装束もボロボロな詠は赤脳無の攻撃を食らったことで、かなりのダメージを負った。
「かはっっ!!」
「詠お姉ちゃん!!」

詠が攻撃を食らい、苦痛の表情を浮かべたことで、未来は動揺して射撃のペースを乱れてしまった。それを脳無は逃さなかった…脳無は直ぐに未来に振り向き、猛スピードで走りかかり、バズーカを使いながら斬りにかかる。

「こうなったら…これでも食らいなさい!秘伝忍法!『ヴォルフスシャンツェ』!!」
未来はスカートの下から無数のガトリングガンを展開させて、赤脳無目掛けてダッシュしながら乱射する。当然射撃は互角、そして赤脳無と未来の距離は次第に短くなり…
(これで…!)
ドッ!!
未来は赤脳無を傘で突くよう攻撃した。手応えはあり、傷あって血も出てる。これで倒したとは思えない…けれど。ダメージはある筈
「ホウホ」
と思っていた。
「え?」
赤脳無は何の表情も変えず、未来を見つめながら、大量の空気を吸っている。

「そ、そんな…！日影じゃあるまいし…」
未来がそう言いかけた途端…
「ホオオオウウウホオオォ！」
ボオオオォォォォーー!!
赤脳無は口から炎を一気にはき出した。
「っっ!!きゃあああぁぁっっついぃ!!」
未来は苦しみながら赤脳無の炎を食らい、転がるように倒れ込み、なんとか炎を消してる。それでも脳無はまだ未来を倒してないと知り、刀で斬りにかかる。

「させませんわ！」
だが後ろから、大剣を持った詠が赤脳無目掛けて斬りにかかる。赤脳無か詠…どちらが早いか？
「私もさせないよ？」
「っ!?」

否、どちらでも無い…赤脳無の背中、詠の前に突然、漆月が現れた。漆月はニヤリと笑みを浮かべる。
ガギィィィン!!
詠の大剣と漆月の刀がつばぜり合いをし、火花散り、金属と金属が擦れて嫌な音を立てる。
「くっ…！」
詠は漆月に邪魔された事に苛立ちを覚え、強さを増す。だが刀はビクとも動かず、押されてる様子も見受けられない。
「てりゃあ！」
ドッ！
「カハッ！」
漆月は詠の腹に蹴りを入れて、吹き飛ばす。そのまま詠は壁にぶつかってい「って、させる訳ないっての」かず、漆月は瞬時に背後に回り、詠を地面に叩きつける。
「っ!!」

ドゴオン！
詠は地面にめり込むように、その場に倒れ込む。そして漆月は詠の目の前に立ち、意地悪そうな顔でニヤリと笑い、詠を見下した。それを見た詠は、そんな漆月を睨みつける。
「……なんですか？その目は…」
「何って？見下してるの」
「……やめて下さい……その目だけは……」
「ふえ？」
「やめてと言ってるのが聞こえないのですか!!!!」
詠は大激怒で叫んだ。詠は昔、鳳凰財閥のお金持ちたちに見下されて生きてきた…だから見下されることで思い出す。生きてるだけでどれだけ苦しいと思ったか、どんな悲惨な生活を送ってきたか……漆月の目はそれに近い目だった。
詠は一喝すると、漆月は嬉しそうに、満面な笑みで詠を見つめる。
「あっははははは！私を傷つけた罰よ！折角貴方たちに命を狙われてるこの私が、壁も作らず素直に誘ってるのに断るなんて…しかもその挙句私を傷つけては罵ったよね？これくらいしないと気が晴れないし」
漆月はそう言うと、横目でチラリと『あるもの』を見つめる。
「それにホラ、『向こう』も終わったみたいだし」
「えっ…？」
そう言うと詠は首を傾げた。漆月が見つめてる方向に、あるものとは？それは…

「ハァ……はぁ……あっ！くぅ…っ！」
「ネエアエア！ネエエエーーェェ!!」

春花は忍装束がなくなっていては、体中がボロボロになっており、息遣いが荒く、緑脳無に首を掴まれてて、苦しい表情を浮かべている。
逆に緑脳無も、傷こそはついてるが、何とも無い様子でそのまま春花の首を掴んでいる。
「は、春花さん！」
詠は仲間である春花が傷つけられてることで、体を動かそうとする。その一方、漆月は「きゃはははは♪あっはははは！」と、耳障りな笑い声が、部屋の中で響きわたる。そして赤脳無の方では、刀状の手から、普通の手に変えて、未来の体を掴んでいる。
「よ、詠お姉ちゃん……ごめん……わたし…」
「み、未来さんまで…！」
詠は、ボロボロな姿の未来を見て、目を大きく開く。漆月はさぞ満足したかのような顔でうんうんと何度も頷く。
「これが、敵の強さだよ」
漆月は皆んなにそう言った。
「善忍が強いか？悪忍が強いか？ううん、敵が強かったの！そう…貴方たちは善と悪についての概念に、大きく囚われていた。だから貴方たちは敵とは何なのかが分からなかった…私たち釜やって来ても何の対処も出来なかった……敵の本当の強さも分からなかった…今こうして私たちに負けた…そうでしょ？」
「……っ」

漆月の言葉に、何も言い返せれず、まず正論を言われたことに腹が立った。言われてみれば確かに自分達は、忍務を全うする立場だ。それが忍…忍には善と悪が存在する。自分達は善が憎かった…偽善、差別、窮屈、綺麗事…様々なものが彼女たちを縛り、悪忍へと変えた。鈴音先生から言われた通り、善より悪の方が強いということを知らしめる為に、半蔵とぶつかった。そして今回の事件で半蔵の連中が攻めてきた、雄英の連中も攻めてきたが、自分達は負けるとは思ってもいなかった。

だが今はどうだ？半蔵と雄英と戦い体力が消耗してるとはいえ、自分達の今の立場に、言葉を失ってる。

蛇女である道元に利用され、敵連合の抜忍漆月と二体の脳無になす術もなくやられて…

悔しい…

それが彼女たちが思ったことだ。

そんな漆月は、周りをキョロキョロと見渡してる。

「んー…それにしても焔と飛鳥はまだ見てないなぁ～…あっ！コイツらがダメなら焔を仲間にすれば良いんだ！」

「！」

漆月の言葉にその場の全員は漆月を睨みつける。

「あ～…でもコイツら傷つけちゃったしなぁ～…というか蛇女の選抜メンバーのリーダーである焔は本当に何やってんの！なんて♪早く来ないと仲間が死んじゃうのに～…」

漆月は刀を上に投げて、遊んでいる。その目からは、ただただ遊んでるように見え、戦いなんて眼中にない。

「ほ、焔さんが……貴方たちの……仲間になるわけ……ないじゃないですか…！」

詠は立ち上がり、大剣を杖代わりにしてなんとか起き上がる。

「……」

「そうよ…」

「？」

振り返ると今度は、弱々しい声を出す未来に振り向く。
「焔は……私たちの仲間なんだ……！それに、焔は……私を受け入れてくれた……だから……私は、大切な仲間を…守るんだ…！」
ドカッ！
未来は傘を握りしめ、赤脳無の手を思いっきり払い退ける。そのため赤脳無は掴んでた未来を離してしまう。
「……」
漆月はそんな未来を見て、黙り込む。
（大切なもの…ね）
漆月は何かを思い当たったのか、未来をジッと見つめてる。赤脳無は、先ほど漆月の命令を遂行するために、未来を殺す。手を刀に変えて、未来目掛けて斬りにかかる。それに気付いた詠は、直ぐに駆け寄ろうと体に力を入れる。
「未来さん！後ろ！」
「っ！」
未来は漆月と戦おうとしたが、赤脳無がそれを許さなかった。赤脳無は未来目掛けて斬りにかかる。マズイ…そんな時だった…

「脳無！やめろ！」

ピタッ！

「!?」

赤脳無は、漆月の命令が出た途端、動きがピタリと止まった。あと少しで刀が、未来を斬るところだった。

しかし皆んなはそこに驚いたのではない…漆月の『やめろ』という言葉に驚いたのだ。

それは一体どういう意味なのか？漆月は未来に歩み寄る。そんな漆月に、未来はおそる恐る震えて声を振り絞る。

「な……な……なに……？」

「守りたいもの…か。それって、この蛇女の…貴方の選抜メンバーの仲間たちの事だったんだね」

漆月は納得したかのように何度も頷く。漆月はまるで全てが納得

し、良からぬことを思いついたのか、未来に満面な笑みを浮かべる。
「よし！じゃあ、未来だっけ？貴方は私たち敵連合の仲間として歓迎するよ！」
「「!?」」
漆月は突然、未来を仲間に引き入れると言った。その目からは嘘を感じない…本気で仲間に入れようとしてるのだ。
「な、な、なに言ってんのよ！何度も言うけど…貴方たちの仲間になんて…」
「ふーん、じゃあ大切な仲間が殺されても良いんだー？」
「!?」
漆月の脅しに、未来は目を開き驚愕した。
そう、こいつは未来の大切なものを理解した途端…未来を仲間に入れることを考えてたのだ。そのため未来の仲間を利用し、仲間に引き入れようとするのだ。
「この二体の脳無の実力はもう経験済だよね？どれ程強いのかとか…」
「……っ」
未来は漆月の言葉に絶句した。ようは漆月はこう言ってるのだ。
もし仲間になることを逆らえば、未来の大切なものである仲間を殺す。
恩人も、何もかも全てを…
二体の脳無の力は戦いで分かった。勝てない…コイツらには勝てないと。未来は、怒りと憎しみが篭った目で、漆月を睨みつける。
どこまで外道なんだ…と。
そんな未来の目を気にしず、漆月は話し出す。
「また、こうも言えるよ？もし貴方が私たちの仲間になるなら、コイツらの命は全員見逃してあげるって」
「！」
漆月の言葉に、未来の目が変わった。それは、仲間の命を見逃してくれるという意味を理解したからだ。
もし自分がコイツらの仲間になれば、皆んなは殺されずに済む…

と。だが、それを皆んなは許さなかった。
「させへんで!!」
「!?」
未来と漆月はその声の主に振り向く。そう、それは緑脳無の最大火力の衝撃波（ソニックブーム）を喰らい、もろに吹き飛んでしまった日影であった。日影は多少傷がついてるが、それでもまだ全然戦えるらしい。愛用のナイフを持ち、日影は漆月目掛けて斬りにかかる。
「脳無！」
漆月は緑脳無にそう言うと、先ほど首を掴んでた春花を、今度は体を掴み、日影目掛けて投げ飛ばす。
「っ！日影ちゃん！」
「アカン！春花さん！」
春花は緑脳無に投げ飛ばされ、日影の方に突っ込んでいく、そして日影はスピードを付けすぎだ所為で、止まることは出来ない…だが、ナイフをしまうことは出来た。
ドン!!
「っ！」
春花と日影は当たってしまったが、いたって傷はない。二人は直ぐに緑脳無を睨みつける…だが。
ボオオオ

未来は傷つけられた仲間を見て、目に僅かな涙を浮かべかながら叫んだ。それを見た詠はとうとう怒りの頂点へと達した。
「っっっ!!っ!よくも!!よくもよくもっっ!!」
詠は憤怒の余り、体の激痛など忘れて漆月目掛けて襲いかかる。だが…またしても…
「脳無」
赤脳無は手を刀に変えて、詠の背中を斬りつける。
ザシュッ!
「…っ!」
詠は背中を取られてしまったとこで、赤脳無の攻撃を受けてしまった。余りにもの痛撃で、意識が消えそうになり、倒れ込んでしまう。そして赤脳無の刀は、詠を斬った時の血が付着している。
そんな漆月は呆れた顔でため息をついた。
「全く、今良いところなのにさ…空気読んでよね三人とも」
漆月がそう言うと、未来は漆月を睨みつける。そんなことも御構い無しに漆月は未来に視線を移すと、少し悪そびれた様子で「ごめん、ごめん」と謝る。
「さて、と!これで邪魔者は黙った訳だし…改めて未来!歓迎するよ!我ら敵連合へ!」
漆月はもう決まったことだと思ったのか、未来に手を差し伸べる。そんな彼女に未来はキレかけ、傘で殴り飛ばそうとかんがえたが、彼女は得体が知れない…何をしやらかすか分からないし、最悪の場合皆んな死んでしまうと判断した。そうなれば元も子もない…未来は睨みつけながら、漆月に話しかける。
「……もし、本当に私が仲間に入ったら……皆んなは……傷つけない?」
「もっちろん!」
彼女はうんうん!と活発よく頷た。まるで子供が約束を守る時の元気な顔で…ふざけてるように見えるが、それでも彼女の言ってることは本当だった。嘘はついてない…
だが…それでも、それでも未来は仲間に入りたくない…だって、近

くに大切な仲間たちがいるんだから…そんなことを思ってると、ふと漆月が話しかけにくる。
「ねえ、前から思ってたんだけど…どうして貴方は蛇女に入ったの？」
「……話して……どうするのよ……」
「それはその話次第だね」
未来は漆月の目を逸らし、自分の身になにが起こったのか全て漆月に話した。すると漆月は「なるほどね…」と真剣な表情で頷いた。
だがそんな彼女の思うことなど丸見えだ。

『辛かったよねぇ…もう大丈夫だよ！私たちのところにいこ！』
『虐めた奴らの復讐ねえ…まんま子供っぽくて敵向きじゃん、私たちの仲間に入ったほうが尚更気分がいいよ？』
『だったら蛇女も敵も変わらないから、私たちの仲間になるのに、負担はないよね？』

正直耳障りにしか聞こえないセリフ、怒らないよう彼女の言葉を予想し、怒りを和らげるようにする。
（アイツは絶対に許せないし…仲間だなんて思わないけど…！でも…でもこれで…皆んなが、無事でいてくれるなら…）

だが、未来の予想はどれも違った…

「じゃあ。その復讐…私が手伝ってあげるよ！」

「は？」

漆月の言葉に、未来は頭のなかが真っ白になり、何を言ってるのか分からなくなった。

手伝う？何を？復讐を…

けど何で？何のために？

あまりの突然の言葉に、じぶんの目的を手伝おうとしてくれてる漆月に、混乱している。

そんな漆月は、ニコッと笑みを浮かべた。

「復讐したいから悪になった…いいじゃん！やろうよ！復讐を！」

「あ……え……え……？」

突然の状況に訳が分からなくなり、言葉を失い、何を言っていいのか分からない。

「だって、そのために悪忍になったんでしょ？善忍の家系だったのに…だったら私達んところに来れば、やりたい放題よ？虐めた奴らの復讐…最高じゃない！」

漆月は両腕を広げて満面な笑みを浮かべて語りだす。

だが、漆月の一つ一つの言葉が…彼女の心を誘惑していた。そう未来は前々から自分自身の悩みがあった…それは。

自分は此処に居てはいけないんじゃないか？と…

それは蛇女の選抜メンバーになってから、少し時が経った頃の話であった。自分は一年生で、周りの四人は上級生…自分は下級生であり、実力差は歴然としてるが、それでも経験の差があるため仕方ないだろう…そう思ってた。だが、だからこそ心配なのだ。そんな自分が

選抜メンバーに入っていいのかどうか…と。もしかしたら皆んなは私なんかに気遣ってそう言ってるのでは？自分は時々失敗することがある、皆んなみたいに強くはない…忍は強さこそが全てだ。私みたいな半端者は要らないだろう…だから蛇女には必要ないんじゃないか…前々からそう思ってたのだ。だが、そんなある日、鈴音先生から命令が下された。それは半蔵に攻めろという事だ。だからこの事件で決心した。もしこの事件で蛇女が勝ったら私は此処を出ないことにすると…けど、半蔵に攻めに行った時、未来は柳生に負けてしまった。それが悔しかった…悔しくて悔しくて…皆んなの足を引っ張ってしまった。その時に確信した…もう自分は此処に居なくても良いんじゃないかと…

確かに柳生のことは許せない…でももう一つ許せないのは、自分の弱さ…惨めさ、未熟さに、自分は許せなかった。

こんなんだから、虐めが起きて、自分に負けてしまったんじゃないか？とも思えてしまってたのだ。

「四人全員を仲間にする事は出来なかったけど…けど誰も仲間に出来ないよりかはマシだね…二兎追うものは一兎をも得ず。と言うし」

漆月は独り言で話してると、暗い顔をしてる未来に手を差し伸べる。

「さあ、一緒に行こう？」

漆月がそう言うと、未来は漆月を見つめ、その手に触れようと手を差し伸べる。

（っ！いけませんわ…！未来さんが…未来さんが……！）

詠はなんとか地面に引きずりながらも、漆月を睨み、未来を助けようと必死に体を動かしてる。だがほんの僅かしか動かず、体が言う事を聞かない。

（っ！未来さん！）

日影は未来のやろうとしてる事が直ぐに分かった。間違いない、蛇女を抜けて、敵連合に入ろうとしてる。

（未来！）

春花も日影と同じ事を考えた。そんな未来を助けようと、体を動かしてみるものの、思ったより緑脳無の衝撃波が効いたのか、思い通りに体が動かない。

皆んな叫ぶ事すら出来ず、ただただ心の中で叫ぶ事しかできなかった。

「……」

（ごめんね…皆んな……ごめんね、ごめんね……私、わたしは……）

自分みたいな足手まといが、居なくなれば、彼女たちの命は助かる。また、自分が歯向かうと彼女たちは殺される…なら、もうこれしかない…自分を犠牲に仲間を、大切なものを守る。それが最善の手だ…だから…

未来の手が、あと少しで漆月の手に触れる。

ボオオオ

ンンン!!!

その時だった。

「がハッ!?!?」
「えっ!?!」
「「!!??」」

突然漆月の横を殴るように襲いかかる爆破。その突然な出来事に、漆月と未来はもちろん…詠、日影、春花も驚いた。
そう、爆豪が此処に駆けつけに来たのだ。
「邪魔だ退けこんのチビ眼帯があぁぁぁーーー!!!」

『調子の良い』爆豪は、漆月の横を思いっきり、最大火力の爆破攻撃をお見舞いする。そして今度は漆月の髪をつかむ。
「!?」
「クソ野郎がああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

ボオオオオオオオォォォォォォンンン!!!

「死ねえええええ!!」
ドガアン!
「っっ!」
思いっきり投げ飛ばす。投げ飛ばされた漆月は何が起きたか分からず、壁に叩きつけられた。

「があっっは!!　な…にが…っ！っりあえず……脳無！」
漆月がそう叫ぶと、緑脳無は春花と日影から、爆豪に移り変わり、掌を向けながら走り出し、衝撃波を撃とうとすると…
「ＤＥｌＡＷＡＲＥ！」
「秘伝忍法！」
「っ!?」
何処かで聞いたことのある二つの声は、緑脳無の目の前に現れた。
そして…
「ＳＭＡＳＨ!!」
「『忍兎でブーン』!!」
ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンンン!!!
思いっきり吹き飛ばした。その正体は…
「いっっづぅ!!っっあの時みたいに……調整出来なかった……でも！間に合っだ!!」
「春花さん！皆んな！大丈夫だよ！」
一本の人差し指が腫れ、目には激痛の余りに大量の涙を浮かべる緑谷出久。
そして、春花たち蛇女の皆んなに笑顔を送り、忍兎が金斗雲で帰るのを見送る雲雀であった。
「ひ、雲雀っ…」
春花は、雲雀が助けに来てくれたことが嬉しいのか、安堵の息をつくのであった。
そして漆月は、吹き飛ばされた緑脳無に驚き、直ぐに赤脳無に視線を送る。

「アレは?あの肝心なもう一体の赤脳無は何やって…」
見てみると…赤脳無は一歩もその場から動いていない。漆月の命令を聞いてるのにも関わらずだ。
「な、なんで…?」
漆月の疑問は直ぐに明かされる。詠の後ろで立っている脳無が何故動かないのか?それは…
「これ以上テメェらの好き勝手にはさせねえよ…」
パキパキ…!
なんと赤脳無の足が凍りつき、みるみると体が蝕んでいくよう凍りつく。赤脳無は上半身、そして刀状の手まで凍り付いている。そのため動きたくとも動けないのだ。
「氷?これは…」
「俺たちがいることを忘れんな…抜忍が」
詠が首を傾げると、目の前に歩いてくるのは、轟であった。
「仲間に入れるとかなんとかほざいてたが…結局お前のやってることは敵そのものじゃねえか」
轟は漆月を睨みつける。
「雲雀いぃ~!」
「っ!柳生ちゃん!」
そして柳生も帰ってきた。咳もなく、体調が悪い様子には見えない。多分爆豪と柳生は元に戻ることが出来たのだろう。
柳生は雲雀の元に駆けつけ、怪我はないかどうかを確認し、無事だと知れば柳生は大きく喜んだ。
「よかった…雲雀が無事で…! 一先ず第一目標達成だ…後は…」

ドガアン！

違う壁が爆発し、やってきた二つの影は…

「敵連合って連中を！」

「ぶっ倒す！」

ボロボロでも立ち向かい、やって来る葛城と切島であった。

「全員じゃないが…大体は集まったな…」

轟は安心すると、皆んなは残る漆月を睨みつける。

未来は自分がどうすればいいのか分からず、戸惑う様子を見せる。

「っ……!!」

先ほどまでは敵連合が有利であったが、今は違う。逆に雄英、半蔵、蛇女の三勢力が有利となり、漆月率いる敵連合は不利になった。そのことに漆月は、不愉快なものを見るような目つきで、皆んなを睨みつけるのであった。

２９話「共闘、立ち向かえ」

天守閣の中は敵連合と蛇女、半蔵、雄英の戦いで滅茶苦茶になっている。騒音が絶えない戦乱の中、飛鳥と焔二人は忍結界のなかで道元が呼び出した怨櫓血と戦っている。

「でりゃあ！」

ザシュッ!!

「はあぁっ！」

ザグシュッ！

二人は怨櫓血の首に斬りかかる。斬られた傷は、真っ赤な血に染まり、傷口が開く。だが…

「ウ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オオオオオオオオオオオーーーーーーーーーーーンンン!!!」

怨櫓血の煩い叫び声は、大きく空間に響き渡り、先ほど傷つけた傷がもう元に戻ってきてる。

「これは…」

「超再生!?」

攻撃が効かないことを知った焔は、内心焦り、飛鳥はつい思わず叫んでしまった。

怨櫓血の能力、襲撃してきた脳無と同じ能力なのだから…それなら当然刃物も効かない…

「ハーーーーーーーーッハッハッハ!!」

そんな二人を嘲り笑う道元の耳障りな笑い声が、忍結界の中に響き渡った。

「無駄だよ、貴様らのような未熟者の忍学生が、怨櫓血に敵うわけなかろう?まあ、貴様らを始末したら、あとはヒーローの卵共に忍学生も血祭りにしてやるがな」

道元はそう言うと、再び笑い出す。そんな外道の道元に、今まで自分の欲望に良いよう利用されてた焔は怒りが頂点に達した。

「よくも…よくもこの私を……利用したなあああぁぁぁぁぁ!?」

数々に思い浮かぶ道元の命令、そして…かつて恋心を抱き、一番に

信頼してた…
小路を…

「ハハハハハ!!笑止千万！焔よ、貴様が利用されたのは己が未熟だったからだ!!」
「っっ!!」
道元の言葉に、焔は絶句する。それでもまだまだと言わんばかりか、忍結界から見える天守閣の最上階に指をさす。
「それに…『敵連合』もよくやってくれた…殺しきれてはない者も居るが、構わん。大分戦力を減らすことは出来たうえに、焔。お前の仲間はボロボロだぞ？」
「…っ」
「えっ？」
焔は言葉を失い、飛鳥は後ろを見やる。確かに二体の脳無の姿はそこには無かったが、それでも仲間たちが傷ついてる姿は確かにあった。
「そ、そんな…！」
「ハーーーーーーハッハッハ!!これで勝負あったな！」
「だから…なんだ？」
「っ!?」
道元の言葉に焔は不敵な笑みを浮かべた。
「これが悪…利用するもされるも感情次第…これが悪の定めと言うのなら…私は…悪の定めに舞い殉じよう!!」
「っ!?」
焔のとてつもない殺気に怨櫓血と道元は焔に震える。そして紅い炎を全身に身を纏い、怨櫓血に近付いてくる。
「道元!!貴様も道づれだあぁぁぁ!!」
焔は三本の刀を怨櫓血に向けて斬り掛かろうとすると…
ガシッ！
「駄目だよ！簡単に命を捨てちゃ駄目だよ!!」
「あ、飛鳥!?」

飛鳥は焔の腕を掴み、命そのものを引き換えに道元を殺そうとする焔を止める。そんな焔は飛鳥を睨みつける。
「元より悪忍に命を拾われた身だ！命なんて惜しくない！それに、仲間なんて私には必要ない！」
「っ！」
その言葉は、飛鳥の心を引っ掛ける言葉であった。
「一人で生き、一人で死んでいく…それだけだ!!仲間は感情次第で裏切る者だ！仲間などという存在はハナっから信じてはいない！」
「そんなことない!!!」
「なに…？」
飛鳥は怒りと悲しみが混ざった声で、焔にそう言う。
「かな…しいよ……そんな、仲間は要らないなんて…信じてない…なんて！」
「お前に…お前に何が分かるんだ？…どけ！」
「嫌だ!!」
飛鳥は焔を必死に止める、焔がどれだけ何を言おうと…飛鳥は焔を止めることをやめない。
「…っ！いい加減に…！」
「仲間を信じようよ!!!」
「っ!?」
飛鳥の言葉に、焔は少し驚く様子を見せる。
「ねえ、焔ちゃん…焔ちゃんが蛇女に入る前は、大切な人に裏切られて…そのせいで自分の人生が狂わされたことがあるのは聞いたよ…だから焔ちゃんが人を信じないって思うのも仕方ないと思う。でも…今はどうなの？」
「っ…！」
飛鳥の言葉に、焔は反論できなかった。今は…そう、今は誰も裏切ってなどいない。前に一度未来は蛇女を出ようとした、最初は『裏切った』と思っていたが…だがそれは自分が足を引っ張ってる存在だと思い、皆に迷惑を掛けないためという事だった。
それを知った私は、「そんなことない」と言うと、少しだけ安心した

顔を見せたことを覚えている。
雲雀は前々からなんとなく超秘伝忍法書の奪還のために来たこと、そして春花の手によって蛇女へやって来たことは勘付いていた。だから警戒はしてたし、裏切るのもなんとなく分かっていた。
だが、今まで付き合ってた仲間は、誰も裏切ってはいない。
そう、皆んな焔を信じていた。裏切るような目ではない、皆んなみんな、焔を信用する目で接していた。
「ね？だから信じようよ!!焔ちゃん!!」
飛鳥のその言葉に、焔は黙り込み、怒りと殺意を混ぜた炎は静まるのであった。

天守閣の最上階。先ほど有利だった敵連合は今や不利な状況に変わっていた。そんな漆月は皆んなを見て睨みつける。
「っ！緑脳無が…ぶっ飛ばして貴方たちを殺したと思ったんだけど……生きてた上に私の邪魔しちゃって…何してくれてんのよ…！」
「ハッ！んなもん知ったことかボケ!!それにさっきのあの変な黒い靄みてーなヤツ…俺に喰らわせやがって…！さっきまで気分はクッソ悪くなってたが、今は体調スッキリだぜ」
爆豪は馬鹿にするよう漆月を睨みつけると、柳生も頷く。
「ああ、あの特殊な闇とやらは初めて食らったが…だがアレには効果に制限時間みたいなものがついてるんだろ？」
「……っ」
柳生の言葉に漆月は黙り込む。
「死んでも死に切れない程の激痛…確かに死よりもある意味恐怖があるだろうな…だが、その痛みを長時間耐えれば、元に戻る。そうだろ？」
「……ちっ、『闇の量』が甘すぎたか…」
漆月は舌打ちをして横目で皆の視線を逸らす。逸らした目の先に

は、緑谷の姿を見つけた。
（…？　っ!?アレって…緑谷って子？確か死柄木の写真にあった……っ！死柄木が言ってた殺せって言ってたヤツ！）
漆月は、やっと見つけた。みたいな目で緑谷を睨むのであった。
「ま、まさか…先ほどの状況を覆すなんて…」
詠は今の状況が信じられないのか、目をパチパチとさせて、赤脳無と漆月、そして周りの皆んなを見つめる。
「それが…ヒーローだろ……取り敢えず脳無とやらの化け物は凍らせといた…もう一体の化け物は緑谷と雲雀がぶっ飛ばしたし、残るはあの抜忍の漆月とやらだ…柳生曰く、先日襲撃してきた主犯の死柄木弔と似てるって言うからな…もしかしたらアイツも同じ主犯かもしれねえな…アンタは見た限り戦えそうにねえな…」
轟は赤脳無と、緑谷と雲雀の力で緑脳無を吹き飛ばした際に、壁に穴が空いた方を見つめた後、詠の傷を見てそう言った。
「なっ！わ、私はまだ戦えますわ！ば、馬鹿にしないでくださいまし！」
「してねえが…って今はんなこと言ってる場合じゃねえな…」
轟は反論する詠から漆月の方に目をやる。それだけではなかった。
「みなさん！」
「すまん、待たせた！」
「ちょりーっす！思ったより『救助が遅れた』！」
皆が振り返ると、壁に複数穴が空いてる方からやってくる人影が三人と、二人…計5人現れた。
そこには、斑鳩、常闇、上鳴の3人ではあるが…
「すまねえ皆んな！」
「悪い！瓦礫だの木の柱とかが埋まっちまってて！」
そこには峰田と瀬呂の姿もあった。二人の姿は少し酷い怪我を負っており、緑脳無の衝撃波の影響で、吹き飛ばされた所が偶々衝撃により建物が崩れ、下敷きになってたそうだ。そこのところを3人が見かけて救助に当たったそうだ。機動力のある緑谷、爆豪、轟、柳生、雲雀は敵連合の戦闘に向かったそうだ。

「それにしても、さっきの化け物二体、もう倒しちまったのか!?スゲェよ！」
峰田は「ひょおおぉーー!!」と叫びながら関心し、上鳴は自分たちが有利になったことを知ると「よっしゃあぁぁ!!バッチ来い！」とバチバチと体に電気を纏わせ戦闘態勢に入る。
「ですが…油断も出来ません！処罰の前に、敵を倒して拘束し、全てを聞き出しましょう！」
「同意」
斑鳩の冷静な判断に、静かに賛成する常闇。
「何がなんだか知らねえが…取り敢えず、覚悟しろよ抜忍！」
葛城も気合を込めて漆月を睨みつける。
「……」
そんななか、未来はただずっと立っている。そう、自分は後少しで敵連合の仲間になる所だったのだ。それは勿論皆んな見てるし知っている。今更戦う気にすらなれない、何故なら仲間たちを裏切るところだったのだから。幾ら自分たちの立場が最悪な状況だったとはいえ、本当なら危険を冒してまでも、戦うべきだったのに…
「私は…もう……」
その時だった。
「はぁー…仕方ない…未来！一緒に戦おうよ！」
「「「は？」」」
漆月の言葉に、その場の全員は驚く。未来自身も、何を言ってるのか分からない様子だ。そんな皆んなの驚く様子を御構い無しに漆月は刀を抜く。
「脳無」

次の瞬間。
「ホホウホーーウ！」
「っ!?」
赤脳無は口から炎を出した。
ボオオオオオオオオーーーーーー!!
「何だと…！」
轟は何が何だか訳が分からず、赤脳無をただただ呆然と見つめることしかできなかった。何故なら赤脳無はその口から出す炎で氷を溶かしてるのだから。
「炎を吐く…んだこれ、聞いたことねえな…」
「ま、まるで『お父さん』見てるみたいだな…」
轟は動揺しながらも、なんとか冷静さを保ち、落ち着きながら戦闘態勢に入り、緑谷は何かを思い出したのか、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべる。
「この赤脳無の個性は『火炎放射』ね。そのゾウみたいな鼻の口で大量に息を吸って炎を吐き出す、燃焼系の個性だよ」
そして赤脳無を凍らしてた氷は全て溶き、先ほどまで何とも無かった様子でいる。その場の全員は驚くが、まだ緑脳無が居るよりかはましだ。そう、緑脳無が居るよりかはだ…
「脳無!!」
漆月が大きく叫ぶと…違う部屋から、何やらピョーンピョーンと音が鳴り響き…そして…

ドガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!
「ネエエエェーーーーエエ!!」
「!?」
「オイオイ！嘘だろ!?」
「チッ！」
吹き飛ばされた筈の緑脳無が、壁を殴り壊してやってきた。緑脳無の傷は、まず緑谷のデコピンにより額が赤く腫れており、腹は雲雀の

秘伝忍法により、大分傷が付いて晴れてはいるが、緑脳無は何の表情も変えずにその場に立つ。
そう、まだこの二体はやられてなどいなかったのだ。
「あ～～っはっはっは!!ねえ、どんな気持ち？倒したと思った強敵が何の表情も変えず、再び貴方たちを殺すために立ち向かってくるこの二体の脳無を見て、どんな気持ち？ねえねえ！あはははははは!!!」
「……っっ!!」
流石の皆んな（日影以外）はこのことに悔しい表情を浮かべる。そもそも忍の力を持つ四人がいるにも関わらず、この二体の脳無を倒すことが出来ないのだから。何より驚いてるのは緑谷だ。
（そんな……そんな!!いくら威力が他のより少し弱いデラウェアスマッシュを撃ったとはいえ、アレを食らってもまだ動けるなんて……！）
緑谷はそんな緑脳無を見て驚愕するのであった。確かにデラウェアスマッシュは他の技と比べて、衝撃を飛ばす遠距離攻撃とはいえ、力は確かに充分だ。
何よりオールマイトの力。
見たところ傷があるということはダメージは効いている、回復系個性や無効系個性があるようには見受けられない。それなのに、緑脳無は、何の表情も変えず、傷を負いながらもこうしてその場に立っているのだ。
「さて、と…手始めに脳無、まず私を傷つけた口煩いガキを殺って」
そういった途端。赤脳無は爆豪目掛けて、手を刀に変えて斬りに掛かる。
「ホホウホウホーウ!!」
「っ！」
余りにも早すぎるスピードに付いてこれず、思わず尻餅をつき、なんとか赤脳無の斬撃を躱す。だが脳無はもう一度爆豪に斬り掛かろうとすると…

「てやあっ!!」
ガギィィィン!!
突然、爆豪と赤脳無の間合いに斑鳩が入り、飛燕で刀を受け止める。刀と飛燕のつばぜり合う金属音が響き渡るが、赤脳無の刀は切れ味を増してるのか、艶もよくなり飛燕に僅かなヒビが入る。
「なっ…!飛燕が…!」
「この個性は『手刀』 手を刀に変える対人戦闘用個性だね、しかも個性を強く伸ばせば伸ばすほど切れ味が良くなる、人殺しとしては結構優れてる個性だよね」
漆月は、斑鳩が押されてるのを見て思わず悪い笑顔を浮かべながら解説していく。元より詠との戦いで大分無理をしてしまったため、こうなるのも無理はない。

「だったらテメェをぶっ飛ばせばクソどうでもいいだろうガァ!!」
黙って居られなかった爆豪は、漆月に飛び掛かるように爆破攻撃をお見舞いしようとするが…
「いったでしょ?アンタは命を狙われてるの、ね?脳無」
爆豪を覆うほどの影が迫り、後ろを振り向くとそこには…
「ネエエェェーーーーエエアァァァァ!!」
待ってましたと言わんばかりか、緑脳無は思いっきり爆豪目掛けて掌を向けて、衝撃波を撃とうとする。
「黒影(ダークシャドウ)!」
「アイよ!」
「おりゃあ!!」
だが爆豪と緑脳無の前に、黒い影が遮り、衝撃波が当たることはなかった。
ボオオオォォォォォーーーーーーーン!!!
「キャア!!!」

なんと、衝撃波は常闇の個性、黒影（ダークシャドウ）に直撃した。そのため衝撃波は黒影（ダークシャドウ）以外誰も食らわず、庇う形となって爆豪は助かった。
「ちっ…！」
「くっ！やはり強いな…」
「痛いヨ常闇ぃ～！」
強力な衝撃波をもろに食らった黒影（ダークシャドウ）は泣きじゃくりながら緑脳無と対立する。
「くっ！我慢しろ！爆豪や他のものがあの抜忍とやらを倒すまで、俺たちが持ちこたえるんだ！」
「っ！アイよゥ！」
常闇の言葉に覚悟を決めた黒影は、緑脳無に殴りかかる、が…
ピョーーーーン！
「なっ…!?」
突如緑脳無は、上に蹴るように跳ね飛ぶ。そう、これのせいで数々の攻撃が避けられてしまうのだ。それに続き、瀬呂はテープを巻こうとする。
「よっしゃあ！取ったりぃ！」
だが…
ブワッ！ベリベリ！
「なっ…」
体に張り付き、巻かれたテープは散り散りになってしまった。緑脳無の体が、ハリセンボンみたいに外側が鋭い無数の棘が出てきて覆っているのだ。常闇の攻撃を避けられ、瀬呂のテープは散り散りになる。まだまだ得体の知れない化け物だ。そんな化け物は、爆豪を狙っている。
「クソが！なんだコイツ…」
「回避に優れてる個性、『ホッパー』に、自身の身を守りかつ、相手にダメージを与えることも出来る個性『ニードル』を持ってる脳無だよ～♪」
後ろから、刀を爆豪に向けて斬りかかる漆月。そのことを察知した

爆豪は
「二度も食らわねえよクソが！」
なんとか避け、爆破を食らわそうとするものの、またもや闇が爆豪に襲いかかる。
「っっ!!ウッゼェなそれ！」
爆豪はその闇の気に触れないように、距離を取る。
「あっははは！怖いんだ？私のこれに触れるのがそんなにも怖いんだ??口だけは達者で結局は腰抜けの三下ってところかしら？」
ピキッ…！
漆月の煽りに、爆豪のプライドにヒビが入った。
「……上等だ……ぶっ殺す!!!!」
キレた爆豪は前に出て漆月をブン殴ろうとする。今の爆豪は完全にキレてる状態だ。もちろん三下などと言う言葉は漆月の煽りではあるが、それでも黙ってはいられなかった。
「落ち着け爆豪！」
だがそれを制したのは切島であった。
「止めんなクソ髪がぁ!!テメェから爆殺すっぞ！」
「あの変な靄みテーなのに触れたらヤベェんだろ!?だったら触れねえほうが良いって！それにアイツが挑発してるってお前でも分かるだろ！」
「〜〜っっ!!」
爆豪は切島の正論にガルルと犬の唸り声をあげて睨んでいる。だがそのお陰でなんとか無闇に突っ込まずに済んだ。
「チッ…やっぱ上手くいかないか……ん？」
漆月が小声でブツブツと呟いてると、自分がどうすれば良いのかわからず、呆然と立ち尽くしてる未来を見つめた。
（……ははあぁん♪そう言うことか…！）
漆月は全てを理解したように、心の中で何度も何度もなるほどと言って納得している。何故未来が戦わないのか…それは。
（自分が敵連合に入ろうとし、皆んなから裏切り者扱いされてると

思ってること。罪悪感からくるものが、彼女を苦しめてると……自分は本当はどっちの味方になれば良いのだろうか？とか…ね）

漆月は、未来をまじまじと見つめてそう考えた。

二体の脳無は蛇女を無視して半蔵と雄英の生徒たちと戦っている。

「ネエネエネーーーエ!!」

ボオオオオオーーン!!

「ホーーウホウホウホーウ!!」

ボオオオオオオーーー!!

緑と赤の脳無は、衝撃波と火炎放射の二つの攻撃で辺り一面を焼き払い、吹き飛ばしてる。

「クッ…そがぁ!!相当厄介な相手だぜ!!」

「葛城落ち着け！ここは俺がやる…！秘伝忍法！」

荒ぶる葛城を制する柳生は、秘伝忍法の力を使う。

「『薙ぎ払う足』」

巨大イカの足が、炎を払いのける。氷の力で炎が消えていき、赤脳無は火炎放射を止める。だが…

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!!

今度は両肩から角質の硬い火薬性の球を高速で放出し、柳生と葛城に襲いかかる。

「だったら今度はアタイだ！秘伝忍ぽ…」

「ネエエエーーーーーーエアア!!」

「なにっ!?」

葛城が秘伝忍法を使おうとした瞬間、緑脳無が襲いかかってきた。しかもニードルを覆い、ホッパーを使って葛城との距離を詰める。

「うぉっ！」

ビュン!!

緑脳無は思いっきり横殴りするが、葛城はそれをなんとか躱した。そこから…

パキイィン!!
氷の壁が葛城と緑脳無の間に現れる。
「お、お前…」
「取り敢えずコイツを止めましょう!それに、俺の氷はあの赤いやつには無理だが…氷の力ならコイツをなんとか…」
凍らせれる。それは甘い考えだった…
ボオオオオオオオオンンン!!!
ズバコオオオオオオオオオンン!!

「しまった…衝撃波で氷をぶっ壊すか…!」
轟は悔し混じりな顔で脳無を睨み、後ろに下がる。
「ネエエエーーーーー!!」
だが緑脳無はやめない、攻撃を。衝撃波を撃ち、轟は横に避けるがその先には…
「なっ!」
日影の姿があった。

「しまった…動けへん…」
「ひ、日影さん!」
「日影!」
「日影ちゃん!」
棒立ちだった蛇女の二人、流石の未来も、日影の危機に思わず叫ぶ。それは無理もない。敵連合は雄英と半蔵と戦ってたのに、まさか巻き添えとして蛇女に攻撃が来るだなんて…しかし恐れるなかれ、ここは戦場だ。そんな甘い考えは許されない。
「あかん…!間に合わん!」
動くにせよ、もう強力な衝撃波が迫ってきてる。終わりか…

ドガアアアアアアアアアアアンンン!!!

衝撃波が貫き、壁にぽっかりとした穴が空いた。そこに日影の姿は見えない。

「ひ…か…げ？」

未来はおそる恐る声を震わせながら名前を呼ぶ。

「うそ…」

詠も、もはや何をどうすれば良いのか、何が起こったか分からない様子でいる。

「まさか…」

あの冷静な春花も冷や汗を垂らし、衝撃波により土埃が発生し、壁に穴が空いてる光景と、なんの表情も変えず、生きてるのかすら疑わしく思えてしまう、張本人の脳無を見つめてる。

「ケホ…！ケホ！」

「！」

土埃から、声が聞こえた。その声は…衝撃波で飛ばされたかと思っていた、無傷の日影であった。

「「日影（さん）（ちゃん）!!」」

三人は一斉に叫んだ。それは喜びから来るものか、安心から来るものか…両方だろうか…しかし土埃が晴れ、何故日影が無事か明かされる。それは…

「ケホ…ケホ！大丈夫か日影？」

「なっ…葛城？」

それは、身を挺してまで日影を助けるべく押し倒して助けた葛城であった。

「なっ、んで葛城が…」

「はぁ…なんとか間に合って良かったぜ……物凄いスピードでお前んところに駆けつけて助けたんだからな…ったた…」

「違う…」

「ん？」

「なんで…ワシを助けるんや？」

なぜ葛城を殺そうとした人間を助けようとするのかが分からず、日影は目を細めて葛城に問う。葛城は数秒黙り込み、髪をくしゃくしゃと掻きながら、ジッと見つめる。
「……お前、この状況みてまだ分かんねえのか？見てみろよ」
「あっ…」
そこには…
「ネエネエ」
ただ呆然と人形のような目で、ジーっと二人を近距離で見つめてる、もはや日影ですら恐怖を覚えてしまう、感情の無い、心すら無い…最恐とも呼べる緑脳無が、目の前に立っていた。緑脳無は葛城と日影、何方を攻撃すれば良いのか分からないのか、あるいは二人を攻撃して良いのか分からず、襲って来ない。
「分かるか日影…感情がねえってのはこう言う事だ…心もない、考える力すら無い…なあ、日影…お前には『感情はある』んだよ…！だって、コイツとは違って心はあるだろ!?」
「……」
自分のように必死に話す葛城に、流石の日影も黙ってしまう。そんな葛城は日影から脳無に視線を変えると、睨み付き腰を低く構える。攻撃しようとした時だった。
「可笑しなことね…善忍が悪忍を庇うなんて…ましてやソイツらアンタ等殺そうとした奴らよ？なんで助けるのよ？」
「なっ…テメェは！」
葛城が日影を助けた行動を嘲笑うかのような目で見下しながら、ゆっくりと歩いて来る漆月がそう言った。
「本当にバッカみたい。まあ、ソイツ殺しちゃったら未来が敵連合に来なくなるし～…逆に殺しちゃったりするかもだから別にこっちが損する訳じゃないけど…」
「黙れ…」
「あ？」
漆月が哀れな目で見下しながら喋ってるなか、葛城は小さな声で、低い声で、怒りを込めながらそう言った。まるで感情を抑えてるかの

ように…そんな漆月は、理解不能みたいな顔で、首を傾げる。
「黙れっつってんだよ!!!テメェがバカにして良いような奴らじゃねえんだよコイツらは!!!」
今まで抑えてた怒りを爆発するように言い放った葛城。まるで仲間を、大事な友を馬鹿にされたことが許せないような感じで…葛城は漆月に更に怒鳴る。
「悪忍だから?んなもん関係ねえだろ!!蛇女のテメェらも、相手が嫌だからって誰かを助けねえのか!?ソイツが嫌いだからって助けない理由にはならねえんだよ!!!」
「「「!!!」」」
葛城の言葉に、四人はハッと黙り込んでしまう。
「そもそもアンタ…抜忍なんだろ…なんでこんなことすんだよ…」
「……は?何よ急に…今の言葉と私の事情とは関係性が全く見えないんだけど?」
「いいから言えや…言えねえならそれで良い…」
「……」
突然の言葉に漆月は反論すると、葛城は黙り込み、無駄な詮索はしない事にした。その事が気に入らなかったのか、漆月も珍しく黙り込む。言えれないと判断したのか、葛城は口を開く。
「実はな…アタイの両親も『抜忍』なんだ」
「!」「!?」
葛城の衝撃なる事実に、二人は思わず黙ってしまう。日影も目を丸くして葛城の後ろ姿を見つめている。
「もちろん忍の掟として、見つかったら殺されちまう。だから今も何処にいるか分からねえし、アタイは幼い頃から親とは会えずにずっと一人でいた…」
葛城は真実を話すと、辛い表情を浮かべて、グッと懸命に涙を堪えながら話し出す。
「当然抜忍は許されねえ…けど、それには何か事情があるんじゃねえかってアタイは思う。何の理由もなしに抜忍になるなんてねえからな…アタイに何も言わずに出でったのは、アタイを巻き込まないよ

う、庇うためだと分かったんだ…」
拳を握りしめ、下を見つめてそう言った。先ほどまでの怒り荒ぶる葛城ではない、セクハラの葛城でもない。ただ真っ直ぐ、純粋で、真剣な顔で話す、本気の葛城だ。
「だからアタイは強くならなきゃならねえと思った。強くなって忍の社会で認められたら、もしかしたら両親を救えるかもしれねえってな…だからアタイは誰にも負けたくない、誰にも負けねえ忍になるって誓ったんだよ！」
それが葛城の原点だから。そう言うと、漆月は数秒黙り込んだ後…葛城は話し終わったのか、攻撃態勢に入る。
「だから、負けねえ…絶対に…!!」
覚悟を決めた。
「……葛城…」
日影はポツリとそう呟いた。感情のない、ただの戦闘マシーンと恐れられ生きてきた自分を、まるで自分のように大切に思う葛城の言葉に、惹かれていた。覚悟を決めた葛城に、漆月はこう言った。
「…はぁ～……両親が抜忍でありながら善の道を選ぶ…と？まあいいや面倒くさい…脳無、や…」
漆月が命令した時だった…
「ＤＥＬＡＷＡＲＥＳＭＡＳＨ!!」
「えっ!?」
命令しようとした途端、突如現れたのは緑谷だった。緑谷は漆月目掛けて飛びかかり、残ってる指で強烈な一撃をブチかまし、衝撃波を食らわせる。
ズドオオオオオオオオオオンン!!
「うぉっ！」
「…っ！」
近くにいた葛城、日影はその衝撃波になんとか態勢を耐えている。土埃が巻き起こり、漆月は思いっきり吹き飛ばされた。
「っっっづっっっ！大丈夫ですか!?二人とも！」
緑谷はその後地面に転がるように落ち、顔を地面に強打する。

「いっつつ…」
「おい、お前こそ大丈夫か!?指腫れ上がってんじゃねーか!?」
心配する緑谷の言葉など忘れ、葛城は緑谷を心配する。緑谷は「ぼ、僕は…大丈夫…です!」と無理やり笑みを浮かべた。漆月の命令が途中だったため、緑脳無は微動だにせず、先ほどと同じくジーっと見つめている。
「ったく…無理するところって飛鳥に似てんなお前は…」
葛城はそう言うと、緑谷は「あはは…」と冷や汗を垂らした。するとハッ!とした顔で二人を見つめて話し出す。
「そ、そうだ…!あの赤い脳無は柳生さんが吹き飛ばしたんですけど…あの二体の脳無…気を付けてください!最悪の場合、皆んなアイツらに殺されてしまいます!」
「柳生がアイツ吹き飛ばしたのか…」
葛城は柳生を見つめてそう言った。柳生は体もボロボロであり、赤脳無と戦った痕跡が見える。いつの間にか倒していたらしい。
「けど…全員ってわけじゃねーが、アタイらの力で互角に戦えるなんて…アイツら何者なんだ?殺されるって…」
「なんでアンタも助けるん?」
「っ!?」
葛城が考えてると、日影は呆れた目で緑谷を見つめてそう言った。
「ワシらだってアンタら殺そうとしたんやで?なんでそんな、真っ直ぐ突き進むように助けるんや?」
日影の言葉に、緑谷は数秒黙り込んだ。
「……ヒーローだから…」
「え?」
「ヒーローだから!!」
その言葉を聞き、日影は目を丸くすると…
「お前の言う通りだぜ緑谷ぁ!」
そこには、つんつんした赤い髪の男…いや漢、切島であった。
「ヒーローってのは誰かが困ってたら、どんな時でも助け出す…それがヒーローだ!善忍だろうと悪忍だろうと、そもそも忍だろうと関係

ねーよ!!」
「切島くん…」
「……」
「それは俺も同意だ…」
「っ！常闇くん!?」
駆けつけに来た切島に続いたのか、常闇も駆けつけ、話し出す。
「俺たちは忍の社会については知らない…だから俺たちがお前たち悪忍を裁く権利などない…それはコイツら善忍である仲間たちに任せる…」
常闇はそう言うと、日影はまたもや下を向いて目を細める。それは負の感情ではなく、何処か嬉しくて、何処か罪悪感を感じるような、そんな目だった。
「なあ日影…これがコイツらだ」
今まで黙ってた葛城は、日影に向いて話し出す。葛城は、緑谷、切島、常闇を見渡した後、日影に視線を移して話しを続ける。
「お前が今まで何を経験して、何があったか知らねえ…けどな、アタイらだってそれぞれ色んな悩みや事情抱えてんだよ…お前や、お前らだけじゃねえんだ」
葛城のその目は、日影にとって暖かい優しさを感じた。今までただ冷静に、物事を成し遂げてた自分を、葛城は優しい言葉を掛けてくれた。しかし、そんな優しさを絶望が許すわけがなかった…
「散々私をぶっ飛ばした挙句、敵である悪忍に優しい言葉を掛けるとか…訳わかんない…本当にバカみたいで呆れちゃう…呆れを通り越して…なんだか本気でブチのめすくらい殺したくなっちゃった…」
「!?」
緑脳無の後ろには、なんとか後ろに下がって直撃は免れたものの、衝撃波の威力によって吹き飛ばされ、頭から血が流れてる漆月と、柳生に吹き飛ばされ、漆月の命令によりここまでやって来た多少傷ついた赤脳無が立っていた。漆月のその声には、先ほどの余裕や人を馬鹿にするような声ではなく、本気で、冷静で、その目に悪意ある殺意の信念が宿っていた。

「赤脳無…まずガキどもを血祭りにしろ、斬って斬って斬りまくって殺せ…殺せ！」
漆月の憎悪混ざった声に、赤脳無は僅かに体を震わせ、緑谷達目掛けてやって来る。
「緑脳無！お前は忍学生とその緑谷ってヤツを殺して！死柄木が殺せって言ってるくらいだ…今ここでアイツを亡き者にしてやる!!」
緑脳無も、赤脳無同様に僅かに体を震わし、低く態勢を構えてから、二体とも一気に前に飛び出て、日影を庇うように葛城、緑谷、切島、常闇が前に出る。そのことに日影は驚きを隠せないでいた。初めて、人の心配をするかのように…
「っ！何して…」
「行くぞお前ら!!」
日影の言葉は、葛城の声掛けに遮ってしまう。四人も戦う姿勢ではあるが、明らかにどっちが勝つか分からない。最悪の場合…死んでしまうケースもある。でも、戦わなくてはならないのだ。
「来るっ！」
迫り来る二体の脳無に、常闇がそう呟いた時だった。

「オラァァァァァァァァ!!」
ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンン!!
「せいっ！」
ドッッッ!!!
またしても、二体の目の前に立ち塞がっては葛城たちの前に現れたのは…低く唸り声を上げる爆豪と、クールで冷静に現れた柳生であった。二体の脳無は爆豪と柳生の攻撃をくらい、後ろに下がってしまう。
「お、お前ら…」
葛城と切島は面食らった顔で二人を見つめてると…
「ケッ！何ボサッとしてんだテメェらぁ!!いい加減立ちやがれやゴラァ!!」
爆豪はここに居る皆んなにそう叫んだ。それは当然蛇女の皆んな

にも言って居る。
「爆豪の言う通りだ…」
柳生も爆豪の意見に賛成し、頷いている。
「はっ…なによ…またお邪魔虫の登場ですかぁ〜?」
漆月は爆豪と柳生に呆れて小馬鹿にする声を出す。緑と赤の脳無は微動だにせず、動きは止まっている。そんな漆月を御構い無しに爆豪は怒鳴り続ける。
「大体テメェらいつまでも眺めてんじゃねえよ!爆殺すっぞオラァ!特にそこのチビ眼帯!」
「!」
爆豪がそう言うと、未来は自分のことだと分かり反応する。
「テメェ…いつまでもシケた面してんじゃねえ!!」
「な、なによ!……仕方ないじゃん、私は、皆んなを裏切り掛けて…」
「それがどした?」
「え?」
爆豪の言葉に未来はポカンとする。自分は仲間を裏切り掛けたのに、爆豪は「だから?」という反応をしてしまうことで、逆にこっちの反応が困る。
「たった一つのことでグチグチ悩んでんじゃねえ!!そういうヤツとか見てるだけでクッソムカつくんだよ!!!だったら二度とそうならないようにすりゃあ良いだけだろうが!そんだけだろ!」
「アンタが言うような単純な話じゃないのよ!!わたしは、仲間の命が大切だったから…皆んなが傷ついて、殺され掛けてるのに、唯一皆んなを救うには私がコイツらの仲間に入らなきゃならなかった…だから私は…」
「倒せば良いだけだろ…」
「え?」
「だぁかぁらぁ!!倒して助ければ良いだけだろっつってんだろうが!!」
「!」
爆豪の滅茶苦茶な言葉に、未来は軽く戦慄する。反論する気力すら

失せてしまう。
「コイツらが自分より強いから、皆んなが死んじまうからテメェはそんだけで諦めて、コイツらクソカス連合の仲間になっちまうのか？アホか!!クソナード並みにムカつくんだよ!!だったら今ここでコイツらより強くなって越えれば良いだけだろ!!」
「!!」
　爆豪の論破に、未来は黙ってしまうどころか、むしろその手があったのかと思えてしまった。爆豪は滅茶苦茶ではあるが、自分が考えもしなかったそのことに、賛同してしまう。それに気づいた柳生は、未来を見つめる。
「あの時言ったはずだ。爆豪の方が苦戦すると…な。コイツの言ってることは滅茶苦茶だ。だが、良くも悪くも、コイツのような単細胞は必要なんだ」
「柳生…」
　柳生の言葉に未来は、あの時半蔵に攻めに言った時、柳生の言った言葉を思い出し、ようやく意味を理解した。しかし爆豪は何のことだか分からず、むしろ単細胞呼ばわりされたことで「ハァ!?なんだ単細胞って殺すぞ！」とキレている。
「……そうだよね…うん」
　未来は先ほどの罪悪感の顔から、馬鹿らしいと、呆れる笑みを浮かべた。そうだ、難しいことなんて今は考えなくてもいい。今は…自分が一体なにをするべきなのかが大切だ。と、考えた。すると今度は爆豪は詠に視線を向ける。
「テメェは…後で話がある…ここで死んだら殺す…!!」
「なっ…！」
　詠は相変わらず口の悪い爆豪に、殺意の目線を向ける。だが一つ気がかりなのが、話があると言うことだ。一体なにを？という疑問が頭の中に浮かんでくる。そんな爆豪は視線を再び漆月に変えた。
「そろそろお話は良いかな？死ぬ前に最後に言う言葉は言い切ったかしら？」
　そんな漆月の無慈悲な言葉が部屋中に響き、皆んなは漆月と二体の

脳無を睨みつける。
「さてと、未来ちゃん。こんなヤツらの言うことなんざ聞かないで、私たちと一緒に…」
バキュウン！
ドシュッ！
「っ！」
漆月がそう言うと、未来は傘を向けて銃を撃った。未来は決心したのか、覚悟を決めた目で漆月を見つめてる。漆月は肩を撃たれたためか傷口から、真っ赤な血の色が染まって流れている。そんな漆月は、ゆっくりと未来を見つめる。
「……なんの真似かな？」
「今やったことに真似もクソもないけど？」
「……あんたが反論しなきゃ他の奴らは殺さないんだけど？」
未来は漆月を見てそう言うと…
「だからなんや？」
「！」
突然、葛城たちの後ろから声が聞こえた。振り返ると、無感情ではあるが、さっきよりかは何処か変わって、マシになった日影が立ってナイフを手に持っていた。
「日影！」
「そうね、嫌いだからって助けない理由にはならないものね」
そこには、雲雀に担がれてる春花の姿であった。春花の目には闘志があるように感じる。
「そう…ですわね、一先ず休戦と言うことで…まずはこの不届き者から倒しましょう！」
詠もなんとか自力で立ち上がり、ヨロヨロになっても大剣を向ける。
そんな彼女たちに漆月は視線を下に向け、暫くすると…
「結局そうなっちゃうのかあ…あーあ…あーあ……まじで最悪…もういいや…

コイツら全員ぶっ殺す!!」

バッ!と顔を上げて二体の脳無にそう言うと、脳無はその言葉を聞き、唸るように体を低く構えてから勢いよく思いっきり、皆んなに向かって前に飛び出した。

「皆んな!」

「どうやらしばらくは休戦のようね」

「不本意ですが仕方ありませんわ…雄英と半蔵の共闘ですわね!」

「せやな、ほな行くで」

迫り来る脳無に未来、春花、詠、日影はそう言うと、他のみんなは明るい希望を見る目で嬉しい表情を浮かべる。

もうさっきまでのようにやられてばかりではない、死ぬかもしれないという危険から来る恐怖など、振り払える。皆んなと協力すれば、どんな化け物でも…

「「「「絶対に勝つ!!」」」」

皆んなはそう叫んだ。

この時ようやく初めて、善忍と悪忍、そしてヒーローが手を組み、敵連合という強力な敵に立ち向かう。

雄英、半蔵、蛇女の共闘が始まった。

３０話「思い吹き飛ばせ」

「ネエエエェーーーアアエア!!」
「ホッホオオーーウオウ!!」
二体の脳無は煩い奇声を上げながらも、子供達を殺すため猛スピードで迫ってきてる。赤の脳無は既に手が刀に変わっており、両肩を使ってバズーカを連射する。
一方緑脳無は一気に間合いを詰めようと、ホッパーで跳躍し、相手の攻撃から身を守るために、ニードルを覆っている。そこから口を大きく開いて衝撃波を溜めている。
この二体の脳無の目的は、漆月から下された命令、ここにいる者全てを殺すことだ。ならば、遠慮はいらない…思う存分暴れて殺すのみ。思考能力を持たない脳無は考えることは出来ないが、漆月の命令が出てるのであれば、それだけを集中する。
そう、脳無達はいま目の前にいる少年少女を殺そうと…
ドガアアアアアアアアアアアンンン!!!
まず緑脳無の強烈な衝撃波が炸裂した。その破壊的な個性で目の前のものを跡形もなく吹き飛ばすように…
「そう何度も掛かると思うなよ脳筋野郎が!!」
爆豪たち全員はそれぞれ半々の数に分かれて、左右に回避した。そのため真正面の衝撃波で吹き飛ばされたものは一人もいない。全員無傷だ。
「よし！一気に畳み掛け…」
「ホウホーウ！」
「！」
切島が皆んなに言葉を掛けた途端、切島の目の前に赤脳無が飛び出てきた。赤脳無は切島目掛けて刀を振るう。
ガギイイイイイイン!!
「っつ!!」
切島の体は硬化し咄嗟に腕を交差するよう赤脳無の刀から身を守った。腕と刀が交差し、ガチガチと不快な金属音を鳴らす。幸い切

島にダメージはない。こんな攻撃を詠はもろに食らったとなると、痛いというレベルでは済まないだろう…この攻撃を耐えれた彼女から強さを感じるくらいだ。
「チッ……！刀結構危ねえな！けど…これで！」
「ああ！助かった切島！」
「今度は私たちの番よ！」
「!?」
　切島がニヤリと笑みを浮かべると、突如切島の後ろから常闇と未来が飛び出てきた。
「秘伝忍法！『バルキューレ！』！」
「行け！黒影！」
「アイヨウ！任セろ常闇！」
　赤脳無は咄嗟に両肩からバズーカを使おうとするものの、常闇の黒影と未来の秘伝忍法の方が早かった為、先手を取られた。未来の一発一発が強力なエネルギー弾と、黒影の強烈な鉤爪攻撃の連携攻撃が赤脳無を襲う。そのことで強烈な弾丸は両肩や足、腕に当たる。黒影の攻撃は胴体の腹部に鉤爪で抉るかのようにダメージを与えた。すると…
「ホバッ……!!」
　苦痛の声なのか表情こそは変わっては無いが、ゾウのような鼻の口から血潮が噴き出し、態勢を崩してよろめいてしまう。
「えっ!?あいつ…私たちの攻撃をくらって…」
「ああ、効いている…確実に！」
　その姿を見て常闇はわずかな希望を見るような目に変わり、未来に至っては歓喜の顔に変わった。
　さっきの攻撃で確かな確信を得れた。目の前で、無表情で苦しんでる赤脳無の光景に。
　先ほどまでどれほど攻撃しても何のリアクションも取らず、ただただ漆月の命令のみ行動してただけの脳無に初めて、常闇と未来の連携によってダメージを与えれたのだ。そう、それはつまり…
　こいつは絶対に倒せれない敵ではない。むしろ、倒せる敵だと確信

した。
「や、やった！この調子でもう一踏ん張り…」
「っ！待て未来！」
「へっ？」
だが未来が喜ぶには、まだ早かった。
「ホオオオォーーーーアァァァァァァァァァーーーーーーーー!!」
「っ!!」
それはあくまで倒せるという話。決して倒した訳ではない。赤脳無はギョロリと目を未来と常闇に視線を変えると、甲高い声を出して刀を切島の腕から離す。
すると今度は赤脳無は常闇目掛けて刀を振り回す。だが常闇は距離を離しながら黒影を使って赤脳無に攻撃する。赤脳無の刀による攻撃は黒影には効かず、透き通るのだ。そのため常闇に対して刃物の戦いは愚策。だが思考能力を持たない脳無に当然考えることも出来ず、ただひたすら標的を仕留めるようとするのみ。
「ふっ…なるほど…命令通りに動くだけであり、思考能力は持たずといったところか！なら、こいつとの戦いでは俺が有利か？」
しかしそんな有利な立場はそう長く続く訳ではなかった…常闇が不敵な笑みを浮かべると、赤脳無は大量の息を吸い、炎を吐きこむ。
「っ！しまった…！黒影！」
「分かってルよ常闇！」
黒影は直ぐにその炎から離れた。赤脳無は辺りを燃やし尽くすような勢いで火炎放射していると…
「だったらコイツでどうだ！」
パキイィン!!
「っ！轟、スマン助かった！」
「いや、良い…それよりアイツの炎攻撃とバズーカ攻撃が厄介だな…」
突如轟が離れた所から氷を繰り出す。パキパキと地面を這うような勢いで凍りついていく氷結は、赤脳無ごと凍らせる気なのだろう。氷は赤脳無に効かないと分かっていても…そう、『今』は…

一方、緑脳無は…
「ネエエアアアアアアアーーーーーーーーーーー!!」
ニードルは不必要のため、引っ込ませた緑脳無は何度もなんども衝撃波を放出している。そのためか、部屋中がハチの巣みたいに穴だらけである。しかし緑脳無は動きが単純なため、慣れれば直ぐに見切ることが出来て、躱すのも容易いものになってきている。重傷を負っている詠を除いて…
「はぁ…ハァ……無理に動くと傷が……いえ、そんなこと関係ありませんわ……」
詠は息遣いが荒くなりながらも、それでも緑脳無を倒すために、大剣を向けて…
「秘伝忍法！『ジグムンド』」
秘伝忍法で振り下ろす。だが緑脳無はホッパーを使い後方に下がって避けてしまう。
「くっ…やはり…」
詠はそんな緑脳無を見て、悔しい表情を浮かばせる。緑脳無が後ろに下がったは良いが…その後ろにいる人物のことまでは分からなかったようだ…
「「秘伝忍法!!」」
その二人の声の主は…血気盛んの姉御肌の葛城と、感情を表に出さない日影であった。
「『トルネードシュピンデル』！」
「『ぶっ刺し』！」
蹴りとナイフが緑脳無の背中に攻撃する。葛城の蹴りが背中を食い込み、日影のナイフは背中を突き刺す。
「ネガバッ…ハッ!!」
緑脳無も赤脳無同様に口から血が流れ、一瞬だけ白目をむいた。
「おっ！今のは効いたみたいだな…！」
「せやな、流石に二人の秘伝忍法の力を同時に喰らえばダメージは出るんか」

二人は感心するよう頷く…ダメージを与えた。それはつまり、緑脳無の標的になるとも言える。
緑脳無は後ろを見ると、ニードルを覆いながら、二人を殺すために両手の掌から衝撃波を放出する。
ズドオオォォン！ズドオオォォン！という激しい崩壊の音が響き渡るが、二人はなんとか直ぐに避けたものの、それでも近距離でいたせいか、日影は左足を食らってしまった。
「日影！大丈夫か！」
「っ！葛城後ろ！」
「なっ…！」
「ネエエエエェェーーーー!!」
緑脳無は口から血を垂らしながらも、葛城を殺そうと迫ってきている。地面ごと殴るかのように、上から下へと拳を振り下ろす。
ドゴオオン!!と衝撃でクレーターのようにへこんだ。
「チッ！結構しぶといな…！」
葛城は間一髪で躱すものの、脳無は直ぐに視線を変えて、動こうとするが…
「秘伝忍法！『忍兎でブーン』！」
横から雲雀が忍兎が乗ってる金斗雲に乗り、突っ込んで行くが、それを察知した緑脳無は直ぐにホッパーで真上に跳躍する。
「ふえ!?あ、あれ？」
雲雀は突然のことに驚いて真上を見ると、緑脳無は衝撃波を出すため力を溜めている。どうやら雲雀を一撃で仕留める気なのだろう…
「まずい！雲雀！」
葛城はそう叫ぶと、雲雀はその場から離れようとする。しかしそれは無意味だった、なぜなら衝撃波は遠距離攻撃にもなれるのだから…軽くホッパーを使って空中浮遊してる緑脳無は雲雀の向きを変えない。そのことに気づいた葛城は、緑脳無を攻撃しようとする。だが、避けられる可能性だってある。また衝撃波が自分の方に来る可能性だってあるのだから…
「チッ！クソ！んじゃあどうすれば…」

その時だった。
「うおりゃあ！」
シュルルル！ピタッ！
「ネ？」
緑脳無は思わず何かが脚に貼っついた方に振り向き見て見ると、それは瀬呂のテープであった。瀬呂のテープは緑脳無の脚に巻きつく。当然緑脳無は何のために脚に巻き付いたのか分かるはずもなく、そのまま標的を雲雀に変えるが…それが思考能力を持たない緑脳無のミスだった。
「いまだ！爆豪！」
「わーってらあ!!」
爆豪は爆破を応用して空中浮遊するように飛び、緑脳無目掛けて
「死ねクソ脳筋があぁぁぁぁぁ!!!」
ボオオオオオォォォォン!!
「っ！」
強烈な爆破の一撃が、ニードルを覆っていない腹部に腹パンすると、緑脳無は思わず唾液を吐き出してしまう。そして瀬呂は脚を巻き付いたテープを思いっきり壁側へとぶっ叩く。
ドガアァァァン!!という激しい崩壊の音が鳴り響き、緑脳無が放出した衝撃波は外れた。
「た、助かったあ～…」
雲雀はそんな緑脳無を見てホッとした。だが…
「ホエエアアオオオオオオーーーーーーーーー!!」
「っ!?」
雲雀の後ろから突如、赤脳無が襲いかかってきた。赤脳無は刀を向けて雲雀に斬りかかる。その後ろには、未来、常闇、轟が追ってる姿も見受けられる。
「きゃあぁぁぁぁぁぁ!!!」
「不味い！雲雀！避けるんだ！」
常闇が叫ぶものの、雲雀は咄嗟に目を瞑り、腰を落として態勢を崩してしまう。するとスッ！と目の前に影が遮った。それは…

ガギイィィン！
「雲雀に、手を出すな…！」
「柳生ちゃん！」
番傘で赤脳無の刀を弾き返す柳生の姿であった。柳生は雲雀を一目見て無傷だと知ると、ホッと安心した表情を出してから、直ぐに赤脳無を攻撃しようとする。
「一気にケリを付けさせて貰うぞ!!」
柳生が叫んだその時だった。
「秘伝忍法！『混沌の渦の刀』！」
「何!?」
瞬間。柳生の横から、渦巻く禍々しい黒い風が刀を巻きつき、柳生を殴るように横から刀を振るう。
「っ!!」
「敵が脳無だけだと思ったら大間違いよ…アンタら結構有利な立場になっちゃってさ…生意気！」
漆月はかっ飛ばすように柳生を刀で殴り飛ばそうとするものの、柳生は咄嗟に番傘で漆月の刀をガードしていた。そのため守ってる番傘は柳生の体に食い込んでいるが、それでも漆月の攻撃を食らわないよりかはマシだ。
「生意気は…お前だ！秘伝忍法！」
「なあっ!?しまっ…」
「『薙ぎ払う足！』」
「きゃあぁっっ!!」
漆月は女らしい悲鳴をあげて、忍装束も少しボロボロになり吹き飛んだ。それだけでなく、近くにいた赤脳無も吹き飛ばされた。柳生は吹き飛んだ漆月と赤脳無を見て、ホッと一息つく。
だが油断はするな、戦いにアクシデントはつきものだ。
「ネガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
「!?」
甲高い、気味の悪い雄叫びが部屋中に響き渡る。そう、緑脳無はホッパーを使って部屋中を飛び回ってる。そのせいか、中々攻撃をす

ることが出来ない。攻撃が当たらない、どう対応すればいいかも分からない爆豪は目を吊り上げて思わず掌を爆破させる。
「ピョンピョン跳ねやがってぇ～…!!こんのバッタ野郎がぁ!!」
ギチギチと歯軋りする爆豪は、緑脳無を睨みつけていると…
ドガアアアン！
「っ！」
爆豪の足元近くに穴が空いた。それは、緑脳無が衝撃波を飛ばしたからだ。そう、緑脳無ニードルを覆いながら、ホッパーで部屋中を飛び回り、衝撃波を飛ばしまくっているのだ。まさに今の緑脳無は無敵。そう言わざるを得ない。
「チッ！……アイツを倒せる方法は、一か八かだと…」
爆豪は残ってるもう一つの腕に付いてる手榴弾の籠手を見つめる。これなら大規模な爆発攻撃でどれだけ飛び回っても関係ない…必ず当たる。だが…それと同時にここの部屋ごと潰されてしまう可能性だってあるのだ。ましてや緑脳無の衝撃波のせいでこの部屋のバランスも滅茶苦茶になっているのだ。そんな状態で撃ったらどうなるのか…言われなくても爆豪は分かっている。
「あ～！クソが!!これどうすりゃあ…」
爆豪が頭を抱えて唸っているその時だった。緑脳無は衝撃波を何度もなんども撃ち、その衝撃波が…
「……え？」
重傷で弱っている詠に迫ってきている。
「ばっ！」
ドガアアアン!!
それに気づいた爆豪は、咄嗟に声をかけるものの、声が途絶えて詠の方に爆発が炸裂した。そう、詠が吹き飛ばされたという最悪なアクシデントが起きたのだ。
「詠ちゃんっ！こうなったら…秘伝忍法！『ＤＥＡＴＨ×ＫＩＳＳ』！」
春花は投げキッスで大量のハートを出すと、運良く緑脳無に直撃

し、大爆発を起こす。ホッパーの音はなくなり、衝撃波を止んだ。そのことを確認すると、春花は視線を詠の方に戻す。土埃で視界が悪く、見ることが出来ない。だが、そんななか一つの疑問が湧き出てきた。
「…？あら？あのガミガミ言ってたあの子は？」

「……ここ…は？」
目を覚ました詠は、気がつくと仰向けに倒れていた。強烈な衝撃波の所為で、自分は吹き飛ばされたのだと分かった詠は、直ぐに立ち上がる。
「…？痛くない？」
詠はまず第一にそれが不思議に思った。確かにあの時自分は衝撃波によって吹き飛ばされた。だから自分はこうして倒れてた訳なのに…なぜ？その疑問は、直ぐに明かされる。
「チッ…！ハァ…ハァ……ハァ……足引っ張んな…怪我人がぁ…！」
「えっ!?」
それは衝撃波をもろに『受けて』、詠を庇い、ボロボロになってる爆豪の姿であった。
「な、なぜ…あなたが…？」
「はぁ…？んなつまらねえ当たり前な質問すんな…自分で考えろや！」
爆豪は呼吸のペースを徐々に戻していき、いつものような爆豪は一喝する。
「っ！私は…貴方に助けてなんて言っていません！」
「アァ!?んなもんわーっとるわ！つか助けたんじゃねえよ！俺が勝手にやった行動だ！」
「結局助けたと言ってるようなものではありませんか…」
「よし、んじゃあのクソカス連合の前にテメェを爆殺させてやろうか？」
爆豪はガルルと狂犬のような目線で低く唸る。だが詠は爆豪にど

んなことを言われても、何故か憎くはない。むしろ何処か安心するような、そんな気がしてきたのだ。そんな詠はハッ！と我に返ると、首を横にブンブンと振る。
（何のんきなことを考えてるんですか私は！私は…）
そんなことを考えてると、爆豪は視線を変える。
「とにかく、早くあの脳筋野郎ぶっ潰してやる！俺様をぶっ飛ばしたんだ。ミンチっつーレベルじゃ済まさせねえ！」
「ちょっとお待ち下さい…」
「あ？」
爆豪が行こうとすると、詠は咄嗟に爆豪の腕を掴んで止める。詠は真っ直ぐ、真剣な目で爆豪を見つめる。
「貴方が先ほど、私に言いたいことがあると言っていましたね？何ですかそれは？」
「は？何だよ急に…今は…」
「いいえ、もしかしたら、今ここで聞かなければならないことなのかもしれませんから…」
「……」
詠はそう言うと、爆豪も真剣な顔立ちになり、数秒黙り込むと口を開く。
「お前あの時、俺たちが辛い思いなどしていないからとか、どうこう言ってたよな？」
「っ…え、ええ…それが…？」
それはあの時、雄英の生徒たちが蛇女に乗り込んで、爆豪が詠にキレてた時の話だ。詠の言葉に、爆豪は黙っていたのだ。そんな詠はぎこちない顔で返事をして頷くと、爆豪はそんな詠を見て再び話を続ける。
「辛い思いをしていない人間なんて本当にいると思うか？」
「え？」
爆豪の気迫溢れる言葉に、詠はキョトンとしてしまい、ピクリと、少しだけ体を震わせる。
「そう思ってたら大間違いだ。人間なんてな、心ある以上辛い思いす

るんだよ、そこは絶対に変わらねえ…テメェがどれだけ辛い思いをしてたかは知らねえし…俺がお前自身の事情をとやかく言うことはねえよ…」
「っ！なら、何でそんな分かってるようなこと言うのですか…！辛い思いをしてない人間なんていない？分かったような口でベラベラと言わないで下さい！じゃあ私の何が…」
「んじゃあ、テメェが辛い思いを抱えてるのを知って欲しいのか？俺らに？同情して欲しいのか？」
「なっ…!!っっ！」
　微動だにしない爆豪は、爆豪の言葉に軽く戦慄した詠に近寄る。同情などして欲しくもない。だが確かに詠の言葉には、同情して欲しいと言ってるようなものも含んでいる。
「んで、テメェは辛い思いがあるから何をしたいんだ？憎いからなんだ？それで、テメェのその辛い思いをどうしたいんだ？」
「そ、それは…」
「……」
　詠はそんな爆豪の眼差しに耐えられないのか、そっと視線を逸らしてしまう。すると…
　バガァァァン！
「っ！」
　瓦礫、木柱などが倒れた音が響く、その音で詠は思わず態勢を崩して座り込んでしまう。そこには二つの人影が…それは…
「いたいた…ったた…柳生めぇ…私を吹き飛ばしたりして…思ったよりもこんだけ数いるとこっちが不利ね…」
「ホウホーウホウ！」
「っ！」
　なんとそこには、長い髪をくしゃくしゃしてる漆月と、木柱の破片やや、瓦礫の破片などで体が突き刺さっている赤脳無の姿であった。赤脳無の体には所々血が垂れている。
「まあいいや、少人数から消していけば…何とかなるかもね…脳無と一緒にやれば少なからずガキ二人は殺れる」

漆月がそう言うと、赤脳無と漆月は走り出す。そんな二人に爆豪は苦虫を噛み潰したような顔で、二人に立ち向かう。
「っ！貴方…正気ですか!?あの脳みその化け物を相手するのにやっとなのに……！」
「五月蝿え!!テメェも俺らより強いとかほざいてたんなら立ち上がれや!!」
爆豪はまず漆月に爆破攻撃をするものの、バックステップで難なく躱され、赤脳無は刀を振り回して、爆豪は何とか見切り避けている。
「テメェ、辛い思いとかで自分を囚われてるんじゃねえ!!いつまでもそんなクソな思いを溜めてるんじゃねえ！」
「！」
爆豪は叫び続ける、たった一人の蛇女の生徒の詠に…
「それなら正直言ってお前はまだ強くねえ…そんなんなら永遠に俺には勝てねえ。それだけはハッキリ言えるわ」
「なっ…んですって…!!」
爆豪の言葉は挑発混じりな言葉ではない、本気で真剣な言葉だ。それを聞いた詠は思わず拳を強く握りしめる。
「ちょっとちょっと～…戦闘中に仲間割れ？随分と余裕があるのね？」
そんな二人の中に、漆月は呆れた声で呟くと、爆豪は漆月を睨みつける。
「ああ!?五月蝿え端役は黙って倒れてろ!!」
「ウザっ…煽りタイプか…」
爆豪の発言にピクリと眉をひそめる漆月は、静かに怒りのコスモを燃やして突っ込んでくる。
「チィッ！っぜぇな本当に！」
爆豪は滝のように流れる汗を拭いながら戦う。自分がピンチな状況に置かれてもだ。そんな爆豪は詠の目の前に立って、敵連合に立ち向かう。
「あ、貴方……」
詠は思わず声を出した。何でそこまでして何かに立ち向かい、戦う

のかが詠には分からなかった。
　自分の立場ががピンチなら、わざわざ庇わなくても良いのに…なのに爆豪は退かない。むしろその後ろ姿は、詠を守ろうとするような姿であった。口ではあんなこと言っていた彼が、なぜ？何の理由でそこまでして守ろうとするのかが分からなかった。
「あなた…命を狙われてるのですよ？なぜこのような状況で私を庇うのですか？いいえ、例え庇う気がなかったとしても……！」
「だったら立ちやがれ!!」
「なっ…」
　爆豪は詠に振り向かず、一切目をくれずに、目の前の敵に戦うので精一杯だ。
「辛い気持ちも…苦しみも…全部ねじ伏せて立ちやがれや!!」
「…っ！」
　赤脳無の刀が、爆豪の肩をかすめてわずかに傷口が出来た。それでも爆豪は話し続ける。
「その辛い思いも、苦しみも全て…強さに変えろや!!負ける以外に……何が辛いんだよ!!」
「負ける…以外……」
　漆月の闇を爆破で吹き飛ばす。斬りかかる漆月に爆豪はなんとかアクロバティックな動きで躱しつつ、反撃を試みるもの、漆月も手強いのか、攻撃が当たらない。それでも尚、爆豪は話すのをやめない…詠のために。
「辛い時こそ、前を見ろよ!!」
「……っ!!」
　辛い時こそ前を見ろ、その言葉を聞いて、詠は脳裏にあるものが浮かんだ。それは自分が幼い頃からお金がなくて、貧民街で育っていた時だった。鳳凰財閥のお屋敷に見下されていて、辛かった。けどそんな時はいつも下を向いていた。
　辛い時こそ下を見ろ。それが詠の座右の銘である。
　どんだけ罵られようと、ひもじい思いをしてようと下を見る。そうすれば…少しは辛い思いも和らぐから…だから。詠はいつも下を向

いて生きてきた。それなのにこの男は…
『辛い時こそ、前を見ろよ！』
こんな自分に、一生懸命になって怒鳴ってくれる。目の前の人が、ヒーローが…

「立ちやがれ詠ぃ!!!!」

初めて自分の名前を呼んでくれた。

「私は……!!」
思わず目から涙を流してしまう詠は、ジッとその背中を見つめた。徐々にダメージで受けた傷の痛みや、今まで通してきた辛い思いも、徐々に和らいでいき、透き通るように無くなっていくような……
「あーあ、ウザい！本当にうざい！脳無！」
漆月がそう叫ぶと、赤脳無は大量の息を吸い込む。炎を吐くと察知した爆豪は、その前に攻撃しようと試みるが…
「イガグリは焼かれてなさいよ！」
漆月は爆豪に斬撃を飛ばす。爆豪はなんとか躱すが、赤脳無の方はもう間に合わない。火炎放射がやってくる。その時だった。
ビュオォォォォーーーーー!!
「なっ!?」
突如強烈な風が爆豪の後ろから吹き出し、その火炎放射は逆に赤脳無を襲った。
「ホオアアアアアアアーーーーーーーー!!」
「赤脳無！」
漆月は間一髪で避けたため、何ともない。その風の正体はもちろん…
「立ち上がれ？言われなくても…わかってますわ!!」
「ケッ…なら最初っからそうしろや…！」
詠である。

しかし、それだけではなかった…
ズドオオオオオオオオン!!
漆月の前から突然、横から何かが吹き飛んできた。それは…ボロボロな状態の緑脳無であった。
「は?何で…他の奴らは?」
「ネェ…ネェ…アッアッ!」
緑脳無は息を切らして何とか立ち上がり、何かを睨みつけるような目で見つめている。それは…
「お前ら大丈夫か!?」
「あっ!抜忍の野郎もいる!」
「見つけたよ!」
他の連中も…この騒動に駆けつけた。
「み、みなさん!」
「それにクソナードもかよ…」
詠はみんなを見て笑顔になり、爆豪は緑谷を見つめて舌打ちをする。
「あっ、か…かっちゃん…」
「そうだ緑谷、この二人にも『あの事』話しておいた方が良いんじゃねえか?」
「っ!そ、そうだね…」
轟が肩に手をポンと置くと、緑谷は冷や汗を垂らして頷く。そんな二人は首を傾げ、話を聞くと…
「はい、分かりましたわ。その事なら…!」
「はぁ!?ざけんじゃねえ!なんで俺が従われなきゃいけねえんだクソ野郎が!!」
「お、落ち着いてかっちゃん!」
詠は納得するが、爆豪は納得せず、腹を立てて緑谷の胸倉を掴んだ。そのことに緑谷は困る表情をして、皆んなは荒ぶる粗暴の爆豪を止める。
そんな中漆月は、増援が来たことと、ワイワイ話し合ってることに

腹を立てる。
「チッ…少人数でぶっ殺す気だったけど…やるっきゃないね…向こうはヤケに仲良しごっこやってるみたいだし、思いっきりリンチだね…」
そう言うと、赤脳無は刀に向けて口から炎を吐く。すると二つの刀は炎を纏わせ、緑脳無は先ほどと同じだ。二体の脳無は、血走った眼でみんなを見つめて走り出し、殺しにかかる。これだけダメージを与えて、充分に苦しいにも関わらず、二体の脳無は尚、戦い続ける。
「皆んな！来るよ！」
緑谷が叫ぶと、皆んなは態勢を整える。そして、二体の脳無が攻撃するその時だ。
パキイィン！
「秘伝忍法！『バルキューレ』！」
「黒影！」
「えっ!?」
なんと、赤脳無と緑脳無の目の前に氷の壁が出て来たのだ。しかし二体の脳無はその氷の壁を壊す。そのくらい容易いだろう…だが氷の壁を壊すことが皆の狙いだった。
「行け！俺たちが考えたさくせんなら！」
「うん！コイツらを倒せるかもしれないからね！」
轟の言葉に、未来は頷く。先ほど、爆豪と詠が吹き飛ばされた時、緑谷達は駆けつける前に話し合っていたのだ。敵をどう倒すのか？単直に、短い時間で皆んなの意見を出し合った結果、それが作戦となったのだ。ただ単に戦っては体力が消費するだけなのなら…考えて戦えば良いと。
未来はバルキューレで二体に乱射し、黒影は殴りまくる。
赤脳無と緑脳無は標的を変えると…
「秘伝忍法！『ＤＥＡＴＨ×ＫＩＳＳ』！」
「うおりゃああぁぁぁぁぁーーー!!!!」
突如大量のハートと紫色のボールが飛んで来た。それは春花と峰田の攻撃だ。

「ふふふ、あなたの個性は期待してるわ…頑張ってね？私の『下僕』♪」
「はいぃ！喜んで春花様あぁぁぁーー!!」
春花の大量のハートに躱すことが出来ず、もろに食らった二体の脳無は爆発し、そして動きが止まった脳無たちは峰田のもぎもぎに当たりくっついてしまう。因みにもぎもぎを取りまくって投げては頭から血が出てる峰田は、いつの間にか春花の下僕となり、様付けする始末だ。だが峰田は嬉しそうなので良いのかもしれないが…
「っ!!小癪な…！」
邪魔ばっかしてくる皆んなに、漆月はますます腹を立て、苛立つ。
「こうなったら私自身で…」
「邪魔はさせない!!」
「えっ!?」
振り返るとそこには…走って来てる緑谷の姿であった。
「ＤＥＬＡＷＲＥ！」
「二度も引っかかるかってえの！」
漆月は真上にジャンプすると…緑谷はワザと攻撃しなかった。そして、残ってる指を漆月の居る真上に向けて…
「えっ!?あっ、ちょっ！」
「ＳＭＡＳＨ!!」
ズバコオオオオオオオオオオオオオン!!
真上に天井が開くような勢いで大爆発が炸裂した。
「っっっづあ!!いっっだぁっ!!」
緑谷は三回も個性を使ったため、痛みに悶絶し、とうとう弱音を吐いてしまう。
「抜忍に二回も使うなんて…!!けど、これで！」
「させるかって言ってんのよ!!」
「えっ…嘘…！」
真上から声が聞こえたので、見てみると…頭から血をダラダラと流れ垂らし、息を切らしてる落下して来てる漆月の姿があった。
「そ、そんな…」
「倍返ししてあげる…死ね！」

漆月が刀を振り下ろすその瞬間…誰もが思いつかない予想外なことが起きた。

「ハイ！タッチ！」

「え？」

漆月は誰かに触れられた瞬間、体が浮いた。

「こ、これは…この個性は…まさか！」

「大丈夫？デクくん！」

声がする方に振り向くと、そこには…

「麗日さん!?」

麗日お茶子の姿があった。

「やっと見つけたよ！お～い！『皆んな』！こっちに居るよ！」

お茶子が後ろを振り向いてそう叫ぶと…ガヤガヤと個性あふれる声が聞こえて来る。それは…

「緑谷くん達は無事か!?」

「下の部屋にまで飛ばされて大変だったよ…」

「尾白くん、埋もれてたからね…」

「俺のパワーとお茶子の個性でなんとか障害物は退かせれたからな！」

「ああ、それに俺と耳郎二人の個性で音がする方へやって来たが…ビンゴだったな…」

「当然でしょ」

「フフフ、友情とは素敵だね…そう思わないかい？」

「え？あ、えっと…その…まあ、うん…」

「青山くん、口田くんもう呆れて困ってるよ～」

「そもそも何故毎度まいど口田さんに話を振るうのですか!?それと皆さん緊張感が足りません!まあ、緊張しなくても良いのですが…」
「とにかく、これで全員揃ったわね、ケロ」
　そこには、緑脳無の衝撃波によって吹き飛ばされた、雄英の生徒達であった。
「俺たちもサポートに移るぞ!」
「負けらんねえぜ!」
「その前に緑谷さん!今の状況は?」
「あっ…え、ええと…」
　緑谷は今起きてることを、皆んなに、手短に話した。
「分かりました…それなら!」
「おう!やれる!」
　皆んなは希望あふれる表情で、二体の脳無を睨みつけた。そんな皆んなを見て、空中浮遊してる漆月は…
「クソ!体が浮いて落ちれない!無重力ってところかしら…?てか、アイツら何をする気なのよ…」
　疑問を抱いて呟いた。

　場所は変わり…
「ネ・エ・エ・エエェェーーーーー!!」
「オラァどうだ!久しぶりの出番だぜこんにゃろ~!」
　緑脳無が雄叫びをあげた。それも苦痛の声が混じって…ビリビリという音が鳴り響いて居る。それは、緑脳無が電撃を浴びて、そんな脳無にくっついてる上鳴であった。緑脳無はホッパーを使うので攻撃が当たりにくくなってしまう。なら足止めをすればいい、その為には未来と常闇の攻撃と、春花と峰田の奇襲をしかけて、隙が出来た所で足止めするという作戦だ。上鳴の個性なら容易いことだ。
　上鳴電気　個性『帯電』電気を纏わせることが出来る。ただし使いすぎるとW数を超えて許容オーバーすると脳がショートしてアホになる。また、放電などといった無差別攻撃も可能。そして今の所１３０万ボルトを出すことが出来る。

そして…
「ほな、助かるわ…」
「ケロ」
赤脳無の前には、足を怪我した日影と、日影の怪我してる足に負担をかけさぬよう、腹に舌を巻きつけて振り回してる蛙吹の姿であった。振り回して速度をつけてから、思いっきり日影を赤脳無目かげて投げ飛ばす。
「ほな、覚悟しいや」
「ホアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」
赤脳無は血走った眼で大きな声を叫び、バズーカを撃つ。だが…
ボガアアアン!!
「ホバアッ!?」
不発。そして両肩が大爆発した。何故その現象が起きたかというと…両肩に峰田のもぎもぎがくっついてるからだ。そう、あの時、峰田は無闇に投げたのではない、真っ先に両肩を狙ってたのだ。くっついたことを確認してから、あとはデタラメに投げれば問題ない。
春花の秘伝忍法の力なら、当然爆発して二体は動きを止めるだろう、動きが止まってる隙に峰田がもぎもぎを投げる。そうすればほぼ確実に両肩を防ぐことだって出来る。それはつまり、個性を封じるという意味でもあるのだ。
そんな状態でバズーカを撃ち、両肩が爆発した赤脳無は、逆にダメージを負った。怯んだ赤脳無に、日影と…
「アタイもいるぜ!!」
葛城も参戦。二人は秘伝忍法の力を使い赤脳無に直撃する。
「っっっっ!!!!」
バシャリ!!
赤脳無は激痛で白目をむき、口から大量の血を吐き出す。そんな赤脳無はヨロヨロな状態で炎を纏った刀を振り回す。
「コイツ!アタイらの攻撃を食らってもまだ…!?」
「ダメージは食らってても命令に従うっちゅー訳なんやな…」
葛城は、二人の最大の力でも、まだ倒れようとしない赤脳無に驚愕

し、日影は嫌なものを見るような目で呟いた。だが、ここで更に赤脳無には苦痛な出来事が起こる。
パキイィン！
赤脳無の体が凍りついた。それは勿論轟の仕業だ…氷はみるみると上半身を覆い、刀にまで覆っていく、すると氷は溶けていくものの、それと同時に火も弱まり、やがて刀も凍りついた。赤脳無が炎を吐こうとするが…
「ホ…ホオォォーーー！」
わずかな炎で氷を溶かすのが精一杯な様子だ。それを見た轟は納得したかのように頷いた。
「なるほどな…緑谷の言った通り、コイツらはもう体力に限界があるようだな…それだから、炎の勢いも弱まってるんだろ？」
轟がそう言うと…赤脳無の目の前に二つの影が遮った。それは…
「秘伝忍法！『飛燕鳳閃・壱式』！」
「レシプロバーストオォォ!!」
真面目な委員長の斑鳩と飯田であった。斑鳩と飯田の二人の力が炸裂し、
バキイィッ!!
赤脳無の二つの刀を折った。
「っっっっ!!!アァァァァァァァァオォォォ

「す、すげぇ…リンチだ…」
　赤脳無の光景に、若干うわぁ！ってなった所もあるが、勝機が見える状況に、お茶子と砂糖は思わず声を漏らしてしまう。
「うん、確かに脳無はどういう理由かで個性を複数持っている…それに感情もないし、雲雀さんが言ってた通り、心もない…オマケに人間離れした身体能力を持ってるし、正に化け物…でも…無敵って訳じゃない、ＵＳＪほどじゃない！」
　緑谷は叫ぶ。そう、心がないだけで、限界があるんじゃないか？脳無だって化け物じみても、人間だ。生きている…必ず限界がある。そう、オールマイトが脳無と戦ってた時と同じように…
　確かにこっちだって体力は消耗してる、けど全員が戦えない訳じゃない。個性が複数あるから？なら、こっちは何人もの力で、個性で戦えば良い。向こうが一体につき個性三つ、二体で六つ。だがこっちは２０人いる、それはつまり、一つの集団で２０個の個性があると言えば良い。それをどううまく活用するべきか、どうすれば良いのかを考えれば、必ず勝利は出てくる。

　そして緑脳無の方は…
「ネネネエェェーーーーー!!」
「ウエェェエエーーイ!!」
　やっと電撃が止み、上鳴の目の前に立つ緑脳無に、個性の使いすぎで頭がショートしアホになり、ウェイしか言ってない上鳴。上鳴は親指を立てて緑脳無に何度も「ウェイウェイ」言っている。
　そんな緑脳無は上鳴を消そうと掌を向けて衝撃波を撃とうとしたその時。
「爆音ビート！」
「秘伝忍法！『ニブルヘイム』！」
「私も手伝いますわ！」
「でりゃあ！」
　耳郎の個性が炸裂し、詠は秘伝忍法で遠距離射撃、そして八百万は詠のボウガンを真似て、詠と同じく遠距離射撃し、柳生はクナイを投

げつける。
四つの攻撃が緑脳無を襲うと、緑脳無は動きを止める。
「ネッガッアッバハァッ!!」
強烈な一斉攻撃に緑脳無は思わず吐血してしまう。
「ネエエェェーーー!」
緑脳無は上鳴よりも、四人を狙いホッパーで跳躍すると…
ブシュウウッ!
「っっ!?」
ホッパーを使った途端、緑脳無の脚の傷口から血が噴き出す。それは…詠と八百万の二人の力で脚を狙ったのだ。詠の秘伝忍法ニブルヘイムは、火薬物だけでなく、刃物を飛ばして脚を傷つけさせ、ホッパーを使用不可にする為のものであった。そんな緑脳無は思わず転倒してしまう。直ぐに立ち上がると…
「うおりゃあああぁぁぁ!」
切島は緑脳無の背中目掛けて走り出す。緑脳無は背中にニードルを覆っている為切島の攻撃は効かないわけがなかった。
ドッ!!
「がアッハ!」
なんと、緑脳無のニードルはへし折られており、切島は傷一つ付いていない。それは硬化により鋭利なニードルが効かないからだ。そんな切島は緑脳無の背中の傷に思いっきりぶん殴ったのだ。その傷とは、前に葛城と日影の二人の力でつけた傷のことだ。
「へへ、あん時俺を思いっきり地面に叩きつけたこと、しっかり返してもらったぜ!」
緑脳無は顔を変えようとした瞬間…
ビッ!
「アバアアぁ!?」
光ほとばしるレーザーが、緑脳無の三つ目、真ん中の目に直撃した。その個性は勿論青山だ。
「フッ…華麗に決めさせて貰ったよ☆」
青山は緑脳無に向かって、自慢げに指を向けウィンクする。

そして…
「おっしゃあああぁぁぁ!!そろそろフィニッシュと行くぜ!!」
瀬呂は思いっきり叫ぶと、テープを赤脳無と緑脳無に巻きつけ、背中を合わせるようくっつけさせ、更に巻きつける。
「これでどうだぁ!!」
ブチッ!とテープが切れると…あとは…
「「「緑谷!!!!」」」
「「「爆豪!!!!」」」
皆んながそう叫んだ途端、緑谷と爆豪は前に出る。
「チッ!何でテメェなんかと!!けど…」
「かっちゃん…うん!今は!」
爆豪は舌打ちして、緑谷を睨むが、思うことがあり直ぐに視線を脳無に変えて、緑谷もぎこちなく苦手意識があるが、爆豪と同じく、直ぐに視線を変える。

((勝つことに集中だ!!))
二人は心の中でそう叫んだ。
「「「行けええええーーーーー!!!!」」」
雄英生徒の皆んなの声が、
「お二人共!」
「ああ、派手で高火力出せるお前らなら、出来るさ!」
「緑谷…爆豪…」
「頑張れ〜〜〜!!」
斑鳩、葛城、柳生、雲雀の、半蔵の忍生徒たちの声が、
「緑谷さんに爆豪さん!どうか!」
「頼むで!!」
「全力でアイツらぶっとばせーー!!」
「これならいけるわ!!」
詠、日影、未来、春花の、蛇女の忍生徒たちの声が、

勝利を願う。

「吹き飛べえええええええええええええ!!!」

「DETROIT(デトロイト)!!!!」

緑谷は緑脳無を、爆豪は赤脳無を目掛けて…

いま!!

「SMASH(スマッシュ)!!!!」

ボオオオ

完全に白目をむいており、ほぼボロボロな姿で吹き飛んだ、物言わぬ人形と呼べる二体の脳無の姿であった。それを見た鈴音は目を丸くする。
「敵(ヴィラン)!?となると…」
「ああ、後輩らと教え子、そして英雄が、邪な者達を見事打ち勝ったのだ!!」
大道寺はニヤリと笑みを浮かべてそう言った。

天守閣の中では…

「やったあああぁぁーーーーー!!」

皆んなは歓喜の顔で、勝利の嬉しさに叫び出し、それが部屋中に響き渡った。
そう…その部屋にいる、お茶子の個性により空中浮遊したまま、ジッと戦いを見つめてた漆月を除いて。
その漆月は、忌々しく、怒りと殺意のこもった目で、不愉快そうに少年少女達を睨みつけるのであった。

31話「飛鳥&焔VS怨櫓血　その後は…」

ドガアアアアアアアアアアアアン!!

二体の脳無は、テープがボロボロとなり千切れて、赤脳無を凍らせた氷も砕かれ、二体は血と消化液を口に垂らし、かなり重傷なレベルで吹き飛ばされた。

遠くでそれを見た死柄木達は…

「あれは…!」

「は?」

吹き飛ばされ戦闘不能となった二体の脳無を見て、黒霧は目を細め、死柄木は目を丸くする。

「おいおい、ざけんな……ふざけんなよ!何がどうなってんだ!?あのオンボロ屋敷の中で大爆発が何度も炸裂したから、善忍を殺してるんじゃないかって思ってたら…なんで脳無が吹き飛ばされてんだよ!!アイツらは忍学生を何十人も殺せるように改造したんじゃねえのかよ!しかも漆月のヤツは一体何してやがるんだ!?」

「まさか、あの二体の脳無が…」

死柄木は突然の余り癇癪を起こし、ガリガリと首を掻きながら、双眼鏡をボロボロと崩壊させる。その隣にいる黒霧は、中で何が起きたか分からず驚愕している。

「なんでだよ……そもそも悪忍はどうした?なあオイ?」

「それは私に聞かれても分かりませんよ死柄木弔……ですが確かに可笑しいですね…先生の仰る通り、あの二体は出来立ての『上位級』脳無…　ましてや善忍はたったの五人…そんな相手に一体どうやって…」

「……っっ!!ああ、ああ!!くそ!クソが!学校襲撃で失敗したばっかだってのに…何で…なんでだ!」

死柄木は納得しないような口で話だし、疑問を抱いてる黒霧はソッと死柄木を見つめるのであった。

天守閣内では…

「やったぜぇ！やっと倒したな！」
「冷やっとしたぜ…もしこの作戦が上手くいかなかったら完全に終わってたもんな…」
「いや、そうでもないぞ…あの脳無とやらは完全に弱っていた…油断は禁物ではあるが、完全に終わるわけではない…」
切島と瀬呂は喜んでいると、常闇は横でボソリと呟く。
「それにしても、まさか共闘するとここまで力を発揮するとはね～…」
「フフ、それねマドモアゼル☆」
「え？」
未来が疲れたように呟くと、青山はここぞと言わんばかりに話し出し、未来は「ええっと？」と首をかしげる。
「そ、そんなことより！…あの脳無って奴ら、一体なんだったの？」
未来はそう聞くが、皆んなも首をげる。そんな中、春花は雲雀に聞く。
「雲雀、貴方なら何か知ってるんじゃない？」
「え？あ、えと…ううん、雲雀もよく分からないの…」
雲雀は何処か悲しいような目で呟いた。
「けど、心がないとかって見極めれたじゃない」
「あ、あれは…雲雀の『この眼』の力のおかげで…」

雲雀がそう話すと、春花は「まあいいわ」とため息をつく。そんな春花に近づいてきたのはあのドエロ変態の峰田だった。
「は、春花様あぁぁ!!ご、ご褒美を下さいぃぃーーーー!!」
「あらアラ、随分と私の虜になったのね…♪」
「はいぃぃ!!」
土下座していて顔は見えないが、顔を真っ赤にしてとても嬉しい満面な笑みを浮かべている。それを見た春花は、新たな下僕を手に入れたことに快感を覚える。
「緑谷ちゃん、取り敢えず峰田ちゃんに何があったか教えてくれるかしら?」
「えっ!?あ、あ~…えと…それは…」
汚物を見るような目で、峰田を見ながら緑谷に聞く蛙吹に、緑谷はぎこちない返事で苦笑する。緑谷は案の定話した。それは、峰田がたまたま春花に一目惚れして、「オイラの下僕にして下さい~!」と額を地面に擦り付けていたそうだ。峰田の性格上やりかねないことだが…そんな春花は、いつも下僕として扱ってる傀儡が峰田のもぎもぎで無くなってしまったので、丁度いいから下僕にしてあげたそうだ。
「煩悩の塊…サイテーね…」
蛙吹はゴミを見るような目でそう言うと、緑谷はまたまた苦笑しながら蛙吹を見つめるのであった。
「うっぷぅ!もうダメ…『解除』っと…」
お茶子は吐きそうになったのか、手で口を押さえて手の指先を触り『解除』する。
「ああ~…気持ち悪い…」
「大丈夫かお茶子?」
具合の悪いお茶子を見て轟は心配すると、お茶子はニコッと笑みを浮かべて「大丈夫だいじょーぶ!」となんとか元気を出して言う。
「そうか…個性のリスクは仕方ねえからな…コスチューム作ってくれてるサポート会社に要望頼めば良いんじゃねえか?個性のリスク減らすために…」
「う~ん…そうだけど…って、アレ…?私さっき『解除』って……」

お茶子がそう呟いた途端、重要なことを思い出し、お茶子の顔は段々と青ざめていった。そう、まるで『何か』に怯えてるように…何かを『やってしまった』みたいな…そんなお茶子に轟は首をかしげる。
「麗日どうした？やっぱり具合悪いのか？あんま無理しずに、足のツボ押した方が…」
「ゴメン皆んな…『ミス』った！」
「「「え？」」」
お茶子の言葉に一同は首をかしげるが、爆豪だけは違った。
「お前らアホか…後ろ見やがれ」
その言葉に皆は言われた通りに振り向くと…なんとそこには、当然と言うべきか…
「わざわざありがとう…解除してくれて……お陰でアンタら一人一人殺すことが…出来る…」
漆月が立っていた。

「ああ！そうだ…まだ一人！」
「喜ぶのは早かったみてえだな…」
緑谷と轟はそんな漆月を見て驚愕した。そう、まだ完全に敵を殲滅させた訳ではない、抜忍漆月が残っていたのだ。皆は強敵である脳無を倒すことに集中してたあまり、彼女のことは忘れていた。お茶子が浮かせてくれたからという理由もあるが…皆は一気に警戒態勢に入る中、漆月は怒りの反面、焦りの顔も含んでいた。
（嘘でしょ!?二体の脳無がやられた？死柄木から貰った私仕様の脳無を…しかも私一人になったし、敵は２８人くらい…っっ!!ああもう！なんでよ！仲間を集めることが出来ず且つ、脳無二体を失ったなんて結果で帰ったら…流石の死柄木もお怒りよね…？）
冷や汗を垂らしながらも、己が思うことを悟らせずに相手を睨みつける漆月。しかし、力は五分五分と言ったところだ。
二体の脳無との戦闘で、皆んなは体力をかなり消費しただろう…一方漆月は確かに怪我は見受けられるが、至って体力を消費してる訳ではない。

「こうなったら…一気に闇で一掃してあげ…」
「させるかぁーーー!!」
「っ!」
攻撃しようと僅かに体を動かした瞬間。爆豪、飯田、詠、斑鳩は攻撃を仕掛ける。
「っっ!うおっと!」
漆月は瞬時に避け、なんとか大ダメージは食らわなかったものの、それでも掠ってしまった。
「クソ!大勢でくると厄介ね…このままじゃ、私ヤバイかも…」
漆月は勝ち目はないと知り、気まずそうに舌打ちをする。そんな半蔵の忍生徒と、蛇女の忍生徒が一気に漆月を叩きかける。
「一気に勝負を決めるぞ!」
「ええ!」「ああ!」「うん!」
葛城が叫んだその時だった。

「そうはさせません」

ズオン!
「「「っ!?」」」
突如、漆月の前に黒い空間が現れた。そしてその黒い靄はみるみると大きくなっていく。そのことに皆は驚いた。蛇女の皆んな、葛城と斑鳩は突然のことに驚くだけだが、雄英の皆んなと、柳生、雲雀はソイツが出てきたことに驚く。何故なら…ソイツは、敵連合の出入り口、ワープゲートの黒霧だからだ。
「な、なんですのこれは?」
「まさか…抜忍の仲間!?」

詠は呆然とし、斑鳩は漆月の仲間が来たのだと思い、飛燕を向ける。そんななか、漆月も目を丸くして驚いている。

「く、黒霧！なんで貴方ここに…それに連絡なんてしてないし…」
「先ほど大爆発が起き、二体の脳無が吹き飛ばされたことを確認し、様子を見に来ました」
　黒霧は突然現れたにも関わらず、ゆらゆらと黒い霧を揺らぎながら、冷静な状態で話し出す。
「それにしても…」
　スッと黒霧は漆月から雄英、半蔵、蛇女全員を見渡す。
「ここに居るはずのないヒーローの卵たちに…善忍と悪忍が並び合い共闘するとは……想像もしない出来事が起きましたね…天守閣の中でそのような事が起きてたとは…」
　黒霧は二体の脳無が吹き飛ばされたことに納得する。そんな様子の黒霧に、皆は構える。
「取り敢えず…抜忍とこの者を倒さなければ！」
「へっ！一人増えたってやることは変わらねえしな！」
「ああ…それにコイツの個性で奴等がここに来たのなら、出入り口は閉めておくべきだ…」
「うん！絶対、捕まえよう！」
　斑鳩、葛城、柳生、雲雀は黒霧を睨みつけ、蛇女の四人も武器を構えてジリジリと近付いてくる。それを見た漆月は、刀を構えるが…
「よしましょう漆月」
「黒霧!?助太刀に来たんじゃないの!?何で止めるのよ！」
　黒霧は戦おうとする漆月を制し、漆月は思わず反論する。そんな二人の状況に皆は思わず立ち止まる。黒霧は漆月を見て、ゆっくりと黒い霧を彼女に纏わり付くように近づく。
「ひゃっ!?な、なに…？」
「二体の脳無が倒された今、もしここで戦えば、いくら漆月と私が居るとは言えど、この数を相手にするのは危ういですよ…無謀なことは避けましょう…それに…」
　黒霧は、目をニヤリと細める。
「今は彼女たちには『泳がせて』起きましょう…何故なら、彼女たちは知らないのだから…この『襲撃の意味』を…」

「!」
黒霧は、皆に聞こえない声で漆月にそう言うと、漆月はようやく落ち着いて来たのか、「なるほど…言われてみれば…」と納得している。もしここで、自分の都合で勝ち目の見えない勝負に挑めば、返り討ちはおろか、全滅。『本当の目的』を崩してしまう…そして、ここに来た意味がなくなってしまうと…相手は蛇女のみんなを仲間に入れるということだけしか知らないのだから…黒霧はそういうと、纏っていた黒い霧を引っ込ませ、身体が増幅していく。
「さあ、早く逃げましょ…「させるかってえの!」」
「!」
黒霧がそう言いかけた途端、前に出て来たのは切島と爆豪だった。二人は爆発する渾身の一撃を黒霧にお見舞いする。そのことにより煙が巻き起こる。
「やったか!?」
「いや…あれは…」
葛城は早くも黒霧を倒したと思うが、日影は見切ったのか、眉をひそめる。それと同じく爆豪も…
「ちっ…手応えがなかった!」
「ってことは…」
爆豪は悔しそうな顔で歯ぎしりしてると、切島はそれを見て視線を煙が巻き起きてる黒霧に向けると…
「言ったでしょう?二度目はないと…私もいつまでも貴方たちの攻撃を食らうほど馬鹿ではありませんよ…例えその相手が忍であろうとも…ね」
黒霧はなに一つ傷を負わず、尚悠長に話している。やはり爆豪と切島の攻撃は食らってないようだ。
「クソ!こうなりゃあ…」
「皆で一斉攻撃すれば!」
未来がそう叫んだときだった…

「きゃあああぁぁぁぁぁぁ!!?」
「ぐっ…!あっ!あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?!」
「「「!!??」」」
後ろの忍結界から悲鳴が聞こえた。
皆は忍結界の空間に振り向くと、そこには…怨櫓血が首で飛鳥と焔の身体を縛り、口から触手みたいな舌?を出して更に身体中を縛っている。そんな二人はかなり苦しい表情を浮かべている様子だ。
「「「飛鳥（さん）（ちゃん）（くん）!!!」」」
「「「焔（さん）（ちゃん）!!!」」」
皆んなは怨櫓血に苦しめられてる二人を見て、目の前の出来事に驚愕しながらも全力で声をかける。しかし忍結界だから聞こえていないのか、または苦しみのあまり聞こえてないのか、反応しない。
「なんだよ…アレ!?」
「分かんない…でも、化け物…だってのは確かだけど…」
「あの道元とかいう訳わかんねえ腰抜けクソジジイの仕業か?舐めたことしやがって!」
皆んなは怨櫓血という化け物を目の前に、心の中に恐怖が湧き上がってきた。切島は顔を青ざめ、緑谷は絶望を見てるかのような表情を浮かべ、爆豪は微動だにせず忌々しい目線で道元を睨んでいる。そんな皆んなはいつの間にか敵連合の存在を頭の中から忘れていた。もはや視界にすら入っていない。皆んなの様子を見てる黒霧は、小声で漆月に声をかける。
「漆月、今ですよ!」
ズオンッ!と身体がワープゲートとなり、漆月はこくりと頷くと、そのワープゲートに歩いていく。
「まあ、今回は状況がアレだから見逃してやるよ…次…あったと」
ドヒュウン!
「いっ…?!」

漆月が小声で呟いていると、何かが足を傷つけた。見てみると、そこには刃物が足に刺さっており、血がドクドクと流れている。
「漆月!?」
「大丈夫よ黒霧…なんて事は無い…」
漆月が攻撃を食らったことに気づいた黒霧は心配するが、漆月は大丈夫だと黒霧に言う。
「一体誰が…」
「逃すと思いますか!!」
漆月の足を撃ったのは、腕にボウガンをつけて、刃物を発射させた詠だった。それに気づいた皆んなも振り向く。だがそれは遅かった…詠がボウガンで撃ち続くが…
「なっ!?」
「残念でしたね…私がいた事により、分が悪かったようだ」
なんと、詠の攻撃を黒霧は黒い霧を飛ばして刃物などを吸い込んでいるのだ。まるで漆月を守るように…
「さあ漆月、お早く!いくら私がワープゲートとはいえど忍の力は得体が知れない…向こうには子供とはいえヒーローの卵たちも居ます!何をしやらかすか分かりません…!引くなら今です!」
「……うん、分かった…」
声を張る黒霧の言葉に漆月は頷くと、苦痛と憎悪、悔恨を含んだ表情で、足を引きずりながらも黒い空間に吸い込まれるように、ワープゲートに入っていく。
「……アンタたち……」
そんな漆月は後ろを振り向くと…皆んなを睨みつけて口を開く。
「今回は…居るはずのないヒーロー達の邪魔があって、蛇女の選抜メンバーを仲間に入れる事は出来なかったし、強力な戦力の脳無二体が無くなった挙句、誰一人も殺すことが出来なかったけど、今度こそ…

皆んなみーんな殺してやるから…何もかも…」
その言葉は何処か重みがあって、不吉な気がして、残酷で、狂気に満ちた目で…彼女はそう言った。
そして漆月は黒霧と共に黒い霧のワープゲートにより、姿を消した。
そんな彼女に、一同は寒気がして、なかには恐怖と絶望を植え付けられたものも複数存在した。
「な、何よ…あいつ……」
「分からない…けど、彼女のあの殺意は…尋常じゃなかったわ…」
嫌なものを見るような目で見つめてた未来がそう言うと、冷静な春花も目を細めて、ジッとつい先ほどいた漆月がいた場所を見つめている。その彼女の不穏な悪意に、皆は恐怖を覚えたからだ。
「って、んなことしてる場合じゃないな…飛鳥と焔ってやつ、どうやって助けるんだ？」
そんな空気のなか、轟は飛鳥たちのことを気にかけ、どう助けるのかを考える。しかし忍の知識がないヒーローたちに、分かるはずがないし、思いつくはずもない…緑谷は忍結界をみると、掌をポンと叩く。
「そうだ！前に僕、これと似たようなもの壊したよ！それなら…」
緑谷は前に忍結界を壊したことがあるのだ。それも焔の忍結界を…本来人では壊すことは出来ないのだが、緑谷の個性なら別だ。ただしその分自分自身にリスクが増えてしまうのだが…
「いいえ、それは無理よ…並みの力や今まで通りでは、忍結界を壊すことができないわ…」
緑谷の言葉に、春花は首を横に振る。「ええっ!?」とじゃあどうすれば良いの？という顔で皆んなは春花を見つめると、春花はそんな皆んなに微笑みの笑顔を向ける。
「大丈夫よ、この忍結界は特殊だけど…特殊な力には特殊な力で対抗すれば良いのよ…ね、『雲雀』♪」
「うん！任せて春花さん！『今まで体力を温存しておいた』から！」

春花の言葉に、雲雀はうんうんと何度も頷きながら、忍結界の方に姿勢を向ける。
「何する気だ？」
皆んなは首を傾げる。するといち早く気づいた柳生は、「なるほど…そういうことか…」と納得した。
「柳生…何が分かったんだ？」
そんな柳生に質問したのは尾白だった。尾白や他のみんなも何がなんだか分からないので、理解が出来ない。
「……念話だ」
「念話？」
柳生が答え出すと、雄英の皆んなはクエスチョンマークを頭の上に浮かべて首をかしげる。
「お前たちからすれば、テレパシーみたいなものだが…俺たちの場合は念話という…それに前に突然頭の中から雲雀の声が聞こえただろう？アレだ」
「あれか!!!!」
皆んなは半分驚き、もう半分は納得した様子だ。雲雀は見た目はドジでおっちょこちょいでマイペースな性格ではあるが、雲雀には多彩な忍の力が存在するのだ。念話が強いのも、華眼も、浸透術も全て雲雀の力によるものだ。
「皆んなが敵さんたちと戦ってた間、雲雀はずっと体力を温存していたの…！皆んなは命懸けで戦っていた…でもね、今度は雲雀の番だよ！」
雲雀は目を瞑ると、大きく集中する。雲雀から念が少しずつ湧き出てきて、大きくなっていくのが見える。
「持ちろん雲雀だけじゃないわ…」
すると半蔵と蛇女の皆んなは、忍結界を使う。春花の話によれば、忍結界の力をうまく使えば、道元が使っている忍結界を不安定にさせることで、雲雀の力が通じやすくなるそうだ。皆んなも体力を大分消費し、思う存分に力を出せるわけではないが、それでも皆んなが揃えば、少なからずとも不安定にさせることができる。そして皆んなは印

を結んで思いを伝える。
「飛鳥さん！」
「飛鳥ぁ！」
「飛鳥！」
「飛鳥ちゃん！」
半蔵の皆んなが…
「焔ちゃん！」
「焔さん！」
「焔！」
「焔ちゃん！お願い……届いて！」
蛇女の皆んなが…そして…
「二人共ぉ!!頑張れ!!!」
「負けるなぁ!!!!」
「頑張れ!!」
「諦めるな!!」
「勝て!!」
「頼む!!二人共!!」
決して忍の力はない雄英のヒーロー学生たちは、自分のように、皆んなみたいに一生懸命に飛鳥と焔を応援する。特別な力などなく、応援することしかできない…だが、それでも、言えれずにはいられない…この湧き上がる思いを。
だから…
「おい!!ガングロ野郎！そんな蛇みてーなクソ野郎にやられてんじゃねえ!!テメェは、『強え』だろ!!」
焔を見ていつも煽るように相手を挑発し、全力で戦ってきた爆豪が、焔を見てそう叫んだ。
「お願い飛鳥さん!!負けないで…負けないでよ!!負けないでよ飛鳥さん!!頑張れえぇぇ!!」
隣の緑谷も、涙腺が弱いのか、涙を流しながら飛鳥を見て、全力の声でそう叫ぶ。

「勝てえ!!」
「負けるなぁ!!」

二人は同時にそう叫んだ。

「お願い……お願い…!飛鳥ちゃん!焔さん聞いて!みんなの声を!想いを!」
雲雀は目を開くと、道元が創り出した忍結界が歪んでいく。すると、飛鳥と焔の身体に力が入っていく。

飛鳥と焔の身体の中には、雲雀が念話で送り出した皆んなの想いが入っていく。
「これは…」
「皆んなの想いが…私の中に、激しく…そして温かく…」
突如、怨櫓血の触手は破け、首で縛っていた体を解いて元に戻る。
飛鳥は緑の闘気を纏い、焔は赤の闘気を纏う。
飛鳥と焔は目を瞑り、何処か温かく身を守られるような表情を浮かべる。
「これが…仲間…これが……私の…!今の私なら…!!」
「皆んなが…皆んなが一つになって私を守ろうと…刀と盾…そうか、分かったよ…じっちゃん!」
すると、飛鳥と焔は瞑ってた目を開き、標的である道元を睨みつける。
「な、なあぁぁ!?たかが…たかが忍学生如きの分際でぇ~!!怨櫓血よ、殺れ!!」
二人の強さに驚愕した道元は、大きな声で怨櫓血に命令すると、怨櫓血は激しい雄叫びをあげる。そして…
「ぬっ…!?がぁっっ!?なんだこれは…!二つの秘伝忍法書が!?」
手に持っていた二つの秘伝忍法書が突然道元から離れ、二つの秘伝

忍法書の陽は飛鳥に、陰は焔の所に飛んできた。秘伝忍法書の力を手に入れた二人は、更に激しく闘気を揺らぐ。
飛鳥は髪留めが外れて長い髪を下ろす。焔はなんと七本目の紅い刀を抜くと、飛鳥と同じく髪留めが外れて、そして…髪の色が紅い色に変わった。焔の七本目の刀は炎月花と呼ばれ、並の人ではろくに扱えず、未熟者には抜くことすら出来ないと言われてる、抜けない型の刀であった。また、焔は炎月花を抜いたのが今で初めてである。

忍とは影、真なる影。今の名前は正に、真影の飛鳥である。

忍とは炎、紅蓮の炎。今の名前は正に紅蓮の焔である。

一人は皆んなの為に、皆んなは一人のために。
皆んなは飛鳥のために、飛鳥は皆んなの為に。
皆んなは焔のために、焔は皆んなの為に。

皆の想いを受け取った二人は、化け物に、敵に立ち向かう。

「覚悟しろ道元！超秘伝忍法！『紅』！」
「超秘伝忍法！『半蔵流乱れ咲き』！」

陽と陰の、飛鳥と焔の超秘伝忍法の力により、怨櫓血は二人に跡形もなく切り裂かれた。そして…怨櫓血を切り裂いた後、今度は道元に斬りにかかる。
「なあああっ?!!ああああああああアアアアアあアあぁ!!」
斬られた道元は白目を向いて、完全に倒れた。そして、忍結界も元に戻って…道元は地面に落ち、飛鳥と焔は戻ってきた。力を使いすぎたのか、膝を地面に着く。全てを見てた皆んなは、飛鳥と焔の二人に駆けつける。
「「「飛鳥（さん）（ちゃん）（くん）!!!!」」」
「「「焔（さん）（ちゃん）!!!!」」」

半蔵の皆んなや蛇女の皆んな、雄英の生徒たちは満面な笑みで二人を見つめる。轟は表情は見せないが、飛鳥を見て安堵の一息をつく。爆豪は「ケッ！こんなん普通だろ…」と当然と言わんばかりの顔で視線を逸らす。一見偉そうに見えるが、爆豪は二人が戻ってきてくれることを信じていた。だから戻って来ることが分かっていた。化け物を倒してくれることを分かっていた。信じていたからこそ爆豪は心配しなかったのだろう…

緑谷は「うおおおぉぉーー!!」と滝のように涙を流す。

「皆んな…」

飛鳥はそんな皆んなを見て、嬉しさのあまり、涙を浮かばせる。そして皆んなの傷を見ると、飛鳥は何かを思い出したかのように皆んなに声をかける。

「そうだ…！敵は?!脳無は?!」

「脳無ってヤツらは倒した…だが、抜忍漆月とワープゲートは逃げられた…主犯の死柄木ってヤツは見なかった」

轟は飛鳥に話すと、飛鳥は「そっか～…」と呟く。何処か気持ちが晴れたように見え、敵を逃したことに残念がる気持ちも見える。

皆んなが悠長に話してると、倒れてた道元は立ち上がり…

「ぐぐぐ！おのれぇ…こうなれば…！」

忌々しい目で睨むと、逃亡する。蛇女を捨て、何処かへと去る気なのだろう。だが、当然皆んなはそれを許すわけがなかった。

「おうぞ！」

紅い髪の色から黒へと変わった焔はそう言うと、皆んなは頷く。

息を切らしながら、天守閣の屋上まで逃げ込んだ道元は、辺りを見

渡す。
「はぁ…はぁ……怨櫓血がやられたのは誤算だった…だが、私はまだ！」
「いいや、もう終わりだ」
「なっ!?」
突如、道元の後ろから声がしたので振り返って見ると、なんとそこには半蔵、蛇女、雄英の皆の姿が見える。
「な、んだとぉ……!!」
道元は歯ぎしりしながら、ジリジリと迫って来てるみんなを睨みつける。元はと言えば、蛇女を散々良いように利用してきたのは道元なので、自業自得と言わざるを得ない。

それを見た鈴音は驚く顔で皆んなを見つめている。
「そんな…！蛇女と半蔵、雄英が共闘?!」
「どうやら、大道寺の言ってたことは正しかったな…」
「うむ…！」
霧夜はそう言うと、大道寺は頷く。鈴音は目を細めて、霧夜を見つめる。
「先生…私の、私のやってきたことは…間違いだったの？」
「いや、それは違うぞ…凛」
「えっ？」
霧夜の言葉に、鈴音…凛は目を丸くする。
「アイツらが強くなったのは俺の指導ではない…アイツらは皆、仲間を想い強くなったんだ」
「仲間……霧夜先生……」
「真に友を想う時、絆の想いの力が、少年少女達を強くする！貴方の生徒もまた然り…」
「大道寺…」
凛は霧夜と大道寺の言葉に、自分に足りなかったもの、何が大切だったのかを感じさせられた。

そんななか、逃げ場をなくした道元は、冷や汗を流してる。
「さあ！覚悟しろオッさん！」
「逃げ場なんざねえよ…」
「テメェも忍なら、戦えるんだよなぁ？」
皆んなは攻撃態勢に入ると、突如皆んなの目の前に、霧夜、大道寺、鈴音が現れた。
「鈴音先生！」
「霧夜先生に大道寺先輩まで!?」
流石の皆んなも驚いている。雄英の皆んなは当然、鈴音と大道寺のことを知ってるわけがなく、首を傾げてしまう。
「き、貴様らは半蔵の！それに鈴音まで！」
「子供のいさかいに大人が入るのは、感心できんがな…！」
三人が来たことに道元は驚愕し、大道寺は拳を強く握りしめそう言った。手も足もなく、もはや勝ち目のない道元は…
「くっ！使いたくなかったが、やむを得ない…こうなれば！」
すると道元の口から何やらカチッと音がなった。すると次の瞬間…
ボガアアァァン!!
「「「「!?」」」」
天守閣のあらゆる所が爆発した。そのことに皆は驚く。そう、道元は自爆装置を起動させたのだ。
「道元…！お前…！」
「これで皆お終いだなぁ!!」
「狂ったか道元！天守閣の中には他の生徒達が！」
凛は怒りの目線で道元を睨みつけるが、道元は何ら臆することなく狂った笑みを浮かべている。
「全てを葬り去るのもまたオーナーの役目だ！それに生徒といってもそこにいる選抜メンバーならまだしも、唯の使い駒である雑魚どもが、どう死のうとどうだっていい！はははははははははは!!」
「……外道が！」
完全に人間の道を外れてる道元に、凛は忌々しく呟くのであった。

すると…
「なら…助ければいい…」
そう呟いたのは焔であった。焔は、詠、日影、未来、春花に視線を向けると、四人はコクリと頷く。
「他の生徒達を救うぞ！」
焔がそう言うと、雄英と半蔵の皆んなも動こうとする。
「でしたら、私達も！」
「ああ！人を導くだけでなく、救うのもヒーローの役目だ!!それに、ヒーローは人を助けることがヒーローだからな！」
「うん！だから僕たちも…」
斑鳩、飯田、緑谷がそういうと、焔たちは首を横に振る。
「それはアカンな…」
「ここの構造は特殊なの、気持ちだけ受け取っとくわ」
「アンタらじゃ足手まといよ！」
「とっととお逃げあそばせ」
日影、春花、未来、詠がそう言うと、焔は飛鳥を見つめる。
「また…いつか…」
「焔ちゃん…」
飛鳥は焔を見て涙を浮かべる。そして焔は爆豪と緑谷を見つめる。
「お前たちもだ…」
「えっ!?」
「…あぁ?」
焔に言葉を掛けられた緑谷は驚き、爆豪は相変わらずといった様子で反応する。
「緑の方のお前は…何処か飛鳥に似ている…」
「え、ええっ?!」
「焔ちゃん!?」
突然の言葉に、緑谷だけでなく飛鳥までも驚き、動揺する。何が似てるか?と聞くが、焔はフッと笑みを浮かべると何も言わなかった。そして今度は爆豪を見つめる。
「お前は……私が生きて来た中で、今までに見たことのない奴だ。だ

から、お前のような強いやつに逢えて嬉しいと思っている。だから、また逢おう…！」
「おう……」
焔は今まで爆豪に向けて来た目線ではない、真っ直ぐな眼でそういうと、意外なことに、爆豪は素直に静かに頷いた。他にも…
「お嬢様…いえ、『斑鳩』さん。私たちもまたいつか逢いましょう…」
「詠さん…!!はい！またいつか！」
斑鳩は詠が初めて名前を呼んでくれたことに驚きの様子を見せた後、頬を赤らめ微笑む。
「日影！死ぬなよ！」
「ああ、分かっとるで…」
葛城が日影に叫ぶと、日影はコクリと頷き、そして皆んなも日影も気づかないくらいだが、ほんの僅かに微笑んだ。
「……お前も、死ぬなよ……お前は俺にとって…」
「うん、ライバル…だからね！アンタも死ぬんじゃないわよ!!」
柳生は良きライバルに微笑みを向けた。そのライバルである未来もまた…。
「春花さん！雲雀、雲雀は…！」
「大丈夫よ雲雀、だって…私と雲雀は、かけがえのないお友達だもの…♪」
春花は涙を流してる雲雀に、自分は大丈夫だよと微笑みを向けて言うと、投げキッスをした。
「は、春花様ぁぁ!!お、オイラも連れてっ…」

ドシュッ！
「でぇっ!?」
こんな状況の中、もはやＫＹと呼んでも過言ではない峰田は、蛙吹の舌で、首の急所を狙い、気絶させた。
「本当にブレないわね、峰田ちゃん。ブレなさ過ぎて此処まで来ると逆に引いちゃうわ」
蛙吹は気絶してる峰田に舌を巻きつける。それを見てる春花は思わず苦笑した。皆んなは各々に言葉を告げると、城に飛び込み生徒たちを救いに行く。だが、城はどんどん崩壊していき、燃え上がっている。まるで火災だ。そんな皆んなを見て、道元は嘲り笑う。
「はぁーーっはっはっは!!どの道奴らには死の道でしかない！これで皆なにもかもお終いだあ！アイツらを助けたいのなら、直ぐに私を逃すんだ…ハーーーーッはっはっはっ!!」
「卑怯者め！」
「クソ野郎が！」
「外道…！」
「……ざけんな殺す!!」
「そんなこと…僕たちがさせない！」
皆んなは憤怒の表情に染まり、歯ぎしりしながら道元を睨みつけている。
次の瞬間。
バッ！
「っ!?」
なんと後ろから凛が、道元を拘束し、首にクナイを突き当てる。
「「凛（先輩）!!」」
「鈴音先生!?」

霧夜、大道寺、雲雀が叫ぶと、凛はフッと笑みを浮かべた。
「本当の強さは善でも悪でもない！仲間を想う強さ…絆の想いの強さ……そんな大切なものをまさか、生徒(あの子)達から教えられるなんて……教師、失格ね」
「凛っ!?お前まさか！」
「す、鈴音！バカなことはやめろ！」
覚悟を決めた凛を見て、霧夜は凛が何をするのかが分かり、道元はさっきの笑みから一変し、驚愕な顔色に変わった。そんな凛は、皆んなを見つめてこう言った。

「さよなら皆んな…そして、私の先生……」

次の瞬間。凛は道元と共に天守閣の頂上から落下した。

「凛!!!!」
「凛さん!!!!」

霧夜と大道寺が叫ぶと、凛はソッと目を閉じ、崩壊していく天守閣

へと姿を消した…

「そんな……何で……僕たちは…ヒーローなのに……なのに……！」
「緑谷くん…」
　そんななか、涙を浮かべる緑谷は小さく呟いた。それを見た飛鳥は静かに、緑谷を慰めるように、背中をさすった。
　一番にヒーローを憧れる少年にとって、近くにいたのに救えれなかったのは辛いことだ。だが…そんな爆豪は…

「オイ、いつまでもメソメソ泣くな殺すぞ…」
「！」
　緑谷に聞こえるほどの小さな声で爆豪がそう言うと、緑谷と飛鳥は思わず爆豪を見て目を大きく開く。
「爆豪くん…今は…」
　飛鳥は少しイラっとした顔で反論しようとすると…
「……あの人、アイツら蛇女の先生なんだろ？だったらこんな所で死ぬわけねーだろーが、ちょっと考えれば分かることだろ…」
「あっ…」
　そのことを聞いた緑谷と飛鳥は、目を大きく開いた。そう、確かに道連れのような言葉ではあったが、なにも死んだとも言えれない。忍は皆んなが思っている以上に強いものだ、爆豪はそれを見据えた上で言っているのだろう。そんな緑谷と飛鳥は、爆豪を見て口元が緩み、少しだけ気持ちが楽になった。

数分後…道元と凛の二人は、ボロボロになりながらも、爆発し崩壊していく天守閣の近くに落下していた。そして、『ヤツ』にとっては運が良く、『彼女』や他のみんなにとっては運が悪いと言うべきなのか、その人物は何とか意識があった。それは…

「はぁ…はぁ……クッ…!鈴音め…よくもこの私をぉ!!」

忌々しく怨念を宿った目で、横に倒れて気絶している凛を睨みつける道元であった。道元の頭からは血が垂れている。

「だが、まあ良い…これで私は何とか逃げれる事が出来る!次はどうやって他の忍を利用し超秘伝忍法書を手に入れるかだ…」

道元はそう言うと、他のものが居ないかどうかを確認し、足を引きずりながらも逃げようとする。

その次の瞬間。

「おいおい…闘うどころか、逃げてばかりの腰抜けのオッさんが何を言ってんだ?無様過ぎて笑いも出て来ねえぜ……道元よぉ…」

「っっっ!!!誰だ?!!」

後ろを振り向き、声の主を見た途端、道元は体が恐怖で硬直したの

か、固まった。

「なっ!?貴様は…!貴様はぁ!!まさか!

死柄木弔か!?」

敵連合リーダー、死柄木弔であった。死柄木の後ろにはワープゲートを開いてる黒霧もいる。

「ははは!正解だ。アンタには用があるんだよ…俺たち敵連合として、利用させて貰うぜ…」

悪意を宿したその目から、狂気を感じる。そんな死柄木から離れるように、道元は後ずさりする。

「こ、断るに決まっておろう…!それに私は!」

ドシュッ!

「つっ!?」

道元が言いかけた途端、手首にクナイが突き刺さった。それは…

「良いから来いっつってんの……わたし今機嫌悪いから何しやらかすか分からないよ？」
ワープゲートからクナイを投げ、姿を現した漆月の姿であった。漆月は先ほど誰一人殺すこともできず、反撃すら出来なかったことに怒りを覚え、今回の失敗で大きく挫折したのだ。そのため当然と言うべきか、彼女の性格から考えて機嫌が悪いのも仕方ない。道元は漆月を睨みつけながら、手首に刺さったクナイを抜く。
「なっ…貴様は……一体……だれ……だ……」
ドサッ！
目を掠めながら聞く道元は、糸が切れたように、その場に倒れてしまった。
「まっ、何やらかすかっていう話以前に、もう眠らせてやったけど…」
そんな漆月は軽くため息をつく。先ほど漆月が投げたクナイは、ただのクナイではない…睡魔の効果があるクナイであった。それを食らった道元は眠っているのだ。それを見て狂気の笑みを浮かべる死柄木は笑いながら近寄る。
「クッハハハハ！あの脳無二体は無駄になっちまったが、その分コイツは使わせて貰うぜ…オイ、漆月。やれ」
「ほいほーい…」
死柄木がそう言うと、漆月はつまらなさそうな反応で、道元の足を掴み引きずりながら、ワープゲートに吸い込まれていくように入っていく。それに続き死柄木も、黒霧の闇とも思わせる黒い霧とともに消えたのであった。

雄英体育祭編
３２話「君が来た」

数時間後…蛇女子学園、天守閣は跡形もなく完全に崩壊した。
その後名のある他の悪忍達は彼女たちを探した訳だが、蛇女子学園の生徒全員は誰一人も見つからなかった…そして、鈴音も…
道元は今回の事件の主犯となり、忍の社会から追放及び、処分対象とされている。忍の存在が世間に知られてしまうどころか、最悪の場合多くの犠牲者、そして大災害をもたらすところであったため道元を見つけ次第即処分しろとのことだそうだ。
一方、多くの忍達が探してたと言われる抜忍・漆月も、上層部からの命令により、見つけ次第処分しろとの事だ。詳しいことはまだ不明ではあるが、抜忍の漆月が敵連合と関わっていたことが明らかになった。そのためまた、敵連合は見つけ次第ヒーローたちに連絡をとる、または捕縛しろとのことだ。理由は当然、敵連合の存在は全国のニュースで放送されているからである。となると、もし忍が敵連合の敵たちを殺せば、こちらの忍の存在がバレてしまうことがあるのだ。
だが少なかれ、忍達にとって、敵連合の存在は大きくデカくなり、忍の社会は世間に広まった。
抜忍・漆月は逃がされてしまったものの、忍達が捜索している中、敵と思われる人物、赤と緑の色をした二体の脳無は捕まえることが出来たそうだ。その二体の脳無はボロボロの重傷ではあるが、無抵抗で大人しいとのこと。忍達が何をどう問いかけても反応なし。そのことに敵連合、漆月を調査することが出来ないというのだ。

半蔵学院の忍生徒達と、雄英の生徒達は速やかに避難する。半蔵学院の皆んなは寮に戻り、雄英の生徒達は家に帰ったそうだ。各々の皆は死闘を繰り広げた、それもまた、ヒーローや忍達は大きな成長になる。
だがそれは、逆もまた然り…

ズズズ…
薄暗いバーの中、黒い空間が現れ、その中からは死柄木、漆月、黒霧、そして眠っている道元が現れた。
「道元は捕まえたのは良いとして…悪忍を仲間にするどころか、善忍を殺すことが出来なかったうえに二体の脳無が倒された……しかも漆月の話によりゃあ、あのガキ共もが居て、善忍と悪忍が共闘だぁ??何だよその流れ…何をどうしたらそうなるんだよぉ!!!」
死柄木はあの時道元に見せてた表情を一気に一変し、怒鳴り散らかしては近くにあったバーの椅子を思いっきり蹴飛ばした。
ガシャアアン!と鳴る音が部屋中に響く。そのことにやはり罪悪感があるのか、漆月はショボンとした様子でジッと下を向いている。そんな漆月を見て黒霧は「まあまあ、貴方が悪いわけではありませんよ…気になさらないで下さい…」と優しい言葉を掛けた。
「うん…ありがと黒霧……けど死柄木ヤケに苛立ってるし、そのことには…」
「ああ、大丈夫ですよ。死柄木弔のアレはいつもの事なので、そう一々気にしなくても問題ありません、落ち着けば治りますよ。それに…」
すると黒霧は道元の方に視線を移す。
「何も、手ぶらで帰ったわけではありませんから…」
黒霧は静かにそう言った。すると次の瞬間、パソコンの画面が起動した。
『随分と荒れてるね、死柄木弔』
「……チッ……聞いてたのかよ……」
その声の主は先生であり、死柄木は聞いてた事に思わず舌打ちをした。
『その様子だとやられたか…ははは、残念だったね』
「残念どころじゃねえよ…漆月の話によりゃあ居ないはずのガキ共が居ては善忍と悪忍が共闘したそうじゃねえか、しかも俺らの誘いを断りやがって……何だかソイツらも気に入らなくなって来たなぁ……」
『そうかそうか、なら仕方ないね…。それにしてもそんな数を相手に

してた漆月はさぞ苦戦しただろうに、とんだ災難だったね』
先生の声からは何一つ怒りや憎悪、悔しさなどと言ったものは感じず、むしろそれだけの多くの数を相手によくぞ帰ってきてくれたと、褒めている。そんな漆月は、パソコンに視線をやり、ぎこちない反応をとる。
「えっと…先生…？失敗した私を……責め、ないんですか？まあ…怒らないのは良いのですけど……でも、私は……」
『漆月。失敗は悪いことじゃないんだ』
初めて見せる漆月の表情に、先生は優しい言葉を掛ける。
『忍は大きな失敗をすれば最悪の場合、死が待っている。けどね、此処ではそんな概念に囚われなくても良いんだ。大事なのは失敗を通して、何がいけなかったのかを考えて、次をどう成功に活かすのか、どう成長するのかが大切なんだ』
漆月は『生まれて初めて』、そんな言葉を掛けられた。もし此処が自分の通ってた忍学校であったら必ず殺害されていた。だが、先生はそんな彼女を責めなかった。
「せん…せい……」
『漆月、君は敵連合を通じて成長するんだ。そうすれば、多くの忍たちとは違う力を持てる。忍の強さは心の強さなら、絶望、憎悪、怒りもまた心の強さとなるだろう。それを自ら己がものとして成長しろ！』
そう言うと、パソコンの電源が切れた。
「成長…」
漆月はその言葉を聞き、ソッと自分の拳を握りしめ、見つめるのであった。

暗闇の中、先生は再びパソコン画面に目を移し、カチカチとキーボードを打ちながら何かを調べてるそうだ。すると、暫く手を休めて、画面をジッと見つめている。それに気づいた老人は、首を傾げて手に持ってた資料を机の上に置く。

「……先生？『あの子』たちの話は終わっというのに、何故まだパソコンの画面を見つめてるんですか？何か調べ物があったりして？」
「ああドクター…いやね、彼女のことを調べてたのさ、何か『懐かしい』気がしてね……それで調べてたらあったので、見ているんだよ」
「ああ、そうでしたか…まあ先生なら何もかもお見通しだとは思いますがね…」

先生の言葉にドクターは頷きながら、再び資料の整理をする。先生は漆月のことについて調べていたそうだ。普通ならパソコンで調べても漆月は愚か、忍については当然書かれてる訳がない…だが、この人物が扱うものだけは違った。なんと、漆月のプロフィールに…忍名だけでなく、『本名』までもが書かれいたのだ。その人物は暫くジッとパソコン画面を見終わった後…

「……なるほど……そういうことか」
納得した様子でそう呟いた。
「ははは っ、まるで点が線になったような気がするなぁ…そうかそうか、そういうことか、何処か『懐かしい』気がしたので調べてみれば、案の定やっぱり全て繋がっていたんだな。彼女は『前の忍名』を消して、漆月という名前になっていたから、分からなかったよ。だがまあいいか、彼女は敵連合として唯一欠かせない人材だ！」
死柄木や漆月のレベルを超えるほどに、その人物の闇や悪意は深く、もはや軽く戦慄してしまうくらいだ。
「これで後は、ドクターと一緒にやるべきことをやり、『彼』を仲間に入れれば…全ての『用意』が終わる！あとは待つだけだ…結果をね。いやあ実に楽しみだな、この先どうなるのか…

ヒーローと忍の社会の崩壊をね…」
その男の発言は、未来を見据えての言葉なのか、計算をしている。この先の、次の闘いに向けての…

翌日。雄英高校では、教師陣とオールマイト(トゥルーフォーム)だけでなく、半蔵と霧夜までもが会議室に呼び集められた。

「なるほど……半蔵くん、君が皆んなに戦闘許可を出したという訳だね?」

「ああ、そうじゃよ…」

質問をしたのは校長の根津。それに頷くのは半蔵であった。半蔵は飛鳥たちだけでなく、雄英の生徒達にも、蛇女子学園の襲撃を許可した為、全ての責任は半蔵にあるのだ。まあ本人はそれを承知のうえでやったことなのだが…

「それなら良かった…もし生徒達の単独行動なら、とても不味いことになっていたからね」

根津は紙コップに淹れてあるコーヒーを啜りながらそう呟いた。そんな根津は、いつもの笑顔ではなく、真剣な顔つきに変わった。

「それで、本題に移そうか……

蛇女子学園の襲撃に敵連合出現、現在も尚、指名手配されてる抜忍・漆月が敵連合に入っている。そして謎に包まれてる戸籍不明の大男二人の脳無と呼ばれる人物。更には蛇女子学園の裏切り道元は現在消息不明。もちろん蛇女子学園の生徒達も居ないとのこと…霧夜く

んの話によると道元が原因で生徒達は危険な目にあった挙句、選抜メンバーと呼ばれる彼女達は生徒達を救いに行った結果、こうなった……と、これにて異論はないかい？」
　根津は昨日にあったこと全てを話すと、その場にいる皆はコクリと頷いた。ただ…それ以外の異論があるのなら…
「私は全く…己の愚かさに腹が立つ!!」
　深刻なため息をついたのは、ガリガリのオールマイトであった。
「私があの時マッスルフォームで蛇女子学園の居場所を無闇に探さなければ…また、半蔵くんに話を聞けば、駆けつけれることが出来たというのに!!そして道元と呼ばれる者を捕まえることが出来れば…少年少女達は…!」
「子供のいさかいに首を突っ込むのは良くはないが…凛のことについては一理あるわい…のう？霧夜よ…」
「はい…半蔵様…」
　オールマイトは怒りの余りに、額に血管を浮かばせている。半蔵はオールマイトを見てそう言うと、霧夜に視線を移すが、霧夜は相変わらずといった様子だ。まあ大切な教え子が消えて、そのような態度になってしまうのも無理はないが…
「しかし、敵連合にはまだ主犯が居るのでしょう？」
「うん、まあね…」
　霧夜は根津にそう聞いた。
　そう、昨日の襲撃では漆月と脳無、黒霧を目撃したとの情報はあったが、リーダーである死柄木の姿は一度も目撃しなかったそうだ。
「しかも蛇女子学園の生徒達を敵連合に入れようとするなど、思いもつかんわい…」
「結局問題ナノハ敵ノ目的ダ。雄英襲撃ニ続キ、蛇女子学園ニマデ襲撃シテキタノダ、必ズ裏ガアルト我ハ思ウノダガ？ソノ意見ニツイテハドウ考エテオルノデスカ校長？」
　難しい顔で眉をひそめる半蔵に、隣にいたエクトプラズムは校長に問う。
「その意見についてはちゃんと考えている。問題なのは何故わざわざ

蛇女子学園なのだろうと思ったんだよ…悪忍の居場所ならどこにだってある。しかも向こうは居場所を知っていて、我々は知らなかった…知っていても半蔵くんだけだね。更に半蔵の忍生徒達の話によれば、雲雀くんの救出に赴くと同時に超秘伝忍法書の奪還として蛇女子学園に乗り込んだことも向こう側は知っていた。居場所もそうだが、どうして半蔵が乗り込んでくることを知っていたのか…だ」

根津の顔つきは、可愛らしいマスコットのような様子ではなく、真剣に、怒りを込めた表情を浮かんでいる。

「確かに……ん？いや、待てよ…」

「どうかしたのか霧夜よ？」

霧夜の様子に気づいた半蔵は首を傾げて横目で見る。

「前に蛇女が半蔵に攻めに来た際、凛と会ったんだが…その時に言っていたな…この忍との戦いは大きな戦いであり、抜忍も来る可能性があると……何故そうなのかは知らないが…それと何か関係が…」

「なるほど…もしかしたらそう言った大きな事件を狙って攻めにきたってことかもな」

霧夜の言葉に、オールマイトの隣にいたスナイプは納得して頷く。

「つーことはアレか!?結論的に言えば敵連合っちゅーバカ共が忍の存在知ってたのは、抜忍の漆月ってやつと関わってたからなのか!?」

スナイプの隣にいたプレゼント・マイクは荒々しい声を出してそう言った。そんなマイクに静めさせるようスナイプは口を開く。

「落ち着けマイク、そうとは限らねえだろ…」

「だってよ他に誰がいるんだよ!!漆月って奴は敵に忍の存在を知れ渡してたんだろ!?そんで敵連合は忍の存在を知ってて、それで蛇女子学園に襲撃しに来たってことだろォ!?ここまで計算的に行われてんのならそれしかねーだろ！」

「いや、それはないね…」

「校長!?」

プレゼント・マイクの言葉に異論を出したのは根津だった。

「確かに最初は僕もそう思ったさ、でも考えてみよう……塚内刑事の話を」

「あっ…」
　皆は口をポカンと開いた。何かを思い出したように。
「学校襲撃で捕まえた敵７２名に聞いてみたが、そのような人物は一人も居なく、また忍の存在なんて聞いたことないし知らないと…当時質問し終わった際に警察が記憶消去機を使ったから良いけど、彼ら全員の発言によればその頃に漆月は居なかったと考えられるね。しかも生徒達の話によると、主犯格の敵は忍の存在は知ってたものの、それ以外のことは分からなかったそうだ…もし言い渡してたのなら、学校襲撃ではもっと最悪な事態を招いていたよ？」
「ｕｍｍ……ん？じゃあよ…結局なんで敵連合は忍のこと知ってたんだ？」
　マイクは難しい顔で悩んではいたが、考えれば考えるほど疑問が湧き上がっていき、根津に質問するが…
「それは現在調査中だね…尻尾も手がかりも掴めれてない…」
「ダァァァーーー！チクショう！」
「ちょっと落ち着きなよマイク」
　根津の言葉にマイクは頭を抱えてはうなされ、近くにいたミッドナイトはため息をつく。そんななか…オールマイトは…

（忍の存在を知ってる敵連合に、抜忍・漆月……脳無……いいや、まさかな…）
　オールマイトは何かに思い当たったのか、冷や汗を垂らすものの、それは違うと首を横に振る。
（なにせ、『ヤツ』は私が……
『殺した』のだから…）
　その殺したという言葉は、犯罪としての言葉ではなく、まるで正義のためにと、人のためにと、皆んなのためにと言ったようなものが含まれた。
「まあ、考えても答えが見つからない一方、むしろ謎が多くなったね……とにかく、今言えることは奴らの目的は…

打倒オールマイトってところだね。逆に、良い報告としては敵連合の敵を二人捕まえたこと、そして雲雀くんが無事救出されたこと、更に超秘伝忍法書の後継者が出てきたことだね」
根津はいつもの顔に戻ると、椅子から降りた。
「事件についてはまだこれから調査していく訳だが…より一層厳しくなったはずだ、特に忍ではね。半蔵くん、『小百合』と『巫神楽三姉妹』に連絡をしてくれないかい？敵連合の調査と漆月を捕まえるために…ね？」
「ブフォッ!?」
根津の言葉に半蔵は思わず飲んでたお茶を吹き出した。「ちょっ、半蔵さん！汚いっスよ！」とマイクは布巾で濡れた机を拭いていく。
「す、スマンすまん…あの～…根津よ……確かにことが事とはいえ……巫神楽三姉妹ならさておき、小百合は……それに連絡しても来ないしのう～……」
あの半蔵が汗を流しながら横目でそう言うと、根津は半蔵の考えに勘付いたのか、ニヤリと笑う。
「そっか～…なら僕が言おうかな…」
「ちょっ！まっっ！うそウソ嘘じゃよ！わ、わかっておる…連絡くらいちゃんとするわい……ワシがおりながら敵連合が捕まえれてないと小百合が知れば、どうされるやら…」
「ハハッ…伝説の忍の名が泣きますね…」
根津の脅しのようなものが混ざった言葉に、半蔵もぐうの根も言えず、渋々と頷いた。
「あっ、その前に……ワシはまだやるべきことがあるからのう…それもやらねばな…」
「やるべきこと？」
マイクとミッドナイトは首を傾げると、根津とオールマイトは納得したように頷いた。
「ああ、アレか！まあ大変だとは思うが頑張って下さいね半蔵くん」
「うむ、まあそれが終わったら小百合に連絡するわい…それで良いかの？校長」

「ああ！君の問題は君に任せるさ！」
半蔵がそう言うと、根津は親指を立てた。
こうして会議が終わったのである。

雄英の生徒たちは普段何気ない、いつも通り学校に通うのであった。それは当然飛鳥たち三人もまた同じ。斑鳩と葛城は前みたく、半蔵学院で授業だそうだ…
皆は教室の中で何時も通り、ガヤガヤと騒いでいる。どうやら昨日あった事の話と、あの後どうなったのか、そして蛇女子学園の皆は無事なのか？そう言った話を飛鳥たちに聞いてみるものの、飛鳥たちも分からなかったそうだ。ただ言えることは、消息不明とのこと…
まるで昨日の事件が嘘のように思えてしまうくらいだ。
だがそんな少年少女たちの時間は、学校のチャイムが鳴る音と共に

終了した。
「おはよう諸君達…」
ピタッ!!
チャイムと同じタイミングで相澤先生が教室の中に入ると、皆は一瞬で姿勢を正しては席についている。相澤は皆を見渡すと、目を瞑り口を開く。
「……朝のＳＴの前にお前らに話すことがある……お前らも知っての通り、昨日の蛇女子学園襲撃の件についてなんだが…」
「っっ……」
相澤の重みのある言葉に、皆は気不味い雰囲気の中黙り込む。やはり当然というべきか、相澤は分かっていたようだ。
「伝説と謳われてる忍、半蔵がお前たちに戦闘許可を許し、お前たちは蛇女子学園に乗り込んだそうだな？」
皆は気不味い沈黙の中、首を縦にふり頷く。相澤の表情からは怒りに似たものを感じ取られる。
「んで…行った奴らは誰だ？手を挙げろ…」
相澤がそう言うと、皆は冷や汗を垂らしながら手をあげる。それを見た相澤はそれも分かってたのか、大きく溜息をつく。
「……そんで？半蔵に許可を貰ったのは何時だ？」
何時？それは放課後のことだ。放課後に半蔵に話を聞き戦闘許可を貰い潜入したのだ。それを聞いた相澤は、目を細くし、目に暗い影を覆わせる。
「なるほど…な。つまりお前たちは半蔵の許可を得れたから、『俺が言ったこと』は聞かないって訳か…」
「っっ！そんな、つもりじゃ！」
咄嗟に席から立ち、首を横に振ったのは緑谷だ。緑谷はつい無意識に動いてしまった。
「そんなつもりじゃなくとも昨日の事件に変わりはない。俺は半蔵が言う前に言ったよな？朝のＳＴの時、『安静にしてろ』って…」
「……っ！」
それは、雲雀が捕まった際に皆が動揺してる中、相澤が言った言葉

であった。確かに相澤は言ってた、安静にしてろと。半蔵が許可を出す前に……
「お前ら…分かってんのか？お前たちはヒーローの学生だ。もし万が一、誰か一人でもお前らが忍に殺されたらどうするんだ？それでもお前らはヒーローを目指せれるのか？」
「……」
皆は相澤の言葉に黙り込むしかなかった。それもそうだ、確かに皆の力があったとはいえ、誰か一人でも死んだら最悪だ。そんな状態で、そんな志でヒーローになるなどと…ましてや緑谷にとっては立ち上がれないだろう…オールマイトから託された想いも、個性も無駄になってしまうことだってある。緑谷が殺されたりとか……
「それだけじゃねえ、もしこのことが世間にバレたら社会は一層に混乱を招くぞ……半蔵が許可を出したとはいえ、俺が言ったことを忘れるな……俺から言えることは以上だ、通常授業があるぞ、一限の用意しろ」
（先生……ダメだ、こんな重い空気の中で授業出来ません……）
皆は心の中でそう悟ったのだった。

なんやかんやで時間は進み、四限目終了後…
「はぁー…先生の言葉はキツかったけどさ、アレってやっぱり俺らのこと心配してだよな…」
教室の中、切島はポツリとそう呟いた。元はと言えば先に言い出したのは切島の方だし、やはり何処か罪悪感を感じるのだろう。
「ケロ…そうね、確かに……私が同じ立場なら誰だってそう言うし、私たちは学生だもの……周りに心配かけちゃダメよね…反省しなきゃいけないわ……」

「オイラ…確かに殺されそうになったけど、けど…死ぬならせめて女性ののおっぱいで死にたい！」
「ゴメン、マジで死んで」
「……」
　皆んながしんみりムードのなか、峰田は相変わらずこんな時でもブレなく、いい加減にしてほしい耳郎は本音を峰田にぶちまける。
「けどさ、もしＵＳＪに襲撃してきた敵連合に、抜忍ってやつがいたとしたら…俺たち相当ヤバかったよな…」
「だな…しかも蛇女子学園の事件では、俺たち全員いたからよかったものの、もし全員いなかったら、今頃飛鳥たちはどうなってたんだと思うと、心が痛むな…」
　冷や汗を垂らす尾白に、同情し頷く障子。
「みんな……」
　そんななか飛鳥は自分たちを心配してくれる仲間に、相澤先生に叱られて反省してる皆の姿に、涙目になる。
「よっしゃあ！そんじゃあ、もうこれ以上そうならねーようになんとかしなきゃな！」
　すると切島は席に立ち上がり、皆を励ますように笑顔を向ける。
「切島…」
「それにさ、もう昔のことばっか悔やんだって仕方ねーよ…やっちまったもんは戻らねえ…なら次は叱られないようにすりゃあ良い！そんだけだろぉが…そんだけ!!な！爆豪！」
「な！じゃねえ!!クソ髪野郎…お前喧嘩売ってんのか？あぁ？表出ろや…！」
　切島に真似された爆豪は、胸ぐらを掴み掌を爆破させる。そんなプンプン怒ってる爆豪を見て、ははは と笑う切島。なんだか皆も口元が緩み、いつしか笑っていた。
　それを見ていた半蔵の生徒たちも…

　廊下では、いつものメンバーと決まっているのか、緑谷、お茶子、飯

田、飛鳥は食堂に向かい、階段を降りている。
「それにしても、除籍処分とかにされなくて良かったあぁ～…」
ホッとしながらお茶子は頬を赤らめる。
「確かにね…もし私たちのせいで皆んなが除籍処分になったら私、耐えられないもん…」
飛鳥はみんなに申し訳なさそうに謝る。
「い、良いよ！とにかく飛鳥さんたちだけでも無事で良かったし…ね？飯田くん！」
「ああ、俺たちは俺たちが正しいことをしたまでだ！何も謝ることじゃあないさ！」
緑谷は飯田に視線を移すと、相変わらずすごい手の動き方をして頷く。
「で、でも…あの抜忍の漆月って人と敵連合が攻めてきたんでしょ？それなのに私は…その場にいなくて……」
飛鳥は何処か申し訳なさそうにそういった。確かにその時飛鳥と焔はいなかった。道元の忍結界に利用され、怨櫓血という化け物に散々な目に遭わされたのだ。
「いやいや、それを言うなら寧ろ僕たちの方だってそうだよ！飛鳥さんたちがあの化け物と戦ってたのに、僕たちは戦うことが出来なかったんだから…」
緑谷は「気にしなくていいよ」と言うと、飛鳥は満面な笑みで「ありがとう！」と言った。
「う、うおおぉぉぉぉーーーーーー!!」
そんな飛鳥の表情を見た緑谷は両手で顔を覆う。
「ど、どうしたの緑谷くん!?顔真っ赤っかだよ？」
飛鳥は緑谷の顔を覗き込むように見つめると、緑谷はますます体を縮ませて、顔を見られぬように隠す。
「だ、だ、大丈夫！りんご病みたいなものだから…気にしないで…」
「いや、りんご病なら不味いぞ！直ぐに病院に！いや、リカバリーガールの元へ！いやしかしリカバリーガールは怪我の治療…実際病気はどうなのだろうか…？」

「飯田くんホンマに真面目や！」
緑谷を心配する飯田は、心配のあまりに独り言を呟き、皆のやりとりと飯田の真面目さに思わず笑いがこみ上げ止まらなくなりとうとう吹き出してしまった。すると、そんな皆んなのやりとりから…

「私が来たあァァァァ!!」
曲がり角から突如やって来たのは、あのムキムキマッスルフォームのオールマイトであった。
「お、オールマイト!?って、どうして？」
緑谷だけでなくみんなも驚いた様子でいて、眉をひそめていると…オールマイトは後ろに隠してた右腕からあるものを出した、それは…

「仮眠室で…お弁当一緒に食べようか？ね？」
可愛らしいお弁当であった…
「オールマイトって乙女なの!?」
飛鳥は意外なオールマイトの一面に驚いた。

緑谷はオールマイトの昼飯の誘いに乗り、仮眠室へと向かった。何を問い出されるのやら…また、何を言われるのか…相澤先生みたく怒

られるのかなぁ…なんて心の中で思いながら歩いていると、仮眠室が見えた。オールマイトは仮眠室の中に入り、誰もいないことを知った途端、ガリガリのトゥルーフォームにへと姿を変えた。
「あ、あの…話ってなんでしょうか？」
　ソファに腰掛けた緑谷は、恐るおそるそう聞くと、緑谷の思ってることはお見通しなのか、オールマイトは「ははは、そう恐縮しなくても大丈夫！」と声を掛ける。
「さて、まあまずは…緑谷少年、昨日の事件では、君が死ななくて良かった…他の生徒たちも…命に別状がなくて何よりだ……」
「オールマイト…」
　やはりオールマイトにも心配を掛けてしまった。しかしそれでもオールマイトは責めない。緑谷の行動を…それは自分と重なるからなのだろうか…あるいは…
「まあね、君の気持ちは分からない訳じゃないさ…けどね、私の目の届かない場所でことが起きてからでは遅いんだ…それにぶっちゃけいえばワンフォーオールの時間は５０分前後…分かるかい緑谷少年、
　もう平和の象徴として立つ時間は、もうそんなに長くないんだ…」
「っ！」
　その言葉に緑谷は言葉を失う。そう、緑谷が思ってた話とは違う。もっと深刻で、社会全体に関わり、そして自分とオールマイトのみの話…
「分かっていたことだし覚悟してたことだから、そう気にすることはないさ！」
　オールマイトは緑谷に不安を掛けさせまいと、豪快に笑い吐血する。
「ただね…昨日君達と戦った敵連合、もしかしたら悪意を蓄えてる奴のなかに、このことを、それに気付き始めている者がいる…」
　オールマイトの目は窪んではいるものの、その窪んでる目の瞳には、光が差し込むような輝かしい瞳であった。まるで魂が、信念が折れないような、そのようなものを感じ取れた。
「君に力を授けたのは！私を継いで欲しいからだ!!」

その言葉を聞き、緑谷はあることを思い出した。脳裏に浮かぶその光景は…幾つか…それは…

『貴方みたいなヒーローになれますか!?』

初めてオールマイトと出逢った時のこと…

『君は、ヒーローになれる』

初めて憧れの人に、今まで生まれてきたなかで、言って欲しかった言葉を…

『なりたいんだ……貴方みたいな、最高のヒーローに!!』

力を継ぐために、ヒーローになるために精一杯死ぬほど努力してきたあの日々を…あの言葉を…

「体育祭、それは全国が注目するビッグイベント!!今話してるのは他でもない、次の世代のオールマイト…平和の象徴の卵…!そう!君だ!

君が来た!ということを、ヒーローと忍の社会に!!世の中に知らしめて欲しい!!」

オールマイトは緑谷に、真っ直ぐな目で見つめ、そう言った。

３３話「雄英体育祭」

食堂、メシ処にて

行列の中、飯田とお茶子と飛鳥は浮かない顔をしている。

「デクくん何だったんだろうね？」

「ＵＳＪ襲撃でオールマイトが襲われた時、一人で飛び出したと聞いたぞ。その関係じゃないか？」

「なるほど！」とお茶子はポン！と手のひらを叩くと、飛鳥は首を傾げる。

「でも、それって前の話じゃない？と言っても一昨日の話だし…」

「いいや、昨日はオールマイトは一人で蛇女子学園の居場所を探ってたそうだ。そのため話す時間がなかったんじゃないか？だから今…」

「あっ！そっか！」

飛鳥もお茶子と同じリアクションで納得する。だが飯田はまだ浮かない顔をしている。

「それにしても緑谷くんの個性は本当に謎だな…自身にも耐えれない超パワーとはいえ、まるで赤子のようだ」

「うーん、何でだろうね？個性の負担ってやつかな？凄いパワーなのにね…？パワーで言えばオールマイトに似てるよね」

「まあでも、試せれなかったからってのもあるんじゃないかな？ホラ、子供の頃から使ってたら…」

「なるほど…！確かにそれもそうだな！蛙吹さんも言ってたしな。きっとオールマイトに気に入られてるんじゃないか？まあ流石と言ったところか！流石と言えば…昨日の化け物を倒した飛鳥くんも凄かったな！流石は伝説の忍の孫だ！もう一人のポニーテールの子も凄かったが…結局蛇女子学園の生徒達はどこへ行ってしまったのだろうか…」

「ほ、褒めてくれてるありがとう…って言ってもなぁ、焔ちゃん達が目撃されてないってことは、きっと何処かへ姿を消して隠れてるんだと思うよ…？」

お茶子と飯田と飛鳥が話してる中、行列で少し前にいる人物。赤と白の髪をした男性、轟は三人の会話を聞き逃さなかった。轟が聞いてることに、三人は気付かないのであった。

「……」

「僕が来たって…」

仮眠室では、正直まだ状況を把握できてない様子でいる緑谷。

体育祭で僕が来たということを世に知らしめることだ。

体育祭は全国の皆が見てるので、当然活躍すれば多くのヒーローからも認められるだろう。だが、緑谷はこう思った。

どうして？なんで僕が？何故ここに来たってことを？

様々な疑問が心の中に湧いてきた。まだ状況が掴めてないように見える緑谷の表情を見て、オールマイトは話を続ける。

「雄英体育祭のシステムは知ってるね？」

「っ！は、はい！」

そう聞くと我に返った緑谷はついとっさに大声で反応した。

「えっと確かヒーロー科、普通科、サポート科、経営科がごった煮になって、それぞれ競技を行って本選まで勝ち抜いた生徒が競う…まあ、いわゆる学年別総当たり…ですね」

「そう！」

すると指を緑谷に向けてさす。
「存分に力を発揮して、自己アピール出来る!!その為には体育祭は持ってこいだ!!!」
オールマイトがキメポーズみたいな感じで言うと、緑谷は。
「はぁ…」
「はぁて!!」
余りにものリアクションの薄さ、そして間の抜けた表情でポカーンとしてる緑谷に、オールマイトはベタな感じでソファごとぶっ倒れる。
そんな反応をも御構い無しに緑谷はブツブツと独り言をする。
「いや、あのですね…仰ることは最もですが、やはり一昨日に続き昨日のことがあってからだとあまり乗り切れる感じじゃないというか…そもそも僕はオールマイトに見てもらってるわけで充分ですし…個性の調整も出来てない状態は自分にとっても、相手にとっても危険ではないかと…第一僕なんかが……」
「君はナンセンス界では他の追随を許さないな!!」
「な、ナンセンス界…!」
倒れてたオールマイトが話し出し、緑谷はがーん…という表情を浮かべる。オールマイトは口から出た血を拭うと、視線を緑谷に戻した。
「別に強制的な意味ではないけどさ…そこは全力で取りに行く!って笑顔で言って欲しかったなぁ……トップを狙うものとそうでないものの差は大きい、ヒーロー社会では大きく響くぞ」
「……」
「君の気持ちも分かるし、私の都合だ…強制はしない。でも、あの時の海浜公園での出来事は忘れないでくれよな」
「…はい」

緑谷はなんだか申し訳無さそうな顔で返事をした。確かにオールマイトの気持ちも分かる、けど…他の人たちだってトップを狙いたがってるわけだ。自分はそんなに目立たなくても良いと思っている。
だからあまり体育祭ではトップを狙いたいとは思ってない。
そんな気持ちもありながら、昼が過ぎて授業が終わった放課後。

「な、な、なにごとだぁ!?」
お茶子は教室の扉の前で叫び出す。
扉の前ではザワザワと人がいっぱい居る、恐らく隣のB組か普通科だろう。
「す、凄いことになってるね?、何十人位居るの?まず何があったの…?」
飛鳥は目の前の光景に目をまん丸にしている。まるで初めてと言わんばかりか…
飛鳥たち半蔵の忍学科では生徒は五人しかいないため、こんなにも多い数が居たとは知らなかったのか、呆気ない様子でいる。
「何だよこれ出れねーじゃん!迷惑なんだけどよ…」
峰田が呟くと爆豪が出てきてこう言った。

「敵情視察だろ、チビザコは引っ込んでろ」
だそうです。
「おい、緑谷…緑谷ぁ!!」
峰田は、この世であり得ないみたいな顔で爆豪を指差してる。
緑谷はゴメンねみたいな表情で峰田を落ち着かせると、峰田の様子すら眼中にない爆豪は悠々と扉の方に歩み寄る。何故こんなにも人が混んでるかと言うと…USJ事件についてのことだった。
「まあ敵の襲撃を乗り越えたんだ、体育祭の前に見ときてえんだろ」
爆豪の言葉のそのまんまの意味だ。敵の襲撃を乗り越えたA組の様子を見にきたのだろう。また敵情視察という意味も含んでいると

思うが…
　すると爆豪は皆んなに向かって…
「意味ねえからどけよ邪魔だモブ共」
　ザックリ言った。
「知らない人の事をモブって言うのとりあえずやめようか！」
「そうだよ幾ら何でも失礼だよ!!ホラ、謝らなきゃ…」
　止める飯田と飛鳥。飛鳥は真面目というより、優しくて真っ直ぐだからなのだろう、いけないことはいけないとキッパリ言う人間なのだろう。
「やれやれ、どんなもんかと見に来たが随分偉そうだなぁ…」
「！」
　すると扉の方、人混みの中から呆れた声が聞こえた。やがて人混みのザワザワがなくなる。
「ねえ、ヒーロー科に在籍する奴は皆こんななのかい？」
「ああ?!」
　その声の主に爆豪は獣のような低い怒鳴り声で反応する。
　直ぐに声の主が人混みの中から現れた。
「こういうの見ちゃうとちょっと幻滅するよなぁ…本当にヒーローかよって思っちまうくらいに…」
　ズイっと出てきたその男は、外見から見て普通ではあるが、髪はボサボサの紫色だ。
　その男は再び話をし始める。
「普通科とか他の科ってヒーロー科落ちたから入ったって奴、結構いるんだ。知ってた？」
「？」
　突然彼の言葉に皆は疑問を抱く。
「体育祭のリザルトによっちゃあ、ヒーロー科編入も検討してくれるんだってさ。その逆もまた然りらしい……俺の言ってることが分かるかい？つまりだ――」
　彼の言葉からしてどうやらこの男は普通科のようだ。
「敵情視察？少なくとも普通科（オレ）は、調子に乗ってると足元ゴッソリ

掬っちゃうぞっつー、宣戦布告に来たつもり」

（この人も…大胆不敵だな!!）

緑谷、飯田、お茶子、飛鳥はこの時そう思った。流石は雄英高校、普通の生徒やA組のような人達だけでなく、大胆不敵な人も居るのだと今知った。しかし大胆不敵な人は彼だけではなかった…

「オイA組のテメェらあ!!隣のB組のもんだけどよぉ!!」

途端、隣のB組からグオッ!と、どデカイが聞こえた。皆はそのB組の方に振り向く。

「敵と戦ったっつうから話聞こうと思ったんだがよぉ!エラく調子づいちゃってんなオイ!!」

（また不敵な人来た!）

四人はまた心の中で叫び出す。

B組の声の主の男性は、外見は髪は白くて目は厳つい…鉄とも思わせるような硬さが伝わる。

「本番で恥ずかしい事んなっぞ!!覚えとけよA組ぃ!覚えてろ!!」

そう言うとその厳つい男も背中を向けて去っていった。

「……」

じっ……

「……」

暫く気不味い沈黙が続いくと、爆豪は普通に何ともなかったように、皆を無視して帰ろうとする。そんな爆豪に切島は呼び止める。

「待てこら何サラッと帰ろうとしてんだお前は!!オメーのせいでヘイト集まりまくっちまったじゃねぇか!!どうしてくれんだコレ!そしてこの空気!!」

キレ気味にそう言うと爆豪は振り向き意外な言葉を投げかける。

「関係ねぇよ」

「はっ!?!」

訳が分からないという顔をする切島は大声を上げる。

「…上に上がりゃあ…関係ねえ」

爆豪はそう言うと、普通に帰って行った。
「くっ…んだよ爆豪…シンプルで男らしいじゃねえか！」
ジーン…と感激で身体を震わす切島。
「上か…一理ある」
頷く常闇。
「お前ら騙されるな！アイツあんなん言ってるけど敵増やしただけだぞ！」
指差す上鳴、いや確かに上鳴も間違ってはいない。
「ねえねえ柳生ちゃん！ウサちゃんキャンディー食べに行こうよ！」
「ああ、そうだな」
雲雀は流石と言ったところか、マイペースでありながらこの場の空気をサラッとスルーした。そんな雲雀の誘いを受けている柳生も十分凄いとも言える。

なんやかんや言って、皆は呆れてる一方…だが爆豪の言葉に何人かは納得したのか、昨日のことが起きて冷めてしまった彼らの魂が、再び沸騰し、熱が出てきて闘士を燃やす。

緑谷は帰るのか、廊下を歩いてる際に…
「緑谷くん！」
背後から、自分の名前を呼んでる女性の声が一人…それは…
「飛鳥さん!?」
飛鳥であった。飛鳥は帰る緑谷に歩み寄る。
「あ、あのね……体育祭！私達は出れないし、応援することしか出来ないけど……でも、頑張ってね…！」
「えっ…？」
飛鳥の突然な言葉に、思わず息を飲み込み、顔を真っ赤に染めてしまう。流石に自分も恥ずかしくなってきたのか、飛鳥も顔を真っ赤に染める。
「ご、ごめん！変な意味じゃないんだけど……その～…　ほら、緑谷くんっていざと言う時にはとても頼りになるし、前に蛇女子学園に攻めにきた敵連合を撃退したのも緑谷くんの策があったからって、柳生ちゃんと雲雀ちゃんに聞いたの…」
「あっ…！そ、それでか！」
緑谷は納得したのか、手のひらをポンと叩く。納得した緑谷を見て「そうそう！」と頷く。
「あと…緑谷くんっていざと言う時には頼りになるけど…それと同時にホラ、個性を使ったら傷が凄いし…昨日だって敵との戦いで使って壊れちゃったでしょ？だから……体育祭とかになると無理して身体壊しちゃうといけないから…」

「あ、飛鳥さん…」
（飛鳥さんが此処まで心配してくれてるなんて…流石は半蔵様の孫だなぁ…）

緑谷は初々しいのか、つい口元が緩み微笑んでしまう。
ハッと我に返った緑谷は、飛鳥を見つめて…
「ありがとう！飛鳥さん!!でも、もう大丈夫だよ！」
真っ直ぐな目で、笑顔でそういった。
「…っ！うん！分かった！『一位』取れると良いね！」
「っ！」
飛鳥はそう言うと、手を振りながら廊下を走って帰っていくのであった…

「……」
（僕は…）
そんななか、緑谷は飛鳥の後ろ姿を見送りながら、決意と覚悟を決めた顔を浮かべる。
（僕は…バカか…！皆、みんな…それぞれ目標があって全力でやっているのに……飛鳥さん達だって応援してるのに、僕は…！生半端な気持ちで……そんで、そんで…！）
体育祭では別にそんなに目立たなくてもいいと、一位なんて目指さなくても良いと思っていた。だが今は違う…それぞれの意見を通して変わってきた。自分が何をどうするべきなのか、己が目指す目標がなんなのか…

そしてオールマイトが言ってた言葉を思い出した。

『海浜公園の事を忘れないでくれよな』

緑谷はその言葉を思い出し、噛み締めて…グッと己の心に強く打つ。

二週間後…雄英体育祭当日

外はマスコミやプロヒーロー達の多くが行列になって並んでいる。どうやら敵への警戒、防止としての入場検査があるそうだ。その為外では人混みが凄いことになっている。

1ーA控え室にて…

「みーんな!お菓子いっぱい持ってきたからね〜!運動会頑張ってね〜!」

「…雲雀、もう突っ込まないからな?」

雲雀の子供じみた表情、そしてまだ体育祭のことを運動会とよぶ雲雀に、切島はため息をつく。

「雄英の体育祭に、観戦として斑鳩や葛城も誘っておいたからな…感謝しろよ」

「う、うん…ありがとう柳生。でもなんで上から目線?」

柳生の自慢気に見える態度に、尾白は目を細めて優しくツッコミを入れる。

「さぁ皆んな！もうじき入場だ、準備は出来てるか!?」

「出来てる、出来てるからとりまその変なポーズやめなされ」

真面目な委員長、飯田が大声で叫ぶが皆んなは聞いてない様子、耳郎は軽く突っ込む。

他の人もどうやら緊張しているようで、峰田なんかは人という文字を手の平に指でなぞっている。

緑谷は心臓の位置に手を置いている、大分緊張してる様子だ。

「おい、緑谷」

そんな時、後ろからふと声がしたので振り返ると、そこには轟が立って歩み寄って来てる。

「轟くん…なに？」

緑谷が言葉を返すと、椅子に座ってた爆豪と、飛鳥が二人に反応する。

「今ここで単直に言う。客観的に見ても、実力は俺の方が上だと思ってる」

「へ!?う、うん…」

轟の言葉にビクっと身体を震わせる。

「お前オールマイトに目をかけられてるよな」

「っ！」

「まあ別にそこは詮索するつもりはねえが…お前には勝つぞ」

轟からの宣戦布告。

「おっ？何だなんだ!?クラス最強トップが緑谷に宣戦布告か!?」

瀬呂と上鳴はどういう展開になるのかとソワソワして見ている。

「ぼ、僕も…！」

すると緑谷は冷や汗を滝のように垂らしながら、ぎこちない様子で口を開く。

「……と…轟くんが、なにを思って…僕に勝つのかは分からないし、客観的に見ても実力は君の方が……上だと思う…

でも！」
緑谷は大声で話をし始める。
「み、皆んな…目標があって全力で向かってるんだ…!!他の皆んなもトップを狙ってる!!」
「……」
「僕も、遅れを取るわけには行かないんだ…!!」
緑谷が言うたびに、色んな記憶が脳裏に浮かんでいく。

『貴方みたいな、最高のヒーローに!!』『海浜公園の事を忘れないでくれよな』『時間は有限』『兄みたいなヒーローになりたいんだ』『上に上がりゃあ関係ねえ』『一位取れると良いね！』

「だから、僕も本気で獲りにいく…!!」
「…おお」
「……ケッ！」
（緑谷…くん）

緑谷の威勢に、軽く感心する轟。そんな二人を忌々しく見つめ、紙コップを握りつぶす爆豪。緑谷の言葉に感激する飛鳥。

そして

「一年ステージ！生徒の入場だ!!」

生徒たちは、一本道に繋がってる門へと駆け寄る。
そんな中緑谷の心の中に浮かんできた言葉は……

『君が来た事を…世に知らしめてほしい！』

「出久～…」
家の中で心配そうに体育祭が映し出されてるテレビを観ている緑谷のお母さん、緑谷引子。

更には……

「……」
「……」
雄英体育祭が映し出されているパソコン画面を、まさかの敵連合の死柄木弔と漆月がジッと見つめている。

緑谷は強い思いを胸に抱きこう言った。

「了解、オールマイト…！」

そして緑谷たち一年Ａ組はステージへと舞出てきた。
この体育祭で何が待ち構えてるのか、そして体育祭を目の前に少年少女たちはどう思うのだろうか…
そんな大イベントが今、幕を上げる。

３４話「障害物競走」

体育祭を行う範囲はとても広く、個性を使って競い合う大イベントだ。
その大イベントで生徒たちの個性を見て、将来有力なサイドキックをスカウトして、雇うために全国から観に来るのだ。
多くのヒーローが来るため、敵の妨げにもなる有益な機会でもある。
特に『彼ら』にとっては…
『さぁーーて！いよいよ始まりましたぁ！雄英高校の体育祭!!実況者はこのオレ！プレゼント・マイクが分かりやすく実況するぜ!!ついでにそこのミイラマンもな！』
「おい…お前が勝手に連れてきたんだろうが…」
はしゃいでは大きな笑い声が響く中、相澤は呆れた顔でため息をつく。
体育祭は、一年、二年、三年へとステージが変わっている。
とても大規模な競技を行うために、振り分けなければいけないのだ。
だが今回は一年の方が観に来るヒーロー達が多い。
それは何故かと言うと、ＵＳＪ襲撃を耐え抜いたからと言える。
『お前らアレだろ！この大バトルを観に来たの!!雄英高校に敵の襲撃を受けたにも拘らず乗り切った新星たる生徒たち!!ヒーロー科！１ーＡ登場だぁぁーー!!』
「観るならやっぱＡ組でしょお!!!」

ワアアアアアーーーーーー!!
という歓喜の声が挙げるなか、１ーＡ組がゲートから歩んで行き登場してくる。
「う、うわぁぁ…！凄い人気だ……分かってはいたけど、やっぱり緊張が…」
ドキドキと心臓の音が鳴る緑谷、確かにこの中で大勢の人たちが観

に来るのは流石に緊張する。
「大勢の人たちが来て、ヒーローになるために何をどう見られるのかも、今後のヒーローとしての役割…なるほど!!ヒーローにとって必要なことだな！」
飯田は納得した様子で頷く。
「が、頑張らなきゃ…『父ちゃん母ちゃん』の為にも…！」
お茶子はこの体育祭で何かの目的があるのか、えらく気合が入っている。
「わー…スゲェ緊張すんな、なあ爆豪！」
「しねぇよむしろワクワクだボケェ!!」
切島は半分緊張の顔、半分がワクワクな様子だ。爆豪はそう言うと、また緑谷と轟を睨みつける。
「……体育祭、か」
轟は歓声をあげる観客達を見渡す。
「これほどの数となると…『アイツ』も来てるな…」
舌打ちをして再び体育祭に集中する。
嵐とも呼べるような馬鹿でかい歓声のなか…

「皆んな～～!!頑張れ～～!!」

その声にA組の皆んなは振り向くと、A組のベンチには飛鳥が座っており、手を振って応援している。
「あ、飛鳥さん！」
「じぇ、JKの応援！ひょおおぉぉーー！録画してえぜ！この瞬間を！」
緑谷は飛鳥を見ると、いつの間にか緊張が和らぎ、解き始める。峰田にいたっては興奮気味で飛鳥を見つめている。それも喜びのあまりにヨダレもたらして…汚い。

しかし応援は当然、飛鳥だけでなく…

「フレ～！フレ～！Ａ組!!」
「皆さん！頑張って下さい!!」
「体育祭もいいけどさ！やっぱりこの体育祭で大事なのは…おっぱいだとアタイは思うんだ！」
「葛城…そろそろいい加減にした方がいいぞ……ここでそんなこと言うと周りから変態だと思われるからな。まあもう既に変態だが…

まあ、それはそれとして…頑張れよお前たち…」
雲雀、斑鳩、セクハラの葛城、柳生も居る。

『続いてはヒーロー科のＢ組！サポート科のＣ組！Ｄ組！経営科のＥ組！Ｆ組！……』
次々と会場に出てくる一年の生徒達は、中央へと整列する。
「あれ？そういえば校長は？」
「三年ステージだってよ」
「じゃあ今回は誰がやるんだろ？」
観客達がザワザワと話し始めている。校長は毎年三年ステージにいるそうだ、ＵＳＪ襲撃を耐え抜いた一年Ａ組ならもしやとは思ったらしいが…

『静かに！』

ピシャァァン！と鞭の鳴る音が会場に響き渡る。全身に極薄タイツを着てるメガネをかけた女性、１８禁ヒーロー、ミッドナイトだ。
「おお、一年はミッドナイトが担当か！」

ミッドナイトは一年が整列している教壇に立っている。
そんな一年も少し疑問に思ったようだ。
「１８禁なのに高校にいて良いものなのか…」
「良い……！春花様を思い出すぜ……」
『アンタ達静まりなさい!!』
常闇が小さく呟くのを、峰田は鼻を伸ばしながらミッドナイトを見つめて春花のことを思い出してると、またピシャアン！とミッドナイトは鞭を地面に叩きつけ、音を鳴らす。
『選手宣誓!!』

ミッドナイトはマイクを持って宣言する。
「１ーＡ組！爆豪勝己!!」
ピクッと少し反応の様子を見せる爆豪。なぜ爆豪が選ばれたかと言うと、入試一位のため選手宣誓の権利があるようだ。
「入試一位だからな爆豪はー…」
「まあ、このクラスの最強は爆豪か轟かだし……」

上鳴と峰田は小声で爆豪と轟について話し出す。確かにそうだ。
爆豪は入試一位だけでなく、意外と繊細でみみっちい所がある。一方轟は、半冷半燃という二つのようで一つの個性を持つ男だ。
この二人はまさしく、学園内での最強と言われても過言ではないだろう…
爆豪は悠々と教壇に歩み寄り、ミッドナイトからマイクを受け取る。
爆豪は皆んなの目線を浴びてるなか……
「せんせー」

……

「俺が一位になる」

「やっぱりそうなるんかい!!」

1ーA組の皆んなはツッコミを入れる。

爆豪の相変わらずの言葉に皆んなはザワめきだす。轟は無表情で、柳生と飛鳥の二人はため息をつく。まあ何時もの事だから、大分慣れてきたようだ。

爆豪の宣誓を聞いたA組だけでなく、他の科たちもブーイングをあげる。ブーイングの嵐が爆豪に押し寄せる。

「何だよこのヘドロ野郎ーーー!!」

「フッザけんじゃねーよ!」

「どうして君は人を蔑めるようなことを言うんだ!!」

「巻き添え食らう俺たちの気持ちも考えろー!!」

A組の飯田と上鳴の声があるが、それよりも他の科目のブーイングの方が激しい。

そんな激しいブーイングの嵐の中、爆豪は親指をクイッと下に向け、皆んなを見つめる。

「お前ら俺の生きのいい跳ね台になってくれや」

ブーーー!!!

爆豪の発言でまたもや激しいブーイングの嵐が巻き起こされたの

である。
「あんの野郎…昨日に続いて…！偉い自信だなぁオイ!!この俺が直々に潰したるわ!!」
この前のＢ組の厳つい男は爆豪を睨みつける。先日の事で、爆豪のことが嫌いなようだ。
「まあまあ、落ち着きなよ鉄哲……この体育祭でアイツらＡ組に、絶えることのない屈辱を味わってもらおう…僕たちＢ組にね」
その少年は、鉄哲という男の肩に手を置き落ち着かせる。
「お、おお！そうだったな…悪りぃな物間！」

爆豪はスタスタと悠然に教壇から下りて戻ってくる。
「……」
そんな緑谷はジッと爆豪を見つめている。
（自信…いや、違う。これは…周りに敵を作らせることで、自分を追い込んでるんだ……）
あの日…戦闘訓練が終わったあの時に、爆豪が緑谷に言った言葉。

『こっからだ！いいか？こっからてっぺん取ってやる!!』

（かっちゃんも…ここで一番を取る気なんだ…本気で！）

ドンッ！と爆豪はワザと緑谷の肩に当たる。

（まあ、人を巻き込んじゃう癖は相変わらずだけど…ってかコレって僕ら巻き込む必要なくない？ワザとかな？）

緑谷は冷や汗を流して、ハァ…とため息をつく表情になる。

かれこれまだブーイングの嵐は治らず、Ａ組以外の皆んなからは敵意の目線を浴びせられる。とんだいい迷惑だ。

『ＹＥＡＲーー!!イレイザー！お前んところのクラス面白いな!!』

『うるせぇよ、アイツらが勝手に敵に塩送ってるだけだろ…まっ、どの道コイツらは他のクラスたちと戦うことになるからそれに越したことはねーけどな…』

プレゼント・マイクがゲラゲラと笑ってるのに対して、相澤は呆れてる様子だ。

と言っても爆豪一人が敵に塩を送ったのだが…

『さあ早速始めるわよ！まずは…障害物競争よ!!』

「障害物競争…！」

飯田が呟くとミッドナイトは続けて解説をする。

『因みにこれは予選よ！これを乗り切ったらそこからが本番になるんだから!!この競技で何十人ものの生徒が涙を飲んだわ！最初の試練

を乗り越えられるかしら!?』
障害物競争は、約４ｋｍもあるスタジアムの外周を沿っていきゴールを目指すといった競技だ。だが４ｋｍもある距離と同時に、それなりの障害物があると推測されるだろう。何が彼らに、彼女らに何が待ち受けてるのか。
それは誰も知る由もない。この競技は個性を使って乗り切るものなのだが、スピード系の個性を持ってないものの場合は、４ｋｍも走らなければならない…つまり体力勝負も含まれているのだ。また、ルールを守れば何をしたってＯＫだそうだ。その時点で既に胡散臭い…
皆はゾロゾロとゲートの前に集まってきてる。そのゲートからは大型モニターが見受けられる。どうやらアレを繋げてテレビなどに放送されているようだ。

しかも現在生放送中。

「ぎゅうぎゅうだなぁ…」
皆それぞれが指定の位置についてる中、人混みの行列に緑谷が呟く。
『そろそろ始まるぜ！3、2…』
プレゼント・マイクが実況でカウントしてると緑谷はふと思い呟いた。
（アレ?それじゃあもう此処からは…）
そう思ってると

『1！』

「最初のふるい」
先頭にいた轟が呟く。
そして……
『スタート!!』

スタートと同時に轟は走り出し、個性の氷を使って一気に皆んなの足止めをした。
「!?」
先頭…轟の近くに居た生徒たちは氷を喰らい、足が凍らされ動けない状態だ。
「う、うおぉ…!?冷え…!」

マイクが盛り上がってる反対、相澤は冷静であり、煩いマイクにため息をつく。

「あとは追いつかれないように…」
「そう上手くいかせねぇよ!!半分野郎がぁぁ!!」
「!」
轟に叫んだのは、爆破を使って空中に回避した爆豪だった。
そして後ろにはA組のみんなが回避に成功。後ろにいた他の科も無事のようだ。
「よっしゃあぁ〜〜!!轟の裏の裏をかいでやったゼェ!!オイラたちがそう簡単に掛かると思うなよ!?」
峰田が半分興奮している。避けれたのがよっぽど嬉しかった様子だ。
「二度目はないぞ!」
轟に向けてそう叫ぶ尾白、どうやら戦闘訓練にて轟に手も足も出ずやられたのが屈辱だったのだろう…
「チッ…思ったより回避されてるな」
轟はそんな彼ら、彼女らを横見で舌打ちをする。

『おおーー!!早速スゲェ展開だなコリャあ!!誰が優勝すんだろ!?なぁイレイザー!?』
『知らん…が、俺らが負けることはない…負けたら容赦しないからな……』
『イレイザークレイジーだな!!』

『おい、どういう意味だ』

マイクと相澤が話し合いをしてると轟は早速第一関門に突入したようだ。

観客席で観てる半蔵の皆んなも盛り上がる。

「おお！最初はあいつか！あの…なんだ、あの半分…誰だっけ？話してねえから分かんねえや…はは！」

「葛城さん…あの人は轟さんですよ。って言っても知らないのも無理はありませんか……」

能天気な葛城に、斑鳩は目を瞑り苦悩する。そんな斑鳩を見て、

「ん？付き合いの浅いお前は知ってるのか斑鳩？」

柳生は、轟のことを知ってる斑鳩に質問すると…

「ええ…知ってるも何も、あの人はあのナン…」

「あっ！見てみて皆んな！アレ！」

斑鳩が言いかけた途端、飛鳥は斑鳩の肩を揺さぶり、モニターに指をさす。そのことに一時話すのをやめた皆んなはモニターを見つめる。

『さあ！まずは早速障害物出てくるぜ!!その名も…』

「なっ…これは…？」

大きな広場になってる第一関門にはなんと…

『ロボ・インフェルノ!!』

超巨大なロボ。雄英入試の時の仮装敵（ヴィラン）であり、０ポイ

ントになってた言わゆるお邪魔虫だ。
「これってあの時の…!?」
緑谷は知っている、緑谷は入試に合格できたのはある意味この巨大ロボをぶっ飛ばしたからだ。
相手一体で緑谷の腕はボロボロになったのに…それが。
何十体もいる。
そして…
「オイ!ニンゲンガデテキタゾ!!ブッ殺セ!」
他の仮装敵も登場のようだ。
「入試の時の仮装敵…?こんなものが……国からどのくらいお金が出るのでしょうか?」
轟、八百万は推薦のため分からなかったから、分からないのも無理はないだろう…いや、八百万、そこは今考えなくても良いだろう……
一方轟は…

「俺も負けてらんねえな」

右側がパキパキと凍てつく音がなる。
すると、巨大なロボは一瞬にして氷漬けになった。
「何よりも…『クソ親父』が見てんだからな……」
その時の轟の表情は、焔との戦いで見せた、どこか哀しく、怒り混じった表情を見せる声で。
ロボはグラグラと揺れながら…
「おお!A組スゲェな、てかこんなのと相手したのかヒーロー科!よし、氷漬けにされてるうちに通って…」
「やめとけ」
轟がそう叫ぶと
グラグラ…グラグラ…
「?」

皆んなは何のことか分からない顔をすると轟が続けてこう言った。
「態勢が不安定な状態で氷漬けにしたから…」
ズドォォーーーーーーン!!
「倒れるぞ」
ロボが倒れて轟音がなり響く。その下に生徒が下敷きにされたような様子もあったように見えた。
『轟選手!!妨害&猛進〜!!轟やることがクレイジーだぁぁ!!』
ワアアアアアアーーーーーー!!!!とまたまた一気に観客は歓声をあげる。
「つってももう遅かったか……」
他の生徒を心配しないどころか、後ろすら振り向かない轟に、生徒たちは不安の表情へと変わっていく。

「うわぁ!まじかアイツ容赦ねえな!死人出たんじゃねえか?」
「体育祭ですし、幾ら何でもそこまでは…」
「いや、あり得るぞ…」
モニターを見つめる葛城たちは、轟が巨大ロボを凍り付けにし倒したことで、下敷きになった生徒を見て驚く。確かにこれは能力を使ったものとはいえ、体育祭だ。ましてや学生…死人が出るのはまずないだろう……
だが、ビルほどでかい巨大ロボが倒れたのだ。これを見て死人が出ない方が逆に疑わしいくらいだ…もしそうだとしたら……

「ふえええぇぇん!!潰されちゃった人居るよ!?大丈夫かな……?酷いよこの運動会!全然面白くないよ!運動会ならもっと楽しくて面白いのに…何なのこの運動会!!可哀想だよ皆んなが!!」
「雲雀ちゃん……これまず運動会じゃないからね…?あと…そういう競技だからコレ…」

先ほどまでは運動会と思ってルンルン気分でいた雲雀は、想像とは違った運動会ではない体育祭を目の前に、涙を浮かべては大声で叫んで居る。それを見てる皆んなは半分呆れて半分苦笑する。
「けど…轟くん凄いな……さすがだよ……でも……皆んなだって……」
飛鳥は唇を噛み締めて…

(皆んななら……どうするの?)

こんな状況の中、皆がそれぞれどう動き、どう立ち向かうのか……飛鳥はそう考えながら皆がゴールすることを願っている。

そんな中、緑谷は
「……」

（今までは、不安で怖くて…動くことが出来なかった…でも…！）
前に入試で受けたことを思い出した。仮装敵が攻めてくる中、緑谷は動くことが出来なかった。

『なんで！身体が動かない…!?』

だが、今は違う…緑谷は逆にワクワクと胸を高鳴りこう思った。
（どうする…？僕!?）
むしろ微笑んで…

体育祭の障害物競走を観ている一人の男は、ベンチに座りながら不機嫌そうにモニターを見つめる。
「……フン……あのバカが……『早く使え』

『焦凍』」

その男は立派な燃える髭を生やして、小さくそう呟いた。

雄英体育祭、予選　障害物競走。
現在一位、轟焦凍

３５話「追い抜け」

障害物競争とは、その名のとおりレースに様々な障害物が待ち受けそれを駆使して乗り越える競技のこと。だが雄英の障害物はどれも伊達ではなく、そっとやちょっとでは簡単に潜り抜くことは出来ないレースだ。第一関門は『ロボ・インフェルノ』。仮装敵が生徒たちを敵とみなして攻撃してくる障害物だ。

個性を使って壊せば良いが、攻撃的な個性でない場合は回避しながら前に進むしかない。

また、各々の創意工夫が必要であり、実力を試される競技でもあるのだ。

『さあお前らもドンドン盛り上げてやってけよーーー!!!』

巨大ロボが倒され、生徒たちが棒立ち状態になって固まってるのに対して、マイクは声を荒げる。

轟が氷漬けにした巨大ロボは、体制が悪く倒れてしまった。巨大ロボが倒れ誰かが下敷きになる姿を前に生徒たちは見てしまった為、体が恐怖で動けれないのだ。

「お、おい…これ、さっきの倒れて……下敷きになったヤツ居たぞ？」

「こ、これ死ぬのか…？体育祭なのに死ぬのか…!?」

普通科やＢ組の生徒がワナワナと恐る恐る震えながら声に出すと、先ほど倒れて壊れたロボの装甲がグラグラと音を立てながら揺れる。

グラグラ…グラグラ！

「し…」

「？」

突如下から声が聞こえたので、装甲の方に目を移す生徒たち。するとそこからは…

「死ぬかあァァァァーーーー!!」

ドガアァァーーン！
大声で叫ぶあのA組の熱血漢、切島の姿であった。
『1ーA！切島が潰されてたあァァァァ!!大丈夫かよ！』
マイクのその声は心配そうには見えず、寧ろ面白かったのか、ゲラゲラと笑っている。
「クソ！轟のやつ…ワザと倒れるタイミングで凍らしやがって…俺じゃなかったら死んでたぞ!!」
切島の身体がガチガチの硬い身体になってそう言いだす。
切島鋭児郎『個性』硬化　体がガッチガチに硬化することが出来る。最強の矛にも最恐の盾にもなる。どれ位硬いのかは不明だが、コンクリートや巨大ロボよりかは硬いだろう。
「うおお！A組だったのか、てか生きてた!?」
「生きとるわ！」
苛立つ切島は声を荒げながら前方の轟を睨みつける。
「轟のヤツ、俺らも妨害か…早いとこ追いつかねえと…！」
切島が立ち上がろうとすると、ロボの装甲がまたしても揺れる。
グラグラ…グラグラ……
「ん？」
切島は疑問な表情を浮かべながら揺れる装甲に目を移すと声が聞こえる。
「クソ…A組のヤツは本当に嫌な奴らバッカだなぁ…!!」
ドガアァァーーン!!
そこに現れたのは厳つい顔をしたB組の生徒だった。
「俺じゃなかったら死んでたぞ!!」
この男、切島と同じことを言っている。
『鉄哲も潰されてたーーー！ウケるーー!!てかアレだな！お前ら似た者

同士だなオイ!!』
「ん？」
マイクは切島と鉄哲の二人が似た者同士の為、笑いのツボが入ったのだうろかまたもやゲラゲラと笑いだす。
鉄哲徹鐵『個性』 スティール　体が鋼のように硬くなる。最強の矛にも最強の盾にもなれる。ただし鉄分が切れると個性が使えなくなる肉弾戦の個性。
切島は自分の個性と鉄哲の個性が同じタダ被りだと知った途端、嫌気を刺されたのか立ち上がり再び走り出す。
「個性タダ被りかよ！タダでさえ地味なのに……まあけど俺と同じで喜ばしいのか虚しいのか…分かんねー!!コンチクショー!!」
声を荒げながら走り出すと、切島の存在に気付いた鉄哲は首を傾げる。
「アイツ…俺と同じ個性か？」
この時硬い男と男の出逢いである。

「フン！クソが!!」
ボンボンと音を鳴らしながら巨大ロボの上、空中に浮遊してるのは、1ーA。爆豪勝己である。
『オォーーーッと爆豪!!まさかの此処で真正面ではなく上からの攻めに入ったあぁーー!!』
「ケッ！煩えなクソ！」
マイクの声を聞いてた爆豪は苛立つ。
爆豪はまず真正面の攻めは余り良くないと判断したのか、爆破の威力を応用して空中からの攻めに入るのを考えた。流石は爆豪、考える方が違う。

しかし上から攻めるのは爆豪だけではなかった…
「お前、上から攻めるのね！」
「！」
後ろには巨大ロボにテープを貼ってやって来た瀬呂。
「やはり戦闘を避けるか…」
黒い影を使って瀬呂と同じくやって来た常闇。
「へへっ、爆豪ばっかカッコいい所見せられっかよ！俺たちだってヒーロー科なんだからな！」
瀬呂はそう言うとテープを千切っては、またテープを発射させて前方の巨大ロボに貼っつける。
瀬呂範太『個性』テープ　　肘からセロハンテープ的なものを発射！巻き取って移動するもよし！切り離してトラップにするもよし！
「着地だ、黒影（ダークシャドウ）！」
「アイヨ！」
常闇がそう言うと、常闇から出てきてる影っぽいモンスターは返事をする。

下の方、真正面から攻める生徒たちは…。
多くの生徒が個性を使って巨大ロボ以外の仮装敵を倒している。
そんななか、個性を一切使ってない生徒が一人…それは仮装敵の襲撃にすら回避する地味で緑色の髪をした頭がボサボサな少年、緑谷出久であった。
（この競技はあくまで予選…そんで此処はまだ第一関門…腕は犠牲には出来ない…だから、ワンフォーオールは使えない!!）
緑谷はこの状況でも冷静に考えながら打開策を考える。
緑谷が走っていると、ふとある物を目につけた。
（そうだ…！これなら『使えそう』だ！）
緑谷は少し違う方向に走っていくと、そこには先ほど轟によって倒された巨大ロボの装甲を緑谷は目をつけたのだ。

その装甲の大きさは、丁度緑谷が背負える分の大きさであり、それほど重くもない、緑谷にとって凡庸性に優れた品物だ。
それを緑谷はロープで背中に縛ると走っていく。その緑谷に目をつけた仮装敵が攻めてくる。が、逆にそれが緑谷の狙いだ。
（助走をつけて…そんでぇ!!）
仮装敵が緑谷を追い、逃げるように見せかけた緑谷は振り返り装甲を思いっきり横殴りをする。
バゴーーーン!!
故障した仮装敵はもう動かなくなり、その場で倒れる。「これ思ったより優れてる…！この調子この調子!!」
すると突然爆発音が響いた。
ドゴオオォォーーーーン!!!!
その爆発を喰らった巨大ロボは動かなくなり、故障した。
「チョロいものですわね！」
緑谷が振り返ると、そこには大砲を押しながら答える八百万であった。
恐らくあの大砲は八百万の個性で作られたものだろう、それが出来るのは彼女しかいない。
「あの入試敵（ヴィラン）が、ああも容易く…！」
緑谷は少しショックを受けていた。前に緑谷のワンフォーオールで腕を壊してしまったとはいえ倒すことは出来た。そんな敵が轟、八百万などと、推薦入学者が難なくクリアしていってるからだ。
『思ったより越されてんなあ!!まあ序盤だし中々やるじゃねえかリスナー達よぉ！』
『まあ…入試の時と今の状況は違うからな。状況が違えば見えかたも違うってことだ…』
相澤はえらく真剣な様子だ。
『入試ではヤツはお邪魔として登場…つまりメリットがないからだ、見る目も変わりゃあ倒せるだろ……まっ、この体育祭では如何にどのように実力が試されるかが見物だな』
Ａ組、Ｂ組、そして普通科にサポート科を見つめる。

（ぶっちゃけ他の科も決して悪くはない…ただ、立ち止まる時間が短い）
Ａ組は難なくクリアしていく様子だ。
（やっぱりあの時（ＵＳＪ襲撃）の経験が大きいな……それだけじゃない、俺は見たことないから分からんが、蛇女子学園での戦いも、奴らを立派に強く成長させている）
ＵＳＪ襲撃で耐え抜いた者たちは、一足先に敵との戦闘を積んでいる。
経験ある者とない者の差とは正にこの事だ。敵との戦闘にて少なからず色々な事を感じた者がいる。

恐怖を植え付けられた者。
近くでその身で感じた者。
プロの世界を見せつけられた者。

または…

忍の力を肌身で感じた者。
忍の力を越えようという者。
忍の恐怖を感じた者。

そう言った者たちは少なからず、この先まだまだ成長する余地があるという事だ。

（まあこれを機に、一位を取るのがどんな意味を表すか…そして各々が何を体験したか…がこの体育祭の勝利を握る鍵だな…）

相澤はジッと競争を見つめている辺り、実況はしない。

一方現在1位である轟は…
「……フゥ」
個性を使いぱなしなので少し息が切れてるのか、それとも疲れによるものなのか、ため息をつく。現在第二関門に近いところだ。
(後ろに見えるのは…)
気になって後ろを振り返ってみると、爆豪の姿があった、近い訳ではないが決して遠い訳でもない。ペースを上げてきてる。
(流石は爆豪と言ったところか……アイツか緑谷が来ることは予想してたが、緑谷の姿が見受けられないな……)
轟も考えながら少しずつペースを上げていく。
そして轟に、皆に待ち受けてる次の難問は…

『さてブッチギリ一位の轟は第二関門に突入だあぁぁーー!!奈落の底に落っこちたら即ゲームオーバー!!命がけの綱渡り、その名もぉ~…』

「なるほど…そういう感じか……」

『ザ・フォール!!!』

前からはほぼ地面がなく、奈落の大穴となっており、あるのは頑丈なロープだけだ。
つまりこれを突破しないと次には進めないという事だ。
だが轟にとってそれは全く関係なかった。
「問題ない…」
そう呟くと氷を重ねてロープを凍らせ橋にし道を作っている。此処にとっては轟の十八番だ。
(後ろは……氷使っても問題ねえか…滑って落ちるのがオチだしな

…）

轟は後ろを見て心の中でそう呟いた。確かに轟の個性なら、ある意味妨害にもなる。細長く、頑丈なロープとはいえど、氷を使えばロープも敢えて滑ってどうしようもなくなる。

『轟選手これも難なく突破かぁーーー!?本当にお前んところのクラススゲェな!!一体どういう教育してんの!?あっ、合理的主義ってやつか!』

『わかってたら言うな……』

マイクの無駄な質問に、呆れを通り越し、ため息すらつかなくなった相澤は、顔を巻かれてる包帯から見える目で、ジッと飛鳥たちを見つめる。

（こいつらを、皆んなの身近に居させるのは、『これからの戦い』に向けてだ……敵連合が忍を狙ってる以上、油断は禁物。それどころか奴等が動き出す際、ほぼ忍が関わってきてる。これから此奴らが奴等を対抗するためにも……個性について見極め、対策し、成長して貰う……その為だ。まあもう一つは……）

また視線をモニターに移すと、そのモニターには雄英生徒たちが必死に走っている姿だ。

（此奴らと一緒に戦う為だ）

相澤は心の中で、そう言った…

一方、飛鳥たちは…

「第二関門は、綱渡りだね～…それも登る方じゃなくて渡る方の……落っこちたら終わりって、本当に命懸けみたいだね…」

飛鳥は第二関門の『ザ・フォール』を見て、固唾を呑む。忍の訓練でも綱渡りや綱を使って登るのはやったことはあるが…それをまさか此処で実戦するとは…

「私達ならともかく…奈落の下ってどうなってるんだろ？……あっ！あそこの人落ちた！」

「……死には…しねえだろ……流石に……なんかクッションがあるんじゃねえか？」

「……そうであると信じたいですね……」

「あのプレゼント・マイクってやつ、そこについては触れてなかったな…」

「……ねえ、死んじゃうの？この運動会本当に死んじゃうの？雲雀、死んじゃう運動会なんて聞いたことないよ…」

「雲雀ちゃん…色々間違ってるけど、死んじゃう運動会は私も聞いたことないな……」

飛鳥、葛城、斑鳩、柳生は奈落の下が気になりソワソワしてるなか、雲雀は涙目になって心配している。死んじゃう運動会…そんなの誰も聞いたことないよ…と飛鳥は苦笑しながら雲雀を見つめるのであった。

「むっ、爆豪のヤツ大分追いついてきたな…スロースターターだ…」

柳生はスルメイカを食べながら、爆豪を見つめてる。

「蛇女ん時も思ったんだけどさ！あの二人ってスゲェ強えよな！アタイ的には爆豪ってヤツが勝ちそうだな！漢気あるし、不良っぽいところもあるし、アタイみたいに真っ直ぐだしな！」

豪快に笑う葛城に、斑鳩は「少し静かにして下さいよ…」と苦悩の表情を浮かべる。

「まあまあ、あっ！そうだ…さっき話しが逸れたんだけど、斑鳩さんは轟くんのこと知ってるんですか？」

飛鳥は葛城と斑鳩の様子に苦笑を浮かべてそう聞くと、斑鳩は口を開いた。

「ええ、知ってますよ…彼は『Ｎｏ．２ヒーロー　エンデヴァー』さんの息子さんですから」

「「「「!!??」」」」

その言葉に皆は斑鳩を見つめ、その後再びモニターに映ってる轟の姿に視線を移した。そのことに今まで気付かなかった飛鳥たち三人は驚愕している。

「そ、そうなの…？Ｎｏ．２ってことは、オールマイトの次に凄い人なんだよ…ね？」

「轟のヤツ、そこについては俺たちに話してなかったよな…？」
「轟くんのお父さんって、ヒーローなんだぁ～…雲雀、驚きだよ！」

飛鳥と柳生の反応はともかく、雲雀の反応は本当に驚いてるのかどうか疑わしくなるくらいだ。
Ｎｏ．１ヒーロー　オールマイトは平和の象徴と謳われ、Ｎｏ．２ヒーロー　エンデヴァーは事件数トップの燃焼系ヒーローだ。他にもＮｏ．４ヒーローのベストジーニスト、Ｎｏ．５ヒーロー　エッジショットなど、今この世で最も重要なヒーローなのだ。
ただ、Ｎｏ．１とＮｏ．２はよく比べられてしまっているが……

「え？でも、なんで斑鳩さんがそれ知ってるんですか？」
飛鳥が首を傾げてそう聞くと、斑鳩は微動だにしず、モニターを見てるまま飛鳥に振り向かない。
「知ってるも何も…前に一度『会った』ことはありますからね」
「「えっ!?」」「なっ!?」

なんと、斑鳩はあの世界で最も強いヒーロー、Ｎｏ．２の実力を持つエンデヴァーと会ったことがあるそうだ。そのことに皆は驚く様子を浮かべる。そんな飛鳥は、冷や汗を垂らしながら恐るおそる聞いてみる。

「い、斑鳩さん…知ってたんだ……で、でも……なんで斑鳩さんが知ってるの……？轟くん、そこには触れてなかったし、斑鳩さんを見ても何の反応も取らなかったんだけど…」
「ああ、それは私が半蔵学院に入る年頃、鳳凰財閥とエンデヴァー事務所の人達がパーティーで祝福してくれたのです。鳳凰財閥と彼処は世論としても、企業としても仲が良いですから……当然エンデヴァーさんも忍の存在を知ってますし、私が忍として素質があり、上層部や半蔵学院に認められたからの祝福だそうです。まあ、私が忍だという存在を知ってるのは多分エンデヴァーさんだけだと思いますけど…」

「な、仲が良かったんだ……よく分からないけど、凄いね…？そ、それで？轟くんとは会ったの？」
飛鳥は斑鳩の話に興味を持つが、斑鳩は難しいような顔で話し出す。
「正直言って、会ったというより、一目見た…と言った方が宜しいですわね……まあ昔の私は他人との関わりは持たない方でしたけど…」
「ありゃあ相当節が固かったよな斑鳩のやつ……アタイがおっぱい揉んでも無反応だったんだぜ？」
「ちょっ!?そ、そそ…その話はしないで下さい！／／／／」
斑鳩が話してるなか、葛城は斑鳩の黒歴史を語ると、頬を赤らめ声を張る。そんな斑鳩の反応に、葛城は「キシシ…！」と、エロ親父のような薄い笑い声をだす。

「そ、それで…？」
すると飛鳥は続きを聞きたいのか、斑鳩に身を乗り出すかのように、顔に近寄り、目を見開く。そんな飛鳥を見て斑鳩は咳払いして話しだす。
「それでですね……私は一声かけたのですが……特に何の反応もなく…『…どうも…』とでしか言ってませんでしたね……それっきり目も合わせませんでしたし……」
『どうも』…たったのその一言だけだったという。その言葉はとても冷たく、昔の斑鳩のように、他人に関わりを持ちたくないような目だったそうだ。いや、それ以上の何かがあったようにも見えたという。
「そ、そうなんだ……で、でも…きっと何か事情があるんだと思うよ！だってホラ！今の轟くんはそんな風には見えないし！多分斑鳩さんの勘違いか、たまたま機嫌が悪かったんじゃないかな？」
斑鳩の話を聞いた飛鳥は、そんなことないと慌てた様子で斑鳩にそ

う言った。しかし斑鳩は納得してない様子だ。
「だと良いのですがね。まあその頃は特にそれほど気にしてなかったので……
あっ、ただ…」
「ただ？」
何かを思い出した斑鳩に、皆んなはまたまた視線を向ける。
「エンデヴァーさんから忍の『訓練』については色々と聞かされましたね」
「訓練？でもなんで…？」
「それについてはよく分かりませんが、ただ私がハッキリ覚えてるのは…あの人最後にこう言ったんです……」

斑鳩の脳裏に浮かぶのは、炎の如く燃え上がるエンデヴァーの姿…
そして……

『ウチの焦凍は…俺を超え……オールマイトをも超える『義務』があるからな……だから、君たち忍がどう強くなるのかを聞きたくてね……失礼した』

「そう仰ってましたね…」
斑鳩は静かにそういうと、その場の空気も収まり、いつしか飛鳥たちは黙り込んでしまった。

（轟くんのお家って……どうなってるんだろう……？）
心の内に沸く疑問が、飛鳥の頭の中に靄が掛かったような感じがした。そんなモヤモヤとした空気にいながら、再びモニターに視線を移し、体育祭に集中する。

第二関門では…

「うわぁ！轟達先に行ってるね！」
ロープを如何ににどのように進むか考えてる芦戸が口を開く。
「綱渡なんて、私にとっては大げさすぎるわね。ケロ」
蛙吹はカエルの為、綱渡りなど余裕なのだろう。スタスタとスピードを上げて進んでいく。

「ウチらも負けられへんわ！行こ！芦戸ちゃん!!」
　お茶子が芦戸にそう言うと、後ろから奇妙な声が聞こえてくる。
「ふふふふふふフフフフフフフ!!甘い、甘いですねヒーロー科!!」
「え？」
　振り返るとそこには何やらゴーグルをかけ足はブーツで、サポートアイテムらしきものをいっぱい装着している謎の女性であった。
「あ、あなたは？」
「初めまして!!私はサポート科の発目明です！貴方たちヒーロー科だけでなく、我々サポート科もこの場を利用し全力でこのサポートアイテムを見せつける絶好の場なのです!!」
　どうやらこの人はサポート科らしい、だがこの大会では…
「え、サポート科?でも、この会場ではアイテムは持ち込み禁止なはずじゃ…」
　何事にも公平にするため、サポートアイテム及びコスチュームの着用、使用は禁止されている。
「フフフ、そこが甘いのですよ!!公平にするべく我々サポート科はアイテムを使って良いのですよ!!貴方たちヒーロー科はヒーローとしての公平を、我々サポート科としてはサポートでの公平を!!」
　つまり直接短く言えばサポート科は使用ＯＫということらしい。
「さぁ！見てできるだけデカイ企業!!」

　バシュッ！

　ベルトからワイヤーを発射させると離れた地に着く地面にかけて、飛び込む。
「私のどっ可愛い…」
　シュルルルル…とワイヤーを掛けたところに移動すると、ボタンをポチっと押す。
「ベイビーを!!」
　するとボタンを押した瞬間に足のブーツからボム!!と柔らかい音

が鳴り、なんとか着地したようだ。
「わぁー！サポート科だけズルい!!悪平等だ！」
サポート科の芦戸は不公平だと言わんばかりにブーイングを発目に向ける。
しかし、そんな彼女たちの後ろのある男は羨ましそうにニヤケていた。
「良いなぁ…」
その男は、ヒーロー科に宣戦布告した普通科の男子生徒であった。

なんやかんやでなんとか第二関門を突破した轟は、そろそろ第三関門へと突入しようとしている。
『さてさてさーーて!!1ーA組の轟リスナー！常に一位をキープしてるぞおォォーーー！これで最後だぁ!!』
「なっ、これは…？」
そこから先はごく普通のレース状になっている、だが地面からは、危険な匂いがプンプンとしている。

そう、気をつけるのはその『地面』なのだから…

『一見何もないように見えるがこれ実は超ハード!!何故なら地面には『地雷』を設置してあるからだ!つってもまあ怪我はしないがかなり威力高めだから足止めお邪魔トラップみてーなもんだ!!』

地面には高威力の地雷が設置されている。まあもし本物の地雷だったら、タダでは済まないのだろうが……これはあくまで体育祭、流石に命に保証のない競技などあってたまるかという話だ。

「……」

轟は少し地面をよく見て、細心の注意を払いながら、地雷に気をつけ走っている。ペースもなるべく落とさないようにし、精神を削りながら集中する。しかし……いつまでも轟の思い通りに事は運ばなかった……

「ハッハァー!俺はぁ…関係ねぇーーーーーー!!!」

ボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!

後ろから、猛烈なる爆発が鳴り響き、悠々と爆速で一気に追いついた、爆豪勝己であった。

「なっ、爆豪!まさかあの距離を一気に…!」

轟は爆豪を見て、この地雷ゾーンを躊躇なく突き進む姿に呆然としている。

「おいテメェ!半分野郎!!」

爆豪はそんな轟の様子を御構い無しに話し出す。

「宣戦布告する相手を…間違えてんじゃねーぞクソが!デクよりも、テメェよりも俺の方が上なんだよ!!」

「!!」

爆豪は横目で轟を睨みつけ、爆発でもろに食らってしまう。
だが、攻撃は爆豪だけではなかった。
「んなっ!?」
轟は爆豪の左の腕を掴んで凍らせた。
「爆豪、それはこっちの台詞だ……!!」
「半分野郎があぁ…!」
轟の睨み、そして氷の個性にまたしても爆豪は苛つかせる。

「悪いが…先行かせて貰うぞ…!」
「なっ、先を越されてたまるか!!」

轟が先を行こうとするも爆豪も走り出し、二人は互いに競い合う。
それを見ている飛鳥たちは……

「うわぁ、地雷か〜…まんま私たちがやってる訓練が実現したみたいだよね〜…」
飛鳥は前に地雷を全て避ける訓練で失敗してしまったせいなのか、嫌なものを見てるかのような目で、ブツブツと呟く。
「でも地雷ってどれくらいの威力なんだろ?」
「私たちがやってるような物じゃないんですか?本物だと死人が出ますよ…」
「だが斑鳩、第二関門で死者が出たらこれもでるぞ」
「……」

葛城が首を傾げてるのに対して、斑鳩はそう言うが、柳生はスルメイカを食べながらそう言うと、もう言葉は返ってこなかった。

「雲雀、運動会で地雷使ったことないよ?それって体育祭で使うものじゃないの?」
「雲雀ちゃん、ワザとなのかもしれないけど一応言うね…?運動会でも体育祭でも地雷は使いません…あとこれが体育祭だから」

「ふえっ!?そうなの!?」
「……雲雀ちゃん、これほどの鈍感な子は見たことないな……」
雲雀の驚くリアクションを見て、頭を押さえ込んでしまう飛鳥であった。

話は戻るが、轟と爆豪はそろそろゴールが近いところにまで進んでおり、ただひたすら、全力で一位を追い求める。
『終盤に入ってお前ら好みの展開突入ーー!!轟、爆豪の二人のリスナーが争ってるぜ!!!争いは争いをやめる!争いはやめられねえがな!!』
『何言ってんだお前』
マイクの興奮実況についていけない相澤はツッコミを入れた。観客たちはハチャメチャ歓声を挙げている。
(くっ…このままじゃ埒があかねえな…!)
轟は心でそう言い聞かせると…その瞬間に突然、誰もが予想してないことが起きた。

ドガアアアアアアアーーーーーーン!!!!

後ろから大爆発が起きた。その後ろ姿は…

『なんだなんだあァーーーー!?突然なる大爆発!!これは偶然か故意かあぁーーーー!?!!』

モニターでも…

「っ!?すげぇ爆発!!んだこれ!」

「この爆破は一体…?爆豪さんは前にいますし」

「……」

「大丈夫かな~…?アレは流石に痛そうだよね?」

葛城は先ほどの爆発で驚き、斑鳩と柳生は何処か妙に冷静で落ち着いている。(柳生は微動だにしないのんびりでクールといったところだ。一方雲雀は、痛々しそうな目で爆発したところをジッとみている。では爆発したのは何故?一体誰が爆発したのか?

「アレって……もしかして!!!」

飛鳥はそれをみて、思わずビックリした。目を見開いて…ではその人物は一体？

観客席で、その姿を見てたある一人の人物、オールマイトは無意識に両腕を上げてしまう。

（こ、これは…まさか!!）

オールマイトの予想は的中。

『1ーA組!!緑谷出久！猛追ダァぁーーーーー!!!』

３６話「第二回戦の幕上げ」

それはことが起きること数分前…

「うわぁ…なんだかんだで結構みんな切り抜いてきてるね…！僕も頑張らないと…」

それは緑谷が第三関門に入って直ぐのことだ、一番前に見えるのが、轟、爆豪の二人。この三人はゴールゲートの直ぐ近く、当然追い抜けるはずがない。

皆んなは懸命に地雷を踏まないように進んで行っているが、中には不注意、または間違って地雷を踏んでしまい爆発して足止めを食らってる者の姿も見えた。

「多分…このまんまだと追い越すのは無理だと思う…どうしよう、どうすれば…」

そんなことを思ってる時だった。

ドガアアアン!!

「うわぁ！」

生徒の一人が地雷を踏んで爆発してしまい吹っ飛んだ姿が見えた。

爆発の威力は高く、少し振り出しに戻ったようにも見える。

「……ん？」

緑谷はふと思ったことがあった、そう。この地雷の威力…高すぎると。

しかも足止めを食らってしまうとはいえ、これほど人を飛ばすものはそうそうない…また、もしこれを上手く使えば…一気にゴールへと行けるんじゃないか？と。

爆豪も爆破でスピードを上げて爆豪と轟まで来たのだから…なら。

「地雷をいっぱい集めて…上手く応用して使えば…二人の所まで行けるんじゃ…！」

緑谷の頭の回転の速さは、とても役立つ時がある。そうと決まれば早速地雷を掘って集めていく。

しかしモロに食らえばやはりタダでは済まないだろう…そうと思っていたが、緑谷は前に拾った巨大ロボの装甲がある。それを盾代

わりに使えば、無傷のまま上手く追い越せるのではないか？と。
だから…

「セイッ!!」

ドッ!!

今。

ドガアアアアアアーーーーーーン!!!!!

『1ーA組!!緑谷出久！猛追ーーーーーーー!!!!!』

これぞ、大爆速ターボ!!

緑谷は無傷のまま一気に他の生徒達を飛び越えて行き、轟達のいる場所まで辿り着いた。

「っ！緑谷…!!」

「んの…クソナードがぁぁ～…!!」

轟は緑谷の予想外の行動で戸惑い、爆豪は緑谷を睨みつける。

「す、凄いな…緑谷のヤツ、猛追だと？あの状況の中でか？」

モニターを見てる柳生は意外な出来事が起きたためか、スルメイカを食べる手を止めた。

「わ～!!凄いや！でも大丈夫かな～…？あんなに大きい爆発が出たら不味いんじゃ…」

この時に限って意外と気が鋭い雲雀は、疑問を抱きながら緑谷を見つめている。

「か～っ！これは意外だなぁ！一位か二位かって所でまさかの第三者かよ！」
葛城も柳生と同じく、予想外の出来事、緑谷の猛追に驚く表情を見せる。
「す、凄いですね…まさかもうあんな……そういえば、蛇女子学園に襲撃してきた敵連合と名乗る輩たち、脳無とやらを倒す策を考えたのも彼ですから、流石といった所なのでしょうか…？」
斑鳩は緑谷の頭の回転の速さに納得するが、それでも緑谷が猛追してきた事には驚きを隠せない。
「流石だな……緑谷くんは……何時もの緑谷くんじゃない位だよ……」
そんななか、飛鳥は流石だなという目線で緑谷をジッと見つめる。まるで彼ならやりそうな事だ。とか、無茶するところが彼らしい行動だ。だのと、目を僅かに細めて、微笑む。すると
（ん？アレ…？そういえば…
なんで私は緑谷くんの事になると、いつも気持ちが和らぐんだろ…？）
飛鳥は心の中に疑問を持ちながら、自分でもどういった気持ちか分からず、モヤモヤするのであった。

場所は変わり、現在第三関門（最終関門）では…

「うわあああぁっ!!」

落っこちて、地面に衝突しそうになる緑谷は慌てている。次に自分はどう行動を取るべきなのかを…自分はただ轟と爆豪を追いつく事だけを考えており、次にどうするべきかまでは考えていなかった。

（速度が下がっている！スピードも大分弱くなってきてる…追い抜けられ……）

「デク!!!!!」

「！」

緑谷が思考で物語っていると、爆豪が急に緑谷に叫び出す。

「俺の前に…立つんじゃねえ!!!!!」

緑谷に噛み付くような鋭い眼差しで睨む爆豪は、一気にその場で加速する。

（チッ…もう後のことなんざ気にしてる場合じゃねえ！後ろに道作っちまうが、今は！）

轟は右から氷を出して、地雷を防ぎ走り出す。爆豪と轟は、突如やってきた緑谷から追い抜かれない為に、二人は全力疾走で走りだす。
（くそっ！ブレーキが効かない今じゃ、このままだと結局追いつけない！）
緑谷は、もうここまでか…そう思った時だった。自分が衝突しそうな地面に目をやると、その地面にも地雷が埋まっていた。
（……いや、まだだ!!）
緑谷は最後まで諦めず、爆豪と轟の間に緑谷は装甲を使って思いっきり地面に叩きつける。
その瞬間…

ドガアアアアアアアアアーーーーーーン!!!

轟く爆発。轟と爆豪は緑谷が起こした爆発に巻き添えを喰らい、一瞬だけ進んでた足が止まる。緑谷は爆速を付け、再び前方に進む。
「や、や、やったぁぁ!!…ってて…」
緑谷は轟と爆豪を追い抜き歓喜の声を上げるが、地面に衝突したため体を打った。
「はぁ……はぁ……あと、少し！」
そう言い聞かせ、とうとうゲートを潜り抜ける……
『サァーーーてと！予選の障害物競走！お前ら優勝者誰を予想してた!?お前ら想像つくか!?誰もつかなかったろうぜ俺予想外だったから！
そう、障害物競走第一位は！こいつの名前をしかと覚えとけ！』
そして、会場に姿を現したその男の名は……

『緑谷出久の存在を!!!!』

障害物競走第一位、緑谷出久。

「緑谷くん!」

飛鳥は歓喜な声で思わず、緑谷の名前を呼ぶ。

「出久うぅ!!」

家にいた緑谷の母、緑谷引子は我が息子である緑谷の活躍に、大量の涙を流す。

バーではなく、ゴミや雑誌、食い物の食べカスなどが部屋中に散らばってる見たことのない部屋には、敵連合の輩『3人』が居た。パソコンに映されてる緑谷を、死柄木と漆月は忌々しい目で睨みつけ、そんな二人の様子をまるで我が子のように見つめてる『黒い工業地帯のようなマスク』を付けた輩は、視線をパソコン画面に変えると、そのマスクに隠されてる口から、ニヤリと口角を吊り上げた。

「漆月、これからこの先君は忍のみならずヒーローとの戦いも避けられないだろう…だから、常に考えて成長しろ…」

悪意を培い、邪悪とも思わせる男は、優しい声で、静かにそう言った…

場所は現在に戻り…

『二位、轟！三位、爆豪！他にもまだまだ遅れてご登場だぁぁ!!イレイザー！お前んところのクラス面白えな！俺めっちゃ好きになったわ！』

『知るか…煩え……』

『ヒュウウウウウウーーーーーーーーーーーーーーー!!』

イレイザーの背中をバシバシ叩いてるマイクに、相澤は不愉快そうな目でマイクを睨みつけると、これ以上やると不味いと判断したマイクは、冷や汗を流しながら背中を叩くのをやめた。

そんななか…緑谷は…

ニコッ！と、涙を目に溜めて堪えながら、ある人に満面な笑みを浮かべた。

そのある人とは……

「よくやったぜ……緑谷少年!!」

平和の象徴オールマイト。その姿はガリガリで細くやつれていている。オールマイトも教師だ。教師陣に紛れて体育祭を見ていたそうだ。いや、彼なら絶対に観るだろう…必ず。

(その泣き虫、治さないとな……緑谷少年は心が優しすぎて他人に遠慮するところがあるから心配していたが……どうやらその必要も無かったらしい!ゴメンな!)

必死に堪えてた涙を出してしまった緑谷は、腕でなんとか涙を拭う。それを見ているオールマイトは、まるで我が子のように優しく見つめて微笑んだ。

一方、二位と三位の彼らは…

「クソ!クソデクに……また……またァ……!!クソがぁぁ!!」

爆豪は忌々しく、悔恨の混ざった目で緑谷を思いっきり睨む。その隣にいた轟もまた同じく……

この第一種目で緑谷が一位だというのはとても大きなことだ。なにせあらゆる策を練り、個性を使わずに、体力勝負で追いつきながら、一位を取ることが出来たのだから。そう考えるだけで十分凄い。そ

れも、海浜公園で死ぬほど努力したトレーニングの成果として報われたのか…どちらにせよ緑谷が一位であることに変わりはない。

飛鳥たち半蔵側では、緑谷が一位になったことにより、彼女たちだけでなく、会場の観客全員が騒めいた。
「緑谷くん一位だよ!!やったヤッタぁぁーーーーー!!」
「良かったですね」
緑谷が一位になったことで大きく喜ぶ飛鳥。その横で微笑みを浮かべる斑鳩。
「二位は轟に三位は爆豪か…アイツ毛根までプライド硬そうだからな…二位ならまだしも、三位となると二倍くらい心へし折られたんじゃないか?」
「爆豪くんっていつも怒ってばっかだもんね〜」

一方、柳生と雲雀は爆豪について話している。まあ確かに彼の性格からして間違ってはないだろうが…

「おっ!他にも色々出てきたぞ!見たことねえやつらや面白そうな奴らばっかりだなぁ!」
葛城はA組のみならず、他の科目の生徒たちをみて興味を湧いたのか、ワクワクしながら見つめている。

〜〜30分後〜〜

集計が整った今、モニターに42人ものの生徒が映し出される。そう、この数こそが予選で合格することが出来た者たちだ。この者たちは当然第二回戦に進出できる。結果はこうだ。

障害物競走　順位

１位　緑谷出久
２位　轟　焦凍
３位　爆豪勝己
４位　塩崎茨
５位　骨抜柔造
６位　飯田天哉
７位　常闇踏影
８位　瀬呂範太
９位　切島鋭児郎
１０位　鉄哲徹鐵
１１位　尾白猿夫
１２位　泡瀬洋雪
１３位　蛙吹梅雨
１４位　障子目蔵
１５位　砂糖力道
１６位　麗日お茶子
１７位八百万百
１８位峰田実
以下略…

以上が、障害物競走を乗り越えた者たちだ。勿論Ａ組は全員なんなくクリアだ。
……青山はヤバかったが…（注意　青山優雅　４２位）

『さっ！確認は終わったかしら？そうと決まれば早速次の第二回戦に突入よ！』
「なんでもかんでも雄英って早速なんやな……」

ミッドナイトの言葉に、お茶子は呆然と見つめている。

『それでは第二回戦は～…『騎馬戦』！』

第二回戦は騎馬戦だそうだ。

ルールは簡単。合格した４２人はバラバラになり、騎馬を作る。その組んだチームをＰを合計したものを持ち点にして、チームのリーダーは鉢巻を巻いて所持する。

それぞれのチームでＰを奪い合いう至ってシンプルだ。

因みに得点は順位ごとに違う。では、早速緑谷出久のＰは？

「えー、以上！ルールの説明は終わりよ！さて…まずは一位から…緑谷出久！得点は…

１０００万Ｐよ！」

緑谷出久　１０００万Ｐ

「え？」

その言葉を聞いた途端、緑谷は思考停止状態になり、彼を除いた４１人ものの生徒は、獲物を見るかのようにジーっと見つめる。

「あ…えと……え？千…万……？」

滝のように流れる汗、そう…このとき知った。緑谷出久は狙われた…と。

「せ、千万!?緑谷くん早速難題に突入だよ!?」

飛鳥は緑谷のＰをみて驚愕する。モニターには生徒の顔と同時に

Pを見ることができる。一人一人が一体どのPを持っておるのかを分かりやすくする為だそうだ。
「ええ……一位の人は狙われる側…ですか」
斑鳩は日本茶を啜りながら、緑谷を見つめている。
「アタイは狙う側がいいな！守る側だと逃げまわらなきゃならねえし…アタイの性には合わないしな！」
「確かに葛城は超突猛進って感じだもんな…」
葛城の相変わらずといった様子に、ため息をつく柳生。
「おお～！やっとまともな競技だよ！」
第一回戦はやれ仮想敵のロボだの綱渡りだの地雷だのでエライことになってたが、騎馬戦はPを奪い合うだけなため、まともだと思った雲雀。一見、確かにまともだとは思うが…しかし皆は知らない…この先何が待ち受けてるのかを……

そんななか、緑谷出久は汗を垂らし、体と拳を震わせながら、周りの目線に耐えている。しかしもう一つは…自分が皆から狙われてるという事実に震わせていたのだ。
「緑谷少年、気付くのが早いな……そう、もう今ここで既に戦いは始まっている……周りの皆が、君の敵だということを……狙うものと狙われるものでは、やることも、見方も大きく違う!!」

緑谷の震える姿を見たオールマイトは、緑谷の心を知ったのか、そう呟いた。
（ただ単にチームを組めば良いというものじゃない、己と立場に見合った個性を選び抜き、どう立ち向かうかが鍵なんだ……他の皆ならともかく…緑谷少年はとても厳しいだろう……）
相手のPを奪うよりも、皆から狙われながら己の立ち位置をキープする方がとても難題だ。だからこそ、今緑谷の置かれてる状況は……誰も緑谷と組もうとしてない。それどころか呼び掛けては避

けられ、無視される。とても辛い状況だ。

それとこれとは違うところで、B組では…

「ねえ皆んな、鉄哲の言葉も踏まえてなんだけどさ、可笑しいと思わない？どうして同じヒーロー科で、A組とB組が分かれてるだけなのに、人気がこうも違うんだ？おかしいよね？しかもA組には応援してくれる人たちもいる……けど実際僕らはどうだ？」

B組を集め、悠々と物語っているのは、B組のリーダー的存在、物間寧人だ。

「ヒーロー科に在籍してるのに、僕らはオマケ扱いされてる……だから、調子づいてるA組をとことん懲らしめてやろう……」

それも、不敵な笑みを浮かべて…

「え、え～…っと……誰もいない!!どうしよう……」

皆はそれぞれチームが出来てきてるなか、緑谷はアワアワした様子で現在ただ一人、未だに一人も仲間に入れることが出来てない状態だ。チーム1組で2～4人まで…余った人と組んだって意味がない…それでは優勝なんて出来やしない……緑谷が苦悩してるなか…

「デクくん！一緒にくも…」

「麗日さああああぁぁぁぁぁぁんん!!ありがとう!!」

「わっ…！デクくん！すごい涙！」

麗らかな表情を浮かべる麗日は、緑谷を誘おうと声をかけると、緑谷は滝のように涙を流す。…相当嬉しいんだろう……

「け、けどいいの!?それだと……危険だよ？それに、僕狙われるし

……」
「うん！危険って百も承知だよ。それに危険なことって私たちにだっていっぱいあったじゃん！ＵＳＪ襲撃の時とか、蛇女子学園とか、またまた敵が攻めてきたりして……何よりさ！仲良い人とやった方が、良い!!」
（麗日さん、女神!!）
お茶子の神々しい満面な笑みを直視することが出来ず、緑谷は顔を真っ赤にして背中を見せる。そんなお茶子は「デクくん？どうしたの大丈夫？」と顔を覗き込む。

そんなやりとりがあり、緑谷にはお茶子が仲間に入り、これで２人になった。お茶子の個性から考えて、緑谷は飯田に駆けつけ仲間に引き入れようとする。まず緑谷はリーダーとなり、ハチマキを守ってはお茶子は個性で重力を軽くし飯田の個性でスピードを出してなんとか皆んなから振り切る。あとはそれに見合った個性の人と手を組む。それが唯一優勝できる道だ。これなら怖くない。
しかし、物事はそう上手くいかないものだ。

「すまない、緑谷くん…誘いは嬉しいが…
断る」
「えっ…？」

飯田は緑谷の誘いを、キッパリ、断ち切るように断った。飯田のその声からは、決死の覚悟と勇気が感じとられる。
「正直、君の意図は分かる。けど…僕だってヒーロー科に在籍してるんだ。いつまでも、君にばかりやられてはいけないんだ……僕は君とは友達であり、僕にとって君はライバルの存在でもある……だから……」
すると飯田はくるりと背中を緑谷に向けて…
轟チームに向かう。

「この戦いで、俺は全力で君に勝つ！」

そう、言い切った。

轟チームには、上鳴、八百万もいる。推薦入学者の二人に、アホ面になってしまうのは欠点だが個性としてはバリバリ強い上鳴。そこに飯田が入って行った。

「飯田くん……そっか…」

緑谷も決心した。

遊び半分ではいられない、真剣勝負。

「み、緑谷くん！どうしよ!?あと残り５分だよ！」

「えっ!?」

お茶子の言葉で我に返った緑谷は、周りをキョロキョロ見渡す。もうほぼチームが決まってきている。他に余ってる人たちも少なくなってきた。

マズイ、もう無理か…その時だった。

「フ…フフ……フフフフふふふふ！ふふふふふ!!貴方が緑谷出久さんですね!?」

「わぁっ!?」

突如後ろから声が聞こえては、顔を覗かれた緑谷は思わずビクッ！と反応する。そんな反応に構わず、ピンク色の髪をした女子は話し出す。

「初めまして！私、サポート科の発目明と申します！貴方の人気っぷりは『使えそう』ですね！」

ガチャっとゴーグルを外すと、その子の目は雲雀のような華眼ではなく、照準器のような模様が入っている眼だ。その女性は緑谷とお茶子の様子を御構い無しに話し出す。

「貴方のような人気者と手を組むと必然的に注目度がＮｏ．　１になるじゃないですか!?そうすると必然的に私のドッツ可愛いベイビー達が大企業の目に留まるんですよ！それってつまり大企業の目に私のベイビーが入ってるって事なんですよ!!あっ！因みにベイビーと言うのはですね…」
「待ってまって!!落ち着いて！ね!?」
　グイグイ来る発目に対して、緑谷は両手で制して落ち着かせる。
「え、えーっと…取り敢えず…君は……サポート科なんだっけ？確か個性をより扱いやすくするあの……」
「そうですそうです！サポート科はヒーローの個性に役立つサポートアイテムを開発します！私のベイビーは沢山いますので、もしかしたら貴方の個性に見合うものがあると思うんですよ！」
　ガシャッ！と大量のアイテムを出す。バスターヒーローのエアジェットや、ワイヤー、吸引マシンに、籠手など、様々なアイテムを発目は持っている。
「す、凄い！こんなに…しかもエアジェットやバックドラフトの……っ！想像以上にすごいし感激だし何より使える！」
「本当ですか!?それは良かったです！実は他にも……」
　二人が熱狂してるなか、ただ一人佇んでいる生徒が一人…
（……完全にウチのこと忘れてるやろ……しかも即気い合ってるし……）

　お茶子はムゥ…と頬を膨らませ、ふと視線を逸らした。
　なんやかんやあって、緑谷のところにお茶子に続き、発目も加わった。残るはあと一人だ。
（あと一人は……あと残り1分！あと一人…あと一人…!!大分居なくなってきたし、もうダメか!?……いいや…『見つけた』）
　残り1分のなか、緑谷はその生徒に近づき、そして…
　がしっ！

肩を掴む…
（チームに足りなくて、必要なもの……それは……）
「君だよ…！……」

～～そして1分が経ち～～
『さぁーて！1分経ちましたァ！ツーわけでサクッと始めて行くぜぇ！』
マイクがそう叫ぶに対して、相澤は口煩いマイクの声に不機嫌な顔をする…と思いきや、そうでもなかった。
むしろ、何か面白いものでも見てるかのような目で見つめている。
「ほぉー…なかなか面白いじゃないか……いいチームじゃないか皆んな……」

応援席でも…
「これはまた、楽しくなってきそうですね」
斑鳩はこの先どうなるのかという展開に興味を持つ。
「なるほど…そういう感じか！」
「まあ、悪くはないな…」
「皆んな面白そうだね～！」
葛城と柳生、雲雀は、皆の騎馬を見て頷く。雲雀なんかはこの先どうなるかワクワクしている。
「次は…どうなるのか……楽しみだ！」
飛鳥は、元気で真っ直ぐな笑顔でそういった。

爆豪チーム

「デクをぶっ潰すゾォ!!」

爆豪勝己

切島鋭児郎

芦戸三奈

瀬呂範太

轟チーム

「取るのは…１０００万だ…!」

轟焦凍

飯田天哉

八百万百

上鳴電気

そして…緑谷チームは…

緑谷出久

「麗日さん!」

麗日お茶子

「うん!」

「発目さん!」

発目明

「フフフ!」

「そして!」

最後の一人は……

「常闇くん!!」
常闇踏影
「ああ…」

「皆んな!宜しく!!」

その声とともに…第二回戦の競技、騎馬戦が始まり、血で血を洗う雄英のがっせんが今、狼煙を上げた。

３７話「騎馬戦開始」

第二回戦、騎馬戦が始まる前のこと数分前…緑谷の誘いを断った飯田は、轟のチームに入ることにした。
轟は皆んなを見つめて、作戦を立てる。まず轟の作戦はこうだ。
上鳴は左翼として電撃で相手に近づけさせないよう常に個性を使って警戒する。
八百万は右翼として、個性を使って帯電シートや武器を出す。
飯田は前方の騎馬となり、個性でスピードを活かす。
それを聞いた皆んなは納得した。
「なるほど…では、轟くんは氷と『炎』を使って相手を攻撃及び妨害と言ったところか…」
このチームのリーダーである轟に、飯田は納得するように言うと、轟は首を横に振る。
「いいや……この闘いに於いて…そしてこれからこの先『左炎』は使わねえ……」
轟は左手を見ると、拳を強く握りしめ、怒りを混ぜた声で呟く。すると今度は視線を『ある人』へと変えた。
「なんたって……『クソ親父』が見てんだからな……」

クソ親父。それは、鳳凰財閥とも関係が良く、事件解決数もＮｏ．１のヒーロー…
エンデヴァーだ。
この先…と言うのは…将来自分がヒーローになっても、炎は使わない気なのだろう…　そう、それこそが轟にとって、エンデヴァーそのものを『完全否定』することになるのだから…
そしてこの体育祭でのもう一つの目的、それは…
「緑谷出久…アイツを倒す……」

轟は、慌ただしい緑谷を見てそう呟いた。

そんで現在。

『15分のチーム決め終了〜!!お前ら仲良い子か好きな子と組めたか!?なんてな!決まった子も良し!決まらなかった子も良し!ツー訳で始まるぜお前ら!熱きハートの情熱と友情と想いの絆の騎馬戦だ!!』

『マジでうるせえ…無駄なことばっか言ってねえで早くしろ…』

『北極並みに冷えなイレイザーミイラヘッドは!』

『あ?』

『さーて!お前ら準備はいいか!?』

相澤のギラついた怒りの目線に、冷や汗を流して相澤から視線を逸らして実況を開始するプレゼント・マイク。なんやかんやで二人は同期であり仲が良い（一方的にマイクが話しかけてるのだが…）。

『一位〜四位までが優勝だから、そこんところ忘れんなよ!』

マイクは付け足したように言うと、相澤は他のチームを見て面白そうに見る。

「どんな戦いが始まるんだろうな…?アタイこーゆーの見ると先にどっちが勝つかって予想したくなるんだよ!アタイは多分、爆豪あたりが一位になるんじゃねえか?」

「それはあり得そうですが…他の組みも侮れませんよ…?A組だけでなく、B組もヒーロー科ですし…どういった戦法でくるかも分かりませんからね」

葛城は爆豪が優勝するんじゃないかと予想し、斑鳩は他のチームを見やる。

確かに相手の個性が知らない以上、下手に動くのは危険だ。まあしかし、蛇女子学園や敵の襲撃を乗り切ったA組なら大丈夫だとは思うが…

「どっちにしろ全員敵だと言うのに変わりはないだろ…」
「皆んなが敵ってなると、ちょっと厳しそうだよねコレ…個性の組み合わせとかもあるし…」
「皆んな～！頑張れ～！」
　柳生と飛鳥は流石と言ったところなのか、もう個性について分かってきてる。今まで飛鳥たちは忍の訓練だので、ただただ強くなることしか目に見えていなかったが、相澤の言ってた個性について対策し、成長している。そう、今までのようにこれから忍と戦うというのはあり得ない。この先個性を持つ悪と戦う可能性だって無いわけではないのだ。飛鳥たちも伊達に応援しているわけではない、個性について見極め、考え成長している。
　だが雲雀に至っては相変わらずなのか、楽しく応援している。雲雀よ、個性について見極めてるか…？少し心配ではあるが……

　なんやかんやでマイクは、騎馬戦開始までのカウントダウンを始める。

『3！』

「行くぞテメェらぁ!!狙うはあのクソデクだぁ!!」
「へっ！わーってるよ爆豪！こちとら立派で頑丈な騎馬だ…！思っきし行くぜ！」
　チームのリーダーである爆豪は、緑谷を思いっきし睨みつけ、切島は爆豪の爆破の威力に負けまいと、自分は大丈夫だと言う。

『2！』

「行くぞお前ら…準備はいいな？」
「ああ！いつでもＯＫだ轟くん！」
「任せろ！」

「私も全力でサポートしますわ！」
轟の覚悟を決めた声に、飯田、上鳴、八百万は頷く。
『1！』
「皆んな！頑張ろう!!」
「うん！」
「フフフ！ベイビーにお任せあれ！」
「おう…！」
緑谷の声かけに、麗日、発目、常闇は反応する。
それぞれ勝利を掴もうとする猛者たちの眼差しが飛び交う。そして…
『スタート!!』

今！

騎馬戦の幕を上げた。その瞬間。多くのチームは一斉にA組の緑谷チームへと突っ込んで行く。
まず最初に見かけるは鉄哲チームと葉隠チームだ。
「まずは狙うは１０００万！やるっきゃないぜ！B組魂見せてやろうぜ！」
鉄哲はその小さな黒い瞳を緑谷に向け、迫ってくる。
「ハッハー！ゴメンね緑谷くん！１０００万P取らせてもらうよ！」
「葉隠…頑張る気持ちは嬉しいけどさ…／／／」
「騎馬戦のためとはいえ…せめて服、着ろよな…／／／／」
葉隠はハチマキを巻いてるが、服を着てないため分かりにくい…しかしこの場では葉隠は上半身裸体な訳だが、見えてないとはいえ羞恥心がないところは尊敬してしまう。自分の気持ちよりも目標のためならばという意味もあるのかもしれないが…
そんな彼女に砂糖と耳郎は顔を赤くしながら呟くのであった。

「同時に来た！」
緑谷は先を読んでいたのか、右腕をあげる。すると右に回りながら後ろに下がる。さっきの右腕を挙げたのは、指示の意味だそうだ。無駄のないやりとりで時間を省かせる。だが…
「ケッ！甘ぇよA組！」
骸骨のような顔をしたB組の生徒、骨抜は舌打ちをして個性を発動させる。その途端…
グニョ…
「っ！足が!?」
なんと地面が泥や沼のように柔らかくなっていき、足が地面に食い込んでいるのだ。そのせいか、身動きとる事が出来ない。
「まずい！こうなったら…お茶子さん！発目さん！顔避けて！」
二人は顔を避けると、緑谷の背中に装着しているエアジェットが起動する。
すると騎馬は飛び、鉄哲と葉隠チームを通り過ぎる。
「なっ！騎馬が飛んだ!?アレって…サポート科の！」
鉄哲は緑谷のエアジェットを見て驚く。だが葉隠チームの耳郎は諦めず、イヤホンを使って攻撃する。
だが…
バチッ！
「っ!?黒い影…あっ！」
「フッ…残念だったな耳郎…」
耳郎のイヤホンジャックは常闇の黒影により弾かれた。
「いいぞ黒影（ダークシャドウ）…常に俺たちの死角を見張れ！」
「アイヨウ！」
常闇の黒影は常に死角を見張る事で、不意打ちが効かない。しかも黒影はとても汎用性が高く、とても有利だ。
「凄い！流石常闇くんだ！僕たち騎馬に足りなかったもの、それは常闇くんのような汎用性に優れてる個性！防御も出来る、攻撃もできるし！凄いや本当！」
「フッ…選んだのはお前だ緑谷…」

常闇はそんな緑谷にふと笑った…
「着地するよ！」
お茶子がそう言うと、お茶子と発目の足に付いてるジェット機を起動させてなんとか着地する。
「麗日さんの個性に発目さんのコスチューム…！凄い！この二人の力も欲しかったんだ!!機動性もいいし、麗日さんの個性だとリスクも減るし！ありがとう！」
緑谷は後ろの二人を見てそう言うと…
「緑谷！前！」
常闇が注意する。前を見るとまたもや鉄哲と葉隠の二組チームが襲いかかってきた。
「発目さん！麗日さん！」
緑谷は二人の名前を呼ぶと、二人はすぐ様ジェット機を起動させ、お茶子は個性を使おうとするが…
ブニョン…
「え？」
足に何やら粘着性のある柔らかいボールを踏んづけてしまったので、下を見て見ると…
「峰田くんのもぎもぎ!?ってことは…」
「ってことはその通りだぜ緑谷ぁぁ!!」
緑谷がこのもぎもぎを見て峰田の仕業だと知った瞬間、峰田の声が後ろから聞こえた。振り返って見るとそこには…
「えっ!?障子くん一人だけじゃん！」
峰田かと思いきや、複製腕を使って背中を覆っている障子は、緑谷目掛けて突っ込んできている。
「ふっふっふっ…緑谷……オイラはちゃぁ～んと居るよ…」
障子の覆っている複製腕の中から峰田がスゥ…っと現れた。
「峰田くんそこにいたんだ！…でも、もぎもぎが邪魔だな…早くしないと！」
しかし…
バッ…！

突如長い舌が緑谷に襲いかかる。
「うわっ！」
しかし緑谷はその見慣れた長い舌をなんとか躱した。
「流石と言ったところかしら…そう簡単に取らせてはくれないようね…」
峰田と同じく、障子の覆っている複製腕のなかから蛙吹が現れた。長い舌を使ってハチマキを奪う…彼女なら考えそうな戦法だ。
「こうなったら…！二人とも顔避けて！出力！」
緑谷がポチっと背中に付いてるジェット機のボタンを押すと、起動して空を飛んだ。しかし足に付いてたもぎもぎは取れたものの、足のコスチュームは故障してしまった。
「発目さん！ごめん！」
「わ、私のベイビーが!!」
緑谷は残念そうな顔をしている発目に申し訳なさそうに謝る。すると…

「余所見してんじゃねえぞクソデクぅ!!!」
「かっ!?かっちゃん!?!」

突如緑谷の騎馬の横から、どう言う理由か爆豪が一人で空中に飛び、緑谷に殴りかかろうとする。
「黒影（ダークシャドウ）」
「アイヨー！」
ボオオオオオン！
常闇が黒影を使って緑谷たちを庇ったお陰か、皆は爆豪の攻撃を喰らわずに済んだ。
「あぁ!?んだこれ…」
直撃した常闇の黒影に眉をひそめる爆豪は、落下していく。するとそこへセロハンテープが爆豪の体を巻き付いた。
「ったく、無茶すんなよ爆豪」
「俺の心配なんかしてんじゃねえぞしょうゆ顔！」

「瀬呂だ！同じクラスなんだしいい加減名前覚えろ!!」
　爆豪の発言に声を張る瀬呂は、ため息をついて爆豪を騎馬に戻す。
『あのー…ミッドナイト、これありなの？騎馬から離れてたけど』
『地に足ついて無けりゃいーよ！ついてたらダメだったけど！』
　これも一つの戦法のため、爆豪のやり方はセーフだそうだ。爆豪が瀬呂を誘ったのはこの為だったのだろう…爆豪らしいと言えば爆豪らしいが…

「追うよ皆んな！」
「いや、待て葉隠…ハチマキどこやった!?!」
「え、え？あーー!!無い！いつの間に?!」
　葉隠は緑谷を追おうとするものの、いつの間にか自分のハチマキを取られてしまった。
　一方、峰田チームも…
「ねえ峰田ちゃん…貴方一体いつ取られたのよ…まさかだとは思うけど、応援席にいる飛鳥ちゃん達に見惚れててハチマキ取られた…なんてことないでしょうね」
「うるせーー!!知るか！てかしてねーよ!!どんだけオイラを疑ってんだよ!!気付いたらいつの間にか取られてたんだよ!!」
　ドス黒い蛙吹の言葉に、峰田は思わず体を震わせては半泣きになって半ギレ状態だ。
「けど…けどよ！これでもう失うもんは何もねえ！だから狙うは１００万だ！いくぜ障子！障子フルアタックモードだ！」
　心が折れかけた峰田は、なんとか挫けずに緑谷のＰを狙う。そして峰田の声かけに障子も軽く頷く。
『スゲェガン逃げ野郎は一位をキープしてるし、最強くんも二位でキープしてる!!そして爆豪も……って、は？アレ？爆豪選手…０Ｐ？』

　モニターに映ってるのは三位が物間になっている。

「単純なんだよね、Ａ組は…」
　爆豪のＰをかっさらった人物は、Ｂ組の物間。そんな物間に爆豪は怒りで目を細める。
「んだテメェ！返せゴラ殺すぞ!!爆殺すっぞ!!」
「ねえ、障害物競走の予選の時から可笑しいと思わないかい？」
「ああ!?」
　爆豪はドスの効いた爆切れオーラを放っていながらも、物間は怯まず、悠長に話を続ける。
「僕たちＢ組がなんで最下位になったか分かるかい？ただ単に個性の相性が悪かったとかそういうのじゃないんだよね～…君たち一人一人を見極めてたんだよ、そんで人気が低くなった僕たちは今、君たちに狙われることなくこうしてＰ狩りを行えるわけさ…君たちのようなバカは思いもつかないだろう？」
「クラスぐるみか！」
「まあ皆が皆協力してくれた訳じゃないけど、それでも良い案だろ？ホラ、『人参ぶら下げた』馬みたいに仮初の頂点を狙うよりさ」
　ピタッ…
　物間の毒舌とも呼べる言葉に、爆豪はピタリと止まった。それでも物間は話を続ける。
「あっ！そーだ君、この前の『ヘドロ事件』で被害にあった有名人だよね？今度参考に聞かせてよ！年に一度敵に襲われる気持ちってヤツをさ…」
　物間は「じゃっ」と手を振って爆豪に背中を向ける…と。
「おい待てクソモブ」
「は？」
　爆豪にクソモブ呼ばわりされた物間は思わず反応して振り返る。
「んでクソ髪…予定変更だ…」
「えっ？」
　物間と同じく、突然呼ばれたことに思わず反応した切島は、爆豪を見る。

「デクの前に…コイツら全員殺そう!!」
爆豪は完全なる爆切れオーラを放ち、物間に向けてそう言った…
『さあ!残り時間半分切ったぞーー!!』
マイクの声が会場に響き渡るなか…
「やはり、B組も侮れませんでしたね…あの爆豪さんのPを取るのは私も予想外でしたし…」
「ケーッ!何やってんだ爆豪!アタイが見込んだ奴なんだ!とっととやっちまえ!」
「それ以前にアイツもう怒りのあまり、意識あるかどうかすら分からんぞ…まあ爆豪に喧嘩売ってる奴も十分凄いが…」
「あー!見てみて皆んな!あそこ!」
斑鳩と柳生がため息をつき、葛城は応援してるなか、雲雀があるところに指をさした。皆は雲雀が指差すほうを見てみると…
「み、緑谷くんに…轟くん!!」
それを見た飛鳥は、思わず声をあげた…
「成る程…一位と二位の争いか…」
柳生は面白そうに、クスッと笑みを浮かべた。

「そう上手くはいかないよね…轟くん…!」
緑谷は一呼吸して、再び轟に視線を向ける…
「そろそろ奪るぞ…緑谷(1000万)!」
轟も同じく、緑谷を見つめて…
『B組隆盛の中!!果たして1000万Pは誰に頭を垂れるのか!?』
激戦のなか、勝負の行方は如何に?

３８話「騎馬戦決着！」

『さあさぁ！又もやお前ら好みの展開だぁぁーーーー!!一位と二位の争いが、今始まろうとしてるぜ!!何方が一位になるんだろうな!?ワクワクな展開だぜ!!』

『お前は静かに実況できないのか…』

声を荒げるマイクに対して、少し静かにしてほしいと願わんばかりの相澤は不愉快そうな顔で呟いた。

（それに…注目するのは緑谷と轟だけじゃない……）

相澤は心の中でそう呟くと、チラッとあるチームの方を向いた。それは…

「あんま煽るなよ物間！それお前の何時もの悪い癖なんだから！」

「ん？ああ、大丈夫さ拳藤。煽っといて自分がやられるなんてのはよくある展開だけど、ヒーロー科の僕に限ってそんな事ないから。それにいるもんねぇ…恨みを買われたヒーローが、敵に仕返しされるって話…」

茶髪のポニーテールの髪型をしており、いかにもリーダーシップのある頼もしい姉貴派のB組の委員長、拳藤と呼ばれる女性は物間に注意するものの、物間は大丈夫だよ～みたいなノリで流した。

「おい爆豪！一先ず落ち着け！な？な?!お前蛇女ん時もそうだったけど煽られると頭の中真っ白になって爆発して行動引き起こすのやめろよマジで！俺らのP取れるもんも取れねえぞ!!」

切島は爆豪を落ち着かせるように大声を掛けると爆豪は怒りを押し殺すための行動なのか、思いっきし掌同士を爆破させた。激しい爆音が鳴り響き、暫くして立つとプスプスと燃え尽きたような焦げた音が爆豪の耳に伝わる。

「っっしっ！安心しろ切島ぁぁ～…俺は、至ってすこぶる快調だぁぁ～～…!!っぅわけで行くぞテメェらぁ!!」

「マジで頼むぜ爆豪…」

目が完全にイかれてて、如何にも大丈夫そうには見えない爆豪に切

島は冷や汗を垂らすのであった…

「随分と荒れてますね…」
斑鳩は半分爆豪の粗暴に呆れてるのか、日本茶を啜り飲みながら冷や汗を垂らす。
「で、でも大丈夫だよ！爆豪くんは確かに口は悪いし暴力的だし、みみっちいし、ガキ大将だしそのうえ単純で繊細なところがあって意外な一面がある将来有望不良の人だけど、それでも私たちと一緒に命懸けで戦ってきたんだもん！今回もなんとかなるよ！」
「飛鳥…爆豪のことを褒めてるつもりなのかもしれないが、ほぼアイツの悪口になってるからな？まあ…だからと言って間違ってはないが…」
飛鳥の言葉に、柳生は横目で飛鳥を見やる。飛鳥よ、爆豪がそれ聞いたら喧嘩になるぞ…
「フレー！フレー！A組イェーイ！爆豪くんやっちゃえ～！あっ！障子くん突っ込んできてる！やっちゃえやっちゃえ！」
雲雀は大会のドキドキハラハラワクワク展開に興奮してるのか、完全に熱中している。
「雲雀は相変わらずだなぁ～…ははっ！まあいいや…時間はあと半分…んでもって緑谷のヤツは皆に狙われる一向、そん時に轟がやってきて対立か…まあこうなる事は薄々は予想してたけどな……けど爆豪がP取られるのは予想外だったな～…まっ！アイツならなんとかなるだろ！」
葛城は血気盛んに盛り上がり、地味に実況し見極めながら観戦を楽しんでいる。

そして…

多くのプロヒーロー達が見てる客席のなか、黒いハット帽子を被

り、社会人の誰もが着てそうな礼儀正しい清らかな黒いスーツを着用しては、烏の仮面を被り、黒いゴーグルを付けてる謎の男は、仮面で表情こそは見れないが、何やら楽しそうに、ヒーロー達と応援席の少女達を見つめている。
「ホッホッ！いやはや、子供（卵）とはいえヒーローの戦いは身近で見ると画風が違いますねぇ……それにしても、まさか『半蔵学院』の彼女たち『忍』学生も、ここへ在籍しているとは…！この事実を『彼』に伝えなければ…！『彼女』は忍を嫌悪し『あの人』のことしか頭にないのでなんとも言えませんがねぇ…」
小さな声で、隣の客席に聞こえない声でそう呟いた。その男が一体何者なのか、それは誰もが知る由もない、半蔵学院の彼女達ですら、今この男の存在に気付いてないのだから…

場所は変わり、会場では緊張する空気が漂っていた。修羅場の空間…緑谷と轟はお互い鋭い目つきで見合い、対立している。
「悪いが緑谷…そろそろソレ（1000万）を頂くぞ！」
「ううん、渡さないよ！その為にこのチームを組んだんだ！」
轟の威圧感溢れる冷たい声に、緑谷も負けまいと声を張る。
「そうかよ……まあ良い…どの道やることは変わらねえんだ…飯田！八百万！上鳴！頼んだぞ！」
「ああ！」
「ええ！」
「おう！」
轟の声掛けに、三人は反応する。
「飯田、お前はまず個性エンジンでスピードを上げてくれ」
「了解だ！」

前の騎馬の飯田は案の定、個性を使ってスピードを上げてきた。
「八百万、伝導性の良い武器と『アレ』を頼んだぞ」
「かしこまりましたわ！」
八百万は腕から細長い鋭利な棒を作り出し、轟はそれを手に持つ。
「上鳴は…」
「わーってるって！轟は自分のことに集中しろ！」
轟に言われなくても分かってるのか、上鳴は声を張った。そして…
「１３０万ボルト！」
上鳴は無差別放電を使って、そこらの騎馬に電撃を浴びせては行動不能にした。轟は八百万に作ってもらった『アレ』、帯電シートを包むように身を守った。緑谷チームは、常闇の黒影でガードするものの、背中のジェット機が故障した。放電が止むと、マヒでヨロヨロになった皆んなに轟は武器に氷を使って地面を擦るようにする。すると伝達性の武器のお陰なのか、氷が広範囲にいきパキパキと他のチームの足を凍らせていく。
「悪いが幾つか貰ってくぞ」
「あっ！取られたクッソおぉぉぉ!!」
拳藤を始め、他のチームのハチマキは轟に盗られてしまった。
「クソがぁぁ！轟の野郎！こっちはただでさえハチマキ失ってるのにこの仕打ちはねえだろぉぉ！ちょっと顔がカッコいいイケメンだからって直ぐ調子に乗りやがる！アイツ絶対に飛鳥達と何か深い交流があるだろぉ…クソ！アイツ後で絶対に呪ったる！」
「峰田ちゃん、障子ちゃんには申し訳ないけど、次そんなバカみたいなこと言ったら蹴落として失格にするわね？」
「あっ、スイマセン…」
峰田の言葉に蛙吹は思わず怒りの目線をむける。そんな二人のやりとりに、障子は冷や汗を垂らすのであった。
「アカン！強すぎるよ轟くん！取り敢えず飛ぶ？」
「ううん駄目だ！後ろのバックパックがイかれて動かない！これじゃ飛べないよ！」

「ベイビー改善の余地あり！」
相手が強すぎ逃げの一択を選択するお茶子だが、上鳴の放電の所為で緑谷のバックパックが故障してしまったため、動かなくなり飛ぶことが出来なくなってしまった。足のジェット機も峰田のもぎもぎで故障してしまった為、せめて飛ぶことが出来るのはお茶子の個性だ。だが自分を含めて４人分を同時に浮かすとなると、相当無理があるだろう…容量がオーバーしてしまう。そうなればこっちにはリスクが増えるだけ。
「ならば…牽制だ！」
常闇は黒影を使って轟に襲いかかる。しかし…八百万の個性『創造』により、装甲を作り出し的確に常闇の攻撃を防ぐ。
八百万百　個性　『創造』生物以外なら何でも創り出すことが出来る個性。分子構造まで把握していれば、創ることは出来るが、大きい物などでは創り出すのに時間が掛かるのが欠点。
「…！八百万さんの『創造』！思ったよりずっと厄介過ぎる！」
八百万の個性に眉をひそめ、まるで難題に立ち向かうような表情を浮かべる。だが…
「いや、それ以前に上鳴が一番厄介だ」
常闇は八百万よりも上鳴が厄介だと言う。
「もしあの装甲が『太陽光』ならとっくに破れていた…」
「……あっ！」
常闇の言葉に、緑谷は騎馬を組む際に話し合っていたのだ。

開始まであと僅かと言った時間で、緑谷は常闇を誘い出し、騎馬について話し合いをした。運良く常闇は誰とも組んでなかったらしく、上手く避けられずに済んだ。
「とにかく攻撃はしなくていいから、防壁に徹してくれると嬉しいん

だ！だから、えっと…その…」
「フッ…面白いな緑谷……俺の個性は黒影。闇が深ければ深いほど攻撃力が増すが、どう猛になり制御が難しい……逆に日光下では制御こそは簡単だが、攻撃力は中の下と言った所だろう…」
「お、思ったよりも色々メリットとデメリットが存在するんだ…」
　個性を教えてもらった緑谷は、納得して頷くと、常闇も頷いた。
「『あの時』蛇女子学園の校舎内には薄暗い部屋が幾つかあったしな…いや、真っ暗な場所もあった。だからあの時俺は青山を連れて一緒に戦いを望んだのさ…もし俺が闇の中で個性を発動してしまえば、敵どころか味方にさえ傷つけ最悪殺してしまう所だったしな…」
「そ、そんなに常闇くんの個性は危険なの!?」
「使い方次第では…と言ったところか…」
　蛇女子学園の襲撃で、常闇はそんな危険な賭けをしながら戦ってたことを知り、緑谷は思わず声を荒げて驚愕した。まあ、当の本人が言うくらいだから、それほど常闇の個性は危険なのだろう…使い方次第では…
「まさか、そんな…あっ、じゃあこれを知ってるのは戦いで手を組んでた青山くんだけ？」
「いや、上手いことに青山に対しては言ってない…念の為にな……俺の個性について知ってるのはＵＳＪで話した口田のみ、そして幸いなことに奴は無口だ。まず問題ないだろう…後は今言ったお前たちだけさ…」
「えっ、けど良いの？本当に…」
　口田にしか言ってない貴重な情報を教えてくれた常闇に、緑谷は逆に申し訳なさそうに顔を伏せた。だが…
「何を今更…知らなかった上で『俺の個性に』攻撃不要と言ったのはお前だろ？この中じゃ滅多に見ない相当に特殊な選択だぞ？第一ここまで言ってるんだ、もう手を組んだと言っても良い…」
　常闇は顔を伏せてる緑谷の肩に、軽くポンと手を置いた。そしてフッと口角を吊り上げ、不敵な笑みを浮かべた。
「よくよく考えてみろ、蛇女子学園に襲撃してきた敵連合との戦いも、

お前の案が無ければ全滅してたかもしれない、お前の指導があったからこそ出来たのだ。だから、お前は上手く俺を使ってみせろ…お前なら出来る。俺はそう信じている。だから、託したぞ緑谷！」

んで現在に戻って。

「そうか！上鳴くんの個性は帯電…だからか！」

「ああ…奴の放電が続いてる間、攻めでは相性最悪だ。黒影が及び腰になってる…」

「モう嫌だ…！暴力反対！帰りタイ…グスッ！」

黒影にも感情はあるようで、及び腰になり、半泣きになっている。

「…今の状況から考えて、恐らく向こう側は常闇くんの個性については知られてないと思う……だから、ここから牽制する！なんとしても…１０００万Ｐは守らなきゃ！」

緑谷は闘志をその目に燃やし、ハチマキに触れてそう言った。緑谷チームはここからどうするか…

一方、爆豪チームと物間チームは…

ボオオオォォォォン!!!!

爆音が鳴り響いた。それもとても強い衝撃で…それが出来るのは当然爆豪の個性だ。爆豪の個性なのだが…

「っ!!」

「へぇ！すごい凄い！君、派手で良い個性を持ってるんだねぇ、ありがとう…お陰でこっちもとことん派手な攻撃を君にお見舞いすることが出来るよ」

なんと爆豪が逆に爆破をくらい、物間は掌を爆破させ殴ったのだ。しかも物間の使った個性は爆豪と同じ物で…

「嘘だろ!?爆豪と同じ個性…タダ被りか!?」

切島は信じられんと言わんばかりか、驚愕な顔で物間を見やる。

「チッ！調子に乗ってんじゃねえぞクソがぁ!!」

やられたらやり返す、倍返しの爆豪は思いっきり物間に殴りかかるが…

ガキィィン！

「っ!?」

「いやいや、調子に乗ってんのはＡ組の方だろ？まあ、君たちの個性よりも『僕の方が良い』んだけどさぁ…」

なんと今度は切島のように体を硬化させて、爆豪の攻撃を防いだのだ。そのためか、傷一つも付いてない様子だ。物間はニヤリと嫌味の笑みを浮かべると、爆豪の手を払い退ける。

「今度は俺の個性!?どーなってんだ？あの時の脳無みてぇに個性複数ある感じか!?」

「アホか、んな訳あるか…あんなキショい雑魚じゃねーだろ……お前、『コピー』したのか…」

「せいかーい！まあ、馬鹿でも分かるよね？」

爆豪の推測に、物間は鼻で笑い、上から目線で見下ろすようにそう言った。

物間寧人　個性　『コピー』　触れた相手の個性を５分間使いたい放題。ただし同時に複数の個性は使えない。

ドポン！

「な、んだ！白い液体？」

突然爆豪チームと物間チームの間から、白い液体が出てきた。振り返ってみると…そこには、のしのしと図体のデカいＢ組の生徒の１人が、頭から白い液体を出しながらこっちに向かってきてる。

「物間！終わったか!?」

「凡戸か！仕掛けてきたな！」
この白い液体は、凡戸と呼ばれる生徒の個性の仕業のようだ。
「んだこれ…動けねえ！」
切島の足に白い液体が付着し、身動きが取れない模様だ。そんな切島に芦戸は「私の個性で溶かすから待ってて！」と、片手の掌から液体を出す。怒りの目線を向ける爆豪に気づいた物間は、振り返ると手を軽く挙げた。
「あっ、怒らないでくれよ？煽ってきたの君なんだからさぁ…こういうのなんて言うか知ってる？自業自得って言うんだぜ？ホラ、宣誓でなんて言ったっけな～…？皆の前で言った恥ずかしいの…えーっとねぇ……
まあいいや！お疲れ！」
物間は「じゃあね～」みたいなノリで背を向けた。
「……」
散々罵られて馬鹿にされた爆豪は、冷や汗を垂らして、ガクガクと怒りを押し殺すあまり、震えが止まらない。爆豪が宣誓で言った言葉…それは……
『俺が一位になる』
トップを狙う者の言葉。ただ一つだった…
「……俺が取るのはただのてっぺん（一位）じゃねえ…完膚なきまでの一位だ!!」

『残り時間約１分！轟、フィールドをサシ仕様にし、そしてあっちゅーー間に１０００万奪取！……かと思ったよ!?五分前までの俺は！ガン逃げ地味ボロ野郎、狭い空間の中、５分間逃げ切っている！』

緑谷はこの５分間、ずっと逃げ切っていたのだ。轟の氷によって逃げる範囲は狭くなり、追い詰められたるように見えるが、騎馬の向きと立ち位置から考えて、飯田がつっかかってしまう。それに上鳴の様子からしてみれば、そろそろ限界に近い。ここずっと放電しているのだ、時間がないのも無理はない…

「やったぁ！すごいよ緑谷くん！このまま行けば二連続で一位だよ！」

「いっけ～！頑張れ～！」

飛鳥と雲雀は、緑谷と轟の対決に熱くなっている。まあ雲雀は元から熱くなってはいるが…

「今の順位ですと、緑谷さんが一位、轟さんが二位、物間さんが三位、鉄哲さんが四位ですね…」

「順位はＡ組とＢ組が半々と言ったところか…やはり斑鳩の言ってた通り、Ｂ組も侮れないな…」

斑鳩と柳生は、順位表を見てそう言った。一位～四位までが優勝、となるとそれ以下は脱落となる。しかもあの将来有望不良少年たる才能マンの爆豪がＯＰ。この状況での逆転はほぼ難しいだろう…

「爆豪はさておき、他のチームは轟の氷に巻き添えを食らって身動き取れない様子だな…この様子だと轟と緑谷は難なく進めそうだな」

「いやぁ、まだ分かんねえぜ？こういう最後側のほうに大逆転～！みたいな展開だってあるかもしれないんだからさ！」

柳生の推測に、葛城はイヤイヤと手を振り最後まで勝負を見届ける。しかし、この葛城の言ったことが、まさか本当に起きるとは誰も

思わなかったのである…

攻めでほぼ躱され、一方的にイライラが溜まる轟は、緑谷に思わず舌打ちをする。残り1分、相手が策士とはいえここまでやれることはそうそうない。まるで鼻から計算してたかのような…このままじゃダメだと思った時だった…

「轟くん、『残り1分弱』…『俺は後は使えなくなる』が…頼んだぞ！」

「飯田？何する気だ…？」

飯田は覚悟を決めた顔で、轟にそう言った。何の意味か分からない轟は、首をかしげるしかなかった。もうこっちにはこれ以上策はないと言うのに、他にどうしろと？思い浮かんでくる疑問を抱いてると…

「行くぞ！必殺！『トルクオーバー　レシプロバースト』!!」

その瞬間。

「え？」

気がついた時には、緑谷のハチマキ１０００万Ｐは無くなっていた。

「は？」

それは緑谷チームだけでなく、轟自身や、観客席の皆…そしてあの飛鳥たちでさえ何が起きたか全く分からなかったのだ。

『は…？……

ハアアアぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー!?何が起きたんだ!?え？え!?轟選手まさかの大逆転！１０００万Ｐ獲得！そして緑谷出久はまさかの０Ｐへと急転直下ぁぁ!!』

「お、お前…何した？」
マイクも突然のことに驚き、轟も訳がわからなく、今の状況においつけなかったのか、冷や汗を垂らして飯田に問う。
「トルクと回転数を無理やり上げて爆発力を生んだんだ。しばらくすると足がエンストして動けれなくなるが……因みにこれは戦闘としても使ったことがある…そうだな…あの時、『詠』さんと戦った時だな…知ってるのは斑鳩さんくらいで他の人やクラスメイトにはまだ知られてない、所謂裏技さ…」
プスプスと嫌な音を立て、もう動くことすら出来ない飯田は、それでも緑谷に態勢を向ける。
「言っただろう？緑谷くん…僕も君に…挑戦すると!!」
覚悟。その二つの言葉に尽きる飯田は、揺るがない闘志を宿した目で、緑谷を見つめてそう言った。

「まっ…まさか、あんな超秘があったとはな…」
「い、飯田さん、あの技は…あの時の！」

柳生は飯田にこのような超秘があったことに驚き、斑鳩は詠との戦いに見せた技を見て柳生と同じく驚いた。
「ええっ!?緑谷くんＯＰ!?不味いよそれは！というか飯田くん速すぎるんだけど！目で追えなかった…」
「す、すごいや凄いや！雲雀も全く追いつけなかったよ！」
飛鳥と雲雀は突然のことに驚きを隠せず、思わず大声を上げてしまう。それは無理もない、忍である彼女たちですら飯田のスピードを見切ることが出来なかったのだから…
「す、スゲェ…凄えけど……まずアタイの言ってたことが本当に起きちまうなんてのは驚いたよ……二重の意味で…」
葛城なんかは自分で言ってたことが本当に起きたことで、信じられんという顔をしてる。実際は予想はしてたが、こういう展開で逆転さ

れたことに驚いてるんだろう。
「まずい!!早くみんな!Ｐ取り返さないと!」
突然のことに頭が付いて行けない緑谷は、混乱しながらも、なんとかその場を逆転させようと必死になる。
「しかし、上鳴が放電してるなか攻めでは防がれる!諦めて他の騎馬を攻めてＰを盗った方が良いんじゃないか!?」
しかし常闇は緑谷の意見には愚策だと思ったのか否定する。
「ううんダメだ!残り時間１分を切ってるし、これは轟くんにしか対策してない!それに少ない時間の中では無理だ!逆に間に合わないよ!」
常闇の案にも愚策だと思った緑谷は、声を張り上げ否定する。それは無理もない、ほぼ自分たちが有利だった立場が今崩れ、逆転された。今の自分たちの状況はまさかの大ピンチへと陥った訳なのだ…
「……よし!こうなったら…!」
するとここでお茶子が走り出す。後ろの騎馬だった為か、走り出すと緑谷は思わず態勢を崩しそうになり、揺れてしまう。
「取り返そうよデクくん!絶対に!!!」
「麗日さん…!」
お茶子の言葉に緑谷は落ち着き冷静さを取り戻す。
「私もこの人の案に賛成です!Ｐの散り方を把握できてない今、こちらの方が効率いいかと!」
隣の発目もニヤリと不敵な笑みを浮かべて頷く。
「……仕方ない!行くぞ!」
観念したのか常闇は納得するしかなく、全力で走り出す。
(そうだ…そうだよ!自分だけじゃない…三人分の思いを、僕は背負ってるんだ!!)
緑谷は咄嗟に腕を力ませ、個性『ワン・フォー・オール』を使おうとする。
そして、それを観てる飛鳥も…

「緑谷くん……！」
また……
（負けるな！頑張れ！）
思いを込めて…
「おおおお

「待てええ！待てって！」
突然後ろから大声がした。この声は切島だったので、まだ来るのかと思い、やれやれとため息をつけながら物間は後ろを振り向く…
「君たちもしつこいなぁ…その粘着質はまずヒーロー以前に人として…」
「勝手すなあああぁ爆豪ーーーー!!」
と、なんと爆豪は爆破を応用して上手く飛び、物間の方にまで近づいた。しかも1人で…
「円場！防壁（ガード）だ！」
「っし！任せろ！」
円場は空気を吸って思いっきりはくと、なんと何もない空中に壁が出来たのだ。その壁に爆豪は当たり止まってしまう。
「ハハ！見えねえ壁だ！ザマァ見やがれ！」
円場硬成　個性『空気凝固』空気を固めて見えない壁を作ることが出来る。防御に向いてる個性だ。肺活量によって大きさが決まる。
だが…
パリイィン!!
バッ！

「なっ!?」
爆豪はその空気凝固を使った見えない壁を難なく壊して、物間のハチマキを奪った。
『おおーっとぉ!?ここで爆豪選手！物間選手からPを奪ってなんとか逆転成功！三位に上がり、物間選手は四位だぁ!!』
そして爆豪は瀬呂の個性、テープに体を巻かれて騎馬に戻る。
「取られた!?クソ！」
「落ち着け物間！大丈夫だ！Pは取られたのは仕方ないがそれでもまだ四位！このまま逃げ切るぞ！」
「ああ…！これさえ死守すれば…！」
さっきの余裕顔は無くなったのか、物間は冷や汗を垂らし、ハチマキを守るように手で握りしめる。

「ったく、無理すんな爆豪！攻めるときはちゃんと言え！」
「でもこれで三位！このまま行けば通過でき…「まだだ!!!」!?」
切島は安堵の息をつくと、爆豪はまだだと言わんばかりに物間を睨みつける。爆豪の言葉に一同は驚きの顔を浮かべる。
「俺が取るのは完膚なきまでの一位なんだよ！こんな生半端な結果なんざ要らねえんだよ！
行け!!!俺らのPも取り返して！１０００万へ行く！」
爆豪の言葉に納得する一同は、頷き走り出す。
「しょうゆ顔テープ!!」
「瀬呂なっ！」
爆豪はまず瀬呂の名前を呼ぶと、肘からテープを飛ばす。しかし物間に当たることなく外れた。
「黒目！進行方向に弱い溶解液！」
「あ・し・ど・み・な！いい加減名前覚えてね!!」
次に芦戸の名前を呼ぶと、爆豪は脚を上げて、芦戸は掌から溶解液を発射させる。

熱闘で観客席が盛り上がり、飛鳥たちも固唾を呑んでる中、オールマイトは冷静だった。
（爆豪少年よ！君は…『言われずとも』、非常によく分かってるんだな！『あの時』に比べて、大分成長してるじゃあないか！）
あの時、それは緑谷と対決した初めての戦闘訓練にて敗北したあの日あの時…爆豪は大きな挫折を覚えただろう。しかしその一回の敗北が、彼を強くした。
（常にトップを狙う者と、そうでない者のその差を!!）
爆豪はなんと、掌を爆破させ一気に爆速をつけて、溶解液の滑りで加速、そして地面に貼り付けたテープが騎馬の支えとなる。
「物間のやり方は合理的で悪くはないが…ただ一つ惜しむのは…その

執念の差を考慮してなかったことだな…」

相澤は、包帯で巻かれてる隙間から見えるその眼差しで、対立する物間と爆豪を見つめる。

『爆豪容赦なしいぃぃ!!』

結果、爆豪がいち早く物間のハチマキを全て取り、これで自分たちのPを取り戻すことが出来た。

『やるなら徹底!爆豪選手は完璧主義だな!!さぁさぁもう時間ももう僅かだぜぇ!!お前ら全員もっと盛り上がれえぇぇーーー!!』

『充分に盛り上がってるだろう…特にお前…』

「おいお前ら!今度はデクと轟んところだ!!」

爆豪は厳つい顔で緑谷と轟の方に振り向く。

現在、残り２０秒

緑谷は右手で轟のPを取るように、轟は緑谷の右手を自分から守るように、つい咄嗟に…反射的に動き左手を出してしまった。しかし緑谷はそこが狙いではなく、轟の腕をどかすことが狙いだった。ワンフォーオール、折れない程度の力で、空を切るように崩す。すると轟は案の定左腕が払いのけられ、ますます動揺してしまう。いや、そもそも轟自身驚いてるのは、緑谷の気迫だった。敵の襲撃でさえ気圧されることのなかった轟は、緑谷の威圧を感じて、初めて気圧されたのだ。

「左……俺は…何をやってんだ……!」

自分で自分を言い聞かせた。決めたのだ、この戦い、そしてこれからの戦いでは絶対に左は使わないと、特に緑谷の戦いなら尚更使えないと……なのに、なぜ……

一方緑谷は、ただただイメージをしてた。卵が爆発しない地味でユニークなイメージを…調整、感覚…感じ取れたのはＵＳＪの時の脳無

に与えたあの時の一撃、あの時の感覚を元に、何度もなんども反芻してたのだ。
轟はハチマキを裏返してるためPを隠してるからわからないが、緑谷は知っている。１０００万Pは最後にとった、だから一番上にあると。そして…轟の一瞬の隙を突いて緑谷は見事奪い取ってみせた。
「やった！とったぞ！これで…！」
緑谷は自分のPを取り返したことに、思わず歓喜の声をあげ、順位が映ってる大型モニターを見てみると…

「……は？」
一位は轟のままで変わらなかった…確かにPは取り返したはず…
「ちょっと！それ違うんじゃないですか!?」
ここで発目がそう言ったので、ハチマキを見てみると…

９０P
そう書かれていた…
「なっ!?!!んで…!?確かに１０００万だったはず…なのに……」
間違えた？そんな筈はない。確かにあの時最後に取られたハチマキは、一番上に巻いていた。一体なぜ？それは簡単なことだった…
「やはり緑谷さんならそう来ると思い、万が一の時のために、ハチマキをすり替えておきましたわ！」
なんと八百万がすり替えていたのだ。緑谷たちが気付かない間に…その事に気付かれされた緑谷は心が痛む。
もう時間はない…ならばもう一度…
その時だった…

「テメェら全員死ねえええーーー!!」
爆豪まさかの登場、しかも1人…
「かっちゃん…！まじかよ！」
しかし爆豪も今どういう状況か分からず、何方を狙えば良いか迷ってしまってる。

緑谷たちが再び動き出そうとしたその瞬間…

『終了ううううう!!!』

タイムアップの声が掛けられた。そう、間に合わなかったのだ…もう……結果、緑谷たちは自分たちのPを取り戻すことが出来ず、そのまま失格に…

「ふぅ…一通りなかなか良い勝負だったな…」

「そうですね…そして流石と言ったところでしょうか、轟さんは難なく一位ですよね」

柳生と斑鳩は騎馬戦を見て、ホッと一息つく。この白熱の勝負の中、この冷静な彼女たちも流石にこの戦いでは夢中になってたようだ。

「爆豪!あいつ惜しかったなぁぁ!けどまっ、上位に入れたし良いんじゃねーかな?」

「皆んな凄かったねえ!雲雀も今度騎馬戦やりたーい!」

葛城と雲雀は誰が勝っても良かったのか、落ち込む様子や悔しい様子などは見受けられない。

「轟くんは凄かったけど…でも、緑谷くん達が……」

飛鳥は悔やむ様子を見せる緑谷に、残念そうな顔で見つめるのであった。

『ツーわけで早速上位4チーム発表していくぜぇ!!一位、轟チーム!』

「チッ…!……クソが……」

一位になれたにも関わらず、轟は下を向いて舌打ちをする。

『二位!爆豪チーム!』

「だあああぁぁぁ!!クソ!戦えんかった!」

爆豪はどうしても緑谷と轟の戦いに入りたかったのか、悔やんでいる。

『三位!鉄て…え!?あれ?心操チーム!?』

「お前らご苦労さん…」
心操…A組に宣戦布告した普通科のボサボサとした紫髪の男は、尾白、青山、B組の生徒と思われる生徒に向けてニヤリと笑みを浮かべた。

発表していくなか、緑谷は申し訳なさそうな様子で、皆んなに頭を下げる。
「みんな…ゴメン……皆んな僕を託してくれたのに……なのに……」
「緑谷…」
そこへ緑谷に歩み寄り声をかけたのは常闇だった。
「お前の策はどれだけ凄くても、時にはそれが通用しなくなることだってある……飯田の時のような事がな……しかしそれでもお前は取り戻さんと言わんばかりに諦めず立ち向かった…だが結果は取り戻せなかった…」
「……」
常闇の言葉に、緑谷は黙り込むしかなかった……これが現実、何をどう言われようと反論出来ないどころか、する気もない……自分の惨めさに、皆の期待に答えれなかった責任に、思わず目から涙が浮かんでくる。
「だが、それでも…『もう一本』は取れた」
「……え?」
もう一本?常闇の言葉に顔をあげて見てみると、なんと黒影がもう一本のハチマキを盗っていたのだ。
「お前が轟に見せた初撃、あの時轟は動揺し、対応が遅れた。上鳴の放電もだいぶ弱まっていた。その隙を突いてもう一本盗っていたんだ。誰も気付かなかったがな…」
つまり…
『4位!緑谷チーム!!まさかの彼処で大逆転成功だあああぁぁぁぁぁ!!』
緑谷出久進出。
「うおおぉぉぉぉあああぁぁぁぁぁーーーーーーーー!!」
嬉しさのあまり、思わず目から大量の涙が昇竜の如く溢れ出てき

た。

「……」

そんななか、轟は自分の左手を見つめ、拳を強く握りしめた。自分は左を使わないと、心の中で決めたのに、なのにあの時、緑谷の威圧に思わず反射的にとはいえ使おうとしてしまった…轟はそのことをずっと悔やんでいた。

「クソ!……こんなんじゃ…親父の思う通りじゃねえか……!」

歯ぎしりをして、焔の戦いに見せた憎悪と怒りを込めた声で…

そのころB組の鉄哲チームは…

「……なぁ…俺ら何が起きたんだ?終盤ほぼ俺ら意識なかったよな?」

「……ああ…何なんだよアレ……何が起きたか全く分からなかったぜ……」

鉄哲と骨抜は、顔を真っ暗にして落ち込み、まだ状況が理解できてない様子でいる。勿論他の二人も下を向いて落ち込んでいる。

彼らに一体何があったのだろうか…?

『昼飯ほど休憩挟んでから午後の部だぜ!じゃあな!!ツーわけでイレイザー!午後のランチ一緒に…』

『寝る』

『ヒュウウウウーー!!!連れねえ!』

メシを誘うマイクに、相澤は寝袋を出して寝てしまった。その事に思わず奇声を上げてしまうマイクであった。あと私語やマイクが必要じゃない時は電源落とそう…

「ふぇー!アイツ彼処で大逆転するなんてやるな!」

「意外な展開ですね…」

葛城と斑鳩は、緑谷が四位に在籍出来た事に感心している。

「やったやったあ!!緑谷くん進出だ!」
飛鳥は自分のように嬉しくなり、思わずその場でピョンピョン飛び跳ねてしまう。
「……前から思ってたんだが、飛鳥…お前よく緑谷のことを褒めてるよな?緑谷にだけ感心してるように見えるんだが……」
と、ここで柳生が思わず横から口を開く。
「そ、そんな事ないよ!?///他のみんなも感心してるし、それに梅雨ちゃんや他のみんなが上位に入れなくて悔しいなー!って思う事だってあるもん!」
「そ、そうか…なんかスマンな……」
飛鳥は柳生に言われた事で、思わず頬を赤く染め、反論する。
「……でも、確かに……なんでだろ?」
飛鳥は自分でもよく分からず、思わず首を傾げてしまうのであった。すると…
「オイ、飛鳥…」
「ん?」
声をかけられたので、振り返って見ると、そこには緑谷と轟の姿があった。緑谷は気まずそうな感じで冷や汗を流している。
「お前、ちょっといいか?」
「え?あ…えっと、うん…良いけど……」
飛鳥は思わずぎこちない返事をした。心当たりがないのに急に呼ばれたので、少し驚いている。一体何を話されるんだろうか?

それと同時に…
「……」
炎を纏うその男は、黙って階段を降りていった。その時、後ろから声が聞こえた。
「やあ!やあやあ君も来てたのか連絡してくれよぉ!なっ!久しぶり!お茶でもしないかい?エンデヴァー!」
「……オール…マイト!!」
振り返ると、そこにはマッスルフォームの姿、Ｎｏ．　１ヒーロー

オールマイトが立っていた。

３９話「お話ししようか？」

騎馬戦が終わり、皆は会場の応援席に戻って来た。勿論、緑谷と轟は早く戻って来て飛鳥を呼んだため、現在三人はいない事になる。
「お帰りおまえら～！」
「お疲れ様です」
「皆んなお帰り～！障害物競争に続いて騎馬戦までご苦労様～！」
「よく頑張ったな…」
応援してた半蔵の忍生徒たち四人は、疲れに満ちたＡ組の生徒たちの労をねぎらった。
「くぅ…！ＪＫのこの言葉！オイラずっと夢みてたんだよ！あぁ…神よ！ゴッド！ありがとうございます…ありがとうございますぅぅ!!」
そんな四人を見た峰田は、目から滝のように涙を流し、更にはヨダレも垂らしては、地面に膝をついて拝んでいる。
「飯田くんズルイや！あんな超秘あったなんて！」
「ズルイとはなんだ！アレも立派な戦術だったろう!?何が悪いんだ！」
「あれ面白かったウエぇぇ～～イィ！」
お茶子は飯田にあんな超秘があった事に驚き、上鳴は終盤までずっと個性を使いっぱなしだった為、アホになっている。
「芦戸ちゃんおめでとう、私なんて全然…悔しいわ！」
「まあまあ…でも私もよく分かんないんだ～…爆豪私と手を組んでくれたけど、アレって轟の氷対策として私を選んだまでで…実際実力に見合ってんのか分かんないんだ～…」
悔しいのか、プンプンしてる蛙吹に芦戸は頭をボサボサしながらキョロキョロと周りを見やる。

すると…

「よお天哉！お前凄かったな！」
「ん？あっ…！」

声をかけられたので、飯田は振り返ってみると、何とそこには…

「『兄さん』!?!」

「あんな技があったなんて凄いな!俺ビックリしたわ!」

なんと、飯田の兄、飯田天晴であった。

「え、え?えええええええええええええええ!!??」

その場の皆んなは思わず驚きの余り、大きな声を出す。その顔を見ただけでも分かった。この人はあのターボヒーロー、インゲニウムだということを…実際は白いアーマーを着用してるが、実際スポンサーやメディアからの取材などがあり、素顔も見受けられてるのだ。何より有名なヒーローだからだ。

「い、飯田の兄ちゃん!?凄え…ターボヒーローインゲニウム……本物だ!」

切島は思わずゴクリと唾を飲み込む。

「アレが…飯田さんの!?」

特に一番驚いたのは斑鳩だろう…飯田に兄がいることは知っているが、まさかこう言った形で会うとは夢にも思ってなかったからだ。しかも兄は立派で有名なヒーローと来たものだ。血こそ繋がってないが、義理の兄の村雨とは大違いだ。

「飯田、あいつヒーロー家だったのか…」

「驚いたな…やはり弟の大会を観に来たんだろうか?」

柳生と障子はそれ程驚いてないが、関心はしている。

「まさか、本当に兄さんが来てくれるなんて思わなかったよ!」

「まぁー、相棒(サイドキック)たちが弟さんの大会を観に行ってやれって言われたし、それにまあ…弟の活躍っぷりも観に行ったって良いかなって思ってさ!まあ息抜きも含んでんだけど…」

真面目で堅いところがある飯田とは違って、兄の天晴はハハハ!と笑い、飯田の頭に手を置く。

「まあけどさ、お前が此処でヒーロー目指すの必死に頑張ってるの観ててさ、兄ちゃん安心したよ。あぁ、弟は今こうして頑張ってるんだな…ってさ!なんか、ホッとした!」

「っ！」

兄はニカッと笑みを浮かべると、飯田は嬉しくて思わず頬を緩める。

それを見てた斑鳩は、思わず脳裏に兄の姿を浮かべた。自分とはまるで反対…大違い……

もし自分もあんな風だったら…

もし自分に忍の才能がなければ…

もし自分にもあんな兄がいたら…

色んな、複雑な感情が湧き上がって来た。嫉妬もあるが、それ以前に飯田の兄がここまで立派な人だとは思わなかった。

何より自分は、生まれて義理とはいえ、兄の笑顔を一度も見たことがない。

自分と飯田は反対なのか…って思ってしまった。その事に思わず視線を下に逸らして顔を伏せてしまう。

「そんじゃあ、俺そろそろ行くは！んじゃあ午後も頑張れよ！」

飯田の兄はそう言うと、応援席から席を外して姿を消した。

そして、飯田の兄が皆んなの元から去った頃に…

「待ってください！」

「ん？」

後ろから突然声を掛けられたので、後ろを振り向くと…

「あの…少し、お話ししても、宜しいでしょうか？」

斑鳩の姿があった。

「いやぁ！飯田の兄凄かったなぁ！何よりカッケェ！」

「だよな、今度詳しく話し聞かせてくれよ！」

切島と上鳴は飯田を挟むようにして話をかけられ、飯田は思わず満面な笑みを浮かべる。
「ああ良いぞ！しかし、おかしいな…この時なら緑谷くんが突っかかってくるかと思ったんだが…おや？緑谷くんは？それと前々から気になってたんだが…飛鳥くんもいないぞ？」
「何処にもいないね？」
飯田とお茶子は、周りを見渡しながら、緑谷と飛鳥を探している。
「ま、まさか！アイツら…オイラ達がいないところであんな事やこんな事や…そして、○○○や○○○○○まで!?」
「何処までもブレないのね峰田ちゃん、そして皆んなの前で、ましてや女性の前で卑猥なことを言うのは良くないわ」
バチン！と長い舌を使って鞭を打つかのように峰田の頬を叩き、峰田は「グハァっ!?」と、その場に倒れてしまう。

「話って…なに？轟くん？」
「……」
轟は静かに、そして冷たい目で二人を見やる。まずは、飛鳥の方に視線を移す。
「緑谷の前にまずお前の話をしとく…単刀直入言う…お前って……『半蔵の孫』なんだろ？」
「「!!??」」
轟の突然の質問に驚き目を見開く飛鳥と緑谷。

「え、えっと…そ、そ…そうだけど……でも、何で？轟くんには言ってないのに…」
「俺には言ってねえってことは、他の奴らには言ってたんだな…」
　飛鳥のぎこちない言葉に、轟は問い詰めるように聞く。
「勘違いすんな、他の奴らが俺に教えた訳じゃねえ……食堂ん時、飯田と麗日、そんで飛鳥…お前らが話してる時に聞いた」
「え？……あ！」
　あの時、そうそれは緑谷がオールマイトに呼ばれて三人で食堂に行って並んでた最中のことだ。なるべく皆んなには聞こえない程度で話してた訳だが、どう言うつもりなのか、偶々轟が近くにいて聞いてたらしい。
「盗み聞きのつもりじゃねえがな……そんで、俺たちが悪忍養成学校、蛇女子学園に乗り込む際に戦闘許可出してくれたのも、ＵＳＪの時に助けに来てくれたのも…あの人が伝説の忍、半蔵だろ？」
「っ…」
　轟の推測に飛鳥は当然、緑谷も言葉を失った。
「何となくあの爺さん…お前と雰囲気似てた…それにただの忍がＵＳＪにやって来るなんて訳ねえからな…だが伝説の忍なら俺らのピンチに駆けつけに来てくれたのも、雄英に居るのも納得が行く……
　これも俺の推測な訳なんだが…否定しないってことは、そう言うことで良いんだよな？」
「轟…くん…」
　そこまで推測してたとは予想外なのか、飛鳥は思わず顔を伏せてましう。別に仲間ならバレても問題ないのだが…それでも轟に自分が半蔵の孫だということを言わなかったことに、何処か罪悪感を覚えてしまう。
「ゴメンね…轟くん……その事言わなくて……」
「別に…何か理由があったんだろ？そこ深く詮索する気はねえし、忍としてなら尚更仕方ねえ事だ…」
　轟はそう言うと、今度は緑谷の方に向く。そのことに緑谷は僅かにビクリと体を震わせ反応する。

（かっちゃんとはまた違う……冷たい威圧感……一体何の話を……）
ゴクリと固唾を呑む緑谷。轟は口を開く。
「気圧された…自分（てめえ）の誓約を破っちまう程によ…」
そう言うと轟は左手を見て、拳を強く握りしめる。
（そう言えば轟くん…左を使えば有利な筈だったのに……なんで使わなかったんだろ？）
轟の左手を見て疑問を抱いた。多分それは飛鳥も緑谷と同じことを考えていただろう…もし全力で勝ちに来るなら寧ろ左側を使った方が良いに決まってるし、本気なら両方使うだろうと…
「応援席にいた飛鳥たちはどうか分からねえけど……飯田、上鳴、八百万、常闇、麗日、サポート科の奴も…何も感じてなかった。最後の場面、あの場で俺だけが気圧された……」
あの時敵の襲撃に立ち向かった、オールマイト（平和の象徴）を、身近で経験した轟だけ
「そ、それって……つまり、どういう……？」
「お前にオールマイトと同様の何かを感じたってことだ…」
轟の言葉に緑谷は冷や汗を垂らし、心臓の音が早くなるような感覚がした。
「お前さ……オールマイトの隠し子か何かか？」
「!?」
轟の言葉に飛鳥は思わず緑谷に顔を振り向く。もしそうだとすればそれはとんでもない事になる。
しかし緑谷はてっきり個性がバレてしまったのかと思ったが、違ったらしく内心少しホッとする。
「ち、違うよ！それは……か、隠し子じゃないし、違うって言うに決まってるし納得いかないと思うし疑いが晴れないわけじゃないけど、そんなんじゃなくて……！」

緑谷は慌てた素振りを見せながら首を横に振る。
「そもそも……轟くんは…何を話したいんだよ……そんな話ならわざわざ飛鳥さんを呼ばなくたって良いし……それに、その…なんで僕なんかに……？」
「そ、そうだよ……そりゃあ私がじっちゃんの孫だってこと黙ってたのはアレだけど……でも私と緑谷くんの話に関係性が見えないし…第一轟くんは何の為にそんな……」
忍のことを聞きたいなら飛鳥だけを呼んで話をした方が良いし、また緑谷となら緑谷とで話をすれば良いものを、なぜわざわざ二人を同時に呼んでこんな話をするのかが分からなかった。しかし、轟にとっては飛鳥と緑谷の話は重要だった……
「『そんなんじゃなくて』…って言い方は、少なくとも何か言えない繋がりがあるってことだよな？」
轟は眉をひそめてそう言った。
「俺の親父はエンデヴァー知ってるだろ？」
「！」
「ああ、うん！斑鳩さんから聞いたよ！鳳凰財閥と仲が良いんだってね？」
「勿論、大狼財閥ってところもな…彼処も割と有名だ」
轟の質問に飛鳥は頷きそう言うと、轟は二人を見つめて話しを続ける。
「万年Ｎｏ．２のヒーローだ。んでもって忍の社会でもアイツは有名だ…オールマイト程じゃねえが、忍とは深い関わりを持ってるし、忍が客に装い何度か家に来ることだってあった…」
なんと轟の家は鳳凰財閥のみならず、他の忍と関わりがあるそうだ。轟はまだ学生のため、忍の事はあまり詳しく知らなかったが、飛鳥たちと関わり轟にとっては忍そのものの存在は大きくなったそうだ。
「だから緑谷、もしお前がオールマイトと何らかの関わりがあるってんなら、尚更お前に勝たなきゃならねえ…もちろん伝説の忍の孫である飛鳥、お前もな…」

「え??」
轟の言葉に、二人は目を見開き首をかしげた。何故轟は緑谷と飛鳥…二人に勝たなきゃならないのだろうか?特に飛鳥は忍だ、体育祭で競える筈がない…それは本人もよく分かってる事だ。

現在。轟が二人のことを話してるなか、Ｎｏ．１ヒーロー・オールマイトとＮｏ．２ヒーロー・エンデヴァー　この二人は対面していた。
「や!久しぶりだねエンデヴァー!
１０年前の対談振りかな!?あの日君はコーヒーによく拘ってたよね!覚えてるかな?見かけたら挨拶しとこうと思ってね!会っちゃった!なんて!ＨＡＨＡＨＡＨＡ!」
「……そうか、ならもう済んだだろ?去れ、俺の前から消えろ!」
相変わらず陽気で活発なオールマイトに、エンデヴァーは眉をひそめて吐き捨てるようにそう言うと、背中を向けた。
「ましてやこの俺が貴様と茶など冗談じゃない……便所に行くんだ失せろ!」
「つれないこと言うなよーー!!」
オールマイトは一瞬でエンデヴァーの前に立ち、絶えない笑顔を見せるとエンデヴァーは思わず舌打ちをした。
「折角お茶のついでとして君の好物な葛餅も二人で一緒に食べようと思ってたのに…アレ美味しいよね!
まあそれはさておき…君の息子さん、焦凍少年。力の半分も使わず素晴らしい成績だ!教育が良いのかな?」

「何が言いたいんだ…」
　オールマイトの言葉に苛立ちを覚え、ボボゥと炎を揺らがず。
「いやいやマジで聞きたくてさ、次代を育てるハウツーってのを…良かったら聞かせてくれないかい？それにあんまり半蔵くんに会ってないとはいえ、忍との交流もいいって聞いてるぜ！何か参考になるものとかないかなぁ…ってね！」
「……貴様に俺が教えると思うか？相変わらずそのあっけらかんとした態度が…癪に障る……」
「ご…ゴメン…」
　オールマイトはしゅん…とした様子で謝り、エンデヴァーは再び歩を進める。

「まあ…これだけは言っておく、覚えとけ…アレは…いずれ貴様や半蔵をも超えるトップヒーローにする！……そうするべくつくった仔だ!!」

　ゾワッ！
「な…にを……」
　笑顔こそは絶えてはないが、エンデヴァーの気迫にあの平和の象徴オールマイトでさえゾッとし、背中に悪寒が走り、僅かに震えた。それほどまでに、この男の気迫は凄いものだと印象付けられる。
「今はまだ下らん反抗期だが…必ず超えるぞ……超えさせる!!忍の力を超越し、よもや貴様をも超える程にな!!」
　エンデヴァーは激しく炎を揺らがせそう言うと、オールマイトに背中を向けて去っていった…その表情はとても厳つく、激しい怒りの色を染めて。何よりその目は、今の轟に似ているようで…

「ヒーローとして破竹の勢いで名を馳せたが…それだけ生ける伝説オールマイトが仕方なかったらしい。半蔵は忍だから別にどうってことないそうだが…」
場所は変わり、轟は緑谷と飛鳥に自分の家のことを話し続けている。
「自分ではオールマイトを超えられねぇ親父は、次の策に出た…『個性婚』って知ってるよな？」
「個性婚？」
個性婚について知らない飛鳥は、首を傾げるが…
「し、知ってるよ…超常が起きてから、第二～第三世代間で問題になったやつ…だよね？」
「ああ…そうだ」
緑谷は知ってるようで、難なく答えた。
「自身の個性をより強化して継がらせる為だけに配偶者を選んで結婚を強いる。倫理観の欠落した全次代的発想だ。アイツは実績と金だけはある男だ…親父は母の親族を丸め込み、『母の個性』を手に入れた」
轟の話はとても深く、聞いてるだけで気持ちが段々と重くなってきた。
「そこで今度は忍だ…」
「え？」
轟は片手で左目を押さえつけるように手を置く。
「さっきも言っただろうが、親父は忍とは交流がよくて、何度か客を装

い家に来ることがあった…なんでだと思う？

忍の力を俺に持たせる為だ」

「「?!!?」」

轟の言葉に緑谷もそうだが、飛鳥は思わず口を隠すように手で覆った。

「持たせるっつっても、特殊な忍法の力だのそういう意味じゃねえけどな。話を聞いたのは忍が受ける訓練、どうしたら強くなるのか…様々なもんだが、幼い頃の俺は、アイツに忍の訓練を無理やりやらされた…毎日反吐が出る程な…」

「と……ど……ろ…き…くん……その……話……ほん…とうなの…？」

轟の過去を聞き、真実を知った飛鳥は、震えが止まらなく、声を振り絞るのがやっとだった。

忍の訓練はとても厳しく、ましてや一歩間違えれば死ぬ危険性だってある。なのにそんな訓練を毎日、しかも無理やりやらされたと来たものだ。

「その事を良いことにして、様々な忍に訓練を聞いては、やらされて……そんなのが中学にまで続いた。今でも忘れねえ…何度死にかけたことか……」

轟の言葉を聞き、飛鳥は思ったのだ。斑鳩から話を聞いたときに、轟とエンデヴァーのことを知ったのだが…エンデヴァーが斑鳩に聞いた忍の訓練…それはもしかしたら、いいや…確実にその時の轟は無理やり受けられただろう。と…そう考えると鳥肌が立つ。だから飛鳥たち忍学生が雄英に転校する際に、轟は他の人たちとは違ってリアクションは取らなかったのだ。無反応で、冷静でいて…轟が驚かなかった理由が分かった気がした。

「忍の訓練を受け力を付けさせた俺を、伝説の忍である半蔵と、オールマイト以上のヒーローに育て上げることで自身の欲求を満たそうっ

てこった……うっとうしい!!俺はあんな屑の道具にはならねえ！母はアイツに苦しめられ、いつも泣いていた……」
轟の目には、焔の時の戦いに見せたのと同じ…いや、それ以上にエンデヴァーに対する憎悪と怒りが含んでおり、母に対する悲しみ、苦しみが込められた。

「『お前の左側が醜い』と、母は俺に煮え湯を浴びせた」

「!!!」
大きすぎる衝撃、二人は言葉を失い絶句した。そして知って知ったのだ。何故轟の左側の顔に火傷の痕があるのかを……
「俺がお前らを呼んでこうして話した訳だが、飛鳥…お前に半蔵の孫かどうか聞いたのも、緑谷、お前につっかかんのも見返す為だ。クソ親父の個性なんざなくたって……いいや、使わず一番になることで奴を完全否定する！」
轟の顔は、蛇女子学園で焔に立ち向かった際に見せた時よりも憎悪が宿っていた。左を使わず一位になることで、父親を完全否定する。それが今回、体育祭で優勝する目的なのだろう。
「だから飛鳥、あの時言わなかったけど…今ここで言うな？
いつかお前にも勝つぞ」
「!!」
轟が飛鳥に宣戦布告。しかしそれはこの体育祭ではなく、いつか先のことだろう…轟と飛鳥この二人が戦うその日への…

「……」
誰にも見えない、飛鳥にすら勘付かれない場所で、それを聞いてた一人の男、爆豪勝己は冷や汗を垂らしながら聞いていた。

「悪いな、長話になっちまって……まあ理由は何にせよ、俺は右だけで上に行く…」
「轟くん…」
背中を向ける轟に、飛鳥は一歩足を出し声をかける。その呼び声に足を止めて振り向くと、飛鳥は澄んだ目で轟をジッと見つめた。
「轟くんの過去を聞いて…驚いて正直混乱してるし、人には色んな事情を抱えてて、それが轟くんの覚悟だっていうのは分かった…だから轟くんの挑戦は勿論受けるよ。けど…」
飛鳥は数秒黙り込んだ後、息を大きく吸ってこう言った。

「やるなら…全力(左)で、かかって来て！」

ピタッ…
「なに……？」
「飛鳥さん!?」
飛鳥の言葉に轟は眉をひそめ、緑谷に至っては驚い大声を出してしまった。さっき話したばかりだ、なのに飛鳥は左も使えと言って来た。突然そのことに少し苛立ちを覚えた。
「轟くんの気持ちは理解したよ、でもね…全力でぶつかってみないと分からないことだってあると思うから…だから、全力でかかって来てって意味！」
飛鳥はいつの間にか、何時も見せる元気な笑顔を浮かべた。轟は呆れたのか、「ハァ…」とため息をついて、飛鳥に背中を向けようとすると…
「轟くん！」
「…緑谷…」
今度は緑谷から声をかけられた。緑谷は自分の手を見つめながら話し出す。

「……僕はさ、ずっと色んな人に支えられて、ここに立ってるんだ……誰かに助けられてここにいる。
僕は飛鳥さんみたいに、真っ直ぐぶつかって行って、んでもって半蔵さんの孫とかじゃないし、特別な力も持ったわけでもない…ましてや轟くんみたいな境遇にあった訳でもないし、控え室で話した時もそうだけど、力で比べたら君の方がずっと上だ……でも…！」
顔をバッとあげて、轟の顔を見つめる。
「僕を助けてくれた人たちに応えるためにも…！負けられないんだ……だから、僕もこれを機に改めて言うね…
僕も君に勝つ!!」
決意のある声に、轟は黙り込む。
（緑谷くん…なんかこー…こう言う時って凄くカッコいいなぁ…なんて）
飛鳥は思わず心の中で、そう呟いた。

轟は緑谷のみならず、飛鳥にまで宣戦布告したのは、やはり伝説の忍　半蔵の孫だからというのもあるが、何より半蔵もまたオールマイトと何処か似ているからなのかもしれない…
こうして三人の話し合いは終わったのであった。

場所は変わり…斑鳩は飯田の兄、天晴に話しかけて五分が立っていた。
「へえー・天哉とは本当に気が合うな！タダでさえロボットみたいに堅い真面目なアイツと似たもんが居るのは驚いた！・ははっ！」

「そ、そんなにですか？」
天晴はかれこれ斑鳩と色んな話をしたのだ。家のことや飯田とは気持ちが合うと…そして、弟がどんな人間かを…
「ああ、まあアイツは昔の頃から俺より凄くてさ、才能もあって…正直羨ましい位今もすごくてさ…」
「…っ」
何気ないことを口にした天晴。才能がある、羨ましい、自分より凄い…それを聞いては自分の家のことを思い出す。
軽蔑、憤怒に近い目でいつも睨みつけてた兄。
自分が忍だということを許せず、養女である自分が鳳凰財閥の家系に伝わる飛燕を手にしたことに対して、斑鳩そのものを拒む兄。
たった少しの才能で憎まれてきた彼女。それなのに飯田の家は自分と同じようで反対だ。この人は自分より凄い弟がいるに、それを拒まず、羨ましく微笑んでいる。
だから斑鳩には分からなかった……
自分と飯田は何が違うのだろう？と…兄の優しさ？それとも…血が繋がってないから？
いや、両方だ…
「才能があって…自分より凄い弟がいて…羨ましくて……私と飯田さんは一体何が……」
「ん？どうかしたのか？なんか悲しいような顔してるけど…なんかあったか？」
斑鳩はふと思わず思ってたことを口に出してしまってたらしく、斑鳩の様子に気付いた天晴は、首を傾げる。
「あの…天晴さん！」
そして迷いに迷って悩み、考えた斑鳩は打ち明けた…自分の悩んでたことを飯田の兄、天晴に話した。勿論、忍の家系や存在は秘密にして…
……

「ええ!?君ってあの鳳凰財閥の?!こりゃ驚いた……言うならもっと早く言ってくれよ～…」
「も、申し訳ございません！ですが、急にそれを言ったら余計混乱を起こしますし…それに…鳳凰財閥の娘だなんて言ったとしても唐突すぎますし…」
「そりゃそうだ！あっははは！確かにな！」
　まず最初に出た言葉は、斑鳩が鳳凰財閥の娘だということに驚いたそうだ。だが飯田の兄は優しい笑みを浮かべて笑い過ごしている。
「悪いわるい、話戻すか…んで、自分には才能があって、でも義理の兄には才能がなくて…たった少しの才能で憎まれてきた。ってか…んー、思ったよりもシリアスだなぁ～…」
「す、すみません…こんなことを話して…」
「いーよいーよ！気にすんなって！」
　自分の家系に悩む斑鳩は思わず頭を下げてしまい、天晴は少し動揺が混じった感じで斑鳩の頭を上げさせる。
「俺に話すってことは…さっき俺が飯田とお前は似てるなーって言ったことで、君は天哉の兄である俺となら打ち明けれる、何か分かるんじゃないかって思って話したわけか…」
「はい…天晴さんはとても優しく、兄とは正反対で……話しやすいという意味も含んでいるのですが…天晴さんの言ってることが一番正しいですね」
　それを聞いた天晴は、「うーん…」と悩むように考えて、暫くしてから口を開く。
「……妬むのは、それは人には誰だってあることだし、仕方ないことかもしれない。んでもって血が繋がってないから…だからそんな他人が許せないってのは、少なからず世の中いるもんだな」
「……」
「けどさ、それでも家族って血の繋がりだけじゃないんだよな」
「え？」
　天晴の言葉に、目を大きく開く。
「ただの血の繋がりなら誰だってそうだ。それだけが全てって訳じゃ

ない…俺はそう思う。それは君だけじゃなくて、義理の兄も分かってるんじゃないのか？」
「お兄様が…」
確かに家族というのは血の繋がりだけではない。それは斑鳩が最も知っている。何せ斑鳩にとっての家族は、半蔵学院の忍生徒たちなのだから…
「うん、だからさ…義理だろうと血の繋がりだろうと関係ない…それに、向こうが認めないならさ、認めさせれば良いんじゃないか？」
「っ！」
天晴の言葉に、斑鳩は心を貫かれたような感じがした。それはとても大きな衝撃で、でも決して傷つくわけではなかった。
考えもしなかった。向こうにも認めさせる…自分は忍だということを。しかし今まで自分を拒んできた兄は、認めるだろうか？
「君が今、何をどう頑張ってるのか、何の目標があるかは俺には分からないけどさ…けど、自分を拒む兄とちゃんと向き合って話すのも、大切だと思うぜ」
「向き合って…」
考えもしないことを言われて、斑鳩は何も言えない。向き合うなんて、そんなこと考えもしなかった…けど、確かに自分は一度も兄と向き合ったことはない……だが、向き合ってないのは兄もそうだった。お互い向き合ってないことを知り、斑鳩は言葉を失う。
「ですけど…本当にそれでお兄様は……向き合ってくれるのでしょうか…？」
「それは分かんないさ、けど…やらずに決めつけるよりかは良いだろ？」
「……！」
その言葉に斑鳩は、自分の悩んでた思いが吹っ切れたような感覚がした。
どうせ何かを言われるなら、やらずに決めつけるより、やって言われた方が良い。そんな感じがしたのだ。確かにそうだ…やらずに何でも決めつけては本当の答えは手に入らない。

「まあけど、きっと分かってくれるって！天哉が俺に憧れるくらいだもん、この先いつか、お前の兄ちゃんはお前のことちゃんと認めてくれるさ！」
「天…晴…さん……」
まだ出逢ったばかりで、初めて会ったのに、この人は自分のように優しくしてくれる。斑鳩はそんな立派な兄である天晴を見て、天哉のことが羨ましくなり、天哉が兄を憧れる気持ちも分かってきた。
「わざわざ私の悩みを聞いてくださり…ありがとうございます……」
「いいって良いって！ますます天哉に似てんな！それにホラ、困った時はお互い様だって言うだろ？…おっと、話してたらもうこんな時間か…そろそろ行くは俺、じゃあな！もしまた会えたらまた今度話そう！」
天晴は明るい笑顔を斑鳩に見せて、その場を去ろうとする。
「はい、誠にありがとうございました…！」
斑鳩は、そんな立派なヒーローである飯田の兄にもう一度礼を言い、頭を深く下げた。天晴はそんな斑鳩を見て微笑むと、姿を消して去って行った…
斑鳩は居なくなるのを見て確認すると、思わず一滴の涙が流れ、頬に伝わっていた。

昼休憩終了。
『最終種目の発表の前に予選落ちの皆に朗報だ!!あくまで体育祭！全

員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ！そして見よ!!』
　昼休憩が終わり、相変わらずマイクはテンションを上げている。そして会場にはぞろぞろとA組、B組、サポート科の発目に普通科の心操も姿を現わす。
『本場アメリカからチアリーダーも呼んで、より一層盛り上げ…て……ん？何だアリャ…』
「なーにやってんだアイツら？」
　マイクと相澤は、何かに気づき眉をひそめる。それは…
『どーしたA組!!?何でチアの格好してんだ?!!?』
　A組の女子全員はチアの格好をして登場した。
「おぉ！発育の暴力！アイツらやるじゃねーか!!ヒャッホーーイぃ！一人一人のおっぱいを揉みてえぜ！」
「何を感心してるんですか葛城さん！それと卑猥なことはこの風紀委員である私が許しませんよ!?」
　セクハラ葛城は、手をわしゃわしゃしながら、チアの格好をした女子全員を見渡す。そして峰田と上鳴にガッツポーズをする。どうやらこの事件の犯人は峰田と上鳴が原因だったようだ。取り敢えず席に戻っていた斑鳩は葛城を注意する。
「良いじゃねえか別に！それはそうと斑鳩さっきまでどこ行ってたんだよ？」
「そ、それは…何だって良いじゃないですか！」
　葛城に聞かれた斑鳩は、頬を赤らめそっぽを向く。

　一方チアの格好をした八百万は、峰田と上鳴の策にまんまとハメられショボンと落ち込む。
「何故こうも峰田さんの策にハマってしまうのかしら私……自分が惨めで……」
「気にすることあらへんよ！大丈夫だいじょーぶ！ね？」
　そんな八百万の背中を、お茶子は優しく撫でる。
「アホだろアイツら…やられた……ましてやアホそうな峰田と上鳴に……！」

耳郎は恥じらいながら、屈辱を受けた目線で上鳴と峰田を睨みつける。
「良いじゃん別に！やったろーよ!!」
「透ちゃん…好きね」
葉隠はむしろハイテンションで盛り上がり、それを見た蛙吹は思わず呟いた。

何やかんやであったが、競い合うレクリエーションが終われば最終科目。いちばんの見せ所。それは…
『進出４チーム！総勢１６名からなるトーナメント形式!!』
巨大モニターに映るはトーナメント形式の図が映し出される。
『一対一のガチバトルだ!!!』
それが雄英体育祭の優勝者を決める、ファイナルバトルだ。

４０話「緑谷出久ＶＳ心操人使」

一対一のガチバトル。この競技は至ってシンプルだ。
ルールに従い、個性を使っては一対一で戦う感じだ。ようは小細工なしの実力勝負といったところだろう。こう言った競技は大体が単純だ。
「トーナメントか！毎年テレビで見てた舞台に俺らは立つんだな！なんかこう……腕がなるぜ！」
切島は緊張しているのだろう、ハラハラしながらトーナメント決勝戦を待ち望んでいる様子が見受けられる。
毎年形式は違ったりはするが、例年サシで競っているとのこと…
「まあ取り敢えず、まずはトーナメントの組み合わせ決めのクジを引いて貰うわよ。組みが決まったらレクリエーションを挟んで開始にするわ！」
ミッドナイトはクジを引くための正四角形の箱を出す。
「レクに関してだけど、進出者１６人は参加するもしないも個人の自由よ。息抜きしたい人や温存したい人とかだっているだろうしね。そんじゃっ、まず一位チームから順番に…」
「あの！すみません！」
ミッドナイトが話してるなか、聞き覚えのある男子の声が聞こえ、皆は一斉に振り向くと…なんとその人物は……
「僕、辞退します……」
「尾白くん!?」
１年Ａ組　尾白猿夫であった。
尾白が突然辞退を申し上げたことで、皆は動揺し疑問を抱く。それは出場者だけでなく、会場や飛鳥たちもだ。
「どうしちゃったんだよ、あの猿っぽいやつ!?せっかく出場出来るん

だぜ…？」
「何か理由があるのでしょう？でなければ…」
「理由？腹が痛えとか？」
「……」
　葛城は尾白がなぜ出場を蹴ったのかを疑問に思い、斑鳩は何か理由があるのだろうと言うが、葛城の余りにも馬鹿げた答えに斑鳩は言葉を失ってしまう。
「でも確かに変だな…こんな機会滅多にないと言うのに……アイツに限って怖気ついた…なんてことはないしな…」
「分かった！おやつの時間がないからだ!!」
「雲雀ちゃん、それ絶対に違うと思う…ううん、絶対に違うから」
　おやつの時間がないだのと、考えもしないことを言ったため、あの飛鳥でさえ目を細めて突っ込んでしまう。

　尾白はなぜ辞退を願うのか？その理由は勿論、この場で明かされることになる。
「チャンスの場だって分かってるよ…俺だってヒーロー目指してるんだ。正直言えば出たいよ……それをフイにするなんて愚かなことだってのも！……でもさ！」
　尾白は真剣な眼差しで、己の拳を強く握りしめて見つめる。
「皆が本気で力を出し合い争ってきた座なんだ…なのにこんな、ワケの分かんないままそこに並ぶなんて…俺は出来ない」

　そう言い切った。

「気にしすぎだよ！本戦でちゃんと成果を出せば良いんだよ！」
「そんなん言ったら爆豪と手を組んでた私もそうだよ!?」
　真っ先に葉隠と芦戸は、悔やむ尾白を励ます。特に芦戸なんかは、轟の氷対策として爆豪に呼ばれたのだ。実際実力として誘われたわけではない。いや、最初に誘う声をかけたのは芦戸だが……

「違うんだよみんな…俺のプライドの問題…気持ちの問題なんだ！……皆んながそう言ってくれるのは嬉しい…でも、俺が嫌なんだよ……」
その声には悔いや心の苦痛を感じさせるものが含んでいた。尾白の言葉に皆は黙り込んでしまう。尾白は目を瞑り、少しだけ、ほんの僅かに涙を浮かべていた…
「僕も、辞退します！」
そんななか、辞退を願う者は尾白だけでなかった。背が小さく、見るからに大人しそうなB組の男子だ。
「僕もその人の言葉に一理あります！理由も同様です！実力如何以前に『何もしてない』者が上がるのは、この体育祭の趣旨と相反するのではないだろうか！」
「庄田…」
棄権を求める庄田二連撃に、その隣にいた鉄哲は思わず声を出してしまう…
尾白、庄田、ついでに言えば青山と手を組んでいたのは…普通科の心操と呼ばれる人物だ。この人物についてはよく分からないが、何かの個性を使って三位にまで上がれたのだろう。しかしどういった個性なのかは未だ不明だが……
棄権を求める二人に、会場の空気は重くなる。
しかし主催であるミッドナイトがそれを認めるかどうかだ…二人の理由は素晴らしいが、どんな理由があっても、決めるのは主催のミッドナイトなのだから。
『そう言う話は…好み!!ってなわけで尾白、庄田の棄権を許可する！』
（許可すんのかよ…！）
あんなにも表情がドス黒かったのに、僅か3秒くらいで決まった。青山は棄権しないらしい。
「そ、そんなのも有りなんだ～…」
飛鳥は冷や汗を垂らしながら苦笑する。

『けどそうなると人数が合わなくなるわね…その場合は騎馬戦５位の拳藤チームだけど…一体誰にするのかしら？』
「う～ん…まあアタシらは全然動けなかったし…ここは…」
当てられた拳藤チーム、一体誰が行くのかという話になる。チームのリーダー、拳藤は周りをキョロキョロ見渡す。
「最後まで頑張って上位キープしてた、鉄哲チームじゃないか？」
「？!!」
チームの名前を呼ばれた鉄哲達は、驚く表情を浮かべる。その後段々と涙が浮かんでいき、鉄哲は思わず頭を下げる。
「オメェら…ありがとな!!」
「このご恩は一生忘れません…」
というわけで、鉄哲と塩崎が繰り上がり、１６名となった。

トーナメントの結果は…
緑谷ＶＳ心操
轟ＶＳ瀬呂
塩崎ＶＳ上鳴
飯田ＶＳ発目
芦戸ＶＳ青山
常闇ＶＳ八百万
鉄哲ＶＳ切島
麗日ＶＳ爆豪
こうなった。

トーナメント表のモニターを呆然と見つめる緑谷。
（僕が勝ったら、そして轟くんも勝ったら…もう早くぶち当たるのか…！）

轟から受けた宣戦布告を思い出す。
その時だった…

「なあ、あんただよな？緑谷出久って…？」
「!?」
　後ろから声を掛けられた。振り返って見ると、その人物は普通科の心操と呼ばれる人で、また尾白と庄田、青山と手を組んでた生徒だ。
「よろシ「喋るな緑谷！」!?」
　緑谷が返事をしようとした途端、突然尾白が尻尾を使って口を巻き、喋れないようにする。それを見た心操は思わずため息をつき去って行く。尾白はとても厳しい警戒態勢で、睨みつけながら姿が消えるのを確認すると、ようやく口を開いた。
「ヤツの話を答えると…もう終わりだ……」
「へ？それってどう言う……？」

　一方、モニターを見つめてから、轟は緑谷を睨みつける。
（……思ったよりも早えな……来いよ緑谷、この手で倒してやる……）

　切島と鉄哲は…
「お前がB組の鉄哲ってやつか！如何にもＴＨＥ・鉄！って感じが伝わってくるな！」
「お前はA組の！そういうお前こそガチガチの硬化野郎だな…ダブりかテメェ！」
「それを言うならこっちのセリフだ！」
　切島と鉄哲は、個性が似てるため、何かしらといがみ合い、仲が良さそうだ。

「……麗日？誰だソイツ？」
（ひいいいイイイイーーーーーーー!!?）
　自分の対戦相手を見て、誰だか分からない為首をかしげる。そのすぐ近くに居たお茶子は顔面蒼白し、滝のように冷や汗が流れる。麗日が誰なのかすら分からない爆豪に、お茶子は今の現状で最早突っ込みを忘れてしまう。

ゴーグルを掛けたサポート科の女子、発目は、飯田を見かけて話しかける。
「そのメガネ…もしや貴方は飯田さんでは間違い無くて!?先ほどターボヒーローインゲニウムを見かけたのですが…」
「ムッ！如何にも僕が飯田だぞ！インゲニウムは僕の兄だ！」
「ひょおーーー！お会い出来て光栄です！実は貴方に話したいことがあるのですが…」
『よーーし！それじゃあトーナメント置いといてレクリエーションだ!!楽しく遊ぶぞ盛り上がれー！』
マイクは相変わらず馬鹿でかい音量を出して、ノリノリ気分で実況をする。

半蔵、女子陣たちではまたもや話し合いが始まる。
「飯田さんの相手はサポート科の…それに緑谷さんとは普通科の人と対決ですか…」
「なんか面白くなってきたじゃねえか！」
「爆豪の相手は……」
「麗日ちゃんだね……」
「ひ、雲雀、お茶子ちゃんの戦い見れないよ……だって爆豪くん女にも手をあげるんでしょ……？」
斑鳩と葛城は他の人たちの戦いに興味を持つが、雄英転校生三人は、爆豪とお茶子を温かい目（雲雀は恐怖を見るような目）で見守る。

とは言っても…

神経を研ぎ澄ます者
緊張を研ぎほぐそうとする者
激戦を見て思いを心に刻む者

それぞれの思いを胸に、あっという間に時は来る。

セメントスの個性、セメントで会場の中心に舞台を作り上げる。セメントスの個性はコンクリートがあれば現代社会では鬼強い。それを操り色んな物へと造り替えるので、戦闘としてだけでなくともとても便利だ。

『サンキューセメントス！ヘイガイズアァユゥレディ!?』

ここでマイクの実況が始まる。

『レクリエーションだのなんだの色々やって来ましたが!!皆さんお待ちかねの、最後の競技、ガチンコ勝負だぜ！』

マイクの実況で観客はドッと歓喜の声を上げる。騒ぎ、煩いくらいだ。今までは周りに皆んなが居たから緊張もそれほどしなかったが、いざ一人との戦いになると尚更緊張感が増す。しかも全国にまで流れてるのだ、逆に緊張しない方がすごい。まあ緊張しない輩となると、轟、爆豪は当たり前のことだが…

しかし緊張するのは必ず自分だけでないはず…

焦り
緊張
不安

心臓の音が高鳴り、色んな感情に惑わされながらも、なんとか落ち着きを取り戻す為、呼吸を整える緑谷

『頼れるのは己のみ！ヒーローでなくともそんな場面ばっかりだ分かるよな!?』

拳をソッと握りしめ、胸に当てる。

『心・技・体に知恵知識！総動員して駆け上がれ!!』

緑谷は会場に出場しようとしたその時だった。

「ヘイ！緑谷少年やったな！」
後ろから、とても聞き慣れた声。聞くだけで心がホッとする…いつも元気を与えてくれるその主は…
「オールマイト!?」
「遅れてメンゴめんご！ワン・フォー・オール掴んできたな！」
ガリガリの姿のオールマイトは、緑谷に親指を立てる。しかし緑谷はあまり乗り気じゃないのか、顔を伏せてしまう。
「えっと…まだ、不安です……敵に撃った時のイメージをいつも頭の中に浮かんでるんですけど、まだまだ全然…それにさっきの轟くんの騎馬の時、個性使って手は壊れませんでしたが、痛みがあって……まだ完璧というわけでは……仮に成功しても、ちょっとパワーが上がったくらいしか……あ、あと蛇女子学園の時に襲ってきた脳無に１００％の力で指のみを使って撃ったんですけど、立ち上がって……倒せなくて……」
「うん、そりゃそうさ。だって君の１００％が全て引き出してるわけじゃないもの……以前話した０か１００かの出力で言えば、今の君で出せてるのは５だからね」
（５!?）
話すたびに不安が高まってく緑谷。ワンフォーオールについて説明したところ、緑谷の１００％の力は、ワンフォーオールの０か１００かで言えば５らしい…
５て…じゃあ本気の力はどんだけだよ……
「そう言われると、完成するまで僕あと何十年掛かるんだろう……？皆と運に恵まれたって感じですよね僕……ダメ駄目じゃ…」
「そこは『こなくそ頑張るぞー！』で良いんだよナンセンス緑谷少年！」
ネガティブな緑谷に、オールマイトはスタアアン！と頭にチョップを食らわせ喝を入れさせる。
「君の目指すヒーロー像は！君の見てきたヒーロー像はそんな儚げな顔かい？違うだろ!?いいかい？怖い時、不安な時こそ…」
緑谷は思わずチョップを食らった頭を手で押さえつける。

「笑っちまって臨むんだ！」

ムキッとした逞しい肉体の姿へと変わり、いつもの調子のいい笑顔を見せる。

「ここまで来たんだ、虚勢で何でも良い…胸は張っとけ！私が見込んだってこと忘れるな!!」

オールマイトの励ましに、言葉に、緑谷は唾を飲み込み、大きく頷いた。

そして、両者共にやって来た。

「あっ、来ましたよ！」

「緑谷くん頑張れー！」

「頑張れぇ～！」

「ああ、雲雀頑張れ！」

「いや、何でだよ……」

今回は半蔵五人の応援（柳生はズレてて）だけでなく、待機してるA組も応援している。

「これさ、あたしらA組同士で戦う場合、どっち応援しようかな…」

「そう考えると難しいわね…ケロ……」

「オイラは俄然女子だな、うん、最高！」

「……」

耳郎と蛙吹が話し合ってるのを聞き、峰田は仲に入って自分の思ってることを言うと、二人は無言で引いた。いや、引くってよりももう何だお前？みたいな感じかもしれない。峰田が変態など、誰もが知ってるんだから……

『一回戦！成績の割になんだその地味ボロなお前！ヒーロー科、緑谷出久!!』

緑谷出久は一歩前に出る。
『ＶＳ　ごめん君まだ全然活躍してないけど何か凄いやつ！普通科、心操人使!!』
心操人使も一歩前に出る。
「来たぞ早速…」
「デクくん頑張れ～…！」
「緑谷くん頑張れーー!!!」
柳生が反応すると、飛鳥とお茶子は緑谷を応援する。その近くには…
「緑谷のヤツ…応援されてるな…スゲェ羨ましいな…俺もこうやって応援されんのかな？」
「アイツ、コロス、緑谷、追放、求ム…!!」
上鳴と峰田は、飛鳥たちが緑谷を応援してることに嫉妬する。上鳴は軽い気持ちだが、峰田は目を充血させ、カタコトになる。
『さあ、サクッとこの戦いのルールを説明するぜ！ルールは簡単！相手に『まいった』と言わせるか、相手を場外へと出した方が勝ちだ!!怪我なんざ恐れるな心配するなよ！こちとら医療の女神とも呼ばれる我らがリカバリーガールが治療させてやっから！道徳倫理は一旦捨てとけ！な？な？』
「なぁ…緑谷」
マイクの解説が入ってるなか…心操が緑谷に話しかける。
「俺たちはヒーローを目指してんだ…例えどんな思いをしても、ヒーロー目指すなら、乗り越えてやらなくちゃいけねえんだ…なのに、あの猿はせっかくのチャンスをドブに捨ててさ……」
猿…それは紛れもなく尾白のことを言っている。
『ＳＴＡＲＴ!!』
「バカだとは思わないか？」

スタートの掛け声と共に心操の言葉が緑谷の心を突き刺す。思いを託してくれた友達を、バカにされた…
「なんてこと言うんだぁぁ!!」
そのことにキレ、思わず怒鳴り声を出す緑谷。次の瞬間。

ピキーーン…!

「……!」
緑谷は硬直したかのように、動きが止まった。それを見た心操は……
「俺の　勝ちだ」
勝ち誇った笑みでそういった…
『な、なんだオイオイしっかりしてくれよ!?一体どうしちまったんだ!?緑谷出久…停止!?』
突然訳のわからないことが起きて、会場が騒めきだす。それも当然、緑谷は動かないのだから…
「な、何…どうしちゃったの?」
「…何が起きたんだ?」
「……」
飛鳥と上鳴は、動きが停止してる緑谷を見て緑谷に何が起きたか分からない様子だ。爆豪に至ってはかなり冷静でいる。

そんななか、黒いスーツを着用している鴉のお面を被った謎の人物は…
「……これは恐らく…洗脳でしょうかね。私の推測が正しければその筈…傀儡のような特殊な気を感じられませんからね…」
指でポリポリと頭を掻きながら、ボソリと呟いた。そう、この会場の中で誰も心操の個性を知らないのに、知ることも出来ない状況なのに…知る場面などなかったのに、短期間で推測して答えを出したの

だ。

『全っっっっっっ然目立ってなかったけど彼…ひょっとして、ひょっとすると…滅茶んこヤベエやつなのか!?』

薄暗く、無表情な顔を浮かべる心操。この男、得体が知れないと…

(二人の簡単なデータ、調べてもらったが…あの入試は合理的じゃねえんだよ……心操はわざとヒーロー科実技試験で落ちている。普通科も受けてるってことは落ちるのは想定済みだったってことだ…アイツの個性はとても強力だが、あの入試じゃP稼げねえよ……)

相澤は緑谷と心操の二人の簡易データの資料を見つめて心の中でそう呟いた。

入試の実技試験は、制限時間内に、多くの仮想敵を倒してPを稼ぐといった試験だ。個体によってPは変わるが…心操の個性では、無理だった…

緑谷は身動き一つも取れず、その場を硬直したまま、心操はそんな緑谷に語りかける。

「……お前は、良いよな……そんな派手な個性を持つ事ができてさ…お前が羨ましいよ……

緑谷出久、振り向いてそのまま場外まで歩け」

心操が命令すると、緑谷は心操の言葉通りに動き出した。そのまま場外へと歩いていく。

心操人使　個性　『洗脳』彼の問いかけに答えた者は、洗脳スイッチが入り、彼の言いなりになってしまう。本人にその気がないなら洗脳スイッチは入らない。また洗脳されたものは心こそあるものの、自分ではどうすることも出来ない。

体力テストでは緑谷はヒーロー科にしては酷いところはあったが、心操の場合はさらに酷い。そう、心操の個性さえ引っかからなければ問題ないのだ、しかし緑谷は心操の挑発にまんまと乗ってしまい、その結果こうなってしまったのだ。もうこうなってしまった以上、決着は早いしどうすることも出来ない。

「み、緑谷くん～～…!!」

飛鳥は緑谷が戻るようにと目を瞑り祈る側から、峰田はちょんちょんと飛鳥に指をつつく。

「へ、へい…飛鳥ちゃん、あんま心配しすぎるとおっ…肩こるぜ？オイラが胸を揉みほぐしてやろうか？」

「ゴメン峰田くん、今フザてる場合じゃないんだ、やめてくれるかな？」

「あっ……ウッス……その、すいませんでした……」

飛鳥の塩対応…いや、日影のような無感情な対応、ゴミを見るような目で睨みつけ、峰田は心が傷つきその場を謝罪する。峰田よ、傷つくくらいならやるなよ…と、皆は哀れみな目で見つめるのであった。

だめだ…ああ、ダメだだめだ駄目だ！

緑谷は心の中で叫び出す。

体が、勝手に…頭がモヤがかったみたいに駄目だ！止まれ…とまれ！

どれだけ何をどう抵抗しようとも、変わらない、洗脳は解けない…

折角…せっかく尾白くんが忠告してくれたのに…こんなことって

……！くそう…畜生!!

　出場する前のこと控え室では、尾白は緑谷を呼び出し、心操の個性について話してたのだ。尾白も詳しくは分かってないが、それでも自分が分かってることを教えなきゃと…

「操る個性？ソレって…強すぎない？無敵じゃん…」

　緑谷は心操の個性の能力を聞き、思ったことをそのまんま口に出した。

「ああ、確かに強い…でも多分初見殺しさ。俺問いかけに答えた直後から記憶がほぼ抜けてた…そういうギミックなんだと思う」

「うっかり答えたりしたら即ゲームオーバー…って感じだね……」

　緑谷は心操の個性を知り、ゾッとした。そりゃあそうだ、話しただけで操られる、ようはそれだけで終わってしまうのだから。しかし尾白は首を横に振る。

「いや、つっても俺らが思ってるほどの万能じゃないな…記憶、終盤ギリギリまでほぼって言ったよな？心操がB組の騎馬のハチマキ奪って走り抜けた時、鉄哲チームの騎馬と俺ぶつかった時に…目覚ました。そっからの記憶はハッキリしてるんだ」

「……ようはそれって、衝撃によって解ける…みたいな感じ？」

「ああ、その可能性は有りとみなして良いと思う。でもどれくらいの衝撃かは分からないし、それにもしかしたらだけど、他の手を使って解けることだってあるかもしれない…けど今のところ分かるのは、衝撃によって目を覚ます、答えることで洗脳されちまう…くらいだ…一対一で外的要因は期待出来ないから対策が一番だな…まっ、俺から出る情報はこんなもんだ…」

「ありがとう！物凄いよ尾白くん！」

　今出せる情報を全て教えて、洗脳の対策を出した尾白は座ってた椅子から立ち上がり、緑谷はそんな尾白に感謝する。

「あのさ…緑谷……すごい勝手なこと言っちまうけどさ…
俺の分まで頑張ってくれよな…」
尾白は緑谷の肩に手を置き、託すようにそう言った……

んで現在。

こんな！こんなあっけなく…僕が…!!
皆んなが、託してくれたのに…!!

もうあと少しで場外。その時だった…緑谷の頭のなかから、直後何者かの人影が８浮かび上がった。

「!!?」

その瞬間…

バキッ!!!
!!ブオオオオオオオオオオオオン!!

指の折れる音、強烈な衝撃波が会場に鳴り響いた。
「ハァ…はぁ……!ゲホ…ゲホっ!!」
そして緑谷は、晴れた指を押さえながら、クルっと後ろに振り向き心操を睨みつけた。
『おおおぉぉーーー!?なんだ何だ!?よく分かんねえんだけどどーなっちゃってんの!?取り敢えず…緑谷出久踏みとどまったあぁぁぁ?!』
「嘘…だろ…!?」
マイクの実況と同時に、驚愕な表情を浮かべる心操。洗脳の個性は

完璧のはず、何より今まで緑谷みたいに洗脳を壊してきた輩など、一人もいないのだから…
ただ簡単に言えば、指を爆発させて洗脳を解いたのだ。
「み、緑谷くん…?!」
「す、すげぇ…無茶を……」
「何だアイツ…今のどうやったんだ!?」
飛鳥、尾白、葛城は驚きを隠せないでいる。飛鳥の祈りが神に届いたのか、あるいは緑谷のワンフォーオールに秘められた力のお陰なのか…
「ホホゥ!これはこれは…なんと…!自らの力で洗脳を解いたのですか…!?素晴らしい精神…何よりそのパワー!侮れませんねぇ……」
クスクスと不気味で気味の悪い笑い声を立てる謎の男は、緑谷を感心するような目で何度もなんども頷いた。

それに対し、心操は…
「待てよ…体の自由は効かないはず…効いたとしても外部からの接触じゃなきゃ……オイお前!一体何をした!?」
冷や汗を垂らしながら、先ほどの余裕が嘘みたいに消え、内心焦る。
(指は僕だ…でも、動かせたのは違う、何だ!?知らない人やオールマイトに似た誰かが浮かんで…一瞬頭が晴れた!これもワンフォーオールかなんかに繋がってるのか…?)

ワンフォーオール
聖火の如く引き継がれてきたもの

(人、紡いできた人の…まさかだとは思うけどワンフォーオールの前任者!?その気配か…?)
緑谷は晴れた指を痛々しい目で見つめた後、心操に振り向く。これだけはわかった。その謎の気配に、緑谷は救けられたのだと…

しかしそれが本当の答えなのか、分かるはずもない…緑谷は取り敢えず考えることをやめて、目の前のことに集中する。
喋らないよう意識する緑谷に、心操はますます内心焦ってしまう。
（いや、待て待て落ち着け…答えないのはネタが割れてる…元より最初っからバレてたんだ、あの猿のやつに聞いてた筈だ…なら、また口を開かせば…！）
「なんとか言えよA組…」
心操は睨みつけそう言うものの、緑谷は案の定口を開かない。
「……！指動かすだけでバカげた威力か！その個性羨ましいよ!!」
僕も昔それ思ってた
緑谷は止まらず前に進む。
「俺はこんな個性のおかげで、スタートから遅れちまってさ、周りの奴らも口を開けば『敵向きだね』だなんて言って皆んなそればっか……!!人の気持ちも何も考えず、知らずに偉そうに！なぁ…お前みたいに恵まれた人間には俺みたいな人間の気持ちなんざ分からねえんだろ？」
分かるよ…痛いほど、辛いほど分かるよ…僕だってそうだった…でも、僕は恵まれた…！
心操の痛々しい言葉を、胸に受け止めながらも向かっていく。
「誂え向きの個性に生まれて！望む場所に行けるやつにはよ!!」
僕は人に、恵まれた…!!
同情する思いを噛み締め、目を瞑りながらも、目の前の心操に立ち向かう。そして肩を掴んで押し出そうとする。
「このまま押し出すつもりか？フザけたことなんざしやがって…！」
肩を掴んでた手を払いのけ、緑谷を殴る。
「なんか言えよ!!」
それでも諦めない、心操に対して思ってることは山ほどある、それでも緑谷は心操を押し出そうとする。
「しつこいな…お前が出ろよ!!」
心操が緑谷の首を掴み、押し出そうとした瞬間。

「んぬうおおおぉぉぉりゃあああぁぁぁ

41話「怒りと不安」

中学の頃、学校の友達に自分の個性を教えてみた。
「えっ!?心操の個性って洗脳なの!?ちょっ、ヤベェ…!」
「悪いことし放題じゃん!」
「心操くん、私たち操って悪いことしないでね〜?」
するとどうだ?皆んなそればっかりだ…まあでもこんなの正直もう慣れっこだ。皆からそう言われるのは…聞く前は大抵予想できる。何をどう言われるのか…どんな反応するのか…
「ははっ…皆んなよく言うよ……」
俺だってそうだ…昔小さい頃や皆んなから言われて、悪いことに使おうと思った。いや、俺に限った話じゃない…洗脳だなんて個性、誰もが手にしたら悪いことに使おうと思う。
「けど…さ…」
敵向きだね。そういう世の中仕方のないこと。
分かってる…そんなの……俺の力でヒーローになれないって……でも仕方ないんだよ……
だって…俺は……

トーナメント、緑谷と戦った心操は見事にやられた。その結果、心操は敗退し、緑谷出久は進出決定だ。
「緑谷くん、戦闘訓練みたいな動きだ!達人みたい…!」
「ね!私もそれ思ったよ〜…!」
飛鳥とお茶子は、緑谷の背負い投げに感激している。まあ、動きがプロみたいだし、あの流れから背負い投げが来るとは思わなかったのだ

ろう…
「まあ、あの場合はそうするのが妥当だな」
「なんか、一瞬で勝負決まったね～」
柳生はスルメイカを食べながら、そう言い、雲雀はアイスクリームを食べながら呟いた。というか柳生…スルメイカ結構食べてるが、後どれくらいあるんだ…？てかどのくらい食べてるんだ…
「背負い投げと言いやあ爆豪も投げられてたよな！な！あーいう感じに！」
「黙れアホ面喋んなやクソが」
「」
肩を落として見たことのない暗い表情を浮かべる上鳴。

体力テストで活かした部分と、戦闘訓練での投げ技の使用、自分が何をどうやるかの前に、自分に今できることを成し遂げた…みたいな感じだ。

『イヤァ、緒戦にしちゃまあ、地味っちゃ地味だったけど両者の健闘に称えて拍手を!!!!』
パチパチと会場の観客たちは、二人の健闘に大きな拍手を送る。
緑谷に敗けたことで、心操の顔はとても暗い表情でいた。先ほど言ってた言葉に、疑問を持った緑谷は、心操に尋ねてみる。
「…あのさっ！戦った後で言うのもなんだけど……心操くんは何でヒーロー科に？」
「……仕方ねえだろ……だって、憧れちまったんだから……」
質問に答えた心操は、悔し混じりの声で低くそう言うと、直ぐに緑谷に背を向けて戻ろうとした。
それを聞いた緑谷は、分かってたことだ…聞かなくたってなんとなく。だが、聞かずにはいられなかった……
だって、個性を手に入れる前の緑谷とそっくりで、自分を重ねてるようだったからだ……
出来れば救ってあげたかった。君の力でもヒーローになれるって

ことを…しかし、今の緑谷が言っても解決できることはない。
そう思った時だ。
「心操！お前スゲェな！」
応援席に振り向くと、そこには普通科の生徒達が、心操に手を振っていた。
「障害物競走一位のヤツといい勝負してよ、俺ら普通科の期待の星じゃん！周り見てみろよ！」
一人の男性がそういい、周りを見てみると…スカウト目的でやって来たヒーロー達が、心操の個性について話題になっている。
「これ対敵にしちゃあものスゲェ有効だぜ!?何でヒーロー科に入れなかったんだ!?」
「ヒーロー科ってホラ、受験者多いし…それでじゃね？」
「けど彼の個性物凄く強力だよな…その気になれば敵との戦闘でも被害出すことなく有益に事が進むぜ！」
「敗けちゃったけど、もし戦闘経験の差が互角だったら分かんなかったかもな！」

色んな言葉が飛び交う。
「なあ、分かるか？心操、お前スゲェよ」
多くのヒーローや、同じクラスの生徒達は、自分の個性を認めてくれた。改めて言われて、褒められて…今まで言われて来た言葉と、今言われた言葉がこうも違う。心操は表情には出してないが、内心は嬉しかった。
「……緑谷」
「!?」
突然声をかけられ、思わず体をビクッと震わせた。振り向いてはないが、話を続ける。
「結果によっちゃあヒーロー科編入も検討してくれるんだと…覚えとけよ？俺は今回はダメだった…けど、駄目だとしても俺は絶対諦めない……ヒーロー科入って資格取得して…絶対お前らより立派なヒー

ローになってやる…!!」
「うん！」
心操がそう言って緑谷は頷くものの、洗脳されてしまった。
「俺と話すヤツって、大体警戒するんだけどさ……お前は違うんだな…そんなんじゃ足元すくわれるぞ？」
心操はニヤリと笑みを浮かべて、緑谷の洗脳を解く。
「え？あっ、うん！」
これが最善の手なのか分からない、だが取り敢えず分かったことは、此処からが彼の始まりなのだと言うことだ。彼も戦闘経験を積めば、より優秀なヒーローになれるだろう……

緑谷は洗脳を解く際に指を壊してしまったため、リカバリーガールの所へ行き治療を受ける。リカバリーガール自身も、今回は本人の意思じゃなかったため、大目に見て怒らないそうだ。それに怪我をした緑谷が心配で駆けつけたオールマイトもいる。

「ありがとうございます……」
「まあ、今回ばかりは仕方ないね…寧ろ良くやった方だよ緑谷少年…なんせ個性を使って体を壊すことなく、こうして最終科目にまで来たんだ、私は騎馬戦あたりから使って壊してしまうかと思ったが…」
「僕は轟くんのところで使いましたけどね…」
ホッと安堵の息をつくオールマイト。治療を終えた緑谷は、ドッと疲れが出てきた。やはりあの後にリカバリーガールの治療を受けるとなると体力がキツイ…
「あ、そうだオールマイト…僕心操くんに洗脳をかけられた際に…幻覚が見えたんですけど…」
「んん？幻覚？」
緑谷の言葉に、オールマイトは首を傾げる。
「8…9人くらいかな…？分かんないですけど、洗脳で頭にモヤがかかったような感じになった時、幻覚が浮かんで…瞬間的に辛うじて指先だけ動いたんです……そのなかにオールマイトらしき人もいまし

た……ワンフォーオールを紡いできた人の意思、みたいなものなのでしょうか？」
「え…？なにそれ…怖！」
「えっ!?ご存知かと…」
　緑谷は洗脳されてた時に、幻覚を見たことを詳しく説明すると、知ってなかったのか、オールマイトは驚愕する。
「なーんてね！知ってるよ、アメリカンジョークだよ！ハハハ！」
「わ、笑えませんよ…結構真剣なんですよ…？」
　少し調子に乗って悪ふざけするオールマイトに、緑谷はムスッとした様子をとる。そんな緑谷にオールマイトは悪い悪いと謝り、椅子に腰をかける。
「んー、それはきっと個性を掴んできたっていう分かりやすい展歩なんじゃないかな…？だって昔若い頃に私も同じ経験があってね。きっとそれかもしれない……ワンフォーオールは努力の結晶…その努力が染み着き、面影となったんだと思うよ…君の強い想いが面影を見るに至り、心操少年の個性（洗脳）に対して、指先だけでも！って打ち勝ったんじゃないかな？」
　ワンフォーオールは努力の結晶…何人もの受け継がれた努力が、一つとなっている。そう言いたいのだろう…
　となるとあのなかには確実にオールマイトがいたってことになる……緑谷は釈然としてない様子で悩んでいる。
「まあなに、今は細かいことは気にしなくても大丈夫さ！それにホラ、次の対戦相手みといた方が良いだろう？」
「あっ！そうでした！」
　満面な笑みで言うオールマイトに、緑谷は忘れてた！みたいなノリで直ぐに座ってた椅子に立ち上がり、礼をしてからその場を去った。
「いやあ、にしても前よりかは成長した感じですかね…ははっ！あっ、

成長と言えば半蔵くんの孫、飛鳥くんもどのくらい成長したかな？超秘伝忍法書を引き継いだそうじゃないか！今度半蔵くんに話を聞こうかな…いや、飛鳥くん直々に聞こうかな？」

オールマイトは緑谷が去ってから、ハハハと豪快に笑いながらリカバリーガールに話しかける。

「さあねえ……ねえ、アンタは平和の象徴でありながら、半蔵と同じ社会を支える立場の人間だろ？」

「…？はい？」

リカバリーガールの言ってることが分からず、オールマイトは首をかしげる。

「アンタの後継者は緑谷出久…半蔵の後継者…孫は飛鳥……あの子も緑谷と同じ、名を恥じぬよう…自分の師の為と言わんばかりに努力してる…そりゃ良いことさね……」

「リカバリーガール…なにを…？」

「あたしゃの言ってること、もう分かってるだろ…？緑谷に半蔵の事話したんだろ？だったら…飛鳥（彼女）だけにも、今のアンタを教えときな……」

「……！」

その言葉に、オールマイトは後遺症が出来た傷に、手を当てる。

まるで弱い部分を杖で突かれたような…そして冷や汗を垂らして…

「全員に言えとは言ってない……けど、半蔵のこと、あの子のことを大切に思ってるなら、せめて半蔵の孫にも教えなきゃいけないんじゃないかい？ヒーローと忍、同じ後継者として……これからこの先の世代として…！

半蔵もそのことは承知してる……覚悟決めんのはアンタもだよオールマイト…彼女も他人に言い渡すような子じゃないって、アンタも知ってるはずさね…」

「……それは勿論、承知しております…!!」

オールマイトは、その目に信念を宿して…

続いては、轟ＶＳ瀬呂の戦いだ。緑谷と心操の戦いが終わり、轟は会場へと向かい、控え室を出る。会場に出る前に…

「……テメェか…邪魔だ退け」

轟焦凍の父、轟炎司たること、エンデヴァーが立っていた。

「相変わらず醜態ばかりだな焦凍」

エンデヴァーも轟と同じく不機嫌な表情を見せ、睨みつける。しかし焦凍のほうは目を合わせず、見ようともしない。

「左の力さえ使えば、障害物競走も騎馬戦も圧倒できた筈だろう…」

「……」

「良い加減子供じみた反抗はやめろ。わざわざ他の忍達をかき集め、貴様をより強くするべくあらゆる強さの秘訣を聞いたのだ…お前は、忍の存在を超え、更にはオールマイトを超える義務があるんだぞ」

「……！」

進むたびに、エンデヴァーの言葉を聞くたびに、表情が曇っていく。

「分かってるのか？兄さんらとは違う…お前は、最高傑作なんだぞ!!」

「黙ってろ!!!!」

とうとう我慢の限界が来てしまい、怒りを染めた大声で怒鳴る。轟の威圧、しかしエンデヴァーは一切表情を曇らせず、また微動だにせず轟を睨みつけている。

「……さっきから黙って聞いてりゃ、それしか言えねえのかテメェは……」

轟は冷静さを取り戻し、乱れた呼吸を整え、進んでいく。
「お母さんの力だけで勝ち上がる…戦いで、そしてこれからこの先テメェの力は一切使わねえ……忍を超越？馬鹿げたこと言ってんじゃねえ……寝言は寝て言いやがれ……所詮、忍のことなんざ興味ない癖に……」
轟は吐き捨てるようにそう言った。轟の言葉に、今まで黙ってたエンデヴァーも口を開く。
「フン…全くもってその通りだ。忍のことなんざ知ったことではない……
それに、学生のうちは通用したとしても…直ぐに限界が来るぞ…」
轟の表情は、より一層ドス黒い怒り、憎悪を染まらせて…

『お待たしました！続きましては～コイツらだ!!』
会場に出てきたのは二人は、舞台の上に立つ。
『優秀！優秀なのになんだその地味さは！緑谷に負けないくらいだぞしょうゆ顔のお前！ヒーロー科　瀬呂範太!!』
「ひでぇなオイ…」
瀬呂は一歩前に出る。
『対！　2位・1位と強すぎるよ君！本当どーなっちまってんの!?同じくヒーロー科　轟焦凍!!』
轟は、その場から動かず先ほどの表情と変わらずにいる。

「瀬呂終わったんじゃねこれ!?」
「終わったな…」
上鳴と柳生は、対戦相手の轟と見比べて瀬呂が敗北するといち早く察してそう言った。
「ひどいよ柳生ちゃんに上鳴くん！確かに轟くんは強いけど…でも瀬呂くんだって強いよ？」
「うむ！同じ仲間を、生徒を信じずしてどうするんだ！」
飛鳥と飯田はそんな二人に叱るように言う。

「……轟くん？」
そんななか、緑谷は轟の異変に気付いた。そう、轟の表情に…
瀬呂はA組の観客席を見つめ、舌打ちをする。
「チッ…あいつら絶対に俺が負けるとか言ってるだろ……くそ、見とけよ…つってもまあ、勝てる気はしねーけどさ…」
そして次の瞬間。直ぐにテープを発射させて、轟の体を一瞬で巻きつける。
「つって負ける気もしねーーけどなァ!!!」
轟を思いっきり場外の方へとやる。テープに巻かれた轟は、なすすべも無く場外へ出てしまいそうになる。
『場外狙いか！この選択は最善じゃねえか!?正直やっちまえ瀬呂ーーー!!』
観客もマイクも盛り上がり、歓声が響くその時だった。

パキイィィィィン!!

会場を、天そのものを貫くような超巨大な氷が瀬呂を襲い、緑谷たちの目にまで出来ている。幸いなことに観客たち皆に被害はないようだ…
冷気とともに観客たちの歓声は途絶え、皆は呆気なく、呆然としている。あのマイクでさえサングラスが傾き言葉を失ってるくらいだ…
忍学生の飛鳥たちもそうだ。
飛鳥も目の前に巨大な氷が出来たことに驚きゾッとし顔を青ざめる。
斑鳩は思わず飲んでた日本茶を吹き出してしまった。
葛城は驚きのあまり姿勢を崩して倒れてしまった。
柳生も突然のことに驚きを隠せないのか、目を大きく開き、手に持ってたスルメイカを落としてしまう。
雲雀に至っては緑谷が心操に洗脳された時みたいに硬直した。ま

るで今何が起きたか分からない様子で…取り敢えずおそる恐る轟に視線を移す。

「……」

轟を巻いてたテープは、氷によってパキパキになり、氷が砕けるように、簡単に破けてしまった。轟は体についてる氷の破片を払うと、瀬呂を見つめる。

「や…やり過ぎだろ……」

瀬呂はあの轟の攻撃をもろに食らって、氷漬けにされて、動くことすら出来ない状態だ。ミッドナイトは右側半分が氷で覆われ、棒立ちで瀬呂の安否を確認する。

「瀬呂くん…動ける?」

「動けるわけないでしょ……痛えぇぇ……やべぇよ幾らなんでも……俺が何したってんだよ轟ぃ……」

白い息をはき、目に涙を浮かべて、悲痛な表情で轟を見つめる。

「すまねぇ…やり過ぎた……色々あってイラついてた……」

轟の八つ当たりを食らった瀬呂に近づくと、左の熱で氷を溶かしていく。会場中は、瀬呂にドンマイコールを起こす。

だがその時緑谷だけが思った…

自身が凍らせたのを左手で溶かしていく轟の姿が何故か、緑谷にはとても酷く、悲しく見えたのだ。

轟焦凍、二回戦進出。

よって二回戦は、緑谷と轟が戦うことが決定した。

その後ステージは乾き、上鳴とB組の生徒、塩崎の戦いが始まった。上鳴の個性はとても強力…なのだが、相性が悪かったのか、B組の生徒に為すすべもなく瞬殺され、結果は敗退。よって塩崎は進出決定だ。因みに今の状況は…

「うぇぇぇエ～いぃ！」

上鳴は体に茨のようなツルに縛られ、完全なアホ面になっていた。その茨のようなツルは、塩崎の個性によるものらしい。

「ああ…与えられたチャンス……無駄にせずに済みました…」

塩崎は何かを祈るような態勢でブツブツと呟いている。

塩崎茨　個性　『ツル』頭髪のツルは伸縮自在で切り離すことが可能。水と日光をしっかり摂っていれば、直ぐに生えてくる。

切り離しが厄介だったらしく、直ぐにやられてしまったそうだ。彼女の個性、その気になれば上手く使って地面や壁にはっつけてトラップにしたりすることが出来そうだ。

「へ～…！結構すごいね！」

「轟の後だとインパクト薄いけどな…」

塩崎の個性に感心する飛鳥に、障子は横でボソリと呟いた。いやまあ気持ちはわかるが…

「知ってるんなもん…言うなや…」

近くに瀬呂がいるから…瀬呂も勝てる気は無かったが、あんな酷い目に遭うとは思ってもいなく、大分落ち込んでいる。

そんなやりとりに苦笑する飛鳥。すると近くで緑谷がブツブツ呟いてるので、見てみると…

「緑谷く…わあっ!?何やってるの!?」

「うわあああぁぁぁぁ?!どどどどうしましたか飛鳥さん!?」

相手の個性をノートにメモる緑谷が、物凄くブツブツと呟いてるのを見て、思わず驚いてしまった飛鳥に、緑谷も驚く。

「ご、ごめん…な、何してるのかな～って…思って…」

飛鳥は大声で驚いたことに謝りつつ、緑谷は大丈夫といった顔で首

を横に振る。
「み、皆んなの個性をメモってるんだ…！」
「皆んなの個性…？」
「うん、そう…対策っていう意味でもあるんだけど……ほぼ僕の趣味でやっちゃって…それに折角他のクラスの個性も観れるチャンスだしさ…！」
緑谷は恥ずかしいのか、頬を赤く染めて、恥じらいながらも早口で喋る。
「へぇ～…そっか、そう言うのも有りか……」
飛鳥はなるほど…と納得した様子で緑谷のノートを見つめて何度も頷く。恐らく飛鳥は緑谷の個性対策を聞いて、参考になってるんだろう。
「ちょいちょい飛鳥さん達やＡ組の皆んなのも書いてあるよ！えーっとそだね…例えば…麗日さんのとか…」
緑谷はノートを開き、お茶子に振り向くと…
「って、どうしたの麗日さん!?」
「ん？あ、あ～…ちょっとね…力んじゃって…つい…」
お茶子は緊張してる所為か、顔の表情がいつもと違い、険しく体を力んでいた。
「どうしたの？悩みとか？」
「うん…実は…」

そんな話をしてる間、次の戦いが始まった。次はヒーロー科　飯田天哉ＶＳサポート科　発目明だ。
飯田はサポートアイテムをフル装備しているが、これは発目の提案であり、真面目である飯田は彼女の熱意ある頼みに断れずアイテムを着用したようだ。
彼女は「ここまで来た以上　対等だと思うし対等に戦いたい」という理由でアイテムを渡して来たそうだ。
それを聞いたミッドナイトは許可したようだ。何やら個人的に青

くさい話が好きだからとかなんとか…まあ双方合意の上なら許可しても良いだろう…

緑谷は内心疑問に思ったのは、発目がそんなこと言うかどうかだということだ。確かに発目はアイテムについては凄い執着心があるが、他人や戦闘には興味がない。

そんな彼女がそんなこと言うのか？と…

だが結果、発目は個性を使ってサポート会社を見つけては、アイテムを使いまくり解説していく。飯田は訳が分からず彼女の思うがままに利用されてしまう。あのマイクも轟と同じく言葉を失っている。

アイテム解説付きの鬼ごっこはその後、１０分もの間繰り広げられた。

そして…

「ふう！全て余すことなく見て頂けました……もう思い残すことはありません！飯田さんありがとう御座います！」

「騙したな?!!」

発目は汗を拭い、飯田にぺこりと頭を下げるが、自分が彼女の思うがままに利用されていたこと、騙されてたことに気付いた飯田は、怒りを見せる。因みに発目は自分からわざと場外した。その結果、飯田は二回戦進出決定だ。

「すみません、あの有名な名のあるヒーロー　インゲニウムの弟さんである貴方を、利用させていただきました！」

「嫌いだ君!!」

飯田はプンスカした様子で戻っていく。応援席で観てた兄は今、苦笑している。

「あちゃ～…まあ結果としては勝てたわけだし…良いんじゃねえか？」

と、冷や汗を垂らしそう呟いた。

「……ホォ…！あの彼女の発明品…なかなかどして、面白いですね！ますます興味が湧きましたよ……貴方たちのような卵には…ね」

謎の男は、緑谷の次に発目に目をつけ、微笑んでいる。

「全く…！何なんだ彼女は一体…もう！醜態を晒してしまったじゃないか！ましてや兄の目の前で！」
　飯田は一人、発目に対してブツブツと独り言を呟きながら控え室に戻ると…
「飯田くん…お疲れ」
「お、うらら……
　かじゃないな！シワシワだぞ眉間が！」
「眉間が？」
　いつも元気盛んで天真爛漫とした笑顔を浮かべるお茶子ではなく、いつもとは様子が違う様子だ。
「あー、ホラ…緊張でね、眉間に来てたね…」
「緊張…？ああ、麗日くんの相手、爆豪くんだもんな！」
　飯田は、なぜお茶子がいつになく緊張してるのかを察し、納得した。確かに相手が爆豪となると訳が違う。
「うん…正直超怖い……でも、負けられないんだ…個人的にも…そして家族のためにも…」
「家族のため？」
　お茶子の言葉に飯田は首を傾げる。その時だった。
「麗日さん！」
「お茶子ちゃん、悩み…相談するよ？」
　控え室の扉が開き、ノートを手に持ってる緑谷とお茶子を心配する飛鳥がやって来た。
「え？会場は？他のみんなの、観てがなくても良いの？」
「うん！芦戸さんと青山くんの戦い、一瞬で勝負決まっちゃったから…あと八百万さんと常闇くんの戦いも一瞬で…」
「青山くん、顎大丈夫かなぁ？アレ凄いの入ったよね？」

お茶子は心配するが、緑谷は大丈夫と首を縦に頷く。飛鳥が言うには、芦戸は青山のレーザービームを見切り、上手く間合いに詰めて、近接戦に持ち込みお腹に巻いているベルトを壊してから、アッパーで青山をダウンさせたそうだ。

一方、八百万と常闇との戦いでは、創造が厄介と判断した常闇は、八百万が戦う前に個性を使って勝負を決めたそうだ。攻撃した時に八百万の服が破けて一時問題になったが、自分の上着を八百万に着せ、黒影の闇で八百万を隠し、失神してる彼女を運んでったらしいが…紳士な彼のお陰で、何とか最悪な醜態を晒さずに済んだらしい。

「そっか……」

お茶子はまだ不安が拭いきれないのか、ぽつりと小声で呟いた。

「次の相手はかっちゃん…」

「そういえばそうだったね…爆豪くんが相手だとまた感じ方も違うよね…」

緑谷も緊張し、飛鳥はしゅんと顔を伏せてしまう。

「しかし幾ら爆豪くんでも女の子相手に其処までは…」

「ううん！かっちゃんなら絶対手を引かない。蛇女子学園ってところでもかっちゃん、相手が女だろうと一切躊躇はしなかったし…だから今回も…」

飯田はそう言うものの、緑谷は首を横に振る。そう、ここでは皆んな夢を追い、全力で戦っている。例え相手が爆豪でなくとも手加減はまずない。勿論飯田も自分の立場だったら手加減しないだろう…

お茶子はますます不安な表情を曇らせる。

「だからさ…麗日さんの助けになれば良いなって思ってさ、今まで助けられたから…だから……かっちゃん対策としてノートまとめてみた！付け焼き刃だけど…」

そんな彼女に緑谷はノートを開き、渡そうとする。

「おお！それは良いな…！良かったじゃないか麗日くん！」

「あ、あの短時間でよく書けれたね？」

飯田は良かったと感心し、飛鳥は緑谷のビッシリとまとめたノートを見て思わず苦笑する。しかし麗日は…

「ありがとう…デクくん。気持ちは、物凄く嬉しい…！でも…いい」
「え？」
　お茶子の言葉に、皆は目を見開き、静寂な空気に包まれる。相手に勝てるかもしれないというのに、お茶子は首を横に振った。
「気持ちは嬉しいんだよ？勝ちたいよ？でも、皆んな必死になって、全力で夢に向かってる…！私だけ緑谷くんにこんなことされたら…逆に申し訳ないよ…私だって緑谷くんに助けられてばかりだもん……それに飯田くんも、『挑戦する！』って言われた時、自分が物凄く恥ずかしくなった…！」
「麗日…さん」
「麗日くん…」
　緑谷は脳裏にあるものが浮かんできた。それは、初めてお茶子と会った時。入試の時、お茶子が動けなくて巨大ロボに潰されそうになった時。騎馬戦の時に緑谷が手を組ませてくれたこと。飯田は騎馬戦を決める時に、緑谷に宣戦布告したことを思い出す。そう、友だからこそ、全力で相手にぶつかる覚悟。その覚悟がお茶子にはなかった…だから恥ずかしくなった…本当にヒーロー目指したいのに、そんな腹づもりでやってて良いのか…と。そう自覚されたことで、お茶子はより自分のことを深く考えた。
「…それにさ、私がヒーローになったのには、理由があるんだ…」
「え？」
　飛鳥と緑谷は首をかしげる。飯田はお茶子が言ってた家族のためにも、という言葉が頭に浮かんだため、驚いてはいない。お茶子がヒーローになりたい理由。それは…
「お金欲しいからヒーローに!?」
「う、うん…なんかゴメンね？こんな時に……皆んな純粋に前に進んでるのに、私だけ…なんかこー、不純で…」
　緑谷は思わず声を張り上げ、お茶子は半分照れ臭そうに、半分申し訳なさそうな様子を見せる。

「しかしそれは先ほど言ってた家族の為なのだろ？それも立派な一つの夢さ！恥じることはない、何故謝るんだい!?」
「そ、そうだよ！自分は自分なんだし、別に悪いことじゃないよ…」
　飛鳥は大丈夫だよと言い、飯田は手の動きが物凄いことになっており、突っ込みを入れたくてもどう入れればいいのか分からず、取り敢えずスルーした。
「ウチは実家で働きたくて…ホラ、実家の仕事建設で、でもって仕事なくてスカンピンなの……」
「そ、そうだったんだ…アレ？でも麗日さんの個性なら…コストかからないよね？」
「でしょ!?それ昔父ちゃんに言ったんだけど…」
　お茶子は緑谷の意見と同じだったらしく、それな！みたいなノリで緑谷にそう言う。お茶子は昔、父と母の仕事を手伝うために父が働いてる建設会社に就職しようとした。だから大人になったら就職するのが夢だった。父は気持ちが嬉しかった…しかし、ウチに就職するより自分の夢を叶えてくれた方がもっと嬉しいと言ってくれた。自分の夢、それは…
　ヒーローになることだった。
　だから…

「私は絶対ヒーローなって、父ちゃん母ちゃん楽させるんだ」

　いつもの麗日じゃない、その言葉は覚悟を決めた声だ。澄んだ瞳で三人を見てそう言った。

「……お茶子ちゃん…」
「麗日くん…！ブラボー…！」
「麗日さん…」
　その気迫に、三人は思わず息を飲んでいた。ここに立つ者は皆、それぞれの夢があって追い求めてる。全力でぶつかって……そして麗日お茶子もまた……そのうちの…

「その為には絶対に爆豪くんには負けられない！本当にヒーロー目指すなら…！皆んなライバルだから！飯田くんも、緑谷くんも…だから！

決勝で会おうぜ…！」

お茶子は無理やり震える笑みを浮かべて、緑谷に親指を立ててそう言った。

お茶子は自分の夢だけじゃない、家族のためにも……

会場に向かい、控え室を出た。

切島と鉄哲との戦いでは、ほぼタイマン勝負。殴り合いで勝負が決まった。

結果は両者ダウン、引き分けといった形となった。その場合は両者回復後、簡単な勝負…腕相撲で勝敗を決めるらしい。実力も個性もほぼ同じ、似た者同士だ。

そして最後の組の戦いが始まろうとする。特にA組の皆んなは騒めいている。その応援席には、戻ってきた飛鳥、緑谷、飯田も見ている。

「次、ある意味最も不穏な組ね」

滅多に表情を変えない蛙吹は、不安で表情を曇らせている。

「雲雀…怖いよぉ…」

「安心しろ雲雀、俺が付いている」

雲雀と柳生の二人は、まるでホラー映画観てるみたいだ。

「ウチ、なんか見たくないなー…」

「爆豪の場合、必ずブツだろ…女の子の暴力は、見たくねえな…」

耳郎は手で顔を覆い、その指の間の僅かな隙間から目を通して見つ

めている。その近くにいた上鳴は、冷や汗を垂らしてる。

「頑張れ!!お茶子ちゃん!!」

飛鳥は緑谷以上に大声で応援する。

「麗日くん!リラックスが大事だ!」

自分にとっては精神真面目、アドバイスしてるつもりなのだろうが、飯田はまたもや変なポーズを取ってるため、参考にはならない。

(麗日さん……頑張れ!!)

緑谷は目を瞑って祈るように、心の中で叫んだ。

『さて!一回戦最後の組はぁ〜…

中学からちょっとした有名人!ヘドロ事件を思い出せ!堅気の顔じゃねえ!ヒーロー科　爆豪勝己!!』

恐る強者とも呼べる爆豪が会場に現れ、舞台に立ち一歩前に出る。

『対!俺こっち応援したい!!ヒーロー科　麗日お茶子!!』

恐怖に屈することなく、立ち向かおうとするお茶子もまた、会場に現れ、舞台に立ち一歩前に出る。

この戦い、まさしく…獅子と兎の戦いだ。

４２話「戦いの始まりと終わりと新たな始まり」

会場は、観客の歓声が途絶えることなく響いている。
舞台の上には、クラスの誰もが認める、最強と認めざるを得ない男、爆豪勝己。
それとは真逆…いつも天真爛漫で、余り争いを好まない優しい麗かなゆるふわ少女、麗日お茶子。
お茶子は爆豪の目をジッと見つめ、いつになく緊張している。それは観客の歓声…皆んなが観てるから、それとは違う。そう、自分の目の前に立っている屈強な男、言わばクラス１・２を争う最強の男だ。
その男、爆豪勝己は物静かな目で、お茶子をジッと見つめる。
「オイ、お前確か浮かす奴だろ丸顔。退くなら今だぞ？痛えじゃ済まねえからな」
丸顔呼ばわりされたお茶子は思わず反応し、僅かに眉をひそめる。やる前から分かってることだけど、今になるとより一層伝わる、爆豪は完全にやる気だ。

「お茶子ちゃんの戦い、緊張で手汗がぁ～…」
飛鳥は手をパーにして、乾かすようにブンブンと振る。お茶子の戦いに自分も緊張してるのだろう、だがお茶子の場合はもっと緊張してるハズだ。
「ところで緑谷くん、爆豪くんの対策とは何だい？」
飯田は突然、緑谷にそう聞いてきた。
「あ、うーんとね…別に大した事じゃないんだけど…ホラ、かっちゃんはとても強くて、近接戦だと隙がないんだ！それにかっちゃんの強さは汗、動けば動くほど汗をかき、爆破の威力も高まるんだ！そうなると物凄く厄介になる。だから麗日さんの個性でとにかく浮かしてしまえば主導権を握れる」
観客の歓声は止み、静寂な空気が、会場を包む。
「だから…」

『ＳＴＡＲＴ！』

「速攻だ!!」

スタートと同時に緑谷がそう言うと、掛け声と同時にお茶子は全力で走り、間合いを詰める。

「悪いけど！退くなんて選択肢ウチにはないから!!」

事故でも触れられたら浮かされる。間合いは付けられたくないはず、だから爆豪の場合は回避じゃなく迎撃。そこは分かっている。問題なのはそこからどう対処するのかだ…

爆豪は右を大振りに殴りかかる。

（右！）

先を見据えて避けようとする。お茶子は前の戦闘訓練で、爆豪が右をよく使う癖を知った。だから右から来ることは予想出来た。

避けるならここ！

だが…

ボオオオォォォン!!

「！」

強烈な爆破の一撃、それがお茶子に炸裂する。

それを観た観客たちは悲痛の声を上げる。それはＡ組の人達もだろう…

（あかん！分かってても反応が出来ない…間に合わん！）

爆豪は近接戦が最も得意だ。相手が爆豪じゃない他の人なら、まだ触れれる可能性はあるが…爆豪の個性は威力が高い分攻撃も派手だ。そう簡単に触ることが出来ない。

「そうか…じゃあ死ね」

爆豪は二歩後ろに下がり、お茶子を『警戒』する。煙が出てるためお茶子がどう来るか分からないが、爆豪にとってそれは関係なかった…出てきたらブチのめす。それだけだと…

煙から黒い人影が見える。分かる、突撃する気だ…爆豪は攻撃する準備をする。しかしお茶子は地面を這うように爆豪に近づいて来る。

（煙が出て視野が悪いから、俺が分からないとでも思ったか？お前が近づいて来ることくらいわーってんだ。浅はかなんだよ…！）
「オラァ!!」
　爆豪は思っきしねじ伏せるように爆撃する。しかし…それはただの上着だった…
「なっ…！」
　爆豪は予想外なことに驚いた。上着だけで爆豪のところに近づいてきた。それが出来るのは…お茶子の個性だ。だが肝心のお茶子は何処だ？
　それは…
（ここだ!!）
　爆豪の真後ろ…！
『上着を浮かせて這わせてたのか！よー咄嗟に思いついたもんだな！まるで忍者だぜ！忍々！』
「オイ…」
　マイクが解説してるなか、忍者というワードに相澤は思わず反応してしまう。
（ここで浮かしちゃえば…良い！）
　お茶子と爆豪の距離が短くなり、あと少しで触れられる…爆豪は後ろを振り向こうとするが、お茶子の方が早い。攻撃を受けても良い、爆豪なら掌で爆破してくる。だから手に当たってしまえば…しかしその考えは爆豪によって完膚なきまでに叩き潰される。
「死ねぇぇぇ!!」
　爆豪はなんと、後ろに振り向くと同時に爆破の威力を高めた攻撃を食らわす。それも…指のみで…
　地面は爆破の威力で、削られたように抉られている。まるで…爪で描いたように…
『しかし爆豪の攻撃がまたもや炸裂～！てかなんか地面が抉られてるよう見えんだけど!?何した!?』
「なるほど…アイツどうやら大分成長したようだな…」

相澤は感心するように呟いた。Ａ組の席では…

「なぁ…アレって……」

上鳴や障子、芦戸、緑谷、気絶から復活した八百万は冷や汗を垂らす。轟は目を細めて…特に飛鳥はかなり驚いたのか、キョトンとし、目を大きく開く。

「これって……焔ちゃんの……？」

飛鳥はそう呟いた。

「いっつつ…」

お茶子は地面に数回バウンドするよう、吹き飛ばされてしまった。お茶子の体には爆豪の爆破によって受けた傷が見受けられる。

「ケッ！…まあ使い方は大体こんな感じか……上手く使えば多様な技が出来そうだな……これもまあ、焔（アイツ）と戦って閃いたんだけどな…」

爆豪は指のみを爆破させ、一歩前に出る。汗が垂れ、指に集中するように…本当のことを言えば、爆豪は伊達に気に入らないから、ムカつくから蛇女に行って殴り込んだ訳ではない、爆豪は体育祭に向けて何か得られるものはないかと、自分を磨くために、経験を積むために蛇女に向かったのだ。そしてその結果、強さを得られたようだ。そう、焔の強さを…

指のみ爆破させ、抉るかの如く攻撃する。まるで、鉤爪…いいや、六爪のようだ…しかしその気になれば５本全部の指を爆破させ攻撃することも出来るだろう…闘う度にセンスの輝くヤツだ。

「言ったろ？痛えじゃ済まねえって」

その目は折れない不滅な闘志を宿して…爆豪は倒れてるお茶子に構わず突っ込み攻めに行く。一方、そのお茶子は間髪入れず再突進し

攻撃を試みる。
「スゲェな爆豪、蛇女んところに行ってもう強くなったのかよ…」
「やっぱ才能マンだ才能マン…やだやだ！」
　男子は感心、あるいはため息をつくが…
「一方、麗日は……なんつーか、やけくそになってるな…」
「麗日にとって一番相性悪いのは爆豪だよな…反射神経も良い何でもできる才能マン…個性も派手だし、触れなきゃダメだっていうアレだとなぁ…」
　お茶子に対して、勝てないんじゃないか？という諦めの声も上がっている。そんななかでも、お茶子は諦めず攻める。
「だあああぁぁ!!」
「遅えよ!!」
　しかし呆気なく爆破を喰らい吹き飛ばされる。これはほぼリンチされてると言っても過言ではないだろう…
「おらあああぁぁ!!」
「しつけえ!!」
　なのにも関わらず、お茶子は諦めない。そんなお茶子に爆豪は眉をひそめ、両手で爆破を食らわせる。
「お茶子ちゃん…」
「これは…」
　蛙吹と斑鳩は冷や汗を垂らし、爆豪の攻撃を受けているお茶子を見て手を口に抑える。
「爆豪のヤツ…マジになってやがんな…」
　葛城は爆豪の様子を見てそう言った。
「と、止めないと、とめないと!!いくら何でもあんまりだよ！お茶子ちゃんが死んじゃうよ!!」
　雲雀に至っては大量の涙を流して号泣している。確かに痛々しいこの場面を見せられたら、雲雀の場合泣いてしまうのは無理もない。
「落ち着け雲雀…気持ちは分かるが…」
　そこで柳生が落ち着かせるように雲雀の両肩に手を置く。
「柳生ちゃん！止めないと…！これじゃあ、お茶子ちゃんが可哀想だ

よ!だから早く止めに行かないと…」
「大丈夫だ、その必要はない…それに心配しなくても大丈夫だ……」
「柳生ちゃん!!お友達が死んじゃうんだよ!?」
「流石に死にはしない…大袈裟過ぎるぞ…でも、そこがまた可愛いな雲雀は…」
　柳生は雲雀を落ち着かせるが、雲雀は治らない。むしろここから飛び降りて舞台に行こうとしてるくらいだ。
「ふえぇ…何となく予想はついてたけど…まさか爆豪くんがここまで…」
「アイツ…まさかソッチ系か…!!」
　飛鳥は耳郎と同じく手で顔を覆い、峰田は腕を組んで爆豪に引いている。
「まだまだぁ!!」
　休むことなく突撃を続けるお茶子。しかしこれは、観てるだけで痛々しい印象しか伝わってこない。それを観てる観客たちはA組の生徒たちだけでなく、爆豪とお茶子の戦いが始まる前の歓喜の顔はなくなっており、目を細め、痛々しい目線で観ている。
「あの変わり身が通じなくて、ヤケ起こしてるな…」
「一体何の勝算があって突っ込んできてんだ?」
「オイ…流石にやり過ぎだろコレ…」
「審判も…止めなくて良いのかよ?大分クソだぞ…」
「それな…」
　ザワザワと嫌な雰囲気になり、観客たちの不満な声が飛び交う。
「馬鹿だねアイツ」
　クスッと笑うB組の物間は、お茶子を観てから声を飛び交う観客たちに視線を向ける。
　どれくらい時間が経ってるのか?開始してからまだ五分しか切っていないが、これを観てると時間を忘れてしまい、長く感じる。そう、それが現在この状況がずっと続いてるのだ。お茶子の息遣いは荒く、弱々しい目で爆豪を睨み、突進するものの、爆豪は攻撃を止めない。爆豪も流石に疲れてきたのか、腕で汗を拭う。

こんな状況がずっと続き、我慢の限界が来たのか、一人のヒーローが席に立ち上がる。
「オイお前良い加減にしろよ!!それでもヒーロー志望か!そんだけ実力差があるなら早く場外にでも放り出せよ!!」
突然なるブーイング。怒号の叫びが会場に響き渡る。一人のヒーローに釣られて、他のヒーローたちもブーイングし始める。
「俺らにこんなもん見せんな!!ふざけてんのか!」
「女の子痛ぶって遊んで楽しんでんじゃねーぞ!!」
「そーだそーだ!」
「審判も審判で止めろや!!」
ブーイングの嵐が巻き起こる。会場全体はいつの間にか激怒のブーイングで溢れている。親指を下に向けて爆豪に言い放っている。
『会場全体のブーイング…!しかし正直に言って俺も…』
ドカッ!
その時、相澤が肘でマイクの頬をつき払い、マイクを奪う。
『ちょいちょいちょーい!?何スーン…』
『オイ今誰だ?遊んでるっつった奴、ふざけてんのかって言った奴。プロか?何年目だ?』
相澤の静かな怒りを含んだ低い声が響き渡り、会場のブーイング嵐は一瞬で止み、実況している相澤を見つめる。
『シラフで言ってんならもう観る意味ねえから帰れ。これはただの見せ物じゃねえんだよ、いっそお前らヒーロー辞めて転職サイトでも観てろ。それが分からないお前らにヒーロー名乗る資格はない』
相澤の厳しい言葉に、一部は眉をひそめたりする者もいれば、キョトンと呆然とするものがいたり、納得したりする者もいる。
『ここまで上がって来た相手の力を認めてるから、警戒してんだろ。本気で勝とうとしてるから、必死に強くなって、負けられなくて、手加減も油断も出来ねえんだろうが…』
そういうと、相澤は手に持ってたマイクを元の場所に置いた。相澤の言葉の後には、会場の観客たちは静まり、一度もブーイングをする者も、反論する者も居なかった。むしろ罪悪感と心の痛みに表情を曇

らせる者が見受けられる。
　爆豪は鋭い目つきでお茶子を睨みつける。
（いや、まだだ…まだこいつ…）
　その先にある、お茶子はよろめきながらも、立ち上がり、汗を拭い爆豪を睨みつける。初めて見るお茶子の本気。その威圧に爆豪はほんのすこしだけ、僅かに震える。何より爆豪に負けず劣らずの、諦めない、折れない、真っ直ぐとした威圧感溢れるその目を見て…爆豪は分かった。
　こいつ、まだ死んでない。
　どんなにボロボロになっても、勝つことを諦めず、真っ直ぐ向かってくるお茶子のその姿は、自分を積み重ね、自分と同じ何かを感じとった。その姿は
　正しく、ヒーロー
「そろそろ…かな…」
　お茶子は爆豪に聞こえない、小さな声で呟く。
「ありがとう…爆豪くん……油断してくれなくて…！」
「あ…!?」
　大量の汗を流した爆豪は、何のことか分からず首をかしげる。お茶子は、両手で指先を触れて…

「爆豪の距離ならともかく、客席にいながら、『気付かず』ブーイングしてた惨めなプロは恥ずかしいねぇ…」
　B組の物間は、ブーイングしてた観客たちを見つめ、小馬鹿にする。そして指を上に向ける。
「低姿勢での突進で爆豪の打点を下に集中させ続けることに、武器を蓄えてた」
　空には、爆豪が爆破攻撃をお茶子に食らわした際に飛び散った、舞台…コンクリートの破片が浮いている。
「絶え間ない突進と爆煙で視野を狭め、敵に悟らせなかった」
　物間が丁寧に解説してくれたことで、B組の皆は納得した。

「す、凄い！あれって全部…？」

雲雀は泣く涙が止まり、上を見て驚いている。

「だから言っただろ、心配しなくてもいいと……」

「柳生ちゃん、もしかして最初っから分かってたの…？」

「ああ…まあな」

雲雀の問いかけに、柳生は当たり前だったように、クールに答える。

「麗日のヤツ、ああなることを分かってて、最初っからアレが目当てだったようだな……並みの作戦ではアイツの前では無理だ…だから捨て身の覚悟でこの作戦を選んだ…と言ったところだな…」

お茶子の覚悟に感心する柳生は何度も頷く。

そして…

「勝ああアァァっ!!」

今まで蓄えてた武器が、流星群の如く降り注ぐ。

「す、凄いや…！お茶子ちゃん、自分でこんな策を…!!」

飛鳥はお茶子の策に驚きを見せる。

『流星群?!まじかよ！でもこれならやれるんじゃねーか!?』

「今更かい…気付けよ…」

マイクはマイクを握りしめ、流星群に驚き、相澤は横目で睨む。

これだけの量、迎撃にしろ回避しようと、必ず隙が出来る、その為にはこの策は持ってこいだ。

その瞬間に距離を詰める。

（勝って……私も…デクくんみたいに!!）

なるんだ。

ボガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンン!!!

しかし…
どんなに頑張ろうと、捨て身の策を講じても、爆豪という圧倒的な壁が、強さが、全てを無にするように……
お茶子の流星群を跡形もなく消しとばした。片手を使った超巨大爆撃で…
巨大な爆発が起こり、お茶子の流星群を相殺したことにより、観客たちだけでなく、当然お茶子も表情を曇らせる。いや、お茶子の場合は、目の前の絶望を見るような顔で…
「そん……な……一撃て……」
言葉を失った。彼のあまりにも強すぎるその強さに……その姿に……
「お前、デクの野郎とつるんでるからな…何か企みがあるかと思ったが……思った通りだ……」
爆豪は物静かに語り、掌を見つめる。
「危ねえな……」
『爆豪勝己の会心の一撃!!麗日の秘策を堂々と…正面突破〜〜!!!』
観客たちは爆豪のあまりにもの強さに歓喜に近い声を上げる。

今の自分にできる最大限が…全く通じなかった…!
お茶子は悔やみ、立つ気力すら無くし、大きな絶望に体を震わす。
お茶子の場合、兎なら、爆豪の場合は獅子…いいや、もはや恐竜だ。
恐れることのない彼は、どんどん強さの高み上り詰め、相手に恐怖を与える。彼の言葉にピッタリだ。
そんな凶暴な彼は、お茶子を見ると不敵な笑みで微笑んだ。
「良いぜお前…こっから、本番だ麗日!!」
出てくる汗が滴り落ち、走り攻めに来る。
自分の秘策が、努力が、思いが、全て目の前で爆豪によって打ち砕かれても、弱々しく震えながら、立ち上がり、立ち向かう。お茶子はそれでも…
(それでも!!)
諦めない。

ドサッ…

しかし……

「……あ？」

諦めない気持ちはあっても…

「ハッ……はぁ……んっ！くぅっ!!んの……体……言うこと……聞かん……！」

我慢の限界はあった…

糸のように切れ倒れたお茶子に、爆豪は思わず眉をひそめる。

「許容重量…！」

緑谷は瞬時に理解して呟いた。体力面でも、個性の上限も、とっくに超えて……

「……」

審判のミッドナイトがとうとう動き出し、お茶子の安否を確認する。お茶子は全身ボロボロになっても、掠れた目で爆豪を睨みつける。

動きたくとも、体力の限界を迎えた末路がこれだ。そんなお茶子は、地面を這うように動き、僅かな声を振り絞った。

「父ちゃん……！」

動かない、ボロボロな傷を負ったお茶子に、審判は手を挙げる。

「……麗日お茶子選手、行動不能。よって、勝者は、爆豪勝己」

これが、勝負。

「麗日さん…」
次は緑谷が出番のため、控え室に向かっている。ヒーローになるために、色んな努力をして、捨て身の覚悟でぶつかった。その結果、敗北した。そんなお茶子に緑谷は思わず声を出したのだ。
お茶子は気絶してしまい、ハンソーロボは担架でお茶子をリカバリーガールの元へと運んでいった。
一方爆豪はなんの表情も変えずに背を向け、会場から姿を消す。
『麗日…うん、本当によく頑張ったよ君は……うん、うん……爆豪…一回戦突破…二回戦進出……』
「うんうんばっかだな…やるならちゃんとやれよ…」
『ツー訳で次回は第二回戦の前に気絶から回復した切島選手と鉄哲選手の戦い(腕相撲)が始まるぜ!!小休憩挟んでからまたやるからな!!』
「私情スゲェな……どんだけ切り替え早いんだよ…」
マイクの相変わらずと言った性格に、相澤は深いため息をついた。

会場を去った爆豪は、皆のいる観客席に戻る途中で、控え室に行こうとしてる緑谷と出会した。
「あ?」
「あ、かっちゃん…!」
一瞬の静寂としたギグシャグな空気が、二人を包む。
「あ……え、えと…その……」
「んだテメェ何の用だ殺すぞ死ねカス!!」
「死ねカス!?」
突然降りかかってくる暴言に、緑谷は思わず体を震わせ、ぎこちなく返事をする。
「え、えっと…次僕の番だからさ…準備!準備するために…ね?だから…そ、それじゃあ!」
緑谷は爆豪から逃げるように控え室に向かう。今の雰囲気では正

直言って居づらい…それにいつになく爆豪は緑谷に対しては厳しい対応だ。幼馴染だからというのもあるが…
「オイ、クソデク」
ふと爆豪が緑谷を呼び止め、歩む足を止めた。冷や汗を垂らし、何されるか分からず恐るおそる爆豪に振り向く。しかし爆豪の顔はとても冷え切った顔で、いつもガミガミと怒ってる爆豪の顔ではない。いつになく冷静の…
「お前だろ、麗日の野郎に知恵入れたの。あの捨て身の策、俺への対策かなんかだろ？なぁ…舐めたことしやがって……」
爆豪は鋭い目つきで睨みつけ、そう言うと、緑谷の表情は先ほどの曇った表情ではなく、いつもの真面目な顔になる。
「ううん、違うよ」
「…あ？」
緑谷は首を横に振り否定すると、爆豪は思わず声を上げる。
「確かに僕はかっちゃんへの対策はしてた、けど麗日さんにかっちゃんの対策は一切教えてないよ。アレは全部彼女自身が作った策だ。もし、かっちゃんが麗日さんに対して厄介だって思ったのなら、それは麗日さんが、かっちゃんを翻弄したんだよ」
緑谷は「それじゃあ！」と言うと、今度こそ爆豪に背中を向け、控え室の方へと去って行った。
「……！」
歯を食いしばり、ほんの僅かに少しだけ悔しい表情を見せる爆豪は、観客の応援席へと戻って行った。

観客席では…
「おーつかれ悪人面の爆豪！ブーイング凄かったなー」
「まあ、客たちから見れば女の子に暴力振るってるって思われるし、仕

方ないわ」
「まあ、中々良かったんじゃないか…？」
「お疲れ様でした～！」
　爆豪に声をかける生徒たち、そんな爆豪は当然のことだが…
「うるっせえんだよ!!黙れ雑魚ども!!」
「おーおー、よく吠えるな本当に、これもう慣れてっけどな」
「慣れんなアホ面!!」
「…」
　爆豪の騒ぐ声に、上鳴は苦笑しながらそう言うが、アホ面呼ばわりされたことにまたもや落ち込む。これは慣れてません。
　爆豪は席に座ろうとすると…
「ふっふっふ、爆豪くん…！」
「あ？」
　何故か雲雀が爆豪の席に座っていて、何か悪戯でも企んでるかのような顔で微笑んでいる。そのことに気づいた爆豪は数秒ガン見してから怒鳴り散らかす。
「テメェ何勝手に人の席座ってんだ!!ぶっ殺すぞクソガキ!!」
「雲雀はいつまでもお子様じゃないから、爆豪くんの暴言ではもう泣かないよ！」
　爆豪の暴言に、なんの表情も変えず答える雲雀。昔は号泣してたのに…
「あーそうか立派に成長したなぁ、わざわざそれ言いに来たのか？気が済んだろ？だったら退けや!!」
「嫌だね！雲雀はいつも怒ってる爆豪くんにちょっと仕返しするもんね！勿論お茶子ちゃんの仇でもあるけど！」
「あぁ？」
　すると爆豪の鞄の中からペットボトルを取り出した。どうやらジュースのようで、ジンジャエールと書いてある。
「おっ、爆豪ジュース持って来てんのか？珍しい～！」
「私はてっきりお茶か渋いものか何かかと…」
「何感心してんだテメェら！あと俺のカバン勝手に荒らすんじゃねえ

!!てか何で俺のヤツ取るんだよ!!返せゴラァ！」
瀬呂と八百万が感心してる側で、爆豪は雲雀に激怒する。そんな爆豪に雲雀はニヤリと笑みを浮かべる。
「ふっふ～！雲雀が今から何するか、わかる？」
「無駄なクイズに付き合う気はねえ、だから返せ！」
雲雀に弄ばれる爆豪、見たことない。と皆一同はそう思った。
すると雲雀はペットボトルのキャップを開けた。
「今からね、雲雀は一気飲みってやつをやるんだ!!」
「二度は言わねえ…じゃないと後悔するぞ…」
爆豪はちょいとツッコミを入れて、雲雀にそう言うが、雲雀は…
「いっただっきま～～～す!!」

満面な笑みでそう言った…
（し、仕返しってこれのことか…なんかますます子供みたいで可愛いな…）
と、皆はそう思ったのであった。
雲雀はゴクゴクと飲みながら爆豪の反応を楽しみにする。が、爆豪の反応は…
「バカ!!……あーあ、どうなっても知らねえぞ俺は…」
（ふぇ？）
爆豪の以外な反応…いや、呆れた反応に、そしてその言葉を聞き雲雀は眉をひそめる。そして悲劇が起きた…
「……!!??～～～～～～!!!!?」
途端、雲雀はジンジャエールのジュースを直ぐに口から離して、ペットボトルを爆豪に押し付ける。それも涙目で
「げほげほ!!ナニコレ…辛い!!」
「「「え？」」」
辛いと言う言葉に皆はキョトンとした顔で見つめる。
「何これ辛いよ辛いよ!!舌が焼けるように痛い～～!!うえええええ

〜〜ん!!柳生ちゃあぁぁ〜ん!!」
「ああ…雲雀!大丈夫か…?おい貴様ぁ!雲雀に何をした!?」
「見てたのに分かんねえのか?何にもしてねーよボケ!自業自得だ馬鹿!!」
雲雀は物凄い号泣で柳生にワンワン泣きながら抱きしめ、ほんの一瞬幸せを感じた柳生は、直ぐに切り替え爆豪にブチ切れオーラを放つ。が、爆豪な何の表情も変えない且つ、爆豪は臆するどころか、柳生に負けないくらいのブチ切れオーラを放つ。因みに雲雀が飲んだのは、爆豪のお気に入り激辛ジンジャエールだ。
「クッ…!……もしオレがこの大会に出れたら真っ先にお前をブチのめしてやろうと思ったのに…」
「や、柳生、落ち着け…な?な?しっかし爆豪もあれだよな、か弱い相手によーそんな真似が出来るな!」
怒りのあまり火山が噴火しそうになる柳生に、瀬呂が止めに入る。
そんな感じで騒いでる中、爆豪は静かに、誰も聞こえない声でこう呟いた。
「何処がか弱えんだよ…」

「負けてしまった!」
気絶し負けた後、リカバリーガールの治療を受け無事回復したお茶子は、満面な笑みを浮かべた。そんな麗かな彼女は、負けた後悔して落ち込んでるのかと思っていたが…予想が外れた緑谷は呆然と立ち尽くしていた。
「麗日さん…怪我は大丈夫…?」
「うん!まだすりキズとかは残ってるけど、全然!!」
確かによく見てみると、ほんの少しのすりキズがあちこち見受けられる。体力面もあるせいか、全回復は出来なかったそうだ。完璧に治癒できた訳ではない為、バンソウコやシップなどが貼られている。

「いやあ！強いね爆豪くんは！こう、直に戦ってみるとこ～…！手も足も出なかった！あ～も～～!!悔しい悔しいよ!!しかも新技みたいなの使ってきて、驚いたよ！」
　お茶子の顔はとても悔しそうに見える。いつも元気で無邪気な彼女…
　だが緑谷はもう既に分かっていた、本当は彼女は無理をしていることを…無理して必死になって…心配をかけないようにと…
「どしたの？緑谷くん？」
「あっ！え、え～っと……本当に大丈夫かな～って、体力や傷のこともそうだけど…色々と心配で…」
「私は大丈夫だよ！ありがとね！」
　ニカッと眩しい笑顔を見せるお茶子。普通のところ今なら、緑谷は顔を赤面にして慌てふためくだろうが、しかし現状そんなアクションを取る気分ではない。
「それにさ、私なんかよりもデクくんの方がずっと凄いよ…先見据えてて、なんか誰よりも頑張ってるみたいで…私だって、負けたからって負けられへんよ…」
「そ、そんな…！僕なんか……」
　お茶子は悲しげな顔でそう言うが、緑谷は慌てて否定する。
　そんな時、ここでマイクの実況の声が上がる。切島と鉄哲の決着が着いたらしい。結果、勝利したのは切島鋭児郎。鉄哲も惜しかったが、切島がなんとかギリギリ勝ったそうだ。
　その為これで二回戦進出者が出揃ったため、第二回戦が始まる。二回戦最初の始まりは、緑谷ＶＳ轟の対決だ。
「次は…僕だな……あっ、麗日さん、それじゃあ僕…」
「うん！ゴメンね私のせいでデクくん全然準備が…！」
　そろそろ準備しなければならない緑谷は、じゃあとお茶子に手を向け、お茶子は頭を下げて謝ってる。
「それじゃあ、後は頑張ってね緑谷くん！優勝…出来ると良いね！」
「……！うん！」

お茶子がそう言うと、緑谷は頷いて出て行った。何気ない普通の会話のやり取り…お茶子の『優勝できると良いね！』と言う言葉は、緑谷にとっては、『私の分まで頑張ってね』と言う意味ではないのか？と思ったのだ。一回戦が始まる前に、尾白が緑谷に託してくれたように、お茶子も緑谷に託した。そう考えられると、緑谷はますます負けられない気持ちが強くなる。

お茶子は緑谷が去ったことを確認し、少し時間が経つと直ぐに携帯を取り出した。

「……父ちゃんゴメンね、さっき急に電話切っちゃって」

『いやあそっちこそ、忙しい時にスマンなぁ…』

話し相手は男性で、少し豪快な声が聞こえた。その声の主は麗日の父親だ。

『それにしても、テレビ母ちゃんと一緒に見とったぞ！惜しかったなアレーーーー!!お茶子お前あんなん出来て、よー立派になったなぁ！負けちゃったけど、でも凄かったぞーーー!!!よお頑張ったな！』

「ううん、惜しくないし凄くないし…出来て当たり前なんだよ、ウチの学校は……最後あれ焦りすぎて彼処からの打開策とか何もない状態だった…その為結果は当然、完敗」

先ほどの元気な彼女とは違って、とても暗く落ち込んでいる。

『そうなんか？よう難しいことは分からんけど…別に負けたからって道閉じるわけやないんやろ？来年もあってまだチャンスはあるんとちゃうんか？』

「勝ち進めばそんだけ…一戦だけでスカウトするかどうか分からへん…それに来年って言ってるけど、年に一度の体育祭、チャンスは合計後二回……！こんなんじゃウチ…ヒーローになんか……」

段々と弱々しい声になっていく。

『……なーにを急いどんのやお茶子』

「だって…だって……！早く私…父ちゃん達……!!」
『……お茶子はもぉ急がんでも大丈夫やで。だってそんなんなるくらい優しいお茶子は、絶対良いヒーローんなるって分かっとるもん、俺も母ちゃんも。だから、父ちゃん達の気い使わんでも、お茶子はお茶子で、自分の道を突き進めば良いんやで』
父の優しい言葉に、声に、お茶子の目から大量の涙が溢れた。
負けて悔しくて、父の言葉が嬉しくて、二重の意味でお茶子はその場で静かに、泣き止むまで泣いた。

彼女の泣いてる声が聞こえる。去ったように見せかけ、実際控え室の扉の近くで会話を聞いていた。
お茶子の泣く声に、緑谷は切ない気持ちで会場に向かう。
(悔しくないわけないのに…助けになればなんて、言って…何もしてあげられない　それどころか…また背中を……)
強い思念を持ち、向かっていくその時だった…

「おお、いたいた」
「!?」
曲がり角から現れたのはなんと、轟の父親、エンデヴァーだ。相変わらずその立派に燃える髭に、メラメラとあらゆるものを焼き尽くそうとする炎は威圧感がある。やはり身近で見ると、オールマイト同様画風が違う。
そんな彼が、轟の父親が、Ｎｏ．２ヒーローが、緑谷を探してたようだ。
「エンデヴァー…なんでこんな所に……」
轟から話を聞いた後だと、誰だって気まずくなる。しかしそれは仕方のないこと、ＤＶとも呼べる父親に気まずくなるのは当然だ。しかも忍の訓練を息子に受けさせるなどと、正気の沙汰ではない。
そんなエンデヴァーは緑谷に人差し指を向ける。
「君の活躍見せてもらった。素晴らしく、中々どして、派手な個性だね。指を弾くだけであれほどの風圧感…！そうだな…パワーで言え

ばオールマイトに匹敵する個性（力）だ」
「！」
個性のことを当てられた緑谷は、冷や汗を流しては目をそらし、早歩きでエンデヴァーの横を通り過ぎる。
「な、何を言いたいんですか…!?僕はもう……行かないと……！」
知ってる？ばれた？いやそんなはずは無い。だって轟くんも知らないのに、バレる筈がない。言ったのはせめてかっちゃんだけだ。アレは自分からバラしちゃったからどうしようもないけど……でもそれ以外は誰にもバレてないはず…取り敢えずこの人だけには悟られちゃ…
「ウチの焦凍には、オールマイトを超える義務がある」
「え？」
何を言いだすかと思えば、突然轟の話をし始めたエンデヴァーは、静かに話し、ゆらりと炎を揺るがせながらそっと後ろの緑谷に視線を移す。
「君との試合は、テストベッドとしてとても有益なものとなる…くれぐれもみっともない試合はしないでくれたまえ」
聞くだけで闇が深い。何より轟が父親を否定する気持ちが段々伝わってきた。理由は当の本人から聞いてはいるが、まさかここまで自分の息子をただのオールマイトを超えさせる為の道具としてしか見てなくて、自らの欲求を得るためにここまでするとは…
「言いたいのはそれだけだ…直前に失礼した」
エンデヴァーはそう言うと、立ち去るように緑谷に背中を向けて、観客席に戻ろうとする。その時だった…
「……僕は、オールマイトじゃありません」
「…??」
緑谷の突然の言葉に、意味が理解できず再び緑谷に振り向く。
「何を言っているんだ？そんなものは当たりま…「当たり前ですよね…じゃあ」」
エンデヴァーの言葉は遮り、緑谷は話を続ける。

「轟くんも、あなたじゃない!!」

そう言うと、緑谷は会場へと向かって行った。そんな緑谷の後ろ姿に、表情を曇らせるエンデヴァーは、目を細める。

そして…

「来たな」

舞台の上に立つのは、緑谷出久と轟焦凍。絶えることのない観客の歓声、会場は轟のことでますます声を上げる。だが、どれだけ会場が騒がしくなろうとも、舞台の上に立つ二人の空気は静寂に包まれている。冷え切った空気に、緊張がほとばしる。何より緑谷の目の前に立っているのは、クラス最強の1・2を争うのだから。

『今回の体育祭　両者トップクラスの成績!!まさしく両雄並び立ち今！『緑谷』対『轟』!!』

そして…

『ＳＴＡＲＴ!!』

両者の戦いが今、始まった。

４３話「緑谷出久ＶＳ轟焦凍」

「失礼します…」
「霧夜か、よく来た…」
　善忍東京本部の高層ビルにて、半蔵学院忍学科の担任、霧夜は会議室に入ると、中には善忍組織の幹部が何十人も椅子に座っていた。低いしわがれた声が、物静かな空間に響いた。
　老人らしき者もいれば、３０～４０代のような上層部の組織の忍も何人か見受けられる。しかし、物静かな雰囲気とともに顔は険しい。
「霧夜、お前を呼んだのは最も他でもない…現在この社会で起きてる事件のことだ…」
「と、言いますと…やはり抜忍・漆月のことで…？」
「うむ…」
　上層部の老人が、霧夜を呼んだことについて話すと、霧夜は直ぐに察した。そのことに軽く頷く。
「調べてはみたが…戸籍不明かつ所属不明、抜忍のためヤツの情報が一切掴めれないのだ…」
「ましてや忍の存在を言い渡すなど…正気の沙汰とは思えん！ヤツは一体何が目的なのだか……！」
　先ほどまで話してた老人がそう言うと、右側の四番目の席に座っている背の小さなおじさ…老人はプンスカと怒りを露わにするように話し出す。
「それだけではないわい…現在危険視されている敵の集団組織、敵連合は雄英高校に襲撃しただけでなく、蛇女子学園にまで襲撃し、二度も忍の存在を見られている…漆月は敵連合に所属し事を進めている。ヤツらの目的は一切分かっていない…手掛かりも掴められていない…一方で、ヒーロー殺しステインは、忍を殺害している。ある者からの報告だがな……更に忍の世界で追放された道元は姿がない、現在行方不明。これで現在、この社会が起きてる事なのだが…
　ハッキリ言おう、これはもう既に緊急事態だ。しかもこれまでにない例の…な」

顔に傷痕が付いてる物静かな老人もそう言うと、霧夜は顔を伏せる。
「霧夜よ…お前からも何か分かったことは？」
「申し訳ありませんが…特にこれといった物は……期待に応えれなく申し訳ありません……」
霧夜がそう言うと、皆も分かってたのか落ち込みはしないが難しい顔を浮かべる。
「敵連合…ことを騒ぎ、世間ではもう既に存在そのものが知れ渡っている。処分したいところではあるが…もし我々が処分した場合、忍の存在が知れ渡ってしまう……」
上層部の言う通りだ。忍の存在を知ってしまった者は最悪処分対象となるが、死柄木弔を始める敵連合は雄英高校に襲撃し、世間に存在を知れ渡ってしまった。表で警察が調査をしているが見つかっていない…一方裏では多くの忍が派遣されてるが、案の定見つかっていない。しかも敵連合の目的は忍の殺害と来たものだ。放って置くわけにはいかない、一刻も早く捕まえなければならないのだ。
ではどうして処分ではなく捕獲なのか？捕獲をすれば世間に忍の存在を知れ渡すことなく、警察側から引き取れば問題ないからだ。後は何をどうするかは勝手だ。また敵連合を捕まえたのは平和の象徴オールマイトにしておけば良い。
安易に言えば、敵は捕獲、忍は殺す。そう言った方がシンプルだろう。
「兎に角だ…霧夜よ、引き続き忍務を続行しろ。半蔵学院の忍生徒たちにもな」
「はい、かしこまりました……」
霧夜は上層部たちに深々と頭を下げると、部屋から出た。

光。ヒーローの世界では超常への警備、悪意からの防衛、たちまち市民権を得たヒーローは世論に押される形で公的職務に定められる。ヒーローらは活躍に応じて、国から収入を、人々から名声を与えられる。

影。忍の世界では、超常への警備、上層部や主から下される忍務を全うすること。世間や人々から見られることなく、陰で諜報や破壊活動、暗殺などを実行することを忍と呼ぶ。
そして忍の中でも二つに分けられるものが存在する。
国家に所属し、国益に資っする善行を積む忍。世の為人の為に働くことを善忍と呼ぶ。
闇企業や悪徳政治家に雇用され、彼らの利益の為に暗躍する忍。光に、正義に生きることが出来ない、善忍と対立する存在を悪忍と呼ぶ。

それが現在、世界の人々が暮らす超人社会の有り様だ。
人々はヒーローや敵の存在を知っていても、善忍と悪忍の存在は知らないだろう…だがそれで良いのだ。
ヒーローは皆から光の脚光を浴び表で社会を支え、忍は皆から見られることなく陰で生き、裏で社会を支える。今の社会はそうやって成り立っているのだ。
もしこの社会が、万が一崩壊したら?そうなれば、超常社会は悪に勾引かされるだろう…それどころか最悪、忍の存在も……

霧夜が部屋から出てから、上層部はお互い顔を見合う。
「良いのか?本当に?」
「ああ、霧夜には言っとらんがな…まあどの道知ることになる…」
「しかし、それなら今言っても問題なかったんじゃないか?」
「バカ、俺たちが決めても向こう側が知ってないと意味ないだろ、それに今回その件も踏まえてこうして会議してるんだろ」
上層部達の話しに、ザワザワと騒めきだす。そんななか、傷痕のついてる老人は目を見開き周囲を見渡す。
「静粛に!!」
クワッ!とした一声に、皆は静まり返る。この老人は恐らく上層部

の中でも信頼が高い、あるいは最高順位に当たる存在だろう。
「兎に角この意見は皆、異論は無いな…？」
緊張するような空気に、皆は首を縦に頷き、横に振る者は一人も居なかった。そう言うと、その人物は皆を見て納得したように頷きこう言った。

「雄英高校に、新たな忍生徒を転校させる」

場所は変わり、轟と緑谷が会場に姿を現したと同時に、負けてしまったお茶子はヘロヘロになりながらも観客席に戻ってきた。そのことに気づいた飯田は思わず「全然麗らかじゃないぞ麗日くん！その目は誰にやられたんだ!?」と慌てるが、お茶子は大丈夫だいじょうぶと軽く手を振る。
「ホラ、リカバリーガールの治療で…体力削られてね、目は…うん、色々あって…」
お茶子がそう言うと、飯田は「そうか…」と納得した様子で軽く頷いた。上手く誤魔化すことに成功したお茶子は席に座る。その隣に座ってる飛鳥は顔を覗き込む。
「お茶子ちゃん大丈夫？でも凄かったね！よく頑張ったよ！」

「あ、飛鳥ちゃん…いやぁ……ありがとう……えへへ…」
飛鳥の励ましに、お茶子は思わず頬を緩めて笑みを浮かべる。
「さて、俺たちはこの戦いを己の糧とするべきだ…」
「問題なのは轟の氷結だな…あれ程の大規模な攻撃、忍の俺たちでも相当厄介だぞ…」
常闇は目を細め、柳生は眼帯を撫でるように呟いた。

あるところでは…
観客席にて
「さて、と…Ｎｏ．２ヒーロー・エンデヴァーの息子、轟焦凍と個性不明の謎多き少年、緑谷出久の戦い…いやぁ、これは盛り上がりそうです。やはり一般ヒーローと比べて、雄英の生徒の戦いは次元が違う！紅茶を飲みながら優雅にくつろぎますか…」
先ほどから怪しい鴉仮面の黒スーツ男は、袖から紅茶を取り出し、鴉の仮面のクチバシが開き、紅茶を口に入れる。まるでマジシャンのようだ…

あるところでは…
薄暗い部屋にて…パソコンの画面をジッと見つめてる二人に、工業地帯のようなマスクを被ってる男は話しかける。
「いいかい？死柄木弔、よく観て備えろ。彼らは、いずれ君の障壁になるかもしれない…それは勿論、漆月、君もだけどね…」
「ハッ…糞みたいな話だな…」
「……分かってますよ…先生」
死柄木弔は、君の悪い笑顔を浮かべて、ガリガリと首を掻く。一方で漆月は、いつも使ってる愛用の刀を宝物のように大事に撫でながらそう答えた。

あるところでは…
緑谷家、テレビを観てる出久の母。緑谷引子は…
「出久うううううう～～～～～!!!!」
大量の涙と鼻水を出してはティッシュで拭き、捨ててはまたティッシュで拭きの繰り返し。部屋中がティッシュの海だ。実の息子がここまで登り詰めたことに、感動している。

あるところでは…
何気ない建物の屋上で、大人らしき一人の女性がふと不敵な笑みを浮かべる。
「フフ…相変わらずだな雄英高校の生徒達は…流石、蛇女の悪忍と戦い、敵の襲撃を乗り越えたことだけのことはある」
その女性の声は何処か懐かしく…

あるところでは…
町の商店街にて…一人の女性は汗だくでアルバイトをしていて、今は休憩を貰っているのか、外に映っているテレビ画面を見ている。映し出されているのは雄英体育祭だ。それを観た女性は…
「ん?アレは…」
首を傾げ、ジッと見つめる。暫くして…
「……フッ」
不意に笑みを浮かべ、嬉しそうな顔を浮かべる。
「そうか……アイツらが……何だろう、久しく感じるな……まさかこんな大場面に出れるなんてな、そう言えばアイツら雄英高校って言ってたな……はは!」

黒いポニーテールの少女は、えらく感心して喜んでいるようで…
「おっと、そろそろ時間かな……また、手合わせ願いたいな…」
もう仕事に戻る時間なのか、座ってた椅子に立ち上がり仕事場に戻る。
「さて、と……焔！只今仕事に戻りました!!」

他にも…あるところでは……
「ほう、アレが雄英高校の生徒か……」
白髪でボーイッシュな女性はテレビ画面に映し出されてる雄英高校の生徒を観て、目を細める。
「観たところ、テレビに映し出されてるってことはそれなりの実力があるみたいだね…」
同じく、眼鏡をかけた女性はその白髪の女性の隣に立ち体育祭を観てそう言った。すると白髪の女性は「フッ」と不敵な笑みを浮かべた。
「そうでなくては困る…何せ潰しようがないからな、蛇女子学園を貶めた罪は重い……悪の誇りを取り戻す為にな…！」
「そうだね、『雅緋』…アイツらを殺すのは駄目でも、半蔵の生徒は殺せるわけだし……」
「そうだな『忌夢』……忍の存在を世間に悟らせない為にもアイツらを殺れないのは仕方がない、だが半蔵の連中にはきっちりと落とし前はつけさせて貰おう」
白髪の女性雅緋と呼ばれる者と、眼鏡をかけた女性忌夢と呼ばれる者は、物静かに、殺意と闘気を燃やしてそう呟いた。

同じく…別の場所では
「雄英体育祭……」
灰色に近いような髪色をした、雪のような白い肌の清楚な少女は、

自分から少し離れた場所のテレビ画面を見つめてポツリと呟いた。
「ん？どうしたんです？　ああ、雄英体育祭ですか…」
後ろから声をかけたのは、青色の短髪をした見るからに真面目そうな少女だ。
「ええ、同じ正義として…これは観ておかねば…と。何せ雄英高校はヒーローとしても名高い学校ですから…」
「ヒーロー…儂らと同じ光り輝く正義……儂も観ても良いですか？」
「勿論ですよ…」

その少女はコクリと頷きそう言った。

ありとあらゆる場面で、人々は雄英体育祭を観ている。それが一体何の意味を表すのか、少年少女達の未来に待ち受けてるものとは？それはまだ、誰も知らない。それが例え、戦うことになったとしても……

場所は元に戻り雄英体育祭。
「オールマイト、あの二人は共に貴方を救けようと行動したそうですね」
「…うん」
観客席、オールマイトの隣に座ってる１３号は舞台を見ながら話した。オールマイトは返事をすると、緑谷と轟を真剣な目で見つめている。
「なんとなくだが、あの二人は何か近いモノを感じるんだ…」
「近いモノ？」
オールマイトの言葉に首をかしげる１３号。

「うん……それが何なのかは上手く説明できないし正直よく分からないけどね……でも感じるのさ…少年たちの何かを……そして…」
目線を逸らして、観客席の飛鳥を見つめて。
「彼女もまた…似ている。緑谷少年と飛鳥くんは似ているというより、同じなのかな……」
「飛鳥くんが？それはまたどう言う？」
１３号ははたまた首を傾げると、オールマイトはほんの少しだけ柔らかい、優しい微笑みを浮かべる。
「そのまんまの意味さ……それに…」
そして何かを思い出したのか、何処か寂しげな顔を浮かべる。
「飛鳥くんは…『陽花』くんに似ている……」
「え？オールマイト、今何と？」
「…ああ！気にしないでくれ１３号!!こっちの話さ…！」
誰にも聞こえない僅かな声で呟いてると、１３号は覗き込むようにして顔を見つめる。ハッと我に返ったオールマイトはぎこちない笑顔を浮かべる。
「さて、と…緑谷少年…君はどう出るかな？」
オールマイトは再び舞台の方に目をやる。

舞台は大きな歓声と冷え滾る空気が流れている。緑谷は緊張のせいか冷や汗を垂らし、呼吸音も乱れている。一方で轟は真っ直ぐとした目でただただ緑谷を見つめている。

緑谷にとってこの戦いは何を表すのか？今は勝つこと、またはオールマイトや背中を押してくれた皆んなの為に戦うことだろう…しかし轟はどうだ？
轟にとって緑谷の戦いはなくてはならない戦いだ。
轟は先ほど飛鳥と緑谷を呼び話し合いをしていた。そして確信したことはただ一つ、緑谷出久はオールマイトと何かしらの繋がりがあると言うこと。
大きかれ小さかれ、繋がりがあるというのならますます負けられな

い、尚更勝負しなければならない。
何故ならこの戦いは、Ｎｏ．　１ヒーローから受け継がれた緑谷出久と、Ｎｏ．２ヒーローから全てを受け継がれてしまった息子、轟焦凍の戦いだからだ。

轟は考えた、もしＮｏ．　１ヒーローとして繋がりのある緑谷出久と戦い、氷（母）の力だけで勝てたらどうなる？
エンデヴァー（親父）を完全否定することが出来る。それが轟の目標であり、戦う為にも負けられない理由だ。

そう、これはお互い立場や事情は違えど、引き継がれた者同士の戦いなのだ。

そして…ついに……

『ＳＴＡＲＴ!!』

開戦！

パキイイイイイイイインン!!!

と同時に素早い猛烈な氷が緑谷に遅いかかる。
ズドバアアアアアアアアアアアアンン!!!
同じく、それと同時に強力な衝撃波が轟に襲いかかる。

ブワオオォォンン!!
お互いの強力な攻撃がぶつかり合い、氷の破片が冷え切った烈風に乗り会場に流れる。氷攻撃が来ると先読みした緑谷は、轟の攻撃を防ぐことに成功した。が…
「…なるほど、やっぱそうくるか…」
「っっっっ!!」

自損覚悟の打ち消し。緑谷の指は腫れ上がっている。個性の調整はまだ可能ではないため当然なのだが、緑谷にとって轟との相手はとても不利だ。

『おおおぉぉーーーっと!?相殺!破った

あぁぁぁーー!!ジ緑谷何チューパワーだよ!?!』

なんとか氷を相殺出来たものの、轟自身にダメージはない。しかし緑谷は個性を使えば強力だが、その分自身へのダメージも背負うことになる。最初の攻撃を防いだのは良いが、問題はここからどう攻めてどう対象しどうやって勝つかが問題だ。

確かに轟がどの程度の規模で攻撃してくるか分からない。瀬呂のような超大規模攻撃なんてされたらたまったものじゃない。だから緑谷の制約できる範囲[5]%を捨てて１００％のぶっぱの選択は正しいだろう。緑谷の場合、氷結の攻略はそれしかない。

轟はまたもや氷結攻撃を繰り出し、緑谷も残った指で個性を打つ。

緑谷の指が血に染まり、苦痛の表情を浮かべる。見るだけでこっちも痛々しくなる、だが轟は涼しい顔で緑谷を見てから観客席の何処かに視線を移す。

「分かっちゃいたけど…轟くん、強すぎる…!!!」

グシャっと指に嫌な音を立てる緑谷は、相手の分析、打開策を頭の中で考える。しかし相手も時間も待ってはくれない、だから戦いながら考える。取り敢えず次の攻撃に備えてまだ残ってる指を向ける。

緑谷のように相手への分析を得意とするなら、戦う前から作戦を考えてはいるが…

(轟くんの戦いは知る限りいつも一瞬で勝負は付くから情報が少ない!情報を……せめて弱点か何かを…この戦いのなかで隙を見つけなくちゃ……!!)

相手の情報、主に氷結攻撃が絶対。炎は使わない、なら氷だけを考えればいい。しかし氷の規模が強すぎる。どのくらいの攻撃が来るのか?相手はまた違う手を使って来ることだってありえる。

ありとあらゆる疑問が思い浮かぶが、また逆に分かったこともある。

轟の背面には自分の背よりも少し大きい氷の壁が張られている。その氷は恐らく自身が強い衝撃を食らって吹き飛ばされない為だ。

（見極めろ…考えろ……！見つけるんだ……!!あと、６回のなかで！）

ズキズキと痛みを噛み締め堪える緑谷は、折れない目で轟を睨みつける。

白い息を吐く轟は、思わず舌打ちをする。

「チッ……しぶてえな……」

そして、地面が氷に覆われていく。そのタイミングで緑谷の個性がまたもや炸裂。観客側から見れば同じ繰り返しの出来事だが、緑谷の内心はとても深刻だ。

１ーＡ応援席では…

「げっ！もう始まってんのかよ…緑谷と轟の戦いかー…」

「よーうお疲れ切島ぁ！二回戦進出よかったじゃん！」

鉄哲とのガチンコ勝負を終えた切島がやって来て、上鳴は軽く手を振る。

「おう！そーいう事だ爆豪、次はお前とだ！宜しくな！」

「煩えぶっ殺す」

「ハッハッハ！率直だなやってみな！」

見向きもしない爆豪は言葉を吐き捨てると、切島は陽気な笑みを浮かべてる。

「しっかしよー、オメーも爆豪もどデケえ強烈な範囲攻撃ポンポンポーンって出して来るからなぁ、柳生とかなんて烏賊とかサイズデカイし範囲も広いし…」

「俺の場合は範囲は限られてるがな……」

柳生は自分を当てられボソリと呟く。

「ポンポンじゃねえよ舐めんな」

「？」

と、ここで真剣な顔立ちで舞台を観ている爆豪は口を開く。
「筋肉酷使すりゃあ筋繊維が切れるし、走り続けりゃ息切れる。個性だって身体機能だ、あの半分野郎にだって何らかの限度はあるハズだろ…」
　爆豪はそう言うと自分の腕を黙々と見つめる。
（まあ俺だって出せる威力には限度がある…あん時麗日に打ったのが限界だしな……ま、だからコスチュームで許容超過の爆破をノーリスクで撃てるように考えた訳だし……それに指のみでの爆破も、五指全部使えば火力出せても威力は減っちまうわ体力も無駄に削る……それは体力テストのアレと同じ……となるとやっぱ3本が妥当か……）
　爆豪は珍しく冷静だ。言動はアレだが彼も彼なりの考えがあるのだろう…
「なんにしてもいたいよ～～!!まだ辛いの治らないよ～…」
「クッ…!こうなったのも爆豪の所為だ……が、悔しいことに雲雀が起こした事だからな……何も言えない…!」
「ゴメン待って雲雀に何があった？」
　まだ涙目になって口を大きく開けてる雲雀に、柳生は頭を撫でては爆豪を睨みつけ、そんなやりとりを見てる切島は、その時その場に居なかった為、訳がわからなかった。
「う～ん…これだと難しそうだね…緑谷くん…」
「うん、デクくん痛そう…指が……」
　飛鳥とお茶子は緑谷を見て心配する。そこで斑鳩は飛鳥の顔を覗き込む。
「そう言えば飛鳥さん、ヤケに緑谷さんを応援していますが…何かあったのですか？」
「ふぇっ!?斑鳩さん!?あ～えっと～…いえ、特には別に…」
　斑鳩の突然な質問に驚き慌てる様子を見せるが、すぐに態勢を取り戻す。
「普通科との戦いはともかく、ヤケに緑谷さんに肩入れするようにも見えますし…」
「そういやそうだな、そこんところアタイも気になってたぜ、他の競技

でも応援してたしな」
斑鳩の言葉に隣にいた葛城も聞いてたのか、何度も頷き納得する。
「か、葛姉まで～…！大した理由なんかないよ～……ほ、ホラ、私緑谷くん達とは仲良いし、何気に気が合うし、それに緑谷くん毎回ケガするから心配も兼ねて…」
「なるほど…そういうことでしたか…」
「ちぇ～！んだよつまんねっ…！」
飛鳥の理由に納得した斑鳩、葛城はつまらなかったのか、口を尖らせる。
「ハァ……それはそうと…轟くんには……事情が事情だし……」
飛鳥はため息をついて、再び舞台に目を向ける。
（何だろう……轟くんの背中を見てると、何処か寂しくて、可哀想な感じが伝わってくるな……）
悲しい眼差しを向ける飛鳥は、ソッと心の中で呟いた。

（あっ、そう言えば疑問に思ったことがあるけど……轟くんは……どうして、ヒーローになりたいんだろう……？）
父親に無理やり個性を受け継がれたから？全てを持たされたから？父親を完全否定する為？精神的に追い詰められた母親のため？
なら別にヒーローでなくたって否定することはできる。例えば焔みたいに家を出たりとか…
だが何かしら理由があるからこそヒーローを目指すのだろう。だが今の轟を見てても何も感じ取れない。感じ取れるのは…
『クソ親父を完全否定する』
父親が悪みたいに、完全否定することしか感じ取れない。
だから正義である善忍の飛鳥は思ったのだ。
轟くんにとってのヒーローって、何だろう？

轟くんは、何を憧れてヒーローになったんだろう？

二つで一つの疑問を浮かべる飛鳥はただただ、二人の戦いを優しく見守るのであった。

「耐久戦か？直ぐに決着付けてやるよ…」

轟は氷を使って同じ攻撃をする。当然緑谷も反撃するわけだが、これで右手は全部全滅してしまった。つまりもう残るは左だけ…

緑谷はもう右手が使えないと察した轟は氷を重ねて接近する。今度は氷結攻撃ではなく接近戦を試みた。緑谷は左の指を使い氷を壊すが、氷の上に乗ってた轟は無害。上からジャンプし緑谷に着地する。と同時に氷を出し氷漬けにするためまたもや氷結攻撃が繰り出される。

「っ！足が!?」

避けたつもりだったが右足が氷漬けにされ動きを封じられてしまった。それを見た轟はチャンスだと判断したのか、氷結攻撃を繰り出そうとする…

ズドオオオオオオオオオオン!!

しかし…

「……さっきよりも高威力の攻撃だな……なるほど、近づくなってか」

「うぅっっっっ!!!」

緑谷は轟に攻撃させないため、いち早く攻撃することに成功した。しかし…左腕は血まみれに腫れ上がっていて…

余りの激痛に思わず目がくらみ、涙を浮かべる。

(個性だけじゃない、判断力、応用力、機動力…忍の訓練を受けてたからってのもあるし分かってたけど……全ての能力が…強い!!)

忍の訓練を受け、父親と母親から受け継いだ個性を持つ。

忍の訓練だけじゃない、ヒーローとしての訓練も受け鍛えられた轟は、そこらにいる一般ヒーローなどとは比にならないだろう…

「さっきから守っては逃げてるだけでもう既にボロボロじゃねえか……」
ここで轟は白い息を吐きながらザッと一歩足を出す。しかし緑谷はここで気づいたことがあった。なんと轟自身、わずかに震えてるのだ。それは寒さによるものなのだろうが…するとここで轟は観客席の方に視線を移す。先ほどからチラチラと見ていたその先は…

「悪かったな…ありがとう緑谷。おかげで、奴の顔が曇った」
父親のエンデヴァー。否定するためにずっと顔色を伺っていたのだ。
「その両手じゃもう戦いにならねえだろ……終わりにしよう。だから…」
苦痛と轟自身に悩まされながら、冷や汗を垂らし睨みつける緑谷に、轟は最後の氷結攻撃を繰り出した。

「俺のために、負けてくれ」

その言葉を言い放ち、氷を重ねて攻撃する。
『オォーーっと！圧倒的に攻め続けた轟選手!!最後だと判断しトドメの氷結を…』

「どこ見てるんだ!!」
「！」
轟の最後の一撃と判断したマイクが実況してるなか、舞台では緑谷の言葉によって遮られる。緑谷が動き出したことに初めて驚く素振りを見せる轟。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオン!!

強烈なる一撃が炸裂した。何時もの攻撃…とはちょっと違い……
「クッ…！」
衝撃波に思わず吹っ飛ばされた轟は、なんとか場外を阻止するため、パキパキと氷を這わせ、重ねて後ろに壁を作る。それも場外ラインギリギリなところで…なんとか場外を阻止することが出来た轟は緑谷の指を見た。
「テメェ…なんで……」
（右手は全滅したはず……まさか壊れた指で……!?）
先ほど晴れてた指は更に酷くなり、血まみれになっている。見てるだけで痛々しさが伝わる。
「何でそこまで……「震えてるよ轟くん……」!?」
轟は緑谷に問いかけるが、緑谷は右手を震えさせながら震える体を見つめてる。
「個性だって身体機能の一つ……君自身冷気に耐えられる限度がある……でもそれって、左側の熱を使えば解決できるんじゃないのかな……？」
「っ…」
左、炎に突かれたことに轟は忌々しい目つきで緑谷を睨みつける。
「皆んな……本気でやってる……!!」
壊れた血に染まった指をゴキゴキと無理やりにでも動かす。痛みに堪えながらも轟を睨みつける緑谷。
「勝って……それぞれの目標に近づくために……1番になるために……!!皆んな本気で頑張って、戦ってるんだ!!それなのに……半分の力で勝つ?!まだ僕は君に傷一つつけられちゃいないぞ!!」
緑谷の熱い言葉が、会場中に響き渡る。痛々しい酷い傷を見ては、戦いに息を飲み込むものもいる。
「全力でかかって来い!!!」
緑谷は真っ赤な血に染まったその拳を強く握りしめ、轟に向けて宣戦布告した。
「緑谷くん……」
緑谷の言葉を聞き、目を丸くする飛鳥。ある言葉を思い浮かべた。

それはあの昼休憩の時、呼ばれて轟の家事情を聞いた最後に飛鳥が言った言葉を…

『全力でかかってきて!!』

その言葉が、緑谷と積み重なったからだ。

飛鳥だけでなく…

「あの小僧…」

エンデヴァーも…

（轟くんも貴方じゃない!!）

脳裏に言葉を浮かべる。

緑谷の宣戦布告を聞いた轟も同じく

『全力でかかって来て!!』

飛鳥の言葉を思い出し…

「飛鳥と言い、お前といい……何のつもりだ……!!」

怒りを露わにする轟は、表情を歪ませた。

４４話「なりたい自分」

幼い頃から俺はよくクソ親父の訓練を受けられてた。
クソ親父曰く、俺はオールマイトを超えるための最高傑作らしい。
ふざんけじゃねえ、誰がお前の道具になんかなるか。お前を見てるだけで、声を聞くだけで腹立たしい。
俺は母の個性と父の個性を引き継ぎ手に入れたことにより、俺は最高傑作となり兄と姉は訓練しなくても良いそうだ。
訓練といえばヒーローと忍の訓練であり、今はもう慣れっこでなんとか付いてけれる。だが幼い頃では次元が違う。
例えば何十体もの傀儡を相手にし少しでも架すれば親への暴力が振るわれたり、目に包帯を巻いて気配や音だけでクナイや手裏剣などを避けたりと…アレは流石に死にかけた。最悪心臓付近の場所にクナイが当たり本気で死にかけたのだから。だが不幸中の幸いなのか、刺さったところもそこまで深くはなく、治療を受けてなんとか回復した。
他にも忍とヒーローが受ける基礎トレや、対人戦闘など、様々なものだ。
毎日が辛く、何度心が折れそうになったことか……生きてて幸せや希望を感じなかった苦しい生活だった。
でもそんな家族の中でも、俺に優しくしてくれる人がいた。俺の心と体の傷を癒すかのように…傷がついたところはシップやバンソウコなどを貼ったりしてくれた。寂しい時はいつも側に居てくれた。溢れ出る涙を拭い、微笑みかけてくれた。
それが、俺のお母さんだ。

『いいのよ…焦凍。お前は……』

その温かい優しさが俺の心を支え、包んでくれた。
そしていつしか、親父を否定し続けることだけを考えてたせいか…

この先をいつの間にか忘れてしまった

舞台には冷気で白い靄が舞台の周りを包み込んでいる。まるで二人の勝負を守り包めるかのように…周りの声を遮るような…緊迫とした空気が流れている。

「……飛鳥といい、お前といい……二人揃って何のつもりだ……」

気付くといつの間にか顔にまで所々氷が覆われている。

「全力だと……？クソ親父に金か弱みでも握らされたか……？」

何を言おうと緑谷はただ真剣な眼差しで睨みつけてるだけで返事はない。

先ほど飛鳥に本気でかかってきてと言われ、そして今緑谷にも言われた。

事情を知ってないのならまだしも、二人は家の事情を知っている。にも関わらず、この二人は本気で掛かって来いと挑戦する。

そういうところが……

「イラつくな……!!」

歯ぎしりし、表情を歪ませ怒りのオーラを出しながら、走り掛ける。

(近距離ならお前は対応出来ねえだろ……！直ぐに終わらせてやる…！)

しかし緑谷はそれが狙いだったのか、走り出した途端に緑谷も走り出した。そして間合いを詰め、低い体勢に入り拳を握り締めると思いっきり腹を殴り飛ばした。

それと同時に轟は緑谷の左腕を氷で凍らせた。

『生々しいの入ったあァァァァーーーー!!轟の僅かな隙を緑谷は見逃さなかったあぁ!!!』

「ぐうっっ!!」

緑谷は先ほどの攻撃で無理をしてしまった所為か、手が更に真っ赤な血に染まり、出血の量も以前より増した。

轟の動きは先ほどよりも鈍くなってきている。それは轟の氷の個

性によるデメリットみたいなものだ。それに直ぐに終わらせるといっていたが、瀬呂に見せた氷結攻撃が今までに見た最高の高火力の威力。つまり爆豪と同じく限界があるということだ。
「はっ……くぅっっ……!!」
轟は叩きつけられたかのように数回地面にバウンドし、何とか体制を取り戻す。咳をしながら腹に手を当てて立ち上がる。
「まさか…ここで攻勢に出るとはな…」
「ああ、どう見ても緑谷の方がボロボロなのにな…!」
観客の声も上がっている。しかし今の二人にはもう外の声なんて聞こえてない。まるで舞台は防音でも貼られてるかのような空気だ。
「氷の勢いも…だいぶ弱ってきてる!!」
緑谷は轟の氷結攻撃を見極め、破壊するのではなく避けた。無敵に思えた轟も、大分落ちてきてる。
「……ミッドナイト、これ止めますか?」
審判のセメントスは無表情ではあるが、内心は心配してるようでミッドナイトに止めかけるかどうか相談している。
「あれ大分無茶ですよ?どうせ治してもらえると思ってるかもしれませんが……聞いた話だと何度もリカバリーして貰ってるそうですし、それにアレでも十分な負傷を負ってます。一度の回復では全回復することは出来ないし、体力的な問題もある。あのまま続けば……治せるものも治せれませんし…例え彼がこの戦いで相手に勝ったとしても次の試合は無理かもしれませんよ!?」
「……」
セメントスは無線で連絡するが、ミッドナイトからは返事はない。見届けたいのか、それとも止めさせるか…それで悩んでる。本来なら止めるべきだが……
応援席では、轟と緑谷の激しい戦いに皆沈黙している。

「緑谷のヤツも…相当だな……」
ふとここで瀬呂が小声で呟くと、聞こえてた皆は僅かに頷く。
お茶子は作戦とはいえ自分のこともあったため頷きはしてないが…しかし今の緑谷は無茶をし過ぎている。
「……緑谷くん……」
飛鳥は冷や汗を垂らし、彼を見つめている。その言葉はこんなにも傷を負ってしまって大丈夫かな?という心配の言葉ではなく…
「轟くんに……本気を出させるために……?それとも……救けるために…?」
緑谷が轟に対する想いであった。轟の家事情のことは本人含めて3人の秘密だ。だから当然皆んなは轟について、そしてエンデヴァーがどれ程親として、人として酷いことをしたのか知る由も無い。ある一人を除いてなのだが…
だから家の事情で苦しめられた轟の気持ちに二人は動揺し信じられなかった。だがそれを聞いて思ったことがあった。
こっちも負けられない。そして…
救けてあげたいと…
親に、過去に苦しめられてるなら、救けてあげよう。
飛鳥はそう思ったのだ。
もし自分も緑谷くんと同じ立場なら、私だって……
そうする。飛鳥はこれを見てそう思ったのであった。
個性の制御は少しずつ出来始めているが、その分、威力は落ちている。調整だけでなく、傷を負ってるからというのもあるが……勝つ為に自ら激痛に飛び込み耐えるのは、より相応な勇気と覚悟が必要だ。

その勇姿は無謀に近いが、僅かな勇気を感じ取れる。
問題なのはその起点。どうしてそこまでして緑谷は轟に食いつくのか？飛鳥と同じく轟がエンデヴァーに囚われ苦しんでるから、だから救けてあげたいからというのも理由に当てはまる。しかし緑谷から感じ取れるのはそこだけじゃなかった。
では一体何が彼を、緑谷出久を動かすのか？

「ぐっぅぅ……!!」
緑谷は握れなくなった指を、口に咥えて無理やり動かし、個性を撃つ。
（彼のようになりたい、その為には1番になるくらい強くならなくちゃ…）

君に比べたら、些細な動機かもしれない。

「お前……なんで、どうしてそこまで……」
「応えたいんだよ!!」
「!?」
「なりたいんだ……笑って、笑顔で、人を救ける憧れのカッコいい人に…僕もなりたいんだ!!」

緑谷の威迫に、轟は言葉を失っては、たじろぎ、幼い頃の自分が脳裏に浮かんだ。
緑谷は先ほど手の指を口に咥えて無理やり動かしたせいか、口元には血がべっとりと付いている。
「だから全力で皆んなやってるんだ!!」
ゴンッ!!
「っ!!」
渾身の頭突きを食らった轟は更に後ろにたじろぎよろめく。
緑谷も頭突きをして頭にダメージがあったため、よろめきながらも体制を整える。

「境遇も、決心も、何から何まで僕には計り知れたものじゃないし……とてもじゃないけど背負えるものじゃない……!!でも…」

顔を上げて冷え切った轟を見てこういった。

「皆んな本気で戦ってるのに、君だけ本気出さずに半分の力で勝って、完全否定なんてフザけるなって今は思ってるよ!!」

その言葉を聞いた轟は、忘れてた記憶が少しずつ頭の中に蘇るように浮かんできた。

『立て焦凍。こんなものではトップヒーローは愚か、忍の力を持つ敵や雑魚なチンピラにすら勝てんぞ』

異常とも思える父親の、余りにも厳しい訓練を受け、腹を抑えながらゲロを吐く轟。そこへ…

『もう…!やめて下さいあなた!まだこの子は、焦凍は五つですよ!?』

母親が庇うように前に出て、轟の背中を優しく撫でエンデヴァーにそう言った。しかし…

『もう五つだ!!お前は邪魔をするなぁ!!』

バチン!!と拳を握りしめ母親を殴る父親。轟は泣きじゃくりながらその光景を見てるしかなかった…

『良いか?焦凍よ……お前は兄さん達とは違う、これまでにない最高傑作なんだ。お前の力でオールマイトを越え、トップヒーローになれ。その為にお前をつくったんだ』

『忍の世界には半蔵と言う伝説の忍が今も存在する。ソイツには娘がいて、孫もいる。お前と同じ近い年頃だよソイツ孫は……半蔵の力を引き継いだ孫らしいが、まるでお前みたいだな。何せお前は俺の力を引き継いだ息子だからなぁ…』

「うるせぇ!!!!」

頭の中に繊細に蘇った記憶を無理やり消すように振り、氷を出す。身体が氷に蝕られ、パキパキという音と共に身体が痛く感じる。個性

の影響だ。
炎を出して調整すれば問題ないが、轟は炎を一切使わない。そう決めたから、だから氷を出せば出すほど痛くなり、記憶が蘇ってくる。
『嫌だ…僕嫌だよお母さん……お父さんみたいになりたくない……別に、良いよ……忍なんて超えなくたって…ただの御伽噺じゃん…あんなの……』
幼い頃の自分がシクシクと寂しくそう呟き、母親を抱きしめる光景。
『お母さんをいじめる人になんてなりたくない……そんなの絶対に嫌だ……』
『……でもヒーローにはなりたいんでしょ？いいのよお前は……』
ソッと優しく轟の頭に手を置く母は、優しく撫でた。

轟は動きたくとも動けれない。過去のことを少しずつ思い出し、思うように動けれないのだ。まるで轟自身の過去の記憶が邪魔するかのように…
「だから僕が勝つ!!君を越えて…!!勝つんだ!!!」
喝を入れるかのように、緑谷は渾身の一撃を叩き込む。そのことにより後方に吹き飛ばされた轟は、またもよ頭の中に記憶が蘇ってきた。
それは…
ある日の夜、轟は偶々起きてしまい、トイレに向かっていた。その時に見たのは、台所にて母親が電話で誰かと話してたのだ。
『お母さん、私もう……ダメ…耐えられない……変なの……子供達が日に日に……あの人に似てくる……特に焦凍の…あの子の左側が……時折とても醜く思えてしまう…!!』
（え？）
それを聞いた轟は思わず扉を開けた。
『私もう…育てられない……ううん、違う。育てちゃダメなの!!!もう

私が私じゃ無くなっちゃうの!!!』
轟は恐るおそる声を振り絞った。
『お母さん……?』
『!!』
お母さんが振り向くとそこには、悲しげで心配している焦凍の顔。それは、父親に似ている左側の顔だけをみつめ、エンデヴァーを思い出し…
母は目の前にあった沸騰した湯を思わず左側の目にぶっかけた……
悲劇を産んだ。

俺は……
包帯を巻いた轟は、無表情で、でも何処か悲しげな顔で父親に尋ねた。
『……お母さんは?』
『お前に危害を加えたので病院に入れた。全く、これからが忙しい時だというのに…何をやらかしてるんだあのバカ女め……』
『……』
目を大きく開きワナワナと体を震わせ、信じられないという顔で父親の背中を見つめていた。
バカ女?だと?優しくて、いつも気にかけ庇い、守ってくれたお母さんがバカ女だと??許さない…許さない……コイツだけは絶対に……そうだ。
俺は親父(コイツ)を…
『お前の…お前の所為だ!!!』
泣きじゃくりながらそう叫んだ。

久しぶりにこの記憶を見た。そうだ、俺はあの日から父親を完全否定するとそう決意したんだ。
父親を完全否定すること。その事だけを考えてた為なのか、何でヒーローになりたいのか、俺自身忘れちまって、いつしか分からなく

なっていた。
俺の心の中にある父親への憎悪は永遠に消えないものだろう。けどそれでも良い、俺はコイツを延々と完全否定する。何せコイツはヒーローなのに、大切な存在を、母を苦しめたんだから…こんなのヒーローじゃないし俺は認めない。こんなのがＮｏ．２なのかって思ってしまうくらい。
アイツはオールマイトを超えるが為に俺を作った。んで俺は受け継いだ親父の力と母さんの力でオールマイトを越える。それがクソ親父の狙い…だから俺はそんなのにはなりたくないしアイツの思い通りにはなりはしない。緑谷や飛鳥には言ったし分かってると思うが、俺はまず炎の力を封じてオールマイトと何ら関わりのある緑谷を倒す。そのことで俺は親父を完全否定できる。
飛鳥は半蔵の孫でありながら、伝説の忍の力を引き継いだ。まるで俺と似ていて同じだ。けどそんな飛鳥も緑谷と同じく半分の力だけで勝てば、確実に父親を否定できると思ったのだ。二人相手に半分の力で勝てば問題ない……奴へ反逆することが出来る。
だからあの二人を呼んで全て話したのだ…なのに…なのに……
(なのに…なのに…!!どうして!!!)
いつしか、怒りの表情に染まっていた。
どうして飛鳥に続き緑谷も、そこまで俺を本気にさせるんだ？炎を使わせようとする？
最初あの時飛鳥の言葉には少し怒りを覚えたが、アイツはあんな性格だ。まあこんなヤツだから余り気にしなくても良いかと思い、対して気に掛けてはなかった…だが、緑谷も飛鳥に続き同じことを言った。
『全力でかかって来い!!』
意味がわからない…どうしてそこまでして俺に突っかかる？お前ら二人に俺は何か変なことでもしたか？気に障るような事でもしたか？俺の家事情も分かるはずだ、これ以上俺の事情に、俺の問題にズ

ケズケと他人が割入らないでくれ……
「分からねえな……」
地面に転がり倒れた轟は、なんとか立ち上がろうとする。
「お前らもう知ってるだろ……？俺の問題を…事情を……それなのに、クソ親父を完全否定することをなんで止めようとする……？」
よろめき、フラフラと立ち上がる。
「俺は…アイツを…」
その時だった。

「君の力じゃないか!!!!」
「っ!?」

この先のことをいつの間にか忘れてしまっていた。どうして俺がヒーローになりたかったのか…ふと脳裏に浮かんできた。
『個性というものは親から子へと受け継がれていきます。しかし…本当に大事なのはその繋がりではなく、自分の血肉…自分である！と認識すること。そういう意味もあって私はこう言うのさ！』
母と一緒にあるテレビを見てた。それは…

『私が来た！ってね！』

平和の象徴オールマイト。
轟の目は今までに誰にも見せたことのない、笑顔。キラキラと目を輝かせていた。

ヒーローにはなりたいんでしょ？良いのよ、お前は…血に囚われることなんかない。
忍の力を持たなくても良い、お前はお前の力を持てばいいんだよ。
母の優しい言葉が、鮮明になり思い出して来た。

『なりたい自分になっていいんだよ』

お母さん、俺は……いつの間にか忘れてしまっていた。よりによってこんな、大切な想いを…大事なことを……

血に囚われていて、忘れてしまってた……

俺は…

ゴオッ!!!

瞬間、舞台が一瞬にして炎に包み込まれた。

『戦闘に於いて、これからこの先炎は絶対に使わねえ…』

その炎の熱は観客たちにまで…

「うおっ!?熱!?」

「アレは…」

葛城は突然のことに驚き腕で熱から守るように防ぎ、斑鳩はその炎を見て固唾を呑む。

「アツアツ!?」

「くっ…!?アレが……轟の?」

雲雀と柳生も葛城と同じく。

「……轟くん、炎を使った……」

飛鳥は冷や汗を垂らし、信じられないと言う感じではあるが、何処か嬉しくなり…

そして…その炎をみた轟の父親エンデヴァーは…

「っっ!!やっと…やっと!!やっとか!ようやく使ったな!」

激しく炎を出しては揺らいで……

舞台では。

「あっつっ!!」

炎に1番近く居た緑谷は、その炎の熱から逃れることなく暑さをそ

の身で実感する。そんな炎の中から…
「勝ちてえくせに畜生……敵に塩なんざ送りやがって……どっちがふざけてるかって話だよ……そうだ、やっと思い出した……」
その炎はやがて少しずつ止み、顔が見えてきた。身体に炎を纏い…
「俺だって…ヒーローに!!」
轟の今のその顔は、涙を流して、幼い頃オールマイトのテレビを観てる時に見せた笑顔と重なり、自分がなぜヒーローになりたいのかを思い出した。
「……すご……い!!」
凍てつく冷たい轟の氷を、炎が優しく溶かして…
「やっと己を受け入れたか焦凍おおぉぉぉぉぉぉ!!!!!」
瞬間。エンデヴァーは席に立ち上がる。
「そうだ良いぞ！此処からがお前の始まりだ!!やっと俺の力を使ったなぁ!!」
その声は会場全体に大きく響いた。
「お前は俺の血で俺を超えていき！お前は俺の野望を果たせ!!!」
「あの…人……！」
興奮する余り自我を忘れてるエンデヴァーの言葉に、それを聞いた飛鳥は睨みつける。

だが焦凍は振り向かず、むしろお前など視界に入ってないと言わんばかりに…緑谷をジッと見つめている。
『…エンデヴァーさん……来てたんだ。あの～……一度に突然のことが多すぎて実況もクソもないんだけど～～…とりあえずこれだけ言わせて？親バカなのね？親バカ……エンデヴァーさんと付き合い短いからあの人があんなキャラだとは思わなかったぜ……よく喋るのね…』
『……』

流石に今のこの状況では実況もクソもないのか、あのマイクですら引いている。相澤はほぼ無口だ。
「……なに、笑ってんだよ……」
轟は腕で涙を拭きながら、笑顔を見せる緑谷にそう言う。
「お前……イカれてるよ……こんな状況で、怪我も大分酷いのに……笑ってるなんてさ……可笑しいよお前……

もうどうなっても知らねえぞ…」

その瞬間、二人は本気を出した。特に轟は初めて…
緑谷は身体全身にワンフォーオールの力を全て溜め、轟は炎と氷を全力で出す。
舞台はほぼ氷で覆われ、緑谷は真っ直ぐ突っ込みワンフォーオールの全ての力を叩き込む。
(この一撃で!全てを決める!!)
たとえ己の身が持たなかったとしても、この戦いだけは負けられない。お互いの威迫がぶつかり合う。
「まずい!ミッドナイト!」
「これは…!」
これ以上やるのは危険だと察した二人。セメントスは個性で舞台のコンクリートを操り壁を作り、ミッドナイトは極薄タイツを腕の部分だけ破り香?らしきものを出す。

緑谷の拳が、轟の炎がコンクリの壁にぶつかり合う前に、轟はふとあることを思い出した。
『全力でかかって来い!!』
飛鳥と緑谷の二人の言葉が積み重なる。
「緑谷…」
思い出す前までは、腹立たしく、ムカついてしょうがなかった。だ

けど今は違う…
今の轟の心は…
「ありがとな」
感謝で満ち溢れていた。

二人の力がぶつかり合い…今。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンン!!!

舞台が白い煙に包み込まれ、その煙は爆発するように広がり、観客席にまで届いては吹き飛ばされそうになる。強い衝撃波と散々冷やされた冷気が瞬間的に熱っし、張した事によってこの現象が起きてる。
「なにコレェ!?」
峰田は吹き飛ばされそうになるものの、障子に足を掴まれなんとか吹き飛ばされるのは免れた。
「ふえええぇぇ〜〜!!冷たいよ〜!はっ、ハッ…ハックション!!」
「雲雀!俺の上着を着ろ!風邪を引くぞ……な、なんなら…お互い抱き合って……」
「こんな時になに言ってんの!?てか本当に寒!風邪引くってのまじで!」
雲雀は突然の寒さのあまりくしゃみをし、それを見た柳生は顔を真っ赤にし自分の着てた上着を脱いで着させては、鼻血を出して抱きしめようとする。そんなやりとりを身近で見てた耳郎は思わずツッコミを入れる。
「おっと、紅茶が溢れてしまう……」
謎の男は優雅に紅茶を飲むのをやめて、白いマントを取り出し身につける。
「凄いな…何十層もの硬いコンクリを固めたのにああも簡単に壊れて……どれだけ威力が高いんだか……」

セメントスは冷や汗を流してそう呟いた。
『なんなんアレ？なにが起きたの？ヤバくね？俺さっきの爆発みたいなの起きて思わずひっくり返っちゃっては頭打って痛いんだけど……』
『それは知らねえ…』
ひっくり返って頭を打ったマイクがそう言うと、相澤は知らんがなと言わんばかりに呆れてため息をつく。
（しかしまあ、轟の炎は俺も初めて見たな…）
相澤は静かに心の中で呟いた。

「……」
白い煙がやがて消えていき、舞台が見えてきた。その光景は…
人影がただ一つ。もう一つの影が見えない…そして場外からは足が見えた。その足は…
「……」
とうとう気を失い、壁にもたり倒れた…緑谷出久の姿であった。
「「緑谷（デク）くん！」」
応援席の飛鳥、お茶子、飯田は彼のその姿を見て思わず叫び出す。
そして舞台がやがて晴れ、見えてきたのは言うまでもない。この勝負に勝ったのは誰なのか、この舞台に立っている人物が誰なのか。それは…
「ハァ……はぁ……」
『緑谷出久場外…よって、轟焦凍！第三回戦進出決定!!!』

轟焦凍の勝利。

４５話「決勝戦開始」

戦いが終わった後、緑谷は気を失っているためハンソーロボに搬送されリカバリーガールの元へ、一方轟は以前よりも顔色は変わっており、無表情のまま舞台に背を向けその場を去る。

観客席からはドヨンとした空気が流れ、ザワザワしている。

「何だあの緑谷ってヤツ…何したかったんだ？」

「さあ？煽っといて結局負けて…勝ちたかったのか負けたかったのか…よーわからんヤツだったよな」

「まあ気迫は良かった、なんかこー、熱かった」

「でもあんだけボロボロになってりゃ無理ねーかもな」

勝った轟よりも、負けてましった緑谷の方に言葉が偏った。

それは決していい意味でもなく、また悪い意味でもないような…なんとも言えない感じだ。

無言のまま歩み続ける轟は、中に入ると…

「邪魔だ退け……とは、言わんのか？焦凍よ…」

待ってましたと言わんばかりに、そこで仁王立ちしているエンデヴァーがいた。

「やっと子供じみた駄々を捨てたな…そうだ、それで良い！お前は俺の力を使うことでやっと、俺の上位互換となったのだ!!まだ左のコントロールは危なっかしくて仕方ない点はあるがな…」

スッと手を差し伸べる。

「卒業後は俺の事務所へ来い！俺がお前に覇道を歩ませてやる!!」

そう言うが、しかし轟は…

「捨てられるわけねえだろ」

「？」

反論したことで、エンデヴァーの表情が曇る。それに対し轟も表情は曇っているが、何処か吹っ切れた感じがして、何処か悩みがあるよ

うに見える。
「そんな簡単に覆るわけねえよ、正直まだ左のことはよく分かんねえ…お前の思い通りにはなりたくねえってことだけは本望だ。ただあの時あの一瞬…

お前を忘れた」
その言葉を聞いたエンデヴァーは一瞬だけ、先ほどの微笑みが消えた。
「それが良いことなのか悪いことなのか正しいことなのか…少し考える…」
ただこれだけ言えることは、本気を出す前の轟とは、雰囲気も表情も違う。もしかしたら、これが本来の轟の姿なのかもしれない…

緑谷はリカバリーガールの出張保健所で治療を受けている。当然緑谷の側にはガリガリに細痩せたオールマイトが立っている。
リカバリーガールは相変わらず緑谷のけがをみると顔は険しくなり、目を細める。
リカバリーガールが言うには、右手の粉砕骨折、キレイに元通りとはいかないそうだ。破片が間接に残らないよう摘出してから治療をするそうだ。
「……アンタは毎回毎回無茶をやらかすね…どこの誰かさんみたいに、試験といい、入学初日といい、二日目といい、敵の襲撃といい、蛇女子学園といい……そして現在も。どんだけ無茶をやらかせば気がすむのやら…やり過ぎだよコレは……」
説教に近いようにそう言うリカバリーガールはオールマイトに視線を移す。
「憧れがこうまで身を滅ぼす子を、発破かけて焚き付けて…嫌だよあたしゃあ、見てられない。やり過ぎだよアンタもこの子も、これを褒めちゃいけないよ?」
「誠に申し訳ありません……リカバリーガール…」
「謝るのならこの子に謝んな!師匠が師匠なら弟子も弟子かね……」

リカバリーガールはため息をつくと、オールマイトは申し訳ない顔で頭を伏せる。そんなやりとりをしてる時だった。
「緑谷（デク）くん!!!」
扉が開き現れたのは、飛鳥を始め、お茶子、飯田、峰田、蛙吹が出てきた。彼女、彼らの登場に緑谷は目を開き見渡し、リカバリーガールは緑谷の治療の準備、オールマイトに至っては思わず吐血してしまい驚いている。この姿がオールマイトであることは誰にもバラしてはいけないため、内心ドキドキしてるのだろうか、冷や汗が垂れている。
「…ん？」
部屋にやってきた飛鳥は、そんなガリガリのオールマイトを見て首をかしげた。
（あの人…見たことないなぁ、他のクラスの先生かな？）
当然その人がオールマイトとは知らない飛鳥は、首をかしげてしまうのも無理はないだろう…
そこで緑谷は飯田を見つめる。
「み、皆んな…試合は観なくても良いの…？特に飯田くんなんかは次試合だし…」
「ああ、その点については問題ない！先ほど緑谷くんと轟くんとの戦いで舞台が崩壊してしまったらしく、今は審判のセメントスが修正している。時間が掛かるそうだ」
「あ、ああ…そうなんだ…なら、良かったね……」
それを聞いた緑谷はホッとした様子で安堵の息をつく。タダでさえ自分の体がボロボロなのに他人のことを心配する緑谷に飛鳥は声をかける。
「もう緑谷くん…自分こんなに酷い傷を負ってボロボロなのに、他人のことばっか心配して……まあ別に悪いことじゃないし、逆にそこが緑谷くんの良いところだけど、今回は自分の身を心配してないとダメだよ？」
「そうだよー・まずは自分の体を心配して、治すこと考えなくちゃ……」
飛鳥に続きお茶子もそう言う。

「あ、あはは……そりゃそうだけど…けど飯田くん、お兄さん来てるし……僕なんかの為に構ってたら…って思って……」
二人の言葉に思わず苦笑する緑谷。
「でも、緑谷スゲェ怖かったぜ？あんだけの気迫あって、結果こんなにもボロボロだし、プロも怖がって欲しくなくなるぜ…？」
「峰田ちゃん、ここに来て塩塗るのは良くないわ、ここは最初心配するところが普通だと思うんだけど」
「言って早々、長い舌でオイラを突く蛙吹もどうかと思うんだが…」
塩塗りスタイルの峰田に突っ込む蛙吹。
「心配するのは良いけど邪魔だよ！ホラあっちに行くさね！これから手術するんだから！」
「「「手術!!??」」」
「ケロ…」
突然手術を始めると言い、杖でみんなを払いのけるようにするリカバリーガールに、四人は驚き蛙吹に至っては呆然としている。
「あ、あの～…リカバリーガールさん？の個性って治療系ですよね？それなのに手術しなきゃいけないんですか？」
「当たり前さね！ホラ！シッシッ！」
「せ、成功するんですよね!?学校で手術とは！いやしかし、雄英は常にピンチを乗り越えて行くもの…何が起こるかわからない、その為重傷を負った生徒を治療する為に手術を…？さすがは最高峰だ！」
「あんたも変な感心しないでさっさと出てってくれ！手術するんだから！あんたらは邪魔なんだよ！」
心配する飛鳥と飯田に、リカバリーガールは眉をひそめ、苛立ち怒り混じった声でなんとか皆んなを追い出す。
「……」
バタンと扉が勢いよく閉まり、鍵を掛けた。扉からバンバンと叩く音が部屋に響くが、リカバリーガールは何のお構いもなしに準備をする。
「……オール…マイト……申し訳ありません…」

「？」
皆んなが去ったことにホッと一息つくオールマイトに、緑谷は申し訳なさそうな顔で謝罪する。
「……オールマイトがいってたあ（君が来たということを世に知らしめる）の言葉、果たすこと出来ませんでした……貴方にちから（個性）を貰って、ここまで来たのに……なのに僕は……轟くんの戦いであんなこと言ってて、負けてしまって……」
「……君は彼に何かもたらそうとしてたね…」
「……はい」
弱々しく、涙声でそう言うと、オールマイトはジッと緑谷を見つめる。
「あの時の轟くん……とても悲しいようで可哀想で……いてもたってもいられなくて、余計なお世話を考えちゃって……でもそれ以上に僕はただ……悔しかった……」
悔しい表情を浮かべ、その思いを声に出すとより涙声が鮮明になってきたように思える。そんな緑谷に対しオールマイトは口を開く。
「……確かに残念な結果さ。他の皆んなから馬鹿なことをしたと言われても言い返せないし、仕方のないことだ。それにどんな思いだろうと、負けたことには変わらないだろうね」
オールマイトがそう言うと、緑谷の目から涙が浮かんだ。
「けどな、勝とうと負けようと…余計なお世話ってのは…ヒーローの本質でもある」
「……っっ」
そしてその一筋の涙が頬に伝わる。
「結果はどうであれ、君の行動は決して無駄ではないさ……

だって個性を得て尚、君の行動は人を動かしたのだから」
その言葉を聞いた緑谷は、雄英の入試を思い出した。
そうだ、あの時巨大ロボットが襲いかかって来た時、倒れてたお茶子を助けるために自分から飛び込んで殴り倒した。その後の結果、お茶子が直談判でPを分けて欲しいと言って来たのだ。その時オールマイトに言われた言葉が積み重なった。

だがその言葉の始まりはそこではなく、初めてオールマイトに会ってからのことだった。爆豪がヘドロ敵に捕まった時、オールマイトはすでに限界を超え、助ける身体ではなかった。多くのプロヒーロー達も手を焼いており、助けることが出来なかった。他の人たちも、ヒーローが、その内ヒーローが必ず助けてくれる。そう思い誰も助けようとしなかった。

でもそんななか、無個性で出来損ないと馬鹿にされ続けてた一人の少年、緑谷は駆けつけ助けようとしたのだ。その時、緑谷の行動が、言葉が、想いがオールマイト(人)を動かしたのだ。

今や忘れもしない、オールマイトの出会い、そして君はヒーローになれると背中を押してくれたあの日のことは。

そして今回も、緑谷の行動が轟の心を動かした。

動かしたからこそ轟も本気を出した。炎は絶対使わないと言ってたが、使わせることが出来た。

「オール……マイト……」

色んなことを思い出し、いつの間にか涙がポロポロと流れてきた。

そんなオールマイトは優しい瞳を向けてこう言った。

「まず、その泣き虫…治さないとな…」

緑谷出久　ベスト8　敗退

あれから数十分後、リカバリーガールの治療を受けた緑谷は、完全回復とはいかないが、歩けるくらいの治癒は進めることは出来たそうだ。無理もない、ただでさえ始める前から指を怪我してたのに、短期間であれ程の重傷を負ったのだ。治療を受けるにしても体力が要る。轟との戦いで体力が少なかったのに、治療を受け、歩けるだけでも充

分凄い。やり過ぎると逆に死んでしまうのは避けたいが…
今では緑谷の腕や体は包帯を巻いている。頬には湿布を貼ったりと、見るだけで痛々しさが伝わってくる。
緑谷は疲れ切った顔でお礼を言うと、リカバリーガールはそんな痛々しいボロボロな体をした緑谷にこう言った。
「今後こう言った怪我は治療しない」
と…そう断言した。
その言葉に呆然と目を開く緑谷は、一瞬だけ理解が遅れたものの、その言葉を理解した。つまり、こう言ったような例の怪我をするなら、二度と治療は受けない。だからきちんと調整できるようにしろと言うことだろう。確かに治してもらえるなんて思っていれば、解決方法は見つかるかもしれない。しかし見つけるにもどうすれば良いかわからない。
一つの言葉がここまで重く、より考えさせられるのは考えてもいなかった。
「あたしゃも医者だ、怪我をした人は治療するさね。けど、アンタの場合はやり過ぎる…ただでさえ力の調整が出来ず、体力もないのに……このままその調子で続ければ間違いなく体力は尽き、回復が追いつかなくなり最悪本当に死んでしまうよ。そうならない為にも、破滅的な糸口ではなく、自分の身を安全に考えれるような、ちゃんとした解決の糸口を考えなさいな。何より自分の体は自分で大切に、守らなくちゃいけないよ」
面倒見の良い老人とも言えるリカバリーガールは、半分呆れて半分心配した顔で、身体中を見つめる。
リカバリーガールの言葉には一理ある。緑谷は数秒黙った後、「…はい」と物静かな声でそう言った。それも残念そうで、どこか悲しく罪悪感のある声で。
無事治療を終えた緑谷は、フラフラとよろめきながらも応援席で皆の応援及び観戦しようと、オールマイトと一緒に戻っている。
緑谷は歩きながら、ふとあることをオールマイトに問う。

「あの……オールマイト…」
「ん？どした緑谷少年？」
突然の問いに少し眉を動かす、緑谷の声は少し暗く、落ち込んでいるようで罪悪感を感じている。
落ち込んでいるのは轟との戦いで負けてしまったからとは思うが、それとは少し違う。
「オールマイトは言ってましたよね……雄英の先生になったのは個性の、次の後継者を探す為だって…でもそれは……僕に会う前からそう決めてたんですよね？」
「ん～…そうだね、君に会う前からずっと考えてたね。それはそうだが急に何故そんなことを？」
「……今回の体育祭を通して、一人一人の皆んなが、全力を出して、本気で挑んで…譲れない強い思いがあるのを肌身で感じました……」
「……」
そこまで言うと、オールマイトは全てを理解したのか、無言になる。
「それで僕…思ったことがあるんですけど……オールマイト……僕は…」
「後継になるべき人間ではないって？」
「……はい…それで……もしかしたら、他にも後継するべき人間が居たんじゃないかって…思って……」
「……成る程ね……」
「……」
言葉を出すにつれて、涙が浮かんできては涙声になってくる。
半分は後継を自分に選んでしまって本当に良かったのか？僕なんかより違う人を選ぶべきだったという背負うに重過ぎると感じる罪悪感。もう半分はそれを聞いて怒られてしまうという気持ち。
実際本音を言えば選んでくれるのは勿論嬉しい。何しろ無個性だった自分は力を受け継ぎ、こうして憧れのヒーローを目指して頑張れるのだから。しかし今はどうだろう？リカバリーガールの言う通り、短期間でこれだけ酷使し、重傷を負い、力の調整は出来ず、更には雄英体育祭、年に一回計三回の行事。全国のヒーロー達が観に来る

ビッグイベント。そのなかでオールマイトが言った『君が来たと言うことを世間に知らしめてほしい』という強い想いを、成すことは出来なかった。
　折角オールマイトに見初めて貰い、これだけの事してもらったのに、結果を返すことが出来ないなんて…
　そんな罪悪感に囚われてる緑谷に、オールマイトは口を開く。
「うん、確かに緑谷少年の言う通り、ここは雄英高校なだけあってヒーローの卵たちばかりだ、更には忍学生も来る始末だし、今年は色々凄いことが起きてると思うよ。前にも言った通りワンフォーオールは力の結晶。個性あるもの…そうだね、例えば轟少年が引き継げば、半冷半熱の上に超パワーを持ったスーパーヒーローとなるだろう。それだけじゃない、君が無個性だったように、個性がない分忍である飛鳥くんたちだってそうだ。半蔵の孫の飛鳥くんなんかワンフォーオールの力を持ってすれば、伝説の忍を超えヒーローそのものを凌駕する最強忍者になるだろうしね。まあでも忍学生は世間にバラしちゃいけないからこの際それはあり得ないけど、少なからず緑谷少年よりってのは、悲しいことに否定できないかな」
「じ、じゃあ……！」
「けどな緑谷少年」
　緑谷の言葉が遮り次に出たオールマイトの言葉に、緑谷の罪悪感は吹き飛ばされる。
「私も無個性だったんだぜ」
「……え？」
　後ろを振り向き、先ほど悔やんでた表情はいつの間にかすぐに消えていた。そんなことを御構い無しにオールマイトは話を続ける。
「君ほどの世代じゃなかったけど、珍しい部類だったよ。師匠（マスター）は個性持ちだったが、それでも私を信じ育ててくれた。そこからかな…半蔵くんと小百合さんに会い、そして彼女に出会ったのは…」
「そん…な！そんな話一度も！」

「ああ言ってないよ、だって聞かれなかったからね。聞かれると思ってたのに!!」
　オールマイトが無個性だという真実を知った緑谷は、罪悪感こそは吹き飛ばされたものの、逆に信じられず驚きを隠せないでいる。
「オールマイトも無個性だった…？」
「うん、最初はかつての自分と積み重ねたよ。君の言葉に過去の自分を思い出したこともあった…君は私の想像を何度も超えてきた。他の皆んなや私でもない、君にしか導き出せないものがあると、私は思っている。だから後継が相応しいとかどうとか難しいことは深く考えなくても良いんだ」
「……すみません……！」
　緑谷は改めて自分を選んでくれたことに感謝し、目を瞑り頭を下げた。そんないつもの緑谷に戻ったことにオールマイトはホッとした。

　あれからオールマイトと話を終えた緑谷は、応援席に戻ってきた。戻ってきたことに気づいたお茶子は、「あっ、デクくん戻ってきた！」と歓喜な笑顔で手を振る。そんな麗らかなお茶子に緑谷は思わず頬が緩む。
　戻ってきたことに気づいた一部の人たちは心配混じった声で駆け寄ってくる。
「緑谷くん大丈夫だった？」
「あ、飛鳥さん…うん！体力的な面があって全回復とはいかなかったけど……歩けるくらいには治癒してもらったよ…」
　駆けつけ包帯が巻かれてる体を心配そうに見つめる飛鳥に、緑谷は若干顔が赤くなりつい目をそらす。
「ったく～…緑谷のヤツ幾ら相手がクラス最強の一、二位を争う轟だからって気張りすぎるぜ！まあその所為で多分プロヒーロー達からはスカウトはまずないかもな」
「それを言う峰田ちゃんもね、ケロ。そんな性格だから誰にも人気がないのよ、勿論人気投票で順位が落ちたのもその所為だと思うわ」
「うるせぇ！それを言うんじゃねえ!!あと何でオメェが知ってんだ！

順位(其処)に触れるんじゃねえよおおおおぉぉぉぉ!!」
最初は揶揄ってた峰田だったが、蛙吹の発言により逆鱗に触れてしまったせいか、憤怒と共に涙が溢れでてくる。うん、煩い。
「アレ?そう言えば飯田くんは?いないけど…」
いつものメンバーに、飯田がいないことを知った緑谷は、周りをキョロキョロするが…
「えっと飯田くんは……いま轟くんと…」
『おおぉーーーっとぉ?!飯田行動不能!氷で相手の動きを封じこみ炎は一切使わなかったあぁぁ!!』
「!?」
マイクの実況に驚いた緑谷は舞台の方に目をやると、なんとそこには手で飯田の腕を掴み凍り付けにされてる光景だ。勿論、飯田の脚のエンジンマフラーまでもが繊細に凍り付けにされてる。
悔しい顔で目を瞑る飯田、一方まだ本気を出して良いのかどうか分からず、迷いが生じてる目で左手をジッと見つめる轟。
ここに来るまでに勝負はすでに始まってたのだ。
「い、飯田くん…」
ベスト4でここまで上り詰めたのも充分すごい。飯田の個性も充分強い故にスピードに特化した素早い個性だ。目に終えないスピードで勝負を決めたかったのだろう。しかしクラスの一、二位を争う轟とは相手が悪かったようだ。
お茶子の話によると、最初の方絶好調だったが、轟はワザと攻撃をくらいエンジンマフラーを凍らせたのだ。
轟自身警戒こそはしてたが、目で追いつけることができず一か八かの思いで凍り付けにすることが出来たそうだ。
勝負は一瞬で決まってしまったが、轟は間一髪だったそうだ。
「あ〜…惜しかったなぁ天哉のやつ……」
飯田の兄インゲニウムは、弟が負けてしまったことに悔しいと思う気持ちはあるが…
「……まあ、けどここまで来るなんて…雄英に入ってから随分と成長

したんだな…スゲェよ天哉」
弟が立派に成長したことを見る事ができ、嬉しいと思う気持ちもあった。

時間は遡り、飯田は渋々とした様子で帰ってきた。当然その隣には迷いのある轟も…
「ふ、二人ともお疲れ！」
「！緑谷くん…！」
「……」
緑谷は吹っ切れない二人に声を掛けるが、飯田は若干反応し、轟は無言のままこちらに振り向く事なく無反応だ。今は緑谷とは話す気分ではないのか、そっぽを向き元の席に戻る。緑谷はそんな轟の背中に視線を送らせるが、直ぐに飯田に視線を戻した。
「ぜ、全部は観たわけじゃないけど…麗日さんから聞いたよ。惜しかったね…」
「…ああ」
やはり負けてしまった飯田は落ち込んでいる。当然だ、負けてしまったら落ち込むのは誰だってそうだ。
その気持ちは緑谷だって理解している。自分も譲れない負けられない戦いで負けてしまった。だから同じ敗者だからこそ、せめて彼の慰めになるような言葉を一声かけたいのだ。
「い、飯田くん…あの……」
「何も言わなくても良いさ緑谷君」
「!?」
しかし飯田は落ち込んでたかと思いきや、険しい真面目な顔で緑谷の顔に視線を送る。
「確かに負けてしまったのは辛いし悔しいし、正直兄にはもっとカッコいいところを見せたかった……けどこのままずっと落ち込んでても仕方ないさ。一度の敗北でこのまま前を向く事なく立ち上がらな

いのなら、それこそカッコ悪いからな。兄にはカッコいい所は見せれなかったが、だからと言ってカッコ悪い所を見せる訳にはいかないからな！」
「飯田くん…！」
いつもの前向きな飯田に戻った緑谷は、ホッと一息つく。
それでこそ流石は我らの委員長だ。
「飯田さん…流石ですね」
それを遠くで見てた斑鳩もまた同じく…
飯田の兄、インゲニウムと話してから彼女は気持ちが楽になった。問題は解決したわけではないがそれでも気持ちが楽になったのは自分でも嬉しい。
相談に乗ってくれたインゲニウムには感謝している。だからこそ、そんな優しい兄を持ってる弟の飯田が羨ましくもあり、感謝しているのだ。
そんな斑鳩は負けてしまった飯田に慰めの言葉をかけようと、力になってあげようとしたが、それは要らなかったそうだ。そんな前向きになれる飯田に斑鳩はつい微笑んでしまう。
そんな飯田は思い出したかのような目で緑谷に問う。
「それはそうと緑谷くん、治療の方は…」
「あっ！うん…！僕は歩けるくらいなら全然！」
「そうか…！」
なんとか命に別状はないと分かった飯田は、内心ホッとしたのか安心した。
「あ、そうだ飯田くん。次の戦いは一体…切島くんとかっちゃんは？」
「それならもう終わったぞ。結果は爆豪くんの勝ちだ。切島くんの隙を狙って爆豪は一気に爆撃し勝負を決めたそうだ」
「さ、流石はかっちゃん…」
今この場で最も強くなろうとしてるのは他でもない…頂点を目指す男、爆豪勝己だ。
「と、なると…次の戦いは…！」
『始まるぜ！次の戦いは、同じくヒーロー科でありながらＡ組同士の

争い！本当こういうの多いな!!流石だぜA組ぃ！』
多くの観客が一斉にしてA組と叫んでいる。敵の襲撃を乗り越えただけあってこうも違う。
舞台に現れたのは常闇と爆豪。常闇は芦戸との勝負に勝ったそうだ。
『漆黒を纏いし物言わぬ冷静な紳士の男！ヒーロー科、常闇踏影!!VS　やっぱ君強くて迫力あるよ!!人気も爆発的にスゲェ！ヒーロー科、爆豪勝己!!』
爆豪もお茶子と戦う時と同じくヤケに冷静だ。同じくプレゼント・マイク曰く漆黒を纏いし物言わぬ冷静な紳士の男、常闇踏影も神経を研ぎ澄ましてるのか、冷静さを保ち、無言のまま爆豪を見つめている。
「な、なんか静かだねあの二人…」
「なんでしょう…ただならぬ気配が…開始の瞬間に一気に叩き込むとかですかね…」
「斑鳩、それは流石に…いや、これはありえるな。爆豪からの性格からしても」
雲雀、斑鳩、葛城は二人を目にして呟き始める。

そして…スタートと合図した途端。二人は一瞬で間合いを詰め一気に叩き込む。
ボオオオオオオオオオオオオオオオン!!
強烈な爆破の一撃。爆豪の爆破と常闇の黒影がぶつかり合った為、黒煙が巻き起こる。
「うっゼェなああぁぁ!!ソレ!!」
「…修羅め！」
お互い睨み合う。
しかし爆豪は常闇の黒影が邪魔で仕方ないのか、爆破ラッシュで叩き込んでいる。常闇は防戦一辺倒、反撃をしない。
『おおーっとぉ!?ここで爆豪まさかのラッシュだ！しかし無敵に近い個性で勝ち上がってきた常闇は、懐に入らせない！何故だ常闇いつものように攻撃しねえんだ!?』

それには理由があった、騎馬戦で緑谷たちに話した通り、常闇の個性は暗ければ暗いほど凶暴になり強くなる。しかし光の場合はその逆になる。つまり上鳴との相性が悪いように、爆破の個性を持つ爆豪とは相性が悪いのだ。反撃したくとも反撃することが出来ない。そのためチャンスが来るまで守ることを専念している。

「爆発の光で攻撃に転じられへん…相性最悪…」

「確かにそうだけど、でもかっちゃんはその事を知らない…気付かなければ転機はあるよ！でも常闇くんの黒影の体力のこと考えるの難しいけどね…」

「うん…ていうか普通に見るんだねデクくん。ケガ酷いのに…」

真っ直ぐ二人の実戦を観てる緑谷に、お茶子はつい緑谷のケガをみて心配してしまう。

「まずいな…不覚」

（読みが甘かったか…黒影の体力（ヤミ）を補充する暇がない！体力が尽きれば終わってしまう……何としても隙を狙わなければ…！）

表情こそはなんとか冷静さを保ってはいるが、内心は焦っている。黒影なんかは涙を流して今じゃ嫌がっている。

瞬間爆豪は一気に爆破でもう一度間合いを詰める。

間合いを詰めた爆豪はそのまま黒影に爆破を食らわせた。

「今だ黒影！掴め！」

しかし爆豪は片手で爆破を使い飛び越え一気に常闇の背後を取る。

「!?」

後ろを取られた常闇はすぐさま黒影を使って背後の爆豪を捕まえようとする。が…爆豪は両手を向けて…

「閃光弾（スタングレネード）!!」

眩い閃光を出した。それも決して爆発的な破壊的攻撃ではなく…

しかしそれもほんの一瞬。爆豪はその後直ぐに爆破攻撃を繰り出した。

『さっきから光やら煙幕やらで分かんねえから実況のしようがねえな！てか今の状況どーなってんの!?常闇は爆豪に背中を取られたのは

知ってるが…』
　そして煙幕が晴れると、なんとその光景は…地面に背中をつけてる常闇の顔を掴み、不敵な笑みを浮かべる爆豪の姿であった。しかも常闇に当たらないよう掌を何発か爆破させ黒影を近づけさせないように…
「…まさか俺の弱点を知ってたとはな…いつからだ？」
「数撃って暴いたんだバァカがぁ…！可笑しいと思ったんだよ！無敵に近い個性を持ってんなら、俺の攻撃だって効かねえはず…けど手応えはあったし、蛇女に攻めてきた時、炎出す脳筋野郎と戦う際お前は炎に警戒してたうえにヤケに苦手意識を持ってたからな…」
「なるほど…あの時から疑問に思ってたのか…そして数打ちした今、俺の弱点がバレたということか…なんたる不覚だ…」
「まあ同情するがな…降参するなら今だぜ？」
　問い詰める爆豪、勝算のない常闇は、目を瞑り悔しい気持ちを抑え…
「まいった…」
　降参した。
『常闇くん降参！よって爆豪くんの勝利！よって決勝は轟対爆豪に決定!!』
「常闇くん悔しいなぁ…」
　常闇が負けたことに悔しがるお茶子。これを観てた多くの観客たちも二人に食いつき、常闇の個性が決して無敵ではないという事を知った。
「しっかり観てリベンジだな！」
「うん、爆豪くん戦うたびにセンスが光るよね。焔ちゃんの技といい、自分の新技といい…この場でポンポン出してきてるし…」
　飯田は次のチャンスに生かすために相手の試合を観て来年の体育祭で挑戦するのだろう。いや、他にも戦う場面はあるかもしれないが…
　飛鳥に至っては爆豪の才能に内心畏れを感じている。

この場だからこそ爆豪は…いや、相手に勝つためにこそ色んな技を出してきてるのかもしれない。今の所爆豪が誰よりも技を持っていると言っても過言ではない。
「あの二人との戦い…どうなるんだろ…」

そしてあれから時間は経ち…
『さぁいよいよラストだ!!雄英一年の頂点がこの戦いで決まる!!』
マイクも最後は盛り上がるのか、いつに増してテンションが上がっている。横にいる相澤はずっと喋ってない。まあ無駄なことはしたくない主義だから仕方ないが…
「始まるよ…!」
「何方が勝ってもお互い可笑しくないくらいだからな…」
お茶子と飯田、いいや応援席にいる皆は固唾を飲んでいる。
「ねえ、緑谷くん…緑谷くんはどっちが勝つと思う?」
ここで突然飛鳥が緑谷に問いかけて来た。緑谷は見向きはしないが答える。
「ん~…飯田くんの言う通りどっちが勝っても可笑しくないけど……でもお互いクラスのトップを争う、どっちが勝つかは分からない…実力は互角だからね…」
「そっかぁ~……けど何か心配なんだよねあの二人……」
飛鳥は不安そうな表情を浮かべて二人を見つめる。
そんな二人は舞台の上で物静かに睨み合っている。
いいや、爆豪の場合は不敵な笑みを浮かべてはいるが、轟は相変わらず無表情だ。氷のような、冷たい目線に何処か迷いのある目。睨みつけていると言うより、ただ見つめてるだけなのかもしれない。
そんな物静かな時間も束の間、直ぐに奮闘した舞台となるだろう。

『もう此処まで来て紹介なんざ要らねえよな！つう訳で…
決勝戦！轟　対　爆豪!!今、スタート!!』
決勝戦　開始。

４６話「雄英体育祭終了」

轟と爆豪の決勝戦が始まる数分前では、轟は控え室で、ただ何処か悲しく迷いが見えるその目でジッと自分の左手を見つめていた。この力があったせいなのか、引き継いでしまったこの力を持ってた時は、ずっとちちおやを否定することしか考えたことがなく、その考えで生きてきて、今までずっとそうしてきた。

自分は父親を否定する、ただそれだけだった。

だがそんな自分の苦しんでいた思いを、壊してくれるかのように、緑谷は全力で必死で抗いこういった。

『君の力じゃないか!!』

その言葉を思い出すだけで心が和らぎ、優しさを感じる。たった一つの彼の行動が、想いが、人の心を変えたのだ。

だからあの時は一瞬、父親のことなど忘れて、本当の自分の強さを出しぶつかった。

けどそれが良いことなのかと言ったら頷けることではない。

自分がこの左の力を使えば、完全に父親の思い通りになる…それは嫌だ。

そう、それは嫌なんだが…記憶の中の母はこう言っていた。

なりたい自分になって良いんだよ。

お前はお前の力を持てば良いんだよ。

母の優しい言葉を思い出し、自分は本気で戦うべきなのかもしれないと考えてしまう。だがどっちが本当の答えで、どれを選ぶべきかが分からない。自分が自分でなくなってしまうかのように…

では一体どうすれば良いのか…？考えるだけより難しくなり分からなくなってくる。

「お母さん……俺は…どうすれば……」

いつの間にか思っていたことが声に出ていた。

何より、お母さんは許してくれるだろうか？この醜い左目も持ち、

本気を出してしまったことを、お母さんは許してくれるのか？それすら不安だった。
今まで父親を完全否定していたから、他のことは考えられなかった。こんなこと考えられるのは初めてだった。
そんな時だった。
トガアァン!!
「？」
勢いよく扉が開き、振り返ってみてみるとそこには…
「ん？あァ？」
厳つい顔で、扉を蹴り開けた爆豪勝己であった。
しかしここの控え室には轟が入っている。爆豪がここに居るのは可笑しいハズだ。
「あぁ!?なんでお前がここに…？控え室はー……あっ！ここ俺の控え室じゃねえのかクソが!!」
「……」
自分がここの部屋でなく、間違えたことに気付くと軽く舌打ちをする。そんな爆豪に轟は無表情のまま数秒間黙って見つめると、また左手の方に目を移す。
その冷静、いや何の反応もない彼に対し爆豪は軽く苛立ちを覚える。
「おいおい……部屋間違えたの俺だ……それは悪かったよ……けどなぁ、決勝相手に黙りこんで……んでもって何だその態度はァ…？オイオイお前、どこ見てんだよ半分野郎があァ!!!」
机を思いっきり殴り爆破させた。壊れてはないが焦げ痕が付いてしまった。それでも轟は反応なしに、見向きもせずに左手を見つめる。
「どこ見てんだよ……か」
「ああ!?」
爆豪の言葉を思い出したのか、ポツリと呟いた。
「そういえば、さっきの戦いで緑谷にも言われたな……アイツさ、自分があんなにボロボロになってるのに、事情に割り込んで来て、人の抱

えてるもんぶっ壊して来やがった…
お前、アイツとは幼馴染なんだってな、昔からああ言う無茶やるヤツだったのか？」
「……っ」
幼馴染、緑谷、それを聞いた途端、爆豪の眉間のシワがよせ、より苛立ちを覚えた。その脳裏に浮かぶその光景は、幼い頃の自分だった。
遊んでた時にたまたま川に落っこちてしまったことがあった。
皆んなは心配そうにしてたが、数秒後に直ぐなんとかなる。と思い、心配なんてしてなかった。しかしそれは、ある一人を除いて。

『大丈夫？たてる？頭打ってたら大変だよ！』

なんともなかった自分に心配の眼差しを向ける、石っころだと見下し続けてきた緑谷に手を差し伸べられた。
そのことを思い出すだけでよりイライラが溜まり、爆豪はとうとう机を蹴飛ばした。
ドガアアアアン!!
「そんなもん…どうでも良いだろうがァ!!」
蹴飛ばされたことに、無口ではあるが軽く戸惑いを見せる轟。
「あんなクソナードの話を俺にするんじゃねえ！アイツを思い出すだけで虫酸が走るんだよ……」
ギリッと歯ぎしりを立て、忌々しく轟を睨みつける。
「何でも良い、テメェが左のことや家の事情抱えてたってなぁ、こっちはどうでも良いんだ…本気で来やがれ!!俺がお前のそれを全部、上からねじ伏せてやるからよ……!!」
「！」
吐き捨てるように背中を向けてそう言うと、控え室の部屋を出て行った…

んで現在。
『さぁいよいよラスト！勝っても負けても恨みっこなしの勝負だ!!雄英一年の頂点が今この戦いで決まる!!決勝戦、爆豪勝己ＶＳ轟焦凍
今ＳＴＡＲＴ!!』
マイクの合図が開始した途端、舞台は氷漬けにされた。瀬呂ほどではないが、巨大な氷結が爆豪に襲いかかる。
『おおっとやっぱり来ました！轟、爆豪の近接戦を警戒したのか氷結技を繰り出したゾ！緑谷のような衝撃波は出ないため、爆豪もろに食らったァ!!これもう優勝者決定じゃね!?』
マイクがそう言うと、巨大な氷の中から爆音と声が響き渡る。
「どいつもこいつも緑谷緑谷って……んのクソがあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
ズバコオオオオン!!!!
なんと爆豪は爆破で氷結を防ぎ、モグラのように掘り進めたのだ。そのためか爆豪にはダメージどころか何処も氷漬けにされてるところが見当たらない。
轟も想定内だったのか、直ぐに行動に入る。この氷結は一瞬で決めるものではなく、次に警戒しての攻撃だ。
「お前…本気出せっつったろ……！」
忌々しく睨みつける爆豪。轟が氷結を繰り出そうとするも、爆豪の方が早いのか、爆破を利用し空中に飛び、轟の方に通り越すと、左の髪を鷲掴みにして思いっきり投げ飛ばす。
「んの……ナメ…っっってんのかバァァアカァ!!!!」
投げると同時に爆破を使ったため一気に場外にまで飛ばされそうになる。しかし轟もやられてばかりはいないのか、右手で後ろに氷の壁を作り出し、場外はなんとか免れることが出来た。それと同時に右足で前方爆豪に向けて氷結を繰り出す。この威力だと爆破で空中に浮くにも、飛びすぎては直ぐ場外…また轟の近くにいれば、隙が出来て一気に氷漬けにされてしまう。

「んのクソ野郎…!!」
炎を出さず、氷のみを使う轟に爆豪は益々苛立ちを覚える。
「爆指斬!!」
爆豪は両手で3本の指、計6本の指、六爪で氷を斬るかのように指のみを爆破させ、氷結を一気に破壊する。その氷は瓦礫が崩れるかのように壊れていき、その目の前には轟が見えた。

「かっちゃん、もう既に技名まで決めてたんだ…」
「うわぁ…爆豪くんやっぱり強い……」
応援席のなか、緑谷とお茶子は二人の戦いを見守るように真剣に見つめている。確かに爆豪は強い、だが轟が強いと言うのも事実なのだが…今の現状では爆豪がほぼ押している。
「これって、爆豪くんが勝つのかな?」
「今のところは爆豪が押しているが、轟もやり手だ。炎を使えばどうなるか分からん……あいつ、緑谷戦以降どこか調子が崩れている。何があったか知らないが、少なくとも迷いが見える」
「迷い?」
轟の戦いの何処に迷いがあるのか分からない雲雀は、首を傾げて柳生を見つめる。
「炎を出した時からだ…轟のヤツ、一体何があったんだ?」
柳生はそう呟くと、雲雀から再び轟へと目線を移す。
(まあ轟の方はさておき、ムカつくことに爆豪のヤツは順調なのか?苛立っているようには見えるが、戦う度にセンスが光るな……戦闘訓練の時から大分強くなってるように見える、色々あったからなのか成長しているな…)
轟だけでなく爆豪の変化にも気づいた柳生は、心の中で呟く。
「轟くん……」
ソッと小声で呟く飛鳥は、轟の迷い見える顔を見つめている。
「まさか…まだあの事を、気にしてるのかな…?」
父親への憎しみの思い。炎を出した時からもう乗り越えたと思った。けど今の現状を見てまだ乗り越えてないことに気付く。

本気を出さない轟に、爆豪は歯ぎしりを立て、爆破を何度も叩き込む。轟はそれを防ぐかのように何度も氷の壁を張り巡らせる。
「いい加減に……本気を出しやがれええええええ!!」
炎を使わないどころか、攻めに来ない轟に爆豪はますます苛立っていく。埒があかないと悟った爆豪は両手の掌を向け高威力の爆破撃を食らわす。
「っ!」
何層もの氷の壁を張った氷壁を、一気に全て壊し、隙が出来たところを爆豪は見逃すことなく、すかさず間合いを詰め左側を殴るように攻める。轟はなんとか避けることができ、肘を凍らせた。そのことに冷や汗を垂らす爆豪。
(左を使う気配が全くねえ……こいつ、俺じゃあ力不足だってのか…?)
そう思ってしまうのも無理はない、緑谷には左を使っても、爆豪には使ってこない。それはつまり、爆豪にとっては『緑谷は強いから使った、お前はそうでもない』、そう解釈することも出来るだろう。
「テメェ…人を虚仮にすんのも大概にしやがれ!!!俺が取るのは完膚なきまでの一位なんだよ!!」
大声で荒げる爆豪に、轟は軽くたじろぐ。その声は舞台のみならず観客側の全員にまで響き渡る声だった。
「舐めプのクソカスにとっても取れねえんだよ!!デクや彼奴(飛鳥)らよりも上に登らなきゃ意味ねえんだよ!!」
爆豪の言葉から緑谷の名前が出たことに、緑谷は僅かながらに反応する。そして飛鳥の名前が出たのは、なぜ彼女を超えたいのか?それは伝説の忍の孫だと知ったからだ。
轟との会話を聞いてた爆豪は、あの時初めて飛鳥が半蔵の孫だと知った。今まで知らなかった爆豪にとっては、彼女の存在は大きくなった。
デクと同じ無個性みたいなヤツなのに、何にも感じねえのに…俺はアイツがその伝説の忍だの何だのとスゲェヤツの孫だってのを気付

くことが出来なかった。
ヒーローとは、常にピンチを壊していくもの。
轟は忍の力をも越えるよう訓練された。なら、トップを狙うならヒーローも敵も忍も関係なく、上から捩じ伏せ一位を取れば良い。だから蛇女の時も負けられなかった。寧ろ全員相手をして勝ちたかった。
「勝つつもりもねえなら俺の前に立つんじゃねえ!!」
全員本気でここで立っている。お茶子だけでなく多くの、いいや…全員本気を出して挑戦している。それなのに轟は本気を出そうとしない。
まるで緑谷の時のようだ。
「何の為に此処に立ってるんだクソがあぁぁ!!!!」
此処まで人に怒鳴るのは緑谷を除いてそうそうない。爆豪の本気の気持ち。
一つ一つの言葉を聞くだけで轟の心は棘が刺さるかのように痛んでくる。
分かってる、爆豪…お前の気持ちは分かってる……けどな…
緑谷と戦ってから、俺は…自分がどするべきなのか、それが正しいのか、もう何がなんだか分からなくなっちまったんだ……
目を潤わす轟は、空中に浮き回転する爆豪を見つめる。

「負けるな頑張れ!!」

「!!」
緑谷に声をかけられた轟は、ハッと我に返る。
「んのクソナードがぁ…!!」
轟を応援する緑谷に、忌々しい目線で睨みつける爆豪、しかし…
(…そうだ、そうだよ…俺の前に立つ以上、テメェは)
グルグルと旋回し、不敵な笑みを浮かべ轟に迫ってくる。
そんな轟は、緑谷の言葉に心打たれたのか、とうとう炎を出す。
(俺に勝つ為に、頭を回してりゃあ良いんだよ…!!)

炎を出した本気の轟。それを見た爆豪は爆破の威力を一気に増す。実力は互角、後はどっちが勝つか…この一瞬で勝負が決まる。
その時だった、轟の脳裏に父と母の記憶が蘇った。
爆豪に当たる寸前、轟は下を向き炎を止めた。そして代わりに氷を出して…

「榴弾砲着弾(ハウザーインパクト)!!」

その時、巨大な氷は跡形もなく壊れ、舞台は大きな爆煙に包まれる。
そのためなのか、二人の姿は見受けられない。少なくとも二人のうち誰かが場外になってる可能性も考えられる。
『麗日戦に見せた特大火力に勢いと回転を加えた人間榴弾!!アレをもろに食らったとなると轟は無事じゃ済まない気がする!!』
マイクの言葉あらずとも、今のを見て応援席はおろか、観客側の皆んなは騒めいている。
『轟は緑谷戦で超爆風を撃たなかったようだが…果たして勝負の行方は……

……って、あ』
爆煙が消えていくなか、舞台の上にたつ景色とは…それは…

「……は?」
爆豪、舞台の上に倒れており、爆豪の目先には、場外で気絶して倒れている轟。
爆豪は記憶を辿っていくなか、蘇ったのは轟が火を消し氷を出したあの瞬間。
そう、火を消したのだ。後少しのところで、完璧に勝負が決まるところだった。
本気で戦うことができたのに、轟は炎を止めた。
その事実を知らされ、爆豪の怒りは頂点に達した。
「…っ!!!!テメェおい!!」

怒鳴り散らかし近寄り駆けつけるが、轟は起きるどころか、目を覚ます気配がない。そしてとうとう爆豪は轟の胸ぐらを掴みだす。
「ふざけんなよ!!こんなのありかよ…!!!こんなの…こんなの!こん……な……」
何度も訴えかけるようにそう叫ぶものの、やはり目を覚まさない。
そして爆豪は何度もなんども揺さぶっていると、睡魔が襲ってきたのか、目を瞑りその場に倒れこむように眠ってしまった。
そして爆豪が眠っているのを確認したミッドナイトは…
『轟くん場外!よって、爆豪勝己くんの勝利!!』
以上をもって全ての競技が終わり、今年度雄英体育祭一年生は…ヒーロー科一年A組み　、爆豪勝己となった。
爆豪勝己は頂点に立つことができた、しかしそれはあくまで…立場の話、この場合話が別だ。お互い本気同士で戦ってこそ意味がある。なのに相手が本気を出さず、自分が勝っても意味がない。
相手が本気を出さずして自分が勝てるのは当然なのだから……

あれから時間が経ち、爆豪も目を覚ましたことで表彰式が行われた。
それぞれ台には3～1の番号があり、3番の台には飯田、常闇が立っており、2番の台には轟、そして1番は爆豪。
それは良いのだが…
「おい、爆豪のやつ締まらねえよな…」
「見ろよ、観客たちはおろか、飛鳥たちもドン引きだぜ?」
「いや、アレはな～…爆豪一位なのによ…」
A組の皆んなは苦笑しながら爆豪を見つめている。当の本人、爆豪勝己は現在…

「〜〜〜〜〜!!!っっ〜〜〜〜!!!!」
口や腕、足、全身全体が鎖や手錠などで拘束されており、まるで何かを訴えかけてるかのように厳つい顔で轟を睨みつけている。そして轟はそんな爆豪を見向きもせず、ただずっと下を向いてる。
何故そうなったかと言うと、目覚めて早々状況を確認することなく猛威に暴れまわり、手がつけれなかった為、拘束具を使って無理やり拘束させたそうだ。彼らしいと言えば彼らしいが、そこまで爆発的な性格だと皆も引いてしまう。
一方飯田と常闇はいつになく荒々しい爆豪にため息をつく。
「爆豪くん…君は本当に…」
「悪鬼羅刹…」
二人はまるで鬼や悪魔をみるような目でそう言い引き気味になっている。

半蔵の生徒たちの反応は…
「なあ、アタイ…ある意味あいつのことスゲェって思えた」
「すごいというより…もはや拘束された猛獣…と言った方が正しいのでしょうか?」
「なんか…怖い…」
「雲雀、見るな」
葛城と斑鳩は猛威振るう爆豪に引き気味になり、雲雀はライオンでも見てるかのように怖がり、怖がる雲雀に柳生は手で目を隠す。

「さて、表彰式といえばアレね!メダルよ、メダル授与よ!」
そして今年でメダルを贈呈するのはミッドナイトではなく、あの超有名なヒーロー…
「私が来た!!!」
オールマイトだ。

「おおっ！オールマイトじゃん！」
「羨ましいよなぁ、一年はオールマイトに見てもらえるんだぜ？」
「しかも身近でな、こんなことそう滅多に無いぞ？」

オールマイトが現れては会場が大きく騒めく。それをも御構い無しにメダルを贈呈する。まずは常闇からだ。
「常闇少年おめでとう！君は強いな！ただ、相性差を覆すには個性に頼り切ってはダメだ！もっと自力を鍛えれば取れる択が増えるし、より強くなれるだろう！」
「御意…」
励まされるだけでなく、自分に足りないもの、自分が必要なことを教えてくれる、本当に良い人だ。それを実感した常闇は、一位を取れなかったことにほんの僅かに、悔しい目を見せる。
「次は飯田少年、君もおめでとう！いやぁ良い戦法だったよ！君の自慢な個性を活かして、一気に蹴りを付ける。相手が相手なら悪くなかったぞ！ただ、どれだけ良くとも必ず通じるとは限らない。もっと工夫し且つ、違う戦法も考えることも大切だ！後はその個性を他にどう活かすかによっても変わるぞ！君がもっと精進することを祈るよ！」
「っっ！はいっ！誠に有難う御座います!!」
（やっぱ硬いな飯田少年…）
飯田も常闇と同じく、言葉をかけられたことに常闇の表情とは違い、慢心な気分になってしまっている。
「さてと、次は…轟少年、二位…おめでとう。緑谷少年の戦い以降、何処か調子が悪かったようだね」
「っっ～～～～～!!!」
「爆豪少年、少し煩いから待っててくれないかい？」
「っっっ!!～～～～～～～～!!!っっ～っ!!!」
「ダメだこりゃあ…」
轟に話しかけるオールマイト、まだ轟をガン見し睨みつけてる様子に少し鬱陶しと感じたのか、オールマイトが声をかけるものの逆効果

になった。
「仕方ない、話を続けよう…決勝戦で左を収めたのは、何かワケがあるのかな？」
「……」
ここで初めて轟はこくりと頷き反応した。
「緑谷戦でキッカケをもらって、分からなくなってしまいました……あなたが奴に気にかけるのも、なんとなく、少しだけ分かった気がします……」
迷いを生じていながらも、氷のように物静かにそう語り出す。
自分がいままで信じ、父親への完全否定、憎悪を糧に生きて来た。それが正しいと思ったしそれが己の生き方全てだった。だが緑谷の戦いでそんな考えが無くなってきたのだ。今はそれが、父親に引き継がれた力を使って正しいのかどうか分からないし、正直迷っている。
少なくとも父親に対する憎しみが消えていくような感じだった。
そして母の記憶を思い出した。思い出すだけで何処か心が安らぐような、癒されるような…そんな暖かい温もりを感じることが出来た。
「俺もアンタみたいな最高のヒーローになりたかった。俺がヒーローになりたかったのは、それなんだと思うんです……
ただ、俺だけが吹っ切れてそれで終わりじゃ駄目なんだと思った。清算しなきゃならないモノがまだある……俺が本当のヒーローになるには、それを片付けなきゃならないんだと……だから……」
「……顔が以前とは全く違う…そうか、緑谷戦で色んなことを感じたんだな……深くは聞くまいよ……今の君ならきっと、清算できる……」
何処か寂しく、悲しいような声で、懸命に言葉を繋げる轟に、オールマイトは労うかのように軽く抱きしめ、ポンポンと背中を叩いた。そんなオールマイトから優しさという暖かい、ほのかな温もりを感じる。
「さて、なんやかんやで色々あった爆豪少年!!全く、君が一位だってのに、この醜態はあんまりじゃないか…取り敢えず拘束具取ると轟少年

に突っかかり揉め事になってしまいそうだからソレはこのままで良いか…」
「っっっ～～～～～～!!!!」
そんな彼は、轟から今度はオールマイトの方へと体の向きを変える。オールマイトが近づき口の拘束具を取り外す。
「取り敢えずまあ、伏線回収見事だったぞ！おめでとう!!」
「オールマイト…こんな1番なぁ、何の価値もねえ糞以下なんだよ!!!!
世間が認めても俺が認めてなきゃタダのゴミなんだよ…!!!!」
(目…スゲェ…ヤベェ…)
口の拘束具を取り外した瞬間にコレ。小さい子や雲雀が目の前にいたら号泣する位の怒りに染まった厳つい顔だ。
目なんかは９０度近くにまで釣り上げており、多分こんな顔芸出来るのは世界で爆豪ただ一人だろうと断言できるほど凄まじいものだ。
ジッと見続けてると笑いが込み上げてくるがそこは笑ってはいけない…
「いやぁ、しかし君ほどのような人間はそうそういないさ…それにな、伏線回収なんてそう出来るようなものでもないんだぜ？寧ろ君はソレを誇って良いくらいだ！抑圧されたこの世の中、君のような勇敢な人間は数少ない。メダル(コレ)は、君の傷としての証だ！受け取ってくれよ！」
「要らねえんだよクソがぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
メダルを差し出すものの、爆豪は今超絶機嫌が悪い。首を横に振るどころか、猛威振るう猛獣みたいに吠えている。
しかし結局メダルは渡される形となり、口に咥えさせられた。
オールマイトは小声で「似合ってるぞ」と言うものの、「煩えぶっ飛ばすぞゴラァぁぁ!!!」と爆豪は更に激怒した。
そんなやりとりをしながらも、オールマイトは観客たちや生徒たちを見つめる。
「さぁ!!今回は彼らだった、しかし皆さん!!この場の誰にもここに立つ可能性はあった！ご覧頂いたとおり、競い！争い！高め合い！更に先へと向うへと登っていく勇敢たるその姿!!次代のヒーローは確実

にその芽を伸ばしている！」
緑谷だけでなく、この場の多くの者はこう感じ、思った。

この体育祭で色々なことがあった。
誰にも見せなかった意外な一面があった。
圧倒的な強さを持つものを、その身肌身で感じた。
誰も知らなかった、その人の事情、本質を知った。

そして、次の次世代のヒーローになるのは自分だ、そうなりたいと思う人物も少なからずいるだろう…

他にも色々あるが、確実に言えること、それはその場の多くが体育祭を通じて大きく成長したことだ。
この戦いは勝っても負けても決して無駄にはならない…寧ろ更なる成長の高みとして持ってこいだった。
これから遭遇する理不尽、ある一部、恐らくヒーロー科の1年Ａ組は必ずしも良からぬ最悪な悪意と遭遇するハズだ。
そんなピンチを乗り越えるためにも、強くなり、誰もが認めなくたって良い、誰かを助けれるヒーローにならなければならない。

「てな感じで、最後に一言!!!」
好敵手と書いて友と呼ぶ。
「皆さんご唱和ください！せーの!!
お疲れ様でした!!!」
「「プルす…え?!」」
「Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａは?!」
「そこはＰｌｕｓ　Ｕｌｔｒａでしょオールマイト!!」
皆はＰｌｕｓ　Ｕｌｔｒａの言葉だと思い言い出したのだが、オールマイトの予想しない発想に皆戸惑いを隠すことが出来ず、いろんな意味で騒めきだした。
そんなオールマイトは「あっ、やべ！……いやぁ、みんな早く終わ

りたいかなぁ…と」と言いつつ苦笑を浮かべる。
　そんなヒーロー生徒たちとオールマイトのやりとりに、観客側は半分呆れたような様子だが、忍学生である彼女たちは、暖かく見守るように見つめていた。
「はぁ～っ！終わったなぁ…！長かったよな～！」
「一日中観てたわけですからね、長く感じるのも無理はありません…さっ、私たちはここで引くといたしましょう！」
　斑鳩と葛城は先に帰ろうとする。しかし1年2年の彼女たちはまだ残るのか、皆んなの終わりを3人は待っている。
「ねえ、飛鳥ちゃん」
「ん？どうしたの雲雀ちゃん？」
　突然声をかけられ振り向くと、雲雀は皆んなの様子をなんだか羨ましそうな目で見つめている。
「あのね、雲雀…この運動か…ううん、体育祭を見ててさ…思ったことがあるんだ……」
「思ったこと？」
「うん」
　ここで初めて体育祭とちゃんと言った雲雀に飛鳥は内心少し驚いたものの、話を聞く。
「最初っから最後まで、皆んな諦めずに全力で競って、高みあって、戦って…一人一人誰にも見せたことのない一面を持ってて…この体育祭で初めて色んな人のことを知れた感じがして……その人の譲れない勝利や想いがあって……」
「……」
「皆んな、ああやって強くなっていくんだねって、なんかふとそう思っちゃうんだ。そう思うとなんか…羨ましくなって……雲雀も、出て見たかったなぁって」
「雲雀ちゃん…」
「……」
　雲雀の言葉に飛鳥はおろか、近くにいた柳生も沈黙してしまう。雲雀の言うことは最もだ。自分ももしこの大会に出れたら、皆んなと

戦ったら、自分はもっと強くなれるだろうと…そう思ってしまう。そう考えると雲雀の気持ちも分かる。
しかし自分たちは忍だ、忍というのは誰にも気づかれることなく、且つ誰にも存在を知られることなく世のため人の為に活動する。
忍になってからそんなことは当たり前だと思っていたし、覚悟の上だった。しかしこう思ってしまうと、ついそんな規則が鬱陶しく思えてしまう。そんな気がする…ほんの少しだけだが…
「それに…もし雲雀たちが忍じゃなかったら…雲雀たちはどんな生活を送ってたんだろう…」
そう言われてみれば確かにそうだ。もし自分たちが忍ではなかったらどうなってたんだろう?
自分たちは一般人として忍の世界を気にすることなく、こうした何気ない普通の超人社会に溶け込めるのか?
自分たちに個性が宿って皆んなみたいにヒーローを目指すのだろうか?
本当のクラスとして、1年A組の生徒となっていたのだろうか?
考えれば考えるほど色んなことを思い浮かべる。
でも逆のことも考えられる。それは忍のことだ。
自分がいなくなったら今の自分はどうなるのか?
他の仲間たちには出会うことがなくなり、忍の仲間はなかったことになるのでは?

いいや、そもそも自分たちは長く居すぎたのだろう。普通の生活に…誰もが住まう超人的となった一般社会。
忍の道とは離れた存在…そんな世界に自分達は此処に存在している。
それが敵連合や漆月を捕らえ、処罰する忍務とはいえ、自分たちが忍の世界の反対、ヒーロー世界に存在していることは確かだ。
そう、それは確かだ…でも。
「雲雀ちゃんの気持ち…分かるよ。でもね、私たちにだって私たちにしか出来ないことがあるし、それにもし私たちが忍じゃなかったとし

ても、きっと皆んなと会ってるかもしれない…それだけはハッキリ言えるかな。だって、私たちが忍でも、向こうはヒーローなんだから…だから今と変わらないかもしれないよ」
「飛鳥ちゃん…」
「それに、私もこの体育祭に出て見たかったって言うのは本心かな！だって皆んな強そうだったし、緑谷くんに轟くん、爆豪くんとは一度でも良いから手合わせ願いたいよ！」
天真爛漫にそう答える飛鳥に、いつの間にか雲雀は笑顔を見せていた。柳生は見せてはいないが、僅かながらに笑顔を…口角を吊り上げた。
「さってと！この後相澤先生の話があると思うから、それ終わったら皆んなで半蔵学院に戻ろうよ！」

これにて、雄英体育祭終了。

アレから時間は経ち、教室に戻った皆んなは相澤先生の話を聞いた。
相澤先生の話は至って短い、話によると明日、明後日は休みになるそうだ。
今日の体育祭の疲れを癒す為でもあるのだろうが、大きな理由は観に来たプロヒーローからの指名等を先生達がまとめるからだそうだ。それを休み明けに発表するらしい。

「ふぅ…」
それは別として一方、体育祭終了の裏では…
体育祭で生徒たちの活躍を見ていた、仮面を付けている黒スーツの謎の人物は、人気のない歩道を平然と歩いていた。
「アレが次世代のヒーロー…ですか、流石は雄英、あれ程生きの良い個性を持った子供が在籍しているとは…まっ、セキュリティーの方は何とも緩かったですがね…っと、早速連絡しなければ……」
独り言を呟いていると、ポケットから携帯電話を取り出し連絡をしている。
「……もしもし、ハイ私忍商会の『魔門』で御座います……ええ、ご依頼を頂いた情報は全て手に入れました。雄英の生徒に半蔵の生徒の写真も情報も入手済みです……ええ、では料金の方はよろしく頼みますね？
黒霧さん」
彼もまた、悪意を培う者だというのは、闇の者にしか知らない。
少なくとも攻め時ではない敵連合は今、忍とヒーローの寝首を狩る為に、少しずつ、的確に、次の戦いの準備をし始めているのであった…

たった一日で、これまでにないことを実感して来た。
そんな一日が過ぎて…翌日。
「え？ちょっと…轟…お母さんのところに行くって本当？お父さんに言わなくても良いの？病院のこと…」
「ああ、寧ろ親父にはそのことを言わないでくれよ」
轟邸は、相変わらず豪快な家で、日本だとより強く感じさせるような和風な豪邸であった。
Ｎｏ．２ヒーローだからこれくらいの家は持てて普通なのかもし

れないが、実際これほど大きいとは思えないし、まず和風というのがまた良い。
鳳凰財閥である斑鳩の家にも似ているのかもしれない。
そんな轟邸では、轟は病院に行こうとするものの、姉、長女の轟冬美は心配する。
「どうして？何で今更お母さんに会いに行く気になったの!?!」
「……」
そう言われても反論することは、言葉を返すことは出来なかった。
いや、そもそも答える必要がないからなのかもしれない。どちらにしろ自分のやるべきことは変わらないと、轟は母の居る病院に向かった。

自分の存在そのものが、お母さんを苦しめ、追い詰めてるんだと思っていた。だから会わなかった。
お母さんはきっと、まだ俺に…父親に囚われ続けている。
お母さんがどの病室にいるか看護師に尋ねて、向かって行く。歩を進めるたびに不安と緊張が高まっていく。ぶっちゃけ正直に言えば緊張するなんてこと自体あんまりなかったし、久しぶりな気分がした。
そうだ、久しぶりと言えば…お母さんに会うのも物凄く久しぶりだ…自分が小さい頃から今までずっと会ってないんだから…
今はどうしてるんだろう？
今までどういう思いで生きて来たんだろう？そう考えるだけで胸が痛くなる感覚がした。
だから俺がこの身体で…全力で、『再びヒーローを目指す』には会って話をしなければならない…
そしてとうとう病室の扉の前に立つ。開ける前に深呼吸をする。
不安や緊張を研ぎほぐすように…
お母さんは許してくれるかな？
一つの言葉が頭の中に遮った。けど、此処まで来たんだ、もう関係ない…

例え許されなくても良い、それでも会って話をつけなければならないのは確かなのだから。
そう、沢山話をしないと…
そして扉を開けた。そこには、病室のベットの上で空を眺めている一人の女性だった。窓から日差しが差しこみ、その女性を照らすかのように…その女性は昔と変わることのない、轟の知っているお母さんだった。

例え望まれなくても
「お母さん」
助け出す

名前を呼んだ途端、お母さんは振り向いた。そして轟の顔を見ると…
「……焦…凍?」
懐かしい声、久しぶりに名前を呼ばれたような感覚。
何もかもが懐かしい…
会って話をつける。

それが俺のスタートラインだと、そう思ったからだ。

同じく同時刻。
「おもち〜おもち〜♪」
麗らかなお茶子は、ルンルン気分で自分の家のマンションに向かっている。
お茶子の手には買い物カゴを持っており、中には色んな食材が入っていたが、彼女はおもちが好きなのか、おもちが入っていた。と言ってもそれ程多い量でもなく、至って普通の量だった。大体3、4個くらいだろうか、まあ一人暮らしのうえ生活費も考えると贅沢は言ってられない。
「アレ?鍵が開いてる?」

自分の家に到着したお茶子は、鍵を使って開けようとするものの、逆に鍵をかけてしまった。
可笑しいな？鍵はちゃんとしたハズ…まさか鍵を閉め忘れたりとか…!?
または誰かが何らかの理由で鍵を使って入って来たとか？何らしらの個性ならあり得なくもないかもしれない…
でも何のため？まさか…
「泥棒…？だったりして…」
恐るおそる扉を開けて見ると…
「お茶子おおぉぉぉぉ～～!!!」
「!?!!ホギャァァァァァァァァァぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!???」
二人の人物が獲物をかるかのように走り出し、向かって来てくる。突然のことにお茶子は思わず腰を抜かしそうになり、驚きのあまり思わずゴム○ム人間が腕を伸ばす時のような感じで目ん玉が飛び出し伸びてしまった。
「父ちゃん！母ちゃん！どうして此処に!?!」
その二人の人物はなんと、お茶子の両親だった。二人は驚いたお茶子を見て笑顔を見せると「来ちゃった」「お祝いに来たんやで!!」と母親は満面な笑みを浮かべ、父親はガッツポーズをする。
「お茶子体育祭で頑張ってたしな！それに最初言おうかと思ってたけど…脅かす方がもっと良いやろ？」
「今日の晩飯は買って来たから、一緒に食べよう！」
「……っ！言ってよもおぉぉ～～～!!」
お父さんとお母さん、二人が来てくれたことにお茶子は思わず頬が緩み涙が溢れてきてしまう。

そして同時刻、半蔵学院の門の前では…
「此処が半蔵学院ですか……」
見たことのない一人の女性は、門をくぐり、学校の前でしばし立ち止まると、ため息をつく。
「善忍養成学校の癖にこうもセキュリティーが甘いとは……呆れて物

も言えませんね…」
　その女性は、灰色に近い髪の色に、雪のような真っ白な肌をした清楚な女性はジッと半蔵学院を見上げて…

　緑谷宅では…
「もう、7回よ!?凄くない!?!私、騎馬戦から7回も気絶しちゃった。ラスト2回はほぼ脱水症状によるもの！」
「僕が戦ったときなんかよりよっぽど壮絶だったんだね……」
　朝、緑谷は母と一緒に朝食を食べている。お母さんは何度もなんどもその話をし始めている。もう何回目だろうか？昨日なんかは１０回も聞いたし、今になって6回…人生、生きてきた中で1番インパクトが強かったと本人が言っている位だ、今まで息子が無個性だと思ってたんだ、驚くのも無理はないし何より緑谷のことを大事に、大切に思っている証拠なのだろう。
「急に奇跡的に個性が出たなんて…しかも今までにない例で……その個性がバッキバキのリスキーパワーでさ、それ聞いただけでも涙が止まらなかったもの！」
「お母さん、目疲れないソレ？というか目やばくなかった？」
　そこまで涙が出る母親に、緑谷は逆に母の目が心配に思えてきた。
「まあ、睡眠とってから大分良くなったけど…それより！腕…」
「！」
　朝食を食べてるなか、人差し指を緑谷の腕に向ける。その腕は包帯を巻いていて…とてもじゃないが大丈夫には見えそうにもない、見知らぬ人から見れば、事故でもあったの？と勘違いされてしまう程の重傷を負った腕だ。
「応援はするけど…それは心配しないってことじゃないよ？」
「……う、うん……」
　母親に指摘されたことに、思わずぎこちない返事をする緑谷。そう、体育祭の時にリカバリーに言われた。今後ともこういった治療は受けない。と…

確かによくよく考えて見れば、自分はそんなつもりではなかったが、ほんの少しだけ、リカバリーの治癒に甘えてたのかもしれない。
また何度でも治せるからと、解決方法を探さなかったのかもしれない…

見てくれてる人を不安にさせてしまった。

誰も心配するこのない、僕なりのやり方が必要だ。

それが、「僕が来た」と言えるようになるスタートラインだ

一方爆豪邸では…
昼過ぎに起きた爆豪は…上半身裸になり洗面所に向かって…
「しね！死ね！んのクソ菌がぁぁぁぁ～!!」
歯磨きしている。
「ちょっと勝己！昼に起きてきて叫ばないで！」
「煩えクソババァ!!!!」
「煩いのはアンタの方でしょーが馬鹿!!」
何ともない日常？であった。

学炎祭編
47話「斑鳩と村雨」

雄英体育祭が終わった翌日、雄英の生徒たちは今日と明日二日間の休みだ。
その間、飛鳥たちは半蔵学院で修行をすることになる。
まるで昨日の出来事が嘘みたいに、いつもと変わらぬ日常に戻っていた。そのことに皆どこか安心感が来るのか、あるいは何処か寂しい何かが湧いて来るような、そんな曖昧な感じでもあった。
「あれ？霧夜先生、斑鳩先輩に葛姉は？」
修行を始める前に一つ、飛鳥が疑問に思い質問をした。確かにいるのは飛鳥、柳生、雲雀のいつものメンバーだ。
「斑鳩と葛城は卒業試験に備えて修行中だ…まだ来年まであるとは言え、今から試験に向けて修行しなくてはな」
「ふええ、もう今からやってるんですかぁ…」
飛鳥は信じられないという顔で驚愕し、ため息をつく。
「でも確かになぁ…試験は難しいし……修行ってどんなことやってるんだろう？」
「そんなことよりお前たちは修行を続けろ」
「「はい!!」」

あの二人がいなくとも、この三人でやっていかなければならない…
そう、こいつらは雄英としても生徒として活動させてもらっている。
今年一年はどうにも可笑しいのだ。始まりは抜忍のことだ、世間に忍の存在を知らしめ、被害を及ぼす。それが漆月のやり始めたこと。
次にヒーロー殺しステイン。
これは漆月とは繋がりがあると俺は睨んでいる。ステインがいくら幾多ものの殺人を繰り返す殺人鬼とはいえ、忍を殺すことは出来るか？いや、まあ個性や場合によっては殺すことも考えられるが…だが

ここで俺は思ったのだ。
何故ヒーロー殺しステインは忍の存在を知っているのか？
漆月は世間に知らしめ被害を及ぼしていると言うなら、漆月とステインは何らかの接触があり、忍の存在を知った敵は他の忍に危害を加えたのではないか？俺はそう勘付いたのだ。
漆月を始末することに協力してくれた雄英、そこで忍学生である彼女たち三人を選び、雄英の生徒として振る舞い、お互い協力し合うことに成功した。
そう、ただ漆月を捕まえる。それだけだったんだ…
ある時飛鳥たちから聞いた、それは敵連合と名乗る敵の集団テロリストたちが襲撃して来たと。しかも飛鳥たち忍の存在を知っていると来たもんだ。更にあの一年にして天才である柳生でさえ酷い重傷を負ったくらいだ。
そして超秘伝忍法書と雲雀を取り返す時も、またしてや敵連合が現れた。それも抜忍・漆月が敵連合として仲間になっていて…
ここまでして騒ぎを起こす敵たち、更に抜忍・漆月が手を組んだことにより俺たちは敵連合との集団を相手にしなければならないという訳だ。
勿論これは俺たち半蔵学院だけでの問題ではなく、全校の忍や日本中の忍たちもそのことは知っている。今も捜査中とのこと…
では何故その件について我々半蔵の生徒が選ばれたか…それは飛鳥の祖父、半蔵様とオールマイトが繋がっているからだ。
どういった経緯かは知らないが、歳は離れてるとはいえ、昔からの仲らしく、今も時々協力しあってるそうだ。
それに雄英は口が硬い、そのことを知り、我々や上層部は大きく賛成した。
そう、その日から現在、飛鳥たちは見違えるほどに大きく成長した。
普通の修行でつけた力ではない、彼らヒーローとこいつらが忍が協力し合うことで、強くなったのでないか？と俺は思うのだ。
まあ、だからと言って修行はやって貰うがな…

そんなことを思いつつ、霧夜は彼女たちの修行を見つめていた。

「よし！休憩!!」
「ふへぇ～～…やっとだぁ～…」
アレから4時間ぶっつけで修行してやっと休憩が入った。
飛鳥たちは汗だくでその場に思わず座り込む。
「疲れたなぁ～…」
「斑鳩や葛城が居ないとはいえ、今日の修行はヤケに厳しかったな…」
「うん、だよね…でもやっとお昼食べれるよ～！」
三人はそう言いながら部屋に戻ってきた。
「そう言えば…懐かしいよね。ここで昼ごはん食べるの」
「そうだな…今まで月～土曜まで雄英で昼飯を済ませてたからな…」
「雲雀たちもヒーロー科扱いで6限もあるもんね～」
そう、雄英高校は国立だが一貫して学校週6日制となっているのだ。他の学科は土曜日は4限までだが、ヒーロー科のみ6限までである。更に土曜日を除いてヒーロー科だけ7限まで、学科によって扱う授業や日課が違うのだ。つまりヒーロー科は他の学科と比べて割とハードである。
「うん……あっ、そうだ！雲雀ちゃんと柳生ちゃんは昼何してるの？」
「昼食か、まあ弁当は雲雀の分まで持ってきて一緒に食べてるな…」
「雲雀は柳生ちゃんの分までお菓子持ってきてるんだ～♪飛鳥ちゃんも今度食べる？」
「え、ええ～っと…ええ～…」
食堂で食べてるのなら誘おうと思って聞いてみたのだが、生憎二人の場合それはお邪魔になってしまうのでやめておく事にした飛鳥であった。
「昼飯の話はさておきだ…俺たちも強くなるためにももっと修行しないとな…」
「や、柳生ちゃん…やけに張り切ってるね？」
「当たり前だ、あいつらがあんなにも強くなってたんだぞ…それに俺

たちはあの時何にも出来なかったし…あいつらだけ強くなって俺たちが弱いじゃ話にならないだろ」
「あっ…」
ヤケに気合いのある柳生に、飛鳥は面食らう。
「そうだね、みんな成長してるんだもん！雲雀たちも頑張らなくっちゃ！それにしても体育祭凄かったなぁ…皆んな誰にも見せたことのない一面があったりして、とても強い芯があって…雲雀も負けられないって思った！」
「…そうだよね」
雲雀も柳生と同じく張り切っているのか、袖をまくって今でも組手をやりそうな構えを取る。
（そうだよね…皆んな、夢に、目標に向かって、頑張ってた……皆んな強かった……）
確かに雲雀の言う通り、あの戦いでどの人も負けられない想いや強い芯を持っていた。意外な一面を持っていた。
そう思うと自然と誰にも負けたくない、勝ちたいという想いが強くなってくる。
皆んな諦めずに、目標に向かって頑張ってた。どんなに挫けそうになっても、辛くても、涙が出ても、決して最後までは諦めなかった……それが皆んなの強さなんだって私は思った。
そう、私たちも同じだ。欲しいものがあるなら、命懸けで取りに来る。
それが例えどれだけ困難でも、どんな強敵であろうとも、どれだけ傷み苦しもうと、負けない、諦めない。
それは私も同じだ。そう、忍の道を極めるまでは。
「私も…負けられないな…！よし！それじゃあ早速修行だぁ!!」
「待て飛鳥、昼飯がまだだ…」
「あっ、そうだったね…アハハ…」
「やれやれ…」
陽気でマイペース、流石は飛鳥だ。半蔵学院のチームを引っ張るリーダーでもある。

「じゃあ昼食は～…あれ？そういえば斑鳩先輩と葛姉は？試験の修行でも昼食はここに来るんじゃないかな？」
「いや、分からんぞ…昼食も別々だったりするかもな…もう昼なのにここに来てないのが何よりもの証拠だ…」
「ええ～…」
　斑鳩と葛城が此処には来ないと知った二人は、大きくため息をつく。柳生に至っては相変わらずシンプルでクールだ。
「ん～、じゃあね～……っ！そうだ！」
「？どうかしたのか飛鳥？」
「いいこと思いついたよ！確か三年は特別訓練室だったよね？」
「ああ、そこで食うのか？」
「うん！でも霧夜先生が来て見つかると何か言われそうだから…万が一のためもって思ってコレ！」
「ん？」
　飛鳥は台所に行って何かを持ち、掲げるように二人に見せた。それは…
「ああ…」
「おお～！」
「これで試験修行お疲れ様って意味で持っていくんだ！それでどうせなら一緒に食べよう？みたいな感じで誘えばいいんだよ！」
「なるほど、飛鳥にしては冴えてるな」
「むっ！今のはどういう意味なの柳生ちゃん？」
「いや、何でもない…」
　多少自分をバカにされたように思えた飛鳥は、柳生をジッと見つめる。
「そうと決まればレッツゴー！」
　そうと決まった雲雀は元気よく満面な笑みで向かっていく。その無邪気な笑顔はまるで幼い子供のようだ…

飛鳥たちが修行を終える少し前…

「はぁ…はぁ……」

物静かな空間に佇むは一人、飛燕使いの斑鳩。試験修行のせいなのか、身体中から汗が滝のように流れ落ち、息遣いがとても荒い。

「もう一回…」

そう呟くと、また目を閉じた。この部屋には何もない…特別な修行部屋。その中でまた静寂な空気が流れ、物音一つ立てることのない空間となった。

彼女は何をしてるのか？それは瞑想だ。

そして彼女の頭の中では…

何体ものの真剣と実弾を装着した木偶人形、傀儡が襲いかかってくる。どの木偶の動きも手に取るように読める。

いける、着実に、少しずつ、焦らず…慎重に…これなら、出来る！

そう思った瞬間。振り返ると背後から、木偶が真剣を振り下ろし背中を切り捨てた…

「……っは!!……はぁ……はぁ……また、ダメですか……」

思わず大声を叫び、瞑想を解いた。

そう、これこそが卒業試験に向けての修行だ。これで何回目になるのだろうか、頭の中で何度も同じシミュレーションを繰り返すものの、上手くいかない。流石に卒業試験への難易度は高い。

真剣と実弾を装備した木偶人形を無傷で全滅させる。それが今回卒業試験への内容である。これをクリア出来なければ一人前の忍として認められることは出来ない。

そう、また不合格ならそこで己の忍の道は閉ざされてしまう。つまり今まで積み上げた来たものが全て無駄になるのだ。

そう、どれだけ頑張ろうと結果が出なければ意味がない。

卒業試験まではまだ時間はあるものの、油断してはならない…本当に忍の道を極めるのならば、いいや、本当の忍になりたいのなら、今から実践するべきなのだ。
忍に情けは不要。
甘えるな、強くなれ。
忍は強さが全て。
現代この世の忍はそれがなければ生きて行くことは出来ない。厳しい世の中、それを支える者が必要、それが忍だ。なら自分たちは更に厳しい世界に耐え、忍となり影となり、この世を支える存在にならなければならない。忍の存在する理由は、それだけだ。
そんなことは分かっている…なのに、なのに自分の心の中は雑念だらけ…どうしたといことか…こんなので本当に忍になれるのであろうか？
私は自分に問うた。
緊張なのか、焦りなのか…よく分からない。ただ今言えることは、このままでは卒業試験は合格出来ないということだ。そんなことでは皆に顔向けが出来ない…胸を張り、自信を込めて忍になる。だなんて言えない…どうしたものか…
その時、背後で気配を感じた。この気配は飛鳥さんや、柳生さんに雲雀さんではない？気配は一人…かと言って葛城さんでもない…では一体…
「そこにいるのは誰です!?」
振り返るとそこには…
「よぉ…斑鳩…」
「っ！お、お兄様!?」
そこに立っていたのは…高級シルク白装束と、腕に巻かれた鎖鎌。何処と無く痩せ細った身体。この独特の風貌を見間違えるわけがない、自分が最も知っている…村雨お兄様だった。
「……久しぶりだなぁ…妹よ…いや、正確には血の繋がっていない……義理の妹だったな…」
「…っ」

血の繋がっていない妹。
そう、私はお父様とお母様の本当の子供ではない。忍の道を継ぐために名家として迎えられた養女なのだ。私は立ち上がり深々と頭を下げた。
「お久しぶりです、村雨お兄様」
自分で言っておいてなんだが、確かに久しぶりだ。余り実家…鳳凰財閥の屋敷に戻ることも余りなく、今は忍の寮で過ごしてるためお父様とお母様はおろか、兄の村雨にすら会ってなかったのだ。
最後にあったのは…飛燕を盗もうと半蔵学院の忍学科の寮に侵入してきた時の話だ。
「俺がここまでどうやってきたのか、気になっているのだな?」
髪の毛はぼさぼさに伸び、肌ツヤも良くない。会うたびに不健康な身体になっていく。
「は、はい…」
私は思わずぎこちない返事をした。
「なめるなよ!」
するとお兄様は目を剥いて私に怒鳴りつけてきた。懐かしい…家ではいつもこんな風に怒られていた。
「俺の家はあの鳳凰財閥だ!学校に沢山金を出してるんだよ!家の名前を出せば簡単に中に入れるに決まってるだろ!」
「し、失礼しました…」
相変わらずこうなると当たりが悪くなる……再び苦手意識が強くなる。
でも言われてみれば確かにそうだ、鳳凰財閥との繋がりは強いし何より自分もその家で世話になった、お兄様が入れるのも当然かもしれない…
「わ、分かれば良いんだ…」
本当だったら一人っ子のお兄様が忍の道に進むハズだった…しかしお兄様は半蔵学院の入学適正検査で不合格となった。残念ながら忍の才能がなかったのだ。
『村雨の代わりに、当家の忍を継いでもらいたい』

今のお父様にそう言われ、養女に迎い入れてから、わたくしは後ろめたい気持ちを抱き続けた。
もし、わたくしがいなければお父様は養女を考えず、お兄様が傷つくこともなかったのかもしれない…劣等感のこもったお兄様の視線を感じるたびにやりきれなくなって心が痛んだ。
「そういえばお兄様、ご卒業が決まったとお聞きしました…」
因みにお兄様は名だたる大学の４年生、専攻は経営学。卒論も無事に完成し、単位も問題なし、今年の春に卒業予定なのだ。
「あ、ああ…そうだ……まあ、俺の話は良い…別にお前よりちょっと頭脳が秀でているだけのこと…」
お兄様はふと視線を落とし、そして珍しく優しい声になった。
「実は、大学以外にもセミナーのようなものに通っていてな。そっちの方はこないだ皆んな卒業したのだ…例えばコミュニケーション能力のスキルアップ教室や素直になる精神統一セミナー、そして…」
「…？」
そこまで言うと、お兄様は口ごもった。
「ま、まあ、そんなところだ！」
「流石ですお兄様、おめでとう御座います」
再び深々と頭を下げた。忍の道を諦めたお兄様は、お父様の後継ぎとして道を勉強中だ。わたくしには経営の世界はわからないが、コミュニケーション能力の教室などに通うことも必須とされるのだろう。なかなかに厳しい世界だ。
「……ところで斑鳩よ、お前が卒業論文を貰うには何が必要なんだ？」
「それは、卒業試験に合格することです…」
「…いいや、違うな。お前には卒業試験を受ける資格すらない…」
「えっ？」
お兄様の言葉を聞いて、思わず声を出してしまった。
「まずはお前に必要なのは…オレとの決着だ！」
お兄様は不敵に笑うと、一歩後ろに下がって腕の鎖鎌を解き始めた。
「さあ斑鳩よ！飛燕を抜け！本来ならばオレが引き継ぐべきだった家

宝を！」
　これを聞くのも何度目だろうか…お兄様のギラギラした眼差しが突き刺さる。私は渋々、飛燕を抜いて構えた。
　お兄様は嬉しそうに鎖鎌の分銅を振り回し始める。
「妹よ、オレが今までどんな気持ちでいたのかを知っているか!?」
　私はその場で頷くことも、首を横に振ることも出来なかった…どちらにしてもお兄様を傷つけてしまう。そう思ったからだ。
「オレの気持ちはただ一つ！お前が本当に飛燕に見合う器なのか、それを身をもって感じたいのだ！」
　分銅のスピードが増し、うなり始めた。それはまるで、お兄様の気持ちの高まりを表現しているかのようだった…
「行くぞ我が妹よ！鳳凰財閥の次期当主、村雨からの卒業試験だ！」
　お兄様は私めがけて分銅を投げてきた。
「これが町内鎖鎌大会六位の実力！思い知れえええええええええ!!」
　そしてその叫びと共に鎖が私の体に巻き付いた。
　私は黙ってお兄様の目をジッと見つめた。いつになく真面目で、透き通り、純粋な眼差しだった。まるで幼い子供のような雰囲気が少しだけあり…
　その目を見て、心が決まった。
　私は両腕に力を入れて鎖を緩めると、そのまま高々と跳躍した。そして飛燕を握り直し、空中で一つの線を描くかのように一閃。着地と同時に鞘を収めた。
「…なっ!?い、妹よ…いつだ？いつオレの鎖から抜け出した？」
　お兄様はポカンとした表情をしている。やはり忍ではない人間にとっては当然なのか、私の動きを目で終えてはいないようだ。そんなお兄様は冷や汗を垂らしながらも、分銅を回し始める。
「逃げ足は早いようだが…これは鎖から逃れる勝負ではな「お兄様、もうありません」え？」
「振り回すものが、もう何もありません…」
　わたくしの一閃で砕かれた鎖が、粉々になった。お兄様の頭上に降っていく…お兄様は唖然としていた。

「……ハ、ハハ…ハハハッ！ハハハハハハハハハハハハハハハッッッ!!!」
「っ!?お、お兄様…？」
途端、血の気の引いたような顔でお兄様は大笑いし始めた、ふと不気味なお兄様の顔を見ると、目には大粒の涙が浮かんでいた。わたくしはハンカチを取り出すと、急いでお兄様に手渡した。
「お兄様、これを」
お兄様はハンカチを手にするなり、思い切り鼻を二回かんだ。くちゃぐちゃになったハンカチをお兄様は懐へと突っ込んだ。
「町内の鎖鎌大会で六位、他にも８人しか参加してない世界からくり屋敷大会で七位、子供しか参加できない手裏剣大会に無理やり出場して１２位…それがオレだ…
そう、オレは無名の大会で小さな満足を貪る。そんな哀れな日々を過ごしてきたオレと、一流の忍育成所を卒業しようとうお前とでは格が違って当然…そう、全く別の生き物なのだろう」
お兄様の頬から大量の涙が伝わり流れ落ちてる姿を、私はただ見てることしか出来なかった。
「それを認めようともせずにオレは、お前を恨み妬むことで安いプライドを保っていたんだ…しまいにはオレはお前を傷つけることしか出来なかった……いくら血の繋がっていない兄妹とはいえ、義理の妹とはいえ、オレは一度もお前に優しく接しようとしなかった……情けない…情けないよオレは…」
私は正直驚いていた。何故ならお兄様がここまで私のことを想い、心情を吐露したことはなかった。まるで別人のようだ、そんなお兄様に私は尋ねる。
「どうかなされたのですか？一体、なにがあったと言うのでしょう…」
「何でもない……これが本来のオレだ」
本来のオレ…そう言われると自分は、今まで本当のお兄様の姿を見てなかったのだと心の底から思い知らされた。今までのお兄様は、私の存在を否定し、恨み妬みをする、それがお兄様だと思っていたからだ。するとお兄様は扉の方へと向き、背中を見せると、振り返りぎこ

ちない笑顔を見せた。
「妹よ……オレの子供の頃からの夢…忍になるという夢はお前が叶えてくれ……オレが叶えれなかった夢を、お前が叶えてくれ……そう、約束してくれ……これは、兄からの約束だ……」
お兄様はそれだけ言うと、部屋から静かに去っていった…
「……お兄様…」
そう、お兄様の背中を見つめて声が溢れた。何気ないお兄様のいた床を見ると、折りたたまれたＡ４用紙が落ちていた。それは…「シスターラブ！妹と仲良くする秘訣！」というセミナーの卒業論文だった。お兄様の様子が変だったのは、これが理由だったのだ。
「お兄様が、わたくしと仲良くしたいと思っている…」
今までのことならあり得なかった…お兄様が私にそのようなことをするなんて…私の知っているお兄様はてっきり…いいや、違う。
私が、お兄様のことをちゃんと見ていなかった。
私の心の何処かにあったはずだ、苦手意識と共に、どこか避けていたり、見ようともしなかった…いつしか嫌悪していたのだ…存在そのものを…
だから自分はお兄様の気持ちを知ろうともしなかった、本当のお兄様を知ろうともしなかった…見ようともしなかった。
そうだ、それは確かあの人にも言われた…

斑鳩が思い出した人物、それは飯田の兄、天晴のことだ。
あの人はお兄様とは真逆の人物。先日の雄英体育祭で相談に乗ってくれた人だ。
その人の言葉を私は思い出してきた…
真っ直ぐ向き合うのが大切。認めさせれば良い。血の繋がりこそ家族ではない。
そうだ、思い出した……忘れていたわけではないが、何故だろう、彼の言葉が鮮明に蘇るように感じたのだ。
そして思った…本当なら向き合うのは自分からなのに、認めさせるのは自分からなのに、全部お兄様にもってかれた…どれだけ忍として

強くても、強くなっても、お兄様には敵わない。
初めてそう思えた、初めてお兄様の優しさを肌身で感じることが出来た、初めて家族として認めて貰えた。
思わず涙が溢れそうになるが、ぐっと堪えた。お兄様にハンカチをあげてしまったからだ。
私が忍になればお兄様は怒り悲しむだろう。そう思っていた…
二人の間にも決定的な溝が生まれるに違いない。それが私が飯田さんの兄、天晴さんに相談した理由。私の心に迷いを生んでいたのだ。
でも今はもう違う、お兄様は言った。
『忍への夢を代わりに叶えてくれ』と…
ならばやることはただ一つ…お兄様の為にも、卒業試験は絶対に合格し忍になる。
「お兄様の分まで、頑張らなければいけませんね…」
もう心に迷いや雑念はない、吹っ切れた今なら、例え相手が卒業試験であれなんであろうと負ける気がしない。
「ありがとう…お兄様」

少し時間が経ってから…
「あっ！斑鳩先輩！」
「お、斑鳩も順調だな！」
「これは…飛鳥さん達に葛城さんではありませんか、どうかなされたんですか？」
斑鳩が再び卒業試験への修行を再開しようとした時だった、葛城や飛鳥達が突然部屋にやって来たのだ。

「これ、差し上げで～す！」
「これは…太巻きですか？」
「うん！」と飛鳥は満面な笑みでこくりと大きく頷く。
「そう言えば…もう既にお昼が過ぎてましたね…」
　先ほどまでお兄様と話していたためもう既に昼が過ぎてるのが分からなかった。確かにお腹も空いてきた頃ですし、今からお昼にしましょう。
「うお！こりゃまた美味そうな太巻きだな！」
「では、皆さんで頂きましょう」
　そう言うと皆は一斉に太巻きにかぶりつく。
「うん！美味えなオイ！」
「はむ……ええ、疲れた体にお酢が染み渡りますね」
　葛城は太巻きを頬張り、斑鳩は太巻きの良さを味わいながら食べている。
「卒業試験の調子はどうですか？」
　ここで飛鳥が二人に聞いてきた。
「アタイはこの通りバッチリさ！」
「私も、迷うことなく卒業試験に励むことが出来ます」
　それを聞いた飛鳥はホッと一息ついた。
「そっか！それなら良かったよ～…それにしても今から卒業試験の修行なんて大変そうだよ…」
「分かる、分かる！雲雀も同じこと考えてた！」
　それもそうだ、一人前の忍になるために、卒業試験は欠かせないし、まず乗り越えなければならないもの…それはきっと飛鳥達にもやって来る。それは分かっていてもいざとなると気持ちの整理が上手くいかない。
「まあ、けどアタイらが卒業試験に合格出来たら、お前らだって絶対合格出来るぜ！」
　葛城は後輩たちに笑顔でそう言うと、３人は何処かホッとした様子を浮かべた。
　そう、そんな話をしている時だった。

「…ん？……誰か、ここに来てる？」
何者かの気配を感じたのは…
「飛鳥ちゃん、どうしたの？」
「うん、あのね…只者じゃない気配がするんだ……しかも私たちと同じ気配……
っ!?まさか…！」
同じ気配、ということは飛鳥たちと同じく忍の何者かが此方へやって来たのだろう…誰なのかは分からない…少なからず忍であることに間違いはないだろう。しかし何故こんなところに？しかもこの気配は今までに感じたことのない気配…初めて感じる、寒気がする気配…一体誰が何の目的で半蔵学院へやって来たのか…
「私たちも行きましょう！」
斑鳩の言葉に皆も頷く。気配のする場所は校庭だ。恐らくそこに居るのは間違いないのだから…

飛鳥が先に校庭に到着すると、そこには…
「ここが半蔵学院ですか…善忍養成学校の癖にこうもセキュリティーが甘いとは…呆れて物も言えませんね…」
灰色に近い髪の色に、雪のような真っ白な肌をした清楚な女性が立っていた。他にも四人…全員見知らぬ女性が佇んでいた。服を見る限り同じ忍学生ではあるようだが…
「どなたですか？」
ここで到着した斑鳩が彼女に問う。見ただけで分かる、この人たちは忍でありながらかなりの実力者であることを…すると先ほどの女性が口を開く。
「私の名は『雪泉』。死塾月閃女学館を束ねております」
「死塾月閃女学館…あの善忍養成学校の…」
そう、死塾月閃女学館とは飛鳥たち半蔵学院と同じく善忍を育成す

るための学校。しかし半蔵学院のように一般生徒がいる所ではなく、忍生徒だけが存在する学校。因みに月閃は山奥に存在するため簡単には見つけられない。それどころか潜入すら難しく、セキュリティーも万全だとか…

「へぇ～…これが半蔵学院の選抜メンバーか…あっ！アタシは『四季』！宜しく～♪」

金髪でギャル系の女性、四季。

「儂の名は夜桜じゃ…」

青い短髪の女性、恐らく真面目な性格であろう…　夜桜。

「美野里だよ！皆んな宜しくね♪」

ツインテールをした元気の良い子共？美野里。

「そして最後に、此方が叢さんです…」

「……」

ここは先ほどの流れで言うかと思ってはいたが、何も物言わぬ為、雪泉が紹介してくれた。その叢という人物は般若のお面を被っており…

「全員を紹介した所で、私たちは今ここに…

『学炎祭』の開催を宣言します！」

４８話「学炎祭開始」

事の始まりは、雪泉たち月閃女学館が半蔵学院に学炎祭を申し込む前の日、そう、雄英体育祭が終わったその日のことだった。

枯れた芝に覆われた丘を登ると、眩しい夕陽が山間の向こうに沈みかけていた。

死塾月閃女学館の選抜メンバーが歩いている。

死塾月閃女学館は、善忍としてもそこそこ有名で、特に選抜メンバーは相当な腕を持つものと言われてる程だ。他校の忍たちや皆は略して月閃と呼んでいる。

「そうだ雪泉ちゃん！ちゃんといちご大福持ってきた？」

「勿論です美野里さん、おじい様の好物を忘れるわけがありませんからね」

手提げ袋の中には沢山のいちご大福が入っていた。大きい大福の白い表皮の奥に大きないちごがうっすら透けてみえる。体調を崩して寝たきりになってからも、おじい様はいちご大福だけは口にされた。今日も気に入ってくれるはず。

ここのところ忍の訓練が忙しく、ろくにおじい様に会っていなかった。

「ええ、そうですね…私たちの顔を見たら、きっと喜ぶでしょう」

私たち５人は皆善忍の家系で、悪忍との抗争の末に両親を亡くしている。

おじい様は私たちを善忍として育て、死塾月閃女学館に入学させてくれた。

その恩義に応えるために、厳しい忍の修行に励み、全員揃って選抜メンバーとなった。

「さあ、あともう少し、行きましょう」

丘を少し降りたところにおじい様はいる。私たちは弾む心が抑えきれずに駆け出しそうになった。その時だ…

「がーはっはっはっは！」

どこからともなく豪快な笑い声がした。気配を感じて振り返ると、

背後に居たのは板前の格好をした老人が立っていた。
私たちは一斉に構えた。その老人が只者ではないことがすぐに分かったからだ…小柄の体から尋常ではない量のオーラが滲み出る。こんな気配、今まで感じた事がない…
「何者です…？」
「ん、ワシか？ワシは半蔵じゃ」
「は、半蔵!?」
その名を聞いた途端、私の血が熱くなった。他の四人もきっと同じことだろう。
…伝説の善忍、半蔵。
忍の道を志す者なら誰でも知っている名だ。普通の忍学生だったら、ここでひれ伏してもおかしくない。
しかし、私たちにとって半蔵の存在はそんな単純なものではなかった。
何故ならおじい様から何度も聞かされていたからだ。
半蔵は宿命のライバルだった、と…
「私たちに何の用ですか…？」
「なーんか暇でのう。ちと退屈しのぎに、遊び相手を探して散歩しとったんじゃ」
半蔵はにやりと笑うと、いきなり姿を消した。
あっ、と思った次の瞬間、私の胸は背後から鷲掴みされていた。
そしていつの間にか半蔵が私の背後に回り込んでいた。
「ぶ、無礼者！」
私が肘打ちを放つなり、半蔵は素早く体から離れた。
「月閃の選抜メンバーと知っての狼藉ですか！」
「もちろん、月閃がどれほどの乳を選抜したのか、この手で確かめたくてな。あそ～れもみもみ」
両手をわしわしと動かすと、半蔵はまた姿を消した。
「皆さん、注意して！」
私たちは注意深く周囲を見渡した。しかし…
「ここじゃよ」

声のする方をみると、半蔵は叢さんの背後に、次に夜桜さん…
「おやめなさい！」
私が殴りかかろうとすると、半蔵はまたまた消えた。
さらには四季さん、おまけに美野里さんまで。半蔵は次々に私たちの胸を鷲掴んでいく…抵抗したくても半蔵の動きが早すぎて為す術がない。
「卑怯者！何が伝説の忍…この薄汚れた善忍め！」
私が大声を出すと、半蔵はようやく動きを止めた。
「薄汚れた善忍とは酷いのう…全く」
「おじい様は言ってました。半蔵は悪の存在を黙認する善忍だと…まさにその言葉の通り。その品性下劣な所業、私たち生粋の善忍とはまるで違う！」
私の話を聞いてるのかいないのか、半蔵はとぼけた顔で口をもごもごさせている。本当にこんな人がおじい様のライバルだったのか…
「しかしのお、こう見えてもワシは雄英高校にだって協力してるのじゃぞ？それなのにこの言われようはないんじゃないかのう～…第一その薄汚れた善忍とやらにもみもみされてるようじゃ、お前さんたちも立派な善忍とは呼べんのではないか？」
挑発じみた言葉を言い放ち、半蔵はまだ口をもごもごさせている。どうやら何かを食べているようだ。よく見ると口の周りが白くなっていることに気がついた。
「ゆ、ゆみちゃん…あの人が食べているの…もしかして…」
恐る恐る声を振り絞る美野里さんに言われて、私はなんだか良からぬことを想像し、冷や汗を垂らしながら手提げ袋の中を見た…そこには
「…ない。一つもありません！」
空っぽだった。
半蔵がもごもごと食べていたのは、私がおじい様の為に持ってきたいちご大福だったのだ。しかもいつの間にか…気付かれることなく、なんと言うことでしょう。
「返して！いちご大福を返して下さい！」

「そりゃ無理じゃわい。全部食べてしまったからの。あー美味しかった、ご馳走さん！」
半蔵は満足した顔でけろりと言い放った。もう我慢出来ない…私は怒りで血が逆流しそうだった。
「もう絶対に許しません！勝負しなさい！半蔵！」
私が叫びながら構えると、半蔵は退屈そうに耳をかいた。
「どんなに怒ったところでワシには勝てんぞ。お前さんの相手なら、孫の飛鳥で丁度いいくらいじゃ」
「孫？」
「ああ、今は半蔵学院の2年生じゃ。飛鳥に勝てたらちゃんと相手をしてやるわい」
あくびをしながらそう言うと、半蔵はふと姿を消した。あまりの屈辱に私は唇を強く噛んだ。これではおじい様にあわせる顔がない。
「みなさん…今日は帰りましょう……」
私が振り絞るように言うと、皆んなも小さく頷いた。

学校の忍部屋に戻ると、担任教師の王牌（ワンパイ）が瞑想をしていた。
王牌は立派なヒゲを生やした老人だ。老人と言っても筋骨隆々で、今でも現役顔負けの動きをし、私たちに厳しい訓練を与えてくれる。最近は居たり消えたりするが…
「おかえりネ」
私たちの気配に気付いたようで、瞑想の姿勢をしたまま口を開いた。
「さっき、学校から指令が下ったネ。学炎祭を仕掛けろとの話ネ。まずは蛇女あたりを狙うのはどうネ？」
「わかりました」
悪忍の殲滅が私たちの悲願だ。蛇女子学園はかつて半蔵学院と雄英高校によって敗れたものの、復活したそうだ。
ならば学炎祭はもってこいの機会と言える。みんなも一様に頷いていた。
これで正々堂々と悪忍と戦える。そう思ったときにある考えが閃

いた。
学炎祭ならば善忍同士で戦うことも出来るのではないか。
「先生、半蔵学院に学炎祭を仕掛けることは可能ですか？」
王牌は少し驚いた顔をすると、なにやら考え始めたように目を閉じた。
「先生、宜しくお願いします！」
私の声に反応するように、王牌はカッと目を見開いた。
「生ぬるい関係だけでは忍の道は極められないネ！」
「それでは…？」
「善忍同士での競い合うのも、学炎祭ならば問題ないネ！思い切りやると良いネ！」
私は大きく頷いて答えた。
「まずは半蔵学院から…みなさん、やりましょう！」
「「「おーっ！」」」
気合いの入った声で皆んなの気持ちが一つになる。
半蔵よ。
お望み通りに孫の飛鳥は完膚なきまでに倒してやる。
そしてその次はお前の首だ。
いちご大福の恨みは海より深いと思い知れ。
光あるところに影があり。
影あるところに光がある。
陽と陰、善と悪、光と影、その均衡こそがこの世を保つ絶対の理。
忍として生きるのならば、その理から外れてはならない。
しかし、と私は思う。
果たして本当にそうなのだろうか？と。
悪は善を侵食し、善は簡単に悪に染まる。しかも自分勝手の悪たちのせいで多くの尊い命が犠牲にされてきた。
善と悪の均衡などという言葉は、とっくの昔にそれを都合よく思う者たちの戯言と化してるのではないか？
その証拠に、私は見たことがない。
悪が善に変わる様も、闇の中に光を見たことも。

これより始まる物語は、私たちの証明の物語。光と善の世界を証明するために命を懸けて刃を振るう。
だから、悪は許さない、許して良い存在ではない。
そして、願いは一つ。
戦いの果てに皆んなが再び笑えるように…。

それが今回、半蔵学院へ学炎祭を仕掛ける原因だったのだ。
しかし今の飛鳥たちには、この事はまだ知る由もない……

「全員を紹介した所で、私たちは今ここに…
『学炎祭』の開催を宣言します！」
そして現在。彼女たちは今、そう宣言した。
しかし…
学炎祭？それは一体なんだろう？初めて聞いた。学園祭ではないことは確かだろう…
「学炎祭？学園祭じゃないよね？それってなんなの？」
「詳細は教師に聞くと良いでしょう…」
学炎祭が何なのか分からない飛鳥たちに、呆れて目を細める雪泉は冷たい反応をとる。
「7日後、私たちは再び此方に訪れます。それが祭の始まりです…
…では」
そう言うと、彼女たちは消えてしまった。
「7日後…即ち一週間後…」
「なあ斑鳩、学炎祭ってなんだ？詳しく知らないのか？ほら、斑鳩こういう学校行事とか歴史とか得意だろ？」
「そ、そうですけど…！聞いたことがありません！……取り敢えずこのことを霧夜先生に報告した方が良いでしょう…」

葛城はもしかしたら斑鳩なら知ってるかと思って聞いてみたが、あの斑鳩でさえ知らないようだ…
彼女たちは心に不安な気持ちを抱きながら学校へ戻って行った…

「学炎祭を申し込まれた訳か、それも同じ善忍である月閃にか…」
事情を知った霧夜は、飛鳥たちを見やると大きくため息をついた。それも何か良からぬような…
「はい…あの霧夜先生、学炎祭って何ですか？」
「学炎祭というのは忍学校に代々伝わる、学校対抗の決戦のことだ。まあ簡単に言えば他校と戦う…と言った方が妥当か。
正式認定された忍学生たちが戦う決闘祭であり、攻守に分かれ攻撃側の学校が守備側の選抜メンバーを倒した場合、敗北となり、負けた校舎には火が放たれ廃校に追い込まれることになる」
「半蔵学院が廃校……一般生徒も居るんですよ？本当に可能なんですか？」
「ああ、忍のルールとならば関係ない…この世の超人社会、なんでも全てが表だけで出来ている訳ではない、時に裏のルールによって今の社会は影響を受けている事だってあるんだ、分かるな？廃校になった場合、二度と忍の資格習得が不可能になる、勿論その場で忍は失格となる」
「え…？そ、そんな……」
学炎祭にそんな意味があったとは…意味を知った飛鳥は言葉を失った。なんて言葉を出せば良いのかすらわからなかった…
「なんなのそのお祭り…そんなのお祭りでもなんでもないよ…まだ体育祭の方がずっとマシだよ…」
ここで雲雀はしょんぼりとした様子で落ち込む。それは無理もない、だってそんなの聞いたことがないのだから…学炎祭、その名の通

りまさに炎上する祭りだ。
「しかし、学炎祭なんて初めて聞きましたよ？」
「それは無理もない、何故なら前回学炎祭が行われたのは５０年前のことだからな、お前たちが知らないのも当然無理はない」
「５０年前…まじかよ、そんなに昔から…でもなんで月閃の奴ら、アタイらを狙うんだ？」
「葛城、お前のセクハラで何かやらかしたんじゃないのか？」
「おい柳生！いくらセクハラが大好きなアタイでもそれはないぜ！」
半蔵学院が狙われた意味が分からない葛城は、柳生に一言言われるものの、セクハラはやってないと主張する葛城。まあ流石の葛城もそれはないだろう…
「でも待って下さい！葛姉の言う通り私たち何もしてませんよ!?狙われる意味がわかりませんし、何よりなんでそんな決戦が存在するんですか!?私は学校同士で潰し合う意味がわかりませんし、あったとしても納得がいきません…潰すなんてそんな…」
正義感が強い飛鳥にとって、全てが分からなかった…忍としてまだまだだし知識もそれほどと言う訳でもないが、学炎祭の意味だけどうしても納得が出来ない。
競うのは良し、戦うのも納得がいく、しかし幾ら何でも潰す事はないだろう。
「…飛鳥よ、忍の頂点『カグラ』は知ってるか？」
「カグラ…？」
その言葉に、飛鳥は目を丸くした。その名前を聞くだけで不思議な感覚がする。
「学炎祭はカグラを養成するために考案されたものだと言われている…因みに現在カグラは数少ない、今でも何人いるかは分からない位だ…」
「なるほど…それは分かりました。ですが月閃の人たちはカグラになることが目的って訳ではなさそうだったけど…」
「そうだな、それについては俺もよく分からん…狙われる理由も分からない…同じ善忍を養成する半蔵に学炎祭を仕掛けてくる理由はな

い、つまり…」
「何か裏がある…と言う事でしょうか？」
「ああ、その通りだ斑鳩」
　どちらにせよ、学炎祭を申し込まれた以上断る事は不可能。勝負は絶対、学校を守るためには戦うしか道はないのだ。
「斑鳩、葛城。今は最終試験のことは忘れて、月閃を迎え撃ってくれ。そして飛鳥、柳生、雲雀も雄英高校のことは一時期休止だ。事情は俺から話す、お前たちも学炎祭に集中するんだ」
「「はい！」」
「分かりました」
「だよな、アタイら忍になれくなっちまうんじゃ、最終試験もクソもないもんな…受けて立つぜ…！」
「では、話は以上だ」
　そう言うと霧夜先生は消えていった。
　学炎祭、未だに勝負を仕掛けられた理由は未だに分からないが、斑鳩の言う通り確かに裏がある。でなければ学炎祭を仕掛けられるのは明らかにおかしいからだ。何かしらの恨みを買われたのなら話は別だが…
　五人は不安な気持ちを抑え込みながらも、学炎祭に向けて修行に励むことになった。
「それにしても学炎祭か…なんか不思議だよ…昨日体育祭があったのに、今度はこっちが戦う番だなんて、また戦いが始まるんだね…」
　言われてみれば確かにそうだ…
　昨日は雄英体育祭が終わり、雲雀と話してた時にこういった勝負がしたかったとは言ったものの、この展開は想定外だ。
　それに昨日と言い今日と言い…どうなってるんだか。
「大丈夫だよ皆んな！私たちだって強くなってるもん！敵の襲撃、焔ちゃんたち蛇女の戦いだって、私たち勝ってきたじゃん！」
　飛鳥はなんとか自信を作るものの…
「それはあくまでアイツらが居たからだろ？この戦いは忍との戦い、ヒーロー科の助力は無しだぞ？」

「あっ…」
柳生に一言言われれ、絶句する。確かに言われてみればそうだ。いつも戦うときは大体ヒーロー科の彼らと一緒に戦う。それも異常事態な時…
「で、でも…今の私たちならなんとか乗り越えれるよきっと！」
乗り越えられる…ではない、乗り越えなければならない。
学校の存亡だけでなく、忍としての命運も掛かっている、双方は絶対に負けられない。
そう、これから始まるは少女たちの証明。
太陽の光を持つ正義と、月の光を持つ正義との戦いなのである。

そして一日が過ぎた二日目、雄英高校1年A組の彼らは、相澤先生から学炎祭の話を聞かされた。
「負ければ半蔵学院廃校!?!飛鳥たちは学炎祭に参加し暫く此処にはいない!??」
「まあぶっちゃけ単刀直入に言うとそうなるな、しかも負ければ廃校だけでなく忍の資格取得は不可能になる、つまりアイツらは今学校の存亡だけでなく、忍の道にまで命運が掛かってるんだ」
「まじかよ…なんだそりゃあ…」
「勝っても負けても廃校になった奴らは炎上した後、灰のごとくこの先も真っ暗になるんだろうな……」
「バカ上鳴、あんまそう言うの言わないでよ…」
今置かれてる学炎祭の詳細を知ったクラスの皆んなは、朝からテンションが一気に下がった…まあ無理もない、クラスの仲間がこんな状況に置かれてるんだ、心配しない方が可笑しい。
「誰だよ学炎祭なんか仕掛けたやつ！学校の潰し合い…こんなのアリ

かよ…！」
「落ち着け切島…気持ちは分かるが、今回ばかりは俺たちが出ていい問題じゃない」
「そりゃ、分かってるけどよ…」
　思わず興奮し熱くなる切島に、障子が止める。ここで飯田が手を挙げ質問をする。
「先生！因みに学炎祭を仕掛けた学校はなんと言う学校なのでしょうか!?」
「死塾月閃女学館だ」
「え、女学館？女だけの学校？ヤベェ蛇女だけでなく宝は、秘宝はまだあった!!つまりおっぱいハーレムの誕生がああぁぁぁぁぁ!!」
「おい峰田、今真剣な話をしてるんだが？」
「すいません、涎が止まらなくて…」
「ソレを言ってるんじゃない」
　ただ一人だけ、可笑しい人物、いや…変態は居た。それも全ての女性に対する天敵、峰田実。
　滝のように涎が流れてる峰田は、腕でなんとか拭くものの、止まらない。汚ねえ…
　もはや突っ込みすらも無駄だと知った相澤は呆れて何も言えず、深い溜息をついた。
「まあ以上だ…学炎祭は一週間後、アイツらが勝てば今度は仕掛けた向こう側に攻める。そして勝てばアイツらも晴れて忍の道も学校も存続する訳だ」
「でも、負けた月閃の彼女たちは…」
「まあ当然、永遠に忍の資格取得が不可能となるな…だが仕掛けてきたのはそっちだ、勝つことに専念するしかない、お前たちは観る事だけは出来るそうだ…そこは自由、ただ参加は無理だからな？」
　学炎祭、今回も派手な戦いになりそうだ、忍側だが…
　学炎祭、つまり雄英体育祭のようなビッグイベントなのだろう、忍側にとって…
「話は以上だ、あぁそうそう言い忘れてたが…お前たちの指名は思っ

たよりかなりの数が多くてな、まだ整理できてないんだ…指名はまだこれから先になりそうだが…悪いな。では話は以上だ、お前ら通常授業の用意しとけ」
そう言うと相澤先生は教室から出て行き姿を消した。
そして教室では重たい空気と共に、気不味い沈黙が続いた…

職員室では…
「むむぅ…まさか雄英体育祭の次に今度は学炎祭かぁ……しかも相手は死塾月閃女学館…！」
机の上で資料を見つめるガリガリ姿のオールマイト。何故忍である彼女たちの資料を持ってるのかが唯一疑問に思うが…
「分かってはいたが、まさかもう申し込んでくるとは…！半蔵学院の諸君たち、今回の戦いは蛇女子学園とはワケが違うぞ…！ましてや相手が雪泉くんとなるとね…」
ゴクリと固唾を飲み込み、冷や汗をかく…そこまでして何故気不味いのか？それは本人しか分からない…
「となると、半蔵くんはもう動き出したと言うことか…！」
それなら、私も動かなければなるまい…

放課後…
いつも通りの授業が終わり、皆んなは荷物を持ち帰る準備をしている。
「飛鳥さんたち…大変だなぁ…」

夕焼けの光が差す窓越しで、ポツリとそう呟いた。
もし自分が同じ立場だったら…と考えると胸が痛くなる。
憧れてやっとヒーローになるチャンスを得られたのに、負けたからヒーローへの資格取得は不可能になる、と言ってるようなものなのだから…
半蔵学院は今そんな状況に陥り、そんな境遇にいるのだ。
そんなことを考えていると…
「緑谷?大丈夫か…?」
「ん?え?　あっ…!轟くん!?」
荷物を肩に背負ってる轟が近くにいた。ずっとボ〜っとしてたので分からなかった。
「いつからそこに?」
「いや、ついさっき来たばっかだ…お前が死んだ魚のような目をしてたから、心配で声かけたんだ」
「死んだ魚のような目て…!!」
轟くんからそんな言葉を掛けられるなんて意外だな…
「そ、それで…?轟くんどうかしたの?」
「ああ、飛鳥たちのことなんだけどさ、学炎祭の話は勿論覚えてるよな?」
「……うん」
轟の言葉に頷く緑谷。ぶっちゃけ学炎祭で彼女たちが死ぬとは思えないし、飛鳥たちも十分強いから大丈夫だとは思う。
そう、そう思いたいのだが…不安なのだ。何か良からぬ気配がするから…
「轟くんはどう思う?学炎祭って言うの…」
「そうだな……
話による」
「っ!!間違っちゃあいないけど…!」
数秒間が差し、答えた轟に緑谷は間違ってこそはいないけどなんか微妙だと思う。しかし轟にはその訳があった。
「だってそうだろ、先生はその理由については一切言ってないわけだ。

つまり俺たちには知る必要がないか、あるいは先生自体分からねえって訳だろ？相手が飛鳥たちに何かを思うことがあるんだったら、それなりにアイツらと向き合わなければならねえし、それに見合う覚悟が必要だと俺は思う。相手がタダ単に潰したいという目的であれば、学炎祭を装った敵（ヴィラン）の行為と何ら変わらねえよ…」

驚いた、まさかそこまで考えていたとは。そりゃあ轟の言ってることに納得がいくし、賛成できる。相手の目的が分からない以上嫌でも戦うしかないし、相手が何かをおもうのだったらそれなりに向き合う覚悟が要る。

（轟くん…そんなことまで考えてたんだ……前ならそんなこと言わなかったのに……ううん、考えなかったのに……）

よく見ると轟の顔は以前より何処か変わっている。まるで吹っ切れた？のかのように、でも冷静でクールな所は変わりはない。まあそういう所が彼らしいのだが…

「そういう緑谷は？」

「…うん、正直心配…相手がどんな人でどれ程の実力を持ってるのか分からないし……飛鳥さんたちなら負けないと思うけれど…でも向こうが勝つことだってあるかもしれないし…そう考えると不安で仕方ないよ…だって飛鳥さんたちが忍になれなくなるなんて…僕らで言うヒーローになれなくなるみたいなもんだよ…」

「まあ、そりゃあそうだな…」

緑谷の言葉に同意した轟…

そういえば轟くんとこうして話すなんて珍しいな、初めてかな？こうして普通に話すのは、前に話したのは体育祭の時以来だ。

「緑谷、お前はどうする？」

「え？なにを？」

「学炎祭…観に行くか？」

「!?」

緑谷は思わず声を上げることなく驚き、座ってた席に立ち上がり背中を窓にぶつける。背中に衝撃が走り少し痛い。

「オイ大丈夫か？俺なんか変なこと言ったか？」

「へ、へへ変じゃないけど！でも轟くんからそんなこと言うなんて思ってもなくて……でも何で急にそんな……」
体育祭の時までの轟からは考えられなかった。今まで父親を完全否定することしか考えてなかった轟が、初めて他の人を心配し、深くかんがえたりなどと…
その顔に迷いはない、確かに変わった。しかし轟の何を変えたのかは分からない。体育祭の後、一体何があったのか…
「緑谷と同じく心配だってのもそうだが、相手がどんな奴等なのかも見たいし、飛鳥たちが俺たちの体育祭を観てくれたように、俺たちもアイツらの戦いを観るべきだと思うから…」
「轟くん…」
言われてみれば、飛鳥さんたちだって一生懸命応援してた。色んな競技で頭の中が精一杯だったとはいえ、応援の声があったのは聞こえてたし、とても嬉しかった。そもそも僕自身応援されるなんて、お母さんとオールマイトだけだっから、尚更嬉しい。
「そうだよね…僕も同じだよ…」
それに何より気掛かりなのは死塾月閃女学館だ、何を目的に半蔵学院に学炎祭を仕掛けたのかは分からないが、少なくとも学炎祭の意味が分かってて仕掛けて来たんだろう、それは間違いないはず。
だからせめて理由を聞きたい、会って話をしたいとも思っている。
それに例え目的があるとはいえ、何も潰す事はないだろ。ましてや同じ善忍が競い争う必要なんてないと僕は思う。
そう緑谷は思った。
「うん、僕も行くよ…！でも僕ら二人だけじゃ…」
「他は誘えば良いだろ…爆豪なんかは来るんじゃねえか？」
「え？あのかっちゃんが!?なんでまた…？」
ここで爆豪の名前が出たことに驚く緑谷、それに体育祭の最後、表彰台でブチ切れてたのに、よく誘えるなと内心思っていた。
「体育祭の時、アイツ蛇女の焔とかってヤツの真似してたろ？つまりアイツは最初っから体育祭で勝つために、蛇女に乗り込んだんだろ？」

「あながち間違っちゃいないけど…でもぶっ飛ばすって言ってたのも本音だと思う……でも大体かっちゃんは…」
「俺が何だって…？」
「えっ…？」
　轟と緑谷が話してたその時、後ろからドスの利いた声が緑谷の背筋を凍らせた。後ろをおそる恐る振り向くと、そこには眉間に皺を寄せ、目は真っ白になっており、怒りで顔が歪んでいる、噂の爆豪勝己が立っていた。
「うわぁっ!!?か、かっちゃんどうして!?帰ったんじゃ…」
「忘れ物取りに来たんだよ、したら何だ？教室に戻って来て見れば、俺がいないところでペラペラと俺の話で駄弁りやがって…クソナードがあぁぁ!!」
　不快だったのか、それともバカにされたと勘違いしてるのか、顔を更に歪ませ怒りを爆発すると共に掌を爆破させる。
　そんな爆豪にビビり体を震わせ縮こませる緑谷は、つい咄嗟に目を瞑り、両腕を交差させ身を守ろうとする。
「落ち着け爆豪、別にお前が怒る必要なんてないだろ、今は学炎祭の話をしてたんだ」
「あぁ!?舐めプ野郎が……偉そうに…」
　轟が止めに入ると爆豪は見つめて軽く舌打ちをした。体育祭でのことはムカつく余り、あんまり思い出さないようにとするものの、本人が目の前にいる為血管がブチブチと切れていく。
「あっ、そうだ爆豪…今思ったんだが丁度良かった。お前、学炎祭どうする？」
「はぁ!?んだよ急に!?」
「お前なら来るんじゃねえかと思ってな、緑谷と話してて誘おうと思ってたんだ」
「ああ？……へぇ～…そう言う事かよ」
　全てを理解したのか、爆豪はなんとか落ち着き、己の怒りを鎮めさせる。
　すると数秒黙り込んだ後、「ケッ…」と吐き捨て、机の中のプリント

を取り鞄の中に入れて帰ろうとする。
「ま、待ってよ！まだ答えが…」
「別に、どうもしねえよ…」
「え？」
　意外な答えなのか、思わずポカンと口を開いたまま、爆豪を見つめる。
「俺たちが参加できねえなら、大人しくするしかねえだろ」
　そう言うと早足で向かい、扉を思いっきり閉めて行った。
「……行っちゃったね」
「爆豪なら来ると思ってたんだがな…仕方ねえ、他のやつら誘うか」
「…！うん！」
　緑谷と轟は仕方ないと思いながらも、他の人たちを誘うことに決めた。

　去って行った爆豪は、一人校門をくぐり家の方に向かって帰って行く。
「……チッ、前までクソナードだけでイライラしてたのに…今度は舐めプ野郎にまでムカついて来やがった…」
　体育祭の時以降、爆豪は轟のことが嫌いになったのだ。轟本人は気にしてないし、まず嫌われてることに気が付いてないから良しとするものの…
「ケロっとしたところがムカつく」

そう呟いた時だった。
「随分と荒れてるね爆豪くん」
「!?」
突然女性の声がしたので振り返ってみると、そこには
「んだテメェ麗日かクソが!!」
「うん、うららかな麗日だよ」
「上手くねえからな?」
爆豪の跡をついて来た麗日だった。
「んで?俺になんの用だ?どーせ学炎祭のこととかか?」
「おお正解!どうして分かったの!?」
「普通に分かるわ」
麗日の驚いた様子に呆れてため息をつく爆豪。
「意外だなぁ、爆豪くん考えるより体動かすの得意そうだからさ」
「オイどう意味だゴラァ」
悪気があった訳ではないが、つい本音を言ってしまった麗日に、爆豪はキレ気味になる。
「でもどうして学炎祭に行かないのかな〜って思って、緑谷くんたちの話を聞いてて思った」
「あん時居たのかお前、てかそれなら別に俺が答えても驚く必要ねえだろ」
「いやぁ、まさか私が話しかけて直ぐに学炎祭のことに結びつくとは思わなくてね、心読み取れたの!?エスパーかな!?と思っちゃって、それでどうして学炎祭観に行かないの?」
どうやらあの時お茶子も教室にいたらしく、そこで爆豪が去って行くのを見て、どうして学炎祭を観に行かないのか疑問に思い跡を付けてきたそうだ。
「あ?別に…気分だよ気分!アイツらが負けるなんざ思ってねえからだ、仮に負けたとしたらアイツらはそこまでだったって訳だ…」
「うーわ、相澤先生並みにキツイねえ爆豪くん」
「もう話は良いか?」
これ以上話すのが面倒くさいと感じた爆豪は、早目に話を切り上げ

たいと思っているのだろう。そこで麗日は「あー待ってよ！」と帰ろうとする爆豪を止める。
「でも意外やなぁ、爆豪くんだったら絶対観にくると思ってたのに、爆豪くんらしくもない…」
「は？俺らしくもねえ？」
お茶子の指摘に内心訳がわからないと思う爆豪。お茶子は真剣な眼差しを向けてくる。
「そうだよ、飛鳥ちゃんたちだってもう立派な仲間なんだよ？
爆豪くん、私と戦った時なんかはとてもカッコよくて、雲雀ちゃんが悪い忍達に利用されて捕まった時なんかも、爆豪くんは爆豪くんなりの想いがあって、答えがあって、敵地に乗り込もうとしてて、本当にカッコよかったのに…それなのに、
飛鳥ちゃん達の戦いを観ようともしないなんて、爆豪君らしくないなってさ…折角私たちの体育祭を観に来て応援してくれてたんだよ？なのに爆豪くん、そんなんで良いの？」
「…っ」
意外なことに、麗日の真剣な言葉に爆豪は言葉を詰まらせる。
お茶子の言葉に納得せざるを得なかった、それにその言葉は、爆豪のことを思ってのことだろう。
負けるとは思ってない、それは彼女達を信じてるから。それは良いことだ。
でも、だからって観に行かない理由にはならない。
それどころか、仲間として、自分たちの試合をちゃんと観てくれた彼女達に対して、寧ろちゃんと応援してあげるべきなのでは？
爆豪は暫く黙ってから…
「んっ…」
「ん？」
「んだコラてめえぇエエエエエエエエ!!」
「えええ!?!!」
ここでまさかの突然、爆豪はブチ切れた。そして予想外な反応だったことにお茶子は驚いた。

「麗日テメエええええ!!」
「なんでええええええ!!??」
お茶子の生物的本能が「逃げろ」と言ってるため、慌てて家に向かって帰って行く。
「ハァーッ!ハァーッ!んのクソがぁ!」
まだ怒りが奮発して落ち着かないのか、息遣いが荒く、顔がいつになく厳つくなっている。

家に向かって帰っているお茶子は…
「う〜ん…まさか怒るとはなぁ…逆効果だったんかなぁ?あかん、思ったことつい口に出してしまった…」
お茶子は「しまった!」と悔いて、家に向かって帰って行くのであった。

「……」
一方爆豪は、お茶子に言われたことが相当効いたのか、まだ怒りを露わにしている。
「麗日の野郎ダメだ!!クソが…!」
怒りを分散されてしまった爆豪、しかし…
『爆豪くんらしくもない…』
(……学炎祭……か)
お茶子の言葉を思い出し、少しだけ学炎祭に興味を持った爆豪なのであった。

そして日にちが経ち、７日後…
「とうとうこの日がやって来たなぁ～…」
半蔵学院で、黒い髪を束ね、赤いスカーフを首に巻いてる飛鳥はそう呟いた。この時間だとそろそろ来る頃だろうと思う飛鳥は上を向いて空を眺める。
「一流の忍になる為にも…負けられないな」
何より半蔵の孫、伝説の忍、半蔵の汚名になり兼ねない。
「じっちゃんの為にも…そして…」
雄英高校で出来た仲間達の為にも…
「お～い飛鳥ぁ!!」
声をする方に振り向くと、そこには…
「あっ！皆んな来てくれたんだね！」
そこには雄英の生徒たち。誰もいない校門をくぐり、「やっほー！」と手を振る。
「連絡通り、本当に来てくれるなんて嬉しいなぁ～！」
「当然っしょ！俺は女には優しいのさ！」
「連絡してないアンタが言うな」
ここで早速上鳴が決めポーズで答えるものの、耳郎のツッコミが入る。
「飛鳥さん…！」
「あっ、緑谷くんに轟くん…この前はありがとね」
どうやら緑谷と轟が連絡してくれたらしく、飛鳥は二人に感謝する。
「う、ううん！別にそんな…！飛鳥さん達だって僕らの大会観に来てくれたんだし…当然だよ。だから僕たちからも言うね？学炎祭、頑張ってね！応援してるよ!!」
恥ずかしいのか、若干顔が少し赤くなりながらも、それでもなんとか言葉を伝える事が出来た緑谷。そんな彼の言葉や、皆んなの気持ちが嬉しくなり…

「緑谷くん…皆んなぁ……凄く嬉しいよ！ありがとう!!」
　いつになく久しい、いつもと変わらぬ満面な笑みを浮かべた。
「う、うおぉ…飛鳥…さ…」
「テメェ何一人で満足してんだゴラァ！そこは本来オイラのポジションなんだぞ！」
「いやポジションなんてねーよ」
　嬉しい気持ちでいっぱいになる緑谷に、峰田はブチ切れるものの、瀬呂のツッコミによって受け流された。
「月閃の奴らはまだなのか？」
「あっ、轟くん。うん…」
　姿が見受けられない、となるとまだ来てないようだ。
「アレ？轟くん、爆豪くんは？」
　そんな皆んなを見つめてる中、一人だけ、爆豪がいないことに気がついた飛鳥は轟に聞いてみるが、轟は首を横に振った。
「誘ったんよ！誘ったんやけど…爆豪くん来てくれなかったんよ……ゴメンね飛鳥ちゃん、皆んなの気持ちとか言って、一人だけ来てなくて…」
「そっかぁ～…」
　爆豪が来てくれなかったことに少しだけ残念だと思う飛鳥。
「学炎祭はまだかよ？チッ、クソが…」
「「!?」」
　しかし…
「あ、アレって！」
　来ないと思ってた人物が一人、校門をくぐり皆んなの方へやって来る。
「かっちゃん!?」
「「爆豪（くん）（さん）!?!」」
　そう、来るとは思ってなかった奴が、爆豪勝己が、遅れてやって来た。
「爆豪くん来てくれたの!?」
「テメェら全員うるっせえんだよクソが!!俺が来ちゃいけねえのかよ

！」
　飛鳥は残念な気持ちが反転し、嬉しい気持ちになる。皆んなが驚いた様子でいることに爆豪は相変わらず怒りだす。
「いやいやいや、爆豪あんなこと言ってたもんだからてっきり、なあ？」
「反則だよバクゴーくん！ヒーローは遅れてやって来るって言うけどさぁ、これは驚いたよ！主人公感ＭＡＸ過ぎるしぃ～！」
　瀬呂は今でも信じられないと言う顔で爆豪を見て、芦戸はブーブーとブーイングする。
「爆豪くん…」
　来てくれるとは思っても無かった。校門で話したっきり、諦めてたが、結局来てくれたことに内心嬉しく思うお茶子であった。
「あら、やはり皆さんも来てくれたのですね」
「おっ、応援するのは今度はお前たちの番って訳かい？こりゃあ頼もしいねぇ！」
「あ～！皆んな来てくれてるよ！ねえ、柳生ちゃん！」
「そうだな……」
　他にも、飛鳥の後ろから歩いて来て現れたのは、斑鳩、葛城、雲雀、柳生だった。
「お、皆んな久しぶりだなぁ～！」
　とここで切島が呟いた。すると爆豪は切島の横を通り過ぎ、飛鳥に話しだす。
「おい、飛鳥」
「ん？えっ、なに？どうしたの爆豪くん？」
　突然呼ばれたことに内心驚くものの、なんとか態度には出さないようにと、冷や汗を垂らす飛鳥は爆豪を見つめる。
「テメェらが負けるなんて心底思ってねえ、正直ぶっちゃけ言えば学炎祭で学校の潰し合いなんてどーでもいいんだよ…」
「は、はぁ…」
「まあけど、テメェらが体育祭で応援してくれてたんだ…借りを作るのは俺には性に合わねえ、だから…学炎祭、テメェらのちゃんと観て

てやるよ」
「！」
　爆豪は少し視線を逸らして、飛鳥にそう言った。正直言われた本人は驚いている。爆豪の口からそんな言葉が出るなんて思っても無かったし、想像もできなかった。
「だからよ、その……
　負けたら殺すからな!!」
（…えっ？殺す？）
　一瞬その場にいる皆んな誰もがそう思った。特に目の前にいる飛鳥なんかは目をまん丸にして気を取られてる。
　爆豪はそう言うと、後ろを振り向き緑谷にドン！と肩をぶつける。
　でもそこが彼らしい。
「ま、まあ兎に角、頑張れ！」
　と、ここで皆んなの代わりに切島がぎこちない笑顔でそう言う。
「あ、ありがと……
　ん？この気配…」
　瞬間、飛鳥は何者かの気配を感じ取り、校門を見やるとそこには…
「この気配は間違いない…雪泉ちゃん！」
「え？詠ちゃん？」
「アホ」
　飛鳥は警戒態勢を取るものの、峰田は聞き間違いをし、そこへ耳郎がツッコミを入れる。
　校門からはただならぬ冷気を感じる。
「冷たい…轟くんの仕業か？」
「いや、俺じゃねえよ委員長」
　最初は轟の冷気かと思ったものの違うと轟は首を横に振る。皆んなは知らないから無理もないが、そう…この気配、飛鳥たち五人だけが知っている。
　月閃の気配。
　そして…
「何故雄英の生徒たちが此処に？まあいいでしょう……」

五人の姿が現れた。
「半蔵学院の皆様、どうやら全員いますね」
「うん！やっぱり来たね…雪泉ちゃん！」
死塾月閃女学館の選抜リーダー、雪泉が前に立ち、国立半蔵学院の選抜リーダー、飛鳥も前に立つ。
お互い二人のリーダーが前に立つ。
（うわあ可愛い、白い肌で凄く美しいなぁ～）
ほわぁ～っと頬を少しだけ赤らめ尊敬の眼差しを向けるお茶子。
（なるほど、アレが月閃か！）
これが月閃だと見つめるクラス委員長、飯田。
（あの人……なんだこの感覚……）
雪泉を見て何かを感じる轟。
（これが月閃の輩共か？何人か忍に見えそうにねえ奴らが居るぞ…？）
雪泉だけでなく、他のメンバーを見やる爆豪。
（これが……死塾月閃女学館の忍達！……！飛鳥さんたちと同じ善忍！）
冷や汗を垂らし、ただならぬ気配を感じる緑谷は、雪泉たちをジッと見つめる。
これにて、半蔵学院と月閃女学館の戦いが今、始まる!!

49話「亀裂」

学炎祭が始まる前の日のこと、緑谷と轟は学炎祭について話があるため、半蔵学院に向かって飛鳥と会い話をした。
「ええ!?学炎祭見に来てくれるの!?」
「う、うん…相澤先生が観に行くだけなら良いって言ってた…」
「戦うことは論外だがな…」
そう言うと飛鳥は嬉しいのか、頬が少し赤くなり、二人にペコペコと頭を下げた。緑谷からは「半蔵学院の皆んなも観に来てくれたんだし、頭下げなくても良いよ」と飛鳥の頭を上げさせる。
「しかし、同じ善忍だってのに…向こうが仕掛けてくるとはな…お前ら何かしたのか?」
「してないよ!初めて会う忍学生たちに急に学炎祭申し込まれたんだよ?」
「な、なんかかっちゃん並みの理不尽な人達だね…?」
飛鳥はぷんすかと頬を膨らませてそう言い、二人は相手が一体どんな人達なのかと、想像するものの浮かんで来なかった。
「まあよく分かんねえが…取り敢えず学炎祭は観に行くってことだけ伝えに来た。他はどうすることも出来ねえ…」
「うん…これ以上問題起こしたら今度こそ相澤先生に除籍処分にされるからね…」
二人は帰る支度をしながらそう言った。今回は連絡をしただけで、特にこれといったものは無かった。緑谷が先に行き、轟も跡を付いてくように帰ろうとすると…
「あ!ねえ轟くん!」
「?」
ふと飛鳥は轟を呼び止めた。そのことに轟は後ろを振り向く。
「どうした飛鳥?」
「……なんか、様子変わったね?」
「そうか…?そういや緑谷にも同じこと言われたな…」
轟はポカンとした様子で自分の髪をくしゃくしゃする。確かに変

わったものの、一目見てそんなに変わるものなのか?と、疑問を抱く。
「うん…前までさ、ホラ…父親を完全否定するって言ってたし…あっ!悪い気起こさないでね!?それで…他の人たちは何にも見てなかったし…」
「…まあ、そうだな…」
飛鳥の言葉に納得した轟は、こくりと頷いた。少しだけ父親に対する怒りは篭ってるものの、体育祭に見せたソレとは違った。そして自分の手に目をやる。飛鳥はそんな轟に、真剣な目で見つめている。
「体育祭…緑谷の戦い以降でさ、自分は本当にどうなりたいのか…どんな人になりたいのか…どんなヒーローを目指したいのか…とかさ、色々悩んだり、あと母さんの事とかでいっぱい悩んだりした……俺は今のやり方で本当に良いのか…それが1番だった…」
「…うん、でも…今は?」
「そうだな……今はもう…迷いはない……やれること、やりたいこと…色んなこと見つけれた……緑谷もそうだけど…これに気づけたのもお前のおかげだ…」
「わ、私…!?」
自分のお陰、自分に当てられたことに驚く飛鳥と構わず、轟は話を続ける。
「あの時さ、お前…やるなら全力で掛かってきてって言ってくれただろ?あの言葉、前の俺だったら怒ってたけどさ……今だと、なんかありがとうって思えるんだよ…だからさ、改めて…飛鳥、ありがとな」
「轟…くん…」
轟の感謝の気持ちに、飛鳥は面食らった。前までの轟なら絶対にあり得なかった。しかし今の轟は、以前とは違う、別人になったかのようだ。
父親への憎しみを乗り越えた轟に、飛鳥はホッとして、心が安らぐように安心した。
「いいえ、どう致しまして…♪」
そして、飛鳥は満面な笑みを浮かべて、轟にピースサインを送った。

現在

「初めまして雄英生徒の諸君達…そして、半蔵学院の皆様、学炎祭の覚悟は出来てますね…？」

雪泉はこの場にいる雄英生徒の皆んなと、飛鳥たち半蔵学院の忍生徒を見やる。

「勿論だよ雪泉ちゃん…！」

「ほぇ～…アレが噂に聞く月閃かぁ……こりゃまた個性的な生徒たちだなぁ…」

飛鳥は気合を入れ、遠くにいた切島は月閃の人たちを見つめている。

「学炎祭の前に一つ…いえ、二つお聞きしたいことがあります…」

「二つ？何のことか分かんないけど…うん！良いよ！その代わり私達にも聞きたいことあるからね…！お先にどーぞ！」

飛鳥は何を気になるのか分からないが、先に雪泉たちの質問に答えてあげようと思ったのだ。

「では早速…まず一つめ…

何故、彼ら雄英生が此処に居るのでしょうか？」

雪泉は、冷たい目線で、半蔵学院から雄英生に目線を移す。

「は～い！それはオイラたちは月閃の皆がどんな美女たちで、どんなおっぱいをしてるのか…」

「アンタは黙ってて、話ややこしくなるから」
「グフッ!?爆音がぁ!!!」
　峰田は頬を赤くしながらセクハラ発言をすると、耳郎が個性を使って峰田の耳に爆音を流した。そして耳がキーンと来てるのか、耳を抑えながらうずくまっている。
「そりゃ、まあ…半蔵の皆んな俺たちの雄英体育祭見に来てくれたんだし…それに俺たちも忍学生同士の戦いを観てみたいし…」
　ここで上鳴が、この状況に冷や汗を流しながら主張する。
「てかてか、雄英の人たちが此処に来てるとか、チョ～ウケる～！あっ、初めまして～♪私は四季って言うんだ～、宜しく～♪」
「うわぁ！何だギャルっぽい！ビックリしたぁ…」
　突然金髪ギャルの四季が、ケータイでパシャパシャと雄英生の写真を撮りながら話しかけ、気配を感じなかった上鳴は四季に驚く。
「上鳴ちんだっけ？チョ～驚いてるじゃん、マジでウケるんだけど～♪私の友達のサチエも驚く時こんな感じなんだよね～」
「ちん!?!てか何で俺の名前知ってんのこの人!?俺知らねえのに！てかサチエって誰ですかぁぁ!?」
「落ち着きなよ上鳴、私達体育祭でテレビとかで放送されてるか、多分その時に名前知ったんだと思うよ？じゃなきゃ知らないし」
　驚き慌てふためいてる上鳴に、耳郎は落ち着かせる。耳郎の言う通り、今の雄英一年生はとても有名だ。外では有名人のように声をかけられ、中でも聞いた話、瀬呂なんかは小さい子供達からドンマイコールされたらしい…瀬呂ちゃんドンマイ。

「……」
「ん？」
　轟はジッと自分を見つめている般若のお面の人に気づき、首をかしげる。
（なんだあの人、俺を見つめてるよな…てかお面？スゲェ懐かしい気分だな…いや、気のせいか…？）
　轟は何か引っかかったように思いつめるものの、般若の少女、叢は

轟を見つめる視線を変えない。

「しかし、何がともあれ学炎祭に彼らが来るとは思いませんでしたよ…」

ここで意外な顔で皆を見つめる青い短髪の少女、夜桜。

「おい、切島…見ろよアイツ…あの真面目そうな女…分かるよな？」

「ん？あー、あの子か？確かに真面目っぽさそうだな…てかぶっちゃけコケシとかで出て来そうな女の子だな、イメージ的に！」

ここで耳郎の個性から回復した峰田は、目を凝視させ、切島はニッとした笑顔で見つめる。

「はぁ～…お前がここまで脳筋だとは、こんのバカ、ちげぇだろ…中身だよ中身…いいか？あーいう真面目でガードの堅い奴ほど中身はエロいんだぜ…」

「初っ端から何言ってんのお前？」

「いいから聞けよ…今からオイラの全ての力を使って…あの女子を堕とすぜ…！いや、堕としてみせる！」

「おい待て早まるな！あの人の場合、流石に耳郎や梅雨ちゃんみたいなレベルじゃ済まねえって！死ぬぞ!?」

「ヒーローは…プロはいつだって命懸け…！」

良からぬ気配を感じる切島の忠告に、峰田はグッドポーズをすると、そのまま夜桜の方に進んで行った。

「や、やあ…！」

「？貴方は…誰です？儂は夜桜じゃ…」

声に反応し、気付いた夜桜は峰田を見る。

「お、おぉ…最初に名前名乗る派なのね？そして方言とは驚いた……えっと、お、僕の名前は…峰田実！彼女募集中です！」

ここで早くもフラグを立たせ、顔を真っ赤にさせる峰田は、言葉を繋げる。

「あ、あの～……夜桜…ちゃん？もし良かったら…えっと、まず…スリーサイズを…じゃなかった…おっぱいをお聞きしてもよろしいですか!?!?!」

「何言っとんじゃ我ぇ!!」
ドゴオオォン!!
「ふげぇっふぅ!?」
早くも夜桜の拳が炸裂。トラックに跳ねられた様に殴り飛ばされた峰田は、地面に数回バウンドして気を失った。
「あ～あ…言わんこっちゃない…」と切島は呆れてため息をついた。
夜桜は気を失っている峰田を、鬼のような怒りの目で睨みつけている。
「全く…何を聞くかと思えばセクハラとは…いい度胸してますね…だいたいセクハラとは…」
「夜桜さん…もういいです…」
「雪泉…!すいません…つい…」
ここで、雪泉が入り込み、止めに入る。雪泉の声は相変わらず冷え切った声…というより、冷たい何かを感じる。
「彼ら雄英生徒たちがどんな人達なのか…もうハッキリと分かりましたからね…」
その目は、体育祭に見せた轟と同じような目をしており…

「チッ…どいつもこいつも…下らねえな…」
学炎祭が中々始まらないことに、一人だけ皆んなから遠くに離れてる爆豪は、苛立ちのあまり舌打ちをする。するとここで爆豪より、背の小さいツインテの女の子、美野里が好奇心でトコトコと爆豪に近づいてくる。
「あー!やっぱりよく見たら運動会に出てた爆発のお兄ちゃんだー!」
「は?」
ここで美野里のことに初めて気付いた爆豪は、美野里に視線をやる。
(なんだコイツ…見たまんまガキじゃねーか、実力はさておき、運動会?)
心の中にいくつか疑問が湧き上がる爆豪を御構い無しに、美野里は

にっこりとした笑顔で話しかけてくる。そして美野里は体育祭のことを運動会と言っている、雲雀と同じだ…

「私ね、美野里って言うんだよ～♪宜しくね！ところでお兄ちゃんに聞きたいことがあるんだけど」

「あ？」

「爆発お兄ちゃんは運動会で優勝したのに、どうして最後縛られてたの？悪いことでもしたの～？ね～ね～どうして～？」

爆豪は美野里の言葉を聞いた途端、体育祭の最後の轟との戦いを思い出した。本気を出さず、納得のいかない勝利を手にし、終いには表彰台でガチガチに体全身を拘束されたのだ。そのことを思い出した爆豪は、屈辱と怒りと言ったあらゆる感情を思い出し、額に血管を浮かばせる。

純粋な子供の心を持つ美野里とはいえ、初対面。ましてや触れてはいけない所に美野里は触れてしまった…そう、爆豪の逆鱗を…

その瞬間、表彰台でオールマイトに見せたあの吊り目９０度の厳つい憤怒の顔を１００％に再現させ…火山の噴火の如く、怒りを爆発した。

「ぶっ飛ばすぞクソガキ!!!!!!!!」

瞬間。爆豪のこれまでにない壮絶な怒りが爆発した。更には怒りのあまり、思いっきし掌を爆発させた。校内グラウンドはおろか、学校の外にまで爆豪の怒号が響き渡った。そしてそんな怒りに満ち溢れてる爆豪の一番目の前にいる美野里は、まるで人生産まれて初めてこんなに怒られたと言わんばかりに、目をまん丸にし面を食らったような顔をした後、目をうるうると揺らし、顔を歪ませ、やがて目を瞑っては頬に大量の涙が零れ落ち、顔を真っ赤にして号泣した。

「う、う、うわあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんん!!」

そして怒号の次には爆豪に負けないくらいか、あるいは同じくらいか…学校の外にまで美野里の泣き声が響き渡った。
この場にいる皆は一斉に爆豪と美野里に振り向く。
「かっちゃん!?!」
「「「爆豪（ちゃん）（くん）!?!」」」
「「「美野里（さん）（ちん）!?!」」」
皆はなんでこんなことになったか分からず、駆け寄る。
「み、美野里さん！大丈夫ですか!?」
「こんなに泣くとは…黒影様が病院に入院して以来だ…」
「美野里！美野里!?何があったんです!?」
「美野里ちんどーしたの急に泣いて!?てか何かされたの!?」
月閃の皆んなは美野里を心配するが…一方爆豪の方は…
「離せテメェら!!どけクソモブども!!此処にいる奴ら全員爆殺してやろうか!?どいつもこいつも俺をコケにしやがってぇ!!」
「落ち着けよ爆豪！何があったんだよ?!」
「爆豪くん！まずはその拳を鎮めたまえ！女性に、ましてや子供に暴力はいけない！」
「爆豪ちゃん何があったか分からないけど冷静になるのよ…」
「やめろ爆豪！落ち着け！…うわっ!?こいつ…！なんつー馬鹿力だよ！」
此処にいる雄英生全員が爆豪を取り押さえている。
「爆豪くん!?美野里ちゃんに何したの!?というか、何で怒ってるの!?」
「かっ、かっちゃん落ち着きなよ！何でまたそんな…」
「クソデクは黙って死んでろ!!いやぶっ飛ばさせろ！殴らせろ!!」
「ええ!?酷い!!」
飛鳥と緑谷は止めるものの、またしても怒りが込み上がってきたのか、緑谷を見つめて殴ろうとする。そんな理不尽極まりない爆豪に、緑谷は驚く。
どうやら美野里と爆豪は最悪の組み合わせだったらしい…それも雲雀よりも…
ここで見てられないのか、仲間を泣かされたことに腹が立ち、月閃

の皆は爆豪を睨みつける。
「爆豪さん？と言いましたっけ？儂らの仲間、美野里さんを泣かしたこと…断じて許しませんよ…！ブチのめされる覚悟は出来てるけぇーのぉ…？」
「爆豪ちんマジで許せないんですけど…!!アタシギャルだけど、仲間侮辱されるのは許せないんだから…!!」
　ここでまず出てきたのが、夜桜と四季。夜桜は黒い怒りのオーラを出し、四季は目を細めて睨みつけている。四季はそれはそれで怖い感じはしないけど…
「う、うわぁ！月閃怖え…特にあの夜桜って人…マジでヤベェぞ！おい爆豪、謝れって」
「爆豪ちゃん、詳しい内容は分からないけど女の子泣かせるのは良くないわ…謝らないと…」
「テメェらクソモブ供は黙ってろっつってんだろ!!」
　しかし聞く耳持たずの爆豪は、荒ぶるだけの様子だ。

「美野里よ…お菓子だ…」
「うっぐ…ひっく……いらないよおおおおおおお!!うえぇぇぇぇんん!!あのお兄ちゃん怖いよ嫌だあああぁぁぁぁ!!」
「なっ!?あの美野里が…要らない…だと？……重症だな…」
　一方叢は取り敢えずまだ泣き止んでない美野里を落ち着かせるため、胸元からお菓子を出して美野里に渡すものの、美野里は首を横に振る。そんな美野里に信じられないという顔をする叢。
　美野里には爆豪の怒りが相当なショックだったらしい…それもそうだ、まさかあんなにも怒られるなんて思ってもいなかったから…だがそれが爆豪という男だ。
「……叢さん…美野里さんをお願いいたします…」
「雪泉…？」
　今まで黙っていた雪泉は、怒りを蓄えた目で、半蔵学院と爆豪抑える雄英生たちに向かって行った。
「半蔵学院の皆様、そして…雄英生の皆様!!」

近くまで来た雪泉が一喝すると、皆は一斉に振り向き、黙り込む。
「貴方たちの行動…そして体育祭での皆さまの実力、そして態度を見て改めて思いました…」
その言葉に、何故か胸騒ぎがした。緊張に近い圧迫を感じて…
「貴方たち雄英生も、半蔵学院と同じく悪そのもの…!!貴方たちに正義を名乗る資格はありません!!」
「「「!!??」」」
そして空気の流れが一気に変わった。先ほどまで爆豪と美野里があんな事になってたのに、今は違う雰囲気の流れになった。
「あ、悪…?正義を名乗る資格はないって…どういう意味ですか…?」
「そのまんまの意味です…」
お茶子の言葉に即答する雪泉。そして雪泉は峰田と爆豪を見やる。
「特にこの二人…一人のこの者は、性欲にまみれています…とても正義とは思えない…いいえ、寧ろ悪そのものです…!薄汚れたあの善忍と同じ…」
「あっ、それは納得いきます。よかったらコイツ懲らしめてやって下さい。煮るなり焼くなり好きにしてしまって構いませんから」
雪泉の言葉に、耳郎はスカッとした表情で気絶してる峰田の首をつかみ差し出そうとするものの、「要りません」と断られた。
(……薄汚れたあの善忍と同じ…?)
その言葉を聞いた飛鳥は、誰のことだろうと首をかしげる。
「まあ良いでしょう…次に問題なのは…そこの貴方です…!彼こそ…悪そのものです!!」
雪泉は気を改めて指をさす。その指差した方は考えるまでもない…当たり前だろう…
「……あ?」
爆豪勝己。
「あ、あ〜…」
皆は納得した様子で頷く。そして自分のことが悪だと言われ、自分のことだと理解した爆豪は、又しても怒りに染まる。
「んだとテメェ!!」

「言ったそばから落ち着け！」
　爆豪が暴れそうになるものの、皆はそれを止めに入る。
「本当のことでしょう？私たちの仲間、美野里さんを泣かせ、体育祭でも見せた野蛮である貴方のような暴力的な性格、悪と思わせる醜態…何より見苦しい……貴方のような人間はとてもではありませんが、正義とは思えれません…悪そのものです。私達で言う悪忍と同じですよ？」
　雪泉の冷たい目線、ぐうの根も言えない正論に、皆は納得するしかなく、爆豪はビキビキと怒りを露わにし、額に血管を浮かばせる。
「テ・メ・エ・!!!!」
　完全に目は真っ白、見ればわかる…これはもう完全に怒りで行ってる。
「そ、そんな…あのかっちゃんがこんなに物を言われてるなんて…月閃？この人達全員すごい人達だ…!!あのかっちゃんが罵られてるんだ…こんなの滅多にない…！」
「お前は何に怯えてんだ緑谷」
　爆豪が罵られてることに驚愕している緑谷に、聞こえてた轟は軽く突っ込みをいれる。
「しかしまあ、確かに向こうも爆豪に対してあれほど言うとはな…口だけじゃねえ…恐らく…あの気配……」
（飛鳥達より強え…）
　自分でも本気で勝てるかどうか…そう思ってしまうほど、雪泉の気配は只者ではないのだ。
「何より貴方たちは…全員弱いです…」
「「「!?!」」」
「貴方たちの体育祭を見てみましたが…どれもこれも力が足りてない…一年生だからと言うのもありますが……これで英雄（ヒーロー）を名乗るつもりなのですか…？笑止千万ですね…」
「な、んだと…？」
　雪泉の言葉に悔しい者もいれば、歯ぎしりを立て、怒りを込み上げる者もいる…それもそうだ。皆んな個人によるが、ヒーローになる為

の努力はしてきた、頑張ってきた、まだ始めたばかりとは言え、体育祭だって通してきた。それなのに、彼女は「弱い」の一言で片付けるのだから…
「そんな者たちならいっそ、この世の正義には必要ありません…」
「待ってよ雪泉ちゃんそれどう言うこと？」
「あっ、飛鳥さん!?」
　ここで、雪泉と雄英生達の目の前に飛鳥が割り入ってきた。
「飛鳥さん、何でしょう？」
「皆んなが弱いってどう言うこと？この世の正義に必要ないってどう言うこと？それは本気で言ってるの？……テレビか何かで見てたから分からないかもしれないけど…少なからず私達は近くで観てきた…だから分かるよ…皆んながどれだけ努力したか…どれだけ強い想いでヒーローになろうとしてるのか…それなのに…そんなこと言うなんて…間違ってるよ！」
　飛鳥はいつになく真剣な目つきで雪泉に抗議する。しかし雪泉は冷静さを保ち崩さない。
「では、逆に貴方に聞きます…何が正しいのでしょうか？何が正義なのでしょうか？」
「そ、それは…刀と盾だよ！戦うための力だけじゃない…誰かを守る力だってある…盾だって力だよ！」
　飛鳥は皆と一緒に居て成長した。刀とは何か？盾とは何か？その答えは雄英の生徒たちにあった。それはヒーロー…
　ヒーローは敵と戦う力を持ち、弱き人々、市民を、大切な人々を守る力だって持っている。
　そう、この子たちヒーローがそう教えてくれたんだ…
「ふっ…聞くに堪えない綺麗事ですね」
　しかし、そんな雪泉は、嘲笑うかのように、鼻で笑い、哀れな者を見るような目で小馬鹿にするようにそう言った。
「なん…ですって！」
「あの人…！」

バカにされた飛鳥は、雪泉を睨みつける。同じ善忍とはいえここまで違うのか、怒りしか込み上げてこない。
意見が違うのはしょうがない、だがその人の覚悟を笑うとならば別だ。
「貴方たち、何もわかっていませんね？いいですか、正しい力などこの世には存在しない。理屈をこねたところで力とは悪意でしかありません…ただ、力さえあれば全てを統べることができます」
「す、全てを統べるって…」
雪泉の言葉に皆（爆豪以外）は驚かされた。そりゃあ確かに力というものは理屈をこねたところで悪だ。力があるからこそ使い、人を苦しめる。自分勝手な敵（ヴィラン）に、悪忍だってそう…あの抜忍もそんな感じがした。それは事実上仕方ない、仕方ないのだが…だからこそ力で全てを統べる？何だかそれこそ本当の悪に近いような気がした。
行き過ぎた正義も、時には悪に変わる。
「力で全てを統べて…アンタはどうするんだ？何がしたい？」
ここで質問してきたのは轟だ。質問の声に雪泉は反応し視線を変える。
「それは…この世から悪を無くすことです」
「「「え?!!?」」」
この世から悪を無くす？何言ってんだ？
悪といえば…悪忍だけでなく敵も無くすというのか？
けどオールマイトが現れてから悪忍は知らないけど、敵の出現率は抑制されている。
まだ街中などで犯行を行う敵はいない訳ではないが…
しかし、そんな事が許されるはずがない。
「この世から悪を無くす…雪泉ちゃん、そんな事、許されるはずが…」
「誰も許可なんて求めていません…悪の存在そのものは、人を苦しめます…それだけは何があってもならないのです…それとも何ですか？貴方たちは悪の存在を許すというのですか？」
「許すというか、なんというか…うぅ～ん…難しい！」

「そんなこと、今まで考えてもなかったわ…」
尾白は髪をくしゃくしゃと掻き、蛙吹は自分の頬に指を当てながら、難しい顔をする。
ヒーローを目指す彼らには難しい話以前に考えたこともなかった。
敵がヒーローにやられて捕まる。逆の立場、敵がヒーローを殺すというのもある。そんなことが当たり前だった。いや、それしか見てこなかった。
しかしこの雪泉という少女は悪の考えそのものを否定している。
まるで、少しでも悪の可能性と感じるのであらば、確実に潰す。
彼女からは危険な雰囲気しか感じない。そう思えたのだ。
「それに聞いたところ、貴方たち一部の半蔵学院忍学生を含め、雄英生徒たちは『敵』との接触があったと聞いています…しかも二度も…」
雪泉が言ってるのは間違いなく敵連合のことだ。半蔵学院だけでなく、他の忍学校もこの噂は既に出回ってたそうだ。まあ無理もない…逆に出回らない方が可笑しいくらいだ。
「貴方たちはヒーローになるのでしょう?それなのに、数が多いにも関わらず敵の大将を捕まえられない醜態、二度も逃げられるような失態。恥ずかしくないのですか?」
「この人…痛いところ突くなぁ…」
「んの野郎…!!」
姿こそ見えないが、葉隠は恐らくため息をついてるのだろう。どんな顔をしてるか分からないが…
そして爆豪は怒り爆発寸前だ。物間に罵られてた時以来だろうか…
「そんな惰弱な正義など目障りだ…悪同様に消えてしまえば良いんです…」
雪泉のその言葉には、どこか怒りと憎しみが含まれてるように皆は感じた。ここまで悪の存在を憎む人間は見たことない。
「では…気を取り直し改めて、これにて今から、学炎祭を始めましょう…!」
目を大きく見開き、静かな声でそう言った途端、月閃と半蔵は武器

を構える。

「貴方は確か叢さん…と、言いましたね？何がなんでも、負けるわけにはいきません…！」

義兄である村雨の忍になる夢、意思を受け継ぎ成長した斑鳩。

「斑鳩…！」

般若の面を被っている叢。因みにこの場で彼女の素顔を見たものはまだ誰もいない。

「アンタらの意見はよぉく分かった…だからってアタイらは負けねえさ！ところで…お嬢さんいい乳持ってますなぁ…こりゃあ揉み甲斐がありそうだねぇ～♪」

情に厚い姉貴派、だがセクハラ大好き変態親父となって、手をワキワキ動かしている葛城。

「なっ…なんて破廉恥な…！先程の変態葡萄少年に続いて…ここにはマシな輩は居ないのですか!?何故セクハラ好きな輩が多いんじゃ！その性根、儂がぶち壊してやるけぇーのぉー…！」

峰田に続いて葛城へと、変態が続いて怒りが溜まる夜桜。

「柳生ちん！その眼帯めっちゃ可愛いんだけどぉ～！あ、じゃあウチが勝ったらその眼帯もらうからね～♪」

先程の様子が嘘に見えるくらい絶好調な様子の四季。

「やれるわけないだろう…この眼帯は俺にとっては特別なものだ…」

雪泉と同じく、冷たい氷の目線で睨む柳生。

「えっぐ……ひっく…、」

「美野里ちゃん、大丈夫？雲雀もね、爆豪くんのことはとても怖いしよく泣かされるんだ…」

ようやく落ち着いたのか、涙を拭う美野里に、慰める雲雀。

「ありがとう…雲雀ちゃん…美野里、大分落ち着いてきたよ…」

「それなら良かったよ♪雲雀もね、よく爆豪くんには泣かされてるんだ…怒ると怖いし、酷い暴言吐いてくるし…」

「え？雲雀ちゃんもそうなの？」
「うん！だからそんなに怖がらなくても良いんだよ♪」
「そうだったんだ！じゃあ雲雀ちゃんも美野里と同じ仲間だね♪」
意気投合したのか、いつの間にか仲良くなった二人。この二人だけ状況が違うのだが…
「なんか…凄いことになったな…しかも勝手に因縁つけられたし…」
雄英生徒たちは、なんとも言えない複雑な気持ちを抱きながらも、こうして学炎祭を観守るのであった…
「……やっぱあの人…」
轟は、雪泉の何かを感じたのか、ずっと見つめている。
なにやら自分に近い何かを感じる。自分と似ている気がする。そう思えたのだ……

山奥にある、古びたお屋敷…そこはかつて飛鳥たち半蔵学院が襲撃した蛇女子学園と同じ学校であった。いや、今は新・蛇女子学園という学校である。
何でもあの一件以来から、学校を修復したそうだ。再現度１００％である。
その暗い屋敷の中には一人、今のリーダーなのだろう、白色の短髪をしたボーイッシュな女性、雅緋と名乗る者がある男の人物と話していた。
「んでそれで、俺に何か用か雅緋？」
「先程、元死塾月閃女学館の生徒が二人、『両備』と『両奈』という者がこちらに転校したいと申しておりまして…その報告に上がりました…」
「月閃…？ああ、あの善忍養成学校か…しかし今時こんな時期に転校するなんてな…ましてや善忍とは……んで、ソイツら二人は俺のために使えるのか？」
「…実力は保証します……二人とも新人の一年ですが、今此処にいる

他の一年より彼女たち二人が一番かと…」
「そうか分かった…手配はしとく、もう下がれ…ご苦労だった」
「はっ…失礼いたしました」
そして雅緋が頭を下げ、部屋を出て扉を閉まると同時にこの男はこう言った…
「死にたくなけりゃあ、命を削れ」
灰色の厚いコートを着用し、水族館のようなヘルメットを被っているその男は…只者ではない雰囲気を漂わせていた。
そして、此処の新・蛇女子学園がどうなるのか、想像もつかないだろう…

５０話「勝負」

「秘伝忍法！【クロスパンツァー】!!」
「ッ!!中々やりおるのう！」
学炎祭が開かれてから、双方の選抜メンバーはそれぞれの場所で戦闘を行った。
葛城と対峙するは夜桜、死塾月閃女学館の２年生。飯田と同じくとても真面目で冗談が通じない。曲がった事が許せず、熱くなって思わず方言が出てしまうこけし娘だ。
彼女は葛城秘伝忍法を喰らうものの、夜桜の台詞からすれば、そそまでダメージは負ってない様子だ。

「へぇ…アタイの秘伝忍法を食らってその言葉が出て来るなんて……嬉しいね！」
「嬉しい…？それは一体どういう意味じゃ？」
葛城の言葉が気に食わなかったのか、または癪に触ったのか、眉をひそめる。
秘伝忍法とは、いわば必殺技のようなもの。ヒーロー達でいう個性の必殺技に似たようなものだ。例えば爆豪の閃光弾（スタングレネード）や、飯田のレシプロバーストなどと言ったものなど、個性を応用して必殺技にしたもの。
忍の秘伝忍法とは、秘伝動物…自然の力や先祖代々から伝わる技など、その力を借り、己の物にし、使うもの。
そう言った点では、その人物の心の強さは大きく関係する。
だから、夜桜はおかしいと思った。
葛城（自分）の秘伝忍法が夜桜（相手）に通用しなかったというのに、葛城というこの少女は不敵な笑みを浮かべ、『嬉しい』と言ったのだ……

「そのまんまの意味さ！」
「おかしな奴じゃ……儂には分かりませんね、お前の言ってることが」
夜桜は葛城のその馬鹿げた答えに、呆れながら、秘伝忍法書を取り

出した。
「まあええ…その減らず口、もう聞けなくなるくらい…ブチのめしてやるけぇーのぉ！」
忍転身をすると、光が身体を包みこむ。忍転身を終えると、全てを破壊するかのように思わせるその強靭な手甲で葛城に殴りかかる。案の定葛城は距離を置き避けるが、夜桜は休む事なく追撃する。
「この拳は、全てをぶち壊す！まず貴様らの性根を、木っ端微塵にぶち壊してやるけぇの！」
「ハハッ、ソイツは面白いぜ！アタイの具足と同じだ！」
葛城は夜桜の手甲に、自分の具足と何処か似てると感じたのか、ますます笑みを浮かべる。そのあっけらかんとした葛城に、夜桜の怒りも益々溜まっていく。

……気に食わん。真剣勝負と言うのに、なぜ此奴はこんなに楽しそうでいられる？自分が勝てると思ってるからか？又は、儂より自分の方が格上だと思ってるからか？
なぜ、コイツはこんなに楽しそうに、笑顔で戦える？戦場とは、生死を分ける場所…こんな状況のなかでよくそんな風に居られるものだ……だから夜桜は、葛城が気に食わない。
「ええ加減にせぇよ！秘伝忍法書！【極楽千手拳】!!」
「なっ…!?!!」
夜桜は巨大化した右の籠手で葛城を殴りかかり炸裂すると、衝撃の爆発が連続で続き、葛城はそれをもろに浴びて、忍装束が破れていく。半壊となった忍装束、葛城は息を切らしながらも、立ち上がる。その光景に夜桜は「フッ」と薄く笑い、口角を上げる。
「どうです？流石の貴方もこれを喰らえば…「へへっ！お前強いな！」!?」
しかし、葛城はボロボロの状態になりながらもなんとか立ち上がる。それを見た夜桜は驚愕した。立っていることではない……何故アレをまともに食らってまだ笑顔のままで居られるのかが、夜桜にとっては不思議で仕方なかった。

最初は相手をおちょくってるのかと思っていたが、此処まで来ると流石に驚きを隠せない。
「お前、まさか儂の技が…効いとらんのか…?!」
「いや、んなことねーぜ…これでも結構効いてるさ」
「では、何故?お主はこんな状況の中で笑っていられるのじゃ?」
「んなもん決まってるだろ…お前が強いからだ」
「は?」
お前が強いから、その言葉を聞いた夜桜は動きを止める。
強いから、こうして笑って戦うのか?強いから嬉しいのか?なんだそれは……
そんな軽い気持ちで、戦場を駆け抜けて来たのか?この葛城という少女は、いや…葛城だけじゃない、半蔵のみんなもそうなのか?それと関わり協力している雄英生もそうなのか?そんな嬉しい気持ちで、生きるか死ぬかのどちらかの戦場を楽しんでいるというのか…?
そのせいで、悪忍との抗争で死んでしまった者もいるというのに…?自分の…自分たちの両親は『その戦場で死んでしまった』というのに…?
勝手な解釈…と言われても仕方ないのかもしれない。しかし、純粋で真面目な夜桜には、葛城の言ってることも、考えてることもどうしても理解出来なかった。

「益々気に食わんのぅ……戦場をなんだと思っとる!!」

闘いは遊びじゃない、スポーツでもない…命を懸けて、燃やして、生きるか死ぬかのどちらかの戦い…それなのに、その戦場を楽しむかどうかなど、頭がイかれているとしか考えられなかった。
そもそも、何故そんな考え方になるのか…想像することすらできないし、理解も出来ない…分からないことだらけだ。
「うおっ!?お前、なんでそんなに怒ってるんだ?」
「テメェが怒らせたのじゃろぉが!!」
こんなに怒ったのは初めてだ。あの変態老人もとい、伝説の忍を名

乗る卑猥で下劣で善忍の風上にも置けない半蔵にセクハラされては黒影様の為にと、イチゴ大福を盗み食い…そして当日、突然変態葡萄少年にセクハラされようとするわ、大事な仲間である美野里を泣かされるわ、そしてこの葛城という少女も戦いが楽しいなど訳が分からないことを抜かすわ……本当にどうなっている？最近の善忍…いや、正義とやらはこんな人間が多く存在するのか？

そんなのそもそも正義ではない…では正義とはなんなのか？

――決まっている、悪を滅ぼすことだ。

この社会…いいや、この世界から悲しみを無くすこと…悪のせいで多くの人間が犠牲になり、涙を流すものがいる。だからその涙をなくしてあげたい…

そう、黒影様と、雪泉と、皆んなと一緒に誓ったのだ。雪泉はその正義の象徴。だからどんな悪をも滅ぼさなければならない。

それが、悪と関わり、善が悪に染まった者でも、元が善であり悪になったとしても…

半蔵と雄英は、悪忍と敵と接触が多かったためか、少なからず影響を受けている。きっとその所為で彼女たちは悪に染まってしまったのだろう…だから、戦いが楽しいなんて平気で言えるのだ……

置いてかれた人間の気持ちも分からずに……

「決着、つけてやるけぇの。秘伝忍法！【地獄極楽万手拳】!!」

激しい闘気が満ち溢れていく。巨大化した籠手でエネルギーを溜め込むと、巨大な黄色い球体を作り、キャノン砲の如く前方へと吹き飛ぶかのように放った。その素早い動きに葛城は対象しようとするも、避ける暇もなく、反撃もすることが出来ず、ただただモロに食らってしまった。

「うッッッがあぁぁあッッッはッあぁ!!?!!」

闘気が激しく打ち合い、爆発の連鎖が起こる。爆発と言っても、爆豪のような火力型の爆発ではなく、衝撃による爆発であった。流石の葛城も、これを食らって立ち上がることは出来なかった。

「流石の貴方もこれを食らえば…」
「いっっっっ…マジかよ…」
見ると身体中傷だらけだ。どうやら今度こそ落とすことが出来たようだ。葛城は戦えないためか、動く気配がない。夜桜はそれをちゃんと認識した後、再び薄く笑う。
「どうやらこの勝負、儂の勝ちで宜しいですね？」
今度こそ決まった、流石に二度連続で秘伝忍法使うのは慣れないが…それでも結果、勝つことが出来たのなら問題ない。これで学炎祭の一勝負は終わった。夜桜はそう思った。
「なぁ…夜桜だっけか？お前、どうしてそんなに怒ってるんだ？」
「…は？」
ボロボロの状態のなか、葛城は夜桜に問うた。何故そこまでして怒ってるのかを…夜桜は考えるまでもなく答え出した。
「そんなの決まっとる、貴様は勝負を甘く見てる…！勝負とは、生と死を分ける戦い…何方かが死ななければ勝負は終わらん…戦場を舐めてることに儂は腹が立っておるんじゃ…！」
「ちょっと待てよ、アタイがいつ勝負を甘く見たって？戦場を舐めてるだって…？」
ここで葛城は眉をひそめる。
「しとるじゃろ！戦場に嬉しいだの楽しいだのと……戦場を、勝負をなんだと思っとる?!スポーツや遊びではないのですよ!?」
夜桜のその言葉に、葛城はなぜ彼女が怒っているのかを理解した。そして、なぜ彼女が勝負を甘くみてると言ってることも…
「なるほど…ね。そういうことか…」
理解した葛城は、体に力を入れてた筋肉を解き、ため息をつく。
「アタイは別に勝負を舐めてる意味で、楽しいとか…嬉しいとか…そういう事言ってるんじゃないぞ？さっきも言ったけどよ…アタイはただ、強いヤツと戦うのが嬉しいだけなんだよ」
「嬉しい…？強いのが？それこそ舐めてるのではありませんか…？強いヤツと戦えばそれ程に自身が死んでしまう危険性だって極めて大きい。それにその嬉しいという一瞬の油断が貴様の死を確定する

……違いますか？」
　間違ってはいない。夜桜の言ってることは…極めてその通りだ。しかし、しかしだ……間違ってはいないからこそ、間違っている。正しいことが全てなのだと、そう思ってるところが…
「お前は、強いヤツと戦えて嬉しくないのか？」
「別に、勝負に嬉しさといった感情など、追求してませんよ」
「勝負をしてて、なんか思わないのか？」
「ただ単に相手をブチのめすだけじゃ」
　それぞれの意見が合噛み合わない…それも無理はない…夜桜は葛城の、その強いヤツと戦う嬉しさが分からないのだから…
　何を持って嬉しいのか、なぜ勝負が楽しいのか……ただ自分の使命と役目、その為と言わんばかりなのか、考えようともしない。
「もう良いですか？貴女はもう戦える身体じゃないはず…なに、殺すまでもない…勝負はありじゃ。ではここで引かせてもらいますよ」
「ちょっと待て、一つ言わせろ」
　夜桜が引こうとしたその途端、葛城に止められた。聞く気がなければ話す気もないが…一応聞くことにした。聞く気はないが、相手の話を聞かない理由にはならないから…
「お前、正義とか言ってるが…それは誰のためだ？」
「え？」
　意外な言葉を投げかけられた夜桜は、目を丸くして葛城に目をやる。
「お前が斑鳩並みに節の硬い真面目なヤツだって分かったよ…けどよ、そこまでして正義とかに拘るってことは、何か理由があるんじゃねえのか？」
（……こいつ）
　夜桜は葛城のその勘の鋭さに思わず心の中で舌打ちをした。なにも知らない癖にここまで気を察するとは思わなかったからだ。そこまでして顔に出ていたのか？となると、それ程あの人の為だと思い、熱心に動いてたんだろうな…
「別に、貴様に言うほどではありませんから……」

「冷えなぁ…」
「て言うか、お前はこの勝負でもう負けた…分かってますか？自分の立場が」
「はっ！残念だがまだ負けてねえぜ？」
「なんじゃと…？」
「アタイはな、アタイ自身が負けと認めるまで負けてねえんだよ！アタイは、もっと強くならなきゃいけねえからな！」
「強くならなきゃ…ですか」
　なんだろう、このモヤモヤするこの感覚は…さっきの嬉しいと言う言葉と何か繋がりがあるような、関わっているような…不思議な感覚。けど、嫌いじゃない。寧ろその点については同感だ、強くならなければ戦場では生き抜くことができない。黒影様の意思を全うすることが出来ない…だから、その点についてだけは同感できた。
「なら、何度でも打ち砕いてやる！拳か蹴りか…何方が強いかをのう！徹底的にやってやる！」
　そして、手甲と具足の火花散る激しい戦いが、再び…

「あの人たち色々とスゲェなオイ…」
　遠くで見てる切島は、ゴクリと唾を飲み込み、釘付けになる。
「ケロ、拳と蹴りの戦い…なんかかっこいいわね」
「けど、足は手の3～4倍の力はあるって聞いたことあるし、その理屈を立てると葛城さんの方が強いんじゃない？」
「尾白くん詳しいね！ウチはテレビで観たことあるよ～！」
　他にも、蛙吹や尾白、葉隠も観ながら雑談している。
「他の奴らは、どうしてるんだろ？」

　一方で、柳生と四季は…

「さてっと、これで一勝負お～わり！っと、柳生ちん大したことなかったね～♪」
「ッ……」
　四季は戦闘中既に忍転身していたのか、忍装束が少しボロボロだ。元々露出度が高いものだが、それでも忍装束が傷つくと言うことは、それなりのダメージを食らったと言うことだ。
　柳生はボロボロで息が荒く、地面に膝をついている。
「うわぁ…！柳生ちゃんやられちゃったよ!?」
　芦戸は腕をブンブン振り、柳生に応援をするものの、動く気配はない。
「まあ勝ち負けは置いといて……柳生ちんの強さの秘密、分かっちゃった♪」
「秘密…だと？」
「そっ、柳生ちんの付けてる眼帯。それ…隠鬼（オニ）の目でしょ？」
「……詳しいな」
「隠鬼の目？なにそれ？」
　当然知るはずのない雄英生は首をかしげることしか出来なかった。第一忍の授業を受けてるわけでもないため、知るわけがない。
「隠鬼の目…強大な思念の詰まったもので片目を封じ続けた者が得られる力。封じた方に秘伝忍法の力が宿る…隠鬼の目。だから、柳生ちんは眼帯を付けてるんだよね～」
「……お前、随分と詳しいな」
「えへへ、ギャップ萌え。ってね、アタシこう見えても結構勉強出来る方だし～、更に言えば般若心経が趣味だしね～」
　自慢気に語る四季は、手を差し伸べ柳生の眼帯へと近づいていく。
「という訳で、そのラブリーな眼帯、いっただき～♪」
　ガシッ…
「えっ？」
　しかし、四季の手が柳生の眼帯に触れることは決してなかった。何故なら四季の腕は柳生に掴まれたからだ。柳生は此処で初めて鋭い目つきで四季を睨みつける。

「オイ、この眼帯には触るな……」
数少ないその言葉を耳にするだけで背筋が凍りついた。そして何よりこの気配…先ほどの勝負とは全然違う。
「…柳生ちん、この気配…驚いた。まだ本気を出してなかったって感じ？」
「……出した。と言ったら嘘になるな…だが、本気で戦おうとしたことは事実だ」
柳生は目を瞑ると、ヨロヨロになりながらも何とか立ち上がることが出来た。柳生がまだ動けることに、戦えることに…何よりもあの気配を出すことに、四季は動揺し驚きを隠せないでいた。
「何か理由でもあったの？それに、その眼帯を取ろうとした時、明らかに雰囲気も変わったし……」
「まあな……あまり使いたくないんだ……それに、俺はまだ傷が残ってる」
「はい？」
傷？どういうこと？訓練の最中怪我でもしたの？四季はそんなことを考えた。
「やはり、そういう事でしたか…」
「ヤオモモー？」
と、ここで今まで黙って見ていた八百万がようやく口を開いた。それも今まで抱いていた疑問が晴れるような表情で…
「柳生さん…貴女はまだ本気を出してない…いいえ、本気が出されなかったのですね？それも、あの時の重傷を負って…」
「あの時の？」
八百万の言葉に、四季と他のものは首をかしげるが、柳生は八百万が分かっててくれた為か、こくりと頷いた。そして口を開く…
「俺たちは前に敵連合と名乗るテロリスト集団と学校の施設で遭遇した。それも最悪なタイミングでな…」
「……雄英高校襲撃事件のことだよね、ニュースやネットでも載ってたし、ウチらの学校でも割と有名になったし……忘れられないよ、あの人の意思を継ぐ為、いずれ戦うことになるって思ってたし」

「なら話は早い…俺はその襲撃で、ある敵に攻撃を受けた。その時に俺は頭部に大きな傷を負った。それも…たったの一撃でな」
「え？」
一撃。誰もが聞けば嘘だと思うだろう…仮にそれが本当だとしたら、それがどの意味を表すか…分かっているはず。
四季は柳生の言葉が嘘でないと分かった。まだ会ってから少しか時間が経ってなくとも、四季には分かってた。柳生がどんな人間であるのかを…少なからず、嘘をつく人ではないと分かっていた。四季は人を見る目があるから…だから嘘をつくとは思ってないし、この話も事実だと思ったから。
「なるほどね…一撃で柳生ちんを戦闘不能にした敵がね～…正真正銘化け物だね…驚いたけど、確かにそれなら忍の勝負とは言え、柳生ちんが本気で戦えないのも無理はないかも…」
それから四季は柳生に聞いた。その敵のことを、そしてその後どうなったのかを…
気がついたらいつもの忍病院ではなく、雄英の保健室にいたと言うことを…そして鼻の骨は確実に折れ、脳に大きなダメージを負い、頭部に深刻な傷を負ったこと、眼帯の方の目の近くに傷が残ったこと…
リカバリーガールの治癒で傷を癒すことは出来たものの、傷が相当酷かった為か、1日では治癒で完治することが出来なかった。
だから緑谷と同じく点滴を入れなければ完全に治癒することが出来ないと…
因みに蛇女に襲撃した際、勿論四季のように本気を出すことは出来なかった。それでもあの場で戦えたのは奇跡と呼ぶに相応しかった位だ。その代わりまた傷を負ってしまったが……
その後体育祭が始まったり、学炎祭に向けての訓練があったりなどと、顔を出すことが出来なかった為傷はそのままだったのだ。学炎祭当日にまでなら間に合うだろ、そう思っていたが、傷はまだ治っていなかった。
「そしてもう一つ言っておく、この眼帯は決して特殊なものでもない

し、隠鬼の目として得た力でもない…」
「え？・けど…書物には確かにそう書いてあったし、王牌先生の授業でも教えてもらったし、間違えるはずが…」
「だろうな……だが間違いは間違いだ…何度も言うがこの眼帯は決して特殊なものではない…更に言えば俺は金属アレルギーだ」
特殊な眼帯ではない、では何故柳生はそんなにこの眼帯を大事そうに持っているのか…四季を含め、その場にいる全員は分からなかった。あの眼帯に一体何を隠されているのか…それに、四季の言ってる事は本当だ。隠鬼の目の強き気配が柳生の眼帯に強く反応している。と言う事は、間違いなく隠鬼の目はあると言う事だ。では一体何が違うのか…？四季は不思議で仕方なかった。
「不思議な子だね柳生ちんって、特殊でもない眼帯をなんで付けてるのやら…まあ可愛いし似合ってるから全然良いんだけど…
分かったよ、今回は引いておくよ。柳生ちんの傷が癒えてなかったとはいえ、不条件で勝っても嬉しくはないからね。けど、そ・の・か・わ・り・！次会った時、私が勝ったら今度こそそのラブリーな眼帯、貰っちゃうからね！」
「させるものか…この眼帯だけは…絶対に…」
四季は背を向けると、そのまま何処かへ行ってしまった。柳生は四季を睨みつけたまま、眼帯にそっと手を置いた。

そして半蔵学院の屋上では…
「雪泉ちゃん……」
「貴方を倒せば、お爺様の悲願が叶う……」
冷たい空気が漂うこの場所だけは、まるで今、冬なのかと思わせてしまう。今は春の季節ではあるが、この場所だけが冬みたいに寒いと

なると恐らく彼女の力によるものだろう…まるで個性だ。
「一つ聞いてもいい？雪泉ちゃん」
「はい、何でしょう？」
「悪が滅べば、本当に世界は平和になるのかな？それで悲しみは無くなるのかな？」
「私はそう、ある大切な人から教えてもらいました」
「私はそうだとは思えないな……私は、悪も必要だと思う……」
「……何故です？」
　悪が必要だと口にした途端、雪泉の表情は一瞬にして変わった。そこまでして悪を憎む人間はそうそう居ない…何があったのかは分からない…でも、自分の思ったことを言うまでだ。
「だって、悪がなくなったら…その世界に生きる事が出来ない人はどうなるの？正義という光に隠れながら、生きることしかできない人だっているんだよ？分かち合える人だっているんだよ？生き方が合わない人は…どうなるの？」
「無論、滅ぶべきです」
「そんなのおかしいよ!!生き方が合わないからってだけで、滅べば良いだなんて…そんなのおかしすぎるよ！そんなの間違ってる!!」
　生き方が合わないなら滅べ、それは最早悪よりもタチが悪い…しかし雪泉、いいや…雪泉たち月閃にとってはこれこそ理想の夢なのだ。彼女たちの願いであって…黒影の…意思でもある。それが彼女たちの正義だ。一つの悪そのものを赦さないと言わんばかりに…
「おかしいのはそちらです、悪を滅ぼすことを否定する意味がわかりません」
　だからこそ雪泉には飛鳥の言ってる事が分からなかった。同じ正義であるなら、善忍であるのなら…なぜ悪を憎まないのか…
　身勝手な悪のせいで、悲しむ人がいる、涙を流す者もいる、心に癒えることのない傷を負う者だっている。
　悪のせいで多くの尊い命が犠牲にされたことだって……
　なのに、飛鳥は悪が必要だと言った、滅ぼすことを否定する。意味が分からない…ただ、一つだけ分かることは、悪と交わった所為で彼

女たちは偽善となったという事だけは理解した。
学炎祭を申し込む前に、彼女たち半蔵のことについて調べていたのだ。そして分かった事が…悪忍である蛇女子学園と関わっていたという事だ。最初は善忍と悪忍の抗争に走っていたが、抜忍とそれを率いる連合が乱入して来たため、なんと共闘を組んだそうだ。
あり得ない…どうやったらそんな流れになるのか…不思議で仕方がない。だから分かったのだ、共闘を組むということは、悪と関わり自らも悪に染まったからなのだと。
だから思ったのだ、悪は善を蝕む存在だということを…まるで漆黒の闇のように…
悪がより危険だと、そう感じたのだ。だからこそ、悪は滅ぼさねばならない…なんとしても、平和の為にも……

「雪泉ちゃん!!」
「もう良いです…貴女と議論する気はありません…正直ガッカリです。半蔵の孫と聞いたのでどのような方かと思えば、程度の低い、底辺で惰弱な正義を掲げる偽善者でした。そんな方と闘うつもりはありません…寧ろ私の部下達だけで充分でしょう……行きなさい、お前たち」
雪泉は飛鳥とはもう闘うつもりはないらしく、目を瞑りそう言うと月閃の忍生徒と思える生徒達が何十人か現れた。数が多い、これを相手にすることは出来るが…しかし、しかし…
飛鳥は雪泉と闘いたい。闘って、間違ってると言うことを証明したい。
「雪泉…ちゃん」

ボガアアアアアアアアアアアアアンン!!!!

「!?」
月閃の何十人かの忍学生が巨大な爆発に飲み込まれる。突然の出来事に、飛鳥は当然、雪泉も驚きを隠せなかった。

雪泉はその爆発が何なのか分からなかったが、飛鳥は一瞬にして理解した。この攻撃が誰からによる者なのかを…
「さっきから黙って聞いてりゃあよぉ……言わせてくれるじゃねえか？アァ!?」
「ちょっ、かっちゃんダメだって！」
この声は…
「爆豪くん!?それに緑谷くん!?」
苛立ちながらも、歩み寄ってくる爆豪。それだけじゃない、荒ぶる爆豪を止めようとするも空振りに終わる緑谷。…それに対し敵意を表す雪泉。この二人の相性も最悪だ。爆豪の性格からは勘違いされやすい性格だ。一方雪泉は夜桜と同じく真面目なため、爆豪のその性格が昔から、当たり前だということが分からないのだ。
「このモブ共は選抜メンバーじゃねえんだよな？なら、俺が暴れても文句はねえわけだ…」
指の骨をならしながら、舌なめずりして睨みつける。
「……もし、これが忍のルールと関係がないのであれば、貴方を真っ先に排除していました」
「同感だぜ、その前に俺がテメェを爆殺してカキ氷にしてやろうと思ってたからな」
お互いの主張がぶつかり合い、今でも奮闘しかねない展開だ。
「オイ飛鳥、テメェはあの氷女ぶっとばせ、俺はモブ共をやる」
「え？」
「え？じゃねえよ、テメェはアイツと闘うんだろ？だったら闘いやすいように俺があのモブ共ぶっぱしてやるっってんだ、まあ…モブの相手なんてクソつまらねえけどな…!!」
爆豪の思いがけない言葉も行動に、面食らう飛鳥。爆豪がこんなことしてくれるなんて思ってもいなかったからだ…
「ぼ、僕は…その、応援してるから…！だから、頑張れ！」
「その代わり、負けんじゃねえぞ！アイツぶちのめす代わりに、倒したテメェをブチのめせばいいだけの話だからな！」
「分かってるよ爆豪くん、それと緑谷くんもありがとう。大丈夫、この

勝負絶対に負けないから！」
「揃いも揃って……やはり悪はとんでもない存在…貴方たちは既に悪に染まった、悪そのもの！この勝負、負けるわけにはいきませんね」
二つの正義が勝負の火花を切った。

51話「恥じるな頑張れ叢！」

場所は変わり…

「てやぁっ！」

「ふんっ！」

飛燕を扱う斑鳩、それと対峙するは般若の面を付けてる叢。雪泉と同じく月閃の3年生だ。

斑鳩の飛燕と叢の鉈と槍の二刀流がぶつかり合い、目にも止まらぬ斬撃の速さで閃光が走りだす。一閃が無数に描かれ、少しでも近くにいるだけで小刻みにされそうなその領域は、入ることを許されない。

「中々やるな…」

「貴方もです…！」

一瞬も気が抜けない。少しでも気を赦せば首を持ってかれる。隙を見せれば其処で終わりだ。それ程までにこの叢という女性は強い。

冷や汗が滴る…

防戦一方、だが叢も斑鳩と同じくダメージを与えれない。斑鳩と叢の実力は同じだということだ。流石は同じ三年というだけがある。しかし、斑鳩は思った。この一瞬の気の引けない状況のなか、何故彼女は面をつけたままなのだろう…と。

面を付けていれば多少、視界が狭まり邪魔で見えなくなる。なら面を取って戦った方が良いに決まってる。せめて戦いの時こそ面を取れば良いのに…

（ん…？いえ…この人……何処かで？）

斑鳩は一つの疑問が心に引っ掛かっていた。叢と呼ばれるこの彼女は、何処かで会ったような気がしたのだ。最初初めて見たときは少しの違和感はあったが、刀を交わすにつれて次第に心に引っかかっていたのだ。

一方、叢は…

（我は二刀流使いとはいえ……一つの刀で此処までやるとは……）

叢は心の何処かに相手へ底知れぬ強さを感じた。もし自分が一つの武器だけで戦っていたら間違いなくやられていただろう…そう

思ったのだ。それに、このままでは埒が明かない…不毛な消耗をするだけだ…そう判断した叢は一旦距離を取った。
（一瞬の隙を突けば我の勝利…！）
「秘伝忍法！」
「しまっ!?」
距離を置いた意味を理解した斑鳩、しかしその時にはもう既に遅かった…
「行け…【小太郎】！」
片手を上げて名前を呼ぶと、白い狼が何処からか現れ、牙を剥き出しジグザグに前方へと疾走していく。斑鳩は避けようとするもなす術も無く、叢の秘伝忍法、小太郎の攻撃を食らった。
「クッ！」
多少身体に傷が見受けられるが、それでも怯むことなく冷静に対処するべく隙を見せない斑鳩は距離を詰めて飛燕を向ける。
「小太郎の攻撃を受けてなお、隙を見せることなく立ち向かうとは…やるな斑鳩…だが、掛かったな」
「え？」
「秘伝忍法…！【影郎】！」
此処で又しても秘伝忍法を二回連続で繰り出す。小太郎の横に、白とは正反対の黒色の狼が現れ、二匹の狼は叢の合図で襲いかかる。斑鳩は又してもなすすべも無く暴れ回る二匹の狼の攻撃を受けてしまう。
流石の斑鳩も先ほどの秘伝忍法の攻撃を食らってしまった為か、今のでかなりの深傷を負ってしまった。
「つあッッ!?」
忍装束がボロボロになり、膝をつく。飛燕を杖代わりとして立ち上がろうとするも、体の節々が悲鳴をあげる。ろくに立ち上がることが出来ない。
「まさか…ここで……」
ジャキ…
顔を上げてみると、叢が既に目の前にいた。それも、血塗られた巨

大包丁を片手に持ち、斑鳩に向けている。
「これで、我の勝ちだ」
「うッ…」
安堵の息をつく叢はそう言うと、斑鳩はガタっと肩を落とした。勝負が終わった時の開放感が全身に伝わり、緊張してた身体の筋肉が解きほぐされる。
終わった、勝った。これで黒影様も喜んで貰えるはず…
そう思った時だ。
「なあアンタ」
「？」
声を掛けられたので振り向くと、一人の少年が歩み寄ってきた。その少年の名は轟焦凍。雄英体育祭で名を上げたあのＮｏ．２ヒーロー、エンデヴァーの息子だ。この戦いが終わったのを見計らって声を掛けてきたのだろう。しかし声を掛けられたからには無視するわけにもいかない…
「なんだ…？」
サッ…
「!?」
突然、唐突すぎる彼の行動に、斑鳩と叢は大きく動揺した。何故って？轟は無言で叢の面を取ったからだ。
見てみると、その素顔は般若の面とは全くの正反対、とても可愛らしい女の子と思わせるものであった。その素顔を見た二人は「あっ」と声を漏らすと、叢は性格までも変わったのか、恥ずかしくてみるみると顔を赤く染め、目から涙を浮かべ、やがて手で顔を覆う。
「み、み、見ないで下さああああぁぁぁぁぁいいいいい!!!」
羞恥心が激しい叢は先ほどの声とは別人のような、可愛らしい声を上げる。恥じらう乙女とは正にこのことだ。インパクトが強すぎて、斑鳩はともかく、面を取った轟本人も動揺している。
「お、おい…アンタやっぱり…」
「見ないで見ないで見ないで！我の汚い顔を見ないで下さい！目を汚してしまってすみませんすみません!!」

「なあ…アン「穴はどこ?·穴はどこにあるの?!穴があったら入りたい!!」なあ…「見ないでえええぇ!!恥ずかしさの余り死んでしまいます!!面を、面を返して下さい!!」……」
(まず会話が出来ねえ…)
轟が質問しようとするも、叢の言葉に全てが無に掻き消されてしまう。埒が明かないと思った轟は、面を差し出す。それを手で覆い隠してる指と指の間の隙間から面をみると、奪うかのように乱暴に面を取り戻し、再び面をつける。
「…ふう」
これでようやく一安心。と叢は息をつくと、轟を睨みつける。しかし面をつけている為轟自身、睨まれてるとは思ってもいないし分からない。
「貴様、よくも我の面を…」
「ああ、スマンな…まさかあんなに動揺するなんて思ってなかったよ」
面を取るだけで此処まで豹変するとは、轟も予想外だった。そしてその後の豹変も普通に変わりすぎて若干驚いている。
「……まあ良い、で?·我に何の用だ?·」
「ああ、アンタに聞きたいことがあるんだけどさ……
アンタってもしかして、大狼財閥の忍だよな?·」
「!?」
轟の唐突な発言に、二人は驚きを見せる。斑鳩はともかく、お面を被ってる叢でさえ分かるほどに…
斑鳩は「本当ですか?·」と尋ねて見た。
斑鳩の家は鳳凰財閥。そして大狼財閥は斑鳩の住む財閥とはライバル関係なのだ。何でも忍が派遣されたという噂は聞いていた。
ここで斑鳩は全て理解した。叢が大狼財閥が派遣した忍だと言うことを……忍を派遣するのは上層部だけでなく、その気になれば大狼財閥と言った金持ちや、裏の社会の極道と呼ばれるヤクザ者にだって派遣されることもある。遣われる忍は場合や立場によっては善忍と悪忍とで分けられるが…
因みに斑鳩は叢と初めてあったと言うのは、交流パーティーの時

だった…斑鳩は思い出したのだ。財閥の交流パーティーで、彼女は綺麗なドレスなのにその般若のお面を被ってて、どんな事であろうとも肌身放さずお面を外さない伝説のご令嬢……今や都市伝説だとも言われていた彼女は、面を付けたままダンスをし、周囲の者のつま先というつま先を潰し、終いにはシャンパンタワーに突っ込みお尻が丸見えになり醜態を晒した大狼財閥のご令嬢、それが叢だ。
「まさか、頭隠して尻隠さずの叢さんが…忍だったなんて…」
「斑鳩、その呼び方はやめろ…昔のことなど思い出したくもない…」
斑鳩が驚くのも無理はない…そして勿論、叢は突っ込みを忘れない。それに叢にとってその時の事件は黒歴史だ…思い出したくもないのも当然だろう…
「しかし…何故分かった?見向きもしなかったお前が…」
叢の言葉に轟は思った。見向きもしなかった…というと、それは昔の自分のことだと…当時その時の自分は父親への憎しみに囚われ、完全否定することだけを考えていた。だからその時は誰かを見ようとなんて思ってもいなかったし、正直言って誰とも関わりたくなかった。
大狼財閥に対しても轟は関わりを持っていた。何故なら鳳凰財閥と同じく、Ｎｏ．２ヒーロー、エンデヴァーが社交パーティーとして招待したからだ。叢が月閃の試験をパスで通り、更に選抜メンバーとして入る事が出来た為、祝福として呼んだというが、焦凍には分かっていた。それも父親の私利私欲、オールマイトを超えるという欲望がの為に、忍の訓練を聞き出す為だったということを……
その時だったからなのか轟はつい顔に出ていたらしく、叢は偶々『見てない』轟を見たのだろう。
「あの時は…色々アレだったんだよ……アンタは一目見て印象強かったから、頭の中の何処かに、ほんの僅かに覚えてた……んだと思う」
自分の家事情など、簡単に言えるものではない…緑谷と飛鳥にはこのことを言ったが、アレは時間と立場の問題だった、話さざるを得なかったし、納得してもらう為にワザワザ呼んで話したのだ。
「だろうな……だが、今は随分と変わったな…」

叢の言葉に轟は「やっぱりか…」と心の中で呟いた。緑谷と飛鳥に続き、叢にまで言われるとその言葉が出るのも仕方がない。しかし、あの日以来全然会ってないと言うのによく分かったな…と轟は思った。

「昔のお前は……何故だか知らんが、何かを憎んでたように見えた。我々と同じ…」

「ん？我々と同じ…？」

引っかかる言葉に、轟は目を丸くする。

「……なんでもない」

叢はそう言うと直ぐに首を横に振った。

（……轟焦凍、お前は…父親への憎しみを超えたと言うのか…？）

叢は知っている。轟が父親を憎んでいたことを…彼に何があったかまでは知らない、お互い面を向き合って話し合ったこともない、だが轟が父親を否定していたことは知っていた。

それは何故か？簡単だ、自分も、自分たちもそうだから…特に大狼財閥なんかもその一つだ。

叢は、大狼財閥の所為で時間を奪われたのだ。それは、雪泉の祖父にして選抜メンバー五人を育ててくれた人物、黒影との時間を…大狼財閥はライバルである鳳凰財閥を真似たのである。

鳳凰財閥は忍を雇っていた、しかし大狼財閥には忍が居なかった…だからこそ、貧民街で両親を亡くした叢を忍として引き取ったのだ。

そんな大狼財閥に叢は怒りを覚えたし、許す事が出来なかった。しかし逆らうことも出来なかった…何故なら黒影と四人の仲間たちの命運を握られていたから…黒影は人には言えぬ事情を抱えており、ある事から忍の存在から逃げているのだ…だから逆らう事が出来なかった…もしそうなれば、黒影どころか、四人とバラバラになってしまう、それが嫌で仕方なかった。

そんなやり取りの中、悩んでいた時に、轟の存在を知ったのだ。

次に、憎しみについて…

雪泉の言葉から察するように、叢含めて月閃の選抜メンバーの皆は悪を心底憎んでいる。いや、悪という存在を許さない…それが今の彼

女たちだ。それは勿論黒影も…
叢は悪を憎んでいるせいか、それとも大狼財閥によって時間を奪われたせいか、自然と憎しみで動いてる人が分かってしまうのだ。だからなのか、轟が父親を憎んでいることが分かったのだ。それがどう言った経緯か知らない…確信はないが、少なくとも自分と同じく何かに苦しめられた…と言うことだけは何となく分かった。
「あの、叢さん…」
考え事をしてると、此処で声をかけられた…それは先ほど負傷を負い動けなくなってた斑鳩だった。斑鳩は体はボロボロだが、既に立ち上がる位には回復していた。しかし敵意を感じられない、恐らくもう戦う気はないのだろう…
「貴方が大狼財閥であることは分かりました…いえ、寧ろ好都合です…」
「なに…？」
その言葉に心当たりのない叢は、首を傾げる。一体何が好都合なのだろう？
「…大狼財閥である貴方にお聞きしたいことがあります、貧民街の都市再開発計画はご存知ですか？」
「ああ、勿論知っている」
「でしたらお願いします！あの計画は中止にして下さい!!」
貧民街都市再開発を止めさせるために、斑鳩は叢に頭を下げる。あの斑鳩が頭を下げるとは…と、叢は内心少しだけ驚いた。
「あそこに住む人たちは他に行く場所がないのです！」
「お前が何故、貧民街の者を心配する？今まで近くにいたにも関わらず、お前たち鳳凰財閥は見て見ぬ振りをしていたではないか？それを今更…関係ないはずだ」
「……わたくしの友人の生まれ故郷が、貧民街なのです…その友人は恐らくまだ、開発計画のことは知りませんが……」
「……なるほど、おいそれと事情は分かった…」
叢は思い当たる節があるのか、小さく頷いた。そのことに安堵の息をつく斑鳩。しかし…

「だが、敗者が強者に要求するのは道理に反する…我に何かを要求したければ、まず我に勝つことだ…」
「…っ、仰る通りですね、返す言葉もありません……」
斑鳩は叢に返す言葉もなく、歯を食いしばり現状を打開出来ないままその場に佇むしかなかった。
「では、さらばだ…」
「……」
叢はそう言うと、席を向けたまま去っていった。その後ろ姿を、近くにいた轟はジッと見つめて…

「……」
叢は歩く中、斑鳩の言ってた貧民街について心に引っかかっていたことがあった。それは自分も同じ貧民街出身だと言うことだ…大狼財閥は都市再開発計画を実行しようとしている。つまり、それは自分の故郷を消そうとしているのだ。斑鳩の言ってた友人とは一体誰なのか知らない…だが、これは大狼財閥の指令…いわば忍でいう忍務…忍は与えられた忍務には忠実に従わなければならない…
非情だと言われても仕方がない…何故なら、それが忍なのだから。
「貧民街か…懐かしい……昔はよく我の友人と遊んだことがあったな…」
今思えば懐かしい…ドブまみれになってその子と一緒に帰って来たことを…あの時の我は幸せに満ちていた…そう、あの事件までは……
我が小学五年の頃、両親は亡くなってしまった…父親の知り合いからは交通事故と言っていたが、子供の我でも嘘だと察しがついた。我の両親は交通事故ではなく、忍の忍務によって死んでしまったのだ…それも悪忍の抗争により…

我はショックのあまり、心を閉ざしたのだ…小さなゴミ袋を顔に被り…

それを見たある友人は、我のことを思って気遣ったのか、小さなビニールの袋をつなげて顔を覆い被れる大きさに作ったのだ。しかしその友人も今はどうしてるか分からない、もしかしたらまだ貧民街にいるのかもしれない…そう思うと少々心が苦しくなる。

……貧民街といえば昔小さい頃、まだ小学生ですらなかった頃…貧民街で一人ぼっちの子供がいたな…

詳しくは覚えていないが、その小さな子供はよく泣いていた…一緒に遊ぼうと友人と一緒に手を差し伸べ誘おうとしたが、何故か両親に止められたことがあった。その子の姿はあまりにも可哀想だったから印象があるものの、もう既に昔の話、それに長い付き合いでもない、ほんの少ししか見たことがない為、うろ覚えであるが…今思えばあの子のような小さい子供はどうなるのか?と、時折思ってしまう。

貧民街がなくなってしまえば、そこに住んでた人たちは間違いなく居場所がなくなってしまう…

しかしこれは忍務でもある…忍は忍務を全うするもの…

だから叢は思うのだ、これは正義なのか?と…悪を滅ぼすことも正義だが、忍務をこなすこともまた正義の一つだ、この世の悲しみをなくすことが黒影様の願いであり、我らの悲願。

どうすれば良いのだ…?

「……」

悩む面のお嬢様は、深く考え込むのであった。

一方、雲雀と爆豪に泣かされた美野里は、既に勝負は終わっていたらしく、今は何をしてるのかというと…

「待て待て待て～～！はいタッチ！」
「ふぇっ!?美野里ちゃん速いね～！」
「うん！鬼ごっこは得意なんだよ♪」
　鬼ごっこで遊んでいた。因みに一応彼女たちは高校一年生です。小学生ではありません、ちゃんとした立派なＪＫであります。
　勝負は何方が勝ったというと雲雀が何とか勝つことが出来たらしい。だがもしあと少しで気を抜いていたら完全にやられていたらしい。しかも美野里自身はまだそれ程本気を出していないらしく、何方かと言えば早く勝負を終わらせたかったらしい。遊べれば勝負などどうでもよかったのだ。
　美野里は他の四人とは違い、ただ単に皆んなと一緒に幸せに遊べればそれで良いと、一番平和的な考えを持っている。
「それにしても、本当にこのまま遊んでて良いの？」
「うん！美野里はいつも修行が終わったら遊んでるもん！それに、美野里負けたけど、他のみんなは強いから、だから大丈夫だもん」
　美野里からは勝負に負けた悔しさなど感じられない。
「そ、そうなんだ…なら…良いんだけど…」

　そして、雪泉との戦いでは…
「きゃあっ!?」
「てやぁ！」
　飛鳥は雪泉に押されていた。無数の氷の刃が貫くかのように飛鳥に襲いかかる。飛鳥はなんとか回避することに成功したものの、避けきれないものは刀で斬り壊した。キラキラとした美しい氷は破片として砕き輝いている。

雪泉の遁術は氷属性。そして氷結といったものを操れる。即ち轟に似た能力だ。個性でもないのに個性のように使える雪泉は、超人社会としても普通に溶け込めれるだろう…

「す、凄いや…あの子の雪泉さんって人、轟くんと同じ能力だ…！忍は個性がない代わりに秘伝忍法が主体となってるけど…雪泉さんのような個性的なのは見たことないぞ…！いや、蛇女の焔さんっていうかっちゃん並みに怖い人だって轟くんの炎のように操ってたし…となると個性的な忍もいるんだ…でも雪泉さんの場合よく見たら氷と風を操っている……吹雪って感じかな？雪じゃなくて氷だけど…でも本当に凄いぞ、雪泉さんは忍として活動してる訳だから、もしかしたらヒーローに装って活動することだって出来るんじゃ……となるとなると、表の社会にも通用するって感じかな？しかも氷と風の二つって個性で例えると轟くんと同じで反対にもなる…てか使い道が物凄くあるぞ…対人のみならず、氷で熱を冷やすこともできるし…火災などの災害も簡単に…！つまり救助にも向いてる…！凄いスゴイこれは大発見だ!!やばいどうしよう…ブツブツブツブツ」

緑谷は体育祭ぶりにブツブツと呟く独り言をつぶやいていた。呟きながらヒーローノートを手に取り一心不乱にかぶりつくように書いている。緑谷は相手への推測、観察、情報集めなどを得意とする。にしても物凄い呟きだ…

「おいクソデク何ブツブツと呟いたんだ死ねやカス!!」

「うわぁっ!?聞こえてたの!?」

「それとデカ乳女!!何押されてやがる！ぶっ飛ばすぞ!!」

爆豪は大人数の忍学生と対峙しながらも二人に怒りをぶつける。爆豪の動きも相変わらずクレイジーで隙のない動き方だ。次々と技を繰り出していく。特に一番驚いたのは胸倉を掴んで顔に何度も爆撃した後向かってくる相手に爆破して投げて一点集中爆破したのは驚いたけど…

爆豪は戦うたびにセンスの光る男だ、敵にしたらと考えるだけで恐ろしい。しかし爆豪も大人数と相手してるせいか、息が切れてきてる。きっと体力的な問題なのだろう。一瞬の気も引けず、最新の注意

を払いながら個性を使って駆使している訳だし、精神的な体力も削れているのだろう。
「大分減ってきたなぁ…ＵＳＪの雑魚敵と同じ感じか？」
　爆豪については問題ないだろう…
　問題なのは飛鳥の方だ…
「秘伝忍法！【半蔵流乱れ咲き】！」
「秘伝忍法！【樹氷扇】！」
　飛鳥は二つの刀を手にして斬撃を繰り出し、高速で回転する。雪泉は二つの扇を広げ、舞うように回転する。回転すると氷と風、氷風が中心に渦巻く。氷の破片が飛鳥に襲いかかるも斬撃を繰り出し相殺する。そして飛鳥の回転と雪泉の渦巻く竜巻、二つの力が衝突する。激しい力が衝突し合い、その場の皆も衝撃で吹き飛ばされそうになる。まるで体育祭での緑谷と轟の戦いを思い出させる光景だ。
　そして二つの衝突する力の衝撃により、空気が爆発するかのように、大きな爆発を生みだした。冷たい空気の爆発が、皆を包み込む。白い靄が晴れると…そこには、飛鳥がボロボロの状態で倒れていたのと、雪泉が立っている姿であった。
「飛鳥さん!?」
「デカ乳女！起きろや！」
　二人は同時に声を掛ける。飛鳥はなんとか意識こそあるものの、体が動かない様子だった。
「うぅ…」
「どうやらこの勝負、私の勝ちで宜しいですね？」
　雪泉は氷の剣を作り出し、飛鳥に向ける。氷の剣…こんな使い方もあるのか…
「これも、お爺様と、そしてこの世からの悲しみを消すためです…」
「お、お爺様？」
「…」
　お爺様、飛鳥がその言葉を口にした途端、雪泉の表情が一変する。
「もういいです…トドメを刺します…お覚悟！」
　氷の剣が振り下ろされようとする。

「このっ…!!」
緑谷は飛鳥を助けるべく駆けつけようとする。しかし距離があるせいか間に合わない。このままでは飛鳥は死んでしまう。
その時、
パキイィィン！
「「「!?」」」
飛鳥、雪泉、緑谷、爆豪の四人は突然氷が現れたことに驚く。なの氷は地面に這うように凍りつき、氷結が飛鳥を助けるかのように転がしていく。
「もう、そこまでで良いだろ？」
氷を出す。この場には雪泉しか存在しなかった…しかしこの氷は決して雪泉のものではない、この氷は、先ほど大狼財閥のご令嬢である叢と話してた、轟焦凍のものだった。
「轟くん!?」
飛鳥と緑谷は轟の名を叫ぶ。「舐めプが…！」と爆豪は轟の出現に嫌気が刺したことをは放っておこう。
「なんですか貴方は？邪魔しないでください」
「悪いな、目の前に困ってる奴がいた」
雪泉は邪魔されたことに怒りを覚え、轟を睨むが、轟は自分のやったことが間違ってると思ってない、むしろ正しいことだと思った為悪気がない真顔だ。
「別にこの勝負、もうアンタの勝ちで良いだろ？アンタらは学炎祭を申し込みに来た、なら殺さなくたって勝ちは勝ちだ…もうそれで良いんじゃないか？」
「いいえ、そういうわけにはいきません…」
「どうしてそこまでムキになるんだ？」
冷たい空気のなか、雪泉と轟はお互い抗議する。
「決まっています、悪を滅ぼす為です」
「悪？飛鳥たちは善忍だぞ？所謂俺たちでいうヒーロー側だ」
「悪に関わり、悪に染まった偽善者です…善忍ではありません」
雪泉の考え方には苦労する。まるで鋼の意思だ…爆豪は呆れ、緑谷

と飛鳥はしゅんとするが、轟は真っ直ぐ向かいあって話し合う。
「……なあ、雪泉つったか？悪だのなんだの知らないが…何がそんなに気にくわない？何でアンタ達はそんなに悪を憎むんだ？何かされたのか？」
「ッ！」
轟の無神経さに苛立ったのか、雪泉は思わず声を張る。
「黙りなさい！無神経な所もいい加減にしなさい！貴方に知る必要などない、分かり合えるわけが無いのですから…」
雪泉のその言葉には怒気が含まれていた。そして彼女も彼と同じく怒りの導火線に火をつける。
「それに体育祭を観ていた際に叢さんから聞きました。貴方、エンデヴァーさんの息子だそうですね？なのに息子である貴方は…エンデヴァーという偉大なるヒーローが父親であるのに、恥ずかしくないのですか？あの敗北を…」
ピタッ…
轟の体が一瞬停止したかのように止まった。
「お前……何なんだよ……今この話とアイツは関係ねえだろ？」
轟にとっての逆鱗はエンデヴァーという父親そのものの存在だ。
あのクソ親父のせいで全ての人生が狂ったんだ。母さんも苦しんだ、アイツは、ヒーローなんかじゃねえ。
轟は体育祭で憎しみを乗り越えた。しかし雪泉の一言で再び憎しみに火が付く。
いいや、落ち着け…思い出せ…あの言葉を…あの時言ってもらった言葉を……これは、俺の力だ。アイツなんて関係ない、だから、血肉なんて関係ないんだ…
一呼吸して心を落ち着かせる。そもそもコイツは父親のことを知らない、だからこうして平気で言える。今その気になれば言えるものだが、この話はそう簡単に話していいものではない…
「お前なら、少しは話が出来ると思ってたんだがな」
「別に話し合いなど必要ありません、悪となった偽善者と関わってる貴方達も既に悪そのものです、雄英も随分と落ちたものです」

「学校まで侮辱するかおまえ、相当悪を憎んでるんだな」
「当然です、悪こそがこの世界に悲しみを生む元凶なのですから…」
「それは本当にそうか？」
「…どういう意味です？」
「悪だけが、本当にこの世界を悲しませてるのか？そう言い切れるか？」
「……何を、言ってるんです貴方は？」
「俺は悪以外によって悲しんだけどな…まあ良い、とにかくだ…悪がなくなったとしても、そこには正義もないぞ？」
「どういう意味です？」
「そのまんまの意味だ」
「……まあ、良いでしょう…貴方と議論する気はありません……今回は引かせてもらいます……決着は、後日また…」

どうやら雪泉はまた此処に来るそうだ…雪泉はそう吐き捨てるように言うと、背中を向け去って行った…

そして、雪泉と轟にはどこか見えない何かの亀裂が生じた。雪泉のその後ろ姿は、余りにも悲しいもので…

５２話「ＴＨＥ・お話ししましょう？」

それから、雪泉たち率いる死塾月閃女学館は決着は後日…と言い残し、半蔵学院から去って行った。
「雪泉、お帰りなさい」
校門前には夜桜、叢、美野里、四季の四人が既に待っていた。最後なのが雪泉だったというわけだ。
「皆さん、お疲れ様でした…」
「ええ、雪泉の方こそ…しかし、決着は付けなかったのですか？」
「はい、とんだ邪魔者が入ってしまったので…」
雪泉はまたもや表情を怒りの色に染める。
「成る程…そうでしたか」
「それに、飛鳥さんにはまだ何処か力を隠している…死の美を交わして分かりました…」
雪泉は何処か薄い笑みを浮かべていた。それが一体何の力か分からない…だが、それでこそ潰し甲斐がある。何故なら飛鳥は半蔵の孫なのだから…
そして私は黒影の孫…
孫対孫の戦いなんて生温い、孫対孫の戦争…そのくらいの戦いでなくては困る。その力を完膚なきまでに打ち砕く為に…我々も力をつける必要があると悟った。
「そういえば…あの葛城とか言うヤツ、変な人でした…強い者がどうのこうのとか、生死を分ける戦いが楽しいだの、嬉しいだのと…儂には分かりませんでした…あの後拳と蹴りを交わしても…分からずじまい……」
「アタシは柳生ちんの強さの秘密が分かっちゃったけどね～♪隠鬼の目…でも柳生ちんは違うって言ってたし、じゃあ答えはなんなんだろう？教科書通りの答えだったのにさ～…それにラブリーな眼帯チョー欲しかったし！」
「皆さん、余計なことは考えなくていいのです…ただ、私たちの思いは一つ、黒影お爺様の願いを叶えるため、悪を滅ぼす…それが私たちの

生き方なのですから」
「す、すみません雪泉、敵とはいえ少し戸惑ってしまいました…」
「そうだね～…ゴメンごめん、でも欲しいものは力づくでも手に入れる、それが私の常識だしさ～、まっ！柳生ちんの眼帯はまた今度手に入れれば良いわけだし！」
　夜桜と四季は謝るようにそう言うと、すぐに気持ちを切り替えた。
一方、叢は…
「……我は、エンデヴァーの息子と会った…」
「！」
　叢の言葉に雪泉はまたしても表情が歪む。轟の時と会った時と同じくらいの険しい顔つきだ…
「それなら私も会いました…いえ、邪魔をされた…と言ったほうがいいですね」
　雪泉は飛鳥にトドメを刺そうとしたところを轟によって邪魔されたのだ、今は彼らを傷つける訳にもいかない…
　だから、雪泉は腹が立っている。いや、それともう一つは言葉もそうだが…何にも知らないとはいえ他人の事情を聞き出そうとするところに思わず苛立ってしまった。
「まあ轟さんの話は良いとしましょう…問題なのは、美野里さんです…」
「えっ…!?」
　突然名前を呼ばれた美野里は、ポカンと口を開き、目を丸くする。まるで小さな小動物が驚いてるように見える…
「貴方は半蔵学院の連中に負けたようですね？そのうえ、敵である彼女たちと遊んでた…」
「そ、それは…！美野里は…ただ、遊びたかっただけだし…戦いたくないし…それに、他のみんなは強いから…勝ってくれると思ったから…だから」
　美野里はおそる恐ると声を振り絞り、雪泉に反論する、しかし雪泉にはそんな言い訳は聞かない…何より彼女の性格なら尚更だ。
「言い訳は聞きたくありません…それに、貴方は雄英の生徒に泣かさ

れたのですよ？悔しくないのですか？」
「ひ、雲雀ちゃんが言ってたけど、あの人は別だよ…あの人はあれが素だし…何より恐竜さんみたいに怖いもん…」
「……成る程、それなら美野里さんはもう学炎祭に出なくて結構です」
「「「!!??」」」
　雪泉の言葉にその場の全員が彼女に視線を向ける。
「え、あ…あのさぁ、雪泉ちん、流石にそれはやり過ぎじゃない？というか、言い過ぎじゃ…」
「やり過ぎ？何を言ってるのですか四季さん、これは寧ろ親心ですよ？学炎祭は下手をすれば命を落とす危険性だってある。いえ、忍とは常に死が付きまとっている…そんな生半可な想いで学炎祭に出られてもこっちが困ります。違いますか？」
「うっ…」
　流石にやり過ぎではないか？と四季は言うものの、雪泉はさも当たり前のように言葉を流した。言い返す言葉もない四季はぐぅの音もでない。
「そんな…」
「それが嫌なら精進し強くなりなさい。黒影お爺様の為に、そして…平和のためにも……戦う決意があるのなら話は別ですが…」
「わ、分かったよ！美野里、戦うのは嫌いだけど、皆んなの足引っ張るのはもっと嫌だし、それに…一人だけ仲間はずれなんて嫌だから……だから、美野里こらからはちゃんと戦う…！何より黒影おじいちゃんの為なら…！」
　美野里は涙を必死に堪えながら、そう言うと、雪泉は安心したように頭を撫でる。
「それでこそ美野里さんです。学炎祭、期待してますよ？」
「うん！えへへぇ～♪」
　頭を撫でられた美野里は、とても嬉しそうだ。その笑顔は無邪気で純粋な子供のように可愛らしいものだった。美野里はいつも黒影にこうして頭を撫でていた、美野里はそれがいつも嬉しくてしょうがなかった。黒影もまた、美野里の笑顔が嬉しくて…

「では、帰りましょうか…」
雪泉はそう言うと、月閃は半蔵学院に背を向け、去って行った…
「……」
ただそんな中、雪泉の心には轟の言葉が引っかかっていた。
『悪がなくなったとしても、そこに正義はないぞ?』
気にしないようにと思っても、何故か頭の中に、その言葉が鮮明に蘇る。雪泉は首を横に振る。
(いえ…そんな言葉などただのまやかしに決まっている……悪と関わりを持ち、悪に染まった偽善者だ…)
心の中で無理やりその言葉を掻き消した。黒影お爺様の意思を全うするのが私たちの役目であり、私たちの悲願。お爺様もそう願っているに違いない。だから私はその言葉など信じない、悪や、それに蝕られ悪として染まってしまった者の言葉など…
しかし…
『悪いな、目の前に困ってるヤツがいた』
悪と関わり、悪に染まった者と言うのなら、目の前で倒れてた飛鳥を救うだろうか?確かに同じ仲間なら心配するのも無理はない…しかし向こうは忍とは訳が違う…
そもそも悪が誰かを助けると言った光景を一度も見たことがない。
本当に心が悪に染まっているのなら、助けないはず…しかし轟は飛鳥を助けた。
では、誰かを助けることは悪なのだろうか?
(轟さんにはああは言ったものの、彼の行動は悪ではなかった…いえ、悪を感じなかった…いえ、寧ろ彼の行動は正義、と言った所でしょうか…?)
では、悪とは一体何なのだろうか?
歩いてるなかただ一人、雪泉だけがそう深く考えていた…

一方、半蔵学院の方では…傷だらけになった彼女たちを医務室に運び込んだ。
怪我は致命傷ではない為よかったものの、結果は負けたようなものだ…今回は彼女たちが引いてくれた為に良かったものの、もし引かなければ半蔵学院は廃校になり、忍の資格が永遠に取れないことになってただろう…
「しっかし、月閃のヤツら、想像以上に強かったなぁ…アタイは結局勝負がつかなかったぜ…」
葛城はあの後、ずっと夜桜の相手をしていたそうだ。葛城のその底知れぬ闘志は賞賛するに値する。
「ええ、それにまさか大狼財閥のご令嬢である叢さんが、忍だったなんて…正直驚きを隠せませんでした……何よりも、強い…！」
斑鳩は先ほどの都市再開発計画を止めれなかったことに、悔やみ歯をくいしばる。そう、友人である詠の故郷を守りたいのに…今のままでは彼女に勝つことは出来ない…
「雲雀も、美野里ちゃん思ったよりも強かったなぁ…見た目は小さな子供だったのに…」
「あの四季という奴もな…月閃、侮れんな…」
柳生と雲雀も月閃の強さに内心驚いている。こんなに強い忍が蛇女子学園以外にも居たなんて…いや、日本中を探せば幾らでもいるのかも知れない…
そう考えると、まだまだ未熟だなという気持ちが伝わってくる…
「皆んなぁ…」
飛鳥は心配そうに皆んなを見やる。自分も怪我をしてしまったが、自分の体よりも、仲間たちの方が心配だ。
「あ、飛鳥さんも休まないと…」
「そ、それはそうだけど…」
自分よりもまず他人の心配をする。それが飛鳥であり、彼女の良いところだ。
雪泉は一体何故悪と少し関わっただけでこんなことになるのか…

考えても答えは見つからない…それもそうだ、向こうのことなど一切知らないのだから、だがそれは逆の立場でも言えるのだが…彼女たちは気にも留めないだろう…

そんなシンミリとした話をしていると…

「おお、お主ら無事かの？」

「え？」

渋い、老いた声が聞こえた。声の主に振り返ると、なんと扉を開けて入って来た…半蔵の姿であった。

「「「「は、半蔵（様）!?」」」」

皆は半蔵が現れたことに、一瞬背筋を凍らせた。別に気まずい訳でもないし、なんの問題もないのだが、声をかけられるまで気づかなかった…まるで幽霊みたいになんの気配もなく話しかけられたので、心臓が止まるかと思った。その相手が伝説の忍であるのなら納得は出来るが…

「霧夜から話は聞いておる、お主ら…月閃から学炎祭を申し込まれ、戦ったようじゃな？」

「うん……ごめんねじっちゃん、負けちゃって…」

「なぁに！まだ学校があるということは勝負は終わってないということじゃろ？今回負けたのなら、次は勝てばええ話じゃ！」

落ち込む半蔵学院のメンバーに、半蔵は豪快に笑う。

そういえば、今思えばじっちゃんが怒ったことなんて一度もないな…危ないことや、怒られるようなことはしたこと無いからなのかもしれないけど…蛇女子学園に襲われ負けてしまった時や、今みたいに学炎祭で月閃に負けてしまったことなど、一度も起こった姿を見たことがない。

いや、一つだけある…半蔵が初めて怒ったのは、敵連合が襲撃して来た時以来だ、それ以降は見たことがない。

半蔵の優しい心はオールマイトと同じだ、オールマイトもどんな時も笑顔を絶やさない心優しきヒーローだ。

そう考えると、オールマイトと半蔵は共通点がかなり多く存在する…まあ、お互いトップの座にあたるので当然なのかもしれないが…

「まあそんなことより、儂が来たのは他でもない…雄英の諸君達がいるのも丁度良いのう…」
「え？俺らっすか？」
半蔵の言葉に、雄英生は息を飲む…伝説の忍が一体自分たちに何ようなのか…？もしや、爆豪と轟が個性を使ったことを知って…？
「体育祭お見事じゃったの！てな訳で、寿司をご馳走しようと思ってな！」
「「「学生っぽいのキターーー!!!」」」
なんと、半蔵自らが寿司を握り皆にご馳走してくれるそうだ。しかも話によると全てタダ、店も貸し切り、こんな上手い話はそうそうない。美味いだけに…
「本当は儂も見たかったんじゃが～…生憎忙しくてのぅ、どうしても手の離せない用事があったんじゃ…なに、結果は知ってるし大丈夫じゃよ」
「いえいえとんでもねーっす!!アザーす！やったぜ！打ち上げだ打ち上げ！」
最初はシンミリとした暗いムードだったが、半蔵が来てくれたことにより、一気にスーパーハイテンションへと変わった。天国から地獄という言葉があるが、コレはその逆だ。
半蔵学院の皆も、気を取り直して半蔵のお誘いに乗ることにした。飛鳥なら尚更だろう…
「でもじっちゃん、急にどうしたの？」
「ん？」
喜ぶ飛鳥は半蔵に疑問を抱き問いかける。
「だって、急に現れたかと思ったらご馳走しようとするし、そりゃ雄英の皆んなの打ち上げは良いことだけど…でもじっちゃん、本当は何の用があったの？」
飛鳥の言葉に半蔵は少し黙り込む。確かにご馳走は有難いし、雄英生への打ち上げは納得がいく。しかし、飛鳥にはそれ以外のものを感じたのだ。それに、『丁度良かった』ということは、本来は飛鳥達に用があったのだろう…

「まあ、それは後で話す…という訳で、待っとるからの」
半蔵はそう言うと、扉を開けて出て行った。
「いやぁ、学炎祭はヒヤッとしたけど…飯おごってもらえるなんて良いな！」
「こんな機会滅多にねーぞ！アレだろ？伝説の忍って、飛鳥達で言うオールマイトみたいな人なんだろ？そんなスペシャルリストにただ飯食わせてもらえるなんて…太っ腹じゃねーか！」
皆はわっしょいわっしょいと子供みたいに大はしゃぎしてる。
「ま、まあ…私のじっちゃん、寿司屋で経営してるからね～…」
「へ～、半蔵って飛鳥のじっちゃんなんだな～…しかも寿司屋経営か～！まあ良いんじゃねーの？……ん？」
「え？」
「ゴメン今なんつった？」
切島は目をパチクリさせ飛鳥を真顔で見つめる。
「え？半蔵は私のじっちゃんでって…
あ」
「は？……え？」
飛鳥は思わず手を口に当てる。しまったと思った時にはもう遅かった。知ってる人以外の皆んなは一斉になって大きく叫び出す。
「え!?ええ!?あ、飛鳥って伝説の…え!?」
「え!?が多いけど俺も言うわ！え!?」
「飛鳥って、伝説の忍の孫なんだ…??」
「はあぁいぃ!?なんですかぁそれぇ!!」
「ちょっ、おまっ、将来有望！」
「衝撃なる事実」
「凄いわ飛鳥ちゃん！全然知らなかった！初耳だー！」
「伝説の忍の孫ってことは…つまり飛鳥は…伝説のくノ一!?!」
皆は一斉になってワイワイと騒ぎ出し、ゾロゾロとマスコミ集団みたいに飛鳥に寄ってくる。あっ、最後の質問、気絶から回復した峰田ね？

「落ち着いて皆んな！落ち着いて！」
飛鳥は一先ず皆を落ち着かせることに集中した。勿論他の四人は苦笑しながら彼女と彼らのやり取りを遠く見守っていた。
落ち着いた皆んなは、まだ興奮こそは残ってるが落ち着いて来たようだ。
「私はまだまだだよ…じっちゃんの名に恥じぬようって、いつも頑張ってるんだけどね…」
飛鳥は顔を赤く染め、恥らないながらそう言った。
「いや、でも、なぁ？」
「あんな話しされたら誰もが驚く」
「てか半蔵寿司屋経営って、忍は引退したの？」
皆んな色んな声が上がってる。正直この話はなるべくしたくなかったんだが、飛鳥はついつい言ってしまったのである。元は飛鳥は真面目でお人好しな性格のため、隠し事はあまり好きではないし得意でもない。そのため嘘をつくのだって苦手だろう。エイプリルフールなんかは可愛い嘘を付きそうだ。
「まあ、じっちゃんアレでも歳は行ってるし…5年前か6年前くらいまでは活動してたらしいよ？」
なぜやめたのか、それは歳のせいであると言ってるが、現状今でも充分強い。とても歳の所為だとは思わないのだ。その為詳しい内容はよく分からない。
「そ、そんなことより！早く行こうよ！……あれ？」
「？どうしたの飛鳥さん？」
「轟くんいないね？」
「え？」
気がつけば轟はこの部屋には居なかった…既に帰ったのか、もしかしたら…
飛鳥は一人で半蔵学院の屋上に向かっていった。もしかしたら轟

くんは屋上にいるのかもしれないと、そう直感で思ったのだ。扉を開けると…そこに映っていた光景は…

「ハァ……ハァ……」

「え？」

飛鳥の知ってる屋上は、温かいお日様が当たってとても気持ちよく、そよ風が吹くいい場所だった。

しかし目の前に映ってる光景は、全てを凍らせていた。

ベンチや柵は氷漬けにされており、床はスケート靴で遊べそうなスケートリンク場になっている。少しでも気を抜いたら足を滑らせそうだ……空気も雪泉と同じ、いやそれ以上に冷たい。

何より氷山の一角に驚いた。瀬呂や爆豪に見せた大規模な氷までとはいかないが、それでも充分デカイ、その氷山とも思わせる氷の一角は、まるで天をも貫くように思わせるものだった。そして、その場にただ一人ポツンと立っているのは…

白い息を荒くし、全てを凍てつくかと思わせる氷を身に纏っている、轟焦凍の姿であった。

「はぁ……はぁ……クソ！クソ!!親父のことは乗り越えたはずだ……！親父のことなんて…もう、あの時誓っただろ…あの時!!」

轟は氷漬けにされてる柵に頭を思っきしぶつける。それでもまだ怒りは抑え切れていないようだ。

雪泉の言葉は轟にとって逆鱗を触れたようなもの…込み上がる怒りを無理やり押さえ込もうと必死になっている。

「とど…ろき…くん」

飛鳥に言葉をかけられた轟はようやく気付いたのか、ハッと我にかえる。

「ああ……飛鳥か……」

「……」

「悪いな、見苦しい姿、見せちまって…」

轟は軽くそう言うと、左手から炎を出す。炎の熱により氷漬けにされたこの場は一気に熱で蒸発し溶けていく。それを見た飛鳥は、ジッと轟を見つめる。

「轟くん、やっぱり…」
「雪泉ってヤツの言葉、気にしないようにって思ってたんだがな…忘れようとすると何故かクソ親父が思い浮かんでくる……それを忘れようとすると今度はまたアイツの言葉が鮮明に蘇ってさ……どうすれば良いんだって思って、ひたすら悩み続けて、こう…頭の中爆発した」
　彼は彼なりに気にしないようにと努力したが、結果こうなってしまった。轟は己の心の弱さに情けなさを感じる。
「他人の言葉に惑わされる俺は…まだまだ未熟だな…何も進歩してねえ…」
「そんなことないよ!!」
　暗くて氷のように冷え切った表情を浮かばせる轟に、飛鳥は抗議した。
「轟くんはあの時とは違ってもう変わったよ！緑谷くんと闘って、様子は少し変だったしその後何があったのか分からなかったけど…少なくとも、轟くんは変われたよ……ちゃんと、進歩してるよ！」
　飛鳥の気遣う言葉に轟はグッと心に嬉しさがこみ上げてくる。昔の自分なら目障りだと思ってただろう…しかし今は違う、素直に嬉しいと思える。それを今ならハッキリと言える。そう、轟はちゃんと真っ直ぐ成長している。進歩してない筈がない。
「飛鳥は、優しいんだな…」
「優しいって、私はこれがいつも普通だよ…？」
「これがいつも普通なのか…」
　裏のない拍子抜けな彼女に、轟は思わず苦笑した。さっきまであんなに悩み苦しんでたのに、何故か飛鳥のお陰でスッキリした。先ほどまであんなに悩んでた自分がバカらしく思えてきた。
「なんか、悪いな…」
「いいよ、雪泉ちゃんに言われて悔しいっていうのは、私もそうだから…それより、早くこれなんとかしよっか？」
「おう…」
　今までずっと拒んできた轟の炎は、とても優しく暖かく、彼の凍て

つく心を、溶かしていった…

後から事情を知った轟はすぐに準備をし、半蔵が兼業してるという寿司屋へと向かっていった。賑やかな商店街に、幾つもの店が並んでいる。幾つもの店を見ている間に着いた。

「此処が寿司屋か？」

「んー、ちょっと想像してたのと違うような…」

「ばっか、お前こういうのこそ結構美味いんだぜ？」

「てか、寿司屋って大体こんな感じじゃね？」

それぞれの意見が飛び交うが飛鳥は気にしない。見た目は少しボロくてとても一流の寿司屋とは言えないが、飛鳥にとって半蔵じっちゃんの寿司屋は世界一なのだ。

中に入ると、寿司職人とも思わせる半蔵の姿があった。どうやら寿司のネタを準備してたらしい。

「おお、待ってたぞ！寿司のネタもいっぱいあるから遠慮せず食え！」

ガッハッハ！と豪快に笑う半蔵は、まさしく寿司職人そのものだ。伝説の忍？なんて忘れてしまうくらいに、

それにしても伝説の忍がどうして寿司屋を兼業しているのか？

飛鳥から聞いた話しらしいが、忍とは常に隠れながら生きなければならない。だから忍を引退した彼は寿司屋で余生を過ごしている。寿司屋は元々半蔵が建てたもので、今は半蔵だけでなく、飛鳥の父親に、忍だった母親も寿司屋の仕事をしている。今は両親はいないし、二人とも忙しい時があるけど、飛鳥は寂しくなかった。何故なら仲間がいるから…

「さて、と！何がいい？」

それぞれのテーブルの位置についた皆んなは子供がはしゃぐかのように騒ぎ出す。
「イクラ！」
「大トロ！」
「マグロ！」
「イカ、タコ」
「たまご！」
「おっぱい！」
皆んなそれぞれ注文する。こんなに忙しいのはそうそう見たことがない。
ここの店は余り繁盛してないらしく、また状況が厳しいとか…それでもここに来る常連さんたちのお陰でなんとか保つことが出来てるらしい。しかし半蔵はそれでも構わない…と言っている。
そう言えば、寿司屋のお陰で飛鳥はこうして生きることが出来ているのだ。飛鳥の母親は忍だ。しかし父親はそうでもないただの一般人、そんな父親はある日母親に恋をしたのだ。それから懸命にプロポーズしたとか、でも半蔵はそれを許さなかったらしい、なんでも半蔵も譲れないものがあったし、プライドというものがあった。
どれだけ頭を下げようとも、半蔵は許可を出さなかったとか…そんなある時、父親は自分の夢である弁護士を辞めると言った、そしてその代わり寿司屋を経営すると言い出した。愛する人と一緒に過ごすことが出来るのならそれで良いと……そして半蔵はようやく二人の交際を認めたのだ。
この寿司屋が、家族の始まりであり、きっかけだ。飛鳥にとっては、もう一つの家のようなものである。
皆んなはそれぞれ配られた寿司を食している。うん、美味い　という言葉に尽きる。飛鳥は太巻きを思いっきりかぶりつく。
口の中にいっぱいに広がり、お酢が疲れ切った体に染み渡る。飛鳥は太巻きが大好きなのだ。だからいつも此処に来る時は必ず太巻きを食す。
「それで飛鳥よ、どうじゃ？雄英は楽しいじゃろ？」

ふとじっちゃんが私に声を掛けてきた。私は思いっきり頷くと、半蔵はさぞ嬉しそうににっこりと笑みを浮かべた。
「そうかそうか！それは良かったわい」
「あっ、ねえじっちゃん…そう言えば聞きたいことがあるんだけど、オールマイトってどうして教師やってるの？」
ビクッと反応したのは半蔵だけでなく、黙々と食べてた緑谷も思わず反応した。半蔵は目を丸くする。
（飛鳥…お主何も聞いてないのか？）
半蔵は心の中でそう呟いた。
（いや、オールマイトの性格上仕方ない…なら……緑谷、この少年にはもしかしたら、志村のこと…言っとらんのかのぅ？）
オールマイトは隠し事が多い、大半は世間には知られてはいけないビックニュースなどだが、もう一方は個人的に言いたくないことだ。
「それは追々分かる……」
深いため息をついた半蔵の表情は、何だかとても悲しい顔だった。飛鳥は半蔵の顔を覗き込む。
「じっちゃん？」
「ん？おおっとと、いかんいかん、ボーっとしておったわい…」
「飛鳥、テメェのじいさんボケてんじゃねえか？」
半蔵は苦笑いを浮かべながら寿司のネタを作りに掛かる。飛鳥はそんなじっちゃんの様子に、疑問を浮かべるのであった…

皆は半蔵が握ってくれた寿司を食べ終わると、大満足した様子を浮かべていた。
いやぁ美味かった！

ごちさんでした！
ごっちー！
デザートは大きな山とも言える桃プリンだ！
つまりおっぱいってことでしょこの変態葡萄が
それぞれ声を上げる1ーAクラス。こんなにも喜びはしゃいでくれる皆に、半蔵はとても嬉しかった。
「ねえじっちゃん、そろそろ良い？」
「ん？」
「ホラ、さっきのお話し…」
飛鳥がそう言うと、半蔵の連中に1ーAの皆んなも黙り込む。半蔵は皆を見渡すと、目を伏せ語り出した。

かつて半蔵にはある親友がいた。その親友は半蔵と同じく善忍の道を進み、彼と双璧を成す程の実力を持ち、お互い対照的なタイプであり、競い合っていたライバルであった。
ソイツは一言で言えば純粋だ。いや、純粋過ぎていた。
善忍として何をすべきか、それを考え抜いた結果、偏ったところに行き着いてしまった。
悪さえなくなれば全ての悲しみが消える、全てが丸く収まると…全ての人が幸せになれると、そう思っていた。
「じっちゃん、それってまさか……」
「ソイツの名は黒影。月閃の雪泉達の師にして育て親、雪泉の祖父でもある。」
皆は目を大きく見開いた。いや、衝撃な事実に戸惑っている。
「話を続けよう…」
何故黒影はそうなってしまったのか？何故雪泉たちはそこまで悪を憎むのか？
それは、黒影も、孫も、その弟子たちも、皆んな悪によって両親を殺されたからだ。黒影はそれから悪を大きく憎んだ。それもそうだ、現役時代は悪忍だけでなく、敵（ヴィラン）の活性化も大きかった。
その時代は善忍と悪忍の抗争、そしてヒーローと敵の抗争が絶えぬ

ことなく激しかった。
そんな殺伐とした世界に、黒影は悪を滅ぼすという意思が芽生えたのだろう…そこからか、黒影はある理想を抱いた。それは――――
――――『善のみ存在する世界』だった。
そんなことできるわけが無い、そんな世界は正義とも善とも呼べない…そこには光なんて存在しない…
光りと影があるからこそ世の中は成り立つ、半蔵はそう考える。光あるところに影がある、善忍が存在すれば悪忍も存在するように、ヒーローが存在すれば必ず敵も存在する…良かれ悪かれそれが自然の摂理、仕方のないこと…
黒影と半蔵は、袂を分かつしかなかったのだ…
黒影は悪というものならば容赦無く殺す…だからヤツは忍学生卒業後、お互い違う道を歩み、トップとも呼ばれる善忍社会に歓迎され、大企業の忍務を難なくこなした。とはいえ、善忍の仕事は悪忍と戦う任務ばかりではない…
彼はフラストレーションを溜め、物足りなかったのか、とうとう忍務でもないのに関わらず、悪忍と敵にまで手を出したのだ。悪忍狩り、敵狩りと言った行為を行った彼は、これは世のためだと思い、責められる理由もないし、問題ないと思っていた。数多くの悪忍を殲滅することが黒影の成功であり、一つでも悪が消えることこそ、黒影の悲願なのだ。
確かに善忍にとって悪忍は敵である。悪忍を倒すのは当然のことで、そこに否定が入る余地はない。黒影はそう確信したのだろう…
しかし、それは若過ぎるが故の無知だった……黒影は純粋過ぎた為、知らなかったのだ。
善忍と悪忍はお互い時には協力し合うグレーな重要人物たちがいると…忍務以外に手を出すとどうなるか、それはヒーローと同じだ。
ヒーローからすれば犯行というもの…ならば忍の場合は追放され、抜忍となってしまう…
そして黒影は抜忍の身となり、善忍悪忍の両方の存在に追われる身になったのだ。

善と悪は背中あわせだけでなく、時には複雑に混じり合っていたりするものだ。
別れる際に黒影はこう言った…
『悪が憎い、善を蝕む悪が憎い！オレは悪が許せない…身勝手な悪のせいで多くの命が死んでいく…そんな悪がオレは絶対に許せない！オレは、善しか存在しない世界を作ってみせる！』
その後、黒影は一人で悪忍と敵を狩り続けてきた。勿論そんな違法行為が許されるハズがなく、善忍と悪忍、恨みを買った敵、忍を知るヒーローからでさえも命を狙われることになった。
「儂はそんなヤツこそが悪に思えることさえあった…過ぎたるは及ばざるが如し。行き過ぎた正義も悪になる…全く、笑えぬ話よ…」
半蔵は遠い目をしながら寂しそうにそう呟いた。今思えばさっきまで騒がしかった空気も、今は静寂な空気に包まれていた。
「まあ、その時の黒影の気持ちは…分からんでもなかったがな……」
「そんなことがあったんだ……」
飛鳥はポツリと呟いた。

そしていつしか黒影の噂は聞かなくなり、悪忍、敵狩りも行われなくなった。
ある最上忍が動いたという噂があったので、黒影は極秘に処分されたのだと誰もが思った。
恨みを買った敵は嘲笑い、ヒーローは詮索をやめ、善忍と悪忍も同じく詮索をやめた。
ところが、五年前のことだ。悪忍との争いで親を失った子供達を引き取って育てている者がいると言う情報を得た。
そしてその者が黒影だというのだ。
本部は黒影の行為を見逃さなかった。もちろん忍もヒーローも…
悪忍の被害者の子供達を率いて、黒影は再び悪忍と敵を殲滅させようしている。それも、ようやく抗争が終わったというのに…
この時期に悪忍と敵を狩る、それは新たな革命を起こすに違いない、と。そう判断したのだ。

黒影を暗殺するために、本部は二人の忍を派遣した。しかしその忍は暗殺に失敗した。やられた訳ではない、ある報告書が提出されたのだ…

『黒影に悪忍狩り再開の意思なし。現在は五人の子供達と密かに暮らしている…暗殺の余儀はないと判断する』

それが、葛城の両親で…

「アタイの両親が!?!」

葛城が驚いた声をあげた。葛城の両親が何も言わずに抜忍になったのには何か理由があると思っていた。しかし、まさかこんな形で理由を知ることになるとは思ってもいなかった。葛城は衝撃のあまり目から涙がポロポロと落ちていく。

「そっか……雪泉ちゃんが言ってた、力さえあれば全てを統べることが出来る。それを何としても見せてあげたいって、その見せてあげたい人は、黒影さんだったんだね…」

半蔵は黙って頷いた。

それを聞いた皆はざわめく声を漏らす。

「なんだよ黒影さん…男らしいじゃねえか！涙流しちまったじゃねーかこんちくしょう！」

「まさか、そんなことが…」

「黒影さんへの恩返しなのかな？」

「月閃の皆さんは、黒影さんのために戦って…」

皆は複雑な顔をする。そんななか、轟は無口のまま、ずっと手を見つめていた。

「……これって、俺と同じだ……」

そう呟いた。

轟は父親を憎み、否定し、大好きなお母さんのために会わなかった。でもお母さんに会いたかった。

それと同じように…

雪泉は悪を憎み、否定し、敬愛する黒影のために理想を叶えようとした。そして見せてあげたかった…

そういうことだ。ここまで共通点が繋がると、自分自身不思議で仕方がない。
そうだ、雪泉を見ていた時、何かを感じたのはそういう感情だったんだ。
つらみ恨みで動く人間を幾多もなく見てきた。だから、雪泉や、雪泉達に違和感を感じた、その正体がこれだったんだ。
だから、あの時雪泉は怒ったのだ。何も知らないとはいえ、憎むものの話を振ってきた轟を……その気持ちは大きく共感できるものだから……

半蔵は皆を見やる。
「飛鳥たちよ、少し戦いづらくなったかの？」
「ううん、そんなことないよ。むしろありがとう！この大事な話をしてくれて…！」
飛鳥はそう言うと席に立ち上がった。
「飛鳥よ？どうした？」
「少し、外の空気を吸いたいな～って思って！お散歩してくる！」
そう言うと、飛鳥は店から出て行った。
そんな飛鳥に、半蔵は心の中で呟いた…
『頼んだぞ飛鳥たちよ…ワシの親友である黒影の、そしてその愛弟子である雪泉たちを、救ってくれ』

外に出た飛鳥は、店より少し遠い方へと歩いて行った。外の空気を吸いたい、それは嘘でもないし、散歩したいというのも本音だ。ただ

少し思ったのが、雪泉たちがそんな辛い思いをして過ごしてきたと考えると、胸が痛むのだ。だからなんとなく一人になりたいのだ。
「雪泉ちゃん達の気持ちは分かった。でも、私にも譲れないものがあるんだよ…だから、この勝負。雪泉ちゃん達のためにも、負けられないな！」
気持ちをはき出せずにはいられなかったから…スッキリした飛鳥は、店に戻ろうとする。
すると…
「あのー！すみません！ちょっと良いですか？」
後ろから声が聞こえた。女子の声、身長は飛鳥とそんなに変わらないくらいだろう…
「はい？」
振り向いた飛鳥は、その女子をみやる。
「あの～、ちょっとある人を探してて、この写真の人を探してるんですけど～、お聞きして良いですか？」
「はい！もちろん良いですよ！」
飛鳥は笑顔で答えると、その女子は嬉しそうな笑顔を浮かべた。
困ってる人は助けなきゃ、困っていたら助け合うのはお互い様だ。飛鳥はその少女の持つ写真を見てみた。
「え？」
その写真を見た途端、飛鳥は血の気が引いた。背筋が凍りつくような悪寒、一瞬心臓がえぐられたかのように思えた。
「いやぁ～、この人に是非会いたいな～って思ってさ、なんちゃって♪」
どうしてこんなに動揺してるかだって？だって、その写真に写ってたのは…

私だから

私はその少女の顔を見た。するとその少女は薄く笑い、こちらを見つめていた。この粘つく不穏な気配…

「まあ、でもさ…やっと会えたよ…貴方と会うのは初めてだからさ…」

初めてだけど、気配だけで分かる。この殺気、間違いない、この人は…!!

「取り敢えずお話でもしようよ、飛鳥…」

「抜忍…漆月!!」

蛇女子学園を襲った、敵連合の抜忍・漆月だったのだ。

53話「二つで一つ、一つで二つ」

薄暗いバー、いつもより殺風景が増すその部屋は、敵連合のアジトとして使われている。その部屋には死柄木弔ただ一人だった…

「……」

死柄木は何やら考え事をしているのか、バーカウンターの席に着いたまま、ずっと動かない。すると部屋の扉からノックが入った。入ってくるとその人物は出入り口（ワープゲート）の黒霧の姿だった。

「死柄木弔、本当に彼女を外に出しても良かったのでしょうか？」

「ああ……」

死柄木は低い声で反応する。

「彼女は抜忍です、多くのプロヒーローはさておき、数多くの忍が詮索している。もし万が一バレてしまった場合、彼女だけでない…我々も危ういのですよ？」

「確かにそうだな…」

現在忍の多くは漆月の消息どころか、敵連合が何処に存続してるのかでさえ不明なのだ。もし漆月が忍に見つかってしまった場合、情報漏洩か、または跡をつけられるかで敵連合の居場所がバレてしまう。その危険性があるからだ。

「だが、あのまま漆月を此処に居させるってか？抜忍とはいえ忍の力を持ってる…それを有意義に使わないでどうする……情報集めするんだよ。」

「それは失礼しました…」

黒霧は軽く頭を下げ、再びバーカウンターの裏側に入りコップや食器などを洗ったり、酒の手入れをし始める。

漆月は抜忍として生き、善忍悪忍の存在から逃げ、隠れ、始末されることなく生きて敵連合に入って来た。なら外に出たって彼女は問題ないはずだ。こうして彼女が生きてるのなら、今回だって問題はない、つまり分かりやすく言えば死柄木は漆月を信頼してるのだ。

先ほど死柄木が考えていたのは、忍とはなんなのか？だ、善忍と悪忍は相反する存在、いわばヒーローと敵の関係のようなものだ…お互

い戦い合い殺しあう…
殺しあうのならこちら側に着いたってなんら問題ないはず…また、悪忍も敵も同じだ。身勝手に生きて、好きな時に好きなように力を使う。
暴れたい、奪いたい、殺したい、それが許されるのは悪だ。だから彼女の話を聞いたあの後、ずっと考えていたのだ…断られる必要もないはず、何故断ったのか…？
忍だって善忍悪忍問わず、任務の為なら手段を選ばず殺すではないか。
自分たち（ヴィラン）と忍とは一体何が違う？だから、それを知るために、漆月に外の情報を集めるようにと頼んだのだ。抜忍の彼女はもとい忍…なら、外の情報を集めるのには適応してる。この時、敵である自分たちではダメなのだと判断したからだ。だから彼女に頼る…それに

漆月も分からなかったから……

自分たちとは何が違うのかを…

「まあまあ、そんな怖い顔しないでよ落ち着いて」
場所は変わり、商店街にて飛鳥は漆月と遭遇した。飛鳥は険しい顔で彼女を睨みつけるも、漆月は飛鳥を見て薄く笑っている。
「この状況で……どう落ち着けっていうの!!?」
「ハハッ、まあそうだよね？」
飛鳥は自身から溢れでる恐怖を抑え込み、身を震わせながら、怒気

を孕んだ声で彼女に吐き捨てるようそう言う。
　そんな彼女に漆月は堂々と近づき、腕を肩に回す。
「だから、落ち着こう？焦ったって何も得はしないよ？それに…別に今回は争いに来たんじゃない、殺しに来たわけでもない、安心してよ……ただ、話をしたいだけだからさ」
　漆月は飛鳥の耳の近くで囁いた。まるで死そのものが纏わり付き、殺す機会を伺っているようだ。彼女はああは言ってるが、そう簡単に信用できるハズがない。
「……もし、私が貴方を殺すって言ったら？」
「あっはは！そう言うと思った！でもさ、殺せるの？」
「ッ!?」
　漆月はニヤリとそう言い、飛鳥は軽く身震いした。そして漆月は何も言わず飛鳥の腕に巻いてある包帯をめくった。するとそこには薬で塗られている傷痕だった…
「ここだけじゃ…ないでしょ？」
「…ッ」
　既に見切られていた。自分がボロボロだと言うのを…
「ホラね、身体がボッロボロ。手負いの状態で貴方は私を殺せるのかな？私がその気になれば、貴方はどうなるか…分かるよね？」
「……もしそんなことしたら、皆んなが駆けつけてくるよ……」
「だよね、でも私が貴方を殺して逃げるってことも出来るよね？またはその間に、ここにいる関係のない一般人だって殺すことが出来るんだよ？」
　最悪だ。まさかこんな事になるなんて…目の前に倒さなければいけない忍がいるのに、倒す事どころか、戦うことすら許されないなんて…飛鳥は思わず唇を噛みしめる。
「忍狼煙に、携帯での連絡と言ったもののやり取りは禁止、無駄な騒ぎも起こさないで、貴方と話がしたいだけだからさ……」
「わかった。……本当に話すだけなら……」
「ふふっ、飛鳥って物分かり良いね」
　漆月は可愛らしい声で微笑んだ。それに比べ、飛鳥は悔し混じりの

顔で下を向く。
悔しい。皆を殺そうとし、傷つけた張本人が近くに、目の前に、傍にいるのに、戦うことすら許されないことが、自分の弱さが、とにかく悔しくて悔しくて仕方がない。
でも、向こうの言ってることが本当なら、此処は大人しくしておいた方がいい…仮に命懸けで戦うにしても今は状況が悪すぎる。ここは彼女の要望に答えるしかない…それで今この場が収まることが出来れば、無駄に体力を使わずに済み、被害を出すことなく解決出来る。

「飛鳥さん、どこ行ったんだろうね？」
「散歩とは行ってたがな…」
緑谷と轟はお互い二人で話し合っていた。雪泉たちについて、そして学炎祭が終わった後のことも…学炎祭は雄英とは関係ないため、この先職場体験が待ち構えている。彼女たちの学炎祭も大事だが、こちら側にとっては職場体験も大切だ。
職場体験とは、体育祭で観に来てくれた全国のプロヒーローが雄英生を指名するのだ。本当は2・3年からが本格的なのだが、今回きた指名は将来性に近い興味に近い。また、卒業までにその興味が削がれたら一方的にキャンセルなんてのはよくある話。大人は勝手でいけないが仕方ない。そこもまた彼女たち忍学生とは似ている。
「学炎祭も心配だけど…職場体験…そろそろ迫ってきてるもんね…」
「ああ、まあな……緑谷は一票もなかったんだろ？」

「う、うん……」
轟の言葉に緑谷は肩を落とす。
「まあ、そう落ち込むな。お前はスゲェヤツだって、理解してる奴が居るんだからさ…」
「えっ？轟くん、今なんて…？」
「悪い…なんでもねえ」
言葉を流すような轟に、緑谷は首を傾げた。一方皆んなはみんなで帰る支度をして居る。
「いやぁしかし今日は学炎祭、アレだったけど凄かったな！あとタダ飯感謝します！」
「ねー！感謝かんしゃです！」
皆んなはやれ美味かっただの、やれ感謝だのと言いながら半蔵に頭を下げて帰って行く。しかし全員というわけでもなく、帰らなかったのは、二人で話し合っている緑谷と轟、携帯のスマホゲームで遊んでる爆豪だけだった。他の半蔵学院の四人は飛鳥待ちのため此処にいる。
「しかし飛鳥本当に遅いな～？何してやがんだ？」
「もしかして道に迷ったりして？」
「それはあり得るな、飛鳥は根は真面目だが何処か抜けてるからな」
葛城と雲雀の言葉に柳生はこくりと頷き納得する。飛鳥は根は良い子であり、明るく真っ直ぐな性格なのだが、何処か抜けているのだ。この前なんかは商店街で財布を取られたくらいなのだから。まあ街中で秘伝忍法書を落とした雲雀よりかはマシなのだが…
「まあ、その内戻ってくるだろ…」
柳生はそう言い残ってるガリを口に運んだ。彼女たちは知らない、飛鳥が漆月と遭遇しているのを……そして、その後に起こることも……

「う～ん！これ美味しい！」
漆月は飛鳥と一緒にベンチに座り、ビニール袋に入ってあるみたらし団子を一口食べ、頬をピンク色に染め幸せそうに食べている。それと比べて飛鳥は落ち着きがないのか、この状況にうまく飲み込めないのか、自分は何て反応を取れば良いのか分からないまま、動くことなくただ無言で座っている。
そんな飛鳥を気にしず、漆月はりんご飴に齧り付く。
「あっ、これも美味い…りんご飴あんま食べたことないから食べてみたけど…これいける」
片手にみたらし団子、もう片方にりんご飴を持ちながら嬉しそうに食べているその姿は、自分たちを襲った抜忍ということを忘れさせられる。
漆月は話があると言いながらも、取り敢えずは色んな店に回り、色んなものを買い占めていた。と言ってもほぼ食うものだけど…
「そ、それで…話って何？」
一向に話す気配がない彼女に、飛鳥は言葉をかける。
「ん？あ～ごめんゴメン、美味しいから夢中になってて食べてたよ、忘れてた」
漆月は悪そびれることなく笑顔で謝り、食べ終わったみたらし団子をゴミに捨てる。
「話ってのはさ、まあ本当は一つだけだったんだけど、二つできちゃったよ」
「え？」
「まず聞くね？その傷どうしたの？」

漆月は袋から箱に入っているアツアツのたこ焼き取り出しながら、横目で飛鳥の傷付いてる腕を見やる。
「こ、これは学炎祭で…」
「学炎祭？学炎祭ってあの？」
どうやら漆月も知っていたようだ。漆月は目を丸くし意外そうな目でマジマジと見つめる。
「へぇ～、相手は？もしかして悪忍？」
「ううん、善忍…月閃っていう所の……」
「月閃…ああ！死塾月閃女学館か！まさかあそこからかぁ……」
漆月は面白い物を見るような目でニヤニヤと口の端を上げ、食い物を口に運ぶ。
（アレ？でも死塾月閃女学館って、確か善忍だったよね？しかも学校を潰し合う立場…てっきり悪忍かと思ってたけど……）
善忍にとっての敵は悪忍。また悪忍にとっての敵は善忍。相反する二つの存在がぶつかり合ってるのかと思えば、善忍と善忍同士の戦いと来たものだ。
善忍同士の戦いなんて聞いたことないし、仮にあったとしても、なんの理由か、何が目的か思いつかない。
「何でそうなったのさ？善忍同士で戦うなんて、どう考えても可笑しいし、動機が分からないんだけど…？」
「そ、それは…」
飛鳥は話した。月閃が最初に仕掛けて来たことを、月閃は悪を憎み、悪の存在を許さない絶対なる正義を貫き通す忍学生であることを、そして…悪が存在しない理想の世界を作るためだと…流石に黒影のことは言わなかったが。
「へぇ……やっぱり…そんな奴らが居るんだね……まっ、流石と言ったところかな？」
漆月は面白くないのか、つまらんと言った顔で黙々と袋に入ってる食べ物を完食してきてる。袋の中の食べ物は彼女の胃袋に吸い込まれていくかのようになくなってきてる。
（これは、充分いい情報じゃないかな…？学炎祭は何方が負ければ廃

校決定、オマケに忍の資格を失う訳だし）
当分半蔵学院はこちら側を詮索出来ないどころか、学校の存亡がかかって居るため、もし半蔵側が負ければ忍の資格取得は不可能、そして忍として生きることが出来ない。こんないい話は滅多にない。
しかし…仮にそうなったとしても、本当に安心できるだろうか？
飛鳥からの話を聞いたところ、月閃は悪を許さない、と言っていた。それは当然自分たちの存在もその言葉に当てはまるのは当たり前だ。となると、彼女たちはいつか自分たちと戦う障壁になるのではないか？それならそれはそれでとても厄介だ…
「ふぅん、分かったよ。まっ、善忍っていう時点でたかが知れてるけどね…どうせ善忍なんて、身勝手で正しいことしか目にないから……」
漆月の言葉に飛鳥は少し漆月に視線を戻す、彼女の表情は激しい怒りを露わにしてないが、何処か不満に思ったのだろう、割り箸を片手でへし折る。
「まぁ、それはそれで良いんだけどさ……私もう一つ聞きたいことあるんだよね」
「何…？」
「あのさ、忍ってなに？」

は？

彼女は突然飛鳥にそう聞いた。当然、飛鳥の頭は思考が追いつけず、頭の中が真っ白になりなにを言ってるのか分からなかった。忍ってなに？と聞かれても、忍は忍だ。と言い返すしかない…そもそも彼女は抜忍だ、つまり彼女は元・忍　なのだ。忍の事なんて分かってるに決まっている。
なのに、彼女は何て言った？
忍ってなに？
まず反応に困る。でも、彼女の質問は、私の思ってることとは違うと思うんだ。それは、彼女の次の言葉により飛鳥の思ってたものとは違うとハッキリ分かった。

「善忍と悪忍は相反する存在、そりゃあそうだよね、善と悪は反対で、やる事も違えば生き方も違う……日向者と日陰者はお互い戦う存在…私はそう思っていた」
　思っていた？その答えは間違えではない。任務になれば時に争うこともあれば、じっちゃんが言ってたように、善と悪が関わるグレーな重要人物がいることもある。
「私が蛇女に襲撃したのは、あの五人を引き入れることだった……だって、元はアンタらを殺すためだったし、正直私は蛇女も潰そうとしたし…でも死柄木がどうせ悪ならこっちに入っても問題ないだろって言ってた。私は考えた、悪忍と善忍が相反するだけでなく、ヒーローと敵だって相反する…つまり、正義と悪の戦いは避けられない運命なんだって……だから死柄木の言葉にも賛成出来たし、私はそれを承知して二体の脳無と一緒に襲撃を仕掛けた。同じ同類なら分かってくれると思ってた、なのに……おかしいよね？何で彼女たちは断ったの？ヒーローと善忍は同じなのに、ヴィランと悪忍はなにが違うの？変わらないじゃん？悪忍なんて所詮ヴィランと同類……なにが違うの？それも善忍と悪忍が手を組んだり…そんなことはあり得ないのに……だから聞いてるの、忍ってなに？って。忍は善忍と悪忍と戦う運命の筈なのにさ、私は訳分からなくなっちゃったんだよ……だから、教えて？飛鳥、善忍と悪忍と手を組み共闘した貴方なら、貴方達なら分かるでしょ？ねぇ、飛鳥」
　善と悪について語り出す漆月、彼女の一つ一つの言葉には何処か重みを感じる。それも当然、飛鳥は漆月の言ってることを理解したから。漆月の忍ってなに？というその言葉の意味が分かった。いや、漆月の言葉に共感に近い物を感じた。
　なぜなら飛鳥も同じことを考えたからだ…忍とは何なのか、善忍と悪忍とは一体何なのか…その考えを作るきっかけは『焔』にあった。
　焔と死の美を交わしたことで、飛鳥にとって、焔は最強の友達であり、最強のライバルでもある。そして分かったんだ…
「確かに…貴方の言う通り、善忍と悪忍は相反する存在、命懸けの戦いがあれば、当然誰かが死ぬことだってあるし、それは忍の定めとして

避けられない……貴方の言ってることは、半分は正しいよ？」
「……半分？」
その半分という言葉に、漆月は眉をひそめる。
「焔ちゃんたちは確かに悪忍だよ？でも、貴方たちみたいに、理由もなしに、何でもかんでも殺したりはしなかった。焔ちゃんはある事情を抱えて悪忍になって、蛇女に入ったんだ……」
焔は中学の頃、小路という先生に恋心を抱いていた。善忍の家系だった為か、いつも厳しくて、友達が出来なければ遊ぶことだってなかった。だから人の接し方も分からないし、人見知りがある方だった…でも、小路という先生は彼女をいつも気に掛け、優しく接してくれた。だから焔はそんな先生に恋を抱いた。そして告白した、自分の家系が忍であることを……
そして小路が実は悪忍であり、焔を抹殺するために先生として装い、騙し、殺そうとしたことを……
そして焔は怒りと殺意に心が飲み込まれ、半殺しにした……
そのあと、両親から家を追い出され、貧民街などに住み着くようになり、そして一年後、蛇女子学園に入学した。
他にも詠、日影、未来、春花の四人もそれぞれ色々な事情を抱え、行き場のない彼女たちは蛇女子学園に入学した……そう、それぞれ色んな事情や思いがあって焔たちは悪忍になったのだ。
「そして焔ちゃんが戦うのは……生きたいから……焔ちゃんはいつも言ってた…『生きる証が欲しい』『生きても良いという実感が欲しい』って……焔ちゃんは、ううん…焔ちゃんたちは、貴方達みたいに何でもかんでも人を傷つけて、殺すわけじゃないんだ……何の理由もなく人を殺す貴方達とは違って…！
だから、焔ちゃん達は、貴方達じゃない…悪忍にだってそれぞれ色んな事情を抱えた忍がいるんだ、悪忍は、敵（ヴィラン）じゃない……同類じゃない!!!」
飛鳥は声を張り、強い眼差しを飛鳥に向ける。飛鳥がそう言うと、漆月はジッと飛鳥を見続け、やがて歪んだ笑みを浮かび上げる。

「……ふ、ふふ……ふふふ……」

「？何が…おかしいの…？」

「そう言うこと…か」

漆月は飛鳥の言葉に納得したらしい。そのためか、何やら悍ましい不吉な薄ら笑いを浮かべる。

「善忍と悪忍……相反する存在…なるほどね、意味が分かったよ。そうか、そう言うことだったんだ…

忍は、二つで一つだ…」

「え…」

漆月はそう言った。二つで一つ…一体どう言う意味なんだろう？と…その言葉も直ぐに分かる。

「そうだよね…善忍と悪忍…人の心は善と悪、どちらも存在する……忍は、二つに別れたんだ。善忍と悪忍へと…」

漆月が思ったのは、善忍と悪忍は何なのか？それは善と悪、一つの心が二つに別れたものだと理解したのだ。確かに雪泉たち善忍は、正義の心そのもので、そこに悪の心は微塵もない。また焔たちは悪に拘っていた。そこに正義の心などはないし、善を嫌悪していた。つまり、忍とは、心が二つに別れた存在なのではないかと思った。

だからこの答えに導いた。

善忍も悪忍も、関係ない。善忍も悪忍も、忍だ。善忍と悪忍、二つの存在があってこその忍だから。

当たり前のことだ、当たり前のことだからこそ忘れていた。そんなことを…

「だから、忍は殺しあうんだよね…善だの悪だのという理由で、上層部の命令だからって言って結局は殺しあう……想いがあるから？私た

ちと違う？この世に忍は必要？影から支える？本当に……

……バッカみたい!!!」

彼女は怒りと憎しみと言った負に近い死のオーラを解き放ち、飛鳥は漆月の感情に恐怖を覚えた。抜忍・漆月の恐ろしさを…

「だから、分かっちゃった……私が憎むべき相手は、善忍でも悪忍でもない…

忍の存在なんだってこと…」

「あな……た……!!」

憎むべき相手、倒すべき相手、それは善忍でも悪忍でもない、忍。つまり、何方かでなく、両方ということ…善忍と悪忍の二つの存在は、自分たちの敵であると。善と悪という心が別れただけで、忍の業が変わることがない…運命も、戦いも、ただ善と悪が違うだけで、あとは何にも変わらない。

変わらなからこそ、彼女は忍を憎み、恨み、殺そうとする。

「だってそうでしょ？善忍も悪忍も関係ない、元はただの忍…なら、忍なら私たちの敵となる。ううん、私たちの敵だ。抜忍である私もね…」

抜忍は善忍と悪忍の二つの存在に追われる身…つまるところ、敵がヒーローに追われるようなものだ…

彼女の顔は、いつもより歪みが増していた。そんな彼女の目には、憎しみと、怒りと、恨み、苦しみ、悲しみ、あらゆるものの負が混ざり篭っていた。

そして、漆月の脳裏に浮かぶのは…

自分がボロボロになりながらも、愛用の刀を大事に持ち抱えている姿、そして…

『出て行け！』『気色悪いのよこの子！』『あっちいけー！』『呪われた

子供だ！近くな！』『消えろ！失せろ！』『お前みたいな人間なんか死んじゃえ!!』

「善忍と悪忍なんて結局そうだ!!受け入れてくれない！ずっと前からそうだった!!そこに、私は入っていなかった!!」

数々の罵声が降り注ぎ、石ころやら道具や物などを投げられ、嫌われ、拒まれ、行く道なくただただ苦しみながら、辛い思いを抱えながら、生きてきたあの時のことを、彼女の脳裏には鮮明に蘇るように浮かんでいた。その過去が、どの意味を表すのか、まだ分からない。

「よくわかったよ飛鳥…ありがとね…貴方と会えて、そして話せてよかったよ」

彼女は腰掛けてたベンチから立ち上がると、飛鳥に背を向け立ち去ろうとする。

「ま、待って!!」

飛鳥の言葉に漆月は振り向きこそはしないが、立ち止まる。

「……貴方は、善忍も悪忍も関係ない、忍だから。その答えには私も納得がいく…でも教えて？貴方はどうして……

忍を否定するの？」

飛鳥の言葉に、漆月は振り向くとこう言った。

「……一つだけ教えてあげる。それはね…貴方たちが私を否定したから」

「え？」

「……じゃあね」

彼女はそう言うと、二度と振り向くことなく、振り返ることなく、そのまま姿を消し去って行った……

「貴方は…どうして、どうしてそこまで……忍(私たち)を……」

それから、次の言葉は出なかった。聞きたいこともあれば、言いたいことだって山ほどある。でも何でだろう…敵なのに、何でこんなに悲しい気持ちになるんだろう…まるで心に穴が空いたような痛々しい気分だ…

「……」
漆月は満足した結果を得られたためなのか、ニコニコしながら歩いてる。
「善忍と悪忍は何ら変わらない……そうだ、そうだよね…善も悪も、人間としての心の一部、感情が違うというだけで、後は何も変わらないんだよ…殺しあうことだってね……」
私たちの敵は忍にあった…光と影、陽と陰、何方も大切で、どちらも唯一欠かせない存在だ。だからこそ、忍は光と影で出来ていて、世の中の為にあるのだと…
しかし、世の中の為にあるとはいえ、使えないものは忍の世界から消されてしまう。例えそれが正義だろうと悪だろうと、忍の業から、運命から、定めから逃れることは出来ない。
上層部の命令に動き、お互い殺し合い、社会として役立ち使われる。それはそれで良いと言う考え方を持つ忍もいれば、違う者だっている…
こんなの理不尽すぎる。
「忍を殺す。善忍と悪忍の二つの存在は、私たちの敵だ」
そして、漆月は携帯を取り出し連絡したその数分後、黒い靄へと消えていった……
「……」
飛鳥はベンチから立ち上がり、下の地面に顔を向けながら、寂しくトボトボと歩いていた。漆月の数々の言葉、善忍と悪忍は変わらないことを知り、敵と忍は違うと知った漆月、そして最後の言葉…彼女の身に一体何があったのだろう?ふと頭の中で思い浮かぶ。

「何が…あったんだろう……」
しかしどれだけ考えても答えは見つからなかった。頭の中がモヤモヤする…このままじゃ、折角じっちゃんが私のためにと教えてくれたのに、これじゃあ…

その時だった。五つの忍の気配を感知したのは…
「これって…!?」
胸騒ぎがした飛鳥は、商店街の広間に駆けつけた。最初は月閃だと思っていたが、それは直ぐに違うのだと理解した。新しい忍の気配、一体誰なのだろう…

数分後、広間に駆けつけた飛鳥、見てみるとそこには半蔵学院四人と、知らない忍学生が五人いた。
しかも、この五人の制服は何処かで見たことがある…
飛鳥が来たことを知った半蔵学院の皆んなと、向こうの五人の忍学生は、彼女に視線を向ける。
「飛鳥さん、今までどこに行ってたのですが、遅いです」
「ああ、飛鳥がいない間にまた忍学生が来たぜ…」
斑鳩と葛城はやる気満々なようだ…そんな二人と飛鳥に、五人の忍のうち一人、リーダーらしき者とも呼ばれる忍学生が前に出て鼻で笑う。
「ふん。やっと集まったか……これが半蔵学院、アイツらはこんな小娘共に負けたのか…」
「貴方たち、誰?!」
「ああ、自己紹介が遅れたな…揃ったし丁度いいか…私は蛇女子学園三年、『雅緋』！今日、ここに来たのは他でもない…半蔵学院に学炎祭を申し込む!!」
新たな蛇女子学園は、半蔵学院に学炎祭を仕掛けて来た。

５４話「新・秘立蛇女子学園」

河川敷のしめった風が頬に当たる。暗闇の空、漆黒に染まった暗雲が、光り輝く満月を覆い隠すかのように遮る。
車椅子に乗った私はぼんやりと、その夜空の景色を眺めていた。
「私は……空っぽだ」
「雅緋？何か言ったかい…？」
背中越しに忌夢の声が聞こえた。私が返事をしないでいると、忌夢は静かに車椅子を押した。
「時間だし、そろそろ戻ろうか？」
何を言われても何も思わない。
何をされても何も感じない。
空っぽだ。そう、私は空っぽなんだ……

どうして私がこんな風になってしまったのか…それについて考えることもない。なぜなら、私はからっぽだからだ。
「雅緋、ほら、見えて来たよ。僕たちの『蛇女子学園』だ」
忌夢が車椅子を止めて、うっすらと見える蛇女子学園を指差した。そこには月夜に浮かぶ天守閣。
蛇女…
蛇女…蛇女…蛇女…
空っぽな心に何か響く…蛇女という言葉に、私の心は揺さぶられる。
なぜだ、何故だろう…
空っぽなはずの心から、何かが湧いてくるような…この高揚感…これは一体。
すると、天守閣から妙な気配を感じる。それも、忍とは違う気配が何十人か…そして天守閣からは物騒な音が聞こえる。爆発、衝撃、炎、光、と言ったものが天守閣に飛び出ている。中で一体何が起きてるのだろう？
「アレは一体なんだ…!?」

忌夢は天守閣を見てそう叫んだ。侵入者?だとすればそれはそれで不味い…

どうやら不味い状況らしい…雅緋はこんな状況の中でも、心がないのか、何とも思わないのか、動揺する素振りを見せない。雅緋はある事情でこうなってしまい、廃人となってしまっているのだ。

「蛇女がこうも攻められてるなんて…ボクたちがいない間に何をやってるんだ…」

忌夢が忌々しそうにそびえ立つ天守閣を睨みつけ、奥歯を噛み締める。

しばらくすると、忍と思われる気配が二つ消えた。

「忍学生の気配が二つ消えた…? 一つは知ってるやつだ…もう一つは、誰だ?敵か?」

しかし、雅緋からは別の気配が大きく膨らんでいった。しかも、ただの気配ではない…吐き気がもよおすような禍々しい気配だ。

するといきなり耳がつんざく轟音が聞こえた。天守閣が激しく揺れ、より激しい爆発音や衝撃音が聞こえる。それは勿論、天守閣の部屋から聞こえるものだ。それも、天守閣の屋上で…彼処の部屋は、道元と呼ばれる出資者がいる部屋、彼処で一体何が起きてるのいうのか。

そんな状況と共に、轟音と一緒に雅緋の中で何かが暴れ始めた。

まるで体の内側から獣が飛び出そうとしてるみたいだ。

その時だった。

ドガアァァン!!

巨大な爆発と衝撃と共に、天守閣の部屋に大きな穴がぽっかりと空き、ハッキリと見えた。今までの蜂の巣のような小さな穴ではなく、

遠くからでも見える大きな穴。それと共に何かが吹き飛ばされ、次第にそれが大きくなってくる。それが、雅緋と忌夢の方に飛んでくる。
「マズイ!」
最悪なことに、今は戦えない。武器を持ってきてなければ、扱うことはできない。かと言って近くには特にこれといったものは何もないし、それがあったとしても解決出来ないだろう…
忌夢は雅緋を乗せてる車椅子を、逃げるように引く。そして、その何かしらの物体がこちらに飛んできた。

ズドオオオォン!!!

地面に衝突し、大きな土埃が撒く。土埃のせいか視界が悪く、咳き込んでしまう。忌夢のメガネが土埃のせいで、汚れてしまう。メガネケースにメガネ拭きを手に持ち、汚れたレンズを磨き、汚れを取る。
眼鏡をかけると共に、土埃が消えていく。すると物影が二つくっきりと見える。
アレは……人か?随分と大柄なものだ…
そして土埃が晴れて、その姿を見てみると、忌夢は目の前の光景に息を飲み、絶句する。
二つの物影は、人?らしきものが見るからにボロボロの状態で仰向けになっており、倒れている光景が目に映った。人らしき?というより、人型の化け物、と言った方が正しいのかもしれない。その明らかに人とは思えない異形の姿に、化け物と呼ばれても仕方がないだろう…
体色が、赤色と緑色、脳が飛び出た異常な怪物、改人脳無と呼ばれる化け物が今こうして忌夢と車椅子に乗っている雅緋の目の前にいるのだ。
「なっ!?こいつら…妖魔か?!」
忌夢は身構えるが、この二体の脳無は反応しない。目が真っ白になっており気絶しているため、動く素振りを見せなければ、動く気配もない。ただただ血まみれで、ボロボロになって倒れているだけだ。

「妖魔…？……ッッッ!!???」
忌夢の『妖魔』という言葉に雅緋は反応し、激しい頭痛の苦しみに思わず髪を掻き毟り、霞んだ視界に崩れ行く天守閣が映る。そして、記憶が鮮明に蘇った。
仲間たちの悲鳴と、血で塗られた恐ろしい記憶が……

ふいに私の目から一筋の涙が流れた。
空っぽだったのではない…
逆だ。
私の心はあふれるほどに満ちていたのだ。あまりに大きな、怒りと後悔と悲しみに……
「雅緋！大丈夫？」
後ろに忌夢の声が聞こえる。そう、私は雅緋…秘立蛇女子学園の選抜メンバーだ。
いや、選抜メンバーだった。といった方が正しいに違いない。
恐らく私は、あの事件からずっと心を閉ざしていたのだから…私は車椅子から降りて自分の足で立った。
そして脳が飛び出た異形な姿をした化け物を見下ろす。
コイツらは、妖魔ではない。私があの日戦った妖魔の気は、血の気が引くようで、生臭い匂いがした…何よりコイツらからはそんな禍々しい気は感じない。感じるのは、先程の私と同じく廃人になってることだけ、直感的に伝わってくる。
「雅緋？」
雅緋の行動に、戸惑いを隠せない。何より驚いているのだ、雅緋が車椅子から立ったことを…雅緋は振り返って小さく頷いた。
「も、戻ったんだね!?」
確かに戻っていた。記憶も、力も…
目の前にいるのは忌夢、私の幼馴染だ。
「雅緋、ぼくは……ぼくはどれだけこの瞬間を待っていたことか……」
忌夢の目には涙が溢れ出す。どれだけこの時を待っていただろう

か、待ち望んでいただろうか…来る日も来る日も、雅緋は空っぽで動かなかった……それが今、やっと、叶ったんだ。まさかこんな状況で、こんな場面で、雅緋が復活してくれるなんて……

「忌夢、泣いている場合じゃない」

雅緋の強い言葉、間違いない。完全に元に戻った。忌夢が一番よく知っている雅緋だ。雅緋は天守閣を見つめる。蛇女子学園の崩壊に、歯をくいしばる。

「忌夢！戻るぞ、私たちの蛇女に!!」

私は駆け出そうとするものの、まだ足が思うように動かなかった。復活したとはいえ、体の力が思ったよりも鈍い…復活しても、完全には復活してなかったらしい。力は確かに戻ったとは言っても、車椅子の生活が長かったためか、足が衰えてしまったらしい。

「雅緋、僕に掴まって」

忌夢の方を借り、ゆっくりと足を動かした。

数十分ほど歩いただろうか…やっと辿り着いた蛇女子学園に残っていたのは――――

――――瓦礫と死体の山だった。

死体には何者かによって、無惨に斬り刻まれた傷痕と火傷の痕跡があり、身体中が棘らしきもので刺されたのか、蜂の巣のように、見てるだけで吐き気がしそうな死体もあれば、血が赤黒色に染まり、口から消化液や唾液、苦痛の顔を浮かぶ死体が数えきれない程存在していた。

「なんてことだ……」

忌夢は余りにもの惨状を前に、ショックのあまりか膝をついた。やがて目から涙を流す。雅緋も目の前に映り出す残酷な光景に、思わず血が滲み出るほどに拳を握りしめた。

あの時…

あの任務の時、私が…

私が自分の力を制御出来ていれば……

そうすれば私は選抜筆頭として、蛇者に残っていたハズだ。
しかし、今は後悔してる場合ではない…私は座り込んだまま、涙を流してる忌夢の腕を掴んだ。
「忌夢、立て」
「雅緋……」
忌夢がすがるような目で私を見上げる。
「グズグズしている暇はないぞ……」
蛇女を襲撃してきた奴。
襲撃から蛇女を守れなかった奴。
蛇女の誇りを汚した奴らを、私は許さない。

絶対に…許せない。

「取り戻すんだ」
「取り戻す？何を？」
私は忌夢の腕を力強く引いた。忌夢はよろけながらも立ち上がった。
「決まっているだろ」
残骸となった校舎を見ながら言った。
「止まってしまった時間と…蛇女の誇りだ！」
雅緋はそう言って、他にも生徒が生き残ってるか見つけるべく、生存者を探しに残骸となった校舎に駆けつける。
そして見つけたのは数十人の生徒、そして…ボロボロになって気を失ってた、蛇女子学園教師、鈴音先生が見つかった。
それから一週間後、鈴音先生は見事完全に傷が回復し、動けるようになった。
そして、あの時起こった出来事を…全て聞いた。
半蔵学院と雄英高校が攻めてきたこと。
焔率いる蛇女子学園が負けたこと。
そして……敵連合という犯罪集団が、抜忍・漆月と共に奇襲を仕掛けてきたこと。

何でも敵連合は前に雄英高校と呼ばれるヒーロー育成学校に襲撃をもたらしたとか…
更にあの二体の化け物は敵連合の仲間であり、脳無と呼ばれる改人らしい。蛇女子学園に襲撃してきた人物は、抜忍・漆月と脳無と呼ばれる者、そして学校に襲撃した主犯格は姿を現さなかったとか…
だが、それでも許さん。半蔵学院も、雄英高校も、焔率いる忍達も、そして抜忍・漆月に敵連合。
覚悟しろ、お前らの寝首を必ず刈り取ってみせる。
それが、新たな蛇女子学園の誕生なのであった。

「我々秘立蛇女子学園は、貴様ら半蔵学院に学炎祭を申し込む!!」
雅緋と名乗るリーダーは、半蔵学院にそう言った。
「蛇女子学園…!?え?焔ちゃんの…」
飛鳥は雅緋という女性の言葉に、思わず目を丸め、目をパチクリさせる。蛇女子学園といえば、前に半蔵学院に襲撃したあの悪忍育成学校であり、焔たちがいた学校だ。
また、こっちが襲撃を仕掛け、ある事情で蛇女子学園は崩壊したはずだ。
「学炎祭…!?私たちは月閃と学炎祭の最中なのですよ!?」
「それがどうした?いや、知らんのか…学炎祭は一対一でなくとも、何

校でも受けることが出来るんだ、いわばバトルロイヤルみたいなものだ」
雅緋は斑鳩の反応に薄く笑う。すると、半蔵学院の皆んなの後ろから、人の気配がした。
「飛鳥さん!?」
「おいなんだアレ?」
振り返ると、緑谷、轟、そして乗り気のない爆豪が駆けつけに来てくれた。
三人はただならぬ気配を察知して、来たのだろう。それもそのはず、ただならぬ殺気を感知したのだから…てっきりヴィランかと思ってみたが、どうやら正体は悪忍だったとのこと…
三人の存在に気づいた飛鳥は「皆んな下がってて!」というが、爆豪は「あぁ!?俺に指図すんじゃねえデカ乳女!」と暴言を吐く。そんな二人のコントに雅緋は鼻で笑う。
「ほう、貴様ら雄英の生徒もいるのか…丁度いい。お前たちも蛇女子学園を貶めた人物なのだからな」
「はぁ?何だテメェら?!!」
「自己紹介がまだだったな…私は蛇女子学園三年、選抜メンバー筆頭、雅緋」
「僕は忌夢だ…雄英の生徒たちには仕返しとして殺したいが…それは悪忍である僕たちとは言えダメだからな…」
メガネの掛けた少女、忌夢と名乗る少女は、半蔵学院のみならず、雄英生を睨みつける。
「……紫です……べべたん、あの人……怖いね……近づかないでおこっか……あと、帰りたい……」
紫色のロングをした根暗な少女、紫は愛用のぬいぐるみ、べべたんというくま○ンを抱きしめ爆豪を怖がるような目でオドオドしている。
「両備だ!お前らの胸に風穴開けてやる!」
右目が緑色、左目が青色のオッドアイの少女、両備は忌々しい目で女子陣を睨みつける。飛鳥たちは怖い!と思っただろう。そしてこ

こに峰田がいたら、そんなことはさせんぞ小娘！と何処ぞの仙人みたいに言ってただろう…
「両備ちゃん良いよ！絶対に痛そうでいい！ああ～♪両奈ちゃんも風穴開けて欲しいなぁ～」
　両備と同じく、目がオッドアイになってる両奈。目の色は両備とは反対だ。恐らく姉妹、いや…双子なのだろうと理解した。
　そして…あ、コイツはアカンわ。と此処にいる全ての人は思っただろう。轟は「何言ってんだコイツ？」と、違う世界を理解してない天然だった。
　何だこいつ等バラバラじゃねえか。と、男子陣は新蛇女子学園を見て思った。
「そうかいそうかい、一校でも二校でも何でも良い…やるなら絶対勝つぞ！」
「いくらでも相手になるよ！」
「なんなら俺一人で爆殺したるわ！」
「おい、お前は違うだろ。観る側だろ」
　葛城と雲雀に続き、爆豪が喧嘩腰になって相手をにらみ舌なめずりするが、柳生に止めて突っ込みを入れるが、爆豪は「煩えお前が応援しとれや！」と無茶苦茶なことを言い出した。
「随分と仲が良いんだな…忍の存在を忘れてる甘ちゃんどもか…」
　雅緋は相手のやり取りに目を細める。
「まあ良い…7日後、とは言わずとも…今此処で軽く前夜祭と行こうか？」
　その言葉に皆は反応し、静まり返る。
「ではコイツら半蔵学院と相手になるのは私と……紫、出来るか？」
「わ、私は……早く……家に……帰りたい…」
　紫は背を向けブツブツと呟く。ネガティブな女の子だ…それに、何しに此処に来たんだ？という質問は彼女にはＮＧです。
「そうか…では、忌夢と私が半蔵学院と、両備と両奈は雄英高校と…それで良いな？」
「「「!!??」」」

まさか、本気で雄英生と戦うとは…学炎祭は本来忍学校同士のはず…だが、雅緋はこう言った。
前夜祭と行こうか…と。そして、雅緋と忌夢は半蔵学院のメンバーと相手になると…と言うことは、数が不利でも勝てれば問題ない。つまりはそういう事だ。
また忍側はもちろん話題ない。本来雄英、いや、ヒーロー学生はダメなのだが、相手が仕掛けてきたのなら、と思い爆豪はやる気満々だ。しかし、轟と緑谷は止めようとする。
そう、相澤は言っていた。
観客ならＯＫ、だが戦闘はダメだ。と、まあ爆豪は月閃で雪泉の部下たちと戦った時点でダメなものなのだが…
「問題ないな？お前たちの了承は聞かない…我々は我々のやり方で…貴様らを倒す！」
そして雅緋が剣を抜くとともに、蛇女子学園の皆は武器を構える。また、半蔵学院も同じく……
「葛城、お前の相手は僕だ。まあ、なんならお前ら四人とも全員まとめてかかって来い」
「随分と余裕があるんだな！」
「ならば、全力で参ります！」
「俺たちを舐めたこと、後悔させてやる」
「雲雀、いっくよ！」
また雅緋は…
「飛鳥、貴様の相手は私だ」
「雅緋ちゃんって言ったね、望むところだよ!!」
半蔵学院選抜メンバーのリーダー。飛鳥ｖｓ秘立蛇女子学園選抜メンバーのリーダー、雅緋。
そして…
「両備達の相手は貴方達ですか…まあ相手にとって不足なしですね…アンタ達、可愛い声で鳴きなさい。とことん痛めつけてやるんだから！」
「両備ちゃん両備ちゃん！あの三人の中で誰が一番両奈ちゃんを気持

ちよくしてくれそう？」
「なんだこいつら」
「ちょっと僕には理解できない世界なんだけど……」
「取り敢えず寝言は寝てしね!!」
二対三？としての戦いになる、蛇女子学園ｖｓ雄英生三人。
そう、この三人が問題なのだ。爆豪がいることにコンビネーションはおろか、コミュニケーションすら取ることが難しい。轟と緑谷は戦闘はなるべく避けたいというが、爆豪はそんなの関係ねぇ、と言う。多数決的に緑谷たちの選択が正しいが、爆豪にとって多数決は関係ない。逆にそんな考えを壁のように越えていくだろう。だが爆豪も何も考えがなく戦う訳ではない。爆豪には爆豪なりの理由がある。
もし此処でルールだのなんだの言ってこの二人の戦いで重傷を負ったら？また、最悪の場合殺される確率だってあるのだ。相手は悪忍、何をしやらかすか分からない。その気になれば本気で殺しにくることだってある。戦いもせずに殺されるより、戦って勝って無事になった方が良いと判断したからこそ戦うのだ。いわば正当防衛。自分の身を守るために戦う。それについては爆豪の考えは正しいだろう。しかし、それでもこの社会にとっては間違いと見なすのだ。ヒーロー社会も忍の社会も…では一体何が正しいのか？それは、何もせず逃げること。だが彼らはヒーローを志す者、逃げることは許されない。
ではこの状況、どうするのだろう？相手は悪忍、悪だからこそ何をしても自由だし、許される。
この理不尽な状況。
「クソ!!テメェら俺に一々命令すんなや！」
「半蔵さんが言ってたろ！許可なく戦って黒影さんはどうなった!?最悪の場合俺たちもそうなるんだぞ！」
「煩え人いねえから問題ねえだろクソが!!」
「人がいねえから…？」
何故個性には使用規制が掛かっているのか？ＵＳＪで１３号先生が話したように、個性の中では使い道を間違えれば人を簡単に殺す個

性がある。だから、この社会にはルールを作った。許可なく個性を使用してないけない、と……つまり、人を傷つけてはいけないのだ。また、人を傷つけないためにある。
　バキュウン！
「っ!!」
　銃弾が飛んできた。そのため轟はつい咄嗟に氷の壁を作り、銃弾から守る。
「つべこべ喋ってなずにかかって来いっつーの」
　蛇女子学園一年、両備はライフルを所持しており、様々な銃弾を用いて戦う、遠距離戦を得意とするのであった。
（遠距離、俺もその気になれば戦えるが、街への被害が半端ねえんだよなこれが！）
　轟は思わず目を細める。
　今みたいに相手へ傷つけず、また証拠もないように個性を使用するのは、最低限セーフの為、ありである。
「あっ！氷だー！・雪泉ちゃんと同じ能力なんだねぇ！」
「こら両奈！・月閃の話はいいでしょうが！」
　二人の会話は緑谷たちには聞こえなかった。
（何話してるんだあの人たち？それにしても遠距離射撃！・両備さんって言う人は銃弾を自由自在に操ることが出来るのか？それじゃあまるでスナイプ先生みたいじゃないか！轟くんの氷の壁があるから当分もてるけど、これじゃあ先生を相手にしてるようなもの！）
　因みにスナイプ先生の個性はホーミング。狙ったものを必ず当てる、百発百中の個性だ。
（いたってあの金髪の、両奈さん？って人は分からない…でも油断は禁物だ！相手の観察を…）
「じゃあ両奈ちゃんは氷の人と緑髪の子やるね～～、きゃうぅ～ん！ご主人様～あそぼ～♪」
「!?」
　なんと、氷の壁を飛び越え通り越し、轟と緑谷の真上に飛び二丁拳銃を構える。まずい、そっちも？と思った途端。

バゴオオオオオオォオオオォン!!!

「!?」

「テメェ、俺を忘れてんじゃねえよクソ犬が!!」

なんと、使っちゃった。いや今更だけど、雪泉の部下たちに使っちゃったけど。爆豪、個性を使ってしまった。それも選抜メンバーの忍学生を、学炎祭参加の忍学生、変態両奈を爆破でぶっ飛ばした。

「え!?」

「おいマジでか」

「ッ!両奈!」

吹き飛ばされた両奈は地面に擦り付けられるように両備の元へ転がってくる。

「もういいわ…実際前から使っちまったし、コイツら忍なら大して傷つけたってこっち側にゃあバレねえだろ、あと人もいねえしな」

「おいけど…」

「まだ分かんねえのか?バレなきゃ犯罪じゃねーんだよ!!」

あ、ダメだこりゃあ…これ完全に犯罪者側のセリフだわ…

しかし、しかしだ…何かしらと爆豪の言ってることも一理ある。忍は本来この世では秘密にされてる存在、そんな存在が怪我しました助けて下さいなんて言うことはまず無い。そのため、これはこれでありなのだと、ほんの僅かに思えた二人なのであった。

それに、雅緋は両備と両奈に相手をしろ。と言ったのだから、これは此方側も許可をもらった。ような解釈なのでは?とそれも思った。

「……俺はもう知らん…」

「この世にかっちゃんを止められる人なんていないんじゃ…」

二人は小声でそう呟いた。

雪山に佇む一つの校舎、その名も死塾月閃女学館。今は夏に近い季節なのに、何故か此処だけ雪が降っている。まるで今は冬にいるみたいで、とても冷たい場所だ…因みに、ここも秘立蛇女子学園と同じく立ち入り禁止の場所だ。

月閃の忍学生でしかここに通る者はいない。

そう、いないはずなのだ…

「此処が死塾月閃女学館か…情報通りの場所だな」

なのに、忍学生ではない…また学生とは思えない大柄な人物は、顔にマスクを被っている、素顔を隠してるその大男は、月閃を睨みつけ、静かに歩み寄る。

５５話「かっちゃん」

飛鳥たちが蛇女子学園と戦っている真っ最中、寿司屋の衣装を身に纏った半蔵は、違う服を素早く着用する。
「さて…と、ワシも早く戻らねばな…」
オールマイトに連絡し終わった半蔵は、何処か誰かに似てる姿をし、寿司屋を閉店すると、何処かへ姿を消してしまった。

「バレなきゃ…って」
「確かに今の所人居ねえけど、それヒーローが使っちゃいけねえ言葉だろ」
両奈を爆破で殴り飛ばした光景に引き気味になる緑谷の横に、轟が突っ込みをいれる。
（まあでも確かに爆豪の言う通りだ、此処でうじうしてたってこっちがやられる一方だ、応援なんて呼べねぇ…オマケに人気のないところでの戦闘…こりゃあ…最悪な状況だな……）
轟はこの理不尽な状況に舌打ちをする。応援は呼べない、人の気配は一切ない、更にはルールに縛られてたらこっちがやられる一方、最

悪死んでしまったらそれこそ終わりだ…殺さないとは言ったが悪忍の言ってる言葉に信憑性がないし、まず命の安全の保証が見えない…
だったらここで抵抗して生き延びた方が良いに決まってる。
「仕方ねえ！今は人がいない！許可はないとはいえ抵抗しなけりゃやられる!!俺も手を貸す！息合わせるぞ爆豪！」
「はあぁ!?俺が合わせんじゃねえ！テメェが合わせろや！」
ここでも轟に苦手意識の持つ爆豪は、相変わらずと言ったところだ。だが轟はスルーして氷の壁を何重にも貼る。
「と言っても、相手は銃撃…防壁だけで充分だとは思うがな…」
（もう一人のアイツ、両奈とか言ったか？アイツは爆豪がダメージを与えた…つーことは、ヤツは暫く動けないハズ…そのうちに少しでもこの状況を打開できる方法を考えねえと…何かこう…）
「凄いんだわ～ん♪」
「!?!」
氷の壁の先から聞き覚えのある声、そんなまさか…と思いたいものの、その考えは氷の壁とともに打ち砕かれる。
ズドドドドドドドドドドドドドドドドン!!!
なんと、何重もの重ねた氷の壁にヒビが入った。この激しい銃声は両備のものではない、ならもうわかるハズだ。
バコオオオオォォンン!!
氷の壁が粉砕された。粉々になり砕けた氷は崩れていく。そんな魅力な幻想的な光景とともに、目の前映るのは、ライフルを構えて狙撃しようとする両備、そして二丁拳銃で氷の壁を壊した、何ともない様子の両奈の姿であった。
「なに…!?」
「えへへ♪両奈ちゃん再登場で～す」
爆豪に殴り飛ばされた両奈は何ともない様子だ。殴ったとはいえ、横腹を思いっきり爆破で飛ばしたのだ。倒せなくとも多少のダメージは効いてるハズ…なのに両奈は何ともありませんと言わんばかりの表情を浮かべ、ご主人様を求めるような可愛らしい目つきで三人を見つめる。

「マジかよ…」
「かっちゃんの攻撃が、効いてない？」
「クッソ野郎がああぁぁ～…！」
冷や汗を流す緑谷は思わず唾を飲み込む。轟は目の前の光景に信じられんとばかりの顔をし、爆豪は自分の攻撃が効かなかったと理解し怒りを蓄える。
両奈は自分を殴った爆豪を見つめる。
「両奈ちゃんさっきの気に入っちゃったよ～♪殴ると同時に爆竹のような爆弾攻撃！一粒で二度美味しい！両奈ちゃんとっても気持ちよかった～！だから、今のもう一回やって～♪かっちゃ～ん♪」
ピキッ!!
「……ハァ？」
「あ、えっと、両奈さんだっけ？……あの～…かっちゃんって……」
「え？だってさっきそう言ったじゃん？だから、両奈ちゃんもこれからそう呼ぶね～♪かっちゃん♪」

かっちゃん

両奈は知らない。かっちゃんと呼ぶということはどういうことなのか…かっちゃんと呼んでるのは緑谷だけだ。そして爆豪は緑谷を嫌悪してる、また何処か後ろめたい気持ちもある、そして緑谷が成長するとともに爆豪は焦り、苛立ちを覚える。いや、そもそも幼馴染だったためなのか、緑谷のことになると無意識に、癖で怒ってしまう習性があるのだ…
緑谷の存在どころか、名前を聞くことでさえ怒りが上昇する。
そんな爆豪に、両奈は「かっちゃ～ん♪」と小生意気に、でも愛くるしい声で彼をそう呼んだ。つまり、緑谷のことを思い出させてしまったのだ…そして、自分が完全にバカにされてるのだと…両奈自身は爆豪の名前が知らないため、緑谷がかっちゃんと呟いた声を聞いて、彼の名前がかっちゃんなのだとそう認識したのだが、それが間違いだったのだ。爆豪は目がイかれてしまい、額に血管を浮かび上げ

る。
「コイツ、コ・ロ・ス!!!」
爆豪は掌を爆破し素早く両奈に接近する。
「きゃう～ん！」
「掛かったわねイガグリ頭！」
両備は待ってました！と言わんばかりに爆豪の接近に歓喜の顔を浮かべる。ライフルで爆豪の額を撃とうとする。両備はスナイパーとしてとても優秀であり、かつて最高ランク以外の順位を取ったことなど一度もないくらいだ。
両備が「いける！」と思った途端に引き金を引いた。爆豪の目には両奈にしか眼中にないことは知っている。だからこそ、視界が狭まってる爆豪は両備の存在を認識してない。その今がチャンスだ。スナイパーとは、存在を認識されてない時こそ、狙撃する絶好のタイミング、正に狩りの基本。
両備が狩人なら、爆豪は獅子だ。
（さぁ、脳みそブチまけな!!）
だが、狩りとは必ず成功するとは限らない。常に平常運転という訳でもない…環境が悪ければ、風向きが変われば、当然狩りの仕方も変わる。また、獲物が違えば尚更だ…特に、状況が急激に変われば当然。
「【閃光弾（スタングレネード）】!!」
「「!?!」」
爆豪は両手の掌で発行性の爆破で眩い強い光を発生させる。いわば目眩まし。
これは体育祭で常闇戦に見せた必殺技だ。ただ単に光を苦手とする者だけでなく、一般人はおろか、忍に対しても効果は十分にある。両備と両奈はその眩しさに直視できない為か、目を瞑ってしまう。
一瞬の隙が出来た所を爆豪は逃さない。爆豪はそのまま突っ込むかと思いきや、爆破を上手く使いこなし、応用して両奈の背後に回る。対人戦闘訓練の緑谷戦で見せたあの動きだ。

そして…
「死ねえええええええええ!!!!」
ボボボボボボボボボボボボボボボボボボオオオ

「!?」
　爆撃で更に押す。爆豪は両備の銃を掴むかと思いきや、思いっきし首を掴み、地面に叩き込む。
「先に仕掛けて来たんだ、文句はねえよなぁ？」
「……んの野郎!!」
　それも、足で乗っかり銃を使えなくするように固定し、もう片方の手で爆破を使おうと構えて…
　常闇戦の最後に見せたアレと同じ光景だ。
「っと、動くな！少しでも怪しい動きと判断したら、完膚なきまでにブチのめしてやらぁ!!」
　形勢逆転、狩るものと狩られるものの立場の逆転。爆豪は獅子から狩人となり、両備は狩人から鹿へと変わった。それにしてもこのシチュエーション、何処かであった気が…
　ヒーローらしかぬ言動に今まで黙って見てた二人は、悪忍並みにタチが悪いんじゃないか？と思ったはずだ…
「相変わらずヒーローらしかぬ言動だな…まあ、これ位までやらねえといけねえのかもしれねえし…」
「うん、でもかっちゃん…凄いや！」
　しかし、二人の安堵をついた表情は、一瞬にして変わる。先ほど爆豪が個性を使って周囲に爆煙を漂わせた場所から、人影が…
「ッ！爆豪！あぶ――」
「ッ?!」
　爆煙から姿を現したのは、忍転身し終え、手に二丁拳銃を構えた両奈の姿であった。身体についてる傷は多少ボロボロだが、忍装束には傷一つ付いていない。恐らく爆豪が攻撃し終わった後からなのだろう、煙の中で忍転身をしたに違いない。
　爆豪は反射的に、瞬時に転がるように素早く避ける。
「両備ちゃん大丈夫？」
　爆豪が避けたため、拘束していた両備を離すことになる。そのため身体が自由になった両備は咳き込みながらムクリと立ち上がる。
「ええ、大丈夫よ……それにしても、忍相手に此処までやるなんて……

大したヤツねアイツ…」
心配する両奈に両備はそう言うとサドッ気の目つきで、爆豪を睨みつける。すると両備も秘伝忍法書を取り出し、忍転身する。
普通の忍転身…かと思いきや、両備だけは今までの忍とは違った。なんと、貧乳だったちっぱいが、大きな山、桃…いいや、巨乳。つまりデカイ立派なおっぱいへと姿が変わったのだ。
「えっ!?!」
「なんか変わったな」
「別に大した事ねえだろうが」
緑谷は予想通りに驚いたが、轟と爆豪はそういうのにはあまり興味ないのか、へぇ～、という反応だった。
「雅緋のやつ、殺すなって言ってたけど、この二人殺していいわよね？ぶっ殺していいわよね？脳天ぶちまけても良いわよね？」
「はうぅぅ～～ん♪両備ちゃん、両奈ちゃんにもそれやってえぇ～！」
「アンタは黙ってなさいよこの雌ブタ!!」
「ブヒイィィ～～～ん!!」
何やかんやでお前らノリいいな。と三人は思った。両備と両奈は爆豪を狙う。両備は分かるが、両奈は驚きだ。アレだけの攻撃を食らったというのにまだ動く、それも何ともない…と言ったら嘘になるか、寧ろ喜んで爆豪に突っ込んでくる。攻撃を食らうたびに喜ぶ彼女のその姿は、もはや恐怖でしかなかった。
「待てよ…あの人かっちゃんの攻撃をアレだけ食らってるのに何ともない様子だ…！いや、寧ろ喜んでる？かっちゃんは個性なしでも戦闘スタイルも身体能力もかなり優秀…それに派手で強い爆破という個性を加えたら、ひとたまりもない…コスチュームを着用してなくたってかっちゃんは今出せる力を全力で出している…なのに効いてない…？もしかしてあの両奈さんって人、ＵＳＪに襲ってきた脳無と同じ能力…？!」
即ちショック吸収。両奈の体質はそれと似ている。いや、もしかしたらショック無効という体質だってあるはずだ…つまり物理攻撃は

彼女には聞かないということになるのか？それはそれでとても厄介だ。
　爆豪は上手く避けてるが、両備も両奈も本気で突っ込んで来てる。相手の攻撃を喰らわずかつ、どう動きどうするべきか、こんな状況の中で冷静に考えれる爆豪は流石は試験入学者一位と言ったところだ。
「チッ！ありゃ不味いな…爆豪やられちまう！」
　轟は氷を出して両奈に襲いかかる。まずは倒さなくても動きを封じればこちら側の勝ち…氷結攻撃で凍らせようとするが…
「シャララララ～～～～ン♪♪」
「なっ!?」
　なんと轟の氷結を両奈はあっさり避けてしまい、氷結を滑るように、華麗に、美しく舞い踊る。その姿はまさしく白鳥、フィギュアスケートだ。いや、正確にはバレリーナだろうか…とても嬉しそうに、幸せそうに踊っている。
「かっちゃん（ご主人様）の物凄く気持ちよかったけど～、でも君も良いね！貴方も両奈ちゃんを気持ちよくしてるのかな？両奈ちゃんね、バレリーナが趣味なの！」
「知ら…ねえよ！」
　パキィン！とまた氷結を繰り出す。そしてまたもや華麗に避けられ氷の上で遊び回る。二丁拳銃で氷の壁を撃っていく。どうやらあの二丁拳銃は近距離戦向きらしく、遠距離射撃というものではないようだ。それについては両備とは正反対だ。
　轟は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、若干体が氷で覆われていく。
（あの野郎……一見ふざけてるように見えるが、かなりのやり手だ。まず強え…爆豪の攻撃を受けてなお、効いてないってのは予想外だ……氷結攻撃も直ぐに避けられて効かねえ…壁作っても二丁拳銃で跡形もなく壊されちまう……蛇女って悪忍は、こんなのがいたのか……！）
　因みに両奈は両備と同じく一年生、つまり同級生。しかも両備と両奈は双子でありながら、性格も真逆だという。

両奈はドＭ、両備はドＳ。武器も同じ銃なのにスタイルも全く反対。とにかく、色々反対なのだ。
「緑谷！これじゃあ埒が明かねえ！頼む、助けを呼んでくれ！」
「えっ、でも！」
「今この状況を打開するには俺たちじゃ無理だ！だから他のヒーローか誰か呼んでくれ！何なら半蔵（爺さん）でも良い！」
棒立ちで自分が一体どうすれば良いのか分からなかった緑谷に、轟は助けを呼ぶよう声を掛ける。確かに今の状況は最悪だ、なら助けを呼んで抵抗した方が良い。しかし、それだと自分たちが個性を使ってることがバレてしまう。そうなればどんな処分が下されるか分からない。最悪、退学ということもあり得るのだ。
「だ～め～だ～よ！二人とも両奈ちゃんと遊ぶの～！」
「!?」
そして両奈はバレリーナ（遊び）を終えると…
「秘伝忍法！【スケーターズワルツ】!!」
「やべぇ！」
両奈の秘伝忍法を発動させると同時に轟は巨大な氷を作り出す。両奈は周囲を薙ぎ払う回転キックを数回、そして、氷属性の攻撃で氷の壁を削っていく。両奈の属性も氷、つまり轟や雪泉とは少し違った能力を持っているのだ。
両奈の秘伝忍法と轟の巨大な氷は相殺。強烈な冷風が吹く。
（んでこれで相殺か！相手の攻撃が効かない上に秘伝忍法っつういわばゲームでいう必殺技…！それがアイツか……攻撃が効かないっつったら、ＵＳＪの化け物とまんまじゃねえか！）
柳生を一撃で仕留めるような怪力は持っていない、目にも止まらぬスピードを出せる訳でもない、それでも両奈はその化け物に少し似ていた。相手の攻撃が効かないのと、秘伝忍法という強力な必殺技、それだけでそこらのプロヒーローをいとも簡単に仕留められそうな彼女…
「ねえねえ～～、もっと両奈ちゃんを虐めてよ～！」
「悪いな、俺そういうのサッパリ分からん！」

轟はそれでも諦めなかった。そんな彼にも少しだけこの状況を打開できる希望が少しだけあったからだ。それは――

――時間稼ぎ。

今人がいなくとも、いずれ人がやって来るだろう…なら此処で仕留めることよりも、時間稼ぎをした方が良い。轟はそう判断したのだ…

一方…

「オラオラ！さっきの威勢はどうしたのかしら!?」

「チッ…！んのクソドS野郎がああぁぁぁ!!」

両備は先程とは違い、銃で乱射している。爆豪は爆破を上手く酷使して避けてるのだが、それでも両備も両奈に負けず劣らず充分に強かった。

一度飛ばした弾丸は、壁や地面やそこらにぶつかっては跳ねている。つまり両備の撃ってるこの弾は、普通の拳銃使いやスナイプ先生とは違った能力を持っていたのだ。

（個性の代わりが秘伝忍法だぁ？秘伝忍法使わずして能力があるってことは…こいつらまんま個性使ってるようなもんじゃねえか！）

それでも彼女たちには個性なんてものは存在しない。忍の彼女たちは、個性がない代わりが秘伝忍法なのだから…

「こんの貧乳スナイパーがああぁぁぁ!!」

そしてブチ切れた。

「はッッ!?はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ?!!」

そして両備もブチ切れた。

キレやすい性格は、ある意味お互い似た者同士なのかもしれない…といっても両備がドSなだけであるが。

雅緋と飛鳥は…

「秘伝忍法！【悦ばしきｉｎｆｅｒｎｏ】!!」
「ッッッ！きゃあああああぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー!!!!」
七支刀に似た黒い刀に黒炎を纏い、数回斬りつける。素早い斬撃に飛鳥は避けれず、雅緋の秘伝忍法を食らってしまう。地獄の黒炎の斬撃、飛鳥の体はその黒炎に飲まれ込み、その場に倒れてしまう。タダでさえ月閃との戦いで体力を消耗したというのに、蛇女子
「ハァ……ハァ……っ、強い……！」
「これが貴様の実力か……大したことなかったな…」
ボロボロの飛鳥に雅緋は訝しげに目を細め、見下す。雅緋の手からは黒炎が燃え続いてる。これも一種の能力だとでもいうのか…
「蛇女の人たちが、こんなに強いなんて…」
「こんな奴らに焔たちは負けたのか……アイツら蛇女の面汚しと言わざるを得ないな…」
「ッ！」
焔を、いや…焔たちを侮辱した雅緋のその言葉は、飛鳥の逆鱗を触れてしまった。飛鳥はヨロヨロになりながらも、怒りを燃やした眼差しを向ける。が、雅緋は表情一つ変えずにただ見下している。
「雅緋ちゃん……いま、何て言った？」
「何とでも言ってやるさ、アイツらは使えない忍のクズ同然だということをな…!!」
「っ!!」
その言葉を聞いた飛鳥は頭に血が上った。自分の最強の友達を、貶め、侮辱し、そしてクズ呼ばわりした。
「私のことを悪く言うのはいい……でも、焔ちゃんを悪く言わないで!!」
「お前は一々不愉快だ、友情ごっこで弱さを誤魔化すな…」
飛鳥の脳裏に浮かぶは、天守閣が崩れるなか、仲間たちと共に他の生徒を救出に赴いた焔の姿。
そして、またいつか…と最後に言った焔の姿。
「友情ごっこなんかじゃない！私と焔ちゃんは…!!」

「お互いを高め合う存在だとでも言うのか？」
「ッ！」
「下らん、本当に下らない。お前ら、忍を何だと思ってる？スポーツ漫画の読み過ぎじゃないのか？お前らのような奴らを世間では何と言うか知ってるか？甘いんだよ、お前たちは全てに於いて甘い、そして弱い……そんな奴等は忍の世界には必要ない」
「そ、そんなこと…！」
雅緋の非情で無慈悲な言葉。地獄の炎のような闘気を放ち、冷酷で残虐な殺意が飛鳥の言葉を一蹴した。雅緋の実力は並みの忍とは訳が違う。それもそのはず、雅緋の父親は世界の忍の中でも五本の指に入る実力者なのだから…雅緋は昔、子供の頃から命を懸ける程の訓練を受けいたのだ。辛かった、でも耐え抜くことが出来た。そう、ある目的が…いや、目標があったからこそ、雅緋はそんな毎日が苦しい鍛錬にも耐えることが出来たのだ。
「今日のところは命までは…とは思ったが気が変わった、ここで始末してやる。忍の弱さとは罪だ、その罪は死んで償え!!」
だめだ、やられちゃう。
「ゴメン…みんな!!!!」
飛鳥は思わず目を瞑った。瞼の裏には、色んな人物たちが浮かび上がってきた。
じっちゃん、雄英の生徒たち、爆豪くん、轟くん、緑谷くん、そして半蔵の仲間たち…
そしてその現状を見た緑谷は、飛鳥が殺されることに気づく。
「!!飛鳥さん!!おい！やめろ!!」
言葉遣い悪くなってることも気付かず、緑谷は冷や汗を垂らし、必死になって駆けつける。しかしもう遅い、距離が離れてるうえに雅緋の刀は既に振られていたのだから。ワンフォーオールでも届かない。
「これで終わりだ!!」
このままでは本当に、飛鳥は死ぬ。
そして飛鳥が最後に思い浮かんだ人物。それは…

焔ちゃん…

ガキィィン!!
「ッ!?!!」
しかし、雅緋の刀が飛鳥を斬ることは決してなかった。目を開けると、飛鳥の目の前には見たことのある人物の背中が…
遠くで駆けつけようとした緑谷もその人物に驚きを隠せない。
「えっ!?」
「貴様は…!」
「ま、まさか……」
見たことのある背中、逞しく、熱く、闘志を感じるこの背中…
黒いポニーテールを揺らし、背中には六つの刀に紅い刀が一本。
「漆月と敵連合について詮索していたのだが、これはとんだ大物だな…」
聞いたことのある声、忘れるはずがない。死の美を交わした彼女を、飛鳥は忘れるわけがない。
「何をやってるんだデカ乳女!お前は私以外に負けるんじゃない!」
「「焔（ちゃん）!!」」
元・蛇女子学園にして、今は抜忍、焔であった。
「うん!って、違うちがう!私は焔ちゃんにも負けないよ!」

「ふっ、それでこそ飛鳥だな」
　焔は前に蛇女にいた時とは違い、雰囲気も随分と変わっていた。だが、強き闘志を燃やした瞳と、近くにいるだけで感じるこの闘気は変わらないままだった。
「焔…善忍を助けるとは、蛇女の誇りを捨て去ったか」
「捨てた？私が？馬鹿を言うな。蛇女の誇りとはそんな安っぽいものではない」
「そうそう、善忍を助けても悪の誇りまでは失わないわよ」
　こっちも聴きなれた言葉が聞こえた。この声は春花だ。と言うことは…
「悪は自由だから良いんだ！こうだなんて決めつけるなんて馬鹿馬鹿しいよ！」
「そんな頭の固い人たちに食べさせるもやしはございません…それが例えもやし好きでもです！」
「新しい選抜チームはイライラした連中多いなぁ、わしが言うのもなんやけど、少し感情を抑えた方がええで」
　未来、詠、日影。元蛇女子学園の選抜メンバー全員が揃っていた。つまり、皆んなあの後無事だったと言うことだ。
　そして向こう側からボロボロになった忌夢がやってきた。
「すまない雅緋、思ったより手強かったよ…甘く見すぎた。それに他の忍の気配を感じからやって来てみたら…お前たちか……探す手間が省けたよ……」
　目を細め睨みつける。特に日影を…日影自身睨まれてることも知らず、何をしたのか覚えていない。
　忌夢だけでなく、焔たちがやって来たことに、両備と両奈も引く。
「あっ！テメェ逃げてんじゃねえぞスナイパー野郎！」
「うっさいわよこのクソ犬!!本当はアンタをぶち殺したいけど、今はそれどころじゃないんだから！」
「ああ?!!」

両備と爆豪は相変わらずといった様子だ。
「両奈ちゃん戻りました～♪」
「戻ったか、助かったな…」

一方、轟は両奈が引いてくれて助かったという様子。
皆んなが集まり、雅緋は歯を食いしばり、苛立つ目で焔たちを睨みつける。
「この抜忍共め…!!」
「さて、と。此方も5人揃ったところで、高らかに宣言するか…

私たち、『焔紅蓮隊』は秘立蛇女子学園に学炎祭を申し込む！」
「ええ!?それって、つまり…蛇女対蛇女ってこと？」
飛鳥たちと雪泉たち善忍同士が戦うように、焔たちと雅緋たちも悪忍同士で戦うということだ。いや、焔たちは今はもう悪忍ではない。元・悪忍、今は抜忍だ。そして焔たちのチーム名は、焔紅蓮隊と呼ぶらしい。
「学校はないが抜忍になったとしても、蛇女の魂は私たちにある。それをお前たちに証明してやろう……」
「上等だ、受けて立ってやる。半蔵は後回しだ…まずは抜忍の首から刈ることにしよう…」
そう言うと雅緋たちは一瞬にして、物音立てず姿を消した。辺りには焔紅蓮隊、半蔵学院、そして雄英生3人となった。
飛鳥さん！
飛鳥！
と、二人は駆けつけてくる。爆豪くんは不機嫌そうに歩いて来てるけど…
そんな三人も焔たちを見て驚く。いや、正確には二人といった方がいい。緑谷はすでに知っていたのだから。
「焔ちゃん…まさか私たちを助けるために？」
「勘違いするな、私の最強への道を邪魔する奴等は蹴散らすのみ。雅

緋たちを倒したら次の相手は、飛鳥、お前だ」
「……流石は焔ちゃんだ…」
　自分の道を突き進もうとする焔の姿に、飛鳥は心が熱くなる。自分も負けていられない、そんな風に思えて来た。三人はポカンとしており、空気を読んでるのか、その間に入り込まない。いや、入れる空間ではない。ＡＴフィールドでも貼られてるのでは？と思えるほどだ。
「でも、焔ちゃんたち…どうして此処に？」
「いや、色々と事情はあるが……漆月と敵連合を探しててな」
「えっ!?」
　焔の言葉に驚く声を上げる飛鳥。漆月なら蛇女が襲いかかる前に一度だけ遭った。しかし彼女が去った跡、直ぐに蛇女が襲いかかって来た為、言えなかったが…
「そ、それなら…少し前に遭ったけど…直ぐに逃げられちゃって…」
「なに!?此処に来たのか!?!逃すとは飛鳥、それでもお前忍か！」
「うぅっ！御免なさい！」
　焔の厳しい言葉に、飛鳥は目を瞑り謝罪する。だが彼女も何かしらの理由で逃してしまったのでは？と、または飛鳥でも仕留められなかったのか？と心の中で言い聞かせ、余り怒鳴らなかった。
「まあ、良い…過ぎたことは仕方ないからな…」
「う、うん…けど…どうして探してるの？抜忍になったから焔ちゃんたちはもう任務なんて関係ないはず…」
　焔は道元を斬ったため、抜忍としての道を歩むことになった。それが例えどんな理由であれど、上の者を斬るということは、反逆、裏切りとみなし、忍の世界から追放されるのだ。それでも焔は悔いはないし、残ってもいない。
「ああ、確かに関係ない…だが私はさっきも言ったはずだ。蛇女の魂は私たちにある…と。仲間たちや未来がネットで調べてくれたんだ、私がいない間に抜忍と敵連合が私たちを襲ったことをな……同じ抜忍とはいえど、漆月は許さん、道元も、そしてその主犯格である死柄木とか名乗る奴もな…」
　焔のその強い眼差しは、怒りの闘志を燃やしている。蛇女の崩壊は

二つにある。一つは敵連合、もう一つは道元。道元は禁じ手の術で皆の命を人質にとり、終いには蛇女を裏切り化け物、怨楼血を復活させたのだ。怨楼血には散々な目にあわされた。
「まあ、何はともあれ、焔ちゃんたちが無事で本当に良かったよ…」
飛鳥はそう言うと、笑顔を浮かべた。

場所は変わり、死塾月閃女学館では…
「……」
何気ない一つの修行部屋に、雪泉は一人で鍛錬していた。学炎祭で半蔵を確実に潰すために…
雪泉たちの目的は悪を滅ぼすこと。純粋過ぎかつ、単純な目標…だが、それが雪泉たちにとっての理想であり、祖父である黒影の悲願なのだ。お爺様のためならどんなことだってする、と言わんばかりのその姿勢は、違う正義…いや、いき過ぎた正義と呼んでも過言ではなかった。
半蔵学院を潰す。なのに、彼女の心は何処か引っかかっていた。

それは…

『悪いな、目の前に困ってる奴がいた』
『何がそんなに気にくわない？何でアンタ達は悪をそこまで憎むんだ？何かされたのか？』
『悪がなくなったとしても、そこに正義もないぞ？』

「ッ!!」
パキィン!!
轟の数々の言葉。その言葉が雪泉の心を突き刺していたのだ。自分たちのことを、何にも知らないクセに、何もわかってないクセに、偉そうに、何の躊躇もなく自分たちの事情に首を突っ込もうとするその姿、思い出すだけで頭に血が上り、巨大な氷を出してしまう。つららのようなその氷は、もはや凶器と呼べるものであり、部屋に氷の音が響き渡る。
「私は…正しい。私は今まで、お爺様にそう教えられてきた……お爺様の本望でもあるはず…悪の必要としない世界こそが…人々を救い、笑顔を守ることが出来る……それこそ真の正義……」
呪文を唱えるかのように、何度もなんどもそう言い聞かせた。だが、ひたすらそう言い聞かせる、ということは、自分の心には何処か迷いがあるからだ。
それは、自分のやってることが本当に正義なのか？ということ、よくよく考えたら、目の前に困ってる人間がいたら助ける。それは立派な善だ、また悪がなければ正義はない…
認めたくはないがこれも分かる。
正義は悪を倒すことで、自分たちが正義だということを証明できる。また、悪がなければ正義とは何なのか、何になるのか…
そう思えたのだ。だが、認めたくない。自分たちの信じてきた道が、たかが知らない赤の他人の言葉に惑わされることなんてあっては

ならないんだ。
だからこうして、体だけでなく、心も強く鍛えるために鍛錬しているのだ。
私は何も間違ってない…そう思いたい。いや違う、そうでありたい。
悪がなくなれば、悪に苦しみ涙を流す人間はいなくなる。
それこそ理想とする世界…何がいけないことなのだ？だから、自分たちは間違ってなどいない。なのに、心の何処かでそれを否定してるような自分がいる。だから、雪泉は悩んでいるのだ。

「お爺様…私は、どうすれば……」
雪泉は自分の手を見つめる。すると、脳裏には黒影が手を差し伸べる姿が…思わずこちらも手を差し伸べてしまう。
「……っ？」
その時…感じたことのない気配を感じた。そう、此処には忍学生しか存在しないはず、なのに見知らぬ誰かの気配を感じるのだ。忍の気配は一切ないし、微塵たりとも感じない。ではなんだこの気配は…？
その強烈な気配が素早い位にこちらに向かってきてる。
雪泉は思わず声を上げる。
「…誰です?!出てきなさい！」

ドガアアアアアアアアアアアアアン!!!

強烈な大爆発。修行部屋の扉が開くことなく壊れ、煙が発生し人影がうっすら見える。
雪泉は警戒態勢に入り、冷や汗を垂らす。はっきり言える、この気配…半蔵学院なんてレベルじゃない。今までに感じたことないオーラが伝わってくる。

近くたびに恐怖を覚えてしまう…体が僅かに震える。雪泉自身震えてることに内心驚いている。自分の心を保とうとしても、震えが止まらないのだ……この気配は、黒影、いや…それ以上の気配…

煙がやがて晴れると、その姿が露わになる。

「なんだ、お前一人か……氷の音がしたんで、せめてもう一人いるかと思ってたんだがなぁ…」

大柄で頑丈で屈強な体、見た感じ如何にも悪どんな思えるその姿、そして顔はマスクを被ってるためよく分からない。だが、この人物が只者でないことは確かに分かった。それ以前にここに侵入してる時点で、既に危険人物だと言える。何故なら、ここのセキュリティーは半蔵学院とは違い厳しく、見回りの忍学生が何十人も見回ってるのだ…だが警報もないとなると…警報が掛かる前にヤツは止め、見回りの忍学生を倒し、全ての難問をくぐり抜けて来たのだ。

「さあて、久しぶりに暴れるかぁ!!!」

それも、見たことのない敵(ヴィラン)が、凶悪な敵(ヴィラン)が、雪泉の目の前に……

56話「悪悪悪」

ちょい前。

学炎祭から帰って来た選抜メンバーたち。死塾月閃女学館は、秘立蛇女子学園のように何十人何百人かの忍学生が授業を受け、修行を受ける、まさに忍学生としてもってこいの学校であった。そして此処は勿論山奥のため、他の人に知られるわけがなく、また誰かに邪魔をされる事もないので心配ご無用。

一先ず学炎祭が終わり、皆は一息つこうとするものの、雪泉は「忍とは常に死が隣り合わせ、くつろいではなりません！」と一喝されたが、正直言って修行よりも学炎祭の方が疲労も溜まる、体力も削る。余り乗り気ではなかった。それに今は王牌先生もいない。どこへ行ったのだろう？と皆は思うもののそこまで心配してなかった。

叢は「確かに修行も大事だが、我は漫画を書くのも大切なんだ…」と、机に座り、美野里は「美野里はやることはやったも～ん」と言い自分の大事なお人形を持っておままごとをし、四季なんかは「あたしはしずえとお話しが～」とスマホでお話し、夜桜は…「儂は皆さんの為にご飯の用意をしとかねば…」と雪泉に頭を下げ調理場に向かう。まあ、夜桜は分かるが、他はどうかと思う。確かに学炎祭は決着はつかなかったが、それでも向こうだって直ぐに修行を積んでいるのかもしれない。その怠惰が敗因となれば、それこそお爺様に顔向けできない。雪泉は「もういいです…」とため息をつき、一人で修行部屋に向かって行った。

それから彼女たち四人は、何処か少し気まずそうに表情を浮かべていた。

「雪泉ちん、なんか怒ってたね…」

「もしかして美野里、悪いことしたのかな？」

「学炎祭が終わってからずっとあの調子でしたしね」

「雪泉、一体何があったんだろうか？」

四人はお互い顔を見合わせるも、答えは出てこなかった。雪泉は選抜メンバーの筆頭でありながら、黒影の実の孫でもある。彼女はいつ

も冷静で、清楚で凛として振る舞い、誰もが認めるリーダーだ。だが、そんな雪泉が悪以外でこのような表情を見るのは初めてだ。
雪泉が一体何故そこまでして機嫌が悪いのか、何故気が荒立ってるのか…知るわけがなかった…

俺の名は黒影、抜忍として生きて来た男だ。実の孫である雪泉は、善忍のエリート校、月閃で選抜筆頭を任されている。雪泉は立派な善忍に近づきつつあるようで、それを誇らしく思いつつも、一方で小さな心配も尽きない。雪泉は早くに両親を亡くし、その後はオレが引き取った。それ故に『悪は滅ぼすべき』というオレの価値観が受け継がれている。
オレは自分の歩んで来た道に後悔などしていない、悪を倒すことが人々の笑顔になるのだと今でも信じている。
しかし、だ。それはあくまでオレの価値観であり、雪泉まで同じように生きる必要はない。もちろん、それは雪泉だけに限った話ではない…叢、夜桜、四季、美野里たちも同じだ。オレの意思を健気に継ごうとしてくれるのは充分に嬉しいのだが、そのために彼女たちは何か失っていないだろうか？
何よりも、月閃に進学してからというもの、雪泉の笑顔をオレは一度も見ていない。人々の笑顔を守るためには、自分の笑顔は封印する

と言わんばかりに……
雪泉たちは純粋で真っ直ぐだ。だからこそ、オレは心配でならない…
もしかしたら、雪泉たちはオレと同じ道に歩み、同じ運命にあってしまうと思うと……そうなれば……
『黒影、これでお前の大切なものは壊した、此処で死ぬといい』
あの時と同じように、昔のオレになってしまう。
善忍を辞め、抜忍となったあの頃を…
悪が憎い、善を蝕む悪が憎い。奪い、壊し、弄ぶそんな悪が許せない。
悪そのものの存在を否定してやる。
オレは悪のない世界、善だけの世界を作ってみせる。
今思えばいつもそんなことばかり考えていた。オレは若く、純粋だった。いや、雪泉と同じく純粋過ぎたのかもしれない。その純粋さを善忍の、いいや…正義の世界を受け止めてはくれなかった。
抜忍となったオレは、たった一人で悪忍狩りと敵(ヴィラン)狩りを続けた。それは表と裏の掟両方全てに於いて反する行為だった。
『殺せ！黒影を殺せ！』『おい！こいつだ！俺たちの仲間を殺した野郎だぜ！』『テメェよくも！』『これ以上お前の愚行を見逃す訳にはいかんな！』
オレの命を狙うべく、善忍と悪忍、両方の陣営から忍が送り込まれ、そしてヴィランは見つけては殺しにかかり、更にはヒーローも見つけては捕まえようと、オレはすべての存在に狙われていた。
抜忍狩りとの連中との戦いは激しく、ときには一般人が巻き添えを食うこともあった。悪を倒すためとはいえ、罪のない者が傷つくのは本意ではない。
オレは悪忍と敵(ヴィラン)を狩るのをやめ、地下に潜伏するようになった。そして、１０年ほど前のことだ。実の娘と義理の息子が死んだことを

知った。どちらも善忍だった娘夫婦は、悪忍との戦いによって殺されたという。それを知った途端、心を再び絶望と怒りと憎しみが支配した。

もう一般人が巻き添えになろうと関係ない。復讐してやる…絶対に悪の存在を許さない。オレはドス黒い復讐心を胸に秘めて斎場へと向かった。娘夫婦の亡骸に悪狩りの再開を報告しようと思ったのだ。

すると斎場の前に一人の少女が立っていた。

オレは我が目を疑った。その少女は、オレの娘の子供時代とそっくりだったのだ。だから直ぐに分かった、この子はオレの孫に違いない…と。少女は悲しみのあまりか、ぼんやりしていたが、オレには感じられた。この子もまた絶望と怒りに心を奪われている。きっとこのまま復讐の道を進めば、この子の可愛らしい顔立ちに笑顔が戻ることはないだろう…それが、例え平和の象徴がいたとしても…

そう。さっきも言ったように、オレと同じ修羅の道を歩むことになり、昔のオレになってしまう。

しかし、大事な人を失った者に言葉だけの慰めは意味がない。

どうしたらいい？

どうすればこの子を救うことが出来る？

『両親が死んだ理由を知りたいか？』

いつの間にかオレは、その少女に声をかけていた。見知らぬ人に声を掛けられたというのに、少女は怯えることもなくしっかりと頷いていた。

『知りたければついてこい、お前を立派な忍にしてやる』

オレの側に置いてしっかりと鍛える。忍を目指すことが雪泉の生きる理由になるだろう…そして、オレと一緒に生活することで、きっと雪泉は気付くはずだ。

復讐にその身を焦がし、恨みだけで生きていけば、空しさだけしか残らないということを…

初めての孫との日々は楽しくて仕方なかった。訓練をつけてやることは勿論。それ以外に野菜や果物の育て方、山の遊び方、知ってる

限りのことを経験させてやった。
その都度見せてくれる雪泉のその目の輝きが、オレの荒んでいた心をどれだけ癒してくれたことか…そして驚くことに、いつの間にかオレの中から復讐心は消え、悪忍と敵(ヴィラン)狩りをしようという気持ちもなくなっていた。代わりに始めたのが、雪泉のように忍同士の抗争で親を失った子を引き取ることだった。
叢、夜桜、四季、美野里……あの子達にも雪泉と同じように愛情を持って接した。そしてなんと、これもまた驚くべきことに、この5人全員は忍としての才能に恵まれていたのだった。オレが彼女達に修行をつけさせたことで、善忍の名門校である死塾月閃女学館の入試を簡単にパスするほどの力を身につけたのであった。入試だけでない、入学してからの成長も目を見張るものがあった。五人全員揃って選抜メンバーになるとは夢にも思わなかった。オレの孫達が善忍で輝き始めている。
本当に嬉しかった。
心の底から嬉しかった。
しかし人生というものはうまくいかないものだ…

オレはある事情により、どうしても遠出をしなければならないことがあった。5人は心配してオレを見つめていた。このことは勿論孫達には言ってない…もしそのことを言ってしまえば、取り返しのつかないことになるからだ…だからオレはこの身をもって、少しの間だけ離れた。
そう、オレにはオレのケジメというものがある…それにケリを付けるために、オレは立ち上がった。

そして五人の元へ帰って来た。皆は心配そうに駆けつけに来てくれた。生きてて良かった…と皆は涙を流してオレの体を抱きしめてくれただろう…だが、その分彼女達を苦しめる事実が待っていた…

再起不能。もう二度と忍として活動をすることが出来なくなってしまった。また、余りにも酷い重傷を負ってしまったためか、１日でも長く生きるためにベッドで安静にしてることが必須だった…体の内臓器官は殆どやられ、今じゃ呼吸をしてるのでさえやっとな程だったのだ……

雪泉たちには、抜忍狩りが奇襲を仕掛けて来たと言っておいたが、本当の事実は違うものだ……だがそれは言えない…言ってはいけない気がした。大切なものを、雪泉たちを失うような気がしたのだ…

それと同時に、自分に残された時間がないことを知ったオレは、頭の中に浮かぶのは雪泉たちの先行きだった。

オレがいなくなってもあの子達はきっと大丈夫だ、生きていけるはず…そのための教育はして来たと思ってるし、信じてるからこその答えだった。だが、あの子達のことがどうしても心配でならないのだ…

叢

あの子にはもっと自信を持ってもらいたい。仮面の脱着如きで性格が変わるというのは、突き詰めて考えれば思い込みに過ぎない…素顔のままでもお前は充分に可愛い、お面なしでも生きていける。その事実を知ってほしい。

夜桜

あの子には生き急がないでもらいたい。自分が立派な忍になって、また家族一緒に暮らしたいと強く願っているようだが、そのために無理をして身を危険に晒してないだろうか？いずれ時が経てば、弟も妹もみんな大人として独り立ちする、その時にそれぞれが大人として再開すれば良い…それくらいの余裕を心に持って欲しいのだ。

四季

あの子には英語を学んでもらいたい。一人前の忍となった暁には、仏教の心髄を体現しつつ、世界に羽ばたく忍になって欲しい。あの奇抜なファッションで『ＪＡＰＡＮＥＳＥ　ＮＩＮＪＡ』

と名乗れば、世界中にセンセーショナルを巻き込こすことになるだろう…それだけではない、日本のみならず外国にだってヒーローは多く存在する。四季はきっと大きく活躍することだろう…

それは忍として初の快挙になるはずだ…

美野里

あの子は今のままでいて貰いたい。つまらないおとなになって、遊び心を忘れて欲しくない。そして、笑顔を忘れて欲しくない…ピリピリした忍の世界だからこそ、あの子のような存在が必要なのだ。今のままならきっと良いムードメーカーになれるし、周りの人間を笑顔にしてくれるに違いない。だから、いつまでもマイペースで自分を見失わないようにして欲しい。

そして…

雪泉

オレの孫。どうしたら雪泉に笑ってもらえるのだろう?それが最大の悩みだ。

雪泉には笑顔が似合う、いや…実際に見たことはないのだが、きっと似合うはずだと思っている。

あの子の笑顔が見ることが出来れば、オレはもうこの世に未練はない。満足してあの世に行くことが出来る…

笑顔と言えばそうだな…『陽花』も言っていた…

『黒影さんはやっぱり笑顔が似合うよ、だって…笑顔が似合わない人間なんていないし、黒影さんには幸せになって欲しいもん♪なんて…えへへ、ちょっと恥ずかしいこと言っちゃったかな?』

『善忍も悪忍も変わらないと思うんだ…だって、忍は善か悪か、その何方かに別れてるんだから……人だってそうだよ、心には良かれ悪かれ善と悪、両方が存在する。だから、そこを否定したって何も始まらないんだ…だからお願い黒影。これ以上自分の身を危険に晒してまで悪に復讐するのはやめて?そのせいで…誰かが苦しむ人だって居るんだよ……』

ああ、なんということだ…オレは彼女になんてことをしてしまったのだろうか…今思えばいつもそうだ…彼女の話をきちんと聞いてい

れば、もっと彼女と接していれば、こんな事にはならなかっただろう…そう思うのだ。
オレ自身悔いはない…だが、オレが今悔やんでるのは、雪泉たちの方だ…陽花の言ってたことが本当になってしまった。自分の理想が夢幻に
雪泉たちは、悪に苦しんでいる…正にその通りだった……抜忍となって、自分の理想が夢幻に過ぎないのだと…
そんな愛すべきあの子たちを、憎しみに向かわせてしまった。オレの背中を見て育てば、憎しみに囚われることがどれだけ無意味なのか伝わるはず、そう信じていた。
だが結果は違った。
優しいあの子たちはオレのために、悪殲滅の意思を継ごうと考えるようになってしまった。今のまま突き進めば、オレと同じ道を突き進むことになるだろう…
だが、どんなに後悔したところで、今のオレには彼女たちを止めることはできない、救うことが出来ない……

もはや頼りになるのは、オールマイトか…半蔵か…

頼む。オレの代わりにあの子達に伝えてくれ。悪を憎むということがどれだけ無意味で、どれだけ空しいのか…
そして、オレから…そしてアイツから、彼女たちを解放してやってくれ。
頼んだぞ……

それが、黒影の想いであり、今の願いなのであった…

ドガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!

「「「!!??」」」

修行部屋から聞こえる大爆発、その衝撃のあまりに地震が起こる。美野里は突然の現象に驚き、目に少し涙を浮かばせる。夜桜は取り敢えず美野里を落ち着かせるよう頭を撫でる。突然起きたこの爆発、当然パニックになるし月閃の四人は何が起きたから分からず頭の中が少し混乱している。しかし、このような非常事態だからこそ、常に冷静に、心を保ち、落ち着かせるのだ。美野里が大泣きして問題を増やしては余計な混乱を招くに過ぎない。そのため夜桜の行動は正しいと言える。

「なんだこの爆発は!?」

「これは一体…?」

「夜桜ちゃん怖いよおぉ!何が、起きてるの!?」

「修行部屋から爆発の音が聞こえたよね……って、修行部屋には確か…雪泉ちんが……」

「その通りさ…!」

「「「!?!」」」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!

又しても爆発。部屋の壁を壊してやって来たのは、大柄で黒いボディスーツを着用し、顔にマスクを被っている男。そして…

「うっっっ……くっ…あっっっっ!!」

首を鷲掴みにされ、苦しみ悶える雪泉の姿。

「「「雪泉（ちん）（ちゃん）!!!」」」

雪泉の苦しむ姿を見て、一同はその名を大きく叫び出す。月閃は中まで厳重に仕掛けがあるため、知らない忍や他の者がここへ辿り着け

ることはまずない。しかし、ここにたどり着ける方法があるとすれば、簡単なことだ…

圧倒的な力で来ればいい。壁を殴り壊せば意味がないのだから…

「お前らのお友達、こんなのになっちまってるぜ？」

大男からは忍の気を一切感じない。恐らく言動からして敵（ヴィラン）と認識していいだろう。その大男に夜桜は怒りのあまり突っ込む。

「貴様あああぁぁぁぁ!!!」

「よし！まてまて、焦るな、そんなこけし娘にはコレをやろう！受け取れよ？」

突っ込む夜桜に、大男はなんと雪泉を思いっきり投げ飛ばす。投げ飛ばされたことに、夜桜は驚き雪泉と夜桜の頭がぶつかり倒れてしまう。それでもなんとか捕まえようと、倒れる前に雪泉の体を抱きしめた。そのため雪泉まで倒れることはなかった。

「ケホッ！ケホッ！ゴホッ…!!あっ……はぁ……はぁ……」

「いつつ、すみません雪泉！大丈夫ですか!?」

「夜桜…さん…」

雪泉は咳き込みながらも、呼吸を整えている。首にはまだ痛みが走っている。しかし、今は自分の痛みよりも、悪（ヴィラン）を倒すことが先だ。

雪泉が命に別状はないと確認した夜桜は、両手に手甲を装着させる。先ほど怒りのあまり自分の自慢の武器を装着させることをすっかり忘れていた。他の皆んなを雪泉を心配し駆けつけてくる。

「雪泉ちゃん！大丈夫?!」

「雪泉、無事か…」

「ちょっちヤバくない!?なんでこんな所に敵（ヴィラン）がいるのさ!?あり得なくない？どーして此処が…」

美野里は雪泉の傷を見て心配し、叢は雪泉が無事かどうかを確認する。四季は雪泉を支えながらもヴィランを見つめる。そんな月閃に今まで黙って様子を見ていたヴィランは嘲笑う。

「ハッハァーーー！これが正義の友情ごっこか！皆んなが駆けつけに来て俺を放置とは…面白え！面白えよお前たち！」

「ふざけるな貴様ッ！いい加減にしろ!!」

雪泉だけでなく、皆を、家族をバカにされたことに夜桜は頭に血がのぼる。夜桜にとって、雪泉たちは家族そのものだ。夜桜はまだ月閃に入る前までは、心温まる幸せな家族と過ごしていたのだ。

自分を除いて、弟と妹で合計１１人と言った大家族に囲まれていた。なんと、母親は一年に１１人もの子供を産んだのだ。我ながら凄い母親だと思った…

母親は今まで休んでたその分、任務で忙しかった。父も忍で忙しく、家に帰ってこなかった日が多かった。その間弟と妹の面倒は全部夜桜が見ることになった。流石に１１人の面倒はとても大変だった。喧嘩を仲直りさせたり、好き嫌いが激しかったり、ご飯の時間など取り合いになったり、やや麦茶は嫌いだオレンジジュースが欲しいなど、更には夜、皆を寝かしつけたりと……大変だったけど、嫌ではなかった。だって、家族が大好きだったから…

だから、両親が死んだことはショックだった。任務で、善忍と悪忍との抗争で敗れたそうだ。母は無理はない…ブランク明けの任務で死亡してしまったのは…流石に一年間ずっと休んでいれば、任務は難しいかったのだろう…そして翌年には父が死亡した。

両親のいなくなった後、親戚の人たちが弟妹を引き取って行く……だが、夜桜にとってそれはとても辛かった。大好きな家族が、引き裂かれていくようで、心も裂けりそうだったから……だからこう言った。

『儂が育てる！儂が皆んなを育てるんじゃ！』

しかし９歳の年頃である彼女の言葉は誰も信じてくれなかった。冗談だと受け取り、結局親戚に引き取られてしまったのだ…夜桜も親戚が引き取るはずだったが、それが嫌で抜け出したのだ。こうなったら一人で生きてやる…何がなんでも…そう思っていた。しかし幼い頃の浅知恵でどうにかできるハズがなく、帰る場所もなく途方に暮れて居た。衰弱しきった体に、疲労と空腹が襲いかかってきたあの辛さは、今でも忘れない…そんな時だったんだ…黒影に拾われたのは。

もし黒影がいなかったら、今の夜桜は何処にもいない。家族を救いたい、家族が大好きだ。だからこそ、夜桜は……そんな家族を馬鹿に

されたコイツが許せない。
夜桜は怒りを込めた拳の一撃を、大男に喰らわす。
「いや、ふざけてないぜ？」
ガシッ!!
「!?!」
だがなんと、夜桜の拳をこの大男は何ともない様子で、ごく自然に手で受け止めた。掴まれた手を引っ剥がそうとするが、ビクリとも動かない。
「四人いるなら仲間の心配、安否を確認するのは一人で充分、なのに敵を目の前にして全員で仲間一人の心配をする、その隙に俺がお前たちをリンチにするってことは考えてなかったか？」
つまり、その気になればいつでもお前たちを潰せた。そう言ってるのだろう、この敵は夜桜を見つめてそう言うと、夜桜はもう片方の手甲で殴りかかる。
「テメェをブチのめすことしか、考えてなかったんじゃ!!秘伝忍法！【極楽千手拳】!!」
「!!」
夜桜は巨大化した籠手を大男の腹目掛けて殴り、衝撃の爆発が連鎖する。ましてや至近距離０での強技が炸裂。これを食らった葛城もボロボロになったくらいだ、それをまともに食らって無事ですむハズが…「それが間違いさ！」
「はっ…?!」
なんと、夜桜の秘伝忍法をもろに食らっても、なんともない様子の大男。あの葛城でさえダメージがあったというのに、この男は、夜桜の秘伝忍法を前にしても、傷を負うことなく、吹き飛ばされることもなく、目の前に立っていた。マスクを被ってるので分からないが、恐らく笑っているのだろう…
それもそのはず、この大男から感じるこの重圧感、拳から伝わってくるこの無限に溢れ出る闘志。そして――
――自分の力が通用しなかったという、絶望感。

「今度はオレのターンだぜ？歯ぁ食いしばれよ！」
大男はそう言うと拳を強く握りしめ、夜桜の腹に鉄槌の拳を入れさせる。衝撃が強いあまり、「ガハッ！」と口から消化液が出てしまう。
そして壁の方に吹っ飛ばされ、背中を強く打つ。
「夜桜さん!!」
雪泉は壁に叩きつかれた夜桜を見て叫び出す。大男はクイッと指を上に向けると、周りの忍学生を見つめこう言った。
「言っておくが…ここにいる奴ら、一人たりとも逃さんぞ…!!覚悟しろ忍学生ども！」
絶対的圧倒的暴力を持つ巨悪と呼ぶにふさわしいヴィラン。皆も黙ってられるハズがなく、大男に立ち向かう。
「もう絶対に許しません！みなさん！」
「ああ…！勿論だ雪泉！」
「どうして敵（ヴィラン）が此処にいるか分からないし、なんで私たちの場所が分かったのかは知らないけど……まあ、倒せば問題ないよね!!」
叢と四季が前に出る。叢は面を付けてるので見えないが、面の奥では怒りに染まった表情をしてるだろう…いつも訓練に乗り気じゃないうえに、友達とよく喋ってる不真面目そうに見える四季も、怒りのコスモを燃やしていた。
「よし、よしよし！良いぞ、もっと来い！更にはもっと本気で来い！」
「その余裕がいつまで続くかな?!!」
大男は向かってくる叢と四季に挑発をかます。二人は自分たちを誘ってるのだと理解し、冷静さを保つ。相手の挑発に乗って怒りを露わにすればそっちの思う壺。怒りに囚われていては冷静さを欠け、判断を見誤る。
「秘伝忍法！【シキソスＺＥＸ】!!」
「こちらもだ！秘伝忍法！【影郎】!!」
二つの秘伝忍法。合体秘伝忍法とは違い、力を合わすわけではなく、単体で攻める戦法。大男は避けるそぶりもなく、ポリポリと頭を掻く。本当に舐めてるのか、と言いたいくらいのその姿勢は、流石に

挑発の域を超えている。鋭い牙を剥き出し襲いかかってくる白と黒の二匹の狼。そして頭の帽子から蝙蝠の群れを呼び出し、四季自身も血のような赤い霧を纏い突撃する。
　この二つの秘伝忍法に、大男はどう出るのか？まず二匹の狼が噛み付く前に両手で首を掴む。そこから…
「フン!!!」
　ドゴオオオオオオオオオオオン!!
　二匹同時に地面に叩き潰す。二匹の狼は一瞬で気絶し口を開き、舌を出しながら失神していた。あの小太郎と影郎をああも容易く行動不能にしてしまった…
「なっ!?バカな、小太郎！影郎！」
「子犬は大人しくオネンネしてな…！」
　そしてムクリと立ち上がると、目の前には蝙蝠の群れと共に突撃してくる四季。大男は右の拳で殴り飛ばそうと右ストレートする。が、ここで大男は四季の罠にかかった。
　シュバッ！
「なにっ!?」
　四季が突然消えた。襲ってくるのは大軍の蝙蝠、視界が奪われて思わず身構える。
「ええい！ちょこざいな！」
　今度こそ右ストレートを放つと、蝙蝠は跡形もなく吹き飛び視界が晴れる。だが目の前に映る光景に、四季はいない…
「ここだよ！」
　後ろから声が聞こえた。振り返るとそこには血管が浮かび上がってるように見える鎌を手に持ってる四季。そして…首を切り落とそうと首目掛けて刈り取ろうと武器を振るう。
「お見事だ！」
　だがそんなのこの大男には無意味だった。なんと瞬時に鎌を素手で掴んだのだ。その手から血は流れないどころか、逆に鎌の刃物が軋み、少しヒビが入ってしまう。
「うっ……そでしょ……!?」

「二匹の子犬が時間を稼ぎ、お前が突っ込んでくるかと思いきや、蝙蝠を目くらましに使って瞬時に背後に回り、気がつき振り向いた途端に首チョンか……うん、悪くねえな！だが…」

四季は武器を動かそうと試みるも、微動だにしない。この馬鹿でかい力、異常なまでの強さ、何より体力の底が知れない。こんな圧倒的な敵（悪）はそういないだろう…なのに、四季は知らない。このヴィランを。何故って？四季はブログのネタを上げるのは勿論、他にもネットやツイッターなどで情報は一通り掴んでいる。そのため当然ニュースのチェックも欠かさない。だから不思議でならないのだ、こんな大物ヴィランが、何故今まで世間に知らされることが無かったのか…この大男（ヴィラン）は一体何がしたいのだろうか？目的は一体なんなのか？色んな疑問が心の中に浮かび上がる…いや、それより…次はどうする？どうすれば良い？四季は次にとる行動を必死に考えていた。冷静に判断していたし、気の緩みも無かったはず…なのにこの男に攻撃が通用しない。

「そんだけだ!!」

すると四季に思いっきり殴りに掛かる。まずい、これを食らったら無事では済まない…最悪、死んでしまうケースだってある。自分たちの力が通用せず、相手に手も足も出ないなんて……

バチンッ！

「……え？」

「あ？」

鈍い音。大男の背中に鈍器かなにやらが当たった。大男はゆっくりと振り返ってみると、そこには…緊張してるのか息を切らし、目は赤く腫れ、震えながら涙を流し、手にバケツを持って殴った美野里の姿であった。

「「美野里（さん）（ちん）?!」」

「四季ちゃんから……離れろ……」

美野里は弱々しくも、力一杯、涙声でその大男にそう言った。大男はポカンとしながらも、体の方面を四季から美野里に変える。

「ほぉ？何をする気だ？ガキが」

「戦う……」
「お前が？オレに？痛い目にあうぞ？」
　美野里は精神年齢が子供ゆえに、とても純粋だ。だから、戦いは好まない。戦いが嫌いだ。戦いがあるから、憎しみを生み、悲しみを生む。美野里はそんなの好きじゃないし、人が何故戦うのか、理由が分からなかった……戦いがあったからこそ、両親は亡くなってしまったのだ…それなのに何で皆んなは戦いなんてしてしまうのだろう？皆んなで仲良く遊んでいれば、辛いことも、苦しいことも、悲しいことも、何もない。遊んでいれば皆んな笑顔になれるし、幸せになるし、楽しいし、嬉しいし、平和にしてくれる。皆んなもそう願ってるハズだ…
　だが、美野里は此処で初めて、こう言った。
「戦いは好きじゃないし嫌いだけど…でも、四季ちゃんや、夜桜ちゃん、叢ちゃん、雪泉ちゃんが傷つくのはもっとも～～っっっと嫌なんだ……!!だから、皆んなのために…戦う！」
　美野里はフライパンを取り出す。
「秘伝忍法！【パンパンケーキ】!!」
　美野里は魔法のバケツから様々な材料を取り出し、フライパンを使って一気に巨大なパンケーキを作り出す。ふざけてるように見えるかもしれないが、美野里にとっては真面目だし、これが美野里にとっての必殺技なのだ。調理といってもそんなに時間は掛からないし、隙を作ることもない…魔法のように一瞬で出来上がり、フライパンを上手く使ってパンケーキを空に投げると、大男の真上から、巨大なパンケーキが降ってくる。美野里はパンケーキ以外にもお菓子を作るときの顔は、とても幸せそうな笑顔になる。その笑顔はとても純粋で、黒影が大好きな美野里の優しくて明るい笑顔だ。だが、今回は違う…仲間を傷つけられ、苦しめられた……初めて見せる、涙を流し悲しみに染まった顔だった。いや、違う。悲しみに染まったのではなく、誰かを助ける為に戦うことを決意した顔だった。涙で顔がぐしゃぐしゃになってるため勘違いしやすいが、それでも戦うことを決意し

た美野里は、この場で成長したと言えるだろう。
そのパンケーキは大男を覆い、潰した。
ズドオオオオオォォォォォォォン!!という巨大な地震。その光景に一同は呆気を取られていた。口をポカンと開き!目を丸くし、美野里とそのパンケーキを見つめて…
「美野里…やったの?」
美野里自身も、まさかここでやれるだなんて思ってもなかったらしく、流れてた涙は止まり、目を丸くする。目の前には甘い香りがふんわりとする大きなパンケーキ。大男の姿は何処にもない。
「美野――」
雪泉が彼女の名前を呼びかけたその途端…
バアアアアアン!!
巨大なパンケーキは空へと吹き飛び、形が崩れると四散する。散り散りになった幾つものパンケーキの欠片が、雨のように降ってくる。そして…美野里の目の前には…
「お前、最っっ高だぜ!!!!」
土埃のような、少しだけボロボロになった大男が、立っていた。大きなダメージは与えれなかったようだ。
「う……そ……だよ……ね……?」
大男を倒したというさっきの喜ばしい感じが、一瞬にして絶望へと叩き落とされた。美野里の秘伝忍法も、夜桜や叢と同じく通用しなかった。そのことに段々顔を青ざめる。そして、大男は堂々と、ゆっくり近づいてくる。美野里は、大男に問う。
「あ、貴方は!ヴィランさんは何がしたいの!?!何で美野里たちの学校に攻撃してくるの!?何で戦うの?!」
美野里の言葉に、大男はまたしても動きを止める。大男は少し考えた後、マスク越しから口を開いた。
「決まってるさ!正義をなくすのさ!」
「正義を…なくす?」
その言葉を聞いた雪泉は眉をひそめる。
「俺は善が憎い、正義が憎くて許せない!!悪を倒す善がオレはどうし

ても許せないのだ！悪を踏み台にして立つ貴様らのその正義が、どうしてもなぁ！」
　その言葉は、黒影のその逆だった。全ての正義を憎むその言葉に、雪泉の脳裏に黒影の姿を思い浮かべた。
「だから、オレは！お前たちの想いを、ぶち壊す!!」
　そして拳を力一杯握りしめ、美野里を殴りかかろうとする。美野里は目の前の恐怖のあまりに、圧倒的な威圧感のあまりに、言葉も出ず、縮こまるようにしゃがみ、手で頭を守るように置いて、目を瞑る。まるで小さい子供がイジメを受けてるような光景だ。
　その光景を目にした雪泉は、黒影が手を差し伸べてくれたあの姿を思い出し、一瞬頭が真っ白になった。
「秘伝忍法…【黒氷】!!!」
　パキィン!!!と大きな氷柱の氷が誕生し、大男に襲いかかる。その大男は美野里から雪泉が放った黒氷へと方面を変えた。拳に力を入れた強さを変えず、そのまま氷を砕くように殴りに掛かる。
「やっぱそうくるよなぁ!!!」
　そして、拳と氷がお互いぶつかり合い、炸裂。雪泉が放った黒氷は今までよりも一番強力で、一番デカイものだった。その黒氷はあの大男をも覆い尽くすような馬鹿でかい、轟が瀬呂戦に見せたあの氷山の一角と同じものの大きさだった。そんな大きな氷山とも呼べる黒氷に、大男は素手で殴り鋭い一角に拳が当たる。デカすぎるあまり、あまり見えないが、それでも強力な衝撃波はビシビシと伝わってくる。近くにいた美野里は衝撃が強すぎるあまり、必死に保とうとするも、とうとう吹き飛ばされてしまう。だがそれを叢がキャッチする。叢の横には、夜桜の腕を担いでいる四季。夜桜は先ほど腹にワンパン入れられ、まだダメージが残ってるとのこと…
　氷が次々と削れていってるのか、氷の破片が輝く飛び散る。その光景は美しいものでもあるが、相手が相手だ、見惚れてる状態ではない。
　ビキビキと氷の芯が割れ、やがて砕け散る。氷が大きく崩れるとともに、この大男は腕を軽く振り回し、雪泉を見つめる。
「……かき氷が出来なくて悪かったな、こちとら生憎、不器用なんで

ね」
「……どこまで舐め腐ってるのですか…？」
今の雪泉は先ほどまでとは比べ物にならない怒りをその目に蓄えていた。それも当然…仲間を傷つけ、自分たちの学校を襲撃し、終いには正義をなくすと来たものだ。そんな悪はこの世にいてはならない…だから、雪泉は戦う。自分を育ててくれた黒影のために…
「いやぁ悪いわるい！お前を見てるとなんだかかき氷食いたくなって来てな！そろそろ夏が来るし…って、んなこと言ってる場合じゃないな」
雪泉の言葉通り、本当に舐め腐ってるようだ。この状況でなおここまで余裕を晒け出すと、怒りが湧いて来る。実に不愉快だ…
「もういいです…貴方と話す気はありませんから……」
そして雪泉は秘伝忍法最終奥義、【雪蜘蛛】を発動させる。氷の巨大な蜘蛛を召喚し、巨大なつららの氷が大男を襲い、そして蜘蛛は自分を中心に回転する。周辺には竜巻か発動し、攻撃する。
氷の竜巻が、大男を襲う。
「ッッ！なるほど、これが本気ってわけか……氷と風のコラボレーション…なんちう秘伝忍法を…！」
この大男は何処まで忍の秘められた強さを知ってるのやら…氷の竜巻は悪を否定し拒み、消すように、大男の体を氷と竜巻が襲いかかり、体を傷つけていた。傷口から出る血、それすらも凍るこの秘伝忍法は、もはや絶対零度と呼ぶに相応しいかもしれない。
だがそれも一瞬の出来事。
雪泉の秘伝忍法が終わると、先ほどの氷のためか、白い霧が周囲に漂う。氷で作られた蜘蛛もいなくなっている。
「これで……」
終わった。
「……いい秘伝忍法じゃねえか」
「!?!」
だが倒れない。目の前に映る光景、それは多少凍傷を負ってるように見えるその体、それでもまだこの大男は倒れなかった。アレだけの

攻撃を食らいながらも、なぜ倒れないのか…不思議でならなかった。それにこの大男、先ほどから個性を一度も使ってないではないか。つまり、まだまだ本気ではない。そう言うことになる。こんな化け物が本当に存在するのか?それすら疑わしい。雪泉だけでなく、四人も流石に雪泉と同じ表情を曇らせる。

「けどな、オレはお前たち正義を殲滅するまで、オレは止まらねえさ」

「なぜ、そこまでして……」

「はっは!お前がそれを聞くか!お前らが俺たち悪を否定してるからだろ!?だからオレはお前らが憎くて許せないんだ!結局、お前らがやってることは人殺しとなんら変わらん!」

大男は笑いながら雪泉に指を差す。

「正義があれば悪だって必ず存在する。お前たちが悪を殲滅しようとするように、オレは正義を殲滅する。つまりは、そう言うことだ」

雪泉の方から四人の方へと視線を変える。そう、涙目になって目が赤く腫れてる美野里の方へと…

「結局、お前らとオレは、なんら変わらないのさ。お前たちのその正義という行動には、何もない。あるのは悪を倒すこと…なら俺たちと一緒だ。俺たちも正義を倒す。いたってシンプルで分かりやすいだろ?だから、オレは破壊をやめない。オレはお前たちのような正義がいる限り、何度でも…ぶちのめす!!!」

拳を握りしめ、四人もろとも殴り殺そうと腕を振るとする。

「くっ!」

「ちょっ…!」

叢と四季は傷こそないが、四季は夜桜の体を支えてるため、戦闘はまず難しい。そして叢は四季と夜桜、そして美野里に被害が及ばないように戦い守り抜けなければならないという、とても理不尽で無茶苦茶な状況に陥る。

「……ここ、まで……ですかね……」

夜桜は既に勝負の敗北を認めてるように見えた。それもそのはず、この大男から倒れるという文字が思い浮かばない。

では美野里は…?

涙を流し、首を横に振りながら、最後にこう言った……

ただ、

その言葉が…

全てを変えた。

「だ、誰か……助けて……」

ドクンッ!!

「!!」

『悪いな、目の前で困ってる人間がいた』

『何がそんなに気にくわない？何でアンタ達は悪をそこまで憎むんだ？何かされたのか？』

『悪がなくなったとしても、そこに正義もないぞ？』

「てやぁ!!」

「!?」

ガキィン!!

雪泉が氷で作った氷の剣と、雪泉の行動に気づいた大男は腕で身を守る。氷と腕が、まるで金属のようにぶつかり合う。雪泉のその目から、冷たい闘志が伝わってくる。
「コイツ…先ほどとは明らかに違う…？」
先ほどの雪泉と何処か違う…一体何があったのだろう…
「せいっ!!」
そして腕を薙ぎ払う。そしてガラ空きになった体にトドメの一撃と言わんばかりに突き刺そうとする。
「ッ！」
だがもう片方の拳でその氷の剣を折る。雪泉は少し距離を取るように後ろに下がる。
大男の目線も、美野里から再び雪泉へと移す。
「まだ体力が残ってたとはな…おも「美野里さんを…」？」
「美野里さんには指一本触れさせない！これ以上美野里さんを傷つけさせない!!」
雪泉の怒気を含んだ声、でもって何処か正義感を感じさせるこの声が、部屋中に…いや、月閃に轟いた。
「美野里さんだけじゃない！叢さんに、夜桜さん、四季さんにも…もう誰にも傷つけさせない!!誰も死なせない!!」
その言葉に、四人とも雪泉を見つめる。
「「雪泉…」」
「雪泉ちゃん…」
「雪泉ちん…」
こんな雪泉は初めて見た。
「……ほう？面白え…さっきよりかは、表情が随分と良くなったじゃねえか…！」
「……」
雪泉は神経を研ぎ澄ます。呼吸を整える。雪泉自身、自分が何処か変わった気がした。そして…何より驚いてるのは…大切な家族であり、大切な仲間である美野里が殺されかけた時、何故か考えるよりも先に身体が動いていたのだ。そして、いつもよりも力が出たような気

がした。その時と同時に、前に言われた轟の言葉が脳裏に浮かんだのだ。アレだけあの言葉に抵抗があり、苛立っていたのに、何故かその言葉にもう抵抗心も、怒りも覚えなくなったのだ。

だからなんとなく分かる気がしてきたのだ…黒影が自分たちに一体何を伝えたかったのかを…そして、本当の正義とはなんなのかを……その答えを見つけるためにも、この大男（ヴィラン）の戦いは負けられない。皆んなの為にも……

「この勝負は絶対に負けられない…！皆んなの為にも…!!」

「っ！雪泉の言う通りだ……秘伝忍法が通じなかったからなんだ…我らはまだ戦える…！」

「その通りですね…弱音を吐いては、黒影様に会わせる顔もねぇ……黒影様だけでなく、雪泉は皆んなの為にも、儂らは負けられない…！」

「そうだよ……もう悪の殲滅だなんて関係ない…今は…」

「皆んなの為に、美野里も戦う！頑張るもん!!」

叢だけでなく、夜桜に四季、美野里も、雪泉の横に並び、武器を構える。先ほどの雪泉たちならば…悪を滅ぼす憎しみをこめた目だった…しかし、今はどうだろうか？彼女たちの目は、輝いていた。まるで大切なものを守ろうとするその目は…雄英生、ヒーローの子供達と同じ目をしていた。

「「「「鎮魂の夢に鎮む!!」」」」

「……」

大男は目の前に映るその光景に、唾を飲み込む。

「なんだよお前ら…悪を殲滅とか言ってたのによぉ……そんな目でオレを見つめやがって…カッコいいじゃないか…!!本当に…

最っっっっっ高じゃねえかあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!!!」

心の底から湧き上がる止まらない高揚感、無限に溢れ出てくるかの

ような闘志。この大男の底は知れない…でも、雪泉たちも負ける気がしない。さっきまでとは違う…

「さぁ、参りましょう!!」

雪泉たちの正義と、強力な悪が、今衝突する。

57話「善善善」

雪泉たち月閃の目の前にいるのは、強大な力を持った正体不明のヴィラン(悪)。正直雪泉たちは敵との戦闘は今日で初めてであって、個性を持つ者の勝負もこれで初めてとなる。

けど、

だからなんだ？

今ここで、戦って負けなければ良い。勝てば良い、たったそんだけのことだ。

「さぁ…行くぜ!!!!」

大男が軽く身を構えると、一瞬にして、一秒も経たずに雪泉たちの目の前に現れた。突然目の前に現れた大男。しかしここで怯んではいけない。まず雪泉の目の前に夜桜が現れ、両手の手甲を合わせるように構える。

「秘伝忍法！【地獄極楽万手拳】!!」

激しい闘気のエネルギーを圧縮させ、巨大な黄色い球体を作り、キャノン砲の如く放つ。その黄色い球体を大男は拳で相殺させる。

「そんなんでオレは仕留めれんぞ!!」

「ええ、知ってますよ!!」

しかし夜桜は口角を上に釣り上げる。夜桜はこれが狙いだった。秘伝忍法が通じないのは先ほどの攻撃で充分に伝わった。だから、秘伝忍法を利用して、足止めする。拳と球体がつばぜり合いをしてる間、雪泉たち他の四人は、素早く移動し大男を囲む。距離もそれほど遠くなく、かと言って短すぎるわけでもない…

「なるほど…そういう感じか！」

包囲。どれだけ強くても、こっちは五人。バラバラに包囲すれば、必ず一人を相手にしなければならない。その間他の皆んなで大男を仕留める。即ち袋叩きと言ったほうが正しいだろう。

「だがな、スピードで勝負して、一瞬で決めれば問題ねえよな!?」
この大男はパワーだけでなく、スピードも早い。強いて言えば…USJで戦った脳無と似ている。と言ったほうが良いだろう。
スピード勝負で決めれば問題ない。まさにその通りだ。だがそれは…
ガシッ!
あくまで夜桜が居なかったらの話。
「なっ!?」
「儂がいること、忘れてはいけませんよ!!」
夜桜は両手でその大男の屈強な片腕を全力で掴む。その大男から初めて、焦りの声が聞こえた。
「離せっ!って、そんなものがどうした!?お前ごときに止められるハズが…」
「ええ、そうですよ。悔しいことに、儂ではお前を止められん。倒すこともできん……ただそれは……
儂一人の場合です」
「なにっ…!?」
ガシッ!
ここでもう片方の腕にしがみつくは美野里だった。恐怖を乗り越え、目にはまだ涙を浮かび、それでも美野里は皆んなの為にと言わんばかりに、力を込めて腕にしがみつく。
「美野里もいるもん!美野里は、皆んなのために戦うんだ!!」
「クソッ!離しやがれ!!」
両腕を封じられた大男、しかし彼にはまだ足がある。大男の強靭なるパワーにどれ程警戒しようとも、圧倒的な力の前では意味がない。そう言わんばかりに大男はもがきながらも雪泉の方へと走っていく…が。
「そうはさせん!」
「あたしも張り切っちゃうから!!」

右足に叢、左足に四季が全力で動きを止める。
「なっっ!?」
流石に予想外だったのか、二人の行動に思わず困惑色の声を出す。初めて見せるこの動揺、この焦り…大男は首から冷や汗を垂らし、両足を止めてる叢と四季を引っ剥がそうとするも、夜桜と美野里が両腕を封じている。そのため両足を引っ剥がすことが出来ない。
「うおおおあああぁぁぁぁぁーーーーーーーー!!!」
怒気を含んだその大声が、獣王の咆哮のように部屋中に轟く。と、ここで大男はふとある事に気が付いた。夜桜と美野里が両腕を、叢と四季が両足を止めてる…四人が動きを封じている。なら、最後の一人、雪泉はどうするのか?と…

「……」
何故だろう…先ほどまで心に靄が掛かったようにモヤモヤしてたのに、今はどうだろうか?全身に力が流れ、冷たい冷気が体に纏っている。私の心には、まだ少しだけ迷いがある。その迷い、それはお爺様の理想、信念、何よりお爺様の意思に反してないのか?と…
お爺様の意思は、本当に悪の殲滅なのか?と…迷い、悩み、悪に苦しんだ……そしていつしか、笑顔というものを忘れていた。
ではお爺様は一体、何を望んでいたのか?今はまだハッキリとした答えが出てこない…どれだけ考えようとも、答えはきっと出ないだろう……けど、今はどうだろうか?私はこの大男と戦って思ったのだ…
悪は何故生まれるのだろう?
人の心によって悪は生まれる。しかし、この大男は善を憎んでいた…その理由は、私たちが悪を憎み、倒し、殲滅しようとしたからだと。

だからこそ思ったのだ…私たちが幾ら悪を殲滅しようとも、また悪が芽生える。いや、寧ろ…悪を生んでいるのでは？私たちが原因で悪が産まれるというのなら、私たちのやってることは殺戮兵器と何ら変わらない……では、正義とは何なのか？正義とは一体……そんな時、美野里さんが涙を流してこう言った…

『だ、誰か……助けて……』

あの言葉を聞いた時、私の凍てつく氷の心が、一瞬にして壊れ、光り輝く氷の闘志が、私をここまで強くしてくれた。忍の強さは想いの強さ…それは善忍も悪忍も関係ない…何より思ったのが、何故美野里さんのあの『助けて』という言葉を聞いて、体が勝手に動いたのか…不思議でならない……でも、何故だろう…それが、私の求める『何か』に近かったのだ。

「雪泉!!今だ！我らが食い止めてるうちに!!」
ここで声が聞こえた。いつもお面を被ってる叢さん…
「雪泉ぃ！儂らの想いを受け取ってくれ!!」
責任感が強く、大真面目で家族が大好きで、大切に思う夜桜さん。
「雪泉ちん!!アタシたちのリーダーなら、出来るよね!!」
見た目に反して、皆んなをよく見てる、皆んなを支えてくれる四季さん。
「雪泉ちゃん!!頑張れ！頑張れ～!!」
純粋な心を持ち、平和を望み、皆んなを明るく幸せにしてくれる美野里さん。

そうだ。私は一人じゃない…皆んながいる。私の周りには、家族とも呼べる大切な仲間が、側にいる。

だから、私は…

皆んなの為にも…

「絶対に負けられない!!!」

雪泉の闘気が氷のように青くなり、そして髪を結んでいた白いリボンが解いた途端、周囲に激しい衝撃波が放たれ、氷が飛び散る。そして、短かった髪が長くなり、氷のように青く染まった。そして、氷の扇が剣となる。

「雪泉…月の正義に舞い忍びます」

その名も【氷王】

秘伝忍法ではなく、これは絶・秘伝忍法と呼ぶ。

絶・秘伝忍法とは、普通の秘伝忍法とは違い、いわば最終必殺技や最終奥義、奥の手と言ったものだ。しかし絶・秘伝忍法はお互いが対立する、正反対の者と戦わなければ発動することは出来ないのだ。ましてや、発動出来たとして、体力はかなり消耗することになる。しかし雪泉はこれを発動することができた。ではなぜ絶・秘伝忍法の習得

に成功し、発動することが出来たのだろうか？

それは、悪(ヴィラン)と戦ったからである…いわば、悪の存在が、雪泉の新たな力を生み出したのだ。またこうも言える…

悪の存在がなければ、雪泉はこの力を得ることもできなかったのだ。

皆んなの想いが、雪泉に力を与えた。

「怒りも哀しみも、喜びも楽しみも一つに」

雪泉の閉じてた目が、そっと開く。そして、四人が抑えつけてる大男を睨みつけて…そしてその肝心の大男は…

「……」

抵抗しず、微動だにしず、ただただ覚醒した雪泉を見つめていた。

「アレが、絶秘伝忍法か……氷の王…目の前に映るものは全て凍てつき氷と化す……その圧倒的な力…

やるじゃねえか」

大男がそう言うと、雪泉は一瞬にして大男の目の前に現れた。そして…

「はあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

氷の剣に風が纏う。氷と風が激しく混じり合い、絶対王者の氷風が、大男を襲う。氷の剣が閃乱を描き、大男は大きな悲鳴をあげる。

「っっっっっ!!!がああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

そして、その大男は前へ、ゆっくり…ゆっくりと倒れていく。

倒した。今度こそ、倒した。手応えはあった、大きなダメージも露わになってる。マスクがほんの僅かにヒビが入ってる。それでもよく見えないが、これで何とか倒したはず…それだけは今ハッキリと言

える。
「「「雪泉！（ちゃん）（ちん）!!!」」」
四人は大男から離れると、雪泉の方に駆けつけた。雪泉の体は氷王から元の姿に戻り、短髪にリボンも元に戻っている。それでも、雪泉の体力は大分消費していた。どれだけ強くても、どれだけ皆の力を合わせても、それでも雪泉は立ち上がれず、その場に座り込む。息も荒く、汗が垂れ落ちている。雪泉自身、アレほど強力な力が出るとは思ってもおらず、内心驚きを隠せない。
「はぁ……はぁ……」
勝った…これで、やっと勝てた…私は、皆んなの笑顔を守れ――
「ふうううぅぅ～～～～!!!」
「「「「!?!」」」」
聞き覚えのある声…この猛獣の唸る声…何よりもこの威圧感…そんなバカな……嘘だ、ありえない。雪泉は目の前の光景にもはや恐怖を覚え、身を震わせる。四人も同じく、その光景を目にし雪泉に固まるようにその場に座り込んでしまう。
立っている。
その男は、まだ立っているのだ……傷だらけになりながらも、その大男は荒い呼吸を立てながらも、雪泉たちにゆっくりと歩んでいく。もはやホラー系のレベルを超えている。
「あっ……ああ……あ……」
雪泉は余りにもの恐怖と絶望に、目の前が真っ白になる。この大男は、なぜ倒れない？この大男の強さの源は一体何なのだ？
「やるじゃ…ねえか…！効いたぜ！」
そしてゆっくりと腕を上げ、殴りかかろうと襲いかかる。流石の五人も体力が残ってない。秘伝忍法を使うこともできないし、何より体が言うことを聞かない。雪泉は思わず目を瞑る。
ここまでか――

「そこまでネ!!」

ピタッ!!

「……え?」

聞き覚えのある声に、私は目を開ける。すると…なんと言うことだろう。私は今目の前に映る光景に思わず息をのんでしまった。

今までどこにも居なかった、不在だったあの王牌先生がいるではないか。そして、大男は拳を止め、そして信じられないことに…手を差し伸べてきた。

「これは…一体……?」

雪泉だけでなく、叢、夜桜、四季、美野里も今の状況がどうなっているのか分からず、また一体何が起きたのかも分からなかった。なぜ、王牌先生が此処に居て、さっきまで戦ってた大男はこうして私たちに手を差し伸べてるのだろうか?

「全く…幾ら雪泉たちの為とは言えど度が過ぎるネ!もう少しで全員学炎祭に出れなかったよ!?

オールマイト!!」

え？

今なんて？

「え……？」

雪泉だけでなく、全員その大男に視線を集める。

「……ふふふ…」
大男は少し体を震わすと…
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!!」
突然豪快に笑い、なんと少しヒビが入ったマスクを取り外した。その素顔はなんと、いつも笑顔を絶やさない、アメリカンなあの誰もが認めるＮｏ．１ヒーロー、平和の象徴オールマイトだったのだ。
「いやぁ少女たち、初戦にしちゃあよくやったぜ!!特に雪泉くん！いやぁ素晴らしかった！君の力に感動を覚えた位だよ正義に輝く少女よ！いや、雪泉くんの為にと頑張り最後まで戦った君らもまた、立派な正義の一員さ!!」
今でも信じられない、さっきまでの大男が、オールマイトだったなんて…余りにもの衝撃の真実のあまり、逆に真実を疑ってしまう。だが目の前には正真正銘、本物のオールマイトの姿だ。しかし雪泉たちは生身のオールマイトに会うのは初めてだ。
「な、なぜオールマイトが…ここに？」
「ワシが連絡したんだネ」
「えっ!?」
なんと、オールマイトにここの居場所を教えたのは王牌先生だったのだ。これについても驚きのじじつだ、まさか王牌先生とオールマイトが繋がって居たなんて…夢にも思って居なかった。正真王牌先生はかなりのやり手、しかしそれはあくまで教師だったからとずっと思っていたのだ。しかしまさか、オールマイトと繋がっていたとは…
「で、でも待ってください！声が全然違うではありませんか！」
「そうだよ！アタシだってよくニュース観てちゃんと声聞いてるんだからさ！」
雪泉に続き四季も信じられないという顔でオールマイトにそう言うものの…この平和の象徴はハハハ！と笑いながらマスクを掲げる。
「それはね～、ジャジャン～～ン！これだぁ！」
「マスク？それが、どうしたのですか？」
「いやぁそれがさ、王牌先生が君たちのために相手をしてって言ってきてね、その際に思ったんだよ…アレ？ヴィランっぽくするって言っ

ても、声はどうすれば良いんだ？ってね、私の声を聞いてる人はよく居る、だから声を変えてなければ簡単にバレてしまって君たちの為にはならんと思ったのさ…そこで！雄英高校サポート科、発目くんに頼んだのさ！」

発目明。あの雄英高校のサポート科であり、かつて自分のサポートアイテムを大企業者に見せつける為に飯田を利用した胸のデカイ女の子だ。あ、胸は蛇足だった。

発目にこのアイテムを作るように頼んだそうだ。なんでもマスクに声を変えれるマイクを付けたとか…因みに彼女は『良いですよ！どっ可愛いベイビーの為ならなんでも!!』と返答してくれた。何でもって…

しかし、マスクにマイクを…声を変えれるように改造すればそれは納得がいく。

「では、あの敵（ヴィラン）の言動は何だったのです？明らかに平和の象徴とは思えませんでしたが…」

「いや、それはえっと…夜桜…くんだっけ？それはまあ……その、アレだよあれ！ヴィランっぽい雰囲気出すために……勉強したのさ！」

夜桜の目線に、兎のように震え縮こまるオールマイト。先ほどのヴィランとは全く違う。だが、納得いく点があった。

どれだけ攻撃しても倒れないのは、彼が平和の象徴であり、Ｎｏ．１ヒーローだからだ。平和の象徴は、悪に屈しない。何より折れた姿を見たことがない。

それに、スピードやパワーも忍の領域を超えていたのは、彼の実力だから…それなら納得がいく。だが、悔しいことにオールマイトはあれでも全然トップギア、やはりまだ本気ではなかったらしい。さらには加減が難しいと言われた…少し何処か凹むものや自分たちと彼の差に大きな溝が空いてるため思うこともあるが、彼のＮｏ．１という平和の象徴の実力を、認めざるを得なかった。オールマイトは「ごめんよぉ、大丈夫かい？」と皆の安否を確認する。

「儂らが死ぬ確率だってあったのですよ？もし死んだらどうするんです？」

と、夜桜は言うものの、オールマイトは「そ、それは…更に向こうへ(Plus Ultra)さ！限界という壁を超えさせる為に…！ね？流石に殺しはしないさ！」と、冷や汗をどっと垂らし、苦虫を噛み潰した表情を浮かべる。
「全く。頼んだとはいえ、オールマイトは加減を知らないネ！サポート科になんとかして貰わなかったのかネ？」
「げげっ！え、え～っと…それが…まだ作成中とのことでしてね～…『超圧縮おもり』がまだ出来てないんですよ…」
オールマイトは謝るように言うが、王牌は「そんなもん知らないネ」と答えた。
「いやぁ、本当に申し訳なかった！私だって心痛めながらやってたんだよ？未来ある子供達に、私はこんなことしてしまって良いのやら…とか、こんなの私じゃない！とか…更には必殺技まで叫びそうになったよ！」
そこまでか。と一同は思ったものの、もしこれがオールマイトでなく本物の悪だと考えると、少しゾッとする。オールマイト並みの敵(ヴィラン)…考えただけでも恐ろしい。いや、しかし…まさかな。なんてもひ思った。それならこの世界は終わってしまってる。何よりニュースで騒がれてもおかしくはない。
ん？と、此処で雪泉は思った。では、あの言葉は何だったのだろうか？と…あの正義を憎む言葉、アレは…彼の本音なのだろうからそれとも、ヴィランと似せるための演技だったのだろうか？
「あ、あの…オールマイトさん……」
オールマイトは雪泉の言葉に反応し、こちらを見つめる。雪泉は一呼吸整えると、疑問に思ってたことを聞く。
「では、あの正義を憎む言葉…あの言葉はどうだったのですか？やはり、ヴィランと似せるための演技…なのでしょうか？」
「……」
すると、オールマイトは少し黙り込み、先ほどの不真面目…と言うわけではないがアメリカンなお調子者の顔ではなく、真剣な顔立ちになった。
「アレは、演技と言えば演技だが…けど実際君たちのために言った言

葉…でもある」
「え？」
「雪泉くん、自分たちの目の前に何かを憎む敵がいて正直どう思った？君たちだけではない、全ての正義を憎む者がいてどう思った？」
　オールマイトの言葉に雪泉は少し考えた。確かに許せない、そんなものがこの世にいてはいけない…と思った。しかしさっきも言ったように思ったのだ。その憎しみの原因は、私たちにあるのでは？と…「許せない…この世にいてはならない…と思いました。しかし…よく考えてみれば、その憎しみや悪は、私たちに原因がある。と…そう思いました」
　その言葉に、オールマイトは軽く頷いた。
「その通りさ。どれだけ悪を憎もうと、憎しみは憎しみを産む……それはね、絶対にあってはならんのだよ…君たちのやってる事は、アレと同じだ……そうすれば君たちを憎む悪が増え続ける。つまり、悪の殲滅は出来ないんだよ……それが例え、私でもね。それにこれは、王牌先生だけじゃない…君たちの大切な、そして大好きな黒影さんの為でもある」
「「「「え?!!」」」」
　オールマイトの口から黒影が出たことに、五人は目を見開く。まさか、そんな…黒影お爺様は、オールマイトとも関係を築いていたとは…衝撃な事実が連続で続き、頭が混乱してしまいそうだ。
「そんな…黒影様が…」
「ぶっちゃけね、王牌先生の頼み事ってだけじゃなくて、私は私自身で君たちと黒影さんを救うためにやって来たんだ」
「救う…ため？」
「悪の憎しみからさ」
　と、オールマイトは雪泉に近づく。
「悪を許さない…それは別に良い。私だって同じだ、悪を許すことは出来ない…身勝手な悪のせいで罪のない人の命を奪ってるのは事実だ。君たちと同じように両親がいなくなってしまったなんて、世界中に何処もかしこもいるだろう…けどね、悪の憎しみに囚われば、その

内必ず後悔する。悲しいかな、悪というものは…考えるだけで恐ろしい…人を蝕むだけでなく、その人の人生そのものを狂わせてしまう……だからこそ、悪に屈してはいけないのさ…！」

オールマイトはニカッと笑う。雪泉は色々考えた。確かに…憎しみに囚われていれば、何か大事なものを見落とし、そして悪に蝕われ、自分自身悪に染まっていく。行き過ぎた正義は悪となる。とはこのことだ…

「悪だって人の心さ…忍が善忍と悪忍に別れたのも、善と悪という心が別れたものだ。そう、悪だった人なんだ。人の心の一部なんだ…それを否定するということは、人の心も、存在も否定してしまう。それは、正義とは思えないだろう？」

言われてみれば確かにそれもそうだ。私たちの原因で悪が生まれることだったある。悪を殲滅しても、また悪が増え続ければ意味がない…それはただの殺戮であって、正義とは言えないだろう…いわゆる自己満足というやつだ。

では、正義とはなんなのだろう？雪泉だけじゃなく、他の四人も同じことを考えていた。正義とは何なのか？戦ってみれば分かる…しかし、短時間で色んな出来事が起きたため、答えは見つからないどころか、分からないことが増えた。

「で、では…正義とは、何なのでしょうか？」

迷い、悩み、困惑に染まった顔色を浮かべる雪泉。分からない…今まで自分たちが信じて来た『悪の殲滅』という意思が違うのなら、一体何が正義なのか…

「では、雪泉くん。質問を質問で返すようで悪いが、一つ君に聞く。美野里くんがピンチになった時、君は駆けつけに来たね？あの時どう思った？なぜ動いた？」

「えっと…」

答えが見つからない。何故だろう、アレだけ答えが見つかりそうだったのに、今は見えない。答えが見つからない…でもあの時美野里さんが言った言葉を聞いて、居ても立っても居られないなかった…雪泉はようやくもごもごとした口を開く。

「気持ちは何なのか分かりません…答えは見つかりそうなのに答えが出ない……ただ、美野里さんがピンチになった時、私は考えるよりも先に体が動いていたのです……これは、一体何なのでしょうか？」
「……」
　雪泉の言葉にオールマイトは黙り込む。雪泉のその言葉に、緑谷出久の姿を浮かべたからだ。そう、あの時爆豪がヘドロ敵（ヴィラン）に捕まった時、緑谷出久は爆豪を助けるため駆けつけたのだ。当時の緑谷は『無個性』と呼ばれており、皆からいつもバカにされていた。特に爆豪勝己には尚更だ……そんな無個性で力もない彼は、考えるよりも先に体が動いていた。彼のその面影が、雪泉と重なったのだ。
（なんてことだい、こんなことがあるんだな…緑谷少年と同じこと言ってるぜ……だが…彼女はまだ答えを見つけてない…）
　しかし、それで良い…答えを見つけるべき時は今ではない…そう、それは私の役目ではない……雪泉くんたちの答えは…半蔵学院で見つけるんだ。
「それなら良かった…なら私の役目はこれで終わりかな…では半…じゃなかった、ごほんゴホン！王牌先生！私はこれにて失礼するよ！」
　オールマイトはそう言うと、王牌は笑顔でコクリと頷いた。しかし、雪泉は…
「ま、待ってください!!答えはまだ聞いていません！」
　雪泉は先ほどの質問の答えを聞いておらず、オールマイトを呼び止める。するとオールマイトは後ろを振り向くことなくこう言った。
「それは自分で考えなさい…君たちが、もう二度と悪への憎しみから囚われないためにも、黒影さんのためにも…自分たちでその答えを見つけなさい…」
「…っ」

オールマイトはそう言うと、歩みを止めてた足を再び動かす。前へ歩き、背中が縮んでいくかのように…

「……」

すまないね雪泉くん。本当は言いたいんだよ、今すぐ…答えを教えてあげたい…しかし！私だって教師だ…

答えを教えるだけでは意味がない。だからこそ、自身でお互いぶつかり合い、考えるんだ。教育とは、そう言うものだ。

今の忍たちは、考えを持たずに上への命令を聞き任務を実行している。忍の世界からすればそれは当然かもしれない…しかし、考えを持たずして命令だけを聞くというのは、傀儡とは何ら変わらない…君たちは人間、忍だ。だからこそ、考えるんだ…

そうだろう？

陽花くん…

「あの、オールマイトさん！」

「！」

後ろから雪泉が後を追うように走ってやって来た。オールマイトは「どうしたんだい？まだ何かあるのかな？」と首をかしげ、彼女を見つめると、雪泉はこう言った。

「貴方は……なぜ、平和の象徴と呼ばれるようになったのですか？貴方のようなヒーロー…一体誰が貴方をそうさせたのですか？なぜ、そこまでして貴方はヒーローを……貴方は、なぜヒーローになったのですか？」

雪泉の純粋な質問に、オールマイトは一瞬表情を曇らせた。

『人を助けるってことは、つまりその人は怖い思いをしたってことだ、命だけじゃなく、心も助けてこそ真のヒーローだと、私は思うんだ。例えそれが忍だとしても、私は助ける。アイツもそう言ってただろ？どんだけ怖い時でも「自分は大丈夫だ」っつって笑うんだ。世の中笑ってるやつが一番強いからな。だから、お前もそんくらい強い、カッコいいヒーローになれよ、いや、なれるよ。だってお前は、平和の象徴になるんだろ？』

『誇れ俊典！最初っから持ってるやつとじゃ本質が違う！お前は力を勝ち取ったんだ！』

『次はお前の番だ。頑張ろうな俊典』

脳裏に映るは、笑顔でこちらを見つめる…志村（お師匠）の姿。

「オールマイト…？」

「っ！」

雪泉の言葉にハッと我に返ったオールマイト。いつの間にか考え事をしていたらしい…雪泉は首をかしげたままこちらを見つめている。そんな彼女にオールマイトはこう言った…

「それは…言えないな……個人情報がアレでね…昔のこととかあって、こう…言えないんだ。ゴメンな雪泉くん…」

オールマイトの言葉に、雪泉は「そうですか…」と呟いた。雪泉の

気持ちもわからないでもない…雪泉は昔オールマイトのような正義に魅かれた時だってあったのだ。だが、今は黒影だ…そのためオールマイトのことはあんまり考えなかった、自分の正義の道を歩むのに必死だったから…

「それはそうとな雪泉くん、私だって昔は、君たちと同じ悪を憎んでたんだぜ？」

「……え？」

初めて聞くその言葉に、雪泉は目を丸くする。知らなかった、あんな能天気でお調子者みたいなアメリカンな人が、まさか自分たちと同じ悪を憎んでたなんて…

「と言っても一部の悪さ、だからさっきも言ったろう？悪を許さないのは否定しない。ってさ…けどな、憎しみを持ってはそれこそいけないものだと分かったのさ…だから、雪泉くんたちも絶対に分かるさ…半蔵学院できっと…」

「っ！」

オールマイトの言葉に雪泉は学炎祭のことを思い出した。そうだ、まだ終わってない…決着はついていない。先ほど色んなことが起きたので忘れていたが、学炎祭の途中だったのだ…

しかし、オールマイトの言葉に私はふと思った。半蔵学院…そこに自分の求めてた答えが見つかるのでは？と…そう言えば飛鳥は悪忍と関わりを持っていた。抗争から共闘へ…最初は悪に染まったのだと思い込んでいたが、それは違うのかもしれない…

雪泉は心の底から闘志が湧き上がってきた。

「では今度こそ私は失礼するよ…！」

オールマイトは「アデュー！」と叫び走り去っていった。オールマイトの後ろ姿を見つめ、私はこう言った。

「ありがとうございますオールマイト…」

迷いはない、半蔵学院と決着をつけるまで…そこにきっと答えが見つかる。いや…違う…自分の道が何なのか、考えを改めるには、半蔵

学院…飛鳥と勝負をしてからにすると。そこで、証明する。

自分の本当の正義を。

「……」

オールマイトは走りながら雪泉のことを考えていた。

(雪泉くん…いや、月閃の君たちは黒影さんの意思が、価値観が引き継がれている。そして黒影さん自身もその悪の憎しみに苦しみ悩んでいた……それが今、ようやく長年続いた憎しみの呪縛から解放出来るかもしれない……ああ、良かった…本当に良かった!だから敢えて言おう…

お前の思うようには絶対にさせないぞ!お前が残した爪痕は必ず駆除してやるさ)

オールマイトは心の中でそう呟いた。

秘立蛇女子学園では…
天守閣の最上階の部屋で、蛇女子の選抜メンバー雅緋、忌夢、紫、両備、両奈が揃っていた。その部屋には水族館のヘルメットに、ぶ厚い灰色のコートを着用した出資者が椅子の上で座っていた。
「それで？お前らは半蔵学院に学炎祭を仕掛けるも失敗してこうしてノコノコと帰ってきたってわけか……」
「……申し訳ありません…」
出資者と思われるその言葉に、雅緋は悔しさの余り歯をくいしばる。出資者と思われる男は表情を変えない。
「お前のためにリハビリの時間もくれてやった、お前をわざわざ筆頭にさせてやったんだ…それなのにこの有りざまか…」
「し、しかし！半蔵学院を潰そうとした矢先に焔たちが…！」
ピタッ…ここで出資者の男は忌夢の言葉に反応した。
「なに…？焔たち？」
「はい…ああ、そう言えば言ってませんでした…焔たち抜忍の連中、焔紅蓮隊が姿を現したんです…」
焔紅蓮隊。元蛇女子学園であることは調べがついていた、しかし目撃情報がないためてっきり死んでしまったのかと思っていたのだが、半蔵学院と戦ってる最中に姿を現したらしい…それを知った出資者は先ほどの不機嫌な顔から、興味深い顔に変わった。
「つまり、邪魔が入ったと言うわけか…成る程、焔紅蓮隊ねぇ…」
暫く考え込んだ後、出資者は雅緋たちにとって、衝撃な言葉が投げられた。
「分かった、じゃあ焔紅蓮隊を見つけ次第…捕らえろ」
「「「「!?」」」」
その言葉に五人は驚きの表情を浮かべる。あの両奈でさえ目を丸くしてるほどだ。
「ほ、焔紅蓮隊を捕まえて、どうするのですか？」

「決まってる、蛇女に入れるのさ」
「なっ!?!」
「安心しろ、金はある。上にはなんとか交渉してやるさ。まあ、抵抗するようなら殺して構わん。俺の部下にしてやりたいが、やむを得ないからな…」
「しかし!」
「雅緋…」
ゾッ!とした殺意が部屋中に放たれる。雅緋は思わず体が硬直する。いや、動かない…これだ、出資者のこの男は、忍術は全くないが、それでも実力は想像以上のものだ。気迫だけでわかる…五人が束になっても勝てない…と。
「お前が俺に逆らうのか?なぁ、忍が俺に逆らっていいのか?筆頭になったからといって、調子に乗ってんじゃねえぞ?誰がここまで再建させたと思ってるんだ?誰のおかげでこうして生きてると思ってるんだ?」
「っ……!!……申し訳……ありま……せん…でした……」
「分かればいい…」
雅緋はその男に思わず身体が震えてしまう。悔しい以前に、生きるか死ぬかの道に左右されてるんだ…コイツに、全てこいつに……でも、忍として逆らうわけにはいかない…
「では追加の任務だ…焔紅蓮隊を捕らえろ。抵抗するようなら殺せ」
「「「「御意」」」」
そう頭を下げると、雅緋はこう言った。

「失礼しました……『伊佐奈』様」

ガチャッ

扉を閉めた。

「……」

そして、それをこっそりと聞いていた一人の少女は、唾を飲み込む。

「…これは……」

そしてアレから一週間が経ち…

少女たちは立ち上がる。

「さぁ、皆さん…行きましょう。半蔵学院へ…」

月閃の雪泉たちは、半蔵学院へ…

半蔵の連中は…雪泉たちを待ち…

「さあ、掛かってきて…雪泉ちゃん」

屋上で雪泉たち月閃を待機している飛鳥。

紅蓮の道を歩む少女たちは…
「さぁ、行くぞ！」
焔たちは蛇女へと向かう…その一方、蛇女子学園では…
「……はぁ…はぁ…」
「雅緋、大丈夫かい？」
「ああ、何のことはない…少し色々と溜まってるんだ……それより、焔たちが攻めてくる…私たちも向かうぞ…」
「う、うん…！」
走る雅緋たち…そして
「……両奈、わかってる？」
「うん、両備ちゃん……伊佐奈様に気づかれる前に…ね？」
「ええ…今この時がチャンス…復讐を果たす時よ…！」
両奈と両備はなにやらコソコソとしている。そしてそんな二人にある人物がやってきて…

「両備と両奈、話がある。良いか？」
「え？なに？鈴音先生？」
そして鈴音先生の言葉によって、衝撃なる真実を知らされる。そして思ってもなかっただろう……蛇女子学園自体が、とんでもない状況になってることを…

「さっさと働け雑魚ども」
伊佐奈は天守閣を見下ろし、そして違う部屋に行くと…カプセルの入った異形な姿をした化け物を見つめていた。
「コイツらは幾ら稼げるんだろうな？」

正義と悪、陽と陰、光と影、それぞれが対となっている二つの存在は、この日激しくぶつかり合う。少女たちの行く道は果たして…？

５８話「雪泉　オリジン」

「半蔵学院…」

半蔵学院に到着した雪泉たちは、そびえ立つ校舎を見上げた。いつ見てもここの学校は普通の校舎とは何ら変わらないであろう。しかし、その中には確かにいるのだ。忍学科に所属する忍学生が…

校門を潜り抜け、屋上を見上げる。そこには確かに居た、飛鳥が。

飛鳥は既にやる気満々なのか、屋上で立ち尽くしたまま待っている。

「飛鳥さん……皆さん、準備は良いですか？」

「ええ、勿論ですとも雪泉」

「我らはあの日よりも強くなったのだ…」

「今なら誰にも負けないよ…！」

「うん！美野里も美野里も！」

四人の輝く笑顔、雪泉はコクリと頷くと、歩み進める。

すると、校舎の前に雄英生がいた。あの人影はどうやら雄英生徒だったらしい…てっきり一般人かと思っていたが…

しかし、あの時とは違い、人数が少ない。人は3人…

随分と減ったものだ…しかし、だらかと言って無視するわけにもいかない…何よりオールマイトの一件もある。雪泉たちが近づくと、3人も月閃が来たことに反応したらしい。3人は、緑谷、轟、そして飯田くんだった。

「こんにちは雄英生徒の皆様…」

雪泉が軽く頭を下げると、二人は目を丸くして頭を下げる雪泉をジッと見つめていた。大したことないのにと思ってるかもしれないが、緑谷と轟は雪泉の先週の態度と様子が変わってることに大きく驚いてるのだ。前ならこんなことしなかったのに…と心の中で呟きながら。飯田は雪泉の過去は聞いたものの、戦いの場ではいなかったので、雪泉がどういう人だったのかをあまり知らない。

「ゆ、雪泉さん態度が…」
「ああ、変わってるな…何かあったのか？それとも変なもの食ったとか…」
「そこまで変わってます？」
　雪泉は目を細めてギロリと睨みつける。緑谷は「あっ！すいません！」と頭を下げ恐縮するが、轟は性格がマイペースなためか、「おお、悪いな」の軽い一言で片付けた。
「そういえば…爆豪と言う人もいませんね」
「ああ、彼はあの後相澤先生にこっぴどく叱られたらしい！何でも月閃の生徒たちと戦ったから…だとか、商店街で新しい蛇女？の忍学生と闘ったとか…それを言うなら轟くんもと言う話になるのだが、どうやら轟くんは人を傷つけず、身を守っていた為厳しい注意で済まされたらしい！」
「厳しい注意どころじゃねえよ、俺も俺でさりげなく怒られたんだからな」
「僕はその場にいて何で最善な判断と行動が出来なかったんだって言われたよ…」
　あの後、蛇女子学園が襲ってきたと言う話は、学校側まで知らされた。それも半蔵が直々に言ったらしい…いや、飛鳥から『漆月』と接触したことを話し、報告のついでに言ったのだった。本当は言いたくなかったらしいが、生徒たちの身の安全とこれからの対策を考え、報告しなければいけなかったのだ。そのため仕方がないとも言える。相澤先生も先生で大変だ。
　よって爆豪は学炎祭を観戦するのは禁止、よって反省文５枚。そして轟と緑谷は反省文４枚書かされることとなったのだ。緑谷は個性を使ってないとはいえ、爆豪を止められなかったこと、そして適切な判断と行動が出来なかったため、彼にも責任はあると…
　一流のヒーローはその場で瞬時に適切な判断と行動が必要となるのだ。
「えええ～、ヒーローってそんなに大変なの～？」
　と…ここで美野里の可愛らしい声が聞こえた、身長が低くかったた

め、いることを忘れていた。因みに彼女の身長は１４４㎝、未来は身長１５０㎝だ。美野里は不思議そうに首をかしげる。
そう、ヒーローは一見単純そうに見えて実はとても複雑で難しいのだ。ヒーローはまず免許なしに個性を使ってはいけない。仮にヒーロー志望だとしても、人を救ける行為でも、犯罪となってしまう。それは敵（ヴィラン）と同じ扱いだ。
相手が忍というのは特殊の為、世論には公表されないが、それでもそれなりの対処はされる。因みに他のみんなは用事があってどうしても来れないらしい。その為今のメンバーがこうなったというわけだ。雄英生徒は２０人いる。しかし、此処の３人と爆豪を除いて、１６人居ないということになる。
「成る程、皆それぞれ事情があるのですね…」
雪泉はこの場に他の生徒がいないことに納得した。まあしかしこれはあくまで観戦は自由、強制参加ではないので何の問題もない。
轟は雪泉を見て、先週の雪泉とは明らかに違うと分かった。この一週間、見間違えるほどに…一体何があったのだろうか…
轟は今までつらみ恨みで動く人間を見てきたことがあった。そのため雪泉に憎悪がなくなってることが分かるのだ。だから、様子が違うことも、雰囲気が変わったことも、轟は分かっていた。
（あの人…変わったな…）
すると雪泉は、轟を見てふとあることを思い出したのか、近寄ってくる。そのことに轟も反応する。
「轟さん…でしたね。貴方に謝らなければならないことがありました…」
「？」
すると雪泉は大きく頭を下げた。謝罪。雪泉の行動にその場にいた緑谷や飯田だけでなく、他の四人も驚いた。いや、四人ではない…叢だけは驚かなかった。
「あの時、貴方に酷いことを言ってしまい申し訳ありませんでした…」
雪泉のその言葉に、轟はハッと思い出した。それは、一週間前、雪泉が轟に言った言葉だ。

『貴方、エンデヴァーさんの息子だそうですね？なのに息子である貴方は…エンデヴァーという偉大なるヒーローが父親であるのに、恥ずかしくないのですか？あの敗北を…』

確かに言われた、その時は思わず氷を出そうと思ったくらいだ。静かな怒りが炎のように揺らめいだあの時の感情は未だに忘れられない。しかし、飛鳥の言葉に冷静になり、ネットの反応…エンデヴァーアンチの一人だと解釈したため、気にしないようにしていた。しかし、まさか此処で謝ってくるなんて夢にも思っていなかった。一体誰が彼女を変えさせたのだろうか…無論、それがオールマイトだということは知らない。

「叢さんから聞きました…エンデヴァーと貴方のことを……あの時は、私は貴方のことを何にも知らなかった…しかし、知らなかったとはいえ許されることではない…貴方の心を傷つけたのは事実なのですから……ですから、これは私の謝罪です…本当に申し訳ありませんでした…」

「……」

轟は雪泉に手を差し伸べる。

「いや、俺の方こそ悪い…お前の過去のこと、何にも知らなかったのに…お前に無理に聞き出そうとしたり、お前の気持ちも考えずにいて……だから、もういい…これでおあいこだ。頭上げてくれよ…」

轟の言葉に、雪泉は頭を上げた。轟の顔には、もうあの時の怒りの表情は消えていた。雪泉と轟は本当に似ている。同じ氷を持つもの同士だからか…あるいは同じ憎しみを持ってたからなのか、共通部分が多ければ、反対な部分もある。例えば、轟は父親のせいで人生が狂い、親に恵まれなかった…しかし雪泉はどうだろうか？黒影は雪泉のことを愛しており、雪泉も黒影がいたからこそ今の自分がいる。他にも、氷を除いて轟が炎なら雪泉は風といった相性もある。風といえば、雄英試験で前にそんなのがいたような…

「ありがとうございます…！」

そして手を差し伸べお互い握手を交わす。

轟が許してくれたことに、雪泉はホッと息を撫で下ろした。雪泉自

身も驚いたのだ、叢から轟の心境を…家の事情を…例えいくら人気が高くあろうと、皆から認められなければ正義だなんて言えない…
だから、悪の殲滅なんて行為は、皆のためではなく、自己満足でしかないのだ…
雪泉は、改めてそう思ったのだ。

そして、暫くして…
雲雀と美野里は…
「美野里ちゃん、勝負だよ」
「うん！美野里、あの時よりもぐ～んっと！強くなったんだから！」

一方、葛城と夜桜は…
「夜桜か、来たなこの時が、待ってたぜ！」
「……」
「アレ？どうしたんだ？」
夜桜は沈黙したまま葛城を見つめたまま、動かない。そんな夜桜に葛城は首をかしげるのだが…

「貴方は…自由なんですね…」
「へっ？自由？」
ここでようやく夜桜は口を開いた。葛城は夜桜が何を思い、何をいってるのか分からなかった。しかしそれも直ぐに分かることだ。
「貴方は前に、戦いが好きだの、嬉しいだの言ってましたが……」
「ああ、アレか」
ここで葛城はようやく夜桜の言ってることが理解した。あの時、夜桜は葛城の言ってた言葉が理解できなかった。なぜ戦いが嬉しいのか…戦場とは生死を分ける戦い…そんな場所が楽しいだなんて正気の沙汰とは思えなかった。しかし、今の夜桜はそこまで葛城のことを悪だとは思えない。何故だろう…オールマイトヴィランの一件以来、雪泉だけでなく、自分自身の心も変われた気がするのだ。だからこそ今なら分かる…彼女たちは悪ではないと……しかし、それでも夜桜は葛城の言ってる『嬉しい』という気持ちがわからなかった…
「あのな夜桜、物事ってのは何でも単純じゃあねえんだぜ？」
葛城の言葉に、夜桜はここで「えっ？」と首をかしげる。
「アタイが嬉しいって思えるのは、自分より強い相手が居るからなんだよ。何でか分かるか？戦場は誰にだって負けられないだろ？…だからこそ、そんな中強い奴と戦って、ソイツよりも強くなって勝ち進む。アタイは、自分が強くなる気がして嬉しくなるんだ…そう思わないか？」
「成る程…つまり、戦いの中での成長ですか…対人訓練ばかりでは意味がない…知らない相手と戦うとワクワクする高揚感……貴方の言ってることが何となく分かりました…」
夜桜は葛城の言葉に納得し大きく頷いた。この世には自分たちだけではない、自分たちよりも強い忍など幾らでもいる。指がいくつあっても足りないくらいに…自分たちのまだ見ぬ忍や、これから忍になろうとする者もいれば、強くなった忍だってこの世には必ず存在する…ソイツらと戦えば戦うほどに強くなり、生き残ることだって出来る…そう考えると葛城の言ってることが大いに理解できる。
ああ、なんだ…単純じゃないか…こんな簡単なことに、自分はあん

なにもムキになってたのか…なんだかバカバカしく思えて来た。けど、それと同時に、良い戦友と会えたことに喜びを感じた。
「話は終わりだ…さぁ、行くぜ夜桜!!」
「ええ!望むところですよ葛城さん!楽しい勝負を始めましょう!」
具足と手甲、蹴りと拳が唸り、再び火花散る戦いとなった。

同じく、柳生と四季。
「ヤッホー、柳生ちん♪おっ久〜!元気にしてた〜?また来たよ〜」
「四季か…オレも待っていたぞ…この前のケリを早くつけたいからな…」
ノリが軽い四季に、柳生は「待っていた」と言わんばかりに無表情で答える。しかし四季は直ぐに表情を変える。
「うん、そりゃそうだけど…アタシ勝てるかな?だって柳生ちんのその隠鬼の目ってやつ、チョーヤバイじゃん?本気でやり合うのはごもっともなんだけど…力をつける為に眼帯で目を封印するなんてさ〜、柳生ちん本当に気合い入ってるよね〜」
「……お前、何か勘違いしてるようだな…」
「へ?」
「この眼は、力が欲しいが為に封じたのではない…」
柳生の予想外な答えに、四季は「違うの〜?」と首をかしげる。それは無理もない…四季は知らないのだから、柳生の過去を…妹である望の死であり、この眼帯はその死んだ妹の形見なのだということを…
「良い意味でも、悪い意味でも、人の記憶は時が経つと共に薄れて行く…それでもオレは永遠に忘れたくなかった……妹の望の死を…」
「え……?」

ここで四季は、柳生が何故眼帯をしているのか、そして死んだ妹の望のことを知ることになる。
「最初は妹の形見として作ったんだ…眼帯をすれば視界は見えずらくなるが、物の見辛さを感じる度に、オレは妹の望を思い出すことが出来ると思ったんだ…気がついたらオレの目には…」
「そうだったんだ……つまり、柳生ちんの妹さんの想いが力に変わったんだね」
四季はようやく柳生が何故眼帯をしているのかを知った。ただ単に力が欲しいが為に目を封じていたわけではない、望を忘れたくない…望みを失った悲しみを…その為だったのだ。
「いや、違うな…妹がオレにこの力をくれたんだと思っている。妹は、オレが忍になることを応援してたからな…」
柳生の妹の望は、いつも応援してくれていた。両親はいつも任務で遅かった為、二人っきりになることが多かった。柳生が修行をしていると「お姉ちゃん！」と健気で元気な声で呼び、作った泥団子を渡してくれた。当然泥団子は食えないので、柳生は食べるふりをした。しかし、それこそ望の思いやりが、笑顔が、柳生に力をくれた。柳生は嬉しかった…とても嬉しかった…ああ、こんな時間が永遠と続けば良いのにと何度思ったことか…
だから、望の死は忘れたくなかった。
全てを知った四季は、何処か悲しい表情を浮かべていた。それもそのはず、まさか眼帯に此処まで深い出来事があったなんて…いや、それ以前に柳生に妹がいたこと、そして柳生の妹が死んだという話に、四季はどうしても悲しくて仕方なかった。だから四季は思ったのだ。
この世から悪を無くすだけで、涙を流す人間が居なくなるとは限らない。自分たちが思ってるほど、この世は単純では無いという事を……柳生の話を聞いてより改めて分かったのだ。
「そっか……柳生ちんのことは分かったよ…ゴメン柳生ちん……アタシ、何も知らないくせに何でもかんでも欲しいって言っちゃってさ…そんなアタシがバカだったよ…」

四季は申し訳なさそうな顔で柳生に謝る。確かに欲しいものがあるなら力づくでも絶対に手に入れる。それが四季の常識だ。しかし、人の大切なものを力づくで手に入れても嬉しくなんて無い。まずそんな大切なもの、手に入れる気など毛頭ない。そんなことをしてしまえばそれこそ悪だ。

ただし…

「けど、その代わりに欲しいものが見つかっちゃったんだ♪」

「なに？」

四季は片目をウィンクすると、柳生は「むぅ？」と呆気を取られる。四季が欲しいもの…それは――

「柳生ちんの完全勝利！」

その言葉に柳生は不敵な笑みを浮かべる。

「だって柳生ちんの話聞いてマジで感動したもん！だから、柳生ちんには絶対に負けられないんだ！」

「ああ、望むところだ…！」

四季と柳生はお互い不敵な笑みを浮かべると、鎌と番傘が激しくつばぜり合いをした。

斑鳩と叢。

今回、斑鳩と叢の戦いを観戦するのは飯田くんただ一人。ちょこんと正座してるのがなんとも言えないが真面目な飯田くんならあり得る話だ。それにしても脚がエンジンになってるのによく正座したなぁ…と思った。因みに緑谷と轟は屋上の飛鳥と雪泉の戦いを観に行っている。では飯田がなぜ斑鳩と叢の戦いを観るのか？それは、似た者同士だからという理由なのかもしれない…同じ規律を重んじる

者同士だからこそ、斑鳩の戦いは観ておくべきだと、そう思ったからだ。何よりもう一つの理由は、自分の兄である天晴のことだ…体育祭が終わった後、斑鳩のことで話していたのだ。彼女は自分と同じ兄を持ち、悩んで居たと……

本当に不思議だ、自分と彼女は規律を重んじ、クラス委員長だけでなく、真面目な性格だけでなく、兄までいるなんて…いや、斑鳩はクラス委員長というよりも風紀委員長ではあるが、ほぼクラス委員長と言っても過言ではないほど彼女は真面目なため、クラス委員長と言っても良いだろう。何よりもそれ位の器はあるのだから…

今の斑鳩の目は真っ直ぐで、迷いがない。きっと恐らく兄についての悩みも解消したのだろう…

成長した彼女の力を、この目で見とかねば。

体育祭で轟に負けてしまった分、今度はきちんと見て自分のものにしなければならない。飯田はそう思ったのだ。

そんな飯田を御構い無しに、叢と飯田は対立する。

「叢さん…」

「斑鳩か…」

斑鳩は叢を見つめる。この勝負は斑鳩にとっては負けられない。そう、貧民街に住む人達や、友人の詠の為にも…斑鳩は負けられないのだ。それに、叢だって斑鳩の考えは分からないまでもない。斑鳩が誰かを救おうとしてる事実には変わらないし、それも立派な正義の行いだということは、オールマイトとの一件で考えたから…

「例の貧民街都市開発計画の事なのですが…」

「何度も言わせるな、我に勝ってから要求しろと言ったはず…」

「すいません…失礼しました……」

斑鳩は貧民街をなんとしても救いたいがあまり、要求さてしまっていた。叢は血に塗られた巨大包丁と鉈を手に持つ。斑鳩は飛燕を抜く…

「では…いざ勝負!!」

そして最後に、飛鳥と雪泉では…
「飛鳥さん…ようやくこの時が来ましたね。この日をどれだけ待ち望んでいたか……この前の私とは、一味違いますよ」
オールマイトヴィランとの戦いで強くなった雪泉たち。彼女のその目は生き活きとしていて、純粋な青色の目だった。あの時に見せた憎悪の色はもう消えている。雪泉も雪泉で色々と考えたのだろう……しかし、それは完全に消えたわけではなかった。
「うん、それを言うなら私もだよ雪泉ちゃん！この前焔ちゃんに修行をつけてもらったんだ！」
「焔さんと…？」
「あっ…もしかして怒っちゃう？悪忍と関わってる～とかで…」
「いえ…今は違います…」
飛鳥の言葉に雪泉は首を横に振る。昔の自分なら完全に許せなかっただろう…悪と馴れ合い、悪の存在を黙秘する存在…そんなもの前までの自分なら否定していた。なぜならそれこそ、善が悪に染まり、善から悪へと生まれ変わってしまうようでならなかったから…だから善を蝕む悪は許せない…しかし、思ったのだ。悪には色んな悪が存在するのでないか？と…
色んな善が存在するように、悪にだって色んな悪がいる。そう思ったのだ…
「確かに悪は許せません…悪という存在が人々を苦しめることには変わりはない…だから私は悪を許さない……しかし、悪にだって色んな悪がいる。全てを滅ぼすというのは、いささか極端な考えなのかもしれません…人を不幸にし傷つける悪は許しません…しかし悪はもう憎まない…つまりは、そういうことです」
しかし、それでは黒影お爺様の意思に違反してるのではないか？と、時々そう思ってしまう自分がいる……だから、お爺様の為にも、自分のためにも、覚悟を決めなければならない。

自分の本当の正義を見つける。

その答えは…飛鳥さん。貴方の中にある…貴方と戦えば分かるはず……私に何が足りなかったのか？私の求める正義とは？その答えを導き出すためにも、それを証明するためにも…

「完全に考えを改めるには、飛鳥さん……貴方と勝負してからです!!」

飛鳥も雪泉の想いが伝わったのだろう…飛鳥は不敵な笑みを浮かべ、二つの刀を抜く。そう、半蔵から託されたいつも使ってるこの刀で…

「勿論だよ…雪泉ちゃん!!!」

その場で遠く見ている二人組み、緑谷遠く轟は…

「なんか凄いことになったね…でも、前の雪泉さんとは違っていい感じになったよね」

「ああ…そうだな」

飛鳥と雪泉、何方が勝つかは分からない…しかしそれでもやはり飛鳥たちには勝ってほしいとそう思うのだ。

「変わったといえば…轟くんもそうだったよね」

「学校で言ってたな…まあ、オレはケジメを付けたからさ…」

「ん？」

（だから…雪泉…アンタもケジメを付けに来たんだろ？だから、飛鳥には負けたくないんだろ？）

同じ経験をした轟だからこそ、雪泉の気持ちは一番理解出来る。何より雪泉のその証明したいという気持ちも…

轟は緑谷戦で炎を使い、自分のやってることが本当にこれで良いのか？と悩んでいた。自分だけが納得してはいけない…ちゃんと精算しなきゃと…そのために、母と会って話をした。雪泉も同じなのだら

う…自分だけが納得してはいけない、精算しなきゃいけない…雪泉にとって自分にケジメをつけるということは、飛鳥と戦ってケジメをつけるということだろう…では黒影に会えば良いのではないか？と考える人だっているはず…でも轟は何となく、薄々と分かっていた…なんで黒影ではなく飛鳥になのか…

轟は自分が変われるキッカケを作ってくれた緑谷と共に、少女（飛鳥）と少女（雪泉）の戦いを、見守ることにした…

ただ、雪泉の言っていた通り…

『こちら！保須警察署！至急応援頼む!!』

べっとりとした血の海が地面に広がる路地裏に、倒れてるヒーローが一名。白いアーマーのコスチュームを着用し、顔をすっぽりと覆うマスク…そのヒーローの名はインゲニウム、飯田天哉の兄であり、斑鳩の悩みを聞いてくれた優しきヒーローだ。

「金…名誉……地位……どいつもこいつも、忍だのヒーローだのと名乗りやがって……ハァ…」

そんな飯田の兄を、何者かが虫を捻り潰すかのように、倒れてる体を足で踏む。

「テメェらはヒーローなんかじゃねえ……ヒーローを名乗る資格もありゃあしねえ……ハァ……ハァ…」

ソイツは手に持った血に塗られたナイフをぺろりと舐める。

「彼だけだ…唯一、俺を殺して良いのはただ一人……本物の正義（英雄）、

平和の象徴（オールマイト）だけだぁ……！」

ソイツ名は、ヒーロー殺しステイン。全国指名手配犯とされてる最悪の敵（ヴィラン）だ。

色んな悪が存在するように、許されない悪もいる。

５９話「正義に輝く忍の少女たち」

「これで、儂の勝ちですね…」
　夜桜と葛城は決着がついたようだ。葛城はかなりボロボロだが、それは当然夜桜もボロボロであり、かなりのダメージを負っている。何方かが倒れても問題ない程の勝負であった。
「へっ…やるじゃねえか……」
「葛城さんこそ…」
　葛城の笑みに、夜桜も微笑む。そういえば、こんな風に戦いが終わった後に笑ったことはあんまり無かったな…と、心の中で呟いた。だがこうして笑えるのも、葛城のお陰なのかもしれない…そう考えると、もし葛城と会ってなかったら、こんな感情は無かっただろう…
「そうだ葛城さん…一つ聞いても良いですか？」
「ん？なんだ？」
「葛城さんは強いやつと戦って嬉しいと仰ってましたが…その経緯はなんです？どうして、そこまで強さに拘るのでしょうか？」
　夜桜は少し前から疑問に思っていたことがあった。強いやつと戦えば強くなる。それは分かる…今までに相手にしたことない敵や、自分より上にいる者と戦えば、その壁を越えられる…強くなるのが嬉しい…しかし、何故強くなるのか？忍は強さが全て……それは当然だ、生きる為には強くならなければならない。しかし、夜桜は葛城と拳と蹴りを交わして分かったのだ。葛城には、他に何か別の事情があるのではないか？と…強さを求める理由は、他に何かあるのでは？そう思ったのだ。
「ハハッ…夜桜にはバレちまったか……いや、お前ら月閃なら丁度良いよ」
　葛城はボロボロなのにも関わらず、立ち上がる。夜桜は「立ち上がると危険じゃ、ボロボロですし」と言うが、「お前こそボロボロじゃねーか」と笑いながら答えた。
「アタイの両親さ…抜忍なんだ」
「え…？」

葛城の両親が抜忍…その事実に夜桜は息を呑む。
抜忍は知っての通り、善忍悪忍問わず忍という存在から追われる存在。漆月なんかはその象徴だ。今でも自分たちが知らない間に、抜忍は何十人か何百人か存在するだろう…忍の世界から追放された忍は後を絶たない…その為抜忍は滅多に見ない。だから、葛城の両親ももしかしたら死んでしまってるのかも知れない…そんな仮説もあり得ることだ。
「厳しい世の中、忍の世界で抜忍という存在は許されない…そりゃあ勿論分かってる…けどよ、アタイはだからこそ思うんだ……抜忍になったのには何か理由があるんじゃないかって……だから、もっと強くなって、両親を救いたいんだ…強くなりゃあ、皆んなから認められるから……けど、その理由が、ようやく分かったんだよ」
葛城の目には少し涙が浮かんでいた。その涙は嬉しさから来るものなのか、または悲しさから来るものなのか……夜桜はいつになく真剣な葛城の話に夢中になって聞いていた。
「黒影は抜忍で、忍の世界から追われてた…そんな黒影を暗殺しようとしたのは…アタイの両親さ…」
「は…？」
夜桜は葛城の衝撃な告白に、頭の中が真っ白になる。夜桜の脳裏に浮かぶ一つの光景は…自分が幼い頃、夜桜は黒影を暗殺しようとした葛城の両親を止めたのだ。止めれるとは思ってなかった…まだ忍としての実力もなければ、力も無い…そんな子供が止められるわけがないと……仮にそうだとしても、聞いてくれるはずがなかった…そう思っていた。葛城の両親は、黒影と子供達を見つめ引き返し、抜忍黒影の暗殺失敗と報告したのだ。
まさか、あの忍が葛城の両親だとは、夢にも思ってなかった。それを聞いた夜桜はいつの間にか、目から溢れんばかりの大量の涙を流した。葛城の両親がもし、引き返してなければ、もし葛城の両親ではなく違う忍の者だったら、五人はまたバラバラになり、良かれ悪かれ、今の自分たちはなかったのだと思う。
「そうか…貴方の両親が……」

「ハハッ…何泣いてんだよ……我慢して堪えてたのに……アタイも涙が出て来ちまったじゃねーかよ……」
人生とは不思議なものだ。人とは思わぬところで出会う…
夜桜と葛城は、静かに涙を流し、微笑みあった。そして、葛城の具足と夜桜の手甲が、二つで一つだということは、彼女たちはまだ知らない……

同じく、斑鳩と叢では…
「はぁ……はぁ……」
「……ここまでだ」
同じく決着がついたであろう、叢は鉈と物騒な巨大包丁を下ろす。そのことに斑鳩は首を横に振る。
「いえ！まだです…！私は…まだ…戦えます…！ですから…」
「もういい…これ以上体を動かすな…」
「しかし…このままでは…」
友人の詠や恵まれなかった子供達の居場所がなくなってしまう。それだけはあってはならない…何としても、あの居場所を、守らなくては……
「……お前の友人とは、一体誰だ？」
「……詠さんです……」
「……ソイツはもしや、金髪の…」
「はい…貴方が何故それを？」
「そうか…やはり……いや、なに…気にするな」
叢は何かが分かったかのように納得した。そして叢は思ったのだ。自分の命が危険に陥ってるにも関わらず、斑鳩は自分の故郷でもないのに、自分と友人の住んでいた貧民街を守ろうとしているのだ。普通の人は愚か、名のある善忍だってそんなことはしない…そこまでして守ろうとする姿も見たことないし、何より斑鳩が初めてだった…

一方、自分はどうだ？大狼財閥の任務に従ってるだけではないか…忍の世界はヒーローとは違い非情で残酷で殺伐としたものだ…そんな世界でも、斑鳩は身を挺してまで貧民街を守ろうとする……そこまでして、斑鳩が守るもの…詠…まさか、自分の『友人』が……いや、そんなものはもう関係ない……

だから、叢は…自らの手で面を取り、素顔を見せた。少し恥じらい頬を赤くするその叢の可愛らしい顔に、斑鳩は目を丸くし驚く。

「わ、我も…頼んで見ます……大狼財閥に……貧民街都市開発計画を…中止にするよう頼んで見ます……」

自分も変わらなければ…そう思ったのだ。斑鳩の目には涙が溜まり、頭を大きく下げた。

「ありがとうございます…!!」

これで本当に貧民街都市開発計画が中止になるのかはまだ分からない…しかし、それでも叢の心が変わったことと、何よりも叢のその言葉が、とても嬉しかったのだ。

「終わったんだな…」

遠くで見てた飯田は、万事解決した二人を見て大きく頷く。

「オレも緑谷くんや轟くん、ついでに爆豪くんに負けないように、もっと精進せねば…!!」

プルルルル！

その時、携帯から着信音が鳴った。飯田は直ぐにポケットからスマホを取り出し着信の相手を確認する。母からだ。

しかし、と飯田は思った…確か兄を含めて家族皆んなは出張のはず…何でもあるヴィランがうろついてるため、パトロールをするとか言っていたのだが…

飯田は掛かってきた一つの着信、電話を出た。

「はいもしもし、母さんどうしたんだ？今日は出張で忙しいんじゃ…」

『天哉！病院に来て!!早く！』

「…母さん……？」

電話越しから聞こえる母親の焦った声に、飯田の表情は一層曇らせる。病院？何かあったのか？

『兄さん(天晴)が…ヴィランに!!』

この事件が、少年少女を巻き込むことになるなんて……

保須市…

「お前らは気づきもしない…」

忍学生の少女たちが戦い、涙を流してるなか、ヒーロー殺しと名乗る一人のヴィランは保須市を高い建物の上からジッと眺めていた。被害にあった路地裏では、警察が調査の為に包囲している。相棒(サイドキック)であろう複数のプロヒーローたちもその場に駆けつけに来る。

ヒーロー殺しステインにとって、今のヒーローたちはヒーローではなかった。

偽物。

その言葉に尽きる。彼にとって今に生きるヒーローたちは偽物でしかない。それはまた、忍もまた同じこと。ヒーロー殺しはどう言う経緯か、善忍と悪忍を殺害しているのだ。また襲いかかって来る忍など後が絶たないなんてのは忍側からよく耳に聞く噂。

「偽善と虚栄で覆われた…歪なる社会……ヒーローと忍は…全員偽物だぁ……彼だけだ…本物のヒーローは…彼だけ…」

オールマイト。ステインにとっての本物のヒーローはオールマイトであった。いや、オールマイトしかいないと考えている。確かに彼は平和の象徴と呼ばれ、誰もが認める最強のトップヒーローだ。それは分かる…しかし、だ。忍はどうなのであろうか？

ステインは忍の知識は殆ど知らない為、伝説の忍、半蔵を知るわけがなく、またオールマイトと半蔵が仲の関係だと言うのも、知るわけがない。

「だから粛清だ…偽物が運びるこの社会も……本物の正義を知らないヒーローも忍も…全員粛清対象だぁ…」

だが、忍と交わして思ったのだ。忍は善忍と悪忍と言うものが存在する。悪忍は悪。即ちヴィランと変わらないであろう…善忍は正義。即ちヒーローと同じだと言うこと…だから思ったのだ。ヒーローと忍は変わらないのだと……本物のヒーローと言えばオールマイト。では、本物の忍とは一体誰なのであろうか？共通点があるのであれば、必ず本物の忍だって存在するはずだ…

だからステインは、忍を幾度もなく斬り殺してきた。それは当然ヒーローもまた然り…

いや、もしかしたら本物の忍は既にいなくなってしまってるのではないか？とも思った。だがやることは変わらない…もしいなくなってたのであれば、本物の忍を生み出せばいい。この粛清がそれに繋

がっている。粛清し続ければ、自らが偽物だと言うことに気づき、考え改めるハズ…そうすればきっと…本物の忍は……

忍。そういえば、忍を知ることが出来たのも、こうして新たな信念を抱き、己の新たな道に進めるのも、ある抜忍のお陰だった。その名も『漆月』。アイツの性格は一言で言えばよく分からない…

お調子者で、ヘラヘラとしていて、自分の信念というものが空っぽのような存在だ。無論そんなヤツも粛清する。しかし…漆月だけは何かが違ったのだ…

その何かという答えもまた知らない…だが、少なからずそこに信念があった。空っぽだったハズのヤツには、信念というものが微かに見えたのだ。それが一体何の意味になるのかは知らない…だが、見届けるのも悪くはない…そう思えたのだ。

それとヤツを生かした理由はもう一つ、それは…彼女は忍の存在を否定してた。

ヤツに一体何があったのかは知らない。だが、自分には今の虚ろに塗れた忍は消えなければならないと思っている。偽物にまみれてる忍もヒーローも…その為には…

今の光（ヒーロー）と影（忍）の社会を壊す。今の社会は二つで一つとなっている。

壊すものが増えただであって、やることは変わらない……

そういえば、漆月とは最近会っていない…ヤツは一体今頃何をしてるのか…？死んだら死んだでそこまでの人間だったということになるのだが…

「やっほ～！今日も派手にやってるんだ？ステイン！」

噂をすれば…と、ステインは呆れながらも彼女の声を聞き流していた。声の主は漆月、この声を聞くのも久しいな…とステインは心の中で呟いた。しかし、今日は違う。漆月とは違うもう一人の人物の声

が、ステインの耳に聞こえたからだ。
「これはこれは、貴方様があのヒーロー殺しステインですか…お初目に掛かります」
「!?」
その刹那。ステインは背中に装備してある長い刀を瞬時に抜き取り後ろを振り向くことなくその声の主を斬る。
ブワァ…
しかし、手応えがない。空振り?そんなハズはない…知らないもう一人の声の主は確かに今、自分の真後ろに聞こえたのだから…聞き間違えるハズがない…何よりも、後ろにソイツの気配がする。だが斬った手応えが感じられなかった…どう言うことだ?と後ろを振り向く。
「落ち着いて下さい。我々は漆月の仲間であり、貴方の敵ではない…また、貴方も我々の敵ではない。寧ろ、『悪意』を培う同類」
「!」
そこには、黒い靄を纏った何かが蠢いていた。そしてその横には「やあ」と手を挙げ挨拶する漆月。この黒い靄を纏ったこの男は一体?
「申し遅れました、初めまして…私は敵連合の黒霧と申します。貴方のような悪名高い輩に是非ともお逢いしたかった…」
黒霧は、直ぐに空間と空間を繋ぐワープゲートで出入り口を開く。
「少々お時間宜しいでしょうか…」
そして…ほんの数秒後、漆月とステインは、繋がっている空間へと足を踏み入れる。そして、誰にも知らされることなく、誰にも見られることなく、その黒い靄は消えた。

暗い部屋の中で、パソコン画面をジッと見つめる一人の男性、主犯格の死柄木弔は、ある動画を観ていた。それは…

『ハアアァーーー!!』

『せいっ!はっ!やぁっ!!』

屋上で飛鳥と雪泉が戦う姿。他にも、お互い涙を流しながらも微笑み合ってる夜桜と葛城に、勝負が終わった叢と斑鳩、戦闘中の四季と柳生、美野里と雲雀。

ニューチューブ。

それは忍専門の動画配信サービスのことである。本来忍の者でしか見ることが出来ないネット動画なのであるが、漆月のお陰でこうして観ることが出来たのである。

今映し出されてるこの動画は全国の忍たちに観られている。では何故ニューチューブに映し出されてるのか?それは学炎祭だからだ。学炎祭は古くから伝わる学校行事…学炎祭の勝者には、負けた校舎に火を放つ事が出来て、廃校にする事が出来るらしい。廃校になり負けた忍学生たちは永久に忍の資格を失うことになる。忍の学校に存亡が掛かってる為、当然ニューチューブ動画にアップされるのは当然なのかもしれない……それ位学炎祭は大きな行事なのだ。敵連合が観るのはあくまで忍の実力、そして漆月の話した通り、障壁は何方になるのか…だ。

半蔵か?それとも月閃か…

「あの…ガキィ…!!」

死柄木は、ニューチューブで生放送されてる飛鳥を忌々しく、血走った目で睨みつけたのである。

真に賢しい敵は、悪という闇に潜むものだ。

学炎祭に戻り、決着がついた美野里と雲雀。どうやら勝ったのは美野里の方らしい。二人ともボロボロだ。
「美野里…勝った…かったよ…」
「うん、とっても強かったよ…美野里ちゃん……あの時とは違うくらい、凄かったよ」
雲雀は美野里の頭を優しく撫でる。美野里よりも雲雀のほうが身長が大きいためなのか、姉妹に見える。
「戦う決意が出来たんだね」
「うん！美野里は、戦うよ…確かに、皆んなと遊んでいたいし、戦いは怖いし…死にたくないけど……でも、誰かが傷ついたり死んじゃったりするのはもっと嫌だから…だから…美野里は戦うよ…！例えこの先どんな辛い事があっても…」
純粋な子供に宿る決意。美野里の成長に、雲雀は微笑んでしまう。
月閃の彼女たちに一体何があったのか分からない。それでも、雲雀は嬉しかった。雲雀だけではない、皆んなもそう思ってる。
前の美野里ならそんな言葉絶対に口には出さなかった。
美野里はまだまだ子供らしい…でもそれで良い。彼女の明るくて

元気な正義の光は、周りの人間を笑顔にしてくれる。それはとても良い事だ…

柳生と四季では…

「はぁ……ハァ……柳生ちん…マジで強すぎるんですけど……」

「お前もな…悔しいことに…勝ったのはお前だ……」

お互い息遣いは荒く、その場に立ってるのがやっとであった。柳生は突如襲いかかってくる疲労感とボロボロな体で倒れそうになるものの、番傘を杖の棒のように自身の体を支える。

「いやいや…柳生ちんもマジでヤバかったって……ていうか、今でも信じられないし…」

「……お前はこのオレに膝をつけさせたのだぞ？今目の前にあることを信じないでどうする……お前は強い、お前は勝ったんだ…黒影も喜んでくれてるハズだ…」

「うん……だと良いんだけどね…」

柳生がそう言っても、四季の表情は変わらなかった。その顔は、まだ何処か迷いがあるように見えた。勝負はついたと言うのに、一体何にを迷ってるのだろうか…？

「実際さ、本当にこれで良かったのかなって思ってね……黒影様は私

たちを育ててくれた…忍に善も悪も関係ないことも充分理解したよ。でも…もしこのまま進んだら、黒影様の意思に反してるんじゃないかなって思うとちょっとね…」
「……」
柳生は今ある力を振り絞り、番傘に力を入れると、立ち上がり四季に歩み寄り、肩に手を置く。
「心配するな…黒影がお前たちのことを大切に思ってたのなら、お前たちの選ぶ道こそ、黒影が望むものだ。黒影がお前たちより自分の描いた理想を選ぶことはまずないハズ……お前はもっと自分を誇れ…」
「……うん、そう…だよね。ありがとう、柳生ちん」
自分に自信を取り戻した四季は、柳生の顔を見つめ、微笑んだ。

そして、最後は…
同じリーダー同士、飛鳥と雪泉。
「ハァ……ハァ……」
雪泉と飛鳥はお互い息が切れながらも、ボロボロになりながらも、倒れることは決してなかった。

「飛鳥さんが……ここまで強いなんて……」
（この前とは明らかに違う）
　先週学炎祭で戦った時とは大違いだ。あの時感じた微かな力が、今ではここまで強いなんて…オールマイトのような絶対的強さを持つわけでもない…それでも、何故飛鳥はここまで強いのだろうか…この短期間で一体…
「まだ…だよ…雪泉ちゃん！」
「何故です？なぜ、飛鳥さんはそこまでして立ち上がることができるのですか？貴女の強さの秘密が分かりません…」
「私の強さに秘密なんてないよ…」
　飛鳥の言葉に雪泉は首をかしげるしかなかった。
「私が戦う相手は皆んな強くて、私は皆んなに離されないようにって、必死に食いついてるだけだから……離れて差が広がったら、皆んな私と戦ってくれなくなるでしょ？皆んなを支えることだって出来ない……そんなの私、嫌だから…」
　ああ、そっか。そうなんだ……
　飛鳥はそうだ、そういう子だったんだ。誰かのためにと戦うその姿はまさしく、光り輝く太陽だ。

　雪泉が月なら飛鳥は太陽。つまり、同じ正義であって、違う部分がある。そう言ったら良いのだろうか…
　何故だろう…飛鳥、悪と少しでも関わったというだけでアレほど憎んでいたのに…今は全くそうではない。そもそもこの勝負の由来は半蔵にある。元は半蔵のために仕掛けたのだった。
　祖父である黒影の大好物であるイチゴ大福を奪われてあれだけ頭に血が上ったというのに…今はもうそんなのどうでも良いのだ、
「ならば、全力を超えた全力のチカラをお見せしましょう…!!」
　飛鳥の気持ちに応えるためにも…
　ビュアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ…!!!

氷と風が、青白い光が、雪泉を包み込み、姿を変える。雪泉の姿は、オールマイトヴィランとの戦いで見せた覚醒した姿だ。いつ見てもその姿は美しく、氷王の名に相応しい風格だ。飛鳥は雪泉の覚醒に驚きつつも、思わず不敵な笑みを浮かべる。
「流石だね……雪泉ちゃん……」
「はあァァァァァァァァァーーーーーーーー!!」
「でりゃあァァァァァァァァァーーーーーーーー!!!!」
そして、雪泉と飛鳥はお互いぶつかり合い、その二つの衝撃により、二人は光に包み込まれた。衝撃の余波によるこの波動、遠くにいた轟と緑谷でさえも吹き飛ばされそうになる。しかしなんとか堪えた。そう言えば、体育祭で緑谷と轟の戦いの時も、こんなことがあったな…あの時はお互い必死で夢中になってたため思ってもなかったし分からなかったが…今目の前にある出来事は、緑谷と轟の戦いに似ている。
やがて衝撃が収まると、白い霧が辺りに漂わせていた。雪泉の氷の力によるものだろうか、周りの空気はとても冷えている。夏に近いというのに風邪を引きそうだ…ジャンバーや何か羽織るものが欲しいくらいだ。そして白い靄が消えていくと、人影が一つ。それはもう言うまでもない…雪泉の姿であった。そして、倒れてるのが飛鳥…流石に絶・秘伝忍法で覚醒した雪泉には敵わなかった。
「さ…すがだね……雪泉ちゃん……もう、立たないや……私の負けだよ……」
「いえ、体が動かないのは……私も同じ…です……」
雪泉も絶・秘伝忍法の力による体力の消耗が激しかったのか、立っていられるのがやっとのようだ。
「ダメだよ雪泉ちゃん……無理しちゃ……何をする気なの?」
雪泉が飛鳥に歩み寄り、飛鳥は首をかしげる。すると雪泉は飛鳥の目の前で手を差し伸べた。
「握手…です」
雪泉は飛鳥に笑顔を見せた。いや、雪泉はここで初めて、笑顔を見

せたのかもしれない。いままでずっと笑わなかった雪泉のその顔は、初めて笑顔を見せた。飛鳥は「雪泉ちゃん…」と差し伸べた手を掴み、立ち上がると、優しく握手をした。

これで、雪泉も飛鳥も、最強の友達だ。

「……おじい様、ごめんなさい…私はおじい様の悲願を叶うことは出来ませんでした……」

雪泉は黒影に謝るように目を瞑る。

「それでも、私は私…おじい様の孫であり、黒影様の弟子です……そのことには変わりはありません……おじい様の愛を胸に抱き、忍の道をまっすぐ進みます……」

雪泉のその目からは、涙が溢れていた。

「そのことだけは、命に代えても、必ず守り通り抜きます……そしてようやく、私の答えが導き出せました…」

雪泉が探し求めてた答え…本当の正義…それは…

「弱きを守り救ける……それが、私が導き出した答え…」

雪泉は、ここで初めて、新たな信念と新たな正義を見つけ出した。本当の正義とは、強き悪を討つだけでなく、皆んなを守り、支え、誰かを救ける。彼女たちと、ヒーロー学生…そしてオールマイトと関わったことにより、その答えを導くことが出来た。絆を結びついたことで、今までに出さなかった答えを見つけ出すことが出来た。あの時、美野里の『救けて』という言葉に

「それで、許して貰えますか?…天国のおじい様……」

雪泉よ…

許すも許さないもない…謝らなくて良い…寧ろ頭を下げるのは俺の方だ。俺は悪を憎んでいた。その憎しみの残り火が、雪泉たちを黒く染めてしまったのだ。

俺は本当に愚かだった…しかし雪泉たちはその憎しみの闇を払い、自らの手で光を掴むことが出来た。

あの子達は俺を超えたのだ。

良かった…本当に良かった。俺は…

『ねえ黒影、いまこの忍の世界は殺伐としてるでしょ？死ぬのが当たり前…弱い者は忍になる資格はない……私はそんなことないと思うんだ…だって、忍もヒーローも何も変わらない…忍だって、元は一つだったんだから……きっと、正義と悪は分かち合えると思うんだ……私はそう思う……だから私は…忍を救い出す！どんな辛いことでも、誰も死なずに、不幸にならずに、解決したい！私はそう思ってるんだ！』

アイツの笑顔は正しく太陽そのものだった。いや、彼女の名前は陽花であり、忍の象徴と呼ばれた少女だった。

それは、『カグラ』を超える程の……とても強き少女だった。あの子の笑顔と、彼女たちの笑顔は、それと似ていた。そして、救うという答えに、俺は導き出すことが出来なかった…だが、雪泉…お前の見つけ出した答えは、間違っていない。俺になかったものを、雪泉は得ることが出来たんだ。

そして俺は、彼女の輝かしい笑顔を見ることが出来た。

雪泉の笑顔を見ることが出来て、俺は幸せだ…もう悔いはない…雪

泉、叢、夜桜、四季、美野里……ありがとう…俺は、お前たちに救われた。だから、言おう…

『心からありがとう…そして、おめでとう…』

俺は悔い残すことなく、成仏した。

学炎祭が終わり、叢、夜桜、四季、美野里の四人は、半蔵学院の校門で雪泉の帰りを待っていた。四人とも体はボロボロになりながらも、それでもその傷を背負い、彼女たちは雪泉を待つ。そして暫くすると、雪泉の姿が見えてきた。

「見えて来たな…」

「雪泉ぃ～!!」

「お疲れ雪泉ち～ん!」

「雪泉ちゃぁ～ん!」

迎えるは叢、夜桜、四季、美野里。彼女たちだ。雪泉は健気で光り輝く笑顔を浮かべる少女たちに、思わず笑みを浮かべる。

「皆さん、お疲れ様でした」

雪泉は皆に軽く頭を下げる。

これからこの先、まだまだ辛いことや、苦しいことがあるだろう…だが、それでも忍は乗り越えなければならない…忍は、世のため人のために動き出す…誰かを支える影が必要だ。

雪泉たちなら、きっと出来るだろう…どんな困難が待ち構えていようとも、雪泉たちならその困難を乗り越え、強くなる…

彼女たちならきっと……

「雪泉ちん、そんで、学校はもちろん、燃やさないんだよね？」
「ええ、半蔵学院の彼女たちは、最強の友達であり、もう立派な仲間です…お互い高め合い、精進する正義…燃やすわけがありません…」
学炎祭に勝利した者は火を放つ権利が得られるだけで、それを放棄してもルール違反でもないし、問題ないこと…その為負けた半蔵学院は廃校にならなければ、忍の資格を永遠に失うこともない。雪泉は「帰りましょう…」と言い、皆、半蔵学院に背を向けた。
これにて、半蔵学院と死塾月閃女学館の、熱き少女たちの戦いは、これにて、幕を閉じた。

６０話「焔の決意」

「いやぁ～！強かったなあ～」

月閃と戦い終わった飛鳥は、屋上で太陽の光を浴びながら背伸びした。飛鳥にとって元気の源は太陽の光だ。彼女はそんなお日様を見て思わず笑みを浮かべる。

雪泉に負けたのは悔しかった。どうしても勝ちたかった…だが、雪泉たちの心が変わっていたのならそれはそれで良かった…元は負けられない理由は、学校を守るためでもあったが、もう一つは雪泉たちを救うためであった。悪の憎しみに囚われた彼女たちを救けるためにもどうしても負けられなかった…しかし、雪泉たちは何があったのか知らないが、悪に対する憎しみが無くなっていたのだ。あの一週間で一体なにがあったのかは知らない…でも、これで良かったのだと思う…学校も失わず、雪泉たちの心は救われ、最強の友達ができた……この日でこれ以上嬉しいことはそうそうない。だから飛鳥は、負けてもそこまで落ち込むことはなかった。負けたのなら今度は負けないくらい修行を積めばいい。雪泉や焔、雅緋にも負けないくらい、修行を積めばいい…強くなればいい。

「あれ？雪泉ちゃん達の戦いで夢中になってて忘れてたけど…焔ちゃんたちはどうしたんだろ？」

焔紅蓮隊がそう簡単にやられるとは思ってない。だが、雅緋たちも強い。お互い何方が勝ってもおかしくない…だからこそ不安なのだ…心配なのだ……

大丈夫だよね…と、そう心の中で言い聞かせた途端、後ろの扉が開く音がした。振り返るとそこには、半蔵学院の四人…ではなく、血相を変えた飯田だった。後ろの方では、緑谷と轟がいる。どうしたんだ？と聞くと…

「すまない…飛鳥くんたちに皆んな…俺は帰らせてもらう…」

「あっ、丁度よかったよ…僕たちも今帰ろっかって話してたところだし…」

「そうか…なら良かったが…では俺は一刻も早く帰らせてもらう！」

飯田の表情、その焦り声に遠くで聞いてた飛鳥も「珍しいな」と首をかしげた。そんなに慌ててどうしたのだろうか…轟が「そんなに焦ってどうした？」と聞くと…信じられない言葉が彼の口から出て来た。

「俺の兄さんが…ヴィランに…!!」

場所変わり…焔紅蓮隊たちは…完全に復興させた新・秘立蛇女子学園の校舎を見上げていた。そびえ立つその天守閣…そして中からは物騒な気配が放たれている。

「ここか…『旋風』と『鈴音先生』の言ってた通り、中からはかなり嫌な気配が放たれてるな…」

焔紅蓮隊リーダー筆頭の焔が口を開く。

「ええ…そうですわね……感じたことのない気配を感じるのは気のせいでしょうか？」
　ここでお淑やかな性格をした、お嬢様口調のもやし大好き１００％、詠も焔の横にたち口を開いた。
「いや、これ気のせいじゃないで…」
「やっぱりあの噂は本当なんだね…」
　感情ないと言いながらも実は感情あるのでは？と疑われている日影と、幼い子供と見間違えられる未来は、訝しげに天守閣を見上げる。
「ええ…『妖魔』を売ってるって話ね」
　同じくマッドサイエンティスト、春花も…

　それは一週間前、飛鳥と共に修行をし終わった後、買い物に行ってアジトへ帰ったある日のこと…
　焔は久しぶりにバイトの収入が入ったため、夕食の食材を買うべく買い物に行った。因みに焔が働いてるのは引越し屋のバイト…バイトの場所では皆一般人のため、個性を持ってる人は当然だ。やはり不慣れな場所は好きじゃない…別に嫌いというわけではないのだが、焔は忍であり個性がない。忍の者は個性という人間が持つ能力の代わ

りに、忍は忍法と言った力を持っているのだ…
忍術、召喚術、瞳術、傀儡の術、他にも焔のように炎を出したり、雪泉のように氷風を出したり…遁術だってそうだ。忍が持つ力は特別な力…その特別な力によって個性が発現しないのだ。その力が強かれ弱かれ関係ない…忍の家系は数知れず、世界中には何万も何百万もの家系が存在するのだ。とにかく、忍の忍法も、個性と余り変わらないものだ。そのため…焔は忍法を個性と言い過ごしてきた。でなければこの先やっていけない。きっと他の忍たちもそうだろう…

焔は食材などいっぱい入ったビニール袋を手に持ちながら、アジトへ帰っていくと、ふと何者かの視線を感じた。気配は全くない…だがこの独特とした感じは…気配を消している。
(この気配は……やはり忍か…)
焔たちは抜忍となった後、忍に追われる身になったのだ。そのため、いつ何処で誰が見てるのか分からないし、油断をすれば死ぬことなど戦場と同じ…それは焔だけでなく、詠、日影、未来、春花も同じだ。
抜忍というのは忍の世界から追放された者…または裏切りや反逆、違法を犯した者のことだ。
即ちヒーロー側で言うヴィランと同じ存在だ。そんな風に見られたり扱われても、私は別に文句はないし構わない。自分のやったことに悔いはないし、間違ってるとも思ってない…寧ろ正しいことだと思っているから。
焔はその路とは違う角へと曲がった。そして静かに身を潜める。相手は此方に近づいて来てる。気配を感じるあまり未熟者…下忍と言ったところだろうか……この忍の気配は独特とした感じに漏れていて、逆に分かりやすい…だがまあ悪くはない…１００歩譲って良しとしよう…しかしだ…殺気があふれでんばかりに漏れている。殺気とは、気配を消すように隠すものだ。殺気が漏れていては意味がない。今の忍学生はどうなってるんだ…と逆にこっちから乗り込んで言ってやりたいくらいだ。振り切れるものなら振り切れるが、私の命

を狙うものなら誰であろうと容赦はしない…相手にしないこそ、逆に失礼だ。だから、私は…隠れるのをやめて堂々と姿を現した。
「忍の者だと言うのは分かっている。さっさと出てこい」
そういうと…物陰から忍学生が姿を現した。見た限り一年生…蛇女子学園の者だった。蛇女子の制服を着ているので、見ただけで直ぐに分かった。それにしても、と焔はこんな状況のなか、思ったことが一つ…それは、

この少女、何処かで見たことがある。

そう思ったのだ。よく見てみると見覚えのある顔だ……そう思ってると一人の少女は刀を取り出す。
「さすがと言ったところか…抜忍の焔…」
「一人で抜忍狩りか？」
「ああ、私は旋風…蛇女の学生だ」
旋風は怒りに燃えた目で、いきなり忍者刀で突いてきた。
「『兄さん』の仇！焔、死ね！」

兄さん…兄の仇、その言葉に私は全て理解した。そう、脳裏に浮かぶは…思い出したくもないヤツの顔。

アイツだ、旋風の妹はアイツだ。
あいつの妹が私の首を狙ってやって来たのだ。
旋風の忍者刀による突きは鋭かった。だがそれはあくまで学生レベルの話…私は刀を抜くともなく、旋風の切っ先を難なくかわす。
「くっ！なんでだ!?」
なんで？
逆に聞くが、なんでこの腕っぷしで私を殺れると思ったんだ？本気で私を殺せるとでも思っていたのか…？その程度の実力では、何百回やっても、私には傷をつけるどころか、掠りもしない。
私は旋風の背中に回ると、延髄に手刀を軽く入れた。

「あっ！」
と旋風は弱々しい声を残して路上に倒れた。まるでよく漫画やテレビでやる、首を軽くトンと叩いただけで気絶した…に近い感じだった。実際気絶はしていない。
「お前…『小路』の妹だな？」
焔は旋風に近づき、見下ろしながらそう言うと、彼女は悔しそうに唇を噛み締めながら、鋭い眼光で焔を睨みつけた。

小路、まさかその名前をまた口にするなんて……思い出したくもないものだ……
何にせよ、アイツのせいで自分の人生を狂わせられたのだから…

小路の妹が蛇女に編入予定だったのは知っていた。まだ蛇女にいたころ、中達入学者の書類チェックも、筆頭の役目だったから…しかしこうして私は今抜忍となったので結局当たることはなかったが…まさか此処で、こうして会うとは…まあ、抜忍となったため仕方ないか…
「焔、お前のせいで……私の兄さんは…悪忍を追われたんだ…!!」
旋風は立ち上がると忍者刀を構えた。その目には消えることのない激しい憎しみがこもっている。
とは言え、もはや実力は完全に見切った。この勝負は私の勝ちだ。今の旋風の実力では決して、私を傷つけることなんて出来ないのだから…あの雄英高校の生徒たちにも傷一つ付けられないだろう…
「中学生の女子にやられ、任務を失敗したようでは忍も務まるまい……で？アイツは今どこだ？何をしている？」
私の質問に、旋風は歯軋りした。
「今は…貧民街にいる……」
「そうか…私の仲間、詠が貧民街の生まれだが、あそこは中々どうして住めば都らしいぞ。街の人たちは優しいし……」
そういえば、貧民街はどうやら都市再開発計画をするとか言っていたが…大丈夫なのだろうか？詠からその話はまだ聞いていないが…

「ふざけるな！」
旋風は怒気を孕んだ声で焔の言葉を遮った。
「兄さんのことだけじゃない!!お前は自分のわがままを通す為に蛇女を捨てたんだ！」
……確かに私は自らの意思で蛇女を去った。捨てた、と言われても仕方がないのかもしれない。だがさっきも言った通り、誰に何をどのように言われても悔いはない、自分で正しいことをしたまでなのだから…
「ふむ、お前の怒りは分かる。だが、兄貴の仇を討つにはまだまだ力不足のようだな。もっと蛇女で鍛えてこい」
私は背を向けその場を去ることにした。小路に対しては悔いはないし悪いとは思わない…
ただ、妹が兄貴の敵討ちをしたいというのならいつでも受けて立つ。まあ、負けるなんて微塵も思ってもいないが。
焔はため息をつき帰ろうとすると、旋風の声が背中から聞こえた。
「焔、今のお前の生き方は…本当にお前が望んだものなのか？……忍ですらないのに…お前は…お前は本当にこれでいいと思ってるのか？」
ピタッ！と、焔は足を止めた。旋風の言葉に、心の何処かにその言葉が突き刺したのだ。抜忍の道は思っていたよりも厳しい…迫ってくる忍から常に身を守り、食料を調達するべくアルバイト生活を送ったりなどと、色々と忙しい。そのため今までそんなこと考えてもいなかった……今の自分に満足している。と言えば嘘になる…今の私には信念を貫く道がない。
「私だって強くなりたいさ！強くなってお前を倒したい！……だが、今の蛇女では強くなれないんだ…強くなれないどころか、下手をすれば殺される……」
「おい待て、それはどういう意味だ？」
今の？殺される？鈴音先生は蛇女に残ってるはずだ。もう道元も存在しない今、蛇女は立派な悪忍養成学校のハズ…鈴音先生が物騒なことをするのはまずあり得ない。元より善忍だ……道元なら話は別

だ…更に言えば叩き斬ってやるところだ。
「蛇女は…出資者の『伊佐奈』によって支配され、洗脳されてるんだ……」
伊佐奈？聞いたことのない名前だ…道元がいなくなった後の、新たな出資者か？随分とまた物騒な輩だな…と私は心の中でそう思った。
「詳しく話してみろ」
「私も詳しくは分からない、しかし、とにかく皆んな変なんだ…こないだまでマトモだった人たちが、兵器が妖魔だのとか戦争がどうなのとか、社会を壊すのとか、新たな改革が必要だのとか、ブツブツと呟いているんだ」
兵器？
戦争？
社会を壊す？
新たな改革？
妖魔？妖魔といえば、かつて古くから存在したあの怨楼血のことか…道元が復活したとのことだそうだが…
だが確かに私が前にいた蛇女とは違う。だが、妖魔、兵器、戦争…社会を壊す、そして新たな革命……なるほど…道元並みにタチが悪いようだ。
「雅緋は承知の上でやってるのか？」
「それはまだ分からない…聞き出す時間もないし…ああ、あとそうだ！もう一つ思い出した！お前たち焔紅蓮隊を捕獲しろという命令があったんだ！」
「…なに？」
私たちの捕獲？処分ならまだしも、捕獲だと？一体なぜそんなことを…
考えても分かるわけがない。心当たりがなければ、当然分かるはずがない。聞けば聞くほど謎が深まる。
伊佐奈…一体何者なんだ？本当なら今すぐ突っ込んでやりたいが、策や準備もしてない、何より体力が残ってない…充分な情報だってない、そんな状態のまま突っ込んではダメだ、無謀すぎる。それに情報

が不十分すぎる。

「よく分からんが…旋風、抜忍となった私が言える立場ではないが、お前も蛇女の生徒なら、蛇女のことを思うのなら、蛇女について詳しく調べてくれ、その情報を私に聞かせてくれ」

「なんだと!?抜忍であるお前が、蛇女を捨てたお前が今更何を言う!」

「旋風!!」

「っ!」

焔の覇気を孕んだ一喝に、旋風は思わず腰が抜けそうになった。なんとか耐えたものの、体の震えは僅かでありながら止まらない。

「いいか、よく聞け…上層部や本部、そして出資者や上の者から下された任務に従うのは、忍の生き方として当然だ…間違いだなんて言わない…だが!!上層部に誰か一人でもそんな腐ってるヤツがいれば、私みたいに抜忍になるヤツだっているんだ!少なくとも、道元というヤツはそうだった…」

自分の野望の為に蛇女を利用し、使い捨ての駒のように捨てた…そんなヤツがいるから、私たちみたいな悲劇を生んでしまうんだ…それだけはもう何があっても、二度と起きてはならない。それだけは絶対にあってはならないんだ。

「また、蛇女が酷い目にあうぞ…下手すれば今度こそ、蛇女子学園は崩壊し、二度と生まれ変わらないだろうな…

だから、それを止める為にも…お前の力が必要なんだ。本当に蛇女を語るなら、想うなら、生徒なら……な」

焔はそう言うと、「待ってるぞ」と言葉を残し、歩みを止めてた足を再び動かし、その場を去っていった。旋風は焔の背中を、歯を食いしばりながら見つめることしか出来なかった。

なんなんだ、アイツは……

アイツは兄さんを傷つけたんだ…

私はアイツを殺すんだ。

それなのに…何で私は……
アイツの言葉に……ここまで心が動かされるんだ？

一方、その頃蛇女子学園では…
雅緋は、過酷な訓練を受けボロボロになって倒れてる一人の忍学生を肩に背負い、出資者、伊佐奈がいる部屋に入り込む。伊佐奈は背を向けており、新聞を読んでいる。雅緋が口を開くも見向きもしない。
「失礼しました……」
伝えることを話した雅緋は軽く頭を下げ、扉を開け、去っていく。部屋から出た雅緋は、扉越しの伊佐奈を思いっきし睨みつける。その目には憤怒と殺意を蓄えた目で…
「あの、化け物め…!!」
忌々しく、伊佐奈が聞こえないレベルの小声でそう言った。

「す、すみません……伊佐奈様……体が……もう……言うこと聞かなくて……」
忍の訓練についてけれなかった忍学生は、体がボロボロで、傷だら

けだ。もはや立ち上がる力すら持っていない。何とも可哀想な忍学生のことか…忍の訓練が過酷になったのも、原因は伊佐奈にあった。なんでも今のままでは雅緋の言う悪の誇りを取り戻せない。と言う理由で訓練をより過酷にしたとか…いや、違う…理由は別にもう一つあった。それは、己の野望の為でもある……

伊佐奈は読んでた新聞を机の上に置くと、水族館をモチーフにしたヘルメットを取り外す。

そして――

「そうか……

使えねえな」

刹那。異形な化け物の姿に変え、全てを飲み込むかのように広がる大きな口が、その忍学生に襲いかかる。

「えっ…？あっ、……っ!!!!」

叫びも届かず、悲鳴をあげる寸前、その少女はその口に襲われ、この部屋だけが、血の海と化した。

それから日にちが経つにつれ、焔と旋風の接触は一向に多くなって来た。それが良いのか悪いのかと言ったら、よく分からない。旋風は焔を殺そうとするべく、人気のないところで待ち伏せし殺そうとするも空振りに終わったり、更にはアジトに潜入し、食料に毒物を盛るも見破られ、更には寝ている間に忍者刀で刺そうとするも当たらず、終いには爆弾をアジトに設置して爆殺させようとするもこれもまた毒物と同じく見破られ、結局言葉通り、焔を殺すことは敵わなかった。焔はまるで旋風の行動を知ってるかのように、予知でも見てるのか？と疑問を抱いてしまうほどだった。「いっそのこと私を殺せ！」と涙を流して逆に頼むくらいだが、焔は気にしてないようで殺さない。これもまた旋風の導火線に火がつくのだが……

そんなやりとりをして一週間が経とうとしたある日のこと…旋風から連絡があったのだ。何でも伊佐奈は焔紅蓮隊をどうしても蛇女に入れたいとか…

それと、根本的に活動して来たようだ…何でも学炎祭やら何やらと計画を立てたり、闇市場との交流があったり、闇アイテムを購入しているとか…

闇アイテムは蛇女なら問題ない。蛇女は悪忍養成機関、違法を犯したりするのが当然であり、また悪は善よりも寛大とのこと…どんなことをしても許されるのだ。だからそこについては余り触れなかったのだが……ここで、とんでもない事実が突き立てられた。これは蛇女の忍学生には誰も知らされてないのだが、何でもあの妖魔を兵器として売ってるそうだ。旋風は下忍…そのため伊佐奈は選抜メンバー以外の忍学生は興味もなく見てないため、旋風は簡単に調査することが出来たそうだ。まさか、今の蛇女はこんなにも腐敗していたとは……雅緋は悪の誇りとかなんとか言っていたが…これが悪の誇りなのか？これが雅緋の求めてた悪の誇りか？疑問が浮かび上がるにつれ、怒

りを覚える。
何でも伊佐奈に歯向かえば躊躇なく殺されたりするらしい…そして使えなくなった忍はどうされたのか分からないが、近々減ってってるらしい、更には金を使って蛇女に生徒を編入させるなど、とにかく正気の沙汰ではない。伊佐奈のやり方に、焔は心の底から炎が浮かび上がるかのように熱くなっていた。まるで道元だ…いや、それ以上だ…これが今の蛇女だと思うと、心が痛くなる。
旋風から連絡を受けた焔たち紅蓮隊は、蛇女に乗り込むべく準備を整える。武器の手入れ、他にも必要なものは何でも持っていく。

焔もひと準備しようと思ったその矢先だった。

「成長したな、焔」

聞いたことのある声が聞こえた。感じたことのあるこの懐かしい気配。間違いない、この人は…

「鈴音先生!?」
突然声をかけられ振り向くと、そこには確かにいた。死んだと思われてた鈴音先生が……蛇女は今も健在してると言うので生きてるとは思っていたが、確かな確信もなく、また会ってなかったので曖昧だったのだが……
話に聞くと、鈴音先生は蛇女を助けるべく、道元と共に道連れの道を選んだ。
「伊佐奈のことについては聞きました…なんでも、妖魔を戦争の兵器として売ってるとか…」
「よく調べたな…そうだ、私はお前たちにそのことを伝えるためやって来たんだ」
妖魔…それが一体なんなのかは分からない。しかし、妖魔とはあの怨楼血のような化け物のことを言うのだろう…あんなものが何体も戦争の兵器にされたりしたら、ひとたまりも無い。鈴音は焔が事情を

知ってることに安心したような表情を浮かべる。

「それよりどうだ？抜忍の生活は…」

鈴音は懐かしき生徒を見つめ質問する。その言葉に焔は口をもごもごとさせたまま、何も答えなかった。これで本当に良かったのか…自分の選んだ道が正しかったのかと悩んでしまう。

確かにあの時のことは悔いはないし、間違ってるとは思わない…それだけは今ハッキリと言える。しかし、その後はどうだ？旋風も言っていたが、これが自分の求めた道か？と聞かれると、頷くことは出来ない。

抜忍になれば、命令に従われることなく、自由に好きなことができる。いわばヴィランや抜忍の漆月と同じようなことだ。

……そんな開放的な気持ちになったのも最初だけだった。

バイトで生活費を稼いでる私たちは、果たして忍と言えるのだろうか？忍養成学校を辞めてしまった者に、忍の仕事が回ってくるわけでもない。隠れ家も数ヶ月ごとに変えなければならないし、場合によっては数日で変えなくてはならない。かつての仲間に追われ、戦いになることもある。安住の地など、夢のまた夢だ。そう考えると、ヴィランや漆月の立場も、少しは分かるような気がする。

どうしても忍のような仕事をしたければ、裏社会の中でも、更に汚い案件に手を染めることになる。そして、そんな汚い仕事の報酬は、仲間たち五人全員の数ヶ月分のバイト代よりも遥かに高いだろう。

裏の汚い仕事をこなし、それなりの報酬を得る。もしかしたら、そのほうが自分たちが忍であることを実感出来るかもしれない。

……しかし、だ。

そんな生活に誇りはあるのだろうか？私は自分の誇りを守る為、道元を斬り、蛇女を去ろうと決めたのだ。

もしそんなことをすれば、私たちの誇りは無くなってしまう……

それこそ、私たちは漆月や敵連合と変わらないものだ。それこそ、ヴィランも私たちと変わらない。と言われても何も言い返せれない。

私たちはアイツらじゃない。
出来ることなら、忍の誇りを持って生きていきたい。
そうやって生きていられるのなら、私は命を賭けて戦う事が出来るのに……

「どうした焔。そんな顔では、これからの戦いに勝てないぞ？」
ふと、鈴音先生が口を開いた。私の悩みが顔に出ていたらしい。なるべく表に出さないようにしていたのだが…鈴音先生は全てお見通しのようだ。
「伊佐奈…と、蛇女の戦いですね」
「それだけか？」
「え？」
鈴音の言葉に、焔は思わず目を丸くする。それだけ？いや、蛇女との戦いが終わったら、次のバイトを探すだけだ。特にこれといった目標はない。
「焔…怨楼血は見ただろ？」
「はい…」
「では、怨楼血とはなんだ？」
「妖魔という化け物…ですよね？」
「では、妖魔とはなんだ？」
私は答えられなくなってしまった…そう言われてみれば、妖魔について深く考えた事がなかった。
「本来なら、忍学校を卒業した者にしか話してはならんが、まあ良い…抜忍なら問題ないだろう」
そして鈴音先生は真剣な顔立ちで話してくれた。妖魔について…
妖魔とは、多くの忍の血で生まれた、膿のようなものである。かつて、あらゆる災厄を引き起こした古の妖魔『心』なんかもそうらしい。忍学校を卒業した一流の忍たちやヒーローからも、ただの噂話、または都市伝説なんかと言われている程の化け物らしい…その気になればこの世界そのものを滅ぼしかねない…と。
しかし、古の妖魔『心』を討ち取った存在がいたという…

その化け物じみた忍は、半蔵をも超える程だったらしい…なんでも戦った際に、現実に引き戻し、災厄が起きたとか…
それでも妖魔は存在する。妖魔を倒す。善忍と悪忍が、忍が今も存在するのは、その為だ。
まさかそんな事があったなんて…鈴音先生の言葉に、なぜか全身の血が滾ってきた。

「その忍は、世界を救ったのですね？」
「その通りだ、そして…最前線で妖魔と戦う忍集団を、『カグラ』と呼ぶ」
カグラ。その称号を持つ者こそが、妖魔を滅する唯一の存在。カグラとは、善忍、悪忍、抜忍問わずなれるらしい、なるには、ただ最強という証を待つのみだとか……シンを滅ぼしたカグラと呼ばれる忍…私もソイツと是非一度手合わせ願いたいものだ。因みに、妖魔を倒す者は忍であろうと、抜忍であろうとも、ヒーローであろうとも関係ないらしい……いわゆるヴィランのような対象を取っても良いとのこと…
「して、そのカグラと呼ばれた者はどうして？」
「……死んだ、いや…殺された。と言った方が良いか…」
「え？」
その言葉に、焔は呆気を取られた。まさか…古の妖魔『心』を滅ぼした忍を殺した者がいるなんて…上には上がいるというが……これはもうそんな言葉に表せるようなものではない。
カグラの称号を殺した者…
「ソイツの名前は…？」
「『神威』だ」
神威？なんだそれは？そんな者が存在するのか？
「神威と呼ばれる者は、多くの忍とヒーローを殺害し、心（シン）のように、あらゆる災厄を起こした者だと、今でも語り継がれている……」
忍とヒーロー、そしてありとあらゆる災厄を招き、人間を、忍を凌駕した危険人物、そのことから上層部たちはソイツを『神威』と呼ん

でた。現在は姿を現さない為、封印されたか…或いは滅んだか…何方にせよ、上層部たちは『神威』は滅んだ。と言っている。何より今平和であるのがその証拠……それもそうだ、もし神威と呼ばれる者が生きてるのなら、今頃どうなってるのやら…想像出来ない。

自分たちの知らない間にそんなことがあったなど…思いもしなかった。そして更に神威は、そのカグラと呼ばれた忍と戦い追い詰められたとも言っている。

「焔、私はなぜ善忍から悪忍になったと思う？」

「え？」

突然話が変わった…そういえば、聞いたことがなかった。昔は半蔵学院の生徒だったということは知っていたが、何故悪忍になったのか、詳しくは知らなかった。何でも本当の強さは悪忍にこそあるとか言っていたが…違うのだろうか？

「私は、善忍だった頃…ある重要な任務に赴いたんだ」

「重要な任務？」

鈴音が善忍だった頃に受けてた任務、その任務は霧夜先生に止められたらしい…だが、鈴音は絶対に成し遂げてみせると言い、霧夜は彼女を信じ、行かせたとのこと…その任務は…

「『神威』の討伐だ」

「なっ!?!」
先ほど話した、災厄を司る忍を凌駕した化け物…鈴音はその討伐に赴いたらしい…だから、神威という存在を知っていたのか…いや、鈴音先生の実力なら納得がいく。
「だが、ほぼ再起不能にされてしまった……その時には確か『黒影』という忍もいたな…」
神威。一体何者なのだろうか…少なくとも私では歯が立たないだろう…
ただでさえ鈴音先生が再起不能にさせる程だ…今の私では返り討ちどころか、本当に殺されるだろう。
「私は神威に為すすべもなくやられ、虫の息になりながらも、なんとか一命を取りとめた……が、もう昔のように忍として戦うことは出来ない…そう言われてな。その際私を助けてくれた、『雅緋の父親』が蛇女の教師をやらないか?と言われてな…」
「なっ、雅緋の父が!?」
これもまた驚いた。まさか雅緋の父親が出てくるとは…雅緋の父親は忍の世界でもかなり有名であり、またかなり腕が立つとか……雅緋の父はなんでも、蛇女の学園長をやってるとか…しかし、そんなあの人までも神威には対抗できなかったそうだ。
「私は何度泣いたか……二度と忍の道を歩むことが出来ない…何よりも霧夜先生にも会えない…とな」
鈴音のその目には、少し目が潤っていた。悲しみを思い出すかのようなその目、焔は初めて鈴音先生の意外な一面を目の当たりにした。
「まさか…そんなことが…」
「焔…今のお前は抜忍だ。だが、今私と話して、何か思うことはあるか

？」
「思うこと…？」
なんだろう…答えが分かってるようで、分かってないようで…でも、見つけられそうなこの感覚……
そんな焔に、鈴音はこういった。
「私は蛇女の教師…だが、私は妖魔と戦いたいというやつの仲間だ。ソイツと一緒に戦う…お前はどうだ？」
その言葉に、焔は鈴音の言ってることがようやく理解できた。つまり…
「焔…カグラとなれ」
そういうことだ。その言葉を聞いた途端、私の血は滾り、全身に力が入ったような感覚が研ぎ澄まされた。
カグラ。その忍こそ妖魔を滅する存在であり、忍の象徴に近づく存在。この溢れてくる高揚感、この漲ってくる闘志、焔は不敵な笑みで鈴音先生を見つめる。
「私の道…それは、カグラを目指す！」
決意を決めた焔の言葉に、鈴音先生は軽い笑みを浮かべる。
そうだ、これだ…何を悶々としていたのだろう……今まで迷っていたことが、悩んでいたことが、全て吹っ切れた。たった一つの揺るぎない信念の道を見つけた今の私なら、誰にも倒されない気がして来た、
「だが、カグラへの道は険しいぞ…？思っただけでそう簡単になれるものではない。お前にカグラへの可能性があるとすれば……何か分かるか？」
妖魔の売買、蛇女の支配者、伊佐奈を止めること。どんなやつかは

知らないが…少なくとも道元のような人の道を外した外道だということは分かる。
「伊佐奈の野望を阻止して、今の蛇女を救う!!」
伊佐奈によって洗脳された蛇女の生徒たち、そして雅緋率いる選抜メンバーとの戦闘も絶対避けられないだろう…伊佐奈を倒す前に、まずは雅緋たち…と言ったところか。

「雅緋も大切な生徒だ…だからこそ、間違った道を正さなければならない。だがそれが唯一出来るのはお前だ焔。いや、お前でなければ意味がない」
鈴音先生は意味深くそう言うと、「お前たちの戦い、しかと見届けさせてもらうぞ…では、さらばだ」と言い去って行った。焔はその場でポツンと一人で立っていながら、一呼吸する。
鈴音先生との話をして、頭の中がごちゃついてる、新事実が出て来たり、自分の信念の道が出て来たり…

「さて、皆んなを連れて行くか…」

これが、蛇女に乗り込むまでの出来事だったのであった。

んで現在。焔はこうして蛇女子学園の前にいるのだ。
「それにしても、ここまで再建してるなんてビックリね、私たちが前にいた時とはほぼ変わらないじゃない」
春花は改めてそびえ立つ天守閣、そして校舎を隅々まで見渡す。
「しかし、見た目は元どおりになっても、内情が酷ければ元も子もありません…」
詠の言葉に全員が頷いた。正にその通りだ、今の蛇女は誇りを取り戻すどころか、蛇女は腐敗し、忍の道を外している。そんなことあってはならないし、許されるはずがない。
「さぁ…行くぞ!」
私が声を上げた時だった。

「随分と仲が良いんだな?」

「「「「!?!」」」」
聞いたことのない声が、五人の耳に聞こえた。校門の出入り口から姿を現したのは、ヘルメットにぶ厚い灰色のコートを着用した一人の男、出資者と思われる人物…伊佐奈だった。
焔たちは突然伊佐奈が現れたことに驚きの様子を見せるものの、こ

の男が出資者なのだと直ぐに気づいた。

「写真で見たことはあるが、こうして逢うのは初めてだな。まさかお前たち焔紅蓮隊の方から来てくれるとは驚いた。逢えて嬉しいな」

「お前が…伊佐奈か…」

「まさか俺のことを知ってくれてるとはな…話す手間が省けた」

焔は伊佐奈に鋭い目つきで睨みつける。焔の目つきを気にすることもなく、伊佐奈は悠々と歩き話し出す。

「知ってるなら話は早い、改めて言おう焔…いや、お前たち…焔紅蓮隊よ、蛇女に入り全員俺の部下になれ」

悪と悪の激突。

61話「伊佐奈という支配者」

「お前ら全員、俺の部下になれ」
　伊佐奈はなんの表情も変えず、さも当たり前のようにそう言った。
「ぶ、部下って…何よそれ！」
「私たちがお前の部下だと…？本気で言ってるのか…？」
　焔の目つきが更に鋭くなる。焔のこの声を聞いてるだけで四人は分かった、怒りを抑え込んでいると…
「当然だ、お前たちは元・蛇女であり、お前は雅緋がいない間に筆頭を務めてたからな……お前らに嘘をついてどうする」
「私たちが何でここにやって来たか…知ってるか？お前を倒すためだ…!!」
「なら話し合おう、俺はお前らを部下に入れたいだけなんだ。危害を加える気は無い。同じ日陰者として生きて来たお前らなら話し合えばわかる筈さ」
　伊佐奈は優しげな笑みで焔たちに語り出す…だが、焔は話す気はさらさらないのか、地面を蹴り、既に伊佐奈に飛び掛かっていた。

「寝言は寝ていぇ!!」
「女の癖に、随分と口が荒いんだな」

　焔は六つの刀を伊佐奈に向け、片方の手で、三つの刀で斬りかかる。伊佐奈の表情は先ほどの笑みから一変、呆れた顔で斬りに掛かってくる焔を見つめる。
「まず話そう」
「ッ?!
!」
　伊佐奈は焔を見つめ、焔は何故か身体に力が入らず、動けなくなった。そして焔の斬撃は伊佐奈に避けられ空振りに終わる。そして、糸が切れた人形のように、その場に倒れこむ。
（体が…動かない!?なぜ…？これはもしや、伊佐奈の術か…?!）
　意識はある、ダメージもない、なんともない…なのに身体が言うこ

と聞かず、自由に動けない。この現象は一体…術なのか？
「焔さん!!」
「焔ぁ！」
焔が倒れたことで、詠と未来が心配して駆けつけてくる。そんな二人を御構い無しに伊佐奈は少女たちを見つめ再び話を続ける。
「会話しよう。言った筈だ、俺はお前らに対し危害を加える気はないと…お互い不毛な争いは避けたいだろ？」
「不毛な争い…ねぇ」
今まで黙ってた春花は口を開く。それに対し日影は表情こそ表に出してないが、日影のその目には怒りが籠っている。
「アンタの野望は知ってるんやで」
「妖魔を売るなんて、そんなことが許される訳ないでしょ？それなのによく不毛な争い…だなんて言えるわね」
妖魔は忍の血によって生まれた膿のような存在。妖魔はそこらの忍やヴィランのようなレベルではない、即ち脳無のような危険的な存在なのだ。また、妖魔を倒すのが忍の役目…それを、売る。という行為は、忍の道に大きく反していた。例えそれが悪忍でも当然許されるはずが無い。
「別にお前たちは忍ではない、なら、忍の掟や存在に縛られなくてもいいわけだ。何もただ単にお前らを部下にしてやるつもりはない、ちゃんと上とは交渉する、それに金もある。お前らの働き次第、金をやろう。そうすればお前たちは忍の存在に追われることなく、金をもらい、自由に過ごせる。どうだ？簡単な話だろ？争う理由もないはずだ」
「お金で私たちを……」
動けなくなってる焔を心配してた詠は、激しい怒りを燃やした目で、伊佐奈を睨みつけた。詠は知っての通り貧民街育ち、斑鳩のことで金持ちを大きく嫌い、憎んでいた。いや、嫌いなんて生易しいものではない、世界中のお金持ちを根絶やしにするくらい、彼女はお金持ちを憎んでいる。斑鳩が養女だということを知り、考えを改めた詠であったが、ここで初めて、性根の腐った金持ちを目の前にしたのだ。

「妖魔を売ってどうするんや？」
ここで口を開いたのは、日影だ。妖魔を売って何がしたいのだろうか？戦争か？どっちにしろ止めなければならないが、せめて理由くらいは聞いておこうと日影は質問した。そこに、伊佐奈の野望があることなど知らずに…
「……改革を作るのさ」
「改革…だと？」
ここで、まだ身動きが取れなくて地べたに倒れてる焔は、眉をひそめて伊佐奈を睨みつける。そういえば、旋風が言っていたな…伊佐奈は新たな改革が必要だと…
「……お前ら忍学生なら当然知ってるだろうが…あの平和の象徴オールマイトと半蔵は繋がってるって、知ってるよな？」
オールマイトと半蔵は、超人社会の象徴だ。一般人にヒーロー学生や、並みのヒーローは知るはずがない…だが、上級ヒーローや、忍学生は知っている。
「ヒーローと忍は同じ…俺もそう思うよ。だからこそ、時に善忍だけでなく悪忍も、ヒーローと手を組むことがある…まあ、悪忍なんてのはヒーローからすりゃあ批判されてる所があるがな……
そこでだ、ヴィランと悪忍はどうだ？同じだろ？奪い、騙し、壊し、殺す…正に俺たちじゃないか。そうさ、法を犯して悪事を働く…ヴィランと悪忍もなんら変わらないんだよ…だからこそ…悪忍とヴィランが手を取り合う改革を作るのさ」
「「「なっ…!?」」」
伊佐奈はなんと、ヴィランと忍も手を取り合うという、新たな改革を作ろうとしているのだ。本来悪忍とヴィランは関わることは許されない。また、悪という行事が同じとはいえ、悪忍がヴィランと手を組むことなど、許されるはずがないのだ。例えば、市民や弱気を助け、守るヒーローが、人を殺し、騙し、不幸にするヴィランと手を組むことと同じこと。何故なら…ヴィランの犯罪がより危険的に上昇する

からだ。忍という自分たちとは違う存在と手を組めば、『自分たちは強くなれるんじゃないか？』『忍に頼んで人殺しの手伝いをして貰おう』などの、より犯罪的なことを犯すためだ。では忍はなぜ、悪忍という悪の存在が許されるのか…

もちろん悪忍は悪というだけあって、非道な行為をする。しかしそれは、全てが悪い方向ではなかった。例えば、世間には公表されてないヴィランへの始末や、ヴィランに紛れて情報集めをするなどといった、時にヒーローや善忍の為にもなる仕事をこなすことだってある。いわば、悪には悪でしか裁けないものがある、ということだろう。

だからこそ、伊佐奈のやり方は、忍の道に反しており、また忍の世界に新たな改革が生まれようとしているのだ。今まで守り続けてきた忍の歴史を、世界を、秩序を、壊していいはずがない。

「その為に、まず何が必要だと思う？ヴィランへの交渉…闇市場…そして忍商会…つまり…

妖魔を売るのさ…殺戮破壊兵器、ヴィランにとってこれ以上望ましいことはないだろうな…」

伊佐奈は考えたのだ。ヴィランへの関わりがダメでも、闇市場なら良いと…闇市場は本来、薬物や密猟された動物、素材など、様々なものが仕入れている。勿論…闇アイテムや、その気になれば悪忍が流通する物など……

伊佐奈は思ったのだ。そこに妖魔を売ればどうだ？と…そうすれば妖魔を使って市民や忍を殺し、自ら手を汚さずとも大金が手に入る。こちら側がやったという証拠もなければ、また責められることはないと…正に悪の権化そのものだ。

「そ、そんなこと…許されるはずが…」

「許す？誰がだ？神か？俺たちは悪だ。悪は罪が許されないからこそ、自由に動くものだろ？違うか？何事にも縛られず、自由にあることこそが悪だ。だが今はどうだ？どうして悪忍が良くて、ヴィランは良くない？なぁ、安息の地を無くし抜忍になったお前らもそう思うだろ？だからこの社会を壊し、革命を作るのさ……」

これが伊佐奈の目的だった。妖魔を売る、ヴィランが買う、使う、戦

争を起こす、忍の社会の崩壊、新たな改革。焔は旋風の言ってたことが何なのか、ようやく理解した。

これが、伊佐奈の本当の目的であり、今の蛇女が腐敗した原因だということを…

「そして、雅緋の言ってた『蛇女の誇りを取り戻す』。それについては俺も大きく賛成だ。そうすりゃあ名が膨れ上がり、蛇女のスポンサーや大企業の関係者も観に来る。そして俺の評価も大きくうなぎのぼり…上層部の人間は俺を中心に褒め称え、新たな忍の統治者となる。そこからだ…改革を作るのは…ありとあらゆる名のあるヴィランに妖魔を売り、戦争を起こし、忍の世界を崩壊に導く。そして…ここ秘立蛇女子学園にヴィランを入れる。ヴィランと悪忍の住処、拠点とする。こんな素晴らしいことはない、分かるよな？金の力で戦力なんざ幾らでも増やせるんだよ。働き次第、報酬もより良くし、金も出す。此方には莫大な金があるんでね、そして新たな改革を作り出す…つまり…

俺は悪の頂天に立ち、支配者として君臨する。それが、俺の計画だ」

伊佐奈は手を広げ、焔紅蓮隊を見つめる。そんな彼女たちは、もはや言葉が出ない。憤怒、殺意、憎悪、様々な感情が心の底から込み上げてくる。

「悪は善よりも寛大だ。どんなことがあっても拒まないんだろ？だったら俺のやってることは悪側からすりゃあ何ら問題ないはずだ。何か問題でもあるか？何が不満だ？お前らはただ俺の命令さえ聞いてればいいんだ、そうすりゃ好きなように生きることができる。まあ、反逆しようなら迷わず殺すがな。だがまた、俺の命令さえ聞いてれば安心だ……

で、だ…こうして話したうえでお前たちに改めてもう一度言おう、

焔紅蓮隊よ、俺の部下になれ」

「断る」

皆が言おうとする前に、誰よりも、まず先に言い出したのは焔だった。地べたに這いずりながらも、伊佐奈を睨み、吐き捨てるように、キッパリと断ると…

「そうか」

ドッ!!

「がッ!!?」

「「「ッ!?!」」」

なんと、伊佐奈は倒れてる焔の顔面を思いっきり足で蹴ったのだ。焔は動けないため、伊佐奈の蹴りを食らってしまう形になり、それを見た四人は焔が傷ついたことに驚く声を上げる。

「俺が折角、態々こうして出向いてお前らを部下に入れてやるっつってんのに、答えはそれか……部下にする前から使えねえとは、不良品だなこりゃ」

「うッ!ぐっ!!あっ…がぁっっ!!あっ…!」

焔の顔を何度も、何度も、虫を潰すかのように踏みにじり、蹴り続ける。焔の顔は蹴られる毎にボロボロになり、鼻の骨が折れて鼻血が

出る。
「焔さん!!」
「ちょっと!アンタやめなさいよ!!」
詠は動けなくなった焔を抱きかかえ、伊佐奈から離れさせ、未来は大切な、家族とも言える仲間を、焔を傷つけられ、怒気を孕んだ声で伊佐奈にそう言う。

「あ?」

しかし、未来の怒りに癪に障ったのか、或いは詠が焔を助けたからなのか、伊佐奈はドスの効いた黒い声を出す。
伊佐奈の黒い影が顔を包み込むかのように、殺気と怒りのオーラが放たれる。そんな伊佐奈に未来は「ひッ!?」と弱気になるも、傘を手に持ち、伊佐奈に向ける。
「貴方は……貴方だけは絶対に許しません!!!」
詠も未来と同じ気持ちなのだろう…詠の武器、轟剣ラグナロクという大剣を軽々と手に持ち、刃先を向ける。
金で人を不幸にさせる伊佐奈。今まで金持ちを恨んでた詠にとって、伊佐奈という存在は、許されるはずのない存在だ。
「何やこれ、焔さん傷つけられた時、思わず頭ん中がカーッと熱くなったな…これが感情っちゅーもんなんやな…」
日影は愛用のナイフを舌なめずりし、蛇のように鋭い目つきで伊佐奈を睨みつける。
「焔ちゃんは私たちの大切なリーダー…それを貶され、傷つけられるのは、黙って見ていられないわね…」
春花は声こそ冷たく冷静でいるが、実際はかなり怒っている。それも今まで見せたことのない春花の怒りを燃やした目つきがそれを物語っている。
蛇女子学園を自分の野望のために利用し、焔を傷つけられた四人の怒りは底知れない。だが…伊佐奈はそれを凌駕するように、黒いオーラを解き放つ。

「忍(道具)が俺に刃向かうなおこがましい…」

ズズズ…

（っ!?なんだ、これ…?!）

その圧倒的な存在感、そしてこの異常な威圧感。倒れてた焔は伊佐奈の放ったオーラに軽く身震いした。

そして、伊佐奈の灰色のコートの丈がゆらりと動き、浮き出す。まるでコートそのものが体の一部として『生きてる』かのように……どんどん膨れ上がってくるように、少しずつ大きくなっていく。

「ちょっ!何よあれ!?」

「何でしょう…どんどん大きくなっていくかのような…」

未来は伊佐奈の異変に気付き、詠は膨れ上がっていくコートを見つめる。これは一体何なのだろうか?伊佐奈の術…にしては見たことのない忍術だ。

「なんやアレ」

「なんかヤバそうね…」

日影は感情がない、そのため伊佐奈の異変に気付いたとしても、それが一体なんの意味を表すのか、日影は分からない。しかし、伊佐奈の異変に身の危険を察した春花は、額に冷や汗を垂らす。

――何か起きる前に、先に止めないと。

その考えは、四人全員が同時に一致していた。つまり、四人とも伊

佐奈を止めようと前に動いたのだ。だが伊佐奈はそんなの関係ないと言わんばかりの顔立ちだ。
「そうだな…ちょいと痛めつけてやろうか」
伊佐奈の言葉を聞いた焔は、思わず頭の中が熱くなった。いつも戦ってる時は、戦いが己を熱くし、闘争心を満たしてくれる。だが、今のその熱さとは、同じであって、違った。
「オイ…お前、何する気だ……」
すると、焔は地べたに這いずりながらも、片方の手で伊佐奈の足を鷲掴みにする。
「はあ?」
自分の足を掴まれた焔に、伊佐奈は思わず声を漏らし、鋭い目つきで睨みつける。しかし、内心は疑問を抱いていた。
(こいつ、何で動ける?俺のクリック音で動きは止めたはずだ…雅緋でさえも動けなかったんだぞ?それをこいつは一体……)
クリック音とは、エコーロケーションと呼ばれる音波の一種のことである。
動けない筈の焔に伊佐奈は眉をひそめる。焔の手から、熱が伝わる。それは闘争心によるものなのか、或いは仲間を傷つけようとした怒りから来るものなのか…
「仲間に何する気だって言ってんだよ……!!」

ズズズ…

「ッ!?」
(なっ!?こいつ……この気……!)

伊佐奈は感じた、焔の尋常なさなる気配を、怒りを、焔の強さを。伊佐奈は此処で初めて、困惑色の表情に染まった。
先ほどまで焔の顔を蹴り、頭を踏みつけてた余裕など毛頭ない。顔からは僅かながに冷や汗を垂らし、あの時伊佐奈が放った気力に、

身震いした焔と同じく、こちらも軽く身震いし、思わず足を一歩後ろに退がってしまう。何より動きを封じ、動けない筈の焔が動いてること自体、おかしいのだ。

焔は一気に起き上がり、怒りを燃やした瞳を激しく揺らがせ、三本の刀で再び伊佐奈に斬りかかる。それと同時に伊佐奈は……

ズオン!!

「なっ!?」
「これは一体…?」
「なんや?」
「なっ、ちょっ!!」

未来、詠、日影、春花も目の前の光景に驚く。しかしそれは、動けなかった焔が立ち上がり、伊佐奈を斬った光景ではなく…

灰色のコートの丈が、急に大きく膨張し、巨大な尻尾へと姿を変えたのだ。その巨大な尻尾は、人を軽々と吹き飛ばしそうな…

尻尾の先端部分は脊椎動物が持つと言われる魚類系の尾ビレになっている。しかし、その大きさは異常なまでのデカさ故、今目の前に起きてるのは錯覚か、或いは幻なのかと、大きな疑問を抱くくらいの大きさなのだ。

焔も伊佐奈の尻尾とも言えるものを目の前にしても、怯まず、畏れることなく、まっすぐ、標的を狩るかのように、三つの刃を振るう。だが、伊佐奈の攻撃が早かった。巨大な尻尾を軽々と動かし、焔だけでなく、詠、日影、未来、春花、この五人は避ける暇も隙もなく、尻尾によって大きく吹き飛ばされる。

「ちょおぉっ!?」
「なっ!?」
「くっ!」
「あかんこれ…!」

「チィッ!!クソッ!」
五人は跡形もなく、まるでホームランを打ったのかのように、成す術もなく大きく吹き飛ばされる。
それぞれがバラバラに吹き飛ばされる中、焔は詠、未来、日影、春花の順に、それぞれしっかりと見てからこう言った。
「標的は伊佐奈だ!!直ぐに蛇女に乗り込め!!」

バラバラになったなか、焔が取った行動は、集合ではなく、蛇女に乗り込むこと。焔の考え方は間違ってるだろう…ここは集合し戦力を集めてから敵の拠点に乗り込む。一般的な常識だ……
だがしかし、焔の行動は実は正しかったと言える。何故なら、標的は伊佐奈であって、他の連中とは戦う気はない、無駄な消耗は避けたい。皆が集合するまで向こうは戦力を束に重ねて来るだろう…そうすればどうなるか分からない、最悪の場合全滅する。なら、散り散りになり、行動すれば、戦力こそは減るが、全滅の危機は免れる。
蛇女に在籍している忍学生など、何千人もいる。そして更には選抜メンバーもいる。それなら、仲間たちの集合を待つよりも、先に行動し、伊佐奈を倒す。それが焔たちが今できる最善の行動だった。
戦国時代の戦争だってそうだ。敵の大将の首さえ落とせば勝負は決まるのだから。
何よりも焔は、仲間たちを信頼している。だから、託せるのだ……自分について来てくれた、大切な仲間たちを。何より焔は仲間たちを信頼してるためか、全滅なんていうことは彼女からすればあり得ない、そう信じているのだ。
(待ってろ伊佐奈……蛇女を己の野望の為に利用したお前は、絶対に許さん……!!!)

吹き飛ばされながらも、焔は伊佐奈が見えなくなる最後まで、睨みつけ、しかと目に焼き付けた。それは逆もまた然り…

「ハァ…ハァ……」
伊佐奈は顔を真っ青にし、息遣いを荒くしながら、飛ばされた焔を睨みつける。
(何だアイツ……この俺が…気圧された?あんなガキに俺が……?)
「……チッ!クソが……道具の癖して俺に刃向かいやがって……気に入らねえ……」
伊佐奈にとって忍とはただの道具。忍は大名や主の為に尽くし、命を懸けることが当たり前なのだが、伊佐奈にとって忍とは自分の利益の為に過ぎないただの道具であり、それが伊佐奈にとっての常識である。
だから、今まで命令が聞けない忍や、使えない忍は全て、伊佐奈が殺していたのだ。
それが伊佐奈という男だ。
非道で残虐な彼、しかし…忍の社会として忍の生き様は当然だ。使えなければ死ぬ、任務の失敗は死を表す。

忍の世界とは、ヒーロー世界とは違い、非常識で残酷な世界だ。

そう考えるとそんな非常識で残酷な世界に伊佐奈がいるのは、当然なのかもしれない…
(とにかく…頭をやられてたら終わりだったな……)
伊佐奈は頭に手を置き、自分の頭を撫でる。伊佐奈は頭が弱点なのかしらないが、心の中で呟き、安堵の息をつく。
「おい雅緋、俺だ。出てこい」
伊佐奈は蛇女の選抜メンバー筆頭である彼女の名を呼ぶと、数秒後、姿を現した。
「ハッ、何の御用でしょうか?」
「抜忍の焔紅蓮隊がやって来た……アイツら、俺に刃向かいやがって……」

「焔たち…」
焔紅蓮隊がやって来た事実を知った雅緋。伊佐奈の荒ぶる表情も、落ち着いて来たのか次第に冷静な顔へと変わっていく。
伊佐奈の言動は、何処か死柄木弔に似ているが、雅緋たちにとってそんなこと知ったことではない。
「本当は部下にしてやりたかったが……よし、こうなりゃもう一度チャンスをやるか……部下に引き入れそうなヤツは捕まえろ。ただし抵抗するようなら迷わず殺せ、俺の慈悲を無下に扱うヤツなんざこの世には要らん」
まるで自分を中心に世界が回ってるんだと言わんばかりの発言…
雅緋は本当は知っている。コイツがどれ程外道であり、そして…妖魔を戦争の兵器に使おうとしていることも……
雅緋にとって妖魔は天敵であり、親の仇でもある。それを戦争に使おうというのだ。

伊佐奈の目的を知ったのは、一週間前だった。何時ものように、忍の訓練についてけれなかった忍学生を、部屋に連れ行った雅緋は、ふとあることを思ったのだ。
(……そういえば、伊佐奈様は普段から何をしてるのだろうか?)
今まで他人に興味を持つことのなかった雅緋だったが、忍学生を連れて、一体何をする気なのだろうと、不自然な伊佐奈に雅緋は疑問を抱いたのだ。今までは忍専門の病院へ送っていたのかと思っていたが…
雅緋は気になって扉越しから見て見たのだ。そこで彼女は初めて驚愕な事実を目の当たりにしたのだ。
なんと、忍学生を殺してるのだ。それも、物言い表せないような残酷な光景……部屋が血の海となり、死体は壊れた人形のように倒れ、伊佐奈は何事もないかのように、その血を集めたり…
「っ!?」
目の前の光景に、雅緋は思わず母さんのことを思い出す。そして、拳を強く握りしめた。

まさかこんなことをするが為に、伊佐奈は訓練についてけれなかった忍学生を殺して来たのかと思うと、怒りのあまり意識が吹き飛びそうになる。

そして…こう言ったのだ…

「これで、妖魔を作ることができるかな」

「!!??」

雅緋は思わず声に出そうになるのを必死に堪えて、手で口を抑えつける。

――妖魔。その名を聞くだけで全身の血が滾り、騒めく。頭の中に浮かぶは、母さんの死…妖魔は本来、忍が倒す存在であり、忍が存在してる理由の一つでも上げられてる。そして妖魔が生まれるのは忍の血から生まれる膿のような存在。そこで、雅緋は分かったのだ。全て伊佐奈の目論見が…

伊佐奈が何故、訓練をより強化させたのか?それは、悪の誇りを取り戻すことではない……使えなくなった忍学生を殺して、血を集め、妖魔を作る為なのであった。前々から可笑しいとは思っていたが、この為だったとは…そして、伊佐奈はヤケに忍学生を編入したがっていた…蛇女に入りたいと願う学生は何万といる。伊佐奈は金を使って蛇女の生徒を買っているのだ。それは、数を減らさない為……蛇女の学校が数を減らし過ぎると、周りの人間からも不自然に思われてしまう。

使えなくなった忍を妖魔へ……

そう考えただけで、殺意が湧いてくる。雅緋は洗脳されてはいない、洗脳されたふりをしていたのだ。雅緋はそれについても可笑しいと思っていた。蛇女の生徒は実力云々関係なく、大名や主への忠誠心はある。だから、洗脳なんて意味がないのだ。雅緋はかけられたフリをしていたが、他はどうだか…他の者たちなど興味はない。

しかし、しかしだ……今こうしてやっと真実を目の当たりにして

思ったことがある…
このままでは、今の蛇女が崩壊するだけでなく、皆の命が…!!
ここで初めて、雅緋は他の者たちの事を考えるようになり、胸を痛め憂慮した。
ふと頭の中に、ある人物たちが浮かび上がってくる。それは父さんや母さんだけでなく…
両備、両奈、紫、そして…今まで自分を支えてくれた、幼馴染の忌夢。もしかしたら、アイツのせいで皆んな死んでしまうかもしれない。そう思うと心が裂けそうになってならない…
雅緋は黒刀を抜いた。

――蛇女や皆んなのためにも、私がアイツを斬る。

そう思った矢先だった…伊佐奈の声が扉越しから聞こえたのは。それは雅緋のことを気付いてではなく、独り言だった。しかし、その言葉が雅緋の決意を鈍らせた。

「そういえば……抜忍の焔紅蓮隊はどうしてるんだろうかな?」
「っ!?」
雅緋はその言葉を聞いて立ち止まった。焔紅蓮隊…今私たちが追っている抜忍のことだ。蛇女を貶め、守ることが出来なかった愚かな連中……だった。
「確か道元っていうクソジジイを斬ったんだっけか?アイツらには感謝しなくちゃなぁ…そのお陰で俺は出資者として計画を進めることに成功したんだからな…」
斬った?どういうことだろうか…後々から鈴音先生から知ったことなのだが、何でも道元のせいで、蛇女は崩壊してしまったらしい。妖魔を復活させた。そのため焔は抜忍になる覚悟を決めて、出資者を斬ったそうだ。因みにこれは、雅緋にしか知らない事実だった。その時は何ら分からなかったため、雅緋は関係ないと再び刀を強く握りしめたのだ。そこでふとあることを思ったのだ。

もし私が伊佐奈を斬ったらどうなる？忍は善であろうと悪であろうと、大名や主のために死力を尽くす。だが、反乱を起こせばどうなるか？……言うまでもない、焔と同じく抜忍になるだろう…それだけじゃない、お父さんはどうなる？学園長であるお父さんも、何をされるか分からない…最悪、私のせいで抜忍になることだってある。

ここでやっと分かったのだ――

――伊佐奈には絶対に逆らえない。

力こそが忍の全てだと、雅緋はそう学んできた。雪泉が悪を殲滅することが正義だと学んできたように、雅緋は忍は力こそが全てだとそう育ってきたのだ。そのキッカケは、妖魔によって殺された死んだ母だった。

それは私のせいで…母さんを死なせてしまったのだ。私がもっと強ければ、しっかりしていれば…

『雅緋、親子丼、出来たわよ…♪』

母さんは……

『雅緋、忌夢ちゃんと遊ぶ時は気をつけるのよ♪』

母さんは……!!

『雅緋！危ない!!』

ドグシャッ……!!

母さんは……!!!!!

だから誓ったのだ。妖魔を滅ぼす、それが雅緋の信念であり、力を付けるべく、強くなることを…

だが、どれだけ強くなろうとも…決して逆らうことが許されないも

のがある。それが今、扉越し…目の前に…

これが、伊佐奈という支配者。

「……」

雅緋は次第に目から大量の涙を流し、力なくその場に腰を低く落とし、座り込む。

誇りをと戻すどころか…

（私は……救うことも出来ないのか…!!）

焔が旋風に言った通り、上の人間が一人でも腐ってる人間がいるならば、組織は崩れる。そう、正しく今の蛇女はそうである。真実というものは時に残酷だ。伊佐奈の目論見を、真実を知った雅緋は、どうすることも出来なかったのだ。

例え自分が抜忍になったとし、父さんも抜忍になったとしても、蛇女が変わることは、恐らく皆無に等しいだろう……雅緋は心の底で思った。

誰か、伊佐奈を止めれるやつはいないのか……

「オイ、雅緋、どうした？」

「っ!?」

伊佐奈の声に雅緋は我に返った。いつの間にか考えごとをしてい

て、どうやらボーっとしてたらしい。「な、何でもありません…」というと、伊佐奈は「そうか、 返事くらいしろ…」と吐き捨てるようなセリフを言い放つ。
「そんでだ、焔紅蓮隊の目的は俺だ。だから、お前らがなんとかしろ……俺を守ってみせろ」
「……」
雅緋は苦しい表情を浮かべながらも、「はい」と頷くことしか出来なかった。逆らえば、死ぬか抜忍になるか…どちらにせよ救済という文字はない。
それに、正直困っているのだ。アレだけ焔たちを憎んでいたのに、今はそれほどでも無い……焔たちが道元を斬った理由を知り、そして目の前には伊佐奈という人の道を外した外道が目の前にいる…
しかし、そんなものは忍の世界では許されない。上層部の命令に聞けない忍など、伊佐奈だけでなく、他の者たちに処分されてしまう。
「雅緋、俺は良い道具(忍)を持って嬉しいよ、それじゃあ後は頼んだぞ」
伊佐奈は、ニコッと今まで見せなかった笑顔をこちらに向けてきた。その笑顔も今のとなっては腹立たしい…しかし、そんな伊佐奈の命令を、私は聞かなければならない…
私は選抜メンバーの仲間たち皆に伝えた。直ちに抜忍を処分しろと…
「焔…」
雅緋は、もうどうすることも出来なかった…ただ焔を殺すことしか…

「飛ばされてしまいましたね…」
「そうね…私たちと偶々合流できたのも、運が良かったのかもしれないわ」
　飛ばされた詠と春花は、蛇女に向かってる中、偶々合流出来たらしい。これは良かった、と二人は心の中で安堵の息をついた。
「それにしても…伊佐奈と呼ばれるあの方、私絶対に許しませんわ!!」
　焔を傷つけられ、自分たちを見下すような彼は、詠にとって一番嫌悪する存在だった。ましてや金持ちに見下され生きてきた彼女にとってはなおさら…
「そうなんだけど…私少し思ったことがあるのよね～…」
「へ？何でしょうか？」
「改革のことよ…」
　春花のその疑問を抱いた表情は、険しい顔立ちであった。
「ヴィランと悪忍と手を取り合う……普通なら考えられないことじゃない？あの道元だって、考えもしなかったんだもの……けど、伊佐奈は確かにああ言ってた…だからこそ思うのよ……
　どうしてヴィランに固執するのかって…」
「あっ、そういえば…」
　春花の言葉に、詠は納得した。伊佐奈の言葉からして、確かにヴィランの存在に固執していた。それは一体どうしてなのだろうか？ヴィランに固執する、何か理由があるのではないか…？だが考えれば考えるほどに謎は深まり、答えは出ない。
「わ、分かりませんわ…」
「そうね、考えただけ無駄だわ……考えれば少しは分かるかと思ってたんだけど…ここは焔ちゃんの言ってた通り、早く伊佐奈を倒した方が良さそうね」

　バキュン！

「ッ!?」
詠の頬に、弾丸が僅かに掠れた。落ち葉には穴が空き、詠はその弾丸を躱したつもりだったのだが、僅かに当たってしまったのだった。詠と春花は立ち止まる。銃弾の鳴った音へ方向を向け、見てみるとそこには一人の影が…
「……折角、雅緋を殺そうって、決心したのに……なんで…アンタたちが、なんで…なんでよ……」
「貴方は…?」
そこには、目に涙を浮かべながらも、スナイパーライフルを構え、詠を撃ったと言って良いだろう。ドSの両備が立っていた。
「はぁっ!」
「ッ!?」
春花の後ろには一つの気配が…避けることに成功した春花はその人物を見つめる。そこには…
「良かれ悪かれ……もう動き出した復讐の歯車は止められないんだね…」
いつものドMで変態両奈ではなく、いつになく真面目で、険しい顔立ちをした、両奈であった。
「これは…厄介そうね…」
「ええ……二人に目をつけられたとは…」
詠と春花はお互い背中を合わせる。両備と両奈…二人の姉妹、この戦いは何があっても避けられない。

「ここ何処よ〜…」

「ほな、飛ばされた方向こっちやから、思いっきし真っ直ぐ突っ走ればええんやないか？」
「そんな単純な話じゃなさそう…」
　未来と日影は一緒になって飛ばされた。此方も後は蛇女に向かうだけだ。
「にしてもあの伊佐奈ってやつ、アレどんな忍術なんやろうな？」
「日影、アレ多分忍術じゃないと思うよ…」
　日影の言葉に、未来は抗議する。アレは明らかに忍術によるものじゃない。ヒーロー学生と戦ってきたから分かる。アレは間違いない…
「伊佐奈のあの攻撃…忍術じゃなくて……個性だ…！」
　未来の言葉は正しいと言っても良い。本来忍術といっても召喚やあるいは式神、傀儡などを操るといったことであって、自ら変身することは出来ない。
　ではアレは何なのだろうか？決まってる、個性だ。しかし…だ。伊佐奈のそれが一体何の個性かまでは不明だ。尻尾を使ったのだから、恐らく雄英高校の生徒、尾白猿夫の個性「尻尾」だろう…しかし伊佐奈のそれは軽く凌駕していた。そう考えると尾白の上位互換と考えた方が良いだろう。
「個性かぁ～、ワシも個性なんて持ってないし、よう分からんわ～…」
「それアタシもだけどね……まあ、ある医療学者によると、何でも私たち忍みたいに特殊能力出せるのは、個性の影響？らしいよ？」
　焔は炎、詠は風、日影は毒、未来は呪い、春花は傀儡の操作。春花は傀儡だけでなく、薬を使って戦うこともあるが…春花は僅かならがに他人を洗脳することができるため、雄英高校普通科の心操のような感覚と考えて良いだろう。
「って！そんなこと話してる場合じゃないって！早く敵地に乗り込まないと！忍学生たちとか、選抜メンバーとかが来る前に…」
「すいません……もう…います」
「えっ!?」
　根暗な声のする方向に視線を向けると、そこには二人の人物が…紫

色の長い髪を垂らし、自分の大好きな人形、べべたんを抱きかかえてる紫。そしてその隣には、メガネをかけてるためなのか、真面目だという雰囲気が伝わって来る。雅緋の幼馴染、忌夢。しかも彼女はヤケに日影を物凄い目つきで睨みつけている。
「日影、日影だ…！ようやく僕の目の前に、あの日影が…!!ふふふ、やっと逢えた……これでお前を殺せる!!」
「なんやよう分からんけど、ごっつい睨まれてるわ、ワシなんかしたんか？」
　日影は心当たりがないらしく、首をかしげることしかできなかった。
「私の相手は…根暗で、小さくて…煩そうな人……しかも、ゴミの匂いがする……」
「はぁっ?!!ね、根暗で……小さくて……煩い……ゴミの匂いって……それ全部私なの!?アタシのことなの!?ねぇ！敵とはいえ酷くない!?……後で春花様の香水でも……って、それどころじゃない！」
　根暗、小さい、煩い、ゴミの匂いと、散々傷つくことを言われた未来は、戦う気満々だ。
「ああ…タダでさえ……『忍の家のラプンツェル』を読みたいのに……伊佐奈様に逆らったら、永遠に読めなくなっちゃう……」
「……は？今なんて……？」
　この時に至るまで知らなかった……未来はネットの小説家であり、それをいつも愛読してくれてるファンが、紫だというのを…

「クソ…大分飛ばされたな…」
　飛ばされた焔は、誰にも遭遇することなく、また誰とも一緒に飛ばされることなく、ただ一人飛ばれたのであった。焔が飛ばされた場所

は、蛇女の庭であり、修行場。その場所は、使えなくなった忍者刀や手裏剣がゴミのように置かれ、地面には血が塗られてる…

「ここは…修行場か？」

蛇女は確かに完璧に再建されていた。だから、蛇女に乗り込む時も、そびえ立つ校舎を見つめ我が校に帰って来たんだな…と何処か安らぎを感じる部分もあった。だが、それは違った。

この修行場を見ただけで分かった。この場所は、いわば地獄だ。とてもじゃないが、忍学生が受けるような修行ではないと、一目見ただけで分かった。何より焔も此処に居た時はよく修行を積んでいた。だからこそ分かるのだ……

今の蛇女は、伊佐奈によって全て狂わされ、苦しめられてるのだと…

「これが今の蛇女だと思うと…胸が痛むな……とてもじゃないが、ここはもう、蛇女じゃないぞ……」

秘立蛇女子学園は、悪忍養成機関育成学校。それぞれの事情を胸に抱きかかえ、行き場の失くした悪が集う場所……

焔はその蛇女があったお陰で、生きることが出来た。それを…こんな風にされるのは幾ら何でも許すわけにはいかない。

「その通りだ…」

「ッ!?」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこには…殺意と怒りに身を染めた、雅緋だった。この強い匂いは……雅緋のものだったのかと分かった。

「雅緋！見損なったぞ！これがお前の取り戻したかった蛇女なのか!?これがお前の望んだものか!?伊佐奈に利用され、妖魔の存在を許すなど……私は…「そんなことある訳ないだろ!!!」!?」

雅緋の激しい怒号に、焔は軽くキョトンとした。雅緋のその目からは僅かながらに涙を流し、怒りを燃やしていた。雅緋は黒刀を抜く。

「私だって…悔しいさ、伊佐奈によって全て利用され、蛇女の誇りを取り戻すどころか、狂わされ、苦しめられて……こんなことされて悔しいわけがないだろ!?」

激しい怒り、今まで冷静でクールであった彼女とは思えなかった。何よりこんな一面、他の仲間たちにすら見せていなかったのだから…

「だが、他にどうすることも出来ないんだ!!逆らえば、学園長である父さんは私のせいで立場を無くし、抜忍になる……私一人なら何とかなるさ…だが、それでも蛇女はどうなる!?」

雅緋の言ってることに、焔はようやく理解した。雅緋は雅緋で苦しんでいたのだと…洗脳を受けていた。と旋風から聞いていたが、どうやら雅緋はそうでもないらしい…

「何より、抜忍のお前らが、偉そうに蛇女を語るな…!!私は…お前を倒す…」

そして、黒刀の刃を焔に向ける。

「雅緋…」

戦いを避けることが出来ない。それを知った焔は、六つの刀を抜き取る。

62話「復讐に染まった姉妹」

焔紅蓮隊が攻めてくる前のこと、両備と両奈は焔達の戦いに準備を整えながら、ある計画を進めていた。

「良い両奈、焔紅蓮隊が攻めに来て、無事生き残ることができたら……やることはもう分かってるわよね？」

「わかってるよ両備ちゃん。両備ちゃんが雅緋ちゃんを、両奈ちゃんが忌夢ちゃんを殺るんだよね…？」

「そうよ」と両備はこくりと頷いた。二人のその目には、雅緋たちへの友情という文字はなく、寧ろ殺意剥き出しの復讐の色に染まっていた。

両備と両奈は、復讐の為か、雅緋を殺そうとしている。同じ選抜メンバーでありながら…では何故、両備と両奈は選抜メンバー筆頭である雅緋を殺そうとするのか？復讐とは一体？それは、過去の話になる…

両備と両奈には姉がいた。その名も両姫。とても美しく、爽やかで、幸せな笑顔で満ち溢れている、優しいお姉ちゃん。

両親は元は善忍だったが早く亡くしてしてしてしまった。しかし両親の記憶がない為、物心付く前に、事故で亡くなってしまったらしい。それでも、不満はなかったし寂しくなかった…両備と両奈の面倒を見てくれたのが、５歳年上の両姫お姉ちゃんだ。

お姉ちゃんはとても面倒見がよく、家事や洗濯、ご飯の支度など、自分のことは全て後回しにして、両備と両奈の面倒をよく見てくれた。

とても優しかった、そんなお姉ちゃんが大好きだった。だから、挑戦させてほしいという言葉を聞いて、二人は首を横に振らず、満面な笑みで縦に頷いた。

『挑戦させてほしい』というその言葉のその意味は、忍になりたいことだった。

両親と同じ善忍としての道を歩む、それが両姫の願いであり、夢で

あった。勿論お姉ちゃんが大好きな二人は、反対するわけがなかった。今まで自分のことを後回しにし、夜遅くまでバイトをし、二人に勉強を教えてくれた、母親とも言えるべき両姫の願いを反対するなど、あるわけがない。

寧ろ大好きなお姉ちゃんの夢をいつも応援していた。おやつの時間が月に一回になっても良い、両姫は自分の道を歩んでほしい。

それが、二人の願いだった。そしてその夢が、ようやく叶ったのだ。

そしてお姉ちゃんの選んだ道が、死塾月閃女学館。それが両姫が忍になる善忍養成機関育成学校であった。

半蔵学院とは違い忍学生のみのエリート学校。両姫がその道に進めたことは、何よりも嬉しかった。喜びのあまり、二人で抱き合ったこともあった。

そして帰って来た両姫に思いっきり抱きしめた。

おめでとう、お姉ちゃん。

大好きだよ、お姉ちゃん。

二人は両姫にそう言った。この気持ちを、言えずにはいられなかったから、この嬉しさを、この大好きな気持ちを……

その気持ちに、両姫は余りの嬉しさに涙を流して、二人の頭を優しく撫でてあげた。世界一優しいお姉ちゃん…

だから、雅緋だけは許せなかった。両姫お姉ちゃんを殺した雅緋だけは絶対に……

ある日、お姉ちゃんの帰りがヤケに遅いので、二人は心配して帰りを待っていた。昨日の夜、お姉ちゃんは言ってた。明日の帰りはかなり遅くなるから待っててね。と…

忍はヒーローと同じみたいで、遅くなることが多いらしい。なんでも、大事な任務があるからだとか……

玄関からドアのノックの音と同時にチャイムが鳴った。
二人はやっと帰って来た！と、目を輝かせ玄関に走って行った。しかし、だ…
何か引っかかる、何かおかしい……何だろうこの違和感……
これは、お姉ちゃんか？もし、お姉ちゃんなら、ドアのノックなんてしないし、まずチャイムも鳴らさない。鍵を使って開けば良い話。あのしっかりものの両姫お姉ちゃんが忘れ物なんてしないし、忘れ物なんて一回もしない……仮に忘れていたとしても、普通なら開けてと言えば良いだけの話である。だが、玄関の扉から聞こえてくるのは激しいドアを叩く音、チャイム音…これは、両姫お姉ちゃんじゃない……
一向に止まないチャイムとノックの二つの音の嵐に二人は段々怖くなっていき、体が震えた。

これはもしかして…敵（ヴィラン）？

敵（ヴィラン）は外で暴れるだけでなく、人の家に急に入って来て、なんの理由もなく人を殺すことがあるため、両備と両奈は思わずヴィランだと思い、恐怖を感じた。
どうしよう…どうしたら良いんだろう……こんなに怖いと思ったのは三人で夜遅い時間にホラー番組を観た時以来だ。
これが、お姉ちゃんなら……
だがその恐怖も、扉越しの声によって消される。

『すみませ～ん！両姫のご家族の方はいますか～？』

「「!?」」
この声は…と、二人は体の震えが一瞬で収まった。聞き覚えのない声、だが…この声の主は少なからずヴィランでないことが判明した。なぜなら、その声の主は両姫と呼んだからだ。お姉ちゃんの両姫という名前は忍名であり、知ってるのは身内の人だけである。だから、知

らない人がその名前を知ってるわけがないのだ。
二人は勢いよく玄関の方へ走って行った。本当はお姉ちゃんから留守番してる間、チャイムが鳴っても決して開けないでね。と、言いつけられてるが、今はそんな事ではないと二人は直感で判断し勢いよく玄関のドアを開けた。
そこには、見知らぬ大人……幼い子供の二人には分からなかったが、その姿は忍装束というものを身に纏った上忍の大人が何人かいたのだ。悪忍…という訳ではなさそうだ…二人は首をかしげると「おお、この二人は間違いない…」「ああ、両姫さんの…」と深刻そうな顔で大人たちは顔を見合わせた。
恐怖から疑問へと一転した二人は、何のことかわからず、ただ首をかしげることしかできなかった。
「あの…両姫お姉ちゃんのこと言ってますが……両備たちに何か用でしょうか？」
礼儀正しく質問すると、大人たちは両備たちを見てようやく此方に体を向けた。何か嫌な予感がする…だって、両姫お姉ちゃんのことを知ってるのに、姉の姿が見受けられない。何かあったのか……
両備と両奈は恐怖から疑問へと一転し、更に嫌な予感を感知した。

そして、その予想が的中した。

なんと、両姫お姉ちゃんは目を閉じたまま、目覚めなくなってしまった。冷たい白い肌。閉じた瞼、動かない唇、そう…両姫は亡骸となってしまったのだ……

それを目の前で見た両備と両奈は、信じられなかった。
うそだ、ウソだ、嘘だ。

こんなこと、ある訳がない…だって、そんな……

二人は言葉が出なかった。それと同時に、二人は段々と、姉の死の

現実に目の前が真っ暗になった。

そして……

「う、うあぁ……お姉……ちゃん……」

「いやあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

二人は大声を出して泣き出した。どの位泣いただろうか、一日中泣き止むまでずっと泣いてただろう…

目は赤く腫れ、涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃになった……

葬式の時は泣かないようにと表には出さなかったが、心の中は悲しみに満ち溢れ、人気のないところでは二人とも顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

この悲しみは永遠に晴れることはないだろう……

悪いのはアイツだ……優しいお姉ちゃんを殺した雅緋が悪いんだ。

両備と両奈はあの後、月閃の教師である王牌先生から事実を聞いた。

どうやら深淵結界という禁術を使った雅緋が暴走してしまい、姉を殺したとか…

それを聞いた両備と両奈の心には、良からぬ感情が芽生えた。それは、両姫が生きていた頃には無かった感情……

憎悪を募らせた、復讐という感情……

復讐しよう。雅緋を殺してやろう、だが…ただ殺すだけではない……雅緋には死以上の辛い思いをさせてやろう……そう、雅緋が夢を叶えたその直後、夢を叶えた喜びから、絶望という地獄のどん底に叩き落としてやろう。その為には秘立蛇女子学園に入り、雅緋に近づけなければならなかった。

その為、両姫お姉ちゃんがいた善忍学校、死塾月閃女学館から離れなければならなかったのだ……だから、何も言わずに雪泉たちと別れ

た。
　正直言って、雪泉たちと一緒にいるのは嬉しかった。楽しかった。悪の殲滅…という言葉を除いて……
　悪の殲滅、その言葉を聞くと何故か知らないがムズムズするのだ…この言葉では言い表せないようなこの気持ち、なんて言えばいいのか分からない。少なからず鬱陶しいと思ったことは何度もある。まあ、事情が事情なので仕方ないが……だから楽しかった仲間たちと別れるのは、胸が痛んだ。
　月閃から離れた両備と両奈は姉の復讐をする為に蛇女に転入した。そこから、信頼させる為に手合わせしたり、敵連合と漆月の詮索活動をしたり、そして半蔵学院に立ち向かい、雄英高校の生徒たちとも戦った。両備からして特に爆豪に対しては苛立ちの余り殺してやりたいという位、怒りが頂点に達したが……
　だが、復讐の為とは言えど少なからず雅緋と一緒に過ごした時間は本物だ。そこには嘘偽りないし、自分でもそれは認める…
　何より生と死を分けた戦場のなかで、共に生き抜き戦ってきたのだから……
　そこには確かに絆はあったのかもしれない……だが、忘れるな。相手は姉を殺したヤツだ。復讐するんだ、殺すんだ……二人は雅緋を恨みながら、武器の手入れをする。
　そして、両備と両奈は顔を見合わせ、頷いたその途端…

「両備、両奈、こんな所にいたか」
「!?」
　ここに居るはずのない声に、聞き慣れた声に、両備と両奈は驚き、声に出すのを堪えて後ろを振り向く。するとそこには、凛とした表情を浮かべる鈴音先生が立っていた。二人は「なんだ…」と声に出さず心の中の隅っこで呟いた。もしこれが雅緋だったら声を上げてパニックになる所だった。
「す、鈴音先生…どうしたんですか?」
「焔紅蓮隊がもう時期此処に来ると聞いてな、お前たちの様子を見に

きたんだが……準備は怠ってないようだな」
「は、はい…」
鈴音先生の言葉に二人は浮かない表情を立たせながら、曖昧な返事をした。ハッキリ言って鈴音先生の前では流石に気まずい、この人は蛇女の担任の先生であり、両備たちを鍛え上げてくれた。それは両備や両奈だけでなく、雅緋だってそうだ。
両備と両奈は先生には感謝してる。先生の指導は厳しく、時には死にかけることも多々あったが、それでも此処まで生きていられるのは、雅緋への復讐心だけでなく、先生の教育と訓練のお陰であったのだ。今は伊佐奈が訓練をより厳しくしたため、ついていけれなかった忍学生は多く存在するが……
鈴音先生が訓練を厳しくするのは、愛情を持ってだろう…だって、鈴音先生は厳しい一面はあるが、とても生徒思いであり、根は良い人なのだ。それは元・善忍のためなのか……今は何故か悪忍となって教師を努めてるらしい…理由は分からないが。
だからこそ、気不味く思うのだ。二人は、鈴音先生が最も大切に、親しみを込めてる生徒を、自分たちの仲間として行動して赴いた雅緋を、殺そうとしているのを……
「どうだ、雅緋がどんなヤツか分かってきただろう…」
「……」
「え、ええ…そうですね…」

その言葉に、二人は冷や汗を垂らしながら目そらす。両奈は無言で視線を逸らし、両備は目を細め、気まずそうに、そう答えた。
正直言って復讐心に囚われてた為なのか、雅緋のことなど余りよく知らない。ただリーダー的な存在で、胸さえなければ完璧に美男と間違えられてしまう程のイケメンで、あとは悪の誇りを取り戻す為しか頭に入ってない……二人はそんな風に思っていた。事実、本当にそれしか知らないのだから。
「それなら良かった…流石は選抜メンバーであるだけのことはあるな……お前たちも辛かったろうな…雅緋一人に、辛いことを任せて…」

「…えっ？」
「辛い…こと？」
両備と両奈は目をまん丸として鈴音の言葉を疑った。
辛いこと…？自分で言うのもなんだが、アレだけ自己中だった雅緋が、辛いことがあるだと？記憶の中では余りそういう表情は出してなかったので分からなかったが…
「伊佐奈、アイツの行動は雅緋だけでなく私も知っている……」
「えっ？ちょっ、なんの話ですか？」
「ん？なんだ、お前達まさか聞いてないのか…？伊佐奈のことを…」

そして両備と両奈はここで初めて伊佐奈の野望について知ることになる。
伊佐奈は莫大なる金を使って蛇女の生徒を編入させ、使えなくなった忍を殺し、その血を集め兵器を作ってることを、戦争を起こし、忍の社会を崩壊し、蛇女子学園を自分の根城にし新たな改革を築け上げようとしてるのを…
雅緋は、それを一人で何とかしようと、悩みを抱えて生きてきたのだ。雅緋が他人に話さなかったのは、もしかしたら、他の者たちを巻き込ませたくない為だったのかもしれない…もしそうなれば、伊佐奈に反逆しようとする者が出てきて、その者はなす術もなく殺される危険がある、或いは抜忍となってしまうからか……何方にせよ、救済という文字はないだろう…
「そんな……アイツが……」
「くぅ～ん…雅緋ちゃんが、そんなこと…」
自分たちですら気付かなかった…復讐心に囚われてる余り、雅緋どころか蛇女の現状すら見えていなかったなんて…
復讐の為に蛇女に転入したとはいえ、周りすら見えていなかったことに、自分たちは心の中で反省する。
「でも、何で鈴音先生はそれを知ってて伊佐奈さ…伊佐奈を止めなかったのですか？」と、聞くと、鈴音先生は何でもそのことを上層部に伝える為に言わなかったそうだ。上層部は伊佐奈には少し目を付

けていたらしく、鈴音に依頼したそうだ。伊佐奈の行動に調査をしろとのこと…しかし伊佐奈は下忍ならまだしも、上忍や選抜メンバー、そして鈴音には用心深かいそうだ。その為、中々調査が捗らず、手を焼いていたとか、大切な生徒を殺されたことに、鈴音も本当は怒りを燃やしていたのだ。しかし、忍の任務は私怨で動いてはいけない。それが忍の世界だ、その為鈴音先生の行動は流石と言って良いほどだろう。

だが、衝撃の真実はこれからだった。

「まあ良いだろう……でだ、本題はここからだ。お前達に話しておくべきことがある」

「話しておくべきこと？」

「ああ、お前達の姉、両姫の死についてだ」

「お姉ちゃんの…？」

「両姫は雅緋に殺されたのではない…妖魔に殺されたのだ」

「妖魔…？何ですかソレは…？」

「伊佐奈が作ってる戦争兵器とも言える化け物だ」

「……は？」

妖魔。そのことについては今ここで初めて聞いた……そんな二人は愕然としていた。

いや、二人は今の会話に完璧についてけれてない。

両備と両奈の聞いた話では、雅緋が両姫を殺した。確かにそう噂を聞いたし、月閃に入って王牌先生にもちゃんと聞いた。

しかし、鈴音先生はこう言った。

両姫を殺したのは雅緋ではなく、妖魔という得体の知れない化け物であり、また伊佐奈が造っていると言われるもの……

話が矛盾しているではないか…と二人は思うものの、鈴音の言葉にその考えはなくなる。

「どうして暴走してしまったのかを、雅緋は深淵血塊や妖魔についてその理由をお前達に話したか？」

「い、いえ…聞いてません……」

「任務の現場に突然、妖魔という化け物が現れて、善忍も悪忍も関係なく殺されていった……そこで、雅緋は自らの命を省みず、深淵血塊というリスクの大きい禁術を発動して妖魔と戦ったのだ」
「……待って、それじゃあ…雅緋ちゃんが暴走した時には、両姫お姉ちゃんは既に…妖魔ってのに殺されたの？」
「そうだ…」
「そんなの嘘よ！」
　鈴音の告発した真実に、両奈はおそる恐る表情を曇らせ、両備はその真実を否定する。
「そんなの…嘘に決まってる!!そんな話し、信じられないわ！だって、私たちが聞いた話に全員、雅緋が殺したって言ってたんですよ!?それなのに何をそんな……そもそも、どうして鈴音先生がその話を知ってるのですか?!」
「雅緋が封印した記憶を知るために、催眠療法を行ったことがあるからだ」
　催眠療法とは、ヒプノセラピーと呼ばれており、最新の心理療法の一つとして取り上げられている。
　普段人が閉じている潜在意識の扉を開け、その中に眠る膨大な記憶の中から、必要な記憶をすくい上げ、問題解決や自己成長といったものへ繋げる心理療法である。
　一般的に使われてる所もあるらしいが、忍の扱う心理療法、催眠療法は一般人とは並が違う。
「なら……どうして、どうしてそんな大事な話を早く言ってくれなかったんですか!?」
「伝えれば、お前達は直ぐにでも妖魔へ駆けつけに向かっただろうからな」
　鈴音の言ってることはごもっともだ…それで自分たち二人はこうして雅緋へ復讐する為に蛇女にやって来たのだから、否定は出来なかった。
「そもそも妖魔のことは忍学校を卒業した者にしか教えられない決まりになっているのだ。未熟な忍を、妖魔へ向かせるわけには行かない

からな…」
　もし、未熟なままの両備と両奈が妖魔に会ったとしよう、結果は見えなくもない…言い表せないような残酷な死を迎えるだろう……
　なんでも、妖魔は忍の血によって生み出されたモンスターなのだから…
「どうして、そんな話を…今ここでするんですか…!!?」
　両備の言い分は尤もだ。今ここで話さなくても…違う時に話せば良い。鈴音先生は復讐のことなど知らないハズ…
「伊佐奈がもう時期戦争を始めようとしてるからだ…妖魔を世界中に売ってな」
「なっ…!?」
　そう、伊佐奈は妖魔をヴィランや闇組織、裏社会に売り込もうとしている。鈴音先生の調べによると、伊佐奈はもう時期各国に妖魔をばら撒き、戦争を起こし、新たな改革を築き上げようとしているのだ。
　その為、どうしても両備たちに知らせておきたかったのだ。
「選抜メンバーのお前たちにだけ伝えている。他の下忍たちにこのことは伝えれないからな……」
　そんな…嘘だ……
　じゃあ、自分たちの今まで信じて来た道は?復讐は?全て無意味だったのか?
　今まで雅緋を殺したいとどれほど思ったか…自分たちの姉を殺したヤツが目の前で、ヘラヘラとしているのを見て、湧き上がる殺意を抑え付け、どれ程我慢したことか……
「……嘘だ……今更そんな話し…絶対に信じない……信じるものか……!」
　だが両備は信じるわけにはいかなかった。今の両備たちの生きる道は、復讐という道…仲間を殺し、その後誰かに殺されても別に文句はない…だって、それが自分の生きる目標なのだから……そうやって今まで生きて来た。
　だが鈴音先生の言葉に、今まで信じてた真実が嘘だと知り、両備たちはただただ苦悩するしかなかった。

「仮にそうだとしても……もう手遅れなんだ……!!後戻り出来ないんだ!!」

両備は憤慨し、目には涙を浮かべた。今更誰かにそんなこと言われても信じない。だって、両姫を殺したのは雅緋なんだ…雅緋なんだ……!!

それを、変えられることは出来ない……もう遅いんだ……

両備はその場を去るように、思いっきり走り出した。

「あっ!待って両備ちゃん!」

その後ろ姿を、跡を追うように、両奈は妹の背中を見つめ、走り出す。

「はぁ……はぁ……」

両備は走り疲れたのだろうか、息を切らして汗を垂らす。頭の中がごちゃ混ぜになってるためか、或いは先ほどの真実がよほど衝撃だった為か、両備の目には大きな迷いが見える。

もし、本当に妖魔という化け物が殺したとしよう…当然普通なら復讐相手は妖魔という化け物になる……だがしかし、妖魔は鈴音先生から聞いたのが初めてである為、遭遇したことがない。まぁ、先ほど鈴音先生からの話からして当然なのだが……

では、この復讐はどうすれば良い？普通の周りの人間から見てすれば…『物騒だな、そんなことやめちまえ』『復讐なんてしても良いことは何もない』口を開けば皆んなそればっかだろう……何も知らないくせに、自分たちの大切なものを奪われ、残された人間の気持ちなどいざ知らずに……

「両備ちゃん!!」

後ろから両奈の呼び声が聞こえた。今まで一心不乱に走っていた為気づかなかったが跡をついて来たらしい…両備は両奈に視線を移すと、両奈も自分と同じく迷いが見える。

本当にどうすれば良いのか…と。

ううん、本当は分かってる……復讐の道に進み、自らの命を落すことなど、お姉ちゃんが望んでるわけないって…でも、どうしてもこの怒りを抑えつけるわけにはいかない……

本当は分かってるんだ……姉の仇、復讐するべき存在は雅緋ではなく、妖魔ということを……

伊佐奈は何でもその姉の仇である妖魔をばら撒こうとしてるらしい。そんなことをすれば、自分と同じ境遇を持つ者や、雪泉たちのような悲しみを生むだろう……

だが、雅緋を殺す。と決めてしまった復讐の呪縛が、それを許さない。雅緋を殺せと言っている。

「両備たちは……どうすれば良いのよ……」

もう何もかもが滅茶苦茶だ……

両備と両奈が涙を流してる時、見知らぬ二人の不慣れな声が聞こえた。

（…なに？この声は……）
だが、何処か聞いたことのある声…両備と両奈は頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら、木々を潜り抜けると、そこには…焔紅蓮隊の抜忍、詠と春花の姿だった。
「!?」
両備と両奈は、思わず叫びそうになる声を手で抑えつけた。
抜忍…？そんな……そう言えば焔紅蓮隊が来ることは、先ほど鈴音先生と話していてすっかり忘れていた。
（そう言えば……もう時期来る頃だって、鈴音先生が来る前に雅緋が言ってたけど……何でよりによってこのタイミングで…!!）
良かれ悪かれ、遅かれ早かれ、時はやって来る。両備は思わず最悪な遭遇に心を痛める。出来ればこの気持ちを何とかしたい、更に言えば雅緋に復讐したい。だから今は抜忍狩りとか、そんなことする暇などない……
だが、もしここで退いたとしよう…伊佐奈に殺される確率がある。伊佐奈はよく言っていた、俺の命令に従えないヤツは殺す。と……何より抜忍狩りをする理由は、雅緋の夢を叶えたところで、彼女を殺し、夢を叶えてから地獄の底へ落っとこす。姉の苦しみを分からせるためにやるだけであって、真実を知った今、そんな気乗りではなかったのだ。
「……両備ちゃん…」
両奈は目を細め、訝しげにあの二人を見やる。両奈はなにをすべきかを理解している。両備も腹をくくるしかなかった。
（……作戦通り…なんて言わないけど……）
両備と両奈の作戦は、抜忍の誰か一人でも倒すことが出来たら、後は雅緋の所へ行き、抜忍を倒したところでトドメを刺す。という作戦だった。
だが今はもう作戦もクソもない…自分がやるべきことは、使命を全うする……
そのために、抜忍を処分する。

そして、両備は引き金を引いた……

もう回り始めた復讐の歯車は、止められない。

そして現在に至った訳だ。
両備は詠に銃口を向け、詠は重々しい大剣を手に持ち構える。
「ここは私に任せて、春花さんは…！」
「ええ、分かってるわ！私はこの子と遊ばなきゃいけないみたいだし…！」
春花も同じく、詠と両備と同じように、両奈はトリガーの二丁拳銃を手に持ち、春花は傀儡衆で購入した最新型の傀儡を使う。木製ではなく、サイバー感ある機会型だ。
一見何ともないように見えるその傀儡には、色んな武器を所持している。

「そうはさせない！」
だが両備は、スナイパーライフルで春花を撃つべく、背中目掛けて銃弾を飛ばした。当然背中を向けてる春花は反応が取れるわけがなく、避けることは出来ない……しかし、その弾が春花の背中に直撃することはなかった。その代わり、その弾は…
「ッ!!」
「え？」
詠の肩に直撃した。
春花を庇うべく、詠は身を呈して背中を預けてる仲間を庇ったのだ。詠の肩から、赤い血が流れ、上半身の緑の安っぽいジャージに、赤く鮮明な血が広がるように染み込む。
「なっ…んで…？」
「詠ちゃん！」
両備は詠の行動に理解できず、春花は撃たれ痛みに苦しむ表情を浮かべる詠を心配する。
「だ、大丈夫ですわこれ位……お気になさらず、それより春花さんは…」
春花は振り向くと、両奈が二丁拳銃で襲いかかって来た。春花は咄嗟に傀儡を使って盾にし防御して、両奈の攻撃を防いだ。
春花は詠を信じて両奈と対峙する。詠は肩から来る痛みを堪えながらも、闘志を宿した目で両備を睨みつける。
「さぁ、やりましょう…!!」
「……」
詠の覇気のある声に、両備は黙っていた。ただそれは…詠の気力に気圧された訳ではなく、あることに気付いたからだ…
「……仲間のために、身を呈して自分を犠牲にするとは……
本当に腹が立つ」
嫌味ったらしいものでも見てるのか、詠の行動に両備は思わず声を漏らした。
「どうしてですの？仲間を思いやるのがいけないのですか？」

両備の言葉を聞いた詠は抗議する。仲間を思いやることに、苛立つ両備に詠はそう言った。
「そうよ…本当にタチが悪いわ！あなたは自分のことなど省みず、人に優しく接するのでしょう…!?」
「…ッ」
何故それを？とまでは言わなかった。実際自分では言わないため頷くことは出来なかったが、詠は他人には優しい人だ。特に貧民街で恵まれない子供達になど、蛇女にいた頃は寄付をしていた。
それだけでなく、詠は仲間を大切に思いやる根の良い子だ。だから両備の言葉は間違っていない。
「そうやって、突然目の前からいなくなるのよ！残された人間の気持ちも考えずに!!そんなの勝手すぎると思わないの!?」
「……あなた、一体誰のことを言ってますの…？」
詠には分からない…両備の言ってるその人が、大好きな両姫お姉ちゃんの事だということを……
「うるさい…うるさい五月蝿い!!」
ごちゃついてるなか、自分自身訳が分からなくなってしまい、どうすることも出来なくなっていた。無理やり心に復讐を抑えつけ、抜忍を狩ろうとするも、目の前には…

「お前を見てると、お姉ちゃんのことを思い出す……!!」

両姫とそっくりな詠。
「お姉ちゃん…？伊佐奈に洗脳されても、家族のことはちゃんと覚えてるんですね」
「クソッ！黙れ!!だまれ黙れ黙れ!!!!」
心の底から湧き上がる怒りを露わにし、拳を強く握りしめる。
やっと決心したのに、自分の目の前にはお姉ちゃんに似ている詠がいる。両備の目から一筋の涙が流れた。
「……お前だ、お前が悪い……お姉ちゃんを思い出させるお前が……憎くてどうしようもない!!

お姉ちゃんを思い出させるお前は、今日ここで始末する!!」
お姉ちゃんが大好きだからこそ、死んだ悲しみは大きい。
お姉ちゃんを思い出させると同時に、今の両備は悲しみを生み出すのと同じこと…

復讐に焦がれた姉妹は、復讐から暴走へと変わった。
そんな両備に、詠は無言で彼女をジッと見つめていた。
「…なるほど、事情は分かりました。何やら訳ありのようですね…」
「分かりました、行き場のない思いなら…私が全力で受け止めてあげましょう!」
暴走する復讐心、回り始めた歯車を、詠は全力で受け止めるべく、両備に刃先を向けた。

そして天守閣の中、伊佐奈は自分の部屋に戻り、窓越しから皆の闘いを見下ろしていた。
「とっとと働け雑魚共…」

63話「復讐、終末の日」

「「忍・転身！」」
　詠と両備、二人はお互い忍転身を行い、光が彼女たちを包み込み、忍装束を身に纏う。詠の忍転身は変わりはないが、両備の忍転身は相変わらずと言ったところか、胸がデカくなる。彼女の秘伝忍法は、他の忍とは違ってある意味特殊な部類に入るだろう。ただ、また逆に言えば、胸さえなくなれば未来と同じ貧乳のままの忍転身…つまり、胸がデカくなるというだけでこれと言った効果がないのだ。両備からすれば自己満足である（ただし忍転身を解いた場合、胸がなくなる虚しさもある）が、他の者から見れば大したことはない、つまり、爆乳を持つ者にとって、胸とは飾りであり設定なのである。
「死ね！消えろ！」
　両備の口の悪さはドSの性格で元々だが、今の両備はその類とは違い、レベルを超えている。怒りと復讐のせいか、口調は以前よりも荒ぶっている。
　両備は引き金を引き、複数の銃声が鳴り、複数の銃弾が詠に襲いかかる。この一つの銃弾を詠は食らってしまい、肩から血が流れ出たのだ。もしこの銃弾を全て食らったらひとたまりも無いだろう……
「甘いですわ！」
　しかし詠は銃弾ごときでやられる程ヤワでもないし、そう簡単に死なないし殺される訳がない。詠は大剣を盾にするかのように、防御態勢、ガードしながら且つ両備に接近する。大剣によって簡単に弾かれ、ガキィンと金属音が鳴っては火花散る。
　スナイパーとは遠距離戦であり、近距離戦では向いていない…ましてや詠みたいに、攻撃と防御を両立するスタイルなら尚更だ。詠の武器は重々しく、凶器でもあるが、こうして自身を守る武器としても扱うことが出来る。その為、両備にとって詠とは相性が悪いのだ…
（詰みましたわね…直ぐに終わらせてあげましょう……!!）
　詠の武器は、切島流で言う最強の剣にも盾にもなれる。と言った感じか、段々と両備との距離が縮まっていく。

「なんて思ってるんでしょ？」
「!?!」
しかし、それはあくまで相手が一般人、または下忍の狙撃手の話。両備にはまだ手がある。それは…
「秘伝忍法！」
秘伝忍法という必殺技の手を――
「【リコチェットプレリュード】!!」
詠と丁度同じくらいの前方の横一列に機雷を放ち、両備はニヤリと微笑むと射撃する。射撃をしたと同時に機雷が爆発する。その位置と、爆破の威力を考えれば当然わかると思うが、防御をしてた詠は当然避けれるはずがない。
（くっ…！これだと…この威力は恐らくは盾にしても耐えきれないはず……）
詠の額から脂汗が流れる。その嫌な予感は、予想を外れることなく的中した。
射撃と爆風という最悪なコンボが詠に襲いかかる。
ダメ元で大剣を盾にするも耐え凌ぐことが出来ず、爆破の威力に負けダメージを食らった。
「キャアアァ!!」
痛々しい声を上げながら、詠は態勢を崩してしまう。
両備の放った機雷は見た目より範囲が広い為、守るにしても予想出来ないので防ぐのは困難であり、ほぼ皆無に等しいだろう。
因みにリコチェットという意味は『跳弾』の意味であり、プレリュードは『前奏曲』という意味…つまり、リコチェットプレリュードとは『跳弾の前奏曲』という意味だ、正にその名に相応しい秘伝忍法である。
銃は剣より強し――正にこのこと。

詠は大剣を杖代わりにして立ち上がる。その姿は両備の秘伝忍法によるものの為か、衣装が爆破で汚れてしまった。多少焦げてる部分が見受けられる。
「あらあら、折角の高級そうな服が汚れちゃったわね？」
両備は何時ものようなＳっ気のある嫌味ったらしいセリフを詠に放つものの、詠は顔色一つ変えない。確かに見た目からしてみれば忍装束を身に纏った詠のこの衣装は、気品溢れるお嬢様と思われても仕方ないだろう…一切汚れのない清廉潔白なその姿は、とても魅力があり、美しいとも言えよう。
しかし両備は知らない。詠が貧民街育ちであり、お金など一切ないということを…それを知らずに両備は嫌味を言ったのである。
「まあ、死ぬからどっちにしろ意味ないけど！」
両備は再び銃弾を撃つ。銃弾の嵐が詠に襲いかかるも詠は先ほどと同じく防御の体制に入る。正直防御態勢に入れば両備の思惑通りになってしまう。もし両備に近づいたとしよう、そうすればまた先ほどと同じように秘伝忍法を食らってしまう。
秘伝忍法とはゲームで言うような必殺技のようでもあるが、ＭＰみたいに精神力の消費もある。そのため相手の方が先に秘伝忍法を使えなくなれば勝機はあるものの、果たして本当にそれが出来るであろうか？
もし、その前に自分の体力が尽きてしまえば？両備とは一年差が違うとは言え立派な選抜メンバー、ましてや伊佐奈の厳しい訓練についてきただけあり強くなっている。弾ギレを待つにしても無駄だろう…両備の弾は実弾、と言えば違うだろうが、忍術によるもの……未来の呪いの弾丸と同じ、そのため弾ギレというものはないのだ。流石は選抜メンバーに入るだけの実力は備わっており、伊佐奈が認めた忍学生なだけはある。
（やられっぱなしではいけませんね……ならばこちらも反撃と行きましょう…！）
大剣を地面に突き刺す。両備は何をするのだろうと疑問を持ち、撃

つのをやめた。何か仕掛けてくる気だ…両備は警戒心を緩むことなく武器を構える。
そして詠は突き刺した大剣の前に素早く移動し
「秘伝忍法！【ニヴルヘイム】!!」
両腕からボウガンやら大砲やらを発射させる。先ほどの銃弾の嵐に負けない詠のこの秘伝忍法もまた、両備と同じく遠距離戦として大きく優れている。
鉄球やら刃物やらが飛び、両備は負けじと銃弾を撃つも、攻撃を受けてしまう形になる。
「ッッああ!!クッ…そぉ!!」
両備は傷だらけになりながらも、攻撃を防ぐのがダメなら回避の選択肢を選ぶ。なんとか避けるもその結果…
「いいえ、させません」
詠は最後に爆弾をを放り投げ、その爆弾が爆破し両備は防ぐことも避けることも叶わず爆弾ももろに食らうことになってしまった。
「ガァッは!?　こんの…!!」
両備も詠と同じようにボロボロになり、忍装束に刃物によって傷つけられたキレ目やら爆発の汚れやらが見受けられる。そのため多少ダメージは効いてるようだ。
「さぁ、お覚悟！」
詠は両備が今、攻撃してない時を隙と捉え判断し、走り出し、剣を振るう。勿論殺す気はない。詠にとって、殺す気のない戦いは初めてであり、相手が蛇女の伊佐奈以外誰であろうと殺したくなかった。
何故なら、詠はこの秘立蛇女子学園という自分を育ててくれた母校と、伊佐奈によって支配されてる忍学生、そして復讐によって暴走し、全てが狂ってしまった両備を救けるために、詠は今ここで戦ってるのだ。
忍からすれば、『甘い』『忍としてなってない』『忍になる資格はない』『滑稽だな』と罵声を浴びられるだろう……しかし、詠にとってそんなのどうでも良かった。何故なら――
「秘伝忍法！」

「!?」
と、ここで剣を振るわれる前に、両備は秘伝忍法を使う。
「【８つのメヌエット】!!」
自身の周囲に６つの機雷が落下し、爆発。自身には爆発が巻き込むことなく、相手にのみダメージを与えれるという物理法則もへったくれもないうえに、自分だけダメージを食らわないという、不条理極まりない秘伝忍法を詠は食らってしまった。
「ッ！」
詠は又しても爆発をくらい、吹き飛ばされ、振り出しに戻ってしまった。距離が再び深まったことで、両備は銃弾を乱射させる。それを詠は盾にして防御する。
「ほらほら！さっきとまた同じじゃない!?そんなんで私を殺せるかしら？」
「クッ……！」
銃声と共に聞こえる両備の声。何をしても両備の範囲領域には触れられない、触れたとしても追い払われてしまう。まさに、両備にとって詠とは相性が良かったそうだ。
この勝負、完全に両備が上だ、勝利が決まったと言っても過言ではない。それは両備だけでなく、他のだれもがこの状況を見ればそう思うだろう。
詰んでしまったとも言えようこの状況、そんななかでも…
（……待てよ…？おかしい……何か可笑しい……なんで？アイツは私に絶対近づけない……それなのに……なんでよ…？）
詠は……
（目が……死んでない…!?）
諦めない。

（ここからどうしましょうか…）
詠は呼吸を整えながら、両備を倒す策を考えている。恐らく小細工は通用しない…相手は相当な手練れ、詠も蛇女にいた頃よりも強くなっているし、抜忍になっても修行は怠らなかった。
（秘伝忍法もダメ…盾にして攻撃を防ぐも向こうは秘伝忍法を使ってくる……）
普通の銃弾ならまだしも、両備の銃弾は訳が違う。
詠は咄嗟に後ろを見る。春花と両奈が戦っている。その時、偶然なのか、両奈に手を焼いて冷や汗を垂らす春花も、咄嗟に此方に視線を向ける。詠は唾を飲み込む。
（こうなったら……）
緊張、不安、恐怖、それらの感情をなくすように詠は目を瞑り、一呼吸する。
そしてキッ！と目を見開き、彼女は両備を見つめ、足を動かす。
「――――は？」
両備は詠の行動に目を大きく見開き、思わず衝撃を受けた表情で、疑問を抱いた
詠の取る行動とは一体――？

一方、両奈と春花の戦いでは…
（この子…思ったよりも厄介ね……！）
華麗な身のこなしに、二丁拳銃を用いて近接距離で乱射する両奈。その動きは一切隙や油断がない、完全に上忍の域を超えていた。苦悩する春花の表情とは違い、両奈の表情は『ご主人様』を愛する顔でもなく、ドＭのような変態で物欲しがりな顔立ちでもなかった……
「貴方には悪いけど……死んでもらうから…！」
彼女も両備と同じく復讐に身も心も奪われた少女、復讐への執着。その表情は険しく、憤る顔立ち、鋭い目つき、そんな両奈は誰も見たことがない、初めて浮かべる表情だった。
両奈と両備にとって、復讐こそ全てだった。復讐を糧に生きてきた。それを否定されるのは何よりも辛い……その苦しさに身も心も暴走してしまった彼女たちは…

ヴィランそのもの。

両奈の二丁拳銃は近距離戦でしか使えないため、遠距離攻撃は不可能なのだ。だが、近距離戦だけでもその威力は絶対だ。
「何があったか知らないけど…今の貴方、とても危険な香りがするわ…」
春花は冷や汗を垂らしながら両奈に言う、両奈は何も答えずただただ標的を仕留めるのみ。
春花は傀儡を盾にし両奈の攻撃も防ぐも、威力が高いがためか、多少防ぎきれない攻撃もあり、ダメージを食らってしまう。かと言って此方もやられてばかりではない、傀儡を使って攻撃をするも華麗な身のこなし、軽々と避けられてしまう。傀儡の攻撃は主にシンプルで、

ボクサーのようなグローブをした拳で相手を殴ること。
威力を例えるのなら、プロボクサーの拳と同じくらいだ。またパンチの威力を溜めればコンクリートの柱など粉砕することなど訳がない。
他にも、パンチャーなだけでなく火炎放射器や、チェーンソー、電撃など、多彩な技を用いる。ある意味殺戮兵器や凶器と言っても過言ではない。
しかし、両奈には攻撃は効かない。余程の攻撃が、耐えきれない衝撃を浴びせば話は別なのだが、両奈のショック吸収の許容がどれ程なのかは、あの両備でさえも知らないのだ。
「なら…これはどう!?」
春花は懐から、怪しい色をした液体が入ってる試験管を何本か出し、両奈に放り投げる。春花の家は知っての通り、医院長である父は名のある大病院に務めてた為、その影響か春花も多少薬のことは理解している。
独自に開発するべく、元いた蛇女では研究施設なんかで独自に薬の研究をしていたくらいだ（ただし、人を困らせる薬も作ることもある）。
そのため、春花は薬を武器として扱うことも出来、トリッキーな戦法を使用する。
薬品に入ってるのはそれぞれ種類が異なるため、どの効果を発揮するのかは不明。そのため予測不可能…と言った攻撃にほぼ近いものだった。
８つの試験管が両奈に放り込まれるものの、両奈は二丁拳銃で反撃…しずに、そのまま避けていく。
両奈のこの判断は正しい。見たことのない攻撃や、相手の力がわからない内は、相手の攻撃をしっかりと見ておくべき、そのため無理に反撃、または攻撃で相殺するのではなく、相手の攻撃をみる。といった行動が一番正しい。ドＭの両奈にしては余り考えられないが、これでも彼女は忍…当然といっても良いだろう。
（随分と慣れてるわね……久しぶりだわ…こんなに苦戦するなんて

……今まで抜忍としての生活を送ってたからかしら？蛇女襲撃事件以来ね…）

春花は次にどう行動し、どう両奈に攻撃し、どう対応すれば良いか、頭を使って考えている。本来春花の戦法はトリッキーな戦法だけでなく、半分はマッドサイエンティスト、『春花様のお仕置き』なのだが……

お仕置きといえば、両奈には色んな意味で効くだろう。しかし今の両奈は前までとは違う、そのため苦戦するのも無理はないだろう。

「そこまでして、何を怨んでるのかしら？」

「ッ――！」

ピタッ、とここでほんの僅かに動きが止まった両奈。思わず声を出した春花も、両奈の動きがほんの一瞬止まることなど思ってもいなかったのか、少し驚くものの、傀儡は両奈に殴りかかる。

「ッ!!」

バチィンと殴られた音が豪快に響く。春花も何となくわかったような表情を浮かべ、両奈の心を察する。

完全に両奈の心がわかった訳でもないが、両奈の心は復讐と、何よりも暴走していることが分かった。

それでも、春花にとってこれが十分なるチャンスとなった。

「そこまでして、貴方は一体何に囚われてるのかしら？」

「……」

両奈も流石に二度も同じ手をくらうほどバカではない。両奈は無言のまま、二丁拳銃の右側で乱射し、左側は拳銃そのもので殴るように襲いかかる。

「こうなったら…秘伝忍法！【ＤＥＡＴＨ×ＫＩＳＳ】!!」

傀儡で両奈の攻撃を全て防ぎ、からの両奈の体を掴む。掴まれた両奈は驚き少し焦りの表情を浮かべ、脱出しようも既に遅し、春花の秘伝忍法による投げキッスを飛ばしたハートマークが襲いかかり、両奈は避けることかなわず、傀儡と共に攻撃を浴びてしまう。

「くっっ――ううぅん!!」

両奈は表情を赤らめ、喜ぶのを必死に押さえ込みながらも、歓喜の

声を上げずに我慢する。両奈は今の攻撃が最高に聞いたらしいのか、Mの性格が目覚めようとするも、両奈は復讐心で無理やり抑えつける。

　傀儡は春花の秘伝忍法をくらい、ボロボロきなりながらもご主人様のためと言わんばかりにムクリと起き上がり浮遊する。

「貴方は確かに強いわ、油断もなければ隙もない……でもね、どれだけ貴方がつよかろうと、私を倒せる算段や実力があっても、貴方はまだまだね…」

「……うる…さい」

　両奈は汚れた頬を拭いながら、春花を睨みつける。しかし、春花の今言ってる言葉は、半分は両奈を誘ってるが、もう半分は違った……

「本当よ…？だって、貴方動きに無駄なんてないし、油断も隙もないのに…

『迷い』はあるもの」

「!?!」

　春花自身の本音。春花だってほぼ大人に近い年齢、年の差なのか、又は元蛇女の生徒だからか、春花は両奈に迷いがあるのが見えていた。

　迷い、両奈のソレは、本当に雅緋を殺しても良いのか？それで間違っていないのか？という、心の底から湧き上がる疑問から生まれたものだった。鈴音に真実を知らされ、復讐の道を否定された両奈は、妹と同じように身も心も裂けるほどに残酷なことであるが、だからこそそれと同時に、雅緋を殺してしまって良いものなのか？と言う疑問も生じたのだ。それは自然なことであり、何らおかしくは無い。

「貴方に……」

　それはとても辛いことで、自分がどうすれば良いのかわからなければ…

「貴方に何が分かるのよ!!??」

　当然悩み、苦しみ、狂ってしまう。それは、復讐という道だけでなく、人生誰もがぶつかる壁。

　こんなに怒った両奈など初めてみたであろう、それもそのはず。心

優しい両奈は人前で怒ったことなど無いのだから…
春花は憤る両奈の言葉を黙って聞いたまま、言葉を返さなかった。
彼女が最後に覚えてる記憶は、三人姉妹で喧嘩をした時以来だろう…
両奈は頭にその記憶が遮りながらも、涙を流し、春花に遅い掛かる。どうやらもうこれで決めるらしい…
(きっと、あの子の考えなら、一気に決着をつける感じね…となると、考えられるとすれば……秘伝忍法を使ってくるはず…)
春花の考えはほぼ正解といっても良いだろう。しかし両奈がどのような秘伝忍法を使用するのか分からない状況では、避けるにしても近づかれたらどの道意味がない…こっちも秘伝忍法を使うにしても手の内を知られている。二度は効かない…
春花は何か手はないかと、辺りを見渡す。耳を澄ませば後ろの銃声音、爆発音…そういえば後ろでは詠ちゃんが闘ってるんだった。と気づき、後ろを振り向く。そこには、偶然と言えるべきことなのか、咄嗟に此方に視線を向けてる詠が、ボロボロになって立っていた。
(詠ちゃん?)
春花は思わず声に出すのを堪え、心の中で呟く。詠が対峙してるは両備。遠距離攻撃が最も得意とし優れている嘆きの貧乳スナイパーだ。どうやら向こうも手練れで詠はかなり手を焼いている。と春花は思いつつ、向こうの両備に視線を向ける。
(そういえば、あの両備って子とこの子、姉妹なんだっけ…目と、こう…言動とか復讐心で分かるわね…)
両備と両奈は似た者同士な所もあれば、反対な所もあるので、姉妹として当然なのかもしれない。
詠も春花から両奈に視線を移す。そしてそこからか詠は決意を決めた目で、合図を送るように春花に軽く頷く。
(詠ちゃん…?――まさか…!)
春花は直ぐに見解し、此方も理解したと判断しこくりと頷く。そして二人はお互い両備と両奈と対峙する。さて、詠のとる行動とは一体?詠は一体何が目的なのだろうか?また春花も同じく、一体何を分

かったというのだろうか…？

「さあ、来なさい！相手にしてあげるわ！」

「言われなくても…両奈は貴方を殺す!!!」

両奈はローラースケートで滑るかのように滑走し、春花に襲いかかる。両奈の手には勿論、愛用の二丁拳銃を構えているが、対して春花は何もない。自慢の薬もなければ、愛用…いいや、下僕として愛でている傀儡さえも出ていない。だから両奈は疑問に思えて仕方がない…

春花が一体どんなことを仕掛けてくるのかを――

秘伝忍法？先ほどの攻撃なら見切れる。一回食らったダメージは確かに効いたものの、避けれない攻撃じゃなかった。

避ける？それは無意味だと春花も分かってるはず。だってこの勝負は何方かが勝たなければいけないのだから。春花と詠の二人の元々、本当の目的は伊佐奈ただ一人。その為には送り込まれた選抜メンバーと闘い勝たなければならない。また、勝たなければ伊佐奈の元へはいけない。だから、避け続ければ、そのまま時間が長引くだけであって、蛇女側の増援が来るだろう。

反撃のチャンスか…？その考えに至った両奈だが、確信性が曖昧だった。

反撃のチャンスとは思えないこの目つき、何よりも何故武器を所持していない？傀儡を上手く利用して反撃をすることだって出来るはず。また、相手に反撃と悟らせない為とはいえ、余りにも不自然で無防備すぎる。

では一体何を仕掛けてくる？

戦いでこんな風に考えたことなど、両奈は今まで無かっただろう。それが、いいことの場合ならの話であって……

両奈と春花の距離はほぼ身近に迫っていた。両奈は警戒心を緩むことなく、秘伝忍法を使おうとする。
「秘伝に――」
「今!!」
「!?!」
勝負の行方は――？

両備と詠の戦いに場面は移り変わる。激しい銃声音が響き渡り、再び嵐のような弾丸が詠に迫って来てる。それを盾のように防御しながら両備へ近づき、先ほどのように秘伝忍法で蹴散らしてやろうとする悪意溢れるＳッ気の両備が高笑いしてる姿――

――では無かった。

「ッざけんな!!!ざけんな！ふざけんな!!巫山戯んな!!ふざけるなあぁぁぁぁぁ!!!!」
両備はこれまでにない程に激怒していた。いや、怒りなんて文字ですら言い表せないその憤る顔立ちは、先ほどの両奈のアレとは超えていた。勝ち誇った余裕の表情など今の彼女の顔から一切感じ取れない。
もし怒りパラメーターがあったとしよう、両備の怒りパラメーターの数値が出るのは、ＥＲＲＯＲという文字が出てくるであろう。
しかし、何故両備はそこまでして激怒してるのか？勿論相手は詠だ

ということが分かる。では、詠は一体どの行動を、どの策を、両備相手にどう対応するのだろうか？

自分が導き出した、両備を倒す策、それは――

「何で……なんでよ!?頭イかれてるんじゃないの!?どうして…？どうして…

平然と歩いて近づいて来るのよ!?!」

――何もしない。

詠は大剣を手に持ち、防御の構えを取ることなく、平然と、明るい笑顔でまっすぐ、両備に近づいて来る。その行為は誰もが見たら自殺行為だと言うだろう。相手は銃、近くには盾やら何やらを使って近くしか方法はない。だが、詠の行動は余りにもイレギュラーなものだった。そのため両備への衝撃は大きく、混乱し、何がしたいか分からず、両備はひたすら乱射しまくるのであった。

だが、その銃弾が詠には一つたりとも当たらない。髪やら頬やらが掠り、掠った僅かな髪はそのままふわりと落ちていき、頬はまるで刃物やらで斬ったかのように血が垂れ流れる。ギリギリだが、それ以外何処にも当たっていない。

「当たれ…当たれ…当たれあたれ当たれ!!!くそッ！クソッ！クソッ!!」

両備自身戸惑いを隠せない。詠を狙って撃っている。しかし外れる、自分自身外してるつもりなど毛頭ない。だが、結果は目の前の詠を見ての通り、掠りこそはしてるものの、銃弾が詠に当たることはない。

両備の狙撃はかなり優秀であり、蛇女子学園一位の成績を取るほどの優秀なスナイパー。目の前の詠など撃ち抜くは当然。

なのに両備は詠に攻撃を当てれない。

（やはり、正解でしたわね）

そのことに両備は腹が立っている。当たるはずなのに、当たる距離なのに当たらない。何故？殺すんだ、私はコイツを殺すんだ。姉を思い出すコイツを絶対に殺すんだ。そう決めたんだ。

自分勝手だと言われてもいい、思われてもいい、どれだけ皆から何を言われようと、自分の決めた道を曲げることはできない。抜忍を始末し、雅緋を殺す。

なのに、何でだ……なんで…

焦り、動揺し、感情昂り、怒りで自我を保てなくなり、復讐で身を奪われ暴走する。だからこそ、両備は詠に攻撃が当たることはないし、当てられないのだ。

両備は冷静さを完全に欠けている。それは、真実を知った時から既に無くなっていたのだ。つまり、戦う前から冷静さという文字は彼女には一切なかったのだ。

だからこそ、冷静さがなくなった彼女は、冷静な判断と応用力、行動や判断が出来ないのだ。

頭の中で色んなことがあってごちゃ混ぜになってる彼女が、銃をひたすら乱射させ、それに対し詠が何の防御を構えることなく、ただゆっくりと通学路を歩くかのように思わされるその行動にこそ、両備は詠に銃弾一つも浴びせられないのだ。

それこそ、詠の行動は柔軟で優れていた。

何よりも、両備が先ほど言ったように、詠はお姉ちゃんに似ている。

そして距離が縮み、詠と両備との距離はそう遠くなく、至近距離、近くにいた。もうあと一歩踏み出せば、両備のほぼ目の前にいると言っても過言ではないだろう。両備の息遣いはとても荒く、鋭い眼光で睨みつけている。詠はそこでピタリと立ち止まる。

そのことに又しても両備は目を大きく開く。だがそれも瞬時に理解した。自分の隙を作らせるためだ――

いや…違う。

（コイツ!!今度は、こいつは何をする気なんだ!?!今度は一体何を…）
もはや考えられる力など残っちゃいない。詠の先ほどの行動がぶっ飛んでる余り、両備は詠の行動が読めなくなってしまった。
人の思考は混乱してしまうと、状況が追いつけなく、また自分がどう対処を取ればいいのか判断が鈍くなる。その現象こそ、今の両備と同じだ。
（まさか…そこから…!?）
秘伝忍法――相手を油断させ至近距離で、秘伝忍法を使用する。そう予想した。そうなれば敗北は確定、復讐をする前に殺されてしまうだろう…それだけは何があっても避けなければならない。
両備は距離を保つために後退するが遅し。ただ…
「春花さん!!」
両備の思考は少し外れていた。

詠がそう叫ぶと同時に春花の「分かってるわ！」というら声が瞬く間に響き渡った。「え？」と一体何が起きてるのか分からない両備は、思わず声を漏らす。
「え？」
上から声がしたので顔を見上げると――
「は？」
春花と戦ってたはずの両奈が、無防備に空から降ってきた。いや、投げ飛ばされたと言った方が正しいのかもしれない。二人は目を見開き、口をポカンと開け、拍子抜けな表情を浮かばせる。
そして二人は身体を動かすことなく、両備は投げ飛ばされた両奈にぶつかり、無防備だと思っていた春花に秘伝忍法を使おうとしたら、傀儡の罠にまんまとかかり、捕まれ思いっきりぶん投げられ、動かない両備にぶつかる。
二人はお互い頭にぶつかり、鈍い痛みが二人を襲う。「イタタ…」と小声を漏らしながら相手を見る。が…詠が何処にも見受けられない。
「アイツは…何処に…？」
見渡すものの、それらしい影は見当たらない。詠の姿が見えないの

だ。
一体何処へ…？
「ここですわ！」
声の方向に振り向くと、そこには右からでもなく、左からでもなく、後ろでもない…
真上だったのだ。
それも、大剣を振りかざしてる詠の姿――
両備と両奈の二人は詠の存在に気づくも遅し…
「絶・秘伝忍法！【ラグナロク】!!」
詠は剣を更に巨大化させ、大回転しながら、真上で剣と共に襲い掛かってくる奥の手とも言える必殺技。大剣が大地に唸りを上げ、轟かせ、両備と両奈は避ける術なく、詠の絶・秘伝忍法をもろにくらった。
因みにラグナロクとは神々の運命という意味であり、欧米神話の世界における終末の日のことである。

６４話「ＴＨＥ・姉」

両奈は全力でこちらに向かって来る。春花は冷や汗を垂らし、呼吸を整え、チャンスを待つ。

落ち着け――

落ち着け私――

できる、出来る。やれば出来る――

改めて自覚すると、不安な気持ちになりどうしても心が揺さぶられてしまう。成功できるかどうかの不安、焦り、失敗してしまったらという恐怖、疑問。

蛇女にいた頃なら、選抜メンバーとしてこんなの無かったのに…何故だろう？

両奈と春花の距離は無くなっていく。そして…

「秘伝に――」

（来たッ!!）

「今!!」

春花の予想通り、両奈は秘伝忍法を仕掛けて来た。だがその前に春花は隠してた傀儡を使って両奈を素早く拘束し、秘伝忍法を止めた。チャンスが訪れ、両奈は驚愕と戸惑いの色を顔に染めるもお構いなく、傀儡は詠と闘ってる両備へとぶん投げた。

巨大化した剣を中心に、竜巻は荒ぶり、両備と両奈に容赦なく襲いかかる。下敷きにでもされたかの如く、両備と両奈は回避する間も無く詠の絶・秘伝忍法を食らうハメになった。

「きゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
二人の痛々しい悲鳴が、天を貫くように聞こえ、詠の大剣が大地を唸らせ轟かす。衝撃が強い余りか、地面には亀裂が生じ、竜巻は地面の砂を纏うように砂煙が吹き上げられ、災害が起きてるのではないか？と思うほど詠の絶・秘伝忍法は驚異的だった。
因みに彼女たち焔紅蓮隊は、半蔵学院と修行し手合わせしたことで、より強くなり絶・秘伝忍法を習得できたのだ。
だが、蛇女子学園はそうじゃない…それもそうだ。善と関わりを持たない彼女たちが、絶・秘伝忍法を習得出来るわけがないのだから……
倒れてる両備と両奈の体はとてもボロボロで傷だらけだった。竜巻に砂埃、そして詠の大剣…これを喰らえば選抜メンバーとはいえど無事では済ませられるわけがない。二人は痛々しい表情を浮かべながらも、体を震わせ何とか上半身だけ起き上がらせる。
闘争心はまだあるようだが、詠の最終奥義とも言える絶・秘伝忍法を食らったためダメージが相当大きいようで、思ったように動くことが出来ない。
だがしかし、それでもかと言わんばかりか、両備の目はまだ復讐色に染まったままだ。両奈は弱々しい瞳を揺らがせ、詠と春花二人を見つめる。
「くそッ……クソッ!!動け…動け!」
「両備…ちゃん……」
動きたいのに動けれない。自分の体の言うことが聞かない両備は、無理やり自分に言葉を投げかけ言い聞かせる。そんな両備に両奈は、ただただ見てるだけしか出来なかった。
もう力は残ってない…しかし、両備は諦めきれない。弱々しい体に力を入れ、立ち上がろうとしても、結果は同じことだった。
「認めるものか……認めるもんか……!雅緋は…雅緋は…!!お姉ちゃんを……!」
「両備さん…」
と、ここで今まで黙って見つめてた詠が口を開き、彼女の名前を思

わず声に漏らす。詠はわかる、今両備がどれ程の憎しみに心を囚われ、苦しんでいるのか。どれ程辛い思いをして生きて来たのかを……

だって、自分もそうだったから。辛み恨みでお金持ちを恨んで生きて来たから――

「どうして……どうしてこうなっちゃったのよ……」

体を震わせながら、両備は大量の涙を流し、弱々しい声を振り絞った。

「お姉ちゃん……」

大切な人が消えてしまった悲しさは、同じ境遇に生きて来た人にしか分からない。だから、両備と両奈の悲しみは、誰にも癒せない。

「こんなことなら……いっそのこと、忍になるなんて止めておけば良かったんだ……ううん、忍なんてこの世界に無ければ良かったんだ……！」

「忍…？お姉さんは忍だったのですか？」

と、ここで詠は初めて両備と両奈の姉が忍だったということを知る。

大好きなお姉ちゃんを殺したのは雅緋だと信じて此処までやってきた。なのに、妖魔という得体の知れない化け物が、お姉ちゃんを殺しただなんて、信じられないし、仮にそうだとしてももう後戻りは出来ないのだと……

だから、狂ってしまった心は、心の傷は、苦しみは、復讐を成し遂げて解放される。復讐が成功できてこそ、大好きなお姉ちゃんの無念も晴らせ、自分たちも心に悔いを残すことなく安心して死ねる。そう思っていた。

詠と春花二人は、両備と両奈の全てを知った。本当の敵は妖魔、でも両備と両奈は今まで雅緋が姉の仇とそう信じて生きてきた。それを曲げることが出来なかった…でもどうすることもできなかった。

色んなものが、二人を縛り、苦しめてるようで仕方がなかった。

「お姉ちゃんがいないと……両備は……寂しくて…寂しくて……」
強張ってた表情は次第に脆くなり、やがて崩れて、誰よりも弱々しい声で、幼少期の頃に戻ったのではないか?と思わせるその両備の泣き顔は、先ほどの憤っていた彼女から考えられないものだった。
詠は暫し目を瞑り、真っ直ぐ真剣な目で両備を見て――

――バチィン!!!

「!?!」
「……え?」
詠は、全力で両備の頬をはたいた。その場の空気が変わり、両奈と春花の二人は茫然と目を丸くし詠の行動に衝撃を受けつつ、両備もまたはたかれたことに、流してた涙が止まり、叩かれた頬が赤くなる。

「シャキッとしなさい!!!」

詠は数秒間を置いた後、憤る声で両備に怒鳴った。
今まで買い物上手の若奥さんのような優しい笑顔を浮かべてた詠が、ここで初めて両備に対して怒りを露わにし、厳しい声を投げかけた。彼女からは考えられないものだった……
両備はそんな詠に言葉を失い、茫然と見つめていた。詠のその目には、怒りと、悲しみと、苦しみが込められていた。しかしソレらは、両備の持つものとは違った。
詠の苦しみと悲しみは、この二人の姉妹が復讐に身を焦がし、身も心も狂い、苦しみ、悲しんでいたこと。
忍になった以上、死は覚悟の上…それでも大切な人が死ぬのは、失うのは当然悲しい。幼い頃の二人なら尚更だ。
姉のために、という気持ちは悪くない。姉のために、執念を捧げ、強くなり、何かの為に戦う。それはいい事だ。
復讐、「恨むな」なんてことは言わない。人の感情、仕方のないことだ。ましてや、前までの自分もそうだったから。

鳳凰財閥の斑鳩というお金持ちを憎み、恨み、全てをバネにして生きてきたから。
辛み恨みで生きてきた自分が一丁前に説教するなと言われても仕方ないかもしれない。自分も他人のことは言えない、だからこそ「恨むな」とは言わないし、それを否定する権利もない。
――だからこそ言わねばならないのだ。
「両備さん、それに両奈さんも…あなた達も忍なら、お姉さんの思いを引き継ぐことを考えなさい!!」
「えっ？」
詠の言葉に二人の姉妹は言葉を失い、驚きの声を漏らす。
今まで感がても無かったその言葉に、二人はただただ詠を見つめることしかできなかった。言葉を失い、口に出る言葉も、反論する言葉もない。
「忍の定めは死の定め……裏社会に生きる者として誰かが死ぬことは当然であり、仕方のないことです……その大切な存在が消えてしまった怒りや苦しみ、悲しみがあることは不自然ではありません……貴方達が復讐の道を突き進むことに、責め立てる権利もありません……
姉のために心の刃を振るう…それは、貴方たちがお姉さんのことが好きだから。愛してるから、姉のことを想って戦う……だから、お姉さんも、お姉さんを愛してくれてる姉妹が大好きだということも伝わります……
しかし、そんな自分の命を簡単に捨ててしまう復讐に、そんな貴方達姉妹の姿を見て、果たしてお姉さんは本当に喜ぶのでしょうか？」
「!!」
詠の一つ一つ重みのある言葉。二人のためにここまで想いを込めて説教するその姿は、お姉ちゃんとそっくりだった。
優しかった両姫お姉ちゃんは、時に厳しく叱ってくれた。自分が悪いことをした時、自分が酷いことをしてしまった時、二人よくして怒られていた。でも、最後はちゃんと反省して、仲直りして、頭を撫でてくれた。
暖かくて、嬉しい…幸せな時間……大好きなお姉ちゃんが、詠と

そっくりだった。
両姫の面影が、詠と重なった。

「両備さん、私は貴方達と闘ってる際に、少しでも殺意を向けましたか？」
「え？…あっ…」
ここで両備は気づく、戦いのなか、詠は一度も両備に殺意を向けてなかったことを。その目には戦う闘志を燃やした決意。そして何よりも…下手すれば自分は殺されてたのかもしれないのに、詠は防御することなく、両備に近づいて来た。アレは驚きものだ、普通そんな考え誰も思いつかないだろう…
「無論、私は貴方達に一切殺意を向けてはいません。それは何故だか分かりますか？私たちを育ててくれた母校である蛇女子学園、そして伊佐奈の野望のために苦しめられ、支配されてる忍学生たち、そして……貴方たちを救うためです」
全てが狂ってしまった蛇女を、両備たちを助けるために、詠は刃を振るった。
何故なら、あの時の両備と昔の自分はそっくりだったから。先ほど言ってたように、自分は辛み恨みで生きてきた…だからこそ、救いたい。
昔の自分と同じ両備を、救いたくてしょうがなかった。
これ以上彼女を、昔の自分へと変えて欲しくなかった。
「……その前に、私に殺されてたらどうすんのよ……意味、無いじゃない…」
「それはご心配なく、両備さんは私を殺せませんでしたから」
「…どういう意味よそれ…」
「決まってますわ…だってそれは、両備さんがお姉さんを愛してるからです」
「――は？」
意味が分からない。両備は心の中で呟き、頭の中が真っ白になっ

た。何故、ここで姉が出てくるのだろう…そう疑問に思ったからだ。だがその疑問も、すぐに分かることになる。
「両備さんは、私のことを『お姉ちゃんと似てる』と言ってましたね？大好きな姉を思い出させる私が憎い…と。だから絶対に私を殺すと決めていた……そこで、分かったんです。両備さんは、私を殺せないんだって確信できたんです」
　両備と両奈は姉のことが大好き、その気持ちは心に染み渡るほど伝わった。復讐の道に進んでしまうほど、姉への想いが強い証拠、そこに善も悪も関係ない。詠はそう解釈する。
　だから詠は確信することが出来た、両備は詠を殺せないと…
　両備は詠を見てるとお姉ちゃんを思い出すと確かに言ってた。なら、両備は殺せないハズだ……何故ならソレは、大好きな姉を傷つけ、殺そうとする意味になるのだから。
　両姫お姉ちゃんが大好きだからこそ、両備は詠を殺せない……詠はそう判断したのだ。
　まあ、お姉ちゃんと見なければ話は別なのだが、復讐心に飲まれてた彼女が詠をどうしてもお姉ちゃんと見てしまうのは無理もない。何よりも詠のその優しさは、本当にそっくりで、同じだったから…

「お姉さんのことが好きなら、お姉さんを想ってるのなら、お姉さんの意思を引き継ぎなさい。そうすれば、貴女達の心の中で、お姉さんは生き続けます」

「お姉ちゃんが…」
「生きつづける…」
　姉の想いがあれば、死んでしまったとしても、姉妹の心の中で両姫は安心して生きることができる。あの世で見守ることが出来る…
「だから、復讐して、死んでしまっても良いなんて馬鹿な考えはもうやめなさい。ちゃんと生きて、お姉ちゃんが大好き。ということを、あ

の世にいる姉に、証明しなさい。それが、貴女達がお姉さんにしてあげれることです」

命だけでなく心を救い出す詠のその姿は、遠い昔…とは言い過ぎか、ある人物とそっくりだった。

「生きて…お姉ちゃんを……」

「……お姉ちゃん……」

詠は伝えることを最後まで伝えたためか、口を閉じる。両備と両奈の二人は、目から涙を流した。その涙は、怒りや苦しみ、悲しみではなく…復讐でもなく……

姉のために涙を流した。

ああ、なんて馬鹿なことをしてたんだろう……姉が殺された憎しみのあまり、本当に大事なことを忘れていた…

簡単だったんだ。だけど簡単なことが目に見えていなかった。復讐心のあまり、憤る怒りで、大切な姉を失った悲しみで、心を縛られるように苦しめられた辛さで、一番身近で大切なことが、分からなかった。見えなかった、忘れていた。

憎悪に染まっていた両備と両奈の復讐心は、先ほどの負の感情と共に、次第と輝く光に浄化されていく。

本当にお姉ちゃんが望むものは、復讐じゃない、雅緋を殺すことじゃない。

二人が立派な、誰もが認める、一人前の忍だ。

――――カグラ――――

その称号こそ、全ての忍が目指すもの。それこそ世間の誰もが認める忍の、最強の称号。

そうだ、引き継ぐんだ…姉の想いを…

復讐が終わって死ぬ道なんて、お姉ちゃんは一切望んでいない。そんなことしたら、それこそお姉ちゃんは悲しんでしまう。

本当にお姉ちゃんが大好きなら、お姉ちゃんの為に想うなら、カグラにならなきゃ…

何よりも、姉が望んでいたものは、二人の幸せな笑顔――

大事なことを見つけ、大切なことを思い出し、本当の姉への想いが何なのか、復讐心が無くなった今、ハッキリと分かった姉妹は、次第に顔を赤くし、先ほどまで止まってた涙が再び零れ落ちるように頬に伝わった。そして…

「う、うぅ……うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーん!!!」

途端、両奈は我慢が出来ないと言わんばかりに、顔をくしゃくしゃにし、溢れ出んばかりの涙を腕で拭い、大声で泣き叫んだ。

両奈はこう見えて両備の姉であり、子供っぽいところはあるが、ドMの変態を除けば、立派な優しい両備の姉なのだ。

因みに両奈と両備は誕生日は同じの双子なのだが、どうやら両奈が姉らしい。見た目や性格的には両備の方がしっかりしてるので、よく間違えられることもある。

「うっ…お姉…ちゃん……ごめんなさい……ごめんなさい…!ごめんなさい…!!」

両備は謝るように嗚咽を垂らし、何度も何度も頭を詠の体に当てて、両奈と同じ、顔面が涙でくしゃくしゃになり、両手を詠の腕にしがみつく。

間違っても良い、その代わりやり直して、正しい道へ進めば良い。

目の前の残酷な真実に驚愕し、目を背け、受け入れなくたって良い。大切なことを理解して、そこから少しずつ、その真実に近づけば良い。

詠は何も言わず、ただ優しい瞳で二人を見つめ、両備の頭を、我が妹のように優しく撫でる。泣き止むまで……今は少しくらい良いじゃないか。時間が経てば増援がくる…でも、良いじゃないか。

こうして、助けられた人間が、忍が目の前に、ここにいる。

――こうして、両備と両奈の復讐は、今日この日、完全に終わりを告げた。

「詠ちゃん、流石ね…」
詠と、両備と両奈の三人の場所から、遠くで見つめてた春花は思わず微笑んでしまう。その微笑みは、詠の優しさから来るものなのか、それとも両備と両奈が救われたことから来るのだろうか…或いは、感動的な光景に微笑んだのか……いや、全てだろう。
春花もその気になれば言えることは何個かあった。しかし、それは自分の役目じゃない、これは詠の役目だと、春花は見解し、三人の元から離れて様子を見守っていたのだ。空気を読むとは正にこのこと。
(まあ、でもこれで一件落着って感じかしら……
でも…これで全ての蛇女が救われたわけじゃない…)
その通り。両備と両奈は救けたとしても、今ここに在籍している蛇女の全ての忍学生が救われた訳じゃない。まだ他にもこうして苦しんでる人達だって沢山いる。
(焔ちゃん…悪いけど……伊佐奈の所にはもう少し時間が掛かるかも……先に焔ちゃんや日影ちゃん、未来が着くかしら…?どの道私たちは遅い訳だし……後は頼んだわよ)
春花は見守ることにした、三人の時間を……
それを邪魔する者がいたらそれこそ台無しだ。影で仲間を支えることも、春花の役目だ――

暗雲が漂い、天を貫くかのよつに思わせる天守閣。
その最上階の部屋には、出資者の伊佐奈と、もう一人の謎の人物が会話、いいや…何かの交渉をしているように見受けられた。
「ひぃ、ふぅ、みぃ…ふむ、これでお金は頂きました。そして其方のお金は？」
「ああ、お前が出した金もちゃんとある……問題ない」
二人は大量の札束を指でめくり、数え終わると、伊佐奈は一先ず札束を机の上に置き、相手はサラリーマンのような黒い鞄に札束をいれる。
相手は帽子と顔がカラスのようなお面を被っているため、素顔が分からない。礼儀正しいそのスーツは、仮面さえ外せば何処かしらにいる、社会人と変わらないであろうものだ。
「お前が指定した妖魔は全て売ってやった…態々忙しい中ご苦労だったな…

忍商会『魔門』…」
「とんでもない！お客様に対し無礼な返事は出来ませんし、仮に忙しかったとしても、お客様を無下に扱うことは出来ませんよ！」
魔門と呼ばれるこの男は、首を横に振り、敬語で紳士さを振る舞う。
忍商会・魔門。　雄英高校体育祭を観戦し、敵連合の黒霧と連絡をしていたと思われる人物。その為、敵連合と関わりがあるのではないか？という疑いが付けられている。しかし裏社会や忍の世界では彼の名は知らない。それどころか存在すらも認識されていないものだった。それが余程名誉が低い為なのか、それとも忍にすら隠れて生きてるのか…なんにせよ、彼は只者ではないということだけ理解できる。
「ふん、そうかよ。まあ良い……んで？これがお前がオススメの品か？なんだこれ、薬物か？」
伊佐奈は試験管や注射器に近い品物をジロジロと見つめている。これは一体…？
「ええ、これは最近ヴィランで流行りの品物ですよ！それが何とも素晴らしいものか、効果も絶大！伊佐奈様のみならず、他の方も喜べる商品ですよ！」
「喜べる？他の？」
「伊佐奈様は、此処、秘立蛇女子学園を自分の『アジト』として根城にし、悪忍を利用し自らの野望、いえ…懇願とも呼ぶべきか、革命を起こそうとしてますね？
そして革命が起こった後、貴方様は名のあるヴィランを誘い、引き入れる……そんなヴィランをもっと効率よく強くさせるためには此方のアイテムが必須なのですよ」
そして魔門は鞄から白い紙を一枚、文字がビッシリと書かれているものを取り出し伊佐奈に渡す。伊佐奈は受け取り見てみると『取扱説明書』と書いてあった。
「詳細の説明は此方に書いてありますので、使う前にはちゃんと読んでおいた方が良いかと……」
「なるほど…先を見据えてコレをか……お前はあの選抜（道具）メンバー（共）より

かはずっと使えるな……お前が此方に入れば、事が進むんだが…」
「ホホッ！とんでもない！私は前までは確かに凄腕の悪忍でしたよ？しかし、それはあくまで現役時代の話…今はしがないただの商売人です。戦力になるはずもなく、貴方様の言う道具としては使えれないのですよ」
　奇人、怪人、奇妙とも呼べる彼の言葉に、伊佐奈は眉をひそめるも、彼の言葉が冗談にしか聞こえず、また謙遜してるように見えた。
「いや、使えれねえことはないだろ、これだけの商品を売ってるんだ…それにお前からは異常な気配を感じる……
　俺が莫大な金を投資して研究所やら何やら作ってやる、だからお前も良ければ俺の部下にならないか？そうすりゃあお前も世の中何かの存在に追われることなく楽して生きていけるぞ？」
「お気持ちは誠に嬉しい限りです。しかし私は一人の商売人…貴方様だけを特別扱いすることも出来ないのですよ。これもビジネス、私はより多くの方が商品を手につけてくれれば、私はそれだけで幸せです」
　魔門は伊佐奈の誘いを丁寧に、紳士を振る舞い断る。伊佐奈は先ほど、焔にも断られたことを思い出し少し腹立たしい気持ちにはなったものの、魔門の性格上、そして何よりも彼の言葉に納得をせざるをえなかった。
　自分と同じように、何かを、商品を必要とする存在がいる。計画、私利私欲、快楽、様々な『客』を悦ばせるために、魔門は忍商会として商品を売ってるのだ。
「チッ……まあ良い……それにお前だって俺の妖魔がなけりゃあ出品できねえだろ？」
「ええ正にその通りで御座います！貴方様が妖魔を造ってくれるのは誠に光栄でありますよ、何にせよ、昔はアレだけ妖魔が大量に売れたというのに、邪魔をされてしまいましてねぇ…」
「邪魔？オイそれは一体誰のことだ？あの妖魔を消せるやつがいるのか？」
「おおっと！シット！私としたことが！何でもありません……今の言

葉は忘れて下さい、私の個人的な意見も兼ねてそれは例え関係者でも口に出すことは出来ません……仮に口に出したとしても、もう意味はありませんが…」
「何だよ、結局言っても問題ねえじゃねえか」
「本当にご勘弁を、私そのせいで忍を引退したのですよ??そしてこうして今抜忍として危険に晒されそうになりながらも生活してるのです、貴方様にそれを言えばそれこそ、トラウマが蘇ってしまう…過去のことは思い返さない主義でして…」
「チッ…食えねえヤツだ……まあ良い…お前には感謝してるからな……金もこうしてたんまり稼いだ……これで5ヶ月分の忍道具学生は買えるな」
　魔門は「ホッ、素敵な買い物ですこと」と薄笑いする。しかし仮面を付けてるため、どんな顔をしているのか伊佐奈には分かるはずがない。
「ところで、その妖魔…一体誰が買うんだ?『ヴィラン予備軍』や『ボルケーノ盗賊団』か?」
「ヤクザやあのボルケーノ盗賊団も確かに良いのですが、先客がいましてね、あの『戦姫衆』という組織から莫大な金を用意されてるのです、これ程の幸せはありませんよ」
「おいおい、まさか彼処に目をつけられてるのか?金は俺よりも上だろうな……なにせあのガキがいるんだから」
　伊佐奈は不快の表れた表情を浮かべ、思わず舌打ちをしてしまう。そのことに魔門は苦笑の声を漏らす。表情は分からないから本当に苦笑してるのかは分からないが…
「まあまあ、おおっと!こうしてる内に時間が、私も長い間此処にいるのもアレですし、伊佐奈様にまで被害が出るのもアレでしょうし、私はこれにて去りますね」
「ん?ああ、もうこんな時間か…時間が経つのは早えな、なんて誰もが口に出す言葉だけどよ……気づかなかった…」
　伊佐奈は自慢の腕時計を見ながらそう呟くと、魔門は「では…本日も誠に有難うございました」と、軽く一礼し、伊佐奈に背を向け去ろ

うとする。伊佐奈はそんな彼に口を開き、言葉を掛けた。

「……なあ、お前は何で商売人の道を選んだんだ？」

すると、魔門はゆっくりと、伊佐奈の方角に振り向いた。伊佐奈のその目から感じ取れるは、純粋な疑問をいだく瞳だった。どうしてコイツは商売人の道に進もうとしたんだろう？という、子供がスポーツ選手を見て、なぜ貴方はこの道を選んだの？というような疑問を宿らせ、魔門を見つめていた。

「ホホォ…これは、今までにない質問ですねぇ……特に深い意味はありません……仮にそれがあったとしても、貴方様の期待するものや、役に立つようなものはありませんよ。なぜなら、私は見たいのですから……これからこの先社会全体が、この世界がどうなっていくのかを…」

魔門は薄気味悪い笑い声を上げながらも、仮面に隠されてるその表情は、きっとそこらの悪忍や敵（ヴィラン）とは比べ物にならないほどに、残酷で、歪みを持った顔立ちであろうことが容易に想像できる。

自分の商品を手にした悪意たちが、どのように使い、どの様な結果で、どのような答えを出してくれるのか、魔門は楽しみでしょうがないのだ。

「人は善悪問わず、必ずしも快楽を求めます。私だってそうです、他人から見れば『イカれ野郎』などと言葉を投げられても仕方がありませんし充分承知の上です。しかしそれでも何かの刺激を、衝動を、解放する悪意を、狂った暴走を、私はその目でしかと見て見たい。そして思うんです。

ああ、人は自由だ…忍の掟や超常社会のルールに縛られず、今こうしてやりたいことをやっている。それを見てるだけで幸せなのですよ、至極普通に…ね？その喜びに決して深い意味はございませんから…

そこで私思ったのです。それが私の幸せなら、作れば良いと。商品を売り、それを手にしたお客様は快楽を得るため商品を使い、暴れ狂

う…お客様も喜び、それを見た私も喜び幸せになる。所謂一石二鳥というヤツです。商品とは、お客様の役に立つ為にあるのですから……」

だからこそ、商売人になった。危険なアイテムを手にし、それを使い自由気ままに暴れる者、それこそ魔門が望んでいた幸せだ。

悪の手に染まり、危険なアイテムを買い、それを使う。魔門の売り込み根性は底が知れず、それ以前に本当にイかれてしまっていた。その言葉でしか言い表せないほどに……

「貴方様もそうでしょう…？元・敵（ヴィラン）組織『ワイルドヴィランズ』リーダー…

『キュレーター』」

伊佐奈の名前はあくまで自分の素性を隠すための名前…忍名であり、本当のネームドはキュレーター。過去に幾多もの犯罪を犯してきた大物ヴィランであった。

伊佐奈は自分の机に向かい、椅子に座り先ほど魔門の商品から買った、薬品入りの注射器を見つめている。

「今は『伊佐奈』で通せ――」

その言葉を耳にした魔門は「失礼しました…」と軽く一礼し、扉が閉まったと共に彼の姿は何処にも見え当たらなかった。

伊佐奈――彼の過去の話など、とうの昔…今の彼は、蛇女を支配する悪の支配だ。

６５話「相性バカ」

両備と両奈、詠と春花が死闘を繰り広げると同時に、　忌夢は日影と、紫は未来と対峙する。

忌夢の目には、ドス黒い怒りと憎悪を混ぜたオーラを感じる。でもって忌夢の表情は不敵な笑みを浮かべており、口の端を吊り上げる。

「待ってたよ日影……僕はお前にずっと復讐したかったんだ……だからこうして僕の目の前にお前がいることが、嬉しくて仕方がない……」

「わしにか？」

日影は何のことだ？と、心当たりもへったくれもない状況に首をかしげることしかできず、対して日影の反応を見た忌夢は「チッ…」と舌打ちをし、益々怒りを込み上げる。

「あくまでしらばっくれるつもりか…まあ良いだろう…そんな余裕もいつ迄続くことか……ふふふ、ようやくお前を殺すことが出来るって思うと、喜びが止まらないよ…！」

本来伊佐奈から受けた命令は『焔紅蓮隊』の捕獲。と言う任務……だが忌夢の頭の中は日影を殺すことだけでいっぱいだ。それに、伊佐奈はこうも言った。『抵抗するようなら迷わず殺せ』と…そして日影は無感情、だから絶対にこちら側にはつかないということが嫌という程よく分かる。何故なら、忌夢は日影をよく知ってるからだ……

それに他の奴らの事などどうでも良いし、日影の相手は自分だけで充分、他の奴らは誰かがやってくれる。忌夢はそう判断した。

「ほぉ…」

「何にせよ、ここで会ったが１００年目！今日こそ数々の恨みを晴らさせて貰うぞ！」

忌夢は日影に宣言する。数々の恨み…なんて言っても心当たりがない日影は当然忌夢の言ってることが分かるはずがなく…

「どちらさん？」

「――は？」

また、忌夢が誰なのかすら分からない始末だった。

「というか、何でわしのこと知っとるん？わしには親戚いないで」

「お、おい…ちょっと待て日影、何を言ってるんだ？僕だぞ？僕…日影、お前にしては随分とぶっ飛んだ冗談をつくんだな⁇昔はそんなこと言うヤツじゃなかったのに……抜忍になってから変わったのか？」

「オレオレ詐欺の次はボクボク詐欺かいな？わしゃあ生憎知らんヤツとは連絡とらん主義での、それに冗談なんてわし生まれてこの方一度も言ったことないで？」

それこそ冗談ではないかと疑ってしまいそうな言葉だが、日影の表情は感情こそないものの、表には疑問を抱く表情でしかなかった。だが日影は感情がない（或いは自覚してないだけかもしれない）為か、嘘をつくことはないし、まずあり得ない。あるわけがない。だからつまり――

「ちょ……っとまて日影……まさかだとは思うが…お前、僕のこと…忘れてるわけないよな？」

「だからどちら様や？」

忌夢が誰なのか日影は本気で知らないということだ。

「というか、何でか知らんがアンタ、昔っからわしのこと知ってそうやな？何でわしのこと知っとるん？わしは孤児院で育ったから、アンタみたいなデコ晒したメガネそうおらんで？まさか、これが未来さんの言ってたストーカーってやつか？」

「失礼だな⁉抜忍になったから辛い人生送ってるのかと、敵でありながら少しでも考えてた僕がバカに思えてしまうくらいだ！って、本当に僕のこと覚えてないのか⁉忘れてしまったのか⁉」

「らしいのう」

「らしいのうじゃない!!お前は何をそんな呑気な言葉を垂らしてるんだ！僕のこと、忘れたとは言わせないぞ！そりゃあまあ…僕は雅緋の世話をしていたから、長い間休学をしていたけど……

それでも最近は少しずつ学校に顔を出していたんだ！」
「はぁ…」
「自分たちの前の選抜メンバーの名前も知らないのか…？」
「うん」
「なんだよその間の抜けた顔は！やる気のない声は！僕を侮辱してるのか!?い、いや違う…コイツはいつもそうだ！僕に対していつもふざけた事や、舐めた事ばかりするんだ……と言うよりも！何で覚えてないんだよ！いつも僕から逃げてたお前が、どうして…？」
「もしかしたら、気づかんかったか、ただ興味がなくてめんどくさかったとか…そういう事かもしれんなぁ…逃げてたつもりはないんやけど…」
本気だ、本気で忘れてるぞコイツ。と忌夢は思ったことを顔に出す。まるで仲の良かった友人に久しぶりに会って「どちらさん？」と言われるくらい、忌夢にとってはとてつもなく衝撃的な事だった。
なんてことだ、感情がないだの何だのと抜かしてたが、最早そんなレベルじゃないぞ…
「ああ、そういやわしそん時抜忍の漆月を探してたり、半蔵学院の戦いとかでそれどころじゃなかったんや」
「いや、多分その前から僕のこと知ってると思うぞ…その時半蔵学院の『は』の字も出てなかったからな…」
「そうなんやね」
「……」
自分は必死に話してるというのに、日影のこの塩っ辛い塩対応。忌夢は思わず額に血管を浮かばせる。
忌夢が一体どんなことで、どんな理由で日影を恨んだり、復讐をしようとするのか分からない。しかし、だ…
日影は三年で忌夢も三年（現在忌夢の年齢は２１才）。つまり、日影が一年の頃に忌夢とは既に会っていたのだ。しかし忌夢はとある事情により、雅緋の世話をしなくてはならなかった。だから良い歳した大人になっても、三年生…つまるところ留年し、こうして蛇女にいる。雅緋の世話をしながらも多少は学校に顔を出している。だから日影

とは会っていたのだ。
なのに覚えてないというこの反応。
同じ学校に在籍し、ましてや選抜メンバーなら名前こそは覚えてる筈なのに、日影は「うん」という超軽いノリで返事をしたのだ。覚えてないうえにこの始末…怒らない人などいる筈がない。
「で？僕のことは思い出したのか？」
「どうなんやろうね？」
（コイツ…）
心の中で思わず殺意溢れた言葉を呟く。今すぐコイツを殺したい。
本当なら今頃、日影を苦しめながら戦ってるか、もしかしたら死闘を繰り広げ、今頃日影を倒してるのかもしれないというのに……
ただ単に殺すだけではダメだ。忌夢は日影に対し数々の恨みを晴らして殺すことこそ、忌夢の復讐は完遂する。
だから、日影には思い出させて欲しい。忘れたまま殺すわけにはいかないし、戦う気もない…いや、思い出してからでないと戦えない。でなければ恨みを晴らしたくとも晴らすことができない。だから日影には何としても自分のことを思い出させて欲しいのだ。
「日影、お前には何としても思い出して貰わなきゃ困る……じゃなきゃ僕が君を殺したとしても意味がないんだ…」
「なんでや？」
「良いから思い出せって言ってるんだ！」
「う～ん…せやけどなぁ…」
「何か一つでも心当たりとかないのか？」
マイペースな日影に対応するだけで、会話をするだけで怒りや疲れが出てくる忌夢は、激しく睨みつける。日影は「考えるのはあんま得意じゃないんやけど」と屁理屈言いながら考え始める。そして数十秒後、日影は「あっ！」と声を上げ思い出したかのように目を大きく開く。
「おっ、思い出したか？」
「ああ、思い出したで。アンタか」
忌夢は「やっとか！」と胸が高鳴り思わずガッツポーズを決める。

これでようやく恨みを晴らすことが――

「アンタ蕎麦屋の店員やろ」

「はぁ？」

　出来なかった。

「やっぱり、アンタどっかで見たことあるような無いような、そんな風に引っかかってたけど、まさかアンタ蕎麦屋で仕事しとったとはね。メガネ見て思い出したわ。すまんな、最近蕎麦屋に行けなくて。わしゃあ抜忍になってから行く暇もお金もないんよ」

「待て日影、自分の世界に入り込むな。何の話をしてるんだ？は？僕が蕎麦屋の店員だと？」

「最近蕎麦屋に行ってないから怒ってるんちゃうか？」

「全然違うわ!!!!何だよ蕎麦屋の店員って！どう考えたら僕が蕎麦屋の店員さんになるんだ!?」

「メガネ掛けてるやん」

「共通点メガネだけだろ!?」

「アンタ女やろ？」

「煩い！もう黙れ!!」

　話しても埒が明かないと判断した忌夢は、息を荒くする。思い出せないうえにこの侮辱するかのような仕打ち。きっとこのまま続けば「蕎麦屋の側にいなくて悪かったなぁ」とか上手くない親父ギャグでも言いそうだ。これ以上怒りたくない。

「何でそんなに怒っとるん？何なら逆にこっちが聞きたいわ、わしがお前さんに何したのか」

　はっ！とここで忌夢は「その手があったか！」と手のひらをポンと叩く。思い出せないのなら、キッカケとなった原因を話せば、もしかしたら思い出してくれるかもしれない。それで思い出したなんてことはよくある話。

「そうだな…その方が手っ取り早い。じゃあ、あの忌々しいボクサーパンツ事件のことを話すか……言いたくないし思い出すだけで腹が立つが…」

「なんやそれ、メッチャ面白そうやん。是非聞きたいわ」
　日影がここで初めて興味深そうな表情を浮かべる。忌夢は「何処が面白そうなんだ…」と小声で呟くも日影は忌夢の言葉に気づかない。
「あの日僕は偶々下着を全部洗ってしまってて、替えの下着が無かったんだ…
　それで僕はコンビニでパンツを買いに行ったけど、女性用の下着は全部売り切れてて…」
「ノーパン？」
「うん日影、取り敢えず人の話はちゃんと最後まで聞こうな？」
　日影の言葉に思わず眉をひそめる。ちょっとした怒りを抑え、堪え冷たい言葉を投げかける忌夢のその顔は、最早「黙ってろ」というようなオーラに染まっていた。
「それで僕は…仕方なく男性用のボクサーパンツを買ったんだ…
　バレるはずがない…バレる筈がなかったんだ……なのに、なのに……！廊下を歩いている時にお前とぶつかって…その場で倒れたボクは、皆んなにボクサーパンツを見られてしまったんだ…!!」
「あっちゃぁ～、それは災難やったなぁ」
「災難ですむか！それからボクのあだ名は『プロボクサー忌夢』だぞ！」
「カッコええやん、スタイリッシュなあだ名やん」
「うるさい！それに屈辱な事件はそれだけじゃない…！
　メガネがサングラス化事件になったり、制服がいつの間にかシースルー事件だったり…全部何もかもお前が原因じゃないか!!」
　幾度のない事件を思い出しては日影を八つ当たり？にし激怒する。日影は勿論感情がないため「そりゃあすまんかったな」と、何の悪気もなく謝る。実際自分が本気で悪いとは思っていないため、忌夢の八つ当たり？というのが分からない。だから、日影は何も悪くないにも関わらず誤ってしまうのだ。まあそこが日影らしいといえば日影らしいので何とも言えないが。
「それから僕は幾度となくお前に果たし状を送ったんだぞ！選抜メンバーの座をかけて戦え！って！なのにお前は…!!ボクに逃げてばっ

かりだったじゃないか！」
「もしかしたら気ぃつかんかったか、或いは興味が無かったんやね」
「お前は何処までマイペースだったんだ??」
ありえない。そんなバカな…今まで逃げてきたのではないのか？
日影には嘘をつく理由はない。だって、日影は自称、感情がないのだから。
だから嘘をつく必要も、理由も何処にもない…つまり、日影の言葉は全て本当だということだ。
「そもそも、アンタがわしのこと知ってるのなら、わしがこう言う性格だったってことを把握してなかったんか？」
「うっ、御免なさい…って！何で僕が謝らなきゃならないんだよ！謝るのはお前だろ!?」
「なんでやねん」
「ボケてない!!ボケてるのはお前の方なんだよ!!」
お前らお笑い芸人か。とツッコミを入れてもおかしくない二人組。
忌夢は髪をくしゃくしゃと乱暴に掻き回す。
ここまで日影が恐ろしいくらいバカだとは思わなかった。感情がないとか何とか言ってるが、アレはもうそんなレベルではない。
そもそも日影が何故感情がないのか逆に疑わしく思えてしまうくらいだ。
「あっ、ちょっと待ち…アンタもしかして忌夢さんか？」
「なっ!?」
ここで初めて名前を呼んだ日影。忌夢の発した声は思い出してくれた喜びではなく驚きだ。しかしそれは決していい事ではない…
「アンタの顔を見てちょっと思い出してきたわ」
「ななっ!?」
「わしの周りにうろちょろしとった先輩がおったんやけど、それがアンタだったのか…知らんかったわ」
忘れてた訳ではない、知らなかったのだ。この人が忌夢であり、忌夢が誰なのか…
だから日影は今まで思い出すことが出来なかったのだ。

つまり、覚えるもなにも、忌夢という存在そのものを知ったのが今日で初めて。という意味なのだ。
その意味を瞬時に見解した忌夢は、驚愕のあまり声にすら出せず、口をポカンと開けていた。
知らず知らずに忌夢を傷つけてた日影は「すまんかったの」と軽く頭を下げ謝る。だが既に遅し、忌夢の怒りゲージはＭＡＸに達していた。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふざけるなあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!」
「!?」

忌夢の大声が響き渡り、羽を休んでた小さな小鳥たちは驚き空を飛び逃げていき、草はらに隠れて動いていたネズミでさえも忌夢の激しい怒りを孕ませた声に素早く逃げる始末。
空を、海を、大地を轟かせるような忌夢の怒鳴り声に、日影は思わず、咄嗟に耳を抑えていた。
「誤って済むとでも思ってるのか!!水着上下反対事件だって、ハンドタオルが油揚げ事件だって…ボクは1日たりとも忘れはしてないぞ!!」
「物覚えが良いんやね、流石パイセンやな」
「良い加減にしろ!お前はボクを侮辱して楽しいのか!?お前はいつもそういう間の抜けた性格だとは前々から知ってはいたが…まさかここまで酷いとは…重症ものだぞ!」
「わし病気かかってへんで、健康診断でも異常なしと言われてるから」
「そう言うお前の間抜けな所を世間では病気と言うんだ!!」
日影が何かを言えば忌夢がツッコミを入れる。
メガネを掛けた忌夢がまるで何処ぞのあの有名なダメガネツッコミ担当に見えるのは気の所為かもしれない。
「何と言うか、忌夢さん面白いなぁ、会話して全然飽きないわ」
「お前が勝手に面白がってるんだろ!会話のキャッチボールにもならないし!」

「当たり前やん、だってボールないんやから、何を言ってるん？」
「こっ…のっ……!!」
何処か抜けてるような日影に、忌夢は思わず拳を強く握り、思いっきりブン殴ろうかと思ってしまった。
いや、落ち着け……
そう言えば自分は言ってたではないか。思い出して貰わないと恨みを晴らせれない…と。
思い出して貰わなければ殺すどうこう以前に闘うことが出来ない…しかし、日影は僅かながらに思い出してくれた。
今までの事件を覚えてないのが未だに腹が立つが、しかし自分のことを思い出させるだけでここまで一苦労してるのに、全部の事件を思い出させるというのも無理があるし、1日掛けて話しても時間が足りないだろう…
それにこれだけ自分が真剣に自分のことを思い出させようとしてるのに、ほんの少ししか思い出してない（知らなかった）ため、きっと全ての事件を言ったとしても骨折り損のくたびれ儲けに等しいだろう。
だが、日影はそれでも一応忌夢を思い出してくれた。自分の周りにうろちょろしてた先輩がいたと言っていた、そこも気に入らないが、忌夢だということを知ってくれたではないか。つまり、もう話さなくてもいい。だって思い出してくれたのだから。
「まあいい……お前は僕のことを思い出してくれたんだよな？ほんの少しでも…
なら問題ない…これでようやくボクはお前を殺すことができる！復讐することができる！ボクがこの日をどれだけ待ち望んでいたことか！
これでもう長々と話さなくても済むし、伊佐奈様に仕打ちを受けることはまずない…！では日影…勝負だ！行くぞ！」
「ボクシングでか？」

ドンガラがっしゃああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!
日影の予想外のアホっぷりに、ぶっ飛んだ発言に、忌夢は壮大に、派手にコケだしてしまう。ギャグ漫画などにはよくあるベタなコケ方だが、そこらのズコッ、デデ~ん、などの弱々しいありがちなズッこけ方など比にはならない、世界一とも呼べるのではないか?というような超ド派手なズッコケであった。
忌夢は直ぐに起き上がり、ズレたメガネを掛け直し、怒りのコスモを燃やした眼光を放つ。
「違うわ!!ふざけるのもいい加減にしろ!!!嫌味か?嫌味なのかそれは!?ボクへの嫌がらせか!?敵でありながら幾らなんでも失礼すぎるだろ!
ハァ~~……闘う前から疲れるなんて…コイツは何処までも僕の神経を逆なでするヤツだな…!」
先ほどまで心を落ち着かせ、ようやく闘えると思い胸が高鳴り、闘う決心がついた矢先にこの日影の何とも言えない対応。
この怒りを誰かに知って欲しい、これまでにない怒りを早くぶつけたい。
「いやぁ、すまんすまん、ボクサーパンツの話ししてたから、ボクシングで決着つけるのかと思っとったわ」
「そんな決着嫌だわ!……はぁ、もう良い。さっさと始めるぞ!っと言いたい所だが…一つ疑問に思ったことがある…」
「ん?なんや?」
「今まで下らない話をして来たからこそ思ったんだが…お前は確かに感情が無いんだよな?なら、どうしてお前は闘うんだ?何のために此処へやって来た?」
先ほどまでのお笑いコンビのような空気は毛頭ない。忌夢のその表情は先ほどのようにツッコミを連発してたあの突っ込み担当役の表情とは違い、いつも以上に真面目で、とても険しい顔立ちだった。
「何や急に?」
「良いから質問に答えろ。益々分からなくなって来た…お前みたいに感情がないうえに、闘う意思すら感じ取れないお前が、何で此処に

やって来たのかを……
　だってそうじゃないか。お前は僕の果たし状にだって来なかったし、あんだけ挑発してたのに一向に僕に構わなかったお前が、何で今回に限って此処にやって来た？ボクはお前が行動を取った原因を知りたい」
　どれだけ挑発し、どれだけ果たし状を送っても、その時の日影は本当に感情というものを知ろうとすら無かった。だからそのため日影は相手にしようとは思わなかったのだろう。
　だが今こうして日影はここへやって来た。だから知りたいのだ、何の感情もなかった日影が何故、ここへやって来たのか、して日影を動かした原因とは一体何なのか？そして日影がそこまでして闘う目標は？理由は？
　分からないからこそ忌夢は問う。
「理由は色々あるけど、一先ずわしの闘う理由は、仲間と一緒に生きたい。そして目的は今の蛇女を助けて伊佐奈をブチのめす。ただそれだけや」
　日影のその表情も、忌夢と同じく真剣な顔立ちでありながら、先ほどのボケみたいな感じとはいかないのか、偉く真面目な表情をしている。
　それに対し忌夢は――
「ふっ…ふふふ…はははは――
　はっはははははははは!!!
　そんな理由で？お前は命を捨てに来たのか！今回はボクも笑えるぞ」
「何処が面白いのかさっぱり分からんわ、それに別にわしは命を捨てに来たわけじゃないで？わしだって生きたいし死にたくない」
「死にたくないだと？ふん、所詮はその覚悟か…少しは強くなったかと思ったが…ガッカリ、つくづくお前は残念だよ…」
「蕎麦屋の店員に似てる忌夢さんに言われてもなぁ」
「これ以上お前の下らないボケはもう聞きたくない、だから真剣に話せ」

やっぱり言っちゃうのか、或いは癖になってるのか、ついつい巫山戯たことを言ってしまう日影。そんな彼女にはもう慣れたのか、忌夢の心の中に怒りが込み上がらない。
「ボクは命など惜しくない！伊佐奈様のためならこの命、幾らでも捨ててやる!!」
「伊佐奈のためにねぇ、それがアンタの闘う理由か？」
「当然だ」
「そっか…」
伊佐奈の為なら命を軽々と捨てようとする忌夢の決意に、日影は呆れたようなため息をつく。日影のその表情から察するに、怒りを堪えている。
「わし、戦う理由がもう一つ増えたわ」
「――は？なんだそれは――？」
「思いっきりブン殴って、アホウの目覚ましてやるわ！」
日影は瞬時にナイフを手に取る。忌夢も日影が突然攻撃態勢に入るとは思わなかった為か、反応が遅れる。
間違ったことを正す。日影のやるべきことがもう一つ増えたのはソレだった。

「はぁ……お姉ちゃんも始めてるね……」
一方で、紫のロングをした根暗な女子、紫は忌夢を見つめてため息

をつく。
実は紫と忌夢は血の繋がった姉妹であり、紫は忌夢の妹なのだ。外見的にはあまり似てはいないし、両備と両奈の双子姉妹のように、オッドアイの特徴もない…しかしそれはあくまで見た目の話。
紫と忌夢の特徴…それは――
――禍魂――
禍魂とは、ある忍家に代々伝わり発現する拒絶の力。怒りや拒絶といったネガティブな感情により発現し、扱う者は上位の忍でさえも恐れられている。
因みに、紫が引きこもりな原因も、根暗で常にネガティブな原因も、それにあった。
だがそのお陰で、彼女は引きこもりが出来たのもこの力のお陰だと心の隅ではそう思っている。
もう一つ思うのは、姉を傷つけてしまったことだ――――
――幼い頃、無理やり訓練をさせられ、妹のやる気のなさに、忌夢は紫の愛用として扱ってる人形、『べべたん』を強引に奪い、引きちぎろうとしたのだ。
その頃からなのか、紫は思わず禍魂の力を発揮してしまったのだ。
それも、自身も気付かずに――
例えでいうなら、個性の発現と同じだ。個性は4歳の頃になると発現する。4歳でなくとも、赤子の頃から個性が発現するといった現象がある為、4歳から、とは言わないが…
個性とは自然に発するもの、だからこそ紫の発現も、それと同じだ。
禍魂とは、ある意味個性と変わりないように見え、また禍魂は個性と類似していると、忍学科の教科書に載っている。それは無理もない、個性もまた、代々引き継がれてきたものが多いのだから（また、轟みたいに、個性婚で混ざり合った個性もあるが）。
気がついたら、姉は目の前で倒れていたのだ。それもボロボロな体で、地べたに…紫にとって忌夢とは自慢の姉であり、大切な姉、大好きなお姉ちゃんなのだ。両備と両奈と同じ、姉想いなのである。

だから姉が傷ついた時は、紫もショックを受けた。自分の所為で、姉は傷ついてしまった…

そしてそれを見た父親や、禍魂の力を見た蛇女のスポンサーや試験官などは、姉の忌夢よりも強いと称賛された。

だけど紫は嬉しくなかった。どんなに強い力があったとしても、姉を傷つけてる事に変わりはない…

そんな紫に、忌夢はこれまでに無い屈辱を受けたような顔で、紫を避けていた。

そんなことからか、紫はこの力でこれ以上姉を傷つけたくなかった。

だからこそ紫は身も心も、閉じ込めるように引きこもりをしたのだ。

紫はこの力のせいで自分の人生が狂ってしまったのだ。

超人社会――ヒーローが個性を使って活動すれば、個性のせいで人生が狂ってしまった人間など少なからずこの世界には存在する。

紫はそのうちの一人の人間である。

この力さえ使わなければ、姉は何も傷つかない…本当に姉のことが好きならば、傷つけずに穏便に済ましたい…そうすればお姉ちゃんも許してくれるのかな？

こうさて紫は、引きこもり生活を始めたのだ。

「本当は戦いなんてしたく無いし…争いごも好きじゃ無い……

でも、お姉ちゃんの頼み、って言うよりも無理やりって感じに付き合わされたし…伊佐奈様の命令だし……それに逆らったら、ネット解

約したり、またゲームも全部取り上げられちゃう……あと少しで、クリア出来そうなのに……」
　禍魂の力は伊佐奈も勿論知っている。何よりも伊佐奈は紫のその力を充分、期待するほどだ。
「できれば、早く終わりたいなぁ……捕獲なんて…殺すことよりも難しそう……」
　そして紫は嫌々な気持ちで正面の未来に視線を戻す。紫は「始めますか…」と呟くが、肝心の未来が何やらえらく真剣にこちらを見つめている。
「ねえ、アンタ…まさかだとは思うんだけどさ…」
「…？はい？」
　未来は深呼吸する。
　まさか、そんなことがあるわけがない…多分気のせいなのだろう…気のせいに決まっている。この世界の何千人、何万人の確率として、まさかそんなことあるわけがない…
　でも、聞かずにはいられなかった。
「アンタさっきさ、忍の家のラプンツェルって言ってたじゃん？もしかしてだけどさ…アンタ…『ｃｕｔｅ　ｈｉｋｋｙ』？」
「!?な、なんでそれを知ってるんですか!?!」

　え？
　動揺してるってことは…まさか？
　未来は目をまん丸にし、顔を赤くしてる紫を目の前にして呆然としている。紫自身、顔を赤くし、恥ずかしさのあまりなのか、涙目になっている。こんな紫は姉でも見たことがないと言うだろう。
　しかし、だ。問題はそこじゃない…自分の出してる小説を愛読してくれてる大ファンがまさか紫だとは思わなかったのだ。
　未来の出してる小説はとても有名で、アクセス回数なんてとんでもない数なのだ。
「まさか……やっぱアンタが…ねぇ…」
　引きこもり生活を送ってるならそりゃあ小説を出した途端「いいね

ボタン」が１００を超える訳だ。
だがコメントの内容は、ネットと現実でのキャラがかなり違うしそこら辺についても驚きを隠せないけど。
因みに未来のネームドは「仏麗」。由来は未来からだ。未来を英語でｆｕｔｕｒｅと呼ぶ。それをローマ字にして読むと「仏麗」になることから、小説での名前はそのようにしてある。
「ど、ど、どうして!?なんで!?私の秘密をあなたが知ってるんですか!?!」
「だって、私は」
――仏麗だから。
そう言いかけた時だった。

「……そうですか、まさかクラッカーなんですね…」

だが紫の言葉が未来の言葉を遮った。未来は思わず「えっ？」と声を漏らし、視可できるドス黒い紫色の、負のオーラを漂わせていた。これは禍魂から来るものなのか?それともただ単なる怒りによってのものなのか?それは分からない…ただ――
「そうやって、私の秘密を奪っていくんだ――」
「え?ち、違うわよ!話をちゃんと聞いてよ!わ、私は…」
「私の秘密を知ってる者は、絶対に生かしてはおけません――死んでもらいます!!」
話し合いで分かち合えるような状況でもないというのは確かに分かった。
「ちゃんと最後まで聞いて～!!!」
未来の言葉など紫には聞こえるはずがなく、今の紫は完全に勘違いをしている。暴走状態だ。未来は色んな意味でこの状況に困っていた。

６６話「ぶちかませ拳」

「日影ぇぇ!!」
忌夢は甲高い声を叫び、地面を蹴り、自慢の武器の伸縮自在の如意棒を上手く使い跳躍する。
その姿はプロの棒高跳び選手のようだ。一気に日影との距離詰めると、相手に向けて思いっきり如意棒で突く。
忌夢の如意棒は伸縮自在に伸びるため、予測不可能。そのため防ぐことが極めて困難なのだ。
だが予測不可能という立場なら、こちらも同じこと。
「ほっ、やっ、とっ」
日影は表情一つも変えず、軽い身のこなしで忌夢の攻撃を難なく躱していく。
避けられることに、腹の底から苛立つ忌夢は軽い舌打ちをしてしまう。
「逃げるのは一人前だな！だがボクに逃げてばかりじゃ勝つこともできないぞ！」
「それもそうやな」
日影は忌夢の言葉にこくりと頷くと、何処からともなく殺伐としたナイフを何本か取り出した。
それを忌夢目掛けて投げかかる。鋭利な刃物か忌夢に襲いかかる。
「僕を舐めてもらっては困るな!!」
だが忌夢は如意棒を自分を中心に回し、目にも留まらぬ速度でナイフを蹴散らす。
ガキィンと弾く金属音が鳴り響く。
「でりゃあ！」
そして忌夢は真上に高く飛ぶと、想定外の速度で日影の腹部に向かって蹴りを食らわす。
「ッ!!」
「どうだ！」
「秘伝忍法――【ぶっ刺し】！」

「んなっ!?」
攻撃を喰らい、至近距離がゼロになったところを、日影は秘伝忍法を使った。
毒々しい色をした雰囲氣を纏い、妖しい殺気をナイフに込める。
その一撃が忌夢に炸裂した。
「ぐぁっ!?!」
思いの外、ダメージを食らった忌夢は、思わず吹き飛ばされてしまう。
(たかが一本のナイフでこの吹き飛ばすほどの威力…以前よりも力が増してるな…だからこそ…そうでなくては面白くない!!)
「秘伝忍法!・【ローリングサンダー】!!」
忌夢は電撃を纏った如意棒を横に回し、横回転させ前方の日影目掛けて投げ飛ばす。
日影は難なく避けるが、この如意棒が壁に反射することは知らず、壁に当たって反射し、予想出来ない方向から攻撃が来て、日影はそれをもろに食らってしまう。
「!?」
当然、訳の分からないと言った表情を顔に浮かべる日影は、攻撃を食らってしまい、電撃を浴びてしまう。
そして如意棒は持ち主の忌夢に還っていく。因みに忌夢のこの厨二チックな名前をした秘伝忍法【ローリングサンダー】はナムコ発売のファミコンゲームソフトの名前の由来だそうだ。
ゲームの名前の由来は、忌夢で初めて?なのかもしれない。
因みにこの秘伝忍法を食らった日影は、先ほど強い電撃を浴びてしまったため、体が麻痺して暫く動けない。
「アカンな……これ」
「まだまだ行くぞ?秘伝忍法!・【デッドフォックス】!」
如意棒に強い電撃を纏ったその瞬間。
フッ――
「!?」
目の前から忌夢の姿は消えた。一瞬にして消えた目の前の光景に、

日影は息を呑む。
突然消えてしまったのだ、一体何処へ…と頭がよぎった瞬間。
背中から激しい電撃と、鈍痛が走る。日影は苦しい表情を浮かばせながらも、当然動くことは叶わず、ただ忌夢の攻撃を食らうことしかできない有様だ。
忌夢のこの瞬間的に素早い超スピード。流石に日影のこれも、対応するのは難しい。
(まずいのぉ…これは予想外やったわ…と言っても予想なんてわし、感情ないから分からんけど)
目に見えないスピードで襲いかかってくる忌夢に対して、日影は心の中で呟くも困惑した様子を見せる。
攻撃が止むと、忌夢は息を切らし、ボロボロになった日影を、上から見下ろす。
「どうだ?これが伊佐奈様への忠誠心の力と、ボクが今までお前に対する数々の恨みによる力だ!!」
メガネをクイッと上げると、誇らしく口角を吊り上げる。
今まで辛かった…訓練も、雅緋が廃人とかし、面倒を見て、一向に意識を回復しない雅緋の姿、見てるだけで、時を過ごすだけで辛かった。胸が苦しくなった。

それでも、雅緋のためならと、無理やり心の中で言い聞かせ、心を支えとし過ごして来た。
様々な苦しみから耐え抜き、ようやく強くなれたのだ。
あの日影をも超えるほどに――

「安心しろ日影、お前のことなど忘れやしないさ。なにせお前はボクに様々な嫌がらせをして来た。忘れる、ということはぼくの存在そのものを否定しかねないからな」
物言わぬ日影に吐き捨てるようにそう言うと、忌夢は背中を向けた。
「さて…伊佐奈様に報告を――」

「後ろや」
「は？」
瞬間――
「秘伝忍法【ぶっかけ】」

紫色のオーラが殺気を露わにし、死が具現化したものが襲いかかる。
突然の出来事に、忌夢は目を丸くし、口を開けたままポカンと見つめることしかできなかった。
赤い狂乱の瞳に魅入られた忌夢は、まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

何が何だか訳の分からないと言った忌夢は、理不尽にも日影の秘伝忍法をもろに食らってしまう。
狂乱渦巻く日影の殺気、毒々しい色に染まった紫の禍魂に似たオーラ。
日影は蛇という存在を超越し、毒の牙を磨き、研ぎ澄ました異形な化け物と呼んでも過言ではない。

「う、うわ――――」
叫ぶ間も無く

ザシュッ！
――切って、
ズバッ！
――裂いて
ズババババァ!!
――乱れ
サグ！
――突き刺す。

日影のナイフによる巧妙な戦術、秘伝忍法…いや、覚醒に近きこの技は、死んだ日向の想いから来るもの。
このナイフが、日向の形見がなければ、きっと日影はここまで強くなれなかったろう。
超秘伝忍法の類に近いこの技は、喰らえばいくら上忍だろうとプロヒーローだろうと、無事では済まないだろう。

日向の想いが、日影を強くした。

今まで、感情のなかった日影は、日向の悲しみすら忘れかけていた。
いや、心の中に閉じ込めていたのかもしれない。
せめて自分だけは、戦場で生きなければならないと…
だがいつしか、自分は本物の殺戮兵器と化していた。
そのことから、死ぬという心の恐怖があの時無くなっていた。
自分は任務のためなら死んでも良いと…任務で死んでも誰も悲しまない。そう思って生きてきた。
だが、半蔵と雄英と関わったことに、自分自身、気づかずに心が変わっていた。

仲間と一緒に生きたい。戦場でも、死にたくない。
昔の自分なら絶対にあり得ないことだし、考えることすらなかった。
だから、こんな自分と一緒に過ごしてくれる仲間がいて嬉しい。生きてても良いという証拠があって嬉しい。
抜忍となった自分たちは、安息などなく、険しい道のりを歩くことになる。
それでも、生きるというのがこんなに嬉しいと思うことに、喜びを感じている。
感情はないけど、心はある。だからこれからもっと感情という不思議で素敵なものを感じていきたい。

だからこそ、忌夢の「死んでも良い」という心だけは許せなかった。

昔の自分がもし、あの時半蔵も雄英もいなかったら、完全に滅びの道へ進み、仲間と大切なものを失い、悔いを残していただろう。

忌夢の、彼女の詳しいことはよく分からない。

昔からいるのに、出会って間もないような感覚、だけど放ってはおけない。

何よりも昔の自分と同じ道に進ませないために。

日影は狂乱から元に戻ると、忌夢にあらゆる攻撃が襲いかかると同時に、音が出る。

あまりにもの早いスピードのあまり、音が出るのが遅かった。

「ッッッ!!!?!」

忌夢の体は一瞬にして体力を一気に削られ、訳もわからずその攻撃を喰らい吹き飛ばされてしまう。

(な、なんだ今の!?!全く見えなかった…分からなかったぞ!これは…いった――)

「忌夢さん」

「!?!」

そして、吹き飛ばされた忌夢は方向が違うため、居ないはずの存在、日影が吹き飛ばされてる忌夢の目の前に姿を現して居た。

「昔のわしもよー思ってたわ。命なんて惜しくない、死んでも誰も悲しまない、だから戦場で死んだってそれはそれで問題ないって、よおそういう考えしとったわ。感情なければそらぁ死ぬのなんて怖くないしな、

けどな、それは違うんや。それだけは違うってことはハッキリ言えるで。同じ人間として、同じ道を歩む者として…

だから、ワシはこう言うんやで？」

すると、手に持ってたナイフが動き出す。忌夢は日影の攻撃が来るとすぐにわかり、警戒する。

だが、忌夢の予想を、日影は裏切った。

「――は？」

なんと、手に持ってたナイフをあっさりと放り投げるように捨てたのだ。

殺意を込めてたナイフを、簡単に手放す。それも日向から貰った愛用のナイフを…

日影の自慢のナイフをあっさりと放り投げる、その行為は、自分の武器を簡単に手放すと一緒だ。

あり得ない行動に、忌夢は頭の中が真っ白になり、考える力がなくなっていた。

毒によるダメージ、他の人の秘伝忍法とは違う類の忍法によるかなりの痛撃、ただでさえ無事ではない忍夢は、意識を保つことだけが精一杯だった。

それを、目の前で意外な光景を見せれば、それは思考も動かなくなる。

日影はそんな忌夢のことなど御構い無しに、握りこぶしを強く握る。

「馬鹿な考えないで真っ直ぐ生きろって」

バッキイイィィィーー!!!

日影の怒りに燃えた拳が、忌夢の顔に炸裂する。
骨の軋む音が響き、忌夢は先ほどの秘伝忍法に吹き飛ばされた力に便乗し、殴ったと同時に吹き飛んだ。
そしてそのまま壁に背中を思いっきり打ち、「ガハッ！」と息が出る。
頬には殴られたせいか、アザができている。日影は拳で殴ることはあんまないためか、初めて人を殴ったため、不慣れなので拳に僅かな痛みが走る。
「これで終いや」
日影はいつもの無感情で、でもって明るいような感じでそう言うと、先ほど放り投げたナイフの元へ歩きより、日向から貰った自慢のナイフを手に持ち、空中に投げてはキャッチする。
ボロボロな身体になりながらも、立ち上がり、無感情で立ち尽くすその光景は、忌夢が今まで見て来た日影とは違い、以前よりも遥かに強さを感じて居た。
「ば、馬鹿な…そんな……この僕が……」
「忌夢さん、アンタの負けやで。たとえ意識があったとしても、わしには関係あらへん。負けは負け、ワシはアンタ殺す気ないし、ハッキリ言って蛇女を救いに来たんや、殺すわけにはいかんのでな」
日影の能天気に近いその言葉に、思わず歯ぎしりしてしまう。
「ふざけるな!!ボクはまだ――
ッッ！」
「あー、無理に動くと傷口開くで？ここは大人しくしといた方が身のためや」
「なん…だと…？」
「言ったやろ？ワシはアンタら救いに来たって、それにワシらの目的は伊佐奈やしな。無駄な戦闘は避けたいし、救いに来たのに殺したら意味ないやろ？」
日影の正論に、認めざるを得なくなってしまう。
自分たちは殺す気で居ても、日影たちは救いに来たため、こちらを殺す気は無い…

敵からみれば腹立たしいことだが、忌夢はこうも思った。
あの日影が、初めて相手の心を気にかけた。
その事実に、忌夢は驚きを隠せなかった。前までの日影なら絶対にあり得ないことだ。例え相手が敵であろうと仲間であろうと、向かって来る者なら迷わず殺す。
殺戮兵器だ。
だが、日影は抜忍になって大きく変わった。自分が見てない間に、日影は急成長したのだ。
力も、心も……
(あの日影を…そこまでして変わらせたのか?それが……仲間だと言うのか…?)
仲間の強さに、認めざるを得ない形となった。
「ふ、ふふふ…日影、あくまで仲間のためにと力を振るうか…昔のお前なら、敵味方問わず、皆殺しにして来た…
そんなお前がボクを生かすとはな……聞いて呆れる…日影も落ちたな!」
「何度でも言えばええやん。別にワシは気にしんし、仲間と一緒にいたい。それがワシの本心やから」
「ふっ……だがな…日影…
昔よりも、今の方がよっぽど強い。そう思えた」
忌夢は、悔しい心を胸にいたがながらも、日影の成長に思わず笑みをこぼした。
敵に、日影に笑みを浮かべたのは、生まれて初めてだ。
「そっか…まあ取り敢えず、殴った甲斐はあったんかもな」

日影は髪をくしゃくしゃと掻きながら、忌夢の表情を見つめていた。
日影がなぜナイフをあっさりと捨てて、忌夢に素手で挑んだのか…
その理由は単純。
アホウを思いっきりぶん殴って、目を覚まさせる。
それが日影が忌夢を殴った理由であり、他にはそれと言った理由は無かった。
「さて、戦いは終わったし…他の皆んなはどうしてるんやろうな？」

こちらも同じく、未来と紫の両者は戦いを終え、お互い傷つき、ボロボロになりながら、息を切らしていた。
そして勝敗が決まり、勝ったのは…未来だった。
「ハァ……はぁ……あ、危なかった…あの紫色の波動？禍魂って言うのかしら？教科書で読んだことはあるけど…あの攻撃があと少し食らってれば確実に死んでた…」
衣装はビリビリに破れており、かなりの深手を負っていた。

それでも、戦闘スタイルによってなんとか勝つことに成功した。
未来は呪いの弾丸を何発か放つことが可能で、紫は遠距離攻撃は可能だが、それもほんの少し…禍魂を利用し上手く念じ、サイコキャノンみたいにボールで飛ばす。
当たれば威力は絶大だが、避けられれば無意味…しかも避けられやすい攻撃のため、これは愚策とも言える。
逆に、近距離攻撃なら思う存分力を発揮できるので、向こうからすれば、近距離戦に持って行きたかったのだろう。
紫の衣装も同じく、ビリビリに破れており、はちきれんばかりの胸なんかは、食い込んでいる。
「うぅ〜……か、勝てなった……そんなぁ……」
紫は負けた悔しさよりも、ネットで自分の素性を未来に知らされた羞恥心により、顔を真っ赤にし、目に涙を浮かべる。
更にはネット解約とゲーム全て取り上げられてしまうという…ゲームプレイヤーやネット民にとって、これまでに辛いことなどそうそうない。
「お願いします…未来さん……ネットのことだけは…どうか秘密にして下さい…
お願いします…でないと私…恥ずかしすぎて……溶けてしまいます……」
そこは死んじゃう。じゃなくて?と、未来は心の中で呟いた。
しかしと未来は雑念を振り払い、真剣な眼差しを向ける。
「別に言わないしそこまで恥ずかしがることじゃないわよ…というか、人の話をちゃんと最後まで聞いて?私は貴方に弱みを握って脅すとか、楽しみを奪うとか、そんな下らないことをしに来たんじゃないの」
「そ、…そうだった……んですか?だとしたら私はまた……
ああ、ゴメンなさい…勘違いしてしまいました……こんなんじゃ、仏麗さんに会っても…嫌われちゃう」
紫は「良かった〜」と安堵の息をつく反面、「また勘違いしてしまった」というネガティヴな考えが頭の中に過ってしまう。

「別に嫌いにはならないわよ…アンタのこと…ううん、絶対に嫌うわけないじゃない」
「？ど、どうしてそんなこと、分かるんですか？」
「決まってるでしょ？クラッカーでもないし、私も忍の家のラプンツェルを知っている…アンタのことも…なら、理由は簡単よ。

私が『仏麗』なんだもの」

「え？」
未来の爆弾発言に、紫は目を丸くし驚愕色に染める。その目はまるで「この子供が面接？本気で言ってんの？」みたいな、少し不快な感情が伝わってくる。
いや、よくよく考えたら無理もないだろう。なにせ、目の前にはいつも作品を愛読してるその作者が、未来であるなどと…ましてやそれが今目の前にいるなんて…誰も想像つかないだろう。未来もそうだったから――
「な、何を言ってるんですか!?だ、だって…キャラが…！」
「それを言うならアンタもでしょーが。『キャーー!!うぷ乙ー！』とか、『ヴィランとかマジクソうぜぇ、迷惑だしタヒね』とか、めっちゃ言ってたじゃないの」
「あわわわ!!!そ、それは…!!」
紫は顔面をトマトやリンゴのように更に顔を赤く染め、あわあわと慌てた様子で未来の口を止めようとする。
「そ、それじゃあ…やっぱり？」
「うん、初めまして…嬉しいわ。私の作品を愛読してくれる、最高のファンがいてくれて」
「わ、私も…嬉しいです……初めまして……仏麗さん……」
こうして二人は微笑み合い、日影と同じく戦いを終えたのであった。

詠、日影、未来、春花は、各々の戦闘を終え、両者ともに辛い思い、苦しい戦いを潜り抜けた。
蛇女の四人は深手を負って、よもや戦える状態ではないが、それでも四人の心は、紅蓮隊の四人のメンバーによって救われた。
特に両備と両奈は大きいだろう。二人は元々蛇女の生徒でもなく、今まで苦しみ悩んで生きてきたため、危うく本当に手に負えないイカれ野郎の部類に入っていたのだから。
他にも、自分の命など惜しくないと告げる忌夢、自分の楽しみを見られ、真っ黒な怒りに身を焦がした紫(これは誤解だけど)。二人の心も救われた。

あと残るは――

「はぁ……ハァ……」
「焔……ハァ……ハァ…」
お互い息を切らし、大量の汗が滴り落ち、刀と刀を持つ、雅緋と焔のみ――

焔紅蓮隊リーダー、焔ｖｓ秘立蛇女子学園選抜メンバー筆頭、雅緋。
悪と悪のリーダーが、命を燃やし、命を懸けて、刀を交えて戦う。

勝者の行方は何方へ――

67話「雅緋　オリジン」

「……」

この男は、伊佐奈は莫大な金を利用し、幾多ものの忍学生を買ってきた。

買えば買うほど、使えない忍学生を漏り出し、それから雅緋を使って部屋に連れて行き、容赦無く処分する。

忍の血は他の人間とは違う、特殊なものであり、一定量の血を集めれば妖魔を造ることが出来る。

忍同士で戦わせることよりも、使えなくなった人間を処分し、妖魔の生贄として捧げた方が効率が良い。

だから伊佐奈は、学炎祭が起きる前から計画を進めていた。

妖魔を世界中に売り、敵（ヴィラン）がそれを買い、世界中を暴れまわり、戦争を起こし、社会を壊す。

そして秩序が亡くなった世界で、敵と悪忍を我が手中、部下に収め、自分が頂点に立つ。そうすれば、再び敵（ヴィラン）となり、暴れることが出来る。

王となり、自由に生きることが出来る。その為ならば、自分の利益となるならば、他人の命など容赦無く利用する。

「にしても…今何時だ？」

魔門から貰った説明書を読み終え、壁掛けの時計を見た。魔門が出てから時間は経っている…にも関わらず選抜メンバーから一向に連絡がつかない…

これは明らかに可笑しいと判断した伊佐奈は、顰めた面で念話に近い、エコーロケーションで選抜メンバーと連絡を取る。

『おい、お前らまだか？遅いぞ…何してる？一向に連絡がない…報告を入れろ。焔紅蓮隊はどうなってる？』

しかし、返事がない。

『応えろ』

それは無理もない…他の四人は焔紅蓮隊と戦い、敗北し、心を救われたからだ。

やれ両備と両奈は、涙こそ少しずつ流れてこなくなったが、それで

も甘えたいと言わんばかりか、二人は詠から離れない。
忌夢は日影に負けてしまったものの、悔いはなく、恨みも復讐も何もかも消えていた。
紫は目の前に、自分の大好きなネット小説『忍の家のラプンツェル』の作者が未来であり、こうして出会ったことに喜ばしい笑顔を浮かべ、未来と仲良く談笑している。引き篭もりをしてから、紫がこんなに笑ったのは見たことがない…と言える彼女のその素敵な笑顔は、とても可愛らしいものであった。

『返事をしろ』

だから、彼女たち四人はもう伊佐奈への忠誠心など毛頭ない。
術から覚めた忌夢と紫、目的を知り、無理やり自ら覚めた両備と両奈の双子、どの道伊佐奈の素性を知った彼女たちは、伊佐奈の道具ではなくなった。いや、そもそも最初っから彼女たちは伊佐奈の為の道具ではない。
彼女たちは、己の抱えた想いと、信念の道、忍の誇りとして、彼女たちは蛇女に在籍し、忍となったのだ。
伊佐奈の道具じゃない。
(…?おかしいな……返事がない…普通なら真っ先に雅緋から来るはずなんだが……なのに連絡がつかないだと?こんなこと初めてだ……
どういうことだ?)
エコーロケーションで通信できるよう彼女たちに特別な術も掛けていた。
本来彼は個性を使う為、忍術といったものは大してないが、それでも多少の術は習得していた。
個性との相性が良かったのは、念話の類に近い通信。
本来彼の個性ならば、水中限定での通信が可能、陸上での通信は不可なのだが、特殊な術を得た伊佐奈は、陸上での通信も可能になったのだ。

『雅緋、応えろ』
『……ザザ…ザ……は…い……ザザザザ…』
多少ノイズは掛かってるものの、ようやく雅緋から返事が聞こえた。
この雑音と彼女の声からして恐らく、派手にやられてることが伝わって来る。
『他の奴らと連絡が繋がらない…一体何があった？お前ら何してる？焔紅蓮隊はどうした？さっきから随分と時間が経ってるぞ…』
『もうし…ザザ…ません……ザザザ…連隊が……抵抗し……ザザザザザザ……処分を……』
『もういい』

――――プツン
激しいノイズで彼女の声は聞こえなかったが、大体の状況は掴めた。
焔紅蓮隊が抵抗し、彼女は処分しているのだろう…
となると、他の連中が繋がらないということは、勝負が決まり、焔紅蓮隊に負けたという意味になる。
他の連中が繋がらない、雅緋の声、いつまでも無駄に時が過ぎていく時間。
今まで伊佐奈が頼れると信頼して来た選抜メンバー…
「どいつもこいつも……使えねえな!!」
ここで初めて、激しい怒りの色に染めた伊佐奈であった。

（くっ！やはり連絡が取れなかったか……大分深傷を負ってしまったからな…）
雅緋は通信が切れたこと、伊佐奈が確実にキレているであろうと想像し、思ったよりも深い傷を負ってしまってたことに、雅緋は思わず心の中で舌打ちをする。
雅緋の忍装束は大分傷が付いており、火傷も少々負っていた。
この火傷は焔の炎によるもの……
「雅緋いぃぃ!!」
焔は獣の咆哮に似た覇気を孕ませ、六つの刀を軽々と扱い襲いかかる。
雅緋は焔を激しく睨み、黒刀から黒炎を纏わせる。
雅緋と焔は、お互い敵同士でありながら、何処かよく似ている。
蛇女で育ち、悪の誇りを掲げたり、同じ悪忍同士だったりと…
焔が紅蓮の炎なら、雅緋は地獄の炎を表す。
「悪いが焔…貴様を殺さなければ私は殺される！私はまだ悪の誇りも取り戻せていない…伊佐奈を止めなければならい…カグラにならなければならない…やることが山程ある!!」
「そうか！奇遇だな！私もお前には負けられないな！飛鳥との勝負もまだ残ってる、蛇女を救うべく伊佐奈を倒す、カグラになる……私も同じだあぁぁぁ!!」
黒き炎と、紅き炎が激しく唸り、お互いの力がぶつかり合う。
他のメンバーたちの死闘も素晴らしいものだった…だがリーダー同士の戦いは、その戦場を遥かに凌駕し、死闘なんて生易しいものではない戦いだった。
衝撃の余波のあまり、地面には亀裂が生じ、訓練用の傀儡たちは吹き飛ばされ、木々は炎の風により燃え上がる。
言葉で表せない少女たちの闘い…これをもし身近で見ているのならば、その人物は間違いなくタダでは済まないだろう…

紅い閃光が無数の線を描くかのように光だし、黒き邪悪な刀は、全てを飲み込まんとするばかりか、紅き炎を飲み込み、四方八方焔に襲いかかる。
「舐めるなあああああぁぁぁぁぁぁ!!!」
焔は紅き炎の渦を巻き起こし、黒き炎を浄化するかのように吹き飛ばす。
炎の渦が焔を中心に守るかのように、上昇する。
(これはまずいな…アイツにまだあんな力が…)
雅緋は焔の実力を認めざるを得なかった。今まで焔は蛇女を守れなかった弱き者…と称していたが、焔の実力は、雅緋の常識を遥かに上回っていた。
普通なら、強いやつがいれば大歓迎…と言えるところだろう。だが、今は違う…
死んだ母のこと、伊佐奈の妖魔大量生産計画、自分と父の立場…あらゆるものが心を縛り付けていた。
「私は絶対に…アイツらのためにも…負けられないんだあああぁぁぁぁぁぁ!!!」

雅緋の髪の色が少しずつ漆黒の黒色に染まってきている。その漆黒の色は、漆月の持つ闇とは違う。
黒刀が焔へと狙いを定めると、遠くから斬撃を飛ばそうと斬りかかる。焔も当然炎の渦からでも見えるらしく、雅緋に襲いかかる。
(クソッ!まずい!私はまだ、やられるわけにはいかないんだ…!!)

『ねえ、雅緋！』
『ん？どうしたの忌夢？』
雅緋の幼い頃の記憶…雅緋と忌夢は幼馴染のため、二人でよく遊んでいたのだ。忌夢の妹である紫は引っ込み思案で、人前で遊ぶのが好きではなく、どちらかと言えば家の中でおままごとをしている方だった。
雅緋と忌夢の憧れは忍…そのため早く忍になりたいと昔からよく『忍ごっこ』で遊んでいた。
「いつまでも忍ごっこだなんて、つまらないと思わないかい？」
「そう言えば…」
父や母のような一流の忍になりたい、忌夢だけでなく雅緋もずっとそう思っていた。しかし、忍ごっこでは一向に強くなる気配がしない、何よりも飽きてきた…
そこで、忌夢から提案があった。それは裏山で本物の忍ごっこをするというもの。
裏山は本来立ち入り禁止区域になっており、忍や上級ヒーロー、警察の捜査すら無理だそうだ。
しかし幼いためか、二人にはそれがどれ程危険な意味を表すのか分からなかった。だから本物の手裏剣やクナイを手に持ち、裏山へ行き、本物の忍ごっこをした。
と言っても、ただ単に手裏剣やクナイを投げ合ったりとか、木登りしたりとか、自分たちの忍ごっことは大して変わらなかった。
でも本格的な感じがして楽しかった、これが忍なのか…と。
日が暮れそうになり、二人は遅くなるといけないため、帰ろうとしたその時だった。

「「え？」」
二人は異様な空気に包まれたことに気がつく。辺りに漂う異様な気配、腐った肉に近い腐臭、血生臭い匂い…当時の子供の頃からは吐き気がしたことでさて覚えている。
「なに……これ？」
二人が目の前にした光景は…
「グギャ……ガガ……ギギギ……」
人間のような腕が何本もあり、蜘蛛のような昆虫形の顔、背中から飛び出てる棘、体は狼のようなものに近い、この世のものとは思えぬ化け物が、雅緋と忌夢、二人の目の前に突然姿を現したのだ。
見ただけでハッキリと分かる。

これはヤバイ。

この化け物は間違いなく危険だ。この生物を知らない二人ですら直ぐに分かった。
そう、この異形な姿をした化け物こそ、忍が倒すべき存在、妖魔なのだ。
妖魔は涎を垂らし、二人をマジマジと見つめると、急に奇声をあげ、物凄いスピードで走り迫って来た。
「ひっ!!」
二人はその化け物がこちらに来たことに思わず弱々しい声をあげ、腰を抜かして地面に尻もちつく。
『逃げろ』と、生物的本能がそう言ってるが、恐怖のあまり体を支配し、動くことができなかった。いや、逃げるにしろ逃げないにしろ、この化け物からは逃げられないだろう。
蛇女や家までは険しい道のりになってて遠く離れている。
とてもではないが逃げても助からないし、まずこの存在から逃げ切れる気がしなかった。
そして雅緋の目の前にやってくると、その妖魔は嘴を大きく開き、横の体についてる長い豪腕な腕を伸縮自在に伸ばし、襲いかかる。

ああ、もう駄目だ――

――死んでしまう――――

頭の中に浮かぶは、忌夢、紫、そして…お父さんとお母さん……

ああ、自分は死んでしまうんだ…怖いけど…でも、どの道もう救からない…

このまま――

「雅緋!!危ない!!」

「え?」

聞き覚えのある声が聞こえ、目を開けるとそこにはなんと、雅緋の目の前に立ち、妖魔から守る、雅緋の母親であった。

ザブシュッ!!

刹那――

「え?」

雅緋の母親は、妖魔の豪腕な手に頭を掴まれ、トマトをすり潰すか

のように潰された。雅緋の目の前に映る光景は、頭がなくなり、首から血の噴水が吹き上げられ、体全身が血に染まり、その場で壊れた人形のように、ドサりと倒れた。
雅緋はなにが起きたか一瞬理解ができなかった。しかし、血飛沫によって体についた、自分の手と体を見ると、今度こそハッキリと理解した。

お母さんは、自分を守るために殺された。

この醜い化け物の、妖魔に――

「お、母さん…？」
おそる恐る震えながら近づき、遺体の母親に近づく、美しく、優しかった母の顔はもうない、見ることすら出来ない。
息の根を吹くことも、動くこともない…死んでしまったのだ。

自分の生半端な心のせいで、お母さんは死んでしまったのだ。

「う、ああ…あ」
目には大量の涙を溜めて、やがてポロポロと自然と流れていく。
殺された、大好きなお母さんが妖魔に殺された。
しかも当時は４歳の頃だ…残酷な世界も何も知らない彼女は、目の

前で母親が死んだのだ。

「うわあああああぁぁぁぁぁぁ!!!」

余りにもの衝撃な出来事に、雅緋は自分の置かれてる立場を忘れ、その場で大きく泣き叫んだ。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

「ギギギャバァーーーーーー!!!!」

それに応じるように、妖魔は雅緋に負けずと奇声を上げる。この世のものとは思えない声だったが、母親を殺された雅緋としては、妖魔の声など聞こえるはずもなく、どうでもよかった。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

「ギャババーーバ!!ギィギーーィィ!!」

豪腕な腕が再び雅緋に襲いかかる。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ――――

ズバッ!!!

「ギィッ…??」

「え?」

何かを斬り裂いた音が聞こえた。心の底から謝ってた言葉を止めると、目の前にはなんと、信じられない光景だった。

あの化け物、妖魔が首を斬られ、頭が宙に回り、ボトッと地面に落ちたのだ。妖魔自身自分が何をされたかのか分からず、思考停止状態に陥り、そして…

ズババッ…

閃光が乱れ、妖魔の体はバラバラに斬り刻まれ、ボロボロと斬り裂

かれた体が落ちていく。
その化け物を斬ったのは、父親であった。父親は自分の妻を殺されたことに、死体の妖魔を激しく睨み、そして母親に視線を戻すと、悲しい表情を浮かべていた。
「お、父さん……」
「雅緋…」
怒られる。それも当然だ…あれだけ両親から口酸っぱく立ち入り禁止区域に入るなと言われたのに、その言いつけを破ってしまい、更には自分たちの身勝手な行動のせいで、大好きな母親まで死んでしまったのだ。
雅緋は怒られる覚悟をしていた。
「……無事でよかった…」
「え？」
すると、お父さんは雅緋に怒らずに、抱きしめたのだ。
優しく、そして背中をさすり…雅緋の頭を撫でた。
「もしあと少しでも遅ければ…母さんだけでなく、お前も死んでしまっていた……」
その言葉に、雅緋は自然と涙が溢れていた。怒られると思っていた、でも父親は怒らずに、自分が無事でいることに安心し頭を撫でてくれた。抱きしめてくれた。
尤も、大好きな妻を殺されたことが一番苦しかったのに、自分の心に来る苦しみを無理やり抑え込み、雅緋に心配かけまいと、優しく抱きしめてくれたのだ。
「う、うううう…お父さん……
うわあああぁぁぁぁぁぁぁん!!!」
そしてその日はとにかく泣いた。
ただ、ひたすら泣いた…一日中泣き止むまで泣いたであろう。

そして、母親の葬式が終わり、雅緋の父親は、彼女に忍の真実を全て話した。
雅緋と忌夢が遭遇したあの化け物は、妖魔と呼ばれる存在であり、本来忍学生を卒業した者にしか、知ることが出来ないこと。
妖魔とは忍の血が一定量集まり、そこから生まれる存在。
妖魔は各地にありとあらゆるところに出現し、被害も出てたという。
超人社会に起きる、大事故、大震災も、妖魔によっての影響らしい。
しかもその頃にはなんと、『神威』と呼ばれる厄災が存在していたらしい。忍と超人を超えた災厄の存在…ソイツは数々の最強の妖魔を作り出し、かつてカグラの称号を超え、古の妖魔『心』を討ち滅ぼした忍『陽花』という忍が、その災厄と謳歌された『神威』と死闘を潜り抜けたそうだ。
そう、カグラこそ忍の頂点と呼ばれる存在。カグラこそ、妖魔を滅することが出来る唯一の存在。
雅緋は様々な真実を突きつけられ、自分が忍となって何をするかが、ハッキリと分かった。

――カグラになる――

そう決意した雅緋は、幼馴染の忌夢と話した。彼女は、あまりの罪悪感に雅緋にただひたすら謝罪していた。
元はと言えば、忌夢が言い出したことなので、彼女は「雅緋のお母さんが死んだ原因はボクだ！」と何度も謝ってきた。

だが雅緋は、無理やり笑顔を作り「忌夢だけが悪いんじゃない…原因は私にもある」と言った。
だから雅緋はこう言った。

「もし、本当に罪を償いたいなら、母のために…カグラになろう…」

そう約束したのだ。

これが、雅緋にとって、齢４歳にして知った、忍の残酷な世界。

だからこそ、負けるわけにはいかない。
「私は!!私のやり方で蛇女を救う!!!」
これが、雅緋の原点（オリジン）であり、今に至った訳なのである。
忍として、お母さんやお父さんのためにも…今苦しんでる忍学生のためにも、自分はもっと強くなり、蛇女を救わなければならない。
だから、伊佐奈だけは許さない。蛇女の出資者とはいえ、自分の母の仇である妖魔を売り捌くことなど論外。
しかし、どうすることもできないのだ…伊佐奈に逆らえば、自分は抜忍になる。それは良い、別に問題ない…自分一人で抜忍になったと

しても、カグラへの道が閉ざされることはない。
しかし、父はどうだろうか？父親には色々と面倒を焼いたし世話になった。忍の道がいくら非道だと言っても、父親までは巻き添えにしたくない。
任務なら兎も角、自分のわがままを通すがために伊佐奈に刃向かうなど、果たして本当に救われるのだろうか？
もう何が正しく、何が間違ってるのか分からなくなってしまったのだ。
それでも、忍は強く生きなければならないのだ。だからこ――
「それが、お前の本当に望むべきものなのか？」
「?!」
焔が突然問い出してきた。
黒い瞳には、揺るぎのない熱き闘志を感じとれる。
そんな真っ直ぐとした瞳で、雅緋を見つめる。
「お前がソレを望んだ結果、伊佐奈は蛇女を支配し、お前たちは伊佐奈の思うがままに従い、妖魔を手放してるじゃないのか？それが、お前の本当に望んだ、蛇女の誇りか？」
「ッ!!お前に何が分か――!」
「じゃあなんで…
お前は伊佐奈を斬らないんだ？」
「ッ――!!」
一番心に引っかかってたこと、一番苦しいこと、一番に悩んでたことを、焔は何の躊躇いもなく、真正面から質問された。
それが癪に触ったのか、逆鱗に触れたのか、雅緋は表情を歪ませ、完

全なる怒りに染まった瞳で焔を睨みつける。
「知ったような口を利くなあぁぁ!!!!」
雅緋は黒い炎をより一層激しく燃え上げ、秘伝忍法を放つ。
秘伝忍法【善悪のＰｕｒｇａｔｏｒｉｏ】は、自分を中心に、周囲に蛇が具現化したような黒き蛇が六つ回り始め、標的の焔に目掛けて襲いかかる。
焔は一斉同時に六爪で斬りかかるも…
ドガアアァァン!!
「ッ!?」
刀で斬りつけた途端、黒炎の爆発が発生した。
六つの蛇が連鎖するように爆破し、焔はその予想外な雅緋の秘伝忍法に、ガードする術もなく食らってしまう。

だがそれはあくまで、食らった話であって…

「負ける…かあああぁぁぁぁぁ!!!!!」

焔が倒れることはなかった。
焔の底知れない力、闘志、信念、それらの全ては、雅緋ですら軽く身震いしてしまうほどだった。

「秘伝忍法!【響】!」
六つの刀を巧みに使いこなし、紅き煉獄の炎が焔の気持ちに応えんと言わんばかりか、雅緋の黒炎よりも熱くなる。
その六つの刀で、紅き斬撃の閃乱を描く。雅緋はガードするも、一撃目にして崩され、がら空きとなった状態へ、二撃、三撃、四、五、六撃食らわせる。
「ッッッ!!がああぁぁッ…!!」
雅緋は焔の秘伝忍法を喰らい、地面に膝をつけてしまう。そして刀を地面に突き刺し、杖代わりとして体を支える。
体には、かなりの火傷と斬り傷が見受けられる。

（こいつ…さっきよりも…？）
戦闘での焔の急成長。
雅緋と戦ったことにより、成長した焔に対し驚愕を隠せなかった。
焔は元・蛇女子学園選抜メンバー筆頭だ、多少の警戒はしていたが、まさかここまでやるとは、自分でも思わなかった。
「今だ！」
驚愕していると、焔は雅緋に隙が出来たことに動き出す。
雅緋はこれは不味いと判断し、立ち上がり焔の攻撃を防ごうとする。

しかし――

焔の狙いは雅緋ではなかった。
「なぁっ!?しまっ――」
「大将の首さえ取れば問題ない…！悪いがお前との決着は後だ…！」

焔が動いたのは、雅緋に隙が出来たから。しかしそれは雅緋へのトドメではなく、伊佐奈がいる天守閣へと向かうためのものだ。
「くそッ！これはやられた…私としたことが!!」
焔のスピードは凄まじくもあるが、雅緋は負傷してるため、思うように体が動かない。焔も傷こそは見えるが、思うように…というような状態ではなかった。
（ならば…最短ルートで…）
雅緋は壁にある仕掛けを見つけ、伊佐奈の元へ向かう。
一刻も早く、報告しなければならない…伊佐奈が狙われてるだけでなく、もう既にこちらに向かっているのを。

「ねえ、本当に大丈夫なの？」
　一方、復讐から目を覚めた双子の両備と両奈は、詠の体を支えながら立ち上がり、心配する表情を顔に浮かべいた。
「ええ、ご心配なく、それよりも両備さんと両奈さんの方が心配ですわ」
「私は…大丈夫よ…ねえ？両奈？」
「両奈ちゃんは大丈夫だけど、お仕置きは欲しいな～♪」
「こんな状況でドMを発現させるな!!」
「きゃう～～ん!!」
　相変わらずの平常運転。二人の仲良しさに詠は苦笑を浮かべる。
　けど、これが何時もの二人なんだな…と思うと、もう復讐のことは心配ないし、もう二度と復讐の道に染まらないだろうと確信した。
「って、そんなところじゃないや…アンタらが行くなら…私も行くわよ」
「両奈ちゃんも、救けて貰ったお礼がしたい…！」
「お二人とも、気持ちは嬉しいですが…貴女たちはまだ傷が癒えていません…確実に治るまで安静してなくては…」
「あ、アンタだって全身傷だらけじゃないの！私も行くって…！アタシも伊佐奈ぶっ飛ばしたい…アイツ、お姉ちゃんの仇を増やそうとしてる…私もそれ止めたい！」
「両備さん……
　ええ、分かりました…そこまで言うなら…」
「本当!?良かったぁ～…」
　詠のオーケーに、両備は嬉しく、子供のように頬を赤らめ歓喜な声を上げる。詠は両備の姿がなんだかとても微笑ましく見えた。
「本当にこれで良かったの？」
　ここで少し離れたところからやって来た春花は詠にそう言うと、彼

女は笑顔を絶やすことなく微笑んだ。
「言っても、きっと無理してついて来ます……それならいっそ、一緒について行けば良いかと…ホラ、色々と心配ですし…」
「プッ…！詠ちゃんったら、もう立派なお姉ちゃんなのね～、感心するわ！」
「なっ!?ちょっ、春花さん!?」
頬を赤らめ動揺の色を見せる詠に、春花は彼女の可愛らしさと面白い反応に、思わず笑みをこぼしてしまう。
「まあでも、良いんじゃないかしら？私も詠ちゃんの立場ならそうするかもしれないし…」

このまま二人にさせておくことよりも、一緒になって行動した方が心配はないし、何よりも二人の気持ちを考えてそうせざるを得ない形となる。
「問題は他のみんなは…何してるのかしら？上手くやってくれてるといいけど…」

「さて、わしもそろそろ行こうかの」
忌夢との戦闘を終えた日影は、パンパンと汚れた忍装束を払い、天守閣を睨みつける。日影も同じく、天守閣に向かうそうだ。
「待て日影…もう行くのか？」
ここで声をかけたのは忌夢、彼女も日影と同じくボロボロだ。
「せやな、悪いけどそんなに悠長にのんびりしてられへんからなぁ」

「なら僕も行く…お前が行って、僕が行かない訳にはいかないからな」
「おっ、忌夢さん今の上手いの」
「黙れ！というか今のは狙ってやったわけじゃない!!」
この二人も相変わらず平常運転？で何よりのご様子。忌夢は日影が嫌いだという事実は変わらないが、先ほどよりかはかなりマシな様子だ。

他にも、未来と紫も日影たちと同じく、天守閣を見つめる。普段の紫なら、やる気のなさで行く気はないが、隣にはあの仏麗がいる、恐怖などもうない。
「伊佐奈に…立ち向かうのは……怖い…ですけど、未来さんが、仏麗さんが、いますもんね…」
「そ、そんなこと言われると…恥ずかしいじゃないのよ…！」
嬉しさのあまりか、それとも慣れていないのか、紫の言葉に赤面する未来は、見た目からして子供っぽい印象が強い。
それでも、紫にとってはかけがえのない存在で、唯一尊敬してる人なのだ。
ネットもゲームも遊べなくなるのは困るが、側にいる尊敬の人と離れるのは、もっと嫌なのだ。
だから、嫌なことがあっても立ち向かう。

そう決心できたのも、焔紅蓮隊と、未来と出会ったからなのかもしれない。
ダメな自分を変えれた未来に対して、紫は心の底から「ありがとう…」と言った。

「はぁ…ハァ……どうやら、焔はまだなようだな…」
傷だらけの雅緋は、何とか最短ルートを使って焔よりも一足先に早く、伊佐奈の居る最上階に上がり込み、扉の前に立っていた。
この扉の前に立つと、必ず嫌な気持ちになる。雅緋は冷や汗を垂らしながらも、深呼吸して心を整理してから、ドアを開ける。
ガチャッ…
「失礼しま「遅い」…!」
するとそこには、机の上に腰掛けて、顰めた表情を浮かべてる伊佐奈。
この黒い影からして分かる、これまでになく怒っている。
「申し訳ございま「遅い、連絡はつかない、ボロボロの傷…なんだこれは？なぁ…その傷はなんだ？お前ともあろうことが、深傷を負うなんてな？焔紅蓮隊にでもやられたか？肝心の紅蓮隊と選抜メンバー(他のヤツら)はどうした？」
雅緋のセリフなど聞く耳持たず、伊佐奈は苛立ちながらも、怒りを孕ませた声で、冷静に話す。
「他は分かりません…ただ、焔とは会敵したものの、ヤツは伊佐奈様を狙い、此方に向かって来てます…逃げた方が宜しいかと…」
「……は？」
雅緋の言葉に癪が触ったのか、あるいは雅緋が焔を食い止めれなかったことに苛立ったのか、焔が此方にやってくることに疑問を浮かべたのか…険しい表情を見せる。
「一人も倒せずお前らは焔紅蓮隊に負けて、お前は誰一人も仕留めれず、ノコノコと帰って来てご丁寧に報告か？

雅緋、俺はお前ならもう少し使えるヤツだと思ってたよ…
悪の誇りのためとやらに、金を使って忍学生買ったり、このオンボロ校舎に金投資したり、お前の入院額も払ったりと…色々金は使ってやってるんだがな…恩も返せねえのか？なぁ雅緋」
「ッ――！」
伊佐奈の言葉に息を詰まらせる雅緋、もうこうなってしまった以上、機嫌を取り戻すには到底不可能に近い感じだった。
「しかし、先に上への報告が必要と、状況を見て判断し…」

ズドォン!!

「ッ!?ガァッは!?!!」
瞬間、雅緋は訳が分からず、何かに捻り潰される形となった。

伊佐奈の攻撃――

まさか突然攻撃が来るとは思わなかったので、防御する事すら出来ず、押しつぶされるかのように地べたにこすりつけられた。伊佐奈はコートの丈から脊椎動物が見せる尾びれへと変化し、襲いかかって来たのだ。

「言い訳なんざ聞きたくねえんだ、何の価値もねえ…
焔紅蓮隊をどうしたかっていう問題だ、分かれよ…なあ？

死にたくなけりゃ、命削れよ？」
トントン、と親指で自分の胸元を軽く叩く。ここまで清々しい程に非道な人間はほうそういないだろう。
伊佐奈は雅緋を見下す。

その時、遠くから何やら呻き声が聞こえて来る。それが段々と近づいていくかのように…雅緋と伊佐奈は、周囲を見渡すものの、それらしき人物など見あたる筈がない、一体どこから来るのだろうか…

ズバアアアアアアン!!

バラバラに斬り刻まれ、四角形のサイコロのように転がり落ちてく天井に穴がぽっかりと空く。

――空。

真上…いや、空からなんと、黒髪のロングを後ろに束ねたポニテの少女、雅緋と先ほど死闘を潜り抜け、ここまでやって来た、焔であった。

そんな焔に対し、伊佐奈は不機嫌な表情を浮かべる。

「伊佐奈あああぁぁぁ!!」

「お前らが使えねえから…こういうバカが湧いて来る」

68話「紅蓮の焔」

「……なあ、ドアが何の為にあるか知ってるか？」
「ああ、知ってるさ…」
不機嫌な表情を露わにする伊佐奈に、悠然と、何処か余裕ぶったようなものを感じる。対して、焔はカツカツと足音を立て、苛立つ表情を浮かべ、伊佐奈に駆け寄る。
先ほど雅緋と戦ってた表情とは違い、伊佐奈を前にすると、血管が切れてしまいそうな位に憤った様子を見せる。
「気に入らねえな…おい、雅緋。あのバカ殺せ」
「!?」
突然命令を下されたことに、雅緋は驚き伊佐奈に振り向く。伊佐奈の表情は先ほどとは何の一変もない。
雅緋の傷を見る限り、もよや闘えることでないと、誰もが見れば分かるだろうに…
伊佐奈は何の躊躇も心配のカケラもなく雅緋に無謀な命令を下した。
「どけ雅緋。私は今、お前と戦う気はない」
焔は怒りを燃やしたその目で、伊佐奈を鋭く睨む。焔はこの時から既に分かっていた…

雅緋は伊佐奈に逆らえないこと――

雅緋は一人の悪忍とはいえ、忍学生だ。上層部や出資者と言った人間に逆らえばどうなるかなど、自分がよく知っている。
雅緋が伊佐奈を斬れば、間違いなく自分と同じく抜忍の身に堕ちるだろう…
道元を斬り捨て、抜忍になった自分が一番分かっている。多分言うまでもなく向こうも分かってるであろう…

だから焔は、雅緋に言わなければならなかったのだ。

本当に蛇女を救いたいのなら、伊佐奈を斬るしかないと――――

例え抜忍になろうとも、本当の忍は己を顧みないものだから。

「私は……」

「早くしろよ」

――――やらなければ、やられる。

弱々しい声を振り絞り、立ち上がる。自分がどうすればいいのか、どうすれば蛇女を救えるのかも分からなくなってしまった。

力があれば何もかも救えると思っていた。カグラとなり、妖魔を滅し、どんな忍にも負けない…

だからこそ、力が必要だった――

しかし、どれ程の力をつけようとも、決して刃向かうことが出来ない存在がいることもまた事実。

「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

例え、勝ち目が無かったとしても――!!

雅緋が刀を振るおうとした瞬間――

――ズバァン!!

「ガハッ――――!!」

何の躊躇いもなく、焔は雅緋を斬った。ただしそれは、殺した訳ではなく、気絶させる程度に焔は雅緋を斬ったのだ。
雅緋は息を切らし、その場に倒れた。床には多少の血が流れ、床のカーペットが赤く染まる。
焔は倒れてる雅緋に振り向くことなく、何も言わず、伊佐奈を睨みつけていた。彼女は鋭い眼光を伊佐奈に放つ。
忍を自分の良いように利用し、忍としてでなく道具として扱い、簡単に命を粗末にするような彼の外道っぷりな行い、あの焔がキレないわけがない。

「ああ、片付けるのが大変だなぁ…」
「？」
伊佐奈は突然、焔から視線を外し、代わりに血に染まり倒れてる雅緋の方へと変える。

「所詮お前は道具か……

本当に使えねえな」

「……」
「ッ…！」
倒れて伏してる雅緋は、起き上がる反応はないが、それでも伊佐奈の言葉に握り拳を強くし、歯軋りする。
黄金のような瞳を潤わせ、目から涙が溢れる。

悔しい――

何が悪の誇りだ――――

敵に殺されることなく、こうして手も足も出ずやられ、今まで心を苦しめ主の為にと全力を尽くし、ここまで頑張ってきた。

なのに、使えないと判断した途端この対応。

所詮強くなろうとなかろうと関係なかった。自分の利益にならない奴なら迷わず切り捨てる。

忍など彼にとって消耗品、人間だなんて微塵も思ってもいないし感じてもいない。

出来て当たり前、結果が全て、彼はそういう人間なのだ。

自分の今までの苦労も、悩みも、努力も、苦しみも、抑え込んでた怒りも、全て伊佐奈に一蹴されたかのような感覚。

今すぐにでも斬り殺したいくらいだ。

対する焔は、表情は変わらなければ、伊佐奈の言葉に反応することもなく、歩みを止め、ただ平然と立ち尽くしていた。

「まあ使えない雑魚は置いといてだ…

焔、話し合おう。これ以上荒らされても無意味だしこっちが困る。

俺はお前の力を認めてるからこそ勧誘してるんだ、お互い悪を背負う者同士、大人しく話せないかなぁ…

前にも言ったが俺はお前と会えて嬉しいんだ。それにお前にはお礼を言わなくちゃな、お前が道元を斬ったお陰で、こうして俺は蛇女の出資者となりスムーズに計画を進めることが出来た。

その意味も兼ねて、俺はお前を誘ってるんだぞ？

悪だの何だのと、周りから嫌われ、安息の地を無くし、何かに隠れ

て生きる辛さ…

お前なら、それを経験したお前なら分かるよな？」

「黙れ」

伊佐奈の言葉を掻き消すような一言。その言葉に伊佐奈も思わず反応する。

同じ日陰者、嫌われ者、安息の地を無くした者、その言葉の全ては彼女に当てはまっていた。

両親に見捨てられ、行き着く場所もなく、ただ途方に暮れ、苦しい毎日を過ごしたあの日々は、片時も忘れない。

それを一年間過ごしてきた焔なら、誰よりも分かるはずだ。だからこそ焔は、そんな自分を拾ってくれた蛇女に感謝しているし、蛇女の、悪の寛容に命も心も救われた。

焔は、ここまで強くなることが出来た。

だが、今の蛇女はどうだ？伊佐奈によって支配された今の蛇女は蛇女と言えるだろうか？日陰者として生き、正義という日向に当たることが出来ず、安息の地がない、居場所のない忍学生たちが、今の蛇女に入り、果たして本当に救われてるのだろうか？

自分たちのように、蛇女の居場所が心地よく感じられるだろうか？

――否。そんなものあるわけがない。

今の蛇女は伊佐奈によって支配された、監獄…いや、地獄と呼んで良いだろう。

どれだけ数多くの忍学生がその場で苦しんだことか、どれだけの忍学生が犠牲となり死んでいったことか、今、どれほどの学生が縛られ、苦しんでることだろうか。

そんな彼女たちを、蛇女を救うために焔はやって来た。

悪は善よりも寛容だ。

だが、伊佐奈の所業は許せない。

「私はお前を、許せない」

はっきりと、そう言った。

「…理解出来ねえな？どうしてそこまでして拒む必要がある？何かに隠れ、苦しみながら生きるお前らに安息の地を与えてやろうと勧誘してるんだぞ？

拒む必要も要素も何処にもねえハズだ、仮にそうだとしても…それは一体なんだ？何がお前を動かしてる？」

理解出来ない。

幾ら憎き相手とはいえ、これからこの先抜忍として過ごしていけば、抜忍狩として上層部から派遣された上忍たちに始末されることなど、自分たちがよく知ってるハズだ。

仮に始末されなかったとしても、彼女たちならいつか飢え死になることも目に見えている。

そんなことよりも、死ぬよりも、自分の存在が汚れてまでも安息の地で生きた方がずっと良いはずだ。

伊佐奈もそうだったから。

「確かに勧誘は嬉しい…が、お前とあらば話は別だ。忍学生を自分の道具のように利用し、妖魔を造るなど、正気の沙汰じゃない！」

「何言ってやがる？妖魔を倒す存在こそ忍だろ？俺が妖魔を造る、そ

して世界中の忍たちが妖魔を倒す…
妖魔を倒すことこそ、忍が存続する真の理由なんだろ？だったら俺のやってる行為はなんら間違ってないハズだ。
それにホラ、言うじゃないか？悪は善よりも寛容だって」
「――ッ!!」
伊佐奈の言葉を耳にした途端、焔の堪忍袋が、逆鱗が、悪の誇りが、全部傷つけられた。
「きっ…様あああぁぁぁぁぁぁ!!!」

悪は善よりも寛容。
悪の心広き優しさに、焔はどれだけ救われたことか。
悪は善よりも寛容だ――
伊達に相手を助けるためや、そのような生易しい信条ではない、受け入れるには、それなりの証明が必要だ。

力で示し、自分はここにいて良いのだと言う、自分は悪として生きても良いと言う…資格、証明、それらがあってこそ、その言葉が成り立つ。

それを伊佐奈は、自分の都合の良いように言ってるだけなのだ。

誇も、堪忍袋も、逆鱗も、何もかも傷つけられ憤る焔は、つかさず刀を抜き取り、伊佐奈目掛けて突っ込んでいく。
刀が再び炎を纏い、刀に熱を通し、手には炎の熱さが伝わってくる。焔自身炎使いであるため、熱や炎といった激しい熱さには慣れっこだ。
そのためか、炎を使う度に肌は焼け、日焼けをした褐色の肌になっているのだ。
焔が攻めてくる中、伊佐奈は――

「撥ねろ」
「!?」
コートの丈を強靭で頑丈な、逞しい尻尾に変換し、鋭利な尾びれを焔に向けて襲いかかる。
大きさは先ほど紅連隊に見せたものの大きさとは程遠く違い、比べると割と小さめだ。雅緋に攻撃をした時と同じ位の大きさである。
だが焔は地面を蹴り、ジャンプして伊佐奈の尻尾を難なく躱す。
「ハッ!当たらないんだよ!」
「バァカ、下を見ろ」

伊佐奈の攻撃にハッ!と鼻で笑う焔に、伊佐奈はなんの表情も変えずに、ただ冷静に標的を見つめる。
「!?」
バキィ!っとした嫌な音が部屋に鳴り響き、焔は先ほど躱した尻尾の追撃を受けてしまう。
外した…と思わせてからの思わぬ攻撃に、焔は素早い動きをする尻尾に対応することができず、攻撃を食らってしまったのだ。
焔は天井…いや、天井なき空へと吹っ飛んでいく。
(焔…)
雅緋は何とか体に力を入れて、這い蹲りながらも、焔と伊佐奈の戦いの場から離れる(とは言っても、此処でも充分危険だが)。息を切らし、意識が朦朧としてながらも、雅緋は焔と伊佐奈の戦いを、見守ることにした。

「ったく、修繕費用も馬鹿にならないんだ。出来れば部下にしたいんだが……大人しくしててくれ」
「だあああぁぁぁぁぁぁ!!」
「!」
伊佐奈の攻撃を食らいながらも、雄叫びを上げ空中からやって来る焔。
見るからに丸っ切り分かるであろう、刀を六爪にして此方にやって

来る彼女の姿。
伊佐奈はそんな彼女を一撃で仕留めるかのように、少し尻尾を大きくし、鋭いノコギリや刃物などを超える鋭利な尻尾の尾びれを焔目掛けて襲いかかる。
当然尻尾の尾びれを喰らえばひとたまりも無いし、下手すれば真っ二つにされるだろう…
ここで片手の三爪（三本の刀）で反撃するも良いが、受け流しきれない、あるいは弾かれてしまう危険性が十分に高いため、焔は軽い身のこなしで、足を尾びれの先端部分、その上に足をつけると、瞬時に回転ジャンプし伊佐奈の攻撃を回避する。
（伊佐奈の攻撃を瞬時に見極めて…！）
見極めるにしても、この短時間、ましてや伊佐奈に出会って間もない焔は、相手の攻撃を瞬時に見抜くことができた。
一見何も考えそうにもない、単純で一直線、単細胞で、力任せの彼女は当然頭を使うようなタチでもなければ、策を講じるような人でもない。
そんな焔が伊佐奈の攻撃を瞬時に見抜き、躱すことが出来たのは、獣のような野生の勘…に近い類のものか、戦闘経験から来るものなのか…
どちらにせよ、焔が強いことは充分に伝わって来る。いや、この現状を見る前から、焔と刀を交えた時から、雅緋には分かっていた。
尾のスピードについてきてる焔は、尻尾を伝わって伊佐奈に向かって来る。
巨大な尻尾な為、足を滑らすことが無ければ、落ちる心配も無用。
「良い加減にしろよガキ」
イラっとした表情を露わにした伊佐奈は、巨大な尻尾を、小蝿を腕で払うように軽々と振り払い、焔は壁に吹き飛ばされる。
焔は壁にあった本棚に直撃したため、資料やら本やらがドサドサと落ちていく。本に埋もれたため、焔の姿がハッキリ見えない。
一方で伊佐奈は余裕の表情こそ崩さないが、尻尾は少しずつ大きくなっていることが分かる。

尻尾には僅かながら血管が浮かび上がっている。きっと尻尾による筋肉が強張ったためなのだろう…つまり、伊佐奈も少しずつ力を解き放っている訳だ。
「でりゃあ!!」
静かになった部屋にまたしても焔の荒い声が部屋に響き、刀を振るう。
どれだけ攻撃しても、いつまで振り払っても、負けを認めず諦めず、攻めて来る彼女に、伊佐奈は益々煩わしそうな顔をする。
「イラつくな」
とうとう口に出し、先ほどの攻撃と同じく、尾びれの先端部分を使って焔目掛けて襲いかかる。
図体に似合わず凄まじいスピードを誇る尻尾に、戸惑いを隠せないにも関わらず、焔は達人のように、それをうまく紙一重で躱した。
着実に伊佐奈に対応している。
「しつけえな」
だが圧倒的な力は焔を許さない。
巨大な尻尾を横に振るい、流石の焔もこれには避けれないか、攻撃を食らう。
圧倒的なる尻尾の存在に、焔は軽々と壁にぶつかる。
(着実に、少しずつ、的確に避け、僅かならがに距離を詰めてきてるな…どんな潜在能力を秘めてやがるんだこのガキは…)
しかし、焔の実力は伊佐奈も正直に認めざるを得ない。
此方はまだ無傷とはいえ、向こうは傷だらけ…ましてや雅緋と死闘を繰り広げたのだから。
それを踏まえて伊佐奈とここまで互角に渡り合える焔の実力は、言うまでもない。
「しかしまあ、随分とダメージは溜まったろ?」

伊佐奈の言葉もまた事実。
雅緋と死闘を繰り広げ、今こうして伊佐奈と対峙し、かなりの痛手を食らった焔がダメージを蓄積しているのも当然のこと。
「……しかしまあよくこんだけの実力を持つものだ。これ程の実力を備えてるのなら、是非ともウチの部下として欲しいんだが…
ここで一つ聞く、仮に俺を倒したとしてだ。お前はこれからどうするんだ？」
一旦攻撃を止め、伊佐奈は悠長に傷だらけの焔に話しかける。
焔も殺意、敵視する目は変わらないが、攻撃を向ける敵意の目はなくなり、口を開く。
「決まってる…私は、いいや…

私たちはカグラになる!!」
「あ？カグラだと？」
揺るぎなき信念を抱く心、真っ直ぐ、純粋で何の迷いもない、真に迫る言葉に、伊佐奈は訝しげな顔で焔を睨みつける。
嘘は言っていない、本気でカグラになろうとしてる。
伊佐奈も勿論カグラのことは知っている。伊佐奈は上忍に肩を並べ…それ以上の実力を備わっている。
当然カグラについて知る権利はあるし、カグラが一体どのような存在なのかも理解している。
理解してるからこそ、カグラへの道が険しいことも当然諒解している。
「ハッ、お前がカグラにか？寝言は寝て言え、お前如きの人間がカグラになれるわけがないだろ？」
焔の信念を小馬鹿にし、一蹴し、否定するかのような台詞。
カグラになろうと思ったことは今まで無いが、それでもカグラという存在がどれ程の意味を表すのかは知っていた。

「カグラは並の忍やそこらの人間がなれるものじゃ無い…少なからずお前はないな。仮にカグラになるにしても計画はあるのか？実力は？戦力は？ねえだろ？抜忍でありながらカグラは無理だな…そもそ

「黙れ」…なに？」

伊佐奈の言葉を焔は掻き消すように遮った。その言葉は、ただ単に伊佐奈の言葉が鬱陶しい、聞きたくない、耳障りだ…という意味ではない。伊佐奈がカグラを語って欲しくないという想いは確かにあるが、焔が第一印象気に入らなかったのは…

相手の信念を見下し馬鹿にすることだ。

それを聞き流してしまえば、反論もしなければ、自分のプライドを、傷つき否定されてしまう。そんな気がしたから。

「お前みたいなヤツが、カグラを語るな。出来ないだと？ならカグラになるまで強くなれば良い、違うか？

カグラになれない？やりもしないのに決めつけるヤツは三流だ…

計画？実力？戦力？そんなもの、カグラになるのに小難しいことなど必要ない…違うか？

お前こそ、カグラについてなにも知らないんじゃないのか？伊佐奈」

「……随分と、饒舌になったじゃないか焔……」

伊佐奈は何の表情をとることなく、少しずつ、少しずつと足を動かし焔に近づいてくる。

何の平素もない声に、その表情は先ほどと同じ余裕の顔立ちだ。

伊佐奈の尻尾が再びゆっくりと動き出したことに、焔は次の攻撃が来ると先を読み、瞬時に警戒態勢に入った。

その途端。

「なっ!?これ…は？」

体が動かなくなった。体に力を入れるにしても、全く動く気配は微

塵もない。
特に体に異常は無いし、何もされてはいないのだが…
傷を負ってしまったとはいえ、急に体が動かなくなるのもおかしい…そんな現象あり得ない。
しかし焔にはこの現象を一度経験したことがある。
体に力を入れても、自由が効かず、その場に倒れ伏したことを…鮮明と記憶が蘇ってくる。

そして、伊佐奈は僅かながらに、敵意…いや、悪意溢れる闇を覆った不敵な笑みを浮かべる。
(!!そうか、これはあの時の…!)
伊佐奈の気味の悪い笑顔を見た瞬間、これが伊佐奈による特殊な術によるものだと見解した。
これは、まだ選抜メンバーと戦う前のこと、焔達紅蓮隊の五人が、伊佐奈に吹き飛ばされる前に、一度この経験を直接味わったことがあった。
エコーロケーションによる超音波の一種。
ま　　さ　　か――

「気付いたか?お前が悠長に話してる隙に、超音波を仕掛けておいたのさ、お前が幾ら強かろうと、生物の持つ能力の前では無力なんだよお前は…今まさにこの現状が物語ってる」
しまった――
焔は伊佐奈の策略にはまったことに、顔を青ざめる。
これが狙いだったんだ伊佐奈は、相手の動きを止める、そうすれば幾ら強かろうと関係ない、力を入れても動けない自分の体を恨んでしまう。
焔の表情を見て、さぞ愉快そうな顔立ちをする伊佐奈は、尻尾にキラリと光る尾びれを、焔の顔面に狙いを定める。
「確かカグラが…なんだっけ?」
悠然と立ち尽くす絶対的支配者、伊佐奈――

焔を見下す悪の支配者が、人の道をはずした、最早悪魔と呼ぶに等しい彼は、嘲り笑い、尻尾を強く、デカくする。
（まずい…焔が…!!）
あのままでは焔が死んでしまう。遠くで見守っていた彼女は、そう確信を得た雅緋は、力を入れて立ち上がろうとするも、ダメージの蓄積により、全身に激痛が走り、痛みで表情を歪ませる。
「クッ…!!まだキズが……」
雅緋は壁にもたれかかり、息を切らし、動ける力も残っておらず、ただその場を見つめることしかできなかった。

（クソッ!まさか…こんなところで…!）
焔は、目の前の惨状に、自分が殺されてしまうかもしれないという立場に、言葉を失い絶句していた。
蛇女を救いに来たのに、伊佐奈を倒しに来たのに、伊佐奈に対して手も足も出ない焔は、自分の情けなさに、己の未熟の弱さに歯軋りする。
（私はまだ、カグラになっていないのに……いや、まだ飛鳥との決着だって付いていない…!!仲間達だっているのに…!なのに私は…私は…!!!）
無理だと分かっていながらも、なんども何度も体に力を入れ、焔は体を動かそうと全力で抗っている。

死ぬわけにはいかない、

仲間のためにも、

蛇女のためにも、

自分だけじゃない、飛鳥のためにも。

今ここで、死ぬわけにはいかないんだ…!!

「あばよ」

伊佐奈がサヨナラの言葉を言い放ち、焔は目の前の尻尾に目を瞑る。

これで、終わってしまうのか――

ドシュッ！

「クッ?!」

刹那――

何やら物を刺したような、嫌な音が、伊佐奈の悲痛の言葉が、焔と雅緋の耳に届いたのだ。

いつまで経っても襲いかかってこないので、おそる恐ると閉じてた目を開けると…目の前には…

信じられなかった、その人物が今こうして自分の前にいることが。

「無事か!?焔!」

「なっ…お、お前は――」

どうしようもなく衝撃的で、思わず息を呑む。壁に背を合わせてる雅緋も、「お前は…?」という、疑問を抱いた眼差しをその人物に向け、対する伊佐奈は、『頭』にクナイを刺され、血が流れ出てる彼は「誰だてメェは…?」という、怒りと殺意を含めた目で睨みつける。

「む、無茶だ…!お前が勝てる相手ではない…!!すぐに退け！

『旋風』!!」

旋風だ。
実力はまだまだ未熟な新入生、兄の仇である焔に復讐しようと、幾度となく挑んで来た、あの旋風だった。
旋風は「焔は私の獲物だ！」と伊佐奈に叫ぶ。
「テメェ……下忍か…俺に逆らいやがって…!!」
伊佐奈は、自分よりも下の存在…ましてや自分の道具である忍に、下忍に、弱者に傷つけられたことに、自分の誇りも、逆鱗も傷つけられ、頭に血がのぼる。
血走ったその目は「道具が、殺す…！」とハッキリとそう言ってるように聞こえる。
旋風は忍者刀を手に取り、伊佐奈を睨みつける。
「よせ！やめろ旋風!!お前が、お前が勝てる相手じゃないんだぞ!?早くここを――」
「焔…」
必死に言い聞かせるようにと忠告する焔に、旋風は焔を見つめ、小さく笑った。それは覚悟を決めたような表情だった。
「うおおおおおおっっ!!」
覇気を孕んだ声、魂の叫び、気合を入れた刀を手に持ち、伊佐奈目掛けて振るう。焔は旋風の行動に言葉が出ず、そのまま見てるだけしかできなかった。
「雑魚が、壊れた道具がどうなるのか、ちょいと見せてやるか」
「伊佐奈!!やめろ!!」
伊佐奈は焔の言葉など聞く耳持たず、視線を変えず、巨大な尻尾を強く振るい、旋風はそれを直接食らってしまう。
ドガァン!!と物騒な音が部屋に轟く。
壁に打ち付けられ、旋風は口から血を吐き、背骨は嫌な音を立て、音もなく、糸が切れたように倒れこんだ。
それを見た焔は、全身血の気が引き、雅緋は目の前の出来事に言葉を失う。

「旋風!!」

焔はようやく伊佐奈の超音波による影響が解け、彼女に駆け寄り体を引き寄せ声をかける。

全身打撲、全身の骨はほぼ粉砕され、衝撃によるショックにより、内臓もやられてしまっただろう…

呼吸を震わせ、旋風は朦朧としてる意識の中、焔の手をしっかりと掴む。

「ほ……むら……」

「しっかりしろ！旋風!!」

「ハハ……弱いなぁ……私……」

旋風は蚊の鳴くような声で言った。旋風の目には薄っすらと涙が溜まっており、一筋の涙が流れ落ちる。

「でも、焔は……こんな私に、ダメな私に……忍の才能のない私に……お前は……真正面から向き合ってくれた……」

「……バカ…！そんなの…当たり前だろ……」

焔の目に大量の涙が浮かび上がり、頬に伝わりこぼれ落ちる。その涙がポタポタと、旋風の手に、顔に滴り落ちる。

「焔……兄さんのことなんか関係なく、アンタと会いたかった……そして、お前みたいに……強くて……頼れるような……そんなお前になりたかった……

でも…お前のお陰で、私は勇気を出して……伊佐奈に……立ち向かうことが出来た……」

あの時、焔はこう言った。

『お前の力が必要なんだ。本当に蛇女を語るなら、想うなら、一人の生徒なら……な』

確かにあの時はそういった。今でも覚えている。

旋風は確かに下忍で、弱くて、忍の世界からして言えば一番の下っ

端で、褒められた成績など毛頭ない。
しかし、どんなに弱くても、忍として、生徒として、蛇女を想う心はどうだろうか？
旋風は、例え自分が弱くても、相手が逆らえない上層部だとしても、動かずにはいられなかった。

焔のあの言葉を聞いて、自分も一人の忍として、刃を振るわなければならないと、そう決心したのだ。
だから、旋風は例え相手に勝てなかったとしても、命を賭してまで、立ち向かったのだ。

「兄さんのことなど関係なく…お前に会いたかった……そうしたら……私は……きっ…と……」

そう言うと、旋風は静かに目を瞑り、息絶えた。
「旋風……」
焔の顔は、今まで誰にも見せたことがないくらい、涙で顔がくしゃくしゃになっていた。
今まで忍との戦いに於いて、生きるか死ぬかの生死を分けた戦いに不満を持つこともなければ、悲しむこともなかった。
忍の定めは死の定め。
戦争で人が死ぬのが当然のように、忍同士の争いで死ぬのは当然だし、仕方のないことだとは思っていた。

しかし、焔は旋風の死を目の前にして初めて、他の人が死ぬと言う悲しみを、苦しみを、辛さを、その身に、一生忘れないであろうと、身に染みた。
人が死ぬと言うのが、ここまで残酷なものなのか…

目の前の旋風の死に、焔は絶句した。今まで自分を殺そうと己を磨き、暗殺しようとあらゆる策や手を出して向かってきた彼女に、どこ

か家族に似た温かいものを感じた。
彼女もきっとそうなのだろう…その存在が、彼女が、目の前で殺され、死んでしまったのだ――――
「使える使えねえ以前に、道具が俺には向かい簡単にくたばりやがって…

死んで当然だな、ゴミが」

プツン――

「――おい」
焔の中に、何かが切れる音がした。ドスの利いたその声に、伊佐奈だけでなく、今まで呆然とただ眺めることしか出来なかった雅緋でさえも感づいた。
「今…なんて…言った？」
焔は旋風を抱きかかえ、ゆっくりと立ち上がった。そして目を覚ますことのない旋風を、焔は部屋の端に置く。
「はあ？何にキレてんだテメェは？役に立たん道具は唯のゴミだろ？殺して何が悪い？」
「何がおかしいんだ？」と本気で言ってるのか、と疑問を抱く伊佐奈の言葉…アイツの声を聞けば聞くほど、焔の心は紅蓮の炎で満ちていく。
焔は七本目の刀を手に持ち、静かに抜き取った。

シュン――

次の瞬間、焔は姿を消した。

「!?」

伊佐奈と雅緋の二人は、突然焔の姿が消えたことに動揺し、目の前で起きた光景に驚愕する。

まるで瞬間移動でもしたのか？と思わせるそのスピードは、先ほどまで戦ってたものとは訳が違った。

そして――

「はあああああぁぁぁぁぁ!!」

突如目の前に、紅蓮の炎に染まった、七本目の刀『炎月下』一本のみ手に持ち、魂の叫びと共に、強烈なる一撃を伊佐奈の顔に斬りつける。

グワッシャァン!!

「!?!」

訳もわからず、顔を斬られ、一閃の傷痕を残した伊佐奈。

ヘルメットの部分も形を保てず、一閃描かれた傷が印象的によく見える。

紅い一閃により、伊佐奈は声を上げる暇もなく、焔の炎月下の斬撃をくらい、体をよろめく。斬られた一閃の傷口からは、血が流れてくる。

「伊佐奈…お前は私が絶対に倒す。お前と言う存在だけは…絶対に許さんぞ!!」

「もういいや…お前。話にならねえ…」

お互い怒り昂り、互いに怒りを燃やした瞳が揺らぐ。

旋風の死と怒り、炎月下による紅蓮の炎となった彼女の名は…

――『紅蓮の焔』

紅蓮の炎は、伊佐奈を許さない。

６９話「人間じゃない」

「本当にここで良いのかしら…？」
「分かりません…しかし、先ほどの騒音はこちらから聞こえてきましたし、もしかしたら焔さんが戦ってるのかもしれませんわね…！」
ふと何気ない静かな廊下から聞こえる二人の女性の話し声。二人は息を切らしながらも出資者、伊佐奈の部屋へと向かっていく。
「両備ちゃんと両奈ちゃん、本当に任せて良かったのかしら？」
「他の忍学生を説得するのは任せなさいと言われました。私たちはそれを信じるまでです」
その二人とは、詠と春花のことだ。
両備と両奈と一緒に行動を共にしていたが、他の忍学生に見つかってしまったのだ。傷を受け、消耗をしてる彼女たちにとっては最悪な展開だったが、両備と両奈の二人が食い止めてくれたのだ。
その間に伊佐奈の元へ…と。
「でも急に静かになったわね……何が起きてるのかしら？」
「あっ、あれ！もしかしたら此処でしょうか？」
詠が指差すは一つの扉…自分たちが前にいた頃と内装は変わったいない…なら前に道元がいたあの部屋も、此処で間違っていないはずだ。
詠は「扉は開けるためにあるものです！」と大声を出し扉を開けた。
その光景は、旋風を失った悲しみで涙を流し、憤怒で紅蓮の炎に身を染める、紅蓮の焔。

そしてそんな焔に完全な殺意を芽生え、顔に横の一閃の傷が残る伊佐奈。

「伊佐奈、覚悟しろ…お前は紅蓮の炎で燃やしてやるよ」
「もう良いやコイツ…ガキ(バカ)とは話が合わねえ」

突然やってきた彼女たちからすれば、何が起きてるのか、何が起きたかサッパリ分からないこの殺伐とした空気。そんな二人の空間に、二人は思わず息を呑む。
部屋は間違ってなかった、伊佐奈がいる。それは良いとしよう…しかし何だろうこの殺意が漂う、気味の悪い静寂なこの空間は、嵐の前の静けさによるもの。

「詠、春花」
「ふぇっ？」
突然、焔は後ろを振り返ることなく、詠と春花に声をかける。
声をかけられた二人は素っ頓狂な声を上げ、目を見開いて、紅い焔を見つめる。
「旋風を…頼んだ」
「えっ？旋風って…」
と、此処で春花は部屋の隅に、旋風の遺体があることを知った。
直ぐに駆け寄り脈や息を確認し、旋風が息絶えたことを知る。
「でも焔ちゃん…この子「頼んだぞ」!?」
焔の異様なまでの、尋常じゃない怒りを燃やし、紅蓮の色に染まった髪を揺らがす。束ねてた白い紐が解かれ、ポニーテールだった髪は下ろされている。
紅きオーラは、触れただけで火傷しそうだ…まるで近づくものは誰であろうと焼き尽くすかのように思わせるその炎は、異常なまでに燃え上がっていた。
「詠、春花、下がってろ。私は、やらなければならないことがある」
「「焔ちゃん…」」

これまでにない、初めて見せる激情に、二人は言葉も出ない。
二人は、扉の前で立ち尽くし、一歩も動かなかった。
二人も本当は伊佐奈を許せないし、今直ぐにでも焔に加勢し戦いたい。しかし、今はそんな状況ではないと見ただけで直ぐにわかる。何よりあの焔が、時に厳しく、仲間想いの、頼りになるリーダーが、仲間には見せない怒りを露わにしてる今、自分たちが出ていい立場ではないと容易に感じ取れる。

「それは、お前を倒す事だ!!」

「やってみろよ!!雑魚がああぁぁ!!」

二人の怒声が響き、焔は炎月花を構え、伊佐奈は更に尻尾を巨大化させる。強靭な尻尾を焔に向けて襲いかかる。避けるスペースがないほどに巨大化させた尻尾、すると焔は炎月花を横に振るい、尻尾に斬りかかる。
紅いオーラを纏った炎月花と、凄まじい尻尾がぶつかり合う。
鍔迫り合いが起き、伊佐奈が一気に押すものの、焔は覇気を孕んだ声を腹の底から振り絞り、振り払う。
するとどうだろうか、あの強靭で強力な尻尾は見事に吹き飛ばされ、壁に埋もれる。
「!?」
尻尾を弾き返され、焔の力強い振りの威力ゆえ、体のバランスを崩してしまう。
焔は難なく、飛んでくるボールをバットで打ち返すような、そんな風に軽々しく、伊佐奈の尻尾を吹き飛ばしたのだ。
その力強さは、先ほどまでとは比にならない。
(コイツ…!尻尾を弾き返しただと?上級ヒーローやヴィランでもひとたまりもなく吹き飛ばし…この尻尾に勝った奴なんざ居ねえのに…!!)

伊佐奈は焔の実力に、紅蓮の焔という覚醒した力に、戸惑いを隠せない。
「チッ！もう一回…潰れろ!!」
伊佐奈は忌々しく焔に舌打ちをし、勢いよく尻尾を振るう。今度は鋭利で頑丈な尾びれを武器にし焔に襲いかかる。
焔はこれもまた軽々しく、一振りで尻尾を難なく弾き飛ばす。
（な…んだと…？）
それから、なんども何度も尻尾で攻撃をするものの、焔は臆することなく、怒りに染まった表情を変えることなく、悠々と、ゆっくりと歩いて近づいてくる。
どのような攻撃を仕掛けても、攻撃が通用しない焔のその姿は、怒りどうこう以前に、軽い恐怖を抱いてしまう。
紅蓮の焔となった彼女は、動きに無駄がなく、力も速さも、全てに於いてより活発となった。
（どれだけ攻撃しても…アイツに通じない……!!
あのゴミを殺してから…急激に強くなりやがった……力も速さも…先程とは比べ物にならねえ位に……クソ！クソが!!そうだ、早く動きを止めないと…こっちがやられ――）
伊佐奈が大きく体の態勢を崩したその時だ。焔は一気に飛び上がり、伊佐奈の目の前で足を掲げる。
スカートの中から黒いパンツが見えるが、そんなの関係ないしどうでも良い。
そして掲げた足を、伊佐奈の顔めがけて思いっきり踏み潰す。
ガシャアアン!!という金属の音が鳴り響き、焔は先ほど踏まれたお返しと言わんばかりか、口角を吊り上げ、伊佐奈をジッと見つめ、不敵な笑みを浮かべる。
「さっきの仕返しだ。
なぁ伊佐奈、お前の言う雑魚に踏まれる気分はどうだ？」
「ッ！クソ雑魚がぁ!!調子に乗りやがっ…てぇ！」
雑魚と罵ってきた焔に踏まれ、不敵な笑み浮かべ、見下している焔に対し、伊佐奈のプライドも、逆鱗も、堪忍袋も…そして…

『なんだよアイツ？顔が化け物だぜ？』
『ヴィランだヴィランだ!!ギャハハ！』
『顔が気持ち悪い……近づかないでおこうぜ？』

消えることのないトラウマを――

「俺を見下すなガキィ!!!!!!!」

――傷つけた。

触れてはいけない過去に、今まで罵られ生きてきた人生を、思い出したくもないトラウマを、全て呼び覚した焔に、伊佐奈は大きく怒鳴り叫ぶ。

（クソが!!くそクソ！こんなガキに、俺が…！だが、動きさえ止めれば関係ねえ…こっちのものだ！）

キィィと念ずるように、伊佐奈はエコーロケーションを使おうと焔を見つめる。また動きを止める気だ。

「アレって…まさか！」

と、ここで旋風を抱えてる春花は、伊佐奈の動きに違和感を感じ取る。一見何も見えないが、耳を澄ませば微かに聞こえる。

キィィという耳の鼓膜を突き刺すような…心当たりがあるのか、春花は傀儡に命令する。

「焔ちゃんを押し倒して！」

すると、傀儡は頷きながら焔に猛進し、グローブ状になってる両手で直ぐに押し倒し、伊佐奈の超音波を食らうことなく避けることが出来、伊佐奈の超音波は空振りに終わる。
「こ、これは…春花の傀儡?!
春花！何をする！私の戦いの邪魔を――」
「雑魚おぉ…!!」
最初焔は急に傀儡に押し倒されたことに驚きつつも、これが春花の傀儡だと知り叫ぶものの、伊佐奈は「クソ雑魚が！」と更に忌々しい目で睨みつける。
春花は「ごめんね焔ちゃん」と大人びた感じで反応を取る。
「焔ちゃんの戦いを邪魔した…っていうのなら謝るわ。でも焔ちゃん、あのままだったらやられてたわ」
「…どういう意味だ？」
「エコーロケーション、超音波。それが伊佐奈、彼の最も得意とする能力よ」
「!?」
エコーロケーション。本来海中で暮らすイルカやクジラなどが使っている超音波だ。
仲間と通信したり、獲物をマヒさせるといった手段で用意られてる能力だ。
「詳しいな…紅蓮隊の……春花…だっけか？確か大病院の娘だったか……」
「ええ、一応動物とかには詳しいから…偶々本で読んだことがあるのよ……でもまさか、忍の世界でこの知識が役に立つとは思わなかったけどね。
それ以前に忍である貴方が使うのは意外だったわ」
個性によるものならば話は別なのだが、こう言った超音波の忍術は聞いたことないため、春花も多少は驚いてる。
伊佐奈のことを完全に知ってるわけではないため、これが本当に忍術によるものなのか定かではないが…
と、ここで詠が一足先に前に出る。

「ですから忍として、貴方は余りにも酷すぎます」
「……あ？」
詠の厳しい言葉に、伊佐奈は眉間にシワを寄せ付ける。先ほど焔を睨んでいたが、今度は詠へと視線を変えた。
「忍がなぜこの世に存在するか…本当にわかってるのですか!?少なくとも此処は、蛇女は、貴方の為にあるのではありません…
行き場のない人間が、辛い思いを、苦しい思いも、嫌な思いも…全て背負って此処にやってきてるんです!!
貴方にとって、此処の忍は全て手段でしかない…そうでしょう!?
使えない忍は全て切り捨てる？殺す？そんなの間違ってますわ！
これだから金持ちは嫌いなのです!!
貴方が出資者であろうとも、貴方が幾ら偉くても、上層部から信頼されてる人間でも!!
私は！私たちは貴方を人間とは思えませんわ!!」
――ピキッ！
『人間』じゃない…？

――やめろ
『おいコイツ、あの財閥家の…アレが息子か？人間じゃねえよな…』
『ええ、気持ち悪いわ……あの顔、何なのかしらね？人間とは思えないわね』
『近づかないでおこうぜ？いくら個性の影響だからって、近づくと何されるかわかったもんじゃねえや』
『ああ、そうだよな…とてもじゃないが…

人間とは思えねえし』

――何にも知らねえくせに…

罵られ、妨げられ、拒まれ、見下されて、それがどれだけ辛いことが…

何にも知らねえガキが…！

何にも知らねえくせに…!!

「知ったような口を利くなあああぁぁぁぁ!!!!」

思い出したくもない。

周りの人間からのけもの扱いされ、見下され、生きてきた。

そんな生涯忘れることのない、心の傷を再び掘り起こした詠に、伊佐奈は大きな怒声で叫び、巨大な尻尾を詠に向ける。

「はあぁぁぁぁ!!」

ガシャアアン!!

伊佐奈が詠を尻尾で殺そうとしたその途端、焔は炎月花を振るい、伊佐奈の顔に斬撃を入れる。

とは言ったものの、伊佐奈が着けてる水族館をモチーフにした無愛想なヘルメット…マスクにだが。

マスクに攻撃したため、傷は与えることはできなかったが、それでも吹き飛ばすことは出来た。

マスクは嫌な音を立て、先ほどの攻撃で原型を保てず、鉄が溶けたように黒い一閃が入っており、そこから臭い匂いが僅かながらに漂う。

そして伊佐奈の顔を半分隠してたマスクが見事に取れる。

「春花、さっきは感謝する。詠、お前の気持ちもわかる。だが春花、詠、

お前たちはもう下がってろ。これ以上ここにいると被害が更に広が――」
「ああ！ダメだ！」
「!?」
吹き飛ばされた伊佐奈は、ゆっくりと立ち上がり、此方に背を向けている。突然喋り出した伊佐奈に、焔たちや、黙って見てた雅緋でさえも振り向く。
「このままじゃ…ダメだ……ああ、ダメだ、ダメだ……！」
伊佐奈はボロボロのマスクを手に持ち、体が小刻みに震えている。
このマスクはもう使えない――
そう見解した伊佐奈は、被ってたマスクをまるでゴミのように、部屋の隅に放り投げる。
「平和の象徴だ……オールマイトなんだよ……そして……アイツら無能の下等生物供が……両親が……この世界の全てが……

俺の人生を狂わせた」
そして、後ろに、彼女たちに振り向く。

「「「「!?!」」」」

四人は、伊佐奈のその隠された顔を見て衝撃を受けた。言葉すら出なかった…
焔は驚きはするものの、多少引いてるだけ。春花も冷静さは保ってるが、内心は驚いている。
詠は手で口を覆い、「何ですの…？これ…？」と、この世のものとは思えないものを見るかのような目で見つめる。
（アレが……伊佐奈の……初めて見せる……隠されたもう一つの顔…!!）
あの選抜メンバー筆頭の雅緋ですら、その顔を見せたなかった。

伊佐奈に隠された真実の顔が…彼女たちの目に映っていた。
「小娘共が…一丁前に講釈垂れやがって……
アイツらのせいで、俺は…惨めな人生を送ってきた……
オールマイト…あの平和の象徴と謳われた化け物のせいで……組織は滅んだ。

この世界が悪い、この世界が人生を変えたんだ！
金髪野郎…詠…とやらか？人間じゃねえだと？何にも知らねえくせに…人間とは思えないなんて…
そんな…そんな…

酷いこと、言うんじゃねえよ」

伊佐奈に隠されたもう一つの顔は、黒い化け物の顔だった。
クジラのような顔に、頭には水を噴出する器官、突起物が生えており、伊佐奈の健全な顔の反面、黒い顔は目がギョロリと目一杯開かれ、野生の獣…いや、海獣と思わせる異形な目をしていた。
「それが…お前の…隠された……顔なのか…」
「やめろ…やめろ!!俺を、そんなゴミを見るような目で見るんじゃねえ!!」
伊佐奈はこの顔を彼女たちに見られ、引かれたことに興奮してるのか、酷くえらく荒れている。
こんな伊佐奈を見るのも初めてだ、四人は彼の様子に戸惑いを隠せない。
「ハァ……ハァ……醜い…惨めだ、哀れだ、化け物だ、そう思っただろ？俺はそれが嫌だったから、それを隠すために…俺はあのマスクをつけてたのさ……裏サポートデザイナーに頼んだ物だがな……自分

の正体を隠すのにちょうど良かったよ。
４歳…俺が個性を発現する前までは…何もかも手に入れてたんだ。地位も、金も、全て!!
忍だってその気になれば幾らでも買えるほどの…俺は有名な財閥家の息子だった…!!」
その目からは、何かに対する憎みし、悲しみ忿怒、悪意、数々の負の感情がその目に放たれる。
「だがある日突然、俺のこの個性が発覚したその時、皆は俺を化け物と呼び始めた。この個性のせいでな…!!
世にも珍しい部類だと医者から言われた……無個性や個性婚とは違い…個性障害というな…」
本来個性の役割は、人それぞれによるものだが、伊佐奈の場合は他の人間とは違っていた。
雄英生の蛙吹梅雨のような個性、カエルといったカエルらしい人間や、Ｎｏ．１１ヒーロー、ギャングオルカのような、完全なる動物異形型といった人間離れした個性を持つ者。
またドラグーンヒーロー、リューキュウのように発動する変身系の個性を持つ者だっている。
しかし、伊佐奈の個性は他の者とは違った、特殊な部類。
個性の影響のせいか、顔の半分がクジラのような化け物となっており、人々は伊佐奈を化け物と呼んでいた。
個性障害。形や姿が安定せず、顔の半分が化け物となり、人間の姿とは半分かけ離れ、二度と元に戻らない個性の障害発達。
つまり、人間らしい動物型でもなければ、完全に人間から離れた動物型でもない、第三の個性を持つ者。
それが伊佐奈だ。
「想像できるか?生まれて望んでもない個性を手に入れて、何も知らねえ他の奴らから罵られ、化け物扱いされ、両親から見捨てられ、ゴミみてぇな場所で生き続け、見下ろされてきた人生…俺はそれを１０年以上も味わった……

これまでにない屈辱と、湧き上がる怒りの殺意…俺はそれを抱きながらずっと生きてきたのさ…」

超人社会。

普通の個性があるのは当たり前。特殊な部類に入る人間は、例えヒーローだろうと敵であろうと、世間はその人間に興味を持つ。

だが伊佐奈だけは違った。例外だった。

多くの人間は彼を否定し、生まれ持った力だけで、彼は何もしてないのに、個性のせいで全ての人生が狂ってしまったのだった。

「だから俺は、俺を見下して来た屑共が許せなかった…

そして俺はあの10年間、自分の個性について向き合い、研究し、把握して来た。自分の個性をどう上手く使えるか、自分の個性の特徴、様々なものを知り、俺はようやく力で全てを支配することが出来た。

他の敵(ヴィラン)共も俺の存在を知り、俺は一時期、敵(ヴィラン)組織を作り出し、そのボスとしてありとあらゆる悪事を働いて来たさ……俺を見下して来た奴らへの復讐としてな…

だがソレでもまた違った!!今度はあの平和の象徴に、あのオールマイトとかいう化け物に!全て滅ぼされたんだ!!俺の組織も、計画も、金も、部下も!すべて全て!全部奴に壊された!!

俺は命からがら、逃げることが出来た……他の部下共は今頃どうしてるから分からねえし、全員捕まったのかもしれんが……今までの努力が、全て水の泡になったんだ……」

伊佐奈のこれまでに至った経緯、そして自分がヴィランだったという存在。

伊佐奈の過去、正体を知ったその場の四人は、言葉を失う。

残酷な人間で、許されない伊佐奈だが、自分たちと同じように、辛い思いをして生きて来た、同じ境遇者を前に、少し戸惑ったからだ。

――焔を除いて。

焔はややきつめな口調で伊佐奈に問う。

「それでお前はこんな事をするようになったのか?聞いて呆れるな…所詮ただの自己満足の為だろ…

それで忍を巻き込む関係性が見えないんだが？」
「それで俺は敵（ヴィラン）をやめて、忍の出資者として生きる事を決意した」
「!?」
伊佐奈は懐からひとつの注射器を取り出した。その注射器を自分の首に向け、シュコン！と中にある液体を注入する。
伊佐奈の行動に四人は目を見開く。
「うぐっ!!かっ……！」
伊佐奈は突然悲痛な表情に顔を歪ませ、その途端、手に持ってた注射器を落とす。
「おいお前！何をし――」
「ハァ…!!ハァ…ハァ……！そして俺は…伊佐奈という忍名で通し、マスクも付け、俺は完全に忍の社会に溶け込むことが出来た……ハァ……そこから俺は忍についてありとあらゆる知識を身につけ、妖魔という存在に大きく興味を持ったのさ……！…ガッ…うっ…くぁ……！はぁ……はぁ…
そこからだ、俺が蛇女を狙ったのは。
敵連合の襲撃、道元の行方不明…その事件を利用し俺は……蛇女を根城として支配することが出来た…！」
伊佐奈の額や首筋には、血管が浮かび上がり、いつもより呼吸が乱れ、息が上がっている。
恐らく注射器で何かを打ったからだろうか、冷静さが欠け、いつもより様子が可笑しくなる。
「その注射器って一体……　っ！貴方まさか…!!」
春花はその注射器が一体何なのか、理解したらしく、いつも穏やかでお姉さんのような顔色は無くなり、血相を変えた。
「貴方…その薬が何なのか分かって打ってるの!?それは――」
「流石だな春花ぁ。ハァ…ハァ……これは裏アイテム…違法薬物の『トリガー』と呼ばれる、無理やり個性を活性化させる薬だ……」
トリガー。
違法薬物、闇市場として流通し、裏アイテムとしてヴィランから扱

われてるドラッグのような薬物。
個性を『活性化(ブースト)』させる反面、その代償として自分の理性を弱らせる品物。因みに打った際に舌が黒くなるのが特徴らしい。
本来こう言った個性を上昇させる物は、個性弱体化を救出するものとして、扱われてる一種の救助アイテムでもあるのだが、最近は闇市場など無断で許可なく流通している。
最近突然敵(ヴィラン)が活性化すると言った、突破性敵(ヴィラン)の原因はトリガーに当たると、近頃よくニュースで噂になっている。

「さて、遊びはもう終わりだ…!!」
伊佐奈の体がみるみると変わっていく。体色が黒水色になり、コートだけでなく、体全身が巨大化していく。
頭は長く伸び、突起物は少しずつ頭の真ん中へと移行し、巨大なあまり、今いる部屋が壊れ、天井がなくなるどころか、天守閣の屋上までもが壊された。
「これは…!」
「あれが…伊佐奈の…本当の姿……」
「で、デカイ……デカ過ぎますわ……というよりこれって本当に……」
「貴方…まさか……」
四人は、悠々と山が聳え立っているかのような圧倒的なデカさと存在感を目の前にし、息を呑み、冷や汗を垂らす。
紅蓮の焔をも対等に、いやそれ以上の力を手に入れた伊佐奈のその姿は、陸上に上がった巨大な鯨そのものだった。
息遣いは荒く、禍々しい目は焔たちを見下ろし、屈強な筋肉に血管が浮かび上がっている。
「覚悟しろ小娘ども…今の俺は伊佐奈じゃねえ…キュレーターだ!!」
「キュレーター…やっぱり!」

「春花、知ってるのか…？」
「ええ…未来のパソコンを借りて、昔のネットサイトやニュースの記事とかよく見てたわ…そこで前に一度目を通したことがあるの…
ヴィランの巨大組織壊滅。『５名』のヴィランが逃走……
その内の一人が…貴方というわけね…その組織の名前はワイルドヴィランズ。そしてそのリーダーこそが、クジラの姿をした彼よ…」
「！」
クジラの姿をした彼なら、ニュースや新聞の記事といったものに目がつけられるし、見た目も派手で印象的なため、一度彼を見たら忘れないだろう。
だから伊佐奈は人間の姿を保ち、マスクをつけ、世の中の光から逃げてきたのだ。
そして逃走中のヴィランが現在、こうして目の前にいる。
ヴィランなのに忍として社会に溶け込むことが出来たのも、きっと彼が素性を隠していたからだろう。
蛇女や悪忍育成機関は、相手の事情や個人情報などを探るのは禁止とされている。
そのため伊佐奈がヴィランであることも分からなかった。

「詠…とやらか？俺のこと、人間じゃねえって言ったよなぁ…？ああ!?
違う！俺は人間だ!!お前らは俺の道具だ！俺は、人間なんだ!!」
伊佐奈は詠を睨みつけると、巨大なクジラの雄叫びを上げ、頭がメキメキと硬化していき、彼女目掛けて頭を振り下ろす。
「なっ！しまっ――」
彼の思わぬ行動に、詠は避けようとするも、伊佐奈は先ほどの尻尾といい、図体似合わず素早い動きで襲いかかる。
巨大な隕石のような鯨の頭が、頭突きが、迫ってくる。
「詠ちゃん!!」
春花はなんとか距離を置いたものの、詠が避けきれないことを知り、駆けつけるも遅し、もう間に合わない。

（ど、どうすれば……！私は……！）
「詠！危ない!!」
「えっ？」
途端、詠は誰かに身体を押された。
いや、誰…だなんてこの状況では言わなくても理解できる。
詠はその人物に視線を移す…その人物は言うまでもない、瞳の奥に映るその姿は…
紅蓮の色に染まり、仲間を、詠を助け出した、焔だった。

ズドオオオオオォォォォン!!!!

そして伊佐奈の…いや、キュレーターの隕石と呼ぶに相応しい頭突きを、焔は詠を庇って食らってしまい、巨大な地響き音と共に地面がクレーターのように凹み、天守閣そのものが、地震でも起きたのかと疑問を抱いてしまう位に、激しく揺れた。
「焔さん!!!」
その光景を見た詠は、涙目になりながらも、震える声を振り絞り、焔の、彼女の名前を大きな声で呼び叫んだ。

しかし、彼女から反応が無ければ、声が聞こえることもなく、詠の叫び声だけが響き渡り、静寂な空気が辺りを包み込んだ。

７０話「仲間」

「クソ！アイツら絶対に許せねぇ…ゲホッ！ゲホッ!!」
夕焼け色に染まった空の下、とある街を歩く不良らしき三人の男たちは、何故か傷つき、ボロボロになっておりながらも、苛立ち声を荒げていた。
「クソ！あのゴキブリ野郎に…クソジジィが……ゲホゲホ！……はぁ…クソ！」
「おいおい落ち着けってば……アイツらもうヤベェよ…あのおっさんにしちゃあ不審者じゃねえか？」
荒立つ声をあげてる男は、髪がギザギザになっており、見るからに不良という印象がしっかりと伝わってくる。
一方、荒げる声を出す男の腕を、肩で背負い、嗜める帽子を被ったトカゲの男…
「いや、そもそも関わっちゃいけねえ奴らだったりして…」
図体が一通りデカく、体は赤色に染まり頭には火が灯っている大男は、見た目に反して内心はオドオドとしている。

この三人はある街中でうろつき、とある女性に絡んで色々と悪事を働こうとしたことから、今割と有名になってる親切マンと呼ばれてる男と、正体不明、顔は黒いバンダナやらマスクやらで素顔を隠してる、バットマンみたいな男に殴られ、酷い仕打ちを受けたのである。
彼らはそのせいか暫く気絶しており、気が付いたらもう既にいなかったという。
幸い路地裏のゴミ溜まりの場所だったため人目つかなかったものの、もし公道の場で喧嘩やら争いだのしていたら確実に警察に事情調査されるだろう…
不良である彼ら三人にとって警察やらヒーローの関係やらに関わるのは一生ごめんだ。
「おやおや、これはこれはお客様…大変なことで…」
「アァ？」

不意に死角から声をかけられ、声の主へと振り向くと、そこには黒ずくめの、社会人のサラリーマンのような男が立っていた。
それも不気味な仮面を被っていて――

「もし宜しければ、此方の『トリガー』と呼ばれる品物を使っては如何でしょうか？」
流通していく、闇のアイテムは、影に潜む悪意から少しずつ……少しずつ……

「俺は…人間だ!!」
ズズンと、鈍い音が鳴り響き、ゆっくりと頭を上げていくキュレーター。
その姿は正しく悪の支配者と呼ぶに相応しい称号を持つ、凶悪な鯨。
まるで冥海の底から現れたような…そんな風格を持つ彼は、先ほどの人間の姿をしていた伊佐奈とは、見間違えるほど悍ましいものである。
「焔さん!!」
詠は鯨と化した伊佐奈、キュレーターに目をくれず、先ほど詠を庇ってキュレーターの頭に押し潰された焔の元へと駆けつける。
先ほどの攻撃を、防ぐことなく食らったのだ。無事で済むはずがないし、何より反応がない。
呼吸はあるものの、それでもあの鯨撃を一撃食らっただけで、この威力。
伊佐奈がキュレーターと化し、力を解放、個性を発現、その上でトリガーと呼ばれる個性の活性化。
それらを合わせ兼ねての一撃、それなら納得がいくし、この高威力も筋が合う。
「個性と忍術…お前らが忍じゃなけりゃあ、忍の道に進まなけりゃあテメェらの特殊能力は個性として扱われてたそうだ。
また忍の家系じゃない人間、忍になる前の人間は個性として扱われていた……
俺はこの鯨の姿を隠し、個性による特殊能力を忍術として隠し通してきた。
お前らのような悪忍が俺を詮索しなかったお陰で、俺は個性を隠す努力をせずに済み、有意義に計画を進めることができた。
何が言いてえかって?今こういう状況になったのも、テメェらが苦しんでるのも、ぜんぶ全部蛇女の、悪忍の、甘さが招いたのさ…」

悪は善よりも寛容だ。
その蛇女の価値観が、言葉が、悪を許そうとする志が、逆手にとった。
キュレーターはそう言ってるのだろう、焔たちを虫けらのように見下ろす。
「この姿を見て、生きて帰れると思うなよ？小娘共が……貴様らに、弱肉強食という残酷な世界を見せてやろう」
フシュゥ～…と、鼻息を荒くし、強い憎しみを込めた鋭い眼光を放つ。
春花は手早く倒れてる焔に駆け寄り、脈を確認し、無事であることが確認できれば直ぐに応急処置に取り掛かる。
詠はキュレーターを激しい怒りを震わせ、睨みつける。
「全て貴様らが悪いんだよ…このガキ、俺に刃向かいやがって…
こんな厄介な日はそうそう無い…仲間に入れてやろうと思ってたんだがなぁ…
俺が直々に始末してやる。此処がテメェらの墓場だ、そうと決まれば貴様ら全員大人しく、黙ってくたば――」
キュレーターが何かを言いかけたその途端。
「おい――」

ドスの利いた声がまたしても皆の耳に届く。キュレーターもその声の主に思わず喋る口を閉じ、視線を向ける。
キュレーターだけでなく、春花や詠、雅緋も…その人物はなんと――
――立っていた。
春花と詠は、近くにいたにも関わらず、焔が立ったことに、いや違う。
その前にいつの間にか立っていたのだ。別の意味で、二人は驚かされた。
紅蓮の炎はまだ燃え尽きてはいないのか、益々と燃え上がり、より紅いオーラが燃え上がるように激しく揺らめく。

（何…!?）
キュレーターから感じるは焔のより急激なるパワー、真紅に染まるオーラ、紅蓮の如く熱き魂の震え…
全てをその肌身で感じたキュレーターは、我に帰ると、いつの間にか身体が小刻みするかのように震えていた。

この俺が震えてる――？

信じがたいことに、焔はあの一撃をもろに食らっても、まだ死んでいない。
焔は先ほどまで、かなりダメージを負っていたにも関わらず、それでも焔はなお、立ち上がっていた。
「お前…詠に…仲間に手を出そうとしたな？」
「……何なんだ…？」
「別に戦いの場で誰かと戦うのも、誰かに手を出すのも戦場では自由だ…
だがな、お前だけは許さん……」
「テメェは一体何なんだ…？」
「お前だけは、忍には指一本触れさせない……例えそれが誰であろうともな…」
「テメェは一体……!!」
焔の発する言葉を聞く度に、キュレーターの怒りは高まり、頭に血管がこめかみに浮かび上がる。
「何なんだ!!!」
「はあああああぁぁぁぁぁぁぁ!!」

二人の真に迫る雄叫び、瞳を震わせ、お互い負けないと言わんばかりか、二人は同時に攻撃を仕掛ける。
そして焔の炎月花とキュレーターの隕石のような鯨撃が、激しい鍔迫り合いをする。

キュレーターの頭は本当に隕石そのもののような硬度を誇り、あの炎月花が…代々伝わる家宝の、紅蓮の刀が、僅かながらに悲鳴をあげる。
（コイツ…!!やはり先ほどよりも全然チガ――）
ドオオオオオオオン!!!
「「!?!!」」
そして焔がここで初めて、鍔迫り合いに負け、キュレーターの隕石頭突き、鯨撃を食らうハメになった。
「何でなんだよ!!なんで!!」
それでもキュレーターは怒り昂ぶる感情のあまり、落ち着きや理性も殆ど無い、攻撃を何度も何度も、執念深く頭突きを繰り返す。
「何で倒れねえんだ!!俺の前で!倒れねえ!お前は道具!俺は人間様だ!
お前が俺に逆らうな!見下すな!俺が上だ!!」
頭突きを繰り返す度に、天守閣は地震が起きてるかのように激しく揺れ、どんどん地面は凹んで行く。
「お前に何度も攻撃しても!倒れねえ!ふざけんじゃねぇぞクソが!!
俺の過去も!苦しみも!何も知らねえくせに!粋がってんじゃねぇぞ!!
クソガキがあああぁぁぁぁ!!!」
「もうやめて下さい!!」
詠は叫ぶ。涙目になりながら、全力で。
目の前の悲惨な光景…キュレーターの激しい暴走…
トリガーの使用に理性が弱まったせいでもあるのか、焔の存在そのものが、彼に大きく刺激したのか、何にせよ、今のキュレーターは言葉は通用しない。
「ねえ!さっきから何の音よこれ!」
「え？」
幼いような声が後ろから聞こえ、振り向くと、そこには猫耳にゴスロリ衣装に身を包んだ未来と、蛇の紋が入った殺伐とした服を着こなしてる、日影。

二人は止まない地震の音に直ぐに駆けつけ、ここにやってきたのだ。
「未来さんに、日影さん！」
「詠さん、これ今どう言う状況や…？」
「え、えっと…」
突然やって来た日影や未来からすれば今のこの光景は、理解することができなかった。
武器を手に持つ詠と春花、何故か雅緋は虫の息、壁にもたれかかり、息を切らし、そして此処にいるは伊佐奈ではなく、巨大な鯨の化け物…
当然何も知らない彼女たち二人は、あの鯨が伊佐奈だということは知るわけがない。
「じ、実は伊佐奈が…」
「伊佐奈？あの鯨がかいな？」
「えっ、ちょっと待って…何よあれ……」
日影はあの鯨が伊佐奈だということを知り、驚きの声を浴びせるものの、未来はそれよりも、伊佐奈が…キュレーターがゆっくりと頭を上げ攻撃をやめたと同時に、血まみれになって、立ち上がることすらままならない…悲惨で痛々しい焔の姿に息を呑んだ。
「ああ？雑魚どもがさっきからゾロゾロと…」
「焔!!!」
ようやく二人の存在に気づいたキュレーターは、忌々しく二人を睨みつける。
二人は焔の名前を叫ぶ。
「ちょっ…待ってよコレ……焔に……何をしたのよ……？ねえ、何してんのよ…？」
「はぁ？
……あー、これか…やっとくたばったか屑が。お前らも確か紅蓮隊の……ああそっか、もうお前らのボスは…
使えねえな。ダメだなこりゃあ」
「何してんのよ!!!」

大切な存在を、仲間を、リーダーを、皆んなが大好きな焔を、キュレーターは屑呼ばわりし、見下し、嘲り笑う彼に、未来は激怒する。
しかしそれは当然、他の三人もまた同じ。
「秘伝忍法！【ヴォルフスシャンツェ】!!」
「行くで！秘伝忍法！【ぶっ刺し！】
未来はスカートの下から無数の凶器、数々の銃の武器を所持し、禍々しく妖しい色をした光の銃弾をブチかましながら超突猛進し、日影は自慢のナイフをひと舐めし、毒々しい色をしたオーラを解き放ち、ナイフの一撃の強さをより強く高める。
二人は同時にキュレーターの右腕に集中攻撃する。
「お前ら何様だ」
だがそれを、腕を振るっただけで難なく二人の攻撃を相殺し、二人まとめて吹き飛ばす。軽々しく吹き飛ばすその腕力、流石は海の支配者と名乗るに相応しい実力だ。
彼が蛇女を支配しようとするだけのことはある。
「私たちも黙って見ておられませんわ！秘伝忍法！【ジグムンド】!!」
「度が過ぎるわ貴方…！秘伝忍法！【Ｈｅａｒｔ　Ｖｉｂｒａｔｉｏｎ】!!」
焔がやられ、二人が吹き飛ばされたことに、詠や春花も黙っておられず、先ほどの日影や未来と同じように、一斉に秘伝忍法を繰り出す。
詠は重々しい剛剣に気合いと激しい怒りを込めて振り下ろし、キュレーターの左腕に斬撃を食らわせ、鋭い刃物が腕にめり込む。
春花は傀儡を操作し、金斗雲のように乗り、未来と同じく超突猛進する。
二人の重い攻撃が炸裂し、さしものキュレーターも思わず「うっ…！」と微かながらに痛々しい悲鳴の声を上げる。
「しつこいな！」
だがキュレーターは先ほどと同じように、小蝿を振り払うかのように彼女たちを軽々しく吹き飛ばす。
腕は多少傷を負い、血が流れ出る。キュレーターは彼女たちを睨みつけ、舌打ちする。

「よし、そこまでして死にたいのなら、お望み通り全員まとめて死なせてやるよ…お前らのリーダーと同じ場所…地獄へな」
キュレーターはズシン…と鈍く重い音を立てながら、彼女たち四人に近づく。四人は立ち上がるものの、それでもキュレーターに攻撃が通用しないのは微かに心を痛めた。
「そうだ、まずは金髪…テメェからだ」
「！」
突然自分が当てられたことに、詠は目を見開く。
「お前は俺の存在を否定した…人間じゃないと言ったな？この姿を見られ、俺の存在を否定し、何にも知らねえくせに一丁前に説教なんざしやがって、気に入らねえ…
だから、殺す」
怒りで頭に血がのぼるあまり、目が充血し、又も頭に力を入れ硬くする。メキメキとした音が嫌に聞こえる。
「……そんなに私が気に入りませんか？」
「ッ！なに…？」
突然口を開いた詠に、キュレーターは動きを止める。彼女の言葉に彼は逆に少し驚いたような表情を浮かべた。
「私のことが気に入らないのなら…それで構いませんわ……
貧民街で育ち、両親も亡くなり、貴方と同じように辛い思いを背負い、生きてきた。
貴方のやったことは許されないとはいえ、その気持ちは分かります…
悪は色々な形があり、貴方を見下してきた人間に復讐するというのも、止めはいたしません…
しかし、だからと言って忍を…関係のない人間を巻き込むことは別です!!それは理由に当てはまりませんわ！だから私だけでなく、私たちも言うんです！
貴方は人間じゃないって!!」
「ッ!!!クソガキがあああぁぁぁああ!!」
二度、人間ではないと断言した詠に、キュレーターは激怒する。

またしても…又しても――
「二度も同じことを言うか！クソガキいィィ!!!」
自分の全てを又も傷つけられ、否定され、滅茶苦茶にされたような痛みを感じるこの感覚に、キュレーターは頭突きをぶちかまそうとする。

「秘伝忍法！【リコチェットプレリュード！】」
「ああ…？」
何処からか、聞き慣れた声が聞こえキュレーターは動きを止めた。
そして次の瞬間、詠の目の前に降り立つ少女が一人、見覚えのあるスナイパーライフルを手に持ち、標的を狙って機雷を放っては、狙い撃ち…
爆破した。
ボオオオオオオン!!
「ッッッ!?」
機雷による衝撃的な大爆発が、キュレーターを飲み込み、爆炎が、爆風が襲いかかり、黒煙が巻き起こる。
幾ら素早くても、図体デカイ彼は、不意打ちやこう言った突然な反応には対処しきれないのであった。
「全く…私たちのことも忘れないでよね」
「両備さん!?」
目の前に立つのは、かつて…いや、先ほどまで姉の復讐に飲み込まれ、自分自身を苦しみ続けていた、姉妹の両備だった。
両備は後ろを振り向き、詠を見ると、優しく微笑んだ。

「これで、借りは一応…返したわよ？ほら、アタシ借りを作るのは性に合わないって言うか……」
「両備さん…」
両備は頬を赤らめ、恥じらいそっぽを向く。素直ではないが、彼女らしい可愛い反応に詠は思わず表情を綻びた。
しかし、どうしてここに？と一瞬疑問を思い浮かんだが、よくよく考えれば先ほどの地震が起きれば誰もが駆けつけるだろうと頭の中に浮かび上がり、疑問が消える。
「両備…お前…」
壁にもたれ、倒れていた雅緋は、両備が生きてたことに、こうして詠を助け出し、上層部…出資者に対し何の躊躇いもなく攻撃したことに、驚愕した。
両備は雅緋が此処にいることに気づいてないのか、振り向かず、ずっと詠を見つめていた。

「ブオオォォォォオーーーーー!!!」

そんな二人のほんわかとした空間を、海獣の雄叫びによって跡形もなく掻き消される。
激しい雄叫び、鼓膜が破けそうになる鯨の鳴き声、その場のみんなは思わず両手で耳を抑える。
「両備いいいい!!貴様あぁ!!なんのつもりダァ!!」
これが両備による秘伝忍法だと分かったキュレーターは、怒りを孕ませた声で両備を見下ろし問う。
両備はようやく耳障りな雄叫びが止んだことで、抑えてた両手を離し、Sっ気に近い目でキュレーターを睨む。
「別に？私は私の好きなことをやっただけだけど？」
「おい待て、お前いつからそんな生意気な口を叩くようになった？あぁ？」
今まで選抜メンバーを道具として見てきたキュレーター（伊佐奈）は、両備の口答えに思わず眉間にシワを寄せる。

「それにどうせ怒るなら…私じゃなく他の人にも言いなさいよ？」
「他だ…と？」
キュレーターは両備の言ってることがイマイチ理解できず、疑問を抱くも、直ぐに知ることになる。
瞬く間もなく、三つの影が遮り、キュレーターは瞬時に理解した。
しかし気付くも遅し、その三つの影の正体が露わになる。
「両奈ちゃん行っちゃうよ～～!!」
「アチャぁーー!!」
「えいっ…!!」
二丁拳銃を軽々と使いこなし、氷の遁術に激しい銃弾の嵐、芸術と呼ぶに相応しいその光景は正しくバレリーナ。
美しさゆえに息を呑む人間も少なくはなかろう…両奈の攻撃。
電撃を纏わせた如意棒を長く伸ばし、素早い動きでキュレーターを翻弄し、息つく間もなく繰り出されるその攻勢は流石と呼べるもの、忌夢の攻撃。
紫色の禍々しい負のオーラを溢れ出し、大きな球体を作り出し、放出する。
強く念じた禍魂の力を難なく使いこなす、それは正しく、禍魂を持つ者代々伝わる継承者に相応しい才能を持つ紫の攻撃。
三つの攻撃が、キュレーターに襲いかかる。
「両奈ちゃんもいるよ～♪」
両奈はべぇっと、小生意気に、可愛らしく舌を出す。
彼女もまた、両備と同じく此処へやってきた。
因みに他に食い止めてた蛇女の忍学生は何とかなったらしい…
「おい日影、こんな所でやられるなよ…お前はボクが倒すんだからな…！
だから、他の奴にやられるなんてこと、ボクが決して許さないぞ…！」
「忌夢さん…」
忌夢は日影に一切顔を向けることなく、振り向くことなく、背中を見せたまま、メガネをクイッと上げ、キュレーターを忌々しく睨みつ

ける。
日影は「せやな…こんな所で負けられへんわ」と不敵な笑みを浮かべ、立ち上がる。
そんな日影に忌夢もつられて不敵な笑みを浮かべる。
好敵手と書いて友と読む。

「紫…」
「未来さん…」
紫は倒れてた未来に駆け寄り、手をさしのばす。
手を差し伸べてくれる友達に、未来もその差し伸べた手を掴む。
「ありがとう…助けてくれて…」
「い、いえ……そんなの、当たり前ですよ……。
だって、私たち、友達じゃないですか…それに、未来さんの、ネット小説の大ファンなんです……死なれたら、尚更……困りますし……」
オドオドとして気はハッキリしていないが、それでも未来のために想って言ってるのだろう、恥じらい頬を朱く染め、未来に笑顔を見せた。
そんな紫に、未来もつられて、嬉しくて、思わず笑みを零す。

「皆んな…どうして……」
雅緋は、駆けつけに来た皆んなに心の中でそう呟く。
自分もその気になればキュレーター(伊佐奈)斬ることだって容易い…
しかし、そうなってしまえば、上層部に、出資者に逆らえば、間違いなく問答無用に抜忍の身に堕ちてしまう。
しかし、他の四人は何の怯みも迷いもなく、躊躇なく彼に刃向かっている。
抜忍たちと共に戦っている。
――ああ、そっか。
ここで雅緋は、あることに気付く。
――目的は同じ…忍だから。

善も悪も関係ない。欲しいものがあるのなら、何かを成し遂げないのなら、命懸けで戦え、取りに行け。
鈴音先生から初めて教えてもらったことだ。
今、何かを成し遂げたいからこそ、目の前に戦うべき相手がいるからこそ、立場など、関係なく、お互い背中を合わせ、戦うことができる。

焔は、もしかしたら――

「雑魚共が調子になるなあああああぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
空を、大地を、海を唸り轟かせる鯨の化け物じみた雄叫び。
超音波を周囲にぶつけたためか、周辺にいた周りの敵を吹き飛ばし一掃する。
紅蓮隊や蛇女も、跡形もなく吹き飛ばされる。
「テメェら道具共がああ！俺に逆らうな！何のためにこの俺様が態々と莫大な金を使ってここを作り直したと思ってるんだ!!
今こうして貴様らが蛇者を名乗れるのも！選抜メンバーになってんのも！全部俺様のお陰だろ!?
なのにその恩を仇で返しやがって…！貴様ら全員抜忍だ!!」
キュレーターは、自分に刃向かった選抜メンバー（道具たち）に憤慨し、荒々しい声で叫び続ける。
そしてキュレーターは壁にもたれ倒れてた雅緋へと視線を変える。
「おい、雅緋命令だ。コイツら全員を殺せ、始末しろ」
キュレーターは嫌味っぷりな笑顔を見せ、雅緋に又もや命令を下した。
雅緋に命令したことにより、雅緋がここに居たことに知らなかった他の皆んなは、目を丸くし驚く。
それは無理もない、ここにいるなんて思ってもなく、今まで雅緋がいたことに皆気付かなかったのだから。
「おい、どうした？早くしろよ。少しは俺の役に立ってみせろ」

雅緋は刀を杖代わりとして体を支え、立ち上がる。不屈な闘志を再び燃やし、戦うが為に刃を振るう彼女を見た紅蓮隊のメンバーは構え、蛇女選抜メンバーの四人は、雅緋に戸惑う。

私は――――!!

散々苦しみ、悩みに悩んだ結果、雅緋は答えを出す。

自分が今この立場で、何をどうするべきなのか……

抜忍にならない為に、彼女らを斬るか、それとも…

無論。答えは決まってる――

「私は、秘立蛇女子学園の選抜メンバー筆頭、雅緋!!地に落ちた悪の誇りを、取り戻す!!」

そして刃を振るう。

ザグッ!!

「!?」

それも、キュレーター(伊佐奈)に――。

「なぁ!?」

黒刀はキュレーターの頭部を突き刺したことで、血が流れ滴り落ちる。

黒炎を纏わせた黒刀を、キュレーターに刺せば尚一層…

キュレーターは突然雅緋が攻撃してきたという予想外な出来事に、動きを止める。

「ぐうぅっ!?雅緋!!貴様までぇ…どういうつもりだ!!なんの真似だ!?ほだされたかぁ!?寝返るとは…分かってんだろうなあぁ!?!」

今まで信頼してきた雅緋が、初めて自分に逆らったのだ。一番頼りになる道具として扱い、今までの任務も全て、彼女に押し付けていた。

最も、道具だと思っていた彼女が、いままで命令通りに生きてきた

彼女が、初めて主に逆らったのだ。
その予想外な出来事への衝撃は重いし、何よりも雅緋の行動にキュレーターの誇りが、傷つけられたのだ。堪忍袋の緒どころか、袋ごと。
「私は…いままで伊佐奈の、貴様の為に戦ってきた…それは否定しないし、事実だ。
だが、貴様が妖魔を売るという悪事は、悪忍でも許されない…それでも、私は貴様に逆らうことが出来なかった…
抜忍になってしまえば、父親の立場も無くし、辛い思いをさせてしまうと…
それだけは避けたかった…自分が抜忍になっても、それだけは出来なかった…
だが、焔紅蓮隊を初め、私の大切な仲間たちは命を懸け、貴様に立ち向かった。
尤も――旋風がそうだ。アイツは確かに褒められた成績もなければ、何処にでもいる一般的な下忍だ…
だが、そんな彼女が、命を懸けて貴様に立ち向かい、命を落とした。
旋風の方が…私よりも上だった……そんな彼女の死を目の前にして…私が貴様に立ち向かわないで…

何が悪の誇りだ!!!」

「ッ!?」
所有物だと思ってきた雅緋の、初めて見せる覇気に、キュレーターは後ずさりした。
雅緋は、旋風の死がキッカケで、考えさせられたのだ。
自分の力量の差を見て、勝てないことなど目に見えているにも関わらず、彼女は弱さを恥じらうことなく、己がやるべきことを、成し遂げようと命を懸けて刃を振るったのだ。
彼女は、悪の誇りを取り戻そうと、伊佐奈に立ち向かったのだ。

それなのに、自分は何もしなかった。何もやらなかった、何も出来なかった。

後輩が命を懸けたというのに、自分は何もしず、父親のためにと、抜忍の立場など、うじうじと考えていた自分が、馬鹿らしく思えてきたのだ。

そして、ハッキリと、決意をすることが出来たのは、共に戦ってきた選抜メンバーの仲間たちが、立ち向かったお陰でもある。

色んな想いが、色んな出来事があったからこそ、雅緋はハッキリと自分の気持ちを正直に、答えを出すことが出来たのだ。

「それに、もし本当に父親のことを思うのであれば、寧ろもっと早く立ち向かうべきだったのかもしれない…

父親の為に見て見ぬ振りをし、ただ貴様の愚かな行為を見過ごしていたとなれば、それこそ父さんに対して失礼だ……

何よりも、本当の忍は、己を顧みないものだから」

抜忍になりたくないから、立場を失うのが嫌だから。

そんな理由では、父親も嬉しくないし、それこそ忍として認めてもらえない。何よりも本当の強さではない、実力を持った唯の卑怯者に過ぎない。

「何よりも私は、強い奴と共に戦いたい。

少なからず、貴様よりも、強いヤツを見つけたんだ」

雅緋はキュレーターから視線を外し、再び違うところへ視線を向ける。

その視線の先はなんと…

「はぁ…？」

先ほど殺したと思っていた、完全にやられたと思っていた。

消えることのない紅蓮の炎を揺らぎ、ポタポタと血が地面に滴り落

ち、身体中全身が傷だらけで、血まみれになりながらも、それでも、仲間のために、家族のために、蛇女のためにと、立ち上がる彼女、焔だったのだ。
「私は…まだ…だ。まだ負けてないぞ……伊佐奈あぁ!!」
消えることのない紅蓮の炎。どれだけ消そうと抗っても、それでも焔の炎は消えることがない。

それを、紅蓮の炎と呼ぶ。

「化け…物がぁ……!!」
焔の威圧に、更に後方へとたじろぐキュレーターは、冷や汗を垂らし、悍ましいものをみるような目で見下ろす。
「雅緋、焔、よく言った」
「!?」
全員が又も聞き慣れた声のする方へ振り向くと、その声の人物はなんと…
「鈴音先生!?」
昔、蛇女にいた頃に、焔たちに修行をつけさせ、今は蛇女の教師として勤めている、凛。いや…鈴音先生だった。
「鈴音…だと…?テメェか?これを仕組んだのは…?」
キュレーターは周りを見渡す。自分に刃向かい抗う紅蓮隊。
自分が最も頼りに信頼して来た、彼女たちの裏切り行為。
全ての元凶が鈴音なのではないか?と疑問を抱いた。
「いいや、こうなったのは私ではない…彼女たち自らが決意した出来事だ。
蛇女の忍生徒たちを道具のように扱い、処分し、そして妖魔を造り、今こうしてヴィランとして姿を現した。
これで証拠は全て揃ったわけだ」

「――は?」

なに…？証拠？

「上層部から伝達があってな…」

ちょっと待て――

「伊佐奈を監視しろということだ、お前の動きがヤケに怪しいとのことでな」

どういう事だ――

「つまりだ、お前の動きが怪しいと上層部はお前に悟られぬよう監視をしていたという事だ。

そしてその任務を受けた私は証拠を取るべく、いままでお前を監視していたのだ。

そして証拠は揃った…意味はもう分かるな？

お前はもう終わりだ伊佐奈。上層部から新たな命令が下された。

伊佐奈を倒せ、ということだ」

「!?!」

「えっ、ということは…」
逆に伊佐奈は忍の世界に追放され、現在、伊佐奈を倒せということになった。
それはつまり、逆らっても何ら問題はない、抜忍になる必要もないということだ。
それを聞いた皆の表情は、少し安心を混ざった顔色に染まり、伊佐奈を倒すという目的が一致し、敵だった者たちは、共闘として彼に立ち向かう。

「……ふざけんな」

キュレーターもとい、伊佐奈は心の底から湧き上がる殺意と、怒りの闘志に、身も心も蝕んでいく。
いままで妖魔を造るのにどれだけの労力と時間と、金を使った来たか。
どれだけ長年かけて信頼を手に入れることが出来たか、蛇女にいる者は皆ただの所有物であり道具。
そんな道具たちに反逆を受け、裏切られ、そして鈴音の証言に衝撃を受け、そして自分はとうとう忍の世界から追放されてしまった。

それがどれだけ自分のプライドを、心を、逆鱗を傷つけたことか。
傷つけ過ぎた余り、憤る怒りに理性が吹き飛ぶ。

「ふざけんなあああああああぁぁぁ

ふざけんなゴミ共!!!」
そして部屋中暴れ狂う余り、天守閣そのものが、ビキビキとヒビが割れていく。
「何が忍だ!!何が悪は善よりも寛大だ!笑わせるな!
俺は人間だ!お前らは道具だ!どいつもこいつも俺をコケにしやがって!!
それにさっきから聞いてりゃなんだ?仲間?家族?想い?
下らねえよ!!何の価値もねえゴミがぁ!!」
理性はもうなくなり、ブチ切れ状態となってる。
「忍を殺すのが悪いだと?使えねえヤツを殺して何が悪い!!忍の定めは死の定めじゃないのか!?
殺した所で恨みを買われる身は無えんだよ!!

そもそも、任務で死んだ雑魚どもが悪いんだろ!?」
「ッ!何よ…それ……」
それを耳にした両備は、思わず眉間に血管を浮かべる。
彼女の姉は、両姫は任務で亡くなってしまったのだ。それも憎き妖魔に…
それを彼は「自分は何も悪くない、任務で死んだ雑魚が悪いんだ」と、言ってはいけないことを言ってしまったのだ。

「仲間だと!?自分の目的を達成するための、『道具』の間違いじゃないか!?ええ!?」
「道具って…!」
詠や春花も両備と同じく、怒りを浴びた目で、激しい攻撃を防ぎながらも彼の言葉が気にくわず、怒りの矛先を向ける。
「仲間?家族?想い?そんなのただの…

『飾り』だろ?!」
キュレーターは次から次へと頭突きを繰り返す。何度も何度も…そのあまり、蛇女の、天守閣の形が保つことが出来なくなって来てる。
「ッ!そうだ…本当に悪いのはお前だ焔」
「は?」
怒りから我に返ったキュレーターは、殺意を蓄えたその禍々しい目で、血まみれになってる焔を睨みつける。
「お前の存在そのものが、俺を苦しめたんだ……!!俺の存在を……何もかも、全て!!お前のせいで俺の人生は狂ったんだ!!!」
「ぐっ!?」
するとキュレーターは素手で素早く焔を捕まえた。
焔は体に力を入れ抵抗し逃げようとするも、キュレーターの握力で逃げることが出来ない。
キュレーターはゆっくりと近づき、焔の眼の前には、キュレーターの大きく開かれ巨大な目ん玉。
「もう、いいやお前要らねえ。死ねよ」
そしてキュレーターは口を大きく開き、焔を飲み込もうとする。
「「焔（さん）（ちゃん）!!!!」」
紅蓮隊のメンバーや蛇女のメンバーも声を掛ける。
しかし鈴音は何も動じず黙って見つめている…この理不尽極まりないピンチを…

ゴクリ…
飲み込む音が聞こえた。

……ここは？
薄暗い空間。まるで違う別の世界に送られたかのようなこの感覚、彼女は意識が朦朧としている中、この空間に溶け込むかのように、少しずつ、力が弱まっていく。
確か私は……ああ、そっか。飲み込まれてしまったのか…
なら、もう助かる術はないのかもしれないな……
今まで傷が蓄積していた分、少しずつ、少しずつ、無気力と化してきた。
身体にはもう力が入ってもいないし残ってもいない…
動くにしろマトモに動くことが出来ない。
私は…もう……死んでしまうのか――
ふと、そんな想いが頭の中に遮った。
でも、それも良いのかもしれない……私は、アイツの闘いに、破れたんだ…
焔の意識が弱まると同時に、紅蓮の炎も消えていく。
外から何やら声が聞こえる…
何だろうこの声は……
この声は…仲間たちの――？
『本当に、これで良いの？』
「え？」
暗闇の世界に、ふと声が聞こえた。
振り向くとそこには、太陽のような光が差し込み、白く輝くその美しい光に、焔は目を細める。
「なんだ…これは…？」

その光の先から、こっちへ近づいてくる人影が見える。
それが段々と見えてきた、知らない誰か……
いままでに会ったことのない人だ…誰だろうこの人は？
『初めまして…焔ちゃん…だっけ？』
え？
コイツは今なんて言った――？
知らないのに…なんで、私の名前を――
『あの世で見てたから、名前は分かるわ…ふふ♪』
あの世？そうか、ここはその境目なのか…だから、自分はこんなにも無気力なのか――
少女のその姿は、白いワンピースを見に包み、薄赤い髪を撫で下ろし、白い肌が透き通ってる、美しく、優しい女性だ。
『今まで…見てきたよ。貴女の闘いも、強さも、悪の生き方も……』
「……そうか……そんな私に、何のようなんだ？」
焔はぶっきら棒な物言いをし、そっぽを向く。何だろう、この気持ち…彼女と近くにいるだけで暖かい…優しさが身を包み込む。
『何の用もなにも……貴女が、言ったのよ？是非とも私に会いたいって、すっごく嬉しかった♪』
「は？」
彼女の優しから来る言葉の反面、ぶっ飛んだ爆弾発言が来たことに、焔は目を丸く見開く。
「私はそんなこと言ってない！それに誰なんだお前は!?」
『……名乗る必要なんてないわよ。もう、知ってるんだし。それに、ううん…何でもない』
その女性は、目を瞑って首を横に振る。
分からな、一体誰のことだろ？こんな女性は今までに見たことがな

い…
　自分が前にいた蛇女で戦い、斬り殺してしまった人間だろうか？忍の私のことを知ってるのだから、忍と見なして多分間違いないだろう…
『そんなことよりも、早く戻ろ？貴女はまだここに来るべき時じゃないわ…』
「ここは…やはり、あの世の境目なのか？」
『うん、まあね』
　やはりそうか…私は負けてしまったのか……
　焔は無気力から悔し混じりの気持ちに移り変わった。
　誰にも負けたくない…蛇女を救うために、伊佐奈に立ち向かったものの、やられてしまったようだ。
「なら、私が戻るのは無理なようだな……私は…」
『焔ちゃん、じゃあアレ見て』
　焔はあの世へとつながる光へ向かおうとしたその途端、その女性は焔の肩を掴んで指をさした。
　指をさした方向をみると…その光景は――
「なっ!?」
　巨大な鯨の化け物が、暴れまわり、紅蓮隊の皆は涙を流しながらも、伊佐奈に立ち向かっていた。
　自分がどんなに吹き飛ばされようと、敵わないと分かっていながらも、立ち向かっている。
「アイツ…ら」
　仲間たちは、命を懸けて、必死に戦っている。
『これを見てもそれが言える？ね？想い出して…貴女がやるべきこと、貴女のいるべき本当の居場所を……』
　ポゥッと紅い炎が全身を包み込み、紅く照らす。焔の無気力の目に、再び熱きたるや闘志が芽生えてきた。
『貴女の目的は？貴女は、なにがしたい？貴女は何になりたい？』

私は――――

「そうだ…私は――!!」

カグラになる――――

それが己が決めた、紅蓮の道。
すると、光の世界とは反対の方向に、紅い紅蓮の燃える道が現れる。
そして、紅蓮の世界が広がっている。
「そうだ、私はまだ死ねない……仲間のためにも、蛇女の為にも、カグラになるためにも…そして、

飛鳥と決着を付けるまで…!!」
『うん、よく言ったわ♪』
その女性は満面な笑みを浮かべ、優しく焔の頭を撫でる。
そのことになぜだろう、焔自身抵抗心は全くなかった…
普通はこんなことされたら、嫌がり腕で払いのけるのに…
何故か、居心地よく感じるのだ。思わず頬をピンク色に染めてしまう――
『じゃあ、ご褒美として……ちょっとだけ…いいかな?』
するとその女性は手から光に似た何かの球体を作り出し、焔の胸へと吸い込ませるように、ゆっくりと、押していく。
「これ…は?」
『貴女と出会えた、ほんの少しのお礼よ♪ほんの一欠片だけどね』
その光は焔の身を包み込み、全身から闘志が湧いて来た。
それも、尋常じゃない程の…
(なんだ…これは……?この力は…!?)

『さあ、行ってらっしゃい♪未来あるカグラの卵たち……

新たな世代の忍たち……貴女なら、ううん、貴女達ならきっと――』

そして、少しずつ消えていく。この世界が…

紅蓮の世界へと吸い込まれ…こちらの意識が朦朧とし消えていく。

あの人の、あの女性の顔をしかと目に焼き付けて――

「もう終わりだ!!」

ズズンと、大地が唸る地響きを立て、キュレーターは周りにいる忍学生たちを、押しつぶそうと、頭に力を入れる。

「クッ…アカン…!」

「そんな…もう……」

「こんな所で……」

「諦めるには…」

四人は、地べたを這いながら、息を切らし、立ち上がろうと体全身に力を入れる。

しかし、体の言うことがもう聞かない…この化物は誰にも止められ

ない。
「さあ、さっさとクタバレ…」
頭を振り上げ、渾身の頭突きを叩き込もうとしたその瞬間。

「生・秘伝忍法!!【紅蓮爆王波】!!」
ボガアアアアアアアアアン!!!!!
「「!?!」」
瞬間。キュレーターの頭は、紅蓮の炎と爆破の衝撃波を合わさった炎に、包み込まれ、飲み込まれた。

71話「学炎祭終了」

「グアアァァッ!!?」
急遽、キュレーターの頭部は紅蓮と爆炎の炎の海に飲み込まれ、焼きつかれる。
紅蓮のような紅き炎、爆破によるオレンジ色に近い炎、この二つの力が誰によるものなのか、今のこの状況で分かるはずがなかった。
「これ…は?」
「何や…これ…?」
「突然…炎が出たと思ったら、爆発した?」
「ねえ、ちょっともしかしてこれって…」
皆の表情は先ほどの不安や恐怖、焔を失った悲しみ、怒り、苦しみ、数々の負の感情から一転、段々と明るく、喜ばしい表情へと変わっていく。
まさかだとは思うが…この状況だからこそなのか、もしかしたら…もしかしたらこれは…
「皆んな、心配掛けて済まないな…!!」
「焔（さん）（ちゃん）!!!」
紅蓮隊のメンバーは、我らがリーダー、焔が死の淵からここに戻って来たことに歓喜を浮かべる。
「焔…?」
「これは…」
雅緋は、これが焔による仕業だということと、あの状況で死から舞い戻って来た彼女に、驚愕な表情を浮かべる。
目の前の光景に充分驚かされたが、それよりも焔の変化に驚いたのだ…
なんと、紅蓮に燃えゆる髪は、更に真紅の色に染まり、体からは異常なまでの熱…炎がまるで生きてるかのように揺らぎ、バチバチと小さな爆破の音を立てる。爆竹みたいな音を立てていた。
炎が唸りを上げる度に、爆破を起こし、彼女に近づこうものなら火傷なんて生易しいものではない…

爆炎に飲み込まれ、死さえ錯覚させてしまう。
一方鈴音は表情を曇らせていた。
あの炎が焔によるものだと知り、最初は「よくぞやった」と思っていた。
鈴音だって一流の忍でもあれば教師でもある。
誰かを見る目は確かにある。
しかし、焔のこの姿には、驚きを隠せなかった。
忍装束や見た目は変わっていないものの、その焔から湧き上がる闘志は、自分の実力をも超えて居る。
今のこの焔は、ここにいる誰よりも一番強い。

多分その気になれば、鈴音や大道寺二人が相手でも、今のこの焔には勝てないのかもしれない…

「焔ちゃん…それは一体…」
「詠…」
先ほどとは別人のように見える焔の異常な強さに、詠は声を震わせ彼女に声をかける。
そんな詠に焔は彼女の顔を見つめ、ニカッといつもの、頼り甲斐ある強い笑顔を見せた。
その笑顔に、詠は頬を僅かながらに朱く染め、焔から放たれる闘志が、詠にとってはとても心地よいものに感じたからだ。
まるで紅蓮の炎が、優しく包み込むように、太陽の光のように優しい暖かさが全身に行き渡るその感覚は、いつまでもこうしてここにいたい…彼女から離れたくないと、そう錯覚させていた。

「グァッ……アァァ…!!」
キュレーターの鼻や口、噴出孔から油っぽい液体が垂れ落ちていく。

これは脳油という鯨が持つ油のことだ。脳油を固めることが出来れば、液状化して水を噴出することが出来る。
キュレーターは脳油を固めて頭を強化し、隕石のような頭突きを何度も繰り返していたのだ。
しかし、焔によって内側から頭をやられた今、溢れ出んばかりに脳油が吹き出していたのだ。
その為、今のキュレーターは防御力０の状態…頭部の攻撃を喰らえば、例えトリガーで個性を強化してもひとたまりも無い。
(脳油が…!これは不味い!脳油を抜かれたら俺は……頭で攻撃することが出来ない!!)
ここで初めて見せる焦りの表情、キュレーターの弱点は頭部。
元々クジラやシャチといった魚は、メロンのような頭部にとても弱い…
また両備や雅緋、焔のように、爆破や炎といった攻撃は、肌を乾燥させるため、より一層弱い。
覚醒と呼べばいいのであろうか、焔は死の淵から舞い戻り、更なる力を習得した。
そして先ほどの爆破と炎の攻撃…頭部がやられた今、無事で済むはずがない。
「クソ!!バカな!?なんで…何故だ!?お前は死んだはずだ焔!なのに何故…お前は……俺の前に立っている!?」
目の前に立ち尽くす焔、その目は未だ死んでおらず、寧ろ忍の生を感じる。
生きたい、まだ死ぬわけにはいかない、生きて、強くなって、命を燃やし、生きていたい。
大切な仲間とともに、カグラを目指し、生きていく、強く生きていく。
忍が、生の心を芽生えた、新たな忍…カグラに最も近き、それ以上を超える可能性を秘めた、新たな世代の忍の誕生。

「二重の遁術…そんなのあり得ねえ……なんだこの馬鹿げた闘気は？この尋常ない威圧感は……
生伝忍法？そんなの……そんなの…
知らねえぞ!?!?」
あの伊佐奈ですら知らない未知なる力に萎縮してしまう。
秘伝忍法に、超秘伝忍法、絶秘伝忍法ならば話はまだ分かるものの、それすら超えるこの生伝忍法とは、聞いたことがない。
焔の眼光がキッ！とキュレーターを、篝火を轟々と強く焚き、怒りを燃え盛らせるその目に、キュレーターは更に後ずさりし冷や汗を垂れ流す。
「おい、伊佐奈」
「ッ!?」
焔の発する言葉に、名前を呼ばれただけで震え上がる。
あの海の王者たるクジラが、キュレーターが、悪の支配者が、恐れをなして驚愕している。
「仲間を散々傷つけ、蛇女の皆を苦しめたんだ…それなりの覚悟は出来てるんだろうな？」
「お、おい…」
焔は、ゆらりゆらりと炎が燃え盛るように、ゆっくりと歩いて近づいてくる。
一歩足を踏み出す度に、地震でも起きてるかのような錯覚、近づいてくる度に彼女の威圧感がヒシヒシと伝わり、全身が痺れるような感覚を覚えた。

――これは、ダメだ。

勝てない。それは自分の思考回路から来た答えではなく、生物的本能が負けを認めたのだ。
それは動物系の個性による本能なのか、それとも人間によるものなのか、定かではないが、焔には勝てないということは分かっており、

キュレーター自身、認めざるを得ない。

（…！ダメだ！コイツ…この、この生伝忍法とやらを持つコイツには…勝てない、ダメだ!!強すぎる!!）

「お前によって無念に殺された数々の忍たち、その中には旋風もいる……」

「お、おい止せ焔…」

近づく焔に恐縮し、身体を更に小刻みに震え、心の底から弱音を吐く。

だめだ、ダメだ、駄目だ。

ダメだ――――

「お前は私が斬り捨てる」

「来るな…!!!」

ダメだ!!!!

炎月花の刃先をキュレーターに突き立て、斬りかかる。

「やめろ!!!!」

キュレーターの、伊佐奈の初めて見せる、弱々しく、大きな悲鳴混じりの絶叫。

「生・秘伝忍法！【炎王紅蓮爆炎刃】!!」

背中にある六つの刃が宙に浮き、ジャグリングのように巧みに操り軽々しく使いこなす。

一つ一つの刀が、炎月花と同じ紅蓮の色に染まり、紅蓮の刃と化す。

その六つ刃が、一本ずつ、順番ずつキュレーターに襲いかかる。

一つ。
ボガアアァァン!!
「ガッ?!!」
たった一本だけでこの高威力。
雄英生の彼、爆豪勝己のコスチュームの両手に付いてある籠手の手榴弾の威力と変わらぬ大規模な爆炎。
触れた瞬間に大爆発を起こし、紅蓮の炎が海のように彼を包み燃やして行く。
二つ。
これも先ほどの一本と何も変わらない。
腕に突き刺し、大爆炎を起こしては右腕のダメージに耐えきれず、思わず右腕の体勢を崩し、体のバランスそのものを崩してしまう。
爆炎が彼を包み込み、黒い煙が濃く巻き起こり、姿が見えない。
三つ。
四つ。
五つ。
六つ。
爆紅炎を纏った刀は止むことなく次々に、彼に襲いかかる。
声を出す間も無く、キュレーターは激しい爆紅炎を浴び、身動きが取れない。
焔はこれが最後だと見なすと、七本目の刀、炎月花の柄を強く握りしめ、力を入れる。
ドクン…心臓の鼓動が脈打つように聞こえる。
炎月花は空間そのものを切り裂くかのように、風を切り、獲物を、標的を、伊佐奈を目掛けて突っ込んで行く。
炎と爆破の相性の良い連鎖、キュレーターの目の前に来ると、焔は勢いつけて刀を掲げる。
「これが!未来のカグラの力だあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
ボガアアアアアアアアァァァン!!

「ッッッ!!!ガアアアアアアアアアア!?!」
紅蓮と爆炎の最大火力。真っ直ぐ、縦一直線に斬られ、斬り刻まれたキュレーターの頭部から、赤い血が吹き出し、噴出した血が炎に飲み込まれ、蒸発していく。
断末魔を上げたキュレーターは、体全身火傷を覆い、ボロボロまみれの姿となり、渾身の斬撃を食らったキュレーターは、白目を剥いて、後ろへとゆっくりと、崩れていく。
ズズゥン！と鈍く重々しい音が、この空間に轟、大地が唸る。

目の前の光景を目に焼き尽くす彼女たちは、何も口に出すことが出来なければ、唾を飲み込み、目の前の出来事に動くことも、戦うことすらも忘れさせ、ただただ呆然と立ち尽くし、観てることしか出来ない者もいた。
また、雅緋も焔の歴然とした力の行使に驚きを隠せなかった。
カグラの可能性に最も近い実力を持った、焔に驚愕の色に表情を染めていた。
抜忍として命を狙っていた、そんな焔が、今まで自分より下だと思ってきた彼女が、自分以上の実力を発揮したのだ。
（この力は…一体……アレが、焔……）
カグラの片鱗を見せた焔を前に、憧れに近い眼差しを向けるその反面、どこか悔しい気持ちもあった…
それは、彼女の実力を認めざるを得ない訳ではなく、誰よりも必死に、死に物狂いで追い求めていたカグラの力を、称号を、彼女に先越されたようでままならないのだ。
一体、あの短時間で何があったと言うのだろうか？
馬鹿力…もあるかもしれないが、それだけであれ程、身震いするような力は発揮できないだろう…
それに生伝忍法なんて聞いたことがない…どの忍の歴史書や、教科書を読んで来た自分でも、それだけは分からなかった、きっと忌夢や両備も同じことを思ってるだろう……

それとも、単に自分たちに知らされてないだけなのか？
数々に湧き上がる疑問に、雅緋は色々と悩まされながらも、ゆっくりと立ち上がり、彼女に近づく。
「焔…お前……」
「雅緋…」
雅緋の声に反応し、気絶し倒れていたキュレーターから、雅緋へと視線を変える焔。
雅緋は声を掛けたのは良いが、なんて口に出せば良いのか分からなかった…
思わず声を掛けてしまったものの、言いたい事がありすぎて、何から先に話せば良いのか分からない…
そんな戸惑う表情を見せる雅緋に、焔はクスッと微かな笑みを浮かべた。
「何をそんなに戸惑ってるんだ雅緋？言いたいことがあるなら、言ってみろ」
彼女のその健やかな笑顔は、とても優しく、暖かく、家族の温もりでさえ感じ取れるほどの、とても居心地の良い感情だった。
この気配は、この暖かさは一体…
先ほどまでの焔とは全くの別人みたいだ…だが目の前にいるのは事実、本物の焔だ。見間違えるわけがない。
雅緋は少し頬を桜色の、純粋なピンク色に染めてもじもじと恥じらう。

そうだ、言わなくては…感謝の言葉を――
「ほ、焔……えっと、その……
あ、あり……ありが――」
「――殺す!!」
!?」
突如背中から凍てつく殺気の声が聞こえた。聞き覚えのある、嫌な声…こんな声などもう二度と聞きたくないと、心の底から願ってしまうこの弱々しい声に、皆はその声の主へと視線を変え、注目する。

「ゴフッ!ガッ……アッ!アァァ……はぁ、ハァ……」
この声の主は最早言うまでもなかろう…伊佐奈だ。
キュレーターの名前を隠し、鯨の化物へと姿を変えた、伊佐奈だった。
あの焔の生伝忍法の技をくらい、まだ意識があることに、それこそ驚愕する。
いや、驚愕どころか軽く恐怖を抱くくらいだ。
「クソ…がぁ!!焔……焔あぁ!!テメェだけは、何があっても…許せねえ……ゴフッ!
俺は…自分の計画のためとは言え…テメェらが存在維持できる蛇女を、悪忍育成機関養成学校に名を轟かせ、デカくしたんだぞ!!
それなのに…なんで…何で俺に逆らう……道具どもが俺に……こんな、はず…じゃあ!こんなはずじゃあ無かったんだ!!
焔がここへやって来て……俺は全て狂わされた…!計画も全て水の泡となった……気に入らねえ…気に入らねえよアイツ!!」

意識はない。気絶している。
不思議なことに、彼の姿は鯨のまま、少しずつ縮んでいき、小さくなっていく。
にも関わらず、彼は怒り深い怨みによる執念で、意識も理性もなくしたまま、喋っているのだ。
よっぽど焔への憎悪が強い為か、気に入らないらしい…
当の本人は、目の前の伊佐奈に呆れて、何も言わない。
言う気もない、言う気力すら失せてしまう…憐れんだ目で伊佐奈をただジッと見つめていた。
「雅緋!命令だ!!コイツら全員殺せ!焔を!あのクソ生意気なガキをブッ殺せ!
妖魔を解放しろ!俺の造った妖魔全部使って…あの野郎を地獄の淵に叩き落としてやる!
俺のために働け雅緋!がはっ…!げほっ……!俺のために、ヤツを殺せ!あの女を…今すぐ殺せ!

殺せ！殺せ！殺せええ!!」
「これが…私たちが従ってた、蛇女の支配者…哀れな強者か…」
頭ではもう喋ってないのか、裏切られたことなど当に忘れ、雅緋に命令を下している。
しかしそれも伊佐奈の言葉は全て虚しく消えてしまう。
黙々と見つめる雅緋は、焔と同じく憐れんだ目を細め、やがて人並みサイズまで縮んだ彼をジッと見つめる。
「おい！何をしてる！雅緋！早くころ――」
「もう黙れ」
――ザグッ!!
「!?」
途端、雅緋は先ほどいた場所から瞬時に、目にも留まらぬ素早さで、伊佐奈を斬る。
ザシュッ！とした人を斬る音が豪快に聞こえた。
血が吹き出し、伊佐奈は喋っていた口をようやく閉じた。
「安心しろ、殺しはしない。お前は数多くの忍学生を利用し、己の野望のために命を奪って来たんだからな。
そう簡単に殺しては意味がない…
忍学生（私たち）を見下して来たコイツには、キッチリと反省してもらわなければならない。コイツにはその義務がある」
「雅緋…」
焔だけでなく、他の四人も思わず声を漏らす。
雅緋のその表情は、怒りに染まった顔ではなく、いつもの厳しめな表情だった。
「それにコイツはもう倒したも同然だ。コイツは敵（ヴィラン）なんだろ？なら処分するのは私たちじゃなくても良いだろう…
それに私怨で殺すのは忍として反している…気に入らないから殺すじゃ、コイツと同じだ。私たちはコイツのような外道にはならん…
まあ最も、コイツには監獄がお似合いだろう。焔が、お前たち紅蓮隊のお陰で私達は変わることが出来た。なのにコイツは変わるどころか、此処までしても変わらんバカだ。

だから、己の罪と弱さを悔い改めさせ、変えさせる。それが私のやり方だ」
雅緋は頭部に突き刺した刀を抜き、血が付着した刀を軽く振り払い、血飛沫が飛ぶ。
「そして、焔。ありがとう…お前や、仲間たちのお陰で、私たちは変わることが出来た。救かった――心から礼を言うぞ焔」
雅緋は、恥じらいを捨て、素直に真っ直ぐ、彼女の瞳を見つめ、心の底から感謝の礼を言う。
雅緋に礼を言われ、最初はキョトンと面食らっていたが、直ぐに穏やかな表情に戻り「そうか、それは良かった」と呟いた。
さっきまで敵同士だった筈なのに、死ノ美を交わし、共闘したことで、友となった。
不思議なことだ…タダでさえ命を懸けた危険な戦いをしていたのに、今ではもうそんなことさえ気にならない…
焔たちが、半蔵学院と仲が良いのも、飛鳥の言ってたことも、なんとなくわかる気がした。

ポゥ…
ふと焔の体は光に包み込まれる。光の粒子が少しずつ、彼女から消えていくように…
「!?」
「こ、これは…?」
突然焔の体が光り出し、その光の粒子が消えていくのに、周りの皆んなだけでなく、自分自身驚かずにはいられなかった。
焔の身に一体何が…?
そう思った後、包み込まれてた光は弱々しく、散るように儚く消え、焔の髪は元の黒髪に戻っていた。
特に焔自身、見た目的には何の変化もないため、問題ないように見える…が、実はこれには大きな変化があった。
「お前…紅蓮を解いたからなのか?気配がまた変わったぞ?それも…前と同じ…」

前と同じ。雅緋が言ってるのは、あの生伝忍法を習得する前のことだろう…
自分も何故かと弱くなった気がする、力が失われたような、喪失感が感じられる。
そうか、あの力は借り物だからなのか？
焔は自分が本当の意味で死にそうになった時、生と死を彷徨ってた時に、あの世の境目で見知らぬ死忍？と会ったことをふと思い出した。
あの光り輝く宝玉のような、ファンタジーとかでいう光の玉みたいな、暖かく、優しく、何時迄もこの温もりに浸っていたいと、心の底からそう思ってしまう、不思議な感覚…未だ忘れられないあの感情…
それが光の粒子と共に無くなった。
きっと力を出し切ったからなのか…あるいは時間制限によるものなのか。
そういえば彼女は、『ほんの少しのお礼』と言っていた。
もしやそれが、これなのではないか？
アレの正体が一体何だったのか、未だ分からない…
どれだけ考えても、答えは見つからない。
でもただ一つ、言えることは――

あの力は無くなった。

「…いや、気にするな。ちょっと、ある人から借りただけだ」

あの人が一体誰なのかは知らない、一体何者なのかも、正体も、初めて会ったあの女性のことは何も知らない、全て謎に包まれた存在。
それでも、あの人には感謝している。
あの人から貰った太陽のような暖かき感情も、温もりも、全て…絶対に忘れないであろう…
焔は小声で呟いたが、彼女の声を聞いたものは誰一人としていなかった。

（せめて、あの人の名前位は聞きたかったな……
あの人が一体どのような意図で私を助けたのかは知らないが…）
「でもまあ、焔が無事で良かったよ…！本当にもう…！」
未来は子猫のようにふるふると震えながら涙目になっており、今でも涙が頬に伝わり大量に流れそうな勢いだった。
「焔ちゃん、毎度毎度無茶するけど…今回のは本当に驚いたわ…しかも生伝忍法だなんて聞いたことないし…」
春花は体中についてある傷痕を見て、無茶ばかりする焔にため息をつきながらも、最後は生きてたことに心の底から安堵の息を吐く。
「でもまあ、そこが焔さんの良いところなのかもなあ」
相変わらずマイペースで無感情のような日影の言葉。
だが今回の焔には日影も流石に驚かされたのか、感心している。
「兎に角、焔さんが戻ってきて、生きてて…本当に良かったですわ♪」
詠も僅かに涙を零すが、それでも笑顔は絶やさなかった。
四人の、仲間の笑顔を見つめた焔も、思わず涙が出そうになった。
――コイツらは本当に、しょうがない奴らだ。
嬉し涙で、焔は思わず笑顔を零す。五人で揃って笑っていられるのも、飛鳥や繋がってきた皆んなのお陰だろう…
絆の想いは影として支え、皆んなを繋ぐ。
大好きだぞお前たち。
大事な仲間たちが、私について来てくれるから、私は一人じゃない。
もう一人じゃなくなったんだ。
ありがとうお前たち。
お前たちに出会えて本当に幸せだ、お前たちのお陰で大切なものを知り、色んなことを学ぶことができた、成長することが出来た。
良いものだな、仲間だというのは――
前までの自分なら、蛇女にいた頃の自分たちなら、絶対にこのような感情はなかった。
詠は永遠と金持ちを憎み怨み続け、日影は感情という大切なものを知ることすら出来ず、未来は復讐に身を焦がし、大切なものを見落と

し、春花は自分が人形だという考えに本当に大切なものを見つけることすら出来なかっただろう。

自分はきっと、仲間たちを失い、本当に一人になっていただろう。

だからこそ、今の自分に感謝をするんだ。今の自分と、仲間たちと…

「焔！」

背中に鋭い声がかけられ振り向くと、鈴音先生が立っていた。

その表情は先ほどの疑問と表情を暗雲に曇らせていた時と違い、今は穏やかに微笑んでいる。

「お前たちのお陰で、伊佐奈を倒し、蛇女が救われた。元・担任である先生として、心の底から礼を言うぞ」

「鈴音先生…感謝します」

「何をいう、感謝するのは私たちの方だ、お前が感謝してどうする」

鈴音の思わぬ感謝の言葉に焔はつい、元にいた蛇女の癖で彼女に謝ってしまう。

どれだけ時間が過ぎ去ったとしても、癖というのは簡単に直るものではない。

「しかし、今の蛇女は救われたものの、校舎が…」

キュレーターと名乗る伊佐奈との戦いで、部屋中はほぼ壊滅し、各フロアや天守閣そのものがかなりボロボロになっている。天井は破壊され、あるのは夕焼け色に染まった空がよく見える。

「壊れた校舎は、また造り直せば良い話だ」

鈴音は焔の肩を軽くポンと手を置き叩いた。その優しさに思わず「ありがとうございます」と礼を言いそうになったが、また先ほど同じことを言われるので辞めることにした。

「焔…」

「雅緋」

雅緋が突然、二人の間に入り込むように声をかけ、焔はそれに反応

した。
雅緋は鈴音を見つめ、鈴音も雅緋に視線を合わせると、コクリと頷いた。
何があるんだろう?と焔は首を傾げながら、近づいてくる雅緋を見つめる。
「焔、もし良ければ…
蛇女に来ないか?」
「!?」
雅緋の言葉にその場にいる紅蓮隊の皆んなは驚いた。
「なに、勿論紅蓮隊のメンバー全員もだ。お前たちのお陰で、我々蛇女は救われ、伊佐奈の野望も阻止することが出来、こうしてお互い生きてるんだ。
死ノ美も交わしたお前たちとなら、本当に新たな悪の誇りが取り戻せそうだ。どうだ?悪くない話なんだが…」
雅緋の誘いに一同は戸惑う。
コレが伊佐奈なら100パーセント断ってはいるが、今は違う。
こうして伊佐奈を倒し、蛇女は救われ、雅緋は心の底から、本心に言ってるのだろう。
皆が迷っていると、焔は微笑み口を開いた。
「お誘いは嬉しい限りだが…悪いな、お前たちの誘いには乗れない」
「!?」
「焔?」
仲間たちは唖然と驚き、雅緋は怪訝そうに眉をひそめる。
「私は抜忍の身になって、お前たちの元に戻りたい…蛇女に帰りたいと願ったことも屡々あったが、抜忍になったお陰で、その道でしか見つけることが出来なかったものもあった。
蛇女にいた頃なら、カグラの存在だって知らなかった…
だから私は、抜忍として生きる道を選んだ。蛇女には戻らない…悪いな」
「そうか…お前も、カグラになるんだったな。となれば、いずれまた逢

えるという訳か」
焔の決意に雅緋は「フッ…」と微かに笑い、軽く頷く。
焔のカグラへの執念に、喜ばしい気持ちになったからだ。そして焔の後ろにいる他の四人も同じく頷いた。
なるほど、皆それぞれ想いは同じということか。それもまた一興…悪くない。
「分かった、ならば焔。強く生きろ！そして私は、お前を超えてみせよう！」
「ふっ、勿論だ雅緋！まあ最もこの私を超えることなど絶対ありえんがな！」
リーダー同士の会話、二人は不敵な笑みを浮かべ、見つめ合う。
何とも頼もしい限りだ、二人がまるで一流の忍に見えるくらいだ、きっとカグラになるのも、そう遠くはないのかもしれない。

そして、これが焔たちの新たなスタートの第一歩であり、焔のあの力が、衝撃な真実へ近づいたことなど、誰も知らない、知る由も無い。
これからこの先彼女たちに待ち受ける、驚愕なる真実、そして圧倒的なる絶望。
だがそれもきっと、彼女たちは乗り越えていくであろう。

「行ったな、焔たち」
傷だらけで、ボロボロに塗れた雅緋はポツリと独り言を呟いた。伊佐奈は他の忍学生たちが彼を捕縛し、連行されている姿が印象的に見受けられる。
他は、傷ついた下忍たちを医療室に運んだりなどしている。
「ねえ、雅緋…」
後ろから声が聞こえたので振り返ると、そこには両備と両奈の二人が、申し訳なさそうな顔で雅緋をジッと見つめていた。
二人の様子に雅緋は首をかしげる。
「あのさ…その……えっと……」

「……」
両備はモジモジと羞恥心に身を染め、恥じらう乙女のようにモヤモヤした感じに、声がはっきりとしておらず、両奈は無言だ。
「どうした？お前たち、私に何か言いたいことがあるようだな…
何、正直に言え。私は決して怒らずに話を聞いてやる」
そう言うと、二人は「で、では…」とお言葉に甘えるように、二人の姉妹はお互い顔を見合わせ頷き、話し出した。

雅緋への復讐と、両姫が雅緋を殺したと言う勘違い。

二人の話を聞き、完全に理解した雅緋。
二人は「ああ、このパターンは怒られる」とよくある話に思わず目を瞑り、怒られる覚悟を決めていた。
しかし、そんな心配は無用。
雅緋はフックールで涼しい笑みを浮かべると、二人の頭を優しく撫でた。
「えっ？」
ふぁさ…とした髪を撫でられた感触が伝わり、二人は今何が起きてるのか理解すること出来ず、ただこの場で頭を撫で続けられる一方だ。
「そうか、私の所為でお前たちはそんな苦しい思いをさせてしまってたのだな…
本当にすまなかったお前たち……私は、知らずしらずにお前たちの心を、傷つけてたんだな…気づかなければならないことに、私はお前たちを見ようともしなかった…謝るのは私の方だ…改めて心の底から、本当にすまなかった…」
「い、良いって！元はと言えば妖魔が悪いんだし、勘違いした私達にだって非があるわ！自分ばっかり責めないで！」
「両奈ちゃんも！両奈ちゃんたちが悪かったの！雅緋ちゃんは何も悪くないのに…両奈ちゃんたちは…それを知らずに…雅緋ちゃんを殺そうとしたんだもん…怒られるのは気持ちいいけど、この場合におい

ては話は別だから…」
「お前たち…」
雅緋はグッと湧き上がる涙を堪えた。
嬉し涙など、今まで流したことなど一度もない。仲間と一緒に過ごせると言うのが、どれ程幸せな事なのだろうか…
雅緋は涙を堪え、代わりに目一杯笑ってみせた。

これが、本当の仲間。
笑いあって
泣きあって
喧嘩して
青春のような、忍らしくないようで学生らしい人生。
前までの自分なら、仲間など要らなかった…そう思ってたのに、今となっては仲間の存在に感謝の言葉でしか湧き上がらない。
「ありがとう…」
そして雅緋は、両備と両奈の二人を優しく抱きしめた。
二人の顔色は、朱い色に染まゆ。二人を御構い無しに雅緋は、最後まで流さなかった涙が、頬に伝わった。

ありがとう、みんな。私について来てくれて…

今まで自分と一緒に側にいて、妖魔との戦いで廃人となった自分を、支えてくれた幼馴染の忌夢。
やや引っ込み思案で、それでも彼女には姉への好意、そして誰かに対する優しさを持つ紫。
勘違いとはいえ復讐に身を染めながらも、二人は姉の仇である自分と一緒に戦場で戦い、背を合わせ、共に生き抜いて来た両備と両奈。
こうして今の蛇女があるのは、焔たちだけでなく、彼女たち仲間のお陰でもあるのだ。

凄いものだな、絆の想いは。

雅緋は心の中で、そう呟いた。

こうして焔たちは、伊佐奈によって支配から解放された蛇女から去り、蛇女の忍学生たちに別れを告げると、皆は日が沈む夕焼けに向かって、帰って行った。

因みに余談だが、伊佐奈は特例中の特例により、雅緋の願いもあってか、彼は上層部から通し、裁判を受けることなく、刑の確定を待たず、今まで全国指名手配犯としてヒーローや警察に追われていた彼は、『ワイルドヴィランズ』のキュレーターとして逮捕されたと、世間に広まった。

これでもう二度と彼が蛇女を支配することはないだろう。

表も裏も、彼が居なくなったことに安堵の息を吐き、人々の安心が蘇る。

まだまだ事情調査することは山ほどあるらしいため、彼からすれば地獄なのかもしれないが、自分を悔い改めさせる良い機会なのかもしれない。

こうして、少女たちによる学炎祭は、幕を閉じた。

「兄さん!!」
「ちょっと天哉！気持ちは分かるけど落ち着きなさい！ここは病院！大きな音立てないで！」
焔たちが伊佐奈を倒し、蛇女と別れたと同時刻、学炎祭が終わり、直ぐに兄のいる病院へと駆けつけに来た飯田天哉と、彼の母親。
母の話によると飯田天晴はヒーロー殺しにやられ、重傷を負い、生死を彷徨ってるとのこと。
それを一目散に病院まで駆けつけここにやって来たのだ。
手術が終了した為、病院の扉を開くと、何とその光景は――
「……兄さん？」
足は白い包帯で巻かれ、頭も白い包帯で覆われ、チューブやら血管やらで所々の体に液体を入れ、治療を受けている、変わり果てた飯田の兄の姿。
その光景を、受け入れられない悲惨な兄の姿を、ボロボロで今でも死にそうな、大好きな兄を見て、母は軽く気絶しその場に倒れこみ、いつも真面目でブレない飯田が、ここで初めて表情を歪ませた。
「天哉……御免な……お前、あん時頑張ってたのに……なのに俺…兄ちゃん……負けちまったよ……」
「兄…さん!!」
ヒーローは、人を救けるのが仕事だ。しかしそれはあくまで至極単直的な答えの出し方。
本当のヒーローの仕事は、プロはいつだって命懸け。
飯田の兄は、あと数分遅ければ完全に死んでいたという。
それ程に、飯田の兄は、酷い傷を負い、二度とヒーロー活動が出来なくなってしまった。

憧れのヒーロー[兄]が、傷つき無残な姿には耐えられなかった飯田は、瞳を激しく揺るがせ、大粒の涙が頬に流れ落ちた。

夕焼け色に染まった空、数羽のカラスが羽を広げ、日が沈む夕焼けへと真っ直ぐ向かっていくかのように、カラスは鳴き声を叫びながら、少しずつ小さくなっていき、やがて見えなくなっていく。

「おじい様…」

辺りの雑草が生えてたり、石像やらが立っており、死塾月閃女学館の筆頭、雪泉は仲間と一緒に、ある一つの墓の前で合掌をする。

墓は先ほど美野里と四季が綺麗にし、叢と夜桜は墓の周りにある雑草を抜き取り掃除をしていた。

墓の前に置かれてるのは、おじい様の好物であるいちご大福。

前は半蔵の所為でいちご大福を全部食べられてしまったのだ。

そういえば、アレから飛鳥に勝ったというのに、半蔵は一向に姿を現さなかった。

『孫に勝ったら勝負してやる』と言っていたのに、まあ自分も忘れてたので偉そうなことは言えないが……

しかし、今はなんだかもうどうでもよくなって来た、前までは半蔵に恨みはあったが、今はそんな怨みも、学炎祭を通してとうに消えていた。
雪泉たち月閃は、学炎祭が終わってから黒影様に今回の学炎祭を報告しにいく為、自分たちが学炎祭を通して成長したこと、そして新たな信念、正義の道が出来たこと、そのために墓参りに来たのだ。
「私たちは、今回の学炎祭を通して、また一歩精進致しました」
やっと、このことを伝えることができた。
前までの自分は、本当に自分たちのやってる事がおじい様の意に反してないか、拭いきれない不安があり、心配で顔を出すことすら出来なかったのだ。
でもその心配も無用、不安もない、飛鳥たちと戦い、雄英生たちと通じ、自分たちは変わる事ができた。

悪への憎しみ。
悪への拒絶。
悪への怨み。

今思うと、自分たちが悪ではないのか?と軽く思えてしまう。
悪は確かに許されるべき存在ではない。
お互い分かち合える悪もいれば、飛鳥の言ってた焔という少女も、きっと、いつか、分かち合えるだろう。

分かち合えようともせず、悪だからという肩書きだけで殺そうとするのは、些か度が過ぎる。
何よりそれは、殺戮兵器と何ら変わらない…自分たちには意志がある。
自分たちは忍だ、これからこの先、何が待ち受け、何が起こるか分からない。
しかしそれでも、人間は、私たち忍は、強く生きなければならないのだ。

影、人々の影を支えるために――

「――立派に成長したネ！雪泉たち！これなら黒影も喜んでくれるね！」

「ッ――！この声は王牌先生?!」

突然後ろからよく聞き慣れた声が聞こえたので、後ろを振り向くと、そこには立派な髭を垂らした王牌先生…ではなく。

「ガッハッハ！よっ、お主ら」

半蔵だった。

「は、半蔵!?ど、どうして此処に…？」

王牌先生の声がしたので振り返ってみれば半蔵がいた。

余りにも声が似ていたので皆んな驚いてしまった。

半蔵は豪快に笑いながら、両手で寿司の木箱を持っていた。

雪泉は一度半蔵から視線を外すと、辺りをキョロキョロと見渡す。

「王牌先生は何処へ？」

「何処へ…というと、ここじゃよ。まあハッキリ言えば、儂が王牌先生だったという事じゃな」

「ええっ!?」

衝撃的なる真実を目の前にして、雪泉は思わず大きな叫び声を上げる。

皆んなも流石にこれは驚かされた。多分この衝撃はテレビとかでやってるドッキリ大成功！を遥かに超えているだろう、思わず心臓が飛び出そうになった。

だが確かに王牌先生と半蔵を比べると似てなくもない。

何より立派に垂れている自慢のヒゲがそう物語っている。

しかし、なぜ半蔵が王牌先生の姿をしていたのだろう？

「黒影がな、言っておったのじゃよ。もしもの事があれば、雪泉たちを頼んだとな、袂を分かった男でさえ、アイツはプライドなど関係なく、お主らの為なら頭を下げる。

それが、アイツじゃ」

なんと、あの黒影おじい様が？と皆んな心の中でそう呟いたことだ

ろう。
しかし、よくよく考えてみれば、黒影おじい様はいつも私たちの為に修行を付けてくれれば、いつも自分たちと遊んでくれていた。
何よりもおじい様は、私たちの笑顔が大好きだったから。
「しかし、いちご大福で挑発し、オールマイトと戦わせ、学炎祭に挑ませた意図が分かりませぬ」
夜桜は不満げそうに口を開き、それを聞いた半蔵は又しても豪快に笑う。
「それもお主らの為じゃよ。ああいう方法でならば自然的に学炎祭に持ち込めるじゃろ？それに一つ言っておくが、オールマイトの件は儂は本当は止めたんじゃぞ？反対もした…」
「え？」
半蔵はオールマイトのことにため息をつき、雪泉達を見つめた。
雪泉自身も、あの半蔵がオールマイトを反対した…その事実に少し驚かされる。一体なぜ…？

『なぬ？オールマイト、お主本気で言ってるのか？』
『半蔵くん！私は何度も言うが嘘はつかない男だ！隠し事は多いけど

ね…』
敵連合襲撃についての会議の後、オールマイトは半蔵と話し合っていたのだ。
雪泉たちの正義の道について――
オールマイトは自分が敵になりきり、雪泉たちの前に立ち、対峙する。
そして頃合いだと判断すれば正体を明かす。と言ったドッキリ番組でも企画してるのかと問いたくなることを考えていたのだ。
『お主の言い分も分からなくもないが…儂は反対じゃぞ?』
『な!何故です!?』
『お主は敵連合の戦いでかなり体力を使ってしまい、今や制限時間も超えておる…お主は緑谷と一緒に精進し、飛鳥にお主のことを伝えるべきだ。
幾らお前が平和の象徴と謳われ、アヤツの弟子だからと言い、雪泉たちについては何があっても反対じゃ。
お主の所為で、学炎祭が出来なくなってしまっては元も子もない、それに悪への憎しみを持ってる以上、奴らはまたトラウマやら悪への憎しみが増える一方になる、ここは安静をするんじゃ』
『それじゃダメなんだ!確かに私はあの襲撃で制限時間は短くなった…
緑谷少年の側にいることも大切だし、飛鳥くんにだけ本当の、この私の本当の姿をバラしても問題ないと思う…君の孫だからね…
しかし!彼女たちは悪の憎しみに囚われている!あのままでは黒影さんと同じ道に進んでしまう!彼女たちが、雪泉くんたちを救うのは良い!私はその手伝いをしたいだけなんだ!
もしこのまま進んでしまえば…『神威』、死んだあいつの思惑通りになってしまう!!それこそ、私は耐えられない!私も手伝ってあげたいんだ!
陽花くんも言ってたじゃないか!彼女と約束したんだよ!あの時のことを!!』
『ッ!』

『もしこのまま進めば…彼女たちは社会の本当の真実を知り、悪に染まってしまう…
私はそれが許せない…困ってる人間を助けないで、何が平和の象徴!!
だから、あの子達に分からせたいんだ、正義とは何なのか、悪とは何なのか…
強大なる悪意を持つ者を前に、悪という存在を、乗り越えて欲しいんだ。
その為なら、私だって全力を尽くす。知ってるかい半蔵、余計なお節介ってのはな、ヒーローの本質なんだぜ…!』
『……陽花のこともある、分かった。じゃがなるべくやり過ぎないようにの？
度が過ぎたと判断したら即止めるからの』

こうして半蔵は何とかこの件に納得し、雪泉たちを改善させるのを手伝わせたのだ。

真実を知った雪泉は、あのオールマイトがそこまで自分たちを心配してくれたことに、全てを受け入れきれることができず、動揺してしまう。
だってあの世界の誰もが認め、自分もその光に照らされ憧れたNo．1ヒーローにそこまで心配されていたのだ。
幾ら黒影の知り合いとはいえ、弟子であり、孫である自分たちを救おうとしてくれた事には、大きく感謝している。
だからこそ、スケールが大き過ぎて、逆に受け入れることが難しいのだ。
「わしらのこと、気遣って…」
あの人が、平和の象徴と謳われているのが、分かる気がする。
「まあ、ようやく儂もこれにて一仕事終えたわい…」
半蔵は疲労が溜まってたのか、背筋を伸ばしながら、眠たそうに欠

伸をする。
この一仕事というのは、前に敵連合が蛇女に襲撃して来たあの事件での会議、半蔵は確かに言ってた。
『ワシはまだやるべきことがあるからのう』
アレは、そういう意味だったのだ。

因みに余談だが、王牌という名前は、おうはいとも読むことが出来て、おうはいはおっぱいに似てるからという何とも煩悩から出来た名前だろうか、ここまで来ると聞いて呆れて、逆に笑ってしまう。
「さてや、黒影…お前はまだ儂の寿司を一度も食べたことがないじゃろ」
半蔵は寿司を取り出し墓の前に置いて、お供えする。
あの伝説の忍が、黒影の墓の前で合掌し、目を瞑る。
伝説の忍というだけのことはあるのか、背中を見つめてると、百戦錬磨を潜り抜けたような、とても逞しく、頑丈で、本物の盾にも引けを取らない程、そう思ってしまう程に、とても強い背中だった。
「お主らの分もちゃんと用意しておる。ほれ、新たな未来ある忍。カグラへの懇願を祈り、お祝いじゃあ！」
寿司箱を開けると、寿司の酢の匂いが一気に漂う。
夕方のこの時間になるといつもお腹が空く頃だ、匂いを嗅いで、美野里はお腹を鳴らしら可愛らしい笑顔を浮かべ、てへへと笑う。
寿司のネタはどれもこれも新鮮で、とても美味しそうだ。
皆は一斉にして寿司を手に取る、雪泉は大トロを口に運ぶ、すると口内で大トロを噛むたびに溶け込むような優しい食感に包まれる。冗談抜きでほっぺたが落っこちそうな程、とても美味だった。
他のみんなも、美味しそうに食べている。そんな皆んなの笑顔に半蔵までも笑顔を零す。
黒影、お主にもあったな……光だけの、善だけの世界が――――
半蔵は空を見上げ心の中で呟くと、あの世の、天国にいる黒影が僅かながらに笑ったような気がしたのだ。

黒影は言っていた。
『俺は善だけの世界を作る』。
確かに今、半蔵の目の前に存在している、笑い合い、輝かしい笑顔を浮かべている、彼女たち、光だけの世界が。
黒影は、間違ってなかったのだ。
雪泉たちの存在こそ光だ。両親や行き場の無くした彼女たちを、黒影が引き取らなければ、黒影がいなければ、きっと彼女たちに光は訪れなかったであろう。
今こうして笑いあってる彼女たちに、半蔵は嬉しくて、幸せなのだ。

「王牌先せ…　いえ、半蔵様」
ふと考え事をしていると、雪泉の声が聞こえた。
雪泉は真剣な眼差しを向けて、此方をジッと見つめている。
あの半蔵でさえも少し驚いたような顔を浮かべる。
「今まで、ご指導して頂き、誠にありがとうございました」
雪泉だけでなく、他の四人も、きちんとした礼儀を込めて、頭を深々と下げる。
五人の姿に、半蔵はふと嬉しくなる。あの子たちは、もうこんなに大きくなって、立派に成長したんだな…と。
これで半蔵は教師から離れることになる。理由は、黒影は半蔵に頼んでいたのだ。
雪泉たちを、あの子たちの悪に対する憎しみへの執念を、どうか断ち切ってあげて欲しい…その願いを叶うべく、半蔵は黒影と約束したのだ。
その間だけ、月閃の教師を務めると。
しかし、雪泉たちの心は救われた。
それに彼女たちは学炎祭を通して、以前よりも強くなった。
もう教えることも、教師でいることも、もう何もない。
「お主らの成長は、きっと黒影も喜んでくれておる」
「しかし、儂らはもう教師がいません…儂らは、自由に修行でもするのでしょうか…？」

「ん？あれ？夜桜たち、お主ら2年と1年は何も聞いておらんのか？」
「え？」

翌日。
まさか、こんな日が来るとは予想もしなかった…

いや、学炎祭があってそれどころでは無かったのだ。報告が来なかった方がない仕方がない……
「いやあ、本当に困りましたね…これは儂予想外でしたよ？」
「てかてか、飛鳥ちんたちもＯＫなんだから、こっちもとりま、一応ＯＫなんじゃね？」
「難しいことよく分かんないけど、でも楽しそう！早く友達出来ないかな～♪」
夜桜と四季は、唐突すぎるこの事実に顔を背けたいくらいに混乱、或いは動揺しており、僅かながらに羞恥心というものが心に芽生えている。それに比べて美野里は通常運転だ。
きっと彼女のような人間なら、どんな困難でも「わ～♪」みたいな軽いノリで乗り越えそうだ。
「よし！お前ら！入って良いぞ！」
大きな扉越しから、ドスの効いた張りのある大声が聞こえ、廊下に

まで響いた。
扉を開け、教室に一歩足を踏み出し入っていく――
「聞けお前たち！校長から話は聞いたと思うが、この三人が新しい転入生だ！月閃という忍学科だ、訳あって此処にいることになったが、お前たち仲良くしろよ！Ｂ組のみんな！」
そう、ここは雄英高校。
そして月閃の２年生である夜桜は、飛鳥と同じく一年生扱いとして、一緒に過ごすことになるのだ。今日この日、１年Ｂ組に転校するなんて、思いもしなかった。

ヒーロー殺し編
72話「THE・B組！」

「わ、儂らが雄英に!?」
素っ頓狂な声を叫ぶ夜桜の声に続き、四季も俄然と驚く。
美野里は「へぇ～」と子供っぽいようで、気持ちのこもってない声を上げる。
「す、すまんかったの…お主らが学炎祭で言えへんかったのじゃ」
半蔵は頭を下げ彼女達に謝罪する。
上層部たちが話し合い、雄英の教師である校長と半蔵の二人に命令が下され、死塾もまた半蔵学院と同じように転校という形で在籍しなければならなくなったのだ。
月閃は忍の世界でも割と有名な善忍エリート学校で、上層部や他の者たちも月閃の強さを認めているのだ。
そのため、立入禁止区域故に実力者揃いのエリート忍学生、死塾月閃女学館は、悪忍にも抜忍にもそう簡単に侵入されない…
それが誇らしいのか、過去にここはやってきたのはヴィランの姿をしたオールマイトだけ、彼は異常で特例の為カンストされない。
「し、しかし私たちはどうすれば良いのですか…?」
「雪泉たちは、学校に残って訓練じゃな。卒業試験のこともある、仕方のないことじゃ」
「では、何も夜桜まで行かせなくても良いのではないか?美野里と四季は納得がいくが…」
「ま、まあ確かにそう言われてみれば…じゃがこれも公平を満たす為。孫の飛鳥も雄英にいる。幾ら儂の孫だからと言い、アヤツだけを特別扱いすることは出来まい?じゃから夜桜も必要なんじゃ」
悍ましい般若の仮面を付けた叢の言葉に、半蔵はやや冷や汗を垂らしながら反論する。
「でもさ、何であたしらまで行く必要が?」
ここで今まで疑問に思った四季が口を開く。その言葉に続くよう

に、他の皆んなも頷く。確かにおかしい…今まで半蔵学院にだけ忍学生と雄英が繋がっていたのに、突然自分たちも雄英に行けなんて、その理由が見当たらない。
半蔵学院も充分に頼れる戦力だし、申し分ない。
一体なぜ自分たちまで行かなくてはならないのだろうか…
「……お主らよ、抜忍・漆月と敵連合のことは当然知ってるじゃろ？」
敵連合と抜忍・漆月。
敵連合は、雄英高校襲撃の事件が全国や忍の社会全体に知らされたことにより、当然知っている。
また抜忍・漆月は、敵に忍の存在を教え、傷つけ殺し、徒党を組んでいるという疑いが大きく掛けられていた。
その原因が種となり振りまかれ、どう言った経緯でかは不明であるが、漆月は敵連合と手を組んだのだ。
そして蛇女への襲撃。
その事実は、善忍・悪忍問わず、上層部の忍のお偉いさんとでも呼ぼうか、直ちに抜忍・漆月への対策として、新たな忍学生をB組に派遣させる必要があったのだ。
今回ソレが選ばれたのが、月閃というわけだ。

それを説明したら、五人は「なるほど…」と納得せざるを得ない顔を浮かべた。
確かにそれなら合点はいくし、辻褄が合う。何より学炎祭では月閃は半蔵に勝ったのだから、きっと高評価されたこと間違いなし。
と言ってもこの決断に至ったのは丁度一週間前の出来事なのだが…
その日は学炎祭の最中だったためか、半蔵自身も、そのことについうっかりと忘れてしまっていたのだ。
学炎祭に専念させる必要があったので、この場合は仕方ない。
「そして飛鳥は前に一度、学炎祭で漆月と接触したと報告があった…
今まで神出鬼没として姿を現さなかったヤツが、敵連合と共に動きが徐々に活発してきた…他の忍たちも行方を追ってるが、未だに尻尾

が掴めていない……
儂ら忍からすれば、これまでにない最悪な、予期せぬ事態じゃ。このままでは何が起こるか分からん…」
謎が謎を呼ぶとは正にこのこと、一方的に手掛かりが掴めないまま、こうして今も奴等は活動を続けている。
「しかし、一体なぜこのような出来事になったのでしょうか…難しい話は儂には分かりませんが　、襲撃が起きたその日敵連合と漆月は無関係だったんじゃろ？一体どう言った経緯で…」
「問題はそこじゃ夜桜。儂も今までに考えておったが、自然とある疑問が一つ浮かんだんじゃ…」
半蔵の表情はより一層厳しく、険しく、鋭い眼光が放たれる。
エロじじいの設定やキャラなどもう関係ないと言わんばかりの、この真に迫る目つきに、五人も思わず息を呑む。
「敵連合が雄英に襲撃し終わった後、奴等は漆月を率いって蛇女にまで襲撃をした…皆からすればこれは何の変哲も無いものじゃろう…
しかし、儂は見落とさなかった。奴等がなぜ蛇女の存在を知っており、用意周到に襲撃を持ち出したのか…
奴等は、半蔵が蛇女に襲撃していたのを既に知っていた。何故じゃろうな？
そのことは半蔵学院の関係者と、雄英関係者しか知らなかったことを…蛇女も襲撃してくることなど分かっておらぬかったのに、何故敵連合と漆月は分かっておったのじゃろうな？」
「ッ!?」
「生徒たちから聞いた話によると、流石に雄英が来たことには驚いてたそうじゃ…
何故、誰にも外にも情報が漏れてないこの忍との間のやり取りに、奴等は知ることができたのか…それこそ不可解じゃ…」
敵連合のリーダー、死柄木弔。
凶悪なる個性を持つ彼は確かに他の敵とは並が違う、狂気と憎悪、底知れぬ悪意を培っている。
しかし、ＵＳＪ襲撃事件で彼の性格は既に知られている。

幼稚的万能。
子ども大人。
普段人からして考えられないことに計画を練り実行をしたり、子供っぽい発言をしたりなど、様々ある杜撰さが見受けられるが、どうにも忍に関して詳しいとは思えない…
一方漆月は、ＵＳＪにこそ居なかったものの、蛇女に襲撃を持ちかけ、二体の脳無と共に実行に移った張本人だ。
彼女ならきっと忍に関しては誰よりも理解はしてると思うが、皆からの証言によると死柄木のように、執念深い計画や策は特になく、また何かを考えるような難しい女ではなかったと言っていた。
つまり、情報が漏れても彼女は敵連合に入ろうが、入らまいが、半蔵と雄英、蛇女の三つに起きた問題は知ることが出来なければ、知れ渡る筈がないのだ。
また、漆月と敵連合についての接触も気になる模様。
散々行方をくらませ、神出鬼没と言われてた彼女が、一体どうやって死柄木たちは彼女と仲間になったのか。
「美野里…よく分かんないよぅ……」
美野里はつまんなさそうに口を尖らせる。
まるで学校の授業で難しい授業を受けて「これ解けないから無理だ～」みたいな、学生あるあるの顔を浮かばせていた。
でも確かに幼い性格をした彼女からすれば、何を言ってるのかサッパリ分からんと言われても納得してしまう。
元々、彼女はあまり考えるタイプではないので、これは仕方ないと言えば仕方ない。
学業の成績は触れてはダメだ。
雪泉や夜桜もその話に多少混乱していた。
夜桜も元々考えるような性格ではない、所謂単細胞といった性格なため、仕方ないだろう。
しかしあの雪泉ですら表情を曇らせているのだ。
彼女は根に深く、よく考えるタイプではあるが、悪についてここまで考えたことはない為か、悪の気持ちが分からない為、半蔵の話には

余り理解できなかった。
　何が言いたいんだ？と思ってしまうが、叢と四季はいち早く何か感づいたらしく、表情を青ざめ曇らせる。
「おい待て半蔵…そんなことがあり得るのか？幾ら奴等がテロリスト集団でも、上層部にそのような報告はないぞ？」
「ちょっち待ってよ……まさか……敵って…」
「え？あの…二人とも？どういう訳です？何か分かったのですか？」
「わ、儂らにも分かるよう教えて下さい！」
「み、美野里も美野里も～!!」
　先に話を理解してる二人に、置いてかれてる三人は二人に何が理解したのかを問う。
　叢はお面越しの為か、表情は見えないが、四季同様にため息をついてることは確かに分かった。
　半蔵は「まあまあ」と三人を落ち着かせる。
「つまりじゃ…
　敵連合には死柄木弔と漆月をも裏で操る、黒幕がいるのではないか？という話じゃ」
「「ッ!?」」
　想像しなかった半蔵の爆弾発言。
　四季と叢は「やっぱり…」といった様子でこの真実を受け止めざるを得ない話になった。だが夜桜と雪泉はこのショッキングな証言を受け入れることが出来ず、反論する。
「ま、待って下さい！これは初耳ですよ!?」
「そうじゃよ、だって儂のあくまでの推測じゃからの」
「そんなのデタラメすぎますよ!?ならその黒幕は何故姿を現さない!?」
「存在を悟られることなく、裏で仕切るのが黒幕じゃ。本当の黒幕は表にその真実を、姿を現さない」
「で、では、その黒幕が何処からどこまで…」
「儂の推論だと初めっから今に至るまで全てじゃな」
「何故そう言い切れるんです？もしかしたら、敵連合の筆頭が考え実

行したという説もあり得ますよ？」
止まらない嵐のような質問に、半蔵は表情を一ミリも変えることなく平然と答え、彼女たちの表情はより険しくなってきてる。
「確かに、死柄木弔ならば雄英高校襲撃といった発想を思い浮かぶ、儂もその点については同意じゃ。
奴の性格上、ヒーローを、正義を嫌ってるのならば、雄英高校を狙うじゃろうな…
しかし、何故雄英高校なのじゃ？」
「え？どういう意味です？それは…ヒーロー育成機関じゃからだろ？」
「他のヒーロー学校の方が効率が良いではないか？
雄英高校には劣るとは言え、学校が襲撃を受けた、その事実だけで社会は大きく揺らぎ、混乱を招く。
ましてやメディアやマスコミを通し、オールマイトが雄英の教師として全国に知れ渡ってるにも関わらずのう。
アイツは世界中の誰もが認める強さを持っている。
だから敵も奴との戦闘は絶対に避けたい…
なのに何故奴等は態々オールマイトのいる学校に、天下の巣窟雄英高校に、マスコミを利用しカリキュラムまで奪って、ここまで用意周到に準備し、襲撃を実行したのか……それこそ分からぬのじゃよ。
オールマイトを殺す理由なんて何処にもないのだから」
「あっ……」
「皆からの証言からして、死柄木と呼ばれるリーダーには、何かしらの私怨で動き、オールマイトを殺害しようとした容疑がある。
こども大人の奴ならば、実行に移すことも考えられる…オールマイトを殺せる算段があったからこそ、その実行に移すことが出来た。
では、その算段を整えたのも、死柄木が全てやったのかの？
あれから襲撃後、調査したところ奴を見たという痕跡は一度もない。
つまり、仲間集めなんて出来るわけがない。
戸籍不明の裏の人間……個性を複数持つオールマイトと渡り合え

た化け物…果たして、本当にそんなコミックみたいに都合のいいことが起きるのじゃろうか？
無論、無理じゃな…」
雪泉たちは真実と半蔵の尋常なさらぬ考察力、伝説の忍は思考力も凄いのか、言葉が出ない。
「そしてその後、漆月が不自然的な、都合のいい流れで敵連合に在籍し、蛇女を襲撃した。
奴等を仲間にするためとはいえ、何故半蔵と蛇女が交戦中だと、向こうは知っておったのじゃろうな？
なぜこうも都合よく奴等は思い通りに過ごせるのか？
つまり向こうは、忍の存在を初めっから知っていた黒幕が存在しているということじゃ」
プレゼント・マイクや校長の言ってた、『敵連合と漆月は接触があり、忍の存在を知っていた』といった言葉や、『どういった経緯で、漆月は敵連合の仲間になったのだろう』という不自然に発生する答えも、全て黒幕が操っていたという話なら、全てに理解がいくし、辻褄が合う。
「黒幕…そやつは一体…」
「儂も分からぬ…ただ一つ言えることは、この先もしその黒幕の思惑通りになれば、ヒーロー社会も、忍の社会も、全て跡形もなく崩壊するじゃろうな」
あの凶暴な性格を備えた死柄木を裏で手を引いてると考えるだけで恐ろしいことだ。
しかもその黒幕がいれば間違いなく、ヤツは成長し雄英生徒と半蔵生徒たちの目の前に立ち塞がり、死闘を繰り広げ、最悪…多くの尊い命が犠牲を出すだろう。
「それを止めるためにも、お主らの力が必要なんじゃ…
お前たちを信頼し、実力も、忍としての強さも、全て認めてるからこそ、頼んでおるのじゃ」
雪泉たち五人は、頭を下げる半蔵から、お互い顔を見合わせると、迷うことも、躊躇うこともなく、決心がついたのか、半蔵を見つめる。

「分かりました。私たちも極力全力を尽くし、抜忍・漆月の処分、そして敵連合の捕縛を手伝いましょう」
雪泉のその目は覇気が溢れ、僅かながらに怒りを燃やし、揺らいでる。
悪への憎悪は無くなった、憎しみも、怨みも、学炎祭を通し、そのような感情はとうに無くなった。
しかし、雪泉が怒ってるのは、悪の存在そのものが許せないのではなく、悪への所業が許せないのだ。
これ以上放っておけば、かなりの被害が出る可能性も極めて高い、ましてや飛鳥たち忍が殺害対象として狙われてるのなら尚一層。
雪泉たち月閃にとって、半蔵学院は、飛鳥は最強の友達であり、大切な仲間だ。
時に任務で敵になることだってあるかもしれない、避けられない戦いが、いつかやって来ることだってある。
それでも、飛鳥たちは大切な仲間であり、大切な存在だ。友の危機を見過ごすわけにはいかない。
協力できることがあれば、無論いつでも可能な限り手を尽くす。
「しかし、私たち三年生は無理でしたね……漆月…その人物が姿を表せば駆けつけることは可能ですが…」
「雪泉、大丈夫ですよ。儂がいます」
「夜桜さん…？」
夜桜の自信ありげな、真っ直ぐとした爽やかな彼女の顔に、雪泉は目を見開く。
「正直言って、儂と雪泉とでは格の差があれば、雪泉のようにリーダーとして振舞うこともできなければ、儂はまだまだ未熟です…
それでも儂は、少なくとも雪泉の隣にいましたし、昔は弟たちや妹たちの世話や面倒だって見てました。
雪泉程ではありませんが、儂も月閃の一人、雪泉の代わりに儂が頑張りますよ」
夜桜のその頼もしい台詞と覚悟に、雪泉は思わず笑みをこぼす。
夜桜は元々家ではよく妹と弟たちの面倒を見てたとよく話を聞い

ていた。
自分が時に怒れない部分や、リーダーとしてまだ未熟で足りない部分を、夜桜は備わっている。
まるで母親のように、厳しく、優しく、強く逞しい彼女は、リーダーとして充分なる資格を持っている。
四季と美野里は「子供扱いしないでよ～！」とブーイングしてるが、今はそんなことなど気にしない。

「では、よろしく頼みますね♪」
「ええ！勿論ですよ！」

これだから夜桜は頼もしい、流石は二年生…自分たちが卒業しいなくなっても、成長した彼女なら直ぐにリーダーとして振る舞い、後輩たちを引っ張り導いてくれるだろう。
学炎祭での成長か、或いは元から持ってた彼女の長所のためか、以前よりも生き生きとしていて、逞しく見える。
そんな彼女に、雪泉は嬉しくて思わず扇を広げて口元を隠す。

「……」
のほほんとした空気のなか、半蔵は離れた場所で雪泉たちの会話を見ていた。
確かに彼女たちのやり取りには嬉しい部分もあるし、更には変態じじいのためか、動くたびに揺れる胸を凝視している。
因みにこれがもし見知らぬ人だったら完全な不審者として扱われるので、良い子の皆さんは真似しないように。
（しかし……）
だが半蔵の頭の中にまたしても不安が遮る。
（儂の推論が正しく、これでもし本当に黒幕がいたとしよう…
儂らはもしかしたら、もう既に…今も、その黒幕の掌の上で転がされてるのだろうか？）
考えたくもない、不安と疑問が半蔵の心の中を、嫌な感じに引っ掛

けていた。

こうして夜桜たちは翌日、雄英高校に転入することになった。
雄英に転校生なんてものはあんまり存在しない、極僅かなものだし、それなりの資格が必要とされるが、夜桜たちは忍学生…飛鳥たちと同じく全てオールオーケーされたのだ。
だがA組には半蔵学院の下級生の生徒たちが既に存在しているので、夜桜たちは同級生であるB組に転向することになったのだ。

そして今現在。
「お前たち!仲良くしてやれよ!先生も仲良くするから!」
教室の中は止むことのない歓喜の声の嵐で、部屋中騒がしくなっていた。
女子たちは「かーわいー!」と指差し声を上げてる者もいれば、男子たちは「夢か?いや、現実だ!」と、わがままと理想を兼ね揃えたボディを持つ美少女たち三人に魅かれていた。
B組の担任はブラドキング。
一見みた所外見は恐ろしく、怖い人、と言った印象が見受けられるが、実は根はとても優しく、生徒想いの優しい先生だ。
相澤のように気怠げな雰囲気とは違い、我が父親みたいな感じな、雷親父の雰囲気が伝わってくる。
相澤と違うのは、また生徒たちにより厳しく怒ったり、優しく生徒に接する姿勢。
日誌なんかは生徒たちの一言メッセージはきちんと感想を書いてるが、相澤は一通り目を通して判子を打つだけと言った、天と地の差が激しい一面も生徒たちの間で見受けられていた。
「とは言ったもののまずはお前たちには知って貰わなくちゃな…

コイツ等は月閃と呼ばれる忍専門育成学校の生徒たちであり、忍学生だ、まあ忍については事前に報告したから知ってるとは思うが…」
忍の存在を教えた時なんか、最初は皆んな何の面白い冗談なんだろ？と思ってたが、ブラド先生は「俺がこんな大事な時に冗談つくと思うか？」と威圧感が増した眼差しを放ち、教室のクラスの皆んなは「嘘だろ？」と信じられないと言った顔を浮かべていた。
忍って、アレでしょ？戦国時代に活躍してた、侍が存在してた時代に生きてたあの忍でしょ？
忍って言ったらエッジショット思い出すなぁなんて、Ａ組と同じことを思っていたり。
「けどよ先生！なんだって急にこの時期に転校生が…？」
「それは国家機密上、他言はできん！」
（国家機密？何それ怖ッ!?）
まさか国家機密上他言することはできない故、それ程までに深刻に関わってることに、皆んなは驚きを隠せない。
夜桜たち三人は当然事情を知ってるため、口には出さない。
…美野里は特に心配だが、四季特にいつもそばにいる為特に問題はないと思う。
「でも先生、忍学科についてよく分からないのですが、取り敢えず私たちヒーロー学科と同じように思えば良いんですか？」
ここで、生きハキハキとした声が教室に響く。その声の主は拳藤一佳。
Ｂ組の姉御的存在だ。
「その通りだ拳藤！忍と言ってもあまりパッとしないかもしれないが、近いうちに慣れてくる。お前たちも問題なく、仲良くな！」
ブラド先生は彼女たちにニンマリとした笑顔を見せるが、あまりこの話には溶け込めないのか、夜桜と四季は苦笑いを浮かべる（但し美野里は、「は～い！」と子供っぽい声を上げる）。
「ええっと、皆さん。儂らはいつまで此処にいれるかは分かりませんが、宜しくしてくれたら嬉しい限りです」
「方言女子だー！宜しく～！」

「カカッ！頼もしヤツだな、鉄徹や拳藤辺りが気が合うんじゃねーか？」
「ん」
　ややきつめそうな顔立ちをした少女、取蔭はニコッと夜桜に手を振り、顔が頭蓋骨みたいなクールな生徒、骨抜はカカカと不気味な笑い声をあげながら、鉄徹と拳藤を見つめる。
　そしてさりげなく夜桜に反応する大人しめの生徒、小大唯。
「ははは!!何とも素晴らしいじゃないか君達！僕は気に入ったよ、心底嬉しいねぇ！」
　ここでガタッ！と席にたち大きな笑い声を上げる生徒、物間寧人は三人を見つめる。
「え、ええっと貴方は…？」
「君たちは忍学科の人間で、僕たちはヒーロー学科、つまり二つの学科が僕たちB組に居るってことは、あのA組をも出し抜いたという訳だ！あっはははは!!
　ああ、僕？僕は物間寧人、テキトーに宜しく～」
（なんだこの人）
　この時、三人だけでなくこの場にいる全員が一斉に心の中で呟いた。
　物間はA組に対しての対抗心が異常なまでに激しい。
　その為忍学生がいるなら対抗できるしこっちも優位な立ち位置になるだろうと思い、こうして物間は腹を抱えて笑ってるのだ。
「あの人笑ってるね～！美野里も笑お～♪」
　一人、色んな意味でお菓子…いや、可笑しな人がいるが…
「何がともあれ！これであの憎きA組にギャフンと言わせることが出来――」
「ああそうそう、お前たちに一つ言い忘れてたことがあるが、A組にも忍学生はちゃんといるからな」
「……」
　ブラド先生の一言で物間は凍りついたように無言になる。
　他のみんなも驚いたような視線をブラドに浴びせる。

「忍学生については、ヒーロー科しか知らん。だからヒーロー科以外の者には一切他言はするなよ？
ＳＮＳとかＬＩＮＥとか、そういうメッセージ機能で騒ぎを起こした際、どうなってるかみなまで言わんでも分かるだろ」
暫く教室に気不味い沈黙が続いた後、物間は「ホッ…」と一息つく。
いや、ホッて何？とこの時皆んなは物間に突っ込みを入れたくなったが、この際時間の無駄になるのでやめた。
「ハッ！Ａ組を潰せなくて実に残念だなぁ！全く、もう前から忍学生が向こうにも居たなんて…あぁ！実にタチが悪い！僕らを掌の上で転がし心の中で僕らを見て「アイツら忍学生いないんだヤッーホう！」て見下してたに違いないああ怖い！彼らの性格の悪さに僕は軽い寒気を感じだよああ怖いなぁもう！」
「ね、ねえ…物間ちんって、病んでるの？」
「ゴメンなー、アイツああいう性格なんだよ、ちょっと心がアレなんだ」
流石の夜桜と四季も彼のあの心のアレにはドン引きしてしまう。
そう。物間は個性こそ強力なのだが、心がアレなため、色々と残念な人間なのだ。
「物間、お前少し煩いぞ。席につけ」
ブラド先生に注意された物間は「はぁ～い、Ａ組の忍学生までタチ悪そうだ」と一言余計なことを残しながら渋々と席に着く。

放課。
いつになくＢ組の教室は、彼女たちがやって来て、いつも以上に賑やかになっていた。
「忍学科って初めて聞いたぜ！凄そうだなオイ！」
「忍学科って言ったら、私たちヒーロー科がヒーローの基礎訓練受け

てるように、この子達も授業受けてるのかな？」
「キョーミ津々」
「ん」
２０人全員が嵐のように彼女たちに駆け寄る。
夜桜や四季も少し冷や汗を垂らすものの、決してそれが悪いわけではなく、どちらかと言えば対応に少し困っていた。
「俺！鉄徹！皆んなからは鉄って呼ばれてるぜ！此れからも宜しくなお前ら！」
「アタシ、取蔭切奈。ウチらＢ組同士、仲良くやってこ～♪」
「俺、凡戸固次郎。そしてコイツが小大唯だ」
「ん」
個性的なキャラたちに囲まれる三人。
美野里は幼い性格のためか、相手に壁を作ることなく接し、キノコのような髪をした小森希乃子と話している。
「儂は夜桜です、そして此方が四季、幼い性格をした彼女が美野里です」
「皆んなとりまよろしくね～♪」
真面目に答える夜桜に、先ほどの表情を一転した四季。
男子たちはやれ彼女たちの胸を見て「ねえ、何で胸がこんなにデケェんだ？」と疑惑を浮かべ、女子は「忍って全員胸がデカイって、個性？」と、女子なりの疑問が思い浮かんだ。
確かにこの世の中、こんな山のように大きい、桃のような柔らかい爆乳を持つなど、Ａ組の八百万以外考えられないだろう、そんなわがままボディを持った女子が三人も目の前にいるのだ。
しかも美野里は低身長爆乳のロリッ娘小動物、萌える。
「なあ、忍学生のお前たちって普段どんな訓練受けてんだ？」
ここで骨抜は興味本位で尋ねてきた。
因みに彼は轟や八百万と同じ推薦学者である。
「そうですねぇ…
基本は対人戦闘訓練や、傀儡を１００体以上倒すと言ったものや、精神統一、滝修行に動きの読みとり、あとは――」

「待って、やべぇよハードル高！」
夜桜は親切に教えてくれてはいるが、内容が人間離れしてるため、質問した骨抜は顔を真っ青にして、「お、おう…そ、そうか…」と上手く表現が出来ず、それを聞いてた円場は声を上げる。
「でも忍っぽいよね」
「ん」
「よくそんな訓練受けれるよなあ…」
ブラド先生から聞いた通り、大抵忍のことは想像はついてたものの、よくもまあこんなに修行のメニューが多いわけだ。
そうなると彼女たちの方が自分たちよりも上なのでは？とちょっとした疑問も浮かび上がってくる。
「まあウチらは忍だしね～♪後々、前々から訓練も受けてたからさ～」
「凄いデース！忍！忍者！ジャパニーズ！」
ここで四季や夜桜に光る眼差しを放つ、ツノの生えたアメリカンな少女、角取ポニー。
アメリカからの留学生だ。
「私ハ、角取ポニー！アメリカ出身デス！仲良くしましょー！」
「へ～！アメリカかぁ～…なら海外に行くための勉強にはなるかな？」
四季の夢は外国に行って活躍し、世界に羽ばたく忍になることが、黒影の懇願であり、四季の夢なのだ。
英語の勉強は絶対必須。
常に日常的に、自然と英語を話せるようにする為にも、角取ポニーはもしかしたら適任者なのかもしれない。
「でもでも、今でも信じられないよね。目の前に忍が本当に存在してるなんて、不思議」
「忍…神の放つ光の陰に生きし者たち……どうかこの子達に安息の地を…」
左目が隠れた髪型をしている柳レイ子に続き、髪が茨になってる、体育祭で一時期活躍を見せた塩崎茨は慈愛深く、手を合わせ神に祈りを捧げる。

確かに彼女たちの気持ちも分からないでもない。
実際目の前に、お伽話にしか存在しない者がいれば、当然このような反応を取るのは間違いない。
しかしこの超人社会、こう言った忍の存在がいても何ら可笑しくはないのかもしれないという、納得する部分も見える。
「まあ知らないのも無理ないじゃろうな。儂は正直言って見知らぬ人と馴れ合うのは不慣れ…というか、両備さん両奈さんが編入して来た以来ですね」
「うん、でもまあA組の皆んな溶け込めてるんだから、そのウチ慣れるよきっと」
夜桜たち月閃は学炎祭の時に既に全員と会ってるので、然程こちらも驚きはしない。
しかしこれからヒーローを志す者と一緒にこうして授業を受けるとなると、慣れない部分もあれば、何処か心に違和感を感じる部分も多少ある。
そもそも忍になった以上、こう言った普通の学生みたいな馴れ合いとかは不慣れであり、経験がないのだ。
四季はコミュニケーション力がとても豊富で、他校の忍生徒と連絡を取ってれば、夜遅く遊んでることもあるので、四季にとっては難しくないし、時間の問題だろう。
「で、君たちはどう言った忍術が使えるんだい？」
と、ここで物間が割り込み入り、彼女たちを見つめる。
「あっ、痛い人」と答え掛けたが、何とか言わないようにした。
「忍術…儂は手甲を使った衝撃波の忍術…ですかね」
「ウチは基本、秘伝動物の蝙蝠を使った多彩な忍術かな」
「美野里はお菓子～！」
「おおう…個性的…」と物間を除いたこの場の全員が心の中で呟いた。
物間は「なるほどねぇ～…」と、ポケットからシャーペンとメモ帳を取ってメモをする。
「つまるところ、夜桜は衝撃波…個性で言えば『インパクト』。四季は『蝙蝠』、美野里は『お菓子』…

お菓子って、忍使うの？」
後半物間は小声で突っ込みを入れたが、「まあいいや」と呟いてメモしたメモ帳やらシャーペンやらを懐に入れる。
「けどよ物間、お前の個性彼女たちに通用するのか？」
ここで体色がほぼ全身真っ黒の男子生徒、色黒が問いかけて来た。
忍術と個性は似てるようで違う、類似関係なのだ。
その為物間の個性が忍術を持つ彼女たちに通用するかどうか分からない。
何故なら物間の個性は『コピー』という模倣個性。
触れた対象の人間の個性を5分間コピーし使いたい放題することが出来る、上位級の個性なのだ。
中でも忍術は個性と関係があり、また個性から忍術へと変わったという話も、忍の世界では聞かなくもない話。
もしかしたらだが、物間の個性が通用するという可能性がゼロではないのだ。
「まあそれは触れてからじゃあ分からないさ…
何がともあれ…
あの憎きA組を潰せるのにかなり上位級の忍術じゃないか！あっはは！彼らの負け犬の泣きっ面が目に浮かぶねぇ！君らもそう思わな――」
「憎くは無いっつーの！あとこの子達に変なこと吹き込むな！」
ベシッ！
「ぐハァッ!?」
拳藤は物間の後ろの首に手刀を一発入れ、気絶する。
お見事。と呼べるその達人のような振る舞いに一同は「おお～…」と静かな声で拍手を送る。
「ゴメンなお前ら、コイツ心が色々と病んでるからさ～。
悪い奴じゃないんだよ、それにアタシら質問しかしてないし、よかったらアンタたちも遠慮なく質問しに来てよ。
あっ、私は拳藤一佳！ここB組のクラス委員長だ、ここの学校でわからないことあれば聞きに来なよ」

拳藤の爽やかで、少し男前のような表情を見せる彼女に、三人は自然と頷く。
夜桜の頬はほんの少しだけ、桜を連想させるピンクに近い色を頬に染める。
彼女はきっとB組の中でも信頼され、頼りにされてることが直ぐに、直感的に分かった。
リーダーらしい彼女のその風格は、雪泉と少し似ていた。
「ぐっふ、何故だい拳藤…君はあのお調子振ってるA組が憎くないのか…」
「いや、だから憎くないってば」
何とか意識があった物間は、忌々しい声を腹の底から振り絞り、弱々しく声を出す。
そんな物間に又しても彼女は正義の鉄槌と呼べるべきか、手刀を入れる。
「な、何なのでしょうか彼は…？」
「た、ただ悪い奴じゃないんだよ夜桜さん…普段彼は優しいし、拳藤の言ってた通り、A組にやたらと対抗心が強いだけなんだ…
それさえ除けば、いい奴だから」
夜桜の横で、オドオドとした様子で、気絶してる物間を心配そうに見つめる、プニプニ食感が半端なさそうな生徒、庄田二連撃。
「えっと、じゃあ聞きたいことあんだけどさ～、B組の皆んな普段どんな訓練受けてんの～？
ウチチョー気になるし～！」
四季は興味津々にB組たちに尋ねる。
動画サイトやSNSと言ったヒーロー活動は見ることは多々あるが、実際ヒーローの活躍だけで、訓練については知らない事だらけだ。
忍としてヒーローの活動は知識を得るだけ無駄だが、四季はそうは思わない。
知識に無駄なことなんてないし、覚えた分だけ知識は役立つものだ。
それにこれから彼らと行動を共にするならば、こう言った活動内容

も覚えた方が良いだろう。
「そうだな、アンタらと同じように対人戦闘訓練はあるぜ！
後は災害救助とか、体力付けたりとか…その他色々！」
「まあ忍学生からすれば、あんまハードじゃないかもしれないけど、アタシ達は人を救けることが仕事だからね。基本は救助訓練が多いよ」
救助訓練。
忍学生である自分たちは未だにそのような授業は受けていない。
いや、忍だからという理由もあるが、彼女達からすれば「大変だなぁ」って思う。
例えば台風や暴雨で救助活動をしなければならないし、水難でどれだけ多くの命を救けることができるのか、火災などの事故でどう冷静な判断を下し、素早く人命救助を行うことができるのか、そう言った肉体的な力だけでなく、精神や判断力も必要とする。
他にもまだまだ考えれることは山ほどあるが、自分たちは体を鍛えてるとはいえ、人のことも配慮して動くとなると、中々に実力をフルに使いこなせない。
そう考えると彼らが経験豊かなヒーロー生徒とはいえ、実力を備わった将来希望のある、ヒーローの可能性を備えた学生だということが、考えただけで肌身感じる。
「儂らは人命救助といった活動はしないので、是非とも勉強したいですね」
「ウッチも～♪ヒーローって一見個性使って街守ってるように見えるけど、案外複雑な感じがあってこ～、奥深いね～！」
「美野里は、よく分かんないな～…悪い人倒すんじゃないの？ア○パンマンで見たことあるよ～！」
「それ、愛と勇気のヒーローな」
「他にも他にも～！」といった質問が飛び交い、嵐のようにB組達との会話が、何時間も長く感じるように、続いていた。

そして授業も一通り終わり、皆は先生からの報告を受けていた。
授業後によくある先生からの連絡だ。
「えー、お前たち。明日からはプロヒーローたちがスカウトした、職場体験がある！ちゃんと準備はしたな？」
「はい！」と活気のある声が教室全体に響く反面、忍学生の彼女たちは「え？何それ？」と言った疑問しかない表情を浮かべていた。
「あの、すいません…儂ら職場体験のこと知らないのですが…」
「ああ！いかん！先生としたことが…うっかり忘れてた！
明日から一週間、A組とB組は職場体験で学校にいないんだ。その為お前たちは月閃で修行を受ける形になるはずだ、まあそれはお前たちの忍担任から報告があると思うが…」
体育祭が終わった彼らは、プロヒーローたちからの使命が入り、職場体験に行かなくてはならないので、学校にいないのだ。
体育祭に続き、学炎祭のこともあったので、タイミングが噛み合わなかったのだ。
（となると、半蔵から連絡が来るのでしょうかね…）
いま王牌先生がいない今、月閃には先生がいないのだ。
その為、連絡を受けるにしてもわからないのだ。
しかし職場体験とは、これはまた一年生から受けるとは…
普通は二、三年生で受けるものだと思っていたが、雄英高校では関係ないか。と直ぐに頭の中でその思考が消える。
「雪泉たちにあんなこと言っておいたのに…明日からまた月閃に戻るとは…」
空気読めよ展開。と嘆いても「そんなん知らんがな」と返答されるのがオチだろう…
何やかんやありながら、先生からの連絡も手短に終わり、下校時間となった。

「ふぅ…」
下校時間。夜桜は四季や美野里と一緒には帰らずに、教室に一人残ってため息をついた。
何故教室に残ってるのかと言うと、特に理由はなかったが、何となく心配や不安が心の何処かに残っており、モヤモヤしたままなので、少しここにいることにしたのだ。
改めて教室の中を見渡し、ゆっくりと見つめる。
綺麗な空間、誇りやチリ、傷一つない床、白い机や椅子、汚れがない黒板。
どれもこれも、素晴らしい教室…小学校の自分を思い出す。
小学校といえば、自分は幼い頃よく弟たちや妹たちの面倒を見てたものだ、懐かしい記憶が頭の中に蘇る。
夜桜は将来立派な一流の忍になって、弟たちや妹たちに再会し、屋根の下で幸せに過ごすのが夜桜の夢であり、希望である。
だから不安でならないのだ。
今頃弟たちや妹たちはどうしてるのかと…それに明日から一週間、職場体験とはいえ、それが終わればまた彼らは学校生活を送る。
つまり、また雄英高校に通わなければならないの。
別にそれは問題ない、問題なのだが…一つ疑問に思ったことは、自分は二年生の立場で、四季や美野里は一年生…彼女たちも立派な仲間ではあるが、自分は彼女たちを引っ張るリーダーとして振舞ってるのだろうか…
「儂は、うまくリーダーとして務めてるのでしょうか…？」
一つの疑問が口に溢れでる。
自分からしては、自分なりに振舞ってるが、周りから見ればどうなのか分からない…
今まで雪泉というリーダーの立場があってこそ、母親のように叱ったりしていたが、いざリーダーを務めるとなると少し不安が高鳴る。

このモヤモヤとした原因がこれだ。
どれだけ考えても日が暮れる一方なので、夜桜は食材が書いてある紙を取り出そうとした時だった。
ヒヤッ…
「!?」
頬に冷たい感触が後ろから伝わったので、思わず振り向くと。
「よっ、驚かせちゃったか？」
「っ！拳藤さん…」
少し悪そびれたように謝る拳藤が、冷たいコーヒー缶を持っていた。
先ほどの冷たいひんやりとした感覚は、これによるものだった。
しかし拳藤がここに入ってきたのは少し驚いた。
皆荷物を持って帰ってたので、自分しかここに居ないと思っていたのだ。
「拳藤さん、どうしたのですか？」
「いや、夜桜下校時間から少し様子が可笑しかったからさ、何かあるかな～って思って声かけたんだよ、夜桜どーしてそんな浮かない顔してるんだ？何か悩みとかあるのか？良ければウチが相談乗るよ」
「ホイっ」と冷たいコーヒー缶を一つ机に置く。
カシュッとした音が響き、拳藤はもう一つのコーヒーを飲み始めた。
ほろ苦い味が口全体に広がり、喉に通る。
これぞ大人の味、拳藤はブラックコーヒーが好きなのだ。
「悩み…ですか…実は――」

「――ということで…」
夜桜は自分の悩んでた思いを全て吐き出すように彼女に話した。
拳藤は表情を少し難しそうにして、髪をくしゃくしゃと掻く。
「リーダーかぁ、難しいよな。他の人を導いて、引っ張るのって。

自分がリーダーなのかどうかも、疑わしく思えるのも、何となく分かるかなぁ」
拳藤と夜桜は夜桜の悩み事を聞きながら帰っていた。
夕焼色に染まったオレンジ色の空が、光が、二人を包み込むかのように、照らしていた。
「拳藤さんがクラス委員長なのは納得します…
皆んなから頼れるようなリーダーシップを備え、信頼されてるのが分かりました」
夜桜は飲みかけのコーヒー缶を虚しく見つめながら、拳藤のリーダーシップに思わず羨望の声を漏らす。
その言葉が聞こえたのか、拳藤は「ちがう違う」と苦笑しながら首を横に振り否定する。
「アタシもさ、実はリーダーとしてまだまだなんだ。
そりゃあヒーローになってから、人を導く人間は必要となってくるし、唯一欠かせないものだからな」
「儂ら忍もそうです。選抜メンバーなんかはリーダーが必要となりますし…儂もこの先いつかきっと…必要になってきます」
次は自分が後輩たちを導く立場にならなければならないという焦り、不安、緊張感、それらが夜桜の心を乱していた。
拳藤は「う～ん」と小難しそうに唸る。
「でもさ夜桜。お前なら心配ないと思うぞ？」
「へ、へっ？」
夜桜は素っ頓狂な声をあげ、拳藤をマジマジと見つめる。
どうして彼女はそんなことが断言できるのだろうか…？
「お前がリーダーとして悩むのは、皆んなの為のこと思ってだろ？
皆んなを導く立場、仲間たちの為にって、そう考えて悩む夜桜の姿のほうが、私はリーダーっぽく見えるな」
拳藤の蒼い瞳が揺れ、微笑ましく、優しく美しく、その笑顔に夜桜は硬直する。
姉御肌の拳藤は、B組の絶対的姉のような存在だ、時に男らしいクールな一面を備えてる彼女に、少なからず興味を持つ女性もいるだ

ろう。
しかし拳藤はここで初めて、他の生徒には見せない一面を、夜桜に見せたのだ。
「リーダーも確かに大切だ。
でもな夜桜、物事ってのはそう単純じゃないんだ。
大事なのは、リーダーになることじゃなくて、リーダーになろうとする努力の姿勢が大事なんだと、私はそう思う。
仲間のために悩んで、必死に努力して、それでもリーダーとして、しっかりと振る舞おうとするのは、人間誰しもそう簡単に出来るものじゃないんだ。
だからな夜桜、私からすれば、お前はスゲェ奴だよ。お前はきっと、一流の忍になれるって、私信じてるからさ」
ニカッとどこか照れ臭そうに笑う彼女の笑顔に、夜桜は呆然と立ち尽くすことしかできなかった。
「何より、仲間のこと大切に思って悩むってことは、お前はそれ位優しい人間なんだって充分に伝わってくるよ、私も、お前をもっと見習わないとな。だから――」
拳藤がそこまで言うと、いつの間にか、夜桜の目から涙が流れていた。
拳藤は夜桜が涙を流してることを知り一瞬固まったように驚き、話を中断する。
「ちょっ!・えっ、夜桜!?・ど、どした!・何で泣いてるの!?」
泣かしてしまった原因が分からず、つい思わず謝りポケットから黄色い綺麗なハンカチを取り出し夜桜に渡す。
「い、いえ…何故でしょう？わしもよくわかりません…ただ、拳藤さんの言葉が嬉しくてつい…」
拳藤から差し出されたハンカチを手に取り、流れ出た涙を拭う。
涙を流したせいか目は赤く腫れており、目疲れも多少、感じる。
「だって人からそう言われたのが、初めてで……今までで弟たちや妹たちのことも心配あって、リーダーとか…家の事情とか、黒影様のこととか、もうこんがらがってて…」

あの母親のような夜桜が、初めて誰にも見せない一面を、拳藤に見せたのだ。
夜桜は母親代わりに弟や妹たちの世話をして、よく面倒を見ていた。
父親も仕事に全うしていたためか、両親がいない家族の中、自分が親の代わりとなって兄妹たちの世話をしてた為、拳藤みたいに、自分を褒めてくれることが今までになかったのだ。
でも、拳藤は夜桜の長所を見つけ、まるで姉のように接して褒めてくれた。
自分がリーダーとして相応しいと言ってくれたことなど、雪泉以来だ。
雪泉たち月閃の家族以外にも、自分の良いところを探し出し、見つけ出し、褒めてくれる、夜桜はそれが何よりも嬉しかったのだ。
仲間たちにすらそんな事そうそう言われない…いや、当たり前だから口に出さなかったのか、それが夜桜の長所だと、口で言わなくても分かってたのか、どちらにせよ褒められることはいつ如何なる時でも嬉しいものだ。
「そっか…お前、いっぱい苦労してたんだな……」
拳藤は夜桜の頭に手を置き撫でる。
自分が今まで母親的存在だったからか、人に撫でられるのも、黒影以来だ。
自分たちが言うことを聞いたり、修行を終えると、黒影は必ず笑顔を見せて頭を撫でてくれたのだ。
だから、頭を撫でられるたびにまたも思い出す、敬愛してた黒影のことを。
「うっ…ううっ……くっ…うぅ…」
夜桜はさっきよりも涙を更に流して嗚咽を漏らす。
彼女は真面目故に、今まで心を安らぎ、悩みを打ち明ける暇も無かった、息つく暇さえなかった。考えることも、何もかも…
でも、拳藤は彼女のことを分かってくれた、出会って間もない、日も経っていないのに、拳藤は彼女を気に掛け、声をかけ、相談に乗り、

理解してくれた。
それが彼女にとってどれだけ嬉しいことなのか…
夜桜が母なら、拳藤は姉…
お互逞しく、頼りになる二人組みは、似た者同士なのかもしれない。
だがそれ程、二人の存在は大きいのではないだろうか？
だからこそ、今は、いまだけは目一杯泣こう。せめて今だけは……

そしてそんな平和的な日常が終わり、翌日。
職場体験――!!

73話「グラントリノ」

職場体験。
スカウト目的で体育祭を観にやって来た全国のプロヒーロー達から指名され、生徒達は行きたい事務所へ行き、軽いヒーロー活動を行う。
一年から始まる職場体験は、経験を積むことと、ヒーロー活動を知るということだ。
二、三年生から職場体験が本格的と化し、より良い経験を積んで、即戦力として判断される。
将来ヒーローになるための道、これは絶対に通らなければならない道のりなのだ。
それを一週間、ヒーロー事務所で研修するのだ。

今年の1年A組の指名は、轟と爆豪の二人に注目を浴びた。
本来ならもっとバラけてるのだが、二人の個性や実力に余程興味を持ったのだろう(但し爆豪の場合は性格上悪い為一部爆豪から轟へと注目を偏ったこともある)。
なにせ轟はあの良かれ悪かれNo.2ヒーロー、エンデヴァーの息子だ。
肩書きだけでも轟は有名なので、実力を兼ねた上で、あの指名数は納得がいく。

「よしお前ら、コスチュームは持参したな。本来公共の場や許可なしじゃ着用厳禁の身だ、うっかり落としたり忘れたりするなよ」
駅のホームは人が絶えることなく混んでいる。
やれ定期を更新するものもいれば、チャージしてる人も見受けられ、また待ち合わせてる人もいれば、ショッピングに寄る物もいる、人と人がすれ違う中、雄英の生徒達と半蔵の忍学生たちは相澤の前で集団になり、担任の連絡を聞いている。
「因みに、忍学生のお前たちは知っての通り、お前達は職場体験…とい

う訳にはいかないため、残念ながら一緒に同行することは出来ない」
「ざまぁ!!!」
相澤の説明に、黙って聞いてた爆豪が突然、上から目線で鼻で笑い、大声で高笑いする。
飛鳥たちも流石に爆豪のこの反応には驚いた。
爆豪は忍学生同士が血で血を争う、体育祭に似た学炎祭で問題を起こし(月閃の部下に手を出したり、襲って来た蛇女と戦ったり)、学炎祭を観に行けず、自宅謹慎をかけられ、よって反省文5枚書かされたのだ。
きっと飛鳥たちがこれからもっと強くなってくることに対抗心を持ち、職場体験で学ぶことが出来ない彼女たちに、心の底から安堵の息とともに笑っているのだろう。
しかし、相澤の説明はこれで終わりではない。爆豪を無視して話し出す。
「ただし、お前たちは多分担任教師、霧夜先生から聞いてはいると思うが、『強化パトロール』がある、お前たちはそこに専念しろ」
「強化パトロールってなにー?」
「強化パトロール。忍学生は基本、街中をパトロールしてることが多々ある。と言っても広範囲及ばず、軽い程度で済ますがな…
だが強化パトロールは普通のとは訳が違う。一週間徹底的にパトロールを行うんだ、範囲制限なし、食料も自分たちで確保、仲間とともに行動するのも自由、一週間が経つまでパトロールを終えてはいけない」
「待って、寝るところは?」
「んなもん自分たちで確保しろ」
「野宿かよ!!」
相澤の言葉に切島は思わず驚愕の声を上げる。
強化パトロール。
平たく言えば、忍に代々伝わる禁断の修行と謳われた這緊虞、締魔破悪と同じくらいに厳しい任務だ。
そのパトロールは、強化パトロールなんて生易しいものでは済まな

いレベル。
一週間、食料や水、寝る場所は自分で確保しなくてはならない。
食料を買う料金がなければ木ノ実や水で我慢するしかない、それが嫌ならひたすら断食するしかない、水も買うお金が無ければ公園にある貯水場を使うしかない。
因みにこの修行は飛鳥たち半蔵学院だけでなく、月閃の雪泉たちも同じ修行を励むのだ。
そんな修行があること知らず、爆豪は「クソが!!」と思いっきり舌打ちをしてキレ気味なセリフを暴露した。
「くれぐれも失礼のないようにな、説明は以上！じゃあ行け」
相澤の解散の言葉に生徒たちは一気に群がる。
やれ何処に行くだの自分はこっち行くだの、無駄な声が飛び交う。
「ではオレは雲雀と行く…
雲雀、くれぐれも無駄使いしないように慎重に――」
「柳生ちゃん！お菓子何買う？あっ、ここの近くのケーキ屋さんとっても有名なんだよ！行こうよ柳生ちゃん！」
「……雲雀、話聞いてたか？」
言ったそばから…と柳生は雲雀の穏やかすぎる超天然な性格に呆れてため息をつく。
まあそこが可愛いところなんだが…
柳生は雲雀を１２０％愛してるので、雲雀が何をやっても甘えて許してしまうのだ。
「上鳴、アンタどこ行くの？」
「ん？そーだなぁ、俺の個性電気だしさ、何か学べねえかな～って思って『エレクトロック』事務所に行く！」
上鳴電気の個性『帯電』は確かに強力な個性だが、デメリットが存在する。
無差別放電は敵味方関係なく攻撃してしまうためチーム戦では彼とは相性が悪いし、個性を使いすぎて許容オーバーすると頭がショートして「ウェイ」しか言わないアホになる。
前にＵＳＪ襲撃の敵に人質に取られて嫌な思いをしてるのだ。

軽いトラウマでも引き起こすくらいの。
指名があったと言うのも一つの理由に当てはまるが、実際は同じ電気系の個性ならもしかしたら上手く使えるのではないかという意味も兼ねて彼はその事務所に行く。
耳郎は「へぇ～」と少し意外そうに感心する。
「まっ、頑張ってよね。ジャミングウェ…『チャージズマ』！」
「おい耳郎！ワザとだろ、今の絶対にワザとだろ!!」
プププと笑いを込み上げ視線を逸らす耳郎に、上鳴は半分キレ気味に突っ込みをブチかます。
遠くで会話を見てた飛鳥は「チャージズマ？」と小首を傾げる。
「あ、そっか！飛鳥さんたち学炎祭に専念してたから知らないんだ！ヒーローネーム！」
「ヒーローネーム？」
近くに居た緑谷の発言に飛鳥はまたも小首を傾げる。
ヒーローネームとは、名付けることでその人のイメージが固まる、「名は体を表す」というものだ。
ヒーローネームを決めてたのは、丁度一週間前のこと…その場にいないため知らないのも無理はないし、寧ろ知らないのが当然だろう。
因みに天哉と焦凍はまだ決めておらず、爆豪はネーミングセンスが悪いのか、それともヒーローらしかぬ名前だったのか、却下された。
「そうなんだぁ、良いなぁ…私も参加したかったなぁ」
「ねーねー！前から思ってたんだけどさ飛鳥ちゃん。飛鳥ちゃんの名前も忍名であって、本名じゃないんだよね？」
緑谷と飛鳥の会話にお茶子も身を乗り出し会話に参加する。
飛鳥は「うん、まあ…」と生きハキハキととしないような声で反応する。
飛鳥だけでなく、柳生や雲雀も本名は隠しており、忍名を通して今も生きている。
忍にとって本名を晒すということは、忍の存在を晒すと同様。
本名はあるものの、身内の人にしか明かしてはならないのだ。
彼女たちの名前は気になるが、これも忍の運命ならば、仕方がない。

無理な詮索はいけない。
「ま、まあヒーローネームは良いとして…緑谷くん指名なかったんでしょ？何処行くの？」
「ああえっとそれが！一人指名が入ってたんだよ！『グラントリノ』っていう凄腕のヒーローらしいんだけど、そこ行くんだ！」
グラントリノ。
聞いたことのない名前だ…いやそもそも飛鳥はヒーローについてはほぼ無知識だ。
興味がない…という訳ではないが、今まで忍の修行に励んでいた為、一般人よりかは知識が半歩劣るくらいだ。
いや、緑谷自身もグラントリノの名前を聞いたことはないので、もしかしたらかなり名前が知れ渡っていないヒーローなのかもしれない…
そう思っていたが、彼が凄腕と言う位なのだから、期待しても良いのだろう。
「そっか…」
緑谷くんも成長してる。
体育祭で成長し、自分は学炎祭を通して成長した。
今度は職場体験となると、自分たちは強化パトロール…
日々を通じて思ったのだが、彼らが成長すれば、自分たちも成長し、自分たちが成長すれば彼らも成長する…互いに互いを成長しあってるように思えるこの感覚は、何だか嬉しいもので、向上心を煽られるようでやる気が出てくる。
「よし！私も強化パトロール頑張る！皆んなも頑張ろう！」
「おおお！飛鳥ちゃん元気出てきたね！学炎祭終わってなんか、結構明るい感じだね？負けちゃったけど大丈夫なんだよね？」
「うん♪雪泉ちゃん達とはもう和解したし、学校も燃やされてないから何の問題もないよ」
「良かったぁ～…ゴメンね？あの日行けなくて…なんか急に父ちゃんから連絡あって、一緒に飯食うか！って連絡あってさ…ウチ実家離れてるし…家族と一緒に過ごすチャンスないから…」

「ううん、気にすることないよ!あの日応援しにきてくれただけで嬉しいし…
あっ…」
飛鳥とお茶子が学炎祭について話し合っていると、緑谷の後ろに飯田が背を向けて歩いていた。
職場体験のためか、駅に乗って移動するのだろう…
後ろに飯田がこちらの会話に入ろうともせず、そのまま無言で行こうとする彼に三人は声をかける。
「飯田くん…」
緑谷達だけでなく、飛鳥も知っている。
あの悲惨な事件を――

インゲニウム再起不能。
――悪夢再び、ヒーロー殺し、現る
自分たちが追ってる漆月とは違うもう一人の凶悪な全国指名手配犯、ヒーロー殺しステイン。
現在も逃走中、漆月と関係性を持つと疑われている神出鬼没の殺人鬼。
過去17名ものヒーローを殺害し、23名ものヒーローを再起不能に陥れ、忍殺害数は10を超える。
忍からは別名、忍殺しステイン、と呼ばれている。

事件にあった日は学炎祭当日だ。
月閃と半蔵の勝負に決着が付いたその時に、母から連絡が入り、ヒーロー殺しの仕業だと知ったのだ。
今でも忘れない、あの傷だらけの悲惨な兄の姿を、憧れの兄の、あんな残酷な姿を、飯田が忘れる訳がない。
「……飯田くん、本当にどうしようもなくなったら、言ってね?僕たちホラ、友達だろ?」
緑谷の言葉に続くように、お茶子は心配そうに飯田を見つめながらも首を縦に振り、飛鳥も何か自分も伝えなければと、気後れした曖昧

な態度で口ごもる。
だが目だけ見れば分かる…「無茶しないでね？」という優しさを含めた瞳。

飯田は三人の声に、ふと頭の中に飯田とその兄の姿が遮る。
それは先日のこと――

『天哉…昨日本当は言おうかと迷ってたけどさ……けど、言うな…
俺、足の感覚が全くねえんだ…』
『そんなの嘘だ！足の感覚が……じゃあ！』
『ヒーロー…インゲニウムは多分、ここでおしまいだ……お前が憧れてたのに…悪いな…』
『ダメだ！兄さんが悪いんじゃない!!兄さんは最高のヒーローなんだ！これからもっと多くの人を導くんだ兄さんは!!』
静まる病院に飯田の悲痛の声が、病室により大きく響く。
ベッドの上で、血液製剤で血液を投与しているチューブが体に繋がっており、頭やら後遺症が残った足に包帯を巻いている。
その姿は、当日とは何も変わらず、痛々しいものだった。
『俺だって嫌だよ……やっと、ヒーローになれて……皆んなに支えられて、やっとヒーロー…なれたのに……なのに、俺は…俺……ヒーロー、やれなくなっちまった……
だからさ、もし……お前が良いなら……インゲニウム。この名前を、受け取ってくんねえか…？』
兄から託された名前を、今はまだ背負えない。
そう、今はまだ…

飯田は唾を飲み込み、嫌な気持ちを無理やり押し殺し、彼ら三人の

方に振り向く。
ただこの時――
「ああ…」
もっと強く言葉を掛けるべきだった――
この日のことを、やがて後悔することになる。
そして知らない……今自分たちがこれから、どのような展開が待ち受けてるのかなど…
最悪の未来が待ち構えてることなど、僕たちヒーローや、忍たちにも、何も分からなかったんだ。
だからこそ、もっと早く気付くべきだったんだ……奴らの行動を、目的を、そして……黒幕の、悪意の正体を。

薄暗い部屋、殺風景とした不穏な空気、壁のポスターにはオールマイトの破れた張り紙、ボロボロに剥がれ傷ついてる壁、この異様な空間、そこには…
「なるほどなぁ……『漆月』、お前が最近行方を眩ませていたので、どうしたのかと思っていれば、此処で身を隠してたのか……ハァ、そしてコイツらがお前の仲間で、雄英襲撃犯にして、俺と同じく忍を殺害する同志…
『敵連合』その一団に俺も加われと…」
ヒーロー殺し、ステイン。

「ああ、頼むよ。悪党の大先輩…」

バーの椅子に腰がけ優雅に話す、悪の司令塔、死柄木弔。

「忍を殺してる手練れのプロは、知ってる中では貴方しかいないからね、ステイン。お願いよ、ここ、とっても居心地良いんだよ？」

バーのカウンターとは真反対、壁に持たれかけ、水色の長い髪を垂れ下ろしてる漆月、そして無言でただヒーロー殺しを見つめてる男、ワープゲートという希少な個性を持つ黒霧。

ステインは周りを見渡した後、死柄木を睨み付けるといった近い視線を向け、暫くして口を開く。

「先に聞いておこう…目的はなんだ？」

「取り敢えずはオールマイトをぶっ殺したい。

後は俺に楯突く忍とかも殺したい。

漆月が言ってたんだけど、月閃とかいうクソ生意気な忍学生は、俺らを狙ってるそうだ。邪魔になるのは面倒だし、コイツらも追加で殺したい。

まあブッチャけ言えば、気に入らないものは全部壊したいな…

こういうクソ餓鬼とかもさ、全部！」

死柄木は写真を手に持ちステインに見せる。

その写真に映っていたのは…

緑谷出久。

飛鳥。

この二人だった。

死柄木は漆月の報告を受け、死塾月閃女学館の存在を知り、悪を滅ぼす正義が自分たちに楯突いてくると知り、死柄木はニューチューブで半蔵と月閃、二人の情報を頭に入れ、しっかりとマークしていたのだ。

「なぁ？気に入らないよなこのクソ餓鬼ども、コイツらさえいなけりゃ今頃オールマイトはぶっ殺すことが出来たんだ…

ああ、早く殺したいなぁ！アイツらの絶望の顔をこの目で見てみいなぁ…！
ヒーローと忍を幾多もなく殺してきた先輩もそう思うだろ？な？気に入らないものは何でもぶっ壊そうぜ、お互いに」
掌マスクで顔は見えないが、マスク越しのその顔に浮かぶ表情は、確かに笑っていた。
薄気味悪い歪んだ笑顔、一体どうしたらそんな顔を出すことが出来るのかと疑問を抱いてしまう位に、死柄木のその笑みは、気味が悪く、残酷な笑顔を浮かんでいた。

なれよ。
さあ、早く…
――死柄木の歪んだ想い。
俺の部下になれよ、あのガキどもを殺せ、無残な悲鳴を、命乞いする様を、俺に見せてくれ。
頼むよ、お前の力なら忍を根絶やしにすることだって夢じゃない。
さあ、早く――

「興味持った俺が浅はかだった」

は？
――途端、ステインは殺意の目線を死柄木に向け、冷たい声で言い放った。

「漆月が共に行動する者共に、もしかしたらと少し興味を持っていたのだが……どうやらハズレらしいな……ハァ、
お前は…俺が最も嫌悪する人種だ」
「はあ？」
ステインの予想外な発言に思わず声を荒げ、表情を曇らせる死柄木。
ヒーロー殺し。その名の通り、信念のないヒーローたちを無残に殺

し、または再起不能を幾多もなく繰り返してきた極悪人。
ニュースなどで、ヒーローへの危害が絶え間無く取り上げられてるのも揺るぎない事実だ。
だが、ステインにとって一つ例外なものがあった。ヒーローや忍とは違う…もう一つの、殺害対象。
それは――
「子どもの癇癪に付き合えと？ハ…ハァ……
信念なき殺意に、何の意義がある」

――徒らに力を振りまく犯罪者。

「ちょっ、ちょっと待ってよステイン！話が違――」
「お前は黙ってろ漆月、動いたら首を落とす」
「ッ!?」
――これは
予想外な出来事に、死柄木や漆月だけでなく、黒霧も動揺を隠せない。
黒霧は一度カウンターバーに設置してあるパソコン型のモニターに視線を移し、また再度死柄木弔ステインを見つめる。
――破壊衝動のみの死柄木弔に更なる成長を促す為に、そして忍に対抗する戦力として招いた人物…しかしこれは――
招き入れたどころか、これは予想外なハプニング、ステインは腰にかけてた鋭利なナイフを二本取り出す。
まるで半蔵学院の飛鳥が刀を取り抜く時のような、そんな感覚に近かった。
ステインが死柄木を最も嫌悪する人種なら、逆もまた然り…
死柄木弔もまた、ステインを最も嫌悪する人種である。

「先生！止めなくても良いのですか!?」
『これで良い！』
黒霧はこれ以上はと、死柄木の身の危険を感じ取り、モニター越し

にいる先生と呼ばれる人に声を掛けるが、返って来た返事は意外なものだった。
『忍学生も着々と成長している。今度は君らが大きく成長する番だ。
答えを教えるだけでは意味がない、至らぬ点を自身に考えさせ、成長を促す。「教育」とはそういうものだ』
音声のみで正体は分からないものの、モニター越しにいるその人物は間違いなく、半蔵の言ってた黒幕で間違いないだろう。

先生と呼ばれるその者は、死柄木とヒーロー殺しの争いを、止めることなく、我が子のように、生徒のように、暖かい目で見守っていた。

どことなく聳え立つビルや建物がかず多く見受けられる街。
雄英から電車で４５分掛かけてやっとついた研修先が…
「こ、ここで…あってる……よね？」
とてもではないが、研修先かどうかと疑ってしまう程に、ボロボロな廃墟となった建物。物静かなせいか、不気味さが増し、もう何年も使われてない住宅地の建物だった。
研修先にやって来たのは、緑谷出久。体育祭で指名が無かったかと思いきや、オールマイトが直接やって来ては指名が入ったとの報告を受けたのだ。
グラントリノ。
ヒーローオタクの緑谷ですら知らない名前だ。
動画サイトやＳＮＳ、グーグルやヤフーニュースでも検索してみたが、グラントリノの検索結果が出て来なければ、動画すら上げられていない。
オールマイトの師匠だと聞いてみたものの、これといった動画は上

がっておらず、謎に包まれた存在だ。
そんな人がどこに住んでるのかと思って来てみたらコレ。
頂いた住所は勿論あってるし、再確認もした。
（いや、でもあのオールマイトが震えてたほどだし…もしかしたら、名前は無くとも実は案外強すぎだりして？）
それでも前向きに思考を働かせる緑谷は、流石と言ったところだろうか、鼻息を荒くし、思いっきり扉を開ける。
ギギギ…と不気味な音が、物静かで暗い部屋に鳴り響く。
外はまだ明るいのに中は思ったよりも暗いので、余計不気味さが際立つ。
「す、すみませんあの～…雄英高校からやって来ました～…
緑谷出久です、どうぞ宜しくお願いしま～…」
ベチャ…
「？」
中に入り数歩、中を歩くと床から何やらベチャっと、液体のような嫌なものを踏んだ感覚が伝わり、思わず一歩足を退げる。
何だろう？と眉間にしわを寄せ、前をよくみてみると…
「っっ!?わあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!」
目の前には信じられないことに、いるのだ。
死体が。
それも老人。
老人がそのまま俯きになって倒れており、床は赤い液体がべったりと広がるように付着し、飛び散っている。
恐らくこれはこの死体の老人による血液と考えて良いだろう…
死体の近くには肉片？らしき不確定な形をした異形な物体が出ている。
これはもしかしたら死体の内臓？だが然程匂いはしない…死体による腐臭などといったものは感じられない…部屋はそれほど寒くはない…
更に何かしらの破片が散らばっている。これは凶器によるものなのか、恐らくだが凶器か何かで老人を殺害し、破片が散らばったと推

測して間違いないだろう。
「け、け、けけ、警察!!あっ、ヒーローもか!てかここって研修先の事務所だよな!?アレがもしかしたらグラントリノ…?死んでるじゃん!!」
緑谷は目の前の光景に突っ込みを入れつつも携帯を取り出し、慌てて連絡しようとする。

「生きとるわ!!」
「ッ!?」

その矢先に、目の前に倒れてたはずの老人が顔を上げる。
緑谷は突然死体の老人が起き上がり、背筋をゾッと凍らせ思わず手に持ってたスマホを落としてしまう。
「いやぁ、イタタ…飯食おうとソーセージにケチャップぶっ掛けて食べようとしたのになぁ…こけて皿割って終いにゃソーセージ台無し!ついとらんなぁ今日は…」
死体?の老人は杖を手に持ち、緑谷に歩み寄る。
「う、うわわ…も、もしかして…ゾン…ビ?」
「あ?誰だお前?蕎麦屋の店員さん?」
「緑谷です!!てか蕎麦屋の店員って何!?」
「なに!?ピザだと?!俺ぁそんなもん頼んだ覚えないわ!」
「違いますって!緑谷です!」
「ああ!?なんて!?」
「緑谷です!!」
「え?俊典?」
「緑谷出久!!」
「誰だ君は?」
——やべぇ、ダメだ。
見た所傷はないものの、恐らく何かしらの間違いだとこの姿を見て直ぐに理解したものの、この老人のボケが余りにも異常なため、本当の意味でドン引きしてしまう緑谷。

因みにあの赤い液体はケチャップで、肉片はソーセージ、破片は皿、つまり殺人現場でもなんでもない、一般的なただの事故だった。
しかしそんなこと考える暇もなく、緑谷はこの老人がグラントリノなのかと疑わしく思えてきた。
(こ、この人がオールマイトが言ってた…先生？確か雄英の教師を一年だけやってたって聞いてたし、どんな人かと思ってたけど、人違いだよな？
相当なお年とは聞いてたけど幾らなんでもこれは…酷すぎる…)
老人ホームにでも連れてった方が良いのでは？と心の片隅で思う緑谷。
老人はかなり身長が低いため、思わず子供かよと思ってしまう。
因みに身長は小学生の平均と変わらないくらいだ。
「おいお前！」
「っ!?」
突然、老人の覇気ある声に緑谷はビクッと軽く体を反応し瞬時に体が固まる。
グラントリノはその場に座り込み、緑谷を見つめてると…
「誰だ君は？」
やはりこの反応。
緑谷は考えることも、突っ込むことも辞めて、老人に背中を見せる。
「す、すみません…ちょっと電話してきますね…」
(もう会話なんて出来ないな……
取りあえずこのことを早くオールマイトに連絡しないと…教わるものも、教われないし……と言うか、本当にここ、合ってな――)
「――早く撃ってきなさいよワンフォーオール！」

え？

今なんて…？

老人からして、あり得ない言葉が背中に投げかけられた。

ワンフォーオール？
確かにこの老人がグラントリノで間違いなければ、当然知っててて可笑しくはないだろう…
オールマイトの師。
それはつまり、ワンフォーオールを育てた教育者でもある。
しかし会って間も無く、この圧倒的なボケをかます老人。
こんな老人から、ワンフォーオールの言葉を口に出したのだ。
となると、間違いない…
「どの程度扱えるのか知っておきたい！」
この人はグラントリノで間違いないだろう。

グラントリノ。
先代の盟友であり、勿論ワンフォーオールの件もご存知。
昔雄英高校を一年間教師として務め、オールマイトを強くしたと言う師匠。
実力も折り紙付き、何せあの平和の象徴オールマイトが、身震いし震え上がり、トラウマを持つ程の凄腕ヒーローだ。
今はかなり年を老いた老人だが、今でも充分強いとオールマイトが断言する程のヒーロー。
もしかしたら…本当に？いや、この流れだと、また「誰だ君は？」というボケをかますに――
「どうだ？最近の忍学生は？生き生きとしてるか？学炎祭とかやからしたそうじゃないか、若い奴は元気で何よりだなぁ」
「!?」
ボケかますどころか、忍学生のことも…
学炎祭を知ってるとなると、半蔵学院に死塾月閃女学館のことも知ってる…
緑谷はそんな只者でない老人、グラントリノを見つめる。
唾を飲み、息を潜め、ゆっくりと老人に語りかける。
「あ、あの…ワンフォーオールの調整はまだで…てんで扱えなくて……体育祭でも何回か無茶してリカバリーガールに叱られたりして、

だからえっと…その…」
「ん？あ？誰だ君は？」
「うわあああああ!!」
やっぱりそう来たか!!結局予想を裏切らなかった！
緑谷は思わず髪をくしゃくしゃに掻きむしり、お惚けグラントリノに悲鳴をあげる。
ここまでくると何故か憎めない。逆にこれが彼の個性じゃない？と疑いを持つほどにだ。
「……あ、あの!!僕時間がないんです！」
「！」
とうとう我慢の限界が来たのか、緑谷は怒気を孕んだ声で、グラントリノに叫び出す。
流石に急に怒鳴られるとは予想してなかったのか、反応する。
「早く力を扱えるようにならなきゃいけないんです！
オールマイトには…もう時間が残されてない…いつ引退してしまうかも分からない…今は、そんな深刻な状況なんです…
だから、お爺さんに付き合ってる暇は…ないんですごめんなさい…」
少しキツめに言い放った緑谷は踵を返し、荷物を持ったまま出て行こうと歩んでいく。
こんな無駄なコントしてたって時間の無駄だ、帰ってどうなるか分からないが、取り敢えず研修先の、グラントリノと呼ばれる爺さんがこんなボケてるのなら、研修も何もクソもない、そう判断した緑谷が、扉を開け出て行こうとしたその瞬間。
「だったらよ…」

―――

1秒も満たすことなく、超猛烈なスピードで部屋中を飛び回り、そして瞬きした瞬間、あの老人が目の前に現れた。
「!?」

目で追いつけないその凄まじい異常なスピードは、彼に対する緑谷の常識を、全て覆した。

「――尚更、撃って来いや受精卵小僧が」

不敵な笑みを浮かべる謎の老人グラントリノ。

この凄まじい威圧感に、緑谷は痺れる感覚を肌身で感じた。

職場体験、初日――

７４話「しろ成長！」

「脳無のＤＮＡ検査？」
「ああそうだ、その件でオールマイト、君を呼んだんだ」
雄英高校の仮眠室にて、ソファに腰掛けるオールマイトの目の前に、同じく白いソファに腰をかけ、真剣な眼差しで語る塚内刑事。
「重要な話がある」と連絡が来たので、今回その件について話を聞くため、彼を雄英へと招き許可を得たのだ。
「捜査協力を依頼してる訳でもないし、これは情報漏えいになるし、社外秘なんだが…どうしても君には伝えなくちゃと思ってね…
半蔵くんや君が言ってた、黒幕への手掛かりだ」
黒幕。
敵連合の本当のボスにして、裏社会で組織を、主犯者、死柄木弔を動かしてると見なしていい人物。
塚内がその話を持ち込むと、オールマイトの額から、脂汗が滴る。
「雄英高校襲撃の脳無のみならず、蛇女襲撃事件の際に漆月と呼ばれる彼女と共に犯行を実行した、二人の脳無…
個体や形は違うものの、共通点は脳が飛び出てるのと、言葉を喋らないだけ…」
蛇女襲撃事件については、塚内は忍の存在を知ってるため、当然あの事件は知っている。
あの二体の脳無はあの後、上層部に派遣された忍が拘束し、上層部を通して警察署へと連行したそうだ。
脳無と名乗られてる者は皆んな共通点が一緒なのか、何を問いても一切口を開かないのだ。
ここまで来ると、警察も忍も、恐怖しか感じられない。
「あれから色々と試して見たんだが、奴らは口がきけないんじゃない、何をしても無反応…文字通り思考停止状態。
まるで脳が無いのかと思わせてしまう程に不気味で気味が悪くてね、しかも三人とも同じ脳が飛び出てる人間なんてそうそう居ない、血の繋がりや関係があるに違いないと踏まえ、素性を調べる為ＤＮＡ

検査したところ…
雄英高校襲撃の人物、傷害・恐喝の前科持ち、まあ平たく言えば何処にでも居るチンピラだ。
だがそこで驚くべきものが発覚したんだ。
奴の身体には全く別人のＤＮＡが少なくとも４つ以上混在してることが分かった」
「なっ…!?」
塚内は三つの写真を取り出し、テーブルに置きオールマイトに見せるよう渡す。
たらこ唇のこのパッとしない、弱そうなチンピラ…これが、あのオールマイトと渡り合えた脳無の状態なのだ。
そして残りの二枚の写真にも目を移す。
「緑脳無、奴の正体は『緑目　三眼』三年前、突然行方不明になった一般人のサラリーマン。彼にはＤＮＡが５つ混在…そして赤脳無、『鼻息　炎射』此方も同じく三年前、工場で働いていたが、原因不明の事故で亡くなったとニュースで取り上げられた人物、だが今はどういう訳か、脳無として姿を現し生きており、ＤＮＡ５つ…こうも体の構造が可笑しい人間なんてそうそういないだろう……
しかも雲雀くんの証言から、奴等三人とも心がない。それはきっと、思考停止状態によるものだろう」
「……おいおい、人間か？」
あの脳無と呼ばれる気味の悪い化け物の正体が、ただの一般人…そこらに歩いてそうな一般レベルの実力、到底オールマイトやヒーロー学生、忍学生と闘い渡り合える程の実力は持たないだろう…
塚内や医療関係者の話によると、全身薬物などでいじくり回されているそうだ
安っぽく簡潔に言えば、『複数の個性に見合う身体』にされた改造人間。
そしてそれがヒーロー・忍へと暴力を振るい、破壊活動と下される命令へと全力を尽くした思考停止の怪物、殺戮兵器の権化。
「脳の著しい機能低下は恐らくその負荷によるものだそうだが、まあ

本題は身体の件よりもＤＮＡ…個性の複製持ちのことだ。
ＤＮＡを取り入れたって馴染み浸透する特性を持った者でない限り、個性の複数持ちなんて事にはならないし、個性婚じゃなければあり得ない話だ。
ワンフォーオールを持った君なら、弟子を持つ君なら、分かるだろ…？」
「まさか…そんな……嫌な予感はしていたが……存在するのか？」
塚内は飲んでた湯呑みを静かにテーブルの上に置く。
危機迫るこの緊迫とした空気、オールマイトがこれまでにない焦りと、不安、信じられないと言わんばかりのその表情は、今までに誰にも見せたことのない顔だった。
「ああ間違いない、個性を与える個性を持つ者…アイツが今も、生きている可能性は高いと断言していいだろう…」

「体育祭での力の使い方、あの正義バカのオールマイトは『教育』に関しちゃあど素人以下、半蔵に教わらなかったか？
体を自然に使いこなし、常に精神を怯むことなく力に変えて使いこなせと。
折角忍学生と一緒にいるって言ってんのに、お前は何を学んでたんだか…
見てらんねえから、俺が見てやるよ。さぁ着ろやコスチューム、ビシバシ指導して鍛えたる！」
パラパラと部屋中蹴られた壁に、グラントリノが蹴り出した足跡が

残っており、僅かながらにヒビが入っている。
緑谷はグラントリノ、目の前のスピード爺さんに腰を抜かしそうになる。
(言い回し、惚け方、忍学生や半蔵を知ってる……そして何よりもこの尋常じゃないプロの気迫…間違いない!この人は…オールマイトの先生!)
グラントリノの底知れぬ実力に、プロが見せる圧倒的な凄みを持つ気迫に、半蔵を知ってることに、思わず体が硬直したものに近いものを感じ取った。
まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。
「お前がオールマイトの弟子ってんなら、それを名乗る資格があるかどうか…試して見たい!」
まあ勿論個性の調整についてそれも含めてだが、グラントリノは緑谷がどれほどワンフォーオールを扱えるのか、その肌身で感じたことがないのだ。
体育祭はテレビで見てたので、緑谷出久のことは当然知っている。
しかし、液晶越しで見るのと直接見るのとでは訳が違う。
オールマイトの弟子として相応しいか。
オールマイトオタクファンの彼にそれを言われたら、緑谷出久は黙っていられない。
「……宜しく…お願いします!」
緑谷出久、果たしてグラントリノに一泡吹かせることは出来るのだろうか?

「はぁ〜…一通りかなり歩き回ったけど……まだ一時間も経ってない

よね？」
一方、忍学生の強化パトロール中の飛鳥はかれこれ４５分も街を歩き回っている。
まだ４５分しか経っていないだろと思うかもしれないが、これ実はかなりハードだったりする。
体を動かすということは、時間が経つのが早く感じるが、しかし体を動かせば全てがそう感じるとは限らない。
平凡で平和な、物騒の無い街。
どこを見ても何の変哲もない街。
敵もいなければ事件の騒ぎも起こらない街。
何にもない…と言ったら可笑しいだろうが、同じ景色をした街を歩いてるだけでは頭が働かないし、一人だと話す相手もいないので時間がより長く感じる。
こう言う時、柳生と雲雀の二人の仲が羨ましく思う。
…但し、同性愛を除いて。
どうしたものかと思い、飛鳥は周りを見渡す。
するとどうだろうか、少し遠く離れた場所に、微かに公園が見える。
まあ何も大した事じゃないのだが、飛鳥にとって寛ぐに丁度いい息抜きスポット。
（そうだ、あそこの公園で少し休憩しようかな…）
どう休憩を取るのかは自由だし、パトロールとは言ってもこの地味なことを一週間も続けなければならないのだ。
休憩を取るのも、食事を取るのも、就寝するのも個人の自由で構わないが、強化パトロールをサボったり、何処か息抜きにと活動しないのも、流石に監視が難しいためバレる要素はないが、真面目に取り組む人間と、そうでない人間では歴然と差が出る。
これも個人に任せるとのこと…まあこれは強化パトロールよりも強化サバイバルと言っても過言ではないだろう…
そう思う人間も少なからずいると思うが、それは違う。
強化パトロールには本当の意味がある。
例えば抜忍の処罰としてパトロールを強化したり、ヒーローが不在

な状況で敵が暴れ出した時、忍学生は戦闘が許される。
抜忍の処罰…焔紅蓮隊の皆んなはきっと苦労するだろうな…
公共の場での戦闘は許可されていないが、強化パトロールの為ならば仕方なく、他の一般市民からは忍の存在が知れていない為、ヒーローと勘違いされることもあるので、この際何も問題無いとか…
確かに忍学生として振舞うよりも、ヒーローとして振る舞えば、自然と納得するだろう。
忍学生を知らないと言うことは、忍だと知らずにヒーローだと勘違いするからだ。
雄英高校だけでなく、多くのヒーロー学生がパトロールを行うので、忍学生もそれに紛れて行うのだ。
これもまた忍の潜入捜査、諜報活動として実践を問われ、経験を積むのに相応しいもの。
食料や水への確保は自分の力で何とかするのも、行動力、判断力を問われる。
一見地味のように見えるが、これもこれで辛いもの。
食料を摂れなくても水さえ確保すれば大抵生きることが出来る。
断食する信教者と同じだ。
また水もなく、食料調達も出来なければ、それはそれで忍耐力として修行となる。
水や食料だけでなく、このパトロール自体一週間を乗り越えるのも忍耐力の一つにもなる。
寝る場所は目立つところではいけないので、細心の注意を図り、目立たない場所で就寝を取ると良いだろう。それでも万が一、一般人が気づく場合もあるので、そこは気を隠し且つ、周囲への警戒を怠ることなく就寝…
これも忍の警戒心、気配の索敵としての修行にもなる。
強化パトロールは厳しい分、修行として経験を積み、得られる物が豊富だ。
どの修行もやる事が同じなので、少し味気ない感じだが、こう言う厳しい修行の方が忍として断然と向いているのではないか？とプラ

ス思考として考えたりすることも出来る。特に飛鳥のような修行真面目バカなら尚更だろう。

何気ないごく普通の公園に着いた飛鳥は、腰掛けるベンチがあるかと探していた。

ジャングルジムや像の動物をモチーフにした滑り台。

小さな子供達がブランコを漕いで遊んでいる。

キャッキャと無邪気で幸せそうな笑顔は、見てるだけで心が晴れやかな気分になる。

そう言えば自分も小さい頃は公園でよく遊んでいた。

もっとも、飛鳥の場合は遊ぶことよりも苛めっ子をぶっ飛ばしていたけど。

そのことでじっちゃんが呆れていたことも未だによく覚えている。

そんな懐かしい頃を思い出しながら、腰掛けるベンチを探していると…

「ん？アレ…？あそこにいるのって…？」

飛鳥は目を凝らして、視線の先に映る人物を見つめる。

それは、青白いベンチに腰掛け、虚ろな目で空を見上げてる、斑鳩先輩だった。

（アレ？なんであそこに斑鳩先輩が？まあ、強化パトロール中だから、偶々会うのも有り得ない話じゃないけど……

って、何見てるんだろ？）

空には曇り一つない、蒼く爽やかな空色。

太陽の日差しが眩しく、直視できない光。

風一つ吹いてない公園。

何もないのに、斑鳩は何を見てるのだろうか？なんだかとても悲しい表情だ。

そう言えば、学炎祭が終わってから何やらソワソワしてた様子が見受けられてたが、アレと何か関係があったりするのだろうか？

考えても仕方がないと、飛鳥は斑鳩に近づき声を掛けてみる。

「斑鳩さぁーん！」

「えっ？」
飛鳥の言葉に、斑鳩は「ハッ！」と我に返ったようで、体をビクリと反応させる。
突然声を掛けられ驚いたのか、或いは考え事をしていたのか…いや、両者だろう。
斑鳩は飛鳥が近くにいたことすら気付かなかったようで、取り乱していた。
「も、申し訳ありません…考え事してて…つい…」
「ううん！全然大丈夫だよ、誰にだって考え事あるんだし謝らなくても良いんですよ？
それで、何考えてたんですか？」
こういう話になると、質問してしまうのは必然的だろうお約束。
飛鳥の質問に斑鳩は体をまたピクッと、小動物のように僅かに反応する。
その表情は又しても先ほどと同じく、虚ろな目、悲しい表情…
一体彼女の身に何があったのだろうか…？
しかし、これは斑鳩自身の身による問題ではない。
「いえ…少し……飯田さんのことを…」
その言葉を聞いた飛鳥も、凍りつくように表情を曇らせる。
飛鳥の脳裏に浮かぶは、苦痛を押し殺しながらも、無理に笑顔を作り立てる飯田。
新聞の記事に載ってたインゲニウム再起不能という記事。
ヒーロー殺しステインという悍ましく、恐怖の存在でしかない殺人鬼。
斑鳩が何故こんなにも苦しそうな表情をしているのか、みなまで言わなくても直感的に、瞬時に理解した。
頭の回転がうまく回らない飛鳥でも、飯田、彼の名前を口にしただけで点が線になるように結び付く。
「飯田さんの兄は…天晴さんは……私にとっての、最高のヒーローなんです……
私の些細な悩みを全力で、真剣に聞いて、前向きに話しかけてくれ

る…そんなあの兄が、私は大好きなんです……
あの人のお陰で、私は村雨お兄様に向き合うようになり、お兄様も私に振り向いてくれた…血こそ繋がってないものの、それでも家族としての関係を、築かせてくれた、誇りあるヒーローなんです……それを…」

斑鳩には村雨という兄がいるのを飛鳥は知っている。
実際に会ったことはないし、一度も見たことはないが、それでも斑鳩が家族について悩んでることは、飛鳥も薄々と分かっていた。
血の繋がってない人間、よそ者、才能のある人間、飛燕の後継者。
たったそれだけで兄から否定され続け、家族の本当の意味が分からなくなってしまった…そんなある時、体育祭で飯田の兄と会い、変わることができた。
初めて、兄と向き合おうと決心がついた。
斑鳩にとって、天晴は最高のヒーローなのだ。
――それを、ヒーロー殺しは彼を再起不能にしてしまったのだ。
どういう理由かは知らないが、何故態々彼を狙ったのか、その動機も知らないが、天晴、インゲニウムを傷つけたことに変わりはない。
斑鳩の心に大きな傷を付けたのも事実であれば、衝撃のあまり、ろくにパトロールすら行えない程に落ち込んでいる。
「……」
飛鳥は黙然と斑鳩を見つめていた。
どう声を掛けてあげれば良いのか分からない…
普通の慰めの言葉を彼女に掛けても意味がない、ただのまやかしの言葉に過ぎない。
また、人によって慰めても返って怒ってくるだろう…
自分だって同じだ。
もしこれが斑鳩の立場ならと思うと、胸が痛む。
きっと並普通の言葉では意味がない、仮にもしそれで救われたとすれば、それはそこまでの悩みという訳になる。
「こういう時…緑谷くんなら……どうするんだろう…?」

ふと自然に声が漏れ、口に出してしまう飛鳥。
幸い斑鳩はショックの余りで聞こえていなかったは良いものの、飛鳥自身も声に出したことすら気がつかない。
ただ、もし彼ならどう行動をするのだろう?と想像しただけであって、決して口に出したつもりは毛頭ない。
しかし、何故彼のことを考えてしまうのだろうか?そんな疑問さえ分からず、ただただ虚しく、時間が過ぎ去っていく…

「これが9代目継承者の実力たあなぁ…
腕が固い、意識がチグハグしている。分析と予測は悪くはなかった…だが、まだまだと言ったところか…
お前はワンフォーオールを特別に考え過ぎている。それが、憧れや責任感から来るものなのか…足枷となってる。
だからこうなる」
場所は戻り、緑谷出久は成す術もなく、手も足も出ず、目にも留まらぬ速度で緑谷を翻弄し、個性の一撃すら与えることができず、今こうして身体の上に乗り、顔を掴んで緑谷を床に伏せさせてる男、古豪グラントリノ。
部屋中は何と、アレだけ壁が蹴られたのに、汚れやヒビやらが何一つ付いてなく、
「ッ!絶対捕まえたと思ってたのに!」
「それだよ、お前は意識が固すぎるんだ。体育祭での騎馬戦や本戦での利用本…立ち回り方も、どう行動を取るべきかも、自分でも理解で

きてるハズなのに、お前は個性が使えてない」
グラントリノは身体を退け、掴んでた手を離すと、緑谷から離れる。
そして先ほど持ってた杖を再び手に持ち、杖を床に突き、体を支える。
アレだけ動き回ってて、本当にどんな体をしてるのだろうかこの老人。
「早く力をつけなきゃ、という焦りを持つのも分かるし否定しない…
時間も敵もお前を待ってくれないのも事実だ。
だがな、それはお前に限った話じゃねえ、ヒーローの誰もが通り、痛感する道のりだ」
ワンフォーオールの個性を引き継ぎ持った緑谷だけじゃない、憧れや、なりたいヒーローを志し、時に焦りの色を見せる学生は彼だけじゃない。
彼の知らない色んな研修先で己を磨き、実績を残し、着々とヒーローへと近付いて来ている。
「じゃあ、僕はどうすれば…？」
行く道分からず、答えに悩み、迷い、緑谷は老人に問う。
「んなもんお前、自分で考えろ」
「俺ぁ飯買いに行く」と、ちょっとコンビニ行こうかみたいな軽いノリで緑谷に背を向ける。
答えを教えるのは誰にだって簡単なことだ。
だがそれでは意味がない、答えを教えたとして、自身で考える力を身につけれない。
身につくことが出来ない。
だからこそ、教えるのではなく、自身で考えさせるのだ。
至らぬ点を、死ぬ気で探せ。
教育とは、そういうものだ。

あれから数十分後、公園を後にした飛鳥は、特にこれと言った考えはなく、トボトボと何の目的も無く歩いていた。
斑鳩のこと、飯田のこと、それが心配なのか、斑鳩と同じく余り元気がなかった。
(斑鳩さんに、何て言えば良いのか、分からなかった…)
落ち込んでた彼女に、自分は何をどうすれば良かったのか、どう声を掛ければ良いのか分からず、何も言えぬまま彼女は「そろそろパトロールに戻りましょうか」と言い、飛鳥が声をかける間も無く去って行ったのだ。
あの時、声を掛けれなかった自分が今になって憎く思える。
どうして、あの時自分は何も言えなかったのだろう…と、今になって後悔する。
本当は大丈夫な訳無いのに、同じチームであって、仲間なのに…
なのに、落ち込んでる仲間にすら励ますことが出来ないなんて…
それが原因なのか、飛鳥は元気がないのだ。
だが、ここでまた一つ、疑問に思うこと…
「緑谷くんは、あの場だったらなんて声を掛けて、どうしてたんだろ?」
彼に対する疑問を浮かべ、数秒も経たず彼女は「アレ?」と小首をこてんと傾げる。
今度はハッキリと己の心から沸き起こる疑問に気づく。
(どうして、緑谷くんならって考えてたんだろ?
ヤケに意識しちゃうんだけど…いやまさか…
ううん!ないないない!流石にない!)
飛鳥はつい思わず赤面してしまい、首を横に振るう。
緑谷くんならと考え、意識し始めてる飛鳥は、もしかしたらこれが恋なのでは?と一瞬疑問に思ったのだが、それを頭を横に振って、その考えを一瞬で否定する。

なぜこれが恋なのでは?と、あの飛鳥が分かったのかと言うと、まあ色々とあるのだが、最近そう言った漫画をちょくちょくと読んでいるので、もしかしたらと思ったのだが、飛鳥に限ってそれはない。
(私は一流の忍になるんだ!今はそんなこと考えてる暇はないもん…!
緑谷くんのこと意識するのは、私にとってそれ程、強くて…人一倍努力してて…それで…)
飛鳥が意識をしているのは、緑谷が他の人とは違う何かを持ってる事、自分と何処か似たようなものを感じ、興味を持ち魅かれてるのだ。
彼は確かに人一倍努力家で、ヒーローになる為ならどんな訓練でも真っ当に受け、正義感が強く、ヒーローに憧れている。
彼を遠くで見てるとなんだか応援してあげるような気分になってしまう。
(緑谷くんが頑張ろうとしてるからこそ、私も頑張れる…
まるで自分を見てるように思えて、つい自然と強くなろうって向上心を持つことが…出来るんだ)
同じ性格を持つ人間など錚々いないだろう、彼の優しさまで彼女と負けずそっくりだ。
「でも、なんだろ…このモヤモヤ感は…?」
恋なんてことはありえない、違うのに、全然そんなのじゃないのに…
それでも、心に靄が掛かったようなこの曖昧とした、口に表現を出すことが難しいこの感情。
飛鳥は知らない、今まで感じたことない、この感情を…
日影みたいだが、これは至って真面目で真剣。
無理もなかろう、飛鳥は今まで忍になる為にずっと鍛錬を重ねていのだ。
そう言った高校生が送る日常的な、甘酸っぱい日々など、飛鳥は知らない。
でも、半蔵学院だけでなく雄英高校に入って変わった、変わることが出来た。

（なんか、変な感じ…）
落ち込んだり、悩んだり…初日で色々考え悩まされる飛鳥は、「う～ん…」と小さな唸り声をあげながら、パトロールを続ける。

「……」
壊れた電子レンジを睨めっこしている緑谷は、ブツブツと相変わらず気味が悪いと引いてしまう位に小声で何かを呟いていた。
無論。個性の使い方――
グラントリノは言っていた。
分析と予測は悪くはない、それはきっと考える力があるから、それは当たり前だ。
分析と予測は、これから先やって行く上で必要となって行く。
だが今回その必要性は問いつけられてない。
問題なのは個性の使い方が間違ってると言う点だ。
自分でも理解している、間違った所も探している。
何も不自然ではないはずだ…
ある一つの疑問を除いて。
「固いって何だ？ワンフォーオールを使おうとした腕、触って固いって言ってた…
固いってことは、多分力んでるからか？いやそんなもの当たり前だろ…だってイメージが強くて固いの……アレ？」
緑谷はここで何か思い当たったのか、電子レンジから、背負ってるリュックの中を探り、荷物を漁ってノートを取り出す。
「固いってことは…イメージを固定しちゃってるから…
憧れ、オールマイトへのイメージが固執してたから、分からなかったけど…
固いから腕が壊れるなら…今度は…
柔軟な発想で…考えれば！」

そしてヒーローノートをペラペラと勢いよく開き、ある情報をまとめた人物の情報と、立ち回り方、戦闘スタイルに目を通す。
「個性は体の一部みたいなもの…どうしてこんなこと、早く気付けられなかったんだろ…いや、きっと近すぎてて、当たり前のように見てたから分からなかったんだ…」
爆豪勝己。
彼のような柔軟な発想力、立ち回り方、対応力、体育祭一位の実力を持つ折り紙付き。
彼の行動を一番身近で幼い頃の昔から、彼を見てたから、真っ先に彼のことを思い出した。
「そうだよ！もっとフラットにワンフォーオールを考える！
そうすればきっと、調整も夢じゃない…！
よし！そうなったら先ずは――」

俊典。
玄関の扉越しで、たい焼き袋を手に持つグラントリノは咳払いして立ち止まっている。
（体育祭を見てて、奴の思考が柔軟なのは直ぐに分かった…
ただ問題なのは個性の扱い…それだけがどうしても慣れてなかったが…
どうやら見つけ出すのにそこまで時間が掛からなかったようだ……俺の見込みでは数時間か数日は掛かるかと思っどったが、たった数十分で…）
オールマイトからは聞いている。
彼の思考力や発想力は、並の人間を超えている。
幼い頃、個性がなかった彼はひたすらヒーローに憧れを抱いて、ノートに纏めていた。
その影響のためか、彼は思想力に長けていたのだ。
（これは、中々いい奴見つけたじゃないか――
八木俊典。オールマイト――）
グラントリノは、緑谷の予想せぬ急成長に、心が嬉しくなり、微笑

んだ。

７５話「死柄木とステイン」

商店街。
お祭りのように絶えることなく人が賑わうこの街は、この場所にいるだけで愉快にさせられる。
人混みが多く、他の人の話し声が鮮明に聞こえるくらいだ。しかし、他人の言葉が飛び交うので正確には聞こえない。
つまり、はっきり言えば煩いのだ。
「柳生ちゃん！ハイこれ！」
可愛らしい華の瞳を輝かせ、桜を連想させるピンク色の髪を揺らし、可愛らしい小動物の笑みを浮かる雲雀は、クールで清楚良い柳生に、冷たい真っ白なソフトクリームを手渡す。
「ん、ありがとな雲雀」
柳生は常闇や轟のような口数少ない、冷静でクールな部類に入る少女だ。
しかしそれは、雲雀大好き１２０％を除いた話であり、柳生は雲雀の前だと気を許して甘やかしてしまう。
そこが悪い訳ではないのだが、前の訓練で傀儡の攻撃を反射的に庇ってしまい、霧夜先生に怒られ、二人は補習を受ける形となったのは今としてはほろ苦い思い出だ。
柳生は手短に言葉を返してソフトクリームを手に取る。
ペロリ、と子犬のようにひと舐めする。
――甘い。
口の中に程よい甘みとバニラと牛乳の味が広がり、思わず頬を緩いでしまう。
流石は、雲雀の買ってきてくれた『ウサちゃんアイスクリーム』は美味いなと、心の中で呟く。
ウサちゃんアイスクリームが美味いのではない…雲雀の買ってきたウサちゃんアイスクリームが美味いのだ。
大事なことなので改めて言っておいた。
そこが柳生らしいと言えば柳生らしいし、それでこそ誰もが知る柳

生ちゃんだ。

「美味しいね！息抜きだったら食べても問題ないよね？」

「そうだな、偶には休息も必要だ。常に気を張ってても疲れが溜まるだけ…

甘い物でも食べながら周囲の軽いパトロールも悪くないものだ」

特に目立った事件も見当たらなければ、騒ぎも見受けられない。

人混みの中では起きないだろう、と考えを持つ者もいるが、こんな大勢の人間がいるからこそ犯罪が起こるのではないかと思い、商店街をパトロールしていたのだ。

因みに集合場所とは大分離れた地域に彼女たちはいる。

「そう言えば此処の研修受けてる人誰がいるの？」

「確か葉隠だった気がするな…アイツは指名は入ってなかったらしいが『カクレオン』事務所にいるらしい。他は…隣の地域は確か爆豪だったな、Ｎｏ．４ヒーロー『ベストジーニスト』の研修を受けてるらしい」

隠密ヒーロー『カクレオン』

他のヒーローたちと比べて目立った活躍はないものの、実績はまあまあ優秀らしい。

隠密活動をペースとして、敵の闇取引や違法薬物の取り締まり、警察に近い活動を常に行ってるそうだ。

常に自分は影が薄く、あまり存在感がないため、ヒーロー達から協力要請が来なければ、マスコミも余り近寄らないらしい。

本人もそれはそれで好都合なのか、特に気にした動きも無く、また彼は相澤と同じくメディアを嫌う人物。

なんでも『本当のヒーローは皆が見てない場所で人を救けるものだ』という座右の銘を語り、一時期少し有名になったとか…

というより彼はヒーローよりも忍に向いてるのではないか？

上層部が聞いたら『是非貴方も忍に！』と逆に勧誘しそう…

因みに葉隠は自分の個性『透明』と類似してるからか、『気が合いそ

うだし何か学べそう！』と鼻息巻いて事務所を選んだそうだ。

ベストジーニスト。

Ｎｏ．４ヒーローとして名高い有名なプロヒーロー。

ベストジーニスト８年連続受賞という功績持ち、事務所の相棒をかなりの数で雇っている。

ファッションリーダーでもあり、若者から中年層にまで幅広く人気な男。

常にメディアを意識し、ヒーローとして何を問われ、何がヒーローなのかを口論する社会的なヒーローだ。

爆豪を指名したのは、彼のような凶暴な性格を矯正し、礼儀正しい自覚を持つヒーローにするべく招き入れたそうだ。

「皆んな頑張ってるね～♪よし！雲雀たちも頑張ろ～！」

（雲雀、オレは雲雀の側にいるだけで元気１００倍だ！）

雲雀が天真爛漫な笑顔で、腕を振り上げる横で柳生は頬を僅かながらに朱に染め、裏でグッドポーズを取る。

相変わらずの平常運転っぷりなのか、雲雀のこととなると全くの別人みたいだ。

隣にいる雲雀は柳生の様子など気付く筈がなく、真っ直ぐ歩み進んでいる。

「そうだ！雲雀たちと言えば、飛鳥ちゃんたち今頃何やってるんだろ？」

「さあな…アイツらのことだ。気にすることない…

葛城はサボってそうだがな…いや、案外影で努力してるかもしれん…」

飛鳥は修行バカと言った印象で、斑鳩は飯田に負けず劣らず超が付くほどの大真面目。

初めて飯田と会った時なんか斑鳩が二人いる？と思ってしまったくらいだ。

葛城は…セクハラエロじじい、峰田と同じく煩悩の塊。

言い過ぎではない、事実だ。異論は認めない。

この前のパトロールなんかは遊園地の絶叫アトラクションに乗っててサボってたくらいだ、学炎祭を通して成長したとは言え、正直よく分からないし、サボってると断言はできないが…
「ねーねー、柳生ちゃん…今パトロール中に思ったんだけど…」
「ん？どうしたんだ？」
「……飯田くんのお兄さんも、パトロール中だったんだよね？」
「あ、ああ…」
「もし……ヒーロー殺しが出たら…どうしよう？」
「ッ……」
その言葉に柳生は言葉を詰まらせ、絶句する。
飯田の兄、インゲニウムはベストジーニスト程遠く及ばないが、それでもかなり名が知れた有名なプロヒーローであり、飯田の憧れの人物だ。
体育祭で観に来てた事も知ってたし、当時その理由で飯田はクラスの人気者にもなった。
それも当然だ、自分の両親がヒーローなら轟には父親がいるので人気者になるのも分かるが、飯田の場合は兄や両親もヒーローなのだ。
そんな兄がクラス皆んなの前で姿現して、飯田の兄がヒーローだと知れば当然人気者になるのも頷ける。
だが、学炎祭が終わったその日、悪夢が起きた。
その事件はヒーロー社会のみならず、忍社会にも大きな悪影響を与えた。
インゲニウムはかなりのプロヒーローとして世間に認められ、忍の存在を教え共に行動させるに相応しい人物だと見なしていたらしい。
しかしステインはそんな彼を再起不能とした。
流石の上層部たちもこの事態には驚きを隠せず、ステイン捕獲への更なる強化対策として、強化パトロールを実施させた。
柳生は口ごもる。
なんて言えば良いだろうか…ステインの名を聞くと自分も勝てるかどうかすら疑問を抱いてしまう。
誰にも負けないくらい鍛錬は積んで来た。

その自信があるからこそ、誰にも負けない忍になるという強い意志が自分を強くしてくれる。
死んだ妹の約束…
誰にも負けない強い忍になること。
だから相手が忍だろうと、敵だろうと、負ける気はしない。
当然、飛鳥たちや雄英生達にだって…
だが、ステインとなると何故か心が揺らいでしまう。
自分たちよりも上の存在、上忍を始末してるのだ。
自分よりも遥かに上にいる忍など、何万もいる。
そんな相手に自分は勝つことができるのだろうか？そう問われると返す言葉が見つからない。
今でも泣き出しそうにフルフルと瞳を震わせた雲雀が不安そうに柳生の顔を覗き込む。
雲雀も怖いのだろう…
柳生は雲雀をジッと見つめ、数秒間を置き、笑顔でこう言った。
「安心しろ雲雀、オレは雲雀を守る。何があっても絶対に」
雲雀はパァッと先ほどの表情から一転、光を孕んだ、希望を見るような純粋な目で柳生を見つめる。
雲雀は柳生に力一杯抱きついた。
胸と胸が当たり少々苦しいような気もするが柳生には関係ない、そして急に抱きしめられた事に驚きを隠せず、嬉しさのあまり思わず鼻血が出そうだった。
本当なら此処で鼻血を出しても良かったのだが、柳生は平然の表情と共に冷静さを保った。
知っている。
もしかしたら自分ではヒーロー殺しに立ち向かっても、勝てないことくらい。
返り討ちに会い始末されることなど、たかが知れてる。
自分で誰にも負けない忍になると言っておきながら、自分の弱さに呆れてしまう。
でも、言わずにはいられなかった。

どうしようもなく不安で、恐怖に心が支配されてる雲雀に、「いや、無理だ」だなんて言えやしない。
なら虚言でも良い、傍で彼女を守ろうじゃないか。
例え負けると分かってても、何もしずただ大切な人を守れず、死ぬよりかは…ずっと忍らしいじゃないか……
「さ、さぁ…パトロール…続けるぞ？」
「うん！」
何より、彼女の笑顔を守りたい。
妹と見間違えるほどに似てるからこそ、柳生は負けられない。
大切なものを、二度も失いたくないから。

「特に異常無しですね」
「うん、見た所この街は安帯かな～？」
違う地域で街を歩くは、月閃の生徒にしてヒーロー科Ｂ組のクラスに在籍する忍学生、夜桜、四季、美野里。
彼女たちもまた強化パトロールで見回っていた。
ここも柳生や雲雀ペアと同じく、三人ペアで組み遠く離れた場所で活動している。
見た所、皆んなと同じくこれと言った騒ぎやニュースになるような事件は何一つなく、安全だった。
皆んなは普通「何か起こらないかな～」と暇な時間によって来る言葉が出て来るだろうが、彼女たち三人は違う。

街が安全だと認識すれば、ホッと一息つき胸を撫で下ろす。
安全なのは良いことだ、願わくば永遠と平和な日々が続けば悲しむ人間が増えることもなく、幸せになるだろう。と心の中で呟いてしまう。
ただ、平和なのは良いことなのだが…暇ではない。
大変だ…
「あ～！夜桜ちゃん！あそこに限定販売ケーキが売ってるよ～！買おうよ～♪」
「いけません！そんなお菓子を買うほど余裕なものはありません！煎餅にしなさい！」
「やだやだ！もう飽きた～！全種類食べたし同じもので飽きちゃった！」
「煎餅は安いんですよ？それに比べて何ですコレ？値段が高すぎます！そんなものが無くても儂らは生きていけます！無駄遣いはよくありません！」
「嫌だあ！ケーキは別腹だもん！糖分摂取しないと、美野里…死んじゃうよ？」
「死にゃあしません…そんな大袈裟な……
そんな我儘言う悪い子はお尻ペンペン百叩きしますよ！」
「嫌だあ！ヤダヤダヤダ!!絶対に嫌だあ！美野里悪い子じゃないもん！」
「ならちゃんと言うこと聞きなさい」
「う、うぅ……はぁ～い」
この二人の会話のやり取りを見れば、きっとこう言うだろう。
お前らは親子か。と…
何処にでもいそうな家庭的関係な二人のやり取りに、四季は苦笑する。
夜桜は母親なら、美野里は娘、勘違いする人も実際多そうだ。
「これだから美野里ちんは子どもだって言われるんだよな～♪
んじゃウチ、ちょっくらトマトジュース買ってくね～♪」
「はい！……ってダメですよ!!何をそんなコンビニ寄ろうかみたいな

ノリで言ってるんですか！」
「え～？良いじゃんトマトジュースくらい、美野里ちんのようにケーキよりかはマシっしょ？更に言えばウチ本当は今日限定販売の超高級バック欲しいんだよね～、我慢してるんだし、ウチは良くない？」
「ダメです！それはまあ…確かにケーキよりかはマシですが…
そう言っているといっしかお金がすぐに無くなりますよ？
大体バックなど幾らでもあるでしょう？」
「え～!?夜桜ちん全然わかってないし～！トマトジュースはね、アタシの血液なんだから！バックもチョー可愛くてオシャレなんだよ？それにバックに限った話じゃないし」
「そっちの方がもっと怖いわ!!」
美野里よりではないが、四季も四季で案外我儘だった。
高級品もののグッズや服、アクセサリーなどは自分で買ってるから特に問題ないと月閃では彼女の事は大して気にしてなかったものの、強化パトロールが実施され、彼女が如何にどれ程我儘なのかを、肌身で感じ理解した。
夜桜は昨日、拳藤の話し合いの件で何処か変わったのか、生きハキハキとしたリーダーシップを取っている。
雪泉がいなくとも、きちんとリーダーとして振る舞えるか否か…
夜桜は昨日の一件から自分に厳しくなり、仲間をきちんと引っ張れるよう、仲間にも一層厳しくなった。
厳し過ぎる訳ではないが、以前よりかはキチンとしつけや注意することは多くなった。
流石に何でも怒ってばかりだと気が引けるし、逆効果になるので、優しく接する部分もあるので、特に仲間との関係に支障は無いため問題ない。
「夜桜ちんなんか変わったね？」と四季は疑問に思うものの、口には出さなかった。
夜桜に一体何があったのかは知らないが、四季はこれでも観察眼には優れてるため、大抵人の心の変化に気付くことがある。
昨日の出来事は知らないが、様子が少しだけ変だったので、きっと

帰りに何かあったのだろうと察しがつく。
「さあ、次行きましょう」
夜桜の言葉に二人は渋々と文句を垂れながらも彼女の背中についていく。
因みに雪泉と叢は何処にいるか分からない、ペアを組んでるのか、はたまた別々で行動してるのか…何方にせよ彼女たちならきっと大丈夫だろう。
夜桜は心にそう言い聞かせ、歩き出す。後輩、仲間と共に。

翌日の朝。
「うーっし！大分調整出来るようになったな小僧！」
部屋の中が少し散らかったこの部屋を他人が見れば、まず第一に疑問を持つのが「一体何があった？」と言う発言が出てくるだろう。
天井にぶら下がってるペンダントライトは少し揺れており、ソファは倒れている。
壁にはグラントリノが蹴ったかも思われるこの汚れ、足跡が僅かながらに残っている。
それだけでなく、血も少しだけ付いていた。緑谷の鼻から血が出てるので、恐らく鼻を壁にぶつけてしまい、血が出てしまったのだろう、彼は少しボロボロになりながらも壁にもたれていた。
――逆さまで。
「グ、グラントリノさんに…一回も当たらなかった……大分調整…出来たと思ったのに……！」
「……いや、以前よりかは予想以上に、大分成長してる。今はまだまだだがな…」

先ほどの疑問に答えよう。
つい先ほど、緑谷はワン・フォー・オールの感覚を大分掴んだので、グラントリノに個性を試していた。
昨晩、緑谷は自主トレで個性の扱いを慣れるべく壁蹴りの反復練習をしていた。
最初は上手く成功できなかったものの、それでも何とか練習したお陰か、個性の使い方は大分慣れ、ワン・フォー・オールの扱いが少しずつ上手くなり、今や体全身にワンフォーオールを巡らせソレを維持した状態で3分間グラントリノを相手に動くことができたのだ。
答えはソレだ。
その為双方部屋の中で飛び回ったり拳を振るったりで、部屋が散らばってるのだ。
だが、これだけの被害で済んだことに幸いを感じるべきだ。
もし二人がまともに本気でやり合ったらこの部屋は愚か、建物は崩壊する。
丁度初めて戦闘訓練で爆豪と戦った時と同じもの、それを想像すれば良いだろう。
正直言ってかなりハードルが高かったものの、あのグラントリノ相手に、頬をかすめたくらいだ。
当の本人は気付いてないものの、グラントリノは緑谷の才能に、久しぶりに驚かされ、不敵な笑みを浮かんでいた。
(こりゃあ化けるな……流石はオールマイトが見込んだ男だ……久しぶりにカスッたぜ…)
頬に僅かに流れる血を親指で拭い、心の中で緑谷の急成長に喜ぶ反面、この先ヒーローとしての成長に期待を寄せていた。
「まあ後はガンガン慣れてくだけだ!その前に飯食うぞ。たい焼き食べたい」
「っ!はい!」
今日の朝届いた電子レンジを開け、たい焼きを入れる。
昨日グラントリノが踏んづけてしまい壊れたので、新しい品を注文したのだ。

本人曰く「中古品だから壊れちまったらしい！」とさり気無い爆弾発言を吐き、緑谷は軽く引いてしまった。
本当にボケてるのかボケてないのか…分からない位だ。

「あの、グラントリノさん」
「ん？」
テーブルの上にはホカホカのたい焼きが六つ皿の上に並べてあり、緑谷はたい焼きを一つ手に取り、頭部を一口齧り、咀嚼する。
餡子の独特とした味が口の中に広がり、この甘さがつい癖になる。
そんな甘い食事の時間を過ごしながらも、緑谷は気になることがあるのか、グラントリノに質問する。
「どうして、忍学生のこと…知ってるんですか？」
「ハァ？お前オールマイトから聞いてるだろ？」
「いえ…サッパリ…ただ雄英教師を務めてたって情報と、オールマイトの師匠だということしか…」
「……アイツ絶対俺のこと忘れてたろ、今度あったら金的蹴ってやろうか…」
（怖っ!!?）
グラントリノは不機嫌そうな顔でもしゃもしゃとたい焼きを頬張りながら恐ろしいことを口に出した。
「……言えよなオールマイト……」
まあ良いや！なら俺が話すしかねえか、俺はオールマイトだけじゃなく、半蔵とも知り合いなんだ」
「ああ、そう言えば言ってましたね……」
半蔵とオールマイトが関わっているなら、当然その師匠であるグラントリノも知っている訳だ。
オールマイトだけじゃなく半蔵も一言も彼の名前を呼ばなかったので分からなかった。
だが半蔵と繋がってるということは、当然孫の飛鳥のことも知ってるだろうし、必然的に繋がり関係が見えてくる。
「これで分かったろ？別に簡単なことだ……

まあ、さっきの言葉が出てくるとなると、あの事、話してねえんだろうな……」
「え？グラントリノ何か言いました？」
「ん？ああ、何でもない、それより早くたい焼き食え、無くなるぞ？」
「ああ、すいません！」
グラントリノの最後の小声に上手く聞こえなかったらしく、緑谷はもう一度聞くよう耳を傾けるものの、グラントリノは茶を濁すように話を逸らした。
緑谷ももっさもっさとたい焼きを頬張り咀嚼し喉を通す。
たい焼き食べるとお茶飲みたくなってきた…
「まあ忍学生のこと知ってても、あんま知らねえけどな、学炎祭は噂で聞いた」
「そうなんですか？」
「おうよ。しかも半蔵の相手が月閃たあなぁ！雪泉が申し込んだんだろ？アイツもやるようなったなぁ、前まではカキ氷幸せそうに頬張ってたガキンちょだったのによ！」
「へ～……って、ええ?!!何で雪泉さんのこと知ってて?!」
「ありゃ？知らねえのか？俺は黒影とも知り合いだったからな」
「初耳!!」
又してもの衝撃発言に、緑谷は目を大きく見開いて驚く。
いや、これは驚かずにはいられない、あのグラントリノがここまで忍と関係を築いてたとは思わなかった。
オールマイトは当然黒影とも関係があった。そうなるとグラントリノが知っててても可笑しくはないのかもしれない…
オールマイトにグラントリノありとはこのことだ。
ないけど。
「まあ昔はようジャスミンと一緒に弟子を育ててたわ」
「ジャスミン…？ってオールマイトを!?と言うことは学生時代…？」
ジャスミンという名前に疑問を抱きながらも、オールマイトの学生時代、グラントリノの修行を受けてたという話を耳にし直ぐにヒー

ローノートを取り出す。
一体どんな修行を受けてたのだろうか？
「ひたすら実戦訓練で無理やりゲロ吐かせてやったわ！」
（えええ～～……）
「さらにジャスミン…いや、今は小百合か、アイツは半蔵が卑猥行為をする度に腹パン入れてたなぁ」
（ジャスミン…小百合って一体何者!?てかあの半蔵さんに腹パン!?）
グラントリノの止まらない、爆弾暴走発言に軽く目眩を起こす。
あの伝説と謳われてた二人に、こんな過去が…
だからオールマイトは恐れてたんだなぁとようやく理解した。
道理で震えるもんだよあれは。
因みに緑谷は小百合という人物がどんな人なのか知らないため、頭の中にクエスチョンマークを浮かべることしか出来なかった。
「でもな、生半可な扱いはどーしても出来なかった。
亡き盟友に託された男だったからな…」
ハァ…とため息をつくグラントリノのその表情は、何処か遠い物を見るような目で、とても悲しい表情に染まっていた。
「亡き盟友…オールマイトの先代って、お亡くなりになっていたんですか？」
「…あ？」
緑谷の言葉にグラントリノは顔を上げて、目をパチパチと瞬きする。
（まさか…この事も言っとらんのか？
……これは流石に言った方が良いぞ…俊典）
グラントリノは先ほどよりも深い、深刻そうなため息をつく。
まさか、ここまでオールマイトが隠し事をしているとは思わなかった為、そう心の中で呟いてしまう。
「なに！気にすんな！
今はな…」
最後の言葉だけとても小さい声でそう呟いた。
その言葉は当然緑谷に聞こえる筈がなく、彼は小首を傾げている。

本当なら別に今すぐ真実を言える。
言ったって良い、ワン・フォー・オールを所持してる彼には言わなければならない事だ。
だが、グラントリノは言わない。
何故なら、その真実はオールマイトの口から言わなければならない事だと判断したからだ。
言ってしまえば、オールマイトの、弟子のケジメを奪ってしまうことになる。

「んじゃまた訓練始めるぞ！早く成長してえだろ？」
「っ！はい！宜しくお願いします！」
いつか知ることになる。
その日が来るまで待とうじゃないか、彼にとって苦しいことになるかもしれない、それでも、言わねばならないんだ俊典。
グラントリノは再びタイマーを手に持ち、ボタンを押したと同時に、二人は動き出した。

「何事にも信念は必要だ…」
不覚だった。
まさか、こんな…こんな呆気なく、手も足も出ずにやられてしまうなんて…
「無き者、弱い者は淘汰される…当然のことだ……」
「死柄木！」
彼女は彼の名を必死に呼び叫んだ。

漆月の初めて出す悲痛な叫び、彼女の目には僅かながらに涙を溜めており、服には血が付いている。
ステインが死柄木に凶器を振るい、傷つき、血飛沫が飛び散った際に、体に死柄木の血が染み付いたのだろう。
彼女には怪我らしいものは見当たらない。つまり、ステインは彼女にだけは手を出さなかったのだ。
「だから死ぬ(こうなる)」
床には赤い鮮血が海のようにベットリと広がり、死柄木は右肩に深くナイフが突き刺されており、ねじ伏せられ、倒れていた。
あの悪の司令塔、死柄木弔を追い詰め、無傷で彼の体を踏みつけ二本のナイフを血に染め突き立ててるヒーロー殺しステインは、無慈悲でありながら、怒りに近い顔で死柄木を睨んでいた。
「ハハハ…ハハハハハ!!いってええええ!速え、躱された!強すぎだろオイ!
漆月!コイツもう要らねえ!お前の闇で、忍法で弱らせろ!」
「む、無理だよ…死柄木……私、動けない……ううん、動いちゃダメだよ……」
死柄木は弱々しい声を上げながらも、今自分が死にそうな状況に陥ってるにも関わらず、彼は笑っていた。
それこそ不気味なくらいに、恐怖やホラー映像を軽く超えてしまう程に。
死柄木は漆月に命令するが、彼女は弱々しく首を横に振る。
別に体には特に異常も無ければ問題ない、黒霧とは違い、体はちゃんと動かすことは出来る。
ステインの個性には掛かっていない。
では彼女は何故動けないのだろうか?
それは、自分が少しでも怪しい動きをしたと見なしたら、自分だけでなく、死柄木も殺されてしまうからだ。
ステインは凶器を彼の首に当てている。
丁度少しでも斜めに切ったら、浮かんでる血管を斬ってしまいそうな…

ステインは漆月を睨み付けるなり、激しい眼光を放つ。
漆月はソレを見るなりして、体を縮こませていた。
死柄木を助けたい。
しかし、「少しでも動いてみろ、コイツを殺す」と言わんばかりのこの煮えたぎる殺意の視線。
ステインの個性で動きを封じられてるのではない、動けないのだ。
動いて仕舞えば、自分ではなく死柄木が死んでしまうという恐怖、それが漆月を動かせなくしていた。
(漆月は…ダメだ!!アイツは今使えない!となると…)
「黒霧!コイツ飛ばせ早くしろ!」
ワープゲートの黒霧なら…と微かな希望を信じて彼の名を叫び命令するが――
「申し訳…ありません……死柄木弔…
体が動かない……恐らくこれが、ヒーロー殺しの恐るべき個性…!?」
黒霧も漆月と同じく動けなかった。
いや、動けなかったというよりも、動けないのである。
何が違うのかと言うと、漆月のように精神的に動けないのとは違い、彼は物理的に動けない、体に力を入れてもビクともしない…
黒霧のコートにはステインにより斬られた部分があり、服の斬れ目から血が染み着き流れている。
ステインの個性は恐らく、相澤先生と同じ『個性を消す』抹消型に入るか、または「斬る」ことが条件で個性を発動してるのか…はたまた血が関係してるのか…
個性については一切不明な点が存在するが、三人相手にヒーロー殺しステインに手も足も出なかったのだ、これが今の現状。
「…俺が……ハァ……何でもかんでも、忍を殺してると思うなよ?
俺が忍を殺してるのは、偽物だからだ……私利私欲に塗れ、本当に忍が存在する理由が……見当たらないからだ……己が戦うべき真の理由を、忍供は持っていない……ヒーローと忍は何ら変わらない……

だから殺すんだ、粛清するのだ。
英雄(ヒーロー)も同じだ……英雄が本来の意味を失い、いつしか偽物が溢れかえる社会と成り果てた……
偽物が蔓延るこの社会も……徒らに力を振りまく犯罪者も……全員粛清対象だ……ハァ……」
ヒーロー殺しは死柄木のように、何でもかんでも殺してる訳ではない。
ステインも確かに死柄木と同じくそこまで忍の知識に関しては疎い方で、漆月から話を聞いただけ…
だが、ステインには分かるのだ。
直感的に、忍が本物かどうか、粛清するべきか否か…と。
今まで幾多ものヒーローを再起不能、殺害して来た彼だからこそ言える言葉。
これぞ正に経験の差というヤツだ。
(……漆月と初めて会った時に、殺しておけば良かったか?
あの時ヤツから信念を感じたので、生かしておいてやったが…これは、少しでも期待した俺が浅はかだったとしか言いようがないな……コイツを殺してから…今度はヤツも殺すか……)
ステインの左手を持つナイフが、少しずつ動き出し、切れ味の良い刃が、死柄木の掌を傷つけようとしたその途端、ステインは予想外な殺意に襲われることになる――

「――おい」
「?」
「ちょっと待てよ、おいおいおい、まて待て、これはダメだ…この掌は…駄目だ」
死柄木の先ほどとは少し違う声色、自身に襲い掛かっている痛みなど関係ないと言わんばかりに、眉ひとつ動かすことなく左から首に当てられてるナイフを一掴みする。
「――殺すぞ」

「――!?」
殺すぞ。
その言葉を聞いた途端、ステインの背筋は凍りついた。
何気ない、今の人間誰もが口にするその言葉。
敵がよく使う言葉…ステインにとって「殺す」という言葉はよく耳にする。
ヒーローも、忍も、敵も、今まで粛清して来た人間は必ずその言葉を口にした。

だが、死柄木だけは例外だった。

彼だけは違う、死柄木の言葉には、重みがあった。真に迫る言葉だった。
聞き慣れてるステインでさえ、背筋を凍らせる程の、死柄木の尋常じゃない殺意…
「口数多いなぁ…信念?
んな面倒くさい、仰々しいもんないね……強いて言えばそうだな…
オールマイトだ」
――コイツは一体……
死柄木の声が発するたびに少しずつ震え、凶器(ナイフ)がボロボロと音を立てて、少しずつ、粉々に崩壊していく。
「俺はあんなオールマイト(ゴミ)が祀り上げられてるこの社会を…
忍(ゴミども)が影で支えてるこのクソみたいな社会を…
目茶苦茶にブっ潰したいなァとは思ってるよ!!」

ゾア……

死柄木のこれまでにない、尋常じゃない、異常な殺意。
こんな殺意を肌身で感じたことなどない、この歪んだ殺意…

コイツは今笑ってる。
掌のマスク越しから、コイツは狂気とも呼べるその歪んだ笑顔で、笑っているのだ。
見てるだけで気味が悪い、ゾッとしてしまう。全身が凍りつくような殺意に襲われ、身震いし、ステインに初めて「恐怖」を与えた。

死柄木弔。
お前は一体何者だ？
何故、こんな歪んだ殺意を出せる？
今まで、コイツの身に何があったんだ？
そう自然と疑問が頭の中に遮る。
この歪んだ男、過去に一体何が彼をそうさせた？
歪み。
そう言えば…漆月と初めてあった時も…死柄木に近かったような気がする……
ステインの脳裏に浮かぶ光景、それは床に伏せられ、血を流し、涙を流しながら彼女はステインにこう言った。

『私は!!忍を否定する！忍をこの世から無くしたい！社会を壊したい!!
だって、今まで誰も受け入れてくれなかった……皆んなに、そして忍に、私は生きることを否定された!!
何もしてないのに…何も悪いことしてないのに……生きてるだけで、のけもの扱いされた…!!
だから、私を見下した人間も！追放した忍も！全員殺してやるから…そう思ってるよ？』

アイツにも一体何があったのかは分からない…過去の理由がどうであれ、私怨で人を殺すのはステインの意思に反していた。
気になる言葉が幾多も存在する。
彼女はあの時嘘を付いていなかった…だからこそ、より現代社会を

崩壊しなければという意思が強まった。
忍の社会も崩壊するべき対象と見なした。
もし、この社会が、彼女をそうさせたというのなら…粛清する前に、社会を崩壊し、責任を問わねばと思ったのだ。
――バッ！
死柄木の右手が動いたと同時に、殺意に敏感なステインはぴったりタイミング良く、後方に飛び退がり、彼の攻撃を避ける。
「あーあ……折角さ、前の傷が癒えて来たとこだったのに何してくれてんだよ……
こちとら回復キャラがいないんだよ……
どう責任取ってくれんのかなぁ？」
野生の獣のようにギラついたその殺気満々な、歪んだ目つき。
血がポタポタと滴り落ちる、傷ついた腕。
癇癪を起こし、癖になってるのか、左手で首を掻き毟る。
ゆらりと動き出す死柄木弔。
彼を一言で表すなら、歪んだ殺意の塊とでも言うだろう。
「それがお前か…」
「…は？」
「お前と俺の目的は対極にあるようだ……だが、『現在（いま）を壊す』！
この一点に於いて、俺たちはお互い共通してる……
良いだろう、仮としてだが、敵連合…お前たちと協力してやる」
「……え？」
「は？ざけんな、帰れ、死ね、くたばれ。お前は俺のこと最も嫌悪する人種なんだろ？何様だお前は」
何を言いだすかと思えば、突然彼の言葉から協力要請を掛けられた。
漆月は何がなんだか分からず、ただ戸惑う表情を見せ、死柄木は幼稚的なのか、暴言を暴露する。
それも当然の反応…つい先ほどまで自分は殺され掛けたのだ、そん

なヤツが「協力してやる」と上から目線で物語ってるのだ。
当然死柄木からして見れば「何様だ」と言われても仕方ない。
「真意を試した…人は死を前にして本質を表す。
お前の場合、漆月と同じく異質だが、想い、歪な信念の芽がお前には宿っている……
お前がどう芽吹いていくのか…お前らを始末するのはそれを見届けてからでも、遅くはないかもなァ……」
ステインは腕を広げ、死柄木、漆月、黒霧の三人を見渡しそう告げた。
「っと言うことは……じゃあステインは……私たちに協力してくれる……なら、忍を殺すことも!?」
「おいおい何喜んでやがるんだ漆月、お前も殺害予告されてんだぞ?
結局始末するとかさ、こんなイカれた奴がパーティーメンバーに入れるなんて俺は嫌だし御免だね」
「しかし、死柄木弔。彼が加われば大きな戦力になる、忍を対抗する唯一欠かせない存在……我々敵連合に必要な人材…
交渉は成立した!」
漆月は先ほど泣き出しそうな表情から一転、ステインが一時的に仲間?になることに歓喜の笑みを浮かべ、死柄木は嫌そうな声を上げ首を横に振るものの、黒霧は無理やり彼とステインを丸め込み、よって敵連合にステインが加わり交渉成立した。
因みに黒霧は今になってようやく体を動かすことが出来た。
「ハァ……用件は済んだ!さァ、俺をもう一度『保須』へ戻せ!
あそこにはまだ為すべきことが残っている……」
ステインは舌を出し、黒霧にそう言うと、彼は死柄木のように嫌な声を上げることなく、自身をワープケードに変えた。

保須市。
インゲニウムのヒーローを失った飯田天哉は、ノーマルヒーロー、マニュアル事務所の下で働いていた。
彼は本当ならもっと上からの指名もあったし、あのインゲニウムにも指名が入っていた。
ただ彼はもう再起不能となったのでキャンセルという形になってしまったが…
彼が此処に居るのは、研修で何かを学びに来たのではない…
「いやぁ救かったよ！君みたいな優秀な学生がウチに来てくれるなんて！地味なパトロールばっかになるけど、ヒーロー殺しがいつ現れるか分からないからね、街中警戒モードだよ」
「そうですね…ヒーロー殺し、現代社会の包囲網でも捕らえられぬ神出鬼没ぶり、予測不能な事態を招く敵…警戒するのも当然ですね…」
パトロールを終え、事務所で一時休憩を取る、マニュアル事務所のノーマルヒーロー、マニュアル。
まさか彼が此処に来てくれるとは思ってもなかったらしい。
飯田はタオルで汗を拭い、メガネ拭きでメガネを綺麗に磨く。
ヒーロー殺しステイン。
集めた情報によると、これまでに出現した七ヶ所全て、必ず四人以上のヒーローに危害を加えている。
目的があるのか、ジンクスかは不明だが、必ず出現する。
――保須ではまだ兄さんしかやられていない。
もし、飯田の推論が正しければ、もしかしたら…保須市で奴は必ずまた、現れるのではないか？
飯田の脳裏に浮かぶは、血を流し、床に伏せられた兄の姿。
奴はこの街に再び現れる可能性が高い。
――来い、ヒーロー殺し！
この手で、必ずお前を始末してやる!!

飯田の心は、ドス黒い渦の感情に、支配されていた。
その目は、兄への復讐…
ヒーローとは違う、殺意の目。

保須市に、大波乱が待ち構える。

76話「インゲニウム」

「ここが、保須市かぁ～」
東京、保須市はいつもより街が賑やかだ。
この地域でヒーロー殺しの事件があったからなのか、街への警備が一層と厳しくなり、ヒーローたちが街を巡回し見回っている。
4、5人のヒーロー集団が街を歩いてる姿を見受けられれば、忍っぽい雰囲気を漂わせている人間も…
自分と同じく忍の独特とした雰囲気を漂わせてる人間は大抵忍だ。
一般人やそこらのヒーローが気づくはずがない、ため一般人に紛れて強化パトロールを行なっている。
人の影に忍び寄る者、それが忍。
「浅草より、賑やかだね。でも、あの事件のことがあったから当然なのかな？」
飛鳥は浅草にいた時を思い出し、保須市と比べてしまう。
この地域でインゲニウムはヒーロー殺しにやられたのだ。
やられたと言っても殺された訳ではなく、一命を取りとめた為、不幸中の幸いではあるものの、喜べないものだ。
「ヒーロー殺し…一体どんな……」
これまでに幾多ものの事件は聞いてきた。
事件を起こせば起こす程に名は上がり、社会へ悪影響を与えていた。
この一週間、ヒーロー殺しにどのような動きが見受けられるのだろうか…？
これだけの街の警備、捜査網に引っかからないとはいえ、忍も派遣している。
いつも以上に厳しいこの街で、彼は現れるのだろうか？
「何としても、止めないとね…！」
飛鳥は風でたなびく赤いスカーフを揺らし、パトロールを開始した。

保須市同時刻。
飛鳥と同じくこの街で飯田も、マニュアルと同じくパトロール活動を行なっていた。
「いやぁ悪いね！昨日に続き今日もパトロールさせちゃって、代わり映えなくて…」
「いえ…パトロールは大事ですから…」
コスチュームを着用してる飯田は、別人のように見える。
スッポリと顔を覆う白いヘルメットアーマーを被ってる為なのか、表情は見えない。
マニュアルは少し間を置き沈黙する。
「……あのさ、聞きにくいんだけど……もしかして君、ヒーロー殺し追ってるだろ？」
「！」
マニュアルの唐突な言葉に飯田は体を反応し、慌てふためき首を横に振り否定する。
「そ、それは……」
「ああ！いや別に良いんだよ?!ホラ、ただちょっと疑問に思ってさ、君がウチに来る理由が見当たらなくて…ホラ、君他にも上から指名入ってると思うし、どうして態々についたんだろ…って思ってね……
いや、来てくれたのは嬉しいんだよ!?でもさ…
私怨で動くのはいけないよ？」
「！」
この世代、ヒーローが個性を使用できるのは、ヒーロー免許、国による使用許可、それがあってこそヒーロー活動が行える。
つまり、ヒーローが個性を使って活動を行えるのは、国による許可があってこそ成り立つものであり、私怨や許可無しに個性を使う権利

はない。
個性が規制化された世の中、刑罰や逮捕はヒーローには無いわけで、本来個性の使用は許されていない。
仮にもしそう捉えられた場合、重罪となり処分が下される。
ＵＳＪで１３号先生が言ってたのはこの事だ。
一見世の中成り立っているように見えるが、実際この社会は複雑な形で出来ている。
その一つが個性の規制化…世の中一体誰かどのような個性があるのか分からない…法律が無ければ超常黎明期と同じく社会はより混乱に陥り、犠牲者も絶え間無く増える。
増幅する敵（ヴィラン）、日々上昇する犯罪率、そして人を簡単に殺せる個性、それを防ぐために、社会はより厳しい法律、個性の規制化を掛けたのだ。
犯罪者じゃなくとも、個性で悩まされる人間もいれば、罪や悪意がない人間とはいえ、人を簡単に殺せてしまう個性を持ち、それを人に向けてしまう…
そうならない為に、個性の厳しい規制が存在する。
実際爆豪なんかは忍学生に個性を使ったのだ。
幸い処分にはされなかったものの、それでも本来ならば警察の事情調査をされる身になるものだった。

「飯田くん、君の兄、ヒーロー殺しの件に関しては辛いこともある…でもね、自分の私怨で個性を他人に傷つけてはいけない…例え相手が許されない犯罪者だとしても、人間だ。
犯罪者を傷つければ、君も犯罪者になる……
あっ！でもね！ヒーロー殺しに罪がないとかそう言うんじゃなくて！君超が付くほど真面目だし、視野が狭かったから！だからその…うん、案じた！」
「…ご忠告感謝致します」
「良かった～…」と一息つくマニュアル。
彼はインゲニウムに比べて然程大した功績や名誉が無ければ、名前は余り上げられていないヒーローだ。

実力も、個性も、全て普通。
ノーマルヒーローの名に相応しい彼だが、相手を思いやる心や、他人を気にかける精神は一流のプロヒーローと言っても過言ではない。
飯田のことを思って言ったのはいいが、当の本人は…
（……じゃあ…どうすれば良いんだ……
この怒りを…この抑えられない衝動を…どうすれば良い!?）
抑えられない怒り、湧き上がってくる殺意の衝動、それらのドス黒い渦巻く感情が飯田の心を支配していた。
拳を強く握りしめ、息を押し殺し、平然な態度を保っていた。
（分かっている！これが、僕のやってる行為がヒーローとして相応しくないことなど、本当は…分かっている……
でも、追わずにはいられない。
兄さんの希望を、ヒーローとしての夢を、全て踏み潰し否定したアイツを…僕は許せない）
飯田は、身も心も、復讐心に染まっていた。
その危険な闇に近いドス黒い復讐心は、新・蛇女子学園の、かつて復讐に身を染めていた両備と両奈と同じく、禍々しい殺意を抱いて……

同時刻、保須市。
廃墟の屋上ビル。
不穏な風が騒めくように吹き始め、人気のない場所に黒い空間が広がる。
そこに現れるは、血に染まった赤いバンダナに、ボロ雑巾のような布が風で揺らぎ、全身に携帯した刃物を持つ男、今や全国指名手配犯、ヒーロー殺しステインが姿を現わす。

「保須市って、思いの外栄てんな」
その後ろから、首を掻き毟る死柄木弔も現れ、それに続くかのように漆月も出てくる。
ステインにより傷つけられ、治療を受けてないせいか、腕の切傷から血がポタポタと滲み出る。
「ちょっと死柄木腕出して、傷の治療してあげるよ」
「ハァ？要らねえよ、つかお前今になって急になんだ、あの時動かなかったじゃねえかよ」
「だからだよ死柄木、そんな怒んないでってば」
あの時自分が死柄木を救けてあげれられなかった事に悔いがあるのか、彼の傷を治療してあげると言ってるものの、死柄木は忌々しそうな目でギラリと彼女を睨みつけ、断固拒否する。
漆月はぷくぅ…と頬を膨らませ、胸から包帯、懐から消毒液など取り出し、強引に治療しようとする。
ステインは後ろにいる二人の喧騒を気にせず、ヒーローや警察が巡回してる街を見下ろす。
「この街を正す。
そして、己の過ちや愚行、偽物だと分からせる、その為には、犠牲が必要だ」
「それは先ほど仰ってた、やるべき事…ですか？」
「ああその通りだ、お前は話が分かる奴だな…」
ステインはワープゲートを閉じる黒霧に一切目をくれず、ただ何も知らずゆくゆくと愚者が生きるこの街を、睨んでいる。

ステインの視界に映るは偽物。
談笑しながら街を徘徊している黒スーツを着た二人組の男女ペア。
パトロールの警備が緩く、やる気が見出せないヒーロー。
欠伸をしながら眠たそうな気怠げヒーロー。

視界に映る度に殺意が湧いてくる。
ああ、殺したい。

直ぐに血に染めてやりたい。
誰かが血に染まねばならない、一般人を巻き込む気など更々ないが、偽物は別だ。
粛清し、正してやる術がある。
偽物がヒーローを語るなど許されれはずがない。
なぜ偽物を殺すか？偽物が偽物を造るからだ、悪影響を与える社会のガン、汚物だからだ。
人が何故ヒーローに憧れるようになったか？それは、ヒーローが存在するから。

弱きを救け、強きを挟る――

世界に羽ばたき、脚光を浴びせた一人の男、平和の象徴オールマイト。

オールマイトが大きな理由の一つとなる。
彼に憧れ、彼のような人間になりたい、ヒーローになりたい。
そう思う人間は幾らでもいる。
数えきれない程に、それこそ指が幾つあっても足りない程に……
彼は素晴らしく、ステインもまた憧れていたからだ…
彼のような、誰もが認める最高のヒーロー。
彼だけだ。
正義を名乗って良いのは、本物のヒーローを名乗って良いのは彼だけ…
彼こそが本物であり、本来あるべきこの社会は、彼のように清く、正しく、強き信念、曲がることのない正義の意思、折れない柱、英雄の光、それらを兼ね合わせた者、それこそオールマイトのような人間がヒーローとして世界を成り立てる、あるべき真の姿。

ステインは、そんなヒーローに憧れた。

だから許せない。
今この世界にいる英雄は、この社会に生きるヒーローは何だ？
結婚したい、金が欲しい、家族の為、名誉が欲しい、地位が欲しい、認められたい、モテたい、敵（ヴィラン）を倒したい、個性を使いたい、テレビに出たい。
私利私欲、欲望、我儘、自己満足、自身への利益、そんなゴミのように汚れた偽物ばっかりだ。
いつからヒーローは堕落したのだろうか？
ヒーローが職業だと？アイドルや芸能人とは違う。
ヒーローとは見返りを求めない者。
他の為に命を削り、拳を握り、笑顔で人の命と心を救ける、正義を名乗るに相応しい人間、それがヒーローだ。
命を救けるだけでなく心をも救い出すオールマイトを見て、何度感激したことか、未だに忘れない、あの正義感からくる高揚感、抑えられない正義への衝動。
オールマイトという存在は、神がこの世界に与えた、希望とも呼べる眩い光。
神が与えた、大いなる聖なる光と謳歌しても過言ではない。

ああ、なんて素晴らしいんだろうか。
何故オールマイトのようにならないのか、それこそ疑問を抱いてしまうくらいに、オールマイトの大きな正義の存在が、彼をヒーロー殺しへと変えてしまったのだ。

憎くて許せない。
そんな神聖な光に、英雄の元にゴミのような存在が、汚物が、偽物が、ヒーローという皮をかぶり英雄として褒め称えられ、脚光を浴びている。
ソレは英雄を愚弄してるに過ぎない。
本物の英雄ではない、ヒーローを侮辱してると同等だ。
そんな幼気な子供たちが、今の偽物のヒーローを見ればどうなるか

？

否。

ソレに憧れ、自身も偽物へと変わる。

偽物になってしまう…悪影響を与えてしまう…

だからこそ、この社会を正すべく、何が何でも偽物は犠牲となって罪を償わせなければならないのだ。

行き過ぎた正義。

雪泉たち月閃女学館の五人がああなったように、ステインは雪泉たちの師匠にして彼女の祖父である黒影と似ていたのだ。

ステインは彼と同じ道を、歩んでしまったのだ。

行き過ぎた正義は悪になる。

半蔵の言う通り、笑えぬ話……だが、ステインは自分の行いを罪だと知っても、許されることのない行為だと言うのも、誰にも言われなくても分かっている…

ヒーローに憧れた自分が、一番よく知っている。

知ってるからこそ、粛清するのだ。

本当にヒーローを憧れ、ヒーローのことを思うのなら、粛清し続けなければならないのだ。

本物のヒーローを取り戻す為に…

そして忍も同じだ。

ステインが今まで見てきた忍もヒーローと同等…偽物だらけだった。

何より信念が見えない…忍が存在するその理由が見受けられない…

暗殺、諜報活動、隠密、ｅｔｃ…

確かに忍と言えばこう言った手を汚した任務を行うのは当然だろう……

だから何だ？

それが人として、世の為になるのか？
国からの命令？それで人を殺して良い理由にはならない。
自分が言うのも何だが、忍が人を殺す…しかしそれは一般的に放送されてるニュースは愚か、表社会は何も告知しない…
それどころか自分が殺害した忍すらも、世間には流されてないのだ…
つまり国は、上層部は、忍の命など唯の駒、どうでも良いのだ。
忍とは言え人間、その命の死を隠密にするこの腐った社会…
何をどう言おうと、今まで見てきた忍は全員、犯罪者であり偽物だ。
「ヒーローとは、偉業を成し遂げた者にのみ許される称号！
ヒーローも忍も偽物しか存在しない…多すぎるんだよ…私利私欲に塗れた英雄気取りの拝金主義者が…!!どいつもこいつも腐っている…腐敗した社会だ!!
この世が自らの誤りに気付くまで、俺は現れ続ける――」
禍々しい殺意を、信念をその身に宿し、背中に収めてた刀を抜刀し、彼はヒーロー殺しとして粛清する。
さあ、今日は一体誰が犠牲となり、血に染まるだろうか…
「なぁにが俺は現れ続けるだよ気に入らねえ、そのまま死ねよ…
結局やること草の根運動…健気で泣いちゃうね」
そんな彼を殺意ある目で遠く睨み付ける。まだ先ほどのことを根に持ってるのか、声を荒げている。
「ですが死柄木弔…彼をそうバカにもできませんよ？」
「どう言う意味だ？」
黒霧の体は靄なので、どう言った体の構造か分からないが、人差し指らしき靄を立てる。
「事実今までに彼が現れた街は、軒並み犯罪率が低下しています。
ある評論家や上層部が『ヒーロー達の意識向上に繋がっている』と分析し、バッシングを受けたこともあります」
「あ～、それ知ってる。忍側もそうらしいよ？」

黒霧の丁寧な解説に続き、死柄木の腕を治療している漆月も解説する。
「何でもヒーロー殺しが現れる理由、そして忍を殺害する動機を探った結果、『我々は何か大事なものを見落としてないか…
今の忍達では彼の思う壺、我々もヒーロー達と同等に変わらなければならないのでは？信念を持たない者は彼にやられてしまう、我々忍側にとって、彼は忍殺しのステインと名付けましょう…』って、何たら星導…
ああっ！思い出した、ゾディアック星導会の『麗王』とか言うお偉いさんの忍が言ってたなぁ～、悪忍だけど。ニューチューブで見たことあるよ」
「成る程、それは素晴らしい！ヒーローと忍が頑張って食いぶち減らすのか！
ヒーロー殺しはヒーローブリーダーでもあるんだなぁ！
回りくどい!!」
ヒーローと忍、お互いの社会にとって彼は驚異な存在でしかない。
このまま続けば、二つの社会に益々悪影響を与えてしまい、彼の思う壺になってしまう。
それなりの対策をしなければと向こうにも考えがあるのだろう。
「でもなぁ…やっぱ合わないんだよ根本的に…ムカつくし、ウゼェし…
オイ黒霧、脳無だせ」
彼は又も黒い靄を増幅させ螺旋状に歪み、黒い渦を連想させ黒い空間が広がる。
「俺に刃ァつき立てて、タダで済むかって話だ…アイツみたいな回りくどい説明なんていらないんだよ。
ようはブッ壊しいたいならブッ壊せば良いって話…ハハハッ……！」
そして黒い空間の中から、異形で禍々しい、怪物と思わせる改人・脳無が四体、黒霧の空間から姿を現わす。
目が四つの腕が長い、関節一つ多い細マッチョな体つきの脳無。

上顎が無ければ顔もない、下顎から上が全て脳で埋め尽くされ、目が無い…下半身はＵＳＪの改人と同じ体を持つ脳無。
口部分が黒い金属製のマスクで口元を隠し、屈強な身体に巨大な翼を持つ、飛行型の脳無。
右目に刀の傷痕が残ってるのか、右目は白目をむいており、屈強な身体に口か白い吐息を吐き、唾液を垂らし、まだ安定してないのか、脳無の口から「コロ…ス！」と、僅かながらに呟いてるのが聞こえる。
下半身はジーパンを履いており、肩から突起物が出ている。
「さあ大暴れ競争だ。
アンタの面子と矜持ブッ潰してやるぜ悪党の大先輩」
その言葉と同時に、四体の脳無は四方に飛ぶよう姿を消した。
さぁ、始まりだ。
死柄木弔のデスゲームが、ヒーロー殺しという悪夢が、保須市を襲う。

同時刻、渋谷へと向かう新幹線は、豪速で走り出している。
その新幹線の中の乗客は、緑谷出久とグラントリノが座っていた。
「えっと、着く頃には夜ですけど本当にいいんですか？」
「ああ、夜だから良いんだよ。
その方が敵は出やすくなるしな！何よりその方が小競り合いあって楽しいだろ？」
「た、楽しくは無いけど、良い職場体験にはなるかと…納得です…」
なぜ緑谷たちが渋谷へ行くのか、それは敵（ヴィラン）退治。
いつ迄もグラントリノの所で修行を受けては意味がない、元言えば職場体験、指名したからにはこう言ったヒーロー活動をさせるのも必

要だ。
緑谷は知識や敵の分析、吸収力は凄まじい。だからこそ、グラントリノの所ばかり戦っていては全く違うタイプへの対応でつまずいてしまう。
そうならない為に渋谷へ向かって様々なタイプと状況の経験を積むフェーズとなったのだ。
と言ってもプロヒーロー達が相手にする強力な敵や事件には触れず、チンピラ程度の為そこまで気にする必要はない。
本当ならこの地域で敵退治を進めるのも良いのだが、それは出来ない…
ここの地域は過疎化が進み犯罪率も低い。
都市部のヒーロー事務所が多いのは、それだけ犯罪が多いからであり、人口密度が高ければそれだけトラブルも増える。
その為自分たちは渋谷に向かうのであった。

渋谷、保須市を横切る場所…
緑谷は保須市のことと、飯田のことを思い出し、不安な顔立ちでスマホを手に取る。
ＬＩＮＥで飯田と連絡をするも、既読がつかない…何時もなら3分以内に既読が付くという自動設定にでもなってるのかと疑わしく思えてしまうくらい、彼な既読は早いというものなのに、３０分経っても返事がないのだ。
多分気付いてないのか、或いは職場体験で忙しいからなのか…
そう思ったが、何やら少し違う違和感を感じた。
「おい小僧！座りスマホか！くぅ～…！近頃の若いもんは！
で、誰と連絡してるんだ？半蔵の孫か？飛鳥と付き合ったのか？彼女か？」
「えっ!?あっ、いや違います…！てかてか！僕が飛鳥さんとなんて!!そんな、そんな…！」
「何を動揺しとんだ小僧は…
カァ～！これだから近頃の若もんと来たら！青春楽しんでるみ

てえだな！」
「だから違いますって――――」
――ドガアアアアアン!!
「「!?」」
瞬間。
新幹線のアナウンスが流れることなく、新幹線の横扉が爆破しそこからヒーローと一般人らしき人間が中に吹き飛ばされた。
一般人らしき…と言っても本当の正体は忍なのだが…一般人やヒーローには知るはずがなく、傷だらけの二人は痛手を負っていた。
爆発の後からアナウンスが遅れて流れ出し、乗客達や緑谷はこの瞬間に一体何があったのか思考が追いつかず、目を丸くする。
「う…あっ…！まさか…あの化け物…」
「んだよアイツ！なんだあの化け物！見たことねえぞ！」
ヒーローがむくりと起き上がった瞬間、乗客の皆は大きな悲鳴を上げた。
――ドッ！
そしてヒーローの顔を何者かが手で鷲掴みし、乗客席に思いっきりぶつける。
乗客席に血が染み着き、ヒーローを投げ捨てるかのように乗客側に投げ込んだ。
その正体は…
（嘘だろ…！脳無!!?）
先ほど死柄木が保須市へと送り込んだ改人・脳無だった。
一般人に装った下忍は乗客たちを気にせず素早く瞬時にクナイを取り脳無の心臓部分を目掛けて凶器を振るおうとするも…
ガシャアアアン！
脳無は女性の下忍を掴み、新幹線の窓ガラスを思いっきり叩き込むかのようにぶつけ、破片が忍の身体に突き刺さり、向こう側へと放り

投げる。
姿が途方もなく消えていく。
「キャアぁぁぁぁぁ!! 敵(ヴィラン)よ!!」
「おいここ新幹線だぞ!?」
「外からやって来たのか!?ヒーローと一般人がやられた!!?」
乗客席にいる人たちはパニックになり混乱している。
悲鳴を上げるあまり、耳がつんざいていたい。
しかし今はそんなの気にする場合ではない、問題はあの脳無がなぜ此処に――
「――座ってろ小僧!」
最初に脳無に飛び込んだのは、隣に座ってたグラントリノだ。
彼は小さい身体ながらも、忍や脳無に遅れを取らない、猛スピードで脳無に体当たりをかまし、乗客や新幹線から離れるよう、被害が広がらないよう離れさせる。
「グラントリノ!」
ワンテンポ遅れて緑谷が叫び、壊れた扉から見える外を覗き込む。
ここは保須市だ、その街は景気の良い街ではなく…
ドガァン!
ボガァン!
爆発の連鎖が続くかのように、街の被害、爆発が四つ。
一つはグラントリノが脳無を引き連れ建物に当たったのだろう…
他の三つは、同時に爆発を引き起こした。
――何だよ…これ。
殺風景。
そう呼ぶに値する。
あの三つの爆発は?この街で一体何が起きてるんだ?あの脳無はなんだ?
脳無、敵連合?
おいおい、嘘だろ?
――飯田くん!

この爆発の騒音と共に、忍のみならず、忍学生たちも…
「な、何今の爆発？」
街への巡回をしていた飛鳥は、爆発の方に視線をやる。
新幹線から煙が巻き起こる、どうやらあそこで事件があったようだ。
すると考える時間すら与えてくれないのか、突如窓ガラスの破片が飛び散ると共に、高いところから血だらけの一般人…いや、この気配は忍だ。
忍が空から降ってきかのように、落ちてくる。
「!?」
飛鳥は考えるより先に、反射的に体が動き出し、降り落ちてくる忍をキャッチする。
お姫様抱っこのような形になり、傷は見た所酷い有様だ。
おでこから血が流れ、激痛に悶えている。
身体には所々、ガラスの破片が刺さっていた。
「大丈夫ですか!?一体何が…?!」
「あぁ……うっ…くっ!!
ハァ…ハァ……に、逃げろ……ヤバイ…、アイツは……ヤバイ……逃げろ……殺されるぞ……」
傷ついた彼女は目を瞑り、気絶した。
呼吸や脈はある。
治療を受ければ問題ない…だが、忍をああも容易く倒すとなると…考えられるのは……
「敵…」
「ちょっと君!もしかしてこれ…」
後ろ振り向くと、ヒーローや一般人の服に装った大人の忍が４、５人。
爆発の騒音に駆けつけに来たのか、忍だと瞬時に理解した彼女たち五人は飛鳥が抱えてる、ボロボロに傷ついた忍を見つめる。

「これは！」
「忍…一体誰がこんなことを！」
飛鳥は彼女たちに引き渡すように忍を授けた。
彼女たち二人は忍を抱きかかえ、治療を受けさせるよう仕向け、残りの三人は「すまない、感謝する」と言い残した後、姿を消し事件に嗅ぎつけ調査し始める。
「一体何が…起きてるの？この保須市で…一体…」
突如ヒーローと忍に降りかかってくる理不尽という名の火種。
警備が手強いこの状況の中、一体何がどうなってるのか…
飛鳥は嫌に冷たい冷や汗を頬に伝わるよう滴り、事件の元へと駆け寄り走り出した。

「おいおい、こんなご時世に…馬鹿な奴もいたもんだ…」
遠く離れた場所には、街のパトロール活動を行なっていたノーマルヒーロー、マニュアルが冷や汗を垂らし、事件が発生した場所を目を細めて見つめる。
後ろには白く逞しいアーマーを着用した飯田天哉もいる。
「天哉くん！現場走るよ!!」
単直に、簡潔にそう言い走り出す。
しかし後ろにいる飯田から走り声が聞こえない、マニュアルはそんな飯田の様子を気にすることなく、走っていく。
肝心の飯田は、何かを見つめていた…飯田が向けてる視線の先は建物の路地裏…
飯田はマニュアルのことも、事件のことなど気にせず、彼は走り出す。
路地裏に。
そこに何があるのか、飯田は見てしまったのだ。

薄暗い路地裏、地面にはベットリと塗られた赤い血、そこには、長い刀を手に持ち、ヒーローの首を斬ろうとしていたステインが、苛立ちの目でよそ見する。
「……今の騒ぎは…騒々しい阿呆が出たか？まあいい……後で始末してやる…今は…
俺が、為すべきことを成す」
ステインは再びヒーローへと視線を戻し、相手の首に刀を当てる。
白く輝く純白の刀…その刀はどこかボロ臭く、先ほどヒーローを斬った為なのか、刀に赤い血がくっきりと映し出される。
「身体が動かねえ…クソ！クソが！死ね！くたばれ！」
「ハァ……偽物とはいえ、ヒーローを名乗るならせめて…死に際の台詞位は選べ…」
ネイティヴというヒーローの言葉に心底呆れたため息をつくステインは、勢いをつけるためか、一度首から刀を離し、勢いよく凶刃を振るう。
その時、後ろから白いアーマーコスチュームを着たヒーロー学生がやって来――

ガシャアアン！

「！」
刀はネイティヴの首を斬ることなく、白アーマーのヘルメットが斬られ、飛び跳ねメガネが吹き飛ばされる。
その顔が明らかになる…
「白いスーツを着た子供？ヒーローか？何者だ？」
飯田は勢いよく後方に飛ばされ、尻餅をつく。
金属音が嫌な音を上げ、静寂な空気と共に直ぐに消え去っていく。
「子供が立ち入っていい場所ではない…直ぐに消え去れ」
ステインは敵。
ヒーローや忍を幾多もなく斬り殺して来た正真正銘の殺人鬼。

しかし、ステインは他の敵とは違い罪のない一般人にまでは刀は振るわない…

それは自分の意に、信念に反しているからだ。

そう考えてみると、他の敵に比べてまだマシ…の部類に入るかもしれない。

「お前だな……ヒーローのみ狙う犯罪者…ヒーロー殺しステイン！」

「！」

「お前を追って来た……保須市…僕の推論通り、お前は保須市に再び現れた……もう少し時間は掛かるかと思っていたが…

まさか、こんなに早く見つかるとはな！僕は――」

「――おい小僧、その目は何だ？」

「!?」

チャキ…と凶刃が飯田の目の近く、丁度少しでも動いてしまったら目を刺されてしまう程の、それほどに近距離で刃物を近付けさせられた。

「言葉には気を付けろ…場合によっては子供でも殺す…その目は仇討ちか？やめておけ…俺が言うのもなんだが、今なら見なかったことにしてやる…即刻この場を去れ、慈悲くらいはくれてやる。

これは、忠告だ」

ステインのその目は、今にでも偽物を排除しようとする殺意爛漫な目付きだった。

これは忠告…もし今仇討ちをやめて、大人しく引き返すのなら、お前は標的にはしない…という意味が込められていた。

そして、お前は眼中にないという意味も裏付ける。

「インゲニウムを…知ってるか？お前が再起不能にしたヒーローだ…！」

「インゲニウム…」

ステインはこの白アーマーコスチュームを着用した飯田と、血に染まったインゲニウムの姿を重ねる。

「聞け！犯罪者！僕はお前にやられたインゲニウムの…その弟だ！

最高のヒーロー（兄さん）だった！その弟が兄の足の代わりにここへやって

来た！お前を止めに来た！」

『この名前を、受け取ってくんねえか？』

受け継がれる名前、兄の言葉…

「僕の名を生涯忘れるな!!

俺の名は『インゲニウム』！お前を倒すヒーローだ!!」

飯田天哉。

ヒーロー名、インゲニウム。

兄の名がこの時引き継がれ、彼は自分の名を叫んだ。

「……そうか、では死ね!!」

ステインの異常な殺気が、怒りの矛先が、飯田へと向けられた。

その血走った狂った目は、飯田天哉（インゲニウム）を、排除すべきヒーロー（偽物）だと認識した。

77話「混沌」

夕焼色に染まった空色。
保須市の繁華街には黒い煙が複数巻き起こっている。
爆発、テロリスト、突然降りかかってきた理不尽な出来事、その唐突たる出来事が、保須市により凄まじい混沌を巻き起こしていた。
「キャぁぁぁぁぁ！誰かぁ！ヒーロー救けて！」
「何だよこの化け物！逃げろ！殺される！来るな…来るなぁぁぁぁ!!」
一般人たちは一心不乱に逃げる。
私服姿で買い物袋を落とし、それに気付かず必死に逃げる女性。
仕事帰りなのか、メガネを掛けたサラリーマンは悲鳴をあげながら鞄を持ちながら、女性と同じく逃げる一般社会人の男性…

「コロス…！アア…ア！」

それを追い、襲う脳無。
唾液をダラりと垂れ流し、屈強な体で、下半身ジーパンを履いてる脳無は、ブツブツと小さな声で呟きながら、奇妙な姿をしたこの脳無は一般人を襲っていた。
邪魔な建物や電柱、自動販売機、車、標識、それらを拳で殴り壊し、持ち上げてはあらゆる方向へとぶん投げ被害を拡大させている。
両肩には結晶か何やらか、硬い純白なクリスタルが突き出ていた。
そのクリスタルは白く輝き、その奇妙な容姿とは似合わず、美しく見惚れてしまう。
口から妖しい色をした紫色の破壊光線を出し、ファンタジーに出てきそうなモンスターを連想させてしまう。
破壊光線が繰り出されると、灼熱の獄炎のように燃え盛り、被害がより悪化し増幅する。
死柄木弔から下された命令…それは暴れること。
ただひたすら暴れば良い、つまり…何も考えず、ただこの平和に彩

られた社会を、繁華街として賑わってた保須市の街を、目茶苦茶にすれば良い。
この脳無は死柄木弔が保須市に放った脳無の一体で、他の三体とは違った特殊タイプに入っていた。
それこそ上位級脳無に相応しい程の実力を備えている。
グラントリノが相手にした脳無は容姿に似合わないガードタイプ。
上顎が無いパワーファイターな脳無はパワータイプ。
巨大な翼を持つ飛行型の脳無はスピードタイプ。
そしてこの脳無は、パワー、スピード、ガード、それらを兼ね合わせたバランスタイプ。
それぞれ各個体は体の構造が違えば、様々なタイプとして使われている。
あの三体は中位級（ミドルレンジ）ならば、この脳無は出来立ての上位級（ハイレベル）脳無。
ヒーローがいないのは、偶々違う場所で猛威を振るう他の脳無と相手をしているから。
だからこの脳無は誰にも邪魔されずに暴れている。
人気の少ない場所でこそ、暴れやすいというもの。
それは脳無の意思でなければ、本能でもない…良からぬ最悪の…奇遇だ。
ヒーローがいない、脳無は暴れる。
つまり、この敵を止められる者はこの場に誰一人として居ないのだ。
「ゴロォス！コロスゥアアアアアア!!」
因みにこの脳無は確かに上位級として出来たばかりだが、言葉や精神への安定がつかないのか、奇声とも呼べる奇妙な声、言葉を発声していた。
獣に近い獰猛な雄叫び、耳をつんざく大きな叫び声、脳無は暴れる。
破壊の為に拳を振るい、殺す為に使われる、物言わぬ改人・脳無は元人間。
そして脳無はふと視線を違う方向へ向ける。
そこには逃げ遅れた一般人が必死に背中を向けて逃げている。

脳無はその逃げている人間目掛けて、低く腰を据え、跳躍するよう猛獣のように飛びかかる。
これでコイツも死――
「秘伝忍法！・【魁】！」

何処か聞き慣れた女性の声。
しかし思考能力を持たない脳無は当然これが誰の声なのか分からなかった…そう、最初だけは。
声の主に振り向くとそこには、誰もいなかった。
だが恐れるなかれ、場所はそこじゃない。
「ここだ」
先ほどの声の場所とは反対、自分の真後ろ、背後から声が聞こえた。
振り向こうとするも、声の主の攻撃が早かったのか、三つの刀が背中に線を描くよう斬り刻まれる。
「ッ!?」
紅い一閃が三つ背中を描き、背中から僅かながらに血が噴き出す。
脳無は何をされたか、何が起きたか理解することが出来ず、後ろ振りを振り向くと同時に腕を振るう。
ブゥン！と豪快な音を立てる。
野球選手が本気でバットの素振りをする際に発生する音、それと同じように空振りに終わる。
いない。
先ほどまでそこにいたと思われるハズが、誰一人としていなかった。
「遅い！」
そして今度は右から。
又も振り返ると、今度はその姿をハッキリと見ることが、確認することができた。
その姿は、皇帝…とも思わせる装束を見に纏い、黒いポニーテールの髪を揺らがせ、褐色の肌が美しく、魅力を注がれ、紅蓮を連想させ

る程に、熱く逞しい目つきをした少女。
ザシュッ！
そこから又もの斬撃。
脳無は傷を受けたにも関わらず、表情を変えず、悲痛の声もあげることなく両拳を強く握り、振るう。
だがその途端。
――彼女は消えた。
瞬間移動。
タネも仕掛けも無ければトリックでもない。
そう、彼女は目の前で消えたのだ、瞬間移動のように…そう思えてしまうのも無理ないし、判断してしまうのも無理はない…
だが、これは瞬間移動ではなく、彼女の素早い動きだ。
そう、彼女は斬撃…斬った後瞬時に素早い動きで死角から脳無の体を無数に斬り刻む。
「オッ…！・ぁぁ…ァ！」
これぞ秘伝忍法、魁。
素早い動きと六刀流を上手く使いこなし、駆使した秘伝忍法。
脳無は彼女の秘伝忍法に対応出来なければ、当然手も足も出ずダメージを負ってしまう。
「今だ！・詠！・未来！」
彼女の口から放たれた、何処か聞き覚えのある名前。
その名前に反応したのか、二つの影から声が聞こえる。
「秘伝忍法【ニヴルヘイム】！」
「秘伝忍法【ヴァルキューレ】！」
脳無の左目に映るその光景は、鉄球やら刃物やら、爆弾やらが無数に襲いかかり、紫色に光る弾丸も、ビッグウェーブに乗るかのように弾丸に紛れて襲ってくる。
二つの秘伝忍法が合わさり、弾丸の嵐が脳無目掛けて襲いかかる。
避けることは出来ない、範囲が狭まっている。
いや、そもそも思考能力など持たない脳無に、避けるなんて発想は無く、筋肉が滾り力瘤がボコッと音を立てて、襲いかかる無数の銃弾

を一掃するかのように殴りかかる。
鉄球やら閃光弾やらは、脳無の拳により跡形もなく相殺した。
あの秘伝忍法を素の力で相殺できる脳無は誇っていいと思う。
秘伝忍法を拳で、素手で相殺するなど、可能なら大道寺以外あり得ないからだ。
しかし、それはあくまで目の前の…拳に放たれた方向だけの話であって、他にはまだ弾が残っていた。
大分減ってしまったが、ダメージを与えるには充分だ。
二つの秘伝忍法による弾丸は脳無に襲いかかる。
怪しい光を放つ呪いの弾丸は当たれば、弾丸は破裂しその衝撃でダメージを与え、並みの鉄球とは訳が違う硬度を誇る鉄球の弾、ナイフや包丁を連想させる、形のデザインが独特な刃物は脳無の体を掠め、傷痕が残り、体に所々突き刺さる。
爆弾は当たれば文字通り爆破し爆破の炎が脳無を包み込む。
「やりましたわ焔さん！」
「どーよ！詠お姉ちゃんと私の連携プレイ、思い知ったか！」
詠はガッツポーズを取り、未来は二人の連携攻撃に猫のように微笑みを見せ、頬を薄赤色に染めていた。
察しの通り、彼女たちは焔紅蓮隊。
焔、詠、未来がこの脳無と対峙したのだ。何故、焔紅蓮隊が此処にいるか？
その疑問は――
「コロアァァス!!ホムア！ホムアァ！」
土煙が吹き飛ばされ、黒い影が姿をあらわす。
爆破で火傷を負い、未来の弾丸で多少の怪我が見受けられ、焔が与えた斬撃は形となってくっきりと傷痕が見える。
「チッ…詠や未来たちから話は聞いたが…タフだな…脳無とやらは…」
三人の攻撃を受けても尚、獰猛たる獣の呻き声を上げる脳無に、若干悍ましさを肌身で感じながらも、厄介な相手だと知り舌打ちをする。

焔は脳無を初めて見れば、初対面でもある。脳無については未来から話を聞いただけ。
初対面だが、コイツが脳無だと直感で理解した。
最初焔もこの化け物を見て悍ましさと、見た目のグロテスクに軽い吐き気がしそうになったが、相手が敵連合と関係があると知れば、直ぐに姿勢を取り戻し、刀を手に取った。
「まあ、想定内って感じですわね」
「初めてコイツ見た時思ったんだけど…やっぱり、怪人なんだ……」
詠と未来は蛇女で脳無との戦闘は実戦済み。
初めこそ、理解し得ることのない化け物だと認識していたが、後々と調べて分かったのだ。
コイツは敵連合が作り出した化け物であり、何かしらにより改人にされてしまったのだと…
実際そんなに詳しく知ってるわけではない。
ただ怪人というのは、漆月がこの脳無と呼ばれる化け物を怪人と呼んでいた。
そして複数の脳無が存在することから、恐らく敵連合により作られた化け物だと、物事が結びつき、理解したのだ。
だから、流石にこれまでは分からない…
コイツは元人間であることを…そして、複数のＤＮＡを無理やり混在され、複数の個性に見合う体にさせられたことを…
コイツの元の人間が、とんでもない人物だということを…

「確か脳無は言葉が通じないんだっけ？心もなければ感情もない……
春花の言ってた、人形とやらだな…」
人形。
言われてみれば確かにそうかもしれない。
その言葉は間違っていない、何故なら彼ら脳無は、ヒーローと忍を葬り、平和、正義の破壊の為に造られた殺戮兵器、なのだから…
「ホムアー！ホムアァァー！」
脳無は焔に寄生を上げながら突っ走る。

脳無は「ホムア」と言ってるが、恐らく焔の名前を連呼してるのだろう…
焔は不敵な笑みを浮かべ、刀を振ろうとしたその時…
「ほいよっ！」
ザシュ！
「！」
突如上から降ってきた人物の声に、焔は上を見上げる。
建物の屋上から降ってきたその人物は、両手でナイフを握り、脳無目掛けてその凶刃を脳に突き刺す。
「ガァッ！」
脳から血が吹き出る。
急所なのか、はたまたナイフによる痛みなのか…
何方かは分からないが、脳無にダメージを与えることに成功したらしい。
「日影！」
「まっ、こんなもんやろ…焔さんの命令通り、春花さんは今街中の人や逃げ遅れた人救けて避難誘導しとるらしいで」
「そうか…それは良かった」
焔はホッと一息、安堵の息を吐き胸をなでおろす。
昔の蛇女に居た自分なら、そんなこと絶対なかった、しなかった。
一般人のことなど知ったことでは無い、寧ろ超秘伝忍法を使い、無数の忍校を潰し、一般人も皆殺しにする。
それが焔だった。
だが、今は違う…飛鳥たちや雄英生に感化されたのか、善意を持つようになった。
昔の焔からは考えられないが、今の焔は以前よりも、蛇女での伊佐奈の時よりも、逞しく、善意を持っていた。
彼女は素直では無いのか、「そんなことない！」と否定するものの、端からみれば誰もがそう思うだろう。
「コロス！コロス！」
脳無は頭部…脳から血を垂らしながらも、まだ吠え続けている。

脳をナイフで刺しても彼は歪んだ表情一つ変えずに拳を振るう。
流石にここまで来るとホラーゲームに似た何かを感じる。
バイ○ハザードにでも出てきそうだ…
「しつこいのう…まっ、蛇女ん時もそうだったしな…んじゃほな行くで」
「ああ、そうだ……な――――」
日影の言葉に焔が頷いたその途端、声が途切れた。
脳無による攻撃ではない、焔の瞳に映った何かによって、体の動きを停止した。
他の三人は気にすることなく攻撃を続けている。
その場に、焔だけは、ある一点を見つめたまま黙って見て居た。
目を凝らし、その一点をよく見てみる…
脳無の後ろの背景…無数の建物が並び立つ景色…そして、廃墟の建物の屋上に…人影が三つ…
アレは…？
こんな大惨事に一般人があんな場所で、危険な廃墟の屋上で、何してるのだろうか？
普通に考えて、彼処に人などいるわけがない…
焔は鼻を使って、匂いを嗅ぐ。
「どしたん？焔さん…！」
ゴリラのように近い何かを思わせる脳無の派手な拳の攻撃をかわしながら、日影はここで漸く焔の様子に気がつく。
戦闘に関しては真面目で、余所見は死を表す、と口で言ってたあの焔が、余所見をしていることに日影は疑問を抱き彼女に問う。
焔は「悪い日影…コイツ頼んだぞ…」と一言言うと、焔はキッ！と目に力を入れるように、目を見開き、怒りと嬉しさを混ぜた笑顔を見せる。
「……見つけた!!」
焔が探してた、敵連合を。

見渡せばどこも彼処も一般人が逃げている。それも当然、警察が避難誘導を出し、一般人たちは暴れ回る敵から逃げ、身を守るため避難しているからだ。
嵐のように、それこそ朝の満員電車のように狭く苦しい人混みが殺到する。
「ううむぐぐ…苦……しい……！」
飛鳥は現場に向かうべく、この道を選んで向かおうとした。
この道は現場に近いため、直ぐに現場に駆けつけることが出来るから…だからこの最短ルートを選んだ。
それが間違いだった。
そう、避難誘導を受けた人が多すぎるのだ。それも狭苦しく、押し寄せて来る人に自分の豊満な胸が当たり、苦しい顔を浮かべる。
自分たちとは真逆に向かってるので、当然こういう形のパターンになるのも無理ないが、正直言ってこれは厳しい…
これでは気配を消すなんて無意味…
飛鳥はこのルートを選んでしまったことに後悔し、自分の浅はかさについ恨んでしまう。
どうしてこういう肝心な時にドジをしてしまうのだろうか…それこそ不思議でならない…
だがそれは、彼女の真面目たる故に、正義感から来るもの…
急がなきゃ、救けなきゃ、心から湧き上がる想いが彼女を動かしてるのだから、考えるより先に体で行動する彼女は、考える猶予がなくつい行動に出てしまったのだろう。
だからこうなった。
「さっきの事件と言い…緑谷くんからの連絡と言い…どうなってるの

コレ…」

向かう途中、緑谷出久から連絡が入ったのだ。

路地裏に来て欲しい…と。

何かあるのだろうか？と疑問に思い浮かんだのだが、何となく嫌な予感がして来たのだ。

緑谷出久はこの地域の隣の研修先…そこで職場体験で経験を積んでるハズ…

だがどういう訳か、彼はここ保須市に来ており連絡をして来た…

意味もなく彼が連絡をするとは思わない…では一体何なのだろうか？

そんな不安と焦りと疑問を胸に抱きながら、漸く人混みから脱することに成功した飛鳥は「ふぅ…やっと出れた…」と軽いため息をつく。

これだけで何となく疲れた感じだ。

飛鳥はもう一度携帯を開きＬＩＮＥを見る。

『江向通り４―２―１０の細道』とだけ、一括送信で送られている。

彼女はここの保須市には余り詳しく知らないので、悩み迷って居たが、地図を見て直ぐに分かった。

（こう言う地域を把握しておくのも…忍として必要だね…）

飛鳥は心の中で呟きながら、確信した。

しかし、確かに緑谷のことも気になるが…先ほどのテロリストが起きたかのような爆発…あの元凶が気になる所だ。

あの爆発は一体――

そう考えてるうちに、騒がしい事件の元凶となっている広間に出る。

江向通りに行くにはここの道を通らなければいけないのだ。

そして飛鳥の目の前に映る光景は――

「――は？」

目をまん丸に見開き、思考が停止し頭の中が真っ白になり、目の前の光景に理解が追いつけなかった。

その異常な光景に、軽く戦慄してしまう程に…あり得ない光景が広がって居た。

黒い煙が巻き起こり、バスや車が薙ぎ倒されている現場。

巨大で強靭な体を持つ脳無。

巨大な両翼を持つ飛行型の脳無が飛び回り、ヒーローを足で掴み、高いところへ飛び、地面へと思いっきり強打させている。

――なにこれ？

なんで、嘘でしょ？は？なんで？何で？

なんで、脳無がいるの？

上顎がない脳無は、ヒーローを掴んでは、此方に攻撃してくるヒーロー目掛けて思いっきり投げ飛ばし、倒れてるバスを軽々しく持ち上げ、ヒーローたちにぶん投げる。

攻撃してもビクともしず、攻撃された脳無はそのヒーローに狙いを定めると、腕掴んでは骨を粉砕し、軽々しく持ち上げ振り回し、地面に叩きつける。

そのヒーロー『ザ・フライ』は頭部の頭蓋骨が軋み、嫌な音を立て、強打したせいか頭蓋骨が崩壊し、脳震盪を起こしてしまった。

そして目を覚ますことなく、口から血ヘドを吐き、音もなく倒れた。

飛行型の脳無、これは厄介だ。

飛び回ってるせいで狙いが定まらず、攻撃を与えることすら困難故に、ヒーローは掴まれまた高いとこから地面へと強打させ、ヒーローの顔面が真っ赤な血に染まる。

顔面打撲、鼻の骨折、目の損傷、そのヒーローは意識がないにも関

わらず、心の持たない、思考能力を持たない脳無は「そんなの関係ない」と言った顔で、気絶してるヒーローを人形のように葬り、それが終わればまた新しいヒーローをとっ捕まえての作業の繰り返し。

飛鳥は思考能力が動きだし、回復したのか、脳無を怪訝そうな目で見つめる。

「何で…脳無が此処にいるの？嘘でしょ……？ヒーロー学校に忍学校にも続いて…こんな所まで暴れるなんて……」

しかも此処は街中、次々と応援に駆けつけてくるヒーローたちも加勢し、次々と脳無に攻撃するも、焼け石に水。

脳無からして弱攻撃らしいのか、一向に効く気配がなければ、倒れる気配もない。

「クソ！飯田くんは何をしてるんだ！本当にもう！」

声の主に飛鳥は視線やる。

ノーマルーヒーローのマニュアルだ、知らないけど。

彼は顰めた面で脳無を睨みながら飯田の名前を口にした。

恐らく飯田も此処にいるのは間違いない…

しかし、あの真面目な飯田が事件をすっぽかして何処かへ行くなどまず有り得ない話だ。

彼は超が付くほど真面目な性格だ、いや…仮に真面目でなくとも事件を置いてどこかへ行くのは明らかにおかし過ぎる。

飛鳥はこの事件を目の当たりにして、一瞬で頭の中に関連ワードが出てくる。

緑谷出久、保須市、脳無、敵連合、

飯田、兄のインゲニウム、再起不能、ヒーロー殺し……路地裏…

――まさか!!!

物事を考えるのが余り得意ではない飛鳥でさえ分かってしまうこ

の事件…
脳無の襲撃、保須市にて緑谷のメッセージ一括送信…
これはもしや、ヒ――――
「ちょっと君！危ないから！警察の指示に従って避難して!!良い!?」
「はっ、はぅ…！　す、すみません…!!」
飛鳥は思わず小動物のように可愛らしい声を上げ、反応する。
その場で謝りつつ後退しその場を後にするも、心に掛かった靄は振り払うことなく、飛鳥の心に疑問の煽りが掛けられる。

――――街で脳無が暴れてて、ヒーローの口から飯田くんの名前が出てきて、ここに飯田くんがいない…
緑谷くんの一括送信、飯田くん不在……つまり、飯田くんと緑谷くんは何かしらの事件に巻き込まれたんじゃ？
そう考えると、飯田くんから関係性が出る事件は……ヒーロー殺し、ステインでしかない。

「もし、緑谷くんと飯田くんが…ヒーロー殺しと鉢合わせしたら……二人の命が危ない…!!」
これはあくまで彼女の推論だ。
１００％そうだと断言は出来ない…だがそれしか考えられない。
きっと頭の回転が早い人や賢い人もこの考えに答えが行き着くであろう。
飛鳥は二人の命の危険に身を感じ取り、心臓の鼓動が、秒針を超える速度で脈打っていた。
高鳴る心臓音、呼吸の乱れ、止まらない冷や汗や手汗…
遠くから感じる歪な信念と殺意…間違いない、この殺意はヒーロー殺しによるものだ。

走る彼女の姿は、風を連想させるかのように疾風の如く駆け走り、友を救うために彼女は、ただ一心不乱に、走り出した。

上から見渡す景色は、さぞやいい眺めであり実に愉快である。
数多くの人々の悲鳴が惨たらしく聞こえ、市民を守るヒーローも、忍も全員、成すすべなく脳無に見事葬られている。
市民を守るヒーローも忍も、所詮奴らは人間、無理やり改造を施された改人・脳無とは訳が違えば、普通のヒーローや忍如きが脳無に勝てる訳ないのだ。
「ハハハ！良いね脳無！派手で強いし、個性の複数持ちは訳が違う……ヒーローの悲鳴も、市民の命乞いも、こうして聞くと気持ち良いもんだなぁ……
なあ？お前もそう思うだろ漆月」
人々の苦しみを、悲鳴を、命乞いを、泣き声、喚き声、絶叫、金切声を、それらを嘲笑する歪んだ悪意を持つ死柄木は、ただ一人、人々の悲境を女神の光に当てられてるかのように、華々しい顔立ちで聞いていた。
漆月もゆっくりと死柄木に近づき、人々を見下ろす。
彼女はクスッと薄ら笑いを浮かべる。
「そうだね死柄木、ザマァみろって感じだよね。
自分だけ普通に暮らすことが出来て、私たちはそれが許されない…こんな景色拝められるのも、死柄木のお陰だね。
あっ、この場合脳無に感謝すれば良いの？」
死柄木は保須市に出発する前、一度先生と話して脳無を手配するよう嘆願し求めていた。
先生と呼ばれる人物の話によると、雄英襲撃時、蛇女襲撃時ほど強力な脳無は存在しないが、動作認証確認済みが7体も存在し他は調整

中とのこと。
死柄木は寄越せと命じた。
理由は簡単、気に入らないものは全部ブッ壊したいからだ。
ヒーロー殺しが気に入らない、だからヤツの信念も、理想も、人生も、全てが気に食わない…
だから壊すんだ。
踏み潰すんだ、ブッ壊したいんだ。
先生は「やれやれ」と言った反応で死柄木の視線を見つめる。
元よりこうなったのは、先生が死柄木に唆し、そうさせたからだ。
よって、先生から送られたのは7体の内4体という訳なのだ。

「それはそうと、ずっと気になっていたのですが漆月、貴女とステインとは一体どのように知り合ったのでしょうか？」
自身一人で健気に楽しんでる死柄木は放っておき、黒霧は漆月に質問する。
漆月は振り返り「ん～」と何か思い出せそうなのか、考えている。
「偶々さ、アタシが路地裏に足を踏み入れてたら、ステインが忍を殺してたんだよね。
当時ステインは忍の存在を知らなかったし、忍を殺害した理由はきっとヒーローかヴィランの何方か勘違いしてたっぽいね。
でも、私にはそんなの関係ない。
なんか、嬉しかった、ステインが忍を殺してたの。
彼に僅かな希望を抱いて、声をかけて…そこからね、ステインとは知り合いになったんだよ。
その代わり殺されそうになっちゃったけどさ」
何という偶然…いや、ステインのことならあり得ると黒霧は納得して頷く。
偶然、ステインが相手だと何たる悍ましいことであろう事か…
「ハハ！けどな、そんな悪党の大先輩も、夜が明ければ世間はアイツの事なんざ忘れてるぜ？」
死柄木は手に持ってた双眼鏡を外し、腕を広げて嗤笑し侮蔑を示

す。
死柄木は精神年齢が低いためなのか、幼稚的万能の子ども大人なのか、他の誰よりも根に持つタイプだ。
「さてと……今はどうなってるんだ？」
死柄木は再び双眼鏡で街の様子を調べようと、脳無を探し様子を観る。
この街を観察…と言った方が良いのかもしれないが、この際意味は同じなのでどうでもいいだろう。
死柄木は嫌がらせをするような薄気味悪い笑顔を満々にして様子を眺めていると――
「――やっと見つけたぞ…！」
「あ？」
不意に、死角から突然声を投げかけられた死柄木弔。
いや、死柄木だけでなく、その場にいる黒霧や漆月にも、その声はハッキリと聞こえた。
振り返るとそこには、六爪と化し刀を手に持つ焔が、死柄木目掛けて斬りかかろうとしていた。
炎を纏ったその刀で――
（速い！？）
「ッ！？黒霧！ゲート――」
突如目の前に降り掛かる死柄木たちの理不尽。
彼は反射的に黒霧の名を呼び、黒霧は黒い靄を瞬時に増幅する。
焔の刀による炎の斬撃により、その場は炎に埋め尽くされた。

嘘だろ…そんな…そんな…！
身体が動かない…!!
殺気立つ薄暗い路地裏。
そこにいる人物は飯田とネイティヴと名乗るヒーローは勿論、そして緑谷も現場にいた。
刀を手にも待つヒーロー殺しステインは、緑谷を殺す事なく飯田に近づき、俯せに倒れてる飯田を足で力強く踏み、刀を首に当てる。
「お前が何故こうなってるのか……教えてやろうか？
お前は弱い、偽物だからだ……兄の復讐に身を焦がすなど、ヒローが……論外だ……
だがこの緑谷とか言う小僧は話は別だ……こいつは、良い……紛れも無い本物だ……お前とは訳が違うんだよ」
「ッ……！」
ステインは舌をレロリと気味悪く舌なめずりし、凶刃を振るおうとする。
「おい！やめろよ!!畜生！おいって！」
緑谷はそれを止めようと必死にもがき抗い、声を荒げる。
緑谷は目の前の光景に息を呑み、冷や汗を垂らす。
身体が動かない。
緑谷も飯田と同じく俯せ状態に倒れているのだ。
斬られても痛くはなかった…どのような個性かは未だ不明だが、動きを止める個性だそうで、斬られた直後、血を舐められ動けなくなってしまったのだ。
（畜生!!なんでだよ！目の前で苦しんでる友達を…助けることが出来ないのか僕は!!）
目の前の友が傷つき血を流している。
救けに来たのに、救けることすら許されないなんて…
誰よりもヒーローを憧れた緑谷出久にとってこれ程悲痛なものはない。

緑谷は己の弱さと、目の前の光景をただ見つめることしかできない自分に、歯をくいしばる。

「じゃあな、正しき社会への供物」

刀がギラリと路地裏に差し込む光に反射し白く光る。
その凶刃たる刀には、血がベットリと染み付いていた。

「秘伝忍法！【二刀繚斬】!!」
疾風の如く、風をきる音と共に路地裏へとやってくる緑色のオーラを纏い放つ少女は、突然此処に現れ、二つの刃を振るう。
その斬撃は、ステインに襲いかかり、ヒーロー殺しはその斬撃を反射的に避けるも斬撃の勢いのあまり、躱し且つ刀で己の身を守った。
斬撃の威力に、飯田の元から離れてしまうステイン。
「ッ！――今度は、誰だ――!!」
舌打ちをするステインは、忌々しい目線でその少女を見る。
その少女は、ふと笑みを零す。
それはステインにでなく、倒れてる飯田と緑谷に向けての、優しさの笑顔。
「もう大丈夫だよ、私が来たから！」
――飛鳥さん!!
光あるところに、影があり。
影があるところに、光がある。
ヒーローは光、忍は影。
影(飛鳥)は、光(緑谷たち)のまえに現れた。

78話「本物」

廃墟となった屋上には炎が揺らいでいた。
激しく燃え盛る炎は、焔の闘志を象徴するかのように、唸り、激しく、バチバチと火種を撒き散らしその場を埋め尽くすかのような炎が、敵連合を襲ったのだ。
「やったか!?」
焔は僅かな期待の眼差しを向ける。
仮に倒せれなかったとしても、多少はダメージを与えたに違いない。
焔は攻撃を繰り出した際に若干違和感を感じたが、目の前の炎は敵を焼き尽くすかのように埋め尽くしている。
焔が何故ここ敵連合がいるのを知ったのか、視力もそうだが、一番の理由は鼻で嗅ぎつけに来たことだ。
薄っすらとした人影…ソイツらから禍々しい殺気の匂いが、鼻をつんざく程に匂っていた。
焔の鼻は普通の人とは違いかなり敏感で、野生的で肉食獣のような一面を備えていた。
それは幾多ものの戦場を、命懸けの戦いをして来たからなのか、死を掻い潜ってきたからなのか、焔の鼻は野生的に発達したのだ。
それも強さの一つなのか、そのお陰かいつ何処に強者が身を隠してるのか直ぐに解る。
それに普通の一般人からは特にこれといった匂いは感じない…だからこそ、誰一人とも寄せ付けない立入禁止となってる廃墟の屋上に、人がいるのも可笑しいし、何より焔の鼻は嘘をつかなければ誤魔化せない。
匂いの元を辿れば、相手が誰なのかも直ぐ解る。
紫や忌夢のように、相手の性格や考えてることは判らないが、強さだけは負けを引けない程に自信はある。
そんな焔の目の前に燃える炎は、次第と黒い靄に包まれていく。

その黒い靄は次第と大きくなり、焔の炎を吸うかのように、それこそブラックホールでも起きてるのかと疑ってしまうかのように、炎は吸われ、少しずつ消えていく。
「ふぅ、危ないところでしたよ…」
「おいおい、初対面どころか……不意打ちとかは反則だろうが……危うく火傷するところだったぜ…」
黒い靄を炎のように揺らがし、目を細めて安堵の息をつく黒霧。
漆月は無言で刀をクロスするよう盾を作り、死柄木の前に庇うよう立ち尽くしている。
死柄木は最大火力とも呼べる炎の火種が付いてないか、火傷を負ってないかと、体のあちこちを確認し、無事だと確認すると、突然訳もわからず攻撃してきた焔を、忌々しく睨みつける。
「ったく、今度は何なんだよクソ餓鬼がぁ！急に訳も分からず俺に攻撃して来やがってぇ!!」
「死柄木弔、大丈夫ですか？お怪我は…」
「別に何ともねえよ…!!」
奇襲に癇癪を起こし、首を荒く酷く掻き毟る死柄木に、黒霧は心配そうな視線を送り、嗜める。
対する漆月は「アイツは…」と小声を漏らす。
（ちっ、流石は蛇女に襲撃を仕掛けてくるだけのことはある連中だ……
あの黒い靄の男、私の攻撃を……アレが個性だとするとかなり厄介なものだぞ…）
黒霧。
ワープゲートを作り出す敵の出入り口。
彼は物や人間をワープさせるだけでなく、焔の炎をも黒い靄で覆い飛ばすことが出来るのだ。
幸い外にいる他の一般人やヒーロー、忍達はここの存在に気が付いてない。
しかしあの一瞬でよく瞬時に対応出来たものだなと、心の反面どこかで感心してしまう。

（何故我々がここにいる事を……それにしてもあの武器による攻撃、プロヒーローに匹敵する動き、もし少しでも対応が遅れていれば殺られていた……

この少女、一体何者だ…？もしや――――）

一方黒霧は焔を凝視しこの少女の正体が何なのか、薄々と勘付き始めた。

六爪の刀、炎を操る少女、気配を感じ取り此方へ襲い掛かってきた。

考えられるとすれば――――

「お前たちが、敵連合……まさかこんな所で逢えるとはな…！」

「はあ？誰だテメェ？いきなり俺に刃ぁ突き立てやがって……

アイツに続いてお前も…タダで済むかって話しだクソ餓鬼がぁぁ!!」

ヒーロー殺しを傘下に引き入れるどころか、刃向かわれ殺されかけ…ご機嫌斜めな時に運が悪いのやら、災難と呼ぶべきか、焔に見つかり、今日で二度殺されかけた。

不幸の連鎖が続く死柄木は、なぜ自分が刃向かわれなければならないのか、理解に苦しみながら、苛立ち首を掻き毟る。

掻き毟るせいか、首には爪によって傷ついた痕が残り、爪には血が付着する。

癇癪を酷く起こしてる死柄木に、これは意外だという視線を送る焔は、冷やかしとしてなのか、死柄木に声を投げかける。

「何だお前？敵連合のリーダーだと聞いて見てみれば…性格は幼稚な子供じゃないか。

やれやれ、リーダーと聞いてどんな輩かと思えば…口先だけの三下か…」

「――――ッ!!クソガキがあああぁ!!」

「落ち着きましょう死柄木弔！」

焔の煽りの言葉に、死柄木はまんまと引っ掛かったのか、それこそ本当に子どものように声を荒げて突っかかり、掌を広げて殺そうと飛び込もうとするものの、黒霧に制される。

焔は「チッ」と軽い舌打ちをする。

もしこのまま真っ直ぐ突っ込んで来れば、カウンターが決まると思ったのだが、それは冷静で適応な判断とヴィランの言葉に似合わない紳士な性格を兼ね合わせてる黒霧に止められる形となった。
「下がって黒霧、死柄木…!」
その途端、素早い動きで此方へ刀を持って振り掛かって来た漆月が、死柄木と黒霧の前に、焔の眼の前に現れた。
焔は漆月による攻撃が来たことに多少は驚いたものの、防げれない攻撃ではないので、六爪を盾にして守るように交差し己の身を守る。
ギギギと激しい火花を散らし、嫌な金属音が耳によく響く。
漆月は歯軋りたて、目を細め、刀に力を入れるかのよう体の体重を入れるように押す。
「ここは私が!」
「漆月!」
(!なるほど、コイツが漆月…噂に名高い抜忍か!)
焔は死柄木とは初対面であれば当然漆月とも初対面のため、一瞬彼女が誰なのか分からなかったが、黒霧の叫ぶ声で直ぐに理解した。
「いや、まて待て…ちょっと待て、このクソ生意気なガキ殺すのは俺だ、何者かは知らねえが、突然俺を襲って来たんだ……それなりの報復ってヤツもしとかねえとなぁ?」
「死柄木弔。落ち着いて…
彼女は恐らく…元・蛇女子学園の選抜メンバー筆頭、焔と呼ばれる紅蓮の少女かと…」
「はぁ!?コイツが…　…抜忍となった身なんだな?間違いないんだな?」
「ええ、何故彼女がここ保須市にいるのかまでは不明ですが…漆月の言ってた人物と見なして間違いはないでしょう……
何よりあの女はまだ子供…子供なのにプロヒーローをも凌ぐ強さをヤツは持っている!それ程の強さなら他のヒーロー学校に在籍してるとも考えられますが……
しかし見てください、漆月のあの表情を…忍をより嫌悪する彼女の表情を一目見れば直ぐに見解出来る…間違いない!」

黒霧の推論に、死柄木は納得したのか先ほどの苛立ちを抑え、薄気味悪い笑みを零す。
確実にそうだと断言は出来ないが、それでも黒霧は彼女が抜忍だと直感で理解した。
「チィッ！」
焔は埒が明かないと判断したのか、刀を横に薙ぎ払うように漆月の刀を弾く。
焔は距離を取るよう数歩スキップして退がる。
こっちは焔一人、対して向こうは死柄木、黒霧、漆月の三人…
焔も向こうもお互い能力が判明してない、実力も底も知れない。
先ほどの火力の高い攻撃は黒霧によって防がれた、なら安易に攻撃は出来ない。
小難しいことは考えない焔だが、向こうが何をしでやらかすか解らない以上、下手に動けば殺されてしまう。
それは、身体能力の強さ云々関係ない、向こうは個性と呼ばれる超能力を持っている。
焔の鼻は敏感だ、だから死柄木の手には嫌という程の禍々しい殺気が敏感に鼻をつんざく程に、危険だということが伝わってくる。
あの手に触れれば、命の保証はない…それは今まで戦場を生き抜いて来た焔だからこそ、分かるものだった。
（さて…どうするか……
あの黒い靄男が厄介だな……私の攻撃を受けても尚立っている。
いや、アレは受けたのか？攻撃した際に手応えが無かった……実体部分ではないと言うことか？）
焔が怪訝そうに眉をひそめていると、漆月は「黒霧、ちょっと考えがある…」と小声で彼に呟き、それを聞いた黒霧は首を傾げて漆月の言葉に耳を傾ける。
「させん!!」
焔は走り出した。
向こうに考える隙を与えさせない。
戦場のど真ん中、作戦を伝えると言うことは、敵から命を狙われや

すくなる意味も兼ねている。
敵が目の前にいるのを関わらずにだ…敵の前にして余所見はタブーだ。
「まだまだ甘いな!!」
焔は躊躇うことなく漆月と黒霧目掛けて刀を突き刺すよう刃先を向け、斬りかかる。
素早い動き、一瞬で間合いを詰める。
焔の刃が二人に襲いかかるその瞬間…
ブワァ…!と黒い粒子のような靄が、漆月の体から噴き出てくる。
黒霧のような黒い靄とは違い、黒紫色の靄は焔から攻撃を守るよう目の前に壁になるように作り出し、その炎は闇に飲み込まれる。
「なっ!?」
「舐めてると思ってたでしょ?」
その黒い靄はやがて周りの空気と同化するように消えていく。
その闇は黒霧のようにワープゲートで炎を飛ばしたものでなければ、常闇のダークシャドウともまた訳が違う。
その闇は触れれば、苦痛なんて生易しい言葉ではない程の、地獄のような激痛が、死の痛みが全身に巡るのだ。
しかし焔はそんなこと知るはずがなく、ただこの黒い闇は危険だと生物的本能がそう告げたので、退がった。
「クハハハ!良いぞ漆月!さっきの失敗を成功に活かせ!気に入らないものは全てぶっ壊せ!あとそうだな…脳無に他の奴らも、お仲間もみーんなぶっ殺させるか、ハハッ!」
後ろで死柄木は両手で顔を覆い、豪快に笑いながら、戦場をスポーツ観戦のように楽しんでいる。
死柄木弔にとって、生と死の狭間である戦場は、ただのゲームでしかない。
そんな焔は一瞬だけ死柄木へ視線を向ける。
あの残虐で、残酷で、無慈悲で、どこか幼い子供のような純粋な悪の笑顔は、流石の焔も少し引いてしまった。
それと同時に、雲雀の言葉もふと思い出す。

『歪みを持った純粋な悪意ある人間でも、その人の大切なもの全てを壊そうとする人も、貴方たちは受け入れるんですか？』

――――成る程、そう言うことか…

焔は蛇女に転入してきた雲雀のあの言葉を脳裏に思い浮かべる。
今まで特にそんなこと気に掛けた事もなかったし、記憶にあったことにすら驚いてしまうが、死柄木の歪んだ悪意に寒気を感じ、ふと雲雀の言ってた言葉が直線の糸を紡ぐように、鮮明に思い出した。

（雲雀の言ってた言葉…誰のことを言ってるのか分からなかった…だから大して気にしていなかったが……
コイツなら、納得がいく…）

飛鳥はこんなヤツらと対峙してたのか…
そう考えれば、何故あの時蛇女に乗り込んできた時、彼女が強かったのか…何となく分かって来た気がする。

焔は冷や汗を垂らしながら、懐からクナイを取り出し死柄木に投げつける。鋭い数本のクナイが彼に襲いかかる。
しかし…
「させないよ」
刀を軽く振るい、ガキィン！とクナイを安易に弾く。
黒霧の反応は気付くのが遅くとも、漆月がいる以上効かないようだ。
そして当の漆月は黒い靄を体に纏い、黒霧も黒い霧を纏っている。
二人の黒い霧と靄は、歪んだ悪意を象徴させるものに見える。
「邪魔を…」
誰かを狙うと必ず他の誰かが邪魔に入る。
そもそも多対一の戦闘など、蛇女にいた頃しかやったことないし、

抜忍になってからもそう言った訓練をする機会はなかったので、現状を打開できないのも無理はないかもしれない。
漆月が腰を低くし走り突っ込んでくる。黒い妖刀は雅緋の黒刀とは全く違うが、異質なその刀は、黒い脈動が流れてるかのように見えた。
焔はそれを尽かさず刀で受け止め、弾き、刀を振るう。
片手での攻撃でコレ、受け止めるのに少し精一杯の様子だ、だから焔はもう片方の腕を使って斬り掛かる。
「でりゃあっ！」
焔の斬撃が腹部を掠め、服に裂け目が現れ傷がくっきりと見える。
漆月は痛みを押し殺すような表情を　浮かべながらも、焔を睨みつける。
「次！――」
焔がもう一度刀を振るおうとしたその矢先だ。
焔は背後から黒い霧に埋め尽くされる。
「なっ!?」
「残念ですが、ステージチェンジです」
後ろから冷静で、何処か薄ら笑いを浮かべてるような悪意を表した声が、背後から血が引けるように聞こえた。
この黒い靄だの霧だのは、漆月による攻撃ではない、黒霧のワープゲートによって起こる現象…
焔は「しまった！」と焦りの表情に染まる。
「漆月が言ってました…ここでの争いはヒーローや忍は愚か、一般市民にすら気づかれる可能性が高いと……
私もその意見には大きく賛成だ、ましてや貴女方のような輩と相手にするのは少々手が焼ける…
ならば、ここではなく隙あらば違う場所に飛ばせと、漆月が私に言ったのですよ。ですから、この少しの隙を待っていた…！」
漆月の作戦はこれだ。
自分が囮になる、そうすれば焔は真正面から相手をしその間に僅かな隙が生じるはず、ならそのほんの少しの隙を黒霧が突く。

ワープゲート状態の黒霧ならば、最早無敵と呼んでも過言ではない、弱点は焔には知らされてないし、彼の個性がワープゲートなど、知るはずがないからだ。
ただ厄介な個性だと注意していたが、焔の浅はかな予想より、黒霧の実力の方が一枚上手であった。
「私は戦闘員としては不向き…ですから、貴女方のような相手をするには、私はサポートを務める役目が向いている。
良かったですよ、漆月のような素晴らしい戦力が、忍がこちらに来て下さって…貴女が我々側につかないのが実に残念だと、そう思います。
ですので願わくば…死んで下さい」
そして黒霧は漆月の体を包み込み、二人同時に別の場所へと飛ばそうとする。
焔は逃げ出そうと黒い靄を炎で焼き殺そうとするも、黒霧のワープゲートの中に入ってる状態では意味がなく、焔の抵抗は空間とともに虚しく消える。
焔は言葉を返すことも出来ず、漆月と黒霧の策にまんまとハマり、何処かへ消えてしまった。

「助けに来たよ…皆んな!」
風で赤いスカーフが揺らぎ、スカートからはパンツが見えるか見えないか…ギリギリのライン、動くたびに揺らぐ胸、真影…鋭い風を刀に纏わせ、ステインを攻撃した少女の名は、飛鳥。
先ほどの攻撃により、ステインは行動不能になっている飯田から離れざるを得ない形となった。
「あ、飛鳥さん!」

「飛鳥くん…？」
「あの娘は…？」
三人の言葉を浴び、緑谷たちに「テヘッ♪」と可愛らしい笑顔を見せる。
舌を出し、来ちゃった♪という女の子らしい可愛さに、普通の状況なら心をくすぐられるが、危機としたこの状況の中、彼女は救いのヒーローと言っても過言ではない。
因みに倒れてるヒーロー、ネイティヴさんは彼女が一体誰なのか知らないため、緑谷が来た時と同様に、首を傾げる事しか出来なかったが。
「チィッ！邪魔を…！」
（この女も…死柄木の写真に載ってた！）
何とか体制を立て直すステインは、飛鳥を見て死柄木が持ってた写真のことを思い出す。
（そう言えばこの女の気…個性でなく、奇術らしき忍術…
まさかコイツも忍か!?）
ステインは幾多ものの忍を殺害して来た。
となれば当然、飛鳥を一目見ただけで彼女がヒーロー学生ではなく、忍だと直ぐに見解することが出来る。
タダでさえ彼は人を見る目はある。忍を相手にすれば次第に相手が誰なのか直ぐ見分けが付く。
先ほど皆に見せた笑顔から一変、ステインを一瞥する。
その目は闘う覚悟を決めた目…その目は闘志が滾っていることが安易に分かる。
「いい目だ…」
心に思った言葉をそのまま口に出す。
ステインの言葉が聞こえたのか、飛鳥は体を僅かに反応する。
「おい小娘……お前、忍だな…？」
「！」
「ハァ……なに、別に隠さなくても問題ない……俺は…ハァ……幾多ものの忍を殺害して来た身だ……ここに転がってる偽物どもと同じ

末路へな……」
今頃ステインに忍への隠し事は通じない。
ならば、と飛鳥は体に入れてた緊張と筋肉を元に戻す。
偽物。
その言葉を聞いた飛鳥は、怪訝そうに眉間に皺を寄せる。
転がってる…飯田と緑谷、そこにいるヒーローたちのことを言ってるのだと理解した飛鳥は、三人に向けてた視線を、再度ステインへと元に戻す。
「偽物…？」
「ハァ……そうだ、俺はこの私欲に塗れた偽物どもを粛清する義務がある。薄汚れた偽善者をな……ハァ……
この緑谷…とかいう小僧は違うがな…」
偽物への言葉に首を傾げる飛鳥に、ステインは凶刃を手に取る。
緑谷は、ステインが本物の可能性を秘めたヒーローと解釈し、認め、彼は殺さなかった。
動けない程度にはしたものの、擦り傷の為、問題ない。
「偽物って…なに？皆んな、みんな色んな想いを抱えて…ヒーロー目指してるのに…偽物ってなに？」
飛鳥は若干、言葉に怒りを孕ませながら、ステインに問い詰める。
飛鳥はバカ正直なくらいお人好しだ。
仲間想いで、単純で、人一倍正義感が強くて、誰にも負けない根性があって…太陽のような優しさと笑顔を兼ね合わせてる、そんな彼女だからこそ、仲間を傷つけ、偽物だと罵り、大切な仲間達を殺そうとしたステインに、飛鳥は怒りを露わにし、厳しい声で彼に問うた。
「それだ小娘。ヒーローになるのに必要なのは、自己犠牲から成り果てる正義、揺るがない信念…強き心……
そこに己の欲望を満たそうとする者は愚か者、偽物でしかない……」
ヒーローとは見返りを求めない者であり、己の正義、誰もが認めるその信念を胸に抱き、他の命を救い、悪を倒す。
ヒーローとは偉業なことを成し遂げ、初めて得られる称号。

己が自慢げに、簡単に口に出すものではない。
どれだけ多くの人間から認められようと、褒め称えようと、ヒローが偽物であれば意味がない。
そんなものヒローとは呼ばない。
それがヒローなら、否定する。
そこにほんの少しでも、偽物という言葉が当てはまれば、全てを否定する。
ステインは、絶対正義を求めるヴィランだ。

飛鳥は数秒瞬きし、ステインをジッと見つめる。
飛鳥はゆっくりと、首を横に振る。
その目は、憤る怒り…ではなく、哀しみだった。
彼女の目を見たステインは、意外にも少しだけ首を傾げた。

――なぜ、彼女は哀しい目で此方を見つめてる？

どのヒローや忍からも、敵からも、ステインを見る目は怒りと殺意を蓄えた目付きだった。
だってステインがどれだけ正論を言おうが、所詮はヒローや忍を殺してきた殺人鬼。
または再起不能にしたヒローの悪夢…そんなステインに向けられるのは、当然許されることのない目、苛立ち、または彼に対抗する正義から来る目…
だから不思議でならない…
そんな殺人鬼に、飛鳥は真っ直ぐ此方を見つめ、哀しい表情を向けていることが、向けられた事など今までに無かった…

――彼女が初めてだ。

飛鳥は、哀しい目で此方を見つめている。
潤いのある目が、揺らいでいる。

「……許せないよ……」
「…ハァ？」
「そんな、そんな理由で……人を殺すなんて……私は……」
――許せない。
そう彼女が口を開き言葉をかけようとした時だった。
「そうか…」
ステインが溜息混じりの声でそう小さく呟いた途端…彼は素早く一瞬にして飛鳥の間合いを詰め凶刃を振るって来た。
飛鳥はステインの俊敏な速さに、唐突な動きに、攻撃に、足元を掬われそうになるが、何とかギリギリ上手く対応できたのか、二つの刀をクロスしガードする。
「お前も偽物か！」
「ッ!?」
重々しく伝わる攻撃、のし掛かる凶刃。ギギギと刀と刀が擦れ合う時に生ずる嫌な音が、相変わらず背筋をゾクリと響かせる。
しかし、それよりも背筋が凍りつけられるものと言えば…
目の前に映る、ヒーロー殺しの残虐な殺意、イカれた執着、悪や偽善に対する対抗心、冷酷無慈悲な悪意…
間近で見るこのドス黒い殺意の感情ほど、背筋を凍らすものは早々ない。
ステインがなぜ彼女を偽物と見なすか？
理由は簡単だ。
許せないという言葉…彼女の怒り…それらは、あの飯田というメガネを掛けた少年と同じものだと、そう判断したからだ。
当初見たときは、少しだけ微かにヒーローに似た正義を感じていたが、所詮は偽物でしかなかった。
許せない。
だから戦う…そんな理由ではダメだ。
本当に立ち向かうのならば、誰かを守る為に、弱きを救ける為に、闘わなければヒーローとは呼べない。
許せないから闘う…それはヒーローでも何でもないし、私怨で動く

偽物…ステインの粛清対象でしかない。
「偽物は、全員粛清対象だ」
――全ては、正しき社会のために。
今度は刺々しい靴のスパイクで彼女の腹を蹴る。
彼女は苦痛に混じった顔を浮かべながらも、後方に退がり武器を構えるものの、ステインは余裕を与えさせないのか、次に肩に携帯してたサバイバル式のナイフを手際よく取り出し投げつける。
クナイの代わりのようだ、ピンポイントに向かって飛んでくる。
飛鳥はそれを刀で弾くもステインはそのほんの僅かな一瞬で、壁を蹴りジャンプし彼女の背後へ回る。
振り返ると同時にステインは長い武器を手に持ち彼女の首目掛けて凶刃を振るう。
飛鳥は運良く反射的にそれを上手く躱し、背筋が曲がった状態に陥り、体制が崩れそうになる。
髪が僅かに掠れ、斬られた髪がハラハラと何処かへ消えるよう風に身を任せて飛んで行く。
ステインはそこから腰にかけてたもう一つのナイフを取り出し飛鳥に斬りかかる。
流石にこの連続で素早く斬り来まれば、飛鳥も対応しきれず動揺してしまうのか、一瞬の動きが遅くなり隙を見せ、刃物による攻撃を食らってしまう羽目になった。
鋭い刃物による斬撃、飛鳥は激痛に襲われながらも、歯を食いしばりカウンターを決めようとする。
しかし、その前にステインは袖から携帯用の投げナイフを飛鳥に投げつけ、予想外の攻撃に躱すこと出来ず、肩に突き刺さり、ブレザーの服が血に染まり、滲み出る。
（つ、強い…！こんなにも早くて…手も足も出ないなんて……！）
「忍も偽物は粛清だぁ!!」
苦悶に満ちた表情を浮かべながらも、ステインの恐るべき実力に恐

怖の心を抱く反面、心の中で彼の強さを認めた。
何故彼が、忍に対抗することが出来たのか、少しわかった気がする。
ステインは怒り狂った目付きで、イかれた執着心の目で、彼女を粛清するべく、排除する為に血に彩られた凶刃を、何度もなんども振るう。
「ち…がう！偽物なんかじゃ…ない！」
「まだ言うか小娘……！ハァ……忍はやはり、偽物しかいないようだな…！」

飛鳥は自分の身を守りながらも、ステインに訴えかけるが、彼は表情を微動だに変えることなく、血走った目で彼女を激しく睨む。
その憎しみに近い放たれる眼光は、見てるだけで思わず身震いしてしまうほど、狂気じみた何かを彼女は感じた。
「消えろ偽物…」
ステインの言葉が最後の合図となるかのように、思いきり刀に力を入れ、そのまま身体を斬り刻もうと身を乗り出す。
その時だった――
「私は！例え偽物だと罵られても！それでも私は…人を救けたい！守りたいんだ！影からでも良い！皆んなの笑顔を守りたいんだ!!」
「……なに…？」
命乞いなのか、又は死を前にした言葉なのか…飛鳥から放たれた言葉は、意外な物だった。
ヒーローや忍を殺す前に、彼らは死の恐怖を前にして、彼らの、彼女らの発する言葉はどれも正義感を胸に張っただけの、現状を逃げ出したいが為の言葉しか吐かなかった。
どれもこれも、とてもヒーローとは思えない偽善者が使う言葉、そこに揺るがない信念が存在しない…
飛鳥もその一人…そう見なしていた。
しかし、飛鳥はなんて言った？
人の笑顔を守りたい、他の人を助けたい、影からでもいいから…
影？どういう意味だ？

本当の偽善者なら、偽物なら、わざわざ影なんて言葉を使わなくても良いだろう…
なのに、何故コイツは…？
今まで殺して来た輩たちに、その言葉は一度も出なかった。
初めて聞くその言葉、どれだけ思考を巡らせても、思いつかない…
不思議でしかならない…だからステインは問うた。

「何故…態々影から？」

ステインは訳わからずと、疑問を思った表情に染め、彼女に問う。
すると飛鳥は、不敵な笑みを浮かべてステインにこう言った。

「だって、本当の正義って見返りを求めないと思うから！」

「……は？」
ステインはここで初めて、疑問から衝撃を受けたような表情を立てた。
思わずそれが声に出る。
この女は、この忍学生は…私怨を優先させる唯の偽物でしかない…
さっき迄そう思っていた。
彼女から初めて聞くこの言葉、その場凌ぎの逃げる行為の言葉ではない、薄っぺらい口だけの言葉ではない…
ステインには分かる、この少女の言ってる言葉は、嘘偽りのない、本物の言葉だ。
今まで、幾多ものの人間の言葉を聞いたステインだからこそ、誰よりも理想を胸に想い抱き、光を求め、信念を抱き求めて来た彼だからこそ分かる…
この少女の言ってる言葉は、全て本物だ。
飛鳥の言葉は、ステインがヒーローとして、信念を掲げるに相応しいものだった。

「それにヒーローは表で誰かを救う、光のように眩しいじゃない？
光があるのなら忍だって存在する……私は忍だから…影で人を支えたいんだ……
笑顔も、命も、心も、大切なものも何もかも……だから、影から人を救けたい。
誰にも気づかれることなく、影で人を支える…それって、己を見返らないもので、忍らしいじゃない？」
「――ッ！」
飛鳥の正義感から来る紛れもない本物の言葉、今まで耳にしたこともない、自分がソレを追い求め、ヒーローの理想として成り立とうとした揺るがない正義と信念。
ステインは彼女の言葉を聞いただけで、軽く身震いを起こす。
それは、恐怖ではなく…歓喜から来るもの。

――これだ。

ステインがずっと、探し求めてたもの。
「それに、私が許せないのはねステイン。貴方が敵として怒ってるんじゃなくて、人として怒ってるんだよ？
だって、私は…悪忍だけじゃなくて……ヴィランにも変わって欲しいって思うから……
ヴィランだって元は、一人の人間でしょ？貴方は少なくとも、私が見たヴィランとは違う……貴方はヒーローについて熱心に語ってる……それって、貴方が誰よりもヒーローを夢見て、ヒーローになろうとしたから…じゃないのかな？」
ヴィランにも。
ステインはその言葉を聞き耳を疑う。
許せないのは、敵としてでなく人として…？聞こうではないか、例え彼女が口に出す言葉が、どんな言葉であろうとも、聞く義務がある。
彼女のようなバカ正直な性格は、嫌いじゃない…寧ろ、好む性格だ。
憧れの部類として…

「ヴィランだからこそ怒るんだよステイン、ヴィランだからって理由で、怒らない理由にはならない…だってヴィランは人として見てもらえてないでしょ？

だからこそ、怒らなくちゃ…本当にその人を変えたいのなら、その人のことを想うのなら……

そんな、ヴィランだからって理由だけで誰にも見て貰えないなんて悲しいもん…

それじゃ人は変われない…いつまで経ってもその人は救われない……

それって、凄く悲しいことじゃない？

私はね、焔ちゃんって言う悪忍と、最強の友達なんだ。

その子は悪忍で、多分貴方が聞いたら許せないだろうって言うと思うけど、正直最初は焔ちゃんの事苦手だった…

カッコよくて、強くても、焔ちゃんの性格は好きにはなれなかった…

忍の道に反するような行動や、どうしてそこまでして強さに拘るのか…理由も見つけられなかった…

でもね、死ノ美を交わして分かったんだ。

善忍も悪忍も関係ないって、元は忍だもの、善と悪の心が二つに分かれただけ…変わらないのは、忍を目指すこと…

そして焔ちゃんと会うのは必然だったんだって思ったんだ。

そんな悪忍の焔ちゃんが、正義について考えるようになって、触れるようになった。

雪泉ちゃんって人もね、最初は好きになれなかった…

貴方と同じ、惰弱な正義は必要ないとか、悪は絶対に許せない…関わりを持つことすらおこがましい…

仲間たちもバカにされて、許されないことも多々あった。

でも、学炎祭を通して闘って、変わることが出来た…きっと雅緋ちゃんもそうなんだと思う…

だから、人と戦えば変わることが出来るんだって…分かったんだ。

なら私はねステイン、貴方と戦うよ、貴方にも変わって欲しいから

！私は絶対に負けない…忍の道を極めるまでは！」
「ハァ…！」
ステインは、緑谷の時と同じく溢れんばかりの笑みを浮かべる。
――素晴らしい。
間違いない、コイツは正真正銘、本物だ。
自分が必死に追い求め、探してた忍だ。
英雄を、正義を背負うに値する価値のある忍だ。
今まで見てきた忍供は皆偽物にして愚か者…私利私欲、金、名誉…
それらを糧として生きることしかできない社会のガン…
ステインはそれしか見てこなかった…忍に本物を見たことがない、
だからステインは、忍は必要無い存在だと解釈していた。
それでも、本物の忍を探し追い求める事までは捨てることが出来なかった。
ヒーローと忍が同じなのであれば、忍にも本物は必ず存在する…
今まで探してきても見つからなかった…影に光など存在しない…

しかし、本物は其処に居た。

今、自分の目の前に、本物が立っている。
ステインは先ほどの怒りを一変、満面な笑みを浮かべ、嬉しさのあまり舌を出してしまう。
彼女の一つ一つの言葉に、感化された。

ヴィランにも変わって欲しいから、正義感から来るものだからこそ、怒るんだ。
私怨ではなく、心を救うために…
変わるという事は、自分も同じことをしている。
偽物から本物の社会へと変えたい…全ては正しき社会の為を思ってるからこそ、ステインは刃を振るう。
悪忍も善忍も関係ない…
元はただの忍…考えもしなかった、忍の知識が浅いからという理由

もあるが、飛鳥のその発想は思いつかなかった。
偽物を粛清して来た彼では、到底たどり着けない発想…だがそれが良い、敵である自分が、教える側から、教わる側になるとは…
人と戦えば変わる、だから、ステインをも変える。
まさか、こんな単直で単純で単細胞で、人一倍正義感の強い小娘から、ステインをも変えると、宣言されるとは夢にも思っていなかった。
戦えば変わる。
それはつまり、これ以上の言葉は不要、命を懸けて闘うのに、言葉は野暮というもの…
変えたいからこそ闘う。
つまり、勝って救ける。
飛鳥はそういう子なんだろう。
――――良い。
ステインが探し求め、理想を描いた忍がそのまんま映されたかのような存在。
いままで忍を見て来た中で、光を見なかった。
忍の社会には光が存在しない…太陽が必要だ。
しかし、もういるではないか…目の前に眩しいくらい輝かしい本物の忍が、飛鳥が太陽だ。
その眩しさは、目では直視できないほど、とても心地よく、眩しく、輝かしく、平和の象徴と張り合える程、強い正義を彼女は持っていた。
素晴らしい、最高じゃないか。
これを至福と呼ばずして人はなんと呼ぶ？
これを、自分は偽物と呼んでいたのか？バカバカしい、先ほどの自分をつい恨みたくなるほどだ。
「ハハ…クハハ……ハハハハハ!!!小娘！」
ステインは突如笑い出した。
飛鳥は彼の笑い声に思わず体を反応する。
「良い！お前は良い！素晴らしい…お前が、お前のような忍がこの世に存在してるとは！お前は素晴らしい忍だ…ハァ……
訂正をする。お前は偽物じゃない、本物だ。お前は本物の忍だ……

忍が存在する理由を、存在しても良い理由を、俺はお前から学ぶことが出来た……ハァ……お前のような忍を、ずっと待っていた。待ち焦がれていた……お前のような本物の忍は、この社会に必要だ……」
ステインは、先ほど自分が偽物と彼女に言葉を投げかけ認識したことを謝罪し、訂正した。
彼女のような真面目で正義感の強い、単純な忍を目の前にすると、皆んなはなんと言うだろうか？
焔はこう言ってた。
『半蔵の名を背負う資格のない甘ちゃんだ』
雪泉はこう言ってた。
『聞くに耐えない綺麗事ですね、惰弱な正義で何という滑稽な事か』
雅緋はこう言ってた。
『弱さを友情ごっこで誤魔化すな、お前らの忍ごっこなど聞き飽きた』
皆んな、彼女を認めなかった。
否定し、罵り、向き合おうとすらしなかった。
だが、ステインだけは違った。
彼女を目の前にし、初めて認めて貰えた。
滑稽、愚か者、甘ちゃん、綺麗事、忍の恥、失格、伝説の忍の名の面汚し。
周りからそう罵られても、飛鳥は自分の信念を何一つ曲げず、正義の為に刃を振るった。
ステインは、そんな彼女こそがヒーローをも超えるような素晴らしい忍だと、身をもって肌身で感じた。

この殺人鬼と呼ばれるヒーロー殺しをも変えようとする飛鳥のその正義は、忍を超える存在と言っても過言ではない。
ステインの犯行は、世間一般として許されることのない重罪だ。
彼の行動の所為で、どれだけ多くの人が血を流し、犠牲となって来ただろうか…
彼は赦される筈のない存在、そんな存在を、飛鳥は変えようとしている。

ヴィランだから、そんな理由で心が変われるかもしれないヴィランを見捨てる訳にはいかない、少しでもその人が変わって欲しい、飛鳥のその優しさは、全てを包み込み照らす太陽。
他の忍共など論外、ゴミ。偽物が生きてることさえ烏滸がましい、そう思えてしまう程、飛鳥と他の忍の差は余りにも酷く差が空いていた。
その太陽は、悪をも蝕む善。
悪は善を蝕む存在だ。
偽物もそうだ、偽物は本物を蝕み、偽物と化す。
腐ったミカンのように、病人が人に病を移すように、その感染は恐ろしく、急速に広がっていく。
飛鳥はその逆だ。
きっとこの先、感染していくだろう…
飛鳥によって、偽物に感化された悪は、善へと変わり、己の誤ちを、罪を償うだろう…

ステインは彼女を、『忍の象徴』と名付けた。

コイツなら、もしかしたら…俺のやり方ではなくとも、もしかしたら…ひょっとしたら……この偽物に塗れた社会を、本物へと変えてくれるんじゃないか？
そんな幻想とも呼べる曖昧な気さえ感じた。

「訂正とか、本物とか、そう言った基準とか色々と分かんないことだらけだけど…これだけは言える…
…絶対に負けない!!から！行くよっ！」
飛鳥はステインに怯むことなく刀を握り、走り出す。
離れた距離を追い詰めるように、ステインとの距離は短くなって行く。
しかし、当の本人は動いていない…ただ、ずっと気味の悪い笑みを浮かべ、飛鳥を見つめていた。

不安を思い抱きながら、彼女は走るのをやめない、止まらない。
その時、ステインがようやく動き出す。ゆっくりと、体ではなく、顔と腕を動かし…血に染まったナイフを舐める…

ガクッ…。
「――――え？」
飛鳥は音もなく、俯きになるように倒れ込んだ。
バランスが悪かったのか、偶々転けたのか…そんな生易しい現象ではない。
体に力が入らなくなったのだ。
どれだけ体に力を入れようと、どれだけ必死に足掻きもがいても、決して微動だにしない。
体に麻痺が掛かった感覚だ、動くことが許されないように、身動きの一つもトレやしない。
飛鳥はさっき自分が斬られ、血を舐められたことを思い出す。
――――血を舐めた途端に体が動かなかなくなって……まさか！
「いい目だ小娘…いや、飛鳥と呼ぶべきか……本物の名前はきちんと胸に刻んでおく……
真意を試した。
今回の目的は別にお前を倒すことじゃない…
偽物を粛清する立場であって、本物は別だ……殺してはいけない……
だから、お前は殺さない。
お前はもっと強く生きるべきだ、忍の社会でお前は、必要不可欠な人間だ。
だから、俺はお前を殺さない…お前なら、未来ある忍たちを……」
ステインは凶器と呼べる武器を手に持ち、飛鳥の近くにいながらも、倒れてる彼女を見つめた後、視線を再び飯田に戻す。
そこには、傷により血が滲み出ており、個性による効果のためか、体が動かず俯せのまま倒れ伏せている飯田の姿。
「飯田…くん！」

「うぅ…！」
一歩ずつ、少しずつ近づいて来てるステインに、恐怖と絶望しか残されていない飯田。
飛鳥は飯田が狙われてることに気付き、声をかける。
――逃げて。
そう言いたいものだが、もしそれが出来れば苦労はしない…このステインの個性はなんだ？
飛鳥の血を舐めたその途端、動かなくなった。
つまり、個性発動は血の摂取による条件。
しかし、それがどれ程長く続くのか…また摂取量はどれ程なのか、不明な点が多く存在する…考えれば考える程より謎が深まった。
ステインは長い刀を再び飯田の首元に当てる。
そしてその刀の刃が、僅かに首の皮膚を少し斬り込み、血が滲みでる。
肩、腕から流れ出る血を見れば分かる…これですらもう重傷だ。
ステインは、再起不能にするのではなく、今度こそ殺す気だ。
兄の代わりに、コイツを殺すと言わんばかりに…ステインはインゲニウムを名乗る少年を、血に染める。
飯田の表情は段々と悲しみの表情に染まっていく。
「くそッ！くそッ!!……クソォ…！」
「飯田くん！そんな…まだ体が…！」
「ダメ！飯田くん…！」
飯田の悲痛と痛苦に、苦楚の表情を見せる飯田は、必死に体に言葉を投げかけ動かそうとするも、動けず…
緑谷と飛鳥は、涙目になって飯田に必死に声を掛ける。
――それでもステインは止まらない。
「どうだ偽物よ…本物のアイツらは、お前を救ける為にここへやって来たも、お前の所為で奴等は不幸の身となってしまう……ハァ……
お前は弱すぎる、そこらにいる虫ケラと同等だお前は……」
「煩い!!俺は……お前を殺すんだ！お前の所為で…兄が！苦しみ！お前の所為で友が苦しんだんだ…！僕は絶対にお前を、お前だけを絶対

に許せない！だから殺し――――」
「まずアイツら救けろよ――」
「!?」
飯田が初めて見せるこれまでにない暴走の殺意を抱き、復讐に染まった彼。
対するステインは、何も臆することなく、親指を緑谷と飛鳥の方向に向ける。
「本物のヒーローとしてなら、兄の想いを引き継ぎたいなら…復讐に矢先を囚われるのではなく、私怨を押し殺してでも、アイツら救けてやれよ。
殺す、じゃなくて、救ける、が先に言葉に出るはずだ……
だからお前は『偽物』なんだよ弱者が…
それを、俺の所為にするんじゃねえよ、復讐に囚われ、お前の愚行が、あの二人を巻き込んだ……それを、他人のせいにするな愚か者、例えそれが敵であっても、他人のせいにするなよ偽物」
「…ッ」
ステインの意外にも、余りにも真面目で真正面な正論に、飯田は心を挫き、絶句する。
確かに、何も言えない…
こんなこと言われれば、もう何も言い返す言葉も見当たらない……
悔しくて、飯田は目から溢れんばかりの大量の涙を流す。
「――――死ね」
彼がそう呟いた時…刀が再び振るう。

と思っていた。
その途端、強烈なる炎と風の二つの属性の攻撃が、ステインを襲いかかる。
「――ッ！」
だがステインは反射的にそれを上手く躱した。
奇襲とも呼べるその攻撃を、ステインは難なく躱した。
「この街は、余り慣れてませんもので…探すのに手間取りましたが…気配で何とか此処まで来ることができました…」
「――またか？ハァ……次から次へと、今日はよく邪魔が入るな…」
風と炎による幻想的な光景を目の前に、ステインは深い溜め息を吐きながら、その個性を使った二人を、目を細めて睨みつける。
視界が悪いので、上手く見えないが、しかし人影は確かに二つ存在する。
「緑谷…こういうのはもっと、ちゃんとした連絡した方がいい…戸惑っちまった…」
「この声…」
聞き慣れた二人の声に、飯田とステイン以外の二人は歓喜な笑顔に染まる。
対するステインは、その人影に舌打ちをする。

「遅くなりました」
「遅くなっちまった」
月の正義に舞い忍、飛鳥の最強の友達にして、正義の同類。
白い浴衣の衣装に身を包んだ雪泉。
コスチュームが改変されたのか、左側を覆ってた氷のコスチュームは完全になくなり、そして…今まで否定してた力を、何の躊躇いもなく駆使する、轟焦凍。
かつて、お互い反対同士で、何かに悩まされた二人は、友を、命を救う為に、やって来た。

７９話「成長し、継がれる想い」

「気配に敏感な私だから分かりました……この不穏な嫌な殺気、街で繰り広がる被害…」

少女は氷を纏った冷気の風を操り、ある少年は燃え盛る炎の熱を操り、真逆な風と炎の力が相性を最高に引き寄せ、これまでにない最大火力を解き放つ。

冷たい氷の破片が散らばり、炎の火種が散らばり、氷山の一角を思わせるような美しく鮮麗な氷に、灼熱の炎の海が全てを明るく照らすかのように、氷を包み込む。

氷と炎は対極にあり、相性が悪いと聞く。

しかし、目の前の光景を見れば、その考えは全て否定されることになる。

氷と炎の融合…メタンハイドレートという燃える氷の名を呼ぶに相応しい、見てるだけで、不思議な感覚に身を包まれるようなこの幻想的な光景――

氷と炎の対極な存在が最高にマッチングし、冷たい冷気と熱い熱気が混ざり合い、温度が不安定になる。

しかし目の前の美しい光景に、その場に倒れてる皆んなは目を奪われ、心なしか見惚れてしまう。

「その正体が、貴方と聞けば尚更納得がいきます…」

その炎と氷の後ろには、氷の女王とでも呼ぶべきか、美しく、清らかな声が路地裏に響く。

「一括送信…可笑しいと思ったんだ……お前みたいな大真面目なヤツが、急に訳分からんメッセージ、送ってくる訳無いもんな……」

同じく、聞き慣れた声も聞こえる。

冷たいようで、でもそこには確かに以前とは違う、温もりが込められてる声…

「遅くなっちまったろ、緑谷――」

「轟くん！」

「雪泉ちゃん!?それに轟くんまで…どうしてここに?」

次第と視界が晴れ、煮えたぎる炎と、冷気で霜が降りかかってた氷が晴れ、そこに映る人物は、轟焦凍と雪泉――

「ハァ……邪魔を……そろそろ、どいつかの個性が切れそうだな……」

対するヒーロー殺しのステインは、又も飯田を殺すことができず思わず舌打ちをし、二人の救助に忌々しい目付きで睨みつける。

――何故あの二人がここにいるのか？

雪泉も飛鳥達と同じく強化パトロールで保須市へやって来た。それも、夜桜や叢とは別々で…

その理由は無論、ヒーロー殺し――

ヒーロー殺しが保須市にいる確率があると推測しやって来たのだ。

とは言ったものの、ヒーロー殺しが他の地域に逃亡し犯行を行なってる場合も考えられたが、どうにも胸騒ぎがしてならなかった。

だが、もしかしたら保須市でまだヒーロー殺しがいる確率も考えられる…ヒーロー殺しを見たという反応は一切ない、それらしき人物も、似たような人物も――

轟の研修先は驚くことに、エンデヴァー事務所、もとい実の父親…今まで憎み、否定して来た父親の事務所を選んだのだ。

そこからここに結びつくのには理由が存在する。

エンデヴァーはインゲニウムの事件があってか、パトロールをより厳しく強化し、相棒（サイドキック）達と共にここ保須市に赴き、警備を強化していたのだ。

そしてその警備に轟も入っていた。

しかし昔の轟から考えれば、研修先がエンデヴァー事務所だなんて考えられないだろう…

何より母親に危害を加え、大好きなお母さんを目茶苦茶にしたエンデヴァーの所業は当然許されるはずがない、でも…轟は、第一志望をエンデヴァー事務所として入った。

轟が彼の事務所に入った、その理由は――

「緑谷から偶々連絡入ってな、そしたら意味が分からんメッセージが送られて来た…数秒意味を考えたよ。

そして調べた結果、ここへやって来てみればまさかのヒーロー殺し…こりゃあ偉い大物が現れたもんだ…雪泉とは…別々でやって来たけどな…

大丈夫だ、数分もすりゃあプロも現着する…！幾ら相手がヒーロー殺しでも、俺らはさておき、多くのヒーローたちが来たら話は別だ…そうだろ？」

轟が右足を出すと、地面を這うように氷が出現し、路地裏の道を凍らせる。

ステインは瞬時に避け素早くジャンプをするものの、雪泉は鋭い氷のクナイを形成し数本、ステインに飛ばす。

ステインは長刀を軽々と扱い、氷をバッサバッサと切り捨てる。

一本もミスることなく全て斬り捨て、キラキラと輝く氷の破片が散らばり、風に身を乗り消えていく。

轟はステインが着地する前に氷を上手く使って、倒れてる飯田、飛鳥、緑谷、ネイティヴを救出する。

「とにかくだ…

コイツらは殺させねえぞヒーロー殺し――」

そして四人は無事、二人の元に転がるように助かる形となった。

「飛鳥さん…他の方々もご無事でしょうか…？」

雪泉は心配そうな目で四人を見渡す。

緑谷は大して問題ないように見えるが、他の三人は血を流していた。

飛鳥は「私は…大丈夫…！」と声を張り、飯田は小さな声で「僕も大丈夫だ…」と小声で呟く。

皆んなの反応を見た限り、どうやら命に別状はないようで、雪泉は一息つく。

「ヒーロー殺し……忍やヒーローを幾多もなく殺害する貴方の犯行に、一体どのような意図があるかは存じませんが…

私たちが来たからには、もう好きにはさせません」

雪泉は冷気な眼光を解き放ち、扇子を広げ、優雅な体勢でステインに向ける。

二人の登場に、ステインは舌を出したまま見つめている。
「……小娘…お前も忍…か」
ステインは雪泉の言葉から察し、彼女も忍だということを知る。
いや、雪泉の名前を聞いただけで直ぐに分かった。
コイツも忍であることを――
飛鳥が話してた人物…
飛鳥の最強の友達。
飛鳥と同じく、正義を志す少女――
「轟くん！それと雪泉さん！アイツに近づいちゃダメだ！
ソイツに血を舐められたら体の自由が奪われる！
僕や飛鳥さんも…それでやられた！」
「血の摂取…つまり経口摂取か？
――それで刃物か！成る程…それなら納得がいく…だが安心しろ
緑谷、俺と雪泉の二人なら…！」
「距離を保ったまま完封でき――「っつ!?」
――!?轟さん!!」
突如、雪泉の隣にいる轟が悲痛の声を上げる。
振り向くと、肩にナイフが突き刺さり、赤い鮮血が広がるように染
まる。
雪泉は少し驚愕に染まった顔で轟からステインに視線を向ける。
するとステインも今度は小型のナイフを数本投げつけ、雪泉はかろ
うじて扇子で凶刃を弾く。
「――ハァ、いい戦友を持ったじゃないか、インゲニウム――」
ドス黒い殺意に身を染めたステインは、鋭利な刃物で雪泉に斬りか
かるも、彼女は扇子を剣のように氷で形成し、ステインの斬撃を止め、
鍔迫り合う。
ステインは自身と渡り合える人間を目の前に微笑み、雪泉は相手の
微笑みが気味が悪いと思ったのか、鋭い眼光を放つ。
「――ハ、ハァ……いい動きだなぁ…俺のこの動きについてこれると
は…飛鳥と良い、緑谷と良い……他の偽物よりかは楽しめそうだ
……」

「そう言ってられるのも、今の内です！」
雪泉は剣に風を纏わせると、ガラスの破片のような無数の氷の破片が風に乗り、剣に氷の風が纏わりつく。
暴風…とまではいかないが、それでも相手にダメージを与えられる程の威力はある。
雪泉は氷風の剣に強い力を入れると、剣は刀を弾き、上に飛んだ。
ステインは瞬時に地面を蹴り、その場から離れ、着地点にあるゴミ袋をクッション代わりに蹴ると、勢いよく轟に斬りかかる。
しかし轟は肩の傷など関係なく、地面から突起物の氷を形成させ盾として身を守る。
だがそれもまた愚か、ステインの刃物はバターをスライスするように、氷を斬り捨てる。
その素早い動き、轟は反射的に避け、刃物の刃先が轟の頬を僅かに掠め、血が殘る。
ステインが上をチラリと余所見し、釣られて轟も雪泉も見てみると、そこには先ほど雪泉が弾き飛ばした刀が、車輪でも回るかのように、轟目掛けて降りかかる。
轟は軽く避けようと数歩下がるものの、胸ぐらをステインに掴まれた。
ステインは長い舌をレロリと伸ばして轟の傷口を舐めようとする。
――血の経口摂取がヤツの狙い。
身体の自由を奪われれば、簡単に殺される。
つまり、血を舐められたら終わりだ。
「ちぃっ！」
轟は咄嗟に炎を出し、ステインに近付けさせまいと威嚇する。
危なっかしい炎はまだ慣れてないのか、多少大雑把に見えるのは仕方ない…
ステインはその場からジャンプをし、空に降りかかってくる長刀を再び手に持つ。
――強い。
たった一つの動きが、二択三択を迫ってくる。

少しでも気を逸らせば簡単に殺される。
コイツは個性を出してなくとも十分強い…
ヒーロー殺しの実力に、悍ましさを感じながらも、相手の強さを身をもって噛み締めた。
「お前ら…ハァ、忍とヤケに仲が良さそうだな？知り合いか…？
何故ガキどもが忍の存在を知ってるのだろうか…疑惑が浮かび上がってくるな……」
「そうか、なら知らなくても良い……！」
轟が炎を飛ばすもステインは軽々と後方に下がる。
「轟さん…血、大丈夫でしょうか？」
「ああ、俺に関しちゃ問題ねえ…けどあのヒーロー殺し……個性なしであれ程の動きが出来るなんてな…
もしかして、アイツも実は忍だったりとかするのか…？」
「いえ…それはあり得ません…」
雪泉は警戒しながら、ステインを一瞥する。ステインは距離を詰めようとするものの、雪泉の氷風でろくに近づけない。
「彼の気から、そのような気配を感じません…忍には忍の独特な気配を感じることができます……
しかし、彼には異常な殺気が漂ってるだけで、忍の気配はありません」
「となると…素であれで動いてんのか……」
身体能力強化の個性でなければ、忍でもない……
素でアレ…ということは、イレイザー・ヘッドと同じ…一体どのような鍛錬をすればあんな動きが出来るのやら…
「ハァ……二人とも同じ属性…厄介だな……だが、それもまた良い…」
ステインは二人を見つめ吐息を漏らすと同時に、狂人っぷりな動きで二人に迫る。
氷の壁を作るものの、ステインは片手に長刀、もう片方にサバイバルナイフを…二つの凶刃を上手く使い、豆腐のように簡単に氷の壁は斬られてしまう。
雪泉が攻撃する前に、ステインは足のスパイクで腕を突き刺す。

「ッ――！」
「動きは悪くはないが……自らの視野を防ぐ行為は…愚策だ……カウンターを決めようものなら、他の立ち回り方をすれば良いものを…
二人とも、愚かだ」
「そりゃあどうかな！」
轟が炎を出そうとするも、ステインは隠し武器のナイフを三本飛ばし、轟の腕に鋭利な刃物が見事に突き刺さり、血が滲み、溢れ出る。
苦痛の表情に染め、それでも怯むことなく屈しず、炎を操り攻撃する。
しかしステインはそれを避け、何かを飛ばし壁際にジャンプし壁蹴りする。
来ると分かり、雪泉が迎え撃とうと一歩足を踏み入れるが…グサッとした嫌な音が足元から響き、雪泉は思わず苦痛の表情を立て、僅かに怯む。
一体何が…と見てみると、地面には黒くて刺々しいまきびし、本来忍が使う道具が撒き散らかしていた。何かを飛ばした正体はこれだった。
雪泉の足から僅かに血が流れ、ステインは雪泉の一瞬の油断を見逃すことなく突っかかって来る。
雪泉は何とか氷の剣を駆使してステインの乱れる狂人たる剣技を見事に防ぐ。
「忍の道具……何故貴方がそれを…！」
「愚問を……俺は忍を殺害してる身だ……殺した相手の道具位は盗むさ……ハァ……
偽物を粛清するのが俺の務めであり役目……飛鳥のような本物の忍へと正すことが俺の使命だ……」
「飛鳥さんの……」
雪泉は飛鳥に視線を合わせば、ステインが何を言ってるのかも、何が言いたいのかも少し理解した。
飛鳥をよく見ると、彼女は確かに血が付いてるものの、殺されてる訳ではない。

また、飯田と比べてそこまで傷が深くない。
ステインは彼女を本物と謳い、他の忍を偽物と名付けてる。
雪泉はステインの考えこそは完璧に理解できないが、彼が何故忍を殺すのか…少しだけ分かった気がする。
「……貴方が何故忍を殺すのか…何となく分かってきました……
貴方が忍を殺すのは…正義を求めて…ですか？」
「……まあ、正解だな」
本物の社会へ、本物の光と影を取り戻すことが可能なら、例え自分がヒーロー殺しというヴィランに、犯罪者として見に染めようと構わない。
それで本物が増え、社会を変えてくれるのならそれで良い。
人殺しが悪いことであり、ヒーローを追い求めた人間がヴィランに身を堕とすなと言われても仕方がない。
だが、本当にヒーローを、正義の為だと思うのなら、憧れてるのなら、こう言ったやり方でしか方法はない。
人は死を前にして初めて、本意を露わにする。
人の死を世に知らしめることで、ヒーローとは何なのか、ヒーローとは一体…正義とは何か？何が正義なのか…考え改めさせる。
ステインの思想はそれだ。
少しでも本物が増えてくれるのが、ステインの悲願である。
ステインは以前の雪泉と同じ、歪んだ正義を持っていた。
――だから、ステインの言ってることが、雪泉には何となく分かるのだ。
「貴方の仰ることは分かります……乱暴に力を振る舞う犯罪者が許せないのも、信念を持たない惰弱な正義が許せないのも…
貴方の怒りも、共感できるものがあります…
私たちも昔そうでしたから……」
黒影おじい様の為に、悪を滅ぼす。
惰弱な正義など目障りだ、悪同様に滅ぼすのみ。
黒影おじい様に拾われたあの日から、ずっとそれをバネにして生き

てきた。
悪を憎み、全てを正義に変える。
五人とも、黒影おじい様の悲願のためにと、そうやって生きてきた。
だから分かる。
「ハァ……誰かが正さねばならない…この偽物に塗れた社会を…ヒーローと忍も、皆んな多すぎるんだよ!!
金や名誉なんて下らねえ物で、私欲を満たそうとする愚か者が…!
利益となる言葉に心を踊らされ、偽善者が正義を胸に掲げる者……愚かにして粛清せねばならない…
小娘、飛鳥からは詳しいことまでは聞いていない……だから、例え飛鳥の友でも…お前もそこらに転がってる偽物と何ら変わらないのであれば…

お前も殺す――」

「――!?」
ステインの禍々しい殺意の視線が、雪泉の心に恐怖を与える。
――殺す。
多分、今まであまり言われたことがないからかもしれないが、その言葉を聞いてゾッとしたのは彼が初めてかもしれない。
その悍ましさ故、軽く体を震わせてしまった。
だが、直ぐに意識を集中すると、雪泉は冷たい目線でステインに語る。
「……貴方の境遇や、過去に一体何があったのかは存じません……
しかし、貴方の行為は何があっても見逃すことなど、あってはならない……
確かに、私欲に塗れた人間は少なくはありません…人の数だけ存在する…と言っても間違いではない……
しかし、哀しいではありませんか…?」
「はぁ…?」

哀しい？
雪泉の目は何故だか潤っており、純粋で綺麗な青い瞳が震えている。
今でも涙が零れ落ちそうな雪泉のその表情に、ステインは疑問を抱き、ため息をつく。
「私も…昔は貴方と同じく社会を変えようとしていました…
悪のない…誰もが幸せに生きる世界……私もそれを望んでいました……
そうすれば、悪によって悲しむ人間はいなくなる…涙を流す人間も…何もかも……悲しみを振り払うことが出来る…と。
しかし、それではダメなのだと、飛鳥さんやオールマイトに教わりました……
だから分かったのです、私たちのやってることも、私欲を満たす行為でしかない…
それに、哀しいじゃないですか…？ただ粛清するだけでは…ただ悪だからという理由だけで、何もかも傷つけ、殺し…結局残るは虚しさだけ……私はそれが、怖いのです……
だから、そんな悲しみに染まらない為にも、ステイン…貴方を止める――!!」
もうこれ以上自分たちと同じ道に歩ませたくない。
例え相手が敵であろうとも、正義を求める者であれば、間違った道を正す。
歪んだ信念や正義を正す、それは雪泉にとって過去へのケジメであり、新たな正義を証明する為でもある。
黒影が雪泉に伝えたかったこと、今なら分かる、目の前に昔の自分がいるように思えてしまう。
「言葉では不要…なら、命懸けで俺を止める…と？
ハァ…成る程……
――お前らも良い!!」
相手の事を思いやり、愚行を止める。
私怨ではなく、己の内から湧く正義が彼ら彼女らを動かしてる。

まさか、本物の忍がもう一人いるとは…今日は何という日だ、本物のヒーローに忍が二人、四人とも居るとは夢にも思っていなかった。
今まで探し求めてた、本物の可能性に近い、本物になりうる忍とヒーロー…
確信した。
やはりヒーローと忍は何ら変わらない、己の信念をよく理解している。
己が何をどうすべきか、何が正義なのかを…
ステインは、狂った笑顔を見せる。
――コイツはマズイ。
そう判断した轟は直ぐに炎を出し威嚇する。
焔に触れれば火傷を負う、ステインは直ぐに雪泉から離れ、携帯ポーチに入ってたナイフを轟に飛ばし、又しても腕をくらい、俯きに倒れてしまう。
「チィッ――!!」
「ッ!」
俯きに倒れた轟、その場の地面が真っ赤な血に染まる。
雪泉は隣にいた轟に心配の眼差しを向けるが――真上にはステインが長刀の刃先を彼女目掛けて降りてくる。
雪泉は轟から直ぐにステインへ視線を変えるものの、反撃や防ぐこともう既に遅し、雪泉は思わず目を瞑ってしまう。
「ハァ…!お前も止まれ!」
ステインの言葉が合図になるように、刃先が雪泉に遅いかか――
「でりゃあ!」
「――ッ!?」
――ることはなかった。
突然誰かの声が聞こえ、薄っすらと目を開けると、先ほどまで体が動けず倒れていた緑谷が、ステインの後ろ襟を掴み、壁際に走り思いっきし頭を擦るようにぶつける。
初めて痛撃を受けたかのような表情に染まるステインは、緑谷を一瞥する。

（コイツ…O型か…！）
「緑谷さん!?先ほどまで動けなかったはずでは…」
「なんか急に動けるようになった!!」
緑谷自身も不思議でならない。
先ほどまで自分は体を動かすことは無理だったのに、突然体が動くことができたのだ。
どういう理由かは分からないし、相手がどのような個性かも分からない…
ただ個性の効果、時間切れによって体が自由に動けるようになったのは確かだ。
その信憑性は極めて高い。
ステインは緑谷の横腹に肘で突くと、「がっ!?」と声を出し体勢を崩しては落っこちてしまう。
ステインは難なく無事に着地し、緑谷はゴミ袋の方へ落っこち、クッション代わりとなったお陰か、怪我は無い、無傷だ。
「……血液摂取、体の自由を奪う、時間経過で動ける……
なるほど、奴の個性…なんとなく分かって来たぞ」
「ぼ、僕は最後に血を舐められて体の自由が奪われた…！でも先に解除できたのは僕だから……つまり、考えられるパターンは三つ！」

一つ、人数が多くなる程効果が薄くなるか。
二つ、相手の血を摂取したその量に応じるか。
三つ、血液型によって効果に差異が生じるか。
因みに緑谷はO型、飛鳥はA型、飯田も同じくA型、ネイティヴはB型。
因みに今まで黙ってたネイティヴさんの目の前で忍の名前を暴露してるが心配はご無用、彼も忍の知識を知ったばかりであり、特に警戒することはない。
「血液型かぁ……察しが良いな……正解だ…！」
ヒーロー殺し　ステイン　個性『凝血』相手の血を舐めることで体の自由を最大8分間奪えることが可能。

Ｏ・Ａ・ＡＢ・Ｂの順番で奪える時間は短い。因みに彼はＢ型である。
つまり血液型の順に沿うと、２分・４分・６分・８分ということだ。
「血液…それが分かった所でこの状況を打破するのは困難……平たく言えば、血を舐められたらそこで終わり…と言えば宜しいですね」
「ああ、問題が時間継続にある……
俺や雪泉はいつ血を奪われたのか見てねえし分からねえ…
それにどのくらい効果が生じるのかも不明だ……
ここは一旦撤去して増援呼びてえ所だが…街に被害が出る確率も極めて高い…何より俺の氷と炎、雪泉の風をも凌ぎ避ける実力がコイツにはある…そう易々と逃がしてくれる相手じゃねえってことくらい、分かってる……」
実際不意打ちとは言え二人のコンビ技もあっさりと躱された。
とてもではないがヒーロー殺しに勝てる確率はほぼ低いと断言しても良い。
それでも轟の目は屈しない、雪泉も覚悟を決めた視線を向ける、緑谷も「僕まだ動ける…戦える…！」と声を張り上げ、弱々しく立ち上がる。
雪泉は轟の腕に突き刺さってるナイフを取り、轟は立ち上がる。
三人は諦めない。
例え相手がヒーロー殺しでも…それでも――
「俺たち三人で、皆んな守るぞ――」
轟は二人にそう言った。
雪泉と緑谷も、無言で頷く。
今この場でやれること、出来ること…飛鳥たちに危害を加えることなく守り抜くこと。
ヒーローたちの増援が来るまで、ステインという強敵と対峙する。
勝ち目はない…でも、負ける気もしない。
ステインを前に、或る者は拳を握りしめ、或る者は氷の剣を生成し、或る者は氷と炎を出すタイミングを見計らう。
「雪泉ちゃん…」

今まで黙って見つめてた飛鳥は、ソッと声を出す。
雪泉は後ろを振り向くと、ニコッとした笑顔を見せた。
その美しく、柔らかい、優しい笑顔は、学炎祭にいた頃の雪泉とは大幅に違った。
「大丈夫です飛鳥さん、私は死にません…絶対に、死にません。
黒影様のこともありますが、飛鳥さん…私には守るべき存在があります。
大切な友達、最強の友達がいるから、私は負けられない…絶対に負けられない…
だから飛鳥さん、もう大丈夫です。安心して下さい」
雪泉の言葉から、初めて守るべき者が存在すると聞いた飛鳥は、目をまん丸にする。
雪泉のこれまでにない急成長、それに戸惑う反面、雪泉の優しさが、月に照らすかのような正義が、何よりも嬉しかった。

「――三対一か、甘くはないな…」

表情が先ほどまでとは全く違う。
ステインの表情は、一段とドス黒い何かに変わる。
嵐の前触れのような、嫌に静かな空間に包み込まれる。

その中で、雪泉は悪とはなんなのか、正義とは何なのか…これからそれらをどう向き合うのか…頭の中でその考えが過った。
轟も雪泉と似たように同じく、飯田を見て自分がこれから何と向き合えば良いのかを、頭の中で考えが過っていた。

――昔の自分なら、悪に対する者は全て処分…滅することだけを考えていた。
悪こそが悲しみ、怒りの原因であり、悪が無くなれば全てが平和に暮らすことが出来る。
今まで、ずっとそう考えていた。

しかし、黒影おじい様の悲願は、何かを犠牲にして世界に平和をもたらす、そんなことじゃない…
黒影おじい様の本当の願いは、自分たちが一流の忍になれること…
悪の殲滅なんかじゃない。

――簡単だったんだ。
何で、簡単で、大事なことを今まで気づけなかったのだろうか。
学炎祭、飛鳥さんの決着の前に、轟さんとある話をした。
自分がまだ本当に我々のやってることが本当に正しいか、黒影おじい様の意に反してるか否か…悩んでいた時。
轟さんは言ってくれた…

『アンタ達がつらみ恨みで動くのは、俺も知っている。
俺もそうだったから……母を苦しめ父は俺を道具としてしか見てくれなかった……
アイツを赦す気なんざ更々ない……今でも、俺はアイツを赦さない…でも、そんな憎悪に染まったままじゃ、ダメだと思う。
もっと大切なものを、見落としてるんだ……俺もそうだったから……
黒影さん…だっけか、俺はその人に会ったことないし、どんな人かは知らないが、話を聞いた限りだと、その人は多分理想を叶えたいわけじゃ無いんだと思う』
『もし本当に悪の殲滅だけを望んでいるなら、アンタ達は俺と同様に、恨んでいるはずだから…
けど、アンタ達は黒影さんのこと、好きだろ?
それってさ、黒影さんは理想を叶えたいんじゃなくて、アンタ達が、幸せに生きることを願ってるんじゃないか?
例えば…笑顔…とか?』
――それを聞いた時、自分たちはようやく、その大切なものを見つけることが出来た…!

悪に対する憎しみの余り、忘れていた…
自分たちの本当に大事なことを…
黒影おじい様が、大好きなものを。

そうだ、もし黒影おじい様が理想を優先するのなら、黒影おじい様は私たちに優しくしてくれなかった…
黒影おじい様と過ごしていた時間そのものが、大好きだなんて思いもしない…
皆さんと、轟さんと会い、私たちは救われた。
今思えば、悪を殲滅する。
悪に対する者は何が何でも滅する…それは、自分たちの弱さではないか？と疑ってしまう。
だって、何の理由もなく、ただ悪を殲滅するだけでは、殺戮兵器…人形と何も変わらない…私達には意志がある。
ただ悪を殲滅するのは、それは悪に染まるのが、怖いからではないか？
自分たちが悪と関わるのが嫌だからという理由も一つ当てはまる、しかし、悪と向き合うのを、逃げてたからではないか？
憎しみが無くなった今なら、色んなものが見える。
視野が広がり、色んな物に対する考えを持つことが出来た。

ありがとう、飛鳥さん。
ありがとう、轟さん。
ありがとう、半蔵学院の皆さん。
ありがとう、雄英高校の皆さん。

貴方達と会っていなければ、今頃私達は、ステインと同じ道を歩むことになってたのかもしれない…
今目の前に映るのは、絶対正義の為に刃を振るう、狂人。
ステインは走り出したその途端、まず雪泉を狙った。
きっと忍が厄介だと判断したのだろう、優先順位を雪泉にした。

雪泉は氷と風を放出するが、ステインは氷を、凶刃で砕き、斬り捨てる。
それも、的確に、素早く、空振りをすることなく…
風は何ともないと言わんばかりに近づいてくる。
雪泉は距離を保とうとバックステップするものの、ステインは数本のナイフを投げつける。
しかしそれを扇子で弾き払う。
ステインは追ってくる。
バックステップした彼女に、二刀の凶刃を手に持ち、先ほどまでのスピードとは全く違う、本領を発揮した。
雪泉がカウンターを取る前に、ステインは縦横無尽に凶刃を振るい、その刃先が雪泉を掠め、血が滲みでる。
あの雪泉の動きを、ステインは上回ったのだ。
掠めたとはいえ、雪泉は僅かながらに苦痛と驚愕の表情に染める。
自分のこの動きを、追いつける者など、忍しかいないと思っていた。
しかし、雪泉の考えはステインによって打ち砕かれた。
雪泉は歯を食いしばり反撃を仕掛けようとするも、ステインは蹴りで腕を蹴り飛ばし、スパイクが腕を突き刺す。
「――ッ!!」
「雪泉ぃ!」
雪泉の悲痛に轟は叫ぶ。
雪泉はヴィランとの戦いはこれで初めてだ。オールマイトヴィランを除いて…彼女の腕から血が出て、ステインは瞬時に雪泉の腕を掴み、長い舌で彼女の血を舐めようとする…が。
「させねぇ!」
轟は炎を出しステインはそれを避ける。
雪泉は辛うじて舐められることなく、無事ステインとの距離を離れる。
これがヴィラン。
雪泉はヴィランという存在が、如何にどれ程凶悪なものか、残虐なものか、悪忍とは違うものなのか、より身をもって理解した。

一方轟は――
――俺は今までヤツを否定してきた。
炎を使わない、氷の力だけで、母さんの力だけで上に進み、勝ち上がり、頂点を取る。
それが俺がヤツに対する否定だ。
アイツは家族のことなど何とも思ってない、微塵たりとも…家族の愛情なんてものはない…あるのは、己の私欲を満たす、オールマイトを超えさせる、それがヤツの野望だ。
俺はそんな道具にならない為に、アイツを否定する為に、今まで炎の力をずっと封印して来た。

けど、緑谷と戦って分かったんだ。
このままじゃダメなんだって…ようやく、自分がヒーローになる理由を、見つけることが出来たんだ。
何でヒーローに憧れたか、その理由すら忘れちまってた…
――俺は本当に馬鹿だった…
大切なもんまで忘れて、何がヒーローだよ。
父親の否定より、まず大切なことがあった、やるべきことがあったんだ。
それを、緑谷のお陰で一歩前に踏み出ることが出来た、そして――
――母さんに会って、ケジメつけることが出来た。

あの時体育祭が終わって翌日、俺は母さんのいる病院に行き、会った…
最初、母さんは凄い驚いてた。
『焦凍…？焦凍なの…？』
それも無理もない…もう１０年も会ってないんだから…けど、俺が頷くと母さんは、目にいっぱい涙をためて、号泣し出した。
俺は涙が出るのを堪えた、母さんはすごく嬉しがってた、俺も嬉し

かった。
大好きな母さんと再会できて、久しぶりに母さんを見ることが出来て、話すことが出来て、昔の自分では想像もできない程に…
母さんは泣いて謝って、許してくれた。
『ゴメンね焦凍…貴方に辛い思いをさせて……
ずっと、辛かったね…ゴメンね、あの時焦凍に酷いことをしてしまって……
焦凍が悪いんじゃない……でも、ありがとう……謝ってくれて…良いんだよ、もう悩まなくても……
大好きだよ、焦凍――』
泣いて、笑って、その後、色んな話をした。
体育祭のことも、左を使ったことも…そして、緑谷のお陰で助かったことも――
――全て簡単だったんだ！
でも、簡単なことが、大切なことが目に見えていなかった…！
そして、俺はようやくヒーローになる為に、スタートラインに立つことが出来た。
その為に、ヒーローなる為に俺は、職場体験で親父の事務所を選んだ。
親父と向き合わなければならない…そう思ったから…
確かにアイツはクズだ。
でも、それでもアイツは腐ってもＮｏ．２ヒーロー、実力は確かにある。判断力、観察力、勘の鋭さ、それらを持ち備えていた。
職場体験で観てきたが、アイツの実力は全て本物だ、その事実は例え相手がクズでも認めざるを得なかった。
俺がこの先成長する為に、ヤツの姿を観て、成長し、経験を受け入れること。

簡単だった…何もかも…だがそれを見えちゃいなかった…だから――

『君の力じゃないか!!』

――嬉しかった！

アイツの言葉で、俺は救われた。

そう、アイツの力じゃない、俺の力なんだ……母さんが言ってた言葉をわせれちまうなんて……

でも、緑谷がそれを思い出させてくれた…心の底から、改めて礼を言おう――

――ありがとな、緑谷。

炎の動きになれたのか、ステインは炎に当たらない程度のギリギリに沿い、轟に詰めていく。

轟は氷を出すもステインは軽々しく避け、もう残りのナイフがないのか、投げナイフを繰り出さず、長いナイフを手に持ち氷の壁を無残に斬り捨てる。

（こいつ…やっぱり……明らかに動きが違う、様子も違う…焦ってやがる……

もう直ぐ増援が来る…その事実をステインに焦りを与えてる）

「想像以上に…厄介だ！」

轟や雪泉は血を流しながらも、ステインに立ち向かう。

どれだけ傷つけられても、どれだけ悲痛な思いをしても、それでも辞めない、諦めない…

――後ろには、守るべき友がいる。

「……もう、やめてくれ……」

ふと後ろから、涙混じりの弱々しい声が聞こえた。
轟や雪泉は目の前のことに集中し、振り向かないが、声は確かに聞こえている。
「もうやめてくれ!!コイツは僕が倒すんだ！君達には何も関係ないだろ!!
もうこれ以上、関わらないでくれ!!僕が…僕がアイツを…兄さんの夢を潰し、苦しめたアイツを…僕がこの手で……!!」
その言葉を聞いた途端、二人の表情は一瞬にして怒りの表情に染め、何かが切れた。
二人同時に…そう…
「――良い加減になさい!!!」
「――やめて欲しけりゃ立て!!!」
「!?」
雪泉と轟の二人の怒号が同時に飛び、飯田を叱る。
轟は最大級とも言える氷の壁を作り出し、自らの視野を遮りながらも、目の前のことに集中しながらも、二人は言う。
「飯田さん、貴方のお兄様が彼の所為でやられたしまったその怒りは、憎しみは、哀しみは私にも分かります!!
悪の所為でその人が苦しむ辛さも、両親を亡くした私が一番知っている!!」
緑谷はワン・フォー・オールの5%でステインに殴り掛かるも、長刀で足を斬り、血が吹き出て、血を舐める。
「ごめん！轟くん、雪泉さん…!!」
緑谷は又しても行動不能に陥る。
体の力が入らなくなる…ステインはその気になれば緑谷を直ぐに殺すことが出来るが、ステインは彼が動けなくなる程度に済ませ、標的を再び雪泉と轟に変える。

彼の悍ましい表情は、まるで野生に生きる獣そのものだ。
「ですが、その所為で自分そのものが犠牲となり、死んでしまったら誰が責任を取るのですか!!
それが貴方の望んだヒーローですか!?違うでしょ!!
私も一度悪の憎しみに囚われ、悪を否定して来た私が言うのも無理があるかもしれません！しかし、今の貴方は私たちと同じ滅びる道に歩んでいる……
貴方がその道に歩んでどうするんですか!!
貴方の兄は、それを望んでいますか!?違うはずです！
もうこれ以上私たちの、あの時のような歪んだ正義にはなって欲しくないのです!!」
雪泉の叫び声。
その声は、哀しみと、両親を亡くした苦しみが混ざり、路地裏に彼女の叫び声が大きく響く。

「貴方の歪み、復讐に身を染めた貴方は、見ていられない…!!」

だからこそ、叱る。
叱らなければならない、昔の自分と同じ道に歩ませない為にも。

雪泉に続き、轟も叱る。
「目の前の現実に目ぇ逸らすな!!自分の大切なもんまで忘れちまってどうする！俺が言えたことじゃない、それは分かってる…
けどお前まで忘れちまってどうすんだ！目を覚ませ!!

――なりてえもんちゃんと見ろ!!」

友の為に怒り、友の為に、全力で叱る。
昔の轟から考えられない、彼の成長。
友の友情、絆…
――轟から、飯田へ。

『天哉、お前は凄えヒーローになれるよお前は…だってお前は――』

――僕の名前はインゲニウム、生涯僕の名前を忘れるな――

（僕は一体……何を、どうすれば……何が、ヒーロー……兄さん……）

友の怒りに、飯田は目から涙を流し、俯せたまま静かに己の未熟さを、弱さを、愚行を悔やみ、復讐心が静まると共に、忘れていた飯田の兄、天晴の言葉を、少しずつ思い出す。

８０話「折れるな頑張れ飯田くん」

「これ、思ったより厄介な相手やな」
日影はポツリと声を漏らした。
とうとう脳無が繁華街に出てしまい、街の人々たちは悲鳴をあげながら逃げ、避難誘導と共に逃げていく。
脳無は口から高熱線の紫色のビームを一閃、大爆発する。
その名の通り炎上――
道路は炎に包み込まれ、黒い煙が巻き起こり、視野が悪くなる。
日影、詠、未来は焔がいなくなってから脳無と相手をしてるわけだが、どういう理由なのか、どれだけ攻撃しても脳無はこちらを相手せず、街の繁華街に出て暴虐の限りを尽くしている。
一般人に巻き込まれないように、違う方向へ誘導したり、挑発に乗るよう攻撃を幾度もなく繰り返してるのだが、脳無の身体は強靭なのか、多少傷は見受けられるものの、見向きもしない。
「何でこうなんのよ…!!」
思い通りにいかない。
相手の思考を持たない脳無に対し、未来は苛立ちで声を荒げ、脳無目掛けて狙撃する。
銃弾が脳無に食い込むように当たるが、脳無は逃げてる一般市民を狙っている。
一体どういう原理なのか、脳無はこちらに相手しようともしない。
「秘伝忍法!――【ニヴルヘイム】!」
詠の秘伝忍法、ニヴルヘイムは脳無の背中に襲い掛かる。
それも外すことなく的確に、脳無の背中、足、腕、そして脳が丸出しの後頭部――
脳無は軽い苦痛のような悲鳴を少しあげ、一瞬動きを止める。
唾液を垂らし、血走った目で詠…ではなく、一般市民を睨み腕を振り上げ殴り殺そうと飛びかかる。
「嘘ッ!?詠お姉ちゃんの秘伝忍法食らって、まだ無視する気なの!?」
未来は脳無のタフネスと、思考の無さに驚愕色に染まる。

どれだけ攻撃しても、脳無は死柄木の下された命令を全うする。
それが自分に出来ることであり、自分がやるべき使命…脳無には思考能力はないが、生物的本能がそう告げているのだ。
「コロ……ス!!」
「――そんなッ!?」
「アカン!こりゃ間に合わへん!」
そして脳無は力一杯、思いっきり拳を握り締め逃げ回る一般市民を殴り殺す。
グシャァ――!!とした鈍く、痛々しい音が、三人の耳につんざくよう響き、焦りから絶望の色に染まった。
死んだのは一人、脳無はゆっくりと腕を上げ、猫背だった上半身を、ゆっくりと上げる。
死んだのは一人、それもしがないただのサラリーマンだ…
地面には鮮血が海のように広がり、悲鳴をあげることもなく、無残な死骸が道路にポツリと…
「守れ…なかった……」
無気力な未来の声が、騒ぎのある静かな空間にポツリと呟いた。
脳無は「次…コロス…!!」と意味不明な言葉を何度もなんども咀嚼するように呟き、禍肩にある禍々しい突起物のクリスタルが少しずつ大きくなっていく。
口から白い吐息を漏らし、唾液がダラダラと垂れていく。いや違う…
シュゥ〜…と何かが蒸発してるような音が聞こえる、それは脳無の口から出てる液体が地面に垂れ落ち、その地面が溶けているのだ。
――これは消化液
これも個性なのか?それとも…素なのか……普通の人間からなら考えられないことだが、この脳無は常人離れした化け物だ、あり得ないことをやって来るのが脳無だ。
しかしそんな禍々しい脳無のことなどどうでもよく、自分たちが一般人を守れなかったという落胆と絶望が大きかった。

三人で相手をしていたのに、脳無一体止めることすらままならない…

「なんて…こと……」

詠は両手で口を覆い隠す。

昔の蛇女の頃にいた自分なら「あら、そうですか♪（微笑）」で済んでいたが、今の彼女は目の前の一般市民の死で大きく動揺し、驚愕の色に染める様だ。

脳無は標的が死んだと本能的に認識し、腕に力を入れ、力瘤が逞しく膨らむ。

最大火力の衝撃を放つのか、三人は目の前の脳無の攻撃に警戒しつつも、市民を守れなかったことを悔やみ、苦しみ、武器を手に取る。

――その時だった。

ボシュん

何かが蒸発した音が三人の耳に届いた。

これは一体…と、聞こえた方向に目をやる。

そこには、鮮血が広がり倒れてる市民…ではなく、木偶人形だった。

いつの間にか、海のように広がってた鮮血は煙のように白く蒸発し、消えている。

三人はその光景に目を疑った。

それと同時にすぐに理解した。これが一体どのような現象であり、何があったのか…誰の仕業なのか……

そう、これは…

「皆んな、お待たせ♪」

春花の傀儡――

一般市民に偽装させ、上手く脳無を羽目る為に誘導させてた捨て駒。
春花はサディスティックな衣装に身を包み、強烈なる一撃を、気付かない脳無の背中にぶつける。
するとどうだろうか、道路に脳無の体が埋もれ、脳無自身一体何が起きたのか、思考能力を持たない改人には当然理解できず、春花の蹴りを諸に受けて、地面にひれ伏すようにとめり込まれる。
脳無の痛々しい声が、地面から僅かながらに聞こえ、ミシミシと春花の足元から、筋肉や骨が軋む音が伝わる。
「春花様あぁ！」
先に叫んだのは未来。
まさかこれが春花による傀儡だとは知らず、心の底から安堵の息を漏らすと同時にその反面、自分たちをも騙してた春花に苛立ちを覚える。
「もうビックリしたじゃない!!!どうして私たちにまで教えてくれなかったの…!?」
「ふふ、ゴメンごめん未来ちゃん。そう怒らないで、別に騙してた訳じゃないのよ…？
本当は私が市民の避難誘導をしてる内に、一般市民に偽装させた傀儡で街の状況を詳しく調べようとしたんだけど、運悪く、偶然、この化け物に出会っちゃっ――て!!」
春花があの時焔たちといなかったのは、街の人々の避難誘導及び、焔たちがここ保須市にいることを悟らせない為のもの。
伊佐奈の件があってか、多少紅蓮隊の調査は手薄になり、処罰はないものになったらしいが、それでも忍たちは何を仕掛けてくるか分からない。
何より自分たちが忍の正体をバラしてしまい、世間にそのことが知れてしまっては元も子もない。
春花はそれらを兼ね合わせた上で、一人で行動し、ついでに今この保須市がどうなってるのか、詮索するべく傀儡を紛れさせ調査をしていた。

そのことを伝えると、春花は今にでも起き上がりそうな脳無の後頭部を、思いっきり踏む。
グリグリとした痛々しく嫌らしい音を立てる春花のその姿は正しくサディスト。
危険な女の香りだ。
ドMの人（特に両奈）や変態（峰田とか）なら喜んで踏まれることに快楽や喜びを感じ、一般人ですら新たな、危険な快感に目覚めるだろうテクニック、しかし脳無はただならぬ声を荒げるだけで、そこに喜びや怒り、悲しみ、苦しみなどない。
全てが無。
脳無は両肩から巨大なクリスタルを生成し、パキパキとその結晶の破片が飛び散り嫌な音を立てるが…
「させへん」
「えいっ!!」
日影と詠は、何か危険なものを感じ取ったのか…或いは嫌な予感がしたのか、武器を駆使して肩にあるクリスタルを粉砕するよう振り下ろす。
一撃二撃という重々しい攻撃を繰り出すと、ピシリッ――嫌な音が響き渡る。その時、脳無は苦痛のあまり口から消化液を吹き出す。
地面のコンクリに埋もれてるため、自身の顔とコンクリに消化液が滲み、顔も僅かながらに消化していき、脳無は又してもその悲痛に襲われる。
「――ホムア！ホムアァァ!!」
何かを訴えかけ、叫び続ける脳無の恨めしい声が、地面から響き渡るように全身に聞こえる。
脳無は屈強な筋肉で起き上がろうと全身に力を入れるものの、三人の攻撃に脳無は起き上がれない。
「ホムア…って何を……
――そう言えば、焔ちゃんは？」
「なんか敵連合を見つけたからって一人で向かって行った！
皆んなはこの化け物を相手しろって言われたし…！」

脳無が意味不明な言葉を叫び続け、春花は脳無の言葉に何処か違和感を感じながらも、焔のことを思い出し、未来に問う。
敵連合、死柄木弔らしき人物がそこにいると言い、そのまんま突き通すように突っ走って行ったのだ。
「もう、相変わらずね焔ちゃんは…まるで猪みたいだわ……
でもまあ、そういう事なら…ちゃんと焔ちゃんの期待に応えないとね！」
焔から言われた事、なら自分たちが次にやるべきことは、脳無を倒すこと。
恐らくこの街に被害を及ぼしてるのは脳無と見なして間違いない…
どういう理由で暴れてるのか、脳無の正体が何なのか、脳無は何匹いるのか、謎だらけで聞きたいことは山ほどあるが、思考能力を持たない脳無には当然、それらしきヒントが手に入れれる筈がなく、答えが見つかるはずがない。
それでも四人はこの化け物の相手をしなければならない。
脳無の体は静まり、ようやく諦めたかと思ったその途端、脳無の筋肉がブクブクと増えていき、動脈がクッキリと見え、秒針よりも早く、脈を打つ。
「……？なにこれ？」
春花は怪訝そうな面で脳無を見下ろす、確かに先ほどの対抗心は収まり、ようやく落ちたかと確信したその時、脳無の体に異変が起きた。
脳無の体は先ほどまでとは違い、少しずつ大きくなっていき、上半身がゴリラをも超えるのではないか？と疑問を抱いてしまう筋骨隆々とした姿、春花が押さえつけようとも、詠が大剣で脳無の体に食い込みを入れても、脳無の動きが止まることなく、成長するかのように体は大きくなっていく。
大きくなると言っても、超大型ヴィランのようなビルを匹敵する大きさではなく、約４ｍの大きさ、それでも筋肉を増やしただけでこれ、恐らく『筋骨発条化』、『膂力増強』による個性だろう。

「ちょっと、本当に人間なの？」
春花は冷や汗を垂らしてそう呟く。
後々と調べて分かったのだが、個性というものは複数持つことはない、あるとしたらそれは個性婚か伊佐奈のような個性障害者…ある意味複数個性を持ち備えてると言っても過言ではないが、それでも脳無のように個性をここまで複数持つ者は見たことがなく、また端から見れば分かること…
「改人って言われてる程だから……そういう風に無理やり個性を複製させるために、作られた…とか？」
未来が恐るおそる口に出す。
確かに未来の言葉には辻褄が合う――
飛び出てる脳に、無理やり強化されたような体、片目は刀による傷痕なのか、白目を向いている。
改人…つまり元は只の人間？そうなると、どのように改造されたのか…
想像できないが、その結末はきっと、末恐ろしいものだと、直感的に理解した。
「……そんなはず……あり得ませんわ…
そんな、そんな悪がいたとして……許せるはずが……」
詠も未来の言葉に想像が付き、考えてることが一致する。
思考能力を持たない…ということは、洗脳かそれに近いもの…または力を摂取し過ぎた為、その副作用によるものなのか…
考えるとキリがない…しかし、今はそんなことを考えてる暇はない、やるべきことは…

――コイツを阻止すること

「アアあアアアあぁぁアアアーーーーーーーーー!!!」
脳無の凄まじい雄叫び、周囲を吹き飛ばすかのような衝撃波、緑脳無の時の衝撃波に近いもの…しかしこれは個性ではない…ただの咆哮だけでこの凄まじい衝撃波、元々高かった身体能力を、無理やり個

性で強化し更にパワーアップ、他の脳無とは一線凌駕するそのパワーバランス、妖魔と同格か、それ以上か…
分からないことだらけだが、ここでやられる訳にはいかない…
「皆さん、行きましょう!!」
「せやな、こないなヤツにやられるようなヤワじゃないからのう儂らは」
「思い出せ私たち!伊佐奈と比べたらこんなヤツ…!」
「ええ、焔ちゃんはアレを一人で倒したんだから、私たちもこんなのに手間取ってたら、カグラになんかなれないものね」

ここで倒れる訳にはいかない。
カグラになるのなら、本気で忍の頂天を目指すのなら、こんなヤツに手間取ってる場合ではない。
それは、未来あるカグラになりうる可能性を秘めた少女たちの決意。
立ち向かえ、強敵は目の前にいる。

――憐れな姿に変えられた化け物と対峙する。

薄っすらとした記憶が頭の中に遮る。
いつからだろう、自分がヒーローに憧れたのは…アレはまだ当時小学生の１０歳の頃からか、皆んなからよく真面目だと言われてた自分は、２５歳、かなり歳離れした兄にある疑問を抱き尋ねたことがあっ

た。
「兄さんはどうしてヒーローを目指したんだい？」
物心がついた時から、兄は立派な一人前のヒーローとして活動していた。
人助け、悪というヴィラン、災害、目の前に降りかかる唐突たる理不尽を前に、兄はソレらに立ち向かい、様々な勇姿をメディアに魅せ輝かせていた。
ヒーローやってるのが当たり前に思えたからこそ思うのだ、どうして兄はヒーローになったのだろう…？
家の代々がヒーローとして務めていたからか？
当然だからこそ、ヒーローになりたいと思ったのが不思議に思えた。
兄さんはどんな気持ちで、どんな想いで、どんな風にヒーローになりたかったのか、不思議でならなかったから…

「モテたい」
「不純だ!!?」
「ははっ、嘘だよ。半分冗談」
「半分!?!」

即答。
思いもよらぬ答えに、飯田は半分引き、半分驚愕色の声を叫ぶ。
まあ半分冗談らしいが…本当にモテたいという気持ちはあるのだろう…
兄はヒーローコスチュームの白ヘルメットを、クローゼットの中に入れる。
「まあそりゃさ、祖父・両親がヒーローやってて、俺もヒーローやるのは世間として当然なように思われてるけどさ、俺はまあ、ちょっとした想うことがあるんだよな」
想うこと？と飯田は首を傾げながら且つ、機械的な動作で尋ねてくる。

お前はロボットかアトムか、と突っ込んでしまう飯田の兄は、自分が何故ヒーローを目指すようになったのかを語り出す。
「迷子の人が、迷子センターへ案内するように、俺は誰かを導く存在になりたいんだ。
そういう人間が、俺にとって一番輝いていて、カッコいいもんだからさ。
他の人と比べたら大したこと無いかもしれないし、ぶっちゃけ言って俺はそこまで凄いヒーローじゃないんだよ。
俺がこうしてヒーローやってけれるのは、俺についてきてくれる仲間たちのお陰なんだ…アイツらがいるから、俺も頑張れるんだ……
俺はアイツらの期待に応えるためにも、もっと頑張らなくちゃいけないんだ……」
自分の為ではなく、自分を支えてくれる仲間の為に、自分は胸を張り頑張ることができる。
ヒーローになりたかったのは、そう言った誰かを導くようなヒーローになりたいから。
「兄…さん…」
「アレ？でもさ、俺以外にも凄えヒーローは山ほど居るのに、お前は俺を憧れてるってことは…
そんじゃあ俺、凄えヒーローになれたのかな？ハハッ！だってお前は俺よりもずっと優秀だもんな！なんか兄としてじゃなくても、普通に嬉しいな！」
――兄さん。
そんな輝かしい兄が、大好きだった。憧れを抱き、尊敬していた。
将来ヒーローになって、兄の事務所に入ろうとすらずっと思っていた。
緑谷くんがオールマイトに憧れてるように、僕にとっての一番の憧れはインゲニウム、兄さん。
そんな一番大切な兄を、憧れを、ステインは潰したのだ。
どんな理由があれど、兄を傷つけたことに何ら変わりのない、嘘偽りのない犯罪者…

僕はアイツの所業を許すことなく、兄の代わりとしてアイツを倒すことを決意した。
けど…違った――

――まずアイツら救けろよ――

何がヒーロー…!
兄の復讐に視野が狭まり心が支配され、ステインを討とうと、己の罪を思い知らせんばかりと、僕は兄の名を使い名乗り、彼に挑んだ。
しかし、罪を思い知らせるどころか、己の誤ちや、愚行を思い知らされた。
僕は何にも変わってない…自分のことしか先のことが見えていない…自分勝手で、我儘で…ヒーロー失格と言われても仕方ないくらい、どうしようもない人間だ…

僕は一体どうすれば…

『救けに来たよ!飯田くん!』
――緑谷くん

『貴方の歪み、復讐に身を染めた貴方は、見ていられない…!!』
――雪泉さん

『なりてえもんちゃんと見ろ!!』
――轟くん

友に血を流させ、危険な状況に陥れ、殺されるかもしれないというのに、僕は黙ってただ見てるだけしかできない…
本当に何をやってるんだよ僕は……
これが、僕の求めたヒーロー像?これがヒーローと呼べる有様か…?

――違う!!僕は…僕はただ…兄さんのことを…

いつしか、自分がどんなヒーローになりたいのか、自分のヒーローの姿を、忘れてしまっていた。

――でも

「小僧は氷に炎…一方忍は、氷に風……何方も相性のいい能力ばかりだな――」

「んで、これ避けられんのか…!!」

ステインは轟の動きに大分適応出来たのか、轟の炎をあっさりと避ける。

自分の攻撃が避けられたことに、轟は表情を苦難と焦りの色に染める。

コイツは前々から知ってたけど、手強い、強すぎる。

ＵＳＪのオールマイトと渡り合った敵や、蛇女の襲撃犯、漆月とは訳が違う。

「おい！お前ら早く逃げた方が良いって！コイツの狙いは俺とそこのメガネくんだけだ！救けを呼ぶのが先決だ！」

「そうなんすけどね、それが中々…敵は見逃してくれないんすよ、そんな隙すら与えちゃくれねえ……だから、こうやって防戦するだけが精一杯なんすよ…！」

路地裏で倒れ伏せていたネイティヴが声を荒げ、轟に忠告するが、彼自身も本当は分かっており、これが今逃げれる状況ではないと逆にそう答える。

ヒーロー殺しの動きは、忍に負けず劣らずの素早さを兼ね備え、本当に忍者のような動きをする辺り、本当に忍ではないか？と疑問を抱

いてしまう。
しかし雪泉の言葉からしてそれはない、忍の彼女が言うんだ間違いない、雪泉自身も驚いている。
忍とここまで渡り合える人間が、他にもいたなんて想像もつかない。
しかし当時、皆んなは知る訳がない…
忍を殺害していく内に、自身が忍の動きを学んでいったことなど…
戦いを経て成長するのは、忍やヒーローだけではない、悪い意味でステインも成長する。
そう、無数の忍の屍の上でステインは、独自に戦闘術を生み出し、身に付け、ヒーローを殺害してた時よりもずっと遥かに成長しているのだ。
つまり、忍と交えたことで、ステインは本来的に入らなかった戦闘術や知識を、得ることができたのだ。
それも漆月のお陰、彼女に出会ってなければ、延々とその存在に気づくことなど無かったであろう…
ヒーロー殺し…いや、忍殺しともよばれる彼は、ある意味漆月に感謝しなければならないのかもしれない。

「言われたことないか？個性にかまけて大雑把だ――――と」
「――ッ!?化け物が……！」
これは避けられない。
長刀が轟を斬るように襲いかかる。
間合いを詰められた轟、避けられるはずがない。
雪泉は「させない!!」と一喝し氷の剣を作るものの、ステインの狂人たる目にも見えない速度の剣技に、氷の刀は簡単に砕け、壊れ、虚しく消えていく。
「嘘…そんな……」
あの氷の剣が意図も簡単に…と絶望の色に染める。
いや、これは無理もないかもしれない…何故ならこの技はステインのような刃のみ相手にする敵、そしてこの狭い路地裏、秘伝忍法を使

えば周りを巻き込んでしまう。
それを対処する術を身につけるため、雪泉は氷の剣という、新しい技を生み出し戦ってきた。
まだ技は未熟なものの、熟練度を上げていけば、立派な秘伝忍法の一つとなりうるものだ。
しかし、ステインの目の前にしてそれは簡単に打ち砕かれた…
ヴィラン相手に…と舐めていた自分が浅はかだ。
ヴィラン…忍の力を持たない悪。
今までそう解釈していた、しかしいるものなのだな…
忍の知識を身につけ、忍を対処する術を持ち、対抗できる力を持つヴィラン…
身を以て肌身で感じた。

――だからこそ負けられない。

今まで倒れてた飯田は、ここで身体が動き出す。
動ける…ということは、個性による効果時間が切れたのだろう、飯田は拳を握りしめ、ステインを睨む。
しかし当の本人であるステインは、轟や雪泉のことで頭が一杯の為、焦ってるのか飯田の存在に気付くはずがなく、再び轟を斬り捨てようと、血に染まった長刀が彼を襲う。

――ここで立たねば…!!

「ッ!?」

飯田は走りだす。

――もう、誰にも追いつけない!!

ここでようやくステインは飯田が動けることに気づき、心の中で舌打ちをする。
（チッ……！もう動けるようになったのか小僧……！）
効果時間が切れた、その事実をステインに更なる焦りを与える。
飯田の足のエンジンが唸りを上げ、猛スピードの蹴り、ステインの刃物は折れてしまい、刃先が地面に突き刺さる。
――――早い。
ステインの目でも追えないこの超スピード、驚愕する。
この小僧にまだそんな奥の手があったのか…と…
誤った使用方法も、時には武器になる。
ステインは体勢を崩し、大きく退く。
飯田の脚はエンジンの音がするが、そんなことは関係ない、やっと動けることが出来た。
効果が切れたことに、飯田だけでなく、他の3人も安堵の息をつく。
これで四対一、つまりこっちが更に有利になり、ステインは不利な状況に陥った。
「飯田くん！身体動けるようになったんだ！」
「効果が切れたか……ってことは、思ったより大したことないな…あの個性、多対一では不向きな個性だ…」
緑谷の明るい言葉、轟はステインを見つめ、相手の個性がそこまで大したことないことに息をつく。
いや、本当は恐るべき個性であることは知っている。
それはあくまで一対一の場合、今みたいに多対一の勝負は決して向いてる訳ではない、どちらかと言えば不向きだ。
「皆んな…僕のためにありがとう……緑谷くんに飛鳥さん…轟くんに、雪泉さんまで……僕のために……本当に申し訳ない……君たちには関係ないことなのに……」
「また…そんなこと……言って……」
飯田の言葉に、ネイティヴと同じく体の自由を奪われ、ひれ伏してる飛鳥がここで反応する。
また誰かのことを見ずに、自分で何もかも解決しようとする。

飛鳥はそう思い、言葉を投げかけようとした途端、飯田の言葉が遮る。
「だからこれ以上、もう君たちに血を流させる訳にはいかない…！」
飯田は蹴りの攻撃によってか、反動が強いあまり、メガネは何処かへ飛んでいってしまった。
そのため、飯田はメガネなしの素顔だ。メガネを掛けてない飯田の顔は何処か新鮮だ、その顔には強い闘志を燃やした、決意を固めた表情。
飯田の視線先は、ステイン。
そのステインは飯田を警戒してか、一旦距離を取り、折れた長刀から飯田へと視線を変える。
「――感化され、取りつくろうとも無駄だ。
人間の本質というものは、そう易々と変わらない…
お前は一度復讐心に飲み込まれた…もうその時点でお前は正義を掲げる資格も、ヒーローを名乗る資格も無い。
そもそも、友の言葉でお前の本質が変わるのであれば、お前は所詮言葉だけで簡単に変わってしまう、信念無き愚かな人間だ…
それは信念と呼ばない、そんなものはヒーローには要らない、強き信念を持たない証拠だ……」
人が誤って誰かを殺し、それが如何に愚かで罪を償おうとも、その罪が消えることがないように、一度復讐に心を奪われたヒーローは、ヒーローではなくなる。
人を殺そうとしたその罪は重く、ヒーローとしてはあってはならない本質。
ステインの言葉は確かに皮肉だが、正論である。
敵に教えられる時点で、もうヒーローとしては失格だろう…
コイツは許されない殺人鬼だ、犯した罪は当然許されるわけがない。
それでも、ヴィランの言ってることは全て本当であり、飛鳥や緑谷も正直、彼の言葉に納得してしまった。

「――お前がヒーローを語るんじゃねえよ偽物!!
誰かが正さねばならんのだ！この社会を！
偽物に塗れた社会を壊す！その為にはお前のような人間は殺さなければならん！粛清だ！
お前は社会の汚染だ！汚物だ！ガンだ！ゴミだ!!
悪が善を蝕むように、お前のような偽物は、コイツら本物を蝕む存在だ！
――お前のような人間が生きてることでさえ烏滸がましい!!お前は私欲を優先させる偽物だ！そんな偽物など目障りだ！
犯罪者同様に滅ぼすまで！」

怒り狂うステインは、額に血管を浮かばせる。
血走った目に、ドス黒い小さな瞳が怒りに応えるよう激しく震わせ、飯田そのものを否定するかの様に一喝する。
飯田の蹴りによるものか長刀が折れただけでなく、拳も食らったのか皮膚は剥け血に染まる。
その痛みも御構い無しに、ステインは飯田を罵倒し否定する。
歪んだ正義もここまで来ると悪としか思えない。
行き過ぎた正義は時には悪になる。今なら半蔵が言ってたことがよく分かる。
「人殺しの言葉に耳を傾けるな飯田、時代錯誤の原理主義だアイツは。
所詮何を言おうとコイツは人殺しだ、挑発してるんだ、コイツの思惑に乗るな――」
「――今の現実を受け入れられない人間…私が偉そうに言えたことではありませんが、貴方のやってることは全て虚言でしかありません。
例えそれが貴方にとって善意の行動でも、貴方が今まで犯してきた罪が消えるはずがな――「いいや、アイツの言う通りだ――」――!?」
雪泉の言葉を遮る飯田は、ギュッと唇を噛みしめる。
正直言って悔しい、ここまで正論を言われ、自分を否定されても返す言葉が無い…

自分のことしか見えてなかった結果、自分は友を傷つけてしまい、血を流させてしまう始末……彼に何をどう言われても、反論できない。

「お前の言う通りだヒーロー殺し……僕はヒーローを名乗る資格も、正義を志す資格すら無い…

愚か者だよ俺は……何も見えなかった…復讐心のあまり、視野が狭まり、言葉云々で変わってしまう僕に、信念がないと言われても、間違いじゃないさ……

――だが！ここで折れるわけにはいかないんだ…!!」

ナイフの凶器によって刺された腕からは血が流れ、白いアーマーが真っ赤な血に染まる。

白い色だからか、血の色はハッキリとよく見える。

そんな傷だらけの腕を見向きもせず、飯田は強く拳を握り締める。

「俺が折れれば…――インゲニウムは死んでしまう…!!」

復讐ではなく、兄の名前…インゲニウムの誇り…

本当に兄のことを想うのなら、復讐で罪を思い知らすのではなく、インゲニウム…兄さんを引き継ぐ…

今度は自分がインゲニウムになるんだ…だから、兄のためにも、ここで折れてはいけないんだ――

「――論外」

しかしステインはそれを赦さない。

――もはや、生きる価値なし。

そう判断したステインは、標的を飯田に変更。

偽物は排除する、全ては正しき社会の為に――

轟の炎が風の様に吹き上がり、ステインはそれを軽々しく避ける。

雪泉の風と、轟の炎の、風炎…それでもステインに避けられる…

ステイン…

さっきよりも明らかに様子が断然と違う。

黒い影が覆うかのように、ステインの表情は真っ黒に染まる。

紅い血のように輝く血走った目からは、狂気を感じる。

刀による無数の線を描くかのような高速な剣技の前に、氷はもはや意味が無くなる。

雪泉も一般的な忍の剣技こそは覚えてるものの、ステインのように熟練度、鍛錬を重要に積んでた訳がなく、その差は歴然としていた。

氷王の状態でなら出来なくもないが、アレは秘伝忍法によるものであり、それも極めなければ到底たどり着けるものでなく相当な体力を消費し、個性や通常の忍法のようにポンポンと簡単に出せるものではない…

雪泉は何度も氷の剣を生成し、斬撃を叩き込むも、ステインの軽い身のこなしに虚しく空振りに終わり、的確に隙をつき、氷の剣は見事破壊され、何回か掠ってしまう。

そして素早くステインは舌を蛇のように伸ばし、雪泉の血を舐めてしまう。

「止まれ!!」

「くっ――!すみません皆様!!」

「雪泉!!」

「お前もな――!」

ステインはいつ回収したのか、投げ捨てたナイフをいつの間にか手に取って拾い、再び轟に投げつける。

鋭い刃物が轟の腕に刺さることはなく、代わりに轟の目の前に飯田が現れ、轟を庇い自分が傷を受ける形となった。

苦痛に襲われ顔を歪ませる。

「ハァ…!偽物!!」

飯田は血は舐められてないが、倒れてしまう。

そしてそこから更に追い打ちとして、折れた長刀を的確に飯田の二の腕に当て、突き刺さる。
そのせいか腕は動かせず、起き上がらないまま倒れてしまう。
地面は再び飯田の血に染まり、路地裏は奮発とした戦況になっていた。

「コイツ……！」

応戦が来る。
その事実をステインに教えれば、焦りはするもの、怖気付きこの場から離れるとそう思ったから、轟は彼に真実を教えた。
普通の敵ならここで、ヒーローの応戦が来る前にトンズラこいて逃げるのだが、ステインは並みの敵でないらしく、焦りを感じたものの、そこから更に彼を刺激させ本領を発揮させてしまった。
――限界突破。
人は死線や瀕死を前に、これまでに無い力を発揮することが可能だ。
体力が少なければ少ないほど、ゲームで攻撃力が上がるように、ステインは自分が捕まってしまうかもしれない焦りを抱き、早く仕留めなければと、馬鹿力を解放させる。つまり、応戦が来ることを言ってしまったのは不味かった…もしこのまま何も言わずステインが焦らなければ…と、少し後悔してしまう。
しかし動き出した歯車が止まらないように、一度偽物を粛清すると決めたステインはもう止まらない…

――何よりも、イカれた執着。

それがコイツをより強くしている。
このイカれた執着の正体が何なのか、何故彼はこんなイカれに歪んだ信念を持てるか…
それはきっと…社会を正し、偽物を粛清し、本物の英雄を取り戻す

こと。
それが、その想いがステインを今以上に強くしてるんだろう…
思想力…想いの力は強さへと変わる…とは言うが、今回ばかりステインのソレは悍ましいものだ…
自分たちが強くなるのは嬉しいことだが、敵が強くなる程恐怖なものは無い。

一方、飛鳥は身体に力を入れると、やっと指先が動いたのか、効果が切れたそうで少しずつ立ち上がる。
ステインは飯田の時と同じく此方の存在には気づいてない。
今は飯田を排除しようと、凶刃を一心不乱に振るっている。
「……動ける！」
まるで力が滾るかのような開放感に、飛鳥は心の中で安堵の息をつくも、目の前の出来事に心を入れ替える。
ここでなら、今なら奇襲を仕掛けることが出来る。
生憎ステインは飛鳥のことなど頭に抜けている、それは飛鳥だけではなかった…
緑谷も同じく、ステインによる効果が切れたためか、フラつきながらも立ち上がる。
ここでワン・フォー・オールを使えば跳躍で何とか追いつける。
一度奇襲を仕掛けた為、もしかしたら自分の存在に警戒している可能性も無くはない。
（こっから跳躍して…届くとしても当たるか…？タイミングを外したら終わりだ……ヒーロー殺しの動きが早すぎる…奇襲で一撃で仕留めれるほどの火力じゃないと……多分倒せない…勝機はない……
勝つ方法は、これしかない…!!）

そう、今はただ……

（……ここでなら、まだ間に合える…！ステインは飯田くんが狙い…なら今、私の存在には気付いてないはず…!!

小細工なんて必要ない…難しいことも考える必要はない……私のこの力は…皆んなを守るためにあるんだ……だから）

――だから今は…ただ…

動けない飯田は、口で刃物を取り外そうと、必死にもがいている。轟は、氷で防壁を作り出し守るものの、やはりステインの前では無力…意味がなく、時間稼ぎになれてるかどうかですら疑問を抱いてしまう。

永遠に個性を使い続ければ、また少し変わった状況に陥ってるのだろうが、轟自身冷気に耐えれるのには限界がある。

炎を使えば体温調節として何ともないのだが、炎の調整をしながら戦うのも中々難しいものだ。

バランス・コントロール・繊細力、それらが試される。

もし昔、炎のコントロールが出来ていれば、鍛錬を積んでれば、きっと難しくはないのだろうが、生憎訳あり事情で炎のコントロールは全くしてこなかった為、調整は難しい為微調整で何とか体温を維持し続けるしかない。

充分な調整が行けてない為、熱が足りずに若干此方も切れ気味だ。

（手荒になっちまうが……炎でカバーしねぇと身が持たねぇか…！）

雪泉は落ちた、飛鳥や緑谷は恐らくまだ動けないだろう…飯田が狙われてピンチだ…

ここで飯田が動けれるのなら、奥の手レシプロバーストで上手くいけばステインにはダメージを与えれるのだと期待するものの、圧倒的

な力の前では、そう易々と許してくれないそうだ。
「轟くん！頼みがある！氷の調整は可能か⁉」
「――？ああ、氷の調整は勿論だ！だが炎はまだ慣れてねえ！危なっかしい…なんでだ⁉」
「俺のエンジンを冷やしてくれ！」

あの時、ステインに蹴りを入れた時、エンジンがやられマフラーが詰まってしまったらしく、動かすことができないらしい。
雪泉はステインに血を舐めれダウンし、氷を出すことすらままならず倒れている。
なら、頼りになるのは轟しかいない。
もしここで轟も落ちて仕舞えば、今度こそ終わりだ。
救からない――
しかし、そんな隙をステインが与えるはずがない。

「今度こそ終わりだ偽物――⁉」

その言葉が合図となり、大きく跳躍し二つの凶刃を構え振りかぶる。
轟は飯田の近くに寄り氷で足を冷やしてる為、その一瞬の隙を突くステインの行動に対応できず、二人は唖然とした顔立ちで、此方に襲いかかってくるステインをただ眺めてる事しかできず、後々くる絶望に身を焦がす。
狂気、歪み、殺意、様々な感情が放たれるその禍々しい影は、二人を包む。

――ただ、そんな禍々しい闇を振り払う英雄が二人いることを、ステインは気付くはずがなく…

「――秘伝忍法！」

「デトロイト――！」

二つの正義の光が、闇に立ち向かうように、飛鳥と緑谷は別方向から飛びつき、ステインに刀と拳を向ける。

ここでようやくステインは気付く、向かってくる二人の存在を…

二本の刀を構え、クロス型に斬りかかる飛鳥と、シンプルに力強い拳を握りしめ、殴りかかる緑谷の姿…

この二人は、ステインが最も本物に近いと認めた人物…

その二つはヒーローと忍、絆の想いが二人を結びつき、強くする。

「――行け」

唾を飲み込む轟も、一筋の冷や汗を垂らしそう呟く。

その言葉が最後なのか、トドメの一撃が炸裂。

――刀が

――拳が

「【半蔵流乱れ斬り】――！」

「【ＳＭＡＳＨ】――！」

あれば良い――!!!

81話「全ては正しき社会のために」

時は少し遡り、飛鳥がステインと接触したその頃――
廃工の中は薄暗く、誰も使われてない古臭い匂いが充満する。
鉄や錆、独特とした匂いが鼻をつんざく。
数年前、この工場は破棄されてしまったものの、撤去することなくこうして取り残された工場だ。
誰も使われてない工場の中には、いるはずのない人物が二人――

「ここなら、邪魔は入らない…」
「なるほど、そういうことか」

禍々しい殺気を具現化したように連想させる邪気…黒い闇を見に纏い、水色の長い髪を揺らす漆月、対峙するは黒いポニーテールを揺らし、六爪を広げる、肉食で戦闘狂、焔。
黒霧のワープゲートによって二人は飛ばされ（漆月の場合は自ら）、ここにいる。
ここでなら人目に付かないし、誰にも見られない、派手に暴れても問題ない…
正に戦場にうってつけのステージだ。
「やぁっと会えたよ焔、この時を待ち焦がれてたんだ。蛇女に襲撃しても見かけなかったんだからさ」
「あの時は道元の所為だ、もしアイツさえいなければあの時、私はお前を斬り捨てていたさ…」
「はは、よく言うね？
焔以外の仲間はみーんなボロボロだったってのにさ、あの時アンタがいたら捻りミンチにしてたところだよ」
漆月は嫌な感じに微笑み、焔は目の前の強者に口角を吊り上げる。
互いは嫌悪しながらも、その存在は確かにどこか似たようなものがあった。
漆月は焔と同じく悪に近い何かを心に抱いている。

同じ悪…
漆月は忍を否定し嫌悪し、反乱を起こす悪…
対して焔は全ての悪に同情を持てる、悪の誇りを持つ悪…
事情は違えど、焔と漆月は何処か似ている。
抜忍なんてところは同じ共通点だろう、漆月がどういう経緯で抜忍になったのかは知らないし定かではないが、抜忍という存在は赦されない。
理由がどうあれ忍の世界で彼女が否定され、処分されるのは仕方ないこと…
焔はそれが痛いほどよく分かる。
焔たち5人も抜忍の身になって思い知らされた…
忍の世界がどれほど残酷で非情なものなのかを…元々忍は非常で残忍なものだ、だが抜忍となれば、元仲間だった忍とも、生きるためにも相手にしないといけない…
今は伊佐奈を討ち、上層部たちも焔たちの存在には少し特別な感情を抱いたものの、抜忍という立場は変わらない。
お互い、世の中嫌われ影で生きてきた彼女たち、二人が刃を交わすのは、必須なんだろう…
ただ一つ不思議に思うこと…それは、どうして同じ悪なのに、こうなってしまうのか…
焔と漆月なら、分かち合えるかもしれない…
生き延びるために、同じ抜忍同士、手を組むことは不思議じゃない。
正義にだって色んな形があるように、焔と漆月、悪にだって色んな形がある。
だからこそ、分かち合えない人間もいるのだ。

そう言った点ではこの二人は似ている。

「――あっ、そうだ焔。一つ聞きたいことあるんだけどさ」
「ん？」
「焔はどうして保須市にいるの？もしかして私たちのこと追って？で

も情報は分からないよね？何処からか漏れたのかな？だとしたらどうやってかな？」
漆月の迫り来る唐突な質問に、焔は意外だな…といった感じの表情を立てていた。
しかし漆月のこういった質問攻めも、間違いではない。
そりゃ当然だ、自分たちがヒーロー殺しと交渉し、ヒーロー殺しが去った後に脳無を四体放ち、そこから焔が突然やってきたんだ、コミックでもない限りこんな偶然はありえないと判断した漆月は、正しい反応とも言える。
しかし生憎、今回ばかりは本当に偶然だ――
「いや何…確かにお前たちを追っていたことは事実だが…何も情報が漏れたこともないし、偶然やって来ただけさ」
焔紅蓮隊の彼女たち五人が何故ここにいるか？
別に大した理由じゃない、偶々新しいバイト先を探し回ったり、新しい隠れ家を探したりしてるだけで、別にここに漆月がいたことなんて想像もつかなかった。
何よりも今の忍たちは強化パトロールを行っている、伊佐奈を倒して自分たち抜忍の存在が少し特別扱いにされたとしても、何をされるか分かったものではない、だから漆月は勘違いしている。
「ふぅん…まあ良いや……どーせ仮にそうだったとしても、敵であるアンタが教えてくれるわけないからね」
お前はよく分かってるな――
そう言いかけた焔は、口を少しもごもごしながらも何も言わなかった。
敵に簡単に答えを教える馬鹿正直など忍の世界ではほぼ皆無に等しいだろう。
いるとしたら飛鳥くらいだ、アイツは正真正銘のアホでバカで仕方ない、どうしようもないお人好し…けど、そんなアイツだからこそ最強の友達でもある。

漆月は鎮めてた気を沸騰させるように、一気に気力を高め、不穏たる闇の粒子…霧が周囲に広がり纏わりつく。
脈打つように上昇し、高鳴るこの暗黒の気は、今までの忍とは一線超えている。
焔は漆月のこの気配に怪訝そうな顔立ちで見つめる。
それは、一体何をしやらかすのか…この忍法はどんな術なのか…
――ではなかった。
焔は蛇女にいた頃、選抜メンバーの筆頭として下級生や下忍たちに厳しい指導や訓練を受けさせていた。
当然対人戦闘なんかは容赦という文字は無く、相手にしてきた者たちは無傷ですまない…
最悪病院送りなんて山ほどいた…
更に蛇女ではどちらかと言えば成績は優秀、焔のような脳筋みたいな見た目から想像はつかないが、座学でもかなり上の方で、春花よりも上だったことも――
そんな戦闘狂の焔だからこそ、知識も経験豊富な彼女は驚きを隠せない。

――こんな禍々しい気は感じたことも、見たこともない……

見知らぬ忍相手に、焔の戦闘欲、抑えきれない高揚感は高まる。
だがそれと同時に、何か危ういものも感じる…

焔は最初っから本気を出すのか…七本目の刀…宝刀、炎月花を抜く。
焔の熱き心に呼応するように、炎月花から炎が放たれ、渦巻き炎上する。
紅蓮に満ちた炎は、焔の髪の色を紅く染め、纏わりつく炎は激しく唸る。
それを見た漆月は「へぇ、覚醒か…」と小声で呟く。

――覚醒。
忍には覚醒といった本来ありえない力を発揮させ、秘められた力を解き放ち呼び覚ます忍術だ。
焔だけでなく、氷王の名を待つ雪泉もまた同じ――
他にも超秘伝忍法書で覚醒した飛鳥…真影の飛鳥も覚醒の力はあるものの、慣れないのか、覚醒する姿はほぼ見ない。
雅緋も才能は高いため、もしかしたら秘められた力…覚醒を持つ可能性もあるだろう…
そう言った秘伝忍術を持つ者は世界でも滅多に見ることはない…
多分、漆月も覚醒を待つ忍を前にしたのは初めてだろう…
「覚醒……私が知ってる中でだと、数十人はいるけど……まさか焔も覚醒待ちとはね…黒霧にはあはいったけど、こりゃ気を引き締めてやらないと死ぬかもね」
「本気でかかって来い漆月――抜忍や悪忍の立場なんて関係ない……お前の全力を私は、真正面から全て燃やし尽くす――!!」
漆月も焔の言葉に胸が高鳴り殺意を膨張させる。
ニヤリと嫌みたらしく笑うその笑顔は、死柄木が焔に見せた時や、ステインに殺されかけた時と同じ笑顔だった。
飛鳥や緑谷の二人が同じ似た者同士で強く影響し合うように、漆月と死柄木もまた二人とも強く影響し合い、成長する。
焔はこの時知った、飛鳥と漆月は正反対の人間だと…
焔から言わせてみれば、飛鳥のように無個性で何ともないような、ヘラヘラした女、忍の世界…別の意味での甘ちゃん…
二人は刀を持って互いに獲物に飛びつくように跳躍し、心の刃を向ける。
紅蓮の炎と漆黒の闇…
二つの力が呼応し激しくぶつかり合う――
勝負の行方は如何に――

緑の閃光は軌跡を描き、ステインの腹部に傷痕を残す。
緑谷の拳はステインの頬に炸裂し、出力が少し行き過ぎた為か、頬は赤く腫れる。
――腕には僅かな痛みが走る、１００％でないためバッキバキに折れることはないが、少しでも調整を間違えれば、また骨折して腕が使いものにならなくなってしまう。
緑谷はその痛みに歯を食いしばりながらも、僅かな痛みだけで済んだことに、軽い一息をつく。
――しかし緑谷少年、恐れるなかれ、油断をするな。
敵を倒したと勘違いをするな、敵はまだ目の前にいる。

ステインは二人の痛恨の一撃をくらい、数秒間を置き苦痛に満ちた表情で悶絶し、気絶に陥りそうになりながらも、目を見開き刀に再び力を入れる。
二人はゾッとする――
５％とは言え、緑谷の超パワーに飛鳥の秘伝忍法、それらを持ってしてもステインを倒すこと叶わず、彼は再びスイッチが入り動き出す。
「偽…者おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーー!!!」
血走った目に、野生の獣のような狂気の雄叫び、殺意を纏わせた凶

刃、刃毀れしようと刀が折れようと、ステインは辞めない、止めない、止まらない…
偽者を粛清するまでは、社会を正すまでは、彼は永遠に止まらない…
飛鳥と緑谷は咄嗟に目を瞑る。
殺られる――そう思ったから、余りにもの恐怖に、二人は萎縮してしまう。
人は恐怖を前にすると、反射的に身を縮め込んでしまうのだ。
しかし不思議なことに、ステインは二人が近くにいるにも関わらず、直ぐに反撃を構すことが出来るにも関わらず、攻撃が届くのに、ステインは二人を目の前にしても、反撃をすることなく、黙認する。
狂った人形のように、殺意に飲み込まれ動く彼は、この世の物とは思えぬ化け物だ…

「これで良いか…？」
「ああ――!!
ありがとう轟くん！これで僕は動ける――――！」
それとは裏腹に、轟は飯田の脚を右で凍らせる。
足の太ももは冷えるも詰まってたマフラーは煙を噴き出し、動けることを確認する。
これでもう一発分、レシプロバーストを発動させることができる。
故障してた脚が動き出し、宙を回転するように飯田の体はステインに向かっていく。
ステインが刀を振るう前に、飯田の蹴りが先に早く動き出す。
「これで終わりだヒーロー殺し――!!」
――お前の思想や信念は、敵であり悪でありながら、素晴らしいとは思った。
間違えを正すことは良いことだ、それは…人を正しい道へと導く人間として、その思想は認めざるを得ないものだ。

でも、彼の所業は許されない、理由がどうであれ、人を傷つけ殺すのは、どう言っても間違っているから。
本当に人のためを思って導くのであれば、暴力ではなく、救う心を持って人に手を差し伸ばす。

だからこそ、お前を倒そうヒーロー殺し、兄としてだけでなく、犯罪者として、お前を止める――!!

「――グッ…!!」
重々しい一撃がステインの横腹に蹴りが叩き込まれ、嫌な音を立てる。
恐らく肋骨が折れたのだろう…その後流れる連携、轟の炎がステインの顔を炙る。
目線を隠してたボロ雑巾のような布は燃えることなくボロボロになり、顔は酷い大火傷を負い、彼は白目を剥いて又しても気絶に陥る。
氷を繰り出すと、飯田と緑谷、飛鳥は滑り台のように氷に転がり轟の元に寄ってくる。
しかし警戒を解いてはならない、相手は忍を殺害して来たヒーロー殺し、次はどのような攻撃を仕掛けてくるのか、どのような動きをするのか分からない。
「次来るぞ――!」と轟は三人を見つめた後、ステインに視線を送る――

――だがその心配はもう必要ない。
なぜなら、ステインは氷に支えられたまま、壊れた人形のように動かなくなってしまったから――

「……気絶?したっぽいね――?」
「流石に、私たちの攻撃を食らったらひとたまりもないから…ね?」
緑谷と飛鳥は目をまん丸にして見開き、気絶したまま動かないヒーロー殺しを見つめている。
奮闘する激戦のあまりか、その場のみんなは息を呑み、ヒーロー殺

しを倒したと認識すると、開放感にどっと疲れが溢れ、轟はその場に座り込むようにしゃがみ、飯田は未だに信じられないような、怪訝そうな目でステインに視線を送る。
本当にやったのか…？まだ動けるんじゃないか？もしや気絶したフリをしてたり…？なんて疑問を抱く中、この場にいる皆んなはこの状況に戸惑いつつ、互いに顔を見合す。
「……とりあえず…どうしよっか？」

「悪かったな…プロの俺が役に立たずに動けなくて…」
「い、いえ…ヒーロー殺しの個性から考えて仕方ないことです…
寧ろネイティヴさん、あんな化け物と一人でやり合って…逆に凄いとしか言えませんし……あんなのを一対一でやれば、勝つことは難しいですから――」
数分後、ネイティヴはようやく体の自由を取り戻すことができ、脚を切られて動けないでいる緑谷を背負っている。
ヒーロー殺しがなぜ、ここまで生き延びることが出来たのか…何故、忍を相手にすることが出来たのか…それが今ならハッキリ分かる。
「これでよし…と、雪泉ちゃん大丈夫？」
「ええ、私はなんとか…」
雪泉もようやく体の自由が利くようになったのか、飛鳥の横でステインを見つめている。
血飛沫が白い和風の浴衣衣装に染み付いてしまい、若干手負いのように見える。
だがステインは何故か雪泉のことを考慮してたのか、致命傷には至らず、擦り傷で済ませたのだ。
その気になれば殺せたんだと思う…そう考えると、雪泉は悪に生かされたことに、若干悔し混じりの表情で、唇を噛み締める。

飛鳥はステインの持ってる武器を全て没収している。
生憎彼は気絶してるので、凶器を取るなら今だと見解し、轟がゴミ溜まりから探し持って来た縄でステインを縛る。
これなら気絶から回復したとしても、そう易々と脱出することは不可能だ…
「……どれも刃物ばっかり、クナイとかマキビシとか、あ！あとワイヤーもある！忍専用道具だよコレ！」
「そんなに忍道具持ってんのか…？戦利品としてか…いや、アイツの言葉から察するに恐らく本当に、自分の武器として扱ってたのか……
本当に大したヤツだよコイツは…悪い意味でな」
「轟くん！俺が縄持つよ、腕傷だらけだろ？」
「いや、それならお前の方もだろ飯田……俺よりもお前が傷ついてんだ…俺に任せろよ」
「お二人共落ち着いて……なんなら私が……腕は傷付いてないので…」
喧騒に満ちた路地裏を後に、飛鳥は複雑な眼差しをステインに向ける。
彼のやってることは、確かに赦されないことだ。何をどう言おうと、人殺しで何かを変えようとした犯罪者…
忍でない人間が、他者を傷つける事実に変わりはない。
――だがステインは正義を求めていた。
眩い光を求め、探し、掻い潜ってきた…確かにコイツは犯罪者だが、普通の犯罪者とは違う。
どれだけ周りが殺人鬼と彼を罵ろうと、飛鳥は彼をそんな人間とは思えない。
ステインによって殺された人間や忍は、数えられない程存在する、きっとステインを赦さない人間は山ほど居るだろう――
救われるはずがない、でも飛鳥はそんな風には思えない。
――『お前は本物の忍だ』

その言葉が、飛鳥の胸に嫌に引っかかっていた。
それこそまるで飛び散ったガラスの破片がハートに突き刺さるように、ステインという存在が、飛鳥の心に何処か変化に近いものを、影響を与えた。
もし、ステインの道をもっと早く矯正させていれば、取り返しがつかなくなる前に彼と向き合えば、止めてあげれば、きっと誰も犠牲を産まずに、彼も救えたのかもしれない。
光と影が合わさったかのような存在、飛鳥はそんな彼を初めて目の当たりにした。
――正義ってなんだろ？悪いのをやっつけるのが正義だって、幼い頃からずっとそう思って来た。
イジメのガキ大将なんてぶっ飛ばして万事解決なんてことをして、半蔵じっちゃんに怒られ、呆れてしまうこともシバシバあった。
その時にじっちゃんに言われた――
『お前のやってることはただの暴力、ただの刀だけじゃ。
刀だけでは人を救うことも、立派な一流の善忍になることも叶わんのじゃ――』
幼い頃は考えが浅はかだったからか、じっちゃんの言ってる言葉は全然よく理解できなかった。
――でも今なら分かる、ちゃんと理解できる。
人を救うのは、正義というのは刀だけじゃない。
人を傷つけるだけの力はただの刀だ…本当の強さというのは、守る力も必要なんだ…
守る力…それこそ、じっちゃんの言ってた盾。
刀と盾があるからこそ、正義は成り立つ。
それこそ、立派な善忍として、忍としての心構え。
強大なる二つの力が、人を遥かに強くする。
――一方ステインはどうだろうか？
確かに彼の執念や正義への固執、信念は飛鳥も素晴らしいとは思ったことはあるが、何もそれを認めたわけではなく、やはり力だけで解

決することは出来ないのだと悟った。
だから、ステインにも分かって欲しい…刀だけが全てじゃない、守る力も必要なんだって――
ステインにはそれが無かったから、ヒーロー殺しという道を歩んでしまったのではないか？
もし、彼も守る力を理解していれば、きっと立派なヒーローになっていたに違いない。

だって、あそこまで正義について拘っていたのだ、きっと昔は自分や雪泉のように、何かに憧れてたに違いない…
そう考えると、どこか複雑な気持ちになってしまう。
――悪には色んな悪がいる…焔ちゃんなら、ステインのことをなんて言うだろ――？

ふとそんな事を深く考えていると、遠くから老人らしき人物が一人、少し埃やらで汚れてるが、こちらに向かって来てる。

「アレ？あの人って――」
隣の緑谷が呟きだした。
その老人は遠くからでも見えるのか、緑谷の方に視線を向けると、何やら反応したらしく、瞬発的に、一瞬で此方に来て緑谷の顔面に蹴りを入れる。

「――何でオメェがここにいるんだ小僧!!」
「へぶぅっ!?」
「「――ッ!?」」

まさかのドストライク。
突然ボールが小池に転がるように、目の前で訳のわからない展開に突入した皆んなは、何が起きたのかも分からず、ただ呆然と目の前の光景を眺めるしかなかった。

――それと同時に湧き上がって来た一つの疑問…それを簡潔に言うとすれば…

――このお爺ちゃん誰？

誰もがそう思っただろう…いやそのはず、皆んな本当に心の中でそう呟いたから。

そう、緑谷を除いて…

緑谷とこの老人が話してる事から察して、恐らく研修先のプロヒーローと判断して良いだろう。

そんな周りのみんなを御構い無しに、緑谷は老人…いや、グラントリノと会話する。

「それはそうと良かったです！あの…脳無の兄弟は…？」

「んあ？アイツ脳無ってのか？個性が複数あったし妙な奴だとは思ったんだが…まあな、轟…いや、エンデヴァーと協力してなんとか沈めたさあの脳筋野郎め！」

「エンデヴァー…」

グラントリノの言葉に、エンデヴァーという名前が出て来たことに、轟はふと俯く。

エンデヴァー…そう言えば別れた際にあの後応戦が来るようにと連絡したのだが、ヤケに遅かったのは脳無らしき人物が保須市で暴れてた所為だったのか…

しかし、いつになっても応戦が来ない…と言うことは、エンデヴァーでも苦戦しているのか、或いはプロヒーロー達でも太刀打ちできてないのか？とそんな疑惑さえ浮かんで来てしまう。

「まあ、あの敵のことは良いとして……」

するとグラントリノは飛鳥の方に視線を向ける。彼女自身もグラントリノに視線を浴びてついビクッと反応してしまう。そんな小動物のように可愛らしい飛鳥の反応は置いといて、グラントリノは心の中でニヤついた。

（ほーお、コイツが半蔵の孫の飛鳥か…随分と立派に成長したじゃねえか。
――つったってまあまだまだ雛の卵…いや、こいつの場合はカエルの卵って言った方が妥当か、見た限り成長する余地はあるけどな――）
グラントリノは飛鳥のことを知っている。ただ、直接会った訳でなく、写真で幼い頃の彼女を見たくらい、後は半蔵の自慢話しか余り聞いたことがないので、現在の彼女がどのような容姿をしてるのかまでは分からなかったのだ。
それは、此方を呆然と見つめている雪泉も同じく…

「ん？アレって…？」
「おい！あそこだ間違いない――！」
「エンデヴァーさんの言ってた通り…ここだ！」
東側の建物の影から数人束ねたヒーロー集団が此方の存在に気付き、駆け寄ってくる。
何事だ？と皆んなが首をかしげる中、轟は「エンデヴァー事務所…サイドキックたちか…」と確認し息を漏らす。
恐らく街で暴れてる敵に対する個性が不向きなヒーローに向かわせたのだろう、何よりエンデヴァー一人なら、きっと大丈夫だろう…ただ単にＮｏ．２の肩書きを背負ってるだけじゃない、それは轟が母と再会しケジメをつけ、視野が広がり色んなものに対して考えを持つ轟だからこそ言える答え。
「君たちその傷…とりあえず手当を！」
「おいちょっと待てよ……コイツって、ヒーロー殺し!?」
「えっ、嘘だろ!?何でまた…」
やれ傷ついてる子供らを見て怪我の安否を確認するヒーローもいれば、ヒーロー殺しがいることに大きく動揺し慌てふためく者もいれば、何故ヒーロー殺しが怪我を負ってるのかも、そして子供達が？という疑惑の視線を送るヒーローもいる。
「――皆んな…」

そんな喧騒としたヒーローたちを後に、後ろから飯田の声が聞こえる。
飛鳥や緑谷たちが振り向くと、そこには頭を下げ、顔こそ見えないが目に涙を溜め、ポツポツと流している。
「本当に済まなかった…皆んな……俺の行動で、皆んなにまで迷惑をかけて…傷ついてしまい……何も見えなくなってしまっていた……
本当に、すまなかった…!!」
――飯田の謝罪。
友の言葉に一瞬戸惑いつつも、飛鳥はニコッと笑顔を向ける。
「良いよ飯田くん、間違いは誰にだってあるもの、それに…飯田くんが無事でよかった！」
「僕も、本当に良かったよ…でもゴメンね飯田くん、君がそこまでおいつめてたこと全然気付かなかったんだ……
もっと、強く声をかけてれば…」
優しい声をかける緑谷。
その言葉に緑谷が自分に言った『どうしようもない時は言ってくれよ、だって友達だろ？』のセリフを思い出した。
――そうだ、あの時緑谷くんは…あの時からずっと気にかけて心配してくれてたのに…僕は緑谷くんのことすら見えていなかった…!!
歯を食いしばり、苦痛のように唇を噛みしめる飯田。
「…悪に大切なものを奪われ、壊される気持ちは、嫌という程分かります…
だからこそ、何も見えなくなり誤ちを犯す人も少なからずいる…昔の私たちのように……
ですが、それを正すことも私たちの正義……間違った時は、お互い正し合いましょう…
それもまた、『友』ではありませんか？」
雪泉も、飛鳥に負けない位の眩しく、優しい笑顔を向ける。
昔の雪泉なら、こんなにも可愛らしい笑顔を見せなかっただろうに…本当に成長したんだなと、何処か嬉しく思う反面、飯田は更に涙を

流す。
あの時の厳しい一括から一変し、優しく接してくれる雪泉。
「しっかりしろよ委員長。俺たち、友達だろ――」
轟は、飯田のことは何も言わなかった。
それは轟なりの気遣いと優しさだろう、何も責めることもなく、間違いだなんて言わず、ただ優しく…気合を入れさせるように一声かける。
「――ああ！」
飯田は流してた涙を腕で拭う。
涙で多少目は少し赤いが、それでも飯田は気にしんとばかり、四人に笑顔を見せる。
皆んなが笑顔で見ているのに、いつまでも自分だけメソメソ泣いていてはかっこ悪い…
だから、笑おうじゃないか。自分も…と一生懸命な笑顔を作る。
その笑顔は、飯田の兄を連想させるもの…兄に近い笑顔だった。

――長きに渡った奮闘…
しかし、時間的にはほんの5～10分程度の短い時間だった。
長かったようで短かった…
あの数分間でこんな激戦が繰り広げてたなんて、皆んなは思うはずがなく正直驚いているし、信じ難いことだ…
でも…これで――
「おい！お前ら伏せ――――」
グラントリノの表情が一変し、突然叫び出す。
皆んなは何事だ？と首をかしげる中、空を見上げる前に…
ガシッ――
「――え？」
「は？」
飛鳥の横に通り過ぎる不穏な存在。
緑谷は何かに掴まれ、素っ頓狂な声を上げる。

轟も雪泉も、今の一瞬何が起きたか訳わからずと、目をまん丸にする。
しかし、横に通り過ぎる何者かの存在を、飛鳥はしかとその目で捉えた。
巨大な翼に、口は金属製のマスクで覆われ、下半身は古いジーパンを着用している。

――脳無

脳が飛び出てる脳無は、左目が抉れており、火傷を負っている。
その脳無は、鳥類に近い足で緑谷の体を鷲掴みにしたのだ。
そのまま、上空に羽ばたくように飛んでいく改人・脳無。
「「――――!!!」」
「――緑谷くん!」
飛鳥の叫びも虚しく消え去るように、脳無に捕まってる緑谷は必死にもがき抗おうとジタバタと体を動かす。
どう脱出するかなんて冷静な考えが出来ない緑谷は、とにかく必死に抵抗している。やれ足を動かそうとも、拳で脳無の足を殴っても、ビクともしない。
火傷の痕を見た限り、この脳無はエンデヴァーにやられたと見なしていいもの。
恐らく逃げて来たに違いない。
「――――クッ!無理か!」
グラントリノは思わず舌打ちする。
グラントリノの個性は『ジェット』、空気を吸った分、足の噴出口から空気を放出するスピード型の個性、現役時代の頃ならあの脳無も倒すことは出来るが、あの上空に飛ぶとなるとグラントリノの老体に響かねない。
飛鳥の斬撃が届いたとして、果たして人質に取られてる緑谷は無事に済むだろうか?
轟の炎もまだ完璧にはコントロールできていない、下手すれば緑谷

まで巻き込むことになる。
氷は無差別攻撃のため確実に緑谷が危険を伴う。
飯田の個性はエンジン、レシプロバーストもステインに使い暫く使えない。
お茶子でもいない限りこの状況を打開するのはほぼ難しい。
となれば…
「こうなれば私が――！」
雪泉の声が路上に響き、氷を生成する。
この気配は恐らく…秘伝忍法を使う気だ――
雪泉の目の前には氷柱を形成させる、この秘伝忍法は【黒氷】だ。
温度の差によるものか、冷気がイヤに白く漂い、翼脳無に標準を定め合わせる。
――今だ！
「ダメだよ雪泉ちゃん――！」
「――ッ!?飛鳥さん！」
銃の引き金を引くように、雪泉が黒氷で脳無を仕留めようとしたその時、飛鳥の声が遮り、雪泉が静かに高めてた集中力が削がれる。
そして飛鳥は前に立つ。
「どいて下さい！」
「嫌だ！もしここでそんなの…緑谷くんが…！」
「躊躇してる場合ではありません！緑谷さんを巻き込まないように――「いや、無理だ雪泉」――轟さん？」
雪泉は怪訝そうに轟に視線を送らせる。
「見てみろ、あの脳無…フラついてやがる……手負いの状態なら当然そうなるだろうが…標準を定めたとしても、当たる可能性があるとは確実には言い切れねぇ……焦る気持ちもわかるが…この場合は何か違う打開策考えねえといけねえ」
脳無の動きが不安定な以上、無闇に撃ち込むことは出来ない。
仮に脳無に秘伝忍法が直撃したとしても、緑谷はどうする？ヒーローらがキャッチするのも良いが、間に合うかどうか…
雪泉は思わず敵意の視線を憎き脳無に送らせる。

脳無の赤い鮮血がポツポツと垂れ、雪泉の頬に付着する。しかし肝心の雪泉はそれに気付かない。
「こうなったら他のヒーローたちを――」
誰もが絶望したその時――
――シャッ…
ここの誰もが予想などつくはずがない、ありえない人物が動き出す――
レロリ…
「――!?」
途端、何者かの舌が雪泉の頬についてる血を舐める。
その時、翼脳無の動きに異変が生じた。
体が急に言うことを聞かなくなり、動きを止めそのまま形を崩すことなく落下していく。
脳無自身、思考能力を持とうが持たないだろうが、自分の身に一体何が起きたのか、理解出来るはずがない脳無は、奇声を上げる声もなく、何者かの手によって脳に刃物を突き刺される。
「――偽者が蔓延る社会も――」
グシャリッ!!
脳無の脳を、瞬時に魚を捌くかのように、無数に斬り刻む。
「――徒に力を振りまく犯罪者も――」
――全員粛清対象だ。
その言葉が終わりを告げるように、ナイフに突き刺さった脳無をクッション代わりに、緑谷を救ける人物…

ソイツの名前はヒーロー殺しステイン。
倒したはずのステインは、本物を救けるべく、気絶から立ち上がり敵に立ち向かった――

「――全ては正しき社会のために――」

折れない信念は、人を強くする。
ただその姿は余りにも…歪みに歪んだ悪となり果てて――

８２話「粛清、救ける」

天空が嫌に闇に染まる。
先ほどまで夕焼け色に染まってた青空は、暗雲に覆われ大雨でも降ってくるのか、それこそ積乱雲ではないかと疑問を抱いてしまうほどに、黒い空は禍々しく、人の心を嫌な感情に染めてしまう。
空からは雨の一粒たりとも降ってこない、天気予報では曇りなんてマークは出ておらず、天晴と言われてたほどだ。
そんな保須市の繁華街にだけ覆うこの黒い雲は一体なんなのか？

漆黒の闇の下に、保須市の繁華街の路上…
数人のヒーローが束ね、傷を負った学生が数人、そして脳を斬られ赤い鮮血が海のように広がり、体をビクビクと弱々しく、魚のように蠢く翼の脳無…
突き刺さったナイフを手に持ち、脳を振り払うかのように抜き取る敵、ヒーロー殺しにして忍殺しのステイン。
そして、緑谷に気付かないことを確認すると、抵抗してる緑谷を押さえつけている。
ステインの個性なら、相手の血を舐めれば動きを止められるものを、ステインは緑谷をジッと見つめたまま、刃物を手に持ち傷つけようとも、血を舐めようともしなかった――

――全ては正しき社会の為に――

「おい！アイツ…子どもを救けたのか…？」
「バカ！あんな人殺しが人を救ける訳ないだろ！人質に取ったんだよ！」
「けどなんで…？さっきまで気絶してたよな？」

「考えるな、気絶したフリして奇襲を伺ってたんだ…ったく、ヒーロー殺し…つくづく外道だな、幼い子供を人質として扱うなんざ…！」
ヒーローたちはやれステインが人を救けたのだの、人質にとったのだの言い合ってるが、それを端から聞いた飛鳥は、心の中で否定する。
（違う…人質に取ったんじゃない…アレは…ステインは…緑谷くんを救けた――？）
殺人鬼である彼からして信じ難い行動だが、確かに、ステインは身を挺して彼を、緑谷出久を救けた。
そもそも、頭を冷やして軽く考えてみよう。
人質に取る必要性など何処にある？
それは確かに生き延びるためならせめて、人質をとって逃げる敵はいない訳ではない、実際『僧坊ヘッドギア』なんて銀行強盗故に人質をとったヴィランだっていたんだ（オールマイトに倒され警察に捕縛されたけど）。
しかし、ステインを知ってる者はその考えには行き着かず、またステインがそんな外道じみたやり方をするヴィランではないことがハッキリと理解できる。
ヒーローについて必死に語り出し、飛鳥を本物の忍として拝み、認め、褒め称え、彼女を殺さなかった――
それに気絶から回復したのなら、ここは一旦逃げればいいだけの話だ。
ステインは広場で目立つ戦闘は好まない（理由は自分の居場所、情報漏洩に繋がり、捕まる危険性が極めて高いため）。
何より気絶したふりなんてありえない。
そりゃあんだけの攻撃を叩き込んで、気絶からすぐに回復して動けること自体ありえない話なのだが、ステインのような人間は、そう言った下らない小細工や、タチの悪いことはしない。
ヴィランに肩入れする訳ではないが、これはステインと死ノ美を交わした、揺らがない事実だ。
「――何をしてる！」

予想外な出来事に、ここに割り入ってくるかのような荒々しい声が路上に響く。
声の主の方向に振り向くとそこには、豪快な炎を燃やし、マスクで目元を隠し、屈強な筋肉が露わになってるヒーロー、間違いない…
エンデヴァーだ。
こうして生で会うのは飛鳥は初めてだ。噂や轟の件、テレビ、ニュースでは予々聞くが、いざ直接こうして会うとは思いもしなかった。
尤も、エンデヴァーは飛鳥や雪泉、忍学生のことなどお気になさらず、怪訝そうな顔で皆んなを見つめてる。それこそ「お前らなんで一固まりになってるんだドアホ共！」と何処その雷親父が怒鳴り散らかしそうな雰囲気を漂わせていた。
当然、今の状況が分からない人間、それこそＫＹ（空気読めない）の人はその反応を取るのが妥当かもしれない。
「エンデヴァーさん！あの、ヴィランは…」
「ああ、思ったよりも厄介でな…一人逃げてしまったが、もう一人のデカブツは倒した。
それもかなり手荒になってしまったが、医療班に連絡した、警察もそれに合わせてやって来るはず…問題はない――
――して、奴はもしや…？」
エンデヴァーは目を細め、睨みつけるような視線で、僅かながらにうっすらと人影が見える人物を見つめる。
あの男は…？コイツは……もしや――
「ヒーロー殺し――！」
まさかこんな所で出会うとは、夢にも思ってなかった。
轟が、息子が向かったその場所に来てみれば、こんな大物ヴィランに、探し求めてた極悪人を見つけるなんて誰が予想つく？
想像もしないこの展開に、エンデヴァーは不敵な笑みを浮かべ、自慢の炎の髭が震え、思わずその場を火の海に変えてしまうくらいの高

揚感が湧き上がる。
「待て轟！コイツは――」
グラントリノの止める声、しかしそれでもエンデヴァーは止まらない。
エンデヴァーが手の平から豪快たる炎を出そうとしたその瞬間――

「――偽者――!!」

「――ッ!?」
今まで黙って緑谷を見つめてたヒーロー殺し、ステインが振り向く。
目元を隠してたボロ雑巾のマスクは炎のせいで取れてしまい、その素顔が明らかになる。
目元は火傷を負ってはいないものの、それでもその顔は見るに耐えない傷だらけだ。
何よりも、執念がまだ消えていない。
信念は折れていない。
まだ戦えると言わんばかりの不屈な闘志。
それらを連想させる、もはや狂気を通り越し恐怖でしかないその不穏な殺気に――
近くにいる緑谷、
彼に殺されかけたヒーロー、
その場にいるサイドキック達、
雪泉に轟、飯田、飛鳥、
グラントリノにエンデヴァー、
この場の全員が恐怖で怖気付く。

好戦的だったエンデヴァーも、表情を曇らせ、オールマイトの師匠、グラントリノすらも震える。
まるで獄氷を目の当たりにしてるかのように、それこそ悪魔がこちらに歩み寄ってくるかのような、ただならぬ恐怖を、この場にいる全員は今、身を以て思い知る。
ステインは血だらけになりながらも、口から唾液を垂らしながらも、歩み寄る。
轟や飯田なんかは腰を落とし尻もちをつき、雪泉は震えが止まらず、手で口元を覆い隠し、思わず後ずさりしてしまう。
その場のヒーローも、今目の前にいるのが本当にヒーロー殺しなのかと疑いを持ってしまうほど、
ステインの信念は、執念は、殺意は、悪意は、怒りは、恐怖は、言葉で物言い表せない程凄まじいものだった。
「正さねば――」
ザッザッと足音をゆっくりと立てる。
「ヒーロー(光)と忍(影)を取り戻さねば――」
オールマイトや飛鳥のような、英雄を背負うに相応しい人間を――取り戻さねば、正さねばならない――

ステインは飛鳥を見つけると、息を荒くしながらも、何かを訴えるかのように言葉を紡ぐ。
「本物を!取り戻さねばならない!誰かが、誰かが血に染まらねば――!
誰かが犠牲にならねばならない!
全ては、正しき平和の社会のために、俺は殺す――!何度でも、何度でも現れ続ける――!!
偽者を!犯罪者も!粛清だ――!」
ステインの殺意爛漫な瞳は激しく震え、その言葉一つ一つが重く、今呼吸してるのでさえ分からない、そんな気さえした。
「来い!来てみろ偽者!!俺を殺っていいのは…本物の英雄だけだ――

！

オールマイト、飛鳥(お前)だけだあああぁぁぁぁ!!」

殺意と覇気を孕んだ叫び声に、一同は恐怖の余り震えてしまい、おろそかに足を動かすことすらままならない人もいれば、自分が何をどうすれば良いのかでさえ迷ってしまう人も、エンデヴァーみたいに表情を曇らせる人も、今その場には確かに存在する。

「お前」、その言葉が誰に向けられてるのか、知るはずが無く――

そんな恐怖に怯えてる周りの中、飛鳥だけは――

「ステ…イン――」

彼女だけは、恐怖に身を染めながらも、ステインの言葉に、どこか胸が熱くなる。

ステインの言葉に大きく影響を受けた。

しかしそれは、犯罪者の語らいではなく、ステインのもう一つの言葉の意味、そしてステインの望む物、ステインが言いたがってた本当の言葉を、飛鳥は受け取った。

『飛鳥、俺は偽者を殺す。何があっても、それだけは変わらない…それがお前の言う俺の信念…

ヒーローも忍も、偽者と見なせば、お前の大切な存在だとしても、粛清する。現れ続ける――それを止めるなら、止めてみせろ本物 』

「ステイン、なら私が何度だって止めるよ。例えそれが貴方の言う偽者でも、本物でも、私は止める。絶対に止めてみせる。

誰かを犠牲になんてさせない、そんなの私が許さない、止めてみせる…

一流の忍なんて関係無いから――」

飛鳥はそう呟いた。

それが周りには聞こえていないのか、或いはステインにしか今は目に見えていないからか、どちらにせよこのメッセージのやり取りは、

飛鳥にしか分からないことだから……

ヒーロー殺しステインは、粛清でしか人を、心を、社会を、世界を正せなかった。

正すことしかできなかった。

彼にはそれしか方法がなかった…守る力、飛鳥の言う盾の力が彼には無かった。

だから例え自ら汚れる存在になろうとも、世間の嫌われ者になろうが、犯罪者としての名を背負おうと、彼は彼で正義を追い求め、信念を貫いて生きて来た。

そんな人殺しが、緑谷出久を救けたのだ。

人を殺すことでしか、正せなかった彼が初めて、ヒーローを救ったのだ。

考えたことはあるだろうか？見たことはあるだろうか？

――ヴィランがヒーローを救うことを――

人殺しが、人救けなんて無いだろう…例え昔、ヒーローを望み、ヒーローに憧れ、オールマイトに尊敬してた人でも、あの気絶から無我夢中で人を救けることなど、ヴィランがヒーローを救けるなど…あるわけがない。

例え緑谷出久が学生でも、ヒーローを志す人間に変わりない、一人の人間として変わりはない。

だが、飛鳥と死ノ美を交わし、関わりステインは確かに変わった。

自分の信念こそ変えはしない…もしそれまで変わってしまえば、自分が今まで殺してきたヒーローも、忍も何もかも全て無駄になってしまう。

確かにステインにとって偽者は処罰されるべき存在だが、ステインにはステインなりの想いがある。

それすら変わってしまえば、自分がして来た行為は全て意味を成すことなく虚無と化す。

しかし信念こそ変わらぬが、ステイン自身何かが変わった。
――守る力、本物を救ける力――
飛鳥から教わった…戦いの中で、意識的に、自然と分かった。
ただ刀だけでは社会は正せない…だから、盾という力も使って社会を正そう…
本物は、生きる意味がある。
生きる価値がある、だから本物は救わねばならない――
ステインの信念の中に生じる、光に似た信念…それこそ、飛鳥の言う刀と盾…

飛鳥は、ステインを蝕んだ。
ステインは、飛鳥を蝕んだ。

互いに互いを成長し合うその姿…
焔や雪泉と戦ったことで変われたように、ステインも彼女らと同じく、変わることが出来た。
しかし悪が善を蝕むように、飛鳥が悪に惑わされることも、俗に言う悪党になることやヴィランに変わることなど決してない。
――飛鳥は太陽だ、その太陽は悪と関われば、その悪すらも自分の正義に、光に変えてしまう。

反対な存在は時に、互いに影響し合い、成長し合う。

ステインは白目を向いている。
グラントリノが「コイツ…気絶してる…」と恐るおそる口に出した。
ステインは立ったまま気絶し、その場に立ち尽くしている。
後々から聞いた話だが、どうやら緑谷たちがステインを倒した時から、彼は既に限界を迎えていたそうだ。

折れた骨折が肺に突き刺さり、ろくに体を動かす事でさえ危険だった彼は、あの場でヴィランに立ち向かい、緑谷を救け、偽者と見なしたヒーロー達に立ち向かおうとしたのだ。
これが、社会に抗い信念を糧として強く生きて来た男の末路…
これが、忍殺しのステインにして、

――ヒーロー殺しステイン――

静寂な空気が嫌に冷たく、それこそ肺が凍ってしまう感覚さえした。
息つく暇も無く、エンデヴァーも、グラントリノも、その場に立ち尽くしてるヒーローも、雪泉も、飯田も、轟も、緑谷も、そして飛鳥も、動くことができなかった。
解き放たれた信念が、その場の全員を縛り付けるかのような…そんな気さえした。

繁華街。
街は火の海で燃え上がり、トラックや自動車はひったくりにされ、道路は割れている。
一体の脳無はまだ暴れている。
「強いですわね…」
「今まで本気出してなかった感じやな」
詠は息を荒くし、日影は感情はないからか、呼吸こそ平常に保っているが、それでも脳無が厄介だというのは理解している。
今まで本気を出してなかったという落胆も無いが、どこか焦りの表情が見えている。

時間も限られている、もし自分たちの姿を他のヒーロー達や忍に見つかってしまえば、マズイからだ…
特に一般市民になんてこの姿は見せられない。
脳無という強敵だけで無く、時間との勝負もある…こういった意味では修行よりも遥かに重い…辛いもの…
だが脳無も大分傷ついており、息が荒い、同じく弱ってると見なして良いだろう。
脳無の予期せぬ行動や攻撃、そして秘められた個性はおおよそ分かった。
まだ個性を隠してるのでは無いかという疑いもあるため、全部とは言い切れないが…それでもタネや仕掛けはもう分かっている。
それさえ分かれば、相手の動きや攻撃に警戒をしながら隙を突けば良いだけの話。
こういったプラス思考やマイナス思考のベクトルが平常に保てば、良くも悪くもこの現状は普通なのかもしれない…
悪く思えば気は重く感じるが、よく思えば体が軽くなる。
疲労や体力にも限界はあるものの、こちらは四人、肝心のリーダーである焔のことは気になるが、託された以上脳無を阻止しなければならない。
「なあ春花さん…この際面倒や、殺してダメなん？」
「ダメよ、昔の私たちならここで容赦なく殺してるけど…
それじゃダメ、私たちの存在がバレちゃう訳じゃない？何より忍の道に反してるわソレ」
忍と言っても、悪忍になろうが善忍になろうが、殺してはいけない人物も必ず存在する。
脳無は確かに化け物だが元はただの人間だ、操られてる可能性があれば、生かして脳無の体や構造だって調べれば、有益な情報だって手に入る。
どの道殺して良い理由にはならない。
「せやった…忘れてた」
日影は髪をくしゃくしゃしながら、ダウナーな声で返事した。

じゃあここからどうしよう…と考えてると脳無が跳躍し始める。
足を地面に思いっきり蹴ったためか、地面のコンクリートは割れてしまう。
粉砕の音、
殺意剥き出しの脳無、
ギュッと鳴る拳、
それらが彼女に襲いかかる。
防御は無理、圧倒的なパワーに耐えきれない。
回避も無理、早すぎる…仮に避けられたとて出来る自信がない。
じゃあどうすれば…？
いいや、決まってる…ここで迎撃し――
「やった！『溜まった』！」
ここで不意に未来が歓喜の声を上げる。
他の三人は「何が？」といった感じに首を傾げるが、未来は三人のことなど御構い無しに、スカートをめくる。
「絶・秘伝忍法！【ラントクロイツァー】――!!」
黒いゴスロリ衣装の四次元スカートから、突如、巨大な要塞とも呼べる重火器の銃器がズラリと出てくる。
特に目立つのが戦車とも思わせる、それこそ世界一強いと言われる戦車、ＡＭＸ―５６ルクレールのフランスと匹敵するかと言われて信じてしまうほど、とても重々しい、熊のような大砲が出現する。
チャームポイントといえば、可愛らしい子供っぽいマスコットのクマさんマークが注目だ。
大砲の口には既にエネルギーが溜まっている。
溢れ出んばかりの呪いのエネルギーが詰まっている。
未来が「今だ――！」と合図を出したと同時に、大砲の口に火が噴き出す。
巨大なボールのように、それこそバスケットボールの３、４倍はあるその閃光弾は突っ込んでくる脳無に外れることなく、的確に撃ち込む。
いや、外すわけがない、こんな馬鹿正直に真正面に襲いかかって来

てるのだ、跳躍してるため回避する仕様がない。
なら、真っ直ぐ標準を合わせ、スイッチ…引き金を引けばいい話。
重々しい無数の銃弾は、脳無に直撃、激しい悲鳴が天につんざくように響き、脳無の体が悲鳴をあげる。
トラックに吹っ飛ばされ、それこそ王道バトル漫画で見かける吹っ飛び方をする脳無は、何処にでもある普通の建物に吹っ飛び、その衝撃のあまり瓦礫が落下し脳無は埋もれる形となる。
銃弾が止み、土煙が晴れると…脳無は白目を向いて、大の字になって倒れていた。
元々ダメージが蓄積されてた脳無は、未来の絶・秘伝忍法を食らったことにより、フィニッシュとなった。
脳無にもはや意識はない、つまりこの勝負は――
「やったぁ！倒せた!!」
はしゃぐ未来のその姿は、幼い子供のようで、脳無を倒せる忍とは到底思えないものだ。
「や、やるじゃない…未来――」
「まさか未来さんが――」
春花と詠の二人は驚く。
いや別に未来が弱いとか、意外だなとか、そういう意味で驚いてるのではない。
驚いたのは、未来の成長だ。
例えエネルギー補充をしていたとしても、絶・秘伝忍法で脳無を倒せたとしても、仲間の成長に嬉しく驚いてる。
日影も驚きはしてないが、それでも成長する未来の姿には、嬉しい気持ちもある。
感情はなくても、感情を芽生えさせることは出来る、そんな日影だからこそ、仲間がいる嬉しさも、成長する喜ばしさも、今の日影は感じ取ることができる。
勝負に勝ったのは、未来ではない――
「でも、私一人じゃやれなかったよ…トドメ、刺したみたいな感じで、

別に私は大してそこまで強くない…
でも、あの脳無…皆んなで戦ったから、倒せたんだ――」
そう、焔紅蓮隊、皆んなの勝利――

四人はやったぁ！とそれこそ小学生が輪になって喜ぶ姿のように、四人は手を取り合い喜んでいる。
あの大人の魅力感溢れる春花でさえも、その輪に入って喜んでいる。
当然だ、あの脳無を…強力な脳無を倒すことができたのだから。
襲撃の時は倒すことが出来なかった…あの時は皆んなの力があってこそ其の場を退くことが出来たが、もし昔の自分だったらこの脳無には多分勝てなかったと思う――
そんな嬉々とした中、春花は一つの疑問を浮かべる。
「あっ、ねえ、そう言えば焔ちゃんは？」
その言葉に皆はハッと我に還る。
そう言えば肝心の焔がまだいない…焔はまだ戻って来てない…
どれくらいの時間が経ったのか？１０分？３０分？もしくは一時間？
時間というものは経つのが早い…人は体を動かすだけで時間感覚がズレるもの…
長き戦闘も、これはもしかしたら数分しか経っていないのかもしれないし、短い戦闘も長い時間だということもある…
もしかしたら、やられたのでは――？
「おい！皆んな――！」
聞き慣れた呼び声に、四人は一斉に反応し振り向く。
そこには、手荒で傷だらけで、息遣いは荒くとも、その目は死んでおらず、血を流しながらも、手をあげる姿…
間違いない…アレは…
「焔（さん）（ちゃん）!!!」
逞しき、皆んなを引っ張る紅蓮のリーダー、焔だ。
皆んなは駆け寄り走り出す。

焔が無事に帰還して良かったと笑顔を浮かべ喜ぶ詠。
無感情ではあるが、焔が無事でホッと一息つく日影。
心配してたのか、顔は涙や鼻水で顔をくしゃくしゃにして、泣き叫ぶ未来。
焔が無事に戻って来て安心する春花。
そんな四人に焔は苦笑を浮かばせながら、未来の頭を撫で「安心しろ、私は大丈夫だ」と告ぐ。
そんな焔に未来は「ちょっと！子供扱いするなあぁぁ！」と怒る。
焔は強い、それは四人が一番知っている。
だが、今回ばかりは本当に不安で仕方なかった――
だって敵連合と闘ったのだ…相手が誰なのか、どんな闘いだったのか、四人は知る由も無いが、こうして無事に戻って来たということは、きっと勝って倒したのだろう…
「事情や聞きたいこと山々あるけど…とりあえず…どうする？これ？」
焔が何か言おうとした途端、春花は親指を倒れてる脳無に向ける。
すると焔は健やかな笑顔を浮かべる。
「倒したのか…良くやった。
だが心配は要らん、警察やヒーローたちがもう直来る、捕縛は奴らがやってくれる筈だ」
「そう、なら良かったわ♪となれば、ヒーローや忍、警察が来る前にとっととズラかりましょ♪」
忍ならともかく、ヒーローや警察は太刀打ちできない。
見つかったら必ず面倒ごとになる。そうなる前に自分たちが消えればいいだけの話、焔は「行くぞ…！」と合図を出すと、五人はその場に消えた。

「――おいおいおい、ふざけんじゃ無いよ？」

ガリガリと首を掻き毟る音が、嫌に聞こえる。
双眼鏡を見渡し映る光景は、ステインが警察に捕縛され、移動牢式に入れられる姿。
「何殺られてんだよあの脳無！アイツだって何あの四人に倒されてるんだ！先生がよりよく強くしたヤツだぞ!?」
ステインによって無残に殺された翼脳無。
焔紅蓮隊により倒された強脳無。
エンデヴァーに倒されたパワー型の脳無。
グラントリノに倒された細い防御型の脳無。
「なんで居ないはずのガキどもが！あの餓鬼どもがいるんだ訳分からねえぞオイ！
――なんでアイツらがここにいる!?まて待て待て！言いたいことがあり過ぎて追いつけない！」
それらが警察やヒーロー達の手で速やかに対処されて行く。
折角放った脳無が、見事にやられた。
四体の脳無を無駄にした。
なんてたって四体のうちの一体の脳無は特別なヤツだ、それを焔紅蓮隊が倒してしまったのだ。
一人も殺せず、任務を遂行できず、失敗したのだ。
「なんでだ……なんで……」
「――死柄木弔」
ズズズ…といつの間にかワープゲートを広げる黒霧。
どうやら今来たらしい、というか今までいなかったそうだ。
いや、そんな事はどうでも良い…今は他のことに気にする余裕もなく、考える余裕もない。
「オイ黒霧！どうなってやがる！何で俺の思い通りにならない!?
というか漆月はどうした!?なんで焔があそこにいた?!」
「し、死柄木弔…それが――」
黒霧の表情は、少し意外なものだった。
あの冷静で神経質な黒霧の声は低く、何か恐ろしいものでも見てるかのような…そんな気さえ感じた。

そして、黒霧が口を開き話し出すと、死柄木は数秒間を置き、手に持ってた双眼鏡を五指で触れ、音を立てず形は崩壊する。

「なんで――？どうして――？

――どうして俺の思い通りにならない？」

「……」

死柄木の言葉に、黒霧は何も答えなかった。

仕方なかったも、分が悪かったとも言わない…

――無言。

ただ何も言わず死柄木を見守っていた。

ここで何か言っても彼には言葉は通じない、傷つけてしまうだけだ。

また、「煩え殺すぞ」と今度こそ自分を殺しに掛かりに来るだろう…

死柄木弔のいつもの悪い癖だ、こうなってしまった以上、大人しくなるまで見守るしか他ならない。

後ろからヘリの音が聞こえるが、そんなのさえ気に掛からない…

苛立ちのあまりか、数十秒間無言だった死柄木はようやく口を開く。

「……帰ろっか」

「――そうですか…

死柄木弔、満足の行く結果は得られましか？」

「バァカ、そりゃお前…明日次第だろ――」

死柄木はその場に吐き捨てるように言った。

どんなに現状を喚こうが、嘆こうが、結果によってそれは変わる。

今のことよりも結果が全てだ…

ここでうじうじしても仕方ない…なら、帰ろう。

これ以上此処にいても仕方ないし、得られるものは何もない…

また焔みたいに忍やヒーロー、又は警察官に見られ相手にするのは

御免だ。
ならさっさとズラかろうと、こちらも黒いワープゲートに包み込まれ消えて行く――
そして緑谷たちや傷を負ったヒーローは、学生は、医療班の手により運ばれていった。
忍も同じく、雪泉も飛鳥も忍専用病院に運ばれ、入院をすることに…
保須市で起きたこの事件は、大きなものとなる。
その大きな事件を後にしたヒーローは、忍は、ヴィランは、保須市を去った――

８３話「暗雲の正体」

ステインが路上で発見され、手練れのヒーロー達が駆けつけ逮捕された時間と同じく、焔と漆月は――

「――はぁ……ハァ……終わり…だな――」

「――ッ！そんな……ぅッ!?」

薄暗い廃工場、数十分間に渡る短い時間の中、激しい奮闘が続いていた。

そこらの床には、血や唾液…胃液に近いものがべちゃりと所々付いている。

二人は見るに耐えない傷を負い、二人はどちらも限界に達していたが、実力は焔が上だったか、或いは運が良かったのか、漆月は大の字に倒され、焔は漆月の体の上に乗り片方の三爪を漆月に向ける。

もう片方は床に散らばっている。

二人の荒々しい呼吸が、息遣いが、静まる空間に響きよく聞こえる。

血は見ればこれは二人のものだって見れば分かるだろう…

しかしこの胃液は何だろ？と疑問を浮かぶ人間は少なくはない…

この胃液は焔が吐いたものだ。

焔自身も迂闊だった、漆月の闇が予想外にも危険だとは…

闇に感染されるように、纏わりついたこの闇は、体に入り込むように黒く蝕み、その瞬間、耐えない激痛が、ダメージが、焔を襲ったのだ。

その闇の正体が一体何なのか、この忍法は、術は何なのか、当然知るはずも、分かるはずもなく、焔はその激痛のあまり症状を引き起こ

す。
めまい、頭痛、全身に走る激痛、吐き気、汗、首元や喉は氷のように冷たく、体は熱湯でも浴びてるのかという位にエラく熱い…
これが、漆月の忍術…
だが焔はそんな症状を抱えたまま、刃を振るい続けたのだ。
どんなに苦しくとも、辛くとも、心が折れそうになっても、相手を全力で倒す。
そう決めた焔は、紅蓮の炎で漆月の闇を振り払う。
その時の漆月は軽い衝撃を受けた。
闇に侵されまだ動けるという焔のタフネス。
その頑丈さ、今までの忍なら虫の息だったのに、焔は怯むことなく戦い続けるのだ…
こんな忍は、初めて…

そして今の現状に至った訳であり、焔も漆月も、どちらが勝っても可笑しくは無い激戦だった。
しかも激戦のあまり、廃工場そのものが軽い地震を起こした位なのだから。
漆月は紅蓮の焔の、覚醒を解く程の攻撃は叩き込んだものの、解除されても焔は延々と六爪を振るいつつ、最後まで諦めず戦い続けたのだ。
「漆月、お前は勿体無いな…実に勿体無い……お前のその力を、どうして人の為に使わない？どうして忍としてその力を使わなかった？」
「――ハァ？何…言ってんの……？それは、私が、忍が嫌いだから……それを知ってのセリフ？」
「では聞こう、どうしてお前は忍を嫌悪する？何が気に食わない？」
焔は、正々堂々と、真正面で彼女の目を見つめ、質問する。
忍の何が気に入らないのか、何が嫌いなのか、どうしてそうなったのか、何でお前はそうまでして否定するのか、焔には理解できなかったから。
本当にコイツを、漆月という抜忍を止めるなら、せめてその理由だ

けは聞きたかった…
そうすれば、自分は何か分かるかもしれないし、対処出来るかもしれない。
自分も何か学べるかもしれない、それを聞いて、何か言葉を投げかけることが出来るかもしれない…
そう思えたからだ。

「――全部」

漆月の放たれた言葉は、氷の機械にように酷く冷たく、冷酷なものだった。
鋭い言葉が、焔の胸の何処かに突き刺さる。

「善忍も憎い、悪忍も憎い、否定した人達の事も憎い、そこら中に何気なく何時ものように、生きてる人間でさえ殺したい――
――忍の全てが憎い、何もかも壊したいくらいに」
彼女はハッキリと分かるように、焔にそう言った。

「それだけでか?」

挑発ではない、本音であり問いである。
何故、漆月は忍を憎むのだ?

「ねえ、貴女には分からないでしょ?忍っていう理由だけで、その人の人生が全て変わってしまう苦しさを……
忍の所為で、その人の存在が苦しむ事も――」
「!?」
「分からないよね?そりゃそうだよね?アンタみたいな温室育ちが、普通に生きることさえ出来る貴女に、悪忍の貴女には、理解できないよね?

忍の存在が人を狂わせる事なんて知らない癖に――」
漆月の顔は、もう焔の六爪が身体に突き刺さってる事など気にもせず、気迫のある目で、信念のある眼差しを向けて、語り出す。
「忍って確かに善悪問わずに、世の中支えて、世の中人の為に動くけどさ……
でもね、光と影が、善と悪が存在するように、忍の所為で救われる人間がいれば、救われなかった人間…それこそ、狂わされた人間がいるんだよ…

例えば、私とか――」
「漆――月―?」
焔の表情はいつの間にか、冷や汗が絶え間なく垂れ流れている。
漆月の放たれる言葉に、重みだけでなく殺意も孕んでいた。
悪寒、
畏怖、
嫌悪、
様々な感情が焔を蝕んでいく。
コイツの過去は、多分私や仲間たちが歩んできた過去とは…桁が違うかもしれない…
過去や苦しみに、差量は付けないが、焔は知ってしまった。
そこに、認めざるを得ないものがあることも…

忍の存在が人を狂わせる――

その事実に、考えもしなかった自分は、首を横に振らず、縦にも振らず、ただただ無言で見つめることしか出来なかった。
でもそうだ…言われてみればそうだ、私もそうだったから。
元の自分は正しき善忍の家系だった…

でも、小路という悪忍に、自分の人生は狂わされた。
それだけじゃない、自分を受け入れなかった家族、忍の一族も、自分を見捨てた――
散々な目にあった…忍の存在が、自分を狂わせた。
そんな経験をする者は、自分の知ってる中では一人、ただ自分だけだった…なら、お前もそうなのか？お前も……経験したことがあるのか――？

――忍に、皆んなに見捨てられ、受け入れられず、否定され、生きてきたのか――？

自分は悪忍に拾われた身…だからこそ命に代えても恩を返す義務があったし、蛇女には感謝している。
あの時拾われてなかったら、多分自分は本当の意味で死んでいたから。
正直、一人で生きていくのは辛いことだ。
寂しくもあり、虚しくもあり、孤独感が心を縛りつけるその痛みは、見捨てられ生きてきた自分が一番よく知っている。

だからこそ、漆月が歩んできた人生がどれ程辛く、辛み恨みで生きて来たことが分かる。
何故そうなったのか分からないし、理由も定かではないので何とも言えないが、それでも、共感できるものは確かに存在する。

――漆月は、悪にすら受け入れてくれなかった――

「ねえ…さっきから……忍、忍って……逆に聞くけど、忍のどこが良いの？
よく耳にするけどさ、忍の道に反する？抜忍は処罰？心の刃は忍の極意？想いの強さは力の強さ？
図々しいんだけど――そんなの私には要らない…貴女たちのよう

な忍なんて大っ嫌いだ、お前も、飛鳥も、アイツらも…全部ぜんぶ…

――私はさ!!忍なんて消えちゃえば良いって、ずっとずっと思ってたよ!?

だから!忍の社会を、死柄木と一緒に滅茶苦茶に壊したいなぁって、今でもずっと思ってるよ!!!」

「――ッ」

焔の息が詰まる。

押し潰されそうな威圧感と鋭利な棘のある言葉…

残酷で残虐で、寒気を感じる破壊衝動に塗れた笑顔、

感じたこともない憎悪、

確かに表情は笑っているが、漆月の目には確かに、涙が流れていた。

焔は今呼吸をしてるのかでさえ疑わしく思えてしまう。

そこまでして彼女が忍を憎む理由も、検討もつかない…彼女の過去に一体にがあった?

自分も忍の存在に狂わされたことはある、悪の心も分かる…

詠、日影、未来、春花も辛い過去があり、受け入れてくれなかったからこそ、蛇女に入った。

そもそも蛇女にいる皆んなは、何かしらの理由があるのだ、焔はそれに対して責めることも、疑問に思うことも何もない…

悪でしか救えない人間だっているのだ…

だが、どうしたら漆月みたいな人間が出てくるのだ?

焔はここで、漆月を通し身を以て知った…

悪だけでは救えない人間もいる。

忍の全てが、必ずしも世に良い影響を与えてる訳ではない。

自分は、全てが正しいつもりでいたんだと、そう思ってしまった。

しかし恐れるなかれ焔。

――本当の恐怖はここからだ…

それもほんのひと時…それこそ瞬きの一瞬でしかないと思わせてしまう…それくらい、ほんの少しの短い時間が、恐怖が襲いかかる。

漆月の闇が溢れ出る。
その闇は焔に当たるも、蝕むことなく、漆月の周りをふよふよと不確定な動きで漂う。
その異変に気付いた焔は、その闇の周りを見渡す。
普通、この闇に触れれば激痛が襲いかかってくるのだが…しかし、異変は焔に起きたのではない…

「アッ――!ガッ――!!ハァ…!!アァァァァ――!」

「――ッ!漆月!?」

漆月は歪んだ表情を浮かべ、青筋を浮かばせ、血管がドクンドクンと大きく脈打ち、心臓の音に近い心拍音が聞こえる。
そして黒紫色の紋章に似た不確定な模様の線は、漆月の全身に巡り、蝕んでいく。
ミシミシと音を立てるその音は実に不愉快で、聞いてるこっちが気味が悪くなり嫌な気分に陥る。
そして、長かった水色の髪は、漆黒の色に染まる。
――知らないだろう…保須市にいる全ての皆んなは…
漆月が解放?や覚醒?に似た何かしらの力による影響で、保須市の空は、『闇の暗雲』に染まることなど…
暴走か、或いは覚醒か…たったそれだけで、天候を変えてしまう漆月の未知なる秘伝忍法による術。
焔も漆月も、保須市にいる外の人間も、当然それが漆月による影響だなんてことはいざ知らず、天は全てを蝕んでいく。
これが何の意味を表すのか…知る由もない……

「漆月……お前?」
焔は、頬に血を流している。
焔は動かない、いや、動けない…

動けば、殺されてしまうから…

焔の目に映る光景は、信じられない物であり、今起きてるこの状況が本当かどうかさえ疑ってしまう。

漆月の目は黒い水晶玉のような、光が灯ってない光のない闇に近い虚の目。

意識があるのかさえ問いたくなるその目は、見てるだけで嫌な気分にさせてしまう。

そして一番驚愕する部分は、『右手』だった――

――右手はドス黒い異形な手に変わり、怪物や悪魔、竜を連想させる禍々しい手が焔の頬を霞んでいる。

闇で作ったものなのか、常闇の個性『黒影（ダークシャドウ）』とは全く異なる能力だ。

何が起きたのか、何でそうなったのか、何がどうなってるのか、焔の頭の中はパニックを起こし、混乱のあまり考える余裕もなく、ただ呆然とソレを見つめることしか出来なかった。

漆月の表情は、苦しみ歪んではいるが、その虚の目がどうにも…無感情に見える。

その手の次は、顔らしきものが出てくる。

その顔は、漆月の顔が変わった訳ではなく、漆月の背後にゆらりと現れるかのように、その異形な顔をした化け物は焔を睨みつける。

その化け物がどのような顔をしているのか、これが、この存在が何なのか知るわけがないが、何となく竜に似た形をした異形な顔が、此方へ近づいてくる。

長年戦場で生き抜いてきた焔だからこそ分かる。

――コイツはヤバイ…多分自分や紅蓮隊の皆んなが戦っても勝てない…

いや、それどころか半蔵の飛鳥達と協力しても、きっと敵わないだろう…

――私はここで死ぬのか？

死の恐怖よりも、この異形な化け物の方が余程恐ろしい――

この異形な化け物は、竜のような形をした顔は、口をグパァと開く。

口の中には何もなく、ただ闇が広がっていた。

まるで夜空や宇宙のように、それこそブラックホールのように…その闇には一切の光がない――

その瞬間、焔の脳裏に僅かな恐怖が映し出される。

その異形な化け物が、焔の顔面を喰らい尽くし、果実のように溢れ噴き出す血の噴水。

右手は焔の身体を掴んでグシャリと握り潰すかのように肉片を飛び散らせ、身体の内部が破裂したかのように原型が保てなくなっている。

自分の死の光景――

「――ッッアァッ!?」

ようやく身体を動かすことが出来た焔は、やっとその恐怖の縛りに脱出出来たのか、滝のように流れる汗を垂らしながら、瞬時に退がる。

思わず尻もちをついてしまい、手を地につける。

呼吸は先ほどよりも荒く、心拍数が上がっている。

心臓の鼓動さえ聞こえてしまう。

手は小刻みに震えている。

自分は今何が起きたのか、脳裏に浮かんだ光景が何なのか、それさえ分からず、自分の身に何が起きたのかさえ、分からずに慄然としている。

恐怖なんて言葉では表せない…今の気持ちを何て言えば良い？

ただ、これだけハッキリと分かる。あの時、もし…もしあのままだったら…

――完全に殺されていた。

予知…に近い何か…死のイメージが影響を与えたのか？
あるいは、生物的本能がそう告げたのか？
何がともあれ、あのままだったら無事では済まなかった…
自分がここまで怖気付くなど、妖魔の怨楼血の時や伊佐奈以来だ…

妖魔やソレすらも超える、不気味な存在――

そんなものが存在するのか？
妖魔よりも恐ろしいものなど、忍の世界ではありえない…
あのオールマイトや半蔵もを凌いでしまうではないかと、そう言った疑問を抱いても不思議ではない。

漆月はムクリとゆっくり起き上がる。
焔を見逃さず、ただしっと見つめている。
此方の様子を伺っている。
まるで、野生の獣が獲物の様子を観察するかのように、肉食獣が獲物を捕食する機会を伺うように、ジッと見つめている。
焔も正直驚いている。
自分がここまで驚愕してることに、自分の弱さを突きつけられる。
あの時、伊佐奈の時に見せたあの生伝忍法さえあれば、きっと太刀打ち出来るかもしれない…たが、あの時以来使うことも、扱うことも出来なくなってしまった。
それはきっと、借り物の力だったからかもしれない…
漆月の異形な手が、焔に矛先を見せたその途端…

「漆月――お迎えにあがりました――」
「!?」
突然、漆月の背後から聞こえた紳士的な声に、その声の主に視線を向ける。
その時か、漆月の闇は次第に消え、瞳に光がこもる。
どうやら意識が元に戻ったらしい。
漆月が振り向くと、そこにはワープゲートの黒霧が立っていた。
漆月の不思議そうな目で見つめていることに、黒霧も首を傾げる。
「――黒…霧?」
漆月はどうやら意識を失っていたらしい。いや…記憶が薄っすらと残っている。
確かあの時…殺意が爆発して…アレを呼んじゃって……そこから焔を殺そうとした…その事だけは覚えている。
でもそれは、自分の意思ではなく、何者かの意思によるもの…
しかし、今来たばかりの黒霧には、ここで一体何があったのかもいざ知らず。
黒霧は不思議そうに見つめてる彼女に「帰りましょう…」と口を開く。
「あ、待って黒霧!私まだ焔を殺してない――!」
「我々の目的はあくまで死柄木弔、彼の目的を成し遂げること…しかしそれももう失敗に終わった――」
「――どういうこと?」

「……ヒーロー殺しがやられた――」

「ッ!――ハァ!?」
「ヒーロー殺し…だと?」
ヒーロー殺しがやられた。

その事実に漆月だけでなく、焔も動揺する。
焔もヒーロー殺しのことは知っている。
何せ上忍以上の悪忍をたった一人で相手にし再起不能にした程の実力者…
蛇女にいた頃の自分達も、その事件について調査していたし、鈴音先生からも捕縛、或いは処分対処としての命令を下された事もあった。
漆月と関わりが高いと、上層部からも言われてる程の実力者…
当時ヒーロー殺しについては興味を注がれていた。
ヒーローだけでなく、忍を殺せる実力者…もし鉢合せをすれば殺し合いは確定、考えただけでもゾクッとした位だ。
何よりソイツの記事を読んでた時など、何故かヤツの活躍が嬉しくて仕方なかった…
どの強者を殺し、次はどんな奴を殺すのか…
当時は悪忍が殺されようと、仲間が死のうと特に気にはしなかった。
それ程の実力を持つ敵など、早々無いだろう…そもそもどうやって忍の存在を知ったのか、それさえ気に掛かるものだった。
しかし、今なら分かる…
ヒーロー殺しが如何に凶悪で、忍の存在としてどれ程驚異的なものなのか――
そんなヒーロー殺しの名前が、黒霧の口から出て来た、恐らくコイツらは…ヒーロー殺しと関わりがある…
思考を巡らすと、漆月が忍の存在を犯罪者に言い渡してたのは、ヒーロー殺しステインと見なして間違いない。
黒霧が此方にやって来たのは、ヒーロー殺しがやられたから、此方も帰りましょうという形で、漆月を迎えに来たのだろう。
漆月の様子は衝撃を受けた顔の反面、信じられないという類に近い顔だった。
あのヒーロー殺しが？一体誰に？

「何より漆月、貴女は見る限り傷だらけです…直ちにドクターに手当を――」
「――分かった」
漆月は静かにこくりと頷くと、焔に振り向く事なく、黒いワープゲートに入り込み、消えていった。
焔が「待て！」と声を掛けても、その言葉は虚しく消え、漆月は戻ってこなかった。
「そういえば焔――蛇女の一件ではどうも漆月がお世話になりました。
まさか雄英生達が居たのはとんだ誤算でしたが、それでも充分、良い成果を得ることが出来ました。その事に関しては礼を言います」
「……何が言いたい？」
黒霧の言葉に焔は怪訝そうな視線を浴びせる。
こう言った冷静なヤツは何を考えてるか分かったものではない。
こういう敵こそ凶暴性を備えてるもの…いつ何処からか攻撃を仕掛けてくるか分からないし、油断させて隙を狙うなんてヤツは死ぬほど見て来た。
「いえ、別に…特に何も――ただ、一応お礼を言っておかねばと思いまして――。
本当に感謝してるのですよ？なんたって、そのお陰で我々は有意義に計画を進める事が出来るのですから――」
「言ってる事が分からん…お前らの利益になるような事があったか？」
「知って貰わなくて結構、私はあくまで感謝の言葉を述べただけ…そこに表も裏も関係ありませんよ……
それに、貴女では…漆月を止めることは出来ません……彼女は、貴女達のような忍とは、もう生きてる世界が違うのだから」
黒霧は目つきをニヤリとする。
顔の表情がどうなっているのか、分かったものではないが、それで

も目だけはハッキリと見えるので、きっとこれは笑ってるに違いないと直ぐに見解できる。
ただ、そんな嫌な顔立ちをしている黒霧とな裏腹に、引っかかる部分がある。

――生きてる世界が違う。

つまり、自分たちと漆月は相容れない人間であり、分かち合えない人間関係だ。
そう言ってるのだろう――
確かに、善と悪そのものが相入れるはずがなく、ヒーローと敵が分かち合えるなど、あるわけが無いだろう…
当たり前だ、犯罪者と警察やヒーローが、仲良くできると言ってるようなものなのだから…
そう、当然のことなんだ――
当然のことなのに、何故こうも引っかかるのだろうか…
まるで、自分たちは何か肝心な事に気付いていないような…
何か間違ってるような…そんな気がしてならない。

「では、これで失礼します――」

黒霧は丁寧なお辞儀で一礼すると、自身がワープゲートとなり、その場から何も残さずに消えた――

先ほどまでここは奮闘していた。
生きるか死ぬかの、生死を彷徨う闘い…
そんな血に塗れた闘いも、今は何も無い…何も残っていない…
さっきまでの出来事が虚無と化す。
この場所にいるのは、もう焔ただ一人――
ここにいてももう何も手がかりが掴めないし、漆月を逃してしまった…

相手がワープゲートとはいえ、何たる失態…
「くそッ！この私とした事が――！」
漆月の歪んだ殺意に怖気付き、黒霧にまんまと逃げられた…
今日はこれまでに無い厄日だ。
考えただけで後々とイライラする…しかし幾ら腹が立っても、もうその相手は今ここにはいないし、無駄に怒っても意味がない――
「取り敢えずどうする…か。
というか、ここは何処なんだ？どこまで飛ばされた？範囲は決まってるのか…？まさかだとは思うが、仲間たちと大分離れた…なんてことは無いよな？」
焔は苛立ちを抑えつけ、冷静さを取り戻す。
漆月の闘いで頭の中から抜けていたが、まずここが何処なのか知る必要がある。
黒霧と呼ばれる男の個性は、移動系と見なしてワープゲート…つまり、場所移動は何でも有りの個性…
ただ気になるのが実態部分があるか、或いは範囲は限られてるのかが問題だ。
まさかあんな個性があるとは…
超人社会なら、個性は何でも有りだがああ言った個性は滅多に見ない…
成る程、裏の人間として適してると言う訳か…
それなら忍達が敵連合の詮索をしても、手掛かりな情報が掴めないのに納得がいく。
「困ったもんだな…敵も、抜忍も…」
焔は床に散らばってた刀を取り、六爪を竜の翼のように広げると、コンクリートの壁を斬り捨てる。
壁には四角形の穴が空き、外の景色が見える。
暗雲に染まってた空が消えていき、再び夕焼け色の光が差し込み焔を照らす。
「ここは…知ってる。思ったより飛ばされてなかったようだな…

――漆月達を追いたいものだが…アイツらもずっと彼処に居続ける程バカじゃ無いはず…

仲間達が心配だな…合流しに行くか…」

焔は高い廃工場から飛び降り、仲間達の詮索をしに向かう。

漆月も限界だった筈…しかしあの時あの場で、ヤツ自身自覚してないのか、秘められた力があった…その力が何なのか…考えるだけで無駄だ、分からない…

でも、二度と誰にも負けないように、もっと強くならねばならない……

今日は偶々運が良かったかもしれない…しかし、もし次に同じ事が起きれば…？

先ほどのような出来事にはならないだろう…きっと救からない…

「強すぎる力は……こうも人を悩まさせるものなのだな……恐れ入るよ漆月……

だが、次こそは絶対負けん…アイツがどんな思いを背負おうと、私はお前を斬り捨てる…それだけだ――」

次はあんなヘマはしない…

アイツの言葉につい同情してしまう部分があった為、殺すことを一瞬躊躇ってしまった。

それが命取り…忍としての常識を再び叩き込み、自覚する。

もしあの時、アイツの言葉を聞かずに斬り捨てていれば、未来の結末は変わっていたかもしれないのに…

複雑な想いを、拭いきれない不穏な感覚を胸に抱きながら、鼻と勘を頼りにし、仲間達の元へ駆け走る――

――翌日。
保須市総合病院に搬送され、入院した緑谷、轟、飯田はおぼつかない顔を立てていた。
緑谷や轟は、体に包帯を巻いてるだけで済んではいるが、飯田は負傷した腕を固定されている。
この中で一番重傷なのは飯田だ。
何せあの場で一番最初に会敵し、一番傷を負ったのは飯田なのだから、逆に殺されなかっただけでも運が良い、それこそ奇跡だ。
「無茶な事が、連続で起きてるけどさ、昨日のは比にならないほど、凄いことしちゃったよね、僕ら…」
「ああ、そうだな…」
「……」
「と、特に最後のアレ…見せられて、生きてるのが奇跡に思えるよね…本当……」
気不味い空気の中、緑谷は口を開き苦笑しながらも語り出す。
轟は天然なので状況や空気を読めないのか、至極普通に反応する。
対して飯田は無言だ――
ヒーロー殺しの最後のアレを見せられ喋らないのか、或いはこの場の二人や飛鳥たちに傷を負わせたことに罪悪感を持ってるのか、一言も喋らない。
「そ、そうだ皆んな！今日飛鳥さん達退院なんだって！こっちのお見舞いに行くって言ってたよ！」
「いや、昨日入院したばっかなんだろ？今日は流石に無いんじゃないか？」
「ううん、それが忍専門医だから、なんか直ぐに治療出来るらしくって…傷が治り次第直ぐに退院しても良い決まりなんだって飛鳥さん言ってた！僕らも特に傷はそこそこ治って来てるけど…様子見もあるし…忍と違ってこっちはアレだから…」

「なんだその病院…普通に考えて一般病院じゃなくて、その忍専門医の方がよっぽどマシだろ」
「そ、それもそうだけど…飛鳥さん達忍だから、回復力強いんじゃ無いかな？柳生さんの時も入院しても一日で退院してたし（しかも二回）…
聞いた話だと、特に致命的な傷は負ってないから、大丈夫だって――」
「――皆んな！お見舞いに来たよ～！」
「――ッ!?飛鳥さん早ッ！」
なんて長々と説明をしてると、湿布や絆創膏が貼られてる飛鳥や雪泉が入ってくる。
飛鳥の元気な声が病院の室内に響き、緑谷は人差し指を立てて静かにと注意をする。
そんな緑谷を見てか、飛鳥は「あっ、ゴメンなさい～…」と手を合わせて謝る。
そんなやり取りに、隣にいた雪泉は呆れながらも苦笑する。
「お見舞いの品持ってきたよ！皆んなで仲良く食べてね？」
食品だろうか、箱を取り出す。
中には何が入ってるんだろうか？
お見舞いといえば、リンゴとか桃とか、そう言った栄養価の高いフルーツだろう…
しかし、皆んなの予想は飛鳥が箱の蓋を開けると同時に砕け散る。
「はい！太巻き！」
うん…飛鳥さん……流石だね――
その顔は喜ぶ表情でもなく、残念そうな表情でもない、呆れてもない…
無。
そう、ただただ無表情だった――

いや、こんな青春でありがちでこんな滅多にない体つきをした美少女が、お見舞いの品として太巻きだなんて誰が予想つく？
予知能力を持たない限り、こんな予想などあり得ないだろう…
いや、世界でも飛鳥しかいないだろう…流石は太巻き大好き少女だ。
流石すぎて最早芸としか思えない。
「あ、あ、ありがとね…？」
「お前が作ってくれたのか？サンキューな」
「轟くんも、動じない所が流石というか何というか…」
轟は天然だ。
多分、「好きです！付き合って下さい！」と相手に言われても、後ろの人に振り向いて「だとさ」とかいう天然っぷりを発揮しそうだ。
いや、まあ流石にそこまで天然ではないと思うが、轟ならなりかねない…こともある。
「あの皆さん、お怪我は…」
ここで黙ってた雪泉が心配そうに口を開く。
緑谷や轟は特に問題ない…が、ある一人…飯田は別であった。
どのような重傷を負ったのかは言ってはくれないが、無理に詮索することは良くないと想い、敢えて何も言わなかった。
「――そうです…か。
しかし見た所、緑谷さんと轟さんは直ぐに退院出来る…と言った感じですか？」
「ああ、まあな…」
「うん…その事なんだけどさ……」
緑谷は俯く。
視線を包帯で巻かれてる足に変える。
足は斬られたが、特に動けない訳ではなく、ただ少し皮膚を斬られた…
例えで言えば、包丁で軽く指を斬ってしまったといった所だろう。
でも、ヒーロー殺しの実力なら、その気になれば足など簡単に斬り捨て、使い物にならない体にされていたに違いない…

足は動けず、いや…最悪殺されてたかもしれない…
だって、実力のある忍学生二人に、ワンフォーオールを持つ緑谷、そしてクラスで実力の一、二位を争う程の実力者、スピード特化に優れてる飯田…どれもこれもの粒揃い。
そんな五人を相手に、ヒーロー殺しは臆することもなく、立ち向かったのだ。
しかも個性もそこまで強力ではなく、多対一の戦闘では不向きのハズなのに、ステインの方が立場は圧倒的に上だった…
五人全員でやっと倒したのだ。
つまり、もしこれが一対一の勝負であれば、確実に殺られていたケースが充分に高いと言える。
「俺たちは、生かされた……それも、ヒーロー殺しなんて殺人鬼に…考えられねえ事だが……」
「……悪に生かされる……なんという屈辱でしょう……」
轟も同じく腕を見つめる。
腕の傷は、特にナイフによる殺傷が酷かった。
何本もナイフを刺されたのだ、それも外す事なく的確に…
雪泉の表情は氷のように冷たく冷静でいるが、瞳には忿怒を宿していた。
そして、己の未熟な弱さにも――

なんたる恥を掻いたことか…
敵を目の前に、震え怖気ついてしまった。
昔の自分ならあまりの怒りに暴走してたに違いない…
確かに敵を止める…という心はあった。
しかし、ステインの最後のアレを目の前にし、自分は屈してしまった。
悪を憎む心は無いし、悪の所業を許すわけでは無い。
それすら許してしまったら、悪を裁く人間がこの世にいなくなってしまうから…
正義の月は、闇を討つ…そんな正義が、悪に屈されて良いものなの

か……
良いわけがない…だからこそ、屈辱で、悔しくて、惨めで仕方がない……
雪泉の心には余裕が保てなくなり、何処かそう言った元気のない表情を時々見せてしまう。
雪泉にとって、アレ以上の屈辱的な事はないだろう…
「落ち込んでるところ悪いが、見舞いはこれで全員か？」
「あ、え～とね、実はもう一人いるんだけど…」
「――邪魔するぞ小僧ども！」
轟の問いかけに答える飛鳥の言葉は、病室の扉が豪快に開くと共に掻き消される。
見てみれば、そこにはグラントリノ、マニュアル、そしてガッチリと黒いスーツを着こなし、犬面の大人の男性が立っている。
「グラントリノ！と確かあのヒーロー…ノーマルヒーロー・マニュアルじゃ…！
っと、もう一人のこの人は…？」
「小僧…本当はスゲェぐちぐち言ってやりてぇことあるし、文句垂れ流してたい所だし、更に何回かゲロ吐かせてぇが…
珍しい来客だ――」
「待って！最後なんか怖いこと言いませんでしたか!?」
緑谷とグラントリノの会話に構わず、犬面の刑事は前に出る。
飛鳥と雪泉は、自分たちはお邪魔ではないかと思い、二人の思考は一致しコクリと軽く頷き病室を出ようとするが…
「ああそうそう、お前らは此処にいても構わねえよ。
何せ雄英と関わり持ってんだ、いや寧ろ飛鳥たちはここに居ろ」
「あ、そうなんですか…
――って！おじさん何で私のこと知ってるんですか!?」
当然グラントリノが飛鳥のことを知ってることなど知るはずがなく、初対面のオジさんに「おお、飛鳥や」なんて言われてドン引きしてしまうのも無理はない。
見知らぬ人に話しかけられ、名前を知ってるなんてのは軽い恐怖を

覚えるものだ。
「腰掛けたままで構わないんだワン、何、詳しい事情は聞いている。
申し遅れた、私は保須市警察署署長、面構犬嗣だ」
顔が嫌にリアルだ…しかも顔だけ…
警察に犬は付きものか、子供のイメージとは大分違うものの、様子を見た限り、根は優しいだろう。
後、飛鳥や雪泉のように、忍のことについては知っているし、其処に関しては問題無いそうだ。
しかしここで皆んなの心の言葉が一致する。
何故、態々警察署長がここに？
それも保須市と来たものだ…塚内刑事なら忍のことも重々知ってるし、敵連合について調査をしてるので、納得いくのだが…
しかし自ずとその疑問も晴れることになり、大体の予想が付く。
保須市と言えば――
「――ヒーロー殺し……調査故、彼の身元を調べる際に医者に診せて貰ったんだが……
酷いものだ…一言で言えば重傷。
肺には折れた肋骨が突き刺さり、酷い火傷を負っている…更には横腹付近に刃物による傷……
今は治療中だワン――」
肋骨、飯田の蹴り。
火傷、轟の熱による炎。
刃物による傷、飛鳥の秘伝忍法。
轟は兎も角、飛鳥や飯田は俯く。
警察が調べを上げて、態々此方に告知したとなると…
「――超常黎明期。
警察は統率と規格を重要視し個性を武に用いない事とし、代わりとして『英雄』という穴を埋めるべく、ヒーローという役職を作り上げたんだワン。
有名で名高い雄英生達ならもう既にご存知だと思うが、個性には安

易に人を殺める力を持つ人間が必ず存在するんだワン。
良かれ悪かれ、その事実に変わりはないし、その力が公に認められ、糾弾されていないのは先人たちがモラルやルールをしっかりと遵守してきたからだワンね。
さて――此処まで言えばもう分かるかね？」
間違いない…
いや、法に厳しい現代社会なら、そうなる帰結だ。
「個性資格未取得者が、保護管理者の指示なく行動し、危害を加えた。
例え相手がヒーロー殺しだったとしても、これは立派な規則違反に変わりないんだワン
よって、この場にいる少女二名を除き…
エンデヴァー、グラントリノ、マニュアル。プロヒーロー三人含め、個性を無許可で使用した君ら、合計六名には厳正な処罰が下されるワン」
先ほどまで賑やかだった空気は、一気に凍りつく。
気不味い沈黙が、嫌に長い感覚に囚われ、その事実が鈍器で頭を叩きつけられるかのように、嫌に響く。
因みに飛鳥と雪泉は、上層部からの命令、又任務…修行の為当然罪には問われないし、処罰もない。
しかし、彼女たち二人の表情が晴れる事はなかった。
「――ちょっと待ってくださいよ」
ここでベットに腰掛けてた轟が、不機嫌そうな顔で声を上げる。
「飯田が動かなきゃ、あのネイティヴさんって人、もしかしたら殺されてたかも知れないんすよ？
んでもって緑谷が動かなかったら、あの二人は確実に殺られてた…
そりゃ危険な事だってのは分かる…けど、あの場で誰もヒーロー殺しの出現に気がついてなかった…
――規則を守って人を見殺しにしろってか!?
人の命よりも、アンタらは法を重んじるのか?!もしもの事が起きた時点でもう遅いんだぞ!?!」

病室に轟の怒号が響き渡る。
緑谷はそんな彼を落ち着かせるが、意味がない。
轟の言葉に飛鳥も雪泉も立ち上がる。
「私たちの事知ってるなら…多分忍だってこと、分かってると思いますけど…
私は確かにヒーローじゃ無いです、私や雪泉ちゃん…それに仲間たちも…
でも！ヒーローも忍も、何も変わらないって、皆んなと一緒に過ごして分かったんです!!
だから、人を救けるのに、法律も社会も関係ないと私はそう思います!!」
「私も同意見です…
自分の正義や道を、大人が勝手に決めつけるのはどうかと…
確かに許可無く個性を使ったことに対し、叱られる事も無理ないです…
でも、守るべきものが目の前にあって、それを見捨てて自分が救かるだなんて…本当にそれは正義と呼べるのでしょうか？」
バカ真面目で正直な飛鳥。
本当の正義を志す雪泉。
幾ら忍とは言え、こんなこと言ってしまうのは良くないと思う…
それは自分たちが一番よく知っている。
でも、言わずにはいられない。
「人救けるのがヒーローの仕事だろ!!
――人救けして何が悪いんだ!!」
轟のあからさまな正論。
緑谷はふと脳裏にオールマイトの言葉が浮かび上がる。
それは、合格通知の時だった。

『綺麗事？上等さ！
ヒーローが人救けして何が悪いってんだ！そんな人救けを受け入れずに何がヒーローだ！

来いよ、緑谷少年――』

今思い返せば、身に染みるその言葉が緑谷の背中を押してくれた。
そうだ、社会や法律なんて今は関係ない…
そりゃヒーロー殺しのように、社会や法なんて関係ないって力を振る舞う人と同じ土俵に立つことになる…
でも、そんなの関係ない。

「僕も…個性使ってて、グラントリノさんに待てって言われてて、なんですが…
こんな生意気なこと言うのも…なんですが…
僕からも…お願いします…」
――どうか処罰は…という願いと想いを込めて…
勝手かも知れない、これがヒーローらしいと言えば嘘になるかも知れない…
でも、頭を下げられずにはいられなかった。

「――いいや、ダメだ。法律上、処罰は免れないんだワン」

しかし、そんな少年少女の願いを、魂を、言葉を、想いを、全て一蹴するかのようなセリフ。
轟は表情を歪ませ、怒りを露わにする。
「この犬――!!」
「――待て轟！落ち着け！」
轟が後一歩出れば、手を出してしまいそうな勢いに、グラントリノが制す。
「これだから若いもんは…話は最後まで聞くもんだ…」
最後まで――？

「――っと、普通なら処罰が下されるハズなんだワン…
これは先に述べた警察としての意見。

更に言えば世間にこれを公表してしまった場合の話…
公表すれば、君らは世論は君らを褒め称えるが、我々警察は規則違反として取り締まり、処罰を与えなければならない。
――が、しかし。汚い話になってしまうが、もしこれな公表しなければ、ステインの傷、火傷の跡から察してエンデヴァーを功労者として擁立させる事が可能なんだワン。
幸い目撃情報は限られ、少ない。居たのは精々エンデヴァーの相棒…
つまり、今回の違法はここで握りつぶす事が出来るんだワン」
違法を握りつぶす…ということは…
このことを世間に公表しなければ、学生たちは処罰までは下されないという話だ。
しかし、その後警察は調査及び、注意をすることになるが、この際仕方ない。
「どうする!?公表して君らは世に褒め称えられるか、君らの公表を伏せ、処罰が下されないで済むか！」
当然答えは皆んな決まってた。
いや、そもそもメディアだのなんだのと、目立ちたいとかそういうのは彼らには無い。
そんなもの要らない。
「違法を握りつぶす…確かに汚い話となりますが……それで皆さんが無事で居られるのなら…例え世間が偽りの正義と言われようと、私は人を救うことに繋がるのなら、それで良いと思います」
雪泉の言葉に、飛鳥は頬を緩ませ「ほっ」と一息つく。
「まあその分、監督の監視不行届で俺たちはどの道処罰下されちまうが…
まあ、前途ある未来の子達の為だし、俺も飯田くんのことちゃんと観てなかったことになるからな…
お互い反省だ…！」
マニュアルは飯田の頭に手刀を入れる。
飯田も思わず涙を出そうになるが、堪えている。

ここで飯田がようやか一言…「すみませんでした…！」と謝罪する。
「よし！もう分かったな？今後からちゃんと気を付けろよ！
立場とか、ちゃんと自覚もってさ」
「……はい!!」
そんなこんなで、公表しないことを告げる。
それを聞いた面構は頭を下げる。
「――我々大人のズルのせいで、本来君等が受けていたであろう賞賛の声は、誰にも知れ渡る事なく消えて無くなってしまうが…せめて共に平和を守る人間として、これだけは言わせて欲しい……
心の底から、有難う――!!」
深々と頭を下げる。
よってヒーロー学生たち三名の、緑谷、轟、飯田は警察から注意こそ受けたが、罪には問われず、よって処罰は下されなかったとのこと…
また一方で、グラントリノ、エンデヴァー、マニュアルの三名は処罰こそ受けたが、減給及びヒーロー資格に関わる事だけなので、他の二人はともかく、グラントリノは特に問題ない。
「…そういう事なら、もっと早く言って下さいよ……」
轟は不貞腐れながらも、先ほどの怒りに罪悪感を覚え、軽く頭を下げる。
その後、お互いなんやかんやで笑い合った。
無事で良かったという、安息から来るもの…
これにて、ヒーロー殺しステインの事件は、幕を閉じた――
ただその事件は、本当の影の意味で…僕らや飛鳥さんたちに知れ渡る事なく、蝕んでいた。

８４話「感染」

保須市の事件から一夜が明け、瞬く間にヒーロー殺しの件で街中が噂になっていた。
ステインが逮捕された事に関して、市民が安堵の息をつく反面、何処か勿体無い…という残念な表情も読み取れた。

ヒーロー殺しの最後――

それが、この社会に影響を及ぼした。
ステインに憧れ、尊敬する市民も、低くはないという事だ…
最後に見せたあの信念は、心をくすぐられ、カッコいいとさえ思えてしまう。
そんな彼に、一部のファンが増えることも…

――ヒーロー殺し逮捕。
ヒーロー数名、高校生も数名、そして駆け付けたエンデヴァーが見事、ヒーロー殺しステインを片付けたとのこと…
この事実は超人社会、ヒーロー社会のみならず、忍社会にも大きく影響を受けた。
全国の忍達の命令は二つ、一つは漆月の処分。
もう一つ、それはヒーロー殺しの捕縛……
忍殺しステインなんて呼ばれてた彼は、忍社会にて刃を振るい、善忍悪忍問わず、殺害してきた身。
その男が、逮捕されたのだ。
善忍も悪忍も、歓喜の声を上げる。
やっと、悪夢が去ってくれた…これで忍の命が救われた…
そう言った安堵の息をつく者も少なくはないはず…
何よりオールマイト以降、単独犯罪者では最多の殺人数、犯罪史上に名を残す敵、ヒーロー殺し・ステイン、犯行の動機など詳しく追っ

て伝えるとのこと――
ステインの逮捕が、ここまで社会を揺らがす事になるなど、当の本人も知る筈が無く――
また、四体の脳無の逮捕については、それ程触れてはいない。
ステインと同じく暴動を尽くしたことから、ステインとの関係性があるのではないかと疑いを持ち、また脳無は以前、雄英高校襲撃事件で逮捕された脳無と外見が一致してることから、敵連合との関係性は高いと言っても良い、それらに関しては警察やヒーローが追ってるとのこと。
また忍もその事件の真相について影で追っている。
脳無に関しては、住所・戸籍不明とのこと…外見的特徴から考え、今後とも逮捕された脳無に関して調査を続けるなどと言った声が挙げられている。

「……ははは、どこもかしこも、脳無は二の次…か――」

テレビニュースの画面、チャンネルを取り直ぐに電源を消す。
そして読んでた新聞を、丸め、粉々に塵にする男、死柄木は笑ってはいるものの、声に喜びはない。
黒霧はバーカウンターで食器だのコップだの洗い、それが終われば酒など整理し、手入れをしている。
漆月は絆創膏や湿布など貼られており、気分転換したいのか、死柄木から借りたゲームをやっている。
横で「うわっ！やられた！」と子供っぽい声を出すがそんな事さえ気にならない。
一方漆月は、死柄木が機嫌が悪い事に気付いたのか、視線を戻してゲームを中断させると、バーのテーブルカウンターに肘を突き、死柄木を見つめる。
「……どお？死柄木、今の感想は――？」
「……気に入らない、最悪だ……俺はこんな糞みたいな結果を求めてたんじゃない――」

死柄木が保須市で高らかに言ってたセリフを思い出す。
『そんな悪党の大先輩も、夜が明ければ世間はアイツの事なんざ忘れてるぜ？』
「食いぶち減らして忘れさせる処か……俺らの方がオマケ扱い…か――」
汚名返上のつもりが、とんだ泥を塗ってしまった。
何時迄も思い通りにならない世の中、死柄木の限界もそろそろか、より癇癪的になってしまっている。
何故、ヒーロー殺しが良くて俺は良くない？
アイツも俺らも、所詮は壊したいが為に動いてきた。
同じ敵なのに、この天と地の差は何だ？
死柄木は、其処が分からなかった。

時は同じく、保須市総合病院――
緑谷は携帯を持ったまま、興奮していた。
この言い方だと唯の変態にしか見えないが、これには訳がある。
昨日の件…緊急連絡の一括送信、そしてヒーロー殺しの件で心配した女子、お茶子は緑谷に連絡を入れ、話していたのだ。
他の皆んなからは反応が無いということは、きっと忙しいのだろう…そもそもクラス全員のメアドを知ってるわけでは無いので、限られてるが…
お茶子は心配してた。
ヒーロー殺しに、飯田の件…殺されてたかもしれないんだよ？とい

う彼女の気遣いと心配…
その気遣いは嬉しいし、忙しい中態々心配してくれるということは、それは彼女の優しさだ。
そう、そこは良い…そこは良いんだが…

「飛鳥さん時もそうだったけど……
携帯だと、声近い、スゲェ……!」

問題は緑谷自身だった――
そもそも女子とはあまり喋らないし（性格上、喋りかけない方なので）、こう言った異性との触れ合いには慣れてないのだ。
そう言ったシャイボーイは世の中いるはずだ…
リア充とかそう言った異性との付き合いがある人間には分からないかもしれないが、これはこれなりで中々緊張するものだ。
と、緑谷はそう思いつつロビーから病室に入る。
病院内での通話は、室内では禁止されてるので仕方ない。
病室に入ると…

「アレ？」
「あら、どうも緑谷さん…」
飛鳥、雪泉、飯田、轟の四人は勿論いるのだが…ここにはいなかった人物が一人、黒髪パッツンと言えばもう分かるだろう…
斑鳩が病室内にいた。
「あれ!?斑鳩さんどうしてここに？いつから…？」
「そんな慌てなくても…私はつい先ほど来たばかりですよ」
「ホラ、お見舞いは実はもう一人いるって、言ってなかったっけ？」
「初耳!!」
これ実は分かりにくかったが、飛鳥は確かに言った。
だがグラントリノ達が入ってきたことにより、扉の音とともに掻き消され、飛鳥の言葉遮られたのだ。
ある意味言ったとは言えるが、伝えられてなかったようだ。
緑谷はロビーで通話してたが、偶々、斑鳩とは会わなかったらしい

……
しかし、斑鳩が何故態々とパトロールを中断してまで見舞いに来たのか、この場の皆は見当もつかない。
しかし、斑鳩には理由があった。
「飯田さん、ヒーロー殺しの件と、貴方のお兄様である天晴さんのことは聞きました――」
「……」
斑鳩の言葉に、飯田は唾を飲み込み、沈黙する。
「…飯田さん、貴方は愚か者です。
本来なら、もしあの場にいたら軽くはたいてました――
私は今それ位、怒っています――」
斑鳩は真面目であり、よく葛城に注意していたが、今回の斑鳩はその比ではない。
本当に、尋常じゃないほど怒っている。
見れば、その瞳は震えていた。
空気が途端に重くなる。
「貴方は知らないかもしれませんが、私もヒーロー殺しの行いは、許せません…何せ、貴方の兄をあんな風にした輩を、誰が赦しますか？
飯田さんは、関係ないと思っているかもしれませんが、それは無いです。
ありえません…絶対に。
私は、貴方の兄に救われた事がありますから――」
飯田の兄は、斑鳩の悩みを聞いてくれた。
初対面で、何も知らないのに、その人が困ってると、悩みの相談に付き合ってくれて、必死に考えてくれた。
そのお陰で家族とは何か、そして兄である村雨と向き合うことが出来たのだから、感謝しても仕切れないもの。
もし自分の兄が天晴であればと思うこともあり、天哉が羨ましく思えた事だってあった。
そんな、そんな天晴こそ自分のヒーローであり、自分の憧れでもあった。

「詳しい事は言えませんが、私は確かに救けられたんです、貴方のお兄様に…
感謝しても仕切れない恩があります…
貴方が敵討ちをする気持ちも分かりますし、ヒーロー殺しが許せない事も知っています。
飯田さんだけじゃ無いんです、私だって、天晴さんの後ろを付いてきてくれた相棒（サイドキック）も、皆んなヒーロー殺しを赦せない。
しかし、貴方が復讐に走ってどうするんですか？
それで天晴さんは本当に喜びますか？違うはずです、貴方も分かってるはず…
貴方の兄はそんなことを望んでいない」
分かってるからこそ叱る。
だからこそ、叱らねばならない。
終わったことでも、言わなければならない。
「もし仮に、貴方が天晴さんと同じ立場だったらどうします？
貴方の兄が、天哉さんの立場だったら、貴方はそれでも行かせますか？」
飯田は首を横に振る。
飯田も分かっている、分かっていた…
自分のやってる事が正しいことでは無いと…復讐でステイン、ヤツの罪を思い知らせようとすることが、間違ってると…
もし、本当に罪を思い知らせるのであれば、違う方法だってあった。
「なら、次はもうこんな無茶やめて下さいね？
貴方だけじゃないんです、心配してるのは…
皆んな、飯田さんのことが大切なんですから…それが消えたら、皆さんや、貴方の事を大切に思う天晴さんも、悲しみます…
貴方は愚か者ですが、恥じる事ではありません…
失敗を踏まえ、人は成長をする……
だから、もう二度とこんな真似はしないで下さい――これは、皆さんの願いであり、私自身の思い…ですから――」
飯田の目から涙が溢れ、頬に伝わっていた。

ここまで自分を大切に想ってくれてる人がいて、斑鳩さんに迷惑をかけ、自分は何て愚かなんだ……
自分を大切にしてくれてる人間が傍にいたのに、それすら気付けず、自分のことしか前を見ていなかった…
斑鳩さんの言う事は全て正論だ。
僕は、何もかも間違っていた。
友に、忍に、ヒーローに、心配を、迷惑をかけてしまった。
情けない…実に情けない…
でも、自分が愚か者でも、次は…もう二度と間違えない。
自分の道を踏み外さない。
二度と、こんな愚行をしない…復讐心に塗れない。

「斑鳩さん…ごめんなさい――
そして、有難う――!!」

これで何度泣かされたことか…
ステイン、お前の言う通り僕は愚か者だ。
ヒーローを名乗る資格はないと言っても、何も言えない…
でも、僕には大切な人がいる。
友が、忍が、兄が、家族が、僕の支えで、導く…
もう次は、こんなことはしない…
二度と復讐心に染まらない…

――飯田の新たな決意。
「まあ、何がともあれ…これで良かったな」
「そうですね、何だかちょっぴり、あの二人が羨ましく思えます――」
ベットで腰掛けてる轟に、椅子に座ってる雪泉は呟く。
あの二人はまるで家族みたいだ。
飯田が弟だとすれば、斑鳩は姉だろうか?なんてこと考えながら、周りの人たちは二人を見つめていた。
「けど、斑鳩さんと天晴さんって何があったんだろ?

それに斑鳩さんもよく此処の病院にいるって分かってたね」
「私が連絡したからね～。
斑鳩さん、私たちのお見舞いに来てくれて、そこから飯田くんたちのこと話してて」
「あっ、成る程！そうだったんだ！」
飛鳥の簡潔な説明に、掌を叩く緑谷。
「それはそうと腹減った…飛鳥が持って来てくれた太巻き、食おうぜ」
「そう言えば丁度お昼だしね……これも半蔵さんが？」
「ううん、私の手作りだよ！お口に合うと良いけどなぁ…」
飛鳥は照れる可愛い素ぶりをしている。
二人は太巻きに手を伸ばすと、なんと言うことだろうか…
デカイ。
太巻き、想ったより少しデカかった。
大きく口を開いても食べれるかどうか、それすら疑わしいほど、デカイのだ。
「……で、デカイね!?」
「太巻きは大きくなきゃ太巻きじゃないもん！」
「そ、それはそうだけど…」
改めて見るとデカイ。
デカイでかい言い過ぎかもしれないが、これまた本当なのだ。
作るの初めてかな？なんて想ってはいるが、何故かそれを言ったらいけないような気がした。
かと言って、このまま食べない訳にもいかなさそうだ…だって天真爛漫な笑顔なのだ、それなのになんか怖いもん…
笑ってるようで笑ってない…みたいな。
「え、えっと…いただき…ます？」
何故疑問形だ。
と、ここに瀬呂が居れば突っ込まれている。
別に太巻き自体は普通だ、何処かのラブコメ漫画やラノベだと、美少女やヒロインが作るの品は大抵、死ぬほど不味いもの、形も黒焦げクッキーだのドロドロのチョコだの、普通ならそうだ。

しかし、この太巻きはそれと比べて良い方で、普通なのだが、何故か命懸けで食べなければいけない気がしてならない……

中には何も入ってなさそうだし、酢の匂いがつんざく。

太巻きを口に入れる。

ギリギリ口に入り、口を開き過ぎて「オェッ！」となりそうな程だが、ここで頬張れば問題ない。

思いっきり噛み締め口の中にいっぱい広がる。

うん、味は悪くないし美味しい。

これが飛鳥さんの手作りか…

っていうか、お母さんを除いて、女子の手作り…食べるの初めてなんじゃ…？

「ッッッ!!うおおぉぉぉあぁぁ！」

緑谷は絶叫する。

あまりにもの美味しさでもなく、不味いからでもなく、女子の手作りを食すのが初めてだから、叫んでいるのだ。

自覚すればするほど、緑谷の心は擽られ、羞恥心に顔を染める。

顔が赤くなり、病室だというのに発狂してしまう。

「ええっ！緑谷くん大丈夫!?」

「緑谷?!」

天然な飛鳥と轟の二人は、何故発狂するのか知るはずがなく、緑谷の絶叫に声をかける。

幾ら嬉しくとも、流石に発狂することは…どんだけ女性に対して不慣れなのだろうか……

「……」
「あれ？雅緋ちゃんがパソコンを弄ってる？珍しいね～♪どうせいじるなら、両奈ちゃんを虐めて欲しいな～♪」
「両奈、全然上手くないから…私の方が完全に上手いから、雌豚がしゃしゃり出るんじゃないわよ！」
「きゃいんきゃい～ん！もっと怒って怒って両備ちゃ～ん♪」
「静かにしてくれないか二人とも…」

一方、蛇女子学園の雅緋達は体や腕、頭に包帯を巻いており、病室のベットの上でパソコンと睨み合いっこしている。
蛇女は伊佐奈の事件があってか、まだ完全に傷が治ってないため退院出来るまで、修行も出来ず、安静にしているのだ。
パソコンは紫の物を借りて、ニューチューブを観ている。
尤も、雅緋はニューチューブだのそう言った動画は見ない為、当然パソコンとも無縁な彼女は操作は分からなかったが、紫の説明でこうして何とか視聴する事が出来る。
しかし、パソコンやネットにすら興味の無い雅緋が、何故急にネット動画を観てるのか…それには理由があった。

ヒーロー殺しの動画。
この動画は世界中に配信され、今もネットの再生と削除のイタチごっこ。
ネット上でも荒れている。
雅緋たちもヒーロー殺しの噂は知っている。
何せ忍を殺害するヴィランだ、市民を殺害するヴィランなど世の中数えきれない。
しかし、忍を殺害するヴィランなど、今までで聞いた事がない。
ヒーロー殺し・ステインの記事を読んで、自分もステインの最後を、しかとこの目で観たかったのだ。
「別名、忍殺しとも謳われた男……コイツの最後の生き様は……我々忍の敵でありながら、信念は認めざるを得ない……何より飛鳥たち

が、アレに立ち向かったとはな……」
雅緋は厳しいが、強者は誰であろうと賞讃する。
それがヒーロー殺しや、忍殺しと呼ばれようと関係ない。
強き者は生きる価値のある人間だと、雅緋はそう思っている。
口先だけの人間は幾らでもいる…でも、アイツは口先だけじゃない、ヤツとは遭遇したことはないが、それだけはハッキリと言える。
雅緋は見る目はある、だからヒーロー殺しの最後が如何にどれ程勇敢であり、信念を持っていた事が、ネット越しでも伝わるのだ。
そこは良いとして…問題は飛鳥たちにある。
今まで忍の甘ちゃんだと思ってきた彼女が、善忍が彼に挑んだと聞く。
しかも雪泉という月閃の、善忍のエリート学校の者とだ。
雪泉に関しては直接会った訳でもないので、どんな人物像なのかは知らないが、飛鳥の仲間となると、根は優しいのだろう。
弱かった飛鳥が、ステインと対峙した…
焔の最強の友達…なるほど、これはどんだ間違いをしていたようだ…
「まあどちらにしろ、ステインが捕まって良かったさ…
残るは、敵連合のみか…」
一番重要なのはこの組織である。
まず目的の一つ、漆月がそこに在籍している。
しかし、ヒーロー殺し・ステインとは敵連合との接触があったと疑われ、また仲間ではないかという疑問も抱いていた。
漆月がヒーロー殺しに忍の存在を教えていたと考えれば、敵連合は、次は何をしやらかすか分かったものではない…
「早急に、対処しなければな」
蛇女を汚した。貶めた。生徒たちを殺した。
それらの罪は償わせて貰う。
但し、感情や私怨に心を支配されるのではなく、自分たちの意思として…悪の誇りとして…
これ以上、もう私怨で動かないことを、皆んなで決めたから――

「ほう、ヒーロー殺しが捕まりましたか――」
その女はテーブルの上に置かれてある紅茶を啜りながら、パソコンに映し出されてるユーチューブの動画、ヒーロー殺しを観ている。
その少女は、優雅であり気高き王者…と呼べば良いだろうか、長い金髪に気品のある口調、端から見ればセレブのお嬢様、と言われても不思議ではない。
湯気を立ててる紅茶を、一口啜るとテーブルの上に置く。
まだ途中だったであろう書類の整理と執筆を後に、今はこの動画を観ることにした。
――何、ほんの少しの休息と思えばこんなもの――
「っと、いけない…私としたことが…ついうたた寝を……」
ほんの少しの休憩と聞くと、つい眠気が…
休憩の時間などそう言った時間はいつも、睡眠をとることにしている。
寝ることが好きなのだが、決して睡眠不足とか言う訳ではない。
ただ、好きなことが睡眠を…寝ることが好きなので好きで取っているのだ。
だから、少しの休憩と思った途端、条件反射で眠気が襲ってくる、困ったものだ…いい意味で。
「紅茶を飲み終えたら…また再開しますよ…」
独り言を呟きながら、動画を見つめている。
しかし嬉しいものだ、同じ悪忍とはいえ…ステインが捕まることは…
忍殺し・ステイン。
その信念は実に素晴らしいものだと思う。
別に犯罪者に肩入れをしてる訳ではないが、信念がない者は淘汰さ

れる…その価値観は自分も同じだから。
　力こそ全てとは言わない…しかし、力無き者に信念も無ければ、それは弱き証拠…
　弱ければ何も守れない…何も救えない…
　だからステインの信念が歪んでいようと、それを否定することも、責めることもしない…寧ろ強き信念は賞賛に値す――
「書類整理は終わりましたか～…？って、何くつろいでるのですか!?」
「ッ！『銀嶺』さん――！入る時はノックくらいして下さい！」
　銀色に縦ロールがドリルのような髪型、螺旋状のような造形物をこよなく愛する少女の名は『銀嶺』、この少女の右腕的存在だ。
「それに、今は休息を取っているので、問題ないでしょう？」
「何を言ってるんですか！そう言いながらこの前１５分の休息を取るつもりが1時間も寝ていたのはどこのお嬢様でしょうか？」
「うっ…戦闘に限らず痛いところを突きますね……」
　この前、明日提出する筈の書類を、寝てしまったためギリギリになって出したことがある。
　もし寝ずにあのままだったら、きっと…
「それはそうと…何を観てるのですか？珍しい…」
「いえ、ヒーロー殺しの件について…」
「ああ、忍殺しの……」
　銀嶺は「成る程…今一番の話題になってますものね」と納得したように呟くと、少女に背を向け部屋を立ち去る。
「それなら良いのですが…時間も程々にして下さいね？
『麗王』様――」

一方、雄英高校の仮眠室。
ソファの上に座り腰掛けてる人物が三人いた。
ガリガリのゾンビ…いや、皮を被った骨人間と思わせる容姿を持つ、トゥルーフォームのオールマイト。
緑谷の研修先として務めてた老人・グラントリノ。
そして、もう一人はとても老けており若々しいとも呼べず、杖を手に持っている老婆が不機嫌な顔を立てている。
「おい俊典、お前あの小僧にワンフォーオールのことと、何故俺と忍の関係を話さなかった？」
「も、申し訳ありませんグラントリノ師匠…正直恥ずかしいことに、私…師匠のことすっかりと忘れておりまして…というか、記憶を封印しておりまして…」
「おい、もう一回ゲロ吐かせたろか？ん？」
「すいません――！」
グラントリノに恐縮するオールマイトは、頭をペコペコと何度も下げながら、「これだけはご勘弁を」と謝罪する。
Ｎｏ．１ヒーローも、こうして見るとサラリーマンに見えるのは気のせいか。
「はぁ～…アンタ等の師弟関係は相変わらず、昔と変わっとらんねぇ…
それは別に良しとして……半蔵から話は聞いたよ？
本当なんだろうねこれは…もしこの話が事実であれば、全国の忍が動かざるを得ないよ――」
「そ、それは勿論分かっております『小百合』さん！
私も、この事実に正直…受け入れません…
だって、あり得ませんよ？私はあの時確かに…」
「真実は真実じゃ……
アンタの過去のことは分かる…酷なのもここに居る皆んな同じじゃ…

しかし、だからこそ情は捨てなければならん…それは忍だけじゃない…アンタも同じさね」
この老婆の名は小百合。
忍の頂点、最高称号カグラを持つ者、とは言ったもののそれは昔の話…
今は元・カグラ。
忍を辞め、『巫神楽三姉妹』と呼ばれる、時空やそれらを超越するような不思議な力を持つと噂されてる、巫女の一族の者と共に居るらしい。
そして、飛鳥の祖母でもある。
当然、飛鳥は小百合が何故、何も言わずに家を出たのかは知らない。
小百合は煙草を一本吸うと、灰皿に吸った煙草を置き、白い息を吐く。
「ああ、俺や小百合がこうして態々ここにやって来たのは尤も他でもねえ…
ヒーロー殺しの件についてだ。
正直驚いたよ、相見えた時間は数分もないが、それでも戦慄させられた――
奴が何故、忍に対抗できたのか理解できたよ…」
「そんな…!グラントリノともあろう者が戦慄させられるとは…
しかし、奴はもうお縄になったのに、何故ヒーロー殺しの件を?」
オールマイトはあの現場にいなかった為、ニュースでしか見たことがなく、その気迫が何なのか、何故ヒーロー殺しの件を態々ここで話すのか、彼には理解できたなかった。
「俺が気圧されたのは恐らく、強い思想…
あるいは強迫観念から来る威圧感…
褒めそやす訳じゃねえ、けどな俊典…
お前が持つ平和の象徴観念と、同質のソレだ――
安い話「カリスマ」っつー奴さ、今後取り調べが進めば、奴の思想主張が、ネット・ニュース・テレビ・雑誌…
あらゆるメディアで垂れ流される…

ヒーローと忍…今の時代で善くもわるくも、抑圧された時代だ、それに関してはヒーローと忍は変わらねえ…
必ず感化される人間は現れる――」
グラントリノの気迫のある視線…
小百合はコホンと咳払いすると、口を開く。
「あたしゃは不思議に思ったんだよ、蛇女子学園の話、聞いてるだろ？敵連合が攻めて来たって…
どうにも可笑しいと思うんだよ…態々ド派手に襲撃をかまし、あろうことか仲間に引き入れるってね…
忍側では、忍の仲間を引き入れる犯罪集団なんて言われてたが、どうにも納得が行かなくてね…」
「え？待って下さい…？何故ヒーロー殺しの件で蛇女の話が？
理由が分かりませんし、関係性は全く無いかと…」
「いいや、それが大アリだ…俺も小百合も早く気付くべきだった…
こりゃ俺たちもやられたさ…まさかその為の襲撃だったなんてな…
雄英高校の襲撃、蛇女子学園の襲撃、そして保須市にてヒーロー殺し…
それらの事件は全て、敵連合に繋がっている――!!」
繋がりが示唆された。
この時点の連合は「雄英を襲って返り討ちにされたチーマーの集まり」から、そういう思想のある集団だったと認知される――
「つまりだ、受け皿は整えられていた！
個々の悪意は小さくとも大きくとも、一つの意思の下集まる事で、何倍にも何十倍にも膨れ上がる……
それも、良からぬ最悪な方へとな――
――ハナからこの流れを想定…いや、そうさせていたとしたら、敵連合の大将はよくやるぜ…気味が悪い程にな…
着実に外堀を埋めて、己の思惑通りに状況を動かそうというやり方…
敵連合は、抜忍・漆月とステインに関わる前から、奴らは忍の存在

を既に知っていた…となれば…忍を知ってる人物はもう一人、ヤツしか考えられねえ…！」
オールマイトの額に冷や汗が流れる。
嘘だ…また、悪夢が襲いかかるのか？
蛇女子学園の襲撃…あれは、そういう事だったのか――!!

「俺の盟友であり、お前の師…先代『ワン・フォー・オール』所有者である志村を殺し、
半蔵の親友――黒影の両親を殺害、更に黒影（アイツ）を再起不能に陥れ、お前の腹に穴を開け、小百合と志村の愛弟子であり、お前のコンビ…『陽花』を殺した男…
古の妖魔『心』を創り上げ社会そのものを破滅の危機に追い込み、忍からは『神威』と呼ばれ、恐れられた悪の象徴――
――『オール・フォー・ワン』が再び動き出し、敵連合の黒幕として生きていると見なしていい――!!」

神威。
忍の最高位と謳われるカグラとは真逆の存在…
カグラとは、最前線で妖魔と戦う忍のことであり、又は忍集団の事。
基本資格は最強の強さのみ、例え善忍だろうが悪忍だろうが、抜忍だろうと構わない。
しかし、神威とはカグラとは違い、災厄として世界を脅かす存在。
妖魔クラスの危険性を備える忍や、またその実力を持つ敵…
つまり、世の中を脅かす忍の敵と言える。
また規格外の強さを持つ妖魔も、神威と呼ばれてたことがあったそうだ…
例えば――オール・フォー・ワンが、忍の存在を滅するために創りあげた古の妖魔『心』とかが代表だ。
「まさか――！あの怪我でよもや生きていたとは…信じたくない事実です……」
薄々と気付いていた…

脳無と呼ばれる改人、抜忍・漆月…ヒーロー殺し・ステイン…
まさか、それらが…繋がっていたとは、信じたくない事実だ。
真実とは時に残酷なものだとよく耳にする。
だが、今回ばかりは本当にそうだ、最早悪夢よりも恐ろしい物……
ヤツが生きてることでさえ、あってはならない事態なのだから――
「あたしゃ巫神楽三姉妹に今起きてる忍社会の情報、ちょいと調べさせて貰うよ……ヒーロー殺しが捕まった今、何が起きるか分かったもんじゃない……
じゃが、きっと何かある…腹くくって覚悟しておいた方がええ…これを気に、飛鳥に真実を話しんしゃい…!」
「小百合の言う通りだ、緑谷にも教えておいた方が良い…
お前のことを健気に憧れているあの子の為にも、話すんだ。
――ワン・フォー・オールの真実と、それらにまつわる全てをな」
「……はい」

オール・フォー・ワン…
まさか、再びこの名前を呼ぶことになるとは…
神威は上層部の忍が恐れて付けた二つ名だ…
師匠は殺され、仲の良いコンビだった陽花くんも殺され、黒影さんを、悪を憎む道に進めた張本人…
そして…小百合さんが忍を辞めたキッカケでもある。
アイツは、全てに於いて悪影響でしかない、赦されることのない存在だ…
忍としても、ヒーローとしても…

再び、戦う時が来たか…
充分に覚悟を決めていたが…
やるしかない…未来ある子達の為にも、そして平和の社会の為にも
――

保須市の事件から二日後、ヒーロー殺しの素性はあらゆる角度から暴かれ始めた。
繁華街にあるスナック・バーの店…
その中には見慣れぬ人物が二名…薄暗いバーの部屋は、死柄木達が使ってる部屋とは少し違う。
黒いセーラー服に、身長は１５０㎝か、低身長であり実は高校生…
携帯にストラップがジャラリとついてある。特に目が付くところはモフモフとした巨大なストラップ。
対してもう一人の人物は、無表情とした氷のような、でもって気味の悪い仮面を着用し、灰色のコートを着こなす人物。
「ふ～ん…蛇女ん処は伊佐奈の所為でぶっ潰れちまった訳だが、お前が妖魔を全部持ち帰ったんだってな？」
「ええ、その通りでございます…魔門がハナから想定してたそうだ…いや、そうです…」
「別にアタシに敬語はいらねーよ、タメで良い…
――まっ、お前ら忍商会には感謝してるぜ…姫も大喜びだ。
妖魔がなくなったって聞きゃあゼッテー手ェ付けられねえかんな、マジで」
「お褒めの言葉、誠に感謝…
とは言ったものの俺たち忍商会は本来、裏サポートアイテムの開発・売買が基準なんだが、オールマイト以降、仲間も全然売れやしねえし嘆いてる奴らばっかでさ、妖魔を売ってやっと買ってくれる状況さ……」
「まあ、最近の忍は戦ってばっかだし、諜報活動が成ってねえんだよ……」
「だよなぁ……ハァ、忍商会なんて名前じゃなくて、いっそのこと張り切って名前変えようかな…妖魔商会とか……

妖魔は売れても、サポートアイテムが売れねえのは心細い…
昔は衝動が国全体に充満してた…もう今の時代は要らねえのかもな、サポートアイテムなんて…」
「んでそこでだ『左門』――
お前らにゃあウチら『戦姫衆』が感謝してる。
忍商会に期待はしてるし、心底評価してるから話すんだ…ホラよ」
少女はニヤリと口角を吊り上げると、片手で素早くいじってると、左門に携帯を見せる。
映し出されてるのは、今最も急上昇ににして大人気の動画、ヒーロー殺しの動画だ。
「お前はもう知ってんだろ？
アタシが独自に調べたんだけどさ…あっ、因みにこの動画はアタシが上げたヤツな。

――ヒーロー殺し・ステイン。本名・『赤黒血染』、年齢３１歳、血液型はＢ型、両親は他界してる。両親に関しては事件とは関係性は無いそうだ。
元は私立のヒーロー科高校に進学するもヒーロー観の根本的腐敗に失望し、一年の夏に中退。
「英雄回帰」を訴える程だ、
元は善良のあるヒーローだったって感じだな――
まっ、ヒーローの価値観に対して不満がる気持ちは超が付くほど共感できるヤツさ」
赤黒血染。
オールマイトのデビューに感銘を受け、ヒーローを志す。
１０代終盤まで「英雄回帰」を訴え街頭演説を行うも「言葉に力はない」と諦念し、以降の１０年間は「義務達成」の為、独学で殺人術を研究し鍛錬を積み重ねて来た。

――氏の主張「英雄回帰」
ヒーローとは見返りを求めてはならない、自己犠牲の果てに得うる

称号でなければならない。
現代ヒーローは英雄を騙るニセモノ。
粛清を繰り返すことで、世間にその事を気付かせる。
「……いや、流石過ぎて驚いてるんだが……しかしまあ、よく調べることができたな『愉姫』」
「別に忍なら常識のことだろ、驚くことじゃねえし大半は慣れてっからさ。
つーかアタシのことは別にどーでも良いんだ…問題は最後のこれだ、今もネット上では荒れてるが、そこじゃねえ…
どちらも気付いてる筈だ…特にこの最後…コイツの生き様は感染していくってな」
「――成る程…そういうことか…
前科無数の極悪人から逃走中の重罪人まで多くの「ネームド」が……
ステインの思想に感染されて行くってことか……
つまり――」
「アタシは別にあそこん所の組織じゃねーもん、姫が其処に協力要請するか否かが問題だかんな。
まっ、そういうことだ。お前らの出番も増えるんじゃねえの？それならそれで良かったけどな」

バラバラだった悪意が今、一つの熱に当てられて――
――彼が所属したという組織、敵のみならず…思想に当てられ感化された忍も、敵連合に向けて動き始めてる――

８５話「明かされる真実」

職場体験も終わり、各々の生徒たちは帰る支度をしてるであろう…
きっとその場で学んだ者もいれば、後悔した者もいる、成長した人間も、出来なかった人間も、きっとＡ組に限らず出ている筈だ。
飛鳥たち忍学生も、強化パトロールは今日で終わりだそうだ。

帰る支度を整え、忘れ物はないか再確認し、準備が終わると後はバスや新幹線を使って帰るだけ…
緑谷は玄関に立つと、グラントリノに一礼する。
「この度一週間は、誠に有難う御座いました！」
「ハッ！別に良いってことよ。調整も完璧！……と言えば嘘になるが…一週間前の頃と比べりゃ上出来だ、そもそも職場体験と呼べるかどうかすら疑わしいが…アレで良かったのかと言っても別にそうでもねえ…」
早朝の為か、グラントリノは大きな欠伸をする。
職場体験の頃と比べれば、確かに大分成長したと言える。
しかし、だからと言って調整が完璧と言えば嘘になる。
ヒーロー殺し相手に許容範囲をオーバーしてしまった。
焦りによるコントロールのズレ、そこに僅かにヒビが入り軽い骨折を起こした。
病院の際に診て貰い、治療を施したものの、リカバリーガールの個性で治癒を受けた訳ではないので、まだ完全に治った訳ではない。
しかも、本気じゃないヒーロー殺し相手と戦い、生かされた。
１００％の一撃必殺を狙って外した…なんて残念な結果になるよりかは充分マシだが、なぜヒーロー殺しが緑谷や飛鳥、轟に雪泉を生かしたのか、その理由は定かではないし、理解は出来ないが、それでも救けられたことに変わりはなかった――
取り敢えず、これからの課題は、常に緊張と冷静を保つこと。
オールマイトのような最高のヒーローになりたいなら、まだまだ学ぶことは多い。

「あっ、そうだグラントリノ！一つ聞きたいことがあるんですけど…」
「あ？何だ？」
「俺は早くたい焼きを食べたいんだ！」という視線を気にすることなく、緑谷はある一つの疑問を思いながら、訪ねる。
「そんなに強くて、オールマイトを鍛えた実績もある凄腕の貴方が、何で世間では噂になってないんですか？
グラントリノ…世間じゃほとんど無名ですし…
もしかして相澤先生…イレイザー・ヘッドのようにメディアを嫌ってるんですか？」
「え？そりゃ、俺ヒーローに興味ねえもん」
「えええぇぇ?!!」
初耳！
ヒーローに興味が無いって…そんな人聞いたの初めてだ…
いや、違う。
もしかしたら、自分は知らないだけかもしれない、
この世界には、ヒーローに憧れてる人間もいれば、憧れを持たない人間、憧れてもヒーローになれない人間、そういう人たちを緑谷は見てなかっただけかもしれない。
誰もがヒーローになれる訳じゃない、緑谷の周りにはヒーローになれそうな人が居たし、実際「かっちゃん」たること、爆豪勝己という幼馴染が近くにいたのだから、その影響か、そうやって考えることが少なかった。
「かつて、目的の為に個性の自由使用が必要だった。
資格を取った理由はそんだけだ、これ以上は俺からよりもオールマイトが話してくれることを期待すんだな、俺からは喋れねえよ」
「ハァ……何やら深いですね……グラントリノでも言えないことがあるんですね…」
まあそれもそうか…
幾ら師匠といえど、言えないことだってある。
オールマイトが頼んだことなのか、又はグラントリノ独断によるものか、詳しいことに関してはオールマイトから聞けば良い。

仮に答えられなかったとしても問題ない、無理に詮索するのも良くないし、オールマイトは嘘こそ付かないが、隠し事が多い。
「じゃ、じゃあオールマイトと半蔵さん…何でオールマイトも、グラントリノも忍と交流が？幾らオールマイトがトップでも、何か事情が――「それも俊の…オールマイトに聞けぇ！俺が教える事は何もない！」――は、はいぃ！すいませんでした！」
グラントリノの一喝に恐縮してしまう。
大きな声で怒鳴られたりすると、つい反射的に萎縮してしまう癖があるのだ。
テントウ虫か。
「まっ、そーゆー訳だ。
――じゃあ達者でな！体、気を付けろよ」
「あっ、はい！本当に有難う御座いました！」
緑谷はもう一度丁寧に頭を下げ一礼すると、グラントリノに背を向け、駅の方面へと歩いていく。
巨大なバックにコスチュームを背負う彼の姿を見て、グラントリノはつい何処か微笑ましくなる。
最高のヒーロー。
容姿も、性格も、まるで似てないが、確かにオールマイトにそっくりだ。
飛鳥もそうだ、会ったのはほんの少し、しかも会話すらした事ないが、彼女もまた半蔵に似ていた。
特にアイツの心から来る正義感は、半蔵のソレと同じだ。
ヒーローと忍は、背中の隣り合わせ。
今社会でのＮｏ．　１と言えば、半蔵とオールマイトだろう。
平和の象徴、伝説の忍、二つの世界には代表が必要だ。
脚光を浴び、注目され、大きな存在が世界には必要だ。
今は良くとも、その内必ず限界がくる。
半蔵は忍を引退した身だが、実力は他の追随を許さない。
オールマイトも平和の象徴、Ｎｏ．　１ヒーローの肩書きを背負ってはいるが、五年前…敵の襲撃、神威たること、オール・フォー・ワ

ンによって腹に穴を開けられたことで、手術で一命は取り留めたものの、力は衰えてしまった。
更に緑谷出久に、個性「ワン・フォー・オール」を譲渡した事により、個性を使う度に日々弱体化していき、残火はやがて消え、無個性として迎えてしまう事になる。
それでも、オールマイト自身後悔はしていない。
大切な愛弟子である緑谷出久を見守る。
そう決めたのだから…
――盟友が選んだ男、そしてその男が選んだ――
「小僧！誰だ君は！」
「えっ!?ちょっ、嘘でしょ此処で!?」
頭の上にクエスチョンマークを浮かべるグラントリノの突然のボケに、又しても驚愕する。
――共に見届けてやろうじゃないか俊典…そして、お前と陽花の交わした約束を、俺も見守ろう……
「えっと、だから…緑谷出…「――違うだろ」？……あっ…！」
お前が過去となる日まで、そして俊典と陽花が、かつてのコンビだったように――

「えっと、僕の名前は『デク』です…!!」

こいつの名前が、平和の象徴と謳われるその日まで……
緑谷と飛鳥が、いつか輝かしいコンビになるように…
飛鳥は陽花に良く似てる…
容姿も髪型も違うんだが…他人に優しい思いや、『誰も知らない強さ』を持つ心の刃、太陽のように全てを包み込む光を持つ正義。
だから、飛鳥は陽花に似てならないんだ――
半蔵や小百合とは面影はある、でもな…アイツを見てると…陽花を思い出しちまうんだよ――

いつか二人が、最高のヒーローと、一流の忍と呼ばれ、脚光を浴び

る日が来れば良いな…

翌日。

長きに渡った一週間の職場体験を終え、生徒たちはこの日、いつも通りの学校生活を迎えることになる。

職場体験が終わったその日は、皆んな自宅に帰り疲労を回復するべく、学校は休みだ。

自宅に帰れば、母親は不安を抱えながら憂患した。

ヒーロー殺しの事件に、短期間とは言え入院。

タダでさえ、息子想いの強い母親が、心配しないわけが無い。

体育祭の傷よりかはマシだが、もしヒーロー殺しの事件で、彼が殺されてもしたら、母の引子はきっと、悲しみの果てに、心が壊れてしまうかもしれない。

ヒーロー殺しの事件については、詳しくは言えなかったが、遭遇しただけと嘘をついた。

気が真面目で、心優しい緑谷が、大切な母親に嘘を付くのは心を痛めるが、安心させるにはそれしか無い。

もしヒーロー殺しと遭遇し、闘ったなんて真実を話せば、学校側に連絡しそうで怖い。

折角、面構署長が頭を下げてくれたのに、それを無駄にしてしまう。

だから母には悪いが、真実は話せない。
でも、骨折に関しては「コントロールの調整が難しくて」と、なんとか納得してもらえた。
そんな事があってか、昨日は中々眠れなかった…
個性の調整、ヒーロー殺し、誰にも心配かけないという懸念。

そんなことがあって翌日が迎えたわけなんだが…
緑谷は教室のドアの前に立つ。
しかし、入ってもいないのに笑い声が廊下にまで響いている。
何の騒ぎだろう？とドアを開けると…

「オイ爆豪！何だよその頭！8：2坊やじゃねえかアッハハはははははは!!!」
「お前事務所に行って一体何があったんだよ！待って、チョー受けんだけど！写メ、写メ!!」
ドッと教室中に切島と瀬呂二人の爆笑の叫びが響く。
対して、七三分けの髪型をした爆豪は怒りを抑えながらも、プルプル震えながら二人を忌々しく睨みつける。
「煩え笑うなボケ共が!!これクセついて洗っても直らねえんだよ…！
おいマジで笑うな、つーか誰だ！写メ撮るっつったヤツ、撮ったらソイツのケータイごと爆破すっぞ!!」
流石のこれには緑谷も思わず笑いがこみ上げて来る。
いや、緑谷や瀬呂、切島だけじゃない。
教室の中にいる他のみんなもそうだ。
尾白や上鳴も笑いを堪えながら腹を抱えてるし、あの冷静でクールで、常闇にも負けを取らない柳生も、今回ばかりは笑いを堪えている。
見ないように見ないようにと気を遣ってはいるものの、ついつい視線を爆豪に向けてしまい、笑いが込み上げてくる。
柳生といつも一緒の雲雀はトイレに行ってる為、もしここに雲雀がいたら必ず喧嘩になっていたに違いない。
「ま、まあ落ち着け爆豪…？あ、案外似合ってる…ぞ……　プッ―

―」
「おい眼帯野郎、ちょいと表でろ、マジで爆殺したる。
今笑ったの知ってんだよクソがあぁ!!」
荒々しい声を出すも、髪型が似合わない為、怒っても全然怖くない。
寧ろ笑いすぎて死にそうになるから別の意味で困る。
爆豪が本気で柳生を表に出そうと、教室の扉に視線を向けると――
「あっ…」
「あぁ――?」
顰めっ面の爆豪と、震えながらニコリとぎこちない笑顔を立てる緑谷、二人とも視線が合う。
そして数秒間を置くと、自分の髪型を緑谷に見られたという屈辱感と、羞恥心、爆豪自身のプライドが傷付けられ、保っていた冷静さが消え失せ、怒りの感情に支配される。
「何見てんだクソがデクテメエエエエエエエエエエエエエ!!!」
「うわあぁぁぁっ!!ご、ごめんなさい見てません!見てません!!8・2坊や!・矯正された髪型なんて決して見てませんん!!」
「結局見てんじゃねえかブッ殺すぞ!!!」
ボンッ!と爆発したかのように髪型が元のギザギザ頭に戻り、一週間前の髪型に元取りになった。
どういう仕組みになってるのか知らないが、怒りパラメータが限界を超えると髪型が元に戻るらしい。理科の実験か何かかよ。
と言うより、本当にベスト・ジーニストの所で一体何があったのだか…
それを見た一同は「ちぇ～、んだよツマンネ～」「折角爆豪の髪型SNSに上げとこうと思ったのに～」「爆発さん太郎に戻んなよ!」「そーだそーだ!」なんて抗議が挙げられている。
「――デクの前にテメエらから先に爆殺されてえか?」
「すいませんでした」
そして本気の殺意の目で睨む爆豪に、恐怖で怯えた一同は、頭を下

げ調子に乗ってたことを反省し、謝罪する。
これ、将来自衛隊の指揮官とかになりそう。
そんな喧騒とした男子とはかけ離れ、女子たちはガールズトークではなく、職場体験の話し合いをしていた。
蛙吹の席の周りには芦戸、耳郎が立っており、三人とも話し合っている。
「へぇ！耳郎デステゴロん所だったんだ!?麗日と同じバリバリの武闘派じゃん！」
「んー、まあね。私ってさ、個性がアレで近接戦っつーか、対人だと戦闘術があんま得意ではないんだよね。
麗日見て、私も頑張らなきゃって思って…まー、他の人たちと違って指名来てた訳じゃないし、フリーで雇ってくれてるけどさ」
「私も同じだよ～…アントヒーロー「フォルミーカ」って所で職場受けた！
内容とか厳しかったけど、励まされた時は嬉しかったな～…」
アントヒーロー『フォルミーカ』
個性は蟻の異形型だ。
虫のようで表情こそは読み取れないが、心の気優しさと力強さが自慢の売り文句。
特に災害救助や、避難訓練とした活動を実施している。
敵との交戦では効果を発揮し、チームでの集団では脅威を発揮する。
正に蟻そのものだ。
「梅雨ちゃんは？」
「隣国の密漁者を捕らえたわ」
「それ凄くない!?!自慢しても良いレベルじゃん！」
蛙吹達がギャーギャー騒いでるのとは裏腹に、近くにお茶子が通り過ぎていく。
お茶子の研修先は、バトルヒーロー『ガンヘッド』、デステゴロと同じくゴリゴリの武闘派ヒーローだ。
本来、お茶子の目指すヒーローの本分は災害救助であり、武闘派と

言った戦闘とは程遠いはず…
だが、お茶子自身が決意したことだ。
体育祭での爆豪戦以来、何処か気に思うことがあったのか、対人戦に於いてやたらと熱心に向き合うようになった。
それはお茶子自身、敗因を無くし弱点を補う為なのか、自身が強くなることで、対処出来ることを増やすためか…
どちらにしろ、お茶子にとって有意義な一週間だったに違いない。
「あらお茶子ちゃん。一週間どうだった……？」
蛙吹が声をかけるも、お茶子のオーラが異様な事に気付き、言葉が途切れる。
「フフフ……とても、有意義だったよ……」
「そう、目覚めたのねお茶子ちゃん…別の意味で」
あの一週間に一体何があった。
緑谷と通話してた時は健全だったろうに、お茶子は空気を吸い、格闘技を披露する。神龍でも出す気かこの女は。
「麗日のヤツ…一週間で変わっちまったな……全然麗日じゃねえや…昇竜拳とか出しそうなんだけど……てか、北〇の拳みたくっつーかなんつーか…画風違ぇ…」
「変わった？違うぜ上鳴、女ってのはな…元々悪魔なんだよ！常に誰にも見せない本性を隠し持ってんのさ…!!」
「お前Ｍｔ．レディの所で何があったんだよ？お前ともあろう煩悩の塊が…おかしいぞ？」
遠くで上鳴と峰田が、お茶子を見て談話している。
上鳴はお茶子の異様な変化っぷりに素直に感心する反面、当然驚きはするが、峰田は精神不安定なのか爪をガジガジと噛んでいる。不愉快、やめろ。

ガララと扉を開ける音が聞こえる。
緑谷は後ろを振り向くと、飯田が「おはよう緑谷くん」と朝の挨拶をして来た。
飯田の様子を見るからに、ステインの事はもう吹っ切れたのか、

ヒーロー殺しのあの事件の前の、いつもの飯田くんに戻っていた。
「お、おはよう飯田くん！」
緑谷も挨拶を交わす。
そしてその後、つい反射的に左手を見てしまう…
――斑鳩さんが去ってから聞いた話なんだけど、医者から診てもらったら、後遺症が残るらしい…
ヒーロー殺しに両腕をボロボロにされたんだけど、特に左のダメージが深刻だったらしく、腕神経叢という箇所をやられたそうだ。
とは言っても、手指の動かし辛さと、多少の痺れくらいな症状が起きるらしく、幸い手術で神経移植すれば治る可能性もあるらしい。
本当なら、斑鳩さんの目の前で言っておくべきだったと思う…でも、あの後の事なんだから、気不味いと言うのも一つの理由に当てはまるし、きっとこれ以上斑鳩さんに心配を掛けたくないからこそ、言わなかったのだろう。
皆んなは飯田くんのことを甘いと、思うかもしれない、そう言う人も少なからずいるかも知れない。
でも、これが飯田くんにとっての優しさで、彼なりの気遣いだ。
――俺が本当のヒーローになれるまで、この左手は残そうと思う――
彼の、飯田くんなりの決意。
そこまで言われたら、何も言えない…
ただ一つ言えることは…あの時もっと強く言葉を掛けていたら、こんな事にはならなかったかも知れない。
飯田くんはもう飲み込んだんだ…僕が謝るのは失礼だ…戒めをこの手に――
「おーい！緑谷くん！いるかなー!?」
扉が開くとともに、天真爛漫な声が教室中によく響く。
この声は知っている、甘くて優しくて、元気１００倍の声…これは、と視線を再び扉に向けると、飛鳥がキョロキョロと探していた。

「ここにいるよ～」と手を振りながら駆けつける緑谷。
彼に気づいた飛鳥は、全速力で走って来たのか、息を荒げながら話し出す。
「え、えっとね…なんか突然で悪いんだけど……オールマイトが、緑谷くん連れて仮眠室に来て…って」
「――えっ？」

二人揃って仮眠室にやって来た緑谷と飛鳥。
緑谷はここへ何度も来たことはあるが、飛鳥は仮眠室に行く機会が無いので初めてだ。
と言っても、緑谷が仮眠室に来るのは大抵オールマイトの呼び出しで、それ以外は特に無い。
「仮眠室…オールマイト先生、様子違ったけど…何だろうね？」
「え？そうなの？」
「うん…なんか少し深刻そうでさ……それに私あんまりオールマイトと交流がないし」
言われてみればそうだ。
飛鳥さんは半蔵の孫なのに、オールマイトと会話してる姿なんてほぼ見ない。
体育祭だの学炎祭だので色々と忙しかったからかもしれない…
緑谷は軽く三回ノックすると、扉越しから「入ってくれ」とオールマイトの声が聞こえる。
声の様子からして確かに深刻そうだ…
元気のないアメリカンなオールマイトが…一体何が起きたんだろ

う？
考えても仕方がないので、ドアノブに手をかけ、開ける。
「ん？」
「は？」

そこには信じられない光景。
逞しく誰もが知ってる平和の象徴、オールマイトの姿ではなく、ガリガリ姿のオールマイト…つまり、トゥルーフォーム――
この姿を見た二人…緑谷は白くカチンコチンに体を硬め、飛鳥は口をポカンと開け、「この人誰？」みたいな表情でジーッとオールマイトの方を見つめている。
「あ、えっと…どちら様…でしょうか？」
飛鳥は恐る恐ると尋ねる。
声はオールマイトとそっくりだった…声真似…としては急過ぎるし、そもそもする必要が無いし…
てかこの人本当に誰だ？
そもそもこんな人いたの？

「――私はオールマイトだ…」
「……あっはは…またまたご冗談を～……ねぇ、緑谷くん？」

飛鳥はぎこちない笑顔を浮かべながら、緑谷に振り向く。
緑谷がオールマイトオタクだということは飛鳥だけでなく、教室中の誰もが知る事実だ。
ここでガチオタの緑谷なら、ここで何か一つや二つは…
「……」
しかし、緑谷出久は大量の汗を垂らし、無言のままジッと下を向いている。
そしてチラリチラリとオールマイトの方に視線を送り、「えっ？言っちゃって良いんですか？」に近い眼差しを向けている。

緑谷のこの反応から察するに、彼自身もオールマイトだという事を知ってるそうだ…

飛鳥は次第に血相を変え、見る見ると表情を青ざめていく。

「う、嘘…ですよね…？」

「私は隠し事は多いが嘘はつかない主義さ…」

「しょ、証拠は…？」

飛鳥が証拠を追求すると、オールマイトは腰掛けてたソファから立ち上がり、正面を向くと、ムキッ！とマッスルフォームに変化する。

突然、ガリガリからマッスルに、それこそ誰もが知ってるオールマイトの姿に、飛鳥は「嘘だろ？」と言わんばかりの表情を立ててていた。

実際オールマイトの事は知らない事だらけだし、些細な事から重要な事までの、秘密の一つや二つがあっても多少は納得出来るが、今回ばかり、この真実は無茶がある。

「えっ…えええええええええええ!?!!?」

仮眠室に、飛鳥の驚愕の叫び声が響く。

オールマイトと緑谷の二人は、慌てて飛鳥の口を閉ざす。

ここで悲鳴をあげれば生徒の誰かが駆けつけこの姿を見られてしまう。

そんな事があってはお終いだ、些細な事が世界中のニュースとして騒がれるのだから。

「と、取り敢えず飛鳥くん落ち着こうかい!?そんなに叫ばれるとおじさん、不審者見たいでカッコ悪いじゃないか！」

「お、オールマイト！オールマイトは…お、おじさんじゃないです！」

「緑谷少年！突っ込むトコそこ!?」

一先ず、飛鳥を落ち着かせる事に成功したオールマイトは、彼女が理解できるよう、ゆっくりと分かりやすく、緑谷とオールマイトの関係を語る。
オールマイトは五年前、ある事件により腹に穴を開けられ、手術を施し一命を取り留めたも、制限時間が存在する事…
オールマイトの個性を、緑谷出久に渡した事を…
そしてこの真実を知ってる者は、緑谷を含め…
校長、リカバリーガール、塚内刑事、グラントリノ、半蔵、小百合…ある一名を除き、飛鳥にこの事を教えた事も。
ゆっくりと、状況が飲み込めるように教えたが、それでも上手く飲み決めれない様子。
「ば、ばっちゃんまで知ってるって…な、何者…？」
小百合の存在を知る者など、上層部を除いて世界には数人か、と言われてる。
その中でオールマイトは飛鳥の祖母を知っていた。
緑谷は何が何だか分からないが、小百合は恐らく相当手練れの忍だと言うことは理解できた。
「それで、話とは…？」
突然前触れもなく飛鳥に真実を教えたこと自体、驚愕しているが…オールマイトにはオールマイトなりの考えがあるんだろうと判断し、飛鳥に真実を話したに違いない。
飛鳥自身も、正直信じてはいないが、幾つか納得する点が存在した。
一つ――ＵＳＪ行きのバスで、蛙吹が言ってたように、オールマイトの個性と似ている。
単純なパワー系かと思っていたが、オールマイトの個性とあらば納得がいく。
しかもまだまだ調整が出来なく、コントロールしている…だから、体育祭であれ程重傷を負ったんだと、より深く理解できた。
二つ――体育祭で轟が「オールマイトと何か関係があるのか？」と口にした言葉。

最初自分も血の繋がりなのか?という僅かな疑問を浮かべていたが、まさか師弟関係だったとは…
「まずは…先に謝らなければ……
ヒーロー殺しの件は聞いたよ…ゴメンな二人とも…私があの場にいなくて…」
「い、いえ!全然そんな…オールマイトが謝る事じゃないですよ!あれは偶々、ステインがいただけで…」
「そ、そうですよ!悪いのはヒーロー殺しで…オールマイトは全然…

本当にオールマイトで良いんですよね?」
「ま、まだ言うかい……」
しかしオールマイトの表情は何処か暗く、曇っていた…
ソレがヒーロー殺しの事件によるものなのか、または別件か…
こんな深刻そうなオールマイトは見たことがない…10年もずっと観てきた緑谷だからこそ分かるもの…
「で、本題に入るんだが…
ワン・フォー・オールについて話そうか。
緑谷少年、君ヒーロー殺しに血を舐められたろ?」
「え?あ、ああ…はい…血を取り入れて体の自由を奪うことが個性発動条件なので…それが何か?」
ワン・フォー・オール。
これがオールマイトが緑谷出久に譲渡し、今彼が持つ個性…
正直緑谷もワン・フォー・オールについて詳しい話は聞いてない。
ただ、これが代々引き継がれて来たという事だけは分かった。
一人が力を培い、譲渡し、また力を培い…
譲渡し、引き継がれ、譲渡する…それが繰り返して来た事で、ワン・フォー・オールという強大な個性が出来たという。
「私が譲渡した時に言った言葉、覚えてるかね?
DNAを取り込めるなら何でもいいと…」
「ッ!!まさか!ヒーロー殺しにワン・フォー・オールが!?」

「いや、それは無いよ。
君ならそれを憂慮してると思ったが、忘れてたようだね…まあ無理ないよ。
ワン・フォー・オールについて詳しく話してないし。
だからこうして真実を話すべく、飛鳥くんを呼んだのさ、ワン・フォー・オールの話を知る必要がある」
「へ？」
――何で私が？
そう疑問に思うのも仕方ない。
ワン・フォー・オールの真実を聞く必要がある…と言うことはつまり、言わなければならない…と言うことだろう…しかし何で自分が？
「飛鳥くん、この事は一切他言しないでくれ…絶対だぞ？
私が君を呼んで、こうして話すのもなんだがね……勝手ですまない。
本当は、前々から話さなければならない事なんだが…私自身、気不味かったという点もあったし、この事はあまり知って欲しくなかったんだけどね……半蔵くんに口酸っぱく言われたから……事情が変わった…」
飛鳥にはよく分からないが、きっとこれは重要な話なんだろうと解釈した。これから先にこの話が関係すると言うのであれば、聞かないわけにはいかない。
他言なんて絶対にしない…ついつい言ってしまう癖はあるが、ここまで深刻に話されては、意識が芽生えて言えない。
「ワン・フォー・オールは、持ち主が渡したいと思った相手にしか譲渡されないんだ…
無理矢理　奪われる事はない…無理矢理　渡す事は出来るがね」
本人の意思がない限り、個性は奪われることは絶対にない。
例えで言えば、強引な女性が男性にチョコをあげるようなものだ。
納得はいかないが…
「ワン・フォー・オールは特別な個性でね、元々は一つの個性なんだ…」

元々は？
ワン・フォー・オールの個性は元は一つの個性ではないのか？
確かにワン・フォー・オールには不思議な力があるし、何処か並みの個性とは違うが…
「オール・フォー・ワン…他者から個性を奪い、己がものとし…
そしてソレを他者に与えることの出来る個性だ……」
オール・フォー・ワン。
皆んなは一人のために…ワン・フォー・オールとは真逆の言葉。
「超常黎明期…社会がまだ変化に対応しきれてない頃の話になる…
その時は、よく忍が栄えてたさ……何せその世代にヒーローは無かったんだから……影で世を支える時代だったんだよ……
突如として人間という規格が崩れた…たったそれだけで、法は意味を失い、文明が歩みを止めた、まさに荒廃…
個性を持つものを人間じゃないと見なし、一時期大混乱に陥った時があった。
その頃からかな、忍はより頻繁的に社会に対応するべく、善忍も悪忍も、個性狩を始めた…
悪忍は、主の為に…善忍は正義の為に、二つの存在はやがて手を取り合い、社会を正すべく、罪のある人間からそうでない個性を持つ人間を処罰して行ったのさ……」
「そんな……」
飛鳥の言葉が小さく、弱々しく声に出る。
確かに社会の混乱を正すべく、忍が動くことは何らおかしくない…
しかし何も処罰なんて…と言いたいところだが、当時は個性を持つ人間を人間ではないと見なし、化け物、亜人、怪物と見なしていた。
個性について何も知らない者から見てみれば、個性を持つ人間は恐怖でしかなかったのだから…
「そんな混乱の時代にあって、いち早く人々をまとめ上げた人物がいた…
君らも聞いたことはあるハズだ…

彼は人々から個性を奪い、圧倒的な力によって勢力を拡げていった…

計画的に人を動かし、己の思うがままに悪行を積んでいった彼は、瞬く間に『悪の支配者』として日本に君臨した――」

「ネットの噂話では聞いたことありますけど…アレってただの創作じゃないんですか？

だって授業でもそんなの聞いたことないですし、教科書にも載ってませんから…」

「わ、私も…です。

霧夜先生の授業は聞いてますけど…こんな話、初めてですし…

じ、じっちゃんはこのこと知ってるんですか？」

二人は首を横に振る。

超常黎明期があり、社会が混乱に陥った話は教科書でも知ってるし、聞いたことはあるが、その時代に悪の支配者がいた事は初耳だ…

緑谷は少しだけネットで触れた事はあるが、ただの噂話…または創作ものだと見なしていた…そもそも調べても詳細は書かれてなかったし、どっちにしろ知らない結果だ。

忍学生は、一般人が知らない知識を身につけてることはある。

同じ学生とはいえ、忍にしか知られない物もあれば、一般人の学生が受ける授業を受けないなんてことは良くある。

しかし、忍学生でも教えられない決まりがある、幾つかは、忍学生を卒業した者にしか教えられないものもある…

――例えば妖魔なんかもそうだ、妖魔の存在は、飛鳥たちも知ってはいるが、怨楼血以外に化け物を見た事がない為、あまりパッとしない…

「ああ、半蔵くんは知ってるさ……ただ君に話さなかったのは……もう関係ない事だと思っていたからだ…

私だってそうさ、まさかアイツが生きていたなんてね……」

アイツ…

オールマイトともあろう者が…震えている。

一体誰のことを指してるのか分からないが、あのオールマイトを恐

縮させる程だ、きっと何かあると見なして間違いない。

「それで、そのオール・フォー・ワンと何が関係あるのですか？」

「さっき言ったように、オール・フォー・ワンは個性を与える事が出来る…と言ったろう？

ヤツは昔、人々の個性を無理やり奪い、そして他者に与えてたのさ…

そうする事により、仲間への信頼・屈服をさせていたのさ…

一方で…与えられた人間は、馴染み深い個性じゃない限り、その副作用か、負荷に耐えきれず人形のように、心が無くなってしまう…つまり、思考能力を持たない廃人と化してしまうのさ…

例えば――君らが遭遇した…脳無のようにね」

「「ッ!?」」

個性を複数持つ改人・脳無。

雄英高校襲撃の脳無、蛇女子学園襲撃の脳無、保須市で暴れた脳無、それらは皆んな意思も心も持たない、廃人と化した人間…

つまり、脳無と名付けられる改人は皆んな、元はただの人間だったのだ。

つまるところ、平たくいえば…

「つ、つまり……私たちは……元はただの、無関係な人間と……闘わされた…という事ですか…？」

「……そうだね……相手の過去に罪があろうと無かろうと……元はただの人間……悪意を持たない廃人と、闘わされていた…という事だ……」

衝撃な事実。

まさか、あの脳無が元はただの人間だったなんて…

最初は異形形の個性か…または生まれた時からこういう身体になっていたのか…と自分で勝手に理由を付けていた…

しかし、オールマイトの口から放たれた真実、自分が元・人間と闘わされていたと考えると、胸が痛くなると同時に、そうさせていた敵

連合が許せなく思ってしまう。
こうも言える…
脳無の正体をハナから理解してた上で、一般人やそこらの人間を脳無に変えて、戦闘兵器のように闘わせていた…
相手が理屈の通じない組織だとは分かっていたが、ここまで来ると何かしらの悍ましさを感じる。

「ヤツは数多くの名のある…名を残して来た忍達からも、上層部からも恐れられていた…
何せヤツは、忍の社会を崩壊させようとしたヤツだ…
忍名『神威』…流石にヤツも、忍の力は持っていなかったらしい…だが、忍を対抗できる力は充分に備えていた……
そこでヤツは、忍を殲滅するべく…妖魔を創り出した」
「妖魔って…何ですか?」
当然、緑谷は忍じゃないため妖魔のことなど知るはずが無く、首を傾げる。
「妖魔とは…忍の血から生み出された膿のような化け物さ……一定量の忍の血が集まる事により、妖魔を生み出す事が出来る……
飛鳥くんは多分、分かってると思うけど…」
カグラの存在を知ってる飛鳥なら、薄々と分かっていると思う…そう判断したオールマイトは口を開くと、飛鳥は僅かながらにコクリと頷く。
「そして!ヤツは忍を殺すと同時に数多くの妖魔を創り上げた……しかし、ヤツはある理由で妖魔を作れなくなった……
そこで、妖魔と同格…その代用品として、脳無という存在を創り上げたという訳さ……」
妖魔は、数々の忍の血が必要となり、それを摂取し集め、妖魔を作り出す。
脳無は、数々の個性を必要とし、それを奪い集め、脳無を作り出す。
脳無と妖魔に共通点が生じているのは、その為だった。

「どうして…妖魔を作れなくなったって……また何でですか？」
「そう焦るなよ緑谷少年…話には順序と言うものがある……まだ待て…」
　質問を制するオールマイトは、手で落ち着かせる仕草を取る。
「一方、個性を与えられた事により、個性が変異し混ざり合うというケースもあったそうだ…
　悪の支配者である彼には、無個性の弟がいた…弟は体が小さくひ弱だったが、正義感の強い男だった…！
　兄の所業に心を痛め、争い続ける男だった…」
　又しても驚きの事実、悪の支配者と謳われた男に、弟が存在していたらしい。
「そんな弟に彼は、『力をストックする』個性を無理矢理与えた…それが優しさ故か、はたまた屈服させる為かは、今となっては分からない…」
「……どういう事ですか？」
「まさか…！」
「緑谷少年は知ったようだね…ワン・フォー・オールの正体を――」
　飛鳥は分からない…しかし、ワン・フォー・オールを持つ緑谷には、何が言いたいのか…ワン・フォー・オールの意味が分かったのだ。
「無個性だと思われていた弟にも、実は個性が宿っていたのさ……
　ただしそれは…自身も周りも気づきようのない…無個性に近い個性をね…
　――個性を与えるだけという、何の意味のない個性が――!!
　つまり、力をストックする個性と、与えるという個性が混ざり合い、結果ワン・フォー・オールが生まれた…
　これが、引き継がれて来た個性のオリジンさ――」
　与える、力をストック…それらが混ざり合うことにより生まれた個性…
　しかし、元の原因は…
　オール・フォー・ワン。

つまり、ヤツが生みの親…という話になる。
正義はいつだって正しい…
しかし、正義が生まれるその理由は？
ワン・フォー・オールの由来と同じ、悪より生まれ出ずる――

例えば、雪泉が歪んだ正義を持っていたのは、元は悪が生み出したものだから。
ヒーローや警察は、事件が出てからこそ駆けつけやって来るもの…
つまり、それも悪がいるから、ヒーローが駆けつけに来る…
ヒーローがいれば、必ずしも悪がいるという訳だ。
「でも、何で…？そんな大昔の悪人の話を…何で今？」
「そ、それに…それと私が…何の関係があるんですか？」
飛鳥の意見は尤もだ…
確かにこれが事実であれば、態々飛鳥を呼ばなくても良いはず…
半蔵や小百合からという理由は仕方ないとして…
「おいおい、忍の社会を崩壊の危機に追い詰めた男、そして個性を奪えるヤツだぜ？
ソイツが今も生きている…
ヤツは何でもアリの人間さ、成長を止める個性…そういう類を誰かから奪い取ったんだろう…
そうなればまず、年齢を迎える必要はない。
半永久的に生き続けるであろう悪の象徴…覆しようのない戦力差、当時の社会情勢…
敗北を喫した弟は、後世に託すことにした…
今は敵わずとも、少しずつ力を培って、いつかヤツを止めうる力となってくれる……
そして私の世代となり、私と同じく…ヤツを討つ事が出来る忍…半蔵と共に、遂にオール・フォー・ワンを討ち取った！
筈だったのだが…ヤツは何かしらの手によって、生き延び、敵連合のブレーンとして再び動き出している――」
オールマイトの脳裏に浮かぶは、血の海に座り込み、腹に穴を開け

られ、悪の象徴オール・フォー・ワンは頭をなくしている光景――
「ワン・フォー・オールは言わば、オール・フォー・ワンを倒すために受け継がれた力！
ヤツはきっと、今もヒーロー社会のみならず…忍社会を壊そうと計画を立てている……
いずれ、巨悪と対決しなければならない…かもしれん」
飛鳥はここで悟った。
なぜ、オールマイトが飛鳥だけを呼んだのか…何故、この真実を知らなければいけないのか…
オールマイトと半蔵…つまり、じっちゃんもまたオール・フォー・ワンと戦った…と言うことは…半蔵の孫である自分だからこそ、この事を知らなくてはいけなかった…
だから、オールマイトが抱え込んでいた秘密も、打ち明けなければならなかった…
オール・フォー・ワンと戦わなければならないから――

オールマイトの予想だと、きっと飛鳥は狙われる…半蔵が何故忍の身を引退したのか…それは、オール・フォー・ワンと戦い、深い手傷を負ったからだ。
もし、ヤツの性格上なら…半蔵の孫であり、弟子である飛鳥を脅威…と感じ取り、排除しようとする。

だからこそ、飛鳥には言わなければならなかった…
それ以前に、もう一つの理由も存在するが…
「先ほど緑谷少年の質問なんだがね、妖魔を作れなくなったのも、ヤツが人前に出れる体じゃなくなったから…だと思う。
ここの所、蛇女の伊佐奈の事件を除いて、妖魔を見たと言うケースは、ヤツが死んだと思われてから、現在に至って一匹たりとも見てはいない…
つまり、ヤツは妖魔を作れなくなってしまった…だからこそ、代わりに脳無という凶暴な戦闘兵器を創り上げたんだろうね…」

やる事が滅茶苦茶だ…
そう思うのも無理はない…だって、それがヤツなんだから…
酷な話だし、この状況に納得しないという意見が出ても仕方がない…
それでも、言わなければならなかった…
「頑張ります！」
「――え？」
沈黙が続いた中、緑谷が声を上げる。
その言葉に覇気が纏っており、やる気を感じる…
「オールマイトの頼み…何が何でも絶対に応えます…！
貴方が居てくれれば、僕は何でも出来る…出来そうな感じですから!!」
「緑谷少年…」
「わ、私もです!!」
腰掛けてたソファから立ち上がる飛鳥、その目には決意を宿している。
「こんな大事な話を…態々私に話してくれて…それで、こんな事が起きてるなんて……私全然知らなかったですし…
それを聞いて見過ごすなんて…私出来ませんもの!!だから、私もじっちゃんの意思継いで、オールマイトの期待に…応えますからね！」
「――飛鳥くん…！」
健気にオールマイトの気持ちを応えようとする二人を見て、オールマイトはたじろぐ。
気持ちは痛いほど、充分に嬉しい…それが二人の優しさだということも分かっている。
分かっているからこそ、痛いんだ…
その優しさが、オールマイトの心をより痛めてることを…
――言うんだよオールマイト、言わねば――
違うんだ…違うんだよ飛鳥くん、緑谷少年…!!

『やめるんだオールマイト！貴方がこのまま行けば…陽花くんと同じ…言葉に言い表せない…惨たらしい死を迎えてしまう!!それだけは…嫌なんだ!!!』

『ねぇ、オールマイト…お願い……もし、貴方の時間をくれる…なら……

もし、貴方が私の想いを引き継いでくれるなら……約束して…？未来ある忍達を……あの子を……救けて……』

「二人とも…ありがとう…!!」

私は多分…その頃にはもう…君のそばにも居ない…いいや、この世にはもういないんだよ……

飛鳥さんは、秘密を知った…

僕とオールマイトの関係、ワン・フォー・オールの正体と、オール・フォー・ワンという悪の象徴が、再び動き出してることを…

彼女からしてまだ理解できない点はあると思う…それに僕自身、納得はしたけど、それでも飛鳥さんに秘密を教えたのは驚いた。

正直言って凄い話だったけど、日常はこうして続いていく訳で、結局僕がやることは、やるべき事は変わらないのだ――

同時刻――場所は変わり…
ある人物は、パソコン画面を見つめていた。パソコンに映し出されてるのは、ヒーロー殺しの動画…今一番大炎上してるネット動画だ。
「ヒーロー殺しが捕まったか…出来れば、死柄木弔率いる精鋭部隊として、もう少し活躍して欲しかったけど…まあ良いや…
概ね、想定通りさ…」
その人物は、ステインの動画を削除すると、後ろにいた老人、ドクターと呼ばれる人物が声をかける。
「先生…本当に良かったんですか？道元を手放して……それに、折角上位級脳無に変え、戦力となったにしても、保須市で捕まったんでしょう？」
「ハハッ、別に良いさ…道元はね、最初は僕の代わりに延々と妖魔を作らせようとしたんだけど…生憎彼の技術ではてんで、ろくに妖魔を出せない…出すにしても忍の犠牲が必要……素材は死柄木に向かわせても良いんだけど、他の忍に居場所が知られ、情報漏洩として捕まる危険性がある…今はまだ潮時じゃない…」
何より死柄木弔の為になるのなら、それで良いさ――
そもそも、道元の性格から考えて、寧ろ死柄木弔の命の危険性を感じる…ならいっそ、個性を与えて脳無に変えれば問題ないというわけさ…

教育者としての本能か、或いは先生自身によるゲームなのか…どちらにしろ性格が悪いのは確かだ。
「妖魔…ねぇ、では…復興した蛇女子学園に、伊佐奈が妖魔を作ってるというのも、先生の仕業なんですかな？」
「いや、僕自身じゃないよ…魔門に頼んでの計画さ…忍商会は金さえ払えば、客の利益になる事は何でもしてくれる…そう、何でも…ね。

だから、魔門に頼んで伊佐奈にけしかけたのさ……彼が敵(ヴィラン)として道を歩んできたのも分かってるし、悪に関する事は少なくとも私の方が理解してる…

でもね――つまらないんだよ」

――つまらない、先生はそう言い切った。

何かと言えば…彼の所業も、目標も全て。

頂点を目指す事はいい事だ。しかし、それはただの自分勝手であって、人を動かしてるわけではない。

そんなもの頂点とは呼ばないし、王とも呼べない。

時に厳しめは必要だ、間違いを正す事や、極一般的な家庭も、親が子を叱る…という物を見るはずだ。

しかし、伊佐奈の場合は暴力だけで人を動かしてるに過ぎない。

そんなものなら誰でもやれる、それは只のガキ大将であって、本当の支配者として相応しい姿ではない。

本当の支配者は、恐怖や暴力だけで無く、時に人を動かす人間に…つまり、自分の想定通りに動かすこと……

つまり、死柄木弔は人を動かす支配者として成長しなければならない。

(――薄々と解ってはいたけど、伊佐奈では無理だね。

前々から分かってはいたが、彼のような人間に仲間はついてこない…だから簡単に仲間に裏切られ、捕まってしまう…自業自得さ…

彼はいい参考書さ…そうさせない為にも、もっと弔には教育をさせとかないとね…今はいい時期だ…

ヒーロー殺しが捕まったことにより…思想に当てられ感化された悪が、弔の下へ集まる――)

「妖魔を造ってくれたことには感謝してるさ……まあこれも、オールマイトの所為だ。もう一つは…陽花が原因かな、僕の放った妖魔を全部台無しにし、忍の殲滅が叶わなかった…あろうことか、最高傑作で

ある古の妖魔、心が倒されたのは、流石の僕も計算外だったなぁ」
「あのクソ女さえ居なければなぁ!!ワシと先生の共作妖魔を全部無駄にしよってあのアマめ!
死んだ忍とは言え、恨みに思うよ…!」
「ハハハ…死んだ忍を愚弄するのは感心しないなぁ…」
「先生が言うことですか……黒影の両親を殺し、思うがままに悪を憎む道に進めたのは、先生の仕業でしょう?」
怒り溜まってるドクターの声に、先生は薄ら笑いを浮かべる。
まるで「ああ、バレちゃったかぁ…」みたいな反応は、時と場合に似合わず、冗談とは思えない。
「まあね。悪を憎む道へ歩ませ、そして自身が滅ぶ結末へと導く…
それが叶わなかったとしても、彼には孫がいる…
昔からの推測だと、黒影の姿を見て、悪を憎み、滅ぼす道へ進み、いずれ半蔵の孫と対峙し滅び合う…そんな最高のハッピーエンドを楽しみにしてたんだが…
どうやら滅び合うこと叶わず、和解したらしい…
あーあ、残念だ…きっと、オールマイトが動いたんだろうねぇ…本当に醜いよ――」
未来予知でもしているのか、または心でも読んでいるのか…考えれば考えるほど、疑問が頭の中で連鎖するよう浮かび上がる。
「半蔵学院に死塾月閃女学館…恐らくは新・蛇女子学園も…死柄木弔の報告からして焔紅蓮隊と名乗る抜忍集団…それらは必ずしもあの子の障壁になる……
敵連合が壊滅する危険もある…」
「何を言ってるんだいドクター…その為の、蛇女子学園の襲撃だろう?」
オール・フォー・ワンは鼻で笑うと、パソコンのキーボードをカタカタと音を鳴らして、何かを調べている。
「先ず雄英高校に襲撃することで、敵連合という脅威的な組織を、世間に知らしめる…
――次に蛇女子学園の襲撃。

元々、ヒーローと忍が手を組むのは、社会の秩序を守る為だ…
だからこそ、敵と忍が手を組むことはない…
そこで、だ。
敵連合に抜忍・漆月が所属している事実。そして悪忍養成学校に襲撃し、組織は忍を仲間に入れたがってることを世界中の忍に認知させる。
するとどうだ？
忍は敵連合と漆月の存在を無視することは出来ず、良かれ悪かれ、忍にとって敵連合の存在は極めて大きなものとなる……
そこからヒーロー殺しさ！
彼の思想と執念…それらが感染し、感化される…
ヒーロー殺しが敵連合に所属していた…その事実が、忍を動かすことになる…
うん、僕のシナリオが機能して良かったよ…完璧さ――」
全国指名手配犯の抜忍・漆月が敵連合の仲間だと知った事により、敵連合の繋がりに示唆された。
そうする事で、ヒーロー殺し…別名・忍殺しステインの最後に感化され、彼が所属した組織に入るに違いない。
つまり、敵のみならず…忍をも仲間に入れることを、先生は最初っから計算していたわけだ。

「出来るかね？あの子に…
ワシはどうせなら、先生が前に出た方が事が進むと思うんだがね…」
「ハハハ！では早く体を治してくれよドクター…もうかれこれ五年間もこの状態なんだよ？」
「『超再生』が後五年早ければな！傷が癒えてからでは意味を成さない、期待外れの無意味な個性だった…」
先生の首には何本もの太いチューブが突き刺さっており、液体やら何やらを投与してる様子…
しかし、一番気味が悪いのは…先生の顔には目がなく、酷たらしい

ものになっていた。
「良いのさ！彼にはもっと苦労して貰う…次の僕となる為にね……
暴れたい奴、共感した奴…様々な人間と忍が、衝動を解放する場として敵連合を求める…
死柄木弔は、そんな奴らを統括しなければならない立場となり、それらを動かす悪の象徴になって貰う!!
それだけじゃない…
悪の司令塔を支えるには…彼にも影が必要だ…
本当の影こそ…漆月…君だ――」
巨悪となり得る存在を、悪の司令塔を支える漆月は、いずれ弔のコンビになりうる。
先生は、全てを支配してはいたが…忍が先生の下にいた訳ではない(ある一例を除いて)。
個性を持つ人間をまとめても、忍だけは出来なかった…恐怖では、忍は動いてくれないからだ。
自分たちは死の定めにあると、常識が縛られてるからこそ、死を恐れず歯向かってくる…
何より先生の存在自体が、妖魔を超える化け物と認識され、彼に耳を傾ける忍は一人もいなかった…
強大なる力は時に、人を寄せ付けなくなってしまう…大変、困ったものだ。
だから、弔に任せたのだ。
その為には、漆月と共に成長して貰わなくてはならない…

パソコンに映し出されたのは、前科無数の極悪人から、逃走中の重罪人まで多くの敵と忍の資料がまとめられていた。
先生はそれを見て、口角を釣り上げ、リストに載ってる人物を見渡していく。

ブレザーの服装に、人を殺し喜んでる少女の写真。
忍を殺し、鎌に付着した血をペロリと舐めている少女の写真。

顔中、つぎはぎで皮膚が縫われている男の写真。
豹のように美しく、黄金の瞳を宿し、黒い髪がストレートに長い…お嬢様の容姿を持つ少女の写真。
顔がトカゲでステインに似せたコスプレをしている男の写真。
ガスマスクと学ランを着用し、悪事を働く中学生の写真。
黒いフードを着用し、妖魔らしき異形な化け物を食い漁ってる大男の写真。
全裸の巨人が、ラジカセでニュースを聞き「全ては主の為に…」という意味深な言葉を発する大男の写真。
メガネをかけ、本を手に持ち、白髪に顔が黒い模様か何かで侵食されている少女の写真。

弔の下に集まる敵(ヴィラン)と忍…きっと、これからも退ける度に増えていく…

彼は新たな仲間を手にし、新たな力を手に入れて、強くなる――

「弔、あの子はそうなり得る、歪みを持った男だよ…
今のうちに謳歌してると良いさオールマイト…
仮初(平)の茶番(和)をね――」

ヒーローと忍が手を取り合い、絆を深めるだけでなく…
敵(ヴィラン)と忍も手を取り合い、絆を深めていく。
悪が栄え、支配するのはいつの日か――

期末試験編
８６話「燃え上がれ期末テスト」

ＨＲの時間、先生の報告として担任の相澤は、教卓の上に置かれてる書類に目を通しながら、気怠そうな声で生徒たちに連絡を伝える。
「えー…お前ら、そろそろ夏休みも近いが、雄英高校は勿論、君らが３０日間一ヶ月休める道理は一切ありません…とは言え、授業がある訳でもないんだがな」
「えっ…と言うことは…？」
「――夏休み林間合宿やるぞ」
「学校ポイのキターーーー!!!」

やったー！林間合宿と聞いた途端、教室中は喜びで騒がしくなる。
雄英高校は常に授業がハードなだけで無く、三年間丸々…つまり、夏休みすらくれないのだ。
前々から分かってはいたが、他の科目や学校と比べると、他の人達は恵まれてるなぁ…ってつい思ってしまう。
でも実際そうだと思う、何せここは最高峰と呼ばれてる天下の雄英高校だ。
世界最大難問とも呼ばれるだけのことはあり、それなりのスケジュールは他の学校と比べて当然厳しい。
「当然。忍学科のお前達も、このクラスに在籍している以上、林間合宿をやって貰う…異論は認めない、それと担任の霧夜先生からは許可を得ている。
其れ等に関しての心配は要らない――」
「ヤッタァ！私たちも行けるんだ！ワーイ！」

「雲雀ね！お菓子いっぱい持っていくんだ！一ヶ月分！」
「いや、それは多過ぎだろ…」
相澤に対する異論は無く、寧ろこの状況を安易的に受け入れ、ガヤガヤと騒ぎ歓喜の声を上げている。
クラスに在籍してる…と言うことは、このクラスにいる忍学科のみ、林間合宿をやる訳であり、三年生は関係ない。
よってA組もB組も、決まったことなのだ。
「やったぁ！飛鳥達も来るのか！良かったぜ！」
「肝試ししよーよ！」
「馬鹿野郎オメェら！風呂だろ！」
「花火」
「温泉！」
「合宿と言えばカレーだな！」
「行水！」
「枕投げしたーい！」
「湯浴み!!」
始まって早々、数分も経たない内に皆んなの意見が飛び交う。
あっ、分かってると思うけど、風呂だの温泉だの言ってるの、峰田ね。
「オイお前ら、誰が喋って良いっつった？あ？」
「すいませんでした――」
と同時に相澤の鋭い視線が放たれ、皆んなは一瞬にして恐縮し、嵐のように騒いでいた教室が静まり返る。
「それに、まだ話は終わってねえしな……
林間合宿行く前に、期末テストがある…合格点に満たなかった場合…
学校で補習地獄だ、覚悟しろよ――」
しかし、林間合宿の前に、最大難問を突破しなければならない。
それは世界中の誰もがこの試練を通り、乗り越えなければならない壁…その名も期末テスト――
赤点の者は当然、林間合宿行けず、補習地獄を受けなければならな

い。
思い出を一つたりとも作れず、補習地獄で嘆きながら哀れな時間を過ごすのは心細いものだ。
「マジかよ！皆んな頑張れよ!!」
「そうだ！特に女子全員落ちるなよ！あっ、飛鳥達は本当にな！」
「人の心配する前にお前が落ちろ」
「や、柳生さん…お気持ちは分かりますが…」
「ハァン！柳生、オイラはもうオメーの罵声なんざ効かねえんだよ！
オイラはＭｔ．レディん所行ってメンタル鍛えたんだよ!!」
「煩悩は解けなかったんだな…哀れな…」
「オイ、良い加減静かにしねえとお前ら補習地獄以上の厳しいもん付けるぞ」

――補習地獄以上の厳しいもんって何？
相澤の厳しめな言葉と共に、一同は心の中で呟いた。

時は流れ、六月最終週――
期末テストまで残すところ、一週間を切っていた。
「オイ！どーすんだよコレ！全然勉強してねーよ！」
「アッハッハ～！上鳴ドンマイ！
私も勉強してない！終わったあぁ～！」
さり気無い日々の日常があっと言う間に過ぎていき、気付けばテストが僅かに迫り来ている。
その中で嘆いてるのが、上鳴と芦戸の二名。

実際クラス順位にて、上鳴と芦戸は最下位に値する。
因みに順位は…上鳴は２３位、芦戸は２２位。
飛鳥達もこのクラスに在籍してる且つ、平等に扱うため順位はあの三人にも付けられるそうだ。
「体育祭やら職場体験やらでここん所勉強できなかったぁ!!」
「それを言うならオレ達もだぞ…学炎祭やら強化パトロールやらで、オレ達も勉強はしてない…
しかも忍学科のオレ達は、ヒーローの勉学には半歩劣る…それなのに、オレより順位が下ってどう言うことだ…」
「煩えぞ柳生!この天才がぁ!!お前が言うと余計ハートにヒビが入るんだよ!言葉遣いに気を付けろよ!!」
柳生の棘のある言葉に心を痛めてるのか、大袈裟なリアクションを取りながら上鳴は叫んでいる。
実際正論を言われ、言い返す言葉もないのだが、悔し過ぎて何も言い返せない。
因みに柳生の順位は６位、普通に頭の良い尾白やお茶子も、柳生には何も言い返せれない。
「だって柳生ちゃん天才だもんね～♪」
因みに雲雀の順位は２１位、お前も二人と変わらないぞ。
しかし、上鳴が言うことも正論である。
言い訳とはいえ、勉強できる時間がほぼ無かった事は本当である。
それは上鳴や芦戸だけでなく、条件は皆んなそうだ。
体育祭では、鍛えるのに必死で勉強してる場合では無かったし、職場体験なんて一週間その事務所で寝泊まりするのだから、勉強する暇すらない。
それどころか、自分の自由時間すらほぼ取れなかったと言っても良い。
それらを学び、身を通して思ったことが、ヒーローになるのは大変だなぁ…としか言いようがない。
しかし、中間は入学したてで範囲が狭く、学校の行事が無かったので特に苦労するところは無く、有意義に過ごせたのだが…ここの所、

急激に忙しくなってるので中間と違って範囲が広く、また先生からテストの詳細を聞かれてない為、期末テストは非常に辛い…それともう一つ…

「演習試験あるところ辛えよなー」

峰田実、成績順位は９位。

馬鹿そうに見えるが１０位圏内の上位に着き、王者の余裕なのか、憎たらしいドヤ顔で自分より下の順位の人間を見下している。

「アンタが最下位なら良いのに!!」

「そーだ！順位違うだろ場所代われ！お前みたいな馬鹿には初めてここで愛嬌出るんだろうが！」

「あーあー、愚民の嘆く声は哀れよのぉ～」

う、ウゼェ…

世界一の変態と自称しても過言ではない、このエロＱ２５０を持ち備えるエロの天才児が、まさか本当の天才児なんて、この時誰もが予想付かなかっただろうに…

他の人たちが頭良いのは何かと許せるが、峰田だけは何故か許せない。

あ、後エロＱと言うのはエロさを表す指数である。

リカバリーガールのような老婆など、脳内で５０年前の姿にコンバート出来るほどであり、相手が女であればウェルカム、揺りかごから墓場までという只者ではない変態葡萄少年、本当に蛇女にいる何処ぞのドＭＱ２５０の金髪とは会わせてはいけないヤツだ。

あ、ドＭＱはドＭを表す指数であり、何処ぞのドＭは全てがドＭとエロに繋がるので、峰田と関わりを持てば、必ずＲ規制されるのに間違いない。

「ま、まあまあ…私も頭悪い方だし…ね？」

「そういう奴が大体頭良い事は知ってるんだよ…俺は知ってるんだよ飛鳥…お前の順位が１５位だって事くらい！」

「う…うぅ…」

飛鳥は…まあ、少し下だが、そこまで悪いともいえない。

しかし上鳴にとって２０番内の人間は仲間であり、それ以外は全て

敵と見なしている。
つまり、自分より順位が上位の位置に達している人間の慰めは、彼を傷つけるだけであって、効果は真逆なのだ。
「おお…神よ！我らに救済を!!何でもしますから！
するとは言ってないけど…」
「自分の力でやれタコ」
上鳴の言葉に口鋭く言い放つ耳郎。
彼女は何やら数学のノートを手に持ち八百万の方へ向かっていく。
「ねーねーヤオモモ～、二次関数についてちょっと分からない所あるんだけど…今度の日曜教えてくんないかな？」
「ええ、座学なら私にお任せを！力添えが出来るなら喜んで！」
八百万百。
個性の関連性からして元々頭は良いのだが…座学ならばこのクラスでは群を抜いている。
成績順位は番狂わせなし、Ｎｏ．　１である。
流石は推薦入学者一位にして、座学の方は完璧。
ただ、彼女に自信がないのは演習試験の方だ…
演習試験の内容は詳しくは聞かされてないが、体育祭での常闇戦からか、何処か調子が悪いのだ。
お互い本気で精々堂々としたバトルなので、常闇が悪い訳じゃないが、何も出来ず、手も足も出ずにアッサリとやられた…その落胆により自分への自信が崩れてしまい、調子が悪いのだ。
彼女に足りないのは臨機応変。
その場で瞬時に判断し、対応出来る術がないのだ…つまり、彼女がその場で瞬時に判断し、対応さえ出来れば、トップヒーローを凌ぐ一流のヒーローになれる可能性は高いのだ。
「や、ヤオモモだと…？」
ここで、上鳴と芦戸は気付いた。
自分たちよりも成績が上の人間は嫌味でしかないが…八百万のように、筆記試験に余裕がある且つ、クラストップの成績を誇る彼女な

ら、分からない所を教えてもらえることが出来るかもしれない…そうすれば、筆記の補習は免れるのではないか？と。
「ヤオモモー！頼れるのはお前しかいねぇ!!」
「お願いしますヤオモモ！いえ、女神！我々にもどうか～!!」
二人は泣きじゃくりながら八百万に迫り来る。
上鳴は額を地面に擦り付け、俗でいう土下座をしてまで頼み込み、芦戸は座り込んで拝んでいる。
「お、お二人とも！安心して下さい…貴方達にも勿論、協力致しますわ！」
そして八百万たること、ヤオモモはニコリと、それこそ本当に女神と思えてしまう美しき笑顔に、二人は涙を飲む。
嗚呼…居たよ、ここに…女神が――

「あ、あはは…とりあえずは良かったね？」
遠くで見てる飛鳥は、八百万と上鳴、芦戸のやり取りに苦笑していた。
「そ、そうだね？飛鳥さんは大丈夫かな？」
「私はね～、まあ…難しい所もあるし、分かんないことだらけだけど……でも、柳生ちゃんが出来たんだから大丈夫だよきっと！」
「な、なら…良いんだけど……」
多分、飛鳥はああは言って実は徹夜まで勉強っていう感じだ。
飛鳥は生真面目だから、きっと修行をこなした後に勉強に励むに違いない。
まあ逆のケースもあり得るが…
「……ねーね、緑谷くん……」
「…うん？」
そんな考え事をしてたのか、急に袖口をチョンと摘まれた事に気付

いた緑谷は、頬を少し赤らめる。
え？何この掴み方可愛いんだけど！みたいなノリで、緑谷はぎこちなく飛鳥の顔を見つめる。
「あの時の話のこと……なんだけどさ――
緑谷くんの秘密…絶対に守るからね？私も…緑谷くんに負けないくらい…強くなって……それで…一緒に、倒そうね…！敵連合と、神威！」
秘密を守るからね？
というセリフを切り残せば、ある意味意味深な発言に聞こえるので、ドキッとしてしまうし、他人が聞けば勘違いしてしまう言葉だ。
しかし、そんな青春ラブコメのような展開はならず、突然の告白も、キスも、待ち受けてるわけがなく、飛鳥はあの時の話を引きずってるのか、元気付けている。
多分、あの時の話のことは誰にも話さないから気にしなくても良いよ！という飛鳥なりのケジメなのかもしれない…
自分が状況を読み込めなかったのに、自分よりも緑谷の不安を和らげようとする飛鳥の心の利いた気遣いは、とても嬉しく思い、そんな飛鳥が八百万に負けを取らない女神に感じる。
「…うん!!一緒に、頑張ろ！」
なら、その言葉に自分も応えるまでだ。
嬉しくも思い、照れ恥ずかしがりながらも、笑顔を作る。
二人は確かにどこか似ている。
ヒーローと忍で、真逆なようで近い存在で…不思議な関係を持っている。
だからこそ、惹かれ合って成長していくのかもしれない。
お互い共通点が多く存在し、互いに影響を与え強くなっていく。
特に、その中で緑谷と飛鳥は特別な関係だ。
恋人とか、恋愛とか、そう言った類じゃない…
オールマイトの後継者の弟子であり、半蔵の孫の弟子である。
双方はトップクラスの愛弟子だ。
だからこそ、時々思ってしまう…

ヒーロー学生と忍学生が出会ったのは、ただの気まぐれでも無く、偶然ではない…
もしかしたら、二人が出会うのは必然だったのではないか？
そう、時々思えてしまうのだ――
だから、二人には…真実を知る必要があったのかもしれない、それもまた…運命なのか――

食堂はより喧騒に満ちており、人混みが激しく何処もかしこも見渡せば、人がいっぱいだ。
その分、カレーだのラーメンだの、美味しそうな匂いが充満しており、嗅ぐだけで腹の虫が鳴りそうになる。
「なんか学食久しぶりだな～…」
席についてる飛鳥は、緑谷、飯田、麗日と…いつものグループで学食を食べていた。
緑谷は好物のカツ丼。
飯田はカレー。
麗日は素うどん（家から持って来た乾燥わかめを掛けたり、そこら辺にある調味料を使って、麗日特性わかめうどん）。
飛鳥は野菜炒め定食だ。
「それね！なんか学食食べてると、「嗚呼…帰って来たんだ！」って、故郷に帰った気分になるよ～！」
「故郷？ああ、そう言えば麗日くん、実家と離れて生活してるんだったな！」
「麗日さん、大変じゃない？」
「ううん、全然平気だよ！そりゃ大変な事はあるけど…ヒーローになるのに贅沢してられへんもん！」

健気だなぁ麗日さんは…
贅沢をしたくないとか、私欲を優先せずに、ヒーローになるための努力をするって言うのは、大切な事だもんね。
「そう言えば、飛鳥くんの実家は？離れてるのかい？」
「うん！私もね、じっちゃんの実家と離れて寮で生活してるから」
「えっ、寮生活してるの⁉」
今更だが初耳だ。
プライベートな事はあんまり尋ねないから無理ないが、寮生活と言うのは初めて知った。
皆んなは離れてたとしてもてっきりアパート借りて住んでるのかと思っていたので、寮生活をしてるとは想像もしてなかった。
「……いや、でも待てよ？飛鳥さん所の学校は半蔵学院の忍学科だから……もしかしたら忍専用の寮があっても可笑しくは無いし……
そもそも素性を知られるのを防ぐために、寮生活を送ってるのかも…
となると、柳生さんとか雲雀さんとか…他の皆んなも？
でも寮生活なんて僕経験した事ないなぁ…一体中はどんな風になってるんだろ？
和風かな？敢えて洋風だったり？いやしかし忍学科が所属する寮なんだから普通は和風と考えても良いよな…
カラクリ屋敷だったりして？そもそも寮のシステムは一体どんな…ブツブツ」
「あの～…緑谷くん、ソレ個性の観察以外の時にも…出るんだね？」
これぞ緑谷のスキル、ザ・アナリシス――
気になることや（基本、ヒーローの活動や個性に関して）の場合により頻繁的に発動する緑谷特有のスキルだ。
ブツブツと小声で呟くのは小学生の時からの癖で、これで周りからよく気味が悪いと軽蔑されていた。
それが中学まで続いたからなのか、自分が無個性という意味もあってか、友達が出来なかった…
つまり、ボッチだったのだ。

何処ぞのガガガ文庫に出てくるキャラと同じボッチという訳なのだ…

誰だよヒキタニくん。

――ガァン！

「ッた！」

不意に後頭部に鈍い痛みが走る。

何かにぶったのだろうか？と後ろに振り向くと――

「あれあれ～？こんな所にA組居たんだ気付かなかったゴメンね～??

君頭デカすぎるし、地味だし、当たっちゃったよ」

「あれ君は確か…！」

隣のB組、物間寧人。

体育祭で爆豪勝己に喧嘩を売り（正しく言えば、爆豪の挑発を買って喧嘩を売った）、返り討ちにされ酷い目にあった人物だ。

A組に対する抵抗心と、心がアレなので、関わりを持つと、こう言った揉め事を犯したくなるのだ。

「物間くん…よくも！」

「酷いよ！ワザとでしょ今の！

当たったらちゃんと謝りなよ！えっと…物…間くん？」

「何で疑問系なんだよ…

――ああそっか、君がA組に所属してる忍学科の生徒かぁ…ふぅん、そりゃ僕とは初対面だし名前は知らないよねぇ？まあ無理もないか…そもそも君らのようなA組に名前を言ったって、どうせ僕らを見下し名前なんて直ぐに忘れるに決まってるさ…

それと言い掛かりはよしてくれないかなぁ？僕がワザとやったなんて証拠はあるのかい？

そもそも君らは仲良しこよし、談笑してただろう？

見てもいないのに言い掛かりはよして欲しいなぁ！ああ怖い！A組は自分の都合が悪いと直ぐに他人のせいにする、あああ怖いなぁ!!実に怖い！」

――何だコイツ。

注意しただけでこの対応、本当に心がアレだ、仕方ないとは思って

たけどここまで晴れ晴れしく返されると少し複雑な気分だ。
「それはそうとさ、君らヒーロー殺しに会ったんだってね？」
「――ッ」
突然、彼の口からヒーロー殺しの話題が出てきたことに、皆んなは止まる。
「体育祭に続いて注目を浴びる要素ばっかりだよねＡ組。
なんで？ねえ何で？君らの何処に需要があるんだよ、僕らも少しは目立っても良いってんのに、君らは何かあると直ぐに注目浴びて僕らの存在を遠く突き放す…
しかもその注目って期待値とかじゃなくてトラブル的な意味だよね？
あーあ、怖いなぁ…君らのような野蛮な輩達がいるから狙われるんだよ！その所為で常に清く正しく日々精進してる僕らにまで被害が及ぶんだろうねぇいつか！ああ怖いなぁ！
君らの所為で僕らに被害が出たらどう責任とってくれるんだよ！ああ、これだからＡ組は――」
「物間いい加減にせんかぁ！」
「ブハァッ!?」
早口で捲し立てる物間の首筋に、怒鳴り声と共に手刀が入る。
後ろに人がいる気配など、感知できるはずが無く、手刀をくらい力無く倒れてしまう。
その後ろに居た人物は、拳藤…では無く、月閃女学館の二年生、夜桜だ。
「あー！夜桜ちゃん！」
「おや飛鳥さんですか、学炎祭以来ですかねお久し振りです。
他の皆さんも…ウチの物間が迷惑を掛けました」
夜桜は物間の首を掴むと、皆んなに謝罪するようペコリと一礼する。
夜桜、アンタは物間の保護者か――
それとは別として、飛鳥を含め四人は意外そうな顔で見つめていた。

そりゃそうだ、月閃が隣のＢ組に在籍することは相澤先生から聞いてはいたが、雄英高校の立場では、此処で会うのは初めてなのだ。
何かしらと気不味い…というより、こんな所で会えるのは意外だったので、何て反応を取ればいいのか戸惑っている。
本当ならもっと早く会いたかったのだが、学生は職場体験で忍は強化パトロールでと忙しく、会うことは出来なかったので、仕方ないと言えばしょうがない。
「あー！・いた物間！・サンキューな夜桜」
又も後ろから声が…
人混みの中から出てきたのは拳藤一佳。
クラス委員長にしてクラスの姉御的存在だ、そして見た目が可愛いかつカッコいいという…
様子を見た限りだと、どうやら拳藤は物間を探していたそうだ…
「ったく、お前急にいなくなるから何処行ったんだって探してたんだよ…子どもか全く――…
悪いな夜桜も、アンタらＡ組も…多分こいつの事だと、気分悪くしちゃったかもしれないけど…気にしないでくれ、何時もの事だからさ」
「いえ、別に拳藤さんが気にすることはありませんよ」
「う、うん…夜桜ちゃんの言う通り、私たちは特に気にしてないからね？」
拳藤の言葉に、夜桜も飛鳥も三人も、特に気にしないと言った様子で首を横に振る。
なんか物間が問題児に見えてきた、優秀でイケメンなのに…心がアレだから勿体無い。
「あー、その…なんだ…お詫びと言っちゃなんだけどさ…
期末の演習試験は不透明とか言ってたよね？
知り合いの先輩から偶々聞いたんだけどさ、入試ん時みたいな、対ロボットの実戦演習らしいよ」
「えっ！・そうなの!?」
ちょっとズルだが、これはかなりの有利な情報だ。

まさかこんな所で期末テストの内容を知ることが出来るなんて夢にも思っていなかった。
「入試？ロボット？」
「あー…そっか、飛鳥さん知らないんだったね」
飛鳥が首を傾げるのを見て、緑谷はそう言えば…と思い出すようにポカンと口を開く。
入試試験で通ったわけでは無く、転入といった形で雄英高校に入った訳なので、当然入試の内容は推薦入学者と同じく知ってる筈が無く、入試の時と同じ…と言われても想像がつかない。
入試試験。
仮想敵のロボットを倒し、ポイントを手に入れるというルールを前提とした試験。
何点以上合格…という目標がなく、より多くのロボットを倒せば良いという試験だった。
緑谷は０ポイントだったが、巨大仮想敵を倒した経験はある。
レスキューポイントで救けられ、何とか合格することに成功した緑谷は、あの時の感動を今でも忘れない。
「ってことは、仮想敵なら思いっきりやっても良いよね！傀儡と変わらない感じ…というか、霧夜先生の訓練でいつも受けてるから、私たちの見せ所だねコレ」
一方、飛鳥たち忍学生は、ヒーローの仮想敵とは違い傀儡を相手に戦うことが多い。
実際傀儡の性能は、伊達に戦闘力だけでなく、使い所によっては人間に偽装し、スパイや囮になる事だって出来るのだ。
仮想敵に傀儡も似てるって、本当にこの世界は共通点が多すぎる。
しかも卒業試験の内容は、大群の傀儡相手に傷一つ付けられずに殲滅すると言った、過激で最大難関の壁がこの先に待ち構えてるのだ…
卒業試験の内容は、時に変わることはあるが…基本はそんな感じだ。
「グフッ…何故だい拳藤……君はバカなのか…
折角の情報アドバンテージを無駄にして……今度こそ憎きＡ組を

出し抜くつもりだったのに！」
ここで気絶してたと思われてた物間が、謎のオーラを解き放ち、忌々しい目線でＡ組と拳藤を睨みつける。
「いやだから憎くはないってーの」
ベシッとここでもう一発拳藤の手刀が入る。
今度こそ完全に堕ちた、気絶している。
夜桜は「ではまたのぅ」と言葉を残すと、物間を引きずる拳藤の背中に付いていく。
何だったんだ物間くん…しかし、演習試験の内容を知れたのは大きい、良かった…ロボは大丈夫…あの時とは違ってコントロールも少しずつ上達している。
堕ちない自信が彼にはある――

かれこれ、一週間が過ぎて――
雄英高校、期末テストが始まったこの日、最初に行われたのは筆記試験…
試験が終わった後、上鳴と芦戸は泣いて喜んでいた。
「ここテストに出たー！」「やばい分かっちゃった！何これヤオモモ、凄〜い！」と子供のようにハッチャケて喜んでいた。
他の皆んなもそんな感じで、クラスの半分がヤオモモのお陰と言って良いだろう…
一方切島は爆豪に勉強を教えて貰おうと、日曜日に会ったそうだが、中々捗らなかったらしい。
何でも図書館で二人の声が騒がしく摘み出されたり、ファミレスで気分爽快しながら勉強に励もうとしたら、元中学の友達と会い揉め事になって摘み出されたりと、色々大変で勉強どころじゃ無かったそうだ。
つまり、分からない箇所が半分以上もあってテストがヤバかった…

という訳だ。

不安だった期末テストも無事終了し、演習試験が控えていた。

皆んなはコスチュームに着替え、雄英教師達が待機してる運動場に集まる。

運動場には数台のバスがある、きっと演習試験は各自バラバラになってやるのだろう…

まあ、不正を防ぐ為なのかも知れない、個性さえ使えばその気になれば不正行為など幾らでも使えるんだから…

しかし、何処も見たことのある教師たちばかりだ…

しかもオールマイトもいるし…何だか嫌な予感しかしないのは気のせいだろうか…

「よし、集まったか?これより演習試験を始める。

一応言っとくが、演習試験でも赤点はあるからな?補習にされたくなきゃ、みっともねえヘマはしねえことだな」

筆記試験が終わり、後は個性を使ったテストと聞けば、期末テストで散々嘆いてた上鳴は今や上機嫌、他の皆んなもウキウキだ。

演習試験の事はあの後緑谷達から既に聞いている。

ズルかもしれないが、何も先生は「他の先輩方には聞くなよ」とは言っていない…つまり、法的な感じでセーフなのだ。

なので演習試験はロボをぶっ飛ばせば良いだけ…簡単だ。

「先生パパッとやっちゃいましょう!合理的に早く演習試験やりたいっす!ロボなんざ楽勝!」

「カレー、温泉、花火、肝試そーよ!!」

…芦戸と上鳴は調子に乗り過ぎて、相澤先生に何か言われそう…と思ったがそうでもなく、表情は変わってない。

しかし変わりに、相澤先生のマフラー?(正しくは捕縛用)の中から、ネズミの外見をした校長根津が現れる。

「ところが残念!ちょいと訳あり事情があって今回から内容は変更させて貰うよ!その為入試の時と同じような仮想敵ロボットでは無いよ!」

――――え？

「君らは当然ヒーロー殺しの件は知ってると思う…
ヒーロー殺しのようなヴィランが、もし他の街に出没し、出くわした場合、君らはどうする？
それを未然に防ぐ為として、我々教師陣は対人戦闘・活動を見据えた、より実戦に近い教えを重視する――！」
期末テスト。
演習試験の内容変更による衝撃な事実に、皆んなは戸惑いながら口を開くも、根津はそんな皆んなを無視して説明をする。
「よって二人一組になって、ここにいる教師一人と戦って貰うよ」
は？
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
なんじゃそりゃあ！そう皆んなは心の中で叫んだ。
ロボットだと思ってたのに、試験内容がロボットから教師なんて、幾ら何でもハードルが高すぎる。
高過ぎて通過できない…潜り抜きたい。
因みに戦闘訓練の時みたいに、クジでペア決めをするのではなく、先生の手配で既に決定済み。
動きの傾向や成績、親密度…
諸々を踏まえて独断で組ませたそうだ。

轟焦凍と八百万百がペアとなり、担任の相澤先生と対決。
上鳴電気と芦戸三奈がペアとなり、校長・根津と対決。
麗日お茶子と青山優雅がペアとなり、１３号と対決。
飯田天哉と尾白猿夫がペアとなり、パワーローダーと対決。
葉隠透と障子目蔵がペアとなり、スナイプと対決。
口田甲司と耳郎響香がペアとなり、プレゼント・マイクと対決。
切島鋭児郎と砂糖力道がペアとなり、セメントスと対決。
峰田実と瀬呂範太がペアとなり、ミッドナイトと対決。

蛙吹梅雨と常闇踏影がペアとなり、エクトプラズムと対決。
残るは五人、緑谷・爆豪・飛鳥・柳生・雲雀…
「そして緑谷と…爆豪がチームだ」

「!?」
緑谷と爆豪の二人は目を丸くし見つめ合う。
何で？かっちゃんと――？
何で？デクと――？
二人はお互い後ろめたい所や、素直になれない所や、嫌う所だってある。
幼馴染で、小さい頃からよく一緒に遊んでた友達だったが、今は違う。
子供の時と、あの時とは全然違う…
緑谷にとって、爆豪は憧れの部類に入っているし、全てが嫌いなわけでは無い。
でも個性が発現し、日々成長して行くと共に悪い方向へ加速し、いつしか二人は話すこともなくなっていた。
しかも、タダでさえ爆豪は職場体験で何も学べず、何も自分の成長に繋がることもままならず、無駄な一週間を過ごしてしまった…
周りの皆んなは見間違えるほどに成長し、緑谷なんかは、爆豪の動き方がそっくりな戦闘スタイルで、皆んなからはチャホヤされていたことも（チャホヤされてることに嫉妬を持っている訳では無い）…
溜まりに溜まったストレスが、爆豪の限界を迎えている。
そんな状況の中で、緑谷出久と試験をやれと？
冗談じゃない…
しかしそれは、爆豪だけでなく、緑谷だけで無い…両方そうだ。
「そして気になる相手は…私だ!!」
二人の前に一歩出たのは、尤も他でも無い…
平和の象徴・オールマイトだ。
Ｎｏ．　１の座に着く彼は、不敵な笑みを浮かべる。
二人はこの状況に何とも言えない。

タダでさえ一番組みたく無いペアと組んでしまったのに、相手は最強の称号を持つオールマイト…
誰もが認める実力を備え持つ彼…こんなヤツ相手にどうしろと？
最悪な組み合わせだ、穴があったら入りたいとはこのことだ。
しかし、これを決めたのは尤も他でも無い…担任の相澤先生だ。
嫌味に思えるかもしれないが、これには訳ありがあるので、出来れば責めないで欲しい…
「へぇ～…緑谷くんは爆豪くんと組んでオールマイトとかぁ……
ん？アレ？それじゃ私たちは？」
見渡す限り、教師陣たちは全員生徒たちとペアを組んだ。
では、自分たちはどうすれば良いのだ？また、誰と組めば？二人一組と言っていたが残る人数は三人だ。
一人必ず余ってしまう…
そんなことも考えてたのか、相澤先生は不敵な笑みを浮かべる。
「安心しろ飛鳥達、お前たちにはスペシャルゲストを呼んでおいた…
お前らだけ特別に三人だ…じゃねえと本気で無理だからな」
「え？」
特別に三人？と言うことは、三人一組で試験に挑めと言うことになる。
皆んなは二人一組なのに、自分たちは良いのだろうか？
しかしその優しさも、次に現れる人物を目の前にして、その疑問は直ぐに打ち砕かれる…
「飛鳥・柳生・雲雀…死ぬなよ？三人がペアとなり…相手は…」

ズドオオォオオオォォォォォォン!!

突如上から降ってやって来た人物は、仁王立ちをしたまま着地する。
地面には大きな亀裂が生じ、地鳴りが響き揺れてしまう。
そして目の前にいる人物は、三人よりも身長が高く、筋骨隆々…に近い筋肉容姿を持っている。

その人物は、ニヤリと口角を吊り上げた。

「大道寺だ――」

半蔵学院の生徒にして、自らの意思で何年も留年し続けてる伝説の先輩だ――

「嘘!?大道寺先輩が?!」

「これは…成る程……三人一組の理由が分かったぞ…そう言うことか!」

「まさか…伝説の先輩まで呼んでくるなんて…!」

三人は震えながらも、それでも大道寺を見つめる。

「我が名は大道寺なり!我も仕り参戦だ!!

貴様らの熱きたるや闘志、我に見せてみろ。

我も全力で、貴様らを潰そう――!!」

伝説の先輩…大道寺は、指の骨を鳴らし、虎に似た眼差しを向ける。

貴公達よ、全力で我にぶつかって来い。

さもなくば、期末試験は不合格となりうるであろう、我は貴様らを全力で潰しに掛かる――来い、死ノ美を極めようぞ――!!

８７話「筆記試験より演出試験の方が難しい」

「敵の活性化の恐れ…か」
会議室。
教師達は期末テストの事を含め、会議を行っていた。
スナイプはマスクを付けてる為、表情こそは見れないが、声からすれば厄介そうな意味でため息をついている。
その事から、余り善くない問題なのだろう。
それもそのはず、ヒーロー殺しステインが捕まった今、社会は少しずつ変化して行ってるのだから…
まだ犯罪率が上がった訳でも、犯罪に関する事件が増えた訳でもない。
寧ろ…減ったと言った方が良いだろう――
では、それの何処が敵の活性化という課題と繋がるのだろうか？
「僕とオールマイトの予想から考えるとね、敵は犯罪を辞めたんじゃない…
恐らく、今は伏せてるんじゃないかな…？」
「どういう意味です？」
校長・根津の説明に小首を傾げるプレゼント・マイク。
いつも能天気で声が馬鹿が付くほどデカイ彼も、深刻そうな表情で質問する。
「簡単だよ、それらの敵は一時的に騒ぎを中断して、敵連合に赴いた…と見なして良いということだ」
「根拠は？」
「ヒーロー殺しの思想・信念、それらは善かれ悪かれ必ずしも感染する…
そもそも最初にデカイ事件を起こしたのは、敵連合が雄英高校に襲

撃した時から始まっていた…

蛇女子学園という悪忍学校にまで攻めてきた連中だ。その時点でただの犯罪テロリスト共じゃない…

それが漆月と関わってたとしても、忍が敵と関係してる時点で処罰もんなんだから…

それがヒーロー殺しまで繋がりが示唆された……

ここまで敵連合が繋がっていれば…何かしらの影響を受け、バラバラな悪意が組織に興味を示す…つまり――」

「敵連合は戦力を増やして、再び攻めて来る危険性があるって訳か…」

これはあくまで予測に過ぎない。

それが本当に起きると断言は出来ない…

いつからかも分からないし、でも…可能性は極めて高い…オールマイト殺害の計画を立ててる敵連合…

つまり、オールマイトが雄英に居る時点で、雄英生に危害が加わる確率も高いと言える。

それもそのはず、ここまで計画的に雄英生だけが事件に巻き込まれてる…

次にいつ敵が攻めて来るか分からない…それと同時に組織は敵の活性化を目論みとしている。

事件を騒げば騒がすほど、敵は衝動を受け、解放を求める…

力があればそれを使いたがるのも当然だ、個性の規制化が進んでいる以上、抑圧されてる彼らは、悪意を培ってるのだから…

しかも小百合からの話によれば、巫神楽三姉妹の調査によると、数名の抜忍が消息を絶ったとのこと…他にも、善忍や悪忍も姿を消したとの証言。

敵連合はきっと、忍を仲間に引き入れることに、オールマイト殺戮計画を進めてるに違いない。

それと同時に、もし雄英生に巻き込まれば…ヒーロー学生は抜忍と戦う確率も…

蓋を取り除けば、そこには酷たらしい、最悪な未来が待ち構えてる

…
　それらを防ぐ為、我々教師は、生徒達の安全と共に対策案を講じてるのだ。
「生徒達の身を守るのは僕ら教師の義務だ。
　社会の安否、そして敵連合についてはオールマイトに任せるよ…」
「ええ…必ずしも…捕まえます…敵連合諸共、アイツも…!!」
　オールマイトはトゥルーフォームの姿であるが、力強い声が聞こえる…気合が入っている。
「その為に…今の時期は期末テストがある…筆記試験はともかく、演習試験の内容を変更しようと思ってね」
「仮想敵では意味がない…と言うことですか?」
「そういう事さ!」
　仮想敵はあくまで生徒達に極力危害を加えさせない為。
　親へのクレームや社会からのアンチが激しい為、金を支払いロボットを作った訳だが…
　柔軟な行動や判断を取るには、仮想敵では意味がない…つまり、生徒の成長にはならないと判断したのだ。
　入試の時から相澤先生は「んなもんアンチがしたい奴らの言葉だろ、好きに言わせてりゃーいーんだよ…俺らが気にする事ねえってのに…」とタメ口を呟く始末。
　しかし、生徒達の安全を確保するのも教師達の役目なので、仕方ない点は存在する。
「だから、演習試験の内容は…
　仮想敵ではなく、演習試験の場所にて教師達と戦闘する…
　という訳さ――」
　一方、教師達なら鍛えてる故に個性も強力で申し分ない。
　寧ろ教師の場合では強過ぎて話にならないという意見が出るのも不思議ではないが、それに対してはちゃんとした案があるので、ここは良しとする。
　問題は――
「では、忍学生の彼女らはどうします?」

１８禁ヒーローのミッドナイトが質問する。
雄英生達は良いとして、彼女達に適材する者などこの学校にはいない…
強いて言うならオールマイトだが、彼は「私は決まってますので…」と言ってる為パス。
忍学校に所属してる霧夜も良いが、話によると霧夜は一度、焔達が蛇女にいた頃に修行として戦ったことがあるので、恐らく動きや行動パターンが読めてる可能性があるのでパス。
ならばここは半蔵！
という意見は少なからず出るであろう…オールマイトが出るなら半蔵も…しかし彼は小百合と共に敵連合の捜索をしてるのでパス。
半蔵と小百合の力を借りても未だに敵連合を捕まえれないって、どこまで用意周到な組織なのだか…もしかしたら国外なんじゃない？と思えてしまう。
だから――
「あっ、そう言えば…霧夜くんの話だと、半蔵学院に一人、卒業しないで留年し続けてる生徒がいるらしいですけど？どうします？」
「よし、じゃあソレにしよう――」
大道寺先輩が出たと言う訳である――

そして現在に至った訳である。
大道寺は元々、三年生になって卒業試験に向かい、彼女の実力からして普通なら合格出来てるし、もう既に卒業している訳なのだが…
とある理由で彼女は留年している――
その理由は現在、蛇女子学園に在籍している教師、鈴音先生にあった。
鈴音先生は元々、半蔵学院の生徒であって、大道寺の先輩こそが、鈴

音先生…凛なのである。
凛は昔っから強くて、大道寺に負けを取らない程に、負けず嫌いな性格で、「まいった」の言葉が出る前に、自分が負けてしまう…
必死に彼女に食らい付き、どれだけ激戦を繰り広げても、結果は同じ…
凛の強さがより身に染み渡り、敗北感の中に何処か嬉しい気持ちもあった。
――凛先輩が「まいった」と言うまで、挑戦を辞めない――
それを凛に話すと「あはは！それは卒業試験よりもずっと厳しいよ！」と笑いながら答えた。
馬鹿にしてるわけでは無い、大道寺の真っ直ぐとした答えに、凛は嬉しく思いつつ答えたのだ。
――では、ソレを我の卒業試験にしよう――
忍学科の人間や、霧夜に半蔵、名のある上層部達も異論はしなかった。
大道寺ほどの戦力が忍社会に貢献してくれるのは、さぞ嬉しいのだが、時に上層部は生徒達の思いを尊重する事がある。
と言っても、殆どが都合の良い時であって、本来は生徒達の事など無視して、命令に従わせることもあるのだが…この際はどうでも良いだろう。

凛が卒業試験に合格して去った後も「またいつでも挑戦を受けるよ！」と約束してくれた。
自分が一流の忍になって社会に出てるにも関わらず、自分の我儘に付き合ってくれる先輩ほど、優しい人間はそうはいない…
凛が忍社会で活躍する姿は、瞬く間に広がり、一流の忍として近づくのも夢ではない…そんな先輩が強くなると思う反面、とても嬉しかった。
自分も先輩に負けていられない…

だから、あの事件が起きたのは想像もしなかった――

「合格を手にしたいのであれば、全力で我に挑め…さもなくば、これ合格、不可能なり…！」
気迫のある言葉、虎のような野生的な眼差し、圧倒的強者の余裕…
それらが垣間見えるのは、決して気のせいでは無い…
大道寺がどれだけ鍛錬を積み重ね、凛に再挑戦するべく強くなったのか…伝わってくる。

「だ、大道寺先輩と…？正気…ですか？」
「勿論だ、それにこれも先生方の決定事項だし、お前ら相手には忍じゃ無いと不公平だからな…
丁度これくらいで良いだろう」
いや全然良く無いですよ相澤先生。
しかし直接口に出すことが出来る訳がなく、決定した以上、何を言っても無駄だろう…
そもそも、自分達のことを考慮した上で大道寺先輩という答えなら、仕方ないかもしれない。
だって今思えば大道寺先輩以外に、他の人が思いつかないのだから…
霧夜先生は…ああ見えて上忍クラスに匹敵するし…半蔵は…伝説の忍ゆえに、強すぎる。
衰えたとしても、三人まとめて攻撃してもかすり傷一つすら付かないだろう…
なら伝説の大先輩の出番…という訳だ。

「試験の概要については各々の対戦相手から説明される、移動は学内バスだ…時間がもったいない、速やかに戻れ」

これも一つの合理的な事なのか、相澤は手短に説明をし終えると、軽く手を叩いて急かすよう皆んなが乗るバスを教える。
それぞれのバスは移動先が違うため、乗る人は決まってるそうだ。
各自生徒がバスに乗って行く光景、飛鳥達三人もそれに続き、気乗りせずして乗って行く。
大道寺先輩とは余り戦った事はないが、噂は聞いたことがあるし、何度か会ったことがある（少ないけど）。
何でも自分達が留守の間、蛇女の生徒達が攻めに来たことがあったそうだが、大道寺先輩一人で全滅させたことがある位だし、実際妖魔とは互角に渡り合える可能性を秘めてる程だ。
飛鳥は焔と二人で、超秘伝忍法を使ってやっと怨楼血を倒すことができたのだから、多分大道寺先輩はそれ以上なのかもしれない…
そう思うと、まるで妖魔と戦う気がしてならない…

三人はバスの中に入り、それに続き大道寺先輩が乗る。
普通バスの中でも、大道寺先輩が入るだけでこうも緊張感が増すのか…申し訳ないけど、歩くたびに何故がバスが揺れている気が…
何これ、大道寺先輩オールマイトより強いの？そんな筈ないけど…
各々が指定されたバスに乗ると、出発した。移動先は多分、そこまで遠くはないと思う。
演習試験場とは聞いたが、そこが一体どんな所なのか…どんな場所なのかは知らない…
出来れば、街みたいなごっちゃした場所ではないことを祈りたい…
「なんか…気不味いね」
唐突に雲雀が口を開く。
ビクッと二人は体を震わせるが、大道寺先輩は聞こえてないのか、或いは無視してるのか、反応しない。
「ひ、雲雀ちゃん…そう言うのはあまりこの場で言わないものなんだよ…？」
「でも～…バスの中なんだからせめてもう少し楽しくしたいよ…」

小学校の遠足か。
出来れば自分も楽しくしたいのだが、相手があの先輩となるとどうしても…なるべく気軽に接してみたいものではあるのだが…これが中々…ボッチの人間がどうやってクラスの輪に溶け込めるのかって言う位に悩んでしまう。
話す事は全然良い、そこは問題ない。
でも、喋らないんだもん…まるで「余り騒ぐな…狩るぞ」と言わんばかりの雰囲気が漂っている。
そこまで先輩が怖い訳じゃないけど、喋ってくれないといのが何とも……
「お、俺は…寝るか…」
気不味い空間に耐えれないのだろう、柳生は目を瞑り仮眠に移る。
「あー!柳生ちゃんズルい!」「柳生ちゃん起きてよ!」と、飛鳥と雲雀が声をかけるも柳生は眠りに落ちる。
逃げたな…
寝てにげるなんて卑怯だ…というか、寝るにこんな奥の手が存在してたなんて…
ノリー吸い込んでコピーしたい…
気不味さで例えるなら、隣にナルシストの青山と無口の口田が挟むように隣にいる位だ。
なんだこのレベル高いの…というかあの二人とはあんまりコミュニケーション交わしたこと無いなぁ…
「えっと…あっ、そうだ!皆んな、尻取りする?!」
飛鳥がピンと人差し指を立てるが、誰も反応しない。
大道寺は無言のまま此方に振り向かないし、柳生は寝てるし雲雀は冷や汗たらしてるし…あっ、これ大失敗?普通気不味くなったら尻取りしようよーって幼稚園の頃から小学校の時まで使ってたんだけど…
と言うより、雲雀さえ食いつかないことに驚いた。

「ねぇ、飛鳥ちゃん……それは流石に子どもっぽいよ……」
「体育祭のことを運動会って言ってた雲雀ちゃんに言われるのはちょっと…」
「……龍が如く」
「え？」
前から大道寺先輩の声が聞こえたような…気のせいかな？
「次、『く』だ…次は誰だ？」
結局、大道寺先輩尻取りやるの？というか、龍が如くって知ってるの？ゲームやってたの？
なんて浮かび上がる疑問は置いといて…車内で尻取りをしてたとさ…

１０分が経過してやっとステージに到着。
長かったようで短かったような…柳生は寝てたので尻取りに参加しなかったが、とても長い感じがしてならなかった…
因みに大道寺先輩、尻取りメッチャ弱かった…「ん」がついて負けたの５回だもん…もしかして、尻取りやったことが無いのかな？
しかし、そんな事は口が裂けても言えなかった。
雲雀ちゃんも流石にこの空気では言えないらしく、珍しく空気を読んだ。
「では、これにより試験のルールを説明する…！」
大道寺先輩はさっきの空気から一転し、覇気のある声を張る。
まるで何事もなかったかのようなその風格は、ある意味尊敬に値する。
「制限時間は３０分、このハンドカフスを我に掛けるか、どちらか一人がステージから脱出することだ」
「えっ!?に、逃げても良いって事ですか？」
「うむ、また勝てるという自信があるのであれば、我と戦うことも有りだ」

選択は二択。
戦うか逃げるか――
先ず、試験官を敵だと仮想する。自分たちが敵と会敵したとして、そこからどう対処するのかがポイントとなる。
勝てる自信があれば、それで良し…しかし、実力差が大きすぎる場合、逃げて応援を呼んだ方が賢明である。
特に飛鳥達ならよく分かってることだ、ステイン戦の時、もし自分しかあの場にいなかったら、確実に飯田くんやヒーローが殺されてた可能性は高いと断言して良い、そんな危機的な最悪な状況にならない為にも、逃げて応援を呼んだ方が良い。
実際ＵＳＪの戦いで、飯田がいなければ教師達が来ることも間に合わず、飛鳥も緑谷も、死柄木に殺されてたかもしれない…
それらに関しての経験は何度か経験してるので、飛鳥はいち早く理解出来た。
何しろ戦闘訓練とは格が違う…一つ一つの動作や行動が如何にどう重要なのか、どう繋がるのか…そこを評価される。
評価される…と言うことは、点数的な感じなのだろう……
筆記試験なんかよりも、演習試験の方が何倍も難しい気が…

この試験は自分たちの判断力が試される訳なのだ。

当然、先生達や大道寺はそこらのプロを凌ぐ実力を兼ね備えてる。
オールマイトに当たった人間なんか「絶対に逃げの一択」と思う人が多いだろう…
そこで、オールマイトが月閃女学館で言ってた、サポート科に頼んだ作品『超圧縮おもり』が出番となる。

超圧縮おもりとは発目がデザインでコンペして採用されたもの。
体重の約半分の重量を装着する、いわばハンデのアイテムだ、古典だが動き辛いし体力は削られるので、此方側としては有難いことだ。
しかし、裏を返せばこんな事も言える…

全然本気じゃない相手と戦うことになる。
不本意だが、ハンデとあらばチャンスは逃れない。
ペアは中央ステージからスタートとなり、クリアする為には逃走用ゲートを通らなければならない。
クリアさせない為にも、きっとゲート付近に待ち受けてる可能性は極めて高い。
相手は大道寺先輩…あの人の性格や体型から考えて、先ず小細工を仕掛けて来る人じゃない…
となると、真正面から攻めて来る危険性がある。
ステージはゴツゴツとした殺風景な石切場で、視界はほぼ岩で覆われゲートが見えない。
それぞれルートが分かれており、迷路に似たステージだと考えて良い。
このステージだとうってつけだゲートで待ち伏せしてるか、真っ直ぐ追って来るか…
この選択肢から考えると、待ち伏せの可能性がある。
こう言った攻略が難解なステージは、無闇に探し回るのではなく、目標の場にいるのが大切だ。
なら作戦はこうだ――
それぞれ三人ともバラバラに分かれ、どちらが先にゲート付近に近づくか…
大道寺と会敵したとしよう、先ず一人が囮となり少しでも多く時間を稼ぐ。
そして意識させないよう、無意識に引き付ける。
引き付けておけば、大道寺がゲートから離れることにより通過することが出来る。
ほんの少しの隙さえ狙えば問題はない、しかも相手が超圧縮おもりを付けてるのであれば、隙は必ず生じる。

次に追って来ると考える。
視界が悪い上に攻略は難問だと言うのに、大道寺が攻めに来れば間違いなく全滅する危険性がある。
相手は一人、こっちは三人…これでも戦力の差は埋めれないが、バラバラに行ったとした場合、一人ずつやられるパターンが大きい。
しかし、その問題は消滅することになる。
何故なら、ルートの攻略には大道寺も手間が掛かるからだ。
幾ら気配が読めるとしても、大先輩だとしても、どちらから先に片付ければ良いのか…必ず躊躇を生むはず…それに一人を潰したとしても残りの二人はゲートに向かっている訳であり、運が善ければ二人のいずれかがゴールする事だって出来る。
逃げることが全て…ではないが、任務としてなら時に逃げることも大切だ。

「となると…俺たちも攻略が難しいが…大丈夫なのかその作戦で…」
「うん…大道寺先輩とまともに戦りあっても、勝機が薄い…だから、合格するには突っ走ること！」
誰もが勘がそうで至ってシンプルな意見だが、悪くはないと思う。
伝説の先輩相手に小細工は通じない…自分より上級生の相手には簡単に見破られることが常識だ。
向こうもそれを分かってると思う…だが、想いの力ならこっちだって負けない。
「それに、戦闘中に作戦を立て直すことも出来ないからね…」
普通なら工夫して作戦は立てれるのだが、相手が相手だ、無理がある。
一瞬たりとも油断すれば即やられてしまう。
何よりも、開始まであと僅か…時間がない。

『皆んな位置についたね、それじゃあ今から期末テストを始めるよ！』
アナウンスが放送される。
声の主はリカバリーガール、あらゆる角度や位置から、監視カメラ

のモニターで見張っている。
何処にカメラが設置されてるのかは置いといて…
『レディ…ゴォ!!!』
演習試験開始の音が鳴る。
試験官も生徒たちも呼応するかのように動き出す。
「じゃー・作戦通りに!」
飛鳥の指示に二人も頷く。
柳生は冷静な部分がある為、視野が広く隠密行動で極力相手に気付かれないよう行動するだろう。
雲雀はドジを起こしたりおっちょこちょいな一面があるが、ああ見えても諜報活動は半蔵の中でも一番に優れてる。
やる時はやる女だ、雲雀は柳生とは正反対なルートに動き出す。
飛鳥は真正面から堂々と突き進む。
彼女の目はいつになく気合が入っており、やる気が満ち溢れている。
きっと飛鳥は、やる気なのだろう…大道寺と…
あれだけ戦闘を嫌がってた彼女だが、作戦と仲間の協力があれば…

――ズドオオオオオオオオオオオン!!!

「「「!?!」」」
突如遅いかかる、虎のオーラを放った衝撃波が、辺り一面を消し飛び、岩は跡形もなく崩れて行き、広大な平地が眼に映る。
幸い、衝撃を食らわなかった彼女たちは無傷であるが、突然起きた出来事に、驚きを隠せない。
いや違う…そもそも状況が把握できていない。
なんだ?何が起きた――?
開始して数秒も経つことなく、景色が変わった。

巨大な衝撃波が襲いかかり、迷宮と思わせる石切場は今じゃ広大な平地だ。
土煙が巻き起こるだけで、物影すら見えない始末、本当に何があったんだ？
「これは……」
「柳生ちゃん！飛鳥ちゃん！大丈夫⁉」
「うん、私は問題…ないよ……
で、でも…何が…起きたの？…これって、まさか……」
考えたくない…自分たちの考えが浅はかだったのか？
こうなる事など、一切予測しなかった…
だって、こんな事が起きるなんて誰が思う？考えたくはないが…これは…まさか——

「我のことを敵と思え——
躊躇は無用、情けも無用だ、我が名は大道寺…！その胸に名を刻め‼
さぁ、行くぞ！熱き血が滾る…血祭りの始まりだァ‼」

小細工は通じない、それだけじゃない…作戦すら通じない後始末。
敵に常識など通じるはずが無く、大道寺は辺り一面の障害物を全て破壊し、土煙が晴れると、そこには大道寺が不敵な笑みを浮かべながら、仁王立ちで拳を突きつけてる姿が眼に映った。

８８話「合格するには」

この人は強い。
今まで見て来た忍よりも、ずっと強い――
焔ちゃん、雪泉ちゃん、雅緋ちゃんよりも…勢揃いになっても歯が立つかどうかでさえ、曖昧だ。
その名も大道寺先輩。
伝説の先輩という異名は伊達では無く、実力に見合った相応しい風格だ。
大道寺先輩は忍転身を既に終えていたのか、黒い学ランの制服を羽織り、背中には天上天下唯我独尊の文字が記されており、長かった茶髪は、ファサファサの黒い長髪…野生で生きて来た人間みたいだ。
腹に見える腹部の筋肉は逞しく、腹筋が割れており、そこらのプロレスラーを軽く殴っただけで相手を瀕死に追い込みそうな位だ。

先ほど、視界を埋め尽くすほどの数多い石柱を一気に崩壊させた大道寺の秘伝忍法は【天地閃乱猛虎拳】――
虎の覇気を纏った気合玉。
虎のような顔をした闘気は、獲物を狩るかの如く、牙を剥き出し、飛鳥達の方面へと真っ直ぐ向かい、周囲の障害物を破壊していったのだ。
この秘伝忍法をまともに食らっていたらどうなってたことか…タダでさえ相手はそこらのプロの忍やヒーローを凌ぐ強さを備えている。
そんなヤツとまともにやり合っても、勝算は薄い…
ハッキリ言ってこの状況、詰んだと言っても過言ではない。

「さぁ、行くぞ!!」

大道寺は覇気を孕んだ声で叫び、足で地面を蹴ると、地面はヒビの入った亀裂を生じさせ、地面が割れる。
そして凄まじい跳躍力…大道寺は三人に一気に追いついた――

「ふぇ！来たよコレどうするの!?」
雲雀が涙目で萎縮してビクビクと震えている。
目には薄っすらと涙がたまっており、先ほどまでの威勢が今では台無し。
「雲雀！俺の後ろに隠れろ！」
柳生も若干震えてはいるが、それでも雲雀だけは…と言わんばかりに、傘を開き盾に構えて雲雀を自分の後ろに避難させる。
「来る…！」
飛鳥も二人と同じだ。
大道寺先輩という強敵に挑むのは怖いし、勝ち目が薄いのは眼に見えている。
しかし、ハンデがあってあのスピード、あの秘伝忍法の高威力…
忍には効果がないのか？いや…そんな筈がない……
しかし、向かってくるのであれば、此方も返り討ちにするのみ…
「秘伝忍法――【二刀繚斬】!!」
闘気を宿した刀を、前方目掛けてやって来る大道寺に合わせ、斬撃を飛ばす。
自分から突っ込んだら腹を持ってかれ跡形もなく吹き飛ばされＫＯされるだろうと判断したから、秘伝忍法を応用して斬撃を飛ばしたのだ。
下手に動くよりかは、適切な判断といえよう…しかし――
「ふん！」
大道寺はニヤリといやらしく口角を吊り上げる。
大道寺は避ける素ぶりもなく、秘伝忍法をもろに食らう。

しかしそれは、突進して飛鳥の突然たる秘伝忍法に避けきれなかったのではなく、ワザと食らったのだ。
服が僅かながらに切れ目が入っただけであり、これといったダメージは与えれていない。
「う、嘘ッ!!?」
「これで我を倒せるとでも?甘いわッ――!!」
そして大道寺は飛鳥の腹部に掌を思いっきり押し付け、飛鳥は難なく吹き飛ばされる。
「キャアぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「飛鳥ちゃん!」「飛鳥!」
ドスン…と遠くで音が聞こえた。
飛鳥が吹き飛ばされた場所だ…遠いため姿を確認出来ない。
「ハッ!あの程度で我に勝とうなどと…笑止千万なり!
言ったはずだ、全力でかかって来い…と。
アレがヤツの全力なら、合格は不可能…一流の忍になるなど夢のまた夢の話だ」
「…!」
大道寺の軽んだ挑発に、雲雀はキッと睨みつける。
先ほど見せていた弱虫の自分はどこにもなく、拳を握りしめ思わず手を出しそうになった。
仲間を傷つけられるのも嫌だが、仲間の悪口を言うのももっと嫌だ。
純粋で優しい雲雀だからこそ怒れる…しかし、雲雀は目こそ睨みつけてるものの、怒りを露わにしなかった。
つまり、怒りを抑え込んだのだ。
「ほぉ、こりゃ良いねえ…やるねあの子…」
モニター室で生徒達の行方を…行動や様子を観察してたリカバリーガールが、雲雀を見て感心した。
大道寺の挑発に乗らなかった。
それはとても良い判断だ…相手は敵であるのなら、挑発を行う敵も

いる…
自分の感情をコントロールし、どう上手く使うかもまた、この先社会では大きく役立つ。
また挑発に乗ってしまえば、それこそ相手の思う壺だ。
雲雀…あの子は子どもっぽいと言う噂は耳にしていたが…強化パトロールか、或いは学炎祭を通してなのか、成長している。
「それに比べて…あの子達と来たら…最悪なコンビだねぇ…」
リカバリーガールがため息をつく。
その視線先にあるモニターの映像は、緑谷と爆豪チームだ。
オールマイトの距離を離れるべく、緑谷が後退したところ、後ろにいた爆豪がオールマイトに突っ込もうとした矢先に、緑谷とぶつかり、二人はオールマイトの前で色々とやらかしていた。
連携は取れない、相性は最悪、言い争い勝手に自滅…
正に最悪なコンビだ…
あの二人はきっと…緑谷がワン・フォー・オールを持って成長したとしても、爆豪が最初っから恵まれた才能を持っていたとしても、連携として役に立たなきゃ意味がない。

「他の子達は、良いんだけどねぇ…」

葉隠・障子ペアはスムーズに進めている。
相手はスナイプ…ホーミングの個性を持つ彼ならば、超圧縮おもりがあったとしても、銃弾でなら意味成さない…
葉隠は姿が見えないため、今どこにいるのかは不明だが、障子がついてるので問題は無さそう…
飯田と尾白ペアも良い感じだ。
パワーローダーの独壇場とも言えるステージを難なく突破してってる。
互いを信じ合える連携、判断力、適正力、行動力、どれも素晴らしいものだ。
特に飯田天哉――彼の成長は凄まじいものだ、保須市の事件後に何

か進展があったようだ、感心する。
「轟・八百万ペアは、良いっちゃあ良いが…何処か違和感があるねぇ…」
轟はそうでもないのだが、問題は八百万にある。
表情が何処か崩れて調子が悪そうに見える。
恐らく不安によるものだろうか…演習試験という立場で自分が如何にどう動くか…
彼女の個性なら何でも物は創り出せるし、役に立つのも幅広い…筆記試験も学年一位を取る彼女…一体何が不安だというのか？
「まあ…ボチボチって感じかねぇ…あっ、柳生が動き出したね」

「秘伝忍法――【氷の足】!!」
柳生の頭上から巨大な烏賊が出現する。
その烏賊は大道寺をなぎ倒すかのように、氷を纏った無数の足で、鞭のように頑丈な触手が大道寺に襲い掛かる。
誤解を招くようだけど、これは戦闘だ。
決していやらしい意味ではない。
「甘い！――喝ッ!!」
「何ィ!?」
大道寺は軽く喝を入れた覇気を放つと、烏賊の触手全てが吹き飛ばされ、柳生も軽く吹っ飛ぶ。
まるで巨躯の獣が大きな雄叫びを上げたかの咆哮に似た気迫。
「次は…」
「忍兎ン！お願い、救けて！」
雲雀が相棒の兎を呼ぶと、何処からともなく金斗雲に乗った兎が駆けつけてくる。
大道寺は「来たか…」と小声で呟くと、忍兎に視線を戻す。
忍兎がこちらに頭突きをかましに来る、大道寺はその頭に拳を入れ

る。
ギュムッ！とした柔らかい感触が拳に伝わり、痛くはない。
そして案の定、忍兎は跡形もなく吹き飛ばされる。
「ふっ…獅子は兎を狩る…とはこの事よ…」
大道寺はフッと鼻で笑い、雲雀に視線を戻すが…
「む？居ない…だと？」
先ほどまでそこに居たはず…
まさか…
「囮のために呼んだのか…!!」
なるほど、これは一手やられた。
危機的状況になった雲雀は、ただ単に忍兎を呼んだ訳ではない…
忍兎を敢えて囮にしたのだ。
そうだ、闘うだけではない…時には知恵を使わなければ勝てない敵もいる。
不覚。
まあ良いだろう…しかし、雲雀は何処にいるのだろうか？
周りを見渡しても見つかる気配もない…だが気配は確かに存在する…
この近くにいないとすれば…一体？
「……ッ！まさかヤツ――!!」

石柱の障害物が無くなったこの場所で、隠れながら行くのはまず不可能だろう…
しかし、大道寺が強すぎる余り、彼の動き一つ一つに土煙が立ち上がる。

幸い地面に砂が混ざっている、そのお陰で視界が悪くなるのは好都合だ。
「早く！早く！」
雲雀は柳生を背中に背負いながら走ってゲートまで近づいて行く。
大道寺が本腰入れてこちらに向かって来たのは、作戦がどうであれ願ったり叶ったりだ、成功した。
後は、如何にどう大道寺から振り切れるのかが重要だ。
超圧縮おもりのハンデがあるとは言え、相手は化け物クラス…敵なんて生易しい存在な訳がなく、妖魔と呼んでも過言ではない相手だ。
「すまん、雲雀…俺としたことが…」
「ううん、謝ることじゃないし全然……
モタモタしてると、倒されちゃう…」
「案ずるな、我もう此処に来たり――」
「へっ!?」
「なぁッ――?!」
後ろから声が…振り返れば、当然そこには大道寺の姿が――
「やるな…だがこれしきの程度、我には通用せんぞ！」
大道寺は雲雀の正面へ回り込むと、腹部目掛けて拳を入れる。
飛鳥の時も同じだが、秘伝忍法を使わずしてのこの威力、恐れ入る。
「アァッ！」
「雲雀！」
雲雀は大道寺の攻撃を受けたことにより、簡単に吹き飛ばされ、背負ってた柳生を手放してしまう。
そのためか、柳生も同じく吹き飛ばされる形となった。
「半蔵の忍学生よ、貴様らの実力はそんなものか!?
甘い、温い、浅い！もっと、命を燃やせ、命を削れ、我の魂にぶつけてみせろ、我は死の美を求める――!!」
地面に打ち付けになった、負傷した仔兎のような雲雀。
雲雀が傷を負ったことに、怒りを燃やした目を宿す柳生。
だが、私怨で大道寺に、勝てるものなら誰だって苦労はしないだろう…柳生も高ぶる怒りをなんとか抑え込み、大道寺を睨みつける。

（雲雀を…!!いや…俺が大道寺先輩とまともに戦っても、勝ち目はない……
『コレ』を使うのも気が引ける…何よりコントロールが出来ない分、雲雀が近くにいる…アレを使えば大道寺先輩に攻撃が通じるとしても…雲雀を巻き込むことは出来ない――！）
柳生は悔しそうな表情で、眼帯に触れる。
禁術を解放しても良いが、周りを巻き込むことは論外…
例え雲雀の相手が飛鳥だったとしても、最も嫌悪する爆豪だとしても、セクハラをして来る葛城だったとしても、仲間を巻き込むことは出来ない。
こんな状況で冷静な分析をするのも…いや、こう言う状況だからこそ冷静でいなければならない。
相手が強いのは分かる…だからこそ、冷静になり他に勝つ方法を…目的を達する方法を考えなければならない。
「さて…どうした…ものか」
大道寺相手に、並みの秘伝忍法は使えない。
忍のスキル、小細工も通じない。
囮は雲雀で検証済みの為、二度は掛からない。
そもそも、大道寺を相手にしなければ先は進めないのでは？
パワー、スピード、耐久性も群を抜けている。
自分たちより格が上…忍の世界にはこんな猛者がいるのか…
あらゆる思想が連鎖するように自然に浮かび上がり、気が遠くなる。
どうしよう、勝てる気がしない――
「だが…このままそう簡単にやられる訳にはいかない…」
勝てない相手だからといって、やられる訳にはいかない。
自分が忍の社会に貢献し、世界に羽ばたくなら、きっとこういった理不尽な出来事が山ほど出て来るだろう…
妖魔討伐なんて一番に挙げられてる例だ、此処で躓いたままでは一流の忍になれる訳がなく、亡くなった妹に会わせる顔もない。
だから、これしかない…

「雲雀…大丈夫か…？」
「柳生…ちゃん…うん、雲雀は…大丈夫……」
柳生の気配りに、雲雀は大丈夫と頷いた。
柳生の決意を宿した目を見つめた雲雀は、柳生が何をやるのか…華眼を持つ彼女には、柳生の考えてることが何となく理解した。
その上で、雲雀はコクリと頷く。
柳生は番傘を杖代わりにして起き上がり体制を治し、雲雀はジャージについた汚れを払い、立ち上がる。

――ほう、良い眼だ…悪くない。
大道寺は不敵な笑みを浮かべる。
それは、二人が立ち上がったからか、それもあるが…一番の理由は決意を固めた二人の眼つきだ。
自分たちが危機的状況に陥りながらも、負ける気など微塵もなく、抗い続けようと、武器を手に取る。
命を削り、燃やし、死の美を極めんばかりに歯を？きだす。
懐かしい…昔、竜型の妖魔と戦った時以来だ…
例え自分たちより上の人間がいたとしても、それでも立ち向かう…
コイツらはよく分かっている。
忍には当然、自分たちより上の人間など数多く存在する。
当然、大道寺より上の忍など、半蔵や小百合を除いてもゴロゴロ…
それこそ数が数えきれない程に存在する。
世界は広い…だから、その中で忍は輝いていく。
まるで夜空に輝く無数の星のように、銀河に輝く星のように、忍は存在する。
自分たちよりも実力が上な忍がいるからこそ、時に任務で強敵と鉢合わせになることもある…
この試験は、その体験版と言っても過言ではない。
だから、大道寺は彼女たち三人と相手するには丁度良い適材する人物なのだ。
この世は自分たちが思ってるほど、そう甘くはない…

だから強く生きなければならない…弱肉強食の世界で生きてきた大道寺だからこそ、強くなることが、強く生きることが出来たのだ。
（勝てないと分かっておりながらも、あくまで勝負を選ぶか…嫌いじゃない）
さぁ、かかって来い…
その全てを潰す、真正面から貴様らの攻撃を全て受け止めてみせよう。
「大道寺先輩、一つ…忠告しておきます…」
「ん？何だ？」
「俺たちの実力では、先輩には勝てません」
そりゃそうだ。
何を今更…なんて、周りにいる忍達なら嘲笑っていただろう…
大道寺の表情は変わらない…何が言いたいのだ？
「けど…だからこそです…」
柳生の隣にいる雲雀が口を開く。
突然喋り出した雲雀に反応する大道寺。
「俺たちは、負けるつもりもありません…」
「ほぉ…！」
面白い。
なるほど、そう来たか…
この状況でまだ、それを言い切れるか。
勝てなくても、負けるつもりもない…至って極シンプルな言葉だが、嫌いじゃない。
此奴らの目はまだ死んでいない…
いつ振りだろうか？
ここまで自分の血が騒ぐのは…
凛先輩の時以来か…久しい…あの人のことを思うと、今までの記憶や思い出が昨日のように鮮明に蘇る。
しかし今は試験中だ…今は思い出に浸ってる場合ではないと、軽く首を振る。
何にせよ、ここまで自信満々にそう言われたら、此方もそれ相応な

応えを返すしかない。
「答えは答えで返す…それが世の中の礼儀だ…
良いだろう、受けて立とう…！来い!!」
二人まとめて相手にしてやろう。
本来ならば三人な筈だが、肝心なリーダーである飛鳥は今はいない…気配も感じない…恐らく気絶してると見なして良いだろう。
大道寺の強者の笑み…しかし、その笑みも時には崩れることもある。
「行くぞ雲雀…」
「うん、柳生ちゃん！」
二人は一気に気力を高める…
ふむ、気力の上昇…ん？
「因みに…普通の連携とかじゃありません…」
「こういうの…あまりやったことがないから、成功できるかどうかも分からないけどね…！」
「何…？貴様ら…」

――まさか。

「はぁあぁぁ！秘伝忍法――【薙ぎ払う足】!!」
「秘伝忍法――【忍兎でゴロローン！】」

柳生の頭上に又しても巨大な烏賊が出現。
雲雀は倒されたはずの忍兎を召喚させる。
どこからどうやって来た…なんてツッコミは控えめに…
巨大な烏賊は、触手を上手く使いして殴りかかり、忍兎は雷を操り、大道寺ではなく、烏賊の触手に電撃を与える。
烏賊は氷ではなく、雷を纏い、電撃を纏った強靭な触手で、一気に追い立てる。
「合体秘伝忍法――【烏賊の蒼雷】!!」

巨大な烏賊に巨大な雷を纏う合体技。
これは流石の大道寺も驚きを隠せず、そのまま顔に出してしまう。
まさか、合体秘伝忍法を使って来るとは…
凛が居ない間、今まで孤独で一人で生きて来た大道寺からは考えられなかった発想だった。
――合体秘伝忍法。
秘伝忍法同士が合わさった忍術。
相性が良かれ悪かれ関係あらず、秘伝忍法であれば、通常の忍術を上回る強さをを解放し、比べ物にならない威力を発揮することが出来る。
しかし、秘伝忍法同士の合体を行うには相応なる体力と気力が必要なのだ。
成功できるかどうかも、未熟ならば成すことは不可能。
「フッ…初かもな…合体秘伝忍法を使う忍を目の前にするのは…」
何度も言うが、大道寺は強いゆえに年齢的にはもう大人だ。
留年をし続けてる為、当然忍社会に出ている筈が無く、凛以外の忍と闘ったことなど数人しか居ない…
相手にしてるのであれば、せめて野生に生きてる猛獣くらいだ…
「だが、敢えてこれを受けよう…
合体秘伝忍法…それを真正面からぶつかるのもまた一興だな…!!」
馬鹿げてる。
そう言われてもおかしくはないかもしれない…
秘伝忍法さえ使えば相殺だって出来るだろうに…直接受けに行くとは気が狂ってる…
そう思われても仕方がない。
しかし、皆んなは知らない…これが、大道寺の強さだと言うことを。
どんな圧倒的な力を前にしても、心が折れぬ限り人は負けることはない、何度でも闘うことが出来る。
半蔵学院に入学した時、初めてそう教えてくれたのが凛先輩だ…
あの人がいたからこそ、今の自分がいるわけで、自分が強くなれた

のだ。
合体秘伝忍法と言う驚異的な力を前にして、自分が立っていられるか…
もし自分がこれを前にして受け止めれば、自分はそれよりも上…強いことが証明される。
これは強者の余裕でもあり、大道寺にとっての…自分への挑戦でもある。
此処は試験だ、飛鳥たち三人を試験する立場だ。
だが自分も留年生である立場…自分も半蔵学院の学生だ、少しくらいの我が儘、目を瞑ってくれないだろうか…
電撃が体全身に伝わる。
烏賊の強靭な触手は、大道寺に殴りつけるかのように、何度も何度も触手で全身を打ち付けて行く。
強靭な触手＋強力な電撃…この2コンボはとても相性が良いと言える…
秘伝忍法同士であれば合体秘伝忍法は使えるが、相性によっては更に上に行くことも出来る。
流石の大道寺もこれはキツイのか、効いている。
辛い表情を立てており、激痛を堪えている。
合体秘伝忍法…脅威的な力だとは認識していたが、まさかこれ程とは…下級生…ましてや一年生にしてこの威力、賞賛に値する。
だが――
「時間は…切れたようだな」
巨大な烏賊は消え失せ、忍兎も消えた。
今この場にいるのは、柳生と雲雀二人組のみ…
二人の合体秘伝忍法をまともに食らった大道寺は、息が荒く、ボロボロではあるが、体勢を崩すことなく、一歩も下がることなく、立っている。
普通の人間ならあれを喰らえばあの世行きは確実だろう…
プロヒーローや忍でも、最悪死んでしまうケースの高い高威力を秘めた忍術…それを、大道寺は…

「まさか…アレを食らってまだ…」
「あれ？もう…立てないや……」
柳生と雲雀、二人は全ての体力を秘伝忍法に注げたのか、それとも合体秘伝忍法による疲労感か、どちらにせよ二人は意識が無くなり、目を瞑り倒れてしまう。
気絶。
息もあるし乱れていない…至って正常だ。
命に別状はない。
大道寺は医療の知識に関しては、一般人と比べて半歩劣るが、常識な範囲は身につけてるので問題ない。
大道寺はゆっくりと二人に歩み寄る。
――惜しかったな…
二人とも合格に値する位、素晴らしかった。
しかしこれはルール、ルールもまた勝負の一つ…
二人が如何に勇敢だったとしても、全員気絶した以上、タイムリミットが来るまで待つしかない。
本当なら気絶していれば敵に簡単に殺されるので負けなのだが、ルールの中に「気絶したチームは負け」なんてものは一切書かれてなかったので、待つしかない。
時間…そう言えばどのくらい時間が経ったのだろう？
『報告だよ、条件達成最初のチームは轟・八百万チーム！』
ふと疑問の念を抱いてるとアナウンスが流れる。
最初に条件達成したのは、推薦組の二人だ。
条件達成すれば、ああ言った放送が流れるのか…
まあ別に問題はない、こちらは三人とも片付いた…後は時間を待つだけだ。
残り時間を見てみると２０分もある。
暇だな…どうするか…気絶してる三人をロープやら何やら捕縛出来そうな物を探して拘束するか…
しかしそれらしき物はこの場所にある筈がなく、残念ながら三人を捕縛するのは無理そうだ…

なら気絶から回復したところまた再戦すれば問題ない…
大道寺はゲートの方に視線を戻す。
ゲート付近には当然誰もいない…再びゲートの方へ向かうか…と、足を出したその途端、少し引っかかることがあった。
（本当にこれで良いのか……？）
足を止める。
根拠のない疑問に、彼女は後ろを振り向く。
その視線の先は飛鳥の方向だ。
（……アイツ、あんなに弱かったか？）
確かあの時、我は飛鳥の腹に思いっきり拳を入れた。
超圧縮おもりで攻撃は半減されているため、食らって気絶したとしても、そこまでか？
いや、違う…何か可笑しい…
あっ、そう言えば――
雲雀にも同じく力を入れた筈だ…しかし、ヤツは耐え凌いだ。
可笑しいぞ？
雲雀が耐えれたのであれば、飛鳥も…
人によって変わるかもしれないが、飛鳥も雲雀も変わらない筈…ましてや雲雀は一年生、飛鳥は二年生だ…
大道寺の一撃を食らった雲雀が立てれたのに、飛鳥だけが気絶したままというのも可笑しい…
しかし現にヤツはこちらを攻めてこない…
あの時から一度も姿を現していない…
気配は…感じない。
いや、待てよ？
気配が感じないのは、気絶してるからであり…
ん？
「飛鳥…お前まさか…」
目を細めて飛鳥の吹き飛ばされた方を見る。
しかし、飛鳥の姿はどこにも見当たらない。
障害物が一切ないこの場所に隠れるものは何処にもない、仮にあっ

たとしても気配で簡単に探ることが出来る。
周りには何もないのに…飛鳥の姿が一つたりとも見当たらない。
一応再確認としてゲートの方に振り向く。
しかし、やはり当然というべきか…飛鳥の姿が見当たらない。
と言う事は…
「待て、ではヤツは今…何処にいるのだ？」
ゲート付近にいなければ、見渡す景色にも、何処にもいない。
おかしい…ステージ以外の場所は柵で覆われてるし、仮に出ようにしてもリカバリーガールが報告を入れる筈…しかし、リカバリーガールから不正行為による宣告もないし、あの老婆は目が鋭い、見落とす筈がない。
飛鳥は生真面目な性格だから、不正行為は元々考えられない事だが…
じゃあ何処にいる？
待て待て…そもそも気配すら感じないとは、どういう――？
考え事をしていると、地面から何か気配を感じる。
気力…忍による独特な気配…これはまさか…
「地昇竜!!」
ドパァァァン！
「――ッ?!」
突然、地面から…大道寺の足元から現れた少女は、刀を剥き出しにして大道寺に攻めに来た。
大道寺は躱すことが出来たものの、僅かながらに反応が遅れた為、飛鳥の刀が頬に掠る。
地面から突然…これは…コイツは――
「柳生ちゃん、雲雀ちゃん…ごめんね、そしてありがとう…もう大丈夫だよ、私が来たから!!」
飛鳥、ここにて再登場。

脇差しに納めてた刀を手に持ち、地面から飛び出るように出て来た…

飛鳥が突然やって来たことに驚いたが、一番驚いてるのは…飛鳥が地面から現れたことに驚いた。

地面から現れたという事は土遁の術？

違う、もしそうであれば気配は感知出来る。

昔サバイバルで生きて来た自分は、野生的な勘を身に染み付いてるので、簡単に見破る事が出来る。

地面から何か来る…そこは分かってはいたが、反応が遅れた。

そもそも、土遁の術であれば直ぐに気付けるので、土遁の術ではない…

いや、これは遁術――

「私の術は土属性ですから…」

土属性による攻撃…それならばあの攻撃に納得がいく。

土に紛れるのみならず、気配を完全に消す事が出来る忍術…

大道寺の察知能力からは完全に隠しきれることは出来ないが、それでも効果は充分に値する。

戦闘では気配を消せば違和感を生じるので直ぐに見破れるが、離れた場所から気配を消すのはとてもいい名案だ。

一度標的を見失えば、相手が何処にいるのか…分からなくなってしまうからだ。

「不覚…又しても一手やられてしまったか…」

頬に流れる血を、親指で拭う。

飛鳥から放つ気はやけに高く、先ほどとは違う…

緑色のオーラが視可出来る程なのだから…

「面白い、来い飛鳥！」

「……大道寺先輩、さっきは簡単にやられたけど…次は…そうは行かないからね？」

「何？――ッ?!」

飛鳥の意味深な発言に眉をひそめる大道寺。

しかし、飛鳥が息をついた途端、その気は最大骨頂にまで達し、緑

色のオーラが彼女を包み込む。
「秘伝忍法を使用するには、体力が必要なんだ……だから、私はずっと溜めてた…この時のために……」
ポニーテールを止めてた白い紐は解かれ、髪がストレートに下される。
緑色の闘気は疾風の如く風を纏っている。
刀にも闘気が纏っており、空気を切り裂くかのように思わせるその気は、流石の大道寺も冷や汗を垂らす。
「……真影…か」
これぞ、真影の飛鳥。
この姿は、かつて蛇女子学園で道元が召喚した妖魔・怨楼血と戦った際に、超秘伝忍法の力を借りて、覚醒したもの。
紅蓮の焔、氷王の雪泉、そして…真影の飛鳥。
真なる影…それは彼女のことである。
飛鳥は、柳生と雲雀が戦ってた間…ずっと気力を高めていたのだ。
未熟な自分では覚醒することなどまず不可能…
しかし、気を高め、体力を温存すれば覚醒する可能性がゼロではなくなるのだ。
高めた気を一気に解放すれば、覚醒する事が出来る。
頭を使う彼女ではないが、戦闘になれば闘うたびにセンスが輝くのは、爆豪に負けず劣らずだ。
「行きますよ…大道寺先輩!!」
飛鳥が叫ぶと、大道寺はつかさず殴りかかる。
ハンデを背負ってる上での本気の大道寺。
殴りかかる速さも、先ほどより上昇している。
飛鳥は大道寺の拳を食らう。
だが…その途端飛鳥の姿は消えた――
「なッ!?」
残像。
あの大道寺でさえ目にも留まらぬスピードを解放する飛鳥。
周りに空気を切り裂く音が聞こえ、流れが読めない。

速すぎて、何処にどういるのか…気付けば飛鳥の残像が何体も見える。
まるで影分身を行なってるかのような忍術…
影分身とは違うが、しかし残像をこれ程までに出すのは見た事がない…
昔の凛よりも強い…そう断言しても良いだろう…
「たあああああぁぁぁぁああああーーーーーーーーーーーー!!!!」
大きな叫び声に、大道寺は後ろを振り向く。
そこには、二つの刀を振るい掛かる彼女の姿。
「…見事だ――」

「はぁ～…やったあああぁぁ…」
大道寺は腕にハンドカフスを装着されており、飛鳥はへろりと座り込み、解かれた紐を結んでいる。
『飛鳥・柳生・雲雀チーム条件達成だよ!!』
勝負はついた――
アレでもまだギリギリな方だ。
もし大道寺先輩が超圧縮おもりを装着していなければ、確実に避けられていたに違いない。
勝った…訳ではないが、隙が出来たところを突き、ハンドカフスを装着させたので、この場合完全に勝ったとは言い切れない。
しかしそれでも、ルールはルール。
条件に従うのが試験官の務め、飛鳥は気絶してる柳生と雲雀を見つめ、物申し訳ないような顔で見つめていた。
「二人に…酷いこと、させちゃったかな?」

これは作戦ではない。
それは分かってる…しかし、自分の為に胸を張り、命を削ってまで大道寺先輩を止め、時間稼ぎとして戦ってくれた二人には感謝しているが、二人が傷ついたことに変わりはない…
これが自分が建てた作戦ではないにしても、自分から大道寺先輩を引き剥がしてくれたことに変わりはない。
「案ずるな…貴様の所為では無い…」
今まで黙っていた大道寺が口を開く。
飛鳥は悪く無い、言われてみればそうだ。
これが飛鳥自身による作戦なら、戦場とは言え謝罪しなければならないだろうが、これは彼女達二人が、覚悟を決めての行動…
責められる要素も無ければ、責める理由もない。
むしろ、この時に出る口は…感謝でしかない。
飛鳥がいなければ、試験に合格出来なかった。
柳生と雲雀がいなければ、飛鳥はここまでの事は出来なかった。
信頼し、頼り、成長する。
仲間を思いやれるからこそ、ここまで持っていく事が出来た。
大道寺は、それ以来何も言わなくなった。
三人の戦いには天晴れだ。
合体秘伝忍法に、忍術による覚醒…伊達に雄英高校に在籍している訳ではない…つまり、飛鳥達の強さは此処にある。
半蔵学院こそが飛鳥達の居場所であり、半蔵学院もまた強さの秘訣だ…だが、飛鳥達にとって雄英高校はもう一つの居場所だ。
此処でしか学べない強さ…それを、彼女達は持っている。
大道寺は強い…飛鳥達よりもずっとずっと…
だが、飛鳥たちの持つ強さは、大道寺には無かった。
仲間を持たなかった自分には、自分にしかない強さを持っていた。
彼女たちも自分と同じく…
――良い仲間に出逢えたな…

大道寺は心の中でそう呟いた。
これ以上、もう何も言うことはない…ルールに従い、我は敗北した…
凛さんとの挑戦は…もう一足延びる事になるな…それも仕方ない事だ…
この世界は、勝敗が全てだ――

それから時間が経過し、演習試験は終了した。
一歩進んだ人がいれば、壁に阻まれた人、合格出来た人、不合格になった人、悲喜交々の中、期末実技試験が終了した。

――そして一方…奴らが三度、動き出そうとしてた。

「……」
「死柄木弔、また写真を…」
薄暗いバーの部屋、黒霧は死柄木の手に持ってる写真を見つめ、呆れながらもため息をつく。
その写真に映ってるのは緑谷…そして飛鳥だ。
死柄木にとってこの二人は相当憎いらしく、黒霧と漆月が見ればずっとこればっかである。
「煩え黙れ黒霧、俺が何をどうしようと俺の勝手だろ」
「相変わらず黒霧にはキツく当たるね～…そう言えば、私が入る前から黒霧と一緒にいるけど…仲良いの？付き合い長そうだね？」

「テメェも黙ってろ、壊すぞ」
ケラケラ笑う漆月に、死柄木の殺意剥き出しの矛が彼女に向ける。
しかし彼女は何ともないのか、表情を変えずにまーまーと落ち着かせる。
しかしそれを鬱陶しがるように、死柄木は腕で彼女の手を払いのける。
「うわっ、今回ばかりは本当にキレてるね？」
「それにしても死柄木弔…緑谷出久はさておき…なぜ彼女の写真を？」
「あぁ？何故って…気に入らないからに決まってるだろ…」
黒霧の言葉に聞く耳を持とうとせず、二枚の写真を握りしめる。
くしゃくしゃと音を立て、死柄木は目を細める。
違う。
本当は違う、なぜ忍である彼女が気になるのか…
気に入らないのなら全部壊せと先生から教わった身だが、自分でも分からない…
ただ飛鳥が気に入らないとか、そういう単純的な問題じゃないんだと思う。
何か他にも…別な理由があるんだと思う…
忍そのものは気に入らない…不愉快だ、自分の計画の障壁になるし、邪魔な存在でしかない。
では、何故飛鳥だけ別なのだろうか？よく当たるのだろうか？
それが分からないのだ…無性に殺したくなってしまう、嫌がらせすら考えたくなってしまうほどに…
緑谷出久と何か似た物を感じる…それが何なのかすら、分からない…
分からないからこそ、怒っている。
二人のことも、オールマイトのことも、ステインのことも…
何でアイツが良くて俺は良くない？所詮気に入らないもの壊してきただけだろ？
なのに、この天と地の差はなんだ？

いや、今は二人のことも、ステインの事も考えたくはない…

――コンコン

ドアからノックの音が聞こえる。

三人ともドアの方へ視線を向ける、此方の返事を待つことなく、開く。

そこには、裏社会で名の知れたブローカーが立っていた。

「やあ、元気にやってるかい？連合諸共、久しぶりだな」

「あっ、ブローカーおじさん！久しぶり！」

「おっ、漆月ちゃんお久しぶりだなぁ」

漆月が手を振って来るにブローカーも思わず手を振る。

ブローカーも敵連合との関わりを持っているため、忍のことは知っている。

しかも、あの忍商会と良い縁があるそうで、魔門とは定期連絡をしていたり、同じ商売仲間、忍の案件についても手を出し協力してるとのこと。

「こっちじゃ連日、アンタらの話で噂になってるぜ？

何かデケェことがあるんじゃねえかってさ、そんで死柄木さん、アンタらに会いたいって輩が３人――」

「で？ソイツらは？」

死柄木は殺気を孕んだ声でブローカーを睨みつける。

写真は原型を保つことなく、粉々になる。

そして横一列になるよう扉から三人、…悪意を培う人物が薄暗い部屋に入ってくる。

「うわあ！此処が基地ですかぁ？手の人ステ様の人だよね？ね?!

水色の髪の子カァイイねぇ！」

右側に立つ少女は、学生服を羽織り、手をブンブン勢いよく振る。

「ねーねー！ここなら好き勝手暴れても良いんだよね？ボクの嫌いなヤツ、いっぱい殺しても…良いんだよね?!

任務以外に人殺しても、良いんだよね!?」

左側に立つボクっ娘少女は、紫色の和風を着用し、胸部には硬い鎧で固定され装着している。
背中に血に染まった大鎌を背負ってるのが特徴だ。
「やっぱ生で見ると気持ち悪いなお前は……」
真ん中には顔中つぎはぎになってる男性…
漆黒の色をした服とズボン、そして髪はボサボサ…

敵連合は敵と忍が集まり交わる事により、ヒーローと忍が絆を深めて行くように、敵と忍も絆を深めていく。

「ねー！あのさ、私も仲間に入れてよ！敵連合！」

――退ける度に、悪意を蓄え、力を増して、強くなる。

８９話「ＴＨＥ・ショッピング！」

「おい黒霧、コイツら三人を飛ばせ…俺の大嫌いな奴がトリプルセットで来やがった…」
よりによってコイツ等か…
相手にするのさえ面倒だ、厄介な三人と話し合うなんて御免だ――
「ガキ二人と、礼儀知らず…」
「アァッ？」
「は？」
「ヘェ？」
死柄木の不快な発言に三人は反応する。
目の前にいるのに対して軽々しく嫌いな人間だなんてよく言えたものだ…
「まァまァ…
落ち着きましょう死柄木弔…折角三人ともご足労なさったのですから…話だけでも聞いてみては？
何よりも大物ブローカーの紹介…しかも抜忍とは言え忍の実力を持つ者がこちらに来てくれるのは本望だ…
少なからず無駄では無いはずですし、我々の戦力になるに違いはないかと…」
荒ぶる雰囲気になったところ、空気の読みが良いのか、黒霧がこの場を制する。
言われてみればそうだ、こっちは戦力が欲しい…更に欲を言えば忍も欲しい…
向こうは忍の力を備えているのだ、こちらも補充しなければ、打倒オールマイトは無理だろう…
「へぇ…皆んなクセ者って感じがあるねぇ、何だか楽しくなって来たよ！早くも仲間が増えるってね！」
「まだ入れるかどうか、決めた訳じゃ無いだろうが……俺の考え無しに決定するな」

早くも敵が此方側に来てくれた事に歓喜の声を上げる漆月に対し、勝手に決めつけられた事に腹を立つ死柄木。
しかし漆月は死柄木がどれ程怒ろうと、殺気を剥き出されようと、罵倒されようと、怒りの表情を見せない。
そんな二人を御構い無しに、ブローカーは一歩前に出る。
「まあ何でも良いが…紹介するよ。
先ず此方の可愛い女子高生、名も顔もメディアが守ってくれちゃってるが…
連続失血死事件の容疑者として追われてる身だ…まあかなりの殺り手故に経験も積んでる…個性から考えて悪く無いぜ、君らの戦力としては大きいはずさ」
「私、トガです！『トガヒミコ』！敵連合に入りたいです！何やらここには、秘密があるって聞きました！」
彼女の名前はトガヒミコ。
夏だというのに、袖の長いブレザーを羽織り、汗一つ垂らす事なく語り出す。
因みに秘密…とは忍のことだ、抜忍・漆月に他の忍たちのことを、ここに連れて来るまでブローカーは敢えて伏せていたのだろう…
「生きにくい世の中ですよね、でも私ね、ステ様みたいになりたいの！
ステ様を殺したい！だから入れてよ弔くん、ね？お願いだよ！」
「意味が分からん、ハッキリ言ってイかれてやがんなコイツ…破綻者かよ」
ステ様になりたいとか、ステ様を殺したいとか…
ステ様ってステインのことか？ステイン信者か、ダメだこりゃ…話が通じる気がしない…
そもそもこう言う話の成り立たない人物を操るのには一苦労する…
「会話は一応成り立つよ、きっと役に立つ…そしてもう一人のこの彼女…
三ヶ月前、とある悪忍学校を抜けた忍…漆月と同じく抜忍の身さ。
死柄木さんの交渉とか、話が通じ合わなかったら、漆月ちゃんに頼

むのも良いんじゃ無いかな？」
成る程…忍同士なら分かち合う事が出来るかもしれん…
ブローカーの軽い紹介に、ボクっ娘少女はヘラヘラした笑みを浮かべて軽くぺこりと頭を下げる。
何だ、コイツは案外まともそうじゃ――
「弔くん、漆月ちゃん初めまして！
ボク、『鎌倉』って言うんだ！ある理由で学校辞めちゃったけど…そこは気にしなくて良いからね！
ステインが所属してた組織なら、ステインみたいにボクもいっぱい、いーーっっぱい暴れても良いってことだよね！
ボク、嫌なヤツらを殺したいんだ！ボクも仲間にいれて！弔くんや漆月ちゃんが嫌いなヤツもボクが殺すからさ、ね？ね！」
抜忍・鎌倉――
前言撤回、コイツもトガと同じく血の気盛んなイカれ野郎だった。
背中まで垂れてる長い白髪に、海のように青い瞳、そして服の所々には赤い鮮血…恐らくつい最近、騒動を起こしたんだろうな…
「漆月、お前相手にしてやれ…俺はこう言うのはパスだ…」
「はいはい、適当な事は全部他人に押し付けるんだから……」
死柄木の悪いクセ…
自分のメンドくさい事は大体、黒霧や漆月に押し付ける。
自分の調子に合わないヤツはスルーするのだろうか？
あんなに仲間を欲しがってた死柄木が…多分ヒーロー殺しの一件だと思う。
ステインの初対面では、彼は仲間に引き入れるヤツなら何でも良いって感じがあった…
でも、ステインと通じて分かったのだろうか…
自分の考えに賛成しない敵もいる、イカれた人間がいる、それらを知った死柄木は、仲間に入れるなんて今はノリ気じゃないのだと推測できる。
「そんで最後にこの真ん中の彼だ…
特にこれと言った事件を騒がしてる訳じゃないし、目立った罪を犯

した訳じゃないけど、ヒーロー殺しの思想に大きく賛成してる」
「ふん…」
ツギハギ男は鼻で笑うと、周囲を見渡す。
そしてトガと鎌倉、死柄木を見比べたり、髪をボサボサと掻いたりと、落ち着きがない。
「なあブローカー…ここの組織大丈夫なのか？
ちゃんと計画とか、そういうの考えてるんだろうな？
それと何だ？忍…？悪忍？そんなヴィランがいるのか聞いた事ねえな？
つーかまさか…だとは思うがこのイカれ女二人、敵連合に入れる訳じゃないだろうな？」
「イカれ…」
「女ァ？」
それ私達に言ってるの？
という視線が半端ない、ツギハギ男はしっかりしてるのか、組織の向上や、これからの計画…組織の理想…それらを考えてる上での発言。
この男が二人を入れたがりたくない理由は、こう言った戦闘狂は紛れなくこちら側にも害が及ぶから…悪影響を与えるのでは意味がない、だから二人は極力避けたいのだろう。
「オイオイ待てよ、その破綻ＪＫとイカれ鎌野郎に出来てお前に出来てない事がある…
自己紹介をしろと親から言われなかったか？まず名を名乗れ、大人だろ？」
しかし組織云々他人にどうこう言われるのはこっちも黙って居られない。
死柄木は敢えて挑発するよう指を差し向ける。
すると男はしばし無言になってから…口を開いた。
「俺の名前は『茶毘』だ…
今はこの名前で通してる……」

「オイ通すな本名を言え…」
「そん時になったら出すさ…
そもそも、本名ってのは案外人に明かしちゃいけねーのさ…いつ誰がどこでチクるか分かったもんじゃねえし、呼ぶならネームドで充分だろ……
まあ何がともあれ…ヒーロー殺しの意思は、俺が全うする――」
――荼毘。
ヒーロー殺し・ステインの意思に感化された男。
警察やヒーローから追われてる身でもなければ、重罪犯や逃亡犯でもない…そこらにいるごく普通な悪党だ。
罪は犯してないが、これから罪を犯すのだろうか？
見た所、三下のような臭いはしない。
「……はぁ」
死柄木のため息が、嫌に響く。
静まり返った空間…死柄木は首を掻き毟る。
「あのさぁ…はぁーー…なんでさ、皆んなヒーロー殺しの話すんだよ…
どいつもこいつも、口を開けばステイン、ステインって…お前ら病気か何かか？あァ？なァ…」
ガタッ。
死柄木は椅子から立ち上がる、それを見た黒霧は目を細める…漆月もここに来てから月日が経っている…
だから、死柄木が何をしやらかすのか…何をしようとするのか…いち早く理解した。
「あーあ、良くないなァ…良くない…
気分が良くない!!」
次の瞬間。
ドス黒い殺意が三人に向けられる。
荼毘、トガ、鎌倉は早くも迎撃態勢に入る。
荼毘はポケットに突っ込んでた手を出し掌を向け、トガは長袖の中

から折り畳み式のナイフを取り出し、刃物を向ける。
鎌倉は背中に納めてた赤黒く染まった大鎌を取り出し、「きゃはっ！」と乙女らしい声を出しながら死柄木の首目掛けて刈りに掛かる。
「――ダメだお前ら…消えろ」
死柄木は両手を使って三人に飛び込む。
死柄木の手に触れた物は全て崩壊する…危険的能力を、あの三人に向け、漆月は死柄木のカバー＆フォローをするべく、納めてた鞘を抜き、刀を取り出し鎌倉の鎌を弾くよう振るう。
「「……」」
「……」
しかし、何方の攻撃も、当たることは決してなかった。
茶毘、トガ、鎌倉、死柄木、漆月の攻撃は、黒霧の個性によって虚無と化す。
それぞれの空間に、五人の手がバラバラに向けられている。
あの五人の攻撃をああも容易く、簡単にワープを使って無害にするとは…
「死柄木弔、落ち着きましょう！
我々の敵は、彼らではない…また、貴方達も、我々の敵ではない…そうでしょう？
それに組織の拡大には、彼らの力は必須…
今ヒーローと忍が結束を固め、双方が成長してる以上、我々も成長しなければならないのですよ…
貴方が望むままを行うのなら…ね」
黒霧の言葉に、漆月、トガ、鎌倉は渋々と武器を納める。
茶毘は呆れた様子で手をしまう。
しかし、死柄木だけは手をしまわなかった…
黒霧の言い分は尤もだ。
自分たちが計画を練ってる間、ヒーロー学生や忍学生も着々と成長している。
特に成長部分を感じ取れたのが、体育祭と学炎祭か…
未知なる忍を見た、ヒーロー学生達の実力も見せられた…

一方自分たちはどうだろうか？
ろくに戦力を増やすことままならず、思い通りに事が運ばない…これ程苛つくものは無い…
それは死柄木にとっても不本意だし、さっさと計画を練ってオールマイトを殺したい。
その為には…
「我々にも、忍の力が必要になって来たのですよ…
漆月は確かに強い、先生が認め、唯一賞賛してる忍だ…しかし、強大な力も時に折れる事だってある…
一つの力だけでは限界が来る…その為にも、組織拡大は必要不可欠なのですよ…
奇しくも、注目されてる今がチャンス…
排斥では無く、受容を…弔」
黒い靄が死柄木にまとわりつく…
まるで闇が死柄木の耳元に囁くようなその光景は、見てるだけで禍々しいものだった。
「蛇女(あの時)みたく利用しなくては…全て…
彼が遺した思想も、信念も、何もかも全て…」
黒霧の囁きに死柄木は鬱陶しさを感じたのか、払いのける。
黒霧は元に戻るかのように引っ込む。
「……死柄木？」
「……煩い」
漆月の配慮に死柄木は一蹴するよう一言で片付ける。
「どこ行くんだお前…」
「どこ行くの～？」
「うるさい!!!!」
ガタン!!
荼毘と鎌倉の言葉に耳を傾けず、苛立に荒ぶる死柄木は、ドアを思いっきり蹴り飛ばす。
ガランガラン…という音が虚しく鳴り響き、死柄木はそのまま何処かへ行き姿を消した。

ドアの方へと視線が注目する。
初対面…出来れば都合よく、穏便に事を済ませたかったが、思ったより上手くいかないようだ…
「死柄木…嫌に機嫌悪かった…相当ヒーロー殺しのこと、嫌いだったんだ…」
「まあ…何が起きたかウチには分からんし、取引先にとやかくいう資格はないが…
彼はまだまだ若いねぇ…若すぎる、一言で言えりゃ子どもだよ彼は…」
「あーあ、久し振りだったなぁ…弔くんの殺気良いね、癖になりそうだよ！ボクここ気に入った！」
「ね！殺されるかと思った！」
「……意味分かんねえ、気色悪いし、ガキかよ……どーなってんだアイツの頭は」
それぞれがタメ口を吐く。
実際この三人は死柄木とは初対面だし、彼がどういう人物像なのかは知らない。
「…申し訳ありませんが、返答は後日で宜しいでしょうか？
――本当は彼も自分がどうするべきか、分かってるハズです…
分かってるからこそ、何も言わず出て行ったのですよ。
オールマイト、忍、ヒーロー殺し…三度鼻を折られた。
必ず導き出すでしょう、あなた方も、自分自身も、納得のいくお返事を……」
人の心は素直じゃないように出来ている。
自分が答えを分かっていても、納得がいかなければ、望んでる物を否定してしまう。
人は常に嘘をつくように出来ている。
素直になれないからこそ、嘘をつき、相手も自分も傷つけてしまう。
人間の愚かしき部分の一つであり、また成長出来る人間の魅力的な部分でもある。

死柄木がもし、自身の答えに納得すれば、きっと以前より断然的に成長するだろう…
ならばそれを見届けるのも、仲間の役目であり、死柄木弔の為なのだ。

時は遡り、期末試験終了した後日、教室内では組が二手に分かれていた。
筆記・実技二つが出来たもの、自信がある人、クリアしたものの納得しなかった人。
演習試験をクリアした組。
対するは、筆記試験こそは出来たが演習試験でタイムリミットを迎えて不合格となった組…
切島、砂糖、上鳴、芦戸、この四人は演習試験を合格出来なかったのだ。
それも当然、先生でも相手が悪ければ簡単に崩れてしまう。
砂糖と切島はパワーファイターとしていいコンビだが二人とも弱点が同じく、時間制限…つまりスタミナ消費が半端なく、個性による持続時間が短い為。
彼ら二人を選んだのは、お互いの弱点が共通し且つ、相手の個性をどう立ち回るかが問題となるからこそ、選んだのである。
芦戸と上鳴の二人も個性は強力なのだが、知性的な判断と適応力、それらが劣ってる分、相手は頭脳戦として攻めた来た。
超圧縮おもりなど関係なく、市街地そのものを使い、計算的に行われた策略の前で、知性の欠片も無い二人は圧倒されたのだ。
今回相手が悪かったとはいえ、気の毒だ…
林間合宿が行けないのだから。
そう――現に今四人は、この世の終わりでも見てるかのように絶望

していた。
「皆んなぁ…土産話…楽しみに…してるからねぇ…!えっぐ…ひっく……う、うぅ…うあああぁぁ…」
「あ、芦戸ちゃん落ち着いて…ね?」
今にも泣き出しそうな芦戸に、飛鳥は「大丈夫だよ」と、まるで大人が泣き出す子どもを嗜めるように、飛鳥は苦笑を浮かべて落ち着かせる。
「ああ…終わったな俺たち……」
「ああ…そうだな……」
あの熱くて頑固な切島も、今では鎮火した灰のように脆くなっている。
皆んな林間合宿を楽しみにしていたのに…可哀想だ…
「ま、まだ分からないよ…もしかしたらどんでん返しが来たりして…」
「な訳ねえだろ緑谷テメェ!この、野郎!!
演習試験クリア出来なかった者は不合格確定なんだぞ!!しかもお前、この野郎!!お前と爆豪の相手がオールマイトだってのに何で合格出来てんだよ!
相手はハンデ背負ってる化け物以上だぜ?だべ??べ?
それなのに俺たちはタイムリミットによってクリアならなかったんだ!
それなのにどんでん返しだぁ?寝言は寝て言え!来るわけねえだろうがそんな都合のいい話あったら誰だって苦労しねえんだよそう言うのは漫画の約束であってこっちは漫画じゃねえリアルであって――」
「あーあー!御免なさいゴメンなさい!分かった、分かったから!ちょっ、上鳴くんやめて胸ぐら掴まないで!ちょっ、目ん玉…やめてよ!!」
上鳴はえらくご機嫌斜めであって、頭のネジが外れたのか、興奮気味に捲し立てる。
緑谷の胸ぐらを掴んだり目潰しとか…
「でも、筆記試験で点数稼いでたら良いんじゃないかな?それに演習

試験は点数付けるとしても、クリア出来てなくても立ち回り方とか…そう言うのに評価が行ったりすれば、良いんじゃないかな？」
飛鳥の以外的な発言に、上鳴…いや四人とも目を丸くする。
飛鳥ってこんな頭いい発言するっけ？一言で二行しか言えない子だと思ってた…
しかしそれを直接本人の目の前で言ったら紛れなく二刀綾斬される訳で、口が裂けても言えない。
「よしお前らおはよう」
予鈴が鳴ると共に相澤が教室に入って来る。
1分1秒たりとも遅れることなくタイミング良く入って来る相澤先生を見て「ドラ○もんかよ」と突っ込むのは少なくはない。
相澤先生の扉はどこでもドアになってるのか？なんて思いながら皆んなは黙々と席に座り、一瞬にして相澤先生へ視線を送る。

「お前らもう既に知ってると思うが…
単刀直入に言う、今から期末試験の結果発表するぞ、一度しか言わねえからちゃんと聞いとけな」
――ドクン
胸が高鳴る、嫌に心臓の音がリアルに聞こえる。
四人は絶望に染まりきってるし、その内一人は悟りでも開いてるし…
アレ上鳴くんじゃん、このシーンはハ○キューかな？
しかし、この場の皆んなも気が引けない…
何しろクリアはしても得点基準が分からない以上、合格なのか赤点なのか…不明なのだ。
その疑問が、人の心を大きく不安にさせる。
「えー、残念ながら赤点が出た…よって
――君たち全員林間合宿に行くことになりました！」
――どんでん返し来たアァァ!!!

まさかのコミック展開に四人は涙を流して大きく叫び、上鳴は「嘘だろ？」とリアリティを出した顔で思わず席に立ち上がり、天を拝む。
緑谷が言ったことが的中するなんて…夢にも思ってなかったし、諦めていたのでこう言う展開が来ると心の底から喜んでしまう。
「筆記の方はゼロ、だが実技での赤点は五人、上鳴・芦戸・切島・砂糖・瀬呂、以上だ…」
「ええっ!?俺もっスか?!合格はしたん…ですけど…」
「誰がクリアしたら合格になるっつった、お前は寝てただろ、寧ろ峰田大活躍したのお前観なかったのか？あの後試験担当のミッドナイトからＶＴＲ観させて貰ったろ？」
クリアしたから合格、という程この試験は甘い訳がなく、行動・判断・適応・コミュニケーション・それらが評価されるので仕方ない。
何故なら瀬呂は試験中に眠ってしまったのだから…
別に悪ふざけでもないし、真面目にやってる。
理由がある――
それは、ミッドナイトの個性で眠らされてしまったのだ。
ミッドナイトの個性は『眠り香』…体から放たれる香りで強制的に眠らされてしまう個性、対人戦としてもかなり有利な個性で、使い方次第では相手を傷つけず、穏便に事を済ますことの出来る、プロヒーローからも認められる人物だ。
１８禁ヒーローというアダルトな名前さえなければ、彼女はきっとスーパースターにでもなれたのに…
瀬呂が峰田を救けたところ、眠り香で眠らされてしまった…
何分寝たか知らないが、少なくとも数時間は眠らされてたのではないか？香りが少しツンとした感じの強めだったのは何となく覚えている。
「あー…そっか、評価されてるし点数みたいな感じ…平たく言えば体育のテストみたいなもんか…うわぁなんかショックだ…クリア出来なかった人より何百倍もキツいし恥ずかしいしシンドイんだけど…」
クリア出来ずに不合格になるのならまだ分かるが、クリア出来て不

合格とは、締まらないというか、ダサいと言うか何というか…
目茶苦茶恥ずかしい。
もう穴があったら顔を突っ込んで入りたい。
しかし、赤点を取ってしても林間合宿に行けるとは夢にも思ってなかったので、此方としては嬉しい限りだ。
「そもそも最初っから皆んな連れてくつもりだったさ…
そもそも林間合宿なんてのは強化合宿なんだ、赤点取った奴こそ力つけなきゃいけないだろ？」
「本気で叩き潰すと仰っていたのは？」
「追い込む為だ。
赤点取っても林間合宿やるなんて言っても、お前らの場合、本気を出さない奴だっているかもしれねえ…そんな輩はいないとは言いたいが…まあ、嘘ついて追い込ませた方が効率的だと思ったんだ…
まあこれも所謂…合理的虚偽…！」
ハッ！と不敵に笑う相澤に又しても騙されやられたA組の生徒たち。
確かにこの方が効率的だし答えが分かってても意味がない、なら敢えて伏せておいて生徒たちのやる気と向上心を最大限に引き出す…相澤先生なりの考えなんだろう。
因みに体力測定の時も相澤は嘘をついていたので、これが初めてでは無い。
赤点組の五人は安堵の息を吐き、席に立てば手を取り合い歓喜に満ち溢れている（但し瀬呂はまだ落ち込んでいるが）。
それもそうだ、あんだけ林間合宿を楽しみにしていたのだ、結果がどうであれ自分たちにとってこれまでにない至福だ。
学校で居残りなんて、仲間外れにされる以上に痛いもの。
しかし、相澤先生の話がこれで終わったわけではない。
「ただし合理的虚偽とは言え、赤点組は林間合宿で補習やるぞ、そこん所は勘違いしないように…
ぶっちゃけ学校に残って補習より大分キツいからな、死ぬ気でやらねえと林間合宿のイベントとかに参加出来ねえかもな、そこん所ちゃ

んと把握しとけよ。
まあ分かってるとは思うがな――一応先生からの連絡は以上だ」
で、ですよねぇ～…
そりゃあそうだ。
これは学校のテストなんだから…無理はないし寧ろ補習があるのは当然だ。
夏休みにやるっていう考えはあるんだろうが、生憎雄英高校に夏休みなど存在しない、つまり飛鳥たち三人も雄英高校に在籍してる以上、彼女たちにも夏休みは無いのである。
夏休みにプールだのキャンプだの海だの遊園地など、行く暇すら無い…
悲しいことだがプロになる以上、これは避けられない道であり、ヒーローになるには険しい道を歩まなくてはならないのだ。
「んじゃ、一限の用意しろ…」と相澤はその言葉を残して教室を後にした。

放課後。一通り授業が終わり、皆んなは帰りの支度を始める。
だが帰る気配など微塵も感じない、A組の皆んなは林間合宿に向けて話し合っていた。
林間合宿は一週間みっちり、身体を鍛えるのでそれなりの準備をしなくてはならない。
強化合宿と聞いただけでなにをするのかは知らないが、準備は万全にしとかなくては、忘れたなんて済まないし、相澤先生の視線がかなり痛い…
大荷物になるため、各自生徒達は荷物を調達しなければならないのだ。
今まで親とかに頼んでいたが、もう高校生だ、やれる事はやらなくては大人にすら近づけない。

「というわけで…明日休みだしテスト明けだし…Ａ組皆んなで買い物に行こうよ!!」
葉隠の提案にクラス中が騒めき、殆どの人が賛成の意見を出してきた。
準備するならこの日しかないし、雄英のスケジュールはビッシリしてるので、準備する暇が余り無い…
そのため、狙うなら明日の休日しかないのだ。
その日に生徒達は準備を済ませる…となると、どうせなら皆んなで行った方がノリが良いし、友好関係を築くにはもってこいだろう。
但し…
「すまん、俺は無理だ」
「俺もだ、行ってたまるか…」
轟・爆豪は首を横に振る。
賛成の意見の中には必ずしも…と言う訳ではないが、大抵反対意見も出る。
いや反対は少し語弊か、行かない人も出てくる。
「なんでだよ空気読めやＫＹ男子がヨォ！轟はまあ…イケメンだし行ったとしても良い女が寄ってくるからお前は要らないけど…
爆豪！お前なんで来ねえんだよ！良いだろ別に来いよ！かかって来いよ！」
「んじゃ本気でテメェぶっ殺して良いんだな？あァ？」
「嘘ですスイマセン冗談ですホントに御免なさい調子乗りすぎましたご勘弁を…」
爆豪の爆ギレオーラ（冷静）に峰田は土下座をする。
この男にプライドという概念はないのか…
「ねーね、飛鳥ちゃん達もどーよ!?行こうよショッピング！」
「うん、私は別に良いんだけど…二人は用事とかあるの？」
「オレは特にないな…雲雀は？」
「雲雀も特に用事はないよ、それに皆んなで買い物なんて初めてじゃない？あっ、皆んなじゃないけど」
轟と爆豪が何故行かないのか理由は定かではないが、まあ何か事情

があるのだろう…
無闇に理由を探るのは良くないし、特に爆豪なら逆に殺されるので理由探りとかは絶対にＮＧ、それに行けないと言ってるのに無理やり連れて行くと言っても相手に失礼だし、行くか行かないかは個人の自由なので仕方ない。
「んじゃ行ける人だけ行くか！場所はどーする？」

翌日。
強い日差しが差し込み、夏だからかいつもより太陽が輝いてるようで、とても暑い。
最高気温は４０℃くらいか、地球温暖化の影響を受けてる為か、去年の最高気温を更新していた。
休日だからか、ショッピングモールはえらく人混みが増しており、見渡す限り波打つ海のように人が大混雑していた。
今にも誰か一人でもその海のように広がる人混みに入れば、ほぼ高確率で迷子になってしまいそうな空気…とてもじゃないが苦しすぎて窒息でもしてしまうんじゃないか？
なんて馬鹿げた妄想を浮かばせながら、飛鳥は「ほぇ～」と小さく呟き周囲を見渡していた。
飛鳥だけでなく、大体の人もこの光景に息を飲む。
こう言うショッピングなんてあんまり経験したことがないし、あるにしても大体は家族と一緒に行くものだ、保護者なしに子供同士でと言うのも、何かと新鮮なものだ。
「いやぁやっぱいつ見ても賑やかだねぇ、木椰区ショッピングモールは！」
芦戸の天真爛漫でハッチャケた声でも、人の声が飛び交い目立たない。
――木椰区ショッピングモール。

県内最多店舗数を誇る、ナウでヤングな最先端。
異形方の人間や、特殊な体をした人間にまで利用できる、信頼性の高い場所だ。
またここは男女がデートするにも相応しい場所だ、ショッピングの話題を出せば此処に行き着くのも不思議ではない。
ティーンやシニアまで幅広い世代にフィットするデザインが集まってることから、集客力が強く、老若男女が飽きる事なく気に入ってるのにも頷ける場所だ。
「なあなあ、こんだけ人多いと迷子になることあるしさ、時間決めて自由行動しようぜ！少なくとも昼飯食い終わった後が良いな、お前らもどーするよ？」
切島の提案に、皆んなも頷く。
そして纏まった意見、多数決の結果…
昼飯後…つまり一時半に目的地に集合する形となった。
昼食を取るのは此処を少し離れた場所にレストランなどの店舗が多く並んでるので、そこで取るのも良いだろうという考えになった。

少し時が経ち現在…
「緑谷くんあそこ行ってみよ？何かあるかもしれないし」
「あ、あ、うぉっす…！」
「も～緊張し過ぎだって～♪私もこう言うと所、全然こないけどさ、でも今は楽しもうよ！」
なんでこうなったんだろ…
ヤバイ緊張してるんだけど…ナニコレ？心臓がバクンバくんって鳴ってる…今僕顔赤いかな？
飛鳥さんと一緒にいるのってなんか…すごい新鮮というか…
今緑谷は飛鳥とペアになって店を見回っていた。
それには理由がある――
最初解散になった途端に「待ってました」と言わんばかりに皆んな

ペアになって何処かへ行ってしまったのだ。
残ったのが緑谷と麗日になって、最初は一緒に行動しようと言う流れになったのだが…
「虫除け～！」と突然言われて何処かへ行ってしまった…つまり、自分は一人になってしまったのだ。
迷子になるといけないし…という意味でペアを組みたかったのだが、これは仕方ないと思い少し歩いていたら、偶々一人になってた飛鳥と合流し、「一緒にペアにならない？」と言う話になったのだ。

――そして現在に至るわけで、今は荷物やしおりの必要事項に記されている荷物の入手と、バックの購入、そして服を買うべくあらゆる店舗をしらみつぶしに探しているのだ。
まあ、一人より二人…なんてよく言うし、悪くはないのだが…
視線が痛い。
雄英生だ～！という視線はもう慣れた。
学校通うのに電車とかバスとかで散々言われてるし、多分忍学科以外の皆んなも言われてるのだろう…
しかし問題なのが、雄英生と見知らぬ人が一緒になって買い物してる姿…これが何とも…
緑谷は異性に対しての羞恥心は凄いが、入学初日程よりかは耐性がついた。
昔の自分なら、お茶子と少し話しただけで顔を真っ赤にしていたが、今では良き友達として仲良く接しているし、飛鳥とも同じように接している。
しかし、こういう立場で男女一緒になって見回るのはちょっと…
飛鳥が悪いわけでもないが、周りからして見れば「オイ、アイツ付き合ってんぞ？」「可愛い、胸もデカイしスタイル抜群だ！」「リア充死ね」「僕たちもあの子達に負けてられないね」なんて言葉が所々聞こえる…
飛鳥は夢中になって気が付いてないので何とも言えないが…
そもそも爆乳ゆえにこんな美少女が僕と釣り合うわけ無いし、勿体

無いし…
なんて逆にマイナス思考に考えてしまう自分がいる。
別に付き合ってる訳じゃないのだが…ん？
付き合う…？
ここはショッピングモールであって、皆んなと此処に来てるから別にデートって訳じゃないし…
ん？あれ？デート？なんでそんな無縁な単語が出て来たんだ？
「緑谷く～ん？おーい！」
「ん？　…――うおわあああぁぁ!?!」
「うわぁ！ビックリしたぁ…何今の?!」
「あ、えっとゴメンなさい…僕全然気付かなくって…ボーっとしてて…驚いちゃった…」
「も～…驚いたのは私の方だよ～…緑谷くんそんなに緊張しなくても良いのに、せっかくのショッピングなんだから、もっと楽しくやって行こ？」
ヤベェ可愛いんですけど…！
心の中で思いっきり叫んだ。
仕草とか、表情とか、もう…いやいや、そもそも忍学科の人って大体美人が多いし…
「あっ、あそこ結構人混んでるね…」
次に目指す店、行くには人が混んでるので逸れてしまいそうだ。
ああ言うところって大体迷子になる危険性があるんだよね…って、峰田くんとかなら絶対に迷子になりそう…
それよりも峰田は一人で行動してるので迷子もクソも無いのでご心配無用。
「よーし、キツそうだけど…行こっか！」
ギュッ
「へ…？」
手首が誰かの手に掴まった。
一瞬だけ頭の中が真っ白になったが、その手が誰の手なのか、大体想像が付くだろう…

飛鳥は緑谷の手首を握り、人混みに駆け走っていく。
「レッツ・ゴー！」
「ちょっおおぉぉあああわあああおおぉぉお!?」
もはやこれは奇声と呼んで良いだろう、緑谷は何が起きたのか分かってはいるが、飛鳥の突然な行為に緑谷は又しても顔を真っ赤にする。そのまま引っ張られるように人混みに駆け、目当ての店に近づいていく。
(飛鳥さん幾らなんでも…！というか…手柔らかい…女性の手ってこんなに柔らかいんだ…って何考えてるんだよ僕！変態になるぞ?!頭冷やせボク!!)
これは異性との付き合いに慣れてない緑谷にとってハードなものだ。
急に手を掴まれるなんて、いや…デートでよく見る手を握る…よりかはマシだが…
それでも大体それに近いものだ。

というか…さ。
ショッピングモールに、手首掴まれて…
飛鳥さんと僕二人だけ…他の皆んなは見ないし気配もない…
これってさ、デート…じゃない？
デートじゃないが、デートっぽい。
しかし飛鳥には羞恥心がないのか、考えてもいないのか、飛鳥は無邪気な笑顔を作りながら、緑谷と一緒に店の中に入っていった。

９０話「嵐の前触れ」

「ねえねえ、この寝巻き可愛いよね！ハート柄の！」
「う、うん…！飛鳥さんとても似合うよ…！」
店の中は私服やら寝巻きやら、オシャレな服やお淑やかな服、小さい子供用の服、可愛いデザインがプリントされた服など、絶え間なくズラリと並べてある。
見渡す限り数えきれないほど服が売ってることから考えて本当に商売繁盛、賑やかなんだな…それもそのはず、ここは県内でも誇るべき木椰区ショッピングモールなのだから…
しかし一店だけでここまで服が売ってるとは…他の店もいっぱいあるのに…1日で終わるのだろうか？
それは置いといて…
服が似合うかどうか…か。
飛鳥は美少女なのでどんな服を着ても似合うし可愛いものだ。
恋愛ものとかだとよく口にする物なのだが、これが本当に可愛いのだ。
だって美少女が普通の服を着るだけで際立つし、その人の服だけでもうレア物だ。別に変な意味ではないけど…
犬だってそうだ。
犬は元々可愛らしい生き物だが、服を着せるとどうだ？
新鮮さ故に可愛さが増し、愛着が強くなる。
犬には服など無粋だし、着せるのは単なる人間のエゴに過ぎないが、それは個人の自由…
つまり、服というのは人が着ることによって、違う意識を感じさせるのだ。
服というものはとても重要であり、大切なものだと改めて理解できる。
実際に服を着るのは当たり前かもしれないが、貧民街や貧しい国で

は、服などあるはずがなく、新聞紙で作った服や、ボロ布でできた服を着て耐え凌いでる人間も居る訳で、どうか服を大切にして欲しいと願う。
「緑谷くんは…？」
「あっ、えっと僕はね…これ！」
――ジャジャーン！
皆んなも笑顔になれる、オールマイトTシャツ！
値段は安く、オールマイトファンには人気でよく売れている。
「う、うん…ここに来てまでオールマイトのグッズを選ぶと…ある意味凄いなって感心するよ…」
別に良い意味ではないが。
飛鳥もあんまり知らなかったのだが、緑谷は重度のオールマイトオタクで、四歳の頃…ネット動画でよくオールマイトの動画を見ていた。
緑谷だけで再生回数1万を増やすほどだ、子供の頃からオタクなので、彼にオールマイトオタクと言っても、寧ろ褒め言葉でしかなく、逆に彼にとっては喜ばしき勲章だ。
「他のは…こういう文字の入ったTシャツとか…」
「あー、緑谷くんの服装スタイルって、なんか焔ちゃんと似てるね」
「えっ、そうなの!?」
実際焔の服のセンスは緑谷と同類だ。
緑谷のTシャツには、Tシャツという文字があり、シンプル過ぎて少し笑ってしまう所がある。
焔も緑谷と同じTシャツで、踊り子号と書いてあったり、弱肉強食とか、そういうスポ根が来てそうな軽いTシャツを着てる。
焔自身も気に入ってるし、緑谷自身も悪くはないと思ってるし焔と同じく自分も似合ってると思って居る。
まあ服なんてのは自分が良ければそれでいい訳で、パーティーや大事な時には服装はきちんとしておかないといけないし相手に失礼だが…
別に私服に着る分は問題ない…と思う。

「他にも草食男子…とか、英雄とか…」
うわぁ、ドンドン焔ちゃんみたいになってるなぁ…
なんて言えない。
まあ緑谷も別に焔紅蓮隊の事はもう気にしてない。
今の蛇女子学園…達のことはあまり良く思ってないが…
「飛鳥さんはもうそれで良いの？」
「うん、私も一通り寝巻きと私服とか買ったし…後は大きなショルダーバッグが欲しいなぁ…」
一週間となると相当な荷物になるし、買ったとしてもバッグが入りきれませんでしたじゃ意味がない。
今日は大変な日になりそうだ、他にも買わなきゃいけない物があるって想像すると、気が遠くなる…
だがその反面、楽しみながら見て回るって考えると案外そうでもない訳で…結局どっちなんだよ…
「飛鳥さんって、買い物とか好きなの？」
「え？う～ん…どうだろ？あんまり買い物とかしないしな～…なんで？」
「いやぁだって飛鳥さん結構楽しそうだし…べ、別に変な意味で言った訳じゃないんだけど…!!
そ、それに…女性って大抵こう言う買い物とか好きそうだな～って」
確かに多くの女性が買い物好きだというのは分かる。
女性は子どもだろうと大人だろうと、服装には欠かさない。
友達に「この服買ったんだ～♪」とか「綺麗でしょ！」とか言い合ったり自慢する子もいれば、オシャレを楽しみ満喫する人もいれば、デートの為に新しい服を買ったり、セレブの人が「これ良いね」って思っただけで、何十着も服を買ったりとする人も居るし…
つまり、服は女性に愛されてるのだ。
まあ服だけの話では無いが…
「あ～分かる！私も一度は思いっきり買い物したい！って何度か思ったことあるよ～…

でも一人前の忍になる為に日々精進しなくちゃいけなかったし、修行するのにいっぱいだったり、学校の勉強とか色々あって…ね？」
「ああそっか…飛鳥さんその頃からもう忍に向けて…
でも飛鳥さん忍なら忍転身で服は変えられないの？」
「あ～…忍転身は元々戦う為にあるから、本来は私欲私怨で使っちゃいけないんだよね…」
それは尤もな意見だ。
神聖な忍転身を自分の服を変えたいなんて欲望だけで行うのは、本来いけないことだ。
別に禁止にされてる訳では無いし、諜報活動やスパイによっては服を変えなければいけないので、そう言った点ではありなのだが…
何も忍転身をする必要がない場合は、体力温存を考えて残しておきたいし、戦闘以外では使いたくない気持ちもある。
まあ、葛城は思いっきり私欲私怨で忍転身を使っているが…
葛城は何を注意しても治らないので論外。
「なるほど…確かにそれもそうだ…
ようは個性を使って便利にしてるみたいなもんだし、忍転身とは言え精神力が必要故に体力だって消費するんだ…
いざとなった時には立ち向かえないし、立ち回るのも難しいし、何より公共の場でやったら目立つからな……
一見便利な能力にしても実は複雑であって…」
「み、緑谷くん次早く行こうよ!!」
いつものザ・アナリシス。
話が長くなるのはたまったものでは無いし、ここで立ち話してたらあっという間に時間が無くなってしまうしキリが無い。
何とかして無理やり話を終わらすべく、腕を引っ張り違う店へと足を踏み入れる。
それと同時に緑谷の長い解析こそ終わったが奇声を上げた。
「いやあ、大きめなバックはこれくらいが良いよね！」
店を出て行く飛鳥は、嬉しそうにバックを見つめながら歩き回って

いた。
バックは特に問題なく、予定より早く決まったので、後は昼飯をどうするかとか、他に行きたい所はあるか？とか、そう言うので言い合っていた。
「う～ん…昼にはまだ一時間もあるし…どうしよっか？」
小腹こそ空いてきたが、今食べると言う空気でも無いし、早く食べるにしても３０分前位だろう…
つまり、暇なのだ…他の店に回るのも良いが、疲れる…
こんなに人がいると、体も精神の方も両方ともキツいし疲労がたまる。
飛鳥は別にそうでも無いのだが、緑谷の場合、飛鳥と一緒にいるだけで心臓がバックんバックんと鳴るのだ、心臓保つかな…
「ん～…他には…」
「あ～、ならアイスクリームとか食べる？」
飛鳥が指指す所には、サービスエリア。
その近くでアイスクリームを販売してる所が目に付く。
なるほど…昼飯前に食べるのもアレだけど、今は暑いし休憩を取るには丁度良いかもしれない。
しかし一つ疑問に思ったのが、アイスクリームを販売してる店員さんだ…
どっかで見た覚えがある…
短い金髪に左右の目の色が分かれてるオッドアイ。
お客がやれ怒ってると店員が犬のような鳴き声で叫び、その悲鳴を聞いたお客が、怒りから顔を冷や汗でいっぱいにし逃げて行く（ソフトクリーム放り投げて）。
服は店員さんとは変わりないんだけど…
「ね、ねえアレって…」

「いらっしゃいませ～ご主人様～♪……あら？」
「あ、やっぱり…」
飛鳥はため息をし緑谷は驚愕色に染まる。
いやいや、嘘でしょ？
何でこの人がこんな所で働いてるの？おかしくない？
「アレ？飛鳥ちゃん？どうしてここに？」
「それはこっちのセリフだよ両奈ちゃん…」
誰もが認め、誰もが驚愕する超が付くほどのド変態、Mの鏡と呼ばれる少女、両奈ちゃん。
「あ、あの飛鳥さん…この人って……」
「あ、大丈夫だよ緑谷くん！蛇女は大丈夫だから！ね？」
「そうだよそうだよ！両奈ちゃんを虐めてくれないとダメだよ、ワンワン！」
「両奈ちゃん、全然話が通じないね？」
緑谷が敵意に近い警戒心を持つのは無理もない。
相手が決して変態だから…という理由も一つ当て嵌まるが、緑谷が彼女に警戒心を抱くのは、この前の蛇女の件だ。
学炎祭で蛇女子学園が攻めに来た時、自分たちは彼女たちに殺されそうになったのだ。
当然、伊佐奈の事件を知らない緑谷には彼女が敵という認識しかないわけであり、彼女のことをあまり良く思ってはいない。
「う～ん…まあもう学炎祭も終わったんだし、危害はもう加えないらしいから、安心しても良いよ」
「え、で、でも…」
それでも曖昧だ…
だって相手は蛇女子学園なのだ、どんな非道な仕事も平気でやり過ごし、一般人にまで手を出す悪忍…
最近は漆月とヒーロー殺しを捕らえるべく、規制が掛かり一般人に危害を加えるのは禁止と化す…となったので、多分どの道大丈夫なんだろうが…不安でならない。
例えるなら、重罪犯がようやく外に出られて、家に帰った時に近所

の人が「や～ね！殺人犯じゃないの嫌よ～！」みたいな感じだ。
考えがアレだけどそこは許して？それとセリフの例えが近所のおばさんで御免なさい、し○ちゃんに出てくる近所のおばさんレベルなんだけど。
「じゃあ両奈ちゃんのおっぱい揉む？」
「ブハッ!?!」
「ちょっと両奈ちゃんやめてよ!!緑谷くんタダでさえ女子恐怖症なんだから！」
「……え？」
――ボクのことそんな風に思ってたの？
いや、全然違うから。
女子との関わりが一般人よりも半歩劣るだけあって、実際は女子恐怖症なんかではありません。
そりゃ確かに奇声とか上げてたりするけど…それは唐突というか…何というか…慣れてないというか…
「え？そうなの？両奈ちゃんはてっきり、飛鳥ちゃんとデートしてると思ってたんだけど」
「なっ、なあああぁぁぁああ!!?!!」
「ふぁあああおおおおえええあっはぁらあ!?」
「飛鳥ちゃんと緑谷ちゃん、二人とも奇声凄いんだけど…」
流石の両奈も驚いたのか、二人同時の奇声に目を丸くして軽く引いている。
飛鳥はここで初めて顔を真っ赤にして、緑谷は凄いことに、燃えて灰になりかけている。
人間、ああやって燃えたらこうやって死ぬんだってことが痛いほどよく分かる。
それは置いといて…
まさかデートとして見られてるのか…
流石の二人もこれには少し衝撃を受けた。いや、緑谷は少し前々から思っていたのだが、流石に他人に言われるとどうも慣れない…と言うよりも恥ずかしい。

すっごく恥ずかしい。デートなんて言われると…どうしても。
――ああ、飛鳥さんに「両奈ちゃん冗談にしては悪い趣味だよ？何でこんな地味な人と？」とか、「いや辞めて私こんな人と一緒になんて思われてる！やってけれないよサヨナラ！」とか罵声を叩かれるんだろうな…
実際中学生の頃、友達がいなくて一人でヒーロー解析ノートを作ってる時に、自分でも気づかずブツブツ呟いてたのを女子に気付かれて
「ねえ、あの緑谷ってキモくない？」
「何言ってんだろうね？」
「ちょっと、何あれ怖い…」
「今後とも近付かないで離れてよっか…」
辛い過去は経験済みだ、何もしてない…ただ呟いただけで女子からのこの仕打ち、それから学校ではヒーロー分析ノートに手を取ることはなく、自宅で夜遅くまで書いてたなぁ…懐かしい。
「わ、私よりも…緑谷くんにならもっと素晴らしい人がいるし…私なんか全然…」
――え？
「そっか～、違うんだ～…飛鳥ちゃんなんか優しいね～」
――あれれ？
飛鳥は頬を赤らめ視線を逸らす。
乙女らしい一面に、優しく暖かな…温もりのある感覚…そんな彼女に緑谷は見惚れていながらも、自分の予想を遥かに裏切られた。
しかしそれは決して悪い意味ではなく、寧ろ嬉しかった。
こんなモテもしない、冴えない自分に、飛鳥は自分以上に相応しい人がいるよ。
なんて言ってくれるのか、どれだけ優しいんだよ…
それが飛鳥の長所であり、彼女の魅力なのかもしれない…
緑谷も恋愛経験には疎いし、考えてもいないし、人を好きになったことはないが、飛鳥の魅力には見惚れていた。
そんなことを嬉しく思いつつも「あ、はいアイスクリームね～、お釣りは無しだから」と言って差し出してきた。

ちょっと待って、アイスクリーム二つで３００円、一つにつき１５０円で千円出したのにお釣り無しってドユコト？
「あの～両奈ちゃん…お釣りの７００円…」
「ブチますか？ぶっ叩きますか？ご主人様、殴りますか？両奈ちゃんを気持ちよくしてくれますか？」
両奈は頬を赤らめ、興奮しながら飛鳥に迫り寄ってくる。
その勢いに思わず一歩下がってしまう。
ああ、成る程…それでお客があんな過激な反応してたのか…
お客が怒ってたのも、店員から逃げ出したのも…両奈のコレが原因なのだろう…
相手を怒らせ、自分を殴らせる…ドＭも戦闘以外にここまで来ると、もう取り返しのつかない、どうしようもない変人にしか見えなくなってしまう。
そのウチ、木椰区ショッピングモールの危険人物リストに載ってしまうのではないか？
「嘘だよ～♪はい、どうぞ～♪」
まあ彼女も流石にそこまで目立つのも逆に悪いと思うのか、お釣りを出す。
五百円玉一枚に、百円玉が二枚…うん、ちゃんとある。
お釣りを確認してから飛鳥はふとある事に気付いた。
「あ、聞きそびれたんだけどさ…両奈ちゃん何でここでバイトしてるの？お金が足りないから？でも蛇女なら大抵のお金は貰ってるハズだよね？」
「う～ん…」
すると両奈は珍しく、真剣な顔つきに戻った。ただ単にバイトしてるだけじゃないのか？となると、訳ありの理由だそうだが…
両奈は意を決すると、そこにはもうドＭの変態の面影がなくなり、悪忍らしい目つきに変わった。
「飛鳥ちゃん…と忍に関わってる緑谷ちゃんがいるなら…言っても良いかな…

あのね、『忍商会』を追ってるの…知ってる？」
忍商会？
飛鳥と緑谷は首を傾げる。
なんだそりゃ、忍商会…という名前からして忍が関わってることは間違いないと見なして良いが…
「伊佐奈が捕まった後にね、校舎を確認するために、妖魔を取り扱ってた研究所らしきものが見つかったんだけど…
そこにね、妖魔が一匹もいなかったの…」
そう言えば…蛇女子学園が二度崩壊した後、上層部が派遣した忍達が調べてくれたのだが、一向にも妖魔が見つからなかったのだ。
しかし鈴音先生が妖魔の写真を撮ったりしてたので、証拠はあるため先ず伊佐奈が造ってたことに偽りはないし、事実なのだが、問題が大量の妖魔がどこに行ったのか…だ。
事件の騒動に逃げた…というケースも考えていたのだが、あの後妖魔を見たという痕跡も無ければ、被害は出ていないそうで、誰かが持ち帰った確率が高いと言われている。
焔達が倒した…という事実もなく、蛇女が崩壊しただけで妖魔が死ぬことも考えにくい…
そこで、伊佐奈の部屋を調べたところ、交渉連絡先が書かれており、そこには『忍商会』という、忍集団の闇組織と関わっていたことが判明したのだ。
何でも最近じゃ違法薬物『トリガー』を一般人に渡して、無理やり人を敵に変えさせたりとか、突破性敵が少しずつ増えているとのこと…
被害が出るのは大体人口密度が高い地域や、公共の場などが多い。
「そこで、人口密度も集客力の高い場所でなら、裏の闇組織もここに来るのではないか？って雅緋ちゃんが言っててね、だからこうして店員さんに紛れて、両奈ちゃんも探してるって訳！」
両奈だけでなく、他の蛇女もショッピングモールに来ているらしく、どうやら忍商会の痕跡を追ってるそうだ。
顔も気づかれてるかもしれないし、不穏な動きで怪しまれるよりは

…と両奈は店員に紛れて調査してたそうだ。
まあ端から見れば巫山戯てるように見えたが、両奈は両奈なりで探してるんだろう…

「忍商会…かぁ、
分かった！ありがとう両奈ちゃん、もし私たちも何か分かったりしたら教えるし、手伝うよ！」
そう言って二人は手を振る両奈に背を向け人混みに消えていく。

「ちょっと色々あったけど…大変そうだね…」
緑谷には忍の社会についての知識は全くないので、首を突っ込めないが、取り敢えずそんな闇組織が動いてるってことだけは理解した。
自分たちの知らない所でも、こう言った物騒な件があるのか…と考えてると少し変な感覚がする。
「うん、でも…妖魔ってさ…強いよね？幾ら忍商会って連中でも、流石に妖魔は捕まえられないんじゃないかな？実力があるにして、妖魔を倒す忍がいたとしても、流石に捕まえるなんてことは…」
討伐より捕獲の方が難問だ。
妖魔に罠など効くかどうか分からないし、そもそもどう言った状況なのかも分からなければ、妖魔を捕まえるなんてあまりパッとしない。
そもそも妖魔は人の言うことを聞くのだろうか？
妖魔は忍の血によって造られた化け物なんだぞ？それを捕まえたとして連中はどうする気なのだろう…嫌な予感しかしないが、今のところ事件が騒いでない内は、まだ大丈夫なんだろう…
「考えてたらキリないな…そもそも私は考えるのあまり好きじゃないし…」

飛鳥はコーンまでヒョイっと口に入れ、アイスクリームを完食した。
緑谷も後もう一口で食べ終えそうだ。
せっかく休憩するつもりが、頭を使ってしまった…
まあこれは両奈の所為では無いし、仕方ない。
「忍にも闇市場とか…商売とかあるんだね…」
「うん…まあうじうじしてても仕方ないし…次、どこ行く？」
気分転換に何処か行きたい。
緑谷は最後に一口食べ終えると、考える仕草を取る。
次はどこに行こうかな？なんて考えていると――

「アレってもしかして…おっ！雄英じゃん！おーい！」
後ろから声が聞こえ、二人は思わず反応し後ろを振り向く。
痩せ方の男性…恐らく２０代かそれくらいだろうか？飛鳥や緑谷よりも少し身長が高めの男がやって来た。
ああ、また声掛けられた…今までそう言う経験をして来たことがないので、呼ばれるのは慣れたが、話してる時に急に呼びかけることは滅多にないので、少し驚いてしまう。
「なぁー、サインくれよ雄英生、体育祭凄かったぜ？迫力あんなお前！」
その男は礼儀もないのか、何の抵抗もなく飛鳥と緑谷の肩を組むようにのしかかって来た。
勢いで思わず転びそうになるのを何とか堪え、飛鳥は「何この人…失礼な人だなぁ」と心の中で呟いた。
飛鳥にまで手を出すなんて…とは誰も気にせず、サインを責められる緑谷は苦笑しか浮かばなかった。
「アレ？お前ってさ、保須市でヒーロー殺しが捕まった写真にそっくり…？
てか、お前か！あそこに写ってたの！」
「あ、え、ええ…よくご存知で…」
バレないとは思ってたし、その事に関して一度も声をかけられたこ

とはないが、まさか此処で声をかけてくるなんて…まあ此処はよく人が集まるし、こう言う見抜く達人…と言っては何だが、観察眼が鋭い人もいるだろうな…

「いやあ本当に信じられないぜ、まさかこんな所でまた会うとは！」

「……は？」

――また？

「飛鳥、お前も学炎祭凄かったぜ！しかも漆月と話し合ったんだってな!?俺にも話させてくれよぉ～…」

はぁ？学炎祭？

何で…そのこと……知って――

「ここまで来ると何かあるんじゃないかって、疑わしく思えちゃうよなぁ？」

――不気味な存在だった。

ただ、気味が悪い程に…とても禍々しくて…

「運命…因縁めいたもんがあるんじゃないかって…さ」

瞬間、緑谷と飛鳥の首に指がゆっくりと迫って来て…

背筋が一瞬にして氷のように凍てつき、冷や汗が止まらない…そして声のトーンが段々と暗く、不気味に…あの時と同じ聞き覚えのある声が…耳元に囁く。

「まあでも…お前らにとっては…雄英襲撃以来になるか……」

そして顔を覆い隠してた黒いフードから、顔が見える…二人はその人物の顔を…見た時、ただならぬ殺意の恐怖に、心も体も支配されそうになった。

コイツは…この男は――!!!

「――取り敢えず、お茶でもしようか？

緑谷出久・飛鳥――」

「死柄木…弔!!」

悪の司令塔にして、悪の象徴の卵――
死柄木弔。
その顔は掌のマスクで覆われた姿ではなく、二人に初めて見せる素顔。
そして、悪は微笑む…正義の弟子と悪の弟子が隣り合う。

91話「善悪の語らい」

――信念なき殺意に何の意義がある――

（見てみろよ、ヒーロー殺し――
お前の信念とやらは、お前が殺して来た人間のことなど、世間は何も気にしちゃいないぞ――）
真夏の日向の下、木椰区が賑やかな中、死柄木は太陽の日差しが鬱陶しいのか、空を睨んでいた。
寝ても覚めても、頭の中はヒーロー殺しのことばかり…
あの一件後、敵連合のニュースの記事は殆ど載っておらず、ヒーロー殺しによって人気も悪意も全て、ヤツによって食われた。
そう、問題なのがソコだ。
どうしてヤツが良くて、俺が良くないのか……
（大多数の人間は、対岸の火事と…いや、どこで誰が
どういう思いで人を殺そうが、コイツ等は、何ともないようにヘラヘラと笑って生きてるぞ――）
――人が殺されたと言うのに、皆んなは何事も無いように平然と生きている。
お前のやって来た事なんて、所詮こんなものだ…お前や俺たちが、気に入らないものを壊しても、コイツらは何も変わらない…
辺りを見渡す限り、何事も無いように、平和な世界で生きてる市民たち。
大人がベラベラとスマフォで談笑してる人。
歩きスマフォをしながら相手にぶつかるものの、気にもしないマナーのなって無い人。
女子高生がＳＮＳを見て盛り上がってるペア。
夫婦に似た男女が楽しく会話しながら、買い物を終え帰る姿。
こんな普通の人間ですら、死柄木にとっては憎く思えてしまい、思

わず飛び掛かって殺したくなるくらいだ。
しかしそんな事すれば当然捕まるわけで、馬鹿な真似はしないけど…
幸せに暮らす人達、しかし死柄木にとっては気に入らない人間の一つでもある。
――忍もヒーローと何ら変わらない…か。
学炎祭、帰って来た漆月から話は聞いた。
その話には自分も納得が行った。
ヒーローと忍は、お互い支えあって、成長しあって、真逆でありながら共通点が存在して…そうやって繋がりが成っている。
確かにそうだ。
光があれば当然、影だって存在する。
ヒーローが光なら、忍は影だ…表裏一体で出来てるからこそ、ヒーローと忍は社会を支ええ、今の世の中が出来ている。
でも、何だろう…気に入らない。
ただ単に忍が気に入らないんじゃない…何かこう、もっとクシャクシャした感じ…言葉では言い表せないような気持ち…
――忍。
お前らの事が理解できない…
忍ノ定めは死ノ定め、虫ケラのように儚い命、名もなき華の如く散る…
お前たちの守ってるものは、こんなものなのか？
お前らが影で、命を削り、死を迎えても、コイツ等はお前等のことなど気にもせず、ヘラヘラ笑っている…
それで本当に良いのか？
こんな守る価値も何もない無能な愚民…自分が本気で殺されるとでさえ思ってないこんなヤツ等を守る理由は？
そもそも、だ。
何故忍は社会を、人を、掟を守らなくちゃいけないんだ？
ヒーローがいる時代、お前たちの存在なんて、他の奴らからすれば何とも思ってない…

お前たちは、何がしたい？
命を懸けてまで、殺しあう理由は？
そもそも、忍なら命令さえ受ければ何をしても良いのか？
それじゃあ敵と同じだ…
敵だって理由がどうあれ人殺しをして良い理由にはならないし、力を振りまくことさえ禁じられてる…
それなのに、お前らは忍だからという立場的な理由だけで、全て丸く収めるのか？
じゃあ俺らの立場はどうなる？
何が忍だ。
余りにも不平等じゃないか、差別的社会だ。
しかも、善忍悪忍どうあれ、殺された忍のことなど、何も知らずコイツ等は笑って過ごしてる…
しかも在ろう事か上層部や社会的な人間までもが忍の存在を知りえながら、忍の死を世間に公表すらしない…
なんて残酷な世界だ。
忍とは言え、人間だ。
人権というものは無いのか。
忍を殺す人間が言うのも何だが、これはこれで不満を持っている。

死柄木はただ一人、石ころでも蹴るかのように、下を向いて歩いていると、何処からか不謹慎な声が聞こえる。
「なぁコレヒーロー殺しのコスプレ売ってるぜ！すごくね？」
小学生が数人、グループになってステインのコスプレらしき商品を指差す。
やれステインのマスクや、刀に似せたゴム質の玩具、他にも携帯ポーチにステインの顔がプリントされたTシャツ。
不謹慎…と言うより、捕まったとは言え人殺しがこんな商品化ブームになって良いのだろうか。
自分とステインを比べると、天と地の差のように幅広い。
そう、一方で良くも悪くもステインによるシンパが生まれている。

ヒーロー殺しに感化され、意思を継ごうとする荼毘。
ステインの凶暴性に魅入られ、自分もその人になりたいと願う、ヤンデレ感が半端ないトガヒミコ。
ヒーロー殺しの暴行に、自分も暴れたいと意見を主張する鎌倉。
何故、俺ではなくヒーロー殺しに向けられる？
何が違うんだ？
答えが分かってるような感覚があって見つからない…
このムズムズとした気持ち悪い感じ…それが一週間近くも続いている…

「何で、アイツなんかが…」
同じことを何度も考え繰り返すも意味がなく、頭を悩ませていたその時、顔を見上げれば…
「――ッ！」
そこには、死柄木の視界に映る人物が二名、談笑しながら歩いている。
アイツ等は…

相手が誰なのかを理解したその途端、死柄木は表情を歪ませ、二人に近づき――
「あっ！雄英じゃん！おーい！」
殺気を隠し、偽物の笑みを浮かばせ、警戒心を抱かせることのないよう、二人にのしかかった。

「動くなよ？」
そして現在に至るわけだ。

死柄木は緊張感なく、さも当たり前のように悠然と語り出す。
「お前等は、旧知の友人のように振舞うべきだ。
決して騒ぐな、落ち着いて呼吸を整えろ。
俺はお前等と話がしたいだけなんだ、でもって少しでも変な挙動を起こしてみろ？
俺の五指が全て首に触れた瞬間、1分も経たずお前らは塵と化す」
やられた、死柄木の存在に気付けなかったなんて…
尤も、重要危険人物…ましてや組織のリーダーが木椰区ショッピングモールに来てる事など誰が予想するだろうか？
「特に飛鳥…お前は忍だからさ、何をしやらかすか分かったもんじゃ無いからな、少しでも下手な動きした、そう判断した途端に即殺すからな、例えお前がそうじゃなかったにしても、俺はお前を殺す――
まっ、忍ノ定めは死ノ定め…なんだろ？別に殺しても問題ないか…？」
「――ッ！」
死柄木の言葉に飛鳥は絶句する。
「や、やめろ…」
ここで弱々しく、死柄木に抗う声が隣が聞こえる。
緑谷は恐怖に怯え支配されながらも、死柄木を睨みつける。
「お前は…話が目的なんだろ？
仮に騒ぎを起こしたとしても…お前はタダじゃ済まないぞ…？
ここは、警察やヒーローも多い…そんなことしたら捕まる事くらい…分かるだろ？」
木椰区は当然人が良く集まる場所だ。
だからこそ、当然その中には凶暴な個性を持った犯罪者だって必ずは存在する。
死柄木弔のように――
「だろうなぁ！そん位、俺でも分かるさ…
でもさ、見てみろよコイツらを――」
しかしそんな事など怖れる事なく、死柄木は嘲笑いながら周りにい

る市民たちに視線を送る。
「俺みたいに、いつ誰が何処で個性(凶器)を振りかざしても可笑しくないのに…
何でコイツら、笑って群れている？
この中に忍だっているかもしれない…漆月みたいに他人を傷つける人間だって少なからずいるに違いない…
例え忍の存在が知らないとはいえ、自分の身は自分で守らなくちゃいけないだろ？
安全性の確保、細心の注意と警戒を払うのが鉄則だ、違うか？
法やルールってのはつまるところ、個々人のモラルが前提だ。
何が言いたいか分かるよな？
――つまり、コイツらはハナから「する訳ねえ」と思い込んでるのさ――
ヒーローが、その内ヒーローがいるから…事が騒いでからは遅いって、コイツら自身気付いてないんだよ、だって守られて生きてるんだから、全ての責任はヒーローと警察に押し付ける、それがコイツ(人間)等さ」
皮肉であって間違ってないようで…死柄木の正論に二人はぐうの根も出ない。
でも、それは仕方ない事だ。
人間誰しも力がある訳じゃない、人は強くとも弱い生き物だ。
個性が強力な人間もいれば、弱小な人間もいる…
だからこそ、ヒーローは人を守らなければいけないのだ。
「んで、仮にお前等を殺したとして事件が起きたとしよう…俺が捕まるまでに…3、40人以上は壊せるなぁ…」
とても冗談とは思えない台詞。
一つ一つの言葉そのものが歪みを持ち、聞いてるだけで気味が悪く、何とも言えない殺害宣言をする。
「嫌だよな？お前等の身勝手な行動のせいで、コイツら殺されちゃうんだぜ？
例えばそうだな…あー、アイツら良いかもな」
死柄木が視線を向けた先には、夫婦と子連れの家族。

小さい子どもが健やかな笑顔で買ったばかりの新品な玩具を大事そうに持ちはしゃいでる、見てるだけで心が晴れやかになる幸せそうな家庭。
しかし、今のこの状況からしてみれば、恐怖と残酷でしかない。
自分たちが勝手に動けば、関係ない人達までもが巻き込まれる…つまり、あの人達の笑顔も、尊い命も壊すと言ってるのだから、たまったものじゃない…
「あー、アレも良いなぁ…」
次に視線を向けたのは、お腹の大きい女性がベビーカーを押し、赤ちゃんは幸せそうに寝息を立ててお昼寝して居る姿。
女性のお腹が大きいのは、きっと妊娠してるからだろうか…
女性も周りの視線からチラチラとお腹を見ては大事そうに、優しく撫でる。
人が目の前で殺されるのが尤も嫌な人間を余す事なく、死柄木は当て続ける。
「次は…」とまた視線を送らせるが――
「やめて!!」
飛鳥の叫びで死柄木は視線を戻した。
飛鳥は優しい…誰もが認めるほどに…でも優しいからこそ、死柄木の残酷な考えは見ていられない。
飛鳥に対して死柄木とは一番、相性が悪い――
死柄木の残酷的な性格は、悪忍と同格か、それ以上のもの…
だって死柄木の素顔は、笑ってるのだから。
まるで小さな子どもが、カエルの卵を何匹殺せるかな?なんて想像してるように見える。
その姿と子供らしさの性格が相容れず、死柄木自身そのものが、もはや歪みの塊でしかない。
あれだけ楽しかった空気が、その時が、死柄木の登場により一瞬にして崩壊し、殺気と恐怖に怯えることしかできなかった。
「分かった…何もしない…何もしないから……

私は別に良い…でも、他の人達には…巻き込まないで……」
飛鳥はやっとの力で声を必死に振り絞り、死柄木に噛み付くように鋭い目付きで睨みつける。
その眼差しに、死柄木は鼻で笑う。
「ハハッ、俺のこと気に入らないだろ？でもな、俺もお前が気に入らないんだぜ？お前だけじゃない…お前もな緑谷…」
人の嫌な所を突き付け、この場にいる大勢の人間を一瞬にして人質に取り、相手を考えさせる余地すら与えず、自分の思うがままに動き出す…
見ない間に彼も随分と成長したものだ、そう言った相手の心を踏み潰すかのような行為は、悪の象徴と呼ばれてた男のやり方に似ている。
「わ、分かった…僕も…手を出さないし……話なら…聞く……
そ、それに……許可なく個性を使っちゃいけないし…僕としてはどの道無理…だから…」
緑谷も諦念し、脈打つ心臓の鼓動を落ち着かせながら、呼吸を整える。
「話が分かるヤツらで良かったよ……」
死柄木は自分の思い通りに動けて、さぞ満足するかのようにニンマリとした笑顔を浮かべる。
「……ねぇ」
すると、隣の飛鳥は、鋭い声で死柄木に声をかける。
「貴方は…何でそこまでして…私たちを嫌うの…？
漆月ちゃんと同じ、何か理由があるんじゃない…の？」
「……何でそう思う？」
先ほどの笑みから、普通の顔に戻る死柄木は首を傾げる。
「だって…漆月ちゃんと話した時も…そんな感じだったし……
漆月ちゃんに何が起きたかは分からないし、理由は聞けなかった…
でも、貴方も同じなら…貴方だけでも、理由は聞きたい……
そうすれば…貴方だって、きっと分かち合えるかもしれないじゃない…救うことだって…」

漆月との対談…いや、学炎祭を通して分かったんだ。
ステインの時にも言ったかもしれないけど、善と悪だからって理由だけで、必ず分かち合えない訳じゃない。
善も悪も何も変わらない…飛鳥は、困ってる人間がいたら救けるし、手を差し伸べる人間だ。
例え相手が悪党であろうと、焔であろうとステインであろうと…そうして来た。
刀と盾。
その意味が分かった時、相手が誰であろうと困ってる人間がいたら、救けを求める人間がいたら、救い出す…
その時から、飛鳥は刀と盾を、忍の道としての信念として突き進んで来た。
――しかし。

「ハッ、それだよ…そういう所だよクソ餓鬼」

――必ずしも、それを否定する輩だっている。

「お前みたいに、分かち合えるとか救けるとか…そう言う言葉を使うヤツが嫌いなんだよ。
何が救うだ笑わせるな、俺は困ってもないし手を差し伸べてる訳でもない、勘違いも程々にしろ。
俺はな…そう言う綺麗事垂れてるヤツが尤も嫌いなんだよ…丁度、お前の体を粉々にしちまう程になァ…」
指の力を入れる。
飛鳥の表情が僅かに歪む。
忍とは言え、飛鳥は善忍の鏡…と言っても過言ではないほど、心は正義感で満ち溢れてる。
それを否定され、嫌悪感を示されるのは、流石に心が痛む。
「まあ良いや…立ち話もなんだ、折角こうして感動の再会が出来たんだ、腰掛けてまったり話そうじゃないか…」

とても感動の再会なんて呼べないが、死柄木はどこか座れる場所はないかと周りを見渡すと、丁度ヤシの木が立つ場所に円形状のベンチがある。
彼処にしよう、と死柄木は勝手に歩を進める。

「いねぇ…」
「ああ、いないな…」
場所は変わり、ショッピングモールの休憩所、白いテーブルにベンチが数カ所配置されてるエリアで、二人の男性はべったりと頬をテーブルの上にくっつかせながら、ストローでオレンジジュースをチビチビと飲んでいた。
変態二人組、峰田と上鳴はつまんなさそうな目で家族連れや男性、リア充カップルが歩いている。
「くそッ！何でリア充が外で出歩いてるんだよ～!!
爆発しろ！つーか手繋いでキャッキャウフフって……クソが!!俺らの視界に映るな鬱陶しい！」
「なぁ峰田…もうかれこれ一時間過ぎてんだけど？流石にもう飽きて来たっつーか、女性一人なんてこんな人混みの中で早々見つかるわけが――」
「諦めるのかお前は!?
ここまで来たのに…もしかしたら美女が歩いてるかもしれねーだろ?!
ここは超有名なスポットだ、客が利用するのにうってつけな場所なんだ、それをテメェ…ここに来て飽きて来たって、それでも男か貴様は！」
「いや男だけどさ…現状こうしてナンパ出来ずに男二人でずっと居るわけじゃん？そらぁ飽きてくるって…」
「煩えクソ鳴！オイラだって好きでテメェと連んでるんじゃねえぞ

！」

そう、この性欲に植えた二人組みが此処へやって来た目的は、ショッピングを楽しむ訳でもない（必要なものを買うためとしては理に適ってるが）…

――ナンパ

そう、ナンパなのだ。

葉隠がこの場所を提案したその時から、峰田と上鳴にとって、ここは狩場と化したのだ。

そして峰田と上鳴は狩猟者（ハンター）になり、獲物を狩る為、ここで品定めをして居るのだ。

やれ女性が通れば目が食いつくものの、スタイルもまあまあ、顔はちょっと…という感じで中々決まらない。

峰田と上鳴のターゲットは、スタイル抜群、顔も抜群、そして気優しい女性なのだ。

でも、流石にそんな美少女がいる訳が――

「ん？」

そろそろ終盤に近い頃か…と、上鳴の気が限界に達していたその時、ある女性に目が食いついた。

そしてその少女の全身を確認できた途端、気怠けな顔から、一瞬で一転した。

「おい、峰田…峰田！」

「アン？なんだよオイラ今ちょいと苛立ってんだよ…美少女見つかんねーしはリア充いるわで…」

「ちげーって！見てみろよアレ！」

「あっ…？」

渋々と上鳴が指さす方向に視線を向けると、そこには一瞬見れば分かるだろう、美少女が人混みの中でオドオドとしていた。

気が優しい…というより、ああ言う慣れてない新鮮さが逆に男子の心をくすぐらせる。

そしてスタイルも良く、ストレートなロングヘアーで顔もかなり良い。

ターゲットがついに姿を現した。
「おおおぉぉ!?こりゃ大目玉じゃねえか!しかも爆乳たぁ、オイラたちツいてる!なっ?言ったろ上鳴、諦めたら試合終了なんだ、けど諦めなかったからこそ、俺たちの視界に女神が降臨したんだろォ!」
峰田は溢れ出んばかりのヨダレを腕で拭きつつ、上鳴は突然のことでテンパっている。
しかし、こんな美女はそうそういないだろう…なんて声をかけるか戸惑っている。
「シャキッとしろよ上鳴!お前の方がオイラよりかは1ナノメートルだけカッコいいんだから、頼りにしてるぞ!」
「ッ!そ、そう言われちゃあ、な!」
「因みに1ナノメートルって、ミリより小さい単位だかんな」
「細けえことは良いんだよ、俺が声をかけるから、お前は…」
「あ、ああ…!」
こうして性欲に飢えた狩人達は、一匹のウサギよりも可愛らしい美女を狩るべく立ち上がる。

ああ、どうしよう…迷っちゃったよ…
ここは、人混みが多いから……戻るのも大変だし…動くだけで疲れるのに…
――やっぱり、外に出るんじゃ…なかった。

秘立蛇女子学園の紫は、美しい長髪を揺らしながら、オドオドと周りを見渡す。
タダでさえ人前に出るのが嫌なのに、こんな場所に来て『忍商会』を探すなんて…
そもそも、そんな組織と鉢合わせになったとしても、戦闘はどうするの？
こんなにも人が多いと、気付かれちゃうし…それらしき人物が見つからないよ…
仮に戦闘が出来たとしても、私じゃ…無理だよ……私一人じゃ無理…
お姉ちゃんや雅緋さんがいてくれると心強いんだけど…
「や、やあー、あの～…」
「？」
紫は声をかけられ振り向くと、二人組みの男性がニコニコとぎこちない笑顔を立てていた。
一応匂いを嗅いでみよう…
――クンクン
うわぁ、二人とも邪な匂いがする…
特に背の小さい紫色のポコポコした人、すっごい嫌な臭いが立っている…
「ねえ君一人？よかったら俺らと遊ばね？いやぁ男子と一緒にいるのつまんなくてさ～、あっ！なんか食う？昼飯食わね？俺奢るよ～」
「い、いえ…結構です……私もう、帰りますので……」
タダでさえ男性に声をかけられるなんて、小学校でも早々無かったし…
男性恐怖症というか…これがラプンツェルに出てくる素敵な王子様ならウェルカムなのに…なんでよりによって下心丸出しの男子二人と…
ああ、これだから外は嫌なんだ…絶対にこうなるんだ…

紫は心底絶望したかのように、深いため息をついた。
しかし紫の考えなど二人には分かるはずがなく、鼻息を荒くナンパしてる。
「大丈夫だいじょうぶ、オイラ達ただ単に遊ぶだけだから、怖がることないよ～…
うわっ、手柔らかいでちゅね～！プニプニしてまちゅね～」
そして紫の手を取る峰田は、彼女の手の柔らかさに堪能し、指で触る。
普通に見れば完全にセクハラであり、警察が見たら捕まるだろう光景。
紫は「ひっ!?」と軽い悲鳴をあげ、蔑んだ視線を送る。
しかし当の本人は気にすることなく頬で手の甲をスベスベと摩る。
上鳴が「んじゃっ、行こっか！」と肩を掴んだその瞬間。
「お前らタコどもは何やってんだ…よ！」
「グェッ!?」「アベッは!?」
「!?」
二人の後ろの女性が、イヤホンジャックらしきもので、二人の後ろ首を挿し、爆音を送り上鳴と峰田は白目を向いて失神する。
二人の奇声に紫は驚きつつも、自分を救けてくれた人物に視線を送る。
やれオカッパの髪型に、スタイルは程よく（胸を除いて）、シャンとしてそうな女性が、心底呆れた顔で倒れた二人を見下ろしていた。
耳郎響香。
真面目でありマトモな彼女は、何かしらそこそこと人気がある。
耳たぶがイヤホンジャックになってるのが印象的だ。
――クンクン
この人からは、良い香りがする。
香水を使ってるのかな？それ以前に心が清らかだ…怒ってるけど、多分それはこの変質者二人が問題だし…
それに自分を救けてくれたんだし、悪い人じゃなさそう…
見た感じ怖い人じゃないし…

「大丈夫？ゴメンね、ウチのクラスの生徒なんだけど…こいつらちょっと問題児でさ、特にこのチビッ子なんかがね～…
何か変なことされてた気がするけど…後でキツくしておくから、本当ゴメン！」
「い、いえ…別にそんな……大丈夫…です、ありがとう……ございます」
ぎこちない返事を送る。
正直頭の中が少し熱くなって禍魂の力を使いそうになったけど…
よかった、この人が来てくれなかったら一時はどうなってたか…
人にはあまり感謝したことないけど、こう言う人が増えることは、とても嬉しいな……
「ったく、コイツら絶対にセクハラ容疑で逮捕されるぞ…
まあ、逮捕されても良いんだけど」
変態は死ね。
という視線を送る耳郎は、二人の首を掴みズルズルと引きずりながら、人混みの中に紛れて姿を消した。
あっ、そう言えば…名前聞いてなかった――

「何でも気に入らないんだけどさ、今一番気に入らないのはヒーロー殺しなんだよなぁ…」
一方。
飛鳥・緑谷の身動きを止めてる死柄木は、ヤシの木が目立つベンチに腰掛け、何気なく口を開く。
――ヒーロー殺しが？
何で、ヒーロー殺しが気に入らないのだろうか？
敵連合との接触があると疑いを持ち、脳無四体からの関連性と、漆

月の接触でその疑惑は大きく立てられてる。
世間一般なニュースでは、敵連合の脳無とステインが同じ保須市で騒動を引き起こした事から、関連性が高いとなってる為、それが漆月と関わってる疑惑は、忍にしか分からない。
「ヒーロー殺しとお前らは…仲間じゃ…ない…のか？」
不思議でならなかったからこそ、緑谷はやっとの声で振り絞りながらも、質問する。
余計なことさえしなければ殺すことはないと頭の中で分かっていながらも、話したいだけだと言われても、やはり隣に極悪犯がいると考えると、どうしても安定な態度は取れないし、落ち着かない。
これをどう落ち着けと言うのだ？ましてや自分の命だけでなく、この場にいる大勢の人間だって人質にされてるのだ、安心出来る筈がない。
仮にそれが出来たとすれば大したものだ。
「別に？仲間じゃねえよあんな奴、寧ろ要らねえし死んで欲しいのが本望だね、俺に刃向きやがって…
世間じゃそうなってるが、俺自身は認めてる訳じゃない…アイツと繋がったのは、お互い目的が同じだから…ただそんだけだ…
――んでだ、問題はそこだ。
雄英襲撃も、保須市で放った脳無も…全部奴に食われたんだよ……
皆んな俺を見ようとしない…何でだ？」
自分たちに存在を知らしめることで、世間に恐怖を与える。
それが成功し、世間に注目が集まった。
しかし保須市でのヒーロー殺しの一件後、人気は下がる一方、皆んな口を開けばヤツの話題で持ちきり…ステインに株が上がった。
気に入らないものは壊したいが、アイツが捕まった以上壊せない…
しかも俺たちのやって来たことが全て水の泡になるよう、敵連合の存在はオマケ扱い。
この仕打ちはなんだ？
アイツの何が良い？なんでアイツが人気者になれて、俺は見ない？
そこが分からなかった…

「アイツがどれだけ能書き垂れようが、所詮アイツは人殺しに過ぎない…
結局奴も、気に入らないもの壊してただけだろ？違うか？」
死柄木の言い分は尤もだ。
自分とステインは同じように気に入らないものを壊して来たと言うのに、なぜステインに注目が偏るのか…
彼には理解出来ないのだ。
どれだけ頭を使っても、先生に答えを求めようとも、黒霧や漆月に話しても、答えは導き出せなかった。
解消されることのない悩みとストレス…それらが死柄木の精神を追い込ませていた。
何がヒーロー殺しステインだ、忍殺しステインだ。
アイツが今に生きるヒーローを贋物と呼ぼうと、決めつけようと、敵を殺そうが、悪を処分しようと、所詮は気に入らないものを壊してたに過ぎないのだから。
「なぁ、教えてくれよ飛鳥、緑谷ぁ…
俺とアイツ…何が違うんだ？」
死柄木は緑谷と飛鳥に問いただす。
飛鳥と緑谷は、保須市であの場所で、ヒーロー殺しと対峙していた。
いない筈のあの場所に、二人がいた。
なら、あの時最後までヒーロー殺しの近くにいたお前達なら、何か知ってる筈だ…
人それぞれ価値観や考え方が違うから、自分ではなく、自分とは真逆で違う性格の二人からなら、意見を聞くことができる。
弔はそれを考察した上での発言だ。
二人は暫し黙り込む。
此方の気が緩んだ隙を見計らってるのだろうか？
何がともあれ油断は禁物だ、指の力加減を緩めず、狼のように獲物を離さない。
そして、先ず最初に飛鳥がようやく口を開く。

「……刀と…盾だよ…」
「…あ？」

刀と盾――
気に入らない物を壊すことしか出来ない弔は、その言葉の意味が分かる筈がなく、眉間にしわを寄せ、不快な表情を立てながらギラついた獣のような目で鋭く睨みつける。
「ステインは…最後……緑谷くんを救けた……
本当に気に入らないものを壊すだけなら、あの時あの場で、自分が逃げれば良いにも関わらず…あの人は……救けたんだ…守ったんだよ…緑谷くんを……」
飛鳥は知っている。
あの時ステインは、信念の下で、善意で緑谷出久を救けたことを――

確かに彼は多くのヒーローや忍を殺害して来た。
しかしそれは死柄木の思ってるものとは違う訳で、人を傷つける刀しか携えてなかった彼には、人を救ける盾も存在していた。
飛鳥は、しかとその目で見たのだ――
その姿はあまりにも禍々しく、歪なものだが、相手がどうであれ、刀と盾が存在した。
人は、戦う力と守る力があってこそ、強くなれる。
しかし、飛鳥からして見れば、死柄木はただの刀だ。
忌々しく、禍々しく、殺気溢れんばかりの、異形で歪な、邪悪な刀…
触れたものを粉々に壊してしまう、それはそれは末恐ろしい刀だ…
気に入らないものしか壊すことの出来ない彼では、盾の存在定義など有る訳がなく、人を守る力など彼には存在しない。
当然のことだ、彼のような人間に盾などあるはずがない、何故なら彼は奪い、壊し、支配する人間なのだから、そこに盾という概念は死柄木の中には無い。
「貴方は知らないだろうけど…ステインは…本当はただ、ヒーローを

愛してただけ……
本当のヒーローを…見たかっただけなんだよ…」
普通に考えれば、あれ程ヒーローに対する熱意は早々ない。
寧ろそれは誇っても良いと思う。
ヒーローがどれだけ素晴らしいのか、ヒーローの定義を、正義を、信念を、本当はただ皆んなに教えたかっただけであり、間違いを正したかったんだ――
ただそれが、人殺しという道に進み、彼は道を間違えたことで歪んでしまったのだ。

「だから、貴方と違うのは…刀と盾があるかどうか…
それを、理解できるかどうか…なんだと思う…よ」
「……」
死柄木は珍しい物でも見るかのように、こちらの視線を向ける飛鳥の目をジッと見つめていた。
そして数秒後、死柄木は緑谷に視線を変えて「お前は?」と問いかけるように見つめてくる。
死柄木の意図を読み取った緑谷も、口を開く。
「ぼ、僕は飛鳥さんの言う通り…確かに救けられた……
悔しいことに、人殺しをして来たアイツに、僕は救われた……
アイツのやってることも、犯した罪も、許せないし、やってることは納得できなかったけど……
でも、理解は出来た…」

――ヒーロー殺しは、理想に生きたかったんだ――

「僕もアイツも、始まりは、オールマイトだから……
それにアイツは何でも、気に入らないものを壊してたんじゃないと思うよ……
アイツは、お前みたいに、何でも物事を徒らに投げ出したりもしなかった――

ステインは、最後まで信念を捨てず、敵に立ち向かった。
一方死柄木は、雄英襲撃時、自分の都合が悪くなると、部下を置いて帰っていった。
「だから…お前とアイツは違うし…飛鳥さんの言ってた通り…刀と盾があるかないか…だと、僕はそう思う…よ？」
「……」

――――フッ。

その途端、死柄木は二人の顔を見ることなく、ただ真下を向いて…微笑を浮かべていた。
しかしその時に放った殺気が、余りにも異常で、二人は軽く身震いをしてしまう。
その殺気は、あのヒーロー殺しをも超えてしまうほどに…
市民は気づかない…そりゃそうだ、死柄木弔という男がここにいることすら知らない人間は、飛鳥と緑谷にすら意識にない人間には、殺気に鈍感な人間が、気づけるはずもない…
「あーあ…スッキリしたぁ……
ああ、うん…そっか、そっかそっか…そう言うことなんだな…
点が線になった気がする…悩みが吹き飛んだ…

――何でヒーロー殺しが気に入らないか…何で緑谷、お前が鬱陶しいのか…
飛鳥、何で俺がお前を殺したくなるのか…何で漆月が忍を殺したいのか…全部、分かった――」
息を詰まらせる。
自分が今呼吸をしてるのかさえ忘れてしまい、分からなくなってしまい、冷や汗が滝のように流れる。
目の集点が合わず、瞳が激しく揺らぐ。
飛鳥の目からは自然と涙がたまっていた。
――怖い、この男が怖い…

殺されてしまう、今すぐにでも、私は死んでしまうのではないか…
一言で言えば、妖魔すら身震いを起こして、逃げてしまいそうな、気迫ある殺気。
心臓を握られてるような、吐き気のする感覚。
そして、死柄木が顔を上げたその時、この世とは思えぬ恐怖が二人に襲いかかる。

「全部――オールマイトだ」

笑っていた。
嘲笑うのではなく、人間誰もが幸せそうな笑顔を浮かべる、誰もが当たり前のように健やかに笑う、輝かしい笑顔、しかし死柄木のその笑顔は、とてもこの世のものとは思えぬ残酷さゆえ、もはや歪を通り越したかのような邪悪な笑顔――
漆月の笑顔が可愛く思えてしまうほどだ。
二人は、死柄木の笑顔を見てようやく我に返った。
その狂気とも呼べる笑顔が、死を錯覚させてしまうようでならなかった――
「そうかぁ…結局そこに辿り着くんだなぁ…
何を悶々と考えてたんだろうなぁ俺は！なんで、なんでこんな当たり前で、大事なことを…俺は忘れてたんだろう…」
原点も、終焉も…全てはオールマイト。
存在そのものが当たり前だからこそ、頭の中で筒抜けていた。
ただオールマイトを殺すことしか頭に入ってなかった。
だから、見えてなかったんだ…その原点を…
ヒーローと忍が、手を取り合ったその原因の種を――
「あのオールマイトがヘラヘラ笑ってるから…コイツらもヘラヘラ

笑ってるんだよなぁ!?!」

周囲に訴えるかのように、声を発する。

全て、オールマイトが悪いんだ――

「忍が死ぬのは掟や上層部だけじゃない…

あのオールマイト(ゴミ)やヒーロー(ゴミ共)も見て見ぬ振りしてるからだよなぁ?!」

見て見ぬ振り…手を差し伸べてくれない、死んで当然、死ノ定、運命――

死柄木の脳裏には、幼い頃の自分の体が、手が、血塗れになり、腕だけが地面に落ち、辺り目の前が血の海と化す。

残酷で、トラウマで、思い出すだけで頭がはち切れそうになる光景。

そして二人の首に力を増し、より強く入れる。

二人の表情が痛みと共に歪み、死柄木は嘲笑うように表情をより酷く歪ませる。

「誰も救えなかった人間なんていなかったかのように――ヘラヘラと笑ってるからだよなぁ!!」

――飛鳥、忍のお前が一番気に入らない理由が分かった。

それは、オールマイトと似てるからだ――

正義感溢れる笑顔で人を救けようとする勇姿、どんな人間でも分かち合えると本気で思ってる忍、善も悪も救いだそうとする志、それが気に入らない…オールマイトみたいだ。

オールマイト以上に不愉快でしかない、

「飛鳥(お前)みたいに救えない人間なんていないと本気でそう思ってるから――俺はお前を壊したくなっちまうんだよ!!!」

もはや抑えきれない怒り、憎悪、殺意、悦び、歓喜、様々な感情が爆発的に暴走した事で、今の自分が抑えられない。
救えない人間なんていない、本気でそう思ってる。
だから、他の忍なんかよりも…無性に殺意が湧いてくるんだ。
それは、死柄木の逆鱗に触れる事になるのだから。
「ああ…話せてよかった…良い、これで良いんだ！
ありがとう緑谷、飛鳥…これでようやく俺は一歩、前進出来る!!」

――俺はなんら曲がることはない!!

「皮肉なもんだぜヒーロー殺しぃ！
それに忍のお前たちも哀れだなぁ！死ぬことが定めで、怖がることはないって？怖くないって？
お前らこそ一番イカれちまってるんじゃないか!?

お前たちの行いも、やって来たことも、忍の道も、何もかも無意味なんだってことがまだ分からないんだよなあお前達はよぉ!!!」

――ヒーロー殺し、対極にある俺を生かしたおまえの理想、信念、全部俺の踏み台となる。
そして、俺の成長の糧となる――

「あっ、あァっ…！や、め…て…!!」
飛鳥は苦しみ悲しみ表情を歪ませながらも、声を振りだし、涙目になっても死柄木の視線を逸らさない。
死柄木は残酷な笑みを絶やすことなく飛鳥に向ける。
その時――

「アレ？デクくん、飛鳥ちゃん？」

聞き慣れたこの天真爛漫な天使の声、ゆるふわであって、それで

もって心が落ち着くような感覚に包まれる女性の声は――
緑谷と飛鳥だけでなく、死柄木もその女性の声がした方向に振り向く。
「その人、知り合い…じゃ、ないよね？」
――麗日（さん）（ちゃん）!?
「何してる…の？手、離して…?!」
二人の首を絞めてると知ったお茶子は、驚愕と恐怖の表情に歪ませる。
とてもじゃないが、この人は友達や知り合い…と言った縁のある人には見えない。
死柄木の指が緩くなり、手を離す。
しかし、それは決してお茶子の言葉通りになった訳ではなく、それは新たな標的を壊すために、離した訳であって――
皆まで言わなくとも、状況的に理解した二人は、訴えかけるように息を荒くする。
「――お茶子ちゃん逃げて!!」
「ダメだよ麗日さん！ソイツは――！」
二人の声が重なるものの、お茶子はなぜ、二人がこんなにも慌てるのかも分からず、立ち上がる人物を見つめる。
そして…
「いやぁ、ごめんゴメン！友達…いたんだな、気付かなかったよ、時間取らせて悪いな！」
意外にも、アッサリとした普通の笑顔を浮かべ、手をパーにして「大丈夫だよ～」と手を振る。
しかしこの笑顔が作り物であることに間違いないのだが、こんな笑顔を作れるとは夢にも思ってもいなく、呆然とする。

今でも殺されてそうだった空気が、嘘のように消えていく。
「あっ、そろそろ時間かな…
んじゃ俺行くわ～…じゃな。
――お前ら追ってきたら分かるよな？」
悠然と、それこそ友人のように最後まで振舞う死柄木は、小声で最後の言葉を残して背中を向ける。
飛鳥は止まらない心臓の動脈を手で抑え、呼吸を整える。
忍でもここまで恐怖を感じたことは早々無い。死にたく無いと思えたのは、死柄木と初めて会ったその時からだ、それ以上の殺気を、死柄木は今まで培っていたのだ。
首にまだ痛みが残ってるのか、手で抑えて咳き込みながらも、お茶子に背中を摩られながらも、死柄木の行方を晦ませまいと、目で追う。
「ゴホッ！ゲッホ…！アァッ!!
――ハッ、ハァ…ハァ……ま、待てよ死柄木…弔！
オール・フォー・ワン、神威は何がしたいんだよ…？」
「…は？え？デクく…死柄木って…!!」
死柄木弔の名を耳にしたお茶子は、青ざめた表情で先ほどの人物を見つめる。
まさかあの男が、敵連合のリーダーであるなどと当然知るわけがない。
彼は今までずっと、掌のマスクを付けていたのだから。
素顔までは見たことがなかったのだ。
「……知らないな、でも気をつけろよ…
次会った時は、お前ら…いいや、お前たちも、忍も、全部ぜーんぶ殺すって決めた時だからさ…」
死柄木は別れ際にそう言うと、大勢の人混みに紛れて、姿を消した。
お茶子は直ぐに携帯を取り出し、警察とヒーローに連絡を取る。
飛鳥は、とても悲しそうな表情で、死柄木の背中を見ていた。
どうして？どうしてそこまでして、忍を否定するの？
どうして貴方達はそうなってしまったの？
何がいけないの？何がそんなに…

しかし、答えが見つからない以前に、何がどうこう出来る訳でもなく、ただ飛鳥の心には死柄木の言葉が突き刺さっていた。

――救えない人間なんていないと本気でそう思ってる。

死柄木弔、貴方の過去に一体、何があったの？

とてもじゃないが、雪泉や焔のような憎悪とはもう次元が違う。

そんなレベルじゃない、彼女達の苦しみを軽視する訳じゃないが、ただ死柄木という圧倒的な存在に気圧されたのだ。

緑谷もまた、姿が消えたにも関わらず、死柄木のいた方向をずっと、執念深く睨んでいた。

「……」

――刀と、盾だよ。

「……」

――本当は理想に生きたかったんだと思う…よ。

頭の中で、飛鳥と緑谷の声が、脳内再生され離れない。

そして――

――信念なき殺意に何の意義がある。

ヒーロー殺しのことも。

――ヒーロー殺し、信念も理想も最初っから俺にはあったよ。

ただ、それが気付けなかった…そうだよ、俺には見えていなかった…自分のことしか何も見えちゃいなかったんだ。
けど、何も変わらない！
しかしこれからの行動は、全てそこへと繋がる――！

『オールマイトのいない世界を創り、正義とやらがどれだけ脆弱かを暴いてやろう――』

――そして、俺の下には忍が集まって来る。
抜忍漆月を始め、忍の社会に不満を持つ者、暴れたい者、思想に感化された者、様々な想いを抱く忍が、敵連合の名の下に集まることで、俺に初めて、忍の力を手にすることが出来る。
そして俺に、新たな信念が芽生えた――
忍を殺すことで、お前達の信念も、忍の道も、定めも、全て否定し、お前達の言う忍が如何に脆く惰弱なのかを暴いてやる。
『忍のいない世界を創り、お前達が間違ってたことを証明し、俺が正しかったことを世間に知らしめる――』
今日からそれを、信念と呼ぼう。
そして、二つの信念を一つにしよう…
それが飛鳥の言う、俺の刀と盾だ――
新たな信念を手に入れるだけでなく、歪な刀と盾を手にした死柄木は以前よりも成長した。
あの時のように、癇癪を起こす幼稚的な彼ではない。
これから次々と成長していく、死柄木だけでなく、組織そのものも、忍と関わる事により新たに成長する。
ヒーローや忍だけが成長する訳ではない、力を培い、準備が整ったその時、お前らに目に物を見せてやろう…
俺は、ヒーローと忍、社会を崩壊する、そしてその頂点となる。

全部、オールマイトだ――

忍との繋がりも、何もかも……

――全部オールマイトだ。

林間合宿編
９２話「林間合宿・スタート！」

あの後お茶子の通報により、警察とヒーローが駆けつけ、ショッピングモールは一時的に閉鎖。
緑谷と飛鳥の下にはＡ組の生徒達が駆けつけに来てくれた。
区内のヒーローと警察が緊急捜査に当たるものの、結局見つからず、二人はその日の内に警察署へ連れられ、オールマイトの友人である塚内刑事から事情聴取を受けた。
塚内刑事は忍のことと、飛鳥がワン・フォー・オールとオールマイトの事に関しては存じてるので、飛鳥にとっては何の問題もない。
雄英襲撃、蛇女襲撃、保須事件、警察は既に敵連合に対して、特別捜査本部を設置し捜査に当たってるらしく、忍からは何でも巫神楽三姉妹が動いてるらしく、執行部達も手を焼いてるそうだ。
その捜査の内に加わってる塚内に、主犯・死柄木弔の人相や会話内容などを伝えた。
塚内は苦慮しながらも、纏めたメモと書類に目を通す。
「なるほど…ね、聞く限り、連中も一枚岩じゃ無いみたいだな…
忍の存在を知った連合…それだけで脅威だと言うのに、これが肥大化すると考えると…想像を絶するな…オールマイトと忍打倒も変わらず…と言ったところかな？
うん、よしありがとう緑谷くんに飛鳥さん」
「あ、いえ僕が引き止めていれば…良かったんですけどね…」
「すいません…私、忍なのに…手も足も出なかった…それ以前に、怖いと思っちゃった…私、忍失格なのかな…」
二人は酷く落ち込んでいた。
折角、主犯・死柄木弔が姿を現し、手掛かりが掴めたかもしれないのに、それは叶わず、止めることもすら出来ず、警察やヒーロー・上

忍達が追ってるに、自分たちは何の役にも立てなかった。
それだけでもう致命傷だ。
二人は不甲斐ない自分を思わず責めてしまう。
「いやいや！寧ろ自分と市民の命を握られながらよく耐えたよ！
――普通なら恐怖でパニックになってもおかしく無い状況、ましてや人殺しが近くにいるにも関わらず、平静を保ったまま犠牲者ゼロは凄い。
これも君らのお陰だ、捜査に関しては僕たちが全力を尽くすから、安心して良いよ」
流石はオールマイトの親友だけのことはある。
塚内は何も悪く無い二人を、明るく励ます。
実際彼の言う通り、もしあの状況になってたのなら、少しでも可笑しい挙動を出してしまう。
それが、自分の意思で無かったとしても、死柄木は飛鳥に「怪しい動きと判断した瞬間に殺す」と言ってるのだから、脅迫されたら誰だって反射的に反応してしまう。
しかし、飛鳥や緑谷がなんとか堪えたからこそ、今がある。自分たちは生きている。
それでも、二人の表情が晴れることは決して無かった。
「よし、それじゃあ三茶に頼んで、君たちを無事家にまで送るよ。それにもう外は暗いし…飛鳥さんの家…というか、君は寮か…
寮だとバレる危険性もあるし…」
「い、いえ！私は大丈夫です！歩いて帰れます…から」
「夜中は昼と違って敵が多いんだよ、暗いからというだけで、視界が見え難いからね…
君の安全性を確保する上での手配だ、別に断る必要性はどこにもない」
事情聴取があった為、大分時間を食わされた。
窓から覗くと、空はもう真っ暗だし昼飯食べてないし、今日は疲れた故にとんだ厄日だ。
事情聴取されてる時は空腹のあまり、お腹と背中がくっ付きそうに

なったが、時間が経つと不思議なことに、空腹を通り越して何も感じなくなったのだ。
それでも、何もいらないと言えば嘘になる。
事情聴取を終えた二人は、警察署から出る。
すると出口の方に人影の姿が浮かび上がる。
「緑谷少年！飛鳥くん！塚内くん！」
「おっ、丁度良いタイミングだな」
それはオールマイト。
夜中とは言え、トゥルーフォームの姿なのは、いつ何処で誰が見てるのか分からないからである（そもそもマッスルフォームをする意味もないため）。
「オール…マイト」
「すまない、助けてやれなくて…」
個人的な話があるからなのか、塚内に呼ばれて来たそうだ。
しかし、オールマイトオタクである緑谷も、表情はまだ冴えない様子、それは飛鳥も同じであり、俯く。
そんな沈痛とした暗い顔をした二人を見て、オールマイトは首を傾げる。
緑谷と飛鳥の頭に過るのは、死柄木弔の事だ。
あの時、ショッピングモールで、彼はこう言ってた。

――誰も救えなかった人間なんていなかったかのように、ヘラヘラ笑ってるからだよなぁ!!

救えなかった人間。
死柄木はもしかしたら、ただ単にオールマイトを殺したいのではなく、何か理由があるのではないか。
そう、心の中の靄が纏わり付き、頭の中から離れない。
まるでモヤモヤとした煙を吹き込まれたかのような、嫌な感覚。
オールマイトは誰もが認めるヒーローだ。
オールマイトに、救えなかった人間など存在しないとさえ言われて

来た。
当たり前のことだ、オールマイトに救えなかった人間なんていない…その筈なのに…死柄木の言葉が頭から離れない。
だから、オールマイトに聞くことにした。
「オールマイトも…救えなかった事はあるんですか？」
「――――……？」
緑谷少年…？
「オールマイト…オールマイトは、救えなかった人間はいないって言われてますよね…？
でもそれは世間一般の話で…
忍は、どうなんですか…？」
「飛鳥…くん？」
二人の気迫ある目に、オールマイトは思わず息を詰まらせる。
なんで、そんなことを？
あの時二人があの場所で、死柄木と話し合ったからこそ、出てくる言葉。
オールマイトは暫し黙り込み、ようやく口を開く。
「……あるよ、たくさん」

ポツリと、力なく言葉が零れる。

「今でも、この世界の何処かで、誰かが傷つき、倒れてるかもしれない…
悔しいが私だって人間だ、手の届かない場所の人間は救えない
――忍もね、人が見てない、存在すら認識されない場所で、善忍だろうと悪忍だろうと、抜忍だろうと、今でも倒れてると考えると、辛いよ……
忍の命は確かに儚いさ…でもね、私はそうは思わないんだよ。
だって、忍は影で出来てるんだ…影で人を、支え、世の平和の平衡を保つ。
影…ということは、人は影がないと生きていけないんだ。

人がいるから必ずしも影がいる、人がいるから必ずしも光がある。
だから、忍には…死んで欲しくないんだ……それは、私自身の問題も含めてね」

――――だからこそ、笑って立つ。

儚い命だろうと、死ノ定だろうと、それでも私は、一人のヒーローとして、影も大切だと思うし、その影が消えるのは何よりも辛いと感じる…
忍だって一人の人間だ、だから生きる意味を、生きる証を、自覚して欲しい、持って欲しい。
「正義の象徴が、人々の、忍の、ヒーローたちの、悪人たちの、心を常に灯せるようにね」
オールマイトは、空に浮かぶ星空を見上げながら、虚しく、それでいて悲しい顔を立てていた。
夜空に浮かぶ綺麗な星の数が、今まで誰にも手を差し伸べられず、救われず、死んで行った人間の魂が映し出されてるように見えた。
人々だけでなく、忍も、ヒーローも、悪人も、救う。
それは、昔のオールマイトから…『あの人』がいなければ、考えられない言葉だった。
自分でも不思議に思う、なんで彼女は殺されなければいけなかったのか…なぜ『あの子』は死ななければいけなかったのだろう…
時折、上層部の人間の考えは分からない。
オールマイトの様子を、遠くで見てた塚内が口を開く。
「二人は死柄木の発言を気にしてるんだ。
多分、逆恨みかなんかだと思う…オールマイトが現場に来て、救えなかった人間と忍は今までに一人もいない」
死柄木弔が、何故オールマイトを恨んでるのかも分からないし、理由は定かではないが、恐らく逆恨みなんだと思う。
オールマイトが現場で救えなかった人間はいない、忍と偶にタッグを組む時もあったが、半蔵の時と同じく、彼は何度か忍の命を救い出

した。
そんな彼が、救えなかった人間がいる訳がない。
だから死柄木の言葉はきっと、恨みや怒り、殺意による言葉なんだと思う。
「さっ、手配するね。三茶」
「ハッ！」
顔が猫そのもの、面構署長とは真逆な個性だ。
警察といえば犬、なのだが…反対で愛くるしい猫とはこれはまた…
三茶は塚内が信頼する警官だ、責任を持って二人の身柄は保証する。

二人の姿が遠く離れていき、目では見えなくなっていく。
二人の姿を見送る塚内とオールマイトは、微笑を浮かばせていた。
「なぁ、オールマイト」
「ん？」
「今回は偶然の遭遇だったようだけど、今後、彼…ひいては生徒が狙われる可能性は低くないぞ。
それは忍学生も例外じゃない――雄英と関わりを持つ忍学生…半蔵学院の誰かが狙われることがあるし、もしかしたら月閃女学館の生徒だって、被害に巻き込まれる危険性も低い訳じゃない。
もちろん、引き続き警戒態勢は敷くが、学校側も思い切った方が良いよ…
強い光ほど、闇も大きくなる――」
ヒーローが光なら、忍は影。
敵は闇。
今は良かったかもしれない、しかしこれが今日みたいに話し合いだけで済むとは限らないし、もしかしたら集団で攻めてくる危険性もある。
相手は打倒オールマイト…が目的だが、生徒たちも狙われる危険性もある。
「雄英を離れることも視野に入れておいた方が良い…

――オール・フォー・ワン、今度こそちゃんと捕まえような」
「うん、今度こそ…絶対に捕まえよう」

オールマイトの僅かに明るい瞳が、揺れる。
……緑谷少年、飛鳥くん…君たちには、ちゃんと生きて欲しい…
神威…オール・フォー・ワンと戦うことになるその時はもう私は、いないかもしれないから。

ゴメンな、塚内くんも…本当はいるんだよ…
どうしても、何処を探しても見つからなかった…
実は、救えなかった人間は…いるんだよ。
それも、大切なあの子を…私は…救えなかったんだから。

『未来ある忍の子達に……教えて……あげて…？お願い、オールマイト……生きる…意味を……』

ゴメンよ、陽花くん。
君の約束は、あの時果たせなかった…救えなかった――
何も…出来なかった……
でもな、見ててくれ、飛鳥くんを初めとした忍は、少しずつ、ちゃんと、生きる意味を見出して来てる――
そして、二度とあんな悲劇を生まないためにも、神威、お前は…この命に代えても絶対に捕まえる。

それから翌日。
昨日の事件が嘘のように、何事もない、いつもと変わらぬ日常を迎え、緑谷は学校に出向いた。
唯一変わったと言えば、お母さんが「出久、今日は学校休んだ方が良いんじゃないの…？」と心配してくれたこと。
流石に学校は休みたくないし、それに昨日の出来事があったからと言い、休む理由を作りたくない。
クラスに入ると、周りからは「昨日は大丈夫だったか？」とか、「二人ともよく無事でいれたよな」と声をかけてくれる。
昨日のことがあったのだし、心配されるのは当然かもしれない。
殺されてたかもしれないんだから、もし、死柄木に殺されてたら、皆んなはどう思うだろ？
…想像しなくても、それはきっと悲しむだろう。
かっちゃんは何て言うか分からないけど…
そうしてるうちに予鈴が鳴る。
当然、予鈴が鳴ったらさも当然のように相澤が教室に入ってくる。
一通りの挨拶を終えると、相澤は昨日起きた事件を口にする。
当然ソレは相澤先生の耳にまで届いており、その件で職員室は一時期混乱していた。
生徒の安否、今後の対策、それらの意見が飛び交い、教師達が出した結論は――
「とまあ、そんなことがあって、敵の動きを警戒し、例年使わせて頂いてる合宿先を急遽キャンセル。
よって行き先は当日まで明かさない運びとなった」
ええええええええええーーーーーー!?!

生徒の喚き声が教室に響く。
楽しみにしてた合宿先が、昨日の都合により突如キャンセルとされた。
生徒のブーイングや不満の声が、キャッチボールのように飛び交う。
しかし、合宿自体をキャンセルしない辺りは、まだ優しい方だろう。
向こうは得体の知れない敵連合だ、敵の大将が姿を現した以上、どんな事をしやらかすか分からないし、此方の合宿先の件も嗅ぎとられてる危険性がある。
だから今回、予定してた合宿先をキャンセルしたのである。

当日まで合宿先を教えない理由は、情報漏洩になる危険性が高いためだ。
生徒達を信頼してない…と言う訳ではないが、最低限その可能性を阻止するためだ。
何処から情報が漏れるか分からないし、そう言った個性を持つ輩がこの世にいても不思議ではない。
一方、教師達も同じこと。
よって、これを知ってるのは相澤先生を初め、ブラドキング、オールマイトに塚内刑事、合宿先の人間にしか知らないよう警備体制を整えている。
合宿先が何処なのかは不安だが、持参する物は一通り相澤先生が連絡を入れてくれるので、荷物に関しての心配は無用。
よって連絡は以上、特に変わった様子はなく、それ以降いつも通りの授業を受けるようになった。

それから随分とした日にちが経ち、あまりにも濃密だった前期は、幕を閉じた。

今思えばいろんな出来事が昨日のような思い浮かんでくる。
初めて忍と手を交わした日、敵連合の襲撃、蛇女子学園での一件、体育祭、学炎祭、そして職場体験、強化パトロールなど、気付けば色々なことがあった。
色々なことがあり過ぎて、半年以上過ごしてるんじゃないかって言う気分になって、時間感覚が狂ってる感覚がした。

――そしてついに夏休み。
林間合宿、当日――!!

A組とB組は二手に分かれ、指定されたバスに乗る。
高鳴る鼓動、己を強化するためとは言え、待ちにまった林間合宿。
バスに乗る途中、B組の物間から
「あれれぇ?!補習が五人もいるね?!おかしいなぁ?A組は僕らより優秀な超絶エリートなのに、五人もいる故に僕らより上ぇ?あれがぁ?お笑いだねぇ!ホラ、皆んなも笑おうよ!アレが惨めなA組の姿なんだよって、恥ずかしいよねぇ!」
と凄い嫌味をグチグチ言ってきたが「お前も補習じゃろ、人のこと言えるのか」と夜桜に手刀ではなく、重いゲンコツをくらいノックアウト。
痛そう…。
最近、夜桜が物間の監視及び、拳藤の代わりになってるのだが、B組の姉御肌の彼女は気にしず、寧ろ「夜桜には本当に感謝するわ」と感謝の意を表すほどだ。
そんなことがあってか、今バスの中は生徒達の騒然とした空気になっていた。
やれ音楽聞こうだの、ポッキーくれだの、尻取りしようだの、昨日の野球はどうだっただの、好きな異性はだの、それはそれは、煩い程に騒がしかった。
無駄がもっとも嫌いな相澤にとって、この空間はさも地獄絵図でしかなく、見てるだけで気が狂いそうになる。

普通の相澤ならここで「お前ら静かにしろ」と一声かけるのだが、今回だけは何も言わず瞼を閉じた。
（まあ、つってもこんなワイワイ出来るのは今だけだし…自由にさせとくか…）
一時間後、バスに降りれば自由なんてないのだから――

「何処だここ？」
そして一時間後、指定された場所に着いたバスは止まり、生徒達は降りていく。
見渡す限り、山だの森だのと、一目で見渡せる展望台のような場所に降りた。
特にこれと言ったものは無く、あるのは一台の車だけ…
ここに他にも誰か来てるのだろうか？なんて疑問を抱くものの、もう一台のバス…B組が乗ってたバスは何処にも見当たらない。
「あれ？B組は？」
「ここサービスエリアじゃねえのかよ…おしっこしてぇ…グレープジュース飲み過ぎた…」
瀬呂が辺りを見渡すが、B組のバスがないことに気付き、峰田はバスの中で官能小説トークをしながら、グレープジュースを飲み過ぎたことで、尿が溜まったのだろう。
千鳥足のようにステップしながら股間を抑えていた。
「何の目的も無くでは、意味がないからな…」
「え？目的って何ですか？」
相澤の言葉に飛鳥が尋ねるが、シカトされ二人組の人物に視線を送る。
「おー、やっと着いたかイレイザー！」

「ご無沙汰しております…」
見知らぬ女性に、相澤はペコリと一礼する。
イレイザー？突然、相澤のヒーローネームが出て来たことに疑問を感じる一同。
皆んなも声のした方向に振り向くと――
「煌めく眼でロックオン――！」
――え？
「キュートにキャットにスティンガー！」
「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!」
カッコよいポーズを決める二人組みのヒーローに、隣には目つきの悪い、角のある帽子をかぶった小さい少年が一人。
この少年は見た所ヒーローと言う訳ではないのだが…というよりもこの人たち誰なんだろ？
「こ、この人たちは？」
「あー！ワイルドプッシーキャッツだ!!略してワイプシ！
ヒーロー事務所を構える四名一チームのヒーロー集団！
山岳救助を得意とするベテランチームだよ！
…あれ？でも二人…しかいないけど…」
「デクくん、やっぱりヒーローになると性格変わるよね」
「うん…オールマイトだけじゃなくて他のヒーローのことまで教科書通りに知識覚えてると、もう緑谷くん何でも知ってるんじゃないかな…」
鼻息を荒く、興奮して解説する緑谷を遠くみるお茶子と飛鳥。
二人は何かしら、何処か似ている箇所がある。
それが何なのかは知らないが…
「あー、『ラグドール』と『虎』はいないよ、明日は来るけど！」
金髪のピクシーボブが声をかける。

つまり、今日は二人だけ…と言うことか。
「えーっと、アンタ等の宿泊先は山のふもとにあるから、今は９時半…考えると１２時前後かしらん？」
え？ちょっと待て。
こんな半端な場所に自分達を降りらせたのは、もしや…
生徒達の顔がみるみると青ざめていく。
これは、不味い…まさか…

「おいお前らバスに戻れ!!」
「うそだろ嘘だろ!?」

切島が先頭として声を上げ、早くもバスに戻ろうと走る。
それに続くかのように、他の皆んなも切島の後を追う。
「１２時半にまで付かなかったキティらはお昼抜きね？」
しかし当然、バスに乗ることなど出来るはずがなく、地面は揺れる。
地震？いや、相澤や他の景色には特に異常はないし揺れていない様子…
と言うことは…この場所のみが揺れてる。
地面がやがて柔らかくなり、そして巨大な土砂土流がＡ組全員を飲み込み、柵を越え、飛ばされる。
「悪いな諸君。合宿はもう始まってるんだ――」
甘くみてた。
流石は雄英、まさかバスを降りたその時からもう強化合宿を始めるとは、雄英は本当に唐突という言葉が好きだ。
だから、今…生徒達は、修羅の場所に陥ったのだ。
「うぇ…ここ何処だ？」
口の中に入った砂や土を吐き出す。
先ほどピクシーボブの個性『土流』で制服が汚れてしまった。
土を自由自在に操ることの出来る彼女は、こういった山林や山岳地帯といった自然的なフィールドではとても有利だ。
見渡す限り、森やら雑草やらで溢れて、目的地が見えない。

しかし、唯一頼りになるのは記憶だけだ。
黒髪のボブ、マンダレイは合宿先に指を差していた。
なら、その方角を頼りに突き進めば良い。
「雄英…改めて本当に凄いよね…今まで訓練とか、そう言うのここでしなかったから…尚更」
飛鳥も、土で汚れた頬を拭い、息を飲む。
自分たちもここで在籍してる以上、全力を持って壁をの越えなければならない。
それは、飛鳥だけでなく、柳生や雲雀も同じだ。
大道寺との試験、自分たちは全力を尽くして止めたとはいえ、やられていた。
相澤先生が言うからには「３０点が赤点とすればお前達は４０点だ」とかなり厳しい評価を受けた。
自分の力が未熟だと言う事実を突きつけられた二人は、当然黙ってるわけがなく、飛鳥に負けずと食いつくばかりに走り出す。
「邪魔なものが入るよりかは断然的にまだ優しい方だな…」
柳生の言う通り、自分たちが受ける訓練はこれくらいのことどうって事はない。
険しい道のりなのは確かだが、そこに傀儡や忍がいなければ…
「グルルゥ…」
「――ッ!?」
突如、視界を覆う無数の木々から獣の呻き声が聞こえる。
柳生の足が止まり、声の主に警戒する。
獣？こんな場所に一体…
しかし、柳生の警戒も気にする事なく、無我夢中に走り股間を抑える峰田は白目を剥きながら「トイレぇ～！」と小声で呟き足を止めない。
「おい峰田止まれ！何かいる！」
「オイラの目の前に壁があろうとも、登って越えて行く…！」
後少しだ、後少しで…！
柳生の忠告など意に介さず、峰田は尿が漏れるのを辛抱し、走って

いると、目の前の何かにぶつかる。
目の前を見ていなかった彼は、木にでも当たったんだろうと、前を見ると。
「グルルゥァァァ――!!」
虎でも熊でもない、異形な形をした化け物、魔獣が立っていた。
「魔獣だあああぁーーーー!?!!」
上鳴と瀬呂の叫び声と共に、峰田は恐怖に表情を歪ませる訳でなく、終わった…と言う蛇に睨まれた蛙でもなく、峰田の表情は、嫌に笑顔で優しかった。
ジョ～…という嫌な水の音がして。
それも、臭い匂いが…
「獣よ!・静まりなさい!」
ここであの無口な口田が牽制するよう声を振り絞る。
口田の個性は生き物ボイス。
声で生き物を操る口田の個性は、相手が動物であれば何でも操ることができる。
しかし口田の声など意味を成さず、魔獣は腕をゆっくりと上げていく。
峰田を捻り潰そうとするように、峰田目掛けて振り下ろす。
「あのバカ!」
柳生は苦虫を噛み潰したかのように、表情を歪ませ、舌打ちをする。
柳生からして峰田は恐怖のあまり、腰を抜かして身動きが取れないと勘違いしてるが、峰田はそれよかとんでもない状況に陥ってるので、魔獣のことなど今の峰田にはどうでも言いのだ。
しかし――魔獣が腕を振り下ろすこともなければ、峰田が捻り潰されることもなかった。
魔獣に飛びかかる人物が五人、峰田の前を通り過ぎる。
爆破、斬撃、蹴り、氷結、拳、様々な攻撃が魔獣に襲いかかり、魔獣は跡形もなく姿を崩す。
爆豪、飛鳥、飯田、轟、緑谷の五人が、魔獣を倒したのだ。
この魔獣の正体は土でできている。

木や雑草やらが混じってるが、これはピクシーボブが個性で作り出した魔獣。
ただ単に簡単に目的地に来られても意味がない。
これは強化合宿、合理的に行う。
そのため、遠い合宿施設をピクシーボブが邪魔をする。

しかし生徒達の様子は、ピクシーボブからでも確認する事が出来た。
遠くでも様子を見れるスカウターで、生徒達の様子を観察していた。
「どうです?ウチらの生徒達は…」
「くうぅ〜!!逆立って来たァ〜!」
ピクシーボブは五人が自分の魔獣を倒されたことに、興奮する。
決して変な意味ではなく、自分も少年少女に負けんと言わんばかりに、心に火が付いた。
そしてピクシーボブは複数の魔獣を何度も作り出し、生徒達にぶつけさせる。
「それにしても凄いね、イレイザー所の生徒、忍学生を雇うなんて…どうしたの?」
「雇うっつーかな、まあ訳ありの事情で…アンタらも忍に関しては三ヶ月前に知ったんだっけか…」
「まあね〜、まあ忍学生もそうなんだけどさ、結構気合入ってるじゃん?
仮免取得のために向けての強化合宿…普通二年生からじゃなかったっけ?」
「まあ、ウチの生徒は無駄は多いですが…実力はそれなりにありますし…
それに、仮免は確かに二年生前期から取得するモノ…
ですが、緊急時における個性行使の限定許可証、ヒーロー活動認可資格、仮免。
敵が活性化し始めた今、一年とはいえA組にも、自衛を術が必要だ

――」
木椰区ショッピングモールの時みたく、死柄木や他の敵が彼らを狙う可能性もある以上、危険因子を取り除くべく徹底的に対策を練らなければならない。
その為の一つが仮免。
忍学生からすれば関係ない…と思うかもしれないが、大有だ。
確かに彼女らは忍を目指してるので、仮免…とは縁が遠いが、彼女らにも彼らと同じく訓練を積ませても損はないし、霧夜に言われたのだ…
『今後とも、飛鳥達を厳しく指導してやった下さい…』
同じ教師だ。
あんな事を言われたら、彼女たちを除くのは些か悪い。
同じ教室で過ごす以上、躊躇もしないし遠慮はしない。
それに忍になるのに彼女らも、越したことはないだろうから。

「ほら、行くよ洸汰」
マンダレイが小さな洸汰と呼ばれる少年を手招くように声をかける。
小さい子供ときたら、とても愛想が良く、人懐っこいのだが…彼だけは違った…
「何がヒーローだ…何が正義だ…下らん――」
それは、余りにも…憎しみに近い何かを、少年は持っていた――

９３話「洸汰くん」

「ヤーーッとついたにゃんね」
合宿施設、マタタビ荘の広間の前で、ピクシーボブが両手を腰に当ててＡ組の帰りを待っていた。
もう夕暮れ…空は夕焼け色に染まっており、見れば分かるがもう昼はとっくに過ぎている。
今の時間は大体５時半だろうか、予想以上に時間が掛かってしまった。
魔獣を相手にし、森を抜け、空腹と疲労に襲われながらも、クラスの生徒達は何とか辿り着くことは出来たものの、ボロボロだ。
制服は泥やら土やらで汚れており、汗は滝のように流れ、土と汗の匂いが混ざり、スポーツから帰ってきた気分だ。
まあ尤も、スポーツなんて生易しいものではなく、強化合宿を始めて初日から、こんなにヘバッてしまうなど、誰も思ってもいなかった。
どんな時でも、人の常識を軽々と超えていく雄英の厳しいカリキュラムは流石！と言いたいが、激しい空腹と何倍もの疲労感が溜まっており、最早そんな前向きな考えは出来るはずがなく、全員虫の息だ。
忍学生の三人も、常人とかけ離れた訓練や、それなりの耐久値はあるものの、流石にこれはキツイ。
昼抜きのまま、何も食べずずっと走りっぱなしだったのだ。
タダでさえ宿泊施設が遠いというのに、ピクシーボブの造り出した魔獣が、倒すたびに何度もなんども現れ襲いかかってくるので、もう頭がはち切れんばかりのストレスと、永久的に続くかのような時間感覚に囚われ、もうとにかく酷いのだ。
「何が『３時間』ですか…腹減った…減り過ぎて胃袋がどうにかなっちまうよ…」
「死ぬぜ……さっきから腹の虫が収まらねえ……お腹と背中がくっ付きそうだ…」

「僕は別の意味でお腹痛いけどネ☆」
瀬呂と切島はマンダレイ達に野次りを飛ばし、お腹を抑えてる青山は何故か得のしないドヤ顔を決める。
しかし、お腹を抑えてるあたり全然カッコよくない。
青山がお腹を抑えてるのは、空腹やトイレと言った類ではなく、個性を使い過ぎたからだ。
青山の個性は確かに威力は良いものの、持続時間が1秒ゆえに、使いすぎると、または1秒以上放出し過ぎるとお腹を壊してしまうデメリットが存在する。
ふもとまで自力で走ってきた。体力的な意味での疲労ではなく、個性を使った上を踏まえてのこの重たい疲労、早く床に就きたい…
「ごめんねえ、アレ私たちだったらって意味だったのよ。
まあでも意外…本当はもう少し時間が掛かると思ってたし、因みにB組の生徒はまだ来てないわ」
「ねこねこねこ!本当それね!
私の土魔獣、本当なら結構強いんだけど、簡単に攻略された時はビックリ!
皆んな良かったんだけど…特に君らその五人…躊躇のなさは経験によるものかしらん?」
爆豪、轟、飯田、緑谷、飛鳥、この五人だ。
意外にも、マンダレイとピクシーボブは褒める。
二人でならってことは…つまり、自分たちよりももっと早く辿り着けてたって言う事になるのか、なんというか…そう言われると返す言葉もない…それ以前に、プロヒーローの凄みが肌に染み渡り、思い知らされる。
逆にそれが嫌味にも聞こえるのだが。
「三年後が楽しみー!取り敢えず唾つけとけ!ペッペッ――!」
「うわっ、汚ねぇ…!」
「おい!唾つけんなや!」
ピクシーボブの唾をガードするよう腕を交差して身を守る。
「マンダレイ、ピクシーボブってあんな人でしたっけ?昔は何という

か…夫が欲しいとか、女の幸せ掴みたいとか、どうとか…」
「ああ、彼女ね焦ってるの…適齢期的な意味で」
ああ成る程…
偶々よく見るパターンの人だ。
心の中で呟いたが、決して口には出さなかった。
言ったらなんかそのネコの手をモチーフにしたグローブで顔に思いっきり猫パンチを食らってしまう気がしたので…
「あっ…そう言えば…ずっと気になってたんですけど…その子、どなたかのお子さんですか？」
マンダレイとピクシーボブの後ろ、相澤の隣に立っていた少年が、鋭い目つきをした顔で反応する。
「あー、違うよ。
この子は私の従甥だよ、ほら洸汰、お兄さんお姉さん方に挨拶しなさい、一週間お世話になるんだから…」
「――うるさい、世話なんて要らない…」
洸汰はマンダレイや他の皆んなに聞こえない範囲で呟くと、トボトボと歩き、緑谷の近くに来る。
緑谷はニコッとした晴々しい笑顔を見せ、手を差し伸べる。
「あ～っと、僕！雄英のヒーロー科の緑谷、宜しくね！」
「……ふん！」

ゴチン！

「ぶっ!?!」
瞬間、誰もが目を疑う光景を目の前で見てしまった。
洸汰は緑谷の手を力強く握ることも、邪魔だと払うこともなく、拳を強く握りしめ、股間めがけて…それこそ男性の誰もがついてるゾウさんと二つのゴールデンボールを潰すかのように、力いっぱい入れたのだ。
股間から強烈な激痛が走り、白目を向いたまま押さえ込み無様に倒れる。

「緑谷くん!?おのれ従甥!何故、緑谷くんの急所を…「うるせえ黙れ、話しかけんな」なに!?」
緑谷を心配し駆けつけた飯田が呼び止めるも、洸汰は緑谷たちに背を向けたまま、飯田の言葉など気にもせず、口の悪い利き方で返してくる。
「ヒーローになりたい、なんてイかれた連中とつるむ気なんざねえよ」
「つるむ!?君は一体幾つなんだ!?」
洸汰はそのまま、宿泊施設のマタタビ荘に入っていき、姿を消した。
あの子は一体何なんだろう…と皆んなは思うが、さほど強い感じではなかった。
小学生か、それくらいの子どもはあんな爆豪みたいな性格をした子どももいるだろう。
まあ尤も、爆豪本人の目の前で「お前に似てるな」なんて言ったら爆殺ものだ、口が裂けてもそれは言えない。
「なあ、爆豪」
「あ?」
「洸汰って、お前に似てるな」
――いた。
ここに、轟焦凍というハンドクラッシャーがここにいた。
爆豪本人に、しかも直接言うとは、天然とは言えここまで来ると、嫌がらせにしか見えない。
「アァ!?俺が小学生並みって言いてえのかクソ舐めプ野郎が!」
当然、こうなる。
轟は何の悪そびれた態度も出すことなく「ああ、悪いな、似てる」と二回言い、ブチ切れをした爆豪は掌を爆破し轟に殴りかかるも切島がそれを止め、落ち着かせる。
「オイお前らそろそろ良いか?
さっさとバスから荷物下ろせ、部屋に荷物運んだら食堂にて夕食だ。
――その後、入浴で就寝だ。
本格的なスタートは明日からだ、今日は早めに体休めとけよ」

はーい。と気怠い声を発する皆んなは、雑談をしながらもバスから荷物を降ろしていく。
しかし、これが終わったら夕食…
昼抜きなので、夕食はたらふく食べて空腹を満たそう。
「皆んな疲れてるのも当然ね、私たちも早く荷物降ろして夕食の時間にしましょう」
飛鳥の隣で蛙吹が呟く。
しかし、飛鳥はマタタビ荘に視線を向けたまま、一向にバスから荷物を下ろす気配はない。
「ケロ…？飛鳥ちゃんどうしたの？」
「ッ！あー、ううん！何でもないの、気にしないで梅雨ちゃん！」
「ケロ…」
ボーッとしてた飛鳥は、蛙吹の言葉でようやく我に返り、慌ただしい素振りを見せる。
当然、何でもないし気にしないで、なんて余計な言葉が出れば、何かあるんだろう…と疑うが、深い詮索は嫌われちゃうし、失礼なので、この際問うのはやめた。
そして飛鳥は再度、洸汰が入っていった場所に視線を戻す。

――なんだろう、この嫌に胸に引っかかる言葉は…
洸汰。
彼のような子どもはあまり触れ合ったことがなければ、そう言う今の幼少期の子供達について、どんな感じの子なのか、知識が疎い。
自分の想像してる、あれくらいの年齢の子といえば、明るかったり、ヒーローになりたいなんて、漠然とした夢を見る子だろうと思うのだが、洸汰は飛鳥の想像の真逆、むしろヒーローと関わりたくない、憎悪に近い眼差しだった。
ヒーローのことをよく思ってないのかな…？
人それぞれだし、一概的には言えないけど…
アレ？でも、なんだろ…洸汰くん、なんか誰かに似てる気がする…
似てるって言うより、外見的な意味じゃないんだけど、言葉の意味

…なのかな、性格とか、誰かに似てる気が――…

――焔ちゃん？

ううん、違う。

まあ、昔の焔ちゃんの目つきは、洸汰くんに似てる感じだったし、ヒーローとか、善とかの馴れ合いは言語両断だったけど、何か違う。

――雪泉ちゃん？

う～ん…近い。

昔の雪泉ちゃんの、悪は滅する…という歪んだ正義の価値観の眼差し、憎悪と言ったレベルでは似てるが、何かパッと浮かべない。

――雅緋ちゃん？

雅緋ちゃん…は、会ってから日は浅いしよく知らないけど、ああ言う厳しめな発言は雅緋ちゃんよりもやっぱ爆豪くんみたいだし…あっ、でも焔ちゃんは昔は結構言葉遣いが荒かったなぁ…

正にＴＨＥ・悪忍だったし…

他に違うと言ったら一体誰だろう？

考えても、頭の中がモヤモヤするだけで、答えが見つからない。

「――おい、おい！飛鳥！」

「へっ!?あ、相澤先生…？な、何ですか？」

「何ですかじゃねえ、何ボーッとしてるんだお前は。

後残る荷物お前だけだぞ、他のみんな先行ってる、早く支度しろ」

「――え？あっ、嘘!?ちょっと…！」

気付けば、バスの中にあるのは飛鳥の荷物だけとなり、他のみんなは施設の中に入っている。

自分も早くしないと…！

焦る気持ちを胸に抱きながらも、荷物を取りに走って急ぐ。

いただきま～す!!

横長い木製テーブルの上には、豪勢豊かな料理がズラリと並べており、色んな品の匂いが食堂に充満し、皆んなの食欲を爆発的にそそる。
どれもこれもデカ盛りとは有難い。
ポテトサラダ、唐揚げ、コロッケ、刺身、ｅｔｃ…プラス、白米に豚汁。
もちろんお代わり自由。すみません自分、フードファイター目指してもよろしいか？
食事の挨拶を軽く終わらせると、皆んなはガッツクように食事に食いつき、せっせと料理を口に運ばせる。
美味い！最高！など、さも当然のような感想が溢れかえり、瞬く間に騒がしくなる。
しかし、空腹だと本当に何でも食えるし、今ならどんな物でも胃袋に収まる。
白米はモチモチとした食感がよく、ランチラッシュの料理に負けを取らない。
豚汁もいい出汁が取れてるし、具材は豚肉を始めとして、人参、じゃがいも、ネギ、こんにゃくなど様々な種類が入っており、程よい出汁と絡み合い、無限にお代わりしたくなる味わいだ
他にもポテトサラダも、口の中に広がるジャガイモの味に、マヨネーズとマッチした淡白な味が特徴。
コロッケなんかも、サクサクとした香ばしい香りに、中にはクリーミーな食感がたまらない。
ジャガイモばっかじゃないか、まあ美味しいので文句は無いが…
刺身はマグロ、鯛、サーモン、海老など、色鮮やかで艶があり、脂っぷりも良く、醤油に漬けて食べるのが何とも…これが刺身の魅力なところ。
刺身よりも寿司の方が好きだ！と言う輩もいると思うが、空腹の中ではそんな事どうでも良く、気にしない。
唐揚げも、外はカリっとした歯ごたえに、中身はとろっとろのジューシーとした鶏肉、塩胡椒は自分で調整出来るので、自分のかける分量は好きなようにかけて、食べる。

家庭的な味だが、空腹と疲労に解放された今は、そんなのはどうでも良く、どんな物を食べても美味しいことに変わらないのだ。

そんな感じで、楽しく賑やかな夕食は、満腹に満たされ終了した。

「っとまあ、ね。

夕食とか、そう言うのはどうでも良いんすよ……オイラが求めてるのは別。

分かってんすよ…そう、求められてるのは、この壁の向こうなんスよ――」

「峰田くん、さっきから何言ってるの？」

夕食が終わった生徒達は、Ａ組から先に湯船に浸かる時間…つまり、温泉を満喫していた。それも露天風呂。

そう、お風呂の時間だ。

クラスの中では男子が多く、漢供は、漢同士、背中で語り合い、汗を流す。

しかも夏とは言え、夜は外の空気が涼しく、温泉の暑さと外の空気で調整され、居心地が良い。

空は綺麗な星が輝かしく、まるで天の川のようだ。

正に絶景、夕食も豪華で露天風呂もある、なんて良い合宿なんだろう…

しかも湯船に浸かると、今までの疲労が全て流されるように消えていき、気持ちいい快感が全身に巡る。

しかし、峰田が求めるのはそんな物では無かった。
そう、峰田が望むもの…それは、女風呂という天国を覗くこと…つまり、桃源郷が目的。
峰田は、ずっとこの日を待ち焦がれていたのだ。
もはや峰田にとって変態という言葉は勲章であり、褒め言葉。
寧ろ、変態という本能に従い生きてると言っても過言ではない、世界でも滅多に見ない変態中のド変態。
峰田は一人、ポツンとカッコつけて男子風呂と女子風呂を隔ててる壁の前に立っている。
「み、峰田！今ならまだ間に合う…やめろ、それだけはやめるんだ！」
「上鳴…それでもお前…男か？あァ？」
「いや男だけど…確かに女子は可愛いし好きだし、なんつーの？気になる気持ちはわかるけどよ…お前ヒーロー科だろ？」
「ハッ！これだから甘ちゃんは…ヒーローという言葉を使って直ぐに正当化させようとする！良いか？男はな、ロマンを求める生き物なんだ…そうやって出来てるんだよ…！」
峰田はハン！と嘲り笑うように鼻で笑う。
木椰区ショッピングモールで、ナンパをしていたチャラい上鳴も、流石に女風呂を覗くことに躊躇っている。
それもそうだ、確かに女と付き合うのは、まあプライベートの問題だし、付き合おうとするのはまだセーフかもしれない…しかし、峰田は欲望に溺れてしまい、最早犯罪の手にまで染まろうとしてるのだ。
それを止めるのが、上鳴[友]の役目よ。
しかし、性欲に塗れた峰田がそう簡単に言葉だけで止まるのであれば、誰も峰田の事には苦労しないだろう。
「上鳴…考えてみ？あの中でスタイルいいヤツつったら？」
「え？えーっと…八百万に……忍学生の…ハッ!?」
ダイナマイトボディを誇る女子生徒と言えば…
露出高めの副学級委員、八百万。
天真爛漫、元気で明るい飛鳥。
クールで逞しい胸を備える、オレっ娘の柳生。

兎のような小動物、お尻がムチムチな雲雀。
忍学生＝ナイスバディ。
上鳴の頭の中で勝手にコンバージョンした。
いや、上鳴だけでなくこの場にいる男子の誰もが想像付くだろう…
今まで自然的な常識で、なんとか受け流して来たが、忍学生はどういう理由か、都合よく胸が、夢と希望がつまったオッパイが、大きいのだ。
それは忍学生の体質か、理由は定かではないが、とにかく胸が大きいのだ。
それも尋常じゃないくらいに。
動くたびにプリンのように揺れ、この世の大地の恵みのような、安らぎを感じる柔らかさ。
触ったことがないし、仮にそうなってしまったら確実に無事じゃ済まされないが。
しかし、忍学生に「なんで胸が大きいの？」と聞くのは愚問だ。
これは自然的な…いや、宇宙の意思であり、摂理なのだ。
因みに、抜忍の焔紅蓮隊の未来や、悪忍の両備に「なんで君たちは胸が小さいの？」という質問はしてはいけない。禁句だ。
胸に風穴が開くじゃ済まない、体全身に穴が空くだろう。
死刑すら生ぬるい処罰が下される事間違いなし。

胸があるからこそ、掴みに行く。
これぞ、命懸けで取りに行く。峰田は、閃乱の境地にて、胸を掴むがために、その桃源郷に咲く果実を拝みに行く。
出来れば掴んで食したいのだが、それが出来れば苦労はしないし、忍学生も務まらない。何よりも規制確定だし、仮にR寄りにしたとしても、相手が峰田ならば残念だ。
「考えてみろ？ホラ、皆さん…手を胸に当てて、落ち着きましょう？
今日日、男女の入浴時間ズラさないなんて…その時点でもう事故、これはもう事故なんスよ……
神が言っている…『望み求めるならば、行くが良い、禁断の果実を

拝めに行くが良い』と…」
しかし、これはただの妄想であり、幻聴である。
峰田の頭の中はもうおっぱいのお花畑でいっぱいだ。
男としてのプライドや羞恥心などない…いや、プライドはある。
変態という名のプライドが。
しかし――

「峰田くんやめたまえ!!
――君のしてる事は己も女子陣も貶める恥ずべき行為！何よりも覗きは犯罪であり、法律違反だぞ!!
ヒーローを志す君が、犯罪者…いいや、それこそ敵となりうる存在に変わってしまってどうするんだ!?
改心したまえ峰田くん！」
当然、そこに壁と呼ぶべき番犬のような飯田が止めに入る。
サッカーで言うならゴールキーパー。
宝箱を守る強敵。
ドラクエで言うローラ姫を守るドラゴン。
勇者である峰田は、女子風呂を覗こうとするも、それを守る飯田というドラゴンが止めに入る。
なんか勇者が悪者で、ドラゴンが勇者みたいだ、勇なまじゃないんだから…
ガードの固い男だ。その硬さはメ○ルキング級である。
峰田はさも失望するかのような表情を立てる。
その顔があまりにも酷すぎて、逆に笑いがこみ上げてくるが、峰田は直ぐに悟りを開いたような穏やかな顔に変わり「やかましいんスよ…」と呟く。
瞬間、訓練されたかのような、俊敏なる素早さで頭のもぎもぎを取り、壁にくっつけ壁をよじ登って行く。
「壁とは！越えるためにあるもの『ＰｕｌｓＵｌｔｒａ』さ！」
「教訓を穢すんじゃない!!」
しかしもう遅かった。

飯田の言葉など意に介さず、峰田は性欲に赴くがままに、欲望をさらけ出すかのように、ケダモノは壁をよじ登り、桃源郷へと向かって行く。
なぜ山を登るのか？そこに山があるからだ。
峰田も言うだろう、なぜセクハラ（覗き）をするのか…そこにオッパイがあるからだ。
そして女子は言うだろう、そんなもん知るか、と。
半蔵学院に一人だけセクハラをする人がいるが、多分峰田と同じセリフを言うだろう。
しかし、あの人は性格がエロじじいとは言え女性なのでまだ百合の華として捉えられるのでセーフだが、峰田は完全にアウト。
後少し、後少しで壁を越え桃源郷に着くことができる。
天国に咲く、豊満なる果実を、その目で味わうことが出来る。
「オイラはこの日のために待ってたんだよおおおぉぉ!!
スケベでエッチなものを期待してる皆の衆！オイラは為してやるぜ…英雄、峰田実の勇姿をしかと見ろおおぉぉ!!今の俺は英雄グンダだぜぇ！」
もう頭の中がとにかくおっぱいしかない。
峰田は上か下かどちらか好きか、どっちも好きだが、どちらかと言えば、上だ。
おっぱいは余すことのない、魅力溢れたものだ。
おっぱいにいっぱいだ、おっぱいに乾杯だ。
そしてグンダに謝れ。殺されるぞ。
さぁ、いざ…桃源郷へ――

その時、峰田の行く手を阻むかのように、目付きの悪い一人の少年が壁の上から出てくる。
だれもが予想しなかった出来事だ。そしてその少年は、出水洸汰。
マンダレイの従甥であり、緑谷の陰嚢を殴った張本人でもある。
「ヒーロー以前に、人のあれこれから学び直せ」
――トンッ。

「クソ餓鬼イイィーーーーー!!!!」
峰田よりも年下の少年に論破され、突き落とされてしまった峰田は、英雄でもハンターでもグンダでも勇者でもなんでもない、ただのアホだ。
それも世界一恥ずべき人間である。
恐らく洸汰は、マンダレイに「相澤から一人だけ変態がいるから監視してきて」と言われたので、渋々と承諾したのだろう。
だから監視役として見回り、こうして峰田という犯罪に手を染めたケダモノを止める事が出来たのだ。しかしヒーローを目指す人間が覗きって…
なんて呆れながら洸汰はため息をつく。
「峰田ちゃんサイテー」
「アイツ後で夜桜に頼んで煩悩ごと打ち砕させてやろう…」
「洸汰くんありがとー!」
後ろから苦楽とした女性の声が聞こえる。
突然お礼を言われたので、反射的に後ろを振り向くと…そこには、確かに天国が存在した。
湯気が立っているので都合よくアウトな場所は隠されてるが、それでも充分に凄かった。
まずピンク肌の芦戸は親指をグッと立てて感謝をし、雲雀はその我儘ボディを活かしながら立ち上がり、両手でピースサインを送る。
乙女のように恥じらい、胸を…真ん中の位置にあるアレを腕で隠しながら頬を赤く染める八百万にお茶子、梅雨ちゃん、飛鳥、そしてついでに耳郎。
柳生は冷静であり、風呂に入っててても眼帯は外さない。
湯船に空洞があるが、これは葉隠だ。
透明な彼女は一見、何も見えはしないが、鮮明に空洞が空いてるため、そのボディラインはしっかりとしてる。
「――ッ?!!」
当然、小学生で幼い彼には刺激が強すぎたため、鼻から血を出してしまい、温泉にでも浸かったかのようにのぼせ、火がついたかのよう

に顔を真っ赤っかにする。
これは不可抗力であって、決してわざとではない。
よくあるハーレム系やノベル小説、結城〇トのようなラッキースケベではない、事故。
これは本当に事故、仕方ないのである。
少年は下心がないし、潔癖であるので、事故でも笑って許せる。
良いことをした上で、鼻血を出して気絶してるのだから、これを責める人間は峰田と同類だ。
落下して来る洸汰を、緑谷がつかさずキャッチする。
もしあの高さで頭をぶつけたら、確実に病院行きだ。
本当の、違う意味で事故になる。
しかし、峰田はだれにもキャッチされることなく、これでも運良く湯船に落ちたので、頭ぶつけずセーフ。
しかし落っこちた先は、爆豪の目の前だったので「何だクソ葡萄がああぁぁ!!」と怒鳴り、爆豪は峰田の首根っこを掴んで乱暴にする。当然の帰結だ。アレが峰田実という愚か者の末路だ。
まるでハイエナに捕まった子兎のようだ、ウサギに失礼だが許してください。
「良かった…洸汰くん無事みたい…」
そんな峰田を気にする事なく、緑谷は気絶してる洸汰の外見を見て安全を確認するとホッとする。
今のところ、傷らしいところは見てないので、大丈夫だが…
気を失ってるので、取り敢えずマンダレイの所に戻ろう。

「ふぅ…スッキリした…」
「峰田本当にすこぶるサイテーだ!信じられなーい!」
「ね!本気で覗きをするなんて!…将来が心配…」

「まー、アイツは一旦心の底から反省するべきだって」
一方、洸汰のお陰で峰田の魔の手から阻まれた女子陣は、峰田の事に腹を立てていた。
それもそうだろう、変態変態と思っていた彼が、最早犯罪の手に染まるなど、だれも予想しなかった。
今回は洸汰が監視役として見回りに来てくれたので、阻止してくれたが、もしいなかったと思えば…もしかしたら、本当に裸を見られてたかもしれないと想像すると…寒気がする。
あんなヤツに裸を見られるなんて…という苛立ちも同時に湧き上がって来るので、体の疲れは取れたものの、精神的な意味では疲れが取れなかった。
いや、取れたが疲れがたまる。疲れというよりストレスだ。
「オレたちにとってアイツはゴキブリ以下の害虫だ…駆除しておいた方が良い…雲雀の体をあんな屑に見られるのは御免だ」
柳生はいち早く寝巻きに着替えて、自室に戻ろうとする。
そう言えば、今夜は女子とみんなでトランプで遊んだり、女子のガールズトークをしたりするんだっけ。
因みに提案者は芦戸、彼女は補習組の一人だが、今日だけは補習がないのでゆっくりとくつろぎ遊ぶことが出来る。

皆んなが峰田の事で文句を垂れつつ、会話しながら自室に戻る中、飛鳥だけはモヤモヤとしていた。
それは洸汰のことだ。
さっき洸汰は峰田の魔の手から守ったのだ。
しかし彼は落っこちてしまったし、あの後洸汰がどうなったのか気になるので、飛鳥は皆んなに「ごめん、私ちょっとトイレ行って来る！後飲み物も買ってくね！」と告げて、皆んなから離れた。
飛鳥は一人、音もしない静かな廊下を歩いていると…ベンチに緑谷が座っていた。
少し遠いが、人っ子一人いないので直ぐに分かる。
緑谷は片手に自動販売機で買ったコーヒー牛乳を飲みくつろいで

るも、表情が暗く、落ち込んでいた。
何を落ち込んでるのだろう?と飛鳥は「おーい!」と声をかける。
飛鳥の掛け声に気づいた緑谷は、視線を彼女に向けると、「うおぉ!かわ…飛鳥さん?!どうしてここに?」と飛鳥を見て一瞬頬を赤く染め動じるも、直ぐに心を落ち着かせた。
緑谷が驚いたのは、飛鳥が突然声をかけて来たからではない。
飛鳥のことは慣れたのでそこは問題じゃないのだが…
緑谷が驚いたのは、飛鳥の姿だ。
可愛いパジャマの寝巻きに、今まで束ねてた髪が解け、下ろされている。
簡単に言えば、真影の飛鳥の髪型と同じだ。
髪を下ろす姿は滅多に見ないし、それだけで印象が変わるので、一瞬戸惑うのも無理はないだろう。
だって髪下ろすといつもと違って可愛いもん。
なんか新鮮な感じだ。
しかもまだ髪は乾かしてないのか、濡れており、風呂上がりのシャンプーの匂いがする。
「隣良い?」と彼女が聞いて来る。
ドクンと心臓が脈打つ。
こんな美少女にこんなこと言われたら堪らない。
しかし、今回の緑谷は心臓こそバクバクしてるものの、「う、うん…良いよ」と平常心を持って言葉を返す。
隣にいると、彼女が近くで見られるし、何故か妙にソワソワする。
少しだけ沈黙が続くと、飛鳥は口を開け「そう言えば洸汰くんどうだった?」と聞く。
男子なら知ってるだろ、と飛鳥は思ったのだ。
「あ、うん!洸汰くんは僕が運んでったし、マンダレイに診せて貰ったところ、「刺激の強すぎるものを目の前にしたのと、落下による恐怖で失神しただけだから、命に別状はないよ」って…大丈夫だって」
「あ、そっか!なら良かった〜…」
安全なら様子を見に行かなくても良いか。

しかし、洸汰くんも災難だ。
まあ、ああいう年頃は羞恥心があるし、峰田くんのような変態行為には手を染めないだろうから、裸を見られても叱りはしない。
そもそもアレは峰田くんの行為を止めただけだし、お礼を言われて反応しただけなので、悪気があった訳ではないので、問題ない。
「……」
「ねえ、緑谷くん…どうしたの？さっきから元気ないね？」
「あ、そう見える…かな？はは…」
「もぉ～…同じクラスなんだから、悩みがあったら言ってよ、私ももしかしたら力になってあげれるかもしれないから！」
苦笑する緑谷に、飛鳥は協力すると言っている。
やっぱりこの人は優しいな…と思った緑谷は、「飛鳥さんなら…」と思い、洸汰のことを打ち明ける。
「ねえ飛鳥さん…
守られてる人間って…どんな、気持ちなんだろ…」
「え？」
緑谷は、マンダレイから聞いたことを、飛鳥に全て話した。
なぜ洸汰はヒーローのことを嫌ってるのか、なぜ緑谷たちに無愛想で、態度が悪いのかを…
洸汰は、かつては普通に生活していた。
昔はこんなに無愛想じゃなかったし、ヒーローのことはあまり知らないが、それでも普通に暮らしていた。
しかし、ある事件がきっかけで洸汰は変わってしまった。
洸汰の両親はヒーローだった。
だけど殉職してしまったのだ。
二年前、敵から市民を守り息を引き取ってしまったのだ。
ヒーローとしてはこれまでにない以上に、立派な最期で名誉ある死と褒め称えられた。
しかし、物心ついたばかりの子どもにはそんなことが分からない…親が世界の全てだった。
「自分を置いて行ってしまった」のに対し周りの皆んなは良い事・素晴

らしい事だと、褒められ続けた…
洸汰にとってその言葉は一番嫌いだった。
どれだけ親のことを褒めようと、名誉があろうとも、大好きな両親は生き返らないのだから。
マンダレイ達のことも本当はよく思っておらず、他に身寄りがないから仕方なく従ってるだけ。
洸汰にとってヒーローは、気持ち悪い人種なのだ。

ワイプシの皆んなは三ヶ月前からようやく、忍の存在を知る事が出来たそうだ。
ヒーローの誰もが忍を知る事が出来る訳ではないのだが、上層部に公式に認められた為、四人は忍学生のことも知っている。
洸汰には話さなかったのだが、雄英が忍学生を連れて一週間、強化合宿を行うのを知った以上、隠すのは無理だと悟り、洸汰に真実を話した。
だが洸汰はヒーローと同じく忍学生のことも嫌悪し関わりを持つこと自体、拒んでいる様子。
それは、ヒーローと忍が何も変わらない、似てる存在だと知ったからこそである。

「そんな事が…」
飛鳥は口を閉ざす。
――洸汰くんにそんな辛い過去があったなんて知らなかった…
物心ついたばかりの時から、大好きな両親が殺された。
それがどれだけ辛いのか…
いや、これは知っている…洸汰の境遇は雪泉たちとそっくりだ。
大好きな両親を殺され、行く当てがなく拾われた…
最も、雪泉や他の四人は雪泉の祖父、黒影に拾われたので、家族の縁が途切れた事がないので、洸汰の思考には行き着かなかったが、そ

れでも家族を失った、悪によって大切なものを奪われたその悲しみは、雪泉とそっくりだ。
そうだ、だからあの目付きも、雪泉と似て似つかなかったのだ。
雪泉は悪に憎悪の懸念を抱いていたが、洸汰は悪どころか、善も憎む…つまり、両方とも憎んでいるのだ。
それが何でなのかは知らないが…
「……善と悪があるから…か」

――『善だの悪だのという理由で、上層部の命令だからって言って結局は殺しあう……想いがあるから？私たちと違う？この世に忍は必要？影から支える？本当に……

――バッカみたい!!』

洸汰のソレは、漆月の言葉と同じものだった。
そうだ、これだ。
学炎祭で、彼女と鉢合わせになり、漆月と話したのだ。
忍とは何か？
善忍とは、悪忍とは、敵とは何か？
そして、彼女の導き出した答えが、洸汰のソレと同じなのだ。
――もしかしたら、漆月ちゃんも…洸汰くんと同じ、両親が殺されたのかな？

なんて思ってしまう。
でも、飛鳥も考えさせられた…自分たちは忍だから、善忍だから、命を懸けて人のために、影で支え守り抜き闘ってきた。
死を恐れず、真っ直ぐ忍の道を突き進む。
でもそれは自分の夢であり、目標であり、自分の価値観と主観でしかない。
他の忍達もそうだろう…なぜなら、忍たちの命は儚いのだから…花のように簡単に散って行く。

それは忍になることを決めた時から、覚悟していた。
しかし、自分は良くとも、そうでない人間もいる。
例えば、洸汰くんのように…
自分がどれだけ正しくとも、世界中の皆んなの誰しもが認めてるわけではない。
それは飛鳥だけに限った話じゃない。
「洸汰くんは…何を求めてるんだろう…？」
ではどうしたら、洸汰くんの心の傷を癒す事ができるのだろうか？
体の傷は、直ぐに癒える。
だが、心の傷は一つ一つがこびり付くように消えず、癒す事だってそれなりの時間がかかる。
中には消えることのない傷も存在する。
家族を失った傷は、より深いものだ。
それを癒すこと…果して本当に出来るのだろうか？
そもそも、洸汰は何を求めてるのだろう？
分からない…そもそも考えた事もなかった…
守られてる人間の気持ちなんて…
感謝する人間もいるのだろうが、洸汰みたいに捻くれた者もいる。
そう言った人間の気持ちはどうなのだろう…それは、飛鳥もしらない。
だから、答えられなかった。
二人は沈黙し、静かな廊下が嫌に冷たい空気に変わった感覚に見舞われた。
どうしたら、洸汰くんを救うことができるのだろう。

９４話「波乱の予感」

早朝、午前７時。
眠たげに瞼を擦るＢ組の生徒達は、マタタビ荘に集まり、担任のブラド先生の前に立っていた。
夜桜だけ眠気が無いのか、髪型も整えており、寝癖や服装の乱れなど見当たらず、他の者よりもきちんとしていた。
こんな早朝になぜＢ組の生徒達は呼び出されたのか、それはこの強化合宿の本題…

――「個性の強化」の為である。

ヒーロー科の授業では、個性を活かした戦闘訓練や、救助訓練、活用方法や技術、その他知識など身についたものの、個性そのものが伸びた訳では無い。
成長した所は先ほど述べた通り、他にも身体能力が僅かに上がっており体は鍛えられたものの、個性という身体能力に備わる器官そのものは成長してないのだ。
それを、強化する為、早朝から生徒達を呼び出し、訓練を行う訳なのだ。
「Ａ組はもう既に始まってる、我々も遅れを取る訳にはいかない。
さぁ、気合を入れてやるぞ！」
「はい!!」
「はぁい…」
夜桜の声が大きく響き渡るものの、他のみんなは眠気で声が上がらない。
なぜ彼女は眠たく無いのか…常闇踏影と同じだ。
「皆んな、気合い入れましょう！たるんでますよ！」
「いやいや、夜桜。たるんでるんじゃなくて、夜桜が異常なんだよ…何

でそんなに大声出せるんだよ…眠たくないのかい？」
「儂は忍ですから」
「あっはは！面白い事言うねェ!?
それを言うなら四季に美野里だって眠たげに欠伸してるじゃないかァ！
忍でも眠たいものは眠たいんだよ！忍と僕らヒーローを比較するな！」
「ホラ、物間。
普通に大声出せるじゃろ、それくらいの勢いで朝の返事くらいせんか」
「お前はお母さんかよ!!!」
もう睡魔も吹っ飛んだ気がした。
夜桜と話すと眠気吹っ飛ぶのか、なんか不思議、カフェインいらないんじゃないか？
「でも夜桜、昨日直ぐ寝ちゃったもんねー」
「まあ、習慣でのぅ。
儂は幼い頃から弟と妹を養うために、母親代わりになって家事全般こなしてたから」
夜桜がまだ小学生の頃、両親が共働きしてて、ろくに家に帰って来ることままならず、家事の仕事は全部彼女一人でこなしてたのだ。
当然、自分を除いて11人もの下の子達の面倒となるとそれはもう大変で大変で…
朝早く起きて、皆んなの分の朝食を用意しなくてはならなかった。
なので早起きはマスターしたのだ。
月閃でも、料理担当は彼女なので、朝食、昼食（弁当）、夕食の三食、全部彼女の役目なので、もうお母さんと呼んでも過言ではない（実際、夜桜の作る料理は美味いという意味もある）。
彼女こそ本当のビッ〇マムに相応しいのでは？
彼女達の雑談に気付いたブラドは、眉間に青筋を浮かべる。
「オイお前達！何してる付いて来い！
強化合宿はもう始まってるんだぞ！」

ブラドの怒号に皆んなは静まり恐縮する。
その外見的怖さと、彼の威圧を孕んだ言葉は、相手が誰だか理解しつつも体が反射的に反応し、硬直してしまう。
「前期はＡ組が襲撃事件の始まりとして色々目立っていたが…
後期は我々の番だ！
いいか？Ａ組ではなく我々Ｂ組だ！忍学生という頼もしい仲間が此方にいる以上、死角も敗北もない！」
「せ、先生…！」
――不甲斐ない教え子で御免なさい！
Ｂ組の生徒達はブラド先生の漢気溢れたセリフに感激し、自然と流れる涙を飲む。
ブラド先生は相澤とは真反対な性格だ。
どんな生徒にも真っ直ぐと向き合い、熱血ゆえに生徒達に時に厳しく、優しい、情が豊かな熱血先生だ。
そこがブラド先生の長所であり、自慢できる点だ。
外見こそはヴィランっぽいが、根は優しいヒーローの先生だ。
「あの～…個性を伸ばすと言っても…夜桜ちゃん達含めたら計２３人…
そもそも忍学生たちどーするんですか？」
「あ～…そーいやアタシ達忍だからね～…個性伸ばすって話でもなければウチらはどーすんのセンセー？」
取蔭切奈に四季の疑問の声が上がる。
まず夜桜たち忍学生は個性がないので考えないとすると、個性強化の訓練は２０人、つまり２０通りあるわけで、何をどうすれば良いのか分からない、具体性が欲しい所だ。
かと言って夜桜たち忍学生はどうするのか。
何もしない…訳がないし、訓練と言っても彼女たちの訓練に付き合える人間がいるのかどうかさえ疑問だ。
ワイプシのあの二人は確かに強いが、二人と担任のブラドと相澤を入れると四人…それでも足りない気がする。
「説明は後だ、付いて来い…！」

しかしブラドは此処では教えず、「俺の背中に続け」と物語るように前へと歩いていく。
生徒たちも渋々とブラド先生の後ろに続いた。

先ほどでも述べたように、個性とは身体能力の一つであり、体の器官の一部。
筋肉が酷使すれば、筋繊維は千切れるように壊れ、再生し、強く太くなる。
個性も筋肉のそれと同じこと、使い続ければ強くなり、でなければ衰え弱くなる。
年齢や体の傷によって影響を与える個性もある。
当然、個性の使用規制が掛かった社会、個性の訓練なんて出来る訳がない。
ヒーロー志望の人間にしか出来ないこと。
つまり。

――限界突破。

B組達が目の前の光景に絶句した。
広間にA組の生徒と、半蔵学院の忍学生三名、計２３名が、悲鳴をあげ、汗と血と涙を流し、猛特訓してるのだ。
尾白は尻尾を何度もなんども振るい、感覚が麻痺しながらも、振るい続ける。
それを耐え受けてるのが切島。
彼の個性は硬化、ガッチガチに体を固めて尾白の攻撃を耐えてるのだ。
体にヒビが入ってる為、訓練を開始してから今に至るまで延々とこ

れを続けてたのだろう。
峰田は頭から血を流し、目の前にはもぎもぎの山が積まれている。
まるで賽の河原の石積みみたく、ブツブツと聞き取れない声で何かを呟いてるあたり、相当精神が限界に達してる様子。
よく聞いてみると、「３０５、３０６…」と数字を数えてるようだ。
この数字は峰田のもぎもぎの数を表す。
もぎもぎは取ったそばから生えてきて、くっつく。
もぎりすぎると血が出るのだが、今の彼の顔は真っ赤な血に塗れてる。とても笑えない。
八百万と砂糖は一緒になって訓練をしてるのだが、これもまた何とも…
お菓子を食べながら八百万は何かを創り出し、砂糖は８ｋもあるダンベルを片手で鍛えている。
もう片方の手は大きなケーキをもぎ取って口に運んでいる。
大の甘党で糖分大好きな彼も、もうギブアップと言わんばかりの顔をしてる辺り、幸せな時間ではないことを現実的に突きつけられる。
柳生は何度も巨大烏賊を召喚し、木々を、岩を薙ぎ倒している。
しかし、柳生の顔色は悪く、青ざめており、息が荒く、冷や汗を流す。
忍学生は個性こそないが、秘伝忍法というものがある。
ゲームで言う必殺技だ。
それを個性と同じように、使い続けることにより、秘伝忍法による熟練度が上がり、忍法がより強くなるのだ。
他にも様々な忍法があるので、使いたいものは自由に使って良いとのこと。
絶・秘伝忍法は馬鹿デカイ体力を消費するので、何発も使えない。
なので、普通の忍法が丁度いいだろう。
飛鳥は二刀繚斬で何度も岩や巨木を切り捨ててるのだが、もう腕が上がらないのか、感覚が麻痺を覚える。
混沌な状況だった。
見るに耐えない痛々しい光景。

泣き叫ぶ生徒達。
Ｂ組はこれを、地獄絵図と呼んだ。
強化合宿なんて生易しい名前と相容れず、昨日の夕食と風呂が嘘のようだ。
個性訓練…その内容といえば。
許容上限のある発動者は上限の底上げ。
異形型・その他複合型は個性に由来する器官・部位の更なる鍛錬。
増強型は至ってシンプル・ひたすら個性を使い続けて訓練するのみ。
当然、個性だけでなく体を使って、それこそ身体能力も高めて。
通常なら肉体の成長に合わせて行うのだが、時間がないので無理矢理と言った形だ。
「でも、私ら入れると計４６人…そんな人数相手に４人で管理できるの？」
「でも、昨日ピクシーボブが二人来るって言ってたわ」
拳藤の疑問に、思い出したように答える希乃子。
「そう！だからアチキらがいるのー！」
そこに陽気な女性の声が高く聞こえた。
声の主に振り向くと、マンダレイとピクシーボブ、そして昨日いなかった人物が二名登場する。

「煌めく眼でロックオン！」
「猫の手手助けやってくる！」
「どこからともなくやって来るゥ…」
「キュートにキャットにスティンガー！」

――これぞ、四位一体。
「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ！」

フルバージョン。
マンダレイ、ピクシーボブに、昨日言ってたラグドールと虎が決め

ポーズを取る。
ラグドールの個性は『サーチ』。
目で見た人の情報が１００人まで物分かり、居場所も分かれば弱点も分かる。
サポートキャラとして適任するヒーローだ。
マンダレイの個性は『テレパス』。
一度に複数の人間へ、直接脳へアドバイスを送る事が出来る。
ただし欠点なのが、それを聞いた人間が返信をする事が不可能だという事。
レスキューヒーローとして適任に値するヒーロー。
虎の個性は『軟体』。
常人では決して曲がることの出来ない体質、蛸のような軟体動物、つまり、体が非常に柔らかいのだ。
しかし、見た目はガッチガチの筋骨隆々で、露出してる筋肉が何とも…
外見からしてみれば、表情の硬いオッさんが、猫のコスプレをした痛い人に見える。
顔もとても怖いので、もう何というか、この人だけは別で悍ましさしか感じ取れない。
見た目からしてもう分かるだろうが、彼はパワーファイターとして、戦闘向きのヒーローだ。
彼なら並みのプロレスラー相手でも屁ではないだろう、どうでも良いが毎日プロテイン飲んでるようだ。
「増強型の者は我の元に来い！
我ーズブートキャンプはもう始まってるぞ――」
――古!!
虎の言葉に、Ｂ組の皆んなが心の中で大きく叫んだ。
そして後ろでは緑谷が辛い表情で体全体を使って筋肉を酷使し鍛えていた。
元々汗っかきなのだろうか、滝のように汗が流れ、表情も辛そう…
見てるこっちが痛々しく感じる。

増強型、一名。緑谷出久。
多分、彼が一番辛いだろうな、だって一人なのだから。
飛鳥や柳生、雲雀は相澤先生が指導…つまり、忍学生の皆んなは相澤に指導されるのだろう。
まあ彼も個性なしで近接術や対人戦はそこらのヒーローよりもとても長けているので、指導する分、悪くない。
「小僧何してる！動きが遅いぞ！ペース上げろもっとォ！筋繊維千切れやァ！」
「イェッサァ！」
疲労により体が追いつかず、ペースが乱れ遅れる緑谷に、虎の喝が入る。
そして殴る蹴るの暴行を受け倒れるも、立ち上がり鍛錬…
端から見れば暴力に見えるが、これは個性強化の訓練なのだ。
…一応、個性強化の訓練だから。
「よし小僧！今だ個性使って撃ってこい」
「イ、イェッサァァ!!」
緑谷はつかさず、俊敏に個性ワン・フォー・オールを使用する。
５％調整したパワーで虎に思いっきり殴るも、あっさり避けられる。
そして「よォし！全然キレキレじゃないか！まだ鍛錬が足りんぞ小僧！」と先ほど猫パンチ？を食らったのにまたしても殴られる。
緑谷は身も心もボロボロだ。
「オィ？壁超えるんだろ？なァ？しろよウルトラ…今すぐしろよ越えろよウルトラぁ！壁越えちまえよウルトラァ!!!」
「イェッサァァァーーー!!」
――何これ。
もはや狂気しか感じない。
殴られ言われ、疲労のあまり頭がおかしくなったか？狂っちまったのか緑谷？
この現状、とてもじゃないが笑いすら浮かび上がって来ない。
あの物間でも息を詰まらせる。

自分たちにも、これが待ち構えてると想像すると…
忍学生も最初は俄然やる気もあったし、軽い気持ちで「挑戦するかぁ～」みたいだったのだが、鬼畜な悪党教官の虎を見てしまえば、気力は失ってしまうのも、仕方のないこと。
しかし一同は知らないだろう…
筋骨隆々としたオッさんが、猫のコスプレをしてる痛い人だと情感を持ってしまうが、実は彼…元女性だと言うことを。

しかし彼女たちの指導は相澤の方、虎とは関係ないので大丈夫だと思いたいのだが…

「オイ飛鳥、この岩的確に斬れてねえぞ、ちゃんと正確に斬れ、はいプラス５回な」
「は、ハァイ！」
「雲雀、お前動き大雑把だ。
ちゃんと狙い定めて集中しろ――」
「で、でも雲雀もう疲れて…」
「ほぉ？疲れてる割には声が出るじゃねえか、じゃあグラウンド制限時間内付きプラス二倍な？」
「えええ!?」
「まだ声が出るな？んじゃ三倍か？」
「おい待て相澤先生、雲雀は何も悪くないだろ…だったら…」
「なんだ？柳生は１０倍か？ん？」
「……」
もはやあの雲雀と柳生をこうもあっさりと、軽々しく黙らせてしまう相澤のスパルタ教育。
ダメだ、これ以上増やされたら体が朽ち果てる。
これ以上喋ったら体が朽ち果てる。
二人が忍でも、所詮は学生…先生には逆らえないのだ。
忍学生の彼女らが、口も手も足も出ずに、唇を噛み締め、涙を飲むしかない。

そして忍学生や他の子達、Ｂ組全員、改めて思い知った。
相澤先生にだけは絶対に怒らせてはいけないと、でなければ死んでしまう。
タダでさえ３０分しか経ってないのにこのへばりつき…今でやっとメニューが追いつけるのにこれ以上増やされると考えると、気が遠くなって自然と体の力が抜けてしまう感覚に陥る。
これを見ると霧夜先生の訓練が可愛く思えてきた。
あの人の訓練は厳しいけど、相澤先生だともう恐怖しかない。
相澤は相手が忍学生だとしても躊躇はないし、遠慮なくより厳しい指導を行う。
虎も相澤も、嫌だな…

なぜ夏休み一週間、林間合宿というイベントを使ってまでして個性強化するのか…
雄英が忙しいという私情もあるのだが、ヒーロー科の一年だけに人員を割くことが難しいからだ。
この四名の実績と広域カバーが可能な個性は、短期で全体の底上げをするのに、尤も合理的だからだ。
最も忍学生は特殊なので、相澤が見ることに。
今まで担任として忍学生を見てきたからこそ、彼が務まるのだ。
「うおおおっシャアああぁぁぁああーー!!」
「よォし!良いぞ小僧、千切れ、伸ばせ、強くしろそのヘボ個性をォ!!!」
緑谷の雄叫びに応じるかのように、虎も大声で雄叫びを上げる。
緑谷の声が一番大きかったためか、皆んな一斉に振り向く。

「……」
個性強化で盛り上がってる?中、無数に広がる木々の陰から、覗く者が居た。
「…何が個性だよ、バーカ…」
出水洸汰。
彼からしてみれば、皆んな理解しかねない、気持ち悪い人種だった。

どいつもこいつも、個性だ個性だと口にして…
忍学生って言うお姉さん達みたいなのはアレが個性なのかどうなのか、マンダレイからは詳しくは聞いてないが、どの道ヒーローと同じ変わらないんだろう？
殺しあうことだって――
だから、嫌いなんだ。
彼も彼女達も、意味がわからない。
何でそこまでして、命を懸けてまで戦わなくちゃいけないのか…
いや、そんなの決まってる…
「そんなに個性をひけらかしたいのかよ――」
個性があるから、悪いんだ。
そんなものがあるから…大好きなパパとママは…

ＰＭ・４時。
ようやく個性強化による訓練は終了し、ここから夕食の時間になる。
個性強化の訓練を終えた少年少女達は、生力を失ったかのように、ヘロヘロ状態になっている。
これまでにない疲労感、体の自由が殆ど利かないし、今こうして動けるのでやっと…
しかし、個性強化訓練が終わったからと言い、自分たちの仕事がまだ終わった訳ではない。
「さァ！昨日言ったね？『世話焼くのは今日だけ』って！」
「己の飯くらい己で作れカレー！キャハハハ!!」
調理。

少年少女達にはまだこの仕事が残って居た。
昨日ピクシーボブが言った通り、昨日までは世話を焼くと言ったが、今日からは自身で食材を調理し料理を作らねばならないのだ。
目の前のテーブルの上に置かれてるのは何十人分の食材…山盛りにして積んである。
食材も限られてるので、上手く配当して作らねばならない。
食材は、人参、じゃがいも、白米、肉、カレールーなど、カレーのルーがある時点でもう決まってるようなものだ。
――皆んなでカレーか。
林間合宿ならではと言った感じで、とても合宿っぽい感じだ。
飯田が「さァ、世界一最高に美味いカレーを作ろうじゃないか!」と皆んなの代わりに代表として手を挙げ声を張る。
生徒達を引っ張ってくれるのはとても有り難いのだが、生憎彼らは疲れてるので、元気という文字のかけらもない。
「でもな、料理作るのあんま得意じゃないし…
このクラスの中で得意なヤツっったら?」
瀬呂の呟きに応じるように、皆んなも左右に視線を向ける。
この中で料理得意っったら…
「あ?」
爆豪勝己――。
皆んなの視線が一斉にして爆豪に集まる。
当然、何事もないのに急に自分に視線を向けられたら、不快な表情を立てるのも無理はなかろう、爆豪は「何見てんだテメェら!」と大声を張る。
「なぁ爆豪、お前ってカレー作れる?」
「ハァ?!何言ってんだクソ髪!テメェは小学生か、余裕で作れるわボケェ!」
爆豪は思わず掌を爆破させる、
よく見ると爆豪の腕はヒリヒリと赤く焼けていた。
個性の訓練によるものだとみられる。
なぜ皆んな爆豪を見るのか?

実は彼、センスがあるのだ。
それはヒーローによる才能だけでなく、日常でもその才能を輝かせている。
緑谷の話によると、小・中学の頃から成績は全てAランク。
調理実習の時なんか、彼が作った料理があまりにも美味すぎて、先生なんか「そこらに並ぶ店、それ以上に美味い」と評論した程だ。
爆豪はその話は覚えてるものの、皆んながソレを知ってることなど、彼には知るわけがなく、爆豪からしてみて皆んな「今日は一段と気色悪りぃ」――らしい。
しかし、何も調理が上手いのは必ずしもA組だけではない。
「ウチん所で上手いヤツって…あっ、夜桜か？」
「なぜ儂だと？」
「いや～だってお前さ、朝ん時母親代わりとして弟と妹の面倒見てきたって言ってただろ？
もしかしたら夜桜って料理得意なんじゃないかな～って、違ったか？」
よく見てるな。
そう、夜桜は家事全般こなしてるので、料理のことなどお茶の子さいさいだ。
しかも得意料理はハンバーグにスパゲッティ、カレー。
子供の好きそうな料理ばかりだが、兄妹達の世話をしてるのだから灼然な事だ。
「ええそうですよ、月閃でもしょっちゅう…と言うかほぼ儂が調理担当でしたからね、料理のことは任せなさい！
解らない事があったら儂に何でも聞いて下さい」
「え、夜桜一人でやってくれるんじゃないのかよ…」
「儂は別に問題ないですが、皆んなで協力しないといけません。
――チームワークが大切じゃ」
物間はため息をつく。
しかし夜桜は間違ってない。
これはチームワーク、全員が協力してカレーを作らねば意味がない

し、夜桜一人に頼むのも悪い。
絆や友好関係を築くのに、これは持ってこいだ。
なんやかんやで、A組とB組は調理に取り掛かった。

調理が始まり、騒がしくなる。
A組なんかはほぼ爆豪の怒号が飛び放ち、喧騒に塗れていた。
「おいデカ乳！じゃがいもの芽まだ少し残ってんぞ！ちゃんと剥けクソが！」
「はうぅッ…！ご、ごめんなさい…」
「む、剥くって…エロいよね？」
「クソ葡萄。
お前本当に良い加減にしろよ、殺されてェか？協力する気ねぇなら帰って死ね」
「爆豪、聞いてくれ！人参って、ビタミン豊富なんだぜ！」
「だから何だアホ面！一々クッソどうでも良いこと自慢げに話すな！」
「爆豪、スルメイカ入れて良いか？」
「良い訳ねェだろがボケェ！カレーに何入れようとしてんだクソ眼帯！」
「ムッ、スルメイカを馬鹿にする者はスルメイカで泣く…スルメイカを馬鹿にするな」
「テメェの主張なんざ知るか！クソ葡萄同じくテメェもやる気ねえのか！
つーかスルメイカ入れてどうする気だ！皆んなの分考えろや！」
「あ、あの爆豪が…皆んなの気を遣ってる…だと…!?」
「醤油顔、後でこっち来い、ブッ殺してやっから、マジで」
「ちょっと皆んな元気過ぎだろ…」
A組の状況はカオスだった。
爆豪は元々気が荒いので、怒鳴り散らかすのは予想していたが、ここまで酷いと違う意味で地獄絵図にしか見えない。
まるで名のあるレストランの厨房みたいだ、店長は爆豪。

そんな意気軒昂な皆んなに、切島が呆れたように小声で呟く。

一方、B組は騒がしいという意味ではA組と同じだが、唯一違うと言えばそれは平穏の差だ。

B組はA組と違って穏やかで、爆豪みたく騒いだりしないのだ。

それもこれも、夜桜のお陰…と言うべきことか。

「夜桜〜、肉切ったよ」

「ではそこのボウルに入れて下さい」

「夜桜ちゃ〜ん！小大ちゃんと柳ちゃんと凡戸くんとね、人数分の人参全部切ったんだよ〜！」

「よしよし美野里、では拳藤さんが置いた肉の横に置いといて下さいね」

「は〜い！」

「ねェねェ夜桜、分かんないことあるんだけどさ」

「はい？何でしょう物間」

「このジャガイモの芽を切り取ったは良いんだけどさ、これ上手くA組のカレールーにぶち込みたいんだけど、どうすればバレずに済むかな？」

「先ずテメェの腐った性根を叩き入れることじゃな!!お前ホント、良い加減にしろォ！」

「ブハッ!?」

…若干、変わらない所もあるが（物間が原因で）。

それさえ除けば中々穏やかな一面だ、これぞ本当の意味でのチームワークと言った所か、しかも夜桜の動きに無駄がなく、爆豪と同じくそこらのレストラン以上の腕が立つ料理人だ。

よくよく考えると、爆豪と夜桜は良い勝負になるのでは？

デカ盛り美食大会はよ出さなきゃ。

なんて冗談はさておき、そろそろカレーが仕上がる頃で、カレーの美味そうな匂いが充満し、皆の食欲をすすらせる。

カレーを食する時間が始まり、一同は賑やかに談笑しながら、カ

レーをひたすら頬張っていた。
疲労と空腹状態の中、皆んなが作ったカレーを食べるのは何時もと違って新鮮で、口の中にカレーの美味さがいっぱいになるよう広がり、頬が落っこちてしまうほどだ。
何よりも良いのがこの程よいカレーの辛味。
カレーと言えばやはり辛口だろう、スパイスの効いたルーが、全ての食材を包み溶かすように、相性が良く、舌が喜ぶ。
辛口が苦手な人にとっては少々嫌かもしれないが、辛口か甘口かの多数決に分かれ、結果辛口になった。
特に爆豪は辛いものが大と呼ぶほど好んでおり、爆豪のカレーだけいやに真っ赤になっている。
コックカ○サキに頼んだのかこのカレー、もう真っ赤すぎて見てるだけで舌が火傷しそうだ。
爆豪は自分の分だけ取ると、タバスコや一味、チリペッパーやカイエンペッパーなど、調味料を多く入れ、自分拘りカレーを作っていた。
もうこれはカレーと言うよりハバネロカレーと呼んでも良いだろう…もはやその域に達している。
都合よく調味料があったものだ。
因みに爆豪は必ずカレーを五辛以上食べるらしく、その割には舌の神経は良く、調理の際に味見役としてもしっかりと働いてた。
本当に何でもありかよかっちゃんは。

一方B組は、A組と違って辛口カレーではなく、甘口だった。
口の中に広がるは、コクのある甘みに爽やかな渋み、それらが兼ね備えた夜桜特性甘口カレーは、とても評論だった。
特に美野里や甘口の子達にとっては、手が止まらず箸が進み、何度も咀嚼していたい気分だった。
隠し味は砂糖と中濃ソース、砂糖はカレーの濃厚さを引き立て、コクと旨味がマッチして引き出す。
中濃ソースは砂糖と相性が良く、甘味やコク、旨味が深く加わり、砂糖とマッチを奏でるように効果を程よく引き立て、甘くまろやかなカ

レーが出来たのだ。
隠し味…ではないが、飲み物としても少し夜桜なりにチョイスしたのが、コーヒー。
コーヒーは実はカレーと相性が一番合う品物なのだ。
カレーの隠し味に入れるのも良いのだが、美野里を始めとしたコーヒーを嫌う者もいるので、飲物として選んだのだ。
飲物なら飲む人そうでない人に別れ、飲まない人は普通の水やお茶で済ませば問題ない。
コーヒーは勿論、無糖。
ミルクや砂糖など一切入れておらず、わざと苦味を取らせるように置いといたのだ。
甘口カレーと言っても辛口と違って、味に飽きてしまう人だっている。
なのでコーヒーという苦味を取ることにより、味に飽きず、甘味と苦味の相性を絡み合わせることで、カレーとコーヒーの素晴らしさを引き立てることが出来たのだ。
カレーなのにコーヒー…まるで白と黒のワルツだ。
A組は辛口でB組は甘口、成る程。
どうやら此処に至ってもお互いの存在が対になってるそうだ。
「カレー甘え！夜桜本当、お母ちゃんだ！」
「こっちはカレー辛えよ！いや、叫ぶほど辛いって感じじゃないけど、うん、カレー！カレーだけに」
「古いから、と言うか全然つまらないから」
「甘いのも良いが、辛いのも食べてみようかな？でも辛いの苦手だしな…」
「オイオイ無理すんなよ庄田、別に良いじゃねえか」
「俺たち美味いもんさえ食えれば問題ないもんな！」
「ヤオモモ結構ガッツクねー！」
「私の個性は脂質を様々な原子に変換し創造する事が可能ですので、沢山蓄えるほど沢山出せるのです」
「ふ～ん…ウンコみてえ」

「瀬呂！ヤメろご飯中だぞ!!」
「ヤオモモちゃん、落ち込む事ないからね？ね!?」
「うぅ…飛鳥さん…私…私…そんな、ウンコだなんて……」
「ねーねー、コーヒー頂戴！」
「美野里ね！コーヒーでも砂糖とミルクいっぱい入れたらね、飲めるんだよ！」
「それってもうコーヒーじゃなくてコーヒー牛乳じゃ…」
「コーヒー牛乳もコーヒーだよ」
「え～、でもコーヒーは苦味があってこそコーヒーだよ、異論は認めない」
A組もB組も祭りのようにとても賑やかで、気持ちが高ぶる。
笑い合い、はしゃぎあい、じゃれ合う。
この幸せな一時は自分たちがヒーローと忍としての立場を忘れさせ、ごく普通の学生として、楽しい合宿を味わい、高校生らしい青春を謳歌する。
学生でしか味わうことの出来ない幸せ…だからこそ、今、めいいっぱい楽しもう。
自分たちが生きてるこの時間が、この幸せが、永遠に続けばと…

「……」
ぐぅー。
お腹が空いた。
緑谷というヤツがカレーを持って来てくれたが、それを断った。
裏山。
誰も気付かないこの場所は景色が良く、辺りを一望出来る。
この場所は自分しか知らないので、ワイプシやマンダレイだって知らない。
ここは出水洸汰の秘密基地である。

緑谷が来たのは驚いたが、跡をついて来たらしく、厄介で気持ち悪いヤツだった。
別に跡をついて来たことに腹が立ってるのではなく、アイツの言ってた言葉がムカついてるんだ。

――そこまで否定しちゃうと、君が辛くなるだけだよ。

考えないように、と頭の中で無理やり振り払うも、チラホラとアイツの言葉がこびり付くかのように…残ってしまう。
何も知らないくせに、両親が死んだ辛さなど、分からない癖によく言えたものだ。
皆んなイかれてるよ、何が個性を引き延ばすだよ、本当に下らん。
そのせいで、大好きなパパとママは死んだんだ――

『洸汰、誕生日おめでとう！
ママとパパはね、大好きな洸汰が居てくれて幸せなんだよ。
仕事が忙しくて一緒に居られない時があるけど、それでも洸汰のこと愛してるからね――』

ママ。

『洸汰、お前が産まれた時はな、パパとママも一緒に泣いたんだぞ？
お前がパパ達の元に産まれてくれて、本当にありがとうな。
その誕生日として、お前にプレゼントだ――！』

パパ。

洸汰は帽子を取る。
このトゲのついた帽子は、パパが誕生日プレゼントで買ってくれた帽子だ。
大好きなパパとお揃いの、思い出がこもった帽子――

パパが悩みに悩んで、洸汰の為にと買ってくれた、大好きな帽子。
時折思い出す、パパとママの大好きな笑顔を、温もりを、そして家族の幸せを――
誕生日プレゼントを貰った時はそれは嬉しかった。
だって産まれて初めて、誕生日プレゼントを買って貰ったのだ。
その嬉しさと来たら、当時は喜んでた、はしゃいでた、嬉しくてどうしようもなかった。
ずっと、この時間が続いてれば、と今でも願う。

――でも、もう両親は帰ってこない。
市民を守った。
敵に殺された。
今でも思い出す、ニュースで放送された敵のの顔を――
僕はアイツが憎くて許せないし、個性という概念そのものも許せない。
だって個性があるから人は力をひけらかし、自由気ままに使おうとする。
個性があるから、敵は生まれる。
個性があるから、ヒーローは生まれる。
力が、人を狂わせる。
だから力なんて要らない、無くなっちゃえば良い。
それなのに、皆んな力を、個性をひけらかすが為にと、無理して強くなろうとする。
忍学生って言うのは、マンダレイから聞いたが、難しいことはよく分からなかった。
でも聞いてたなかだと、ヒーローと変わらないし、この目で見てハッキリ分かった。
アイツらもヒーローと同じで、狂っちまってるって。
何が力だよ、そんなものがあるから…そんな、要らないものがあるから――!!!

パパとママは死んだんだ――

パパとママは、水の個性『ウォーターホース』と呼ばれるヒーローだ。

「……クソ」

洸汰は苦虫を噛み殺す表情を立て、起き上がる。

このままずっといると怪しまれるし、無駄に人と関わってしまう…怪しまれようがアイツらがどうなろうが、大して気にしないしどうでも良いが、詮索されて緑谷とか言うヤツみたく、誰かが秘密基地に来られても困る。

特にラグドールなんかは個性「サーチ」とかいう便利な能力があるので、見つけられたら嫌だ。

夜は暗いしもう遅い、マタタビ荘に戻ろう――

マタタビ荘についた洸汰は、帽子を被ったまま、音一つ立たない、物静かな廊下を歩く。

このまま自分の部屋に戻って寝よう。

そう思った時だ、曲がり角から一人の少女が飲み物を片手に持ちながら歩いて来た。

自分よりもずっと身長は上なので、お姉さん、と普通は呼ぶべきなんだろうが、関係ない。

少女が洸汰のことに気付くと、「あっ、洸汰くん？こんな所で何してるの？」と聞いて来た。

「なんだお前…」

名前は知らないので、つい素っ気ない態度で言葉を返す。

「あ、そっか。

自己紹介まだだったね…

私はね、飛鳥って言うんだよ。昨日は言いそびれたけど、よろしくね！」

この女の名前は飛鳥…
洸汰にとって相手の名前などどうでも良いし、前述の通り人と関わりを持ちたくない。
洸汰は足早とスルーするように、飛鳥の横を通過する。
「どうでも良い、お前らとの関わりなんざ糞食らえだ」
「うわぁ、幼い子とは言えいざそう言われるとショックだなぁ…」
普通の小さい子だったら、手を差し伸べて握手するんだろうな。
でも、違うんだよね洸汰くんは――

「ねえ洸汰くん。
洸汰くんはさ、何を求めてるの？」

――ピタッ。
飛鳥の言葉に洸汰は動を止める。
何を――と問われても、洸汰には分からなかった。
洸汰は自然に飛鳥の方へ顔を向ける。
飛鳥の顔はやけに真剣であり、洸汰の目を真っ直ぐ見つめてた。
唯一、頭の中で思い浮かぶのは、パパとママ、両親の姿だ。
洸汰が求めるのは両親だ、愛するパパとママ。
でも、二人は死んでしまった…
パパとママはもう帰ってこない。
それでも、洸汰にはどうしても忘れられない…大好きなパパとママのことを、どうしても考えてしまう。
「個性（ちから）がなくなることだよ――」
だから、当然こうなる。
洸汰の口から放たれる言葉は、重みがあり、深い憎しみがこもっていた。
「お前も、お前らも、みーんなイカれてるよ。
そこまで強くなってまで、ひけらかしたいのか？バッカじゃねえの…
個性（ちから）があるからいけないんだろ。

個性(ちから)があるから、皆んな傷つきあって、殺しあうんだ。
なんでそんな事も分からないんだよ。
正義だとか悪だとかで、言い争ってさ…何が良いんだよ。
下らねえよお前ら全員――」
力がなければ、争う必要もない。
力がなければ、使う事もない。
力がなければ、傷つく事だってない。
「…なんか、昔の雪泉ちゃんに似てるね、洸汰くんって」
「あ?」
誰だソイツ。
なんて口にする前に、飛鳥は何か思い出すように語り出す。
「本当はあんまり人に言っちゃいけない事なんだけど…
昔の雪泉ちゃんもね、洸汰くんと同じ境遇に遭ったんだよ?大好きな両親を、悪に殺されたんだ――」
洸汰は思わず息を呑む。
同じ境遇者…ソイツが一体誰なのか知らないし、見た事もないが、少なくとも他の奴らとは違う…そんな気がした。
「洸汰くんのように、力そのものを否定してた訳じゃないんだけど…悪という存在そのものは否定してたよ」
昔の雪泉、学炎祭の頃の彼女の目は、洸汰と同じく憎しみを持っていた。
悪に対する憎悪、怒り、嫌悪、拒絶、様々な負の感情が、一つになるようその目に込められていた。
「悪があるからいけない、悪という存在そのものがあってはならない…
悪が無くなれば、人々は幸せになれる。
自分と同じ境遇者を生むことはないってね、その人のお爺ちゃんのこともあるんだけどさ、洸汰くんと同じ境遇者は、見てきたよ。
雪泉ちゃんだけじゃない、叢ちゃんに…この合宿に来てる夜桜ちゃんに四季ちゃん、美野里ちゃんも、そうなんだよ」
飛鳥は優しく、洸汰に話し出す。

洸汰の表情は、飛鳥を嫌うような目で睨んでいた。
境遇者…とはいえ、自分を誰かと同じような扱いは受けたくない。
でも飛鳥はそれを分かっても話す、それは、洸汰の為を思っての―
―
「皆んな、ひけらかしたいが為に、ヒーローになった訳じゃないんだよ？
洸汰くんも知ってると思うけどさ、私たちは忍学生でね、影から見守って、影で生きて影で死ぬの…
けど本当の影は誰にも知られずに見られずに、人を支えて守って生きてるんだよ。
皆んなが洸汰くんの思ってる人間じゃないってことは、分かってほしいな。

だからさ、洸汰くん。

――自分を否定しないで？
自分で自分を傷つけないで？
それは、見てる私も、辛いから…さ」
洸汰の顔は歪む。
緑谷と言い、飛鳥とか言うヤツまでも…
図星で、でもどこか心が温まるようで苦しむようで、何とも言えない感覚。
洸汰は大声で否定し叫び出す。
「うるせえよ！もう黙れよ!!俺のことなんかほっとけよ！
言ったろ俺はお前らとの関わりなんざ糞食らえだって！お前らのことなんか知らねえんだよ!!
俺の前から消えろよ！」
突き放すような言葉、飛鳥は一瞬面食らった顔をし洸汰を見つめていた。
洸汰はそう言い残すと、思いっきり走って行き、自分の部屋へ戻ると、私服のまま毛布にかぶって寝る。

毛布は顔まで覆い隠し、自分の弱さを、自分の心を隠すかのように…被る。
「……なんで、どいつもこいつも…皆んなこうなんだよ…」
洸汰には分からない。
なんで緑谷と言い、飛鳥と言い…何も知らないくせに――

「はぁ～…」
飛鳥はため息をつく。
洸汰に言われた言葉に傷ついてるのではなく、自分では彼を変えれなかったことに悔やんでいた。
まあ言葉巧みで心を変えれるなら、誰だって苦労はしないのだが…
忍である自分は普通の立場なら真剣に闘い、命を懸けて、相手に本音をぶつけ、変わることが出来るのだが…
相手は一般人、しかも幼い子供、洸汰くんだ。
勝負云々の話しではないし、戦いなんて馬鹿げたことは決してしない。
するとしたら、煩くて熱血でどこか抜けてる焔ちゃんくらいだろう、相手が男だろうと女だろうと、老若男女区別しないのだから。
だから、言葉で変えることは出来なくとも、知って欲しかった。
ひけらかしたいが為に、ヒーローに、忍になりたい訳じゃないことを――それが、生きる全ての人々が望んでる訳ではないと。
しかし幼い彼には通じないし、これから先、彼はもっと苦しむことになるだろう…
そう考えると、胸が締め付けられるように苦しくなる。
「どうすれば…良いのかな?」
雪泉ちゃんならなんて言うんだろ?
雪泉ちゃんだけじゃない、他の皆んな、なんて言うんだろ?
「難しいなぁ…」
そうため息をつき、片手に持ってたいちごヨーゴルトを飲み終える

と、ゴミ箱に捨てる。
そして女子部屋に入る。
部屋の中はとても騒がしく、聞いてるだけで心が晴れやかになる。
賑やかで楽しそうな女子の会話が聞こえる。
そう言えば今日は、Ｂ組の女子生徒も来てるのだ。
何でも峰田くんがまた覗きを…今度はＢ組の女風呂を覗こうとしたらしい。
荷物がその証拠、中には小型ドリルだのピッキングだのと、他にも覗く品物がわんさか入ってた。
ここまで用意周到にされてると、逆に引くしかない。
しかし当の本人はどこにいるか分からないが、少なくともワイプシの四人が監視してるのだろう。
そう言えば飲み物買ってた時、峰田くんらしい声が聞こえたのは気のせいか？
「あーー！飛鳥おそーい！」
「ゴメンごめん芦戸ちゃん、飲み物買ってて、ついトイレにも行きたくなっちゃって」
芦戸は頬を膨らませるも、飛鳥は苦笑を返す。
因みに今Ｂ組と一緒に恋バナというものをしてる。
Ｂ組の生徒は全員いる訳ではなく、拳藤を始め、夜桜、美野里、四季、小大、塩崎、柳、そしてＡ組は全員。
これでも結構の人数で、うまい具合に部屋にスッポリ入れたのが不思議だ。
部屋の真ん中には美野里特製のお菓子が広げてある。
彼女の作ったお菓子は本当に甘くて美味しくて、皆んな大喜び。
話を戻すとして、気になる男子は誰だ？
とか、どういうタイプ？とか、妄想でキュンキュンとか、どの人と相棒になりたい？とか、色んな話題が出ては盛り上がっていた。
「あっ、もうこんな時間だな」
「うあーー!!補習行きたくないよ～！うわあああぁぁぁん！」
拳藤が時計を見て時間を確認すると、芦戸は足をバタバタと暴れさ

せ、子供のように駄々をこねる。
「もっとキュンキュンしてたい！甘酸っぱいこの感覚…恋バナらしきもの全然してないよー！」
「いや芦戸ちん、そんなこんなを繰り返してこの時間なんだけど…」
「ん」
「四季ちゃん言わないで！だってだってぇ～」
女子同士で盛り上がるのも、悪くないし、居心地が良いものだ。
飛鳥が苦笑してる中、柳生は窓の外をジッと見つめていた。
それも目を細めて。
「どーしたの柳生ちゃん？さっきから…」
「いや、気のせいか？誰かの気配がするんだが…」
「え？それってもしかして…？」
「もしやもしや…夏になるとやっぱそうなるの？」
柳生の言葉に、耳郎と葉隠が反応する。
この部屋には誰もいない、外出はこの時間帯では禁止だ。
「いやヤメテ！幽霊とかチョー苦手だから！」
「しかし、妙ですね…儂もそんな気がします…」
「夜桜ちんまで？」
夜桜は立ち上がり、窓に近づく。
女子たちは胸が高鳴る。
それは恋バナではなく、誰もいないはずのベランダに、誰かがいるかもしれないという、奇妙な感覚…夜は外出禁止…
となると…
幽霊とか？
幽霊を信じる人もいれば信じない人もいるし、怖い人もいればそうでない人もいて、霊感が強ければない人もいる。
流石に霊感が強い人はこのクラスにはいない。
しかし、外に気配がある…と考えるとやはり気になって仕方がない。
何より柳生と夜桜が冗談抜きで言うのはおかしいのだ…
だって彼女達は忍であり、気を察知することが出来るのだから。

夜桜は臆することなく、窓に手をやり鍵を開け開く。

しかし――

「……誰も、いませんね」

誰もいない。

気配はない、勘違いだったのだろうか？

疲れてるからか、見渡す限り、誰もいない。

ここにもし峰田が覗きをしてたら本気で秘伝忍法を使ってた所だが、その峰田すらもいない…となると、自分たちの思い違いだったようだ。

「なんだよもー！ゾクッとしたじゃーん！」

「柳生ちゃん、美野里たちを怖がらせないでよ！」

芦戸と美野里がブーイングをする。

柳生は「そ、そうか？すまん…怖がらすつもりは無かったんだが…」と出張する。

まあ疲れてるんだし、多分虫の音や動物の鳴き声で反応したんだろうし、別に峰田くんじゃなかった事だけでも喜ぶべきだ。

しかし、柳生は再び視線を向ける。

柳生は僅かに目を細める。

まるでまだ「そこに誰かいるのか？」という目つき…何か見えそうな気が……

しかし、柳生には見えるはずがない。

忍び寄る悪意を持つ人間が、いることを――

宿泊施設から離れた場所、柳生が見つめていたその先は、闇が広がるばかりの暗い森。
虫の音や、動物の声すら聞こえない。
夏だというのに、この場所だけは、嫌に空気が冷たかった。
――ゴオォッ……
その時、嫌に物静かな空間に、一陣の風が吹く。
まるで威嚇するように通り過ぎた風が横切り、木々の葉は一枚落ちる。
崖の上からは景色が一望出来て、宿泊施設も一目で見れば丸分かりだ。
その崖の上に六人の人物が、見下ろしていた。

「――疼く、疼くぞ…早く行こうぜ！ウズウズが止まらねェ、暴れてェよ……！」
「ハァ～…僕もう待ちきれない…あァ…お預け状態ってこの事なんだね？
ねーねー、摘み食いしちゃっても…良いよね？」
「良い訳ないでしょ、何を仰ってるのですか貴女は――」
「まだ尚早。それに、派手なことしなくて良いって、言ってなかったっけ？」
「えぇ～？そんな事言ってましたかァ？」
「ああ、帰ってきた途端にボス面し始めやがってな、
今回はあくまで狼煙だ――」

一番前にいるギザギザの髪型をした、顔中ツギハギ男はこう言った。

「虚ろに塗れた英雄と忍たちが地に墜ちる――」

月の光が闇黒の森に差し込み、六人の姿が照らされ、映し出される。
顔中ツギハギ男、荼毘の背後にいるのは…

――黒いフードで体を覆い、表情のない無愛想な仮面を被る大男。
――茶毘と同じく、敵連合に赴き死柄木と対談してボクっ娘少女、鎌倉。
前見た時は、背に大鎌一本背負っていたのだが、今は二本背負っている。
――蒼色の短髪に、背中には逞しくもあり、美しくもある、長きに使い古された、歴戦の刀を背負う少女。
――ガスマスクに黒い学ランを着こなす、他の者と比べやや身長低めの少年。
――此方も同じく、茶毘・鎌倉と共に敵連合に赴いた、ブレザーを羽織る少女、トガヒミコ。

「俺たちの輝かしい未来の為のな――」

――深まる悪は、深い闇の中で生き、嘲笑う。
この時、誰も予想しなかった。
最悪な出来事が起こる事など――微塵たりとも思っていなかった。

９５話「グッドイブニング」

暗闇の森は、いやにざわついていた。
風で木々の葉が揺れ、葉が次々と落ちていく。
ただ横切る風の音しか聞こえず、動物や虫の鳴き声は一切聞こえない。
それは、この場にいる六人の殺意が異常な余り、動物や虫が危機感を持ち近づかないのか詳細は分からない。
「ていうか、これ…嫌です。
何ですかこのデザイン…全然可愛くないんですけど…」
そんな静寂に包まれた空気の中で、最初に口を開いたのは、連続失血死事件の犯行人物として大きな疑いをかけられてたイカれたＪＫのトガヒミコ。
首元に巻いてあるスカーフには、化け物の口をモチーフにしたギザギザの歯が特徴で、口にはマスクを着用してる。
背中には太い注射器やらチューブやら収容器やら物騒な何かを背負っている。
「裏デザイナー・開発者が設計したんでしょ。忍商会も忍専用・裏デザイナーもあれば、忍対応・闇アイテムもあるらしいね。
まあ見た目はともかく、理には適ってる筈だよ」
「そんな事聞いてません、可愛いかどうかの問題なのです」
「見た目より効果の問題じゃないかな、まあ素顔をバラしたくないって言う意味に関しては同意だけど」
トガの隣に立つガスマスクの中学生は、高圧ガスを手に持ちシャカシャカと振り続けてる。
「まァまァ、トガちゃんはとっても可愛いから全然問題ないよ！
むしろカッコいいと可愛いと血の気が混ざってる辺り、魅力すら感じちゃうよ！」
背中の大鎌二本背負ってる少女・鎌倉は、顰めっ面のトガを慰める。

鎌倉の背中に背負ってるのは、忍商会のサポートアイテム、死柄木が発注してくれたそうだ。
「んなこたァどうだって良んだよ!!
何でも良い…オイ茶毘！早く始めようぜ！さっきからワクワクが止まらねェ…今までヒーローしかぶっ殺して無かったからよ、忍って言う奴らの血、見たくてどうしようも無ェんだ！
早く暴れてェ…ブチのめしてェんだよ!!!」
黒いコートで身を包んでる男は、腕を出すとゴキゴキと骨の音を鳴らし、腕の皮膚から筋繊維を出す。
マスクを被ってるので、表情は見れないが、マスク越しからは笑ってるように見える。
「黙ってろイカれ野郎共。
テメェら全員、大人しくしてることすらままならねぇのか、何度も言わせんな、静かにしてろ。
忍は気を察するんだ、テメェらの殺気で気付かれたら計画が台無しになる…」
「待って下さい茶毘、私をこんなイカれた連中と一緒にしないで下さい」
茶毘の右後ろに立つ少女が、不快そうに口を開く。
蒼く染まった短髪に、海のように広がる瞳、豊満なる胸、お淑やかな顔立ち、純麗とした美しい少女は他の連中とは違い冷静で、何故こんな美少女が敵連合と関わってるのかさえ疑問を抱いてしまう。
「分かってる…テメェは黒霧と同じまともだ、お前はノーカン…
それと決行は…」
敵連合は当然、忍を知っている。
この場にいる皆んなも、そしてこれから来る敵も…
「――15人全員揃ってからだ」
敵の集団に、新たな四人の人影が現れる。
「ごめん茶毘、準備に手間取ってたわ」
ふんわりとした鮮やかな長い茶髪に、豊満たる胸を僅かに揺らし、両手は頑丈そうな純白の籠手を装着させてる少女。

「おまたー」
サングラスを掛け、顎髭を生やし、タラコ唇に、赤く長い髪を垂らしたオネエ口調の人物。
男なのか女なのか、分からない。
「仕事…仕事……仕事…しなくちゃ…」
口からヨダレを垂らし、目元を隠す上に全身が拘束具でガッチガチに固められてる人物。
「……」
ヒーロー殺しに似せてるのか、目線を包帯で隠すトカゲ顔の男。
背中には大剣らしきものを布で覆い隠し、合宿施設を睨みつけてる。
よってみるからに只者ではない、そこらにいるチンピラや雑魚敵とは違う風格を漂わせていた。
どれもこれも、実力を持つクセ者ばかりだ。
「威勢だけのチンピラや下忍じゃ意味がねえ…やるなら経験豊富で実力のある少数精鋭。
目標（ターゲット）以外、全員殺して構わねぇとさ。
見せつけてやろう、テメェらの平穏は、俺たちの掌の上で転がされてるってことを、そして…忍達に証明してやろう…
俺たちが強え、俺たちが正しいってことをな――」
忍び寄る悪意は、着々と力を培う。
敵は抜忍と、抜忍は敵と、結び付く。
光がより深くなるほど、闇もより深まる…善と悪が表裏一体になるように、雄英生と忍学生が強くなれば、敵連合に所属する敵も、忍も、強くなるのだ。
崖の上に佇む悪意を持つ１０人は宿泊施設を、雄英生や忍学生、先生やプロヒーロー達がいる場所を、ただずっと、見下ろしていた。
まるで天から地を見下ろすように…ただただ、その目に悪意を募らせて――

三日目・昼。強化合宿、二日目に続き、個性伸ばしの訓練が続いていた。
忍学生は身体能力強化・耐久性や体力、秘伝忍法による強化を行なっていた。
昨日に続き、今日も訓練が実施される…となると、明日も明後日も、終日までコレが続くのだろう…
考えるだけで気が遠くなる。
特にA組やB組の男子達や、補習組の者達は昨日よりも表情が暗かった。
「補習組、動き止まってんぞ。
芦戸、欠伸するな。切島、眠るな。気ィ引き締めろ――」
「す、すいません…眠気が…」
「ちょっ、先生！縛らないで下さいよ！昨日の補習と説教が…」
「ソレはお前らA組B組男子達が悪いんだろうが…違うか？」
「スイマッせん!!」
切島は相澤の捕縛繊維の布に頭を縛られ、切島は眠たげな目を擦りながらも声を振り絞る。
通常の生徒は就寝が十時からなのだが、補習組は就寝が二時からで、起床時間は七時、つまり補習組は五時間しか取れず、中々キツイのだ。
ましてや個性訓練と補習の二つで疲労が半端ないのに就寝時間もろくに取れない…

相澤が学校で言ってた通り、かなりキツイ。
しかし、ここで一つ疑問に思ったのが、なぜ男子全員表情が暗いのか分からなかった。
補習組は分かるが、そうでない男子達も補習となると、何かあったのだろうか？
「そういえば、どうして男子の皆んな顔が暗いの～？」
「分かった！昨日のカレーをいっぱい食べ好きだから、お腹壊しちゃったんだ！」
「良いですね～…このワガママボディを持つ純粋で子供な子達はそんな甘い考えで…！」
甘く何も知らない雲雀と美野里の発言に、上鳴は唇を噛みしめる。
なぜ男子達がここまでして落ち込んでるのか…それには訳があった。
昨日、女子達が恋バナをしてる同時刻、男子達はA組とB組、二クラスになって枕投げ勝負をしていたのだ。
元の発端は、肉じゃがにあった。
カレーを食べ終えた昨日、明日の夕食は肉じゃがだと知り、豚肉か牛肉どちらを使うか言い争っていたのだ。
A組とB組の何方も肉なんてどうでも良かったのだが、物間が「あれェ？A組は逃げちゃうの？勝負から逃げちゃうの？なら僕たちは美味しく牛肉を食べてるから、君らA組は貧相な豚肉を食べてると良いよ！君らは豚みたいだし、お似合いだね！」と言う挑発に爆豪がまんまと乗せられ勝負事になったのだ。
本当は物間も肉はどうでも良かったのだが、これはA組を出し抜くチャンスだと見切り、ワザと煽いだのだ。
「あ～、それでブラド先生と相澤先生に怒られてたんだ～」
「お前らバカだろ…」
四季は苦笑して、耳郎は心底呆れたようにため息をつく。
因みに峰田は勝負事に巻き込まれた訳ではないのだが、B組の風呂場を覗こうとしたり、更には虎の入浴場を除いたことに、こりゃもうイカンと考えた相澤は彼にも罰を与えたのだ。

二クラス男子全員と共に、肉じゃがの肉を抜く事と、訓練二倍という罰を。
つまり、今日は一段と訓練が厳しいのだ（男子だけ）。
女子は全員普通なので、何の問題もなければ、肉じゃがの肉を抜かれることもない。
肉じゃがの肉を抜いたら、もうタダのじゃがじゃ…ホクホクのジャガイモだけだ。
だがこれ以上相澤に何か文句を言ってみよう、じゃがも抜かれる。
つまり、肉じゃがが無くなるのだ。
「んじゃ、ウチらは肉結構食べ放題って事になるね」
「こりゃ俄然、やる気出るなァ！」
「おい四季、葉隠、駄弁るなちゃんと訓練しろ」
「は、はァ～い…」
相澤の声を聞いた二人はせっせと訓練を始める。
自分たちも肉じゃがの肉抜かれたら困るし、訓練がいつもより倍にでもなったらひとたまりもない。
男子達は滝のように汗水垂らし、血と汗と涙を飲みながら、渋々と耐えるよう訓練を始めている。
男子陣は嫉妬の目を女子陣に向ける。
自分たちに非があるのは確かだが、それでも自分たちの肉を女子達が平らげるとなると、心が痛い。
元はと言えば物間だが、勝負に乗った爆豪も悪い…つまり、双方悪いのだ。
そして峰田はもう犯罪の域に達してるので、もうしょうがないし、当然だと思う。
「ねこねこねこ！そんな暗い顔しなくても、今日は肝試しがあるよ！訓練された後には楽しいことがある！これぞ、ザ・アメとムチ！」
ピクシーボブの言葉に、クラスの皆んなが反応する。
肝試し――
それは、肝を試すもの。
怖い場所へ行かせ、その人の恐怖に耐える力を試す事である。

真夏の大イベントの一つだ、他にも夏で涼むために恐怖を体験すべく、立ち入り禁止区域や廃墟となった場所を平気で肝試しする、恐れ知らずのチャレンジャーもいるが、学校側はそんな危険な事はさせないので、林間合宿の肝試しは特に問題はなさそうだ。
ただ、個性を除けば…
二組のグループは分かれ、A組が先行で肝を試し、B組が脅かす側となる。
それが終わればチェンジ、と言った形式でやっていくそうだ。
勿論、個性を使用して脅かす事は良いが、直接接触は禁止で、攻撃などは論外だ。
個性を使用して脅かすことは良いのだが…勿論、忍学生も参加するし秘伝忍法で直接攻撃もまた論外、脅かすためとして披露するのは良いが。
「なるほど…ね。
さっすが肝試し…個性使って良いのは面白そうだね」
「僕は対抗って所が気に入ったよ…」
腕から鱗を出してる『燐』に、同じく頷く物間。
だが、それはあくまで訓練が終えてからであり、今は真っ最中だ。
「オイどうした、サボるな動かせ、ちゃんと訓練しろ。
特に補習組は緊張感と危機感を持てよ、お前らがどうして他の者より厳しく指導受けてんのか、考えろよ」
相澤の厳しめな言葉が、補習組の心に突き刺さる。
期末での露呈した立ち回りの脆弱さ、自分たちの個性による理解不足、それらが原因で自分たちは補習を受けてるのだ。
特に危なかったのは、麗日、青山、柳生、雲雀。
この四人もギリギリだったそうだ。
柳生と雲雀は、連携としては理に適っていたし、高得点は得たものの、大道寺にやられたという点は大きく酷かったそうだ。
もし期末試験という立場でなければ、気絶してたとは言え本気で殺されてたのだから。
そう考えると、己の未熟さがより伝わり、自分が非力だと言う事を

改めて感じられる。
柳生はともかく、雲雀は落ち込んだそうだ。
だって、４０点なのだから…
因みに青山と麗日は３５点…超ギリギリだ。
「何をするにしても原点ってのを常に頭の中で意識しとけ、向上ってのはそう言うもんだ。
何の為に汗かいて、何の為にグチグチ言われるか、常に頭に置いておけ――」

何の為。
人を救けるのは何の為？
強くなるのは何の為？
それが善であろうと悪であろうと、原点という存在は必ずや存在するのだ。
それは、ヒーローや忍…人間誰だって原点というのは存在するのだ。
その原点が自分で理解してるかどうかが問題であり、原点によって人の強さは変わるものだ。
「原点…かぁ…」
飛鳥は小声で言葉を漏らす。
今まで思ったんだが、自分は一流の忍になりたい…そう願っている。
しかし、その原点は？
なぜ自分は忍になりたいのか…
じっちゃんやお母さんが忍だから、と言う理由もあるのだが…（事実、お母さんは反対してたが）、多分じっちゃんを見て、私も忍になりたいと思ったんだ。
それは、緑谷がオールマイトに憧れたように、飛鳥は半蔵に憧れたから。
自分も、じっちゃんみたいに強くなって、立派な善忍に、カグラになりたい。

その想いが、人を強くしてくれる。

個性訓練も終わり、夕食の時間が迎えた。
夕日が山の彼方へと沈むその光景は、何とも美しいものだ。
数羽のカラスが、夕日へ向かうように、羽を羽ばたき飛んでいく。
「えっと…これで良かったんだよね」
二組の女子達は、豚肉や牛肉やらを切り込み、焼くなり煮るなりと調理している。
まあ女子は肉じゃがで、男子達は肉のない肉じゃが、つまりホクホクなじゃがしか食べないので、今日は少し特別だ。
男子達は薪を運んだりや、肉以外を調理している。
肉を没収されるだけでここまで落ち込むとは夢にも思ってなかった。
本当に女子達が羨ましい、自分も女の子として生まれたかった…なんて時折思えてしまう。
「よし、焼き加減はこれくらいで良いかな…あとは…」
鍋に投入…と思ったその時、竈の方から緑谷と轟の喋り声が聞こえた。
何だろ？と思い耳を澄ます…どうやら洸汰の事で話してるらしい。
「そう言えば…洸汰くん…見てないね…」
朝から今に至るまで、一回も洸汰を見てない。
もしかして、昨日のこと言い過ぎたのかな？
いや、でも…う～ん…
飛鳥が悩ましそうに表情を難しくすると
「ん？どうした飛鳥？」
「あっ、柳生ちゃん」
柳生が手を洗ってる所、飛鳥が悩ましい顔を立ててたことに気付いたようで、声をかける。

「んっとね、洸汰くんについてなんだけど…」
そこから飛鳥は昨日あったこと、そして洸汰の心境を彼女に話した。
本当は洸汰くんの家事情を、そう易々と教えてはいけない事なんだと思うが、そうでもしなければ話せないし、何より彼の悩みを解決したい…
でも、自分の意見では彼には通用しなかったし、自分の価値観ではもしかしたら彼に声は届かないとさえ思えてしまう。
なら、他人の意見を聞いてみようと思ったのだ。
そうすれば、自分になかった意見が出るかもしれない。
まあ、此処に洸汰がいない事が幸いだったのかも。
しかし、此処にいない…となると、やっぱり自分たちのことをよく思っておらず、嫌いだから一緒に居たくないのだろう…
「どう思う柳生ちゃん…？もし、柳生ちゃんだったら、なんて言うかな？」
柳生は目を瞑り、沈黙する。
そして、目を開けると、柳生は簡潔に言った。

「簡単だ、受け入れれば良い――」

「え？」
飛鳥は素っ頓狂な声を出す。
余りにも、柳生の言葉が手短く、それでもってアッサリした答えなので、逆に驚きてしまった。
「悲しみも、その人の死も、受け入れるしかないんだと思う。
乗り越えられたようで、乗り越えてないようで…また乗り越えたようで…乗り越えてなくて…その繰り返し。
だからそのまま受け入れるんだ、何もかも――
悲しんでも良い、苦しんでも良い、人間というのは弱い生き物だ。
だから、その悲しみを踏まえて、人は生きるしかないんだ…」
その時の柳生はいつになく真剣だった。

悲しんでも良い、苦しんでも良い、その人の事を想い、涙を流すことは、決して悪いことではないのだから。
涙を流すことは、悲しむことは、亡くなったその人の事を大切に思う証拠だから。
だから事故だろうと、殺されたとしても、その死は受け入れるしかないのだ。
だって、死んだ人間は生き返らないのだから。
そして人間はいつか死ぬ、生があるから死がある。
人間は、世界はそうやって創られている。
その寿命が、短ろうと長かろうと、必ず死ぬんだから。
悲しみは、避けて通れないのだ。
「俺の妹の望は、交通事故で死んだ…
個性とか、忍とか、関係のない…極一般な事故死でな…
洸汰の言う通り、確かに個性のせいで、人は狂ってしまうだろうな…それはヒーローとか敵だけじゃない、俺や、俺たちも…そうなんだろうな…
力があるから、人は狂い、争ってしまう…
でも、例えそうじゃなかったとしても、争いのある世界じゃなかったとしても、人は死なない訳じゃない、いつか死ぬかもしれない…
それは、変わらないんだ…」
自分だけじゃない、この世界に生きてる人間、いつ誰が何処で死ぬかも分からないのだ。
突然死んだりすることもあれば、望と同じ交通事故で死んでしまうことだってあれば、凶器やらで殺されたり…
人は、平穏という名で生きている。
だから、人は常に死を意識しなくなる。
「洸汰くんは…受け入れてくれるのかな…?」
両親の死だけじゃない、個性という存在、超人社会という世界を、洸汰は受け入れてくれるだろうか?
それが出来ないから、洸汰はああなってしまってる…では、どうしたら受け入れてくれるのだろうか?

「受け入れてくれる…じゃない、受け入れなければならない…だな」
柳生だって、望の死を受け入れられなかった。
それもそうだ、まだ幼い妹が、子犬のように後を付いてきてくれた可愛らしい妹の死を、どう受け入れろと言うのだ？
当時の頃の柳生は、心の半分が死んでいた。
だから、悲しみを受け入れるため、望の願い…忍になる夢を叶うために、自分は眼帯を作ったのだ。
いつの日か隠鬼の目――なんて物騒なものになってしまったが。
それでも視界が狭まれば、望のことは忘れない…
「さっきも言った通り、人間は弱い生き物だ。
弱い生き物でも、強くなることはできる。
だから、自分で受け入れなくちゃいけないんだ。
それが、アイツにとって…洸汰の課題…なのかもしれないな。
アイツが望まなくても、いつか受け入れなくちゃ…いけないんだ。
今はまだ無理なのかもしれない…でも、無理でも良い、焦る必要はない…
いつか、受け入れれば…それで良い――」
望の死をどうすれば良いか、心が裂けるほど悩み、甚い、苦しんだ。
大切なものを失った柳生だからこそ、ソレを経験した彼女だからこそ、言える言葉。
自分たちがどうするかじゃない、洸汰がどうするかが問題なのだ。
幼い少年に「死を受け入れろ」なんて言っても納得が出来ないし、柳生でもそこまで単直には言わない。
結局、無理に他人の家事情には首は突っ込まない方が良いし、問題なのが本人がそれを呑めるかどうかで、自分たちが解決するのではない。
でも…手助け位は、しても良いのかもしれない。
だから柳生は「無理に首を突っ込むな」とは言わない。
そもそも言ったとしても、飛鳥が止まる訳がない。仲間として、忍として、今まで飛鳥を見て来たから分かる。
飛鳥は今まで曲がらず己の信じる忍の道を前向きに突っ走って来

たからこそ、どんな人間も救おうとする。
焔も、雪泉も、そうやって救って来た。
そして、ステインだって――救おうとした。
彼を倒したは良いが、アレが救えたと言われたら、答えられない。
でも、彼の心に少しでも変化があれば、それが人の為になるのなら、良いのかもしれない。

「…そっか、そう…だよね」

これは誰かに助けてもらう、ではなく、自分で解決しなければいけない問題だ。
他人がどうこうする問題ではないし、自分で乗り越えなきゃ意味がない。
でも、これだけは伝えておこう…

――今は受け入れなくたって良い、これからちゃんと、向き合っていこう――

個性も、超人社会も、そして…ヒーローも。
例えそれが無駄だとしても、ちゃんと彼に伝えよう…
それが私に出来ること――

肉じゃがを食べ終え、ようやく待ちに待った肝試しが行われた。
「ケケッ、爆豪と轟ビビってたな。

俺と小大の相性抜群だな！」
「ん」
「ウチだって忍法工夫すりゃ脅かす事だって朝飯前だし～」
「四季に唯も気合入ってんな！」
暗い森の中、最初の脅かし役は小大、骨抜、四季、拳藤だった。
骨抜の個性で小大を沈めさせ、地面から顔を出すのが彼女の役目。
四季は蝙蝠を召喚させ、驚かせる。
勿論、危害は加えないし触れることはないのでセーフ。
拳藤が指導、または手を巨大化させて驚かせる。シンプルだが怖い。
事が起きること数十分前、夕食を食べ終えた皆んなは、肝試しのルールを聞き実行。
B組が脅かす役、A組が肝を試す役…時間は1組に付き5分置きに出発。
ルートの真ん中に名前を書いた札があるので、それを持って帰ることが条件とされている。
因みに補習組は最初こそ行けるハズだったのだが、訓練が疎かだったので肝試しの時間を削いで補習…とのこと。
楽しみにしてた補習組がとても可哀想でならなかったが、肝心の物間も同じく補習を受ける羽目に…残念だ。
因みに出発したペアは爆豪・轟と、柳生・雲雀。
そろそろ五分が経つので麗日と蛙吹のペアが出発する頃だろう。
ペアになった際、嘆く者が居た。
爆豪、峰田の二人…
爆豪は轟のことにヤケに苦手意識を持ってる為、尾白に変われと命令し、尾白とペアを組んでいる峰田は、八百万…飛鳥に代わりたい為か、青山と緑谷に「代わってくれ！」と膝を地面につけてひがんでいた。
当然二人は峰田とくっつかせたら危険だと思ったので（または爆豪と変わりたくないので）断固拒否する。
八百万と飛鳥は峰田と変わりたくないし、他の女子も峰田に当たら

ずに心の底から安堵の息をつく。
まあ実際バスの中でエロ（本人は官能）トークしたり、覗きを二回行ったので、女子から不潔扱いされるのは瞭然たる結果だ。
B組は勿論、皆んな仲が良いので誰がどのペアになろうと関係ないし、それはそれで楽しい。

「にしても、柳生ちゃんが意外だったな～、まさかホラー系が苦手なんて知らなかったし」
「まあでも脅かし役は案外楽しいよな！
爆豪とか柳生っつーヤツとか、人に見せない一面を見ること出来るし、恐怖ってスゲェ！」
「……ん？」
「…？どったの拳藤ちん？」
「ねぇ、あのさ…さっきから焦げ臭くない？妙に…さ」
拳藤が何かを察したかのように、手で鼻と口を抑え、辺りを見渡す。
しかし闇が広がる森の中、懐中電灯でもない限り視覚することは出来ない。
「焚き火とかやってたり？広間で…キャンプファイヤーとか？」
「けど…プッシーキャッツの皆んなや先生…今日は肝試しやるとしか言ってなかったろ？
何か匂いが強くなってきたし…」
「どーせ爆豪か轟辺りがビビっちまって個性使ったんじゃ――」

バタン――

「――え？」
この時、小大・四季・拳藤は目の前の光景を疑った。
なんと、骨抜が突然倒れ出したのだ。
先ほどまで何ともない様子で自分たちと、平然と会話をしていたのに…
骨抜はまるで魂が抜け取られたかのように、目を開けず、物言わず

倒れてしまったのだ。
この焦げ臭い匂いが原因か？
しかしこの匂いが原因であれば当然、自分たちも骨抜と同じく気絶してしまう…
では何が原因で…？
「ッ！これって――！」
拳藤は暗闇に漂う視覚出来る異様な空気、ガスを見て瞬時に悟った。
これは…毒ガス――!?
「四季！小大！」
「ん！」
「待って拳藤ちん！なんか来る！」
「え？」
手で口を抑えながら、小大を掴むものの、四季の言葉に視線を向ける。
四季が指を差してる方向から、フヨフヨと不確定な動きをした光る物体が此方に近づいて来る。
その姿は、妖怪シリーズに出て来そうな火の玉と同じサイズをした龍が口を開き、遅くとも此方に近づいて来る。
「何これ…？」
「ッ！拳藤ちんに小大ちんこれなんかヤバ――」
「――さぁってと、開戦の幕上げだ」
瞬間、聞きなれない女性の声が暗闇の森の何処からか聞こえ、それを合図にするかのように、龍の姿をした物体は、危険察知して避難させようとした四季や拳藤に触れることなく――
――ボガアアアァァン!!!
爆発を起こした。
それこそ花火のように光が爆発し、周囲に漂う毒ガスは爆風により吹っ飛ばされるものの、森がヒシヒシと悲鳴をあげる。

「龍姫からの合図だ…
さァ始まりだ。地に墜とせ…『敵連合開闢行動隊』――」
暗闇の森の何処か、荼毘は近くにあった木に触れると、その木は瞬時に燃え上がり、黒煙が巻き起こる。
森に火が付くことで、当然気がつく者もいるが、関係ない。
合図があったと言うことは、各々の悪意は暴れると言わんばかりに…動き出す。

「何だ?さっきの爆発…近かったな…」
「もしかしたら、爆豪くんが爆発起こしてるのかも?」
柳生・雲雀ペアも何が起きてるのか分からないし、毒ガスが発生してることも、森が燃えてることも、分からない。
しかし、直ぐに知ることになる――
「――みーつっけた♪」
木の上、葉に紛れて隠れてる少女は、背負ってる一本の鎌を手に持ち、微笑む。
鎌倉は柳生の首めがけて、鎌の刃先を向ける。

当然、始まったばかりのお茶子と蛙吹ペアも…その悪意に気づくことなく、後ろにナイフを持つトガヒミコの存在も、彼女たち二人には分からなかった。

ポタポタ…
地面に血が流れ、こびり付く。
広間に集まる生徒たちや、飛鳥に緑谷は恐怖で怖気付き、マンダレイと虎は目の前の光景を恨むように睨みつける。

その目には、怒りが込められていた。
――なんで
そんな、こんな事有り得ないのに…
だって、この場所は雄英生と担任、そしてワイルド・プッシーキャッツにしか此処にはいないはずなのに。
「――もう、飼い猫ちゃんは邪魔ね」
サングラスを掛けたオネエ口調の敵は、嫌に薄ら笑みを浮かべながら、広間にいる皆んな全員を見つめる。
布で覆い隠された大きな鉄棍棒を手に持ち、頭から血を流し気絶してるピクシーボブの頭を潰すようにと、力を入れる。
その痛みに伴うかのように、ピクシーボブの表情は歪む。
「ハッ――無様な事だな、至極当然な報いだ」
装甲付きの黒いブーツを履き、ゴミを踏み潰すかのように、ピクシーボブの腹に足を踏み入れ、ペッ――と唾を顔に吐き付ける、トカゲの顔をした男は、嘲笑う。
――なんで、そんな…だってここは…

私たちしか知らないはず。
林間合宿のことは、誰にも知られてないはず…生徒たちだって当日になってからしか知らなかったんだ。
なのに、こんなこと…あり得るはずがない。
「なんで…そんな…万全は期した筈じゃあ…
なんでだよ畜生…嘘だろ……なァ?おいって!!」
皆んなの気持ちを代弁するかのように、訴えかける峰田は、恐怖で体を小刻みに震える。
他の生徒たちの顔色も、目の前の信じられない光景に息を呑み、青ざめる。
峰田の気持ちは同じだ…
「なんで敵(ヴィラン)がいるんだよォォ!?!」

峰田の怯えた叫び声が、空に届くよう響き渡る。
そしてピクシーボブと虎が戦闘態勢に入る。
歪んだ悪意を持つ敵は、善を踏みにじり、嘲り笑う。
その光景は、もはや悪夢でしか何でもない。
唐突たる理不尽は、ヒーローと忍に襲いかかる。
あのピクシーボブが、個性を使う前にやられたのだ。
見るからに結果は最悪、森は燃えてる、爆発があった、毒ガスがある。
敵の実力も数も未知数、何処にいるかさえ不明、用意周到に計算された襲撃、生徒たちが危険…状況は最悪だ。

「何が…起きてんだ?」
そして、秘密基地で独りになってた洸汰は燃えてる森を見つめる。
その後ろに、殺意を孕んだ敵がいる事などいざ知らず――

９６話「黒佐波」

「先生ぇ…肝試ししたかったよ…明日は？補習って明日じゃダメなの…？」
「ダメだ、つかそれ言ったらお前ら寝る時間ねえぞ、我慢しな」
相澤は拘束布で五人を縛りながら、宿泊施設へと連行するかのように、ズルズルと音を立てながら引きずっていた。
補習組は個性訓練が疎かだった為、肝試しの時間を削って補習を行う流れとなった。
残念な結果だ、肝試しを楽しみにしてた五人は、何が悲しくてつまらない補習を受けなくてはならないのだろうか…しかしヒーロー科の道は険しい…
五人が本当にヒーローを望むのなら、相澤も躊躇はしないし、厳しくやっていく。
マタタビ荘、補習の部屋に入ると、物間がケラケラ笑いながら補習を受けていた。
「アレェ!?Ａ組肝試し出来なかったんだ!?アハハハハ！
Ｂ組は赤点僕一人しかいないのにＡ組は五人も赤点かぁ、こりゃお笑いものだねぇ！」
「お前本当どんな神経してんの!?赤点取ってんのに何なんコイツ！昨日もそうだったよな!?」
物間の心がアレとは言え、自分が補習を受け肝試しが出来なかったにも関わらず、Ａ組を煽る彼のメンタルはもう異質だ。
そんな物間に壮大なツッコミを入れる切島。因みに昨日も似たようなことを言ってたので、相当心が来てるんだろうな、アレなんだろう。
「ブラド、今回は演習入れたいんだが…」
「奇遇だな、俺もそう思ってたところだ！」
部屋には物間だけでなく、ブラド先生も既に来ていた。
今回は立ち回り方を含めた演習だそうだ、今日の補習は一段と厳し

いだろう…
補習の内容について話し合っていた時だ。
――皆んな！落ち着いて聞いて!!
「ん？」
突然、頭の中から急に声が聞こえる。
この声はマンダレイ…個性のテレパスで皆んなの頭の中に直接送信してるのだろう。
突然脳内にマンダレイの声が聞こえたことに、驚く者もいれば、楽しむ者もいるが、今はそんな空気ではない。
――敵が二名襲来！他にもいる可能性アリ！
動けるものは直ちに施設へ！会敵しても決して交戦せずに撤退を!!
その言葉に生徒の顔は呆然とする。
意味が分からない…だって、この場所は生徒や先生、そしてワイルド・プッシーキャッツしか知らないはず…
そもそも当日でしか生徒たちはこの事を知らされてないし、親だって知らなかったのだ、それなのに何故？
「バレないんじゃなかったの?!!」
部屋に物間の叫びが響く。
相澤は直ぐに部屋から飛び出るように駆け走り、外に出る。
「考えたくないが……な…」
額から冷や汗が流れる。
昨日の夜、妙に胸騒ぎがした…根拠もなければこれと言った理由もない…ただ、嫌な予感は微かにしていた。
緑谷と飛鳥が死柄木と接触したと聞いた、敵が今後絡んでくる危険性があると察知した教師たちは、最悪な未来を阻止するべく、先ず合宿先を変更した。
そこは生徒たちにも説明してるので、問題ないとしよう…
次に、オールマイトが原因でもある。

彼を何故この合宿に連れて行かなかったか…それは、敵連合の目的がオールマイトにある為。
オールマイトを狙い生徒たちも巻き添えを食らう危険…
それこそ、ＵＳＪの時のような状況を阻止するべく、オールマイトは連れてこなかったのだが…
まさか万全を期しても、狙われるとは…
相澤は苦虫を噛み殺したかのような表情に染まる。
外に出る相澤は、目の前に広がる光景に目を疑った。
森が燃えてる、ガスで覆われてる…まるで囲んでるかのような状況…
この時間帯は…まだ肝試しが始まったばかり…つまり森の中にはＢ組全員と、Ａ組が数名…広間にはまだ残ってる生徒もいるのだが…
「こりゃ…マズイな…！」
相澤は舌打ちをする。
敵は何人いるか分からない…森は燃えてる、ガスの正体は不明…
敵の目的が何かは知らない…生徒たちの安否が不安だ…一刻も早く――
「――これはこれは、イレイザー・ヘッドですか、お初目に掛かりますね…」
途端。相澤が振り向く間も無く、隣から女の声が聞こえた。
その少女の目は冷徹で、熱の篭ってない…氷のような、凝視に近い目付きで語り出す。
「ブラドキング――!!」
相澤がブラドキングの名前を呼んだ瞬間、少女は手に持ってた刀を軽く振っただけで、大規模な蒼炎を放つ。
青空のように蒼く綺麗な炎は、相澤を包み込むように広がり、炎は揺らぎ、炎が掻き消すかのように相澤の姿はもう何処にも見当たらない。
「私たちにとって、貴方達教師を含め、プロヒーロー達は邪魔な存在でしかありません…ですから、大人しく私の蒼炎に焼かれて死んでください――」

蒼炎が激しく揺らぐ中、少女は薄ら笑いを浮かべる。
闇夜の下で、蒼い炎が生きてるかのように、消えることなくいつまでも、いつまでも…
そして少女は、施設に意識を向けると、刀を手に持ち刃先を向ける。
「どうせなら、建物ごと蒼炎で炙ってあぶり出しましょうかね。
尤も、出て来たところで始末しますけど――」

「――ハッハッハ！ご機嫌よろしゅう雄英高校!!そして忍学科の忍学生よ！
我らは敵連合開闢行動隊――！」
場所は移り変わり、マンダレイと虎、忍学生の飛鳥を始め、他の生徒達は広間にて敵連合開闢行動隊と名乗る二名と対峙していた。
トカゲの容姿をした男は、ピクシーボブの腹部を踏んづけながらも、豪快に笑っている。
髪は桃色に染まっており、水玉模様のお洒落な服を着こなしている。
「敵連合…!?なんで、ここに…」
尾白の言葉は最もだ。
見知らぬ敵が、生徒達の前に現れた…しかも、敵連合という組織の名を口にして…
ＵＳＪの襲撃にはこの二名はいなかった…となると、ヒーロー殺しの事件がきっかけだろう…

「ねぇ、この子の頭どうしちゃう？ねぇ、潰しちゃおうかしら？」
「ッ！させぬわこの――」
「まァまァ待て待て、早まるなよマグ姉！虎もだ落ち着け！
生殺与奪は全て、ヒーロー殺しの出張に沿うか否か…じゃないか？」
マグ姉と呼ばれる人物が鈍器をピクシーボブの頭に強く入れ、本気で頭を潰そうとしたところ、虎が動くも二人を止めるトカゲ男。
そして、このトカゲ男は確かに言った…『ヒーロー殺し』という名前を口にしたのだ。
そうなると…
「ヒーロー殺し…忍殺しって呼ばれてた…ステインのこと…だね？」
飛鳥は恐るおそる口に出す。
すると彼女の声に反応したのか、トカゲ男は飛鳥を見ると歓喜の表情に染まる。
「そうさ！君は確か…飛鳥くん！あぁ、君はヒーロー殺しが認めた人間…英雄を背負うに相応しい…本物の忍か！生で会うのは初めてだなァ！
そして、そこにいるのはもしや…メガネ君！保須市にて終焉を招いた人物が勢ぞろい…君らに会えて光栄だ――！」
スピナーは飯田と緑谷に視線を向けると、さぞ嬉しそうに満面な笑みを浮かべる。
そして背中に背負う大剣を覆ってる布に手を取る。
「申し遅れた、俺の名は『スピナー』。
――敵連合開闢行動隊の一員であり、漆月同様、忍と共に道を歩む者であり――
彼の夢を紡ぐ者だ――！」
そして、布に隠されてたその武器は、異常なものだった。
短剣、刀、クナイ、忍刀、ノコギリ、チェーンソーの刃、数えたらキリがない、無限に思える凶器の刃物が何重にも、束になっている。

一同はそれを見て後ずさりする。
この刃物で傷付けられたら、一たまりも無い…
それを軽々しく持ち上げ、あろうことか忍が使ってた武器までも混ざってること自体が不思議でしょうがなかった。
スピナーと名乗る男は、その大剣を虎とマンダレイに向ける。
「えっと…皆んなは下がって！私が――」
誰よりも危険を察知し、この場に忍学生が一人しかいない飛鳥は、状況を打開すべく、前に出る。
この二名は手練れ…しかも漆月と共に歩む…と言っていた。
つまり、スピナーやマグ姉と同様に、ここに彼女がいる危険性もあれば、恐らくスピナーと同じく、ステインに感化された忍も少なからずいるはず…
そう考えると、漆月以外の忍が敵連合の名の下で動きつつあるという、可能性は高いはず。
いや、あるだろう…
殺気で紛れてるので詳しくは分からないが、忍の気配が複数存在する。
「飛鳥、よせ…貴様は下がってろ」
「でも…」
飛鳥の言葉を待たず、虎は彼女に下がれと命令する。
飛鳥が何か反論しようとするも、虎の怒りを察して言葉を途切らす。
虎の表情は元々怖いが、今は非常…と呼ぶくらいに、大激怒していた。
眉間に青筋がくっきりと、分かるように浮かび上がっている。
声を聞いただけで分かる、今の虎は完全にキレている。
「何でも良いがな貴様ら…！
お前らが傷付け、血を流し倒れてる女…ピクシーボブはな、最近婚期を気にし始めててなぁ、女の幸せを掴もうって…良い歳して頑張ってたんだよ…

――それを!!そんな女の顔を傷物にし、汚して、何が夢を紡ぐだ笑わせるな愚か者！
男が一丁前にヘラヘラ語ってんじゃないよ!!」

虎の一喝が入る。
例え相手が敵だろうと、ステインの夢を紡ごうと、どんな理由であろうと、家族に等しい仲間を、ピクシーボブを傷付けて良い理由にはならない。
ピクシーボブの顔を傷付け、唾を付け、痛めつけ、罵り、あろうことか腹を踏んづけ…
虎が怒らない訳がない、それは冷静そうに見えるマンダレイも同じこと。
「――ハッ！愚か者は貴様ら贋物だ！
ヒーローが人並みの幸せを夢見るか!!」
虎の一喝など意に介さず、スピナーは言葉を吐き捨て嘲笑する。
そして大剣をマンダレイに、マグ姉は虎を…
プロヒーローＶＳ敵二名との戦闘。
「虎！指示は出した！他の生徒の安否はラグドールに任せよう！
二人は私たちが抑える！
他の生徒たちは施設に戻って！会っても決して交戦しないこと！
良い？――委員長引率！」
「承知致しました！皆んな早く行こう！」
マンダレイの適切な対応と、早口ながらも手短に素早く事を伝える彼女に、飯田は大きく頷きながら生徒たちも同様、己の身の安全を確保するべく撤退する。
宿泊に向かおうとする皆んな、飛鳥もそれに続こうとするも、緑谷が立ち止まってる姿が視界に入り、思わず立ち止まる。
「あれ？緑谷くん…何して――」
「ごめん！飛鳥さんは飯田くんと一緒に！」
「な!?何を言ってるんだ緑谷くん！僕らはマンダレイの指示通り動くべきだ！早く…」

飯田が制するも、緑谷は飯田の言葉に耳を傾けず、決心したかのように彼は口を開いた。
「マンダレイ！僕知ってます！洸汰くんが何処にいるか――！」
緑谷が告げると、マンダレイは意識を緑谷に向ける。
マンダレイの不安な表情が、ほんの僅かに薄らいだ気がする。
この宿泊施設を囲む敵の数は、底が知れない。
テレパスで送ってるものの、宿泊施設にいないことは確か…
だが万が一外に出ていて、敵と遭遇すれば？
最悪な結果が、想像したくもないその先が、マンダレイの心に不安を煽り、頭に洸汰の死が過ってきた。
これがあくまでもし、敵と遭遇してたらの話で、ただの予想に過ぎない…
だがその予想がもし的中すれば？
だから、不安で仕方なかった。
だが、彼は洸汰の居場所を知っている。
なら、ここは彼に一任しよう…
交戦は避けるべきだが、それでも洸汰の…ウォーターホースが残したあの子を救けるのは、彼に任せよう。

「ごめんね飯田くん！」
「ッ――」
飯田は思わず唇を噛みしめる。
本当なら、飯田は叱って彼を止めなければならない…
保須市の事件があった、そんな彼が傷付く姿を見たくなければ、心配だってする。
それは当然だ、自分の命を救ってくれた恩人でもあるんだ、心配しない方が逆におかしい。
委員長としての立場だけでなく、友達として、ヒーローとして、彼の身勝手な行動を、止めなければならない。
しかし、彼のお陰で命を救えたのなら、もしかしたら洸汰くんだって自分と同じ状況に陥ってる危険性だってある。

口が悪いとはいえ、ヒーローの事をよく思ってない子どもとは言え、見捨てる訳がない。
もし洸汰くんが自分と同じ状況下に陥ってるのであれば、それは救わなければならない。
それに、緑谷の余計なお節介のお陰で、自分は救われたのだ。
それは…
「――分かった…くれぐれも無茶はしないでくれよ……そして、そんな無茶にならない為にも…飛鳥くんも…同行してくれないか？」
飛鳥も同じこと――
彼女は一瞬何を言ってるのか分からない表情を見せるが、直ぐに頷いた。
危険な目に合わせたくない…だからこそ、自分を助けてくれた恩人が、危険な目に遭わない為にも、飛鳥は緑谷との動向を一任したのだ。
緑谷は無茶をしすぎることがある、それは飛鳥も同様だが…
もし敵と遭遇した場合、一人より二人なら対処しやすい。
洸汰を無事確保することが出来れば、いち早く施設に戻り相澤やブラド、担任に任せることも出来る。
絶望だけが、この場に残ってる訳じゃないんだ――
きっと、委員長失格だと言われれかも知れない…ヒーローとして誇らしくないと蔑んでも構わない…
今はただ、最善の可能性を信じて…

暗闇の森の中、爆発によって毒ガスは吹き飛ばされた。
それでも全体的にその毒ガスが変わったわけでもなければ、また毒ガスは原型を保つかのように、周囲を覆い囲む。
動きは遅いものの、充分だろう…

なぜなら…
「いっつつ…」
「四季！」
そこに…
「あらら…掠っちゃったか…残念ザンネン。
爆破ごと意識吹っ飛んでくれりゃ良かったのにさ」
敵がいるから。
両手に純白な籠手を装着させ、鋭利な爪に四季の血がポタリと垂れ流れている。
四季の額にはその爪で傷つけられた傷跡があり、血が流れてるあたり酷い有様だ。
「おいおい、何があったんだ？」
拳藤の背後から声が投げかけられ、振り返ると、そこにはガスマスクを着用した鉄撤と夜桜の姿が見えた。
二人は先ほどの爆発音を察知して駆けつけに来てくれたのだ。
「鉄哲に夜桜！」
「これは一体…？――四季！」
ようやく拳藤達と遭遇することが出来た夜桜は、最初無事を確認したことに安堵の息をつくものの、四季が傷を負った姿を確認すると、驚愕色の声を上げる。
夜桜たちに気付いた四季は、振り返るもワザと苦笑を作りながらも、大丈夫だと言う意思を表現で伝える。
それと同時に四季と対峙してる少女も、夜桜たちの存在に気付き、薄ら笑いを浮かべる。
「おっ、アタシの爆発音に駆けつけに来てくれたのか～！そっかそっか、こりゃ暫くは遊べそうだねェ！
それに、数分経ったとはいえマスタードの毒ガス対策もしてるなんて…流石は雄英生、分かってたけど一筋縄じゃいかないね」
腕を軽く振る少女の名は龍姫、敵連合開闢行動隊の一員であり、スピナー、マグ姉と共にやって来た抜忍だ。
毒ガスは別の敵が発生させ妨害をしている。

毒ガスを吸って意識を失った人数は多く、Ａ組やＢ組に大きな被害を生み出していた。
「貴様か？四季をこんな目にしたのは…」
ここで夜桜が一歩足を踏み入れる。
相手の正体が、悪だと知った以上見過ごすわけには行かないし、四季に傷を負わせたのだ、そんな輩は放って置けない。
そんなの、夜桜が許す訳がない。
勿論それが四季に限った話ではない、他の生徒やＢ組の大事な仲間たち…骨抜や塩崎、角取に円場など、酷い目に合わせたのだ。
この龍姫という少女の仕業じゃなかったとしても、八つ当たりだとしても、おとしまえは付けてもらわなくてはならない。
夜桜の怒りに染める眼光に、龍姫は軽く鼻で笑う。
「フ～ン、お前らが今の月閃女学館かぁ、動画見せて貰った通り…善に善がる忍…かぁ、嫌だねェこう言うメンドくさい奴」
龍姫は腰を低くした態勢を作って拳を構え、武術者の姿勢をとる。
気から察するにこの力は恐らく上忍クラス…雪泉と同格か…それ以上か…
相手がどれ程強かろうと、夜桜には関係ない。
「おい待てって夜桜！マンダレイのテレパス聞いてなかったか!?交戦は避けるべきだって！」
「止めないで下さい拳藤さん！儂は此奴をブチのめさなきゃいけません…
四季の分まで返さないと――」
交戦しようとする夜桜に、拳藤は必死になって食い止める。
マンダレイのテレパス通り、普通なら交戦せず大人しく引き下がるのが得策なのだが、四季が手負いゆえに相手との距離も近い…そんな状況の中、逃げ出すのは困難だし四季が危険すぎる…
その為には此奴と相手をしなければならない…誰かがコイツを止めないと脱出は出来ない…そもそも毒ガスの中掻い潜るのはほぼ難しいだろう。
ガスマスクにも限度があるはずだ…

「大丈夫だよ夜桜…ちん…」
しかし、その心配はもう必要ない。
声のした方向へ振り向くと、四季は流れてる血を抑えながらも、何とか立ち上がる。
その傷とは似合わないが、彼女は大丈夫だよという意思を込めた目で夜桜を見る。
夜桜は「四季!?しかし…」と言葉を詰まらせるも
「コイツに一杯食わされちったんだもん…なら、今度は反撃しなくちゃ…やられたまんまとか一番嫌いだしさ…」
四季は龍姫に鎌の刃先を向ける。
ギラつく鉄製の刃物、輝く艶、研ぎ澄まされた武器、四季は先ほどのリベンジだという目付きで龍姫に向ける。
「いいね、そうこなくっちゃ♪」
それに応じるかのように、まるで獲物を狩るように、彼女は舌なめずりをして純白の籠手を向ける。
「夜桜ちん、ぶっちゃけ言って今回ガチ目にヤバイかも…ウチも、ウチらも…
向こうはタダ単に暴れたいが為にやって来た訳じゃないし……人数も目的も居場所も不明…
オマケに炎やら…ガスやらで囲まれてる始末だしさ…
だから夜桜ちんが…お願い、皆んなを守って欲しい…頼むよリーダー」
四季は龍姫から意識を夜桜に向けると、微かに笑う表情を見せつける。
その笑顔には、四季の覚悟を決めた決意が見受けられた。
四季の言葉が、想いが届いたのか、夜桜は怒りを抑え殺しながら、頷く。
頼られた。
リーダーとして、忍学生として、仲間として…なら、自分が皆んなを守らなくてはいけない。
夜桜は一呼吸整える、ここで怒りに感情を任せても状況は悪くなる

はずだ…
他の仲間が無事でいるかどうかすら分からないままなのに、それこそ奴等の思うツボだ。
時間稼ぎのために奴がいるなら尚更だ。
「…分かった、ただし気ィ付けての…」
夜桜は、四季を信じることにした。
仲間を信じずして何が仲間だ、家族だ、忍だ。
四季は強い、それは同じ忍学生にして黒影に育てられた愛弟子だからこそ、信じることが出来る。
辛いことかもしれない…しかし、今は仲間の安否が大切だ。
この森にはラグドールもいるし、そこまで気にかけること事ではないと思うが…
「では、行きましょう…」
「――長々と、悠長に話してたけどさ…私がアンタらを見逃すと思う？」
夜桜の言葉が終わると、龍姫は嘲笑し籠手の鋭利な爪を立て夜桜に斬りにかかる。
夜桜は龍姫が攻撃してくる気配に気付くものの、いつの間にか龍姫は夜桜の背後にいた。
彼女の素早さに反応が遅れ、間に合わない。
「夜桜ちん――！」
ガギィン――!!
しかし、龍姫の爪が夜桜を切り裂くことは決してなかった。
夜桜の目の前に立つ人物が、彼女を守ろうと言わんばかりに、盾になっていた。
その少年の名は――
「鉄哲!?」
鉄哲徹轍。
B組一の熱血漢であり、仲の良い切島と個性タダ被りの、最強の矛にも盾にもなれる彼が、夜桜を庇ったのだ。
「四季！夜桜！お前らなぁ、一つだけ間違ってることがある！」

ギギギィ…と金属同士が擦れ嫌な音を立てる。
そんな不快な音に表情を歪ませながらも、耐え抜くかのように鉄哲は踏ん張る。
「夜桜が俺たちを守る？笑わせんな！つか全然笑えねえわ！
良いか？俺たちはB組だ！ヒーロー科だろうと忍科だろうとな、俺たちはもう仲間なんだよ！
俺たちだってヒーロー目指してる人間だ！
夜桜だけが俺たちを守るんじゃねえんだよ、俺たちも夜桜や皆んな守るんだよ！
だから、夜桜や四季だけじゃねえ…
ここに最強の盾がいるっつーこと忘れんなあああァァァ!!!」
鉄哲の叫びが、気持ちが、熱意が、正義感が、漢気が、全て彼を強くするかのように、全身から力が溢れ出てくる。
相手が抜忍とは言え、それなりの実力を備えている。
そんな相手を、鉄哲は――
「はァッ!?」
押し合いで彼女を払いのける。
龍姫が衝撃を受けた表情を見せる。
相手はヒーロー学生とは言えまだ子供…いや、自分もまだまだ子どもなのだが、正直押し合いで負けるとは夢にも思っていなかった。
龍姫は落胆することなく、彼に視線を向ける。
（私が…押し合いで負けるなんて…
コイツ、強い!?）
「良いねお前！」
龍姫は不敵な笑みを浮かべ、竜の爪を再び鉄哲に向け襲いかかる。
正直言って個性訓練で個性を酷使した為か、あまり使いたくないのだが…
彼は受身の態勢に入る。
「そうだよね…」
――あ？
龍姫は突然声のした方向に振り向く。

その小さな言葉が、四季であることは分かっている。
しかし次の瞬間、四季は大鎌で彼女を切り裂く。
服が破れ、血飛沫が飛び散り、龍姫は痛みに表情を歪ませながら、態勢を崩し地面にバウンドするかのように転んでしまう。
「ぁぁ！」
彼女の小さく、弱々しい声がわずかに聞こえた。
四季は三人に振り向くことなく声を張る。
「ありがとね鉄哲ちん！けど早く行って！コイツはウチが食い止めるから！」
「四季…」
夜桜は迷う表情を見せながらも、俯きながら頷く。
「…四季、死ぬなよ…無茶すんなよ…」
拳藤の言葉に四季は三人に振り向くことなく、無言で頷く。
拳藤も夜桜と同じ気持ちだ…
出来れば友を置いておきたくないし、連れて行きたい…
しかし、ここで彼女を食い止めなければやられてしまう。
忍の事は分かっても、全てが知ってる訳ではない、そんな未知な敵と遭遇しても勝機は薄い…
「んじゃ、行くぞ！」
鉄哲の言葉に頷くよう、拳藤と夜桜は無言で駆け走る。
三人の気配が遠ざかると、四季は不敵な笑みを浮かべたまま、ため息をつく。
「死なないけど…無茶はするかも…」
立ち上がる龍姫に目を細めながら、敵意を孕んだ目付きで睨みつける。
それは、彼女も同じこと…
「悪いけど、ここは絶対通させないから…誰も死なさせないから…
ウチ頑固だからさ、決めた事は何でも守り通す主義なんだよね～…
だから…大人しくウチに倒されてよ！」
「ハッ、それはこっちの台詞よ月閃！
悪いけどアタシ死ぬ気ないから、それに…全力でここ通ってあげる

よ…！」
初めてなのかもしれない…
月閃女学館が敵連合と闘うのは。
四季と龍姫が地面を蹴ると、跳躍するよう距離を縮める。
死ノ美を交わす彼女たち、勝負の行方は如何に――？

「本当に此処であってるの？」
「うん！間違いないよ…ちょっと遠いけどね…！」
一方。緑谷と飛鳥はいち早く洸汰の元に駆けつけるべく、全力疾走で無限に広がる木々を駆け抜け、洸汰がいると思われる秘密基地とやらを目指している。
緑谷は洸汰が何処にいるのか、跡を付けてたので彼が此処にいる事は容易に想像できる。
「緑谷くんはもし洸汰くん見付けたら、背負って施設まで行って！私は緑谷くんをカバーするから…！」
因みに飛鳥はこれでも忍の素を出してるので当然早いのだが、緑谷もワン・フォー・オールを微調整で応用してる為、スピードは他の忍達とは引きを取らない。
深い森をかいくぐっていくと、山が見える。
寂しそうに聳え立つ山、そこには草木一本も生えておらず、岩だけだ。
しかしそれ以外は何もなく、崖になっているので落っこちたら無事では済まないだろう…
「あんな所に…一人でいたんだ…」
僅かながらに、小さな声を漏らす飛鳥は、あの岩だらけを目標にして突っ走って行く。

いつの間にか汗が流れており、疾駆で汗が風に乗るよう後ろへと飛ばされて行く。
動物や虫の鳴き声など聞こえず、この森は嫌な雰囲気を纏わせていた。
きっと、敵連合が攻めに来たからだろう…
安心出来ない。
そもそも、敵連合がこの合宿先を知ってること事態が驚愕の事実なのだが、こんな危機的な状況で考えても無駄だし、考えるにしても答えなど出てくるハズがない。
――それよりも私たちの目的は先ず、洸汰くんを救うこと…
敵がいなければ不幸中の幸いだけど…敵が多かったりしたら命の保証がない！
洸汰くんだけじゃない…それが終わったら散り散りになってる生徒達を見つけないと…
その為にも、風のようにもっと早く――

「秘伝忍法――」

その刹那――何処からか秘伝忍法という声が森の何処からか聞こえた。
飛鳥はそのほんの少しの瞬間だけ、一秒にすら満たされない…そんな瞬間的な時間、飛鳥は立ち止まる。
暗い森の中、何処から声が聞こえたのか分からない…でも、確かに今、秘伝忍法って――

「【波王獣撃拳】――」

飛鳥の真横に、ハッキリとした声が聞こえた。
横を見ればその謎の人物は拳を既に飛鳥に向けており、咄嗟に二刀でガードを試すも、その拳を食らった直後、鈍く重い衝撃が刀から身体全体へと伝わり、軽々しく、トラックに跳ねられたかのように吹き

飛ぶ。
「飛鳥さん!?」
突然、飛鳥が吹き飛ばされた。
この状況に頭が追いつけず、目を丸くし飛鳥を殴ったと思われる…いや、この場に一人しかいないので、飛鳥を殴った張本人に視線と意識を向ける。
その人物はゆっくりと拳を握りしめ、飛鳥を殴った方向に、悠然と語り出す。
「――お前らにとって忍ってなんだ?
何故テメェらは殺し合いをする?闘う?血を流す?命を懸ける?
それは上層部からの命令か?はたまた、任務の一環か?
違う違う、ダメだ駄目だ…それじゃあ闘う理由にはならない、それだから忍ってヤツはつまらねぇんだ…」
マスクで顔を隠してるので相手の素顔は分からないが、服は黒いTシャツに後ろにたなびく黒髪、そして逞しい筋肉が露わになっており、その人物が緑谷よりも一回り大きい男性だという認識を受けた。
両手には夜桜と少し似た手甲を装着させ、黒く禍々しく、血の匂いがこびり付いてるのが特徴的で強い印象を与えている。
「殺し合う理由はただ一つ!勝つか負けるかのシンプルな定義…弱肉強食ッつー自然の摂理の下で闘う訳よ!
つまり死の戦場の中誰が生き残るか、誰が勝者になるか…決められるんだ!
分からねえもんかねェ…忍を殺した時の快楽と、超越感…己がまた強く前進する成長感…それが俺の心に刺激を与え火を付ける…!
だから、殺しはやめられねェんだ!!」
ゾクゾクと体に身震いを起こすこの男は、興奮のあまりボクシングのように軽く腕を動かしジャブを繰り返す。
この男は余りにも異常だ、狂ってる。
言ってること自体が何を言ってるのかも分からないし、到底理解することなど、緑谷には出来る訳がない。
その男は今後は緑谷に視線を動かす。

「まァ…あのパンチ食らってあの世行きってのは少々名残惜しいが…
久しぶりにブッ殺せたんだ、相手が誰だろうとどうだって良いか…
尤も、ヒーロー学生なんて今までにブッ殺したことなんざねぇからな！」
その男は緑谷には拳を向けるよう構える。
緑谷もワンテンポ遅れて、反射的に構える。
出来れば戦闘は避けたいのだが…思った以上にこれは…苦戦しそうだ。
それ以前に緑谷は今混乱している。
頭の中で上手く状況が整理してない。
飛鳥がやられたなんて信じてる訳でもないし、やられたなんて思っていない。
しかし彼女の姿が何処にも見受けられない…
となると、やっぱりやられたのでは？
そんなハズ…ある訳が――
「んじゃま…行くぜェ!!」
しかし、幾ら緑谷が考え悩んでたとしても、時間も敵も待ってはくれない。
大男は大きな素振りを披露し、緑谷の顔面に思いっきり拳を入れるよう、殴りにかかる。
駄目だ、早すぎる！
図体に会わず、この男のスピードは尋常じゃない…多分、プロヒーローが多くとも彼に簡単にやられてしまうだろう…そんな気さえする。
ワン・フォー・オールを使用してガード？
駄目だ、あのパワーはグラントリノを凌ぐ…彼の猛攻で解除されるんだ…自分が無事だという保証もなければ、秘伝忍法で防げれるかどうかと問われても多分無理に近い。
ワン・フォー・オールを使用して回避？
これも駄目だ、もう遅い…コイツのスピードは多分微調整な自分のスピードを軽々しく超えてるし、時間がない。

なら――
一か八かの勝負…つまり、カウンター――
ここで使うのは名残惜しいが…１００％を使うしかないのかもしれない…
威力は爆発的で、火力が高い分自分に激しい激痛ダメージ及び、使えものにならなくなってしまうが…
それでも、今は関係ない――！

「秘伝忍法――【二刀繚斬】!!」

緑谷が決意したその直後、聞き慣れた声がこの人物の後ろから聞こえた。
その声は、この男に殴り殺されたのではと、死を疑った少女、飛鳥だった。
飛鳥はガードしていたので何とか態勢を立て直すことが出来たらしい。
一瞬の防御による一手、そのお陰か傷らしき傷は見受けられない。
緑谷の表情は僅かに晴れ、その大男は一瞬だけ動きを止めると、諸に飛鳥の秘伝忍法を背中で受けた。
普通なら秘伝忍法を食らった忍は、破壊的な衝動、衝撃により忍装束に傷を負い破くものなのだが、この大男…背中を諸に食らったにも関わらず、傷一つ付かないのだ。
――傷が付かない…？嘘でしょ!?
焔ちゃんなんか忍装束が破けたのに、破くどころか、傷一つすら付かないなんて…
飛鳥は内心そう叫ぶ。
自分の秘伝忍法が相手に通じない…それがどれだけ恐ろしく悍ましいことか、想像できるだろうか？
つまり己の力が相手に通用しないという事は、自分の攻撃が相手に通じないという意味を表すのだ。
「飛鳥さん！良かった…無事…だったんだね…」

緑谷はようやく安堵の息を吐き、胸をなで下ろす。
もし死んでたらどうしよう…なんて思っていたが、そんな心配も意味なく野暮だった。
飛鳥は「私は大丈夫だから…それよりも…」と伝え、視線を相手に向ける。
その大男は飛鳥が生きてることが意外だったのか、呆然と突っ立っている。
「――意外だなァ、普通俺の奇襲を掛けたパンチなら、対応出来ずに虫の息になるのがオチなんだが…
…飛鳥？ん、んん？お前…飛鳥なのか!?死柄木の言ってた人物…
思い出した！お前確かリストに載ってたヤツか！」
その大男は、緑谷が彼女の名前を呼ぶ際に思い出したのか、何度も掌を叩く。
死柄木弔…そうか、彼が忍を動かしてるのか…
「緑谷くん早く行って！此処は私が食い止めるから！」
「飛鳥さん!?で、でも――」
「良いから!!
――言ったでしょ？カバーするって…私と緑谷くん二人で闘っても、時間を消費するだけ…その間に洸汰くんの身に何かあったらどうするの？誰が救けるの？私と緑谷くんしかこの場にいない…
なら、緑谷くんが動かなくっちゃ！」
この場の近くにいるのは緑谷と飛鳥だけで、飯田率いる他の生徒たちは速やかに、相澤とブラドがいる施設へと避難している。
マンダレイや虎は、スピナーとマグ姉を受け止めている。
ピクシーボブは重傷を負ったまま気絶し、ラグドールは森の中にいるため、他の皆んなの安否は彼女に任せるしかない。
ここで頼りになるのは、この場にいる緑谷だけだ。
「それに――救うんでしょ？洸汰くんを…なら、私がそれを、守らなきゃ…ね？」
飛鳥はニコッとした笑顔を緑谷に見せる。
太陽のように輝かしく、優しい笑顔…飛鳥にとってその笑顔はいつ

も見せる、何気ない普通の笑顔…
しかし、緑谷にとって飛鳥のその笑顔はある人物と面影が重なった。
オールマイト――
憧れのヒーロー…どんな危機的なピンチに於いて、常に笑顔を絶やさない彼女のその笑顔は、心が安らぐ。
――そうだ、飛鳥さんも忍なんだ…任せなきゃどうするって言うんだ…
折角飛鳥さんが託してくれたんだ、この想いを、無駄には出来ない。
「分かった！それじゃあ飛鳥さん…お願い！」
緑谷は声を振り絞り、彼女にそう告げる。
飛鳥は緑谷からこの男に視線を送ると、決意を宿したその目で、不敵な笑みを浮かべる。
飛鳥の事が気に入ったのか、男はニヤリと口角を釣り上げる。
マスクはしてても、口から下は素顔なので、口だけでも様子が物分かりだ。
「貴方は私とだよ…！ええっと…」
飛鳥は相手の名前を呼ぼうにしても、初対面なため当然の如く、名前は知らないので口をもごもごとし悩む。
すると飛鳥が何を悩んでるのか察した男は、口を開く。
「…黒佐波だ。別名…抜忍狩の抜忍さ…」
彼は黒佐波と…そう答えた。
抜忍狩の抜忍とは、また偉い名前だ事…
飛鳥は僅かに呆然とするも、抜忍狩の抜忍という名前に首をかしげる。
「なに、簡単な事だよ…
俺は俺を狩ろ(殺そ)うとする忍を片っ端からブッ殺してるだけさ…
抜忍になりゃ窮屈な生活が始まる…なんてことは俺にはねぇ…
俺にとって忍をブッ殺すことは三度の飯より好きなんでね…」
忍を殺した時の快楽感、自分より上か同格か…強敵を倒した時の優越感と達成感が己を強くし、殺し合いの向上心を高まらせる。

歪んだ殺意もここまで来れば狂気だ、正気の沙汰とは思えない。
飛鳥は嫌なものを見るかのような目付きで、黒佐波に問う。
「殺し合うことが、貴方にとっての…忍の道なの…？」
「ん？あぁ、まあな。
別に忍の道理なんざ知ったことじゃねえし暴れれば、殺せれば何でも良いんだけどさ、いざ問われるとそう頷いちまうよなァ…
上層部の命令ばっか聞いて、任務でしか人を殺める事のできない忍の超人社会…
窮屈で差別的で、ハッキリ言ってつまらねぇ、ウゼェし興味もねえ、だから暴れて殺すんだよ…
殺した時は身も心もリフレッシュされてな？
他者を踏みにじり殺したと来たら何のって、それがやめられねぇんだよ!!」
この世界は常に弱肉強食として創られている。
強ければ生き、弱ければ死ぬ…当然のことだ。
弱者がどうして力を付けずしてこの世界を生きることができる？
生きるのであれば強くあれ…
それは今の超人社会や忍社会に於いてもそうだ。
忍の罪は弱さ、弱さは罪に値し死ぬべきである。
生きるのであれば、強くあれ。
ヒーローもそうだ、強くなくして人は救えない。
心が優しくとも、強くとも、折れなくとも、体の強さが無ければ救うことは愚か、敵を倒すことなんてままならないし、死に至る。
ならば、常に強くあれ。
黒佐波はそうやって生きて来た。
別に間違ってはいない、強くなることは良いことだし、強く無ければ人は成長しない…
それが全てとは言わない…
しかし――
「そんなの…間違ってるよ――」

「あ？」
「――そんなの間違ってるよ!!」

飛鳥はそんなの認めない。
別に強くなることを否定してる訳ではないし、それは良いことだと思う…
実際自分は忍を目指してる身だし、否定しようもない…
だが、一つだけ間違ってる。
「何でもかんでも…殺して…楽しいなんて…殺し合うことが、忍の道？
巫山戯ないでよ！
そりゃ確かに…忍の任務で、殺し合うことは必然かもしれないし、避けられないかもしれない…
でも、殺し合う事が忍の道なんて…絶対に認めない!!
そんなの私が許さない！忍は、何でも殺し合うためにあるんじゃないんだ…」
殺し合うことが、全てじゃない。
時に善と悪が殺し合う争いになっても、仕方ないかもしれない。
任務のことだ、だが忍はそれだけじゃないんだ。
世の中を、社会を、人々を支えて守る…
それが忍の本業だ。
「――ハァッハッハッハ!!
善忍はいつでも正しいですよ～、私たちは何も間違ってないですよ～、世の中殺生ダメダメ～、ってか？笑わせんなクソ餓鬼ぃ！
やっぱなぁ、善忍ってのは根本的に相性悪いって俺の中で二番目に言われてんだよなぁ、あっ、三番目か？あれ、あれれ？まあ良いや…
善忍ってのはそうだよな？何処にでも現れて、一丁前に正義面しやがる…」
黒佐波は半分笑いながらも飛鳥の怒涛など気にもせず語り出す。
「闘う力だけじゃない…守る力も立派な強さなんだ!!それが、私の刀と盾――

飛鳥！正義の為に舞い忍びます!!」

守るべきものがある少女は、命を懸けて闘う。

97話「守る盾と、壊す刀」

「クッセェ…んだこの焦げ臭い匂いはよォ…」
「美野里、大丈夫か？」
「ケホ…コホ……うん…大丈夫…」
黒煙が充満に溢れる中、毒ガスの被害から免れた爆豪、轟、美野里は、音を立てないよう密かに宿泊施設に向かっている。
この近くに敵がいる危険性がある、音を立てれば気付かれてしまう事もある…
野蛮な爆豪も、出来れば戦闘を避けたいらしい…
まァ尤も、マンダレイから指示を出されてるのが一番の理由だろう。
美野里は鉄哲と夜桜と離れ、代わりに爆豪と轟と一緒に施設に戻るよう夜桜に頼まれたのだ。
最初は「嫌だ！美野里も…」と言いかけたのだが、この状況の中夜桜の指示に従うのが妥当だと判断し、美野里は渋々と二人に付いてきてるのだ。
それに、もう一人いた円場は毒ガスを吸ってしまった所為か、倒れてしまったのだ。
轟が背負ってるので良いものの、仲間が倒れてる姿は見たくはない。
「敵(ヴィラン)…なんで？何でこんな所に来てるの…？
美野里もう嫌だよ…帰りたい……夜桜ちゃん、四季ちゃん…無事…かな…？」
今にも泣き出しそうな美野里は、目を潤せていた。
暗闇と共に不安に包まれる三人…しかし
「うるっせェなチビ、一々泣くんじゃねェよ…」
「爆豪？」
「ッ!!」

厳しい彼の声に轟は首を傾げ、美野里は面食らった顔を見せる。
美野里だけでなく、爆豪は雲雀や美野里と言った幼い性格を持つ子どもらしい人間は苦手だ。
自分が素を出しただけで直ぐに怯え泣くし、図書館の一件ではエライ目に遭った（特に切島が）。
だから当然、美野里は泣き出しそうになる。
「おい、爆豪…美野里泣かせたらダメだろ…もう少し言葉を…」
「あっ!?うっせぇ喋んな舐めプ野郎!!」
…多分、この組み合わせは最悪だと思う。音を立てずに施設に戻るなんて出来ない。
爆豪が叫んでは隠密行動も意味がない。
こんな大声を出されては誰かに気付かれる。
それはそうと、美野里は足を止めて今にでも泣き叫びそうだ。本当に幼稚園か…なんて思うし、爆豪も轟も反応に困っている。
「美野里…爆豪が怖いのは分かるが…今は…」
「はァ!?何で俺が怖いとか俺の所為になるんだクソ野郎！」
「いや、だって――」

「――違うの…」

「あ？」「え？」
美野里の発言に爆豪と轟は疑問を浮かべる。
違う…とは、爆豪の事で泣いてるんじゃないんだと思う。
彼女は泣き虫でもあるが、爆豪じゃないとなると、何なのか？
何故美野里は、立ち止まったまま、震えてるのだろうか。
それは…
「あれ…見て……」
小刻みに震える美野里の指を差す方向。
そこには、見慣れぬ人物が、地面に膝をついて背中を向けている。

――人？

見た感じ黒い布で体全身を覆い、拘束具やらで体を縛り付けられている模様、その怪しい人物は此方に振り向く事なく、何かを眺めている…

「……おい、待てや…俺たちの先って…誰かいたか？」

爆豪の言葉に轟は、みるみると恐怖に表情を歪ませる。頭の中に二人の人物が過ぎる。

前のチームは確か…

「常闇と…障子――!!」

彼らが無事かどうかは分からない…

ただ、三人の視界にはにわかに信じ難いものが、映っている。

その人物が見つめている視線の先は、ベチャリとこびり付く赤い鮮血。

そして…斬られた腕――

「…ああ、見惚れてた。

いけない、イケない…仕事しな…くちゃ…

綺麗な肉面だァ……あぁ、あァ…ダメだ駄目だ駄目だ……

集中出来ない…

仕事しなくちゃ…いけないのに……僕の…後ろに…人が三人もいる…そう考えると……肉面があァ……

――でも、あの子は駄目なんだよなァ…」

ブツブツと物騒な事を呟いている。

一体何の事か知らないが、声から察するに男性であることは確かだ。

男は三人が居ることを知りながら、振り向くことなく悠長と語り出す。

「あぁ、あァァ……殺しても…死んでも良い人間が…この場所にいるなんて……夢…見たいだァ…

あああァァァ!!駄目だダメだろ！仕事しなくちゃ…いけないのに！

肉面が…綺麗で……もォ、誘惑すんなよもおおおおおおオオオオオーーー!!!!」

突然発狂し叫び出す男に、美野里は僅かに体を反応させる。

轟と爆豪は至って普通だ。だが、血生臭い匂いには何とも…

この腕が一体誰のものなのかは知らないが、前のチームにいた常闇か障子である可能性は高い。

他にも青山や耳郎のペアもあるのだろうが、とにかくこの腕がこの男に斬られた?のは確かだろう…

そして拘束具で縛り付けられてる男は、立ち上がり後ろを振り向く

―――

「――…仕事、しなくちゃ」

目元が見えないこの男は、口だけがむき出しになっており、興奮してる所為なのか、口から涎を垂らしては息遣いも荒い…

ただ次の獲物を仕留めるべく、この男は三人をジッと見つめている。

「交戦すんなだァ…!?」

そんな男に、不敵な笑みを浮かべる爆豪勝己。

恐らくこの男も…他の敵や忍とは負けず劣らず強いだろうことが安易に分かる。

この男が発する異常な殺気は、肌身で感じるだけで背中から何かが這いずるような、気味の悪い感覚に囚われるようで気持ち悪い。

さァ、まだまだこれからだ…

敵と忍…ヒーローと忍の戦い…いや、戦争は始まったばかりだ。

「刀と盾だって…？ハハッ――！
聞いたことねえな？そんな綺麗事…綺麗なもん更に磨き上げて出来たような綺麗事としか思えねェなァ？」
洸汰の秘密基地へ行く途中、左右に分かれる山林に寂しく続く一本道…
洸汰への救出を赴くものの、黒佐波と呼ばれる抜忍がその行く手を阻み、飛鳥は緑谷に洸汰を救ける事を託し、現状…飛鳥は黒佐波と対峙することになった。
飛鳥のその目には、覚悟が見受けられた。
どんな事があろうが決して折れる事なく…
洸汰に緑谷…そして、他の皆んなを守る…
他者を守ろうとするその目は、何処か現役時代の半蔵の目と似ていた。
「お前さ！殺し合うことが忍の道じゃねェっったよな？んじゃよォ、俺達みたいに死柄木(上)からの命令で殺せって言われても、それでも否定すんのかよ？
所詮、俺たち忍がやってる事は殺し合いさ…それが忍だろうと妖魔だろうと関係ねェ…
世の中楽しいことやったもんが勝ちなんだよ!!
お前アレだろ？半蔵の孫なんだろ？だったらさ、言葉じゃなくて殺し合いで俺を止めてみせろよ？
言葉でどうこう訴えても意味がねェぜ？」
黒色の両籠手を装着してる両手で指を鳴らす仕草を取る。
理屈の通じない敵に言葉どうこうで止められるほど甘くはないし、少なくとも黒佐波は誰かの言葉で変わるほどの人間ではないだろう。
飛鳥は呼吸を整える…気を研ぎ澄まし、冷静さを保つ。
「…うん、そうだよね。
言葉で変わる位なら、誰だって苦労しないもんね……それに、任務なら…厳しく言えないけど…

でも、私たちだって忍…それに貴方達が殺すことが任務なら…私たちがそれを止めれば…問題ない！」
ようは『俺に勝って止めてみせろよ』という意味だ。
黒佐波の遠回しな台詞に飛鳥は理解したのか、軽く頷く。
シンプルで分かりやすい…だが、こう言った単純な人間ほど、どれ程の実力を備えてるかが見切れない…
ただ少なくとも、忍の彼女が気を察知する前に秘伝忍法を使われ食らったのだから、それなりの実力は備えてるのだろう。
「皆んな…私が守ってみせる！貴方達の好きにはさせない…！
忍・転身――!!」
飛鳥は跳躍するよう軽く地面を蹴ると、黒佐波目掛けて飛び出す。
それと同時に体が光に覆われ、服が一瞬で吹き飛び忍転身により忍装束を身に纏う。
黒佐波は不敵な笑みを浮かべ「よっしゃァ来いや!!」と歓喜の雄叫びを上げる。
「秘伝忍法――【半蔵流乱れ咲き】!!」
飛鳥は刀を乱暴に振るうよう、無我夢中に黒佐波に斬りかかる。
黒佐波は両手を盾のように使い、刀を弾く。
しかし、乱れ咲きは【二刀繚斬】とは違い、一撃だけで終わるのではなく、岩を斬り裂くように、何度も何度も執拗に、一撃ずつ力を込めて振るう。
手加減などしないし、訓練をされてない一般人が喰らえば死ぬだろう、飛鳥は躊躇する事なく、手を休める事なく振るい続ける。
ガギィン、ガギィンと金属の音が響き、火花散る。
飛鳥の刀の一撃が、本気以上だ。
それを黒佐波は――
「ほォ？これがテメェの秘伝忍法か？」
余裕を持ってそう言った。
飛鳥の表情が僅かに歪む。
衝撃を受けるかのような言葉。
手加減はしてないし、先ほどの秘伝忍法で彼に傷が付いてない事が

ハッキリ分かってるので、これでも本気でやってるのだが…黒佐波は余裕で全て腕で受け止めている。
「おらよッ――!!」
黒佐波は小蝿を払うかのように腕を払いのけ、刀を弾き飛鳥を軽く吹き飛ばす。
黒佐波の秘伝忍法を食らった時の衝撃を受けた訳ではないが、態勢を崩してしまう。
擦れた地面の足跡がくっきりと見える。
又しても秘伝忍法が通じない…こんな敵今までにあっただろうか？
――焔ちゃんでも忍装束を破けてたし…ダメージが入るのに…
雪泉ちゃんや雅緋ちゃんだって、強いし彼女たちの秘伝忍法の力には劣るけど…それでも攻撃は通用する…なのに…なんで!?
「おいオイどうした？何ボーッと突っ立ってんだよ？
鳩が豆鉄砲食らったような顔しやがって、掛かって来いや、俺を楽しませてくれよ飛鳥。伝説の忍のお孫さんだろォ？」
黒佐波は指で挑発する仕草を取る。
飛鳥は絶望の色に染まる…実力が通じないなんて嘘だ…だって、そんなのって…
いや、これはもしかしたら忍術なのか？
攻撃が通じない…通用しない忍術を使ってるのか？それ以外考えられないし、幾ら何でも可笑しすぎる。
「来ねえのか？はたまた秘伝忍法はたったのそれだけか？
んじゃ今度は俺から行くかァ！」
黒佐波は腰を低く構え、突進してくる。
次はどのような攻撃が来るかわからない…避けるタイミングを捗らないと、防御だけでも彼に殺られてしまう危険性が高――
「秘伝忍法――【黒波衝乱舞】!!」
――ボボボボボボ――!!

黒佐波は荒々しく一心不乱に連続で殴りかかる。黒い波紋はエネルギーとして拳に纏わり付き、一気にゴリ押しをしていた。
乱暴でいて、適当に殴ってるように見えるが、拳の一撃一撃が重々しく、その威力は飛鳥の【半蔵流乱れ咲き】のレベルを軽々しく超えていた。
飛鳥は避けるタイミングが取れず、刀をクロスさせるも、黒佐波の連撃に為すすべ無く食らってしまう。
「ッッッ――!!あああァァァーーーー!!」
激しい拳ラッシュの猛攻に、飛鳥は耐えきれず更に吹き飛んでしまう。
口から血を吐き、頭、手、腹、足など、様々な部位を殴られ、拳の跡が僅かに残る。
「おいおいどうした?皆んなを守るとかほざいてたよな?
この程度で吹っ飛ばされてんじゃねえよ、皆んな守るんだろ?ちゃんと盾役演じろよ?
秘伝忍法――【黒波衝乱舞】ゥ!!」
黒佐波は又しても連続で同じ秘伝忍法を使用する。
――また…!?
なんて心の中で大きく叫ぶ。
飛鳥は何とか後方に下がる。
あんなのをマトモに喰らえば体力が削れるだけで、体力戦としてはまず勝ち目がない。
連続で、ただ殴るように見えるこの技も、波紋に応じて相手にダメージを与えている。
つまり、黒佐波の拳と忍術による波紋が合わさった技…
単体の力だけでも重いのに、それを連続でしかも力を乗せると来たらたまったものじゃない。
だが、後方に下がれば問題な――
「秘伝忍法――【波動拳大玉】ァァ!!」

と思ったら大間違い。
秘伝忍法を中断させ、黒佐波は拳と拳…両拳で玉を作るよう螺旋状の球体を作り上げ、エネルギーを溜めれば溜めるほどにそれはデカくなり、溜まると両拳を突き出し大砲を発射させるかのように、螺旋状の玉は前方目掛けて襲いかかる。
「わわッ――!!」
飛鳥は痛みを堪えながら辛うじて右方向へ転がり回避することに成功し、攻撃を免れた。
しかし、衝突した木々は大爆発を引き起こし、木々は一瞬で焼け、焦げ臭い匂いが充満する。
回避したのでダメージはないものの、もしアレを食らってたと思うと…考えただけでゾッとする。
飛鳥は表情を更に絶望と恐怖の色に染める。
しかし、其処から飛鳥は更に絶望と恐怖に身を染めることになるだろう。
「秘伝忍法――…」
「!?ちょっ…」
――まだ来るの?!
この男、先ほどから休むことなく連続で秘伝忍法を使用している。
秘伝忍法と言うのは知っての通り、ゲームで言う必殺技のことだ。
しかしこれはゲームではない現実だ、ＭＰ制限以前に、強い忍法を使用することにより体力を削り疲労が溜まるのだが…
黒佐波は息を荒げることもなく、平然と、ごく普通に…それこそ普通に殴り殺す感覚で、多用な秘伝忍法を使って来る。
それも、連続で――
「【黒風大波乱衝】――!!!」
右腕に大きな渦巻く黒い波紋が風のように蠢き巻いている。
風の唸り声、大きな風に似た黒い波紋…まるで災いの竜巻だ。
他にも、台風、サイクロン、ハリケーンなど呼び名はあるが、この際はどうでも良い。
その渦巻く黒い波紋は、吸引力や引き裂く力があるのか、木々の落

ち葉が竜巻に乗り、その葉が無残に散り散りになっていく。
飛鳥は目の前の光景に、唖然とする。
コイツは、一体――
「伝説の忍の孫ならよォ…これ位お茶の子さいさいだよなああァァァ!?!」
黒佐波の嗤笑もここまで来ると歪みでしかない…いや、もう頭が完全にイカれてる。
狂ってる、狂人だ。
本当に殺すが為に生きて来たんだ…
こんな忍が、この世に生きてるなんて…想像出来やしない。
「あああああああァァァーーーーー――!!!!」
獣に似た雄叫びを上げる黒佐波、その気迫に応じるかのように黒波紋のエネルギーは渦巻き、辺り一面を一掃する。
横から薙ぎ払うように仕掛けるこの大技は、回避不可能だ。
避けるにしても、波紋による吸引力が凄まじく、逃げようにしてもジャンプしようとしても、掃除機見たく吸い寄せられ体の自由が効かない。
「ダメ…!これは……!!」
飛鳥は唇を噛みしめる。
この男、選抜メンバーの筆頭に相応しい…それ以上の実力を備えている。
この実力クラスは…大道寺並みか…それに近い実力だ。
この技は防ぎようがない…飛鳥は思わず死を錯覚させる。
「――アッ!!あああああああァァァァァァァァ!!!」
黒い竜巻に吸い込まれると、あらゆる波紋の衝撃波が体全身に襲いかかり、刃物で全身を小刻みにするように斬られてる感覚だ。
血飛沫が飛び散り、傷口にまた傷口を抉るようで…忍装束がみるみると破けていき、肌が露出する。
「あッァァ…!!がああァァああァァァァああーーーーー――!!?!」
激しい激痛、鈍器やら刃物やらで延々と傷が続くかのような痛み。
脳が引き裂かれそうな程の激痛…これを食らって無事でいるはず

がなく、まるでミキサーの中に入った感覚だ。
ようやく嵐のような竜巻が止むと、飛鳥は力なく倒れかけ、手でなんとか地面を付き、膝をついたまま、呼吸を整える。
下着姿なのかみるからに無残な姿で、血が流れて酷い有様だ。
見るに耐えないこの傷跡…体中刃物やらで傷つけられてる。
「おうおう!お前伝説の忍の孫じゃねえのかよ!?為すすべなくして虫の息になってらァ!
所詮はガキか?結局、刀と盾なんざなんの意味もねえな?」
黒佐波はゆっくりと歩み寄る。
黒佐波の忍法は波紋による忍術。遁術は風、風と波紋が合わさった忍術…対人専用の忍法術だ。
忍法には多彩な忍法が存在する。
秘伝忍法の数は無限大、制限などない、それはカグラや半蔵に小百合だけでなく、黒佐波もそうであれば、飛鳥もそうだ。
忍による特別な体質…ただ、その力に伴い取得するものが増えていく。
忍転身とは、己のイメージに伴い、自分がそうでありたいと願い具現化されるもの。
精神的な忍術であり、想像すれば何でも忍装束を変えることが可能。
つまり制限など無いということ、それと同じように秘伝忍法や特殊能力に入る忍術も同じだ。
忍によって取得する忍術は異なるものの、秘伝忍法は制限なしに多く生み出すことが出来る。
己がそうでありたい、こうしたい…そう言う心の強さとイメージによって忍法は生まれるのだ。
忍術は心の技、心の成長が技を生み、技の強さが心の強さと成り得る。
尤も、生み出した所でも最初は弱いが…後々と使い続ければ、熟練度が上がっていき技の威力も高くなる。
「最初なんつった?俺の事さ、間違ってるって言ってたよな!?

じゃあさっさと俺を止めてみせろよ！俺の間違いを正してみろよ！

それとも何か？所詮は勢いだけの口先女だったか？

――ハハッ！お前さ、綺麗事さえ言っときゃなんとかなるとか思ってたんだろ!?なぁ、それが間違いなんだよ！」

興奮してるのか、黒佐波の言葉が荒々しくなる。

飛鳥は血を流しながらも体をなんとか動かし、立ち上がるだけで精一杯だった。

対して相手は無傷、余裕をこいてる、この実力は間違いなく強い…妖魔と相手をしてるんじゃないかとさえ疑ってしまう。

「――守る物があるから負けられない？それが間違いなんだよ!!

テメェのような人間を世間は何て言うか知ってるか？なァ？

甘ちゃんって言うんだよ!!守る力も立派な強さ？

じゃあ何でお前は――俺にやられてんだよ?!!

お前皆んなを守るんだろ？じゃあだったら責任持って立ち上がれや！俺みてェなクズさっさとブッ殺してみせろや!!

テメェの言うその盾ってヤツ、俺がへし折ってやっからよォ――！」

相手の信念を嘲笑い、残酷な笑顔を立てる。

足音も重々しく伝わり、ズシンとした振動が響き渡る。

「お前に一つ教えてやろうか？

お前の弱点ってヤツを…さ、テメェと俺とでは圧倒的な差があるんだよ」

「弱点…？」

――自分の弱点…？

そして黒佐波はハッキリと、自信満々にこう言った。

「それはテメェの言う、守る力。つまり…

『盾』だよ――」

――は？

飛鳥の素っ頓狂な声など気にもせず、その男は悪魔のような歪んだ笑顔を見せて、語り出す。
「お前さっきからさ、意識がチグハグしてる時あるな？
あの緑谷…とか言うヤツだっけ？アイツを行かしてからお前、あの岩しかねえ崖の方向に視線がちょびっと向いてることあるんだよ、無意識で気付いてねェかも知れねえけど――。
それだよ、それがお前の弱さなんだよ」
「……何が…言いたいの……？」
「簡単だ。

盾なんざ捨てれば良い――」
黒佐波は、そう言い切った。
盾を、守る力を捨てろと、半蔵から教わった教えを、言葉を、黒佐波は軽々しく捨てろと告げた。
「守るべき物？そんなの要らない、弱肉強食の世界で守るべきものなど論外、荷物でしかないし、ハッキリ言って邪魔だ目障りだ。
人に守る物なんて必要ない、守る力も、守り抜く力も、意思も、心も、決意も、そんなもの、要らない――」
静寂な森が騒めきだす。
鳥類が夜空に舞うように飛び、逃げていく。
風が吹き森は僅かに揺れる。
「――だったら、捨てろ。
そんな意味も価値もないもの、さっさと捨てろ。
更に付け加えれば盾なんざ人の弱さに過ぎねェ、盾なんて馬鹿げたこと言ってる時点で、テメェと俺とで勝負は付いてんだ」
「何を…言って……」
「守られてる時点でソイツは弱えんだよ。
だってそうだろ？誰かが守るってことは、ソイツは殺されるかもしれない、死ぬかもしれないからだろ？
そんな弱え生き物守って何になる、何の価値が、何の意義がある？

そんな下らねェ事してッから、お前ら全員弱えんだよ、俺に殺られるんだよ――」
黒佐波の言葉はヤケに落ち着いていた。
冷徹で、まるで弱者は死ねと、そんな意味を含めた言葉で、黒佐波は言葉を紡ぐ。
「だったら、盾なんて邪魔なもの、捨てれば良い。そして、相手を殺す刀だけを手にすれば良い。

人を、殺すんだ。
なに、罪悪感なんて無ェよ。だってお前は忍で、俺は抜忍であり敵(ヴィラン)なんだから。俺も、アイツらも――
忍の道に進んだ以上、殺し合いは免れない、借りにお前が殺し合いが嫌だと言っても、社会が、忍の掟がそれを赦さない――」
対象を、忍を殺せと、上からの命令さえ来れば殺し合いは免れない。
仮に嫌だと命令を拒否したとしてそれは忍じゃない、忍は全て善良の任務を承る訳ではない、時に手を汚す仕事だってある。
忍は任務に従うしかないのだ、だからそう言った点では黒佐波の言ってることは、間違ってると断言は出来ない。
「だから――生きる為に殺せ。
俺たちみたいにバカみたく、暴れようぜ？殺そうぜ？
なァ、殺そうぜ？そうしようぜ？忍の社会とかそんな煩わしい考えなんか捨ててよォ…
逆に守るもんがあるから、人は苦しむんだから…
だからさァ…捨てろ!!!
殺そうぜ!!!」
黒佐波はニタリと気色悪く、口角を釣り上げる。
守るものがあるからこそ、人は命を懸けて闘う。しかし、守ろうとする人間が生き絶えた所で守られてる人間はどうする？
また、守るべき人間が殺されたとして、自分はそれでも誰かを守ると、断言出来るだろうか。
いや、多分…出来ないかもしれない。

黒佐波が強い理由が分かった。
コイツに、守る力なんて無い。
人を殺す刀しか持ってないんだ、だから盾という存在を嫌に捨てようとする。
コイツに、守る力も、守る人間もいない…
ただ暴れたい、たったそれだけ。
それ以外に彼は何もいらない、暴れて殺せれば、それで満足。
黒佐波とは、そういう自己出張が激しい人間だ。
おかしい物だ、守る人間がいないものは、失うものの無い人間は、此処まで強いのか。
人には大切な物が存在する。
金、家族、物、愛、個々人による大切な物…しかし、黒佐波には無いのだ、そんなもの。
だから黒佐波はヘラヘラ笑いながら、悠然と胸を張ってそんな事が言える。
しかし――

「……嫌だ」

それでも、飛鳥は自分の信じた信念を曲げない、折れない、捨てない。
他人にとやかく言われるのは慣れっこだ。
しかし、黒佐波は初めてだ。ここまでして人の信念を嘲笑い、見下し、否定しようとするのは。
護るべき人間がいない彼は、もしかしたら強いんだろうな、いやそうだろう。
失う物がなければ、平然と命だって懸けれる。
見返りを求めない、だからコイツは強いんだろうな…技術面だけでなく、精神面でも、手強いんだろう。
単直な脳筋バカだが、そう言った人間は本領を発揮する。
得体が知れない、でも相手が誰であろうと…

「ふざけないで」
信念を捨てて良い理由にはならない。
自分が決めた道を、半蔵から教わった教えを、曲げる訳にはいかないし、曲げさせない。
そんなの飛鳥が赦さない。
それさえ曲げてしまえば、自分の存在も、半蔵も、自分の忍の道も、曲がることになるから。
「刀だけが全てじゃ無い…盾だって立派な力…刀だけじゃ、意味ないんだよ…
それに勘違いしないで、皆んなは貴方が思ってる以上に弱くなんかない。
皆んな強くて、信頼出来る仲間たちだよ――」
ではなぜ飛鳥は、皆んなを守ろうとするのか？
その答えはもう、決まってる。
「私が、好きで守ってるんだよ――」
誰かが殺されたり、傷つけられたりするのは嫌だ、見たく無い。
忍からして、甘ったれた考えだろう。
だけど、それでも良い。
だって、それが自分の本音だから。
自分の正直な気持ちだから。
自分の気持ちに嘘は付けない。
お人好しだろうと、お節介だろうと、護りたい物は護りたい。
例え皆んなに否定されても、飛鳥は絶対に変えないのだ。
自分の気持ちに正直で何が悪い？
護りたい物の為に命を懸けて何が悪い？
護る価値なんて誰が決めた？
命にそれ以上もそれ以下もない。
皆んな、守ってみせる。
そう決めたから――
飛鳥は、誰もが手を焼くほど頑固だ、だから自分の正直な気持ちに、言葉に、嘘偽りもなく正々堂々と胸を張って、護ると宣言する事が出

来る。

「――はァ??」

だから、黒佐波とは相性が悪いのかもしれない。

今まで殺す事でしか、己の欲望を満たすことしか出来なかった獣は、眉間に皺を寄せる。

マスクを被ってるので表情は見えないが、口から下までは露出してるので、口を見れば相手がどんな表情をしてるのか、大体分かる。

「お前はバカか?俺よりバカなのか?

俺はお前を殺そうとしてんだぞ?俺がテメェをブチ殺せば、全員も死ぬんだぞ?

仮にテメェが誰かを護ろうとしたってなァ、俺がテメェの守ってるもん、ソイツらブッ殺したらどうなんだよ?」

自分が守るにしても、その対象が殺され、壊されてしまえば守る意味がない。

自分が生きてたとしても、その人を護れなければ意味がない。

護るべき物を壊された時、それはきっと自分が死ぬ事よりも辛い事だろう…

必死に、命懸けで守ってきたのに、それすらも壊されて…

そう言うヒーローは少なからずこの世界に存在する。

それが原因でヒーローや忍を引退する人間は少なくはない。

それをトラウマに思う人間も、苦しむ人間は、世の中いっぱいいる。

大切だった人間を殺されたり、死んだりするのは、一番辛いことだ。

護るべき人が、誰かに殺されても、飛鳥は口が裂けても「刀と盾」の信念を掲げるのだろうか?維持する事が出来るのか?

だから黒佐波は問う。

もし大切な物を壊されたとしても、それでもお前は誰かを守るなんて口が言えるのか、いや…言えないだろうな。

黒佐波は抜忍狩を幾度となく始末してきた。

その中に突然、飛鳥のような忍もいれば、家族だの恋人だのと口に

する者も飽きるほど見てきた。
「うん、それでも守るよ――」
けど、飛鳥はそれでも曲げない。
黒佐波はほんの僅かに、体を反応する。
痛みなど屁でもないのか、飛鳥は刀を構えて微笑む、
飛鳥は確かに言った、それでも守るって、そう言い切った。
「誰かが殺された、護れなかった…
それは一番辛いと思う…でもね、だからこそなんだよ。
だから、守るんだよ」
「……あ？」
「人を救えなかった、誰かを護れなかった…けど、それを理由にして護らない理由にはならないよ。
二度とそうならない為に、人は頑張るんだよ。同じ失敗を、過ちを犯さない為にも…守るんだよ。
だって、影は誰かを支えるものだもん。
この先、どんなに辛いことや苦しい事あってもさ、私はやるよ。
守るよ、だって決めたんだもん。
一流の忍になるって――」
苦しいことや辛い事など、覚悟の上だ。
だって忍は生半可でなれる程甘くはない。
そんなの半蔵学院に入学してから、ずっと覚悟して生きてきた。
命を懸けてまでやらなきゃ、きっと一流の忍になんて…カグラになんてなれないと思う。
だから、どんな困難が道を阻もうとも、歩む力を止めない。
信念を曲げない、絶対に。
「……あァ、気に入らない」
黒佐波は静かに口を開く。

冷静そうに見えるが、中には怒りの業火を燃やしていた。
「なんで、漆月がテメェのこと気に入らないか、何で死柄木が優先的にお前を殺せと命じたのか、なんか俺分かっちまったわ…」
黒佐波は両拳を握り締める。
声を発する度に段々と、少しずつ怒りで声色が高ぶってる感覚が伝わる。
「気に入らねェ。ざけんな、そんな綺麗事で俺に勝てるとか思ってんのか弱小が。
テメェの思ってる以上に世界は残酷だ。テメェの甘い考えで、世界がどうこうなる訳でもねェ、俺はな飛鳥…テメェのような甘ったれた人間が嫌いだ――
猛烈にブチ殺してェ位になあァァ!!!!」
黒佐波の表情がみるみると怒り色に染め、歯を食いしばり、歯軋りする。
ギチギチと不夜会な音を立て、殺気が火山の噴火の如く高まっていく。
誰かが守られて生きて行く、そんなの黒佐波は許せない。
刀と盾なんて論外、滅するべし。

「守る価値なんざ雑魚どもにゃあ無えだろうがあァ!!!
人は守られ生きて強くなる意味を忘れ！やがて強者は減って行く!!
俺は強えヤツと殺し合いたいんだ駄目だ駄目だダメだそんなの俺が赦さなあああああァァァいい!!!!」
怒涛の黒佐波はあまりの憤怒に怒りで感情を支配され、高まる怒りに暴走する。
飛鳥は唾を飲み込む。
来る…秘伝忍法を使って来る。
「テメェを殴り殺して他の奴ら皆んなブッ殺す!!!他(アイツ)の奴らに獲物なんざ渡さねェ!!
勝つのは強者(オレ)だあああァァァァ!!

秘伝忍法――【黒波衝乱舞】!!」
黒佐波の鬱憤に呼応するかのように、秘伝忍法の威力がより強く増す。
歪んだ彼の殺意が、熱意が、闘志が、彼をより高く強くさせる。
彼が飛鳥を憎むのは、盾を否定するのはその強さにあった。
この世界は常に弱肉強食で出来ている。
それが黒佐波の主観だ、強い人間が勝ち弱い人間は死ぬ。
抜忍生活を送って来た自分は、ずっとそうやって、孤独ながらも生きて来た。
歪みとはいえ、彼に強い信念が、常に強者であろうと、そうなろうとしてるからこそ、自分はここまで生きて来た。
彼は強い人間と闘えれば何でもいい、殺すことが出来ればどうだって良い。
だが、飛鳥は守ると言った。
それが黒佐波は赦せないのだ。
だって、守られてる人間は強くあろうとしず、守られたままのうのうと生きているではないか。
ヒーロー志望はまだしも、人間は強さの意味を失いつつある。
それもこの社会が原因だ、ルールに縛られ個性規制や忍の掟など下らない理由で、人は強さを無くしていく。
だから、飛鳥もこの糞ったれた社会も気に入らない。
逆に守る人間がいなくなれば、人は生きる為に強くなろうとする。
強い人間と戦い、殺すことが黒佐波にとっての至福であり、強者が増え続け、強者同士の争いこそが彼の望むべきものなのだ。
だから、人を守ろうとする飛鳥は赦せないし、守るなんて言う存在そのものが間違っている。
守られてる人間が、強くなる訳がない。
守られたまま生きていけば、弱者が増え続け強者は減りつつ、やがていなくなる。
つまり盾とは、守る、とは黒佐波の望むものを邪魔する害でしかないのだ。

だから必死になって盾を否定する、捨てようとする。
命懸けで望むものを手にする為に。
そして、飛鳥を本気で殺そうと、秘伝忍法を炸裂する。
銃弾のように素早く、重々しい拳の嵐が、飛鳥を襲う。
傷だらけで、ましてや訓練で疲労してる飛鳥は、もはや絶体絶命と言えよう。
「盾なんざ糞食らえええええエエエエエエエエ!!!!!」
波動する拳が彼女の刀に当たる。
そこからか、絶え間なく連撃を仕掛けてくる。
これを食らえば飛鳥はひとたまりもないだろう…最悪死んでしまう。
見るに耐えない惨たらしい死が待ってるだろう…
しかし、そうはならなかった。
ガギィン、ガギィン!!ギャリギャリ…!
「――ッ!?」
黒手甲に甲高い金属音が鳴り響く。
この手応え…飛鳥の体じゃない…刀によるもの。
まるで金属同士を打ち合うかのように、火花が散る。
黒佐波の表情から、怒りなど消えていた。
代わりに少し衝撃を受けたような、息を詰まらせる。
だってボロボロになりながらも、飛鳥は刀で拳を全て受け止めてるのだから。
端から見れば、大したことはないだろうと思うかもしれない。
だが、飛鳥は先ほど彼の拳を防げなかったのだ。
それなのに、彼女は黒佐波の拳を全て、受け止めている。
――さっきは軽々しく吹っ飛んだのに!?
それなのに、どうして黒佐波の秘伝忍法を受け止めているのだろうか?
そんな事が出来るのは、黒佐波が拳を交わした忍の数人位だろう…
上忍や強い忍なら、そう言った個性を持つヒーローなら、敵（ヴィラン）ならまだ分かる。

だが、相手は忍学生…ましてやさっきまでほぼ虫の息になってた彼女が、だ。
何処にそんな力が…どうしたらそうなるのか、黒佐波には理解不能だった。
「違う――貴方は間違ってる。
刀だけじゃ意味がないんだよ、それは本当の強さじゃない、貴方が強くても、それは本当の強さじゃないし、そんな強さは誰も認めない――」
飛鳥は拳を刀で押し返そうと力を入れる。
黒佐波の表情は又しても驚き止まる。
「……コイツ――」
先ほどまでと力が全然違う。
俺とコイツとでは歴然とした差があった。
力を隠してた？
仮にそうだとしてもどうしてだ？
体力勝負を狙ったのか？はたまた、火事場の馬鹿力か？
飛鳥から闘気が溢れてくる。
その強さが、身に染みるように伝わっていく。
この気は…まさか!?

「飛鳥。真影の如く、正義の為に舞い忍びます――!!」
緑の闘気が、風神の如く唸りをあげ、髪をまとめてた紐が解け、髪を下ろす。
その姿は美しく、闇夜を照らし、暗闇を吹き飛ばす風を見に纏う飛鳥。
真影の飛鳥――
疾風を身に纏い、黒佐波の拳を払いのける。
そして彼女は、刀を振り下ろした。

人の笑顔を守る為、誰かの命を守る為に、飛鳥は刀を振るう。
より強く生きる為に、思うがままの強者である為に、黒佐波は人を

殺す。
人を救け、守る盾と、人を殺し、壊す刀。
刀と盾が、命を懸け激しく衝突する。
最後に勝つのは、立つのは、生きるのは、何方か――恨みっこなしの勝負。
飛鳥は、黒佐波は、刀を、拳を、――振るう。

事が起きてから数分前に遡る。
岩だらけの崖には洸汰ともう一人の人物が、立っていた。
洸汰の表情は青ざめ、冷や汗を滝のように流していた。
――洸汰！聞いてた!?
今すぐ施設に戻って！私ゴメンね洸汰が何処にいるか私知らないの！
貴方がいつもどこに行ってるか私わからなくて…本当にゴメン！
私救けに行けない直ぐに戻って！
テレパス、マンダレイの声が直接脳内に響く。焦りと不安の声色、洸汰の息は荒く、恐怖で怯えていた。
「よォ、ガキんちょ一人かよ？お前、見ねえ顔だな？」
自分のもう一個分の身長があるのだろうか、フードを見に纏う大男は、洸汰を影で覆い、悠然と語り出す。
顔はマスクを付けてるので表情は読み取れない。
「見晴らしが良いんでやって来たは良いがなァ…

所でボウズ、お前センスの良い帽子被ってんなァ！俺のダセェマスクと交換してくれよ、死柄木が素性を隠すためとかどうとかほざいて、こんなの付けられてんのよ。
だからさ、お前のと交換してくれよォ、なぁ？」
大男は洸汰の被ってるマスクを見つめ、親指を立てる。
そして自分のマスクと交換しようと手を取り外そうとする。
洸汰はその隙にと、大男に背を向け無我夢中に逃げ出す。
「あ、オイ待てゴラ――」
次の瞬間。
岩を蹴る轟音が響くも、その音よりも素早い速度で、大男は洸汰の前に現れる。
そのスピードは、忍を軽々しく超えるほどに…速かった。
そしてマスクを外したのか、表情が見える。
「景気づけに一杯やらせろよ――！」
そして腕の皮膚から筋肉繊維が飛び出る。
大男の顔を見た途端、その腕を見た途端、洸汰は立ち止まり、思想を巡らせる。
――あの腕の個性は…！それにあの顔…何処かで!!

暗い部屋の中、荷物をまとめた段ボール箱が、部屋を埋め尽くしていた。
山座りの姿勢で、明るいテレビを睨みつける。
洸汰が今観てるのは、テレビニュースだ。
『ウォーターホース、素晴らしいヒーロー達でした。
しかしその二人は市民を守るべく、心なき犯罪者によって、絶たれました』
ウォーターホースの輝かしい未来は、敵によって殺された。
犯人は現在も行方を眩ませている模様、洸汰は大好きな両親を殺した男を覚える為に、ニュースを観ていたのだ。
『現在も警察とヒーローが行方を追っています。
個性は単純なる増強型ですか、非常に危険な人物です。この顔を見

かけたら直ぐに警察とヒーローに通報を――
その男の特徴は、現在左目にウォーターホースが受けた傷が残っています。
敵（ヴィラン）ネームは――」

――血狂いマスキュラー。

そして現在、洸汰の目の前にいる大男は、左目に傷を負っていた。
「お前…まさか――！」
洸汰の表情は歪み、目に涙を溜める。
だってコイツは――
「パパ、ママ――!!」

大好きなパパとママを殺した人間、なのだから。
その大男は、残酷で、歪んだ満面な笑みを浮かべ、洸汰を殴り殺そうと腕を振り下ろす。
ドガアアアアアン――!!
地雷でも起きたかのような轟音、地面がクレーターのように凹む。
たったの一撃でこの威力、しかし…洸汰は彼の拳を受けることはなかった。
マスキュラーは視線を前にやる。
殴った時の感覚がない、避けられた。
思わず舌打ちをする。
「つっ…！あいた――!!」
洸汰を救けたと思われる人物は、地面にバウンドしながら、洸汰を抱きしめ、当たらないよう跳ねる。
直ぐに姿勢を整え、洸汰を放す。
「お前…なんで…？」
洸汰は分からなかった、何故こいつは自分が此処にいるのが分かったのか、何でこの男がやって来たのか――

「ん～？地味めの緑髪…お前は…リストにあったな！」
マスキュラーは余裕そうに視線をその人物に向ける。
地味めの緑髪と言ったら、洸汰の秘密基地を知ってる者と言ったら、彼しかいない。
そう――
「大丈夫だよ…！洸汰くん！」
緑谷出久という少年しかいない――
緑谷は洸汰に大丈夫と笑顔で告げる。
その後直ぐにマスキュラーの方へ視線と意識を向ける。
男は舌舐めずりをする。
まるで次の獲物がやって来たと歓喜の笑顔を見せるソレは、狩猟者だ。
一方、緑谷は不安で緊張し体に無駄な筋肉が入る。
落ち着けるべく、深呼吸しながら、考える。
――此処にも敵（ヴィラン）が…！
広間で二人、飛鳥さんと対峙してる男、そして…こいつ…
今の所四人の敵がこの合宿所にいる。
まだまだ数や実力も知れないが、それでもこの男からタダならぬ気配を感じる。
オマケに携帯も壊れた、先生や皆んなに連絡は送れないし、仮に出来たとしても、飛鳥さんと戦ってる大男がそれを邪魔するだろう…
どの道増援は呼べない…相手がどんな個性を持っているか分からないし、強さも未知数…
「僕一人でやれるかどうか…」
緑谷は洸汰に視線を送る。
「――」
洸汰は、泣いていた。
自分が殺されてたかも知れない、両親が殺された、様々な感情が洸汰の心を支配していた。
――じゃない！！
緑谷は心の中で一喝する。

出来るか出来ないかの問題じゃない…守らなくちゃ、救けなきゃいけない。
何がなんでも…
マンダレイが、飯田くんが、飛鳥さんが、託してくれたんだ。
ここで救けなきゃ、いけないんだ。
「忍学生じゃねえのかよ、残念だなァ…まあいっか、どーせこの場にいる奴ら全員皆殺しだ、ハハッ！」
マスキュラーは腕をグルグル振り回し、肩を鳴らす。
対する緑谷は、体全身に力を入れる。
緊張なんて、洸汰の救けを求める顔を見て、そんなの吹き飛んだ。
「大丈夫だから――！必ず、君を救ける――!!」
僕一人で、コイツと闘わなくちゃいけない、守り抜かなきゃいけない。
飛鳥さんや他のみんなも、闘ってるんだ！
離れた森林地帯で、龍姫と四季が闘ってる。
爆豪や轟、美野里も、飛鳥も、相澤先生も、皆んなピンチな状況に陥ってる。
守れないじゃ赦されない、やらなきゃいけない、それがヒーローなのだから――

９８話「やりたい事」

「――必ず救けるって？
ハハッ！確か前にそんな事言ってたヤツいたな…その後くたばっちまったけどよ」
男は笑う。
必ず救けると宣言した緑谷を、見下すように、不敵な笑みを浮かべ、布に手を握る。
「お前アレだろ？緑谷だろ？
丁度いいよ、率先して殺せって死柄木から言われてんだよ、さっきの爆発で龍姫のガキが仕留めたかと思っちまったが…
こりゃあまさか、メインディッシュからやって来るとは、おえらいこった」
短髪の黄色がかった髪に、気色の悪い義眼を左目に着用、傷がついてるのが特徴。
凶悪で顔付きが悪い。
「テメェも、忍学生ってガキも、たっぷりじっくり痛ぶってやっから…
――血ィ見せろ!!」
黒いマントを放り投げると、血に染まった赤いＴシャツ、腕から筋肉繊維が生えてくる。
マスキュラーは笑みを絶やすことなく、飛びかかってくる。
まるで血に飢えた野生の獣のように、獲物を殺そうとするばかりに。
来る。
そう思った時には遅かった。
緑谷が個性を使おうにも、マスキュラーが速く動き出し、もろに殴られる。

咄嗟に腕を交差し防御していたので、なんとか防ぐ事は出来たものの、痛みが腕に走る。
壁に叩きつけられ、思わず息を吐き出しそうになった。
「あッ、イケね――
聞きてえことあったの思い出したわ」
ちょっと出し過ぎたか…と言わんばかりのアッとした顔。
叩きつけられた緑谷に一瞬で間合いを詰める。
「なァ、良かったら教えてくれよな…
爆豪と雲雀ってガキは何処にいる？」

――は？
マスキュラーの唐突な質問に、緑谷の頭は真っ白になる。
今、なんて言った？
かっちゃん、雲雀さん？
「今回俺らの目的はあの二人なんだよなァ…もし知ってたら…教えてくれ――」
マスキュラーは再び殴ろうとばかりに、緑谷目掛けて拳を振るう。
緑谷は相手の取る行動を瞬時に予測し、ワン・フォー・オールを全身に行き巡らせ、壁を蹴るよう横に跳躍する。
「よっ!!!!」
案の定、殴りかかって来た。
しかし横に跳躍したので当たる事はなかったが、壁が崩れ凹む。
岩がガラガラと音を立て岩の破片が落ちていく。
土煙の中、マスキュラーは腕を振るい土煙を吹き飛ばす。
「何も答えねえってことは、知らない…で良いよな？な!?」
かっちゃん？雲雀さん？
どうして…？何であの二人が目的なんだ？
一体何がどうなって…コイツらの目的はもしかして、あの二人…って事は――！
二人の命が危ない。

相手は人殺しを躊躇なく行う殺人鬼だ、そんなヤツが二人を狙ってる…と言うことは、殺される危険性が高い。
しかし、何の為に？
その先の目的は？真意は？
――オールマイト殺害が、奴等の目的じゃないのか？
しかし、考える時間などある筈がなく、敵はそれを待ってくれない――
「よっしゃあ!!んじゃ遊ぼうぜ!!」
歓喜の声を上げるマスキュラーは目にも止まらぬスピードで、地べたについてる緑谷の腹を蹴り上げ、そこから背中を思っきし殴る。
腹部から、背中から、強烈な痛みが走る。
そんな痛みの感覚に苦しみながら、背中を殴られた勢いで地面に思っきし打つ。
その際に地面に前の全身を打ち、鼻が折れる。鼻から自然と血が滲み出てくる。
痛みを噛み締めながら、マスキュラーを睨む。
早い、強い…
目にも止まらぬスピードに、圧倒的なパワー…まるでオールマイトに近い。
オールマイトと闘わされてるのかとさえ、疑問を抱いてしまうほどに、マスキュラーは、この男は強い。
「おいどうした!?まさか終わりじゃねえよな？
ウォーミングアップにすらなってねェぜ！
ちゃんと俺を楽しませてくれよヒーロー！
ほら、えっと…なんだっけ？最初なんつったっけ？」
男は純粋に、無邪気に嘲笑う。
好戦的な笑みに、緑谷の血を見て興奮している。
こんなヤツが、敵連合にいるのか…そう考えただけで背筋がゾッと

する。
手も足も出ない緑谷は、心を痛める。
だが、相手が油断してる今なら…いける。
緑谷は体全身にワン・フォー・オールを巡らせ、軽く跳躍するように地面を蹴る。
瞬く間にマスキュラーとの距離を詰め、拳に力を入れ腹部目掛けて殴りかかる。
――溝を狙う…！相手の個性は見た感じ単純な増強型…
じゃあ、スピードで虚を突いて…！
「５％――ＤＥＴＲＯＩＴ・ＳＭＡＳＨ!!」
５％とは言え、それでもパワーは有る方…
強く握りしめた拳が、空気を切り裂くかのように、勢いよく殴る。
岩よりも硬い筋肉の手応え、衝撃が迸る。やった！と思うもののそれは束の間…視線の先は腹部ではなく、マスキュラーの腕…それも筋繊維を出来るだけ束ねたかのような、筋肉の腕…
防がれた。
緑谷の拳…５％のワン・フォー・オールを、マスキュラーは何事もないように防いだのだ。
「俺が油断してるとか思っちまったか？
スピードは良い方だよ…けど一つダメ押しすんなら…
パワーが足りね事だ!!!」
筋肉繊維で重ねた腕で、小蝿を払いのけるかのように腕を振るう。
体が持ってかれ、マスキュラーの馬鹿力によって軽々しく吹き飛ばされまたしてや壁に背を打たれる。
「オラぁ！どうした緑谷ァ！
弱えじゃねえかお前！何が守るだよ三下ぁ！結局口先だけかよヒーローってのは！」
男はズシンと音を立てながら歩み寄ってくる。
思った以上に状況が不利だ…
相手は恐らく相当な手練れ…ＵＳＪの時みたく三下…捨て駒とは

訳が違うしレベルも断然的に上だ…
そのうえ個性は通用しない…仲間もいない、更には個性訓練で皆んな疲労しているし、洸汰を守りながらこの男と対峙するのは中々骨が折れる。
ヒーロー学生とは言えまだ自分たちはまだ子供だ、相手は経験豊富な大人…明らかに大きな差が開いている。
「だったら…だあああぁぁぁぁ!!」
緑谷は再び攻めに来る。
先ほどと同じか…と、思いきや少し違った。
５％を維持したまま、殴りかかる。これはいつもの光景…そして案の定マスキュラーは薄ら笑いを浮かべながら筋になってる腕で攻撃を防ぐ。
しかし、緑谷は休む事なくもう一度、またもう一度…殴りかかる。
連続攻撃。
ゲームで言うコンボ、攻撃を繋げて出来たようなものだ。
一つの攻撃が無理なら、休む事なく連続で殴りかかれば、きっと防御が綻ぶはず。
５％のパワーが弱く力が足りなくとも、相手が反撃する隙を与えず殴りかかれば、きっと攻撃が通用するは――
「しつけェな!!」
しかしそんな浅知恵など通用するはずがなく、マスキュラーは足から筋繊維を出し絡ませ、思いっきり腹を蹴る。
「グッ…!!」
蹴られた衝撃で、思わず態勢が崩れ、後方に吹き飛ばされそうになる。
背中が地面に打ちそうになる。腹を蹴られた事で思わず吐き出しそうになるものの、何とか堪えてこの状況から次の攻撃を繰り出そうと試みるも、それよりもマスキュラーが速く上回り、横腹に拳を入れて殴り飛ばす。
ゴッ――
骨が軋む。

脳に刺激が走り、骨が悲鳴をあげる。
一瞬頭が真っ白になり、咳き込む。
地面に擦れながらも、横腹を押さえつけながら激痛で表情を歪ませる。
――これじゃ…不味い！
このままじゃやられる一方…
交戦で勝ち目がないなら…洸汰だけでも救うべき…
緑谷は洸汰に視線を送るものの、彼は殺される恐怖のあまり腰を抜かし、身動き一つ取れない。
駆けつけようにも緑谷のスピードを超える男だ、そう簡単に逃れることなんてできる訳がない。
「何ボーっとしてやがる！」
マスキュラーはそんな緑谷の頬を殴り、又しても壁に吹き飛ばされる。
口から血を吐き、壁にめり込み音もなく倒れる。
虫の息…もう立ち上がることすら困難だ…壁に頭を打ったせいか、血が流れてくる。
「やっぱいつ見ても良いもんだな血って！
これだよこれ！面白えやハハッ！
お前さ、さっき守るとかほざいてたよな？何で地べたに這いつくばってんだよ！
必ず救けるつったのに何で逃げてばっかなんだよ！
言ってることとやってる事矛盾してお前可笑しいぜ？笑えてくらァ!!」
殺人鬼の笑い声が天を貫き、絶望が降り注ぐ。
――血狂いマスキュラー。
その名の通り、血を見る事で狂い楽しむ殺人鬼、黒佐波と同じく戦闘という概念の欲望に溺れた戦闘狂。
彼の性根が本当に人間かどうかさえ疑いを持ってしまう。
血を見る事で発狂しだし、数多くのヒーローを快楽を目的として殺害してきた非道な人間、それが目の前で笑っている。

「俺の個性は『筋肉増強』！単純な増強型ゆえに、皮下に収まらねえ筋繊維を底上げされる速さと力！
何か言いてえかって？自慢だよ！つまりテメェは俺の――完全なる劣等型だ！
俺はお前より強えんだよ！分かるよなこの気持ち！笑えて仕方ねぇ！こんな昂ぶる気持ちなんざ早々無えよ！」
マスキュラーは自分の個性を軽々とひけらかし、自慢する。
同じ増強型の個性でありながら、相手よりも自分の方が上。その事実が彼に刺激を与え喜ばせていた。
人間誰しも、優劣で差別し順位を決める。
同じ種目や同じ力で、相手よりも優れてるというのは、中々に喜ばしいものだ。
特にマスキュラーと言った単細胞なら尚更だろう、興奮するのも無理はないかもしれない。
「必ず救ける?!どうやって？
出来もしねェ事をベラベラと垂れてんじゃねェよ!!綺麗事で乗り切ろうたって弱けりゃ何もできねえじゃねえか!!」
嘲笑う狂気、歪んだ殺意、迫り来る恐怖、
それらが辺りに雨でも降り注ぐかのような感覚。
動けない緑谷は、霞んだ目でマスキュラーを睨みつける。
体全身打撲して、痛みが充満し全身に悲鳴を叫ぶ。
どんなに虚を突こうと、どんなに殴っても、焼け石に水。
敵わない…
強すぎる、これが今まで警察やヒーローを翻弄し逃げてきた…実力のある敵…
道理で強い訳だ、だから今まで生きてきたのだろう…生き残り、捕まる事もなかった…
そう考えるだけで意識が遠くなる。
「自分に正直に生きようぜ!!」
腕を振り上げる。
トドメの一撃と言わんばかりに、高らかに拳を天に掲げる、

筋繊維が束になり凝縮され、腕の筋肉が更に膨らむ。
緑谷の心臓目掛けて、彼は渾身の力を入れて振り下ろす。
絶望、恐怖、殺意、全てにおいて気圧された。
敵わなかった、ダメだ…勝てない…これじゃあヒーローなんて…

そう思った時、神は見逃さなかったのか、奇跡が起きた。
ただ、これが奇跡と呼んで良いものなのか、疑問を抱くかもしれない。
ゴツン――
小さな音が聞こえた。
いつ迄経っても何事も起こらないので、不安と疑問を抱きながら、ゆっくりと、おそる恐る目を開ける。
すると、至近距離までいたマスキュラーは、動きを止め、笑顔から真顔に変わり、腕を止める。
そこから後ろに視線を向ける。
あの小さな音は…？
訳分からずの顔をしてる緑谷、しかしマスキュラーの視線の先に、その疑問は晴れる。
「――ウォーターホース…そうやって、痛ぶって……楽しんで……パパとママを殺したのか…!!」
声の主は、出水洸汰。
その声はいつも無愛想で拗ねてる彼の声ではなく、泣きじゃくり、声が震え、鼻を啜る声が、マスキュラーの後ろに聞こえた。
彼が咄嗟に行動したのは、そこらに転がってる道のりの石ころを取り、彼の後ろ頭に投げたのだ。
彼の勇敢…とは少し御幣か、行動により注意がそがれ、トドメの一撃を喰らわずにすんだ。
しかしそんな事、緑谷の頭の中に入ってなかった。
ウォーターホース、その名前が洸太汰からの口に出たのだ。
洸汰の言葉の意味に、緑谷は寒気を感じなら理解した。

この男が、今目の前にいる男が、洸汰の大好きな両親を殺したのだ。

マスキュラーは一瞬面を食らった顔をするものの、彼も緑谷と同じく理解し態勢を向き直す。

そこからゆっくりと歩み寄り、笑顔を作り出す。

「――あァ？お前…は？マジで？アイツら子ども持ってたのかよ…んだよソレ、面白えな運命的じゃねえの――」

自分の目の前に、殺した筈のヒーローの息子が、生きている。

この場にいる、立っている…

自分の左目を傷物にし、目を無くした彼は、殺意を孕んだ声で、視線を送る。

ウォーターホース、左目を義眼にした本人。

「お前なんかがいるから!!お前みたいなヤツがいるから！

こうなるんだ！

身勝手で、暴れて、人を殺すから！僕みたいなのが出てくるんだよ！

いつもこうなるんだよ!!全部お前のせいで!!!」

ヒーロー社会を、個性を、力を、受け入れず否定する洸汰の叫び。

その声が虚しく暗闇に消える。

大好きな両親が殺された、そのせいで自分は人生を狂わされた。

そう、元はと言えば、こんな身勝手なヤツのせいで…そんなヤツがいるせいで、自分は悲しんだ。苦しんだ。

両親が殺された、しかもそんな男が今こうして、目の前で息をしている。

平然とヘラヘラ笑いながら立っている。

それがどれだけ憎ましいことか、心が引き裂かれそうなくらい、辛い。

「プッ――」

思わず口から、笑いが吹く。

洸汰の言葉など、まるで幼稚な言葉としか思えてないような、人を蔑む視線、でもって呆れてるような顔立ち。

洸汰の頭に火がつく。
「何がおかしいんだよ!!!」
訴えかけるように、声を振り絞る、洸汰の怒号。
マスキュラーは止めてた足をようやく動き出す。
肩をすくめ、平然と笑いながら、語り出す。
「おかしいのはテメェだよボウズ、何怒ってんだよ、殺されたからなんだ？
――何が悪い？俺の何処が悪いんだ？
人を殺して何が悪いってんだよ？力を使うのは個人の自由じゃねえか――」
マスキュラーの平然とした言葉に、洸汰を呆然と口を開き、立ち止まる。
何を言ってるんだコイツは…？
本気で、そう言ってるのか――？
「何も言えねェのか…ホラ、餓鬼は直ぐそうやって責任転嫁する。
そう言うのよくねーぜ？
勘違いしてるかもしんねーけど、俺は別にこの目のこと怨んでねえぞ？俺は俺の殺すことしただけだけで、アイツらはソレを止めたがってた…お互いやりたい事しただけだぞ？」

その結果マスキュラーは左目に傷を負い、ウォーターホース、洸汰の両親は命を落とした。
お互いやりたい事やり合った結果。
それをしょうがない、当たり前だと遠回しで片付けるマスキュラーの神経に悍ましさを感じる。
「けどな、本当に一番悪いのは…出来もしねえ事を綺麗事でやりたがってた…

テメェの大好きなパパとママさ――!!」
尤も、相手は敵だ。

事情や理屈など通じるはずがなく、マスキュラーは悪魔に似た破顔を浮かばせる。
相手が子供だろうと大人だろうと、老人だろうと女だろうと、迷わず殺す。
自分の殺す(やりたい)事をするがために。
ようは遠回しに『負けた弱いお前の両親が悪いんだ』と言う台詞。
そうやって、多くの人間の命を殺してきたのだから、そうやって生きてきたのだから。
洸汰の顔は恐怖と絶望に埋め尽くされ、溢れんばかりの涙を滝のように流す。
パパとママみたいに、コイツに殺される――
洸汰はそう悟った。

「――悪いのお前だろ!!!!」

刹那。
此処で初めて、緑谷は憤怒を募らせた怒声を叫び出す。
身勝手で、心もとない敵。
自分がどんなに苦痛で苦しもうと、それでも立ち向かう緑谷。
――違う。悪いのは洸汰くんの両親じゃない、悪いのはコイツだ。
平気で人の笑顔を奪い、壊し、踏みつけ、嘲笑う。
やりたい事をやりあって、彼は両親が悪いと言い出した。
洸汰がどれほど辛く、どれほど苦しみ、悲しみ、憎しみを抱いてきたことか。
それを知らず口に出すことなど、あってたまるか。
赦されるわけがない。
しかし相手は赦される気もなければ、反省の文字など毛頭ない。
そもそもそんな心変りするような人間なら、態々ヴィランにはならないし、天下の敵連合に参入しないだろ。
何がともあれ、緑谷を怒らせたことは確かだ。

大切で、守るべきものが、救けるべき人間が目の前に殺されかけてる。そんなもの見せられたら、動かないわけにはいかない。
自然と、食いつくように体が動くだろう。
マスキュラーは「待ってましたァ！」と歓喜の顔を絶やすことなく緑谷に振り向く。
体の筋肉が膨張し、筋繊維が凄まじい量で覆っていく。

スピードは劣る。
ダメージも与えられない。
コイツは間違いなく強い。
仲間もいない、連絡も取れない。
救けは来ない。最悪な状況…
――絶体絶命！

だけど

ギチッ!!
「これで、速さは関係ない!!」
傷だらけで、血を出しながらも緑谷はそう告げた。束になってる筋繊維…そこに折れた腕で相手の筋肉に絡ませることにより、スピード関係なく至近距離で攻撃することが出来る。
しかしそれはマスキュラーには全て分かっていた。
「だから何だよ？」
力不足の弱え腕で殴るのかよ？」
当然、５％など彼には通用するはずがない。
パワー・スピード・そして耐久力も誇らしく、全てのステータスが常人を上回る存在…そんな相手にどう立ち向かうのであろう？

ヒーローとは――…
「出来るか出来ないかの問題じゃないんだよ…!!」

常にピンチをブチ壊していくもの――

「そうだよ！ヒーローは命を賭して綺麗事実践するお仕事だ!!」

１００％・ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ――

その一撃が放たれた時、大爆発に似た轟音が鳴り響き、大きな衝撃波と土煙が巻き起こった。

９９話「ヒーローになれる」

今思えば、僕がオールマイトに憧れたのは何時だろう？
それは緑谷（じぶん）が幼い頃の、遠い遠い記憶…
それはとても懐かしくもあり、輝かしかった。あの頃の事を思い出すと、何故か複雑な気分になる。
あるニュースの動画。
それは昔に起きた大災害の直後、オールマイトがたったの一人で数百人ものの命を救い出したと言う、逸話を遺した有名な動画。
どんなに苦しくとも、笑顔で人を救ける彼のその姿は、とても輝かしく、まさにヒーローそのものだった。

それがきっかけだろう。
緑谷は眩しい笑顔で、高ぶる気持ちを抑えきれずはしゃいでいた。
カッコいい、凄い、そう言った尊敬に値する眼差しを放っていた。
お母さんもそんな出久の表情を見て喜ばしくも思った。
父は物心付いた時から海外に出張しており、家に帰ってくる事は殆ど少なかったので、お父さんというのがどんなものかは当時は分からなかった。
他にも尊敬するヒーローは幾らでもいるだろう…
例えば烈怒頼雄斗とか１３号とか、デビューしたてのインゲニウムに、ネットの評判こそ悪いが、Ｎｏ．２にまで上り詰めた男…エンデヴァー。
多くのヒーローがいれば、尊敬だって持つだろう…でも、出久が選んだのは…他の誰でもない、オールマイトただ一人。
理由は漠然としてる、他のみんなから見てみれば普通の人と偽りなく変わらないだろう…
でも、理由なんて関係ない――
だって、憧れちゃったんだから…自分の気持ちに嘘は付けないし否

定できない…なっちゃった物は仕方ないじゃないか…
だから、認めたくなかった。
医者から『無個性』だと言われたあの時は――
その時は後頭部を鈍器で殴られたかのような衝撃を受けた。
どんな個性なのか、期待し胸を高鳴らせていた、しかし緑谷には個性がない…そうハッキリと断言された。
最初は病気かと思った、しかし病でも障害でも何でもない、ただ単に個性がない、ただそれだけだった。
夢でありたかった…個性がない人間などヒーローになれる訳がなく、ヒーローになりたくても今の社会…厳しい世の中、オールマイトみたいになる事なんて夢のまた夢…それこそ幻想と呼ぶに相応しかった。

今でも覚えてる、あの時の言葉を――

『お母さん…どんなに困ってる人でも、笑顔で救けちゃうんだよ…?
超カッコいいヒーローさ、僕も…なれるかな……?』
残酷な現実を突きつけられ、それでも現実逃避をしたくて、どうしようもなくて、泣きじゃくりたくて…嘘だと言いたくて…
目一杯涙をためて指を差す、暗い部屋に映り出る明るいパソコン画面、そこには…オールマイトのネット動画、人を笑顔で救ける最高のヒーロー…
なりたかった、尊敬してた…だからお母さんに聞いたんだ。
僕もオールマイトみたいな、最高のヒーローになれるかな?って。

お母さんは泣きじゃくりながら、抱き締めてくれた。そして何度も「ゴメンね出久」と謝って来た。
個性を持たなかった体に産んでしまって、未来を、夢を叶えさせられなくて、そんな後悔に似た声…
それが酷く傷つき、声に出せなかった。
違うんだよお母さん、お母さんが悪いんじゃないよ…でも、違うん

だ…僕が言って欲しかった言葉は――

その頃からか、周りの人から馬鹿にされることが多かった。
超人社会の中、個性があるのは当たり前…逆に無い方がおかしいのだ。
そんな超能力がありきたりな世界、出久はただ一人、無個性でありながらずっと過ごしてきた。
個性がないの？
ダセエなデクって。
無個性？カッコ悪い。

――お前は石っころだ。
友達だった子に、つるんでた子に、女子に、そして幼馴染に馬鹿にされた。
無個性だから、たったそれだけで大きく差別された。
個性がなくても普通の人間なのに、皆んなは個性がないと言う理由だけで馬鹿にしてくるのだ。
別に怨んでるわけじゃないし、至極当然だと思う…だから、個性がないのは認めている。
それが小学校に渡り中学まで続いて…仕方ないしょうがないと無理やり自身を納得させて過ごして来た。
でも、どんなに大きくなっても、成長しても…捨てられないものがあった。

それは――幼い頃から憧れてた…ヒーローになること。
オールマイトみたいな、最高のヒーローになって――

でも、誰もそんなこと認めちゃくれない…現実はいつだって残酷だ、どれだけ憧れても、力がなければ意味がなかった…

だから、すっごく嬉しかった。

あの時、あの人に言ってもらえたあの言葉が、生きて来た中で…一番心に響き、涙を流した。
あの言葉を忘れない…忘れるものか、アレ以上に衝撃な事はない…
『君は――――…』

「あああああああァァァァァァァーーーーーーー!!!!!」
天に轟く雄叫びが、大地に響き、森を揺らぎ、天を貫く。
先ほどまでのとは違う威力、本気の力。
気迫ある拳が唸る。
至近距離０の状態で、１００％のスマッシュを撃つ。
その代償として腕が折れてしまうのは難点だがそんなの関係ない、今はただこの男をどうにかするのに精一杯だ。
マスキュラーの表情が一瞬で硬直する。
ヘラヘラ笑ってたあの時の顔立ちとは違う。
油断ならない緊迫とした、機器を前にして見せる初めて目を開く顔。
彼の言葉など口から出る前に、緑谷の拳がマスキュラーの顔面に直撃したのだから。
ドバコオオォォオオーーォォン!!!

地雷が鳴り響く音が止まらない、衝撃の余波の影響か、崖は次第に崩れていき、洸汰は地震に足元を掬われ、崖の上から落っこちてしまいそうになる。
「う、わあああぁぁぁ!!」
落下していく洸汰は、涙を流しながら抵抗しようと腕や足を動かす。
しかしそんなものでどうこう出来る訳がなく、虚しく落ちていく。
この崖の上から落ちてしまえば救からない…落下死するだろう…
――ガシッ！
泣き叫ぶ洸汰の動きが止まった。
プラーン…とてるてる坊主のように吊られてる状態の彼は、荒んだ息を安定するべく気持ちを落ち着かせ、止まらない冷や汗を流しながら、自分の服を掴んでる方向へ視線を向ける。
「ごへん…ふっほはしへ…」
ゴメン、ぶっ飛ばして。
彼の言葉にいち早く理解した洸汰は頷きながらも足につくところによじ登る。
緑谷は手で彼の服を掴んでるわけではなく、口を使って固定していた。
服に噛みつき何とか洸汰を救ける事が出来た…
本当なら避難誘導させてからぶっ飛ばすのがこの状況を打破する打開策として相応しいのだが、頭がいっぱいでそんなこと考えられなかった。
しかし何がともあれ、マスキュラーを倒すことに成功した出久は、１００％を使った右腕を凝視する。
ぶっちゃけ１００％は骨が折れる…冗談じゃない、本当の意味だ。
今思えば、色んなこと無茶して来たなと１００％を使う度に思う。
入試試験を初め、対人戦闘訓練、ＵＳＪ、体育祭、使う度に腕は酷くなって行く。
腕の中で爆竹が爆発されたような痛みは尋常じゃないほど痛い。
「あ、ありがと――」

洸汰は感謝の言葉を告げる。
もし緑谷がいなかったら本気で死んでた、とにかく救かった事に今はホッとするべきだ。
そう、目の前の光景を見るときは、安心していた――
「ここから施設は…行けるね……
飛鳥さん所は…どうなってるか知らないけど…多分無事かな…
何がともあれ早くここから離れなきゃ…洸汰くん、動け――……」
洸汰の顔を見た途端、一瞬にして疑問を抱いた。
なぜ洸汰は怯えてるのだろう？
涙を流しながら、まるで幽霊を見つめてるかのような、恐怖に染まった顔。
洸汰の視線の先…それは丁度、今土煙が巻き起こってる方向…緑谷がマスキュラーを殴り飛ばした方角だ。
「洸汰…くん？何を見て……」
本当に幽霊なら願いたいものだ、そうであって欲しかった。
しかしそれよりも恐ろしいものがいる。
ムクリと起き上がる黒い影、そこには人影ではなく、異形な形をしていた。
しかしそれが段々と人の姿に変わっていき、その影は邪魔な土煙を吹き飛ばす。
ブワォッ！と霧散されていく土煙などお構いなく、緑谷は目を疑った。
目の前の光景に息を呑み、疑問が頭の中を埋め尽くす。
嘘だろ？は？何で…そんな…こと…
いや、だって…だって僕の個性は…そんな…！
「いつつ、火事場の馬鹿力っつーヤツか？
マジでやりやがったな…」
ワン・フォー・オール。
譲渡する人間、受け継ぐ人間、それらが力を培って行くことで個性は次第に強くなっていく。
オールマイトの１００％は、拳の一発だけで天気をも変えてしまう

怪力を誇っている。
パワーなら誰にも負けない、世界一といっても過言ではない。
入試試験では軍事防衛兵器、巨大仮想敵をワンパンで破壊に追い込み戦闘不能にした。そんな超パワーを食らったにも関わらず、男はニタリと笑う。
血狂いマスキュラーが立っているのだから。
絶望が、戦闘欲に刺激されたのか先ほどの余裕の笑顔はない。
衝撃のあまりか、左目に付いてた義眼は取れている。
「テレフォンパンチ…
今のはガチで効いたぜ…良い拳持ってんじゃねえか…!!緑谷ァ！」
嘘だろ？
オールマイトの力だぞ？１００％の力を食らったんだぞ？
それなのに男は、平然と立っている。
バリアといった防御に特化した個性じゃない…単なる増強型…なのに、この男は立って笑っている。
敵からすればヒーローの笑顔はいわば呪いだ、自分たちの悪行に魔を刺し阻み、暴力を振るう。
暴力を振るって万事解決、しかしそれが逆であってもまた恐ろしいこと…
倒したと思ったはずの敵が、平気な顔でヘラヘラ笑ってるのだ、それがどれほど末恐ろしいものか…
自分の本気が、敵に通用しなかった…　その事実が緑谷を苦しめる。

そんな動揺する緑谷など気にもせず、殺人鬼は歩み寄る。
緑谷を、洸汰を殺すために、動く。
多少よろついてるものの、見るからに怪我といった怪我をしていない点が大きい。
「な、なんだよ…何で動けるんだよ……やめろ！来るなよ!!」
「嫌だよ、行くよ…お前、強えからな…
お前見たく強えヤツつったら、俺らん所も数人いるけどよ……お前

は特に良いよ単純で、分かりやすくて…」
緑谷の悲鳴に似た叫び声など、馬の耳に念仏。マスキュラーは俄然やる気を燃やして近づいて来る。
己の欲望の為に、血を見る為に、快楽を求めるが為に、動き出す。
ポケットに手を突っ込み膨らませ、ゴソゴソと物音立てて何かを取り出す。
その際、ポロポロと何かを落として行く…
それは、義眼だった。
様々な悪趣味な義眼が地面に落ちて行く…彼の趣味なのか、理由は定かではないが、この義眼は強さに関係するのかがどうか疑問に思えた。
「今までブッ殺して来たヤツ、ああ勿論ウォーターホースも含めてな…
味気無かったんだよなァ…ザコばっかでろくに満足すらままならなかった…
殺すことすら飽きちまうくらいにさ…
でもお前は違ェよ!!俺と同じ類の個性で、俺の方が上だと思ったらそうじゃなくて…
面白えよなァ、闘いって…」
どうしたら、どんな生き方をすれば彼のようになるのか、頭が痛くなる。
本気だ、冗談なんかじゃない…本当に殺す事が己の快楽として欲望を満たして来たんだ。
ヴィランの考えてる事はやっぱり理解できない…
何を考えてるのか、何を思ってるのかさえ、理解出来ない。
そこに当然、理解しようとする気もないし、する訳がない。
「覚えてるか緑谷!俺ささっき言ってたよな?遊ぼうって、なぁ、言ってたんだよ!
ああ止めるよ!遊びはもうやめるよ終いだ!
俺ちょいとスイッチ入ったからさ、な?だからさ…本気でテメェも、テメェらも、この場にいるヤツら全員本気でブチ殺すわ――」

本気の眼。
眼球はただ漆黒の色に染まっていた。
真っ黒で、そこには光など存在しない…全て黒で塗りつぶされてるように見える。
彼にとってさっきの戦闘はただの遊びでありウォーミングアップに過ぎなかった。
荒んだ殺気、先ほどのとは違う…貪欲で、血の気盛んなドス黒い殺気。
感じ取るだけで不気味のあまり腰を抜かしそうになる。
そんな恐怖を必死に押しこらえながら、緑谷は「洸汰くん捕まって！」と大きな声で叫ぶ。
我に返った洸汰は、彼の言葉にワンテンポ遅れ抱きつこうとするが――

ズドバッコオオオォォォォオオオォォォォーーーーーーーーン!!!

巨大な筋肉繊維で絡めた拳が、緑谷の前を掠める。
本当に運が良かったのか、直撃こそは免れたものの、衝撃波だけで壁に打ち付けられ、呼吸が出来なくなる。
「ガァッ――ハッ――――!!!」
叩きつけられたことで、全ての酸素が抜けるかのようの苦しみ悶える感覚。
呼吸が困難に陥り、傷から更に傷を打ち付けるかのような刺激は、緑谷の脳を引き裂くかのような超激痛の感覚に囚われていた。
当たってない、衝撃の余波でこれ。
忍学生や、今まで見て来た忍よりもズバ抜けてる。
視界がぼやけて霞む。
マスキュラーは「チッ、調整ムズイなこれ…」と舌打ちをする、
その言葉が信じられなかった、とにかく強すぎる。
何が起きてるのかもう頭の中で追えない。
だって、この男はさっきまで遊んでたんだから…

緑谷にとって真剣な勝負でも、彼にとってはただの準備運動でしか無かったのだから…
あからさまに広がる実力の差…もはや世界観が違う。
大人だからだろうか、相手が強いのは無理もないかもしれない…
しかし、これは異常だ…強すぎる。
脳無やオールマイトに次ぐ程のパワーファイターだ。
それだけじゃない、先ほどの衝撃で、崖は次々とバランスを崩し、崩壊していく。
「洸汰くん！」
彼の安否を確認するべく、必死に声を上げて探し出す。
洸汰は腰を抜かして尻もちついていた。言葉を失っている、そりゃそうだ…
あんなのを目の前で見せられたら、息が詰まり、言葉を失っても仕方ないだろう。
「他人の心配する程余裕あんのか!!そうかそうか、流石だぜお前!!」
マスキュラーは違う方向で大きく感心し、舌なめずりしながら緑谷に続けて猛攻を食らわす。
彼は案の定いち早くワン・フォー・オールを使って回避するも、衝撃の余波が激し過ぎて、吹き飛ばされてしまう。
例えでいうなら…ＵＳＪでオールマイトと脳無が拳で殴り合った時と同じもの、そう捉えれば十分だろう。
嵐以上の余波、これはほんの一片のカケラに過ぎない。
緑谷は衝撃に上手く流されるように乗り、洸汰を抱きしめる。
彼を守ろうと言わんばかりに、自分が重傷を負ってるのにも関わらず洸汰に被害が及ばないよう庇う。
（洸汰くんだけでも…救かれば良いんだけど…!!）
そう上手く事が進む訳がなく、マスキュラーは追尾する。
落下していく緑谷は片腕を洸汰から放して、デコピンする仕草をとる。
この高さで落下すれば無事じゃ済まない、最悪本当に死ぬ。
だからそれを防ぐために、緑谷は指を使ってその威力を殺す。

「ＤＥＬＡＷＡＲＡ・ＳＭＡＳＨ!!」
デラウェア・スマッシュ。
指のみの１００％の出力、これを使うのは体育祭以来か、指が爆発したかのような衝撃と激痛に表情を歪ませながらも、高威力のパワーを放出した事により、落下するものの威力を殺したためか、難なく無事に着地する。
それでも、緑谷は身体中の激痛に悶えていた。
頭がクラクラする、腕が震えてまともに上がらない、足もガクガク、指は腫れ上がってジンジンと痛みが続く、体全身傷だらけ…
今でもこうして意識があること自体が驚くべき事態。
普通なら気絶来てても可笑しくはないのだが…
「強い…強すぎる……こんなのが敵連合にいるのか…？
じゃあ、本当にさっきまで…」

――ただの遊び感覚で、闘ってたんだ。

これが、プロが相手にする敵（ヴィラン）…
実力も今の自分を超越してる。
そもそも敵の数は？
かっちゃんと雲雀さんは無事だろうか？
仮にコイツに勝てたとして、他のみんなは無事だろうか？
考えれば考える程に気が遠くなり、体の負担が重くなる感覚さえ感じる。
霞んだ目、垂れてくる血、拭いながらマスキュラーの方向に視線を向ける。
マスキュラーは緑谷がいることを確認すると、直ぐ様こちら目掛けて跳躍する。
目にも止まらないスピード、先ほどよりも飛躍的に速く、さっきまでのが可愛く思えてしまう。
パワーやスピード…多分耐久性も間違いなく上。
劣等型の自分が相手に勝てるとは到底思えない。それに勝てたと

してもこの体で本当に誰かを助けることは出来るのだろうか？
「おい大丈夫なのかよお前…」
洸汰は満身創痍の緑谷に気遣うように声を掛ける。
こんな状況を一人で打破しようとしてるのだ、ましてや自分よりも格上の存在を、たった一人で相手にしてるのだ。
勝負など見なくても分かるのに…どうしてそこまでして自分傷つけてまで闘うのか…洸汰には理解できなかった。
自分を救けるにしても、緑谷に酷いことをしてしまった…そんな相手にどうしてそこまでして、命を懸けてまで救けようとするのか、分からない。
「大丈夫……洸汰くんは…逃げて、ここは僕がコイツ相手にする…
多分さっきのように救けれないと思うから……一気に施設まで走って行って…！」
「無理だよ！何行ってんだよお前!!お前も一緒に逃げよう！勝てっこないよあんな化け物！
それにお前の本気でも倒せなかったじゃん!!」
洸汰の言う通り、勝ち目はない。
ない…というより完璧にゼロに近い感じだ。
あの１００％を防いだ時の衝撃と来たら堪ったものじゃない、自分でもそれは驚愕していたし、考えるだけでも恐ろしい。
でも、それでも…
「ヒーローはね、どんなに辛い時、苦しい時でも、笑顔で笑って臨むんだ――」
「…え？」
諦めるわけにはいかない。
ウォーターホースが残した大切な息子を、マンダレイ達が守り育てた洸汰を、守らなければいけない。
「この際だからね、言っておくよ洸汰くん…
ヒーローはひけらかしたいが為に個性を使ってるんじゃないんだ…
大切なものを、人を、笑顔を、守る為に、ヒーローは闘うんだよ―

―」
洸汰の心臓が高鳴る。
こんな状況でも、緑谷はヒーローとは何かを語り告ぐ。
いや、こんな状況だからこそ言わねばならないのだ。
ヒーローや、個性を否定する彼の心を、救う為に。
「だから、笑顔で人を救けるんだ…」
緑谷は洸汰に振り向くと、満面な笑顔を見せる、その笑顔はオールマイトの面影と重なっていた。
自分が困難な状況に陥っても、救けることを、守ることを諦めない、折れない。
そんな輝かしくもあり、心の底から安心する。
しかしそんな安堵の息もつかの間、ほんのひと時に過ぎなかった。
「――面白えヒーローごっこだ、ここまで来ると素直に感心しちまうわ本当に」
そんな彼の勇気を、笑顔を、言葉を、虫けらのように踏み潰す絶望が、声と共に降り注ぐ。
地面に足をつき、マスキュラーは獣のような視線を緑谷に向ける。
その野生的な目付き、戦闘欲による好奇心、今の彼はまさしくイカれた人間。
腰を低く構え、緑谷に突撃する姿勢を整える。
「無理だって!!!だってお前…両腕折れて――」
「行くぞ緑谷ああァァァ!!!!」
「――大丈夫!!!」
緑谷は目にいっぱい涙をためて折れた右腕に力を入れる。
その涙は、激しい痛みによるもの、痛みが電流のように走り出し、筋肉が、骨が悲鳴を上げる。
正面からの一騎打ち、筋肉繊維で体中を覆うマスキュラーの猛攻に対して、正面からの殴り合いをする。
１００％　ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ。
折れた腕に渾身１００％の威力を込めて腕を振るう。
力を入れただけで何十倍もの痛みが走り出す、そしてその技がマス

キュラーの拳にぶつかり鍔迫り合いになる。
「ッッんの野郎があァァ……!!」
「大…丈夫――!」
「さっきよりも弱えじゃねえかよおおォォォ!!!!!」
緑谷は思いっきり吹き飛ばされる。
衝撃で吹き飛ばされた緑谷を追うマスキュラーは、一気に懐に迫る。
緑谷はつかさずカウンターを取るべく左手を使って１００％を放出。
衝撃の嵐、爆竹以上に響く轟音、木々が異常に激しく揺れる。
「あああああァァァァァァァ!!!!」
「おッらあァァァァァァあ!!!!」
緑谷の雄叫びが、マスキュラーの雄叫びが、二人の声が轟音と共に叫びでる。
緑谷の腕からは大量の血が流れ、意識が朦朧としていく。
渾身の力を入れ、マスキュラーを何とか吹き飛ばし退かすも、すぐに体制を整え、木々を軽々となぎ倒していき再び衝突する。
今度は緑谷とマスキュラーが動きが止まってるかのように、互角に渡り合っている。
筋肉繊維の束から見える隙間、そこには闘争心で満たされていくマスキュラーの顔、大して此方は電撃のように痺れる痛みを噛み殺しながら、必死に耐えてる緑谷。その目からは涙が滝のように溢れ、止まらない。

――ヒーローとは。

「んのガキがァ……さっさと潰れろやあああァァァァァァ!!!!」
「うううぅるうぅせえええええーーーー!!!!」

筋繊維が切れていく音が、耳元から聞こえる。
マスキュラーは勢いよく、先ほどのお返しと言わんばかりに思っき

し壁の方へと吹き飛ばす。
為すすべなく壁に衝突した緑谷は、背中を打撲し背中の骨が折れたかのような感覚を受ける。
悲鳴を上げる暇もなく、白目を向いてる緑谷、そこへマスキュラーが追撃する。
筋肉繊維で底上げされた拳が、緑谷を殴る。
緑谷は血まみれで酷く腫れ上がった腕でマスキュラーの渾身の拳を撃つ。
双方、拳で打って打って撃ちまくる。
弾丸とも呼べる正面からの殴り合い、四方八方から放たれる衝撃波に、洸汰は体制を崩しながらも、尻もちをつきながらも、涙を流して緑谷に問い続ける。
「な、なんで…どうして……そこまでして……」
自分が死ぬかもしれないのに、どうしてヒーローは誰かを救けるのか…
震えながらも、それでも緑谷に問う。
「洸汰くん逃げて!!!走れ!!!」
緑谷の口調が荒んでいく。
絶体絶命の中、彼は洸汰に避難を告げる。
拳の嵐が止まらない、双方の猛攻が激しく、近づくことすら危うい。
そう、まるでＵＳＪでオールマイトと脳無が闘った時と同じあの時の状況…
負けられない、絶対に。
「皆んなを守る!!お前なんかに!飛鳥さんや洸汰くん!!皆んな殺させない!!!」
ヒーロー学生も、先生も、プッシーキャッツも、飛鳥も、忍学生も、洸汰も、この場にいる全員誰一人傷付けさせない、絶対に守り通す。
そして勝ってみせる、その勇姿は平和の象徴に似ても似つかないものだった。
憧れからくるものなのか、はたまた彼の性根なのだろうか、この際理由はどうでもいい…今は守るべきものの為に、命を削ってでも戦

う。
「緑谷ああァァ…テメェ…!!最ッッ高に面白えぜお前ええェェェェェ!!!」
マスキュラーの闘争心を大きく刺激させ、守ろうとしてる緑谷のソレをより酷く壊そうと、力が膨らむ。
人の守りたがってるものを目の前で見れば、その想いが強ければ強いほどに、より強く壊したくなる。
双方の想いが、良かれ悪かれ、強くさせていた。
「お前なんかに絶対殺させない!!!!」
「やってみろやクソ餓鬼いいィィ!!!!!!」
徐々に壁に亀裂が走り、壊れていく。
崖はみるみると音を立てながら、ゆっくりと壊れていく。
これ程馬鹿デカイ振動に、揺らがされれば当然こうなるだろう。
しかしこの二人にはそんなのどうでも良く、今頭の中にあるのは、己のやりたいこと。
――常にピンチをブチ壊していくもの。
しかし、人間誰にも必ず限界は来るもの。
緑谷の体力はほぼ底が着く状態、少しずつマスキュラーの筋肉と後ろの壁に挟まれ呼吸すら困難な状況になっている。
体全身がグチャグチャになる感覚が脳に走り、痛みも神経が途切れていくことで感覚が無くなってきてる。
衝撃が強すぎる、押し潰されていく。
緑谷の姿が筋肉繊維に埋まっていくことで、姿が消えていく。
「フィニッシュだあああアァ!!!潰れろやああアァガキィィィーーーー!!!」
マスキュラーの狂い叫ぶ声が最後の合図に伴うかのように、渾身めいいっぱい力を込め押し潰される。

緑谷の体全身、ビキビキと骨が鳴り響き、何本か骨が折れていく。
緑谷は悟った、守れなかった…誰一人…
オールマイトが託してくれたのに…自分の弱さが原因で……負けてしまった。
ダメだ、でも体がもう言うことを聞かない…意識が遠くなっていく。
まるで本当にあの世へ行くかのような、鈍く眩しい感覚…
目が少しずつ次第に閉じて行く。
薄暗い視界、ぼやけて映るのはマスキュラーの狂った笑い顔…
もはやアレは狂気…全身の体が圧迫して身動きが一つも取れない。
無理だ、ダメだ、諦めろ。
なぜか次第に頭の中に自分の声が聞こえてくる。
これは自分の声とは真逆で、反対の言葉…自分の今思ってる意思とは違う方向性の言葉…それを聞けば聞くたび心が針で刺されたかのような鋭い激痛と、諦念に対する心が和らいで行く変な感覚…
ああ、もうこのまま…折れてしまえば…

そんな、自分がいる。
否定しようにももう滅茶苦茶だ、何をどうすれば、こんな危機的な立場から脱するのか、分からない。
そっと目を閉じたその途端…

ビシャアアァン!!

「ッ!?」
冷たい液体が、マスキュラーと緑谷に浴びせられる。
マスキュラーは視線をその人物へと向き力んでた筋肉繊維が緩くなる。
「んだよコレ…水か!?」

水。
ここの山林地帯に川など存在しない、水辺らしきものは何処にも見当たらない。
ではこの水は一体誰が？
そんなの決まってる、あの子しかいない――

「もう…もうやめろォ!!」

泣き叫ぶ洸汰の声が響く。
洸汰の掌はベタベタになっており、水掛かっている。
洸汰の個性によるもの。
ここで初めて洸汰は、個性を人に向けた。
今まで個性そのものを受け入れる事が出来ず、力を否定してた自分は、初めて緑谷を救ける為に使ったのだ。

考えるよりも先に体が動いていた――

洸汰のその勇敢な行動は、かつての昔の自分の姿と重なる。
中学校の頃に有名になったヘドロ事件。
幼馴染が苦しんでた時、人質に囚われてた時、緑谷は個性がないにもかかわらず、あの場で一人だけ動いたのだ。

その時、なぜ動いたのか分からない…でも、洸汰と同じく体が勝手に動いてた。

「洸汰…くん！」

遠ざかってた意識が、元に戻って行く。
諦めかけてた自分の心は、みるみると自信を取り戻して行く。
そうだ、そうだよ――

――ヒーローは、いつだって命懸け。

命を懸けてまで、ヒーローは人を守るんだ。
笑顔を、命を、全てを守る。
命だって懸けてやる。

「後でな!?な!後でお前も他のガキどもも仲良く殺してやっからな!?だから待っ――」
ズドンッ――

マスキュラーの体が揺らぐ。
振動、衝撃、それらから来るものなのか、体がどんどん押されて行く。筋繊維が激しい速度で切られていく。
まるでカッターナイフで切られてるのではないかと、疑いを持つほどに、筋繊維は音を立てて切れて行く。
(な、なんだ――?)
マスキュラーの顔はみるみると険しくなって行く。
冷や汗が垂れ落ち、次第に焦燥の顔立ちへと変わって行く。
なんだろうか、一体何が…
いや、そんな筈はない…
マスキュラーは念入りするよう執拗的に力を入れる。
しかしどれ程力を入れても押し返されて行く感覚。
「オイ待てや――!!」
だって、押し潰された筈だ。
瀕死の状況で、そんな事出来るわけが――

「出来るか出来ないかの問題じゃない――」
筋繊維の拳の先から聞こえる緑谷の声に、マスキュラーは更に焦りの色に染まる。
潰したと思われてたはずの緑谷が、息をしている。
声が聞こえた。

あんなボロボロで、死ぬかどうかさえ問われるあんな体で、まだよじ登って来る。
そんな緑谷に、マスキュラーは先ほどとは違う…寒気を覚えた。
「お前なんかに殺されてええええエエエエエ!!!!」
「パワー上がってねえかお前!?!」
「たまるかあああああぁぁぁぁぁ!!!」
声の気迫と共に、マスキュラーは体全身に纏ってた筋繊維を、デコピンだけで払いのけるぶち壊す。
先ほどのパワー、同じなのに…何故かそれ以上に強く思えてしまう。
――Ｐｌｕｓ（更に）　Ｕｌｔｒａ（向こうへ）
１０００００００％デラウェア・デトロイト　スマッシュ――
とてつもない衝撃が放出され、筋繊維が破けた彼はガラ空きとなり、そこから隙を突いて、本気で殴る。
心と力が、１００％の、最大最高火力の、本当の火事場の馬鹿力。
跡形もなく、意識と共に吹き飛び、義眼が外れる。
白目をむき、木々はなぎ倒され、何処かへと吹っ飛んだ。彼の姿はもうどこにもない。

――洸汰。
アンタの両親、ウォーターホースはね、確かにお前を残して逝ってしまった…けどね、確かに守られた命はそこにあるんだ。
洸汰の薄い記憶が、ハッキリと鮮明に蘇っていく。
両親が死んで、引越しをして、初めてマンダレイに言われた言葉。

当時など、理解したくもなかった…ヒーローなんて所詮、殺し合うが為に、個性をひけらかしたいが為にしか存在しないと無理やり丸めていた。
「なんで…お前……お前！」
体の力が抜けて、尻もちをつくことなど忘れ、洸汰は泣きながらも、必死に声を振り絞る。
「……何も…知らない癖に!!!」
――あんたもいつか、きっと出会う時がくる、そしたら分かる。
マンダレイの言葉を思い出す。
どうしてヒーローが存在するのか、どうしてヒーローは人を救けるのか。
「何でだよ!!なん…で……」
涙で視界が見えずらなくなる。
止まらない、どうしても止まらない。
自然と溢れてくる…それは嬉しくて、悲しくて、色んな感情が一気に押し寄せてくる感覚。

――命を賭して、アンタを救う――

「どうして…だよ…皆んな……」
ヒーローを否定して来た少年は、俯きながら言い聞かせていた。
分からない…いや、答えなんて本当は分かっていた。
ただ自分が認めたくなかっただけで、本当は答えは最初っからそこにあった。
受け入れたくなかった、でも、目の前で僕を救けてくれた。
両親を殺したアイツを倒してくれた。
僕を守ってくれた。
それが嬉しくて、どうしようもなくて…
ヒーローなんて嫌いだ、理解なんて出来やしない。でも…目の前にいるこの人は僕を救けてくれた。
色んな酷いことしたのに、大切な人を失った気持ちなんて、分から

ないのに…それでも、この人は、僕を救けてくれた。
ここで初めて、ヒーローとは何なのか分かった気がする。

――僕のヒーロー。

その名は――デク。
この名前が彼のヒーローネーム。
かつて彼は無個性だと罵られて生きて来た。
個性も、力もなく、ただ必死にヒーローになる夢を見て来た。
色んなことがあった、辛いことなんてしょっちゅうあった…
でも、ある人に言われた…
尊敬してた最高のヒーローに、言われたんだ。

「君は――ヒーローになれる」

背中を押され、強くなって…
そして今、初めて誰かにヒーローだと認められた瞬間。
それは、ヒーローや個性、超人社会そのものを憎み拒んでた彼が、初めてヒーローに憧れた。
オールマイトや、エンデヴァー、他のヒーローじゃない…数多く存在する名高いヒーローとは違う。
出水洸汰は、デクに憧れた。
命を賭してまで救けてくれた、たった一人のヒーローなのだから――
これは、緑谷出久がヒーローへ一歩足を踏み入れた成長の一つの証。
初めて誰かにヒーローと認められた瞬間。
初めてヒーローを憧れた瞬間。

１００話「飛鳥・オリジン」

魂の底から湧き上がる闘志の叫び、最後に放たれたデラウェア・デトロイトスマッシュにより、マスキュラーは暗闇の森の彼方へと姿を消していった。

視界にはポッカリとした穴を思わせるように、木々は跡形もなくなぎ倒されていた。

先ほどの奮闘から数秒後、静寂な空間が包み込む。

静かであり、ひんやりとした空気、真っ暗な森、その中で血まみれの緑谷は、一人勝利の雄叫びをあげて佇んでいた。

腕はプラ～ンと垂れており、見るに惨たらしくバッキバキに折れて腫れている。

両腕ともに酷いが、腹部や頬を腫れ上がっており、アザが出来ている。

一方、吹き飛ばされたマスキュラーは完全に気絶、意識喪失している。

吹き飛ばされた彼は緑谷の火事場の馬鹿力による衝撃を食らった為、気絶から回復しても当分起き上がってはこれないハズ…

折れた腕で本気を撃ったとしても、威力は落ちてる…筋繊維を使って防御される可能性も充分あった、だからこそ躊躇なく緑谷は本気で個性を使ったのだ。

単純で攻撃特化の個性ゆえにタフだった。

しかも勝てたのは良いが、大分体力を削ってしまった。

もう腕の感覚が無い、視界はぼやけて意識も曖昧…体全身打撲を受けたような感覚…

少しでもどこかに触れると激痛でおかしくなりそうだ。

まだマシだと言うと背中くらいだろう…

背中も何回かは打ったが、前よりかはマシだ。

あと無事だといえば――

「ハァー……ハァ……うぅッ…！あッ！くぅぅ……」

呼吸が荒くなり、ふらりふらりと足元がおぼつかなくなる。
前に倒れそうになるのを必死で、足で踏ん張った。
ドシンという音が地面に響き、洸汰にまで届いたのだろうか、思わず体を反応させる。
「オイ…お前、大丈夫…かよ？」
いても経ってもいられない洸汰は、緑谷の元へ駆けつける。
こんなに重傷になってまで、自分を救けてくれた…もし緑谷が来なければ、あの殺人鬼に殺されてたに違いない…
自分の大好きなパパやママがアイツに殺されたのは悔しいし、許せないけど、それでもアイツは確かに強かった。
単純なる増強型…マスキュラーだけじゃなく他にもそう言った個性を持つものは少なからずいるだろう…
しかし、使い方や使う人間によってそれがこんな凶器になると考えると、個性も恐ろしいもの、背筋がゾッとする。
「うん、大丈夫……ハァ……それ、よりも……まだ、やらなきゃいけないこと…あるし…」
「やらなきゃいけないこと…？もう、充分だろ…？」
そんな重傷を負ってまでも、一体何をしなくちゃいけないんだ。そう訴えかける洸汰に、緑谷は顔を上げる。
「ううん、いっぱい……あるよ…
まず、あの事を先生とプッシーキャッツに伝えなきゃ…
それと洸汰くんを守ること…他のみんなだってそうだ…
この夜襲に来た敵（ヴィラン）が全員このレベルなら…それだけじゃない、相手は忍だっている…
抜忍…って言うのかな、多分飛鳥さんが闘ってるアイツだけじゃないと思う…他にもいるハズだ…
そうなると、皆んなの命が危険だ…！」
特に爆豪と雲雀。
マスキュラー（アイツ）は確かにあの二人が目的だと言っていた。
理由は？そもそもどう言った目的で？何の為に？
理由が定かでないからこそ、不安で仕方がない。

簡単に殺られる玉じゃない…と信じたいが、相手は強敵だ、三下や捨て駒とは訳が違う。
それ程今回の敵は強レベル…
相手によって本気で殺されるリスクは高い。
だったら…
「僕はまだ動ける……まだ手は届くんだ…
それじゃあ、僕が動けるなら…救けに行くしかないだろ…！」
皆んな苦戦してるハズ。
敵の実力。
敵の数。
敵の範囲。
それらが全て不明、しかも生徒の安否も不明。森の中にはラグドールがいるにしても不安だ…
今回の目的は恐らくプロヒーローや先生方範囲邪魔な存在…
確実に始末する気だろう。
洸汰は思わず息を呑む。
ここまでして、敵に勝利しても、誰かを救ける為なら己の傷など見返らない…
改めてこの男がどれだけ凄いのか、肌身で実感できる。
「その為には、洸汰くん…君の力が必要だ…」
「…え？」
突然、自分が必要だと言われたことに、思わず目を見開く。
こんな自分が、どうしてこの場で必要なのか、小さな自分でも理解できなかった。
だって自分は何も出来ない…荷物だと言っても過言じゃない…なのにどうしてこんな非力な自分が必要なのか…
すると緑谷はある方角に指を差す。
その方角に視線を向けると、森が燃えてる光景が映っていた。
そういえば、黒煙が森から出て来て燃え始めたんだっけ…
「ねぇ、あそこの森が燃えてるよね…？しかもよく見ればガスも周囲を漂わせている。

多分色的に見て毒ガスなんだと思う…
つまり、囲まれてるんだよあの森は…」
その中に生徒がいるとしたら？
しかもB組や肝試すA組は勿論、膨大な被害を及ぼすハズ…
暗闇で視界が見え辛い森の中で確認することは難しいし、何処にいるかも分からない…
そしてもう一つ驚異的なのはは毒ガスだ、あのガスがある限り、ろくに近づけやしないし、その毒ガスがどんな効果を発揮するのかも不明な点…
即死系の毒ガスだったり、意識を無くす毒ガス、睡眠に似たガスだろうか…後者なら命の危険性は減るかもしれないが、これが前者だったら最悪だ、数多くの死人が出るのだから。
尤も、毒ガスに限った話だけでなく敵は全員殺す気でいるのだから…
「だから、少しでも被害を減らす為に、君の個性が必要だ…」
先ず炎が邪魔だ。
森は火に弱い、だから炎を洸汰の個性『水』で消せば、被害は和らぐだろう…
まあ仮にできたとしても発火元をどうにかしなければ意味がないのだが…
考えるだけでやる事がいっぱい頭の中に浮き上がる。
自分がどう行動すべきか、自分がどう考えるのか、何が正しいのか…
それこそ、ヒーローの本分なのかもしれない。
何より今の洸汰は不思議な感覚でしなかった…
あんなにも個性を否定してたのに、ヒーローや超人社会を嫌ってたのに、今ではそんな事気にしない…それも彼のお陰か、心の何処かで落ち着く自分がいる。
それは、緑谷（デク）という存在が、洸汰の心を変え、救けてあげたからかもしれない。

自分の力が必要としてくれている…そう考えると、なんでヒーローになりたいのか、ヒーローの気持ちが、個性を持った人間の気持ちが、薄々と分かって来るかも知れない…

洸汰は、静かに首を縦に振った。

緑谷は洸汰の反応を確認すると、帰り道を考える。
普通なら来た方向にそのまま施設に戻って先生に連絡する、その方が良いのかもしれないが…帰り道には飛鳥が敵と戦っている。
いや、秘伝忍法と言ってた辺り、抜忍だろう…
本当なら自分も参戦したいのだが、洸汰に被害が及ぶ危険性が高い。森の火を消す事も充分に高いのだが、ここはせめて仲間と一緒に行動した方が良い…
その為、飛鳥さんには少し悪いけど先生に頼んで貰う。
先生に洸汰を頼んで、直ぐに飛鳥さん所に戻って応戦する。
その方が今の危機的な状況を打破出来る考えだろう。

「飛鳥さんには悪いけど…取り敢えず相澤先生に連絡を――」

ズドオオォォォン!!!

「!?」
瞬間、とてつもない地震が襲いかかる。
訳も分からず突然地面が揺れだした。
マスキュラーとの戦闘もそうだったが、今回ばかりは大きな揺れだった…
大きな振動に洸汰は怯えるが、緑谷は「大丈夫…!」と元気付けるよう励まし落ち着かせる。
しかし、そんな笑顔とは反面…不安が大きく揺らいでいた。
(今の振動…結構近かった……まるで地雷でも起きたかのような大地震…

結構距離が近いってことは――）
ズドオオオォォン！またズドオオオォォン！と、激しい地震が何回も連発する。
流石の緑谷も笑顔から徐々に不安と絶望に染まっていく。
――ちょっと待て。
（ここの近くって、よくよく考えたら…僕を除いて飛鳥さんしかいないだろ…？
こんなに地震が頻繁に起こるって…オイ…待って…）

ズドオオオォォォオオオオオーーーーーーン!!!!

――大丈夫だよな？飛鳥さん!?
最後の地震は特に凄まじく、二人の足元が僅かに浮いた。
メキメキとした音、大地が揺れて小鳥たちや小動物たちが振動によって逃げていく。
不安と焦りで、心が埋め尽くされるかのような感覚…
飛鳥さんは充分強いけど…でも、大丈夫なんだよね？
そんな疑問が膨らめば膨らむほど、不安も高まり、心臓の脈打つ音が早くなって行く気がした。
思わず唾を飲み込み、喉に引っかかったような錯覚さえも感じる。

違う予想が、頭の中に過る。
飛鳥さんなら大丈夫…と思ってた自分の心とは反面のソレ…
もしかしたら、飛鳥さん…

――殺られたんじゃ…？

時は少々遡り。
風神…と呼ぶに相応しいだろう疾風を見に纏い、刀が渦巻く。
下ろされた髪はたなびき、風によって激しく揺らぐ。
手甲はかなり強靭で、頑丈で、黒く重々しい黒佐波の拳を、飛鳥は受け止めていた。
仲間を、命を、笑顔を、守る為に彼女は、真影の飛鳥となった彼女は刀を振り下ろす。
その威力は、真影による刀は、先ほどまでの鈍刀でもなく、下忍が振るう刀でもない…
絶対的強さを誇る、風神の刃。

――ガアアアアン!!

そして、黒佐波は大きく吹き飛んだ。
籠手には刀の斬撃が残り、仰け反る。
突風…違う、風神によるその強さ…それがヒシヒシと音を立てている。
しかし…
「……」
黒佐波は、吹き飛んだものの、飛鳥の予想…いや、この場の誰もが予想を裏切っただろう。
黒佐波は飛鳥の一撃を耐えたのだ。
大きく吹き飛んだと言っても、数十メートルだけ吹き飛び、地面には擦った跡がくっきりと見える。

それでも体力主に怪力を誇る彼の力なら、耐え忍ぶのも不自然ではないのかもしれない。
たった一撃なのだから。
だから、飛鳥は止まらない。
「――まだ…まだァ!!」
飛鳥は突っ込んで来る。
真っ直ぐ正面に、黒佐波は「うらァ!」と殴りかかるも、避けられる。
そして、四方八方斬撃がやって来る。
「絶・秘伝忍法――【一刀繚斬】!」
「――なァッ!?」
驚愕色の声を上げる黒佐波。
その視界に映った光景に、声を荒げる。
ある一定の領域か、何処からともなく地面から岩が出現する。
大きさは約２ｍ程か、飛鳥はそれを足場に水平に往復する。
一本の刀を手に持ち、飛ぶ度に、往復する度黒佐波に斬りつける。
当然疾風の如く、風を切る瞬間的な速さを持つ為、その素早さは並みじゃない。
目にも止まらぬスピードで斬りつけ、黒佐波の忍装束が初めて、切れ目が生じた。
（――やった!やっぱり、忍術じゃない…ちゃんと傷つく…!）
無敵と思えた黒佐波も、覚醒した飛鳥には敵わないのだろう、次々と斬りつけて行く。
黒佐波は悲鳴は上げず、口元を見る辺り、寧ろニヤリと口角を釣り上げていた。
そこが唯一不愉快なのだが…面倒なことになる前に、秘伝忍法が来る前に、と…連撃をかましていく。
「ッ――俺に傷を付けるなんてやるじゃ…ねぇ…か!」
声は途切れながらも、言葉を紡ぐ。
口より上を覆い隠すマスクは亀裂し、ピシリと音を立てる。
まさか、自分が傷を負うなんて…

いつぶりだろうか？傷を負ったのは…２年前か、３年前か…
昔のことなど覚えてやしない…
そして最後の一撃となるのか、飛鳥はトドメの一撃を喰らわせる。
血が流れる。
黒佐波に血が流れている。
不思議なものだ、絶対強者だと思ってた相手が血を流すと考えると、自分の力は相手に通用するんだと思える。
しかしまた逆に言えばこうだ、真影――覚醒がなければ相手には勝てなかった…とも言えるだろう。
そう思うと少し心は痛むが、この覚醒は自分の力だ…だから、特にこれと言った心配はしてない。
「どう…これが、守る盾の力だよ――！」
仁王立ちし胸を張って、堂々と…黒佐波にそう告げた。
対して彼は動きを止めたまま、風神を纏う彼女をジッと見つめた。
「刀だけが全てじゃない、守る力も立派な強さ…
この覚醒（ちから）は、守る盾があったからこそなれたんだよ――」
人を傷つける刀。
人を守る盾。
欠けてるものを補い、持ち合わせることで、人は強くなれる。
人を傷つけるだけの力は暴力であって、本当の強さじゃない。
そう大好きなじっちゃんに、教えて貰った。
それだけじゃない、忍学科の皆んなや焔紅蓮隊、雄英生に教師達、オールマイト…皆んながいてくれたから、強くなれた。
だから言わねばならない…皆んなが強くしてくれた…皆んながいてくれた、繋いで、結んでくれたこの力を否定する黒佐波には、言わねばならなかった。
それを、見せて上げたかった。
綺麗事？上等だ、綺麗なことを言って何が悪い、本当に悪いことは口先だけで何もしようとしない、努力しない人間のことだ。
守る盾も、力もない人間が、軽々しく「盾なんざ捨てろ」なんて言葉、飛鳥は許せない。

穏やかな彼女も、怒る時は怒る、人間…いや、生き物皆んな誰だってそうなのだから――

「――あァ…そうかよ」

嫌に普通に、黒佐波はそう答えた。

認めたのか、いや…見た感じまだ認めてない。

素っ気ない声、しかし彼の言葉はこれで終わった訳じゃない。

「弱え弱えと思ってた女が、まさか覚醒来るとはなァ…んなもん誰も予想付かねえよな？」

雑魚だ弱小がと罵ってきた、そんな相手が覚醒を持つなど誰が想像する？

覚醒こそ強力なものだが、覚醒前の飛鳥は黒佐波にとってただのひよ子でしかなかった。

これが伝説の忍の孫なんて、と笑ってた自分がいることに、不思議を持つ。

「でも…なァ…やっぱ盾は認めねえわ――」

しかし、嫌いなものは嫌いだ。

強くなれたとしてもそれは彼女自身…他の皆んなが強くなれた訳がなく、ただ一人自分が強くなっただけ…

それだけでは、盾を認める理由にはならないし、弱者が増え続け、強者が減っていく自体も変わらない。

もしそれが、人が自分の弱さと向き合い、考え強くなろうとするのであれば話は別なのだが――

「盾なんて弱さの象徴に過ぎねえし…

つーかお前思ったんだけど…

覚醒だけでどうにかなるとか思ってんじゃねえだろうな？」

――え？

その言葉に僅かに呼吸が乱れた。

黒佐波はガチんと両拳を打ち付け、金属音を鳴らす。

覚醒の力を前にしても、この男は、まだ戦おうと言うのか？

ダメージだって与えたはずなのに、それなのに…

「何で立ち向かう?って言う感じなツラぶら下げてんなァ…
簡単だよ、テメェらが負けられないように、俺もまだ負けられねえんだよ。
折角、ここに入っていっぱい暴れるんだからさ…お前一人に負けてちゃあここに入った意味がねえ」
まだ暴れたい。
まだ一人も殺してない。
もっと楽しみたい。
戦闘欲による殺意が、黒佐波を強くする。
想いとは色んな形が存在する、歪みだろうと善意だろうと悪意だろうと、人間の心によって人の強さは変わる。
刀と盾は、より強く。
諸刃の拳はより強く。
「だからよォ〜…
俺の為に、死んでくれよ――」
その言葉が、再戦の合図となった――
目の前にいる人間は、どうしようもなく理不尽で、身勝手で、不条理な忍だ。
「絶・秘伝忍法――……!」
「え!?」
ましてや、相手も絶・秘伝忍法を使えるとは思ってもなく、飛鳥は素っ頓狂な声を上げる。
「【破傷乱波・獄極拳】――!!」
凄まじい気と黒い渦巻く風を、圧縮し、赤黒い風が拳に纏わりつく。
球体に似た形は拳を覆い、ボクサーのパンチグローブを似せていた。
それを一発、殴る。
距離は遠くとも、その威力は壊滅級――波紋と遁術・風…更に絶・

秘伝忍法による組み合わせ、殴っただけで地面は削れ、木々はへし折ることなく、無残に散っていく。
その威力はソニックブームなんてものじゃない、超衝撃波。
真影となった飛鳥は素早さも長けているので、何とか躱わせたものの、もしアレをまともに食らっていたらと考えると、絶望でしかない。
「面白え…面白えよお前!!!雑魚だと思ってた奴が強えなんて、嬉しいサプライズしてくれるじゃねえか最高だぜ!俺もそれなりのお礼、返さなくちゃあよォォ!!

絶・秘伝忍法!【天上天下唯我独尊波王乱殺拳】!!」
秘伝忍法と同じく、連発で絶・秘伝忍法を使用してくる黒佐波は、黒虎の化身を浮かばせる。
今にでも食らい付きそうな、野生的な黒虎の化身は大きく口を開き、牙を向け、それが何匹か現れる。
黒佐波が乱暴に殴ると、それに乗じるように黒虎が動き、飛鳥に襲いかかる。
まるで生きてるみたいだ…いや、これはまるで…大道寺先輩に似てる。
戦闘スタイルも、秘伝動物も…少なからず共通点が存在する。
「絶・秘伝忍法――【古式・半蔵流乱れ咲き】!!」
拳が数十個もあるように見える拳の残像…黒佐波の絶・秘伝忍法に対応するべく、飛鳥も本気で応える。
逃げてばかりでは追い詰められる。
仮に逃げたとしても、コイツを止められる人間は近くにいない。
同じバトルファイターの類として言えば緑谷たけだが、洸汰がいると思われてる秘密基地から地雷のような轟音がここにまで響き渡っている。
多分、敵と鉢合わせになって交戦中なんだと思う。
応戦?ダメだ、無理だ、逆に殺されかけない。
なら、全力を持って対抗するしかない。
こちらも負けずと黒佐波に追いつくような斬撃を叩き込む。

息が荒くなる、拳が掠って痛みが鮮明に蘇る。
拳圧がより重く、所々食らってしまい痛みに悲鳴を上げそうになる。
重火器で射撃しているかのように見えるその拳は、一切連撃の速さを落とすことなく、寧ろより速く、より重く、殴りにかかってくる。
「おいいイィ…お前ェ！
こんなもんなのかあああぁぁぁぁ!?!
おッッせえぞオオォォ!!」
一気に押し寄せてくる。
まるで強い波がのし掛かってくるかのような重圧感、荒んだ勢いのある風は、飛鳥の体を次々と傷付け、拳の重圧感で口から酸素が放たれる。
思わず悲鳴を上げてしまい、黒佐波は「終わらせてやらあああァァ!!」と荒々しく、若干興奮で声が高ぶり、獣のような雄叫びを上げて、黒い波動をブっ放す。
強烈な禍い風、圧倒的な戦力、一発だけで重々しい拳を軽々しく連発するスタミナ、此方が攻撃しても、傷こそ見えるが気にもしない様子…そのタフネス。
覚醒の力を持ってしても、黒佐波に追いつくのがやっと…いや、それ以下かもしれない。
飛鳥は岩の壁にめり込み、背中を打ち、背中全身から激痛が走る。
霞んだ目を開きながら、黒佐波を睨みつける。
「楽しくなって来たんだ飛鳥、速く立ってくれよ、なァ。
もっと俺に生きる意味を、価値を、見出させてくれや。
こんな所でヘバる程、じゃねえよな？言ったよなお前、一流の忍になるって――」
「ハァ……ハァ……」
頭がクラクラする。
疲労が蓄積し、思うように動けない…
覚醒とは言っても、訓練による疲労困憊と、受けたダメージが消え失せることはない。

肩が呼吸してるかのような辛さ、痛み、殴られた箇所が今でも焦げ目のようにこびり付き、痛みが生きてるかのように思えてしまう。
対して黒佐波は、飛鳥の秘伝忍法によって所々斬られた切れ目は存在するし、血も流れてるが、そんなの関係ないとダメージなど意に介しておらず、余裕を立てている。
「なんで…貴方は……抜忍になった…の？なんで、敵連合なんかに……そもそも、目的は…なに？」
飛鳥の言葉に黒佐波は薄ら笑いを浮かべる。
拳を下ろし、口を開く。
「あァ、教えてやろうか？
簡単だよ、俺は捨てられたんだよ、忍に――」
捨てられた。
その言葉に幾つか疑問が浮かび上がるが、そんな飛鳥の心情など関係なく話を続ける。
「昔は殺害、破壊活動を専門として来た忍でよォ、下された任務は全部、喜んで受け入れたさ、殺すことが仕事なんて夢だしな。
俺は忍の家系に生まれた訳じゃないが……いるだろ？お前んところにも突然、忍になったヤツ――」
沈黙が続く。
忍の家系に生まれた人間だけでなく、昔はただの一般人として生きて来た人間が突然、何らかの理由で忍になった人間も少ないわけじゃない。
例えば養子の斑鳩。
両親を亡くし、貧しい生活を送って来た詠。
孤児院で育った日影。
家族の歪んだ愛に狂わされた春花。
理由はどうあれ、確かに存在する。
黒佐波が忍になった理由は簡単、幼い頃に個性を私利私欲や喧嘩、興味本位で公共の場で暴れたこと、それがキッカケで彼は家を放り出され、一人で生きて来た。
別に辛くは無かった、寧ろ嬉しかった。家族に愛なんてものは存在

しないし、好き勝手暴れれるなら万々歳だ。
警察やヒーローも手を焼いていたが、黒佐波はまだ幼い子供、逆に暴れることの何が悪いか、彼には解らなかったのだ。
純粋で歪んだ子ども…
そんな危険的な子どもがあるとき、一人の悪忍にスカウトされたのだ。
『ウチに来ないかい?そうすれば君はもっと、強くなれる。
次第によっては、君を必要としてくれる人間もいるかもしれない』
ソイツの名前は『小路』
一般的な悪忍さ。
敵との関わりは極力避ける事…と悪忍業界からはよく言われてるが、敵としてはまだ認定されてない自分なら、教育を施せば悪忍としての大きな戦力になれると、見込んだらしい。
俺は言葉二つで返し、俺は悪忍の道に進んだ。
天賦の才が俺にあったのか、訓練も難なくこなし、テメェらの歳には選抜メンバーの筆頭に立っていた。
雑務やメンドくさいこと、殺生や破壊以外の任務は全部テキトーに他の奴らに押し付けた。
殺すことは全部一人でやって来た。
殺すことも、壊すことも、何もかもやりたい放題…
しかも悪忍だ、他の誰かが庇ってくれるし証拠は隠滅…つまり、殺して暴れても、誰にも文句は言われねえって訳さ。
「俺は悪忍学校を卒業してからか、悪忍集団組織に加入し速くも上層部から任務が下された。
殺しや破壊活動は難なくこなせて褒められてたっけ…
でも、そこからさ…俺が抜忍になったのは――」
ある時、上層部からの伝達があった。
メンバー全員ならまだしも、俺一人…不思議に思った俺は…まァ行くわな。
指定された場所は、名のある上層部が数人…老人が多く、若い野郎が一人…

命雲って名前だったか、ソイツが俺にこう言って来た――
『君は悪忍になる気はあるのかい？殺害・破壊活動以外、君は何の任務も受けてないじゃないか、そんな悪忍はこの社会に必要ない』
挑発か、やる気を引き出すためか、悪忍として矯正させるのか、何がともあれ遠回しに『悪忍として行きたいのなら全ての任務に全うしろ、背けばお前を抜忍にする』と言ってる事に偽りは無かった。
そんで俺は言ってやったさ。
『下らねえ、言ってろ。俺は俺のやり方で生きてくし、テメェらに誠意なんざ払ってねえ、俺は、好きな事出来れば何でもいい――』
ってな、そんで案の定俺はその場で数名の忍にその場で殺しあって、上層部の人間二名くらいか、ブッ殺したさ。

「そんで俺は抜忍になった訳だ。
そういや…俺を拾ってくれたあの小路とか言うヤツも、ある悪忍の忍学生に半殺しにされたんだと、笑っちまうよなァ？」
「……敵連合に入った理由は…？何なの…？」
「俺が敵連合に入った理由はもっと簡単、さっき話したように俺は人殺しがしたい、殺し合えれば何でもいい…
俺が天下の連合に入れば殺し合うことが出来るし、殺すことを仕事としてくれるからもっと楽、つまり…暴れたいんだよ俺は――
俺だけじゃねえ、マスキュラーも、ムーンフィッシュも、鎌倉も、事情はどうであれここにやって来てんだ…分かるか？なぁもう分かったろ？」
殺したいか為なら手段は選ばない。
敵連合に入れば、危機的に狙われる分殺し合いがしやすくなる。
効率的に考えれば、抜忍生活を送るよりもこっちの方がもっと楽しく且つ自由に殺れる。
何たってあそこはイカれた人間が多く集まる組織…もう雑魚集団の犯罪グループなんて生易しいものじゃ無い。
歴とした、カグラ集団の反対に等しい…それこそ、カムイ集団と呼ぶに相応しいものだ。

「駄弁りはもう終いだ…テメェはここで、俺に朽ち果てるんだよ!!」
――来る。
黒佐波の本気――これまでの経緯なら、絶対に連発で絶・秘伝忍法を使用して来るハズ…
なら、自分もそれに負けずと戦うまでだ。
出来るか？
素の自分で手も足も出なかった自分が、黒佐波に勝てるのか？
「ううん、勝つか負けるか…じゃない…コイツを止めないと…皆んなが危ない…！」
仮に自分が負けてしまったとしよう、この化け物を一体誰が止めるのだろうか？
先生？ダメだ多分勝てない。
緑谷くん？これもダメ、今頃無茶してると思う。
生徒たち？これは論外…危険な目に合わせたくない。
プロヒーロー？タダでさえピクシーボブがあっさり、ああも容易くやられたのに、これ以上の敵をどう相手にしろと？
他の忍学生も場所が分からない…なら、勝たなきゃいけないじゃないか。
「終わらない！私はまだ、こんな所で終われない!!」
飛鳥は刀を交差させ、集中力を研ぎ澄まし、軽く息を吐く。
「絶・秘伝忍法――【破傷乱波・獄極拳】!!」
「絶・秘伝忍法――【古式・半蔵流乱れ咲き】!!」
魂を込めた、強烈な渾身の一撃、その拳。
大地が轟く風神を刀に宿らせ、暴風が唸るその刀を、振るう。
刀と拳がぶつかり合い、火花が散る。
黒佐波は一回拳を振るう毎に絶・秘伝忍法の破傷乱波・獄極拳を連発して来る。
何十回も拳を振るうということは、何十回も絶・秘伝忍法を繰り返して来るという意味だ。
飛鳥は一気に押される。
――負けられない、負けたくない、だってまだ一流の忍になってな

い、仲間と一緒にいたい、生きたい。
その想いが、飛鳥を強くする。
「たあああああああああぁぁぁ!!!」
「オラあああああああああァァァァ!!!」
お互い、魂の底から叫び出す。
心も、想いも、力も、何もかも違えど、そこには確かに…輝かしい死の美が存在する。
ズッ――
「絶・秘伝忍法――【波紋・天地轟剛殲滅覇拳】!!」
ドゴオオオオオオオォォォォン――!!!
大地が揺れる。
波紋を大きく集中させ、相手に爆発的な振動を与えるこの技は、今までの秘伝忍法とは比にならないものだった。
大地が大きく轟き、悲鳴を上げているかのように、爆発的な音が、何度も響く。
まるで波が打ち合うように消えない音、地面は亀裂を生じ、今でも壊れかけないものだった。
それを、刀で弾こうとする飛鳥は、あまりにも馬鹿すぎる力に、呆気なく押され負けてしまう。
「アッ!?がああァァああああァァァァあ?!!」
振動が、波紋が、拳が、飛鳥の全てを傷つける。
殴られた箇所には跡が残り、血が滲み出る。一発殴られただけでこの威力、どう訓練したらこんな馬鹿力を発揮できるのだろうか、飛鳥は血まみれになりながらも、必死になって、激痛に涙を流しながら、刀を振るう。
「一流の忍になるんだろ!?俺に負けてたら一人前の忍になんかなれねェぞ!!お前が死んだら、テメェの守るもん俺が全部壊すんだぞ!?!」
嫌だ、それだけは嫌だ…
飛鳥は心に小さく声を出す。
こんなヤツに、大切なものを壊されたら、それはきっと死ぬよりもずっと辛いし苦しいし悲しい…

だから、飛鳥は吠える。
「守る!!!絶対に!守るから!!この命に代えても!皆んなだけは絶対に守り通す!!!貴方なんかに指一本触れさせない!!」
一つ一つ、大きな言葉を発する。
気持ちで負けてたら、まずコイツには勝てない…だから、気持ちも負けず、力でも負けず、コイツに勝って見せる。
殴打の嵐の中、黒佐波のマスクがヒシヒシと音を立て、マスクに亀裂が入る。
不敵な笑みを浮かべる黒佐波は
「――そんなに守りてェなら…

守って見せろやあああァァァ!!!」
最後の力を振り絞り、絶・秘伝忍法を最大限フルに活用する。
拳がさっきよりも激しく、強く、破壊的な拳の嵐が巻き起こる。
殴られただけで骨は折られ、意識が遠のいていく。
まるで、死へと少しずつ近づいていくかのように…視界がぼやけ、血を流し、それでも心を折れることなく、刃を振るう。
「辞められないィ…止まらないいいィィ!!
飛鳥ァ!頼む!強者(オレ)の為に快く死んでくれェェェェ!!」
抑えられない殺意の波動。
辞められない破壊の波動。
止まらない暴走。
「やめられねえんだ!!まだ楽しみたい!強者との命を削る闘い!!戦場でしかその価値を見出せない闘い!
嗚呼!ああ!楽しい…楽しいいィ!
俺の為に、敗者となってくれよ飛鳥ああァァァ!!」
黒佐波も飛鳥の刀が何箇所か体に突き刺さるも、表情一つ変えずに殴っていく。
頑丈な籠手には飛鳥の血がビッシリとこびり付き、相手はもう押し潰されそうだ。

飛鳥は涙を流しながらも、心の中で必死に訴えかけるように叫び出す。
（皆んな！ゴメン、御免ね皆んなぁ…！斑鳩ちゃん、葛姉、柳生ちゃん、雲雀ちゃん…
緑谷くんに、先生、皆んなも…本当に御免なさい!!
――私、約束守れそうにない…立派な忍になるって夢、多分叶えれない…！）
頭の中に浮かぶ人物たち。
どれもこれも皆んな、飛鳥にとってかけがえのない、大切な仲間だ。
（――焔ちゃん、雪泉ちゃん、雅緋ちゃん、忍学生の皆んなも、不甲斐ない私で、ゴメンね…？）
もし自分が死んだら、皆んなは悲しむかな？
緑谷くんや生徒のみんなは泣くかもしれない。
霧夜先生は、鈴音先生のことがあって、心を閉ざしてしまうかもしれない。
相澤先生やオールマイトには迷惑をかけてしまうかもしれない。
斑鳩さんは三日三晩、泣きこもるかもしれない。
葛姉は自分がここにいれば…と自分を責めるかもしれない。
柳生ちゃんは悲しみで、心を閉ざして氷のように冷たい人間になるかもしれない。
雲雀ちゃんも斑鳩さんみたいに泣いて…多分、立ち直れないんじゃないかな、忍になるのを辞めるかもしれない。
焔ちゃんは「まだ勝負は付いてないのに負けて逃げるのか」と鼻息荒くして怒るかもしれない。
雪泉ちゃんは、再び悪に復讐心と憎悪を抱いて、昔よりも酷くなるかもしれない。
雅緋ちゃんは、余り関わったことはないけど、無茶して敵連合に一人で喧嘩吹っかけに行くかもしれない。
じっちゃんは――

「は・や・く！死ねやあああああああアアアア――!!!」

黒佐波の猛烈な雄叫びに乗り、最大級とも呼べる秘伝忍法の限界を超える。

何度も地震が鳴り響き、治らない。

大量の血が流れ、表情を酷く歪ませる。

バキィン

――そして…刀が折れた。

ああ、ダメだ――カグラになんか、なれっこないや…

私は弱い…何も…守れないのかな…

命に代えても守り通したかった…でも、私じゃ何も守れない――

私は…

『じっちゃ～ん、じっちゃん！』

意識が遠のき、消えていく中、僅かな光とも呼べる光景…

走馬灯のように浮かび上がる。

これは、まだ自分が四歳の頃だ。

当時は幼く、じっちゃんも少しだけ若く見えた。

『おおっ、飛鳥か！なんじゃ？』

その頃のじっちゃんはまだ忍として現役時代、名を輝かせていた。

修行をしていたのか、刀をしまいタオルで汗を拭う。

『じっちゃんのからだって、どーしてそんなにぼろぼろなのー？』

上半身裸の半蔵は、体に古傷が絶え間なくあり、ボロボロだった。

そんな半蔵に疑問を持った飛鳥が、純粋な眼差しを向けて問う。

『ああ、これか…

これはな、ワシの勲章みたいなものじゃ』

『くん…しょー？』

『そうじゃ…忍とは常に死が隣り合わせ。敵・味方問わず死ぬ時は一瞬…ワシはそういう現場を幾度となく見てきた――』

その時のじっちゃんの目は、とっても悲しい目をしていた。
大切なものを失った時の目…なんだか不思議とこっちも悲しく見えた。
『だからワシは決めたんじゃよ…
仲間のためなら安全な所だろうが、危険な所だろうが、先陣を切って突破しようとな。
ワシには、守れなかった大切なものがある…その時はとても辛くてのぉ、自分が死んだと思ってしまう程に、辛く悲しかった。
この傷たちはそんな戦いで付いた傷…その分だけ守った仲間がおる――だから、これはワシにとって勲章なのじゃよ』
じっちゃんはニカッと笑みを浮かばせ、ガッツポーズを取る。
守って来たものがあるからこそ、傷がある。
それは決して恥じることではない、それこそ、強さの証。
しかし当時の自分は何がなんなのか分からずといった顔で、口を開けて呆然としていた。
『はっはっは!まだ飛鳥には難しかったかのう!』
可愛らしい孫の髪をくしゃくしゃと乱暴に撫でるじっちゃんは、優しい笑顔で満ち溢れていた。
『お前がもう少し大きくなれば、分かるようになるかもしれんな…
何かを守る時、必要な力は、刀だけでも、盾だけでもない…
原点というものがお前を強くしてくれる。本当の意味を知ったその時、人は強くなれる。きっと、お前を…もっと先へと導いてくれるハズじゃ――そう、それは…』

――刀と盾。

「そうだ、じっちゃん…私は…」
「――あァ?」
――伝説の忍の孫なんて関係ない、大切なのは刀と盾…思い出した、これが自分の…忍の原点だ。
途端、風神が折れた刀の先を補うかのように形を作り出し、欠けて

た刀が風神によって元に戻る。
「――んだコレッ？」
優しくもあり鋭い風は、まるで刃物のようだ。
飛鳥の身に纏う風は、彼女を優しく包んでくれる。
――コイツ…さっきまで瀕死だったろ？何で、アレだけ食らってまだ動けんだよ!?しかもコイツさっきより闘気がバカみてえに上がってきて…？
「もういっぺん…潰れろおおおおおオオォォォ!!!」
黒佐波は荒々しい声で殴打の嵐を巻き起こす。
殴れば殴るほどに、波紋は大きく、風は強く吹き荒げる。しかし…
「無駄だよ、黒佐波…貴方の負けだよ!!」
飛鳥の刀に力が入る。
その力は真影…覚醒の域を超えていた。
押される刀に黒佐波は焦りの顔色を浮かべる。
「ッ――そだろ?!有り得ねえ！俺が、んな…馬鹿な！忍学生だろお前！お前ェェ!!」
焦りのあまり、言葉の原型が所々保てなくなり、更に追撃と連打しまくる。
嫌だ、嘘だ、こんなガキに俺が負けるハズ――
「絶対に負けるもんかああァァァ!!!」
しかし黒佐波の拳は、飛鳥の刀の一振りによって全て弾かれ、衝撃が強く体制を崩し大きく仰け反る。
あの絶対強者の黒佐波が、簡単に仰け反ったのだ。
「行くよ！これが、私の原点！
生・秘伝忍法――【飛鳥流・風神乱れ舞い】!!」
風神が、天罰を与えんとばかりに、強靭な風は黒佐波の体全身を大きく傷つける。
飛鳥の姿が見えない…それは、風に紛れ、速いあまりに目で追えな

いのだ。
何処にいるかも分からなければ、捉えることも難しいだろう。
回り込むように、体全身を捌くように、斬り刻んで行く。
「ッ!?あああああァァッ痛ッつあああぁぁぁ――!!」
「生・秘伝忍法――【天下無明・二刀繚斬】!!」
天下に名を馳せたあらゆる亡き忍の魂が、一つになるよう刀に宿る。
魂が込められた斬撃が飛び、黒佐波に襲い掛かる。
「終わりだよ!これが、私の忍の道だあああああァァァァ――!!」
その斬撃に、黒佐波はなす術なく斬られ吹き飛ぶ。
斬ると同時に、打撃…似た忍法。
斬られた傷口に打撃を食らい、痛みが二重になって襲い掛かる。
黒佐波は激しい雄叫びを上げながらも、岩の壁に叩きつけられた途端、声を途切らせ、口から体力の血を吐き出す。
ピシリッ――!
マスクは嫌な音を立て、崩壊し素顔が明らかになる。
顔には筋一本の刀傷が斜めに残っており、壁に埋もれ白目を向いたまま、意識が途絶える。
上忍以上…一流の忍が相手にする黒佐波を、飛鳥は倒したのだ。
そんな相手に、飛鳥は見事、勝利を掴んだ。
「やった…やったよ…じっちゃん…皆んな、私…守れた……」
飛鳥は、乱れた呼吸を整える。
忍の定めは死の定め――
影に生まれて影に散る。
忍の命は儚い。忍の命は報われない。
それは誰も知らない名も無き花。
――本当の影は、誰にも見られずに知られずに、人を支えて守って生きている。
飛鳥の勝利も、黒佐波を倒したことも、皆んなは知らない…この場には飛鳥しかいないのだから。
でも、それでも良い…それで皆んなの命を救えるのならどうだって

良い。
これこそ、その姿こそ正しく…かつて忍の象徴と謳われるに値する。
本物の忍――
刀と盾――
守る力があれば、人を救える。
戦う力があれば、人を倒せる。
対立する力にこそ、欠点がある、それを補うものこそ、刀と盾。
その意味を理解した時人は強くなれる…
全てを斬り捨てる刀――
黒佐波は強かった、守るものが無ければ失うものはない…ただ己の欲望を満たすが為に、幾度となく振り下ろしてきた。
そんな彼には強く、弱点が存在しなかった…
だからこそ、黒佐波は負けたのだ。

守る力、盾を持たなかった彼は、負けてしまったのだ。
そこに歴然とした差が生まれ、彼は飛鳥に勝てなかった。
それが生涯、彼の一番の致命的な弱点として遺るだろう…
弱さを受け入れてこそ、本当の強さを得ることが出来る。
人は最初っから弱い生き物だ…強ければ生き、弱ければ死ぬ…確かにそうなのかもしれない、否定は出来ない、だが刀と盾の意味も、否定出来ないのだ。
黒佐波は知らない、知らなかった…
弱さとは恥じないもの…恥じるべきものではないことを…
弱さは罪ではない、本当の弱さとは、何もしず怠慢に嘆くもの…
弱さも、強さの一つ。
弱いからこそ、人は強くあろうと生きていく。だからこそ生き物は皆強くなる。
弱さあってこその強さ…
黒佐波はもしかしたら、弱さを受け入れれば、自分が弱い事を証明

されるのが嫌だったのかもしれない…それを恐れてたからこそ、否定して来たのかもしれない。

これが、飛鳥――オリジン。

１０１話「反撃・逆転」

『あの女を殺せ！上層部からの命令だ！』
『クソッ！何処に姿を眩ませた…流石は忍の家系と言ったところか……幼女とはいえ逃げ足の早い…！』
遠い記憶…
思い出したくもない、血みどろな、暗く、殺伐とした記憶――
『見つけ次第連絡しろ、何をしやらかすか分からんからな』
嫌だよ、どうして皆んな私を、殺そうとするの？
嫌だよ、私だって人間なんだよ？生きたいよ…そんな、そんな酷いこと…しないでよ。
『半蔵からは止められてるとは言え…流石に上層部の命令には背けれないからな、子どもとは言え、心を痛めるな』
やめて、お願い…殺さないで――
私は…まだ……
『ッッ！見つけたぞ!!』
やめて、ダメ、嫌…イヤ!!
『やめてええェェェェェ――――!!!』

そこから、記憶は閉ざされた。
暗く、闇に覆われていて、この先の事は何が起きたか分からない…
幼い頃の記憶だからか、曖昧としている…いや、思い出そうとする度に靄が掛かった感じで、よく覚えてない…
なんで、自分が今もこうして生きてるのかすら、分からない…
誰かが救けてくれた、訳でもない…
私は、救われようのない…この世にいらない人間だ…だから、誰かが救けてくれる、なんて事は無いはずなのに…
何でだろう、何だろうこの胸にトゲが突き刺さったこの、痛々しい

感覚は…
時々…この夢を見ることがある…
けど…今は…

「――き…――漆月？」

「――ッ！」

気に掛ける黒霧の言葉に、漆月は意識が戻る。どうやらボーッとしてたらしい…
夢に見る光景が、まさかボーッとしてただけで思い返すなんて…前まではこんなこと、無かったのに。
黒霧は首を傾げて此方を見つめている。
「どうかしましたか？さっきからボーッとして…」
「あ～…ゴメン、何でもない…ちょっと考え事してた…ハハッ…」
「？そうですか…？」
「大丈夫、気にしないで」
何事もないように、何時もと変わらず笑みを浮かべ手を振る漆月、黒霧はこれ以上何も詮索しず、鵜呑みにしてグラスを拭いている。
「それより、死柄木は…？」
「ああ、彼でしたら――…」
ガチャッ…
扉が開く音が鳴る。
二人は話をやめて、自然と意識と視線をその先に向ける、黒いパーカーを着こなしながらも、写真に手を握る死柄木が、何事もなく普通

に、平然と、歩み、バーの席に座る。
「お帰りなさいませ死柄木弔」
「……」
黒霧の挨拶など軽く無視をする死柄木は、資料をバーカウンターに置き、ゆっくりと見渡す。
リストには数々のネームが書かれており、資料の横には二枚の写真が置かれている。
最初は緑谷と飛鳥かと思っていたが、よく見るとその写真の人物は、体育祭で一位を取った凶暴な男、爆豪勝己と、半蔵学院の忍学科所属、一年の雲雀の写真が置かれていた。
「死柄木、何しに行ってたの？」
「先生からの資料…前から貰ったヤツ、もう一度見返そうと思ってな…持ってきたんだよ」
死柄木は目を細め、資料を見つめていた。
それは優先殺害リスト…そして名のある敵ネームと抜忍…忍の力を持つ人間…数々の人物が書かれていた。
そこには、まだ見ぬ人物…見たことのある人物が、聞いたことがある名前が載っていた。
恐らく、今回の目的が達成した後のことを考えてるのだろう…
死柄木は今、仲間集めに専念している…前までは、癇癪を引き起こしていた彼だが、帰ってきた途端は驚いた…
死柄木は平然と、何事もないように、普通に笑っていたのだ。
別に笑うなとは言わないが…あんだけヒーロー殺しに苛立ちを覚えていた死柄木が、嘘のように、その怒りは消えていたのだ。
黒霧の言ってた通り、彼は自分なりに納得する答えを見つけたんだろう――
ただ一つ、問題なのが…
「ねェ死柄木、開闢行動隊…上手くいくかな？」
「…ああ、そうだと良いな…」
開闢行動隊。
敵と忍が結束を固め、林間合宿に攻めこむ為に作られたメンバー

だ。
死柄木は軽い笑みを浮かばせる。
「敵連合開闢行動隊……素性はどうであれ、アイツら充分に上手く使える駒だ…
失敗しようが成功しようが関係ない…組織としては利益になることに変わりはないからな…」
ここに来た。
――という事実が、ヒーロー社会と忍社会の二つに大きくヒビを入れる。それが崩壊へと繋がることになる。
目的はオールマイト打倒なのには変わりはない…だが、それは今じゃなくても良い、いつか倒す、その為には準備が必要だ。
ゲームと同じ。
自分が主人公ではなく、プレイヤーであるべきだ。そしてあらゆる駒共を使うことで、相手の戦力を削ぎ落としていく。
格上を切り落とし、オールマイト（ラスボス）に挑む。
これらの行動は、ストーリーみたいなものだ。
それに駒の使い方も充分に分かってきた…
ヒーロー殺しの出張に感化されたもの、純粋に意識を引き継ぎたい者は、それらの思念で働かせれば良い。
暴れたい奴や理屈の通じない敵はもっと簡単、適当に暴れさせれば問題ない、ただ今回目的とするあの二人は殺されては困るので、出来れば殺害リストに載ってる人間を率先して相手にして欲しい。
社会に不満に思う人間は、死柄木の命令を聞いてくれるので、逆に助かる。
一番良い最終目標として言えば、殺害リストの人物たちをまとめて殺し、目標達成ゆえに全員無事に戻ってくる事…
だが相手もそう甘くはない…物事が都合よく上手く行くとは限らないので、これは仮としての最終目標…
きっと想像から察すると、駒は何名か堕ちる…
最悪は、失敗…全滅。
だがそれはあり得ないだろう…なんたってアイツらは経験豊富、強

力なチカラを持つ狂人達だ。オールマイトがいないと言う情報も上がっているし、何ら心配はない。
「使える駒は、ドンドン使っていこう…」
「死柄木…抜忍は駒じゃないよ…？上層部みたい…」
「彼らは捨て駒と…？」
「バカ言えお前ら！俺がそんな薄情者に見えるか!?奴らの強さは本物だ！
特に抜忍（アイツ）らは希少価値だ、優先的には生き残れって命じてる！」
抜忍は他の敵と違って価値が違う。
行方を眩ませてるし、ヴィランの数よりも低いと推定されてる程だ。
こっちは敵十人、抜忍は五人、明らかに抜忍の方が少ない。
本当はもっと戦力を増やしたかったのだが、調査報告によって仕方なかった…
狙い（チャンス）なら今しかない。
出来れば忍は優先的に生き延びて欲しい…今回、林間合宿だけが敵じゃない…
この事件をキッカケに、上層部から派遣された忍達が、ヒーローと共に駆けつけにくるハズ…
敵はヒーローと、抜忍は忍と対立して欲しい…唯一、抵抗する術はそれしかない。
「アイツらは皆んなバラバラな方向に向いている…
だがそれと同時に信頼できる仲間さ…とにかく、成功を祈ってるよ――」
これは社会を壊す大きなキッカケだ、連合と絡む事で、マスコミはバカみたいに食らいつく、メディアに流されることで、他の敵と忍はもっと、飛躍的に戦力に加わり、組織拡大も夢じゃない…
これらの全ては、オールマイトに繋がる。
今までも、そしてこれからも――

「取り敢えず…これで、良しっと……」
紐で再び髪を纏め、折れた刀を腰掛けた鞘に納める。
黒佐波を倒した飛鳥は、気力を失うも、根性でなんとか意識を維持させる。
血がポタリと地面に垂れ落ち、真っ赤な血に染めながらも、視線を黒佐波に向ける。
見た所、気は失ってるし、立ち上がる体力も無さそうだ…
大の字になって倒れてる彼、多分死んでないと思う、相当タフだし、それに相手がどんな忍だろうと、殺生は働かない。
「生伝忍法…なんて知らないし、咄嗟にその名前を叫んだけど……もう、使えそうにないなぁ…」
緑谷と同じく、火事場の馬鹿力によって発揮したのだろうか、あの力がもう一度出せるのかと言われて縦に頷く事は出来ない…
ぶっちゃけ反動が強すぎるこれは、とてもじゃないが思った以上に体の自由が効かない。
「思った以上に……体力使っちゃった……」
しかし驚くべき事実がコレ。
敵連合のメンバーは恐らく何人かいるハズだ…それなのに、たった一人でこの選抜メンバー筆頭級の敵と戦わされた。
それがどんな意味を表すのか…こんな化け物が何人もいればどうなる？
自分は一人相手にするのがやっとなのに、こんな実力派揃いが向こ

うにもいると考えると、恐怖以外に何でもない。
最悪、本当に多くの生徒が殺される危険性は高い。
「いかな……くちゃ……」
ヨロヨロの体に無理に力を入れて立ち上がり、足を運ぶ。
こんなのに皆んなが戦わされてると思うと、心が裂ける程に痛くて仕方がない。
飛鳥は朦朧とした意識の中、必死に前へ進む。
もうダメだ…体の限界が…でも、皆んなが……
フラッ――
体の自由が効かなくなり、飛鳥は前のめりになって倒れていく。
意識が良くとも、体の自由が効かないのであれば…もう……
ガシッ――
誰かにキャッチされた。
体を、支えてくれた。
霞む視界が、晴天のように広がる。
意識を支えてくれた人物へと視線と共に向ける。
「だ、だい…じょう…ぶ…？」
自分と同じく、惨たらしく見てるだけで痛々しい…そんな気さえ思えてしまう。
血まみれの緑谷が、飛鳥を支えていた。
いつの間に来たのか、気付かなかった。
同じく、背中には洸汰が心配そうな眼差しで飛鳥を見ていた。
どうやら洸汰くんは無事らしい。
「あ、ありがとう…緑谷…くん……」
戻って来てくれたのは良いし、感謝してるが、緑谷も重傷…言葉で言い表せない傷を負っている。
――緑谷くんと当たった敵も、強かったんだ。
飛鳥は黒佐波を、緑谷はマスキュラーを倒した。どちらとも負けず劣らず手強かった…
圧倒的な怪力を誇るマスキュラーに、絶・秘伝忍法を軽々しく連発多発使用する黒佐波…

今回の敵は、比にならない。
雑魚の集まりなんて集団の面影はもうない、イかれた人間どもが集う、驚異的な犯罪連合…
「飛鳥さんも……酷い、重傷だね……」
緑谷は言葉をうまく紡ぐように呟き、壁に埋もれてる黒佐波に視線を送る。
見た感じ埋もれたまま気を失っている。
動く気配など微塵たりともないことから、暫くは放置してても大丈夫だと思う…
地震の騒動に不安を抱きながらも駆けつけて来たが、飛鳥が無事なことにはホッとしている。
「それは…こっちのセリフだよ……でも、強い……敵の目的も聞けなかったし…」
「ああ!それの事なんだけど……」

ボボゥ…。
蒼き炎は微かな音を立てる。
合宿施設の前で燃えてる炎は、虚無と化し消えていく。
少女は刀を持ったまま、合宿施設そのものを斬ろうと腕を振りかかるも――
「……あァ、大人しく燃えて灰になれば良かったのですが…まさか、至近距離でアレを避けますか…

――イレイザー・ヘッド」
自分に敵意の視線を感じた少女は、手を休め横上に、施設の屋根に避難してた相澤を睨みつける。
呆れた目線、それは鬱陶しいという意味も込めた冷たい、眼差し。
「ったりめぇだ、プロを舐めんな――」
少女は矛先を相澤に向ける。
刃先…刀から蒼炎がブワリと炙り出る。
相澤は早くも彼女の能力を阻止するべく、抹消の個性を使用する。
目が赤くなり、乾燥するが関係ない…これで異能は使えないハズ――
ボオオゥ――!!
しかし、相澤の魂胆は少女には読めていたのか、躊躇なく炎を出す。
相澤が抹消してるにも関わらず、少女は炎を出すことが出来た、それがどんな意味を表すのか、相澤には直ぐに理解出来た。
「ッ!?消えねえ…ってことは――まさか…!」
「そう、そのまさかです――」
抜忍。
その答えが頭の中で一直線に辿り着く。
相澤も伊達に教師をやってる訳ではない、これくらいの推理は予想つく。
相澤の個性、抹消は見たものの対象の個性を消すことが出来る。
しかし、彼女は炎を出した…と言うことは、これは個性出ないことが証明できる。
つまり、忍術。
その答えが瞬時に辿り着くのは、当然なのかもしれない。
(忍者は忍術を取得する反面、個性因子を消す…!忍達が厳しい修行を積むのも、個性因子を消すためのもの…
厄介なものだな…!)
相澤は己の可能性を出来る限り、幅広く活用するべく近接戦闘を磨いて来た。
個性を消す。

相手の個性を使えなくすれば、直接近接戦で戦えばいい話。
相澤の動きはどれもこれもプロ並みだ、だからこそ、強いのだ。
しかし、今回ばかり例外がある。
秘伝忍法と言った忍術は個性ではないため、消すことが出来ないケースは、骨が折れる。
相手がどんな忍術を使ってくるのか…いやそれ以前に、相澤の個性が効かなければ、忍にとって相澤はただの人。
下忍相手なら相澤一人でもなんとか太刀打ち出来るだろうが、相手が手練れであれば話はさらに別。
つまり…
――死ぬと言うこと。
「――させぬわ!!」
「――ッ?!!?」
ドスの利いたデカ声に、少女と相澤は声の主に視線を向ける。
しかし少女は視線を向ける前に、思いっきり壁にめり込む。
ドスンッ――と利いた手応えのある音、少女は殴られ壁にめり込み口から血を吐く。
痛みに表情を歪ませながら、睨みつける。
「ブラド!」
ブラドキング。
B組担任の彼が、相澤の声に反応し駆けつけに来てくれたのだ。
少女は痛みなど気にしず刀を振りかざすも、ブラドの拳から赤黒い血が流出し、スライムのように彼女の手を拘束する。
解けない、力を入れてもビクともしない。抵抗しようとするも、ブラドは更に拳に力を強く入れる。
「イレイザーの抹消で消せなかったと言うことは…
お前は…忍か!一人でノコノコやってくるとは…考え無しにガン攻めとは、随分と我々を舐めてるな女ァ!!」
ブラドキングの個性は『操血』
血を自由に操ることの出来る個性、血の量によって応じる。
相手の身動きを防ぐ一手にも使える。

「考え無し…ですか、それは貴方達が言えることでしょうか…？」
少女は激痛に悶えながらも、言葉を紡ぐ。
気味が悪い程に落ち着いてる彼女の冷静とした姿勢…態度、口調…引っ掛かる。
「もしかしたら、貴方達はもう既に掌の上で転がされてるかもしれませんよ？
今こうして、貴方達が立ち止まってる間にも、生徒達が殺されてる…なんてこと、考えもつかないでしょう？」
「――ッ！貴様!!何が目的だ！」
正義感溢れる熱血漢のブラドの頭に血が上る。相手の安い挑発だと知っていながらも、本性が自然に許すなと告げている。
「言えずじまいになれば今度は恐喝ですか？
誰もが夢見るヒーローも今じゃ笑いものですね、こうして見ると、ヒーローに憧れ、尊敬する一般人がどれだけ無能な愚民なのか、ハッキリと分かりますよ――」
時間稼ぎ。
少女の目的はこれだ、拉致が明かない――何より相手の筋が読めない…相澤は冷静になりながら彼女が何をするのか、どんな行動を取るのか…考えていた。
挑発してからの忍術？
時間稼ぎとは言え、呆気なさ過ぎる。
使い捨ての駒とも考えにくい…
何よりコイツらが何者で、何故この林間合宿の事がバレてるのか、第一目的は？
数は？目的は？位置は？
隅から隅まで全て謎、それにコイツがそう簡単に吐くとは思えない…さっきからブラドを挑発してるだけで、戦う意思すら見せない。
「先生！」
ふと聞き覚えのある委員長の声に、相澤とブラドは反応する。
飯田に他にも無事な生徒達が数名…全員無傷な事に安堵の息を吐くも、数が少な過ぎる事にやはり心を痛める…

他の皆んなは交戦中…のケースが高い。
当然、少女も…彼女は不敵な笑みを浮かべて生徒達一人一人確認するように視線を送る。
――おや、どうやらあの中にはターゲットはいませんね…
それどころか、忍学生もいないとなると…森の中が高い。それかマグネかスピナーが足止めしてる可能性もあり得ますね…
少女は諦念したのか溜息をつき、体の力を解く。
(となると、この体はもう要りませんね…大分やられましたし、流石はプロだと褒めるべきでしょうか――)
「わっ!敵?」
尾白が皆んなの声を代表するように叫ぶ。
ヘラヘラとした薄ら笑いを浮かべる少女は、もう狂ってるとしか見えない。
根は十分冷静なのだが、こうして血が付着してる状態で見ると怖い。
「取り敢えず、貴様をこのまま拘束する!足まではやらん、ブタ箱に入れるのに大変だからな…!」
「ふふふ、誠に残念ですがそれは無いかと……」
瞬間、皆んなは目の前の光景を疑った。
なんと、少女の腹には穴がぽっかり、ブラドの拳と同じサイズの大きさに空いてるのだから。
一同は驚き且つ唖然とする…
そして少女の体は次第と原型を保てずドロドロの、泥のように消えていく。
最後に「では、さようなら…」と言葉を遺して…
「相澤先生…今のは?」
「……お前ら取り敢えず中入ってろ、ブラドはコイツら頼んだ…」
相澤はそう呟くと、火と毒ガスが充満してる森に視線をやる。
胸騒ぎがする…最悪な事態が…起きかねない……

「ハァン!?蒼ちゃん弱！瞬殺てマジかよ！ダッセェなオイ！カッコ良かったぜ!!」
火事で黒煙が巻き起こる森の中。
薄らと浮かぶ不穏な人影が三人…
一人は蒼い短髪の少女、もう一人は黒髪が四方八方のギザギザした黒髪の男、そして黒いラバースーツを縫っている灰色の肌に三白眼の目つきをした男性が、燃える森の中に佇んでいた。
陽気な性格をした男性は、「蒼ちゃん」と呼ばれる女性に親指を下に向けて煽ったり励ましたりと、反語で話している。
「この…私が？まあ、私が何処ぞの馬の骨にやられたかは存じませんが…数の暴力でやられた…のであれば仕方ありませんね…耐久力は弱いと聞いてますし…」
「違えしー！そうさ負けたんだよ！数の暴力って俺好き！そう言うのマジでサイテーだよな！弱く無いさ、強いんだよ！」
「……オイ、煩えぞテメェら…」
茶毘が鬱陶しそうな声を上げ、二人は黙り込む。
「『蒼志』がやられたって事は…プロヒーローか忍学生のいずれかだろ…
まあ良い、今度は俺を増やせ『トゥワイス』、プロの足止めは俺と蒼志だけで充分だ」
「テメェら雑魚どもが何度やったって同じ事だっつーの！
良いぜ任せろ！」
この男の名前はトゥワイス。

一見陽気でギャグ満載…巫山戯てるように見えるが連合の中でも欠かせない重要なメンバーの一人だ。
彼がいるかいないかだけで劣勢が決まると言っても過言では無い。
荼毘が火で森を燃やし、トゥワイスは荼毘を増やし、蒼志は周りへの気の察知及び、二人のボディーガード。つまり二人の護衛だ。
敵は恐らくこの火事の騒動に駆けつけに来るはず…相手が手練れの忍やヒーローが来れば厳しい…
尤も、此方には『秘密兵器』がいるので万が一の時があれば呼ぶが…
敵も一筋縄ではいかない…強敵だらけだ。
だからこそ、お互い敵は敵同士協力しあう…

暗闇の木々の中、広間に向かう相澤は息を切らし、呼吸を乱れながらも我武者羅に走り続けていた。
マンダレイは広間に敵が二名いると言っていた、二人の実力なら簡単にやられる玉ではないのは充分承知…だが、それでもどうにも不安で仕方がない。
この治らない胸騒ぎ…嫌な予感しかしない…
「取り敢えず…生徒が全員無事であることを祈るしか…」
その間に、もう生徒が殺されていれば?
蒼志の言葉が相澤の頭の中を遮り、静寂な水辺に一滴の雫が落ち、波紋が生じるように、相澤の心は、不安に打たれていた。
しかしそんな不安も、僅かに和らぐ事になる。
「「相澤先生!!」」
「!?」
二人の重なった声に、相澤は自然とその視線の方角に向ける。

静まり返った森の中、二人の大きな声で誰なのか直ぐに分かった。
緑谷と飛鳥か、と相澤は声をかけようとするも、二人の姿を見て一瞬で硬直し、不安に染まる。
「……おい」
「相澤先生良かった！無事だったんですね……」
「あの、洸汰くんお願します！水の個性です守って下さい…宜しくお願いします…！」
「おい…」
「では僕もう行かないといけないんで！」
「わ、私も！他のみんなが心配だから行かないと…」
「オイって!!」
相澤の怒号が響き渡る。
二人は思わず立ち止まってしまい、ぎこちない感じの顔で相澤を見つめる。
「……お前ら、何だその傷は……」
「えっと、これは……」
相澤が怒るのも無理はない。
あんな短期間で、二人の姿はもう直視できない程の重傷を負わされてるのだ、ましてや大切な生徒の無残な姿を見て、相澤が落ち着いていられる訳がない。
洸汰はそんな相澤の足を掴み、緑谷たちに心配の眼差しを向ける。
明らかにこの二人は闘って良いなんてレベルじゃない。
「お前…また闘ったのか…
飛鳥、お前忍学生とはいえ、任務外や無許可で闘ってはダメだって、担任教師から言われてなかったか？」
忍学生も同じだ。
無許可で相手と戦闘を交わしてはいけないと言う掟がある。
悪忍は自由なのだが、最近は抜忍たちを炙り出すため一時は中断になってる…
ヒーロー殺しの事件では上層部が決めた事なので問題ないのだが…

「す、すみません…でも……！」
行かなくちゃ。
しかしその言葉は相澤の言葉に遮られた。
「だから、マンダレイにこう伝えろ――」

喧騒に溢れ返る広間。
先程の地震から数分後の出来事、マンダレイと虎はスピナーとマグネと戦っていた。
あれから今になっても状況は変わらず、どちらに優劣が転がるか分かったものではない。
マグネには何故か物理攻撃は効かないし、スピナーは凶器を振るうだけで個性を使ってきてない…
見目がトカゲだからか、異形型の類に入るのだろうが、異形型だからこそ、その個性の特徴があるもの…しかし、それでもスピナーはろくに個性らしいものを使用してきてない。
それは相手にするのに個性は不必要という彼なりの余裕か、はたまた無個性に近い個性か…何にせよ、この状況をどうにかしない限り、生徒たちの安否の確認が取れない。
「さっきの地震といい…本当にもう…！」
マンダレイは怒りを孕ませた声で舌打ちする。
洸汰のことやラグドールのことが心配だ…
洸汰は緑谷に任せたので信じるしかないが、ラグドールは別だ…
さっきから何度も連絡を試してみるも、返信が来ないのだ。

普通なら直ぐに返してくれるのに…
「余所見してんじゃねえよ贋物が!!」
「ッ!」
刃物を束ねた大剣を、軽々しく振るうスピナーは、殺意を含めた目付きで襲いかかる。
まずい、間合いを詰められた…
同じ手は多分喰らわない…
「何がヒーロー!何が忍!
良いか?テメェらのような社会の汚染汚物になり兼ねねェクズどもはな、此処で全員!俺たちに粛清されて死ぬんだよおおォォ!」
若干、小物臭いセリフだが、マンダレイも苦戦する相手となると相当な実力者なのだろう…
一方マグネは受け身をとってるだけで攻撃はして来ない…
それは虎のキャットコンバッツで相手に余裕を与えない為でもあるのだが…
怪力を誇るあの虎の猛攻を物怖じせず、オカマの笑みを浮かべてるあたり、恐怖でしかない。
「さァ!とっとと死にやが――」
「――秘伝忍法【二刀繚斬】!!」
バリィン!という金属の弾ける音、何かが崩れたような音が広間に響き渡る。
黒い影が、斬撃を飛ばし、スピナーの武器を壊したのだ。
「れえェッ――!?」
突如、破壊された大剣はスピナーの素っ頓狂な声と共に、凡ゆる刃物が降り注ぐ。
まるで雨のように降り注ぐ刃物は、スピナーやマンダレイ…この場にいる人たちには当たらなかったが、それでもスピナーの自慢の武器が壊されたことは、大きな戦況を与えていた。
「ギャッ――!?」
同じくマグネは何者かに後頭部を蹴られたのか、体制を崩し前のめりになって倒れる。

虎の猛攻は一瞬で止まる。
「ムッ…!?」
「君ら…」
「ちょっ…何なのよ一体!?」
「き、貴様は…!」

「――虎にマンダレイ、洸汰くん無事です！」
緑谷出久。
マグネの後頭部を蹴った本人でもある。
飛鳥はスピナーの大剣を。
突如現れた二人の連携に敵も僅かに痛手を喰らい、バランスが崩れる。
「マンダレイ！相澤先生から伝言、皆んなに伝えて下さい！

『一年ヒーロー科、全忍学科、全生徒は個性及び忍術による戦闘を許可する！』
その伝言が、相澤の許可が、生徒たちの希望になる。
既に戦闘を始めた生徒もいるが、それは緑谷や飛鳥だけの話ではない。
いつ迄もやられてばかりじゃない、反撃だ。
この最悪な状況を打破するのは、これしかない――
責任は全て、相澤が負う。

１０２話「救けるからね」

相澤の許可が降りてから数分後、この場にいる全ての人間にマンダレイの声が頭の中に流れていく。
生徒たちは戦闘、及び個性の使用を許可する。
また、生徒のかっちゃんと雲雀は直ぐにこの状況から撤退すること。出来るだけ交戦は避けること――
様々な疑問を浮かべるもの、苦痛の表情を浮かべるもの、それぞれの生徒が動き出す。
一方で緑谷と飛鳥はヒーローたちに止められるも、先を急がんばかりに森の中へ突っ込んで行った。
マンダレイも虎も、無駄に詮索するよりも今相手をしてる敵を優先し、中断していた戦闘を再び開始する。

その一方で、今一番に最悪な状況に陥ってる三人組は…
「んのクソ野郎がああァァ！かっちゃかっちゃ煩えんだよクソデクの仕業かオイ！」
肝心の爆豪は憤慨に満ち溢れていた。
怒り荒ぶる爆豪は、掌を爆破させ吠えている。
「らしいな…敵のやろう、爆豪が狙いだそうだ…それと雲雀もか…」
轟は氷結で必死に氷の壁を何層にも張り巡らせながらも、爆豪に視線を傾ける。
美野里は半泣き状態で身を縮ませながらも、戦う決意の目は見受けられる。
「んなもんクッソどうでも良いんだよ!!ぶっ飛ばしゃ――」
しかし…

ザシュッ――！
「痛ッ――!?」
爆豪と轟というクラスの最強一、二位を争う強者であろうと、エリート校の死塾月閃女学館の忍学生であろうと、今の相手は手を焼く相手だ。
手を焼く…なんて生易しいものではない。
相手は宙に浮いてる。
手足を使わずどうやって？
拘束具で縛られ固められてる男の口から強靭で、伸縮自在の歯を伸ばし、地面に突き刺すことで体を支え宙に浮いてるのだ。
その歯は斬れ味もよく、そこらのナイフとは違う歯は、轟の氷の壁をいとも容易く貫き、爆豪と轟に襲いかかる。
服に切れ目が生じ、血が流れる。
美野里は轟の後ろに隠れて攻撃するチャンスを伺うも、相手は一瞬の隙も見せない…
爆豪は腕こそ落ちてないが、刃物の歯に腕を掠めて血が流れ、手で押さえる。
「うわァ…血…」
「んの野郎…チョコまかとヒョロヒョロしてそうな雑魚野郎のくせに…」
強い。
今相手にしてるのは人を殺す手練れのプロだ。
美野里はバケツに入ってるボールを思いっきり投げつける。
光を放つボールはその男に飛んでいくも、一点集中するように刃物の歯はボールを貫く。
遠距離だからか、ボールが爆発しても本人には届かない為、無傷に終わる。
「つ、強いし近付けない……敵さんって、こんなに怖いの…？」
「ねェ～…ねェ～…」
「！」
美野里が落ち込んでる中、男は三人に向かって口を開く。

そしてこう言った――

「皆んなの、肉、見せて――」

脱獄死刑囚・ムーンフィッシュ。

死刑判決を下された男、監獄を脱走し一時期ニュースで流された殺人鬼。

全てが、何もかも狂ってる狂人だ。

マスキュラーや黒佐波と同じく、人を殺すことに快楽を覚え、血に染まった肉を見ることに興奮を覚える、理解し難いイカれた人間の一人だ。

人を殺すことなど彼にとっては日常茶飯事、遊びでしかない。

つまり彼にとって殺す、というのは、遊ぶ、という言葉に値するのだ。

一人称が僕であり、殺すことに何の悪意も持たない、遊び感覚で人殺しする狂人、まるで歪みを持ってしまった子どもだ。

美野里とは偏り歪んだ方向性だろうか、純粋な人間もここまで来ると狂気でしかないし、恐怖でしかない。

どうしたらここまで歪んでしまうのだろうか…

否――理解出来ないからこそイかれてるのだ。狂ってるのだ。

ムーンフィッシュは刃物の歯から枝分かれするように歯から歯が生えていき、氷の壁が難なく突き刺されていく。

防戦一方。

退こうとするも後ろは毒ガスに覆われている。

此方には近づかず、一定の距離を保っているのが幸いだが、後に退けない事実に変わりはない。

「こりゃ一見大雑把に見えてるが、案外計算されてんな…

囲まれてやがる…」

前も後ろも無理、道はないとは言え横からでも逃げれるが、相手がそれを赦さないだろう…

ムーンフィッシュは涎を垂らしながら、先ほどよりもより素早く、

的確に刃物の歯を生やし刺していく。
爆豪も手も足も出ない。
本当は最大火力を出せば倒せなくもないが、それだと爆破の余波で火花に森があたり燃えかねない。
一瞬で氷で覆うにしても森の中には生徒たちがいる、そんな危険な行動は出来るわけがなく、ただこの状況を耐えながら、打開の機会を伺うしかない…
「……みんな、こんなのと…戦ってきたの…？」
美野里の言葉が小さく、でもって轟の耳に届く。
不安がる美野里は、目の前の理不尽に目を背きたくとも、それでも前を向こうとするが、相手の圧倒的な恐怖と実力に、力が抜けてしまう。
月閃女学館たちは知らない、敵連合という闇組織がどれ程凶悪なのか…
オールマイトヴィランで経験したとしても、やはり怖いものは怖いのだろう…
「このまま、美野里も…大好きなパパとママみたいに、殺されちゃうのかな…？」
美野里は知っている。
大切な人間が殺された悲しみを、辛さを、苦しみを――
黒影に会い、拾われた時は嬉しかった。
だけど、死んだ時も苦しかった…そうやって大切なものを失ってきた彼女だからこそ、また誰かを失いそうな気で、仕方なかった。
それが何よりも、死ぬよりも怖かった――
「美野里…大丈夫だ…」
不安に心が支配されてる中、希望とも呼べる光が、声をかけてくれた。
「アイツは強い、でも…倒せない訳じゃない。それに倒さなくても、逆転できる立場もあれば、逃げれることだって出来るかもしれねえ、可能性は低いがゼロじゃない…
だから、今は頑張ろう…お互い」

諦めたらそこで終わりだ。
轟のこの励ましが、美野里の心に靄かかった不安という暗雲を晴らしてくれた。
今でも涙が溢れ出そうだった目からは、希望の光が灯る。
「うん…分かった…」
小さくとも、弱々しくとも、もう昔の弱虫で、泣き虫な自分とは違う。
どんなに辛い時でも、人は戦わなくちゃいけない…その言葉の意味が、今では大分分かってきた気がする。
「あんな変な人、さっさと倒しちゃおう…！」
「肉めええええええエエエエエーーーーーんん!!
肉・肉・肉ぅ！肉見せてよおおおォォォ!!」
狂人は発狂する。
いつ迄経っても死なない三人に、苛立ちを覚える。
彼が何故、死刑囚になったのか、なぜ脱走できたのか、今ならほんの少しだけ分かる気がする――

毒ガスが充満してる森の中、ガスマスクを付けてる三人は、草木を掻い潜りながらも、毒ガスが発生してる中心部へ足を踏み入れる。
「聞いたか夜桜！拳藤！マンダレイのテレパス、戦闘許可下りたぞ！」
「待てって鉄徹落ち着け！そりゃ確かに許可は得たけどさ…このガス

がどういう意味を表してるのか分かるか？」
「……やべえって事だろ？」
「単直ですね」
「ハァ～…鉄徹、お前バカ！」
鉄徹に頭を悩ます拳藤は、ガスマスク越しに溜息をつく。
夜桜もあまり拳藤が何を言いたいのか分からず、やり取りに突っ込まず流している。
「このガス可笑しいんだよ、さっきからずっとさ、一定の距離保ったまま動かないし、それにこのガスフィルターも限界があってさ、近付く度に濃度が増してるんだ、つまり…早くこのガスを解決しないとガスマスクの効果が切れて時間が来ちまうってこと！」
「……」
「拳藤…すげぇな」
「あー、やっぱな…二人とも分かんなかったか……夜桜はしっかりしてると思ってたんだけど、肝心な所が抜けてるあたり、やっぱ付いて来て良かったわ…」
「な、なんかすいませんね…」
「いーって別に、責めてるわけじゃないんだからさ」
母性の塊の夜桜は、確かに気は真面目でしっかりしてるが、あまりこう言った物事を考えたりしないのだ。
尤も、鉄徹など考えるより先に体が動く単細胞…この二人だけ行かすのはマズイし、それに…
「それと、マンダレイのテレパス、あれは多分違うと思う…
許可が下りたのは、敵と遭遇した時に対抗する為で、態々行って良いって訳じゃないんだとウチは思うんだよ…」
戦闘許可を下したのは、敵と戦う為ではない、自衛の術を身につける為。
態々敵と戦わせるために許可を下ろしたわけではない、拳藤の言い分は正しい。
敵との対立はプロだけで充分なのだから。
「分かった！んじゃぶん殴る！」

「はぁ!?ちょっ、聞いてたのか鉄徹!無理して戦えって訳じゃ」
「知ってるよんなもん!けどよ拳藤…
敵と戦闘するなとは言ってねえよな?つーことはだ、ブン殴っても良いって訳だ!」
極めたバカ、ここに来たり。
拳藤は面を食らった顔を浮かべる。
「ワシも、鉄徹さんの意見に賛成です」
「夜桜まで!?」
「考えてください、この毒ガスを吸えば意識を失うか、最悪の場合命を落す危険性だってあり得る訳です…
八百万さんのガスマスクがあればこの状況を切り抜ける可能性はありますが…もし、ガスマスクを装着してない人がこの森の中で、しかも敵と鉢合わせしていれば…また毒ガスのせいで逃げれない人もいれば…
その為には、このガスの原因をどうにかしなければなりません…」
その為には、今このガスに近い三人が対処しなければならない。
相手は恐らく毒ガスを発生させる個性の持ち主…ガスマスクさえあれば万全だ。
「つまり、儂等は全力でガスの主をぶち壊せば問題ねえって事じゃ!」
「そういう事だな!!」
「ハァ〜…まあ、そうだけど…」
意気投合する二人に、拳藤は冷や汗を流す。
こう言った単直な人間は、ここぞの時こそ強い…
夜桜の正義感溢れる生真面目さ、鉄徹の友を想う熱血さ――
しかし、それが決して悪いかと言うとそうではない…逆だ――
「なあ拳藤に夜桜、A組の連中…勿論忍学生もだけどよ、なんか思うことはねえか?
例えば、見えない壁の差とかさ…」
「見えない…」
「壁の差?」
二人は頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、分からずと首を傾け

る。
そんな二人に鉄徹は何か思うことがあるのか、拳を握り締める。
「そう、体育祭の頃からか…俺たちはA組とB組とで大きな差があった…
天と地のように広がる差だ…お前らも感じてると思う…俺ァ感じてた！
じゃあ何が違うかって？ピンチだ!!」
体育祭前の、雄英高校襲撃事件。
あの時、生徒たちはピンチを肌身で感じ、理不尽な立場を覆したことで、成長として繋げた。
「人を脅かし、壊し、殺す、そんな胸糞悪いイカれ連中に、ヒーローがどうして背を向けられる?!
俺達一年B組ヒーロー科！ここで立たねばいつ立てる!?今こそ、この状況を覆すチャンスだ!!」
鉄徹の言葉に、夜桜は思わず胸が熱くなる。
正義がここで、立ち止まり背を向けられるか？
違う、出来ない。
自分の掲げる正義は、こんな所で躓かない。
ここで立ち向かわなければ、自分の正義の名が廃る、それこそ黒影様に顔向け出来ない。
「それに…塩崎や円場も、クラスの皆んなも、このガスに苦しめられてんだ…！
ソイツのせいで皆んなが苦しめられてんだ、ムカつくんだよ!!嫌なんだよ腹立つんだよそういうの！
だからここで立ち止まったら、俺は切島やクラスの連中に顔向け出来ねえ…
ここで、俺たちが立ち止まったら…俺はヒーローなんて口が裂けても言えねえ！」
クラスの皆んなが、身勝手な敵の毒ガスに苦しめられている。
ソイツの身勝手な悪意のせいで、大切な友達が苦しめられてる、そんなの許せない。

夜桜も、鉄徹も…もちろん、拳藤も――
自分の為じゃない、ヒーローとして背を向けられない、皆んなを救う為に、鉄拳を握りしめる。
「行くぞ!!拳藤…!」
「……」
――バカだ。
やっぱり、正真正銘…単細胞で、真っ直ぐで、バカ正直で、考えてることが丸分かり…
クラス一の熱血漢と呼んでも過言じゃないくらい、大馬鹿だ。
でも――そういう所、嫌いじゃないな…
だから、支えよう…折れないように…二人を――
「分かったよ鉄徹、夜桜、私もヒーロー科だもん…こんな所まで来て、引き返せ、なんて言わない…
やるからには…全力だ!」
拳藤はニカッと笑ってみせた。
可笑しなものだ、こんなピンチな状況なのに、笑ってる自分がいるなんて…
鉄徹のおかげだからだろうか、今なら、やれる気がする。
それ以前に、鉄徹の友を、仲間を思いやる気持ちが、凄く嬉しかった。
それを聞けて、気持ちが楽になったように、安心した。

ユラァ…
「ん?」
ピタリと、ガスマスクの男は止まる。
渦巻く毒ガスの中心部分に立ち止まってる少年は、ある異様な気に

察知した。
毒ガスが僅かに揺らぐ…その揺らぎが少年に伝わることで、何が起きてるのかが分かる。
メンバーは全員ここには来ない…毒ガス担当は自分一人だけ、作戦には無かった…ということは。
（二、三人…真っ直ぐ僕の方向に、こっちに来てるな……
やっぱ普通に気付くヤツもいれば、切り抜けるヤツとかいるんだね、そこん所しっかりしてる辺り、流石は名門校だな…）
「でも悲しいね――相手がヒーローだろうと、忍者だろうと、所詮は――」
少年はある方角に視線を向け、学ランの中に隠されてる…銃を取り出す。
その方角から雄叫びに似た男の叫び声が聞こえる。
「見ィいいいつうけたあああァァァァァァ!!!!」
ガチャッ――！
「――人間なんだよね」
その言葉が合図となるように引き金を引き、銃声の音が二発、森の中に轟いた。
どれだけ強い個性を持ってようと、忍だろうと、銃には敵わない――
敵ネーム・マスタード。
正体は不明、年齢も不明、個性は毒ガス。
この少年がガスを発生させることで、多くの生徒たちの意識を奪い、戦闘不能に追い込ませる。
準備万端した彼にぬかりはない。
その銃弾は、鉄徹の顔に命中した――

「銃声…？一体何事ですの…？」
ある少女はお上品な仕草で、手の指の先で口を覆う。
眼鏡を掛けた少女は、清らかで美しく長い白髪を下ろし、肌には黒い模様の血管が侵食してる。悍ましさと気品清楚溢れる美しさを兼ね合わせた少女は、読んでた本をパタンと閉じた。
「あァ、マスタードさんでしたか…
そう言えば彼、死柄木さんに銃よこせと申しておりましたっけ――」
毒ガスを発生させる個性、それは一見強力な個性だが、近接戦闘が出来る訳ではない。
人は、力に頼る。
己が身に付けてる力で人を傷つけ、いつしか実技の概念を失う。
それが善意であろうと悪意であろうと、個性に頼りきっている人間は、大抵個性なしの殴り合いに弱いものだ。
イレイザー・ヘッドなどが良い例えだ。
「となると、もう本格的な戦闘が行なっていますのね…
私ももう終わりましたので、仲間の加勢にでも行きましょうかね――？」
少女は軽い冷笑を浮かべ、ある人物に視線を向ける。
その人物は、この少女と同じく肌に黒い模様に侵食され、気を失っている、ラグドールであった。
ラグドールは意識がないのか、気絶したまま目を開けない。
そして…地面から黒紫色の棘状となった触手に身体を縛られ、締め付けている。
ラグドールは苦痛の表情など一切見せる事なく、無心の表情でいた。
まるで心そのものが無になっているソレは、見る者に対し不気味さ

を与えている。
「ヒーローも、忍も、全然大した事ありませんわね――♪
何よりもラグドールさん、貴女のその力は連合に必要です…このままお眠り下さい…」
少女の笑顔は美しくもあり不気味だ、二つの印象が強い事を表している。
彼女は気絶してるラグドールにそう告げると、ゆたりと遅く足を動かし移動する。
そして彼女は本を開き、何かを読み上げると、謎の黒い霧が発生する。
その黒い霧がラグドールに集まるように漂い、固形状の物体に覆われ、閉じ込めていく。
そこには、ラグドールの姿はなく長方形の柱が立っていた。
あの柱の中にラグドールがいる、脱出不可能の上に外からの救出もゼロに近い状態に終わらすと、彼女は森の中を彷徨うかのように、何処かへと姿を消した。

「柳生…ちゃん?」
「――ハァ……ハァ…来る……なぁ!」
一方、マンダレイと虎から離れた飛鳥と緑谷は、それぞれの方向に向かって走っていった。
飛鳥は肝試しに向かうスタート地点の入り口から行き、緑谷は出口から…

遠い方向には獣のような雄叫びが聞こえるが、今目の前に置かれてる状況に、飛鳥は呆然としていた。
「ひば…り……！飛鳥ァ……ああ…あ…!!」
呆然…？違う、恐怖だ。
先程から、体の言うことが効かない。
さっきから体がガクガクと小刻みに震えている。
「柳生…ちゃん、一体何があったの!?」
ヒュン――
飛鳥の言葉に反応したのか、何かが飛鳥に向かっている。
鞭のような音、風を切る勢い、飛鳥は反射的に避けた。
体の自由が効かない…とは御幣だったのだろうか、しかしそんなこと気にすることもなく、問いかけようとするものの――
ズドオオン！
地面が何かに殴られたのか、クレーターのように凹み、地面の破片が飛び散る。
大きな岩盤も抉られ、木々はへし折られ、その光景は最悪だった。
「……俺は…いい！雲雀を……探して…くれ！」
それは余りにも異常なものだった。
柳生の赤黒い目が、眼帯から飛び出ていたのだ。
その目は見るに余りにも悍ましく、まるで鬼のようだった。
隠鬼の目――
学炎祭で四季が言ってた隠鬼の目とはこのことだ。
柳生が今まで制御し防いでたこの目が暴れ出したのだ。柳生も何とか制御しようと抑え込むも、治らない。
隠鬼の目の暴走は止まらない。
柳生の表情は、酷く苦痛を浴びせられてるような顔だった。
冷や汗は止まらず、まるで蒸発してるかのようにさえ思えてしまう。
「雲雀ちゃん…？一体…何があったの!?」
「うっ…！」
柳生は苦痛に悶えて、身体を僅かに動かすも、隠鬼の目が飛鳥に矛

先を向ける。
刹那。
飛鳥の横に大きな衝撃音が響き、土煙と共に視界が遮られる。
後少し、横にいれば確実に死んでたであろう…
「柳生…ちゃん…」
ただ名前を呼ぶことしか出来ない飛鳥は、己の未熟さに恨んでしまう。
こんな状況の中、自分は何も出来ないのか…
傷を負ってるとはいえ、苦しんでる友を、自分は何も出来ないのか…
柳生をよく見てみると、体に刃物やらで傷付けられた傷跡が見える。
無数に傷付けられ、傷口一つ一つから血が滲み出ている。
早く応急処置をしないと、大量失血で死亡してしまう恐れだってある。
傷口からしてみると、恐らく…敵と遭遇したのだろうか…
しかしその肝心の雲雀と敵が見受けられない…
「……ううん、ダメだ。
弱気になっちゃ…」
飛鳥は元気付けようと、己の両頬を掌で叩く。バチンと音がなり僅かに痛みが走るが、先程の戦闘と比べればこんなの屁でもない。
飛鳥は柳生を見つめる。
今の柳生ちゃんは隠鬼の目で暴走してる事は間違いないんだと思う。
でも、問題は柳生ちゃんをどうするか…だ。
暴走してしまった上に、傷口も酷い…どうやって彼女を止めるか…が問題。
普通なら闘って落ち着かせる…が正当方なのだが、これ以上傷付けてしまえば逆に彼女を殺しかけない…
しかも雲雀ちゃんがいないのも心配だ…
でも、今は――

「大丈夫だからね柳生ちゃん…ちゃんと、救けてみせるから――!!」

目の前に苦しんでる友を、仲間を救うことだ。

１０３話「拳拳拳」

「あす…か！やめろ！お前は雲雀の救出に向かうんだ…!!
雲雀が…雲雀…」
柳生は、苦しみに悶えながらも、雲雀の救出を先にと飛鳥に告げる。
隠鬼の目は回転するように渦巻く、まるで獲物は何処だと、意思があるように見える。
「雲雀ちゃんも大切…だけど、アテがない今、雲雀ちゃんの救出は難しいし…それに…
柳生ちゃんを放っておくなんて、無理だよ」
誰かを救ける為に、誰かを見捨てるなんて選択肢は、飛鳥にはない。
それに、雲雀が何処にいるのか分からない今、無闇に探しても見つかる訳がない。
もしかしたら他の生徒と合流してる事だってあり得る。
しかし柳生はそれでも首を横に振る。
「俺に……構うなあァァ！」
隠鬼の目が再び飛鳥に迫り来る。
赤黒い目は、飛鳥に狙いを定め、抉るように殴りかかる。
地面はボコりと大きく凹む。
「柳生ちゃん…一体何が…」

それは、マンダレイのテレパスを聞き、雲雀が狙われてることを知ったあの時――
「柳生ちゃん！」
「ッ――」
「ありゃ？」
雲雀は目に涙を溜めながらも、柳生を心配する。自分をかばってくれた彼女を心配する。
柳生の腕には真っ赤な血が流れている…
「雲雀！ここは逃げろ！コイツ等の目的は雲雀だ…だから、雲雀だけでも」
「そんなの嫌だよ！柳生ちゃん見捨ててまで、自分は救かりたくない…！」
柳生は雲雀を想いやり。
雲雀は柳生想いやる。
仲の良い二人組ほど、ここまで息の合うコンビはいないのではないか？
しかし、目の前にいる理不尽は、ニヤリと口角を釣り上げる。
「うゥ～ん！良いなぁ、友情ごっこ…僕もそんな人と巡り会えたら嬉しいなぁ、雲雀ちゃんは優しいんだね。さっすが、弔くんが認めるだけの器はあるよ！」
「へっ!?」
「弔…連合か！」
二人はより強い敵意を含めた目で、鋭く噛みつくような眼差しを鎌倉に向ける。
鎌倉は「まあね～」と軽薄な言葉を発しながらニコニコと笑っていた。
「でも、嬉しいな！僕、てっきりヒーロー学生か飛鳥ちゃんと当たるかな～って思ってたけど、まさか目的がこんな早くみつかるなんてね

～、あっ、爆豪くん知らない？僕たちの目的の一人なんだけど、森の中って結構視界が悪いからさ、何処にいるか分からないんだよね～」
「知る訳…ないだろ!!」
柳生は無数の氷のクナイを鎌倉に飛ばす。
鎌倉は、鎌を回転させると氷のクナイは跡形もなく散り、無散する。
軽く調子狂わせる印象を持つ少女、鎌倉はクナイを砕くと間合いを詰め、懐に入る。
鎌倉の切れ味の高い鎌を番傘で防ぐも、背中に納めてるもう一本の鎌をつかさず取り、一閃、斬りつける。
まさか背中の鎌を使ってくるとは、予想してなかったので反応が遅れてしまったのだ。
「――ッ！」
斬り付けられた傷口から血飛沫が飛び散る。
赤い鮮血が鎌に付着し、躊躇わず斬り付けに行く…が。
「秘伝忍法――【氷の足】！」
柳生は秘伝忍法で巨大イカを召喚させる。
大きくウネリのあるイカは、足をプロペラの回転させる。
その足は氷漬けにされており、触れたものを瞬時に凍らせてしまうような冷度を持っていた。
「あはッ――！楽しいね柳生ちゃん！」
鎌倉は頬に付着した柳生の血をペロリと舌で舐める。
巨大な足を躊躇わず両手の鎌で斬り付けていく。柳生の秘伝忍法と鎌倉の両鎌スタイルによる叩き込む斬撃…鎌倉は秘伝忍法相手に、秘伝忍法なしで互角に渡り合っている。
つまり、秘伝忍法なしで素でこれ…柳生の秘伝忍法相手に渡り合い、傷一つ付いてないのだ。
「何…ッ」
「ん～、思ったより味気なかったかな～…んじゃ僕から殺るね――」
鎌倉はニコリと笑うと両鎌を軽々しく巧みに使いこなすよう振り回し、赤い鮮血がジワリと鎌に染まっていく。
「秘伝忍法――【血狂い咲き】!!」

血に狂った鎌は速度を増し、振り回す程に赤い残像が見える。
二刀流による秘伝忍法、鎌は段々激しく速度を増し、血が飛び散っていく。
その血が鬱陶しいのか、柳生は腕で顔を守るが、その腕に血が付着した途端――
ジュワッ――と嫌な音を立てた。
柳生は僅かな刺激による痛みに表情を歪ませ、腕を見る。
血が付着したと思われる腕、蒸発らしき湯気が立っている。
量は少量なので大したことはないのだが…
「まさか…」
「えへへェ～♪」
笑顔に似合わず、鍛錬された身のこなしによる鎌倉の動きに恐怖を覚えながらも、冷や汗が流れる。
まるでドライアイスを浴びせられたかのような悪寒が背中に走る。
血が腕に付着し、僅かに消化している…と言うことは、鎌倉が振り回してる鎌の血は…とても危険だ――
「厄介だな…」
柳生は番傘を開き、雲雀を守るように庇う。
血が服に付着すると蒸発する嫌な音を立て少しずつ消えていく。
「柳生ちゃん！傘！」
「なっ!?」
しかし、これも無意味。
番傘が血で溶けていき、隠してた刀は錆になりボロボロになる。
武器がなくなった、それがどういう意味を表すのか、分かるであろう――
「あ～らら、柳生ちゃん。大切な武器、無くなっちゃったねェ？
でも、雲雀ちゃんをちゃんと守ってね？僕、君らの友情ごっこがとても好きになっちゃったみたい！だからさ、もっと見せて？大好きな人を守るその勇姿ってヤツ――♪」
狂ってる。
その言葉しか出てこない。

見た目的に軽薄な印象を与える彼女だが、それはあくまで表面での話…実際は悪魔のような少女だった。
武器がなくなると言う事は、己が相手に対抗する術が無くなると言う事だ。
対人術など、傘あってこそ成り立つ…大道寺みたくああいう殴り合いの戦闘とは無縁なのだ。
鎌倉の狂い咲きに、柳生は腕で身を守るものの、刃物が腕の肉を抉り、鎌に染まってる血が傷口に更に激痛を浴びせる。
「うぐッ――!!あああァァ!!」
余りにも激しい痛みに、その場で悶え叫んでしまう。
鎌倉はパァッと笑顔になる、その苦しみの声をもっと聞かせてくれと、訴えるように、鎌で次々と抉って行く。
腕、腹、足、膝、胸、様々な箇所を的確に斬りつけて行く。
糸のように細かく、紡ぐように、両鎌で斬撃を叩き込む。
柳生の返り血が所々付着すると、まるで女神の光を浴びるかのように、狂喜に満ちていく。
「――あああァァ!良い!良いよ柳生ちゃん!苦しんでる姿、激痛に叫び出す声、血に染まって行く柳生ちゃんすっごく良い!!
もっと、もっと、僕にその苦しみを見せてよ!僕、今ビンビンに感じちゃってる!!」
息を荒げ、呼吸が乱れる鎌倉は、顔を真っ赤に染めて柳生に斬りつけていく。
相手の苦しむ姿、地に染まっていく姿、悲鳴、相手の痛み、それらの全てに快楽を覚えて行く。
「あ…ああ……」
雲雀は、おぼつかない様子で柳生が傷付いてく姿を見つめている。
柳生ちゃんが苦しんでる、救けてあげなきゃ――
でも、どうやって？
相手は強い、多分自分よりも…もっと強い。
あの天才の柳生ちゃんが、手も足も出ずにやられているんだ、自分なんか敵いっこない…

じゃあ、友を見捨てるのか？
そうやって、出来もしないと心の中で言い訳を吐き、そうやって目の前の現実から目を背けるのだろうか？
違う、そんなこと…でも、目の前の悲惨な光景に、自分が何が出来る？
柳生ちゃんが庇ってくれてるのに、自分は何も出来やしないのか…
「もう…やめてよ…」
ポツリ、ポツリ――
いつしか雲雀は目にいっぱい涙を溜めて、流していた。
柳生だけでなく、鎌倉にも雲雀の声は届いていた。
「どうして、どうして……こんな、酷いこと…するの…？目的は、雲雀なんでしょ…？柳生ちゃんは、関係ないじゃん……」
「どうし…て？」
鎌倉は手の動きを止め、柳生から雲雀に視線を移す。柳生は糸が切れたように前のめりになって倒れ、膝は地面につく。
相当な激痛を感じてたのだろうか、今何が、何処が痛いのか、何をされたのかさえ分からない…頭がクラクラして可笑しくなりそうだ。
そんな柳生など構わず、鎌倉は歪みに歪ませた笑顔を作る。
「どうしてって、何を…言ってるの？雲雀ちゃん??
そんなの、力があるからに決まってるじゃないか？」
血に染まった鎌は、今でも雲雀の血を求めんばかりに、鎌は忌々しく怪しい妖光を放っている。
夜空に浮かぶ月が、鎌の刃物に反射し輝いてる。
「力があるから、使うんだよ？なんで、分からないの…？力で人を傷つけて、何が悪いの…？なんで、雲雀ちゃん泣いてるの？」
鎌倉は理解出来ない。
人が何故人を守るのか、何故暴力を止めようとするのだろうか？
人を斬ることに何を躊躇うことがある？
自分の力を自由に使って何が悪い？どう言う使い方ゆえ、自分の好きなように力を振ることは決して悪とは言わない…
鎌倉はそう考えている。

いや、考えている…と言うよりも、それが普通としか思えていない。
「そ、そんなの可笑しいよ！力があるからって、人を傷つけて良い理由なんか…」
「だァから、何を言ってるの？なんで、人を傷つけちゃダメなの？誰が、そんなこと、決めたの？」
「……ッ」
雲雀は口ごもりをして言葉を詰まらせる。
鎌倉に理屈は通じない、幾ら彼女に言葉で訴えても馬の耳に念仏だ。
こう言った人間こそ、救いようよない人間と呼ぶのだろうか、鎌倉は言葉を紡ぐ。
「仮に決めたとして、僕らが守る権利は？なんで、力を使っちゃいけないの？
なんで、任務では力を使って良いの…？
ねェ、可笑しいよね？」
任務で人を殺せと命じ、任務外では力を振り撒いてはならない。
鎌倉は、そこが一番に疑問に思えたのだ。
そもそも、なんで忍の定めが死ノ定めなのかさえ、分からない。
幼い彼女の浅知恵か、または現代社会に対しての疑問なのか。
「力は、あるから使うんじゃないの!?ねぇ、何が悲しくて僕らは下らない上層部の命令に頭を下げて、人形みたいに働かなきゃいけないの!?
君らこそ可笑しいんじゃないの…？忍だからって理由で全て片付けて、結局自分の想いなんか何もないじゃないか？」
忍だから、死んで当然。
鎌倉も他の連合と同じくイかれてるが、何処か気がしっかりしていた。
先ず彼女は忍だから死んで当然…という言葉に納得がいかない。
忍だって生きたい、死にたくない、覚悟を持つ者もいれば、そうでない者だって存在する。
鎌倉はその内の一人だ。
上層部の人間が嫌いだから、鎌倉は忍に対して敵意を向けている。

「雲雀…無理だ、コイツに言葉は通じない…イかれてる……早く逃げろ！」
「もう無理だよ…
ああ、そうだ！雲雀ちゃんを傷付けたら柳生ちゃんどんな反応するかな？」
「!?」
本気なのか、冗談なのか…
鎌倉の軽薄な言葉に、二人は体を反応する。
ただの興味本位で、鎌倉は雲雀に刃物を向ける。
「本当は雲雀ちゃんと爆豪くんには手を出すなって言われてるんだけど、抵抗するようなら動けなくすれば良いって言ってたし…
抵抗してないけど、弔くん見てないし…嘘つけば…良いよね？」
大好きで、大切な雲雀を傷つけば、柳生はどう行動するのだろうか？
いや、どんな事になるんだろう…
嘆き、泣き叫び、心は折れ、絶望の海に沈むだろうか…
そう考えれば考えるほどに、鎌倉は興奮していく。
目の前にいる大切な友が傷付く姿は、誰だって見たくない…
殺しはしないと心の中で理解しながらも、やはり傷付けられるのは辛い…
だからこそ、鎌倉は傷つけるのだ…
人の嫌がらせをしながら、絶望に身を染まらせ殺される…
最悪で残酷な死に方だ、鎌倉は幾度となくそれを繰り返してきた。
「雲雀ちゃんゴメンね!!恨むなら動けなくなった柳生ちゃんを恨んでね!!!」
死神――
そう呼ぶに値するものだった。
腕で大きな素振りを見せて、鎌の刃先を柳生の目に向ける。
これを喰らえば確実に死ぬ。
ちょっとやそっとの事じゃない事を、鎌倉は少しだけと言う言葉で丸めてるのだ。

彼女そのものに狂気を感じる。
雲雀は泣きじゃくりながら、鎌倉を見つめる。
恐怖で体が動かない…
――これじゃあ、あの時と同じ…

ＵＳＪの襲撃で、脳無に襲われた時と同じだ。
自分の力が通用しなくて、柳生ちゃんに迷惑を掛けて、弱くて何も出来なかった…
あの時と同じ…いや、それより酷いものだ。
柳生ちゃんが傷付いてるのに、自分はまた何も出来ないのだろうか…
やっぱり自分は…忍に向いてないんだろうか…

「オイ――」
刹那。一つの凍てつく言葉が、空気を凍らすかのように包み込む。
緊迫とした状況のなか、鎌倉は後ろを振り向く。
グオン！とした音速が耳に届き、鎌倉は反射的に上手く避けた。
鎌倉の表情は、変わっていた。
狂気に満ちた笑顔から、真顔に。
驚きでもない、喜びでもない、動けない筈の柳生が攻撃してきた事でもない…
隠鬼の目――
いつの間に外したのか、巻いてた眼帯を取り外し、眼帯を付けてた目が赤黒い色で飛び出ているではないか。
「雲雀に…手を出すな……!!」
「……ほへェ、驚いた。まさかこんな力を隠し持ってたなんて、弔くんの殺害リストに柳生ちゃんの名前が載ってたのも、頷けるなァ…」
鎌倉は表情を少しだけ、不敵な笑みに変える。柳生の殺意の孕んだ声、忿怒を表す隠鬼の目。
鎌倉が、喜ばない訳がない…

「や、柳生ちゃん!!」
雲雀は柳生に声をかけるも、柳生は雲雀に目をやらない。
完全に怒りと力に支配され、暴走している。
意識が鎌倉に向いており、多分雲雀の声はその所為で届いてないんだと思う。
「雲雀から…離れろ……」
「嫌だ、って言ったら?」
「――ッ!!」
柳生は怒りに身を焦がす。
怒りの感情に飲み込まれ、隠鬼の目が激しく暴れる。滑らかに、でもって急激に、激しく暴れ回る隠鬼の目。
雲雀は頭を抱えしゃがみこみ、被害を喰らわないように身を守っている。
対する鎌倉は、捌いていた。
全て隠鬼の目の攻撃を予測し、避けていく。
木々を土台にしてとんだり跳ねたり、更には隠鬼の目を上手く使って跳躍したりしている。
アクロバティックな動きに、柳生は翻弄されている。
拉致が開かない…
焦りが、柳生の心を煽っていく。
焦れば焦るほどに、心が怒りに染まっていく。
怒りを超越して、殺意が芽生えていく。
コイツを殺したいと言う歪んだ殺意が、それこそ、連合の一人一人が持つ異質な殺意に似たものが、柳生の心に芽生えていく。
「あ、あああアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」
守ると誓ったのに、守れない己の非力な弱さ。
何が自分が強くなるだ、雲雀を守るだ。結局…自分はあの時と何も変わってない…
弱いままの惨めな自分と、何ら変わらない…
自分が弱いから、あの時脳無に殺され掛け、雲雀に怖い思いをさせてしまった。

死柄木に殺され掛けた、それを…自分の手で止めることは叶わなかった。
雲雀…俺は――
最後の希望に目を向けようと、視線を移す。
しかし、柳生の心は絶望の淵に落ちることになる。
いない…
雲雀が何処にも見当たらないのだ。
先ほどまで泣きじゃくり、子ウサギのように怯えていた雲雀の姿が、何処にもいない。よくみれば鎌倉の姿も見受けられない…
逃げた…？いや、少し違う…
まさか、雲雀を拉致って逃げたのか？
あんな数秒で？
自分の心が絶望に支配されてる間に、そんな数秒すら経たない僅かな時間で、雲雀がいなくなったと言うのか？
何処…に？
その疑問と同時に、もう一つの真実が柳生に突きつけられる。

守れなかった――
今度こそ、雲雀を守れなかった…
誰の手もなく、自分の弱さのせいか、雲雀が目の前から消えた。
それこそ、妹が目の前で消えた時と同じ光景が、頭の中に過ぎる。
大好きな妹が消え、雲雀まで消えた。
自分の周りにいる大切な存在は、手の届かない場所に行き渡り、消えてしまう――
絶望が、憎悪が、悔恨が、柳生の心を染めていく。
ドス黒い赤黒い色に、隠鬼の目は染まっていく――
「ッッッ!!あああああアアアアアア!!!!雲雀、雲雀イィ!!!!」
状況は最悪な方面へ転落し、柳生は鎌倉の思惑通り、絶望の海に沈んで行った。

そんな暗闇で、光さえない深い絶望の海の中…氷のように冷たい、凍てつく闇の中…
手を差し伸べてくれる人間が、一人いた。
雲雀じゃない…もう一人の人物が…手を差し伸べてきた。
その手が、光の一筋を表すように…そして、彼女はこう言った――
「必ず救けるからね――」
何処かで聞いたことのある、生真面目で明るい、優しい声。
安らぎに満ちた、温かい声が、心の闇に、光が灯る――
さあ、目を開けてごらん…
絶望だけが、残ってる訳じゃない…希望を掴もう…まだ、チャンスはあるハズだ――

濃度の高いガスは視界が悪く、森を包み込んでいる。
このガスを一口吸えば、間違いなく意識を失ってしまう有毒ガス。
成分は不明、どんな毒ガスの効果を発するのかは未だに不明、謎が多い森の中――銃声が鳴った。
「ああ、いたね君…硬くなるヤツか――驚いた、個性ならこの銃弾効か

ないかな？
まあでも、関係ないや…このガスの中で、どれだけ息を止めてられるかって話になるからね」
マスタードは手に銃を持ち、悠々と語り出す。
対する鉄徹は傷こそないが、最悪なことにガスマスクが壊された。
破壊されたことにより、呼吸することは決して許されない。
吸ってしまえば終わりだ。
（――痛え！スティールで体硬めてたのに…マジかよ！普通の拳銃じゃねえのか？なんで痛みが…！
しかもマスクを狙い撃ち…）
鉄徹の個性はスティール。
平たく言えば切島の被り個性。
つまり、個性の派手さも強さも切島と同じと言うこと…
その強さは体育祭で披露されていた。
銃弾など、鉄徹にとっては無害なのだが…マスタードが放った銃弾は、そこらの銃弾の並みとは違った。
特殊加工された銃弾は、鉄徹にダメージを与えていた。
しかも見た感じ相手は中学生らしき人物、同じ学年とも考えられるが、この際どうでも良いのでこの考えは取り敢えず放棄する。
「この拳銃、実に面白くてさァ、他の鉄砲とは訳が違くてね…
銃弾の性能も飛躍的に良いんだけど、何が面白いか…見て見たい？」
「んのおらああァァァ!!」
悠長な話など論外。
鉄徹は雄叫びをあげながら突進してくる。
相手が拳銃使いでも関係ない、突進して相手を全力でぶん殴れば問題ないからだ。
「アイアンマンごっこ？」
ダァン！ダァン！
銃声が二回鳴る。
マスクを被ってるので相手がどんな表情をしてるのか見えないが、

声から察するに呆れている。
膝、腹に的確に狙い撃つ。
銃弾を受けた余波で思わず体制を崩しそうになる。
鉄の体でコーティングされてるとは言え、甘くはない。
銃弾が発砲し相手の体を貫くよりも、衝撃波が体内を貫く際に、筋肉、骨格、神経、血管、それらを爆発的に粉砕する威力は並みの銃弾にあるものだ。
フルメタルジャケットを着用しても、銃弾によれば性能は変わるし、最悪…無事ではいられないとさえ言われてる。
「そう言うさ、人が喋ってる時に暴力とかおかしくない？ねェ、皆んなヒーロー科ってこんな屑共ばかりなのかよ…なんだか悲しくて笑えてきちゃうよね、こんなのがヒーローなんて、お笑いものじゃん」
挑発じみた言葉を発するマスタード、しかしこれは挑発以前に彼の本音だ、拳銃を自慢するように掲げ駄弁っている。
一見相手が油断してるように見えるが…
「せやっ!!」
「あ～らよっと…！」
何故か不意打ちが効かない。
ガスの中から一人、夜桜が姿を現し拳を振るうも、まるで分かってたかのように、軽い身のこなしで容易く避ける。
「完全に虚を突いたと思ったのですが…」
「ハハッ！なるほどねェ！僕が油断してるように見えると？でも残念、全部知ってるよ。君が僕を殴ろうとしてた事も、何人ここに来てるかも、この低脳のバカが来る事も、全部知ってたさ」
マスタードは自慢げに話す。
しかし可笑しなものだ…鉄徹ならまだ分かるが、なぜ夜桜の動きを見破ったのか、彼女は不思議で仕方なかったのだ。
気配は確実に消していた…なのに、忍相手にこうも、あっさりと簡単に見破れるとは考えてもいなかった。
決して相手を舐めていた訳ではないのだが、夜桜は知らない。
敵の実力を、強さを、恐怖を――

「ん…？と言うかオカッパのお前…
ああ、思い出した…漆月が言ってた月閃とか言うエリート校の忍学生か…雄英に負けず劣らず、成績良いんだっけ？
しかも正義厨とかって聞いたけど…」
「……だったら何じゃテメェ、しかも一丁前に銃なんか持って、楽しいか？」
「ああコレ？すっごく面白いよ！君みたいなクソエリートの忍学生ですら射殺出来るんじゃないかって位、凄い性能でね…！」
銃を見せびらかすように、ケラケラ笑いながら喋るマスタードの言葉などに聞く耳持たず、夜桜は懐に間合いを詰める。
相手の虚を突けれなかったとしても、相手が対応できない素早さで、殴れば問題ないハズだ。
何より…
――普通の銃弾は、儂には効かねえ!!
効かない…と言うよりも、そう簡単にやられない…と言った方が言葉としては良いかも知れない。
夜桜の姿は浴衣…既に忍転身を遂げた姿だ、一見服が変わっただけだが、性能は凄まじい…普通の銃弾など食らっても、忍装束がダメージの代わりになる…
なので、忍学生相手に銃など通用する訳がなく、マスタードにとっては相性最悪だろう…
「――って思うじゃん？」
――ダァン！ダァン!!
しかし、夜桜の考えは全て否定されることになる。
甘かった…
「がッ…!?」
夜桜は口から血を吐く。
少量とは言え、その威力は桁外れだった。
銃弾に触れた忍装束は、ビリリと音を立てずに微かに敗れ、肌が露出し、その肌に銃弾が炸裂。
しかも、ダメージ有りなのだ。

「夜桜!!」
鉄徹の焦りと心配の声が、夜桜に投げられる。
夜桜の表情は、僅かに信じ難い様子で、マスタードの拳銃を睨む。
あの銃は――？
普通の銃ならこの位どうってことはない…だが、あの銃は忍装束の条理を無視する事が出来た…そんな銃など世界中に探しても見つからないハズだ…一体何処でそんな拳銃を手に入れる事が出来たのか、疑問が色々と溢れかえって仕方がない。
「あはは！油断したよね？ただの拳銃なら問題ないって、本当にバカだよなァ…普通疑うだろ？
忍相手になんで拳銃向けてんのかとか、んで考える以前に先ずは突進して相手を殴ろうとする魂胆を見るからして、君ら猪兄妹かよ。此処まで来るともう笑っちゃうよね？」
腹を抱えて笑う少年は、罵倒する。
拳銃一丁持つだけで、ここまで大きな差が広がる。
その事実が、心に突き刺さり、思わず唇を噛みしめる。
「君ら何してヒーロー科になれたの？忍学校についてももうちょっと聞かせてよ、僕も忍に関して全て知ってる訳じゃないんだからさァ」
ガチャッとした銃の音が聞こえる。
その銃口は夜桜にも、鉄徹にも向けられていない…全く違う方向…
最初何をしてるのかと疑問に思ったが、鉄徹は直ぐに理解した。
「んの野郎!!やらせねぇ!!」
「鉄徹?」
ダァン――！
又もや拳銃が鳴り響く。
拳銃から放たれた銃弾は、鉄徹の眉間に直撃し、僅かに跡が残る。
鉄徹の取った行動――
「なッ…!?」
拳藤を庇うこと。
濃度の高いガスから、拳藤の姿がうっすらと見える。ガスの濃度が高いため、視覚する事は出来ないので、拳藤の姿は見えなかったが、彼

の言葉と動作を見て、直感的に理解し行動に移す事が出来た。
「やっぱ三人で来るかァ、はハッ！でも僕の立場は変わらないよ。
相手がヒーローだろうと忍だろうと、殺すことには変わりはないんだし…
浅はか、君らの考えって浅はかだよね？
大人しく黙って尻尾振って逃げてれば良いのにさ、この毒ガスが体に有害を及ぼすことを知ってて尚、バカみたいに突っ込んで…そんでもって僕に苦戦をしいられる？
雄英も、月閃とか半蔵学院とかも、所詮は名門校の肩書き背負ってるだけで、全然大したことないなァ」
「ッ！貴様ァ！」
他人を傷つけ平気で笑い、何もかもバカにされて、黙っていられるほど夜桜はお人好しじゃない。
何よりも自分の母校もバカにされてる気がしてならなく、許せない。
自分たちが月閃に入れたのは、黒影様の修行があってこそだ。
それを、なんの苦労も知らない中坊が、拳銃を一丁前に掲げて自慢するヤツを見て、黙っていられるハズがない。
逆にやめろと言われてもやめない。
マスタードは毒ガスに溶け込むように姿を消す。
何処にいるか…気配で察すればガスが視界を邪魔しようと関係ない…
（ヤツは…ここ！）
夜桜が右に視線を向け、手甲で殴りかかるも――
「バァ～ッカ」
ダァン!!
殴る前に銃に撃たれ仰け反る。
痛みが腹に走り、露出してる肌から血が流れ出る。
「考え無しの突進なんて、見てるだけで醜いものだよ。
この銃は結構特殊なものでさァ！
忍商会の裏サポートアイテムなんだよね～。

対忍魔用として造られた拳銃は、忍装束の条理を無視する事ができる！
勿論防御関係なしに無常理で肉体にダメージを及ぼす良い品物さ。
しかも忍装束を徐々に減らす特殊効果が乗せられてね？
ただの銃弾だって思う大馬鹿には良い効果さ。だから君、僕にやられてるんだよ？そんな簡単なことも考えられないの？」
安い挑発だと分かってても、つい体が勝手に動いてしまうのは夜桜の悪い癖だ。
相手が悪だと言う以上、どうしてもカッとなってしまう。
悪の存在が人を脅かし、煽り、奪い、騙し、壊す。
今目の前にいる連中がそうだ。
マスタードは銃口を夜桜に向け、引き金を引く。
「君、忍学生なんだろ？善忍だっけ？
悪は絶対に許せない、絶対主義者なんだろ？
是非、教えてくれないかな？
僕らみたいな悪党にさ、コケにされてやられてるって、どんな気分なんだい？」
銃声が何回も鳴る。
夜桜は必死に急所の部分を手甲で身を守るが、それ以外は銃により傷が付き、悲痛の声を噛み殺しながら睨みつける。
「善忍が、ヒーローが！一丁前に偉そうにさァ!!正義だとか守るだとか救けるだとかありがちでバカみたいなこと駄弁ってさぁ！
挙げ句の果てに、結局君らが悪に対する行動って暴力だよねェ!?
君らがやって来た行いってのは、こう言うことなんだよねェ!!」
若干興奮してるのか、気が昂り、早口で捲し立てる。
正義という名に恨みがあるのか、銃を何度も鳴らし夜桜に血を流させる。
（…こいつ…!!）
このままやられてる訳にはいかない、しかし反撃する隙すら与えてくれない…　早くしないとガスマスクのフィルターの時間が切れてしまう。

効果の時間が切れてしまえば終わりだ。
「テメェ!!」
夜桜を痛めつけてるマスタードに対して我慢の限界が来たのか、鉄拳を握りしめ、思いっきりブン殴る。
しかし鉄徹が動いた瞬間に彼は視線を移し、あっさりと避けまたも引き金を引いて。
「低脳じゃなかった…
完全な無能だったわお前――」
ダァン!ダァンダァン!!
3発、発砲する。
鉄徹は銃に撃たれて体制を崩してしまう。
夜桜を庇って――
鉄徹は横に転がるように倒れてしまう。
「アレ君、さっきよりも肉質柔らかくなってない?血出てるよ?
やっぱ君みたいな単細胞の個性って、筋肉とスタミナが必須なのかな?
この毒ガスの中じゃ空気は吸えないし、やっぱりこう言う個性って得てして体力勝負、あるもんねェ」
マスタードは横に転がる鉄徹を見下しながら、銃口を向ける。
そして一発、また一発と、銃を発砲させる。ガキィンガギィンと、甲高い金属音が耳をつんざく。
「どいつもこいつも、バカみたいにさ…
教えてくれよ、どうして君らみたいな低脳供がさ、ヒーロー目指せんの?
お前らがしっかりしてないからさ、こう言う襲撃とかあっさり許しちゃうんだよ…
あーあ、何でこんな簡単なことって考えられないのかなァ…」
ダァンダァンダァン!!
「僕おかしいと思うんだよねェ…
君らみたいな低脳のバカ供がさァ!学歴だけで周りの皆んなからチヤホヤされる世の中ってエ!」

ダァン！ダァン！ダァン！
「正しくないよねぇェ!!」
ガァン！
思いっきり蹴り飛ばす。
言動から察して、雄英に恨みがあるのか、マスタードは銃口をまた向け転がる鉄徹に銃弾をブチかます。
（つべぇぇ！そろそろ…息が続かなくなった…クソ！クソクソ！）
鉄徹に焦りの顔が立つ。
息にそろそろ限界が出てきた。
鉄徹の個性スティールは、部位を硬化させるには体力が必要だ。
しかし、酸素を取り込めない今、硬化の時間がじっくりと終わりを迎えるだけ…
ましてや相手は拳銃を手に持っている。
体力全般を主に、肺活量もそこそこ自信はあったのだが、この状況ではかなり厳しい。
ドン！
振動で地面が僅かに揺れる。
何が起きたかと視線を移すマスタード。
「やめろ――」
夜桜のドスの利いた声が、ハッキリと聞こえた。
声から察するに激怒してる。
それも尋常じゃないほどに。
マスタードの心が僅かに揺さぶる。
夜桜は基本怒ってばかりではあるが、今回はその比ではなかった。
その怒りのあまり、握り拳を思いっきり地面に殴りつけたのだ。
その時に振動が生じ、僅かに揺れたのだ。
「……ハッ、まだ生きてたのかい？」
直ぐに心を入れ替えるマスタードはもう一丁の銃を学ランの中から取り出し銃口を向ける。
「懲りないね君も、生きてるとはいえ大人しくしてれば見逃してあげたかもしれないのにさ」

「…テメェに、家族を侮辱されて…黙っていられるかって話じゃ…」
「……はァ？」
夜桜の家族という言葉に、マスタードは素っ頓狂な声をあげ、小首を傾げる。
「何言ってんだコイツ？」という言葉を示す仕草に、夜桜は声を張る。
「儂は…B組と出会ってまだ日が浅いですが…それでも、儂がこのクラスに入ってからは…毎日が楽しくて仕方ないんです…
あのクラスと一緒にいると…昔の頃の自分が重なるんじゃ…」
かつて、光に満ち溢れたかけがえのない思い出が、頭の中に浮かんでいく。
自分がまだ小学生の頃か、妹や弟達の面倒を見てきた、あの輝かしい思い出が、走馬灯のように…浮かんでいく。
怒って、泣いて、笑って、喜んで、そんな喜怒哀楽とした家族が何よりも大好きだった。
またああやって、幸せな時間を過ごしていたい…
だから、B組に入って嬉しかった。
皆んなと一緒にいると、昔の頃を思い出す。
まるで、B組というクラスが家族そのもののような、そんな温もりさえ感じた。
月閃と一緒にいる時と同じくらいに…それこそ、家族のような温もりが…夜桜の心を、照らし、明るく導いてくれたのだ。
だから、夜桜にとってB組とは家族なのだ。
喧騒に満ち溢れ、毎日が飽きない…嫌いじゃない…皆んな明るくて、かけがえのない仲間だから…そして、家族と同じくらい、大切なのだ。
「プッ――」
しかし、理不尽は――
「アッハハハ!!アハは、クッハハハ!!」

それを嬲り笑う。
まるで狂ったかのように笑い出すマスタード。ガスに包まれた静寂の中、彼の嘲笑に空間は溢れかえっていた。
「家族だぁ？あっははー！本当に居るんだねそう言う痛いヤツ！
犬とか猫とかのペットをさ、家族とか言うヤツ、見てるだけで痛々しいったらありゃあしないのにさァ？
家族なんて、何の価値もない飾りだろ？」
ダァン！
夜桜は肩を撃たれ、痛みに表情を歪ませる。
それでもマスタードは躊躇うことなく、平然と射撃を繰り返す。
「家族とかさァ！両親とかって全部何の役にも立たないだろ!?
成績を追い求めて来るクソッタレた父親に、世間の目を気にして個性がどうのとケチつけてくる母親に！
恵んでも、望んでもない個性を手にして、周りの皆んなから除け者扱いされる人間の気などいざ知らず!!何が家族だ！
そんなバカなもんがあるから苦しんでる人間とか出るんだろ!?僕はただ、この間違った社会を正してあげてるだけなのにさァ!!」
社会に、家族に、友人に、何もかも絶望して来た少年は、手を休める事なく、的確に夜桜に銃を発砲する。
家族なんて下らない。
馬鹿馬鹿しい。
聞いて呆れる。
愛する家族と離れ離れになった者。
家族という嫌いな物とかけ離れ、歪みを持った者。
夜桜は覚悟を決めて、鉄をも砕く拳を強く握りしめる。

「らあァッ――！」
「――ッと！」
背後から、今まで黙って見ていた拳藤が動き出し、殴りかかる。
マスタードの個性、毒ガスなら当然、三人の動きが揺らぎとなって動き、その揺らぎが直接マスタードに繋がるので、不意打ちは先ず無

理。
だから、あっさりと躱された。
「さっき言ったろ?君らの行動は全部筒抜けなんだって――」
しかし、ここでマスタードは一杯食わされる。
突如、拳藤の手が巨大化したのだ。
その大きさを利用し、マスタードは僅かながらにダメージを食らう羽目になった。
「痛った!?」
「何、ヘラヘラ笑ってんだよ!!」
ガスマスクが揺れる。
拳藤の一喝に、再び森が沈黙に包まれる。
夜桜が、傷負ってでも、自分たちを大切に思ってくれている。
自分も皆んなのことを大切に思っているし、その気持ちは夜桜と同じだ。
だから嬉しかった。
自分たちの事を家族と言ってくれて、それ程に自分たちを大切に思ってくれていて、嬉しくないはずがない。
煽りとはいえ、マスタードの軽はずみの言動に、拳藤は我慢ならなかった。
相手が拳銃を持ってる以上、下手に動くことは出来ない…
相手に虚を突く事が無理だとしても、動かずにはいられなかった。
「どれだけ気に入らない事があってもなぁ、人の大切なもんを笑うなよ!!」
拳藤の叫びに、夜桜の気持ちは揺らぐ。
自分のことを思って、叱ってくれる人間がいる。
(――なんだあの個性!?)
「事実を言ったまでさ!!
そんなショボい個性にドヤ顔されて、説教されてもなぁ!」
マスタードは一旦距離を離れて銃弾を入れる。
相手が近づこうとも、この銃さえあれば…どうってことない。
簡単だ、こんなヤツを仕留めるくらい――

しかし、マスタードの思惑は、思わぬ形で崩れてしまう。
「ショボいかどうかは、個性の使い方次第だ!!」
拳藤は巨大な手を団扇代わりにし、充満してる毒ガスを振り払う。
ガスが少しずつ晴れていき、周囲の毒ガスが消えていく。
毒ガスは空気より重い、しかし空気の成分により、毒ガスは少しずつ消えていくのだ。
「なッ!僕の個性が!!なんちゅうパワーだコレ!」
マスタードは少し体制を崩してしまう。
拳藤の個性、大拳の威力に思わず足がすくんでしまう。
扇ぐと同時に強力な風を作り出したのだ。
「馬鹿はお前だよ学ラン野郎。
一丁前に拳銃なんか持って、喧嘩に自信がねえって言ってんのと一緒だ。
必死にヒーロー目指して頑張ってる人間を、上から見下すように笑ってる人間より、よっぽど強いんだ!!」
「…!このッ!」
銃の引き金を引こうと、標準を合わせる。
コイツなんて、ただの銃には――
マスタードは慢心していた。
だから、気付かなかった――

「何より雄英の単細胞ってのは――」

ドッ――
「いッ――?!」
手に激痛が走り、手にしてた拳銃は宙に舞い、遠く離れた方向へ飛んでいく。
マスタードはマスク越しに激痛で表情を歪めながら、手を見る。
「油断したな!ガスマスク!!」
鉄徹が、マスタードの手を殴ったのだ。
そのため、つい拳銃を手放してしまったのだ。

（コイツ！ガスの濃度が薄くなって、揺らぎが伝わらなくなって気付かなかった！）
初めて、焦りが生じる。
マスタードは鉄徹を蹴り飛ばし、直ぐ様拳銃を取り出そうと、学ランの中を探るが――
（しまった！拳銃が…もう無い!!）
二つまでしか所持していなかったのだ。
しかも鉄徹は蹴り飛ばされてもこちらに噛み付くように睨んでいる。
蹴り飛ばされた銃を拾おうとしても、多分二人がそれを赦さないだろう――
（どうすれば良い!?これ以上毒ガスは出せない！銃もない、手助けは来ない！こんなハズじゃないのに！）
「普通、もうダメだって思うことを――」
拳藤の言葉が紡ぐように発せられ、マスタードは拳藤の視線の先に振り向く。
地面を蹴りつけた音、拳藤が見据えてるその先に…視線を向ける。
「儂らを散々コケにして、馬鹿にして、覚悟は出来ちょるんじゃろうな…！」
「ッ――!!」
夜桜。
もう既に間合いを詰めている。距離を取られ、マスタードは立ち止まる。
気付かなかった…どう対処すれば良い？一体どうすれば…
「テメェのその腐った根性…儂が…」
「嘘だ…嘘だ！僕が、この僕が!!こんな、こんな大したことのない…低脳の、バカ共に!!!」
「――ブチのめす!!!!」
そして、正義の鉄槌が下された。

ドガシャアアアァァン!!!

「更に乗り越えて来るんだよ――」

夜桜の鉄槌。

それにより地面へ背を叩きつけられ、ガスマスクが割れるマスタードは成す術なく、顔面をやられ、倒れこむ。

それと同時に、毒ガスは霧散していく。

そして瞬く間に、毒ガスは完全に消えた。

森を包み囲んでいた脅威は、夜桜と鉄徹、拳藤の三人により取り払うことが出来た。

「なるほど…お主がガスマスク付けてたのは、自分もそのガスに巻き添えを食らってしまうからか…

じゃが、何にせよ…この勝負…儂の……

いいや、儂らの勝ちで宜しいですね――」

殴られたマスタードは、動く様子もなく、白目を向いて気絶している。

殴られた所為か、頬は赤く腫れ上がっている。

大の字に倒れてるマスタードを見下ろす夜桜は、体の傷など意に介さず、息を荒くしマスクを取り外す。

「プハァ…!やっと、息吸えるわ…ハァ……ハァ……」

鉄徹は、鼻から流れてる血を拭いながら、呼吸する。

久しぶりに吸ったような感覚に、鉄徹は酸素を取り込めることに何処かありがたみを感じながら、倒れてる少年に視線をやる。

「コイツ、どーするよ?ガスマスクがねェんじゃ毒ガスは出さねェと思うけど…放っておくのもアレだろ?」

「んじゃウチが連れてくよ…取り敢えず施設に目指そう…八百万や泡瀬のヤツはマスク配って他の生徒の安否確認してるし…」

拳藤は個性を使って拳を大きくし、マスタードを一握り掴む。

これで気絶から回復して起き上がっても暫くは抵抗出来ないだろ

う。
また何かあれば気絶させればいい話だ。
「では…儂らも早く…」
夜桜がポツリと呟くと、拳藤が「夜桜…」と呼び掛け、近づいて来る。
拳藤の呼び声に首を傾げる夜桜。
「その…ありがとな、私たちのこと――」
その一声に、目をまん丸にする。
「あん時ウチらのことさ、家族って呼んでくれて…スゲェ嬉しかった。
ウチらの為を思って、アイツ許せなかったんだろ？だから、さ…

カッコよかっぜ、夜桜」
初めて自分の正義が誰かに認められ、感謝された。
昔の自分なら、多分感謝されてなかっただろう…何より、他人に感謝されるなんて考えは当初は無く、感謝されるような事ではないとずっと思っていた。
悪の殲滅こそが己の正義だと、そう誤った方向に道を歩んで来たから…
でも、今は違う。
初めて、ありがとう。と言ってくれた。
それが、今ではどうしようもなく嬉しくて、つい涙が溢れ出てしまいそうになる。
自分の善意ある行いが、他人に感謝される日が来るなんて思いも付かず、嬉しくて仕方がなかった。
だから、夜桜は
「いいえ、どういたしまして――」
明るい笑顔で、黒影様が大好きだったその笑顔で、二人にそう答えた。

１０４話「奇々怪々」

ザシュッ、ザシュッ！
肉の切れる音が、森の中に騒めく。
暗闇の中でも、ハッキリと視覚することが出来る。
無数の刃が嵐のように襲いかかり、月の光に反射し輝きを増す。
「肉面…肉めええぇぇん……」
ムーンフィッシュは先程から意味不明な言葉を何度も発している。
まるで、血肉を求む飢えた肉食獣のように…殺意を孕ませ、何度も歯から歯を生やし、氷の壁を切りつけ、三人の皮膚を少しずつ切っていく。
「んにゃっ!?」
美野里は猫のような可愛らしい声を上げる。
服がビリビリに破れ、下着が露わになる。黄色とオレンジ色の可愛らしい下着が、見えてしまい、一瞬頬を赤く染めるが、どうってことなかった。
羞恥心は多少はあるものの、今は死ぬかもしれない…生と死を賭けた戦いの真っ最中だ、恐怖に怯えてる中、そんな感情は一切芽生えなかった。
幼いとはいえ、小さい身のこなしに素早く動く美野里を、ムーンフィッシュはああも容易く、美野里の忍装束を破壊したのだ。
「美野里！」
美野里の悲鳴に、轟は声を張り視線を彼女に向ける。
しかしそれが一瞬の隙と呼べたのか、ムーンフィッシュの刃が一点集中し向けられる。
――しまった。
この数は不味い…下手に喰らえば跡形もなく体は貫かれ死ぬこと間違いなし。
稲妻のように駆け走るその刃は、轟とあと僅か３０㎝という距離に追い詰めていた。
反応が遅れただけで、こうも致命的なミスをするのか…鳥肌が全身

に立ち、絶え間ない恐怖と絶望を、浴びる事になる。
ムーンフィッシュの顔は隠されてるので、相手がどう言った表情をしてるのかは知らないが、微かに微笑んでるような印象が見受けられる。
轟は氷を出すも、その前に刃物が轟の腹部に迫っていた。
避けることも…多分間に合わない…咄嗟に目を瞑る。現実から目を背くように、轟は襲いかかる凶器に、目を瞑ってしまった――
ボオオォン！
「いっ…!?」
轟の横腹に、爆破が叩き込まれる。
転がるように倒れる轟は、咳払いしながらも横腹を押さえつけ、爆破が発生した所へ視線をやる。
「何ボケッとしやがる舐めプ野郎！
死にてえのか!!」
爆豪の爆破。
それ以外、この現象はあり得ない…
爆豪は荒々しい雄叫びに似た声で呶鳴り散らかし、歯の刃に爆破を叩き込もうとするも、歯から再び歯がニョキリと生えていき、爆豪を切りつけようとする。
運良く躱すことに成功したので、重傷には至らなかったが、微かに少量の髪の毛がハラリと、音を立てず切られてしまう。
そんな事などお構いなく、爆豪は二歩下がって相手の動きを観察し予測する。
「爆豪…」
「テメェにはまだちゃんと勝ててねえんだよ!!体育祭で俺にワザと負けやがってクソが！テメェが此処で死んだら完膚なきまでにブチのめせねえじゃねえか！」
一見、救けた訳じゃないと言うセリフ…しかし、その言葉に何処か優しさと温もりが存在していた。
爆破を受けた痛みが、スッと引いていくような感覚を覚えながら、轟は少し呆れた様子で、でも爆豪なりの優しさに、思わず「すまねえ、

助かった」と一言。
「アァ!?だから救けてねえわ！
調子に乗んなクソが!!」
爆豪は掌を爆破させ、忌々しい目で轟を威嚇するように睨みつけ、荒々しい言葉を発する。
「ふ、二人とも！前！前！」
美野里の指差す方向に、二人は息が合うよう同時に前の視線に向く。
刃先が数本、自分たちに降りかかってくる。
ムーンフィッシュの歯の刃はかなりの強度を誇っていた。
未だに一本も歯を折れてないし、その硬さは鉄をも容易く切り裂くような強靭な切れ味を誇り、チタン合金のような硬度を持っていた。
ムーンフィッシュは涎を垂らし、ポタリポタリと自分の真下に唾液が落ちていく。此処まで見ると、恐怖どうこう以前に、気持ち悪い。
人間、歪んでしまえばああなってしまうのか…そんな気さえ思えてしまう。
敵と交戦してから随分と時が経った気がする。
実際は１５分弱しか経っていないのだが、厳しい状況下の中だと、時間感覚がズレてしまう。
人が同じ作業を何度も繰り返すと、時間感覚がズレるように、防戦一方の中を延々と繰り返していると、何時間も戦わされてるのではないかとさえ思えてしまう。
唯一この戦場の中で何かが変わったかと言えば、後ろを覆い囲んでた毒ガスが晴れたことだ。毒ガスが無くなった今なら撤退することも可能なのだが、その先はまだ未知数…
この先にまだ敵がいるのかもしれない…そう考えると撤退…と言うのも、敢えて危険を招くのかもしれない。
それぞれの可能性が、分岐点になるよう別れており、正しい選択が何なのか分からなくなってしまった。
救けは来ない、爆豪は戦えない、こちらもそろそろ体力の限界も近い…

個性訓練で体力を使い、ろくに本気すら出せない…森の中だと尚更だ。
美野里はともかく、爆豪や轟と言った、被害になりかねない個性を持つ者では、立場が悪いとしか言いようがない。
爆豪だって本気になれば強い、ただ無鉄砲に近づけば危険だという話だけで、戦闘訓練やオールマイトに放った最大火力をぶつければ、ムーンフィッシュも無事では済まないのだが…
爆破は衝撃的な爆発と共に火を放つ。
その散った火花が森の葉に引火し、大爆発を起こしかねない。
轟も、炎を使えばどうってことない相手だが、爆豪の例と同じく火事を起こしかねない。
下手すれば自分たちも巻き添えをくらい自滅するなど目に見えている。
「んの雑魚がァ!!」
「まずい!!」
爆豪と轟二人に、凶器と呼べる刃物が迫ってきている。
身体中の力が強張り、思うように動けない。
目にも留まらぬ稲妻のような速度で駆け巡るこの刃物…美野里もバケツで応戦しようとするも間に合わない…ダメだ、無理だ。
そう誰もが絶望したその時――

「〜〜――!!」

ムーンフィッシュの動きが止まった。
まるで時が止まったかのように、二人の前で刃物は寸止めとなっていた。二人はなぜ、ムーンフィッシュの動きが止まってるのか意味が分からず、相手を見やる。
森の何処からか、声が聞こえ、二人の耳にまでその喧騒は届いていた。
二方向から、何かを壊しながらやって来る…
それを知った三人は、二つの方角に目をやる。

ズドォン！
刹那。
大きな音が大地を唸らすように響き渡り、周辺にあった木が薙ぎ倒されていく。
最初目に移り出した光景は…
「！皆んな!!」
「飛鳥ちゃん!?…と、何あれ？柳生ちゃん!?」
ボロボロの体でなお、三人の元へ走り逃げる飛鳥と、それを追うように隠鬼が暴れ狂い、宙に浮いてる柳生。
「肉見せ――」
ムーンフィッシュは柳生と飛鳥が来たことなど動じずも、顔の方角も変えることなく、人形のように口を開き、刃先を飛鳥たちの方向へ変える。
しかし、隠鬼の目はムーンフィッシュの歯が自分の敵の対象と解釈すると、圧倒的なその力で、歯を折っていく。
爆豪や轟が手も足も出なかったあの刃を、柳生は何の躊躇いもなく、壊したのだ。
目には細長い刃の歯が突き刺さり、隠鬼の目が震え、弱々しく縮みこむように、体をクネクネと鰻のように動かす。
「――アぁ？」
ムーンフィッシュの疑問に満ちた声が発せられ、柳生に視線を向けようと体の方角を曲げようとしたその途端。
ズドオオォン!!
「ガッ――!?」
違う方角から、何者かの黒い手がムーンフィッシュを押しつぶす。
まるで這いずり回るゴキブリを虫叩きで　潰すように、ムーンフィッシュは地面に埋もれるように倒れてしまう。
その黒い手の正体は――
「――ア…アァ…ア…ガ――!!」
黒いカラスの外見が特徴の少年、常闇踏影。
そして黒い影が体を纏い、暴走してるダークシャドウ。

ダークシャドウは常闇の相棒とも呼べる存在で、常闇の個性だ。
体に黒い影のモンスターを宿してる。
ダークシャドウには危険的なポイントが一つ存在していた。
それは、暗い場所で個性を発動させることだ。
光が強ければより弱く、闇が深ければより強くなるダークシャドウの個性は、他の生徒達とは違った特殊能力類の個性を宿している。
それは体育祭でお披露目されている。
上鳴や爆豪のような光を発する個性にはてんで弱く、脆い。
しかしその逆…闇が深ければどうだろうか？
「アアアアアアアアーーーーーーー!!!!」
それは、もう誰もが知るダークシャドウではなかった。
可愛らしく、親切で、気の利くダークシャドウではなく、完全に野生の獣を連想させるような…怪獣やクリーチャーを思い浮かばせるような、残酷な化け物へと成り果てたのだ。
しかもサイズも以前の頃とは比にならず、森を丸呑みにするような大きな口に、森の中でもくっきりと姿が見える程の凄まじい大きさ。
「ガルルァ…モット、モットォ！壊ス！破壊サセロォ!!!」
獣のような呻き声を上がる黒影は、次の獲物を追い求めんと言わんばかりに、荒々しい息を立てながら、周囲を見渡しては、薙ぎ倒された木を手で鷲掴みにし、メキメキと一握りし粉砕する。
思わぬ参上に、三人は唖然としていた。
頭の中が追いつかない、言いたいことがあり過ぎる。
先ず何だあの禍々しい目は、柳生の表情は酷く歪み、冷や汗を滝のように流している。
宙に浮いてる体は、多分…その赤黒い目が原因だと思う。
その目からは禍々しい殺意のオーラを異様に発していた。
常闇踏影。
今のダークシャドウはとてもじゃないが、普通じゃない。
雄英に入って半年も経つが、彼のこの暴走するダークシャドウは今までに見たことが無かった。
どうやったら一体あんな凶暴になるのか、そっち方面にさえ疑いを

抱いてしまう。
しかし常闇本人は苦しみながら必死に押さえ込もうともがいている辺り、制御が出来ないのではと推測される。
「轟くん！かっちゃん！光をお願い!!」
戸惑う状況の中、聞き覚えのある声に、三人は反応する（爆豪は眉間にシワをよし付け）。
森の中から現れたのは、巨体を駆使して背負ってる障子と、ボロボロの血塗れになってる緑谷。
爆豪の表情は一段と険しくなる。
「光…？つーか、何が…」
轟は分からずとおぼつかない様子で口を開き呟く。
光…多分それは常闇にという意味で間違い無いと思う。
体育祭で常闇の弱点は明かされた、その為ダークシャドウに光を浴びせれば多分制御できるのだろうが…
柳生の方はどうなのだろうか？
隠鬼の目など此処では初見だ。
どう対処すれば良いのか分からないし、隠鬼の目については話すこともなかったし触れることすら無かった。
「…取り敢えず、柳生の方の目？は弱ってるみたいだな…目に刃物刺さってるからか…？
もう一方の常闇の方も落ち着かせ――」
「待てやアホ」
暴走する常闇を鎮めようと、炎を出す轟を制する爆豪は、不敵な笑みを浮かべ「見てぇ」と呟く。
こんな状況で何を？と美野里と轟は首をかしげる。
「皆んな！大丈――」
常闇を含め、飛鳥は三人に口を出すものの、それとは違う歪んだドス黒い殺意に、一瞬体を硬直させる。
殺意が発せられてる方角に視線を向けると…
「……肉…めぇん…」
倒れてたムーンフィッシュが、顔を上げ歯を伸ばし地面を突き刺

す。
ニョキ～っと伸びる歯を利用し、上手く立ち上がり態勢を整える。
見た目的には多少ボロついてる為、そこまで酷い傷を負ってない模様。
「その子達の肉面を見るのは僕の特権だあアァ～!!
ああ、ああ、あアァ!ダメだ駄目だ許さない赦さない!その子達の血肉を…獲物を邪魔するお前は…赦さないいいィィ!!」
歯を剥き出し、鋭い刃物の歯を生やし伸ばしていく。
狙いはダークシャドウ。初めて敵意を向けるムーンフィッシュの矛先に、ダークシャドウは意識を向ける。
軽く唸り声を鳴らすダークシャドウは、訝しげな目を細めて
「ネダルナ…三下ガ…!」
伸ばした全ての歯を完膚なきにへし折り、握り拳を作り、ムーンフィッシュの体に直撃する。
ミシリと嫌な音を立て、ムーンフィッシュは悲痛の声をあげようもズバババァァン!と木々を薙ぎ倒すと同時にムーンフィッシュを殴り飛ばす。
まるでバットでボールを垂直に打つように、ムーンフィッシュは悲鳴をあげる間もなく、森の彼方へと吹き飛ばされてしまう。
ダークシャドウは影のモンスターなので、当然ゴム人間のように腕は伸び、刃物に貫通されようとノーダメージ、その為刃物の歯はダークシャドウには通用しない。
倒れた木々は所々血まみれになっている。
ムーンフィッシュは本当に、口の中にある全ての歯が折れてしまい、口から血反吐が出る。
彼を縛り付けてる拘束具もボロボロで、隠してた素顔が明らかになるも、白目を向いており失神した。
暗闇の中、血の海が広がり、ムーンフィッシュは木に背が当たったまま、気絶した。
人は麻酔なしで歯を一本抜くだけで泣き叫ぶ程の激痛を浴びてしまう。

しかし、ムーンフィッシュはその比でなかった…２８本もの歯を、麻酔無しでへし折られたのだ。
口は血の色しか染まっておらず、見るに惨たらしい重傷を負った。
普通ならショック死してしまう恐れもある為、生きてるのかさえ不明だが…
爆豪や轟、美野里でさえも手も足も出なかった（状況によるが）あの敵を、ダークシャドウはたったの一振りで倒してしまったのだ。
「……すげェ…」
思わず息を飲む。
森の中とはいえ、苦戦してた相手を…ましてや人殺しのプロを、難なく戦闘不能に陥れたダークシャドウに、轟は呟かずにはいられず、つい口に出してしまった。
「アアアアアアア!!!今度ハ、オマエダァ!!」
次は隠鬼の目が伸縮し、元に戻って来てる柳生を睨みつける。
柳生は冷や汗が止まりつつもあり、あの驚愕するべき隠鬼の目が落ち着いて来たのか、引っ込んでいく…
しかし、ダークシャドウは次の己の脅威と認識したのか、殺意を孕ませた声で、獣の呻き声を鳴らし、爪を向ける。
「暴レ足リンゾオオォォアアアァ!!」
ダークシャドウは己の欲望を貪るように、他者の血を求めんばかりに、必死になって襲い掛かってくる。
これぞまるで映画館の中に入ってるみたいな感覚さえ覚えてしまう。
ファンタジー系の魔物やモンスター、クリーチャーを連想させる。
ボォン！
「ヒャッ!?」
しかし、後は簡単。
どれだけダークシャドウが強くなろうとも、光には敵わないのだから。
爆豪は掌から発光性の爆破を、轟は炎を出すことで、ダークシャドウは弱くなっていく。

そして常闇の後ろに隠れるように、子犬のように引っ込む。先ほどのモンスターとは偉い違いだ。
一方、柳生も皆んなと合流し落ち着いてきたのか、はたまた隠鬼の目の効果切れか、元に戻っていく。
「はわわ、常闇くんのダークシャドウくん…凄く強かったのに、光に当てると…なんか子犬みたい…」
「……？爆豪に、飛鳥…か？」
ようやく我に返った常闇は、冷や汗を流しながら、辺りを見渡す。
ダークシャドウが常闇を飲み込んでたせいか、先ほどまでの記憶は無く、自分が何をしたのかすら覚えてない始末だ。
「すまない……俺は障子の腕が飛ばされた途端、怒りに任せてダークシャドウを出してしまったのだ……
その影響か…俺は、皆んなを傷つけるために……己の心が未熟だったせいだ…本当に、申し訳ない……」
常闇は悔いを噛みしめるように謝罪する。
頭を深く下げる常闇を見て一同は黙る込んでしまう。
「という事は、あの腕はやっぱ障子の複製腕だったのか…」
常闇じゃ無くて良かった…とは言えないが、それでも障子の複製腕は再生が可能なので、腕を斬られても心配は無いという話だ。
不幸中の幸い…と言ったところだろうか。
「後悔するのは後にしろ…と、普通のお前なら言うだろうな…」
障子は常闇にそう告げると、横目で柳生の方に視線を移す。
「柳生は、大丈夫なのか？」
「あっ、柳生ちゃん！」
柳生は拗ねてるのか、此方に視線を合わせようとしない。
それは、雲雀を救えなかった悔しさか、皆んなを傷つけてしまったと言う悔恨か…
「……飛鳥、俺のことは……」
「まだそんな事言ってるの？」
飛鳥はうぅ～っと唸るように言葉を発する。
どれだけ励ましの言葉を掛けようと、柳生の心が晴れることはない

だろう。
しかし――
「だったら、雲雀ちゃんを取り返せば良い話じゃない！」
バカの考えることは至って単純だ。
分かりやすく、そして難しくも無く、至ってシンプルなのだ。
「……雲雀が何処にいるか分からないんだぞ？それに…」
「う～ん…でもさ、敵がまだここにいるなら…もしかしたらまだ雲雀ちゃんは無事なんじゃないのかな？」
「……どう言うことだ？」
「雲雀ちゃんが目的って言ってたんだよね？でも目の前にいなくなっちゃったってことならさ、雲雀ちゃんが安全な場所へ避難したか、または敵と交戦中か…
私はよく分かんないけどさ、でも雲雀ちゃんの気配がなくなった訳じゃないんでしょ？」
言われてみれば確かに、雲雀の気配は微かに感じる。
いなくなった訳でもないし、あの雲雀がやられるとも考えにくい。
第一、敵の目的が雲雀と爆豪ってだけで、何が狙いなのか分からない。
イかれた連中のことだから、きっと命を狙ってると考えるのが妥当だろう。
「今度は救けようよ、ね？柳生ちゃん」
「……」
出来るのだろうか？
自分ですらあの鎌倉に手も足も出なかった自分が、果たして救けることが出来るのだろうか？
いや、出来るか出来ないかの問題じゃない…救けるんだ。
けど、今回は一人じゃない…
「ああ、勿論だ――」
――仲間がいる。

こうして、合流し陣形を整えた皆んなは、他の生徒達の安否を確認しながら、森の中を探索することになった。
――……爆豪を守りながら。
「待てテメェら！俺を守ろうとするんじゃねェ!!」
……若干、チームとしては偏ってるが。

「なんだよ…さっきの騒音…？」
暗闇の中、数十分間の激闘が続いていた。
双方は血を流し、満身創痍の状況であった。
純白とした鋭利な爪は、血に染まり、タラタラと垂らし、雫が落ちる。
騒音と言えば森の木々を破壊していく物騒な破壊音、ダークシャドウの暴走。
森の中にポッカリとした空洞があり、道ができていた。
地面には血が少量流れており、誰かが吹き飛ばされたものだと理解した。
「まさか…だと思うけど…」
地面には何本か強靭な刃が刺さっていた。
どれも血に濡れてるものの、それが何の意味を表すのか、理解するのに時間は掛からなかった。
――ムーンフィッシュ!!
やられた。とは考えにくい…だが、あの歯は間違いない…ムーン

フィッシュの個性、歯刃だった。
つまり、何者かがあの殺人鬼を再起不能にしたのだ。忍学生ですら苦戦すると高評価を押してたアイツが、何者かにやられたのだ。
（そんなヤツいたっけ…？）
しかし、幾ら思考を働かせたとしても、爆豪か夜桜…或いは今回の優先殺害リストのランキングＮｏ．１、緑谷出久。
それしか考えられな――
「余所見してる暇…あるんだね！」
「ッ!?」
大鎌が振りかぶり、肩を切りつけられる血飛沫が飛ぶ。
頭に血を流す四季は、服に裂け目や鉤爪の痕を負いながらも、前に飛び龍姫の肩を切りつけ、そこから顔面も斬りつけようとするも、スレスレに避ける。
「んのッ！邪魔ァ!!」
龍姫は掌から思念化した龍の形をしたオーラを放出し、四季に食らいつくように向かっていく。
「またソレ…！本当に嫌になっちゃう!!」
この追尾型の龍はダメだ、喰らえば爆発に巻き込まれる。
爆豪の爆発の脅威力版、と言った方が良いだろうか、一つ喰らえば体が吹き飛ぶんじゃないかという程の絶大さを誇る。
「秘伝忍法――【クウソクＺＥＸ】!!」
無数の蝙蝠達が束になって龍のオーラに襲いかかり、相殺。
巨大な爆発音と轟音が鳴り響き、風圧が襲いかかる。
思わず仰け反ってしまうほどに、押されてしまい、二人はバランスを崩してしまう。
「マジで……強い…でも、向こうだって瀕死だし…もうちょいで……」
「あー…もー！頭クラクラするし、いつの間にか毒ガス晴れてるし…仲間も倒されてるし…ウンザリなんだけど…!!」
溜息交じりの愚痴を吐く龍姫は、拳を強く握りしめ、歯を食いしばり思いっきりアイアンプローを決めようと足を一歩前に出す。
「一か八か…秘伝忍――……」

「四季ちゃん!!」
「!?」
一つの声が仲介し、二人は思わずと動きを止めてしまう。
森の視線の先には、美野里や他の皆んなが来ていた。
少し変わったといえば、麗日と蛙吹が追加したことだろう。雲雀救出メンバーが一気に駆けつける。
「皆んな?」
「……あァ?」
増援が来たことに苛立ちを覚える龍姫は、眉間にしわを寄せる。
四季はようやく手助けが来てくれたことに安堵の息を吐きながら、思わず体の力が抜けてしまう。
「コイツ…連合のヤツか?」
皆んなも直ぐに警戒態勢に入る。
四季と相手にしてると言う事は…だ、恐らく忍である可能性は高いだろう。
見た目的にヴィランだとは思えない。
「あー、増援来たか…本当は誰か一人でもって思ってたんだけど…やーめた――」
龍姫はつまらない物を見るような目で一人一人見ていくと、呆れた仕草で肩をすくめる。
一瞬、躊躇してしまう皆んな。
コイツらの目的が爆豪と雲雀以外の相手なら誰であろうと迷わず殺す、そんな連中が辞めた。と言った。
まるで先ほど会ったトガヒミコのように、簡単に諦めてしまう。
「まあ…弔から、最悪な場合は命を優先にして逃げろって言ってたし…」
「逃すわけないで――」
四季が相手を逃がすまいと少し体を前に出した途端、龍姫は龍の化身とも言えるオーラを放ち、それを四季や緑谷達…ではなく、地面に放出する。
ボガアカァァン!と地面が揺らぎ、土砂が降り注ぎ思わず目に入っ

てしまいそうになる。
口に土の味が嫌に広がり、思わず唾と同時に吐き出したくなる。
目眩しとして忍術を使うとは少し誤算だった。確かに忍の道としては使い道はオールオーケーだろう。
行方を眩ませ、相手の目を欺く…これぞ忍の極意の一つでもある。
龍姫は姿を消した。
「消えちまったか…」
「でも向こうが逃げるならこっちも本望よ…無理に戦わなくても良いし、相澤先生が許可を下ろしたのも、あくまで自分の身を守るためだと思うわ」
轟の言葉に蛙吹はそう言う。
拳藤と同じく、許可の意味を深くよく理解できている。
流石は、期末テストの実技試験を乗り越えただけの事はある。
「んなことより…皆んなどったの？手助けしてくれたのは嬉しいけど…なんか慌ててるように見えるし…というか緑谷ちんと飛鳥ちん傷が凄い…やっぱ敵に…？」
「うん、とっても強かった…今の私じゃ、歯が立たない位強かったよ……」
「そ、そんな事よりさ四季さん…雲雀さん見かけなかった？」
「雲雀ちん？そう言えば敵の目的が雲雀ちんと爆豪ちんなんだよね？見てないけど…」
「そっか……あのね、今僕らかっちゃんを守りながら皆んなの手助けと一緒に雲雀さんを探してるんだけど、四季さんも――」
「ちょ、ちょっと待って緑谷ちん！
……何、言ってるの？」
四季は「何言ってんだコイツ？」みたいな驚く視線で緑谷を見つめている。
いや、緑谷だけじゃなく…皆んなを見ている。
「あのさ、その肝心のかっちゃんはさ…何処にいるの？」
「――は？何、言ってんだよ？かっちゃんなら後ろに…」
後ろを振り返った途端、かっちゃんはいなかった。

かっちゃんを囲んでた皆んなも気が付かず、四季が言われるまでは理解できなかった。
どこに行った？だってかっちゃんはついさっきまで後ろにいたのに…
爆豪は確かに自分勝手で我儘で、自分のことしか見えてなかったが、幾ら何でもこんな状況下でフラッと何処かに行くなんて馬鹿はまずないし…
「何処に……」
「彼と雲雀ちゃんなら――俺のマジックで、貰っちゃったよーん」
ふと、若々しい男性の声が、上から聞こえた。
皆んなの視線が一点集中する。
木の枝の上に、土茶色のコートを羽織り、素敵なステッキを木の枝に突き、ハット帽と仮面を被った奇妙なマジシャンの男が一人、ビー玉サイズの球を四つ手に持っている。
「コイツらはお前らヒーロー側に居るべき人材じゃあねえ！俺たち側の人材だ！
――だから、俺たちが二人に相応しい輝かしいステージへと…導いてやるよ!!」
「!?返せ!!!!」
敵ネーム・Ｍｒ．コンプレス――
音も立てず、忍の気配すら掻い潜る奇妙な男は、爆豪と雲雀を拉致った張本人だ。
事態は急悪化。
奇々怪々と迫る事態、マジシャンは闇世の中で、嘲笑う。

１０５話「会敵」

「返せ？返せって言ったか今？可笑しいねェ？
爆豪くんや雲雀ちゃんは誰のものでもねェ…自分自身のモノだぞ！このエゴイスト！偽善者供め!!」
「返せ！返せよオイ!!」
奇妙な仮面越しから聞こえてくる薄ら笑いに、緑谷は怒りのコスモを燃やしていた。
普段の緑谷とは思えない程に、彼は激怒していた。
「そもそもなァ、返せ返せってせがむもの程見苦しいモンはねェぜヒーロー学生。
返せって言われて返す位なら最初っから奪いやしねーさ！」
悠々と、気楽に語り出し指を差し向ける奇術師たること、Ｍｒ．コンプレスは表情こそ読めはしないが、笑ってるように見えた。
「どけ緑谷！障子！」
地面に這いつくばる氷は支配していくかのように、地面から木へと凍り付けにしていく。
それをコンプレスは軽々しく、華麗な身のこなしで氷結を躱す。
木の枝に足の力を入れ飛ぶと、宙に舞う。まるで、本物のマジシャンのように――
「爆豪くんと雲雀ちゃんをどうする気なの!?」
「別に？どうって事はしねえさ、ただ…ちょっとした進路の話をするだけさ。
これからの、自分たちの夢について…ね？」
緑谷程ではないが、飛鳥はそれでも自分の大切な仲間を奪われて憤ってるのだろう、張り詰めた声を発する。
そんな彼女に対し、コンプレスは声色を変えることなく悠長に話し出す。
「我々は凝り固まってしまった『価値観』に対し『それだけじゃないよ』

と新たな道を示すだけさ…
今の子らは価値観によって道を選ばされている。飛鳥くん、君もそうだろ？君だけじゃないハズだ、忍のキミ達もそうだろ？
定め、なんて下らないルールに縛られ、己の道は消えていき忍の道を強いられた君らだって、少しは思うことはある筈だ、違うかい？ヒーローも忍も変わらないからこそ、我々は問うのだよ」
ステッキを上手く使い回し、体を駆使して違う木の上に着地する。
少しでもズレていれば、一ミリ単位でも着地する場所を間違えれば落っこちてしまう危険性だってある。それを物怖じせず華麗なパフォーマンスを発揮する彼は、もしかしたら昔はこう言った体術を使った芸当人の仕事を担ってたのかもしれない。
「違う…私たちは――」
「違わないさ。君たちは無意識に定めに縛られ、他の違う道を歩もうとも、見向きもしなかっただけだ。
それを悪とは言わない、だからこそ…そんな少年少女達を導くのさ、ヒーローや忍だけが世の中生きてる訳じゃない、我々のような除け者扱いされた人間もいるという事を…ね」
「随分と舐め腐ってんな…お前」
皮肉だが、それでも事実だ。
そうやって己の意見も、意思も、心も、届かない時がある。
忍の家系に育てられた人間だって、多くの人が無理やり忍の道を強いられた人間だって少なからずいる。
しかし、気付かないのだ…
それが普通ではなく異常だという事を――
忍になりたい人間は少なからずいる、間違ってはない。
だが、それが全てと言うとそうでもない。
忍の道を強制的に選ばされ、それを悪く思わない人間が存在することも――
幾多もの制限された社会に、不満を持たない人間こそ、可笑しいではないか？異常じゃないか？
それはヒーローだって何も変わらない。

そう言った点も共通してると、少し不思議なものを覚える。
まるで何か見えない不思議な法則が存在するような、そんな非現実的な事まで想像してしまう。
尤も、この世界の多くが非現実的な超人がいる訳で、そんな世界に非現実な出来事なんて僅かだろうが。
「待て…常闇と柳生もいない！」
「ああ。心配しなくとも、あの二人はアドリブで貰うことにした」
『!?』
柳生と常闇も?!
皆の心の声がシンクロして叫び出す。
コンプレスはビー球を懐にしまい、エンターテイナーのように悠々と語り出す。
「お前らが倒した男、ムーンフィッシュ。
歯刃の男な？死刑判決下されて、控訴棄却されるような生粋の殺人鬼…それをああも容易く蹂躙する凶暴さ故に常人じゃない強個性！素晴らしい、彼を連合入れずして何になる!?」
仲間が倒れ行く姿を遠くで見つめながら、この男は彼を切り捨て常闇という新たな強個性を持つ人間を選んだのだ。
そして柳生を選んだ理由は、薄々と予想出来ると思う――
「んでもう一人の彼女、あの子は天才だ。
己の力を食い止められない辺り、まだまだ未熟だが…それでも彼女はまだ子どもだ。
子どもだからこそ、この先もっと成長する余地がある…隠鬼の目（アレ）を見て確信したよ。
彼女は優先殺害リストに載っててね、けど…死柄木と上手く掛け合うさ、彼女ほどの人材を無くすのは惜しいからね。
万が一忍術が暴走したら、『闇』ちゃんの呪術で止めれば問題ない…と、言うわけで…彼女も敵連合に入れるには良いと判断した!!」
「良い訳ないでしょ！皆を返してよ!!!」
飛鳥の怒りに染まった憤る声が、森全体を包み込む。
Ｍｒ．コンプレスはそんな彼女の声など意に介さず嘲り笑うよう

に低く笑い出す。
「言った事をもう忘れるとは…こりゃ君の頭の中はお花畑だな――
殺されないだけでも有り難く思えよ！」
ヴィランが人を誘拐するとならば選択肢は二つ。
先ずは金目当てで人質を取り、最悪人質を殺す。
ヴィランが金目当てで人を捕まえ、売春、ネット動画、又は体を切り売りすると言った闇商売の売買。
しかし、どれもその選択肢には当てはまることは無かった。
連中の目的は、爆豪と雲雀を誘拐し、敵連合に加入させること。
なぜよりによってあの二人が…弔言った疑問も少なからず浮かぶはずだ。
だがこの際、今は関係性が無いので特に何も問題ない。
例え内通者と言う可能性も低くあろうとも、今は関係ない、それは後から考えれば良いだけの話であって――
「俺は人を欺く事と逃げることが取り柄でよ！
こんなヒーローと忍の選抜メンバー供とまともにやってたまるかってんだ！それに俺は戦闘要員じゃあねェ！」
飛鳥の飛ぶ斬撃、轟の氷結、それらを優雅に軽くかわし、又もや宙に舞う。
繊細な動きやアクロバティックな動きは見てるこちらもつい見惚れてしまいそうになる。
「敵連合開闢行動隊――全総員に告ぐ！目標回収達成だ!!」
Ｍｒ．コンプレスの言葉が、１５人全員の耳に伝達する。
無線で連絡を受けた開闢行動隊のメンバーは、即座に耳を澄まして伝達を受ける。
「長かったようで短かった！だがこれにて幕上げだ！
通信終了後、五分以内に回収拠点へ向かうこと！無事を祈る、以上だ！」
無事な人間が多数だが、現在戦闘不能となっているのが…
――マスキュラー、黒佐波、ムーンフィッシュ、マスタードの四名、その内１１名は無事だ。

コンプレスは違う方角へと視線と意識を向ける。
その先は、森が燃えてる場所だ。ただ一つ変化があったとすれば、毒ガスが晴れたと言うこと…それはつまり
「ｏｈ！シット！まさかマスタードがやられるなんて、誤算だなァ――
あの毒ガスをどう掻い潜ったんだ？まあ、流石は雄英生…そう言った点に関しては油断出来ないな」
マスタードの毒ガスは原因不明、解析もほぼ難しく、最悪死ぬケースも高いと言われてる。
可能性があるとすれば忍学生だろうか、忍学生は得体が知れない人間だ。
毒ガスを回避する術は少なからず学んでるんだろう。
だから、対忍用専用銃弾を所持させていたのだが、それでもやられた…と考えると相当な手練れだろう。
「まあ良いさ、何方にしろ目標は回収出来たんだ、このままトンズラさせて貰う…じゃあ諸君達、アデュー！」
「ッ！逃がすかよ！」
パキィンとした冷ややかな音が鳴り、巨大な氷山の一角が轟の右側から発するも、コンプレスは姿を消した。
いや、正確には空中の上を歩いてるのだろうか、飛んでいる。
まるで見えない何かの上に歩いてるようだ。
「くそッ…！」
「そんな…ダメ！絶対に！」
「マジで…笑えないんだけど…ヤバいんだけど…！」
「逃がすなああァァ!!」
好機から一転、絶望え。
少年少女の顔色は絶望と言う名の闇に覆われていく。

「おい茶毘と蒼志ちゃん無線聞いたか!?テンション上げ上げＭＡＸだぜェ！Ｍｒ．コンプレスのヤツ、早くもミッション達成だってよ！
遅えッつんだよなァ!?なんだか俺眠くなってきちゃったよ蒼志ちゃん寝よ？もう朝だぜ？」
「どうぞご勝手に。
茶毘、目的は達成しましたし、後は気を抜くことなくこの体勢を維持するまでですね」
「ちょっ、蒼志ちゃん本当に熱い!!クールだぜ！」
「ああ、そうだな…良くやってくれたよＭｒ．は。
後は五分以内に無事な奴が戻ってくるのを待つのみだ…」
炎が激しく揺れる中、炎の光を浴びる人影が三人、悠長に語りながら帰りを待っている。
目標は達成した。これが無事に上手くいけば現代社会に置けるヒーローへ像への信頼は一気にガタ落ちし、雄英は致命的な打撃を受け、マスコミやメディアは大きく食らいつく。
信頼を揺らぐ大きな案件が重なれば、その揺らぎが社会全体に蔓延する…それこそ、ヒーロー殺しの目的と信念…現在(今)を壊すことに繋がる。
何度も襲撃を許す杜撰な管理体勢、挙句に生徒を犯罪集団に拉致される弱さ。
その事実が現代社会に悪影響を与え、ヒビを入れる。
オマケに裏社会…忍社会に大きなヒビを入れるには絶好のチャンスだ。
忍学生が敵の襲撃を受け、仲間が拉致されれば、上層部も黙ってはいられない。
表の社会に忍の存在を告知しなかったとしても、忍に対する不満やヒビは大きく入る。
二つの社会に大きな影響を与えることが出来るのだ、これこそ一石二鳥。

「ただ、毒ガスが晴れてやがる…マスタードやられたか…
アイツも良くやったが、今から様子を観に行ったってどうしようもねえし、ヒーローか忍に見つかる危険性も高い…
下手に回ると厄介だし、ここは大人しくするか…やっぱこう、上手く予定通りには行かねえな、出来れば全員無事であることを祈りたかったんだが…」
本来は炎とガスで囲まれ視界が見え辛いように策略を練ってたのだが、夜桜達によって妨害させられたのだ。
しかし茶毘達は気付くはずがなく、自分の分身を送った数十分後には毒ガスが晴れていた。
「まあ、これでも最善と考えた方が良いでしょう？我々は上手くやりましたし、他の方々が戦力を減らし且つ、有意義に状況は進めてるかと…ましてや此方には強固性を持つ方々や、カムイ集団に認定されてる私たちがいます、我々の痛手と向こうの戦力を減らした分、プラスマイナス思考で考えると当然の帰結では？」
「最悪だぜオイ！上手くいってねえし戦力は健全さ！
俺たちが強え、相手は弱え！ハイお終い!!」
「……トゥワイス、少し煩いです…」
「静かだよ！煩えよな！本ッッッ当にノリが良いね蒼志ちゃんは！機嫌いいじゃねえか、慰めてやろうか？」
トゥワイスに冷たい目線をガン飛ばしするものの、本人は至って平常運転。
テンションを上げ声を張りながら悠々と足や手、体を動かす。
「大体貴方は……――？」
「ん？どした？」
ふと、蒼志は視線を違う方向へと向ける。
訝しげな目で、草木の葉を凝視する。
そこに誰かいるのか？という鋭い視線をジッと眺めてるだけで、軽く戦慄してしまう。
「いえ…彼処から気配を感じるので……誰か来てるのでしょうか？」
炎に囲まれ燃える森の中、ここに居るのは三人だ。だがもう一名、

違う何者かの視線を感じる気がしてならないのだ。
その気配が誰かまでは知らないのだが…
蒼志は【鬼火】を抜刀し警戒態勢に入る。
「おいオイ蒼志ちゃん、んな物騒なもん手に持ってどーしたよ!?楽しそうだな!」
「気配を感じませんか?何処からか…私たちを探ってるような…そうでないような…
兎に角、貴方達は気配には敏感ではないのです?」
「他の奴ら程じゃねえが、お前ほど優れてはねーよ。それと、気配って…俺たち以外、誰かここに居るのか?」
三人が喧騒に満ち溢れてる中、茂みに隠れてる一人の少年は、体を小刻みに震わせていた。
息を押し殺しながら、三人に怯えていた。
高校生とはいえ、ヒーローを目指す人間とは言え、一人の子どもが三人を相手にするのは無謀だ。
勇気と無謀は違う――
「……」
コツコツ、コツコツと足音が聞こえる。
蒼志が近付いて来てる。
刀に魂が宿ったかのように、蒼炎が鈍く揺らぐ。
張り詰めた空気に、一同は静かになる。
あのトゥワイスでさえもポーズこそは巫山戯てるが、ゴクリと固唾を飲み込み見守って居る。
ダメだ…来る!
少年が絶体絶命だと感じたその時――
「ヤッホー!」
「!?」
茂みの奥から、気楽に木と木を渡って行く少女が、蒼志に飛び付き抱きしめるように現れた。
思わず体勢を崩して後ろに倒れそうになるも、何とか足の力を入れ

て踏ん張ることに成功した。
「何だ……貴女でしたか鎌倉――」
「何だってのは、随分とした挨拶だねェ？」
まるで旧知の友に会え感動を受けた顔を満々と浮かべ立たせる鎌倉に、蒼志はつまらなさそうに、炎を扱う己の力とは真逆…血を通わない冷徹な視線を飛ばす。
それは鬱陶しいからか、鎌倉のキャラが嫌いだからか、苦手意識を抱く。
と言っても常人が抱くほどの嫌悪感は無く、何方かと言えば敵かと思えば鎌倉でしたというサプライズドッキリに驚かされて不機嫌になってるだけだ。
「気配の正体って鎌倉だったのか…驚かせやがって…」
「本当だよ！危険だぜ!!」
「仕方ないでしょう、気配が誰のものなのか…相手が気配を隠してれば分からない時だってありますよ」
「えへへぇ～♪いやァ柳生ちゃんがまだあんなチカラあるなんて知らなくってさ…！
何とか逃げてきたよ、殺されたらたまったもんじゃないし、まだボクのやりたい事終わってないからね」
鎌倉は頬にこびり付いた血を、ケチャップでも舐めるように親指で拭い、ペロリと舌で舐める。
「おや？まだこんだけしか集まってないんですかァ？」
反対方面から茂みを掻い潜る音が聞こえる。
この声は…と聞き慣れた声に溜息をつく茶毘は、声の主に振り向く。
「イカれ野郎か…血は集まったか？」
トガヒミコ。
彼女は先ほどＭｒ．コンプレスの通信が来る前に、お茶子と蛙吹と戦っていたのだ。
と言っても、戦闘…という乙女に相応しくないものより、恋バナをしていた…と言ったほうが正しいのかもしれない。

トガはルンルン気分で「いいえ、一人しか採れてません」と答えを返す。
「一人ィ!?死柄木が血は最低でも三人分は摂っとけ言ってたろ!?褒められるぜトガちゃん!」
「仕方ないですー、他のみんながゴロゴロ来ましたし、殺されるかと思っちゃいました」
殺す事は好きだが、殺されるのは嫌いだ。
自分勝手極まりない、とんだ凶悪な敵だ。彼女が敵だなんて到底思えないほどに――可愛らしい容姿を持ち、それでもって、危険だ。
「…ふっふっふぅ～♪」
ふと、鎌倉が自慢気に口元をニヤリと釣り上げる。
まるで「君らはダメダメだな～」と物語ってる顔が気に食わないが…
「そんな事もあろうかとねトガちゃん、柳生ちゃんの血採ってきたよ!」
鎌倉は鎌を手に持つと、赤黒い鎌から絞り出るように血が出てきた。
微かだが、鎌の色は少し薄くなった気がした。
「わあー・鎌倉ちゃんありがとうですー!
それにしても、これ溶けませんよね?」
「ダイジョーブ!その場合は忍術使ってるから、素は何ともないよ」
もしこれで舌が溶けたりでもしたらどうしようもないのだが…
しかし意外な事だ。
イカれ野郎と思ってた鎌倉が、トガの行動や結果を配慮し血を採って来るなど、誰が想像するだろうか?
「本当は雲雀ちゃんのも摂りたかったけど…あの子はボク達のメンバーに入る訳なんだし、まあ仕方ないよね?」
「ちょっ、鎌倉ちゃんマジ無能!本当にありがてェじゃねえか!結婚しよ!!」
突然のプロポーズに何も嬉しくない鎌倉は敢えてスルーするのが懸命な判断だと解釈し、懐からガラス式の試験管を取り出し血を入れ

る。
　赤色の血が、試験管の中に入っていき、トガは「はあぁ～♪」と頬を真っ赤に染める。彼女は血が付いたものが好きなのだ。
「私！忍ちゃんの血は初めてですので、何処か新鮮さが…！」
「血に新鮮さ求めてどーすんだテメーは」
　茶毘は面倒くさそうに頭をボリボリと指で掻く。
　やはりイカれた人間のことを考えようとしても、何も分からない。理解できない。
　だからこそ、なのだが。
「そう言えば茶毘――
『脳無』はどうします？」
　その言葉に、茶毘は反応し掻いてた指を止める。「ああ、そう言えば忘れてたな…」と茶毘は、秘密兵器・脳無を思い出す。
「Ｍｒ．コンプレスの通信があったとは言え、アレは茶毘専用脳無…
　恐らく彼の声では届いてないでしょう。かと言ってこのまま放置するのも、此方の戦力を減らす意味になりますし…
　回収した方が良さそうでは？」
「…そうだな、折角あんな便利なヤツくれたのに置いてくなんてあんまりだしな…」
　茶毘は耳に手を当てる。
　そして茶毘が「戻って来い」とだけ短く伝えると、通信を切った。
　本当にこれで大丈夫なのだろうか、自分が何処にいて、どの場所に茶毘がいるのか分かってるのだろうか。
　思考能力は無く、知能はかなり低いと言われてるあの改人・脳無は一体どうなってるのだろうか…
　一体どうしたらそんな体の構図になるのだろうか…自然と頭の中に疑問が曇りのようにモワモワと増えていくが、どれだけ考えても答えが見つかる訳がなく、またああいった人間すら踏み外れてしまったあの改人・脳無は最早人ではないだろう…バケモノ…それこそモンスターと呼ぶに相応しい名だ。

「後は…ここで待機してれば問題なしか…」
茶毘が一安心し息を吐いたその時…何処からか上から声が聞こえ出した。
「――…ぃ」
「ん？」
「――…びぃ」
上から少しずつ、少しずつと声が聞こえてくる。この喧騒に満ちてる森の中（トゥワイスが一方的に皆んなに話しかけてるだけ）、この場の誰でもない声の主が、上から聞こえてくるのだ。
「――茶毘ィ!!」
「！」
今度はハッキリと聞こえた。
バッ！と上を振り向くと、ズドォン！と地響きが鳴る。
何かが夜空から降ってきたのだ。
そして見た瞬間、直感で理解した。
誰が？ではなく、何を？――

茶毘と何度も名前を叫んでいたのは、Ｍｒ．コンプレスで間違いはない。
しかし、眼に映る光景は不可解なものだった。
Ｍｒ．コンプレスは下敷きになるよう地面にうつ伏せで倒れており、背中には四人の人影が映し出されてる。
緑色のボサボサ頭をした、緑谷出久。
複製腕を生やしてるマスクを付けた大男、障子目蔵。
赤と白のハーフに分けた髪色に、左目には火傷を負った、轟焦凍。
赤いスカーフを首に巻き、メロンのような豊満とした胸を揺らし、コンプレスの左腕を拘束する少女、飛鳥。
以上の四人が、自分達の目の前に突然、何の変哲も無く現れたのだ。
先程まで駄弁ってた四人も、目の前の出来事に沈黙になる。
「ハイ！おい！知ってるぜコイツら四人のガキ共！誰だテメェら!?」

１０６話「決着」

時間は遡り、Ｍｒ．コンプレスが拠点へ向かうその頃。
「本当に良いの？」
お茶子が危疑の眼差しを緑谷に向ける。緑谷は何も言わずただ頷いた。
飛鳥もそうなのだが、緑谷がこんな重傷の状態で何故動けるか？
アナドレリンの鎮痛作用が働いてるため、一時的に痛みを感じなくなってるが、効果が切れれば更なる激痛が襲いかかる。
ましてや両腕が折れてるのだから…
つまり、一時的には動くことは出来ても、後からは動けなくなるという話だ。
この中に治癒系の個性や忍法術を使える人間はいないし、リカバリーガールもこの合宿には来てないので、救急隊が駆けつけに来るまでは回復は期待できそうにない。
「これで良し…後は――」
「ええ、私が思いっきり投げれば良いのよね？」
障子は緑谷を背負ったまま複製腕で轟、飛鳥を抱きしめる。
端から見ればホモか恋人かと勘違いされることがあるだろうが、この状況は至って真面目だ。
「ウチもついて行きたいけど…でも、麗日ちんの容量考えると…」
「うん…ゴメンね？ウチも四季ちゃん連れて行って上げさせたいけど…傷酷いし…それに、最悪四人が限界だし…」
訓練の後で酔いも少しは克服したのだが、訓練は訓練…個性を頻繁に使ってた為、浮かせる力はこれ位しか残ってない…
トガとの戦闘では個性を使わず体術で駆使したので、何とか良かったものの、個性を使うのなら話は別だ。
「麗日さんの個性と、蛙吹さんの舌なら…追いつける！」
お茶子の個性『無重力』で皆んなの重力を無くす事で四人を浮かばせる。
そして蛙吹の鞭のように強靭な舌で障子を巻きつけ、方角へと放り

投げる。
蛙吹の蛙の個性は折り紙つきだ、舌だけでなく脚力もあり、素でも充分に強い。
所謂、人間弾。お茶子はコンプレスとの距離を見計らい、タイミングで解除する。
二人の個性があれば突破口は開ける。
伊達に個性をノートに纏めてる訳じゃない、今まで培った知識をフルに活用する事で、初めて努力が報われるのだ。
「早く…アイツを捕まえなきゃ……！」
柳生さんが
常闇くんが
雲雀さんが
そして、かっちゃんが。
今動けるなら…こんな痛みなんて知ったことじゃない――！
その信念が、その前向きな強さが、心の芯が、彼を支え強くする。
仲間がいるから
今、救わなければいけない友がいるから。
まだ、手は届くから――

手の届く範囲なら、救けなきゃいけない…
オールマイトの約束だけじゃない、自分がヒーローとして進む、覚悟――

「絶対に皆んなを救けるのよ！」
「デクくん達なら出来るよ！お願い！」
「役に立てないけどさ…でも、応援はしてるから…マジで頑張って！」
「美野里も…あまり役に立ててないけど…でもお願い、皆んな美野里のお友達だから…だから――！」
四人が、心の底から応援してくれている。
皆んなだって辛いんだ必死なんだ、なら…絶対救ける事しか他が無い。

「任せろ…」
「このままやられてる訳にもいかないしな」
「絶対取り返そ！皆んな！」
「うん！」
そして、緑谷達は心意気と共に、人間弾が発射され、森の彼方へ吹き飛んだ。

んで現在。
Ｍｒ．コンプレスを捕まえ、タイミングよく重力で落下した今、目の前には不穏に佇む連合メンバー。
荼毘、トガ、トゥワイス、蒼志、鎌倉の五名。静かに燃ゆる炎がこの場を照らし、沈黙が漂う。
会敵。
四人も当然、目の前に敵がいることは知っている。今に至るまでは。
「おい、Ｍｒ避けろよ？」
手っ取り早く荼毘が掌から炎を発生させる。
その炎はまるで、人を焼き尽くす為に生まれ出したと言わんばかりか、異様な炎が揺らぐ。
コンプレスは荼毘の言葉に「ラジャー！」と短く伝え、拘束されてない右手で自分に触る。
その瞬間。
大爆発でも起きたかのような広範囲の炎が、波のように押し寄せ、数名は荼毘の炎をまともに食らってしまう。
そして肝心のＭｒコンプレスが消えてしまう。
まるで人が消えてしまうマジックが起きたかのように、突然消え出

したのだ。
緑谷と障子の悲鳴が炎の中に聞こえる。
緑谷は折れた右腕が焼かれ、苦痛の叫びを上げてしまい、障子は複製腕を焼かれたので、緑谷程の悲痛は上げてはいない。
飛鳥と轟は間一髪に避けた為、荼毘の炎を浴びることはまずなかった。
無かったのだが…
「秘伝忍法――……【蒼狐炎・鬼火】！」
蒼志が立ち阻む。
『蒼刀・鬼火』は天下に纏わる宝刀――地獄の業火が雄叫びを上げ、生命を吸い取り燃え行く炎。
蒼白い炎は狐の尾の如く、炎の柱が九つ現れ、意思を持つかのように飛鳥目掛けて炎の波が押し寄せる。
追尾型なので回避は無理、しかも森の中で炎を躊躇なく発生させる彼女は、見境ないのだろう。
「秘伝忍法！――【半蔵流乱れ咲き】!!」
飛鳥は体に軸を回転させて、風が炎を消し飛ばす。
火の粉が森の中に付着する危険性もあるのだが、幸いこの森は燃えている。
その為大した被害はそこまで出る程じゃない。仮に炎の被害が酷くとも、轟の氷結があれば防ぐことなど容易いこと。
…なのだが…
「あー！轟くんだよね!?体育祭のイケメンだぁー！ね、ね!?殺しちゃっても良いかな?良いよね!?」
轟を阻む鎌倉に、苦戦を強いられていた。
大鎌を二本抜刀し、轟の首を刈りに来る。
一見ヘラヘラと笑ってるように見えるこのサイコパス少女。しかし内心に沸く殺意までは隠しきれる訳が無く、まるで霊に背中を撫でられたかのような悪寒が全身に走り、鳥肌が立つ。
轟は迷わず氷結で鎌倉を止める。
しかし、彼女がそう上手く氷結に飲まれるほどヤワじゃない――

「チッ！んでこれ全部斬り裂いてんのかよ…！」
苛立ちに思わず自然的に舌打ちをしてしまう。己の個性が相手に通じないと思うと、何故こう言う時に限って個性が通用しないのかと疑問を抱き、己の未熟さに怒りがこみ上げて来る。
まるで豆腐でも斬るかのように、滑らかで、繊細で、見てるこっちが立ち止まってしまう。
鎌倉は氷結攻撃に警戒したのか、上にジャンプし木の枝の上に乗る。
そして、チャンスを伺う…まるで「少しでも動いたら君を真っ二つにしてアゲル♪」と訴えかけるかのような視線。
しかし轟には鎌倉の視覚的な動作など関係なく、氷を出す。
氷山の一角が、鎌倉のいる場所めがけて貫くように突き進む。しかし――鎌倉は違う木へ飛び移り、直ぐ様轟に鎌の切れ端を振るう。
鋭い鎌の刃先はどんなものでも斬り裂き、刃こぼれする事なく、命を延々と刈り続ける凶器だ。
轟はもう一回、氷を発生させるも結果は初手と同じこと、アッサリと終わってしまう。
「厄介な忍も…いたもんだな…」
「う～ん、柳生ちゃんよりかは……楽しめそう??」
不敵な笑みに、思わず吐き気を生じてしまう。
その気味の悪い笑顔は、まるで昆虫のようだ。鎌倉にとってのこの笑顔は、自分にとっての素顔なのだろうか、作り笑いをしてるような、いや…これが彼女の笑顔とは思えないのだ。
自分の欲求を満たす為なら、血を飲めるのなら躊躇などしない…それこそ、感情を持たない捕食する昆虫のよう――……
轟は「参ったな…」と一滴の冷や汗を流し、指で頬をポリポリと掻く。
自分の実力が通じず、炎もろくに出せない今では、状況も、相性も何もかも全て悪い。
炎は出せるにしても、大雑把。
コントロールが上手く行かないし、ろくに使えない…炎はここその

時の為に使うつもりだ。
苦虫を噛み潰したような表情を立てる轟だった――

「轟くんは…無理そうだね……」
「他人を心配する余裕が貴女にあると――？」
飛鳥は油断していた。
いや、自分でも油断してるつもりは無かったのだが…それはあくまで己自身の視点であり、相手にとって隙を突くに充分だった――
「秘伝忍法――【獄狼炎・鬼火】」
狼の如く吠える雄叫び、大地が轟、地獄の炎は狼へと生まれ変わる。
炎に身を包まれた地獄の番犬は、まるで今生きてるかのように、獲物を睨みつける。
「自分が選抜メンバーに居座ってるからと言って調子に乗らないで下さい」
氷のような、低い冷徹な声色に寒気を感じる。少女の目は憎しみに満ち溢れてる気がした。氷獄のように冷血で、獄炎の如く揺らめく憎悪の炎を燃やしている。…炎と氷が合わさった印象を与える蒼志に飛鳥は軽く戦慄する。
「さぁ、喰らい尽くしなさい。
炎尽(命)きるまで、永遠に――」
その言葉が合図となるように、番犬は動き出す。風を切り、空気を燃やし、裂ける口を目一杯大きく開き、飛鳥に喰らいつく。
「秘伝忍法――【二刀繚斬】！」
ならば此方もと…風を切り裂く斬撃をお見舞いするまで――
空気を飲み込むかのように、風神の刃が番犬を真っ二つに――
「グルァァ!!」
――出来なかった。

なんと、飛鳥の秘伝忍法を喰ったのだ。
「は…？え!?」
「だから…言ったでしょう？命尽きるまで…喰らい続ける…と。
さぁ、晩餐の時間ですよ――地獄の番犬のね」
秘伝忍法を大きな口で一喰らいしたのだ。
風が己の体内に纏わりつき、炎と風が合わさる体に、番犬は快感を覚えたのか、舌なめずりをする。
炎の生命体…なんて生易しいものじゃない…本当に生きてるのか？空想上の生き物が、目の前に？
それ程に蒼志の忍法はとても繊細で、再現力も高く、無駄がなかった。
何よりも見た事も聞いた事もない…秘伝忍法を喰らう秘伝忍法など…
この番犬は、あらゆる秘伝忍法を喰らう忍術を秘めている。
「ガァァァルァ!!」
獣は再び大きな口を開き、襲いかかる。
不味い…体力も思ったよりもまだ回復してないから忍法が全然使えない…！
飛鳥はダメだと判断しながらも、引く事も出来ず、前のめりに突っ走り、二刀丁を駆使して番犬に斬りかかる。
だが、蒼志の忍法…即ち、蒼炎で作られた番犬にはそんな攻撃通じるはずがなく、体を透き通し、大きな口で飛鳥の肩を喰らいつく。
「ッッ！きゃあああぁぁぁぁぁァァァァ!!!?」
鮫のように鋭い無数に生える歯、強靭で力強い顎、灼熱の炎。傷口が抉られる度に炎は少女の傷口を灼熱の蒼炎で燃やし続ける。
傷口に熱が通り、脳がはち切れそうな激痛が走り、涙を流す。
「――こうなったらァ！」
飛鳥は激痛により流した涙で視界がおぼつかなくとも、刀を地面に突き刺し、潜る。
「ほほう、考えましたね」
飛鳥の遁術は土。

なら、土に潜れば炎は酸素を取り込めず消えてしまうという考えに、蒼志は一発食わされたような顔を立つ。
しかし――…
「言ったはずです…命尽きるまで消えない…と。まあ、土に潜れば酸素も取り込めるはずがなく、消えてしまうのは本当です…だから…こうしちゃいます」
パチン…！と指を鳴らすと、地面が蒼白く発光し、じわじわと熱を増す。
そして、地面から突如…爆発が起きた。
轟音と共に空へと宙に舞う飛鳥は、痛みのあまり悶絶しそうになる。
体中がオーブンで焼かれたかのような焦げ焦げしい感覚…プスプスと嫌な音を立て、黒い煙が巻き起こり、焦げ臭い匂いが充満する。
蒼志は番犬を爆破させたのだ。
己の意思一つでこうも出来てしまうと、万能と思えてしまう。
「一つ教えておきましょう…
選抜メンバー…なんて称号は所詮唯の飾りです。
どれだけ名を馳せようと、自慢しようと、実力が無ければ無意味…
分からないでしょうね？どれだけ鍛錬を積もうと、その努力を決して誰にも見向きされない人間の気持ち…分かりますかね？いいえ、分かるはずありませんよね――」
飛鳥は膝を地面につき、荒い呼吸を立てながら意識を整えている。
クラクラする余り、考える力が彼女には残っていない…
突破口も見えないし、勝機だって見えない。
でも、戦わなければならない……早く…仲間を取り返さないと…
「オイオイ！よく見たらこの女、死柄木の殺せリストに載ってる忍ちゃんじゃねえか！
そしてそこの地味ボロくんと髪分けハーフくんとタコ野郎！無かったけどなぁ!!」
ふと太い声が後ろから聞こえた。
トゥワイスが腕についてるリングからメジャーを引き出している。

恐らく彼も強い…そう確信した飛鳥は、残る力を全て刀に注いで斬撃を飛ばす。
「当たった！安心！」
しかしトゥワイスは素早く避ける。
回避する俊敏さが彼にあるのか、それか偶々運が良かったまぐれか、何方にしろ飛鳥の斬撃は虚しく空振りに終わった。
「トゥワイス、やるなら真面目にやりなさい……と言うより、貴方は戦闘不向きでしょう？それなら私のサポートを…」
「あの山この桃ペッタンコ！
俺が強えって言ってるのか？こんな貧乳弱ってる今なら叩き込むのが一番だッつーの！
ダメだ可哀想さこんな強えボインちゃんほっとけねえ！」
「貴方はどっちの味方してるんですか！」
「勿論飛鳥ちゃんだぜェ！」
と言いながらトゥワイスは飛鳥に飛び蹴りするも、飛鳥は転がるように横に回転しトゥワイスの蹴りを避ける。
蒼志は溜息吐きながら、宝刀・鬼火を構え直す。
飛鳥に睨みつけられてるトゥワイスは蒼志の横に隣立つ。
「複製した茶毘は？」
「倒されちまったからいけねえぞ！おっぱい揉む？」
「結構です」
一々反語を語りかけるトゥワイスに鬱陶しさを覚える蒼志は、大体の言葉はスルーする。
調子が狂ってしまうし何よりこの男といると可笑しくなりそうだ。何を言ってるのか分からない時がある。
だがこれでも自分達には必要不可欠な人材。ただ性格さえマトモであれば良かったのだが、彼の過去を考えると仕方ないとも考えられる。
なので無理に言ってもこっちが疲れるだけなのだ。
蒼志はかなりの真面目なので、ジョークというものが通じないのである。

「…思ったよりも…結構骨が折れるね……」
飛鳥はこんな危機的な状況の中、無理やり苦笑を浮かばせながら、内心は焦っていた。
早く…早く雲雀ちゃんと爆豪くんを取り返さないと…
何が起きるか分からない……

「いったた～…まさか飛んで追ってくるとは…発想が飛んでる…ハハッ――」
一方。皆んなが交戦してる中、何処からともなく平然と姿を現したＭｒコンプレスはコートについた汚れをパンパンと手で払い落とす。
仮面越しから聞こえる薄い笑い声に反応した荼毘は「爆豪と雲雀は？」と掌を見せて強要する。
「そう急かすな荼毘、ちゃんと持ってきたさ！それに見てくれ、二人だけじゃないんだ。他の二人も良い逸材がいてな？ソイツらも捕まえたんだ見てくれ」
喜々を弾ませた声を発しながら、自慢げに語り懐を探る。
ビー玉を探してるのだろうかそれが中々見つからず、コンプレスは「あれ？可笑しいな？」と首を傾げる。
何処を探しても見つからない…落としたか？という僅かな疑問が浮かび上がる中、荼毘が「どうした？」と顔を覗き込む。
「お前が探してるのはこれじゃないか？エンターテイナー」
すると障子の頼もしい声が森全体に響き、視線を向ける。彼の手に持ってるのは四つのビー玉、それはＭｒコンプレスが探してた品物だった。
「お前の個性がなんなのか…何故音も立てずに攫ったのかも分からん…
だが、お前が散々自慢し見せびらかしてた品物が、恐らく爆豪と雲雀…そして常闇と柳生の四人なんだろ？」
障子の推論に、コンプレスは「おおっ！」と声を上げる。

反応からしてみてビンゴ。あの時、コンプレスを捕まえた時、咄嗟に懐を探ってビー玉を盗み取ったのだ。
Ｍｒコンプレスはそれに気付かなかった。
「まさかあの一瞬で…いやぁこれは一手やられたな！」
「何感心してんだ阿保…」
「これは……不味いですね……形勢逆転されました…」
茶毘と蒼志の顔色に焦りと苛立ちが出てるにも関わらず、コンプレスは障子を感心している。
「よし！んじゃ引くぞ！」
「いや、逃がさないよ」
轟の声に反応した鎌倉は、横殴りに鎌を振り、平行に一直線の軌跡を描く。
そこからまた縦横無尽に斬り裁き、斬影が残る。赤い一閃が交わり、赤い血が飛び散る。
この血は…ダメだ。
轟は氷を駆使して何とか止める。
大分行動パターンも読めてきたので、氷の壁で守れば此方に支障はない。
「よし…なら早く逃げなきゃ――!?」
バタン！
誰かに押し倒された飛鳥は、誰？と相手を見つめる。背中から押されたので、誰だか分からないのだが…
「ああー!!飛鳥ちゃんも血だらけでカァイイですねェ！ねェねぇ！
貴女からもお茶子ちゃんと同じ匂いがプンプンしますゥ！」
殺意爛漫の笑顔をめ一杯にして浮かばせ、ナイフを手に持つ少女、トガヒミコ。
ハァハァ…と飢えた獣のように息遣いが荒く、頬は血のように真っ赤になってる。
飛鳥は「え?!」と困惑しながら刀を握りしめるも…
「ダメです～、飛鳥ちゃんはトガに刺されるのです…！
前から思ってたんだけど忍ちゃんって皆んなカァイイんだねぇ！

飛鳥ちゃんもトガとお友達になりましょう！最強のお友達になってくれますかァ!?」
胸めがけてナイフを振り下ろす狂人。
飛鳥は腕に力を入れるも中々どうして、トガが飛鳥をまたがってるからかビクともしない。
綺麗なバラには棘がある、と言うが…
トガは綺麗と言うより可愛いの部類だろう、正にそのままだ。
「離せ！」
「きゃっ！」
ダメだ。と思った瞬間、緑谷の逞しい声が耳に届いた。
重傷でも緑谷はトガに捨て身のタックルをかまし、トガは仰け反り体勢を崩す。
緑谷が来るとは思わなかったのだろう、油断してたからか躱す事は出来なかった。
「あ、ありがと…」
「早く！」
急かすように、まるで寝坊した学生のように彼女の腕を引っ張り轟の背中を追いかける。
無意識に傷だらけの、折れた腕で彼女の手首を掴んだことに躊躇いは無いが、彼女の手首を掴んだ…というシーンは何処かデジャヴを感じる。
しかし、少年少女達の努力も、成果も、目の前の理不尽に滅多に踏み潰されることになるなど、今になって分からなかった。
「いや、君らの負けだ――」
コンプレスが冷たい声で呟いたその途端、皆んなの目の前に突如、黒い靄が空間から現れる。まるで黒い煙が謎の空間から湧き出たかのような感覚、しかし…この現象は知っている。思い出したくも無い一ページに刻むに相応しいだろう記憶。
これは…この個性は…コイツは――！
「嘘でしょ…？」
「ワープゲート…！」

黒霧。
敵連合、死柄木の側近にして補佐の役割を務める重要人物。
非常に厄介にして最悪な敵だ。戦闘要員じゃ無いのは、彼が戦闘不向きなだけであって、個性を上手く応用すれば人を簡単に殺めることが出来る。
いや、黒霧だけなら…まだ良かったのかもしれない――
「あらあら、うふふ…こんな所に思わぬドブネズミが忍び込んでましたのね…」
右の茂みから姿を現わしたのは、眼鏡を掛けた美少女――呪術・闇。
端から見て美貌と呼ぶに相応しいだろうが、黒い血管らしき触手の模様は頬を蝕み、気味悪さの印象を与えている。
因みに忍法も実力も未知数、ラグドールを拉致した張本人。
「ネホヒャン！」
左の無数の木々からは現れるのは、頭部から脳が剥き出しになってる改人・脳無。
敵連合開闢行動隊のとっておきの秘密兵器であり、パワータイプの類では四人の内一人に入る。
紫のバイザーを付け、金属製の猿轡を嵌め、背中から複製の腕を生成し、凶器と呼べる工具を出している。
ハンマー、ドリル、金槌、チェーンソー、ソレらの武具は人を殺す為に所有してるのだと、見ただけで丸分かりだ。
体には血がこびり付いており、意味不明な言葉を発し続けている。
四面楚歌。
四方向、的確に敵が少年少女を囲んでいる陣形。此方は体力も底に近い状態で、手酷くやられてる始末だ。
この状態でどう逃げるか？完全に詰んだ。
そう誰もが認識しても可笑しくない状況。
此方は四人を取り戻したので、逃げきれれば問題ないのだが…そう上手く事が運ばないのが人生というものだ。
しかし、黒霧は四人の事など視界に入ってないのか、道端の石ころのように敢えてスルーし茶毘に語りかける。

「茶毘。通信から五分が経ちました、ヒーローと忍の増援が来る前にお早く。
龍姫、スピナー、マグネは既に回収済みです。残るは貴方達だけ――」
「待て黒霧、コンプレスの阿保が凡ミスしたせいで二人が…」
「いや、俺は凡ミスなど一切してないよ。このまま帰ろう――」
「何を仰ってるのですか…？貴方は何故そんな悠々と…」
お前のせいで…と茶毘と蒼志が苛立ち責めるも、コンプレスは片手で蒼志を制する。
「いやァね、お喋りが過ぎるのはエンターテイナーの悪い癖なんだよ。つい喋っちゃうんだ、タネを明かしたくなるのも一つの所業…でもな？俺言ったよな？
逃げることと…欺くことが取り柄だよって。
マジックは基本見せびらかすものがあるとき…
見せたくない(リック)ものもあるんだぜ？」
素顔が明らかになると同時に、男は口から舌を出す。
口の中にはなんと、四つのビー玉があったのだ。その中に僅かに感じるのは…柳生と雲雀…忍の気配。
薄っすらと四人の姿が見える。
じゃあ障子が奪った四つのビー玉は？
そんな疑問を問い出す時間はなく、コンプレスは指パッチンをする。
障子が奪ったビー玉は、氷へと姿を変えた。この氷は？なんて疑問は浮かばなかった…この氷が何なのか、問わなくても直感で分かる…これは、轟の個性、氷結を出した際の氷だ。
「万が一の時にね、こうなる事を予測しダミーと入れ替えたのさ。
ああそれと、君にはそのダミーをプレゼントしよう。走り出すほど嬉しかったんだろ？」
やられた。
Ｍｒコンプレスの解説に、皆は暗い表情を浮かばせると同時に、仲間一同はホッとする。

まさか、触れた対象を圧縮して閉じ込める個性だとは思いもしなかった――

だが、彼の解説と行動を見れば筋が合う。

トガは「ごめんね出久くん！また今度刺すから、またね！」と言い残してワープゲートへ去っていく。

トゥワイスも鎌倉も、闇も脳無もワープゲートへ次々と姿を消していく。

「まさか…私たちまで欺くとは……Ｍｒコンプレスにはやられました…が、予測を立てての最善策…お見事です」

「いやいや、それ程でもねーさ蒼志ちゃん。

んじゃツー訳で…お開きと致しますかァ…」

三人も黒霧のワープゲートへ姿を消そうとする。

「逃がすなぁ！」と轟が焦燥を孕ませた声を発し、皆はそれに応じて全力で駆け走る。

だが、緑谷はアナドレリンの効果が切れたのか、腕が、足が真っ二つにされたような、神経がブチ切れた感覚に苦しめられ、悶絶してしまう。

となると残るは飛鳥、轟、障子の三人。

しかし間に合わない――

バリィン！

「ッ?!」

そう誰もが諦めかけたその刹那。違う方角から輝きを放つ青白いレーザーの一閃が、コンプレスの仮面を破壊する。

狙いを定めたその個性…茂みからか、見てみると少年が怯えながら、ヘソからレーザーを発射させたのだ。

その少年は誰もが知ってる気障の男、青山優雅。

今までずっと、隠れていたのだ。

端から見ればヒーローらしかぬ醜態かもしれない…しかし己の恐怖を耐え凌ぎ、決行の時まで自身の存在を悟らせなかった青山は、誰

よりも輝いていた。
横倒れてる耳郎を見放すこと無く、ずっと――

「がっ…」
青白いレーザーを面食らった所為か、口からビー玉を吐き出してしまう。飲み込まなかっただけでも幸いだ。
三人は勢いを殺すこと無く走り続ける。無我夢中に、食らいつくようにと、仲間を取り返すチャンスなのだから。
飛鳥は一つのビー玉を、障子も飛鳥と同じく同じビー玉…残るは二つ、轟が回収しようと手を伸ばしたその瞬間――
バッ！と横から奪い去るように一つの手が、轟の手前を横切る。
風を掴むように、轟の手は空振りに終わり――
「哀しいなぁ？轟　焦凍――」
茶毘の凍てつく笑顔が、こびり付く。
ヘラりと笑い、見下すその笑顔に、轟は奥歯を噛み締める。
「お前じゃ誰も救えねえよ」というその蔑んだ目が、イヤに心を突き刺す。

「オイＭｒ。確認だ解除しろ」
「いてて…畜生!!んだよ今のレーザーはよォ！折角、景気良く片付けれると思ったのに…
俺のショウが台無しだ！」
紳士な覆面男も、青山の予想外なレーザーに苛立ったのか、口調が荒々しくなる。
コンプレスは苛立ちで歯を噛み締めながら、指パッチンする。
するとビー玉から解放され姿を現したのは…
障子が手にしてたビー玉から常闇。
飛鳥が手にしてたビー玉は柳生。
後はお解りだろう…茶毘が手にしてたビー玉は…雲雀と爆豪。
突如、解放された四人は訳分からずと辺りを見渡す。
雲雀と爆豪の肩に、茶毘の手がのしかかり

「問題なし――」

口元を歪めて、一言。

そして、黒い空間は徐々に狭まり、小さくなっていく。

「かっちゃん!!!」

「雲雀ちゃん!!!」

飛鳥は涙目になって叫ぶ。

目の前の友に、仲間に、精一杯手を伸ばす。

雲雀は最初の一瞬だけ何が起きてるのか理解出来ず、戸惑うものの、目の前の飛鳥の叫びに状況を理解し彼女も手をさしのばす。

だが、横からか…蒼志が雲雀の手を掴み、引っ込ませる。

黒霧のワープゲートが閉じる際に、手首を切断される危険性があるからなのか、単に抱いた希望を摘み取る為か…この際理由はどうでも良かった。

爆豪は、一瞬で理解出来た。

目の前に、ボロボロの緑谷が叫び手を差し伸べようとする。

遠くとも、三人よりもずっと遠くとも、自分の目には緑谷しか見えなかった。

そんな爆豪勝己は体を小刻みに震わせながら――

「来んな…デク」

そう一言、口に出し、首を横に振る。

そして空間は閉じ、消えてしまった――

敵連合開闢行動隊の姿はもう何処にもいない。目に映る光景は、静かに炎に燃える森のみ――

真夏の熱帯夜の中、雪国のように冷たい静寂な空間が全てを支配し――

「あ…ああ…あああああアァああアァーーーーーーーー!!!!」

緑谷の苦痛と悔恨の叫び声が、虚しく森に包まれ、闇夜が空を支配していた。

そう、ヒーローが負けたのだ。

忍学生も、ヒーロー学生も、敵連合という理不尽な存在に、敗北したのだ――

善悪頂上決戦編
１０７話「救ける、救けない」

闇夜の中、静かな空間に燃える炎の森。
敵襲撃から１５分後に、救急隊員と警察が林間合宿にやって来た。
どうやらブラド先生が通報してくれたみたいで…他にも、複数名の上忍達がやって来た。
ただ、通報にやって来た救急隊員達の事など知らない、森の中にいる皆んなは、緑谷の悲痛の叫びに反応しやって来る。
お茶子、蛙吹、四季、美野里、他にもマスタードを連れた拳藤、夜桜、鉄徹。
他の皆んなは全員毒ガスで意識不明になっている。
「これ……は？」
「デク……くん？」
「爆豪くんは？雲雀ちゃんは？」
皆んなが駆けつけにきた時には――もう…

「あああァァァァァァぁあああぁぁ――!!!!」

完全敗北――
涙を流し、己を責めんばかりと、何度も何度も頭を地面にぶつける。
己の弱さに、友を救けれなかった未熟さに、不甲斐なさに、こうしてられる事しか出来なかった。
頭からは何度も骨を打つような激痛が走り、出血する。
緑谷を止める為に、障子と轟、常闇は緑谷を落ち着かせるべく抑える。
この光景を見た皆んなは、ただ固唾を呑む事しかできなかった――

「飛鳥…ちゃん？これっ……て」

お茶子がソッと言葉を添える。美野里も恐る恐る…低い身長を更に低くして下から顔を覗き込む。

「……飛鳥……ちゃん……泣いてる…の？」

ポタポタと、雨雲から降る雨の雫のように、飛鳥は緑谷と同じく、己の未熟さと弱さに、涙を流していた。

…いや、違う。正確には…雲雀を救えなかったという事実に、涙を流してるのだ。

どうしてだろ？

救うって決めたのに、必ず手を出して、救けるって決めたのに…仲間を救けれなかった。

柳生は無言で何度も木に拳を当て、飛鳥を睨みつける。

どうして、どうして雲雀を救えなかったんだ…という鋭い視線が突き刺す。

「御免ね皆んな…ごめんね……皆んな……」

目の前の仲間を救えなくて、己の無力さに…心が凍てつくかのように悲しみに染まっていた。

瞼を閉じると、雲雀が「救けて」と叫びながら、先ほどの光景が浮かんでくる。

浮かべば浮かんで来るほど、涙が止まらない…

何が起きたか、その時を最後まで見てない人達は、ただずっと見守る事しか出来なかった…

自分たちだって本当は嘆きたい…仲間を、友を救えなかった辛さは、死ぬほど苦しい…

でも、それよりももっと辛いのは、目の前の友を、仲間を救えなかった彼達だ。

忍学生を含めた４６名の内、敵の毒ガスに被害を受け意識不明となった数は１５名。
重・軽傷者は全部で１５名、無傷で済んだのは１３名。
そして、誘拐された行方不明者二名。
プロヒーローの六名の内一名が頭部による重傷を負ったピクシーボブ、もう一名のラグドールは行方不明となった。
捜索したものの、結局警察の手では見つかる事なく、敵連合による拉致の可能性が高いと判断した。
一方、代わりと言ってなんだけど…
警察はマスキュラー、ムーンフィッシュ、マスタードの三名を捕縛。組織に派遣された上忍は黒佐波一名を捕縛し、計四名が現行犯逮捕された。
楽しみにしてた林間合宿は、中止という形で幕を閉じた

翌日。
メディアやマスコミは雄英高校の取材を取るべく門の前で待ち構えている。
一目見れば分かる通り、かなりの数だ。
写真を撮る者もいれば、今回の騒動に批判の声を上げる者、様々な人間が嵐のように殺到していた。
セキュリティーで守られてるとはいえ、この状況は見てるだけで見

苦しいもの…

「敵との戦闘に備える為の合宿で襲来…しかも相手が敵連合と来たものだ……

向こうは忍の戦力を持っている…恥を承知でのたまおう――我々は甘かった…敵活性化の恐れ…そして雄英のセキュリティも――」

会議室。

嫌に静かな空間が室内を支配し、緊縛とした空気が流れていた。

数名の教師が椅子に座り、面揃って会議を行っていた。

会議の内容は当然のこと、「爆豪勝己と雲雀の拉致」「敵連合の襲撃」「忍の結束」の三題だ。

爆豪勝己だけでなく、忍学生の雲雀が拉致されたことは大きい。タダでさえイかれた連中が何をしやらかすか理解出来ないのに、あの二人が何かされると思うと辛い…不安が心を煽る。

仮免許可を含め、敵と忍への対抗の術を身に付ける為に行った強化合宿に突如、敵連合が襲撃したケースに関しては幾つか可笑しな部分があった――

先ず、緑谷と飛鳥が死柄木に遭遇した時から危険性と最悪な予想を防ぐ為に合宿先を変更した為、相手に悟られることはまずない…

この事を知ってるのは数名の教師陣、合宿先のワイルド・プッシーキャッツ。

だが、敵連合はまるで知ってたかのように用意周到な作戦で攻めて来た。

それぞれの陣形、配置、更には生徒の情報など、向こうは全てを把握していた。

何故、生徒や親にすら悟られてない事を、向こうは知ってたのだろうか？

そして忍の結束も極めてデカイ。

向こうがその気になれば、抜忍が公共の場で忍術を使う危険性だっ

て大幅に高い。
抜忍はヒーローからの視点では敵と認識するので、最低限は問題ないが、忍は目立った場所への露出は厳禁だ。
ヒーローが対抗するにしても、力の差と相性で埋もれてしまう。それは、善も悪も関係ない――

奴らが暴れれば暴れる程、社会の秩序は壊され、ヒビが入り、超人社会は滅んでしまう。

今頃奴らは今回の騒動を利用し仲間集めに専念するだろう…しかも向こうの情報どころか、手掛かりすらも掴めてないのに…

「こんだけ計画された派手な襲撃を幾度となく仕掛け、我々の捜査網に掛からない…
裏で何かが起きてるかのような…そんな気さえ感じます」
「この際だから信頼云々言うが、これを通してハッキリ分かった…
ぜってェにいるだろ、内通者――」

マイクの一言に、その場の全員が固まる。
嫌な空気は更に気不味さを増し、一同は沈黙する。
「教師人じゃなかったにしてもだ！生徒の可能性…いや、忍学生だってあり得るさ！
携帯の位置情報とか――」
「やめろマイク。性懲りもない今、焦って内通者探しをするべきじゃねえ」
「止めるなよスナイプ！この際だから洗いざらいしよーぜ！白黒付けんなら今だろ！」
「じゃあ聞くがテメェが白だと１００％証拠が出せるか？ここの全員がそうだと断言できるか？」
いや、無理だ。
マイクは野良犬のような唸り声を出す。証拠がない今、内通者を探

したとしても内側から崩壊していくだけ…それこそ敵の思惑通りだ。
開ける気持ちを押し殺し、今はこの最悪な状況をどう打破するかが問題。
ましてや体育祭の時みたく、屈さぬ姿勢は取れるはずがない。生徒が拉致されたという雄英最大の失態が、社会全体に大きな不安を煽ぎ、ヒーローへの信頼を無くしていく。
マスコミの大きな批判の嵐が殺到する、その為根津校長と供に相澤やブラドには謝罪会見に出席することとなっている。
「私は腹が立つよ…無理にでも林間合宿に同行していれば…少年少女達があんな悲惨な目に遭わずに済んだものを…
心底腹が立つ！今すぐ己を殴り飛ばしたい気分だ…！」
深い怒りを孕ませたため息が、オールマイトの口から汽車の煙のように噴出する。
眉間には青筋がくっきりと映し出され、ガリガリの体でも、その威圧感に誰もが口を閉ざしてしまう。
それは長年平和の象徴と謳われたトップの実力から来るものか、はたまた圧倒的威圧感のある正義感が身の内から溢れ出したのか…
「取り敢えず…だ。
内通者探しは後にしよう、問題なのはこれから先どうするべきか…だ。いつまでもマスコミやメディアにこのままの雄英の醜態を見せる訳にもいかない、それは…
半蔵学院も同じこと――」

暗い闇の世界が、宇宙のように広がる。
真っ暗な世界で視界は見えない…気配もなければ何もない虚無の世界。
冷たくもない、暑くもない、無情の空間――
そこに一人の少女が佇んでいた。
「ここ…は？」
赤いスカーフがお似合いの忍学生少女、飛鳥は辺り一面をキョロキョロと見渡す。
まるで小さな子どもが親とはぐれ迷子になったかのような可愛い仕草をしながら、飛鳥は辺りを見回す。
しかし誰もいない――
「えっと待って…私はあの後確か…」
そうだ、確か組織に派遣された上忍に運ばれて、そこから疲労と痛みが解放されたかそれに伴い眠りに就いたんだ…
後のことは覚えてないし記憶にない、先ず知らない。
「と言うことは…夢？」
『そうよ』

「ッ!?誰――!」

後ろから、突如声が聞こえ飛鳥は気迫の声を張って振り向く。
普通ならそこまで警戒しず、天然見たく「え？は～い？」としたのほほんな声を発するのだが…普通じゃないからこそ飛鳥は殺意と敵意、警戒心を最大限に引き伸ばす。
だって、此処には人の気配も無ければ本当に人すらいないのだ。先ほどまで気配もなかったのに…だ。
此処は多分夢に違いない。夢だと言う確証が確実にある訳ではないのだが、感じ方からすれば夢のはず…なのに、今現実にいるかのような引きのばされた、聞きなれない嫌な声がこの世界に、飛鳥の耳に

鮮明に届いたのだ。
警戒しない訳がない。
振り向くと、そこにはにわかに信じ難いモノが彼女の目に鮮明に映し出されていた。
体色が毒々しい黒紫色に染まっており、眼は黒く、異形な形をした生き物が、飛鳥の真正面に向くよう佇んでいたのだ。
その姿は一言で言えば竜に近いものだった。
無数にある牙は長年研ぎ澄まされたかのような、鋭利なナイフを連想させる切れ味を持ち、翼は闇の羽衣を思い浮かばせる禍々しいマントに似せた翼。
四足歩行の竜は、飛鳥に近づいてくる。彼女も後ずさりしようとするも、思うように体が動けない。
恐怖のあまり、体が言うことを聞かないのだ――まるで蛇に睨まれた蛙のように、飛鳥はただただ得体の知れない化け物を、見続けるしかなかった。
『夢だから、我はテメェを傷つける事、出来ない。だから、話し合うことしか、出来ない』
まるで機械的な物難しい語り出し、獣のような呼吸が飛鳥の耳に鮮烈に届く。
「貴方は…何者……なの？」
『我は僕だ、私は俺だ』
「……？何を…言ってる…の？」
『そのまんまの意味だよ、いや…まだ潮時じゃないわ。貴様が我の存在を知るのは速すぎる。知るならこの姿だけで充分さ』
独特な喋り方に、飛鳥は訝しげな視線を向ける。取り敢えず自分はコイツの正体も、素性も、名前すらも知る権利は無いという訳か。
そう解釈すると何故だか遠回しに自分が弱いと言われてるようで何だか無性に腹が立つ。
『別に僕の存在は知らなくて良いんだよ、問題はテメェだよ、飛鳥――』
え？何で自分の名前を――？

いや、これは夢だ。自分の夢なのだから、自分の名前を知ってても仕方ないのかもしれない。
『キミじゃ、何も救えなかったね。何も、誰も、守れなかったね』
「ッ――」
カッターナイフのような鋭い刃物が突き刺す言葉に、飛鳥はコイツが何を言ってるのか、直感で理解した。
『お前の所為で、爆豪くんと雲雀ちゃんが悲しんだね？苦しんだね？傷ついたね？可哀想だね？
お前が手を差し伸べても、誰も掴めやしねェのさ』
「違う！私は――」
『違わない、違わねえよ。お前の弱さが、あの子等を不幸に陥れたのさ。
お前さえ強ければ、アイツ等は拉致されずに済んだんだよ』
ああ、言われてみれば――そう納得してしまいそうになる。もし自分が強ければ、黒佐波に苦戦することなんて無かったかも知れないのに。
深傷を負うこと無く、蒼志やトゥワイスだってその場で倒せたかもしれないのに、自分が弱かった所為で、それが裏目に出て敗北してしまった。
それは、弱い自分が一番知っている。
『なぁ、忍って楽しいか？忍をやってて何になる？何の意味が、価値が、理由が、キミにある？お前が、テメェが、貴女が、貴様が忍じゃなければ、こんな引き裂かれる想いなんてしなかったんだよ。
つまり、忍の道を選んだお前のソレ（弱さ）は運命だったのさ。そして弱ければ、人は救えない――』
確かに、忍じゃなかったらと時折思えてしまう自分が何処かにいたのもまた事実。図星を突かれ、飛鳥は口をもごもごしながら戸惑い、動きを止める。
此奴の正体も、素性も、名前すらも分からない得体の知れない化け物の言葉に惑わされてしまう。

そんな得体の知れない化け物の言葉に、納得してしまう自分が、何よりも許せないこともまた事実なのだから。

『――忍になるなんて辞めちまえば良かったんだ、これで分かったろ？アンタが忍になる資格なんて無いって。

思わなかったかい？貴様が忍になるなんて、荷が重過ぎるってよォ？それこそ、半蔵の名を背負う資格なんて無えように、テメェじゃ仲間の命すら背負うことだって出来ねえんだよ』

これは、幻覚か？いいや、悪夢だ。

自分の弱さを責める悪魔だ、竜だ、化け物だ。

耳を傾けるなと思いながらでも、それが出来ない。虫が脳に這いずるような悪寒に、飛鳥は苦虫を噛み殺した苦い表情を浮かべる。

これが、自分の知らない隠された本性なのだろうか？想いだろうか？

人間、自分の本当の気持ちに気がつかない事は誰にでもある。

だから当然、自分の知らない本性を見せられると、こうなる。

『何が刀と盾さ？お前は何も守れてない、力なんてない、お前じゃだーれも守れない。

理解出来たか？貴様じゃ忍にはなれないって』

正反対の自分が目の前にいるとさえ錯覚してしまう、得体の知れないコイツは飛鳥の真横に顔を出し、悪魔が囁くように、呟いた。

『逆に忍じゃないお前はどうさ？もしかしたら、そっちの方が貴様に似合ってると、相応しいと思うよ？

例えば、極普通にいる一般女子生徒のように、友達と平和ボケして遊んでたかもしれない…でもそれが悪いわけじゃない。それも一つの選択さ――

例えば、実家の寿司屋の経営だって悪くない。テメェは太巻きが好きなんでしょ？だったら、貴女は将来の仕事に就くべく父親と母親の下で働いたって良いじゃないか？

何も悪いことじゃない筈だ、寧ろ…前に忍になると断言して母親と

喧嘩になって、傷ついた頃よりかは』
それだけじゃない。
忍の基礎訓練ですら虫の息になったり、軽傷を起こしてボロボロになったり、生傷が絶えなかったり、忍の事で家族一丸で揉め事になったりもしたり、反抗期でよく母親とたわいの無い事で喧嘩したりしたものだ。
『忍が人を救う？逆だ、忍が人を苦しめてるんだ。
お前らは、我らから一体何を奪った？何をした？何を壊してきた？何を、傷つけて来た？』
――我ら？
『何も変わっちゃいないんだよ忍は。そう、あの時からずっと、アイツが死んでも、貴様らは何も変わろうとしない、する気もない。忍の秩序だと何だのと鵜呑みにして、何も変わろうとしない。
そんな糞ッたれた世界なんざお断りだ。だから、忍なんて消えてしまえば良い――』
――アイツ？
『だから、諦めなさい。これは自然の摂理なの。努力が報われる？――違う、努力は人を裏切り傷付ける。
友情は大切？――違う、友情は悲しみを生ませる。現にキミは悲しんでるじゃないか、涙を流してるじゃないか？爆豪を、雲雀を、友情で結ばれた友を救えず、絶望してるだろ？友情は必ず、何処かで切れるのだから――
勝利は人を強くする？――違う、勝利があれば敗北が存在する。
勝利した人間は、敗北した人間の全てを奪う、惨忍な存在だ。
幸せ、金、名誉、大切な存在、夢、希望、自由、それらを全てな。そしてアンタらは気付きもしない…無意識にそれがテメェらの糧となってる事に――』
また敗北は人を強くする。
敗北があるからこそ、次へと向かって行ける。一部挫折してしまうケースも多いのも確か。だから勝者は敗者へ誘い、敗者は勝者へと誘うのだ。

『だからさ、諦めようよ？そうすれば争いは無くなる。
傷付く事だって無い、悲しみも、怒りも、恨みも、何も持たずに済むんだ。
痛いのは、辛いのは嫌いだろう？だから――ずっと一人で生きていけば良いんだよ――』
コイツの言葉を聞くたびに思う。
辛い、苦しい、悲しい、怖い、嫌だ…と、必死に抗い否定し、自分で自分を維持しようとする自分がいるのだと。
『忍なんて、死んでしまえば良い――
無くなっちゃえ！消えろ！辞めなさい！無意味だ！価値など存在しない!!
――これ以上、無理に続けるのは止めようぜ？
――アンタは友を救えないんだから、やったって無駄だよ？
――お前に何が出来るんだ？
――辞めなきゃ自分を傷つけてしまうだけだ
だから、もう――』

「――嫌だよ…」

『――は？』
飛鳥の弱々しく、涙混じりの声が、化け物の耳に届く。
飛鳥の素顔を覗き込むと、彼女は泣いていた。顔面をくしゃくしゃにして、涙いっぱいだった。
「なんで…？何で……そんなこと、言っちゃうの？……どうして、全てを否定しようとするの……？」
確かに忍の道のりはヒーローと同じく厳しい。忍の定めは死の定めだから、危険を冒すのは至極当然だ。
生半可な覚悟じゃ望めないし、掴めやしない。
友を救えなかった。
ああ、そうだ…自分は仲間を救えなかった。あと一歩という場面

で、不条理な連中は希望を摘み取った。
それ以前に、自分が弱くてどうしようも無かった。
だから、自分が忍になる。なんて宣言しても説得力の欠片もない事など承知だ。
コイツの言ってることは、全部間違ってないのだから――

ある一点を除いて――

「どうして、そんな悲しいことを言っちゃうの…？
一人になれば良いなんて…そんな事、言わないでよ――」
『何が分かる？誰も救われなかった人間の気持ち。病だと呪いだと罵られた人間の気持ち。生きてるだけで罪だと罰せられ殺され掛けた人間の気持ち。人と関わらないようにと自分を殺して生きていく人間の気持ち。誰にも見向きされずに、生きる事を否定された人間の気持ち。愛、家、希望、夢、家族、それらの光を求めても、浴びたくても、それを許さない、許されない人間の気持ち。テメェに、アンタに、貴女なんかに、貴様如きに、キミに何が分かるんだい??』
「分からないよ!!分からないけど…でも、でも!!!」
『忍に全て奪われ、殺され、騙され、傷つけられ生きてきた人間の気持ちが、忍に分かる訳がない!!ならいっそ、滅んでしまった方が良いのさ!!!
お前らは多くの過ちを冒しすぎた――だから、忍も、カグラも…我を滅ぼし掛けた??楽も、滅んでしまえば良い!!』
ゴァッ――!!
巨大な鋭利な鉤爪が、飛鳥を引き裂こうと迫り来る。
飛鳥はソレを避けようとしない。
コイツが先ほど「夢の中では傷付けれない」と言っていた。その意味も兼ねて飛鳥は避けなかったのだが、もう一つの理由は恐怖で足が動かなかった訳ではなく、硬直して動けなかった訳でもない。
本当に動けなかったのだ。

早すぎて体が対応出来なかった…と言えばソレに近いし、完全にそうだとは言い切れない。飛鳥自身も、なぜ避けなかったのかは知らない。

ただ、ソレと同時に…バチンとて放電の火花が散るように、電源のスイッチを切るかのように、悪夢はココで途切れた――

「……ん」

眩しい朝日の光が窓から差し込み、太陽の日光が飛鳥を照らす。

見慣れない天井に頭の上に「?」を浮かべるしか出来ない飛鳥は、数十秒ボーっとしてようやく思考が働く。

さっきのは夢で、今見えてるのが現実。

横を見ると、木製のテーブルの上には白い皿に盛られた太巻きがある。手紙には「起きたらお母さんに連絡しなさい。お爺ちゃんは大事な要件があるので連絡は出れません」と油性のマジックで書かれていた。

文字から読むに察して恐らくお母さんなんだろう。お母さんもよく太巻きを作ってくれた。じっちゃんの太巻きも好きなのだが、お母さんが作ってくれる太巻きも中々絶品で、流石は寿司屋を経営してるだけの事はあるなと納得してしまう。

「という事は…此処は、病院…?」

飛鳥は目をまん丸にして起き上がろうとするものの、体の傷がまだ癒えてない所為か、ズキズキとした痛みが、身体中に電流が流れるように激痛が走る。

よく見ると身体中や胸など包帯が巻かれており、湿布も貼られ、点滴も打っている。

自分がどう言った状態なのか、直ぐに理解できた訳で、理解に到達するのに時間は掛からなかった。

「他の…皆んなは?」

ここは林間合宿近くの病院。

個室だからか、自分以外誰もいないし見当たらない。
緑谷くんは？柳生ちゃんは？常闇くんは？皆んなどこに行ったの？
不安が靄のように引っかかる。
するとガララ…と、タイミングよく病室の扉が開かれる。
そこには――
「おや？飛鳥さん目を覚ましてますね…？」
黒髪ロングがお似合いで、清楚な雰囲気を漂わせるクラス委員長、斑鳩の姿だった。
そこからか、後ろから波が押されるように人混みがやって来る。
半蔵学院のメンバーだけじゃない。
死塾月閃女学館のメンバー全員に、焔紅蓮隊、蛇女の両備と両奈、紫も入ってくる。
「飛鳥…さん……？その、傷は……」
雪泉は恐るおそる口を開き、飛鳥を見る。彼女自身は気付いてないのかもしれないし、半蔵学院のメンバーは昨日の深夜近くにやって来たので、二度目で見慣れてるから大して大きな変化は見せないが、他の連中はボロボロの飛鳥を初めて見る。
そう、体全身打撲で数カ所の骨を折り、臓器をやられ、筋肉も疲弊し見るに傷だらけで惨たらしい姿。
因みに夜桜は軽傷で済んでたので治療を受けて何とか退院、四季も頭部に傷があるものの、治療を受け包帯を巻いてるため何とか退院。柳生は体全身に刃物による傷が絶え間なくある為、治療は成功したものの、無理には動けない。また無理に動いてしまうと切れ目が開いてしまうので、退院こそは可能だが、忍による修行や鍛錬は出来ない。
「飛鳥！お前…誰にやられた!?誰がお前にこんな事したんだ!!」
焔は血相を変えて飛鳥に食らいつくかのように駆け出し近付いてくる。今にも胸倉を掴まれそうな気迫だ。
最初の焔はソワソワこそしてたものの「飛鳥め、何やってんだ…私以外に誰にも負けるなと言ったのに…」と強がりを見せていたものの、目の前の悲惨な彼女を目の当たりにして、取り乱れ、ライバルな

んて関係なく、飛鳥を本気で心配する。
昔の彼女からは考えられない熱意と動き、想い。言葉では言い表せない彼女なりの優しさ。
しかしその目には、飛鳥にこんな酷い目に遭わせた敵連合への怒りを燃やしている。
「うわぁ…飛鳥さんまで……傷が酷い……やっぱり、外は怖い……」
紫はビクビクと子犬のように小刻みに震え、愛用のクマのぬいぐるみ、ベベたんを抱きしめる。ふんわりとした人形の柔らかさが何とも、温もりがこもっており、暖かい。
「皆んな……」
皆んながお見舞いに来てくれた事に、ここまでして自分を心配してくれる人間を前にし、氷が溶けるかのように、じんわりとした涙を浮かべる。
「飛鳥さん…」
雪泉も飛鳥に歩み寄り、焔の隣に立つ。
か弱い、ボロボロで、生傷が絶えないその柔らかい、優しい手を、そっと握る。
女性同士とはいえ、なんだか無性に照れてしまう。手を握られたことはあまり無いし、雪泉みたいな美人になら尚更だ。
緑谷の手を掴んだ時は、筋肉でガッチガチで、男らしい手なのだが、雪泉のその柔らかい手はまるで雪そのものだった。
触れてしまえば溶けてしまいそうな滑らかな手は、いつまでも握っていたい気分だった。
「……私たちが、日常を過ごしてる中、飛鳥さんは……」
悪に立ち向かい、挙げ句の果てに致命傷を負い敗北した。
これが忍の世界なら、彼女は捨てられていただろう。忍の世界は無情で無慈悲だ。使えないと判断されれば例え相手が男だろうと女だろうと迷わず斬り捨てるのだから。
しかし、今回は例外に当たった。
「敵連合…私は、あのような悪党集団を許せません……飛鳥さんや柳生さんのみならず、私たちの家族…夜桜さんや四季さん、美野里さん

を傷つけた……私は、敵連合を絶対に赦しません」
何より飛鳥にこんな目に遭わせた悪など論外。生きてることすら不思議でならない敵連合という存在は、雪泉への憎悪の炎を燃やし上げるのに充分だった。
「それは私も同感だ。飛鳥の獲物は私だ！それを横取りしようとし、挙句私たちの天敵とあらば、黙っちゃいられない…」
焔も同じ気持ちだった。
尤も、漆月のツケがあるし、連合の事件を前に黙って見過ごすほど焔達は生温くない。
蛇女の誇りは、今でも彼女たちの中にあるのだから。
「でもさ、どうするの？」
しかし、ここで未来が釘を刺す。
焔や雪泉は未来に振り向き疑問を浮かべた顔を見せる。何が、どうするとは？
「確かに雲雀を攫っちゃったのは許せないけどさ、その肝心の連中の居場所はどーすんのよ？」
――あっ、と此処で一言詰まる。
幾ら自分が正義感で息巻いても、連中の居場所が解らなければ、捜索することも不可能だ。
「そもそもアタシ達が動く理由にはならないし、第一ここは大人しくしといた方が身のためじゃない？」
ここで同じく、未来と隣立つ貧乳スナイパー、両備も釘を刺すように口を出す。
「両備さん、何を言って――」
「だってさ、連合に攻め込む任務なんて来てないじゃない。居場所も分からず無鉄砲に探すなんて馬鹿馬鹿しいし、そんなもん小学生でも分かるッつーの」
口こそ悪いが、これでも両備の言ってる事に反論は出来ない。
そもそも翌日経ってから霧夜先生を見てないし、半蔵だって見かけてない。
任務の内容もなければ、当然任務外での執行など言語両断だ。

下手すれば死刑にすらなり兼ねない。
「だから、ここは大人しくしといた方が身のためじゃない？って事よ」
「ワシもその意見に賛成やで」
「日影!?」
「悪いな焔さん、確かに焔さんの気持ちは同じや。けどな、全国の忍ですら捜査網に引っかからん連中やで？しかも相手は相当な手練れなんやろ？六人でも手も足も出ず虫の息にされたっちゅうに、焦って行く必要はないで」
「両奈ちゃんは痛いの好きだし気持ち良いけど、これで死刑にされたりしたら嫌だなぁ。それこそお姉ちゃんのためにならないし、両奈ちゃん達は下手するよりも大人しくしてた方が、絶対いいと思うんだワ～ン♪」
「私も…同意見です……仮に、場所が分かったとして…ど、どうするです…か？その、えっと……何を…目的として…？
雲雀さん達を救けるのか、連合を相手にするのか…両方は……無謀過ぎますし……」
或る者達は、連合に行くに反対する人数が少数出た。
未来、両備、両奈、日影、紫、本当は彼女らも連合のことは許せない。しかし、無理に探したとしてどうだ？自分たちはまだ学生という立場の身…まだ立派な一流の忍じゃない。
無断で、任務外での戦闘はご法度だ。
それは、忍学生でも知っている。
「じゃあ、貴女達は…連合の悪事を見過ごすと言うのですか？」
しかし、雪泉の言葉も間違ってはいないのだ。任務だから、場所がわからないから、と言いつつ結局立ち向かう意思はどこにも見当たらない。せめているとしたら日影か未来だろうが、蛇女の三人はそうでもないらしい。
因みに雅緋と忌夢がいないのは内緒である。
「アタイは我慢ならねーぜ!!もう何度も飛鳥達が連合に襲われてんだぞ!?黙っていられるかよ！」
「俺も賛成だ…俺を貶めるのはまだ良い…だが、雲雀を奪った事実は

確か…俺はアイツ等が許せない」
「これだけ全国の忍達がかれこれ何ヶ月も探してるのだ、流石に手掛かりは掴めてるだろ？ならば微かな情報を聞き出し、洗いざらい探せば、見つかることだって可能なはずだ」
「それ以前に、私達は蛇女の事がありますからね」
「私の可愛い雲雀においたした連中は、全員まとめて強調しなくちゃね？」
また連合の居場所に乗り込もうとする連中も少数前に出る。
葛城、柳生、叢、詠、春花は義憤をその目に燃やし、今すぐにでも連合に駆けつける態勢だ。
だが…行くか反対かのグループに分かれてる中、答えが曖昧な学生も少数いることに変わりはない。
夜桜、美野里、四季は俯けたまま何も答えない。
だが、斑鳩は意を決したように前に出る。
「…皆さん落ち着いて下さい。
ここは、ヒーローと上忍達に任せましょう」
皆んなの前で、ハッキリとそう断言した。それはつまり――
「…ッつーことはだ、斑鳩。お前は、反対なんだな？」
葛城は嫌に真剣な眼差しを斑鳩に向ける。いつものセクハラ親父ではなく、本当に、一番付き合いの長い友の、真意を問うかのような、熱く鋭い眼差し。
「勿論です」
「テメェは雲雀が捕まって悔しくねェのかよ!!!!」
堪忍袋の緒が切れる。
葛城は抑えられない忿怒に思わず胸倉を掴んでしまう。拳を固く握り締め、思わず今でも殴りそうな雰囲気だ。
一瞬で空気はドンやりと重くなり、気不味い空気の流れとなった。
他の連中は良い。
いや、良いと言う訳ではないのだが、それでも彼女らは半蔵学院のメンバーではないので、他の人に対して怒りは持てなかった。
だが同じ屋根の下で、共に切磋琢磨し合った仲、下級生や上級生な

ど関係なく、家族のように接して来た半蔵学院のメンバーたち。
行かない、と言うことは、つまり雲雀を救けに、そして連合を見逃すという事。
だから、斑鳩は葛城の手握ってる手首を、思いっきり、ギリギリと音がなるくらい痛く、強く握り返す。
「私だって悔しいに決まってるじゃないですか!!!雲雀さんが今も連中に何かされてると考えるだけで虫酸が走ります!!
雲雀さんは私たちの仲間ですよ?当然です。
ですが、居場所が解らない上に、飛鳥さん達をこんな悲惨な結末へと変えた集団ですよ?
私たちが連中の位置情報が判ったとしましょう。もし、私たちが殺られたとしたら?
雲雀さんは喜ぶでしょうか?
いいえ、雲雀さんにとっても私たちは大切な仲間…殺される姿は見たくないはずです。
これが単なる言い訳かもしれません…それでも構いません。

ですが、任務も与えられず、無許可で動くのに変わりは無い。そして雲雀さんを救けたとして、この事実が世間中に知れればどうなります?少なくとも忍への資格は剥奪されることは確実でしょう。
私たち約束しましたよね?全員で立派な、一流の忍になる…と」
空気の流れが濁るように重さを増し、重力空間にいるように心がより一層重くなる。
葛城も流石にぐぅの音は出せないか、奥歯を噛み締め、手を離し、後退りする。

そうだ、自惚れるな。
自分たちは忍学生だ、上の命令や許可なく動いて良い理由が彼女らにはあるハズが無く、自分たちは忍の段位にいる訳ではない。
忍ではなく、忍学生なのだから――

「…でも」
それでも…
「私は…」
雲雀ちゃんや、爆豪くんを――
「救けたい――」
その小さなか弱い声が、皆の耳に届き、一点集中するように、視線が飛鳥に注がれる。
飛鳥の出す決断は――

１０８話「動き出す運命」

救けたい。
そのたった一言に、室内は沈黙と化し空気が重くなる。
喧騒に満ち溢れてたであろう空間は、飛鳥の言葉に静寂と成り果てた。
「飛鳥さん……」
雪泉は物悲しげに飛鳥を見つめる。
こんな姿になっても、どれ程打ちのめされても、苦しもうと、それでも飛鳥は仲間を救いたいと、宣言した。
平和ボケした日常を過ごして来た自分たちが、今でも恥に思う。
何もなかった林間合宿に、突如敵連合が攻めて来るなど、誰も予想してなかったとは言え彼女達は命を懸けて本当の悪と戦い抗ったのだ。
それなのに…負けてしまったのに……
飛鳥は救けに行くと宣言したのだ。
それなのに自分たちはどうだ？
行くか行かないかで悩み、微塵たりとも動かないこの体たらく。
行くか行かないかで言い争ってる自分たちは一体、何をしてるのだろう。
そう思えてしまうほどに、自分たちが口の言い争いでしか出来ない自分たちが、何よりも情けなかった。
「飛鳥まで、無茶を言うのね」
両備は呆れを通り越して怒りもドＳも湧いてこないようだ。
飛鳥が元から無茶をする忍だと言うのは、嫌でも理解してるつもりだ。
両備だけじゃない、飛鳥と関わって来た人間もそうだ。
だが、今回は本当に無茶以前に行かせてはならない。
「気持ちは分かるけどさ飛鳥…今回は本当に無茶だって。
アンタ殺害対象にされてんのよ？オマケに言い様のない重傷負っ

ちゃって、もう迂闊に戦うことすら出来ないんでしょ？だったら、アンタはちゃんと安静にしてないと駄目だって。
まあ、悪忍の私が何言っちゃってんだかって思うのも無理ないけどさ、私も元は雪泉たちと同じ善忍だったんだから……」
死柄木の殺害対象ゆえに、黒佐波による深刻なダメージ。
それは、飛鳥にとって行動不能をさせるを得ない状況に作り上げていた。
これがもし、死柄木の思惑通りとならば、本当に驚異的だ。以前とは比べ物にならない。
「わ、私も……です……もし、私が飛鳥さんと同じ立場なら……た、立ち直れない……かも……」
紫の根暗な声。
元々気の弱い彼女は、何をやるにしても無気力ゆえにネットの引きこもりだ。
だから、彼女がこう言うのも必然だろう。
「両奈ちゃんは、痛いの好きだし気持ち良いから連合ちゃん達はウェルカムだよ!!」
かなり不謹慎だが、それでも本性を隠せない彼女はドMの鏡だろう。
怒らせたいのか、単に口から漏れた本音だろうか。何にせよ、蛇女の皆んなは断固反対と言った空気が読み取れる。
「皆さん良い加減にして下さい！
どうして、どうして飛鳥さん達がこんな悲惨な目に遭ってると言うのに貴女達は――!!」
場の空気が偏って行く中、雪泉の怒鳴り声が病室に響き、一同は静かになる。
これだけ怒りを露わにするのは、保須市のヒーロー殺しの時以来だろうか、あの時は飯田の弱音に雪泉は怒らざるを得なかった。
「もう良いです…皆さんは家に帰ってて下さい、私一人で行きますから」
『えっ!?!
!?』

流石の一同も、彼女の言葉に驚嘆の声が上がる。
とても、冗談に聞こえないその言葉に、目を丸くし唖然とする。
雪泉はバカが付くほど大真面目であり、頑固だ。夜桜と似た性格があり、冗談を付くようなタイプでは無い。
だから、今の言葉が本当だとすれば、それは余りにも無謀過ぎる。
「待ってよ雪泉ちん！幾ら何でもそれは……！」
「そうだよ雪泉ちゃん！ダメだよ悪い人たちの所に攻めに行くなんて！
雪泉ちゃん一人じゃ危ないよ！美野里だってたった一人の悪い人に殺されかけたんだよ!?」
「儂も同意見です…
相手が強かれ弱かれ、厄介な個性を持っています…儂一人ですら太刀打ち出来なかった…そんな輩が何人もいる中、一人で行くのは余りにも危険過ぎる…」
「我もだ。
雪泉が憤る気持ちは解る、連中が許せないのも理解出来る。
だが勇気と無謀は違うぞ、我も行く気ではあったが、お前がその気なら止めなければならん…」
雪泉以外の四人は言語両断と言った形で止めに入る。
四季は知っている、敵が如何に強いか。
夜桜は知っている、敵がどれだけ執念深い連中か。
美野里は知っている、敵の圧倒的な悪意と強さを。
経験した三人だから言えること。
尤も、夜桜、鉄徹、拳藤の三人がマスタードを倒してくれたお陰で毒ガスを消すことは出来たが、それでも被害が出てしまったのも確か。
不幸中の幸いなのが、これ以上被害が出なかったことに安堵の息をつくべきだろう。
今でもＢ組の面子やＡ組の葉隠と耳郎は目を覚ましてないと聞く。
「貴女達が、行かないと言うからでしょう？」
「じゃーさ雪泉！アンタは上の許可なくして連合のアジトへ行けんの

!?
しかも向こうはオールマイト殺そうって言ってた馬鹿げた連中よ!?忍の捜査網に引っかからない訳わかんない連中の居場所突き止めること出来るの!?
アンタにそんな力無いでしょ!?」
両備の怒鳴り散らかすような大声に、空気が益々重くなる。
確かにそうだ。
両備の言ってることも間違いじゃない。
居場所が解らない以上、下手に動くのは愚策。聞き出そうにも上忍や上層部の連中がそう簡単に忍学生に吐いてくれるハズも無く、ましてや許可が下ることもないだろう。
忍学生が下手に動いて良い案件では無いのは、言われなくても解るはずだ。
それだけじゃない、忍を対抗できる力も術も、奴らは身についている。
もう昔のような雑魚集団では無いのだ。
あろうことか向こうはオールマイトを倒すべく、力を培って来てる。
とても、敵うとは思えない。
「上の許可も無い癖に、私達がしゃしゃり出たってね…どうにもならないのよ…」
この正論に、誰もなにも言えない。
自分たちは忍であり、忍学生の身だ。
今回、爆豪と雲雀の救出の件に関しては重要な任務であり、最上忍の方のみが寄せ集められてるのだ。
許可なく忍活動を行なって良いわけがない。
無いのだが――
「では、仲間を救けるのに許可は必要なのでしょうか？
正義を貫くのに、許可は必要なのですか？」
雪泉の言葉もまた正論。
己の正義に他人に許可を貰わなければ成し遂げれない正義など、最

早正義では無い。
それこそ、偽善だ。
雪泉の低い声に、両備の目付きも変わる。
図星だからだ。
少ない時間だったが、自分も同じ学び舎の下で一緒に暮らして来たから、少しでも雪泉たち善忍の気持ちは理解できる。
たからこそ、懸命に止めているのに…
雪泉達を止めているのに、彼女は止まらない。
「私は黒影お爺様に誓ったのです…私は私なりの正義を貫くと…
信念を、夢を、そして…月の光で悪を討つと――
ここでジッとしてはいられないんです」
そんなの、私が赦さない。
「いても立ってもいられない、救けたい。
それの何がいけないのですか？
寧ろ、ここで私が動かなければ、きっも後悔する…私は、悔いのない正義を貫きたい。
二度とあんな悲劇を繰り返さないのなら、私は許可が無くとも行動に赴きますが？」
もう、誰も彼女を止められない。
ここまで、張り詰めた雪泉は初めて見る。
それは、彼女が覚悟を決めたから。
（それに…ここで立ち止まっては、黒影お爺様に叱られてしまいます…）
きっと、黒影お爺様もそうしてると思うから。
だが、自身の想いが一番強い方だ。
許可がなければ何もできない正義など、正義ではない。上からの命令で正義を全うすることは別に構わないが、仲間が危険な目に晒されてるにも関わらず、許可が必要というのはどうなのだ？
そして、許可をもらえない立場もまたどうなのだ？
「ほんまに、行く気なんやな？」
「……雪泉が、悪を赦せないのも解るよ…でも――」

日影と未来が語りかけたその時――

「あの～スミマセン君たち、悪いけど…飛鳥くんの診察始まるから部屋から出てくれるかな？」

病室の扉が物静かに開く。

ここの病院の先生だ。どうやら診察時間のご様子…ここは大人しく話を辞めて病室から出るのが利口だろう。

何しろ病院の先生は彼女らが忍だという真実を知らない。

皆んなは渋々と帰って行く。

雪泉は氷のような凍てつく目で、皆んなよりも早く先に出る。

その事に不満や怒りを覚える一面（両備はかなり不機嫌）など合間見える。

「じゃ、飛鳥また今度な…」と葛城が軽く頭を下げる仕草を取り、飛鳥も思わず頭を下げてしまう。

かなり物静かになった飛鳥も、内心混乱してるとはいえ中々に見ない光景だ。

診察が終わった後、病院の先生は溜息をつきながら、カルタに目を通す。

「ん～…リカバリーガールにかなり強めの治癒を施してもらったから動かせるとは思うけど…それでも無理はしない方がいいね。

内臓によるダメージ、何本かの骨折、筋肉離れ、どれもこれも酷かったよ…生きてるだけでも奇跡だって言うほどにね」

先生の言葉に飛鳥は何も言えない。

絶・秘伝忍法で覚醒しても、黒佐波には敵わなかった。あの時は生伝忍法という術があったから勝てたものの、もしあの術が無ければ結果は解らなかった。

あの時で、多分かなり負傷してしまったんだろうし、いつ死んでも可笑しくは無かった。

まあ、最上忍を幾多も殺して来た抜忍なのだから、当然と言えば当然なのだろうが、あんな理屈の通じない強者を死柄木が手駒にして従

わせてるのだから、何があっても可笑しくは無かったと考えると胸が痛む。
　このまま、連合が強くなっていってしまう…
　そうなってしまえば、次は本当に死人が出そうだ。
「君は緑谷くんに似てるねぇ…」
「え？緑谷くんと……ですか？」
「うん、見た目の問題じゃなくて傷の問題ね。
　彼の方がかなり酷く重傷でさ、君もそうなんだけど。
　でもさっき見に行った時は起きてたから、意識も回復してたし退院だね。
　君のも見た感じ、大丈夫…と言えばアレか…説得力ないけど…それでも普通の生活には支障は出ない程回復したから、よっぽどの無茶さえしなければ大丈夫さ」
　確かに体のあちこちは痛いが、前回の頃に比べれば全然マシだ。
　体に電流が走るような痛みは筋肉痛なのだろうか？そう言えば敵連合開闢行動隊が襲撃しに来た時からすっと無茶しっぱなしだったし、筋肉が疲労してるのも無理はないか。と飛鳥は丸呑みにする。
「あっ、そうそう君が退院する前に渡しておくべきものがあった」
「はえ？私宛にですか？」
　見覚えのない彼女は素っ頓狂で可愛ら声を発しながら、首をコテンと傾げる。
　白衣の胸ポケットから、小さな白い紙が折りたたまれて出てきた。
　先生が飛鳥に手渡すと「確かに渡したからね」と言いそのまま去って行った。
　飛鳥は呼び止めることなく、貰った紙を広げる事にした。
「えっ？」
　開いた紙には、文字が書かれていた。
　鉛筆で書いたこの手紙、文字も見慣れぬもじで、平仮名なのがまた可愛らしい。
　だが、問題はそこではない…その送り主が洸汰である事に、驚いていた。

どんな内容なんだろうか、と疑問が心を扇ぐ。
早速目を通すと、その文にはこう書かれていた。
『おねえさんへ
あのひ、おねえさんにひどいことといって、ごめんなさい。
おねえさんはひとり、とおくであんなこわいひととたたかってたのに、ぼろぼろだったのに、おねえさんはさいごまでたたかってたの、ぼくはちゃんとかげでみてました。
もうひとりのおにいさんはきづいてなかったけど、ぼくはとおくでちゃんとみてました。おねえさんとてもかっこよかったです。
だから、わるいことといってしまったのをすごくこうかいしてます。
ほんとうにごめんなさい。きえちゃえっていってごめんなさい。
だから、またあったらちょくせつしゃざいとおれいをいわせてください。
こうたより』
「……」

言葉が出なくなる。
まるで喉に何かが詰まったような…でも、息苦しくはない。
頭が真っ白になり、視界は歪曲率のようにぼやけ、自然と頬に涙が伝わる。
まるで一つの動作に手順を思わせるように、涙が流れ落ち、洸汰の手紙に涙がしみる。
ポタポタ、ポタポタ。
まるで雨のように泣き止まない。
ポタポタ、ポタポタ。
自然と涙が溢れてくる。止めたくとも、止めれない。
自分は、仲間を救えなかったのに。
雲雀ちゃんを、爆豪くんを、救えなかったのに。
誰も救えなかったのに…
こんな自分に、有難うと言ってくれる人がいてくれて、嬉しくて、涙が止まらない。

飛鳥は今まで皆んなの影で人を守り、支えてきた。
誰かに見てくれなくても良い。
誰かに守られなくても良い。
仲間のために、力を尽くしてきた自分は、報われなくても良い。
そう思ってきた。
けど……でも……
「――洸汰くん……」
洸汰くんは、見ててくれてたんだ。
微かな時間の中でも、それでも…私を見ててくれた。
二人を救えなかった…でも。
あの子と緑谷くんは、救えたのかな？
もし、私が黒佐波に負けたら…緑谷くんや洸汰くんも殺されてたのかな？
それは凄く嫌だ…でも、私一人で誰かの命を守れたのなら、救えたのなら…
私は……

「――うッ…ぁぁぁ……ぁぁ…ぁぁ、ぁ、ぁ、ぁ　ぁ　ぁぁ、ぁ、!!」

その後、飛鳥は泣け叫び続けた。
悲しくて、嬉しくて、彼女は泣き叫んだ。
救えなかった辛さと、救われた嬉しさ、それがシンクロするかのような複雑な気持ち。
自分を責めてきてた中、洸汰くんの手紙を読んで、迷ってた心が晴れた。
まるで靄掛かってた迷いは、洸汰のお陰で吹っ切れ前に進むことが出来る。
でも、今はどんと泣こう。
その涙が枯れるまで…私は、洸汰くんから貰った手紙を、大事に握

りしめた。
破けないように、優しく包み込むかのように……
これは飛鳥にとっての勲章であり、人を救えたという証拠だ。
この手紙が、あるのなら…

敵連合なんてヘッチャラで、全然怖くない。
そんな錯覚にさえ見舞われてしまう程に、心が強くなった気がした。

それは、洸汰の手紙が飛鳥の背中を押してくれたから。
今まで個性を嫌悪してた小さな子どもが、お礼の言葉など思いつくものか？
手紙を書いてまで出す子なんて早々いないだろう。

もし、次にあの子にあったら私もお礼を言おう。
その時は、ヒーローや個性を恨まずに、明るい笑顔を見せてくれると嬉しいな。

夜の病院は、嫌に静かだ。
闇夜に漂う暗雲は、月を遮るように浮遊する。三日月の光が差し込むような気がして、どこか神秘的な気分になったりもする。
病院前は明かりが点いており、何処かホッとさせられる。
もし明かりも何もない病院であれば、廃病棟の黒いホラーとなってしまうのでそれはやめて頂きたい。
林間近くの病院の前に、外で佇んでいる四名は、浮かない顔をしていた。

「悪いな、こんな物騒な事件に手を貸してくれて……でも、手伝ってくれるのなら心強い…有難うな雪泉」
「い、いえ……私は全然……それに、私も敵連合のことでつい頭に来てしまい…その……他の方達と喧嘩してしまいまして……
轟さんこそ、動いてくれるなんて驚きです…てっきり否定するものかと……」
「まあ俺たちぶっちゃけ蛇女に乗り込んじまってる身だしな！今更法だのなんだの気にしてちゃいられねーよ！
なっ、八百万！」
「あ、アレは私たちが完全に判断を見誤っただけですわ切島さん！今後あのような事はしません！
それと、柳生さんから連絡が来ました。
直ぐに行くと仰ってましたし、もう直ここへいらっしゃるかと…」
轟焦凍、雪泉、切島鋭児郎、八百万百、この四名が今集まっていた。
柳生は雪泉と気持ちが同意だった為、皆んなの視線を掻い潜り抜けながら、合流するそうだ。
「後は緑谷と飛鳥だよな…」
「飛鳥さんもですか？」
「ああ、何でも切島が連絡したそうだ。
連絡先はあの三人しか知らねえし、無駄に数が多すぎりゃあバレちまう危険性が高い」
同じクラスにいるのは飛鳥、柳生、雲雀の三名だけ。
雲雀は現在爆豪と共に捕まってる身だ、そのため連絡なんて論外。
柳生は雪泉と八百万が手を打って話し合っていたので、連絡に関しては彼女二人に任せるだけ。
となると、残るは飛鳥だけとなる。
だから、最後に切島が飛鳥に連絡したという形になったわけだ。
「けど、結局はアイツらの気持ち次第だ…俺たちが今回やろうってのは正直、誰にも認められねえエゴだし、危険なのも百も承知…だからこそ、重傷のアイツら二人が動くってのは些か――……」
視線の先に映る姿に、轟の言葉が止まる。

不思議に思い見てみると、病室の扉から三名の人影が姿を現わした。
「おっ！来てくれたか！」
切島の歓喜に満ちた声が、夜の静けさを打ち消してくれる。
来てくれたのは、柳生、飛鳥、そして緑谷の三名。
三人とも包帯や湿布が張られており、まだ完治したとは言えない危なっかしさを秘めている。
「飛鳥さん、柳生さん！」
「ゴメンね雪泉ちゃん、私…悩んでたけど、もう大丈夫。
吹っ切れたよ」
「俺は、雲雀を救けたい…ただそれだけだ。
雲雀をもう、手放さない為にも、今度は友の手を掴みに行く…」
清々しい太陽の瞳。
冷徹に見えて情熱の瞳。
飛鳥の表情は、朝の病院の時とは全く違う。
晴れやかで、生々としていて、それでもって…いつも真っ直ぐで頼りになる彼女の顔。
柳生は最初こそ何処か憎しみに近い黒い感情を抱いていたが、今となっては連合こそは許してないものの、雲雀の手をつかもうと、友を救けようとする覚悟を決めた顔だ。
そしてもう一人の少年、緑谷出久は――
「僕は…「何でだ――」!?」
決意を固めた緑谷の言葉を、遮った言葉に視線が集中する。
後ろから声が…と振り向くと、切島達の後ろに飯田天哉が立っていた。
「飯田さん…」
「何で…よりにもよって君達なんだ!!」
憤る声、湧き上がる怒り、抑えられない衝動。それらが飯田の心を苦しめ傷つける。

まるで大鍋に煮込むかのように、グツグツと煮え切るような音が、心に鳴り響いている感覚だ。
「俺の私的暴走を咎め、共に特赦を受けたハズの四人が……何で俺と同じ過ちを犯そうとしている!?あんまりじゃないか!!!
僕たちは学生なんだぞ!?!
――何で、君たちは!!自分達の行いに自覚が足りないんだ!!!」
悔やみ、苦しみ、悲しみ、怒り、罪悪感、様々な負の感情が、言葉と共に放たれる。
何故、自分の誤ちを正してくれた友が
何故、自分を守ってくれた友が
何故、身を呈してでも咎めてくれた友が
何故、自分を救けてくれた友が
よりによって、保須市の自分と同じ行動に移るのか。同じ過ちを、繰り返すのか。
それだけは、あってはならないのに――
「俺たちはまだ保護下にいる…タダでさえ学校側が大変な時に、君らの行動の責任は一体誰が背負うのか解っているのか!?」
言葉を発するたびに、胸が締め付けられるかのように苦しくなる。
正さねば…
皆んなの誤ちを正さねばならない。

「飯田くん違うんだよ、あのね…僕らだってルールを破っていいなんて――」

バキッ――

『!?!』
緑谷の弁明など聞く耳持たず、飯田の固い鉄拳が彼の頬に炸裂する。嫌な音を立てながらも、緑谷はフラつきながらも、痛みを堪えて自分の頬に手を置く。
殴られた緑谷を見た一同は、息を詰まらせる。

「俺だって悔しいさ!!
俺たちはクラスメイトだ！委員長なんだ当然だろう!?
雲雀くんも元々は雄英とは違う…けど今じゃ僕らは仲間だ！
心配しない訳が無いだろうが!!!
それに君が怪我を負い床に伏せる姿を見た時！兄の姿を思い重なった!!!

君らが暴走した挙句に兄と同じ取り返しのつかない事態になれば誰が責任を負うのだ!?!僕の心配はどうでも良いのか!?
違うだろ!?」
怒り荒ぶる声に、一同は何も言えなくなる。
あの雪泉でさえも、罪悪感と気不味さに心が埋め尽くされてしまう。
今回、保須市を学び通して飯田は二度と同じ誤ちを繰り返さないと心に誓った。
だからこそ、二度と同じ誤ちを繰り返さないためにも、飯田は止めなければならない。

それが、友なのだから――

「だから……やめてくれ……」

その言葉は、とても痛々しくて弱々しかった。先ほどの強情な彼とは違い、涙を堪えてるような、辛さ。
緑谷の両肩を掴む飯田の手は、離れない。
これで、自分の言葉で友を止められるのなら……

「なあ、飯田」
ふと、低い声が飯田の耳に届く。
表情を一切ブレない轟は、相も変わらず何の動作を見せる事なく語

り告げる。
「俺たちは何も真正面からかちこむ気はねえし、無謀に突っ込む気なんて更々ない」
「？」
なに？と飯田の悲しく辛い表情が、疑問を訴えかけるような顔色に変わった。
轟に続いて
「確かに梅雨ちゃんの言う通り、法を犯すって事は、敵とやってること同じようなもんだ…てか俺は法とかルールとか全然解らねえ……
けど何も策が無いわけじゃないんだよ飯田、このまま突っ込んでったて危険なのはバカな俺でも解るぜ」
切島も答える。
「私たちの今回の行動は…隠密活動。
つまり個性を使わず、相手に私達の存在を悟られないよう行動する…
これが、私達に出来ることです！」
法やルールで最初に咎められる罰は、無許可で個性を使用すること。
例え相手が敵だろうと、個性を私欲私怨で使うなどあってはならないこと。
ならば、個性を使わずに二人を救ける。
たった、それだけのことだ。
「ただ、前回の蛇女子学園の時みたいな無茶はさせません…取り返しがつかなくなる前に、私が監視しておきます…私が同行するのは、万が一の時に備えて止めるため。
私も、実を言えば飯田さんの気持ちに大きく同意です」
八百万は救出と言うよりも、監視に近い感じだ。
いくら効率の良い策とはいえ、危険性が消えた訳ではない。
ならば、止めることも副委員長の務めだ。
「隠密行動は私達忍の専売特許ですからね」
「それに、目的地も見つかったんだ…

八百万のお陰だ」
通信機。
八百万は林間合宿にて敵連合開闢行動隊が攻めてきた際に、Ｂ組の泡瀬洋一とペアで対処してたものの、連合の秘密兵器・脳無と鉢合わせとなり頭部に傷を負ったものの、逃げられる際に発信機を付けたことで、何とか居場所を特定することに成功した。
八百万百。
彼女の個性は名前の通り、あらゆる有機物のものを創り出す事の出来る、万能者。
期末試験の一件で、何処か冴えたように吹っ切れたソレは、確実に成功の証として成り果てた。
「無論、オレも極力そうする。
雲雀を奪ったアイツらを叩き潰したい処だが……」
「悪を見逃す…というのも些か、可笑しな話ですが…いずれ連合を討つことが可能であるならば、今が耐え時と言ったところでしょう」
柳生も雪泉も、一歩前を踏み出す。
どれだけ相手が気に入らなくとも、今は耐えなければいけない。
救出するのと、殴り込みに行くのとでは全然意味が違う。
今回の目的はあくまで救出活動なのだから。
「しかし…」
「なあ飯田。
お前がさ、クラスメイト大事にしてんのは解るんだよ。それは俺たちも同じなんだ。
どれだけプロヒーローがいようとさ、オールマイトが現場に赴こうがさ、不安は消えねえ……
でもよ、ここで行かなきゃ、俺が俺じゃ無くなっちまう…
もう、何も出来ねえ自分は――〝嫌なんだよ〟!!」
これ以上、俺は後悔したくないんだ――!!
『雄英目指すって言っても、高望みし過ぎたかなぁ……』

――また
『スプリンガーヒーロー事務所は何処ですか？』
――あの時みたいな
『何やってんだよ…俺、バッカじゃねえの……

何も出来なかった……』

――後悔はしたくねえんだ
それは、中学時代の頃の記憶。
何も出来なかった…あの時の自分。
恐怖を植え付けられたあの瞬間、俺は一生の悔いを残した。
「俺が俺じゃなくなっちまうのは嫌なんだ…ここでやらなきゃ、動かなきゃ、アイツのことダチなんて呼べねえよ…
例えコレが悪くてもな、俺は……後悔のねえように生きたいんだ――」
それは、あの過去があったからこそ、今の自分がある、オリジン――
「僕も……切島くんに〝まだ手は届くんだ〟って言われた時、どうしても、どうしても…頭の中に考えが抜けきれなかった……

考えるよりもまず先に、体が動いたんだ……!!」
まだ手を届くと言われたら、無理だろうと重傷だろうと、関係ない。
救う。
手を差し伸べて、救い出す。
あの時は救えなかった…
でも、次は救う。
必ず、救ける。

「私も。誰も救けれなかった…二人の手を掴めなかった…でも！
守れることは出来た。
私に、ちゃんと守れた人間がいたって、分かったんだ！」
洸汰と出会ってそこまで日も経たなかった…
けど、今は違う。
あの子から、元気を貰った。
今なら、二人を救えそうだ。

初めて、あのロボット敵に飛び込んだ時も、小さな女の子から、感謝された。
あの時の自分と、今の自分が重なる。
「……俺は、まだ納得していない……
だが、俺も同行させて貰う……」

飯田の言葉に、一同は驚嘆する。
認めた訳ではない。だが、幾ら言葉で止めようとも無駄なのであれば、危険と判断した際に自分で止めさせる。
八百万もそのつもりで来たのなら、こっちもそれに越したことはない。

運命は動き出す――

「よし、良い顔ぶれが集まって来たな」
一方で学生達とはかけ離れた場所では、塚内刑事を始め、名のあるヒーローと忍が集まっていた。
「何故よりによってこの俺があんなメリケン男と一緒にいなければならんのだ全く!!」
「そう言わないでよエンデヴァー！まぁだ体育祭のこと怒ってたの？
あ、ひょっとして葛餅…」

「オールマイト、静かにしましょう…これから行うは、悪鬼滅殺。
そしてその作戦だ…時間が潰える」
「複雑だな…世界で五本指に入るヒーローの顔ぶれがこうして集まるとは……
尤も、この案件に私が出ない訳がない。爆豪少年を矯正したハズだったんだが…」
Ｎｏ．１ヒーロー、オールマイト
Ｎｏ．２ヒーロー、エンデヴァー
Ｎｏ．４ヒーロー、ベストジーニスト
Ｎｏ．５ヒーロー、エッジショット
以下の四名束になったグループのプロヒーローが集まり、また隣の一軍グループは
「こりゃあ、儂も久しぶりに本気を出すしかないのう…
コンビを組んでからあれから何年経った？小百合」
「詳しいことは覚えとらんよ。ようやく尻尾を掴めたんじゃ…まさかこんな形で半蔵と一緒にまた任務に励むとは思わんかったのう……じゃが、今回は儂らだけじゃないわい。
巫神楽三姉妹もいる、まだまだ増援は来るんじゃろ？」
「へぇ、これが本物のプロヒーローかい。
生で見るの初めてだ…ワクワクして来たぜぇ！取り敢えず服脱ぐか！」
「だから何で服脱ぐのよ『蓮華お姉ちゃん』!!全く、『華毘お姉ちゃん』は取り敢えず難しい話聞くとドッカーンしちゃうから、後で私がやる事言うで考えことしないでよ？」
「『華風流ちゃん』そんな事言われてもウチ困りますよ～……考えるなって言うと、余計考えちゃうし…」
巫神楽三姉妹。
各地を巡る彼女達は一応、上忍と同じく敵連合を探し回って来た、護身の民だ。
護身の民とは、古くから伝わる民族のことであり、今は日本地図には載っていない。

貧しいかのような村で、三人は修行し巫女として活躍するようになったのだ。
伝説の忍にして飛鳥の祖父、半蔵
元カグラの称号を持つ忍、小百合
巫神楽三姉妹の蓮華、華毘、華風流
以下の五名が束になった忍グループを足して、合計九名の実力者揃いが、今回爆豪救出作戦に赴く。
今回、マークされてる箇所は二つある。
一つは市民から聞いた話と相澤が目撃した人物、荼毘の目撃例によりマークされた薄暗いバー。元々使われてない古い廃屋は、今も使われてるらしく、恐らく敵連合のアジトと見なして間違いはない。
今朝の調べにより、ようやく情報の詳細が解ったのである。
またもう一つは八百万百から貰った発信機。
この発信機か見て信号は、バーとは少しかけ離れた場所に反応している。
彼女の証言からして、発信機を付けたのは脳無と呼ばれる改造人間によるもの。
つまり、そこに脳無の格納庫があると話が挙げられてるため、二手に分かれる算法だ。
「爆豪くんに雲雀くん…辛いだろう苦しいだろう怖いだろうよ……だが！
あと少し、待っててくれ…！それまでにどうか、無事でいてくれ！」
オールマイトの怒りを押し殺す悲鳴に似た苦痛の声。
拳が自然と震える。
当然だ、なにせこれから少年少女達を傷つけた連中へ殴り込みに行くのだから。
――覚えてるだろうか？ＵＳＪ襲撃時のあの言葉を
「さぁてと…感動の再会を祝って、先ず早速だが…

エリート学校に住まうヒーロー志望の爆豪くんと、カグラを目指す善忍志望の雲雀くん。

俺の仲間にならないか？」

〝後に起こる大事件〟が、始まろうとしている。

薄暗いバーは、異常な空間に飲み込まれてた。

敵連合のリーダーにして主犯格、死柄木弔。

そしてその下に付く以下の１３名の敵。

小規模の犯罪集団の中に、爆豪と雲雀が金属製の椅子で拘束されていた。

「雲雀は絶対ぜ～～ったいに、仲間にならないもん!!」

「寝言は寝て死ね糞カス連合供がぁ!!!」

運命は止まらない。

留まることを知らない。

良かれ悪かれ回り出す。

この先の行方や如何に――？

１０９話「バカばっか」

時は遡り、まだ外が明るい昼の病室内の時間帯。昼飯分の太巻きを食べ終えた飛鳥は、スマホでお母さんと通話していた。
「うん、うん！大丈夫、もう傷は治ったよ。あとお母さん太巻き有難うね、じっちゃんと同じくらい美味しかったよ」
『そう……それなら良かった…
本当に心配したわ飛鳥…貴女にもし何かあったらと思うと、お母さん心配で心配で……
この前友達とお買い物に行ってた時も飛鳥、敵と遭遇したんでしょ？
それに続いて林間合宿まで……
病院に搬送されたのを聞いた時は本当に心臓が止まるかと思ったわ……』
「……ごめんね、お母さん…本当にごめんね……ごめんなさい」
通話越しから、お母さんの啜り泣き声が聞こえる。よっぽど自分のことを心配してくれていたのか…
心配してくれてるのは嬉しい限りだが、そうとも知らずとただ忍の道に突き進むことばかり考えてた自分を今思うと、お母さんになんて声をかければいいのか…
本当に申し訳ないと思ってる。
今でも面を向かって頭を下げたいくらいだ。
『お父さんもね、すっごく心配してたんだから…貴女にもしもの事があったらって、後でお父さんに連絡掛けておきなさいよ？』
「うん、そうする……じゃあ…」
『あっ、ちょっと待ちなさい飛鳥！』
「わっ!?…ごめん、何お母さん？」
通話を終了しようとした途端、母から止めに入る声が入り、思わず耳を離してしまう。
『……飛鳥、霧夜先生に頼んで、飛鳥だけ半蔵学院に戻りなさい……
それが嫌なら、いっそ、半蔵学院も…やめなさい……』

「……え？」
まさかの言葉に、頭の中が一瞬で真っ白に埋め尽くされる。
まるで絵の具を白色で塗りつぶしたような、そんな真っ白しか存在しない世界のように。
母の震えてる声は、とても辛そうだ。
『お母さんね……考えたんだけど……
飛鳥可笑しいよ…？
半蔵学院に入学した時はそんな危なっかしい子じゃなかったのに……
雄英高校に転入してから、おかしな事件が続出してるじゃない……そんな危険な事件が起きるたびに、飛鳥ずっと無理し過ぎっぱなしじゃないの……』
「……ッ」
言葉が喉に詰まる。
喉に引っかかった罪悪感が、急に押し潰すように降りかかる。
今思えば、雄英に入ってからずっと無茶し過ぎっぱなしだ。
半蔵学院に蛇女が攻めて来て、敵連合と名乗る集団が雄英に攻めて来て、蛇女子学園と共闘で脳無と戦ったり、学炎祭で漆月と遭遇したり、雅緋と戦ったり、強化パトロールで保須市のヒーロー殺しと遭遇したり、木椰区ショッピングモールで死柄木弔と遭遇したり、そして林間合宿で敵連合開闢行動隊が襲撃してきたり。
今思えば、自分はとんでもない事件に巻き込まれてるなと思う。
こんだけ無茶苦茶な事件に遭遇して尚、今もこうして生きてる事自体が不思議だ。
だから、お母さんがこう言うのも、必然なのかもしれない。
「うん……ゴメンねいつも無茶ばっかりして……言い訳はしないけど……でも、逃げることなんて出来ない……
けど本当にごめん。それも出来ない」
辛く、苦しく、自分の本音をぶつける。
それが、その言葉がお母さんの怒りに触れることなど理解しながら、躊躇わず。

「そりゃあお母さんの言ってることは尤もだよ。忍以前に私は忍学生、まだまだ忍と呼ぶには到底敵わないヒヨっ子…
でもね、それは私だけじゃ無いんだよ」
柳生ちゃんや雲雀ちゃん。
他にも、まだ日が浅い夜桜ちゃん、四季ちゃん、美野里ちゃん。
色んな忍学生も、敵連合と接触した。
そして、負けても勝っても強く成長し続けている。
「それに、危険なのは…百も承知だから…！」
『お母さんは……』
「だから、ゴメンね!!」
そう最後に力振り絞る声を残し、通話を終了する。
今思えば、前にも一度こんな事があったなぁ…と、昔のことを思い出しながら、飛鳥は外を眺める。
中学校の時、よくお母さんとたわいのない事で喧嘩になったりした。
その時は、思春期なのと将来のことで不安だったからか、お母さんによく八つ当たりもしていた。
特に一番印象に残ってるのが、自分が忍学生になりたいと言った時、お母さんは大きく反対した。
勿論、飛鳥はいつもながらに怒ったが、それよりもお母さんに物凄く怒られたのを、飛鳥は今でも覚えている。
今思えば、少し勝手になり過ぎたかなと罪悪感すら感じてしまう。
今は、高校生活が楽しくて、お母さんへの八つ当たりは無くなったけど…
でも、気付かなかったのだろう…今までお母さんが、どんな想いで心配して来たのか。
今なら、よく解る。
「待っててね、直ぐに行くから」
ピロン♪
「ん？」
メール？

お母さんからだろうか？連絡先を見てみれば、違った。
切島くんからだ。
何だろうと疑問に思いつつ内容に目を通すと――
「え？切島くん達も？」

そして現在に至った訳である。
ヒーロー学生五名、忍学生三名、計八名の学生が、今回の案件に隠密活動を行う。
因みにこの事を他の忍学生には他言していない。
彼女らも救けに行きたい気持ちは山ほどだとは思うが、出来れば少数が良いと言われた。
雪泉には連絡してなかったので、彼女が外で待ち構えてた時は少し驚いたけど、よくよく考えれば雪泉は高らかに救出活動を宣言してたので、別におかしな事でもない。
夜の街は冷え込み、電車から出発してから目的の場所――神奈川県横浜市神野区へ到着した時間は約１０時頃。
八百万の発信機によると、どうやらそこに爆豪や雲雀がいると言う疑い深い可能性があるとのこと。
電車の中で飯田は緑谷へ暴力を振るった事に謝罪したり、スタミナをつけるため弁当を食したりなど、中々に見ない光景に少し心が浮きながらも、二人を救けることに専念していた。
時間というものは、呆気ない。
何も喋ってもない沈黙の中で、直ぐに神野区へ到着した八人は
「神野区に着いた！のは良いんだけど……人多過ぎだよコレ…」

賑わう繁華街に困惑していた。
今思えば、神野区なんて地域に足を踏み入れた経験は一切無いし、ましてや発信機があるとはいえ、どうやって探索すればいいのやら…
「取り敢えず発信機辿って行けば良いんじゃねえか？
ッつー訳で善は急げだ！行くぞ！」
「お待ち下さい切島さん！貴方本当にこのまま突っ込む気ですか!?」
「？そうだけど？」
「そのキョトン顔止めてください！
何も策もないまま突っ込んで行くのは無謀です！勇気と無謀は違うのですよ？そこはお忘れのなき事……私たちは敵に顔を知られています、このまま行けば気付かれますし、何よりも隠密活動とは呼べません！」
言われてみれば確かに。
体育祭の時からか、もう既に自分たちの顔は見られている。
このまま行くには文字通り無謀すぎるし、何よりも隠密活動に成り立たない。
それに、飛鳥達も学炎祭でニューチューブのネット動画に挙げられているので、飛鳥達もアウトだ。
有名人になる程、生きにくいと感じたことは早々体験出来るものじゃない。プロヒーローならまだしも、自分たちはまだ保護下の身の学生だ。
「という事は変装するのでしょうか？私達は忍転身があるので、私達は問題ないのですが……」
忍転身という素晴らしい能力を備えていないヒーロー学生には、変装が出来ない。
今持ち合わせてるものは特になく、これと言って役立ちそうにない。
「ヤオモモちゃん達、変装出来ないね？どうする？ここは二手に分かれて…」
「いいえご心配なく！」
自信溢れ、若干ワクワク感の興奮に満ちた八百万が差す指の方向に

目を向ければ、ド〇キの店があった。
それを見て一同は納得したらしく「あ～…」と納得する。
あそこで変装するのかと理解した皆んなは、切島、緑谷、轟、飯田、八百万の五名は店に入って行く。
残りの内三名は、ここで忍転身するのも怪しまれるので、建物の路地裏で転身することにした。プリユアかよ。

そして数分後、特に時間はかかる事なく、変装を終えた八名は合流するも、若干誰だコイツ？と首を傾げてしまう人も少数いた。
「私達は普通だけど…」
飛鳥は髪紐を解き、ストレートな髪型に黒いドレスコートを着用。
見慣れぬ姿に新鮮さを感じ、何処か少しだけ大人に近づいたような気がする。
「は、はい……私も…」
雪泉は髪を白銀のように白く美しく、白い浴衣は忍装束に近い、日本の和を主張していた。
肩にまで露出した肌も美しく、まるで白雪姫のような美貌に、周りの住民も惚れざるを得ないだろう。
柳生は珍しくツインテールに束ね、眼帯こそは変わらないが、私服は水玉模様のお洒落な服に、赤いワンピースは、クールな彼女とは考えにくい一面に、とても可愛さが引き立てて魅力すら感じる。

三人は一目見ればバレない格好で変装をしたのだが、流石は雄英高校。
何事にもハードル高く、ここまで別人に変装するとは思わなかった。
「ふぅ、準備に手間取りましたが、思ったよりも早く片が付いて良かったですわ」
ドキドキと緊張面と至福感が隠せれてない、キャバ嬢にでも出て来そうな彼女は八百万百。
ポニーテールだった髪はロングストレートに垂れており、高級そう

なドレスはお金持ちを主張していた。もしここに詠がいれば「お金持ちは皆殺しですわ～♪」と愛用の武器〝ラグナロク〟を振り回してた所だろう。
　そして手には香水の〝ＵＮＥＲＩ〟を持っている。確かアレは職場体験でスネークヒーロー〝ウワバミ〟のＣＭに出てた商品だ。
「オッラァ！コッラァ！」
「おい緑谷！もっと顎をクイッてやんだよ！こんなんじゃチンピラとして見て貰えねえ！」
「オッッラァ!!」
「よし！それで良い！」
　一方、顎髭にグラサンをかけたチンピラの容姿に似せた緑谷と、ツンツンだった頭のワックスを洗い流し、髪をペシャンコにした、角のカチューシャを付けてる切島の姿も見えた。
　緑谷は元々真面目なので、あまりこう言うオラオラ系は似合わないが、だからこそ自分らしくない格好のスタイルで攻めてきたのだ。
　切島は思ったよりもカッコよく、話によると中学時代の頃の髪型らしい。
　因みに余談だが、切島は入試試験の時に緑谷と同じステージに立っていた。
　ただ、彼の髪が黒なのと目立った感じの生徒ではなかったので（入試試験二位の実績を誇っている）、緑谷も気づかなかったのは無理もない話。
「パイオツカイデーチャンネーイルヨーー!!!」
　コイツ誰だ？
　飯田天哉である。
　メガネを外し、髪型を変え、鼻の下にチョビ髭に真っ白なタクシードの制服に包まれたその姿は、間違いなくホステス。
　酒関連の仕事を営むガタイの良い大人に見えるのは気の所為だろうか？
「なぁ、八百万。お前の個性なら別に服くらい創れるだろ？何で態々買う必要があったんだ？」

この声の主は※轟焦凍。
黒く少し癖のあるヘアースタイルだが、整形たるイケメンな顔立ちは、全てを美に司る。
飯田とは対照的な色をした黒いタクシードの姿をした彼は、全ての女性が一目惚れしそうな容姿だった。
因みに髪はヅラ。
ヅラじゃない桂さんはお呼びではない。
「い、いえ！その……何と言いますか、個性での私欲私怨はヒーローとしてどうかと！
公共の場に於いて、許可なく個性を使用するのは犯罪…そう、悪なのです!!
悪は決して赦されるべきではありません！」
「なるほど、そうか」
轟は納得してるように見えるが一同はこう思っただろう。
「お前ただ単にド〇キ行って買い物したかっただけだろ」と。
そもそも彼女は豊富な家で育った斑鳩にも負けないお金持ちのお嬢様。
庶民の買い物などするハズがなく、こう言った経験は初めてなのだ。
そのため、一般人との間隔は何処か偏ってる。
因みに斑鳩は一般常識も身につけてるので、八百万ほどピュアではない。
「こ、ここまで再現度が高く、誰が誰かと解らなくなると……少し敗北感が…」
何に競ってんだか。
だが雪泉たちの変装もまあまあではあるが、緑谷達が異常を越してただけだ。特に飯田は「お前マジで誰？」と指摘してしまうほどに。
轟なんかも髪型変えただけでこの変わりよう。印象が強いからか、変装するとこうも変わるのか…流石はクラス一、二を争う強豪だ。
オマケに性格も顔もお墨付きと言えば人気なのも頷ける。
「では、早速隠密活動開始と行きましょう！」

八百万の言葉が始まりの合図となるように、試合開始のゴングが鳴ったような感覚がした。
決して離れれことはなく、目的地に一本道に進むように、怪しまれず動く。
人混みが多い中で視界も悪いが、発信機を元に辿って行けば、問題はない。
後は下手な事故さえ起こさなければ、特にこれといった害意は――
「おっ！雄英じゃん！」
『!?!』
一同は口から心臓が飛び出るような気がした。変装は完璧、特に怪しまれる動きも動作もどこにも無かったハズなのに。
思わず緑谷はチンピラ装うように「オッラァ！」と声を張り詰めて上げるも、皆んなの考えてた事は全く違った。
声を出した主を見てみると、背を向けて大型のモニターテレビが映し出されているのを、ジッと見つめていた。
神野区の繁華街でならこんな光景も珍しくはない。
そしてその映像に雄英高校の教師、校長・根津を始めとし、相澤先生にブラド先生の謝罪会見の姿が映し出された。
この映像に、思わず息を飲む。
何せ自分の教師達がこうして新聞記者やマスコミ達に頭を下げてるのだ。
しかも、相澤先生はメディアを嫌う人間。先生にとってコレは嫌がらせでも何でもない、最早拷問に近い状況だ。
しかし、相澤先生の顔ぶれは一切変わらず、平静を保っていた。
『――では先程行われた、雄英高校謝罪会見の一部をご覧下さい』
『この度――我々の不備からヒーロー科１年生２７名に被害が及んでしまった事、ヒーロー育成の場でありながら敵意への防衛を怠り社会に不安を与えた事、謹んでお詫び申し上げます。
大変、誠に申し訳ございませんでした』
『ＮＨＡです。雄英高校は今年に入って４回、生徒が敵と接触してると聞きますが、今回　生徒に被害が出るまでに各ご家庭にはどのよう

な説明をされていたのか、又　具体的にどのような対策を行なっているのか、是非お聞かせ下さい』
体育祭開催の件から、雄英の基本姿勢は把握しているハズ、にも関わらず国内のニュースとして言わせるという事は、最早嫌がらせでもなんでもない。
生徒を守れなかったヒーローや先生に対し悪者扱いにしたいだけに過ぎない。
『周辺地域の警備強化、校内の防犯システム再検討。
〝強い姿勢〟で生徒の安全を保障する……と、説明しておりました』
「はぁ？」
「守れてねーじゃん、何言ってんだコイツら？」
「雄英しっかりしろよ、最高峰なんじゃねーの？」
「雄英マジで糞だな、無能じゃねえかよ」
結果が全て。
現実はいつだって優しくない。
守れなければ悪者扱い。
市民への怒りと不安の声に、この場の空気が淀んでいく。
この場に聞いてたヒーロー学生にとっては、さぞ胸が痛むほどに辛い言葉。
忍学生もこれを聞いててあまり良い気はしない。
しかし、何も言えない。
何も言い返せない。
どれだけ悔しくても、結果が全てなのだから――

忍サイトネットページや掲示板での投稿は忍しか出来ない。一般人が辿り着けるような、並のセキュリティにはなっておらず、また探し出すのに一苦労するのは確かだろう。
忍専用ネットワーク。
今回の掲示板で雄英高校による生徒拉致の最大の失点。
同じく、半蔵学院の忍学生拉致に関しても大きな酷評が相次いで挙げられていた。
『なんで任務失敗してるんだよ？しっかりしろ、エリート校じゃねえのかよ』
『教師何やってんの？責任取れよちゃんと、頭下げて分かりましたとか思ってんのかな？』
『忍学生拉致？は？ふざけてんのコイツら？』
『半蔵学院ってエリート学校じゃなかったっけ？』
『漆月とか言う胸糞悪い全国指名手配犯捕まえれなかった連中だよ』
『てか月閃も雄英入ってたよね？三校のエリート学生でも太刀打ちできない連合って何者なん？ウチらじゃ絶対勝てへんやん』
『ソレ、てかどのネットとかでもめっちゃ炎上しとるよ、今回の騒動は今までと比にならんて』
『太刀打ち出来ないだころか学生拉致られててワロタ。
仲間想いの学生とかいないのかよ、仲間の顔が見てみたいわ』
現時点でも、忍のネットの批判は嵐のように殺到し、最早マンモス進学校の半蔵学院や、最高峰の雄英高校、付け加えれば死塾月閃女学館、この三校の評価はガタ落ちし、看板に泥を塗ってしまったこの失態は、想像以上に市民や忍に不安を煽いでいた。
守れなかった、その結果が今を生み、ヒーローと忍を責め立てる。
一方、元凶たる敵連合へのアンチコメは一切見受けられず、また危険視された様子が深まったように見える。
「いやぁ……おかしなもんだよなぁ？俺は不思議でならないぜ……」
ただ忌々しい囁き声に、張り詰めた空気に変わる。
声の主、死柄木弔は両手を広げ、まるで王様のように皆を纏めるように、悠々と語り告げる。

「何故ヒーロー(お前)と忍(ら)が責められてる!?」
パソコンとテレビ画面を、この場にいる皆に見せながら、死柄木はさも当然と言わんばかりに語り出す。
「奴らは少ーし対応がズレてただけだ！
戦力だって相手は解らない、こっちが有利だっただけだ！
お前らは命を守ろうとし戦った！
生きようと必死に抗った！
敵と死闘を繰り広げた！
――それなのにコイツらなんだ？
守るのが仕事だから？
人救けするのがヒーローだから？
任務を遂行するのが忍だから？
忍の定めは死の定めだから？
いいや違うね！間違ってる、どいつもこいつも皆んな間違ってる!!
誰にだって失敗の一つや二つはある！
忍だって、ヒーローだって元は人間だ！
忍は駒？命令だけ従えば良いだけの道具？上層部の命令は絶対だぁ？世の為に働け？
そんなもの最早人間じゃないよな!?
お前らは傀儡や道具じゃない、違うか？
〝お前らは常に完璧でいろ〟ってか!?!」
訴えかけてるかのような言葉、否定する言葉、怒りや不満をぶつける抗議、悪への執念の姿勢。
ソレらに、この場の皆は死柄木の言葉に口を出さない。なぜなら、皆も同じ考えを持っているからである。
或る者は、死柄木の直訴に賛同し、静かに頷く者。
或る者は、異議なしと沈黙する者。
或る者は、死柄木の気持ちに近い者。
様々な悪意は、死柄木と関わり成長していく。勿論、死柄木弔本人も、成長する。
互いに互いを影響し合うことで、己が強くなっていくソレは、成長

以外の何でもない。
「現代社会に於けるヒーローと忍ってのは堅苦しいなぁ？爆豪くんと雲雀くんよ！」
二人は身動き出来ない状態で拘束されている、金属製の椅子に、黒い拘束器具、更にこの敵の数による視線。
この状況になってしまえば、間違いなく勝機はゼロに近い。
この記者会見と忍ネット掲示板を直に目の当たりにした二人は、何とも言えない表情で立っていた。
雲雀ならともかく、あの爆豪でさえも心が折りかねないような姿。
「……」
「ひ、雲雀たちのせいで……皆んな、責められてるの？」
「まっ、テメェらだけじゃねーけどな」
雲雀の横で、金属製の椅子に腕を置いてた荼毘が口を開く。
「守れなかった学生から教師まで全部言いたい放題。
どう？これが醜い社会の現実ってヤツだよ」

そして、それに続いて漆月も語り出す。

「普通、失敗した人間に次は頑張ろうと励まして涙を拭うのが一般的な人間の考え。次の打開策に身を譲るのが筋ってもん。
それなのに、アンタ達が必死に頑張ろうと血反吐吐いて、必死に命削って、体壊して、涙流して、汗水垂らして守ってるのに、この仕打ち。
ヒーローだって無敵じゃない、正義の味方が、完全無敵なわけないじゃん。
私たちという悪党にやられることだってある。守れなかったことを怒りと不安で言い訳にして、守られてる国民はアンタ等を責め立てることしか出来ない無様なやり方、ソレがコイツらだよ」
漆月の素顔は清々しく、その言葉に表も裏も存在しなかった。
ただただ本音、嘘ではない。しかし真実とも言い難い感覚。
「こんなものを守って何の意味が、義務がある!?

こんな守られてる身が守られてないような言い口と、批判する愚民。
己の立場さえも理解しない屑ども！それがコイツ等なんだよ！
ヒーローと忍が、そんなクズ供を生み出している！己の誤ちさえも気付かずに!!
つまり俺の言いたい事は、アレだ。

こんな奴等放って置いて、俺の仲間になれって話」
死柄木の二本の指が、二人に指差す。
まるでお前達も頷けと言わんばかりの指図感に、二人の表情は少し歪む。
「これだから市民の考えは汚れてどうしようも御座いません…
私腹が立っておりますの…
上層部の人間が何事も当然と考え、私達の意思を尊重しようともしない有様に殺気を出してしまいまして……
生きにくい忍、反論する輩がいるからこそ、我々は抗ってるだけですわ、ソレを市民やヒーロー、忍にとやかく言われる筋合いは我々には御座いません」
「そもそも、守るという行為に対価が発生した時点でヒーローはヒーローでなくなり、私欲私怨や存在価値も解らん上層部が徘徊してる時点で、忍は忍でなくった！
それがステインのご教示！」
闇とスピナーも、死柄木と漆月に賛同するかのように言葉を足す。
悪意以前に、彼らも元はただの人間。一般市民と変わらない、純粋な人間に違いはなかった。
だが、環境は人を変える。
時間が人の心を変える。
人が人を変える。
ここにいる全ての人間が、何かしらの理由があって敵連合へと集ったのだ。
勿論、敵連合に入るのに幾つか合わないと却下された人間もいた

が、少数な為情報漏洩は低い。
「人の命を金や自己顕示に変換する異様、それをルールでギチギチと守る社会。敗北者を励ますどころか責め立てる国民。
俺たちの戦いは『問い』、ヒーローとは正義とは、忍とは何か、この社会が本当に正しいのか一人一人に考えてもらう！
無論、俺たちは勝つつもりだ。
今も、そしてこれからも――」
社会に対する不満はより強く、より強力に。
単に気に入らないものを壊すが為の死柄木弔ではない…
現代社会に於けるヒーローと忍の、裏表の社会を、二つで一つの社会を壊すこと。
「君も勝つのは好きだろ爆豪くん。それに、死にたく無いだろ？雲雀くん」
ＵＳＪ（あの時）、自分達を殺そうとした癖によくそんな大それた口が訊けるもんだな。
と、二人は心の奥底で思う。
しかし、雄英襲撃事件のことを、死柄木だって忘れていない。
理解してる上での発言。

「ツー訳で、だ……おい荼毘。この二人の拘束外せ、今すぐにだ」
「は？」

突然、死柄木の突拍子のない発言に、荼毘は鋭く目を細め、首をかしげる。
しかし、その言葉を逃すほど二人は落ちぶれてはいるはずがなく、二人は反応する。
「暴れるぞコイツら、良いのか？」
「良いんだよ、対等に扱わなきゃスカウトだもの！
身動き出来ない状態で仲間になって下さいなんて、言われた奴が仲間になるとは思えない…交渉するなら一先ずフェアで行こう。
それに、この状況で暴れて勝てるかどうか、解らないような奴ら

じゃない」
確かに、なんて思えてしまう程にこの殺伐とした状況の中で納得してしまう。
敵は１４人、まだ何処かに潜んでる可能性がある。
交渉決裂と判断したら、相手は見境いなく即殺しにかかる。
相手はプロをも凌ぐ手練れ、そう簡単に逃がしてくれるハズもなく。
「それに…爆豪くんは勿論、雲雀くんなら敵連合としては大歓迎さ、お前は寧ろ此方側にいるべき存在だ」
「え？」
死柄木の思わぬ発想に、雲雀はおろか、他の一同も少し意外性の面を見せる。
あの死柄木が、初めて善忍に大歓迎だと宣言したのだ。
ＵＳＪでは、絶望の淵にまで追い詰めたくせに。
「どうして……雲雀を？」
「お前、本当は忍なんかなりたくなかっただろ」
「!?」
何を言ってるの？と口から溢れてしまいそうになる。だが、何とか意思技集中して口を抑える。
この男、雲雀の心を見抜いてるのか？
「え？ちょっと、どういう事？」
「雲雀の情報調べさせて貰ったらスゲェ事が分かった。
まず、コイツの眼をよく見てみろ…他の奴とは違うこの華模様の眼は…
――華眼だ」
華眼。
思春期の頃に発現し、必ず一人しか現れない瞳。所有者は瞳に花のような紋様が浮かび、相手の心を強力に操る術が使えると言った洗脳に近い能力。
ただし、どんな命令でも出来るような万能の術ではない上、常に発動し続けると言ったものでもないらしい。

しかし、より強くこの術を磨き、己を強くすれば、選択肢も広まり自分のものになれるそうだ。
華眼の術は扱いが難しく、無意識に働いてしまう危険性がある。
「しかも雲雀の忍家系は戦国時代の頃から存在し、先祖代々から伝わるそうだ。
瞳術を持つ忍は世界の中でも数少ないとさえ言われてる貴重な代物…
忍を目指してた兄姉からは発言する事なく、ドジでマヌケなお前が選ばれたってわけだ。
そう、忍の才能もカケラもないお前がだ」
「……」
「雲雀ちゃん…スゴッ」
「いやぁそんなおっかねえ忍術があったなんて驚きだねえ…雲雀ちゃん有能過ぎて怖えし、おじさん頭上がんねぇや」
死柄木の突き付けられる言葉にグゥの音も出せず、雲雀は唇を噛み締めただ俯いた。
その一方で、鎌倉とＭｒコンプレスは驚嘆する。
雲雀が俯き涙目になってるのは、死柄木の言葉に苛立ち、悔しがってるからではない…

〝嬉しい〟のだ。
「嫌だよな？
忍になんてなりたくなかったのに、他の誰でもないお前が選ばれた。
兄や姉は必死に訓練頑張ってたのに、出来損ないのお前が選ばれ、責め立てるどころか慰めてくれた。
嫌だよな!?苦しいよな!?
本当は無能の自分になんで華眼なんか持っちゃったんだろうと、責めて欲しかっただけだよなぁ!?
それを、他の皆んなは優しさと気遣いで、本当のお前を見てくれや

しなかった、誰もお前を理解しようともしてくれなかった!!!」
どいつもこいつも皆んな偽善者だ。
口だけで、皆んな優しくしてくれる。
余りにもおかしい…こんなのおかし過ぎると…
なんで自分には怒ってくれないのだろう…皆んな優しすぎる…と。
そんなある時、気が付いたのだ。
もしかしたら、これが華眼の力ではないのか?と。
自分が無意識に力を発動していれば、皆んなの心を操っていたのなら、この件について辻褄が合う。

そうだ、自分のせいで……こんな力を持ってしまったから……

「だからさ、もうやめようぜ?忍の茶番ごっこは

俺が救けてやるよ、お前の苦悩を」

過去の束縛が、弔の囁きが心を煽ぐ。
今、ほんの一瞬だけ…
敵連合に入ろうと思ってしまった……
この人達なら、解ってくれる…
自分の苦悩を、打ち解けてくれる…誰もが成し遂げてくれなかった、誰もが本当の自分を見てくれなかった事に対して、死柄木弔が見てくれる。
「大丈夫だよ雲雀、仲間になってくれれば、君は殺さない。爆豪くんもね。あっ、けど仲間になってから、保証するよ」
漆月はゆっくりと近付いてくる。

雲雀の元へ
「もう苦しまなくたって良い…無理に忍にならなくても良い…ここには、雲雀だけが苦悩を抱えてる訳じゃないんだよ」
そして、頭を撫でる。
あの、残酷な漆月が明るい笑顔を見せてくれた。それは、飛鳥と何ら変わらない、健やかな笑顔。
とても、忍を殲滅しようと言ってた口だとは思えない程に。
「俺たちの信条を知ってるか?お前達が更に向こうへが、お前達を強くする信条なら…俺たちはこうだ――
更に混沌(プルスケイオス)へさ。混沌をより混沌へ導くのが、俺たちだ」
それは、ヒーローの信条にして全く真逆の言葉。それは、間違いなく闇の信条にして悪の心得。
今まさにこの空気がそうだ。
「トゥワイス、宜しくな」
「はぁ!?俺やだし!」
死柄木の話を終えたと判断した荼毘は、トゥワイスに拘束器具を外すように命令する。
当の本人は否定してるものの、体は素直かルンルン気分で外して行く。
「なぁ、爆豪くん。雲雀くんもだけどさ、強引な手段で君らを拉致したのは謝る…けどな、漆月ちゃんの言った通り、我々は色んな想いを抱えてここへやって来たんだ」
拘束器具を外して行く中、コンプレスの優しい声が、二人の耳に届く。
コンプレスの仮面は、以前とは違い表情が読み取れない白黒の縞模様を彩っていた。
「我々は悪事の行為に勤しむ、ただの暴徒じゃねえのを、わかってくれ。
君らを攫ったのは偶々じゃねえ…」

二人の拘束器具が外れ、死柄木はバーの椅子から立ち上がり二人の元へ近づいて行く。
「ここに居る者、事情は違えど――人に、ルールに、社会に、忍に、ヒローに、縛られ…苦しんだ――

君ならそれを――」
解ってくれる。
死柄木の差し伸べる手に、雲雀は思わず…手を差し伸べてしまう。
この人は、本当に自分を救けてくれるのだろうか？
今思えば…皆んなが優しくしてくれたのも、このチカラのせいだ。
皆んなの心を操ってまで友達なんかなりたくない。皆んなの心を利用してまで、優しくして貰いたくない。
そんなの、いらない。
だったら、もう良いじゃないか諦めよう…
寧ろこの人達だって悩み苦しんだ、自分と同じように…
これこそ、対等な仲間じゃないのだろうか？

だったら雲雀は――
「ッッざけんなボケェ!!!!!!」

ボオオォォン!!

「え!?」
『!?!』
待ってましたと言わんばかりに喰らいつくかのように飛びかかってきた爆豪は、掌を爆破させ死柄木の顔面をぶん殴る。
誰もが予想してなかった展開に、一同は思わず息を潜める。
「死柄木!?」と漆月の沈痛の叫びに、「オイ大丈夫かよ!?」と声を張り詰め体を支えるトゥワイス。
顔面に爆破を食らってしまった死柄木の顔に付いてた掌マスクは、

ポトリと地面に落ちてしまう。
「さっきから黙って聞いてりゃあよぉぉ～…雲雀何敵に同情してんだドアホ！こんなクズ野郎供に感情移入してんじゃねえ!!
バカは要約できねえから話が長ェ！
要はテメェ、『嫌がらせしたいから二人とも仲間になって下さい』って意味だろ!?
無駄だよ」
爆豪は雲雀の背中を思いっきり叩く。
「痛ッ!?」とつい悲鳴を上げてしまう雲雀は、一瞬だけ爆豪を睨んだが
「雲雀、いつまでもウジウジと悩んでんじゃねえ。
コイツらじゃなくたって、テメェの悩み聞いてくれる奴らは、周りにいっぱい居るだろうが、自分を見失ってんじゃねえよ」
爆豪の勇気をくれる、温もりのある声に、自然と涙が溢れた。
背中に痛みが走りながらも、元気を貰ったような気がした。それが嬉しくて、どうしようもない。
「うん！ゴメンね爆豪くん！雲雀もう見失わない！」

――そうだ、何をバカなことを考えてたんだろう。何を自分はそんなバカなことを言ってたんだろう。
周りに大切な仲間がいるじゃないか。
その仲間に、悩み事を相談してれば良かったんだ。
いる。
色んな人がいる。
個性豊かで最強クラスを誇る雄英高校のクラスメイト達。
敵対した身とはいえ、死の美を交した元・蛇女、焔紅蓮隊がいるし春花さんもいる。
学炎祭を通してより強くなり、絆を結んだ死塾月閃女学館の生徒たち、そして…
我が故郷とも呼べる、家族とも呼べる、半蔵学院の仲間たち。

そうだ、自分には仲間がいる。

「俺はオールマイトに勝つ姿に憧れた!!
誰が何をどう言おうが、そこァもう曲がれねえ!!」
「雲雀は仲間がいるんだ!!大切な、大好きな、仲間が皆んな待ってるんだ！雲雀は敵連合なんかに入らないよ！飛鳥ちゃんや、皆んなの待つ場所へ帰るんだ!!
だから、どいてよ死柄木!!」
譲らない二人。
不敵に微笑む爆豪勝己に、
小さな兎が、子どものようなか弱いはずの仔兎は、拳を強く握りしめる。

「……お父さん…」
死柄木は、ただ一つ。
地面に落ちた自分の自慢の掌を見つめたまま――何も動かなかった。

１１０話「突入!!」

現在、校長・根津を初めとした教師、相澤とブラドの三名が敵連合による襲撃、学生拉致、警備による怠り、ソレら雄英高校最大の失態による謝罪会見が行われてる中。

離れた場所ではとある善忍東京本部の高層ビルにて、半蔵学院忍学科の担任、霧夜は会議室で何十人の上層部達の視線を浴びせられていた。

物静かな空間は、これまでになく空気が重く、この場にいることさえ耐えられない状況の中、霧夜はただ一人、佇んでいた。

上層部達の顔ぶれは、いつになくいつもとメンバーと変わらないが、一つ違うと指摘するならば、彼らがこれまでになく不安と怒りで感情が最骨頂に達しているのが非常になんとも言えない様子であった。

「霧夜よ…お主の腕を見込んで半蔵学院忍学科の担任として任命したわけなのだが…

この結果はなんじゃ？何故、忍学生の一人が全国指名手配犯と危険視されてる敵連合に拉致られてるのだ？」

「今回の騒動に於いて、お前にも責任があるぞ？例え半蔵学院に身を委ね、任せたとは言え幾ら何でもこればかりはどうにも…のぅ？」

老人たりの気迫迫る批判の殺到に、霧夜はただただ心を苦しめることしか出来なかった。

雲雀が敵連合に拉致られた事実を知った時は己を呪った。

どうして、「あの時自分があの場所にいなかったのか」「自分が飛鳥達と一緒にいれば」「また、凛の時みたく同じ過ちを繰り返すのか」自分を責める言葉が雨のように降り注ぎ、自虐する。

「今年に入って半蔵学院による敵連合への接触は合計６回だ、この事実をお前はどう受け止めるんだ？」

半蔵学院のセキュリティの甘さ、管理体制の脆さ、敵にマークされる始末、ここまで来ると何か意図的にこの事実を作り上げてるとしか

考えにくい。
その点に関しては、霧夜も同様に勘付いていた。
「私、半蔵学院の忍学科でありながら、教育者として深く反省し、管理体制及び生徒の身を守れず、お詫び申し上げます」
霧夜はこの場で頭を深く下げ、謝罪する。
自分だって本当はこの場で反論したい、何も憤慨に満ちてるのは上層部の人間だけではない、自分だって同じく怒りのコスモを燃やしてるのだ。
だが、私欲で上層部に大層な口は叩けない。
だからこそ、今は耐えなければならない。
「霧夜よ…貴様の忍学生が敵連合を討つ事が可能であるのなら話は別だ。
実際に黒佐波を捕まえることだって出来たのだからな」
姿を眩ませていた全国指名手配犯の抜忍は、現在も忍達に拷問をされており、連合の情報について吐かせようとしているらしい。
本人は死んでも吐かないと言ってるので、期待は出来ないのだが、少しでも情報収集になるのであればと今でも生かしてるらしい。
「命曇様…」
「忘れてる訳ではあるまいな?
貴様らの学校は雄英高校とは違う……ヒーロー志望の学生が拉致されマスコミが事件を煽るようにしているのは、保護下にあたりながらも守れず敵連合を阻止出来なかったその管理体制に不安を持つからであり、忍は違う……貴様らの目的は何だ?言ってみろ?」
「……抜忍・漆月を処罰すること……そして、敵連合の捕縛…」
「そうだ。あの抜忍を殺し、連合を捕縛する事が、全国の忍に与えられた任務だ。
無茶は百も承知だが、忍学生もまた同等。
我々が問いたいのは、だ。
何故ゆえに半蔵学院はそこまでして弱いのだ?あろうことか忍学生をも拉致られる弱さ、逃げられる後始末…
敵連合への接触も多かろうに、忍学科の担任として何も思わないの

かね？」
一つ一つの言葉に、思わず怒りがこみ上げてくる。
確かに、半蔵学院が雄英と協力して転入したのは、事のきっかけは漆月を処罰する事であって、連合を捕まえれなかった失態もまた咎められる形となるのはやむを得ない。
学生拉致を責められるのは致し方ないとはいえ、連合を捕まえられなかった事を咎められるのは、正直痛い。
「……忍学生への教育、及び指導が不適切であり、充分に鍛えられなかった事に関してはお詫び申し上げます……
しかし、勘違いをされては困ります…」
「勘違いだと？貴様、忍学生を拉致られ、あろうことか敵連合を仕留められなかった学生どもに、何が誤算があるというのだ？
そもそも、忍学生は元よりヒーロー学生とは教育と立場も違う。
連合を捕まえる事が全忍の任務であり、学生だろうと任務を遂行できず失敗を重ねるようならば、忍にはなれんと言ってるのだ」
国立半蔵学院や死塾月閃女学館、蛇女子学園が連合への接触及び、戦闘可能となってる理由は、上層部が任務として許可を出されてるからであり、それ以外での戦闘はご法度となっている。
雄英は世間の目もあり、連合への接触は極力避けてるわけだが、忍学生は最初っから任務として送られてるので、違いは確かに存在するだろう。
だから、今回の林間合宿の事件は流石の上層部も目を瞑ってはいられない。下手すれば忍の存在が世間に悟られる危険性は充分に高いのだから。
あろうことか、下手すれば忍の存在が知らされ、そのイメージや印象はかなり悪影響を与える事になるだろう。
社会の闇の中で、影で仕事を全うする存在が、世間に知らされる事だけは、あってはならないのである。
「確かに、彼女らは幾多も失敗しています…
それどころか連合は以前と比べ物にならない程に、強く成長しています…この事実は到底赦されるべきことではないのは、私も把握して

います…
ただ、光と影は表裏一体…
連合が成長しているのなら、少なからず彼女達も強くなっている…つまり、失敗を重ねるにつれて、彼女たちも自ずと成長をしている…私はそう解釈しています」
「…？意味が分からんのだが？
それに、忍学生の拉致…下手すれば忍学生が連合の下に就くことも十分にありえる。
その場合、貴様は切腹だけでは済まされんぞ？」
「私が言ってるのは…もし連合が忍学生を拉致し、傘下に就くようにと想定しこの流れを作り出したと例えるのならば…
今回、連合が起こした騒動は、全て浅はかであり愚策と言ってるのです…
少なくとも…連合の下へ就くような教育指導はしておらず。また悪に抗い、対抗する術は彼女たちにあると、私は生徒の教育者として推定しております…」
「つまりだ霧夜よ…忍学生は連合の思惑通りにはさせない…
忍学生は絶対に連合に屈さぬと言うのか？その根拠が貴様にあると？
何とも見苦しい戯言を…連合は愚か…漆月すら捕まえる事すら出来ないと言うのにか？」
「ええ、今は弱くとも…彼女たちは忍学生とはいえ襲撃を受けながら今も生きている。
ましてや、上層部を殺害し、上忍を葬ってきた抜忍を仕留めた彼女たちが、上忍ですら成し遂げなかった事を、遂行した…
何も策がない訳ではありません…
現在ヒーローも上忍も、そして警察も、連合のありかを探っています…
絶対に、我が校の生徒を取り戻してみせます」
霧夜にとってのプライドとは、生徒の為のものであり、自分が育ててきた忍が強く立派に成長する事が、霧夜にとっての本望だ。

だからこそ…

頭を地面へとこすりつけることも、躊躇わない。俗に言う土下座だ。

一同は驚嘆する。

あの霧夜が、頭を地面に付けることなど、今までなかった。

この容姿は、単にその場凌ぎの謝罪ではないと容易に感じ取れる。

これが、霧夜にとってのプライドだ。

捨てたのではない、彼女たちのためになるのなら、幾らでも頭を下げる事ができる。

それは、生徒たちを信じてるからこそ成し遂げれるもの。

「……解った。だが、もし忍学生が連合の傘下となれば…解るな？」

「……はい」

その言葉が、終点を打つかのように、室内は再び、静かに沈黙と化した。

「は！どいつもこいつも言ってくれるな！雄英も先生も！

そう言うこったよ糞カス連合がぁ!!」

現時点、拘束が解けた二人は軽い戦闘態勢に入る。獣のような雄叫びが、薄暗いバーに響き、より殺風景な雰囲気が漂う。

雲雀も手に汗を握り締めながらも、拳を強く握る。

今回、連合が拉致したのは爆豪と雲雀のこの二名だけ。

Ｍｒ．コンプレスはアドリブで常闇と柳生を捕まえたはずだったのだが、雄英生と忍学生に妨害され、結果本命の二人しか拉致することは出来なかった。

「雲雀と俺を連合に入れたかったんだろうが…残念だったな？

コイツもコイツでテメェらの傘下にはならねえとさ、勧誘する気があっても仲間にならねえザマぁ見ろゴミ共！」
ギャハハハ！と煽るかのような甲高い笑い声が、薄暗いバーに静まり返る。
一同はやれ呆れ、やれ困惑、やれ不機嫌にと様子を見せながらも動き出す。
「因みにな、俺と雲雀はまだ戦闘許可を解除されてねえ！つまり、暴れて良いって訳だよなぁ!?!」
――コイツ等は元々、俺と雲雀を連合の傘下に参入させるために招き、あんな馬鹿みてえな襲撃をブチかましたんだ。
じゃなきゃ、こんな態々と改めて綺麗事言うような輩共じゃねえ…
心の中では、自然と冷静でいた。
観察力や、応用力、戦闘への技術は、容姿や性格とは似合わず頭がキレる。
そう言う場面では、緑谷と似てる点がある。
――つまり、俺と雲雀はコイツ等にとっちゃあ〝利用価値のある存在〟。その視点がある限り、俺たちは少なからず殺られねえ…
方針が変わっちまう前に…
「俺と雲雀だけで五、六人ぶっ殺したる!!」
「うん！雲雀たちは絶対に負けな…ええ!?ダメだよ殺しちゃ！さっきまでのカッコいい爆豪くんはどこ行ったの!?」
「五月蝿え！つかカッコいいってなんだテメェの視点からは俺はどー言う風に見えんだクソボケぇ!!」
…平常運転なのも変わらない。

「何よあの二人…自分たちの立場を解ってて…小賢しい子だわ！」
「あのような野蛮な輩…オイ死柄木、だから俺はこんなヤツを連合に入れるのは反対だったんだ…雲雀と言う忍はともかく…」
「へぇ～…やるじゃん。んじゃ、バトルか？つーかさ、襲撃しかけたとはいえウチ等のお誘い断って…ただで済むなんて思ってんの？なんならウチ一人で完封してやるよ」

マグネ、スピナー、龍姫の三人は呆れながらも武器を取り出す。
マグネはマグネットアイテムを、スピナーは大剣を、龍姫は竜籠手を装着させる。
「でも龍姫ちゃんにスピナー、ここバーだよ？騒いだら警察やヒーローも、忍だって来ちゃう…
どうする？ねえどうすれば良い？
あっ！ボクの鎌で息の根刈り取れば良いのかな?!」
「取り敢えず刺しましょう！私雲雀ちゃんの血を飲みたいです！」
鎌倉とトガヒミコは頭が逝かれてるあまり、常人な考えは出来ず、ついドス黒い方向へと思考が働いてしまう。
恋する乙女達は、時にイカれ狂い、ヤンデレと成り果てる。
トガはヤンデレだが、鎌倉の場合はサイコパスと言った方が宜しいのだろうか。
「いや、馬鹿だろ」
「可笑しな事ですね…こんな状況の中で諦めても誰も文句は言いませんよ。
それに、爆豪勝己。貴方は頭が良いのでこの状況を上手く飲み込み参入してくれると想定してましたが…
思った以上に、とんで火にいる夏の虫……脳まで筋肉と化した馬鹿でしたか」
「嫌でも大人しく懐柔されてるフリをすりゃあ良いものを…
やっちまったなコイツ等…

死柄木どーするよ？だから俺言ったんだよ？〝闇ちゃんの呪術なら二人を丸めて仲間になれる〟って」
荼毘、蒼志、コンプレスはため息を吐き、呆れた様子で渋々と動き出す。
コンプレスの言葉に若干、違和感を感じ取った二人だが、そんな事など気にせず前方から視認出来る敵に屈せず、佇む。
「悪いな、俺ァ嫌でもテメェらの言う通りにだけはしたくねえんだよ。
だから、傘下になるなんて馬鹿げた妄想はまず有り得ねえ。雲雀

だってそうだ、テメェらがそんな事も安易に想像できてねえ時点で馬鹿丸出しなんだよ社会のゴミ供がぁ！」
掌から爆破を出す。
威嚇とは言え、近づけば殺すというアピールは充分に出来たのだろうか、中々に近づこうとしない。
しない…のだが。
「もう良いです…私とコンプレスでやります。私の蒼炎を放ったら…解りますね？」
「火事になったら終わりだからねぇ…けど二人とも死ぬぜ？」
「元より交渉決裂した時点でたかが知れてます…
何よりも自分が偉いと思い込んでるあの上から目線が、一番気に入らない…
あのクソ女を思い出してならないんですよ…」
「あーあ、お前ら覚悟しといた方が良いぜ？蒼志ちゃん、滅多に怒らねえけど…お前らが琴線触れちまったせいで…こりゃあの世行き確定かな」
蒼志とコンプレスは静かに動き出す。
動き慣れたその動作は、自然と足音を立てず、水の流れに沿うように近づいて来る。
（チッ…！よりによって厄介な野郎が来やがった…あの蒼女はさておき…クソ仮面が邪魔でならねえ…!!
俺的に一番厄介なのは…あのクソ仮面と靄モブと、あのメガネ女には注意だな……）
爆豪は思わず舌打ちをしてしまう。
手に汗を握りながら、その強く握った拳だけは、緩ませなかった。
不敵な笑みを崩す事なく「かかって来やがれよチビ蒼女に仮面野郎！返討ちしてやんよ！」と声を荒げる。
「ひ、雲雀も絶対負けないもん！なんならここの部屋ごと壊してやるもんね!!」
雲雀は頬を膨らませ、威嚇する。
雲雀の忍法は華眼にして、様々な特殊効果が備わってるため、一筋

縄ではいかないのは確かだ。それに、雲雀は上手くいけばＭｔレディのように姿を大きくする事も可能なのだ。
しかし部屋を壊すにしろ、近くに一般人がいるとも考えると、巻き添えを食らってしまう危険性があるため、軽々しく壊せとは言えない。

「……」
そんな中、黒霧は何も言葉を発さずに死柄木を見つめていた。
ただ、呆然と…彼が見据えてるその先の視線、彼が大事にしてた手のマスクを
「!!」
いけない…死柄木弔の〝手〟が…！
下手すればこの場の全員が、彼に殺される!!
「いけません死柄木弔！ここは抑えて…」
「黒霧…」
ゾッ!!
と、黒く禍々しい殺気が放たれ、一同は静まり返る。
あの爆豪でさえも真顔に変えるほど、その殺気は歪で、純粋な瞳をギラつくように輝かせ、殺意の牙を向ける。
黒霧は立ち止まり、靄を引っ込める。
近くにいた漆月でさえも、少しだけ体を震わせていた。

「お前ら、手を出すな……
コイツ等二人は…俺の大切な駒だぞ…」

その言葉に黒霧は目を丸くする。
あの幼稚な子供のように癇癪を引き起こし、気に入らないものを単に壊して来た彼が、初めて…〝我慢〟を覚えた。
それは、着々と彼自身が成長してる証。
死柄木は落ちた手のマスクを拾い顔に付けると、蒼志に振り向く。
「蒼志、勝手にコイツら殺そうとするな。それとも、昔の事でも思い出

したのか?なら、ソレはアイツ等にぶつければ良いだけだろ……お前は少し熱を冷ませ。
お前が連合に就いた理由は、俺たちが知ってるんだから」
「……ッ」
そして初めて、自分の駒として見てきた仲間に、フォローするよう優しく語り告げる。
蒼志は俯きながら「すいません…」と軽く一言残して一歩下がる。
コンプレスも同じく一歩下がるものの、彼女を慰めようと肩に手を置く。
「……コンプレス、お前の言う通り…確かに闇の呪術ならコイツらを丸めて傘下に入れることは容易い…」
「でしたら弔様、私が力添えを…」
「――ただ…俺が闇のチカラを借りなかったのは……お前たち二人なら解ってくれるかと思ったからだ…
俺の話を聞いてくれれば、二人は俺の仲間になってくれるかと思ったから…だから、俺は俺自身で腹割って話し合おうとしたし、拘束も外させた……
けど、お前らがそのつもりなら…　話は別かな…」
物悲しげに語り告げる死柄木は、軽く手でマスクの誇りを払いながら、ギラついた視線でパソコン画面に目を移す。
「……テレビでも放送してたように、ヒーローも警察も、忍だって俺たちを捜索している……タイムリミットは二、三日か。
下手すれば俺たち全員逮捕なんて胸糞悪いバッドエンドになるのは嫌だなぁ…

んじゃあ先生、力を貸してくれ」

悪は動き、自ずと成長していく。
死柄木弔は、考えれば考える程に成長を促し、絶望や憎悪を糧として成長する。

『良い、判断だよ…死柄木弔』

そして、パソコン画面からは嫌に奇妙な声が静かに、虫が這いずるように耳に伝わる。運命の歯車は少しずつ回り始め、動き出す。
善と悪、光と影、陽と陰…相反し対立するその存在、それぞれは戦うべく戦争の準備を進めている。
悪の親玉にして、オールマイトのコンビであり親愛を共に過ごしたカグラを超えし忍、〝陽花〟を殺めた弔の師匠が、動き出す。

先程まで、世界の指に五本入る実力者ヒーローと忍が集ってから数十分後、今はどうだろうか？この光景を見て、敵連合への恐怖はあるだろうか？
いや、本当に恐ろしいのは敵連合ではない…
敵連合が触れてしまった、ヒーローの逆鱗、忍のプライド。
今回の事件はこれまでとは比にならないほどに深刻であり、爆豪と雲雀の拉致。
そして連合に数人の抜忍が在籍していること。学校襲撃はもちろん第一位として危険視されてるが、その後に起き発覚したこの事件は、幾ら上層部達の力でも隠しきれない。
「凄い面子が揃ったな…だが、これなら行けるぞ!!」
それぞれの集団が二手に分かれる。
一つは敵連合のアジト、もう一つは八百万の発信機による別倉庫。

爆豪と雲雀がいるのは恐らくアジトの確率が高い。倉庫には特に誰も目に触れておらず、恐らくは脳無格納庫で間違いはない。
「待たせたな俊の…オールマイト、こんな大事な案件だってのに遅れてすまねぇ、このご老人を許してくれ」
「何を今更！私は恨んでおりませんし怒ってるわけでもありません！それに、突入時間には全然間に合ってますよ！」
「それでも十分前くらいには着いてないとダメだろうが！」
「仲が良いのだな二人とも…我も昔はこうやって凛さんとじゃれ合ってたものだ…」
「ほぉ、忍学生…しかも伝説の留学生か……半蔵からは忍学生を送ることは出来るのだな？」
現在のメンバーは…
オールマイト、エンデヴァー、半蔵、小百合、巫神楽三姉妹、エッジショット、大道寺、グラントリノ、そして若手実力者、シンリンカムイ。
その他のプロヒーローと上忍達。
「半蔵学院は忍学生の存在を知らせていないし、雄英は悪いけど今立て込んでて教師がマスコミやメディアと相手している！今は送れないのは察してくれ」
塚内の言葉に、エンデヴァーは軽く鼻息を荒くしフン…とそっぽを向く。
よっぽど、オールマイトと組むのが気に入らなかったらしい。
「それに、他の増援も凄いよ…」

今回は、ヒーロー・忍飽和社会が崩壊しかねない大事件。
総力を持ってして解決せねばならない。

また一方では…
「忍とヒーローが手を組むのは、近年目立たなかったたからね…嬉しいよ。

再び忍と手を組めるなんて、何年以来だ？かれこれ７、８年くらいじゃないか？」
ベストジーニストが先頭として始め、他の忍やヒーローも数多く現場にいる。
それに勿論警察もだ。
「我が同志であるラグドールが行方不明となった我自身、看過出来ぬ！
必ず救い出す…！」
そして今回は林間合宿で教官としての役割を担ってたワイルド・プッシーキャッツの一人、虎も駆けつけてくれた。
もう二人のマンダレイとピクシーボブは不在だ。なんでも、ピクシーボブは頭に鈍器による重傷を負い、マンダレイが看病してるとか。
「それにしてもジーニストさんでも変えられなかった人いたんですね…何者なんですかその生徒？ウチ体育祭全然観てないんですよパトロールが忙しくて…」
「毛根までギチギチプライドが硬かったよ…職場体験で矯正したハズなんだがな…」
シンリンカムイと同じく、新入りヒーローのＭｔレディも参入し、大分様になってきた様子だ。
「良いか雅緋、忌夢、お前達は忍学生にしてもう既に上忍の立場と変わらない忍だ。
必ず連合の退路を断ち、終わらせるぞ」
蛇女の教師、鈴音の掛け声に二人は静かに頷く。飛鳥の見舞いに二人がいなかったのはこの為であって、蛇女の皆んなは雅緋と忌夢が超重要任務を受けているのは知っている。
両備や両奈、紫が行く気がなかったのは、ある意味二人が関係してるからだろう。
「我々蛇女を私欲私怨で、利用価値として踏み台にし、悪の誇りを地に堕とした奴等に、ケリをつけてやろう……
それに、これ以上野放しにするのは危険すぎる……忌夢、やれる

か？」
「大丈夫だよ雅緋、僕はもう何も見失わない……今の僕ならやれる。
あの時から僕等は強くなったんだから…だから、これが終わったら、アイツらに胸を張って『ただいま』って言ってやろう。
僕等は誇り高き蛇女の生徒なんだから」
何も怖くない、不安もない。
伊佐奈の事件から、二人は見違える程に逞しく、強く成長した。
それは、鈴音にとっても喜ばしいことであり、教育者としてこれを微笑まずにはいられない。

「貴様が、蛇女の選抜メンバー筆頭か…」

ズン…と、大きな影が覆い被さる。
ふと声の主に振り向く雅緋は、少し目を疑う。
忌夢は雅緋との空間を邪魔されて忌々しいのか、噛み付くかのよう視線を相手に浴びせる。
「ああ…そうだが…お前は？」
「フッ、申し遅れた。
俺はギャングオルカだ……俺はお前にでら会いたかったのさ」
……でら？
独特な口調に首を傾げそうになるも、それよりも見た目のインパクトに少し強い印象を受けた。
黒い肌をしたシャチの顔、白いタクシーどのような服は見るからに上品で、雅緋に負けず劣らずとクールだ。
因みに腰掛けポーチに天然ミネラルウォーターがあるのをお忘れ無きこと。
簡潔に言うならシャチ人間といった方が良いのだろうか、見た目の凶暴さと怖さから見て、敵っぽいヒーローランキングでは3位の番付だ。
現在Ｎｏ．１１ヒーローの実力を持つ彼は持ってこいの話だろう。
「キュレーター……伊佐奈の件で少し話をしたくてな。お前たちに御

礼を言いたかったのさ」
「御礼？」
伊佐奈と言えば、ワイルドヴィランズのリーダーであり、蛇女子学園を利用してた道元並みの非道の男だ。
己の欲望のためなら他者の命さえも躊躇わず生贄にしてしまう正真正銘、惨殺者だ。
「俺は長年、ワイルドヴィランズのボス、キュレーターの行方を追っててな…手がかり掴めず、結局事件は鵜呑みに流されたんだが……
蛇女にいるとは思わなんでな……ソレを、お前達が倒してくれたと聞いた時はでら嬉しかったぜ。
宿願がようやく叶った…だから、こうして御礼を兼ねてご挨拶しに来たのさ…
有難うな」
「……いや、何。我々は利用されてただけ、私は何もしてない…
礼を言うのなら、焔紅蓮隊のと名乗るアイツらに直接、言ってくれ」
「紅蓮隊……フム、リーダーである雅緋が言うのなら、承知した…」
まさか、キュレーターを追ってるヒーローがいるとは少し驚いた。
だが、よくよく考えると全国指名手配犯のリストにも乗り兼ねない重罪犯なのだし、当然か…と思う説も。
最初はオールマイトが倒したと聞いたのだが、捕縛中に運悪く逃げられ、他の仲間も数名逃走したとか……
何がともあれ、蛇女の暗雲が晴れた事は、全部焔のお陰なのだ。
もし、焔がいてくれなければ…何も変わらず、いずれ自分たちは人形のまま延々と利用されてただけだろうに。
ギャングオルカは軽く微笑むと、腰掛けポーチに入れてあった天然ミネラルウォーターを自分の顔面に思っきしぶっかける。
「ヒーローと警察のみならず、善忍と悪忍の共闘……鬼が出るか蛇が出るか…か」
警察もスタンバイし、プロヒーローも、上忍も充分ここにいるし、戦闘としても何ら問題ない、文句なしの陣形だ。
『今回！二つの居場所を一気に制圧する！敵に少しでも攻撃する隙を

与えさせるな！
先に優先するのは、拉致された人質を救出優先！人命救助！
そして尤も注意すべき人物は、敵連合を裏で操りながらも滅多に姿を現さないクレバーな敵、忍の天敵、〝オール・フォー・ワン〟！奴がいる限り被害は延々と増え続ける！今回のメインは敵連合の捕縛！被害者救出！

全員、幸運を祈る!!』
塚内の無線が、全員の耳に行き渡る。
今回限りで、敵連合も終わりだ。忍とヒーロー達で連合を捕まえ、脳無格納庫を制圧し、被害者を無事救出させ、オール・フォー・ワンを討つ。
悪の象徴と呼ばれる男が、一体どのような人物なのか、容姿も解らなければリストにも載ってない、裏社会の王。

――この日で、全てが決まる。

それぞれの二手の陣形は、所定位置に着く。
準備は万端。
抜かりはない。
自信もある。

「先ほどの会見、連合を欺くよう校長にのみ協力要請をしておいた!!さも難航中かのように装ってもらってる！
あの発言を受け――その日のウチに突入されるとは思うまい!!」
謝罪会見に関しての、校長のさも不安のような広告は全て嘘。
少しの間だけ、荒れてしまう…だが、社会の不安を取り除く為ならば、嫌な嘘でも突き通すしかない。
「意趣返ししてやれ！さァ反撃の時間だ!!
流れを覆せ!!
――忍とヒーロー!!!」

冷や汗が頬に流れ落ちる。
拳に汗水握りしめ、強く、要塞すらも吹き飛ばす拳を握りしめる。
強く、曲がらぬ信念をその心に宿し、先祖代々から伝わる、二刀を握りしめる。

そして、時は来た――

１１１話「絶対正義は勝つ」

「ここが発信機の示す場所ですわ」
ヒーロー達が動くその数分前、救出メンバーの八人は、発信機を辿りアジトにやって来た。
幸い人は誰一人もおらず、物静かな空間がひんやりと肌に染みる。まだ夏場なのにこのシンとした静まりようは、少しだけホラー感を引き出している。
アジトと呼ばれる建物はとてもボロついた廃屋で、工場のようだった。
窓から見て灯りは見えず、人が居る気配も感じない。
だが、発信機は確かに此処で間違いはない。
「如何にも悪が巣喰いそうな場所ですね……こんな場所に、雲雀さんや爆豪さんがいるかと思うと、虫酸が走ります…」
元々雪泉は知っての通り、悪という存在を嫌悪している。
今は、復讐心及び憎悪が拭い消えたとは言え、悪を赦した訳ではなく、ましてや連合の事は前々から気に入らなかった。
平気で人の全てを奪い、見下し、壊し、殺す。善忍も悪忍も生き方に違いは無いものの、敵となると話は別だ。
「俺もだ…今頃雲雀が泣いてると思うと…建物ごと壊したくなってきた…」
…柳生もまた、色んな意味で連合が気に入らないのであった。
しかし、仲間の安否が不安なのも解るし、連合の好き勝手にやられてると考えると赦せないのは同意だ。
「ですが、先ほどからおかしな事に…昨日からずっと動きが見当たらないんですわ…止まったまま何も動じずに…
機械の故障はあり得ませんが、何が起きるか解りません…ここは細心の注意を払って動くのが得策でしょう」
見た限り、使われてないボロ倉庫からは特に何も人気は感じないし、忍からの視点では気配すらも感じない。

本当に爆豪と雲雀が、または連合がいるかどうかすらも怪しい。
「けど、ここは一通りもあるし少なからず人も通る…怪しい動きを取ればより目立つ…隠密行動にはならねえ…
取り敢えず、だ。
一旦ここから離れて違うルートで回って中の様子を見るのはどうだ？正面から突入なんてプロヒーローくらいだろうし」
自分たちは個性を使わずに生徒を救出する前提で此処へやって来てる。
轟の氷や炎があれば、一見最強に見えるが、それをああも簡単に看破する人間が向こうにはいる。
どの道、正面から入り込むのは無謀にして危険のリスクが高すぎる。
ここは轟の言うべき通り、静かに遠回りするのが妥当だろう。
「よく見ると正面の入り口には小石や草もあるし…微かな音でも勘付かれそうだ…
遠回りするって言ったって…どうするの？」
「建物の細い隙間の道を通ろう…
俺らが安全に行動できるのはそれしかねえだろ？」
言われてみれば、他に回って見たとしても一通りがあって人の視線を浴びて注目の的となってしまうし、ここは窮屈かもしれないが狭い細道を通るのが賢明な判断だろう。
善は急げだ、一秒でも早く中の様子を見る衝動を押さえ込みながら、少年少女は駆け走る。

狭い細道は、男でさえも窮屈と感じてしまう程に狭く、少し息苦しい感覚だ。
まるで壁と壁にプレスされたサンドイッチにされたようなこの感覚はあまり宜しくない。
「んんっ…やはり狭いですわね……っっかえそうですわ……」
「んん～ッ！はぁ…はぁ…本当だよ……胸が大きいのが裏目に出た

なぁ……
だから胸が大きくなるのは嫌なんだよぉ～…」
「くッ…狭い…俺のぽっちゃりお腹ではなく、胸が原因か……それはそれで嫌だなこの状況…」
「二人を救けるべく、如何なる困難を目の前にして屈さぬと決意したのに……
まさか我々がここで手間取る羽目になるとは……連合の用意周到な計画はやはり伊達ではないのですね……雪泉、一生の不覚…」
……色んな意味で。
お前らただ単に胸がデカくて苦しいだけだろ。と突っ込む衝動と少女たちの豊満で動く度に揺れる胸に視線がいかないようにと、気まずさながらも注意する。
胸をジッと見てたら変態と扱われてしまう。それこそ、峰田と変わらない人種となってしまう事だけはなりたくない。
「少しでも怪しい動きをしたと向こうに知られたら終わりだし…人気がなくても何かあるか解らないから、注意を払う事に越したことはないけど…でも問題は中の様子をどう確認したら良いんだろう……これじゃあ救けるどころか、何も出来ないままなんて…どうすれば……」
「おい、上。窓から中の様子見れるんじゃないか？」
轟の視線の先を見てみれば、窓があることに一同は気付く。
確かに、ここからなら誰にも気付かれることなく、中の様子を調べることが出来そうだ。
発信機の元もここの近くだし、一目で解るだろう。
「これなら中の様子調べれそうだね、でも誰が中の様子を見るの？」
「あまり人が多いのもな…いや、見るのは誰でも良いんだが…」
「ならオレに任せてくれ、雲雀の安否がどうしても気になる」
「しかし柳生さん。中に二人がいるとは限らないのですよ？」
「だが中に二人がいないことも限らないだろ八百万。それに轟も言ってた通り、中の様子を観るのは誰でも良いなら、オレにさせてくれ」
「一歩も譲らない姿勢を見ると…何を言っても無駄ですかね…解りま

した…
　では、あと二人くらいでしょうか…誰が……
　ああそれとその前に柳生さんには後で暗視鏡を」
「それならオレに任せてくれよ、こんな事もあろうかとアマ〇ンで買ってきたんだ」
「切島さん!?」
　狭い路地の中、切島は待ってましたと言わんばかりにジャージのポケットからカメラを取り出す。
　確かこれは…一個で五万もすると言う高額な値段を張る代物だ。
　八百万がもし付いてこなかった場合に備えて、買って持って来たんだろう。
「いやさ、八百万でも作れるかもしれねえけど、何でも人に物創ること頼らせるのは良くねえし、いなかった場合に備えて買っておいたんだ…」
「でも良いの？相当高いよね!?」
「だからだよ、てか値段は聞くなよ…
　友達救えるなら、金なんていらねえし…これで少しでもアイツら救えるなら、どうも思わねえよ」
　最後らへんは少し声が低くてあまり聞こえなかったが、取り敢えず三人で上手くカメラを使って中の様子を調べることにした。
　結局見ることになったのは柳生、切島、飛鳥という形になり、切島を担ぐのが緑谷、柳生は八百万、飛鳥は雪泉となり、三人が中の様子を調べることとなった。
「中の様子は……見た感じ暗いな…散らかってるし、人気もない」
「切島くん、他には何が見えるの…？」
「他は～……
　――なッ!?!」
　何事もなかった無言の空間が、切島の驚嘆たる叫び声に、皆の心は僅かに暗雲にかかる。

心がざわめき、二人はどうした!?と聴き込むかのように切島の顔を覗き見る。
見ると彼の表情はとても酷く取り乱しており、まるでこの世の物とは思えぬ光景を見てしまったと訴えてるかのような顔つきで、冷や汗がとても酷い。
最初は連合の誰かに視線が合ったのかと思ったのだが、そうでも無いらしい。
「やべぇ…やべぇってアレ!!んだよありゃ…人間かよ本当に……畜生!!」
「き、切島くんどうしたの!?」
「良いから見てみろって！飛鳥！コレ！」
迫り来るような声に、心を不安の黒色に染めながらも、切島のカメラを借りて見てみる。
視野は思ったよりも裸眼よりかは見やすく、暗闇の中で探すのには充分だった。
だからなのか、散らかってる部屋の中で、とんでもないものが目に見えたのも頷ける。
「……うそ…でしょ……？」
「飛鳥さん…？一体何が……」
肩車の形として背負ってるので、雪泉はただ聞くだけしか出来ず、飛鳥の声色に眉をひそめる。
しかし、雪泉の言葉など飛鳥に響くはずがなく、彼女は何も答えない。
まるで喉に何かが詰まったようなまどろっこしい感覚、見てるだけで吐き気がしそうな光景。
それは――
「アレ全部…〝脳無〟？」
倉庫の中には幾つもの培養カプセルの中に、人型の化け物が無数に存在していた。

頭部の皮膚は綺麗さっぱり割れており、脳を曝け出しては異形で歪な体をしていた。
無数に点滴が打たれ、チューブに繋がっており、目を瞑っている。
中には様々な種類の脳無がそこに保管されていた。
蛇の形をした脳無、蛇女を襲った赤脳無と緑脳無に似た脳無、ＵＳＪを襲った脳無に似せた脳無、頭部が二つある脳無、骨のような脳無、そして培養液に浸かってない、林間合宿を襲った脳無。
数々の脳無がその倉庫には存在していた。
これぞ、脳無を収容する為にある廃工場、脳無格納庫と言うのが正しいだろう。
だが、それだけならまだ良かったのだ。

「じゃあ、あの赤色の〝アレ〟は…何なの？」

赤色の液体の中には、異形な姿をした化け物が、眠っている様子が見受けられる。
黒色の肌に、外側の皮膚は棘のような骨格で覆われており、顔は骨のように見えた。
しかし、この化け物は他の改人とは違い、脳が飛び出ていないのである。
この化け物が何なのか、説明もしようもないが、一先ず此処には爆豪勝己と雲雀はいないのだろう。
そう考えると、ここを離れるのが必然な行動なのかもしれない。
外で何やら騒がしい様子が見受けられるが、三人は気にもしない。
心に更なる暗雲を募らせながら、飛鳥はそっと降りることにした。
この場を離れなければ…何が起きるか解ったものじゃない。

別の場所、敵連合のアジト・バーの様子は、より混沌たる雰囲気をその場の空気に曝け出していた。
「〝先生〟ェ…？テメェが連合のラスボスじゃねえのかよクソが!!まだ他にもいるってか！面倒臭えなオイ！」
やや爆豪はキレ気味で口を開く。
実際、心の中では少し取り乱していた。
今まで連合のボスだと思い込んでいたその直後、先生と名乗る人物の言葉、そしてパソコン腰から聞こえた奇妙な大人の声。
まだ何かあるのかと、警戒しながらもその心は安心を取り戻すことはなかった。
「黒霧、コンプレス、もう一度二人を眠らせてしまっとけ…
闇、先生に頼んで余った部屋を借りさせるから呪術の準備しろ、問題ないかどうかは先生が確認するから…」
「はい、呪いの事なら私にお任せを…♪」
「参ったなぁ…ここまで人の話を聞かねえとなると、逆に感心しちまうぜ」
闇は頬をピンク色に染め、コンプレスは心底呆れた様子でやれやれとした素振りを見せる。
人間、ここまで来ると精神がおかしくなるのか、こんな状況を平然としてるのは余りにも異常である。
イかれた人間が集団として溜め込んでる集まり場、敵連合のアジトにして実力者はかなりいる。威勢だけのいいチンピラや下忍と言った輩はこの場に一人も存在しない。
「聞いて欲しけりゃ土下座して死ねや！っっても絶対に無理だけどなギャハハはは!!!」
自嘲の笑みを浮かばせながら、ジリジリと後ろへと下がっていく。
気付かれないようにソッと、足音を立てず、自然と後ろへと流れるかのように、下がっていく。
一見、余裕そうに煽ってるように見えるが、実際はかなりヤバイ。
見たところ数は十人そこらか、尤も爆豪と雲雀がこの中で一番厄介

な個性を持ってると判断してるのが、バーカウンターで静かに佇む黒霧だ。
ワープゲートの持ち主、最大火力の爆破や雲雀の戦闘技術を持っても、この男が個性を発現しただけで容易く葬りることは、想像がつくだろう。
（――特に要注意なのがあの靄モブのワープゲートと、クソ仮面の圧縮系個性、そしてメガネ女の呪いとかって言う分かんねえものだ……どうする？
後ろの扉を開いてもあの靄モブがいる限り簡単に脱出なんて出来ねえのは解る…
じゃなきゃ、死柄木が俺と雲雀の拘束を外すなんて真似はしねえ……）
余裕。
拘束を外しても問題ないからこそ、二人をあえて解放した。
それはつまり、此方は戦力があるから何の害もないと示してる余裕の一面に過ぎなかった。
よく見れば、他の連合メンバーも然程緊張はしていない。
完全に舐められている。
当然、そんな現場に身を置かれてる爆豪の堪忍袋が、タダで済む筈がない。
「テメェら爆殺してやんよ!!」といいかけたその途端。

「すいませーーん！ピザーラ神野店でぇーす！」

は？
と、漠然とした顔立ちで、爆豪が背を向けてるその扉から、アルバイトの学生みたいな声が室内に響き渡った。
爆豪と雲雀だけでなく、死柄木と漆月も、連合のメンバー達も呆然と佇んでいる。

思考を働かせる前に
「――ＳＭＡＳＨ!!!」
巨大爆発に似せた衝撃の音が、全員の耳を貫く。ボガアアァァン！という轟音は、衝撃とともに現れ、壁にもたれかかってた龍姫とスピナーは体勢を崩して倒れこむ。
思わず吹き飛ばされてしまいそうな勢いに対応する事すら叶わず、二人は地面に着く。
そして、颯爽と現れたのは〝皆んな誰もが知ってるＮｏ．１ヒーローの姿。
「――ッ！　黒霧ゲート!!」
死柄木の迅速な対応に、黒霧は靄を膨らませワープゲートを作り出す。
黒霧も対応が早い。しかし、この速度には対応出来なかった――
「先制必縛――〝ウルシ鎖牢〟!!」
連合メンバーの敵のみが、シンリンカムイの個性により完封。
反撃するチャンスすら与える事なく、拘束し身動を封じる。捕縛系では新入りとしてかなり優秀な面持ちだ。
「なっ!?!」
「ちょっ、何これぇ!?」
俄然とした現場。漆月と龍姫の動揺する声に、鎌倉は颯爽と背中の鎌を抜きシンリンカムイの幹を斬ろうとするも
「無駄じゃよお主ら」
老人の声が耳に届いたその瞬間、気付けば抜忍達は金属製のワイヤーで縛られ体を拘束されていた。
何が起きたか、
何が何だか解らずと頭の中で混乱しながらも、状況は進展、加速し連合は身動き一つ見せることも、出すことすらも叶わず圧倒された。

「ちょぉ…苦し……胸が…食い込む……!」
「うわぁ!縛られたよどうしよう!鎌抜けないよ…!」
「な、何事ですの?!」
龍姫、鎌倉、闇の三人の困惑色の顔立ちに、答えるものは誰もいない。
そしてこの目にも止まらぬ速度でワイヤーを巻かれた…これを知ってるのは、死柄木弔と黒霧しかいない。
「……!テメェ…糞ジジイがぁ!!!」
「まさか…この手練れた術は…〝半蔵〟か!!」
「ご名答、流石は今まで姿を眩ませた連合じゃな」
先程まで、そこに誰もいなかった筈なのに…瞬きしたその瞬間に、老人は立っていた。
古い顔立ちに歴戦を潜り抜けて来たその表情は、一目見て間違いなく、伝説の忍〝半蔵〟と見なして間違いは無いだろう。
以前、USJから退散しようとした死柄木もコレにやられた。
だからこそ、よく知っている。
「因みに、お主ら大人しくしといた方が身のためじゃぞ?動けば動くほどにワイヤーは食い込み、よりキツく窮屈に縛るような仕組みにしておるからのう」
ある意味拷問器具として役立つこのワイヤー、本音を言えば女の忍が淫らな容姿を見るためにと改品したものだ。
半蔵の煩悩たる思考はさておき、効果は本当に抜群で、敵が誰であろうとこの術はよく効くし、本心がなくとも戦場でかなり役立つ。
「ハッ、けど木なら俺の個性で燃えるよな?」
茶毘は憎悪を募らせた目で、縛られてる木に火を付けようと、皮膚から炎が微かに揺らぐ。
のだが――
ピシュン!
「つッ…?!」

弾けた水の音が響く。
まるで銃弾でも撃たれたかのような、それにやや劣る衝撃が、皮膚に響き、痛感を覚える。
皮膚が濡れて、炎が消えてしまい、焦げ臭い匂いがこの部屋に漂う。
「あ？んだコレ…水？液体か？」
「あのねぇ、アンタ等バカなの？
連合の位置情報も個性も忍術だってある程度知ってるのに、ウチらが対策しないわけないでしょ？
はい論破」
子供らしい声に、茶毘は思わず眉間にしわを寄せ、相手を睨み付けるも
「早んなよ――」
ゴッ――!!
と鈍い音と共に、茶毘の後頭部を何者かが蹴る。老人の声が聞こえたと思えば、茶毘は後頭部の痛みに、苦しむ様子もなく気絶する。
まるで後頭部を鈍器で殴られたかのような鈍く痛い衝撃、首の骨が折れたかのような錯覚に囚われながらも、茶毘の意識は遠のき声を上げることも、抵抗する術もなく目を閉じた。
「茶毘！」
「半蔵の言った通り、大人しくしとくのが身のためだ…反撃する隙すら俺たちが与えると思ったか？浅はかだよ兄ちゃん…」
蒼志の声も虚無と化するように、虚しく消える。老人の声は半蔵ではなく、目にも止まらぬ速度で蹂躙する古豪・グラントリノ。
衰えながらも、老人と成り果てながらも、現役とは負けず劣らずと成果を発揮する。
「どっか～～ん!!!」
能天気な声と共に、またしても爆発音が鳴り響く。壁が崩壊し、火花散るその光景は、花火でも打ち上げられたかのような光景。
しかし火傷する心配はなく、瓦礫のような壁は音を立てながら崩壊

し、外の景色が一望のように丸わかりに見えた。
だからこそ、相手が何者なのか…何が来たのか何が起きたのか、ようやく今になって理解できる。
「若手実力者、シンリンカムイ！古豪グラントリノ!!伝説の忍、半蔵！上忍に引けを取らず世界各地を駆け巡る護神の民、巫神楽三姉妹！
もう大丈夫だ少年少女よ、我々が来た!!!」
オールマイトにグラントリノ、シンリンカムイに巫神楽三姉妹の蓮華、華毘、華風流、そして半蔵。
壁を崩壊し中の様子を丸わかりにしたのは華毘。巨大な金槌を軽々しく背負い、大工のような姿はどう見ても花火職人にしか見えない。蓮華は「暴れたい奴いるか？いるならウチが喧嘩の相手してやんよ！」と目を輝かせ、少しでも怪しい動きをしたと判断すればその太鼓を叩く桴で殴り込むような意気込みでいる。
後ろからゾロゾロと警察官や上忍、プロヒーロー達が姿を現す。
目の前の光景は夜景など見えない、ヒーロー達の姿に視界は埋め尽くされていた。
爆豪や雲雀からすれば、救けに来たという希望と安心感に安堵するが、この場にいる連合にとっては恐怖と絶望でしかない。
「嘘だろ!?忍に警察…オールマイトもかよ！あの謝罪会見は…タイミングを示し合わせたのか！俺たちまんまと嵌められてたのかよ畜生が!!」
「しかも…巫神楽三姉妹……？
世界各地で駆け巡るあの三姉妹もまた、今回の件に嗅ぎ付けたのですか？
そんな……！彼女たちまで来るなんて…！」
「木の人引っ張んなってばよ！推しやがれ！」
「い～～や～～!!」
コンプレスの苛立ち混じった声色、蒼志の悔やむ声、トゥワイスと

トガの苦しむ声が、混沌と成り果てるように喧騒に満ち溢れる。
シンリンカムイの個性、半蔵の拘束術、この二つの捕縛術には成す術はない。
打開策はない
仲間は全員行動不能
一人は気絶して戦力外
端から見れば、数の暴力。
死柄木で言う〝詰み〟だ。

「攻勢時ほど、守りが疎かになるものだ……
ピザーラ神野店は、俺たちだけじゃない。それに、忍との結束を固めてるのがお前達だけだと思うな」
扉越しから、ドロン！と現れたのはエッジショット。
忍者のコスチュームに身を包まれてるその姿は、どうからどう見ても上忍の風格を漂わせていた。
ガチャガチャと、扉の鍵を外し、中からは老婆の姿をした小百合と、数名の上忍たち。
やれ狐のお面やひょっとこ面、狼をモチーフにしたような忍、熊のような容姿をした図体デカイ忍、鴉の見た目をした忍、様々な上忍達が、連合を包囲するように取り囲む。
「やれやれ、バカ餓鬼供や。
やんちゃをするのもこれで終いじゃ、敵は特殊拘束場へ、抜忍達は地獄拷問場へ案内してやろうかね」
小百合はハァ…とため息を吐きながらも、主犯格である死柄木弔と漆月を睨む。
当然、この方が一体誰なのか…闇以外は誰も知らない。
小百合が、元カグラにして半蔵をも超える最強の忍であることを。
「特に漆月、お前はもう牢獄どころか処刑確定じゃ。
この場では殺らんが……連合の同志達に何か伝えてやる事はないかい？」
「……ッ」

小百合の言葉に漆月は絶句する。
忍の一人や二人ならば、この絶体絶命とした空気を覆すことが出来るかもしれんが、生憎数が悪ければ仲間もいる。
とでも不便ゆえに今回は彼女もお手上げという形らしい。
(……にしても、コヤツ何処かで見たことがあるのう…初めてじゃない気がするのは気のせいか?)
小百合の心は、どこか疑問と不審な気持ちで仕方がなかった。
漆月に関しては微かならが数少ない資料写真で見た事はある。
しかし、そう言う問題ではなく…どこか懐かしいような気がしてならないのだ。
単なる気のせいだと願いたいのだが…
因みに、大道寺先輩はもしも万が一の時に備えてエンデヴァーと一緒に建物を包囲し街中の安全を守るべく佇んでいる。

オールマイトは、爆豪と涙でくしゃくしゃになってる雲雀に振り向き、笑顔を見せる。
いつも見てる筈のその絶えない笑顔は、二人にとっては何故だか特別な、違う笑顔に見えた。
それは状況が状況だからか、またはオールマイトの安堵の息による安心感から来るものなのか、詳細は解らずとも良かったと二人の肩に手を置く。
「ごめんな二人とも!辛かったろうに、苦しかったろうに!!けど、もう大丈夫だからな!」
強く、優しく、暖かく、温もりを感じるその声は、緊張し強張ってた二人の心を解きほぐすには充分だった。
雲雀は「オールマイトぉぉ!!」と涙と鼻水で顔面をくしゃくしゃにしながら抱きつき、爆豪はどこか浮かない顔か「び、ビビってねえはクソが!!」と強がる。
己の弱さを隠すためか、照れ臭いからか、他にも理由があるのだろうか、この際はどうでも良い。
「おいおい…せっかく計画を練ってこねくり回してたのに…

何そっちから汚い面下げて来てくれてんだよラスボスが……」
気力のない目はギラつき、痩せ細ってる体は微かに震え、動きは封じ込められている。
外見は何ともない、子どもに似つかないような様子が見受けられるが、実際中身は必死にこの最悪な状況を打破する計画を考えていた。
（全員抑えられた…漆月も鎌倉も、蒼志だって動けない…荼毘は気絶、簡単には逃げられないか……）
「んじゃ仕方ない……
使いたくなかったんだけど、状況が状況だ…こんな予想外なハプニングは仕方ねえよなぁ？漆月」
「死柄木……？
――！まさか…！」

無理ゲーだと言わんばかりのこの状況を切り抜ける打開策は、まだ連合にはある。
一瞬何を言ってるのか理解出来なかった漆月は、絶望の色から希望の光へと塗られるように明るくなる。
――そうだ、ウチらにはまだ秘密兵器が残ってる。アイツらだって、きっと戦力として役に立つだろう。
「やりたきゃやってやるよ。ヒーローだの忍だの警察だのと、全面戦争したけりゃ上等だ…気に入らないものはぶっ壊す!!
――黒霧ィ！〝全部〟持って来い!!」

死柄木の言葉の意味を理解した黒霧は、対象位置へとワープゲートを繋げる。
これで、後は「殺せ」の命令だけ出せば、必ず向こうの陣形の何処かが綻びる。

しかし、何も起こらず辺りが静まり返るだけだった。
何秒時間が経っても、時計の秒針が進む音しか聞こえず、他は特に

これといった動きもない。
漆月は冷や汗を垂らしながら「黒霧…？」と、首を傾げ視線を送る。見てみると、黒霧の表情は険しくもあり震えており、目を細めていた。
「そ、それがその……申し訳ありません死柄木弔…
保管してある筈の脳無、倉庫にワープゲートを出しているのですが…
――〝一体もいない〟！」
「!?」
ボロ臭い廃工場には確かに、脳無を補充していた。こうなることがあっても不思議ではないように、先生が予め用意していた改人・脳無が一匹たりともいない。
それがどんな意味を表すのか、弔達には理解出来なかった。
「やはりまだまだ青二才だな死柄木弔」
「ああ〟ぁ？」
オールマイトはポンと二人の肩に手を置き、死柄木弔を睨みつける。
それに続いて漆月に視線を移し
「そして漆月、私はね…非常に怒っている。
貴様の行いが、どれだけ忍に恥をかかせ、泥を塗って来たか」
蛇女子学園の時にようやく、姿を現した。
敵と手を組み攻めて来たあの事件を、オールマイトは忘れるわけがない。
大切な愛弟子や、半蔵の孫を殺そうしたその罪は、死柄木と同等だ。
そして、この場にいる連中も同じこと。
「私は…怒ってるぞ漆月!!
たった一人の身勝手な行動で、社会そのものを不安と恐怖に貶めると想像しただけで、腹ただしい!!」
もし、漆月の影響で忍の存在を世間に知れ渡ってしまうと考えると、何とも歯痒い気持ちか…思わずブン殴りたくなってしまう。
彼女は何も答えないまま、平和の象徴と言う恐怖に慄き、絶望の顔を映し出していた。

「貴様らは解っていなかった…
ヒーローと忍の、強く硬く結ばれた…絆を!!
警察のたゆまぬ捜査を――
――そして、少年少女達の魂を――舐めすぎた!!!」
遠い方角から巨大な爆発音が鳴り響く。
建物が破壊されたような破壊音、崩壊する音、遠くても、遠距離からでも聞こえる個性を持ってなくても聞こえるこの衝撃…まさか！と、死柄木は頭の中で想像つく。
「我々の怒りを!!!!」

それは、誰も使われていない廃工場。
Ｍｔレディは足で故障して使われてないトラックを掴み、それをオモチャのように、砂で作った構造を破壊するかのように、壊す。
そして次々と精鋭部隊が中に突撃し、脳無を拘束。
薄暗い廃工場の中でも、月の光で見えるだろう。Ｍｔレディは巨大な体のまま、林間合宿に襲撃をかました脳無を鷲掴みにする。
虎は、裸体となって虚の目を開けているラグドールを姫さま抱っこのように抱きしめ、辺りを見渡す。
雅緋と忌夢、ギャングオルカ、凛、上忍にして蛇女子学園の学園長、隼総。
そして、脳無を制圧する精鋭部隊の筆頭、ベストジーニスト。
これらの全てが全力を尽くして脳無を制圧、及び確保。
「うえぇぇ～、マジでキモい～！何っすかコレ！」
「悪の誇りを取り戻す。
それが少しでも可能なら、私はこの命を死に変えてでも貫き通す！」
「全員ご苦労、脳無格納庫。制圧！」

ベストジーニストの服の繊維がみるみると脳無の体に巻きつき、捕縛していく。
シンリンカムイより秀でてるその才能は、流石はＮｏ．４の肩書きを背負うだけの実力はある。
そして、飛鳥達はそれを…その光景を全員で眺めていた。
建物が半壊となった今なら、よく見える。
何にせよ、高まってた不安が一気に消え去った。
そう、近くでプロヒーローと忍の、本当の実力と怒りをその身で、肌で感じながら実感した。

これが忍なのだと。

これがヒーローなのだと。

「おいたが過ぎたな!!漆月！死柄木弔！敵連合!!」

絶対的圧倒的最強正義。
平和の象徴は、悪の前で微笑む。
敵連合の敗北が、ここで――

112話「巨悪、起動」

遠い遠い記憶の中、真っ白のような空白の、忘れられない記憶。
その記憶は余りにも懐かしく、思い出すだけで心が暖かくなる…大切な思い出の1ページ。

『俊典くんは、何になりたいの？』
それはまだ、学生時代の頃だった。
敵の活性化が頻繁的に増え、まだヒーロー社会がそこまで成り立っていない時代の頃、二人はまだ学生だった。
一人は金髪でいて、痩せ細ってる弱々しい見た目をした男、八木俊典。
もう一人は長い髪を下ろ、こちらの様子を伺うようにソッと見つめてる少女、陽花。
セーラー服に身を包み、香水なのか、和らぐような良い匂いが鼻に利く。
何になりたいのか…ヒーローになる事は前にも話した筈だが、彼女が問てるのは、どんなヒーローになりたいのか、という純粋な疑問の言葉だった。
『僕は…お師匠のような優しいヒーローになって、お師匠を超えるような、皆んなを笑顔に出来る、そんなヒーローになりたい…そのためには、象徴が必要なんだ…だから僕は…』

――平和の象徴になりたい。

その為に、血反吐を吐くような鍛錬を積んできた。師匠からはとんだクレイジーな弟子だと言ってるが、無個性だった自分を選んでくれた、俊徳にとっての最高のヒーローでもある。
俊徳がソレを言う前に、陽花は「そっか…」と心の底から安心したような言葉を漏らした。

『平和の象徴になる…か。
凄いなぁ、俊典くんは…奈々さんも言ってたけど、俊徳くんは他の人と違う…凄い目標を持ってるよ』
平和の象徴。
この時代は殺伐としており、善忍悪忍の争いも絶え間無く続き、血で血を争う何とも血生臭い世界だった。
当時は、ヤクザの死穢八斎會なんて組織が暗躍してたし、忍性戒と呼ばれる闇売買を目的とした商売組織も出回り、社会は秩序と意味を失いつつあった。
特に、最近ではワイルドヴィランズなんて組織が暴れ出していると聞く、何でも偉い企業の上層部が殺されたとか。世間はとても物騒な世の中だ。
いつ、誰が敵に殺されてもおかしくない世界に、救いなんてものは数少ない。
そんな世界に、俊典が平和の象徴として表へ出れば、世間は彼の存在だけを知ってるだけで、心は救われ、敵は慄き悪意は消える。

平和の象徴。正義のシンボルにして、そこらのヒーローとは違う、格も覚悟も何もかもが違う、頂点を目指す者が与えられる称号。
これこそ、ヒーローの本質。
平和の象徴になれば、人々を笑顔に咲かせ、心を救い、全てを支える。
この世界には象徴と呼ばれる柱が存在しない。
だから、自分がその柱となる。

『俊典くんがいるから、私も頑張れるんだよ。一緒に頑張ろうね俊典くん!!』

その笑顔に、思わず頬が桜色に染まってしまう。
その言葉が、彼女の笑顔が、存在が、太陽の如く私を照らし、導いてくれた。

そんな彼女が、とても強く誇らしく、尊敬もすれば…青春なのか、恋もしていた。
そんな彼女に、微かな特別な感情さえも抱いた。

何を言うんだい…
君が、凄い人だから……君のその笑顔が好きだから、私は陽花くんを尊敬してるんだ。
だから、一緒にここまで頑張れたんじゃないか…
平和の象徴だけじゃない、お師匠の為だけでもない、君がいたから…

――今の私がいるんだ。

「おいたが過ぎたな敵連合!!ここで終わりだ!!」
悪鬼滅殺。
凄まじく、直でいるだけで、肌で感じるだけで震え上がるその圧倒的威圧感は、誰もが恐怖で軽く戦慄していた。
「こ、これが…ステインが認めし……ほ、ほほ、本物のヒーロー……!
格が違う……そこらの贋物とはレベルが違う…!!」
オールマイトの威圧に早くも弱音を吐き出すスピナーは、畏縮していた。
テレビや新聞記事ではオールマイトの写真はアップされてるし、雄英の教師を務めてるとは言え、日に日に時間を解決してるのは確かだ。
だが、直で見るのと噂で見るのとでは、天と地の差が付くほどに違っていた。

何よりもオールマイトの画風が違うならまだしも、ここまで怒りに身を焦がすオールマイトなど、あの憧れを抱いた爆豪ですら知らないのだから。

「終わりだと？ふざけるな！始まったばかりだ……

正義だの平和だの…ヒーローだの忍だのとてあやふやなもんでフタされたこの掃き溜めを……

どたまのそこからぶっ壊す!!その為に、オールマイト（フタ）を取り除く……」

ヒーロー社会と忍社会は常に支え合って現在（いま）が出来ている。

ならば、それを壊すには両方欠かさず崩壊せねばならない。

この社会が気に入らない。

秩序だの掟だのルールだの法だのと、面倒臭いものは全部ぶち壊せば良い。

気に入らなものを壊すことが出来るのなら、尽力を尽くす。

その為に、仲間を集めた。

「折角さ、こっちには漆月以外の忍が集まってきたんだ…

敵も忍も、襲撃事件に嗅ぎ付け仲間はどんどん増えていく！

ようやく、仲間が集まって来たんだよ…俺の邪魔をするんじゃねえよオールマイト（社会のゴミ）がぁ…

良いか？俺たちはここから始まるんだ……!!」

噛み殺すかのような覇気のある眼は、ただならぬ殺気と憎悪を浴びていた。

異質だが、死柄木はこの通り仲間を通して着々と強くなってきてる。

それが、ヒーロー側にとってどれ程脅威なのかは、皆まで言わなくても解るはず。

ヒーローの憎悪、漆月と関わり深く根に持つようになった忍への嫌悪。

日々、悪意を募らせることで死柄木は強くなる。

そして、不敵な笑みを浮かべ

「黒ぎ「うらぁ!!」――!」

黒霧と彼の名前を呼び始めた瞬間、雷を纏った撥が黒霧の腹部に炸裂する。
「――ぐっ…!」
強烈な電撃、突然たる攻撃、黒霧のワープゲートよりも早く対処された彼は、電源が切り落とされたかのように呆気なく意識を途絶える。
黒霧はくたぁ…と意識を失ったまま、起き上がることも動くこともなかった。
「え…?――キャアアぁぁぁあああァァあああぁーーーーー!?!!
なぁにい殺したの!?黒霧ちゃんが!黒霧ちゃんがあああぁぁ!!」
マグネの悲鳴に、まさかとここにいる皆んなもソワソワと気を立てる。
死人が、死人が出るのか?忍ならまだしも、黒霧は敵だ。正式な手続きで敵は刑務所へと放り込まれるわけで、殺されることは無いのだが、目の前の光景にマグネの悲鳴で、まさかとあり得ない意識を芽生え始める。

「ったく、ピーピー喚いてんじゃねえよ!ひよこかテメェは!
別に殺しちゃいねえよ、気絶させただけだ。ホラ、少しでも怪しい動きをしたらぶっ飛ばせば良いって、こういう事だろ?」

巫神楽三姉妹の蓮華は、江戸っ子口調でおうおうと語り出す。
因みに蓮華は長女、次女が華毘、その次が華風流だ。
先ほど黒霧に投げつけた太鼓の撥は彼女の武器であり、ブーメランのように帰ってきた。
これで、出入り口は完全に防がれた。
荼毘に続き黒霧もダウン。
これは流石に不味い。
ワープゲートさえなければ、この状況を脱出することも、逃げることさえ叶わない。気絶から回復するのには数十分はかかる。
脳無でもいない限り、この状況を打破するのは、不可能と言っても

過言ではない。
「だから何度も言わせんな若造供が……大人しくしといた方が身のためだって…なぁ？」
「ええっと待ってね…」
グラントリノの心底呆れた声色に、合図の視線に似た視線に気付いた華風流は、資料をポケットの中から取り出し読み上げる。
「マグネ――引石健磁、
Ｍｒコンプレス――迫　圧拡、
スピナー――伊口秀一、
トガヒミコ…は、そのまんま…渡我被身子ね。
トゥワイス――分倍河原　仁。これ、何の意味か分かりまちゅか～？」
華風流の幼稚な言葉遣いなどなんのその、この場にいる敵は全員、背筋が凍りつく。
これは間違いなく彼らの本名、つまり…素姓がバレてるという明白な証拠。
彼女の手に持ってる資料は、敵連合の個人情報に纏わるデータ資料だった。
ただ、詳しく詳細すら不明な完全な裏社会の住人のデータだけはどれも取れなかった。
死柄木弔、黒霧、荼毘がその住人に当たるのは、もはや当然と言っていい。
そう、それだけなら――
「他にも…私立蝶姪高校一年忍学科、鎌倉――血ノ原美紗子。
秘立蛇女子学園一年選抜補欠メンバー筆頭代理、蒼志――蒼火　香惠。
死塾月閃女学館志望推薦者、龍姫――竜胆沙知。
敵はさておき、忍のアンタ達が素姓知られちゃあ、忍なんて終わりよねぇ？どんな気持ち？やりたい事やらかして、自分たちが追い詰められてるその気持ち、聞かせてよ抜忍さん」
華風流の煽る言葉に、視線を逸らし、俯き、歯を食い縛る。

ここまで、計算的に調査されていたとは微塵たりとも思っていなかった。
そもそも、林間合宿の襲撃をかましたとはいえ、生徒たちと体面こそしたが、情報漏洩になる事は決してなかった。
況してや、顔こそ情報漏洩の一つになり兼ねないものの、学生たちとは初対面なので、素姓が明かされることは無いのだが…
「少ない時間、警察と忍がたゆまなく捜査して突き止めたんだ。
そんでも、オメェ等の中にまだ知らないヤツはいるが…芋づる式にしきあげりゃあ問題はねえだろうに」
他にも闇や漆月の素姓は一切明かされておらず、本名も家柄も不明な点は数多く存在するが、拘束してる今ならそんな事どうでも良い。
それ等の情報に関しては上忍や警察が何とかしてくれるだろう。ヒーローと忍は、与えられた任務を全うすれば良いのだから。
それに、警察や上忍がこの取り調べや調査に詳しいことも、何ら不自然ではない。
「この意味が解るか?もうお前等に逃げ場はねえって事だよ。
諦めな連合諸共、もう終わったんだよ。勝負はケリ着いたのさ…
んで本題だ死柄木、教えてくれねえか?
連合の親玉にしてお前さんのボス、オール・フォー・ワン。ヤツは今どこにいる?」
その言葉に、死柄木の顔色が段々と青ざめていくように悪くなる。
冷や汗が首筋から垂れ落ち、呼吸も少しずつ荒くなる。
癇癪でも何でもない、初めて自分たちがヒーローに追い詰められたという屈辱感、敗北感、そして自分たちが捕まるという恐怖の概念が、死柄木弔の心を荒み、追い詰めていた。
「俺が……俺らが……?終わり……?」
見渡せば、警察は銃口をこちらに向けており、上忍達は抜忍や敵へと近付いていく。
「取り敢えず死柄木と話したい、だから他のメンバーは速やかに移動

牢式で」
グラントリノの言葉が合図となるかのように、迅速な対応で敵を連行していく。
「さあ来い！」
「ッ！離せ！離せよ！僕に触るな！
やめろ！お前らなんかに触りたくない！あの子と一緒に復讐するって決めたんだ!!」
「……蛇女の襲撃を受けたことを良い機会に逃げ出しても、平和からは逃れられないのか…」
鎌倉と蒼志の悲痛と呼べる叫びが、弔の心に突き刺さる。
自分がせかせかと努力してかき集めた精鋭が、駒が、自分の手の元から去っていく。
それはまるで、正義が悪の大切な宝を奪い去るような、そんな光景。
次々と、メンバー達が警察や上忍に拘束されてく光景を見て、奥歯を噛み締める。
「……こんな…こんな呆気なく……」
弔の小さな声が小刻みに震え、上手く喋れない。
吐き気がする。
目眩がする。
心が痛い。
「俺たちが……こんな所で……!!」
重々しく憎悪を孕みながら、負け犬のようにしか吠えることが出来ない自分に、嫌気が刺す。
いやだ、イヤだ、嫌だ…
これから、これからが始まりだったのに…まだ始まったばかりだったのに…
こんな形で、こんな呆気なく、自分たちはここで終わってしまうのか？
折角、駒の使い方も分かってきた。
仲間を集める術も、仲間にしたい人間の心当たりだって幾つかあった。

にも関わらず、ヒーローという無条理が、忍という理不尽が、自分の手から次々と奪い去っていく。
「お前らが…ヒーローなんているから…！いつもそうやってェ…!!!」
訴えかける言葉の反面、頭の中がフラッシュバックを引き起こす。
遠い記憶。
ボロい道端に、ゴミ袋が積まれた山の隣で、自分が壁に背を向けてもたれかかってた、まだ自分が幼い頃の記憶。
誰も、誰も手を差し伸べてくれなかった自分の元に、一人の男が歩み寄って来た。
『誰も、君を救けてくれる人間は、誰一人としていなかったね…〝天孤〟くん』
その声は血の通わない冷酷な声でありながら、弔にとってはとても温もりのある、暖かい声だった。
『ヒーローが、その内ヒーローが！口を開けば皆んなそればっか……皆んなそうやって言って、君を見て見ぬ振りをし続けて来たんだね、可哀想に……。
そして、誰も…君だけを救けてくれなかった。一体、誰がこんな世の中にしてしまったんだろう――？』
弔…いいや、天孤の頭の上に優しくて、温もりのある手が置かれる。
その手は、どこか懐かしく、暖かく、そして心が微かに揺らぐ。
『君は何も悪くない――』
あの人の言葉が、今の心を突き刺さす。
誰も救けてくれなかった。
見て見ぬ振りをされ、生きてきた。
そこらの道端に転がるゴミのように、生きる意味すらも失い、絶望の頂点に達したその時に、まるで天からの救いの如く差し伸べられた一つの手。
あの人だけは、違った。
あの人は…俺を…

「正義なんて嘘だ……幻想だ……
……消えろ…きえろ消えろォ!!俺の前から!!」
お前（オールマイト）という存在が!!!

メンバー達が連れてかれる中、死柄木はオールマイトを睨みつけたまま、荒ぶる声で叫ぶ。
その時、死柄木の視界に、たった一人の少女の姿が映る。
その少女は必死に抗おうともがきながらも、手を差し伸べ死柄木の名前を叫ぶ。
ヒーットアップしてるせいか、あまりよく聞こえない…だが次の瞬間。
彼女の声が鮮明に聞こえた。

「死柄木……救けて…!!」

漆月の、泣き叫ぶ声が、弔の心に響く。
弔の、憎悪が膨れ上がる。
何かが弾けたような音が、聞こえた。
頭の中が真っ白になる。
「ヤツは今どこにいる死柄木弔!!!」
オールマイトの最骨頂とも呼ばれる怒り孕んだ声。憤りは、止まる事を知らない。
だが、それは死柄木も同じだ。
「オールマイト（オ マ エ）が!!!」
正義と名乗るお前が
平和を語るお前が
悪を潰すお前が
俺の大切なものを、〝仲間〟を奪い去るお前が
〝先生〟を殺したお前が――!!

『もう大丈夫――』

「――嫌いだ!!!」

『僕がいる――』

嫌い。

ただ嫌い。

もう名前を聞くだけで、見るだけで、壊したくなるほどに、お前の事が大っ嫌いだ。

殺してやる、この男だけは絶対に――

殺意が爆発し、怒り孕ませた声で叫んだその瞬間。

バシャアアァン――!!

死柄木の声がトリガーの引き金を引いたかのような、絶妙なタイミングで、死柄木がいる左右の空間から、黒い液体が現れる。

二手に別れたその黒い液体から、忌々しい姿をした化け物が、顔を出す。

「!?」

「なッ――」

「何イィィィ!?!」

何もない。

予兆も無く突然、怪奇は訪れた。

脳が飛び出てるその化け物は、紛れもないその姿は、改人・脳無だった。

骸骨に似せた頭部を持つ脳無、一つ目の脳無、それらが現れてはまるで死柄木を守るかのように、行く手を阻むかのように佇む。

それだけではない、漆月の前に黒い脳無が現れ、上忍を一撃で吹き飛ばす。

「何で…？黒霧なの？」

漆月は、涙で枯れた声で彼に視線を送るも、黒霧はぐったりとして

気絶してる。
そして黒霧の隣にも脳無が続出。
つまり、この現象は黒霧のワープゲートによる個性ではない、違う個性の持ち主。
しかしながら、この場にいる全員ともこのような現象を引き起こすワープ類の個性は誰一人とも持っていない。
次から次へと、脳無は姿を現し、無限に湧き出てくる。
「どんどん出てくるぞ!!」
連合のメンバーを連行してた警察や上忍、付き添いとして側にいたプロヒーローですら、全員脳無に薙ぎ倒され、その場に倒れ伏せている。
気絶してるものが多く、痛みで蹲ってる人間はほんのわずかと言ったところ。
「ど、どうなってるんすか!?全員拘束したはずなのに…訳わかんないッス!」
「取り敢えず落ち着い……ッ!おい華毘!」
「華毘お姉ちゃん後ろ!!」
え?と彼女が首を傾げ後ろを振り向いたその瞬間。
血のついたチェーンソーが唸りを上げながら、首を斬り落とすかのように華毘目掛けて降りかかった。
「ネホヒャン!!」
バイザーで頭部を覆われた脳無は、奇声を上げながら数々の武器を背中から飛び出し襲いかかる。
これは、八百万が発信機を付けた脳無。
林間合宿襲撃に参加したメンバーにして、秘密兵器。そして付け加えれば荼毘専用脳無。
だが、荼毘は気絶していながらも、命令されてないにも関わらず機能していた。
主人と認めたものの言葉にしか反応しないはずの化け物は、あのお方の意思のままに破壊を繰り広げる。
華毘は急遽対応すること叶わず、武器を手に握るも既に遅し。

「ハッ――!!」
パァン!
と、風船が破裂したかのような衝撃音に、華毘はビクつきながらも、脳無が吹き飛ばされた光景に目まん丸にし、脳無の頬に裏拳をぶちかませた老婆たる小百合に視線を送る。
あの一瞬でよくぞ華毘を救い、脳無に一撃を入れることが出来たものだ。
しかし恐れるなかれ、ここは最早戦場だ。
脳無が倒されても次から次へと姿を現わす。ゲームで言う無限ポップのような現象。
「怯むなお主ら!
巫神楽三姉妹!この場にいる警察とヒーロー、上忍のサポートしつつ脳無を倒せ!!」
『はっ!!!!』
三人の声が重なり、瞬時に外に出る。
しかし、外はエンデヴァーと大道寺、その他の数多くの警察がいると言うのに、何を…
そんな疑問を抱いたシンリンカムイは、外を見る。
何という光景か、外にも脳無が大量続出されていた。
警察に襲いかかる脳無、忍を襲う脳無、ヒーローと対峙する脳無、数々の脳無は、皆流れるように動き始めてる。
「塚内!避難区域を広げろ!それにしてもジーニストは何してる!?作戦は完璧ではなかったのかド阿呆がぁ!」
「おかしい…先ほど連絡が入って脳無は制圧完了と報告が入ったはずなんだが…それにさっきから通信試してるんだけど一回も出ない……まさか…!!」
最悪な結果が、頭の中を過ぎる。
警察の身柄で、悪忍と手を組むのは引けたものの、今事件の為とあらば、悪忍にも協力要請を出し、脳無格納庫の制圧を目的として学園長を中心に、雅緋と忌夢の三人で赴いたのだが…プロヒーローと上忍、焼き石に水かもしれないが、警察がいた中、連絡が途絶えたとな

ると…
考えられるのは…
――脳無格納庫から、ヤツが出現した可能性は極めて高い！
状況はより混沌へと導かれる。
先ほどまでかなり有意義で、優位な立場に居座ってたヒーロー達が、今じゃオールマイトや半蔵がいても大混乱となっていた。

建物が半壊されたバーの床には、ドロドロと黒い液体が零れ落ちていた。
脳無は連合のメンバーを守るかの如く、一人に集中するように集まり、手出しが出来なかった。
そんな中、半蔵は爆豪と二人の手首を掴み、オールマイトに語りかける。
「取り敢えずお主二人は儂が遠く離れた場所へ連れて行く!!少しの辛抱だがオールマイトは――」
その瞬間。
ドボボ！と黒い液体が溢れ出る音が、半蔵の耳に伝わる。
うぇっ！と吐き気を施すかのような爆豪と雲雀の声に半蔵はゾクっと背筋が冷えた。
悪寒が背筋を凍りつくように。
爆豪と雲雀は、苦しみながら黒い液体に飲み込まれてる。
「――!!　雲雀！爆豪!!」
「んだよコレ！クセェ…！」
「だ、だめ！の、飲み込まれ――……」
半蔵とオールマイトの言葉など意味がなく、二人の声はそこで途絶え、オールマイトが必死に手を差し伸べ、半蔵は二人を抱きかかえたその瞬間
バチャン！
と、水の弾ける音と共に二人は消えた。

黒い液体は力なく、形を保つことなく床に落ち、べちゃりと広がり不安定な形を描いていた。
「――!!Ｎｏｏｏーーーーー!!」

二人は、形なく黒い液体に飲み込まれ、そのまま床に落ちた。
正確にはこれは黒霧の個性に少し似たワープ系の個性。
どこに転移したかは不明、しかも独特とした臭い匂いが特徴の個性は、今までに見たことのない個性だ。
そもそも、ワープなんて個性は希少故に中々に見かけない代物は、そう簡単に見つからないし、出会った事もない。
ただ、もしこれが…〝混ざり合った〟個性なら?可能ではないか?
では、それを可能とする人間は一体誰なのか?そして、この窮地な流れを完全に糸で操作するように仕組んだ人間は、一体誰なのか?
「ワープ系の個性などヤツには持ってなかったはず…だが!!」
「俊徳!コイツぁ間違いねえ…連合に不利な状況から一気に流れを打ち変わらせるこの仕組み……ヤツが動き始めた!!」
浮き上がる水盆を、ひっくり返すかのように、意図も簡単に流れを変える事が可能な、計算的な男は、オールマイトやグラントリノの中で知ってる人物は、一人しかいない。

「……先生…」

死柄木は、どこか幼い少年のような声で、安堵の息を吐き、名前を呼ぶ。
いつも親しく、今では普通に名を呼んでたこの名前を呼んで、ここまで心が落ち着くようになるのは、久方ぶりだ。
先生は、二度も自分を救けてくれたのだから――

脳無の大群が連合のアジト周辺に続出する少し前、時間的に言えばそんな数分なんて生易しい時間すらかからない。
時間は、二分前に遡る。
オールマイト達が連合のアジトに突入し拘束したと同時に、ヒーローを先頭に、忍と警察は脳無格納庫を締めていた。
沢山の脳無は無気力で、生きてるのかすら疑ってしまう程に、不気味さを実感させていた。
主人の命令でしか動くことの出来ない改人・脳無は、文字通り操り人形でしかなかった。
どれだけ、強力な個性を複数にして所持していたとしても、自分に意志を持っていなければ、本領を発揮する事はない。
個性の質や、脳無による馬鹿力とかではない、それを抜きにして、思考能力を持たない脳無は、抵抗する事もなく、個性すらも使わず捕まったのだ。
意志も、心も持たない人間は、もう人間ではない。
「うえぇ…ねえジーニストさん……早く終わらせましょうよキモチワルイよこれ!!
ウチどちらかと言えばオールマイトの方に行きたかったなぁ～…事件の重要性から重視してあっちの方が私の方が得策でしょう？
捕縛系ならシンリンカムイさんに任せれば良いし」
「重要性と難易度を切り離して考えろ新人！
それに下された任務は如何なる私情があっても全うし遂行しろ。
嫌悪する任務も時に当たらねばならない事くらい頭の中に入れておけ」
Ｍｔレディは元はと言えばヒーローと言うよりも名誉や収入が欲しいだけで、特にヒーローとしての活動に熱い訳ではない。
ニッチなファンが付いてて、新人時代で名を馳せたいという欲望ダダ漏れではあるが、巨大化という個性で負けフラグビンビンに立ってるにも関わらず、事件を解決してる彼女の実力は、本物ではあるのだろう。
何よりも屁理屈ばかり言ってはいるものの、きちんと真面目に仕事

に当たってる事から察して、まだ経験が足りないと考察できる。
そこを配慮した上で新人に言葉を投げかけるジーニストは、周りをよく見ている。
「これで全部か？」
「ああご苦労様、鈴音さん。それにしても彼女、隼総の娘も凄いな、一瞬にして的確に脳無を確保した。
お手柄だ」
「雅緋は俺がいなくても、充分に強い忍さ……悪忍とややヒーローから批判を受け入れガチだが、それでも屈さず必死に誇りを取り戻そうとするプライドと精神は、俺ではなく彼女自身の強さだ……」
隼総は、雅緋の父親にして蛇女子学園の学園長の役目を担ってる、世界の中で五本の指に入るほどの実力を誇る、カグラに近い忍だ。
幼少期の雅緋を妖魔から守った、雅緋にとっての誇らしい父親であり、命の恩人でもある。
「脳無は今は起動していない、襲いかかる気配も微塵とも感じないが気を抜くな！
警察はいち早く移動牢式で脳無を連行しろ！コイツ等は複数の個性を身に宿してる！何かする前に無気力にさせるんだ！」
雅緋の指示でいち早く了承する敵引き取り係は、二文字で返事を返し、速やかに脳無に移動牢式で拘束する。
彼女はリーダーの素質がある。
そう言った事に関しては、今回の任務ではかなり適任者ではないのだろうか。
「雅緋！奥の部屋に妙なものを発見したんだけど…来てくれないかい？」
「忌夢、本当か？……何が起こるか解らない…私と忌夢だけでは不安だな…父上と一緒に調べるか……」
その妙なものが、何があるのか……想像もつかないが、何か危険だというのは察知した。
もしかしたら、脳無の中で最も強力な個体が隠されてるかもしれない。

「ラグドール！我だ虎だ！返事をしてくれ！どうしたと言うのだ!?」
虎の懸命な叫び声が倉庫に響き、それに駆けつけに来たギャングオルカが「どうした？」と声を張る。
「チームメイト、息があるようだな良かったじゃないか」
「ああ、特に問題は無さそうに見えるがおかしいのだ……何度呼びかけても反応しない…ずっと、気力を抜かれたまま呆然としてるのだ…ラグドール！返事をしてくれ！」
闇に拉致されたラグドール、一見見た目的には特に問題は無さそうで、最初こそ安堵の吐息を吐きたものの、彼女のこの反応しない様子に、正直何が起きたか心配でならない。
ギャングオルカは「取り敢えず彼女は救助隊員に身を預けよう、精神科医の専門家がいる、その医者に頼もう」とラグドールの背中をさする。
仲間の安否に不安な虎に優しい声を掛けてくれるギャングオルカは、見た目に反してかなり優しい。
それぞれのヒーローが、想いやり、絆を紡ぐ。
これが、現代に生きるヒーローと忍。
互いに互いを信頼し合い、現状を打破するそれは、間違いなく切り離す事のない仲間との友情だった。
それを、コンクリートの壁から覗き込むように見てた緑谷達は、脳無の格納庫に驚かされながらも、迅速に対応し処理するヒーロー達に、心の吐息が漏れる。
良かった…肝心の爆豪と雲雀の二人がいないと言う事は、間違いなくオールマイトの方なんだろう。
二手に分かれて行動を取り、その結果自分たちはそうではない、脳無格納庫に行き着いてしまった訳だ。
そもそも、彼ら彼女らは情報量も少なければ、確信もなかった。
ただ、ヒーロー達の方が情報量が秀でただけ。
ただ、ヒーロー達の方が実力も確信も強く持っていただけ。
たったそれだけの事でも、数の多いチームと連携により、ここまで

の成果を発揮するとなると、流石過ぎて物も言えない。
「ヒーロー達すげぇ…！俺たちが来るよりも早く善処してたんだな！」
「雅緋ちゃんと忌夢ちゃんもいる…お見舞いでいなかったのは、この事件に協力してたからなのかな？」
「善忍や悪忍との共闘だけでも、今思えば不思議ですのに……ヒーローだけでなく警察も来るともう、言葉が見つかりません……」
「虎さんにギャングオルカさんもいますわね…確かギャングオルカさんは昔は丑三ツ時水族館で経営をしてたと噂で聞いたことがありますが……」
「なんだ、雲雀はいないのか…となると、オールマイトの方に駆けつけに行きたいが、それでは隠密行動の意味にはならないか……」
それぞれ言葉を漏らす。
今思えば、自分たちのやったる事は誰にも認められないエゴに過ぎない事だ。
もっと強く言えば、本来はしてはいけない行動だ。
学生の身として保護下にいる自分達が、自分の身勝手我儘な感情論を押し付けて、行動して良いわけがない。
しかし、このままプロヒーロー達がいてくれるのなら心強いし、大事にならなくて済む話だ。
飯田は「俺たちの出番は無いようだ、ならここで引き上げよう！」と強い言葉を掛けてくれた。
そうだ、自分達はあくまで救出する為にやって来たんだし、これ以上は野暮だ。
連合の方もヒーロー達が捕らえてるし、何の問題も心配もいらない。
結局、緑谷達と飛鳥達は、何もせずままそのまま、今回の事件は幕を閉じ――
「すまない虎。
前々から良い個性だと思っててね、弔に追加で頼んで……貰うこと

にしたよ」

――なかった。

たった一つの、冷酷で不気味な声が、少年少女の歩む足を止める。

緑谷と飛鳥は、その言葉にどこか違和感を覚え、振り向く。

幸い壁で身を包み隠してるので、見られてはいないし、都合よくこちらだけ確認する事は可能だが、何故だろう…どうしてもその不気味な男性の姿だけ、見えなかった。

「止まれ貴様！連合の者か!!」

「こんな体になってしまって…ストックも随分と減ってしまった…

不自由な体は、いつになっても窮屈な気がするよ……」

ギャングオルカの制する言葉に聞く耳持たず。歩む歩を止めず、男はさも悠然と語りながら歩み寄る。

「そうか、ならばもっと窮屈にしてやろう」

ガチ!!とキツく縛る音が、室内に響く。

ベストジーニストの個性だ。

ベストジーニスト〝個性〟　ファイバーマスター。

服の繊維を自由自在に操るこの個性は、簡単に言えば服を着用してる人間は彼に抗う事が出来ない。

因みにスウェットを操るのは苦手で、得意なものと、苦手なものもある、意外と繊細な個性だ。

「貴様、連合の伏兵か！」

雅緋の黒刀の刃先が、その男に向けられる。

その黒刀は、赤黒い禍炎を纏い、灼熱の炎に思わず近くに火照ってるだけで火傷を負いそうだ。

しかし、男は雅緋に刃を向けられてながらも、平然と何ともない様子で立っていた。

ここまで来ると不気味さを通り越して恐怖でしかない。

「お前の後ろにあるソレは何だ!?言え！さもないと本気で致命傷を負わせるぞ…！」

忌夢の葛藤にた言葉を発しながら、如意棒を男の胸に当たるか当た

らないかのギリギリラインで寸止めしている。
それでも、男の動きに変化はない。
男の後ろには、赤い培養液が入った、世にも奇妙な化け物の姿をした異形で歪な生命体は、明らかに他の脳無とは違った。
何か特殊な生命体のような…その正体が何かは理解できない。
更に言えば、その化け物よりも今目の前にいる男が余程恐ろしいのだが…
それでも、恐怖を無理やり押し殺してでも、二人は後ろに退かない。
「二人ともその態勢を維持しててくれ。何らかの個性を使う筈だ」
ジーニストの個性は服の繊維を操ることが可能なだけで、個性そのものを封じれる訳ではない。
もしも念力と言った個性で攻撃されれば、ジーニストでも対処出来ない。
尤も、相手の姿すら見えない以上、何者か解らなければ、どう言った個性かも解らない。
なので、最新の注意を払うのはプロとして当然だろう。
「けどジーニストさん…もし一般人だったりしたらどーすんですか!?もしかして誘拐された人かもしれませんし…」
「状況と立場を考えろ!その一瞬の躊躇が現場を左右し、遂行できたはずの任務が失敗という形で終わる事になる――」
ジーニストを中心に、警察や上忍が取り押さえるようにその男に近づく。
「いいか、敵には何もさせ――」

「出来れば、弔の邪魔はよして欲しかったなぁ…」
ジーニストの声が途絶え、瞬きする暇すら遅く感じるその瞬間。
世界が新しく変わり、塗り変えられたかのような、悲惨な光景が映し出されている。
男は宙に浮き、それでも何も動じず、声色を変えず、平然と一人で物語る。
何が起きたか？
そんなもの知るはずがない。
この男を除いて――

ギャングオルカは、鈴音、雅緋は、忌夢は、隼総は、虎は、Ｍｔレディは、上忍及び警察官は、筆頭のジーニストは、跡形もなくこの男に吹き飛ばされた。
簡潔に言えば、反撃や行動、呼吸する事すら早く、この男は複数もの個性を使い、今の現状を作り出していた。
そして、確保してた筈の脳無の姿は今じゃ何処にも見当たらない。
赤色の培養液に使っていた化け物の姿もいない。
「折角、弔が自身で考え自身で導き出したんだ……
ようやく、弔の元に仲間も集まり始めたんだ。それを君らが邪魔するなら、僕もとことん付き合おう」
目の前には、建物も何もない。
地平線とゴミのように崩れた何軒もの高層ビル。
地面には黒い液体が微かに床に散らばってるものの、そんなもの関係ない。
あの一瞬で、この男は全てを無に変えたのだ。
上忍も、プロヒーローも、警察も、この男に手を足も、出す術なく倒された。

「弔は成長してるんだ。
教育者として、先生として、彼の邪魔はさせないよ――」

そして、その場の近くにいた緑谷達は、動くことが出来なかった。
冷や汗が滝のように垂れ、吐き気を無理やり留めながら、口で手を抑えながら、呼吸の音すら立てないようにと、踏ん張っている。
もちろん、緑谷だけではない。
飛鳥も、飯田も、切島も、八百万も、柳生も、雪泉も、絶え間無く延々と続く恐怖に身を震えさせながら、存在を悟られないようにと身を隠している。
何が起きたか解らない…目の前で起きた事を直で見てても、それでも解らなかった。

――一瞬にすら満たされなかった。
あの一瞬の出来事、何が起きたのか、何があったのか解らなかった…!!
ただ、ハッキリ言えることは…この男はヤバイ!!!
飛鳥と緑谷は、この男を知っている。
会ったことも、会敵した事もない。でも、この男が何者で、連合の誰なのか、直感で解ってしまっている。
本能が言っている――〝逃げろ〟と。
一秒にも、一瞬にも満たされない瞬間の中、その男の気迫は――僕らに、私たちに、死を錯覚させた。

緑谷は、飛鳥は、前に個性に関して話してたオールマイトとのあの会話を思い出す。
『君たちはいずれ、その巨悪と対決しなければならない……かもしれない』
そのかもしれないというもしもの不安定な言葉。

巨悪と言う、禍々しい絶対悪。
悪の権化、悪の象徴――

（――嘘だろ……ウソだろ!?オールマイト……じゃあ、あの時話してた会話……あの男は……）
（――そんな……じっちゃんは、あんなのと戦ってたの…!?
じっちゃんのあの傷は…あの人が……付けてたの？
じゃあ、あの人がまさか……）

――オール・フォー・ワン！

「――さて、やるか」

悪の象徴、オール・フォー・ワン。
忍の天敵にして、オールマイトの最愛のコンビである陽花を殺め、全てを支配していた男が、全てを葬り去り、全てを奪い、壊し、殺す為に、今動き出す。
圧倒的絶対的最強悪。
悪の象徴は、正義の前で微笑む。
ヒーロー達の敗北が、ここで――

113話「オール・フォー・ワン」

同時刻、場所は打って変わって流れが変わり始め、覆された状況下。
爆豪と雲雀がワープ類の黒い液体に飲み込まれて直ぐだった。
「ぼえェっ！」
鎌倉の口から突如、黒い液体が溢れ出す。
脳無が送られた際に現れたこの謎の液体は正体不明であり、硫化水素に似た臭いが反吐が出そうなほど匂っていた。
「！しまった！」
逃げられる。
そう悟ったエッジショットは、合図一つで直ちに上忍や警察全てが動き出す。
連合を取り押さえようと、逃げられるよりもいち早く対処しようと全力を尽くす。
だが――
「グッ――」
「これ…はぁ!?」
連合のメンバー全員の口から、異臭漂う黒い液体が放出され、全員を飲み込むかのように、液体が全てを包む。
「おんのれ死柄木！漆月！逃がさん!!私も連れて行け!!」
オールマイトの手があと少しと言ったところで、死柄木と漆月の二人に届きそうだ。
だが、オールマイトの手が死柄木と漆月に触れた瞬間。
黒液体に飲まれた二人は、メンバー諸共バチャリ！と水が弾けた後のように、消えた。
オールマイトの声が虚しく消えていき、今回の作戦は後一歩と言ったところで取り逃がしてしまった形になってしまった。
「――申し訳ありません皆様ぁぁぁ!!!」
シンリンカムイの悔いを恨むような、責任を感じてる圧力に押しつ

ぶされそうな声が、響く。
メンバーを拘束していたのにも関わらず、自分が今回の任務で重要な部隊として参加したにも関わらず、全員取り逃がしてしまった。
「お前の落ち度じゃないわい!!
それを言うのなら儂も同じこと…ワイヤーで拘束していたはずが…今じゃどうじゃ……この能力は一体……」
「拘束器具が取り残されてる…と言う事は、液体に触れたものをワープさせるのではなく、液体により発動した対象の人物にのみワープさせる個性か!」
黒霧のような、空間を繋げるワープ個性ではなく、対象の人物にのみワープさせる個性。
仮称「転移」の個性は、どう対処すれば良いかも不明だ。
もし突破口が解れば、この事態を防げたかもしれない。
そんな苦虫を噛み締めるような表情を浮かべながらも、脳無はオールマイトに襲いかかる。
数は五、六体。
どんな個性を所持してるのか、個体一体でレベルはどの位か、詳しくは知らないが――

「ＨＡＨＡ……全く、笑えねえぜ――」

笑顔は常に絶やさず、歯を食いしばりながらも、心は真逆。
義憤と悔いに、心を煮やしていた。
力強い拳が微かに震えている。
あの場で、二人を救えなかった後悔が、連合のメンバーを成す術なく取り逃がしてしまった不甲斐なさ、それらがオールマイト怒りに火をつける。
脳無がオールマイトの身体にまとわりつくようにしがみつくも、体の軸を回転し軽い竜巻が発生する。
「Ｏｋｌａｈｏｍａ――ＳＭＡＳＨ!!!」
腰、左右の腕、首、足、胴体、執着するかのように食い付く全ての

脳無を吹き飛ばす。
建物から吹き飛ばされた脳無は一気に戦慄し気絶。
立ち上がる動きも見えず、意識が無くなった。
オールマイトは体制を整え、静かに壊れた壁に外を見やる。
見てみると辺り一面、脳無、脳無、脳無、脳無、脳無だらけ。
警察も手を焼き重傷者が相次いでいた。

「これでも喰らえっス！」
ガン!!
華毘の渾身の鉄槌。
黒い金槌による重々しい攻撃を、脳無は背中に生えてるハンマーで防ぐ。
軽々しく数百キロはありそうな金槌を、脳無は豪腕な腕に生えてるハンマーで互角に渡り合っていた。
「ネコニャン!!」
「うっさいわね～！気持ち悪いっての!!」
脳無の意味不明な奇声に、気味悪がり引きながらも、二丁銃で乱射する。
銃はライフルでもショットガンでもM―６０でもない。
イルカをモチーフにした水鉄砲だ。
鋭いような、水の弾を脳無はドリルを地面に突き刺し、地盤が緩み割れた所を、二つの腕で持ち上げ、盾にする。
そこから背中にバズーカや小型ミサイルを精製し、撃つ。
「この野郎……早く倒れやがれ!!」
蓮華は電撃を纏った桴で、脳無に真正面にぶつかる。
脳無は「ネホヒャン!!」と奇声を上げつつ、チェーンソーを唸らせ桴と鍔迫り合う。
しかし桴とは相性最悪で、チェーンソーの刃先が、桴を削り削ぎ落とすかのように、みるみると火花を散らしながら蓮華が押されていく。

「――ッくしょうめい!!ウチが押し合いに負けるなんざらしくねえ!!華毘!華風流!お前らも何でもいいから押してくれ!!」
「うっス!」
「そんなの言われなくても解ってるわよ!」
華風流は無数のイルカの形をした水玉を水鉄砲から出しては、脳無に襲いかかり、華毘の特大級の花火玉を脳無にブチまける。
水柱が天を覆い、爆破による火が脳無を飲み込むかのように燃え続ける。
押されてた蓮華は、優勢を取り直し桴を脳無の胸部に叩きつける。
まるで太鼓のドラムを叩きつけるかのように、リズムよく、心臓に振動が伝わるかのように、手を休むことなく打ち続ける。
「秘伝忍法――〝紫電〟!!」
「!――ッ!!――!」
奇声を上げる暇もなく、脳無は悶絶しながら走った蓮華の攻撃を浴び、もろに吹き飛び上忍と交戦中だった脳無にぶつかる。
「よっしゃあ!これでどうだってんだ……」
蓮華は息を荒くしながら、吹き飛ばされた脳無に視線をやる。
どうか、倒れて欲しい。
コイツだけじゃない、まだ脳無は沢山いる。
コイツだけで体力を消耗はしたくないという、心の隅に微かな懇願が芽生えるも
「ネホ――ヒャン!!」
脳無は、立ち上がる。
思考能力を持たない脳無に、諦めるという文字はない。
「嘘……でしょ?化け物過ぎでしょ……何なのよコイツら……」
わなわなと震える華風流の声に、三人は驚愕する。
一定以上のダメージも与えた。
巫神楽三姉妹は護身の民、特別な訓練を幼少期から受けてるので、他の忍学生とは実力は桁違い。
にも関わらず、脳無は苦しむことも、痛みに表情を変えることもなく、主人の為にと、破壊を続けんばかりに立ち上がる。

これが…脳無。

「踏ん張れ巫神楽三姉妹！お主らが唯一の要じゃ！」

ふと、心強い声が三人の耳に届く。

小百合様！と声を張り上げようとするも、小百合の目の前にいる怪物に、三人は一瞬で戦慄する。

小百合の目の前にいるのは、黒く堅い皮膚で覆われた外装、棘が生え、顔はドクロのような化け物で、身長はざっと二メートルに近い。

他の脳無とは違い、能が飛び出てないのが印象的だ。

そして、他の脳無とは桁が違うほどに禍々しく、不気味な気配を孕んでいた。

「小百合様……これって…」

蓮華の瞳に、微かな涙と、恐怖と、ただならぬ怒りが芽生える。

こいつは知っている…

前に一度、見たことがある…

だって、アイツは――

『ね～ね～三人とも、今度はかくれんぼして遊ぼうよ！もっとあそぼ？』

あの子を殺した化け物と同じ形をした姿だ。

過去と今が、積み重なる。

「ここは儂に任せんしゃい…

やれやれ、あのカムイめ…オールマイトから聞いた話とは全然違うのう…

まだこんな大玉を隠してたのか…こりゃ間違いない

――妖魔じゃな」

ギュオオオオオオオーーーーーァアアア!!
妖魔の雄叫びが、建物に亀裂を生じさせる。
近くにいた上忍や警察、プロヒーローは耳を抑えるのがやっとといった形で、小百合にいたっては、妖魔の圧倒的威圧感の強さに、冷や汗を流す。
脳無格納庫にいた別個体の化け物。
赤い培養液に浸かっていた化け物の正体は、忍の天敵にして、異常たる化け物、妖魔だった。
それは伊佐奈が創り上げた妖魔とは違う、完全なるオリジナル。
血の塊のような、泥々とした生臭い匂い、歪な殺気、妖魔な訳がない。
しかし小百合は知っている、今ここで妖魔を出したということは、これは小百合や忍への憎悪による、嫌がらせなのだと。
オール・フォー・ワンは、そう言う人間だ。
「さあ…久しぶりに本気を出すかのう…ちと、荒くなるが、老い先短い人生の老婆の我儘、許しておくれ」
ゴウゴウと轟く音が、地面や空気を通して鮮明に伝わる。
この只ならぬ破壊力、鳥肌立つこの気配、小百合の本気が解放される。

「絶・忍転身!!」

見れば姿は白い輝きに身を包まれ、眩しい光に視界が覆われ、暗く暗雲がかった夜は、一つの光に照らされる。
妖魔だけでなく、脳無も小百合一つに意識を向ける。
「さあ、おっぱじめようじゃないか!!」
その姿は、もう誰もが知ってる老婆の姿をした小百合ではない。
長い髪がストレートに伸び、肌も何もかも若返ったかのような美貌。
文字通り、正真正銘若返ったのだ。
その姿は現役時代、かつてカグラとして生きてきた、最高称号を背

負うに相応しい、最強の忍の姿だった。
その名も――ジャスミン。
生きる伝説、今ここに在り――

一望から見れば、この光景を一言にら簡潔に言えば「混沌」。
優勢だった立場は覆され、一瞬にして流れは変わり、今じゃ敵連合が優勢の立場に立った。
尤も、オール・フォー・ワンの一手でこうも戦況が変わるなど、思いもつかず、上忍達や警察、プロヒーローは全力を持って脳無の動きを止めていた。
そんな中ジャスミンだけでなく、圧倒的な戦力で敵の戦力を削ぎ落としている人物がもう一名。
灼熱の豪炎を、悠々と揺らがせ、脳無を翻弄していく強者。
体中の炎は、触れたものを火傷に負わせ、地獄のような業火を煮え立ちらせる男、轟の父親にしてＮｏ．２の肩書きを背負うヒーロー、エンデヴァー。
息遣いは荒くとも、実力は本物。
あの脳無の大群を、灼熱の炎の海で一掃し、横には倒れた脳無の山が積まれていた。
「ふぅ……まだ、終わりは見えないな…！」
それでも、無限のように湧き出てくる脳無は、怖れなくエンデヴァーに襲いかかる。
脳無一体なら倒すことなど造作もない作業、だが圧倒的な数は暴力と為す。
一体で複数の個性を持つ脳無は、何体も束になり襲いかかる。
口からガトリングを乱射する脳無、腕が消化水を放出する脳無、圧倒的な増強形の個性を複数与えられた脳無、そこらかしら、脳無だらけ。

見飽きてしまう程に、見慣れてしまったせいか気味が悪くも思えない。
尽きない炎を放出しながら、エンデヴァーは延々と脳無を倒す作業を繰り返す。
そんな、精神的に追い詰められてる中
「大丈夫か皆んな!!!」
平和の象徴と謳われた男の発する言葉が、全員の耳に届く。
エンデヴァーは一瞬、炎を止め動きを止め、ほんの数秒間を置き
「大丈夫!?これを見て本気で言ってるのか貴様は!何処をどう見たらそんな疑問が浮かび上がるんだド阿呆がァ!!」
ああ、確かに。
とオールマイトは心の中で呟いてしまう。
見て見れば、小百合は口から血を流し、無理な体に鞭を入れ絶・忍転身を行いジャスミンの姿と成り果ててる。
あの姿を見るのは久方振りだ。
アレを発動したなら間違いなく今の彼女は本気を出してるのだろう。
だが、それはこれ以上限界に近い老体を更に酷く悪化させてるようなもの。
下手すれば死ぬケースすら高いのだ。
それを、妖魔と対峙している。
しかも本来、妖魔がここにいること自体、オールフォーワン自らが妖魔を造る事など、ありえないとさえ思えていたのに…
奴は悉く、我々の予想を裏切ってくれる。
巫神楽三姉妹を中心に、警察や上忍、プロヒーローは脳無の動きを止めている。
エンデヴァーという戦力をもってしても、脳無は一向に減る気配が見えない。
確かにそんな最悪な戦況の中、大丈夫か?と聞かれればそんな答え

も返ってくるだろう。特にエンデヴァーは。
「流石のトップヒーローも老眼が始まったのか!?ならばＮｏ．１なんて肩書きは捨ててしまえ！
なぜ貴様はその場で立ち止まってる!?貴様は平和の象徴なのだろうならばさっさと親玉を倒しに行け！敗北は俺が絶対に赦さんぞ!!」
遠回しに「我々に構わず先に行け」というエンデヴァーなりの気遣いさと言葉に、オールマイトは瞬時に受け入れ理解し、「すまないね！」と炎のように燃える怒りの眼光を光らせ、その場から消えた。

――パチパチパチ。
無音と成り果てた、朽ち果てた光景に、何の突拍子も無い拍手の音が、鮮明に聞こえる。
パチパチパチ、パチパチパチ――
世界の終わりを連想させられる景色、崩壊した街並、延々と続くかのような地平線の彼方。
この常識外れた空間は、文字通り異常というに値する。
――全滅。
上忍も、プロヒーローも、警官だって、束になっていた。
どんな輩が現れようと、太刀打ち出来る程の実力者揃い達がいた。
オールマイト程でなくとも、世界の五本の指に入るヒーローも忍もいた。
それを、たった一人の男はさも当然と言わんばかりに、人が意識しずに呼吸をするような感覚で、個性を発動しただけで、この破壊的な威力を出していた。
それでも、男は拍手を止めない。
それは挑発か、またはた…全員、この男に殺されずまだ息がある事

に、経緯を表してるのか、この際はどうでも良い。
本当に、心底どうでも良い。
「流石Ｎｏ．４ヒーロー、ベストジーニスト!!
僕は全員を消し飛ばしたつもりだったんだ!!
普通なら、これを常人が喰らえば確実に息の根は止まるんだけどね。
タネは知ってるよ、皆んなの衣服を操り瞬時に端へ寄せ、威力を軽減させた。そうだろ？
君の精神力・判断力・技術…並みじゃ無い！」
感心するように平然と語るこの男に、ジーニストは霞む視界を無理やり払うかのように、目に力を入れオール・フォー・ワンを睨む。
「……コイツ……！そうか……はぁ……はぁ…こいつが…!!」
連合のプレーン。
作戦会議で塚内刑事を始めとした警官達から、予めの情報や連合に関して、知り尽くすだけ全部記憶した。
勿論、二つのアジトのどちらかにオール・フォー・ワンがやって来る事は聞いていた。
忘れてた訳でも無い、忘れるはずがない。
だが、まさか本人が直属やって来るのは、流石に誤算だった。
自身が危険と感じたら姿を現わすと聞いた。だが話が違う――
――からなんだ!?!
本当のプロはそんな物を言い訳にしていい筈が無い。
朦朧とする意識の中でも、ジーニストは諦めない。
まだ、皆んな息がある。
自分も、まだ個性は使える。
全ての力を振り絞り、不可能を可能にしろ。
「一流のヒーローは!!絶対に――」
――トッ

その瞬間。視界が真っ白の無に変わる。
意識が、まるで電池が切れたかのように、体の言うことが効かなくなり、腹部に強烈な激痛が走り出す。
「相当頑張ったんだね。よほど、ヒーローについて勉強して来たんだねジーニスト。
凄いなぁ、偉いなぁ、相当な努力を費やしてここまでよじ登って来たんだよね。
練習量と実務経験故にの〝強さ〟だ。
でも残念、君のは…要らないや」

君の個性は、弔の性に合わないな――

その言葉と共に、ジーニストは意識を無くし、完全に気絶する。

「儚いなぁ…一流のヒーローの精神論？
結果が全ての君らには、そんなもの要らないんじゃないかな？
努力と経験で語る君らには、偽善という言葉がお似合いさ――なぁ？鈴音」
オール・フォー・ワンは、嘲り笑いながら鈴音に振り向く。
彼女もジーニストと同じく立ち上がれずとも、意識はある。
もちろん、雅緋や隼総も意識はある。
ただ、忌夢や上忍達、警官やプロヒーロー達は、もう気絶していた。
「お前……は!!」
「お久しぶり、僕が誰で、僕が何者か…忘れて貰っちゃ困るからね。
感動の再会…にしては、余りにも酷だっかな？」
残骸のような建物が、殺風景な景色を照らし出し、悪の象徴は笑い声を抑えながら語り出す。
鈴音は歯を食いしばりながら、力無き体を無理やり動かそうとするも、叶わない。
「無駄だよ。
ジーニストの個性で威力は軽減されたとは言え、このダメージは君

にとって深刻な筈。
Ｎｏ．４の実力を誇る隼総ならまだしも、君は以前、僕に破れたんだ。
君が今回の任務に出張すること自体が、奇跡でしかないんだから、無理はするものじゃないよ」
「あっ……くッ…!!」
この男の一つ一つの言葉が、怒りを沸騰させる。
まるでマグマのようにグツグツと煮え滾るこなよ怒りは、かつての自分を想像する。
神威討伐の任務で、自分は初めて彼に負けてしまった。
そして、オール・フォー・ワンは、鈴音の大切なものを、絶えない笑顔で奪ったのだ。

スーパー忍者になる、最高の一流の忍になる夢を――

重傷を負い、後遺症も酷く、忍として生きていく事は出来ないと聞いた時は、己の不甲斐なさと共に、あの男を憎んだ。
己の弱さも一理ある…だが、あれ程の実力があれば、いつでも自分を殺せたのに、彼は態と生かしたのだ。
それは生きていく上で、二度と忍として生きられない彼女の不幸を、笑顔で嘲笑う為に過ぎなかった、単なる嫌がらせだ。
「だからもうお休み、君はもう二度も負けてしまったね。
忍として、教育者として、僕に破れた君は、敗北を悔いながら、憎悪を燃やして一生を過ごすと良い」
この男の言葉全てを聞いてるだけで、怒りを通り越してどうにかしてしまいそうだ。
たった一人の、興味本位な単なる嫌がらせで、自分の人生が狂わされたのだ。
怒らないわけがない。
「き……さま……!」
今まで黙って聞いてた隼総は、歯を食いしばりがら、近くにいる雅

緋を抱きかかえたまま、地面にひれ伏している。
強い、強すぎる。
今まで鉢合わせた妖魔よりもずっと強い…
いつ以来だろうか？
ここまで苦戦を強いられたのは……
「……ああ隼総か、君とはここで初対面かぁ……どうだい？妖魔に家族を殺された気分は、辛かったろう？」
「黙れ！貴様は最早人間ではない……妖魔と同様…！ならば私が……」
「父…上…！」
重傷に、体中の激痛に耐えながらも、雅緋は息遣いを荒くしながら、隼総の服を握りしめる。
ダメだ、父上まで逝ってしまう…
そうなれば私は…！
最悪な予想が、頭の中を過ぎる。
早く止めなければ――

――トッ

嫌な音が、凍りつくかのように再び聞こえた。
隼総の腹部もまた、ジーニストと同じく見えない何かの衝撃を喰らい、彼は静かに瞼を閉じた。
「父上!!」
「怒りに身を任せて立ち上がれる位なら、死んでった忍の先人達は苦労なんてしない。
それにあれだろ？
忍の定めは死の定め、任務で失敗した忍が死ぬ事は、何ら不自然ではない、自然の摂理なんだろう？
なら、悲しむ事はない。
ホラ、隼総や君も言ってたじゃないか…
弱い忍は罪、万死に値すると。なら、僕は何も悪くもない、怨まれ

る理由も、叩かれる口も僕にはない訳だ」
自身の犯した罪など知らない。
そんなのこの男からすればどうでも良い。
それは、忍とヒーローへの憎悪から来る本音なのか、これも単なる嫌がらせなのか、理由は定かではないが、どの道雅緋の逆鱗を傷つけるのには、充分だった。

――お前…だけは……
『雅緋。悔しければ、妖魔を狩れ…妖魔を倒す、カグラとなるんだ――』
――オール・フォー・ワン…貴様だけは…!!
「絶対に許さな――!!」

――トッ

そこで、雅緋の視界も揺らぐ。
一瞬にしか満たさないが、それでも…それでも雅緋の意識を途絶えさせるのには充分だった。
「雅…緋…」
鈴音の枯れる声が、涙と共に聞こえる。
守れなかった……負けてしまった……雅緋や隼総すらも、この男には敵わなかった。
何が…忍だ……
雅緋に続き、鈴音も絶望に身を染めながら意識を途絶えてしまった。
「ハッキリ言って聞き飽きたんだよ、君らのそう言う憎まれ口は。
だからもう少し表情を歪ませて欲しかったけど、一度大切なものを失った君らじゃ、効果はあまり効かないのかなぁ…?
まあ良いやお疲れ様。
ああそれと雅緋、君は確か悪の誇りを取り戻すとか言ってたね。

残念、取り戻すどころか、またとんだ汚名を被ってしまったねぇ……」
けど、仕方ないか。
たった一言で、人の信念を全て捻じ曲げ、圧倒的な力でひれ伏させるこの男に、敗北という文字は無い。
この男に、人間という常識は無い。
勿論、理屈なんてこの男に通じるはずがない。
「母親を亡くした位で、そんなムキにならなくても、君には他の生き方がお似合いだと思ったんだけど……
強いて言えば、悪忍の君らなら、弔の気持ちを解って欲しかったかな…
不幸面を掲げてるかもしれない、君の人生の殆どはさぞ、辛かったんだろうけど…君なんかよりも――
漆月の方がずっと無残な生き方をしてたよ。何せ彼女は、幼い頃から人間とすら認めてくれなかったんだから、君と比べればそうだな…
周りに空飛ぶ蚊蜻蛉がお似合いかぁ、ハハハ――」
悪の象徴は微笑む。
嘲笑う。
何せ彼は、カグラを超越した超人。
人間の理を超えた化け物なのだから。
悪は悪を踏み潰す。
その光景は正しく、弔がステインを踏み台にする姿と同じものだった。
「忍も、ヒーローも、全然大した事無かったなぁ…」
実力者揃いだった敵に対して、彼はつまらなさそうに、口から愚痴が溢れだした。
オール・フォー・ワン。
かつて何千人何万人、何十何百万…いや、それすらも超えるだろう命を摘み取った男は、まだ命を摘み取る気でいる。
そんな男のすぐ近く、コンクリートの壁。

奇跡的に壊されなかった壁の向こう側、オール・フォー・ワンの視界に入らないその壁越し、八人は息を詰まらせていた。
絶対的な力。
圧倒的な恐怖。
絶望と悪意。
言葉が、出ない。

――何だ…何だアイツ!?何が、起きたんだ？
轟焦凍は想う。
――全部、掻き消された…!!
切島鋭児郎は想う。
――お爺…様…黒影おじいさま…!アレは……アレは一体…!?
アレが、悪の象徴……巨悪と呼ばれる存在…!
雪泉は想う。
――ダメだ…アレに立ち向かったら、オレ達全員、アイツに殺される…絶対に殺される…!!
柳生は想う。
――逃げなくては…解っているのに…!
八百万百は想う。
――頭では解っていても、身体が…動かない!!
飯田天哉は想う。

――身体が動かない!!!

全員は想う。
圧倒的絶対的な悪意に、この場の全員は吐き気を抑え込む。
飛鳥は両手で必死に口を抑え込み、微かな呼吸音すらも聞こえる。
緑谷は両手で腹を抑え、吐き気を押し殺す。
たった一つの恐怖で、ここまで違うのか。
オールマイトに似たこの凄まじいオーラは、余りにも異質で、彼が忍から天敵と呼ばれてた理由が、今ではハッキリと納得出来る。

上忍やプロヒーローも、警察もやられた。
その時間は、わずか一秒未満。
刹那と呼ぶに相応しいその一瞬にも満たない短時間、オール・フォー・ワンは全てを吹き飛ばし一掃したのだから。
恐怖に身体を震わせながらも、少し経つと、壁腰から液体が滴り落ちるような音が聞こえた。

「ゲボッ…えええ！臭えええ……！んだよコレ！」
「うえぇん……気持ち悪いよぉ……」

それは、爆豪と雲雀の、連合に拉致されてた二人の声。
オールマイト達が救けたハズの二人は、オール・フォー・ワンの元に転移された。
（――かっちゃん！――爆豪（くん）!!）
（――雲雀（ちゃん）（さん）!!）
八人とも、思わずその場で叫びだしそうになるも、その衝動を何とか危機一髪と言った感じで防ぎ、抑え込み、息を荒くする。
どうして此処に？という疑問が、八人の頭の中に靄が付くようとどうしても離れられなかった。
あの二人が、この場にいる事自体が、どう言っても異常でしかない。
「悪いね二人とも、こんな手荒な歓迎で」
「あぁ、？」
「誰…？
……！ねえ爆豪くんアレ!!」
雲雀の驚嘆な叫びに「なんじゃオラァ！」と叫び振り向くと、そこにはただただ「無」が広がっていた。
歪でありながらも、その破壊的な世界観は、二人を硬直させるのには充分だった。
この街が何処なのか、此処が何処なのか解らない。
それでも、何十人も人が倒れてる地平線は、どう見ても歪としか言い表せなかった。

ただ、これだけは理解できる。
こんな、こんな漫画も幽霊もビックリするこの状況を作り上げたのは、間違いない…
「テメェ…が、やったんかこれ」
爆豪の問いかけに
「うん、そうだよ」
なんの声ブレもなく、平然と答えるオール・フォー・ワン。
「君らと話したい事は山ほどあるが…ホラ、君たち二人の仲間が来たよ」
オール・フォー・ワンが指差す方向は、なんの変哲もない、ごく普通の壁。
その壁越しには、八人ともしゃがんでいる。
まさか…!と言いかけたその途端
「うえぇ!ゲホッ!」
「ガハッ…!」
「気持ち…悪いぃ…!」
次々と黒い液体から姿を現わす連合メンバー。警察に引き取られてた連中、気絶してた連中、シンリンカムイと半蔵に身動きを封じられてた連中は、一人残らずオール・フォー・ワンの元へ転移された。
当然、連合のメンバーも何が起きたか解らずといった所で、更に気絶してる黒霧と荼毘に至っては関係ない話だ。
「ゲホッ!ゲホッ、はぁ…はぁ…何…これ?
何が起きて…」
「ここは一体…何処なのでしょう?」
漆月と蒼志の声に構わず、オール・フォー・ワンは、弔に歩み寄る。
彼は、彼だけは知っていた。
この転移による現象も、脳無が現れたのも、眼に映るこの壊れかけた世界のような光景も、それらが全て先生の力によるものだと、知っていた。
「弔、君はまた失敗したね」
先生の声が、重々しく聞こえる。

その声には怒りなど微塵も感じない、だけどこの場にいる皆んなは、開いてた口を閉ざすのには充分な程に、その威圧感は凄まじかった。
「けど、決してめげてはいけないよ。
こうして、君は仲間を取り戻せた。漆月という君にとっての、最愛のコンビも取り戻せた。彼女は君の良き理解者だ、その事を決して忘れるな」
でも、その威圧感は嘘のように消える。
アレだけ、ヒーローや忍に対し嫌がらせをし続けて来た彼は、悪に対しては優しく接する。
それこそ、まるで悪の救世主のように
「漆月、君もね。
ずっと辛かったろうに…君も、何も悪くないのに、罪すら背負ってない君は、多くの人間に殺されかけた。
忍どころか、そこらの一般人は、君を受け入れてくれなかった…けど、そんな辛さも、もう要らない」
「え……？」
――ちょっと待て。
どうして、どうして貴方が、私のソレを知ってるの…？
黒霧から、少しだけ話を聞いたことがある。
『あのお方は、常に未来を見据えてる人間だ…どう動けばどう転がるのか、先生はソレを知っている…
あのお方に知らない知識など存在しない。
完全たる万能者と呼んでも過言ではない存在…
漆月もいずれ、あのお方の素晴らしさが解りますよ』
――どうして、私のことまで…?!
「漆月、僕は君にも感謝してるんだ。
もし君が連合に赴かなければ、彼女たちとも会えなかった…それこそ、連合は忍の力も、抗う術も無かったんだと想う…」

まあ、他にはいるが…幼い弔にはアレ等は酷すぎる。
なによりも、漆月。
君という存在がいたからこそ、僕もまた君に出会う事が出来たのだから。
「弔の仲間たちも。抜忍もだ。
いいかい？君らは決して、捨て石なんかじゃない。
君らは忍の世界から追放され、社会に苦しみ生きてきた。
だから、君らは負け犬でも何でもない。
今がある事を誇れ」
悪の象徴は優しく語り告げる。
オール・フォー・ワンは、昔はよく仲間を一つにまとめていた。
個性的で激しく、凶暴な悪意をまとめるのも、組織のボスとしてのあるまじき姿だ。
だが恐れるなかれ、彼は衰弱して弱体化した状態で、素がこれなのだ。
片手一つで全てを吹き飛ばす力、たった一つ破壊的な存在に、恐怖で鎮めさせる圧倒的な気配、それらが兼ね合わせても、彼は弱ってるのだ。
「爆豪くんに雲雀くんもね、弔が君らを駒として必要だと判断したから、僕は動き出す事が出来たんだ。
敗北をしても、失敗を繰り広げても、それでも何度でも立ち上がれ弔。
その為に、先生（ボク）がいるんだよ」
弔の教育には、経験が必要だ。
本当なら、自分の手で下せば事は有意義に進むだろう。
だが先生が態々直接手を下さないのは、弔の教育のためにならないからだ。
何事にも経験は必要だ。
だが、こう言った弔の身に危険が及ぶ非常時ならば、手を下す。
それが、先生だ。

「――全ては、弔（キミ）の為にある」

オール・フォー・ワン――全ては一人の為に。
悪の象徴は、黒いマスク越しで微笑みながら、手を差し伸べる。
黒いマスクはまるでドクロをリスペクトしたかのような、不気味な金属製のマスクに包まれていた。
師匠の差し伸べられる手に、弔は……
「先生…」
ただ、眺めていた。
この世界で、誰も自分を救ってくれなかった。
けど、この人だけは違う…先生だけは。
先生は、また自分を救ってくれた。

「言っただろう？もう大丈夫――〝僕がいる〟って」

悪の囁きに、異常な空間に包まれた二人は、険しい顔を立てる。
あの男は、只者じゃない。
危険すぎる、あれが本心なのかどうかは、二人には理解出来ない。
だが、本物なのだろう。
悪の絆というのは、師弟関係の繋がりというのは、良かれ悪かれ、双方に繋がってるのだから。

そして、壁越しに佇む八人は、息を押し殺しながら、考えていた。
最善な策を、どう対処すれば、どう動けば救えるのか。
――考えろ…この状況でどう動けば良いのか!!
緑谷は必死に考え、思考を無理矢理働かせる。頭のいい緑谷でも、最善策が思いつかない。
恐怖という概念に支配され、心が囚われながらも、それでもどう動けば二人を救ける事が出来るのか。
――ダメだよ…怖いから動けないなんて、そんなの絶対ダメ!!
飛鳥は「うっ…！」と本気で吐きそうになる嘔吐感に悩まされなが

ら、心の底から無限に溢れ出る恐怖を振り払いながら、二人を救ける為に脇差の刀を握る。
手に汗が握り、滴り落ちる。
距離的にワン・フォー・オールを使えば一秒で爆豪と雲雀の二人を救ける事など造作もない。
だが、救けることができるだけで他はどうする？
救けた後、一秒未満で全てを吹き飛ばす事の出来るアイツから、果たして逃れることが可能なのだろうか？
仮に出来たとしても、それはあくまで自分自身なだけあって、飛鳥や他の皆んなはどうする？
無論、全員この男に殺される。
自分たちの死を錯覚させる、この男の気迫だけで、ここまで解ってしまう。
それでも、どう動けば良い？

このままだと、二人が――!!!

ガバッ！
緑谷出久の思考は、友人の手によって止められた。
体も、思考も、飯田に止められる。
緑谷だけではない、飛鳥も彼に止められた。八百万は切島と柳生を、轟は雪泉を、どうやら彼ら彼女らも考えは同じだったらしい。
――俺が、僕が、私が、〝止める〟!!!
友を危険から守る為に、体を張ってでも止める。二人はそう決意したのだから。
「……ああ、やはり来てるな」
――ドクン!!
嘘だろ？そう心臓から口が飛び出そうな程に、全員はその場で凍りつく。

見られてない、忍だって完全に気配を消している。
にも関わらず、この男は知っているのか。
この場に学生がいることを。
口調から察して、恐らく爆豪と雲雀の二人を奪還しに来ることは最初っから予想がついてたのだろう。
オール・フォー・ワンは静かになんの変哲もない壁に、顔を向ける。
そして――

ズドオオォン!!!

「全てを取り戻しに来たぞ！オール・フォー・ワン！カムイ!!」
危険（ピンチ）な場面に、平和の象徴（オールマイト）がやって来た。
「また僕を殺すか、オールマイト」
悪の象徴（オール・フォー・ワン）は、オールマイトの拳を素手で受け止める。

〝平和の象徴〟対〝悪の象徴〟――
善と悪の頂上決戦は、これにて開戦する。

１１４話「掴め友の手」

荒野の如く、地平線の彼方を連想させる現状、オールマイトの怒りの鉄槌を軽々しく受け止めるオール・フォー・ワン。
「随分と遅かったじゃないか――オールマイト」
現在。
絶対正義と絶対悪が衝突し、頂上決戦の火蓋を切り落としていた。
そして、互いの力により衝撃の余波が生じる。
空気は震え、地面には大きな亀裂が木の根を張るように生じり、瓦礫の破片が宙を舞う。
両者引かず、一方で爆豪と雲雀は吹き飛ばされそうになり、連合は死柄木と漆月以外全員吹き飛ばされている。
地面はクレーターのように大きくめり込み、まるで小隕石が衝突したのかのように、大きな凹みが生じていた。
拳が離れた途端、双方は距離を置く。
「ここからバーまで五キロ余り、優に妖魔を中心に脳無を送ってから既に３０秒経過しての到着…か、衰えたねオールマイト」
ここまでかなりある距離、グラントリノの個性でさえ到底出せない記録に対し、オール・フォー・ワンは鼻で笑い飛ばしながら弱いと一蹴。
「貴様こそ、何だその工業地帯のようなマスクは！大分無理をしてるんじゃないか!?」
二つの象徴は対面する。
まるで正義と悪の戦争を終わらせるかのような、頂上決戦。
一層と張り詰めた空気は、険しく痺れるような感覚と成り果てる。
「もう五年前と同じ過ちは犯させん…貴様のような穢れた存在が、どれ程人々の大切な笑顔を奪って来たか…!!」
今でも思い出す。
彼の魔の手により、個性を奪われた人々が、悲しみに身を焦がし、笑

顔を亡くした人間を。
笑顔を奪い、壊し、夢を潰して来たコイツは、生きてることさえ赦されないのだから。
「今度こそ貴様を豚箱にぶち込んでやる！死柄木率いる連合に、漆月を筆頭とした抜忍も全員！貴様諸共な!!」
「ハハッ、流石はＮｏ．１。やる事が多くて大変だなぁ…」
オールマイトは大きく跳躍しオール・フォー・ワンに殴り掛かる。
無論、１００％の威力を喰らえば、先生と言えど無傷じゃ済まない。
だがそれはあくまで喰らわなければの話。
シュッ――ドス!!
「いッ!?」
突如、少女の痛々しい悲鳴が微かに耳に伝わる。
視線をほんの一瞬逸らす。
オール・フォー・ワンの指先は赤黒い爪と化し、鋭利に研が澄まされた爪は、龍姫の腹部を突き刺していた。
赤い液体を吸うかのように、指先から自身の血液へと取り組んでいく。
「ゴメンね龍姫――」
そしてオール・フォー・ワンのもう片方の腕はブクッ！と膨れ上がり、掌をオールマイトに向けたその瞬間――
「個性〝合体〟秘伝忍法――」
凄まじい闘気を孕んだ龍が飛び出る。
「――【滅殺龍燼砲】」
猛虎の如く、龍神のオーラは生きてるかのようにオールマイトに食らいつき襲いかかる。
そしてオールマイトの身体を噛みつき、比にならない速度で推していく。
あのオールマイトが押され、軽く安全圏だったビルは何軒か倒れ崩壊し、街は一瞬で塵と化し、繁華街の光景は又しても無残な形へ塗り

替えられた。
「秘伝忍法〝ドラゴン・ズロア〟＋〝筋骨発条化〟〝瞬発力〟×４〝膂力増強〟×３。
うん、素晴らしい威力だ。流石は、弔の仲間、秘伝忍法の攻撃性能も、そして個性に見合う忍術、個性と秘伝忍法を混ぜ合わせるのは楽しいなぁ…
次はもう少し忍法と個性…特に増強系を足してみるかぁ」
オール・フォー・ワンはさぞ愉快そうに物語る。
龍姫の忍術は龍脈を操る闘気、龍闘忍法。
龍脈忍法なんて呼び名もあり、龍を具現化した強力なエネルギーで相手を翻弄し、爆発する戦闘向きの忍術だ。
それを、オール・フォー・ワンは何個も増強系の個性で補修しオールマイトをも吹き飛ばす力へ変えたのである。
「そして龍姫が忍法を取得する前までの個性は『龍脈』。
地面に流れる龍脈を吸い自身の身体能力を上げる個性…か。弔の性に合う優秀な個性――」
だが、個性因子を忍術因子の細胞へと変換した忍の能力は、個性とは呼ばない…それを忍術と呼ぶ。
忍の忍術を個性と呼んではいけないのは、この為である。
個性と忍術は似ているが実際は違う。
個性は使い方によって色んな使い道や方向性が可能だ。
大きなことから些細なことまで、個性を熟知していれば、不可能だった事が可能になる。
一方、忍術は必殺技みたいなもの。
遁術という属性を持つ術を発せる事が可能であれば、必殺技を軽々しく使える点。
個性を持つものは、必殺技を作る事が難しい。
忍術を持つものは、使い方による方向性、個性のように巧みに使う難易度が重視されている。
そして細胞を集中的に集め、血肉の材料を揃える事で妖魔が誕生する。

オール・フォー・ワンはそれらを全て熟知している。

「オールマイトぉぉ!!」

「オールマイト……そんな!」

「ああ二人とも心配しなくても大丈夫さ、彼はあの程度では死なない…から――」

二人の虚しい絶叫をあやすように、温もりのこもってない言葉でオール・フォー・ワンは

「黒霧、皆んなを逃すんだ」

ドッドッドッ――!!

五本の指を、赤黒い色から完全なる漆色に染め、鋭い爪で黒霧を襲う。

腹に突き刺され「ぅッ!」と悲鳴の声が全員に響き渡る。

「ちょっ、何してんのよアンタ!彼はやられて気絶してんのよ!?

アンタが一体何者か知らないけど、逃す事が可能なら、さっきみたいに私達を逃して頂戴よ!!」

「すまないねマグネ、僕のあの個性は特別でねぇ…

転送という個性は範囲が短く限られ、対象者及び転送元は人、完全に、安全に、逃げ切るなら僕の個性なんかより、座標移動の黒霧が適してる。

まあ出来立てだし、完全たる個性にはもう少し時間がかかるんだけど、許してくれ。

因みに黒霧の身体には何の害もない、傷の恐れは何ら心配はない――」

突如、黒霧の体から黒い靄が増幅する。

みるみると止まらないその黒い靄は、まぎれもないワープゲートだ。

仮称『個性強制発動』〝ワープゲート〟――

黒い禍々しい爪に刺された人間の個性因子を無理矢理といった形で、強制的に相手の個性を発動させる個性。

幾つもの個性を混ざり合わせ誕生した、オール・フォー・ワンだけ

の特別なオリジナル個性だ。
「さあ、弔。
仲間と共にその子達二人を連れて逃げるんだ」
オール・フォー・ワンは次にまた赤黒い爪で
「そうそう、その前に悪いけど君たちの分も取っておこう、長期戦になりそうだし、君らの忍術は素晴らしい代物だ」
ドッ――ドッ――ドッ――ドッ――！
「がッ――！」
「ッ――！」
「くぅッ！」
「また…！」
鎌倉、蒼志、闇、龍姫の血を吸う。
漆月を除いた抜忍は、少量だが血を吸われ、腹部に傷痕が見える。
他者の忍の血を吸う事で忍術を発動させる。
仮称『忍術強制吸血』もまた、先生自ら作り出したオリジナル個性であり、五年前の戦いでは決して無かった個性だ。
忍の血を吸った人物は、文字通り忍術を発動する事が可能で、組み合わせることも、混ぜ合わせることも、全て可能。
彼の思うがままだ。
またトガや鎌倉のように、忍の血を飲んでも他者の忍術を扱えないのは、オール・フォー・ワンだけの特権だろう。
「僕が時間を稼ぐ、さあ…行け」
悪の象徴、ここまで来ると全国指名手配犯にして超災厄をもたらす敵も何故かと心強くなる。
いや、当然だ。
彼は先生、そして弔は生徒。
もちろん、連合諸共、弔と同じく大切な生徒達だ。
先生は、弟子の教育のために、生徒の為に胸を張る。
例えそれが、幾多もの命を奪い続けた極悪党だろうと、関係ない。
「先生は…？先生も逃げよう……だってアンタ、その体じゃ…ダメだろ？

下手すれば…死――」
ボガァン！
大爆発。
死柄木が初めて、他人に気遣いをするその刹那、遠方から爆発音が鳴り響き、数百メートル先にはオールマイトが追って来る姿が認識出来た。
「弔、常に考えろ――君はまだまだ成長出来るんだ」
片腕には蒼炎を纏い、腕からカマイタチの如く空気を斬り刻むかのような、斬撃を常に纏う。
蒼炎と斬撃、二つの組み合わせとオール・フォー・ワンの個性を組み合わせれば
「個性〝合体〟秘伝忍法――【鬼火丸鎌鼬・死ノ誘イ】
蒼志の秘伝忍法〝鬼火・蒼炎歌
鎌倉の秘伝忍法〝鎌鼬・獄ノ誘イ
個性〝空気を押し出す〟
個性〝瞬間火力〟
個性〝増幅〟
それらによって組み合わせられた個性は、オールマイトを殺す為に生み出された歪み持つ異能だった。
凡ゆる空間領域に踏み入れた対象を四方八方で斬り刻む空間ミキサーの斬撃、
凡ゆる空間を吸い込み瞬く間に膨張する蒼炎、
凡ゆる増強個性で秘伝忍法の威力を補助し、本人が扱う力量を上回る。
触れたものを火傷に負わせる蒼炎は、止まることを知らず、鎌鼬の如く研ぎ澄まされた斬撃は、オールマイトの皮膚を抉り血飛沫が飛び散る。
それらの忍法を〝空気を押し出す〟という個性で上乗せすれば、ジーニスト達を吹き飛ばした人間砲を、軽々しく超えることも可能。
オールマイトは蒼炎と斬撃に包まれ吹き飛ばされる。
オール・フォー・ワンは相も変わらずと何の変哲も様子も見せるこ

となく、悠々と弔達に向き直る。
「僕の事は気にするな、安心しろ。大丈夫だ。弔、君がいれば何度だって連合は立ち直れる。
それに――漆月、君はこの社会では紛れも無い、特別な忍だ」
その言葉に、頭痛が生じる。
目眩も起こり、でも立ち眩む事はない。
不思議と脳が活性化するかのような、そんな錯覚を感じながら、ワナワナと体を震わす。
「……待って……貴方は……誰なの？ねえ、教えてよ……貴方は……先生は……どうして、ウチのことを、知ってるの!?」
疑問と不安が止まらない。
何故だろう、この人の事なんて知らないのに、初めて会うのに、なのに心の中にいるもう一つの存在が『目を覚ませ』と訴えかける。
（――そろそろ、潮時かな。）
マスクを被ってるその顔から、表情は隠されており一切見る事が出来ない。
黒霧からは聞いている。
先生と呼ばれるこの人は、全ての常軌を覆す程に、異常で万能で、全てを熟知していると。
だが、個人情報、ましてやトラウマと呼べるあの悲惨な過去を、まるで知ってるかのように語り告げる。
そんな先生が、不気味であり優しくもあるように、感情と感情が混ざり合ったような、そんな訳の分からない感覚に囚われながら、彼女は動かないでいた。
ズドォォン！
しかし、敵にそんな暇など与えてくれるはずが無く、オールマイトはボロボロになりながらも、血反吐を吐きながらも、それでもオール・フォー・ワンに立ち向かう。
「恐れ入るよオールマイト。
秘伝忍法と個性の組み合わせを諸に食らっても、それでもまだ立ち向かうその姿。

一体誰に似たんだかなぁ？心当たりが二つあって、流石の僕も解らないや」
「お前の奪って来たものを、全て返させてもらう!!!!」
そして、衝突。
衝撃の余波が、全方位を襲い、体制を維持できるのがやっとのメンバーは、手も足も出ない。
平和の象徴と悪の象徴のぶつかり会う衝動。
二人の空間だけは、全く違った。
この場に、今目の前に二人が見えてるのに、二人だけはまるで別世界で戦ってるかのように、自分たちの次元とは違う世界に、目の当たりにしながら、ただただ見つめることしか、出来なかった。
「死柄木！」
だからこそ――
「あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めてる内に、爆豪と雲雀の二人を連れて逃げるんだ!!」
コンプレスは近くに気絶し倒れてる荼毘を個性で圧縮して、ビー玉サイズに縮小した荼毘を懐に入れる。
「死柄木弔、あの邪悪な男とどのような関係があるのかは存じません…
しかし、あの男が〝逃げろ〟と仰るのならば、あの方の為にも、我々が二人を連れて逃げる事が最善の選択なのでは？
安心して下さい…駒は持ちますよ、ちゃんと」
仲間がいる――
蒼志に腕を担がれ、体制を整える死柄木。
前までなら他人にすら興味のなかった彼女が、何故か初めて死柄木弔を支えたような気がした。
死柄木は数秒黙り込み「そうだな…やるしかねえよなぁ…」と呟き「んじゃあ、始めるぞお前ら…
――ゲーム・スタートだ」
両手を広げ、全員動ける者はそれぞれ体制を整える。
全方位、敵が、抜忍が、爆豪と雲雀を囲む。

当然、連合の動きに感知した二人も
「ば、爆豪くん……来るよ！」
「見りゃ解んだよボケェ…言われなくたってなぁ、そうなる事くらい予想つくけどよ…
ガチで面倒臭えなァ…!!」
元よりこうなる事は解ってた。
まだヒーロー達が殴り込みに来る前に、もし来なかったらと、全力で連合に挑むつもりだった。
例えそれが無謀だと言われようが、無茶をしようが、無理な結果だろうが。
勝つ事に拘りを持ち、オールマイトの勝つ姿に憧れた爆豪からして、諦めるなんて選択肢は最初っから無かった。
だからこそ、戦闘の覚悟はしていた。
だが、戦闘にしては余りにもトラブルの都合上で、予想外な事が起きてしまった事は、咎める事は出来ない。
こんな、オールマイトが近くにいるこんな状態で戦えば、オールマイトは必ず躊躇する。
近くに救けるべき人間、人質を救出する為にも、隙あらばと状況を伺う。
「待ってろよ雲雀くん！爆豪少年！今すぐに救けてやるからな!!」
ヒーローは、困った人間を目の前にして救い出す。
だが――
「させないよ――」
絶対悪（オール・フォー・ワン）はソレを許さない。
「弔達の邪魔はさせない、その為に今こうして僕がいるんだから。
例えどんな手を使ってでも、君を阻止する事が僕の役目なんだから」
黒い禍々しい爪でオールマイトを引っ掻き、顔を地面に突きつけ、擦るように思いっきり後方へ吹き飛ばす。
一方でオール・フォー・ワンも確かに戦い辛い状態でいた。
何せ死柄木達を含めたメンバー全員、オールマイトに触れさせる事

なく阻止しなければならないのだ。
有利な個性で何とかカバーは出来てるものの、その力があっても全盛期では彼に殺された。
もう同じヘマはしない為にも、常に相手の行動を予測し最新の注意を払いながら、対処する。
「邪魔を!!」
「ヒーローは常にピンチを覆す…やってみろよオールマイト、君の力でこの逆境を乗り越えて見せろよ――」
幾多もの個性と忍術を使用し、オールマイトを翻弄する。
焦る気持ちを抑えながら、なんて都合の良い話はそう簡単に出来るものではない。
ヒーローが目の前の人質を、どう上手く救えるか、そう悩むのはヒーローの弱点であり焦る部分でもある。
冷静な判断も大事だが、この状況を前にして落ち着けるほど、オールマイトも冷徹ではない。
もし、誰かの手助けがあれば…きっとこの困難を打ち破る事は可能なのだろうに…

壁越しにいる八人がいる事など、オールマイトは気付くはずも無く。

何度もの衝撃音が、個性を使用する音が、耳に鮮明に届く。
爆破の音に、雷の音、恐らく雷は雲雀の忍術による効果音だろう。
壁越しからは激しい戦闘音が鳴り響いている。
今思えば、自分たちはこんな危険な身に置かれてるのだと、痛いほどに思い知らされる。
勝手に首を突っ込んでしまったとは言え、元は仲間を救う為に行動に赴いた。
それが今じゃどうだろか？

何も出来ないまま、何も動けないまま、ただただ自分たちは身を潜めてる事しか出来ないのか。
自分たちの身に置かれてる愚かさが、責められるほどに痛感させられた。

何よりも、こんなピンチな時に、自分たちは――戦う事が許されない。

どれだけ綺麗事を一丁前に語ろうが、格好を付けようが、自分たちの行いは咎められる事になる。
法律が、ルールが、全てを縛る。
せめて隙さえ見せれば、救える術が見つかるかもしれない。
しかし、その隙があったにしても、どう救い出すのか…
下手すれば、オール・フォー・ワンの標的として狙われ殺される確率も充分にあり得る話だ。
あんな、オールマイトをも殺せる実の実力者に、ボスに、悪の象徴に狙われたら、一たまりもない。
平和の卵が、悪の象徴に敵うなど、到底あり得ない事だろう。
「何か…策が……策があれば…!!」
必死に、全力で、全開で、思考を働かせる。
自分たちは、どうすれば良い？
一体――どうすれば?!

今いる生徒たちの能力を、考えよう。
緑谷は、ワン・フォー・オールのフルカウルで軽く爆豪と雲雀の二人の元へ辿り着けるのに時間は要らない。
飛鳥は、風と土を操る術を持つ、対戦用としてはかなり最前線の位置に立つ彼女。
雪泉は、風邪と氷を操る術を持つ、だが飛鳥と違って風を巧みに使いこなす事が可能で、上手く使えば速度の調整も可能だろう。
柳生は、烏賊の忍獣を召喚させ、戦う事が可能。前の蛇女戦で雲雀

を救出する事に成功したらしい。
飯田の個性エンジンは、急速度を発揮する事ができる。体育祭の騎馬戦で、痛いほどにその個性が強力なのか身に沁みた。
八百万は、何でも創造する事が可能だ。
だが大きな物を創るのに時間はかかる故に、路地裏の狭い範囲では、ろくに使うことすらままならない。
切島は、身体を硬化させる事が出来る。
強度は恐らく、コンクリートをも突き破る程に硬く、きっと岩も簡単に粉砕出来そうだ。
轟焦凍は、炎と氷を出す事が可能。
炎は危なっかしいのでこの際必要ないが、氷は地面からでも出現させる事が出来るので、使い方次第だ。
ザッとまとめた所はこんな感じで、これを如何にどう使いどう救けるのか…だ。
「救けるってどうやっ……ん、待て……よ?」
スピード特化は三人、頑丈な生徒は一人。
これだけでもう爆豪と雲雀の二人の距離を簡単に詰める事が出来る。
ましてやレシプロバーストは、かなりの距離を一瞬で追い詰め、自身が鉢巻を取られた事にさえ気付かないスピードを誇る。
先ず、これでもう二人を救ける事が可能だ…
後はオール・フォー・ワンの隙を伺うだけ。
今はオールマイトと激戦を繰り広げてる。
「かっちゃんに、雲雀さん……そうか!!」
一瞬の閃き。
まるで探偵の如く、謎が解けたと推理を解くように、緑谷は納得する。
だが、顔にこびり付いた不安の暗雲は拭いきれない。
「おい、駄目だぞ緑谷くん……ダメだ、ここで動いてしまえば殺される……!」
ここで友を制するのが、我らが信頼する委員長、飯田天哉。

彼だけでなく、八百万や轟も頷いてる。
そう、今下手に動いてしまうえば、確実に殺される。
それは、間違いない。
だが――それは作戦がない状態での話だ。
「違うよ飯田くん！あるんだよ……ちゃんとした作戦が!!」

「本当に良いんだな？」
作戦を告げた緑谷に、険しい顔立ちを浮かべる七人。この作戦は、下手すれば全員死ぬ。
それは、間違いはないだろう。
だが、その危険性がかなり低くなっただけの話。
成功すれば、全てが好機に転ずるのも確か。全員が納得してしまう程の作戦に、もちろん戦闘をしろという文字は無い。
「これが上手くいけば、オールマイトも思う存分に戦え、二人を無事に救出する事が可能…私たちの選択肢はこれしか無い…」
雪泉の言葉に一同は頷く。
時間もない、爆豪も雲雀も敵に囲まれ、オールマイトは思う存分に戦えない。
この現状を打破できる方法は、これしかないだろう。
ただ――問題なのがどうやって救うのかが問題だ。
別に、雲雀と爆豪をどう救けるのかはどうでもいい。
正直言って、強引なやり方でも悪くないだろう。
そもそも、姿さえ見れば自然と駆けつけに来るため、本当なら何も問題ない。
そう、もし本当ならばの話。
雲雀はともかく、爆豪は必ず躊躇する。
自分の立場が解ったとしても、その一瞬の躊躇いが、逆に隙を突か

れる。
爆豪はプライド高い、みみっちぃ人間だ。
自尊心の塊と呼んでも間違いではない彼が、果たして緑谷の言葉で、本当に来てくれるのだろうか？
いいや、緑谷だけじゃない。
この場にいる飛鳥や雪泉も、飯田も八百万も、轟だって、柳生だって無理だろう。
だが…切島ならばどうだろうか？

彼は爆豪にどれだけ罵られても、友達だと平気で笑って、平等に接してくれる、懐が広い彼はどうだろうか？
「救けるキーになるのは、切島くん…君だ！」
今こそ、友の活躍の見せ場。
一年前。〝謎の巨大敵〟に震え、雄英を取り消した自分が初めて、自身で動いて友を救う瞬間だ。

切島鋭児郎は、簡潔に言えば、馬鹿正直だ。
真っ直ぐな気持ちで、昔の不良っぽいような雰囲気を兼ね備えているが、それは切島らしい彼の面なのかもしれない。
中学の頃は、てんでそこまで個性も強力ではなかった。
ただ身体を少し硬くするだけ、なんて地味な個性はヒーロー向きではなく、派手な個性を持って生まれたかったのが、本音だろう。
当初は性質の悪い同級生に岩を投げられ、個性を使っても壊せなかった程だ。

地味な自分が、唯一憧れてたのは、漢気ヒーローの〝紅頼雄斗〟。
中学時代の頃からはもう既にヒーローを引退した身だが、時代が流れ変わろうとも、切島にとっての憧れは、その熱血溢れる漢気ヒーロー、紅頼雄斗だけだった。
因みに、ヒーローネームの烈怒頼雄斗の名前は勿論、紅頼雄斗をリスペクトとしている。
そんな自分が、ヒーローを目指すのに通うべき学校は、雄英高校しか無いと決めていた。
他には士傑高校なんかも有名で、名が高いのが自慢だが、自分としては最高難関と呼べる雄英高校に、どうしても目指したかった。

中学は芦戸三奈も同じ学校に在籍していたし、人気のある元気っ子とだけは聞いていた。
同じ学校でもクラスは違ったので、ただの噂としか聞いてなかったが、ああ言う誰かを明るくする人間が、一番雄英に向いてるんだろうなと、心の片隅でそう想っていた。
想っていた…のだが、ある事件をきっかけに、自分は挫折してしまった。

学校帰り。
友達に進路の話を打ち明けれなく、悩んでた自分は、とにかく一人になりたかった。
確かに個性は地味でヒーロー向きじゃないかもしれない…だが、地味でも、心に漢気があればそんなの関係ないと、有耶無耶にして来た。
そうでも無ければ、ヒーローを目指すなんて、維持する事が出来ないから。
だから、何度も鍛錬し強くなって、地味な個性を強くして、ヒーローになるための努力を、陰で費やして来た。
そんな自分でも、やはり雄英は無理なんじゃないかと、不安が心を埋め尽くす。
(芦戸みてえな奴を見てると、俺は自信持ってヒーローを、雄英を目指

すって、本気で言えんのかな……）
なんて漠然と考えてたその時だ――

寒気が、背筋を凍らす。
感じたことのない異様な気配。
道路の道端で、巨大な影を覆うマントを被った大男が、女子中学生に絡んでいた。
大男の身長は、ざっと三、四メートルはありそうで、首にラジカセを吊るしてる。
女子中学生は…見た事がないな……短い緑髪をした小動物系の女子、可愛らしくもあり髪止めは桜の花と習字の墨筆をモチーフにした、可愛らしい女性が、今にでも泣き出しそうな面で、怯えている。

大男は、震える女性にこう問いた――

「スプリンガーのヒーロー事務所は何処ですか？」

その威圧感の篭った声に、少女は「ヒッ！」と震える声を発する。
手に持ってた習字道具を落としてしまうも、今は関係まいと、心の奥底から湧き上がる恐怖を必死に耐え忍んでいる。
何秒経っても、答えない彼女に嫌気が刺したのか、大男は手を出す。
「……何で、教えてくれないんですか？」
男の声は先程とは少し重みを増した声で、言い放つ。
それでも彼女は、ふるふると震え、目を瞑る。目から一粒の涙が滲み出る。
怖い、怖い、この人が怖い。
それでも、彼女は動く事が出来ない。
たった一人のか弱い女子中学生に対し、男は目を微かに細める。
その目は、完全に殺意と怒りで染められていた。
「――オイ、どうして……教えてくれないんだ……」
パキッ――!!

建物の亀裂が生じる音。
ビルの建物は次々と嫌な音を立てながら亀裂を生じ、指で引っ掻くかのように、ビルに指で引っ掻いた痕が遺る。
恐らくこの男は、間違いない…
敵だ――
だが、誰も救けは来ない。
何故なら、今は警察もヒーローもいないからだ。
パトロールに出かけてるのか、偶々その場に居合わせていないだけなのか、何にせよ、このままでは彼女が危ない。
〝何でこんな時に限ってヒーローが〟そんな時、自分の心の中にいるもう一人の自分が、こう言い放つ。

――〝お前が行けよ〟と。

ダメだ。
無理だ。
動かない。
恐怖の余り、体が動かせない。
あの子は下手すれば死んでしまう。
そう、思った時だ

「待ってください!!」
颯爽と現れてくれたのは、学校でも有名で噂になってた、芦戸三奈だ。
彼女は直ぐに、的確にヒーロー事務所を教える。
彼女の顔色を見る限り、恐怖に身を震えている。
足が、腕が、体が、小刻みに震えている。
あんな元気で活発な女の子が、怖いもの知らずのあの子が、初めて恐怖を前にしたかのような動き。
男は数秒黙り込み「有難う…」と言うと

「――全ては主の為に……」

去っていった。
ただ静かな空間の中、彼が首にブラ下げていたラジカセの音だけを置いて、そのまま何の危害を加える事なく去っていった。
彼女は「大丈夫？」と少女に聞くと、思いっきり泣きだした。
「怖かったです……あ、有難う御座います……！うっ……うぅ……！」と、涙の嗚咽を漏らしながら。
芦戸も泣いた。
彼女も、いつ殺されてもおかしくなかった危険のリスクを背負ってたのだ。
そんな状況から解放されれば、誰だってこうなる。
一方で、それを黙って見てた自分は――

「何が、ヒーローだよ……俺……」
バッカじゃねえの？

「目の前で困ってる人、救えなくて、何がヒーローを目指すだよ……」
俺は――

「ヒーローになんか、なれねえよ――」

雄英を諦めた。
ヒーローになる夢を、諦めた。
ヒーローになる事を、諦めた。
ヒーローを目指すのを、諦めた。
自分なんかよりも、芦戸の方がよっぽど強えヒーローじゃん…

ニュースで、自分と同じ中学生が身を危険に侵してでも、友達を救うために飛び込んだ一人の少年のニュースを聞いた時に、決めた。

雄英高校を取り消す事を――
情けなくて、悔しくて、苦しくて、悩みに悩んで自暴自棄に走ってしまった自分は、近くにあった物を本棚に投げ捨てたその時――
『そうじゃあねえだろォ!?』
懐かしい熱血孕んだ声が、自分の部屋に響く。
――今思えば、ここからが本当の始まりだったのかもしれない。
自分が憧れてた、ヒーローから貰った漢気。
その熱意が、ヒーローの言葉が、切島鋭児郎の心に再び火が付いた。

過去の悔やむ自分があるからこそ、今のオレがいる。
もうああはなりたく無い…
目の前の現実にビビって、動かなくなる自分はもう嫌だうんざりだ。
だから、爆豪と雲雀が連合に拉致された時、何も動くとも救けに行くことも出来なかった俺は、後悔した。
先生の選択肢も、飯田を中心としと生徒の言葉も、正しいって解ってる。
でも、もう戻りたく無いんだ…
あの時のような、何も動くことも、救ける事のできない自分が――
一番怖いから。
もし今こうして、友達を救うために動かなかったら。
この先一生後悔する。
だから、いても立ってもいられなかった。

今になって思ったのが、高校に入って、忍なんて馬鹿げたお伽話のような、歴史の教科書に載ってそうな、そんな古風な感じの存在として言い伝えられてた彼女たちが来た時は本当にビックリした。
今は、任務で同行してるだけかもしれない。
でも、俺にとって特に一番印象的なのは、飛鳥と雪泉だ。
ＵＳＪの敵連合襲撃の時に、恐怖に染まりながらも、悪に立ち向かおうと一心不乱に食いついてきた彼女(飛鳥)。
学炎祭で、半蔵に月閃の選抜メンバー達が、黒影に拾われた弟子だと知った時、一番驚いた。目頭が熱くなり、本気で涙が出そうになった。黒影の意思を継ごうと、日々努力を怠らず、悪の憎悪を断ち切った彼女(雪泉)。
二人の孫は人生の経験が違いすぎて、当然比べる事も出来なければ、自分などまだまだ優しい方だろう。
けど、あの二人みたいな凄いヤツじゃ無くたって良い。
爆豪や轟みたいな、クラス最強の一、二を争うような、凄いヤツじゃ無くたって良い。
そりゃ勿論強くなりたいし、体育祭だって一番を譲る気は無かった。
けど、今の自分は…ただ――
目の前の友を救えるヒーローに!!
「爆豪!!」
「雲雀!!」
友の叫びが、二人の意識を変える。
爆豪と雲雀は、友の叫びに上を向く。
声がしたのは、上からだ。
綺麗な星が広がり、黒く埋め尽くす夜空の中、聞き慣れた友の叫びが耳に届く。

二人は反射的に動き出す。
友の叫びなら、考えるよりもまず先に、体が動く――

囲んでた連合を出し抜き、二人は見事に
「バカかよ、テメェら」
「柳生ちゃん!!」
友の手を掴む。
戦況は一転。
友は微笑む。
過去があるからこそ、今がある。
友がいるからこそ、自分は救われる。
縁とは、切っても切れないように作られてるそれは、正しく友情だ。

115話「平和の象徴」

俺は、ヒーローになんかなれねぇよ――

これは一年前、切島鋭児郎があの事件をきっかけにして初めて挫折し、雄英に通う夢を諦めた瞬間だった。

一流ヒーローは、本物のヒーローは、目の前で危険に冒される人を救い出す。

そもそもヒーローという職業は、主に人間の救出活動を目的として動いている。

敵と戦うのは市民から守る為であり、敵を、犯罪者を倒すためにヒーローはいるのではない。

それは、解ってる。

だからこそ、目の前の人を救えないで、ヒーローになるなんて大仰な口を開いてた自分が、馬鹿らしく思えて来たのだ。

目の前の女の子一人も救えないで、漢だなんて言えない。

目の前の女の子一人も救えないで、立派なヒーローになんか、なれるかよ。

頭の中で、もう一人の自分が責め立てるように言葉を投げかける。

ヒーローになる事を拒む自分が、今を苛む。

自分は何も動けなかった…何も出来なかった…そんな自分が、果たして本当に立派なヒーローになれるだろうか？

いいや、なれる訳がない――

部屋に戻った自分は、進路希望調査書に書いてあった〝雄英高校〟と書かれた名前を、黒く塗り潰す。

これで、良い。

これが、俺の元の結果なんだ…俺みたいな地味で、上っ面だけを振舞ってた偽善野郎が、雄英に通うなんて烏滸がましいだろうよ。

本当に怖い時、何も動けない自分は、ヒーローになる資格どころか、漢を語る資格なんてねえよ。

あの巨大敵がどうなったのか、あの後警察やヒーローが調査した所、それらしき人物は見かけなかったと言われている。
気になるスプリンガーのヒーロー事務所も、どうなったのかはニュースでは流されてないので、不安でしかない。
でも、今の切島鋭児郎には、そんなのどうでもよかった。
そもそも、自分はヒーローになる事すら無理なのだ、そんな怖い時にも動けない自分が、気の弱い自分が、そんなの聞いたって意味がないし、何より聞きたくもない。
「ハァ……そう言えば、芦戸は…どうしてんのかな……」
あの後、無事に帰ることが出来ただろうか？
またあの男に目を付けられては居ないだろうか？
芦戸の事ばかり考えてしまう。
恋愛とか、友達とか、そう言うのじゃない…
どちらかといえば、妬ましい方だ。
別に憎くはない、彼女の行動は、誰もが認めるヒーローの行動だ。
本来、ヒーローを目指す人間の行動は普通はああなのだ。
まだヒーロー科ですらない、一般人と変わらない中学生が、身を呈してか弱い女の子を守ったのだ。
それなのに、自分は怖くて動けなくて、ただただ観てただなんて、ヒーロー志望が聞いて呆れる。

羨ましいんだ――

芦戸みたいな誰かを明るくまとめ、身を呈して誰かを救える、そんな彼女がカッコよく思えて、自分よりも立派なヒーローだと思ってしまった。
思ってしまった、と言うよりも、本当にそうなんだろうけど、事実なんだろうけど、ハッキリした。
自分なんかよりも、芦戸みたいなのが、ヒーローの器としてピッタリなんじゃないかと。
そんな、ネガティヴに根暗な事を淡々と考えて視線を落とすと、あ

る一つの書物が目に映る。
この本は確か…幼い頃、誕生日に買って貰った本だ。
『偉人・ヒーロー列伝』――
大分古い本で、今は全く人気のない、ごく普通の本だが、確かこの本のお陰で、ヒーローになる決意を抱いたんだっけ。
切島鋭児郎の個性は硬化。
知ってるとは思うが、体を硬化させる個性は、盾にも矛にもなれる。
親から聞いた話なのだが、幼い四歳の頃に尿意で目が覚めた自分は、つい目を擦った時に間違えて個性を使用してて、硬化した指で傷つけてしまったことがある。
瞼に切れ目があるのは、その理由だ。
その時はただ怖かった…
個性という物が、如何にどれ程恐ろしいものなのか。
大人や周りの皆んなからして見れば「偶然なる事故」「中々良い個性だ」と偏見で彼を見てきた。
偏見…にしては少々語弊かもしれないが、切島にとっては、自分の個性は恐ろしいものだと解釈した。
それもそうだろう、心も優しい彼は他人を傷付ける個性になんか持ちたくないし、そんなもの要らない。
個性は都合上、使い方によれば何でも出来る。
だから、切島にとって硬化の個性は、軽いトラウマでしかなかった。
しかし、そんな過去のトラウマを克服出来たのには、訳がある。
それが、切島にとっての憧れである。
紅頼雄斗――
それが、切島が初めて憧れた、尊敬出来るヒーロー。
外見からして見れば古風の不良を連想させるが、志は誰にも負けない最高のヒーローだ。
憧れのきっかけは、その人の漢気もあるが、一番は個性による関係性だ。
紅頼雄斗の個性は、切島と同じ硬化する事が出来る個性で、その個性で幾多もの人間を救って来たのである。

自分と同じ個性でも、使い方によれば誰かを救える個性となる。
それを、教えてくれたのが紅頼雄斗である。
自分も、あんな胸を張れるカッコいいヒーローになれたらな――
そんな事を自然と考えてしまう自分に、頭の中にある、焦げのようにこびり付いた記憶から、無理矢理恐怖の記憶が蘇る。
怖え時に、目の前の女の子一人救えなかった、無力な自分――
「クソ――ッ!!」
苛立ち昂ぶる余り、思わず本を投げ捨てた。
ガタッ！と物音が立ち、本棚に収納してた本もまとめて崩れ落ちるが、今はそんなの知った事じゃない。
何も出来なかった自分に対して、兎に角苛立ちが治らなかった。
腹の居所が悪い彼に、もう言葉も何も聞きたくない。
そんな風に、一人で殻に閉じこもろうとしたその時――

『そうじゃねえだろォ!?』

聞き覚えのある、ドスの利いた声が、切島の殻を壊すように、言葉が投げかけられる。
この声は…聞いたことがある…
父親の声でもないし、今日は仕事が忙しくて出張してるし、母親も今日は買い物に行ったきりまだ帰って来てない。兄弟もいないこの家には、切島鋭児郎しかいないハズだ。
ましてや、こんな声をした友人など身内にはいない。となると…
「紅頼雄斗…？」
後ろを振り向くと、確かに紅頼雄斗の姿が見える。
懐かしくもあり、今じゃ学校が忙しくてあんまり見る事が出来なかったが、確かにそこには、映像投影機に映し出された、紛れも無い、切島が尊敬するヒーローが映っていた。
けど、何で映像投影機なんか？と疑問に思うのも束の間、切島は視線を落とす。
そこには、切島が先程投げつけた本から落ちた、ＨＥＲＯ登竜門の

付録に付いてた映像投影機だった。
そう言えば、小さい頃コレを見てヒーローになりたいと思うようになったんだっけ…と思いながらも、幼い頃では難しい事は解らず、内容も詳しく覚えていない。
切島は勉強机の椅子に座りながらも、流される映像をただ呆然と釘付けになっていた。
『すっ、すみません！では早速質問に入ります…！』
『おう！来い！』
『他のヒーローと比べて、紅さんは兎に角、超突猛進というイメージがありますが…危険に身を投げる事への恐怖は無いのでしょうか？』
紅頼雄斗は基本、前線をメインとしてヒーロー活動を行う。
例え凶暴な個性を持つ敵を前にしようと、災害を前にしようと、紅頼雄斗は躊躇なく死地へ飛び込む。
世間では彼を勇敢なヒーローと賞賛しているが、その一方では超突猛進や自己犠牲、又は怖いもの知らずと言われている。
それもそうだ、あんな外見をしてて、その上如何なる困難を前にしても平然と立ち向かうその姿は、誰もが見てもそう思うのは不自然ではない。実際に切島もそう思っていた。
『テメェは俺を何だと思ってんだボケェ!!!』
一喝。
黙々と聞いてた切島でさえも震えた怒鳴り声に、思わず椅子から反転して崩れそうになった。
だが――次の瞬間
『んなもん、あるに決まってんだろ』
彼の言葉で切島は止まる。
まるで歯車の動きを止めたかのように、ピタリと、微動だにせず。
『それも大有りだ、てか死地に飛び込むのに怖くねェ奴なんぞ、余程の阿呆か○○○のみよ!!』
今迄、怖いもの知らずと見てきた彼の世界観が、微かに変わる。
紅頼雄斗だって怖い思いをして来たんだと、今の自分と重なりながらも、耳を澄ませる。

何でも新人時代、救える筈だった命を、救えなかった事があったそうだ。
その時はオールマイトがいても犯罪率が一向に減らず、寧ろ上昇し続けてたらしい。
社会は絶体絶命の危機状態に陥り、一年で何十万人もの人々が亡くなった事など、よくある話だった。
『一瞬、躊躇しちまったんだ……テメェの心が弱い所為で救けられなかった――』
ヒーローとは、常に心と戦っている。
犯罪者や災害ではない、まず最初の困難の壁は心にある。
どれだけ強力な個性があろうと、どれだけ強くなろうと、心が弱ければ、いざという時に救えない事だってある。
たった一つの心が、弱いか強いか、少しの変化が、ほんの少しの事だけで、全てが変わる。
『敵だって死ぬ事も怖ェ!!』
人間、誰だって死ぬ事は怖い。
例え人生を諦めようと自殺する人間だって、心の片隅では死ぬ事を怖がってる自分がいる。
そしてそれに気付かず死ぬ事もあるが、人間誰でも恐怖から逃れる事など出来やしない。
敵だって、確かに人を殺しあだなす存在だったとしても、自分が死ぬ事を恐れるのは本当だ。
身勝手で我儘な事だと解ってても、本来は人間という生き物なのだから。
同じ、この世に生きる人間なのだから――死ぬ事が怖いのは、当たり前なのだ。
『死ぬ事は怖え…けどな、死ぬ事が怖え俺が死地へ飛び込んで行けるのは、それよりもっと恐ろしい事を知っちまったのさ……
亡くなった方の最期の表情、救えない、救えられなかった辛さ……そいつを知ってるからこそ、俺は飛び込んで行くのさ…!!』

救えなかった人間の表情。
救われなかった人間の悲鳴。
救けてと懇願し、救われなかった人間の心。
それは、死ぬ事よりもよっぽど辛く、とても恐ろしい。
紅頼雄斗は、それを、救えなかった恐怖を知ってるからこそ、胸を張って前に出る。

『俺はヒーローだからこそ人々を守る！一度心に決めたなら、それに殉じる!!
――ただ、後悔のねェ生き方、それが俺にとっての漢気よ！』

紅頼雄斗に、言葉を返す事が出来ない切島は、グッと拳を握り締める。
――ああ、畜生…
俺は、なんて馬鹿だったんだ。
目の前の怖いもんに逃げて、ビビって動かなくなって、一人で勝手に落ち込んで…
何が、憧れのヒーローだよ…目の前の尊敬する人すらも、俺は何も解って無かったのか…
本当に怖い思いしたのなら、もう二度と悔いの残らないように、胸を張ってヒーローになる。
それが漢ってもんだろ――

俺は一度挫折した。
自身の心に、圧倒的な悪意を持つ敵に、目の前のピンチを救えない自分に、挫折した。
今までの人生で過ごして来た中で、これは一番大きな出来事だ。
忘れもしない過去があったからこそ、俺はもう二度と同じ過ちを犯さない為にも、頑張る事が出来た。
本気でヒーロー目指す猛特訓もした。
雄英は個性があれば良い何て話じゃない、ある程度の学力も付かな

ければ到底入る事もできない。
だから、死ぬ程頑張った。
勉強と訓練を両立し、休まず精進するというのは、漫画みたいな王道なストーリーであつてもいざとなると本気でキツイ。
何度か挫折仕掛けたし、筋肉痛絶えなかったり、入試試験なんか緑谷とかが0ポイントの巨体仮装敵ぶっ壊してたし、そう。
兎に角、今までの一年はとても濃厚…というより汗臭い話だが、過去の情け無い自分と決別する為の過程としては、充分な時間だった。
黒い髪を、ワックスで髪を逆立て、黒髪から赤髪へと染めたりと、過去の自分とは全く違う、今の自分になり変えた。
それでも、過去の切島鋭児郎は今の切島鋭児郎とは何も変わらない。
名前も、性格も、優しさや漢気だって変えた訳じゃない。
因みにこの話は芦戸だけしか知らない。
前にも話した通り、芦戸とは同じ中学出身で、友好関係を築いてた訳ではないが、あの事件を境に知り合いになるきっかけとして作る事が出来た。
『なに切島、前よりもカッコいいじゃん！漢気溢れてる感じでさ！
まー、切島の中で乗り切れたら教えてよ、高校デビューマンって学校のみんなに言いふらしてやるからさ！にしし！』
楽しみだ！と、いかにも花道に沿う活発な女子高校生のようなセリフを残す彼女に、切島は思わず微笑む。
芦戸は、アレでも気遣ってるのだろう。
過去のことを、あの時の事件のことを…
そう言えば、被害者だったあの子にはお礼を言えてないし、あの事件以来から一回も遭った事ないな…
今はどうしてるのだろうか？なんて考えながら、足早と学校へ向かっていく。
これが、切島鋭児郎が今に至るまでの物語。
だが、ここからが始まりだ。
自分が、果たして本当に自身を乗り越えられるか、己の目指すヒー

ローになれるのか――

有難う、芦戸。

そして、有難う…昔の切島鋭児郎。

有難う……紅頼雄斗。

オレ、アンタみたいなカッコイイヒーローになりたい…強くなりたい。

世間では皆んなアンタの事、興味もなけりゃあ知らないだろうし、知ってるとしたらヒーローオタクの緑谷だろうけど…

けど、アンタがいたから、今オレは胸を張って、ヒーローを目指せるんだ。

オレはもう、後悔しないよ――

緑谷出久達が行動を移す前、戦場はヒーロー視点では宜しくない形となっていた。

爆豪はアクロバティックな動きで連合の動きを捌き避けつつも、実力者揃い故に抜忍の彼女達がいるとなると、捌き切れない…と言えば自分でキレてしまうかもしれないが、正直辛い状況ではあった。

特に厄介なのがＭｒコンプレス。

アイツのせいで、二人は連合に拉致されたのだ。

個性は圧縮系と見なして間違い無いだろう。

それともう一人、闇という少女が厄介すぎる。

地面から突如、黒い茨が触手のように畝りながら襲いかかってくるのに対し、爆破攻撃を殴打してもビクともしないのだ。

雲雀の忍術【忍兎でブーン！】の雷で蹴散らす事は可能だが、それでも鎌倉や蒼志、龍姫の三人は厄介すぎる。

漆月は爆豪へのリベンジか突っかかって来るし、トガやスピナーと言った刃物による攻撃も、下手すれば致命的なダメージを負いかねな

いので、油断してると寝首を刈られる。
そして何よりもオールマイトは、本気で戦えないのが一番の欠点だった。
それは、人質となってる生徒の巻き添えを食らってしまう危険性。
オールマイトが本気を出せば辺り一面、荒野にする事など容易いものだが、それこそ下手すれば二人が死にかねない。
たからこそ、第三者達の手が必要だった。
作戦はこうだ。
先ず一番最初の先頭が切島鋭児郎、硬化で全身ガッチガチに硬めた彼なら簡単にコンクリートの壁を突き破る事などお茶の子さいさい。
次に飯田のレシプロで推進力、緑谷のフルカウルで瞬間火力のスピードを、雪泉の氷風で更に推進力及び着地による速さの調整。飛鳥は柳生を掴みそのまま四人と共にくっつく。
重量的にオーバーもあるし、麗日がいない状態では厳しいが、飛鳥も上手く遁術を使えばそれなりのフォローは出来る。
轟は地を這う氷を出し、空高く飛ぶための土台を作り出す。
柳生は雲雀を、切島は爆豪を救うための重要なキーだ。
何より敵が此方側に気付いてないのが好機。
今まで散々敵に出し抜かれたが、逆に今自分たちがその立場。
手の届かない高さから戦場を横断する事で、自然的に二人を救出。
オール・フォー・ワンが一番の危険因子であって、尤も注意するべき人物。
オール・フォー・ワンがオールマイトを食い止めてるのなら、オールマイトも、逆もまた然り。
後は、友の名前を呼べば、二人は自然と体が勝手に動く。
そして、友の手が再び――繋がれる。

『何ィィィィ!!?』
戦場は一転。
絶望から好機へ一変した今、戦場には連合とオールマイト以外誰もいなくなった。
真上の空に羽ばたく学生達は、見事無事に二人を救出し出す事に成功した――
オール・フォー・ワンの視線が少しずれたその微かな隙、オールマイトの正義の鉄槌が黒マスクに衝突し――
「――ッ」
吹き飛ぶ。
無敵と思えた彼に対して初めて、痛撃を与える事に成功した瞬間だ。
「やったぜ爆豪！雲雀も救出出来た!!」
「雲雀…雲雀!!良かった、無事か？酷以外事、されなかったか!?」
「うん！大丈夫！皆んな…来てくれて有難う!!!」
「オイテメェらオレに合わせろやクソが!!このままだと落っこちんだろ！」
「君はこう言う時にまで競わなくて良い！」
「皆さんお静かに！はしゃぎますと調整出来ません！」
……こういうお騒がせな所も、彼等らしい個性だ。
自然と、体の萎縮は収まり、作戦は狂わせる事なく成功した。
因みに轟と八百万は別行動になる。
連合が彼等に釘付けになってる今、逃げる手はこれしかない。
「……――ッ!!」
好機な立場だった自分たちの戦況が、崩された。
しかも、来るはずのない、居るはずのないガキ供が、又しても俺の邪魔をする。
死柄木弔は憎悪を燃やす目付きで、彼等を睨んでいた。

特に緑谷出久、飛鳥。
この二人は死柄木弔にとって一番気に入らない人物だ。
ＵＳＪがキッカケだろう。
緑谷出久という存在が、飛鳥という存在が、いつも何時も自分たちの邪魔をしてくる。
雄英高校襲撃だけじゃない、ヒーロー殺しの時だって、木椰区ショッピングモールの時も、いつも自分の前に現れて来る。
運命のいたずら…なんて生易しいレベルじゃないほどに。
だがこの時、死柄木弔にとって今、新たな因縁が芽生えた。

薄暗いバーには、いつも死柄木弔と漆月、黒霧が居るのだが、あの二人は今はいない。
何でもヒーロー殺しを探してるんだとか…
だから、いつものバーには死柄木弔しかいない。
いないのだが、ボイス音声のみのパソコン画面の奥越しには、オール・フォー・ワンがくつろいでいた。
『どうだい弔、忍専門ネット動画、なんて珍しいだろう？
漆月が君のために見せてくれた動画だ、学炎祭はさておき、他の動画も見た事ないだろう？これを機に他の忍から何か学び取ると良い』
「別に……興味ねえし、他の奴らなんざ知ったことかよ……」
それは飛鳥達が学炎祭を終了した際に起きた、あの日の事。
何て事はない、その日は仲間集めに必死だったし、漆月が帰って報告してくれたので彼女の言われた通りに動画を観ただけだ。
どちらが勝つか、負けるか…
彼女の話によると善忍同士の潰し合い…善と悪が立ち向かうなら兎も角、正義同士の戦いなんて聞いたこともないし、況してやお互い潰れ合うのなら、半蔵学院の飛鳥を消せることが出来るのなら、別にそれはそれで万々歳だ。
飛鳥を殺すことが目的という話ではないが、気に入らない人間を壊

したいのが死柄木弔の信条。
なら、どうせなら観ておいて損はないだろうと思った。
だが、結果はどうだ？
半蔵学院は敗北し、死塾月閃女学館は勝利した。
学炎祭通りのルールなら、負けた忍学校は燃やして廃校…忍資格を失う羽目になる。
だが、どうだ??
相手は学校は燃やさないと言い出した。
それどころか…
『飛鳥さん…私の、最強の友達になってくれませんか？』
仲間が増えただけだ。
寧ろより強く互いに強く、切磋琢磨し合う仲間が出来ただけ。
漆月の話と全然違う。
「なぁにが最強の友達だぁ……俺はなぁ、こんな誰もが馬鹿みたいに涙流す糞みたいなハッピーエンドを態々観るために時間潰してたんじゃねえんだよ……」
『ハハは……随分とまた御機嫌斜めだな、まあ…綺麗事を見せられ反吐が出のは弔の性格上、元々か……』
「漆月の話が全然違うぞ…アイツ帰ってきたら文句垂れ流してやる……糞が、俺を騙しやがって」
『まあまあ、彼女も別に悪気があった訳じゃない、弔に嘘つく道理もない。
僕の推論だと幾つか心当たりはあるが……
漆月は嘘をついていない…ただ、その後に何か変わったんだろうね…
それで、どうだい？弔から観て彼女達、死塾月閃女学館は…いずれ君の障壁となりうるぞ？』
「ハッ…！随分とまた厄介な敵が増えたもんだ……
嫌だなぁ、面倒だなぁ……あんなのに俺たちは標的にされてんのかよ」
『知っての通り、特に雪泉という少女は強いぞ？

弔、先生からのアドバイスだが、彼女達は、いいや…彼女はいずれ、いつか君と対立する障壁に化けるぞ…
君が、悪の象徴になるのなら、ね』
「……ふぅ～ん、先生がそこまで言うのなら……考慮しとく……まあけど、今はどうでも良いな……なんか幻滅したし」
学炎祭の予想外な結果。
廃校ならず、お互い手を掴んで成長する。
彼女達からしては成長過程の大きな大進歩だろうが、弔にとってはどうでも良い結果だ。
誰かが一人一人幸せになるのなんて知った事ではないし、興味もない。
期待してた結果に応えられない学炎祭に幻滅した死柄木は、バーの扉を開け、室内から去って行った――

漆月が帰って来てから、月閃女学館の存在を知った。
当時の自分は仲間集めに必死だったからか、特に危険という注意を払っていたが、気にしてはいなかった。
だが今になって確信した。

雪泉は、自分の障壁になる。

今事件で全く関係ない彼女が、雄英生や半蔵学院と供にやって来た。
リストから観て月閃は二年一年しか転入してないし、雪泉は三年生。
林間合宿では一切彼女に手を出していない。
だが、彼女が動き出したとなると、先生の予言通り、いつかは戦うべき時になるだろう。
「クソガキがぁ!!!!!」

悪は更なる憎悪を煮えたぎり、怒りを燃やす。
元々癇癪に敏感な弔は、子供大人という印象が強く、気に入らないものを壊す幼稚的万能な大人だった。
だが、幾つもの事件を通して成長してるのもまた事実。爆豪の爆破を諸に食らっても真っ先に彼を殺さなかった事が証明されている。
だが、成長しても怒りを隠せないのは、彼の性格上仕方ないのかもしれない。
「おいおい、マジかよ！」
オールマイトは不敵に笑う。
少年少女達が、あの場にいたことなど誰が予想が付く？
「逃すな追え！遠距離ある奴は!?」
「茶毘と黒霧両方ダウン！龍姫は!?」
「ウチはまだ行ける！あの距離なら射撃範囲に届くし問題ない！」
「しかし爆豪勝己と雲雀も巻き添えをくらいますが…」
「んなもん今気にしてる場合じゃねえ！鎌倉かトゥワイスでカバーしてくれ！」
「大丈夫よ！私がいるから、一先ずアンタ等くっついて!!」
突如、彼ら彼女等の介入に戦場は大混乱。
誰がどう動くか、全員が焦る気持ちを曝け出し、言い合いになる。
龍姫は両手の掌を爆豪と雲雀達に向け、ロックオンし、マグネはスピナーにくっ付き、スピナーはコンプレスにくっ付く形となった。
マグネの個性は『磁力』。
自身から半径４．５ｍ以内の人物に磁力を付加させ、全身・一部の力の調整が可能。
男がＳ極、女がＮ極となり、自身には付加できない。
「反発破局――夜逃げ砲!!」
「秘伝忍法――〝ドラゴン・ズロア〟」
反発し合う磁力現象によってコンプレスは人間砲の如く、空高く飛び標的に向かって加速する。
龍姫のドラゴン・ズロアは、大地の龍脈を吸収し大きく成長した龍は、星をも喰らい尽くすかのように、空高く走り標的に向かって行く。

コンプレスが先か、龍姫の秘伝忍法が先か――――

「タイタンクリフ!!」

しかし、何方も雄英生と忍学生に直撃することは決して無かった。
突如目の前に視界を遮らせるは、見覚えのある人物。
巨大化し人質を守った、新人ヒーローのＭｔレディだったのである。

「救出…優先……行きなさい…バカガキ共…」

しかし、ドラゴン・ズロアとコンプレスに顔面直撃したＭｔレディはタダで済むはずがなく、鼻の骨が折られ、失神し白目をむいたまま倒れこむ。

コンプレスもマグネの磁力を利用して空高く飛び、軌道をズラす事が出来なった彼は、なす術なく落下し気絶した。

「わぁ!どうしようどうしよう!邪魔が入ったせいでドンドン二人が遠ざかって行くよォ!」

「チィッ!邪魔なんだよヒーロー!!流石のウチもあの範囲じゃ…無理!」

「大丈夫よ!まだもう一発…トゥワイス!アンタもくっ付いて!」

「そーれトゥワイス!!」

龍姫はコンプレスを担ぎ、トゥワイスは弾役としてスピナーにくっ付く。

ドッ――

だが、次の瞬間。

訳も解らず三人と龍姫は何者かに頭を蹴られ、意識を失う。

声を上げる事もなく、四人は倒れ伏せ

ガッ――ギィィン!!

「!」

鎌倉だけは、反射的に武器で防ぐことに成功した。

それでも蹴りの一撃による威力で仰け反るものの、ダメージは受けていない様子。

「遅いですよ！」
「お前が早すぎんだよ戯け」
正体はグラントリノ。
たった一人で四人を気絶させたのはかなり大きい。
一石四鳥と言った所か、流石は志村の友人である。
「こっちも終わらせといたぞ！」
声の主に振り返るオールマイトは、安堵の息を付く。
「ガッ――」
「はっ、離して下さいまし!!」
漆月、闇は一瞬の隙を突かれて縄で縛られている。
エレベーター級の強度さを誇る金属製の縄は、かなりキツめに縛られてるため抜け出すのにも時間が掛かるだろう。
しかし、気配を悟らせず二人を拘束させたのは大きな手柄だ。
「志村の友人に…半蔵か……となると、妖魔と当たったのは、小百合かな……」
瓦礫に背もたれするオール・フォー・ワンは、咳払いしながら戦況を見渡す。
状況は最悪、より酷く悪化し次々と連合の戦力は削ぎ落とされて行く。
「なァあいつ緑谷！――っとに益々お前に似てきとる！悪い方向に!!
それと飛鳥も雪泉も！揃いも揃って祖父寄りなのは変わりねえな本当に!!どう言う教育しとるんだ！今度霧夜と雪不帰に直接文句垂れたる！」
「雪不帰は関係ないと思うんじゃが……まあええ！残りはあと三人、そして主犯格！此奴らを先に終わらす!!」
保須市の経験を経た彼ら彼女らに心の変化が訪れ、少しずつだが成長してるのだろう。
それが良いことなのか悪いことなのか、大人からすれば悪いことだろうが、周りや友人関係からしてみれば良い意味で成長した事にもなる。
「しかし、情けない…実に情けない!!あの子達に助けられる形になる

なんて…」
もしあの場にあの子達がいなければ、きっと爆豪と雲雀の救出なんて到底叶わなかっただろう。
半蔵やグラントリノが来たとしても、オール・フォー・ワンがいる以上、何をしでやらかすか解ったものじゃない。
だがこれで――心置きなく貴様と戦える!!

オールマイトは、平和の象徴は立ち上がる。
圧倒的な強さを誇る彼は、強き信念を瞳に灯し、指を差す。

「こっちは半蔵と俺二人で終わらす!お前はソイツを頼んだ!!」
グラントリノと半蔵は、死柄木弔を始めとして、トガ、鎌倉、蒼志を相手する。
漆月も闇も意識こそはあるものの、行動不能として拘束された為、体を動かすことは出来ない。
「申し訳有りません皆様……」
「闇ちゃんと漆月ちゃんの拘束はボクが外すから…三人とも頼んだよ!」
「え～…弔くん、私まだ終わりたくないです」
「トガヒミコ!……チッ、なら私は…」
「ッ!蒼志、俺をカバーしろ!二人は俺が殺る!」
鎌倉は研ぎ澄まされた鎌を二本使って縄を切り削いで行き、トガは戦えませんと言った雰囲気で首を横に振る。
頼れるのは蒼志だけ。
弔は舌打ちをしたながらも蒼志と共に二人を迎え撃つ。
「ハハッ――こりゃあたまげたなぁ…
一手で綺麗にやられた……形勢逆転だ」
恐れるなかれ。
オール・フォー・ワンは漆黒の爪を伸ばし、オールマイトに避けられるも――
――ドスッ!

「ッ！」
狙いはマグネだった。
黒い爪は気絶した彼の腹部に突き刺し、個性因子が働く。
個性強制発動――〝磁力〟。
磁力を発動させる事で、トガ、鎌倉、蒼志はN極、弔はS極に付加される。
気絶した者や拘束されてる者にも問われず、引っ張られて行く。
「あわわわわ!!ちょっ、ちょっと待って下さい!?そんなにいっぺんに来られても困ります！」
「ちょっ、何これぇ！」
「これは…マグネさんの個性!?」
「すみません弔…くっ付いて離れません……うぅッ…」
トガを中心に集まってくる仲間たちに、どうする術もなく直撃し、ワープゲートの方へと寄って来る。
気絶し磁力を付加されてないマグネは救いようがないが、オール・フォー・ワンの爪で投げ飛ばされ、彼また無事に救出された。
「ねえ！待って!!」
漆月の声が、先生もといオール・フォー・ワンの耳に届く。
「貴方は…何で私のこと知ってるの!?もしかして…あの時の事だって……!!」
それは…遠い記憶の中……自分に手を差し伸べてくれたあの暖かい手。
そこから、薄々と鮮明に記憶が蘇って行く。
先生は「漆月…」と一息付いて彼女に振り向く。
「漆月、弔の事は任せた――？？？

「あ……あああぁ…あ゛ぁ゛ああ゛あ゛あ゛あ゛ぁあァァーーーーー!!!!」
全てを思い出し、今になってようやく、オール・フォー・ワンを知った彼女は、最後に泣き叫びながら、闇に深いワープゲートへと消えて行く。
先に消えたのは漆月の方だ。
次から次へと、意識のない輩から拘束された輩まで消えていき
「ああ、待てよ…ダメだ先生!」
残るは死柄木弔だけとなった。
「アンタその身体じゃ…!!」
ダメだ。
背後に大きな闇が空間を開く中、弔は必死になって、声を振り絞る。
「俺、まだ――!!」
その言葉が最後の合図になるように、黒い靄は弔を包んで消えていく。
そんな彼に、愛弟子にオール・フォー・ワンは
「安心しろ弔、君は君の戦いを続けるんだ――」
黒い爪は解かれ、先生の言葉が終わりを告げる。
黒い靄は弔と共に完全に消え、敵連合は誰一人捕まえる事叶わず全員取り逃がされた。
「貴様ぁ!!」
オールマイトの拳が迫り来る。
あんな強烈な拳を食らえば、流石のオール・フォー・ワンも無傷では済まされない。
「個性〝合体〟秘伝忍法――【強制呪縛転送】」
闇の秘伝忍法〝呪縛の茨樹〟
個性〝転送〟
二つを組み合わせる事で、対象の人物を呪いの茨で束縛し、転送させる。
グラントリノの口から黒い液体が放出し、黒い茨が次々と体を侵食し、縛り、オール・フォー・ワンの目の前に現れる。
「+〝衝撃反転〟」

そしてオールマイトの腕に黒いオーラが纏わり付き、オール・フォー・ワンに殴るつもりが、目の前のグラントリノを殴ってしまい、その衝撃が自分に返ってくる。
この個性は簡潔に言えばカウンターによる異能だ。
「申し訳有りません先生！」
自分に衝撃が返っても、何の表情を曇らせないオールマイト。
「貴様はそう言う人間じゃったな…仲間や敵を、全て利用する輩だったのを忘れとったわい!!」
連合が逃げら、標的を変えた半蔵は、武器を握りしめ襲い掛かるも
「人聞きが悪いなぁ半蔵。別に弔を利用してた訳じゃないし、彼の大切な仲間を利用する訳が無いだろう？
それに、利用すると言うのは…こう言うことさ」
オール・フォー・ワンは素早く指を赤黒い爪に変形し、半蔵とは全く違う方向に爪を伸ばす。
その方角の先は気絶してる雅緋、忌夢、鈴音、隼総達だった。
ドスッ！と鈍い音が聞こえ、半蔵は思わず振り返る。
「忍法強制吸血にはね、色んな制限があるんだ……忍の血を吸えば忍術を使用する事は可能だが、量によって使用できる数が限られてる。
少量ならば使用する数は少なく、また多量ほ血を摂取すれば長時間、そして数多く使用する事が可能、但しこの個性…その気になれば人を殺すことも出来るんだよ」
四人の血が次々と迅速に吸われて行く。
連合のメンバーが何故少量の血で済んだのか…それは一時的に力を借りる、協力的な意味で吸い取ったものだが、下手すれば対象の人物の血を全て吸うことも可能なのだ。
だからこそ、利用するならば、敵の血を全て吸い尽くし、忍法を思う存分に使用する事こそ都合が良い。
「させぬわ!!」
半蔵の武器、古典式の刀は唸りを上げ、鋭い刃物は赤黒い爪を一刀両断する。
爪の断面には吸い取ってた血が見えるものの、あの数秒でかなり血

を吸ったそうだ。
「もう遅い…合体〝秘伝忍法〟――【Ｐｒｏｍｅｔｈｅｕｓのプラズマフォックス】」
雅緋の秘伝忍法〝善悪のｐｕｒａｇａｔｏｒｉｏ〟
忌夢の秘伝忍法〝ローリングサンダー〟
二つの忍法を掛け合わせ、半蔵に放つ。
禍々し黒き禍炎と高電力を誇る稲妻の電流、半蔵は何とか秘伝忍法で相殺するも、オール・フォー・ワンはまだ本気を出していない。
「僕はあくまで弔と仲間達を救けに来ただけだが？」
体勢を低く構え、腰を落とし、次の攻撃に移る。
「君らの足止めの為に戦って阻止したんだが、別にもう今はそんなの関係ない。
降参し撤退するなら被害を及ぼさず平穏に事を済ませたかったが…
でもまあ、相手が平和の象徴に伝説の忍、そして古豪・グラントリノなら話は別か…」
腕が巨大化に膨らむと同時に、オールマイトは拳を振るう。
「それにねオールマイト、僕はお前が憎い。
そして、半蔵を始めとした忍も、全て憎い
――かつて、その拳で僕の仲間を次々と潰し回り、お前は平和の象徴として謳われ、忍は僕の計画も、大切なものも、オールマイトと共に全て奪われた」
事の始まりは超常黎明期。
忍に害を与える気は無かったオール・フォー・ワンもまた忍達から標的にされ、幾度となく殺しに掛かってきた。
「何よりも、黒影も憎いね。
アイツは僕の仲間を見つけ次第、幾度となく殺して来たんだから。
憎まない訳が無いだろう？」
かつて、五、六年前のオールマイトの戦いで黒影もいた時には驚いた。
しかし好都合だったのが、これで仲間の仇を討つことが出来たのが

何よりもオール・フォー・ワンの救いだった。
だからこそ、あの手この手で陰湿に、黒影の嫌がることを考え、終いには黒影の孫である雪泉に対しても多少の嫌がらせを考えていた。
黒影の荒んだ傷苦しい姿を見せれば、孫やそれらの仲間は悲しみに明け暮れるだろうと、そして…悪をより憎む道へ進ませ、自身を破滅の道へと追い込ませる。
それが叶わなかったとしても、オール・フォー・ワンにはまだ〝奥の手〟がある。
学生相手に大人気ない気もするかもしれないが、事の発端は黒影から始まったのだ。
「僕らのような悪意を、犠牲として踏み台にし立つその頂きの景色――ヒーローと忍はさぞや良い眺めだろう??」
巨大化し膨らんだ腕からは、チリチリと黒い炎が、風が纏わり付く。
目の前のグラントリノごと吹き飛ばすつもりなのだろうか、咄嗟に片手でグラントリノを掴み、もう片方の強い拳は、そのまま殴り込む。
「個性〝合体〟秘伝忍法――【星を破滅せしｄｅｓｕｔｏｒｏｉ】」
「ＤＥＴＲＯＩＴ――ＳＭＡＳＨ!!」
雅緋の秘伝忍法〝善悪のｐｕｒａｇａｔｏｒｉｏ〟
凛の秘伝忍法〝烈風大車輪〟
個性〝空気を押し出す〟
個性〝筋骨発条化〟
個性〝瞬発力〟
個性〝膂力増強〟
幾多もの個性を組み合わせた秘伝忍法を、たった一つの拳だけで相殺するオールマイトの腕は、既に絶え間ない傷で縫われ覆われた痛々しい物だった。
凛の烈風大車輪は、鎌倉と違って風そのものが刃物となっており、触れたものをいとも容易く傷つける事が出来る上、雅緋の黒き禍炎で傷の上に火を通し、火傷を負わせるそれは、より痛みが染み渡り、空気を押し出す高威力の個性で衝撃をかなり抑えたのだ。
既に骨が折れても仕方ないこの強力な個性と秘伝忍法の合体技を、

オールマイトは折れる事なく片腕だけで、空の天気を変えたその一本で防いだのだ。
（――衰弱したとは言え…アレを耐えるか…）
「ヒーローと忍は多いよな」
唐突に語り出すオール・フォー・ワンに、オールマイトは何を言ってるのか、検討も付かず表情を曇らせる。だが、次に放つ言葉で、その意味も全て理解出来る。
「守るものが――」
その言葉で全て理解した。
現在、こうして戦ってる間に、何千人何万人ものの被害が出ているのだと。
これほど大規模な戦いで、被害者が出ない訳がない。
既にビルや建物はドミノ倒しのように崩壊し、中には死者までも発見されている。
ヒーローたちが救けに入り、この街に隠れ潜んでた忍、または任務のオフで街を歩いてた忍までもが、救出活動を行なっている。
平和の象徴と悪の象徴がぶつかり合えば、こうなることは必然。
況してや、誰かが傷つき苦しむ姿こそ、オール・フォー・ワンの望むもの。
「黙れ!!」
「――ッ!?」
ギチッ！と嫌な音が耳打ちするよう鮮明に伝わる。
マスク越しで解らないが、初めてオール・フォー・ワンが嫌がる声を、苦痛を出した瞬間だ。
「貴様はそうやって！いつもいつも人を弄ぶ!!
壊し！奪い！付け入り支配する!!」
ゴキキッ！と骨が軋む音などオールマイトは意に介さず、力強く握りしめたまま離さない。
「忍を自身の良い道具として使い！死へと追い込ませ嘲笑うお前のその姿こそ！何よりも憎い!!」
かつて、コンビとして協力して来た最愛の友は、こんな汚れた外道

に全て壊され、奪われた。
今でも思い出す。
彼女を殺して嘲り嗤うこの男の姿を思い出すだけで、頭に血がのぼる。
「日々平和に暮らす方々を！貴様という理不尽が嘲り嗤い全てを奪う!!
私はそれが絶対に――
――許せない!!!」
もう片方の拳を、オール・フォー・ワンの顔面に殴り込む。
黒いマスクは壊れ、中から血に似せた赤黒い液体が少量吹き出す。
「俊典…！」
もはや戦意喪失となった半蔵とグラントリノは、地べたに這い蹲りながらも、オールマイトの背中を眺めている。
アレは間違いなく、オール・フォー・ワンをやれたはずだ。
（しまった…活動時間に限界が…!!）
蒸気で身は隠れてるものの、顔の半分は俊典の姿が垣間見える。
吐血しながらも、息遣いは荒らく、とても無事とは思えないその痛々しい姿は、見てて心苦しいもの。
それを
「ハハは、ようやく君らしい顔になったじゃないか」
その言葉に我に返ったオールマイトは、恐る恐ると、オール・フォー・ワンを見やる。
拳は確かに当たってる、のだが――
「感情的になる所は、昔と変わらないね…そう言う奴だったよなお前は……
一体誰に似たんだか…いや、同じような台詞に、変わらぬ折れぬその正義感、君はあの二人に似てるな」
傷が無い。
ブニィと柔らかい感触が嫌に拳に伝わり、シュコォー…シュコォー…とした音が静かに聞こえる。

「二人はワン・フォー・オール先代継承者にして君の育手となった師匠、〝七代目〟志村菜奈――もう一人は…

オールマイトの最愛たる友と呼べる、カグラを超越した、正義感溢れ、たった一人で僕の前に立ち阻んだ女――陽花、本名〝天咲光芭(あまざきみつば)〟」

絶望は、まだ消えない。まだ終わらない。

陽花、その名前はかつてオールマイトと供を過ごし、犠牲を出さまいと、たった一人で巨悪に立ち向かった、少女の名前だ。

１１６話「負けないんだよ」

「雪泉、そっちの状況はどうだ？」
『はい、何とか無事に爆豪さんと雲雀さんの救出は成功しました…此方は問題ありません。轟さんの方は？』
「俺と八百万も特に問題無いし、奴らに見つかられず無事に何とか逃げ切れた。
となると、作戦は上手く行ったみたいだな」
爆豪と雲雀の奪還に成功して数分が経過。緑谷達は無事に怪我を負うことや人目の注目を浴びることなく自然と街の人混みに紛れ込み、オールマイト達との戦闘場からなるべく遠ざかるようにと足を運んでいた。
対する轟焦凍と八百万百も連合の目を浴びることなく、逃げおおせる事に成功。
二人とも反対の方面に向かっているので、どう言った状況下に陥ってるか不明だし
、お互い状況確認するのが普通だろう。
「ところで雪泉…」
『…？何でしょうか――『だぁかぁらぁ!!テメェらの力借りなくたって普通に余裕で着地出来たわボケぇ！』『でも爆豪くん切島くんと手を繋いだ時嬉しいそうな顔してたよね』『テメェも黙れやデカ乳女ぁ!!』『公共の場ではしたない暴言を使うのはやめよう爆豪くん！』『言わせてんのテメェらだろモブ供が！てか俺は救けられてねえし一番良い脱出経路がテメェらだっただけだわ!!』『ナイス判断だったぜ爆豪！』――』
「お前ん所、今何が起きてんだ？」
通話越しから聞こえる喧騒。
とてもではないが、物騒なように聞こえて愉快そうな会話。
その場にいない轟が聞けばそれはそれは、とてもカオスな内容だ。
元から爆豪の性格から考えて荒々しいのは想像付くが、通話越しだ

と何処かと不安を隠せない。
『いえ…特には何も……？爆豪さんの事でしょうか？』
『あ!?俺がどうしたッつーんだ雪女!!』
『ゆ、雪女!?雪泉とお呼びください！今轟さんと電話して――『あんな舐めプなんざ知った事か!!』――『な、舐めプ??』

――爆豪のヤツ、面倒臭いな。

ピッ――
心の中でボソッと呟いた轟は、ソッと相手に悟られぬよう通話を終了する。
「彼方の方は何と？」
「いや、特に何も問題ねえとさ。
俺たちもずっとここにいるのは危険だし、何が起こるか分からねえ…」
プロヒーロー達が避難誘導をし、次から次へと波のような人混みの中、轟は冷静に事を考え、伝えるべきことは伝える。
「あいつらも無事だし、一先ず駅に戻ろう。人混みと爆豪が煩くてろくに連絡できる状況じゃねえ」
「はぁ…爆豪さんが煩いと？想像は出来ますが、そんなに煩かったのですか？」
「まあな、けど安全だってのが知れただけ充分だ」
自分達に出来る事はもうそれしかない。
出来るだけの事はやり遂げた今、無駄に首を突っ込むのは流石に危険だろう。
何よりも身近でアレほど危険を身に染めた事は早々無い。
自分達のやるべき事はやれた。
後は、オールマイトに任せれば良い――

「ああ！轟さんとの通話がいつの間にか……！」
「轟くんから切るなんて珍しい事でもあるんだね…」
　同時刻、気付いたらいつの間にか通話が終了してた事に気付いた雪泉は、驚きと残念そうな声を孕ませ大声で叫ぶ。
　轟から電話を切るなんて事は滅多に無いし、あるとすれば父親への電話を拒否する位だろう。
「ああ、私もしかしたら轟さんに嫌われたのでしょうか…？い、いえ…そんな筈は……」
　ご安心を。轟くんは轟くんなりの気遣いで通話を終了したまでで、決して呆れたからでも嫌いになったわけでもない。
　因みにこれに気付くまで爆豪と言い争いが終わった頃に気が付いた。
「轟くん、なんだって？」
「え？あ、ああ…はい。
　此方は無事かどうかの安全確認による連絡でした。向こうも無事だそうです」
「良かった…それじゃあ今度こそ完璧に作戦は成功したんだ!!」
　一度は自分達の出る立場じゃなかったと痛感した。だが、二度めは、今度こそ確実に救出奪還は成功した。
　今になって、オール・フォー・ワンは自分達の存在に気付いてたのかどうかは、定かじゃ無い。
　多分、気付いてないと思う。
　そうあって欲しいし、仮に気付いてたとしたら確実に仕留めていたはずだ。
「そう言えば…半蔵さんもあの場にいるんだよね…」
「じっちゃん……」
　緑谷の言葉に反応した飛鳥は、表情を曇らせる。
　半蔵はかつて五、六年前に引退したと話は聞いている。
　ＵＳＪでの動きはとても衰えてるようには見えなかったが、あの化け物相手にどう立ち向かうのだろうか？

しかも年齢的に考えても何が起きるか解ったものじゃない。そう考えると、不安がより心に募り集まる。まるで小さな埃が積もるように。

「そう言えばオールマイトも……」

活動時間。

グラントリノや半蔵がいるし、向こうも弱まってると話は聞いたし大丈夫だとは思うが…

不安が拭い去る事は決して無かった。

――大丈夫なんですよね？オールマイト

――大丈夫だよね？じっちゃん…

少年少女の心は双方、無事である事を祈る。

どうか、無事でありますように…と。

報道のヘリが、現場の方へと駆け向う。

あの騒ぎが起きてから既に数十分は過ぎてるので、当然といえば当然なのだろうが、どうにも胸騒ぎがする……

一体、何が起きるのだろう？

何が、起きようとしてるのだろう？

先ほどの数分前までは、緑谷達が、敵連合が、爆豪と雲雀の二人の人質がその場にいた。

しかし、今となってはオールマイトとオール・フォー・ワンだけが取り残されていた。

他といえばグラントリノや半蔵の二人、しかし二人の象徴の戦いでは到底手も足も出ない。

現在。オール・フォー・ワンの口から二人の女性の名前が溢れた瞬

間だった。
オールマイトの額に青筋が浮かび、ギリギリと歯軋りを立てる。
「貴様のような外道が！穢れた口で！お師匠と陽花君の名前を呼ぶんじゃない!!!
二度と、彼女の本名を口に出すな!!!」
憤る感情が昂る中、二人の人物が頭を過る。
記憶が、鮮明に蘇るように溢れかえる。
『いいか俊典、陽花！ヒーローと忍ってのはな、切っても切れない縁ってものが確かに存在するんだ！
私たちも、陽花達だって、人の為に動いてる。理不尽と戦ってる。
同じ似た者同士は惹かれあって存在して、手と手を取り合うんだ！だから、今も忍がいるんだ。俊典、もし忍がピンチだった時、お前はどう動く？定めなんて関係ない、お前の正義ってやつを貫き通せ！そして皆んなに見せてやれ、お前の目指す象徴ってやつをな！』
『お師匠は、凄いよね。人の理想と夢を叶えようと、その為に一緒になって戦ってくれる…
私も、師匠みたいな強い忍になりたいなぁ……私ね、善忍も悪忍も関係ないと思うの。
だって同じ忍を目指して、同じ夢に向かって、頑張ってるんだもの。
争い啀み合う関係だけじゃない事を知ってほしい。そして、善と悪が手を差し伸べ合う関係になれたら、凄く素敵な事だと思うの』
かつての記憶が、眩しい思い出が、オールマイトの心に火を灯す。
師匠が、陽花がいたから、今の自分が存在する。
それを、無邪気で理不尽な闇は、オールマイトの大切なものを奪い、志村を殺し、陽花の理想と夢を壊した。
「二人は他人の夢と理想を追い求める、ワン・フォー・オールの実力に伴わない女だった！
もう一人は誰も傷つかず、手を取り合う世界に一縷の望みを賭け、正義などと下らない妄想を掲げてた馬鹿な女だった…！
師が師なら弟子も弟子か…二人揃ってあそこ迄醜いと今でも笑い

が込み上げて来るよ。
知りたいだろ？天咲光芭の最後、彼女の死に様を。たった一人の少女が僕に殺されたエピソード、何処から語ろうかな？」
それをさも当然のように、ニッコリとした笑顔でゆっくりと語りかけるオール・フォー・ワン。
元々、性格の歪んでた彼からして二人の存在は邪魔以外何でも無かった。
オールマイトを除いて、唯一自分を殺せる算段のある人物と言えば陽花くらいだ。
だが、彼女もまた彼に敗れた。
その結果、彼女が亡くなった現代社会は理想とシンボルを失い、忍達は生きる意味を失った。
築き上げて来た彼女の努力は全て、オール・フォー・ワンに踏みにじられ、壊されたのだ。
「Ｅｎｏｕｇｈ――!!」
黙れと言わんばかりの怒り昂る感情。
ここまで冷静さを失ったオールマイトは、ＵＳＪ以来、いや…それよりも酷く怒りに染まっていた。
だが――
――ボッ!!!
オールマイトの拳は届く事なく、重々しい衝撃が襲いかかる。
烈風大車輪の秘伝忍法に、空気を押し出す個性に何重もの増強型の個性を足したその破壊力は、伊達ではない。
あのオールマイトが上空に吹き飛び、報道ヘリと顔合わせする程に高く飛ばされた。
中にいたマスコミは顔を真っ青にしながらオールマイトにカメラを向ける。
顔の半分は全盛期、誰もが知るオールマイトが映し出されてたので良かったものの、もし反対側の枯れた顔を見せられてたら終わっていた。
口から血反吐を吐き、ボロボロに打ちのめされる姿。

それが、どれだけの意味を表すのか。
「俊典!!」
いても経ってもいられず、グラントリノは個性を使って空高く飛びオールマイトを何とか救出する。
あの高さで落下しても死にはしないが、少しでも素顔が見られてしまえば大混乱になる。
何よりグラントリノも年齢的な意味もそうだが、体力に限界が近づいている。
「ゴホッ…邪魔を……するな」
咳払いするオール・フォー・ワンは再び起き上がる。
絶対正義が折れないように、絶対悪も折れない。根本的に相反する存在は、唾み合い傷付き合い、命の存亡を賭けた戦いにまで発展するのだ。
人はまたソレを、戦争と呼ぶ。
「聞け俊典!これじゃあ六年前と同じだ!奴の挑発にまんまと乗り、アイツを取り損ねた!!そしてお前は腹に穴を開けられた!」
着地した二人は、呼吸を整える。
オールマイトが重傷なのに対してオール・フォー・ワンは見るからに傷らしいと言った傷はなく、どちらかと言えば無傷だ。
目立つのは土埃で付いた服の汚れくらいだろう。
「お前の駄目な所だ!奴の言葉を聞く事自体が思惑通り…言葉を交わすな!!」
オール・フォー・ワンは、言葉巧みで人の心理を操り掌握する。
外堀から埋め自身の思惑へと誘導する。
信じられないが、自身の望むべき物の為ならば汚い手だって容赦なく使う。
陳腐だが、大切な物への冒涜でオールマイトの逆鱗に触れ、追い込ませる等と言った心理戦では彼がズバ抜けている。
この世の誰でも、彼に敵うものはいないだろうに。
「前とは戦法も使う個性も違う!何よりアイツ、個性を混ざり合わせて他者の忍法まで使用出来る身体にしやがった…!!

正面からじゃ有効打にならん！接近も難しい！なら虚を突いて倒すしかない!!
踏ん張れ！お前は平和の象徴!!陽花の想いを引き継ぐんだろ!?菜奈の言葉を思い出せ!!!
限界超えろオールマイト!!」
グラントリノの激励に、少し頭を冷やすオールマイトは、荒ぐ呼吸を整えながら、敵意を孕ませた視線を放つ。
今目の前には、師匠と陽花の仇がいる。
「――……はい!!!」
せめて、気持ちだけでも勝たないと、到底オール・フォー・ワンに勝てやしない。
全盛期の頃に比べても、やはりアイツは強敵だ。衰えた…と表現すれば良いのか解らない程に、とても強力だ。
使う個性も戦法も違うからかもしれないが、秘伝忍法＋個性使用はオールマイトにかなりの痛手を負わせていた。
それと供に、奴の身体に負担も掛かると思っているが、見た感じ平静でいて、何ともない様子だ。
だが奴も無敵ではない。
そう思い込ませながら、心の中の理不尽に負けず、拳を強く握る。
この勝負は、絶対に負けられないのだから――

『ご覧下さい！悪夢のような光景！
突如として神野区が半壊滅状態となってしまいました!!
現在オールマイト氏が元凶と思われる敵と交戦中です！』
全国のテレビ画面に放映されてるニュースは、緊急速報という形でどのチャンネルに変えても、今神野区で起きてる激戦が映し出されている。
『しかも信じられません!!敵はたったの一人…そう、たった一人で街

を壊し！あの平和の象徴と互角以上に渡り合っています！
オールマイトが重傷を負ってるのに対し、向こうは…なんと無傷!!
これは一体…オールマイトが押されてるのでしょうか!?』
日本、海外、貧民街に置かれてるボロいテレビから、ショッピングや電化製品のテレビまでもが、まるでハッキングされたかのように放映され、現にネット動画でもかなりの話題になっている。
今こうして自宅で待機してる雄英生徒も、冷や汗を垂らしながら肝を冷やし観ている。
人を脅かす圧倒的巨悪と、誰もが認めるＮｏ．１ヒーローの激戦。
それは、雄英生だけじゃなかった――

「ねえ焔！観てこれ!!今神野区で大変な事起きてるわよ!!」
洞窟のアジトの中、パソコン画面に釘付けになってた未来は、皆んなを呼び集めパソコンに放映されてる動画を観やる。
土煙が巻き起こる中、血反吐吐くオールマイトは血を拭いながら、悪の象徴に立ち向かう姿。
オール・フォー・ワンは秘伝忍法と個性を組み合わせ駆使する。
「……なんだ…これは……」
画面越しでも解る。
この激戦が、ただの闘いではないと。
今まで死の美を飾し、死と隣り合わせで闘った焔達だからこそ、この戦いがタダの闘いではないことを重々承知出来る。
自分たちの次元を通り越すこの戦いを観てて、冷静でいられる訳がない。
「たった一人で街を壊して…オールマイトと渡り合ってるなんて……そんなの信じられないよ……」
未来の弱々しい声に、一同は黙り込む。
あの日影さえも反論出来ない惨状。
伊佐奈の時のような圧倒的強さでもない、画面越しから伝わる男の気圧は、観てるものを恐怖と不安にさせる。
焔紅蓮隊だけじゃない――

月閃女学館でも、その話題に持ちきりだ。
大きなテレビ画面に、くっきりと映し出されてる映像に、皆は釘付けだ。
「オールマイト……」
「何だ……あの、邪悪な男は……」
「ねえ、ちょっちこれヤバく…ない??」
「美野里たち……これから……どうなっちゃうの??」
彼女たちの心に暗雲が積もる。
学炎祭でオールマイトがヴィランの役を演じ交戦した彼女たちだからこそ解る。
自分たちの本気を使ってでもビクともしなかったオールマイトが、押されてるのだ。
戦闘した経験だからこそ伝わる。
あの平和の象徴が、巨悪に手も足も出ず打ちのめされてる…それが、どんな意味を表すのかも。
「負けませんよね…?オールマイト……」
遠く離れた場所。月の正義を貫く少女も、彼女たちと同じことを考えていた。
かつて、悪を滅ぼす間違った正義の道を正してくれた彼に、死んで欲しくない。
何故なら、正義とは悪に屈しないのだから。
オールマイトは、忍にも憧れの懸念を抱かせてくれる、人々の心を明るく照らしてくれる、人々にとって、忍にとってのヒーローなのだから。

『戦闘が繰り広げられる交戦中、被害者が絶え間なく続出！プロヒーローや警察が追って駆けつけています！既に救出活動してるヒーローもいるものの追いつかず、街への被害はどんどん酷く悪化してい

ます!!』
「あわわわ……た、大変だよ……」
秘立蛇女子学園の広間では、テレビ画面に夢中になってる忍学生たち。
選抜メンバーの紫、両備、両奈を始めとした下級生たちも息を呑みテレビ画面に目が集中している。
紫は焦る気持ち、不安な気持ちを今抱きしめてるべべたんと供に押さえる。
紫の焦り、それは爆轟と雲雀の救出へ赴いた雅緋と忌夢の二人が神野区へ駆けつけ、現状が悲惨な事を物語っている事だ。
オールマイトの事も心配と言えば心配だが、何より一番なのがリーダーの雅緋に、大好きな姉の忌夢の安否が気になるところ。
マスコミ達が映している光景が、夜空の上空から流しているので、ハッキリと上手くは見えないが、そこに雅緋と忌夢、そして先生の鈴音や学園長の隼総がいるのも事実。
「何が……どーなってんのよ……」
「両備ちゃん……」
忍ですら成せれる事のない大規模な破壊。
犠牲者の続出にオールマイトのピンチ、死を掻い潜って来た学生だからこそ解る。
あの変態の両奈ですら戦意を喪失してしまう。

半蔵学院の中は二人の先輩である葛城や斑鳩も、そのニュースを観ていた。
目の当たりにする絶望の光景、巨悪が嘲り嗤い、少しずつ、少しずつ平和の象徴が折れ朽ちて行く痛々しい姿に心を痛めながら
「あんなの……バケモンじゃねえか……」
「……」
声を振り絞ることさえやっとだった。
何をどうすれば、あの化け物に勝つ事が出来るのか、そんな勝機も予想さえも塗りつぶされる。

一方で、学生達とは無縁な一般市民の反応では、ネットページや掲示板でのコメント欄もバカにならない程に伸びていた。
『なにこれヤッバｗｗｗ』
『オールマイトボコられ過ぎててクッソワロた、敵強スギて草』
『神野区って確かウチの親父の出勤先なんだが……』
『街崩壊とか草原不可避』
『てか最近ヒーローやられ過ぎじゃね？仕事しろよｋｓ』
『それな、今ヒーロー達何やってんだよ、使えなさ過ぎィ!!』
『これ勝てんの？』
『いや、敵が暴れすぎてる気がするし、ヒーローは何も悪くないでしょ』
『大丈夫ｗｗどーせいつもオールマイトが勝つんだから最後は余裕だろ（笑）』
数々のコメントは他人事のように言いたい放題。
忍サイトも当然荒れており、市民はまたオールマイトが勝てると信頼しきっている。
また市民の声も
「ヒーローたるんどる！なんつって！」「おー、熱いなこれ、がんば～」「てかさっき吹っ飛ばされてなかった？」「久し振りの大物ヴィラン登場！」「ねーねー、ママ～、ウチ観たい番組あんだけど～」「明日仕事大丈夫かな…」「まあどうせオールマイトがなんとかしてくれるっしょ!!」
まるでさも当然のように。完璧であることが普通であるように、弱い市民は強き者に頼りすがり、談笑する。
今この状況が、この戦いが善と悪の頂上決戦であることなどいざ知らず。
ヒーローが、その内ヒーローが。
ヒーローという憧れにして尊敬すべき存在は、いつしか市民にとって当たり前の存在に成り果て、いつしか人々は危機という概念を忘却

していく。
「せっせと弔が崩してきた社会への信頼関係を――この僕が決定打を打ってしまって良いものか……」
心底呆れるオール・フォー・ワンは両手を広げてやれやれと溜息を吐く。
片手に持ってた赤黒い炎の剣は消え、戦闘を繰り広げてたオールマイト、グラントリノ、半蔵は既に満身創痍と言った形で体力に限界を迎えていた。
因みに黒炎の剣は雅緋の秘伝忍法〝悦ばしきｉｎｆｅｒｎｏ〟に個性〝剣技〟で半蔵と互角以上に渡り合っていた。
「けどなオールマイト、君が僕を憎くて赦せないように、僕も君の事が憎くて赦せないんだぜ??」
二人は対峙する。
今この大地に佇むのはオール・マイト（平和の象徴）とオール・フォー・ワン（悪の象徴）のみ。
グラントリノと半蔵は周囲の衝撃に近づくと事も許されず、立っていられるのがやっとだった。
「確かに僕は君と陽花の師である菜奈を殺した。それに憤りを覚えた彼女が僕に楯突き、僕は彼女の大切なものを全て奪い去った訳だが…
君は僕を殺めた上に大切なものも、仲間も、築き上げて来たものも、全てその拳で奪って来たじゃないか?
――だから君には可能な限り、醜く惨たらしい死を迎えて欲しいんだ!!天咲光芭よりも、残酷にね」
巨悪は嘲笑する。
ご丁寧な手仕草に、奇妙な残酷の笑みを絶えない彼は、瞬時に腕をデカくする。
これは先ほどの…個性合体秘伝忍法が来る…!だが、種さえ解れば関係ない。避けて反撃を行えば何ら問題も無いし無駄に体力を使わなくても済む。
「オールマイト!!避けろ!!!」

グラントリノの叫びにコクリと頷くオールマイト。
あの巨腕を見た限り、かなり強めに強化されている。黒い焦げのような匂い、蒼い炎と黒い炎、風、鎌鼬、そして増強系。
これを食らえば流石のオールマイトもタダでは済まない。
元からかなり強めの衝撃波に手こずっていたが、下手すれば死ぬ確率が高いこの合体秘伝忍法の空気砲は先ほどまでとはレベルが違う。
オールマイトが避けようとした刹那

「――〝避けて良いのかい〟？」

悪魔の囁きが、耳打つように鮮明に聞こえた。
背筋が凍りつくと供に――

ガラッ――
瓦礫が崩れる音が聞こえた。
後ろにはただただ崩壊したビルが無残に倒れているだけ。
だが、その中に確かにいた――
逃げ切れなかった一般市民が、瓦礫の下敷きに埋もれ、涙を流していた。

オールマイトは、その人の存在を知ってしまった。
避けてしまえば、ここで引いてしまえば
死――

「おい!!!!」
「辞めるんじゃ!!オールマイト!!!」

グラントリノと半蔵は歯を食いばりながらも、声を絞らせ叫ぶも、オールマイトは動かない。
半蔵とグラントリノはもう既に動けないのだから――救けたくとも、救けれない。

「先ず、君が守って来た物を全て奪う。一つ残らず、全て」
努力も
思い出も
命も
「君が怪我を通して守り続けて来た矜持」
オールマイトが命懸けで守り抜いてきたものを、理不尽に奪う。
巨大な空気砲、雅緋、蒼志、凛、鎌倉の秘伝忍法を上乗せし、破壊的な衝撃波を放つ。

土煙が巻き起こる中、人影が映し出され――
「惨めな姿を世間に晒せ――オールマイト（平和の象徴）」

煙が晴れると供に姿を表したのは、トゥルーフォーム。
八木俊典としての、衰えた本当の姿。
頬はこけ、皮と骨だけのような痩せ細った病人のような体。
突き出して受け止めた拳の皮膚は全てめくれ、火傷を覆い、身体中に斬り刻まれた傷跡は、見た人の心を痛めつける。
その姿は、全国に放映されていた――

「え？あの人……誰？」
「なんだ…あの骸骨？」
「オール……マイトは……？」
「嘘…でしょ？」
市民の人々は、不安の声を孕ませる。
先ほどまで巨悪と対峙してたオールマイトの姿は何処にもない。
今、オールマイトとしてその場にいる人物は、本当の素性を明かされたオールマイトは、八木俊典として姿を現していた。
「…は？」

爆豪勝己は、面食らった顔で硬直し
「アレは……オールマイト…なのですか？」
雪泉は驚嘆で震えた声を隠せず、自然と目に涙が溜まる。
『…え？え～っ…と……は？え？み、皆さん…見えてます……でしょうか？
オールマイトが、まるで別人のように…しぼんでます……』
これは世間に公表されていない。
オールマイトが公表しないで欲しいと、上層部や一部の人間に頼んだ。
世間に素性を曝け出してしまえば、悪の栄える社会に塗りつぶされてしまう。
その為に、怪我を通してまで守り続けて来た。
そのために、後継者が必要だった。
自分を引き継げてくれるヒーローを――

「緑谷…く――」
オールマイトの真実を知ってる人間は極僅か…関係者と、飛鳥に緑谷出久。
飛鳥は恐るおそると声をかけてみるも、緑谷出久の表情は不安と焦燥、絶望に歪ませていた。
今まで、ずっとずっと秘密にして来た真実が、今、世間に明かされてしまったのだ。
「オール……マイト!!!」
知られてはいけない真実は、理不尽な巨悪に暴かれた。

「頬はこけ！目は窪み！誰もが見るからに思えてしまう…世界一最弱なトップヒーローとなってしまった!!

恥じるなよ?恥ずかしくないよな!?だってそれが、他でもない…君の本当の姿なんだろう!?」
絶対悪は、巨悪は、悪のシンボルは嗤い飛ばす。
「君が前々から世間に公表さえしていれば、多くの市民は絶望しずに済んだものを
君はそれをしなかった。己の自己正義で多くの人々の心が傷付いた!!
君は平和の象徴なんかじゃない、穢れた醜い最弱ヒーローさ!」
罵り、邪悪な笑みを浮かべる。
今まで秘密にしてた素性を明かす事で、身体と供にオールマイトの精神を傷付けて行く。
ここまで人を見下す人間は、外道は、彼しか居ないだろう。
「オール…マイト……!」
元よりこうなる帰結は免れる訳も無く、彼自身も薄々と解っていた。
緑谷出久と出会ったあの日から、覚悟はしていた。
緑谷出久に個性を渡してから、長くとも短い月日が経った。
通勤がてらに起こる事件、敵連合襲撃事件、学炎祭での死塾月閃女学館の雪泉達と戦い、期末試験で緑谷出久と爆豪勝己の二人ペアとの戦い、数々の無理を通した結果。
使えば使う度に消えるその力には、オールマイトの命よりも先に限界に達していた。
「もういいや、これで。
君の素性が明かされたまま、君が死ぬ瞬間を皆んなに見せて貰えば良いさ――」
手順を終えたオール・フォー・ワンは、指を漆黒の色に染める。
研ぎ澄まされた鋭利な爪が、オールマイトを襲う。
衰弱したオールマイトは、睨みながらも拳を動かすことが出来ない。
それ程までの重傷を浴びた彼が動くはずがなく

ドシュッ――!!
肉が突き刺される音が、心臓を突き刺すように嫌に響いた。
血飛沫が飛び散り、鮮血は地面に滴り落ちる。
漆黒の爪は、個性強制発動とは違う、攻撃用の個性を組み合わされていた。
「えっ？」
但し――突き刺されたのはオールマイトでは無かった。

「ガッ…ふ――」
それは、オールマイトと同じく身体が衰えながらも、仲間の為に影として最前線を走って来た――

平和の象徴を庇う、半蔵が身体が突き刺されていた。

「僕の尤もやりたかった事、それは…
忍の存在を世間に晒け出し暴くこと――哀れだなぁ…悲しいなぁ〝〝服部半蔵〟〟」
言葉で煽り、誘惑させ、半蔵に庇うように動かすよう仕向けたオール・フォー・ワンは、予想通りといった口調で口角を吊り上げる。

『えっと…皆さん？見えますでしょうか??しぼんでるように見えるオールマイトの前に突如、老人が……これは一体…何なのでしょうか？何が…起きてるのでしょうか??
そもそも、我々が今こうして目にしてる光景は、何なのでしょう……??』
世間は更に混沌の渦巻きに流され、市民は焦りと不安に心を支配され、表情が歪んで行く。
半蔵のような老人がヒーローとして活躍してる姿などほぼ皆無、況

してや今の今までこの老人の姿など、知る訳が無いだろうに。
伝説の忍が、世間に放映され、忍社会に大きなヒビを入れたのだ。
「じっちゃん!!!!」
飛鳥の悲痛の叫びが虚しく夜空へ消えて行く。
突然だ。
尊敬してる忍が、血が繋がってる祖父が、こんな傷だらけの姿で世間に晒されて黙る孫など何処にいる？
「飛鳥……さん…」
「雪泉…ちゃん……じっちゃんが…じっちゃんが!!!!」
腹を突き刺され、今にでも血反吐を吐き、危機的な状態に陥ってる半蔵の姿を見るのは、心臓が裂けるほど辛い。
雪泉は、そんな彼女をあやすように、肩を持つ。
飛鳥の目は涙いっぱいになって溢れている。
そんな飛鳥に、雪泉はなんて言葉をかけてあげれば良いのか、解らなかった。
でも、実の孫でも無いのに…何故かと自然と、涙が頬に伝わった。
何故なら半蔵は雪泉にとっても深い縁があり、王牌として担任教師を務め、雪泉たちをここまで強く育ててくれた。
黒影の、友なのだから――

「オールマイトに続き半蔵まで、揃いも揃って僕の目の前で腹に穴を開けてやがって！
そうだったよな、お前の身体に付いた消えない古傷は、今まで沢山のものを、仲間を守り続けて来た勲章なんだよな？
きっと、孫も涙を流してさぞ大喜びしてるだろうね。英雄を救った

影として、歴史上に君の存在は語られ続けるだろう…良かったじゃいか、君の栄誉が世間に放映されてるんだぜ？素直に喜べよ」
忍とは、決して世に語られてはならぬ存在。
成果が、結果が良かろうと、栄誉を与えられようと、それが表に公表される事などある筈がなく、オール・フォー・ワンはしてはいけないことを、平然とやり遂げた。
「半蔵さん!!」
オールマイトは力強く叫ぶ。
腹部から血がボタボタと絶え間なく流れ続け、忍装束はドンドン真っ赤な鮮血に染まり続けて行く。
忍装束はある程度のダメージを受けない限り、破れることはないものの、オール・フォー・ワンの放たれた爪は一瞬で忍装束を分解し、貫通したのだ。
「何故…なぜ私なんかを…!!」
「なんか……とは…ゴホッ!!言わないでくれ……お主もまた……儂の守るべき人間じゃ……ガハッ…!クッ……はぁ……はぁ……歳は、取りたくないものじゃな……全盛期なら……こんなことにはならんかったが……」
「ダメです喋っては!!」
「なに……こんな傷……あの子（陽花）に比べれば……やわいもんじゃ……儂は忍を……引退したとはいえ……手当すれば……大丈夫……
それに、悔しかったんじゃよ……このまま動かず、ただ観ていては……お主を陽花と同じ悲惨な目に遭わせてしまう気がしてならなっかたんじゃ……」
陽花が死んだ時、悲しんだのはオールマイトだけではない。
半蔵も、黒影も、小百合も、相棒も、グラントリノも、皆んな、彼女の事を大事な思ってた皆んな、悲しんだ。
「それにな……考えるよりも……まず先に、体が動いてたんじゃ……だから、お主は何も悔やむことだってない……お主は、誰もが誇る平和の象徴なのだから……」
平和の象徴の名は、決して一人で手に入れれる称号ではない。

志村菜奈(師匠)がいたから
陽花(最愛の友)がいたから
グラントリノや半蔵、黒影がいたから
サー・ナイトアイ(相棒)がいたから
色んな絆が、色んな縁があるから、それを紡ぎ形にし、平和の象徴として生きる事が出来た。
ヒーローとは常に二つの名を持っている。
それはヒーローでない時と、ヒーローである時。
オールマイトの平和の象徴の名は、皆んなの為にあるのだから。

ギン…!とオールマイトはオール・フォー・ワンを噛み付くかのような目線で睨みつけ、気迫ある視線にオール・フォー・ワンは反応する。
「驚いた…そんなボロボロになって、半蔵が傷付けられながらも、まだ立ち上がるか、まだ僕に立ち向かうのか……」
オールマイトは、マントを脱いで半蔵の傷口を布で止血する。
半蔵はゆっくりと瞼を閉じる。
呼吸こそはあるが、恐らく気絶したのだろうか、無理に体を動かし重傷を負ったせいで限界が迎えたのだ。
なら、半蔵の分まで…自分が立たなきゃいけないだろう。

「そっか…そうだよな。
どれだけ傷付き身体が衰えようとも、その醜い姿を世間に晒されようとも、まだ立ち上がる……」

折れない。
挫けない。
負けない。
だから鬱陶しい。
どれだけ個性を掻き集めオールマイトを殺そうと、彼はその笑顔で拳を振るう。

一見、周りから見れば偉大なヒーローだろう。
だが、オール・フォー・ワンから見れば醜く烏滸がましい存在だ。
自分の自由を奪い、築き上げて来た仲間を、計画を、全て奪い、無限と思えた命が有限にされたのだから。
何よりも、笑顔が一番嫌いだ。
どれだけ嫌がらせをしようと、どれだけ痛めつけようと、結局最後まで立ち上がり笑顔で立ち向かう。
なぜ倒れない？
なぜ折れない？
なぜ負けない？
何度もそう思って来た。
その強さの秘訣があの二人にある事は知っている。知っているからこそ、醜く烏滸がましい。

「私の心は依然！平和の象徴!!一欠片とて奪えるものじゃない!!!」

熱き闘志が、平和を願う心が、弱気を救ける正義が、彼をより強くする。
文字通り、平和の象徴。
ヒーローの鑑だ。
「素晴らしい!!おっといかん参った…君が強情で聞かん坊な頑固者だったのをすっかり忘れてた！」
ハハハと軽く嗤いながら
「あっ、じゃあコレも君の心に支障はないかな…あのね――」
人差し指を立てて、ニヤリと笑顔を引きつけてこう言った――

「漆月は陽花の妹だよ」

「――はっ？」

世界が一変した。

頭の中が突如、真っ白の色へと変えられた。

色のない、何もない虚無の世界に塗り潰されたような、脳の思考が一瞬完全停止する。

熱き闘志が、平和を願う心が、弱気を救ける正義が、全て消えるように。

強張ってた筋肉は解け、思考が追いつかなくなる。

いま、コイツ

何て言った？

「君の嫌がる事、ずぅっと考えてた」

満面なその微笑みは、正しく魔王の嘲笑を表にしていた。

いや、魔王なんてそんな生易しいものじゃない。

「考えなかったかい？なぜ、敵連合に忍を介入させたのか。

幾多もの忍を葬り去って来たこの僕が、なぜ敵連合に漆月を仲間に引き入れたのか」
時折、不満に思うことがあった。
人の理を超えた邪悪な男が、忍を嫌悪してた男が、忍を超越したあの化け物が、何故今になって忍の力を必要とし始めたのか。
当初は、死柄木弔の有力たる人材の為かと思った。
だが、死柄木弔がもしオール・フォー・ワンの意思を引き継ぐ、後継者と想定すれば可笑しな点もある。
忍を殲滅する人間が、忍を仲間に引き入れたいなんて選択肢は無いと思った。
だが、今になってようやく解った気がした。
「漆月には、頼りになる悪の人材が必要だった。
また、弔にも悪の司令塔の影が必要だった…だからこそ、漆月に彼を遭わせたのさ――

――志村天孤にね」
「……志村……天孤…くん？」

「ああそうさ、死柄木弔の本名は志村天孤。志村菜奈の孫だよ」

まるで時を止められたかのような、異常に静けさが増す空間の中、オールマイトはただただ呆然と立ち尽くしていた。
頭の整理が追いつかず、混乱している状態で、そんなことを言われても…
お師匠の孫が死柄木弔だったなんて、信じられない。
「最初に君と弔が会う機会を作った。君は弔を下したね。何も知らないその穢れた笑顔で、勝ち誇った醜い笑顔で、菜奈の孫を傷つけたね。
それだけならまだしも、君は彼女までも傷つけ、救おうともしなかった。
漆月と君を会わせた時は、賭けだった。
もしかしたら気付かれる可能性もあった…けどそんな君は彼女の

心すらも気付かず、罵り傷つけたね」
一つ一つの嫌味が、心の奥底に突き刺さる。飛び散ったガラスの破片が心臓に突き刺すように、痛い。
「何を……言っている……何の…嘘を??あの子は…漆月が陽花くんの妹……？天孤くんが…死柄木弔……？
全くの嘘だ…だって…何より…陽花くんの妹は……死んだハズだ……私はあの子を……」
「事実さ！君よりも先に僕が拾ったんだ!!一人で貧民街に彷徨ってた所をね。かなりの重傷で今の君よりも酷かったよ…危うく本当に死ぬ所を、僕が救っただけさ…
そして、
尤も忍に憧れてた彼女の思想とは真逆の教育を施した。
何よりもホラ、僕のやりそうな事だろ??」
新たな真実が、今を否定する。
頭の中が、ズキズキと痛む。
「〝天咲魅影（あまざきみかげ）〟――それが漆月の本名だ。
それに何度も言わせるなよ…僕は陽花の、天咲光芭の大切なものを全て奪ったと言ったろ？いい加減現実を受け入れろよ」
天咲魅影。
かつて、まだ陽花が生きてた頃。一回だけ見たことがある。
まだ産まれたばかりの、赤ん坊な彼女はとても可愛らしく、陽花も妹が出来た事を嬉しく思い、幸せな笑顔は今でも良い思い出だ。
歳の差は開いていたし、会ったのは一回だけだが、偶に陽花がアルバムを作って妹の成長を見せてくれた事があった。
どれもこれも、温もりのある暖かいものだった。そんなオールマイトにとって、それは正しく宝物のようだった。
アルバムを持ってくれた時の彼女はとても嬉しそうにしてたし、時々妹の話も聞いていた。
初めてハイハイし始めた日の事。
初めて〝お姉ちゃん！〟と呼んでくれた事。
初めて姉の似顔絵を描いて、プレゼントしてくれた日の事。

話す時の彼女の笑顔はいつになくとても輝いていた。
それに釣られて、自分も笑顔にさせられた。
自分が象徴となる事で、市民の人々の心に光を灯す事で、安心して笑顔を送れることを信じ突き走って来た。
それなのに、こんな幼い子が自分を笑顔にしてくれるに不思議な快感を覚えながらも、彼女の妹の思い出話は、とても幸せなひと時だった。

だったんだ――

「あれ？おかしいなオールマイト。いつも自信満々に掲げてる笑顔はどうした？」
クイッと親指で頬を押し上げる仕草は、見覚えがある。
それは間違いなく、志村菜奈がいつも自分と彼女に見せてくれた、笑顔のポーズだ。
こんな忌々しい人間が、お師匠の真似をしている。
こんな憎くくて憎きれない人間が、陽花くんを殺した。
「どんなに辛い時、不安な時こそ笑顔で笑っちまって臨むんだろ？
ホラ！――笑えよオールマイト」
これまでにない残酷で無慈悲な笑顔は見たことが無い。
笑え？
志村菜奈の孫を傷つけたことを？
陽花くんの思い出を奪われた悲劇を？
魅影さんを救えれなかったことを？
『ねぇ、オールマイト…お願い……もし、貴方の時間をくれる…なら……
もし、貴方が私の想いを引き継いでくれるなら……約束して…？
未来ある忍達を……あの子を……救けて……』
陽花が死に際に残した最後の言葉が、ハッキリと鮮明に、記憶の中

に映し出される。
あの子と誓った約束は、未来ある忍達を守り、救けること。
もう一つは…陽花の妹である天咲魅影を救うこと。
そう、彼女と約束したのに…私は彼女を傷付けてしまった。
それどころか、私と陽花くんをここまで育ててくれたお師匠のご家族にまで手を出してしまった――

「ああ、悲しんでるんだなオールマイト、今の現状に打ちのめされてるんだなオールマイト??
なに！心配することはないさ！
――忍の定めは死の定め！死ぬことが当然なら、天咲魅影(漆月)が死ぬことだって何も可笑しくない！
忍は与えられた任務を遂行するんだろ？忍ってのは無慈悲でいけないなぁ、けど任務だから仕方ないかぁ…
だから君は安心して、陽花の大切な妹を思う存分に痛め付けると良い!!
無論、漆月だってそう簡単に殺られるタマじゃないけどね」
真実を知った時点でもう遅い。
漆月は、全忍からの処罰対象とされている。真実を知った彼がどう出張しようと、上層部が耳を貸してくれる訳もなく、彼女はもう後戻り出来ないのだ。

悲しい現実の中、遠い記憶が蘇る。
『魅影がね、忍になりたいって言い始めたの…あの子はいつも私の背中を見て走ってきて、まるで仔犬みたいに可愛いの』
夕焼けが沈む頃、帰り道の中彼女が語りかけて来た。
妹はとても健気で、今とは想像出来ないほど変わっていたし、今が水色の髪に対して写真で見た時は黒色だった。
『その時にね、あの子…忍になったら友達が欲しいって言ってたの。
私、とても嬉しかった…この子なら、私以上に皆んなの幸せを守っ

てくれるんじゃないかって』
『だからね、会わせて上げたいんだ！半蔵さんのお孫さんと、黒影さんのお孫さん…あの子達に。
ほら、私の忍家系って善忍だし、あの二人には世話になってるし、とても仲良くなれると思うの!!
楽しみだなぁ……ふふふ♪』

「き……さ…ま……!!!!」

彼女の笑顔が、忘れられない一つ一つの思い出が、血の塊の泥のように穢れていく。
悔しい、悔しい、悔しい。
こんな穢れた、人間と呼ぶことすら烏滸がましい外道に、全部掌の上で転がされ、奪われてはいけないものを奪われて。
悔しくて言葉が出ない。

「やはり…楽しいな！
今頃、陽花はさぞ未練がましくあの世で泣いてるだろう。悲惨な現状に嘆き、自分を責め入れてるだろう。想像しただけで笑いが止まらないなぁ……
果たして僕は、彼女に嫌がらせをする事が出来ただろうか？
僕は君の心の、ほんの一欠片でも奪えただろうか？」
神威は笑う。
絶望は微笑う。
巨悪は嗤う。
悪は善の目の前で笑い、善は悪の目の前で膝を折る。
ズキン、ズキンと胸が痛み、心の柱が折れていく。
少しずつ、着実に、弱い音を立てながら折れていく。
――私は……彼女と約束した。
魅影さんを救い、守ると誓った!!

親のいない姉妹に、姉が殺されれば次は彼女が狙われる。
だからこそ、私が引き取り守り抜けなければならなかったのに…
私はあの子を救うどころか、あの子を絶望のどん底へと突き落としてしまった。
私はあの子を守るどころか、あの子を傷付け、取り返しのつかない事態へと陥れた。
天狐くんは、魅影さんは、傷付けてはならない、大切な人なんだ。
それを――私は――

「～～～ぉぉぉぉぉぉぉぉぉ――!!!」
お師匠のご家族に、陽花くんの妹さんに…何ということを――!!!

もう手遅れだ。
何もかも遅い。
何が平和の象徴。
私は陽花くんの約束を破り、己の自己満足たる正義で二人を傷付けてしまった。
自分を呪う。
自分を責める。
自分を恨む。
数々の自虐が、平和の象徴と謳われる信念の柱をへし折っていく。

私のせいだ、私の所為で…全てが狂わされた。何をどうすればいい？
もう、このまま死ねばいいのかも知れない。
それが、どれだけ楽なのだろう…でも、死んでも私は陽花くんには、会えないだろう。
私は、あの人に会う資格も無いのだから――彼女だって私に会いたくないだろう…
もうこのまま――

「――負けないで!!」

絶望に心の奥底にある柱が折れそうになる瞬間。

涙で顔がクシャクシャになってる女性が言葉を投げかけた。

「お願いオールマイト……救けて――!!」

それは被害で逃げ遅れた市民。オールマイトが全力で庇い、守り通した人間。

その言葉で、オールマイトの叫びは止まった。

この現状は放映されている。

オールマイトとオール・フォー・ワンの会話はマスコミに届かず聞こえないが、オールマイトの悲痛な叫び声だけは確かに聞こえた。

そんな中、市民の顔色は先ほどとは打って変わって青ざめる。

「嘘、オールマイト!!」

「あれ、ヤバくない!?」

「やば……マジでどーなっちゃうのコレ?」

「なぁ…もしさ…オールマイトが殺さらたら……俺たちどーなっちゃうんだ…?」

夜の繁華街で、たった一人の言葉に段々と青ざめ、不安を煽られる市民。

「ここにいる私たち、殺されちゃうの…?」

「嘘だろ?嫌だよオールマイト…なぁ!オールマイト!!」

「負けないでオールマイト!お願い!勝って!」

「あんな化け物…どうすりゃあ良いってんだよ!!」

プロヒーローも、忍も、半蔵も、何もかも敗れ、世間に多くの真実が明かされた中、人々は混沌の渦に飲み込まれていた。

「姿が変わってもオールマイトはオールマイトでしょ!?」

「アンタが勝てなきゃ、あんなの誰にも勝てっこねえよ!!」
「さっきの老人のこと含めて解らない事だらけだけどさぁ！けどそんなのどうでも良いよ！今は、あんただけが頼りなんだよ!!」
死に近づくオールマイトに不安を煽られた市民は、糸が切れたかのように叫び出す。
応援の声が、次々と絶え間なく上がっていく。
「負けるなオールマイトぉぉ!!勝て!!頑張れええ!!!」
いつしか市民の声は大きくなり、世界中の多くの人々が声を荒げる。
勝ってほしい。
負けないで。
頑張れ。
どれも同じ似たような台詞でも、一人一人は確かにオールマイトの勝利を望んでいる。
それは忍も同じこと。
「オールマイト!!お願いです…勝ってください!!」
「半蔵の分まで勝てええええ!!!」
半蔵学園の忍生徒。
クラス委員の斑鳩。
姉御肌の葛城。
あの二人でさえ、今も震えている。
「ええい！面が邪魔だぁ!!
――お願いですオールマイト！こんな薄汚れた我が言うのも烏滸がましいですが……が、頑張って!!」

「オールマイトは…間違った儂等を正すために、矯正しようと胸を張ってくれた！それなのにこんな所で死ぬなんて…嫌じゃあ！絶対に嫌じゃ!!」
「ウチさ……もう涙で声が出ないし……オールマイトも泣いてて……何が何だか解らなくて……でもさ……もう大切なものを二度と失いたく無いんだよ……黒影様みたいに…死んで欲しくないんだよ!!!」
「オールマイトぉぉ!!絶対に勝ってよ！美野里、幾らでも甘いもの作ってあげるから！だから、負けないでよ！いなくならないで！死んじゃ嫌だよ!!」
死塾月閃女学館の中も、喧騒と涙の声で混じりあっていた。
面の脱着で性格が変わる叢も、面を外し羞恥心を感じることなく声援を送り、夜桜や四季、美野里はかつて大好きだった黒影の死の面影がオールマイトに重なり涙声で声援を送る。
もう彼女たちにとってオールマイトとは、半蔵に負けず劣らず、感謝し切れない大切な人なのだから。

「オールマイト……！ダメ！負けちゃダメ!!」
「何なのよコレ…本当に……何で…畜生！涙が止まんないのよ!!
何で…両備は……こんなに胸が苦しくなるの！」
「勝って!!両奈ちゃん絶対に応援するから！何でもしますから！頑張れえええええ!!!」
秘立蛇女子学園は月閃女学館に負けず劣らず、涙と喧騒で包まれていた。
数多くのある部屋からは、下級生の涙声と応援の声が絶え間なく聞こえ、それが選抜メンバーの部屋まで聞こえる。
紫は映画やゲームでは泣いたことがないので、涙もろくはないのだが、今回は本気で涙目で潤っており、両備と両奈は姉のことを思い浮かんだのか、悪忍の立場でありながらも平和を願う心と共に声援を飛ばす。

「オールマイト…何やってんだよ!!立て!お前ならそんなヤツに屈しない男だろ!?お前は今まで立ち上がって来たじゃないか!」
「こんなのが暴れたら……私たちですら……」
「なんやこれ、わし感情無いのに、目から汗が出て来たわ…」
「汗じゃ……ないよ日影ぇ……涙って言うんだよ……うっ……くっ……ひっく……うわあぁぁぁぁん!!」
「未来なんか……号泣してるじゃない……」
洞窟内でもまた同じく、焔紅蓮隊は未来を中心に応援の声を上げている。
焔以外は涙を出し、焔自身も本当は内心かなり焦っている。
こんな化け物など、命が幾らあっても足りないし、ヒーローなんて正義に擦りつくタチじゃないが…今回は別だ。

あらゆるネットサイトから忍サイトの至る掲示板も、今までとは比にならない程に書き込まれていた。
『オールマイト!!勝て!!』
『クッソ泣いたわ、こんなの見せられたら応援するしかねえよ…』
『こんな化け物が勝っちゃったらこの世の終わりだよ……』
『負けるな!!頑張れ!!』
『オールマイトなら絶対に勝てる!だから負けないでくれ!!』
『やばい、涙が止まらないんだが……』
『こんな敵にヒーローがやられたって思うとスゲェ心が痛い』
先ほどとは違い、皆オールマイトに勝ってほしいと願い、色んな意味で炎上している。
「オールマイト!!」

夜の街は、数分前まではシンと物静かにしてたものの、今では全く違う。
そんな中、雪泉は涙を流し叫び出す。
「貴方は私たちを救ってくれた！
間違った正義を、貴方は懸命になって信念の道を歩むように紡いでくれた!!
私たち忍にとっても……貴方は最高のヒーローなんです!!絶対正義の象徴なのだから…！
だから…お願い……〝死なないで〟!!」
涙がポロポロと、溢れ落ちていく。
こんなにも泣いたのは、黒影が死んだ以来だ。これ以上涙を流さないと誓ったものの、これには勝てない。
「じっちゃんや皆んなの為にも頑張れええええ!!!オールマイトおぉ!!」
飛鳥の叫びは、雪泉に負けず劣らず声を張り上げ
「勝てや!!負けないでよ!!――
――オールマイト!!!」
爆豪勝己と緑谷出久の声が重なる。
かつては隣同士だった幼馴染は、時を経て距離が空き、離れ、そして今、再び隣り合わせで、同じ憧れのオールマイトに大きな声援を飛ばす。
市民の声が、忍の声が、雄英生の声が、たった一人の後継者の声が、オールマイトの居る場所まで響き渡る。
――ドクン!!
「――ッ！」
オールマイトの腕に筋肉が浮かび上がる。
衰え弱り切ったボロボロの体は、今もなお膨れ上がる。

オール・フォー・ワンは反応する。
「ああ…そうだった……忘れてたよ笑顔を……そうだ、私は約束したさ……陽花くんと！
未来ある忍達の子を救けて欲しいと！そして守って欲しいと!!」
ならば守ろう。
ヒーローや市民だけでなく、忍の命をも救い出す。
忍の命は儚い。
だからこそ、そんな命を守る人材が必要だ。
オールマイトは、そんな人間になりたいと、心の底から願った。
「多いんだよ忍やヒーローは、守るものがいっぱいあるんだ……
――だから、負けないんだよ」
止まらない涙を流しながら、彼は笑って見せた。
どんなに辛い時、苦しい時でも、笑顔で笑って臨むんだ――
何度でも立ち上がろう。
この名前を呼んでくれる――皆んなの為に。

117話「残り火」

『限界だーって感じたら思い出せ』
――思い出す。
『お前が、何のために拳を握るのか』
――何のために。
『原点（オリジン）ってヤツ！それが、お前達をもう少しだけ先に連れてってくれる！』

平和の象徴とは何か
ヒーローとは何か
正義とは何か
原点とは起点となり得る存在であり、人々には原点というものが有る。
何故、ヒーローを目指すのか、何故敵と成り果てたのか。
善かれ悪かれ、原点というのは必ず存在する。
大きな理由から些細な理由でも、本人にとっては重要な事であってそうでないようで、何とも曖昧で気難しいようで簡単なようで。
けど、誰も原点を振り向こうとせず忘れていき、何故自身がこうなったのか、忘れてしまう。
人間は時が過ぎると、記憶と供に原点を忘れて行く。
人間とは不要な情報だけでなく、重要な事でさえ忘れてしまう。
だから常に、原点というものを頭の中に入れておかねばならない。
『私は――象徴になりたい。
この国には象徴が必要です……だから、自分が象徴となって国民達

の笑顔を咲かせたい。失った数々の幸せを、取り戻したい』
まだ、犯罪率が上昇していた殺伐とした時代には、Ｎｏ．１ヒローは存在しなかったし、平和の象徴として謳われる人物像すらいなかった。
皆が笑って暮らせる世の中にするには、自分が象徴とならなければならない。
望むならば手に入れろ。
望むだけでは、手に出来ない。
だから、人は努力しようとする。
人は強くなろうとする。
人は過程を踏まえて成長する。
それは、人間という美しい一面であり、人間としての誇らしさだ。
象徴となる道は、ヒーローになる道よりも険しい。並みの覚悟では決して辿り着けないだろうその頂き。
だけど、一人じゃない。
お師匠が、陽花くんが、グラントリノが、半蔵さんが、側にいてくれた。

その絆を、決して奪われたりはしない。
そう、させない。
そんな事、オールマイトが赦さない。
一人なんて、この世界には存在しない。

だから、自分は今こうして立つ事が出来るんだ――

「――渾身。それが、最後の一振りだねオールマイト」
絶望の掛け声が耳を打つ。
オール・フォー・ワンは自然と空中に浮いていた。まるで体積が軽くなったかのように、手放した風船のように、上空へと浮いて行く。

「恐れ入るよ。真実を知りながら、まだ立ち上がるその勇敢な姿勢は賞賛に値する」
けど、良くないなぁ――
君は大人しく死ねば、苦しまずとも済んだものを。
善良ある人間の心は本当に理解出来ない。
何故、正義を掲げようとする？
何故、正義を語る？
何故、正義を貫こうと抗う？
人は感情に大きく動かされ、この世界ではたった小さな出来事から敵やヒーローになる輩が多い。勿論、そうでない人間から自警団なんて呼ばれてる身勝手な輩もいるが…まだソイツ等の方がマシさ。
だけど、コイツは苦しみながらもまだ抗う。
死ぬ事がどれだけ楽になるのか、それを拒むかのように、何度でも拳を握る。
「今でも思い出す。陽花が腕一本もげながら、それでも必死に僕に立ち向かう姿。内臓も潰れ、腕も無くし、それでも僕に挑む……無謀な醜態――ヒーローと忍は見えない縁で結ばれていると聞くが……参ったなぁ、これじゃ悪夢だ。
いち早く彼女が復活したのかとさえ錯覚してしまうよ――」
陽花の面影が重なり合う。
オールマイトという、個性に恵まれなかった平凡な男と、才能に恵まれ万能さえ通り越す女。
どちらも対局であったアイツらが、手を取り合い僕の前に立ち憚る。
「腸撒き散らしてでも襲いかかる君の執念は、僕と同じく異常だ。
まッ、これも善と悪の隣り合わせと言うものか……」
オール・フォー・ワンの腕が再び膨らむ。
アレを見たのは何度目だろうか、やはり全盛期ではない、衰えた為か個性が少ない。
あるとすれば恐らく戦闘向きではない個性か、発動条件が満たされてない個性なのだろうか、どちらにしろ気が引けないのも確か。

腹くくってやるしかない――
「二、三度見ておいた方が良いな」
忌々しい腕が振り下される刹那、滾る豪炎がオール・フォー・ワンに襲いかかる。
「おや、思ったよりも早かったな……」
その腕をオールマイトでは無く、向かってくる火炎に個性合体秘伝忍法を放つ。何者かに放たれた豪炎は凄まじい衝撃波により掻き消される。
「なんだ貴様……その、姿は……!!」
震える声。
聞き覚えのあるドスの利いた声色。
しかし怒気と微かな焦りが滲み出てる。
「何だその姿は貴様！オールマイトォォ!!」
声の主はエンデヴァー。
側にはエッジショットもいる。だが二人は知らない、オールマイトの危機に陥った現状を、そして本当の姿を――
エッジショットが衝撃を受けるだけならまだしも、エンデヴァーにとってオールマイトとは超えられなかった壁で、いずれ息子の焦凍が越えるべき壁。
平和の象徴なのだ。
Ｎｏ．１ヒーローなのだ。
焦凍が越えるべき壁なのだ。
Ｎｏ．１とＮｏ．２との差は歴然、天と地の差が開いており、そんなフレンドリーな親しみもなければ、生易しい関係ではないのだ。
そんな、超えるべき壁が今じゃどうだ？
脆くボロボロな、触れてしまうだけで崩れそうな、長年使い古されたボロい壁のようだ。
そんな、圧倒的絶対的な強さを持つオールマイトが、やられ、ボロボロにされ、打ちのめされて、痩せ細った別人の姿をしていて…一体

何が起きたのかさえ解らない。
だが一つだけ解るのが、アレがオールマイトだと言う事だ。
「やれやれ…幾ら中位級の脳無とはいえ、アレらを圧倒するか…それもこんな短時間…
一体の妖魔もいたはずなんだけどなぁ……」
「貴様のことなどどうでも良いわ!!
問題は貴様だ!オールマイトぉ!なんだ…なんだその情けない姿はァ――!!!!」

元凶の犯人の事など、今のエンデヴァーはどうでも良い。
それはヒーローとしてどうかと問われるだろうが、流石のＮｏ．２ヒーローのエンデヴァーも、オールマイトの姿を目の前にして、冷静ではいられないのだろう。
普段は冷静で対処する彼も、今回ばかりはどうにも……
――俺は、かつて貴様を越えようと研鑽を重ねて来た。
――俺は、誰よりも強いヒーローになりたかった。
――俺は、誰よりも優れたＮｏ．１の座を目指して来た。
自分が二十歳になった頃にはもう既に、Ｎｏ．２の称号を得ていた。
たゆまぬ努力と、才能がエンデヴァーの背中を押してくれたのだろう。
しかしソレは、決して今に至るまでの話ではない。
頂を登ろうと鍛錬を重ねるにつれて痛感してしまう。

自分は、一生Ｎｏ．１ヒーローにはなれないと。
オールマイトを超えることは出来ないのだと、知ってしまったのだ。
人は何故努力するのか。答えは簡単、己の懇願を叶える為だ。
自分のなりたいもの、願ったもの、憧れ、欲、それらを叶える為ならば努力は惜しまない。
しかし、この世界に絶対という言葉が無いように、必ずしも努力が

報われる事は無い。
例えばどれだけ努力を積み重ねても、Ｎｏ．１ヒーローであるオールマイトに勝てないように、自分では頂点に辿り着く事が不可能であるように。
自分がこれ以上、何を努力しても、無駄なのだから――
だからこそ、エンデヴァーは、止まってしまった。
だからこそ、自分を引き継いでくれる後継者が必要だった。
だからこそ、妻を利用し子供を産ませ、己を超える轟焦凍（息子）に託した。
自分でもこれが父親として、ヒーローとして相応しく無い事など、解らない程子どもじゃない。
だからこそ、嫌われようが汚名を被ろうが、オールマイトを越し、己の野望を果たしてくれる事実が、達成感が欲しかったのだ。
それが今になってどうだ？
元から戦えない体、故に…今まで見てきたオールマイトがアレだと？
絶望が、エンデヴァーを支配する――

「その情けない背中は何なんだオールマイト!!!!何とか言え!!!」

焦燥に身を焦がし、表情がより曇る。
冷や汗は止まらず、受け入れ難い真実を無理やり否定しながら、叫び出す。
認めない、こんなの認めて良い訳がない。
だからエンデヴァーは憤りながらも、叫び続ける。
「……あのさぁ、応援に来ただけなら、観客らしく大人しくしててくれ、僕は今からオールマイトを殺すんだから――邪魔をするなよ」
邪気を孕んだ声主は、ズズズと嫌な音を立てながら、腕から氷が生成していく。
恐らく対エンデヴァーや炎系の個性に対抗する個性だろう。
「邪魔はアンタでしょ!!」
子どもっぽい声が聞こえたと思った刹那、鋭い水鉄砲の弾丸が、

オール・フォー・ワンに襲い掛かる。
しかしその水の弾丸は当たらず、オール・フォー・ワンの目の前で蒸発し消えた。
見えない壁なのか、どの個性かは不明だ。
「おや？エンデヴァーだけじゃないのか…いや…そうだろうね。Ｎｏ．２ともあろうヒーローが、仲間を見捨てる筈も無いか…ハッハハ」
軽く微笑を浮かばせながら、余裕そうに振り向けば、ボロボロ状態の巫神楽三姉妹が別方向に立っていた。
忍装束はボロけてるが、まだ戦えそうだ。
「み、巫神楽三姉妹！」
ここに来ては…！とオールマイトが言うものの、意図を読み取った華風流はムスッとした表情で、でもどこか頬を赤らめて口を尖らせる。
「ふん！半蔵様が出ちゃった時点で、もう忍の存在なんてバレバレよ……
それに半蔵様だけじゃなくて、オールマイトが…こんなボロボロになってまで戦ってるのに……私たちが出ないなんて…それこそ私がすたるのよ!!」
荼毘専用脳無の戦闘で満身創痍だが、それは悪の象徴と対峙してるオールマイトも同じ事。
心も、体もボロボロになりながら、まだ人々のために拳を握るヒーローに対して、自分たちは忍だからと言い訳を回しながら何もしないなんて、そんなの自分が赦せない。
そんなの、あって良いはずがない。
「華風流殿の言う通り、俺たちは救けに来たんだ――」
シュン！と神速で斬りかかるエッジショット。しかし目にも留まらぬ速度をもってしても、傷一つ付けられず、オール・フォー・ワンはため息交じりで呆れながら振り向く。
その他にも、シンリンカムイが気絶し倒れたジーニストやギャングオルカ、Ｍｔレディを救出したり

「凛さん!それに蛇女の者達よ…!遅くなってすまぬ!!」
覇気を纏わせた大道寺が、凛を含めて忍達を担いだりと、面子が揃ってきた。
凛は微かに目を開け、口を動かすも声が掠れてて上手く聞こえない。
元々凛は、神威討伐の任務にてオール・フォー・ワンに一度重傷を負ったのだ。
今まで忍教師として生きてきたので、後遺症などによる作用は無かったものの、二度目の重傷はかなり厳しい。
もう忍教師はおろか、下手すれば普通の生活すらも……
大道寺は眠れる獅子が目覚めた、怒りの眼光を相手に向ける。
「我々には……これくらいの事しか出来ぬ……」
一方、オールマイトの背後には、瓦礫に埋まってた人民と、重傷で立っていられるのもやっとな虎がいた。
よく見ればラグドールの姿も見える。
裸体となって気絶してるらしいものの、傷らしきものは見受けられないので、一先ず安心して良いだろう。
「貴方の背負うものを少しでも……!!」
「虎……」
「もう、背中を背負うのはアンタだけじゃないって事さ」
「!さゆ…ジャスミンさん!!」
いつの間にか、隣には若々しくも懐かしい容姿をしたジャスミンが立ち尽くしていた。
気付かなかったが、半蔵を抱えている。どこか悲しそうな目には、同時にヤツに対する怒りも含まれていた。
小百合は、半蔵の妻だ。
ジャスミンになっても、小百合でいようとも、半蔵を愛してるのには変わらないし、同時に家族の情を捨てたわけでもない。
だからこそ、身を呈してまでオールマイトを守り、庇った半蔵には感謝しているし、大切な人を傷付けられた怒りは、より高まるのも当然のこと。

「妖魔には大分苦戦したよ…若返ったとはいえ、妖魔相手はそう簡単にいかせてはくれないか……

形そのもの無くすほどに木っ端微塵にしてやったよ」

よく見れば、腕や顔、服には妖魔への返り血がビッシリと染み付いていた。

耳を澄ませばジャスミンの息遣いが荒々しい。怒りと興奮、そして仲間を奪われた憎しみへ来る影響なのか…どちらにせよ、彼女と妖魔の戦闘は相当なものだったらしい。

「あの邪悪な男を止めてくれ！オールマイト!!」

虎の悲痛な叫びが胸に響く。

「どんな姿になってもあなたは皆んなのＮｏ．１ヒーローなんだ!!」

聞いてしまえば、皆んなの声援に泣かされそうになる。

自分は一人じゃない…みんながいてくれる。

皆んなが応援してくれる…その一つ一つの言葉の温もりが、心を温めてくれる。

――みんな、貴方の勝利を願っている!!

市民の皆んなが

緑谷出久が、飛鳥が、爆豪勝己が、雪泉が、雄英高校の皆んなが、忍学生の皆んなが、焔紅蓮隊が、

ヒーローが、上忍が、

上層部達が、警察が、

教師達が、

背中を押してくれる。

耐えられなく、痛々しい体を、そっと優しく……まるでマラソンで体力尽きた人の背中を、応援してくれるように。

ゴール直前の中、皆んなが声援を飛ばすように。

巨悪と戦う正義のヒーローを応援するように――皆んなが!!

「煩わしい――」

ゴゥ!!

周り一帯が一瞬にして吹き飛ばされる。

瞬きする瞬間すら惜しいその破壊的で瞬間的な個性で、辺り一面オール・フォー・ワンの周りにあるもの全てを無に帰す。

「君らの下らない精神話は置いといて…これから僕がやる事を話そうか――」

血の通わない冷徹な声。

凍て付く悪魔の囁き。

巨悪と謳われた男の実力。

「秘伝忍法――〝善悪のｐｕｒａｇａｔｏｒｉｏ〟〝サンダーフォックス〟〝烈風大車輪〟〝覇道明咆〟〝禍ノ鎌風〟〝鬼火・蒼炎歌〟〝天翔竜脈拳〟〝呪いの茨樹〟

＋個性〝筋骨発条化〟〝瞬発力〟×４〝膂力増強〟×３〝肥大化〟〝鋲〟〝増幅〟〝瞬間火力〟〝氷創〟増殖〟〝エアウォーク〟〝創骨〟」

数々の秘伝忍法や、数々の個性が今、混ざり合う。

ドクンドクンと、心臓の音が大きく音を立て、遠くにいるオールマイトにすらもその奇妙な音は鮮明に聞こえて来る。

「今までの個性合体秘伝忍法じゃ、君の体力を削るだけで、自分の体力が減りつつどれも殺せる確実性が無かった」

右腕が悲鳴を上げる。

ミキミキと、メキメキと、ドクンドクンと、複数の音が交差するかのように、音は次第に大きくなる。まるで聴覚が研ぎ澄まされたのかと疑わしくなる程に。

「今度は確実に殺すために、僕が掛け合わせられる最高・最適の個性に今の僕の体内に宿る忍の血を全て一回に絞り出すよう、全ての秘伝忍法を上乗せし――」

これぞ正しく禁術・〝個性合体・死・絶秘伝忍法〟――

「――君を殴る」

絶望は空高く見下ろす。

顔のない悪魔は一望と広がる景色に嘲笑う。

憎悪を表すかのような、禍々しい右腕は紛れもなく、正義の終止符を討つには相応しい形だ。

黒く禍々しい竜の形をした右腕(顔)、その腕には無数の茨が巻きつかれ、その先端部分は蛇の頭になっている。

雷、風、炎は三種の属性を奏でるハーモニーのようだ。

腕から腕が生えてる無数の腕、鋲と氷が混ざり合う凶器。

それらは全て、異常を来していた。

(――先程の戦闘でようやく確信を得たよ、オールマイト。

君の中にはもう、ワン・フォー・オールはない。君が今使っているのは余韻…残りカス、譲渡した後の残り火だ)

そしてその火は使う度に弱まっていくその光は、吹かずとも消えゆく力――

「緑谷出久、次の譲渡先は彼だろう?」

「ッ――!?」

ズキン…ッ!と鈍い衝撃が頭を打ち込むかのような感覚に囚われる。

オール・フォー・ワンは薄々と感知していた。

いや、正確的には確証出来るものがあった。

敵連合、死柄木弔が雄英高校襲撃の報告に気になる言葉があった――

オールマイト並みのスピードを持つガキがいた――

その後、調べずとも全国に放映されてた体育祭に目を通せば直ぐに理解した。

緑谷出久、彼が次の後継者だと。

「資格も無しに来てしまって！まだ個性が制御できてないそうじゃないか。
君は後継者を選ぶ人材を間違えた……
それに半蔵の孫である飛鳥も、陽花によく似てる」
資料に目を通し、特にこれといった過去もなければ、成績は普通。
陽花と比べて才能が無いのが欠点だが、それでも雰囲気やあの明るさは正しく彼女そのものだ。
雪泉も、雪吹帰と似ているし、黒影にも似ている――
だからなのか、つい…こう遭わせてみたくなるのだ。
「飛鳥が陽花に似てるのなら、また彼女と同じ目に遭わせるのも良いかもなぁ」
腕がもげ、内臓が飛び散り、血反吐吐き、辺り一面が血の海に溺れる陽花の死に様は、今でも良い思い出だ。
何度か夢でも見てる光景…その悲劇をもう一度、今度は次世代のカグラとなる彼女たちにも遭わせたいのだ。
「後は全部僕が片付けるから…君は安心して、存分に悔いて死ぬと良いよオールマイト――君の負けだ」
お互いが飛び、オールマイトの拳とオール・フォー・ワンの個性合体絶・死伝忍法が衝突し合う。
「この戦いとしても、先生としても――」

ズドオオオォン!!と豪大な爆発音が鳴り響く。
街一つ破壊しなん限りのその膨大な爆発に、周りの皆は思わず息を呑む。
土煙の中、黒い液体のようなものがオールマイトの腕に纏わりつき、ミシミシと骨が軋む音が鳴る。
「＋〝衝撃反転〟フィニッシュだオールマイト」
衝撃反転でオールマイトのパワーを全てフルカウンターし、その上で自分の複合個性秘伝忍法で上乗せする。
爆発的な火力を食らって、済む者などもはや皆無。強力な大型妖魔、怨櫓血すらもワンパンで粉々にするだろうこの威力が、オールマ

イトに向けられている。
そうなれば、あの平和の象徴も無事では済まな――
「そうだよ」
「なッ――？」
済むはずがないのに。
土煙から、あの忌々しい声が鮮明に聞こえた。
幻聴じゃない、ちゃんと聞き覚えのある声が確かに聞こえたのだ。
土煙が晴れていくと共に、姿を表す。
「私が先生だからこそ！叱らねばならんのだよ!!
私はまだ、あの子と約束している!!忍の子達を、未来ある彼女たちを救って欲しいと!!!」
いや、確かに腕はへし折られていく。
もう見るだけでも惨たらしいその腕は、間違いなく使い物にならない。
ならないのだが…
――コイツ、反撃の力じゃなく、耐える力で対抗してるのか？
衝撃反転は、攻撃をそのまんま対象の人物に反撃するカウンター能力。
だが、相手が攻撃を仕掛けるのではなく、あくまで耐え忍ぶ為に使うとしたら、意味が無い。
「成る程……醜い！」
吹かずとも消えてゆくその力。
抗っているのか…役目を終えるまで絶えぬよう、必死に抗っているのか――
その痛々しい光景を例えで言うなら、極寒の吹雪の中、裸体で弱々しい焚き火を全力で守る様。
「彼女は死んだ。君が愛しくてどうしようもない、魅力に惹かれ、焦がれた彼女は死んだんだ。その現実を噛み締めながらも、それでも死者の約束を守り続けるだと？
ワン・フォー・オールが無くなれば、君は守れるものも守れない筈だ、なぜそこまでして、死に行く彼女たちを守るメリットが、君にあ

る？」
名誉？
地位？
誇り？
いや、そんなものでオールマイトが口に出して言うはずがないし、先ずコイツさ名誉や地位云々を口に出すような輩ではない事など、とうに知っている。
では何なのだ？陽花が好きなだけにしても、理解出来ない。理解し難い。
ヒーローとしての役割か？確かに、ヒーローは誰であろうとも救い出す。皮肉だが、瀕死状態に陥った敵も時に救助しなければならない役割を担っている。
どうせ、ただの自己満足による正義感だろう？
救わなければ、陽花に顔向け出来ないからか？何とも醜い。
「ああ、そうだね。けど守るさ……力がなくとも！お前に全てを奪われるなら！この命に代えても守り通す!!!」
「愚かな……」
「ああそうさ！愚かさ!!私も！私の後継者（生徒）も！けどそれは――!!」
決して恥じることではない、人間らしい生き物の姿だ。
誰にだって間違えはある。
躓き、転び、失敗する事は誰にでもある。
だから人は成長する。
それが人間としての素晴らしい誇りであり、美しい生き様だと言うことを、師匠に教えて貰った。
「メリット？私はただ、皆んなが幸せに生きてくれればいいだけだ!!!」
それが、オールマイトにとって尤も素晴らしいと思える至福なのだから。
誰かが不幸になることなく笑って生きていく。不幸が訪れても、それでも自身の笑顔を忘れずに、前向きに、通り越していく。
笑顔とは、強さの証なのだ――

――思い出す。私がなぜ拳を握るのか…そう。平和の象徴としてでなく、お師匠が私にそうしてくれたように、私も彼を育てる…それまではまだ…!!

「君がそこまで醜く抗っていたのは、僕自身も誤算だった」

――死ねんのだ!!!!

もう片方の残った拳を強く握りしめ、殴り付ける。

死ねない、まだ後継者を育むまでは。

力が無くなろうとも、それでも彼女と約束したソレを、破って良い訳がない。

守る力がなくとも、それを言い訳に決して諦めて良い訳がないのだから。

だから、平和の象徴は絶対に、倒れないのだ――

118話「次世代へ」

オールマイトの右腕は完全にへし折られ、血塗れだ。
完全にへし折られた腕は、どう見ても惨たらしく、見る者に思わず苦痛を与えてしまいそうな程に残酷だ。
それでも、オールマイトは一本腕が折れようと、心までは折られることはなかった。
例え腸を撒き散らされようと、血反吐吐こうと、必死に蹌き、苦痛に抗い、打倒すべきオール・フォー・ワンに立ち向かう。
普通の人間ならば、既に限界を迎えてるであろう異常な戦況。オールマイトは凡ゆる困難を乗り越える。
普通、人間は痛みに躊躇いを持つ性質がある。例え頭の中では解っていても、生物的本能がそれを拒絶し生きる為に逃げろと告げる。
これ以上の怪我を、重傷を負えば取り返しのつかない事になるからだ。
ソレは、死を意味する。

それでも、オールマイトは決して心折れる事なく、闘う。
血塗れた拳を精一杯に、力強く握り締める。
死を覚悟するなど、ヒーロー社会にとっては日常茶飯事。
恐怖を乗り越えず、困難を乗り越えずして何がヒーローか、平和の象徴としてなら、皆の背中を背負う者としてなら尚更だ。
皆んなが背中を背負おうとする意気込む姿に、オールマイトの背中を押してくれてるのだ。
皆が背中を支え、オールマイトは全てを守る。

この命に代えても――

「がっ――」

渾身。そう呼ぶに相応しい手応えが、拳から伝わる。
オール・フォー・ワンの頬に拳がめり込み、ここでようやく、初めて痛撃を与える事に成功したオールマイト。
放映されてる現在、不安と恐怖に身を焦がす市民たちは祈るばかりだ。

どうか、勝ってほしい。
絶対に負けないでくれ。
悪の象徴を倒してくれ。

全ての人々の願望が一つになる。

今の一撃で、どうか倒れてほしい。
そう願うばかりの市民は、息を呑む。

だが

「らしくない小細工だ…一体誰に似たんだか……」

オール・フォー・ワンを倒すまでには至らなかったのか、残火による力量が足りなかった。
右腕を犠牲にし、左腕でのカウンター攻撃を読めなかったオール・フォー・ワンは殴られた衝撃により口から血を吐きながらも、睨みつける。
オールマイトは既に限界を超えている。力及ばずという、彼に相応しくない言葉も、今では仕方ない。
ずっと力を酷使し続けて来た彼の代償なのか、もう打つ手がない。
せめて虚を突けたまでは良かったのだ。
正面からでは有効打にならないのなら、最後の一振りを、右腕のパ

ワーを左腕に変えて決着を付けたかった。
しかし、それすらも叶わず
オール・フォー・ワンのもう片方の腕は爆発的に、異常なまでに膨らみを増す。
まるで風船のように膨らむその腕は、空気を押し出す個性を中心にパワー個性を上乗せする気だろう。
霞む視界に、禍々しい腕が見える。
「浅い…だがそれも終わりだ」
この手のネタは知っている。志村奈菜が使ってた小細工だ。
個性に見合わない癖に、パワーもそこまである程でもないのに、無駄な足掻きで無様に死んだ彼女の戦い方は覚えている。
しかし、ここでオールマイトが使ってくるとは思わなかったが、貧弱で弱り切ったパワーでは意識を途絶えるのには足りなかったようで、今度こそ終わらせる。
空気を押し出す個性に、数々の増強型の個性を増す。忍術は先ほどで全て使い切ったので、少し名残惜しいばかりだが、オールマイトを殺すにはこれでも充分――
「そりゃあ腰が入ってなかったからな――!!」
「――!」
双方満身創痍の中、オールマイトは更なる一手として、折れたハズの腕を無理矢理にでも動かし拳を振るおうと血反吐を吐く。
皮も捲れ、筋肉繊維が剥き出しになったその腕は、空気に触れてるだけで稲妻に直撃したような痛みが、腕から全身に血液のように流れる。
その痛みを噛み締めてなお、オールマイトは貫く。
己の限界という壁をブチ壊し、平和の象徴としての意地を、正義を貫き通す。
「お師匠だけだと思うなよ!!!」

見透かされていた。
オール・フォー・ワンが脳裏に浮かんだ人物は志村奈菜だった。
前に昔、闘った時も彼女はこう言った戦法を使ってきたので、今のオールマイトを見て流石は師弟だなと思った。
だが――
次に見せるオールマイトの勇姿は
巨悪に立ち向かうその姿は
粉骨砕身の覚悟に身を賭す姿は
ヒーローの鑑であり、平和の象徴としての姿と
天咲光芭(陽花)が自分に立ち向かう姿が重なり合う――
それは、予想していなかった。

運命というのは理不尽であって、時に至福でもある。
今思えば、不思議なものだ。
自分が初めて、忍の存在を知った時は…まだオールマイトというネームドではない。八木俊典としての名前、ヒーロー学生の頃だった。
『俊典!・お前に紹介したい人物がいる。なに、お前と同じ私の弟子さ』
これは自分が少年期だった頃の、初めて彼女と出逢った物語――
当時は奈菜の弟子に入ったばかりでこれと言った日にちは経っていなかった。

ただ、お師匠が認める弟子がもう一人いるというのは、余り考え難い物だった。
私が弟子となったのは、ワン・フォー・オールの後継者の為。こんな無個性な私を選んでくれた彼女の心は、寛容だ。
先代達に引き継がれた力、それ以外に師匠が弟子を取ると言うのは、余り考えられないもので、想像もしなかった。
『ソイツはまあ…お前も聞いたらさぞや驚くだろうけど、大丈夫。上手くやっていけるよ』
何が大丈夫なのだろうか…
自分は少し複雑そうな顔を浮かばせていたんだろう。
それと同時に、緊張していたんだろう。
まるで学校の入学式のような、新鮮さを感じた青春を迎えて。
師匠は軽いノリみたいに手招きして彼女を呼び寄せ、対面させるような姿勢を作らせた。
『初めまして、私は陽花と申します。お師匠、志村奈菜さんの弟子として日々精進していくおつもりです。
師匠の弟子同士、宜しく御願いしますね』
薄い灼熱のような、紅蓮の光を浴びせた赤髪は、尻にまで届く長髪。
整った美形に魅入られる淑やかな顔立ち。
学生とは思えない豊満な胸。
全てが完璧に思えるその容姿に、太陽の如く眩しくもあり美しい彼女は、そこらの学生とは思えない程の美少女だった。

後ほど師匠に教えて貰ったのが、彼女は忍の家系として生まれた事。
もう一つは、お師匠にはもう一人忍の盟友がいること。
忍としての知識の欠片も無い私は、聞きたいことが山ほどあり、1日経っても教われきれないものが沢山あった。
特にこれと言って大きな出逢い方ではないが、これが彼女と初めて出逢った日の出来事。

――もし
お師匠に出逢わなければ
陽花くんに出逢わなければ

私はどうなっていたんだろう。
ふとそんな疑問が頭を過ることが多々ある。無個性の私は誰にも好かれることなく、他の人間とは違った価値観で生きてきた。
だけど、あの人たちと出逢ったからこそ今がある。

『何人もの人がその力を次へと託してきたんだよ
皆の為になりますようにと……一つの希望になりますようにと、次はお前の番だ。
頑張ろうな俊典、陽花』

お師匠が

『忍はね、死ぬ為の駒じゃない。上層部の命令は絶対だけど…でも、私たちを必要としてくれるからこそ、忍には意味があるんだと思う。
もし、忍が死ぬだけの駒なら、傀儡たちと何も変わらないと私は思う。
だから私は絶対に生きて、忍にも明るい未来があるんだって、気付かせたい。
その為にも…私は、忍の象徴になりたい』

陽花くんが

背中を押してくれる。
死してもなお、あの二人の言葉を思い出すことで、まるで隣にいるかのような…そんな錯覚さえも感じてしまう。
極限状況だからか、はたまたそれ程にあの二人が恋しかったから

か、私は今もなお、立ち続けることが出来る。
オールマイトの意思が、正義が折れぬ限り、何度でも立ち上がり、何度でも拳を振るえる。
だから、絶対に負けないんだ――
お師匠や陽花くん
皆んな
「おおおお

衝撃の余波で、台風さえも作り出すかのような威力に、現場にいる人間は身を屈め、衝撃に耐え、上空にいるマスコミのヘリコプターはその余波に当てられ揺らいでしまう。

全国世界にいる一同は思わず息を呑む。
あの巨悪に放った拳は、届いたのであろうか？
不安が心を煽り、一同は冷や汗を流す一方、沈黙が続いている、騒がしかった街は、静けさだけが漂っていた。

土煙が巻き起こり、視界が悪くなった事で二人の姿が見受けられない。
最後に立ち残ってるのは誰なのであろうか？
オール・フォー・ワンか
オールマイトか
二人とも歴史上に名を残すトップの実力だ。
だからこそ、どっちが立ってもどっちが倒れてても、何もおかしくない。

圧倒的な絶大なるパワー
何でもありの、千差万別に存在する個性を持つ男か

皆は願う。
どうか勝ってほしい…オールマイト、負けないで、と。

土煙が少しずつ消えて行き、晴れていく。
人影が薄っすらと見えるこの光景に、心が打たれるような鼓動に見舞われ、緊張が昂ぶる。
そして、土埃は段々と晴れて行き、ついに視界でも認識できる程に鮮明と目で捉えることができた。

それは――

――血塗れの姿で、拳を天に衝き立て挙げる、誰もが知るヒーローの姿。

『オールマイトおおお

緊迫とした空気が、一気に流れを変え、解き放たれたかのように人々の声で街は満ちていく。
それはきっと、神ノ区だけではないハズ。
全国中継を見ていた者たち、殆どの人間がそうなのではないだろうか？
「オールマイト……良かった……本当に……」
理想の正義
誰もが認めるヒーローの鑑
世界一の実力者
そんな男の勇姿を目の当たりにされて、思わず目頭が熱くなる雪泉は、手をそっと胸に当て、涙を流す。
痩せ細った体から、誰もが知っている姿に変わったオールマイトの姿は正しく、英雄という名に相応しいものだ。

「……」
「オール…マイトぉ…」
爆豪は、息が詰まったこのように何も物言わず、沈黙だけを続ける彼とは他所に、雲雀は泣きじゃくりながら腕で涙を拭う。
改めて認識した。
紛れも無い事実を突きつけられた。
ＵＳＪに攻めてきた敵連合、対峙してた脳無の戦いでそれを直に、目の当たりにした爆豪だからこそ、雲雀だからこそ解る。

これが、平和の象徴なのだと――

勝利のスタンディングが上がる中、一切姿勢をブレることなく維持してるオールマイトに誰もが歓声を上げ賛える中、幾多もののプロヒーローや上忍達が一斉に救助に当たる。
世間に半蔵という伝説の忍の存在が暴露された今、隠す必要も無いため存分に捜索する事が出来る。

一方、重傷者達は忍やヒーロー、一般人問わず、治療を受けるようにと病院へ搬送される。
又、敵連合のメンバーは全員取り逃がしてしまったものの、代わりと言ってはなんだが、連合を指示していた悪の親玉、オール・フォー・ワンを捕える事には成功した。
現在、移動牢式で拘束され敵受取係の警察達が慎重に連行している。
一応念を入れるため、オール・フォー・ワンの護送の為として巫神楽三姉妹と小百合が責任を持って監視、及び警察達の安全の身柄を確保するべく側にいるそうだ。
当の本人であるオール・フォー・ワンは気絶から目を覚まさないので今のところ危害は無さそうだが、現在に生きる世界災厄とも呼べる男なので油断をしていれば全滅は目に見えるだろう。
厳重する管理体制を維持したまま、敵連合のボスは連行された。

長きに渡ったようで短いような戦闘は、一時間も過ぎていた。
だが因縁深い善と悪の対決は、長い世代に渡って、遂に終止符を打つ事が出来た。
今度こそ、大丈夫だ。
オールマイトは曖昧とした意識の中、心の奥底で語りかける。

――お師匠、陽花くん……わたしは、出来ましたか？
誰もが認める、平和の象徴になれましたか？
私は……お師匠や陽花くんが認められるような人間になれましたか？

――平和の象徴としての最後を迎えたオールマイトは、切ない声で、虚しい声で、語りかける。
しかし、その言葉を聞いてくれる人間は、誰一人もいない…そう、周りには

――よくやったよ、俊典…いいや、オールマイト
――うん。立派だったよ、オールマイト

幻影とでも呼ぶのか、オールマイトの視界には僅かに、光のように薄っすらと映っていた。
志村奈菜が、陽花の姿が。
亡き英雄の二人の姿が、微笑んでるように、手を振っていた。

「……」
やせ細った体、皮膚が捲れ傷だらけの体、疲労困憊に満身創痍の彼の顔は笑顔で綻び、目からは粒のように涙を流す。

「師匠……陽花くん……」
これで今度こそ仇は討てた。
二人に安心して、平和の象徴の座を下りる事が出来るな…良かった。

私は腕で涙を拭き、マスコミのカメラに向かって指を指し、口を開く。

「――――」

災害のような大被害が神ノ区に及ぼされた事によって、街は半壊滅状態。
そのため人が混雑しており、波のように人が押し寄せてくる。
現在、電車も一時期停止してる模様で、多くの人が介抱施設に向かって行く。

これ程の被害が出たのだから、当然なのだがまだ轟と八百万が緑谷達と遭遇してないため、人混みの中であの二人を探さなければならないのだ。恐らく向こうもそのつもりで動いてるのだろうか、それにしては現状が現状で動き難い。
「取り上げず轟と八百万探したいな…集まる場所を考えないと」
「その前に警察に爆豪のこと、そして上忍に雲雀のこと伝えないといけないんじゃないか？」
「ダァー！やること多い上に動き辛いな！取り敢えず人混みから抜けてそこから――」
一刻も早く、轟と八百万の二人と遭遇するべく人混みから抜けようとする切島達。
しかしその中には浮かない顔を立つ者もいる。
緑谷出久、飛鳥。
緑谷はオールマイトの秘密が暴かれた事に大いなる不安が募り、飛鳥は特に重症だ。
それも無理はない、血の繋がりを持つ実の祖父が腹に穴を開けられた重傷を見せられ平然としていられる孫など何処にいる？
愛する祖父が傷つけられ、今直ぐにでも駆け寄って看病したい。
側にいて手を握りたい…もう一度逢いたい。
しかし、それを今する事ではない。
何時迄も子どもじゃない彼女だから解る。しかしそれでも半蔵の容体が気になる事もあれば、不安がるのも必然。
最悪の場合、死んでしまうケースだって可笑しくないのだから、もし半蔵が、実の祖父が亡くなったと聞けば自分は耐えられそうにないだろう。
二人は不安な表情を浮かばせながら足を運ぶその時
『次は――君だ』
英雄の声が、耳を打つように聞こえた。
モニターを見てみると、オールマイトはマスコミのカメラに向けて

指を刺している。
血塗れで、今にでも倒れそうな弱々しい体を、無理矢理立ち尽くし、震える指を向けてそう言い放つ。
その言葉を聞き一同は又しても、歓喜と興奮の声で満ち溢れる。
街中はより騒がしくなり、涙馳せる声が全員の耳に伝達する。

オールマイトの揺るがない信念と、折れない勇姿。
そして『次は、君だ』という短い単直なメッセージ。
まだ見ぬ犯罪者への警鐘。
平和の象徴としてのメッセージ。
人々の心を安心させる一言。

――しかし、緑谷出久と飛鳥だけは真逆のメッセージを受け取った。

私は、もう出し切ってしまった――平和の象徴として立つ事が出来なくなってしまった。
だから緑谷少年、次は君だ――と
飛鳥は緑谷とオールマイトにまつわる個性、ワン・フォー・オールを知っているので、皆まで言わなくとも、簡単に読み取れた。
彼女は後継者ではない…しかし、緑谷は次の次世代による後継者だからこそ、その事実がより痛感できる。
意図を、読み取ってしまう。

緑谷の眼には、溢れんばかりの大量の涙が流れ出てくる。
抑えきれない感情を、世界一の憧れの懸念を抱くオールマイトの痛々しい姿に、平和の象徴としての最後の姿…それを迎えたオールマイトに、涙なしでいられる程、緑谷は涙腺は強くないし、憧れたヒーローだからこそ、引退する姿も、辛いものだ。
頭の中で解っていても、現実を受け止めようとしても、それでも涙が溢れてしまう。

「オールマイト……」
腕で涙を拭う緑谷を、爆豪は何も言わず黙々と、横目で見つめていた。
爆豪もどちらかと言えば、他の者と同じく敵への警鐘としてメッセージを受け取った…しかし、それが正しくないというのは頭では解っていた。
緑谷の姿に、オールマイトのメッセージ…真意は不明でも、それでも爆豪の心の中に靄が付いていたことは、誰も知らない。

こうして平和の象徴と同時に、神ノ区で起きた善と悪の頂上決戦は幕を閉じた。

翌日――彼は昨日の大きな事件を起こしたことで、特例中の特例として刑の確定を待たず特殊拘置所へ入れられた。
オール・フォー・ワン――悪の象徴。
伝説の支配者として世代から謳われたその存在は謎が多いばかり、故に昨日の神ノ区半壊の被害により死亡者もかなりの数と言われており、現在は刑の執行を待つばかりである。
当然皆からの死刑への言葉は計り知れない程に多いが、オールフォーワン自身による数々の犯罪、連合の在り処や情報を探るため、まだ生かしているだけのようだ。
もし刑の執行が下れば間違いなく無期懲役、死刑は確実だろう。

神ノ区で起きたオールマイトとの戦争。
それは現世代で語られる伝説と化し、逸話を残す事になる。

平和の象徴――オールマイト
ブレイブ
紅ライオット
自警時代から今日に至るまで、ヒーローと呼ばれ歴史に嶄然と輝き、名を刻む者のヒーローがいる。しかしそれとは裏腹に、敵も幾多ものの犯罪や逸話を残しているのもまた事実――

伝説の支配者――オール・フォー・ワン
〝異能解放軍〟指導者――デストロ
稀代の盗人――張間歐児

人々を恐怖と絶望、不安を煽り脅かす存在もまた語り継げられている。
しかしそれもまた表社会の一部分に過ぎない（オール・フォー・ワンは特例中の特例の為、裏社会にも名を残している）。
裏社会――それ即ち、忍社会である。

忍の象徴――陽花
伝説の忍――半蔵
カグラ千年祭――小百合
護身の民の英雄――肆奈川
死塾月閃女学館初代選抜筆頭――猗華月

そしてオール・フォー・ワンを初めとし、忍社会への反乱を来そうと忍の力で忍社会を崩壊させようとした、歴史に名を刻む者もまた存在するのだ。

妖魔違法研究者――ティオ・ディアボリクス
忍商会初代指導者――鏖魔
伝説の侍――黒夜叉
忍反乱革命者――志々滅

漆月やステインだけでなく、問題視された忍達も過去には存在していたのだ。
当時オール・フォー・ワンだけでなく、こう言った曲者達の手によって忍社会は混沌渦巻く世の中になり、結果忍とは社会の未来と希望を託す者であって、駒として扱う者と認識され生きてきた。
現在の社会は、オール・フォー・ワンの手によって忍の存在が暴露され、世間の数多くが忍を知ってしまった世の中、新たな改革が生まれ出ずるだろう。
その意味も込めて、オール・フォー・ワンを死刑にしろと告発する上層部は少なくはないはずだ。

現在、彼は特殊拘置所・タルタロスという監獄に入り、厳重なセキュリティの下で動きを縛られ封じられている。
ここに入られた者は、動くことすら許されない為、こうして金属製の車椅子で過ごす事になる。
タルタロスの従業員に押されるオール・フォー・ワンは、訝しげそうに口を開いた。
「ここは？」
「黙ってろ犯罪者！見れば解るだろうここは死刑すら生温い罪人達が行き着く場だ!!」
尋常じゃない管理者の怒号の声が飛び、静かな刑務所の中が声の反響で騒めく。
しかし、オール・フォー・ワンは何の反応を示すこともなく、声ブレも変える事なく納得したように
「ああ監獄なのか……解らなかった、センサーが多すぎて…
監獄ならここに捕まった弔の仲間もいるのかな？」

呟いた。
「……？何を言っている貴様……まさかだと思うが
眼が見えないとでも言うのか？」
従業員の言葉に「うん、そうだよ」と軽く答えて頷く。
従業員の動揺する様子などお構いなく、オール・フォー・ワンは口を開くと語り出す。
「布ずれの音、空気の僅かな振動に加えて『赤外線』という個性で僅かながらに感知して六年間過ごしてきた。
『音』・『振動』の個性で動作を……『感知』で感情の動きや空間把握を補助しているんだ……
何も見ずに戦うのは六年前じゃなくても、ずっと前から鍛錬していたさ。
陽花という忍に、全盛期のオールマイトと対峙していた時は、肉眼では捕らえられなかったし見ることすら出来なかった……だから、もう慣れてるんだ。
ここはセンサーだらけで感知が意味を成さない…悪いね」
オール・フォー・ワンのぶっ飛んだ会話についていけない従業員は思い知った。
コイツは、全ての人間が恐れる、最恐の存在…悪の象徴だと。
警察の手短な詳細は聞いたものの、この男の凶悪さをより身に染みた。
――嘘だ…ウソだろ？
まさか、そんな手負いの状態で…不平等な状態でオールマイトと互角に渡り合っていたのか??
あの、平和の象徴相手に…何も見ずに闘っていたというのか?!
「――バ……化け物め……ッ!!」
冷や汗が止まらない。
体が震える。

個性を発動すればいつでも殺せるように仕組んであるセキュリティを前にしても、この男が死ぬとは思えない。
厳重に設備を整え、自分達が安全に管理出来る設計へと作られたこの刑務所を前にしても、自分の命の死が曝け出されるようで気がしてならない。

ある部屋では…
(また…誰か入って来たのか……)
オール・フォー・ワンと従業員の会話に心の底で愚痴をこぼす男は、訝しげな目を開く。
その男はかつて、ヒーローと忍にただならぬ恐怖と絶望を与えた犯罪者だった。
ヒーロー殺し・ステイン。
敵連合との関わりを持つと疑いが掛けられてる本人は、特にこれと言った詳しい情報知らずとも、警察側ではシラを切ってると思われてる為、こうして顔に火傷を負い包帯を巻かれながらも、退屈な日を過ごす日々なのである。

――だが、彼だけではないだろう。

(うるせぇな……誰だ、騒いでる阿保は……ったく、タダでさえここは窮屈で機嫌が悪いのによ……)
隣の部屋で心の底から愚痴をこぼす男の名は――伊佐奈。
嘗ては蛇女子学園で雅緋達を支配し、妖魔を創り出していたワイルドヴィランズのボスである。
顔はマスクが無いため、半分がクジラの顔で占めており、もう半分は人間の顔をしている。
刀で一閃斬られたかのような傷跡が無数に付けられ、重傷を負いながらも命に別状は無いと判定された直後、速攻でタルタロスに連行されたのだ。
また、忍商会にまつわる取引内容や、妖魔に関して事情調査してる

とのこと。

――負けたよオールマイト

実に醜い足掻きだった。しかし、だ…君が選んだ道は間違えてる。

戦いの果て、弟子に寄り添う道を選んでしまった。

オール・フォー・ワンは酸素マスク越しの口元を歪めて、嘲り笑う。

――君は離れ時を見誤った。死に時を失った。

邪悪な男は、オールマイトに負けたというのに、まるでそれが計画通りだったような口調で、満足そうに笑みを引きつける。

その笑顔は、オールマイトのように人々を安心させるものでは無い。その逆、絶望と不安を与ええる、残酷な嗤笑を飛ばす。

――いいかい？本当の先生というのは、弟子を独り立ちさせる為にあるものだ。

獅子の子落とし。

屈強な猛獣の獅子は、我が子を育てる為にまず崖の上で子を落とす。

それは子への試練であり、厳しい自然界の中で生き抜く力を身につける為の、親の愛情である。

親子だけでなく、師弟も同じものだ。

頼りにして来た師が、手の届かぬ場所へ去り――彼は成長する。

彼は憎悪を募らせる。

彼は真に先頭を歩んで行く。

仲間もいる。

仲間を増やす術も学んでいる。

大丈夫だよ死柄木弔。

君には仲間がいる、そして『同じ愛弟子』の漆月もいる。

経験も

憎悪も
悔恨も
全てを己がものとして成長しろ。
悪の象徴になるのは、死柄木弔――次は、君だ。

そして私は、死柄木弔と同じ後継者…悪の象徴になる為の影を用意していた。
彼はヒーロー社会を崩壊させる為に、容赦ない攻撃を仕掛けるだろう。
そこで、不覚にも忍の刺客が死柄木の首を刈り取る者だっている筈だ。
特に今の世の中、僕のシナリオ通りに機能してるのなら尚更ね。
だから、その為に漆月、君の力が必要なんだよ。

現在、彼女は死柄木の部屋の片隅で山座りをするように、顔を隠している。
当然、死柄木の部屋には彼だけでなく、仲間達全員いる。
オール・フォー・ワンが送り出した先は、死柄木弔の部屋なのだ。
ゴミ袋が山のように積もり、散らばった紙や埃、汚い部屋に机と椅子にパソコンがある。
やれ仲間達は死柄木や漆月の様子を黙ったまま見つめている。

「漆月ちゃん……大丈夫？」
「……」
鎌倉が側で宥めるように、そっと肩に手を置くも、彼女の反応はない。
まるでいじけて拗ねて、泣いてるようにも見えるが、実際は全く違う。

彼女の頭の中に離れられないのは、欠けてた記憶だ。

漆月、本名は――天咲魅影。

オール・フォー・ワンのあの一言を聞いた時から、まるで自分が過ごして来た世界観が、異なるように生まれ変わった。

それはある日、自分が明日の食料の当ても無く貧民街を彷徨っていた時のことだ。

腹に背中がくっ付きそうな程に空腹で苦しみを味わい、ゴミ箱を漁っていた毎日の自分。

家も無ない自分は、なぜか忍達に命を狙われていた。

当時の自分では理解し難い事実で、生きる為に逃げることだけが精一杯だった。

逃げ切った場所は貧民街だったが、そこでも酷い仕打ちを受けて来たものだ。

助けて。と町の人に懇願するのに誰も聞いてくれない、誰も助けてくれない。

更には殺しにかかる忍から逃げていれば、不良や個性を扱うチンピラ達にサンドバックのように扱われ、殴られていたこともあった。

だから毎日傷は絶えなかったし、連中は面白半分で彼女を痛ぶり、鬱憤ばらしやたかが個性の性能が見たいが為に、過酷な仕打ちを、口の中が血の味で滲むほどに味わっていたものだ。

なんで、人は人を傷つけるのだろうか。

幼い頃は優しい性格の根っこがあったので、人を簡単に虐めるような人間の性格は考えられなかった。

そんな、ある日……

食料の虫や鼠が無かったので、仕方なくゴミ箱に溜まってた残飯を口に無理やり詰めて空腹を紛らわしていた時に、いつも自分を虐めて

来る連中に酷い目に遭わされていた時だ。
『なぁ、マジでどーするコイツ？』
『やり過ぎたら死ぬぜ？』
『いーっていーって！どーせ生きてても意味のない人間なんだから！価値のねぇゴミ以下なんだから、殺したって誰も悲しみゃあしねーよ！』
『ちょっｗｗｗ酷すぎｗｗｗ』
何人かがまるで塵を見るような目で見下してた連中が、高笑いながら個性という凶器で殺しに来た時、自分は何も感じなくなった……
――嗚呼、死ぬんだ。
でも、良いや。だってこの人たちが言うように、私は死んだ方が良い人間だから……
死んだら、皆んなが喜ぶんだよね？
良いよ。
私、死にますから…死ぬから。

少女はソッと目を閉じた。
しかし、いつ時間が経っても痛みや苦しみが感じないので、可笑しなと思い目を開けてみれば
全員、黒い爪で体を貫かれ血を吐いてるではないか。
『――がっ!?』
『随分と滑稽だなぁ…君たちが悪者になるのは勝手だが、どうせなら他所で…なんならヒーロー育成学校に行って個性を使って暴れてくれ』
そう言うと、あっという間に自分を痛ぶってた人間は、糸が切れたかのように、倒れ伏した。
その男は紳士な声を発しながら、ニコリと笑顔を見せて歩み寄る。
『誰も君を救けてくれなかったね、天咲魅影くん。まるで初めて天狐に遭った時みたいで…可哀想に』
何の危害も、害意も感じない男は、手を差し伸べる。

『善忍が救けてくれるから、悪忍は善よりも寛容だから！
でも、君だけは誰も救けてくれなかったね。君だけは誰も受け入れてくれなかったね？
何故、誰も君に手を差し伸べてくれないんだろう？
安心しなさい、君も何も悪くない』
そして、手を頭の上に置き撫でると、男はそっと優しく抱きしめてくれた。
背中に手を当て、優しく、我が子のように撫でて落ち着かせようとする。
先程までの仕打ちとは打って変わって、地獄のような生活の中、初めて救けてくれた。
初めて、手を差し伸べてくれた。

それが死柄木にとって、そして私にとってのオール・フォー・ワン（先生）
嬉しさの余り、頭の中が真っ白になって、訳わかんなくなって、でも最後は思いっきり泣いた。
涙が止まらなかったし、優しさの有り難みが本当に解ったよ。

だ　か　ら――先生を奪ったお前らだけは許さない。

そうだ、私は…あの人に救われたんだ。
なんで、忘れてたんだろう…こんな大事な記憶。
先生と過ごした時間だって、今は覚えてるのに…なんで別れ際（あの時）に限って…思い出したんだろう。

しかし、それがオール・フォー・ワン自身による記憶操作の個性と、暗示をかけていた事までは覚えてはいない。

人の記憶とは、生きてる意味で尤も欠かせない物だと言っても過言ではない。

何故なら記憶とは心でもあり、楽しかったことや苦しかったこと、それらが積合せてた物があるから、人は幸せにもなれれば、悲しむことも出来る。
記憶とは日常生活において必要不可欠で無くてはならないものだ。

それをオール・フォー・ワンは何の躊躇いもなく、息を吸うかのように自然と漆月の成長を促す為に記憶を操作したのだ。
最終的には暗示が発動し記憶が蘇ったものの、彼は最初っからこうさせる為に掌の上で転がし、シナリオを創っていたのだ。

タルタロス拘置所で、オール・フォー・ワンは期待を高らせながら、口角を吊り上げ嗤う。
――漆月、僕のメッセージは届いただろうか？
君が幼少期の頃、弔に遭わせず忍を憎むように成長を促した私は、次の一手を用意している。
先ず、目の前でオールマイトと僕が闘い、弔率いる連合を逃がすことで彼女は身をもって知ったはずだ。
自分の敵は、忍だけではないと――
忍を嫌悪するだけでは、どうにもならない…と。だからこそ、僕は君にメッセージを残した。
そのメッセージで、君の記憶は戻ったハズだ。
だからこそ、以前よりも強いハズ。
君の中に眠る化け物だって、少しは操作できるだろう。
だが、恐れるなかれ――君と同じように化け物を巧みに使う者は漆月だけじゃない。

その中で僕は君を選んだ。
紛れも無い、君という純粋な悪意をね――
だから、安心しなさい。

漆月は思い出す。

オール・フォー・ワンは弟子に伝えた言葉を振り返る。

『漆月、弔の事は任せた――
????????、
??????』

あの言葉を、先生が漆月に伝えたメッセージ。

次は、漆月(キミ)だ(カムイ)――

善と悪の頂上決戦は幕を閉じ、善悪の闘いは次の次世代へと託された。

119話「終幕」

神ノ区で起きた、オールマイトとオール・フォー・ワンの死闘が幕を閉じて一夜明け。

世間は騒然としていた。

それは無理もないだろう。神ノ区半壊という大規模な災害に匹敵するレベルの被害、平和の象徴オールマイトの正体及びヒーロー活動引退、終いには世間に忍の存在が明かされたという事実。

数々の事件に目を通せば、それは嫌がる程に人々の記憶に刻まれる事だろう。

オールマイトという折れぬ平和の象徴の弱体化が判明され、半蔵という伝説の忍が世間に晒された。

平和の象徴という言葉は、ヒーローからすれば心強い味方で、市民からすれば安堵の息から来る幸福感が湧き上がる弱者の味方、敵からすれば絶望と恐怖でしかない存在。

存在してるだけで悪の抑止力となったヒーローは、二度と復帰叶わず再起不能となった。

それだけで市民からして観れば不安と恐怖、絶望でしかない。

忍に関しては最も大きな変化だろう。

今まで御伽噺として曖昧に語られてた歴史の存在が暴露された事で、市民からの疑問の言葉が相次いでいる。

エッジショットと言った忍風ヒーローなんて誤魔化せはしないし、マスコミを始め、多くの市民からは忍の存在と理由を問う嵐が絶え間ない。当然の帰結ではあるが、流石の上層部も表に出さざるを得ない形に成り果てたようだ。

結果、忍の有様を最大限に誤魔化すことが出来たものの、最小限の範囲で忍の存在に対して不満と批判の言葉も上がったと聞く。

忍は表社会から派遣された任務を全うする。これは誰もが聞けば世のため社会の為として、ヒーローの暗躍とて想像が付いたものの、人々のイメージとしては暗殺、破壊、奪取、諜報、隠密という如何に

も忍らしいイメージもあり、敵という悪者イメージも付く為、良く思ってない人が殆どだろう。
何より表社会に公表すらされない者なら尚のこと。裏では世間には晒せれない任務や暗殺などをしてるのでは？という記者達の言葉もあり、益々忍へのイメージが悪くなり、いつしか忍に対する社会への信頼と希望は無くなり、批判と酷評が大きい。
それでもまだ最小限だ。もしこれが裏では殺し合いが起きてたなんて知れば、敵同士の争い関係やヤクザやギャングの縄張り争いなんてレベルでは済まされない。
社会全体のイメージを悪化する以外の何でもない。
忍と人間は違う。
忍は死を覚悟して、世の為人の為に血で血を争う生き物だ。平穏な環境で育たれた人間とは違う。
それでも昨夜オールマイトを庇った一人の老人、半蔵の勇姿や、ヒーローと共に救助活動を行なっていた忍達の活躍もあるため、一概的に忍が悪者と決めつけるのも無理があり、忍を悪く思わない者もいる。
五分五分と言った形で、忍を良く思う者もいれば、まだ信頼出来ないと言い張る者もいる。
忍の話題だけではなく、ヒーロー社会にも影響が訪れた。
折れない平和の象徴という圧倒的な一位を誇る実力が途絶え崩れることで、社会の均衡バランスが崩れ去り、近々犯罪率が急激に上昇するという恐れが上がっている。
忍に対する人々のイメージは悪化し、ヒーロー維持性も悪化。現代社会はヒビ割れたガラス細工のような、危機的な状況に陥っていた。
これが、現代社会における状態。
寝ても覚めても何も変わらない――現実である

東京本部基地――高層ビルの会議室。
静寂な室内は緊迫とした気迫が孕んでいた。中には警察庁上層部の長官が数名、善忍悪忍の上層部が数名、数枚の資料に目を通し難しい顔を浮かばせる。
警察庁上層部と忍社会上層部とは特別な縁があり、国家機密に触れることから全て忍社会とヒーロー社会に関係ある件の殆どはこう言ったやり取りで手を組んでいる事がある。
ヒーローと忍が協力関係を築き事件を臨む事が出来るのも、裏で警察の手続きや上層部の合意があるからである。
少しでも害意が有れば、即対応する為にも必要不可欠な仕事でもある。
今回上層部達が会議を開くのは尤も他ではない。
「昨夜の神ノ区半壊事件。特殊捜査官の塚内刑事を始め、警察の捜査によりますと捕らえた脳無は全てこれまでと同様に人間的な反応がなく、新たな情報は得られそうにありません。
また元カグラである小百合が討伐したであろう妖魔の死骸を調べた結果、連合が所属している抜忍達が殺害した忍の血液だと判明。
保管されていたという倉庫は消しとばされており、彼らの製造方法についつも追って調査を進めるしかありません」
今回の神ノ区半壊を始めとし、オールマイトの引退と世間に明らかにされた忍の存在。
「そもそもよ、その倉庫というのもフェイクじゃねえのか？生体実験なぞ行える環境じゃねえし場も安易過ぎる。
バーからも連中の個人情報は上がってねえんだろ？」
「第一、妖魔を創り上げてた本人はオール・フォー・ワンと名乗る巨悪だけで間違い無いのか？
超常黎明期の頃、ティオ・ディアボリクスという研究者が妖魔の製造、及び実験研究をしていたと聞いた事があるが……」
「現在調査中です」
連合に関する事件は靄のように有耶無耶にされ、探ろうにもまるで壁に阻まれてるかのように、一切情報に触れる事が出来ない。

「大元は捕らえたものの、死柄木弔を始めとした実行犯らは丸々捕り逃した……
とびきり甘く採点したとして、痛み分けといったところか…」
「あろうことか、よりによって忍の存在が世間に晒された今、弁解の余地も誤魔化すことも出来なくなってしまった…」
「馬鹿野郎。伝説の忍に平和の象徴と引き換えだぞ。
オールマイトの弱体化が世間に晒され、忍という社会に暗躍する日陰者も暴かれた…
もう今までの絶対に折れない平和の象徴がいないと同時に、お前ら忍社会を取り締まる上層部達も、無闇な争いや私利私欲で忍を派遣する事が出来なくなった訳だ」
上層部の半分は忍をカグラへと養成するべく、必要上な任務を与え成長を促せた。もう半分は私利私欲による争い、また国家機密や企業情報を探るなどの目的を始め、暗殺から諜報活動まで様々な任務を与えていた。
しかし今はどうだろうか？
「我々が最善を尽くすのは忍へのイメージを改良、及び新たな平和の象徴を探さなければならない…オールマイトという穴を埋めるべく手を打たなければならねぇ…」
「たった一人にもたれかかったツケだァな…」
オールマイトの背中を託し、甘えた結果。忍を駒として扱って来た上層部達の帰結。
自業自得の反面、反省部分も含めこれから未来へ向き合うために改善しなければならない事が山ほどだ。
「超人社会、馬鹿も集まりゃここまで出来ると…全員が知った。
俺は恐れ入るよ――最初期のプロファイリングじゃ子どもの癇癪とまで言われていた主犯格――死柄木弔の犯行計画は、数を重ねる毎に回りくどく、世間への影響を見据えたものになっている。
しかもだ、抜忍・漆月と接触し関わりを持った事で、忍に対する社会も大きな影響を及ぼし、敵連合なんちう生温い犯罪集団へと変えやがった。

忍をも殺害する敵や、漆月のように連合の悪意に魅かれた忍も集まり、戦力を急激に増やす術…
死柄木は考え成長してる。そしてオールマイトが崩れ以前にも増して抑圧が無くなろうとしてる状況。連合は失敗する度に力を付けていく。これから連合の悪意に影響を受け、社会を反乱する忍も増えるはずだ…そしてまた連合へと赴く可能性も…
こうも都合よく勢力拡大の余地が残っていくものかね?」
そして上層部達は知らない。
漆月の本名が天咲魅影であり、上層部達が過去に死んだと見なした人物と一致してる事など。
そして、漆月も死柄木弔と供に成長し、以前とは違う彼女になったこと。
もう幼稚で摩訶不思議な性格をした彼女ではない事を。
本当の自分を取り戻したことなど、誰も知らない。
「手の内だと?結果論じゃないか?ネガティヴに考えすぎでは?」
「わからん…ただ確実に言えるのは、奴等は必ず捕らえなきゃならんことと、忍はこれからどう世の中を進めていくかだ…
我々警察も〝敵受け取り係〟などと言われてる場合じゃあない、改革が必要だ」

東京本部とはかけ離れた場所――とある医療病院。
ここへ来たのは何度目だろうか?覚えてるのは腹に穴を開けられ手術を施してからか、もう五、六年前の話になる。
真っ白な天井、見慣れない床に医療ベッド。そして太陽の日差しが差し込む窓に、緑色のカーテン。
患者服を着たオールマイトは、包帯で巻かれてる折れた腕を、巨悪を討ち取った勲章として、ヒーロー活動最後として、戒めな目で見て

いた。
「私の中にあった残火は消え、平和の象徴は死にました」
殆どが包帯や湿布で貼られており、見るからに痛々しそうな、元平和の象徴オールマイトは、窶れ細った姿でそう呟いた。
「しかし、私にはまだやらねばならぬ事があります…」
しかし英雄、未だに死なずと瞳には強い信念を揺るがせていた。
「死柄木弔が志村の孫で…陽花の妹が漆月…天咲魅影なんだな？」
病室には見舞いとして、グラントリノ、小百合、塚内刑事が来てくれた。
因みに半蔵は昨夜の深夜に手術を施した結果、なんとか無事に成功したものの、二度と復帰することは叶わないそうで、忍として立つことすら出来ないそうだ。下手に動けば命に関わるとさえ病院の先生に言われてる。
黒影の時と同じく、床に伏せ通常に体を動かせれるまで回復を待つしかないようだ。
「まさかあの子の妹がねぇ……。嫌なもんじゃなあ、オール・フォー・ワン。
あの大馬鹿者にここまで転がされてたとは思わなんだ。思わず血圧が上がってしまうのぅ…」
小百合は深いため息を吐き、暗い表情を浮かばせる。
それはまるで、身内の訃報を聞かされたかのように辛く、何処か物悲しいような瞳を震わせていた。
「それは奴の発言だろ？根拠が薄いんじゃないか？それに、小百合さんと半蔵さんも含めて、先ずその先代の方の家族とは交流が無かったのか？」
塚内は辛そうな表情を浮かべる三人を宥めるように口を開く。
彼の言葉にグラントリノは「ああ…」と首を小さく縦に振り頷く。
志村は夫を殺されており、我が子をヒーロー世界から遠ざけるべく里子に出しており、グラントリノ、俊典、半蔵、小百合、陽花には『私にもしもの事があっても、あの子と関わらないで欲しい…』と言っていた。

それは、孫がヒーローや敵とは関係なく、平穏に幸せに暮らして生きて欲しいと願った、彼女なりの配慮である。
「成る程…漆月の方は？」
「赤ん坊の時に一度だけ、それ以来は一度も逢ってない。陽花の父親はオール・フォー・ワンに殺され、彼女とアイツの因縁が芽生えたのはそこからだ。
母親は漆月を出産した後、命を落とした…」
志村奈菜と関わりのある弟子、忍の身柄である陽花を警戒してなのか、はたまたオール・フォー・ワン自身による嫌がらせなのか、父親が任務の途中でヤツと遭遇し殺されたそうだ。
一部では妖魔の材料として殺されたのでは？という微かな可能性の線も存在する。
「二人の約束が逆に…やるせないな……」
塚内は心を痛めたかのような、少し苦痛混じりの表情を浮かばせ、視線を落とす。
「けど待てよ…それなら漆月があの魅影なら…
なぜツノが生えてない？」
「ツノ？」
グラントリノの言葉に、そうだ！と意見が一致した小百合も目を開く。
近くにいる塚内は陽花の妹のことを一切知らないので、解らない。
「塚内には話してなかったな…漆月が上層部達に狙われてる理由」
「？全忍を敵に回したからじゃないのか？」
「ああ、それはあくまで成長した漆月の話だ…幼少期の頃、アイツは呪われた子どもと謳われ、厄病扱いされていた。それが、あの忌々しいツノが原因でなぁ…」
天咲魅影が幼少期だった頃から、上層部達は彼女を目に付け処分しようとしていた。
その理由は少女の忌々しいツノにあった。嘗て大昔、厄災を齎す厄災神として謳われた神威がこの世に存在していたらしい。
それは数多くの命を奪い去り、破滅へと導く呪われた化け物として

世に名を轟かせ、言い伝えられて来た。
唯一、抵抗出来たのは妖魔を滅せし転生の珠――神楽という神により阻止する事ができ、厄災を振り払ったとか。
それを忍の有様として、魔を滅する者をカグラと呼び、災厄を齎す者をカムイと名付けたそうだ。
それが、カグラとカムイの名の由来――
「幾ら何でも、それは上層部の勘違いじゃないのか？昔の話…は良く分からんが、超人社会、ツノの生えてる人間なんていくらでも」
「じゃろうな。何も上層部の人間だって何も考えなしに漆月を処分しようなんて思っとらん」
災厄を齎す神は、闇を好む化け物だ。影を蝕み、悪意を好み、戦場を血の海に変え妖魔も忍も見境なく殺し合わせる混沌を司る厄病神。
その神威は、漆黒に染まる闇の粒子…靄を纏わせていた。
その闇は触れた者に凡ゆる苦痛を、死を錯覚させる地獄の苦しみを味わう事となる。

「まさか……」
「上層部は漆月が厄災を齎す人間と…いや、化け物と見なし、処分として決した」

漆月が多くの忍から命を狙われてた理由がコレだ。
上層部の推測は間違う事なく、彼女は幼い頃体から溢れる闇の瘴気を身に纏い、触れた者が症状にかかり苦しんだと言うケースが見るようになった。
それは正に、大昔に語り告げられた厄災神と同じ現象――漆月は厄災神の生まれ変わりではないか？という声が上がった。
だがそんなの当の本人は知るはずがなく、魅影だった頃の彼女は純粋無垢な性格で、何かに対しても優しく無鬼畜無害な、何処にでもいそうな普通の幼い少女と変わらなかった。
だから忍に命を狙われた彼女にとってはさぞ辛い事だっただろう。
何も訳分からず自分を殺しに掛かる人間達、想像も付かない苦し

み、悲しみ、絶望、孤独、それらが彼女を追い込ませていた。
「ただ、前までは違ったんじゃぞ？たった一つ、上層部を説得する事が出来た者がいた。それが姉の陽花じゃ」
実力や功績のある彼女は、たった一人で上層部と掛け合ったそうだ。
どうか、あの子には手を出さないで欲しい…と。
当初は彼女の言葉に耳を傾ける者は少なかったが、彼女の力なら厄災を止めれる事が証明され、望み通り陽花の意見を呑み込み一切手を出さなかった。
しかし、現実とは非常なり――
「ただソレはあくまで姉が生きてる内だけ……陽花がオール・フォー・ワンに殺された途端、糸が切れたかのように魅影の処罰任務が下された。儂等が駆けつけに来た時はもう既に遅かった……あの子が逃亡していたんじゃよ」
何人かの上層部はどうしても天咲魅影が邪魔でしか無く、結果上層部の人間が言い合った中だと、陽花が生きてる内だけ。
よくよく考えてみれば、彼女の厄災を止めれるのは姉の陽花だけ。
なら、陽花が亡くなれば誰も止める術が無い為、処罰を下すしかない。
それが、上の答えだった。
ただ、オールマイトと半蔵だけが大きな反対を述べた。
それでも、平和の象徴とは言えど将来性の無い戯言と見なし、耳を傾けることは無かった。
半蔵は幾ら伝説の忍であろうとも、元が忍の身であるが故でも、上層部の意見に反すれば半蔵の血筋も処罰すると脅された。
この世に驚愕な害を及ぼすのであれば妖魔と変わらない。魅影を庇うのであれば、半蔵も世に災害を齎す人間とみなされ刃を剥かれる事になる。
「……そんな事が……」
「何件かヤツの生存確認が見れたものの、暫く時が流れ去ってから、魅影の消息を見た者は誰一人いなくなり、息を引き取ったと裏で告知さ

れた」
　しかし、それをまさかオール・フォー・ワンが引き取ったとは誰も思わなかった。
　確かにヤツなら考えそうな行動だ。それと同時に陽花の全てを奪い、あろうことか大半は彼女への嫌がらせと来た。
　オールマイトもその真実に本当に心が折れかけてしまった。
「あの子は化け物じゃ無い！人間です!!飛鳥くんや雪泉くんと何も変わらない、善良で優しさを持つ一人の女の子なんです！
　私はお師匠と陽花くんの約束を守るべく、死柄木と漆月を見つけなければ……二人を見つけて私は――……」
「ダメだ俊典、見つけてどうする？お前はもうあの二人を敵として見れてない、必ず迷う。
　素性がどうあれ犯罪者だ」
「グラントリノの言う通りさね。
　良いか俊典、情とは捨てるもんじゃ。何度も言わせるな。
　儂がカグラを辞めた理由も聞いたじゃろ？お主には紛れも無く断ち切ることの出来ない迷いが生まれておる。そんな様子であの二人に遭ったとしても、殺されるのが一番のオチじゃ。例え忍じゃない主でも、今回の件に関して儂は厳しいからね」
　オールマイトの言葉に、グラントリノと小百合は断固拒否と言わんばかりに言葉を遮る。
　二人の正論にぐぅの音を言えないオールマイトは、冷や汗を流し、唾を飲み込む。
「死柄木と漆月の捜査は、俺と塚内、小百合で行なっていく」
「ああ、それと巫神楽三姉妹も同行させて貰うよ。あの漆月相手となると、かなり骨が折れる」
「だからお前は、雄英に残ってすべき事を全うしろ。平和の象徴が死んだとしても、オールマイトは生きてるんだから。
　これから先はもっと忙しくなるだろうに、無茶をしろとは言わんが…程々にな」
　そうだ、自分にはまだやるべき事がある。

その為には雄英で先生としての役を担い、教育を施す。
そして緑谷出久という後継者を、次の世代を育む義務がある。
他にもまだやらねばならぬ事が、教える事が沢山ある。
こんな体になっても、自分にはやらねばならぬ事がまだあるんだから。

打って場所は変わり、神ノ区を後に無事何とか轟と八百万と遭遇した緑谷達は、警察に爆豪と雲雀を送り届けた。
当の二人は意外にも冷静で、雲雀はともかく爆豪は無口のままどこか吹っ切れてないような面で大人しく警察の指示に従い、安全の身柄確保及び、安否の確認を取るべく数時間警察に付き添えられた。
一方、緑谷達は半日以上の時間をかけて、家路に辿り着いた。
緑谷達雄英生は帰宅、一方忍学生である飛鳥、柳生、雪泉の三名は寮に戻る事に。
飛鳥は何処か浮かない顔を立たせていた。それは無理もないだろう。祖父の半蔵が身を呈してオールマイトを庇い、腹に穴を開けられ治療を受けてると聞く。
もし手術が上手く成功していなければ、確実に死んでいたであろう。
それでも、半蔵が心配なのには変わりはないし、辛い思いをしたのも事実なのだから。
「では！」
「皆んな有難うな！」
「……」
「それじゃあまた学校で…」
「私は月閃所属ゆえ、夜桜さん達とは違いますが…いつかまた逢いましょう」
「うん、雪泉ちゃん有難う」
「お三方！真っ直ぐ帰ってくださいね？」

「本当に有難う皆んな」
各々の生徒達は、道は違えど無事に家に帰ることが出来た。
今思えばあんな事が起きた後、自分たちが生きてる事其の物が不思議でならない。
無茶をしたとはいえど、生きてるなんて心地もあんまりしないし、何時もと何も変わらない日常を過ごしてる気分でもあった。
だからなのか、あの事件を目の当たりにしてオールマイトが引退なんて事実が受け入れ難い。

それでも、あの場で駆けつけなければどうなっていたのか…と考えると、自分達の行いが間違ったとも言い切れない。
第三者の救い手で戦場が変わった事実に変わりはないし、オールマイトも押されてた。
きっと、爆豪も雲雀も無事では済まなかっただろう。
自分達は無茶こそしたが、その分後悔のないベストを尽くす事が出来た。
「退院……多分、斑鳩先輩や葛姉は知ってるよね……この事」
隠密活動。
病院で母と連絡を終え、切島から話を聞いた時、迷わず頷いた。
しかし、斑鳩や葛城にはその事は伝えてない。

そういえば、柳生ちゃんはどうしたんだろう?
あの流れで斑鳩先輩や葛姉と一緒に病室から出てったのを見たのだが…
とここで不意に疑問を浮かばせる飛鳥は、帰りたくないという僅かながらの気持ちを胸に抱き、帰宅路をぼんやり眺めながらトボトボと歩いていく。
帰る場所は二択だ。
一つ、半蔵学院の忍学科が住まう寮だ。
本校舎とは少しかけ離れてるし、ここからの距離的に考えるとまだ３０分位の道のりがある。

今帰れば「飛鳥さん、何処行ってたんですか？」と斑鳩先輩にしつこく聞かれそうな予感がする。
葛姉に限ってはセクハラ地獄で質問攻めされそうだ。
葛姉の場合は物理的に嫌なのだが、斑鳩の場合は精神的に辛い。況してや爆豪と雲雀の救助へ当たったことが知れれば、確実に怒られる。
自分たちの行いが間違ってたと皆に言われても、自分たちは後悔してないし、間違ったとは思えない。しかし頑固たる斑鳩さんに通用するだろうか？
……どちらにしても余り気乗りがしない。
二つ、実家へ帰宅するか。
祖父の家はかなり古く、テレビを始めとした電子製品の無い家だし、先ずじっちゃんが居ない以上帰っても余り意味がないだろう。因みにばっちゃんは家にはいない。自分が物心が付いた時から家出したからだ。
「お母さん…」
となると、我が家だろうか？
いいや、電話の後に面向き合うのは抵抗感があるので、余り寄りたくはない。
今思えば半蔵学院に入学してから、最近親の顔を見ないなと物心が付いた。
一流の忍を目指す為に修行を励むのは勿論、寮制なので親の身を離れるのは当然。
しかし、忍になる為仕方ないと片付けてたが、よくよく考えれば親が子の身を心配するのは親として当然だし、況してや忍になるのに反対した母親なら尚のこと。
「う～ん……どっちにしても怒られちゃうよね？皆んなはどうしたんだろ？」
柳生ちゃんは実家に帰るって言ってたし（体の傷の問題で安静にする為）、雪泉ちゃんは月閃女学館に戻ると言っていたし、どちらにしろ自分も腹を括って半蔵学院に戻るしかない。実家に行けば喧嘩に

なってしまうし、何よりそんな気分ではない。
「じっちゃんの見舞い……は、ダメかな？」
ふとじっちゃんのことが頭に浮かび、ポツリと声が漏れた。
怪我を負った半蔵じっちゃんの容態も気になるし、孫の自分なら難なく通れるだろうと思ったが
「……あの事件の後に、顔を合わせるのも…何となく気不味いなぁ……」
それなら、雪泉ちゃんや柳生ちゃん、他の皆んなでお見舞いに行った方が良い。
そもそもじっちゃんは、飛鳥は目を覚まさない重傷を負ってるとしか知られていない。
「半蔵学院に戻ろう……」
独り言を呟きながら、気分転換にと少し遠回りする。
ちょっとした散歩だ。急いで帰る必要もないし、息抜きがてらに回るだけだ。
そうして飛鳥は、海浜公園に辿り着く。
ここは砂浜と地平線の彼方に広がる蒼い海が美しい、デートスポットとしてもかなりの人気を誇る場所だ。
半年前まではゴミ広場として使われなかった場所だったが、誰かが綺麗さっぱりと片付けてくれたらしい。
世の中ヒーローですらしない行事を代わりにやってくれる物好きなボランティアも居たものだなと思う。
しかし今は昨夜の事件があってか、余り外に出る人もいなければ、ビーチに足を運ぶ者など自分以外誰も存在しない。
ある一人を除いて――
「綺麗な夕日だなぁ……」
蜜柑色に染まる夕日が沈んで行くのを見て、思わず見惚れてしまう。
こうして外の景色を眺めるのも、心が落ち着いて、リラックスする時には良いかもしれない。
ただ波打つ音と、潮風の匂いが、良い雰囲気だ。これならデートス

ポットとして人気なのも頷けるし、夏になるとここを活用する人が続出するだろう。
なんて思いながら、辺りを見回すと
「アレ?あの人って……」
飛鳥は自分の眼を疑う。
砂浜で軽いジョギングを行なってるのか、痩せ細った身体を動かしてる、何処か見覚えのある姿。
いや、見覚えなんてものじゃない。今日の朝、街で流れたテレビ映像でも観たし、新聞にさえ載ってる姿。
相手は此方の存在に気付いてないが間違いない――

「オールマイト!」
飛鳥は思いっきり大きな声をかける。
ビクッと身体を震わせ反応する八木俊典もとい、オールマイトは飛鳥に視線を移す。
ガリガリに痩せ細った身体、目は窪み、包帯で全身を巻かれてるその姿は、ミイラに近い印象を与えていた。
「飛鳥くんが、来た!!」
口からドバッ!とケチャップのように赤い血が吹き出す。
その光景に彼女はうわぁ…と思うものの、緑谷と本人は慣れてるので突っ込んだりはしなかった。
飛鳥は砂浜の階段を下り、オールマイトに近付いて行く。
「あんまり大きな声で私の名前を呼ばないでくれよ?世間にはもうこの姿を告知してるんだし、色々と面倒事になってしまう…」
「あっ、ご…御免なさい……」
世間にこの姿を曝け出してしまった今、トゥルーフォームの状態でも時折人に声をかけられる時がある。
サイン責めや握手だけならまだ可愛いものの、ヒーロー活動の生活や事情まで聞かれてしまう始末で、とてもじゃないが話し辛い故に精神的にキツイ。
「あっ、そうそう飛鳥くん丁度良かった」

「ん？なんですか？」
「テキサス～……スマッシュ！」
「!?」
コツン…
弱々しい拳を握り締め、オールマイトは力弱い拳で飛鳥の頭にコツンと拳を当てる。
然程痛くない力加減でも、彼の突然たる行動に驚嘆の声を上げるのは無理はないだろう。
飛鳥は目をまん丸にしたまま、オールマイトの拳を頭で食らったまま呆然としている。
「お、オールマイト？」
「なんで……」
「？」
「何で君らが神ノ区（アソコ）に居たんだ!!」
突然、葛藤し出すオールマイトに、飛鳥は黙り込んだまま平然と、真っ直ぐとした瞳でオールマイトを見つめる。
オールマイトが海浜公園にいたのは、連絡した緑谷と待ち合わせていた為。
しかしどれだけ連絡をしても緑谷から返信が来ないので、こうして退屈凌ぎにジョギングを行なっていたのだが、ここで予想外だった事に彼女が来たので、折角と彼女にもここで叱ろうと、拳を振るった。
しかしこんな美少女に強く殴る気もなければ、先ず力も無いのでどの道殴れない。
「全て無に帰るところだったんだぞ……あと少しで君らは！緑谷少年や飛鳥くん、雪泉くんも殺されてたんだぞ！あの男に!!」
その気になれば、オール・フォー・ワンだって直ぐ様、全員殺すことが出来た。
ただ、偶々運が良かっただけ。
偶々物事が上手く行っただけ。
偶々殺されなかっただけ。
もし、少しでも運が悪ければ確実に殺されてた事には間違いないだ

ろう。

「一体誰に似たんだか君は……本当に今でも思い出すよ…！」

天咲光芭――忍名・陽花

彼女の優しさと無茶っぷりは、飛鳥に負けず劣らずで、よく似ている。

オール・フォー・ワン自身も、飛鳥は陽花と似ていると言っていた。

だからもし半蔵の孫である彼女が、陽花に似ても似つかない彼女が殺されて仕舞えば、それこそ立ち直れない。

また、最愛の彼女が殺された気がしてならないほどに。

「飛鳥くん私ね、知っての通りもう体を動かせる立場じゃなくなった…ヒーロー活動も出来ないし、片方の腕はもう使えないし神経が殆ど無い。ワン・フォー・オールの残火も完全に消えてしまい、二度とヒーロー活動に復帰する事さえ叶わなくなったよ私は」

事実上の引退、マッスルフォームすらろくに維持できない衰えた体は、二度とヒーロー社会に羽ばたくことが叶わないことを証明していた。

オールマイトに対する批判の声は無く、これまで無理を通して市民を守って来た彼の勇姿は、世代へと永遠に語られ続くだろう。

「緑谷少年は無茶する度に傷を負うし、君は忍学生だというのに、無茶な危険を冒すし…」

忍学生でも、任務となれば無茶や無理を通す時はある。

それが忍として活躍するのであれば、仕方ないこともあるだろう。危険を冒してまで何かを成し遂げるべき目標があるのなら、それが忍としての運命なら、通すべきなんだろう。

しかし、今回の件は幾ら善意で働いたとしても、叱らなければならない。

「だから――君達が無事で本当によかった」

すると、オールマイトは飛鳥の頭の上に掌を乗せる。

「えっ？」

「あんな危機的な状況で、君たちが無事でいられた事が何よりも嬉しかった。
怪我もなくて本当に良かったよ」
すると、オールマイトは痩せ細った身体で、彼女を抱きしめた。
陽花と面影が重なってる飛鳥を、まるで亡くなった盟友と再会したかのように。
オールマイトの頬に一筋の涙が滴る。
「もう、これ以上大切なものは奪われたく無いんだ……だから、君らが生きててくれて良かった……」
嘗て悪の象徴は陽花の全てを奪い去り、あろうことか師匠の孫である志村天狐を、陽花の妹である魅影を、奪ったのだ。
だから、もうこれ以上自分の大切な存在を奪われて欲しくない。
だから嬉しかった。
誰も失わず、守り通し、彼女達は危険に身を冒してでも無事に成し遂げることが出来たのが。
小百合が言ってたように、先生としてまだ甘い部分があるだろう。
それでもこれを喜ばずにはいられない。
「オール……マイト」
飛鳥は弱々しい声で、喉を振り絞るように声を出す。

「ワン・フォー・オール…平和の象徴としての次の世代は緑谷少年だ……けどね、君らがもし、忍を目指すのなら…カグラを超える気で臨んでほしいと思ってる」
私の体では、戦うことも、災害救助もろくにままならない。
しかし、先生として教えること、伝えることは出来る。
自分が生きてるのなら、この命を違うことへ使うことだって出来る。
「私は雄英の先生として、そして君たち次世代へ託される忍達の先生になりたい」

ヒーローとして復帰することが出来なくなっても、次世代へと受け継がれる子達を強く、教育する事は出来る。
もう、オール・フォー・ワンのように二度と大切な全てを奪われない為にも、最善の手を尽くす。
嘗て、志村菜奈が私にそうしたように、陽花くんが次世代の忍達に想いを託そうとしたように、今度は私が師匠と親友の為に動く。
私の命は、そのためにあるんだ。

「だから、この先頑張ろうな!!――カグラになるのは、君たちだ」

飛鳥の眼には、目一杯の涙が溜まっていた。
じっちゃんの時といいオールマイトと言い…なんで泣かされるんだろう。
なんで、私たちの為にここまで必死になってくれるんだろう…なんで？
「なんで、オールマイトは……私たちの為に……そこまでして？」
「私が平和の象徴としてだけでなく、亡き親友の分まで、生きて頑張ろうって思ったんだ。あの子がやり残したことを、私が全うする為、そして、私自身の余計なお節介さ――」
余計なお節介は、ヒーローの本質なのだから。

「あ……ああ……あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ〝あ〝ぁぁぁぁ!!!」

彼の優しさに、飛鳥は身を包まれながら腕の中で泣いた。
緑谷のように、オールマイトの事に関して詳しくはない。
しかし、オールマイトはこんな自分たちに命を懸けてまでも育て、守ろうとしてくれる。
それが嬉しくて、でもオールマイトが引退してしまって、色んな感情がごっちゃ混ぜになる。
「君もまた、私の大切な生徒だ。だから、先生が生徒のために励み頑張

るのも、当然なんだ」
カグラになるのは、何も一人だけじゃない。
忍の数だけ、カグラになれる可能性があるのだから。

オール・フォー・ワン。
お前のシナリオはきっとこうなんだろう？死柄木弔は悪の象徴として、漆月はカムイとして想いを次世代へと後継したんだろう？
もう、これ以上お前の好き勝手にはさせない。私がソレを赦さない。
だから、ヒーローに戻れなくても、それでもお前の思惑通りにはさせやしない。

こうして、オールマイトによる平和の象徴としての時代は終幕し、海浜公園に渡る静かな海風の音だけが、漂っていた。

仮免取得編
１２０話「始まるぞ寮」

神ノ区半壊事件を始めとし、社会は大きく変わった。
市民による人々の価値観、社会への信頼は、まるで塗り潰されたかのように変わり、今後どう未来を生きていくのかさえ不安な始末。
その大きなキッカケが――平和の象徴・オールマイト引退という、揺るがない大きな事実。
全国のニュースでも記事が取り上げられており、既に五年前から事実上活動出来る体ではない事が判明された。
二度と復帰する事すら叶わないその身体の傷と負担は、これまで幾多ものの命を守り続けて来た、ヒーローの名誉を飾るに相応しい代償だった。
アメリカでも起きた謝罪会見、不安と気難しい気な口はあったものの、彼を責める人間は誰一人として存在しなかった。
次にＮｏ．２燃焼系ヒーロー・エンデヴァー。
オールマイトとエンデヴァーの、一位と二位の差は天と地ほどに大きく存在するも、オールマイトが引退した事により、現世代のＮｏ．１を飾るのが彼に当たった。
市民の難儀な声も上がっており、本人自身も納得のいかない顔立ちではあるが、ヒーロー社会の流れから察すれば当然の結果。
また、エンデヴァーに対する不満や批判の声も僅かながらに上がっている。
Ｎｏ．４ヒーロー、ベストジーニスト。
神ノ区、敵連合捕縛及び人質救助の任務の結果、大きな傷害を受けた為、長期の活動は休止。

ヒーロー活動を復帰するには時間が掛かるとのこと。
更にＮｏ．３２ヒーロー
ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ。
四味一体、集団活動で働くヒーローチームの内１名、ラグドールが敵連合に拉致された後、何かしらの原因によって個性が発動出来なくなったという変調が発生し、今後のヒーロー活動は難しいとさえ言われてる。
世間では公表されてない、極一部の人間が知る事実なのだが、ラグドールが個性を扱えないのは、個性が無くなってしまったからであり、よってラグドール自身無個性という体質になってしまったのだ。
その元凶たる男が悪の象徴・オール・フォー・ワン。
彼に個性を奪われた為、彼女がヒーローに戻るのもほぼ無理に近いとさえ言われており、今後、チームの活動は不明。

次に話すは忍が生きる影の世界、忍社会。
神ノ区で起きたあの大規模な被害により、忍の存在が明かされてしまった今、今後とも忍の活動は変化し、表社会に羽ばたくヒーロー達との協力も欠かせない物となって来た。
忍側で起きた出来事――
オールマイトを庇った伝説の忍・半蔵は致命傷を負い一命は取り留めた物の、二度と忍として影に舞い殉じることは叶わず、普通の生活さえどうかと言われている。
なお、市民からは忍の存在や隠密にしてた動機など疑問を問われており、今後ともイメージを改良するべく、ヒーローと協力する忍が必要となって来るとの事。
――次に秘立蛇女子学園
負傷者は学園長を始め、鈴音、雅緋、忌夢の四名が重傷を負い、　体への負担も大きいと言われている。
学園長は悪忍が取り扱う忍専門病院に搬送、入院し、復帰するのは不明。少なくとも命に別状はない。
鈴音も同じく入院したものの、今後は二度と忍の活動が出来ないと

医者に告げられた。
元々鈴音は、神威討伐任務に当たっており、成す術無くオール・フォー・ワンに倒され負傷した結果、後遺症が残り、忍として活動することも不可能に近いと言われていた。
しかし今回無理を通して来たものの、二度目の重傷を負った事により、オール・フォー・ワンの言葉通り、普通の生活すらままならなくなった。
雅緋は深い傷を負ったものの、命に別状は無く、忌夢同様復帰するのに時間はかかるが、理事長見たく長引くことはないらしく、治療を受ければ直ぐに回復するそうだ。
オール・フォー・ワンの正体不明な個性、仮称〝指先から衝撃を放つ〟個性を一発喰らったとはいえど後遺症もないのは、血塊突破をした彼女の精神とタフネスにあるのだろう。
忍の存在が明かされた今、日向も日影も跡形もなく無くなってしまった現代。
オールマイトの穴を埋める新たな戦力、そして忍へのイメージ改良。
この二つが課題点になるだろう。

ただ、忘れないで頂きたい――

忍は、戦国時代から既に存在してる身。
故に忍とは妖魔を滅する者、影で暗躍する闇の使い。
忍が今も存在するのは、妖魔を討ち滅ぼす為。
そして――神威と呼ばれる邪悪な神を滅する為。

妖魔は今も――生きている。

山岳地帯。

立入禁止区域として、硬く足を踏み入れる事を禁じられた地区。
人気もない、雑草すら生えないゴツゴツとしたこの場所は、足場が悪く事故を起こす危険性が高い為、危険スポットとしても有名であり、立ち入るにはどうしても上層部への許可証が必要なのである。
ヒーローや忍すらも迂闊に近づけない、手も足も出すことの出来ないこの場所には、確かに何者かがいた。

「……」
薄っすらと見える人影。
黒いマントで身体を覆うその巨躯は、ざっと三メートルはあるだろう身長の高さ。
大型敵と比べるとさしずめ、巨体と呼ぶには相応しくないが、常人の約二倍の高さがあるだけで、巨人と呼んでも過言ではないだろう。
「……フゥー……フゥー……」
僅かに震えてる息遣い。
口からは血生臭い匂いが放たれ、呼吸をする度に真っ赤な血の吐息が漏れる。
ポタポタと溢れる涎は、ジュワリ…と音を立て消化される。
黒いマントを覆う者は、忌々しそうに新聞を広げ、ある一点の記事を読めば、より苛立ち新聞を滅多打ちに破け散る。
一件の記事を見つめていたのは只一つ。
――『神ノ区半壊。敵連合のボス、巨悪逮捕!!』という記事。

「――グルルゥア……忌々……しい……」
噛み殺すかのように歯を食いしばり、獣の唸り声を上げ、全身の血管が浮かび上がる。
屈強な身体は豹のような黒い体毛で覆われ、狼のような口に獅子の顔立ちをした異形の男は、横に仰向けに倒れてる死骸を鷲掴みにし
――グシャリ!!

顔面を食らう。
死骸特有の腐臭が辺り一面に漂うも、御構い無しと表情一つ変えず、黙々と喰らい続ける。
骨も食い、内臓を食い破り、血で喉を潤す。
「もっと……もっと……妖魔を食わねば……」

この者が食してる死骸は、正真正銘――妖魔。
下半身が百足、上半身は花魁のように美しい女性の姿をした人間。
今彼が食してる死骸は、神隠しに遭うと言われる地下洞窟に巣食っていた妖魔だ。
「何故……いつもいつも！忍が世を蔓延る……俺の元から奪い去る……!!!」
血走った目に忿怒を燃やし、歯軋りを立てる。
男は青筋を額に浮かばせながら、妖魔の腸を食い荒らし、ニッチャニッチャと嫌な音を立てながら死肉を噛み殺す。
「……偉大たる厄災の神が……また一人…減った……」
音立てず立ち上がる屈強な男は、眼光を赤く光らせ、涎を垂らしながら漆色に塗られた爪を輝かせ、体毛を掻き毟る。
「……早く……願望を……使命を果たさねば……」

妖魔を喰らう男の名は――獄獅狼
〝悪の象徴〟オール・フォー・ワンがタルタロスに送り込まれた事により、現在で尤も危険的な害意を及ぼす、忍の天敵。
忍を憎み、世界に拒まれ、人間を辞めた者――
次世代の――新たなカムイである。

爆豪と雲雀が拉致された二人は、警察の手続きが終わった後、直ぐに自宅へと送られた。
警察の事情聴取や、本人身調べの確認は面倒で、終わった頃には夕暮れだったそうだ。
調べた結果――爆豪勝己と雲雀の両者は傷痕や個性による害意を受けた痕跡は無く、無傷で済んだようだ。
しかし内心は個人による問題なので、今後カウンセリングを受ける必要があると警察から言われている。

何がともあれ、こうして二人は無事に救出された。

――そして一週間が過ぎた。
こう言ってしまうと唐突な物言いに聞こえるだろう。
しかしこの一週間は雄英高校に於いて、忍学校においても有効な時間且つ敵に対する危機意識、生徒への安全性を立てることが出来た。
現代の超人社会、平和の象徴オールマイト無き今、絶対戦力が失われたことにより、平和の秩序が乱れ、世の中は少しずつ犯罪の魔の手に染まりつつある。
雄英高校は敵連合に二度も襲われ（ステインと死柄木、漆月は遭遇という事故）、市民達による難儀の声が上がっているのはお解りだろう。
僅かだが、オールマイトが雄英に赴任したのが問題と言う批判も上がっている。
数々の不安を重ねるにつれて、雄英の安全性による保証が薄れ、生徒の命が危険に晒される畏れが高くなりつつある。
体育祭見たく折れない姿勢を作り出すのも困難。

そこで――全寮制

拭いきれない不安を取り除くことは難しく、これからはより危機意識を保ち生徒の命を守り育たねばならない。

敵連合という存在だけでなく、世の中には犯罪の手に染めた敵が影でうようよといるもの。前回の騒動の波に乗り、馬鹿騒ぎをする敵も不思議では無い。

だからこそ、今度は雄英の教師陣達で絆を紡ぎ、強くしていかなければならない。

オールマイトというたった一人の英雄が繋ぎ止めたヒーローへの信頼を。

――次に忍学生の扱い、これは既に考え対策している。

オールマイト引退の事実にいち早く対策するべく、『不雪帰』が月閃家直系の忍を二名派遣させ、新たな敷地を設け――『忍基地』を設立させた。

忍基地とはその名の通り、忍専用の基地。

元々、〝シノビマスター〟という大規模な大会の為として用意されたらしいが、特例中の特例、及び体制を整えるべく創建したらしい。

莫大な資金を費やすも、負担は名のある財閥家達が出資しているらしいので、心配は無用らしい。

そもそも、巨大仮想敵という軍人が使用する兵器を所持している時点で知れてるが――

また忍基地は雄英の寮とは少し離れた場所に設立されてるので、距離感や授業の支障は出ない。

雄英生達と同じ寮にしなかったのには理由が存在するものの、決断したのは校長である。

学生寮と、忍基地と言う忍の寮。

因みに雄英の方の寮はA組とB組の二手に別れており、忍基地は半

蔵学院と死塾月閃女学館の二校を合同にしてるそうだ。
なんでも忍学生の数は少ない故に、ペースも空いてるので、問題無いそうだ。
これも合同任務…として理に適ってるそうで、反対の意見は無かった。
半蔵学院は元々全寮制なので、手続きや説明、親の公認に手間はかからなかったし、月閃女学館も寮制なので異論は無かったそうだ。
当然といえば当然なのだろうか、手を焼いたのは雄英生たちの方だ。
忍学生と比べてヒーロー学生の数は1クラスで２０人も所属しいるので、家庭訪問は二手に分かれて行われたのだ。
Ａ組は担任の相澤とオールマイト、Ｂ組は担任のプラドキングと校長・根津。
オールマイト曰く、一番危なかったのは緑谷出久だったらしい。
危うい…と言っても家庭内による暴力という訳ではないが、緑谷だけ違う学校へ転入させられる所だったのである。
他の方なら致し方仕方ないことはあるが、彼はオールマイトの後継者、そしてオールマイト自身には弟子を育てるという師匠の役目がある。
師の元から離れてしまうのは無理にも程がある。
しかし親の意見を聞いた上で、物事を丸めて解決出来たのも、師匠であるオールマイトのお陰だろう。
こうして無事、何事も怖れることなく全員、全寮制として新たな学生生活がスタートした。

雄英高校、校長室。
植木鉢や本棚が部屋に並べており、いい味を出している。
机の上には雄英に関する資料は勿論、忍学生による情報資料が置かれていた。

「忍学生も全員寮制の公認を貰ったし、今後は一先ず様子見かな…
取り敢えず忍基地の件、感謝するよ――『閃光』くんに『月光』くん」
「いえいえ、雄英が困ってる以上見過ごす訳にはいけません。
お力添えになれたのなら光栄ですし――」
「ああ、不雪帰様の命令でもあるからな」
妖美で穏やかな性格をした、柔らかな笑顔を絶やさず振る舞う少女の名が――月光。
月光とは対照的に違い、クールな振る舞いで沈着冷静という言葉そのものが具現化したような少女が――閃光。
二人は死塾月閃女学館創始者である月閃家直系の忍であり、腹違いである。
月光の腹違いの姉が閃光
閃光の腹違いの妹が月光
見た感じ二人は双子のようにも見える故に、二人でいる事が多い。
そして二人もまた、死塾月閃女学館の中等部所属である。
因みに月光は月閃女学館の購買部の役割を担っていたものの、二人ともとある事情で学校から離れ、海外に出張し修行を受けていたらしい。
「いやいや、充分に感謝してるさ。忍学生とはいえ学生の身……今までは漆月の件で協力態勢に謹んでた訳だが…一筋縄じゃいかないようになってね」
「敵連合の件ですか」
「うん。生徒が拉致されたのは我々にとっても大きな痛手となった……それだけじゃない、忍学生も狙われる後始末じゃ例え運良く二人とも無事に救出出来たとして、その後のことも考えると安心なんて出来やしないからね」
事の発端はＵＳＪ襲撃から始まり、次に林間合宿でも敵連合の襲撃を受けてしまった。
裏でオール・フォー・ワンが操っていたという説もあるものの、どれも具体性がなく、根拠もない。

今後こう言った生徒の襲撃を許してしまえば、今度こそ雄英高校の安全性も無くなり、批判は殺到するだろう。
況してや生徒達の命を狙えるのは、学校だけとも限らない。
オールマイトがいない今、外出中に敵と遭遇し被害を受けたでは話にならない。
生徒の命を考えて、全寮制にしたのである。

「しかしそれはあくまで表面での話……本当の目的は幾つかあるのだろう校長？」
「流石は月閃家の忍、中等部所属とはいえ、伊達に並みの修行を受けてる訳じゃないね。その通りさ――
これはあくまで世間の目を誤魔化す為、生徒達の命の安全性を保証する為の手段…本領は――〝内通者〟探し」
職員会議でもあったように、幾つか不可解なケースが存在する。
ＵＳＪ襲撃の時など、マスコミを利用し、混乱に乗じてカリキュラムを奪うなんて考えはオール・フォー・ワンか主犯格である死柄木達の考えによるものかもしれないが、それにしては呆気ない。
生徒達の情報も知らないとはいえ、オール・フォー・ワンも忍の存在を知っていたとはいえ、雄英高校自体に忍学生を派遣した情報は国家機密、教師陣にしか教えてない。
考えすぎであれば、敵連合の手が一枚上手だったとも言えるが、問題が大きいのは林間合宿だ。
親や生徒には内密にし、林間合宿の行先は教師と合宿先に務めてるプロヒーローでしか知らないようになっている。
前にプレゼント・マイクが言っていたように生徒達の位置情報などのケースもあり得るし、生徒の内通者疑惑も立っているが、向こうは生徒達全員を殺害しようと息巻いていた。
そんな連中が、態々内通者も巻き込み殺そうとするだろうか？
聞いた話によると、毒ガスと炎の森で囲まれ、大きな被害をもたらしたと聞いた。
実際にＢ組の殆どの生徒が被害に遭ったと聞いている。

その中で安全な生徒も極わずか…とても生徒だとは考えにくい。
そうなると、教師陣の中に情報を連合に流してる人物がいると見なして良いだろう。
といっても１００％白だと証明することは出来ないものの、そのキッカケを掴むの事くらいは出来るはず。
「雄英学生と、他校の忍学生、二つの寮を分け隔てたのもそのためさ」
「成る程…忍学生にも内通者がいる危険性がある。
外は監視カメラで捉えてるし、怪しい動きがあれば駆けつけに行くという事か……」
「その通りさ！私も出来れば生徒に疑いの目を向けるのは胸が裂けるほど辛い…教師達もね。
職場の中でも彼等は仲間みたいなものさ、そんな中に内通者がいるとも考え難い…
それでも立場上は仕方ない」
「下手に動かすよりも泳がせて尻尾を掴む…という考えには大きく賛同です」
月光は優しい上に上品で大人の雰囲気を曝け出す、お淑やかな一面を備えてるが、こう見えても意外とサドっ気もあるのだ。
こう言った戦法は実は得意だったりする。
「君たちも、ここに来た以上やるべき仕事は沢山あるだろうが…どうか、我々雄英と供に、明るい社会を…未来を築き上げていきたいと、心の底から願っている」
「勿論です……敵の活性化…そして抜忍の悪事による暴走が働けば……」
「血の匂いに嗅ぎつけ、妖魔も増えるだろう……
いや、既に何匹かの妖魔も動き出してると聞く……野生型ならカグラが対応してるも、特殊な妖魔は話は別だ」
特殊な妖魔とは、人間の体に妖魔が住み着いた、又は人間が妖魔になった特殊な個体が存在するそうだ。
忍の血が集い造られた妖魔などはカグラでも対処出来るので、補充さてあれば問題ないという上層部の意見が多かったが、人間の体と妖

魔が合わさった特殊な個体はレベルが違うらしく、カグラの殆どが殺られたという報告もあったそうで、現在はカグラを呼び集め、近々会議が開かれるそうだ。
「うん、有難う。それじゃあ、不雪帰に宜しくと言ってくれると助かるよ」

雄英高校。
現在、出来立てホヤホヤのハイツアライアンスを前に、一年Ａ組のクラスが全員集合した。
「えー、取り敢えずＡ組。何事もなくこうして無事にまた集まれて何よりだ」
相澤の言葉に周りはザワザワと喋り出す。家庭訪問で全寮制の説明をするのに回ったとはいえ、厳しい反応もあった。
林間合宿でガスの被害を受けた耳郎と葉隠や、複製腕とはいえ腕を斬られた障子、黒影で暴走し連合に拉致されたかけた常闇、そして合宿で飛鳥に負けず劣らず重傷を負った緑谷。
相澤は途中でオールマイトと別れ（緑谷の家庭訪問に行って）違う家を一人で回っていたので、緑谷の事情は分からなかったが、オールマイトから聞いた話だとかなり厳しかったようだ。
「けど全員集まれたのは先生もよ…会見を見たときはいなくなってしまうのかと思って悲しかったの…」
蛙吹梅雨の言葉に隣に立っていたお茶子も軽くうん…と頷く。
相澤やブラドの二人もかなり厳しい状況下、退職なんて事にならなかったのも、オールマイトの事件を通してという意味も含めている。
もし生徒に何らかの被害があれば、それこそ取り返しの付かない事

態になっていたし、下手すれば教師退職なんてレベルでは済まされなかっただろう。
教師というものは、教育者であり生徒の命を第一優先に考え責任を負わなければならない。
こう言った意味ではヒーローにしろ教師にしろ、先生というものがどれだけ大変なのかが解る。
「俺もびっくりさ…色々あったんだろうよ…俺も〝あの人〟も…」
あの人…とは霧夜先生のことである。
今回の件で霧夜は上層部に責められており、下手すれば切腹すらもあり得た話なのだ。
しかしこうして爆豪と雲雀が連合の悪意に誘惑を受けることなく救出された為、今回の件ではオールマイトと半蔵の事もあり、お咎めは食らわなかったそうだ。
「さて、寮の説明の前に重大な話がある。
当面は合宿で取る予定だったが…仮免取得に向いて動いて行く。勿論、忍学生もな」
「わ、私達も？」
飛鳥の少し予想外な声に相澤は黙って首を縦に振り頷く。
「忘れがちだが…お前らが雄英と協力関係に当たってるのはあくまで漆月処罰の任務…だった筈だ。
しかし漆月が敵連合と接触した事によって、漆月だけでなく追加任務として連合の捕縛も加わった…
上層部が下した任務を受けてる身だ。よって連合に対して忍術を使用するのに許可を取る必要はないが、他の場合…話は別さ」
任務中での忍法使用は個人に任せられてるので問題は無いが、それ以外は話は別だ。
もし連合や漆月とは無関係な敵と遭遇したとしても、戦闘は許されない。
蛇女を始めとした悪忍が許されてる辺り、平等の批判もあるが、ソレは善忍と悪忍の区別のため仕方ないだろう。
何しろどれだけ正義感があって善良な行動に移ったとしても、下手

すれば警察やヒーローが駆けつけに来る騒ぎにもなる。
近々犯罪率が上がれば当然、あの後の余波に当てられ暴走する敵が世の中に溢れるほどなど時間の問題。
雄英生は勿論、忍の存在が明るみになった彼女達にすら厄災が降りかかるだろう。
そのため、忍学生も仮免取得が必要になったのだ。
林間合宿では特に気にしてはなかったものの、今じゃ仮免は必須だ。
「おお！それじゃあ――」
「と、そしてもう一つ」
瀬呂の胸弾ませる歓喜の声を上げようとした矢先に、相澤のドスの利いた声が、沈黙を作り出す。
また合理的主義か？と反射的に考えて込んでしまう。
「緑谷・轟・切島・飯田・八百万・飛鳥・柳生……以上が、あの夜あの場で爆豪・雲雀の救出に赴いた」
しかし、全員の予想は相澤の言葉に裏切られ、思わず息が詰まった。
病院での出来事、全員は反対した。
飛鳥と柳生は忍専門病院だったのでお見舞いに行けず、彼女二人が同行したのは夢にも思っていなかった。
この七人が、あの夜大規模な被害を受けた街にいたのかと考えるだけでゾッとする。
ソレがどれだけ危険なのか、下手すれば死人がいても可笑しくなかったものの、生きてるだけで奇跡のようなものだ。
「って言っても、忍学校…他校にも一人…雪泉と言う生徒とも同行してたそうだがな…
全員で八名だ。
その様子だと行く素振りは皆も把握してたワケだ

飛鳥と柳生は…当担任の霧夜先生からこっ酷く言われてると思う…ここでとやかく言うのも何だが…一応今はお前らの担任としても務めている。
色々棚上げた上で言わせて貰うよ――もしも、だ。
オールマイトの引退が無けりゃあ俺は、爆豪・耳郎・葉隠・雲雀以外全員除籍処分にしてる」
『!』
相澤の切り捨てたような物言いに、一同は息を呑む。
相澤は元々無駄が嫌いな合理的主義の人、ソレは入学初日の個性把握テストの時点で知っている。
況してや冗談嫌いな先生なのだから、問答無用で除籍処分にしてるのも可笑しくは無いし、寧ろオールマイト引退が有ったからこそ、こうして全員集まる事ができるのだ。
飛鳥と柳生の二人を除籍処分…と言うのは、些か可笑しいものだが、任務外で無茶無理無謀を通して死んでしまう危険なケースを考えると、学校に生徒を置いて行く訳にもいかない。
学校で死ぬことなど先ずあり得ない…といえば、超人社会何が起きるか解ったものではないので言い切れる確証はない。
「彼と飛鳥のおやっさん…半蔵の引退。明るみになった忍の存在…今後しばらくは混乱が続く。
敵連合の出方が解らない以上、今雄英から人を追い出す訳にはいかねえし、忍との協力体制も維持したいのが本望。
行った八人は勿論、把握しながら止められなかった者全て理由がどうあれ俺たちの信頼を裏切ったんだ。
お前らが負い目を感じるのなら、正規の手続きを踏み、正規の活躍をして信頼を取り戻してくれると有難い。まあ、今すぐにって訳じゃないけどな」
クルッと背中を向ける相澤は、空気を切り替えるかのように「さて、報告は以上！中に入るぞ元気でいこう」と無表情で指揮すると皆の表情は変わらず、重たい空気が支配していた。

「相澤先生にいざそう言われると…ね」
「てか飛鳥たち…行ってたの？」
葉隠は見えない顔でため息をつき、耳郎は横目で心配するよう彼女に声をかける。
飛鳥は「うん…まあね」と浮かない顔を立てながら頷いた。

雄英高校の全寮制の前の日、家庭訪問を終えての翌日。
半蔵学院の方では今後の教育方針と、全寮制に応じての説明が行われていた。
飛鳥たち三人は元々寮制だったので、雄英の寮に移るだけで難しい話は特に必要なかった。
因みに先輩の斑鳩、葛城の二名は卒業試験が迎えてるのと、半蔵学院にこれ以上人手が減れば学校側の立場も意味もないので、残念ながら寮に移る話は無いそうだ。
何しろ雄英から半蔵学院の距離は遠いし、霧夜先生が教師である意味もなくなってしまう。
月閃女学館も同じ理由だそうで、三年の雪泉や叢も移る事が出来ない。
それだけならまだしも、今回呼ばれたのは寮制の話だけで無かった。
「任務外での活動……忍術使用や殺生…又は担任の許可なく勝手な行動をするなと…あれ程言ったはずだお前ら……」
上層部の呼び出しから一夜明け、霧夜先生の顔はいつに増しても険しかった。
今回怒られてるのは飛鳥と柳生、雲雀は拉致された被害者なので、関係ないといえば語弊だが、お咎めは無しだそうだ。
今回の件は、無許可で二人の救出に案件で叱責を受けていた。

教師の立場として、例え仲間を救うべく善良な心で行動を取ったにしても、幾ら何でも今回は情で勝手に首を突っ込んではいけない。
「蛇女の時とは違う…ヒーロー殺しの件とも別……超重要任務ゆえ、あと少し違っていれば…お前ら死んでたんだぞ!!」
霧夜の鬼気迫る怒号が飛ぶも、二人は表情を変えない。
柳生にとっては、アレがどれ程間違いだと上から責められようと、自分の心の中では「最善の手であり、正しいことをした」と思っている。
どれだけ他人から否定されようと、自分の行いが間違いだとは思わないし、悔いてもない。
逆に忍とは言え、雲雀を救って違法だと罵られ抜忍にされても、問題ないとさえ思っていた。
もし、妹の時みたく、二度と大切な存在を失わずに済むのなら…と。
「どれだけ善良の行いだろうと、お前たちはまだ学生の身……上の許可なく勝手に行動しろと俺が教えたか?」
「いいえ…」
「なら――「でも、これだけは言えます」――?」
霧夜の声を遮るように、飛鳥は立ち上がり、視線を逸らすことなく、真っ直ぐ面向かって口を開く。
「もし、あの場で私たちが動かなかったら、オールマイトは殺され、爆豪くんと雲雀ちゃんは助からなかったと思います」
迷わず、何の躊躇いもなく断言した飛鳥に、隣にいた柳生や、直面の霧夜は勿論、襖越しで聞いてた斑鳩と葛城の表情が曇り、動揺する。
確かに、忍とはいえ学生の身。ましてや飛鳥は林間合宿の襲撃で相当な痛手を食らっていた。
戦力も未知数な相手の巣窟に行き、二人の救出をするなんて端から聞けば無謀にも程があるし、霧夜先生がこうして怒るのも無理はないだろう。
しかし、目の当たりにした当の本人だからこそ、事件を目の前で目

撃した自分だからこそ、言えるセリフ――

「私たちのやり方は…間違ってます。良い意味でも悪い意味でも…
でも少なからず私たちは、自分の行動に悔いがあるとは思えません！

そりゃあ…心配かけたのは充分に悪いですし…言い返せる立場じゃありませんけど…

でも、任務だからっていうのは可笑しいとは思います」

生徒の身を考え叱責するのも、怒りをぶつけるのも、致し方ない。

もし自分が先生の立場なら同じことを言うし、昨日親にこっ酷く叱られた。

雄英高校の任務も反対されたし、話がエスカレートして半蔵学院もやめる話に持ちかけて来た。

でも――任務外だから叱られるのは可笑しいと思う。

無許可で忍法を使用したり、殺生を始めとした悪事を働くのは悪いことだ。

それで抜忍が増えてるのも事実だし、其れに関しては特に何も言わない。

だが、例えそれが世の為人の為に、そして仲間を救う善良な行動でも、任務が無ければダメなのだろうか？

人が目の前で殺されかけてるのに、助けてはダメなのだろうか？

上層部の命令だから？

じゃあ自分たちは…傀儡なのか？

違う。自分たちには心がある、上から見ては道具に見えるだろうが、少なくとも傀儡や消耗品ではないのも確かだ。

「任務じゃなければ、正しいことをしてはいけないんですか？

私たちを道具として使ってるのなら、傀儡でも問題ないんじゃないですか？」

「飛鳥……お前はまだ――」

「学生なのに、こんなこと…言いたくないんです……でも、〝言って貰った〟から」

あの人に――生きてて良かったと。

あの人に――これから頑張ろうなと。

あの人に――次は、キミらだと。

本当に自分たちが任務に従うだけの駒なら、道具なら、果たして世界に名を馳せ轟かせるオールマイトが、自分の命を使ってまでも忍を守ろうとするだろうか？

そもそも、忍とは何なのか？

今に生きる忍たちは、何をどうしたいのか？

忍が今も生きてる理由とは何なのか？

昔までは、そんな事微塵も感じなかったのに…それなのに、あんなことを言われたら、自分たちが忍として生きる価値基準を見つめ考え直したくなるのも、必然。

考えに考え悩んだ結果、飛鳥が出した答えとは――

「だって私たちは、余計なことをするのが普通だと思うからです」

余計なお節介はヒーローの本質であるように、余計なことをする事が、忍の本領だと思うから。

霧夜先生は、面食らった顔で飛鳥を見つめていた。

霧夜だけじゃない、聞いてた葛城と斑鳩も、雲雀も――

「余計なことって……」

「だから、任務だろうとそうじゃなくても、余計なお節介をするのは…当然じゃないですか？」

自分の過ちを正当化する気は更々ないし、正直言って危険を冒して叱られるのは別に問題ない。

だが、任務だからというそんな道具みたいな物言いで言われるのは気持ちがスッキリしない。

忍は道具？それなら何故ロボットや傀儡に任務を任せないのだろ

うか？
忍である人間が手を汚すより、任務の為だけならば、傀儡など意思の持たない者が物事を成せば何も問題ないはず。
それでも世の中忍が必要なのは、妖魔の殲滅はもちろん、余計な物を守る為だからだと思う。
ヒーローが人々に笑顔を作るのなら、忍は笑顔を守る側。
「……参ったな…こりゃあ」
霧夜は思わず押され気味で苦虫を噛みしめる。しかし決して怒りに満ち溢れた顔立ちじゃない。
「何を言っても無理そうだな…まぁ、一応相澤先生からの話もあるだろうが……生徒にここまで言わされるとは、いっぱい食わされた」
飛鳥の言葉に納得がいく。
彼女がここまで教師に強く、熱心に語ることなど今まで無かった。
一体何が彼女をそう変えさせたのだろうか？
それ以前に、前まではこんな大それた事は言わなかった。
何がともあれ、善良な行為をした人間を責めるなど、本当の自分だったらしないだろう。
「解った…少し言いすぎたな…」
よかった…と心の奥底で呟く飛鳥。隣にいた柳生も思わず頬が綻び生じる。
「だが、それはあくまで任務としての話…個人的な説教はまだだぞ」
で、ですよね～…
と、心の中で少女は少し落ち込んだ形で呟いた。

「とまあ、そんな訳で色々とね…」
「色々とねって、飛鳥。もし相手が相澤先生だったら言える？」
「い、言えなくもないけど…あの変な布で縛られるのは間違いないんじゃないかな？
けど相澤先生は、私たちのことを心配しただけで、任務だからとかは言わなかったから…」
勿論、相澤先生は忍の教師ではないので強くは言えない部分もあるし、相澤先生なりに心配する事もあったのだろう。
「おいお前ら、早く入れ」
「あっ、はーい！」
相澤の呼び声に、立ち話をしてた飛鳥と耳郎は急かすように足早と雄英の寮に入っていく。
今日から新たな新生活。
変わったようで変わってないような、そんな曖昧とした時間を過ごすのだろうか。
こうして、雄英生達の寮生活が始まった。

１２１話「部屋決めやろう」

雄英の寮は思いの外施設が整えており、一階は男女共有スペースになっている。
食事、洗濯、風呂、中庭もあるという、中々に快適且つ充分に施設が揃っている。
最新型の大型４Ｋ液晶テレビに、生地の良い黒色のソファ、黒色に彩られたテーブルが置かれている。
キッチンや冷蔵庫、エアコン等、設備がある分、生活に困らない。
因みに風呂、洗濯は男女別である。大事なことなのでもう一度、風呂と洗濯は男女別である。
部屋は二階からになっており、１フロアに男女各４部屋の五階建て。
一人一部屋には、エアコン、トイレ、冷蔵庫、クローゼット付きの贅沢空間。
ベランダもあり、外の景色は森を空想させるかのような光景。
木が沢山植えられており、ここが学校の敷地内だとは考え難い程の出来だ。
因みに八百万曰く、部屋の大きさは我が家のクローゼットと同じ広さだそうだ。
部屋の組合は相澤先生が既に決めたらしく、席替えみたく変更は無いそうだ。
各自、事前に送って貰った荷物が部屋に入ってるので、今日は部屋作りで授業は無いそうだ。
そもそも、一人で自分の部屋を作らなければならないので、授業をする暇はそもそもないだろう。
八百万なら尚更、彼女の家は超が付くほどのお金持ち。
先ほどのように部屋の大きさは考慮してなかったのか（育ちによる上、充分に考えてたものの）荷物が多過ぎて送り返す羽目となったそ

うだ。
必要最低限の家具を残すしかないらしく、今日一日で終われるかどうかさえ不安な後始末である。
轟は部屋の中が和式でないので、それはそれで不満を持っているらしく、落ち着かない様子でもある。
ある者はスムーズに部屋に家具を置く者もいれば、部屋作りを終えた者もいれば、重い荷物に手こずり悩んでる者、様々な人間が垣間見える。

一方、雄英の寮施設とは少し離れた建物、忍基地の内装は雄英と大して変わらないものの、テーブルやキッチンなどの位置が違えば、数も思ったよりも少ない。
そもそも忍学生の数は合計六名、考えてみると雄英の生徒より数が少ないので、違うのも当然だろう。
雄英寮との違いがあるとすれば、風呂は大浴場になっていたり、闘技場も存在する。
本校に戻れない故に余り外に出れない分、自主訓練として設けているとか。
最新型の傀儡も用意してあるので、訓練に関しては問題ないだろう。
部屋は六つ、その内右側の廊下にある部屋が半蔵学院生徒、左側の廊下にある部屋が月閃女学館の部屋となっており、そこは雄英と変わらない。
部屋の初期内装も殆ど変わらず、生活にも困らないので特に轟や八百万のような個性的な生徒とは違うので其処も問題ない。
「よし、じゃあ部屋の準備しないとね」
一息吸って張り切る飛鳥は服の袖をめくり、荷物が積まれてるダンボールを開けて行く。

ぬいぐるみ、私服、テーブルランプ、クローゼット、小さな物から大きな家具まで丁寧に積まれてる。
中の荷物を持ち運びながら、部屋作りを進めていく。
飛鳥は意気込みながら、部屋作りに取り掛かる。
普通の一般人ならタンスやベッド、本棚と言った持ち運びの際に一苦労する重い家具には時間が掛かり手間取るのだろうが、あいにく此方は忍。
飛鳥は軽々しく部屋に運びながら部屋の整理をしていく。
壁紙やベッドの毛布変え、他にも刀置きや家具の配置などを難なくこなす。
テキパキとした雑のない動き、流石は忍だ。

「なんて意気込んでたけど…思ったよりも…早く終わっちゃった……」

開始してから部屋作りにそこまで時間は掛からなかった。
正直夜まで掛かるかと思ったものの、何のトラブルも無くスムーズに終えることが出来た。
余り部屋の内装を変える機会もなかったので、何処と無く不安な気もあったが、要らぬ心配だったようだ。
部屋作りを終えた達成感により、思わず背筋を伸ばす。
凝り固まり蓄積された疲労から解放されたような感覚に囚われながら、ベッドの上に寝転ぶ。
「はぁ〜……このまま寝落ちしちゃいそうだなぁ……」
今日は訓練や授業と言った物が無いので、いつもより疲労こそ感じたりはしないが、今まで無茶ばかり通し体を動かし続けて来たので、体を気休める日が来るとついつい眠気が来てウトウトしてしまう。

休める時間に休めておく、霧夜先生から言われた言葉を思い出した。
まだ自分が一年生だった頃、柳生や雲雀の下級生二名が来る一年前の話。
一つ歳上の先輩、斑鳩と葛城の上級生二名に対して下級生である一年生は飛鳥一人。
同級生がいない自分は伝説の忍である半蔵の孫という肩書きを背負い、訓練や授業で先輩に遅れを取らないよう、足を引っ張らないように必死になって後を追っていた自分は、気休める日が無く毎日がボロボロの絶え間ない日だった。
それが過酷といえばそうなのだろうが、別に嫌では無かった。
訓練で傷を負ったりボロついたりするのは日常茶飯事だし、斑鳩や葛城だって傷を負うこともある。
それに訓練を通して受けた傷は、成長してる証拠でもある。
それでも毎日が厳しい修行日和の中、霧夜先生は同級生も後輩もいない自分に気遣ってくれたのだろう。
『飛鳥、自分が一流の忍になるだけでなく半蔵様の為を思って修行に励むのは良いことだ。
ただ…無理を通して強くなれるほど世の中甘くない。休める時に休んでおけ、でないと任務で支障を来す場合がある。
休むこともまた、忍には必要だ』

焦っていたのだろう。
一年生の頃は兎に角、一秒でも早く強くなりたい、修行を通してじっちゃんの名に恥じぬよう一流の忍になりたい。
そんな焦慮とした心が表に出てたのだろうか、霧夜先生に言われて心が少し落ち着いた気がした。
それでも当時はまだ拭えない部分もあったので、完全に気が晴れた訳ではないが、気休めの言葉にはなれたのは確か。
今思い返すと霧夜先生の言ってる事はよく解るし、次にいつ休める

日が来るのか解らないのだから、こうして体を休める時は忍なんて忘れてゆっくりしよう。
「ちょっと……目を瞑ろう……」
眠たくなるとつい少しだけ目を瞑ろうと言って寝てしまうのは、よくある事だろう。
今まで無理を通して来たので、日頃の疲れが溜まってたのか、睡魔が重力のように推しかかり、眠りの底についてしまう。
居心地の良い、生地の良いベッドの上でゆっくりと――

雄英高校とは大分かけ離れた地方。
場所は本州中西部に位置する日本の地域、近畿地方の京都府である。
京都と言えば、日本でも有名な日本の都市の一つである。
観光客が訪れる程に人気のあるこの地域は、歴史的な文化が有名で、旅行記念として名が上がっている。
小学生の行事として、修学旅行を機に訪れるのも耳にするだろう。名物や観光スポットは言わば、京都府を主張するだけでなく、それ故に愛されているのだ。
実際、現代社会でもその光景は変わらない。
７９４年に日本の首都として定められた後、個性という超人社会に成れ果てようと、過去の歴史が変わることが無いように、文化は今も遺されている。
その分個性による犯罪や破壊活動も多数（今年は厳しい）上がっている為、ヒーローや警察も充分に警戒態勢を維持しているのもまた確

か。
プロヒーローが多いのは、地元にそれなりの事務所を構えてるのだ。

街並みは東京とは違い高層ビルは建っておらず、歴史的な古風を残しつつ神秘的な空間は京都ならではの空気を曝け出していた。
流石は観光してでも訪れたいと思うだけのことはある。
木造家屋がそこらに並び立ち、下は床石になっている。
「ここが……京都か……」
黒いフードを被った少女は街を見渡すと、思わず口から声が漏れてしまう。
京都に訪れたのは初めてなので、地形やコースはよく解らないし、五重塔なんて本でしか見たことがなかったので直で見ると初めてな新鮮な気分に見舞われるも、今はそれどころではないと気持ちを切り替える。
気付かれないよう、そして近くに忍がいるかいないか、常に気配を感知しながら足を運ばせる。
今のところ一般人に偽装した忍もいなければ、感知範囲内にもいない。
少女はチラリと右や左に視線を移し、警戒態勢を怠らない。
どこもかしこも、人、人、人。
人並みで溢れている。

「おか～さん、次はどこ行くの～？」

ふと、視界に映る女の子の声に思わず視線を向いてしまう。
幼年期…あの姿だと幼稚園児なのだろうか、小さな女の子が母親の手を握って歩いている。
一見何事もないだろう、何の変哲も無い光景に、少女は唇をキュッと噛み締める。
「……お母さん……ねぇ……」

元々、親の愛情も無い自分からして、親とは何なのか理解出来ないものだ。
いや…親の愛情が無いと言うのは少し語弊か…両親のいない自分からして、親という存在意義が解らないのである。
そもそも、自分には必要ないものだ。

『良いかい魅影――君がこの怨む社会を壊すのなら、生きて見せるんだ。
殺すか殺されるかの世界、君は生き残ることは出来るかい？』

――私に必要なのは、先生の想いに応えること。
その為には、証明しなければならない。

「幾多ものの花（命）を摘み取り、罪を束（重）ねて、私はカムイになる――」
命とは、謂わば花だ。
美しくも、その命は儚い。
寿命を迎えば花は散り、弱々しい命は直ぐに消え去るもの。
私はその摘み取った花を束ねて、先生に贈りたい。
そうすれば、きっとあの人は認めてくれる。
喜んでくれる。
何故なら私は――

『次（カムイ）は、漆（キミ）月だ――』

――先生の後継者、カムイになるのだから！

笑顔と愉快な声色が混ざり合うかのような人街を悠々と歩みながら、彼女は殺意と悪意に染まった笑顔で歩む。
普通なら人の幸福な笑顔を見て不愉快に思うこともあれば、壊してやりたい等と、死柄木弔と同じ思考に行き着くであろう。
しかし記憶を取り戻し、自身の価値観が変わった今、道に咲き誇る

笑顔など小石同然。
寧ろ踏み潰す価値もない。
「嗚呼！私は、幸せ者だなぁ……♪」

だって、他の誰でもない。
世界中には色んなゴロツキや、自分より格上の存在だっているのに、先生は私を選んだのよ？
まあ…あの人の事だからきっと裏があるのだろうけど、それでも私を選んでくれた。
その事実には嘘偽りは無い。自分を後継者として選んでくれたのなら、それなりの成果を得て先生に恩を返さなければならない。
「その為には～……」
フフッと微笑を浮かび立たせる漆月は黒紫色の瞳を爛々と輝かせながら、人気のない岩陰に隠れ、指で軽く何の変哲も無い岩肌に触る。
すると、砂状の地面から隠し扉が開く。勿論、こんな仕掛けがあることなど地元の住人には解る筈もなく、漆月も初めて目に見る光景。まるでカラクリ屋敷のような出来具合だ。
そこから何の挙動も見せることなく、速やかに階段に足を踏み入れると、仕掛け扉は自動で閉じた。
視界に広がる光景は地下洞窟。
壁はゴツゴツとした岩で出来ており、道導の如く、ランプの灯りが点いている。
まるでトロッコやピッケルが在っても可笑しくない程に、洞窟の工事現場に来てる見たいな錯覚に見舞われる。
漆月は一切視線をブレることなく、ただ無言で視野に映る道を歩み続ける。
ジメジメとした乾燥する空間、自分の足音だけが洞窟内に響き、他の気配は一切肌に感じない。
「んんっと、ここだっけ」
暫くして歩き続けると、行き止まりの先には大きな扉がある。

赤い扉は頑丈そうで、ダイナマイトを爆破させても壊れないのでは無いかとさえ錯覚してしまう。
しかし漆月はそんな赤いペンキで塗られたかのような扉には一切目もくれず、壁に隠されたレバーを引く。
ガララッ！と何かが開く音がした。
「扉はあくまで侵入者を欺くため、こんな見え透いた罠に掛かるのは警戒無しの大馬鹿者以外あり得ないもの。
本当はこっち、そして隠しスイッチは関係者以外知り得ない仕組みになっている」
そして天井が開き、階段がギーコギーコと音を立てて出現する。
天井に刺す僅かな光が眩しい。目を細めながら階段を登り、地下から出口の外に出る。
辺りを見渡せば、視界は金と外の景色で埋め尽くされていた。
ここは金閣寺の内部。
京都では観光スポットとしてかなり有名である。
実際、外の景色は中々にオツなもので、見晴らしが良い。本来は一般人による立ち入りは禁止とされており、また特別の人にしか入ることは許されない仕様となっている。
もしこの現場を見かけられたら叱られるだろう。
しかし観光目的で来た訳でもなければ、この建物自体本当はどうだって良いし、先ず興味の欠片も無い。
漆月には目的が在るからこそ、態々隠し通路を使ってまでここに訪れたのだ。
最上階は金箔と漆張りの空間となっており、見てるだけでチカチカする。
外からでは此方の存在は確認出来ないので、外野からの視線を気にする心配は無用。
「感知で確認出来るのは…三、四人ね。特に異常はなし…」
まるで自分の範囲圏内に入る者を感知出来るかのような物言いには若干、引っかかる部分があるが…
漆月は黄金色に染まった襖に手を置く。

「最上階には着いたのは良いけど…ここであってるかしらん？」
私は気配を敏感に察知し、反応を感知出来る術はあるけど、場所や位置が正確に解る訳ではない。
これはまあ、記憶を取り戻してから自分の体を少しイジって手に入れた術だけど…
いや、正確に言えば術では無い。
私の本能というべきか――

シュッ――ガタッ！

そして何の躊躇いも、何の反応を示すことなく、思いっきり襖を開けた。
横開きの襖は音を立て、彼女は表情も変えず、問答無用と言った形で部屋に足を踏み入れる。

「突然だけど、お邪魔しまーすぅ♪」

嬉々爛々とした声を弾ませながら、彼女は元々部屋にいたであろう人物達に視線を向ける。
一人は坊主頭の男が、胡坐を掻きながら手に持つ札束の枚数を丁寧に数えてる６０歳過ぎた男性。
一人は黒のハット帽に不気味なマスクを着用した人物。銃の手入れをしてる姿を見るから察して狙撃手だろう。
一人は笠を被った古風の男。
紅葉柄の和服姿に、腰には一本の鞘を収めた赤紫色の刀がある。
そして、もう一人は無表情とした氷のような、でもって気味の悪い仮面を着用し、灰色のコートを着こなす人物。
大将と思える人物は、マスク越しで不快な表情を引き吊らせながら、訝しげに声を張り上げる。

「お前……漆月か？」

「初めまして、佐門♪」

忍商会筆頭Ｎｏ．３。

現在、全国指名手配犯のリストに載る闇社会の一員である。

その実力は折り紙付き、幾多ものの違法と闇売買を繰り広げる曲者だ。

佐門とは正反対に、漆月は似つかない笑顔を引き吊らせていた。

「何しに来た…てか、お前どうやってここに来た？」

「詳しい事は後々、それより話があるの――大丈夫、決して悪い話じゃないわ♪」

佐門の周りに居座る残りの三人も、眉間に皺を引き吊らせながら、漆月を凝視する。

彼女がここへ来る情報は聞いてない。それどころか、初対面ゆえに何故ここの基地がバレたのかさえ不明だ。

そんな四人の困惑した対応など御構い無しに、漆月は口元を歪めながら口を開いた。

「単刀直入に言うわ――私と手を組まない??」

「んっ…ふわぁぁ…」

ベッドの上で眠りについてた飛鳥は、眠たげな眼を擦りながら起き上がる。

欠伸をする彼女は、開いてるカーテンに目をやり外を見るともう夜中だ

「今、時間は…何時？」

ベッドの近くに置いてある目覚まし時計を確認するともう７時だ。

眠りについたのが４時なので、３時間も寝ていたらしい。
中途半端に起きてしまったせいで、眠気が残るも、飛鳥は背筋を伸ばして起き上がる。
「皆んなはもう終わったのかな？」
流石にこの時間帯では終わってるだろうと思うが、もしまだ部屋作りが終わっていないのなら手伝うべきだろう。
それに皆んなの様子を見てみたいという気持ちもあった為、どの道部屋に出る理由は存在する。
玄関を開け、一階の幅広い公共スペースのリビングに向かう。
テレビの騒音やら談笑する声が聞こえるので、もう部屋作りは終わったのだろう。
リビングに来ると、柳生と雲雀の姿が見える。
いや、仲良しコンビの二人だけでなく、よく見ると空中で服が浮いてる葉隠らしき姿や、お茶子の姿も見える。
「アレ？葉隠ちゃんにお茶子ちゃん？」
「あっ！飛鳥ちゃん今晩わ～♪」
「お邪魔してま～す！」
二人は軽くゆるふわな声で反応する。
ここに来るのは意外という話では無いのだが（夜の９時以降は外出禁止の為、忍基地に居座るのは禁止、逆もまた然り）、それにしても何故二人がここに来てるのか理由が解らなかった。
「飛鳥ちゃん部屋作りは終わったん？もしまだ出来てないならウチ協力するよ！」
「ううん、私は前から部屋の整理は終わってたんだけど…早かったから眠っちゃってて…えへへ」
「あっ、そうだったんだ？ウチ等はてっきり飛鳥ちゃんだけまだなのかなと…思い込んでたばかりに…」
「二人はどうして此処に？」
「あっ、ん～とね……芦戸ちゃんや他の男子の意見も兼ねて…なんですけど…」
お茶子は少しもどかしそうな態度で、視線を彼方此方へと向いてい

る。
そんな彼女の反応に飛鳥は首を傾げながら「どうしたの？」と聞いてみると――
「え～っとね……お部屋の披露目大会…しませんか??」
これより始まるは、古今東西から伝わる伝説の行事礼、お部屋の披露目大会。
幾多ものの修羅場を潜り抜けるであろう、人生で歩むべき通過点。
――天下一お部屋披露大会が今夜、幕を開ける!!!
「いや、天下一じゃないし大袈裟過ぎるから!!」

１２２話「お部屋披露大会」

「オーっすお前ら、お疲れ」
雄英寮の施設内。男女共同スペースにやって来た切島鋭児郎は、その場にいる皆んなに軽く挨拶をする。
男子も女子も、荷物運びと部屋作りに疲労が溜まったのか、寛ぐ者が多い。
「切島か、お疲れ～」
「男女共同の寮生活つっても、一から部屋作るのは大変だよなぁ…」
ソファにもたれかかるように寛ぐ切島は、頭に白のタオルを巻いている。
彼の性格と髪型から見ると、より熱血漢という印象がより強く伝わる。
怠いような声で反応する上鳴は、軽い白シャツを着こなしスマホを触っている。隣には仲良しコンビの峰田も寛いでいるが、低身長のせいか、足が床に付かない。
他にも女子は女子同士で談笑したり、テレビのニュース番組を鑑賞、又は単に携帯を触ってる者が多く見える。
「そーだ！男子～！」
「ん？どした芦戸」
天真爛漫、明るく活発な女子の声は芦戸三奈。ピンク肌に蟻のような触角を生やす彼女は、ルンルン気分で明るく声を弾ませる。
「あのね！今女子と話しててね！提案なんだけど――お部屋披露大会、しませんか!?」
「お部屋披露大会？」
芦戸の提案に上鳴と轟は反応し、表情を曇らせ小首を傾げる。

そんな二人に芦戸は「そう！」と人差し指をピンッと立てて、皆んなに誇らしげな笑顔を浮かばせる。
お部屋披露大会。
共同生活の中、自分の部屋を皆に披露する、至ってシンプルなものだ。
部屋とは人が住まう空間、自身が落ち着く個性的な空間。部屋を見ればその人の性格や個性が視認出来ると言っても過言ではない。
これは一見愉快で楽しそうなノリイベントだろうが、実際はそう甘くはない。
部屋を披露する…と言うことは、その人の性格や個性が丸わかりになってしまう。
つまり、人の趣味や好みが相手にバレてしまう意味も表わしている。
別にそれはそれでと特に問題を感じない者もいれば、芦戸の提案に乗り息巻く者もいれば――
「常闇くん…どうしよう僕、引かれるかな？」
「……他人にどう見られようと、己の道を恥じるな緑谷出久。
闇を背負うは皆同じこと……」
「なーなー、オイラの部屋絶対女子に見せらんねえんだけど」
プライバシーに関する事に自己意識を持つ者。つまり、他人に自分の部屋を見せたがりたくない者も少なからず存在する。
緑谷・常闇・峰田という意外な組み合わせも、意見が一致すると面白いものだ。
しかし多対一の意見、況してや緑谷たちも自分の口から反対の意見を述べることも出来ないので、部屋披露大会は避けられないものとなっていた。
そもそも自分から部屋を見せたくないと拒否する行為は、大勢の皆から怪しまれるので、態々そんな事を言いに行くバカはいない。
「良いけどよ～、誰から見て行くんだ？」
「えっ？其処は男子……」
「ちょっと待ったあぁぁーーーー!!」

話を進めてる芦戸と上鳴の間に割入るよう、背の低い峰田が強引と言った形で横入りする。
峰田の反応に芦戸は「ゲッ…」と失礼極まり無い反応を示すものの、本人は意に介さず口を開く。
「お前ら？何か忘れてねえか？ん？大事な大事な俺たちクラスの仲間を、忘れてやしねえか？」
「そいや爆豪くん居ないね？それと梅雨ちゃんも」
「爆豪は眠いから寝てるんだってよ～、部屋作りは大分前から終わってるらしいぜ？」
切島の部屋の隣は爆豪勝己の部屋となっているので、荷物の詰め合わせと部屋作りの整理の際、爆豪は特に何の問題も起こす事なく、手際良く部屋作りを終えてたのだ。
本当は一人の友達として自分が早く終わったら、爆豪の部屋作りを手伝ってやろうと意気込んでたのだが、どうやら要らぬ心配だったようで、本音を言ってしまえば逆に手伝って欲しかったという点が大きい。
因みに蛙吹梅雨たること、梅雨ちゃんは不明。部屋作りを終えてるのかどうかさえ解らない。
「仕方ねえ、ここは１８人でやるっきゃねーよ」
「お前らマジで酷えな！オイラが言うのもなんだけど、変態に論破されてる時点でお前らオワコンだぞ!!」
「峰田お前、それ自分で言ってて悲しくねえか？」
若干…自虐混じりの峰田の声高い発言に、瀬呂は思わず突っ込みを入れる。
皆訳分からずと首を傾げたりする者や、「大丈夫峰田？」と大変失礼な対応をする者、呆れてる者、様々な反応を示す生徒の顔色が伺える。
そんな皆んなに峰田は高らかに、胸を張って声を荒げる。
「飛鳥達を忘れてるんじゃねぇ!!!」
その発言に、皆は『あっ……』と声を漏らし、氷漬けられたかのよ

うに凍り固まる。
「そいや…自分の部屋作りで大変で忙しくて…」
「疲れてたとはいえ…」
「べ、別の寮だし…忘れてたって言い訳も…アレだけど……」
皆の表情が段々と青ざめて行く。
飛鳥達だけでなく、ど変態中のど変態、峰田実にまで罪悪感を抱いてしまう。
幾らヒーロー科専門の訓練授業の際に八百万百の胸を凝視するとは言え、非常時に梅雨ちゃんの胸を触ると言ったラッキースケベを発動する変態とは言え、バスで官能トークを発動するエロスとは言え、林間合宿の女子風呂を覗く覗き魔とは言え、今回ばかりは峰田を責めることは出来なかった。
「それを何だお前ら！オイラを変態とかゴミとかクソ雑魚ナメクジとか言ったり！「――いや誰もそこまで言ってねえよ」……汚物を見るような目で見下ろしたり！峰田大丈夫って何だ!?オイラは全然正常だわい！」
様々な変態行為に手を染めた峰田が正常と言う言葉も些か可笑しなものだが。
否定出来ない点もあれば、流石に峰田への反応も悪かったと言う点も存在していたので、流石に悪いことをしたと反省する皆の衆。
「ゴメンね峰田～、態とじゃないんよ～」
「でもそうされても可笑しく無い行動をアンタは取ってるんだから、非がないとは言え責められるのは致し方ないと思うけどね」
「あ～なんか解る～。変態という性根を正せばウチらも見直すけどさ」
しかし耳郎の言い分も尤もなので、結局はプラスマイナス思考の回路で辿り着いた結果、どっちもどっちという形で特に揉め事にはならずに済んだ。
峰田も欲を言えば「お礼におっぱい揉ませろ」と言い張る気でいたが、今回は別の目的があるので敢えて伏せておいた。それが懸命な判

断だったのか、余計な一言で峰田へのイメージ悪化（手遅れだが）が進まずに済んだ。
「じゃあ忍基地行って誘おっか!!」

「という訳なのです」
「成る程ね～」
んで現在。
お茶子から事情を全て聞いた飛鳥達三人。飛鳥は苦笑を浮かべている。
「けどお披露目パーティー、雲雀もやってみたかったんだ!!」
「お、オレも…雲雀の部屋を見たいと…ずっと思ってたからな……」
純粋無垢そのものを表した雲雀、そして彼女の隣にいる柳生は頬を紅潮に染め、涎を垂らしながら何かしらの妄想をしている。
端から見ればエロ葡萄たる峰田実と余り変わらないような気もするも、本人の前で口にするのはタブーだ。
お部屋披露。
別に悪くないんじゃないかな…と思う飛鳥は、どちらかと言えばワクワクしている。
他人の家に上がり込んだ経験すらない彼女からして見れば、お部屋披露大会とは正に夢のようなもの。
大袈裟かもしれないが、自分は伝説の忍になる為の修行と経験を積むのに忙しかったので、先ず友達作りもしなかった。
因みに幼稚園の頃は、よく友達と一緒に遊んでたりしたのは今となっては懐かしくもありいい思い出。
況してや国立半蔵学院というマンモス学校に通うようになってか

ら、忍学生として休める日も遊ぶ暇も無かったので、どちらにせよ誰かの部屋の内装を見るのは楽しみで仕方がない。
しかしソレは飛鳥だけでなく、柳生と雲雀の二名も同じ気持ちだろう。
雲雀はイメージ付き易いが、柳生もクールっぽく見えるだけで雲雀と同じ一年生なのだ。
「じゃあ最初は～……」
雄英寮。
このお部屋披露大会を主催する審判の芦戸（いつの間にか決まっていた）は、勢いよく人差し指を向ける。
「えっ？ぼ、僕!?」
緑谷出久。
突然芦戸から指名を受けたことに、挙動不審な言動を見せる。
理由は単純、最初に見て廻るのは男子からと女子の話では決まっており、二階から順に上へと上がり見に廻ると言う事業だそうだ。
一階の部屋は――峰田・緑谷・青山・常闇、の順になっている。
部屋の順番の組み合わせは担任の相澤先生が決めたことなので、何かしら余程な理由が無い限りは変更にはならないそうで、特に組合による拘りや理由は無い。
「わあぁぁ!ダメダメ!ちょっと待って――!」
慌てふためき皆を止めるも遅し、皆の衆はわいやわいやと賑やかな雰囲気で緑谷の部屋に入る。
緑谷ルームを簡潔に言えば『オタク』だ。
机の上にはオールマイトのフィギュア、壁紙のポスターも全てオールマイト、本棚に収まってるのは教材ではなくオールマイト写真集、特集、そして超常黎明期から現在に至るまでのヒーロー百科事典まであるという、部屋全部がヒーローの概念に染まりきっている。
一同から発せられた言葉は、「歩くヒーロー百科事典」とまで仇名を付けられる羽目になり、このクラスでヒーローの知識に勝る者は存在しないとさえ声が掛けられるほど。

彼のオールマイト魂は眼に染みる程知ったので、緑谷の部屋から次は常闇の部屋に映る。
「フン…下らん……」
「そう言うの良いから、どかすよ～」
「オイッ……！貴様等よせ！やめろ！」
玄関扉の前で背にもたれるようクールに佇む常闇を、まるでブルドーザーでどかすかのように、芦戸と葉隠は強く押し、隙が出来た所で部屋に突入。
「暗！漆黒!!」
部屋の中は一言で言えば闇の狂宴。
電気を付けてないとはいえ、人の肉眼では殆ど見えにくく、よく見るとドクロ型のランプや洋風の剣を表したキーホルダーなどがあり、まるでファンタジーな世界観が映し出されている。
どちらかと言えば、魔女が住みそうな部屋だ。
「常闇くん、迂闊にダークシャドウちゃんでも出したら部屋滅茶苦茶になるんじゃない？」
「早く出てけ貴様ら!!」
飛鳥の言葉を振り払うよう、常闇は憤慨に満ちた眼光を解き放ち皆に立ち去るよう追い払う。
余りこう言った独特な部屋を他人に見られたくはない…というのは、厨二チックな性格上仕方ないのだろう。
自分の好みでも、人前では見せたくないというのは、可笑しな事では無い。
しかし見られた屈辱さと羞恥心は、例えで言うなら、ノートに纏めた厨二世界設定を、相手に見られるのと同じくらいなものだ。
因みに余談だが、秘立蛇女子学園の雅緋も実は影で秘伝忍法による必殺技の名前を、『ＤＥＡＴＨＮＯＴＥ』と書かれた漆色のノートに纏め書いてたりする。
しかしその事実は、親友の忌夢でさえも知らない（本人が秘密にしているので）。
本人曰く見られたら死ぬらしい、恥ずかしさで。

常闇に追い払われた皆は、次に隣部屋の青山優雅の部屋を観に映る。

「どう?僕の部屋、ま・ば・ゆ・い☆でしょ☆」

これも一言で言おう、『眩しい』――以上。

ハッキリ言えば常闇の逆バージョンと言った感じで、ゴージャスな貴族風の部屋には違いないだろうが、想定内の範疇と言った所で、特にどうと言うものでも無い。

「目が痛い…」

「同意……」

柳生は眼帯じゃない裸眼の方の目を手で抑え、常闇は目を細めている。

烏はヒカリモノが好きという習性があるが、常闇の場合は光とは影の抑止力。つまり、弱体化するという意味だ。

「えっと、この階だとあと一人は……」

想像してたよりもずっと楽しい。

飛鳥は嬉々初々しそうな声を弾ませ、まだ見てない部屋の扉に視線を移すと――

「なぁ、来いよ…お前ら女子にスゲェもん見せてやるからよぉ…なぁ、おい」

峰田実(不審者)らしき変態がいた。

玄関の扉の隙間から覗くように、指で「来いよ」アピールをする。

表情は気味が悪いほどに笑ってはいるが、ほぼ目が死んでる。

まるで煩悩の塊が泥沼のような汚れた気配を曝け出し、峰田に見る目もくれずに一同は「次、行こっか」と先を急いだ。

「なあぁぁ来いって!!お前ら女子にスゲェもん見せてやっからよぉ!!!なぁ!!ムラムラさせてやっからさぁ!!」

峰田という得体の知れない煩悩を置い残して。

こんな調子で次々と暴かれていく男子達の部屋を見て周り、口田の部屋まで来て不覚にもペットのうさぎたること『ゆわい』ちゃんに女子は大人気。

雲雀なら尚のことではないだろうか、抱っこしたり頭を撫でたりと、うさぎに夢中になっている。

雲雀の秘伝動物は兎、そして相棒の忍兎も存在する、うさぎ愛好家だ。

口田ルームでは女子の「カワイイ」のコールが絶え間なく降り注ぐ。

「なあお前ら…俺思ったんだけどさ……なんか釈然としねえよな」

口田のお部屋披露が終わり、三階から四階へと移動する矢先、上鳴の発言に男子達は立ち止まる。

皆何処か思い当たる節があるのか、納得のいかない者、気持ちが釈然としない者の顔立ちが垣間見える。

「確かに」

「同意☆」

「奇遇だね…僕もだよ」

常闇・青山・尾白の順にリズム良く頷く三人は、少々この立場に納得がいかなかった。

常闇は厨二チックな部屋だと言われ、青山に関しては何の興味も示されず、強いて言えば目が痛いという言葉が上がっていた（本人は眩ゆいと直接脳内にコンバートされたのか、褒め言葉として受け取った）。

尾白に関しては「普通」という一言だけで終わった。

飛鳥からも普通過ぎて「こう言うのも有りだね」と言われた始末。

部屋の内装をどう決めるのかは個人の自由だが、常に男子が女子に言われっぱなしと言うのも納得がいかない。

「男子だけが言われっぱなしなのも変だよなぁ？お部屋披露『大会』つったよなぁ?!

なら女子の部屋を見るのも、その場の流れというもの…違うか?!
なら当然!女子の部屋も見て決めるべきじゃねえか?誰がクラス1のインテリアセンスか、全員で決めるべきなんじゃねえのかなあ!?」
いやお前は単に女子の部屋見たいだけだろ、と普通ならばここで全員が口にするセリフなのだろうが、今回ばかりは譲れない。
峰田の意向や趣旨はどうであれ関係ないし、寧ろ峰田の思考など配慮してないが、男子達が常に言われっぱなしという何とも拭えない気持ちが晴れないのも事実。
よって、女子の部屋も拝見することになった。
因みに男子達全員の意見に芦戸は「良いよ~!面白そうじゃん!」とそれはそれでこの状況を楽しみ、活気良くはしゃいでる。
そんな芦戸の陽気な性格などいざ知らず、隣にいた耳郎は「えっ?マジでやんの?」と頬を赤く染める。
少数とは言え、どうやら乗り気でない者もいるらしく、大半の男子(部屋紹介してない者)達はどうでも良いと呆れスマホを触っている。
ここでもし峰田実ただ一人、この場で発言していれば変態という肩書きのある彼に向けられるは汚物を見るかのような視線。
「来んな変態」と罵倒を受け一蹴されるだろうが、これが一人では無く数人であれば話は別だ。
少なくとも男子達の自尊心とも呼べるプライドを傷付けられ、黙っていられるほど彼等はヤワでは無い。男子の心に火を点ければ後は簡単。
流れは川の如く勝手に動き出し、自然的に〝女子の部屋を物色する〟事が出来る!!
これが峰田実という策士たるや、エロ葡萄の目的。
男子達の意見に乗じる事で、民意と捉えられる。逆に『峰田だけダメ』、と言えばそれはもう差別的な問題が生じるし、先程の一件である峰田の真面目な口論もあり、批判的な言葉はまず出ないはず。
変態という勲章を持つ彼が、自然的に女子の部屋を観に行くその光景は、性的犯罪者も尊敬の眼差しを向けるだろう。

現に彼は今、目にじんわりと涙を溜め、口から溢れんばかりに大量の唾液を零してる。
しかしまだ男子達の部屋の拝見は終わってないので、引き続き中断してた披露大会を再開し、四階へと上がっていく。

「まあつっても、俺のはあんま大したことねえよ」
「轟の後だと誰だってそうだよ」
男子達の部屋も締めくくり、最後は五階フロアの砂糖力道のお部屋披露の番に移った。
五階は瀬呂・轟・砂糖という順番で、五階は男子三人だけだ。
瀬呂の部屋は、中々にエイジアンな内装で、何処か新鮮な雰囲気を曝け出し、女子からはギャップ萌えを受けた醤油顔である。
彼の性格上、健康食品好きな彼から考えて尾白のようなシンプル的な部屋がお好みかと思ったが、予想を遥かに超えた。
続いて轟焦凍。
元々部屋にあったフローリング的な内装とは違い、日本を主張した和風の空間となっていた。
翠色の畳、障子戸、四角い木枠の照明、箪笥に置物の手毬、達磨、壺、盆栽、壁には紅梅の絵画が飾られてある。
轟の実家は日本家屋、フローリングのような洋風の部屋は心地よくないのか、落ち着かないそうだ。
特に地面に足をつけ歩くとペタペタする感触も気になるし、見慣れない部屋で過ごすのも釈然としない。
本来ならこんな和風に凝った部屋にはならなかったのだが、リカバリーガールが「ゴミ倉庫から好きなだけ自由に持って行きな」と中には使い慣れてない新品な畳や四角い木枠の照明、様々な家具が倉庫に置かれてあったのを持ってきただけだ。
ゴミ倉庫だなんてとんでもない、寧ろ轟からすれば貴重な品物ゆえに感謝まである。
そこから実家から送られた荷物から、家具を部屋に運んだだけ。特

に労働的な作業はならず、飛鳥と同じくスムーズに進める事が出来た。
　轟の部屋の出来具合に瀬呂のギャップは遥かに超え、飛鳥からは「我が家に帰って来た気分」と一言。

　そして現時点で砂糖に当たった訳だ。
　尾白や障子みたく、至って普通の部屋ではあるが、机の上には金属製ボウルの中にクリームがあり、電子レンジがある。
　食器棚や調理器具等があるのが室内に大きな印象を与えていた。
「なんか、甘い匂いがするよ？」
　部屋内に漂う菓子類に似た甘い匂いに、雲雀が声を出すと、砂糖は「ああしまった!!」と忘れてた記憶を呼び覚ましたかのように、取り乱した様子で慌てて電子レンジを開ける。
「だいぶ早く片付いたんでよ！皆んな食うかと思ってシフォンケーキ焼いてたんだ！」
　電子レンジの中からはなんと、甘々しくて美味しそうなシフォンケーキ。
　中から開けられ甘い匂いは更に強さを増し、部屋は甘い香りに支配されていた。
　それに嗅ぎつける女子は、目を輝かせそのシフォンケーキを見やる。
「ホイップがあるともっと美味いんだが…お前ら食うか？」
『食うー!!』
　ホカホカ出来立ての美味しそうなシフォンケーキに食い付く女子達に、砂糖は押されそうになりながらも手慣れた手付きで包丁を扱い、均等に切る。
　皿に移し全員に配り、一口食す。
　口の中に広がる甘み、フワフワな食感は、女子達からは絶対的人気を集めた。
「美味しいよ砂糖くん！普段よく作ってるの？」

「お、おう！個性の訓練がてらな…俺の個性は〝シュガードープ〟…糖分は俺の力になるし、それに趣味で作ってることもあるから…」
「砂糖さんは素敵なご趣味を持ってますのね！今度、私の紅茶と合わせてみません？幻の紅茶、〝ゴールドティップスインペリアル〟をご馳走致しますわ！」
「お、おお…凄い反応だな…！正直ここまで食い付いてくるとは思わなかったから…意外な反応だ……」
　飛鳥と八百万に褒められ、恥ずかしがるも内心はかなり嬉しい砂糖は、瞬く間に女子の人気を得ていた。
「悪くない…美味いな……」
「おぉいしぃ～♪砂糖くんはシフォンケーキ以外何作れるの～？」
「クッキー、ドーナッツ、バウムクーヘンは勿論。カヌレやティラミス、アップルパイにタルト、ホットケーキ、ノルマンド――」
「パティシエかよ!!」
　思わず突っ込みを入れてしまう瀬呂は、甘くてふんわりとした美味しいシフォンケーキを咀嚼しながらも、彼の凄さと料理の腕は素直に褒めざるを得ない。
　流石はシュガーマンの異名を持つだけのことはある。甘党は正義と言わんばかりに菓子作りに適しており、到底学生とは思えない程の腕前を持っている。
　ヒーローではなくパティシエの道もあったんじゃとさえ疑問を抱いてしまうのは、瀬呂だけでは無いハズだ。
「さて！男子のお披露目も終わったことだし次は女子棟！最後は忍基地のお部屋披露と行こっか！」
「時間はダイジョーブ？」
「へーきへーき。９時までなら問題無いし大丈夫でしょ、時間はまだあるんだし」
　砂糖の菓子を充分に味わい深く口の中で咀嚼しながら、芦戸はノリ良く歩みを進める。
　乗り気の無い耳郎や恥ずかしそうな八百万などお構いなく、お部屋披露大会は進む。

女子棟の部屋も見終わり、最後は忍基地の半蔵メンバーである飛鳥達に当たった。
因みに月閃メンバーはB組と一緒にお部屋披露大会を開いてるので、現在は不在だそうだ。
「じゃあ先ずは…雲雀ちゃんの部屋からだー！」
「俺読めた、ぬいぐるみと玩具で部屋いっぱいにしてそう」
「モーレツプリユア１０とか置いてな、おままごとしてそう。
それ以外に考えられん」
「お前らの中で雲雀は何歳設定なんだ」
瀬呂と上鳴の会話に、半ば呆れながら突っ込む障子。
実際に体育祭を運動会と言ってる（体育祭終了後、訂正したのは皆お気付きでは無い）のと、容姿が子どもらしい幼気な雰囲気を持っているのだから、そう皆から解釈されても可笑しくは無いのだろうが、障子からすれば雲雀は立派な高校生だと思っている（確かに少し子どもらしい雰囲気もあるが）。
そんな男子達のたわい無い雑談の中、玄関が開かれた。
「いらっしゃ～い！どうぞ～♪」
「お邪魔しま～……っす…ってうおおぉぉ!!??」
雲雀の部屋に入る一同は驚嘆の声を上げる。
可愛らしいハート柄なラブリーのカーテンに、ピンク色のしたフワフワな生地のベッド、兎や熊の可愛らしいぬいぐるみは勿論飾ってある。
ここまでは男女関係なく案の定と言った形で、葉隠の内装と似ていたし、普通の女の子らしいドキドキする空間だ。
しかし意外なことに子どもらしさとは対極に、本棚の上には名のある有名で大人気なヒーローフィギュアが置かれてたり、本棚には超絶人気の少年漫画、ワ○ピースやハ○キュー、ナ○ト、ブラッ○クローバーと言った有名な漫画作品を全巻買い揃えてたり、小説はとある○

術の禁断目録や、魔法科高校の○等生、S○Oと言った人気小説から、ラノベや人気作品とは無縁で程遠い、読んだことも無い推理小説まで収録されている。
　他には裁縫道具や救急箱、お洒落でブランド寄りの手提げバックからキュートなバック二つ、机の上には〝為になる運動トレーニング〟の教材や、忍百科事典が置かれてある辺り、彼女からは考えられない品物。
　壁にはアニメ等よくあるキャラクターが映し出されたポスターやパズルが貼られている。
　更にはなんと、最新型のパソコン機材やゲームも置かれており、理想的な女子の部屋と、男子の想定内な部屋が合わさった、独特な空間の部屋になっていた。
　ゲームは家庭用からネットゲームなんでもござれ、３ＤＳや某新天堂Ｓｗｉｔｃｈ、コジーのＶｉｔａやＰＳ３、ＰＳ４、そしてＶＲも揃っており、正に娯楽の聖地と呼んでも過言ではなかった。
「ひ、ひ、雲雀さんこれって!!超激レアのオールマイトフィギュアじゃん！」
「おいこれって超鳥ヒーロー『グリフォース』じゃ無いか？期間限定のレアフィギュア、超常黎明期で噂になってた人気ヒーローだ」
「あああぁぁぁぁ!!!!それ持ってない!!欲しかったけどお金と都合で買えなかったんだよ！」
「吸血ヒーロー『プテロバット』、古竜ヒーロー『プテラ』、兵鎧ヒーロー『ソルジャー・ランサー』、後なんだこれ？」
「ラビットヒーロー『椎名』じゃなかったっけ？」
「思いは一つ！ラビットピースの椎名だよ！昔有名なヒーローで、実力は折り紙付きさ！」
　緑谷・障子・尾白は本棚の上に飾り立ててあるヒーローフィギュアで盛り上がり、緑谷は熱心に語りながら、羨ましそうな眼でフィギュアをマジマジと見ている。
　忍家系で育った彼女がヒーローフィギュアを持つことなど誰も想像付かないし、飛鳥でさえも意外だと声が上がるほど。

因みに緑谷はオールマイトだけではなく、他のヒーローに関しても熱中になる癖が有り、一人のヒーローを解説するだけで小一時間は掛かると言う程のヒーローオタクなだけあって、流石は歩くヒーロー百科事典だ。
「わ〜！雲雀ちゃん漫画読むの意外！この漫画すっごく面白いよねハ○キュー！これ読んでから家族でバレーの試合観るようになったんだよ！」
「仮想空間…娯楽という名に浸かりながらもその世界は……生死を賭けたデスゲーム……ふむ、雲雀が読むとは意外だったな…」
「女子の人気も高いよね〜、努力！友情！勝利のテーマを沿った忍者漫画のナ○トは神！」
「おい雲雀！ＴｏＬＯＶＥるダー○ネスが無えじゃねえかよ!!ゆらぎ荘の○奈も買えや！アレ単行本だと○首出るんだよ○首！」
「峰田、お前ここ女子部屋だぞ？自重しろや」
漫画で盛り上がり、立ち読みで熱狂するのは葉隠・常闇・芦戸・峰田（コイツだけ何か違う）の四人組。
雲雀はてっきり少女漫画でも読むかと思っていたが、意外とこう言う少年漫画を読むことに内心驚きはあるものの、趣味や好みが合って嬉しいと思う反面もある。
「筋トレに役立つ本とか読んでんのか!?雲雀！今度本貸してくれ！これ鉄哲も見たら喜ぶんじゃねーか!?」
「お裁縫道具も揃えてあるのですね！」
「忍百科事典…うわ！有名な忍達がいっぱい！」
切島・八百万・飛鳥の三人組も、分厚い本に手を取り中を見るやで興奮している。
八百万はそもそも雲雀が裁縫セットを持ち合わせてるとは思ってもいなかったらしく、雲雀を褒めるやで当の本人である彼女も嬉しそうに照れてる。
「……」
「……」
想像の斜め上を遥かに超えた上鳴と瀬呂は何も言えずじまいなの

か、唖然としていた。
　そりゃ無理もない。本当に幼稚園っぽさのある彼女が、まさか高校生と変わらない上に此処まで超絶人気を誇るとは夢にも思ってはいなかったらしく、自分たちの部屋を見た反応と比べて天と地の差が開く現実に、ただただ唇を噛み締めるだけしか出来なかった。
「あら、あんた達どーなのよ？ん？」
「耳郎…黙って、ごめん本当に想定外だったわ……」
「俺、今の見て雲雀へのイメージが１０８０度変わったよ」
「三回転して元の位置に戻ってるんだけど」
　どこか落ち込み気味の二人に耳郎は傷に塩を塗るように一声かけるも、二人の反応はそこまで変わらない。
「ゲーム見て良い～？」
「うっわ！ＶＲも在るじゃねーか！今じゃ何処も売り切れで予約しようにも出来ねーよ！」
「なぁ見ろよ…雲雀のやつ、ポケ○ン図鑑全部コンプリートしてある……プレイ時間８００超えてるんだけど……」
「ドラクエ１１にスナイパーゴーストウォリアーにダーク○ウル全シリーズ……あっ、これってストリートファイター!?鉄哲が今一番ハマってるっつう格ゲー！
　――ッッッ!!どうしよう！スゲェやりたいんだけど!!」
　ゲーム機に触れるとそれはそれは、まるで近所の友人の家に遊びに来てゲームで盛り上がるかのような光景は、中々に愉快で盛り上がる。
　芦戸は雲雀にゲーム使用許可を求めるわ、砂糖はＶＲ機を触れてマジマジと見つめるわ、峰田は３ＤＳを開き目を大きく開いて画面の時間プレイ数に驚愕するわ、切島は沢山のゲームの種類に興味を注がれるわ、なんやかんやで今この部屋が一番騒がしく、そして披露大会で一番人気の高いのが雲雀の部屋だ。
　実は雲雀の好きなものは甘いお菓子は勿論、ゲーム全般が好きで、特にはテレビゲームをプレイしている。
　フィギュアやぬいぐるみ、本など実は兄や姉からのプレゼントでも

あったりする。
　雲雀の家系はこう見えてかなり特殊なものらしく（華眼もその理由のウチ一つ）、戦国時代から既に忍として活躍していると言う、忍社会の中で割と有名な方なのだ。
　簡潔に言えば飯田天哉や轟焦凍の家よりも凄いのかもしれない。
「ね、ねえ皆んな～…そろそろ行かない？早くしないと９時になっちゃうし……」
「ひ、ひ、雲雀の匂いぃ～……」
「柳生ちゃん!?何してるの変態だよ?!」
　ベットの上でボフンと寝転ぶ柳生は、顔を枕に埋めながらスーハー…と深呼吸する柳生に飛鳥は鋭い壮大なツッコミを打ち込ます。

　ホカホカな気分とは打って変わって、次は柳生の部屋に移り変わる。
　先程、雲雀の部屋で匂いを嗅いでた彼女とはまるで別人のように気持ちを切り替え、沈着冷静な表情を浮かべながら無言で扉を開け招待する。
「うわぁ～すげぇ!!」
　柳生の部屋は常闇のように少し暗がかっているが、照明が青いブルーライトとなっているので、まるで青と黒が混ざり合った物静かな空間にいるようで、何処かと心が落ち着く。
　それに夜のため、眠気がやって来るものの、コレを見れば驚くのも無理はないだろう。
「柳生お前魚飼ってんのか!!」
「口田に続いて柳生もペットはズリィわ…てか色んな種類あんのな」
　何個もの水槽が置かれており、色んな種類の魚がスィーッと泳いでいる。
　一個につき１種類と決めているらしく、観賞用のアロワナ、グッピー、ピラルクー、この３種類だ。

見てるだけで和やかになり心が落ち着くのは、観賞用の魚の見所だろう。
このまま過ぎていく時間すらも忘れてしまうような気分だ。
「柳生ちゃんもぬいぐるみね～って、全部魚のぬいぐるみだ！」
「ウツボ、イカ、タコ、ジンベエザメ、シーラカンス……まるで水族館みてえだな」
「柳生、お前は本当に魚が好きなのだな…特に烏賊」
葉隠・上鳴は柳生の独特な部屋の出来具合に微笑んでおり、障子はイカのぬいぐるみを触りながら感心している。
こう改めて見てみると、イカやタコのぬいぐるみも悪くはないと思うものの、女子ならまだしも男子がぬいぐるみを持つのもどうかと思うので、やはりやめておこうとソッと元の位置に人形を戻す。
障子の部屋は驚くことに、何もない。
テレビもない、パソコンもない、本棚や置物などもなく、あるのは勉強机と布団のみ。
ある意味、相澤先生に似たような部屋になっており、正直何もなさ過ぎて珍しいとさえ思えてしまう。
「お、オイラも……ぬいぐるみとして扱ってくれても良いんだぜ柳生…？
ほら!!この愛くるしいゆるふわキャラな俺を胸に埋めて――」
「そうだな、サンドバッグとしては丁度良いし、今度地面に埋めてやろう」
「……冗談に聞こえない」
峰田の軽々としたセクハラ発言に、眉ひとつ動かさない柳生は、眼中にないといったような口回しで、峰田に背中を見せる。
彼女が言うと冗談には聞こえないので、正直怖いと言えば怖い。

「さて！最後は半蔵学院リーダーの飛鳥ちゃんに締めてもらおう!!」
「なんか緊張するな～……」

雲雀、柳生の順にとお部屋披露が終わり、最後の一部屋で終盤を迎えていた。
彼女は頬を赤らめながら指でポリポリと頬をかく辺り、落ち着きがないように見える。
それもそのはず、女子ならまだしも男子達が自分の部屋を見るのだ。
雲雀も柳生も男女共同で見て回ったので、何ら可笑しくは無いのかもしれないが、自分からすればそれでも気持ちが拭えない。
「で、では…どうぞ?」
「おお〜〜!!可愛い〜〜!!!」
部屋の中は雲雀や葉隠に似た通り、女の子らしい部屋になっている。
ラブリー的な印象を受けるこの空間は、飛鳥らしいといえば飛鳥らしいが
「蛙のぬいぐるみに、床のカーペットやベットの布柄も蛙…飛鳥ちゃん蛙好きになったんだね!」
「わあ、刀置きの……なんか侍っぽい!」
「動物百科事典、読まなさそうな所が逆にあざといわぁ……」
「わあ〜!パジャマが猫と蛙みたいな服だ〜!子供服だけど…うわぁ〜これ欲しいなぁ」
雲雀や柳生の後だと普通の部屋に見えるのも仕方ないが(そもそも部屋に面白さを拘っていない)、こうして普通に可愛らしい部屋を見ると落ち着くのは勿論、一周回ってホッコリする。
「ヒーロー科最高」
「峰田くん!?人の部屋に入って無断でタンス開けるのは止めようね!?」
「に、匂い……飛鳥の匂い!プ、ププ、プルスウルトラ!!」
「ちょっとやめて〜!峰田くんプライバシーの侵害にも程があるよ!?」
「何言ってんだ飛鳥お前!人様を部屋に上げてる時点でプライバシーの侵害もクソもねえ!それに男ってのはな、寧ろこう言うの気にする

タイプなんだよ誰だってこうするんだよ世の中の男子はヨォ!!」
「ふぇっ?そ、そうなの?」
「な訳ないでしょ、飛鳥に何変なこと吹き込んでんだこのバカ」
「へぶぅっ!?」
峰田の相も変わらずの平常運転に耳郎は呆れながら長い耳朶のイヤホンプラグを峰田の目ん玉に突き刺し爆音をお届けする。
特にこれと言ったものは無く（雲雀と柳生の後だと誰でもそうなる）、こうして飛鳥のお部屋披露も終わった。

雄英生の寮。
一階の男女共有談話スペースにて、忍学生も含めて全員揃っている。
これから行われるは投票結果発表だ。
お部屋披露大会を経た今、誰がインテリア1部屋王の称号を飾るに相応しいかが決まるのである。
因みに、自分への投票は無しというルールのため、クラス委員長決めの時みたいな結果にはならないハズ。
「さて!それでは爆豪と梅雨ちゃんを除いた…第一回部屋王暫定一位の発表――!!
得票数8票!!圧倒的独走単独首位を叩き出したその部屋は――砂糖力道!!」
「はあぁぁぁ?!!ええっ!?」
部屋王は何と、全員誰もが考えてなかったであろう、シュガーマンたること――砂糖力道だ。
当の本人が一番驚いている。
「因みに全て女子票!理由は「ケーキ美味しかった」だそうです」
「いや部屋関係ねえだろうがぁ!!」
女子8人は全員ヨダレを垂らし、今でも忘れないあの味わい深いシフォンケーキの食感を脳内再生しており、幸福感に満たされたような顔をしている。

柳生は最初、雲雀に投票を入れるつもりだったのだが、女子全員の話（雲雀も含めて）という事で、あの柳生でさえも砂糖に票を入れたのだ。
そんな女子にツッコミを入れる峰田は
「テメェ砂糖唇ゴラァ！ヒーロー志望が贈賄してんじゃねえよ!!」
「いやしてねえよ！何これでもスゲェ嬉しい!!アハハハ！やめろよお前らアハハ!!」
「笑ってんじゃねー！」
峰田と上鳴の暴言など何のその、砂糖は笑いを止める事なく二人とじゃれあっている。
しかし二人はそうでもなく、どちらかと言えば嫉妬が大前提で、恨みの一撃一撃を砂糖の体に打ち込むも、効いてないのか笑っている。
「じゃあ俺たちもそろそろ寝ようぜ、明日から授業始まるんだろ？」
「うむ！ケーキ食べた後は歯磨きしなくてはな！」
お部屋披露大会を終え、ようやく自由行動になれた轟は眠たそうな目を擦り、真面目な飯田は非磨きを催促する。
「あっ、轟くんちょっと待って！デクくんに飯田くんも…それに切島くん八百万さん、飛鳥ちゃんに雲雀ちゃん柳生ちゃんも……ちょっといいかな」
自然と解散しようとする轟達は、自室へ戻ろうとするも、制するお茶子の声に呼び止められる。
なんだ？と軽く疑問に思う轟に、お茶子はバツが悪そうに顔を下に俯き伏せる。
「あのね、梅雨ちゃんが話ししたいって……取り敢えず、外でよ？」

９時近くの夜は、既に真っ暗な空色に染まっており、外接設置されてる灯に照らされる十人は、寮の外で静かに梅雨ちゃんの話を聞くこ

とにする。
蛙吹梅雨は、常に冷静な判断や、視察、洞察力の高い蛙の個性をした少女。
お部屋披露大会で爆豪勝己と同じく参加しなかった理由は、体調が優れないと聞いていたのだが、実を言えばそうではない。
今ここに集まってるメンバーは、よく見ると神ノ区で爆豪と雲雀の奪還、そして敵連合に拉致され捕らわれた者達が揃っていた。
爆豪勝己は既に寝てしまっているので、起こすのも悪いと思い呼ばなかった。
雪泉はそもそも死塾月閃女学館の三年生、その上忍基地にも居ないので呼ぶことが出来ない。
お茶子は梅雨ちゃんの心情を聞いているので、この場に居合わせてるだけだ。
梅雨はヤケに悲しそうな表情を浮かべて九人を見渡す。
「私思ったことは何でも言っちゃうの。でもね、何て言ったらいいのか解らない時もあるの。病院で私が言った言葉憶えてるかしら？」
梅雨ちゃんの言葉に、緑谷・轟・飯田・切島は病院内で話し合った出来事を思い出す。
八百万百は敵連合の脳無に発信機を付けた事で、敵の住処が解り、オールマイトと塚内刑事に、あらゆる情報を隅から隅まで洗いざらい情報提供して居たので、その場にいなかった八百万は心当たりが無く、疑問の顔色を浮かべる。
「……と言っても、その場にいなかった八百万ちゃんを始め、飛鳥ちゃんに柳生ちゃん、雲雀ちゃんは知らないけれども……それでも気持ちが晴れないのも確かだわ」
飛鳥と柳生は忍専門病院に緊急で搬送され、柳生は体全身に細かな刃物の切傷が付き、飛鳥は全身打撲と骨折、火傷で、悲惨たる重傷を負っていた。
その場に居なかったとはいえ、梅雨ちゃんと同じく何名かの他校の忍学生に止められたのも事実。
雲雀は敵連合に拉致されたので関係ない…とは一概的には言えな

いが、それでも気持ちが晴れやかではない梅雨は、彼女にも話を聞いて欲しかったのだろう。
「心を鬼にして辛い言い方をしたわ…本心じゃ無くとも、それでも皆んなの為を思っての発言だったのよ……」
『ルールを破るというのなら、その行為は敵のソレと同じなのよ』
辛い言い方なのは百も承知。
もしかしたら皆から嫌われるような台詞を吐いたとしても、それでも皆んなには行って欲しくなかった。
そりゃそうだ。
飯田と同じく、忍学生も含めてこの一年A組はかけがえのない大切な生徒なのだ、立派な友達なのだ。
そんな大切な友達が、爆豪と雲雀が拉致された事によって、目の前の矢先が真っ暗になり、誤った危険な道に進む友を止めるのが、友達という者だ。
だから、どんな酷い言い方をしても、危険な目には絶対に遭わせたくなかった。
「それでも皆行ってしまったと、今朝相澤先生から聞いてとてもショックだったの…
信じられない程に…
止めてたつもりになってた不甲斐なさや、色んな嫌な気持ちが溢れて…何て言ったら良いか私、解らなくなって……皆と楽しくお喋り出来そうになかったのよ」
友を止められなかった己の不甲斐なさ。
友に対する己への責任。
友が危険な目に遭うと考えてしまうだけで、嫌な気持ちが溢れるような気持ち。
落ち込み俯いてた彼女は、顔を上げ、皆んなの顔をしかと見つめる。
眼は潤い、溜まってる涙で瞳が揺らいでいる。それは、蛙吹梅雨が此処に来て初めて見せる表情。
「でも、それはとても悲しいの」

ケロ…ケロ…と啜り泣く蛙の声が聞こえる。
彼女がここまでして心配して、涙を流してる事に、爆豪と雲雀の救出に赴いたメンバーは、己の行動に心を痛める。
飯田も蛙吹梅雨と同じ意見だからこそ、同情する部分もあれば、彼女が何を言いたいのかも解る。
「だから…まとまらなくっても、せめてちゃんとお話をして
また皆と楽しく仲良くお喋り出来るようにしたいと思ったの」
そんな泣きじゃくり指で涙を拭う梅雨ちゃんを見て、お茶子は肩に手を置きながらも自分の思うことを伝える。
「梅雨ちゃんだけじゃないよ、皆すごい不安で拭い去りたくって。だから…部屋王とかやったのもきっとデクくんたちの気持ちはわかってたからこそのアレで…だから責めるんじゃなく。またアレ…なんていうか…ムズいけど…とにかく、また皆で笑って…頑張ってこうってヤツさ!!」
お茶子はグッと腕を挙げ、ガッツポーズを作りながらニッ!と強い笑顔を見せた。
「すまねえ梅雨ちゃん!話してくれてありがとな!」
「ぼ、僕も…あっすぅ……ゆちゃん…ゴメンね!」
「わ、私も…!梅雨ちゃんと楽しくお喋りしたいよ!!ゴメンね梅雨ちゃん…心配かけて本当にごめんね!」
「……あの場に居なかったとはいえ、不快にさせてしまったのは事実…蛙吹、すまなかった」
「私も…梅雨さん申し訳ありません!」
「俺は梅雨ちゃんと同じ意見…だが、友をあの場で止めなかった俺も、謝らなければいけない…すまなかった梅雨ちゃんくん!」
「雲雀は……梅雨ちゃんの気持ち、良く分かったよ。だからもう泣かないで?これからは明るく元気でいこ?」
「すまねえな蛙吹…今度、雪泉にも連絡入れて謝るように伝えておく」
八人は必死に泣き噦る彼女に寄り集まり、謝罪する。
雲雀は優しく彼女の頭を撫で、切島と飯田は思いっきり頭を下げて

と、彼女が泣き止むまで、気が済むまで付き合ってあげた。

皆、戻そうと頑張ってくれていたんだ。

いつもの、そう…いつもの――各々がそうなりたいと、目標を目指し、切磋琢磨するあの――日常へ!!

１２３話「圧縮訓練」

お部屋披露大会という気晴らしイベントを終えたあの昨夜から一夜明け。
久々のような授業、でもって何時もと変わらぬ授業が生徒達には待っている。
当たり前のような日常、嬉しさが溢れる出るような安心感に心が安らぐ。
あの事件から一変、一年Ａ組は今日も元気に明るく授業を受ける。

有耶無耶にされていた仮免取得は昨日、相澤先生が話した通り、今日を以って本格的に動き出す。
本来なら林間合宿で仮免取得の為に、個性・忍術の強化訓練を一週間行うハズだったのだが、敵連合開闢行動隊と名乗る犯罪集団の襲撃を受けたため、強制的と言った形で即合宿は中止。
林間合宿ではロクに強化訓練に浸り受けることは叶わなかったものの、それでも連合と対敵し、交戦したお陰で少しでも経験が付いたのが生徒達によるカバーとなるだろう。
それでも本来、受けるハズだった合宿期間は台無しにされてしまったのもまた事実。
しかし立ち止まる時間は雄英生や忍学生には無い。
実は半蔵学院だけでなく、上層部の会議を通して、各校の忍学生も仮免取得に動いていくらしい。
当然、仮免を取得するのにもそれなりに合格率も低くなる。
先生が言うからには合格率は例年５割を切るほどらしく、毎年厳しいと言う声も上がれば仮免を取得できず、ヒーロー志望だった者が堕ちて敵という人生に走ると言うのも、聞かない話ではないだろう。
それ程に、ヒーロー免許と言うものは人命に直接係る責任重大な資

格なのだ。
仮免取得に向けて今日、生徒達が受ける授業とは――
「今日から一人、最低でも二つ――
〝必殺技〟を作ってもらう」
必殺技を生み出すと言う課題の授業――相澤先生の言葉を聞いた生徒たちは
「学校ぽくてヒーローっぽいのキタァぁぁぁ!!!」
教室は相も変わらず、喧騒と歓喜の弾む声に満ち溢れる。
必殺技と言うネームを聞くだけで、興奮が止まらない者は数少ないだろう。
そんな彼ら彼女らの仮免取得、そして必殺技を編み出す為、今回相澤先生に呼び出された教師は三名――
「必殺――コレ、即チ必勝ノ型・技ノコトナリ!」
無愛想な顔付きに、敵寄りの風格をした数学担当教師――エクトプラズム
「その身に染みつかせた技・型は他の追随を許さない。
戦闘とは如何に自分の得意を押し付けるか、立場を有利に覆す一手!」
立体四角形の顔立ちに、表情が上手く読み取れない個性の戦闘では鬼強さを発揮する現代文・国語担当教師――セメントス
「技は己を象徴する!今日日、必殺技を持たないプロヒーローなど絶滅危惧種よ!!」
妖美で危険な香りを纏う、１８禁ヒーローと言うアダルトな肩書きを持つヒーロー美術担任教師――ミッドナイト
以上、三名のヒーロー教師と担任の相澤先生で、２３名の生徒全員に実技指導を行う。
「あの～…先生、私たちは？」
「詳しい話は実演を交え合理的に行いたい。

コスチュームに着替え、体育館γへ集合だ」
必殺技を作る――しかしソレはあくまでヒーロー学生の話。
一方、忍学生は秘伝忍法と言う必殺技を備えてあるので、予想すると言えば新たな秘伝忍法を習得すると言う想像以外に考えられない。
しかし相澤先生は合理的主義者、詳細は体育館γで話すとのこと。なので仕方なくと、飛鳥は首を縦に頷いた。

体育館γ。
辺り一面全てがコンクリートで出来てるこの空間は、皆が想像してた体育館の内装とは少し違った。
先ずバスケットゴールが無い、床に貼ってある色分けテープも無い、完全にコンクリートで支配されてる。
とても体育館と呼ぶには余り似つかない建物にセメントスは触れる。
瞬間。
コンクリートの地面は粘土のように柔らかく、勢いを増して形を造って行く。
「トレーニングの台所ランド、略してＴＤＬ!!」

ＴＤＬはヤバイだろ。
一同は全員、セメントスの個性で造り上げられた無数に連なる岩柱を見て息を呑む。
此処はセメントス考案の施設。
生徒一人一人に合わせた地形や物を用意できる場所。辺り一式全てがコンクリートで出来てるのはセメントス自身が個性を発動し、生徒たちが安全に個性を全力で使用し、伸ばす訓練所として仕上げる為

のものだ。
　これだけ大規模で広大な体育館なら、爆豪の榴弾砲着弾（ハウザーインパクト）や、轟焦凍の最大火力の氷結を幾ら出しても良さそうだ。
　ただ他の生徒もこの場で訓練を受けるのだから、皆の事も考慮すると使用しないのが妥当だろう。
「先生質問です！何故、仮免許の取得に必殺技が必要なのか――意図をお聞かせ願います！」
「飛鳥たちのも同じく順を追って話すから、お前は一先ず落ち着け」
　疑問に満ちた飯田は急かすように質問するも、相澤の落ち着いた声で、質問は伏せられる。
「ヒーローとは、事件、事故、天災、人災…凡ゆるトラブルから人々を救い出すのが仕事だ。
　取得試験では当然その適性を見られることになる」
　情報力、判断力、機動力、戦闘力、他にもコミュニケーション能力、魅力、統率力など、多くの適性を毎年違う試験内容で試されるのだ。
「その中でも戦闘力はこれからのヒーローにとって極めて重視される項目よ。
　備えあれば憂いなし！技の有無は合否に大きく影響するわ」
「ミッドナイトさんの言う通り、状況を左右にされることなく安定行動を取れれば、それは高い戦闘力を有している事になるんだよ」
「技ハ必ズシモ攻撃デアル必要ハ無イ、例エバ…
　飯田クンノ〝レシプロバースト〟――一時的ナ超速移動ソレ自体ガ脅威デアル為、必殺技ト呼ブニ値スル」
「アレ必殺技で良いのか…!!」
　ミッドナイト、セメントスに続きエクトプラズムが解説すると、飯田は己の技名に対し賞賛を受け、身体を小刻みに震わせ感動している。
「つまり、自分の中に『これさえやれば有利・勝てる』って型をつくろうって話か」
「また、飛鳥達三名の秘伝忍法のようなものか…！」
「そ！砂糖君や常闇君の仰る通り、己の安定とした行動や能力を活か

して編み出す技術が必要となる訳。
個性への思考を深めることで、己の視野が広がり『何をするか、何が出来るか』の可能性を見出す事が出来るわ。
少なくとも、貴方達の中にも既に感じてる人はいるんじゃ無い？」
思い当たる者は、僅かに反応する。
爆豪勝己、常闇踏影、緑谷出久の三名は、心の中で個性による必殺技の案を幾つか浮かばせている。
常闇は体育祭、オールマイトに言われて貰った『もっと自力を鍛えれば取れる択が増えるし、より強くなれるだろう』と言う言葉を振り返え思い出す。
まだ技名を出した訳ではないが、案は幾つか考えてある。
後は想像を現実に活かす努力を費やすのみ。
爆豪勝己は才能の塊と呼べるべき、才能マンだ。
体育祭で幾つかの必殺技を披露するだけでなく、抜忍・焔紅蓮隊のリーダー、焔の戦闘スタイルを必殺技として使用する事で、己の強さへと繋げる程の実力者だ。
爆破と言う破壊的な個性は、必殺技として輝きを膨らませる。
緑谷出久の個性は、オールマイトの必殺技をモチーフにしている。
授かれた個性、憧れから来るソレは、緑谷自身に強く影響を与えていた。
「そして忍学生については、幾つか案は考えてある――お前らの〝忍術〟は遁術、忍法を主に表している」
飛鳥は風、柳生は氷、雲雀は雷の遁術を備えている。
常人からすれば個性に似た能力、そして遁術と忍法を上手く駆使して生み出されたのが秘伝忍法。
代々家系として継がれる秘伝忍法の技も存在するが、己が新しく編み出した秘伝忍法も存在するのはご存知だろう。
「例えば――飛鳥の遁術、風という属性に、〝風刃忍法〟を合わせ編み出した必殺技を、秘伝忍法――【二刀繚斬】と呼ぶ、そうだろう？」
「は、はいっ」
唐突に自分の忍術を参考にして貰ったことで内心少し驚くも、自分

を例えとして指名して貰った事は悪くない気分だ。
「成る程…忍術って、本当に俺たちみたく個性に似てるね…
って事は、飛鳥達はもう既に俺たちよりも先のステージに進んでるってこと？」
「まあ間違いじゃねえな」
尾白の意見に、相澤は否定せず首を縦に頷く。
「ただ…ステージで言うならお前達と同じだ。
必殺技を編み出しただけで、仮免取得をどうこう出来る程ヤワじゃねえのも解るだろう？」
相澤の放つ言葉に、無言のまま頷く三人は、幾つかの経験の過程から思い振り返す。
焔や雪泉、雅緋、大道寺、黒佐波と言った強敵の忍達を前に刃を交えた飛鳥なら尚のこと。
これまで闘って来た忍達は全員忍法を主体に戦って来た。
お互い持つ物同士の力をぶつかり合わせば、決着はそう簡単に付かない。

「飛鳥達に受けて貰うのはコイツ等とは別、忍術を個性へなぞらえ活用させる術を身につけさせる――」

「個性の…ように？」
必殺技を編み出すヒーロー学生とは真逆、飛鳥達は忍術を個性のように扱う訓練を受けるのである。
「そうだ。
幾ら秘伝忍法なんて言う必殺技が有ったとしても、其れは必ずしも困難を前に切り抜ける訳ではない。
一芸だけじゃヒーローは務まらないように、忍も秘伝忍法だけでどうにか出来る程、世の中は甘くない」
秘伝忍法と言う決められた必殺の型・有利な一手の動きでは、やがてボロが生まれ、逆に翻弄される事も有り得る。
いつ如何なる場合に備えて、常に臨機応変として動ける為の手段は

身に付けなければならない。
「いつまでも秘伝忍法頼りじゃダメだってこった……」
定めに従い舞い殉じる忍は、下された任務を全うするべく動き出す闇の存在。
その分、発想力や思考などの能力はどうだろうか？
作戦や任務の如何なる手段を下す選択肢を選ぶ忍の思考力は、とても賢い方だろう。
しかし常識に囚われてる事で、思慮が疎かになるのもまた忍の欠点でも有る。
それを補う為に、柔軟な発想と思考力、適切な対応と判断、其れ等を身に付けて貰う。忍術を個性へと活用させるのにはうってつけだ。
「お前達に足りないのは応用力だ。
己の創意工夫で、お前達の忍術をどう活かせるか…
これから後期始業まで、残り十日余りの夏休みは個性を伸ばし必殺技を編み出し、忍術を様々な方向へ活かす――圧縮訓練となる!!」
またヒーロー学生は〝個性〟の伸びや技の性質に合わせて、コスチュームの改良も並行して考えて行くようにしなければならない。
忍学生側も、申請をすれば可能らしい。

「プルスウルトラの精神で乗り越えろ、当然…忍学生側も然り、命懸けでやっていけ。
――準備はいいか？」
「ワクワクしてきたぁ!!」

相澤先生の圧の篭った声に、一同は自然と不敵な笑みを浮かべる。
初期は相澤先生の除籍処分という部分も含めて恐る事も有ったが、最近は…次の壁を乗り越えていこうと勇気付けられる。

開始してから15分が経過。
エクトプラズムの個性、『分身』によって生み出された数体のエクトプラズムを従わせ、生徒たちの指導を施してる姿が映っている。
各々の生徒たちは個性の必殺技を考えるも、想像してた物と違う形であれば、まだ必殺技と呼ぶには相応しくないのか、悩む色を映し出す者もいる。
しかし個性を駆使して、順調に必殺技を完成に近い状態へ造り上げている者も垣間見えるのも事実。
爆豪勝己が良い例えだろう、彼は今もすこぶる快調で、様々な必殺技を編み出している。

「えっと、コレをこうやって…ってわぁ!?」
コンクリートの地面に顔面直撃した飛鳥は、苦痛で思わず鼻を手で抑えてしまう。
そんな彼女を、エクトプラズムは半ば呆れたような、でもって無愛想な顔立ちで溜息を吐く。
「大丈夫カ？怪我ハ？」
「は、はい…大丈夫です……
う～ん、葛ねえみたいに遁術を上手く工夫して空を飛んで見ようと思ったんだけどなぁ…」
「空ヲ？コレハマタ意外ナ発想ダナ。
確カ飛鳥ノ主ナ戦闘スタイルハ、二丁刀ヲ使用シタ斬撃系ノ攻撃ダロウ？」
「そうなんですけど……私、ううん…他の忍も地上戦が主体じゃないですか？足に地を着いて、攻撃するって感じを見るのが多くて…
だから、遁術を上手くコントロールして空中に浮きながら攻撃を仕掛けれれば良いかなって思って」
「成ル程、考エタナ。
自分ノフィールドヲ作リ上ゲ、戦闘ヲ優位ニスル。
私ヤセメントスノヨウナ考エ方ダ、悪ク無インジャナイカ？」
飛鳥の考えはこうだ。

風刃という忍術は、風そのものが刃物のような鋭い攻撃型の忍法だ。
其れを今度は、己の立ち位置を有利にするべく、敢えてサポート系に移す。
決して悪くない案ではあるし、空中浮遊もまた欠かせない一種の手だ。
(マア…実際ニ空中浮遊ヲ難ナク使イコナス忍モ存在スレバ、我々ノヨウニ個性ソノモノノ忍術ヲ持ツ忍モ居ル……
コレカラ先、彼女ラガ何ヲ見テ何ヲ学ブノカガ本番…ト、言ッタ所カ)
世に蔓延る得体の知れない猛者達は、ヒーローや敵をも凌駕すると噂で聞いたことがある。
今やヒーローの上位級が忍だなんて噂も何度か耳にする。
「あっ、そうだエクトプラズム先生。ちょっと相談したいことがあるんですけど……」
「ン、何ダ?」
「先生もご存知の通り、確かに私は刀を巧みに使った戦術を披露しますけど…一つ問題がありまして…」
「問題?」
「林間合宿で敵連合の襲撃を受けた際に私、抜忍と闘って…その……
――刀、折れちゃったんです」
「ナント、自慢ノ武器ガ折レテシマッタノカ?」
エクトプラズムの言葉に無言で頷く飛鳥は、自慢の刀を目で見やる。
じっちゃんが忍学生になった暁にと、託してくれた自慢の刀。
前に一度、忍サポート会社の正式な手続きを経て打ち直して貰ったもの。
「それで…もしも、また次の戦いで刀折れちゃったらどうしようって……」
林間合宿の襲撃。
抜忍狩りの狩人と言う異名を持つ黒佐波との戦闘で、刀が折れてし

まったのだ。
当時は、そこで「もう駄目だ」と諦念してしまったものの、火事場の馬鹿力で何とか立場は逆転。あの超パワーを持つバケモノを戦闘不能にまでは追い詰めることが出来たのだ。
――しかし、それはそれで良しと言えば、そうでもない。

「フム、君ノ言ウ事ハ尤モダ。
忍ノ武器トハ、己ノ強サヲ主張スル意味モ含マレテイル。
大勢ノ忍ガ、得意トスル武器ヲ扱ウノモ至極当然。
マタ打チ直ス…デハ、イザ現場デマダ事件ノ収拾ガ付イテ無イ状態デアレバ、圧倒的ニ不利ダシナ。
忍ノ君等ナラ尚更ダ」
「はい、そうですよね……どうすれば、良いんですかね……？」
今まで考えた事もしなかった。
一度、刀が折れてしまった飛鳥だからこそ悩むのだろう。
もしまた、次も自分の刀が折れてしまったらと考えてしまうと、不安が心を募らせ、意識や集中力が疎かになる。
エクトプラズムの言葉通り、現場で自慢の刀が折れてしまって戦えませんじゃ意味がない。
強くなる以前に、自分の手とも呼べる刀で悩む日が来るとは思いもしなかった。

「やあ、悩んでるみたいだね飛鳥くん」
「えっ、あっ!!オールマイト!?」
悩み頭の中で思考を巡らせていた飛鳥に声を掛けたのはオールマイト。
衰弱し痩せ細った身体、骨折し動けなくなった腕を包帯で巻きながら、軽く挨拶を交わす。
「珍しい。何時も元気で悩みを吹き飛ばす君が、浮かない顔なんて」
「ええっと、それがその……」
飛鳥は心に靄付いた悩みを、オールマイトに吐き出すよう相談し

た。
誰かと相談すれば気持ちが和らぐと言う意味も含まれてはいるが、一番は己の問題を解決するべく誰かの助言が欲しいと言う気持ちが強い。
「ふむ、成る程……」
納得したかのように頷く素ぶりを見せるオールマイトは、腕を組む。
「君は、常識に縛られすぎだ！」
「はえ？」
「じゃあ、頑張れよ飛鳥くん――切島少年！私が見よう！」
「うわっ!?オールマイト…！ビックリしたぁ……えっと、アザす!!」
飛鳥に何も答えず、オールマイトは一言言い残し、切島の方へ向かっていく。
「オールマイト……」
正直、意外な返答だった。
てっきり何かしらヒントを得るキッカケにはなるかと思っていたが、オールマイトの口からは特にこれと言ったアドバイスになるような言葉は言われなかった。
いや、常識に縛られすぎだ…というワードに何処か心が引っかかるも、今の所は特に思い当たるような発想は無い。
「何時マデモ悩ミ、動キヲ止メテイテモ仕方ナイ。
先程、君ガヤッテタ風ヲ上手ク使ッタ空中浮遊、ヤッテミテハドウダ？
ソレニ授業後ニ生徒達ノ意見ヲ聞クノモ、悪ク無インジャナイカ？」
「は、はい！」
どうやら、まだまだ答えの先は遠いらしい。
努力に励み、遁術を上手く使いこなし空中へと浮遊する飛鳥を横目で見るオールマイトは、口角を釣り上げる。
（緑谷少年にも言ったが、答えを教えるだけじゃ意味が無い！
悩み、考え抜いてこそ、その先に答えがある。君たちの得意な、ぶ

つかり合えば分かち合える本質と似ている…だから、焦らずとも君なら直ぐに答えに辿り着くさ……）

教育とは、そう言うものだ。

私はこの先…彼女たちの先生としての立場で指導する。ただ教えるだけでは、個人の個性を発揮出来ない。

他人に教えられ動くのではなく、己の思考力と判断で状況を覆す事も、この先如何なる場合においても必要になる。

オールマイトは優しく微笑むと、まるで自分の愛弟子のような視線を飛鳥の背中へ送るのだった。

尻ポケットに『すごいバカでも先生になれる！』教材ブックを収めて。

学校の授業が終わるまで、結局彼女は遁術を上手くコントロールする課題を主に、指導を受けていた。

エクトプラズム先生からの一言は、「動キハ悪クナイ、遁術ノ扱イモ上手クナッテイル。シカシ、大雑把ダ」とアドバイスを受けた。

正直、個性のように自由自在に扱うなんて考えてもいなかった辺り、相澤先生の言う通り自分達は常に何かしらの常識に囚われていたのだろう。

（参考になりそうなのは、緑谷くんが一番かな？）

緑谷出久を真っ先に選んだのは、オールマイトの後継者だからである理由も一応含まれているが、本音を言えば彼の方が一番参考になりそうだからだ。

常に周りに対する個性をノートにまとめて研究する彼の姿勢は一見ナード呼ばわりに見えるが、いざ個性に対して悩む部分が有るとなると、彼の知恵が一番役に立つのでは無いだろうか？

何よりオールマイトの個性を受け継いだ身、参考としてはこれまでに無い人材だし、自分の足りぬ応用力を補える気がする。
そうと決まれば、善は急げだ。

「お～い緑谷く～ん！」

廊下で何処かへ向かう彼の背中を、飛鳥は大声で呼んだ。

「えっ？個性について詳しく聞きたい？」
「うん…良ければ個性分析ノートとかも見せてくれると嬉しいかな。私、個性とか考えたことなかったし…
体育祭の時もそうだったけど、見た限りだと小まめに相手の個性を観察してまとめてるの得意そうだし、緑谷くんに相談したんだけど……知ダメかな？」
「ええっ!?そんなダメじゃ無いよ寧ろ全然！うん！良いよ――と言うか僕のノートがまさか他の人にも役立つなんて思いもしなかったからさ…！
そっか、飛鳥さん僕らみたく忍法術を個性のように自由自在にコントロールしなきゃいけないもんね…」
サポート科のコスチューム開発部屋へ向かう緑谷出久は、廊下を歩く途中で飛鳥に呼び掛けられ彼女の相談を受けている。
個性に関して知識も応用力も疎い彼女は、ヒーロー学生から見れば、ヒーロー学生以下…それ即ち、受精卵以下で有る。
特別な能力があっても、上手く扱い方が解らず悩んでしまってる。そんな彼女を一目で見れば、自分とよく似てるという印象を強く受ける。
オールマイトに見初めて貰い、平和の象徴という称号とともに個性を受け継がれた。

直に体で個性の破威力と驚異は嫌と言う程覚えたので、個性をどう活かしたいか、その気持ちは痛いほど理解できるつもりだ。
「ただ、飛鳥さんは個性を上手くコントロールしてどうしたいの？」
問題と言えばコレだ。
自分はオールマイトへの憧れによる影響を受けているので、個性の性質上、肉弾戦を使う。
ただ飛鳥の場合は自分とは違い、刃物を使った近接戦、中距離戦を得意とする。
彼女がそのスタイルでどう忍術を活かしたいのか、聞かない限りアドバイスも説明も何も教えたくても教えれない。
「う～ん…一先ず空中浮遊？それと、刀が折れちゃった場合のことも考えたいんだ」
「え？刀折れちゃった場合？う～ん…それはどうにも言えないけど……」
「そうだよね…あっ、そうだ！
緑谷くんって、個性発動する時ってどんな感覚で発動してるの？私、忍だから個性持ちの人とどう違うのか聞いてみたくて…」
なるほど、確かにそれは一理あるな。
なんて思えてしまう緑谷は、「う～ん…飛鳥さんに上手く伝わるかな？」と難しそうな顔を浮かべて、口を開いた。
「電子レンジに卵を入れた状態で、爆発しないイメージ？」
「はあ？」

しかし当然この言葉を聞いただけではイメージも何も、疑問しか浮かび上がらない。
素っ頓狂な可愛らしい声を上げる彼女に、緑谷は「ええっと！つまり…」とどう解り易く説明できるか、頭の中で言葉を整理し、区切りながら言葉をつなげる。
「電子レンジに卵を入れると爆発、しちゃうんだよ！知ってると思うけど…

僕の場合、馴染み浸透した個性は器が良くても、体への代謝が比にならない位に、負担が掛かっちゃうんだ！
肉体を鍛えてあれば問題ないんだけど、ワン・フォー・オールは先祖たちが培った力の結晶で、幾ら体を鍛えても負担からは逃れられないんだ！」
「あっ、だから体育祭まで個性発動するだけで怪我しっぱなしだったんだ」
「うん…だからいつも、卵を爆発しないイメージを持ち続けてたんだ」
「発想がユニークだね？」
「ソレ、オールマイトにも言われて貰ったよ…」
でも、確かに中々良いイメージだ。
大切なのはイメージを浮かべ、維持し続けることが大事だと緑谷出久からは駄目押しなほどによく言われた。
自分でも理解してるつもりでも、他人から言われると再度強く認識してしまう。
「アレ？でも職場体験の時は体の負担も無かったよね？傷が付いたのって、ヒーロー殺しに…」
「うん、やっと個性が上手く扱えるようになったんだ。
今度は電子レンジに鯛焼きを入れたイメージ！」
「はあぁ…？」
「……飛鳥さん、馬鹿にしてる？」
「し、してないしてないよ！これはその…癖で…」
「あ、そうだったの……いや、ゴメン変なこと言って……」
「いや、ううんこっちこそ。誤解させちゃってゴメンね？」
二人揃って謝り顔を見合わせると、飛鳥は次第と「ふふっ…♪」と微笑を浮かばる。
そんな可愛らしい彼女の笑顔に、緑谷は「ど、どうしたの？」と少し顔を赤く染めながら訪ねる。
「いや、なんか緑谷くんとこうして話すと飽きないし面白いな～って。それに、優しいし。
私と緑谷くんって何気に息ピッタリ合うよね。意識してなかった

けど」
「や、優しくなんて全然！僕は何時も通りの僕であって…
で、でも息が合うっていうのは…そうなのかな？」
意識してなかったが、時々飛鳥と緑谷の動きが一致する時が有る。
相性が良いのか、偶々呼吸が合うのか、その強さは現場でも発揮された。ヒーロー殺しの時も、お互い阿吽の呼吸で痛撃を与えたことも出来たし、林間合宿の時も殉職してしまった洸汰の心を、どうにかして救って上げたいと思ったこともある。
「ねえ、もう少し聞いても良いかな…？緑谷くんは授業後は用事でもあるのかな？あるなら…またの機会でも良いけど」
「あ～っと、用事はあると言えばあるけど…時間が迫ってる訳じゃ無いし、急かさなくても良いから大丈夫だよ！
それに、僕の知識が誰かの役に立てるのは、凄く嬉しいし」
今までで自分の知識が誰かに役立ったことは、実を言ってあまりない。お茶子には体育祭で爆豪勝己の個性分析ノートを見せて対策案を立てようと話はあったが、本人が「精々堂々、真っ向勝負したい」と言うか強い意志が芽生えていたので、本人の意思を尊重し見せなかった。
「で、鯛焼きのイメージって具体的にどんな感覚なの？」
「んっとね、まず電子レンジって全部入れても回らないものがあるんだよ」
「あ～確かに。ウチの家にある電化製品も皿付いて回すものだもん。一部しか暖まらないのが嫌だよね」
「そうソレ！問題はどう個性を上手く調整して、どう使えるか。
僕は今まで無意識に体の一部だけを使ってたんだ。相手を殴ろうと思ったら腕一本だけ…固定したイメージが強すぎて気付かなかったんだけど…
鯛焼きを全部温めれるように、体全身を使ったイメージ！つまり、個性を発動する時は体全身にスイッチを入れる！それならパワーもスピードも上々、固定した価値観をちょっと変えただけでほら！出来ちゃったんだよ！」

今までは強いイメージを浮かべ続けてただけで、フラットな発想で個性を扱うことは出来なかった。
大事なのは、己の能力を常に理解しながら、違う価値基準で見つめ直す。
つまり、既成概念に囚われないことが大事なのだ。
「全部？体全身を使って……？」
「ああ、うん！そうしたら５％だけど調整する事が出来て、お陰で怪我もしなずに済んだんだ!!」
「……」
アレ？
何だろう、今凄く良い事閃いちゃった気がする…
体全身を使う？
「そもそも、体の動かし方はかっちゃん寄りもあるけど…最近はグラントリノみたいなピョンピョン跳ね飛ぶスタイルも悪くないかな～って…って飛鳥さん？」
「……体全身……価値観を違う基準で見つめ直す？」
今思えば、自分はまだまだ縛られた常識が拭えなくて、考えもしなかっただろう。
しかし緑谷出久という柔軟な発想と思考を待ち兼ねた人物の幾つかの助言で、思いも付かない発想が浮かび上がる。
一番心の中で靄付いた問題は、刀が折れた後だ。

常に自分の思う事が通じないのは、林間合宿で経験済みだ。
特に忍にとっての武器とは、ヒーローのコスチュームとは少し違い、己の強さを主張するもの。
飛鳥の二丁刀。元から刀技を鍛錬してた自分だから、刀が無ければどうすれば良いのだろうとずっと疑問と不安で悩んでいた。

だから、柔軟な思考と発想のある緑谷出久と話して思いついた事がある。

――なぜ、刀前提で闘おうとしていたのだろうか？

「刀が無ければ……体全身を使って戦えば良いんだ！」

一瞬にして閃いた発想は、常人の全てを覆すことがある。

天才の閃きは凡人の一生を勝るように、一瞬にして閃いた発想は時に、自身の悩みを吹き飛ばし、次なる成長を促すことへ繋がる。

「え？どうしたの飛鳥さん？」

「有難う緑谷くん!!お陰で良いこと思い付いちゃった♪」

はしゃぎ、嬉しくて若干興奮気味の飛鳥は、緑谷の両手を握って大喜びする。

感謝する彼女の笑顔と、唐突な行動に緑谷は「おっ!?!おおぉぉぉぉおおぉぉぉーーーー!?!!」と大声を出してしまうも、今の飛鳥は彼の発狂すらも聞こえない。

「ただ、問題なのはここから…この発想をどう活かして……そうだ!!半蔵学院に戻って葛ねえに聞いてみよう！

あっ、もしいたら大道寺先輩の意見も聞きたいかな…」

武器を使わない肉弾戦を得意とするのは、葛城、雲雀、大道寺の三名。

雲雀は自分と同じく忍術を個性へと上手く活用させる課題があるので、なるべく迷惑は掛けたくないし、風やゴリ押しのある先輩二名なら良い発想が浮かべそうだ。

「そうと決まれば相澤先生に外出許可を貰って……」

雄英の敷地内から外へ出るのには担任の許可証が必要となる。

また担任が不在の場合は、他の先生方に相談して許可を得るという手もある。

善は急げだ、飛鳥は「有難う！今度なんか奢るからね～！」と調子の良い台詞を放ちながら、廊下を後にした。

「やべぇ……心臓…バくンバくん……」

未だに顔が林檎みたく赤い緑谷は、その後コスチュームの件で発目明の大胆なボディに押し倒されるという心臓爆破しかねない展開が待っている。

翌日。
昨日と変わらずＴＤＬで圧縮訓練を行う生徒達は、昨日と比べて見れば、見間違えるほどに変化が生じていた。
或る者は、コスチュームを改良して新技への一歩を踏み込む者。
或る者は、違う個性の扱い方をこなす者。
或る者は、個性の新技を次々と完成する者。
昨日始まったばかりなのに、もう個性の技を編み出しているのは、流石は雄英のヒーロー科だ。
昨日と言い今日といい、仮免取得に向けて気合が入っている。

「飛鳥、今日ハドウスル？マタ、忍術ノコントロールニ費ヤスカ？」
「いえ、それはもう大丈夫です」

飛鳥の予想外な返事に、エクトプラズムは無愛想な表情に目を細める。
昨日と比べて、今日は何時もより表情が明るい。それどころか、早く自身の能力を見せたくて仕方ないような、そんな胸を躍らせてるような、清々しい表情だ。
（昨日ノ様子トハ表情ガ違ウ…何ヲ学ビ通シタカハ不明ダガ……面白イ）
黙って見つめるエクトプラズムに、軽く頷く飛鳥は、目の前の岩をジッと物静かな目で見つめる。
岩…と言っても、セメントスに頼んでコンクリートを操り岩の壁を造り上げただけである。

これ位のことなど造作もない。
飛鳥は心を落ち着かせるよう空気を吸い、肺から吐き出すように、大きく一呼吸すると、構えを取る。
「イメージ通り、そして強く――」
バガァァン――!!
視界に映るコンクリートで出来た岩は、文字通り粉砕。
清々しい爽快感たる音を残しながら、目先の壁は跡形もなく消し飛び、岩の欠片は風に乗り何処かへと吹き飛び消え去っていく。
昨日、緑谷出久と話しても拭えきれない不安が一つ。
それはパワーによる物理的な力量と忍術による風刃を、どんなスタイルで活かすか。
「暴力は嫌いだけど……出来た!!」
全身に纏う緑の風を揺らぎ、彼女は爽快感溢れる笑顔を浮かばせる。
強く握られた拳を、高らかに天に突き上げるように――
腕には緑風が滑らかに、細かく揺らぎ、空気が乱れるようは感覚が伝わる。
空気とは、空間があってこそ為せることができる。
「腕のゴリ押し、風を纏わせた拳の戦闘法……林間合宿で経験を積んで学んだ、個性の応用、私なりの戦闘スタイル!」
風を纏わせ、四肢を強化した、刀無しの素手による肉弾戦。
これなら――刀が無くても戦える。
「素晴ラシイ、答エダナ」

エクトプラズムは感心するかのように、飛鳥を褒める。
そんな彼女は素直に嬉しく舌をテヘッと出す仕草を見せる。

嘗て、彼女は死を錯覚した。
儚き命が散る間際、彼女は希望を捨てなかった。
自身より格上の、圧倒的な敵と戦い刃を交えたことで、経験が活かされた。
それが、彼女自身への強さへと導いてくれる――

『盾なんざ、捨てちまえば良い』
『強者の為に敗者となってくれよぉ!!!』
『さァ、殺そうぜ!!』

「これなら、折れないでしょ？〝黒佐波〟――」

彼女はニカッと、不敵な笑みを浮かべた。
嘗て彼は、人を殺すが為に力を振り撒いて来た。
敵との戦いを経て彼女は、刀と盾の如く、人を守り、救ける為にこの力を使う。

定めに舞い殉じる戦乙女は成長を、止まることを知らない――

１２４話「一息吐く裏で」

「え？アタイの忍術について聞きたい？」
担任の相澤先生から外出許可を得た飛鳥は、学校から飛び出るように母校である半蔵学院の元へ向かい、三年の葛城に忍術について聞き出していた。
これは昨日に起きた出来事である。
個性の応用、自分の忍術をどう上手く工夫して活かすか…緑谷の助言とも呼べるアドバイスを参考に、飛鳥は自分の忍術と似た彼女に聞き出していたのだ。
「どうしたんだよ急に……てか、学校良いのか？飛鳥達ってあんま外出しちゃダメなんだろ？」
「ダメ…って言うより、注意されるか最悪、指導受けるだけだけどね。担任の先生から許可を貰えば問題ないよ」
謹慎こそあるが、許可なしに外へ出てしまえば基本叱られてしまう。
特に無断で外出し何かしらの騒動を起こしてしまえば、生徒指導担当を務めるハウンドドック先生に物凄い唸り声で叱られてしまう。
これだけは他校でも誰でも嫌だろう。
「それなら良いんだけどよ……って、態々アタイにソレを聞くためにこっち戻って来たのか？」
「う～ん、出来れば大道寺先輩の意見も聞きたいんだけど…大道寺先輩、いる？」
「あ～それは知らねえ。
多分先輩は鈴音先生…いや、凛さんって呼べば良いのか、お見舞いに行ってると思うぜ？」
「そっか～……先輩のアドバイスも聞きたかったけど、残念だなぁ…」
「アタイと大道寺先輩に用があるってのも、飛鳥にしちゃあ珍しいよな。忍術のこと聞きたいとか、何かあったのか？」
「ん～っとね…実は」

飛鳥は自分の難儀にして通過に於ける課題点を、姉御肌で頼り甲斐のある年上、葛城に全て話した。
彼女は「あっははは！そう言うことか！」と甲高い声でゲラゲラ笑いながら納得した表情を浮かべる。
「けどよ、それなら『菖蒲』に聞くってのも有りだぜ？」
「え～？菖蒲ちゃん基本購買部担当だから無理があるんじゃない？其れに私雄英の敷地内にある忍基地で過ごしてるし…
一年生だけど雄英に派遣されなかったんでしょ？」
「いや、菖蒲はまだ選抜メンバーじゃねえからな。補欠だ、其れに仮免取得で上手くいけば上層部からの命令で雄英に行くんじゃね？」
菖蒲。
半蔵学院の購買部を担当してる忍学科の新人生徒にして、普通学科の生徒に紛れてる生徒でもある。
菖蒲は基本購買部を担当に受けてるので、転校という形は中々に難しいらしい。彼女を雄英に派遣しなかったのも、この理由が大きい。
「アタイは基本身体を柔軟に動かす蹴りメインの戦法スタイルだからな！やっぱ身体を動かすのって気持ちいいし、飛鳥もアタイみたく蹴りでも使うのか？」
「う～ん…葛姉みたいな活発的には動けないけど…身に付けて損は無いのなら一応……」
「後輩の為なら教えれることは何でも教えるぜ。
それに久し振りにこうして先輩としてのアタイが後輩に教えてやるんだ、先ずは…ホレほ～れ♪」
「きゃあっ!?ちょっ、葛姉どさくさに胸を揉まないでよ!!」
「ばっかで～、揉むなって言う方が無理に決まってんだ。久し振りに後輩の身体を触れるんだ、感動の再会みたいなノリの挨拶だから良いだろ？」
「良く無いです!!!」
自然的な流れで息を吸うかのように胸を揉む葛城は常習犯だ。
ある意味峰田実より性質が悪いし、これが男子であれば軽く一発は殴っている（斑鳩は度が過ぎるのであれば相手が葛城でも一発殴って

いる)。
ただ、意外にも葛城には弱点がある。
それは逆セクハラ。実は彼女、セクハラをする癖にセクハラされるのは大が付くほど苦手なのだ。
その為、菖蒲からはいつも逃げている。
まるで凶器を持った殺人犯から逃げるかのように、血相を変えて学校の敷地外の木の上で隠れるくらいの効果だ。
「菖蒲ちゃんがいればな～…
ってそうだ、葛姉は仮免取得はどうだったの？」
「アタイか？そりゃあ余裕だぜ。
まあ偶々試験内容が良かっただけかもな、それかアタイが強かったりして」
葛城と斑鳩の仮免取得の試験内容は、実技で傀儡５０体を制限時間内に片付けると言った形式だった。
当時の斑鳩と葛城の仲は今とは比べ物にならない程に悪く、相性も最悪な二人組だったものの、今では同級生同士仲が良い。
因みに仮免試験は毎年内容が変わるので、己の身に付いた実力を信じる他ない。
況してやこの世代、平和の象徴亡き忍の存在が明るみになった社会だ。
ヒーロー学生と忍学生が合同で試験に臨むので、簡単…とはならないだろう。
しかも合同試験は今年が初めてなので、中々にハードルの高い難儀な試験が来ると予想して間違いはない。どの道試験を受ける以上、覚悟を決めておいて損は無いだろう。
「まっ、不安ならアタイが付き合うよ。
一汗流したりすると、心が落ち着くこともあるもんなんだぜ？」
葛城は後輩にめいいっぱい笑顔を浮かべて親指を立てる。
緊張感を解すかのようなその活気的な笑顔を見るのは久しぶりだ。

芦戸みたいな明るみとは少し違う、姉御的な存在に自分も頬が綻ぶ。
葛城は性格がセクハラ親父ゆえに行動でその性根が表れる。しかし、根っから悪いと言えばそうでもないし、仲間思いの良心的な頼れる心強い先輩なのだ。
だからこそ、そんな葛城の魅力に惹かれる自分がいる。
さぁ、後は閃いたイメージを後は…実戦で実現するのみだ――

葛城に稽古を付けて貰った彼女は、体の動かし方を学び通すことが出来た。
今までは武器メイン、二丁刀を駆使した戦闘スタイルで幾多ものの現場を潜り抜けて来た。
しかし、必ずしも其の常識が通用するとは限らない。
細心の注意を払い、最悪な予想から逆転する為、護身の術を身につける為、彼女は敢えて素手による格闘スタイルを選んだ。
備えあれば憂いなし、とは正にこの事。
気優しく明るみのある彼女から考えられないが、其れで良い。相手の予想と視認してた常識を覆すような、忍術の活かし方でないと、到底この先忍として生き延びる事も出来ない。
如何なる任務に徹する事も叶わない。
命懸けの戦場を覆すことが出来ない。
大袈裟かもしれないが、少し価値基準と戦法を変えただけで、そうでない者との差は歴然に広がる。

少なくとも、次世代のカグラになるのなら――当然だろう。
「出来た！秘伝忍法じゃない、忍術の応用――もう一つの戦術！」
体全身に付き纏う緑風を揺らがせ、飛鳥は自信溢れる笑顔を浮かば

せる。
目の前に聳え立っていた壁のコンクリートは跡形もなく粉砕され、破片が散らばっている。
拳は腫れ上がっておらず、埃一つすら付いてない模様。
葛城に稽古を付けて貰ったことで、体の動かし方は大分慣れた。後はこれをどう強くイメージで持つか――
相澤先生は言っていた、経験は活かす為に有ると。
林間合宿、彼女が学び経験を活かしたのは敵連合の襲撃。自身より断然的な格上の存在である黒佐波との戦闘を経た彼女は、この結論に至った。
黒佐波、敵連合開闢行動隊のメンバーにして飛鳥を苦しめた上忍以上の実力を備える猛者。
秘伝忍法を多発連続使用する彼に今でも悪寒を覚えてるし、今こうして生きてる事でさえ奇跡でしかないのは、自分でも実感できる。性格も心も、認めざるを得ないが彼の方が一段と上だったのは、身の骨に染みるほど思い知らされた。
それでも懸ける想いが同じなように、自分も負けたくない。だからこそ、逆境を乗り越えて勝てたのかもしれない。
これが連続で通用するとは思っていない、だからこそ強くあれ――
（あの人も、私と同じ風遁術を使うって言ってた…！忍法は違うけれど、それでも出来ない訳じゃない、私の思った通り――）
黒佐波の忍法は波紋忍法。
風の遁術に波紋忍法を兼ね合わせたことで、衝撃的な強さを発揮し、相手を翻弄。
相手を打ち砕くかの如く拳を乱打させる際に、風遁術を放出。そうすることで、衝撃と風の威力、更に忍術を合わせて破壊的な効果を表していた。
これだけで緑谷出久のワン・フォー・オール常時５％による威力を、同等かそれより上まで登り上がる。
黒佐波のように拳に風を纏わせたイメージを、今度は緑谷出久のように体全身へ。

緑谷出久が周りから知識を得て吸収するように、飛鳥も色々な者と交えて吸収し、強くなる――

「凄イナ。昨日トハ比べ物ニナラナイ程ニ、成長シテルナ。正直ココマデ活用良ク活カセレルトハ、良イ意味デ想像ヲ裏切ラレタゾ」

無愛想なエクトプラズムは彼女の急成長具合に感心したように、ニカッと笑顔を浮かばせる。

しかし、無表情ゆえに顔付きは変わってないように見えるものの、声色だけで伝わって来る。

飛鳥は「有難う御座います！」と先生に一礼、しかしまだまだ訓練は今始まったばかり、終わりは無い。

「飛鳥のヤツ、すっげ～……」

「刀メインだったのに今度は体術？どーゆー風の吹き回しでこうなったんだ？」

「でも…お茶子ちゃんみたいな発想で私は良いと思うわ、ケロケロ」

「飛鳥ちゃんの笑顔見る辺り爽快だねぇ！」

彼女の急成長に戸惑い、驚きを隠せない者も少なくは無いだろう。現に未だに必殺技を編み出してない者、既に技を完成してる者、様々な者達が彼女一人に視線を移す。

「飛鳥ちゃんも、ウチみたいな格闘メインで行くんかな～？」

「まあ俺達のクラスにも肉弾戦を得意として闘う者もいる訳だ、珍しい…と言う程でも無いが、確かに意外性はある！」

「飛鳥さん…」

いつもの三人組も、彼女の成長具合に談話する。

麗日お茶子は格闘武術も身に付けているので、もし彼女と相談していれば、一番早くこの結論に辿り着けただろう。

しかし飛鳥は、お茶子が職場体験でガンヘッド事務所に訪れた事をご存知ないため、緑谷出久と葛城のアドバイスでこの答えを導いた。

飯田天哉も、他の一同と同じく意外との声が上がってるものの、内心は彼女に感心している。

緑谷出久は昨日コスチュームの件で用事がありサポート科に向かう途中、彼女に呼び止められ、相談を受け彼女と話し合っていたのだ。
自分も個性の扱いに悩み、頭に苦しんだこともあったが、まさかあの会話で彼女がここまで成長するとは思っていなかったのか、緑谷本人も呆然としている。
(飛鳥さんも…また一段と……
僕が話したのなんて全然…動き方は僕やかっちゃん寄りでもないし…独自のスタイルなのかな?)
自分はオールマイトや爆豪勝己と言った周りの人から影響を受けているので、戦闘スタイルや動作が似てる部分が有る。
其れは身近な人から見て倣ったのか、はたまた緑谷出久自身による尊敬から来る憧れか――

「デカ乳女の野郎、また一歩成長しやがったのか糞ったれが」
爆破の煙に呑まれ消えゆくエクトプラズムを余所に、込み上げてくる怒りを噛み殺すかのように、鋭い獣の視線を向ける。
爆豪勝己を一言で言い表すのなら、其れは自尊心の塊だ――
初期の頃はプライド高い余り、結果として緑谷に敗北し心が折れたのは、今でも忘れられない。
道端に転がる無個性の石っころだと思ってたヤツが、今じゃ自分か其れ以上の格上に食い込むようになった。
突然個性が発現したなんて見え透いた嘘っパチなことを呟いてはいたが、着々と成長過程へと進んでいるのは明らかに揺るがない事実。
前までは緑谷が眼中に入るだけで苛立ちが込み上がってた。だが、今ではどうだ?
体育祭で完全舐めプしてた轟焦凍、自分をダチと胸を張って言い語る切島鋭児郎、その他にも忍学生の飛鳥を始めとしたまだ見ぬ忍達。
いつしか自分の周りは、己を超えうる可能性を秘めた強者が山ほど存在している。

「おいエクトプラズム！もう一体死んだ！追加頼む!!!」
心の底から湧き上がる焦燥を誤魔化すように、エクトプラズムに分身を寄越せと頼む。
ここのところ落ち着きがない。
自分の心に整理が上手く付かない…
脳に虫が這いずり回るかのように、頭の中がごちゃ混ぜになる。
其れは、次々と自身を追い越そうとする皆への圧が掛かった焦燥か？
または、神ノ区で起きたオールマイト引退を根に引きずってるのだろうか。
（……テメェのじいさん、あんなことになっちまったのも…俺が弱くて捕まっちまったから……なんだろうな……）
「なんで、そんな笑顔になれるんだよバーカ……」
自分の所為で、お前のじいさん…もう戻れなくなっちまったんだぞ。
俺の所為で、お前のじいさんが…傷付いちまったんだぞ。
お前、あの時泣いてたよな――
何で、俺の所為だって…怒鳴らねえんだよ。

「俺と…お前が、手を組む？」
突然自分の根城に土足で入って来た漆月に、内心焦りの色を浮かばせるも、顔は無愛想なマスクで覆い隠してる為、相手からは表情を悟

られる事は無い。
（何を突然…は？意味がわからん……魔門や『亜門』からは連絡は来てないハズ…手を組む？何んの話だ？其れを何故態々俺に…？）
疑心暗鬼が深い佐門は、仮面越しで目を細めながら、獲物の様子を伺うかのような視線を漆月に浴びせる。
他の一同も表情を曇らせているのか、浮かばない顔だらけだ。
対して漆月はこちらに妖しい美笑を浮かべている。
「何故、俺とお前が手を組まなきゃならない？況してや天下の敵連合の傘下であるお前が？」
「『何故、俺とお前が手を組まなきゃならない？』って台詞から察して、私と組むのに何か都合が悪いのかしら？佐門くん♡」
悪戯そうな笑みを浮かべる彼女は、一歩また一歩と足を踏み入れ佐門に近付き寄ってくる。
以前のような子供っぽい漆月とは違い、今は見間違える程に成長している。
「そりゃあ言い方が悪かった。態々忍商会のＮｏ．３なんて最下位の肩書きを背負う俺と手を組まなくても、他のアイツ等がいるじゃねえか？なんで俺だ？」
皮肉なことに、あの二人は俺よりもずっと強い。
たった一人で忍学校を５校潰したアイツはカグラを７名葬った〝裏闘技場〟チャンピオン。カムイに認定された危険人物――Ｎｏ．２亜門。
オール・フォー・ワンと言う伝説の支配者と一時期協力関係に入り、カグラを１７名も葬り去った事から鏖魔に認められ、亜門と同じくカムイとして認定された人物――Ｎｏ．１魔門。
この二名なら協力に事足りる。
しかし何故態々最下位の俺に協力要請を申すのか、理解ができない。尤も、敵連合のコイツが直々にお出迎えになるとは思ってもおらず――
「そりゃああの二人は今も忙しいからよ、手が離せない程にね♪
アンタも知ってる筈よね？同じ組織の下にいるなら、情報共有して

るんじゃ無いかしら？」
この世代は犯罪率が上がり裏・闇売買が頻繁的に開発生産や販売に手が付けられない程忙しい。
トリガーの薬物、忍道具の開発や売買は世界各地の敵と取引を行ってる為、どうしても手が出せない。
「魔門と亜門に連絡したら佐門に当たってくれってさ、居場所もルートも教えてくれたのよ？どう？納得できたかしら？」
「腑に落ちねえな。敵連合が神ノ区で全員捕まってないのなら、黒霧の手でいつでもここに来れるだろう？
それより、仲間はどうした？お前一人か？」
「随分と質問が多いのね？強引すぎると女性に嫌われちゃうわよ？
そりゃあ黒霧がいれば問題ないけど、今はちょーっと手が離せなくてね。大事な案件があって訳有り離れてるのよ。
仲間は…置いてきた。御察しの通り私一人だけよ♪アンタと交渉する為にね――」
「……」
嘘を吐いてるようには見えない。
恐らく、一人でこの場に赴き手を組む交渉をしに来たのだろう。
魔門や亜門も忙しい…と言うのは頭の中でも解っていたが、自分に当たるとなると、暇を持て余してるように見えるのだろう。
それも、その筈か
「……解った、要件を聞こう。で？何をどう手を組めばいい？」
「佐門も知ってると思うんだけどさ、私たち連合は今人手不足…早く他のメンバーが欲しいのよね。
警察やヒーローに忍、3勢力が徹底的に私たちを追ってる中、仲間探しは流石に厳しいのよ。
私一人なら、あんな奴ら大したことないんだけど…他のメンバーが心配でね？茶毘とスピナー辺りが厳しいかしら？」
「つまり、俺たち忍商会と敵連合…組織同士手を組むってことか？」
「出来ればそうしたいのだけど…それはまた別。
私個人として組む話は別にあるの――」

「なんだ、言ってみろ」
呆れるような、面倒くさそうに聞く佐門の心境は全く別だ。
正直、今は敵連合と協力する気は毛頭ない。魔門や亜門とは全く違う目的があるし、組織のことなど今となってはどうでも良いのだ。
しかし態々ここまで聞いてしまった以上、怪しまれるのも困る。尤もこんな厄介なヤツが何をしやらかすか、解ったものじゃない。
まだ、計画がバレるわけにもいかない。誰にも悟られる事がないように、上手く誤魔化して追っ払うしかない。

「あのね――獄獅狼を探したいんだけど」
『!?!?!』
漆月の口から出たその名を聞いた途端――一同は震え上がり一気に視線を向ける。
まるでとんでもない言葉を口にしたかのような反応に、漆月は面白がるようなクスクスと
「あら、どうしたのかしら？皆んな顔面蒼白よ？呼吸も乱れてるし、仮面越しからすっごい冷や汗を流れてる…もしかして私、何か変なことでも言ったのかしら？」
悪魔の微笑みを浮かべる漆月。
変なことだと…？このクソ女（アマ）、本気で言ってるのか？
俺たちを殺す気か……

アイツは――１００年以上生きる天災だぞ!?!

獄獅狼
年齢不明、個性または忍術不明、戸籍不明、所属グループ無し、情報は全て皆無。
隅から隅まで謎だが、殺人件数やカグラを葬った数は数え切れないと言われてる、忍の天敵だ。
それこそ、彼こそがカムイと名乗るに相応しい――

そんな化け物を、漆月は飼い慣らすかのように、仲間に引き入れると言うのだろうか？

「ホラ、アイツなら立派な戦力になれるじゃない？弔も大喜びすると思うの…褒めてくれるかな？ううん、褒めてくれるわよね。

何たって私と弔は――切っても切れない、永遠の絆で結ばれてるから♡」

まるで赤い糸で結ばれてるように、死柄木と漆月はもはや表と裏という表裏一体の関係だ。

彼女に似合わない其の引き釣った笑顔は、殺意と悪意を蓄えて曝け出していた。

その殺意に引き当てられ、思わず悪寒を覚える一同は、顔を顰める。

これ以上は危険だと察した佐門は

「お断りだ――」

拒否の意思を示すよう、断言した。

「幾ら何でもアイツは危険すぎる。俺が全力で対峙しても命が幾つあっても足りねぇ…

アイツを一人、組織全員敵に回したとしても、勝機はねぇし核兵器を使っても倒せやしねえだろうよ…そもそも目撃情報が無い今、生きてるのかさえ判らない。探し出すにしろどっちにしろかなり厳しい。金とかの問題じゃねえんだアイツは、なぁ？お前も死ぬぞ――」

「あらぁ、もしかして私の心配でもしてくれてるの？有難う佐門くん♪けどその件については大丈夫――私は絶対に死なない。

何なら佐門を殺さないようにしてあげる事だって可能よ？私ならやれる、そして私ならアイツを仲間に引き入れることくらい訳ないから♡」

そんな事が可能なのだろうか？なんて疑いを持ってしまうほどに、その内容は意外的なものだった。

ハッタリにしては、こんな自信満々な顔を浮かばせるだろうか？策もなく単に悪事を働くような女じゃ無いことなど、今日コイツと会って直ぐに身に染みた。

「随分と自信満々なんだな…
仮にその案があったとしても俺はお前ら側にはつかん。
知っての通り俺らは多忙の身…俺だって手が付けられないほどに忙しいんだ。他を当たってくれ」
正直、自分はコイツら敵連合に就く気も協力する気も更々無い。
此方は手が付けられない…という理由は間違いではないが、組織の仕事上では関係ない。
それとは別、魔門や亜門の筆頭や其れ等率いる幹部達にも話してない、自分の仲にしか知られてない計画がある。
其の為、敵連合の組織はもちろん邪魔以外の何でもない存在、漆月なら尚更だ。
佐門は厄介払いするよう口を開く。
「そもそも得するのはお前ら側だろう？俺たちには何の利益もないじゃねえか」
「何言ってんの？利益ならあるじゃない――」
「ん？」

「獄獅狼を仲間にした後、アンタも仲間に入れば良いのよ！」

「――は？」
彼女の言葉に佐門は唖然とする。
まさか…俺を連合の傘下に引き入れるための、獄獅狼なのか!?アイツを仲間に引き入れて、俺も連合に赴けと？
確かにそれなら漆月の言う通り、敵連合の危険意識は高まり、圧倒的な戦力一つで命の保証は確立される。連合にいれば、命を狙わようとそう易々とヒーローや忍から倒されることは無いだろう。
それなら文句はない…だが
「お嬢さんや――あんま儂等を揶揄わん方がええぞ」
それを黙って見過ごすほど、ここの闇組織は甘くはない。
丸刈りの坊主頭をした男はニッと優しい笑顔を見せるも、行動は当たって凶暴だ。拳を構え、殴りかかるも漆月の頬を寸止めしている。

漆月は眼中にないように、坊主男を見向きもせず口を開く。
「アンタ、誰？」
「申し遅れました、私は佐門（マスター）様に使える道具。忍商会十悪業者――綺語道楽と申します…以後、お見知り置きを」
忍商会十悪業者、九ノ座――綺語道楽。
笑顔とは裏腹に凶暴性を備える道楽は、佐門率いる幹部の中でも下位の順位に当たるものの、実力は有る男だ。
肉弾戦を得意とするパワーファイター、綺光忍法を使用する曲者である。
「やめろ道楽。
此処で暴れりゃあ騒ぎが起きてプロヒーローや忍が駆けつけに来る。そうなりゃ此処の基地はヒーローと忍に怪しまれる。それにコイツがウチの門じゃねえ以上、手出しは出来ねえ。あくまで交渉…それに下手に動けりゃコイツが何をしやらかすか解らねえからな。被害はなるべく起こしたくない」
「うっす…マスターがそう言うのなら…失礼しやしたぁ…」
腹黒い心の中で舌打ちをしながら、拳を引っ込めて後方へ下がるものの、警戒態勢を解かず構えを取っている。
しかし、それに対して漆月は不気味なほどに笑顔を引き攣り立てていた。
そんな漆月に多少の気味悪がりながら佐門は口を開く。
「残念だが、俺はお前らの傘下にはならん。
確かに獄獅狼がバックについてれば敵なし…魅力ある話だ。だが、その理由を機に組織を抜け出すことは許されないってことを、お前は知ってるか？
さっきも言った通り俺たちは暇じゃねえ…俺たちには期待しない方が良い。協力関係なら話は別だが…さっきの言葉通り、どの道お前が俺たちと手を組むことはない」
立ち去れと言わんばかりの視線を飛ばす漆月は、ニヤリと口角を上げると

「それならもっと簡単よ、忙しいなら私がアンタの仲間になって動けば良いんじゃない？」

「――はぁ?!」

彼女のぶっ飛んだ台詞に、佐門は思わず驚嘆な叫び声を上げる。他の一同も表情を曇らせ困惑している。

――コイツ、このクソ女(アマ)ぁ！

仲間に引き入れるかと思ったら今度は仲間にして下さい…だと？一体全体どう言うつもりだ？

お前が言った其れは、つまるところ敵連合の仲間を裏切るって言ってるようなもんだぞ?!

いや、コイツは死柄木の思想の下で働くヤツだ…簡単に組織を裏切るとは思わねえ…と考えると、コイツの本当の目的は何だ？何がしたい？

そこまでして俺達に執着する理由が見当たらねえ――少なくとも、会話内でも検討が付かないだろう。

「って言うかさ、ずっと不可解に思ってたことがあるのよねぇ～……何で私はアンタの質問に答えてあげてるのに、佐門は一向に喋らないのかしら？」

「！」

「アンタ達の戦力が増えるのは本望よね？其れなのに協力関係は築けず、仲間に入るって言ってるのに何も言わないなんて、如何にも怪しすぎるわよねぇ…？もしかして佐門くん

――私と組むのに何か都合が悪い事でもあるんじゃないかしら？」

探るように、執着する漆月は虫のように不気味だ。全身に虫が纏わりつくかのような、背筋がゾッとする。

まさか…コイツ…俺達の真の目的を探ってるのか？

元々疑い深く疑心暗鬼の強い佐門は、漆月に様々な質問を繰り出していた。
しかしそれが逆に彼女の狙いだったのか、初めっから情報を与えず、不確定のまま態と質問をさせ、後から自身が質問に答えるように仕向けていた。
彼女に問い続ければ、自分が答えたくない情報をいずれ答えにするよう質問しに来るハズだ。
仮に質問に答えなかった場合、更に疑いを向けられ怪しい印象を強く与えれば、何れ計画がバレてしまう危険性はかなり高い。

「ねぇ佐門、私すっごーく気にな――」
ポンッ！
肩の上に手を置かれた瞬間。
反射的に漆月は背後にいる人物へ視線を移すと
「組織内の秘密は、如何なる理由があれど外部に情報を漏らしてはならない」
口元に黒マスクを覆う男は、漆月の肩を掴んでいた。
刹那――漆月は肩を掴んでた男の手を払い、凄まじい勢いで後方に下がる。
ズザザザ！と床と靴が擦れる音を部屋に響かせながら、先ほどの妖美な笑顔とは反面、獲物を睨みつけるかのような敵意の視線をガン飛ばす。
対して黒マスクの男は、払い除けられた手をパッパと払う仕草を取り見つめ直す。
「良い反応だ。
素晴らしい反射神経、無駄な動きもない…　流石は全国指名手配犯なだけあって、今まで生きて残れた訳だ――」
(コイツ、力いっぱい肩を掴んでたんだがな…簡単に払い除けやがって…何者だ？
しかもかなりのやり手だな…あの反応速度…相当鍛えこんでやがる)

表面上、強者の余裕と言わんばかりに上から目線で語りかけるも、内心は彼女の秘めたる強さに目を細める。
払い除けられた手は痛みによる刺激で僅かに痺れが生じている。
「アンタ何者？
昔とは違って、今の私の背中を取れるヤツなんて、Ｍｒ．コンプレスやトガヒミコ、鎌倉でも出来やしないわよ？
それなのに私に気付かれずことなく背中を取るなんて…一本取られたわ」
四角からの奇襲は効かず、至近範囲内の距離では目を瞑ってでも避けられるにも関わらず、漆月は彼の存在に気づく事が出来なかった。これは彼女にとっても大きな致命的な点である。
「嗚呼、そう言えば生で逢うのは初めてだな。俺は忍商会筆頭Ｎｏ．３佐門の補佐を務める身…幹部（商品）を纏め上げる最高幹部。忍商会十悪業者――嘘月妄語だ」
忍商会十悪業者、一ノ座――〝嘘月妄語〟
忍商会の幹部メンバー全員を佐門の代わりに指揮する筆頭の補佐だ。その実力は折り紙つき、肉弾戦格闘と言った忍術なしの戦闘では佐門をも凌駕する手練れの抜忍だ。
実力は本物、何しろ最高幹部ゆえに佐門率いるメンバーの中で一番強いのだ。
「最高幹部？へぇ…貴方が。
どうやら…只者じゃないわね――貴方なら楽しめそう♪」
ニィっと、殺意を込めた瞳を放つ漆月は、野性味溢れる笑顔を作り出す。まるで肉食獣のような残酷な笑みは、常人が見れば殺意に慄くるだろう。
「組織内の秘密が外部に流される危険性を踏まえて、信頼性も何も無い私と組むのを敢えて拒否するってわけね。
ワザと質問に答えてあげてから、アンタ達のこと問い詰めようって腹積もりでいたんだけど…
ちゃんと組織のこと考えてる辺り、しっかりしてるじゃない♪流石は忍商会ね、やっぱ上手く思い通りには行かないわよねぇ♡まぁ、

いっか――これ以上聞いても何も収穫無さそうだし、いつまで此処にいても時間の無駄…帰らせてもらうわ。
けど忘れないで――また来るから♪」
諦念したのか、溜息を吐いて踵を返す漆月は、襖を開け背中を相手に見せる。
やっと厄介なヤツが消え去ってくれる…そう一同が安堵の息をついた途端、彼女は思い出したかのように振り向き
「それじゃあ精々頑張りなさいな――その仕事ごっこ」
「――はぁ？」
そう意味深い言葉を告げた後、襖を閉めて何処吹く風か、消えて行く。
（――まさかだとは思うがアイツ…俺の計画に勘付いてやがるのか？
いや、外部からの情報は絶対にバレないよう細工を施してある。テレパシーや読心術でもない限り、計画を知らされることは先ず無い。
だがあの様子だと気付いてる様子…何が目的なんだアイツは？少なくとも俺たちを仲間に引き入れるってのも、手を組むってのも嘘…いや考え過ぎか？
本当の目的が解らない以上、アイツは注意するべきだな）
此方側に情報を流さないよう、防止の為に術は掛けているので心配は無いが、漆月の出方が解らないのであれば、確認する仕様がない。
「お前ら、今後から漆月には注意しろ。
何を考えてるか解らん、得体の知れないアイツの目的が解らない以上、何をしでやらかすか分かったもんじゃねえ。
今度また漆月を見かけたら情報を寄越せ、アイツが計画の邪魔をする場合は――迷わず殺せ、良いな？」
『御意』
血の通わない冷徹な声で命令を下す佐門に、幹部達は了承する。
もし此方の計画に勘付かれてしまえば最悪だ。今のでハッキリしたのは、計画を進むのにつれて漆月は必ず障壁となるだろう。

佐門にとっては厄介すぎる敵…
（考えたくもないものだな…あんな小娘一人、俺たちが振り回されるなんざ……）
漆月という得体の知れない女は、佐門に粘りつく不安を与えていた。其れは紛れも無い事実。
着実に外堀から埋めて、内側から己の思惑通りに状況を作り上げ、操作する。
漆月の回りくどく、悪質で気味悪いやり方は、正しくオール・フォー・ワンに似ている。
佐門は苦虫を噛み潰したような顔で、漆月が先ほどまで佇んでた場所を静かに黙視していた。

場所と日時は変わり、一週間以上が通り過ぎた日の今日、ヒーロー仮免許取得試験当日!!

１２５話「仮免試験」

「ついだぞ、降りろ」
相澤先生の気怠い声が、静止したバス内に響き渡る。担任の掛け声に雄英生と忍学生は荷物を持ち、次々と速やかにバスから降りて行く。
此処は試験会場――国立多古場競技場
外見から見ると天に突き刺すような螺旋状の形はまるでドリルみたいで、白くて大きい建物が悠々と高く聳え立っている。アレが試験会場なのだろう。
見た限りかなり広く、ペースが大きい分個性による範囲も範疇において考えたのだろう。
「予想してたよりもデケェ…」
「もう野球出来るじゃんコレ、プロ野球の試合会場かよ」
「なんか緊張して来たぁ…」
「人人人人人……」
試験会場を前にザワつき雑談が漏れるＡ組達は、酷く緊張してるご様子。
冷や汗浮かぶ上鳴や耳郎、会場のデカさに呆然とする切島、緊張を解す為に掌に人の字を書き舐める峰田。
そんな生徒達の囂然たる空気など御構い無しに、相澤は気怠い眼つきから一変、真剣な眼差しに変わる。
「良いかお前ら、この試験に合格し仮免許を取得すりゃあ、お前ら志望者（タマゴ）は晴れてヒヨッ子…セミプロへと孵化できる。
忍学生も気を緩むなよ。お前達半蔵学院以外にも、忍学校の生徒たちが此処に来るんだ。
足をすくわれましたじゃ済まねえからな」
『はい！』
仮免許を取得さえすれば、護衛の術を手に入れる事が出来るのは勿

論、偉大たる立派なプロヒーローへの第一歩を踏み込む事が出来る。
本来なら忍学生とヒーロー学生は別々に試験が行われ、仮免許は二年生から受け始めるのが基本なのだが、あの神ノ区を踏まえ一年生達も取得する必要があると上層部が見込み判断し、一年生も受け始めるようになったのだ。
忍学生もまた然り。ヒーロー学生と忍学生を一緒に試験へ臨ませた理由は、今後から忍とヒーローが本格的に手を取り合う場面が多くなり、明るい社会を築き上げると供に、平和の象徴という圧倒的戦力の穴を埋める為だそうだ。
「先生からの説明と報告は以上、後は己の経験を全部試験にぶつけろ、頑張ってこい」
無気力な先生も、いざ生徒達に面を向かってそう言ってくれると頼もしい。
心に縛り付く緊張感が少し和らぎ、気が楽になったようだ。
「しゃああ!!頑張ろうぜ!そんでなってやろうぜヒヨッ子によぉ!!
ッつーわけでここはいつもの一発キメてこうぜ!!」
切島の熱血漢たるや、漢気のある活気な声が皆の心に響く。
自慢げに、高らかに腕を振り上げ

「せーのっ!Ｐｕｌｓ――「Ｐｕｌｓ　Ｕｌｔｒａ!!」」

発声した途端、後方から別の声が切島の言葉を遮る。
切島に負けず劣らず張り上げた声の主は、丸坊主頭をしたガキ大将に見える。
「えっ？え??」
「だれ？この人…」
切島と雲雀は困惑しながら、声主に目を細める。
「勝手に他所様の円陣へ加わるのは良くないぞ、『イナサ』」
「ああしまった!俺としたことがつい……熱く血が滾って思わず邪魔しちゃったっス!!」
熱血そのものを文字で書き映し出したような丸坊主頭の少年は夜

嵐イナサ。
　そんな騒然とした彼に轟は何処か心に引っ掛かったのか、「アイツは…」と他人に興味を示すような視線を飛ばす。
「皆様の邪魔して大変――申し訳有りませんでした!!」
　そんな一同の視線など意に介さず、イナサは額を思いっきし――
　ガァン！
　コンクリートの地面にぶつける。
「えええぇぇーーーー!?!」
　本人からしては、単なる謝罪なのだろう。
　礼儀正しい姿勢の状態で、頭を下げてる辺り、根は真面目のようだ。
　しかしオーバーリアクションを目の前で披露すれば誰でも悲鳴が上がるのは無理は無い。
「何だこのテンションだけで乗り切る感じの…なかこう、熱いヤツは！切島より熱いんじゃね?!」
「熱すぎて近づくだけで火傷しちまいそうだ！」
「と言うより、思いっきり頭打ったよね…大丈夫かな？」
「飯田＋切島みてーなヤツだな」
「てかあの制服…って」
　わいのわいのとイナサのぶっ飛んだ謝罪対応に、一部は騒がしくなるも、本人は頭を上げない。
「誰だアイツら？」
「あの制服からすっと決まってんだろ…
　東の英雄、西の士傑――」
　数あるヒーロー科の中でも雄英に匹敵する程の難関校――士傑高校。
　毎日授業を受けるカリキュラムは、雄英に負けず劣らず厳しく、並みの実力では到底ヒーローを目指すのは愚か、付いていく事でさえ敵わないと言われてる。

実際に雄英高校を諦め、士傑高校を入学希望とした生徒も、少なくは存在する。
雄英と士傑が比喩されてるのは、雄英高校の卒業生が学生時に幾多もの逸話を残してるからであり(オールマイトが良い例え)、士傑高校も雄英と対して変わらないのである。
ただ、目指すのなら最高難関と仰る者もいれば、士傑が良いと数ある理由を機に入学する者もいる。
「一度言ってみたかったんスよプルスウルトラ!!自分雄英高校大好きで憧れを抱いてます!!
それに雄英の皆さんや忍学生なんて言うジャパニーズニンジャと競い合えるなんて光栄の極みっス!
って言っても俺忍なんて全くの無知なんで此処にやって来る忍学生の皆さん沢山知って行きたいと思っています!!!!
お互い頑張りましょう!宜しくお願いします!!」
太くデカイ声を吐き出しながらも、額からはボタボタと血を流してる辺り狂気じみてるが、真正面からぶつけて来る台詞や、彼の熱血魂から考えて悪い生徒では無いのだろう。
「てかイナサが英語喋ってるし」
「?士傑高校に入学してるのだから当然だろうケミィ」
「いや想像出来ないでしょ?」
「お前そんな喋り方だったか本当に?」
細目の男性と、ケミィと呼ばれる少し金色掛かった長髪の女性が駄弁りながら、イナサの横を通り過ぎていく。
そんな二人に「嗚呼待って下さい!俺もいくっス!」と二人の横に並び立つように歩み寄る。
「夜嵐イナサか…こりゃあ珍しいな」
意外なことに、相澤先生が珍しい物でも見るかのような目付きでイナサと呼ばれる少年の背中を見つめる。
「先生知り合いっスか?」
「あんなゴリラと先生が知り合いってのも想像しにくいだろ」
「爆豪出会って間もない他校の生徒にストレートに意見ぶっ放すの失

礼過ぎじゃね？」
上鳴の言葉は尤もだ。
しかし反応や素振り、外見を見た限りイナサと相澤先生の接点が見えない辺り、何故相澤先生が彼のことを知ってるのか想像がつかない。当の本人は相澤先生を見るも全く興味を示さない無反応だったが。
「気を付けろお前ら、よりによって厄介なヤツが同じ会場に当たっちまった」
「士傑高校自体、雄英に負けず劣らずのエリート校だから…ってだけじゃないんですか？」
飛鳥の質問に、相澤は視線を変えずコクリと頷く。
「まあな。
知ってるもなにもアイツは昨年度――お前らの年の推薦入試、トップの成績で合格したにも拘らず何故か入学を辞退した男だからな――」
相澤先生の切り捨てた言葉に、一同は耳を疑う。
先ほど彼の台詞から聞くと「雄英高校が好き」という言葉に嘘を吐いてるようには見えなかった。
単に見えなかっただけかもしれないが、それにしては嘘をつく理由も見当たらない。
トップの実力…となれば即ち、実力は轟焦凍以上だろう。
にも拘らず、雄英高校の入学を蹶る理由は何なのだろうか？
だからこそ、最高難関である雄英の入学を蹴ること自体が信じられない。
「まあ不安がる気持ちも解らなくは無い…ただ先生からのアドバイスとすれば…アイツには気をつけるって事だ」
どの道、同じ試験会場に当たるとすればぶつかり合いは免れない。
予め警戒しておいて越した事はないだろう、士傑高校相手なら尚更だ。

雄英のライバルと呼んでも過言ではない学校、充分に注意しなければならないだろう。

「ふっ…雄英に士傑か。
双方名高きエリート学校…相手にとって不足無し、中々に素晴らしいじゃないか」
イナサの熱血漢と雄英入学辞退に驚き呆然としてる真中。
凛とした清楚な声が、皆の耳を打つかのように届く。
「ん？誰だお前ら？」
先生の発する言葉と供に、全員声主の方向へ視線を移す。
「誰だアレ？」
「五人組…だけだね？」
「あ～でも他の大半の生徒達もいるな」
芦戸、瀬呂は眉をひそめながら相手の学生をマジマジと興味深く見つめる。
黒いセーラー服を着た女子高生など、道端でヤンキー座りしてる不良女しか知らない。
しかし、見覚えは有る。
少なくとも覚えてないだけで飛鳥達はおろか、緑谷達全員はこの女子高生の学生服を見た事がある。
「ッつーか、その服どっかで見た覚えがあるかと思ったがよぉ……」
「おい飛鳥、アレって…」
「あの制服って…」
眉間に皺を寄せ付け、不良感ダダ漏れの爆豪は忌々しい視線をガン飛ばし、相手の学生服に見覚えのある轟は確認するよう飛鳥に声をかけ、緑谷は思い出したかのように嫌な脂汗が流れ滴り落ちる。
「申し遅れた、私たちと会うのは初めてだな？光栄に思え――
私は『総司』、秘立蛇女子学園選抜補欠メンバーの筆頭だ！」
ルビーのような輝かな瞳、腰まで長く垂れ落ちた金髪、優雅な一面

にどこかキザな口調は青山優雅にも負けないだろう。
秘立蛇女子学園選抜補欠メンバー筆頭代理、総司。
「へ、へへへ、蛇女!?」
「うっそでしょ…マジ?!」
「あ、ああえっと……どーも??」
蛇女と名乗り出る総司達にてんぱり混乱する上鳴達は、冷や汗を滝のように流れ落とす。
同じく耳郎は苦虫を噛み潰したかのような、苦の表情を露わにし、透明で素顔が見えない葉隠は、何故か敬語且つ疑問形で見えない姿のままペコペコと頭を何度も下げる。

蛇女子学園。
嘗て半蔵学院に奇襲を仕掛け、超秘伝忍法書争奪戦として双校断ち切る事のない因縁が生まれ、戦争にまで陥った、悪忍育成機関養成学校である。
当初は道元の企みにより蛇女全体の生徒たちの命が危機に陥り、更には緑谷、轟、爆豪の三人以外は知らないが、学炎祭にて新蛇女子学園の選抜メンバーに目を付けられ、学炎祭を仕掛けられたのだ。
その日は前夜祭だったのだが、雅緋率いる一同のメンバーは強く歯が立たなかったのは、骨が身に染みるほど覚えている。
積もる話、半蔵学院や雄英高校にとって、蛇女子学園との出会いはどれも良いものでは無いのだ。
「…天下の雄英高校の生徒と聞いて見れば…私達悪忍の前に取り乱れる姿勢を見る辺り……こんなのがヒーロー学生だなんて、呆れを通り越して笑えませんね」
「あァ?なんだテメェこらァ」
総司の隣に立つ少女の冷徹な言葉に、反応した爆豪は顔をしかめて獣の如く食らうかのように睨み付ける。
茶髪に二本のアホ毛がチャームポイント、野生の野良猫を連想させる目付きが特徴だ。
少女はそんな粗暴極まり無い爆豪に臆する事なく

「そもそも、敵連合の襲撃に万全たる対策と生徒の安全たる保証が取れてない時点で、貴方達がヒーローを名乗るなど烏滸がましいと思うのですが……

貴方はどう思います？ヘドロ事件に続き、敵連合に拉致された爆豪勝己さん」

平坦に、堂々と煽りの宣告する。

その台詞は、尤も本人の目の前で言ってはならない言葉。

器が小さいゆえに、プライドも高くクラスで一、二位を争う存在。

少し侮辱的な意味が含まれてる言葉を耳にするだけで文字通り掌から爆破を起こす爆豪勝己にその言葉は、冗談抜きでマズイ――

緑谷、お茶子、瀬呂辺りは顔面蒼白で爆豪の背中を見やる。

「テメェ――いま何つった？あ゛ぁ゛？？デクやゴリラ諸共（士傑の野郎供）の前に、お前から爆殺してやろうかぁ!?!」

ボォォン！と凄まじい爆破を目の前で披露するも、少女の表情は変わらず、まるで「お前は眼中にない」などの興味を示さない目線で真正面を見つめている。

そんな爆豪を相手に臆さないどころか、平然とボーっとしてること自体が驚嘆すべき光景なのだが。

「や、やめて下さいよ『千歳』さん!!そう言うのは無しです！

た、他校の悪口を言うのは……良くないです…よ？」

いても経ってもいられなかったのか、か弱く優しい声が横入りするように皆の耳に届いた。

オドオドとした態度、優しさで全てを包み隠すかのような口調に、爆豪は兎も角千歳と名乗る少女は鋭い眼光を放つように横目で相手を見やる。

「悪口では無く事実を言ったまでですよ『芭蕉』さん。

其れに他校の事など貴女にとってはどうでも良い事でしょう？」

「そ、そんなことは――」

彼女の名前は芭蕉。

同じく蛇女選抜補欠メンバーの一員であり、皆を影から支えるチームのムードメーカー的存在。悪忍とは思えない気優しさと心遣いが彼女のより良い長所だ。
「一人は感じ悪いヤツだけど、もう片方の一人は結構マトモそうだな」
「選抜補欠ってことは、選抜メンバーじゃないってこと？」
「そもそも俺たちが知ってるのってあの選抜メンバーしか知らないもんな」
緑谷、爆豪、轟は雅緋を始めとした新選抜メンバーの存在を知ってるので、辻褄も合えば大凡の想像は付くだろう。
しかしそうでない者達からすれば、彼女達が選抜メンバーでない事に納得がいかない。
「ん？あり？」
「どったの切島⁇」
「いや、あの緑髪の…あの子、なんかどっかで遭ったような気がしなくもないんだけど……」
「知り合い？」
「いんや…けど、なんだろうな…？初めて逢った気がしないんだよ俺、どっかであったっけ？」
何処かで見覚えのあるようなデジャヴな感覚に、切島は小首を傾げて記憶を巡るも、思い出せない様子。
芦戸も同じく「あれれ？けど確かに遭ったような気も……同じ中学のクラスなら全員覚えてるけど…」と切島と同じように既視感を覚えながらも首を傾げながら芭蕉を見つめている。
当の本人は見られてる事に気付いて無い様子で、千歳の失言に爆豪の前で謝っている。
「雄英の生徒とは初対面じゃが…全員癖のある個性的な者ばかりなのじゃな。
我の従信にしても良いぞ!!」
赤髪で可愛げのある美形、しかし口調はどこかじじ臭い、独特なセンスを持つ少女の名は芦屋。
彼女は自分が正体不明の神の６６６番目の使徒だと自称する、俗に

言う厨二病に近い輩だ。
「今ならこの手配した紙にサインをすれば、直ぐに我が宗教たる下僕にしてやらんでもない!!」
「下僕なのか」
何気にツッコミを入れる常闇もまた厨二チックな一面が有るも、少なくとも彼女と関わりを持ちたくないと感じるの常闇だけでは無いハズだ。
「オイオイおいおい、選抜補欠ってんだから恐らくは一年だろうけどよぉ…前の選抜メンバーに続いて…よりどりみどりじゃねえか!!」
血走り狂った充血の目で、五人組を見つめる峰田の表情は、いつに増しても卑猥で下劣な顔立ちだ。
もうここまで来ると誰も突っ込まないし、何時ものことかと、皆は汚物を見つめるような蔑んだ目で見下す。
「はうううん!!自分、そんな卑猥且つ疑問な視線で体をジロジロ見られたら、興奮して感じちゃいますよぉ〜!!」
峰田の視線に勘付いた少女の名は伊吹。
元選抜メンバーである春花を慕い、下僕だと言いながらも自分は正常、普通の女の子と自称する変態且つ変人だ。
思わず身体中を震えさせハァハァと犬のような荒い息遣いを吐く。ある意味両奈に似たエロ犬だ。
「ちょっ!おいマジかよエロ!!!」
ブバッ!と刺激が強く、エロ目線で見られる事に興奮を覚えてる彼女に峰田は思わず鼻血を噴水のように放出する。
そんなエロチックなドMたる彼女に「なんだあの変態…」と引き気味に思うクラスメートの皆んなは、意外な一面でも直視したかのように驚いている。
どのメンバーも個性的な一面を持つ曲者ばかりで有り(約一名はマトモだが)、競い合う相手としては充分に警戒すべきだろう。
「随分とまた派手な忍学生な事だな…何でもいいが、試験とはいえ命に支障を来すような真似はするなよ?

悪いが俺はアンタ達を信用してないんでね」
「ふん…私たちが悪忍の身とは言え少しは気を楽にしたらどうだイレイザーヘッド。いや、今はヒーローネームで呼ばなくとも良いのか。
しかし警戒を怠らない姿勢は賞賛してやらんでも無い」
「お前学生の身なんだよな？」
言葉を発する度に常に上から目線の物言いに少し苛立つ相澤は声を低くするも、総司は表情一つ変えず、高らかに口を開く。
「一応学生の身ではあるが……プロを凌駕する実力は備えてるさ。
まあ精々、お互い頑張ろうじゃないか？特に其処の半蔵学院もな――」
キッ――と鋭い眼光を放つ総司に、飛鳥は思わず固唾を呑む。
焔や雅緋から蛇女の話は詳しく聞いていなかったので、彼女たちの詳細は知らなければ、超秘伝忍法書争奪戦にて蛇女の本拠地を攻めた時などあのような五人組は居なかった。
「特に飛鳥、お前はあの選抜の焔と戦ったそうだな」
その言葉に思わず真剣な眼差しを総司に向ける。
選抜補欠となると、元選抜メンバーの焔達を知っていても可笑しくない。
その言葉に飛鳥は無言で頷く。
「フッ…そうか。
あの焔を……流石は伝説の忍である半蔵の孫だ。改めて半蔵の偉大さが伝わって来るよ」
神ノ区にて元凶たるオール・フォー・ワンと対峙したオールマイト。
その英雄を庇った半蔵の姿は、全国の国民や忍からは大きな賞賛が讃えられた。
平和の象徴を庇い、ヒーローの盾として、刀として動き闘った半蔵の勇姿は総司も褒め称えた。
「焔ちゃんと何かあったの？」
「まあ色々とな、話せば長くなる。
これ以上立ち話をするのもアレだろう？詳しい話は後日、暇な時間が有れば幾らでも話してやるさ――」

そう言いながら総司率いる五人組は試験会場へと向かっていく。
その際に
「お気楽で良いですね轟焦凍(貴方)は、そして貴方の父親も――名誉と幻想(正義)の下で幸せに暮らせる人間は」
千歳は轟の横を通り過ぎ、小さく静かなる義憤を燃やした声で呟いた。
その言葉を、轟焦凍は聞き逃すはずもなく、視線を彼女へと振り向く。
当の本人は轟へ視線を振り向くことなく、平然と総司の後を付いていくかのように歩いていく。
「何だアイツ…」
先程の爆豪勝己に続き、轟焦凍を煽るかのような台詞、初対面の女子にいざ言われると若干不機嫌になるのだが、それと同時に心の底に湧き上がる疑問も抱いた。
何故わざわざそんな事を他人に言われなければならないのか、と。
轟焦凍はエンデヴァーの息子としてそれなりに知名度が上がっていれば、体育祭での生放送にて全国のプロヒーローから注目を浴び、職場体験の勧誘も一位の爆豪よりも人気が高かった。
今時エンデヴァーの息子を知らない者など、低学年レベルだろう。
当然、息子は関係ないがエンデヴァーへの批判的アンチコメも存在するし、現時点でＮｏ．１の肩書きを背負う彼に納得のいかない言葉が大半を占めいているのも揺るがない事実だ。
しかし、誰かを憎み怨み辛みで動いてきたからなのだろう
千歳が発した言葉には、どこか絶え間なく滾る義憤と怨みが、その言葉に込められていたように感じた。
(俺、アイツと逢ったっけ?・記憶にねえけど……なんかしたかオレ?・)

其れは、エンデヴァーだけに対する言葉ではないのだろう。
単なる批判的な意見とも言い難いような、心に突き刺さる言葉。
しかし彼女に怒り怨みの言葉を言われる筋合いも無ければ、先程も述べたように彼女とは初対面。
焦凍とは関係性のない赤の他人。
他人の関わりと無駄な時間を嫌うエンデヴァーともまた無縁のハズ。
（まあ良い…放っとくか。
変な奴に気を取られて仮免許取得できませんでしたじゃ許されねえ…親父を批判するヤツは少なからずいるだろうしな……）
脳内に纏わりつく雑念を振り払うかのように、気持ちを切り替える轟は軽く深呼吸する。

「さて、気を引き締めろよお前ら。
早速中に入って――「おーうお前イレイザーじゃねーか！」――あ？ってげッ…」
相澤先生の言葉が誰かの声に遮られ、面倒臭さそうな面で声主に振り向くと、相澤の表情がより一層、面倒臭そうな顔立ちへと変わった。
「テレビや体育祭で姿は見てたけど、こうして直で会うのは久し振りだな!!」
「よりによってまた厄介な輩が来たもんだな。士傑に続き蛇女に続きで…この試験どーなってんだ…ったく」
「結婚しようぜ」
「しねえよ阿保」
唐突にプロポーズする女性に女子の生徒はキャーキャーと騒ぐも、日常的なノリなのか、特にどうも気にしない相澤は溜息を吐く。
「しねえのかよ！てか相変わらずウケるなお前!!」
「お前が異常なだけだ、そっちこそ昔と変わらず絡み辛いなＭｓ．ジョーク」
スマイルヒーロー「Ｍｓ．ジョーク」
本名は『福門　笑』――個性は『爆笑』

一見巫山戯てるような個性に見えるが、敵への戦闘に対して効果は覿面。
近くの人を強制的に笑わせ、思考・行動力を鈍らせる、並みの敵では彼女の個性に抵抗することも出来ない。
彼女の敵退治は常に狂気に満ちており、今は傑物学園高校の教師を務めている。
余談だが、雄英体育祭を観に来たプロヒーローの一員でもある。
「知り合いなんですか？」
「そーそー！昔事務所が近くでな！助け助けられを繰り返すうちにお互いの絆は結ばれ恋色の如く相思相愛のラブコメディの仲へと――
「なってねえわ、教え子に誤解招くような事言うんじゃねえ」本当に揶揄い易くて面白えよなイレイザー!!」
「は、はぁ…」
二人の漫才的コンビのノリに呆然とする飛鳥は、目の前の光景をただただ眺めてるだけであり、また怒ると本気で怖い相澤先生に対して何発ものジョークをかます彼女の据えた肝に思わず放心状態になってしまうのも、少なからず無理はない。
「まっ、そんな訳でウチらとも仲良くしてくれよな」
おーい！と声をかけるＭｓ．ジョークに反応した生徒たちは、駆け寄ってくる。
傑物学園二年二組ヒーロー科、雄英や士傑ほど大きな地位や名誉は無いものの、そこそこ有名である。
「雄英、本物だ！」
「ＴＶで見た人ばっかり！凄いじゃん!!」
「真堂に折紙、テンション上がってんな」
「一年で仮免って随分とハイペースだよね。まあ色々あったし当然といえば当然だけど…流石、やることが違うよ」
次から次へとゾロゾロとやって来る傑物の生徒たちは、雄英に興味津々だ。
尤も、雄英高校に忍学生が在籍してるのは、実は余り知られていない。

「俺の名前は真堂　揺！今年の雄英はトラブル続きで大変だったね、けどこうしてヒーロー志し続けてるんだし、君たちは本当に素晴らしいよ!!」
ハッハハ！と彼の輝く笑顔は爽やかでありイケメンだ。
外見や心強い言葉から察するに、カリスマ性を備え持つ優等生なのだろう。傑物学園高校二年二組のクラスのリーダーシップを誇ってるようにも見える。
「中でも神野事件を中心で経験した爆豪くん、君は特別に強い心を持ってる。
今日は君たちの胸を借りるつもりで頑張らせてもらうし、こうして同じ試験会場に当たったんだ、仲良くしよう！」
爆豪と真正面に向き合い、手を差し伸べる真堂に対し、爆豪は舌打ちをしながらその腕をパァン！と払いのける。
「要らねーわクソが、フかしてんじゃねえぞ。
台詞と面が合ってねえんだよ、つまらねえ茶番なんざ糞食らえ」
相手の意図と思考を読み取ったのか、苛立つ口調で投げ飛ばすかのように言葉を吐き捨て背を向ける。
詳しく知らない、出逢ってばかりの人間が突然仲良くしようなんて言葉をかけられても、同じクラスや仲間でもない限り信憑性が無い。
少なくとも、他人と気軽に馴れ合う器を爆豪はその身に宿してなどいない。
「失礼過ぎるだろ爆豪！すみません無礼で…コイツいっつもそうなんッスよ。
図書館の時と言いファミレスの時と言い、一度怒りの導火線に火が点いたら止められない暴君で……けど根っこは良いヤツなんですよ本当に！」
「うっせえぞクソ髪！余計なこと言うんじゃねえよカスが!!」
「いや、芯が強い証拠さ！
其れもまた、君の長所であり誇るべき強さなんだろうね」
「何時迄も綺麗事言ってんじゃねえや茶番野郎!!」
ＢＯＯＭ！と掌から爆破を起こしドスの効いたデカイ声で吠える

爆豪を当然のように制止する切島。
そんな二人のやり取りを見てさぞ愉快そうに高笑う真堂は、端からどう見ても良心的な人間にしか見えない。
一体何をどう見間違えれば、爆豪の言う「茶番」なんて言葉が出てくるのが、思考を働かせた所で想像も付かない。
「他にも…春雨忍高校に、登坂高校のヒーロー科、様々なヒーロー学校と忍学校が来てんな。
こりゃ、去年みてえな仮免許取得の試験にはならなさそうだな」
「おいおい何だよイレイザービビってんのか？未来の妻が慰めてやろうか？」
「誰が未来の妻だ。
お前は忍学校のこと、詳しくは聞かれてねえんだろ？不安には思わねえのか」
「アタシのこと心配してくれてんの？気持ちワリーヤツだな優しすぎ、婚姻届いつ出す？
な～んてな。実を言えば確かに不安は有るし、無いと言えば嘘になる。
けどウチは生徒を信じてるから、少なくとも真堂率いるアイツ等はそう易々と脱落なんかしたりしねーよ。
これまで積み重ねて来た訓練、無駄じゃねえからな」
他校のヒーロー学校や忍学生を眺める二人の教師、相澤とＭｓ．ジョークは軽い雑談を交わす。
Ｍｓ．ジョークは確かに冗談好きのお笑い上手な女性だが、ヒローの担任教師を務める以上、根は真摯である。
不安なのは皆も一緒。
自信が無いのは責められる事ではない。
緊張が体を支配する。
試験前になると大抵の人間は面接前で待たされるような緊張感、不安、気弱な精神に陥る。
もし自分の実力が、経験が、努力が、失敗すればどうなるのだろう

か、
「そう言うイレイザーはどうなんだよ、アレ。おたくの生徒、爆豪って子は兎も角他の子皆んな警戒心が無さすぎるんだけど…
もしかしてよ、強者の余裕ってヤツか？はたまた…言ってないの??」
心外と言わんばかりのＭｓ．ジョークの驚嘆に似た声色に、相澤は振り向く素振りも無く、無表情のまま生徒達を見つめていた。

雄英生は知らない。
今試験に起こるアレを――
勿論、別々だった忍学生も知らないのは必然。

「嗚呼、もちろん言ってねえ。それで落ちる程落ちぶれちゃいない」
バッサリと切り捨てるかのように、言葉を吐き捨てた。

試験会場館内。
大規模な館内フロアの面積は、一気に受験者の数で埋もれていた。
見渡せばどれもこれも人ばかり、余りにも多すぎる人波に一年Ａ組はただ呆然と眺めていた。
受験者数は多いと聞いた。
それも当然だ。今年は例外な上に一年生も受験すると聞いたし、他校の忍学科の生徒も今試験は合同で臨むと聞いたので、大規模な人数になると予想はしていたが、いざ直面すると何とも凄まじい光景だろうか。

思わず目が眩んでしまう。

「えー初めまして皆様、仮免のアレやる前に軽い自己紹介、しときます。

あー…僕は公安委員会の目良善見です。好きなものはノンレム睡眠、どうでも良いですよねハイ、宜しく」

目良善見。

相澤とは少し違った、疲労感ややる気の無い気怠さダダ漏れの公安委員会、ネガティブな目良は眠たそうな目で資料に目を通す。

「え～次にこちらが、態々今試験にお越しなさってくれた特別ゲストの二名もご紹介しておきますね。さっ、どぞ」

目良の言葉に応じるように、横に佇んでた二人はペコリと軽くお辞儀をする。

「受験者の皆様、初めまして――私は月光と申します。何か解らないことや困ったことが有れば私達に相談しに来て下さいね♪」

「どうも閃光だ……

今試験、私達二名はヒーロー科と忍学科の生徒たちの特別審査員として務めさせて貰っている」

死塾月閃女学館中等部所属の月光と閃光。

不雪帰の命令を受け、仮免許取得試験の審査員役を担うことになった忍学生である。

しかし海外に出張し幾多ものコミニュケーション、社会的な立場、大人の世界を踏み入れた彼女二人の存在は、そこらの審査員よりも格段上だ。

「え～、この二人はこう見えても忍学科の生徒です。まあ特例と上の事情があって急遽、直ちに今試験の審査員の補助として担当してくれた、我々不眠不休の社畜の大人からしてとても有難い人材ですマジ忍サンクス。

この通り、試験内容、ルール説明にて何か不可解な点が有れば教えてくれます。

不正な点や過度な個性、又は忍術使用行動を監視し、怪我人を手当

てする医療担当役、貴方達受験者の戦力、能力、行動分析プロフィールｅｔｃ…様々な役割を補助して下さる…まあ、我々にとっても貴方達にとっても本当に救かるサポート役、いわば簡潔に言えばお手伝いさんみたいなもんです……そう認識して下さい……ほんと眠い…」

――疲れ隠す気ゼロだろ！所々素が出てるぞ大丈夫か。

仕事の忙しさ。

睡眠不足。

人手が足りない。

充分な休息が取れない。

そんなブラック企業の社畜を露わにしたような、目良の紹介に館内にいる皆の者は心の中で大きく叫んだ。

「ずばりこの場にいる受験者、ヒーロー科と忍学科含めて系２１００人一斉に、勝ち抜けの演習を行ってもらいます」

ヒーロー学生と忍学生の双方の学科が、同時に試験が行われる。

それはつまり、ヒーロー学生と忍学生の共闘、もしくは対敵の意味を表す。

「現代はヒーロー飽和社会と忍暗躍社会なんて言われ、ステイン逮捕以降、ヒーローの在り方に疑問を呈する向きも少なくありません」

ヒーローとは見返りを求めてはならない。

自己犠牲の果てに得うる称号でなければならい。

それはまた、忍も同じ――

「まァ一個人としては…動機がどうあれど命懸けで人助けしている人間に〝何も求めるな〟は現代社会に於いて無慈悲な話だと思うワケで、忍側の場合は悪忍という犯罪的イメージが成り立つのでしょうが、誤解なさらず。

悪忍はヒーローでも手に付けられない問題視される敵、又は野放しにされた忍の力有る抜忍などの殺害を行なっています。

しかし其れはあくまで昔の話…現在、忍は善忍悪忍関係問わず、明

るい社会を築き創り上げるべく協力関係に当たり、殺生を始め、無闇に公共の場や許可なしの忍術使用、戦闘は禁止とされています。
任務の都合上、多少の違法はあるかもしれませんが、しかし其れはあくまで忍の組織の下で成り立ってる訳で、決して貴方達に害を与えることは無いので悪しからず……
つまる話、善忍と悪忍を例えで言うなら、私立と公立みたいなものです」
ヒーローの行動範囲は酷く限られている。
災害救助法、敵退治、其れらは免許を手にした者が、管理者の下で許可を受け始めて国から認められ報酬が届くようになっている。
しかし、仕事ではかなり不利なのは当然のこと。
屋内で暗躍する敵、違法、密猟、ハッキング、闇売買、其れらを如何なる手でも突き止め、破壊活動をするのも悪忍なのだ。
悪とは人聞きの悪いものだが、悪だからこそ正義にやり得ないことを成し遂げる事ができる。
正義とは、悪なしでは成し得ない形であり、逆もまた然りなのだ。
「とにかく対価にしろ義勇にしろ、多くのヒーローが救助・敵退治に切磋琢磨してきた結果、事件発生から解決に至るまでの時間は今、ヒくくらい迅速になっています。
君たちは仮免許を取得しいよいよその激流の中に身を投じる、そのスピードについて行けない者はハッキリ言って厳しいです」
「よって試されるはスピード！
条件達成者先着２００名を通過とします」
「先着２００名⁉
２１００人いて２００ぅ⁉５割どころじゃねえじゃん厳し過ぎるだろう!!」
「二年で仮免許取得しないと不味いんだよ私は!!」
「そこ静かにしろ！まだ説明の途中だ!!」
２１００人中、合格者がたったの２００名と言う驚異的な低数字に嘆く受験者に、閃光の厳しい注意が施される。
そんな彼女に「ナイスサポート…」と怠く眠たげな目良の声が、誰

にも聞こえない声で呟かれた。
「その条件というのがコレです」
月光が懐から出したのは、ターゲットとボールの二つのアイテムだ。
「受験者はこのターゲットを三つ、体の好きな場所、但し常に晒されている場所に取り付けて下さい。足裏や脇などはダメです。」
「そしてこのボールを六つ携帯、ターゲットはこのボールが当たった場所でのみ発光する仕組みとなっている。
三つ発光した時点で脱落になるから、付ける場所はしっかり考えておくんだぞ」
「また三つ目のターゲットにボールを当てた人が〝倒した〟こととします。
そして二人倒した者から勝ち抜きです、ルールは以上です！
何か不可解な事が有ればどうぞお訊き下さいませ♪」
閃光の健やかな笑顔が浮かぶも、疑問を抱く人間がいない辺り、どうやら全員理解できたらしい。
入学試験のロボ破壊や、葛城や斑鳩の時みたく傀儡破壊のミッションとは違う。
対人となるなら尚更だ、個性や忍術…まだ見ぬ相手の能力を警戒しながら、自分のターゲットを守り且つ相手にボールを当てる。
入試以上に苛烈なルールだ。
「じゃあ展開後、ターゲットとボール配るんで、全員に行き渡ってから1分後にスタートします」
「展開？」
目良の「展開」という言葉に疑問を抱いた生徒は、上を見やる。
ゴウンゴウンと大きな音が鳴り響き、会場館内にある天井や壁は瞬く間に開かれる。
外の景色とつい先程までいた場所の変わり様に、茫然としてしまう生徒たち。
様々な地形が設置されている辺り、相当大規模な個性や忍術の使用が行われるのが目に見える。

六つのボールを貰い、ターゲットをそれぞれの箇所に貼り付けた雄英生徒たちは、グループになって集まった。
爆豪は「フザけろ、遠足じゃねえんだよ」と言いながら勝手に一人で行動を開始し、轟は「大所帯じゃ却って力が発揮しない」と二人は集団から離れていった。
時間も無いなか、追いつける時間も説得する暇もないので二人は独自の判断として任せる事にした。
まあ特にクラスで一位、二位を争う二人組みなら余程のことが無い限り大丈夫だろうという心の底から来る安息感につい納得してしまう。
「けど、私たち単独じゃなくて良いのかな？」
「大丈夫！逆に単独行動は危ないんじゃ無いかなって…僕ら手の内バレてるし…飛鳥さん達はバレてないから、まだ打開する点はあるけど…」
束になりながら各地を移動していく緑谷達。
彼らは雄英体育祭で既に目を付けられている。個性や機動力、実力も生放送でしかと反映されている。
その状況下、個性で対策されているのなら厳しいし、あり得ない話ではない。
「いつもみたいな一対一みたいなのとか、多対一という不利な状況とかじゃなくて…
勝ち筋は他校も同様だから、学校単位での対抗戦になると思うんだ…そしたら次はどこの学校を狙うか…」
「おい緑谷アレ!!」
峰田の焦燥な声色に、咄嗟に振り向く緑谷。
視界に映るは――他校の殆どの生徒が、一気に雄英を潰さんと言わんばかりに、袋叩きのように寄って集まりボールを投げる光景が、視界を支配する。
「自らをも破壊する超パワー！まぁ…杭が出ればそりゃあ打つさ!!」

真堂の言葉に、瞬時にことの状況が理解した。

雄英潰し――

最高難関ゆえに、強敵だからこそ、先ず最初に潰しておこうという段階。

何より個性不明というアドバンテージが失われている雄英を攻めるのは絶好のチャンス。彼ら彼女らは狩られる側の餌でしかない。

しかし、だからこそ――

「ＳＭＡＳＨ!!!」

逆境を乗り越えてこそ、ヒーローと呼ばれる。

緑谷は拳…ではなく、足を使って一気に攻めてくるボールの数を捌ききる。

他も同じく、新たな必殺技で対抗だ。

「皆んな！締まっていこう!!!」

１２６話「白熱、各々の実力！」

例年形式は変われど、仮免試験には一つの慣習に近いもの、それは雄英潰し――

個性不明と言うアドバンテージが無くなり、代わりに相手側の個性が不明と言う、如何にも雄英側が圧倒的不利な状況。

雄英体育祭が行われ、全国に放映された事で良かれ悪かれ人々に影響を色濃く与えたものだ。

敵連合もその内の一つ。

学生の個性を調べるまでもなく、呆気なく簡単に素性は明かされ、名前まで知られてる身。

絶対に〝折れない姿勢〟とは言え、其れが必ずしも雄英の生徒に良い影響を受けてる訳でも無いのだ。

特に襲撃事件や今回の仮免試験が其れを物語ってる。

「雄英潰し――別に言わない理由も無ければ、試験の合格に対する合理性を考えて伝えた方が脱落する確率も減るんだろうな」

仮免試験を観戦する相澤とＭｓ．ジョークたること、福門笑はベンチに座りながら軽い雑談を交わしている。

「だったら可愛い教え子に言やぁ良かったじゃねーかよ」

「だが、そりゃあくまで合格するっつう話で、アイツら将来のためにはならんだろ。

プロになればこう言った不利な状況、絶え間なく続くし大人からすれば日常茶飯事だ」

しかし其れは合格率が上がると言う話であって、将来プロになる生徒たちの身になる訳では無い。

全員、仮免許を取得するのが今回の目標ではある。だが一流のヒーローは凡ゆる困難を乗り越えてこそヒーローと呼ばれる。

たかが雄英潰しで脱落されては将来的に困るし、この先ヒーローとして生きて行くのには厳しいだろう。

大人の世界とは常に厳しいもの。況してや現場では何が起こるか

解らない以上、殉職してしまう可能性もない訳では無い。
「ほーん…気に入ってんだあのクラス。全部で２０人、一人も除籍処分してないなんてお前にしちゃあ珍しいもんな」
「忍学生入れて２３人な。
　別に今は除籍処分してないだけ。将来プロへ羽ばたくヒーローになれないと判断したその時は直ぐに除籍処分するさ」
「照れんなよ気持ち悪い」
「照れてない」
　ハッハッハッ！と笑うＭｓ．ジョークを他所に相澤は仏頂面で再び仮免試験の現状に視線を戻す。
　結局やる事自体は変わらない。
　ただただ目の前の壁を乗り越えて行くだけ。
　Ｐｕｌｓ　Ｕｌｔｒａの校訓を一日欠かせず心得よ。
　理不尽を覆すヒーローは、決して挫けない。
　そもそもプロになれば〝個性〟を晒すなんて前提条件、雄英は他よりも少し先を見据えている。
　二年生の受験者も数多くいる中、絶対という言葉が無いように必ずしも全員が受かるという保証はない。
　何せ職場体験を通し、敵との戦闘や救助訓練の経験を積んだ先輩たちもいる中、簡単に通れば其れこそ二年生達の面子が立たない。
　況してや今年は一年生も出るのだ。この好機を狙わずして何になる？
　そして今試験で重大なる鍵は、ヒーロー学生と忍学生の関係である。
　此方は雄英側が有利になるのだが、他校のヒーロー科と忍学科はお互いの知識が乏しい上に関係性も無い。
　雄英は半蔵学院と繋がっているので、忍術や個性の特徴、効果、能力面など浅いレベルだが知識を身につけている。
　そして双方、合格しなければならない。
　つまり、半蔵学院と雄英高校は、手を組み闘えるという訳だ。

「にしてもイレイザーが忍学生を雇うのも珍しいよな。
ウチは誰も申請が来てないし、それに忍術なんて教師でも分からねえよ」
「俺も最初はそうさ。
校長直々の頼み…ってのもあるが、霧夜先生に続き半蔵さん、校長にまで頭を下げられたら断る理由は無いし、寧ろ忍学生と供にクラスに溶け込むことで、お互いが成長を成し遂げると見込んだまでだ。
その方が、アイツらにとっても合理的だ」
お互いが手を組み、互いを、己を知り、成長へと促す。
コミュニケーションや連携の流れ、ヒーローにとっても忍にとっても、欠けられない絶対必須な能力だ。

「目標を乗り越えることは良いことだが…
ただ、先着２００名っつう甘い課題に目先捉われてたら――返り討ちに遭うぞ」
必死に抵抗する雄英生徒と半蔵学院の忍学生に聞こえるはずもない相澤は、静かに言葉を漏らした。

「効果は…覿面!!」
空間を切り裂くかのような、強烈な足技はボールを蹴り飛ばす。
唸る足、空気のブレ、ボールは威力を増して様々な方向へ吹き飛ばされる。
緑谷出久の戦闘スタイルは基本、アクロバティックな身のこなしの動きで相手を翻弄し、主に拳を使った攻撃をするのを得意としていた。
オールマイトの憧れと身近な人間、爆豪勝己を観察し続けたからこそ、今まで其の動きに倣い、癖となっていた。

そこで新たなコスチューム。
腕が壊れ、戦場で不利に陥った場合の対処法を考慮した結果、足を使う選択を閃いた。
元々ワンフォーオール・フルカウルはグラントリノみたく俊敏で、眼にも止まらぬ速度で動き易く、機動性を考えみたもの。
そこを殺さず活かす為、最小限で効果の大きい装備。
『良いですか緑谷さん！
足って言うのはですね、単に走るだけではなく攻撃メインとしても上手く活躍する事が出来るんですよ。貴方の戦術が体育祭と変わらず、パワーのゴリ押しで行くなら尚更！
足は手の３～４倍の威力があると聞きますしねぇ。
ウチのどっ可愛いベイビーは沢山あるので、もし見合いそうな装具が有れば使ってみて下さい！
コスチューム開発、サポート科――発目明にお任せあれッてやつです。
何ならコスチューム依頼も引き受けます』
雄英サポート科、コスチューム開発を発頭としている発目明に新コスチューム開発の依頼を頼みに行った時に、〝足を使用する〟選択肢を得られた、体育祭の騎馬戦時に一時期協力関係として手を組んだ生徒である。
全てが彼女のお陰…と言う訳でもないが、大半は彼女のお陰でもある。
何よりプロへと羽ばたくヒーローになるにしろ、サポートアイテムは必要不可欠な代物だ。
発掘ヒーロー、パワーローダー先生にも『サポート科には世話になるぞ』と言われた。
全くもってその通り――

しかしサポート科にコスチュームアイテムを発注するにしろどちらにしろ、其れはあくまで個人の能力や効果を補助するお助けアイテムでしか無く（場合によっては個性並みの威力を発揮するが）、元より

コスチュームや個性によって個人の動き方までは大いにカバーすることは出来ない。

況してやオールマイトや爆豪勝己でも、足技を使った攻撃など余り見た事が無い。

唯一得意とするならば飯田天哉だろう。個性の〝エンジン〟を上手く活かし、素早いスピードを足の攻撃に移すことで驚異的な威力を発揮する。

しかし飯田曰く、彼が言うからには「誤った使用法」らしく、参考にはなれないと言っていた。

無理もない、何にせよ飯田の足技は基本レシプロバーストで素早さをより特化してこそ必殺技並みの威力を発揮するのだ。

使用後、動けなくなることも有り、エンジンの排出口が故障してしまう恐れもあるので、余り得策とは言えないし、参考になるにしろ逆に迷惑を掛けてしまうだろう。

――そこで、飛鳥さんに聞いてみた！

「えっ？足技について教えてほしい？」

「うん、ゴメンね？僕個性の分析は得意だけど…体術をメインとした体の動かし方は余り…かっちゃんやオールマイトも使わないから」

「いいのいいの、気にしないで！

ホラ、前に私の悩みも相談しに来てくれたでしょ？だから緑谷くんの相談も是非乗るよ」

緑谷が発注したコスチュームの依頼品が来る前の日。

いつもみたく授業が終わり忍基地へ戻って訓練に浸かろうと意気込んでたところ、廊下で自分の名前を呼ぶ緑谷出久の声に振り向いた時のことだ。

前に一度、飛鳥は忍術を個性応用の術へと変えるべく緑谷に相談したことがある。

その件があってか、飛鳥は彼の悩みを聞くことにしたのだ。そのお

陰で自分もまた一歩成長することが出来たのだから、勿論相談に乗らない訳がない。
「あ、有難う…
えっとね、ホラ僕って今まで拳だけを使って来たから足を使う発想が上手く浮かばなくて…
身近な人って言ったら飯田くん位だけど、間違った使用方法だったり危なかったしいとかで参考にならないって本人が言ってるし……
其れに、僕たちのクラスでは足技を得意とする生徒って数少ないしさ…だから飛鳥さんの身近な人ならそう言う人もいるんじゃないかなって思って」
「あ～確かにね。
其れなら、葛姉が一番の参考になるけど…緑谷くん拳も主に使うんでしょ？
だったら、菖蒲ちゃんが参考になるんじゃない？」
「えっ、菖蒲さん？
それって他校の生徒？聞いたことないけど…」
「ううん、ウチの生徒だよ。半蔵学院の生徒、選抜メンバーじゃないけど」
「えっ、あれ!?そんな人いたっけ？てっきり斑鳩さんとか、葛城さんだけかと…」
「神野区の一件で、選抜メンバーや補欠でも良いからって生徒を補充したんだって。
前までは違うクラスで指導を受けてたんだけど、私たちがいない最近じゃ選抜関係なく同じクラスで授業を受けてるって聞いたよ？」
他にも風魔、土方、清明の三人が補充に入ったとか。もう一人の生徒は見つからなかったらしく、補充を用意するのには待つしかないんだとか。
特に風魔という生徒はかなりの飛鳥ラブらしく、執拗に追い回されることも前に一度あったらしい。
「確かに葛姉も良いかもしれないけど…菖蒲ちゃん、聞いたところだと昔はかなりの腕っぷしの良い格闘家らしいし、拳と足の格闘技をメ

インとして戦うから緑谷くんには丁度良いんじゃないかなって思って。
足だけだと拳も疎かになるし…足技をメインにする訳じゃないんでしょ？」
「う、うん！あくまで護身用の術と、拳の保護代わり…みたいな。
けど菖蒲さんって人、知らないからこんな僕に教えてくれるのかな…」
「大丈夫だいじょうぶ！あの子根っこはかなり優しい性格だし、其れに半蔵学院に入る前まではヒーロー志望の生徒だったくらいだし、少なくとも個性や忍術とか関係なく素手での武術は身につけてるハズだよ」
「ほ、本当に!?」
「うん！なんだったら今日紹介しよっか？緑谷くんが良ければだけど…」
「そ、そんな良いの!?僕は依頼したコスチュームの品が明日届くから、せめて足の活用を少しでも身につけたいとは思ってたから予定では訓練に浸かろうと思ってたけど…知識が身につくなら下手な訓練よりもずっと良いし…
飛鳥さんこそ、予定は大丈夫なの？」
「私も自主訓練しようって思ってたけど…いつでも出来るし、それに前の件でもお礼返さなきゃって思ってたし」
もし前に緑谷に相談していなければ、延々と悩んでたのかもしれない。失礼な話かもしれないが、飛鳥は考えるよりも体を動かすタイプであって、自分の必殺技や退出を考えるのは問題ないのだが、今までの工夫や考え方を覆す程の変化を成し遂げろと言われても難しいものだ。
もし緑谷と話さなければ、体全身を使うなんて発想、思い付かなかっただろう。
「ああ、アレ？僕なんて別にそんな…それらしいアドバイスなんか全然してないし、其れに会話した時なんてほんの少しだったし…」
そんなことでお礼なんかしなくても良いのに…と静かな声で心の

中に呟くも、決して口には出さなかった。
飛鳥がこんなにも嬉しそうに礼を返したいと申すのだから、それなりに受け止めなければ、それこそ彼女に失礼だ。
「じゃあ、その…お言葉に甘えて――」

そしてコスチュームが届き装着し新技を披露した四日目の日には、付け焼き刃だが新たな戦闘スタイルを編み出すことに成功した緑谷は、自分の想像した以上に良い動きになった。
現在、全てのボールを捌き蹴ったこの現状が証拠として映し出されている。
その名も、ワンフォーオール・シュートスタイル
十日間の内六日間はひたすらシュートスタイルの戦法を編み、熟練度を上げ、体を慣らし且つサポート科の発目明や菖蒲に色々と世話になった。
コスチュームは腕の保護サポーターにスパイク兼アーマーのアイアンソール
新コスチューム――コスチュームγ

この二つが兼ね備えた今、如何なる予測不能の事態が起きてもこのスタイルを駆使すれば上手く対処する事が可能だ。
「菖蒲さんからアドバイスを聞いて見たけど…オールマイトの言う通り、付け焼き刃以上の効果だ！」
飛鳥と話し合った後に、半蔵学院に行き動き方のコツや戦闘スタイルを教授してくれた。
『良いですか緑谷さん！
単に相手を我武者羅に蹴るのではなく、一つ一つの一撃に想いを込めて強く蹴るんです！
大雑把な動きじゃ喧嘩と変わりません。何より葛姉様を見てください。あの美脚たるや太ももの露出に、無駄のない動きに隙を突くような集中力!!

そして気付かず爆乳が動くたびに揺れて…ほら、わさわさと…はぁぁん！ダメです鼻血が出て多量出血してしまいます！

あっ、そんでですね。蹴りを数発入れてからの、しゃがみ込んでから体の軸を回転するようにして拳を入れて、数発！

ゴリ押しで行くなら相手に隙を与えず強烈な連打撃を与えた方が相手もＫＯ出来ます。

まあ私の場合は葛姉様の魅力に思わず意識そのものが吹っ飛んでＫＯしちゃうんですけどね』

（ただ菖蒲さんって思ったより個性的だったなぁ…

けど、あの人のアドバイスのお陰で効果は抜群！やっぱり訓練とは違って本場でも自分のスタイルが通るのは素直に嬉しい…!!）

所々、アドバイスの中で私情が挟み込んでるのに幾つか突っ込みを入れたくはなるが。

菖蒲という生徒は元々忍家系で無ければ、忍と言う存在そのものは知らなかったらしい。

聞いた話によると実は彼女、雄英高校受験志望者でもあったそうだ。格闘スタイルが良いのも、実は忍に向けての訓練ではなく雄英を目指し一流のヒーローになる為の努力の結果だとか。

ただある理由で雄英高校の志望を取り消し、半蔵学院に入学希望にしたとか。

何でもその理由が葛城にあるんだとか。

「はあ、ほぼ弾くかぁ」

「雄英、思ったよりやるね。脱落は狙えなくてもせめてターゲットの一個や二個、当たっても良かったんだけど」

「気を付けろよ真壁に軌道、体育祭観た時も感じたが、今年の雄英は一味違う…

舐めてかかると返り討ちに遭う。どうせ狙ってやるなら出し惜しみせず全力でぶつかるしかない」

安息吐く緑谷を他所に、傑物学園二年生の面々は脱落者ゼロ、ターゲットゼロの雄英を相手に目を細める。

「けどまあ…見えてきたな。軌道任せた」
「任された」
真壁は手でボールを握りこねるかのようにギュッギュッと詰めこませ、硬質化させる。
真壁漆喰――個性『硬質化』
触れたものをこねたりすることで硬質化させる個性。但し生物には適応されないので注意。
硬質度はコンクリート並みにガッチガチに硬める事が可能。
軌道幻月――個性『ブーメラン』
触れたものに狙いを定め投げることで、軌道よく投げ飛ばす事ができる。
これも生物には適応されないが、スナイプに似た類の個性である。
コンクリート並みの硬質度に高めたボールを軌道に渡し、狙いを定め地面に投げ飛ばす。
よってコンクリート以上に硬くされたボールは地中に潜る事が可能であり、狙いは雄英生徒のターゲット。
――地中にボールを潜らし隠すことで、君たちは反応する事が出来ないのさ。
「巻き添え喰らうから皆下がって！ウチがやる！」
ここで出張するかのように前に出てきたのは耳郎響香。
見たところ、新たなコスチュームを頼んだのか、前よりも少し違う雰囲気を漂わせていた。
「音響増幅ジャック――【ハードビートファズ】!!」
イヤホンジャックで出来てる耳朶を、手の甲に装着してある小型スピーカーにイヤホンを挿入し、爆音を高め地面に付けさせ爆発的な威力を放つ。
地面は大規模に割れ、軌道が投げたボールが露わとなった。
「ってオイラに向かってくるぅぅ!?」
「どいてろ」

軌道がロックオンしたターゲットは峰田実。突然自分に向かってくるボールを前に取り乱れるも

「烏賊凪!」

横から柳生が峰田を庇う。

手に持つ番傘が、烏賊の触手一本に絡み纏わせ薙ぎ払う。柳生が忍術を個性になぞらえ身につけた新たな術だ。

柳生の秘伝忍法は基本、烏賊を出現させた攻撃を使用する、烏賊忍法だ。

秘伝動物が烏賊だからなのだろう。秘伝忍法が主に烏賊となってるのは、大自然の力を借りてるのは勿論のこと、秘伝動物により色濃く影響を受けている。

そういう忍は割と居る方で、自分の好みやじゃない動物もいれば、性格上や容姿によって当て嵌まる方もいる。

昔、蛙が嫌いだった飛鳥が良い例えだろう。

「秘伝忍法の使用は体力が削るからな…一本が丁度いい」

秘伝忍法の巨大烏賊。

その滑りある触手のウチ一本を出現させることで、秘伝忍法より半歩劣るが、威力や効果は抜群。

戦闘としても救助としても扱える伸縮自在の触手は、ヒーロー活動にも向いてるだろう。

「って雲雀ちゃんにも向かってるよ!?」

「なっ!?しまっ――」

ボールは三つだけではない。

もう三つのボールは、軌道のブーメランによって雲雀に狙い付けられていた。

柳生は苦虫を噛み殺したかのような苦の表情を浮かべ、歯軋りを立てる。

側に居たにも関わらず、肝心な時に救えない自分の不甲斐なさに腹をたてる。

「一点集中――ビリビリ雷兎(ライト)でビーム!」

しかし、何も成長してるのは柳生や飛鳥だけではない。

雲雀は念を生じるかのように強くイメージを集中させ、兎の耳のような短いツインテールの髪を逆立て、雷の点を出現させ放電する。
上鳴のような無差別放電では無い、どちらかと言えば上位互換たるやその実力。
個性応用の一つの術でもある。
「おぉ、やるぅ！」
「ふう…冷やっとしたぞ雲雀」
「大丈夫だよ柳生ちゃん！それよりも……雲雀達もそろそろ攻めないと、防戦一方のまま終わっちゃう！」
入学時代の頃とは違い、今では見間違えるほどに逞しく成長してる雲雀をみて、どこか誇らしげになる柳生は、そっと胸をなで下ろす。
――どうやら、半蔵学院の皆んなと話し合って、自分の問題は解決したようだな。
曇りなき純粋な瞳。
活発良い彼女の動き。
一瞬の迷いのない決意。
それらは自分達の遥か予想以上に、彼女を強くしてくれたようだ。
雲雀と柳生は、固唾を飲みボールを強く握りしめる。

「我々も攻めるぞ――深淵闇躯（ブラックアンク）!!」

混乱陥る状況の中、声を張り上げたのはカラス顔の常闇踏影。
黒き相棒のダークシャドウは常闇自身を飲み込むかのように、体中に纏わり付いている。
まるで影に覆われた鎧のようなその姿は、何処か林間合宿で暴走した彼の一面と重なる。
「【宵闇よりし穿つ爪】！」
暗きダークシャドウの腕が伸び、掌にはボールを装着させてある。
狙うは傑物学園の生徒、中瓶畳だ。
「うわっと！」
常闇の攻撃をさも間一髪と言ったかのように、顔を身体に引っ込ま

せて何とか回避できた形となった。
文章の文字としてこの現状を表せば、見て想像付かないだろう。
「危ないなもー!その黒い影の腕が伸びるとか、某海賊漫画の主人公じゃないんだから…」
中瓶畳――個性【折りたたみ】
折り紙のように体を折り畳んだり、亀のように引っ込ませたりする事が可能な個性は、端から見れば奇怪に見えるだろう。
「体育祭で見てたA組じゃないや、成長の幅が大きいね。確かに異端だ。良い意味でも悪い意味でも…相手になるとここまで末恐ろしいなんて…下手すりゃチンピラ敵退治よりも面倒だな」
しかも、忍学生と手を組むという発想には少々驚いた。
此方は忍学生の情報を知らない、向こうも同じ条件だ。
だが雄英と手を組む話なら別だ、ある意味一番厄介なのは彼女たち忍学生なのかもしれない。
如何なるピンチを覆す雄英高校。
修羅場を掻い潜り、死の戦場で生き残った忍。
二つの存在が手を組む姿は、敵から見れば絶望でしかないだろう。
(て言っても俺たちはヒーロー科…敵じゃないし同情するわけじゃないが…こりゃあ参ったな)
表面上は不敵な笑みを浮かべる真堂も、内心は少しばかり混乱している。
忍術という不確定で情報が少ない能力は、此方からすれば未知なる力。個性不明のアドバンテージと変わらないが、少しばかり予想がズレた。
「まぁだからと言って攻めに入った時点で引く気はねえ!さっきので忍学生の能力も大体分かったしな!!」
全てを把握した訳ではないが、それでも見た限りある程度の実力は理解したつもりだ。
烏賊、電気…もう一人の赤いスカーフを首に巻いた女子生徒は不明。確認したい所ではあるが、攻めに来る以上は相手にすると返り討ちに遭ってしまう。

宣戦布告し喧嘩を吹っかけ、見ず知らずの学生にやられたでは笑い話になってしまう。
「防御が固いなら、割れば良いのさ!!!」
掌を地面に触れ、歯をくいしばる。
傑物学園の生徒たちは直様、彼の所在地点範囲から離れて行く。
何か…来る!
そう悟り、警戒を維持したまま後方に退くももう遅い。

「最大威力!――【振動伝地】!!」

刹那。
巨大振動がこの場のフィールドを崩壊させるかのように、地面は激しく揺らぎ、地響きが鳴り起こり、地割れが生じ、やがて地面は振動によって破壊された。
まるで地震災害でも起きたかのような、荒くれた戦場。地震の威力はマグニチュード5に近い高威力。
「必殺技ならこっちも編んでるよ!こちとら二年生、場数踏んでるのは、君たち雄英だけが特別じゃない。
悪いけど一年生や忍学生が相手でも、敵である以上…手を抜くなんて選択肢、俺たちには無い!」
真堂揺――個性『揺らす』
触れたものを揺らす振動的な個性。
但し、揺れの大きさ・速度に応じた余震が身体に来て動けなくなる。
「まぁ…余震で体動けなくなるなら……最初っから本気出せば良いって事よ……やるなら徹底的にな」
余震の影響で体が上手く動かせない真堂は苦笑いしながら、落下していく雄英生たちを見下ろしていく。
しかしこうなってしまった以上、動けない自分もピンチなことに変わりはない。
「うわあああぁぁぁ!!落下していくぅ!」
「雲雀!俺に掴まれ!」

「柳生ちゃん…うん！忍兎、可能な限りで良いから他の皆んなも救けてあげて!!」
「クソ！傑物学園…一年上の先輩とはいえ…分離させるのが目的か?!」
「皆んなあああぁぁぁ!!」
　それぞれの生徒の悲鳴が上がり、各生徒達はバラバラに隔離されてしまう。
「さて…幾重もの現場…数々の不利な状況を覆す有精卵の卵達…君たちなら、どう乗り越えるんだい？」

「ねぇねぇ総司さん！さっきの地震何なんですかね？私、気になって仕方ないんですけど…雄英や半蔵学院に向かわなくて良いんですか？」
「何を言う伊吹。
　情報が漏れてるから雄英を狙うなど、私からして見れば猿が知恵を絞った結果にしか見えん…目先に捉われては、いずれ足元を掬われ後悔することになる。忍としても、ヒーローとしても鉄則だろう？」
「はうぅん！流石は我らがリーダー、総司さんです！出来れば、雄英生徒の皆さんとぶつかって、罵られ…そして…痛ぶって……恥ずかしめに遭って……はうぅんワンワン！想像しただけで興奮して来ちゃいますよぅ!!」
「……伊吹、試験の内容は忘れてるわけではあるまい？」
「えっ？勿論ですよ？居眠りすることなくちゃんと聞いてましたもん。心配しすぎですよ総司さん」
　傑物学園を始めとした他校の生徒が雄英と半蔵学院を攻め合う一方、蛇女選抜補欠のメンバー、総司、芭蕉、芦屋、伊吹は目的でもあるのか、走りながらも雄英とは反対方向へ向かい走っている。
　伊吹の少し変態混じりの会話に不謹慎に思う部分もあるのだが、悪は寛容という心情を常に心構えとして振る舞う総司は、クールな一面

を崩すことなく問いかける。
「まぁ、聞いてるのならそれで良いが…ヘマをするんじゃないぞ。我々蛇女の実力が底辺と思われては恥だ。況してや鈴音先生や学園長が不在な今、蛇女を支え、頼れるのは我々学生のみだ」
「ふむ…何でも良いのじゃが総司よ。お主は何処に向かっておるのじゃ？何やら人が数少ない場所へ向かっておるようじゃが…」
「それにしても千歳さん…私たちとは別行動を取って、どこに行ったのでしょうか？」
芦屋の言う通り、この場所だけはヤケに受験者の姿が見えない。
隠れてるにしても、忍学生である自分たちは気配を探ることが可能で、下手な隠密など彼女達の前では無意味だ。
他校の忍学生なら話は別なのだが、攻撃が仕掛けに来ない以上、その線も緩い。
因みにこの場に千歳がいないのは、彼女だけ別行動を取っているからである。
「フッ…私たちの狙いは別にある。
受験者の数が少ないのは…恐らく、何者かにやられたのだろう。千歳は放っておけ、簡単にやられるタマじゃない」
「何者かって…アナウンスは流れてないぞよ？
となれば、隠れながら我々を試してるのかもしれん…ここは我が神の偉大たる力を解放し――」
「ふむ、着いたぞ」
芦屋の厨二病発言を遮る総司は、不敵な笑みを浮かべ、立ち憚るかのように、佇んでる一人の生徒を見やる。
その生徒も総司達の気配を察したのか、同じく視線を合わせる。
「……貴様は確か……」
「選抜補欠メンバー筆頭、総司を始めたした秘立蛇女子学園の学生…所謂、悪忍だ」
誇らしげに語る総司は、美しい顔立ちで相手に人差し指を向ける。
「私たちの狙いは――士傑高校の貴様らだ」

雄英高校に続き追加で半蔵学院が狙われてる中、その分士傑高校は実力や個性、各生徒の能力が不明な点が存在するため誰も近寄ろうとはしない。
厄介なだけであって、情報が不特定である以上下手に出るなど愚策だと考えるのが多いだろう。
だからこそ、其処を総司は敢えて真正面からぶつかる事にした。
例えで言うなら、半額のバーゲンセールが押し寄せる波よりも、高級で多額な値の付いた、誰の手にも渡ることのない品物を手に取った方が買い物としては楽だろう。
「あぁ、成る程…雄英が狙われてる中、自ら混戦の火の中に飛び込むのではなく、人が少ない場所で、格上の人を落とす…のでしょうか？」
「それにしても道に落ちてるあの肉の塊は何じゃ!?荒ぶる魔王が産み出した魔物か?!」
「でもよく見るとウネウネしてますよね。肉の塊…って言うよりも、粘土みたいですし、体のパーツがバラバラになってますけど」
よく見ると一人の士傑生徒を中心に、周りは肉の塊がバラバラになって落ちていた。
三人の喧騒満ちる言葉など気にせず、口を開く。
「我は士傑高校に所属せし生徒、名は『肉倉精児』である――先ほど交戦してた者達を一掃してた所だ」
肉倉と名乗る男はイナサと一緒に同行してた二年生の生徒である。大真面目な分、外見的特徴なポイントが細目である。
「蛇女子学園…残念ながら私は忍に関しては無知である故、詳しくは知らない所業の身…
だが、悪忍と名乗るのであれば…如何なる理由だろうと黙視する訳にもいかぬ」
細い目を更に細め、忌々しいような嫌悪に似た眼光を総司達に放つ。
「ほう、他の生徒とは一味違いそうだな。
少なくとも、目先に捉われてるような獣ではないことは確か…」

「それよりもあの細目の男性、目付きが悪いのう…産まれ付きか？視力が悪いのやら知らんが…

確か紫から聞いた話によると、教育の仕方によって子の顔立ち容姿も変わる…と。つまり、あやつはきっと、さぞや教育の悪い両親なのじゃろうな…家庭内もきっと悪いのじゃろう…迷える憐れな子羊じゃな…」

「私の眼は見目良く長大であり決して私の肉親など家庭内など関係ない!!!赤毛の貴様！見ず知らずの他人とは言え失言にも程があるぞ!!」

「な、なぬ？なぜ儂が怒られなければならんのじゃ!?」

誰だって怒るよそれは…と、心の中で呟く芭蕉は申し訳なさそうな顔立ちで溜息を吐く。

芦屋の悪い癖は、悪気が無い上につい反射的に人を怒らせてしまうことだ。

以前にも似たようなことがあり、伊吹と変わらない変態のドMたる両奈も、前に一度大激怒し芦屋を泣かせた一件がある。

「本来ならば私は、爆豪勝己を狙っていたのだが…正義、品位、教授、誇り、其れ等を背負い語る以上、貴様ら悪に仕えし闇の暗殺者達を前に無視することなど論外。

よってこれより、士傑の名に懸けて、貴様ら蛇女を排除する!!」

ベチャッ！と嫌な音が耳をつんざき、片方の手は切り離され四散し、肉の塊に似た指は大きめのサイズになっており宙に浮いている。一体どう言う個性なのだろうか、不明な点が多い上に奇妙極まりない。

「ほう、そうでなくては面白くない。

せいぜいこの美しき私の甘美たる色となり彩ってくれよ！」

「そう言う自尊心は――爆豪勝己そのものだな!!」

肉倉の肉片と、総司の鎖鎌が衝突する――

場所は打って変わり、真堂の個性により崩壊した足場の悪い荒野と

なれ果てたステージフィールド。
緑谷はよろめきながらも、障害物の瓦礫をどかし、辺りを見渡す。
「痛ってて…あの真堂さん…凄い個性だな…」
(強さは本物…ただヒーローとして動く以上…活動する使用範囲は限られるし…それに建物のある所では使いにくいな…
それよりも分断されちゃった…マズイぞ、傑物学園の思うツボ、術中にハマってる…)
誰もいないとなると、考えられるケースは自分と同じく何処かへ分断されたか、一人になってるか、数人で行動をしているか…
出来れば最小限としては数人同行で動いてる方が助かるし、その分落ちる確率も少ない。
問題なのは一人でいる状態だ。
多対一なんて状況、この試験では余りにも不利すぎるし、戦闘とは違ってターゲットが全箇所に当たれば終わりだ。
互いを活かす。
流れる連携。
戦況判断。
先輩だから当然なのだろう、年季が違う。
一年と二年の訓練の差…経験値だけでは埋まらない差は存在するもの。
全国の強い人たちが、自分たちに刃を向けられているのだ。
何故かと、気持ち高ぶる緑谷は、つい不敵な笑みを浮かべている。
ドッ――!
刹那。気配を感じ悪寒が背中を襲い、ゾッとする緑谷は咄嗟に反応を取るも、その前に右胸のターゲットに鈍い衝撃が伝わった。
ピカッ――ターゲットが光り始めだ。
「ダメですよぉ〜、ボーッとしてたら背中、取られちゃいますよ?てか当たってますし」
ふと、宙に舞う一人の女性の声が聞こえた。

突如現れた謎の女性に、なす術なく当てられた緑谷は唇を噛み締めながら相手を見やる。
「でもピンチなのに笑ってるの、不思議。
余裕とも違うこの感覚…変なの、雄英って貴方みたいな生徒が数多くいるんですかァ？なんだか気になっちゃうなぁ私」
プルンと色の潤った唇を揺らしながら、黒いスーツに士傑高校の学帽を被った少女は微笑を浮かべる。
（油断はしてなかったし気配も感じた…なのに、反応が追いつかなかった…！
この人…士傑の学帽に顔…あの時身近にいた…！）
イナサと肉倉と供にいたもう一人の女性、名は『現見ケミィ』。
「キミ、カッコイイねえ」

どうやら、この試験…一筋縄ではいかないようだ。

１２７話「君のこと」

真堂の個性「揺らす」による必殺技、振動伝地の影響により皆とはぐれる羽目になった雄英生徒と半蔵の生徒たち。
可能な限り集団で動き、安全を確保しながら着々と突破したかったのだが…傑物学園はそんな思惑に見切りを付けたのか、敢えて分離させて少数を狙う作戦へ実行した。
相手がどんな個性を所有してるか不明な以上、考えても拉致が明かない。
如何なる場合に於いても、自分達は予測不能な事態に対抗するしか打開する術は無い。
「うぅ～、イッたた……地震なんて凄い個性が来たなぁ……」
地震により土砂と共に落下した飛鳥は、なんとか受け身を取り最小限のダメージで済んだものの、痛覚は少し感じている。
土埃で汚れた頬に汗が伝わる。汗水供に腕で拭う飛鳥は、第一確認として周りを見渡す。
見た限り現ステージの殆どが土砂崩れによる被害が色濃く映し出され、どれもこれも視界が悪い。
人が居るかどうかさえ分からない上に、敵が物陰に隠れ潜んでる可能性もある。
「せめて一人でも多く他の皆んなの安否を確認したいなぁ…脱落者ってアナウンスで流れたりするのかな?ううん、こんな混戦の中、的確に言い当てるなんてしないよね普通…不正行為が有れば話は別なんだろうけど…」
２１００人の中、受験者の脱落を言い渡すなんてこと、考えてみて想像が付かない。
不正行為で有れば話は別なのだろうが、混戦の中で態々宣言する必要もないだろう。
「一刻も早く他の人と合流して…」
体制を整えよう。

そう言いかけた時、ふと土砂崩れの中からひょっこり顔を出し、周りを伺う受験者を見かける。
(アレって、お茶子ちゃん?)
どうやら向こうは此方に気付いてないらしい。
お茶子の近くにもう一人、顔をスッポリ覆う黒いヘルメットを被る人影も見える。
アレは間違いない、瀬呂範太だ。
お茶子と瀬呂は今のところ無事な様子。安否の確認が取れたことで胸をなで下ろす飛鳥は、ホッと安堵の吐息をついた。
「二人共無事みたい…良かったぁ~…早く合流して陣形を固めながら他の子達を探そう……」
そんな独り言を呟きながら、彼女は足早と二人のいる方角へと忍足で向かって行く。
これは思ったよりもずっと気難しく、中々にハードな試験のようだ。

「ッ――!!」
早い、速すぎる。
目を逸らすと直ぐに消えてしまう…!
何かしらの個性か?其れとも他の士傑高校の生徒が援護、サポートを担ってるのか?
どちらにしろ、現状…余り宜しくない。
緑谷出久は奥歯を噛み締めながら、苦の表情を浮かべ、的確に素早く、視野を広げ辺りを見渡す。
しかし、誰もいない。
つい先程まで、そこにいた士傑高校の生徒・ケミィは突然消えたかのように、姿がなくなっていた。
(考えろ…落ち着け!相手は必ず近くにいる!
そうだ…もしかしたら姿を消す…または相手の視覚を誤魔化す…

幻惑系の個性か――？）
「因みに私のは姿が消える個性じゃないよ――」
まただ。
ケミィの声が、耳元の近くで聞こえた気がした。気がした…と言うよりも、本当に身近に聞こえた。
振り向く間も無く、緑谷はケミィに腰の右横に貼り付けたターゲットを、当てられそうになる。
其れを緑谷は瞬時に足で地面を蹴り、ケミィの攻撃を上手く躱し体制を整える。
しかし又しても、彼女の姿はどこにも無い。少し目を離した隙に、彼女は忽然と消えてしまう。
「消える個性じゃない…？いや…相手を錯乱するための嘘…だったり？」
いや、今はダメだ。
考えるな…全神経を集中し気をしっかり高め保て。
女性とは言え向こうは見た目によらず、体力や機動力、素早さが特に異常な程に強い。思考を働かせる時間すらない。下手に考察に入っては必ず隙を突き付けられる。
もしかしたら身体能力強化系の個性か、又は他に見ない希少な個性か…何がともあれ、緑谷出久が翻弄されるには充分な程に相手は学生とは思えない実力を秘めていた。
「こんなんボールで殴れば良いじゃんね？」
刹那――耳朶を打つかのような声が届き、反応する前に背中から腕を掴まれ身動きが拘束される。
「くっ――!?」
地面に押し潰されたかのような迫力に、肺から酸素が吐き出される。思わずオエッと吐き気が施しそうになるも何とか堪え、視界ギリギリまで相手を睨むように見つめる。
そんな緑谷とは真反対、ケミィはその状況をさぞ優越な、そんで

もって色っぽい表情を浮かべそっと顔元に近づく。
「因みに嘘は吐いてないからね、私は…ただ隠れてただけ。フフッ…
私のは技術。相手の視と聴から私の存在を逸らすのよ、その瞬間息を止めて何も考えず潜み・紛れるもの…〝何も考えず〟が難関よ――
次にコレは武術、龍式・武術――龍の絡め。
相手の動作、視線、呼吸、様々な存在を知り、肌身で感じ取り、其れらを全て利用し関節技として繋げる初歩の技にして武術の基本。
大事なのは自然に流れるような動作、体の無駄な動きの部分を無くし、如何にどう柔軟に対応出来るか……私もコレ身に付けるのに一週間は掛かったけど…中々に厳しかったわ」
龍式・武術。
聞いたことがない。そもそもそんな武術さえあったのが初めてだ。
いや…きっとあるのだろう。ただ、自分が無知なだけで、実在してるかもしれない。
そもそも武術を得意とするヒーローは、実を言えば余りこの世には存在しない。
皆、個性を代表にして扱い、自分の個性に何かしらのプライドと自信があるからだ。
心操や切島と言った望んでもない個性を手にした者、自分の個性を地味だと自称する者なら話は別かもしれないが。
「し、士傑ではそんなことも習得出来るんですか!?まるで動き方が忍に…似ています!!」
気配を隠す巧妙な手口。
柔軟たる動作。
鍛錬された身のこなし。
其れらが緑谷に脅威としての認識を与えていた。
「コツは訓練を訓練と思わないこと…フフフ、お互い知りたがりだ…君のこと、益々気に入ったよ」
耳元の近くで、蕩けるような甘い言葉が緑谷を誘惑する。
鼻に女性特有の香水の匂いを感じる。
垂れる金髪が緑谷の頬に触れる。

「どう?体に力を入れても動けないでしょ?
この社会…大抵多くの人間が個性を得意とする中、自分の個性に自信過剰の人間が多く増えてるの。
特に子供なんかそう…聞いたことある?〝個性特異点〟が良い例え。
個性で対処できる範囲なんて限られてるもの…最小限から最大限まで己の力量で対処するのもまた、ヒーローや忍に必要なことじゃない?
だから私は、技術と武術の両方を兼ね備え学んだの」
彼女の言葉に、一つ一つが納得せざるを得なかった。
力を入れてもピクリともしないし、外すこともできない。無理やり外そうにも痛みが増して反射的に力が元に戻ってしまう。
これが武術と技術なのか…
正直、もし相手が敵ならば完敗せざるを得ない形だろう。
「次は私ね…貴方、何でヒーローを志してるの?
名誉?
誇り?
利益?
誰の為――?貴方のこと、もっともっと知りたいな」
彼女の声色、瞳、其れらがまるで血の通わない冷徹な悪意に染まる。
この人は一体――?
「――ぬんっ!!」
バイン!!
「わっ!?」
そんな思考を遮断するように、緑谷は体全身に5%の出力を上げ、バウンドするように腹部を打ち跳ねる。
まるでトランポリンに跳ねられたかのような音、緑谷は直様体制を整え、ケミィは受け身をとって立ち上がる。
一つ一つの動作に無駄な動きがない上に、その分隙がない。
「よく喋るんで――「雄英貰ったぁ!!」!?」

何処からか違う男性の声が聞こえたかと思えば突然、粘り着いたネット状の物が緑谷とケミィに襲いかかる。
振り返れば其処には、まだ見ぬ他校の生徒が大勢と言わんばかりにボールを握りしめ此方を見つめている。
まるで獲物でも狩るかのような視線、体育祭の騎馬戦決めとは違った視線…
「雄英だけじゃない、士傑もいる…嫌だなぁ…」
「けどこんだけの数なら士傑も何とかなるっしょ！」
「バーカ、そんで返り討ちにあったらどーすんだよ。油断はするなって言われてんじゃん忘れたか？」
駄弁りながら個性を発動し追い詰めて行く傑物学園に登坂高校の生徒たちは、思ったよりも厄介だ。
サシなら何とも無いのだろうが、数が多いと暴力と化すように、流石にこの状況は余り宜しく無い。
「これじゃあ…迂闊に近付けないし当てることも出来ないぞ…！」
緑谷出久のターゲットは一回、ケミィに当てられてる。残り二つとはいえ、油断は禁物。
どれも不明な個性が次々と緑谷単体に襲いかかる為、様子見とはいえ体を駆使して避けるのに精一杯だ。
何より緑谷はまだ誰一人たりとも生徒にボールを当てていない。これはこれで心の中に焦りが生じるものだ。
（何よりもあの士傑の女性…ちょっと目を離した隙に直ぐ何処かに消えちゃう!!いや、隠れてるのか？隠密系の個性…なのかな？あの人も隙あらば狙ってくるはず…）
「緑谷くん!!」
混乱真っ只中のこの状況。
騒音鳴り響く現状、聞き慣れた女性の声が耳に届く。
アレは……？
「大丈夫!?こっち！」

声の主は、ヘルメットを被った茶髪の丸顔少女、麗日お茶子だ。
少し遠いが、こんな状況の中で彼女の声がハッキリと、確かに聞こえた。
彼女は「早く!」と急かすように手を差し伸べる。
(何だ?何か策があるのか――?)
ふと疑問に思う緑谷は、浮かない顔でお茶子を眺めるも
「早くじゃねーよボケェ!!!」
登坂高校のうち一人、キューブロック状の体つきをした大柄な生徒と、拳がゴリラのような形をした生徒、鋏を持った生徒がお茶子に集中放火するように、個性を巧みに使い、ボールを投げ飛ばす。
「うわっ!ちょっ…もう邪魔だし!」
お茶子は鬱陶しそうな表情を立たせ、でもって厄介そうに相手を睨みつける。
(?何で麗日さん…個性、使わないんだ??)
可笑しい。
彼女の個性『無重力』であれば自分を浮かし回避することも出来れば、如何なる予測不能な事態、または不得意とする部類は大抵個性に頼らずとも、肉弾戦を主に使った動作で対処出来るハズだ。
それなのに、目の前でテンパり焦る彼女の様子は明らかに可笑しい。
ガラッ――
「あっ…」
足場が悪かった為か、土砂が崩れ落ち、お茶子も落下して行く。
何も出来ず焦り色を浮かべるお茶子は、正しく絶体絶命だ。
「よっしゃあやりぃ!!んじゃ俺この女にボール当てて抜けるね!おッ

先〜！」
「あぁ！抜け駆けはズリィぞ！」
「早いもん勝ちだからズルも卑怯もこけしもねえよ！」
一人の生徒は手をミサイルのように発射させ、ボールを握りしめたまま成す術なく落下して行くお茶子を狙って行く。
「ッ――！」
緑谷の足は、自然と無意識に力が入っていた。

「何処行った?!あの女！」
「すばしっこいヤツだったな…追え！まだ近くにいるハズだ！」
「挑発しておいて逃げるのか…舐められたものだな」
憤慨に満ち溢れた忍学生の何名かは、愚痴を零しながら足早と迷路になってる市街地を走り回り、ある人物を執拗深く探し回っていた。
突然他校の生徒が目の前に現れ、ボールで相手を脱落させようとした矢先に『多対一でしか相手に勝つことも合格することも出来ないんですか？ハッキリ言って見苦しい余り興が冷めました…』と、相手に自ら背中を見せたのだ。
まだ煽り文句の一つや二つは許容しよう。
気配から察して相手は忍だ。煽り、騙し、奪い、破壊する所業を得意とする身…しかし、相手は自ら背中を見せたのだ。
油断大敵の戦場に身を放り出されながらも、態々背中を見せる…あってはならないことなのだ。
そんな彼ら彼女らも相手に舐められさぞ御機嫌斜めだろう、プライドの導火線に火が点いた忍学生達は、彼女を探し回っていた。

「おい！こっちにはいたか!?」
「いんや…いねぇ…あんにゃろ～どこ行った？隠密系の個性か？」
「一人相手にそんなにムキにならなくても…」
違う男女の声が耳に届く。
何事かと思えば男女の三人組がボールを強く握りしめながら、誰かを探してる様子が伺えた。
誰を探してるのやら…なんて考えながら折角だしアイツらを脱落してやろうかと考えが過った矢先に
「おい！あのアホ毛何処行ったブッ殺してブチのめして爆殺のミンチにしてやんよぉ!!」
「だぁ～爆豪落ち着け！あの子の軽はずみな言動も、嫌味言われたこと許せねえのは解るけどよ…そ～ムキになんなって！これ潰し合いじゃねえんだぞ？」
「合格するに脱落者出すなら潰し合いと変わらねえよ!!他のモブ供も皆んなやってるわクソ髪！」
「てか…さっきから他の人達こっち見てね？」
慌ただしい三人組が、喧騒満ち溢れた雰囲気をダダ漏れにしながら駄弁っている。
特にあのイガグリ頭のような、厳つい顔立ちをした生徒は見覚えがある。確か…体育祭で優勝し一目瞭然として注目を浴び集めた生徒。そんでもって敵連合の襲撃を受け拉致された張本人…爆豪勝己。
他は何処かで見覚えがある顔ぶれだが、特に覚えていない。
「てかよ…浪川……なんか人多くね？」
ここで春雨忍高校の生徒、浪川は言葉を発する。そんな彼の発言に不審に思うリーダーは表情を曇らせながら口を開く。
「そりゃあアンタ、２１００人もいる仮免試験会場なんだから、多くて当然でしょ？未だに脱落者のアナウンスも流れてないんだし」
「いや、そうなんだけどよ…さっきまでここ…俺たちしかいなかったよな？」
言い返す言葉にハッと我に返ったリーダーの浪川は、辺りを見渡す。

人が多いのは当然だが、なんやかんやで人が増えて行ってる気がする。
まるで一つの大集落に人が集められたかのように、餌を求めた獣達が鉢合わせになるような流れに、何かしら寒気を感じる。
「なぁ…アイツら全員…誰かを探してるよな…？」
「ウチらは、忍学生を探してるけど…」
「もしかしてアイツらも俺たちと同じように誰かを探してる内に集められたんじゃ？」
もしその線による可能性が濃厚であれば、〝偶々〟〝偶然〟なんて言葉が来るハズが無い。
意図的に集められたのではないか？
しかし一体誰がそんなことを？
いや、解りきったことを…其れが可能なのは…自分たちを引っ掻き回してる人物一人しか考えられない。
「でも…なんだってそんな為に？」
わざと身の周りに敵を増やすのはある意味愚策だ。
今試験では尚のこと、一対一による能力同士をぶつけ合せた戦いではない。ターゲットが三つ発光すれば即脱落となるこの試験、慎重に且つ、有利な状況で相手を堕とすのが有益にして安全な方法だ。
「ふう、そろそろ頃合いでしょうか」

血の通わない冷徹な声が、受験者達を見下ろす。
とある建物の屋上は、見晴らしが良く効率的に相手を観察することが出来るので、ある意味自分にとっては有意義なスポットだ。
かの有名な暗殺者やスナイパーと言った人間なら、迷わずここを選ぶだろうと断言出来るほどに、ここは射撃範囲内に届くし何の文句も言い分もない。
火縄銃を連想させる大型の重火器を背中から下ろし、肩に担ぐ。
秘立蛇女子学園選抜補欠メンバー・千歳。

野良猫のような目付きに、茶色掛かったアホ毛がチャームポイントの彼女は、その何処か可愛らしい要素を脱ぎ捨てるかのように、物陰に潜む獣の如く、獲物を仕留める殺意の瞳を何百人もの受験者に向ける。

殺意や気配に敏感な忍学生達も、彼女の存在には気付いてないらしく、或る者は未だに彼女を探し迷い。

或る者はどうせならと、ボールを持ってターゲット目掛けて投げかかる者もいる。

(見晴らし良し…風向き良し…標準を定めて……)

後は念を込めるだけ。

禍々しい負のオーラは視認可能な程に濃厚に漂わせ、黒紫の毒々しい

色は見た者に恐怖を与えるだろう。

「私利私欲に溺れ、安い挑発に乗る…

こんなヤツらがもし戦争に出れば間違いなく死にますね。少なくともヒーローと名乗るバカ供なら尚のこと…偽善者は目障りです」

ヒーロー

その名を聞くだけで心が苛立ちと怨念の感情に呑み込まれる。

焔や雅緋と同じ悪忍の立場だとか、単に気に入らないとか、そういう話ではない。

そんな簡単に易々と理解されても困る、私情が彼女の血みどろな過去に切り刻まれている。

「いや、もう良い。

ヒーローとか警察とか、正義だとかそんな綺麗事目障りだ……全部、何もかも滅べば良いんです」

キュッと唇を噛み締める彼女はギラつく瞳を殺意により輝かせ、銃の引き金に指が触れる。

「未来も過去も——消しとばしてやりますよ」

そして殺意と悪意による過大たる負の感情はより高みへ登り上げ、引き金を引いた。
爆発的な音が屋上に鳴り響き、手を怯ませる事なく幾多もの発砲を繰り出す。乱射だ。
体制が崩れそうになるも、標的を見逃さず、時には建物に当て崩れさせ、立場を悪くし怯んだ獲物を狙い撃ち。
彼女が幼少期に身に付けた暗殺の技術だ。
「な、なんだ?!」
突然発砲が鳴り響いた屋上に、利用された受験者達は視線を千歳に移す。
唐突に起き始めた理解し難い状況に身を置かれてる者達は、対応出来ず銃弾の波に呑まれるかのように、打ちのめされる。
「徹甲弾(APショット)!!」

乱れる銃弾の嵐の中、此方も負けずと爆発音が轟き、銃弾を爆破で相殺する。
銃弾と言っても、皆が想像するような拳銃で撃ち放たれる金属製の銃の弾ではなく、あくまで忍術による気力の弾。
なので一撃で致命傷を負う威力は無いものの、それでも相手を行動不能に落とすには相応しい威力でもある。
爆豪はああ見えて不器用で常に鬼の形相の面を被ったような荒くれ者に見えるが、繊細で意外な一面も備えている。
ましてや、切島と上鳴が巻き添えを喰らわないようにと、高威力の爆破を連続で叩き込み、三人組誰一人たりとも傷付くことがなかったのだから。
「おいおいオィィ…安い喧嘩吹っかけたアホ毛野郎追ってみりゃあなんじゃこりゃあ?あァ?
随分と手荒な挨拶じゃねえかよオイ!!」
ＢＯＯＯＭ！と両掌を爆破させ怒鳴り声を張り上げる爆豪は、吊り

目９０度に達しそうな目付きで屋上の千歳を睨む。
銃弾の嵐が止み、爆破の手を止めてみれば全員倒れたままピクリたりとも動かない。
やれ気絶した者もいれば、やれ苦痛に表情を歪ませる者、負傷者などが相次いでいた。

「……意外。
アレを前に無傷でいたなんて…どうやら、体育祭での噂は間違いないようですね」

千歳――『邪弾忍法』
己の内に沸く怨念を銃弾に変えることが出来る忍法。
凡ゆる拳銃に対応する事が可能で、相手を翻弄することに長けた対人戦闘系の忍術。
「おいテメェ!!上から見下ろしてスカしてんじゃねえぞアホ毛が！早く降りて戦えやクソがぁ!!」
「弱い犬ほどよく吠える…と言いますが、なるほど。あの方の個性を考えて、強さは本物。直に見て確信しました。
しかし、残念ながら其れはないかと――」
ふぅ…と大きく溜息を吐く彼女はソッと静かに、瞼を閉じた。

「ん～皆んな上手くやってますねぇ……しかし未だに脱落者ゼロとは…まぁボッチボチじゃ無いんですかぁ～？」
欠伸をする目良は、相も変わらず眠たそうにパソコンのモニターを眺めている。
これは今試験に挑んでる受験者の数とプロフィールを表したもの。
受験番号に分けられ、ターゲットを当てた数、当てられた数が自動的に増えたりしていく仕組みになっており、審査員が目を光らせて監視をしている。
端から見れば単に楽そうな仕事に見えるかもしれないが、これも意

外と面倒くさく、偶に「お前も落ちろや」と言わんばかりに脱落者がボールをターゲットに投げつけたこともあり、審査員は不正な行為を見張らなければならないのである。
なんて怠い気力でモニターと睨めっこをしていると、ピピっと脱落者が出たセンサーの音が鳴った。
「おっ、早速脱落者…んでもって通過一人目ですね…って、うおぉぉ!?!」
モニターに映し出されてる驚異的な数字を目にした目良は思わず叫び出す。
目をパチクリしながら数秒黙り込む目良は
『コホン!え～っ、気を取り乱して失礼しました!!脱落者８５名！一人で８５名の数を脱落させました!通過です!!』
マイク越しで報告をする。
会場中に広がるレスポンスの放送に、大勢の者が耳を疑っただろう。
初めての通過者はまさかの秘立蛇女子学園選抜補欠メンバーに居座る千歳。
彼女はたった一人で８５名もの受験者を振い落し、見事一次試験を通過してみせた、稀代の忍学生である。
『え～先ほどの驚愕的な数字に思わずビックリしちゃいまして少し目が覚めましたかな、さアドンドンやってって下さいよ～!
それにしてもどーやって８５名も出たんだろ?ボールって三つじゃなかったっけ…まぁ良いでしょう!』
方法は複数存在するが、一番はストックの大きい収容範囲の有る大型火縄銃に、皆が投げてミスしたボールを集め、邪弾に紛れさせ発砲し脱落させたのが良い説だろう。
ボールを拾い相手に投げるのは反則では無い上に、これも一つの戦術でもあるため、脱落者の数が多くとも咎められることはない。
「あの野郎…ハナっからそのために俺ら集めて弄ばせてたのか」

「弄ぶなんて人聞きが悪いですね。仮にそうであったとしてもまんまと掌の上で転がされる貴方達に非があるかと…勝負に卑怯も非常も有りませんよ」
冷静で常に声色を変えることのない彼女は、見下すように爆豪の三人に告げる。
「てかよ…何もここまでする必要なくね？」
死骸…とまではいかないが、気絶し横倒れてる受験者達を直に、切島は情で訴えるかのように言葉を発し、茫然とする。
「は？何を仰るかと思えば…爆豪さんみたいに貴方達も力で対抗すれば良いだけの話でしょう？こんな試験に生き残れないクズ供が脱落者になるのなら、最初っからこの場にいないようなものと同じですよ」

血も涙も無い冷酷な彼女は、バッサリと切り捨てるように言葉を吐き捨てた。
「おい…幾ら何でもその言葉はねえだろ……」
情のない千歳の言葉に、上鳴が反応する。
元々峰田と絡む機会の多い彼は、並の人間と比べて女性が好きなうえに、初登場の時では女子を誘うナンパ派にも見えた。
しかし相手が女性だからと言って黙っていると言う話でもない。
確かにコレは端から見れば学校同士の潰し合い、学炎祭のような派手な炎上行動でもない、勝負という名の下で互いが競い合う試験だ。勝負にズルも卑怯もないのは百も承知。
だが
「オレ…君みたいな子とかさ、異性に対して過激になったりするのあんま好きじゃねーんだわ…
趣味じゃないっつうか、普段通りのオレじゃないっつうか…
あのさ、態々相手を痛めつけて通過する意味があったか？」

倒れてる人間をゴミのように見下し。
試験に適応出来なかった者を罵倒。
まるで他者を蹴落とすかのような。
これが彼女なりの策なのは良い。
相手に打ち負かされて怪我を負うのも仕方ないだろう。
だが…わざわざ、ここまでする必要が果たしてあったのだろうか？
「なぁ、せめてクズって言葉だけは撤回してくれねぇかな？」
静かに怒りを燃やす上鳴は今までに見たことがない。
爆豪も珍しく口を挟まず平然と二人のやり取りを見届けてる。
隣の切島も、また同じだ。

「暑苦しいですね…撤回する気などありませ――『オイ通過者ハ早ク控室ヘ移動シロ、コノ場ニ居続ケルトマドロッコシイ』……失礼、お喋りはまた何処かで」
「あっ、ちょっ――!!」
千歳に張り付いてたターゲットが三つ光始め、センサーが二人の会話を遮った。
千歳は「まぁいいでしょう」と納得しながら足早と屋上から地上に飛び降り、速やかに控え室へ向かっていく。
「あぁ～もう!!なんなんだよアイツ!?ここまで毒舌で感じ悪い女っていたか!?」
「ナンパで何回も見てきたんじゃねえのかアホ面」
「ちょっ、爆豪もうちょいオブラートに包んで!?今オレちぃと気ぃ荒れてんのよ！」
「知るか顔面へのもの字」
「更に悪化してない？」
『おおっとぉ!?況しても通過者一名！脱落者は１４０名！先ほどの一名の記録を通り越したぁぁ!!これどーなってんの？通過者２００人で足りるかコレ？』
爆豪と上鳴がいつも通りの様子で駄弁る中、又してもレスポンスに

三人の顔色は一瞬で変わる。
自分達もいつまでもウジウジしていられない。早く他の受験者を見つけて通過しなければならない。
「いつまでも駄弁ってたってしゃーねえ。行くぞクソ髪、アホ面」
「そんなパーティーのあだ名みたいなノリで呼ばれても!!」
「つーか…この場にオレら以外誰もいないんじゃね？早く他行って探そうぜ！」
三人組も、ここまで来ると仲が良いのは、今になった話ではない――

落下したお茶子の元に駆けつけた緑谷は、唐突に気恥ずかしが…お姫様抱っこをする形で彼女を救助することに成功した。
彼女を助けたついでとして脚を中心に使い、シュートスタイルを駆使して土砂を破壊することで相手の視界を奪い、注意を分散させることに成功した。
今は二人で岩の物陰に潜み隠れている。
「ご、ごめんね緑谷くん…下手こいて動けへんかった…」
「んっ、別に……」
たはは…と苦笑を作るお茶子に緑谷は警戒してる為か、外の景色を眺め相手の様子を伺っている。
土埃が消え、視界が元に戻った相手の生徒たちは、徹底的に自分達を執拗よく探し出している。
「この場所当てられるのも時間の問題かな……バレたらどうする？相手の個性…見た限りだと危なさそうなのが三、四人いたな…いや待てよ…その時はアイアンソールの活用を上手く生かして…ってそれよ

り……」
緑谷の独自分析が働く中、お茶子は表情を変えず――ボールを握り音も気配も立てずターゲットに当てようと近づける。
もうあと少しで、次のターゲットが――

ビシッ――！

当たらなかった。
「ひょっとして、士傑の人ですよね？」
据え切った緑谷の瞳は真っ直ぐで、いつになく険しい顔つきだった。
「は、え？」
面食らった顔を浮かばせるお茶子は「何言ってるの？」と口を開くも緑谷は口を閉じず語り出す。
「麗日さんは〝個性〟の訓練をしてごく短い時間なら副作用を気にせず自身へ使えるようになっている。
危ない目にあっても発動する素振りは見せず、肉体的な面も強いのにただテンパってただけ。
無策のまま敵前に姿を現わす人じゃないし、何よりも――」

『デクって、なんか頑張れって感じで…好きだな私！』

「麗日さんは僕を緑谷くんとは呼ばない」
数々の事実が突きつけられるような感覚に、相手は頬を綻ぶ。まるで「バレちゃったか…」と悪戯っぽい笑みを浮かべるその笑顔は、とても安心できるようなものじゃない。胸騒ぎがする、殺気に近い感情が、自分に向けられてる気がした。
「僕の知ってる麗日さんじゃない…
そ、それに……士傑の人は目を離したら直ぐに消えちゃうから…あのスピードと君の動きの良さから考えて…貴方なんじゃないかなって……その、個性までは分かりませんけど…考えられるとすれば…

他者の姿に〝変身〟してなりすます個性？とか――」

ドロォ…

静かにお茶子の体はヘドロのように蕩けていく。ドロドロと気味の悪い音が、毛肌を逆立ちさせるような錯覚に見舞われる。

「じゃあ、私のことを利用しようとしたのかな？」

「す、すいませんそこまでは流石に頭回ってませんでした…ただその…麗日さんじゃないなら個性で浮かばせること、出来ないから…もし落下したりでもしたら……あのまま落っこちて確実に背中を打って痛めてた…最悪事故に繋がりかねないし…怪我でもしたら大変……

何よりも、考えるより体が先に動いてました――」

「成る程、それが君の答えなんだね――君のこと、もっと知りたいなぁ…教えてほしいなぁ……」

ズルリ！

もうお茶子の姿はどこにも無い、先ほどの士傑高校の女子生徒、現見ケミィの姿へと元に戻った。

（試験の後じゃ……ダメなのか!?）

どうやら、前途多難はまだまだ先へと続くようだ。

１２８話「通過」

「これで全部か…」
熱く燃え揺らぐ炎に、全てを凍てつく氷。
息を吐くだけで白くなる温度の低いここの周囲は、氷結による個性で支配されていた。
受験者は氷漬けにされており、身動きを封じられた生徒たちは為す術なく脱落されてしまった。
そんな目前の光景を意に介さない轟焦凍は、センサーの指示通り直ぐ様控え室に移動する。
「やっぱ個性の同時発動は動きが鈍るな…強化合宿から仮免取得に向けての十日間、ずっと鍛錬を積んだんだがな……」
左右の手に視線を落とす轟は、軽い溜息を吐きながら独り言を呟き、控え室の前に来るとドアノブを握り、扉を開ける。
部屋は思ったよりも広く、テーブルの上に茶菓子や飲み物が広げられてる辺り、配慮が効いてる。休息するに丁度良い。

「一次試験、お疲れ様です♪」

ここで出迎えるように声を掛けて来たのは月光。
柔らかな笑みに、お淑やかな雰囲気の有る月閃女学館中等部の生徒にして、今は特別審査員の役割を担っている。
「ああ、どうも…」
「ヒーロー科・受験者１５２７番、轟焦凍さんですね。確認完了致しました。貼り付けたターゲットを今から外しますので、お手数掛かりますが少々お待ち下さいませ。失礼しますね」
そう言うと、月光は手に持つ専用磁気キーを三つのターゲットに近づけ、一瞬で解除する。
ターゲットを貼り付け試験が開始した直後、一度貼り付けたターゲットは二度と外せないような仕組みになっている。かなりハイテクだ。

「はい、この通りターゲットは全て取り外しましたので、これでＯＫです。失礼しました♪」
「一次試験が終わるまでまだ時間は有る。くれぐれも他の受験者に迷惑を掛ける行動や、騒ぎを起こすことは極力避けてくれよ」

月光の隣に腕を組み佇んでた閃光は、注意深く轟にそう告げる。
「ああ、有難う」と軽く受け答えする轟は通過者に視線を送ると
「スタンプマン好きっすよ俺も！サイン貰ったっす！彼みたいなヒーローは熱くてカッコイイっすよね!!」
張り上げた声が室内に響き、思わず目を丸くする。
確かアイツは夜嵐イナサ――雄英志望だった彼は、前に一度推薦者として雄英高校の試験に合格したものの、何故か其れを蹴った男だ。
「煩く騒いでるあいつは大丈夫なのか？話し相手も困惑してるけど…」
「……まあ、特にこれと言って多大な苦情が出てないから良いだろう。余りに騒がしい場合は注意するが…」
何とも言えない顔を浮かべる閃光。
月光とは違い彼女は冷静で無駄なことを嫌う、如何にも担任の相澤先生のような合理的主義者だ。
そんな彼女が合理的な思考を顧みず、趣味として余興を楽しむとえば戦闘くらいだろう。
轟は「そうなのか、有難うな」と軽く言葉を返すと、テーブルの上に置いてあるコップにオレンジジュースを注ぎ、口に移す。
乾燥した口の中にオレンジの味が広がり、喉が潤う。
「んでやっぱり…」

椅子に腰掛ける轟に、偶々視界に入ったのだろう。イナサは轟を見やると一瞬――凍り付く視線を向け、凝視する。
彼の其の瞳はまるで氷の機械のような、熱のこもってない感情なき

敵意の眼差し。
先ほどまで愉快そうに、熱く語り掛けてた少年とは別人のようだ。
「？」
敵意剥き出しの視線を向けられた轟は、なぜ自分が睨まれたのか理解できるハズもなく、頭の上にクエスチョンマークを浮かべるものの、相手は直様開き直ったように、駄弁ってた相手に振り向き再び会話を愉しむ。
愉しむ…と言ったものの、イナサと正面向いてる本人は全然楽しくなさそうで、鬱陶しそうな眼で視線を飛ばすだけで、特に口は開いていない。
（なんで睨まれたんだ俺？そう言えばアイツも推薦入学者だったんだよな……
じゃあ試験の時に遭ってるハズなんだが可笑しいな……あんなヤツ見た覚えも記憶もねえぞ）
心の中で睨まれたことと、イナサが推薦入学者であり見覚えがない二つの疑問に悩みながら思考を働かせるも、結局答えは見つからない。
そもそも自分はあの日を境に、体育祭にかけてまでエンデヴァーを否定することに必死だったので、単に見てなかっただけかもしれない。しかし其れがなぜ態々睨まれなければならないのか検討が付かないので、考えるだけ無駄だろう。
そもそも人と関わる事に極力避けてた轟は、他人と話すことなど滅多に無かった上に、一人の方が気楽で過ごしやすかったので、他人に怨みを買われる道理は無い（エンデヴァーアンチを除いて）。
「恨み辛みって言ったら…」
イナサの静かな敵意の眼を見て思い出した轟は、ふと千歳のことを思い出した。
――お気楽で良いですね轟焦凍（貴方）は、そして貴方の父親も――名誉と幻想（正義）の下で幸せに暮らせる人間は。

嫌味よりも、義憤と私怨に近い千歳が一番気になるのが本音だ。
元々ヒーロー家として産まれた自分は、憎きＮｏ．２の父親がいる。忍を客として装い招き入れた姿は何度か観たことがある。しかし、子連れの忍など見たことがなく、彼女と会うのは初めてだし、関係性があるとすればエンデヴァーなんだろうが、憎まれ口を叩かれることに繋がりが見えない。
「なぁ、アンタ」
壁に背をつき持たれてた彼女は、寝てたのか瞑ってた瞼を上げて、声主へと視線を送る。
一瞬だけ、ギラリと殺意が放たれたような気もしなくは無いが、相手は忍なのだから多少文句は言えないと心の中で鵜呑みにする。
「どこかで俺と遭ったか？」
躊躇なく、単刀直入に物事を訊ねる轟に、千歳は苛立つような顔立ちでそっぽを向く。
よほど嫌われてるようだ。口も開かなければ、会話をしようとする意思すら見えない。
尤も彼女は一次試験合格の後にイナサに絡まれたせいで不機嫌な理由も一理あるが、其れとはまた違ったもの。
「オレ、お前になんかしたか？話してくれねえと解らねえし、訳分からず敵意向けられても正直困る。何か気に入らないなら、ハッキリ言って欲しい」
話せば解るとはこの事だ。
もし自分の行動が原因で不快な思いをさせてしまったのなら、謝るべきだし、況してや初対面の人間にいきなりここまで辛辣に対応されてもこっちが悩ましくなる。
自分にここまで敵意を、嫌味を向けるのなら何かしら原因が存在する筈だ。
なら、少しの会話でも良い。
其れで何かを言ってくれればこっちも――
「理解しなくて結構ですよ。私は、貴方達のような偽善と関わるつも

りは毛頭ないので――況してや貴方なら尚のこと」

しかし、轟焦凍を切り捨てるように、彼女は断言した。

「そうですね、貴方は何もしていませんし悪くありませんよ。特に気に触る行動も取っていませんし、こうして直にお逢いするのは初めてです。

しかし、貴方と抗議したところで解決しません。これは私自身の私情ですので…貴方は気に病むことなくどうぞ」

彼女は避けるように轟の横を通り過ぎ、離れていく。

そんな彼女に、どう声をかければ良いのかすら解らない轟は、二重の重みを感じながら呆然と彼女の背中姿を眺めていた。

(はぁ、どうにも調子が出ませんね……幾ら初対面であり、彼自身、何もしてないとはいえ…エンデヴァーの息子となると、頭に血が上ってしまいます…)

考え事に浸ってる彼女は、深くため息をつき空になったコップにオレンジジュースを注ぐ。

ここは別にオレンジジュース限定でもなければ、麦茶や粗茶、他のジュースも並べて有る。

偶々、轟焦凍が注いでた大きなペットボトルのジュースを手に取っただけなのである。

(気にしないように、普段通りに振る舞おうと…そう思っても、彼があのクズの血を継ぐ息子と認識している以上、どうしても苛立ちが治らない…もしこれが任務であれば、連携の戦略は免れないはず……消耗品として失格ですね…)

消耗品とは、忍のことだ。

彼女にとって忍は使い捨ての道具で有り、任務として使われる為にあるものだと自己解釈している。

殆どの忍が仲間だの強さだのと名誉や地位だのと喚く者はごまん

といるが、彼女にとってそんなもの全部どうでも良い。
実を言えば仲間だなんて感情、理解できない部類だ。忍は上層部や国の為に存在する者で有り、それ以外には何の価値も無い存在だ。
(……いいえ、取り敢えず試験に集中しましょう。これが終われば遭う機会は少なくなるはず…幾らヒーローと忍が手を取り合う時代になろうとも、ヒーローが悪忍になど……)
ヒーローは常に綺麗事や私欲を満たす存在だと、彼女はそう認識している。決して嫌味や正論を述べてるのでは無い。主観である。

例えば…あの時のように…

『邪魔だ汚い小娘が――俺に触るな、消え失せろ』

救けを求めても、泣き叫んでも、現実に打ちのめされても、この世界は誰も救ってくれないのだから。

泥のような滑り。
粘りつく音。
偽りの姿が溶ける。
岩の物陰に隠れてる二人は、歪な形で対峙していた。
緑谷出久と現見ケミィ――雄英高校と士傑高校、どちらも最高難であるヒーロー学科に在籍している。
麗日お茶子の偽物だと見抜いた緑谷の観察眼、洞察力、其れ等はどちらもクソナードと呼ばれるだけで伊達では無い。
(考えろ…!こんな物陰で暴れたりでもしたらまた他校の生徒が襲いかかってくる……打開策もない今、一人の身…下手に動くのは危険すぎる。ここは焦らず冷静に…んでもって的確に動かないと、少しの判断ミスが致命傷に繋がる…!)

頭の中の回転数はいつだってフルスロットルだ。
「君は誰でも救けるの？」
ドロドロになりながらも、彼女はその液体を拭うように、突っ込んでくる。
来る！――しかし、目前にいる彼女は驚くことに何と、裸だ。
「境界は？何を以って線を引「うわぁ!?ちょっ、何で裸なんですか!?服着てくださいよ！」――ふふっ、やることやったらね」
裸体を直前に目撃した緑谷は、ある意味予想外なハプニングに羞恥心に火が点き顔を真っ赤にするも、ケミィはそんな彼の反応を見て微笑み、構わず突っ込んで来る。
変身らしき個性は、まだまだ謎が深く、不明な点が多い。
シャッ！っと、彼女は爪で緑谷の頬を引っ掻く。避けきれず偶々食らってしまった緑谷の頬に切れ傷が生じ、血が垂れる。
（引っ掻き？なんだよもう――！）
次から次に予測不能な行動に軽い恐怖を抱く緑谷は、目前の裸体に直視できず、本気を出せず防戦する一方だ。
不味い、タダでさえ他の生徒が自分たちを探してるのに、これ以上この人のペースに引き込まれたら、それこそ通過なんて夢のまた夢、誰一人当てること叶わず脱落する側に陥ってしまう。
「おらぁ！離れやがれ！」
『!?』
ケミィが緑谷を押し倒そうと攻めに入った瞬間、二人を隔てるように白長いテープか飛んでくる。
間一髪だったのか、ケミィは其れを紙一重で躱す。この個性と、声の主から考えて間違いない。
「緑谷なんちゅー羨ましい状況に置かれてんだクソッタレがぁ!!」
醤油顔の瀬呂範太。
若干、羨ましそうな台詞にも聞こえるが、今の緑谷は気を止まることなく手短に感謝の礼を告げる。
「はぁっ!!」
刹那――風がケミィの髪を揺らぐ。

その微風の一瞬と供に、気合の張る声を上げる飛鳥は体を上手く駆使してケミィに蹴りの一撃を入れるも、向こうは柔術を使って難なく躱す。体の関節が柔らかい彼女は、体術を使って体制を整える。
「大丈夫デクくん！」
瀬呂と飛鳥と共に駆けつけに来たお茶子が緑谷に安否の声をかける。ケミィは目の前にいる、デクの呼び方、今度こそ本人で間違い無いだろう。
本物のお茶子に安堵の息をつく緑谷は「麗日さん…良かった、今度こそ本物だ」と呟くものの、本人は知らない。
「反応…凄……」
体術と言った、武術に近い動きに飛鳥は茫然とする。
素人とは思えない動きに、身のこなし、凄まじい反射神経にスピードは、忍やそこらの上忍と肩を並べれるだろう。
「ふふっ、飛鳥ちゃんにお茶子ちゃん…貴方達も素敵ね……」
「はえっ？」
「えっ、何で私の名前のこと…」
一瞬、自分の名前を言い当てられた飛鳥は、大きく動揺してしまう。
まだお茶子や緑谷、ついでと言っては失礼だが瀬呂のようにヒーロー科の名前を知っているのは不自然ではない。
体育祭で名前や個性が生中継として披露されてるので、割られるのも有名人なのも可笑しくはない。
しかし忍学科として、まして世間に公表すらされてない彼女の名前すらも知っているとなると、それはそれで不気味だ。
「偶然、他の子と会話してる所を聞いて、貴方の名前を覚えたのよ…ふふっ、可愛い」
果たして其れが本当なのか、嘘か真実かは解らない。
それでも、彼女に何かしらの危険性と不気味さの印象を与えるのに充分だった。
「人が多くなったし…そろそろ服着たいから、一旦引くね。バイバイ、緑谷くんにお茶子ちゃん、飛鳥ちゃん」

そう言うと、彼女は呆気なく物陰に身を潜むように撤退した。
緑谷の呼吸は乱れており、飛鳥やお茶子もケミィに対して何処か浮かない顔立ち。「俺は？」と色々な意味で空気と化してた瀬呂。
なんやかんやあったが、ようやく無事な生徒を確認することが出来たので、取り敢えずは一安心だ。
「緑谷くん無事で良かったぁ～…さっきの子誰？」
「ホラ、士傑の人だよ。正直、怖かった……」
「あんな痴女と絡む緑谷、もしかして如何わしいことでもしてたんじゃねーのか？」
「ち、違うよ!!幾ら何でもこれ試験だよ!?二人とも違うからね!?」
「緑谷くん、動揺してる辺り益々怪しく見えちゃうよ？」
「飛鳥さんも!?!」
緑谷本人からすれば危機的な場面だったのだろうが、途中から介入した第三者達からすれば、物陰で裸体の女性と緑谷が絡んで、色んな意味で襲われそうになってるという説が大きいだろう。
当の本人は激しく反対の意見を述べてる上に、女性との免疫も無いので考え難いが、ここまで動揺してると少し疑い深くなる。
「そ、それよりもさ…確認するけど三人は本物だよね??」
「ホンモノ？何の話？」
「さっきの女性…士傑の生徒の個性が、他者に変身できる個性だったから…その……本物かどうか解らなくて……」
「ったりめーよ。仮に偽物だとしたら態々お前を助けねーだろ？相手を信用付けさせるドーピング方式なら話は別だけど」
「変身の能力？……ああ、忍で言えば変化の術だね」
「ま、まあそんな感じ…
んで飛鳥さん、麗日さん、瀬呂くんの三人はどうしてここに？一応、経緯を聞きたいんだけど」
「あの後傑物学園のイケメンの個性で皆別れちまったろ？んで近くにいた麗日と一緒に他の皆んな探しに行こうか悩んでて、他の生徒がいるか確認してたところ、飛鳥と合流した。

そんで他の生徒探してたらドンパチやってるところ目撃して、忍び込むようにしてたってわけ！そしたらお前と痴女がなんかして「瀬呂くん有難う！それじゃあ他の皆んなの安否はまだ確認できてないわけか…」――サラッとスルーするのな」

これ以上誤解を招きたく無いという意思が強い緑谷は、何とか瀬呂の言葉を切り上げるように言葉を遮り、情報を整理する。

謎や不明な点が多い今、迂闊に他の生徒を探すのは難関にして愚か。またケミィのようなやり手の生徒や、蛇女や他の忍学生に目を付けられるのはゴメンだ。

「ここからどうしよう…皆んな何か考えはあるかな？」

「俺たちは他に仲間を探しながら通過しようって話をしてた。アナウンスで脱落した生徒や通過した生徒が流されないのは不便だけど、信じるのもまた戦略の一つだって二人がな。俺は多数決に従ったんだけど…緑谷はなんか策でもあんのか？」

「なるほど…」

三人では対処出来ない予測不能な事故が起きる危険性があるため、なるべく多過ぎず、仲間を増やして守りを固めて一次試験を突破し通過するのが三人の本望だそうだ。

その意見に関しては同意だし、実際雄英ヒーロー科に半蔵の忍学生は強い。十日間の強化訓練に続き、コスチュームの改変から必殺技まで編み出してる。

「僕もそんな感じのことを考えてたよ…僕を狙ってた生徒たち自体は強くないし、数を攻めてくれば不利になる、厄介だけど…向こうの団結力は思ったより大したことない。見たところ意思疎通が出来ない感じだから、僕たちが上手く連携を取れば制圧は可能。

たださっきの士傑の生徒のようなイレギュラーの場合は話は別だけど…」

「お、おお…じゃあつまり今この場でソイツ等を完封すりゃあ良いって訳か？にしてもあんなドンパチ激しく混戦してたのによーあんな短時間で考えたな緑谷」

「じゃあ、ウチらは具体的にどうすればええん？」

「わ、私も活躍できるのかな？」
「それは――」
崩れた大きな岩影に潜む緑谷たちに寄るように、他校の生徒たちは少しずつ此方へ近づいて来てる。
この状況を打開し通過する方法は――

鎖鎌の金属音が、ヂャラヂャラと不愉快な音を奏でている。
血のように赤く塗り染められた鎖は、まるで赤い蛇のようだ。凡ゆる獲物を捕縛し食い締めるその鎖は、獲物を捕縛する。
そして大小サイズに並べられた鎌は、蛇の牙を表してるように見える。龍の鱗、蛇の牙、敵意を？きだす刃物は、相手を仕留める為に造られた印象が伝わる。
「鎖鎌…蛇女の補欠とは聞いたが……想像以上に厄介だな」
士傑高校二年ヒーロー科、肉倉精児は細い目を更に細めて愚痴をこぼす。
鎖鎌の斬撃が己の肉体を弾き飛ばし、肉片が飛び散るように地面に付着する。端から見ればかなりグロテスクにも見えるが、個性の性質上仕方ない。
「貴様の肉片に触れれば即、その醜い姿に変えられるのか…厄介と言うよりも、相性は最悪だな。私の美貌を汚すなど、善より寛容な私でも万死に値する罪なのだから」
鎖鎌を巧みに扱う総司は、そこらに落ちてる肉片に視線を落とす。少しでも触れてしまえば、まるめこねられ、最終的に他校の生徒のように行動不能となってしまう個性は中々に強力だが、総司の主観からすれば、個性の厄介どうこうなく己の美しき容姿を醜い姿へ変えられてしまう、最悪な個性である。
「あ、芦屋さんに伊吹さんも……士傑の人にあんな姿に変えられちゃったんですよね…」

恐る恐る口を開く芭蕉は、肉倉の近くに落ちてる二つの肉の塊に目をやる。
「チッ……最初は様子見でヤツの弱点を捉えてから隙を突くべく狙ってたんだがな……」
最初、相手の個性が不明な為、警戒を怠らず斬撃を飛ばし相手の様子を見計らっていたのだが、私情丸出しの伊吹が突っ込んでいき（気持ちよくなりたいらしく）、彼女を止めるべく芦屋が庇い、更に不意打ちで伊吹も肉片に捕まり丸めこねられてしまったというオチだ。
個性的な性格ではあるが、ある分強すぎて逆に負担が掛かってしまうのは望ましくない。
「貴様らは悪忍、それ則ち悪鬼の従。
敵と何も変わらない存在が、世に蔓延り我々ヒーローと供に歩むことなど、あってはならぬ」
再び両腕の肉片を分離させ、複数の肉の塊へ分裂すると、総司目掛けて一斉に襲いかかる。
肉倉は自己意識と正義感が強い上に、立場や地位などの場をわきまえる優等生。
だからこそ、神野区の一件後に明かされた忍の存在。悪忍の存在を許さない、いわば忍を良く思わない人間だ。
「九頭龍閃乱――風鼬」
一定の領域で鎖鎌を激しく振り回すことで、風の如く空間を切り裂く斬撃を飛ばし、範囲内の侵入者を排除する個性に似せた応用術だ。
因みに総司の遁術は飛鳥や葛城と同じく風。忍社会の中では本人の忍術とは合わない遁術を扱う忍も存在するらしい。
肉倉の放った肉片は全て飛び散るように弾かれる。
「何度やっても同じことだ!!私という完璧に敵う者などこの世には存在しない！」
断言する総司は鎖鎌を鞭のように素早く振り回し、自身の範疇内に触れる者全てを吹き飛ばす絶対領域を作り出す。
間合いに入った者はた只では済まないだろう。
「そうか、しかしこれならばどうだ？」

肉倉はその肉の塊を更に分裂させ、次第にサイズは小さくなり、やがて雨粒並みの縮小サイズへと成り果てた。
「なっ――」
「これは、繊細なコントロールが必要で時間が掛かる…故に私自身本体の体が使えないため、余り宜しくないのだが、貴様が攻めてこないのならば好都合。
私の個性は、大きさも自由に変えることが可能なのだ」
肉倉精児――個性『精肉』
揉んで〝肉体〟を変化させてしまう。他人の肉体はこねて丸くするのに留まるが、自身の肉体は自分の身体の為自由度が高く、肉を切り離し分離させたり寄せ集めて大きく出来たりする事が可能。因みに切り離した肉体へのダメージはゼロ。
「私が相手をして来た中でも、貴様は例外だ。中々に手を焼く相手だった」
「しまっ――クソッ!!」
全方向から肉の雨粒が降り注がれ、総司は全て払いのけようと振るうも、少量の肉の塊が総司の身体に所々付着してしまう。
ある程度確認出来れば、後は簡単。一旦操作をやめて、総司に纏わりつく肉の塊を寄せ集め、こねて丸めば問題ない。
「総司さん!!」
「因みに一度捕まってしまえば終わりだ。私の分身に攻撃したとて無意味。巻き添えを食らうだけだぞ緑髪の少女よ――名は確か芭蕉だったか?」
なす術なく、まるでパンの生地のように、揉んで、丸めて、こねて、そしてやがて彼女は自身のアイデンティティを傷付けられたかのような、醜く肉の塊のようになってしまう。
喋れないのか、声を張り上げること叶わず、何を言ってかは不明だが、言葉なしでも芭蕉の心を痛めつけるのには充分だった。
「そんな…」
「これは示威である。

今試験、ヒーローのみならず善忍悪忍が合同で試験を望む理由…オールマイトが引退し時代は節目、更にはとある古風の老人たる忍が胸を張り矜持を貫いて見せたその雄姿、実に感激した。
私は誇りに思う。忍とは単に暗殺や破壊をなりあいとする生き物ではないと、我々が知る忍とは違うのだと、確信した。本来であればヒーローは増員して然るべきもの…この世代に於いて、ヒーローだけで済む世界…とは、神野区を後に断言できるものでもない。少しでも戦力を増やす事がベスト…なので、忍の存在が邪魔だとは言わない」
「…そんなことを解っているのなら、そこまでして言うのなら…何で私たちを拒み、否定するんですか…？」
「私の中での忍とは善忍のみで充分だと言う話だ。
貴様ら悪忍は別…善忍と言うのなら我々ヒーローのように他が為に行動し命を張ることが出来る、いわばヒーローの補佐の役割を担う存在だ。
しかし貴様ら悪忍はどうであろう？様々な違法行為、破壊や暗殺、時に奪取し命を踏みにじる、敵らしき存在では無いのか？
芭蕉よ、其れが違うのであれば忍はなぜ善と悪に別れるのだ？私の言葉に何かしら誤りが有るのか？
其れを教授してくれるのなら、耳を傾けよう。まぁもっとも悪の語る妄言など馬の耳に念仏だが」
肉倉は伊吹の近くに歩み寄ると、彼女の身体を蟻を潰すかのように、踏みにじる。そんな彼に思わず敵意の視線を向けてしまうのは、致し方ないこと。
「一つ忠告しよう。
貴様が攻撃を仕掛けようと、この場にいる肉の塊…即ち受験者と貴様の仲間三名の痛覚は正常に働いている。
大規模な攻撃や、被害の大きい攻撃、忍術は愚策…注意した方が良い。とは言ったものの、悪忍は冷酷、仲間のカケラも字も無かろうに…次は貴様だ芭「ありますよ…」――ッ！」
肉倉の言葉は、静かに怒りを燃やす彼女の声に遮られてしまう。一

見、可愛らしい人畜無害な小動物の彼女に見えるが、油断は禁物。この女性は決して、気を緩やかにし隙を見せてはならない悪忍である。
「仲間の情は、ちゃんとあります……」
彼女は大きな墨筆を握りしめると、空中で何かを描き筆を振るった瞬間――斬撃が飛び放つ。
「ッ！」
肉倉は間一髪で、躱すことに成功したものの、内心は混乱。何が起き、どう言った原理で斬撃が飛んできたのか、解らなかった。
（何だ今の？斬撃を飛ばした…？総司のような忍術…いや、そうには見えない。原理的に考えればそんなことは…待て、忍の存在は未知が多い故に、不明な点が多すぎる。
攻めすぎたか？彼奴の忍術が何か確認したい所だが…）
手短に頭の中を整理する肉倉は、冷静に取り乱すことのないように、至って正常で堂々とした態度を取り、彼女に目掛けて肉の塊を飛ばす。
先ほどのようにコントロールは不要、一先ず様子見も兼ねて肉の塊を飛ばし、判断を取る。
「私だって…腐っても選抜の補欠メンバー…前に在籍してた選抜メンバーの未来さんに、一年生で転校してきた両備さんや両奈さんにまだ遠く及ばないですし、選抜の座はまだまだ遠いのも、実感できます……
特に、あの時の私なら尚のこと…」
『スプリンガーのヒーロー事務所はどこですか？』
其れは、嘗て切島が体験した恐怖と挫折。
彼女は目の前で死を錯覚した。
消えない恐怖と絶望で彩られた記憶に悩まされた。
「私は気弱ですし…オマケに忍術も充分に扱えない未熟者…日影さんみたいに常に冷静で強い忍では有りません……」
其れでも、あの人みたいになれたらな、と切なく思うことも多々

あった。
どうしたら、自分もあの人みたいなカッコいい忍になれるのだろうと、どうしたら自分も日影さんみたいな無情な忍になれるのだろうと。
彼女にとっての憧れとは、日影なのだ。

しかし、其れと同時に内心に沸くのは、善良たる抵抗心。
無情になり、人を簡単に殺めてしまうような忍になって良いのかと、時折そう思ってしまう自分がいる。

「可笑しいですよね私…蛇女の悪忍なのに、人を殺めること出来ず、小さな虫を傷付けるのでさえ躊躇ってしまう私が悪忍なんて…笑い者ですよね…時々、そんな自分が産まれてしまったことに、多少の疑惑が湧いてしまいます…」
「其れは己に自覚があるからか?まだ、人間としての心が有るのか?貴様ら悪忍にどう言った経緯が有ったかは存じない…其れを知る必要もない。
しかし、貴様がこの場をわきまえ、己の罪に悔やむのならば大いに賞賛。故に、省してくれれば幸い――」

肉倉の肉の塊が、彼女に触れようとした刹那――懐から文字の描かれた札が数枚、肉の塊を包み込む。
「なに…?!」
肉倉は己の眼を疑う。
今目の前に映ってる光景は、己の肉の塊を完全に封じ込み、包み込んでるのが見え受ける。
自分の個性が、封じられたかのような、それこそイレイザー・ヘッドの抹消で封じられたかのような錯覚に囚われてしまう。
「ただ、そんな私だからこそ情はあるんです……
相手にも家族がいて、事情があって…其処に、確かな幸せと笑顔が

あるのなら、奪ってしまう自分が怖いと…そんな事を考えてしまうんです…

だって、そんなこと考えてしまったら…命なんて奪えないじゃないですか――」

例え相手が気に入らない存在だろうと、殺すことに躊躇いも持たない人間の道を踏み外した存在だろうと、道具のように利用し支配してた外道だろうと、こっちも気に食わないから殺したなんて、そんなこと彼女には出来ない。

それが忍として未熟だと罵られ、悪忍に不向きだと言われるのも、慣れっこだ。

一時期、そのせいで自分は心の殻に閉じこもり、人と関わらないように生きて来た自分は人間不信でもあった。

それでも

『別に芭蕉さんは芭蕉さんでええんちゃう？わし、周りの視線なんて気にせぇへんからなぁ。

そもそも、なに言われても何も感じないし、自分を貫き通すのが忍ってもんやないの？其れが正しいかは知らんけど、悪忍なんだし、自由になればええと思うで。生かすも殺すも、アンタの自由や』

憧れの先輩である日影さんにそう言われてしまえば、閉じこもってた自分がバカらしいではないか。

「知ってますか肉倉さん、悪は善よりも寛容だと言う言葉を――」

彼女が念じたその瞬間（とき）、肉倉の足場は光だし――爆破する。

「!?!」

最小限の爆発は爆豪と比べて小さいものの、相手に傷を負わせるレベルは充分。

伊吹に被害が届かない程度の安全圏を見計らった芭蕉は、咄嗟に彫ってあった文字を発動させる事で文字の効果を発揮した。
「な……にが……？」
「貴方が伊吹さんと芦屋さんの猛攻を避けながら個性を使ってた間に、貴方の眼を盗んで書いてたんです。
幸いにもコンクリートで出来た道路は色が墨色、私の忍術ならば相性は良好。罠を張ることも可能なんです」
意識が朦朧とする肉倉は、視界が霞む中、歯を食いしばり相手を睨みつける。
伊吹と芦屋が攻撃を仕掛け、肉倉が相手の攻撃を避けてる隙に相手の目を盗んで墨字で「爆」を書いてたのだ。
そして肉倉は足元の下まで訪れたのを機に、念を込めて仕掛けが作動しただけのこと。
芭蕉――『墨字忍法』
墨に彩られた筆毛で文字を書くことで、其の文字の効果を発揮させる事が可能。文字の数だけ忍法が存在し、其の分だけ他の忍とは違い数多くの忍法を扱う事が出来る、世にも珍しい希少な忍術。
…なのだが、本人はまだ実力が未熟なので、失敗する事が多々あるのがタマにキズ。
「でも、もし貴方が側にやって来なかったらどうしようかと悩んでましたが…その心配も無かったようですね…」
チャキ…
芭蕉は静かに大きな墨筆を握りしめ、筆毛を相手に指し向ける。刃物に似た音が、肉倉の耳に伝わる。
「まさか…！あの時、私が伊吹を踏んだ時か!!」
悪忍はこうだと言わんばかりの見せしめが、逆に仇となった肉倉は、己の失態を大きく後悔する。
油断大敵とは正にこのこと、まるで参考書のように解りやすい。
「貴方が私たちをどう思おうと勝手です。
事実、悪忍は批判を受けてるのも上層部だけでなく、私たちにも非があるので、否定は致しません…

でも、これだけは言わせて下さい――」
彼女は一息吸って、腹の底に力を入れて喝を入れる。
「私の大切な仲間を馬鹿にしないで下さい!!!」
「己の立場を自覚しろと言う話だ愚か者ォ!!!」

其れは、気弱で優しい彼女が初めて見せる激情。
肉倉も其れに応じるように、怒号を弾ませる。
「九頭閃・牙龍!」
透き通った美しい女性の声が、耳に届くかと思えば、余りの激痛で意識は途絶えるように、肉倉は後ろへと倒れた。
先ほどまで丸めこねられあるまじき姿へと変えられた総司が、元の姿へと戻り、鎖鎌を腹部に狙ったのだ。
「全く不覚だ。
完璧主義者でありながら、貴様如きに足元を掬われるとは…しかし、芭蕉のお陰で私の美貌が元に戻れたのも事実。感謝するぞ」
「わ、我も忘れては困るぞ!」
「はうぅ〜ん!やっと元に戻りましたぁ〜!ワンワン♪」
肉倉が気絶したことにより、個性で行動不能に陥られた総司、芦屋、伊吹は元の姿に戻ることが出来た。
「皆さん無事で…良かったです……」
ホッと一息つく彼女はソッと胸をなで下ろす。
肉倉精児の個性は厄介ではあるが、ある一定量のダメージを受けてしまえば、捕まった者も元に戻ると言う個性の仕組みらしい。
「芭蕉、これはお前の手柄だ。
コイツのターゲットを全部当てろ、お前が勝ち取ったんだからな」
「えっ?で、でも…」
「其れに、私達の相手は他にもいますもんね?」
伊吹の声に振り向くと、肉倉の個性で行動不能になってた受験者達の姿も戻っていた。
それも当然、掃除に芦屋、伊吹が元の姿へと戻ったのだから何ら不

自然ではない。
「さぁ、再戦だ！」
悪に舞準じる蛇の乙女は、獲物を睨みつける。
闇夜に咲かす華は刺々しく美しい、血に彩られた彼岸花とは違い、友情のような情熱の薔薇だ。

今回の試験、意思疎通と連携が取れない理由は個人的な意見を除いて、多くの理由が一次試験を通過したいと言う欲求。
つまり抜けがけする人が多いと言うこと。
先着２００名という甘言に惑わされ、視野が狭まり混乱を招きやすい混戦は、ボール当てにしては中々にカオスだ。
だからこそ客観的に見て簡単な事柄でも、圧力を掛けてやれば自動的に生徒たちの行動は難しくなる。
一年生に忍学科の受験者が合同で有れば尚のこと、本来得意とする連携や、弱点を補う役割も今試験では自分たちが自ら潰してると言っても過言ではない。
「麗日さんお願い！」
「任せてデクくん飛鳥ちゃん！」
緑谷出久と飛鳥は、左右反対方向で視界に入る受験者たちをかき乱すように行動し、囲んでからの飛鳥と緑谷が合流するように、距離を縮んでいく。
二人に視線が集まる受験者はボールを持って投げるタイミングを見計らう。そこで麗日と瀬呂の二人がポイントだ。
お茶子の個性で浮いてる岩に接着した瀬呂のテープ、重しと拘束の二つを組み合わせ利用することで敵陣を一瞬で完封。
「テープ?!瓦礫にくっつけさせて投げたのか！」
「よし！かく乱して正解だった…狙いは僕ら…集中することで瀬呂く

んと麗日さんへの注意が削がれる。僕の読み通り…！」
難なく作戦が上手く成功した緑谷は、安心した表情を浮かべ懐からボールを取り出す。
因みに余談だが、お茶子は瓦礫を使って相手を怪我させないようにと配慮しタイミングを見計らっていたのだ。
「なぁ、君らまだ一年生なんだろぉ…？俺らもう今年で仮免取らないと将来的にもヤバいんだよ…勘弁してくれよぉもぉ……」
仮免許を取得出来ないものは、ヒーローの職業に就くことはかなり難しい。
言葉から察するにこの人は恐らく先輩だろう。
「お気持ちは分かります…」
此処で仮免許を取得しなければならないのも、将来のために負けられないのも、理解できる。
しかし其れは

「僕らも、同じです――」

決して先輩だけではない。
自分たちもここで躓いて居られないのだ。
憧れへと近づくための、試験なのだから。
『ええ～たった今四名通過しました！残り２９名～、じゃんじゃん通過しちゃって下さいよ～！』
唐突のレスポンスが流れるも、こうして無事通過出来たことに喜ぶ四人は、お互い顔を見合わせ笑顔を浮かべる。
「やった～！通過出来た～!!」
「ヨッシャ！一次試験、一先ず通過～！ってもまあ爆豪と轟辺りは余裕で合格してそうだよな～」
「あっはは、爆豪くんなら確かに…脱落した姿なんて想像できへんもんね」
一安心した四人は、すぐ様控え室へと向かっていく。
緑谷の顔色は、どこか不安そうで、まだ合格出来てない人はいるの

だろうかという疑問が、表に色濃く出ていた。
「大丈夫…だよね」

「いや～青春がほとばしってますなぁ……特に今年は珍しい。毎回マークが厳しい雄英が、未だに脱落ゼロとは」
パソコンのモニター画面に目を通す目良は、深い溜息を吐きながら言葉を漏らす。
一次試験とはいえ雄英潰しに於いて脱落者がゼロというのは中々に素晴らしい成績だ。
「さぁって、そろそろ準備しといて下さいね。第二次試験、始まるんで…厳しく採点しちゃってくださいね。ＨＵＣの皆さん」
「ふふふ……活きの良い若者程、困らせ甲斐がある…！どう厳しくしてやろうかのう…」

一難去って、また一難――
少年少女達に待ち受けるは二次試験、ＨＵＣと呼ばれる老人集団。
また更なる困難が立ちはばかる。

１２９話「二次試験」

緑谷達が一次試験を通過して１５分後、大してそこまで時間は経たなかったが、Ａ組と半蔵組は全員無事に奏功できた。
緑谷達四人組が控え室に入った時は轟を始め、爆豪達三人組、八百万達の六人組（八百万、蛙吹、耳郎、障子、柳生、雲雀）が既に休息の束の間に浸っていた。
緑谷チームを含めて計１４人が通過点を過ぎ、内の残り９人が未だに姿が見えない辺り、まだ通過はしていないのだろう。
もう時期満員となり二次試験が始まる中、９人もいないのが現状辛い所で、脱落の発表がない辺り同じ生徒としては不安が心に募る一方で、全員は無理じゃないかと半ば呆れていた。
しかし、残り最期の９名の席がＡ組全員の生徒で埋まったのだ。諦めかけてた控え室の生徒達も、大きく歓喜の声を張り上げた。
因みに残りの席が全て同じクラスの生徒で埋まる確率は何％なのだろうか？

「はへぇ～、肉倉先輩落ちちゃったんですか！意外っすね！」
「単独行動するからだあの劇場型男め…忍とは言え相手は女子と舐めてたのだろう……全く、後で蛇女子学園に謝罪しに行くぞ。何か無礼な言葉を投げてたかもしれんしな。相手が悪忍であれば尚更よ。それとケミィ！お前もダメよ！イナサは兎も角！」
「はぁ～い」
士傑側での通過者は肉倉を除いて全員通過している身。
ケミィも自然的に、さも当然と言わんばかりに通過を達している所存。
毛むくじゃらの生徒、毛原長昌はケミィに指摘しながら数々の生徒を見渡す。
彼は士傑高校二年一組のクラス委員長。

士傑側でのクラス委員長決めは雄英のような投票制ではなく、先生側が成績と功績を鑑みて決めるらしい。
つまり彼は大人として、そして将来ヒーローとしてのリーダーシップを誇るに相応しい存在なのだ。
ケミィはそんな生真面目委員長に、力無い声で返事をする。

「A組は全員無事に通過できたかな良かったけど…次に起こる二次試験…一体何やらされるんだろ？」
「数も多いしガチンコ勝負みてぇなのは無いと思うから…チーム戦？」
「緑谷どーゆー事だぁ!!あァん!?お前士傑の色っぽい女性と裸で密着してたんだってぇ!?詳しく吐けやナンパ天パ野郎!!」
「お前俺らが真剣に試験に臨んでたってのにお前ってやつは…ムッツリスケベか!!」
「えっ？色っぽ…痛い痛い！髪引っ張らないで！ってああ、瀬呂くんか…違うよ本当にヤバいんだよ怖かったしあと少しで脱落される所だったんだよ…」
クラスが一次試験を通過し歓喜を上げる者もいれば、やれ二次試験は何か、やれ考察したり。……若干、違う私情の声も上がっているが、其処は気にしなくても良いだろう。

「どうじゃどうじゃ～♪今なら善忍悪忍問わず、そしてヒーロー学生だろうと差別せぬ今なら我が従信にしてやらんでもないぞ！ホレ、そこの鴉頭に坊主頭、今なら信者特有のポスターにクリアファイルが付いてきてじゃな…」
「凄いっすね！自分のクリアファイルにポスターまで販売って、ウワバミさんのサイドキックかなんかっすか!?ああいやでも学生を雇うのは違うからアイドルとかっすか？俺全然分かんないっすけど、その宗教に入れば何が起きるんすか？」
「下らん…其れと俺は鴉頭では無い、常闇踏影だ。覚えとけ。それとどちらかと言えば俺は宗教派じゃないんだ悪いな」

「なぬ？もしやお主、悪魔の下僕か？我が神の天敵か!?」
「何故そうなるのだ…」
あっちはあっちで他校同士駄弁ってる姿が見受けられる。
イナサは何事に対しても明るく接する点があるので、不審がることは無いのだろう。どちらかと言えば中身は少年のような子供らしい性格を見に備えている。
常闇は沈着冷静で、閃光に似た落ち着きとクールさが容姿として曝け出している。
芦屋は中二病チックな面と、宗教らしき怪しいオカルトを開き信者として無理やり招き入れようとする節がある。
なのだが、実は単に友達が欲しいだけだったり。
しかし他校の忍学生に他それぞれのヒーロー学生がああやって話す姿は中々に目にしない光景だろう。そう考えると彼ら彼女らが手を取り合う姿というのは、悪い気はしない。
皆それぞれ個性的だからこそ、話し合えることも、互いを理解しようとする事も出来る。
不謹慎だが、神野区の後に忍の存在が明るみになったこと全てが、悪いことには繋がらないだろう。

『え～全員お揃いでしょうか皆様、突然ですがモニターをご覧下さい』

絶え間ない雑談の中、アナウンスの声が流れる。
自然と騒音は止み、声を途切らす受験生たちは一斉に口を閉じモニターに視線を送る。
モニターに映るのは、先ほど一次試験で使われてたであろう、フィールドが放映されている。
一見何の変哲も無い景色だが
――ズドオォォーーーン!!
『!?!
弾む巨大な音と共に、フィールドは崩壊した。
まるでダイナマイトで起爆したかのような大爆発に、地震のように

崩壊していくフィールドは、茫然とさせるには丁度良い演出だ。
『これから皆様には二次試験を行って貰います。因みにこの試験でラストにいたしますので最後まで諦めず、曲げずに頑張りましょう』
マイク越しから伝わる目良の声に、眉間にしわを寄せる生徒たちは、モニター画面を凝視する。
「おい、なんか何人か人がいねえか?!」
切島の言葉に、よく見てみると確かに何人かの老人や子供らしき人物が数名、歩む速度が遅くとも、崩壊して行く現場へと群れるように向かって行く。
端から見れば普通に危険だ。
「彼らは関連において今、引っ張りダコの要求救助のプロだ。『ＨＥＬＰ・ＵＳ・ＣＯＭＰＡＮＹ』略して『ＨＵＣ』の皆さんだ」
ＨＵＣとはヒーロー人気の現代に則した必要不可欠な仕事だ。本来は様々な仕事があるのだが、今回は被害現場での要求救助としての役割を担う仕事らしい。
「今から皆さんにはこの二次試験にて、バイスタンダーとして被災現場で救助演出を行って貰います♪
今ＨＵＣの皆様は傷病者として扮しておりフィールド内でスタンバイ中、如何にどう適切な判断と対応が出来るか、採点式でポイントを振り分けていきます。
試験開始は１０分後からスタートいたしますので、トイレや準備などは済ませてくださいね♪」
受験者たちはフィールド内の傷病者に対してどう適切な判断と対応が出来るか試される身。
少しでも不適切な面が有れば減点されるだろう。
下手に動けば次々とポイントが減って行く…かと言って何もしなければ良いと言うとそうでもなく、問題は如何にどう動くのが正しいのかが、この課題の真価である。
因みに演習終了時に基準点を超えていれば合格となるらしい。
「まるで神野区みたいだな…」
ボソリと呟いた緑谷は、何処か遠い目で被災現場を眺める。自分た

ちも一流のヒーローになれば、こう言った被災現場での救助活動は出来て当然。
しかし、今目の前で映し出されてるのは、神野区を模した光景。あの悲惨と絶望に覆い塗りつぶされた世界。
ヒーローとは人の命を救い、守る存在。
敵と交戦するのはあくまで防衛、及び仕事のうちの一つでしかない。

(それにしてもさっきのかっちゃんの言葉…アレ、たぶん気付いたんだよね…)

一次試験を通過した緑谷は、四人で通過した後爆豪勝己に絡まれ話しかけられたのである。
爆豪自ら話しかけに来ることは滅多にないので、最初は罵倒の言葉が来るのかと思ったのだが、意外にも「まあ、お前なら合格するわな」なんて世にも言われない言葉ランキング１０位には入るだろう驚嘆すべき言葉を発せられたのだ。
戸惑いもしたし、信じられなかったが

『で？お前は借り物の力全部自分のモノに出来たのかよ』

思考が止まるような、鈍器で頭を殴られたかのような、ガツーンとした重い衝撃が何十秒も続くかのように、心に響いたのだ。
其れは、嘗て入学して直ぐに開かれた対人戦闘訓練の日に言った、あの言葉。
爆豪勝己は、未だに忘れもしてなかった。
そもそも覚えていたことに少し驚きを感じるし、頭の回転が速いのは百も承知だったが、殆どノーヒントで爆豪は緑谷がオールマイトの個性を貰ったことに、薄々と気付いていたのだ。
「どうしよう…」
真実を吐いたことに、これで本当に良いのかと疑いを持つ緑谷は、

曇った表情のまま、床を見つめる。
正直なんとも言えない歯痒いような気持ちを奥歯で噛み締め、気持ちが晴れない暗雲が、彼の心を深く積もらせる。

ジリリリリ!!!!
急遽鳴り出した警報ベル。
鼓膜が激しく揺らぎ、耳が少し痛い。
唐突な大音量に驚倒しそうになる。
『敵による大規模破壊(テロ)が発生！規模は○○市全域建物倒壊により傷病者多数！道路の損壊が激しく急遽先着隊の到着に著しい遅れ！
到着する迄の救助活動はその場にいるヒーロー達が指揮を執り行う、一人でも多くの命を救い出すこと!!』
「ケロ、どうやら始まったわね」
アナウンスの解説に、瞬時に反応する蛙吹。
今回の試験は先ほどのボール投げ大会のようなチンケな内容とは違い、至って大真面目の救助活動。
飛鳥たちも１３号先生から嫌という程救助に関して知識を植え付けられているので、訓練通りやれば問題ないだろう。
忍側はヒーローのようなレスキュー活動を行なってる身ではないが、上層部のボディーガードや、時にヒーローらしい救助活動も行われてるので、その辺抜かりはない。
「救助活動…取り敢えず訓練通りにやれば良いんだよね？」
何処かぎこちないような声色を発する飛鳥。
「救助活動！ヒーローならではってヤツッスね！熱くなってきたじゃないっすかぁ!!」
誰よりもいち早く飛び出すイナサ。熱血溢れるこの男は、一次試験にて１４０名もの受験者を脱落させた士傑の生徒だ。
千歳の記録を超えたこの漢、雄英高校推薦入学者一位の話は嘘ではないらしい。
「救助ですか…何とも言えませんね。
人の命を奪い、血に染めて来た私が、他者を救うなどと…どうかし

てる」
救助演出という千歳にとっては不快でしかない試験に、愚痴をこぼしながらも仕方なく大型火縄銃を背中に担ぎ、行動を取る。
「問題は採点の基準が明かされてないのが難点だな…まっ、そこは訓練の経験が試されるんだろうけど…！」
スタート開始時、素早く救助活動に赴く真堂。
各々の生徒が、まるでさも散らばるかのように傷病者へと駆けつけ、次々と迅速に救助活動を行なっていく。
「さて…と、まァーこの試験、皆さん虐めるようで悪いですが、今回は一筋縄ではいきませんよぉ～」
試験内容、救助演出に隠されたもう一つのシナリオ――其れは……
「俺の名は夜嵐イナサ！又の名、ヒーローネームはレップウ!!さぁーて救助演出頑張るゾォォ!!!」
凄まじい威力を誇る突風が、障害物を退かして行き、且つ危険物は風で浮かし安全な場所へと物置き、傷病者は優しい風で体そのものを抱え込むように風で浮遊させる。
イナサは風を自由自在に操る事が可能で、微弱な風から台風の如く強い風も生み出す事が可能で、何方も調整する事が可能だ。
様々な風を同時に操る技術はかなりの努力と鍛錬が必要なのだが、流石は推薦者、コントロールがかなり上手い。
一見何も考えずの荒々しい処置だが、意外と繊細で器用な部分が有る。その辺は爆豪勝己にそっくりだ。
「凄いけど雑！減点!!」
しかし、やっぱりダメだったらしい。
減点食らったイナサは、まるで面食らったようだ。
「イナサ！もう少し慎重にやれ!!何でも救けりゃあ良いって問題じゃ

ないんだこの試験は！」
「そっか！すいませんした!!」
「それにしてもケミィめ…少しでも目を離した隙にまた何処かへ単独行動か……何を考えとるんだアイツは!?」
　ケミィの個性では余り救助活動には不向きだが、其れでもヒーロー科の授業では多少の訓練を受けているので、チームワークを乱さず、連携を取り欠点を互いに補う役割が必要なのだが…

　試験開始から既に３０以上の経過、もう時期４５分に近づこうとしている。
　ＨＵＣの数も最初の時と比べて数が少なくなってきている。この調子で行けば終わりも近づくだろう。

「あ～！いました～！総司さん芭蕉ちゃん芦屋ちゃんに千歳ちゃん！瓦礫の奥に倒れた傷病者が這いずってます！」
「救けてくれぇ～…!!」
　６０代近い容姿の傷病者を見かけた伊吹は、すぐ様仲間たちの名前を呼び掻き集める。
　瓦礫の奥には、血のりで表現してるのか、頭に血が流れ、足が瓦礫に挟まってる怪我人が助けを求めている。
「瓦礫に挟まってるのでしょうか？何としても救けないと…」
「ふむ、問題はどうするべきか…だな。
　下手に動けば少しの動作による衝撃だけで落ちてくるぞ。そうすれば傷病者どころか、私たちも生き埋めになんて可能性もありうる」
「じゃ、じゃあどうすれば良いんじゃ？」
「ここは一人居残って私たちは他の場所へ行き対応しましょう。誰でも良いので、何れかの二人が救助要請をお願いします」
「えっ？で、でも…早く救けないと……傷病者の人が……」
「其れが間違いなんですよ芭蕉さん。
　一秒でも誰かを救けるのは当然ですが、だからと言って時間ばかりに気に掛けてたら普通にタイムロスしますし、生憎私たちでは時間が

掛かってしまいます。ですから、個性に適する者を呼んで状況を打開しましょう。私は他の場所へ行きますので…」
「ああ千歳さんまた……」
単独行動をしてしまった。と顔に文字を浮かべたような表情を浮かべる彼女は、千歳の後ろ背中を見つめる。
「で、では我が行こう！」「私は取り敢えず安全範囲を確保しよう」と、其々の生徒は速攻で適切な対応へと取り組む。
（成る程…自分たちの力では限られてる…無理に動けば重病者を悪化させてしまう恐れとタイムリミットを鑑みての考察…
蛇女と言ったかな、悪忍とは言え中々に素晴らしいじゃないか。でも、まだまだ動きに無駄な部分が有る。減点…とはいかないが、これじゃあポイントを上げることも出来ないぞ……！）
プロと呼ばれるＨＵＣも、どうやら内心は中々に褒め称えてる様子。千歳の考察案、総司の今やれるべき事への対応、伊吹の重病者に対する気配の察知、芦屋と芭蕉は救助要請へ。
混沌と化してるこの状況の中で、自分達が何をするべきか、理解してるのは素晴らしいことである。
学生の２年生なら兎も角、彼女らは選抜補欠にして一年生。微かな経験で仲間との連携で穴を埋めてるとすれば、これからの先が楽しみだ。

「うえぇぇ～ん！お父さん！お母さぁぁ～ん！」
「大丈夫だよ、落ち着いて。怪我はない？喋れるかな？」
泣きじゃくる子供を宥め、安全確認を取る雲雀の柔らかい声に安らぎを感じる者は少なくないだろう。
「柳生ちゃん、この子頭怪我してるから慎重にお願いね？それと肩の傷口を抑えたまま！出血が少し酷くて、ここで応急処置しても良いんだけど、向こうで保護してる治療員がいるからまっすぐ！」
「分かった」
「ああ、それとなるべく安心させる声をかけてあげてね？子どもだと大人と違って不安や恐怖に怯えがちなの」

「凄いな、ここまで配慮してたのか…任せろ雲雀。雲雀の頼みなら傷病者の５０人…いや、１００人だって救けて見せるさ!!」
柳生は小柄の少年をお姫様抱っこし、ハンカチの布を傷口に抑えこみながら運んでいく。
雲雀は意外にもこう言った手の活動は得意分野だったりする。ただ単に人を救うだけではなく、時に傷病者への心の気配りや配慮も救助活動には欠かせない一種のステータスだ。
彼女は昔よくドジを起こし、訓練する度に失敗が続くのと同時に、怪我をし易かった。
更に言えば昔焔たち選抜メンバーが蛇女に在籍していた頃などは、春花の罠に掛かり、利用され、仕方なく転入させられた彼女は、基地の情報を探る手段を取るべく、訓練で生傷が絶えない下忍たちの看病も嫌という程してきたので、自信はある方だ。
なので有る程度の傷の手当や気配りは自然と身につけれるようになり、今では病院の看護師なんて役職でもやっていけそうな出来前だ。
「よ～っし!次々!あれ?青山くんと峰田くんに他の生徒も傷病者のことで困ってるみたい…援助しにいこっ!」

重病者受け取り保護施設。
老若男女関係問わず、かなりの数の重病者が一箇所に集まっている。どうやらこの数全ての人がＨＵＣのようで、見たところザッと１００人はいるだろう。
「もう…こんなに」
飛鳥は泣きじゃくる女の子を姫様抱っこで抱え込みながら目前の光景に思わず立ち止まり、唾を飲み込んでしまう。
遠くから緑谷出久と伊吹、真堂に他校の生徒が次々と傷病者を連れて此方へ向かってきてる。
「この子怪我人ね、見せて」
「あっ、はい!宜しくお願いします…それとこの子、足の骨が折れてるらしくて…他は腕に切れ目が…あと呼吸も少し乱れてます」

「ちょっと深刻ね…有難う」
少し減点を食らってしまった飛鳥も、臨機応変、挽回さんとばかり、気持ちを切り替え傷病者を次々と救助し適切な対応が出来てるため、そこそこポイントは高い。
それでも八百万や瀬呂、雲雀に毛原と比べればまだまだなのだろうが…
傷病者の状況を手短に素早く語ると、飛鳥は次は…と言わんばかりに探し出す。

「救助演出、一次試験と言い二次試験と言い…雄英だけでなく他の学校の生徒たちも、想定していたより減点が少ないですね。例年、毎年ならＨＵＣの皆様が下す減点採式は厳しいですのに…」
『調子はどうだ？』
「思ったよりも採点は順調、特に今のところそれらしい大幅な減点も無く、想定したより早くＨＵＣの皆さんが保護施設に集まってる模様です。予定より少し早いですが、準備は良いですか？」
『ああ、俺達も既に準備は万端。抜かりはない』

これは頼もしい。そう心の中で語る目良は、口の口角を釣り上げ赤いボタンを押す。

そして次の瞬間

ズドオォオォーーン!!!

巨大な爆発が、会場全体に響き渡る。
「なんだ!?」
「何今の爆発?!爆豪くん!?」
「飛鳥さん多分違うと思う!!」
『敵の大規模破壊が発生！動けるヒーローは至急対処して下さい！繰り返します！敵の大規模破壊が発生！動けるヒーローは至急対処し

て下さい！』
轟く大爆発に一瞬、慌てふためく者達は、警報のアナウンスに直ぐ演出のシナリオと聞解した緑谷達は、爆破が起きた方角へと視線を飛ばす。
今回のシナリオは、とある○○市が敵による大規模破壊によって大勢の傷病者が続出したという設定。
つまり救助活動を行なっていればその間には当然、隠されたシナリオ演習――
敵も存在する。

「で、よーは私たちは受験者を脱落させれば良いわけね？」
「全員振るい落とすつもりでな、全力で。さぁ始まるぞ」

爆発により発生したウザッたい煙から発せられる声。
人影は数十名、そして後ろで大将と思われる敵が二名、悠長に佇んでいる。
やがて煙が消えていき、姿が披露される。

「私たちを前に」
「並行処理、出来るかな??」
その名も
Ｎｏ．１０ヒーロー・ギャングオルカ
巫神楽三姉妹・華風流

「ギャングオルカ!?とあの小さい子誰!?!」
「あの子の気配…忍!?ってことはコレ、敵と抜忍が共闘して私達の邪魔しに来るってこと…？」
緑谷と飛鳥の驚嘆の声も虚しく消え去り、ギャングオルカは鋭い眼光を放ち、華風流は相棒の秘伝動物、ルカを呼び出す。
（神野区の敵連合掃討作戦においてエンデヴァーやベストジーニスト

と並び指名を受けたヒーロー…
そして半蔵さんに小百合さんとかなりの最上位に入る忍と供に行動し、ゆえに小百合さんから認められた忍…二人とも強いぞ！）
仮免試験において中々に上位の部類に入る強者。
ＨＵＣの採点も厳しい上に、敵の乱入。
全てを並行処理しなければならない。

「うっそだろ!?ギャングオルカと…あの可愛い子だれ？イレイザーの娘？」
「戯けか、寝言言ってんじゃねえぞ。似てねえだろ」
「ジョーダンだって!!って笑ってる場合じゃないや、コレヤバくないか？どーせあの子も強いんでしょ？忍っぽいし…」
「ぽいのかな？まあ実力は本物だろうな…何せ飛鳥の婆さんに認められてるんだ、それ相応の実力が発揮されるんだろうな」
Ｍｓ．ジョークも最初こそ笑い事のようにボケを入れるも今回はガチで洒落にならないと冷静になり、相澤は珍しく険しい顔つきに一変する。
（しかしまあ仮免試験の中でもかなり難易度高いぞコレ…救助活動は訓練を通し、敵との会敵は何度かあった…
だが、それを全て並行処理ってのはちょいと厳しいかもな…）
仮免試験でここまでやるのかと、心情で語る相澤。
ギャングオルカ一人での肉弾戦は強く、彼と対峙した何名かの敵は泣き出す程と言われている。
対して彼女は何より情報が少なすぎるため不明。
抜忍といった忍の知識を身につけてない者からすれば、存在は敵と何も変わらない。

『敵が姿を現し追撃を開始！現場のヒーロー候補生は敵を制圧しつつ救助を続行して下さい』

アナウンスの言葉に益々顔面蒼白と、焦りの色を浮かべるヒーロー

と忍学生の何十名かは、固唾を呑み込む。

「さぁ、ヒーローと忍よ…どう動く!?」

ヒーローと忍が手を組む世代なら逆もまた然り、敵と忍が手を組む者も少なからず存在する。

会場の空気は淀み、被災現場は戦場へ、混沌へ加速する。

１３０話「三つ巴」

時は遡り三週間前のこと。
オールマイトＶＳオール・フォー・ワンによる神野区激戦から四日が経った日。
「ヒーローと忍学生を合同に試験を受けさせる？本当に大丈夫かコレ？」
ヒーロー公安委員会本部にて仮免試験企画会議が開かれてる現在、１人の公安委員の疑問溢れる声が漏れた。
それに連なるように、会議室は騒めき異様な雰囲気を曝け出す。
「ヒーローと忍が互いに手を取り組む時代がやって来た今、何としてもその姿勢と経験が必要とのことです」
「其れは解るが…忍なんて得体のしれない存在をヒーローに…況しては学生に組ませていいのかって話だ。
悪忍なんて特にそうだ、目の届かない範疇で身に何かあったら誰が責任を取る？」
「我々ヒーロー公安委員会、そして忍の上層部が責任を取るそうです。
何より上忍から数名の学生を派遣させ監視、及びサポートの担いを受けて下さるようで…仕方ないんですよコレは上司の命令ですし」
「まぁ個性の性質によっちゃあ人を簡単に怪我負わせちまうモンだっているし…今更忍がどうこうなんて言ってられねえよな」
「二次試験はボール投げに、二次試験が最終目標としてＨＵＣのメンバーに救要活動の役割ポジション…時間経過によって敵と抜忍の乱入??また忍か！」
「忍が明るみになった今、抜忍と敵が手を組み犯罪を繰り返す事件が相次いでる中、こう言った犯罪防止としての対策案も必要とのことです」
知っての通り、現世代はヒーローだけが公で活躍する現実では無く

なってしまった。
数百年、千年も隠密として生きてきた忍の存在が、悪の象徴に暴かれた事により、改革が必要となった今、まずすべき事はヒーローと忍の協力態勢と統一である。
その為として少しでも忍とヒーローの協力関係を慣らせる為に、敢えて合同に試験を参加させるのが、今やるべき最善策と上層部が出した答えらしい。
「協調性としても、実力や実績、全てに於いて魅力的な一強を誇るオールマイトが引退した現段階で少しでも穴を埋める決定的な戦力が必要なんです。
次の彼を待つより、強く結束を強く意識した集団、〝ヒーローと忍の群〟で穴を補う。
今回の提唱はその足掛かりのようなものと…」
「成る程、つまるところ〝シノビマスター〟をモチーフにした感覚か…」
シノビマスター。
忍の最高称号を誇る神楽の集団を意味指す言葉で、大会を開催し優勝したチームがシノビマスターとしての道が開かれると聞く。
次のカグラ会議にてシノビマスターに関する話が持ち込まれるとか、詳細は不明だが、着々と準備には取り掛かってる様子でもある。
「今のＮｏ．１だけでは不安が残り安心出来ん以上、少しでも戦力が欲しい。だからこそ、何としても築け上げなければならない。
嘗てオールマイトを始め忍と結束したように、また新たな改革が必要となった。問題は、これからをどう繋がるのかだ」
激戦後に始まった超人社会の変革。
ヒーローと忍は、少しずつ動いてく。
良かれ悪かれ、時間は加速する。
「少しでも国民たちの心を灯せるような…なんてオールマイトのような偉大なことは出来んが…我々もこれからの未来を、社会を明るく照らす為の努力は惜しまないつもりだ」
ヒーローと忍は、光と影

ヒーローと忍は、陽と陰
ヒーローと忍は、表と裏
相反するようで、でも何処か進む道は似ていて…
何かの為に生き、社会のために動く。
共通点も存在すれば反対な点も存在する、そんな二つの存在は、他が為に、存在している。
ヒーローは、国民の心を灯し
忍は、国民の影を支えて
世は成り立っている。
問題は、これからの未来をどう進むべきか、が今後の大きな課題点である。

同時刻。
ヒーロー公安委員会が仮免取得試験の会議を開いてる真中、とある地方のヒーロー事務所では――
「お前ら、今日から三週間仮免試験の当日までお世話になる助っ人の忍だ。単刀直入で悪いが少しの間だけ、宜しくさせてやってくれ」
「どーも、私の名前は華風流よ…子供扱いしたら許さないんだからね」
シャチっぽい姿をした、ワイルドでクールなヒーロー事務所の社長、ギャングオルカ。
現在番付けＮｏ．１０ヒーローにして、この事務所を一から作り上げた敵っぽいヒーロー。
対して此方は横で仁王立ちでもするよう佇み、腕を組む少女は、華風流。
巫神楽三姉妹の三女にして、小百合に認められた護身の民の一族である。
「しゃ、シャチョー！早速忍を雇ったんですか!?」
「嗚呼、雇ったと言うより上からの命令でな、忍と手を組めと言われたんだ。
もう時期仮免取得試験があるのはご存知の筈。尤も、俺は敵役とし

て適してるからな」
シャチョー！真面目なのに流れるような軽いジョークお見事です!!と内心に呟く相棒（サイドキック）達。
実を言えば華風流では無く鈴音や隼総と手を組みたかったのだが、蛇女子学園の学園長に教師は神野区で重傷を負い、とてもではないが体を動かせない状況、雅緋に忌夢も意識こそはあるが安静にしないとダメだと医者から言われてるので論外（そもそも彼女二人も学生なので雇うのはダメだろうという意見が一番に強いのだが）。
結果、神野区で爆豪と雲雀の救出活動と敵連合掃討作戦に於いて無傷で残った巫神楽三姉妹に目を付けたのだ。
大道寺も有りと言えば有りなのだが、雄英高校の期末試験の実技も出てる上に情報が知られてる為無理に近いらしく、更に言えば違う地区での試験担当に選ばれたらしいので、どの道無理だ。
結果、何とか小百合に頼んで巫神楽三姉妹の内誰か一人譲れないだろうかという話になり、頭脳の高い真面目な三女の華風流が選ばれたと言う訳だ。
「まあ雇われたんだから、ちゃんと報酬に応じて働くけど…で？その間何すれば良いのよ？」
「我々のことを良く知って欲しいのと、コミュニケーションに連携の取り方、試験当日による作戦を開く予定だ」
巫神楽三姉妹は、護身の民にして巫女の役割を担っている。
信じられない話だが、産まれてからたったの2歳で忍の修行を受けると言った、常人には成せれない事を日常のようにやり遂げているのである。
護身の村の掟に沿えば、村人の住人である華風流の口からは一言も言った覚えは無いので、小百合を始めとした関係者は一切知らないが。
他の人間と関わったことのない華風流は、二人の姉を除いてコミュニケーションと言った連携は不得意な上に慣れていないのだ。
「お前の出身地の事は詳しく知らないが…小百合から聞いた話だと余り我々や忍すらも関わったことなど無いのだろう？

ならば試験当日までに、場の流れの掴み方、連携、協力体制を築き上げていきたい。
決して馴れ合いなどでは無いから心配するな」
「わかってるわよ～…しっかし本当に大きな事務所ね。全部で何人いるの？これが噂で言うサイドキックって人たち？」
華風流はヒーローに関して殆ど無知な上に、忍すら知識が狭いのだ。決して頭が悪いと言う訳でも無く（どちらかと言えば常人に比べて頭がキレやすく、賢い方）、忍社会の中で理解してるのは半蔵と小百合、黒影、カグラ四天王の四人、合計七人位だろう。
「しゃ、シャチョー…大丈夫なんですかあの子？」
華風流は珍しそうに事務所の中を見渡す中、隙を突いて物陰で語るように小さな声で社長のギャングオルカに話しかける。
「ん？大丈夫とは？」
「えっとその…あの子ども…じゃなくて！学生ですよね？良いんですか？」
「心配するな。
アイツも、巫神楽と名乗る二人の姉も学生では無い。いや、年齢は恐らくそうなんだろうな、だが少し特別でな。学生では無いんだ」
「えっ？教育受けてないんですかね？それ、益々心配じゃ…と言うか社長、学生で無くともあの子が我々に付いて行けるかどうか不満というかその…」
「貴様!!この俺が人選ミスしたとでも言いたいのか愚か者ォ!!!この俺に抜かりがあるとでも？」
「ノ、ノーサーノーサー!!」
言葉が悪かったのか、怒りを弾ませるギャングオルカに相棒の一人が断固否定するように首を横に振る。
見た目が敵っぽい雰囲気が有り、凶暴な面影に恐怖の印象が強く伝わるので、相手が敵でも泣き出しそうだ。
ギャングオルカが怒る姿はよく見るが、別に其れが嫌と言うと実はそうでもない。
「ちょっと、急に声を荒げないでよ…私まだ貴方達のこと知らないし

慣れてないんだから…ビックリしたじゃないのよもぅ～…」
「フン、其れは失礼した。
とは言え…アイツを子ども扱いしてるのなら…お前たちは忍で言う死地の戦場で必ず寝首を狩られる側になるぞ。
油断は大敵、俺の事務所に置かれてる者は皆、俺が信頼に置ける人材だ。其れを心して日常に励め」
『サーイエッサー!!』
信頼してくれるから、社長の気持ちに応えたい。
自分達を導いてくれるから、付いて行ける。
自分達も社長を信頼してるから、頑張れる。
ギャングオルカは爆豪ほどでは無いものの、常に強者としてのプライドと其れなりの自尊心を誇っている。
シャチとしての生物的本能の影響か、はたまた強者であるべき姿が好ましいのか…どちらにせよ、この事務所内のサイドキックはギャングオルカを信頼し、何より強者で生きようとする彼を尊敬している。
彼がＮｏ．１０の座にいるのも、何となく頷ける。
（軍隊のモノマネかな？）
そんな華風流は傍で呆けた顔でギャングオルカ一同のメンバーをソッと眺めてるのであった。

救助活動の真中、敵と抜忍の襲撃。
元々のシナリオは敵と抜忍がテロリストとして大規模爆発を起こし、被災現場にて大勢の民間人が負傷し傷病者が相次いで続出されたという設定。
ならば此処にも当然、敵と抜忍がいるのも不自然では無い。
敵役はギャングオルカ
抜忍役は華風流
ギャングオルカは敵っぽさをイメージしたのか、白のタクシードスーツの容姿ではなく、白とは真逆に漆色のスーツに肩や腕には何か

を装着している。
対して華風流は今までの巫女の服とは違い、忍装束に似せた白に赤のラインの刺繍が入った、中々な美しさを引き出し、独特なセンスが噛み合った新しい巫女の装束。
そして相棒達は全員体全身を覆うスーツ、特撮で言う戦隊モノのザコ敵が着こなしてそうだ。腕はサポートアイテムのセメントガンを装着している。
全部で数十人、数としても少なくなく、かと言って多くも無い。
テロリスト集団は救助活動の近くで発生。華風流のホイッスルの音が鳴ったと思いきや否や、敵達は素早く的確な陣形でＨＵＣが保護されてるであろう保護施設に狙いを付ける。
「えぇっ!?しかも保護施設の近くから始まるの…?幾ら何でも卑怯じゃ無い??」
飛鳥の愚痴が思わず口から溢れる。
この試験は今の現実をモチーフに表したもの。当然、このようなケースは少なくないし、大人になれば避けて通れない難関。この壁に躓いてるようでは、目標は愚か、試験に合格することすら危ういのである。
（クソっ、考えろ!先ず最前すべき行動を…!
あっちも救助はまだ…かと言って此処を放置する訳にもいかないし、敵がＨＵＣのメンバー全員に危害を与えてしまえば減点以前に滅茶苦茶だ!!
其れにここの人員だって…）
「どいてなキミ!俺がやる!!」
緑谷の深い考察スイッチが付くも、すぐ様反応し迎え撃つのは真堂揺。
傑物学園二年生にして一次試験で強力な地震を叩き込み、硬い陣形を割るように分断させた張本人だ。
頭は割とキレる方で、洞察力や体力面に於いてもかなり優れてる優等生だ。
「インターバル一秒程で震撃かまして時間を稼ぐ!キミは少しでも重

病者を奥に避難させてくれ！
後キミ、え～っと犬っぽい人！ちょっと手を貸してくれ！俺一人じゃ流石に忍は手に負えない！」
「はうぅ～ん私は犬じゃ無いですよ普通の女の子です！伊吹と呼んでくださいそこの普通の人」
「何でも良いから早く!!」
若干巫山戯てる伊吹に苛立ちと焦燥で怒鳴る真堂。
彼は一度半蔵学院の生徒を直視し、忍術もこの目でしかと見たとは言え、結局は相手がどのような能力を備えてるのか、解らない以上忍を相手にするのは愚策。
ギャングオルカは大凡想像は付くものの、忍がどう動きを見せるかによって変わるので、ここは忍同士相手にさせるのが最善策だろう。
しかし
「甘すぎよ、アンタ」
華風流は伊吹に目もくれず、水鉄砲を真堂目掛けて狙い撃つ。
ピュンピュンと弾け飛ぶ音は何処か爽快感があるも、直に当たると中々に痛い。
銃弾を直撃したような衝撃的な鋭い痛みは無く、そんな大袈裟ではないが少しでも隙を作るのには丁度良い。
「水ッ！しつこ――」
「眠れ」
水浸しになり、コスチュームも顔面も濡れ、眼に水が入った真堂は荒げた声を張り上げながら腕で拭うも、其の腕をまるで小枝でも掴むかのように、力強く握り締める相手が、ギラついた眼光を輝かせながら手をかざす。
キィン――！
「がっ……」
刹那。刃物のような鋭い音が鼓膜を揺らぎ、脳から全身に伝わるよう麻痺が生じり、体の自由は効かなくなり白目を剥く真堂は、前のめりになって倒れてしまう。
「おいおいヒーローよ、もう少し粘ったらどうだ？歯応えがねえぜ？」

正体はギャングオルカ。
野生のような凄みある眼光は、まるで狙った獲物を喰い殺すかのような、獰猛な肉食獣を連想させる眼つきだ。
「はうぅん!?あの普通の人やられちゃったんですか早くない!?何だか気持ち良さそう……あっ、でもでもここで気持ちよくなっちゃったりしたら減点されちゃうから…ここは、え～～い!!」
伊吹は巨大な金属製の鋏を担いでた背中から取り出し、ギャングオルカ目掛けて、切り離すかのように凶器を振るう。
「ほい、やっ、せい」
華風流は水鉄砲を相手の顔面に狙い撃ちをし、眼に水が入った伊吹は「わぷっ!?」と声を上げ、視界を封じられてしまう。
「緩いぞ小娘」
一瞬、隙を作ってしまえば後は簡単。
其処を突くようにギャングオルカは柔らかい頭部に超音波を纏い、伊吹の額に頭突きを叩き込む。

キイィィン――!!

「きゃうぅぅぅ～～ん!!♡」
今度は強度の高い音波で叩き込み、相手の脳は完全に麻痺してしまい暫くは動けなさそうだ。膝を震わせ絶頂したのか気持ち良さそうな面で気絶してしまう。
「殿二人この程度?おいおい華風流、俺たちも随分と舐められたものだな?」
「味気無さすぎ、アンタ達何の為にここまで頑張って来たんでちゅか～?はい、論破」
不敵に笑う二人は、現状端から見れば敵と抜忍の最恐コンビである。
ギャングオルカ――個性『シャチ』
陸上でもシャチっぽい事ができる。
その内の一つが超音波アタック。シャチは水中の狩りに於いて超

音波を得意とし発する事で、相手を麻痺させ獲物を食らうと言う性能がある。
別名、海のギャングと呼ばれるだけは有る。
華風流――『水弾忍法』
イルカをモチーフにした二丁の水鉄砲を巧みに使い、水の弾を発射させる。
また、個性を応用したのか屈折を利用し予測不可能な弾丸で相手を翻弄させる事も可能。
ついでに言えば相棒のルカは雲雀の忍兎と同じく秘伝動物の扱いな為、秘伝忍法と掛け合わせることも出来る。
鯱と海豚、混戦の場に参上――戦火の宴に舞い踊る。

「あの二人がやられた…!俺たちも行くっきゃねーな!」
「一気に数で攻めろ!!個性や忍法とかやたら撃ちまくれば」
多勢のヒーローや忍がこの場に赴き、敵達の行方を阻むかのように増援が到着。
やはり一対一に持ち込もったとしても二人が厄介な以上、最善策を練ろうにしても簡単に破れ散ってしまうのがオチだ。
「二人ではダメだと理解した途端、今度は数で攻めに来るか」
「まぁコレも想定内よね。じゃあ、出し惜しみせずアレやる?」
「当然だ、相手を一掃するには丁度良いだろう。其れに、我々の実力を示すのに持ってこいだ」
お互い顔を見合わずとも、軽く言葉を交わすと二人は構えを取る。
華風流が後方で二丁の水鉄砲を手に持ち、ギャングオルカは前方の位置に立ち、超音波を纏っている。
「個性〝合体〟秘伝忍法――『オール・エコーサウンズ・フェスティバル』!!」
ギャングオルカの前に水の輪が出現し、リングから無数のイルカの形をした水弾が飛び出る。ギャングオルカの超音波で付与すること

で、超音波を纏ったイルカが、まるで水中を泳ぐかのように、縦横無尽に一帯を飛び回る。
華風流の秘伝忍法――『オール・レンジ・フェスティバル』に、ギャングオルカのシャチによる個性の内一つ、超音波を駆使して編み生んだ合体技である。
「超音波を纏いしイルカを前に、貴様らは無事でいられるかな？」
ギャングオルカの言葉など耳に届かず。
辺り一帯の忍とヒーロー学生は跡形もなく、たった1分も経たず全滅状態。
水でびしょ濡れになり、超音波の影響があってか意識が有っても自由には体が動かせない模様。
「これなら楽勝ね、ホラ…アンタ達」
ピッピッピー!!とホイッスルでサインを出すと、黒ずくめの部下達は「イエッサー！」と意気込みある掛け声で返事をし、ギャングオルカと華風流を囲み、二人が中心になるように守りを硬める。
華風流はこの日までにギャングオルカの相棒達にサインの練習や意味など、様々な工夫と練習を積み重ねて来た。
そのため、号令に反応すればすぐ様対応してくれる。いわば女王の名に相応しいだろう（容姿が子どもなので、プリンセスが一番似合うだろう）。
「このまま保護施設に向かって滅茶苦茶にすれば良いわけね。まあ近くに多少茫然と突っ立ってるのもいるけど…」
「ただ油断はするなよ華風流、忍術や個性によっても相性ってものが――…ッ!!」
華風流の余裕地味た声色に、油断するなと深く忠告するギャングオルカ。
するといち早く気配に勘付いたギャングオルカは、超音波を多数連続で吹き飛ばし、紫色の銃弾を防ぐ。
「じゅ、銃弾!?なんだ!!」
其れでも前衛の部下達は半分吹き飛ばされてしまい、防御が少し手薄な状態になってしまった。

「敵との戦闘は私が引き受けます」
茶髪でアホ毛二本がチャームポイント、そして金色な瞳で相手を睨みつける少女を一言で例えるなら野良猫だろう。
ここに辿り着いたのは蛇女選抜補欠の千歳。大型火縄銃を肩に担ぎ、引き金を引く。
「アイツって、確か千歳だっけ……何でも殆どのヒーロー公安委員会の人たちが合同訓練に却下の言葉が降り注いだとか…」
「アレは履歴の話だろう。現状、特に物騒な騒ぎも起こさず、目立ってなければそれと言った問題行動も起こしてない。まァ、警戒するのは解らんでもないがな」
どうやら千歳のことは少し耳に入ってたようで、華風流はそんな千歳を凝視し、ギャングオルカは表情を変えず、真剣な眼差しを向けているだけ。
「私は救助に向いていない……ならば、敵退治こそ私の専門的な分野の一つ…
予め忠告しておきます。
私は蛇女の身…手加減はしませんし全力で行きますので、怪我を負う覚悟を」
「心配は無用だ小娘。喰うか喰われるかの世界に、怪我のない戦場などこの世には存在しん。
デカイ口を叩いた以上、逆に喰われる覚悟はあるのだろうな?」
「死ぬ覚悟なら四歳の頃から出来てます」
千歳の指が銃の引き金に触れ、ギャングオルカと華風流は無言で相手を凝視し、水鉄砲の引き金と、超音波を全身に身にまとう。
「取り込み中、悪いな」
――刹那。凍てつく割れた氷の音が、一帯に佇む人間の耳を貫き、予想外な攻撃にギャングオルカは華風流を庇うかのように前に立ち、

超音波を盾にして防御する。
氷山の一角と思わせる広範囲の氷結は、文字通り凡ゆる一面を凍り付けにし、ステージを氷点下へと変えた。
「敵退治…かなり手を焼いてるみてぇだなコレ」
急激に温度差が変わった事により、白い息を吐く少年、轟焦凍はギャングオルカと華風流の二人を見定める。
氷結攻撃では幾ら水で追撃しようにも防がれる上に、下手すれば凍り付けにされる。
ギャングオルカが身を呈して庇ったおかげで怪我らしいものは無い。
対して横にいる千歳は訝しげな瞳で、轟を横目で見やるも当の本人は気付いてないようだ。
「アイツ、エンデヴァーの息子！マジか!!」
「来ちまった…いや、こっちには華風流ちゃ…サンにシャチョーもいる！一人相手なら――」
「何だか熱い展開になって来たじゃないッスかあああぁぁぁーーーーー!!!!」
『!?!!』
ドスの効く張り上げた声、聞くだけで暑苦しくなるこの言葉遣い、そして部下達が強烈な突風で吹き飛ばされる光景、誰が誰だか直感で解ってしまう。
「敵乱入！是が非でも、俺もその熱い嵐に乗っちゃいますよォ!!!宜しくお願いします!!」
夜嵐イナサ。
コスチュームと個性の扱いにより空中浮遊が可能な彼は、飛鳥の忍術と少し似た性能が有る。
「風…か」
乾燥に弱いギャングオルカの口から、思わず溜息混じりの声が漏れる。
シャチの弱点は火と風、元々水中に徹してるこの個性から考えて火や風が弱点なのは当然だろう。

「庇ってくれてありがとオルカ…けど、風は無理でしょ？なら私がの暑苦しい風使い相手するから…」
「俺は残り二人を片付ける。特にエンデヴァーの息子は俺にとって厄介だ…早々に消し去るのが利口だろう」
これで最高戦力が三名揃ってしまった。
クラス一、二位を争うＮｏ．２の息子、轟焦凍。
雄英高校推薦一位、そして士傑高校一年生、夜嵐イナサ。
一次試験最初の通過者にして選抜補欠メンバー、千歳。
この三人が敵を抑制する役としてはかなり適してる上に、ポイント的にはかなり高く、判断も良い。
千歳や轟は災害救助よりも、最高戦力として乱入して来た敵と対峙するのが、この場としては一番効率が良い。
夜嵐イナサも災害救助こそは可能で、使い方も良いが雑な上にやはり向いてないのだろう。
それでも戦力の補助としてはこの場の流れとしては良い方向に加速している。

しかし、其れはあくまで結果論としての話。
文字通り三つ巴となった現状、三人の顔は険しくなる。
千歳は轟と夜嵐を見て嫌悪を示す表情を立て、轟は千歳と夜嵐に対し怪訝そうな顔を、夜嵐は轟に対してのみ不愉快そうな面を示す。
千歳は特にイナサに対する嫌味も苛立ちは無いが、ハッキリ言えば邪魔と鬱陶しい以外の何でもなく、どちらかと言えばさっさと失せろのような眼差しに近く、当の本人は気付かない様子。
共通点があるとすれば、千歳と夜嵐は轟に対する何かしら嫌悪する感情が剥き出しになっているのは確か。
何かしらの因縁が有るのか、この二人はえらく轟に苛立ちと嫌悪の矛先を向けているのだ。
「……何だよテメェら、退いてろ。
俺が一人でやる、風使いのお前は戦力よりも救助に適してるんじゃ

ないか？
　あとよく解らねえお前も、困ってるヤツの手伝いしたらどうなんだ？」
「ムムゥ…其れは俺が邪魔だって言いたいんスか？やっぱ昔と何も変わってませんね。
　少しだけ、体育祭で変わったかと思ったら…！」
「そう言う貴方こそ困ってる人を救助したらどうなんです？
　そもそも、最初に到着し相手にしたのは私です。貴方に退いてろなんて言われる筋合い無いと思いますが？」
　口を開けば憤慨する言葉が飛び交う。
　この三人は能力的にも連携を決めれば上手く迎撃でき、完封できる最強ペアだ。
　だが、それ以前に連携や協力体制が疎かな分、上手くいけるハズが上手くいかず噛み合わない。
「取り敢えず俺の炎で、一掃する」
　話し合っても埒が明かないと直ぐに理解した轟は、目の前の出来事に集中するように、炎を放出しギャングオルカと華風流を狙う。
「来るぞ」
「待ってアイツ炎使いなの!?」
　それだったら私もアイツ相手にしないとダメなの？と子どもらしい眼で相手を観察する華風流に、ギャングオルカはこれ以上何も口を開かない。
　あの炎がもし先ほどの氷結と同じ広範囲であれば、かなりマズイ。
　セメントガンを装着してる部下達でさえも抵抗出来ない。華風流は咄嗟に後方へ下がるよう号令を出し、部下達は逃げ出すかのように後方へ退がる。
　しかし、轟の炎が部下やリーダー格の二人に当たることは決して無かった。
「何で炎を出すんですかアンタ！熱で風が浮くんだよ!!」
　轟が炎を出した時、それとタイミングが被るようにイナサの強烈な

突風が吹くも、位置と使い方が悪かった為、軌道が逸れてしまい上手くいかない。
「さっき氷を出したら防がれたんだ…それにお前の風のせいで俺の炎が吹き飛んだ。邪魔するんじゃねえよ失せろよ」
「またアンタはそうやって俺を!!」
見ようとしない！
その言葉が出したくとも、声に出なかった。
特に轟の「失せろ」の言葉に過激に反応したイナサは、とてもではないが落ち着く素ぶりは見受けられなく、冷静さを欠けてしまう。
「漫才コンビも見てて不愉快ですね、私が仕留めます」
横目で眺めてた千歳は、呆れた口調で大型火縄銃を構えて発砲する。
巨大で複数の邪弾がギャングオルカ達を襲うも、その破壊を示す銃弾は、直撃しない。
「なっ、」
「くっ……！」
なんと千歳の銃弾が轟の氷に直撃してしまい、千歳の邪弾も轟の氷結も、相殺と言う形で崩れてしまった。
「お前…」
「何するんですか……！貴方、私の邪魔をして楽しいんですか？何で私が狙撃した矢先に氷で妨害を――」
「してねえよ!!さっきあの風使いが炎出したことにムキになって、また逸れるかと思ったから今度は氷を出したんだ！そうしたらお前の銃弾に直撃しちまったって話だ…
お前こそ俺の邪魔してんじゃねえか、妨害はそっちだろアホ毛が」
「俺のせいだって言うんスか!?!
自分が上手くいかないと今度は自分を棚に上げて他人を責めるんすね!!やっぱりアンタはサイテーな人間ッス！ヒーロー向きじゃない！」
「私だって邪魔したくてした訳じゃ有りません。そもそも貴方を相手にした所で利益も何もありませんから。

ただ、今すぐに氷を出さなくても良かったんじゃないですか？何故、私が狙撃したタイミングで合わせるように個性を発動したんです？どー見ても狙ってるようにしか見えません」
「は？何処にそんな根拠が有るんだよお前ら」
「有りますよ、だって貴方は――」
「いいや有るね！だってアンタは――」
「「エンデヴァーの息子だから!!」」

ピキッ――と何かの拍子が砕けヒビ入った嫌な音が、轟焦凍から聞こえた。
「さっきから……本当に何なんだよお前ら……」
憤慨、
憎悪、
嫌悪、
其れ等の負の感情が心を支配し、敵意の視線を送る。
轟自身からして見れば、二人は突如と喧嘩腰になって吹っかけてくるような連中だ。
相手がどれだけ自分を憎もうが蔑もうが、苛立ちこそ湧いて来るが特に気にしないようにと振る舞い、無視すれば問題ないだろう。其れが大人としての対応というものでも有る。
しかし、轟焦凍にだって触れられたくない事情だって有る。
特に、エンデヴァーの息子という言葉だけ。
賞賛したり凄まれたりするのは、何処か複雑な気持ちでは有るが別に苛立ちは湧いてこない。
ただ父親を思い出すことに対して腹立たしく思うだけで、一人一人の人間に怒りを露わにするのは気が引けるし、そう言ったことは無い。
だが、
父親だからお前も悪い。

エンデヴァーの息子だから気に入らない。
アイツの血を通ってるお前もお前だ。
そんな罵詈雑言は、轟が尤も耳にしたく無いものであり、怒りに触れる言葉だ。
「揃いもそろって、エンデヴァーだからって…お前等は其れしか言えねえのか…アイツは関係ないだろ」
「有るんだなーソレが!!俺はアンタの父親を尊敬してた!」
最初の否定的な言葉とは一変、イナサの言葉から意外な声が上がった。
アンタの父親を尊敬してた。
其れはつまり、元エンデヴァーのファンだったのだろう。
どんな理由でエンデヴァーを嫌うのか、焦凍には理解できないし、一人一人を相手にするのも気が引けるので、結局のところ深くは追求しないし聞く気にもなれない。
「けど、俺はアンタの父親の眼が嫌いだった!遥か先を憎むような、ヒーローとは思えない荒ぶるその眼だけが!!
そして、推薦入学の時、初めて出会った時のアンタの眼は同じだった!!」
「同じだと?巫山戯るな…俺はアイツじゃねえ…乗り越えたんだ……俺は、アイツなんかじゃねえ…」
「……」
イナサと千歳の嫌味たらしい言葉に、頭の中が掻き乱れるように、物事に集中が付かず、意識出来ない。

俺は、アイツを乗り越えた。
憎悪は捨て去った。
恨み辛みで生きることを辞めたハズだろ。
己の心に問い聞かせるも、エンデヴァーに似せた憎悪たるや炎が再び轟焦凍の心を支配し火を灯す。
とても荒々しく、気が削げるこの怒りは、以前の頃と同じ血に囚われてた過去の自分が、重なる。

――煩え、やめろ。俺はアイツとは違う、血の繋がりや個性なんて、関係ないだろうが!!!
そんな憎悪の炎を振り払う轟は、否定するように頭を横に振る。

「ねぇ、黙って聞いてるけどアイツら何で喧嘩してんの？」
華風流の退屈そうな言葉に、ギャングオルカは溜息を吐きながら呆れた様子で手に頭を置く。
「……さぁな、ただこれだけは言える。
アイツ等はもうダメだ。やるべき事が見えず、喧嘩する始末…愚か者以外の何でもない、ああ言う馬鹿どもは論外だ」
試験の合格基準は不合格の点数にまで陥らないこと。
つまり、不合格になる条件は個々による基準値の点数が５０点以下になること。
合否のアナウンスは発表されないので、誰が既に不合格になってるのかは不明だ。
少なくともギャングオルカの言う通り、三人は確実に合格に受からないだろう。

「兎に角！俺はアンタの事が気に入らない！以上ーー!!」
イナサの荒々しい風が吹き、轟とは以下の波長が合わず又しても同じ結果となってしまう。
炎は風で消し飛び、風は熱によって浮いてしまう。

「ああもう！だからなんで――」
「おい待て、そっちは確か！」
「ッ！――伊吹さん！」
イナサの風によって軌道が削がれ吹き飛んだ炎は、麻痺して動けない伊吹と真堂に向けられる。
このままだと、二人に被害が――

「何やってんだよ!!」
なんて最悪な予想が脳に過ぎる瞬間、怒号を飛ばす緑谷出久の声が聞こえた。
足に「滑走」という墨字で書かれた札を付け、真堂と伊吹を抱きかかえ何とか救出した緑谷は、怒る瞳を三人に向ける。
己を変えてくれた友の声が、轟を支配してた憎悪を振り払う――

１３１話「夜嵐イナサと千歳」

夜嵐イナサは、幼少期の頃から並の子供よりも人一倍好奇心が強く、常に物事に対する熱意や執着心を持っていた。
周りから見れば暑苦しいと思う印象を受ければ、気難しい人とは違い明るくて接しやすい、なんてイメージが付くだろう。
其れもその筈、イナサは裏表ない正真正銘のバカ正直な人間だ。
元気の良い素直なこどもを言い表したような、そんな人懐っこい性格の少年がヒーローに憧れる理由は難しくは無く、単純に言えば「カッコいいから」と言うのが一番だろう。
特に今の世代ならなおのこと。ヒーローの熱きたるや闘志は、イナサだけで無く多くの子供が憧れと尊敬の眼差しを向けるだろう。
そんな少年は、誰かを守り、悪に立ち向かう正義のヒーローに憧れ、常に彼の心を熱く滾らせてくれた。

だから、ショックだった。

ある日、街で敵が暴虐の限りを尽くすかのごとく暴れ回り、大きな被害が出ていた大参事の時だった。
偶々その場の近くに警察や地元のヒーローが駆け付けておらず、任務で離れていたため、被害はどんどん悪化する一方で、被害区域が絶体絶命の時だった。

『俺を前にこれ以上自由で居られると思うなよ雑魚が』

赤く燃え盛る豪炎が、敵を襲う。
荒々しい波のような焔は、敵を丸呑みにし、脅威が消え去るように、破壊を繰り広げてた敵は戦意喪失。
出会って数秒で片付けたのは、あのＮｏ．２ヒーロー、エンデヴァーだ。
他にも数名のサイドキックを連れており、敵を鎮圧した後、気休む

事なく敵の仲間がいるかどうかの捜査網を広げ、警察に敵を引き届けて居た。
そんな光景を前に、熱くならないわけがない。
強力な敵を炎で薙ぎ払うこの男から放たれる圧倒する重圧感。
更にはオールマイトに次ぐ人気のヒーロー。
これがＮｏ．２の実力たるや、４歳にして中々に見ない貴重な経験を得たイナサは、いても経ってもいられず思わずバックの中に入ってた色紙を一枚取り出し、サインをお願いした。
丁度現場にはエンデヴァー以外誰もいなく、暇をしていたのを見つけたので、仕事の邪魔にならないよう配慮しながら声をかけた。
緑谷出久ほどでは無いが、イナサはヒーローに対する希望や憧れの懸念が強く、どんなヒーローでも善良な点を見つめて応援していた。

『そんなことする暇があるなら勉強でもしてろ。いいか、俺の邪魔をするな、失せろ』

しかし少年の想いを、拭い廃るように、言葉を吐き捨てた。
色紙のサインとペンを、振り払うように捨て去り、此方を一切見ようともしないエンデヴァーの瞳には、ヒーローとは程遠い…絶望と憎悪、そして煮えたぎる憤慨を宿していた。
少年が初めて知った、エンデヴァーの顔。
ヒーローとは感動と勇気、そして希望を与えてくれる光の存在だ。
しかし、エンデヴァーは今まで少年が見て来たヒーローの中では、明らかにヒーローとは思えなかった。
認めることすら出来ないし、今でも脳裏に彼の敵意が焦げ跡のようにこびり付いている。
しかし、時が経つにつれてその記憶は残りつつあるも、彼に対する悪意は消え失せていた。
時が経つにつれ人は記憶が薄らぎ、忘却していく。
かと言ってショックが消えたと言うとそうでもなく、思い出せば鮮明にあの頃の衝撃は思い出す。

しかしあの頃の記憶をいつまでも引きずる程、イナサは子どもではない。
エンデヴァーのことは今でも嫌いだが、それでもヒーローを目指す少年の進む道は変わらない。

雄英高校推薦入学試験。
狙うはトップ校、最高難関にして誰もが憧れを夢見る学校。
イナサは一流のヒーローになるべく、プロヒーローが逸話を残したと言われる雄英高校を入学するべく推薦と言う形で試験に臨む。
学校を入門する際、偶々自分の前に歩いてた人物に目が入り、「一緒に行こう」と声をかけると

『煩え、邪魔だ失せろ』

あの頃に味わったエンデヴァーの言葉と同じ、憎悪と忿怒の声が確かにその少年に宿っていた。
見間違い？
いいや彼は正真正銘、今でも嫌厭するエンデヴァーの息子だ。
何より憎しみと絶望に支配された、あの忌み嫌う瞳が息子とソックリなのである。
轟焦凍も雄英を受かるつもりなのだろう。
それも少し考えれば解ること、当選だ。あのエンデヴァーでも雄英を卒業してる身。ならば、親が親なら子も子のように、雄英を目指すのも何ら不思議では無い。
『なんッスか…あれ』
最初に出た言葉は、其れだった。
轟焦凍の息子だと、後ろ姿では解らなかったものの、初対面の人間に対して失せろという言葉は無いのでは？
しかし、イナサは活発な少年なだけでなく、明るく優しい人間だ。
あの眼が嫌いでも、轟焦凍自身を嫌うことは無かった。
きっと、自分の対応が気に入らなかったのだろうか、または虫の居

所が悪かったに違いない。
出会って直ぐに誰かを嫌うのは宜しくない。イナサは特に気悩むことなく、試験会場へと足を運ばせた。

この試験で自分もあの人も合格できれば、恐らく同じ学校を通う者として、クラスで仲良くできるだろう。
それならあの眼だって気にならないし、きっとエンデヴァーのことだって…

『やったー!!一位だ!アンタ速いな!!』
推薦入学試験。
個性を駆使して凡ゆる障害を駆け抜けるレースを、平均タイムの3分も早く到着しゴールしたイナサは腕を上げながらハイテンションな声を上げて騒いでいる。
そして横で息を深呼吸する轟は、汗を拭いながら黙々と自分のタイムを見つめる。
轟とイナサ、どちらが勝っても可笑しくない程に双方の実力は本物。僅差と言った形でイナサが一位を取れたので、実力はほぼ互角だろう。
『アンタ凄いな!激アツだな!!
この勝負は俺の勝ちだけど次やったら分かんないな!けど良い勝負だったッス、熱くなれてスゲェスッキリっていうか、アンタもしかしてエンデヴァーの息子さんかなんかッスか?』
『黙れよ…うぜぇ……』
『えっ…?』
これを機会に友達になろうと接するイナサは手を差し出すも、向っ腹の立つ轟は静かに憤慨の声を震わせる。
『これは試験だ。
合格すりゃあ良いだろ、勝負でもなんでもねえ…勝手に競われても困るんだよこっちは』
――見ない。

『だいたい何なんだよお前は、初対面のヤツが…横で煩く喋りやがって…其れが迷惑って分かんねえのか……』

――俺を、見ない…。

『邪魔だ、失せろ』

轟焦凍は、手を差し伸べるイナサの手を振り払ったのだ。

もしかしたら、少しでも変われたかもしれない、そんな可能性ごと、彼は言葉と供に切り棄てた。

きっと、彼とは上手くやっていけないだろう。

どれだけ手を差し伸べても、如何に友達として声をかけようと、意味がない。

少なくとも、これから学び舎でヒーローとして日々精進するイナサは、轟焦凍と供に歩むことは出来ない。

あの日を境に夜嵐イナサはエンデヴァーと、そしてその男の血を引き継ぐ息子、轟焦凍を否定するかの如く拒絶し、己の進むべき雄英の道を取り消した。

少年の歯車は、微かな拍子で狂い始め、其れが今へと繋がった。

わたしの名前は千歳。本名は４歳の頃に捨てました。

私は幼い頃から常に人から忌み嫌われる、恵まれない子どもとして貧困が厳しい貧民街で育って来た。

周りの人間は兎に角生きることに必死ではあるが、何も非情ではない。

時に困ったことがあれば支え合い、時に喜ばしいことがあれば分か

ち合う。皆が思う以上に、貧民街というのは汚れてはいるが、その中には確かな光が存在するんです。
不法地帯なんて印象の悪いイメージが付きますが、ここは恵まれなかった人間が集う、そんな受け入れられなかった集落場なんです。
中でも、鳳凰財閥と言うお金持ちの家が隣町で佇んでいるにも関わらず、海外の恵まれない貧困な国にお金を投資するなんて意味不明な事も有りましたが、其れは今となっては昔の話。
私の故郷とも呼べる貧民街は、ヒーローや警察が巡回することは有りますし、犯罪の騒ぎが起きなければ案外安心して暮らせるんです。

なんて言うとでも思いましたか？
私からすれば、あんな場所はクズとゴミ供が蔓延る社会不適合者、即ちこの世界の負け組が集う哀れな集落場です。
誰が死のうと関係ないし、警察やヒーローなんて４歳から生きてきた私からすれば汚い大人以外何でもない。
貧民街は私の出身地である事に何ら変わりは有りませんし、昔の選抜メンバーに居座ってた詠先輩も同じです。
詠先輩は恵まれない貧民街の住人にお金を寄付してたそうですが、私から見れば「あんなゴミ供にやるだけ無駄だ」が一番の本音ですかね。
詠先輩が貧民街に固執してるのと、私がアイツらに嫌悪を示すことなど、実は何ら不思議では無いんですよ？
もし、私も詠先輩みたく誰かに支えられ、時に喜びや幸せを分かち合い、貧しくても生きていく道があれば私だって進みたかった。
しかし、私にはそれを選ぶ権利も、進む権利すらも掴めさせてはくれやしない。
私の家庭はかなり貧困でお金に困っていました。
借金が出来たのやら、母や父は絶え間なく毎日のように喧嘩していました。

当時はまだ悪忍でも何でもない、ごく普通の子どもだった私は親の喧嘩をやめさせようと必死に声をかけるも「煩え」と、今度は怒りの矛先を私にぶつけ、虐待を受ける始末。

まるで打ちのめすように、お前が悪いと言わんばかりに責め立てるような暴力を食らう私は、痛みと苦しみにより来る涙と恐怖に体が支配され、動くことができなかった。

貧しく惨めに生きようと、親にどれだけ殴られ生きようと、私は両親がいなければ生きていけないし、明日食う飯だって調達出来ない。

だから、親に従う半分…またいつか、家族と一緒に三人で笑いあえる幸せな家庭になることを、心の奥底に祈りながら毎日を過ごしてきた。

まだ産まれて余り年月が経たない私からすれば、親を信じ愛してしまうのも自然。

親が仲直りするのも、喜ばしい笑顔が戻ることも、心の底から祈るように願っていた。

そんなある日の朝、目を覚ました私は親に腕を引っ張られ、どこかへ連れて行かれた。

一切此方に視線を移さないことに疑問を持った私は「おとうさん、おかあさん、どこにいくの？」と問いかけるも、返事はない。

何の反応を示すことなく、ただ無言で引っ張られるだけ。私は訳分からずとただただ黙って親に従い足を運ばせることしか出来なかった。

暫くして着いた先が貧民街の隣町で、人気のない場所へ連れていかれた私は何だか自然と体が強張り震えていた。

こんな所まで来て、一体何が目的なのだろう？お父さんとお母さんは、私をこんな所に連れて何がしたいんだろう？

そう考えると何故か余計に寒気と恐怖が込み上がり、私は「怖いよ…」と独り言を呟く。

「ホホッ、お待ちしておりました？？？？様、？？？？？様！」

誰も使われてない古いボロ屋の工場内に連れてかれると、見慣れな

い大人が数名、待ってましたと言わんばかりに業者口調で両親の名前を口に出し深々と頭を下げた。
皆がよく見る一般的なサラリーマンの容姿だが、顔には覆い隠すよえに仮面を付けており、相手の表情が一切見えない。
そんな奇妙奇天烈な怪しい大人達に、今まで黙ってた両親の顔が綻び、それに応じるようにお辞儀をする。
自分に見せたことのない笑顔を他人に見せる両親に、どこか複雑な気分を味わう私は何も言わず相手のやり取りの話を聞くことにした。
「本日はお忙しい時間、誠に有難う御座います…」
「いえいえとんでも御座いません！お客様には全身全霊でお応えするよう心掛けております。
おおっと、言い忘れておりました。私は忍商会を務める『魔門』と申します。本日、忍商会をご利用頂き誠に感謝申し上げます…して、その女の子は、例の…？」
「はい…前に話したウチの娘です…」
どうやら以前にも会ったようで、私のことは既に知っていたらしい。
小さい子供の私は、親がいないときは留守番をしていたから大人の世界のことはよく解らない。
「ふむ、畏まりました。ではこちらにサインと実名…更にはご記入欄に…」
白紙を取り出す魔門に、両親はペンを手に持ち何かを書いている。
アレは大人でいう契約書か何かなのだろうか？背の小さい私からはどんなことが書かれてあるのか解らないので、ただ見つめることしか出来ず、ボーッとしてた。
しかし、次に出る言葉はそのアホ抜けた私の感情を一変させるには丁度良かった。
「はい、確かに契約書にサインを貰いました！
では、今日から彼女は忍商会の『道具（商品）』として、お引き取りしますね。

では、こちらが娘さんを引き取った際の売却によるお金で御座います。どうかお受け取り下さい」

――えっ？

私の頭の中は一瞬で色のない真っ白な世界へと塗り潰された。

幼い子供とはいえ直ぐに言葉の意味を理解した私は、とても信じられなかった。

突きつけられる現実を受け入れることが出来ない私は「嘘だ…」とか弱い声を漏らしてしまう。

どれだけ貧しくとも、辛くとも、常に一緒に住んでいた親が、時に喧嘩が起こり暴力が過激になりつつあるとは言え、私を捨てることは絶対に無いと思っていた。

しかし、現実は違った。

両親は金属ケースを開けると、万札が何十枚も束ねてある大金を前にして喜び合い、魔門と呼ばれる大人に何度もなんども頭を下げ、私を見ずに両親は抱き合っていた。

「おとう…さん？おかあ…さん？うそ…だよ、ね？」

私は自然と涙を目一杯貯め、掠れた声で親に声を掛ける。其の声に反応する両親は、暫し此方を見つめるも、「さっ、行きましょう」とアッサリとした反応で立ち去って行く。

まるで「お前なんて娘じゃない」と見下し蔑む眼付きは、今でも脳裏に焼き付いている。

父親と母親は寄り添いながら、私に背を向けそのままどこ吹く風か、立ち去って行った。

両親は、私を売った。

其の過酷な現実が、私の心臓を射抜くように突き付けられ、受け入れるのにどの位の時間が掛かったかは覚えていない。

「まってよおとうさん！おかあさん!!なんで…わたしをすてるの!?」

だからせめてでも良い、理由だけは聞きたかった。
大きな声で喚き泣き叫ぶ私は、必死に声を張り上げるも数名の大人達が私の髪や服を引っ張り、縄で口を縛りってはタオルで目を隠し、身動きを封じられた私は強引に大型自動車に乗せられ何処かへと連れ去られた。
所謂人身売買という闇商法の中でもかなり値の付く商売法らしく、特に子供は滅多に仕入れが無い為かなりの値段が付くそうだ。
私の歳で５００万円。つまり両親は金欲しさのために、産まれて間の無い私を売り飛ばしたのだ。
しかし幼い頃の私からすれば、心の奥底から絶える事のない深い恐怖と悲嘆、親に売られたという悲惨な現実を、何も見えない真っ暗な世界の中で絶望に身を焦がれていた。
そんな状態の中で３０分位続き、やっと移動を終えたのか、私は目隠しをされたまま、機械音と何十人もの飛び交う声が、鮮明に耳に届く。
硝煙と油と、金属特有の臭いが猛烈に鼻に突き刺し、思わず噎せてしまう。
「さぁ、目隠しと縄を解きますよ」
魔門の声を確認すると、縛っていた口と体の拘束は解け、目隠しも取ってくれた。
やっと視界に光が射し込むかと思いきや、私が眼にした光景は、とても信じられないものだった。

大勢の黒スーツを着用した大人たちが、薬品やら拳銃やら凡ゆる違法物やサポートアイテムを売買し、労働者と思われるボロ布の服を着た人間は、荒い息遣いで人の何十倍も重そうな木箱を運び、汗水垂らしながら、懸命に動いている。
中には「助けてくれぇ！頼む!!まだ俺は使える！」と泣きじゃくるように叫ぶ５０過ぎた叔父さんが、そのまま何処かへ連れていくように、トラックに詰め込まれ移動していく。

こんな鬼畜な所業を強いられる姿は、正しく奴隷のようだった。
それはつまり私も、道具にして奴隷であることを裏付けていたのだ。
「さて、軽く説明しておきましょう。
先ず初めに、貴方の本名は今日限りで無くなりました。戸籍も無く、貴方は世間では存在しない者となり、今後から貴方の名前は意味のないものとなりました。
次にこの場のルールです」
一つ、従業社員全員の命令には絶対に従うこと。
もし幾多ものの命令に背き、叛逆しようものなら「妖魔の巣」の生贄として、捧げられることが絶対条件となる。
二つ、如何なる道理であっても発言は慎むこと。
発言許可を願ってから、発言をすること。奴隷となった者は人間では無く、道具として扱われてる為、人権など存在しない。
三つ、商品として他者に売却されても主人に逆らうな。
忍商会を抜け買主に受け取られた以後、決して騒ぎを起こさず道具としての有るまじき行動を取れ。
問題行動が見受けた場合「妖魔の巣」の生贄として処分する。
最低でも生きるためにはこの掟を守らなければならない。解らないことがあるとすれば「妖魔の巣」ということだ。
聞いた話だと得体の知れない血の気盛んな化け物が巣食っていたり、中でも神威と呼ばれる化け物の爪痕により、誘き寄せられ住処となったとか。
益々謎深くなったが、これ以上ムダ話を追求すると殴られそうな気がしたので、口は開かなかった。

私は４歳の頃から親に売られ、消耗品としての人生を送ってきた。
いつ処分されるかも解らない場所で、明日死ぬかも知れない未来に絶望と恐怖に心が支配されながら、私は生きる意味も希望の光も見出せず、ただ暴力を受ける日々を過ごして来た。

時に品物を見定めるためとして売買オークションを開かれ、見知らぬ大人から邪な眼や嘲り笑う顔で、舐め回すかのような視線を向けられ、私は身を縮こませながら得体の知れない人間に不安を抱き懼れ慄き、もし自分がこの人に買われたらどんな事を強いられるのだろうかと、想像するだけで身震いしてしまう。

しかしそんな悪夢は、三ヶ月後で打ち砕かれた。

三日前、私を欲すると言う人間が大金を支払って買おうと言う件が出たそうで、体の保身と点検を受け、特に異常がないと知り三日後に出荷され、立派な消耗品として今日ここを離れる時になった。

その時の私の心は、殆ど崩壊しかけていた。

救いのない場所で、暴力と労働を強いられ働かされ、奴隷のように扱われ人間とすら烏滸がましいと言わんばかりに攻め立てられ、生きることに何も快感すら感じない毎日を送れば、誰だって壊れかけた人形になるのも必然。

でも、もうこのままで良いのかもしれない…

救われない人間は、最期まで救われない。

使えないと判断されれば即ゴミ行き、生きる為には役に立つしか方法はない。

ならば、もうこの絶対のルールに従うしかないじゃないか。

絶望し、意を決っした覚悟で収容されてた檻から足を踏み出した私は、忍商会のアジトを背後に、道具として買主に使われるべく搬送された。

搬送先は東堂組と呼ばれる敵補正と認識されてるヤクザ者の住居だそうだ。

何でも死穢八斎戒や南朝組と深い縁のある組織だそうで、私はそこで彼らの道具として働き生きなければならない。

当時の私の顔はどんな表情を浮かべていたのだろうか？

人間としてすら見て貰えず、延々と命令に従われる為に強調された

私は、氷の機械として無感情に生きてきた。
そんな私は、どんな…どんな顔をしていたのか。
否――言われずとも、きっと死んでいたに違いない。
産まれて間もない自分は、まるで一生分の不幸を味わったかのような、そんな錯覚さえも感じた。

トラックから降ろされた私は、縄で手首を縛られながら処刑人が連行されるような構図で歩かされる。
乾いた眼、
黒く澱んだ汚れた服、
全身痣だらけの身体、
一体、どこの戦争時代から生まれた貧困街の住人なのだろうか。私を見る者は必ず引いてしまうだろう醜態。
目立たないようにと慎重に、的確なルートで目的地に向かう大人と私。
いつになったら到着するのだろうか。なんて疑問を抱いていると

「おい、其処で何してる」

ドスの効いた声に視線を移す大人たちは、その人物を見やると一瞬で顔面蒼白と化し震え上がっていた。
誰だろう？と相手に振り向くと、明るく照らす豪炎が大人たち二人を襲う。
「ッッアァァーーー!!?!」
「あ、あぢぃッ！あッぢぃぃぃぃ火傷しちまうぅ!!」
涙声で喚き命乞いをする業者を、まるで蟻を捻り潰さんと言わんばかりに踏みつける男の名前は、エンデヴァー。
Ｎｏ．２のヒーローにして、事件解決数は殆どトップに近い男が、悪を燃やし尽くさんとばかりに自慢の炎を唸らせていた。
「確かコイツらが違法や闇商売の常習犯グループで間違いないな。
サイドキック達は直様拘束しろ！其れと仲間がいる場合のケース

も考えうる！不穏な動きがあれば絶対に見逃すな！」
的確と指示を出すエンデヴァーに、気合いある返事をするヒーロー達は、在るものは火傷で気絶してる大人を縛り、在る者は探知探索を広げ、捜査網を拡大。
現場には数名のサイドキックにエンデヴァーと、尻餅ついた私と忍商会の従業員だけだ。
「な、なな何でいるんだよ……燃焼系ヒーロー・エンデヴァー!!」
「もう一人いたなチンピラの雑魚が。
悪かった、影が薄くて気付かんかったよ。だが安心しろ、今大人しく降伏するなら痛い目には合わせん。お前が俺に眼を付けられた時点で勝負は見えてるだろう？」
「舐めんじゃねえぞゴラァ!!」
威勢を張るチンピラの指の爪が長くなり、尻餅着いた私を人質にするよう、鋭利な爪を首筋に当てる。
私は突然人質にされたことと、キツく縛るように体を掴まれたことに、思わず表情が歪んでしまう。
「このガキがどうなってもいいのか!?そ、それに俺達に刃向かったってなぁ…商会側と東堂組が黙ってられねえぞ!?」
幼き少女を盾に使うよう脅す男に、エンデヴァーは不敵な笑みを釣り上げ
「お前のようなたかが三下程度が、組織を口出して俺が畏れると思うなよ」
瞬間、エンデヴァーの片方の手から炎を出し、火炎放射の如く狙い撃つ。
迫り来る熱気に、自分も巻き添えを食らうと反射的に眼を瞑るも、激しい炎は襲ってこない。
「ガッ――」
だが、代わりに犠牲になったのは、人質にしていた男の方だった。
エンデヴァーは掌から放出した炎の軌道を変え、相手の背中に回り

込んだのだ。
その為私は被害を受けず、助けられた形となった。
「え、エンデヴァーさんすげぇ!!」
「このアホも捕まえとけ。
全く手間のかかる…それと東堂組はもう終わったのか？」
「『バーニン』達のチームも終わったそうです！後は警察に引き渡すだけですねエンデヴァーさん！」
「其れは重畳。それに、時間を迅速に対応する…其れが俺達のモットーだ。」
エンデヴァーは燃える自慢の髭を揺らしながら、不機嫌そうに口を開く。
私は、いつ死んでも可笑しくない状況の中、エンデヴァーに命を救われた。其れが嬉しかったのか、酷い環境に身を置かれてまともな感覚すら味わえなかったためか、私の目から一筋の涙が流れていた。
救けられたことが嬉しくて、これで上手くいけば忍商会からも、引き取り側の人間からも逃げられ自由を手に入れられる。
この身の置かれた開放感に、私は久しく喜びの感情を露わにする。
しかし、だ。
自由を手に入れたとして、これから先はどうすれば良い？
もうあの家には帰れないし、子供を捨てた両親の元には戻りたくない。
当てもなく、途方に暮れながら彷徨うしか無いのだろうか？
いや、人に訪ねてみよう。
一人では無理でも、誰かに力を借りれば、きっと…
善は急げだ。
私は早速、自分の命を助けてくれたヒーローに、礼の言葉を沿って、これからどうすれば良いのか聞いてみた。
「た、たすてくれて…ありがとうございます……
わ、わたしは…だいすきなおとうさんとおかあさんに…うられたので…このあと、わたしは、どうすれば…いいんでしょうか？
わたしを、たすけてくれますか？」

警察に引き渡される敵を後にして私はエンデヴァーに聞いてみた。
この人は、私の命を助けてくれた恩人だ。ならば、聞いてみる価値は有るし、何か手掛かりにはなるのではないか？
まるで捨猫のように頼りすがる私は、じっとエンデヴァーを見つめて。
そう思ってた私は、今となれば浅はか以外の何でもない愚か者だった。

「だからなんだ、任務に無関係じゃないか。
なぜ俺が一々お前のような小娘の事情に付き合わんといかんのだ愚か者。

邪魔だ汚い小娘が――俺に触るな、消え失せろ」

憎悪が募った、否定的な言葉を浴びせられた私は、絶句した。
私を救ってくれたヒーローの言葉がコレだ。
この世界の中でただ一人、両親にすら捨てられたこんな私を救けてくれた人間から発せられた言葉に、私は信じられなかった。
あの後警察に引き届けられ、事情調査を受けたものの、私の本名が戸籍リストに消されてて調査が受けれないのと、何をしようにも打つ手がないのやらで、解放された。
もちろん、エンデヴァーの切り捨てられた言葉でかなり人間不信になりかけた私は、諦めずに警察にも助けの言葉をかけるも、相手にしてくれない。
貧民街に戻っても同じこと、誰かに救けてと乞いても誰も救ってくれやしない。
無視する者、邪魔だと追い出す者、相手にしない者。
結局私は何不自由のない場所へ来ても同じこと。邪魔者以外の何でもない、自由を手にしたって私は救われない、ゴミ同然の存在。
結果、私が今日という今に渡って学んで来たものは、この世界に救

いは存在しないことだ。
所詮ヒーローなんて金と名誉を搾取し目的とする偽善者。
仕事だけを考え、他人の心など心底どうでも良いもの。
自由を手にしても、幸せなど手に掴めない。
生きると言う意味は殺すこと、そして…

――私は、消耗品なのだと。

これは、私が齢４歳にして知った、社会と己の現実。
人間は〝他人〟の死に関して酷く無関心な生き物だ。
自分の知らない場所で何百人何千人死のうと心動くことは決してない。
今日も食事は美味しい、
何不自由なく幸せに暮らし、
安心しながら雨凌げる屋根の下で心地良く眠りにつける。
今日も仮初の平和は続き、楽しく幸せに生きて行く。

私と言う生きてもどうしようもない人間を、取り残し、今日も日常は廻っていく。

『…何故？其処まで抵抗する。全て受け入れろ千歳――私達は殺すことでしか生きられない人間だ。抵抗した所で何の意味もない、無駄であり虚無でしかないんだ。
平和の象徴？そんなモノ、唯の虚無に過ぎん。善悪の和解？そんなモノは、蜃気楼のように霞んだ幻だ。現実を受け入れろ――私達の生きる選択は、殺すしかないんだ――』

こうして殺し屋として闇の世界の中で生き、とある国際テロリストの暗殺組織に選ばれた私は、悪忍育成機関養成学校――秘立蛇女子学園に行き着いた。

この人生に、沢山の屍の上を歩いた私は、たとえ罪だと死ねと罵られても、決して反省などしない。

これが私の虚無に等しい生き様であり、私なりの抵抗だ。

１３２話「挽回せよ」

私が拾われて初めて学んだことは、生き物の在り方について教わった。
人間がどれだけ知恵を手にしようと、眩しい幸せな感情や喜びを味わおうと、殺されれば全てが無と化す。
人は惰弱な生き物だ。
目に砂が入っただけで涙は溢れ、刃物で一突きしただけで血を流し、最悪急所に当たれば絶命は免れない、まるで小さき虫ケラのような存在なのだと。

『新人だ――今日からＤ　―　スクワッド特別特攻隊として所属することになった消耗品だ。

お前達、確りコイツに仕事を教えてやれ』

組織に入隊したばかりの私が次に学んだのは、殺しの技だ。
今では口にも出したくないし思い出したくもないが、あの人から技術を学び生きる術を手に入れたのは事実。
暗殺術を学ぶと同時に、血生臭い記憶が埋め尽くされている私を周りの人間は確実に異端者と言えよう。こんな小さな女の子が、笑顔を殺して、心も殺して冷酷な殺人マシンに成り切ろうとしてるのだから、当然だ。
えっ？恵まれない不幸な私が簡単に受け入れ過ぎてる？
殺すことに抵抗は無いのかって？
無いですよ。だって、もう疲れましたから。
誰かに頼り、身を添えようとしても嫌われるだけ。
救けてと命を乞いても人の心は決して動かない。

手を差し伸べても振り払われ裏切られるだけ。
だからあの人に教わった。
何も無いなら、奪えば良い。
周りの幸せな人間を忌み嫌い、己にした行為を許すな。
人間が、お前という歪みと殺意の塊を生み出した。
例えこれが自分の罪を逃避するような綺麗事だと言われても気にしません。事実、自覚してますから。
あの頃の私は血に飢えた狼のように、幾多ものの人間を殺し、屍の上を踏みにじるように過ごしてきたのですから、誰に敵意を向けられようと殺意を剥き出されようと、慣れてますから。
だからなのか、あの人から資料に載ってる人間を全て殺せと命じられても、特に何も抵抗の意を示さなければすんなりと受け入れた。
初めて人を殺したのは、温泉旅館の時だ。
上層部の人間が有名な旅館に泊まり、魅力的且つ噂されてる温泉。
湯で身体を浴びる６０過ぎた肥えたオッさんの背中を洗う私は、油断してる相手の隙を突くように、隠してたナイフを手に持ち、首めがけて振るい落とす。
後から、大動脈を切り心臓を一突きし、死んだことを確認した後、私は返り血でこびり付いた、濃い血をシャワーと供に身を流し、直ぐに撤退した。
今となってはトラウマとなった忌々しい記憶だ。

その頃の私は、まるで相手を殺すと同時に自分を殺してるような気がしてならなかった。

後から起きた大規模爆発テロも、標的の殺害も、組織壊滅など、私の気が晴れるかと思いきや、私の心は次々と崩壊していくだけ。
忌み嫌う行為なのに…なのに、私の顔は死んでてもなお、笑っていた。
眼は既に光りを無くし、返り血を浴びながらも不敵な笑みを浮かべる私は、誰が何と言おうと殺人鬼。

生きてることさえ烏滸がましい、殺戮マシンのモンスターだろう。
いつしか私は自然と「今日は何人殺せるかな…？何百人道連れに出来るかしら？楽しみだなぁ…」なんて当時には思えない発言もしていた。今となっては不思議なくらいだ。

こうして日々を積み重ねると供に、私はあの人達五人のような冷酷無慈悲な人間へと近付いていくような気がした。
嬉しかったような、拒否してるのか、混ざり合った私はあの人から「まだ情を捨て切れてないだろう」と指摘を受けるだけで、後は何も教わせてくれなかった。
最初、私はまだ任務をやり切れてないと、沢山の人間を殺して己の心を壊し、殺してきた。しかし其れでも私の心は首を絞めるように辛く苦しい想いをするだけで、幾ら星の数だけ殺生を働こうと、私の人間としての心が消えることはなかった。

あの頃の過酷なトラウマが芽生え蘇り、暴力振舞われる痛みを感じればより、奴隷として生きたあの頃の痛みが積み重なる。
いつしか、私は何をして欲しくて、何が欲しかったのか解らなくなってしまった。

私が変われ始めることが出来たのは、秘立蛇女子学園がキッカケだろう。
とある忍務の一環だと言われ、有名な悪忍養成機関育成学校、秘立蛇女子学園に入学させられた。
ただ、一つ入学理由があるとすれば「単に自分で入学したかったから」という心にも無い嘘を言わされ、難なく入学することに成功した。
こうして私は、あの人から逃げ去るように蛇女の生徒として生きていく事となった。
最初は「簡単に受け入れ過ぎだ」と愚痴をこぼしていたが、蛇女曰

く、「悪は善よりも寛容」とのことで、犯罪履歴のある私を疑うことなく簡単に受け入れてくれた。
しかし闇の世界で生きてきた私が其の言葉の裏を取れることなど造作もない。
ようは、来るもの拒まず去る者追わず…但し消えるかどうかは自己責任。
裏切れば死、あるのみ。
先輩に言われなくても直ぐに言葉の意味に理解した私は、闇の世界…上のステージで生き抜き、消耗品としての名に相応しくなるため、己を磨くべく鍛錬に没頭した。

其の頃の選抜メンバーが、焔、詠、日影、未来、春花と言う中々に目に見ない個性豊かなメンバーが揃っており、私は補欠メンバーとしての座に収まった。
因みに未来さんは私と同じ学年で、殺しの技や技術は私に比べればまだまだ軟い方でしたが、忍術は私寄りで、その威力は闇の世界で生きた私からも賞賛できる強さだ。
選抜メンバーになるにはそれなりの成績と強さが必要で、選抜メンバーを決めるトーナメント戦で私はあと一歩の形で取れずに、補欠の座となったのだ。もしここにあの人があれば確実に嬲り殺されていただろう。
選抜メンバーに居座ることが出来なかった私は悔やんだろうな…あと少しで勝てたところを、私は一瞬の隙を見せてしまった。このままでは消耗品として利用され、生きていく事が出来ない。
勝敗は一転するもの、優勢だった私は急所を狙われ気絶してしまい、未来が合格という形となった。

結果、私はこうして選抜補欠メンバーの生徒として生きているのだ。
蛇女の入学生徒は想像していたものよりもずっと多く、何千人何万人もの忍学生がいるのだが、私たちは補佐の為、選抜よりでは無いが、

それでも上の立場として振る舞えることはできた。
まあ、自分が優越な立場なんて微塵たりとも興味はありませんが…

訓練時。
蛇女の訓練メニューは思ったよりも厳しく、あの人に暗殺の鍛錬を積み込まれた時と同じく、息が上がる程に体力を消費してしまう。
特に、鈴音先生の「己の限界を超えるべく、精進しろ。訓練の課題を終わった者から本当の始まりだ」という、滅茶苦茶な言い方で、課題の倍以上の鍛錬をやらされると言う、中々に見ない過激な訓練を受ける私は、なぜあの人が私にここを紹介したのか、何となく解った気がした。
「でも…私は人を殺すのと、消耗品の為に生きるだけ……結局そこに、幸せなんて存在しない……」
いや、そもそも人を殺める道を選択した時点で私は幸せになる資格など無い。其れ所か、生まれて一度も幸せや環境などに恵まれたことのない私は、この世に生まれたことそのものが間違いだったので、常に不幸が降り注ぐのは当然だろう。
「どうしたんです？こんな所を一人で――」
なんて独り言を呟き感情に浸ってると、爽やかな声と共に、頬に冷たい感触が伝わり思わず反応してしまう。
「貴女は確か…えっと……」
「ふふ、蒼志ですよ覚えて下さい。どうです？ここの生活には慣れましたか？」
爽快な笑顔を浮かべる少女に私はソッポを向く。
彼女の名前は蒼志――秘立蛇女子学園選抜補欠メンバーの筆頭にして、私たちのリーダーでもある。
実力は選抜メンバーの未来、詠、春花、日影をも上回ると言う予想外な戦闘力を持つ少女なら、余裕で選抜メンバーの座に居座ることなど容易いのだが、何故か彼女は補欠の座で治っている。
「別に…貴女には関係ないじゃないですか」
「大有りです。

私は補欠とはいえ個々のメンバーを導く筆頭です。同じチームワークとして仲間を心配するのは当然ですから」

ハイこれ、と彼女は手に持ってたスポーツドリンクを一本差し出す。もう一本手に持ってたのを、彼女はペットボトルのキャップを外して口に付ける。

「要りませんよ……何ですか、私に構ったって何も面白くありませんよ…」

「別に面白さ目的で絡んでる訳では無いのですが……其れにですね、水分補給は忍でも必要不可欠なんです。夏なら尚更ですよねぇ…あっ、私は夏でも全然大丈夫なんですよ、こう見えて熱いのは慣れてる方なので。千歳さんは夏は好きですか？」

「……別に好きでは…と言うよりも、放っておいてくれません？私は独りでいた方が気が楽なので…誰かに戯れるのは好きではないんです」

素直じゃなく、否定的に彼女に言葉を浴びせる私に対し、蒼志さんは表情を何一つ嫌味と感じずに、ただ苦笑するだけだ。こんな人は見たこともないので、逆に反応に困るのが一番の本音だろう。

「そうなんですか。千歳さんには千歳さんなりの事情が有るのですかね？ですけど…いつまでそうしてるつもりなんです？」

その言葉に、何処か心が突き刺さるような錯覚が芽生えた。

入学して間もないと言うのに、私は同じ選抜補欠の総司さんや芭蕉さん、芦屋さんに伊吹さんとは初日で軽い挨拶を交わしたきり一度も会話したことなどないのだ。

例え三日とは言え、交流的な意図や話し合う様子が見受けなければ、誰だって不審がるのも可笑しくはない。

「そのままずっと、誰とも話さずに卒業を迎えるんですか？コミュニケーションも忍として必要不可欠なステータスです。ってまあお巫山戯が過ぎる連中に対して余り会話が好ましくない私が言うのも何ですが…千歳さんには、とても会話が不向きな人間には見えないんです…」

彼女の優しい言葉に、何処か対抗心が生まれてしまう。

本当は解ってるのに、こんな事してたって何の意味もないのに…いいえ、消耗品として馴れ合いなど不向きなので、仲良い交流を深める気にはなれませんが。
其れでも、やっぱり会話をしない理由にも当て嵌まらないのは事実。このまましてたって気力を削るだけで、全部図星だ。
特に…

「私を……人間なんて呼ばないでよ……」

産まれて今まで、親にすら一度も「人間」と言われたことのない私なら尚の事。
親や周りの人間にすらそんな眼で見て貰えない、誰も私を人間とすら思っていないのに、彼女は私を人間と呼んでくれたのだ。
何処かか弱くて…でもって嬉しくて、泣きたくなるような感情に、私は小さな声で呟いた。無論、相手には聞こえない音量で。
…いや、違う。

『待ってくれ！これ以上千歳を殴らないでくれ!!私が、私が悪かった！だからこれ以上はもう……だから、だから辞めてくれ!!!私がちゃんと育てる…から！だから、どうか…どうか…』
『うぅ…ぐすっ！ひっく…うえぇぇぇぇん!!もう、もう辞めて下さいよぉ！これ以上私たちを虐めないで下さいよぉぉ!!!ふえぇぇぇ～～～ん!!わあぁぁぁぁぁぁーーーんっ!!』
『ち…とせ、だい…じょうぶ？』

幼い頃は、五人とも私と仲が良かったっけ。特にリーダーには毎日迷惑をかけていたな。失敗して何も上達出来ない私が、大人に殴られてる時…あの人だけは、あの人達だけは、私の仲間であり、味方で有り続けてくれた。
「私は今まで恵まれた境遇におらず…時に常日頃から殺される日々が続いていたので…皆さんの事が信じられないんです。

其れに…貴女達のように、親の元で生活して来た人間なら尚更です…」
私は初めて、自分の過去も本心を誰かにぶつけて見た。
期待はしなくとも、其れでも私を知り距離を離れてくれれば好都合だ。
客観的に考えれば、不幸な話を他者に言いふらして自慢してるような構図に見えるかもしれないが、私は本気でそんなつもりではいない。逆に言いたくないのが本望だ。
「ふむ、つまりは人の付き合い方が解らない…という意味でも有りますね」
蒼志の言葉に若干、違うと反論したくとも、間違ってはないので黙ってることにした。
「そうなんですか…其れはさぞ辛かったでしょう……」
「同情しないで下さい」
「別にしてませんよ。私も同情されるのが嫌いであって、素直に言葉を述べただけです。
其れにですね、辛い想いをしてるのは千歳さんだけじゃないんですよ」
「…えっ?」
彼女から放たれた言葉に、私は声を詰まらせた。
「蛇女が悪忍を育成する学校なのはご存知のハズ…でも思いませんでしたか?何故、この学校は人を簡単に受け入れ過ぎなのか…と」
「…悪は善よりも寛容だから?」
「そうです。善は窮屈で、差別的で正しいことしか受け入れられない…しかし、悪はどうでしょうか?
如何なる理由だろうと、拒むことなく全てを受け入れられるんです。法律など関係ない、裏側の人間から必要とされる悪の理想郷。其れが、秘立蛇女子学園なのです。
と言っても、悪忍にもルールは有りますが…其処は気にしなくとも大丈夫かと」
悪は善よりも寛容である。

私は蒼志さんから蛇女に住まう色々な生徒の事情を聞かされた。
詠さんは驚くことに私と同じ貧民街の出身で、お金持ち（特に鳳凰財閥）や環境に恵まれ幸せに育って来た人間を恨んで来たとか。
日影さんは孤児院で育ち、生まれてから感情に乏しい彼女は周りの人間からバカにされ続け、ある日を境に盗賊団に加入したとか。
未来さんは中学時代からクラスメイトの人間に陰湿な虐めを受けていたらしく、その行動はかなり過激で、虫の死骸や千切れくしゃくしゃになったプリント、荒々しくなった教材が机の中に放り込まれてたり、机の上には油性ペンで「バカ」「死ね」「ゴミ」「役立たず」「何でお前は生きてるの？」なんて罵詈雑言を表した言葉が埋め尽くされたり、一番酷かったのが親に作ってもらった弁当をゴミに放り込まれたりやトイレで水を浴びせられたりと胸糞悪い虐めをされたそうだ。
春花さんは父親が大病院の院長として務めており、毎日帰る時間が遅く、母親は殆ど放ったらかしで、実は裏では不倫や金で医療の失敗を帳消しにする最低の屑で、母親は全ての不満やストレスを解消するべく春花さんを人形のように取り扱い、可愛がってた様子だが、母の溺愛は異常に達しており、其れが中学にまだ続いたらしく、心が壊れかけた彼女は家族諸共、自殺しようと試みたらしい。
そして、現在蛇女子学園の中で最強の座を誇る焔さん。
実力的に言えばこの学校内で彼女以上に勝る者は存在しないらしく、いるとすれば過去に一位を取得した雅緋先輩と言われる凄腕の悪忍だけだろう。
ランキングで言えば焔さんはＮｏ．１で、ヒローで言えばオールマイト的な立場だろう。
そんな彼女の家柄は元々由緒正しい善忍家系に育って来た誇り高き忍の一族。俗に言えば地位も名誉もある、私とは無縁で一瞥される存在だ。
蒼志曰く「私と同じく常に一位を取らなければダメらしい」という、若干彼女の家庭に触れたような気もするが、取り敢えず耳を傾けていた。
そんな彼女は、ある日を境に悪忍となったそうだ。

親の反抗や単に暴れたいからとかではなく、違法を犯してしまってらしい。
悪忍に騙され、正当防衛で対処したものの、親に失望されて家から追い出された経歴を持ち、内一年間は貧民街で育って来たとか。
つまり、彼女が言いたいのはアレだろう。
私だけが不幸なわけではないと言いたいのだろう。例え過去の所業に悩み、苦しもうと、過去を変えれることは出来ずとも、心を楽にすることは出来るのだと、彼女なりの配慮だったんだろう。
「有難う御座います…私に気を遣っていただいて…」
私は冷えたスポーツドリンクのキャップを取り外し、口を付ける。冷たい液体が乾燥した喉を潤い、訓練で熱くなった体温が冷めていく気がした。
どんな犯罪者であれど、心を落ち着かせ、気を楽にしたって咎められたりはしない。誰だって気休めは欲しい。許されるべき存在ではなかろうが、ここは私の住んでた貧民街とは違い、とても過ごし易い。生温い環境に身を置かれる訳でなくとも、殺伐としたあの貧民街よりかは、ずっとマシだ。
私は初めて、誰かに感謝の言葉を述べた。

「それは良かったです♪」

すると彼女はニコッと私に笑顔を見せてくれた。それと同時に、この日初めて私は、人に笑顔を向けられた。
家族や他人にすら、私に見せたことのないその天真爛漫な、眩しい笑顔を私に見せてくれたのが、何よりも嬉しかったのだろう。
その日以降、昔と比べて信じられない程に、私は独りでいることが少なくなって来たのだ。
代わりに私の側には蒼志さんを初め、総司さんに芭蕉さん、芦屋さんに伊吹さんと、個性的なメンバーと一緒にいることが多くなってきた。
以前の私とは思えないほどに、血に塗られ錆切った私の心は、日々

を重ねると供に磨き落とされ、あの頃の非情な自分が消えていくような気がした。
如何なる理由がどうであれ、人を殺した罪は到底許されなくとも、消えることはなくとも、受け入れてくれる蛇女に、居場所と心地よさを感じながら私は学園生活を送って来た。

だから私なりにショックが大きかったのだろう。
日々を重ねるに連れて、少しずつ強さと同時に非情を身につけていく蒼志さんに、何処か不安を感じたのは。

『煩いですね。貴女達のような雑魚共が、もう私と関わらないでくれます？鬱陶しい』

彼女の言葉が、とても信じられなかった。
一体何があったのか、何故、彼女は突然と冷徹な言葉を発したのか。
ムキになった総司さんが彼女に宣戦布告をするも、信じられないことに、あの総司さんを相手に無傷であしらったのだ。
まるで私たちや下級生をゴミ屑のように蔑む眼は、貧民街や忍商会で過ごしてきた大人たちが私に向ける眼と、極似していた。
そして臨海合宿が迫って来た私たち選抜補欠メンバーは、暫く蛇女子学園を離れなければいけなくなった。
蒼志さんは「私は結構です」と、昔の私みたくぶっきら棒な言い方で棄権し、自ら蛇女選抜補欠メンバー筆頭の座を降りたのだ。

そして、私たちが不在の間に半蔵学院達が攻めに来たのと同時に、世間で物騒な噂が流れ出てる敵連合が襲撃し、出資者の道元は現在も行方を眩ませ、本校舎は崩壊。
後々と伊奈佐が蛇女の出資者になるも、紅蓮隊によって魔の手は断ち切られ、現在蛇女の出資者にして一時的に教官として務めてるのが『小尾斗』さん。
何でも階級はカグラであり鈴音先生より技術も優れており、悪忍の

五本の指に入る学園長の隼総よりも実力は上だという。
そんな人に稽古を付けて貰ってる私たちは、こうして時が過ぎ去り現在、仮免許可試験を受けている。
当時、ヒーローに何も良い思い出がない私としては、詠さんの言う偽善者…と呼ぶべき存在なのですが、私の視界に入った人物がどうにも…神経を逆撫でするようで。
其れは、嘗て救いの手を振り払われたあの忌々しい記憶。
呼び覚まされたのは、あの憎悪と憤慨に満ち染まったエンデヴァーの瞳。
私の存在を否定するかのように、振り払ったヒーローの息子、同じ血筋を引く轟焦凍が目の前にいる。

あの人もきっと、エンデヴァーみたいな…あの偽善を言い表した屑になるに違いない。

だから私はあの人を嫌悪する態度を取ってしまった。
見れば見る程に、あの頃の記憶が鮮明に脳内に映し出され、怒りと供に頭に血が上る。
頭の中では解っていても、無意識に動いてしまう。

そんな意地っ張りな私だからこそ、最悪な現状を招いてしまった。

「何を――してんだよ!!」
怒り篭った怒鳴り声が、空気を変える。
悶絶してる真堂と、気持ち良さそうにヨダレを垂らし気絶してる伊吹の服を引っ張りながら、無事救出を果たした緑谷。
彼の怒号を飛ばす声に我に帰る三人は、緑谷へと視線を移す。
「緑谷…」
「ッ――!」

「体育祭で轟焦凍さんに挑んだ…クレイジーな人…」
緑谷の登場に咄嗟に名前を呟く者、彼の言葉に己の誤ちを指摘された顔を浮かべる者、体育祭ての印象を受けた緑谷にクレイジーと呼んでしまう者。
三人は息を呑む。
現状、自分達がどんな身に置かれてるのかを知った三人。それと同時に轟はイナサの方面へ眼をやり、何かを思い出す。
「ちょっと待てよ…」
――コイツ…ずっと靄のように気にかかってたが…まさか、試験の時のアイツか!?
ここでようやく、夜嵐イナサを思い出した轟は絶句する。
今まで、親父を否定すると言わんばかりに頭でいっぱいで周りのことなど気にかけていなかった。それは入学した後の体育祭の前からも同じこと。
何も人の気など考えず、我武者羅に突っ走るようにエンデヴァーを完全否定するためだけの計画を考えていた。
だが、憎悪と義憤が表に出たのだろう。
夜嵐イナサに、酷いことを言ってしまったと自覚した轟は、あの時の言葉に悔いを味わいながら唇を噛みしめる。
(じゃあ、あの千歳って奴にも何かしちまったのか…?アイツのことはどう考えても初対面……けど、俺が思い出してないだけで、アイツだって俺に何かしらの敵意を向けてる以上……)
本人は初対面にして特に直截的な因縁は無いのだが、それでも彼女が轟焦凍と関わりがあると言うのも、微かながらの真実。
(忘れたままじゃいられねえよ…過去も血も……全部、真正面から受け止めて、乗り越えなくちゃならねえ……)
過去を忘れるのではなく、向き合ってこそ本当に乗り越える一線だと焦凍自身はそう解釈している。
しかし――
「取り敢えず――」
時間も敵も、試験は待ってくれない。

「アホ共、寝てろ」
ギャングオルカの野生的な声が耳に聞こえた時は既に遅し、超音波を轟にめがけて…というのはフェイントで、両手をイナサと千歳に向けて投げ飛ばす。
「ッ――!!」
千歳は上手く避けれず、運悪く超音波に当たり体の感覚が麻痺してしまう。
イナサは何とか避けるものの、華風流の水鉄砲が眼玉を狙い撃ち、視覚を奪われたイナサは部下達のセメントガンに直撃し、結果ギャングオルカの攻撃を食らってしまう羽目になる。
「ガッ――!!」
直撃を免れなかったイナサは気を失ったかのように、体に力が入らず落下してしまう。
「ふん、どーよ。狙った獲物は逃さないんだから」
「流石です華風流ちゃん!偉いッス!」
「だーかーらー!子供扱いするなってば!」
部下達に褒められ若干頬を赤く染める華風流は、ジタバタと反抗期の子供のように恥じらう。
向こうの雑談などお構いなく、ギャングオルカは次に轟焦凍に標準を定め、超音波を振るう。
「残念だったな」
その言葉と供に、脳に響く音波に、体が不自由になる。
力が抜け、感覚が麻痺した轟も、イナサと千歳のように力無く前のめりに倒れてしまう。
「全く…勿体ない」
ヒーローの仕事で喧嘩ごとなど論外なのだが、彼等はより一層勿体ない。千歳という単騎でも充分格上と渡り合える知略と戦術を手にしてるのに、性格による相性の悪さで全て活かせず無駄にしている。
イナサと轟も、個性の相性は抜群のはず。
上手く使い合わせればギャングオルカ自身を倒せなくもないのだ

が、千歳と同じく相性の悪さゆえに、喧嘩する始末。
本当に残念だ。その事に呆れるオルカは、横目で見つめた後三人を通り過ぎ、保護施設へと向かっていく。
「まだ…だッ――!」
しかし、地面から這いずる声が、ギャングオルカの歩む足を止める。
地面にひれ伏しながらも、獲物を喰い殺すかのような野生的な視線は、ギャングオルカに似た何かを持っていた。
その眼に宿す殺意と呪怨に、一瞬だけ戦慄を覚えてしまう。
「コイツ…至近距離で超音波を食らったのに……喋る気力もあるのか…なによりも…」
眼が、死んでない。
格上に食らいつく視線に、野生的な動物の本能が動いてる千歳は、闇の世界で生きてきた経験が、彼女の凶暴さを生み出したのだろう。
「まだ、喋れる余裕が有るんだな…驚いた。意識を保てる人間は多くはないが、それでもこの歳で…素晴らしい。
この俺を喰らい殺すような目付き、今まで退治してきた敵とは違う質を感じるぞ…
なのに勿体ないな…」
溜息を吐くオルカは、油断せずトドメを刺すと言わんばかりに眼前に出る。
超音波を纏わせ手を振るオルカ、最後まで諦めまいと意地を見せる彼女。まるで、自然界に生きる猫と鯱のようだ。
「させません――!」
刹那、気優しく生真面目な声が、二人の耳朶を打つ。
向けられた刃を咄嗟に受け止めるギャングオルカは「ほぉ…」と不敵な笑みを浮かべ、言葉を漏らす。
「大丈夫ですか千歳さん!!」
「芭蕉…さん……」
千歳を守るように庇い、ギャングオルカの前に立ち阻むのは芭蕉。忍装束を揺らがせ、大きな墨筆を手に持つ彼女の手には、汗がかいていた。よく見ると微かに体は震えており、力んでるようにも見える。

「救けに来たか…ふむ、良いことだ」
「褒められても…嬉しくありません！」
彼女は引き剥がそうと更に力を入れるも動じず、オルカはゆっくりと歩み寄り、超音波を纏わせる。
「何してるんです芭蕉さん！私なんか放っておくのが一番…敵わない相手に無理して挑む必要など……」
「でも、千歳さんがピンチじゃないですか！危険に晒された仲間を、救けるのは…当然です…から…」
「仲間仲間って……理解不能…です……私に仲間など……」
「そんなこと言わないで下さい！それじゃあ千歳さんはずっと、独りのままじゃないですか!!」
彼女の葛藤に似た大声に、何も言えなくなる。
ずっと独り…と言う言葉に、どこか対抗心と、蒼志を思い出す彼女は、無理に体を動かそうと力を入れる。
「少しは私たちを頼って下さいよ!!!!!」

同じ選抜補欠メンバーの仲間なんだから。
皆まで言わなくとも、自然と脳裏に言葉が浮かぶ千歳は、もう立派なメンバーの一員だ。
芭蕉の優しさに、歯をくいしばる千歳は、嬉しさと其れに対する対抗心が生まれてしまう。
「友情ごっこは終わりでいいか？お前も仲良く眠れよ」
それこそ本当に敵っぽい重圧感ある言葉に、気持ちごと押し潰れそうになる彼女は、恐怖に慄き思わず眼を瞑ってしまう。
「いいや、終わらせねえよ」

轟の熱こもった声に反応するオルカは、視線を移す。
「そこの緑髪！手を離して直ぐに引け!!」
突然声をかけられた彼女は、言われるがままに手を離し距離を取

る。
しまった、逃したと再び彼女に視線を向けるギャングオルカ。
炎を出す轟を構わず「華風流！」と名前を叫び、芭蕉と千歳に手を出す。
「分かってるわよ！」
「いや、させねえッス！」
華風流の焦りの色を浮かべる声に反応するイナサは、烈風を放出する。
その強烈な風は、華風流ではなく（強力な風の影響を受けて思わず態勢が崩れるが）、ギャングオルカに向けられた。
炎と風が、ギャングオルカに混ざり合うように襲いかかる。
炎と風が組み合わさり、荒々しい風と炎の檻がギャングオルカを閉じ込める。
這いずくばる三人の意地が、ギャングオルカに一矢報いる。

１３３話「試験終了」

時は少し遡り。
夜嵐イナサ、轟焦凍、千歳の三名がギャングオルカと華風流のペアに、二人に従う部下達を相手にしてる中、保護施設の守りを固める緑谷に、次々と救助に成功し連れてくる生徒達が見えて来た。
背中に重傷者を抱えた者、足を動かせる者を安全に誘導する者、中には足の骨に響かないよう配慮しお姫様抱っこで駆けつけにくる者。少しずつだが、着々とＦＵＣのメンバーが減っていくのが見受けられる。
「あの皆さん！保護施設の守りを固めるのに適してる個性か忍術の持ち主はいませんか!?」
緑谷の張り上げた声に反応する人命救助の学生達は、緑谷の方に集まる。
「俺は地面を操ることが出来るぜ！範囲は限られてるが…防御なら適役だ！」
「私は竹の忍術で守りを固めることは出来るわ、弱点は炎だけど……相手はギャングオルカに…水使いの忍？なら安心ね」
「俺も使えるよ～！」
数名の学生達が反応に答えてくれることにホッとする緑谷は、的確に指示を出して配置や性能などを鑑みて守りを固める。
保護施設を攻められれば終わりだ、況してや試験で対処出来なければ、それこそプロの世界の中生き残れるのは不可能。現実には通用しないだろう。
「よし、後の問題は……」
轟を始め、千歳とイナサが上手く迎撃できるかどうかだ。
轟焦凍は兎も角、千歳と名乗る少女や推薦入学一位のイナサの実力は直接眼にしてないので、未知数。
信じることしか出来ないが、仮に崩されてしまった場合も考えうる。

「どうやって助けるか…」
戦闘組の三人の方向を少しズラし、ギャングオルカの超音波に気絶させられた二人を見やる。
真堂揺、伊吹は体と意識が麻痺してるため、動くことが出来ない。轟焦凍、千歳が全力を振り絞り対処できるように、二人を助けることに越したことはない…のだが。
問題はあのセメントガンを発してくる部下達に、ギャングオルカの超音波、華風流と呼ばれる少女の未知数な実力。
先ずセメントガンで四肢に直撃でもしたら身動きが封じられるし、ギャングオルカの超音波は遠距離にまで飛ばすことが可能。況しては相手は手練れのプロ、隙を狙って受けて仕舞えば終わりだ。華風流の忍術は水遁で間違いは無いのだろうが、其れにしてはまだ全力を出してるとは思えないし、隠し球を持ってるに違いはない。
ただ我武者羅に助け出すという選択肢には、それなりのリスキーが含まれている。
だからこそ、単純且つ策略も練ずに突っ込むのは無謀に近い。幾ら轟焦凍達三人がいるとは言え、相手は部下を含めて数十人…フルカウルを駆使すればあり得なくもないが、二人を担ぐというのは、人間二人分の重さを背負わなきゃいけないことになるので、難しい。
「援護に適した個性か忍術…」
辺りを見回すも、防御に個性や忍術といった能力で役割を注ぐ者や、他の増援に手を焼く者も見受けられ、余り期待は出来ない。
「あ、伊吹さんが倒れてる…!」
ふと、斜め右後ろから芭蕉の声が聞こえたことに、反射的に振り返る緑谷。
芭蕉は心配性な上に人一倍仲間想いの強い悪忍の忍学生だ。倒れてる仲間を見れば助け出そうと息巻くのも必然。
「えっと、君は……？」
「あっ、ど、どうも……わ、私は芭蕉と申します…えっと、あの中に気絶してる私の仲間が……」

「う、うん…えっと…その事なんだけど……どう助け出すか悩んでて……芭蕉さんって、忍だよね？どういう忍術を使えるのかな？」
「えっと、私の忍術は墨字忍法と言いまして…筆に想いを念じて文字を書く事で、その文字の効果を発揮する忍術なんですが……」
「えっ？」
――普通に強くない？
芭蕉の忍術の性能を耳にした緑谷は、正直驚きと衝撃を隠せなかった。
例えば、「爆」と文字を書けば、爆豪のような爆発を生み出すことも出来れば、「氷」で轟の個性を出したり、「雷」で上鳴の個性を発動することが可能という、オール・フォー・ワンに少し似た凄味が有る。戦闘向きからサポートメインまで主に活躍できるその忍術を聞けば、簡単に救い出すことも可能だろう。
ただ欠点が有るとすれば、彼女の忍術はよく失敗することが多いらしく、余り有効的では無いらしい。
強力な物ほど、難しくなるのだろうか、まだ謎が多い部分もあり、緑谷自身は本当なら直ぐにノートにでも纏めたかったのだが、これ以上の雑談は減点されてしまうのでやめておこう。
「す、凄いね……文字通りの言葉を発揮するなんて…これって下手すればプロヒーローをも凌駕出来るんじゃ…」
「そ、そんな別に私は…!!全然、失敗ばっかしちゃいますし…最近はよく教官に叱られてばかりで…」
「そ、そうなんだ…えっと、早速策があるんだけど…成功できるかな？」
策はこうだ。
先ずは緑谷の足を無理やりでも動かすように出来るだけ早く気絶してる二人に駆けつけ、救助を果たす。
二人を抱える重量感でも、スピードを殺したくはないので、素早さに特化した墨字忍法でカバーしてほしいという、シンプルでわかり易く、簡単な事だ。
「そ、それなら滑走をうまく使えば…」

滑走。
滑らかに走ると書いて、滑走と呼ぶこの文字は、回避性能や予測不可能な動きで相手の攻撃を空振りに終わらせると言った安全面でカバーしやすい能力の効果を発揮する。
一見地味に見えるが、汎用性の高い忍術である。その分操作に難有りでもあるが、体術を如何に活用する緑谷の肉体面と、たった数日で個性を上手く扱えるよう導き出した精神面を備える彼ならば、直ぐに克服は出来るだろう。
こうして、二人が出会って数分の出来事だが、場繋ぎとして最悪な状況を回避し、改善可能な場面へと持ち込むことが出来たのである。

轟！っと激しく燃え盛る灼熱の炎に、竜巻の如く唸りを上げる烈風、二つが混ざり併せ、炎と風の檻を作り出すことで、敵に痛手を与え身動きを封じる合体技は、ギャングオルカを封じ込めるのには充分だった。
熱で風が浮くのなら、下から掬い上げれば良い。
炎と風の相性の良さなど、小学生の理科でも直ぐに理解出来る法則だ。
「身体は動かさなくとも…個性なら話は別…か！」
超音波の影響を受けた三人の内二人は、常に体からでも放つ事が可能な個性だ。
しかし、其れでも個性まで影響は受けてないと言えば嘘になる。個性は身体機能の内一つにして、体内への影響も関係してあるので、麻痺してても問題ないという現象は整理学的な法則としてはあり得ない。
その証拠に、イナサの風の威力・精度は減退してはいるが、遠距離だった為に麻痺の効果が不十分。ギャングオルカの超音波攻撃は確かに驚異的で厄介な能力だが、遠距離であれば効果は薄くなる。
一方轟は至近距離で超音波を浴びてしまった為、完全に動く事は不

可能、更に個性の操作も不安定ではあるが、位置取り的には問題なく、イナサの風をくべることで、風の威力をカバーする事に成功。
千歳は轟と同じく身体を動かす事は出来ない。出来ない…のだが、彼女の忍として、野生的な彼女としての本能が、まだ諦めまいと麻痺状態でありながら、必死に抗い立ち上がろうと、身体を動かそうと力ませる。まるで無理にでも動かそうと体に鞭を入れてるようで、痛々しくも思える彼女の姿には、確かな覚悟と決意が見受けられる。
――先ほどまでの愚行が消えるわけではない…しかし、良いじゃないか。
「フフッ…！」
雨降って地固まる、敗北者に成り下がるより…己の愚行や誤ちに気付き、取り返さんとする必死な抗い。
そう言う足掻きは、決して嫌いではないぞ、お前たち――！
ギャングオルカの強者たるプライドと固執から生まれた、不敵な笑みは、一矢報いることには成功したものの、まるで効いてない様子だ。尤も、ギャングオルカの弱点は熱と乾燥に弱いという、弱点を突くダブルパンチで対抗したにも関わらず、ギャングオルカは微かに眼を細め、笑みを浮かべていた。

「シャチョーーー!!」
部下たちの悲鳴に似た叫び声が、辺りを支配する。
「ちょっ、嘘でしょ!?」
激しく唸る炎風の檻に閉じ込められたギャングオルカを目の当たりにした華風流も、流石に動揺を隠せない。
「どーすんだっぺ!?シャチっぽいシャチョーは熱と乾燥に滅法弱いんだぞ！」
「落ち着きなさいよアンタ達！良い？取り敢えず私たちがやれるべき事は、先ず炎と風を放出する二人を阻止すること！アンタ達は風を、炎は私がやるわ！オーケー？」
『サーイエッサー!!』
状況が覆されるケースなど、上の世界ではよくある話。動揺はする

も、其れでも冷静さと思考力を欠けない辺り、流石はギャングオルカの元で研修を重ねて来ただけの事は有る。
華風流の指示に受け応える部下達は、返事を返す。腕に装着してあるセメントガンでイナサに標準を定める部下達は、すぐ様発砲しようと試みるも
「墨字忍法――斬！」
芭蕉のか弱くも、覇気の篭った声に呼応するように、元々札に墨字で描かれた斬の文字が、効果を発揮し斬撃を飛ばす。
殺傷力は無くとも、相手を翻弄するのには充分。彼女の忍法による斬撃を浴びた部下達は、昔ケラの様に悲鳴を上げ吹き飛んでしまう。
「チッ…蛇女の生徒も厄介ね…けど、セメントガンの効果を受けてるのも確か…」
二丁の水鉄砲を構える華風流は、苛立ち横目で芭蕉を睨むも、部下達だって弱いわけではない。死角からセメントガンで攻めて、彼女の動きを封じようと浴びせてるので、攻撃は通っている。
「悪いけど、終わらせてあげるわ」
華風流は水鉄砲を、地べたに這いずる轟目掛けて発射。
鋭い水の弾が轟を襲うも氷の個性を発動し壁にする事で、水の弾幕を阻止することに成功。
「アンタ…同時に出すことも出来るわけ!?複合個性も良いところじゃないのよ！しかもオルカの超音波浴びてんのに…」
華風流の悪態吐くセリフに、心の中で「まあな」と呟く轟は、炎と氷を休む事なく放出し続ける。
確かに炎と氷の同時発動は中々に操作が難しく、動作が鈍くなるので、戦術としては現段階としては宜しくないのだが…
(今動けねえ状態なら…別に問題ねえよな)
身動きが取れない状況下に於いては、存分に出し惜しみせず力を出すことが可能なので、問題はない。
近づけさせなければ、こっちが邪魔される事もないので、このまま休む事なく延々と炎と氷を出せば良い。但し能力においても限度があるため、永遠に続くとも言えないのだが…

「こうなったら…半々に別れてヘルプ崩すか？」
「いや待て！」
１人の部下の声に制するもう一人の部下は、何かの動きに反応し、臨時体制を取るも
「敵を制圧します――！」

緑谷出久のワン・フォー・オールのシュートスタイルで呆気なく、木っ端微塵に崩される。
蹴りの衝撃と、的確に狙う彼のコントロールの良さと繊細さに、呆気なく翻弄されるのも無理は無く、スピード勝負では緑谷の方が一線を超えていた。
「強っ!?なんちゅー学生…セメントガンでガンガン浴びせて固めろ！」
「じゃあ借りるね」
「はえっ？」
何処からか聞き慣れない声に、素っ頓狂な声を上げる部下は、気付けば腕に尻尾が絡みつかれ、セメントガンを発射し止めようにも遅く、尻尾に腕を利用され、仲間にセメントガンを浴びせてしまう形になった。
「尾白くん！怪我人は!?」
「もう済んだって！後何人かがこっちに加勢来るから、もう一踏ん張りだ！」
ＦＵＣの数は残り三名ほどで、着々と終わりに近づいて来ている。
守りを固めながら、救助を進め、敵の足止めというのは、初戦にしながら中々に良い結果が出せている。まだ何名かに無駄な動きや素人じみたものは感じるも、其れでも何人かが協力し場を繋ぐことによって、最悪な結果を阻止することが出来たのも、皆のお陰でも有る。
「オレ達も加勢しに来たぞ」
他にも、柳生や常闇、芦戸の姿も見受けられ、何十人かの部下達は成す術なく痛手を受ける始末。

「ゾロゾロ湧いて来たな…一掃射撃だ！せめて華風流ちゃんの邪魔だけはさせるな！」
部下一人の声に全員首を縦に頷く全員は、セメントガンと陣形を固めて構えを取る。
これなら死角からの攻撃を受けることなく、何十人かの動きは防ぎ固めることが可能だと考えたのだろう。しかし、其れも生徒に崩されることになるなどいざ知らず。
「ガッ――…？」
鈍い衝撃が、頬に伝わり吹き飛ばされる一人の部下。なんだ何だと集中が切れる者共は、また一人と次々に吹き飛んでいく。

「ふう、間に合って良かったわ」

忽然と姿を現したのは蛙吹梅雨。
全く気が付かなかった…気配もなく、まるで忍のように他の者達に気付かれることなく敵の懐に入り、難なくあしらう彼女に何処か大胆な所を感じる。
「蛙吹さんいつの間に!?」
理由は簡単。
個性を磨く練習で実戦レベルに到達し、結果彼女が生み出したのは〝保護色〟という新技を身についた。
相手の眼を欺き、敵の陣地へ攻め入る彼女の行動っぷりは、流石としか言いようがない。
他にも、雄英だけが全てではない。

「そちらにイナサが向かった筈なんだが…こんなに残ってたとは思わなんだ…これでは士傑の名折れよ！」
士傑高校二年のクラス委員長、毛原長昌。
体毛全てを個性の伸毛で伸ばしまくり、絡みつく毛を利用し敵を行動不能に陥れるこの技は、拘束用としては立派な戦術だろう。
「チッ！千歳のヤツめ、油断したな？」

ジャララ…と不愉快な金属音を奏で、空間を支配するかのごとく鞭のように振り回すのは、総司。
美しき金髪は多少乱れており、紅き瞳には僅かな屈辱感が伝わる。
「こんな結果では…〝教官〟に何て言われるか…想像するだけで腹立たしい!!」
どうやら自分たちの教官にかなりの不満を感じてるらしく、良い想い出が無いそうで、総司にとってはとてもらしくない言動だった。
次々と敵が薙ぎ倒されて行く光景は、ヒーローと忍側がとても優勢を敷いてるようで、このまま行けば合格も僅かだろう。

――有る一点を除いて。

まだ、こちらには救助が済ませてない学生と、何よりも対処出来てない敵が二名存在する。
一人は、抜忍役の華風流。
轟を封じると息巻くもアッサリ見破られ看破された彼女は、違う行動に出ていた。
もう一人は、炎と風という地獄に相応しい監獄に閉じ込められたギャングオルカ。彼の方が尤も重傷に近いだろうレベル。しかし、彼はなお何の表情を変えず、平然と突っ立っている。
対峙しているのは、倒れ伏せている三人を除いて芭蕉だけ。
彼女の手元には武器はない。ギャングオルカが握ったまま離さず、現在炎と風の中でもなお、肌身離さずと言った様に、自分の武器でも扱うかの様に、握っているからだ。
「炎と風の熱風牢獄…か。良いアイデアじゃないか。
効果は覿面、もし超音波による効果を受けず、フルパワーで放出されていれば、これの倍以上の効果が発揮されたであろう合体技。
並の敵であれば、諦め泣いて、許しを乞うだろう……」
彼の言葉から返ってきたのは、賞賛だった。
皮肉にも感じるが、何より恐ろしかったのは、彼が平然と無傷でいることが、一番の衝撃だった。

そもそも炎というのは、火傷を負わせる危険性がある個性だ。風という相性の良い属性と絡ませるのなら尚一層。例え相手がギャングオルカでは無いとしても、無傷なんてのは免れない。
「ただ、そうでなかった場合…又は、既に相手の策を見抜き技が免れた場合は？対処され看破されたケースは？
次の一手を講じておくものが戦場としての常識…少なくとも、忍側では下忍以下でも解るぞ」
ギャングオルカが指を鳴らした刹那、大量の水が上から雨のごとく降り注ぐ。
いや、雨というよりもまるで滝に近いイメージだ。他にもバケツで上から水を捨て去る様な想像にも近い。
風が来ようと関係ない、上から水を浴びせれば問題ないのだ。
水を浴びる爽快感をＢＧＭに奏で、乾燥と熱を吹き飛ばし、肌の潤いを再現して復活するギャングオルカは、超音波で一掃する。
この手の正体は華風流だ。
秘伝動物のルカの尻尾を利用し、大量の水を一気に放出することで、竜巻の如く手も足も出ずに相手を翻弄する忍術を、上に放出することで強風の法則に従うことなくギャングオルカに水を浴びせるという算段だ。
空間式把握、距離の計算、何処を狙えばギャングオルカに行き届くのか、頭脳が優れた華風流にとっては造作もないこと。
熱と風を吹き飛ばしたギャングオルカは、一歩一歩と重みある足踏みで千歳と芭蕉に近づき、無防備な芭蕉の胸ぐらを掴み、顔を近づける。
「で？次は???」
鋭利な刃物の歯、初めて他者に見せる野生的な眼、口を大きく開く鯱の口は、正しく海の王者に相応しい称号だ。
敵の笑顔もここまで来ればゾッとする。手も足も出ない芭蕉は「ヒッ…！」と思わず声を漏らしてしまう。

万策尽きたと思われた直後、腹部に重い衝撃を受けたギャングオルカは、一気に表情を歪ませる。
「彼女から……離れて…下さい……」
声の主、そしてギャングオルカの腹部に邪弾を撃ったのは千歳。
体への麻痺や負担がかかっていながらも、それでも全ての気力と恨みを火縄銃に込め発砲することで、普通の何十倍もの威力の銃弾を撃つことが出来る。
「千歳さん!!」
「……」
芭蕉の声とは裏腹に、ギャングオルカは無言で相手を見下ろす。地べたに這いずる彼女の火縄銃を、蹴りで退かす。
「そんな…やはり……効いて…ない?」
常人が食らえば重傷は免れない、全身全霊を込めた一撃を喰らってもなお、立ち尽くすシャチに驚愕するのは必然。
「いや、今のは応えた。中々に良い一撃だったじゃないか……しかし、この食うか食われるかと問われる弱肉強食の中、簡単に食われる側になるほど俺も落ちぶれちゃあいない」
片手で芭蕉の胸ぐらを掴み、もう片方の手に持つ墨筆を遠くへ投げ飛ばすギャングオルカ。
後ろからはルカを離して二丁銃でギャングオルカの後を追う華風流も見受けられる。
「教えてやるよ――絶対強者のプライドを、食物連鎖の頂点をな!!!」
喉から吐き出す覇気の篭った大声に、二人はピクリと反応してしまう。圧倒的な捕食者の眼、幾多ものの血を流させたであろう刃物に近いギザギザに並べられた歯、鮫に近いトサカに、獲物を喰らい尽くすであろう口は、正しく自分たちが食われる側に回ってることをより強く実感させられた。
蛇と鯱の勝敗など、殆ど眼に見えてる状態。
二人を助けるべく行動を出そうにも、もはや一手を封じられた轟とイナサは悔やむ様に諦観する。

ギャングオルカの爪先が、千歳をえぐる様に振り下ろされた瞬間――

「二人から、離れて!!」

優しくも、怒気を孕んだかのような声に反応したギャングオルカは、すぐさま腕で顔を守るように防御に測る。

二本の刃物が、腕に食い込み血が滴り落ちる。

「コイツは……半蔵と小百合の…孫!」

相手の正体は飛鳥。

二つの刀を力任せに振り下ろし、ギャングオルカに攻撃を仕掛けるも防がれた以上、手を出さない。だが、此方も同じこと。しかし、胸ぐらを掴んでた芭蕉を離せば、相手にカウンターを仕掛けることは出来る。片方の手で飛鳥の刀を手に持ち相手の行動を防ぐ。

「武器を封じればお前も…」

――終わりだ。

そう告ごうと口を開いた刹那、彼女は手に持ってた武器を態と離すと、体を駆使して二本の足をギャングオルカの頭めがけてふるい落とす。簡潔に言えばかかと落としだ。

「しまッ――」

ギャングオルカの凶暴な一面とは違い、初めて見せる焦り色の表情。飛鳥は御構い無しと、二本の腕を封じたギャングオルカに追撃を実行する。

「オルカ待ってて!!」

華風流は瞬時に水鉄砲を発射させようと試みるも、手に重い衝撃が迸る。

「痛ッ――!」

「飛鳥さんの邪魔はさせません!!」

何処か頼もしく聞こえる男の声の主は緑谷出久。

蹴りで華風流の二丁の水鉄砲を離させ、少し遠い方へ銃が吹き飛んでしまう。

華風流にも焦燥の一面が見受けられた。

銃が無ければ、殆どフルに活用できないというのに、こんな時に限って妨害を受けるとは思わなかった。
華風流は「ルカ！お願い助けて!!」と腹の底から大声を出し助けを乞う。こんな非常時だからこそ、ルカの手を借りればまだ勝機は有る。地面から現れたルカは「お嬢！助けるぜ！」と大きな口を開き緑谷を襲う。
体制も悪い今、攻められれば避けられない。お互い緊迫と化した空気の流れに沿いながら、どう打破するかを――

『終了～～～～ッッッ!!!!!』

アナウンスが流れ、ハッと我に帰る数名の学生と敵は、攻撃を止める。
試験終了の合図に、全員は立ち止まる。
どうやら配置されたＦＵＣのメンバーは全員無事に回収することに成功したらしい。
長かったようだ短かったような、緊迫とした試験は、今を持って幕を閉じた。
緑谷と飛鳥、他にも芭蕉や千歳、轟とイナサは安堵の息を吐く。もしこのまま流れに沿っていけば、どちらかがやられていた。
因みに最後に救出を果たしたのは爆豪、上鳴、切島の仲良し三人ペアだ。
「シャチョーに華風流さん…お疲れ様です!!」
「すいません自分達、仕事できませんでした…」
「お怪我は大丈夫でしょうか？」
一斉に部下達がギャングオルカと華風流の元に駆けつけに来る。華風流は二丁銃を再び拾い上げ、痛みが生じる手をぱっぱと払う。
対してギャングオルカは表情を変えず「嗚呼…」と受け答える。
「お前達もご苦労だった…華風流も、以前とは違い立派に動いていた……感謝する」
「……いーわよ誉めなくたって…其れにしても改めて凄味を感じたわ

…炎と風、そして千歳の忍術を受けても立ち尽くすなんて…」
「何を言う、お前がいなけりゃあ最悪、元々所持してたペットボトルの量でも足りなかったかもしれん。超音波で吹き飛ばすのも良いが…ダメージが残っちまうのには変わりはない。
何よりも、一番脅威と感じ取ったのは飛鳥の方だ…」
「飛鳥？小百合様の孫よね？少し話は聞いたことあるけど…まあ、そりゃあ元カグラの血を継いでるんだもの。
それなりに実力があるのも頷けるし…けど、炎と風の方が一番脅威じゃないの？」
「確かにな…だが、飛鳥のヤツ…俺の弱点を狙い突こうとした」
実はギャングオルカの弱点はもう一つ存在する。
炎と風、そして頭部。
鯱と言う生き物は、超音波を纏わせて頭部で頭突きをする習性があるも、実はとても柔らかいのである。
多くのものはメロンと名付けているが、鯨と違って脳油を固めることは出来ないため、頭を突かれるのは炎や風よりも一番致命的なダメージを受けるのだ。
「でも華風流ちゃんにギャングオルカさんも凄いっすよ…だって、『拘束用』プロテクターを装着してるのに、あんなにも猛威を振るえるなんて……」
もし今の言葉を他の生徒に聞かれれば絶望に耳を疑うだろう。
つまり、華風流とギャングオルカは全然本気ではなかったという事だ。
例えで言うのであれば、雄英期末実技試験で、教師達が身につけてた圧縮重りを捉えれば良い。
――いや、炎と風の檻の渦は俺も痛手を受けた。周りからは無傷に見えたのだろうが、所詮は単に誤魔化してるだけ…それ程に魅力だった上に千歳の最後の悪足掻きは、正直堪えたな。
まだ腹部に痛みが出てる…なるほど、これが闇に生きてきた獣の為せる技…鈴音に続き小尾斗も、中々に良い生徒を持ってるじゃないか。

そして最後の飛鳥…アイツは、武術でも習得してるのだろうか？蹴りの技は、とても素人じみた動きではなかった…かといって玄人という訳でもない、中途半端な表現だが、頭を狙われば終わりだった…弱点を知ってたのか、或いは気まぐれか…何にせよ、あと一歩早ければどうなってたことか…

「フフ、今年の生徒は、中々に活きが良いじゃあないか…強者が増えるのは好ましい事…アイツらの経験の糧になれば、喜ばしいのだがな…」

先ほどの敵らしき面影は既にどこにも無く、生徒思いの優しい鯱である。

「そーだ華風流、お前小百合の孫と話さなくても良いのか？」

「…別に。どーせまた会うだろうし…」

「そうか…」

こうして第二次試験は幕を閉じ、もう直ぐ試験の合否が発表される。

誰が脱落したのか、誰が受かったのか、そんな悩ましい時間の中で少年少女達は時間を過ごす。

１３４話「合否その後に」

二次試験を終えた受験者達全員は、月光と閃光の言われた指示に従い会場へと足を運び、試験の合格発表を目に通す。

採点方式はＦＵＣのメンバーとヒーロー公安委員会（＋月光、閃光の特別審査員含め）の二重減点方式で拝見し、個々の数値を見出していた。

つまり…早い話、危機的状況の中、どれだけ間違いのない行動を取れたのかを審査する形式なのである。因みに不合格ラインは５０点に達した時点で落ちるらしい。

受かってる受験者は忍学生とヒーロー学生隔てる事なく同時に五十音順に並べてあるので、こうして気を配ってくれるのは有難い。

受かったか、受かってないか…の雑談流れた空気が辺りを支配する中、結果は――

半蔵学院

飛鳥、６９点

柳生、８４点

雲雀、６３点

この通り、半蔵学院のメンバーは何ら問題なかったようで、難なく合格突破。

「やったーー！合格したー！」

「当然だ……他の学校とは違い、雄英側と手を組んでたことがオレ達の救いでもあるな」

「なんとか合格できたね皆んな！」

また、雄英側も飛鳥達と同じく殆どの生徒も合格に達しており、危なかった者もいれば当然…

「ふざ……けんなよ……!!」

試験に落ち、不合格点のラインに足を踏み入れた者も存在する。

爆豪勝己。

成績や実績、彼なりの才能センスを鑑みるにヒーローとしての実力

は限りなく本物に近い。下手なプロヒーローよりも確実にレベルは上だろう。しかし其れはあくまで実績による結果論でしかなく、役割やヒーローらしい振る舞い、立場、其れ等の点は性格によってほぼ減点を食らってるので、爆豪らしいと言えばそうだし、脱落という言葉だけを見てみるとらしくなさもある。何とも歯痒い結果だろう。当の本人は奥歯を噛み締め苛立つ眼で何度も自分の名前を探している。

五十音順で並べられてる名前に、爆という文字すらも無いのにも関わらずだ。

「……」

そして実はもう一人、脱落者は存在する。

冷たい影に浸るような、無情の表情を映し出す轟焦凍の顔色は変わらなかった。

其れも当然だ。重傷者に「自分で助かれや」なんて批判的な言葉を浴びせ、救助らしい行動も見せない爆豪とは違い、やるべき時に私情を挟み真堂や伊吹に迷惑を掛けてしまう始末。とてもではないが、危機的な状況で喧嘩を起こし挽回しようと、試験に受かるほど世の中甘くはない。

「……」

「ヒエラルキーどんまい！」

「峰田くん、ここは空気を読もう」

横から背の小さな煩悩の塊が何か挑発じみた声を掛けて来たものの、特に気にする素振りを見せない轟は、貰った資料に目を通し溜息を吐く。

この資料は個々人の試験に対応するデータが載っており、合格点の上に不十分な点も存在するため、何が減点で何が間違えたのか、細かく書かれてるので有難いし、大勢の受験者の中、ここまで細かく詳細を記してくれるのは素直に凄いと思う。流石はヒーロー公安委員会。ちなみに忍学生は全て、月光と閃光が目を通し、結果論や注意書きも添えてあるので、あの二人も中々に素晴らしい。

「よ、よ、夜嵐…やっぱ無かった…」

「……」

轟が不合格なら、残りの二人も同じだろう。
夜嵐イナサ、千歳も合格至らず、不合格点に陥り浮かない顔を浮かべる。
轟焦凍だけが悪いわけではない、当然の帰結。
解っていた、薄々…結果は目に見えていた。
しかし、こうも現実を突き付けられると、やはり辛いことには変わりはない。
「千歳以外、皆んな合格か…」
一方、秘立蛇女子学園選抜補欠メンバーは千歳を除き全員合格。凛とした美しい声を発する総司は、自分の点数を見ながら舌打ちをする。
「はうぅん、危なかったです～。私５１点です、他の皆んなも見せて下さ～い！」
「わ、私は７１点…初動から至らぬ点と、気が動揺し挙動不審な動きが見受けられるため、減点が…」
「なぬ!?総司９０点じゃと!?何故そんな不満がってるのじゃ!?!?」
「私は常に完璧主義者だ、１００点というベストな点が出せないようではな…９０点などと言う半端な点を貫おうと、頂点に立つこと出来ず喜べるか。寧ろ恥晒しまである」
だが内心実は喜んでたりもする総司は、表面では常に自分が上位であり完璧主義者を貫き通してるだけで、根は真面目で優しい忍なのだ。
これも、ほぼ誰にも見せずに自主訓練を通したお陰でもある。
「千歳さん…元気、出しましょう?」
「……」
隣で優しく声をかけてくれる芭蕉にすら振り向かない千歳は、過去と今の記憶や感情、何よりも芭蕉の先ほどの言葉に心揺らぐ彼女は、キュッと制服のスカートの裾を握る。
こうなったのは、自分のせいだ――私は…
「……」
そんな千歳を横目で、冷静に見つめる総司は、暫くして間を空け声

をかける。
「千歳、ちょっとこっち来い」
「えっ?あっ、ちょっ!腕を引っ張らないで下さい!」
「お前たちはここにいろ、筆頭の待機命令だ。なに、直ぐに終わる」
引っ張られるまま、為すがままに総司に連れてかれる千歳は、彼女の唐突たる行動に頭の中で混乱しながら、何されるのか予想付かず、人並みのような集団を潜り抜けていく。
彼女の手に多少の違和感を覚えながら、それでも掴んだ手を離さず、彼女に従うしか道はない。
一体何をしようと言うのか…
しかし、人混みの視界が晴れ、ある人物の集団を眼にした私は、総司さんが何をしたいのか、私に何をさせたいのか、直感で理解した。
「雄英の諸君たち、愉しむ会話の中失礼するぞ!」
彼女の声に呼応するように振り向く雄英の全員は、息を詰まらせ驚くような表情を引き釣り立てる。
其れもその筈、何せ突然声をかけたのは総司であり、今彼女に引っ張られてるのは、千歳なのだ。
盛り上がってた会話は一気に冷めるように、沈黙と化す。
「えっと、総司さんだっけ?どうしたんです…か?」
「ふむ、千歳が皆に言いたいことが有ってな、是非耳を傾けて欲しい。ホラ、言え」
「言えって、何余計な事を…」
「お前、本当はコイツらに言うべき言葉があるんじゃないか?轟に対してなら尚更だろ?折角私が謝罪するチャンスを与えたんだ。お前の言葉で、ハッキリと伝えろ」
どうやら彼女は既に見通していたらしい。
総司の正論に物言えぬ千歳は、渋々と承諾し、彼女より一歩前に出る。そして――
「すみませんでした……」

謝罪の言葉を述べるのと同時に、深々と頭を下げる千歳に、一同は眼を疑う。
先ほどの忌み嫌う反抗的な態度とは違い、正直困惑してしまうのは無理もなかろう。それこそ、まるで喉に何かが詰まったような感覚に、絶句してしまう。
「初対面の貴方達に、無礼な振る舞いをしてしまい、大変申し訳有りませんでした…其れに爆豪さんも、神野区の一件が有るにも関わらず批判的な言葉を浴びせてしまったこと、大変深くお詫び申し上げます……
何よりも轟さん…貴方に多大な迷惑をお掛けして、誠に申し訳ありませんでした……」
頭を上げず、声を震わせる彼女に、流石の轟も面食らう様子だ。爆豪は「ケッ…嫌味かよクソが」と愚痴をこぼすも、千歳は何も反応の意を示さず、頭を下げ続けている。
正直、自分たちに敵意を示していた彼女がここまでするとは思ってもおらず、反応に困っている。
女子達も浮かない顔立ちだ。
「急に喧嘩吹っかけて御免なさいだぁ??おいおいおい、そんな虫の良い話があったら誰だって――」
「あー、なぁ爆豪、もう良いんじゃねえか?」
「あ〝ぁ〝…?」
苛立ちの連鎖に続く爆豪に、静止の言葉を投げかけた人物は、意外な事や、上鳴電気。
普段チャラいイメージがあり、個性を使い続けるとアホ面を晒す彼も、今回に限っては珍しく真剣な顔立ちだ。
「えっと〜、ホラさ。あの千歳ちゃんがこーして俺らに来て謝りに来たんだから、其れで終わりで良いじゃんか。な?爆豪」
「急にしゃしゃり出んなアホ面!」
「だから何でこんな時に限ってまでアホ面呼ばわりされなきゃいけねーのよ!?そりゃあ不合格で腑に落ちねえのも解るし、クラス内の実

技テスト赤点、ヤオモモの力添えあっての執筆試験で赤点ギリギリの俺が合格してたら、そりゃあアホ面って呼びたくなるのも無理ねーけどさ…」
「無意識にディスってんのかテメェおい」
「まーまー。んでもさ、千歳ちゃん…だっけ。
こうして態々俺らに謝りに来たって事は、多分轟と関係してるのかもしれねーけどさ、俺らのことも悪いことしたなって思って、頭下げに来たんだろ？なら、もう良いじゃん。俺はバカだけど、悪いことしてないって思ってるヤツが、他所の所まで来て頭下げるヤツは居ねえと思うの、普通に考えて」
「……」
上鳴はバカでアホ面などと呼ばれているが、チャラいだのナンパ野郎なんて悪質なレッテル（事実なので）を貼られてるが、何も根は悪いのでは無い。
千歳は、震えてた体を休め、頭を上げずとも上鳴の言葉に耳を傾ける。
「あーでも！ホラ、あの時一次試験のこと、覚えてる？アレはちょっとやり過ぎだろって言うか…作戦の内ってのは解るんだけど、あそこまで酷くする必要はなかったんじゃ無いかなってのはあるかな。
ぶっちゃけ俺らヒーロー目指してる学生だし、千歳ちゃんの価値基準や物事の融通も違うと思う……」
今思い返せば、酷い暴言に、脱落者をクズ呼ばわりする彼女に、神経を疑ったりもした。
幾ら悪忍でも…いや、悪忍だからこそ本当に自分たちと協力関係を結ぶ気は有るのかと、不審に思ったりもした。
しかし、そんな彼女だからこそ、自分たちに頭を下げに来たのには、何かしらの理由と本当に謝罪したいと言う良心的な意味も含んでいるのではないかと、理解するのにそこまで時間は掛からなかった。
非情な彼女を目の当たりにした上鳴だからこそ、言える言葉なのだ。
「だからさ、もー終わり！

折角千歳ちゃんは可愛いんだからさ、もっと穏やかに考えよーぜ！なっ？他の皆んなも、もう良いよな？」

意外性を感じる一同は、お互い隣同士の人と顔を見合わせ、ぎこちなく頷く素ぶりを見せる辺り、恐らくは納得したのだろう。轟は個人的な話があると思うので、まだ話は終わってないが、少なくとも爆豪は…と視線を送る。

上鳴や周りの生徒の送られる視線に鬱陶しさを感じる彼は、くしゃくしゃと髪を掻き毟り「勝手にしやがれクソが、俺はもう疲れた」と一言言い残すと集団から外れるように何処かへ向かっていく。あの様子だと、どうやら納得したようだ。

「千歳……」

轟は一歩前に足を踏み入れる。

彼女はまだ、頭を上げて居ない。

彼が反応するまで、ずっとこうしているのだろうか…

「私は……昔、貴方の父親に酷いことを言われ、エンデヴァーへの嫌悪を示していました。

誰もが聞けば、下らないような、失笑する話です……私の愚かな私情で、他人に、況してや初対面の轟焦凍さんに迷惑をかけてしまった…

血の繋がりという理由で、貴方を見るたびにエンデヴァーを思い出して…ずっと不愉快で嫌いでした……だけど、貴方を恨む理由にはならない…

親は親で、子は子…エンデヴァーがああだから、息子がそうな訳無いと言うのに、バカみたいに嫌厭し避けて、貴方を不愉快な想いにさせてしまった…そして、今を招いてしまった私に責任があります……本当に……御免なさい……」

なんて思考に浸っていると、彼女は口を開いた。

一言一言の言葉の重みに、余程の責任と罪悪感が生まれてるのだろう。そう察した轟は口を開こうとするも

「轟ィ！お取り込み中失礼ッ!!」

別の方角から、野太い大声が聞こえ反射的に反応する。

腹の底から湧き出る熱意篭ったこの声の主は、間違いなく夜嵐イナサだ。
また、試験に脱落し轟焦凍、千歳と同じく原因のうち一人。
「ゴメン!!!」
高らかな身長を折り畳むように、全身全霊で頭に地面をぶつけるイナサ。簡潔に言えば、謝罪。その二文字を体現してるような行動に、目を大きく見開く。
千歳に続いてイナサまで…どういう流れだと心の片隅に困惑が生まれる。
「幾ら俺が私怨混じりでぶつけたとは言え、合格逃したのは俺の心の狭さのせいだ！本当にゴメン!!」
己に強い責任と罪悪感を背負う彼は、熱血漢にして根はとても優しくて真面目だ。だからこそ、そんな彼の友好的な手を振り払った自分は尚更、あの時の言動を悔やんでしまう。
頭下げる二人の姿を前に轟も、無言で頭を下げる。
「良いよ二人とも、俺の方も悪い…。原因は俺にあって、責める立場じゃねえよ…
夜嵐の場合、お前が熱く意見をぶつけて来たから、思い出せたこともあるし、あの時の振る舞いも…正直悪かったって思ってる。先に謝るのは俺の方だよ、すまねえ…。
千歳の場合は、俺が思い出してないだけで何かしたんじゃねえかって思ったけど…俺が直接、お前を傷付けてないことを知れて良かったし、安心した。
俺の親父が、お前に何をしたのか、千歳の過去に親父と何が有ったのかは知らない…
でも、俺もアイツの血が通ってる以上、千歳や夜嵐含めて、向き合わなきゃいけないって、ケジメがついた」
エンデヴァーが気荒い性格なのも、性根が屑なのも、息子である自分が一番よく知っている。それこそ、血反吐を吐くように。
だからこそ、周りの視線をないがしろにするのでは無く、ヒーローとしての道を進むのならば、受け止めなければならない。

「だから、父の代わりになって謝罪させてくれ…二人とも、申し訳ねえ…俺の親父が原因でお前らに不快な想いを背負わせちまって…すまなかった」
とても父親を憎み否定してた当時の少年とは思えぬ彼の言葉に、二人は頭を上げる。
言葉で許されない事だと解っている。たった一つの些細な事が原因で、拍車が掛かり、人は狂う。
ほんの僅かな理由が原因で、人は善にも悪にも染まりやすい。人間の心は強く生き続け、時に脆く壊れ易い。
嘗てのイナサや千歳がそうだ。
エンデヴァーにとっては、小さな子どもの事情や尊敬の眼差しなど、邪魔以外の何でもない、得無しの所業だと認識してるだろう。しかし、ほんの些細な事柄で今を生むのなら、改善しなければならない。少なくとも、今の父親はどう思ってるかは不明だが…
「ふっ、話は済んだようだな…では、私たちもそろそろ戻ろう…行くぞ」
勝手に連れて来ては帰ろうなんて身勝手では?と文句の一つや二つ、普通なら言ってるだろうが、もし総司がこうして強引にまで引き連れて来なければ、きっと和解すること叶わなかっただろう。
少なくとも今回の件で理解し認識したことは、轟焦凍は、エンデヴァーにはならない、ということだ。
親が親なら子も子、という様に、轟焦凍はきっとエンデヴァーのような屑に成り下がってしまうのではないかと言う、不確かな想像を頭の中によぎらせていた。だが、そんな心配は無用だったようだ。
これで少しは気が楽になっただろう…しかし、だからと言って自分のこれまでの経緯による犯罪や薄汚れた手が消え去る事は断じて無い。
それでも私は幸せになる資格も、生きて良い資格だって無い。
結局、轟焦凍との関係性が改善しただけであって、所詮は消耗品。この価値観だけは、轟焦凍だろうと芭蕉だろうと、上鳴だろうと、誰に言われても決して変えられはしない。

そう易々と変わって仕舞えば、私の手で散り去った命を否定する事になる。其れを捨て去るほどに、私はまだ化け物になっていない。

私は、救われなくても良い道具だから…気に病む事は、ないのだ。

一度傷付き壊れかけた心は、幾星霜と時が過ぎ去ろうと、治る事は難しい。況してや、人殺しの自分なら尚のこと。

己の暗く深い感情に浸りながら、私は総司さんの後ろ姿をついて行く。

流れや結果はどうであれ、無事仮免試験は終了。

仮免許可証を得た自分たちは、ヒーローや忍と同等の権利を行使できる立場となり、敵との戦闘や事件・事故から救助など、上からの指示がなくとも自分たちの判断で動ける事になるらしく、それと同時に行動の一つ一つに大きな社会的責任が生じることにも繋がるので、意識して立場を振る舞うことを常日頃から心がけるようにしなければならない。忍側では善忍はまだしも、悪忍の場合は規制化が進む一方だ。

オールマイトというヒーローにとっても忍にとっても、欠かせない偉大たる存在が力尽きた今、次は自分たちが規範となり抑制できる存在にならねばならない。

今回取得したのはあくまで、仮のヒーロー活動認可資格免許、イメージでは半人前程度の扱いで、殆どが自己防衛の為に存在しているような物である。

目良さん曰く、不合格に陥った受験者もチャンスはまだあるそうで、三ヶ月の特別講習を開き、個別テストで結果が出せれば仮免許を発行するらしい。

理由としてはこの先の未来に向かう社会への対応や、理不尽を覆し抵抗する術、そしてより多くの質の高いヒーローと忍を育て上げ、社会を築き上げる為。少しでもオールマイトの欠けた穴を補う為にも、

最善を尽くす所存だそうだ。
その内一次試験を乗り越えた２００名を最優先に育て上げ、至らぬ点を修復し合格させるのが見込みだそうだ。
当然、轟焦凍、爆豪勝己、夜嵐イナサ、千歳にもまだまだチャンスは有るので、絶望的という訳でもない。
三ヶ月、学校の行事や授業で忙しさが一層増してしまうが、これさえ乗り切れば、ヒーローとしての一歩を踏み出すことが出来ると言う訳だ。

こうしてようやく、僕たちはまた一歩、目標へと近づいて行く!!

試験終了の帰り道。
仮免許を取得した生徒たちは、晴れやかな気持ちで嬉しそうに心踊ってる人間が見えるのは、数から察してごく僅かで、大半は受からなかった者も多く、浮かない顔立ちをしてる生徒たちが多いだろう。
しかし受験に合格しても浮かない顔立ちをしてる生徒は、確かに存在する。

「ふぅん、仮免試験の結果は5人中4人が合格したわけか…へぇ、ふぅ〜ん。そうかそうか、4人ね…つまり、一人試験に落ちた不合格者がいるという訳か…へぇ。
まあ、一つの試験会場に２１００人もの中から２００人に合格者が絞られる訳だしたな、合格も一筋縄でいかないだろうなぁ……うん、うんうん。
だかな、仮の免許試験であって本番ではないよな？幾ら合格率が低かろうとあんな低レベルな試験で不合格者が出てることに俺は軽い頭痛がするんだが…
まあ試験は試験だしな、一応受かった訳だが…お前は言ったよな？『私に死角など無い、全員必ず受かってみせるから要らぬ心配はするな』って言ってたよなぁ総司。俺はお前の言葉を一欠片も信じてはいなかったが、ここまで清々しく俺に嘘を吐く日が来るとは思ってもい

なかったよ。
まあ何がともあれ、低レベルだろうと受かったことには変わりはない…そこまでしてお前が完璧主義者を貫き通したいのなら、そこまでして完璧という自惚れた名誉を大切に維持したいのなら、敢えて一言…

――褒めてやっても良いぞ、総司」
秘立蛇女子学園選抜補欠メンバー一同である。
彼女たちは現に、上から目線で見下ろす教官の説教を浴びている真っ最中なのである。伊吹は興奮のあまり息遣いが荒くなり、芭蕉や芦屋は耐え忍び、千歳は憤りを隠すように目を瞑り、総司は屈辱と恥に心を痛め唇を噛みしめる。
目の前にいる男の名は――小尾斗
半々羽織の和服に、背には蛇女の紋章を背負っているのが特徴。口元は包帯で覆い隠し、黒い眼はまるで爬虫類の蛇に似せている。
首元には二匹の蛇、アオダイショウとマムシを巻き連れており、二匹は総司を睨みつけている。
現在、秘立蛇女子学園の教官の立場にして不在たる鈴音の代わりを務めている身。正真正銘――彼は歴としたカグラである。
(クッ…だから教官は来て欲しくないんだ…!覚悟はしていたが、やはりここまで責められるのはキツイ…寛容な私としても、限度というものがある…)
総司は心の中で悪態を吐きながら、表情を出さないようにと恥じらいと屈辱に身を焦がしながら強く拳を握り締める。
「先程両備から報告があってな。紫、両備、両奈は難なく仮免試験を突破、ゆえに選抜メンバーは誰一人欠かさず仮免許を取得したそうだ。で??一方、お前たちは何だ?何で脱落者がいる?何食わぬ顔で平然と突っ立っている?
なぁ、千歳」
総司から千歳に標的を定めるように捲したてる小尾斗に、僅かに力む千歳は何も言い返さず、俯せている。

「そ、そんな言い方…しないで下さい教官！ち、千歳さんばかりが、悪いわけじゃ、ないんです…よ？だ、だから…あまり悪口を言うのは、やめて…下さい…！」
「そうじゃそうじゃ！別に仮免許だろうと素直に喜んだって良いであろう？何故に儂らがお主に叱られる立場にならんといかんのじゃ！」
「はううぅん、ダメ…小尾斗教官のネチネチした毒舌の言葉責めが…快感を刺激しますうぅ～！」
　責められる千歳を庇うように、芭蕉、芦屋、伊吹（若干偏ってるが）の三人が抗議する。
　確かに教官からすれば大したことでは無いのだろうが、自分達からして見れば、一流の忍を目指す第一歩なのだ。
「シャアァァーーーーーーッッ!!!」
「シュルルルルーーーッ!!」
『ひっ!?』
　無表情で何も言い返さない小尾斗の代わりに、「黙れや」と吠えて威嚇をする二匹の蛇に、三人はゾッと悲鳴を上げる。
　まるでご主人様を守る忠実な僕のように見えるアオダイショウとマムシは、小尾斗の身体を守るように巻き付いて行く。
「お前ら全然ダメだな。
　何故叱られる？結局お前らは其れすらも解らない低レベル…だからいつまで経ってもお前らは下忍なんだ格下なんだ。
　仲間だからこその連帯責任だろう？お前らの大好きな仲間というヤツだ。仲間の為に一緒になって罵倒を受けるのも叱られるのも当たり前、其れが普通だ違うか？」
　ネチネチネチネチとしつこく言葉で責める彼の正論にぐぅの音も出ない一同は、怒りを鎮めて気を保つ。
　ぶっちゃけ、教官を言葉で表すのなら実力のある卑怯者だ。
「千歳。俺は一体何のためにわざわざ時間を費やしてお前らに稽古を付けてやったんだろうな？
　俺の時間はどうする？失った時間は巻き戻すことも出来ない、結果を出せないヤツに時間を払った俺が馬鹿みたいじゃないか？

あろうことかお前の不合格という事実が俺の顔に泥を塗ったんだ。
良いか？解らないようだから教えてやるよ。
雅緋は復帰に掛かるのに一週間入院による治療が必要と医者から言われたよ。だが忌夢はまだ治療が必要で戻るのに時間がかかる。鈴音も意識こそ回復したが忍として動くとは叶わない、学園長の隼総は手酷い大きな重傷を負い、後遺症が残るそうだ。まあ、鈴音見たく生活に支障が出ないよりかはずっとマシだがな…
選抜メンバーが不在の場合は代わりにお前ら補欠メンバーが穴を埋めて選抜の役目を全うするんだ。
神野区後、善かれ悪かれ社会は、未来は廻り始め時間も増えていく。当然、蛇女からも救援の依頼や選抜のやつらが不在になることもある。
つまりだ、選抜メンバーの穴をお前らが埋めなければならないんだ。その穴は一体誰が埋める？人手が足りない今、有象無象の学生、下忍にすらなれてない忍学生が多すぎる中、補欠が必要なんだ自覚しろ」
「……」
忌み嫌うようにネチネチとしつこく執念深く言葉を浴びせる小尾斗に、千歳は無言のまま頭を下げる。
「申し訳ありません…私の不甲斐なさで、教官の気持ちに応えることが出来ず、迷惑をかけてしまい…深く反省する所存であります……次の結果に応えるよう、頑張ります……」
全て事実。
小尾斗の正論に言葉が出ないのは必然。
これが下忍とカグラの、天と地の差。
「……ふぅん、ようやく意味のある言葉が聞けたな。
そうか、へぇ…次の結果ねぇ…うん、それも敢えて信じないようにしておこう。
これ以上お前らの説教に垂れてると、明日に備えてる任務に出向出来なくなっては困るからな」
最後の最後まで嫌味の連発に苛立ちが積もるも、ようやく教官がい

なくなると全員はホッと息を吐き、開放感に脱力する。
「あ～…疲れたのぉ…何なんじゃあの教官は……鬼じゃ悪魔じゃ…」
「でも、確かに人当たりが悪い教官ですけど…私たちは感謝しないといけませんし、歯向かうことは出来ませんからね…」
「嗚呼…何せ小尾斗は、秘立蛇女子学園創始者の末裔だからな…現段階で全ての費用は小尾斗が莫大な金を投資してる訳だし、強くは言えない…」
小尾斗はカグラにして数々の妖魔討伐の任務を難なく遂行している、屈指の実力を持つ忍だ。
今まで成功し報酬を得た金額は殆ど手につけておらず、全ては蛇女子学園の校舎に注ぎ込んでるので、もし彼が不在になって仕舞えば、それこそどうにもならない。
「千歳さん…気に病むことは無いですよ。小尾斗さんも言葉は強いですけど、私たちの為を思って言ってるんですから…ね？」
しかし、鈴音や噂に聞いてた伊奈佐とは違いこれまた意外なこと、彼は如何なる場合においても余程のことがない限り、手を上げないのだ。
女子に謀略を払った姿など、芭蕉からして見て一度もない。
「解ってます、解ってますから…だから、少し静かにさせて下さい…」
ぶっきら棒な口調で冷静に答える彼女も、どうやら気に悩んではいないらしく、どこかホッとする芭蕉は「そうですか…」と苦笑を浮かべるのであった。

路地裏。
空はもう夕暮れを迎え真っ黒に塗りつぶされている。そんな闇夜の中、人気のない一本道へと進む一人の少女、士傑の生徒である現見ケミィは着信音の鳴る携帯に手を伸ばし耳を当てる。
『やっと繋がった!!おい、お前今までどこ行ってたんだ!?

――トガ!!』
姿がドロドロと滑りある液体が、顔や身体を溶かしていき、正体を現したのはトガヒミコ。
士傑高校の制服や帽子を被りながら、ニヘラァと薄気味悪い笑顔を浮かべる彼女は「えへへ～♪」とルンルン気分で足を運ぶ。
『定期連絡は怠らなよ！一人捕まれば全員が危ないんだ！』
「大丈夫なんです其れに素敵な遊びも出来ましたし、有意義な時間を過ごせました。
龍姫ちゃんに伝えといて下さい――龍式・武術の伝授を有難う御座います、ちゃんと実戦で使えましたって…♪其れと弔くんにも伝えといて下さい朗報です」
頬を赤らめ、目を細める彼女は、スカートのポケットから一つの試験管を取り出し、一滴の血をのほほんと眺めなが宣言した。

「緑谷くんの血をゲットしました。これで彼の姿にも変身できますよぉ～♪って」
トガヒミコ　――個性『変身』
他者の血を摂取することで、他者の姿に変身できる。

闇夜に住まう悪意は、血塗られた牙を研ぎ磨き、月夜に照らされる彼女は夜を歩く。

１３５話「自由を求めた開放」

朝――目が覚めると、窓から差し込む眩しい日差しが私を襲い、思わず反射的に目を強く瞑ってしまう。

直射日光の強さに直視出来ない私は、眠た気な瞼を腕で擦り、背筋を伸ばす。

「うぅ～……ん？今、何時だっけ……」

射し込む光から逃げるように、背を向ける私はベッドの横に置いてあるテーブルの上から目覚まし時計を手に持ち現在の時刻を確認する。

ＡＭ：１１時４２分。

…うん、遅起きだ。生活的リズムとしては宜しくない時間。もう直ぐ昼食の時間帯に入るであろうこの時刻は、周りから見ればダラけてると言われても否定はできない。

「うぁ～…昨日、深夜遅くまでテレビ観てたからな～…」

特に何もやってなかったが、暇潰し程度と就寝に陥るまで特に何もすることが無かったので、普通に遅くまで起きてただけだ。因みに昨日の就寝時間（正確には今日とも呼ぶが）はＡＭ：１時５６分。１０時間分の睡眠を取った訳か…

確かより多くの睡眠を取る人間は基本、体力が多いと聞く。睡眠と言う安らぐ言葉で勘違いしやすいが、人は眠りに就くと体力を消費するように体はできているのだ。

例えば老人は早寝早起きをするだろう。しかし其れは身体が弱体化しつつ、体力が疎かになるためであって、多くの老人は早朝に目覚めることが多いそうだ。だからこそ、若者の自分たちはこんなにも遅く堕落的な生活を送ることだって許される。

「今日は…いないかな～…っと」

なんて自分の都合良い回想に浸りながら、私は窓を開けてはベランダに立つ。

上のベランダからグイッと顔を出し、外の景色を眺める私は、監視を行うも、どれもこれも監視して観ればまともな人間ばっかり…

元気よく仕事を務める極一般的なサラリーマンに、談笑しながら歩行する三人組の婦人達、仲良く手を握り締めながら初々しく微笑み合うカップル。

これが半神野区崩壊に平和の象徴不在後、犯罪率上昇中の御世代だとは思えない。

私は追っ手が近くにいないか、又はどこか監視してないか確認をし終えると、リモコンを操作しテレビの電源を点ける。

最初に流れた映像はニュース。

今話題として盛り上がってるのが、Ｎｏ．２ヒーロー、エンデヴァーに関してのヒーローニュース。

何やら象徴不在後の彼に関してどう思いますか？とか、彼がオールマイトの代役として適任者か？だの、単純にエンデヴァーについてどう考えて？だの、明らかに半分嫌味でもあるんじゃねえの？って本音をブチまけたい位に住民に声をかけてる辺り、マスゴミってよーまー本当に暇なんだなって思っちゃったりする。

「ここの所ずっとこればっかかぁ……」

神野区の激戦後。現時点での社会は善かれ悪かれ未来へ加速するなんて言うけど、私の観てる中ではより一層過激に悪化してる様に見える。

平和の象徴が不在の今、悪の抑止力として謳われたオールマイトはもう何処にもいない。

「あ〜、ウチは絶対イヤだ…なんか同情出来ちゃうな、エンデヴァーのこと」

事件解決数史上最多の肩書きを誇るＮｏ．２ヒーロー、エンデヴァー。

人々の不安と困難の大部分はオールマイト引退後、彼にのしかかり、批判と願望の声が絶え間ないと聞く。

何よりも本人が一番皮肉であろうことは、オールマイトと比較され

てしまう事だろう。
彼がオールマイトのことをどう思っているのか詳しく知らないし、多くの国民がオールマイトとエンデヴァーが接する場面すら見たことが無いと聞く。
私の推測としては恐らく、エンデヴァーとオールマイトの間に何か見えない壁でもあるのだろう…そりゃそうだよね、Ｎｏ．１とＮｏ．２のやり取りなんて裏事、つまり本人同士でしか解らないし。
しかし、願っても無いＮｏ．１と言う不釣り合いで彼には似合わない称号を得た本人としては焦燥と憤慨に身を焦がしてしまうんじゃ無いだろうか？
況してや全国の国民を背負い守り、Ｎｏ．１としての肩書きを持ちながら生きていくことは、恥晒しよりも酷いものだ。
勝手に期待されても困りますよってのは、痛いほど分かる。
私はベランダの窓とカーテンを閉めて、太陽の光に遮断された薄暗い密室の部屋で寝巻を脱ぐ。
ホザボサとした長い茶髪を揺らがせながら、上から下の順に脱いで行き、白い肌が露わになる。太ももや、桜色のブラジャーで止められてる豊満な胸、透き通った背中、肩や腕には忌々しい傷痕が残っており、これを見るたびに父親のことを思い出す。
「……」
覇気の篭ってない無気力な眼で、私はボロいクローゼットに手を伸ばし服を着る。
学生服だと平日と今の時間に違和感を感じると思うので、敢えて私服で街を巡回する。本当はボロい一軒家から出て調査を行うのは余り気か乗らないが、追っ手が来ないことを祈りながら、私はテレビの電源を消し外へ出る。
外の新鮮な空気を吸い込む私は、一先ず深呼吸をする。なるべく怪しまれない様に少し可愛げのある格好にしてみたが、似合うだろうか…
まあ、しょうがないよね？小・中学でずっとお洒落やファッション

のことなどに時間を費やすことは愚か、遊ぶ暇さえ作らせてくれなかったから、こういう…なんて言うのかな？自分が女の子としてどう似合うのか、どう可愛く見えるのか、詳しく解らないのだ。
　周りのアイツらは特にどうとも気にしない様子だけど、私だって一応女の子の身である訳で…
「……でも、女子陣に褒められたり、可愛いとか言われたりするのも、嬉しいかな…」
　まぁ、女子も女子で頭のネジ吹っ飛んでるヤツが数名いるんだけどね？あっ、決してバカにしたりしてないからね？いや寧ろ仲間バカにしたり蔑まされたりするヤツ嫌いだから。そこまで人間を捨ててない。
　外に出た私は足早と範囲内のルートを巡回し、警察やヒーローの眼、忍の追っ手などを意識し警戒しながら、何の変哲も無い街を歩んで行く。
　特に一般人の視線から察して怪しむ素ぶりは見えないので、ここの周辺は一先ず大丈夫だろう。
「今日の収穫は無いかな～？ここ数日間ずっと何事も起きてないけど…」
　起きたら其れはそれで警察やヒーロー、ついでに忍までここの地域を警備強化し、調査し辛くなるが、辛抱しなければならない。
　逆に考えろ、同志を探し出すことが出来るじゃないか。
　まあ、当然今の御世代は外れも多い訳で、個性を持て余した輩や抜忍は以前と比べて数多く姿を現している。
「キャーーッ!?ちょっ、誰か！強盗よ捕まえて！ヒーロー!!」
　とても犯罪率が上昇してるとは思えない街並を歩く中、女性の甲高い悲鳴が上がり、私はすぐ様視線と供に意識を集中する。
　事件の匂いだ。
　私は素早く、でもって怪しまれない反応で事件が発生した方角へ突っ走る。
「アッハハはチョロいなレジのババアも！すげぇぜイエロー！お前の図体のデカさと馬鹿力でレジごと持ってくとか！」

「いやいやいやぁスリの白浪姐さん、我慢出来なくてやっちゃったの！俺の取柄は図体デカイのと力自慢が売り文句でさ☆」
コンビニの方から自動ドアを突き破るよう豪快な登場をしたのは異常型と若い女性の二人組み。
一人は図体デカイ黄色の体色をしたイッカククジラが擬人化したであろう敵。もう一人は下忍と思われる抜忍。青い忍装束を纏ってるので、忍で間違いはないだろう。
レジを片手で持ち逃げし、肩に乗っかる女性はレジの強盗に胸が踊ってるのか、欲望が満たされてかなり満足してるそうだ。
「なんだ…コンビニレジの一般強盗…ハズレだぁ」
あんな光景これで１０回は観たな。
なに？最近の敵はコンビニに恨みでもあるのかしらん？最初のおにぎり万引きと比べればこっちの方がハードル高いと思うしウケもいいと思うけど、結局はショーモないね…しかも実力的に雑魚だし。
「誰か頼むよォヒーローいないの!?」
そりゃあ簡単にヒーロー来ちゃったらねぇ…って側から心の中で呟いていると。
「すいません！私下忍ですが事件の噂に嗅ぎつけて参りました！」
おっ、ヒーローではないけど忍がやって来た。
見た所高卒かな？見た目ではアテにならないこともあるけど、善忍が来てくれたようで、周りの人間は一安し…
「参りましたじゃねえよボケェェ!!」
「がっ――!?!!?」
しかし、現実は思い通りにはいかない。想像通りの展開に描いてくれない。
背後から突如、姿を現したのは竹刀を持ったスケバンの不良女だ。竹刀を背後から頭蓋骨を砕くように強く嬲り打ち、後頭部を強打した女性は痛みに悶絶し気を失う。
「ハッハハだっせぇバーーカ!!」
「おい早くしろよイエロー！あのバカレジごと持って来やがった！」
「忍法、マキビシの術ー！ハハッ！辺り一面マキビシだらけで近づけ

ねーだろ！」
「こんな効率よく派手に金稼げるとか、汗水垂らして飯食うよりこっちの方が効率よくね？ハハッ、本当信じらんねーよな」
「クジラの姉御！もう直ぐに出発しましょう!!」
「はははっ！この世は金と暴力さ！良いかい？アタイらの名前しかとその身に刻んときな！チーム〝レザボア愚連ドッグス〟よく覚えときなタコ女！」
赤信号、皆で渡れば怖くないとは正にこのこと。
最近は敵と抜忍が徒党を組み、計画的に行動する奴らが目立ち始めた。
因みに愚連とは紅蓮隊のことでは無く愚連、つまり愚かな連中と書いて愚連らしい。忍がグレたことから、忍グレなんて呼ぶ連中が多々存在しているらしく、焔紅蓮隊とは一切縁もゆかりもない無関係な名前である。
忍グレの存在が発覚したのは、神野区後の一週間後位に頻繁的に増えるようになり、器物損害ならまだ可愛いレベルだが、犯罪レベルの案件にまで取り掛かり、ニュースでは忍の評価が少しずつ低下していき、上層部も頭を悩ませてるようで私としては歓喜的な結果だ。ああ言う自分が上の立場で偉くふんぞり返ってる野郎どもが、悩ませ泡吹く姿を想像するのは愉快なものだ。
善忍と悪忍は現段階に於いては、ヒーローと手を組むべき助力の存在だ。しかし、こう言った問題騒動を起こす抜忍は容赦が無く、犯罪行動まで染まる姿は、誰が何を言おうと敵そのものだ。
逆に、最近として問題行動を起こさない抜忍は、自警団扱いとされている。焔紅蓮隊が良い例えだろう、他にも自警団として扱われてる抜忍は少なからず影に潜みながら生活を送っていたりもする。
「ただ、それでも私たちと同じ生き辛いって言う分には変わらないだろうけど…」
中でも忍の追っ手に迫られる人生を送るのは中々に厳しく、夜中に寝る際も警戒を怠ってはいけないので、兎に角安心が湧く生活が送れないのだ。

♪～♪～♪
「ん？電話？」
懐から鳴り響いた着信音に気付いた私は咄嗟に耳に手を当てる。
「もしもし？蒼志？」
『お久しぶりです、元気にしてましたか？なんて言葉は不釣り合いでしょうけど…どうです調子は？』
「あ～ん～…ビミョー…」
『何ですかそのはっきりしない返答は？まさか、忍の追っ手に狙われてるとかではありませんよね？』
「違うって。たしかに絶対安全という保証が無い今じゃ警備も強化されてるし、得なくもない話だけど…それだったらもっと緊迫感有るよ？こんな女子とも思えない気怠い声なんてしないし」
『そう…ですか。フム…なら、良いですが……所で、ここ暫くの間調査はどうです？何か収穫ありましたか？』
「コンプレスと儀欄から連絡があったのと、荼毘と漆月は知らねえか？って連絡しか来てないわね…因みにここんところの騒ぎがあるとすればコンビニ強盗くらいかな？」
『コンビニ強盗って…、こっちは銀行強盗に人質誘拐犯など物騒な事件が絶え間なく私の目前で起こってるので活動に悪いですね…しかも追っ手の目から察して自由に上手く動けないというのも、トガヒミコの言う生き易い世の中にしたいと仰る気持ちは解らなくもないかと……』
「あははっ、確かに！
――そーだ蒼志、アンタ荼毘と漆月のこと知らない？」
『知りませんよ。私もかれこれずっと連絡をしてるのですが…一向に繋がらなくて…私として連合のメンバーは誰一人とて欠けて欲しくないですし、裏切りという線も考え難いですが…
取り敢えず死柄木が今度全員に収集を掛けるそうなので、荼毘と漆月も来るはずでしょう』
「そう…なら良いけど……まあ、お互い頑張りましょう蒼志」
『ええ、貴女こそ捕まるなんてヘマ犯さないで下さいね？龍姫』

プツンッ――！
ツーッ、ツーッと通話の切れた音が私の耳の中に残り、端末を再び懐にしまう。

ちょっと、遅れたけど…私のことについて語ろっか？
私の名前は龍姫――本名は竜胆沙汰。敵連合のメンバーにして抜忍の身である私は、実は善忍家系で育った忍なのだ。
そんな私が一体なぜ、敵連合なんていう犯罪集団の味方に加入してるのかって、疑問に思う者は少なからず存在するだろう。
私の忍術は――『龍闘忍法』
闘気を操り龍の姿へ具現化させる私の忍術は、戦術や対人戦としてはかなり優れてる方だ。
遁術は無。龍の闘気が属性に触れることで、その属性の効果を吸い、そのまんまの属性の効果を発揮する、いわば吸収型だ。
例えば蒼志の蒼炎忍法を出せば、そのまま炎を吸い効果を己のものとするし、相手によって属性も変われば、吸収出来ない遁術は無い。
まあ、龍脈からその効果が来てる訳なんだけど…其れはオール・フォー・ワンだっけ、死柄木の師匠が少しネタバレしちゃったので想像で解ると思う。

私の家系は善忍と言っても、そこらの学生とは違いどちらかと言えばエリートに近い肩書きを背負ってた。
何せ私の家は龍式武術家の元で生まれ育った娘で、次の師範後継者として産まれた時点で既に選ばれた。
龍式武術とは、戦闘力と技術技量の全てを注ぎ込まれた、忍術を一切使わない武道の事である。
だから龍式武術家に産まれ育ったと聞けば大方察しが付くだろうが、私も龍式武術を学んでたし、少なからず基礎から中級までは身に付けている。

でもねぇ…私は弱いんだ其れでも、才能が無かったんだよ。

何しても上手くいかない。
血反吐の努力を注ぎ込んでも報われない。
無能の私には誰からも褒めてくれない。
逆に才能があるとすれはトガヒミコか漆月辺り…
神野区の激戦に終止符が打たれ、漆月はあの後別人のように変わり始め、彼女は「私に武術を教えて」なんて言い出して来た。
最初は戸惑ったし驚いた。
才能の無い私でも教授することは可能なのかと疑問を心に募らせながら、その流れに沿うように学びたいと物申して来たのはトガヒミコとスピナーだ。
私は止むを得ず、親に言われ培った知識をそのまんま伝えたわけなんだけど…トガヒミコは忍らしい訓練なんて受けてないのに、一週間で基礎を学んだわけ、凄いよね？
スピナーは筋肉に悲鳴が上がってギブアップしたので、始めて三日で終わったから何とも言えないけど…
でも、一番の才能を持ってるのは漆月。
一体、どうやって生まれればあんな風になれるのか、理解にするのに頭が痛くなる…
漆月はたった三日で私の教え込んだ武術を全て習得し、今じゃ私よりも段位的にも実力的にも全て上だ。
ああ言うのを才能マンと言うのだろうか…

おっと、話の論点が逸れてしまったようで……
私が幼少期の頃。立派な師範となり道場の跡を継ぐべく、小さい子供が受けて良いレベルでは無い鍛錬を毎日強いられた。
忍の訓練を受けるのはどの忍家系の子供も同じだろうし、親の期待に応える為にも懸命に頑張ろうと、文句の垂れ言は吐かずめげずに、親の指示に従って来た。更に言えば武術も学ばなければならないので、他の忍学生よりもハードだった。
何せ訓練を受け始めたのが四歳の頃なので、今思い返せば尚更無茶

をやらされたなと言葉が漏れるのは無理もない。
でも幾ら訓練を続けても、武術を磨こうと私は他の子と比べて一向に成長しなかった。
成長速度が遅いのか、鍛錬が少ないのか、父親は焦りを覚え私に過激な訓練を受けさせた。訓練のミスや口答えをしてしまうと、父親に何度も虐待に近い暴力を振るわれ、言う事聞かなければ丸一日飯や風呂は入らせず反省室なんて言う可愛いレベルとは違い、ボロい倉庫に一晩中入れられたこともあった。それでも柳の木に近いボロボロな体で何度も激痛に耐え忍ながら訓練を受け続けて来た私は、心も壊れかけていた。
そんな私だからこそ、こう思った。

なんで、忍にならなきゃいけないのだろうか…と。

そう考えるのは歪だろうか？
そう考える私は異端者だろうか？
そう考えてはいけないのだろうか？
願っても無い希望に託され、望んでも無い後継者として育てられ、私に何のメリットが有るのだろうか？
そう考えてしまう私は、もうこの頃から既に忍に向いてなかったのだろう。
１２歳の頃から、親との頻繁たる喧嘩が勃発し始めた。
忍になりたくない、何で私が後継者に選ばれなきゃいけないのか、勝手に他人の希望を自分に擦り付けるな、と。
だけど父は『ダメだ！我が家系は代々、武術家として伝統を築き上げて来たのだ。独り身のお前が後継者にならなければ、龍式家は誰が跡を継ぐ？お前の身勝手なワガママに付き合う暇はない！そんな戯言を言う暇があるのなら訓練しろ訓練！お前には死塾月閃女学館に入学し、我が道場を背負う義務があるのだ！』聞く耳持たずで私の言葉なんて理解してくれやしない。
父親にとって大事な価値基準は娘よりも道場なのだ。本当に、自分

の父親がコイツなのかと疑いを持ちたくなる。
だから、中学まで続いても跡取りの事柄や、才能の無い私を自分以上に鍛えさせるべく、遊ぶ暇すら作ってくれなかったし、友達作りすら許してくれやしない。
学校帰りなら尚のこと――一人で帰宅路に足を運ぶ私は、周りの女子学生を見ると、自分も違う場所に生まれたら、こう言った普通の人生を送れたんじゃ無いかって思う。
食べ歩きながらお互い携帯を見あったり、
何人かの友人と誘ってカラオケに行ったり、
一緒にファッションについて語ったり、
女の子らしい生活を送れたんじゃ無いのかな。
なんて、ありもしない幸せを望みながら私は毎日を過ごし、日々を重ねるに連れて忍に対する嫌悪感が生じていた。
大体忍と言うのは上層部の命令に従う駒であり、大名や主人の為に命を投げ捨てる鉄砲玉のような存在だ。其の考えに対して父は当然だと言わんばかりの言葉を立てる。
そんな考えに、私はどうしても納得出来なかった。
忍だって生き物云々関係なく一人の人間だ。
そんな人間だけが特別に死んでも良いという考えに賛同できない私は、ある一件をきっかけに家出をした。

『本物を！取り戻さねばならない！誰かが、誰かが血に染まらねば――！』

ヒーロー殺し・ステイン
別名・忍殺しステインなんて悪名背負う彼の所業は、終わりの垣間見えた執念に、私は思わず身震いした。
彼の歪にして殺意と悪意が溢れる執念は、只ならぬ憤慨と憎悪に染まった言葉は、正しく反乱者。忍やヒーローの、現実の常識を壊さんとする姿勢は、私の心の導火線に火を点けるのに充分だった。
別に意思を継ごうとか、フォロワー地味たことを口に出すつもりは

無いが、今の自分を変えれるんじゃ無いかと思った。
そこから、私は決別するように最後に父親に言ってやった。
私は道場の跡継ぎはしたくないし、忍にもなりたくない、と…ダメ元で言ってみたけど結果は同じ…父は猛激怒し反抗する私を痛め付けるように猛威を振るった。
まあ結果は見ての通り…力及ばずと言った形で、私は血まみれになりながらも床に倒れ伏せていた。
口の中には鉄の味が広がり、肩や腕には深い火傷を負い、こうして今も忌々しい傷痕が嫌味のように残されている。
肋骨は折れたわ、内臓にダメージもあったで、滅多打ちにされ死にかけた私は決心した。

もうこの家とは縁を切ろう――話し合っても埒が明かない。

こうして私は、敵連合の味方に着いたって訳。
スピナーや荼毘、トガみたいにステインに固執する訳じゃないけど、でもステインと繋がりが確認されたわけだし、入るならここしかないだろうと、そう思ったからだ。

私たちだって、自由が欲しい。
己の欲望に忠実でも良いじゃないか。
好き勝手に生きるのが一番だ。
別に逃げ出したと罵倒を受けても気にしないし、寧ろこれで良かったと心の底から悔いは無かった。
私以外にも漆月を始め、鎌倉や蒼志、闇に黒佐波（捕まっちゃったけど）など、忍に不満を抱き反する者や、衝動を抑えきれない者、連合の味方になりたい者、差別せず死柄木は受け入れてくれた。
逃げ場として利用してるように見えるかもしれないが、私を受け入れてくれた以上、棟梁はもちろん、仲間の皆んなやメンバーの一員として役立ちたいのが本望だ。
「まぁその分、月閃の取り消しもあったし、親が汚名を被ってはいい気

味だよね」
また、私のこれからの行動は全て父親に対する反抗。恥を晒し泥を塗らせる。
私は駒じゃないし、道具に成り下がる気も更々無い。少なくとも連合の中に所属してるメンバーの多くがそうじゃないだろうか？私は――

――ズドオオオォォーーーン!!

違う方角から轟く爆発音に、私は足を止める。
方角に視線を向けると、黒煙が巻き起こっており、恐らく爆発による火事が発生したのだろう。
大勢の人間が蟻の群れと化し、逃げ去るように悲鳴を上げながら一目散へと逃げ去っていく。
「今度は…なに？」
これでまた小さな事件だったら欝憤晴らしに忍術使って暴れてやろうかしら？なんて半分冗談地味た言葉を並べながら現場へ足を踏み入れると
「――えっ？」
私は、視界に映る現場に無意識に息を詰まらせる。
燃え盛る火事、先程小型トラックで逃げてたであろうコンビニの強盗犯の〝レザボア愚連ドッグス〟が、原型のない無残な姿で大炎上し歪な光景を晒していた。
イエローと呼ばれてたイッカククジラはタイヤと混ざっており、白浪と呼ばれてた下忍は、電柱に埋まれたように手足が出てて少し気色悪い。
他のメンバーはコンクリートの道路やトラックに混ざるように溶け込まれており、何が起きたのか頭の中での理解が追いつかなかった。
「おいおい、何だよ…拍子抜けだな。

大の大人が…況してや敵と抜忍が徒党を組んで小さなコンビニのレジを盗むだけ？
変だと思う…普通これだけ集まればもう少し大きな目的を持つと思うのに……」

事を起こした敵と思われるメンバーは五人、道路のど真ん中で燃え盛るトラックを前に、並び揃え立ち尽くしていた。
一人は全身に鱗を纏った翼を持ち、トカゲらしい男は尖ったマスクで口元を隠している。
一人は全身黒ずくめのスーツを着用し、ハット帽子がお似合いの男性側らしき人物はペストマスクで顔面を覆っている。
信号の上に座り込む白いコートを着た男は、同じく顔を覆うペストマスクで札束を数えている。
図体がデカいのが特徴的で、拳にはメリケンサックを着用し、ペストマスク…にしてプロレスラーのような風貌は限りなくパワーファイターに近いだろう男性は、拳に地面を突き立ててる。
最後の一人は、真ん中に立ち尽くし小さな声で独り言を呟いている。客観的に見えて恐らくこの四人のメンバーを纏める頭と思われる人物だ。
「世間ではお前らのことを何て言うか知ってるか？
――病人さ。お前ら全員病気だよ？病人は俺と壊理で治さなくちゃあなぁ？」
言葉から察して、間違いなく大物に近い人物だ。
今まで拝観して来た有象無象なチンピラとはレベルが違うコイツは、限りなく強い。
「若ァ、次はどうします？」
ここで竜人っぽい男が、棟梁と思わる人物に言葉を投げかける。
「クロノ、金は？」
「はい、レジの金は全部頂きやした。騒動に駆けつけに来るヒーローや警察…ああ、勿論忍が来る前にこっちもトンズラずらかりやしょーや……――『オーバーホール』」

クロノと呼ばれる人物はオーバーホールにそう言うと、若頭は無言のまま焼き尽くす火事を見届ける。
「どいつもこいつも…病人ばっかだな…」
さもゴミでも見るかのような蔑んだ視線を送るオーバーホールは、軽く咳払いをし立ち去ろうとする。

「…成る程ね。イカれた現実社会に不満を持つ人間は、穴の貉同士で居場所を作るってワケね…」
私は何故かと高揚感が昂り、久し振りに胸を躍らせた。
今までは、仲間探しに夢中になっててアレだけど…今度は組織ごと引き入れるという話も…悪くはないかもしれない。
物陰で眺めてた私は口角を釣り上げ、敵グループに目を付けた。

上層部や親の言いなりなど関係なく、上という立場のしがらみに支配されることなく、今の自分を大切にして欲しい。
今の忍達は上の常識や価値基準に心を縛られてる人間が数多くいる。其れを解放することで、私と同じ悩み苦しむ忍を救うことに繋がると信じて行動してる。
大事なのは自分が何になりたいのか、何をしたいのか…だ。忍としての基準など関係なく、人間としての心を大事にして欲しいのが、善忍だった私から言える一言だ。

場所は打って変わり、半蔵学院と雄英高校Ａ組が仮免試験に挑む頃――とある特殊拘置所では。
「そろそろ後期が始まるだろう？いや、もう始まってるのかな？忍とヒーローが手を組み合う世代はどうだい？陽花が望んでた結果と、僕が望んでた結果が一致したのかな？なんて…ハハは。
まあ前書きは置いといて…だ。君はてっきり弟子の教育に専念するものかと思ってたけど、意外だなぁ――それで？僕に何を求めに来たんだい？――〝オールマイト〟」

タルタロスの面会室にて

「ケジメを付けるだけさ――オール・フォー・ワン」

神野区で激突した善と悪の師匠が再び、衝突する。

１３６話「善と悪の師匠」

「ここは窮屈だよオールマイト」
最初に彼と出会い次に投げられた言葉がこれだった。
対面窓越しで軽い椅子に腰掛けるオールマイトは、不屈の闘志を揺らがせながら、視界に映る巨悪を鋭く睨みつける。
対するオール・フォー・ワンは、まるで旧友の知人と再会したかのような、懐かしさと嬉しさを混え声を弾ませる。
「まず背中が痒くなると背凭れに身体を擦る。するとどうだ、途端にそこかしこの銃口がこちらを向く。
バイタルサインに加え、脳波まで常にチェックされているんだ。
この時点で個性を発動しようと考えた時点で、僕は既に命を握られているんだ…
地下深くに収監され幾層ものセキュリティに覆われ…徹底的にイレギュラーを排除する。
世間はギリシャ神話になぞらえ、ここをタルタロスと呼ぶ。〝奈落〟を表す神の名だよ。流石に神威と呼ばれた僕でも、反逆となると一苦労するよ…」
此処はタルタロスと呼ばれる、重罪を犯した犯罪者が収監される監獄だ。刑による執行は愚か、死刑すら生温い者が行き着く場所で、ここでいつ誰が殺されても可笑しくは無いと言われてることから、信頼性も高い。それでも相手が特別なので、不安要素しか無いのだが…
犯罪防止に加え、厳重たるシステムが組み込まれたこの監獄を脱獄することは不可能。何にせよ、面会すら厳しい上に、親から見放された者が大勢なので、そもそも面会と言う機会すら滅多にないのだが…
さも当たり前のように、監獄のセキュリティ構造を細かく語り出すオール・フォー・ワンは歪にして不気味だ。しかし、オールマイトは何の表情を見せない。
それも当然だ。コイツをそこかしこの敵や抜忍…況してや妖魔と

すら一緒にしては困る。オール・フォー・ワンと言う存在だけがイレギュラーなだけなのだ。
「いいや、出られないんだよ」
「まあ、そう言う事にしておこう――それで？僕に何を求めてる？大方の予想は付くが…先に僕の方から質問をさせてくれよ。
グラントリノは独断か？半蔵は無事か？僕を憎む黒影は？アレだけ僕を殺すなんて大口叩いてた癖して死んだんじゃないだろうな？それにその未練がましいコスチュームは何だ？
まさかだとは思うが君、まだヒーローやってるワケじゃないだろう？」
「……お前は、よく喋るな」
「アッハハハ!!察してくれよ！久々に会話が成り立つんだぜ？こうして暴力関係なく真正面から君と話す機会なんてそうそう無い…」
愉快そうに豪快に笑うオール・フォー・ワンを無視してオールマイトは口を開く。
「…死柄木弔と漆月は今どこにいる？」
「知らないな…君とは違い、二人はもう僕の手から離れている」
「……漆月の中に…今もアレがいるのか？」
「うん、そうだよ。上に話すかい？」
「……」
重い沈黙が漂い、空気は凍りつく。
こうなることは解っていた…と言わんばかりに、それでも拭いきれない衝撃を堪えながら、会話を続けることにした。
「貴様は何がしたい、何がしたかった？人の理を超え、その身を保ち、生き永らえ…結果、妖魔すら超越した貴様はその全てを――搾取、破壊、支配、人を弄ぶことに費やして…何を為そうとした？」
「生産性のない話題だなぁ…聞いても納得など出来やしない癖に、解り会えない人間ってのは必ず存在する者さ。僕と陽花がそうであったように、侍と忍がそうであったようにね」
才能のセンスや超人という類に関しては陽花もオール・フォー・ワンも同じだった。異なると言えば中身の話、つまり性格だ。

人を弄び、破壊し、支配することに悦びと快楽を覚える残虐非道な彼と、人を信じ、救け、守ることで逸話と実績を積み上げた聖人君子の彼女とは訳が違えば話し合える仲でも無いのは、目に見える。
「同じさ、君と同じだよ。君が正義のヒーローに憧れたように、僕は悪の魔王に憧れた。
彼女がカグラに憧れたように、僕はカムイに憧れた…どうだ？分かり易くてシンプルだろう？それにね、君も充分理解してるようだけど言わせてくれ。陽花も僕も、妖魔を超越した存在という事に変わりは無いよ。僕と彼女は体内に妖魔を宿していた、結果論としては僕も彼女も似たもの同士だろう？」
「嗚呼、才能の面や超人という部類も含めてな…けど、彼女とお前は違う」
「似たもの同士ってだけで、別に好き好んで僕はアイツと一緒くたにされたくは無いね。自己犠牲の塊に、忍の道に情や絆なんて不釣り合いな言葉を掲げるような無価値な人間とは…ね」
「あの子は無価値な人間じゃない。私に嫌がらせするのは物足りず、今度は死した彼女の悪口を言い始めるか？」
「事実だろう？君と同じく自己犠牲でしか人を救えない、醜い姿に成り果てながらも誰かのためにと綺麗事をほざきながら結局彼女は死んだじゃないか。これを笑わずして何になる？
真に価値ある人間は犠牲すら出す事なく人を救えてこそだろう？違うか？
『犠牲なき献身こそ真の奉仕』、フローレンス・ナイチンゲールの有名な言葉さ。君らにとって僕らの存在は人を脅かす得体の知れない生き物だろう？僕から言わせてみれば、ヒーローなんて己の欲望や安全を投げ捨て見知らぬ他人を救う、得体の知れない生き物さ。ホラな？君らと僕らとじゃ先ず価値基準が違う。その時点で僕らと君らとでは分かち合えないんだよ。仮に出来たとしても少なからず僕は君らとは分かち合いたくはないなぁ」
大火事になって自分の家の火を消すよりも、他人の家の火を消すバカなど普通はいないだろう。しかしヒーローは己を顧みない存在だ。

他の人間とは違い、そうはならないのだ。
己の欲望に忠実な人間と、他人の幸せに忠実な人間とは全く違うのだ。
他人の為に己の命を削るエゴ精神よりも、自分自身の欲や理想を叶えようとする自己中な人間こそ、オール・フォー・ワンが好むべき人間だ。
「理想を抱き、体現出来る力を持っていた。
永遠に理想の中で生きられるなら、その為の努力は惜しまないし、手を汚すことも厭わない」
「なら…なぜ後継など…？」
「ハッハッハッ！君が其れを聞くかぁ面白い！
なぜ後継などだって？君が僕にそうさせたんだろ?!僕の全てを奪っておいてよくもまあそんな間抜け面で言えたね。この体をよく見てみろ、僕を中心に刺してるチューブの管でようやく生命は維持できる。
陽花は別に良い…命に別状は無かったさ。まあ下手すれば死んでたかも知れんが…しかし君はどうだ？」
オールマイトという存在が世に登場したことで、オール・フォー・ワンは頭を潰され殺され、ドクターという助手の力でようやく一命を取り留めることに成功したのだ。
しかしその分、身体に負担が掛かることから、無限と思えた存在は有限となったのだ。
「終わりがある事を知れば人は託す。
何だってそうさ、そこかしこに建つ家やビル、何気なく口にする食品、代々伝わって来た秘伝忍術、全て人から人へと託され発展して来たもの…皆んながやってる事を僕もしようとしてるだけさ」
数々の文化や歴史が今を物語る。
過去は未来を創る為にあるものだ、時間が進むにつれて人間の技術や知識は発展し明るい社会を築きあげていく。
オールマイトが緑谷出久や飛鳥に次は君だと想いを託したように、オール・フォー・ワンは死柄木弔や漆月に想いを託したまでのこと。

別に何ら不変も無いし可笑しくはない。寧ろ想定していたのが妥当というべきだ。
「お前の理想…本当に悪意の下で暴虐を尽くしていた、だけなのか？」
「…？」
「あの子…漆月が後継者となったことに、死柄木弔と同じく衝撃も受ければ、どうせ私と陽花への嫌がらせなんだと薄々理解できる…だが、彼女があの天咲魅影と聞いて一つ思い当たる節があった…」
「なんだ言ってみろ？」
「神威のことだ」
「……」
その言葉にオール・フォー・ワンは口を閉じる。どうやら、オールマイトが何を言いたいのか率直で理解したようだ。
「暴走してしまえば、どうなるか…下手すれば死柄木をも巻き込む事になるぞ」
「ならないよ。それは僕が保証する…なに、君のように弟子の育成には器用で慣れてるんだ。不器用でがさつで教育方針に向いてない君に心配される言われは無いよ。
無能なヒーローが対策案を取らないくせに、僕が配慮に欠けてるとでも？仮に死柄木が危険な目に合うとすれば僕は彼女とは合わせて無いよ」
何の会話なのだろうか、外部で監視してる監獄官でも会話内容はサッパリだ。そもそも、二人の事柄にここまで知り合いな存在がいたとは想定外だったと言うのが本音である。
「それに…面白いじゃないか。今まで駒だの部下だの所有物だのと、蔑み利用してた上層部たちが、今度は漆月を始めとした忍への反乱を意に決する者達が、暴れ狂い、支配するんだ。支配されて来た者たちが今度は自身の手で支配する。どうだ、魅力的な話だろう？寧ろこれは救いとなるんだ」
「下らない…実に下らないよオール・フォー・ワン…そもそも、そんなのは忍ですらない」
「ここまで来てまぁだ解らないのかい？そもそも現代社会に忍なんて

不要なんだよ！薄々と忘れてるかもしれないが、僕は忍を殲滅する側だぜ？忍を無くし、悪の蔓延る世界へと変える為に僕は数々の努力と労働、時間を費やして来たのさ！忍と言う存在は今じゃ影物で邪魔以外の何でもない…僕ら敵と何ら変わらない人種にして、都合の良い解釈と言い訳で正当化して誤魔化してるだけ…

社会や上層部が「これも社会のためだ」と言い逃れで事実を逃避してるただの見苦しい言い訳さ！

君も憤りの感情を覚えただろう？陽花が築き上げて来た信頼も情も繋がりも、そして妹も全て上は切り裂いたのさ！」

「違うよオール・フォー・ワン…お前が悪いんだよ。

そもそも、お前が陽花くんを殺さなければああなることも、妹くんも傷付くことだって無かった」

「自分が守れなかったことを棚に上げて他人の所為にするってのも、どうかと思うけどなぁ…」

「黙れ!!!」

オールマイトの怒号が飛び馳せ、思わず椅子から立ち上がってしまう。

「ハッハッハッ！君はよく感情的になるよなぁ！だから面白くてやめられないんだ、確かに陽花は全ての上層部…最高幹部からの人間にも信頼を受け、僕を討伐しろと依頼を受けたのは尤も他でもない…彼女だ。

君に任務を同行させなかったのも、きっと何かしらの決心があってか、君を傷付けまいと、手を汚させないと僕に立ち挑んだんだよね。けど彼女の余りにも心優しい性格が、自分の首を絞めることに繋がるなんてなぁ？」

さも見下し、彼女の死を心底感心し楽しむ彼に、憤りを通り越して呆れてしまう。

ここまで性根が腐った人間など、彼以外存在しないだろう。

『オールマイト、あと残り5分程で…』

「待ってくれよそりゃあないだろう…！折角人と会話出来るんだから…もっと話がしたいんだ！もっとこう…」

監視員の言葉にオール・フォー・ワンは驚きを隠せない様子でいる。まるで別れを告げられ待ってくれと懇願するような反応は、中々に見ない光景なので珍しく思えてしまう。
「そうだな…あっ、じゃあこれならどうだ。
外の世界はどうだい？君の引退に世間は動揺し、今頃騒がしいと思うんだが…どんな様子が詳しく聞かせてくれないか？」
タルタロスに収監された者は、外部からの情報が遮断されている。外の景色も見ること叶わず、年老いて朽ち果てるまで永遠に監獄の中で一生を過ごす事になる。
人間と会話することは愚か、身動きを厳重に封じ込められてる現状、自由を奪われ退屈と窮屈の重圧に押し潰されながら生きることは、ある意味地獄に相応しいだろう。
そんな監獄に住まう囚人が外の情報を欲するのは無理もないし、神野区の元凶犯なら当然だろう。
オールマイトは「それは…」と口を自然に開くも『オールマイト、外の情報は遮断されています。軽率な発言は公言は慎み願います』と看守からの一声が掛かり、頷き無言する。
「そっかぁ～…其れは残念だな…」
ハァ…と深い溜息を吐くオール・フォー・ワンは心底残念そうに、眉をひそめて俯く。
オールマイトは「ああ、残念だったな」と言葉を出そうとした刹那

「きっとこうなんじゃないかなぁ」
落ち着いた声が、ゾクリと悪寒が背中を襲う。まるで幽霊に背を撫でられたような冷たい感触に、冷や汗が滴り流れ落ちる。
「今頃メディアは君がいなくなった不安、そして新たなリーダー…エンデヴァーへの懸念が重なりヒーロー社会と忍社会全体の団結を訴えている。
方や忍社会は次々に暴れ狂う抜忍や妖魔に手を焼き、焦りが芽生え始めてるんじゃないだろうか？少しでも改善とイメージを良くするべく悪忍も公の場で活躍する場面も増えるんじゃないかな？善悪問

わず、ヒーローと手を組み新たな現実社会を作り上げようと必死なのかな？

この可能性は大きく高いよね、だってこれからヒーローや忍、敵なんて差別なんて関係なく争う世の中にするようシナリオを描いていたのは僕自身だから、其れを機能するように回りくどく執念深い計画を積み上げたんだからさ。

一方で不安定になりつつある空気を察知して、ヒーローや忍を支持しない、いわゆる日陰者が行動を起こし始める…

抜忍も敵と同じ考えに行き着くんじゃないかな？自分たちも社会を動かせるんじゃないか？よくも自分達を見捨てて救わなかったなと組織立って動き始める――弔達は暫く潜伏を続けるんじゃないかな…あっ、漆月は敵連合の目を欺く為に敢えて問題行動を起こしたりするかもねぇ。注意しておいた方が良いよオールマイトも、他の人間も…今の彼女は僕自身が知る中で一番厄介な問題児だ…警察や上忍すらも煙に巻く程の凄腕さ」

僕が彼女と闘うなんてなとになれば、下手すれば軽く臓器は一つ持ってかれるかな…なんて考え事に浸るオール・フォー・ワンは口角を釣り上げ悪意の笑顔を魅せる。

「話の論点を戻そう。

台頭する組織を見極める為に、どこも勢力を広げたいだろうから、敵や抜忍同士での争いも頻発するだろうね。

カムイになりたい、逸話を残したいなんて悪意が蟻のように群がり広がるのさ。善かれ悪かれ人は衝動をキッカケに感染しやすくなる。ステインが良い例えだろう？

僕の描いたシナリオが全て正しく機能していれば、だいたいそんな流れになってるんじゃないかな？まあ物事は常に何が起こるか分からないから、その対策案を一つ一つ練り上げてシナリオが成り立ってるんだけどね。

仮に、だ…そうなっているとしても原因は全て君の偽りの姿と引退なワケだ…漆月や死柄木が原因で大勢の犠牲者や被害が広がるのも、根元を探れば君の所為にもなる」

段々と、濃い黒色の影が覆い支配するオール・フォー・ワンの表情に、軽い悍ましさと恐怖が植え付けられる。
汚い笑顔に、クスクスと声を漏らす汚い嗤い声が、脳を焼き尽くすように支配する。
「今後、君は人を救うこと叶わずに自身が原因で増加する敵と忍を前に指を加え、涙目になりながらも眺めるしかできず、陽花の「あの子達を助けて」という理不尽な約束を延々と破る羽目になる。無力に打ち拉がれながら余生を過ごすことになると思うんだ。
で、漆月は死柄木と違い特殊な方だ。君と面識もあれば、君が発言をしない限り飛鳥や雪泉は勿論…彼女の大切な仲間達が、友達になれたかもしれない漆月に次々と消され、花束を摘まれることになると思うんだが、ここで一つ教えてくれないか？」
彼の外道たるや言葉の一つ一つに恐怖と絶望に身を染めながらも、憤りと正義感に思わず拳の力を強く握り締めてしまう。指先の爪が掌の肉に食い込むも、関係まいと最後まで彼に耳を傾ける。
「今、どんな気分なんだ??」

ガタッ！と反射的に立ち上がってしまうオールマイトは、怒りの感情に頭に血が上り、息遣いが荒くなる。
自分の心の奥底の感情を刺激し、苦悩する彼を嘲笑うオール・フォー・ワンは、心底愉しそうに相手の表情を観察するように眺めている。気が付けば自分の拳は相手を殴ろうと高らかに掲げていた。
『オールマイト、危険です離れて下さい！』
看守の言葉に我に帰るオールマイトは、静かに拳を納める。マグマのように煮えたぎる怒りを、そっと蓋をしてなんとか落ち着かせる。
「人は心の中を言い当てられればすぐ怒る!!残念だったねオールマイト、ここでは君じゃ憎い僕を殴れない！」
追撃せんとばかり追い立てようと最後まで煽り立てるオール・フォー・ワン。人の心理を掌握し、何をどうしたら人の嫌がらせをする事が出来るのか、最後まで計算し言葉を選び、人を追い込ませるの

だからメンタリストとは怖ろしいものだ。
陽花も昔はこれでよく怒らせていたものだと、オール・フォー・ワンは懐かしさの感情に浸りながら高らかに微笑う。
「……フン」
そんな彼に呆れながら、オールマイトは鼻で息を飛ばすよう自身の怒りを沈み抑え込む。別に、相手が好きで煽って怒らせてるだけで、其れを理解さえしていればどうってことはない。それに、まだケジメを付けていない。
「貴様だけが全て知ってると思うなよ…大方の予想はついてる。お前がやりたいこと、これから未来で待ち起こるシナリオを…」
――君の嫌がることをずぅっと考えてた。
もし、彼の性格を元に探り当てれば、間違いなく予想の検討は付く。其れは…
「先ず師匠の血縁である死柄木弔に、私と弟子である緑谷少年を殺させ、陽花くんの妹である漆月には飛鳥くんと雪泉くんを始めとした、忍学生達を殺す気なんだろう？貴様が黒影にそうしたように、次の矛先は雪泉くんに向けるはずだ…違うか？」
「で？」
だから何？と言わんばかりに興味深く、でもって平静を保つオール・フォー・ワンに、オールマイトは大きく息を吸い込む。
「私は死なないぞオール・フォー・ワン――私に死柄木は殺させない、漆月に彼女達を殺させない…！これ以上、貴様の思い描く未来にはさせない！私が其れを、許さない――!!」
弱くとも、個性がなくとも、オールマイトの言葉には意を決した覚悟が確かに存在していた。
闘気を揺らがし、気迫ある眼光を巨悪に放つ。
ただならぬ正義感と信念を小さな瞳に宿しながら、負けずと声を張る。
亡き平和の象徴は今もなお、倒れる様子も死ぬ気もない様子で、彼の世界の柱になると公言した彼を、ヒーローとして立たせていた。
「ふぅん…まさか〝ケジメを付けにきた〟って、これを言いに来たの

か？」
こちらも呆れるように、溜息を吐くオール・フォー・ワンはつまらなそうな声で呟いた。
金属製の椅子にもたれかかり、冷たい感触が全身へと伝わることを確認しながら、口を閉じる。
『オールマイト、時間です退出を――』
どうやら面会時間の終わりが来たようだ。
看守の言葉に「ああ、解った…」と軽く受け流すオールマイトは、オール・フォー・ワンに背を向ける。
最後に後ろを振り向き
「良いか、貴様の描いたシナリオとやらは私が全部砕く…何度でもな!!
お前こそそこで精々指を咥えて余生を過ごすが良い…！」
言葉を吐き捨てる。
シューッ！と鉄の自動ドアが開き、オールマイトの後ろ背中が遠のくも、自動ドアが閉まるように、彼の姿を遮断する。
面会室でただ一人、孤独の空間で金属椅子に座り込んでるオール・フォー・ワンは一人でに軽く嗤い声を漏らす。

「ふふふ…ふふ、余生か…」

オールマイトが最後に残した台詞は、半永久的に生き永らえたオール・フォー・ワンにはとても皮肉が効いていた。
成長を止める個性を得たことで、不老死の体を手に入れたオール・フォー・ワンは、タルタロスで一生を過ごすことになる。
確かに、個性を発動しない限り死ねない体と成り果てたオール・フォー・ワンにとっては、ここは死ぬことも無く延々と退屈な時間を過ごす日々を通すことになるだろう。
何も無い、鉄と金属とセンサーだらけに支配された厳重なセキュリティで仕組みこまれた監獄で過ごすのは、少々嫌気が刺す。
「良いよ、僕は君の言葉よりも……死柄木弔の成長を、そして漆月が摘

み重ねた死の花束を、僕は期待しながら待ってるからね」
二人の弟子に歪んだ想いを託したオール・フォー・ワン。
一人は、数々の人間を踏み台にし、裏社会の王として成長することを胸に踊らせて。
一人は、愛する誰かの為に、他者の命を摘み取り、先生に捧げることに期待を高らかにする。
ヒーローという各々の信念を胸に宿し、誰かを守る光の存在は、悪の王となりうる死柄木の踏み台と化す。
忍という死の定めに舞い殉じる儚き花の命は、厄災の神となりうる漆月に花を摘まれ、彼女は美しさを増す。
楽しみだなぁ…二人の成長が早くも待ち遠しい。
もし、監獄の中でも外の情報が持ち込めれば窮屈さを除いて良しだったのだが…完全脱獄防止のため、仕方ないか。
さて、弔と漆月…君たち二人は師である僕がいなくとも生き延びれるかな？なんて、無駄な心配事だったか…ハハッ、何にせよ君たちを信じてるよ僕は。
オール・フォー・ワンは、心の中で言葉を呟きながら、看守に車椅子を押されて自分の監視部屋へと連れて行かれる。
また、退屈な日々が続きそうだなという憂鬱な感情が入り込むも、今は弟子のことで頭がいっぱいだ。
しかし、唯一気掛かりがあるとすれば…
――じゃあ、オールマイト…君はどうするんだい？

タルタロスの監獄から外へ出たオールマイトは、背筋を伸ばしながら深呼吸し酸素を肺に取り組む。
鈍ってる体の疲れが解きほぐされるような錯覚に見舞いながらも、オールマイトは顔を一切変えずにパトカーに乗り込む。
「お疲れ様オールマイト、どうだった？」

「…情報の類に期待していたならすまない塚内くん…特に聞き出せることは出来なかったし、有益な情報は取り出せなかった…」
「いや良い気にするなよ。確かにタルタロスは正式な手続きが怖ろしい程に厳しくて面倒だけど、一回の面会だけで簡単に情報が引き出せるとは思えない。仮にヤツの口が軽くとも証拠や情報が真実が確かめる必要もあるし、どの道一筋縄ではいかないよな」
運転しながら会話するオールマイトと塚内は、敵連合の有益な情報に関する話題で話し合っていた。
「ヤツの言葉では、暫くは潜伏に専念し、漆月が何かしらの問題行動を起こすのではないか…だとさ」
「潜伏に専念か…確かに信憑性も高そうだし、こんな御世代の中、組織も不安定な状態で学校襲撃なんてバカらしいけど、一番に疑い深いのが漆月だな。
幾ら真実だからと言っても本当に口に出すか？其れに問題を起こすって…カグラや数々のトップヒーローにすら目を付けられてる中、騒ぎを起こせるとも思えないが…」
どちらにしろ信憑性もクソも無いし、これだけでは確実に万全たる対策は設けられない。各地に捜査を広げるにしろ、情報が不足している以上は無理に近い。
「そうだ、敵連合の繋がりがあるとすれば、ステインの面会はどうす……」
ヴー！ヴー！ヴー！
鳴り響く携帯にオールマイトは「失礼塚内くん！」と懐にしまった端末機を開く。
ＬＩＮＥの送信先は緑谷出久、トプ画は全盛期の頃であるオールマイトが設定されている。こういつ見ても平和の象徴として生きた自分を見返しなるようで少し複雑な気分になるも、送られて来た内容に目を通す。
『オールマイト！仮免試験無事に受かりました！』
合格の発表だ。
一枚の写真が送られ、其処には確かに仮免許証が映し出されてい

た。どうやら無事に合格することが出来たようで、先生としても師匠としても嬉しく思えるし、頬が綻んでしまう。
――良かったな緑谷少年！
内心ガッツポーズを上げるオールマイトは、笑みが止まらず微笑んでしまう。
弟子の成長とはいつ見ても微笑ましくなるものだ、自分が師匠であることに誇りを持つ事が出来るのも、ヘドロ事件をキッカケに出会った事だろう。今となっては彼と出会えて幸せだと思っている。
そうだ、私はこれから弟子である彼を育てなければならない。
明るい未来、そしてヒーローになる夢を心がけ、目指す彼のためにも、私は最後まで生きて、責任を持ってあの子を育て上げなければならないのだ。
其れが、私が今出来ることであって、緑谷少年だけでなく、其の母の為にも…期待に応えるべく、精進しないとな。

同時刻。
雄英は仮免試験を終えて、其々の寮へ戻り休息の時間を堪能していた。何せ仮免試験からずっと緊張と無理を通し、試験を受けて来たので、心安らぐ生活に戻りたいのは自然の成り行き。
「皆んなオツカレ！」
「ゆわいちゃん、可愛いわね」
「明日からフツーの授業だってさ！」
「一生忘れられない夏休みだったね」
男女の楽しい愉悦な会話が飛び交う中、緑谷オールマイトと連絡を終えて携帯をしまう。
合格の知らせに喜んでくれたようで、さぞ本人は嬉しい様子だ。これで一流のヒーローになる為の第一歩へ足を踏み入れた訳なので、喜ばない方が可笑しい。
「よしっ！後は…」

「おい、デクてめぇ――」
ビクッと、自然的に反応してしまう緑谷は、ぎこちない表情を浮かべ声の主に振り向く。
聞き慣れたドスの効く声に、苛立ちと焦燥を孕ませた声色は間違いない、仏頂面で、でもって不機嫌な様子が伺える爆豪勝己だ。
「な、なに…？かっちゃ――」
「後で表出ろや、テメェの個性について話が聞きてえ」
友の言葉に、頭の中が真っ白に塗り替えられた緑谷。
固唾を飲み、自身の本性を、経緯を話すべく、覚悟を決めなければならない時が来た。

137話「喧嘩」

テメエの〝個性〟についての話だ――

仮免試験を受け、無事に寮に戻った夕方の頃、爆豪は確かに緑谷にそう口述した。

いつもの不機嫌で苛立ちに染まった仏頂面とは違うし、何時もと違い、イヤに真剣な表情をしていた。

最近になって罵声を浴びせるような発言も、神野区の一件以来、殆ど耳にしないし、仮免試験の一次試験突破の休息の途中で褒められた時は嬉しさよりも動揺と疑いが勝ったりもした。

しかしそれは自分の体…つまり、個性について勘付いてるからであって、決して緑谷自身を認めたわけでも、全ての詳細を認知してる訳でもない。

ただ元となる原因は…最初のキッカケは恐らく、入学して間もない頃に受けた戦闘訓練が一番の説が高いだろう。

緑谷自身から「借り物の力を受け取った」と発言した時から、ずっと頭の中の隅に置いてマークを付けていたのが、考えられる線だ。

そもそも、個性が四歳の頃までに発現しない者は無個性（発達障害も有り、個性の発現が遅い場合もある）と呼ばれ、それ以降成長して個性が発現した異例は存在しないし、教材はまだしもニュースですら知られていない現実だ。

緑谷出久は正真正銘の無個性。

口から火を吐いたり、物を引き寄せる力も、他の能力だって存在しない、恵まれなかった子供だ。

四歳以降、無個性や自分の性根もあってか周りからよく馬鹿にされ、蔑まされたり、爆豪からよく幼稚な虐めを受けていたのは日常茶飯事だ。

爆豪からすれば他の個性を持つ人間をモブと称するのは勿論、緑谷出久のような無個性ならば格下の石ッコロというのが、彼なりに相応しいネームドだろう。
だが、今の現実はどうだ？
不可解な現象や自分すらも食い付くような勢いに、石ッコロだと蔑んでた自分が、いつのまにかここまで苛立ちに染まり、あろうことか張り合うだの超えるだのと、自分と互角に戦い、更に意識すらさせられる。本当の雑魚なら眼中にすら無いだろう…それなのに、その雑魚に仮免試験で出し抜かれるだけでなく、着々と自分すらも手の届かない高みの場所までよじ登っていく彼の姿勢に、段々と焦りを芽生えてる自分がいる。
…これ以上解らないままではいられない。
本当なら、オールマイトに聞くのが賢明な判断だろうし、勿論本人にも話を聞いてみた。
しかし、ダメだった。
三者懇談の後、オールマイトが次の自宅へ訪れる前に声をかけて問いてみた。
けど、真実を口に出してくれなかった。
なら、もう一人の関係者である緑谷と、其れを知る人間に話を聞けば良い訳だ。

もうこれ以上、ないがしろには…出来ないのだから。

『デク、後で表でろ。それとテメェの個性を知ってる他のヤツがいるなら、ソイツも呼べ』
約束の時間は皆が就寝する時間帯。
深夜、空は漆黒の闇に覆われており、夏だというのに真夜中は静けさと涼しさが増し、何処と無く胸が騒がしくなる。
雄英の寮と忍基地は基本的に９時以降の外出は禁止されており、それ以降の時間に外出が見受けられた場合、問答無用で担任教師を始

め、生徒指導を務めるハウンドドック先生にこっぴどく叱られ、最悪謹慎させられてしまうのである。
「で？個性のこと知ってんのはデカ乳女だけか？」
「デカ乳女って…もう突っ込まないけど……話があるなら三人っきりの時で良いじゃない……なのに何でこんな深夜に限って外に出なくちゃいけないの…？」
現在、寮の外から出て闇夜の下、歩む者は――爆豪勝己、緑谷出久、飛鳥の三人組である。
いつ先生方に自分たちが平然と深夜を彷徨ついてる姿を見られ、叱られるかと考えると、気掛かりで仕方がない。
「そうだよかっちゃん！それに…9時以降の外出は禁止されてるんだしさ……て、ていうかさ…どこに向かってるの？」
飛鳥に続いて助言するよう口を開く緑谷も、先生達に見つかる危惧を鑑みて止めようとするも本人は聞く耳持たず、足を緩める気配はない。
街灯の光が闇夜を照らしているため、爆豪の後姿や、不安そうな表情を浮かべてる彼女の姿はくっきりと見えるが、其れでも漆色で塗り潰されたような暗さに、視界が悪く何処へ向かっているのかも読めない。
「ねえ……かっちゃん……」
緑谷がどれほど声をかけても、飛鳥が何をしたいのか意見を求めても、爆豪は頑なに口を開かない。喋る気配が一切感じ取れない。
普通、ここまで言葉を発せば「煩え死ね！」「黙れやクソが!!」の暴言の一つや二つ吐くというのに、今ではイヤに冷静で、どこか表情が暗く見える。
（そういえば…ずっと学校の行事や敵連合のやり取りで忘れガチだったけど……僕とかっちゃんは幼馴染、昔はこうしてよくかっちゃんの背中を見て、付いて来たんだっけ……）
過去の記憶と今の現状が、二人のエピソードを物語る。

四歳の頃――幼馴染であり近所という理由もあってか、二人は絡む機会も多くよく遊んでいた。
公園でサッカーやドッジボール、鬼ごっこをして遊んだり、山奥でヒーロー探検ごっこや虫取りなんてしょっちゅうだった。
爆豪が個性を発現してから、緑谷自身に於いて爆豪への眼差しは、友達から薄々と尊敬へと変わっていった。
爆破という至ってシンプルで、派手さや強さもプロヒーローになれそうな彼の能力面は将来プロヒーローになれるだろうと幼稚園の先生にも言われてた。
そんな個性と供に才能に恵まれた少年と、無個性に産まれ恵まれなかった少年とは、行き違いをし…いつしか少年の頃だった友情関係は、時間と供に忘れ去っていたのだ。

(そう言えば、緑谷くんと爆豪くんって幼馴染だったけ…初対面では焔ちゃんに気荒い性格と野蛮を足したような、暴君って感じだったけど…
今となっては随分マシというか…そもそも、二人は幼い頃から知り合いで、友達だったんだよね…)
一方、飛鳥は二人の重いやり取りを見て何か思う部分が有ったのか、先を見据え前方に進む爆豪と、距離を置いて背中を見ながら追いつこうとする緑谷を、遠い目で見守る。
自分は幼い頃、特に友達と呼べる方もおらず、偶々公園で知り合った子と遊ぶ程度で、ガキ大将が見知らぬ子供を虐めてると、ついカッとなってボコボコにした記憶程度だ。
とても、二人のような関係を築ける友達はいなかった。
しかし其れは昔の話で、今は違う――
(私も、幼少期から焔ちゃんと逢ってたら…こうなってたの…かな?)
もし自分も焔ちゃんと幼馴染だったら…きっと二人のような関係になってたのかな…?
それとも、善悪なんて問わずに普通の女子学生として過ごしてたのかな?

それとも、善と悪で唾み合い、競い合う仲になってたのかな…
幾多もの〝もしかしたら〟という妄想が増え続け、時にこんな未来も楽しそうだな…と楽観的に見てしまう。
だが、今の自分の進むべき道に不満や後悔は微塵たりとも存在しない。例え緑谷くんや爆豪くんみたいに、人を救う職業（ヒーロー）になれなくとも、普通の女子学生のような、平和的な生活が送れなくても、誰かを影で支える職業（忍）の方が、自分としては向いてるんじゃないかと思う。
（まあ…５００円玉を取られてた時の私は…全然ダメダメだったけどね…）
尤も、昔の自分はとても忍らしくも無く、才能のない無個性に近い少女でもあるが。
各して三人はこれ以上言葉を投げかけても無意味だと見解し、鎮まる闇夜の中、目的地に足を運びながら黙々とした空気に従うのであった。

街灯の光に導かれるように辿り着いた先は、いつも訓練で使ってる場所で、でも少し特別な想いがある場所だ。
グラウンド・β
解り易く言えば、入学して初めて戦闘訓練を行った場所で、この勝敗をきっかけに、爆豪はある意味代わり始めたスタートラインでもある。
「ここで…何をする気…なんだよ？」
「まさかだとは思うけど…爆豪くん??」
善かれ悪かれ――二人にとっては忘れられない、甘苦い経験の場所。
飛鳥はさておき、緑谷にとっても爆豪にとっても、互いの主張と意思をぶつかり合い、示し合わせた訓練所でもある。
「初めて戦闘訓練でデクと戦ってら俺が負けた場所……最初は無個性のテメェが何で俺に喰らい付くんだって、クソ目障りで気色悪かった…」

似合わない冷徹な声は、今まで耳にしたことがない。
「訳わかんねえヤツが訳わかんねえこと吐き捨ててさ…自分一人で納得した面して、どんどんドンドン上へと登って来やがる…」
不敵な笑みは、勝利に拘る彼とは違う、見たことの無い表情。
「ヘドロの時から…いや、オールマイトが街にやって来たあの時から…どんどんどんどん…
そして、忍なんつー歴史に載りそうは意味不明な連中がやって来た…」
爆豪勝己は前々から頭の回転が良く回る繊細な子どもではあるが、ここまで回転が良いと少し気味が悪くなる。決して批判的な意味では無いのだが、ここまで奥深く考えてることに意外性を感じてしまうのである。
爆豪にとって異変と勘付いたのはヘドロ事件後、緑谷出久が雄英を受かったのは勿論、その後だ。
入学初日で半蔵学院と言う進学マンモス学校に忍学生が在籍していることを雄英側に伝え、士傑すらも忍学生が在籍してない所業に、何故、自分たちが関わることになるのかと、ずっと警戒していた。
「オールマイトの噂やテメェらの話を聞いてて解った…他のモブヒーローだって裏で忍と繋がりのある奴らが何百人もいるんだろ？
それ自体はどうでも良いんだよ…猿でも知恵を手に入れりゃ簡単に分かる。
けどよ…問題は其処じゃねえんだわ…
飛鳥は爺さんの孫で、オールマイトは爺さんと繋がってた…んで、クソデクはオールマイトと会ってから何もかも変わり始めた…」
「な、何が言いたいの…？」
ぎこちない声を張る飛鳥は、妙に怯えてる。
「お前らは上へ登って仮免許取得して、俺は落ちた…何だこりゃあ？なぁ??」
「それは実力ってよりも性格の問題じゃ…」
「黙って聞いてろクソカスがッ!!!!!」
緑谷の余計な一言に、久し振りに怒気を孕んだ大声を出す爆豪。反

射的に「ごめん…」と謝罪する緑谷は、やはりこう言った爆豪の気荒い性格には慣れてないのだろう。
「兎に角、苛々してた…まあ、デカ乳女は祖父の孫だもんな、お前のど直球な性格や強さも、納得するわ…」
「私は別に…じっちゃんの孫だからって、血が流れてても別に血縁は関係な――「黙って聞いてろッッッてんだろーが!!!」――は、はい!」
ブルータス、お前もかと言わんばかりの流れに、飛鳥は身を縮こませる。
正直、争い事や暴力を好まない飛鳥は爆豪とは話す機会も薄ければ、何気に絡む機会も無い。
「けどよ、そんなモヤついてた鬱憤も晴れて、全部理解出来た…
神野区の最後、そしてオールマイトと敵の親玉のやり取りを身近で見た俺なら尚のことだ…」

――人から授かった〝個性〟なんだ、いつかちゃんと自分のモノにして、〝僕の力〟で君を超えるよ
――〝借り物〟の力、自分のモンになったのかよ

「オールマイトから貰ったんだろ、その〝個性〟」
爆豪の解き放たれた真実の言葉に、固唾を飲み込む緑谷は、何も答えない。
頷かない、反応すら取らない、冷や汗が流れ、図星ですと晒してるような情景だ。
「待って緑谷くん、爆豪くんに個性のこと話したの!?アレだけ他人に話すなってオールマイトが…ッ!」
「〝アレだけ〟〝オールマイト〟〝話すな〟…ねえ。
やっぱデカ乳女とテメェは繋がってたか、まあ薄々勘付いてたけどな。お前ら二人はメガネに麗日含めて、いる時間も多いしオールマイトに半蔵と繋がってりゃあ寧ろ知っててても可笑しくねえわな」
緑谷はオールマイトと出会うことで変わり始め、オールマイト本人が雄英教師に在籍し、半蔵学院の忍学生が転入し始め、飛鳥は伝説の

忍・半蔵の孫である。孫である祖父の半蔵はオールマイトと裏で繋がっていた。
これらの線を考え辿り着くと、別に知っていても可笑しくはない。
「敵のボスヤロー、アイツは人の〝個性〟や〝忍術〟をパクって使ったり与えたりするそうだ。
信じらんねえが、プッシー(猫)キャッツ(バ)(ア)の一人が個性の消失で活動中止…
脳無とかいうカス共の個性複数持ちから考えて…信憑性は高え。チート野郎も良いところだが…あんなのが現実に起きたんだ。そもそも超人社会と呼ばれてる時代、何かしら事が起きても可笑しかねえよ」
オール・フォー・ワンの個性に、忍術の使用、更に脳無という数ある敵連合の操り人形、更には爆豪や二人も知られてないが、妖魔の製造法。信じ難い事実ばかりだが、何となく辻褄も合う。
「んで、オールマイトとボスヤローには確かな面識があった。
さっき述べたみてぇに、個性をパクったり忍の血を吸って能力を発動する素ぶりを見るに察して、個性や忍術の能力は〝移動〟する事が出来るんだろ」
微かだが、オールマイトとオール・フォー・ワンは旧知の知人のように語り合っていた。
オールマイトに憎み恨みを買う人間は少なくはない。だからと言って、あのオールマイトを死の淵まで追い込ませた彼の異常な強さは認めたくはないが本物でもあった。
何より、二人で実技試験で当たったオールマイトと一戦交えた自分達が痛いほどよく理解している。
圧倒的なパワー、驚異的なスピード、頑丈なタフネス、その三つのシンボル的なステータスを誇ってながら、あそこまで瀕死に追い詰める敵は早々無い。だから、敵の親玉がオールマイトと何らかの繋がりが存在しても、別に不思議では無い。
「オールマイトとあのボスは関係が有り、テメエの〝人から授かった

〝ッつー発言を聞きゃあ自然と結び付く。
お前は個性を貰って変わり始め、代わりにオールマイトは個性を失い力が消えた…
少なくとも、だ。神野の一件…オールマイトのメッセージを違う受け取り方をしたお前を見て確信したよ」
全てを悟った爆豪の解説に、緑谷は何も言えずじまいになる。
自分の言動が浅はかだったのかな…と、今更になって過去を悔やむ自分が在る。
「オールマイトに聞いても答えてくれなかったし、俺以外にも知ってるヤツもいるかも知れねえから、他のヤツも誘うようにした…そんで、テメェとついでのデカ乳に聞いた…」
「……」
「否定しねえ、揃いもそろって黙り込んだりしてるって事は、肯定として捉えて良いんだな？」
鋭い彼の言葉がイヤに心に突き刺さり、嫌味を言われてるようで釈然としない。
「……」
これは、個性の言いつけを守らなかった報いであり、当然の帰結。
黙り込む緑谷の心情を察した爆豪は、髪を掻き毟りながら、爆豪の表情は変わらない。
「テメェも俺も、オールマイトっつーＮｏ．１に憧れた。なぁ、そうなんだよ…お前だけが全てじゃねえんだよこの世界」
ずっと石っころだと認識してた底辺が、オールマイトに見初めて貰い、個性と共に意思を引き継いだ。
「今、俺と戦えや――二人一緒にねじ伏せてやっからよ」
『!?!』
爆豪勝己は、二人に宣戦布告する。
二人一緒…つまり爆豪は、二人でペアになった緑谷と飛鳥を全力で叩き潰す所存なのだろう。
爆豪の文字通りの爆弾発言に、二人は困惑する。
「ちょ、ちょっと待って!?何でそうなるの!?」

「そ、そうだよ！今のやり取りを見てて私が爆豪くんと争う必要は無いじゃん！それに…何で私が戦わなくちゃいけないの？」
飛鳥の意見はご尤もだ。
あの流れで、緑谷出久のことが気に食わない流れと想定すれば、百歩譲って良しとしよう…
しかし、どっからどう考えても、二人の輪に自分が加入する必要性はどこにも感じ取れない。
「だ、第一さ、仮に僕のことが気に入らなくて戦いたいなら…先生に頼んでトレーニング室借りるべきだし…何もこんな学生が外に出て良い時間じゃ無いのに…戦うなんて！」
「本気（ガチ）でテメェらと戦ったら、止められるだろーが」
「わ、私は…関係ないよ…？こんな喧嘩して…何の意味が…」
「テメェに無かろうと俺とクソデクにはあるんだよ、いつまで経っても何も知らねえままでいる俺が嫌なんだよムカつくんだよ…
なぁ、クソデク…お前の何がオールマイトにそこまでさせたのか…確かめさせろ」
「……じゃあ、私には何の意味も……」
「あるんだよ、其れが。クソデクと俺の…昔絡みの事情じゃねえ。俺はお前にも用があるんだよ」
尚更不可解に思う飛鳥は、頭の中にクエスチョンマークが自然と溜まってるような気がした。
何故、こうなってしまうのか…観戦だけではダメなのか？
いや、仮にそうなったとしてもどの道止めるとおもうが…
「なぁ、デク。
お前の憧れは良くて、何で俺の憧れはダメなんだよ――お前の目指すもんが正しくて、俺の目指す道も何もかも間違いだってんのかよ」
「かっちゃん…」
――どんだけピンチな時でも、最後は絶対勝つんだよなぁ！
――どんなに困ってる人でも、笑顔で救けちゃうんだよ…
オールマイトの勝つ姿に憧れた少年
オールマイトの守る姿に憧れた少年

想いは違えど、尊敬の懸念は確かに二人の魂には存在する。今も昔も変わらず、熱きたるや闘志は、胸に宿っている。

「飛鳥、お前も…何で神野区後でも平然とヘラヘラ笑ってられるんだ？テメェの爺さんは、死んでたかもしれねえ…いや、もう二度と目を開けることさえ叶わねえかもしれねえのに、何で俺に何も言わねえんだよ」

「爆豪くん、其れは…」

「ずっとムシャクシャしてた…何も言わず、悩んでる俺を構わず自分で前に進んで、バカみてえに成長して…テメェは俺に何も思わねえのかよ…

お前の爺さんあんな風にさせちまった原因の俺を、何で責めねえんだよ」

一陣の風が、横殴りするように吹き、髪が微かに揺れる。

爆豪は、自分の心の何かを押し殺し、僅かに悲鳴に似たような、心苦しい声を喉に絞らせて問う。

元の原因は、自分にあって雲雀にもあるんだろう…だが、オールマイトの個性と緑谷の話に薄々勘付いてた自分しか、行けなかった。

雲雀にも最初は声をかけようとした、けど…オールマイトが話したくないと聞いたあの時の記憶が蘇り、何も知らない雲雀を誘うのをやめた。

だから、緑谷に個性に関する人間がいれば呼んで来いと申し頼んだ。

飛鳥や雲雀以外なら、争う要素が無いので黙っててても良いのだが、相手が飛鳥となれば、そうはならない。

「……雲雀ちゃんにも、そんなこと言われたな……」

面食らった顔を浮かばせながら、ポツリと心で呟いてたハズが、口に漏らして居た。

「こんなことでもしねえと、殴りあえる機会なんざ滅多に無いだろ。喜びながら存分に殴ってみろよ俺を…まあ、サンドバックになる気はねえから抵抗すっけどな」

早速、爆豪は軽いウォーミングアップと言わんばかりに準備をする。
本気だ。
本気で殴り合う気だ…いや、そもそもここまで来て仕舞えば誰にも止められないし、こうなった以上、何を言っても言葉では無駄だ。
爆豪は冗談を吐くような人間ではない、常に日頃から何かの勝負には拘る勝利への固執とプライドの高い人間なのだ。
「おら行くぞデク！テメェの大好きな右の大振りがよぉ!!!」
右手を大きく振り被る動作に、初期の頃を思い出す。
入学してから始まった戦闘訓練…爆豪の底のない才能のセンスに、フルボッコにされたし、痛々しい血生臭い記憶が染み付いてるのは善いのか悪いのか、どう捉えれば良いのだろう。
（本当に…!?いや、まて…取り敢えず回避を選択しろ！
右…と思わせておいて左か？いや、敢えてそう思わせての…逆か…とっちだ――）

ボガァァン！轟く爆発音は、大地に振動が伝わる。
「緑谷くん!?」と彼女の虚しい叫び声も闇夜に消え去り、爆豪はすぐさま標的を飛鳥に変えて爆速ターボで接近を試み爆破劇を披露する。
右から左の爆破を、回避し距離を取ろうとするも、爆破の軌道と調整を上手く合わせ、背後に回り込み横蹴りを入れる。
「あッ――がっ!?」
「確かテメェ二丁刀からデクや俺見たく素手の肉弾戦メインに変えたんだってな？蹴りも使えるんだろ、さっさと戦えよ…
じゃねえとお前、冗談抜きで怪我で済むレベルじゃねえぞ」
汗ばむ爆豪は、戦闘に於いて必ず強者の余裕とは違う、不敵な笑顔を見せる。
決して相手を舐めてる訳でも、見下してるわけでもない…オールマイトの憧れに来る笑顔を、必ず見せるのだ。
だが今が今な現状…とてもそんな気分では居られないらしい。緑谷も頬に爆破の煙で汚れ、表情を曇らせている。

「来いや!!!」
憤り、焦燥を孕ませた声。
二人から、三人へ…運命の歯車は、狂い始める。

１３８話「意味のない戦い」

深夜の1時近く。
明日に向けての授業カリキュラムに課題確認、書類整理、日誌や各々の生徒によるプロフィール確認などに目を通してる相澤梢太は、夜分遅くまで残業を続けている。
教師という仕事の役割は常人が考えるよりも何倍何十倍も厳しく、マトモに睡眠を取れるかどうかさえ疑わしいと言われている。
眠た気な眼を擦りながらも、今日も何の変哲もなく通常通りに仕事をこなすだけ。
そんな時だった――監督不行届の連絡が入ったのは。
「オイ、イレイザー・ヘッド！オタクノ生徒、Ａ組ガ、グラウンドβニイルゾ！責任問題叱ッテコイ！」
ピタッと、さも時を止められたよう一瞬だけ硬直する。
センサーによる特殊ロボットの連絡を真に受けた相澤は、眠気や憤りよりも、気怠さの感情が優っていた。
「マジかよ…こんな深夜に、本当にウチの生徒が？」
「緑谷出久、爆豪勝己、飛鳥ノ三名ヲ確認。
間違イナシ、個性ト忍術使ッテ暴レテルカラ止メルノ早ヨ」
うわぁ…面倒くせえ…あの三バカは何やらかしてるんだ。
と心の中で悪態を吐きながら、顰めっ面で教師部屋から外に出る。
爆豪勝己に緑谷出久…この二人の組み合わせを聞いた時は納得が行ったし、色んな意味で最悪だなと思考が過った。
（緑谷と爆豪の二人組みは元から相性や仲が悪いってのは、実技試験が始まる以前に踏み込んでたが…
恐らくは仮免試験のことで揉めあってんのか？いや、にしては飛鳥は無関係な筈だ…）
飛鳥。

相澤梢太からすれば、どこにでも居そうな極普通の女子学生という印象がデカイ。
だがその見た目や性格とは裏腹に、伝説の忍・半蔵の孫という血縁が流れてるのもまた事実である。
危険性も無く、所々マイペースな部分や明るみな一面を持つ彼女は、到底忍とも思えないが、そもそも自分だって余り忍と連携を組むことはほぼ皆無に等しいので、今の世代に生きる忍があんなものなのかという、軽い主観は持っていた。
誰とどう仲が良いのかは軽く見た目や生活による問題行動で大抵の把握は可能でも、どうしても飛鳥と爆豪が結びつかない。
(そもそも、アイツも暴れるような玉じゃねえと思ってたんだが…
どちらにしろ、注意しなきゃいけねえのに変わりはねえし…如何なる理由でも叱らねえ訳にはいかないな…)
問題児三名に厳重な注意と、更に自分の仕事が控えてると想像してしまうだけで気が遠くなりそうだ。合理的な主義として、一刻も早く止めに入らねばいけないし、時間を無駄にするのは大の苦手なのだ。
「へい、待ちなよ!」
「?」
聞き慣れた、でもって何処かユニークな声に、真っ暗な外に佇む一人の男性に視線を送る。
「あれ?貴方が何故ここに……?」

鳴り止まない爆音は、火花散り市街地に似せた道路が爆破で煙が巻き起こり、元々視野が悪い状況が更に悪化する。
三つ巴を体現したかのようなこの戦況、飛鳥も若干顔は浮かんでおらず、横蹴りで食らった横腹を押さえ込んで刀を握る。
「待ってって!何も戦い合わ無くたって良いじゃないか!誰も君の憧れが間違ってたなんて一言も言ってないよ!そもそも――」

「あんま喋ってると舌、噛むぞ」
これ以上の言葉は不要。
何もいらない、
何の意味もない、
何の変化にならない、
さっさと拳を構えて戦えや、と言わんばかりに爆破を使って距離を詰める爆豪。
狙いは緑谷出久――其れもそのハズ、元々こうなったのは緑谷と爆豪による仲の溝と個性による関係上でこうなったのだ。
オールマイトや半蔵の関係も含めて全て、この闘いには意味のないようで意味がある。
向かってくるのなら迎撃を仕掛けるしかない、決死の覚悟でワン・フォー・オールの５％を発動させ、臨機応変に対応する。
常時５％発動なら、大抵の攻撃は見切れるし、少なくともこの距離なら――
ボオオォン！と破壊と爆破の衝撃は広範囲に渡り、狙われてない飛鳥でも土煙が襲いかかり、視界を奪われてしまう。
反応し回避の選択を試みても、想定を上回った爆破の威力に喰らってしまった緑谷は、軽い怪我を負う。
「どう…して……！」
それは避けきれなかった疑問の言葉ではない。
どうして、そこまでして闘い争わなければ駄目なのかという、純粋な問いに爆豪の表情が歪む。
「んなもん…俺が聞きてえよ…!!」
緑谷の悲壮な声色に、爆豪の苛立ちが加速し、奥歯を強く噛み殺す。
個性が発現し、緑谷出久が無個性だと知っても、遊び相手では有った。あの時、無個性の出来損ないが才能の溢れた自分に心配されて以来、其れが原因でムカッ腹が立ち、何度もなんども叩き潰すように虐げた。
無個性のくせに――

『デクって、無個性がないんだって。ダッセェな』
弱虫のクセに――
『こ、これ以上は！ぼ、僕が許ひゃなへぞ…！』
道端の石っころだった癖に――
『大丈夫、立てる？頭打ってたら大変だよ!?』

なんで、何で――お前は立ち上がって、俺の背中に張り付いて来やがるんだ!!!

ずっと不快だった。
時折、奇妙で気持ち悪かった。
とにかく鬱陶しかった。
無個性で泣き虫で、喧嘩も弱いタダの出来損ない。
だから見下して嘲笑ったり、蔑んだりもした、虐めに近い揉め事だってしょっちゅう起きてた。
自分に心配されてから、緑谷出久への見方に嫌悪が混じった時から、彼に対する行動は日々エスカレートしていった。
別に、好きで虐めたりだの笑い者にした訳でもない。

ただ…離れて欲しかった。

これだけ痛めつければ、無個性の自分は遠ざかって行くんだろうな…これでもう視界に入らず、心配されることだってない。
それなのに、こんだけ嫌われるような行動をしたのに…それでも、それでもコイツは…
『待ってよかっちゃ～ん！次は何して遊ぶの？僕も混ぜて！』
俺の跡を、付いて来やがる。
ここまで来ると、人間軽く悍ましさを覚えてしまう。
普通、嫌われるような行いをした人間と関わろうとするだろうか？
少なくとも自分だったらそうはしないし、精々喧嘩勃発レベルだろう。

何度も引っ剥がしても殴っても、除け払おうと、絶対に離れようとしない。
そんなことが幼い頃から中学にまで続いて…ずっと不愉快だった。
そんな気色悪いヤツがオールマイトに見初めて貰って、実技試験で協力し合う関係になって…自分だけ納得したように上へ登り詰める緑谷に、焦りを覚える自分に、どうしても認めたくないと否定する自分が確かに存在する。
「戦えや!!!」
苛立ちと、焦燥に混ざった声色を発する爆豪は、両手をくっ付け真っ直ぐ、平行線を描くように飛ぶ。
それに対する緑谷は、咄嗟に体をバク転させ、蹴りを顎に入れる。ガンッ!と何処か鈍くて、嫌な音が鮮明に聞こえた。
「緑谷くん!爆豪くん!!」
喧嘩勃発。
一触即発とした空気の流れが加速を増し、後戻り出来ない場面へと到達。中々見ない、急所にダメージを負った爆豪は、舌を噛んでしまったのか口から僅かながらの鉄の味が広がり、ベッ!と朱く染まった唾液を何処かへ吐き飛ばす。
「ご、ごめん…!かっちゃ――「俺の心配なんかすんじゃねえよ!!クソデク!!」…ッ」
緑谷の善意を、薙ぎ払うような荒々しい言葉が、緑谷の行動を制する。爆豪の瞳は、少しずつ震えており、息遣いも荒い。これは、顎の激痛と舌を噛んでしまった痛みとは違う。
「あん時もそうだった…
――そうやって、何食わぬ顔で……無個性のテメェが!俺の心配なんかしやがって!!あの時からずっとそうだった!!!」
あの日を境に、自分と緑谷には何処か見えない壁に隔たれ距離を置くようになった。
無個性の人間が自分の側に居ることに目障りと感じるのもそうだ

し、素直じゃないという性格も合点が行くが、何よりも爆豪にとって緑谷に対する怒りと嫌厭は、彼の底が知れない優しさ。

個性も、力も、才能を持つ自分が――無個性で、無力で、凡人以下の人間に心配された。

そして、あれだけ嫌われる行いを、況してや中学のヘドロ事件前の学校内では「来世に賭けてワンチャンダイブ！」など、自殺をお勧めする程のガキ大将。最早、世間で言う悪質な〝イジメ〟と呼んでは過言では無いほどに。

其れなのに、離れないどころか…背を追い求めようと張り付くどころか…

――君が、救けを求める顔してた!!

なんで、テメェが俺を救う？

自尊心や格差関係なく、なんでここまで痛ぶってた人間を救おうと手を差し伸べる？

常人の考えでは明らかに、見捨てるかヒーローに託すべきだろう。あの時から既に個性を持ってたのかは未だに謎に包まれてる。しかし、其れでも…救おうとは思わないだろう。

「気色悪いんだよ!!デクもデカ乳女も!!何食わぬ顔で平然と前に進んで!!!

デクは無個性だったのに強くなってて…俺よりも先に行って…背中に張り付いてたヤツが…！俺はデクの背中を追うようになっちまって…!!んでもって俺が弱かったせいで…飛鳥（オマエ）の爺さんに酷え目に遭わせちまった……」

「かっちゃん…？」

爆豪の、何かしらの枷が外れたのか、怒号に似た大声を曝け出す。

頭をクシャクシャと掻き毟り、肌に浮かび上がる脂汗が滴り落ちる。とても先程まで冷静で落ち着いてた彼とは別人のようで、それでもって口を開けば暴言と悪意の言葉しか吐き出さない、不良を表した爆豪とは思えない様子だ。

冷静さを無くし、突然マグマが噴火したような、彼の焦燥と憤慨を兼ね合わせた印象に、二人は戸惑う。

何よりも、緑谷出久にとって大きな衝撃は――爆豪の口から〝自分の背中を追う存在になってしまった〟という発言だ。

今まで他人を見下し、時に強者には敬意を表し、そして…絶対の正義であるオールマイトの勝つ姿に憧れてた人間が、今まで石ころと見下し雑魚と蔑み、痛ぶり滅多打ちにでもしてた幼馴染が、自分(ボク)に憧れている。

その事実は、衝撃と変わり、目頭が思わず熱くなる。

自分は今でも爆豪勝己を尊敬し、背を追い続けてる。今でも自分の実力では彼には敵わないと不安が染まってるし、固定概念に囚われてるからか、逆らえる気にもなれなければ、憧れの視線は変わらない。

そんな人間に、自分を憧れと認識してたことが何よりも嬉しくて、衝撃的で…そして、それすら気付かずに一人で全ての想いを背負わせてたことに、悲哀の感情が重なる。

「何でだよ…何で飛鳥(テメェ)は俺を責め立てねえんだよ!!「お前のせいだ」って、「お前さえ捕まらなければ」って、何でそんな簡単なことも！怒ることすらしねェんだよお前は!!!

何とか言えやデカ乳女ァ!!」

「爆豪くん…違うよ…？違う、爆豪くんのせいじゃないよ……？だって、元の原因は敵連合でしょ？それに、爆豪くんは捕まってた囚われの身だった…だから…」

「あんなん目の前で見せられて!!死んでたかもしれねえ爺さんの姿見せられて、被害者面出来る訳ねェだろうが!!!」

あんな物を見せられて。

あの場所で何も出来ず。

ただ観てるだけだった。

神野区から放映で流れてた死闘の中、半蔵がオールマイトを庇い致命傷を負っていた。

液晶画面でも伝わる、血の海に浸る祖父に泣きじゃくる飛鳥。雪泉に体を支えて貰いながらも、それでも絶える事のない涙を流し続け少

女。初めて見せる彼女の泣き顔。
俺は、アイツの笑顔と幸せさえも…壊しちまっんだなって――俺の心の何かが、亀裂を生じさせた。
「お前の幸せを実の祖父を!あんな目に遭わせちまったのは俺の原因でも有るんだよ!!オレなんかを救っちまったから…!俺みてえな弱え奴の為に…!!
なのに…お前は何も言わねえ笑顔で前向きになってさぁ…!!考えないようにってしてたけど、フとした瞬間に脳裏から湧いて来て…!そこからもう…一日中悩みを抱え込んだりして!!……――畜生がぁぁ…!!」
段々と涙混じりに染まっていく爆豪を見て、胸が締め付けられる程に痛みを感じる飛鳥は、首に巻いてるスカーフをキュッと握る。
「何でだよ…なんで、何で…!!何で俺は憧れのオールマイトを!!お前の大好きだった半蔵を――終わらせちまったんだ!!!」

小さい頃の憧れ。
今だから見える他人の幸せ。
大好きだったオールマイトを、捕まった自分が原因で時代と供に終わらせてしまった。
学炎祭の期間中、寿司屋で一緒くたになる時、いつも微笑み幸せそうに世間話や友人の話で頬を綻ばせる彼女の幸せを、祖父の笑顔。片隅で観てた自分だから少しは理解できる。
そんな彼女と祖父の家庭を少しでも崩壊させてしまった自分に、責任の自負を背負っていたのだ。
そんな…何も出来なかった足手まといの自分が、神野区後に「爺さん大丈夫だったか?」なんて心配言を言える筈も無く、心に晴れないモヤモヤが募り溜まりに溜まったガスを発散させる。
「もう…自分でもどうすりゃあ良いか解らなくなっちまったんだ!!」
様々な困惑が爆豪勝己を悩ませ呪縛する。
緑谷出久に越えられたこと、

オールマイトの引退、
半蔵の重傷、
飛鳥と半蔵、
思考を巡らせるだけキリが無い。
煮え滾る負の感情が溢れ返り、自虐する。だから、自分の元凶で悲しませてしまった自分を殴ってでも良い、責めて欲しかったのだろう。こんな爆豪勝己は見たことがないし、本当にあの爆豪だと疑い深く感じてしまう。

「そっか…そうなんだ……だから、戦おうってなったんだね…爆豪くんは、優しいな――」

――はぁ？
最初に出てきた彼女の言葉は、誹議とは無縁な慰めだった。
そんな彼女に唖然としてしまうのも無理は無く、飛鳥の瞳は潤いが漂っていた。
爆豪勝己が自分とじっちゃんや、オールマイトの為にここまで叱咤してくれるなんて、初対面と比べれば信じられないだろう。けど、日々を積み重ねることで理解したこともある。
爆豪は確かに周りにも自分にも厳しいが、それと同時に相手に対する敬意や気遣いが確かに存在する。
単純そうに見えて、実は繊細で些細なことや細かいことを視察し考察する辺り、不器用というか器用というか…他人からの視点では外側しか知られない、実は内心では他人の心に気遣いの出来るヒーロー向きな少年なのだろう。
「俺に気遣いなんかするんじゃねえよ!!俺は…オレは……！」
「オールマイトや緑谷くんの件だけじゃない、私やじっちゃんのことでここまで悩んでくれるなんて…私はそんな爆豪くんが優しく無いとは思えないよ。
でもね――」
飛鳥は意を決した目つきで、一呼吸し、一気に距離を詰める。

そして…指に力を込めて思いっきり――
バチィン！
「ッ!?」
殴る。
表現では平手打ちを殴ると言い表すこともあるが、飛鳥は指の爪先を掌の肉に食い込ませ、グーで顔を殴っただけだ。
突然の行動に殴られた本人の爆豪は勿論、見守ってた緑谷も驚きを隠せない。
「――そんな、自分の所為だなんて二度と言わないで!!!じっちゃんは、そんなこと絶対に思わない！口が裂けても絶対に誰かを責め立てたりはしない!!!」
飛鳥が他の誰かに見せる、激憤。
それは曇りなき純粋な怒り。
別に嫌いで爆豪を怒ってる訳では無いし、逆鱗に触れたとか、悪いことをしたとか一切関係ない。
確かに爆豪勝己がここまで自分に責任を抱いて、悩んでくれたのは嬉しいことだ。多分、焔ちゃんに「飛鳥、お前は最強の友達だ！」と真正面から堂々と言われる程だろう。
だけど…「自分なんかの所為で」、「俺なんか」、と自身を誹謗する言葉は、半蔵やオールマイトの善良な行為を否定してしまうことに繋がるから。
「救ける人間に価値も無価値も存在しない！じっちゃんは、じっちゃんが決めた忍道を信じてやり遂げたんだ!!爆豪くんや雲雀ちゃんが捕まったからじゃない、其れが原因だって言うのなら私たちだって救えなかったことに非があるんだから。
何でもかんでも一人で背負って、自分だけの所為にしないでよ！」
飛鳥の意見は尤もだ。
自分だけが悪い理由にはならない。
確かに自分の非力さに打ちのめされてしまい、責め立ててしまうのも自然なのかもしれない。
半蔵学院に帰ってきた雲雀ちゃんがそうだったし、爆豪くんがそう

なってしまうのも、今の本音を聞いて納得した。
でも、其の理屈で筋を通すのなら友を救えなかった自分達こそどうなのだ？
其れだけならまだしも、延々とオールマイトの背中を託し、信頼して安全を預けていた上層部達もどうなのだ？
皆んなが皆んな、原因に当たるわけではないか。

そんなのは結局、オールマイトや半蔵の引退する原因にはならないのである。
そもそも飛鳥は、半蔵が床に伏せる原因を恨んだりはしていない。大体他人を怨む暇が有るのなら「そんなことよりも、修行は順調かのう？」なんて心配してたのが馬鹿馬鹿しく思える位の事をじっちゃんに言われそうだ。
「忍だって常に命懸けで事を為して、想いを抱えて闘ってるの。いつ死ぬかも解らない闘いに身を投じて、明日が来るのも解らない道を歩んで…私たちは強くなってるんだよ。
じっちゃんだってそう、神野区の件だけ覚悟してたんじゃ無い。如何なる任務も常に生死を賭けてたんだよ。だから、じっちゃんがああなっちゃったのは悲しいけど…でも、今思えば誰も救えずに生き延びるより、誰かを救い役立つ事のほうが、じっちゃんは後悔してないと思うよ。私ならそうするし、少なくともじっちゃんの気持ちは理解できるよ」
「……もし、テメェの爺さんが本気であの場で死んじまっても、同じこと…言えんのかよ」
「大切な存在を失って無いからハッキリとは言えないよ？でもね、私ならじっちゃんの想いを背負って生きていきたいと思ってるよ。
オールマイトが、緑谷くんに託したように…今度は私が責任を持って…そして、じっちゃんの分も闘う」
死んだら其れは悲しむんだろうなぁ…
辛くて泣き叫んで、殻に閉じこもってしまうかもしれない。
けど…大切な人を亡くし、泣きじゃくるのは決して悪いことじゃ無

いから。
涙が枯れた頃にはきっと、強くなってるかもしれない。
少なくとも、忍の死は決して無駄ではないのだから。

「死んでしまった命は二度と回帰しない…でも、その人の思想や意思を引き継ぐことは出来るから。
だからじっちゃんが死んじゃっても、精々堂々と胸を張って生きていくよ。其れに、私が笑顔でいないと、じっちゃん心配して化けて出てきそうで怖いし！」
最後は少し明るみがかったような、お調子者のペースに戻り若干困惑する。
彼女の楽観的主観に思わず、自分が心配してたのが本気でバカバカしく思えてしまう。
「でも、其れでも納得がいかないなら…鬱憤晴らしたいのなら、何時でも相手になるよ！
其れに、爆豪くんとはあんまり喋らなかったし…これを機会に貴方とも交流を深めたいと思ってるもん」
飛鳥の得意分野は、死ノ美を交えて他者との友好を深めることだ。
爆豪という雄英生徒を相手に死ぬ気でというのも些かオーバー過ぎる気もするが、爆豪なら「本気出せやクソカス」と暴言が放たれるので手加減はしないつもりだ。
「……ハッ！デクよりもある意味厄介で面倒な女じゃねえか……
解ったよ、お前の気持ちも…言いてえことも、本心で俺を憎んでないのも…理解した。
けど、それで引き退るほど俺は二流じゃねえ…喧嘩吹っかけた以上、最後までやり通すつもりだよ…」
これ以上、半蔵や飛鳥の件で引きずるつもりは毛頭ないし、寧ろ本音をぶつけてくれて気持ちが晴れやかになったのが第一の理由だ。
「かっちゃんの言いたいこと、僕も解るよ…」
ふとした瞬間、飛鳥の横から口を挟むように出てきたのは緑谷出久。

その声色は落ち着いており、優しさが含まれていた。
「確かに、幼馴染とは言え…あんだけ酷いことされて、それでも背中に引っ付いてる僕を見れば、鬱陶しくもあったり気味悪がられたりするのも、何となく解る…」
そこまで自覚して、何故ここまで固執するのか？
爆豪の疑問や拭い切れない疑問は其れでもあるのだろう。
「だって、僕もかっちゃんに憧れたから――オールマイトと同じ、僕も君の背中を追い求めてたから…！」
「――ッ」
緑谷出久もまた、彼の背中を追い求めていた。
爆豪勝己が緑谷出久を認めたように、緑谷出久は爆豪勝己の勝つ姿に憧れた。
だから幼少期はどれだけひっ叩かれても、中学時代でどれだけ酷い目に遭わされても、緑谷は頑なに離れなかった。
幼少期からの、もう一つの憧れを追って。
「今まで、僕とかっちゃんとは面を向かって話し合いなんてしなかったから…本音を言い合える機会なんて、いっぱいあったのに、それを僕らはして来なかったもんね……だから、こうなっちゃった責任は僕にもあるし、咎められても何も文句は言えないよ…」
緑谷出久の今までの人物像では強者、ガキ大将、意地っ張り、ワードは様々浮かんではいるが、友好的な意味は皆無に等しいし、殆どが嫌な奴というのが一番だ。
そもそも緑谷だって嫌いな人物を好んで後を追ったりしないし、普通であれば友達という縁も切ってるだろう。
でも、幼馴染関係なく爆豪に絡むのは、尊敬の言葉がそれ以上に強いから。
それが、緑谷出久を突き動かしていたと呼んでも過言ではない。
「君の背中を、僕はずっと追ってたんだよ…だって、君の勝つ姿が、オールマイトに負けないくらい輝いてたから」
お世辞でも謙虚でもない、緑谷の口から放たれた本音。
爆豪も先ほどと同じくまた唖然とする。こんな、無個性と罵られ無

能とまで認識してた、こんな気色悪いとばかり思ってたヤツが、自分に憧れていた。
其れに対して、嬉しいと思ってしまう自分がいることに、戸惑いが隠せない。

「かっちゃん…言ってたよね？二人でまとめてかかって来いって…ちょっと違うかな」
「戦うなら、二対一なんて卑怯地味たことじゃなくて…やるならとことん…三人とも敵同士だ！」

飛鳥は拳を握りしめる。
今なら、試す機会としてはうってつけだ。

「武器を使わずに、戦ってみせる！」
今こそ、訓練の成果を見せる時。
憧れから来たその想いは、互いにぶつかりあう物となり――

１３９話「喧嘩の結果」

「ねえ、飛鳥ちゃん…雲雀のこと、怒らないの……？」

時は遡り。

神野区激戦後から一夜明け、霧夜先生から「雄英高校から連絡が来るまで半蔵学院で待機だ」と指示を受けた飛鳥達三名は、忍学科の教室で休息を取っている。

湯気の立つ湯呑みをちゃぶ台の上に置き「何で？」と問い返した。

雲雀の表情は見るからに罪悪感の篭った薄暗い顔を立っており、声が微かに震えていた。

そんな彼女に何処か不満を感じる飛鳥は、首を傾げる。

「その…半蔵様のことや、連合に捕まったこと……」

「あー、神野区のことは気にしなくても良いよ？其れに、霧夜先生の説教も終わったんだし、過ぎたこと悩んだって仕方がな――」

「そうじゃなくて――！……その、雲雀が弱くて捕まったせいで…飛鳥ちゃんのお爺ちゃん…ううん、半蔵様が倒れちゃったんだよ？其れに、今は無事だったとしても…死んじゃってたかもしれないんだよ…？だから、その…なんで、怒らないんだろうって…」

雲雀の言葉の意味を理解するのにそこまで時間は経たなかった。

彼女の言動から察して、恐らく自分の弱さと今回の事件に余程の責任を感じてるのだろう。

何せ彼女は他人に思いやりのある、心優しい少女だ。

その分雲雀は気弱で優柔不断な一面も多く、雄英高校に転入する前までは秘伝忍法書を商店街に落としてしまったというドジっ子だ（スケールが違うが）。

訓練も毎日失敗ばかり積み重ねる彼女が自然的に責任を追い込んでしまうのも、仕方ないと言うか癖なのかもしれない。

「ううん、怒らないよ？だって雲雀ちゃんが悪い訳じゃないもん。捕まっちゃったのはしょうがないし、私たちだってあの場で雲雀ちゃん

を救えなかったもん…悪いかどうかの話をするなら私たちにだって非があるんだし、気にしてたって仕方ないよ」
「で、でも……」
雲雀はオドオドと弱々しく口を開き、言葉を紡ごうと必死に探している。まだ拭えきれない部分でもあるのだろうか、何か言いたげそうは表情だ。
「其れにね、じっちゃんはあの結果に後悔してないと思うの。そりゃあ…大切な人が、大好きなじっちゃんが居なくなったりするのは嫌だけど…でもね、じっちゃんだったら助けずに見放してた方がよっぽど悔いが有ったと思うの」
あの場所で半蔵が口にしてた言葉は聞こえてなくとも、大体の予想は付く。これも同じ血筋だから成せる事なのか、特に気にしてはいない。
いや、気にしてないと言えば嘘になるだろうが、あの時は庇う以外オールマイトを助ける手段も無かったし、そもそも年齢的に忍としての活動は向いてないので、生きてるだけでも奇跡だと思う。
「雲雀ちゃんがもし、じっちゃんの立場なら…どう行動を取る？私だったら、目の前の困ってる人間の盾になりたい」
刀と盾。
今思えば飛鳥の強さの秘訣も、忍道の始まりもここからだった。
原点と呼ぶものなのか、誰かの盾になることで人を守り、誰かの刀になることで如何なる強敵に立ち向かい、明日への道を切り開く。
半蔵学院の選抜メンバーに於いて先輩である斑鳩や葛城とは違い、なぜ飛鳥がリーダーに選ばれたのか…半蔵の孫という肩書きなしでも今ならハッキリと解る。
「私の為に心配してくれて有難うね雲雀ちゃん♪そーだ！今度、皆んなでじっちゃんのお見舞いに行こうよ！」
彼女の天真爛漫な笑顔は、いつも人の心を癒し、和ませ、勇気をくれる。まるで、オールマイトに負けないその光り輝く笑顔。
その笑顔に雲雀は、何故かふと違う人物の笑顔が積み重なる。

『どんな時でも笑顔は大切だよ！お師匠が言ってたもん、笑ってる人間が一番強いって。皆んなが笑顔じゃないと、暗いままで楽しくないもんね♪』

――え？

違う女性が積み重なったことに、茫然としてしまう。

雲雀の瞳に宿った華模様の華眼が映し出されたものなのか、はたまた幻覚による錯覚に近い現象か…そう言えば、神野区で人質に捕まってた時から殆ど睡眠を取っていないので、疲労が蓄積されて見えてしまうだけかもしれないが…

「どうしたの…？雲雀ちゃん？」

「へ？あ、ううん――何でもないよ！気にしないでっ」

ぎこちない返事をする雲雀に飛鳥は益々頭の上にクエスチョンマークを浮かばせる。

…あの女性は誰だったのだろうか？覚醒した紅蓮の焔と少し似た気もするが、あくまで髪の色と言うだけで、他に言えることがあるとすれば可愛らしくも美しい女性というのが第一印象だ。

況してや、見覚えのない人間と面影が重なるなど、普通ならあり得ない。彼女が誰かに似てるとしたら、半蔵や焔位だろうに、全く知らない人物が自分の視界に映り出たのは、何か理由があるのだろうか？

「難しいことは私も上手く言えないけどさ……雲雀ちゃんは私たちの大切な仲間だもん。

責任を感じてくれるのは嬉しいけど、私たちは責めたり批判したりはしないよ。蛇女の時もそうだったじゃない」

蛇女子学園。

其れはまだ雅緋が血界突破の代償として廃人になっていた頃、まだ焔達が抜忍になる前のことだ。

超秘伝忍法書の強奪戦により、善と悪の荒れ狂う戦いの火蓋が切り落とされてたあの時の戦い。敵である春花に操られ、半蔵学院を裏切ってしまった(本人の意思とは関係なく、傀儡として操られてた為)記憶は、今でも鮮明に覚えてるし、自分の所為で半蔵学院に迷惑をか

けてしまったなぁ…と多々思い詰める事がある。
「あ、アレは…確かにそうだけど……でも、それに続いて雲雀、今度はオールマイトに半蔵様、クラスの皆んなにまで迷惑を掛けちゃったから…だから……」
そんな自分が嫌なんだ――その言葉が上手く口に出なかった。
役に立たず、次は最初よりも酷い失敗を繰り広げてしまいそうで、そんな自分の弱さが他者を傷付けてしまうことに、恐怖を抱いてしまう。
修行すれば良いだけの話、と言うのは聞き飽きたほど、雲雀は何度も訓練を受けるも成長の伸び代はほぼ皆無に等しいとさえ自覚している。
「う～ん…じゃあさ！思い悩むことがあって、言葉で解決できないなら修行して汗を流そうよ！考えてたって、時間が減ってお腹空くだけだよ？」
彼女の言葉に、雲雀は少し面を食らう。
明るい笑顔に、透き通るような彼女の声色は、いつも雲雀の心を慰めてくれるようで、励ましてくれる。
「えっ、で…でも……」
彼女なりの考慮だろう。
お誘いや善良ある配慮には有り難みはあるが、生憎今はそんな気分でもないし、お菓子なんて以ての外…パフェ３杯しか食べれない腹具合だ。
雲雀は遠慮すると言った形の様子だが、飛鳥は引き下がることなく食らいつくように手を握る。
「雲雀ちゃん。いつまでも悩んでたって仕方がないよ。自分の力の弱さに打ちのめされてるのなら、それ以上に食らいついて壁を越えれば良い。皆んなそうして来たじゃない、だから雲雀ちゃんももっと強くなろう？」
「雲雀は…何をしても…失敗ばっかするし、ドジっ子だし……足を引っ張るんだよ？」
「仲間を足手まといなんて思わないよ、心配しなくても大丈夫。私な

んか、スリの人に５００円玉盗られちゃった位だもん」
アレは確か商店街で歩いてた時に、ザコ山盗賊団の白浪という女性にスリで財布を奪われた時である。当初は忍としての才能や実力も底辺に近く、焔には「お前は忍には向いてない」と罵倒な台詞まで吐かれてしまった頃が懐かしく感じる。
しかし其れを自慢げに話しても良い物なのかと思えてくるが…本人は気にしてない様子だ。
「それにね、じっちゃんが死んじゃっても私の忍の道は諦めないよ。そもそも忍になった以上、命を懸けて戦うのは当たり前だもん。そう考えると辛いことや悲しいことばかりが多い気がするけど…それが全てじゃ無いことは、雲雀ちゃんも知ってるでしょ？」
どんなに辛い時でも仲間が側に居てくれる。
其れは、半蔵学院に入学して始まったことで、そこから先は色んな仲間に出会えた。
雄英高校、敵対関係だった焔紅蓮隊、死塾月閃女学館。
人生とは不思議なものだ…恵まれてもない〝華眼〟という天賦の才を手に入れ、自分はなりたくなかった忍を目指せば、こんなにも頼りになって優しい仲間に巡り会えた。
「だから、嫌なことがあったり悩むことがあって、解決できないなら…修行しよ！」
体を動かすと言うのは体力や筋肉を付けるだけでなく、ストレス解消やリラックス効果が有り、健康に良いと聞く。
人間は不安や悩みを溜め込むのが癖になっている。些細なことや聞ける範囲では人に訪ね、解消する術があるが、そうでないケースもある。
そう言った意味では飛鳥の〝修行しよう〟という発言も、単純に見えて実は雲雀の気遣いにもなっているのだ。…当の本人が単に体を動かしたいだけという意味は含まれてないとも言い切れないが、雲雀のためを思ってるのも確かである。
「飛鳥ちゃんは…強いな」
彼女の明るみの言葉と笑顔に、思わず小さく呟いてしまう。

自分の祖父がアレほどの怪我を負い、後少しで手遅れだったかもしれないのに、自分の失敗を責めずに思い悩み詰める自分の心配をしてくれる。
常人の人間ならあり得ないのに、忍というレッテルが貼られてるだけでこうも違うのか。もし、忍という立場で無ければ彼女の心は崩壊寸前に達してても可笑しくはない。
それなのに彼女は……――
こうして優しい笑顔を見せてくれる。
こんなにも暖かい言葉を掛けてくれる。
仲間の存在と大切さを大事にしてくれる。
彼女が2年生にして半蔵学院の選抜メンバーのリーダーを担う理由も、霧夜先生から賞賛されるのも、改めて納得が行く。
こんな聖人君子など、この世界で探しても滅多に居ないだろう。況してや、華眼の影響を受けてない彼女となると尚更だ。
「有難う…飛鳥ちゃん……」
その華の様な美しい瞳から、微かな涙が滲み出る。
この涙は悲しみか？苦しみか？
違う、嬉しさだ――

時は戻り、深夜に轟くグラウンド・βは夏の夜の静けさとは裏腹に、白熱の空間と化していた。
三人の身勝手な喧嘩が始まって、既に３０分近くは経過してるだろう。
爆破の乱打。
鬼にも勝る豪打な拳。
風が唸り上げる足。
それがまるで火花が飛び散るかのような荒々しさと、風に揺られて散る華のような凛々しさが、異常な空気を漂わせて居た。
ある者は不服な面を浮かばせて。
ある者は友を想い拳をふるい。

ある者は戦場に胸を躍らせて。
各々のバラバラな感情が、絵の具で混ざり合うように集う。爆豪の爆破を飛鳥に向けるも、その腕を蹴りで逸らし、拳で相手の顔面を殴りかかる。
其れを防ぐよう、仰け反り鼻先スレスレで回避に成功。汗が飛び散るも関係ない。そのまま自分も蹴りで追撃を仕掛ける。
しかし飛鳥は忍の中で近接戦を得意とする者。その点に関しては緑谷や爆豪、切島や尾白と言った肉弾戦を得意とする武闘派には引けを取らない。
そのままバク転し躱しながら距離を取る。
(チッ――デカ乳女が…蛙女にポニテ女、猿野郎と訓練で一緒になるのモニターで観察してたが……成長し過ぎだろオイ!!)
日常の戦闘訓練で、ヒーロー科と忍学科が合同で訓練に励むことなど初期に比べて今となっては当たり前。
飛鳥や柳生、雲雀のステータスを監視モニターで確認してたが決して悪くはなかった。これが爆豪自身による感想である。
しかし、悪くはなかったという個人による意見であって、強いとも言ってない。いや…少し語弊だろう。
弱くはない、それだけだ。
忍だからこんなものかという軽い認識も有ったし、吸収できる分はこの通り蓄えた。
それでも少女は、更にその上をいく。
自分の予想を遥かに超えて、羽ばたくように。
「やっ!ハッ――!」
虚空を切り裂く脚技と、気迫ある拳。
緑谷出久の五%より少し上…と言った方が良いのか、着々と爆豪と緑谷の動作に順応している。
「らあッ――!!」
ここで緑谷が二人の間合いをブチ壊すかの如く、めり込み脚と拳を上手く巧みに使いこなし、飛鳥は防御し爆豪は前方に爆破を使い距離を引き離し

「死ねェ!!!」
瞬時に後方に爆破を放ち威力を殺し、前方へ飛んでからの大規模爆破を放出する。
爆豪の個性は始まりの頃から明かされたが、汗をかけばかくほどに威力は増し、強さも跳ね上がる。コスチュームの個性補助アイテムに重視されていたが、サポートアイテム無しでも、対人に於いて体力を消耗するので、汗をかくのは必然。
つまり、戦闘が長引けば長くなるほどに威力も強く増し手強くなるのだ。
即ち、爆豪勝己を相手に長期戦は愚策。
戦えば戦う程に汗をかき、それ程に個性による脅威が膨らんでいく。確かに戦闘向きで派手な個性だ。
「らああぁっ!!!」
ゴッ――
「!?!」
視界がブレる。
飛鳥の腹部が、爆豪の頬が、以前より痛みを増す。
先ほどの攻防の中で、この痛撃によるパワーは明らかにこれまで食らった中では一番に強いレベルだ。
(あの時は…5%のままでいた……
でも、今は違う!!体の扱いも慣れて来た、パワーも体も以前より大分個性が馴染み追いついて来た…!)
職場体験で爆豪のセンスを元に編み出したフルカウルに、怪我をしない程度の5%。しかし林間合宿に続き少ない期間だが個性を伸ばす圧縮訓練で培った強さによる経験が、少し先へと彼の背中を押してくれる。
「8%――フルカウル!!」
五%から八%。
伸び代は少なくとも、威力は依然と比べて強烈なのは確かだ。
爆豪は不敵な笑みを浮かべ、飛鳥も同じく戦闘狂じみた瞳を差し向ける。

この打撃を食らって個々人は想う部分が有るだろう。
小さな伸び代でも、たったの八％で屈されそうな勢い。
たった短期間でここまでの成長を発揮する少年の急成長。
緑谷の成長に更なる脅威だと認識する者もいれば、こんなにも強くなれた事に、まるで自分のように喜ぶ者もいる。
「八％……？１２０％で来いや舐めプ野郎!!」
爆豪は軽いアクロバティックな動きで緑谷に反撃をし、空中のままで上手く避けられない緑谷はその爆破をモロに浴びてしまう。そこを飛鳥が追撃で背中に蹴りを入れ、緑谷の背骨が嫌な悲鳴をあげる。
…骨折はしてないので、多分大丈夫…だと思う。
「次ィ！デカ乳ィ!!」
「その名前呼ばれるのもう慣れた!!」
爆破によって勢いを増す少年の猛攻が、彼女を襲う。
掌から文字通り爆破を放ち、其れを我武者羅に…乱暴に振るう。確かこれは体育祭の切島戦で見せた爆破ラッシュだ。
「テメェも落ちろや――チェインブラストォォォォ!!!!」
リズムを刻むかのような燃え盛る爆破の乱撃は、視界を奪い相手に一瞬の隙を与えない。
一撃一撃が、まるで悩み抜いた不安と怒りを全部彼女に叩き込むかのように、爆破の連鎖が延々と続いていく。
「死ねヤァぁぁぁ!!」
ＢＯＯＯＮ!!
最後のフィニッシュは最大火力で決着を付ける。
派手な爆発が人影を覆い、煙が辺り一面に漂い視界が悪くなる。滴り落ちる汗を拭いながら呼吸を整える爆豪は、目を細める。
「がッ――!?」
しかし、爆豪はその煙が晴れる間も無く背中から強烈な痛感を覚えた。まるで思いっきし叩かれたかのような痛撃に、思わず表情が歪む。咄嗟に背後を見やり、迎撃の体制を整える。
「まさかデクかッ――はあ？」
あの状況から察して倒れ伏せてたデクだと推測した爆豪。しかし

彼の予想は粉々に破壊された。
何故なら、晴々した光景から颯爽と現れ自分に追い打ちを仕掛けた、飛鳥が其処にいたのだから――
しかしよく見ると彼女の上半身は下着のままだ。
――んじゃあ…俺が爆破で叩き込んだのは…
煙が晴れ、視線の先を捉えたのは…彼女の制服だ。
ボロボロで爆破の火力にほぼ焦がれ黒くなったその服…この戦法は何処かで……
「チッ!麗日の…!!」
「私だって単に体育祭を眺めてただけじゃない!!爆豪くんが焔ちゃんの技を吸収したように、緑谷くんが爆豪くんやオールマイトから吸収したように、私も皆んなと交えて強くなる!!」
まさか彼女が麗日の真似をするとは…
これを、身代わりの術とでも呼ぶのだろうか、忍としてはある意味理に適ってる戦法だ。
「だったら何だあぁぁぁ!!」
爆速ターボで瞬間的に距離を詰め、右の大振りで爆撃を叩き込む。其れを防ぐように身を屈め?きだした腕を取り防ぐ。
腕を引っ剥がそうとする爆豪に、其れを阻止する飛鳥。二人の至近距離はほぼゼロ状態。ギチギチと筋肉の強張った音が、両者の耳を打つ。
「僕も忘れんなよ!!」
そこから横蹴りをするよう死角から飛鳥の横腹に蹴りを入れ、吹き飛ばす。「あァッ!」と嫌な悲鳴をあげながら、アスファルトの地面に身を削らせ皮膚がめくれる。其れに続き爆豪に攻撃を仕掛けようとするも
「テメェの動きなんざ慣れたわクソカスがぁ!!」
右に爆破を放ち視界から横へと少年が消える。
ターゲットを一瞬だけ見失った緑谷は爆豪を捉えようと顔を向けた時には既に遅し。
両手で爆破を放ち、相手の腰に強烈な爆破撃をお見舞い。腰に悲鳴

を上げた緑谷は悶絶し掠れる声を振り絞る。
「まだまだあぁぁ!!」
負けずと雄叫びを上げる少女は、傷を負いながも覇気を纏わせている。只ならぬ気配、流石は死線を潜り抜けた猛者とも呼ぶべきか。
飛鳥は拳を構え、予測を立てた緑谷は一段と早く回避を試みるも、拳はあくまでフェイント。腹部に突き刺すかの如く、強い蹴りを入れ、少年は思わず口から消化液を吐いてしまう。
「ゲホッ…!・オエ…はぁ……ハァ……」
痺れるかのような痛みに、腹部に残る痛みはまだ晴れない。ついでに言ってしまえば全身がギズギズして痛いし、正直横たわりたい。
タダでさえ爆豪相手にするだけで大苦戦を強いられるし、飛鳥なんて以ての外だ。
(そう言えば…忍との戦闘って、今思えば全然経験したことない…よな……飛鳥さんの動きは観察してたけど、実戦となると違うというか…)
観察と体験では経験が違う。
相手の動きを視認しても、その動きを完全に再現出来ることが難しいように、頭の中で動作は理解していても体が追いつけないのなら、ある程度の対策と防戦に移ってしまうのも仕方がない。
更に彼女は刀二丁による武器を用いた戦闘がメインだったハズ。それが急に肉弾戦を強いる彼女のデータは中々に見ない。十日間とはいえ微かな情報は頭に入れてるも、それでも完全かと問われると首を縦には頷けれないのだ。
「こんなものかよ!!」
それでも二人に負けまいと、せめて心だけでも気合を張る。
その言葉に不敵な笑みを浮かべる彼女とは他所に、爆豪勝己は…
「はあああぁぁ!?殺されてェかクソナードがあぁぁ!!」
ブチギレ。
憤慨極まれり。
枷が外れたような、虎にも勝る咆哮が夜空に響き、全身の筋肉がより強く力む。

別に煽りたくて意図的に発言した訳では無いのだが、緑谷の時に暴言のような荒々しい口調には理由がある。
内心穏やかで、腫れ物に触るような気弱な性格とは裏腹に、極限状態になるとつい爆豪の口調を出してしまう癖があるのだ。好きでやってるのではなく、反射に近い自然現象。其れもまた、憧れから来る懸念の影響を受けてるものと考えても良い。
一方爆豪は追い詰められたりや、ピンチな時こそ冷静でいる場面が多い。ＵＳＪ襲撃の際も彼の活躍は見事だったし、黒霧や漆月に一矢報いたのも事実。
「これ食らっていっぺん死んでろ――」
爆ぜる両手は、円を描くかのように自身を軸とし中心に廻り、コマのように勢いのついた回転が速度を上げる。
いや…これはコマというより、回転花火と断言しても良いだろう。
勢いが増すごとに爆破の威力も上がり、的確に突こうと明確に動く。これだけ回ってよくもまあ酔わない物だな…と改心する半分…
「今度は…雪泉ちゃんの技…！」
彼の戦闘センスに驚きを隠せない。
これは雪泉の秘伝忍法――《樹氷扇》を意識してるのだろうか、回転と能力を活かした必殺技を緑谷に放つ。
「こっちだって吸収してるわボケェ!!クタバりやがれ!!!」
【爆式――廻爆転】
爆指斬に続き、雪泉の動きや個性を活かして威力を再現させる彼の才能には驚きばかりだ。
廻れば廻るほどに爆破の威力で加速し、スピードを上乗せすることでハウザー・インパクトとは違う高威力な攻撃を発揮するこの技は、酔う危険性もあるがその分、必殺技としては完成している。
「カロライナ――スマッシュ!!」
ここを敢えて回避の選択では無く、迎撃をすると判断した緑谷は咄嗟に腕をクロス型にし、開くように放つ。
空気の圧が放たれ、僅かながらに飛鳥の二刀繚斬をイミテーションしてるみたいだ。又、これはＵＳＪでオールマイトが脳無に放った技

でもある。
二つの衝撃がぶつかり、余波が生じり立ち上がる飛鳥は膝を折る。
爆破飛び散る火花に火傷を負う緑谷に、鈍く重圧感ある打撃を喰らい顔をより強く歪ませる爆豪。
三人とも既に満身創痍で、下手すれば取り返しのつかない怪我まで犯すだろうほどのレベルまで到達していた。
だからこそ、各々の想いによって――立ち上がる
――オールマイトに応える為に

「俺がぁ…敗けるかあああぁぁぁぁぁーーー!!!!」

腹の底から噴き出た爆豪の咆哮。
それが合図となるかのように、上から下へと叩き落とすよう大爆発を起こす。
その破壊力は対人訓練や蛇女、体育祭に引けを取らない…いや、それ以上の大規模な超爆破。それこそ、死人が出ても可笑しくないほどの高威力に、緑谷は為すすべなく猛撃を食らい、飛鳥は巻き添えを食らう。
天から地へ叩き落とす其れは、まるで神が下す鉄槌のようだ。尤も、こんな荒々しい天罰は余り想像つかない物だが…
「……はぁ…はぁ……」
視界が霞む。
痛みは鮮烈。
意識は曖昧。
ヨロヨロで、ボロボロで、クラクラで、そんな擬音が何重にも奏でるような感覚に、脳の働きが覚束無い。
地面はクレーターのように凹んでおり、緑谷は倒れ伏せていた。…いや、正確に言えば〝爆豪に平伏された〟と言うべきだろう。腕は抑えられ、足で腕を踏み、体重を緑谷に押し付ける。
「お前の……負けだ……」
息遣いの荒い爆豪は、緑谷が戦闘不能だと確認すると、立ち上がる。

呼吸するだけで肺や肋骨に微かな痛感を覚え、派手にやったなと思い知らされる。
「デカ乳女は…」
爆豪にとって、敬意を表すことが出来る強者とは、緑谷を除いてそう多くは無い。
どれだけ魅力的な個性だろうと、捩じ伏せれば問題ないし、オールマイトなんか単純なパワーで渡り合えてる位だ。嘗てはアメリカでマフィアやテロリスト集団を相手にたった一人で立ち向かったあのニュースの生放送は今でも覚えている。
その中で爆豪がオールマイトに憧れたのは、どんな状況でも笑顔で勝つ姿――という彼らしい答えだった。
しかし、そこにはもう一つの光り輝く憧れが存在していて、倒れない姿にも同時に魅了されていたのだ。
神野区で倒れないという姿勢の偉大さを身を以て噛み締めただろう。
だから、麗日お茶子という非力でも格上の強者に食いつこうと、倒れてしまっても折れない瞳に心打たれたのは自覚している。

――飛鳥は、拳を構えて目の前に立っていた。
現時点で誰もが観れば爆豪の勝利に揺らぎがないと確信するだろう。気を抜いてた訳でもないが、アレ程のダメージを受け蓄積してるのなら、立ち上がることだって困難なハズ。
はず…なのに
「悪いけど…この勝負、まだ私は負けてない――」
風が拳に一点集中するように唸りを上げて溜め込んでいく。
その悍ましそうな気配に、防御を構えるも無駄。
飛鳥は全身傷だらけの状況の中、爆豪にも負けない雄叫びをあげ、拳を振るう。
「〝新〟・秘伝忍法――【風刃衝乱舞】!!」
拳が分裂したかのような幻覚。

無数の拳が銃弾のように、嵐の猛攻が爆豪を襲う。
物質を斬り裂くかのような風が、拳に纏い衝撃を与える。
緑谷と爆豪が新たな必殺技を編み出してる真中、彼女は忍術を個性の応用として取得しただけでなく、新たな秘伝忍法という必殺技の芸まで考え抜いてたのだ。
そして、これは――黒佐波の秘伝忍法《黒波衝乱舞》を模倣した動きでもある。
「ッ――!!」
鋭い衝撃が体全身に渡り、意識諸共、吹き飛ばされる錯覚を味わう。
防御があっさり破られ、爆破で迎撃するも風で爆破の威力が殺され、数カ所の打撲で青白い色が浮かんでいるのが見受けられる。
「この……勝負…私の……勝…ち……」
プツン。
糸が切れた音が脳に響き、気がつくと自分は爆豪と同じく地面のアスファルトにくっつき倒れていた。
朦朧とする意識の中、運動による熱で体全身汗まみれになりながら、夜空の星を見上げて深呼吸をする。
「勝った人間が……なんで…倒れてる……んだ…」
ゼェゼェと息を荒く吸う爆豪の言葉に飛鳥は「…ごめん」と小声で呟く。まるで、初めての戦闘訓練で開始された緑谷の姿が重なる。
「テメェも…オールマイトに力を授かってんのに…何俺らに負けてんだ…」
少年の指摘に思わず「…ごめん」と飛鳥と同じく言葉を揃える。疲労と痛みが蓄積された体は、そう簡単に起き上がれない。まるで重力が何倍にもなったような感覚。
散々ここまで荒れた喧嘩を起こすバカなど、雄英高校としてはこの三バカで初めてでは無いのだろうか？
「そういう爆豪くんこそ……倒れてる…じゃない」
「うるせえ……はぁ…はぁ……コロス…」
「大抵、返事が返って来るといつも其れだよね……」
彼女の正論にこれ以上口を開かない爆豪は、目を細め夜空を見上げ

る。まさか、彼女にまで負けるとは想定外だ…緑谷と言い、轟焦凍と言い…自分を追い越そうとする輩がドンドン増えていく。
それこそまるでゲームでいう全国プレイヤーとのランキングを競い合うかのように。

「そこまでにしよう、三人共」

闇夜の影から、聞き慣れた声が三人の耳に届き視線が集中する。
明るい街灯に照らされた人物はオールマイトのトゥルーフォーム。
痩せ細ったその姿は相も変わらず不健康そうで、身体が少し心配だ。
「話は聞かせて貰った…すまないね、気付いてやれなくて…」
「アンタが謝んなよ…」
ぶっきら棒な口調で言い放つ爆豪は、少し間を置き――
「何で、デクを選んだんだ……ヘドロの時から…だろ？オールマイトが来てから変わったんだアイツは…」
気掛かりだった問題点を尋ねた。
アレから半年近くが経つこの頃、溜め込んでた疑問と答えがようやく知ることができる。
「……知っての通り少年は無個性だ…だからと言って特別扱いするわけにもいかないよ…私の知人にも緑谷少年のような子がいるし、それを機に彼を後継したんじゃ無い…
非力な彼が誰よりもヒーローに憧れ、そして…あの場の誰よりも、少年が一番のヒーローだったから…」
今でも鮮明に蘇る記憶。
暴れ狂う敵。
苦しむ人質。
外野はヒーロー任せで、当のヒーロー達は打開策も無く手を焼いていた矢先に、少年は無個性でありながら他者を救おうとした。
少年は非力な無個性という存在に悩み、苦しみ其れでもヒーローになる夢を捨て切れていなかった。

そんな少年を知ってしまって、ヒーローになれないとは言えない。
そんな少年に、夢を見るのも程々になんて失言を謝罪したかった。
そんな少年に、当時平和の象徴と謳われた自分すら心を動かされた。
緑谷出久の存在が、自分と積み重なったことも含めて、少年に一縷の望みと夢を叶えさせたかった。
この少年なら…平和という世界を照らし続け、世界を支えてくれるのではないかと。
「…俺の…憧れは間違いだったのか…」
「違う、爆豪少年の憧れに間違いなんて無いし、両方大事さ…」
爆豪の頭の上にポンポンと、手を置きあやすオールマイトに、爆豪はその手を振り払う。
「長いことヒーローやってて思うんだよ…爆豪少年のように勝利に拘るのも、緑谷少年のように困ってる人間を救けたいと思うのも…どっちが欠けてもヒーローとして自分の正義を貫くことは出来ないと…」
緑谷出久が爆豪勝己の力に憧れたように、爆豪勝己が緑谷出久の心を畏れたように、気持ちを曝け出した今だからこそ、解る。
「互いに認め合い真っ当に高め合うことが出来れば…
救けて勝つ、勝って救ける最高のヒーローになれるんだ。それこそ、飛鳥くんと半蔵さんが言ってた、刀と盾の真髄なんじゃ無いだろうか…と」
刀と盾の片方だけでは意味を成せないように、どちらかの片方だけでは誰かを救うことも勝つことも、ヒーローとしての正義を貫くことは出来ないのでは無いだろうか。
そして…彼女の強さの秘訣も、勝因も、彼女の〝刀と盾〟の存在定義が一つの理由に当て嵌まるだろうことを、現状明から様に証明を示していた。
「今までは飛鳥くん達が私たちの元から学ぶ立場だったのに…私が引退した今、今度は我々が学ばされることも有るんだな…」
「俺は其れが聞きてえ訳じゃねえよ…」
爆豪は上半身を起き上がらせ、顔を俯かせる。

深い溜息を吐いた後、「デクとアンタの関係知ってんのは？」と問いてきた。
「半蔵くん、リカバリーガール、校長…生徒では飛鳥くんと君だけだ」
「そうか…わーったよ。
バレたくねェんだろオールマイト…あんたが隠そうとしてたから、誰にも言わねえし、クソデクみてえに軽々しく口にも出さねえ…
ここだけの秘密だ…」

こうして三人から四人へ、ワン・フォー・オールの秘密を知る人間はまた一人増えたのだった。

蛇女躍進編
１４０話「喧嘩の後に…」

各々の思想がぶつかり合った後、オールマイトと緑谷出久の個性――【ワン・フォー・オール】の存在と供に秘密を明かすのにそこまでの時間は経たなかった。
多少混乱地味た衝撃も受ければ、彼の頭の回転から察して理解するのに難しくも無かった。正直言ってコミック展開過ぎて受け入れ難い現実でもあるものの、其れを敢えて何も否定せず噛み砕き飲み込むように真実を受け入れた。
「成る程ねェ…そらぁオールマイトじゃなくとも誰だって秘密にしたがるし、敵連合のボスヤローもアンタに因縁が有ったのも頷けるわ…
何よりリスクとデメリットがデカ過ぎる…」
「すまないね…今まで秘密にしてて……本来ならもっと早く爆豪少年に頭を下げるべきだった…」
「アンタが謝るも何も…クソデクがバラしたのが原因だろ…力の所在やらで混乱を招く上に、関係者そのものまで被害が巻き込む危険性がバカデケェ…
デカ乳も、クソデクがバラしたのか？」
「其れに関しては私から話した。半蔵くんにも言われててね…彼女に話した理由…そして、忍がこの世に存在する理由も話しておこう…」
忍は妖魔を滅する存在。
脅威たる存在が、神威と呼ばれる所以。
巨悪の象徴が半蔵とオールマイトと対峙した事。
彼女が、次に狙われるべき標的だと。
「…今度は、知らさねえと逆に危険な目に遭うから身を以て気をつけろッつー注意報告みてーなもんか…解らんでもねえし、嫌がらせとして孫にまで手を上げるって、敵らしい発想だしな…

デカ乳の場合はれイレギュラーって訳か…つーか何だ妖魔って。初めて聞いたわンなもん…まあ、全部辻褄は合う訳だし、オールマイトがこの場で嘘言うとも思えねえ…」

「家庭内でも、学校側でも彼女だけ本校に連れ戻すという考えも…捨てきれてはないのだが…私の思う部分も有ってね…」

彼女が殺害対象として刃先を向けられてる現状、雄英にも被害が及ぶ危険性もあり、林間合宿だけでも滞在させようとも考えてはいたが、試験合格の後に連れて行かないというのも酷な話な上、学生達の安全面を確保するべく存在する彼女一人を手放すというのも、悩む答えだ。

暫し様子見の結果、彼女自身は三者懇談で頑固たる意志と決断を見出した。

（――飛鳥くんは陽花くんに似てるな…と、体育祭で思う部分は何箇所か有ったが…もし私の見込みが正しければ…多分、カグラに近いのは彼女で、カグラすらも超えうる存在になるだろう…

なら、樺楽（シロ）君がいたら…）

喜んで飛鳥君を次の後継者にしてたのだろうな――

なんて、もしもの妄想を浮かばせる。

いや、これ以上の回想は不要だ。

「何にせよ…秘密が明かされようと俺のやることは変わらねえや…」

嘗て、高校入学で間もなく挫折を覚えた少年は、敗北を知り強さを得た――

その揺るぎない強さは、信念として人を更に上へと押し上げてくれる、心の原動力だ。

オールマイトは、その言葉を知っている。

「ただ…今までとは違え…デクに飛鳥…」

ここでようやくデカ乳女と言う蔑称から、名前へと呼び始めた爆豪に、飛鳥は目を丸くする。

飛鳥や緑谷が、他人の強さを見て吸収したように――自分も経験と供にそれ以上の強さを己のモノとして上へ行く。

「俺は二人に負けちまった訳だ…これ以上の敗北は真っ平御免……〃

選ばれた〝お前に、半蔵（じーさん）の孫たるお前両者を更に超えて、次のリベンジで絶対勝ってやる」
「……ようやく、私の名前呼んでくれたんだね♪」
「それ言われんの嫌だから御託並べた前置きの言葉を垂れたんだろうがぁ…!!」
「けど、名前を呼んでくれたってことは、認めてくれたって意味でしょ？」
「はぁ？馬鹿も休み休み言え、誰がいつんなこと言った、あ〝ァ〝？」
「へっ？だって緑谷くんがそう言って…」
「クソデクてめぇ何有りもしねえ戯言吐いたんだゴラァ〝!!!」
「えぇっ!?そんな僕のせいじゃ…!てか、僕の名前はデクのまんまなんだね…まあ、今は気に入ってるから別に良いんだけど…」
「デクはデクだろーが!!」
「喧嘩はよしなよ～、まだ傷も酷いんだしさっき喧嘩で決着付いたばかりでしょ？」
「テメェが勝手に仕切んな飛鳥！」
夜空の星が輝く下で、三人の声が鮮明に響き渡る。
先程の気迫感溢れる雰囲気とは打って変わって、まるで喧嘩するほど仲の良い、連れ仲間のような、正に学生らしい三人組の姿。
この喧嘩には、学校としては何の意味も為さない三人同士の感情と心が衝突し合った喧嘩だ。
其処にメリットだのデメリットだのと関係ない、恨みっこ無しの真剣勝負。
そんな清々しい戦いをしたからだろう、以前のような見えない壁に隔たれ、距離感が有った緑谷出久と爆豪勝己の関係性が、以前より改善され、真っ当なライバルっぽさが目立ったというのが一番言葉として適切だろう。
かくして、三人の喧嘩は幕を閉じた――のだが…

「試験終えたその晩に喧嘩とは、お前ら元気があって大変宜しいようで――

マジで何してくれてるんだお前ら!!!!」

ギリギリギリギリギリ!!

窮屈に縛る音が、痛々しく聴こえて言葉の内容が耳に届かない。

喧嘩した後、三人に待ち構えていたのは、睡眠の時間を削り夜勤を通しながら授業のカリキュラム整理を行い、馬鹿三人組を待ち構えていた――相澤先生だった。

当然…と言えば、当然だろうな…。

オールマイトが三人の前に現れた時点で、察しが付いてても可笑しくはないが、あの場では状況と空気の流れで気にかけてはいなかった。

「待って相澤くんストップ、捕縛やめて。ね？私の原因だからこれ以上三人の傷を更に深く抉ってはダメだからね」

血相を変えてる相澤に、制止の声を投げかけるオールマイト。

原因…のワードを耳にした相澤は、炭素繊維の特殊捕縛武器を掴んでた力を緩める。

その為、縛られてた三人の苦痛に歪めた表情は元に戻る。

「原因…」

其れは数十分前の出来事。

爆豪と緑谷、ついでに飛鳥が問題行動を起こしてる報せを受け、連れ戻すべく駆けつけにいこうと外をでた矢先に待ち構えたのが、オールマイトだった。

『また緑谷と爆豪ですよ…？ついでに飛鳥も…何考えてんだかあの馬鹿三人は…彼女が問題行動を起こすなんてある意味初ですよ？』

『嗚呼、その事なんだが…私に原因が有ってね…』

『原因？貴方と三人がどう原因に繋がって…？』

『詳しいことは連れ戻してから話すよ。それに、ここは私から三人に

話した方が身の為にもなるし…説得は出来る。お説教はその後でも良いんじゃないかな…？』

ここほどうか譲ってくれという、彼なりの表現と言葉遣いに、何も知らない相澤は呆れた顔で渋々と頷くことしか出来なかった。

「そういえば言ってましたね…で、何です其の原因って？」

「実は神野区の事件でね――…」

神野区という言葉に敏感に反応した三人の様子を見た相澤は、一先ずオールマイトの話に耳を傾ける。

神野区半壊事件。

そう言えば、爆豪が人質として捕まり、緑谷と飛鳥の二名は爆豪と雲雀の救出活動に赴いた張本人である。

しかも爆豪と緑谷は犬猿の仲というのも織り込み調べ終わってもいるし、線を引くように繋がってるのも何となく理解はしてきた。

「実は――…爆豪少年は私の引退に負い目を感じていてね…モヤモヤとした気が晴れないまま試験を臨ませ…結果、彼の積もった劣等感が爆発した。気づけず彼のメンタルケアを怠った大人の失態でもあるのさ…それが喧嘩に繋がり招いてしまった…

どうかこれ以上は彼らを責めないで頂きたい」

「……んん」

オールマイトの言葉を率直で理解した相澤は、これ以上深い勘繰りはしなかった。

オールマイトの立場もあり、その原因が無事に解消したのならば特に文句も無ければ問題もない。同じ学校の教師とは言え元・平和の象徴…一先ず彼の意思に尊重するが…

「しかし如何なる理由があれとルールを破って問題起こして済む話でも有りません…

下すべき処罰はしますし、言葉巧みだけで終わるほど俺は落ちぶれちゃあいません。反省を形として証明しなければコイツらバカの為にもなりませんし…

おいお前ら、先に手を出したのは誰だ？」

だからと言って罰そのものを許す訳ではない。

犯罪を起こした敵が罰を受けるように、騒ぎを起こした生徒は如何なる理由があろうと罰を受けなければならない。
まあ、除籍処分にならないだけ大分マシではあるが、余り気乗りはしないし、受けて喜ぶものでもない。
「俺」
「僕は仕掛けられて対抗してガンガン…」
「私も緑谷くんと同じく…っていうか、鬱憤晴らしの相手になるとか宣言しちゃってたし…」
オイ、その理由は普通に考えてアウトだろ。と内心飛鳥に突っ込みを入れる相澤は、顔を曇らせる。
「爆豪は四日間！緑谷と飛鳥は三日間の領内謹慎！その間の領内共有スペース清掃！朝と晩！そして反省文の提出！」
結果、相澤先生から下された罰の内容はこの通り。
仕方ないと言えばその通りだと思うし、寧ろこれだけで済むのならまだ可愛いレベル。もし生徒達の保護と神野区がなければ最悪除籍処分にされても可笑しくは無いのだから。
「怪我に関しては痛みが増したり治らなかったり、重傷の場合は保健室行け！余程のことが無い限り婆さんの個性には頼るな！勝手に付いた怪我は勝手に自分で治せ！其れが理解したらさっさと寝ろ！以上!!」
お説教も終わり、深夜遅くなった三人は疲労と傷の痛みに浸りながら部屋に戻り就寝する。
（相澤先生に酷く怒られちゃったなぁ～…まあでも、無理ないか……しかもあの後なのに、問題起こしたらそりゃあ謹慎になっちゃうよね…）
今思えば、半蔵学院では戦闘許可も許されてたし、忍の訓練や授業はヒーロー科とは違って特殊な部類である。
尤も、昔までは善悪の殺し合いを生業としていたので、当然なのだが、一年生と比べて今振り返れば随分と変われたなぁ…と呆然と考えたりもする。
（今日は疲れたし…明日も早いし清掃しなきゃいけないからもう寝よ

う…）

疲れ果てた彼女の思考は、そっと眠りについた。

「ふぅ…今日の任務終了報告も終わり、資料は提出した…次は……」

真夜中――場所は打って変わり蛇女子学園へと移る。

天守閣の最上階に達する部屋、嘗ては道元や伊奈佐が王の座として居座り胡坐を掻いていた場所。

今は正式にカグラの称号の中から選ばれ、蛇女子学園の教官の立場として収まり活動してる小尾斗は、あの二人よりかは随分とマシだし、安全面も高い。

「……雅緋と忌夢は明日を以って退院か…前に面会した時か、忌夢はさておき雅緋の回復は早かったな…選抜筆頭を名乗るだけはあるが…」

ここまで回復が順調に進み、退院も可能と言うのは少し信憑性に疑いを持ってしまう。

「いや、俺も現場に居合わせて無かったが…傷が浅かったのか？まあ何にせよ…それなら手続きもしなくちゃな…

明日は…ん？雪不帰からの手紙？」

資料を確認し整理を済ませていく中、彼の目が捉えたのは一通の手紙だった。

内容は、簡潔に言えば会って話をしたいという内容。

特にそれ以外の物は書いてなく、詳細は書かれていない。いや…書かれてない方が自然なのだが、其れにしては…

（いや、話せない内容か？態々俺に？

俺がコイツと会うのなんて陽花の葬式以来だぞ…？）

陽花。

忍の象徴にして、カグラという存在を超えし存在。

その知名度はカグラとしては誰もが知っており、小百合すらも超えうる姉的な少女のことだ。

彼女の人望や期待度はヒーローでいうオールマイトと同じであり、大勢が彼女に期待と尊敬の眼差しを向けていたのは事実である。
「……いや、そもそも陽花の死など認めない。俺はまだあの人が死んだことを絶対に認めてない」
俺を否定した家族。
男に産まれたことで罵声の言葉を浴びせられた日々。
野生の蛇としか友好関係を築けなかった、根暗ボッチみたいな価値のない俺を…彼女は俺に手を伸ばしてくれた。
その手をどれだけ振るい払おうと、自分のように必死で懸命に接してくれる彼女の温もりに、俺は救われた。
(だが…彼女は生きていない…結局俺は、他人の死をも受け入れられない弱き者……)
いや、いい。
もう考えるのは辞めよう…余計に虚しさと悲哀が込み上がるだけだ。
あの人が…死んだという事実を受け入れるしかないのだ。
「しかし、カグラ会議の収集で逢えると言う物…なぜ、こんな時に限って俺を…」
特に想い当たる節は無く、彼女と対面はほぼ皆無に近い。連絡のやり取りも無ければ、彼女の名前に関する話題すら、カグラの周りでは挙がっていない。
「シュルルル……」
「?どうした?」
アオダイショウの蛇丸が、微かな鳴き声を漏らす。
まるで不吉な予兆に警戒を示すような、そんな気配。
(随分と様子がよろしくないな…コイツらが警戒を示す時はいつだって不吉な前兆がやって来る…知らせの声……まさか、雪不帰が原因…なんて訳が無いだろうな?)
ブワッ…と、冷たい風が横殴りに吹き溢れる。
窓を閉めて無かったせいか、一陣の風が通り過ぎ、資料は風に沿って舞う。

しかしそんな事など一切目もくれず、これから起こりうる不吉な予感に、ただただ頭を悩ませていた。

「えーっ!?三人とも喧嘩して謹慎とか、馬鹿じゃん!!」
朝一から掃除する三人に理由を聞いたクラス。
最初に出たのは罵倒に似た芦戸の言葉だった。
顰めっ面で掃除機を動かす爆豪。
解せぬ…と言われるがままに掃除をこなす緑谷。
たはは…と苦笑を浮かべる飛鳥。
芦戸の言葉に続き、他の皆も呼応するよう一人一人の生徒が次々と嵐のように言葉を投げかける。
「争いなんてナンセンス☆」
「爆豪くんとデクくんは解るけど、飛鳥ちゃんはホンマに意外やな!」
「愚かな…」
「ダセェぞ!仮免試験では俺にへのへのもへじとか言ってた癖に!」
「わ〜…爆豪のことだから麗日ん時みたくボコボコに殴ったりとかしてそう…してないよね?」
「男と女の拳の語り合い、俺は嫌いじゃねえぜ!」
「やっぱ爆豪おんめぇドSッつーか…リョナ好ぶべらッ――!?!」
「全く気が付かなかったわ…何にせよ個性同士の争いなんて…何か思い悩むことでもあったのかしら?」
「骨頂ですわね…」
「取り敢えずガトーショコラお食べ!」
「俺で良ければ相談乗るよ?」
「俺も、尾白と同じく話が有ったら聞くが、話にくいことでもあったのか?」
「それよりウチは相澤先生の怒鳴り声すら気が付かなかったことに、自分の深い睡眠に驚愕してるよ…」
「あっ!喧嘩ってもしかして仮免試験の事とかじゃね!?昨日の夜に喧

嘩とか、合点が行きそうだよな」
「つうか爆豪、瀬呂の言葉で思い出したが仮免試験の補習どーすんだ？」
「…な、仲直りは…できたの…？」
「寧ろ反省でよく済まされたな…仲直りはできたのかい!?」
皆の言葉に、謎の重圧感が引き寄せてきた為、殆どの言葉は聞き流していた。
ご覧の通り、皆からは「馬鹿だなぁ～」「喧嘩も程々にね？」「逆になぜ喧嘩が起きたのか聞きたい」と言われることが多々存在するが、自分たちの行いに決して悔いは残してない。
因みに柳生からは「飛鳥、お前…以前より問題活動起こして無いか？逆に心配になってきた…大丈夫か？」と、何故か哀れみの眼を向けられ。
雲雀からは「ええっ!?爆豪くんと喧嘩するなんて飛鳥ちゃんどーしたの!?」…爆豪と喧嘩のキーワードが衝撃的で緑谷出久と言う存在を忘れてしまっていた。
そして朝は皆、始業式で出席してる為、寮内に残るは昨夜バカをやらかした三人組である。
ついでに言えば、寮内はヒーロー科だけでなく、忍基地も含まれてる為、仕事はまだまだ残っている。
「緑谷く～ん、そっち終わった？」
「うん、後はそっちの方残ってる！」
「おいゴミ袋出すけどもう無ェか？」
想像していたよりも順調にスペースは上がっており、清掃も三人で協力し合い効率よく進められてる。
溜まった悩みを吐きあってぶつけ合って…距離感が縮んだとは言えここまでの効果は、かなり影響が有ったとも言える。
「……あのさ二人共…僕のシュートスタイル…どうだった？」
緑谷の覚束ない、弱々しい声に反応する二人は、見向きこそしなかったが、最初に口を開いた飛鳥は
「悪くなかったけど…動作が単純と言うか……パワー任せと力量ぶつ

けて様子伺ってるような気配も有ったから、やるならガンガン…
足技は菖蒲ちゃんに聞いたんだろうけど…やっぱ実戦あるのみ…かな？」
つまり経験値を増やして其れを活かせ、とのこと。
爆豪は飛鳥が言い終えた後、数秒間黙り込み、
「予備動作がデケェ、速度上がってもギリ反応出来たし、乱打戦にゃ向いてねえ…ここぞと言う時に足技は使うもんだ…
ただ、あん時食らった蹴りは、強かった――」
認められた、とも言い難い曖昧な言葉に、思い掛けず頬が綻ぶ。
今までは、唯み合っては口をまともに開けない程の、犬猿な関係だったが、少しずつ改善しているようにも見える。
「わ、私のオリジナル忍法…どうだったかな？新しいの…」
緑谷は戦闘不能に陥り体験はしていないため、上手く感想は言えない。諸に喰らった爆豪本人にしか聞けないことだ。
「……フラフラになってからの連続パンチはかなりムカついた」
これは、〝お前の攻撃は強かった〟と言う認識をしても良い物なのだろうか？
何にせよ、爆豪の口からムカついたと出るのなら、其れを脅威と感じても良かったのだろうか…？
半蔵学院とは違い、焔ちゃんのような関係を、もっともっと築き上げたら…きっと…――

こうして、飛鳥達三人組が清掃を行ってる間に始業式は幕を挙げ、夏休みから心機一転。
晴れて二学期を迎えた雄英生徒達にほんの数名の忍学生。
と言っても、半蔵学院の三名と月閃女学館の三名、計六名しか在籍してない訳だが、それでもこちらからすれば少し多いと思える位だ。
各学校ももう時期夏休みは終わるのだろうか？それとも、既に始まってるのだろうか？
忍学校に休日はあるのだろうか？

そんな夏休みが晴れて、新たな新学期を迎える真中――影に蠢く悪意もまた、次の段階を踏まえていた。
「ふむふむ、うん！・もう既に成熟期に到達しているね。〝いつ暴れても〟問題ない位にバリバリ!!これなら、大勢の犠牲者を出すのにうってつけになったね」
暗い部屋で一人、幼女はデータの資料が映し出されたモニターを目視しながら、指を素早くキーボードを打っていく。
誰もいない部屋には、ゴミ袋が沢山置かれており、壁には文字や写真集でいっぱいだが、よく見えない。
「実験も特に問題ないし、動作確認も取れたしぃ～。うんうん、これなら喜んでくれるよ！・後は一応培養カプセルで一時待機かなぁ…『トガっちちゃん』が暴れたくてうずうずしてるねぇ、ふふっ♪可愛いなぁ、頑張って戻ってこれたら、お祝いしてあげなくちゃねぇ～♪一応、テストをするって言ってたし…よぉ～し、これで一応仕事はお～わり！・えへへぇ、この子で何百人壊せるのかなぁ？♡」

ギギャア゛ア゛ア゛ア゛ア゛アアアアーーーーーー!!!
妖魔の血塗られた咆哮が、倉庫に鳴り響く。
其の雄叫びは、さも悪意を求めるかのような、血に飢えた貪欲な獣。
悪意の矛先、次は少女達に刃を向ける。
暗躍する悪、蠢く絶望、底知れぬ悪意は今日も、闇の中で生きていく――

１４１話「飛来して来たモノ」

神野区、爆豪雲雀救出と敵連合一掃作戦に加担し敵のアジトへ赴いた雅緋と忌夢は大きな痛手を喰らい、一命は取り留めたものの、入院という形で傷を癒す事に専念していた。

体全身打撲。

一定量以上の失血。

腹部による外傷。

刃物による裂傷。

どれも傷は酷かった物の、雅緋の回復速度は他の忍学生と違い少し異常だった。

勿論、年齢的に歳が違うため（本人に言えば大変失礼だが）回復の速度に違いが生じるのも無理は無いが、其れにしては鈴音は兎も角、実の父である学園長よりも早く完治するというのは、何処か現実離れしてるような気もしなくは無い。

忌夢はＯＦＡの超人間空気砲を喰らい、ベストジーニストが衣服を操り橋に寄せたので、ギャングオルカや虎、Ｍｔ．レディと同じく特に後遺症や深刻な傷を負わなかったので、問題はない。

だからこそ、雅緋の頑丈な体質には忍専門医の医者も驚いてるようで、過去にこのようなケースは存在こそしているが、滅多に見受けられないとのこと。少なくとも…廃人から復活する前までは…だ。

何がともあれ、それから約一ヶ月の時が過ぎ去り、大分回復を経た二人は、退院の日を迎える。

「随分と、日にちが空いてしまったな…」

入院してた分、学校から離れてた日数を確認し愚痴をこぼす雅緋は、病室で包帯を取り外していた。

「けど…これで僕たちもようやく復帰できる。皆んなが心配してるだろうし…早く戻ってアイツらを安心させよう」

隣で荷物の整理をしてる忌夢の言葉に軽く頷く雅緋。
神野区半壊後、病院に運ばれ手厚い治療を受けた雅緋と忌夢、次の日は選抜メンバーの三人がお見舞いに来てくれた。
紫は半泣きになって姉の忌夢に泣きつくように縋り、両奈も心の底から二人の無事が発覚して安心してた様子。両備は素直じゃない性格なので、ツンツンしながら何かを呟いてた記憶は残っている。
(そういえば…蛇女で伊奈佐と戦ったあの時も…無茶して皆んなで入院生活をしていたな…)
伊奈佐の野望とも呼べる悪事を阻止するべく、抜忍である焔紅蓮隊の連中と供に戦ったあの日のことは、今でも忘れられない。
己の壁を乗り越えたあの日、
旋風という忍が死したあの日、
両備と両奈の復讐に終わりを告げたあの日、
私達は本当の意味で、私怨を乗り越えた。
(あの頃が無ければ…私はずっと、一人ぼっちのまま…だったのだろうな)
強さこそ全て。
仲間というのは戦場で役立つ駒。
弱者を見るだけで吐き気を催す。
そんな冷酷無慈悲で強者に強く拘ってた自分…
(昔の私は……ん?昔の…私は……)
過去に浸ってた雅緋の思考が、微かに揺らぐ。
まるで平然とした水面に、一陣の風がひと吹きしたかのように、波に揺れる。
(昔の私は…何だった…?)

深淵血界。
禁・秘伝忍法――血界突破を発動した雅緋に掛かった負の代償は、記憶喪失だ。雅緋の記憶が曖昧なのは、蛇女子学園に入学してから全く記憶が抜けてる。
その前の過去は鮮明に覚えてはいるが、廃人と化して3年近くの年

月が過ぎた為か、その頃の記憶部分は欠けていた。それはまるで、失ったパズルのピースのように。
「私…はっ？」
「み、雅緋…どうしたんだい？顔色悪いけど…」
異変に勘付いた忌夢の言葉に、はっと我に還る雅緋は「すまん、何でもない」と一言。
深呼吸をして落ち着かせる。
動悸に頭痛が起きたこと…まだ症状が治まっていないのだろうか？いや…そんなハズはない。もう既に体の傷は癒えてるし、これと言った問題点も見当たらない。医者からの検査で異常は無いと診断されたし、軽い発作か何かなのだろうか？
「もう少し病院にいた方がいいんじゃ無いか？症状が残ったまま学校で訓練するわけにも…」
「心配は要らん…それに、個人的には病院に居続ける気もない…」
別に病院が不便だとか嫌いとかでは無いのだが、これ以上傷や異変も症状もない以上ここに留まる必要は無いし、欲を言えばこれ以上体を休めては鈍ってしまうのが嫌だからというのが本音だ。
小さな怠慢は大きな命取りとなる。常日頃から鍛錬を怠らない雅緋にとって、体を動かすなというのは酷な話であり、入院中はマトモに体を動かせず退屈していたのだ。
前に両備に「鉄アレイだけでも持ってきてくれ」と頼んだら医者にまで却下の言葉が下された時のショックは少し大きい。
「鈴音先生と父上にも報告して…それから」
「なんだ、既に荷造りの準備は終わってたのか。手間が省けて良かったよ」
刹那――聞き慣れない男性の声に瞬時に反応した雅緋と忌夢は、声主に警戒を示すも、敵意が無いことを理解した。
「ッ！――なんだ、小尾斗教官か…」
「なんだとはご挨拶だな。俺がこうして態々任務を後回しにして退院手続きのついでに様子見に来たのにその反応はおかしいだろ？女というのはいつもこうだ」

「聞き慣れない声だからてっきり何者かの刺客かと思ってしまっただけだ…無礼な反応に機嫌を損なわせてしまったのなら謝罪する――すまない」
深々と頭を下げ謝罪する彼女に、「ふん、まあ良いだろう…」と上から目線で口を開く。
「症状や傷の悪化はない、完治したな。
なら早速蛇女子学園に戻って訓練だ。久しぶり…と言えばいいか、多少は体が鈍ってるだろうが甘言は許さんぞ。徹底に取り組めよ」
「言われなくとも…」
「……」
相も変わらずネチネチした言動に雅緋は特に感情は変えていないものの、忌夢はかなり不機嫌そうだ。
しかし小尾斗教官は忌夢の表情など気にもせず、語り続ける。
「それと選抜メンバー二人に報告だ。
両備、両奈、紫の三人は仮免試験合格、選抜補欠は千歳以外は全員合格…アイツは補習を受けている」
「おお、そうか。三人とも、私が不在の間によくやってくれた…」
「紫…アイツ、僕がいなくても合格できるなんてやるじゃないか…!」
選抜メンバー三人の報告を聞き安堵の吐息を漏らす雅緋に、引きこもりの妹が無事に話題なく試験を合格したことに、嬉しさでいっぱいなようだ。
「一応現状の報告は伝えておいたからな。
それと、だ。俺は任務以外にも用事がある、余程の事がない限り俺に連絡はするなよ。俺から言えることは以上――」
呆気なく、素っ気ない態度に面食らうも、何事もなく病室を出る小尾斗に、糸が切れたように忌夢は「本当に嫌な教官だな…!」と軽く愚痴をこぼす。
「そもそも、雅緋に一言『これからも精進しろよ』とかも言えないのかい!?だいたい、女ならまだしも男性が雅緋を見て興奮しないのもおかしいし…」
「忌夢、お前も可笑しいぞ?」

若干、偏ってる忌夢にさり気なく一言添える雅緋は、手で髪を掻く。
小尾斗教官には何か思い当たる節や好き嫌いな部分もあるのだろうと軽い認識を受けてるため、余り気にしてはいない様子だ。
小尾斗教官と初めてご対面したのは、両備と両奈、紫がお見舞いから帰って数分のことだった。
初めは見知らぬ相手に動揺もしたが、教官になった所以と鈴音先生に父上たること、隼総が暫し入院期間で復帰出来ないことを知り、教官の立場として蛇女の面倒を見てくれるとのこと。
しかも蛇女子学園創始者の血縁、末裔であることに当時は驚くも、一目見て納得した。
体はか弱く筋骨隆々とした肉つきでは無くとも、実力は本物。技術や強者の気配は肌身で感じ取れた。
何しろカグラであり、父上よりも実力を秘めてる忍…彼が蛇女子学園の味方に付いてるのなら心強い。
…伊奈佐の時みたく、二の轍は踏みたくはないな。
「まあ何にせよ、これでようやく晴れて退院だ…
よし、では急ぐとしよう。鈴音先生に、父さんに報告してからな」
かくして、二匹の蛇たる戦乙女は、今日を以って病室から立ち去った――

秘立蛇女子学園。
悪忍養成学校…というのはとうに知っているだろうが、神野区の大事件を後にしようと、何も変わらず平然の日々を過ごしている。
一見、こうやって聞くと平和だな…と直感的に想像してしまうが、悪忍と名乗る忍学校は甘くはない。
それこそ、常日頃から命懸けで訓練に励んでいるので、言葉では実感出来ないのも致し方ない。
水遁、土遁、火遁、風遁、基本的に四種の術を学ぶのが忍学生の基本的な授業内容で、他は座学、対人訓練、今となっては仲間や雇い主

である主人の身を守る護衛術も学んでいる。
その中で殆どの基礎や平均を上回り、マスターしている選抜メンバーは当然、成績も大変良い。
「……射程距離ＯＫ。西の風向き弱、少し狙う的をズラして…っと」
岩盤に支配された特殊訓練所。
視界の殆どが灰色の岩で覆われ、森林や草木と言った目立つ緑色は見ない。
岩石だらけの風景に映し出されるのは、何の変哲も無い木製の射撃専用の的と、獲物を品定めし、決行の瞬間（とき）を待つ銃猟者。
微動だにしない木偶の坊に対し、静かに呼吸を整える少女は、銃の引き金を引く。
発砲した音が、静寂な空気を打ち破り、火薬の鳴った音がこだまする。
「よしっ！今日も順調ね」
絶好調！と言わんばかりに無い胸を張る少女、両備は軽く息を吐き撃ち抜いた的に視線を飛ばす。
微かな火傷後に煙が舞い、狙いは百発百中という形で収まり、見事中心部分にヒットする事ができた。
両備からすればそもそも、こんな訓練は大したことは無いのだが、何事にも基礎や日頃の行いは大事だ。簡単で当たり前のことでも、人間は体が鈍ってしまえば感覚や動作を忘れてしまい、衰えた力が戻るのには時間をロスする。
だからこそ、感覚や腕が落ちないためにも、日頃の基礎練は絶対に欠かせない。
「次は…この前教官が仕入れてくれた鉄製スピード特化タイプの傀儡を五体、練習用で…」
「おーーい両備ちゃぁ～ん！」
射撃訓練を…と口に出そうとするも、能天気な声が両備の思考を遮る。
「何よバカ犬、またお仕置きされたい訳？今訓練中でしょ？」
「きゃうぅ～ん♪お仕置きは両奈ちゃん凄く嬉しいし、今すぐやって

欲しいけど、今回は真面目な話をしに来ただけにゃん♪」
犬なのか、猫なのか、甘々な声色を発する彼女に色々と突っ込みたい言葉が有るが、取り敢えずスルーしておこう。
変態なバカ犬たること、両奈はルンルン気分でご機嫌が良さそうである。
「あのね～～、雅緋ちゃんと忌夢ちゃんが帰って来たんだよ～！」
「へーあっそ……ってえぇ⁉雅緋と忌夢が…本当に？もう戻ってきた訳？」
二人の退院に心を踊らせる両備の顔はご満悦そうで、頬が綻んでるようで、見てるこっちも自然と微笑ましくなってしまう。
その笑顔はとても、過去に雅緋と忌夢を殺そうと復讐の計画を立てた頃とは程遠く、綺麗だ。
「連絡くらいくれれば良いのに…」
しかし、それなら別に電話だの連絡してくれれば、自分たち三人だけでも迎えに行けたものを…まあ、雅緋のことだから「蛇女本拠地に侵入が来たとして、排除は誰がするんだ？」と口を開きそうで、雅緋の言葉が安易に想像出来てしまう。
「雅緋ちゃんも忌夢ちゃんも会いたがってるし、さっ！行こ行こ～♪」
「ったく、バカ犬は…でも」
この日だけは…子どもらしく素直に喜ぼう。
姉の両奈に手首を掴まれ、引っ張れる両備は何処か嬉しそうに釣られ、修練所を後に二人は仲間の迎えへと突っ走る――

修練場から蛇女子学園の距離は、忍学生に比べればそう遠くない。
岩盤だらけの殺伐とした場所から、左右前方後方全てが闇と緑で支配されてる森林地帯を抜けてようやく蛇女子学園の本拠地へと辿り着ける。こう言い表すと実に短く思えるだろうが、距離的には４ｋｍ。選抜メンバーからすれば朝の爽快たる軽いトレーニング、勿論侵入者や余所者である曲者を排除するべく様々な罠も設置していたりするので、本校の生徒でなければとても掻い潜れない仕様になってい

る。
　品種改良した邪草々が生い茂った草道に、クサヘビやマムシの出血毒の成分を塗った毒矢、視界に映った獲物にのみ反応する石像に擬態した傀儡蛇。下手すれば命を落とす危険性な罠があるため、まず修練場に辿り着くだけで骨が折れる。
　毒物や危険物を平然とこの場で扱うことや訓練で強いることが出来るのも、悪忍のみ違法が許されるからだろう。公共の場ではなく、訓練目的というのなら、支障は無いだろう。
「雅緋、忌夢！」
「二人ともお帰りなさ～い♪」
「雅緋さんに…お姉ちゃん……良かった、無事に退院できたんだ……良かった…ね？べべたん」
　二人の帰りを笑顔で向かい入れてくれたのは、懐かしくもあり見慣れたいつものメンバーの三人だ。
　両備は胸を弾ませ歓喜の声を上げ、両奈はマイペース且つ可愛げのある声に、一般男性なら惚れてしまうだろう。
　紫はネガティヴで根暗っぽい雰囲気を曝け出してはいるが、二人の復帰に心底喜んでるようで、相棒…いや、大好きなべべたんを力強く抱きしめる。
「ああ…少し見ない間に、随分と逞しくなったな三人とも」
「紫、僕がいない間に訓練サボって引きこもり生活してないだろうな？」
　歓喜に満ちた再開。
　一ヶ月間の不在でありながら、生死を分けた戦場に戻って来たその感動は、まるで戦争から帰還した兵士のようだ。
　イレギュラーな相手に深手を負うも、命に別状がないことに安堵の吐息を吐く一同。
　仲間がいなければ、きっとこうして出迎えてくれることも無かったのか…と反面的に思えてしまうも、今はこの喜びを堪能したい。
「全く、もし雅緋と忌夢が死んじゃってたらって想像したら…両備は危うくあの化け物相手に復讐する所だったじゃない！」

「両備ちゃんオールマイトが勝って大号泣してたよね～、雅緋ちゃんが無事だって知った時は鼻水まで垂らしてて可愛かったの～♪」
「黙ってろ雌豚！テメェの○○○に鉛玉ぶち込まれてェか!!」
「きゃうううぅ～～ん！良い！それ絶対に良いよ両備ちゃん！」
「私は特に…小尾斗教官が煩くて…引きこもり続けるならネット解約は愚か…除籍処分されるって脅かされてましたから…」
　両備と両奈は平常運転。
　紫は穏やかでマイペースな口調で話すも、その声色に危機感は感じ取れない。
「そ、そうだったのか…それで、ボク達がいない間、蛇女内で何か問題は無かったか？小尾斗教官は特に話ては無かったみたいだけど…」
「いえ…特には…あっ、お姉ちゃん……私ね、仮免試験…無事に合格できました…」
「あっ、それなら私も。試験なんて両備からすれば朝飯前だっつーの♪」
「でも両備ちゃん月閃相手にどう接すれば良いかってテンパってたよね」
「いい加減にその口閉じないと絞め殺すわよ!?」
　両備と両奈は元々月閃女学館所属の、由緒正しい善忍家系で生まれ育ったのだ。
　昔は復讐心で頭がいっぱいだったとはいえ、月閃女学館の生徒たちは皆家族同然のように、親しみ対等に接していた。悪忍を滅することを第一の目標にしてた彼女に少し嫌気が刺してたが、それ以外では気優しい仲間だった。

　――雪泉先輩、短い間でしたが、お世話になりました。

　しかし、雅緋の復帰の知らせに勘付いた双子姉妹は、ある計画を練り上げ蛇女子学園に転入。
　復讐を終えたら、自分たちもあの世に…天国に待つ大好きなお姉ちゃんに会いにいく…

そう決めていたのに、焔紅蓮隊に伊奈佐の件が有り、復讐という美化には聞こえない私怨は幕を閉じ、雅緋と和解。月閃を抜け、蛇女子学園に転入するも悔いはないし、自分たちの決めた道にとやかく言う資格は無いのは百も承知…なのだが。

仮免試験当日、自分たちの前に現れたのは…

『あれー？両備ちゃんと両奈ちゃんだー！』と美野里

『ほう、まさか月閃を抜けた貴女達とご対面とは…面白いですね』と夜桜

『蛇女はどう～？レッツエンジョイ！って感じ～？』と四季

…揃いもそろって、裏切っただのと罵詈雑言が降ってくるかと予想していたのに、こんなにも呆気ない対面に思わず唖然としてしまったのは今でも鮮明に記憶が蘇る。

そもそも、悪忍を滅ぼすが第一主義だったあの月閃女学館の選抜メンバーが、何故ゆえに悪忍学校に転入した自分たちにここまで友好的に接してくれるのか、不可解だった。雄英高校のB組もいたわで兎に角、仮免試験は両備にとって一波乱巻き起こった、忘れられない日であった。

「そうか…月閃も……」

「これで手加減して落ちたなんて話になったら、僕は許さないからな？」

「お姉ちゃんも…雅緋さんを見過ぎて事故ったり…しないでね？」

「黙れ紫！それとこれとは話が別だ！」

どっちも変わらないような…と心の片隅で呟く紫。

まあ…雅緋ラブの変態エッチメガネに雅緋を見過ぎるなと言った方が、それはそれで大暴れして事故を起こしやすそうなイメージが安易に考えつくが、本人には言わないことにした。

「さて、感動の再会も終わった所で…だ。最初に訓練を始めるか…身体も動かしてない今、鈍った体では戦場に身を置いても死の危険が大きい…」

鈍い身体。

僅かに衰えた筋肉。

己の技量を高める。
こうして、やっと待ちに待った訓練を再開できることに、心底懐かしさと愉悦に浸る雅緋は、自然と口角が吊り上げていた。
(待っててくれ父さん…母さん……私は一日でも早く、カグラになるべく強くなってみせる…!
鈴音先生も…見てて下さい……)
病室で寝たきりの父上。
弱き体を休め、安静にし蒼天を見上げる鈴音。
そして…妖魔に殺された天国の母さん。
(妖魔に殺された…と言えば、両姫も…話では聞いていたが……)
前述の通り、雅緋は記憶が曖昧で、完全に取り戻してない状態だ。
だから両姫が何を言ってたのかは今となっては解らないし、知る術もない…しかし、両備と両奈の二人が自分の仲間である以上、幾ら忍の身とはいえ…仲間の背中を、命を守るのも筆頭たるリーダーの役割だ…自分は、皆に背中を押され支えるだけでなく、今度は自分が、皆んなの背中を支えて押してあげるんだ。
嘗て、焔が仲間にそうしたように…
今度は…私も……

刹那――雅緋の思考は停止した。
漆色に塗り潰された禍々しい悪寒が、背中を走り、黒き瘴気が雅緋の全身を覆い尽くす。
突如として脳内再現されたイメージに、戦慄を覚えた彼女は即座に反応する。
「――ッ!?」
ただならぬ気配に自然と体が動き、震わせる雅緋は腰にかけてた刀に手を取る。
そんな彼女の動きに四人は、首を傾げて雅緋を見つめる。
「ん?雅緋…どうし――「伏せろ忌夢!紫!!」――えっ?」

彼女が口を開くも、無反応にすら間に合わないと判断した雅緋は飛び付き押し倒す形で――二人を救ける。

それと同時に、衝撃により発した余波と轟音が、五人の鼓膜を揺らがす。

激しい突風、両備と両奈は学校の石壁に背を持たれながらもその身を耐え、忌夢と紫は地面に背を付け、雅緋は二人にもたれかかるよう倒れ伏しながらも、降ってきたナニカに視線を浴びせる。

土煙が巻き起こり、晴れる時間も待ってはくれず、人影が煙を強引に振り払う。

一歩、踏み出したことで確認されたのは、足だった。

その足は、人間とかけ離れた形をしていた。

鎧と鱗が混ざり合い、黒紫色に染め上げられた体色はアメジストの宝石を連想させる。

しかし、足の指は前で三本踵が足指の関節に出来ており四本。まるで鳥のような足跡だ。

晴れて登場したのは――竜の姿をした妖魔。

眼は黒く塗り潰され、頭は退化してるのか水晶玉に見える、鉄壁な要塞をも砕け割るような頑丈そうな頭部。

指は爪のように鋭利に尖っており、まるで刃物のようだ。

序でに尻尾は長く、蜥蜴や鼠、蛇のようにしなっており、何メートル以上伸びてるのかは不明だ。

この場にいる選抜メンバーは直感で理解した――コイツが、妖魔なのだと。

少なくとも、忌夢にとってはこの妖魔を目撃したことで、軽く戦慄を覚えたのは、無理もない。

「妖魔かッ――!!!」

こんなにも早く、母の仇たる妖魔の存在に立ち向かえるとは!

願望と怒気の感情がインクのように混ざり合い、自然と全身に力が入る。かく言う両備と両奈は、呆然としていた。

（アレが…妖魔…！よりによって何で急に…!?）
心の中で悪態を吐く両備は、目を細めて敵を睨みつける。
妖魔は、大好きな両姫お姉ちゃんを殺した姉の仇…許されるはずのない、仇打ちを前にするも、足が竦み、震えが止まらない。
何より、何故よりによってこんな時間に限って妖魔が来るのか…謎や突っ込みどころは満載だが…今は――

「アア゛ア゛ェエ゛エ゛アア゛ア゛ァァーーー!!!」
瞬間――けたたましい妖魔の咆哮が、天を貫き大地を揺らがせ空を突き破る。
金属音に似た不愉快な鳴き声と血を求める雄叫びが、耳を突き破るかのような勢いで発せられる。
「あ、アイツは……嘘だろ…？」
忌夢の顔は真っ青に変貌。
まるで、本物の悪夢を今こうして目の当たりにしてるかのような、そんな…絶望を噛みしめる彼女は、震える手で武器を取る。

突如とて襲来した妖魔、対峙するは五匹の蛇乙女――

１４２話「正しく害獣」

「お前から話とは珍しいじゃないか、雪不帰殿――俺なんかを呼び出して何の用なんだ？」
　女性に対して忌み嫌う発言は多少見受けられるも、なるべく毒舌口調を出さないようにしてる小尾斗に、対立するよう椅子に腰掛けてる女性は雪不帰。左右隣には月閃女学館中等部所属の月光と閃光もいた。
　艶掛かった漆黒の長髪は腰まで垂れ落ち、お滅多に目に掛らないであろう、美しき黒の衣装を着こなす容姿は、中々様になっている。
　黒とは対照的に、露出された肌には一切の汚れが無い。清き水のように透き通る白い肌は、雪泉の美白にも負けないだろう。白と黒を司る絶妙なバランスに、一般人が目を通せば息を呑むのも無理はなし。正に、美麗を文字通りに体現した理想の女性である。
　白と黒の羽毛で彩られ、調和を示す一際大きな扇子を胸元に当てながら、彼女は瞑ってた瞼を開け、小尾斗の目を合わせる。
「小尾斗教官…ようこそいらっしゃいました……本日はお忙しい中、私の屋敷へお越し頂き有難う御座います…」
　薄い桜色の唇から発せられた言葉は、冷気が篭り覇気は無い。しかし、雪のような冷たさと清楚感に満ちた言葉は、不思議と人の心を落ち着かせる。
「お疲れ様です小尾斗様、どうぞ自由に腰をお掛け下さい♪」
　相手をもてなし礼儀良く振る舞う少女――月光は手慣れた動作で椅子を下げて座るように催す。
「ふん、随分とまあ…優秀な忍学生を護衛として雇ってるんだな…確か、カグラ四天王マナの元で修行を受けてたんだっけか」
「ええ、よくご存知で。流石は嘗て供に闇鷹を討伐しただけのことはありますね♪」
「別に大したことは無い…それに、中等部が妖魔の話を持ち出すな。本来なら忍学校を卒業した者にしか知られてはならない規則では無かったか？」

「心配は無用です……この二人は私が信頼に置ける逸材だと判断したまでのこと。だから…これから話すことに関してもまた同じ…」
雪不帰と小尾斗の対談の中、「失礼する…」と紅茶を差し出す閃光を横目で見やりながら、彼女の言葉に耳を傾ける。
「これから話すこと…？まさかその為だけに俺を呼んで来た訳じゃ無いだろうな？」
「察しの良いこと、誠に感謝申し上げます…正にその通りです」
「……一応、その話だけは聞いておくか…大した事のない話題なら俺は怒るぞ」
ここまで来るのに大した時間は無い。
ざっと1時間近く掛けてようやく現地に辿り着いた小尾斗。それでも本来ならカグラの身として与えられた任務は山ほど積もっていたのも事実であり、それらを全て後回しにしたのだ。
これで特に何もない話であれば、幾ら陽花と供に忍の道を歩んだ彼女とは言えど、容赦はしない。
特に手紙には話だけがしたいと書いてあっただけだが、またそれしか書いてないのは、〝敢えて他者に手紙を見られる危険性を配慮〟した結果と判断し、小尾斗は何も問わずこうしてやって来た訳だ。
「いえ、きっと貴方にとっても重要な話です……そう、雅緋さんについて、話があるのです」
「はぁ――？アイツの話？」

何故、彼女が今回呼ばれる鍵となるのか？
どう考えても彼女はカグラですらない、彼女のことで呼ばれる筋合いは何処にも見当たらない。
「ええ…小尾斗さん。雅緋さんが何故、３年間廃人となったのか…理由はご存知でしょうか？」
「……任務中により、妖魔に襲われたトラブルが発生し、事故で廃人化した…とは聞いたが？」
「其れは本校に佇んでた者のみの情報…鈴音先生から聞いた話により

ますと…血界突破を発動させたとか…小尾斗さんはご存知ですよね？血塊突破という禁術を――」
「知ってるさ。カグラにしかなれない者にのみ情報が取得可能な禁術は、生半端な学生では例外なく死ぬからな…しかも大人とはいえ、カグラでさえも血界突破――深淵血界を維持するのは困難だぞ。それでミスしたアイツもアイツだが…」
血界突破とは、先程雪不帰が前述した禁術だ。
空間内に染み付いた忍の血を取り込み、戦闘能力を飛躍的に上昇させる業。
本来なら忍学生がこの禁術を身につけてる事自体が異常なのだが…悪忍の掟と女嫌いの小尾斗からすれば、そこまで詮索する気にはなれなかった。
「そう…だからこそ、彼女の身に何が起こるか解りません……」
「？…どういうことだ？」
彼女の声はブレなくとも、その言葉の気迫に眉をひそめる。
「…そもそも、血界突破とはカグラですら失敗するケースが大きい…その上、禁術に手を染め成功した例はごく僅か…」
「偶々選ばれたんだろう？」
「それなら尚更、彼女の身に何が起こるか解りません……調べた結果、血界突破の秘伝忍法に成功し、無事生還できた忍は彼女を含めて――五人」
――はぁ？
腹の底から漏れた言葉は、小尾斗の思考を停止させるのには相応しかった。
たったの五人？もはや二桁すら越してないこの驚愕な数字は、明らかに異常。幾ら成功例が少ないとは言え、其れは余りにも…信じ難く、何よりも現実が脳に入らない。
「先代二名は殺され…今残ってるのが三人……カグラ四天王の『リュウ』に、妖魔狩りの『桃』…そして、蛇女子学園選抜筆頭の雅緋…
現段階で確認されてるのがこの方達のみ…」
「そして桃と呼ばれる抜忍は１０歳の頃に血界突破を取得した…消息

は不明だが訃報は聞かされてない…カグラに尤も近い忍でもある…」
「解ってるそのくらい。一度だけ面識も有ったし、女とは言え気に食わんヤツだったのは覚えてるよ」
「話を戻しましょう…それで、問題はここから。
なぜ態々血界突破と雅緋さんの話を貴方だけ話すのか…」
「後遺症か発動後に起こる今後の発作か？」
「…前例が無いだけで、今後そのような問題も起点すると考えて良いでしょうが……本当に話すべきことは別――それは…」

ここから先は、決してカグラですら聞くことは困難だろう。
雪不帰の真実に、あの小尾斗の顔色が真っ青になったのも、冷や汗を流すのも致し方なきこと…
そして…雪不帰はカグラの中で5位以内の順位に入る強豪の忍…だからこそ、この情報を取得出来ても余り文句も言えないだろう。

「……そうか、情報提供感謝する。偽り…では無いとも言い切れんが…今のところ辻褄は合う」
「納得してくれましたか？」
「ああ……元々俺も目的は妖魔の殲滅。
ただ、何も確証は無いのだろう？ヤツらの居場所も解らん以上、現状俺たちでは他の打ち所がない」
「だからこそ小尾斗教官、貴方も含めて…蛇女を守らなければなりません…それが例え貴方にとって辛き選択だとしても…陽花のことを想うのであれば…」

もし、ヤツらの尻尾を掴めば…きっと――

突如として現れた異形の化け物。

轟音鳴り響いた後に残るは、殺伐とした沈黙。
重圧と緊迫に支配された空間の中に、先程のほのぼのとした感情は消え失せていた。
異形の化け物は――コイツは恐らく妖魔で間違い無いだろう。
こんな姿をした人間など見たことがないし、個性の異形型だと言われても、首を縦に頷くことは難しい。
衝撃から発生した土煙が晴れていくと、次第と姿が露わになる。
首、両手首両足首には錆びて汚れた頑丈な手錠が装着されており、まるで奴隷教育を受けたような姿を物語っている。
鎖と呼ばれてるものは既に引き千切られており、檻に収監された猛獣が自らの手で破り、解放されたような、そんな独特な雰囲気を感じてしまう。
しかし、雅緋を含めた他の忍学生にはそんなことどうでも良い。
「妖魔……何故、急にこんな所へ――」
雅緋が次に漏らした言葉は妖魔に対する疑問の問いかけだった。
言葉が通じないと理解していながらも、その本心は喉に伝わり口へと発せられた。
しかし其の言葉が通じたのかどうかは定かではないが、此方の様子を伺っていた妖魔は突然――

「ガァ゛ァ゛ァ゛ァァァァァァァァーーーーーー!!!!」

激しい号哭が辺りを震え立たせた。
雅緋の言葉に呼応するかのように発せられたその凶暴な鳴き声は、尋常じゃない。
軽く辺り一面に衝撃を放ち、鼓膜が激しく揺れ、耳が痛くなる。
その猛烈な咆哮に耳が持ってかれてしまいそうな大音量は、マイクで馬鹿でかい声を上げるような威力と同じ。
「うっ…!うぅ…!いた…い…!脳が裂けるような声…何なのよ……!」
「ひゃあっ!?な、ななな何ですか…これ……いやぁ…うる……さい!」

両備と紫は嘆声を上げるも、この大規模な咆哮の中、聞こえる者はいない。皆両手で耳を塞ぐので精一杯だからだ。
雅緋、忌夢、そして痛撃に快感を得る両奈でさえも、表情を歪ませている。
(これは…妖魔の声だけなのか…?まるで個性や忍術を使ってるかのような破壊規模の大声だぞ!?)
雅緋は心の中で呟く。
その考えは正しいのか間違ってるのか、討伐する対象に今更どうとでもない事だが、それにしてもコイツの上げる声は余りにも常軌を逸している。
シュン――ッ、と咆哮を一瞬で止めた妖魔は、土を蹴り飛ばし、視界に弾け飛んだかのように姿は消えた。
何処へ?と声を上げる暇もなく、妖魔は――
「ウリィッ――!」
ドガッ!怯み完全に隙が生じた両奈の腹部に拳を突き刺す。
衝撃を表した効果音は、皆の背筋を凍りつかせるには丁度良いものだった。
「あッが――!?」
「両奈?!」
両奈の苦痛に混ざった小さき悲鳴、両備が銃を構える暇すら与えず妖魔は、豪腕な手で首を掴み、真逆な方向へ身を乗しながら投げ飛ばす。まるでボール投げがどの位まで飛ぶのか、試験を測るかのような軽いノリ。しかし知性と言う縁とかけ離れた妖魔の判断は、戦場の中で正しい行動を起こしていた。そのまま鍛えられた脚力を使って吹き飛んだ両奈を追尾する。
呆気に取られた皆も「早く追うぞ!両奈が殺される!!」と、雅緋の覇気含んだ言葉に乗じて追う。
吹き飛んだ両奈の勢いは止まることを知らず、庭にある休息所として建てられた古い小屋の壁に大きく叩きつけられる。
大きな衝動の音に、中にいた忍学生達は不思議な顔を立てながら外

に出ては様子を伺う。
「何だ今の音？」
「突然叩かれた音が…って両奈さん!?」
「何じゃなんじゃ？訓練の息つく間にと思うて和菓子を食べてる最中に物騒な…ぬぬ？」
「はうぅん!?両奈さんどうしたんですかぁ!?」
中にいたのは運が良いのか悪いのか、選抜補欠メンバーが揃っていた。総司は不可解そうに表情を曇らせ、芭蕉は両奈に驚き、芦屋は目を丸く開き、伊吹は驚愕の声を染め上げる。
因みに千歳は仮免取得のため不在だ。
「あぁ～…はぁ…はぁ……ちょっと、今の両奈ちゃん気持ち良いを通り越して痛みを感じるレベルなんだけど…
み、皆んなも…早く逃げ――」
しかし、痛みという感覚に腹部が残る両奈の忠告は、虚しく掻き消える。
追ってきた妖魔はタイミングよく両手を合わせて腹部に叩き込む。激しい衝撃の余り、地面の岩盤はヒビが生じ、辺り一面に揺れが発生する。
「は――？」
四人はその異常な現実を知らしめられたように、1秒の出来事に思考が白く塗り潰される。
妖魔という、得体の知れない化け物を見れば、当然の帰結。
「ア゛ガアァァァァァァーーーーー!!!ガァァ!!」
糸が千切れた妖魔は、まるで破壊を目的とするかのように、発狂の声を上げながら両手の拳を使って両奈を叩き込む。
ダァン！ダァン！ダァン！と弾け飛ぶ音は、銃弾を連射させるような爆竹に似た音だ。
一撃一撃が強烈たる故に、対処できない。
「あぁっ！がぁぁハッ――!!」
両奈の苦痛と絶望に染まったその顔色に、もう変態地味た表情は何処にも残っていない。

口から血を吐き、悶絶しそうになりながら、霞んだ視界を維持させながら妖魔を睨む。
両奈の衝撃は基本、受け流されることがあるボディ。いわば脳無の衝撃吸収といった物理を無効にさせるに近い特殊体質を備えている。
無効に出来ないものの、あの雅緋の猛攻さえも痛気持ち良いと声を張る程だ。多少痛みがあるというのは、其れ程に雅緋が強いという意味を表している。
しかし、目の前で破壊と殺戮を行う妖魔は、もはや次元を通り越していた――
最早一撃の一つ一つが強烈な痛みを鮮明に浴びさせている。
豪腕な強筋で振るわれる暴行、痛みに泣き叫びそうな絵面は、もはや阿鼻叫喚と呼ぶに相応しい――完全なるリンチ。
其れは、両奈の衝撃流しの容量を遥かに超える証明を裏付けていた。

霞む視界に、遠のいていく意識。
死へと招き入れるかのような感覚を堪能しながら、両奈は「ごめん、両備ちゃん、両姫お姉ちゃん…もう、ダメかも…」そう呟いた。
最後として適してる言葉…
しかし、そんな唐突すぎる暴行を、死を、理不尽を、許さない者が居るのも当然であるのだ。
「ガァイ…？」
突如。身体に金属の感触が伝わる。
まるで自身を再び縛っていくようなデジャヴを感じながら、その鎖鎌にみるみると縛られ拘束されていく。
「伊吹、芦屋！お前は早く学園内の学生に報告だ！芭蕉は援護してくれ！」
鎖鎌と声の主は総司。
訳分からずな状況の中でも、迷いのない判断と適切な行動は、紛れもなくリーダーの座に相応しいだろう。
二人は戸惑いながらも首を頷き、芭蕉は忍転身し「畏まりました！」

と叫ぶ。
「ギエ゛、エ゛、エ゛、エ゛、エエエエエエーーーー!!!!」
喉から発せられる奇声の咆哮に、二人は一瞬隙を見せ、鎖鎌の力を緩めてしまう。
その一瞬を狙った妖魔は、「カァッ!」と喝を入れ鎖鎌から脱出し、総司目掛けて猛攻を振るう。
「芭蕉!」
「恐らく…これで!」
芭蕉は墨筆を振るい、斬の文字を飛ばし妖魔を迎え撃つ。
空間から現れた斬撃に、予測不可能な攻撃を妖魔は成すすべなく諸に喰らい、空中のまま落下する。
しかし大したダメージは見受けられず、精々皮剥き程度だろう。
「ゴガァァァ!ウガァァァァァーー!!」
筋肉を膨張させ、威圧感に溢れでた咆哮。
獲物を邪魔され、始末し損ねた妖魔の怒号は、いつ聞いてもこの大音量は聞きなれない。
「さっきの声主は…お前だったか……にしても、見ない化け物だな……ヴィランの異形系の個性とも考え難いな…」
「はい…私も、あんな邪悪な気配を放つ生き物なんて…見たことが……」
そもそもこの怪物はどうやって此処へ辿り着いたのか?
見張り役の警備たちは何をしてた?
そもそもコイツの目的は?
第一、この怪物の正体は?
まだ仲間はいると考えて良いのだろうか?
考え出すとキリが無い。疑問が多すぎて意識が遠のいていくような気がした。
「選抜は何をやって…いや、我々でも何とか完封して見せるぞ!ここでコイツの餌食にされるのは真っ平御免だ!」
瞬間、総司は鎖鎌を乱暴に振り回す。
しかし、決してデタラメでは無い。

昨日の仮免取得試験、肉倉に見せた技と同じく、一定範囲内の空間を支配する総司の技術は、いつ見ても油断も隙も無い。穢れた相手に近付けさせまいと強靭な鎖鎌がしなりをあげて振るわれていく。
「後は…相手の出方にもよるが……」
相手の行動パターンによって動きや体制も変えなければならない状況…相手の能力や行動が不明である以上、下手に動けば両奈の時みたくリンチにされるのがオチだろう。
しかし、妖魔は総司の想像を上回る行動パターンに出た。
何の躊躇も無く、大海原に飛び込むように、彼女に目掛けてジャンプし突っ込んでいく。
余りにも無謀で、脳筋が出そうな行動、面食らう総司はそれでも力を緩めない。
「ウギャァ…!」
対する妖魔は己の体をハリネズミの如く回転させ、尻尾を縦横無尽に振るい叩く。
まるで、総司の鎖鎌を真似たような繊細な動きは、知性も理性も一切感じさせない化け物が成せる技とは思えない。
「ま…さか……」
総司の支配してた空間を、容易く看破し接近することに成功した妖魔は、大きく口を開く。
そして、両腕を掴み――
ガブリッ！肩に牙を食い込ませ、噛み付いた。
「がはッ――！」
「総司さん！」
芭蕉の言葉が虚しく消えるよう、妖魔は尻尾を伸ばし、薙ぎ払う。
尻尾の攻撃を受けた芭蕉は、跡形もなく吹き飛び、背に岩をぶつける。
「芭蕉！ぐっ!?」
今度はその尻尾を総司の反対側の肩に、鋭い尻尾を突き刺す。
猛獣の牙、鋭利な刃物、二重の激痛が総司を襲い、獲物を離さないよう彼女の清らかで美しい体をキツく抱きしめる。

この絵面だけ見るセクハラを受けてるように見えなくも無いが、この状況だと地獄絵図にしか見えない。
「アッ、アッ、ッ、アッ、アッ、アァァァアーーーン!!」
久しぶりの血肉。
柔らかな食感。
新鮮な血の液体。
それらはこの妖魔の心や体を潤わせ、幸福を満たしていた。
もし表示マークのアイコンで表すのなら、ハートマークがお似合いな程に。
(私は…こんな汚らわしい獣に……殺されるのか――!?)
彼女もまた、両奈と同じく死を錯覚する。
狩りを行う捕食者は、時に狩られる側に回る、弱肉強食の世界をより強く証明付けさせた。
己が捕食される感覚を、痛みと共に堪能しながら…
「総司さん!!もう、やめて下さい!!」
芭蕉はふらつきながら体を起こし、弱々しくも涙を流しながら近づいていく。
しかし体に力が入らない。
恐怖が体を支配する。
仲間の死が迫り来る絶望を味わいながら。
「もうやめてェ!!!」
一心不乱に貪る妖魔に、制裁が下される。
彼女の言葉に呼応するよう、妖魔は突然頭を掴まれ、彼女を掴んでた四肢の力が緩む。
バギャァン!と鈍い音が、彼女の涙を止めるには丁度良かった。
妖魔は訳分からずと何者かに殴られ、生い茂る木々の方へと吹き飛んでしまう。
「すまない!皆無事か――!」
「み、雅緋さん!」
選抜リーダー、雅緋の登場に希望と安堵の息を漏らす芭蕉。対する雅緋は己の不甲斐なさに舌打ちをする。

「両奈!・総司!」
忌夢の叫ぶ声に、意識が曖昧な両奈と総司は、反応する。
これでも全力疾走で駆けつけた選抜メンバー。別に怠けてたわけでもない、我武者羅に走った結果、危機一髪な流れになってただけ。たったほんの数分でこれ程の被害を齎すとは…猛獣を通り越してもはや害獣である。
「両奈!・しっかりしなさいよ!・アンタ、あんなトカゲ野郎に殺られるタマじゃないでしょ!?」
「ひ、いやぁ…!・総司さん…肩が血塗れ…両奈さんも傷が酷い…!」
両備は両奈の両肩を掴みながら、必死に言葉を投げかける。
両奈は悶絶しながらも「大丈夫…だよ、両備ちゃん…」と優しく答えを返す。
その言葉に、大丈夫なんて安心感含まれてない。
聞いただけで解る、その声は掠れており酷い深傷を負ってる事など。
いや、そもそも姿見て無事じゃないのは充分理解はできてる。
それでも…双子の姉が死んでしまいそうになるのは、心が引き裂かれるほどに辛い。
両姫お姉ちゃんの時と同じ想いをしそうで――
対する紫は、二人の重傷に軽く眩暈がして、顔を青ざめる。
「クソッ!・私としたことが…こんなので何が選抜メンバーの筆頭…私の不甲斐なさが二人を……」
グシャッ!・ベキシッ!
雅緋の心底悔やむ嘆きの言葉の矢先に、木々の薙ぎ倒される音が、皆の耳に伝わる。
大木を片手で掴み、武器にしながら振り回す妖魔は、殺意の眼光を放っていた。
「ガルルァ゛ァァ!!ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァァァァ!!!」
「アイツ…」
穢らわしい化け物は、何度も何度も奇声を荒げる。
まるで其れは、獲物に対する警戒と威嚇。

そんな妖魔に、鋭い衝撃が放たれた。
「ガバッハ――！」
「クソトカゲ野郎が!!!さっさと地獄へ堕ちろ!!」
正体は両備、スナイパーライフルで何度も射撃を繰り出し、銃弾が妖魔の体に食い込んでは当たる。
青紫色の血飛沫を飛び散らせながら、苦痛の喚き声を挙げる妖魔。得体の知れない謎多き妖魔から流れる血は、とても生物上のものではない…。
両奈を傷つけられた怒りに、両備は止められない。
「皆んな！ここは小尾斗教官を呼ばないと不味い！雅緋も、早く学校の生徒を連れて逃げよう！」
「何を言うんだ忌夢！確かに連絡はしたが…それまで全生徒が保つとも思えん！ここは私達が食い止めなければ…」
「ダメなんだよ雅緋！それで僕たちがどうなったのか覚えてないんだろ?!!」
ピタリ…ここで時空か静止したように、雅緋の身体の動きは止まる。
「……どう言うことだ、忌夢?」
「雅緋…やっぱりまだ記憶は戻ってないんだね…
聞いてほしい、雅緋に両備と両奈も――…」
忌夢の言葉に、何故か良からぬ予想が頭をよぎる。
心臓の鼓動が早まるような、痛む動機を抑えながら、忌夢の言葉に耳を傾ける。
瞬間――一秒にも満たない時間の中、僅かながら数々の記憶の断片が、脳を埋め尽くしていく。

『忌夢、今まで世話になった…だが、これでもうお別れだ』
『嘘だろ?雅緋…嘘だって言ってくれえええ―！』
『血界突破…やはり私にはまだ使えこなせないのか…?』
『やったじゃないか雅緋！先輩たちを黙らせるなんて凄いよ！』
『悪いが忌夢、お前も消えてくれ』

『雅緋、確かに今のお前の実力は学園の中でＮｏ．１だ…だが、それと同時にお前は諸刃の剣と同じ……小物の妖魔でも簡単に殺られるぞ』
『運命とは何と理不尽な事でしょう…抜忍に続いて今度は貴女達と戦わなければならないなんて…』
『なぜ、月閃の忍がここに…？』
『皆んな逃げて!!この妖魔は今までと違ッ――!』
『両姫!!忌夢!!』
『カグラに実る前に摘まさせて貰ったわ、この雑草供が…陽花と言う阿呆に憧れた鬱陶しい蝿よ…』
『貴様あああああああああああ!!!!』

数々の記憶が、感情を司る。
冷や汗は止まらず、頭痛は止まない。
だが、その外の景色や声、音は確かに聞き取れる。
「５年前、僕と雅緋、両姫を襲ったあの妖魔…そして、両備、両奈、お前たちの姉を殺したのは…あの妖魔なんだ」

忌夢の衝撃な告白に、声を詰まらせる三人。
害獣の正体――其れは少女たちの人生を狂わせ変えてしまった、姉の仇。

１４３話「悪夢」

この化け物(妖魔)が発見され、研究が行われたのは今から約２００年以上前のことである。

とある研究者が、妖魔の実験を行うのは日常茶飯事。研究とは日々を重ね、失敗や経験を経て成果が出る物。その為の苦労は惜しまないのは、研究員としては当然だ。

「……なんだ……これは……」

瓦礫の山の上で、固唾を呑みながらその光景に絶句した。その者の名は、妖魔違法研究者――ティオ・ディアボリクス。

彼の悪名は当時世間では問題視されており、彼を始末するべく数多くの忍が動いたのは今でも有名な話だ。

何よりも彼の天才的な頭脳は、余りにも危険ゆえに現代社会で発展されてない未知なる科学や技術を持っていたことから危機感を覚えた上層部、そして妖魔の存在を知り実験を行っていたことが明白となった事実により、動かざるを得ない形となった。

妖魔の存在認識が規制されたキッカケは、ティオ・ディアボリクスが原因なのである。

そんな彼が忍を撒いていた時に偶然見つけ出したのが、この妖魔である――

「ガァー！ガァルル…！グジュルッ！グジュルル――」

黒く禍々しい邪気を孕む人型の竜は、なんと忍と他の妖魔を食い荒らしてるではないか。

忍の血に嗅ぎつけた妖魔が忍と鉢合わせになったらしく、運良く無事に撒けたティオは、どうせならと高見の見物として妖魔と運悪く遭遇した忍が戦う姿をこの目で収めておきたいと軽い気持ちで観察していた。

どちらが勝つのだろうか？

どう言う戦術で勝敗を喫するのか？

何かしらの戦闘データを入手し、研究の発展に繋がるのか？

その全ての予想は、裏切られた。

突如として嗅ぎつけに来たこの黒き竜は、忍を襲うかと思いきや、妖魔にまで食い突いたではないか。
研究者は唖然した。
長年研究して来た中で、妖魔が妖魔を襲うケースは、今までに無かったからだ。苦しみ悶える妖魔に、黒い竜はさも歓喜な雄叫びをあげながら、そのまま内臓を食い破り、首を無理矢理破るよう引き裂いたのだ。
そして、頭蓋骨と首の骨を折られた忍と、内臓と骨が露わになった妖魔、二つの死体をご馳走のように平らげる。
この異様な光景に、軽く戦慄したのも覚えているし、初めて本物の死への恐怖を味わった。
ティオ・ディアボリクスの研究上、妖魔が同類である妖魔を襲うケースや捕食活動は有り得ないと断言した。観察上、ほぼそう言った資料や情報、実験では見受けられ無かっただけではない。細胞や血液、其れ等を研究器具で調べた結果、細胞が受け付けない、または摂取するのを拒み、同じ妖魔という細胞エネルギー同士が死滅し合うことが確認された。
妖魔という同族である以上、上位だろうと下位であっても変わらないらしく、食べ合わせた結果、双方が死に至ったことが証明された。

しかし、この竜は平然と妖魔を摂取して見せた。
こんなことがあり得るのか？
この妖魔は他の者と違う種類なのか？
それとも、妖魔ですらない新種の生物なのだろうか？
謎が謎を呼び、研究として追跡するほどに謎は深まるばかりだ。まるで、土を掘るように…
これは、新たなる研究の発展に繋がるんじゃないか？
「ガァッ!?」
バッ！と振り向いた黒き竜は、瓦礫の上に視線を送る。
しかし、ティオ・ディアボリクスの姿は何処にも見当たらない。気のせい…か？野生に生きた為、勘が鋭いのか、完全に気配や匂いを消

してた研究員の微かな存在を、黒き竜は感知したのだ。
食事の手を休めてた竜は、暫くして再び腐臭漂う血肉を貪り始めた。
血を飲み、骨を砕き、内臓を食い破る怪物…もっと、この生物について知る必要があるようだ。
そしてティオ・ディアボリクスは全力を尽くして一匹の黒き竜の捕獲に成功。多少…手荒になったものの、この化け物相手に死力を尽くすのは惜しまない。
こうして、様々な事実が発見された。
この化け物が、他と違う特殊な妖魔であること。
野生的に見えて、人間よりも遥かに知能が高いことも。
そして…嘗て約８００年前に誕生し、存在が確認された二つの神…
――神楽と神威に大きく関わる、重要な妖魔であると。
ティオ・ディアボリクスが一番興味を持ったのは、この妖魔は血肉を欲するだけでなく感情にも好みがあることを。
ある時、試しに人間の子供を誘拐して実験台に放り込んだことがある。
黒い竜は幼少期の子供をしばしば見つめ、獲物を品定めしていた。それに対して、目前に突然、得体の知れない化け物を見てしまえば怯えるのも当然だ。
子供は泣き叫びながら施設を走り回り逃げ出した。その後を追うように妖魔は子供の足跡を追う。
それが信じられないことに、５時間位はこの調子で行くのだろうと予想をしていたら、これが７日晩…つまり、一週間も続いたのだ。
疲労とストレス…化け物から絶対に逃げられないと言う事実、底知れぬ恐怖を抱く少年は、延々と獲物を品定めする妖魔に…とうとう我慢を超える時が迎えたのか、精神は崩壊し、絶大に泣き叫ぶ声を喉から発しながら、心が壊れる瞬間を経た――
ガブリュッ――！シャクジャク!!
その刹那のタイミングで、妖魔が大きく口を開き、頭部を食い千切る。

子供相手とはいえ…まさか恐怖のどん底に落としてからの捕食に、軽く恐怖に慄いたあの感覚は、死しても忘れられない気がした。
そうだ…コイツは生物の負の感情を好んでいるのだ。
まさか…死に対するドーパミンの快楽物質を好んでるのだろうか？いや…絶望や憎悪にまみれた生物の感情も、黒く染まった怒りにすらも歓喜に味わっていた…
更にはこの妖魔、通常とは違うのか、人間や妖魔だけでなく、猪や豚、牛と言った哺乳類から、魚類、両生類、爬虫類などの生物も好み、植物や時に虫までも食う習性があり、雑食や環境破壊に繋がることから、害獣と呼ぶようになった。
通常の妖魔では、動植物は愚か、人間という部類に近い上に、臓器移植まで進んでる豚すら好まない。
この生物は…もしかしたら――
??????????なのでは…？
この妖魔は――正しく害獣。
そして…コイツが生きる限り、忍や妖魔の存在は絶えないだろう。
これこそ正しく、悪魔の証明――彼がティオ・ディアボリクスと呼ばれた由来である。

「何だ…と……」
忌夢の告白に、頭の中が墨色に塗り潰される。
まさか、この得体の知れない妖魔が、謎の怪物が…両姫を殺めた元凶だとは想像も付くはずがなく、茫然としてしまう。
それは雅緋だけでなく、両備に重傷を負った両奈の方が、一番衝撃が大きかっただろう。
「アイツ…が??」

「上手くは言えないけど…アイツは…いや、最初の一匹は雅緋と両姫で討伐出来たんだ…そこからまた、もう一匹強いヤツがいて…」
もう一匹？
つまり、同じ妖魔が複数存在するのか？
記憶が消えてる雅緋にとっては初めて見る妖魔だし、先程の回想では確かにあの妖魔らしき化け物が両姫を殺したような気もしなくはないが…それにしては、野生的なのと、記憶で見た知略を巡る化け物とは訳が違う。
「……そう、コイツが」
両備は軽く一呼吸を終えると、銃の手入れを素早く行う。
忌夢の告発に両奈も、ボロボロの身体に鞭を入れながら立ち上がる。
…あの優しさに満ち溢れた、母親代わりの姉を殺した妖魔が、今目の前にいる。今こうして、黒い涎を垂らしながら、喰らい尽くすよう睨みつけている。
「だったら話は速いわ…両奈、立てる？」
「当たり前でしょ…お姉ちゃんを殺した妖魔を前にして、寝転べれる訳無いじゃない…」
両奈の口調も、いつもと違い厳しさと怒りを孕ませていた。
変態ドMというレッテルを貼られてる彼女から考え難いことだが、それはあくまでも性癖の話であって、根は優しく且つ真面目だ。そんな彼女でも、目前に姉の仇がいるとなると、黙っていられない。
嘗て雅緋と忌夢に殺意を抱いたあの感情が、再び膨れ上がるのも、自然な道理。
「お、おい待て両備、両奈――「このクソ野郎をブッ殺す!!!」
頭に血が上り、もはや冷静ではいられない両備と両奈に、忌夢の制止の声は聞こえない。
雅緋は微かな違和感を覚えながら、乱れる呼吸を抑え、両備と両奈に声を投げる。

「待て二人とも、冷静になれ!!コイツが本当に姉を殺した妖魔なら、かなり不味――「煩い!!行くわよ両奈!」ッ…」
筆頭のリーダーである雅緋の声すら届かない二人は、完全に怒りの感情に支配されている。いや…以前の自分もそうだったし、人のことは言えないかそれとこれとは話が全然別だ。
「ガァ゛ァ゛ァ゛ァァーーー!!」
襲ってくる獲物めがけて、大木を投げつける妖魔。
巨大な木を前にしても走るスピードを失わず、両奈は二丁銃を乱暴に連射させ、あっと言う間に巨木を氷漬けにし、割り散らす。
そこを狙うよう敢えて両奈を狙う妖魔は、右腕に力瘤を作り、パワーを溜めて今度は顔面を目掛けるも
「オラァ!!」
「カッ――?!」
上から両備の銃弾が頭部に炸裂し、思わず衝撃を合わせて、体勢がズレたことで、勢いを増して転んでしまう。
絵面的にはまるでバナナの皮を踏んで転び捨てたような間抜けな光景…しかし状況が状況。
そのまま妖魔の体の上を踏み付き、銃口を妖魔の口の中に当てる。
「死ね!消えろ!!」
ダァン!ダァン!ダァン!
火薬の匂いが鼻に届き、銃声の音が鮮明に聞こえる。
口の中に鉛玉をぶち込まれ、口内から喉にかけて激痛が伴う妖魔は、嫌がる悲鳴をあげる。どうやらかなり効いているらしく、口からブルーベリー色の血が確認できた。
「ア゛ァァッ!アバァ!」
「喋んなゴミ!!お前が…お前が――お姉ちゃんを殺したんだろ!!」
両備の怒声が森に届き、鴉が鳴き声を上げながら天に羽ばたき消えて行く。
必死に抵抗し何かを訴えかける妖魔に対し、両備は怒りの感情に身を任せ、怨み叩くよう何度も何度も射撃を繰り出す。両備の綺麗なオッドアイの瞳は潤い、自然と涙が溢れている。

「ヴガァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛!!!」
妖魔の絶叫に耳が痛み、体全身が痺れるような咆哮に思わず竦みそうになる。
「こんな物…ッ!?」
「グゲェ!」
躊躇うことなくもう一度銃の引き金を引こうとするも、突如首から絶え間ない激痛が両備を襲う。
妖魔は自身の尻尾を巧みに扱い、背後から悟られぬよう両備の首を瞬時に巻きついたのだ。首を絞めて殺す気か、酸素が喉に通らない。
「あッ…あが……!」
「両備!クソッ、離れろ化け物め!!」
「ガァァァッ――!!」
表情を歪ませる両備を、尻尾の力で宙に浮かせ、迫り来る雅緋を察知し音の破壊光線で吹き飛ばす。
どうやらこの妖魔、音を操ることに特化しているようだ。
「カァァ…」
両備の苦しみ歪む表示に、口角を吊り上げる妖魔は、彼女の頭を掴む。
「ゔッ!?あ、あがあ――ッ!あ゛、あ゛、!?」
「カァーーーッ!!」
そのまま力を入れ、歓喜の表情を浮かばせる。
両備は瞬時に悟った。
コイツは、自分の首を無理矢理引き千切る気だと。首から鮮明な痛みが脳に送られ、激しい痛みに涙が溢れ止まらない。
脳内に自分の首が千切れる最悪の予想が、流れ出てくる。ブチチと首の皮膚から音が鳴り、骨が悲鳴をあげる。
マズい。このままじゃ、殺られ――
「両備ちゃんを苛めるなああァァ!!」
終わりに死への抵抗を続ける両備に救いの手が差し伸べられた。
妹である両備に手を出す妖魔に、怒りのコスモを燃やす両奈は、二丁銃を妖魔の頭部に殴るよう叩きつけ、銃弾で両備と同じく乱射す

る。
「えいっ！やぁっ！」
次に紫の攻撃。
髪を巧みに扱う彼女は、ソレを武器にすることが可能で、髪飾りである手裏剣で尻尾を斬り落とす。
「だ、大丈夫ですか？両備さん…」
「うぐっ！ぅぅ〝…!!」
「えっ？」
しかし両備の首を締め付けてた尻尾は首に巻き付いたまま剥がれようとしない。
なぜ？尻尾を斬ったのに…
「まさか…まだ神経が…通ってる？」
強烈な匂いが鼻につんざくものの、確かにまだ動いている。
まるで虫の神経質のように、斬り落とされた尻尾は休むことなく彼女の息の根を止めようとキツく、締め付ける。
「両備さん…動かないで下さい…私が助けます…！」
普段はオドオドと気の弱い彼女も、仲間の危機とあらば話は別だ。
繊細に千切れた首を更に小刻みに斬り落とす。
両備が何とか我慢して動かなかったお陰で、傷跡が残らずに済んだ。
「ゲホッ、ガハッ！はぁ…はぁ……うぅ…」
「今度こそ大丈夫…そうですね」
酸素を肺に取り込むことで、生き心地を得た両備は、消化液が混じった唾液を拭きながら「有難う紫…」と素直にお礼を申す。
「いえ…それよッ――「痛ッ!?」きゃっ!?」
「紫!?両奈！」
紫が何か言いたげに言葉を送ろうとするも、吹き飛んで来た両奈に激突し、言葉が途切れてしまう。
「ギエ〝、エ〝、エ〝、エ〝、エ〝!!ニ〝、ィ〝、ーーーーー!!」
元凶は妖魔。
両奈に何度も銃撃で葬られたからか、手荒い傷痕が残るも、興奮し

ているのか奇声がより強く荒くなっている。
瞬時に飛びつき、そのまま両奈と紫に怒りの鉄拳を振るい落とすが――
「いい加減にしろよお前」
獄炎にも負けまい滾る怒声と共に、妖魔の顔面がひしゃげるよう鈍く、そして熱く燃える衝撃が頭部から全体へと流れる。
「秘伝忍法――【善悪のｐｕｒａｇａｔｏｒｉｏ】!!」
拳に纏う漆黒の業火で相手を嬲り焼く。地獄に焼かれる灼熱と、鍛え上げられた拳の圧力。怒りを搭載させた拳で、何度も叩き込むよう乱打する。
一定量の拳を叩き終えると、包帯が剥がれた腕から無数の蛇が妖魔を食い尽くすように襲う。黒き蛇はまるで地獄から生まれた魔物を連想させ、周囲を囲み、同時に集まった刹那――大爆発を起こす。
「カッ――ハッ」
プスプスと黒く焼き焦げた音が、煙と供に放つ。体全身が黒炭に染まったようにも見える。
「忌夢!」
「了解――ッ!」
雅緋の掛け声に反応した忌夢は、彼女の意図を汲み、伸縮自在の如意棒に電撃を纏わす。ビリビリッ!と痺れる音を奏でながら、行動の取れない妖魔に狙い、ブーメランのように投げ飛ばす。
「秘伝忍法――【ローリングサンダー】!!」
バチバチと先程よりも強い電撃の音を放つ如意棒の動きは止まらない。回転するほどにその電撃は強さを増し、次第に其れは竜巻のようになる。
「ガッ――!?バァ゛ァァァァ!?!!」
電流の強さは１００万ボルト。
通常の生物なら軽く戦闘不能に陥れることが可能な忌夢にとって最大火力の電気量だ。
黒く焦げ染まった体は、更に痛々しさと残酷さを主張させていた。妖魔の悲鳴から察して恐らく効いただろう。雅緋に続き忌夢の秘伝

忍法の連携は、正直堪える筈だ。
「よし、後は…「ギュア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ァァ゛ーーー!!」なっ――」
しかしこの妖魔、なお攻撃が止んだ事を確認した後、復活したような叫び声を天に轟かせながら、忌夢目掛けて突っ込んでいく。
空中の何もない空間を脚力を使い蹴り飛ばし、距離を詰める。こうも瞬間的に間合いを詰める妖魔に、軽く悍ましさを感じながら、如意棒で何とか猛撃を防ぐ。
「お姉ちゃん!」
「忌夢!」
ガギガギギィィ!!金属を刃物で擦り付ける嫌な音が鼓膜を刺激し、思わず苦虫を口に放り込んだように顔の表現を歪ませる。
よく見ると、妖魔の口には三段階で歯がはえており、舌の先端部分は鋭くなっている。ブルーベリー色の唾液はいつ見ても気味が悪く、SF小説と言ったエイリアンが出そうな体液だ。尤も、多くの未確認生物の血液が緑色なのだが、決してあおい意味ではない。
「クソッ!このままじゃ押されて…」
想像以上の馬鹿力。
底知れぬ体力と頑丈さ。
押されて土が足に減り込み痕が見える。
足も全力で力を振り絞ってるが、妖魔は更に漬物石を乗せるかのように、もう一加えで力を乗せる。
「うおッ――?!」
体制が維持できず、力押しに負けてしまった忌夢。
そこで食い尽くすのかと思いきや、今度は――
「ウギャア!」
「なっ!?」
悟らぬよう背後に近付いた雅緋に裏拳をかます。
しかし、瞬時に回避したことで怪我を負う心配は掻き消え、妖魔の攻撃は虚空へと消えた。
そこから片方の手で忌夢の腕を掴み、乱暴に蹴りを入れる。
「ぅぐぁ゛ッ!!」

「ッ！お姉ちゃん！」
「ウガァルル！ケエエエエエエエエエエーーー!!」
爆発的な音を口から放ち、何回も忌夢の至近距離で声を上げる。
一体、どれ程の音量を出せば声帯が保てなくなるのかと、違う方向の疑問が脳内に芽生えてしまう。
これだけの大迫力な奇声を間近で聞き、耳鳴りはするわ脳が揺さぶられるわ、鼓膜が悲鳴をあげるわで滅茶苦茶だ。
「離しやがれ化け物が！」
仲間たちが怪我を負うことに悪態の吐く両備は、スナイパーライフルを構えて妖魔の眉間を狙う。
訓練の賜物なのか、修行を日々重ねたことで、自然と相手の狙うべきポイントに銃口を合わせることが可能になった。そして、引き金を引き、銃口から火が吹き溢れる。
しかし妖魔はそれを見切ったのか、頭を下げて回避する。ターゲットを忌夢から妖魔に変えたのか、彼女をそのまま何処かへ放り投げようとするも
「ヴバッ!?」
背後から、避けて空振った銃弾が炸裂し、口からブルーベリー色の血が吹き出る。
今のは避けたはず…そう自然と疑問が芽生えた妖魔は、避けた銃弾の方に視線を送る。
――そうか、恐らく物質に反射して自分に直撃するよう誘導したのだろう。微かな火薬の匂いに、木の傷跡を見れば、直感的に線を結ぶように答えに辿り着いた。それが、ノーヒントと野生の勘を合わせた、妖魔の理解力。
「秘伝忍法――【デッドフォックス】！」
バチィン！弾ける音が近くで聞こえたかと思った直後、又しても痺れる体感をこの身で味わうことになる。
忌夢の近くにいたのが悪かったのか、電撃を纏った彼女を捉えるのはほぼ不可能に近いと言っても過言ではない。彼女の速度はもはや雷の其れと同格。目にも止まらぬ速さで相手を翻弄するこの忍術は、

焔の秘伝忍法――【魁】に類似している。
「――ッ」
悶絶する妖魔は、もう叫ばなくなった。
食らえばそれ程に黒く染まるその身体は、雷と炎の猛撃を浴びた証だ。皮膚が耐えられず、この結果になってしまったのだろう。
「これならいける！皆んな、この結果になってしまったのだろう。
「叩き込むぞ！秘伝忍法――【悦ばしきｉｎｆｅｒｎｏ】！」
「秘伝忍法――【リコチェットプレリュード】！」
雅緋の華麗な剣技と漆黒の炎に彩られた技は、いつ見ても熱く美しい。それに合わせて八つの機雷が前方に吹き飛び、雅緋が刀の鞘を収めた刹那――機雷と獄炎の爆破が乗せ合わせ、尋常じゃない規模の火力を生み出した。

合体秘伝忍法――【リコチェットｉｎｆｅｒｎｏ】

両備と雅緋の連携で併せ持った秘伝忍法。
爆破と炎が、まるで曲を奏でるように最後に終止符を打つ忍術。これで決まったか？と思う雅緋は黒い煙に視線を送る。
「……」
「少しは…効いたかしら？」
両備と両奈の二人による身勝手な行動のせいで此方の連携やペースは乱れたが、それでもこちらがフォローをすれば問題ない。
芭蕉はこの絶え間ない爆撃にも近い衝突に、壁に背を当てる総司の応急処置を施し、何とか被害を受けずに間に合った様子。その後は治療室と足を運ばせる。両奈と忌夢も、痛々しいダメージは残ってしまってるも、それほど深いわけではない。
「……？」
誰もが倒したか？という疑問に思うだろう。
いや…まだ、倒されてないのだろうな。相当なタフネスだと言うのは、拳を交えたからこそ、戦いの本能がそう告げている。
だから、警戒態勢は解けていない。

両備も雅緋、勿論負傷しながらも立ち尽くす両奈と忌夢も同じこと。
しかし、煙が晴れると供に、そこには既に妖魔はいなかった。
「なっ――」
雅緋の絶句と供に、異様な気配を鼻で感じ取った紫は、真っ青にしながら喉から声を振り絞る。
「ダメ！雅緋さん両備さん！上！」
紫の忠告に、空を見上げる。
黒焦と微かな傷跡だけを残す妖魔は平然と、空高く跳躍し、隕石のごとく勢いを乗せて降ってくる。
――ま　さ　か
あの合体忍術を、避けたと言うのか？
剣技は浴びせた…手応えも有ったしこの攻撃は間違いなく喰らっていただろう。
では何か？
爆破と獄炎で視界が見えない状態の機会を狙って、回避したとでも言うのか？いや、あの時からはほぼ回避できる状態では無かったハズだが？
現実を否定する数々の言葉が脳内に埋め尽くされると供に、雅緋は燃え盛る黒刀を盾にし攻防を防ぎ、両備は遠距離射撃があるので、銃弾を放つ。
しかし空中の体制でなお、自らの軸を捻り回転し、紙一重で銃弾の乱射は食らわずに済んだ。
「うっ――そ」
ドッ!!
鈍く重々しい擬音は、雅緋をひれ伏させていた。
妖魔は雅緋の武器を手にそのまま全体重をのしかかり衝突。落下による勢いを搭載させた落差を利用し、体制が維持できず背を地面に付けてしまう。
獲物に品定めされる雅緋、対する妖魔は涎をボタボタと垂らしながら、大きな口を開け、雅緋の腕に牙を食い込ませ、流れる血を喉に流

し込む。
「このクズやろ――」
両備が罵詈雑言を言い放ちながらスナイパーライフルの銃口を向けるも
「アァーッン！」
バリッ！ムシャグシャッ！
「はぁ――？」
今度は両備のライフルを食らいつく。
今度は物理的に、だが――直接、口を開き両備の武器を牙で粉砕させ、シャクシャクと爽快感あるスナック菓子を咀嚼するかのような音が、嫌に鮮明に広がっていた。
「うっそでしょ!?幾ら何でも、武器を直接…」
呆気に取られてる間も、シャクシャクッ！と続けて二口三口、齧り付く。そのまま一気にゴクリと飲み尽くし、金属と木製を喉に通した。
「あっ…ああ…」
武器がなければ…そう心の中で呟いた両備は、絶望に身も心も支配されていた。
コイツは一体…この化け物は何なのだ？
「両備ちゃんに近づくなあぁぁぁぁ!!」
両奈が猛撃し、倒れ伏せてた雅緋は再び黒刀を握りしめ、秘伝忍法わ詠唱しようとするも――

妖魔術――【連鎖龍のｕｒｏｂｏｒｏｓｕ】

黒炎と、千切れた尻尾の傷口から再生された鎖鎌状の新たなる尻尾を巧みに扱い、辺り一面を支配し、燃やし尽くす。
地獄の業火と、蛇の如く空間そのものを支配する鎖鎌の繊細な技術。それらを兼ね合わせた力は絶大。
近くにいた雅緋、両備、両奈は「あっ…」と声を発することなく、妖魔の術を諸に食らう。少なくとも、脳内に過ぎったのは、この術は合

わせられた合体技。総司の【鎖蛇九頭龍閃】と、雅緋の【悦ばしきｉｎｆｅｒｎｏ】を搭載させた技。
そこから更に、ドーム状の爆破を生み出す。
「雅緋!!」
「両備さん…両奈さん……!」
範囲内の距離から外れていた忌夢と紫の姉妹。
心配を投げる言葉に、安心かもしれないなどと甘い考えは含まれていない。心臓の鼓動が早まるような感覚、冷や汗が次第に流れ落ち、やがて視界が晴れると。
三人は倒れ伏せていた。
両備と両奈は苦痛に歪めた表情で。
雅緋は…握力のある手で首を締め付けられ、倒れてるにも関わらず、何度も何度も地面にぶつけ弄んでいる。
まだ玩具を壊したりないという幼稚的な部分も合間見えるが、忌夢の我慢してた怒りのマグマは、噴火した。
「穢れた手で雅緋に触るなああああああああああああ!!!!」
爆ぜる怒りはもう止められない。
憎悪と嫌悪。
怒りと苦しみ。
それでこそ、妖魔の好みたるや感情――妖魔の狙いは、これだ。
敢えて仲間をわざと甚振らせることで、相手の感情に怒りのボルテージを高め、返り討ちにする。
復讐者を返り討ちにする戦法はこれまた、この妖魔にとっては至福極まりないこと。
「だめ!お姉ちゃん!」
しかし、相手の感情や心情すらも匂いで感知できる紫には見破られている。だからこそ制止の言葉は投げかける。しかし人間というのは一度怒りに身を任せてしまえば止まらない。まるで起動した機関車のように。

「ガァエエェ！ァ゛ァ゛ァ゛ァァァァァァァ!!」
そこから、総司に似せた鎖鎌に形成された尻尾で薙ぎ払うも、忌夢は跳躍して其れを避ける。
長く伸びる如意棒は、いつ伸びるか予測がつかない。瞬時に伸ばすも反射神経にも特化した妖魔は簡単に回避できるだろう。だが、狙いはそこではない。
コテを利用し自身を少しズラすことで、重力とコテの作用で如意棒の動きはずれ、長くリーチを保つ武器で妖魔の首を薙ぎ払うように当てる。
ヒットした妖魔は「ギエッ?!」と予測不可能な攻撃に驚愕を漏らし、忌夢はそのまま追尾する。
「あああぁぁぁぁぁ…!!」
「お姉ちゃん後ろ！嫌あああぁぁぁ!!」
しかしそれも一瞬の妄想に過ぎなかった。
背筋から鋭い痛覚が全体へと広がり、紫の言葉通り後ろを見やる。鎌状となった尻尾が、軌道をずらし、両備の反射を利用し死角を取り怒りで視界が狭まった忌夢を、尻尾で突き刺したのだ。
「あああ！お姉ちゃん！」
紫の悲鳴に、忌夢はこれまでの戦闘と記憶を頼りに追跡する。
そういえば、コイツ…人語も喋れない癖に、何言ってるか判らない印象だけが強く残っていたけど…
攻撃を受けたり、相手の行動を見たりして…僕たちの行動を真似たり、さっきの技も総司と雅緋に似ていた…
まさかだとは思うがコイツ――学習してないか？

ティオ・ディアボリクスが研究を重ねて早くもこの妖魔の生態が解明されたのは一つ、学習能力。
この知性は正に鴉や猿を凌駕する。
記憶力は勿論、更に相手の攻撃や動作を学習し、対抗しうる技や、予測を立てて相手を葬ることを得意とする。何よりも驚愕したのは、その後だ――

「お姉ちゃんを離して!!」
紫は本来、余り怒鳴り散らかす性質ではない（べべたんを侮辱された場合は別）。
しかし、彼女の怒りの導火線に火を点けられてしまえば、例え相手の思うツボになろうと、罠だろうと突っ込んでしまう。そう言った意味では、小百合の情を捨てろという言葉は、正しいのかもしれない。
だからこそ、冷静じゃない紫にとってこの行動が致命的でも、仲間たちや姉すらも倒れ行く中、自分だけが平然と無事に立ち尽くす方が、よっぽど許せないのだ。
紫の察する通り、妖魔は態と悪意に染まった感情の怒りを煽り、向かわせてくる。この感情に至福を感じるのも、両備と両奈の復讐心が、快楽を教えてくれた。
「ゲェェェェア゛ア゛ァァァァ!!」
間合いを詰める妖魔に、髪を操作し四肢を掴む。
紫の攻撃は禍魂の能力だけでなく、こう言ったように髪を自由自在に操り翻弄する戦略も可能なのだ。更に言えば手裏剣を回してプロペラのように空を飛ぶことだって造作もなきこと。
妖魔は縛られ四肢を引き千切ろうとする紫に、軽く笑みを浮かばせ
グンッ!と体を引きつかせる。
「きゃぁっ!」と痛みと引力に微かな悲鳴を叫ぶ紫。
そのまま勢いをつけられ、無防備になったところを
「ヴガァ゛ァ゛ァ゛ア゛!!アァァァァァァァァァァァァ!!!」
何度も怨めしそうに、殺意の感情を孕ませながら、拳の乱打が紫を襲う。
「い゛、やだぁ…!い、痛い…!!」
「おい紫!やめろ妖魔!!」
紫の聴くだけで心が痛む悲鳴が、姉である忌夢の心を煽り、突き刺す。
「フンニ゛、イ゛ィィイ!!」
そのまま髪を鷲掴み、強く引っ張り、女性にとって命とも呼べる髪

を、まるで雑草や華麗な花を摘み取るように引き千切る。
「あ〝あ〝ぁぁぁ!!やめて!やめて!!」
「やめろおおぉぉぉ!!!」
もはや害獣は欲望の赴くままに暴走と破壊を続ける。
脳に走る激痛に、紫の潤う眼から涙が絶え間なく流れ落ちる。
確か…前にもこうやって授業をサボって父親の目を盗んでべべたんとおままごとしていた時、父に見つかって叱られて…無理やり髪を鷲掴みにされて、何度も引っ張叩かれたっけ…
激痛に伴う反面、走馬灯に近い回想が、心を煽る。
「お前エエェ!!!」
今まで人前に見せたことない忌夢の激情。
激しく憎悪を燃やせば燃やすほどに、妖魔の心は至福と快楽に満たされ、思考が働く。
そのまま敢えて紫に尻尾を使わなかったその鎖鎌で、忌夢の眉間を狙い飛ばす。
ザグンッ!!
「!?!」
黒刀が妖魔の腕の肉に食い込み、弾かれる。
雅緋が、間一髪のところで紫を救い、そのまま剣を縦横無尽に振る舞う。
一体？いつから復活した？
先ほどまで紫と忌夢に固執していた余り、欲望に目先が囚われてたようだ。
「これ以上…誰も失わさせない!!母さんの時と同じ悲劇だけは、あってはならないんだ!!!」
仲間という大切さを覚え、手に入れた雅緋は、ボロボロの傷だらけになりながらも命を削り燃やす。
このまま倒れ伏せていて何が選抜筆頭。何が悪の誇り。
「ウリイィィ!!」
しかし感情論で倒せるほど妖魔は甘くない。
腹部を蹴られ、痛み残る部分に更に鞭を入れられた気分に陥り、口

から血を吐き出してしまう。
「雅緋!!」
とめどない絶望感が体を硬直させてしまう。
そして、再び鎖鎌の尻尾を忌夢目掛けて狙い撃つ。今度こそ、確実に仕留めてみせよう。
シュンッ――!
短く弾ける音が、空気を斬り裂き、銃弾の如く素早い刃物が突き刺そうと凶器が振るわれる。
しまった…もう、ダメだ――絶望と終わり。
それを嫌という程体験させられた忌夢は、目を瞑り奥歯を噛みしめる。雅緋に総司、両備と両奈がやられて、今度は僕が…
ドスッ!!
突き刺す音が、忌夢の耳を打つ。
血飛沫が顔にかかり、悍ましい恐怖が背筋から全身へと伝染した。しかし、痛みがないことに違和感を覚えた忌夢は、瞼を開くと――
「がふッ――」
妹(紫)が、姉(僕)を庇い、鎖鎌の尻尾に体を貫かれていた。先端部分の刃物が、紫の体から飛び出ていたのだ。
「む、紫…?」
「おねえ…ちゃん…」
「紫いいいいいいいーーーーーー!!!」
忌夢の甲高い絶望と恐怖、全ての負の感情を染めた忌夢の悲鳴。それに呼応する妖魔は、とてつもない歓喜の産声をあげ、絶望と歓喜の声が、天を支配し蛇女子学園に轟いた。
蛇女子学園選抜メンバー、崩壊。
しかし恐れぬなかれ、ここからが悪魔の始まりである――

１４４話「禍魂」

冷たい一陣の風が、横殴りに吹き、頬に触れる。
騒めく森林は揺らぎ、葉は落ちていく。
静止した空間には、忌夢の叫喚と妖魔の雄叫びだけが、轟いていた。
「紫いいィィィ――!!!!」
喉が潰れる程の大声を発し、ゆっくりとスローモーションのような鈍さで前のめりに倒れ行く紫を、抱きしめる。
紫の顔色は悪く、腹部には妖魔の鎖鎌で貫かれ、引き離されたものの、このダメージはかなり重傷だ。止めどなく溢れ出る赤い鮮血は、漆黒の服を染めるように汚していく。
「紫、紫!・しっかりするんだ紫!!」
必死に言葉を投げかける忌夢の声は微かに震えており、心臓の鼓動がより速く脈を打つ。
「おねえ……ちゃん……」
霞む視界を精一杯開こうと、口から血を流しながら、優しく姉の手を握る。柔らかく、女性の掌には温もりが籠っていた。
「待ってろ紫!・直ぐに救助が来るから…そうだ、布でせめて傷口を抑えるよう止血を…!」
救助なんて、本当は来ないくせに。
本当は助からないかもしれないのに。
忌夢は必死に紫の死を阻止するよう、善意を尽くして応急処置を行う。自分の忍装束の布を引き千切り、紫の傷口を抑え、何とか止血する。気付けば、自分の手も紫の血で赤くべったりと塗り尽くされていた。
「お姉ちゃん……だいじょうぶ…?・ケガは、してない?」
掠れた声でも、忌夢の耳には鮮明に届いている。
口の中に広がる鉄の味を覚えながら、紫は覚束ない口調で忌夢の安否を確認する。自分が致命的な傷を負ってるにも関わらず、姉の心配をする紫に、「僕のことは大丈夫だ…」と軽く首を縦に振る。
「良かった…大好きなお姉ちゃんが……死んじゃったら、私、耐えられ

ないから……」
「紫…」
姉妹でありながら、今まで言葉を交わしたことは全くと言って良い程少ない。中学から高校に入学してからは一年まるっきり会話すら交えない位に。忌夢と雅緋が血界突破の件で暴走し、入院して話せなかったと言う意味もあるが、見舞いすら行ってない紫は、端から見れば確かに異端者であり、姉妹とは思えないだろう。
「私ね…ずっとお姉ちゃんに……言えなかったことがあったの……」
「言えなかったこと？」
「うん、お姉ちゃんを、困らせたこと……〝ごめんなさい〟の一言……」
「えっ――」
忌夢の喉に息が詰まる。
その言えなかった一言が、彼女にとって余りにも大きな衝撃だったから。
どうして…こんな刻に限って、謝るんだ？
いや、そもそも何に対して紫は謝っているのか？
その答えに辿り着くまで、どれほどの時間が潰えるだろう。しかし、そんな時間を、紫の言葉が短縮してくれる。
「覚え…てる？私が…お父さんの目を盗んで……修行をサボって……それで…怒られて……無理矢理修行させられたあの日…」
「ッ――」
紫の言葉に、全て理解した忌夢は絶句する。
そうだ…確かあの日、僕はいつも修行を放ったらかしにしてべべたんと遊んでる紫に、嫌気が刺して…大事にしてたべべたんを引きちぎろうとしたんだっけ。
ちょっとした姉妹喧嘩に見えるだろうけど、この時からだった…紫の力が開花したのは。

『やめてええええええええ――!!!!』

鼓膜が破れるほどの絶叫。

心の奥底からマグマの如く噴火する怒り。

天然で大人しげな彼女とは正反対な、凶暴な一面。

紫が目を開けると、忌夢はボロボロになって倒れ伏せていた。今でも記憶に残るその忌々しい記憶が、いつも忌夢と紫を苦しめ縛っていた。

私が、お姉ちゃんを傷付けた――

大好きなお姉ちゃんを、怒りの感情に任せて傷つけてしまった…それが、どんな意味を成すのか…

紫だって何も故意が有って姉を傷つけたのではない。

禍魂――それが紫に宿る、凶暴な力。

禍魂とは、特殊な忍家系が引き継ぐ希少な忍術である。拒絶から産まれる負のエネルギーによって、感情を具現化させ発現させる忍術は、雅緋や鈴音、前に出資者として働いてた伊佐奈はおろか、小尾斗教官すらも大きく賞賛する忍術である。

今では禍魂を引き継ぐ者は紫と忌夢の家系しかいないそうで、ある組織では狙いを定めていたりする程、危険で希少な代物である。

忌夢は禍魂こそ発現しなかったし、何れ力を身につければ手に入るだろうと一縷の望みを賭けるも、結局発現はしなかった。

一方、修行に手をつけずサボり遊んでた紫に禍魂の力が発現し、父や母は大きな歓声を上げていた。

でも、紫はそんな力を嫌っていた。全然嬉しくなんて無かった。

こんな物があるから、姉を傷つけてしまい、この呪われた忍術がある限り、永遠に姉とは仲直り出来ないだろうと、殻に閉じこもってしまった。

そもそも紫は忍という存在に関しては根っから興味がないし、固執すらしていない。まるで雲雀みたいな経緯だろうけど、何も努力してない自分が、才能という理不尽な力で姉を苦しめることだけは、絶対に有ってはならないのだ。

だから紫は、薄暗い部屋で引きこもることにした――

其れが、愛する姉への罪滅ぼしだから…

自分が外にさえ出なければ…お姉ちゃんの視界に自分が入らなければ、姉も安心だろう。

本当だったら、姉と一緒に愉快な話をしたいし、世間話や何気ない日常でも楽しみたいというのは、彼女の心の奥底にある本音だ。

更に一言加えれば、姉が入院した時も何度もお見舞いに行きたかったし、お供え物は何が良いかななんて懸命に考えてたりもした。

けど、もうそうはならない…

自分の目覚めた才能のせいで、姉はより激しい嫌悪の眼差しを紫に向け、避けるように見向きもしなかった。

「ごめんねお姉ちゃん…ごめんなさい」そう何度も口に出したくても、忌夢に伝えることが出来なかった。自分の弱気な性格が原因の一つでもあるが、一番は姉に対する罪悪感のプレッシャーだろう。

言い訳は見苦しいかもしれないが、それでも、姉のことを大切に想っていたことも、大好きだという家族の愛は、正真正銘――本物だ。

だから紫は、せめて…一人で悲しみに押し潰されないよう、べべたんを忌夢として見てきたのだ。

べべたんに向ける愛情は、お姉ちゃんと同じ…だから。

「だから…御免なさい……お姉ちゃんを傷付けて…苦しめて、役に立てなくて……」

「……」

紫の瞳から、涙が滲み出る。

それは痛覚から来る涙ではなく、愛と傷心から生まれた、透き通る雫。紫の、心から想う涙を見るのは、いつぶりだろうか？

紫の誕生日に、初めてプレゼントしたべべたん以来だろうか――

「違う…ちがうよ、紫……」

忌夢もメガネが涙で曇り、声はより一層震えていた。

「紫が悪いんじゃないんだ…お前の力に嫉妬して、向き合うことから逃げてきた僕が…悪いんだよ…紫、お前は何も悪くないんだ…」
紫は仲直りしようと、姉を想っていたのに対し、忌夢はそれをないがしろにするよう見向きもしなかった。
紫の好意や心を、全て拒絶するよう避けていたのは、姉である自分自身で、紫は何も悪くない。
もし、自分が姉としての自覚を持って妹と接していれば、仲直りしていれば…紫を苦しまずに済んだのでは？
姉と妹、何方も顔付きは余り似てないが、家族である姉妹への想いは、とても良く似ている。
「紫を苦しめてたのは…僕なんだ…
何が、悪の誇りだ…妹を守れず、お前の善意から逃げてた僕は…蛇女の生徒としても、姉としても…失格だ…」
何が悪の誇り。
何が自慢の姉だ。
何が仲間を守るだ。
結局、この妖魔に成す術なくやられて、両備や両奈に雅緋を守れず、紫だって救えない。どうしようもない、ダメな姉だ。
「情けないよ…自分の無力さに、己の弱さが…僕は、とても情けない…」
姉が初めて妹の前に見せる、弱音。
其れは、雅緋を守ろうと振る舞う彼女とは違う、妹の為に己の不甲斐なさを悔やみ、涙流す一面を見せる彼女。
「お姉…ちゃん……空、綺麗だね――」
紫の言葉に、忌夢は「えっ？」と目を丸くする。
「お姉ちゃんのお陰なんだよ……こんなにも綺麗な空を見れたのは……普段、私は…部屋に閉じこもってるから……外の景色なんて……ネットの画像…でしか、あんまり見てないから……実際見ても…大したことない…って、思ってたけど……違うね…」

ネット画像で絶景などを閲覧するのと、実物を目で見るのとは訳が違う。多くは達成感や美しさに見惚れるのだろうが、今はそんな理屈を語る状況ではない位、紫でも解っている。
「もし……お姉ちゃんが無理にでも部屋から引っ張り出して無かったら……私、ずっと部屋に…閉じこもったまま……灰色な人生を送ってたんだと思う……」
笑顔も光も何もない、暗く闇に沈む重い牢屋のような空間。
夕方の六時から起床して、ネットやゲームを一晩中やり過ごし、朝日が昇れば就寝する。そんな生活リズムもクソもないニートのような、引きこもり生活。
そんな生活に、華やかさも美しさも、笑顔も存在しない。其処に有る物は、ただ無駄に時間を過ごす怠慢と、生きる喜びない囚人のような世界。
そんな中、原因とも呼べる姉が来てくれたから、自分も心動かされ、雅緋を始めた仲間たちと会うことが出来た。姉を含めて、皆んなの役に立つことだって出来た。今は、こんな結果になってしまったし、欲を言えばもっと姉の役に立って、笑顔を見たかったけど…
でも、それももう無理そうだ。

「最後に…お姉ちゃんに…言葉を残せて良かった……」
「むら…さき?」
紫の途切れ途切れな言葉に、最悪な予想が忌夢の頭を過らす。まるで、全身の血が逆立ったような体感に錯覚をしながらも、紫の頬に手を置く。
「お願い……雅緋さんや他の皆んなを守って……そして、出来ればお姉ちゃんだけでも無事に……今まで……ありが……とう……」
そして、彼女はゆっくりと瞼を閉じた。
「嘘だろ?おい、紫…起きろよ、紫……」
しかし反応がない。
呼吸もほぼ聞こえない上に、体を軽く揺さぶっても、目を開ける仕

草や気配は微塵たりとも感じ取れない。
「変な冗談…やめろよ……なぁ、ゲームや映画みたいな、そんなありきたりなこと、するなよ…心臓に悪いからな??…なぁ…そんなに、僕を困らせたい…のか？流石の僕も……これには……」
「……」
忌夢の表情は段々と歪んでいき、涙が絶え間なく溢れ出る。
どれだけ言葉を投げても、涙を流しても、妹が起き上がる気配は毛頭ない。息絶えた…としか言い表せないこの悲惨な光景は、忌夢にとって余りにも衝撃が大きくて、それで…余りにも虚しく切ない別れ方。
「紫!!起きろよ！起きてくれよ!!
僕が悪かったんだ！それなのに、何も悪くないお前が何で死ぬんだよ!?目を覚ましてくれ！お願いだよ紫!!」
必死に泣き叫ぶ声を上げる忌夢に、何かと意識が戻った両備と両奈は、ソッと目を開ける。
鈍く重い体に、生傷が絶えない体に鞭を入れながら、立ち上がろうとする二人は、現状何が起きてるのか解らない。
「一体…何が……？あれは忌夢と、紫…？」
「ねえ、もしかしてだけど…これって……」
最初、何も解らずと見つめてた両備と両奈の表情は、段々と青ざめていき、現状を悟る。
「そんな…ッ！紫!!」
「いやあああぁぁぁ!!紫ちゃんがッ――!!!こんなのあんまりだよぉ!!」
両備と両奈は大きく悲鳴をあげる。
自分が先走ってしまい、連携取れず体制を悪くしてしまった罪悪感と、仲間が死んでしまった悲嘆に、心が引き裂かれそうになる。
自然と涙が溢れる両備に、両手で顔面を覆い泣きじゃくる両奈。二人の声と忌夢の声が届いた雅緋は、霞む視界に映る情報を頼りにしながら、這いずるように体を動かす。
（まさか…紫が殺られたのか――!?）

最悪な予感は、文字通り的中し、紫は微動だにせず仰向きになって倒れている。その表情には、忌夢に本音を伝えれたことと、痛みと苦しみで悶えるような、そんな感情が混ざり入れた表情を現しながら、彼女は息を引き取った。

「ウギャァ゛ァ゛ァ゛ァァァァァァ!!ウイィィーーーッ!」

紫の死を確認した妖魔は、血で赤く塗り潰された尻尾を舐め終わり綺麗にすると、ようやくを以って歓喜な鳴き声を腹から振り絞り、勝利のポーズを取る。

拳を天に高く挙げ、勝利のスタンディングを送る光景は、大変不快なことに、オールマイトの最後を真似ている。

妖魔が与えられた任務の中には選抜メンバーを率先的に殺せと命じられた。資料に記憶した中から紫という少女が死したことにより、任務の一環を達成した爽快感に身を震わせ、喜びの雄叫びを上げている。

妖魔にとって、これは仕事であり不自然なき事柄。

しかし、この場の全員の逆鱗を傷付け、堪忍袋を破くのには、充分過ぎるものだった。

「オイ――」

忌夢よりも先に、言葉を発したのは両備だった。

そのドスの効いた声に反応する妖魔は「オッ?」と張り上げる声を止めて、意識を向ける。

「何、ヘラヘラ笑ってんだよ」

憤慨。

憎悪。

悔恨。

様々な感情が含まれた声は、もし一般人が聞けば腰を抜かすだろう。覇気の通った声色には、いつものSッ気は抜けており、完全に瞳

は怒りに染まり、頭に血が逆上している。
　このまま、死体になっても的として射り続け、四肢を引き裂いてやろうとさえ思っていた。
　しかし、両備と両奈は直ぐに気付く――それよりも、妖魔を凌駕するほどの、危険的な気配を
「ガ、ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァァァァァァァァーーーーッッ!!!
　妖魔に似せた凶暴な雄叫びに、二人は我に返り、妖魔すらもその声主に反応する。
　再び視線と意識を向けた刹那――

　バギィッ！と弾け折れる嫌な擬音が、二人の耳に届くと、妖魔は吹き飛ばされていた。
「えっ？」
　何が起きたのか…？あの妖魔も反応が取れず赤ん坊のように呆気なく吹き飛ばされてしまい、姉妹は思わず茫然としてしまう。
「今の…忌夢？」
　いつの間にか、紫の側から忌夢の姿が消えていた。
　あの声に、あの瞬間のタイミングから察して、忌夢と判断して間違いは無いだろう。
　他に動けそうな忍学生はいない…と言うより、両備と両奈に、倒れている紫しかこの辺りには存在しないので、姿を消した忌夢だと判断しても良いだろう。
「追うわよ両奈！」
「待って両備ちゃん！その前に…」
　急かすように言葉を放つ両備を制すると、両奈は紫の方向へ駆けつけ、体を持ち上げる。
「紫ちゃんを、安全な場所に…」
　例え息を引き取ったにしても、仮に死んでしまったとしても、せめてこれ以上体が汚れないように、安全な場所に置いておく方が良い気がしたから。
　両奈の慈愛に満ちた優しさは、死んだ両姫を連想させる。少し目立

つが、巨木の下に体を寝かすように置いて、軽く優しい一言を添えると、両備に駆けつけ跡を追う。
……なんだろう、この嫌な気配は。
騒めく胸の鼓動を抑えながら、二人は我武者羅に突っ走っていく。

「ウガァァァァァァーーーーー!!!」
「グガァァァァァァーーーーー!!!!!」

けたたましい二つの雄叫びが、大地を轟かす。
殺伐とした異様な空間は、入った者の神経を麻痺させるような緊迫感が滲み出ていた。
そこには――暴れ狂う妖魔と、暴走した忌夢が、互いの命を削り合うよう唸み合っていた。
「ガゥル!」
妖魔は忌夢の首筋を噛み付き、皮を剥がす。耳に残る嫌な音を立てながらも、忌夢は苦痛の顔を浮かべるが
「ガァァァ!!」
腹部に腹を突き刺し、妖魔は思わず口に含んでた忌夢の皮を吐き出してしまう。唾液を垂らしながら妖魔は呻き声を上げるも、続けて顔面、溝、膝、胸部、右肩と如意棒と拳を巧みに狙いよく追撃をかます。
先程までの忌夢は、妖魔にとって脅威ではなく、獲物としか認識していなかった。今回の任務とはいえ、手応えのなさとその非力たる弱さ、しかし今の忌夢は妖魔の常識を覆し、化け物にとって敵と認識した。
「ガァバァァァ゛ァ゛ァ゛ァァ!!」
妖魔術――【悦ばしきｉｎｆｅｒｎｏ】
雅緋の忍術を習得した妖魔は、己の妖魔術で彼女の秘伝忍法をコピーで写し出したように再現をする。
腕から紫色の結晶が生成され、剣となったその鋭利な水晶は研ぎ澄まされており、まるで雅緋の黒刀を再現させたようだ。美しさと威厳

あるソレは正しく誰もが武器と言うだろう。右手は黒炎を発生させ、刀と拳を巧みに使い、忌夢に反撃をする。
「アァ゛アァ゛アァ゛アァ゛アァ゛ァァァァァァァ――!!」
しかし忌夢は紫色の禍々しき気力で妖魔の全てを吹き飛ばす。その威力は凄まじく、地面のクレーターが小隕石でも降り注いだ跡のように凹む。
「グァバッ――!?」
強度を誇る黒刀らしき水晶はガラス破片の如く砕け散り、そのまま忌夢の禍魂の力を食らってしまう。
妖魔は瞬時に理解した。
そうか…先程の紫と同じ能力…つまり、同じ忍術を持つ忍学生なのだと。
本来忌夢の忍術は雷属性を得意分野としたもので、禍魂の力は才能の無さで受け継がれず、忌夢は独自の忍術を編み出していた。
しかし、今の忌夢は紫と同じ…それ以上の禍魂の強さを備えていた。実際は忌夢に禍魂の力が受け継がれなかったのではない、禍魂の力が引き出せなかっただけである。そう考えると、忌夢のこれまでの忍術は〝武術忍法〟という名称が正しいのかもしれない。だがしかし現状、そんなことはどうでも良い。
心底、どうだって良い――
「許せない…許せないぃ…!!」
忌夢の獣混じりの怒声には、底知れぬ憤怒の感情が含まれていた。
雅緋を守れなかったこと。
紫が死んでしまったこと。
両備と両奈がやられたこと。
理不尽に蛇女子学園を襲う愚か者。
数々の怒りが、彼女の感情を爆発させ、結果――今の忌夢を造りだしたのだ。
その名も――禍魂の忌夢
これは覚醒名であり、暴走状態は未完成な力。
彼女の暴走は、嘗ての雅緋の姿を重ねている。

忌夢の体は次々と闇の紋章で侵食されていく。禍魂の闘気に、闇という女性ににた不気味な模様は、見た者に恐怖と不気味さを強く与える印象深い姿だ。
「ウガァァァァァァァー・ァァァァァァァァ!!」
電撃と禍魂を纏った彼女は、ある意味としては妖魔と同格か、それ以上の強さを引き出していた。妖魔が全身全霊を込めた拳を、忌夢はお返しと言わんばかりに同じく拳を突き刺す。激しい衝撃音が、空間を揺らがせ、双方は互いに吹き飛んでしまう。
忌夢の腕の骨は折れてしまうも、妖魔の腕は感電してしまい、更にはグシャリ!と柳の枝が折れたような醜さを映し出していた。
べちゃりとした薄気味悪い血の色がネットリと地面に付着し、しばし折れた腕を見つめ痛みに発狂。
「ガァァァアバァァァアーーーーッッ!!」
「許せない…」
聞き慣れたのか、忌夢は大反響する妖魔の大声を間近で聞きながら尚、何とも無いと言わんばかりに忌夢は悔やむように小声で呟く。
「お前も……自分の弱さも……今になってようやく、禍魂の力に目覚めた自分も……」
そして軽く一息吸い
「許せなあああぁぁいいい――!!!」
絶・秘伝忍法――【ブラック・デッドフォックス】
如意棒の先端部分から黒く禍々しい狐が、無数に飛び出しては妖魔の中心を回り囲む。脱出する退路を断つように、頭上からでも飛び越えれない高さでその狐は台風の如く動き回る。
「カァァァァァ――ッ!!」
妖魔術――【蛇鎖九頭龍閃】
今度は総司の忍術を使い、尻尾の鎖鎌を乱暴に振り回す。強靭な斬れ味を誇る刃物状の尾がしなりを上げ、斬撃を縦横無尽に飛ばしなが

ら速度を上げ、指定範囲の空間を支配する。
そうすることで、多少は狐の猛攻を相殺することが可能だろう。しかし、〝多少〟という点だけであって、実際に全てを防ぎ相殺出来る訳ではない。
鎖のように伸びる尻尾、尾の鋭い刃物状の突起物は刃こぼれを起こし、みるみると相殺出来る量が減っていく一方、忌夢の忍術は収まらない。それどころかすこぶるペースを上げては狐の渦が、妖魔を呑み込んでいく。
「がああぁぁ！」
渦の頭上には空が見え、穴がある。そこから一気に跳躍し飛び降りた忌夢は、禍魂を搭載させた打撃の乱打を繰り出す。
禍魂の力は何も感情を具現化させた攻撃だけではなく、身体能力が何倍、何十倍にも跳ね上がる術なのだ。使用者によっては忌夢と同じく暴走し、力の使い方を見誤ってしまう危険的なケースが存在するが、紫や先代達は禍魂の力を見事コントロールすることが可能となり、こういったバフ的な効果を発揮させることもあるのだ。そう考えると、禍魂が珍しいのも、妖魔にとって恐れを成すのも、頷ける。
「ガァフッ――！」
口から大量の血を溢れ出す。全身血まみれだ。
喉から出血が溢れて声がまともに出ないそうで、苦しそうに悶えている。それでも忌夢の怒りは治らず、妖魔を滅多打ちにするよう、折れた腕を鞭のようにしながらも、痛撃を与えていく。
「あ〟、あ〟、あ〟、あ〟、ぁぁぁああ――ッ!!」

もう、このまま全て滅んでしまえば良い。
妖魔の骨や血は一滴足りとも残さず、完全駆除してやる。
大切な妹を奪われ、蛇女を崩壊へと追い込ませたコイツだけは、何がなんでも絶対に許せない。
忌夢の心に埋め尽くすのは、拒絶と憤怒のドス黒い感情。それが禍魂の力をより強く引き出し、忌夢の善良な心を暗闇に沈めていく。
ただ、それは即ち諸刃の剣と同じ物。

忌夢の体にも限度があり、無限に力を振り絞れる訳ではない。体の組織や骨は攻撃を繰り出すと共に身体能力に似合わず壊れていき、体が何度も悲鳴を叫んでいる。
下手したら妖魔と同じく忍からの殺害対象として見定められても可笑しくない程に、今の忌夢は妖魔にとっても忍にとっても危険的で喜ばしくない方向に偏っていた。
「忌夢！」
ようやく駆けつけた両備と両奈は、息を切らしながら仲間の名前を叫ぶ。しかし反応が無いのか、此方に聞こえてないのか、意識を妖魔に向けたまま、振り返らない。
「完全に狂っちゃってるわ……」
「忌夢ちゃんにも、紫ちゃんと同じ禍魂の力が目覚めたってことなの…!?」
両奈の推測はほぼ確実と呼んで良いだろう。
実際に二人は全力疾走で直ぐに到着できたが、時間が長く感じるのは致し方ない。
忌夢は苦痛と悔恨、怒りや悲しみと言った負の感情を昂らせてるも、妖魔は蜚⊠の如くしぶとく、死ぬ気配は更々ない上にナイフのように尖った指で忌夢の体をグジャリと引っ掻き回し、このまま内臓を引きずり出すつもりだろう。お互いが血みどろな争いを続けてる上に、見てるだけで心が締め付けられる程に痛くて残酷な描写だ。
「どう…すれば……」
最早、二人の声では彼女の耳には届かない。
仲間に何度も言葉を掛けても、もう今の忌夢は皆が知っている忌夢では無いのだから。
下手すれば、本当に殺害処罰の対象になる可能性も有れば、このまま我を忘れて蛇女子学園の学生達を襲うケースも有る。迂闊に下手を出ればこっちが余計に痛手を食うだけで、解決方法にはならない。
「忌夢！聞こえるか!!」
しかし、この悪夢の中に響く声は、絶望ではなかった。

忌夢の動きがピタリと止み、妖魔は疲れ切ったかのように痺れたまま微動だにせず動きを停止させた。
「雅…緋?」
忌夢の心に募った暗雲が、お日様が覗くように晴れていく。
完全…とは言い切れないが、それでも少しだけ、意識が戻ったようにも見えるのは、気のせいではないだろう。
「すまない忌夢…私は……」
「ウグッ!うううぅ!!」
満身創痍の忌夢に、己の弱さとリーダーとしての不甲斐なさに思わず顔を俯いてしまう。
力を求めすぎても、其れは妖魔と何ら変わらない…そう、忌夢の現状が物語り、己の筆頭としての自覚の無さに悔やんでしまう。
(私は結局…何も変われてないじゃないか…!!伊奈佐の時からずっと……)
変われたと思い込んでいたのか、二度と蛇女子学園を狂わせないようにと筆頭としての役割を担い、精進してきた。それでも、叶わない夢が存在するように、自分たちの夢や希望は、何も成し遂げれないのだろうか。
「なんて詫びれば良いんだ…強さだけが全てじゃないと…あの時、思い知ったばかりなのに……」
ん――?
待て…よ?あの時、とは?
伊奈佐の時とは違う…もっと前に、誰かに言われたことがある…力を求めすぎる者は、妖魔と変わらない…と。
「あの時…?なんだ……」
また、波のように記憶が次々と押し込まれていく。
まるで映画や漫画の区切れのついたコマやページのように、脳に失われていた記憶が浸透するように。
「雅緋!」
両備の必死に叫ぶ声も、今となっては馬の耳に念仏。
全く頭の中に入ってこない。あるのは、今まで欠けていたパズルの

ピース…

「そうか……忌夢、お前だったんだな……あの時、私を救けてくれたのは……そして、私を影で支えてくれたのも…」

全てを知る。

記憶が完璧に戻った雅緋は、嘗て血界突破を発動し暴走した己を思い返す。自分でも何を呟いてたのかは今でも余り良く判らないが、妖魔への怒りがそれ程に強く昂ぶっていたのだろう。

そんな時、忌夢が血塊反転を使用してくれたから、今の自分が生きている。あの術を使ってくれなければ、自暴自棄に走り今頃、両姫と同じくあの世送りにされていただろう。

「待ってろ忌夢、今度は私が救け出す番だ…ッ！」

雅緋は覚悟を決める。

もう一度、発動した場合、下手すれば失敗する可能性も充分あり得るし、死のケースも考えうる。

しかし、今目の前に友が苦しんでるのであれば、其れを救うのも、己の役目――嘗て忌夢が私を救けたように、私も忌夢…お前という親友を救ってみせよう。

「〝禁〟秘伝忍法――【血界突破】!!」

先程述べたように、この術が原因で雅緋自身の存在が狂い、廃人となってしまった。しかし、これが原因ならまた、忌夢の現状を打開するのも、この禁術ではないのか？

いや、もう昔の私とは違う――なぜなら

深い木々はなぎ倒されては、それ程の被害は出てはいないが、それでも戦闘が有った被害が表に出ているのは否めないだろう。
巨木の下で目を開けず、ゆっくりと体温が下がる紫は、人形のように動かない。傷口には忌夢の忍装束で抑えているとはいえ、心臓の鼓動や脈が小さくなり、息をしていないのは事実。
ザッ、ザッ――
草木を踏み、砂利で出来た砂場を歩む足音が嫌に聞こえる。
足音を立てる者は、倒れている紫を目撃し、近づいて行く。しかし当の本人は知る由もないのだが――
その姿は、全身が純白な色で染められてるのと、口が少し鳥っぽいのと、清楚の雰囲気と紳士さを匂わせる漆黒のタキシードを着用している。瞳には紅色の赤眼が、倒れている紫をジッと見下ろしている。勿論コイツもまた正真正銘の妖魔である。

その妖魔は、紫に近付き――……

１４５話「欠けてた記憶」

今思えば、あの頃から記憶が曖昧になっていた。廃人から復活した自分が、一体どんな人間で、忌夢とどう接していたのかが、余り覚えていなかった。だからこそ、ふと思うこともあった。

昔の私は、一体どんな自分だったのだろうか――？

復帰した当初は、そんな事よりも蛇女子学園を崩壊させた愚か者供と、攻めに入った敵連合。そして母の仇である妖魔を全滅させる為に、とにかく必死だった。心に余裕の無かった私が、伊奈佐に良い道具として利用されたのも、あの頃の私から考えて防ぐことは出来なかっただろう。曇りに隠された記憶に興味を示さず、私は未来を生きようとしていた。

しかし…それだけでは、己を乗り越えたとは言えない。過去の自分を知り、其れと向き合う大切さを、私は自然と忘れていたのだろう…

だからこそ、今となってハッキリと解る。

最後に欠けてた記憶のピースが揃った時、私の記憶は蘇り、世界観が変わった。

脳が活発に動くような錯覚に見舞われながら、深淵血界の中で無限に湧き上がる忍の血を体内に巡らせる。多量の血を摂取することで、妖魔に受けた傷は塞ぐよう回復し、折れた骨や弱々しい体をそっと癒していく。まるで、数々の忍達が自分の傷を撫であやすように、守り…治し、強くしてくれる。

「昔の私は…こんな風だったな……」

以前に起きた記憶が蘇る前兆の頭痛とは違い、今度は的確に且つ、繊細に記憶が川のように流れ、フィルムが映像のように映し出される。そこには急激に押してくる激流とは違い、痛みも動悸も何も感じ

ない、懐かしさに浸るような、そんな歓楽的な状態。

そう、あれは5年前――祈願した秘立蛇女子学園に無事入学を果たせた忌夢と雅緋がまだ一年生だった頃の物語。

「雅緋、お待たせ！」

蛇女子学園に入学してから初日に、幼馴染である忌夢は、天真爛漫な笑顔を浮かばせながら、両手で買い物袋を持ち上げ、自慢げに見せてくる。まるで女子高生のような、そんな楽観的な忌夢に、私は厳しめな視線を送った。

「どうした忌夢」

「御免ごめん、少し買い出しで遅くなっちゃって…」

買い出し？

よく見れば、鶏肉に卵、醤油に砂糖、玉ねぎにネギと言った食材がスーパーのビニール袋からはみ出すように見えていた。晩飯…は、学校側から出してくれるので、何ら問題ない筈だし、その辺しっかりしてる忌夢が忘れてるとは考え難かった。

「ほら、僕たち蛇女に入学したら二人で祝杯パーティーを挙げようって、昔約束してたじゃないか」

嗚呼、そう言えば中学に入ってからそんなこと言ってたな…なんて心の中で呟く雅緋は、決して口には出さなかった。

雅緋と忌夢は幼稚園の頃から仲が良く、忍家系の事情でよく遊んでたりしたものだ。そんな仲は、例え母が妖魔に殺されようと、二人の仲は引き裂くことなく続いていた。

「花嫁修業のように…トントントンって、包丁を振るって、いつでも雅緋を満足させれるように、料理の勉強を頑張ったんだ！ホラ、見てよこれ。何を作るか解るかい？親子丼さ！」

ピタリッ――とここで、空間内で時を止められたかのように、雅緋は硬直し、それと同時に表情は友好的な顔色とは裏腹に、段々と険しくなっていく。

――親子丼。

嫌いではない、寧ろ大好物と言っていい程で、母によく作って貰っていた。母さん特性の親子丼の味は今でも忘れられないし、またもう一度食したいと何度願ったことか。
しかし、そんなお日様のように晴々とする記憶は陽が沈むように消えていき、代わりに頭の中によぎったのは――

頭部を失った愛する母の遺体に、テーブルの上に置かれた親子丼。

――ただただ、己の愚かさに悔やみ泣きじゃくり崩れた、あの頃の自分を思い出す。

「悪いな忌夢…今夜は出来そうにない…」
気分が悪くなり、俯く彼女は忌夢から視線を外す。今はとてもそんな気分ではないし…正直、余り忌夢と関わりたくないというのか一番の本音だろう。
「アレ？もしかして用事とか…？ま、まあ雅緋にも都合があるもんね！それじゃあ、明日なんてどうかな？」
「悪い、明日も無理そうだ」
「えっ？そうなの…？ん～、じゃあいつ祝杯を挙げよっか？」
一つ一つ温もりと優しさに満ち溢れた忌夢の言葉に、雅緋は奥歯を噛み締めながら、厳しい視線を浴びせては、鋭い言葉を解き放つ。

「忌夢――何をヘラヘラ笑ってるんだお前は、一体何が可笑しい？」
「えっ？何が可笑しいって…」
雅緋の鋭い言葉に心を突かれる忌夢は、驚嘆の声を喉から発した。掠れてはいるが、少なくとも彼女にとってはそんな言われような身の覚えはないと顔に出てるみたいで、戸惑ってる様子が見受けられる。
「まさかだとは思うが…蛇女に入学出来たからと言って浮かれてる訳ではないよな…？」
「う、嬉しいんだよ！雅緋と一緒にこうして、希望した忍学校に入学出

来てさ…それで…僕は雅緋の罪滅ぼしもしたいし…雅緋と一緒に…」
「下らんな…」
「へっ？」
それこそ誰もが聞けば間抜けに聞こえるような。素っ頓狂な声を上げる忌夢に構わず、雅緋は忍転身を終えて黒刀を握りしめる。黒く歪む漆色の業火はまるで全てを飲み込み焼き尽くすような異常感を漂わせている。
「笑顔なんて下らない。お前如きが罪滅ぼし…？なら、それに相応しいか私が実戦で確かめてみよう。
本気で殺す気で来い――」

忌夢の罪滅ぼしとは、謂わば母さんの死のことだ。
責めてる訳ではないが、母さんが死んだ原因は単に妖魔だけでは無かった。私と忌夢の落ち度にもある。
立入禁止という場所に、危険とは裏腹に感じる微かな好奇心に釣られた二人は、其処で遊んでいた。自分達も一流の忍になる為、ただの〝ごっこ遊び〟では満足する筈がなく、幼い自分達の軽はずみな言動でその場に足を踏み入れてしまった自分達。
立入禁止と言っても、少し不気味さが際立つのと蛇や熊が出てくるレベルだろうと、浅はかな考えをしていた自分達は知る由も無かった…
妖魔が住み着いてたなんて――
自分達に襲い掛かる妖魔に、腰を抜かしては足が竦み、立ち向かう勇気のかけらも無い。そんな絶体絶命の状況の中、帰りが遅いと駆けつけに来てくれた母さんが、突然目の前に現れて庇ったのだ。
そして、頭部を握りしめられては、果実のように手で握り潰した光景は、記憶の中に残ってるし、忘れたくとも忘れられない、永遠として染み付いたトラウマ。
文字通り頭を粉砕された母さんは、亡き者として死んでしまったのだ。

父が救けに来てくれた時、父さんに叱られずとも、自分達が情けなかった。

そんな軽い認識で、ただの遊び半分な好奇心で、母さんは死んでしまった。酷い言い方をすれば、母さんを殺したのは私と言っても過言では無い。

葬式の際、忌夢は涙と嗚咽を漏らしながら、私に誓った。是非、母の仇討ちをさせて欲しい…と。

当初の私は、忌夢の心を察して承諾した。目的は私も同じだし、もし仮に立場が反対であれば自分も申し込んでいるだろう。あの立入禁止の区域に足を踏みいれようと提案したのは忌夢だが、それに案じて頷いた自分も間抜けだ。

だが、私たちに落ち度があろうと、妖魔の意志など関係ない――私は、一匹残らず妖魔を滅する。

其れで、母さんが報われるのなら…これで、許してくれるのなら…そして、これで何も大切な物を失わずに済むのなら…

「忌夢…残念な結果だな。お前がここまで弱いとは……お前の実力に失望した」

戦いを終え刀を鞘に納めた雅緋は、深い溜息を吐き、瞼を閉じる仕草を取る。

模擬戦…とは言い切れない程に無残に散らばり火傷跡が見える訓練場、忌夢の体はボロボロで、対する雅緋はほぼ無傷だ。

「これでハッキリと解ったよ、お前は私と側にいるべきじゃない…とな。今日限りで、お前とは縁を切らせて貰う」

「――は？えっ…？」

余りにも呆気なく、唐突すぎる雅緋の告白に、忌夢の脳内は真っ白

に塗り潰されていく。
思考が働かず、目を丸くしては喉に何かが詰まったような感覚に、何も言えなくなってしまう。
「忌夢、今まで世話になった…だが、これでもうお別れだ。お前なんかよりも、この蛇女には強い忍がごまんといる。私は、そんな者達と側に歩きたいと想っている」
「ちょっ、ちょっと待ってくれよ！嘘だろ……？」
今まで誰よりも長く友人として生きてきた。
誰よりも大切に想う友達と縁を切る？
これほど、忌夢にとっての衝撃的な告白は無いだろう。そんな忌夢の心情など御構いなく、雅緋は背を向け遠ざけていく。
「嘘だろ？雅緋…嘘だって言ってくれえぇぇ―！」

涙を流す忌夢の叫びは、虚無と化しこだまする。
訓練場に響く彼女の言葉に、手を添える者など誰もいない。忌夢は雅緋を友人としても少し違う意味としても愛することを止まなかった為か、雅緋（一人）を除いて誰も友達と呼べる者がいない。
だからこそ、雅緋と離れるのがどれほど辛いのか、どの位心が引き裂かれるのか…勿論、雅緋も知っている。

「はぁ！せいッ!!……はぁ、血界突破…やはり私にはまだ使えこなせないのか…？」
そんなこんなで三ヶ月が過ぎ、難なく選抜メンバーに入れた雅緋は、焦燥に染めながら喰らい付くすようにこれまでの時間を猛特訓に費やして来た。
日々を重ねることで強さを実感できるこの体感は、段々と雅緋を妖魔殲滅――カグラへと導いていた。別に憎しみや怒りを原動力として生きることは生物上としては不思議では無い。忍としてなら尚の

こと、憎悪だろうと危険な橋だろうと道は道。ならば命尽きるまで我武者羅に走り続けば、より早くカグラへの道が切り開かれる。
大事なのはいつカグラになることではない――今すぐにでも、カグラにならなければ、辿り着くことは出来ない。
それなのに…鈴音先生からはこう言われた。

『雅緋、確かに今のお前の実力は学園の中でＮｏ．１だ…だが、それと同時にお前は諸刃の剣と同じ……小物の妖魔でも簡単に殺られるぞ』

それを聞いた時、理解できなかった。
情念の劔こそ、忍の強さ――何が違う？私に何が足りない？私はまだまだ力不足だとでも言うのか？
解らない、分からない、わからない。
ただ、妖魔を駆逐する事だけを一縷の希望として突っ走って来た雅緋は、本当の強さを知る術はない。
いや…正確に言えば、その強さに気付かず、見向きをしないだけであって、答えは直ぐ近くにあるのだ。それを、雅緋が気付くかどうかだ。
鈴音先生は、学園長の話を聞いた上で彼女のことはよく知っている。妖魔の仇を討つという理念は間違ってはいないし、雅緋だけでなくとも妖魔が元凶で数々の命が朽ちているのは信じ難いが、今でも起きている。最悪、ヒーローや警察ですら手に出すと噂では流れている。

（私の何が……いや、鈴音先生から教わってない以上、自分で何とかするしか無いのだが……）
今思えば、あの時は単に焦っていただけではなく、力に固執する余り知的な考え方が出来なかったのだろう。
簡潔に言えば、脳筋…みたいな。しかし座学などは成績を落とすことは無かった。元々勉学は小学校の頃から出来てたし、知識を吸収する力も備えていた。

だが鈴音先生の言ってた本当の力とは、とてもそう言った座学的な意味とも思えなかったのだ。唯一、本当の力と思い込み、過信していたのは……中学の卒業が迫っていた時に偶然、古い書物を家の本棚から見つけた――血界突破の秘伝書だろう。

空間に染み付いた血を、大量に摂取し膨大な力を取得する禁術は、同時に命を危険に晒す物。

精神崩壊を始め、制御の難しさと供に体の負担が耐え切れず死を招くこの術は、カグラでさえも術を発動させるに困難な代物。だが、この術こそ命を賭けるに相応しい。

これがあれば、妖魔の殲滅だって――

昔から、私は何も変わってなかったのだろうか…まさか、あんな悲劇を生み出すなんて、その時は想像を逸していた――

「凄いじゃないか雅緋！先輩たちを黙らせるなんて」

隣で肩に手を置くのは忌夢。縁を切った…とはいったが、それでも話しかけること位は良いじゃないか、と言う理屈で会話を交える忌夢に、溜息を吐く。

「悪いが忌夢、お前も消えてくれ」

冷たい言葉を忌夢に投げ飛ばし、そっぽを向く。

朝、訓練早々に上級生達がよってたかって一人になってた雅緋を囲むように刃の矛先を向けて来た。

何でも選抜メンバーの座を狙ってるらしく、選抜試験で一位になった私を殺すことで、返り咲くつもりだったのだろう。だが、どれほどの数で攻めてこようと、結果は同じ。ほぼ目に見えていたと断言して良い程に、勝負の差は歴然。番狂わせなし雅緋の勝利に収まった。上級生達を追い返したことなど心底どうでも良く、何事もなく木偶人形を切り捨てていた所だ。

「今のメンバーはまだマシだ。例え卑怯者と罵られる覚悟は有った。

一方で、お前はどうなんだ？何の覚悟も感じ取れないお前が、私の側にいるな」
「覚悟なら僕にだってあるさ！雅緋の為に戦う…だから、僕も雅緋と同じ選抜メンバーに入れたんだ！」
「何ッ!?」
ここで初めて雅緋は驚嘆を上げた。
まさか――蛇女の中で猛者供がいる中、忌夢が選抜メンバーに？最初は何かの間違いだと思ったのだが、鈴音先生を始めた他の教師達からも言われたそうで、誤報では無いらしい。いや…ここまでの成果が挙がっている以上、変に疑うのは縁を切った相手でも流石に失礼だろう。
妖魔を除いてどんな相手だろうと、強者なら喜んで歓迎する雅緋にとって、失礼な言動だけは慎むのが、雅緋なのである。
「これで僕も雅緋の役に立てる、これ程嬉しく思えることは無いよ！」
「…ッ」
忌夢の幸せそうに綻ぶ笑顔の中で、心の底で舌打ちをする雅緋は、唇を噛みしめる。

（どうしてだ忌夢……お前は、私の側にいちゃダメなんだ……なんで解ってくれないんだ――!!）

突き放し、自分の心とは裏腹に酷い厳しめな言葉を浴びせても、忌夢は心を折れることなく子犬のように付いてくる。そんな忌夢の優しさと友人としての在り方に、喜びを押し殺す雅緋は、口を開く。
「良い加減に――ッ！」
キィン――ッ！バガァン！とここで、爆発の連鎖が起こる擬音が、耳を貫く。それにこの血みどろな空間に、この異様な気配…
「これは…」
「嗚呼、間違いない。妖魔の気配…忍もいるな、しかも二人」
黒く禍々しい気配に、荒々しい忍の気配…
肌身で感じ取れる尋常じゃない気迫に、体の芯が痺れるほどの体感

に身を覚える。
「雅緋、どうする？」
「どうしたもこうしたもあるか、妖魔は皆殺し…当然、向かうに決まっている」
「解った！なら、行こう」
「おい、ちょっと待て…お前も付いてくるのか？」
「勿論だよ雅緋、嫌だと言われても付いて行くから」
「忌夢、お前の軟弱な姿勢では妖魔との闘いで無駄死にするだけ…お前は引っ込んでろ」
「無駄死にじゃないさ…雅緋の為に捨てる命は、無駄死にじゃないから…」
「――ッ」
言葉が詰まり、忌夢の善良な心に苦しくなってしまう。
こんなにも突き放すような、嫌われた言動の態度を取っているのに、それでも忌夢は…
「……もういい、勝手にしろ」

本当は来て欲しくない。
本当は忌夢だけでも無事に…
だから、態と嫌われるような反応を取ったのに…
本音の気持ちを抑え込み、走って行く。

森林を掻い潜る中、生い茂る緑を退かし爆破の連鎖が起こる方向へ突き走る。
近付くほどに妖魔と忍の気配がより濃くなり強くなる。その度に鼓動が速まり足に力が入る。そして緑の海を掻い潜ると供に視界に眩しい太陽の日差しが照らされる。
「これは…」
「貴女達も、忍の気配を察して現れたのね…」

広がる土地に、凛とした声が耳朶を打つ。
雅緋と忌夢が視界に捉えたのは、意外なものだった。
見かけたことのない忍学生の服に、少し傷痕が残っているもそれを掻き消すかのような、凛々しくも美貌に溢れた女性の容姿が、それを帳消しにする。
木々の奥には、この女性と闘い破れたであろう大の大人が倒れ伏せていた。抜忍…なのだろうか、忍新聞で見かけたような顔付きだ。両腕が黒く頑丈で物騒な籠手を装着し、最近付けられたであろう顔には筋一本の刀傷が斜めに残っている。これは恐らく刀の傷跡ではなく、彼女の武器、ショットガンによる銃弾で負ったものだろう。筋骨隆々とした凶暴そうな相手を倒したと思われる。とてもそうにも見えないが、彼女から放たれてる馬鹿デカイ闘気が、二人を納得させた。
見かけによらず…とは、このことだ。
「忍学生…やはり……私は蛇女子学園の選抜メンバー筆頭・雅緋！」
「同じく、忌夢！」
「私は死塾月閃女学館選抜メンバー筆頭・両姫です」

彼女は月閃の両姫。両備と両奈の姉にして母親代わりとして務めている。そしてこの事件を後にいずれ、二人の双子は雅緋の復讐を果たすべく転校してくるのだ。
「チッ…よりによって善忍か…」
「運命とは何と理不尽な事でしょう…抜忍に続いて今度は貴女達と戦わなければならないなんて……」
まるで都合が悪いような物言いだった。
しかし雅緋にとっても気持ちは同じなもの。何せ彼女の目的は善忍と争う事ではなく、妖魔と闘うことが目的なのだ。
頭を悩ませる双方――刹那、異常な殺気が風のように押しのけ、空気の流れが一気に変わる。
「ッ――！来る…気を付けて下さい、ヤツが来ます!!」
「ヤツ…？」
両姫はまるでさも来ることが解ってたかのように、武器を握りしめ

雅緋と忌夢の二人組とは違う方角に意識を向ける。
ガサガサッ！ガサガサッ――!!
草むらを描き走る音、草木の葉が揺れ不快な音を奏でて行く。その音はやがて近付く度に強くなり――
「カロロギャーッスーーッ！」

黒き竜が姿を現した。
聞き慣れない奇声はとてもこの世の者とは思えず、甲高い声に鼓膜が激しく揺れる。
二足歩行の漆色に塗られた竜人は、幼く見えてまるで子供のようだ。頭部は水晶玉のように丸く、首には赤いスカーフを巻いており、下半身はジーパンを着用、その上に足はランニングシューズを履いている。
この妖魔は、現在進行形で蛇女子学園を襲ってる妖魔と同じ種類だ。外見が幼く見えたり、奴隷のような格好では無かったが…
「ッ！――これが、妖魔か！」
母の時以来姿を見てない雅緋と忌夢は、化け物を目前に驚愕する。改めて直視すると、この世界にこんな化け物が生きてることさえ疑問を抱いてしまう。
妖魔は青紫色の唾液をボタボタと地面に垂らしながら、獲物を凝視する。
「憑黄泉…気を付けて下さい、この妖魔は通常種とは違って青玉から生成されて生まれた化け物です！相手が幼年期でも決して手を抜くことなく全力を尽くして下さい！」

どうやら両姫は妖魔の存在だけでなく、この化け物の情報も既に知っていた様子だ。しかし彼女もまた同じ忍学生となると、一体何故この妖魔の詳細を知り得ているのか、理由は不明だったが、一先ずこの化け物を倒すことに専念する。

（両備ちゃん、両奈ちゃん…お姉ちゃん、絶対に生きて帰って見せるね……そして、陽花さん…見てて下さい。貴女の仇も、討ち果たして見せますから――）

「お姉ちゃんは清く正しく真っ直ぐに、忍の道に舞い準じます――両姫、鎮魂の夢に沈みます!!」

善と悪が隣り合い、謎の妖魔――憑黄泉に立ち向かう。

１４６話「お前は…」

震える闘気は肉眼でも視覚でき、上昇気流のように両姫の体から溢れ出ている。とても、優しく美貌な容姿からは似つかないその忍の気は、カグラに近いであろう。

右手には両備に似せたショットガン、左手には青と白を強く主張させた太陰太極図のシールドを持つ特殊な武器の装備だ。厚く強固な盾は、まるで全ての猛攻を耐え凌ぐような実感が伝わってくる。

「ギャァァアアッ――！」

森に奇声が轟き、異様に騒めく。

幼年期の状態とはいえ、相手は妖魔。一瞬の油断が命取りとなるだろう。そんな緊迫感の中、彼女の心は冷静でいた。

人は死の現場に居合わせると、必ずしも心の中に恐怖感を抱いてしまう。例え戦場に赴く兵士だろうが、人間である以上、洗脳でもされてない限り恐怖に怯えない生物は存在しないだろう。

「ウリィッ――！」

軽く地面を蹴り、間合いを詰めた憑黄泉は、両姫を狙う。この化け物曰く、先ず危険的な忍を排除しようと判断したのか、その行動に迷いはほぼ存在しない。

「虎式武術――琥珀拳」

凛…とした両姫は取り乱すことなく軽く一歩、横に移動し拳を握りしめて憑黄泉の溝に打ち込む。

メキメキ…ッ！と鱗が減り込む肉体の悲鳴が嫌に聞こえ、妖魔は「ガァバッハッ――!!」と軽く消化液を吐き出してしまう。虎の殴打――素手で軽く殴ったように見える絵面だが、その威力は絶大。壁に背を打ち付けられた妖魔の溝にはまだ衝撃が残っており、激痛が止む気配が無い。代わりに両姫は攻撃を仕掛けた際に、腹部に拳を食らった妖魔が僅かに爪で頬を引っ掻いた程度で済み、頬に血が垂れる。

「キエェェェーーーーッ!!」

今のレベルでは、とても近距離戦闘には不向きゆえに、手も足も出ないと率直で理解した妖魔は、尻尾を伸ばして彼女の心臓目掛けて猛威を振るう。
「秘伝忍法――【シールドバッシュ・カウンター】！」
しかしそれも無駄。
タイミングよく弾き、跳ね返された尻尾は憑黄泉に向かっていく。鎖の様に長く伸びた尻尾が、まるで折り紙の如く屈折し、勢いに乗ってる今、自分の意思で止めることは不可能。
ならば、と妖魔は体を右に転がる様に回避する。もしあの一撃を食らってたら致命傷は免れなかったハズ…両姫と呼ばれる少女の底知れぬ実力故に、彼女の計り知れぬ強さに、軽く戦慄さえ覚えてしまう。
幼年期とは言え、生まれたばかりのこの妖魔からすれば、彼女もまた己の一線を超えし猛者。まだ狩りとして成長を遂げてない赤子が、獅子を狩れなど、自殺行為以外の何でもない。
だからこそ、知恵を絞り進化を遂げよ――憑黄泉とは、他者の血を吸い成長を施し、進化を成せ。これは、生きる為の自然の摂理だ。
憑黄泉だって何も単細胞な訳では無い。考えなしの真正面バトルでは勝算はほぼゼロに近い。なので、ここは姑息な手を使った計算をしながら攻めるのが有効だろう。
「余所見をするな!!」
しかし、それはあくまで両姫一人ならではの話。単騎なら兎も角、こちらは後二人の敵がいる。雅緋と忌夢も、黙って見ているほど甘くは無いし、相手が妖魔なら尚のこと。
「秘伝忍法――【悦ばしきｉｎｆｅｒｎｏ】！」
憑黄泉は雅緋の剣技を躱すも、微かな黒炎の熱と目にも留まらぬ斬撃に、多少の傷を負ってしまう。焼けるような皮膚、掠れる身体、スレスレとは言えど、妖魔の反射速度と神経は昆虫にも引けを取らない。
「チッ――今のを紙一重で躱すのか…」
それでも満足の行く結果が出ないのも、仕方なきこと。悪態を吐く雅緋は、恨めしそうに妖魔を睨みつける。鋭い眼光の眼差しに「ケ

ケッ」と薄ら笑いを浮かべる妖魔に
「秘伝忍法――【ローリングサンダーＩＩ】!!」
流れる連携に添う忌夢の秘伝忍法に、回避したばかりの憑黄泉は電撃の輪を浴びてしまう。
「ガババババッ――!!」
全身の血液が電撃で流れるような麻痺感覚と、止まらぬ激痛が妖魔に襲いかかる。一度触れてしまえば攻撃が止むまで脱出不可避の忌夢の秘伝忍法は、確かに妖魔に通用していた。
「忌夢が…あんな……」
妖魔に攻撃が通用し、以前手合わせした頃よりも遥かな成長を見せた彼女に驚嘆の声が漏れてしまう。三ヶ月…雅緋にとって短い時間のように思えるこの短期間で、彼女は以前とは比べ物にならない成長を成し遂げていた。
「てやぁッ――ッ!」
忌夢か追撃と言わんばかりに跳躍し、電撃を浴びた妖魔に襲いかかるも、空中で上手くバランスを取り回避に移った。どうやら、早々に攻撃を受ける余裕は無いらしい。野蛮な獣に見えて、中々に勘の良い妖魔なことだ。
「せい!やっ、はぁ!」
両姫はショットガンで無数の気量のエネルギーを銃弾として放ち、無防備な妖魔の体を撃ち尽くしていく。気力の弾が妖魔の肉体を貫通し、口から吐血する。青紫色の血飛沫は、空中で飛び散り、シャワーのように流れ落ちる。
「ブラァガァァアーーー!!」
妖魔術――【キューティングアロー】
口からハート形の矢を無数に放ち、遠距離射撃にも特化した両姫の銃弾を相殺していく。その数は膨大で、視界でも埋め尽くされるこの矢は、妖魔とは似ても似つかない術だ。
「これは…愛忌さんの忍術……やっぱり、王牌先生の仰ってた通り、月閃に手を…!」

両姫の表情は微かに険しく、留まりを知らない怒りを肌身で感じ取るも、その怒りは直ぐに冷静さを取り戻した。
「秘伝忍法――【善悪のｐｕｒａｇａｔｏｒｉｏ】！」
両姫の技を相殺することに必死な妖魔の背後に、黒炎に包まれた無数の蛇が、妖魔の背後に迫り来る。
尻尾を巧みに扱い、次々と蛇を撃ち落とすも無傷という訳ではないのか、火傷跡が見受けられ、微かな悲鳴が聞こえたような気がした。
「ウガラァッ――！」
地上に落ちては追撃を喰らう危険性を感知した妖魔は、上空が有利だと判断し、背中から翼を生やす。
蝙蝠のようにドス黒い異形な翼は、悪魔を連想させるだろう。正直、翼を生やせること自体が脅威なのだが、妖魔という一線を超えた化け物ならあり得なくもない。
妖魔術――【キューティングアロー】を翼の羽毛から解き放つ憑黄泉は、両翼を駆使して両姫と忌夢を襲う。空中戦に持ち込んだ憑黄泉の選択肢は正しいと呼ぶべきか、流石の二人も手も足も出ず、防戦を強いられるばかり。
「くっ……！コイツ、今度は生えた翼から…どんな生態系をしてるんだ…？」
「個体によっては違いますが…無数の進化で姿を遂げる憑黄泉は、一匹ずつ厄介です…必ず倒せる方法は有ります。気を引き締めて下さい！」
両姫は気力のオーラを具現化させ、シールドに上書きし被弾の確立を大幅に下げた。これぞ秘伝忍法――【ハッピー・シールド】。防御に特化した両姫の秘伝忍法はここぞという時に使うべきもの。彼女の選択も正しいのだが、この忍術…いや、両姫にはデメリットが存在する。
それは――気力の容量。即ち、弾で言う残弾をイメージした方が解り易いだろう。彼女の忍術は両備や両奈の姉の為、当然忍術は殆ど近い上に似ている。気力エネルギーを弾として扱うことが可能、つまり

気力が尽きれば当然弾切れにもなるし、武器を手にしても意味がないのだ。

しかしそれはあくまで弾切れという話で有って、本物の物理的な銃の仕組みとは違い、気力ならばまた作れば良いだけの話。それでも気力を使うには体力も消耗すれば、精神攻撃に汚染を食らえば難なく殺られてしまう危険性も充分にあり得るのだ。

更に加えれば、彼女の気力を貯めるのにも、エネルギー補充も含めて時間が消費する必要がある。万能という能力では無いため、必ずしも彼女の能力が無敵と言うとそうでもない。無限に弾を撃てると思えても、弱点が存在するものだ。

（この数は…柔軟関節を駆使しても被弾する可能性が有るわね…仮にシールドのバリアが破壊されちゃったら、虎ノ鬼貫を使わざるを…）

両姫が思考を巡らせていると、ふと自分の気力が吸われるように減っていくのが感じ取れる。

「えっ!?」

妖魔術――【エネルギー・イーター】

口を大きく開けて、両姫のエネルギーを吸い取る妖魔は、彼女の気力を吸い取りながらもムクムクと体の筋肉が強張っていく様に見える。血管が浮かび、逞しい身体はさもマスキュラーや黒佐波のようなパワーファイターへと変貌を遂げていく。

「あら、私の気力を…この術は、一体誰の忍の血を吸収して得た力なのですか？」

ふふっ、と健やかな笑顔を浮かべる彼女は、現在の状況とは似合わず、端から見れば軽く戦慄してしまであろう。彼女本人からは慈愛の表情を示してるのだろうが、他から見れば狂人者と思われてしまう。

悪意のない、天使の笑顔はまるで女神。

「であらっ！」

ザグッ――！と肉斬る音が、脳に送られる。

妖魔の体のバランズが崩れ、体重がのし掛かるように傾き落下していく。右翼が切り棄てられ、羽ばたくことが不可能な妖魔は、まるで翼の折れた小鳥のように呆気なく落下する。
「グェ゛、エ゛、エ゛、エ゛、エ゛、ーーーーッ!!」
「このまま堕ちろおおォォッ――!!」
重力の法則に従う妖魔は地面へ落下し必死に抵抗しもがくも、妖魔の翼を斬り捨てた雅緋は拳に黒炎を纏い、憑黄泉の顔面に減り込ませる。灼熱の炎を浴び、渾身の一撃を込めた拳が炸裂し、発狂しながら線を引くように地面へ落下。
「あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、ァァァァぁぁぁぁぁ!!!」
地面に付着するも、妖魔の上に乗りながら何度も何度も拳の猛攻を食らわす雅緋は、完全に憤怒と憎悪に心が支配され、私怨混じりの暴力を繰り出していた。
母を殺した妖魔。
今も殺戮を楽しむ妖魔。
存在そのものを忌み嫌う雅緋にとって、冷静で居られない方が逆に可笑しい方だ。口から大量の吐血を吐く妖魔は、それでも拳の乱打の中で起き上がり、雅緋を退かす。
「ウガァラァァァァーーーッ!」
「がぁっハッ!?」
バギャァッ!と妖魔は雅緋の腹部に拳を突き刺し、一撃で吹き飛ばす。背を大木に打たれてしまう形となり、重い衝撃に躊躇わず吐き気を催してしまうも、何とか堪えては意識を保つ。今の一撃で軽く意識が吹き飛びそうになってしまった妖魔の底知れぬ強さに、自然と手が震えていた。
「妖…魔……!絶対に、お前の首を斬り捨ててやる…ッ!」
「雅緋!」
地獄の底から這いずるような雅緋のドス黒い殺意に、まるで面白い物でも観察するよう、愉快に表情を汚く歪ませる妖魔。
そんな化け物などお構いなく、雅緋の安否を確かめる忌夢の声が、私怨ニ染まった雅緋の心を打ち消す。

「忌夢、来るな!!」
しかしもう遅い。
忌夢の言葉に素早く反応した妖魔は、先程のお返しと言わんばかりに、忌夢の方角に意識を向けては、両手で拳を作り、頭蓋骨目掛けて振るおうとする。忌夢も雅緋の方を気に掛けてた為、妖魔への警戒を疎かにしていた。防ごうにも、間に合わない…
「秘伝忍法――【ハッピー・キャノン】!!」
チュドオォン!という豪快な爆破音が、鼓膜を揺らがす。唐突なことに瞬きをしてた忌夢は再び瞼を開けると、視界には巨大なエネルギー砲が吹き飛び、木々が倒れ征き、衝撃は止まずと森の海へ溶け込むように消えていった。
「わぁッ…月閃のヤツ……が」
「キエエエエエーーーッ!」
「!?」
吹き飛ばされた、と思いきや憑黄泉は紙一重で回避に成功したようだ。両姫の遠距離射撃を学習し、すぐ様順応する妖魔の生態系には驚かされるばかりだ。
「今のを避けるなんて凄いですね…秘伝忍法――【ハッピー・キャノン】!!」
人を飲み込む程の巨大なエネルギー弾を何発も撃ち込むも、妖魔は軸を回転し上手く躱していく。とても人の技とは思えない巧妙な体術に、そんな光景を眺めてた雅緋と忌夢は息を呑む。
だが、両姫の表情は変わらずとも、動じる様子は見受けない。
戦乙女との距離は縮んで行き、間合いを詰めた妖魔は、尻尾と両腕による拳の乱打、そして残ってた左翼を広げ【キューティングアロー】を解き放とうとする。仮に銃撃で迎撃しようと、口で【エネルギー・イーター】を使用し両姫の気力エネルギーを根こそぎ吸い上げる魂胆なのだろう。全ての身体の機能を起動する妖魔に対して――

「虎式武術――空白・乱打」

正義の鉄槌を下す。

両姫は武器を背中に収めると、シールドを手にしてた利き手で狙いを定め、銃器を手にしてたもう片方は、拳を握りしめていた。

シュン――ッ！と風切る音が耳を貫き、肉眼では捉えれない速度で拳が振るわれた。空間がブレ、妖魔の身体を貫通するよう、鋭くて鈍い矛盾した痛覚を味わう。

拳の衝撃が空気に触れ、その威力に呼応するよう妖魔は腰を折るように振るわれた方角に吹き飛んでしまう。【キューティングアロー】の桃色に染まり上げた鋭い矢が多少体に突き刺さるも、〝虎式武術――柔軟関節を駆使して急所は避けていた。そのため大したダメージはない。そこから両姫は虎式武術――空白・乱打の手を休まず追撃をする。躱しながら且つ遠距離打撃による戦法は、常人や新米ではとても身につけれないスタイル。

自身の気力を温存且つ回復する為に時間の消費というデメリットを帳消しにするのが、この〝虎式武術〟だ。気力を溜めるのに時間が必要な場合は防戦スタイルに移らなければならないし、【シールドバッシュ・カウンター】にだってタイミングが命だ。下手すれば簡単に殺られる可能性だって低い訳ではない。

その為、両姫自身が身につけたのが武術なのである。自分の欠点が命取りとなるのならば、最悪の予想やケースを防ぐ為にも護身の術は必要だし、一芸だけでは忍は務まらない。

「ビャバハァァァ〝ァ〝ァ〝ァァァッ！あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あぁぁぁぁぁぁーーッッ!!」

空中で見えない衝撃に連打的に吹き飛ぶ妖魔は、苦痛に歪めた悲鳴を上げている。回避を試みようにも、両姫はそれすら許さない。タイミングよく、簡潔に言えばゲームで言うハメ技のコンボ。相手が躱す機会すら与えない両姫は、武術の中でもかなり上位の部類に入るのだろう。いや、彼女もその気になればこの妖魔の成熟体二匹は一人で相手にできる位ではないのだろうか？

因みに両姫の忍段位(ランク)は秘忍。カグラの一歩手前である。しかも忍学生の二年生でこれほどに実力が有るというのは、才能として誇っても可笑しくないレベルだろう。
「雅緋、大丈夫かい!?直ぐに手当てを…」
妖魔が離れ、両姫が相手にしてる状況を察しながら、雅緋の安否を確認する忌夢。駆け寄る彼女に雅緋は奥歯を噛み締めながら苦痛を含めた言葉を漏らす。
「忌夢、来るな!お前だけでも逃げろ!」
「何でだよ!雅緋を置いて逃げるわけないだろ?!仮に逃げの選択肢を取るのなら雅緋も一緒だ!」
「私はまだ妖魔を倒す役目がある…お前は関係ないだろ!」
「関係あるよ!僕のせいで、雅緋のお母さんは…妖魔に殺されちゃったんだから…関係ない訳ないだろ?」
もう既に妖魔は瀕死状態なのだが、相手は人間ではない。この世の物とは思えぬ化け物だ。例え相手が死ぬ前提であっても、世の中何が起きるか判らないように、妖魔が何をしでやらかすか解らない。そもそも戦場では余所見という行動でさえ一瞬の命取りになるのだ。忍の死に塗れた戦場は、油断とは死を表すことになる。鈴音先生がよく教えてくれたことだ。
「いい加減にしろッ!何でお前はいつもこうなんだ!!なぜそこまで私にだけ着いて来る?」
「そんなことも言わないと解らないのかい!?
好きだからだよ!雅緋のことが、大好きだからに決まってるじゃないかッ――!」
忌夢の告白にも似た葛藤に、雅緋は思わず口を閉じてしまう。
ずっと、幼馴染として一番最初に出会い、友達になってくれたかけがえのない親友。
辛いとき、悲しいとき、嬉しいとき、楽しいとき、幾重も積み重ねた膨大な時間の中で過ごしてきた、光篭った思い出が、頭の中を過ぎる。それは決して走馬灯ではない、雅緋と忌夢が一緒に過ごしてきた、大切な時間…それは尊い物にして、雅緋にとっても忌夢にとって

もかけがえのない存在。
雅緋の手が震える。
黄金の瞳が潤う。
唇を噛みしめる。
嬉しかった、ずっとずっと嬉しかったんだ。
忌夢と一緒に入学出来たことが嬉しかった、あのときは心を鬼にして酷い厳しめな言葉を浴びせたが、祝杯パーティーをしようと言って来れたのも、少しの出来事を覚えててくれたこたも嬉しかった。
忌夢が選抜メンバーの一員になれたと聞いて、内心は喜ぶ気持ちで溢れかえっていた。
それでも…友の為にと自分の感情や想いとは裏腹に嘘を吐いた。
態と嫌われるように、自分の本音とは真逆の言葉を言い放ち、離れるように厳しくした。
それは…それは……

「解ってるよ……だから、お前だけでも、無事にいて欲しいんだ……」

震える声から発せられる、雅緋の本音。
蛇女子学園に入学して初めて、忌夢に見せる本当の自分…弱音を吐かない、常に強者としての立ち位置やプライドを大切に守り、悪の誇りを持つ彼女の、嗚咽にも似た言葉。
一滴の涙が頬に伝わる。嘗て、母が妖魔に殺されてから己の涙は枯れ果てたと豪語してた彼女から出てきた、歓喜と悲哀が含まれた雫。
「お前が母の仇を討つと決めた刻から悩んでいた…本当にソレで良いのかと……お前は、私の大切な親友だ…だから、そんな親友を危険に晒してまで、私の為に罪滅ぼしをしなくても……
そして、次にお前が妖魔に殺されると想像したら、私は…もう、絶対に耐えられない…」
大切な親友だからこそ、妖魔に殺されてしまえば…完全に心が壊れてしまうだろう。
まだ、善悪の争いで命を落としてしまうのなら理解できる。親友を

亡くしてしまえば、それこそ悲しみも生まれるだろう。納得する訳ではないが、悪忍として生まれた身…そして悪忍となれば下手すれば任務によっては手を汚す仕事だってある。お互いの使命に舞い準じるのであれば、それ相応の覚悟と死への代謝は仕方ない。

いや、雅緋にとっては妖魔こそ真に倒すべき敵と捉えてるので、仮に善忍悪忍との抗争に成ったとしても自分で大抵協力して助け合う事もできる。

しかし、妖魔は別だ。

雅緋から愛する母の命を奪い、無残に殺した。

あの化け物は次元が違う。

雅緋だって人間だ。

忍とは言え心も在る。

だからこそ、忌夢が妖魔に殺されてしまうのだけは、どうしても許せない。

それでも、忌夢も一人前の忍になればいずれ妖魔と戦うことも何ら不思議ではないのに…自分は親友が苦しみ、殺される姿が見たくないと言い訳をしながら避けていた。

「やっぱりね、そういう事だろうと思ってたよ…」

そんな雅緋に、忌夢は苦笑を浮かばせる。「えっ?」と、雅緋の素っ頓狂な声が口から溢れた。

「雅緋の幼馴染なんだ、親友としてどれだけ僕との付き合いが長いと思ってるんだい?其れを見抜けないほど僕は落ちぶれちゃいないよ」

まるで全て解ってたかのような口調に、多少困惑の色を浮かべる雅緋。まさか…解ってて、敢えて関わろうとしてたのか?しかし、忌夢に対して慈悲すら見せない冷徹な自分を演じてても、決して相手に悟られないように振舞ってた筈だ。

「だって、蛇女に入学して突然態度が変わるなんて可笑しいもん。最近笑わなくなったなぁ…っていうのほ本当なんだろうけど、雅緋は他人にも自分にも厳しい強い人間だ。

だから、雅緋が冷たくて厳しい言葉を言うときは、仲間を想っての言動なんだって、僕は解るんだ。厳しさは優しさの裏返し…そうだろう？」

「……」

見透かされていた。

雅緋の思想も意思も、何もかも全て…いや、長い間友として過ごしていれば、誤魔化せない部分も在るだろうし、表情や本音を隠すのは気配を隠すのとでは訳が違う。

忌夢の優しさと言葉に、とめどなく喜びと幸せが溢れ、一滴流れてた涙は、やがて涙腺が崩壊し止めどなく溢れ出てしまう。

要らぬ心配だった。自分の想定以上に身も心も強い忌夢には不必要だった。

「すまない忌夢…私は、お前を傷つけるような事ばかり言って……」

「良いよ全然。まあ、と言っても流石に今回のは少し傷ついたけどね…紫のことで対比されたり、縁を切るって言われたのは中々に堪えたよ」

「私は…なんて詫びれば……」

「う～ん、そうだな…じゃあ、無事に帰って怪我を治したら、親子丼が食べたいな。雅緋の！」

親子丼？

そんなことで良いのか…？そもそも修行に日々を積み重ねてた自分は、座学ならまだしも料理は得意ではない。そもそも卵焼きですら完璧に作れるかどうか不安な位だ。レシピ通りに作れば作れなくもないが…

「ああ、解った。帰ったら祝いのことも含めて…な」

雅緋が心の底から安堵の吐息を混じえた言葉を発した時だった――

「――カロロ…」

「!?!」

歪な鳴き声に、背筋が悪寒に襲われる。
反射的に振り向くと、森林を背景に、あの妖魔は生きていた。二足歩行で覚束ない足取りで、全身血まみれになりながら、ゾンビのようなホラー要素を漂わせ、震えながら一歩一歩と前に足を踏み入れる。
「妖魔!お前に、これ以上なにも奪わされやしない!!」
雅緋は刀を抜き、刃先を妖魔に向ける。
黒刀に光が反射し煌めきを増す。熱き闘志に呼応するように、刀にも炎の熱が加わる。
「……カ、カ……」
しかし襲ってこない。
憑黄泉は暫く口をパクパクさせると、膝を崩し、糸が切れたよう静かに倒れ伏せた。
「……えっ?」
動く気配も、命の鼓動さえ感じない憑黄泉は息をしていない。ただ力尽きたように、安らかに眠っている。
これは…まさか――
「蛇女の皆さん大丈夫ですか…?怪我はない?立てますか?」
優しく慈愛に満ちた言葉が、心を安らいでくれる。
コイツが、一人でほぼこの妖魔を圧倒したのだろうか?それにしては
忍学生は思えない力量…底が知れない強さゆえに、不明な点が多い。とにかく、救われた、と言うべきなのだろうか?
「それにしても、貴女達も妖魔のことを知っていたんですね。憑黄泉のことは、解らなかったようですけれども…」
「憑黄泉…コイツの名前が」
そもそも妖魔に名前が存在するなんて初めて知った。
雅緋は妖魔に強く因縁をつけては討伐することに固執こそさているが、それはあくまで存在自体を知った〝だけ〟であって、妖魔の詳細は知らない。

そもそも妖魔を知るとしたら精々戦いを有利にする位のデータだろうが…
「それにしても、まさか妖魔のことを知ってるなんて驚いたわ…もしかして、カグラなのかしら？あっ、それとも…妖魔に関する情報の取得が許可されてるのかしら…？」
両姫は二人を見つめてはしばしばと独り言を呟いている。傷らしい傷は見えないし、この通り余裕そうだ。彼女の力量がどれ程なのか…少なくとも自分よりも遥かに上だと言うのは確かだろう。
「すまない月閃の両姫、お前のお陰で助かった。なんて詫びればいいのやら…まあ、何がともあれ、お前も妖魔のことは知ってるんだな」
「ええ、まあ…」
雅緋は軽く礼を告げ、これ以上の詮索は何もしなかった。
確かに相手は善忍にして悪忍である蛇女からみれば敵だ。しかし、妖魔との戦闘で助けて貰った上に、妖魔を一人で嗚呼も容易く仕留める彼女とは今は刃を交えたくないのが本望だ。
相手にだって知られたくない過去や事情もあるだろうし、妖魔を知っていたかどうか、そんなものは重要ではない。
「他に妖魔の気配は無いし…んっ？」
完全に妖魔の気配が無くなった。そう確信した刹那――新たな気配が一瞬で噴き上がる。まるで爆発的に起きたその歪な気配は、先ほどとは比べ物にならない程の。
「何だこの馬鹿げた気は…!?まだ妖魔が…」
「この気配……恐らく妖魔衆…？いいえ、それよりももっと恐ろしい、邪悪で禍々しい気は……まさかッ!?!」
天真爛漫な笑顔はどこ吹く風か直ぐに消え、両姫の表情は一瞬で変わり、険しい顔立ちを浮かばせる。冷や汗が流れ、圧倒的な気配に体の芯が痺れるようだ。
ズドォンッ！――落下した音がこだまし、三人はその方角に視線を向ける。煙が晴れて姿を現したのは、先ほどの黒き竜。

憑黄泉と呼ばれる妖魔だ。しかし先ほどの幼年期とは違い、姿が違うといえば違う。
黒く禍々しく染まった青紫色の体色に、悪魔のような角が頭部から月のように生え出ている。背中には黒いマントを羽織っている様はまるで気高き王。妖魔の王を表したかのような――
背中のマントには〝神楽滅殺〟と文字が刺繍されている。
「なんだ、アイツ……何なんだ、あれ……」
異様な殺気は空気を淀ませ、汚していく。
その場に佇むだけで圧倒されそうなこのオーラは、これまでの…いや、雅緋の父親が本気を出すだけでなく、カグラですらもこれ程の圧力は解放できないだろう。
「アレはそんな…ッ！天竜衆!?ダメ！あの妖魔はマズイ…！」
両姫の鬼気迫る声に、心臓の鼓動が早く聞こえる。
まるで、この世の者とは絶対会ってはならないような物言いに、恐らく両姫でさえも勝てないのだろう。
両姫曰く、今この場では来て欲しくなかったようで、苦虫を噛み殺したような苦悩に表情を染め上げていた。
それでも、死力を尽くして抵抗しなければ、全滅させられる。それ程に危険な相手…何せ天竜衆は妖魔衆の特別な勢力。他の神威とは訳が違う。
両姫は戦闘態勢に入った。

「皆んな逃げて!!この妖魔は今までと違ッ――！」

ドッ――!!
「はッ――？」
刹那――両姫の言葉が途切れた。
戦闘態勢、決して気を抜いてた訳ではない。全ての意識を集中し、気力を最大限に高めてた彼女は、倒れ伏せていた。そんな余りにも唐突すぎる展開に、雅緋は付いていけない。漫画を一気に読み飛ばし、衝撃な展開を先読みしたような。

雅緋と忌夢は眼を丸くし、茫然と立ち尽くしか無かった。
だって、さっきまで彼処にいた妖魔が、数秒にも満たずに両姫を倒し伏せたのだから。
ズボッ――ッ！と、嫌らしい汚泥を踏み歩く不快な音に総毛立つ。
鼻がつんざく異臭は、血の匂いで充満していた。
両姫は背に地面をつけており、天竜衆と呼ばれた妖魔は、両姫の臓物を踏み潰していた。

「両姫いいィィィィ――!!!」

雅緋の叫びが、騒めく異様な森に響き渡る。
その数秒、余りにも呆気なく――

１４７話「そして、深淵へ…」

血飛沫が飛び散り、呆気なく倒れ伏せた両姫は、口から大量の血を吐き出す。腹部は完全に妖魔の足で穴を開けられ、致命傷を負ってしまう。

何も手も足も出せず、いや…抵抗する余地すら与えなかった妖魔に、一蹴された。

「両姫……？」

雅緋の声は震えていた。

常に怖いもの知らずで、強者や凡ゆる困難に挑み立ち向かう彼女から発せられた声は、余りにも弱々しく掠れていた。

「カグラに実る前に摘まさせて貰ったわ、この雑草供が…陽花と言う太陽の光に焼き焦がれた鬱陶しい蝿よ…」

歪み淀んだ言葉が、辺りに静寂を与えた。

あの妖魔が喋った。

そのたった小さな真実でさえも、二人にとってはかなりインパクトが強いだろう、圧倒する絶望の影響か、記憶が鮮明に掘り刻まれる感覚を味わう。

憑黄泉と呼ばれてる妖魔の詳細は何も触れてない上に不明な点が多いが、幼年期と呼ばれてた妖魔と何かが違うというのは直感的に理解していた。タダでさえ気配だけでも感知できるのだから、変化を感じない方が逆に可笑しいだろう。

いや、そもそも妖魔とは喋るのだろうか？

化け物だのと蔑み恨めたらしく言葉を吐き捨ててはいたが、妖魔とは会話の通じるあいてなのだろうか？そんなどうでも良い疑問が自然と芽生えてしまうのも、無理はなかろう。

「イ、イザ…ナギ……ッ！ガハッ――！」

両姫は弱々しくも朽ち果てる体に無理に筋肉を集中させ、イザナギと呼ばれる妖魔の足首を掴む。
そんな瀕死な彼女にさも嘲笑うように見下ろす妖魔は、口角を吊り上げる。
「両姫、お前も良い線は行ってたんだがな。たった六歳の頃から秘伝の極意を発動させたお前は〝特異点〟。俺たち天竜衆から見ても危険すぎる。ここで俺と出会ったことが、運の尽きだったな……」
イザナギと呼ばれる妖魔は、それでも多少の賞賛はあるらしく、誇らしげに語りながら腕を退かして骨ごと踏み砕く。
グシャリ！と嫌な音が弾け飛び、両姫は更に苦痛に表情を歪ませてしまう。
「あ、あれだけ強かった月閃が、一瞬で……」
忌夢の言葉に我にかえる雅緋は、固唾を呑む。
手が震え、刀の柄を静かに握りしめるも、まるで自分の心臓を優しく手に触るような居心地のなさに腹の中がムカムカしてしまう。
「然しどうしたものか…実験のデータをくれるようにと『エリザベス（イザナミ）』に頼まれてたのに、これじゃあ失敗だ。まあ…両姫を殺したことで許してくれると良いんだがな…」
腕を組みながら独り言を呟いてる妖魔は、此方の存在に気付いてない様子――
「ついでに、残りの蝿二匹もな――」
では無かった。
何の兆しもなく、平然と通行道路を歩むかのように、尻尾が振るわれる。強靭で伸縮自在の黒紫色の尻尾は、忌夢の横腹を薙ぎ払う。
ズドォン――ッ！
爆発に似た擬音が轟き、今の現状こそ思考が追いつかなくも、忌夢の方角に視線を向ける雅緋。妖魔が攻撃を仕掛けたという事実が突きつけられるのに、３秒は掛かった。
しかしその３秒が、まるで３０秒もの長さを感じるのは、時間感覚

が違うからだろう。
　岩へ叩きつかれた忌夢に、声を発しようとする間もなく、尻尾が雅緋の方へと振るわれる。
　ドガッ――!!
「オオッ!?!」
　鈍い音が響き、衝撃が体に走る。
　打撃を食らったソレは、決して雅緋から鳴った音ではない。彼女に振るった尻尾は何事もない分、雅緋には至って何の異常も来たしていない。
　肉体も、何もかも形が保たれたまま無事だ。
「両姫!!忌夢!!」
　余りにも異常な速さで展開が繰り広げるこの状況に、混乱しながらも現状に追いつこうとする雅緋は、刀を握ったまま動けない。下手すれば、自分も殺られていた。
　いや、そもそも忌夢が吹き飛ばされたことだって解らなかったし、反応が取れなかった。この凄まじい常人離れした動きに、手も足も出ないという己の不甲斐なさを噛み締める雅緋は、せめて押し殺すかの如く、声を荒げる。
「お……まえ……!?!?」
「逃が……さな〝いい!!」
　イザナギの背中を強打し身体を貫いたのは、先程足で臓器ごと身体を踏んづけられ、腕を潰された両姫。
　頑固たる屈強な拳が、イザナギの溝を貫き、血に塗られた拳が鮮明に映し出されていた。
「私、両姫は……お姉ちゃんはね……絶対に、負けないって…決めてたから…!あの子達を育てるって…!守るって!
　だ、から!この命が尽きる…前に…せめて……!」
「馬鹿な!お前…!!まさかこの致命傷でっ〝…――!!ゴバッ〝!!」
　さっきまでの王様のような気高い余裕な面はどこ吹く風か、両姫がなお立ち上がり、一矢報いた予想外な展開に、イザナギも焦燥を隠せないようだ。口から青紫色の血を吐き流し、睨みつける。

人間という軟弱で雑草と認識してたイザナギが、両姫が死んだと仮想し油断してて、簡単に背中を取られた。
これは、天竜衆と名乗る己としては恥じるべき姿であり、余りにも馬鹿げてる。
しかし、両姫が死に抗いながらイザナギに拳の一撃を入れた彼女は、確かに強い。
「キシャあ〝あ〝ァ〝ぁぁぁ――!!」
ブチィッッ!!と、千切れた音が鼓膜を貫く。
イザナギを貫いてた両姫の腕が簡単に千切れたのだ。しかし、潰されてもなお生命力が溢れてたかのように、体を突き抜けたのは正直言って動かせること自体が凄いと称賛しても良いだろう。
イザナギはくるりと体を回転させ、両姫の腹に拳を入れ、先ほどのお返しと言わんばかりに背骨から拳が生えた。
「がハッ――あぁぁ!!!」
ドシャッ!と大量に血が流れる音に、血の匂いが濃くなり充満する。それから薙ぎ倒すように蹴りで横腹に入れ、身体が歪み、全身が悲鳴混じりの絶叫を上げる。
嫌に心臓が震えるこの恐怖、立ち尽くす雅緋は何としても動かねば…と、己に言い聞かせる。
(両姫…もうあんなボロボロになって…!なのに私は…体の震えで何も動けない…?今まで、母の仇を討つために、修行した私の時間は何だった!!なんで、こんな時に限って、クソ!!!
忌夢は……無事か!)
余りにもの己の不甲斐なさと醜態に、自分を殴りたくなる衝動を殺しながら、雅緋はふとあることに気がつく。
妖魔を滅する禁断の忍術なら、この妖魔とも渡り合えるのではないか?と――。
因みに忌夢は偶々、奇跡と呼んで良い程に偶然、一歩下がってたらしいので、尻尾によって薙ぎ払われても、何とか致命傷は免れたようだ。頭に血を流しながらも、形と供に呼吸や脈が通ってたことに安堵するのは、今となっては仕方ない。

（これなら…きっと！）
秘伝忍法書を取り出し、詠唱する。
己を超え、妖魔を滅する力、今こそ解き放たれよ――
「フゥ～…フゥ～…!!クソが！」
血を垂らしながら苛立ち気を喉から発するイザナギは、青筋を立てる。いずれ陽花になるであろうと危険視してた彼女とはいえど子供だ。況してや学生相手に一撃を受けてしまうなど、あってはならぬ屈辱。
（思ったよりもダメージが深い…！コイツ、決死の覚悟で虎式・武術の暗技を使いよったな……!!後少し、身体の損傷が激しければどうなっていたことか…！）
一瞬垣間見えた己の死を想像しながら、荒げる呼吸を整え、平常を保つ。両姫を手短に、素早く殺めたのは、彼女が本気を出されては困るからだ。彼女の秘められた強さ、嘗て陽花と供に大妖魔『ハンムラビ王の裁判者（ジャッジメント）』を二人で討ったと言える程の強豪…そして天竜衆のイザナギでさえも今も知らされてはいないが、両姫は既にカグラの力を持っている。それでも彼女が秘忍として収めていたのは、陽花が態とカグラの称号を隠していた為だ。
全ては、両姫が忍学校を卒業し、妹達を養える時間を作るための…天竜衆に狙われないようにと彼女の善良たる配慮。だからこそ、イザナギは油断を作ることが出来た。
しかしそれも、何百年も生き永らえた妖魔の力によって、水の泡となってしまったのは心が響くほどに痛い。
「いや、しかし…メルヘンには再生力が備わっている。そして俺は上位者――こんな傷、直ぐに防ぐことだって可能だ…取り乱れるな俺よ…」
こうしている間にも、あっと言う間に貫かれてた身体の傷が一瞬で塞がれた。彼女が命を賭けて振るった拳も、努力も、いとも容易く崩れ去った。
「ま……て……」

「ん？」
掠れる声が、弱々しくも瀕死な両姫の言葉が、妖魔の動きを止める。
向き直るイザナギは、両姫に視線を浴びせ、耳を傾ける。彼女は身体が崩れそうなほどの重傷を負いながらも、口に血を吐き捨てながら、突き殺す視線をイザナギに向ける。
「貴方達だけは……絶対に…許せない……から。どれだけ……貴方達が、生き永らえても……貴方は…必ず……」
両姫の怨念と義憤に満ちた言葉に、微かな記憶が蘇る。
『私が死んでも、お前達だけは絶対に許さない。忘れるな、カグラは…そして、神楽もお前を討つべく必ずや、地獄へ叩き落とす――』
これは…肆奈川？
『何が楽しい？何が可笑しい？
お前達の生業は、誰も許さない。この世に誕生した悪霊の権化、妖魔よ――貴様達を討つべく、私は刀を握ろう』
今度は…松陽？

数々のトラウマにも近き忌々しい記憶が、フラッシュバックを起こす。だが、全ての記憶が己の物とは限らない。
これは…我が主の…創造主である神の…残された記憶…？細胞が流れ、記憶の遺伝子に深く切り刻み残されてるのだろうか？
そんな狂気すら感じ取れる威圧に、両姫の死に近き光灯る底知れぬ執念は、イザナギを震えさせるのに充分だった。
それ程の威圧と脅威が孕んだその眼光は、陽花と同じ眼をしていた。
「人間如きが…言ってくれるわ！所詮、無限の時と自由を手にした我々が上だっただけのこと…愚直に生きる貴様よりも、利口に賢く世渡りする俺の方がずっと、遥かに強いのさ…」
どんなに愚かと言われようと、真っ直ぐに道を突き進む両姫に対

し、利口に道を変えながら、賢く進むイザナギの対照関係。
「はぁ……はぁ……」
それでも人間は必ずしも死を迎えうる存在。
深傷を負い、既に立ち上がれる状態ではない両姫は、地面に倒れ伏せながら、血が滲み出る。やがて雑草や地面の土は朱色に染め広がり、真っ赤な世界を映し出したような。
「嫌…イヤよ……両備ちゃんと、両奈ちゃんを残して死ぬなんて…絶対に嫌……。
あの子達は、お腹を空かせて待っているのに……せめて、最後に別れを告げられないなんて……」
美しき瞳から溢れる涙は、純情で透き通っている。
妖魔の澱んだ汚い血とは違い、悲哀と悔やみが含まれたその涙の雫は、妹達への愛から流れたもの。
「よう…か…さん……ごめんなさい…貴女の仇、うてな…かった……貴女の無念と……私と妹達を、妖魔から救ってくれた、恩返し……したかったなぁ……
ダメな…お姉ちゃんで……ごめん…ね…」
残る悔やみと、命の恩人である陽花に対する謝罪。両姫の命の鼓動が段々と終わりに近付き、光る灯火が弱々しく消滅しようとする。まるで蝋燭のような小さな火の魂が、終わりを告げようとしてるみたいに。
その仇打ちとは決して私怨ではない。彼女が果たせなかった役目を全うしようと、強く生き続けた彼女の正義感。
「残飯なんざ食う気にもならねぇが……しかし、たかが家族如きで人生を棒に振るうなど、迷惑極まりないな全く――お前が魔術師にならずに貧しく金稼ぎさえしていれば、こんな想いなどしなかったのだ。尤も、両姫を殺したと…アルテスタ（ヤギハヤ）が聞けば怒り狂うだろうな……アイツには申し訳ないが、計画の邪魔だ――これ以上お前を野放しにしてしまえば、我々の起こり得る未来が、無かったことになる」

一方、イザナギの方は既にダメージも回復してる様子で、以前の慌ただしい取り乱れた面影は無くなっていた。
どうやら、妖魔は人間とはかけ離れた程の治癒力を持っているらしく、人間の血を摂取することで傷を癒すと言った物が存在するらしい。いや…下手すれば忍も可能なのだが…
「がぁぁあ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁああ――ッッ!!!」
「ん…？」
一息吐くイザナギの背後に、雅緋の咆哮が轟く。
全身の血が騒つくような異常感に、己をも殺める可能性を秘めた馬鹿でかい闘気。殺意が爆発的に膨らむ異様を感知したイザナギは、雅緋に振り向く。
「貴様ああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
「なっ、おまえ…」
雅緋の頭髪は深淵の如く漆色に染まり、瞳は血の如く紅い。まるで朱珠のように煌めくも、殺意と憤怒、憎悪と言った、憑黄泉が好む感情しか宿っていない。
頬は禍々しく染まり、まるで禍魂の忌夢や敵連合の闇と同じく、漆黒の紋章が染まり浮かび上がる。これは…月神ノ紋章？
背中は六枚の翼が出現し、鴉の如く暗黒な色を映し出していた。今の雅緋は、下手すれば妖魔衆と渡り合える実力を秘めているだろう。
「おお…おおお！」
しかしイザナギは、決して震えなかった。
相手に殺意を向けることも、戦闘態勢に入る訳もなく、まるで感心するように眼を輝かせ、歓喜の声を溢す。
「お前…誰に禁術を教わった…？本来なら忍学校を卒業した者にのみ伝授可能な代物を……一体どうやって？
いや、まあ…良いだろう。血界突破を使ってくれるのなら好都合…」

まさか、カグラでもない学生が、血界突破を習得していたとは…両姫に続き、お前も…特異点が多いな。
然も覚醒？血の目醒めこそ、覚醒を引き起こす現象は幾つか観測されたが、『上位の聖杯』も無しにこれとは…。
「絶・秘伝忍法――【闇に穿つしｓｅｒｐｅｎｔ】!!」
巨体な大蛇が黒き獄炎を見に纏い、紅き瞳に縦に伸びる瞳孔が、イザナギを喰らい付くそうと眼光を放つ。
そんな威圧に物怖じせず、微動だにしない妖魔は、口角を釣り上げる。それは好戦的な笑みなのか、はたまた血界突破を発動してくれたからか、どちらにせよ宜しくないという面では確かだろう。
「魔術――【イザナギ】」
刹那――急速に口を広げ、全てを飲み込もうとする大蛇は、空間から生えた黒青色の結晶に全身を貫かれる。
雅緋も、背中や溝、膝、肩を貫かれてはいるが、息はある。イザナギは敢えて殺さないよう加減をしていた。それが何の意味を表すのか、知る由もない。
まるで全ての巨体を駆逐するその神々しい術は、正しく神の裁き。嘗て、妖魔を全て滅し、終焉を刻む者と謳われた神楽という女神が扱ってた神儀だ。常人や忍では決して辿り着けない、取得すら不可能な術を、イザナギと呼ばれる妖魔は、平然と扱ってみせた。
そう言った意味でもまた、確かに何かしら神楽との繋がりは有るのだろう。
因みにイザナギとは、範囲内の空間に亜空間から発した刃を出現させる、正体不明、解析不可能な大技で有る。下手すれば巨大妖魔すら殲滅させるのは容易いこと。
「しかし、面白いものを見たな…血界突破の発動は見たところ制御できないからして見て…初めてだな？この術を使うのは…破滅を迎えるコトを想定しなかった阿呆なのか…いや、どちらにしろ手遅れだ」
「がああああ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あぁぁぁぁぁ!!」
「って言っても、もう自我もない…言葉は通じないか…ハハッ」

雅緋の暴走を、冷笑を浮かべるイザナギは、敢えて雅緋を殺さなかった。手を下すのを止め、そのまま戦闘態勢を解く。一体、なぜ雅緋を殺すのをやめたのか…その疑問は未だに解らない。当初では想像さえしなかったし、今となってはここから、全て狂ってしまったのだろう。

「実験は失敗したが、それなりの成果も有った。ふふ…また次に遭うときは…メルヘンとして使役をしてやろう」

後半の言葉は上手く聞き取れず、何を言ってたのかは記憶を取り戻しても解らなかった。イザナギは〝神楽滅殺〟と刺繍で縫われた文字を見せ、退却しようとする。

今回の仕事も終わり、帰ろうとした矢先――

「に…げる…な」

ん？

イザナギは止まる。

獣みたく狂い始めた雅緋に、人間味のある言葉が微かに聞こえたからだ。雅緋は全身に血を流しながらも、忌々しく剣を突き刺す言葉を解き放つ。

「逃げるな卑怯者がああぁぁぁぁぁ!!!」

……

雅緋の言葉に、イザナギは数秒静止してから――

「ハぁ……？」

疑問を含んだ声を、吐息と共に吐き出す。

「何、言ってんだ、お前……」

その声は冷徹で静寂が有るも、確かに殺意と憤怒を孕ませていた。

青筋が全身に浮かび上がり、躊躇わず一瞬消し炭にさえしてやろうかとさえ想像していた。

（馬鹿なのかアイツは、卑怯者？それは俺のことか？俺が逃げてるように見えてるのか？アイツの眼玉は腐ってるのか？

俺は逃げてるのではない、イザナミに呼ばれたから離脱するだけだ、お前など殺そうと思えば直ぐに殺せるような、容易い無価値な命を前に何を逃げる道理が存在するのだ…？）

「口を慎めよ雑草がぁ!!俺が敢えてお前を殺さなかったのは、お前がより強力なメルヘンになると見越したからだろうがぁ！血界突破の多くが失敗と供に死亡したケースが多発してる!!だから禁術とも呼ばれてるんだろうガァ！其れを何食わぬ顔で、俺に勝ったつもりでいるのか弱者が!!

そもそも勝負など既についてる、両姫は死んだ――俺の圧勝だろうが忘れたか！」

「両姫は最後まで！諦めなかったぞ!!戦場で背を向けず、投げ出したりしなかった!!

命尽きるまでもお前に一矢報いた！最後まで己の意思を…ぐっ…！貫いた両姫が強い!!

そして…意思も情念も何もない、貴様は…！両姫に負けたんだぁ!!!」

暴走を無理矢理にでも抑えながら、言葉を紡ぐような言い放つ。

イザナギは歯を食いしばり、拳に力を入れる。

（いや…もういい。どの道コイツの言葉に誘っても殺す価値もないわ……メルヘンとなれば奴隷のように扱ってやる！

仮に克服しようと殺せば良い…！コイツの誘い言葉に乗る…それこそ、探究者として、実力者としての気品が無いではないか。あのまま自爆させるのが返って良い様なのだ…、コイツの言葉に耳を傾けるな）

己の弱さを正当化し、そのまま撤退するイザナギに、雅緋は抑え止まらぬ暴走に身を任せ咆哮を上げる。

「うがあ〝あ〝あ〝あ

「あ…ああ……」
雅緋の嗚咽に似た言葉の掠れめだけしか残らない。そんな雅緋に、最後の生を振り絞る者――両姫が這いずりながらも、言葉を発する。
「……あり…が…とう……」

その言葉は、涙と優しさで濡れていた。
「私の……為に……言って、くれて……
もし、もし…も、だよ…？両備ちゃんと、両奈ちゃんに…逢ったら…こう、伝えて…？」
「…両……姫…」
「……どんなに…辛い、時が…あっても……愚か者と言われても…自分の信じる道を……まっすぐ、前を…向いて……そして…お姉ちゃんのことを、時々でいいから…思い出して…欲しい……そばに…一緒に…いてあげられなく…なっちゃったけど……でも、貴女達は…立派で強い子だから……精一杯、悔いのない人生を、送って……生きて…欲しいな……」
言葉が掠れ、段々と弱々しくなるも、精一杯最後の力を振り絞って、声を発する。
「あの子達は…とても個性的だけど……心優しい、自慢の妹達だから……もしも、会えたら…伝えて欲しい…な…」

その言葉を最後に、両姫は糸が切れたように、息を引き取った。
脈は通わず、血や心臓は停止し、瞼は閉じ、呼吸音すら感じない。両姫――天竜衆と遭遇し、華の如く散った。
伝言には、妹達に逢えるなんて確信はないが、それでも…せめて僅かな可能性が有るのなら、その望みに賭けてみようと思ったからだ。だからこそ、雅緋にだけでも、言わねばと…
「あ…ああ……ああ…」

喪失感と悲哀に満ちた時間が、永遠のように感じる。また、目の前で妖魔の穢れた手によって、尊き命が減った。
雅緋に残る感情は、妖魔を憎む怒り――それが、雅緋の心を沸騰させ、深淵が飲み込み渦を巻く。
「妖魔は何処に行ったあああぁぁぁぁぁぁ!!滅してやる…アイツだけでも、絶対に……!!
あ〝ッがあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
雅緋は完全に気が狂ったかの如く暴走し、妖魔もどこにも何もかもいない場所でただ一人、獣の如く吠え続け、刀を振るい、破壊を繰り返す。月神ノ紋章が広がり、体を侵食し、次々と異様な気配が辺りを包みこむ。
これは、妖魔化による異常現象――

「雅…緋…」
気絶から目を覚ました忌夢は、霞む視界の中、雅緋を捉える。
訳分からずに何を言ってるかもわからず、ただ妖魔のように破壊だけを目的として暴れ狂う雅緋に、危険なものを感じ取った忌夢の表情は、段々と険しくなる。
「だ、ダメだ…このままじゃ…雅緋が……」
死んでしまう。
血界突破は精神を崩壊させる危険性は充分に有る。最悪死ぬケースが高いと言われてるだけで、妖魔化になる恐れは、一切古文書には記されていなかった。それなのに、妖魔化になるこれは一体…
「…そうだ、血界突破を発動した者に、対抗できる禁術があるんだ…確か……」
その名も、血界反転。
空間内に染み付いた血を、全て抜き取ることが可能なこの術は、一見救済目的を持つ忍術に見えるが、実はこれも危険なリスクを伴うのだ。

これを成し遂げた者の生還率はほぼ皆無に近い。カグラでもやっとな思いで成功する忍術が、果たして忌夢にも可能なのだろうか？

「雅緋…待っててくれ、直ぐに…助けるから…!!」

１４８話「Ｒｅ：雅緋」

欠けてた記憶（パズル）のピースを取り戻した少女（とは言っても年齢では21歳なので、少女と呼んで良い物か定かではないが）、雅緋は光のない赤き血と闇深い心の中で、悔やむように顔を俯いていた。

こう言うのをファンタジー世界では〝時の狭間〟だの〝精神世界〟と呼ぶのだろう。

今雅緋が佇んでいるこの世界は、深淵血界によって影響を及ぼした、記憶の断片から生まれた世界。

たった一つの小さな記憶は、全てのパズルを組み立てるのに無くてはならない存在であり、どうでも良い出来事など少なからずこの世には存在しない。

「すまない…両姫、私は…」

記憶が戻り、全てを知った雅緋から口に出した最初の感想は、両姫への陳謝だった。

幾ら血界突破による暴走が原因で記憶が飛んでしまったとは言え、自分にとっても両備や両奈に対して忘れてはならない記憶を、自分はさもどうでも良いと、蔑ろにし見向きをしなかった。それだけではない、忌夢に酷いことをした。

今思い返せば、忌夢はずっと自分の為に影で支えては守って来たではないか。廃人と化しても世話を欠かさず面倒を観てくれた。全身の筋肉が衰え、ろくに歩けない自分に車椅子を押してもらい、外の景色を眺めさせてくれた。些細な事柄から全てに於いて、こんな自分の為に尽くしてくれる忌夢に、復帰した私は親友に謝罪の言葉を送ったか？

「これが普通だ」と、忌夢の性格と自分の都合の悪いことを正当化して、強さを求める反面何も気付かずただ彼女の優しさに甘えてたのではないか？

「忌夢も、私のために命を懸けて救ってくれたのに…私は、お前を…」
記憶が戻っただけで人はこうも変わるものなのか…当初の自分から想像もつかない、信じ難い衝撃な心情だ。
母のため、自分の為、蛇女の誇りのため…そんなことを公言するよりも、もっと大切な言葉を伝えるべきだっただろう？
血界反転の忍術は知らないことも無かった。しかしだからと言って強さにしか興味を示せないつまらない人間である私は、血界突破をより効率よく成功に導く座学と、妖魔を殲滅するための修行に明け暮れていたので、まさか忌夢が血界反転を取得してたとは考えもしなかった。

「……謝らなければ、ならないな…」

雅緋が罪悪感を込めた言葉に――

『はっははははは！何を謝る必要がある？』
嘲笑う声が、返ってきた。
「ッ!?誰だ！」
ここにもう一人、いや…誰かいるのか？
そもそも、自分以外に誰かいるのだろうか？声主の方角に振り向いた雅緋は、背筋が凍った。
『誰だ、とは…酷いじゃないか私よ…5年ぶりだな、もう一人の私…』
そこに立っていたのは、紛れもない自分自身だったからだ。
「もう一人の…私??」
まるで鏡にでも語っているかのような…いや、自分と違う点が有るとすれば、其れは向こうの私の髪色が幼少期の黒い髪という点と、黄金ではなく彼岸花のような紅色に濡れた瞳と、頬には闇の紋章が染め上げられてる点、何よりも背には六枚とも鴉の翼が生えているのだ。黒く羽ばたく羽毛は、烏天狗に近いだろう。
相手は深淵に染まった雅緋だ。
『はぁッ！そらぁ!!』

瞬間――深淵の雅緋が拳を入れる。
腹部と頬に炸裂した拳に、頭が鮮明に伝わり、苦痛の色を浮かべてしまう。
「なッ――」
自分が自分を攻撃した。
痛みが伝わり、驚嘆する。
ここは現世とは違う、なのに痛みが残るというのは、どういう事なのだろうか？いや、そもそも自分はどういう状況下に置かれてるのか、不明な点が沢山有るだけで、考えると気が遠くなる。何よりも今一番疑問に思うのが…
なぜ、もう一人の自分が存在するのか…だ。
個性の変身能力や、分裂能力でも無い限り、こう言った現象はほぼ皆無に等しいだろう。これが夢であるにせよ、現実に存在するよう痛覚が働いてるのであれば、ここは夢や精神世界とも言い難いもの…いや、精神世界に痛みが無いとも言い切れないので、そういう自己解釈が間違ってるという可能性が大きいのだろう。
『弱い私よ…今までご苦労だったな。だが安心しろ、これからは私が雅緋として生きていく』
「何を言ってるんだお前は！お前が私として生きていく…？言ってる意味が解らんぞ！」
『そのまんまの意味だ…お前は弱いから消える。そして強い私が自我として蘇り、雅緋として生きていく…たったそれだけの簡単な話だが？』
「巫山戯るな！私の何処が弱いと言う？」
『何処がって？全てだろ――』
自分と自分が口論し合う中、深淵の私が侮辱に似た眼差しで見下ろす。
『お前は忌夢を切り捨てれなかった、お前は紫を守れなかった、お前は両備と両奈の姉妹の心を察する事なく、都合の良い戦闘道具として利用してた。イザナギと死闘を繰り広げ、一矢報いた両姫に助力することも、妖魔を討つことも叶わない。

そして、私を忘れた――』
「わた…し……？違う、私は…」
『自分で自分を忘れたでは無いか。それに何が違うと言う？少なくともお前は私怨と欲望に目先を狂わされ両姉妹の復讐を察することが出来なかったじゃ無いか。
また両姫が死に、イザナギに手も足も出なかった過去と同じことを繰り返そうとしてるんだぞ？それは、お前の弱さが招いた結果じゃ無いのか？』
深淵の闇が、雅緋の心に囁いてくる。
『いや…違うな。そもそもお前は冷酷無慈悲の残虐非道、強さこそ全てに忠義を尽くす生粋の悪忍だ。
仲間なんて存在は綺麗事でしか無い、己の圧倒たふ強さに勝るものなど存在しないと、自分に言い聞かせてたでは無いか。母上の復讐を果たすべく、骨が悲鳴を上げようと、拳の皮が捲れようと、ずっとそうやって生きてきたじゃないか』
母上が死に、死に物狂いで修行に食いついた自分だからこそ、ここまで強くなれた。己の心に妖魔を殲滅する圧倒な強さを身につけるべく、毎日修行に時間を費やした。
深淵の私が言ってることは、全て私がそう有り続けたものだった。
『最初にお前は言ったよな？弱者が未来を語るなと…今、強いか否か、違ったか？』
蛇女子学園の選抜試験で忌夢に厳しめの言葉を浴びせた言葉だ。確かにあの時は忌夢と離れて欲しいと言う意味で言った言葉だが、半分は本音だ。弱者が想像を膨らませ、それを物語ろうと虚無に終わる。鍛錬に励まない弱者が、無駄に口を開こうと意味がない。そんなのただの時間の無駄でしかない。
『だから、強い私の方が良いに決まってる。甘ったれた感情に逃げたお前はここで消えて、血界突破で殻を破った私が雅緋として生きていく。そうすれば、アイツらを幸せにしてやることも出来るハズだ…それに、血界突破を自由に使いこなせる』
「……私は、お前ではない」

『おいおい、自分に対して否定の言葉を投げるのか？お前は、太陽に照らされ映し出される影にお前は私じゃないと言い張るのか？可笑しなヤツだな』

深淵を否定する雅緋を、鼻で笑い飛ばすもう一人の自分は上から目線で物を言う。

『消えろ消えろ！弱い私なんて要らない！妖魔を殲滅する強さ、全てを圧倒する強さ！それこそ完璧を司る私なのだ!!』

影の深淵は、拳と蹴りの乱打で光の雅緋を葬り去ろうと殺しにかかる。

罵倒、誹謗、殺意の言葉が溢れかえるその台詞も全て、私自身の心から生まれた物なのか…自分で自分が信じられなくなってしまう。

「クッ……！」

『そもそもお前は仲間の何を知っている!?忍の世界では甘ったるい精神は命取り！それをバネに生きた貴様が、仲間のことを知るハズは無いもんなぁ！

仲間、友情、絆…そんなものちゃんちゃら可笑しい。周りの人間が勝手に作った単なる綺麗事だろうが、お前には余りにも無縁で不必要な存在だ。妖魔を一匹残さず葬り去る為に身につけた力こそ正しい――時間が、世界が、人間がお前を弱くしたのなら、関わらなければ良いだけの話。それが、アイツらの幸せにもなるのだからな』

忌夢と縁を切ることで、妖魔との抗争で命を落とさずに済む。

紫と縁を切ることで、忌夢と一緒に側にいて幸せになることが出来るし、引きこもりの生活だって送れる。

両備と両奈の姉妹二人と縁を切ることで、変態に悩まされなくても済めば、両姫の事柄に責任を負う必要だってないし、そもそもアイツらは復讐の為に転入してきた訳で、仲間と呼べるような関係ではない。

深淵の言葉が、雅緋の心を蝕んでいく。

それと同時に、光である雅緋が朽ち果てるよう、肉体が削れるよう

にダメージを負っていく。
『仲間という存在がお前を情弱させた！妖魔の殲滅のためには力が必要だ、違うか？なら、己を弱くする存在が仲間ということは、妖魔を殲滅させる道を遠のかせ、邪魔をしているようなもんだろ、私の言ってることは何も間違いではないハズだ』
「……」
過去の自分と、復帰した私の存在がそう有っていた。だからこそ、図星を突かれて何も言えない。今は違うとしても、昔ね私は確かにそうだった。
笑顔なんてくだらない。
涙などとうに枯れている。
仲間なんて必要ない。
そう生きてきた私が、今を苦しめ誹謗する。全てを痛めつけんと言わんばかりに振るわれる暴力は、それと同時に哀しみも含まれていた。
『全ては母の仇、妖魔を滅する為、怪物に対抗するには、怪物並みの力量が必要だ。それが尤も他でもない、お前という人間だろ、雅緋。これは嘘ではない、私だからこそ知り得ること、私だからこそ言える立場――第一、アイツらだって現に妖魔に打ちのめされてるだろ？両姫なら兎も角、仲間という惰弱な存在は何れ足を引っ張り己の命取りになる。
何を躊躇う必要がある？仲間と言えど自分ではない、所詮他人は他人…誰が死のうと関係ないだろうが、忍の定めなら尚更だ。他人が苦しみ死のうと、自分にとっては関係ない。仲間のために命を賭ける行為は、無駄に命を捨てにいくような自殺行為だぞ。
そんなつまらないことで己の命を捨てるのなら、私のために死ねよ』
何も答えられない雅緋は、心も体も満身創痍だ。
ようやく、嵐のような猛攻を終えた深淵は、ゆっくりと雅緋に近寄り、指で顎を撫でる。
『安心しろよ、私。軟弱とは言えど、私であることには変わらない。だ

からこそ、お前まで無駄だったとは言わないし、お前は被害者だ。他人の甘ったるい感情に汚染され、強く有り続けた己が弱体化してしまった…

だが、次の私はそうはならない。

お前という確かな存在を糧として、責任を持ってお前の願望を叶えてやろう。それだけは絶対に約束してみせる』

深淵の中に籠る確かな光は、まるで自分の幼き頃の髪色に似てる。黒く染まりきった髪には、白も交えていた。朦朧とした意識の中でそんな軽い記憶に浸りつく。

『では、さらばだ――』

無慈悲に放たれた言葉に雅緋は

「なぁ、もういいか？」

覇気のこもった声が、深淵を硬直させた。

ドッ――と殴る鈍い音が鳴り、深淵の頬に拳が炸裂。衝撃によって微かに体のバランスが崩れてしまう。

『なッ――にぃ?!!?』

殴られた深淵は、一体何が起きたのか検討も付かず、突然殴られたことに動揺してしまう。

「悪いな、私は消えたくないんだ。そもそも、私は一言だって喋ってないし、消えたいとも言ってない。仲間の存在が惰弱だとも、今私の口からは何も言ってないぞ」

満身創痍…とは呼べない雅緋の容姿は、以前と比べてとても強く逞しく見える。そこにはより眩しさを募らせる瞳に、諦めの文字がない勇気が膨大に溢れていた。

『お前、話を聞いていたのか？全てはお前の本音、お前の口から発した言葉だろうが!!それを――……』

「ああ、確かに言ってた。とても、昔と今とでは違うようにも見える

し、別人にさえ思えてくるよ」
『だったら――……』
「ただ、それだけであって、ソレがどうした？」
『――ッ!?』

　さっきまでの雅緋とは違い、威勢のある彼女は怖気ない。代わりに、深淵が面食らった顔で、驚愕している。
「過去の私がそうで、成長したのが私だろ？そもそも記憶がなかったとは言え、あのまま進んでも伊奈佐（あのバカ）に良いように利用されてるだけの、絶望の未来しか待ってなかったしな。お前は惰弱と言っていたが、仲間のおかげでこうして成長もしてるんだぞ？
　そう言う面では、妖魔を殲滅する手助けとなり、進む道に背中を押してくれる、無くてはならない大切な存在じゃないか」
『ふざけるな！そんなもの都合の良い解釈だろうが！お前の綺麗に飾った言葉巧みでしかない、逃げてるだけだ！そんなもの本当の強さとは呼ばない！
　全ての絆を断ちきり、圧倒たる力を身につけてこそ本当の強さだろうが!!何を今更お前は――』
「否定はしない。お前の言う通り、全て事実だし言ったことは本当だ。言葉を撤回しろと言われたらそうしたい気持ちも無いわけではないし、廃人から復帰した私がそうだったからな…
　ただ、それだけが全てじゃないだろう？」
『えっ――？』
　深淵の荒げた声が、途切れる。

「焔のお陰で、私達は救かったことも事実だし、旋風が命を賭してまで蛇女の誇りを取り戻そうとしたことによって、己の愚かさと弱さに気付いたことも、事実。
　それもまた私なんだよ、お前は妖魔を怨み、血界突破の衝動で生まれた影の私…だから、お前は私の全てを知っている。そうだろ？」
『……』

「仲間の存在が私を強くしてくれた。忌夢のお陰で命は救われたし、紫だって外の世界に連れてこれる良い機会じゃないか。閉じこもった空間にばかりいれば、体の調子も悪くなるしな。
　両備と両奈も確かに、復讐の為に私を殺すが為に転校してきた訳だ…だけど別に恨んではない。そもそも蛇女の中では常に選抜の座を狙われてるし、別の意味で女子たちからも狙われてるしな。明日に命の保証がない上に、周りに気を配るのも当然と言うか、慣れてるからな。別に苦ではない」
　違う意味とは、雅緋親衛隊のことを指しており、雅緋ファンクラブのメンバー達のことだ。
　そういった面でもしつこく狙われてるし、間違いではないだろう。
『だから何だ…結局自分が弱くなる事実は変わらないだろ…いずれ足を引っ張る存在にだって…』
「何を言ってるんだよお前は、そうならない為に皆んな、必死に頑張ってるんだろ？だから、毎日欠かさず辛い修行を送り、己の限界を超えるべく鍛錬に励んでいる。最低限の力を身につける為とはいえ、基礎を疎かにしては強大な力があっても命取りになるだけだし、一人の力では成せることに限りはあるしな。
　仲間がいればよりスムーズに強く進める上に、助け合うことだって出来る。ホラ…仲間は無駄じゃない。鈴音先生の言いたかったことって、これなんじゃないか？」
『バカバカしい…漫画じゃあるまいし…』
「それはどうしようもないが、そもそも個性なんて能力がある世界だからなぁ…漫画だのどうこう言われても、今となっては曖昧さがあると言うか…第一妖魔だってそうじゃないか？」
『……』
　何も言えずじまいになる深淵は、唇を噛みしめる。拳を強く握りしめ、歯軋りを立てる。
『後悔することになるぞ…？私に取り込まれていれば、弱さを切り捨てれば、死ぬことなど無かったって…』
「自分の道に後悔なんてないさ。有るのは全部、感謝の気持ちで一杯

だ――こんな私に、ここまで背中を押して、そして側に付いてきてくれる仲間たちに、私の支えと強さの成長を促した皆んなに」
忌夢、紫、両備、両奈、焔紅蓮隊、旋風、鈴音先生、父上、そして両姫…皆んなの想いが糸のように紡ぎ、私を強く奮い立たせてくれる。昔の私からは想像もつかないが、それでも私という存在は成長しての私の姿だ。

――有難う、皆んな。私は…己の欲望だけじゃない、今度は皆んなの恩義に応えるべく、私は強くなって、悪の誇りを掲げてみせよう。
世のため人の為…そして、仲間のためになるのならば、私は…いや、私達は喜んで汚れ役だって買うさ。

『ふざけるなあ〝あ〟あ〝ああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!!!』

唐突に狂い叫ぶ深淵は、憤りと怨みに含まれた絶叫を喉から発した。
『ふざけるなフザケルナ巫山戯るなぁぁ!!何で私がダメなんだ!今までの記憶は何だったんだ!お前が復活する前に欠けてた私の記憶は何なんだ!!私の存在が無かったことにされるのか!?弱さを切り捨てようとしてた私の努力はどうなるんだ!
お前は知らないだろ!どれだけ私がお前を呼んだと思っている!記憶を取り戻して忌夢に謝罪する気持ちも!両備と両奈に真実を告げたかった気持ちも何も知らないクセにィ!!その上お前は強さを固執し取り残された私を見向きもしなかった!興味も示さなかった!ずっとずっと独りぼっちで残された私の心情など知らず!お前は過去の私を消そうとした!無かったことにしようとした!それなのにぃ、何でお前が皆んなにぃッッ!!!』
深淵から初めて、人情と心情を知った。
先程の自分とは思えないほどに、でもって何処か子供らしい一面を残し、泣き叫ぶ。
瞳からは透き通った涙の雫が溢れていく。

『いやだ…あの時の私が無かったことにされるなんて嫌だ……消えたくない…消えたくない!!』
前述した仲間との繋がりを断ち切ろうなんて吐いてた彼女とはお前ないほど、その言葉には優しさと温もり、そして…
欠けてた記憶の私が含まれていた。
「大丈夫だ、お前は消えやしない」
『…えっ?』
私は、一歩前に出て、手を差し伸べる。

「何故なら、私がお前を受け入れるからだ」
『何…?』
「ここは私の心の中の世界…記憶と精神が合わさった、特殊な世界空間だ…なら、お前が私を消そうとしたように、私もお前を受け入れることが出来るのではと思ってだな…」
『……私は、お前という存在を消そうとしたんだぞ?』
「嗚呼、確かにそうだな。普通の考えでは殺しに掛かる人間を引き取ろうなんて考えない。
だが、命のやり取りする戦いなんて幾らでも存在する。焔達とだってそうだ。私達はアイツらを殺そうとしたのに、何も言わずに救ってくれたじゃないか。そもそも私たちの受ける修行だって命懸けだ。今更…という点がある。
それに、お前は私だ。私が自分を消してどうする?お前も私も、目的は妖魔の殲滅。ならば、一緒になって戦おう。第一私は蛇女子学園の生徒、忘れたか?
悪は善よりも寛容だ――どんな物でも受け入れる」
『…そのせいで、伊佐奈が来てから狂ったこともあるだろう…』
「それもそうだな…まあ今は小尾斗教官がいるしな。口ではああは言ってるが、退院間際に医者の先生から聞いたところ、私の体に異常が来してないか、忙しい中毎日病院に通って私の安否を確認してたそうだ。そもそも、そんな不埒な輩に利用されないことも含めて、強くなれば良い。その努力も惜しまないつもりだ」

『……やはり、自分で自分は否定できないな…』
深淵は観念したように目を閉じて、ソッと差し伸べられた手を優しく握る。自分で自分と仲直り…なんて、現実的に考えてあり得なければ想像し難いが、悪くないものだ。自分と向き合うというのは…

「これからも、宜しく頼むぞ、もう一つの私」

そんな私は、自分にありったけの笑顔を見せた。
深淵も私だ、一つになることは当然だ。深淵の私はどうなっても知らんぞと物語るような顔を浮かばせるも、その中には微かな笑みも含まれていた。
深淵が光に爆ぜ、雅緋の中に取り込まれていく。

「これが、欠けてたもう一つの私…感じるぞ、私の記憶…もう一つの力……」

暖かい感情が包み込まれ、心地よい感覚が溢れてくる。その眩しい粒子の光の中に、複数の人影が此方を見つめている。血流が上昇する感覚、光に包まれる私を見つめる、複数の人影。
「誰…だ？」

次第に明らかになる姿、見慣れない上に体が透けている。これは…一体？目を丸くしてる私に、二人の人影が駆け寄り口を開く。
「良かったね、これで…血界突破、深淵血界の力を自分のものできたんだね」
「よく頑張ったな、これで…また犠牲が出ずに済んだのだな」
これは…
「私は暁。血界突破を成功できておめでとう。でも、気を付けて…ここからが本番…」
「俺は白夜、君のことを知れば、天竜衆が黙っていられない。その時は全力で消しに来るはずだ…」

天竜衆？
血界突破の影響か、死後の人間と微かな会話が出来るらしい。それと同時に血の細胞の如く流れ出るのは、知らない先人達の記憶。
そして、大人や子供、信じられないことに幼少期の子供達までも見える。
「わたしたちねー、むりやりけっかいとっぱ、されたのー」
「じっけんとかどうとかってね、てんりゅーしゅーにさらわれて、ひどいことされた！」
「お父さんとお母さんを殺されて、憎しみを植え付けられて、無理矢理血界突破をされて、死んでしまった…」
「僕は妖魔になっちゃった…沢山の人を殺してしまったよ……嫌だよ、殺したくなかったよ……僕も、地獄に行って、罪を償いますね……」
「天竜衆に殺されるのが怖くて、やらされた…でも、そんなの言い訳に、ならない、よね…」
「貴方たちは…一体……」
聞くほどに悲しくなる、悲痛と悔恨に塗れたその魂は、少しずつ消えていく。信じられるだろうか？二歳や三歳の子供が血界突破をしたなんて、常人では考えられないことだ。
様々な人間が、雅緋にサヨナラを告げるよう消えていく。
そして――世界は眩い光に照らされて、飲み込まれていく。

瞼を開けると、そこには映し出されたのは…禍魂の忌夢に満身創痍の両備と両奈。
忌夢は獣のように酷く歪んだ表情で此方を警戒し苦しんでる様子で、両備と両奈は此方を見つめて驚いてるようだ。
「まるで、世界が一変したようだな…これが、私か――」
一息空気を吸い、外の懐かしさを堪能する。

現実ではほんの1秒そこらにも満たないのだろうが…記憶を取り入れてからはその比ではならない程の時間を費やしたような感覚だ。

「アンタ、その姿…」

「雅緋ちゃん…」

二人の驚嘆な声に、雅緋は振り向き笑みを浮かばせる。

「両姫の妹、両備、両奈…ただいま戻ったぞ」

今の私と嘗ての私が一つとなった存在。

雅緋(私)と、深淵が一つとなった姿。

これぞ深淵の雅緋。そして頬には月神ノ紋章ではなく…これは、日神ノ紋章。太陽の如く日輪に似せた模様は、清々しく神々しい。

己を取り戻した雅緋は、今を生き、仲間供に妖魔殲滅への道を歩む

１４９話「ただいま」

自分に記憶が戻ってから、全ての価値観が、世界が塗り替えられた錯覚に入る。元々、自分の記憶にそこまで興味を示さなかったからこそ、もっと早く気付くべきだったと多少の悔いは有る。もう一人の私を忘れ、取り残してしまった…

でも、それも今日で終わった。

仲間と供に蛇女の誇りを取り戻し、掲げようとする私も――妖魔を殲滅する強さに固執する私も、両方が私という存在で出来ており、私を映し出しているのだ。どちらが欠けても意味がない、だからこそ…私はもう一人の自分と供に未来を駆け抜け斬り開く。

「両姫の妹、両備と両奈…ただいま戻ったぞ」

雅緋の慈愛に満ちた声に、面食らう二人は声を詰まらせてしまう。言葉が出ない。今までとは雰囲気も強さも違う雅緋は、まるで何か強さを手に入れたような、そして…最愛の姉である両姫の言葉を、自ら口に出すとは思いもよらず。

「忌夢、待たせたな。どこまでも美しく、私の側を支えてくれた、私の無くてはならない…親友」

「が…あ……ああッ、あ…」

凶暴、正しく妖魔に似た忌夢は獣の如く叫びながら威嚇をするも、雅緋はそんなものどうでも良いと言わんばかりに、優しい笑みを浮かべる。

「すまない忌夢、リーダーのくせに私は…お前の苦労も心情も知らず、負担をかけさせてしまって…禍魂が復活したのか、覚醒か……いや、これは忍術の暴走か。

こうなってしまったのも私か…まるで、あの時みたいじゃないか」

両姫が殺され、怒りに狂った自分は血界突破を使役し、命の限り暴走を繰り返していた。そして、妖魔になりかけてた私を救ってくれた

のが、血界反転をした忌夢…お前なのだろう？
「だが安心しろ…私が戻ったから、もう大丈夫さ…な？戻ろう、皆んなの所へ」
「雅…緋……」
　忌夢の禍魂が、浄化していくかのように少しずつ消えていく。だが、完全に消え去ることはなく、紫が亡くなったという現実が突きつけられた現在、忌夢の心はあと一歩といった形で晴れはしない。
「ゲェアァ゛ァァ゛ァァ゛ァァ゛ァァ゛――ッ!!」
　けたたましい雄叫びが、二人の和む会話の空間を引き裂く。
　禍魂の忌夢にズタボロにされてた妖魔は体に負傷を負いながらも、殺意を孕ませた拳を振るおうと飛びかか――
「貴様は黙ってろ、トカゲの分際が――」

　るも、雅緋の威圧感ある眼光が、大砲の如く放たれ、全身に痺れが伝わった妖魔は地面に着地した後、距離を取るように後方へ飛び去った。初めて、相手から放つ威圧に恐怖を覚えた妖魔は、何が起きたのか訳わからず、暫く放心状態になってしまう。
　ただ、睨んだだけの押しつぶされる圧迫感は、妖魔からしても予想外だったろう。
「ぼくは…ぼ……ぅぅッ……！」
「忌夢、いっぱい辛い想いをさせてしまったな……だから忌夢、これが終わったら――親子丼を食べよう」
　えっ？
　たった一つの、優しさと温もりの言葉に、忌夢の瞳は光を取り戻す。これは、自我を取り戻したものなのか、興奮状態による気性の荒さは沈静化していき、体全身の強張った筋肉が解けていく感覚に陥る。
　忌夢の禍魂は紫の拒絶とは違い、彼女の場合は紫を失った喪失感と罪悪感、そして妖魔に対する膨大なる怒りから生まれたもの。ネガティヴに関しては禍魂の根元の原因なので、共通点が一緒なのは別に問題ではない。

制御できない禍魂を抑える対処方法は
一つは簡単、それは処罰すること。平たく言えば殺処分、殺してしまえば何ともないと言う、シンプル且つ殺伐で一番に好ましくない方法だ。
一つは原因となった根元を解決させること。解決する方法の大半がそうなった元凶によって打開することも可能なのだ。
一つは禍魂とは真逆、ポジティブでありネガティヴなかのとすらも上回る感情。これは相手次第だが禍魂とは怒りとネガティヴによって発生したのだ。ならばその歪んだ邪悪な気を取り消せば良いのだ。尤も、余程のことでない限り禍魂の暴走はあり得ないので、それを上回る衝撃を与えるのはかなり骨が折れるだろう。
しかし、雅緋が記憶を取り戻したのならば、彼女が生きて心の奥底から忌夢と向き合うのなら、禍魂の暴走が治るというのは、あり得なくもない。

「前に約束したじゃないか、私の親子丼が食べたいと。なら、お前が死んでしまえば、食べさせてやることが出来ないじゃないか」
「雅緋…」
正気に戻った忌夢は、瞳を潤わせる。紫を失った怒りは微かに残るも、それ以上に雅緋の優しさが嬉しかった。嘗て、記憶を取り戻し自分のことを見向きすらしなかった彼女に対して、しょうがない、でも元に戻ったようなもの、と勝手に認識していた。しかし、今を観ればわかる。彼女は、今と昔の彼女なんだと。
そして、未来に向かって刃を掲げる彼女は、完全無欠な雅緋だと。全てを知っている忌夢だからこそ、解るのだ。
「だから先ずはゆっくり休め…後のことは私に任せろ」
優しく頭を撫でる雅緋に、これまで蓄積された疲労感と過大なる負担が押し寄せ、瞼を閉じる。また…雅緋が暴走でもしてしまったら…と、ふと脳内に過ぎるがその心配もなさそうだ。
今の雅緋は誰よりも強い、きっと両姫よりも強いんじゃ…少なくとも、この妖魔に負ける要素が何処にも見当たらない。大丈夫…雅緋な

ら、きっと。

「さて、両備と両奈。二人は忌夢を頼む」

「えっ、あ…うん」

気絶し眼を閉じてる忌夢に、雅緋は二人を呼び抱え込ませる。浮かない顔を立てる二人は、何も言わずに忌夢を抱え込む。安全な場所へ避難しながら、せめて見届ける必要があると二人は判断し遠くながら雅緋を見つめる。

「……すまんな、待たせて貰って」

忌夢から妖魔へ意識を変えた刹那、声色が変わる。言葉に重みが増し、憤怒の感情が表に出る。絶え間ない怒り、これは…母上が殺された時から既に消えることのないものだ。

「……そうだな、お前は負の感情を好んでるんだったな。だから、態と人を弄び、壊し、愉んでた。そうだろ？

――言葉は、分かるんだろ？」

雅緋の問いかけに妖魔〝憑黄泉〟は何も動じず、図星を突かれたように急に静かになる。雅緋の放たれた常人ではない力量の気配を放たれたからか、自分の敗北が見えてるのか、はたまた見透かされたことに対しどんなリアクションを取れば良いのか、少なくとも先程の凶暴な妖魔から〝余裕〟という顔は完全に消え失せていた。

有るのはただ一つ――コイツを殺すこと。

「憑黄泉、お前は何がしたい？なぜ人を殺める？

何がお前という存在を創り、生み出した？人の不幸を見て楽しいか？」

マグマのように煮え滾る怒りを通り越した言葉を孕ませ、妖魔に問う。嘗て母を殺めた妖魔、嘗て両姫を殺めては悲劇を生み出した妖魔。天竜衆の名前にどのような意味が有るのか、存じてはない。だが、イザナギと呼ばれた妖魔が両姫を殺めた理由は、あの場の流れを観てて言える言葉は

――ただ、普通に殺した。

偶々そこにいた。

特に理由はない日常茶飯事。

邪魔だったからつい。

あの妖魔はこんな程度の軽い認識だったのだろう。今ならより強く実感出来る。別に両姫を殺したことは、雅緋自身怒ってはない。忍の定めは死の定め、幾重もの忍が妖魔との戦闘で敗れ、命に危険を犯し帰らぬ者となったのは紛れも無い真実。

だからこそ両姫が死んだのは、忍の定めに沿ったものだろう…だが、それはあくまで雅緋自身という話で、仲間を悲しませた怒りは想像の遥か何十倍にも重いだろう。

「死した命は戻らない。お前の、遊び道具として存在してるんじゃないぞ私達は」

本来、雅緋は余り他人に質問を下す主義ではない。

何故なら、それぞれ皆は背負う価値観が有って、己の信念の刃を掲げてるからだ。時には自分みたく他人に話せない事情だって存在する。そう言った意味も含めて彼女は、基本的に他人の心を探ろうとはしない。何処かの、心の隙間に寄せ入るような、巨悪とは違う。

雅緋の義憤を募らせた言葉に、脳内がフラッシュバックする。

『ハハハッ、妖魔よ。私が一匹残らず滅してやろう！我が名は――神楽。終焉を刻めし者――』

『貴様ら妖魔は、一匹残らず駆逐してやろう！愛する神楽と供に！』

『失った命は二度と蘇らない。命とは尊い者…お前達妖魔の罪は決して誰にも許されない。忘れるな――私は何度でもお前の首に刀を振るおう』

これは、何百年前の話だ？

だがこれは決して己が体験したトラウマではない。妖魔の遺伝子

細胞が、記憶に刻まれているのだ。
だからこそ、雅緋から放たれる威圧はそんな先代達に引けを取らない強さに、動揺を隠せないのだ。まるで別人のように強く急成長を遂げた彼女は、妖魔からの視点では明らかに異常。
「……――」
意を決した妖魔は、覚悟を決めて全身に力を入れる。
ゾオォン！と聞き覚えのない効果音を発する妖魔の気は、増大に膨れ上がっていた。
妖魔の竜鱗と呼ばれる硬い皮膚からは紫色の毛が腕、頭部、膝から生え伸び、少し気色悪く思えてしまう。これは、紫の毛…つまり、他者の血を吸って己の者として扱う生態系…ヤツの生体がどんな風に構成されてるかは不明だが、別に対してもう驚きもしなかった。
前に、イレギュラーな存在とご対面し、闘ったことがあるからだ。ここまで言えば何の意味を指してるのか、解るだろうから皆までは言わないでおこう。
「カァァルァァァァァ…ッ!!」
蛇に似せた低く唸り声を上げる妖魔の野生的な威嚇。全身全霊を込めて嬲り殺しにかかる気なのだろう。対する雅緋は微動だにせず、刀の鞘を硬く握り締める。この心地いい感覚、妖魔との戦いでは絶対になかったこの温もりは、記憶を取り戻したからか、それとも…日神ノ紋章が発動したからだろうか、太陽を連想させる日輪の模様が、頬や胸、そして首からと侵食するように現れていく。
以前の暴走とは違ったこの紋章からは、光の温もりが体内に沸き、心地良くしてくれる。凄く調子が良くなり、今なら余裕で傀儡を相手に死体で本物の山が作れそうだ。
「雅緋、悪の誇りを舞い掲げよう！」
その言葉を合図に、再戦に入る。
雅緋が先か、妖魔が先か、双方は地面を蹴り間合いを詰める。雅緋の拳が、妖魔の拳が衝突し、空間が揺さぶるよう衝撃の余波が生まれる。
雅緋の腕はともかく、何度も戦を交えた妖魔の腕は既に限界を到達

し、腕が弾け飛ぶ。
「ッッッ!?アガァァァァァァァァァァァァ!!?!!アァァァァーーーッッ!!」
消し飛んだ腕に猛烈な痛みが現れる。一方で雅緋の腕は健全といった形なのか、それらしい傷跡は見当たらない。肉の形を保っている。
(もっと血流を早め、限界の壁を越えるんだ…!意識しろ、体中の熱と呼吸、血の流れ、一つ一つの細胞を…!)
意識を集中すればそれ程に、雅緋に浮かぶ日神ノ紋章が浮かび上がる。瞳の色は赤くもあるが、血のような淀んだ色ではなく、まるで灼熱の炎を曝け出していた。
「憑黄泉ィィィィ――!!」
「ガァエエエエエエ――!!」
双方は吠える。
唖み、怒り、荒げ出す。
太陽の使いと、月の使いは、お互いの使命と意思を持ち、ぶつかり合う。
「絶・秘伝忍法――【闇に染まりしＤａｒｋｎｅｓｓ】」
光のない欲望と絶望の漆色が、全てを飲み込まんとばかりに憑黄泉を闇に染め上げる。黒の豪炎は辺りの空気を吸い、温度が急激に変わる。その炎の海を脱出しようと跳躍しようにも、炎に重りがついてるかのように、鈍くて余り動けない。これは…?
「そらぁッ!」
パァンッ!と風船が破裂したかのような音と供に、妖魔の顔面が歪む。首に嫌な音が鳴り、骨の軋む音が鮮明に聞こえたような気分だ。そして何よりも雅緋はこの一定空間の中で、闇の炎を前に何ともないような動きをしている。まるで自分の絶対領域だと言わんばかりに、平然と。
本来ならば自分の能力によっては無差別で己にも影響を与えかねない能力だって存在する。耐性があるものもいるが、雅緋の場合はそんなレベルとは少し違うような気もする。
「絶・秘伝忍法――【罪を滅ぼしｒｅｑｕｉｅｍ】!」

ザシュッ！ザシュッ！肉斬る音、血飛沫が飛び散り青紫色の液体が炎によって蒸発し、妖魔の前身は黒焦げだ。なすすべなく、意図も容易く人間に葬られるなど、これまであっただろうか？

「ガァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ーーーーッッ!!」

妖魔術――【禍魂九頭龍覇衝】

紫の忍術・禍魂と総司の忍術を取り込み解放させたこの異能は、周辺の全てを禍魂と尻尾の鎖鎌を振り回し、空間の全てを支配する。衝撃と鎌鼬の合わさったこの忍術は最適な様子で、雅緋が一面にばら撒いた漆色の業火は掻き消されていく。

鬱陶しい灼熱の炎を退かすよう、振り払う尻尾を雅緋は

ザンッ――と何の変哲もなく、平然と無慈悲に刀が下された。

クルクルと何回転かしながら跳ね飛ぶ尾は、宙を舞い、炎が灯り、焼き尽くす。

「アガァバッ!?」

突如として呆気なく尻尾を切断されたことに戸惑う様子を見せる憑黄泉は、切り落とされた尻尾に視線を移す。

斬り落とされた尻尾は燃え続け、動くことが出来ない。憑黄泉の尻尾は虫の神経のように生命力が有り、切断された後でも活発に動くし、斬り離されてからも三日三晩は通常に動く。そんな妖魔の尻尾が、微動だにしないのは、明らかにこの女性の忍が原因であるというのは、率直で理解した。

「絶・秘伝忍法――…」

そして雅緋は黒刀を妖魔に差し向ける。

この見慣れないようで懐かしいような構えは…

「ク、ク…ゴ…ヤハァ…？」

憑黄泉は口の中に溢れる血を流しながら、何かを問うように口を開く。言葉が聞き辛く、雅緋は何を言ってるのか解らない様子ではあったが、躊躇することなく動作を緩めない。

「【妖魔を罰せしＰａｒａｄｉｓｅＬｏｓｔ】!!」

瞬間――憑黄泉は想像を絶する猛攻を食らう。
視界がブレ、肉片が飛び散るように血飛沫が激しく飛び、痛覚の伝達が送り切れない程に遅い。
黒炎と光炎の、白と黒を司る炎の拳の乱打が、憑黄泉を滅するまで殴り続ける。何か打開策を打とうにも、この連打の打撃を、瞬間火力の高い猛攻を食らうのは、妖魔でも身が持たない。肉が保てず肉面が剥き出し、骨が何本か折れてしまう。
「ガッ…ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ーーーーーッッ!!」
憑黄泉の断末魔。
痛みという感情から湧き出る悲鳴。
先ほどの立場とは真逆な状況。
何より気に食わないのが、雅緋の感情が憎悪や悪意ではなく、感謝と透き通った純粋な負の感情とは真逆な味…
それは、憑黄泉が最も嫌厭する優しい感情だ。
……気にくわない。
実に腹ただしい、なぜ怒らない？
殺意を向けろ、悪意を募らせ、憎悪を蓄えろ、なのに…なぜこの人間は、こんなにも心が綺麗なのだ…??

「雅緋ちゃん、凄ッ…」
「雅緋…一体何が……」
安全範囲…と問われると何とも歯痒く答えづらいが、両備と両奈は被害を受けない範疇でソッと眺めていた。
先ほどまで手も足も出ず、歯が立たなかったあの妖魔が、まるで赤子の手を捻るかのように、優勢な立場で葬ってるではないか。妖魔は断末魔を叫び、雅緋は悪への哀れさと、善意から来る怒りを込めて、妖魔を滅多打ちにしている。
たった記憶を取り戻したという、二人にとっては訳分からない状況だったが、たったほんの数秒で雅緋が変わった。以前よりも強くなった、それだけは確かだろう。

なぜだろうか、不思議と妖魔が憎くない。
母を殺めた仇なのに、あの日をキッカケに、妖魔を怨み滅する為だけに鍛錬を通してきたのに…今の私は、心が清らかだ。まるで太陽の光で負の感情が浄化され、清らかになるような…穢れを落とし、汚れを消すような、そんな感覚が私の心の中で満たされていく。
もう一人の自分と向き合い、一緒になったからか、どんな理由があろうと、確かにこれは異常…とも呼べるものだろう。だからと言って母を殺した罪を許すかと問われるとそうでもない。
実際に妖魔は許してない、しかし昔ながら私怨は混ざっていない。私の心はただ、カグラとなってその使命を全うし、闇夜に生きし化け物を討つだけだ。
ただ、それは…皆んなが願ったこと。
コイツだけでなく、大勢の忍が妖魔という存在に命を落とした。そんな忍の血が、私の中で流れていく。
「血界突破…それは忍の血を取り組む危険な禁術だ――しかし、他者の血を取り組み己の力として扱うことができるとすれば??その血の量が、全ての血が流れてるとしたら?前世の忍や、今を生きし忍の血を、私が吸収すれば?その力は無限に膨らむんだ。だから、私は妖魔を討つべく努力を惜しまず励み、取得した。
さァ、覚悟しろよ――今の私は限界という概念は無い」
血界突破――発動させることで大量の血を体内に取り組み戦闘力を上げるこの忍術は、カグラの血も混ざっているのだ。つまり、今克服した彼女はカグラをも超えうる存在と成り果てた。
それこそ、オールマイトやオール・フォー・ワンとですら良い勝負が出来るのではないだろうか。問題は時間によるタイムリミット…永遠に血を摂取する訳ではないので、体力面や精神面でもいつまで保つかは解らない。
「……」
憑黄泉は察した。
どう足掻いてもこの女には勝てないのではないか――と。血界突破……今の雅緋は大勢の忍が流した血を己のモノとし力を身につけ

た、それはつまり、雅緋には今大勢の忍達が彼女の血肉と化し戦ってるというなのか？

……これは、非常に不味い。

しかし、マスターからの命令では蛇女子学園を崩壊させろとのこと、選抜メンバーが最低ライン。それすら合格に達してない上で逃げてもその先はどうすれば良い？

雅緋の絶・秘伝忍法を諸に浴びながら、静かに生き永らえる可能性を捜索し打開策を考える。

私は、大勢の人間に守られている。

雅緋は心の中で呟きながら、振るう拳を一切緩まず、休ませない。一撃一撃が全力、それはまるで雄英高校のＵＳＪに襲撃した敵連合の脳無戦を沸騰させる。

肉削る拳の打ち合い、どちらも劣らず全力の限りで振るう拳の嵐、今の雅緋は正にその立場に置かれていた。拳を打つだけで衝撃が生まれ、妖魔の骨が、鱗が、肉が、抉れながら打ちのめされている。灼熱を灯したこの拳は、光と闇を司る。

しかし、この禁術が無事に扱えるようになったのは、仲間のお陰でもある。

忌夢が、紫が、両備が、両奈が、私の背中を支え、付いてきてくれたから。こんな訓練と強さにしか興味もない、女性らしさの欠片さえ感じさせない、男らしい私を、仲間という存在が満たし、心を潤わせてくれるから。その想いに応えようと、自然と力がみなぎり湧いてくる。

私は一人じゃないんだ――私の背中には、仲間たちの想いが沢山に詰まっている。その光には、忌夢が、紫が、両備が、両奈が、鈴音先生が、父上が、母上が、手で背を押し助力してくれる。

忌夢――昔ながらの幼馴染であるお前だからこそ、お前まで命を落とすことを恐れ、冷たく厳しめの言葉を浴びせてしまった。あろうことか廃人になった私に世話をしてくれたお前には、感謝の言葉でいっぱいだ…

紫――お前は引きこもりで、よく暗い場所を好むよな。まるで冬眠する熊みたいだな…だが、姉の為に私のために、そして蛇女の為にと勇気を振り絞って部屋から出たお前を、賞賛する。大勢の人間からすれば小さな蟻の一歩だろうと、私たちからすれば大きな第一歩だ。私たちのために戦ってくれて、有難うな。

両備――もし私と忌夢が忍学校を卒業したら、その時は両備、お前が選抜メンバーの筆頭となり、皆んなの手を引っ張ってほしい。お前は座学に於いても戦闘においても優秀な面がある。リーダーらしさも備わってるし、お前なら蛇女の未来を任せそうだ。嘗て、両姫が月閃の選抜メンバーの筆頭として月閃を導いたように。

両奈――お前は…個性的というか、特殊な性格なんだなと思う。だが、お前は優しくも強い。巫山戯てるようにも見えるが、初めてお前と刃を交えた時は面食らったことでさえ鮮明に覚えているぞ。

その優しさと強さは、お前たち二人の姉――両姫を沸騰とさせる。

鈴音先生――短い間でしたが、この私にご指導を有難う御座います。私たちが強くなれたのは、先生の厳しい指導有ってのこと…貴女の恩義に応えるべく、カグラとなって妖魔を討ちます。

父上、母上――こんな私を、ここまで世話をし育くみ、なんて言葉を掛ければ…

母上は私のせいで、妖魔のせいで、尊い命が消えてしまった。その責任は私が取ります。だからあの世でも観てて下さい。私は仲間と共に未来を目指し、明日を斬り開きます。

そして有難う有難う――もう一人の私よ…

「ミヤビィィィィイイーーーーーッッ!!」

刹那――妖魔のけたたましい咆哮と供に雅緋の名を叫ぶ。

まさか…コイツ、今になって言語を…?

死の淵まで追い詰められ、決死の覚悟で叫んだ声なのか、はたまた妖魔による進化か…理由は定かではないが、どうやらイザナギで無く

とも言葉はともかく喋ることも出来るらしい。
「オママ…ミヤ…ビィィィィィ!!ミヤビィィィィィィィ!!オデ、オデはハ!ま、マハ…マァダ…!」
「自分の死に際に対抗するべく、ついに言語まで身に付けるとはな……」
「ミィィィやァァァーーービィィィィィィィ!!」

血に混ざった大声を出しながら、憑黄泉は雅緋の腕に喰らい付く。
「クッ……!」
「ガムッ――グジュル!」
雅緋の腕は微かに止まり、妖魔は休むことなく顎を働かせ雅緋の腕を食い千切ろうと目論む。発狂し、理性も何もかも吹き飛んだ妖魔は、一心不乱に雅緋の排除を試みながら、本能が生き永らえる術を持つべく脱退することを命令する。しかし雅緋を消さなければ、追われてはいずれ屍となるのがオチだろう。
「だからなんだ――」
覇気のある声に、怯えは無い。
強者の瞳は、揺るがない。
深淵は、妖魔を赦さない。
雅緋は片方の腕で憑黄泉の腹部に強烈な拳を炸裂させる。そんな妖魔は思わず口を離し、それと供に己の血を吹き出すも、関係まいと打撃を与えることに集中する。
それでも我武者羅にと腕を千切るべく、食い付き、自身の首を無理矢理と言った形で捻じ曲げ、デスロールする。腕に悲鳴と絶えない血が溢れ出るが、関係ない。
「妖魔…憑黄泉――お前は、嘗ての私だ」
意を決した雅緋は、妖魔にそう告げた。
「血界突破に失敗し、妖魔になり…暴れ狂う化け物……忌夢がいなければそんな未来もあっただろう。そして己の力に固執する姿は妖魔と変わらない。

だからこそ、そんな者が私を、お前を生み出してはいけない。これ以上、お前たちの好きにはさせない。だから――」

光と闇が、一つに収まるようにと集合する。

本来は、陰と陽、光と闇、白と黒は交えない存在だ。対照的で、意味も反対で色も違う。忍の善と悪が交えない、隣り合わせと同じ例え。しかし、雅緋のソレは――可能にしてみせた。

善と悪が分かち合い、交えることがあり得ないという不可能を――血界突破の新たな忍術で発動させた。

「生・秘伝忍法――【白と黒のＤｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ】」

さぁ、終焉へ――

１５０話「妖魔との終戦」

全てを白く包み覆う光は、厳しくも有り、闇に容赦はない。
全てを染め占める闇は、優しさも有り、光に容赦はない。
白と黒のワルツ――光と闇が混ざり合った瞬間、何が起きるのだろうか？そんな魅力的であり且つ、摩訶不思議な現象を目にすれば、殆どの人間は息を呑むのではないだろうか。
幻想と魅力的な光と闇は、合わさり混ざることで球体を創り出す。その中には忍文字で記された古文が描かれており、幾ら無限の成長と進化を遂げる妖魔とはいえ、初めて見る物は理解が出来ないらしい。
「全ての妖魔に万の責め苦を――」
さぁ、もう楽になれ。
口を開かずとも、雅緋の意を汲み理解した妖魔は漆の瞳でただただ、彼女を見つめる。
これから、何が起こるのだろうか？見たことのない忍術に、恐縮と不可思議に思う妖魔は暫く放心状態となり――
白と黒の球体の檻に閉じ込められる。

「オ、ア…アア、アイエェェ…？ミヤ…ビビ…？」

「じゃあな、悪しき化け物。せめて、お前が犯した罪は地獄に堕ちて償えよ」
軽く、見下ろすように言葉を言い切ると、雅緋は木片を潰すよう握りしめ、光と闇の球体は黒と白の色を発光させる。モノクロにして光の強度が高いソレは、蛇女子学園を照らし、空をも染める。

「さぁ、終焉を――」
瞬間、白黒の球体は過激な光を増し、憑黄泉の様子が大きく変化する。雅緋の【白と黒のＤｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ】は、光と闇を混合させ球体を創り出すことで、対象に向けて檻として閉じ込めることが可能だ。そこかはは簡単、光と闇の光線が檻の中で反射を繰り広

げ、万物を滅するのだ。属性の反響、反射と絶対回避不可能の衝撃、絶対に救からないと言う監獄の処刑にすら相応しいソレは、まるで妖魔の公開処刑だ。人間でいう命綱も何もない手ぶらな状態で、檻の中で鮫と水泳をするようなもの。

「グゥ〝ゥオ〝オ〝おオアああ〝あ〝アぁァアあぁぁぁぁあアァァあァァァアああああア――ッ!?!」

生まれて初めて味わう感触。

表現し難い痛覚に喉が枯れる程の大咆哮。

死に抗い逃れようともがき、大発狂。

そこはただ、死を証明付ける為の己の死――待つのは終焉という生涯を終える事実だけ。

妖魔の死という決定打された未来は、変えることが出来ない。ソレを為す術を持つ力は持っていないし、彼女が血界突破を成し遂げた瞬間――既に勝負は決まっているようなものだ。

何百年何千年近くの忍の血を摂取した雅緋と、生後一ヶ月の妖魔とでは、まず勝負にはならない。完全に赤子の手を捻るようなものだ。

「オォォオ〝オ〝オ〝オ〝オ〝オ〝オ〝オアア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ァァァーーーーッッ!!ミアビィいいぃあぁぁぁーー!!!」

恨みたらしく、憎悪を募らせた大声で、何度も球体の檻を殴りながら、断末魔を上げている。

天から与えられしソレは、救済か――或いは罰か。

光は妖魔を赦さない。

闇は妖魔を赦さない。

白と黒の存在は妖魔を逃がさない、赦さない。

さも雅緋の心情を映したような、神々の光景を垂らしながら、妖魔が滅されていく。

――オ、オデはハは…マ、マァハダ…

己の死を迎える真中、憑黄泉の脳内に様々な記憶が蘇っていく。

光に照らされ、フラッシュバックを起こすその記憶は――

『はいは～い、????ちゃん。この子が新しいお友達だよ～』
『わぁ～♪すっごく可愛いですぅ！流石は????姉たま！♪またお友達が増えたねぇ♡♪』
『気色悪いなコイツ、オイ。本当に俺たちの手駒として使えるのか？ちゃんと言葉は通じるんだろうな？』
『酷いこと言うじゃない、だったら試してみる？』
『憑黄泉、命令です。蛇女子学園を全滅させなさい。選抜と名乗る方は全員皆殺しにして構いません』

――闇と呼ぶに等しい牢獄で過ごした、微かな走馬灯か。

そして、憑黄泉は打開策が無いと判断し、己の消滅を認め、目をそっと閉じた。喉に血が溜まり、呼吸は叶わず、全方向からの光と闇による猛攻の光線、脱出不可能な現状、妖魔は何も抵抗をせず、己の死を受け入れた。

それと同時に、【白と黒のＤｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ】で創生した球体の檻は、亀裂を生じ、ミシリミシリと嫌な音を立てる。軈て全ての球体に亀裂が繋ぐと、妖魔諸共、弾け飛んだ。

ガラスが破壊されたような音を奏でながら、光と闇は妖魔と共に消え、虚無と化した。先程まで猛威を振るい暴虐を尽くした妖魔の姿はどこにも存在しない。

簡潔に言えば、妖魔は完全に消え去った――そう答えた方が妥当だろう。あの醜い化け物は、血も肉も骨も残らず、この世から消滅した。ただ、その事実が皆を安堵の表情へ変えるのに、どの位の時間がかかったことやら。

「やった……の？」

「雅緋ちゃんの…勝ちで、良いのよね？」

掠れた二人の声に、無言と化した空間は嫌に静寂だ。

風の音や葉が揺れる音、鳥の鳴き声すら聞こえない。先ほどまで飲んで絶え間ない轟音は嘘のように、妖魔の討伐と供に掻き消えていた。

「――終わったぞ、皆んな」

雅緋の静かな言葉に、皆はようやく表情を綻ばす。

雅緋自身も、どこか表情が明るい上に清楚感が漂い、よりリーダーらしい気を感じ取れる。

髪の色は漆色から白へと戻り、翼は弾け飛び、羽毛は宙を舞いながら風に添う。頬に侵食された日神ノ紋章はラインをなぞるように消去され、以前の姿に戻っていく。

血走ったような紅い目は、黄金の瞳へと色が豹変する。それは、妖魔を滅する前の、我らが頼きリーダーだ。

「雅緋！」

朦朧とする意識の中、彼女の名を叫ぶ忌夢は、気絶から目を覚まし、声を上げる。あれだけ蓄積されたダメージと疲労が残る中、雅緋を心配し立ち上がる彼女は正直言って、尊敬すら値する。

「バカ忌夢！あんたさっきまで気絶してたのに無理に起き上がっちゃダメだってば！」

「忌夢ちゃん無理しちゃダメだよ？妖魔は雅緋ちゃんが倒したんだし…ね？」

両姉妹の双子の言葉でも、忌夢の震える足は止まらない。

よく見ると忍装束はほぼ淫らに破れ、腹部には憑黄泉の鉤爪で傷が抉れ、出血が酷い。

直ぐに手当をしなければ、どうなることやら…

忌夢も、確かに妖魔の気配が断たれた事は気付いてるし、雅緋が妖魔を倒したという事実は紛れもないことだと認識しても間違いではないだろう。

しかし、血界突破をした後だ。以前と同じくいつ暴走しても可笑しくないし、今度こそ雅緋が自暴自棄に走ってまで肉体が滅んでしまえば、取り返しのつかないことになる。

「安心しろ忌夢、私は生きてるし、お前のことも忘れてない」

しかし、空から舞い降りた雅緋の温もりのある言葉に、忌夢の心は鎮まる。
「すまないな、沢山お前に迷惑をかけて…
それに、もう大丈夫だ。私は――私を取り戻したんだからな」
廃人から復活を遂げ、蛇女の誇りを掲げようとする未来に生きる私と、過去の記憶として造られ生まれたもう一人の深淵の私。
欠けてたパズルのピースが揃ったことで、完全無欠となった今の私に死角はない。過去と、未来を取り戻し、カグラの道に進もうとする彼女は、過去と今を知る雅緋だ。
「良かった…本当に……良かったよ……」
普段、時に強がりでよく雅緋への愛着を見せる忌夢とは違い、弱々しく泣き崩れる忌夢の姿は、今までにない。
あるとすればそれは、嘗て母が妖魔に殺され、己の浅はかな行動に一生の悔いを残した姿だ。
「雅緋…」
泣きじゃくる忌夢をあやしながら、雅緋は両備の方へ振り向く。少し戸惑いと疑問…に似た顔を浮かべていた。
「アンタ、何があったの…？急にあのトカゲ野郎を赤子の手を捻るように圧倒したり、見たことのない姿に変貌したり……」
「それはだな……」
両備の問いかけに応じようとする雅緋だったが、直ぐにあることを思い出す。
「おい待て、それよりもだ…紫はどうした？」
雅緋の言葉に、この場の三人は凍りつく。
忌夢は溢れる涙を一瞬で止めて、最悪な記憶が頭をよぎり、両備は顔面蒼白と言った感じで青ざめ、両奈はとても辛い表情で目を丸くする。
皆まで言わずとも、三人の嫌な反応に雅緋は薄々と最悪な予想を頭

に過ぎらせる。

まさか…私がいないほんの数分の間に…紫は殺されたのか？

「憑黄泉に…殺され…たのか？」

雅緋の問いに、言葉が返らない。

表情と重い沈黙を察して、ほぼ図星と捉えて間違いは無いだろう。

空気が淀み、ウェイトが増す。

不安から一転し好機に入り、そこからまた絶望の淵に追い詰められる。嫌な冷や汗が頬に流れ、胸の鼓動が秒針よりも早く鳴る。

本当に…紫が……？

「お姉ちゃん…雅緋…さん！」

絶望が全てを支配していた中、聞き覚えのある声が耳を打つ。

心臓が破裂しそうな衝動を抑えながら、目を見開き声の主の方角へ振り向く。

一瞬、幻聴かと思ってしまうも、反射的に動いてしまう。

「えっ、嘘…だろ？」

忌夢の瞳は潤い、揺れ始める。

枯れた涙は再び溢れ返り、脳が上書きされたように真っ白になる。

これは…夢か？幻想か？

だって…今自分達の視界に映るのは…紛れもなく

「だ、大丈夫…ですか？」

忌夢の妹、紫だ――

森林の崖の上は見晴らしが良く、蛇女子学園の天守閣がよく目立つ。
ここは蛇女子学園の見張りが監視をしているため、侵入者を確認すれば直ぐ様警報が鳴り直ちにイレギュラーを排除するよう設備されている。
配置的にも曲者や敵襲など一目見れば解るので、監視としては最適な場所だろう。今回、憑黄泉という妖魔の敵襲に於いて警報が鳴らなかったのには深い理由がある。

「ちょっと待って下さい意味が分かりませんよ?」

何故なら、見張り役の忍学生は全員、一人の少女にやられたからだ。
全身火傷を覆い、見るに惨たらしいその姿は、火葬でもしたかのようだ。とても冗談には聞こえないだろうが、これがまた本当なのだ。
「何で紫が生きてるんです?憑黄泉に殺されてませんでしたっけ?しかも全員死んでないし、何でああも容易く殺されたんです?意味が分かりませんよ…本当」
冷徹で熱の籠らないその声色に、少女は悪態を吐きながら、倒れ伏せてる悪忍を蹴り飛ばす。
「これじゃあ私は何て報告をすれば良いんですか!私一人じゃとてもではないですが…雅緋達を相手に無事では済まないのは勿論のこと、あんなものを見せられては死ぬ確率だって……はぁ」
少女は悩み、頭に手を置く。深い溜息を吐きながら、少女は舌打ちをし踵を返す。
憑黄泉が消滅さえしなければ、回収しようかと思ってみたが、あの四人とまともにやりあっても勝算が無ければ、勝てる道筋が見えない。とても、合理的とは思えない。
「……勝算かぁ」
勝算。
忍として己の道を突き進む時は、勝算なんて考えないようにと、憧

れになろうと思ってたんだけどなぁ…
　でも、あの人は違う――私とはなにもかも分かち合えない。
『戦う前に勝ち負けの計算をする奴は三流以下だ。やるなら命を燃やしてかかって来い。それが、私たちの生きる忍の世界だ』
「生きる忍達の世界…ですか」
　昔の私は、悪忍としてだけでなく忍として生きてきた。
　ただ…忍の使命とは何か？
　忍の生きる業とは、忍とは何か？
　なぜ、命を燃やしてまで刃を交えるのか？
　幼少期の頃から解らなかったからこそ、あの人の圧倒的な強者たるやその誇りに、私は憧れた。
「……いいえ、私の住む世界はもう…」
　ピピピッ！ここで着信音が鳴る。
　端末機を手に取ると、相手から着信が届いてる。私は溜息を吐きながら携帯を耳に当てる。
「もしもし？」
『お前今何処にいる？そろそろ戻って来いって上からのお達しだ、例の件はまだ終えてないのか？』
「ああ、たった今終わりましたよＭｒ。蛇女子学園の件についてなら先に謝っておきます。申し訳ありません、憑黄泉がやられました。思ったより計算外の方向に偏っちゃいましたね。期待の類でしたら、余り期待しない方が…」
『あ～、成る程ねぇ。じゃあ直ぐ戻ってきな！龍姫とトゥワイスから伝達があった。俺たちの仲間になるかもしれねぇ期待の新人がウチにやってくるんだとよ』
「もうですか？龍姫と連絡した時はそれと言ったものは……それに収集も掛かってますし、了解しました。一応、死柄木にもこのこと伝えて下さい。申し訳ありません」
『俺たちは責めないから安心しなよ。何よりも生き延びることが先決だ。一人でも捕まったらアウト、漆月にも一応連絡はしとくが…ってアイツここ１週間連絡に来ねえしなぁ…マジで何やってんだよ』

「お気遣いの言葉有難う御座います。漆月は今じゃ抜忍である我々の筆頭です。彼女がそう簡単にやられるとも思えませんし、ここは敢えて伏せて我慢しましょう。

それにしても――黒霧がいないとこうまで…不便なんですね」

『アイツだって人間さ。一人で無茶なこと押し付けられねぇよ。黒霧も珍しく護衛なしで一人で山林地帯に行くとか言ってたしなぁ。んじゃま、場所はいつものあそこで。本拠地じゃねえ隠れ倉庫でな――蒼志』

ピッ――と着信音を切ると、蒼志は無言のまま天守閣を睨みつける。

噛み殺すような鋭い眼光を放ち、拳の力を入れる。

「やれやれ、今回も徒労に終わってしまった訳ですが……さてさて、貴女達はきっと我々を許さないのでしょうね。憑黄泉以前に、蛇女襲撃の時から、因縁が芽生えた――これが漆月の成長を施す単なる踏み台か…それとも潰すべき脅威の存在と成り果てるのか…何れにしても、私が連合に加入したことで貴女達の立場は不利ですよ」

元蛇女子学園の選抜補欠メンバーだった彼女だからこそ、この場所も、監視を凌ぐことすらも可能だったのだ。

憑黄泉は単に暴れやすくする為に、蒼志が僅かなフォローをしたまでのこと。

「問題なのは……」

「おいおい、どうなってやがるんだ？」

芭蕉から連絡を聞いた小尾斗は直ちにと息を切らして蛇女子学園に戻ってきた。時間的にも距離的にも全力で走っても間に合わなかったので、責められる立場ではないが、それにしてもこの状況はどうなっている？

「憑黄泉が現れたのは…ここで間違い無いんでしょうかね？」
「ああ、確かに闘いの痕の痕跡もあれば、異臭や気配も間違い無い。憑黄泉が、あの化け物が出現したんだろうな」
コートで身を包み隠す不雪帰は、表情を変えず一歩一歩と前に進む。小尾斗は目を細めながら、憑黄泉の気配の痕跡を頼りに歩を進める。何処かに、あるはずなのに、静寂な空気に包まれている。
（……もし、憑黄泉が生きてるとなれば……）
不雪帰は心に微かな不安を募らせる。
彼女は誰よりも憑黄泉の正体を知り、そして嘗ては陽花と同じく日本を守り、妖魔だけでなく悪の蔓延る社会に群れる悪意の存在――敵とでさえ交戦した。
そして…

『君も師匠に負けず、素晴らしい喜劇を有難う。陽花、君の大切ものを全て奪う、だから…君を殴ろう』

途端に、忌々しい男の穢れた顔が、汚れた声が、不雪帰に僅かな怒りの導火線に火をつけようとする。
（愚かな…あの男はもう…捕まりました。陽花も、今度こそ安心して……魂は鎮まったはずです…）
冷気が辺りに漂い、少し距離を離している小尾斗にでさえもその異様な冷気は伝わってくる。まだ夏が終わったばかりなのに、この女性は一切の冷度を変えることなく保っている。
「んっ、おい。アレは…」
小尾斗が見据えたその先は、仲良く抱き合いながら涙を流す選抜メンバーの面々だ。
「何を喜んでるんだアイツら？
は？妖魔がいると聞いたから駆けつけに来たんだぞ？」
「いえ、これは……」
予想外な光景に混乱さえ生じてしまう小尾斗を制するよう、不雪帰は短い言葉を伝える。

「……おい、ちょっと待て。妖魔の反応がここで消えているということは……

倒したのか？アイツらが、あの憑黄泉を？しかも…」

よく見れば、蛇女子学園は崩壊さえしていない。

雅緋も、忌夢も、怪我はしているが、紫と両備、両奈は大した怪我を負ってはいない。紫はせいぜい口から血が流れた跡を残してるくらいだろう。

「となると、どうやら彼女たちが成し遂げたそうですね…」

「……不雪帰」

「？何でしょうか小尾斗？」

「……コイツらにも、伝えた方が良いのかもしれない。憑黄泉の正体…そして、忍と妖魔が今も生き続けるその理由を…

俺たちカグラが真に倒す、本当の巨悪を――」

１５１話「原初」

憑黄泉を討ち果たした雅緋達の前に、腹部を抑えながらヨロヨロと覚束ない足取りで歩く少女は紫。口には流れてた血は拭き取られており、それでも微かに血の痕は残っていた。
「紫…本当に紫…なんだよな？」
涙と嗚咽に混じった声で確認する忌夢に、紫は弱々しくも「う、うん…」と答える。あのとき、憑黄泉の尻尾によって腹を貫かれた紫が生きている。それだけで衝撃的だ。
あのシチュエーションで最後…なんてお世辞じゃない言葉を使うものだから、本当に妖魔に殺されたと決めつけていたが、何とか無事だったようだ。
「もしかして…気絶してた、だけ…とか？」
いや、それは有り得ないと抗議する忌夢は、溢れ出る涙を拭いながら口を開く。腹部と言っても急所では無かったにせよ致命的なダメージを負ったことには変わりない。両備と両奈は気絶していたため、詳細は知るはずもないが、忌夢本人だけが確かに知っている事実。
でも、だとすると…奇跡だったにせよ、よくもまあ生きていたな…と、信じられない余り疑惑が浮かぶが、ここは素直に受け入れるのが筋だろう。
「紫、ケガは無いか？大丈夫か？」
「あ、み、雅緋さん…はい、大丈夫です……み、皆さんは…？」
「私は見ての通り、問題はない……両備と両奈も傷はあるが…」
憑黄泉との戦闘で被害を受けた二人だが、見たところ忌夢ほど重傷を負っているようには見えない。多少の土埃と血が染み付いてはいるだけで、特にこれと言って気にするような傷痕も見受けられないので、一先ず無事と捉えて良いだろう。
雅緋は紫が憑黄泉の尻尾に貫かれた所を直接見た訳ではないので、

安否の問いかけが来るのも不自然ではない。
「紫…良かった、本当に…よかった……」
紫が生きてたことに確認が取れた忌夢は、心の底から安堵の息を吐く。安らぎと涙に濡れた声色に、紫の瞳が潤う。
「私も……生きることが出来て…良かった…よかったよ……お姉ちゃんが殺されてなくて…良かった……」
自分ですら殺されかけてたのだから、最愛の姉だって殺されても可笑しくない。紫は頬を微かに赤く染め上げながら、姉を抱きしめる。
それにもし手遅れだったら、忌夢だって殺されても可笑しくは無かったし、禍魂の暴走による影響で何らかの害をもたらす危険だって低いわけではないのだ。
嘗ての雅緋が血界突破に失敗し、妖魔化しかけた例だってある。暴走し制御の利かない忌夢は妖魔並みの危険性が高まっていたので、何が彼女の身体に危害を齎すのかと考えるのは妥当だろう。
その分、多大なる負担により体の自由があまり上手く利かないのは、禍魂による影響である。
「これで、蛇女のメンバーは一先ず全員無事…みたいだな」
雅緋の一言に両備と両奈の二姉妹は頷く。
これでも、まだ奇跡と呼ぶべきだ。
妖魔との戦闘経験がある雅緋とは言え、それでも憑黄泉に手も足も出なかった自分は確かにいた。忌夢も抵抗するので精一杯、紫、両備、両奈だって妖魔との戦闘経験は皆無であり、ほぼ知識がないと断言しても過言ではない。そんな五人が、憑黄泉と戦闘を繰り広げながらも、ここまで善戦出来たのは、奇跡と呼べる。あろうことか、カグラの段位でもない忍学生の雅緋が、異生物である憑黄泉を葬ったのは、忍社会からしても大きな成果であることは間違いない。
「……ん？」
感動に浸る忌夢は、微かな声で疑問の声を上げる。
安心感から来る紫が涙を流してる真中、忌夢は紫の腹部に視線を落とす。
あれ？

紫の腹部の傷が、治っている？
貫通したお腹は、まるで嘘のように塞がっていた。先ほど手で抑え付け、弱っていたのがただの仮病とさえ思えるほどに、紫の負った致命傷は、消えていた。
（でも……紫は確かに……）
この目でしかと見たのだ。
今でも紫の鮮血が手に濡れた感覚だって忘れない。肉が貫通されたような忌々しい音、残酷に痛めつけられた妹の光景だって脳裏に焼き焦がれている。
それがまるで、そんなことが無かったように…
（紫…なんだよな？……うん、確かに、紫だ。匂いは何時もと同じだし、間違いない）
忌夢は鼻を使って紫の匂いを嗅ぐ。嗅覚が優れてるのは何も紫だけではない、姉である忌夢と言った、禍魂の血を継ぐ血縁者は何故かしら鼻の嗅覚が効くのだ。
焔のように強者の気配を感知するのとは違い、相手の思想や性格などを探り当てると言った特別な嗅覚の持ち主である。なので、忍社会にとって騙すか騙されるかの心理戦に於いては欠かせない希少な能力である。
それでも紫の方が姉より更に優れてるのは内緒である。

（じゃあ……一体、誰が…？）

蛇女子学園の生徒の中で医療を専門とした回復忍法に特化した忍学生は余りいない（そもそもこの忍術を持つこと自体が希少）ので考え難い。更に芦屋と伊吹を始めとした忍学生が緊急警報として安全拠点へ避難させてるので、忍学生の仕業という可能性も大きく低い。
となると、第三者によるものか？紫自体が応急処置できるにしても、こんな重傷を一人で完治するのはほぼ不可能だ。
となれば、何者かが治療したと考えるのが妥当なのだろうか？偽物という線は、嗅覚による匂いで既に看破している。

「なあ、紫…」
「…？お姉ちゃん？」
「お前……その、お腹は…大丈夫なのか？」
「あっ…えっ…と……」
　忌夢の問いかけに、何故か紫は困惑色を浮かべ、オドオドと気を動転させている。何かを隠してるかのような、とても言い当てられては不味いような顔色に、益々怪しく見える。
「紫…一体何が…」
「お取り込み中すまんな――」
「!?」
　忌夢の言葉を遮る声主に、五人は脊髄反射で一斉に振り向く。
　一人は半々羽織を着こなし、腰に鞘を収め悠々と歩く小尾斗教官だ。もう一人は黒き忍装束に身を包み、羽毛の扇を口に当てている女性――不雪帰。
　どちらも冷静かつ、冷たい視線と雰囲気が曝け出している。
「小尾斗教官！……と、もう一人は…？」
「初めまして蛇女子学園の生徒方々……私の名は不雪帰…以後、お見知り置きを…」
　ただならぬ気配を瞬時に感知した雅緋は、背筋を凍りつかせながら声を発するも、害意は無いようだ。不雪帰という女性の圧力、並みの忍の気配では無い存在感に、血が騒いでしまう。
「芭蕉から話は聞いた。妖魔が出現したと聞き、駆けつけに来たが…気配の残り方とお前たちの状況から察して討伐したと見受けられるが……犠牲者は？」
「はい、いません。全員無事です…」
「……ふむ」
　改めて雅緋に問うも、嘘は吐いてない様子。
　更に付け加えれば蛇女子学園の本拠地は荒らされた痕跡は無く、城

は傷一つ付いていない…
　戦闘の痕跡があるのは致し方ないにせよ、犠牲者ゼロで本拠地が無事な上に最小限の被害で憑黄泉を葬った戦績は、素直に賞賛するべきものだろう。
「不雪帰、あの話はやはりするべきなのか？幾ら憑黄泉との関係性が大きく高いとはいえ…この事実はカグラの中でも」
「この者達には話すべきでしょう…憑黄泉を討ち取ったのが現実なら、黙っていられないはずです。脅威を取り除こうと、刃を向けるはずです…その代わり、憑黄泉の妖魔を倒したのは彼女達の戦績には含まれませんが、宜しいですか？」
「まあ一応こいつら学生だしなぁ…将来的にもまだ卒業すら満たしてない奴らに報告しても半信半疑で信じてくれないのもあり得そうだ…それに、下手すれば全員が殺されるケースもある。教官としても金の卵は無駄にしたくはないし、俺でも守りきれない可能性だってある。ここはお前に一任するよ」
　二人の会話にめり込まない五人は、黙ったまま見つめることしか出来ず。会話の意味を察知できない彼女達は話し合いが終わるまで待つことにした。
「重傷者はいませんか？応急処置でも酷い方は残念ですが、病室の方へ…」
　しかし、誰もいない様で、皆は反応しない。
　あるとすれば忌夢だけだろうが、彼女は応急処置を受けて辛うじて聞き取りを出来る状態だ。戦闘なんてしない限りは大丈夫そうだ。
　皆の意図を読み取った不雪帰は「それでは、場所を変えましょう…」と声を発すると、背を向け歩み出す。
　小尾斗は「お前達も来い」と声を出し、来させるように命令する。指図を受けた雅緋達はどうすることも出来ないので、一先ず指示に従う。
「紫、歩けるか？」
「う、うん…なんとか……」
「……なぁ、紫…」

何処か心配そうな瞳を向ける忌夢は誰にも悟られぬよう耳元に近付き囁く。
「お前…妖魔に腹を突き刺されたのに…どしたんだ？」
その言葉に、紫の表情は困惑色に浮かび、答え辛い顔色へ変色する。そもそも、なぜ答えることに躊躇いと迷いが生まれるのか、忌夢にとっては理解できないのだ。
蛇女子学園内の敷地に足を踏み入れた余所者に問題があるにせよ、それでも妹の紫を救ってくれたのならば、探し当てて、感謝を述べたいのだ。
紫を助けた人物がいるのなら、黙っていられない。
忌夢の言葉に――
「……お姉ちゃん、御免なさい。答えられないの……」
紫は答えを出した。
答えない…いや、答えられないというキーワードに多少引っかかるも、第三者の介入によって命を救われたのは確かなようだ。
「紫…何故だい？」
「……これは、お姉ちゃんや雅緋さん達の…為…だから……」
「え？」
自分達のため？
その言葉に益々謎が深まり、思わず目を丸くしてしまう。
なんで、答えないことが自分達の為になるのだろうか？いや、口止めされてるのか？だとしたら一体何のために…
「御免なさい…この話は黙ってて下さい……お願いお姉ちゃん……」
紫の言葉は弱々しいが、眼は真剣だ。
声も震えてはいるが、それでも本気なのだろう…気迫がこもっている。
……これ以上追求しても、答えは得られそうにないようだ。
そもそも悪忍というのは相手の事　深い事情を追跡するのは禁止とされている。
「解った。じゃあ、後からでも良い…もし、話す時が来れば教えてくれ

ないか？心の整理がついたらでも良いし…な？」
「うん、有難うお姉ちゃん」
諦念した忌夢はこれ以上深追いはせず、妹の意見を尊重した。
聞かれたくないことを意地でも聞くのはマナー違反だし、悪忍とは言えど常識は付いてる。
忌夢も引き続き雅緋の後ろ姿を追いかけるよう走っていく。
「……ごめんね、お姉ちゃん……でも、言えないよ。私も、驚いてるし…今でも、信じられないもん……」
あの時の紫は、既に死を迎えていた。
そんな彼女を救った相手が、想像もつかない相手だったから。
そしてこう言われた…
『私のことは決して話すな。
それが、お前達にとっての最善の選択……他言するなよ。お前達が忍として生きたいのなら。でなければ、天に仕える竜に皆殺しにされる。今は必死に奴等の悪事を抗え』
その言葉には、嘘もない真実が込められていた。
アレは一体…誰なのだろうか？
紫だけが知る、予想外な真実。
そのきっかけが、忍の世界観を揺るがしたのだ。
「なぜ、場所を変えるのです？」
森林地帯に足を運ばせる雅緋は、思い付いたように言葉を投げる。
不雪帰は振り返りもせず、背中を見せたまま
「簡単です。本来は知られてはいけない事実を話すのですから」
と、軽々しく声を放つ。

妖魔の件は本来、忍学校を卒業した者にしか知らされない仕組みになっている。妖魔に遭遇した者、または事実を知っても問題ないと判断を受けた者にのみ語られる問題だ。
少なくとも不雪帰の周りの忍が、殆どと言っても良い程に妖魔の存在を知っているものが数多くいる。その中でも、憑黄泉に纏わる真実と巨悪を話すのは、滅多にない。
「それともう一つは、いつ何処で何者かが聞いてるか分かりませんから…貴女達のみの気配だけになるまで、距離を取り、安全地帯で話をします」
そもそも、なぜ憑黄泉を討伐してから直ぐに真実を語ろうとするのかが不思議で仕方ないのだが…私たちに話すということは、それなりに重大なことなのだろうと考えると、不雪帰の行動も一理あるとも言える。
「このことを少しでも他言すれば、俺もお前達に手を下さんといけない案件にまで掛かっている。お前達を信頼してるから話すんだ。良いか、決してこの話は誰にも話すなよ?」
「えっ!?手を下すって…って言うことは…両奈ちゃんお仕置きされるんですか!?わんわん、わおぉぉーーん!」
「アンタは黙ってろ雌ブタ!こんな状況でふざけてる場合じゃないでしょ!?もっと考えて発言しなさいよバカ犬!」
「ぶひぃぃぃ~~~ん♪」
「……俺はお前らが怖いよ、色んな意味で」
もはや性欲に飢えた両奈が色んなことをしでやらかしそうで、心配になってくる教官小尾斗は、頭に手を置き深いため息を吐く。女性嫌い…な肩書きを背負ってる彼が更に過激な両奈の性格を目の当たりにすれば、こんな反応を取るのも頷ける。
「貴女達の強さは…この先を突き進めば全員がカグラになる可能性を秘めている…しかし、それを阻み、同時に脅威として成長している異質も存在する…」
生い茂った木々をくぐり抜けると、荒野が広がっていた。
殺伐とした空間に、草木も生えてないこの場所は訓練所だ。今は誰

も訓練を受けてはいなければ、カリキュラムでは訓練所は使用禁止、つまり座学を受ける時間帯なので、人気がいないのは当然といえば当然だろう。
「ここで、良いでしょう…」
冷気を孕んだ声に、不雪帰はくるりと回り皆を見届けるよう正面に立つ。
「では、話しましょう……貴女達が倒した妖魔――憑黄泉の話を……」
一同は固唾を飲み込む。
静かな空間には風の音すら聞こえない。
鳥のさえずりすら耳に届かない。
まるでそういう風に個性や忍術によって無音化されたような違和感。
「貴方達が対峙した妖魔の名は憑黄泉――害獣、悪魔、竜人、魔物、数々の名が挙がっていた妖魔は、遥か昔…約９００年前から存在が確認されています」
「そんな古い時代からか…？」
「ええ…憑黄泉は他の妖魔と違い、人間だけでなく人工、野生の妖魔など、見境なく襲撃し喰らい尽くす邪悪な存在なのです。これは約２００年前、ティオ・ディアボリクスが初めてこの妖魔の危険性をより強く解明させました。
雑食にして性格は凶暴、知能も高く常に進化を遂げる妖魔の最上位に位置する存在は、忍からもより一段と危険的な認識を示していました。
害獣と呼ばれるこの悪魔は、人の負のエネルギーを好み、食し、パワーアップすることから、人間の悪意を食うと言った異食症に似せた性質を持っているのです」
「そう言えば…両備や両奈の怒りに示して、喜んでた様子も見受けられていたな…」
復讐心、私怨に心を染め、悪意と殺気を向けたことに、大喜びして

たあの妖魔は、単に人の嫌がらせをしていた訳ではないのか。と理解した五人は、納得したようだ。
「だから何だ。妖魔にだって種類があるのは確かだ。だがそれだけが重要な話では無いのだろう？本題を出せ」
急かす雅緋に、不雪帰は取り乱れることなく、冷静を保ち口を開く。
「そう焦らずとも、話します。これはあくまで憑黄泉という妖魔の前提の話をしたまで…この妖魔こそ、忍の全てに関わりを持ち、神楽に大きく関わるのです。
貴女達が忍として存続する原因の一つでもあります。それでも、氷山の一角に過ぎませんがね」
「妖魔を殲滅する…なら、相手が憑黄泉だとしても存在する理由は当然だろう」
「そうですね……では雅緋さん。もしあの憑黄泉が、全ての元凶だとすると、どうします？」
「……なに――？」
不雪帰の想定外の言葉に、雅緋は愚か、他の四人も目を丸くする。
「憑黄泉は先ほど前述したように、他の妖魔とは一線を画す存在…道元や伊奈佐、鏖魔やティオ・ディアボリクスみたく、忍の血を集め、量産させることは不可能なのです」
「……なるほど、他の妖魔と違うと言うのは、そう言うことか」
「ええ……そして、この憑黄泉はまた、貴女達全ての忍が対峙するべき本当の巨悪と深い関係が有ります」
本当の巨悪？
つまりその巨悪とやらが、忍が存在する理由になるのだろうか？
「巨悪…原初の妖魔にして初めて妖魔と謳われ神をも恐れた災厄を司る天災――憑黄泉神威。これが、忍が存在する理由です」
「憑黄泉…神威？」
「ええ…この憑黄泉神威こそ、妖魔の生みの親にして原点。忍が存続し、カグラが誕生した悪の権化です。

日本を脅かし、ある大陸を死の地へと染め上げたこの妖魔は、数々の逸話を残しています」
憑黄泉神威とは――
原初の妖魔にして原点。全ての元凶にしてカグラが誕生した原因の一つでもある。
嘗て大昔、厄災を齎す厄災神として謳われた神が存在したと言われてた。それが憑黄泉神威なのである。妖魔を生み、自身の仲間を増やし、全ての支配者として君臨していた化け物は、神楽と呼ばれる女神と戦を繰り広げたそうだ。
太陽の神こそ神楽、月の神こそ憑黄泉神威。
憑黄泉神威、原初の妖魔が数々の化け物を生み出す意図は、神楽を滅する為である。
己を滅ぼそうとする者を、全滅させる為だろう。

「憑黄泉神威は、己を滅ぼそうとする神楽を滅する為に。神楽は妖魔を滅し、全てに平和を齎す為に…
こうして月と太陽の神が衝突し合い、妖魔と忍が今も存続しているのです」
「待て、妖魔は忍の血が一定量集まってから産まれるんじゃないのか？」
「ええ、半分は正解です」
――半分？他に何が足りないというのだろうか？

「妖魔というのは、忍の血が一定量集まった上に多大なる負の怨念が含まれることで誕生するのです。
忍の血が染み付いてでも、学園内に現れないのは、穢れと言った怨念が無いからです…」
成る程、それは盲点だった。
ある一種の件では、忍になれなかった…または無念に朽ちた忍の負や殺意の怨念が吹き込まれたことにより生まれるらしい。
「憑黄泉神威は負のエネルギーと怨念を喰らう、悪意を好む化け物で

す。これ以上深くは言えませんが、憑黄泉神威は溜め込んだ害意ある悪意を忍の血肉に吹き込むだけで、妖魔を創り上げたと聞きます」
「…不雪帰と言ったか。なぜ、それを知っている？そこまでの情報を、何故お前が…」
「私が言うのも何ですが、実力者には知る権利を与えられます。つまりは、そういうことです」
　そうか…と納得した雅緋はこれ以上口を開かなかった。

「憑黄泉神威…ソイツが、僕たちの敵…」
「ただ、私にも不明な点があります」
「？」
「…憑黄泉神威は、細胞の一つを外へ放出することで、憑黄泉を生み出します。いわば人間でいう出産のようなものです」
「…あの憑黄泉は、まだ憑黄泉神威の氷山の一角に過ぎない…ということか」
「ええ…しかし、憑黄泉神威はあの一件で既に死んだはず……なのに何故……いえ、そもそも我々が今も忍として存続し続ける理由など…」
　憑黄泉神威が滅んだ？
　つまり、死んだと捉えて良いのだろうか？
「まあ良いでしょう……問題はもう一つ、貴女達に伝えなければなりませんね」
「？」
　まだ話すべきことがあるのか？と眉をひそめる雅緋。
　しかし、不雪帰の証言に皆の顔色は変わる。
「憑黄泉は、オール・フォー・ワンを大きく初め、敵連合と繋がりがあります」
「はッ……？」
　素っ頓狂の声を上げ、五人は驚嘆の声を張る。

今、なんて言った？
「敵連合のメンバーと関わっていること自体は詳しくは存じません…しかし、連合のボスであるオール・フォー・ワンは憑黄泉と深い関わりを持っています。何せ、オール・フォー・ワンのコンビが、憑黄泉なのですから」
新たなる事実が、今を脅かす。
憑黄泉が、オール・フォー・ワンのコンビ？あり得ない…しかし、何かの共通点が、そこに存在する。
「貴女達は存じませんか？神野区での激戦と、憑黄泉の戦闘との共通点……それは、他者の忍の血液を吸い、己の能力として扱う性質です」
「あっ……」
両備と両奈、紫の三人は合点が言ったように納得する。雅緋と忌夢は気絶していたので知らないが、オール・フォー・ワンは憑黄泉と同じく他者の忍術を扱っていた。
憑黄泉の妖魔術とやらも、妖魔が扱うからこそ妖魔術と呼ばれてるだけで、変わりはない。
「まさか……ッ！」
「オール・フォー・ワンは、何らかの理由で憑黄泉神威と関わっている、と断言しても良いでしょう」
この情報を知るのは陽花、不雪帰、翡翠、夢幻、カグラ四天王、小百合、そして巫神楽三姉妹である。他に知りうる人間はまだいると言えば存在するが、それ程に大金を払ってでも価値のある情報である。
「私が言えるのはそこまでです…これ以上の真実を口に出せば、貴女達の命は危険に晒されます…」
これ程の情報量に正直まだ混乱している。
敵連合と、オール・フォー・ワンに大きな接点があり、また何故か憑黄泉が出現している…
不雪帰が真実を話すのは、恐らく憑黄泉を倒したという実績が何者かに行き届き、彼女達を邪魔だと判断し矛先を向ける危険性があるか

らだろう。少しでも対抗するべく、強く成長を促すべく、敢えて限りある定量の情報を植え付けた。
少なくとも蛇女子学園は敵連合との因縁が既に芽生えているのだ。何れ、理不尽な悪意と戦うのなら、事前に知らせ、今のうちに力を身につけておくべきだ。
「それと雅緋さん…出来ればですが、血界突破の使用は程々にして下さいね？貴女個人に話が有ります」
「まだ、話があるのか……」
「本来ならば教えてはならない情報ですが、血界突破を取得した貴女ならば話は別……上手くいけば、インターンでも活躍出来ますし、誇りを高く掲げ易くもなるでしょう…」
「インターン…」
確か、校外活動によるものか。
本来ならヒーロー学生が受ける学校行事なのだが、最近は忍との関係やイメージを改善するべく忍学生の参加も許可されてるらしい。
「待て待て不雪帰、俺はそんな話聞いてないぞ。俺は反対だからな？第一、血界突破の発動したアイツが狙われ、他の者達に危害を与えたらどうする？責任は取れるのか？」
「だからこそ、彼女本人と個人で話しておきたいのです……」
何やら意味有りげな会話をしているそうで、此方側は理解できない。小尾斗は半ば呆れたように「俺は知らん…」と一言で言い終える。
取り敢えず話は終わり…と見受けて良いのだろうか。
「皆様もどうかくれぐれも…口を慎むよう…そして、カグラになりなさい。そうすれば何れ貴女達の見る世界も広がるでしょう。私からは話は以上です」
この戦いは、蛇女として大きな成果を上げた。妖魔に一矢報う人材が増えた不雪帰は、微笑を浮かべる。
「嗚呼…そうだな。おい皆んな、聞いてくれ」
不雪帰の話が終えると、雅緋は皆を見渡し纏め上げるよう、宣言する。
「これから私たちが目指すのは、蛇女の誇りと妖魔殲滅だ。憑黄泉を

倒した経験は、今後の戦闘に於いて有意義な方向へ傾くだろう」
圧倒的な強者と戦うことで得た経験値は豊富だ。通常の修行の何倍もの効果をもたらすだろう。何よりも全員が生還してる今だからこそ、伝えれるのだ。
「この調子でもっと強くなろう。神野区では敵連合に一矢報えず、誇りが再び地に落ちた…
だが、ここから先は登るだけ。落ちた分だけ駆け上り、誇りを高らかに掲げれば良い」
雅緋の覇気のある言葉に、全員の顔色が変わる。
「取り戻すぞ！私たちで蛇女の誇りを――これは、私たちの大いなる一歩にして初めて前進した証でもある。憑黄泉を倒したこの事実が、私たち蛇女の誇りを高く掲げるだろう」
敵連合の死柄木弔は、他者を踏み台にすることで自身の成長を施していた。そうすることで己が高みへ赴き、支配者へ着々と近付き、社会を崩壊させる魔の手として脅かしていた。
それに対して、蛇女子学園の雅緋達選抜メンバーは、他者を倒すことで、己の誇りを掲げ、悪の中の悪を脅かすだろう。社会を保つ悪忍が、敵に矛先を向けることで、今までとは変わった戦いになるだろう。
忍として害意のある連中を倒し、誇りを掲げるその姿には、確かに蛇女子学園を背負うリーダーらしさを雅緋には備わっていた。
これが、今の秘立蛇女子学園――今後とも彼女達の活躍が増えそうだ。
これは、初めて雅緋達が悪の誇りを掲げた第一歩だ。連中もバカなことをしたものだ。これを機に、雅緋達だけでなく、総司や芭蕉を含めた補欠メンバーも、成長を促すだろう。
これからもっと蛇女は強くなる。まだまだ蛇女の名を高くするには、時間と労働が必要だが構わない。
少しずつでも良い、焦らずとも、着々と近づいていけば良いのだ
……悪の誇りを――舞い掲げよう。
これぞ――蛇女子学園の躍進だ。

そして時間と場所は移り変わる。
夏が終えてもなお、雪が残るという異常な区域に佇む忍学校、死塾月閃女学館。
大昔から先祖代々の大きな富を引き継いだ有力者の娘が生徒の大半を占めるお嬢様学校。半蔵学院の次に名高いエリート学校にして、善忍学校の中に於いて、ダントツで数の群を上回っているのである。
因みに半蔵学院のように普通の学生は紛れ込んでいないため、全て忍学生の生徒しかいない。
時間は深夜の１１時。
選抜メンバーの大半はほぼ床に就き眠っている。美野里、夜桜、叢、雪泉などがそうで、四季は深夜遅くまで通話をしているのが殆どな為に、部屋は灯が点いている。
今日も訓練を終えた雪泉は疲労から来る圧力に、１０時に眠りについた。
そして１１時近く、雪泉は眠りに就いてる中、少女は夢を見る。

「……これ、は？」
夢…にしては、何処か現実感ある空間だ。
ここまで意識的に夢を見るのは初めてだし、普段なら無意識に夢だと理解するのだが、今見てるこの夢は、そうでもない。
そもそも夢というのは、自分の記憶から影響を受け、映像のように映し出されるのだ。想像力によっては見覚えのない景色があっても、不思議ではないのだが…
今、雪泉が目の当たりにしてるその夢は、見覚えがない。
見知らぬ男性が、和服を羽織ってる姿など見たことがない。和式の部屋に、外の景色は田舎に似た…大昔の光景を曝け出している。

何よりも…これは何の意味を表してるのだろうか。
「ここは一体…」
しかもだ、雪泉はその屋敷の中に、立っているのだ。
此方に勘付いてない辺り、夢であることは間違いないにせよ、只の夢とも考え難いのは、直感で解る。
「すいません！お待たせしました、お茶とおにぎり、出来ましたよ♪」
明るい声が、雪泉の後ろから聞こえてくる。
透き通り、そのまま男性の方へ駆けつけに行く女性は、木製のおぼんを運び、座ると男性に湯気の立つお茶とおにぎりを置く。
匂いこそ感じないが、美味しそうなのは見れば解る。
「……嗚呼、済まないな」
「もう、良いんですよ。これ位の仕事は当然です。それに、もう夫婦なんですから…♪」
夫婦？
となると、この男が夫で、女性が妻なのか…
よく見ると男性は赤ん坊を抱きかかえ、あやしている。
「お前は子育てに家事がある…俺はただ、旅に出て帰ることしか出来ない。それに比べたら、お前の方が無理をしている…しっかり気を休んでくれ」
「そんなことないです。貴方が旅に出るのは、村を襲う妖魔を討ち、人々を救ってる…命を懸けて戦う貴方に、何も出来ない私こそ…」
「違う…」
ズッ…と、お茶を啜る男は、否定する。
「俺はまた、守れなかった。妖魔から人間を…いつもこうだ。俺が駆けつけに来た時は既に人は死に、化け物は血肉を喰らっている。やはり、忍が妖魔を引きつける原因ならば」
「そんなこと、ないですよ？
忍だって好きで妖魔を呼び寄せてる訳では有りません！あの人達だって命を賭してまで、妖魔に抗って…第一、侍だって…」
「猗華月よ、この世界に忍も侍も、本当は無くても良いのだ」
えっ？

雪泉は目を丸くする。
この女性が、死塾月閃女学館を建て、忍として一騎当千を率いた力を持つ、偉大なる英雄なのか。
「忍も侍も…殺し合うだけの仲となってしまった。
ならば、例え私の手が汚れようと…これ以上の争いで尊き命が死なずに済むのなら、俺は刀を振るう。
天竜衆も其れが狙いなのだろう…」
「黒夜叉さん！」
「猗華月、俺はこれ以上お前の手を汚させたくないのだ。この子とも…私のように、何も救えない何も守れない、正義すらも語ることすら許されない私だからこそ、手を汚してでもせめて、多くの人間が争いで命を落とさないように、忍も侍も、妖魔も斬り捨てるのだ。
お前はこんな無価値な私を愛してくれた…だから、せめて俺はお前だけでも、生きて欲しいんだ」
黒夜叉。
嘗て伝説の侍と謳われ、忍からも侍に妖魔すらも敵意を集めた男は、赤ん坊を置くと、立ち上がる。
「許せとは言わない。俺のことを好きなだけ罵ってくれても良い。
何せ俺の行動は、お前の心に灯る正義に背いてるのだ…本来ならば、お前は俺といるべきではない」
何故だろう…それを聞く猗華月だけでなく、雪泉自身も心が締め付けられる程に痛い。
何よりも黒夜叉の背中が、懐かしいのだ。
これはそう…黒影お爺様の背中に似た、小さくて寂しい、あの背中が重なり合う。
「全てが終われば、俺も罪を償う。
忍と侍…もし願うのであれば、手を紡ぎ、供に妖魔を討つ存在になって欲しかった」
その声は余りにも切なくて、誰よりも何よりも、正義と平和を願った侍の言葉だった。
「私は為すべきことを成せない、生きてても何の意味もない、誰も救う

ことの出来ない愚か者だ。
猗華月…そして、華月もどうか、無事でいてくれ。また暫く長い旅になりそうだからな…」
「…黒夜叉さん」

そして侍は軽く言葉を告げると去って行った。
そんな彼の背中をただ虚しく、悲しく眺めることしか出来ない猗華月の瞳は、潤いでいた。
「何を言ってるんですか…私は、貴方に救われたんですよ？
妖魔に殺されかけてた私を、貴方が救ってくれた……私は、貴方に救われたのに…
この子も、華月も産まれたのに…どうして、そんな…自分を責めるように……」
キュッと、赤ん坊の華月を優しく抱きしめる猗華月の表情は、同時に己の悔やみと悲しみを押し殺すよう耐え抜いていた。
黒夜叉さんのお陰で、私は――

「これが、偉大なるお方…猗華月さんに、侍と名乗る黒夜叉さん…」
正義を貫く雪泉という少女は、月閃の原初である猗華月と、正義を貫きたかった黒夜叉の背中を、そっと見守っていた。
何故だろう、どうして…こんなに悲しいんだろう。
これだけ辛く、悲しくて、虚しくて、切なくて、泣きたくなるほどの夢に、自然と涙が流れる。
救いたくても救えなかった侍の心情と、愛する者が離れ行く忍の心情を考えてしまうだけで、心が苦しくなるこの衝動は、何なのだろうか。

次に迎えた夢はとても奇妙で、太陽の陽射しが彼女を照らしていく…。
『これは……私が尤も畏怖すべき障害でした……』
次に投げられた声、そして倒壊された街並とビル――戦争が起きた

とも呼べる程に荒らされた地帯。壁に背を向けながら、血に塗れた女性の遺体らしきシルエットが照らされていく。
「これは……貴女は…一体？」
『俊則さんを巻き込むまいと…一人で全てを背負ってしまった私の、最大の失態……これから、多くの災が、きっと若い子達に降り注ぐでしょう…私が救ってきたもの、それが争いの火種になってしまう……嗚呼、まさか奈菜さんの言ってた『奇跡』にこれほど縋ってしまう時が来るなんて…』
　緋色と白と赤を連想させた太陽を象徴とするドレスコートを羽織りながら、大人の女性は夢の中で此方へ見つめる雪泉を認識し声を投げかける。
『昔の私からは想像もつかない事だったけど…どうか……大変迷惑をかけてしまっている『妹』だけど…彼女を、宜しく…お願いします…。善と悪について、凡ゆることを知ろうとする貴女達なら…黒影さんのお孫さんなら…きっと、どんな苦難が待ち受けても、きっと乗り越えて…私が掴めなかったハッピーエンドを、掴んでいくでしょう…』
　朧気ながらも、死へと近づき、生を終えようとする彼女は、はにかみながら言葉を発し、語り継げていく。
『忍の象徴なんていう不釣り合いな名前なんかよりも…貴女達はきっと、次世代の子供達は私を超えて強くなっていく――誇りを持って、自分の気持ちを主張して……前に進んで欲しい…なんて、死にゆく私がさしでがましい言葉を連なっているけれど……』
「だ、誰なんですか貴女は!?その傷は一体……! いえ、これは…夢？どういう意味を露わに……」
『雪泉ちゃん――』
　すると、血塗られた手が頬に差し伸べられ、触れる。冷たい感触は、体温が徐々に低下していき、今にでも死体へ成り下がろうと、生という火種が消えようとしている、尊き女神の手。
『貴女が…悪忍を恨むのも、理屈も…全部、分かるよ…でも、憎しみを乗り越えた貴女にならきっと……それにね、大事なのは相手を知ること…どれだけ取り繕っても、私達は…自分と相手は理解できない他人

で在ることは当然だから……』
　忍の象徴からして意外な言葉が発せられる。聖人君子で在る彼女から放たれた言葉は、人とは他人であり理解できない存在であると。
『それは、善忍と悪忍の立場になっても……同じこと。だから、お互いを通じることで、自分を知り…自分という存在を知って……相手を知ることが出来るから……否定ではなく、受容が…大事だよ……強さでも、経験でもない……自分がそうしたいと願った、道が…』
　――最初はお互いが他人であり理解できないのは必然である。それまでは自分でさえも未知なる存在であると。然し他人を通じて、初めて人は自分を知り、相手を知り、自分と相手の何かに、未知に気づき、お互いを通じ合うことで理解を深め知っていくと。こうして仲間が、人との絆が紡がれて、未来へと道を照らしていくのだと。
　忍の象徴と呼ばれる女性は選択肢を誤った――一人で全てを抱えてしまった、この世界で生きる一人の女の子は、とある黄金時代に名を馳せた魔王と、その協力者によって殺された。
　そうして言葉は途切れ、眩ゆい幻想と共に消えてゆく。雪泉は『待って――』と声を投げかけようと、手を伸ばそうとした途端、再び景色は移り変わる。

『……ごめん、俊典さん』
　それは暗闇の空――破壊し尽くされたボロボロの街。雄英高校らしき学校は崩壊され、月閃女学館も、蛇女子学園も、半蔵学院も、ゾディアック星導会も、全てが破壊され尽くした、最早別世界と読んでも過言ではないほどに、荒み朽ち果てた、絶望彩る世界。
『陽…花くん…なにを……――』
『御免なさい…本当に御免なさい……生まれてきて御免なさい…生きてて御免なさい……私なんか、菜奈さんと出会わずにあのまま餓死してたら…皆んな救われてたのに…』
　雨降る真夜中――多くの死体が転がり、破滅へと導く残酷な、とてもヒーローと忍が協力し合おうとしてた世界とは全く違う、絶望の残滓が漂う歪な、破壊された後の世界。

陽花と呼ばれる女性は、容姿は似てても何処か幼さのある雰囲気を晒していた。大人ではなく、雪泉や飛鳥と変わらない程の成り立ち。だが違う点を挙げるとするならば――緋色に輝いてた綺麗な長髪は、全てを塗り潰す黒色と、白と赤を強調としたドレスコートもまた、光を失った残酷さと無意味を表した黒色のドレスコートへと変色していた。

刀を差し向けて、ボロボロなオールマイトを…殺そうとしている。

『陽花なんて…そんな素敵な名前じゃないよ……今の私はもう……レグル――』

その言葉が続くことはなく、テレビ画面の映像が突然消滅したかのように、夢は此処で消えてしまった。

すると夢はそこで途絶え、私は目を覚ます。

目を開けると、涙が垂れ落ち、痕が残っている。

「……もう、朝なの…？」

時計を確認すると朝の6時だ。

朝日が窓に差し込み、鳥のさえずりが聞こえる。

クシャクシャと腕で涙を拭う雪泉は、起き上がり洗面所へ向かう。眼は少し赤く腫れており、顔面を洗い流しながら、雪泉は浮かない顔で呆然とする。

何故だろう…あの夢を見てしまった自分は、何故こんなにも落ち込んでるのだろうか。

あれが現実とも言えない、いや…そもそも夢ではないのじゃないかとさえ、錯覚に見舞われてしまう。これは、月閃に残る先代の方達が見せた夢なのだろうか？どちらにせよ、考えてたって仕方がない。

「……いつまでも、こんな顔をしていたらお爺様が心配してしまいますよね…」

よしっ！と両頬に手をパンパンと軽く叩く雪泉は、気合いを入れる。

今日も私たち黒影お爺様の孫である私たちは、いつだって月の正義を貫き、大義を成す。

皆が笑って、安心して平和な生活を送れますように……

「…あっ、そう言えば忘れてました。今日提出しないといけませんね」

書類を手に持つ雪泉は、鞄に入れると制服に着替え準備する。

「さて、私も申請しましょう。できれば、インターンとして採用されれば喜ばしいのですが…」

蛇女子学園の一件を後に、校外活動（インターン）編が、幕を上げようとする。

インターン編
１５２話「インターン、始動！」

憑黄泉に襲撃された蛇女子学園。
予兆のない奇襲とはいえ、憑黄泉と呼ばれる得体の知れない妖魔を葬った戦績は大きい。況してや被害は最小限に収まり、死亡者は数人。とはいえ、この死亡者数は憑黄泉に殺された忍学生ではなく、警備を勤めてた学生だ。
全員見るに酷たらしく焼殺されており、全身が黒焦。警備による警報が鳴らなかったのは恐らく、第三者による介入だと想定している。憑黄泉ではないのか？という微かな疑惑も残っているが、どうにもあの妖魔はまるで狙ってた…と言うより、タイミングを見計らい合わせて襲撃をかました様子だったらしい。
妖魔という化け物は本来、忍との戦闘後によって出現するケースが高く、学校を狙って攻撃を仕掛けるのは滅多にないらしい。
更に不雪帰の話によれば、憑黄泉は敵連合と関わっていると聞く。オール・フォー・ワンと大きな関わりを持ち、コンビだったと聞くが…
何にせよ情報が不確定な上に、謎が多い。そんな連中に対しては恐らく〝何らかの条件や方法で憑黄泉を量産可能にした〟という説を考えていれば良いだろう。
この案件は隠密に調査を進み、追って話すとのこと…蛇女子学園の襲撃も一見は最悪な不運では有ったが、何者かの意図でそうするよう仕向けたとならば、見過ごせない。
一方、蛇女子学園の選抜メンバーの内、忌夢、両備、両奈の三名は酷い手傷を負った為、彼女たちは蛇女専門病院に入院し、治療に専念するそうだ。
……凶暴、暴走、暴力、全てに於いて最悪な要素を蓄えた憑黄泉を

前に「死ななかった」というのは、殆ど稀に見ない。
しつこいかもしれないが、過去に生徒が憑黄泉を討伐したケースは全くない。それなりの実力者がいるにせよ、それは世界の中でもたったの極数十名…相性によれば勝ち負けは変わるし、況してやあの妖魔自体イレギュラーな存在にして例外。最後に憑黄泉が姿を現した報告は、両姫と雅緋、忌夢との戦闘以来だ。
なので入院しても、治療を受ければ退院出来るというのは、ある意味誇っても良い物だ。……別に誇る物でも無いのだが。
因みに雅緋と紫、そして総司は軽傷でありながら命に関わる致命傷は受けていない。
総司は肩を噛まれただけで、止血すれば大したことはなく、芭蕉も背中を打っただけで特にこれと言った問題もない。
紫が唯一の謎であり、腹部を刺され貫かれたにも関わらず、穴は塞がり何ともないことから、一応検査は受けてるそうだ。紫本人も何故か話したがらないらしく、本人曰く「何れ、落ち着いたら話す…」と話を濁られた。
…まあ、無理強いする訳にもいかないし、仲間の意見を尊重するのも筆頭の役目。それに急かさずとも何れ口に出すというのであれば、彼女を信じる他は無い。
一方雅緋は傷こそはあるものの、どれも致命傷には至らず、血界突破の件も含め、一応検査は受けなければならないようだ。
今後とも、体調に悪影響を与える可能性も決して低い訳でもない。そもそも学生云々関係なく血界突破を発動させること自体が体に大きな影響を及ぼす禁術なので、定期的な検査を受けるのは必然だろう。
「無茶をした…にしろ、とんだ厄日だったな」
小尾斗の自然と吐き出した愚痴に、近くにいた雅緋は昨日の一件を思い返す。
幾ら被害が最小限に抑えたにしろ、今後とも妖魔が続出する可能は低くはない。その上、聞く機会すら無かったが、憑黄泉が蛇女子学園を狙った理由も不確定なままだ。狙った理由…目的と呼ぶのが妥当

か、ソレが解らない以上、最善たる対策のしようがない。
目撃者さえいれば、かなり有意義に事が運び、対策案を練れるのだが…
「問題はこれ以上、秘立蛇女子学園の本拠地を荒らされたくないのが本望なんだが……移籍するにしろ、不十分すぎるな。それなりの時間も費やしてしまう…如何したものか…」
蛇女子学園の襲撃が、相手の忍学校による対抗戦や任務などの一環なら解らなくもない。この学園に妖魔の襲撃など前例がない（怨楼血の場合は召喚させたというのが正しいので話は別）。
「暫くは俺も、任務をほどほどにするべきか…余程のことでもない限り、恐らくは大丈夫だが…」
これ以上、本音を言えば蛇女子学園のことなど知ったことではない。こんな自分をも見下していた学校に何の恩義も無いのだが…
（それでも、コイツらをまた憑黄泉の時みたく危険な目に遭わせ、殺されたでは…な。忍とはいえまだ卵、学生だ。コイツらを見殺しにする訳にもいかぬ）
蛇女子学園には興味はない。
学生であるコイツらとは赤の他人。
基は任務の一環で教官を務めてるだけ。
だが…もうそんな悠長な想いでやってられる状況でもないこと位、小尾斗だって知っている。教官だからこそ、任務だからこそ、己も蛇女を守らなければならない。
学生だけではと舐めてる訳でもない。
少なくとも雅緋は、格別だ。
血界突破を取得し、憑黄泉を葬り去った雅緋は限りなく幅広い成長を見せてくれるはずだ。
「あの、教官…少し宜しいでしょうか？」
資料に目を通し、思い悩んでた小尾斗に雅緋は口を開く。
「ん、ああ。なんだ？」
「実は――……」

「え～っと、ゴミ置く場所は…」
雄英敷地内で、ゴミ袋を抱える緑谷は、考え事に浸りながら足早とゴミ収集所へ進んでいく。
気に悩むことでもあるのか、険しい顔立ちに焦りの色が浮かんでいるのが、他人からして見れば直ぐに解る。

（インターンって何だ…!?明らか様に凄い置いてけぼりにされてるんだけど…!!）

問題の原因は昨夜のクラス会話に有った。
なんて事はない、爆豪と緑谷、飛鳥の三人組は謹慎を受けてるため、基地による外出は禁止されてるのだ（但し、清掃に関わる謹慎内容に触れるものは別）。
帰ってくるのは大体遅くて6時半、7時近く。補修やヒーロー基礎学に於いて至らぬ点を語り合ってたのを耳にしたまでのこと。
話せば長くなるので省略すれば、緑谷達が謹慎を受けてる真中、何やら校外活動（インターン）の件で盛り上がってる様子で、授業に出てない緑谷からすれば、皆との距離が遠のいてる事実が突きつけられ、焦りが芽生えているのだ。
因みに爆豪は常にご機嫌斜めな様子で、緑谷と同じく自分が置いてけぼりにされてることと、仮免試験補習のことを含めてかなり鬱憤が溜まってるんだろう。
飛鳥はインターンに関しては興味こそ湧いたが、どうしても参加で

きないらしい。因みにこの情報を知るのは相澤先生と飛鳥、雲雀、柳生の三人のみで、何処へ行くかは事前には知らせてくれないそうだ。
林間合宿のとき見たく最悪な未来を防ぐのと、教師達で話題になってる内通者の話が挙がってるからだろう。
何がともあれ飛鳥達三人の忍学生は別として、早い話、焦ってる緑谷は少しでも皆よりも先へ進み、空いた時間を埋めたいのだろう。空いた時間を埋めるのは人の何倍も努力しなければならない。座学も、ヒーローとしても、このままのペースであれば何れ…
「やあ君、掃除お疲れ!!」
ニュッと、壁から顔が生えた不気味な物体に、緑谷は険しい顔立ちのまま、硬直してしまう。
「……」
唐突過ぎるのと、自分に何が起きてるのかさえ全く理解が追いつかない緑谷は、何も答えない。そんな緑谷にニコッと微笑む顔は、今の状況とは釣り合わず、とても不気味だ。
「食器のトレイね、可燃物と一緒に出して大丈夫だからね」
「あ、はい…」
ようやく応答した緑谷の反応を確認すると、少年、と呼ぶべき男はニッと笑顔を浮かばせる。つぶらな目をした男は、壁に吸い込まれるよう消えていく物体に緑谷は…
取り敢えず一言……――なんだこの人
「って思っちゃってるよねーー!!」
「わぁビックリした!!」
消えたと思ったら今度は地面からヒョコッと顔を出す男に、緑谷は驚嘆の叫び声を喉から発する。
危うく顔を踏んでしまいそうだったのを、何とか堪える。
「何なんですか貴方!?」
「何なんだろうね!ビックリするかなと思ってやってみたんだ!ドッ

キリ大成功！アレ一度やって見たかったんだよねオレー！」
ハハハハハ！と豪快に笑う少年はまるでオールマイトの笑い方に似ている。何処かマイペースで相手の行動が読めないと言うのは、性格も含めてなんだと思うが、本当に何しに来たのだろうか…
「あっ、そうそう！ねー君だよね？元気な一年生って」
「元気な一年生…？」
遠回しに問題児と言ってるのだろうか？
確かに学校の時間外での個性使用に　喧嘩を起こせば問題児と言われても何も言い返せないが〝元気な〟という発言には少々引っかかる。
「まあ俺が来たのはぶっちゃけ、挨拶しておきたかったんだよね～。それに俺が誰なのかは、何れ…ってよりも、近いうちに解るんだよね～」
「は、はあぁ？」
「じゃね！」
最後に意味深い言葉を残しながら、謎の男は去っていった。
顔だけしか見えていなかったので、どんな格好をしているのかは不明だが、取り敢えず顔だけは覚えた。
インパクトある人間だったので、そう簡単に忘れられないとは思うが、それにしては…何しに来たのか全く意味が解らない。取り敢えず挨拶しておきたかったことは確からしいが、だからと言って何故…？
近いうちに？
（……アレ？でもあの顔、何処かで見た覚えがあるんだよなぁ）
懐かしいような、脳の片隅に残る記憶を探るも、心当たりも無ければ縁は無い。しかし、初めて見た…と言うのもない、微かな既視感に眉を顰める緑谷は、考えても仕方ないとそのままゴミを出す。
心に引っかかりながらも、緑谷出久は三日を迎えようとした。

パソコンと睨めっこでもするよう、Ａ組担当の相澤は、相も変わらず気の怠い目で作業に没頭している。

明後日のカリキュラムを作成しているのだろうか、やけに熱心だ。
（インターンの説明として先ず雄英ビッグ3に……忍学生か…）
ここで相澤は側にあった資料を手に取り再確認として目を通す。
（忍学生っちゃあ学生ではあるが、一応悪忍…雄英に他の学生入れるのもどうかって話な上に、悪忍と言うのは俺にはどうにも…信憑性やヒーローの面識も豊富な分、信頼度は有る。もう一人は善忍だし問題はねえが…）
ヒーローインターン。
校外活動とは、平たく言えばプロヒーローの指名の下で働く職場体験の本格版。
その具体的な内容を、明後日の午前から話すのだ。
本来ならインターンは2、3年生でしか活動は許されず、基本一年生は受け付けていない。それなのに説明もクソも無いのだが、平和の象徴が死んだ今、少しでも勢力を整え穴を補うべく、雄英側も許せる限り協力を惜しまずに行こうと言う話になったのだ。
しかしそれでは「雄英体育祭は何だったのか」という結論になるのだがその心配は無用。
体育祭での指名はあくまで経験を積むのと、ヒーローの社会の現実をより詳しく知ることを始めとしている。ヒーローとして何を学べるか、何を想うか、少なからず保須市では滅茶苦茶になった訳だが…
インターンは体育祭の指名をコネクションとして使い、指名が有った事務所から駆けつけることが可能だそうだ。それでも都合によって取り扱ってくれないヒーロー事務所も有るそうなので、他を当たるという事はよくある話。
授業の一環ではなく、生徒の任意によるこの活動は、そもそもの話、体育祭でプロから指名を貰えなかった者はインターンすら受け付けることは不可能。
（まあ一年生の受付…柱がいなくなった勢力による穴の補い、社会の秩序や治安を改善しようとするその趣向は、仮免取得のそれに近い旨趣だしな……問題なのはウチの学校の何人が参加するかってなる）
そもそもインターンと言うのは先ほど前述したように、生徒の任意

で行われる活動だ。学校側の行事でもない限り、インターンと学校の両方を両立させるのはかなり至難だろう。正直言って先生としては余りお勧めはしないが、生徒によっては合理的な週間でもあるだろう。ただ、勉学やヒーロー基礎学が疎かと見なせば、場合によって取り消すこともあるのだが…

（ウチの優等生は爆豪と轟、八百万の三人は間違いなく実力は通るが……）

爆豪は緑谷と飛鳥と同じく謹慎（しかも二人より一日多い）な上に仮免試験の補習もある。轟も爆豪と同じく仮免取得に赴きそれどころでは無いのも事実。となると八百万くらいだろう。

一方で…

（忍学生の三人は充分実力的にも問題はないが…確か校外活動には参加出来ねえんだったな）

忍学生がインターンに参加出来ない訳ではない。寧ろ、より早くヒーローによる社会維持の姿勢と、忍の改善をよくするべく極力励んで欲しいのが本望らしい。特に由緒正しい善忍なら尚喜ばしいことこの上ないそうだ。

それでも飛鳥達三名が参加できないのは、半蔵学院による担任からの命令だそうで、事情があるらしい。それだけ聞いただけで、殆どの詳細内容は知らされていない。

林間合宿のような最悪な襲撃を未然に防ぐ為なのと、内通者がいるかの確認でもあるため、上の考えには納得がいく相澤は、拒否せず霧夜先生に一任した。

ぶっちゃけ本当の担任は霧夜先生なので、何がどうにも自分が首を突っ込むこと自体では無いのだ。

因みに明後日の校外活動の説明では、ビッグ3に二人の忍学生をクラスに紹介するつもりだ。とは言ったものの、彼ら彼女らのことは約一名を除いて詳しく知らない。

では何故、忍学生の二人を参加させるのだろうか？

根津校長の話によると「うち一名はオールマイトが信頼してるから、そして二人とも有力にして我々雄英高校の寮制、及び忍基地の資

金に投資してくれてる方々だから」だそうで、この御世代だからこそ、協力と信頼を築くべく、是が非でも天下の雄英高校でご教授したいとのこと。
転校…と言う話ではないが、恐らくインターンに参加する為、事前にヒーローの事に関して触れておきたいのだろう。
「Ｈａｙ！なーに辛気臭え顔してんだイレイザー！もしかして例の問題児三人組に悩んでるとか!?」
「まあ、一応間違っちゃあいないが……てか近え、邪魔だマイク」
相澤の疲労と浮かばない顔立ちにフレンドリーに声を投げる活気良いお調子者はプレゼント・マイク。相澤とは雄英高校での同僚にして、何かしら声の煩い英語教師だ。
「ＨｅｙＨｅｙ！最近疲れ溜まってるように見えるからよ、親友の俺が心配してるワケ！」
「そりゃあ忙しいからな。お前は相も変わらず元気そうで逆に何でこんなハイテンションになれるか不思議でしょうがねえ」
「聞きたい？」
「いらん」
そもそもどうでも良いし、時間を無駄にはしたくない。
合理的主義な相澤にとってマイクとは騒がしい男、と言うのが一番しっくり来るだろう。性格に於いても個性に於いても。マイクからパソコンに視線を戻すと、再び作業に専念する。そんな相澤にマイクもまたパソコン画面を覗く。
「あっ、俺この学生ちゃん知ってるぜ！いや寧ろ知らねえヤツってマイナーなヒーローや新人位じゃねえか？こんなお嬢様が悪忍なんて信じられねえよな、美麗と色気で騙すふじこちゃんみてえ！」
「一応ウチら雄英の寮に忍基地に投資してくれてるしな…少しでも明るい社会と秩序を保つ行いをしたいって志はヒーローのソレと同じだが…」
確かに悪忍とは思えないのもまた事実。
どちらかと言えば善忍家系と見間違えるだろうし、正義感を装う悪党もいない訳ではないが、態々莫大な資金を投資してまでとも考え難

い。何でもオールマイト曰く、知人も含めて彼女は信頼における人間だとのこと。校長も信頼における人物なので、良しと見なして良いのか躊躇はあるが、正直微妙な感じではある。
「たった一桁な歳の子がなぁ…その頃の俺だったらダチと遊んでた記憶しかねえぜ」
「お前の脳内は常にお花畑だろ能天気」
「俺だって英語の教師だしやる時はやるよ!?アレ?そういやこの家ってその分…」
「まあ、割と有名ではあるな」
パソコン画面の忍学生を見て記憶を巡らせるマイクに、相澤は察したように軽く言葉を付け足す。
彼女とは対面こそないが、噂は聞いてるし、実は表社会も取り締まってるお嬢様なのだ。そう言った点では斑鳩や叢も代わりは無いのだろうが、こっちは完全にヒーロー社会すら適応し溶け込めている。
そんな女性に対して悪忍のレッテルを取り除いた上での一言は、大人子供。死柄木弔や漆月という以前の子供大人のような、幼稚的癇癪を起こす、子供が大人になったのではなく、大人な思考と柔軟性、社会に対して姿勢を持つ子供が大人な思考を持っている…と述べた方が良いだろう。
大したものだと自分でも思うし、もし彼女がヒーロー志望の学生として雄英に赴いていたら、八百万すら渡り合えるかもしれない優等生。
そんな彼女に対して疑わしくも有り微妙と答えるのは失礼かもしれないが、こうも敵連合の掌の上で転がされてることを実感すれば、そう言う気にもなるし、蛇女の件もあるので乗り気ではない。
(問題なのは、だ。この二人がどう生徒達に影響を与えるのか…と、またウチのクラスと交わりどう影響を受けるのか…だな)
今の時代、柱が無くなってしまった以上、背負うものも庇うものもいない。日陰も日向も支える象徴がいない現在は、少しでも未来に待ち受ける理不尽に対抗するべく、チームアップに経験が必要だ。

今年の一年生は本当に教え甲斐が有る。とても…去年や今まで当たって来たクラスとは違い、善い意味でも悪い意味でも…
普通なら今頃、除籍処分を布告しクラスは6、7人になってるのだが、オールマイトがいないとはいえ、除籍処分ゼロと言うのはかなり珍しい部類だ。それでも生徒には容赦という文字はないが、それは担任による生徒の愛情とも呼べるだろう。
「さぁ、明後日が見物だな……」

「おい、金目の物はちゃんと…」
「ああ、確かに受け取った。これで問題はないな?」
人気のない道端で、影に隠れながら金属製のカバンケースを手渡しするチンピラに、受け取ったことを確認した黒ずくめの男はホッと胸をなで下ろす。
敵と思われる人物達は、人気のなく目立たない場所で闇取引を行なっていた。影者にとっての日常茶飯事のソレは、明らかに敵だ。ここ数週間、柱がいなくなったことで抜忍や敵が少しずつだが、でもって頻繁的な速度で犯罪活動を繰り広げてる模様だ。
「どーせなら、今確認を…」
「おいおい、俺のこと信用できねえのか?確かに金と例の薬品物は渡したぞ?」
「け、けどよぉ……」
何やら疑心暗鬼と言ったように、信じられない口調をする敵に、不満を持つ敵は「文句でもあるのか?」と荒げた口調で指を胸に突く。
「じゃあ今確認したって問題は……いや、けど…」

「アレぇ？嘘じゃないなら別に中身確認したって問題ないじゃない♪」
「あッ、誰だテメェ？」
ゴロツキと商売人の会話に無理矢理割り込む妖美な女性の声に、二人は反射的に振り向く。
素敵な黒紫色の衣装に、スカーレットのような紅いスカートを履く女性、長く下された髪は透き通った水々しい水色を現している。
「ソイツが偽札をせっせと中に詰め込んで、薬品を偽装してアンタに手渡そうとしてる所…アタシ見たけど？」
「アァ？何デタラメなこと垂れたんだ？つか誰だテメェって聞いてんだろオイこら!!」
絡むようにキレ出すチンピラに、女性は面白がるよう不敵な笑顔を浮かばせる。
「ホラ、こんな荒々しい態度取ってる辺り、図星でも突かれちゃった？」
「テメェ良い加減に…！」
「おい待てや、今の話本当なのか？」
頭の血管がキレかけた男性は、彼女の顔面に殴り掛かろうとするも、取引相手は表情を怒りに染め上げ、青筋を浮かばせる。
「は？いや待てコイツは知らねえ部外者だろうが、何で俺の言葉よりもコイツの言葉を信じるんだよ」
「そんな部外者が態々こっちに来て口を挟んで偽物とか言わねえだろうがぁ！」
「はぁ!?やんのかテメェオイおいおい!!」
緊迫とした空気に一人の部外者が介入したことで喧嘩の導火線に火がつき、爆発したことで喧嘩勃発。
ゴロツキは個性「筋肉強化」で殴りかかり、商売人の個性「狼化」で、お互いが個性を使役し衝突する。そんな二人のやり取りに心底楽しむよう観戦する彼女に、冷静な声が響き通る。
「相変わらず、何考えてるか分からねえな漆月（お前）」
冷徹で血の通わない気怠い声に反応する漆月は、ニィ…ッと口角を

微かに釣り上げる。彼女の瞳は、さも闇の中で輝きを増していた。まはで漆色に染め上げられた月は、美しくも禍々しい。
「面白いから良いじゃない茶毘、醜い奴らの罵り合いはいつ見てもオツなものよ」
「理解出来ねえ……トガや鎌倉もそうだが、お前も相当なようだな……況してや、人殺しならさておき、全くの赤の他人を引っ掻いてややこしい問題起こそうとする奴の気が知れねえ…」
「ふふ、これを理解不能と言ってると本当に忍に捕まっちゃわよ？それに焼死体が相次いで見つかってるって聞いてるけど、明らかにアンタの仕業じゃないの」
　ここの所、敵による頻繁的な殺し合いと焼死体が見つかっており、警察も手が焼いてると聞く。その焼殺事件の殆どは茶毘と断言しても良いが、敵同士の抗争による殺害事件は漆月が関わっている。無論、彼女の仕業だとは誰も気付かないが…
「俺は仲間集めで使えねえゴミを焼却してるだけだ。テメェの意図が読めねえ…まさかこんな遊びの為に連絡取れなかったとかじゃねえだろうな？」
「だーかーら、コレだからアンタはまだまだヒヨッ子なのよ茶毘。そりゃあ赤の他人が見ればそう見えなくはないけど…
　それに連絡取れなかったのは十悪性戒の奴らと警察の追っ手を撒いてたの。調べたい調査もあったし」
「……まあ良い、それより死柄木から収集がかかってる。それと蒼志が蛇女の奴ら全滅できなくて申し訳ないってよ。憑黄泉も無駄にしちまったって責任感じてるみてえだが」
「そう、弔の思惑通り動いて良かったわ」
　漆月の想定外な反応に茶毘は「は？」と声を漏らす。
　コイツ、知ってたのか？
「良かったって…想定済みだったのか？」
「まー、そりゃあね。二度も襲撃くらって学校全滅なんて余程の弱小忍学校じゃなければあり得ない。蒼志の母校なら、多少のリスクだって考えてる」

「じゃあ何で敗北が解った上で行かせたんだ。テメェも知ってたなら、憑黄泉も無駄にしなくて済んだろ。益々解らねえな」
「ん～…敗北を知った上で行かないのと、承知の上で敢えて危険に挑むのとでは、経験の価値は大きく左右されるわ。少なくとも、敗北した上で優先に生き戻るのなら、って限られた話だけど」
　きっと弔なら、仲間を統括し指示するリーダーとして、蒼志に憑黄泉を合わせて蛇女を襲撃。その際勝とうが負けようが、林間合宿みたく経験が生まれる。死柄木はその成長を敢えて利用するよう蒼志に一度、敗北と蛇女の実力を目の当たりにし、成長へと促すことが目論見だったのだろう。少なくとも、漆月は死柄木の考えを見抜いた上で了承したのは確かだし、仲間一人一人に大きな成長を与えるのも、支配者にして上に立つ者の役目だと踏まえている。
「そもそも蛇女の場所知ってんのは私と蒼志だけだし、あれ以来皆んな拡散するようバラけてるから、一緒くたになって襲撃は難しいからねぇ…私も行ってあげても良かったけど、場所は遠いし…黒霧がいてくれれば話は別だけどね」
「……ほーん」
　荼毘は確信した。
　以前の漆月は単に死柄木の思想に便乗したり、自分の意思が無いようにと、訳分からない奴だったが、今彼女と直接言葉を交えて理解した。
　コイツは、何も考えてないように見えて…今はちゃんと考えてやがる。
　まるで遥か先を見据え、己の利益になるようカラクリのように仕組んでる陰湿的な手は、確かにオール・フォー・ワンに似ている。それはまた死柄木弔も同じこと。
　この敵同士の殺し合いも、何らかの理由があるのだろう。本人は命の殺し合いに愉悦や価値を見出せてると言ってるが…
「んじゃ、私たちの基地に戻りましょうか。っとその前にこれ見終わってからね…♡」
「はぁ…」

しかし、こう無駄に見えるようで、実はこんなどうでも良い争いにも価値はあるのだろうか？そう考えると、漆月の行動は連合の利益に繋がるのだろうか？
（やっぱ解んねえ…つーか、女でマトモなのって殆ど居ねえじゃねえか…闇も、マトモかどうかってより不気味だしな…マシなのは龍姫と蒼志位だろうな……）
ボサボサな髪を掻きながら、漆月の隣に立つ茶毘はいっそのこと「二人を燃やして薪にしてやろうか」という考えが頭によぎったが…
「あっ、そうそう茶毘。アンタに提案…協力して欲しい事があるんだけど…」

それから二日目、反省文を相澤先生に提出し無事に何とか謹慎が解けた緑谷は、皆との実力差を埋め取り戻すべく爆豪よりも一足先に復帰した。
「皆んな！ご迷惑おかけしましたぁぁ!!」
ヤケに気合が入ってるのも、緑谷らしいのやららしくないのやら、鼻息が荒く機関車のように噴出する。
「デクくんお疲れ！」
「うむ！謹慎を終えて反省した様子だな！」
「えぇ～…戻ってこなくて良いのにオイラもっとコキ使いたかったよ～…」
皆の労いな言葉（約一名、変態が可笑しいが）を貰う緑谷は、息巻くように実力を埋めようと必死な様子だ。微かな会話で得たその焦燥に、何もできない三日間は緑谷にとって地獄に近いものだ。
「皆んなとの開いた差を埋める為にもっと頑張らないと!!」
「おっ、ソレ良いな。そう言うの好きだわ俺！けどその分飛鳥達が居ないのがまたなぁ」
緑谷が謹慎復帰後、飛鳥も謹慎こそ解けたが彼女たち三人とも雄英

から少し離れるそうだ。
何でも人には言えないらしく、口止めされてる上に本人達も何処へ行くから知らされてなかったらしい。となれば、今このクラスはヒーロー学生のみとなる。何らおかしくない、雄英にとってごく普通なことでも、忍学生がいないとこうも違うのか…と、現実を噛みしめる。
「やあ皆んな、おはよう」
学校のチャイムが鳴り出したと同時に一斉になって静まり着席するA組クラスの面子。このやり取りはもう慣れたというよりいつもの事なので、誰が突っ込んでも動じない。
「以前話してたインターンの話に入る訳だが、職場体験とどう違うのかこれから教える。まあ但し、今回教授するのは俺ら教師じゃねえ…」
教師じゃない？
具体的に、でもって効率の良い方法。
時間を有意義に活用するのが大好きな相澤にとって、この方法は正しく彼らしい考えだ。
「そして仮免取得で実感したとは思うが、今後とも忍と供に手を打つことだってある。言わばチームアップと強化、連携にコミュニケーションが必要。早い話、プロになりゃあ忍と供に協力し合う日は必ず訪れるって訳だ」
だから、と相澤は不敵な笑みを浮かべる。
相澤が「よし、入れ」と軽く一言、その言葉に反応すると、扉から五人の学生が現れる。
「多忙の中、空いてる時間を埋めて来てもらった。紹介しよう、彼らがビッグ3、そしてこの日のために態々と遠いところから遥々やって来た忍学生の二人だ」
今日、相澤ですら初めてご対面する二人。
さて、A組は対応できるかな？
「雄英高校A組の皆様、本日は宜しく御願いします」
「わ、私からも……宜しく、お願いします……」
一人は長く垂れた清楚で美麗な長髪に、騎士道を連想させるよう、

固められた鎧を身に纏う女性。
一人は白い長髪に、肌は褐色で引っ込み思案がある女性の肩には、黒い鴉が立っている。
「ゾディアック星導会に、遠野天狗ノ忍衆…悪忍と善忍の忍学生にして、選抜メンバーの筆頭の方々だ」
新たな善忍と悪忍が隣り添え、合わさった。

１５３話「無敵と対立」

ビッグ３。

雄英高校三年生にして上位の成績とそれなりの実践を残す者にのみ与えられうる称号は、並みの生徒では貰うことは出来ないのである。

彼らこそが、今の亡き平和の象徴という大柱を補う、最高戦力でもあり、明るき未来を守り、社会を守る、ヒーローとしても相応しい人材である。

インターンに於いては既に参加してる上に経験豊富、況してや一年生の歳二つ上の大先輩だ。学べる点は幅広く大きいだろう。相澤先生が態々収集に掛けてくれたのも頷ける。

ゾディアック星導会。

基立星十字学院と呼ばれる架空の学校内部に存在する忍学生。場所は都会に建てられており、誰も忍学生が存在するとは思ってもいないのは、半蔵学院と同じ仕様なのだろう。

しかし裏は優秀な悪忍を育てる教養学校であり、秘立蛇女子学園とはある種として変わらない学院である。

また、超大金持ちのお嬢様学校であり、訓練や修行は、他の忍学校とは群を抜いているらしい。

遠野天狗ノ衆。

忍ノ里と呼ばれる山の中の奥深くに存在する善忍の団体である。忍ノ里とは、現役を引退した忍や、負傷し忍として戻れなくなった者達が多く集まる遠野の集落の村である。

行き先は不明であり、地図にすら記されてない場所は、そもそもの話上層部ですら知り得ないと言われている。あくまで隠密に、そして遠野の居場所を悟られぬ為であり、村の掟として決して他言してはいけない決まりとなっているのだ。

厳密に言えば、忍学校と呼ばれる組織は無いが、里に住む若者には善忍の教えを学び習わせるなど善忍の学舎のような建物は存在するそうで、教えを学び受け、里を守り、善忍としての役目を全うしてい

るそうだ。里には老人と鍛冶屋ばかりがいるそうで、忍の武器調達や日本の忍達が任務を全うする為、妖魔を倒す為と、武器を作っているとのこと。その腕は一流とのことで、現役社会に建てられた忍サポートアイテムや裏サポート、違法商売、忍商会とは格が違うらしい。

因みに、飛鳥が林間合宿に於いて、黒佐波との死闘の際に刀が折れては治してくれたのも、遠野里の刀鍛冶が打ってくれたそうだ。何でも半蔵本人も、若い現役時代の頃からよく世話になってたとのことで、面識もあればそれなりの縁も存在する。

英雄を背負い、期待に任されたヒーローに羽ばたくであろう先輩方三名――ビッグ3。

ゾディアック星導会と、遠野天狗ノ衆、二つの善忍と悪忍による選抜ツートップが二人。計五名の生徒がAクラスに赴き、現在生徒達の目の前にいるのだ。

「アレが噂のビッグ3か…！パックマンみたいな眼した先輩だな！」

「あの人、イケメンっぽい！」

「ふわふわで可愛い子がいる～」

「金髪の人、鎧と存在感が…！アーサーかよ」

「あの褐色の子スゲェ可愛い！オドオドしてるのが男子心を擽るというか…新鮮だよな！」

入って早々に雑談と化し空気を無駄口に染めるAクラスの生徒方々に、不合理と時間を無駄にするのを嫌う相澤先生の顔色は早くも怒りボルテージがグングン上がっている。

「そうだ…思い出したあの人！」

ビッグ3の中の内一人、見覚えのある顔を見つけた緑谷は、思い出したように掌を叩く。

三人の内中央に立ち尽くす男は以前、一昨日のゴミ出しで偶然…とは呼べないが、対面したあの不気味な先輩だ。壁から顔を出したり、ドッキリ大成功だのチンプンカンプンなことを抜かしていた為、思い出すことすら出来なかったが、全体を見て記憶が蘇った。

アレは去年テレビで体育祭を観戦していた時のことだ。特にこれといった成績は残してなかったものの、妙にインパクトが強かった

為、記憶の片隅に残っていたのだ。
それもそのはず。何せこの男、テレビ生放送の中、競技の際に裸になったのだ。決して悪気があったようにも見えないが、どうにも個性の性質上、裸体になってしまうそうだ。
こう言ってしまうと葉隠はどうなのかと問われてしまうが、透明人間な彼女にその質問は野暮だ。
(となると、左右の二人は……体育祭では上位にはいなかったけど、どんな個性なんだろ…?)
一人の男性は褐色の女性と同じくクールこそ伝わってくるが、どこか引っ込み思案な所は似てるし、一方で女性の方は明るく活発的で、青白い長髪の子は笑みを絶やさない。
「まあ良い…時間をこれ以上無駄にはしたくねえ。他校の学生を連れて来て説明しますじゃ混乱するのも無理はないが……先ずは手短に雄英の先輩方から…そうだな、最初は天喰から」
「……」
相澤に指名された天喰と呼ばれる彼は、一歩前に足を踏み入れる。この先輩は特に目立つ所が無く、どちらかと言えば口数が少なさそうに見えると言った方だろう。
「……ッ!」
グワッ!とくる威圧感ある眼差しに、一同クラスは肌身で感じ取る。痺れるような存在感は、流石ビッグ3と呼ばれるだけのことはある。
飯田だけでなく、轟自身も、まるで咆哮を浴びるように、その実力をより実感する。
「……」
しかし天喰は見渡した後、暫し沈黙して壁に向かって手を置く。
「だめだ、皆んなの顔…じゃがいもだと思って観ても、緊張感が…!!」
――は?
天喰の予想外な発言に一同は呆然としてしまう。
先程の覇気の篭った気迫は何処へ行ったのやら…天喰は声を震わ

せながら口を開く。
「ダメだミリオ、波動さん……頭部以外が人間だから、ジャガイモだと観ても意味を成してない！……だめだ、頭が真っ白になる…帰りたい」
「最後帰りたいとか言っちゃったよこの先輩!!」
皆の言葉を代弁するように、瀬呂は壮大なツッコミを入れる。その言葉に関して同意する皆に続き尾白も「本当に雄英のトップなんですよね？」と相澤に確認を取る。どうやら先生本人も予想外な展開に頭を悩ませてるようだ。
因みに遠野の善忍筆頭の子は何処からか親近感が湧いたらしく、小声で「なんだか、私に似てる…」と呟いている。
「あっはは！ねー聞いて！そういうのって、ノミの心臓って言うんだって！人間なのに不思議！」
波動と呼ばれる彼女は、天喰を指差してケラケラと笑う。そんな微笑ましい彼女の笑顔は、まるで天使のようだ。
「私は波動ねじれ！そんでこのノミが天喰環！今日は相澤先生から校外活動の話を頼まれてやってきました！
……それにしても気になる子達がいっぱい。ねーねー、この中に忍学生の子達いるんだよね～？」
どうやら先輩方でも忍学生のことは多少、話題となっているらしく、好奇心旺盛な波動は当然、この事に関して食い付いてくる。
「ああ、三人は今本校の事情があってクラスには…」
「ねーねー、そこの君はなんでマスク付けてるの？それと髪分けの子も！火傷跡は個性によるもの？」
「……」
「あーんー…すいません彼女、いつもああなんです!!大目に見てくれると幸いで…ね？」
聞き出しておいて別の話に切り替えようとする彼女の幼稚的な行動に、相澤先生の額に青筋が浮かぶも、本人は気付いてない様子で、ミリオが代わりになって陳謝する。
「そこの紫色の君、頭に貼り付いてるもぎもぎな玉はなぁに？散髪は

どうするの？ピンク肌の君、触角切れたら生える？動く？まるで蟻ん子さんみたい！どの子達も気になる子ばかりで不思議だね！」
「待ってオイラの玉が気になるって…ちょっ、やめて下さいよ先輩ぃ!!オイラ興奮しちゃうじゃないですかぁ!!人生初の逆セクハラとか最高かよぉ!!!」
「絶対ちげぇから」
　さり気なくツッコミを入れる瀬呂だが、峰田本人は涎を垂らし、興奮のあまり聞こえていないらしい。
「……合理性に欠ける、不合理の極みだね？」
「大丈夫ですイレイザー・ヘッド！大トリは俺なんで!!」
　不機嫌な相澤を何とかカバーで機嫌を取り戻そうとするミリオに、深い溜息を吐く。
　波動ねじれ。
　性格はイマイチよく分からない天真爛漫でマイペースな部分のある彼女だが、アレでもビッグ３な上に実力は本物。今ではインターンでＮｏ．１０ヒーロー、リューキュウの元で活動をしているとさえ耳に入っている。
「次は…と言いたいところだけど、俺が言っちゃうと二人の出番無いと思うんで、忍学生の方からで宜しいですかね？」
「ん？ああ、別に構わんが…」
　あの流れで中断…というのは、恐らく実戦経験を一年生達にさせるつもりなのだろう。いつものパターンだ…と、相澤は気怠くボサボサな髪を掻く。
「んじゃあ忍学生の…っと、お二人さん、先ずは遠野の方から」
「あっ、えっと……私、ですか？」
「？何か問題でも？」
「ああいえ……大丈夫です……」
　何処か気の弱い性格は、蛇女選抜補欠の芭蕉に似てる気もするが…彼女はオドオドとしながら深呼吸をする。
「えっと……雄英の皆さん初めまして……遠野天狗ノ衆選抜メンバーの筆頭を担う、夕焼……と、申します……

雄英の方々に、神野区の噂は聞きました……えっと、その…本日から私も、インターンに参加させて頂く所存ですので……少しでもヒーロー学生達のことと、都会に触れて行けたら良いなと、思いまして……」
「うわぁ、頑張り屋さんだー！」
「ふむ、成る程…忍学生もインターンに参加…その為、我々ヒーロー学生に触れることで、知識を身につけようという協力体制を…」
(飯田、便利だなぁ)
飯田の台詞は的を射ている。
詳しい説明はゾディアック星導会の筆頭を後にするのだが…
「私の故郷はその……人知れずの隠れ里……山の奥深くに存在する村で育って来たので…
那智さんとは違い、ヒーローについては勿論、都会のことは全く知識がなく……今回の件を機会に、触れていくことで学んでいけたらと…」
「飛鳥達もそうだけど、夕焼さんスッゲェ忍らしい！」
「忍ノ里ってなんだろ!?行ってみたいよねぇ！益々忍らしくてカッコイイ！」
「都会知らないのか、何処か良いラブホあったっけ…」
「女子の紹介で一々セクハラ発言しないとダメなのか峰田は？」
忍ノ隠れ里、遠野、というワードに反応する生徒達は、初期の頃、雄英から転校しに来た飛鳥達と引けを取らない反応でクラスが騒めいている。
「オメェら、静かにしろッ。俺が最近注意してねえからって怠んでるな、ア？」
しかし相澤の静かに燃える怒声に一同は一瞬で縮こまるように静寂する。相澤先生の髪が逆立つ光景も、久しぶりに見た気もしなくもない。
「あ、あの……もしかして私の…せい…なのでしょうか？」
「ん？いやそう言った訳じゃないから気にすんな。じゃあ次は…」
相澤の軽い視線に反応した彼女は頷くと、一歩前に足を踏み入れ口

を開く。
「初めまして雄英高校の皆様、私はゾディアック星導会の選抜メンバー筆頭、麗王と申します。貴方達の噂は、夕焼さんと同じく聞いております」
夕焼とは対照的に、頼り甲斐がありリーダーシップが活用されてる美麗な女性だ。凛々しくも美しく気高いその姿勢は、正しく王に似た風格を表している。
「ゾディアック星導会に、遠野天狗ノ衆、この二つの組織は雄英の寮と忍基地を投資して下さってる方々だ。是非とも、無礼だけは働くなよ」
「ふぇぇ!?そうなんですか!?麗王さんって言う人は兎も角、夕焼さんも……お金持ちなんやなぁ…」
「あ、あの……私ではなくて、那智さんが……ですね……」
麗王は見た限り、八百万のようなブルジョワ感が漂っているので大方予想通りだが、忍ノ里からも投資してるとは思わず、お茶子は意識が遠のいていく感覚を味わう。
因みに麗王は斑鳩や叢と同じく財閥家のお嬢様なのである。
「神野区のオールマイト以降、忍の存在が明らかになり、供にヒーローと忍が手を打つという話は以前伝えたから知ってるはず…
このお二人方は優等生にしてインターンに参加する忍学生だ。」
「なるほど!我々雄英に協力してくれてる方々だからこそ、筆頭の二人が選ばれ、呼び集めた訳ですね!」
「飯田の言う通りだ。
よーはそのお礼…と言って良いのかはアレだが、インターンに参加する二人は事前にヒーローについての在り方を知りたいとのこと…まあ、お前たちのことも含めて良い機会なんじゃないかという、校長の話だ。早い話、彼女二人は予行練習の為に来たと思ってもらって良い」
麗王は社会に於いても大人に近い部類だが、表の社会に触れてるだけで、ヒーローについての基礎、そう言った専門的な実戦経験は乏しいのだ。

夕焼は言わずとも…である。
「ハイ、今回我々がインターンの説明に参加するべく、雄英にお越しになったのも、相澤先生が仰った通りです。
悪忍である私がこうして現れたことで少々混乱を招いたこともあるかもしれませんが…これを機に、我々と協力をして下さると幸いです」
深々とお辞儀する彼女の仕草に、とても蛇女と同じ悪忍だとは信じ難く思う一同は、困惑していた。
お嬢様が悪忍…というのは、無くもないのだろうが…
「これから先、時間も敵も環境も待ってくれません。オールマイトという平和の象徴の戦力、穴を埋めるべく出し惜しみはしたくないのが、上や私からの意見でもあります。
問題は、これから協力を結ぶ上、我々は貴方達を…貴方達は我々を知らなければならない…というのが、今社会の立ち回り方だと思うのです」
何も知らない人間と一緒に協力しようにしろ、急造チームアップで無いのなら、事前に知っておくべきだと言いたいのだろう。麗王の言い分は尤もである。
「そして私を含めた他の悪忍とも、この先何れ協力する機会は一方的に増えるハズ。そんな中、悪忍とヒーローの間での協力に一瞬の迷いと躊躇が生まれる…少なくとも、ヒーロー志望の方はそうだと思うのですが…」
間違っては無いな…と心の中で頷く相澤は、麗王の大人じみた発言に多少は驚きつつも、彼女が何故表社会としても生きていけるか僅かな時間で納得した。
(麗王…こいつは悪忍というレッテルこそ貼られてはいるが、表社会では数々の企業やグループ、そして社長すら従える人権を持つ彼女は、間違いなく上の人間としても注目されてる忍…
ホークスと少し似てるが、１０代の頃から既に大人の世界に踏み入ってる、現代社会に於いて尤も適応してる人間だ)
忍学生や悪忍というのは、あくまで立場上の話だけであって、これ

だけ聞くと、この社会としては重要な人物にして無くてはならない存在なのである。
そう言った意味では、悪忍もこの世界には必要だというのも充分に理解出来る。
成る程、根津校長にオールマイトが認めるだけのことはある。
「その場合、気持ちの問題を解決するには、我々は知り合う必要があると思っています。
経験により心の靄を振り払うことで、お互いもしもの場合に於いて強力な連携を発動する事が出来るのではないかと言うのが、私の意見であります。
ヒーローに於いても同じです。手を組むにしろそうでないにしろ、ヒーローは時に敵の命も救わなければなりません。それが例え、因縁のある敵であろうと、ヒーロー殺しだろうと…」
その言葉に飯田が敏感に反応する。
ヒーロー殺し、又は忍を殺害することで社会を正し、贋物や悪意を粛清してきた時代錯誤の原理主義者、オールマイトを追い求めた殺人鬼。
ヒーローが相手にするのは、敵や抜忍だけでなく、時には環境や災害と向き合わなければならない…その際、人命救助に於いて救う人間は選ばない。もしその中に敵が、抜忍が含まれてたとしても、ヒーローである以上は救わなければならないのだ、選択肢を選ぶ余地など、無い。
「そう言った精神面と向き合う技術や経験を積むのも、ヒーローにとっては必要不可欠…今後とも、そう言った場面が増えることもある。そんなこれから先の未来を見据えて、我々は凡ゆる面においても対策案を講じなければなりません。
その上で、私は貴方達と供に協力して行きたいと願っております」
彼女は知っている。
唐突に訪れる理不尽を。
その悲劇が死ぬ程辛いことを。
それは、彼女が誰よりも一番に身を以て知っているから。

彼女は悪忍ではあるが、人並みの常識と人間としての尊厳は保っている。誰よりも一足先に大人の世界に触れ、厳しい現実に耐え抜いた彼女だからこそ、言える言葉。
その協力的な姿勢は、紛れない本心であることが見解出来た。
「っと、まあ…長々と話してしまい申し訳ありません…私の悪い癖で……」
「いや、良い。アンタの言葉で少しは生徒たちの主観も変わっただろう……」
正直、本音を言ってしまえば相澤先生自身も驚いた。
こんな、ヒーロー学生と歳が一つしか変わらない二年生なのに、こうまで違うのか…と。
ヒーローとしての知識や基礎は頭では充分に理解している。しかし、体術による物理的な経験が乏しい彼女だからこそ、己の至らぬ欠点を補うべくインターンに参加したいのだろう。
「す…げぇ…なんか難しいこと言っててよく分かんなかったけど！」
「悪忍って人も色んな人がいるんだねぇ…敵っぽい認識してて誤解してたかも！」
「気高い王妃のお言葉…」
息を呑む一同は、感嘆する。
口だけの人間は沢山いると言うが…彼女のはそういう類のものでは無いと、子供でも直感で理解できる。
（あの人…麗王さんと言う人はミリオと似ている……
先を見越し、対策し且つ打ち勝つという見方に関しては、ミリオのやり方と同じだ……）
額を壁に押し付けてる天喰は相変わらずネガティブなのだが、推察力に他人への信頼はかなり高い。
冷静でいれば判断力や臨機応変な対応は彼にだってできる。ただメンタルが弱いのと、冷静さを失ってしまうのが難点なだけで、それさえ克服出来れば、上位ランカーのプロヒーローや上忍でさえも同じ立場に入れるだろう。
「いんやぁ～、なんか俺が言うことを更に覆すようなセリフ言っ

ちゃったよね!!正直ビックリして俺の言葉説得力あるかなって位!!」
「も、申し訳ありま…「でもそれを更にプルスウルトラするから問題ないんだよねーー!って、責めてないからノープロブレムなんだよね!!陳謝しなくて大丈夫!」はぁ…そ、そうですか…」
　麗王とは真逆に、ハイテンションでボケるような一面を見せるミリオは、ＨＡＨＡＨＡ!と豪快に笑いながらグッドポーズを取る。
「さてさてさーて!最後はビッグ３の俺、通形ミリオだってばよ!前途～～～!?!!」
「……?」
「多難ーーー!!なんつって!よぉし掴みは大失敗だ!!」
　ミリオのジョークに笑いの起こらない一同の中、ミリオ一人が中心に笑い声をあげる。
「なんか変人だけど…このノリ、オールマイトに似てない?」
　麗王の時のような真面目と気迫のある空気はテレビのチャンネルの如く切り替わり、騒めいてしまう。
「まあ何が何やらって顔してるよね。そりゃそうだ、必修…ならまだしも、任意のある校外活動で何で三年生が態々やって来たのかって顔してるし…
　まあしかも?今年はアレが起きたとは言え一年生で仮免取得、合格者の数だってかなり占めてるし…うん、うんうん。今年の一年生は凄く元気があるね??」
「ミリオ…?まさか…!」
　いち早く察知した天喰の表情が強張る。
　波動は何も表情こそ変えてはいないが、ミリオのこれからやることに感知したようだ。
「よしっ、そんじゃあ一年生の皆んな!まとめて俺と戦ってみよう!」
　ミリオの宣言に、一同はただならぬ音量の驚嘆を上げる。
「えええええええええーーーーーーッッッ??!!!」

「おっ、掴み取り成功？因みにドッキリじゃないからね！それに実戦する為に来たわけだし、麗王くんの言葉を借りるなら、これも一種の経験ってヤツ！どうでしょうかねイレイザー・ヘッド！」
鼻を啜るような仕草を取るミリオは、確認を取るよう視線を向ける。ミリオ自身、ボケを連発でかますような芸人みたいに見えるが、中身はきちんとしている。
「好きにしな……」
担任の言葉と共に、皆は体育館γに移動する。

体操服を着こなした雄英生達を前に軽いウォーミングアップで体を慣らす通形ミリオに、皆んなは実戦を躊躇っていた。
「あの、マジでやるんすか？」
「マジだよね!!」
瀬呂の不安を代理する言葉に、ミリオは自信満々に返答した。
最初は風格を感じない(麗王の後なら)変な三年生かと思いきや、とんでもない発言に驚愕するA組。
一応相澤先生は特に何も言わなければ止めもしない…三年生にしろ歳が上にしろ、幾ら何でも舐め腐っている。ここにもし爆豪がいたら怒り狂う余り天に召されるだろう。
因みに夕焼と麗王は、ヒーロー達の戦い方を生で見たいとのこと。夕焼なら尚のことだろうが…
「轟、お前参加しなくていいのか？」
「あ、俺…仮免取ってないんで……」
こう言う時だけ丸くなりやがって…と心の中で愚痴る相澤は「まあいい…」と言葉を漏らす。
「あ、あの……麗王さんは、あの人のこと、どう思います？」
「あの人…ミリオさんの事ですか？ふむ…」
夕焼の問いかけに指で唇に触れる彼女は暫し沈黙し答える。
「……一言でいえば、ジョーク溢れた活発な青年、と言うのが一番と言

いますか。インターンでほぼ経験を積んでると話は聞いたことがあります。あの人の眼をみる限り、挑発をしている訳でも、虚勢を張ってるようにも見えない…勿論、相手を見下してる訳でも」
　近くで壁にもたれかかってる天喰は「君はよく分かってる…」と小声で言いながら、チラリと眼差しを向ける。
「何よりも、あの人はサー・ナイトアイの事務所で活動している学生です。個性なしの戦闘だとしても、私ですら勝てるかどうか…」
「わ、私でも…勝てないんですかね？」
「夕焼さんはその…非常に申し難いのですが……」
　何やら口をもごもごとさせているようで、とても言い難い様子だ。それに勘付いた夕焼は「あっ、そうですね……私の場合は見境い無しですもんね……」と、若干心に引っかかる言葉を付け足す。
　夕焼と麗王の会話を他所に、向こうは語り合ってる様子だ。
「あの…俺ら忍学生の子達もいないし、向こうに比べて色々とハンデとかありますけど…」
「俺たちはプロの下で活動したり、敵と戦闘だってしてるんですよ？」
「準備できたー?!俺はいつでも良いからねー!!」
　いやこれはどっからどう見ても舐めてるとしか言いようが無いだろう。皆の言葉をさも一蹴するような掛け声に、一同は若干怒りが込み上がる。
「あの……こう、言いたくないんすけど、そんなに雑魚に見えます俺たち？」
「うん！ぶっちゃけ、どっから掛かって来ても良いんだよね」
　ミリオの余裕っぷりは雄英のトップとして相応しいのだろうが、それにしては余りにも馬鹿げてるとしか言えない。
　しかし幼馴染である天喰は知っている。
（通形ミリオは決して蔑む訳でも見下ろしてる訳でもない…一年生達が、ミリオの努力を知らない以上、少なくとも勝算は無いよ…
　どんな強個性が相手でも、今のミリオに勝てる人間はほぼいない。例え相手が忍だろうとね…）
「んじゃ、僕から行きます!!」

「緑谷?」
緑谷の意外な行動に若干驚きつつはあるも、彼の焦りと皆に追いつきたいという言動を知ってるクラスの皆んなは、頷く。
近距離戦、遠距離戦などを得意とする者達は様々な陣形を組み、立ち位置を変え、個性を発動できるよう準備する。
「んじゃ良い?行くよ!」
相手はトップ。
油断は禁物、隙は許されない。
緊迫感のある空気に、皆は固唾を呑む。さぁ…相手は一体どんな個性を…
スルッ――
瞬間、ミリオは裸体と化した。
「はぁあああッッ!?ちょまっ、ええ何で裸!?!」
予想外過ぎる唐突な光景に顔面真っ赤にする耳郎は激しく取り乱れる。少なくとも女子陣は兎も角、観戦してた夕焼は「ひゃっ!?は、はしたない…です」と両手で顔を覆い、麗王は取り乱れてはいないものの、赤面こそはしてるが視線はずらしている。
「ああゴメン、これ俺の個性だから。コスチュームが有れば全然良いんだけどねぇ…」
「そこっ!!」
悠長に駄弁ってるミリオ先輩に一発かますべく、足蹴りをするものの、ミリオの体は幽霊の如くすり抜ける。
「はぁっ!?」
衣服のとき見たく、今度は緑谷の足をすり抜けたことに驚嘆の声が自然と漏れてしまう。
「速攻で顔面とかマジかっ」
一度空気を吐いては吸って、口を閉じると同時に、遠距離攻撃の嵐がやってくる。
それでも意味を成さないよう、全ての攻撃が虚無と化し、ミリオは

消える。
「消えた!?」
大規模による猛攻撃を繰り出したからか、視界が悪く見え辛かったとはいえ、あの一瞬で跡形もなく消えるというのは、どうにも信じられない。
「……何処へ？」
「ここなんだよね！」
「ッ!?」
突如、飯田の真後ろに出現したミリオに、皆は対応出来ない。
すり抜ける個性に、瞬間移動の個性？
まるで、複数の個性を兼ね合わせた強敵と戦ってる気分だ。しかも相手の個性が不明な上に、弱点も突破口も見つからない辺り、状況を覆すのは極めて困難。
「必殺の～…」

こうして、時間はあっという間に過ぎた。
いや、〝過ぎた〟というのは時間感覚がズレてるから来る発想ではなく、本当にあっという間だったのだ。
Ａ組全員が倒れ伏せる時間はざっと7分弱。ミリオ一人で全員を完封し、天喰と波動はただ観戦しているだけだった。
たった一人の先輩が、一年Ａ組全員を圧倒したのである。
いや…全員というのは少々語弊か、爆豪に、轟、飛鳥、雲雀、柳生の計5名がいないのでフルとは呼ばないが、それでも到底辿り着けないこの明らかに開いた戦力差は、経験によるものだった。
「お前ら、しっかり鍛えて貰え。それとこれが終わったら麗王と夕焼の二人が控えてるからな。
因みに、俺の知る限りでは通形ミリオは、プロを含めて最もＮｏ．1に近い実力を持つ男だ」
通形ミリオ
個性「透過」
身体の部位や全体に個性を発動させ、調整することで物質をすり抜

けることが可能。無機物のみならず有機物にも適応する個性は、沈むことも可能。
地中に沈み、タイミングよく解除することで「弾かれ」地上へ戻ることで瞬間移動に似た個性を発揮する。
因みに発動条件は息を止めてる間。その間は光や酸素すら透過するといった、複雑な個性にもなっている個性だ。

「なるほど…これが、Ｎｏ．１に近いと呼ばれた雄英のトップ…」
「り、理屈は色々気になりますけど……す、凄いですね……人には、色んな個性が……」
麗王に夕焼も口から自然と言葉が溢れる。
夕焼は人知れぬ忍ノ里で暮らしていた為、都会のみならず、外の世界は見知らぬものばかりなのである。その為、様々な個性をめのまえにして驚くのは無理もないし、当然だろう。
一方で麗王は大人の社会で生き延びてる上に、様々な人間を見ている。だからこそ、彼がどんな人間なのかも、大方読める。
「ふぅ～……取り敢えずこんなものかな？」
ミリオのケロッとした言葉とは、裏腹に彼は。
（戦って分かったけど、皆んな悪くはないけど…特にあの問題児は、良い）
一昨日、顔出しした甲斐が有っただけのことはあった。
彼と交戦した際、緑谷出久は反応ではなく、敢えて相手の行動を予測してからの攻撃に移っていた。緑谷の得意分野にして、グラントリノですらも認める男だ。
相手の攻撃を、未然に防ぐよう、予測を兼ねた行動…
「なるほど！サーが好きそうだな…！」

「……」
カタカタカタという、キーボードを打つ音が、暗い室内によく響く。
パソコンを開き、調査に写すサラリーマンの風格をした男性は、一切指の動きを緩めることなく、眉ひとつ動かさずただ一人この部屋で、いつも通りの仕事を全うする。
そんな時だ、静寂な空気が打破されるのは――
「た、大変ですサー・ナイトアイ!!!!ってうわ!今日もいつに増して地味ですね!」
「バブルガール、報告は元気に一息で――」
「っはい!ホシに動きがありました!
現在捜査中の指定敵団体組織、〝死穢八斎會〟その若頭!敵名『オーバーホール』が…!
全国指名手配犯の犯罪組織、敵連合と接触があったそうです!!」

その報告の元に、裏では敵同士の対立が今まさに起きていた。

「へいよぉ!死柄木、龍姫ちゃんの連絡受けて来たらこのトリ公と会ったんだ。是非とも上に逢わせろってスゲェ優しいヤツなんだ!感じ悪いよなコイツ!」
「へへん、どーよ死柄木!ウチが街を巡回してたら偶然見つけてさ、見たところかなり強いらしいし…どう?」
テンションはいつでもフルスロットルのトゥワイスに、敵連合としての組織に少しでも役立てたのではないかと、胸を躍らせながら声を弾ませる龍姫の隣に、さも不愉快そうに咳払いするは、チーム〝レザボア愚連ドックス〟のグループを壊滅させた張本人。その名もオーバーホール――
「……龍姫が見つけたんだな?」
静かに声を発する死柄木弔に、龍姫は「そう」と返事を返す。

「龍姫、トゥワイス、お前らさ……とんでもない大物連れてきた来たな」

死柄木弔とオーバーホール、敵同士の筆頭は、闇の中で静かに因縁を芽生えさせていた――

１５４話「オーバーホール」

光の灯る月が、暗い闇夜の中で三人を妖しく照らし出していた。
誰も使われていない、古びた廃工場に赴く人物は、敵連合のチーム、トゥワイスと龍姫、そしてレザボア愚連ドックスを壊滅させたであろう死穢八斎會の棟梁、若頭のオーバーホール――
「……ここが、お前らの拠点か？見るからに不衛生のようだが…」
「ああ！急に本拠地なんか連れてくかよ、面接会場ってトコ」
「悪いねぇ、敵や抜忍狩がいつ見張ってるか、追跡してるか分かんないし…尾行とかされたらたまったもんじゃないし」
ボロ臭い廃工場が拠点では無いにせよ、どの道こんな汚れた場所に入らなければならないと考えるオーバーホールは、眉をひそめる。
「おいおい、勘弁してくれ…こんな埃塗れの汚れた場所に入るのかよ……病気になりそうだ」
「安心しろ！中の奴らはとっくの昔に病気だ!!」

豪快に扉が開かれると視界に映る光景は、敵連合のメンバー数人に、我らのリーダーである死柄木弔が待ち構えていた。

「大物…ねぇ、随分と皮肉が効いてるもんだな敵連合…死柄木弔」
不愉快そうな口調、ゴホッと咳払いするオーバーホール。ペストマスクを付けてるとはいえ、潔癖症の彼にとってこんな薄汚れた空気が充満する廃工場で対談というのは、どうにも気が乗れないらしい。
仮称――〝面接会場〟と呼ばれる廃工場には死柄木弔を始め、鎌倉、トガヒミコ、Ｍｒ．コンプレス、闇、マグネ、蒼志、そしてオーバーホールを連れた龍姫とトゥワイスが揃っていた。
残りのメンバーは不在だそうで、漆月を始め、荼毘、黒霧、スピナーはまだ来ていない。

「龍姫ちゃんが見つけたの？見るからに危険な匂いがするなぁ……」
「ああ、充分に危険だよソイツは…」
「えっ、もしかして知り合い!?有名人かしら？」
　鎌倉の心の底から漏れた本音に、死柄木は頷くように言葉を付け足す。危険人物と知ったマグネは驚嘆に似た言葉を上げてしまう。
「いや…前に先生から貰った資料で見せて貰ったことがある。そうだな…お前らが雄英に襲撃かました時だ……そん時にコイツのことを知ったんだ」
　死柄木は、ゆっくりとオーバーホールに指を差す。
「コイツは死穢八斎會の若頭…オーバーホール――まあ、どんな奴かと一言で言うなら…極道だよ」
　極道。
　ヒーロー社会に於ける指定敵団体組織。
　血も涙もない非道のヤクザ。
　オールマイトが登場し輝きを増す前の世代、死穢八斎會は裏社会で暗躍をしていたと聞いたことがあるが、現在は弱小ヤクザというレッテルを貼られている。
「やだぁ！極道の若頭なんて初めて見たわ！鎌倉ちゃんの言う通り危険な香りがプンプンするわね！テンション上がっちゃうわぁ！」
「でも、私たちと何が違うのでしょうか？」
　そんな重要且つ危険的な人物を前に興奮が昂るマグネとは正反対に、冷静に壁に寛ぐトガヒミコは首を傾げる。
　高校生か中学生かさえあやふやな彼女は勉学には励んでいなかったとは言え、敵とヤクザの何が違うのか判らないそうだ。そんな彼女に「よ～っし」と近くにいたＭｒ．コンプレスは指を立てる。
「なんでも昔は裏社会を取り仕切る恐ーい団体が沢山有ったんだ。でも、ヒーローが隆盛してからは摘発・解体が進み、オールマイトの登場で時代を終えたのさ。
　シッポ捕まれなかった生き残りは、敵予備軍って扱いで監視されながら細々生きてんのさ。ハッキリ言って時代遅れの天然記念物って訳さ」

「……間違っちゃいないな」
コンプレスの解説に、オーバーホールが口を開く。
細々しくも、睨みつけるような目線は、とても良い印象では無いようだ。
「そういえば、敵連合と言や死柄木弔とは違うもう一人の、抜忍の筆頭、漆月はどうした？」
「残念ながら不在です。
私達も召集を掛けてるのですが、多忙の身なので…それに、不在にしろ死柄木弔がいるので、話は死柄木で良いでしょう？」
蒼志の言葉に「まあ、良いか…」と仕方なく頷く彼の素振りに何処か引っかかるも、特に気にしない様子で会話を続ける。
「それにしても意外ですわね…そんな八斎會と呼ばれるヤクザが…孤独の身であるなら兎も角、組織ですよね？そんな若頭が私たちに何の用でしょうか？」
冷徹で、且つ血の通わない闇の言葉が暗い工場内に響き渡る。
どれも死柄木が仲間に引き入れたのはバラバラな悪意…そんなネームドを持つ悪意を募らせた犯罪者の中はどれも単独だ。組織を持つリーダーというのは、前例が無い。
「もしかして貴方もオールマイトが居なくなっちゃってハイになったのかしらん？」
「いや、オールマイトよりも…俺はオール・フォー・ワンの消失が大きいな…」
マグネの言葉に首を横に振る極道の若頭。
オーバーホールの言葉に、表情が険しくも、不愉快そうに立てる死柄木弔は、眼を細くし相手を睨みつける。
オール・フォー・ワン――死柄木弔と漆月の先生にして師匠である、悪の象徴だ。現在こうして日陰者が暴れ狂い、犯罪事件が多発してるのも、元凶を探ればオール・フォー・ワンが原因だ。そう言う解釈で行くとなれば間違ってはいないのだが、どうやら相手の眼を見た限りだと、そう言う訳でもない個人的な事情がある様に見受けられる。
「オール・フォー・ワン…悪の象徴にして裏社会を支配する闇の帝王…

俺がガキの頃は都市伝説扱いだった」
　裏社会の支配者であるオール・フォー・ワンの下には、悪意を募らせた敵が、日本中に溢れかえっていたと聞く。ほぼ大半の敵がヤツの息が掛かってると聞くし、少しでも反逆の意思を見せてしまえば、全ての敵から注目を浴び、命を狙われると言われる程だ。
「日本を支配し、社会を混沌へと陥れたヤツは、老人達も恐れていたよ。死亡説が噂されても尚…な。
　そんな混沌な社会の中、オールマイトという平和の象徴が不在の中、親父の話によると、巨悪が支配してた混沌な社会を変え、正そうとする者がいたらしい……」
「……」
「俺には話さなかったが、ウチの親父が密かに他の組と対談しているのを聞いてな……確かに言ってた――〝カグラ〟という単語を口に出してたんだ」
　オーバーホールも、また忍の存在を知り得る人物なのだろうか？疑問が残る中、沸々と不快感を煮えたぎらせながら、死柄木は黙って耳を傾ける。
「最初はヒーローネームか何かかと思ったよ…だが、調べてもそんな名前は一切出なかった。
　隠語か何かか…とにかく、親父の話にはよくソイツの名前が出てたよ。
　――それで、神野区で都市伝説と謳われ恐れられてた悪の象徴（オール・フォー・ワン）が実体を現し、タルタロス（監獄）へと放り込まれた…
　激戦の中、オールマイトを庇う一人の老人が姿を現したことで、忍の存在が発覚した…その後、計画に乗り移るべく直ぐ様忍の情報を調べたよ。カグラとは、忍の中の最高称号だってな」
　金や鉄砲玉を動かせば、直ぐに情報は手に入る。
　レザボア愚連ドックスを始めとした外れも多かったが、その分大物の団体組織…名誉こそ無かったがそれでも充分に有意義となる情報を手にすることが出来たのは、オーバーホールの指揮と統括力による賜物だろう。

「そしてその対になるのがカムイ…カグラとカムイは対立し、平和の象徴と悪の象徴は唾み合い争いが勃発した…
で、だ――今は日向も日陰も支配者がいない」
オールマイトもオール・フォー・ワンもいない。
ヒーロー社会も、忍社会も、それを支える象徴…或いは、その中心人物となり得る人間が存在しない。
「じゃあ――次は誰が支配者になるかって話だ」
今のＮｏ．１はエンデヴァーという、万人受けの無い、転がされた一位を取得した元Ｎｏ．２ヒーロー。
ヒーローに於いても厄介な相手ではあるが、オールマイト程誰かを幸せや笑顔にさせ、光の柱となるような人間では無い。
一方で、オール・フォー・ワンのいない今、影の支配者は誰になるか…というのが問題だ。
個性を持て余した輩が、私欲を満たし、無駄に人を傷つけることしか能の無い暴虐の野人、社会に不満を持つ者、様々な人間が動き出してるこの何十万の中、支配者が決められる。
「おいおい…さっきから黙って聞いてりゃあお前…ウチの先生が誰か知っててての挑発か？」
今まで黙り込んでた死柄木は、鋭い声を低く発しながら一歩、前に出る。

「――次は、俺と漆月だ!!!」

死柄木の荒ぶる、でもって怒りを押し殺した叫びが、工場内に鮮明に響き渡る。ギラついた殺意孕んだ視線は、いつになく不気味で相手に恐怖を与えるものだ。
敵連合、そして先生の弟子である死柄木から言わせて貰えば、オーバーホールは不愉快な人間でしか無い。
先生のことを知らずの発言なら、無知は罪だと言えるのだろうが、態々知っててての発言には苛立ちを覚えてしまう。
何よりも、以前の死柄木ならば「次は俺だ」と自己中的な発言をす

るのが昔の彼だ。しかし、今は漆月を見ている。アイツは自分にとっては無くてはならない、理解者にして同じ立場の支配者だと、認めている証拠だ。
「今も勢力を拡大しつつ広げている、忍も敵も悪意に溢れ、やがて俺たちの下に集まり戦力も増えていく……！
必ずヒーロー社会と忍の世界を、ドタマのそこからブッ潰す…!!」
気に入らない者、正義だの平和だのとオールマイト無き荒んだ社会に希望をと改善し少しずつ修復を目論む社会を、壊す。
そして上層部や忍社会を亡き者にすることで、次の支配者は抜忍である漆月と、その同類にして同じ立ち位置に佇む死柄木が、支配者となり王となる。
今は理想を成し遂げず、拡大せずとも、少しずつ戦力も増せば強くもなる。その時だ――社会を壊すのは、今じゃ無くとも何れ…
「で、計画は有るのか？」
――は？
死柄木の悪意が鎮まるように、呆然とする。
唐突な発言に、眉をひそめる死柄木に、オーバーホールは悠長に語り出る。
「計画も現実味も実現性もない目標を妄想という、妄想をプレゼンされてもこっちが困る。
計画を動かすのに最初に必要なのは何だと思う？金と駒だ――んで、お前らは駒を集めて勢力拡大してどうする気だ？」
「貴方…私たちの仲間になりに来たのではないんですか？」
「俺は今、死柄木と話してるんだ。駒は黙って控えててくれ」
「なッ――コイツ…」
「待て蒼志、抑えろ……」
オーバーホールの眼中もない只の雑魚、駒だと見下された蒼志は、憎悪の感情を芽生えさせる。
嫌悪感を示す蒼志の漏れた声を聞き逃さなかった死柄木は手を掲げ制する。
「仮に…だ。お前が金や駒を揃えたところでどうする？どう金を使

う、駒をどうやって操作する？どういう組織図を目指すんだ？
ヒーロー殺し〝ステイン〟を始め、殺人快楽〝血狂いマスキュラー〟脱獄死刑囚〝ムーンフィッシュ〟――どれも駒としては一級品だが…全員落としてるな？
扱い方が分からなかったか？それとも扱いが下手なのか…」
他にも名も地名こそ上がってはいないが、雄英高校や半蔵と言った名高い名門校に対して憎悪を募らせた中学生――〝マスタード〟
凶暴性と気性の荒さから多くの忍から危険視され、両姫と死闘を繰り広げ、飛鳥に敗れた抜忍狩の狩人――〝黒佐波〟
この二名は特に調べたところ（黒佐波は不明だった）興味もないのだろう。
「そんなイかれた人間十余人も操れないで勢力拡大？笑わせるなよ、コントロールも出来ない力を集めて何になる？単なる時間と金の無駄なだけだろ？」
「ねぇ…オーバーホールくん君さぁ、僕らに喧嘩でも売ってんの？」
棘の刺す、敵対を見せ煽るような言葉遣いに、鎌倉は表情こそヘラヘラしてるものの、今鎌を握りしめてる手はギチギチと不快な音を立てている。
「別に争いに来た訳じゃない、そもそも仲間にして下さいなんて懇願もした覚えはない。俺が今日ここへやって来たのは話があるのと提案しに来ただけだ」
「提案…？トゥワイス、龍姫、仲間集めならせめて意思確認だけはしてくれ……話が違う」
てっきり仲間になるかと思いきや、提案と話に来ただけでは困る。
その為にここで態々待機していたにも関わらず、こんな厄介な相手をしなければならないのは死柄木にとってはとても喜ばしくないものだ。
「俺には目標がある、その目標を成すには計画が必要だ。そしてそれを実行する手筈も整えている。ただ一つ足りてないとすれば名声だ――そしてお前らは名声がある」
オーバーホールは両手を中央に位置させ手をゆっくりと広げてい

る。まるで、全てを己が物とするような、そんな統括者の一面が垣間見えた。
「金も駒もある中、小さなヤクザ者に投資しようなんて物好きは中々いなくてな…ただ名の膨れ上がったお前たちなら話は別だ――況してやお前らには抜忍という死んでも文句を言われない都合の良い駒がいる。俺たちの組織には忍のような手品を扱う輩は一人もいなくてな、社会に派遣された忍を対抗する術も必要となった今、抜忍をも集めてるお前らなら話は簡単だし丁度良い…

死柄木弔、漆月を始めとした敵連合、俺の傘下に入れ。次の支配者は、俺だ――」

「――帰れ」
オーバーホールの言葉を完全拒否する死柄木。
冷徹で血の通わない声で呟き下された言葉に、黙って見つめてたマグネが動き出す。
「ゴメンね極道くん。私たちね、誰かの下についてる為にここに集まってる訳じゃあないの」
棍棒らしき鈍器を手に取り、隠された布を取ると、そこにはSとNの磁石を現したマグネットアイテム、裏サポート会社のアイテムによって開発された品物だ。
「ねえ極道くんは知らないでしょ？何で抜忍達(この子)がこの場に集まってるのか――」
マグネは個性を発動させ、オーバーホールに磁力を付与させる。突然、磁石のN軸に吸い寄せられる若頭は微かに表情を歪ませる。
「この子達は、望みたくもない忍(人間)にさせられて、上層部や社会のルールに縛られながら、それでも辛くて苦しくて、やっとの想いでここへ集まって来た、私たちの大切な仲間なの――」
マグネの言葉に、鎌倉の表情は穏やかになり、沸騰して頭に昇った血が治っていく。鎌倉にとってマグネは良き理解者であり、友達のことでも相談に乗ってくれてたりもした、姉御肌の頼れるお姉さん的存

在なのだ。
「私もね、初めてこの組織の仲間になった時は忍なんて訳わかんなかったけど、この子達と交えて理解したわ」
初めて忍として好感を持てたのが龍姫だった。
望みたくもない者にさせられ、親子としての血筋よりも家柄を優先にし子を子とも思わない虐待紛いの家柄事情。
龍姫はそんな誰にも縛られない、自分のように苦しめられる人間が一人でも減ることを望んでいた。それを善しと思わず、忍を人間とも思わない連中…どれもマグネにとっては耐え難く、社会に対する怒りを増幅させるものだった。
「だから私も漆月ちゃん達と一緒に忍の社会を壊そうって。そしてこの子達が笑って自由を手にする幸せを、分かち合おうって決めたのよ…それにね、こないだ友達と会ってきたわ」
マグネの友人は一般市民であり決して犯罪者ではないが、マグネと同じ同類の…オカマではあるものの、気の利いた優しい人間だ。
「内気で恥ずかしがり屋で、私の素性を知っても尚、友人でいてくれたかけがえのない友達…彼女言ってたわ――「常識という鎖に繋がれた人が繋がれてない人を笑ってる」って」
「……」
マグネの語り言に無言のまま表情を動かさないオーバーホールは、そのまま薄い手袋を脱ぎ取る。
『――健ちゃんはそこから飛び出したんだよね…私は、飛び出す勇気も持てないや…だから、そんな健ちゃんはとってもカッコいいよ…』
友人の言葉を脳裏に浮かばせたマグネは、武器を掲げる。
「何にも縛られずに生きたくてここにいる…この子達は貴方に見下されるような弱い子達じゃない――私たちの居場所は私たちが決めるわ!!」
ガンッ!!
と、鈍く重々しい一撃が入る。
鈍器で頭部を強く打たれたオーバーホールは、微かに表情を歪ま

せ、指一本でマグネの腕に触れる。
「知るか、そんなもん」
ギギギギギ――
「？」
不快な音、体の構図に異変が生じたことに気付いたマグネは、今自分に何が起きてるのかも分からず

――パァンッ!!!

肉体が弾け飛んだ。

「――――」
一同は、今自分達の目の前で何が起きたか、いや…何を目にしてるのか理解が追いつかず、茫然としてしまう。ポタポタ…と、真っ赤な血の雫が垂れ落ちる音だけが、今の工場内にしか聞こえない。
マグネの上半身は肉体と供に弾け飛び、下半身は人形のように、しかしその後バランスが保てずゆっくりと、後ろへ倒れ伏せてしまう。
「……先に、手を出したのはお前らだからな？」

「マグ姉ええええええええーーーーーーッッ!!」
トゥワイスと龍姫、鎌倉の悲痛なる絶叫が木霊する。
死んだ――目の前で仲間が、殺された。
死穢八斎會の若頭と呼ばれるオーバーホールに、殺害された。
「なッ――今何が…？」
「マグ姉さんが、殺された…ッ!?」
冷静沈着な蒼志と闇でさえも、唐突な出来事に動揺してしまう。
何のモーションも無く、彼女（マグネ）は突然、上半身が弾かれ血飛沫を飛び散らせたのだ。
オーバーホール、若頭…この男、間違いなく危険人物だ。
「ウ、ソ……だろ？」
トゥワイスの横で、今の現実を受け止めれない龍姫は膝を崩し、表

情を暗く、歪ませる。
　自分がコイツを連れてきてしまったせいで、単なる好奇心と組織の仲間に役立つ為に招いた結果が、悲劇を生み出した。
「うわああああぁぁぁぁああああぁぁぁぁあーーーーーーッッ!!うっ、ぐぅ…うぅ…!マ、マグ姉が……!殺され…あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
　大切な仲間。
　頼れるマグ姉。
　悩みを聞いてくれた彼女が、目の前でオーバーホールに殺された。余りもの衝撃で、目に涙を溜め発狂する鎌倉は髪をぐしゃぐしゃと乱れさせ、喉が枯れる程の叫びを上げる。
「血が…ああ汚い…汚いなぁ!!穢れただろうが、これだから嫌なんだ…!!」
　頭部に血を流しながらも、マグネを殺めたことにより血飛沫で返り血が服に染み付いたオーバーホールは、ゴミでも見るように汚らわしく、ゴシゴシと腕を擦る。
「ッ――お、まえ!!今、何て言った!!!マグ姉のこと悪く言うなああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁーーーーーーッッ!!」
　完全に頭に血が昇りキレだした鎌倉は、額に青筋を浮かべながら両鎌を抜く。
　許せない、マグ姉を穢れたような物言いに、理性が吹っ飛ぶ鎌倉はオーバーホールに刃先を向ける。
「よせ鎌倉!…闇、アイツを止めろ!!」
　混乱の真中、それでも動じず冷静さを欠かせない死柄木は、適切な判断と対応を取る。死柄木の言葉に直ぐ様応える彼女はコクリと頷くと、呪いの文字で記された札を、地面に貼り付ける。
「鎌倉さん一先ず落ち着いて下さいまし!」
　瞬間、巨大な黒く淀んだツルがコンクリートの地面を突き破っては芽生え、鎌倉の四肢に巻き付き拘束する。飛びかかった彼女なら、回避は不可能な上に冷静さを失ってる彼女だからこそ、こう言った手段での拘束は容易い。

「何するんだよ闇！・コイツは僕らの仲間を殺したんだぞ!?何で止めるんだよ！」
「お気持ちは解りますが怒りに身を任せては己が滅ぶだけです！弔さんの命令でも有りますし、それに相手の個性が不明な以上、無防備に突撃してはマグ姉さんと同じ結末になってしまうのは貴女でも解るでしょう!?」
「嫌だ！・僕はアイツが気に入らないんだ!!」
ジタバタともがき抗う鎌倉に、闇も気が昂りながら彼女を抑制する。忍術よりも個性の方が遥かに上なのは、種類や特性によっては変わるものの、これは余りにも…馬鹿げてる。強個性なんてレベルじゃない、下手すれば不正なチートみたいなものだ。
「一先ず俺が…！」
「ッ――！・止めるんだコンプレス！」
鎌倉に続きＭｒ．コンプレスが動き出す。
しかし、鎌倉ほど感情的にはなってはいないものの、冷静さは保っていた。別に怒ってない訳じゃない、ただ…このオーバーホールという余りにも桁違いなイレギュラーを無力化させるべく、己の個性で封印させるだけだ。
（確かにコイツは強え…が、圧縮で閉じ込めれば一先ず無力化できる！・鎌倉ちゃんが暴走気味になってる中、今の場を治めるのは俺しかいねぇ…！）
一方で、Ｍｒ．コンプレスが相手に近付く真中、蒼志は遠距離で刀を持ち秘伝忍法を発動させようとしていた。
（コンプレスに注目が偏ってる中、意識は向けられてない。私が彼に巻き添えを食らわせないように…秘伝忍法――【獄狼炎・鬼火】であれば、命に支障はない！）
彼女もオーバーホールの異端的な強さに驚愕と警戒を高めてるのだろう。排除しようとする意思が繋がり、連携を発動させる。
シュッ――ドススッ！
刹那――蒼志とコンプレスの二人は鈍い物理的な衝撃を受ける。

特に痛覚は感じなかったものの、今は何が起きたか気にする余裕すら無かった。
コンプレスがオーバーホールの肩に触れ、個性を発動させようとするも――
「はっ？」
圧縮が出来ない。
一瞬、頭の中が白と化し、思考が停止したＭｒ．コンプレスは息を詰まらせる。
個性が、発動しない…いや、使えない!?
――また、それは…蒼志も同じこと。
「なっ、そ…そんな…！秘伝忍法が使えない!?」
顔面蒼白、己の忍術が使えないことに驚嘆の悲痛を含んだ声を発する蒼志は、試しに刀を振るって蒼炎を発動させようとするも、遁術すら扱えなくなってしまった。

「俺に――触るな!!」

オーバーホールの怒声。
顔面が蕁麻疹で覆い尽くされる。
ここで初めて見せる激情。
怒り任せに軽く腕を弾き飛ばそうと振るわれ、Ｍｒ．コンプレスの片腕は、マグネの時と同じく弾け飛んだ。
「痛ッッてええええええ!?!!」
絶大なる痛覚。
尋常じゃないダメージ。
止まらない血流。
Ｍｒ．コンプレスは腰を抜かし尻もちを着いてしまう。マジシャンである彼の命とも、個性としての強さとも呼べるその腕は、オーバーホールによって無慈悲に失われたのだ。
「コンプレス!!――畜生…！憑黄泉さえいれば…！」
トゥワイスの嘆く言葉を無視する死柄木は、咄嗟に素早く動き出

す。
シュッ――と放たれた注射器をモチーフにした形の弾丸を、死柄木は解っていたのか直ぐ様回避しオーバーホールの間合いに迫る。
身を屈め、死柄木の殺意と歪みを込めた掌が、オーバーホールに向けられる。
そんな異常な殺気を放つ禍々しい腕に、寒気を覚えたオーバーホールは、地面を分解させる余裕もなく――
「おい、盾!!」
〝盾〟という一言に、突如と見知らぬ男性が横から割り込んで来た。
ペストマスクに、ゴーグルと帽子を被った構成員は、若頭の命令通りに動き、盾となる。
五指によって身体は触れられ、名前も解らぬ不明な構成員は「うぅッ!?」と苦痛な呻き声を漏らした後、十秒も経たず全身が崩壊した。
「危ない所でしたよオーバーホール」
ふと、今度は聞き慣れない若い男性の声が天井付近から耳に届く。
盾役として死柄木に殺された構成員は既に肉としての原型を保たず、塵のように真っ赤に粉々にさせられ、地面が汚泥の塊と化す。
「ッ……そうか、成る程な。ハナからそうしてりゃあ、幾分わかり易かったぜ」
ボゴオォッ!と豪快に壁が破壊する音が、廃工場を轟かせる。
その正体は死穢八斎會のメンバー達、龍姫が目撃したであろう個性ある凶暴なメンバー達が勢揃い。
メリケンサックを装着させ、壁をぶち壊した巨漢なパワーレスラー。
巨漢な敵の背中から、何やらニョキリと飛び出た小さな人形のよう

なマスコット。顔そのものがペストマスクとなっている。
全身黒のマントで覆われ、銃器を掲げるハック帽子がお似合いな男。
全身が煌めく鱗を覆い、トサカを生やした異形な男。
海のように深い青色な短髪をした少女。二本の黒刀を手に持ち壁を切り捨てる彼女は、蒼志とは少し雰囲気は似ているが、血のように紅い瞳は濡れてるようで不気味な印象が残る、容姿的には１０歳に近いだろう。
全身が白のコートで覆われ、Ｍｒ．コンプレスと蒼志に何かしらの銃弾を撃ち込んだ男。
どれもこれも曲者ばかりの敵だ。全員がペストマスクを被ってる。
特に龍姫は小さな黒いマスコットのような人形と、刀を軽々と向ける少女には、見覚えが無かった。
「待て！尾行はされてなかったハズ…！」
「ちょっと待て！話が違うぞ仲間は置いてくッて…それにコイツらも了承してたのに…！」
「大方、どいつかの個性だろ」
突然の急襲に慌てるトゥワイスと龍姫を他所に、死柄木は取り乱れることなく冷静に状況を分析し、思考を働かす。
「遅い…」
「すいやせん、しかし即効性は充分でしたね」
即効性…彼が撃ち放った銃弾の性能だろうか、謎が増えてしまったものの、恐らく相手は〝個性や忍術を無効化〟に出来る術を持ち合わせているらしい。
イレイザー・ヘッドのような個性の類ならあり得なくもないが…生憎、そんな様子にも見えない辺り、何らかの手段が奴らにはあるのだろう。そう見解した死柄木は、気に入らない相手に対する憎悪を燃やしながら、静かに目を細める。
「悪いな…俺も出来ればコイツらを呼びたくは無かったが…やむを得ない。
穏便に事を済ませたかったが、残念だよ敵連合。こうなったら冷静

な判断を欠く…そうだな、戦力を削り合うのも不毛だし愚策だ…利害が一致しないし、丁度死体は一つ、キリも良い…一度頭を冷やして後日また話そう。
　そうだな、駒の腕一本はまけてくれよ」
「おい待てよ巫山戯んな!!」
　オーバーホールの吐き捨てる言葉に、黙ってた龍姫が憤怒の募らせた声を上げる。
「こんな事しやがって…タダで済むと思ってんのかよお前…!!」
「テメェブッ殺してやる!!」
「弔くん私刺せるよ、刺すね」
「コンプレスさん!今すぐ応急処置を致しますから、暫しお待ちを…!」
「コイツ…!僕をイジメてた嫌いな奴等とそっくりだ……斬り裂いて切り刻んでやる!!お前なんか、お前なんかあああぁぁぁぁ!!」
　敵連合と死穢八斎會の面々は、一触即発と言った雰囲気で、その気になれば迎撃できるような態勢になっている。全員向こうの個性が知らない上に、蒼志とコンプレスが無力化となった今は、かなり厳しい。
　一同は空気を騒めつかせながら、殺意と憤怒の憎悪を膨張させる。
「……駄目だ」
「何でだよ!!」
「責任取らせろ!!」
「何言ってんだよ弔!気に入らないものは壊して良いんだろ!?僕はアイツらが大っ嫌いなんだ殺させろよ!!」
　死柄木は、敢えてここは牽く。
　憤る仲間たちを止める一言に、トゥワイスと龍姫、鎌倉が過激に反応する。特に鎌倉の言葉遣いは以前と比べてやや荒々しくなり、優しかった気の穏やかな口調が崩壊している。
「ハハッ、負け犬の遠吠えだなぁ!もっと泣いてろ、若が本気出しゃあテメェら全員、地獄に落ちてたろうがァ…!」
「賢明な判断だな、死柄木弔」

竜人のような、トサカの異形敵は相手を蔑むよう見下し、小さな着ぐるみを着た人形のような敵は、指を差す。
「直ぐにとは言わないが…できれば早めにして欲しいな。よく考えてみてくれ…こう、自分達の組織とか色々。冷静になったら電話で連絡してくれ」
連絡先を床に放り投げるオーバーホールは、壊れた壁の空洞へと歩んでいき、八斎會のメンバー諸共、消え去って行った。
不穏な空気は爆竹のように爆ぜ、微かな因縁が大きな種を成長させた。敵連合と死穢八斎會の対立関係は後味の悪い方向へ加速する。
「うぅ…ぐす……はぁ…はぁ……ゴメン…ゴメン、なさい…死柄木……」
死柄木の方へ、トボトボと歩み寄る龍姫は、潤った瞳に涙を流しながら、嗚咽に似た言葉を繋ぎ、謝罪する。
「私……アイツを呼ばなかったら……マグ姉が殺される事、無かったのに……皆んなの役に立てると思って、連れてきたのに……ゴメン、本当に……」
龍姫は姉御肌に似た、強気な性格を兼ね備えているが、所詮は中学生。精神的に忍としても甘い彼女にとって、敵同士の抗争という殺伐な空気にはまだ溶け込めていないのだろう、脆く弱い部分が存在する。そんな彼女が、涙を流するのも、不自然ではない。
そんな彼女に、死柄木弔は――
「……気にするな、と言ったらマグネのことが晴れないだろうが、今回の失態はお前とトゥワイスの所為じゃない。俺たちの為に、善かれと思って行動したんだろ？
お前が気に悩んで、頭を下げるのなら、もうそれで充分だ――……」
……え？
死柄木の余りに意外な言葉に、色んな意味で驚嘆する龍姫。本来なら、癇癪を起こして殺されても文句は言えないのに…昔の死柄木ならば、ここで完全に龍姫とトゥワイスを殺していたはずだ。
膝を崩し、拳を何度も床に打ち付ける鎌倉の嘆きだけが響き渡るこの殺伐とした異様な空間の中、死柄木は目を細く、咬み殺すような瞳

でオーバーホールが去って行った方角を見届ける。

「……死穢八斎會、オーバーホール……」

次の支配者は――誰か。

１５５話「新たな因縁を」

「俺の個性強かった？」
「いや強すぎますわ!!」
インターン説明の為に実戦を経験させた通形ミリオの呆気ない一言に、一同は揃えて発声する。
本来の説明ならば口だけの説明で良かったのだが、生憎インターンとは社会奉仕活動でも有り、職場体験とは違うプロと同等の立ち位置で行う本格的な活動だ。だからこそ、プロと供に現場に赴き活動を行う経験者の方が信頼や確証が大きい。インターンという活動の重みも知れるだろう。
「どんな個性なんスか!?」
「瞬間移動、ワープ類の個性持ってましたよね!?轟のようなハイブリッド型ですか!?」
複数個性といえば、脳無を思い出さなくもないが、アレは論外だろう。しかしだとすれば轟のような個性婚によって組み合わされた個性と考える方が自然だ。でなければ到底あの現象には行き着けないし、透き通るのと瞬間移動が併せ持った個性としか考えようが無い。
そんな不正なチート級の個性で突破口も見つからず、訳わかんないように腹パンされただけで試合終了となってしまったのだ。
「ねーねーミリオ！私答え言ってイイ～？私知ってるよー、ミリオの個性はね～」
「波動さん…今はミリオの時間……」
「まあ簡潔にいうと俺の個性は一つ、そんでもって俺の個性は『透過』！君たちが言う瞬間移動ッていうワープ類の個性はその応用！」
透き通る個性がワープの応用？
どんな原理であんな人間離れした行動が取れるのかは不明ではあるが…

「俺の個性はすり抜けることは実戦でも分かったよね？でもね、俺の個性は結構複雑でさ、凡ゆる物が透けちゃうんだよ。
空気も、光も、体も何もかも――だから地面でさえもすり抜けちゃうんだよね！」
「……ってことは、地面もすり抜けるって…沈んでたって事ですか？」
お茶子の言葉に「そゆこと！」と親指を立てて頷くミリオは、自分の個性について解説を始める。
通形ミリオの個性は一つ――透過
先ほど本人が述べたように、個性を発動する事で壁や床、空気や光、音さえも透過してしまうこの個性は解除する事で、質量的なモノが重なり合うことは出来ず、弾かれてしまうらしい。どう言う原理かは不明だが、そもそも個性自体ほぼ理解不可能に近い部類も有るので、そこは気にしなくても流れで納得するべきだろう。
つまり解除をすることで瞬時に地上へ脱出することが可能であり、これが皆で言うワープの類によるものだ。
体のポーズや角度を調整することにより、弾かれ先を狙うことが出来るのだ。
「何それゲームのバグじゃん！」
「ゲームのバグね！センス有りイーエテミョー!!」
相も変わらずテンションが高いミリオには笑いが滑るが、確かに納得がいく。
「でもよぉ、俺たちの攻撃をスカさせて無効にして、自由に瞬時に動けるって先輩、そゃあ強すぎッすよ…」
上鳴のセリフにノンノンと指を左右に振って否定するミリオ。
「いいや違うよ…強い〝個性〟にしたんだよね」
「強い個性にした？」
ミリオの個性は本来ならば危険的で有り弱小部類に入る能力だ。
発動中は肺が酸素を取り込めない。
鼓膜は振動を透過し網膜は光を透過する。
個性を発動中はただただ質量を持ったまま、落下すると言う感覚が

残るだけであり、下手すれば幼い子供が体験すればトラウマに残る難しい個性なのだ。
だからこそ、壁一つ抜けることも他の者からしてみれば簡単に見えるが、それなりに順序的に解除しなければならないし、普通の動作であっても幾つかの工程が必要なのである。
何せ下手すれば、身体が真っ二つになって死んでしまう個性なのだから。プロの現場や急ぎの時間に嗅ぎつける際に、必ずや〝焦り〟が生まれるもの。
焦っている時こそミスが有る…下手な場所でミスさえしてしまえば、自分の個性で自分を殺してしまう危険性は十分に高いのである。
それでもミリオがAクラスを全員腹パンで倒したのも、それなりのたゆまぬ努力と経験によるものなのだろう。それらの努力が実り、彼をビッグ3へと昇段させた。
「この個性で上を行くには遅れだけはとっちゃダメだった！んで俺は周囲よりも早く予測を立て、時に欺く!!俺に足りないものは「予測」だった！それが俺にとって必要不可欠なものだった！
その予測を可能にするには経験が必要で、経験則から予測を立てる！つまり、そゆこと――
ビリッつけから落っこちたら後は登るだけ！俺は上り登って上を目指した！手合わせしたかったのはコレが理由、言葉よりも経験で伝えた方が一年達にとっても、二人の忍学生も伝えやすくて合理的だろう!?
インターンとなればお客ではなく一人のサイドキック！社会奉仕活動として立派なヒーローの一員なんだ！」
先輩の気迫ある言葉に、一同は心が熱くなり、灯火が残る。
これが、努力でトップを掴み取った通形ミリオと言う男――
「でもね、プロの仕事に立つと言うのは、同時に怖いことでもあるんだ――人が目の前で死ぬことも、恐怖を前にすることもある。
勿論、誰かを救えずにヒーローを辞めてしまった人だってこの世の中には存在する」
現在――忍の存在が明るみになり、平和の象徴が不在により今の社

会は混乱を招き、殺伐とした空気になっているだろう。今はまだ増加してるだけで済んでいるが、この先は頻繁に起こるのでは無いだろうか？

いや、あり得る。

敵の犯行でさえ数は多いと言うのに、抜忍が犯罪に加担するだけで悩ましくなる。前例にならない程の犯罪数やその被害数も、下手すればオールマイトが世論に公表される前よりも荒くなる。

そう言った意味も含めて、インターンと言う活動の重さと経験を知らせたかったのだろう。

インターンの活動では、学校の授業とは違う経験を得られる、一線級の経験値が手に入る。この先本気でトップを目指すのならば、インターンの活動は学生にとっては必要不可欠だろう。

「今の時代だとインターンは忍学生も参加可能になるから、俺たちもまだもだ学ぶ点は増えたし、他校との忍学生と連携を取るシチュエーションも多くなると思うよ！」

確かに飛鳥たち三人組がこの学校に来たことで、相澤が本来見込んでた学生たちの成長を、壁を越えるよう想像以上の成長を発揮させた。

多少、無茶をやらかす問題児も存在こそはするが、善かれ悪かれ、ヒーローとしての一歩を歩み進めてるのは確かなのだから。

「ちょっと長くなったけど、俺の言葉を解ってくれると嬉しいな！それを踏まえて行くか行かないかは君たち次第だし!!俺が言えるのはそんな事かな？」

何もかも納得せざるをえないミリオの演出に、皆の悔しむ顔は、段々と次のステージへと歩もうとする思想が芽生えていく。

努力次第では、なれるかなれないか…夢が叶うか叶わないか…それは本人次第の努力、というのは言わずとも解るもの。しかし先輩に、況してや雄英のトップにしてオールマイトに近い男の言葉は説得力が有る。

「てことで俺の話は以上！後は……美人なお二人さんがどうするのかどうしたいかは任せるとするけど…？」

チラリと二人の忍学生に視線を傾けるミリオに「え、美人…？」と面食らって呆然としてる夕焼、そして目を瞑り暫し沈黙する麗王。
「……相澤先生、私達もミリオさんみたく実戦に移りたいとは思っていますが…木刀はありますか？」
「木刀…？ああ、そう言う事か。それなら夕焼の分も…」
「あ、そうですね……刃物だと傷付いちゃいますし…その……」
何やら言いたげそうに体をモジモジさせる夕焼は、実戦に躊躇している様子が見える。何をそこまで躊躇ってるのか、理解するのに少々疑問を浮かべる相澤。
刃物により相手を傷付けない為にと忍学生用として配給されたごく普通の木刀である。主に扱われるのが対人戦闘訓練であり、個性によって刃物を扱える者も居なくはないが…
「二人も木刀使うんだ…」
「まー、飛鳥たちも戦闘訓練だとよく使うしな。けど二人ともやっぱ近接戦がメインなんだな…」
柳生は番傘使用、雲雀は肉弾戦を主体としたスタイルなので、武器は扱わない。なので、相手が木刀を使うとなると、二人は飛鳥のような刃物を扱う近接戦が主体となる訳だ。
「面白え!!ミリオ先輩に負けっぱのままなのも癪だ！一年先の先輩でも勝って先越さねえと、ヒーロー以前に男らしくもねえからな！」
硬化した拳で打ち合う切島は、熱く盛り上がってるようだ。彼の個性は硬化なので、武器を巧みに扱う者との戦闘では、他の者とは違い躊躇なく肉弾戦で本領を発揮できる。今じゃ対人戦闘訓練で飛鳥にも引けを取らない程で、一騎打ちで彼女に勝ったこともあったりだとか。
「けど、ウチら全員でやるんすか？」
「その辺は二人の任意で決める…俺は命の危険性以外口出しはしねぇ……問題さえ無けりゃあ戦闘は許可する…」
「畏まりました…」
相澤の言葉を了承した麗王は軽く頷く素ぶりを見せると、では――と口を開き一言。

「私もミリオさんと同じく全員でお願いします」
えええぇ?!
!?
と驚嘆するAクラス一同に、夕焼も驚いてるようだ。先ほどの見せ場もあってか、麗王もここで持ち込むとは想定外なものだった。
「ありゃりゃ、もしかして俺みたいなって感じなのかな?でもまー俺も忍のことは詳しく知らないし、観戦にはかなーり良いんじゃないかな!?」
ミリオもミリオで自分と同じ事を言うとは思ってもなかったのか、豪快に笑いながら後頭部をポンポンと叩く。
「いえ…ミリオさんと少し違うのは、夕焼さんも含めて…です。私一人だけで…でも良いのですが、夕焼さんもいますし、この先善忍と悪忍が手を組む話も有ります。ならば、善悪共闘で、雄英と渡り合う方が宜しいかと…」
「あっ、私もですか…けど、良かったです。もしこの流れで最後に私なんて来たら……緊張のあまり、腹痛が起きそうですから……」
夕焼はどちらかと言えば天喰環と似た雰囲気を持ち合わせてるし、ネガティヴな引っ込み思案が彼との共通点だろう。
そんな彼女に「貴女も充分に強いですがね…」と軽く言葉を付け足す辺り、彼女もそれなりの実力を備えてるのだろう。
「先ほどのミリオさんの演習を見せられ、王たる私が何も動かないと言うのも、些か可笑しなこと――最小限の力で最大限に引き出し、一騎当千をして見せます。夕焼さん、良いですか?」
自分が王様宣言するのに多少常闇地味たものを感じ取ったが、其処は敢えてスルーする一同は、準備をする。
夕焼は深呼吸した後、意を決して二刀の木刀を手に取る。二丁刀ときた辺り、戦闘スタイルはほぼ飛鳥に似てると予想しても良いだろう。それなら多少抵抗する位ならば――
「ハッハッハッ――!!なんだなんだ威勢の良い餓鬼どもばっかじゃねえか!!面白えなオイ!

さぁとっとと始めんぞオラァ！血が騒ぐ、疼くぜ!!」
『えええええええええーーーーーッッッ!?!!!』

武器を手にした彼女は突如、性格も表情も一変する。
あれだけ穏やかで優しい彼女が、別人と化す。まるで悪忍や心許ない暴虐を尽くす敵そのもののようだ。つぶらな瞳が、獲物を喰い殺す眼に変わり、男勝りな口調に変わる。
「うひゃあたまげたぁ！まさかあの可愛い褐色美人ちゃん、武器取るだけでこんなに変わるってあるんだねー！」
「ミリオ、笑ってる場合じゃない……」
ミリオ自身は笑ってはいるが、隣の天喰は面食らったように驚嘆の声を震わせる。少しだけ親近感を覚えた彼は、あっさりと彼女に対する恐怖感を覚えた所だ。
「……」
「申し訳ありません相澤先生、彼女…武器を取るとこうなってしまうんです…」
相澤本人もまるで何か別のものを目の当たりにしてる様子で、目を細めたまま微動だにせず何も口を開かない。投げる言葉も見つからない相澤に、彼女の代弁として謝罪する麗王に「いや、まあ…気にするな」と多少無理矢理気持ちを押し殺しながらようやく声に出せた。
（なんちゅー豹変の仕方よ……一応那智って人からリーダーの手が焼けるから程々にとは連絡では聞いたものの…ていうか、武器を取るだけであんな風になるんかい）
夕焼は本来の素は、それこそ飛鳥のような心優しい善忍だ。しかし、武器を取る彼女の場合は話は別――その強さは素とはかけ離れた戦力を発揮するのだ。
「うえぇぇ何だあの先輩！新鮮な所が男子心を擽ると思ったら…てかオイラ的には試験のミッドナイトとの戦闘よりも遥かに怖さ倍増なんだけど…!!」
流石の変態神・峰田も夕焼相手だと下心よりも恐怖心が勝ったらしい。彼に同情するつもりはないが、他の一同も困惑と軽い恐怖に身を

震わせている。
「おっ、なんだチビ野郎。テメェが最初の相手になってくれんのか？面白え――その小さな体で俺を倒してみな!!」
舌なめずりし、峰田を狩り殺す獲物と見定めた夕焼は、二刀の木刀を差し向ける。ただの木刀なのに、まるで本物の太刀と錯覚してしまうのは、彼女の豹変によるものなのだろうか、どちらにしろ、このままでは無事では済まないのも確か…
峰田は「おおお、オイラは性的な描写なら襲われてもカモンだけど…血、血の争いは好みじゃねえええ！」と涙を滝のように溢れ出し、命乞いをする始末だ。
これじゃあ演習で学ぶ身どころか、恐怖体験公開演出みたいだ。
「夕焼さん…落ち着いて下さい。私たちで連携を取り、相手を全滅させるのが目的です――このままでは生徒達を学ぶ所か、相手トラウマ植え付けて対人戦闘の場ではなくなりますよ」
「あぁ!?んなもん知ったことかよ麗王！俺は強えヤツと戦えれば何でも良い――さっさと暴れさせろ!!」
麗王相手にここまでの大口を叩けるのは豹変した夕焼しかいないだろう。まるで脳筋のような台詞でもあるが…しかし自称が私から俺となると、二重人格なのだろうか？
「だからこそです。貴女が臨むままを行うのなら…息を合わせましょう。相手は最高峰…私と協力しても満足のいく結果は得られます」
「わーったから、御託は良い。ちゃちゃっとおっ始めようぜ!!」
二人が結託を結び、戦闘開始の火蓋を切った刹那――
「俺が相手だあああァァァああァ――!!!」
最初に飛び出したのは切島鋭児郎。
緑谷よりもいち早く足を踏み出した熱血少年は、硬化の個性で全身を固めて拳を握る。
（緑谷の時ァ遅れちまったが、相手が近接戦なら、こっちも肉弾戦に持ち込んでブッパする!!）

最強の矛にも盾にもなる少年は、夕焼を狙う。
恐らく相手の武器やスタイルから考えて飛鳥と似てると推測するのならば、武器で攻撃をする暇もなく叩き込めば良い。何とも脳筋が考えそうな思考だが、飛鳥との戦闘は此方も経験済み、それに似た行動や動きならば、此方も経験や根性でフォローできる。
何よりも夕焼は田舎育ち…雄英体育祭を見ていないので、完全に個性不明のアドバンテージを披露することができる。麗王ならば話は完全に別で、突破口も見つけられ打破されてしまうので、偶然とはいえ切島が相手をする選択肢は正しいとも言える。
「――【烈怒頑斗裂屠】!!」
切島の個性技――【烈怒頑斗裂屠】は硬化させた腕で渾身のボディブローを放つ強力な一撃技だ。一見地味に見えるが、硬化によりガッチガチに皮膚を固めたその技は、食らえばひとたまりもない。
それを、夕焼は――
「おお!やるじゃねえか――活きの良い熱い男、嫌いじゃねえ…寧ろ燃え滾るなぁ!!」
さも余裕すら持てる満面な笑みで、刀で弾き振るった。
ガギィン――という金属音の音が鼓膜を貫き、呆気なく個性技を一蹴された。
「だからどうしたあぁぁぁ!!!オラオラオラァ――!!」
それでも挫けぬ切島は、気合いと根性で両拳を振るう。殴り合いは己の独壇場とするもの。弱点さえ見抜かれなければやられるリスクは低い。
しかし夕焼はああも容易く彼の拳を木刀で受け流し、弾かれる。況してや何の変哲も無い、ごく普通の武器は刃こぼれさえしていない。相手は硬化、攻撃力も高い切島があしらわるのは、正直予想外なものだ。
「でりゃあ――!!」
少し遅れて、でもってタイミングを見計らってか、緑谷が跳躍し、夕焼の背後を取ろうと拳を構える。ワン・フォー・オール常時８％の緑谷は以前よりもスピードも早く、気付くのが僅かに遅れる。

切島が相手をしてる間、緑谷が――
「私がいることも――」
麗王の言葉が耳に届いた瞬間、予測を立てた緑谷は瞬時に標的を麗王に切り替える。
（拳はあくまでフェイント――だから足を残した！こっから一気に武器を振り払えば、）
「忘れずに」
しかし彼女も緑谷やミリオと同じく予測を立てることを得意とした戦術を用いり、彼が自分を狙うことは最初っから想定済みだったようで、怯むことなく身を屈める。
「おぉっ!?」
「へっ――」
麗王を狙おうと、レシプロバーストで突っ込んで来た飯田が緑谷の前に現れ、対処できない二人は為すすべなくゴッツンコ、衝突してしまう。
緑谷だけでなく、全方向を意識して予測を立てる彼女は頭の回転がズバ抜けている。知力や策略としては、八百万や緑谷をも対等に渡り合えるほどの実力を備える彼女は、ミリオに引かず劣らず強い。
「甘いですよ――お二人とも」
そして地面にひれ伏させるよう木刀で腹部を強く叩く。でもって相手が怪我をしない程度で軽く納め、飯田と緑谷は二人で地面に転がされる。
「す、すまない緑谷くん…！」
「いや…ううん……こっちこそごめん…」
お互い謝りながら、二人は態勢を整える。
緑谷の予想を予想した彼女…なるほど、油断も隙も微塵たりとも感じさせないその気高き品性は確かに王と自称するだけのことはある。
「オラオラァ！どうした赤髪野郎！遅えぞもっと楽しませろよ！なぁ!!」
「ガッ――」
一方、アレだけ気迫ある切島の猛攻は、既に夕焼の番と変わり、鮮

やかな剣技の嵐が、切島の硬化を破っていく。
切島の個性による弱点は、硬化する部位が和らいでしまう点だ。酸素を肺に取り込み体を力ませることで、硬化の個性が成り立つこの代物は、時に脆く突破されやすいのである。
「切島くんの個性が簡単に……！」
切島も戦意喪失といった形で、スタミナ切れとなりダウンしてしまう。実技試験でのセメントスにもやられたこの戦法、どうやら克服するにはまだまだ努力が必要な様子である。
「俺たちも続くぞ――！」
遠距離射撃を得意とする個性たちの一斉射撃。
遠距離のある者たちによる猛攻に、二人は対処する。
夕焼はスピード特化による荒ぶる太刀筋を、麗王は分析と予測、鮮やかな剣技で凡ゆる障害物を退かし突破していく――

「わぁ～凄いねミリオ！天喰も！二人とも凄く早くてすごく強いね！ね！特にね、あの夕焼ちゃんって子、ビックリ！ミリオ知ってた～？」
他校の忍学生と雄英生徒による対人戦闘を観戦するビッグ3、その内が一人――波動ねじれは幼稚的な言葉遣いではしゃいでる。
「へぇ…あの麗王さんって人も予測と分析…あの問題児と同じくサーがとても好きそう!!って言うかぶっちゃけ、あの人もインターンでサーの事務所に来るんだけどね」
「えー!?それは知らなかった！何で教えてくれなかったの！」
さり気なく暴露したミリオの言葉に、波動はぷくぅっと頬を膨らませる。そんな彼女に「ゴメンごめんご～」と軽いノリで謝る彼の言い方に波動は「良いよ～」と言葉を返す。
「まー、ぶっちゃけサーも信頼してる人物だし、それに大人の事情とかで彼女のこと前々から知ってたらしいし、俺は最近知ったんだけどね」
まあ、サーの事務所に来る忍学生は必ずしも一人だけとは限らないんだよね～…と心の中で呟きながら、観戦を愉しむ。
（……麗王さん、二人で全員をまとめて相手って、無茶なこと言ってる

けど、ぶっちゃけ解ってるねあの人）
外面での軽薄なノリの良い笑いセンスなミリオは別として、内心は彼女の強さを身をもって感じ取っていた。それは相澤先生自身も同じだが、予測と分析を得意とし、努力を積み上げてきたミリオだからこそ、麗王の脅威を直様感知していた。
（一見全員との戦闘って案外不公平みたいな立場に聞こえるけど…実は多数決より少数派で戦った方が場合によってはかなり優劣の差がつく…そして麗王さんはソレを知っている――大勢で手を組み戦うより、数少ないチームで共闘した方が得策と言うのを！）
そもそも雄英では全員が全員手を組んで戦闘を行う訓練は殆どと断言して良いほど数少ない。全員が己の個性を知り尽くしていたとしても、経験が足りていない。その欠点があるだけで大きく違うし、数の多いチームで全員が戦っても、本来の力量を発揮できないのだ。
ミリオも半分ソレが狙いで全員と戦闘を行うと宣言したし、到底経験を積まなければ見えない発想でもある。
何よりも脅威なのが…麗王自体、忍術を一回も使っていない。
夕焼の忍術は不思議なもので、飛鳥とは違い変わった忍術で駆使しているが、彼女自身は忍術に頼らずとも雄英生達と互角に渡り合っている。それはまた、彼女もたゆまぬ努力を積み上げたからこそであり、その実力こそヒーロー殺し・ステインとさえ対等に渡り合える程の。
（二人、二人なら連携は決めれるけど、これだけの大人数での連携はかなり難しい…だって個性によって相性が変化するし、人によっては連携を取るのでさえ何ヶ月間か掛かる人間もいるんだ――上手く連携が取れず下手を犯すよりも、少数の方が良い…ふむ、雄英にいる忍学生さん達は置いておくとして、二人ともやるなぁ…）
褒め上げるのも無理はない。
共感し痛感できる部分がある。
だからこそ、ミリオは彼女の強さを誰よりも理解することができるのだ。
「さぁ、まだまだ行きますよ――！」

気高き王と、天狗の烏は、善と悪でヒーロー生徒達に全力をもって勝ちに挑む。

「ここら辺…ですかね」
余り慣れない街並みに足を踏み入れる死塾月閃女学館の制服を着た雪泉は、端末の地図を見ながら目的地へと足を運んでいる。
片方の腕には書類を抱え、歩きスマホをしているようには見えるものの、道が解らないので仕方がない。
「オールマイトのサイドキック…サー・ナイトアイ事務所……」
サー・ナイトアイ
メディアでも顔は載ってるし、地味なサラリーマンのような風格はあるものの、嘗てはオールマイトの相棒として助力し合い、未来を築き上げて来たユーモアを第一に考えてるヒーローなのだ。
今回のインターンでは、雪泉も参加希望としてヒーロー事務所を探していたところ、サー・ナイトアイ事務所を当てたのだ。とは言っても、オールマイトが雄英の担任教師になったことでコンビは解消となったものの、今の二人の関係は定かではない。
「一体どんな……って、きゃ――!?」
道を歩き、考え事に浸っていたら、人にぶつかってしまったようだ。片腕で抱えてた資料を手放してしまう雪泉は、封筒に閉まっていた書類が飛び出てしまう。
「ああ、いけない…書類が……すみません――ボーっとしてて…」
「……ああ、此方こそ」
若い男性の声が返ってきた。
雪泉は資料を必死に掻き集めていると、小さな写真が一枚落ちてきた事に気付く。
(写真……?)
雪泉は首を傾げながらも、その写真を拾おうとする前に若い男性の

手が遮るよう、写真を拾う。
裏側だったので、誰が映っていたかは不明だったが、封筒に写真は入ってなかったので、持ち主と考えて宜しいだろう。男性の手に釣られて、雪泉は視線を男性に傾き移す。

「すみません、お怪我はありませんか？」

心配そうに雪泉の表情を伺う青年。雪泉は直ぐに「あっ、ハイ――」と言葉を返した。
その青年は……一際目立つペストマスクを付けていた、一般人とも呼び難い風貌に身を包む男。

雪泉の目の前に佇む男の名は――〝オーバーホール〟
死穢八斎會の若頭にして、敵連合との接触で揉め事を起こした、大物敵だ――

――白き正義の少女と、黒き悪の青年が、遭遇した瞬間である。

１５６話「後継者」

「ああ、それなら良かっです――私も、注意が足りてなかったようで」
死穢八斎會の若頭・オーバーホールは表情を穏やかにしながら軽く謝罪の意を込める。
雪泉自身は、この青年がまさかこの地区の極道とは思ってもおらず、敵連合と接触した危険人物だとは知らない。殺意も敵意も一切感じ取れないので、雪泉でも気が付かないのだろう。
「ああ言え全然…すみません、其方こそ大丈夫ですか？私が不注意だったばかりに……」
「いえ、特に問題は有りませんよ――其方に怪我が無くてよかったです」
敵連合、死柄木弔達に見せたあの冷徹な表情が嘘のようだ。とても穏やかで、その笑顔は本性を隠す贋物の仮面だとは誰も気付かない。
「それにしても……」
と、オーバーホールは雪泉の制服姿をマジマジと見つめる。決して卑猥な眼ではないが、何処か珍しそうな視線を彼女に浴びせる。本人は相手の様子に小首を傾げ、「どうかしましたか？」と尋ねてみると――
「貴女、何処の学生さんなんですか？」
オーバーホールの問いかけに、少し困ったように目を開く雪泉。なぜ、こんな質問をして来るのか…なんて疑問が湧く前にオーバーホールは口を開く。
「ここらの地域では一般からヒーロー学校こそありますが…その学生服を着た学生さんは見たことないですね……」
オーバーホールを始めとした八斎會は指定敵団体こそではあるが、何も警察やヒーローからは追われてる身では無い。監視されてるだけで、犯罪の証拠物や目立った騒ぎを起こさない限り、問われ追い詰

められることは無いのだ。
なので、周辺地域をくまなく調査、巡回しヒーロー学校や一般学校にまで予め頭に入れてるオーバーホールだからこそ、雪泉のような学生服に覚えのない青年は、不思議でならない。
「あの…私はこの地域の人間ではなく、遠い方から来た者でして……今日初めて研修に来た訳でして…」
「嗚呼、そうだったんですか。どおりで、見ない学生だと…遠くから遥々やって来るなんて、最近の学生さんはいつになく熱心なことで、感心ですね」
まるで近所の人と軽い談笑を愉しむように、ニッコリと笑顔を見せるオーバーホールに、雪泉は「はいっ、有難う御座います♪」と軽くお辞儀をする。
「んで、何処の研修先に向かうんです?もしかしてヒーロー学生か何かですか?」
だが、この男は極道の若頭。
一度疑惑を芽生えた相手をそう易々と見離す程、甘くはない。この時期はよくインターンという活動でヒーロー学生がその社会奉仕の活動に赴き参加する生徒が居る。そんななか、この地区で研修先に参加するとなると、万が一自分たちの計画に支障が出れば狂わされてしまう。特に…最近忍の存在が明らかになった以上は尚更。
「大した場所じゃないですよ、それに他言するのは教師からも禁止されてるんです…申し訳御座いません」
「なんだ…それは失礼しました。烏滸がましくてすいませんね、私の悪い癖で…気になった事があるとつい、聞いてしまうんですよ……気分を害されてしまい申し訳ありません。この質問のことは忘れて下さい」
「いえ、全然…では私急いでるので、失礼しますね」
雪泉は絶えぬ笑顔で頭を下げ、足早と研修先へと向かう。そんな微笑む彼女の後ろ姿に、オーバーホールは――

「……アイツも、英雄症候群の一人か。一応、マークを付けとくか」
彼女の見え透いた嘘に、只者ではないと確信したオーバーホールは、先ほどの笑みを一瞬で崩し、冷徹な顔に戻る。それこそ、極道の若頭の本当の表顔である。

同時刻、場所は変わり雄英体育館γ
先ほどまで火花散るごとく、激戦を繰り広げた雄英生と忍学生達。今広がる光景は、全員が倒れはしてる状態だ。
とても、歳が一個上な忍学生とは思えぬ程に、彼ら彼女らの実力による壁は、雲泥の差として広がっていた。
相手が選抜メンバー全員なら解らなくもない…しかし、こうも二度成す術なく負けの連続が続いてしまうと、正直言って心が折れる程に悔しい。
「皆様、対戦して頂き、誠に有難うございました」
「ッ……あの、私の方こそ、有難う御座います…それと、大丈夫、ですか？」
二人は怪我らしいケガは見受けられず、夕焼は息こそ上がってるが、麗王自身はまたまだ余裕が有りそうだ。
二丁の木刀を手放した夕焼は、１８０度豹変した血の気盛んな殺伐の性格から、元の臆病で気弱な彼女に戻ってしまう。どうやら武器を手に取ることで、どうも性格が豹変してしまうらしいそうで、性格が変わった後は詳しいことは覚えていない、記憶が曖昧なのだ。
「いや、強過ぎッしょ二人とも……一個歳が上だからって……」
「マジ凹むわぁ～…つか、夕焼さんの気迫と麗王さんの連携がうますぎ…」
「気圧されたよね…しかも麗王さんに限っては忍術っぽいの使ってなかったし…」

上鳴、芦戸、葉隠の萎える声色に、麗王は「いえ、そんなことは…」と、謙虚に似た言葉を発する。
飛鳥、柳生、雲雀の三人と対峙しても、相手によって変わるとは聞くものの、こうも差が違うとなると、経験や年というのはここまで力の優劣を生み出すのかと、考え込んでしまう。
「私としても、今日は勝てましたが次は分かりません。そもそも、勝負に確定な勝利というのはありえません。貴方達が日々精進し努力を欠かさなければ何れ…ふふ、我ら選抜メンバーでも危うい…
それ程に貴方達には成長できる余地を感じました」
謙虚だろうか？しかし、彼女の口からはそんな風には聞こえない。麗王は険しい顔立ちで、でもって凛々しく美貌を兼ね備えた形で語り出す。
「先ず、貴方達は先程ミリオさん一人を相手に戦いました。大した傷も無ければそれらしい怪我もしていません。その上で私たちは二人、相手は轟さんに爆豪さん二人と忍学生がいない状態での戦闘。偶々、勝利出来たまでのことです」
「それを言うなら麗王さんに夕焼けさんもっしょ、流石に多対一で俺らの方が有利っスよ…そもそも、夕焼さん敵みたいですし、麗王さんなんか一回も忍術発してないですし…」
「わ、私が敵っぽい…世の中にはもう一人の私みたいな人がいるんですか……やっぱり、恐ろしい…」
「いや、夕焼さん敵のことも知らないんだ…あっ、ヒーローのこと知らないって言ってたし当然なのかな？」
上鳴の仰ることはごもっともだ。
麗王には忍術らしいものが見受けられない。いや…動き方がプロにしろ、まるで相澤先生と戦わされてるような気がした。そもそも、忍術というのは、必殺技のような効果を発するものばかりなのだろうか？
夕焼に至っては敵っぽいと言われる始末で、当の本人はネガティヴ気味で豹変した彼女とは思えない程に、落ち込んでいる。
そもそも夕焼が住む遠野の里は犯罪の起きないのどかな田舎村だ。

電子器具や娯楽機などが存在しないので、ある意味正義と悪からかけ離れた理想的な大自然の村だ。
　そんな彼女が敵のことすら知り得てないのは、ある意味当然だろう。
「いえ、他の方々と比べて私は無個性に近い部類、相澤先生やミリオさんのような特殊類な能力はありません。
　そんな生身である私が、轟さんの大規模な氷結を出されてしまえば打開できる術は難しく、特に爆豪さんのような最大火力の爆破を出されてしまえば、無事では済みませんよ。上鳴さんだって無差別放電を出されてしまえば、下手すれば気絶してたかもしれませんし」
「……つまり、私たち全員を組ませたのは、個性が上手く連携を取れないようにするのと、出力を抑えるため…？」
「はい、麗日さんの仰る通りでございます」
「なるほど…つまり俺一人なら麗王さんに勝てたかも、という事か！」
「いやぁ、アンタの場合は大抵の相手がそうでしょ。アホになるのが弱点だけど」
「お前さあ！人が気にしてる所を突くなよなぁ!!」
　上鳴電気はチャラけてる上に、個性の能力は強力だが、それは多対一との戦闘の場合に於ける、奥の手のような物だ。そんな無差別に味方の巻き添えを防ぐべく、彼は発目に頼み、サポートアイテムを申し込み、仮免試験では一時期役に立ったのである。
　また轟や爆豪のような、初見殺しによる大技を披露されれば、対策案が有ったにしろ、対処出来ないケースだってあるのだ。そう考えると、つい納得してしまう。
「えーっ!?けどさ、私たち全員なら大体行けるでしょ？私の酸や青山のおへそレーザーだって…」
「いえ、そんなことはありません。各々が計画的に流れで動くのは難しいんですよ。個性によって相性や向き不向きが有りますし、集団戦闘訓練を行ってるのなら、話は別ですが…」
　集団による連携…数ある生徒で組んだのは体育祭の騎馬戦以来か、アレでも数ある個性を扱うのは骨が折れるし、二体の脳無で上手く連

携を決めれたことだろう。
　そもそも相手は意思がなければ思考能力もない化け物、そんな相手に勝てたのも策略によるだろうし…
「少なくとも、敵の襲撃を受けた貴方達なら、理解できる節も有ると思いますよ」
「それって、ＵＳＪか！」
　ＵＳＪ
　災害救助による訓練施設に突如と襲いかかった敵連合。忍の力もない、悪意を募らせた犯罪集団の事件は、今でも覚えている。
　緑谷が思い当たった節は、対集団戦闘だ。向こうは個性も人数も不明な上に、入学したばかりの新米ヒヨッコ生徒達だった自分たちが何とか苦難を突破出来たのも、そういった連携やコミュニケーションと、相手の相性に性格、向こうの連携にも問題があった。有象無象の駒と呼べるチンピラ程度とはいえ、中には強力な個性を持つ輩だっていたのだ。
　成る程、つまり今回の訓練は夕焼や麗王は二人、自分たちは徒党を組んだ敵の集団と想定すれば、大きく納得がいく。
「ＵＳＪ…？かは存じませんが、思い当たる節があるのでしたら話は早いですね」
　何となく頭の中で納得した雄英生達。
　因みに悪忍の身柄な上に、表面では数々の会社やグループを統括する彼女にとっては、敵連合襲撃を含めた情報収取は朝飯のモノ。とは言ったものの、重要性と実現性のものしか記憶に残っていないのは無理もなかろう。
「私が言えるとは…ミリオさんの仰った言葉と同じで努力と経験を積み、より早く予測を立てることです。
　私も嘗ては、忍なんて呼べる程の技量は有りませんでした…しかし、原点が、目標が、友が、私の背中を押してくれた――」
　そして…

『自分の弱さで、誰かの為に涙を流せる君は、決して弱者なんかじゃない――もう大丈夫、私が来た』

平和の象徴の、温もりを――

忘れられない、あの人の暖かな腕。

現実に打ちのめされ、非力な自分を救うあの人の正義。

太陽にも負けない、彼の慈悲深い優しさ。

それらが、彼女を奮い立たせた。

忌々しい過去と同時に、与えられた希望とも呼べる勇気…麗王には、仲間を含め背中を押してくれる人々がいる。

己を王と例えるならば、市民や仲間を守らなければならない。その為ならば、誰かの笑顔を壊されたくないのならば、その努力は惜しまない。

彼女の強さの所以は過去にあり、忍として今を生きてる理由も、過去にある。

だから、過去を未来に紡ぐ。

過去に貰った様々な苦難、悲嘆、どれも彼女の心を蔑み、時には心を折らせたこともあった。トラウマとなり、血塗られた記憶は、時折夢に出てくる。

それでも、非力で弱かった自分を、慰め、背中を押してくれたのが、あの人だからあの人だから――

「これは謙虚ではありません。私からして原点が無ければ、貴方達と張り合う欠片もない、非力で貧弱な愚か者のままでした。大事なのは原点――自分が何故、ヒーローを目指すのか…各々ももう一度、心の中で問いかけて見ては、如何でしょうか？」

一年の差だけで、これだけ力量が広がるのか。

一年先、経験豊富な彼女、それは夕焼も同じであり、ミリオ達は二年先だ。問題はこの一年で、どの位の成長を成せれるか…また、どれだけの成長の幅を見せてくれるのか。

夕焼にとっては、ある特殊な戦闘傀儡のお陰でより広い幅の成長を成せる事が出来たし、彼女が強いその秘訣は、己の中に住まうもう一

人の自分が大きな原因とも呼べるだろう。
「私も是非とも、オールマイトが背負ってきた大切な存在を、守り、ヒーローと供に背負わせて下さい。私は、其れが出来ませんでしたから――」
「――？」
できなかった？
麗王の少し意味深い発言に、オールマイトの弟子である緑谷は眉を顰める。
彼女の気高き品性のある、お嬢様のような柔らかな笑みとは裏腹に、その言葉には何処か後悔に似たような物が混ざっていた。
「私からは以上です…夕焼さんは……？」
「わ、私のような気弱な人間には到底…それに、私から言えることなんて、麗王さんの言葉で気持ちがいっぱいになりましたし……」
夕焼は首を横に振ると、麗王は「そうですか…」と一言。
特に何も言うことが無くなった麗王は、軽く相澤先生に視線を移す。意図を察した相澤は「まッ、ザッとこんなもんだ」と軽く手を叩く。
「直に解ったろ、これが実力だ。良いか、よーく心の中に刻んどけ。それと二人の言葉を忘れんなよ、一つや二つ歳が上なだけでこうも差が開く。ただそれは本人の努力次第だ。己がより壁を越えれるか、どれほど先へと成長出来るかが鍵だ。
林間合宿でも言ったように、原点を思い出せ――」
原点――
何人かがそのワードに心が揺らぎ、熱き火が灯る。
オールマイトに憧れ、個性を貰った緑谷出久
父親に野望を託され、全てを背負わされた轟焦凍
嘗て、恐怖を前に挫折した切島鋭児郎
他の生徒も想いを募らせてはいる。しかし其れは口だけの言葉と化してないだろうか？常に強き信念を抱き続けるのは難しい。それを可能にする者は精々ヒーロー殺し位だろう。時間が、人が、環境が、全てを狂わせる。だからこそ、人は変わってしまう。

だからこそ、維持を続けると言うのは大変なのだ。そう言う意味では、ヒーロー殺しがヒーローを贋物と呼び、日々粛清という罪を重ねた道理も、今では少しだけ理解も出来る。
インターン…成る程、ここでトップを狙うには、正にピッタリな奉仕活動だ!!

「はぁ!?いんたぁん!?誰だ君は!?」
インターンの講習、そして授業を終えた緑谷は、グラントリノに連絡を入れた。
体育祭を終え、職場体験で指名が有ったのは一人だけ、その相手が古豪グラントリノ。オールマイトの師であり、ワン・フォー・オールの詳細を知っている人物。他に事務所を頼んでも良いのだが、あの老人相手なら都合も良いし、ズルで言えばコネもあるので、真っ先に電話をかけたという訳だ。
「あの僕、体育祭で指名貰いましたし…良ければと思って…」
「無視するたぁお前も大物になったなぁ小僧!」
この手の付き合いに構っていられる暇は無いのか、グラントリノのボケを空気の如くスルーする。
経験を積めれる機会があるならば、逃さずチャレンジをこなす。その繰り返しだ。授業の中だけでは取得できない経験だからこそ、何十倍もの価値がある。それを目の前で見せられては、ジッとしていられないのが、今の緑谷出久だ。
「校外活動、そいやもうそんな時期か…体育祭の時のオメェは俺を除いて指名ゼロの半人前だったしなぁ!!」
「半人前の自分だからこそ、もっと上を目指さなきゃいけないんです!他の誰よりも、何倍もの努力をしないと…」
「お前さんの意気込みとやらは大いに関心するが、生憎こちとら警察の方で手を焼いててな…敵連合の捜索を兼ねてお前の面倒は見れねえんだ、悪いな」
グラントリノは現在、塚内刑事と供に敵連合を捕らえるべく全力を

尽くしてまでも、捜索を行なっている。それでも目撃情報は滅多に噂を聞かず、完全にお手上げに近い状態だ。上層部から派遣された忍達も敵連合を目撃した話はないそうで、忍も手を焼いてるんだとか。
「となると他を当たれってことになりますよね？……どこにしよう」
「だったらお前、俺以外にもう一人適任者がいるだろ、オールマイトから紹介されてないか？」
「えッ、誰です？」

「例えば、オールマイトのサイドキックを務めてた…サー・ナイトアイの事務所とかな」

少しずつ、運命の歯車は動き出し、走り出す。
加速し、時は進み、物語は動き出す。

「おい、クロノ…今日もやるぞ。壊理連れてこい」
「へい、了解しやした」
死穢八斎會、拠点地下の研究室…らしき真っ暗な通路を歩む若頭・オーバーホールはクロノと呼ばれる者に指示を出すと、彼は首を縦に頷き了承する。
「どうでした？外の空気は？」
「汚れてた…どいつもこいつも、大義を成そうとしない病人どもばっかが、世を蔓延んでいる。収穫は…一部を除いて問題はなったよ」
「はぁ、一部？」と首を傾げるクロノは、ペストマスクを被ってるので、表情も素顔も見えない。
オーバーホールは何の表情を変えることなく、変化のない顔で手袋を脱ぐ。いつもの、アレが始まる合図だ。
「サンプル品の物流はどんな感じだ？」
「ええ順調です。闇市場で出回って忍までその匂いに噛み付くほどですし、計画の方は着々と…」
「よしッ、後は時間の問題と名声…だな。奴らから連絡は？」

「まだツスよ、そもそも会ってから数日も経っていやせんし、無理もないかと」
「そうか、まあ良い…立ち話もなんだ、早く始めるぞ」

オーバーホールが手袋を脱ぐ瞬間は、二つ――
一つは、排除、殺処分として人間の命を分解して消すこと。
一つは、計画を進行すべく、核から摂取する異能破壊弾の作成のため。

全ては、個性と言った異能の病気を治し、支配者となる為、己の為、全ては――オーバーホールのために。
今の死穢八斎會は、その為の……

１５７話「事務所へ」

「一年生の校外活動の件ですが、昨日の協議した結果――校長をはじめ、多くの先生がやめとけの意見でした」

朝のホームルーム。

早朝から相澤の発表に大半の生徒が口を開く。やれブーイングだの疑問の声が上がっていく。

「全員ザマぁ!!!」

そんな中、自己中心を言葉で言い表した男、爆豪勝己は蔑む視線で見下ろし、ハッ！と鼻で笑う。

緑谷と飛鳥よりも一足遅く謹慎から解放され、溜まってたストレスが抜けたのだろうか、気分はいつもより高めの様子だ。

「じゃあ昨日の説明なんだったんスか!?」

皆の気持ちを汲みするよう代弁したのは切島鋭児郎。その言葉に大きく賛同するお茶子は、ＵＳＪの１３号を解説する緑谷に見せたような、凄い勢いで首を縦に振る。脳までシェイクされるんじゃないかと、違う疑問を浮かんでしまう。

しかし全寮制になってしまった上に、雄英が敵と遭遇し変な噂が流れ出れば今度こそ信頼も評価も底へと落ちてしまう。体育祭のような〝折れない姿勢〟と言った形で全体へのイメージを保つのは中々に難しい。インターン中に敵連合に狙われていた、では致命的でもあり話にもならない。

だからこそと言うべきか、教師の適切な判断として、雄英には出て欲しくない主張が強いのだろう。生徒達の身の安全を考慮してこそ〝反対〟の意見が多いのだ。

「が、現代ヒーローの教育保護下方針では、強いヒーローは育たないのではないかという疑惑も上がっており、結果――プロヒーローにも許可を得ることが可能で、且つ重要で優秀な生徒、数多くの実績のある

学生をプロヒーローの事務所、インターンに参加することを許可するそうだ。まっ、高い実績なけりゃあほぼ無理だと考えとけ、体育祭での指名貰ってない奴らは残念ながら禁止とされている」
「クソッたれが!!!!」
だが、逆に褒められた実績と仮免許可証、そして体育祭でプロヒーローから指名を受けた者たちは別らしく、その中から事務所から許可が下りるそうで、場合によっては学生時代からヒーローインタビューを受けるなんてこともない話ではない。
自分のいない場所で先へ進んでいくこと、結局全員廃止にならないことに、怒りの鬱憤を貯めてた爆豪は、殺意の衝動を押さえ込みながら、狂犬のように声を曝け出す。
「フォースカインドさん受け付けてくれっかな〜?」
「セルキーさんに連絡してみるわ」
「ガンヘッドさんとこ行ってもっと色んなもの学びたいなぁ」
一方、それでも実績のある生徒達は校外活動に興味津々と言った形だ。緑谷自身は昨日、グラントリノと連絡してみたものの、別件で手を焼いてるそうなので、話してたサー・ナイトアイについて相談してみたいと思っている。
ホームルームも終わり一限目の授業、プレゼントマイクが担当する英語を終えて直ぐ、職員室へと足を運ばせる。

「サー・ナイトアイにインターンの紹介をしてもらえるか…だって?」
緑谷の質問に驚愕の色を隠せないオールマイトは、手に持ってた資料を机の上に置く。
「はい!!オールマイトの下で働いたという数少ないヒーローの一人に――「質問を質問で返すようで悪いが、どこから彼の名が上がった??私は話した覚えはないのだが…というか、ここ職員室だから静かにするんだ緑谷少年よ、落ち着きなさい」すいません、オールマイト関連になると興奮しちゃうんです」
「うん、知ってる。それで?」
「あの…校外活動でグラントリノに連絡したんですそれで…」

「あー…うん、成る程ね。大方、話は読めた」
グラントリノから話を聞いたと察したオールマイトは、深い溜息を吐く。師匠が塚内と供に敵連合の尻尾を探っているのは、あの大事件を後に病室で聞かされてはいたが、迂闊だった…グラントリノの記憶を無意識に、且つ自動的に封印していたようだ。
もし、今の言葉をグラントリノが聞けばまたゲロ吐かされるので、口が裂けても言わないのだが。
「じゃあッ――「お断りしマス」…えぇ…」
緑谷の次に出す言葉を感知したオールマイトは、言われる前に宣告した。緑谷は声と供に気が沈むような、表情を曇らせるもオールマイトは「いや、意地悪で言ってるわけじゃあないぞ」と、真剣な顔立ちで指を五本立てる。
「君のために言ってるんだ、私は〝君の先生〟で、君は〝私の大切な生徒〟だ。
その内が先ず一つ目、私は昨日の協議で反対派だ――敵活性化の恐れ、頻繁に増える犯罪の数々を考えて、そもそも今やるべきことでは無いと思う。何せ校外活動は生徒個人の〝任意〟であり、強制では無い。勉学も厳しくなる一方、両立させるのは極めて困難だし、緑谷少年なら無茶をするんだろうけど、私としては出来ればやめて欲しいというのが本望だ」
犯罪率上昇は世間に対して危険な意を表している。そもそも敵だけでなく最近は良からぬ事件が相次いでると聞く。
そんな物騒な今、外に出て危険に晒せる行為は、先生として自分はよろしく無いと考えている。
「二つ目、そもそも緑谷少年は焦らずとも、シュートスタイルの強化に専念すべきだと思う。皆より早く追いつこうとする気持ちも、分からんでもないが、焦燥に身を焦がしてはかえって逆効果だよ」
シュートスタイルだけでなくとも、技として押し付けるにはまだ開発の余地があると考えている。第一、体術及び新たなスタイルを身に付けたとしても、自分の持てる全てが通じるとは限らない。
可能な限り、備えを持ってからでも遅くはないと踏まえているのが

現状での気持ちだ。
「三つ目、これは余り詳しくは言えないが、最近不可解な事件が相次いでると聞いている」
「不可解な事件？」
「ん～…とても言い難いのだが…その、〝妖魔〟の話は覚えてるかい？」
その言葉に、息を呑む緑谷。
妖魔――以前、飛鳥と供に話を聞いたことがある、異形の姿をした化け物のことか。
「私のいない間に、ちょっと個人的に関わる問題がね……」
最近は全国各地に妖魔が出現したと言う報告を小百合から聞いたことがある。
殺伐とした世の中、忍が公に姿を現したからこそなのか、善悪問わず血を争う行動が増え始めた間中、年間の平均を上回ったと聞く。
緑谷自身、パッと聞いても余り納得は行かないのだが、目撃したことも見た覚えもない緑谷にとっては、化け物という言葉だけが思い浮かぶため、想像力がよく働かない。
大体異形の姿をした存在なら、個性だってそうだし…
「まあそんな話をされても余計に混乱しちゃうだろうけど…
そして四つ目、敵連合の目撃が少ない上に、君自身、多少命を狙われてるのだろう？
飛鳥くんもそうだが…彼女は別件で雄英から離れてるし、インターン目的でもないから心配こそはあるけど…霧夜先生が付いてるからね」
半蔵学院。
詳細は聞かされてはないものの、学校側の行事で離れなければならなくなったのだ。
かと言って向こうは担任の先生が付いてるし、万が一のことがあれば助力してくれるだろう。それに当日まで情報は届かなかったし、止めるどうこう以前に無理だったと言う話だ。
そして敵連合――緑谷と飛鳥曰く、殺害対象として優先順位が高

かったとのことと、オール・フォー・ワンとの対面で少年少女の命に危険が伴うリスクが充分に高いと判断したオールマイトは、だからこそなのかその考えは間違いではない。

「そして最期の五つ目、気不味い」

「最後は気マズイんですか!!!」

特にどうでも良いような、でもって重要な内容でもないし、私情を持ち込まれた緑谷は盛大なツッコミを入れる。

大声に職員の教師たちは一斉に振り向くありざまで、空気までも気まずく淀んでしまった。

「緑谷くん、ボリューム抑えて……

と言ってもまあ、緑谷少年のことだ、止めても止まらないのだろう？君は私が何度止めても、言うことを聞かないんだからな」

何処か呆れたような口調に、緑谷は沈黙したまま首を縦に頷く。

平和の象徴として、次の世代の後継者の役割を担うのなら、次のオールマイトになるのなら、果たす為に努力は惜しまない。

ミリオの話を聞いた限り、確かに危険な道だと言うのは重々承知、命を堕とす場所へ向かおうとしてるのだから、心配されるのは無理もない。

「だけど、私からは紹介できない訳で、ほかの適任者はいるだろう？君自身なら知ってるはずだ――私が昼に呼んでおくから、良ければ…」

場所は変わり、善忍本部。

東京に支部を構える高層ビルは、空を見上げるほどに高く、上層部たちの拠点としては相応しい建物だろう。

会議室は重力が増した空気はいつになく険しいもので、見渡せば険しい顔立ちをした組織の上層部は、資料に目を通せば悩ましく抱え込む。

「善悪の忍か公の下、行動を示してから一ヶ月…これらの進歩らしい

結果は見出せず、問題騒動ばかりが増えていく一方だなぁ…」
「雪不帰と小尾斗の報告によると、憑黄泉が姿を現したと聞いたぞ？」
「それは誠か？奴は死したはず…いや、殺処分の噂は聞いてはいなかったが、誰にも頼れんあの状況で生き延びる術を持つことなど…」
「ハハハッ！そうかいそうかい、あの化け物が現世に姿を現したとな！天竜衆ではなくか？」
「口を慎め覇黄！今は一刻も猶予を争う事態だぞ？カムイが神野区で姿を現し、半蔵に平和の象徴が折れた今、頼れるのはその穴を補う駒ではないか？」
「俺より下の者を駒と呼ぶ雷堂殿の方がおっそろしくアレなんだけど、口を慎めよって言いたくなるんだけど…
そう目くじら立てず、我々人間、上の者はそう焦らずとも、下の者達にゆとりを持って、信頼を寄せ明るみに接するのも、我々上層部の役目だとは思わんかい？ねえ、明王様」
白髪の長い髪を下ろす老人は、覇黄と呼ばれる青年らしき上層部の人間に怒声を飛ばすも本人は軽く笑いながら一蹴。世に言う不真面目な陽気キャラとはこのことだろう。
そんな青年は、明王と呼ばれる最高上層部に同意を求める。
「……」
微動だにしないその圧倒的な威圧と、ただならぬ雰囲気を曝け出すこの気配は、歴戦を潜り抜けたであろう風格が形として見える。
「……憑黄泉だけではない、各地で妖魔が出現してる中、これ以上妖魔の被害に本性を暴くのは此方としても都合が悪い…」
「陽花が大半の妖魔衆を倒したのはよしとしても、その後でくたばっちまったのがなぁ…
信頼こそしてはいたが、また不在となった妖魔衆が増えちまったら身も蓋もないぞ？」
「なに、カグラ四天王がいるではないか」
「忘れたか、リュウは今不在…と言うよりも抜忍になったならまだしも、消息不明だ。あの化け物が…」
カグラ四天王。

カグラの称号を持つ中でも尤も順位も高く、多くの忍からはその実力を認められ、陽花亡き穴を補う重要人物にして貴重な人材である。
個性的で意思や出身はバラバラだが、どれも神威でも迂闊に手が出せないレベルの実力らしい。
「それよりも、俺は今でも謎に包まれている妖魔の巣が気になるよ。まだ調査は終わってないのかな？
〝妖魔を連れた少女〟の話は――」

覇黄の発言に、眉をひそめる上層部達。
妖魔を連れた少女――目撃談があったのは8年前になるだろう、微かな情報だったが、妖魔の巣に襲撃した上忍の集団は全滅。そんな中、奇跡とも呼ぶべきか、一人だけ生還者がいた。
その後結局は助かることは無かったが、呼吸を荒くして確かに言っていた――

小さな少女が、妖魔と手を繋いでいた…と。

今となってはその少女が無事かどうかは不明だし、人間の形をした化け物なのではないかと疑いが付けられたが、妖魔の巣から化け物が出てこない辺り、害は無いと見なし、暫し様子見とのことから、一向に詮索はしなかった。
「なぜ今その話を？」
「今、日本各地で妖魔が発生し、あろうことか生け捕りをしてるそうじゃあないか？
知能の低い妖魔が、意図的に一般人を始め、ヒーローや敵、善悪の忍を生かしたまま妖魔の巣へ持ち運んでるんだ。ならば、危害が無いと考え見込んでたあの巣窟も、何かしらの変動があるんじゃないかと俺は想うんだよ」
上層部の話を、もし知識のかけらもない上忍が聞いても、到底理解し難い内容なのは間違いないだろう。
多くの真実は、上層部の人間しか知らされてないのだから。

「覇黄の意見も一理ある……しかし、今は忍供を失うわけにはいかん…どうしたものか――」
明王が神妙そうに表情を曇らせる中、「失礼しますッ！」と声と供に扉が開かれる。
上忍の一人だろうか、黒い忍装束を身に纏い、息を切らしてる様子はまるで緊急事態とも見える。今度は何事かと、耳を傾ける上層部たちに、上忍の一人はこう言った――
「か、かぐらと護身の民と呼ばれる者、二人の少女が日本に、現れたと情報が――ッ!!!」
日の神は、憑黄泉の件と供に目を覚ましたようだ。

電車で一時間。
そこかしこに聳え立つビル、何気なく通勤をする大人の社会人。犯罪率が加速している世の中、とても平穏とかけ離れた世界とは言い難い。
「ここがサーの事務所なんだよね」
先頭で道を案内するのは、昨日で演出活動を行ってた三年のビック3、通形ミリオだ。
「おぉ…確か今日聞いた話だと、忍学生が二人来てるんですよね？一人は麗王さんで、もう一人は新しい生徒だとか…」
「一言で言うなら白雪姫にも負けない美人さんなんだよね！かき氷にシロップかけて食べたくなっちゃう子なんだよね！」
「先輩、それ益々分からないですよ」
これは昼休みに戻るのだが、職員室でオールマイトが言ってた言葉を覚えてるだろうか？
昼食時間に呼び出された緑谷はミリオと供に休息室へ向かい、オー

ルマイトが話してたサー・ナイトアイの事務所について聞き出していたのだ。自分からは個人的な事情が大きい分、合わせ辛いのだとか…

私情極まりない話だが、自分たちはあの二人の仲に何が起きたのかは不明だが…

特に一番気になった言葉のワードが「彼の忠告通りになってしまった」という点が大きいだろう。

「あっ、そうそう――緑谷くんはサーに会ったら話終わるまで、必ず一回笑わせるんだ」

そんな呆けた顔で街を巡回していると、唐突にミリオは無茶難題を突きつけて来た。

「わ、笑わす？何ですか!?」

緑谷の反応はごもっとも、当然のリアクションだ。

まだ面識もない人間に、急に「その人笑わせろ」なんて言われて「サーイエッサー！」なんて言えたものじゃないだろう。まだ相手が赤ん坊の方が百倍マシだ。

「サーはメディアとは違うもう一つの顔があるんだ。真面目すぎるし硬い節もあるけれど、根はとっても優しくて良い人だから、問題ないよ！」

あのミリオ先輩がそこまで言うのなら、そう難しい人間でもないのだろう。見た目がサラリーマンな風貌なのと、オールマイトの相棒という事実上の情報しか知らない緑谷にとっては、何というか、不思議な感覚だ。

緑谷は知っての通り、オールマイト大好きヒーローオタクだ。オールマイトグッズを集めるのは序の口で、他にも超常黎明期から現代にかけてのヒーローを知らない者などほぼ存在しない。

しかしそれはほぼと言っただけで、全て知っているという訳でもない。ヒーローに関する知識量、歩くヒーロー辞典の彼でも、ナイトアイのことは詳しく知らない。

メディアや社外秘が多いのだろうか、メディアで顔こそ上がっては

いるものの、どういう人物像なのかは知らないのである。グラントリノとは違う点は、メディアやヒーローの職業かで別れているのだから。
「で、でも忍学生をすんなり受け入れてくれるんだし、僕でも…」
「あー、麗王ちゃんは聞いた話によると昔オールマイトと深い関わりがあったらしいね。小さい頃からヒーロー達を生で見て来たから、サーもそんな彼女の才能を買ったんじゃないかな？」
「えっ？」
　知らされてない事実に、喉が詰まり、心臓が揺さぶるよう脈を打つ。
　そんな、話は…いや、オールマイト自身も麗王が来てることを知らなかったのか？いや、相澤先生が指名した位だし、職員室でもそれなりに話し合いでもしてたのではないだろうか？
　まだ浅い繋がりなら、解らないでもないが、深い関わり…というのが、妙に引っかかる。
「どんな関係…なんですか？」
「あー、それはちょっと分かんないや。サーが言ってたのをそのまんま伝えただけだし！」
　そうなのか？
　なら、余り考えてても仕方ないものなのか、取り敢えず麗王の件は次にオールマイトに会ったら雑談で聞けば良いだけの話。
「んでもう一人は何とか合格したよ、笑わすことは出来なかったけど、サー曰く個人的な関わりもあったそうらしいんだよね。
　因みに俺は指名を受けたの！」
「あの、何で僕にそこまで良くしてくれるんですか？」
「あー、別に良くはしてないけど…ホラ、ヒーローってのは困ってる人間がいたら助けるのが基本でしょ？」
　無意識というヤツなのか、こういうヒーローがもしオールマイトのようにワン・フォー・オールを持っていたのなら、本当に平和の象徴として輝けてたんだと思うと、ちょっぴりミリオの凄さが羨ましく思えてしまう。
「でも勘違いしないで欲しいのは、俺が出来るのはオールマイトの

言ってた〝紹介〟するってだけで、〝採用〟を促すことは出来ないんだよね。
本当は俺もキミに協力してあげたいのは山々なんだけど、サーが君を使うかどうかは、サー本人次第なんだよね」
そりゃそうだ。
コネで通るほど、インターンは甘くないし、職場体験のようなお客としての取り扱いでもない。
そもそも認めてもらわなければ、ヒーローとして立つことすら出来ないのだから、紹介してくれただけでも充分に感謝しないといけない。そんな気持ちでいっぱいだ。
(切島くんや常闇くん達…飛鳥さん達だって今頃厳しいインターンや修行を積んでるんだろうな…)
誰かの努力を想像してしまうと、焦燥が芽生えてしまうのは、過去に自分が努力をせず必死にヒーローの考察を纏めてただけなのだろうか。それも一つの努力と呼べるのだろうが、もし肉体作りをしていれば、より早く最高のヒーローに近付けたかもしれないと、そんなあったかもしれない過去の想像を膨らませながら、事務所の通路をひたすら歩み進める。
「おや、廊下の椅子に腰掛けて談笑してるのは麗しきお嬢様方二人じゃあないかッ!おーい美女二人!」
麗王さんともう一人の忍学生か。
先ほど話してたインターンの参加者のことだろう、一体どんな子なのだろうか?
「おや、ミリオさん。もう学校の方は終わったのですね、お疲れ様です」
「今、センチピーダーさんが新人さんの面接の準備とバブルガールさんの報告があるからここで待っててくれと…って」
一人は、昨日見たとおり、麗しき美貌に獅子のような金色な長髪を腰にまで垂れ下げており、腰にはレーザーブレードの武器を納めている。
一人は、肌が雪のような白い美貌、麗王にも負けない豊満な胸に何

処かで見覚えのある学生服。水色の髪に、濡れたような青色の瞳。大きな白いリボンで髪を纏めてる彼女に、何処か既視感を覚える。

「アッ、あああぁぁぁああッッ?!!」

懐かしさと、再会に驚嘆な大声を腹の奥底から叫び出す緑谷に、隣のミリオは驚いてしまう。無理もない、会って突然悲鳴をあげて仕舞えば誰だって驚く。

「ど、どーしたんだってばよ緑谷くん!急にそんな大声張り上げて…そんな大声出してもサーから見たら変人としか見てもらえないよッ?」

「あ、あの…緑谷さん…てすよね?」

「ん?おやおや、この問題チャレン児一年生を知ってるのかな?」

恐るおそると、声を震わせる一人の美少女に、ミリオは神妙そうな顔立ちで問いかける。

「ゆ、雪泉さんッ!?」

黒影の弟子と、オールマイトの弟子が再開する。

因みに、現時点での半蔵学院の飛鳥達は――

「八つ橋美味しいね〜!」

「次は映画村に行こうよ!」

修学旅行先の京都を満喫していた。

１５８話「雪泉ちゃん!!」

「フム、君が例の黒影の孫弟子か――」

昨日――インターン志望として、遥々と遠い地区（忍学校は企業秘密の為、詳細は伏せておく）からやって来た忍学生を凝視するのは、ヒーロー事務所を構えるサー・ナイトアイ。

対するは、死塾月閃女学館の忍学生にして、黒影の孫弟子――三年生の雪泉である。

彼女は相手の目線を合わせ、軽く「はいッ」と返事を返す。雪泉はサー・ナイトアイとは初対面であるが、相手は彼女の事は調べ尽くしている。

尤も、ヒーローが忍学生を含めた特定の忍の個人情報を把握するのは至難を極めるが、サー本人は調べなくとも黒影との面識がある為に、調べずともある程度、彼女の事は知ってるつもりだ。

「先ず基礎的な質問をしよう――君は何故、私の事務所を選んだのか」

何処の職場や学校にも、ほぼ確定と断言して良いほどにこの手の質問は繰り出される。（但し、指名が入った場合はそもそもの話、質問はされない）

忍学生とはいえ勉学の方も疎かにせず、日々精進し励む雪泉にとっては想定内の範囲だろう。

「私はこの現代社会――オール（平和の象徴）マイトがいない、忍の存在が明るみになった今、ヒーローと忍の結束を固める為の助力となり、忍の信頼を強く証明するべく、貴方の事務所が適材であると思いました。

その為には――オールマイトとコンビを組んでいた貴方から、多くを学びたい。知識や技術、経験を己の糧として、人々の未来を守る立派な忍になりたいから…いえ、ならねばならないから」

オールマイトの元相棒（サイドキック）、サー・ナイトアイ――深い詳細は不明だが、何かしらの原因でコンビを解消し、一人で事務所を作り建てたヒーローである。

しかし相棒の肩書きとは余りにも不釣り合いで、その人員はミリオと麗王、本人を含めて四人しかいない。その点に関しては謎、不可解には思ったものの、出さない理由にはならない為、彼女はオールマイトとの縁による繋がりの意も込めて、この事務所を選んだのである。
「成る程…契約書のプリントは見ての通り忘れずにあるな…
――で、私がこの契約書にサインを押せば、君は晴れてこの事務所の一員として実績を積み、校外活動（インターン）を認めることを証明する訳だ」
黒尽くめのサインを片手に持ちながら、眼鏡越しの瞳を雪泉に向ける。彼女もサーの視線を一度も外すことなく、見つめ返している。
「だが、もし私が〝お断りします〟と、拒否の言葉が返されたらどうする？」
その言葉に深い意味はなく、皆まで言わずとも雪泉は彼の物言いたげな発言を理解した。
「……理由を、お尋ねしても宜しいでしょうか？」
「簡単だ、私が印鑑を押す気がないから、ただそれだけだ」
雪泉は表情こそ何とか堪えてはいるものの、サーの余りにも理不尽な理由に、僅かに表情は訝しさを増した。
「確かに正義としての心得、志し、理想、平和の象徴の穴埋め、其れ等のやるべきことをしっかりと理解し、私の事務所を選んだのは素晴らしい。良い考えだし、貴様のメリットは承知した。我々事務所には忍学生を含めたインターン生2名、サイドキック2名、成る程…忍学生に関してはいないよりかはマシだな…そうなると私にもメリットがつく訳だ」
「でしたら――」
「だが…」と、サーは事務机の椅子から立ち上がると、素早く雪泉の方へ移動し、両肩を掴む。
「貴様の正義は、誰かを笑顔に輝かすことは可能なのか――？」
「えっ…？」
サーの予想外な質問に、雪泉は微かに驚嘆の声を上げる。
己の信念とも呼べる正義が、他者の笑顔に繋がるのか――サーは更に言葉を紡ぐ。

「私の事務所内の者達は皆、ユーモアのある優秀な人員だ。人々の心を幸せに、そして世の中を輝かす為にはそう言った旨味が必要だと認識している。
無論、現代社会によるヒーローの法律や規制は多くなり、ヒーローそのものがユーモアのセンスを失くしてる者が有象無象として広がっている…現に私利私欲に塗れた者達の姿勢が、ヒーロー殺しの逆鱗を触れたと断言しても過言ではない。
私はね、元気とユーモアのない社会に未来はないと私は思うのだよ」
サー・ナイトアイはユーモアのセンスを何よりも誰よりも、大事に心掛けている。
幾ら社会に蔓延る悪意を砕こうが、弱者を救おうが、人々を笑顔にするユーモアがなければ、殺伐とした空気だけが漂う。
其れは――嘗てのエンデヴァーが千歳、夜嵐イナサに対してそう振る舞ったように、少しの原因でトラブルを招き入れる危険性が充分に高いこともある。
ヒーローが人を救うだけでなく、自分は他者にどう見られているのか、それを理解していなければ人々を救うヒーローになるなど夢のまた夢……正義を志しても何の意味もない無価値と化す。
それでは悪を倒す暴力装置と変わらない。
弱気を助け、笑顔に導けない者はヒーローとは呼べない。
正義の定義は様々有り、笑顔に繋がるとも限らない。
「黒影のことは知っている――忍社会では悪忍狩りを幾重と行い、善悪問わずと全忍に追われ、上層部から追放された男…私からすれば〝正義だけを語る非情な愚か者〟と称する…」
黒影の罵倒に、雪泉の表情が僅かに怒りを沸騰させる。
……いや、間違いではない。確かに黒影は己の語る正義と信念に背く忍を殺害してきた。
其れが任務、ではなく…己の私怨として――サーからの視点でそう口に出すのも、致し方ないのかもしれない。此処が面接会場でなければ、軽く口応えをしていたのには間違いないだろうが…

「忍の世界とヒーローの世界…生き方が違うのは百も承知……だからこそ、私から見れば忍の世界に生きる者達は皆、ユーモアという概念すら存在しない。当然だろう、私が口答えする義務もない…しかし、其れは悪魔で手を結ばない条件での話だ…

私の事務所に入る以上、忍の生き方も使命も関係ない――ユーモアも示せない、他者を笑顔に出来ない人間は不要だと言っている」

忍とヒーローが供に明るい未来を築くのであれば、此方の条件を呑む必要もあると判断したまでのこと。

別に此方は忍学生を募集してる訳でもないし（麗王の場合は話は別）、人員を増やす気もない。必要な人員さえいれば今の事務所は成り立つし、雪泉が此方の事務所に入ればメリットこそは存在するのだろうが、強要はしていない。

「だがもしもだ、雪泉――先ほど問うた際、貴様の答えた言葉が嘘偽りない真実なのであれば…了承し引き受けよう。

貴様が黒影の背を追い続けてるだけの、二の次ではない…誇りある信念、他者にとって有益である者と認められれば、是非とも私の事務所の下にてインターンを許可する。

私の言葉、解るかな？」

「……言葉だけでは不要。私の存在が貴方にとって相応しく、事務所に所属する素質があるか…

其れを証明しろ…と、言葉を捉えて宜しいですか？」

いつの間にか雪泉の手には黒影から渡された自愛してる扇子を握っていた。

「気の利いた返事で大変宜しい――制限時間内、そして被害を出すことなく、私からこの印鑑を奪ってみせよ。

どうだ、簡単な上に忍らしい試練だろう？」

忍は盗み、暗殺、破壊、諜報、様々な活動を生業として生きている。少なくともヒーローとしての世界観より、忍社会の掟や常識に溶け込んでる自分にとって、有利な状況下とも思えるだろう。

「こうなっても可笑しくないのではと、薄々勘付いておりました…何せあのオールマイトの元相棒…一筋縄では行かないのは百も承知、良いでしょう、私の正義――貴方の目に凍りつかせましょう！」

「私の目が見据えるのはいつだって、限りない未来だ――」

「へぇ～、昨日サーとそんなことがあったんだ！オードーローキーがぁぁ～～…デカイ!!!――ってね！」

タハハハハ!!と相も変わらず愛想よく豪快に笑うミリオに、隣の席で座る雪泉は少し照れくさそうだった。

昨日起きた試験採用に至る過程に対して触れていたようで、ミリオは声のボリュームを下げるとを知らず、廊下にまで笑い声が反響した。

因みに麗王は現在、バブルガールと供に調査回路と範囲の確認、とある組織のターゲットの監視に二人で対談をし合っている。

「いえ…結局、制限時間内に印鑑を奪取することは不可能でしたし…其れに、私もまだまだ未熟だと、思い知らされました…」

「いやいやいや、ああなった以上は基本、サーの攻略は不可能だよ。幾ら万策立てようと、一度視られてしまった以上はどうしようもない」

サー・ナイトアイの個性は『予知』――対象人物の一部に触れ、目線を合わせることで1時間の間、その人物のとりうる行動を先に〝視る〟ことが可能。

未来を予知する幅が広くなれば、時間による誤差も起きてしまう。

因みに個性による情報は社外秘なので、雪泉はともかく個性分析や知識が幅広い緑谷が現在進行中で試験に手こずっているのはその為である。

遭遇した後、感動…とまではいかないが、意外なる再開に内心こそ驚きではあったものの、緑谷自身遊びに来た訳ではない。再開に打ち震えるのは後に、採用を受けるべく事務所にやって来たのだ。
現在――緑谷がサーに認めてもらうべく、試験を始めてからは1分しか経過していない。
勿論、事務所で採用を受ける際に試験なんて存在しない。他の事務所はどう言った理由で相棒、又はインターン志望の生徒を引き入れるかは不明だが、少なくともサーにはサーなりのやり方という物があるのだろう。
未来予知を駆使し、結果がどうなるのか予め知っててもなお試験を受けさせると言うのは、実はそれなりに期待を寄せてるからだと雪泉は推測している。
口では伝えなくとも、彼の厳しさには優しさが一体と化してることを、雪泉は昨日の採用試験の後に身に沁みたから。
恐らく、余程のことで無ければ緑谷出久の不採用は有り得ないが、万が一という確率もあるので、油断は出来ないというのも確か。
「ミリオさんは、指名…だったんですよね？」
「せやで！まー体育祭では良い結果こそ出せなかったけど、努力を認めて貰えるのは素直に嬉しいよね！」
体育祭に関しては、雄英一年生の舞台しか視聴したことがない為、ミリオ達の生中継は一度も観たことがない。
「流石ですね、あの人から指名を貰えるなんて…私と歳も変わらないのに、相当な鍛錬を重ねたのでしょう。努力とは実るもの…期待を裏切らないというのは、ミリオさんにピッタリですね」
「あーそうなんだけどさ、俺の場合は沢山色んな人から恵まれて来たから、ここまで登りつめたんだよね」
ミリオの個性は雄英生徒に伝授した通り、本来なら誰もが口に出す弱小部類の個性だ。下手すれば体が真っ二つになるなんてホラーも真っ青な展開が起きても不思議ではない。
使い道を間違えれば己すらも死へ追い込む能力を、自分の使い方と個性の鍛錬で無敵に近い個性へ磨き上げた。

「そりゃあ何度も吐き気を施すほど自分を追い詰めたり鍛錬したりして…でもサーに指名を受けてから、学校じゃ教わらないこといっぱい学べたし、俺としてはサーやアイツ等（環、波動）と会えたことで恵まれたんだよね」

ヒーロー科で受ける授業は全てが万全とは言えない。

教師だって人間――教える事にだって限度があれば、外の世界では常に何が起きても可笑しくない。

校内と教師が所属し安全を確保してるだけであって、一人前のヒーローとして外の世界に出れば生死を彷徨う現場に赴くことは日常茶飯事…尤も、オールマイトのいない社会では、少しずつ犯罪確率も高くなりつつあるので、命を落とす危険性は尚更だろう。

だからこそ、学校内の授業は学べる知識や技術に限度があり、外の世界に出れば限りない経験を積み、学び吸収することが出来るだろう。

だからこそ、インターンは危険を伴うと同時に豊富な経験を積むことができるのだ。

サーが自分を指名してくれなければ、自分はそもそも此処にはいない。誰かと出逢い、繋がれたことが、ミリオにとって恵まれた環境だと自負している。

「それよりもさ、俺は雪泉ちゃんがどーして忍になった経緯とか、これから先どうしたいか、どうなりたいかが聞きたいな。ホラ、昨日のこと聞きそびれちゃったし」

「私、ですか？そうですね――」

話すべき…？いや、黒影様の存在を口に出すのは関係者以外、基本的にタブーではあるものの、敢えて名前を伏せておくことにした。

勿論話したく無ければ無理強要はしないし、家庭内による深い事情を残す人間は世の中には存在するのである。

「私は…ある人に恩返しをしたい。そして自分は己の信念と、世の中の正義と向き合い、理不尽な悪を討つと言うのが、最初の答えでした。

…しかし、今は少し違います」

単に悪だから、消してやる――そう言った根本的で行き過ぎた正義

とは違う。
悪を討つ…と言う言葉を切り抜けば、自分達の行動は変わりはしないものの、悪だから滅べと言う極端で理不尽な理屈を並べて、大義を成すつもりはない。
良かれ悪かれ人間には、善と悪の両方を持っている。それを完全否定しては意味がない。何も変わらないし、結局は争いしか生まれない。
嘗ての自分は純粋過ぎた――黒影の背中を追い求め、悪の存在を蔑ろにし、否定し拒む忍だった。

だけど、飛鳥さんやオールマイト、半蔵様、他にも雄英生に轟さんと出逢え、初めて心を動かされた。考えが変わった――自分の正義、価値観を見直すことが出来た。

「今は…そうですね、私の正義が誰かに認められ、人々の笑顔を守れる忍になりたいです。
私は、ミリオさんやナイトアイさんのようなユーモアこそ持ちかけてはいませんが…心の底から溢れた皆の幸せを、影から守りたいと思っています」
ヒーローは人々に笑顔を導かせる。
忍は人々の影から笑顔を守り、幸せを護る。
ヒーローにはヒーローの役割が、忍には忍の役割が存在する。別にヒーローが忍のように影から守らなくても、忍が公に出てヒーローの真似事をしなくても良い。
自分達にしか成し遂げれないものを為すのが、個々人の役目だと雪泉は解釈している。
幾らヒーローが人々の笑顔を作っても、それを何の性懲りもなく理不尽な言動で壊す輩がいれば、人々は苦しみを味わう。
造られた幸せが崩壊し、悲惨な過去を背負うことになれば、何れ自分と同じ境遇を持つ人間を産んでしまう。
そんな悪意を持つ存在から笑顔を守るのも、大切なことだ――これ

以上の被害や悲しみを生ませない為にも、少しでも多くの人間から悪意を守る為にも、より多くの経験を積み、自分が社会に貢献する善忍になりたい。
「例えば、ミリオさんやナイトアイさんが救った誰かの笑顔を、今度は私達が守る――幾ら人々に笑顔が灯っても、それが消えてしまうのは私も辛いですから…
だから、ユーモアこそ私には存在しませんが、皆さんが導いた笑顔を守り通したいと、そう思っております」
信念、理想――其れ等を担ぎ新たな忍社会に革命を築こうとしてた過去と今では大違いだ。

「……元気な問題児君も滅茶苦茶な目標だって思ったけどど、君も君だなぁ――良いじゃんソレ!!」

軽く親指を立てるミリオは、ほんわかする優しい笑顔を浮かべる。
(成る程ね…サーは、其処が気に入ったんだ)
明るい笑顔とユーモアをより強く大事に心掛けてた彼は、雪泉の〝笑顔を守り通す〟信情に心を動かされた。
印鑑を奪えず、制限時間すら過ぎた彼女…別に、拒む理由だって無いのだが、彼女が黒影の行く道を、ただ追い求めていた後継者だったら普通に切り捨てていた。
でも、彼女のダイヤモンドの様に硬い眼差しが、オールマイトに勝るとも劣らない正義感、黒影のような私怨混ざらない清々しい心があったから、試す価値があった。

その結果、彼女は誰かの笑顔を守りたいと断言した――

『たしかに、私はオールマイトの様に他人を輝いた笑顔に染めることも、誰かを幸せにしてあげることも、そんな力さえ持っていません…
だけど…神野区の出来事で、彼が人々の笑顔を守り通したように、私も誰かの笑顔を守りたい――貴方達が笑顔を作るのなら、私に明る

い笑顔を、守らせてはくれませんか…？』

そんな事を言われたら、彼女の採用を不可にする理由も無い。

自分達が市民を笑顔に導かせても、其れが壊されてしまえばその分、落差による悲しみを、心の傷を背負わせてしまうだけだ。

予め予測を立て、最悪な未来を防ぐサーにとって、予め守り立て、悪意から幸せを護り防ぐ雪泉は必要不可欠な存在になってしまった。

ユーモアは大切だ――だがそれだけを求めても解決策にはならない。サー・ナイトアイがオールマイトとコンビを組んだのは、単に憧れからくる尊敬の念だけではない、全てを守り敵に立ち挑む勇姿に感化されたからだ。

『……久しく、忘れていたな。オールマイトのことを…』

彼女への否定は、ユーモア自身を拒絶することに繋がる。

元々彼女を事務所へ招き入れるかは半信半疑では有ったが、彼女と面を向けたサーは、彼女が我々事務所に貢献するに相応しく、有益だと判断し採用したのである。

「待たせたな、ミリオ、雪泉」

ガチャリ…と、扉が開かれると供に冷静な声が二人の耳に届く。埃や汚れ一つないサーに対し、横で息切れながら汗を被ったようなびしょ濡れの緑谷とは、絵面的に対極を示している。

「おっ、どうだったんです？」

「採用だ――少年も晴れて我が事務所の一員と認める。勿論、インターンとは言え一切の甘えはしないし、勉学と供に励むのが厳しかろうと、普段通りやっていくつもりだ」

やったあぁぁ!!良かったねぇ！と歓喜の声を張り上げるミリオに、緑谷の顔は何処か浮かばずとも、不思議そうな顔をしていた。

「おめでとう御座います、緑谷さん――今日から私達と供に活動するんですね」

「本格的な活動は翌日からだがな――」

雪泉の微笑む声とは他所に、言葉を付け足すサーは書類を片腕に抱えながら、事務所の机の上に置く。
「そ、それでも僕…条件を満たせなかったんですけど…」
「其れを仰るなら私もですよ緑谷さん、大丈夫です。ナイトアイさんが採用したんですから、経緯はどうであれ、認められたことに感謝しませんと」
落ち込み、疲労、探れない不安、其れ等が集合したように心を募らせた緑谷に、雪泉は軽いフォローをする。
緑谷出久に課せられた条件は、昨日の雪泉の試験内容と同じものである。違う箇所とすれば、部屋を荒らさずに奪取しろと言うのが、雪泉の条件ではあったが、緑谷の場合は部屋を好きに荒らしても良いことだったので、些細な違いは其処の点だけだろう。
そもそも制限時間内に印鑑を奪取しなければ不採用とは言ってないので、採用されても全く可笑しくはない。
「雪泉の言う通りだ――別に私は貴様を不採用にするつもりはないし、させるつもりは毛頭ない。
だが、認めていなかった――だから試した。それだけのことだ。貴様が後継者に相応しいか否かは、現場で痛感してもらう」
象徴無き今、人々は〝微かな光〟ではなく〝眩い光〟を求めている。例え彼の意に反しようと――
「よ、宜しくお願いします……!!」
緑谷出久――サー・ナイトアイの事務所にて採用確定。
オールマイトに選んでもらえた緑谷出久、それを認めないサー・ナイトアイは通形ミリオを後継者として選んでいた。
そんな事務所内による奇妙な関係に戸惑うも、時間は待ってくれないよう、あっという間に翌日に入る。
「監視、ですか?」

ヒーロースーツに身を包む緑谷とミリオ、忍装束に身を包む雪泉と麗王は、サーの事務所内で行動作戦を練っていた。
「そそ、今ナイトアイ事務所は秘密の捜査中でね――死穢八斎會と呼ばれる小さな指定敵団体について調査を行なってるの。それで隠密に捜査をしましょってことで、二手のグループに分けて行動に移ろうと思ってるの。チームの組み合わせは昨日麗王さんと打ち合わせたから、指示に従ってくれればＯＫよ」
褐色肌の短髪な女性――バブルガールは手に持ってた資料を全員に手渡しする。
こう言ったプロの現場に赴き、活動できるというのは何だか新鮮で、緊迫感が拭えないのがまた意識を高めさせてくれる。
「死穢八斎會…そんなヤクザ者の調査の意図とは…？」
「最近その組織の若頭、治崎が妙な動きをしてる上に、顛末は不明だけど、今も名を騒がせてる敵連合と接触があったそうなのよ――あっ、雪泉ちゃんの分これね」
バブルガールから渡された八斎會の資料を手にした雪泉は、あの敵連合に関わる治崎の写真を見る。

「えッ――これって……」

途端――氷の如く冷たい彼女の背筋は、悪寒に襲われ鳥肌が立つ。
微かな衝動が、全身に巡るような錯覚に囚われながら、隅々と写真に映し出された若頭の顔を観察する。
静寂を被る物静かな眼、
青年と思わしき年齢の容姿、
大きな特徴はペストマスク、

これは、一昨日遭遇した死穢八斎會の若頭であった――

159話「個々の行動」

死穢八斎會――指定敵団体（ヤクザ者）と呼ばれる小さな組は、サー・ナイトアイ事務所が密かに調査を進めている。

その中で今の組を仕切っているのが治崎と呼ばれる青年。敵ネーム――オーバーホール。

元々の原因は、とある街でのコンビニ強盗犯――レザボア愚連ドッグスというチンピラ集団から始まった。

犯罪行為を働き、逃亡を図ってた所を、運悪く八斎會の連中と遭遇したらしく、警察が駆けつけた所、どういう原理か清廉潔白になった状態、つまり無抵抗のまま大人しく署へ連行されたそうだ。

この関連性から察して確かな証拠はなく（レジのお金は全て焼かれていた）、警察も事件の関連性はないと宣言し、治崎率いる敵達は調査されずのままであった。

しかし、その微かな事件をサー・ナイトアイ事務所は流すことなく八斎會の行方、調査を進めた結果――敵連合との接触があったとバブルガールの報告書には書かれていた。

現場では血痕が二つ、原型を保たず血肉の破片が汚泥の塊になっていたことから、酷い触発だったのだろうと想像で察しれる。

ただ八斎會、主に組織を仕切る若頭が悪事を企んでる証拠を掴めず、幾ら現場での揉め事が起きてようと、黒に近いグレー敵扱いが出来ないのである。

今回のインターンは、死穢八斎會の犯行証拠を逃すことなく捕まえること。その為にはサー・ナイトアイ事務所が穏便に且つ、確実性の高い計画を円滑に進めながら、その証拠を手にする。

失敗は許されないし、インターンの生徒が大きな件に手を出すのは些か危険ではあるものの、今までのような甘えた姿勢でのやり方では、今の社会に明るい希望など持てやしない。

でなければ、サーは可能性のない人間は真っ先に切り捨てるし、今頃緑谷達は寮で勉学に励んでるだろう。

彼ら彼女らが、社会に貢献するに相応しいと判断したからこそ、今ここにいるのだ――

「私、知ってます――この方、一昨日の……」

微かな出会いに、大きな因縁が芽生える瞬間を、身を以て味わいながら、驚愕の色に染まる。

この男、間違いなく一昨日ぶつかった男とほぼソックリの人物だ。

ほんの短時間、なんて事のない僅かな会話、そして何よりも特徴的なペストマスク――

見間違え、人物像が似てるという勘違いは人探しや調査ではよくありがちなこと。だが、仮にそうだとしても態々公衆の前であんな目立つようなペストマスクを、普通は掛けたりなどしない。

となれば、高確率で一昨日雪泉が遭遇した人物と、死穢八斎會の治崎は同一人物と見なして問題はない。

「えっ、雪泉ちゃんマジでか!!」

「一昨日って…」

「……」

雪泉の斜め上の予想外な発言に、驚愕、困惑、沈黙を重ねる。

サー・ナイトアイは表情を曇らせながら物事の考えに浸り、何か手掛かりや関連性について思考を働かせてるのだろう。

「雪泉さん、彼と遭遇した場所と事柄の詳細を教えてくれませんか？些細な事でも構いません、出来れば具体的に……」

物事に動じず、常に冷静で判断し素早く行動に移したのは麗王――柔らかな口調、優しく冷静さを保つ言葉を掛けながら、雪泉に質問を訪ねる。

「えっと……」

繁華街――いつになく絶え間ない雑談と人々の交わる声が、街中に溢れ返っていた。

慣れない地で大勢の人波が押し寄せるのは窮屈だが、捜査とあらば止むを得ないし、ターゲットの為だ、弱音を吐いてる暇はない。
「ここの、曲がり角と…信号を右に……」
一昨日の出来事を脳内で再生しながら、記憶を探り確かな目的地へ足を運ぶ雪泉と、その後ろ跡を追う一同。
彼女がオーバーホールと鉢合わせたのならば、それはそれでメリットと同時にデメリットも存在する。そして勿論、今後の捜査には大きな影響が出る。
「ここ、ですね――ここの道端で、事務所に向かうところをぶつかって…えっと、資料を落としたんです。
触られてはいません、内容はあの角度や見方から察して見られてないので問題はないと思います…ただ色々と質問をされたり…」
「質問ですか？」
「ええ、貴女は何処の学校所属ですか？とか…研修先は何処ですか…とか……上手く誤魔化せてはいましたが…どうですかね？」
顔色を伺うように質問を訪ねる雪泉に、サーは冷淡に答えた。
「不幸中――素性や我々の事務所内に雪泉がいることがバレていないのならば、幸いか…現段階では支障はないし問題ない」
返って来たサーの言葉に安堵の息を吐くも、「ただ…」と言葉が付け加えられた。
「雪泉はなるべく捜査に赴かない方が良い。情報としては有益だが、同時に雪泉が事務所内にいることが相手に知られてしまえば、捜査は愚か、相手の尻尾を取り逃してしまう危険性は充分に高い。下手して警戒心を刺激させ、身を隠してしまえば折角積み重ねた労力は台無しになる」
「そんな……」
確かに――なんて言葉が出ても可笑しくない程に、その事実は説得するのに充分だった。
運が善いか悪いかは判決こそ曖昧だが、少なくとも若頭（治崎）が何かしらの計画を立て、目的がある以上自分達の野望に支障は出したくないのが普通だ。

もし捜査の際に雪泉が目標と二回も遭遇してしまえば、それこそ敵は身を隠してしまう。
「だがその分、ここの捜査網を広げた方が良さそうだな。雪泉のお陰で多少は有益となった。次はこの現在地点から此処の範囲内まで…」
地図を広げながら指をさし、捜査の範囲を広げるサーを遠目に、雪泉の表情は晴れやかではない。
「あー、雪泉ちゃん落ち込まなくて大丈夫。たまたま悪い偶然が起きちゃっただけだから、気にしないで良いんだよ?」
そんな彼女の心情を察したバブルガールは、あやすように頭を撫でる。頭から手の感触が伝わるのを感じながら、「有難う御座います…」と言葉を返す。
折角、サー・ナイトアイを含めた事務所の役に立てるよう助力に励みたかったのだが、こうなってしまった以上残念な結果だと心が痛んでしまう。
その上、死穢八斎會の手掛かりや捜査が狭まると言うのは、何とも歯痒い気持ちだろうか…
「では、ペアは緑谷出久、通形ミリオ――雪泉は麗王と組んでくれ。ヒーロー学生の方はこの警戒網に関してもう少し調査を願いたい。雪泉と麗王はこの警戒網の外を調べてくれ。
パトロールも事務所で勤める上では必要不可欠なことだ。二ペアで同時進行するのは実に有効な方法だからな」
サー・ナイトアイ事務所は主に死穢八斎會の組織を厳重に監視、調査に赴いてはいるが、ヒーローの事務所として立ち上げる以上はパトロールも欠かせない。
最近は敵連合との事件や関連性を追うのに必死で務めていなかったので、序で…とは言わないが、初日という意味も含めて忍学生にはパトロールを優先するようにと判断したまでのこと。
先ほど前述した通り、雪泉が治崎と対面してしまった以上、最悪な未来を防ぐ為には、なるべく彼女の存在を公に映すのは良くないだろう。それでもサー・ナイトアイ事務所のインターンとバレない以上はまだマシだろうが…

「それに雪泉ちゃんや麗王ちゃんもあんまりこの地域は詳しくないでしょ？慰めになるかは判らないけど、これを機に土地に慣れるのも良い案だと思うよ！」
バブルガールの明るい励ましに、表情こそは晴れてはいるものの、内心はモヤモヤと靄が纏っている。
いや、しかし解っている。
これはこれで仕方がないし、寧ろ言わねば今後の調査や進展に支障が生じるので、雪泉には皆感謝してるのだろうが、何故か心は余り心地よくない。
いや……それは自分が活躍出来なかったからとか、そう言う自己満足の私欲では無く――
「もし、私があの方の正体を知っていれば……」
――もっと有益な情報を取得出来たかもしれないのに…
尤も、あの状態では確かな証拠や手掛かりなど探れるような体制では無かったのもまた事実だが…

場所は変わり――街外れの孤立した島に佇む大きな特別病棟。
端から見れば何処か不気味で、昼間なのにその異様な気配は、全身の血を騒めき、悪寒を感じさせるものだった。其れも、夜になれば完全に廃病棟の心霊スポットと噂が流れても可笑しくない程に――
近辺には駅や住宅街は愚か、工場や店と言った地の利が存在しない為、荒廃した土地と人工芝、鉛色の病院の建物が錆び付くように残されている。
これだけ見れば、夜に見る隔離病棟は完全に身の毛もよだつ心霊スポットという噂が流れても可笑しくはなさそうだ。
衛生面でも喜ばしくないことは勿論、一般人の立ち入りは禁じられており、関係者以外は許可されていない。

鯖色の鎖で封鎖されたバリゲードは、凡ゆる侵入者を一切通さない様に設置されている。
「はぁ～、やだやだ。信じられないよねぇ全く」
孤立した島、薄暗い病棟に赴く三人は荒廃した地の上に足を踏み入れながら、騒々しく歩みを進める。
一人は薄い水色の長髪をなびかせ、黒紫色のドレスに紅いスカーレットのスカートを履いている。
一人は顔面がツギハギに縫われ、火傷した皮膚が露出し目立っている。
一人は容姿がイグアナの様な爬虫類に、乾燥した鱗で覆われながらもヒーロー殺しのコスチュームに身を包んでいる。
「死穢八斎會の奴等、折角のし上がる為に戦力拡散してたのに…こんな時に部外者が邪魔しちゃってさ。
アタシがいたら犠牲者出さずに返り討ちに出来た。少なくとも半分は確実に相手を仕留めれたのに、残念を通り越してまー絶望だわ」
「あのオカマが死んだんだっけか――まあ、戦力としては役立ってたよな。敵同士の抗争なら死者が出るのはあり得なくもねえ…」
「なぁ、漆月と荼毘――目的地に着いたのは良いが、これからどうする気なんだ？」
不機嫌そうに声を荒げる漆月に、どうでも良い様に冷淡に言葉を返す荼毘。その隣でバリゲードの方角に指を差すスピナーは、小首を傾げる。
この三人はメンバー内での連絡は愚か、組織内では滅多に会う機会が少ない人物達だ。
これだけ聴くと、三人が揃い会う光景はとても奇妙で斬新だ。
「病院…隔離で孤立した島……おい漆月、お前一体何が目的だ？お前が人手が欲しいからって来てみりゃあ…ここって確か極悪人が行き着く病棟だったよな？」
訝しげに、目を細める荼毘の言葉に「そっ」と軽く言葉を発する漆月は先行に立ち、繋がれた鎖を掴む。
「重罪犯は勿論――マフィアやギャング、悪名高い組織の人間が搬送

されてると呼ばれる病院。
中でも一生治らず植物状態のままで生を終えた囚人患者もいるらしく、ゴーストタウンの様な風貌に、治る見込みが無いと判断された者が行き着くことから世間では『病と悪霊の墓場』なんて物騒な名前を付けられてる程よ。
――とまあ、大半が完治した場合即座に個性を使われてお陀仏になってしまう危険性を防ぐ為だから、正確には完治目的じゃなくて無力化した人間の監視――が、しっくり来るかしらね」
そう呟きながら、手に持つ二刀丁の一本を取り出し鎖を断ち切る。
ガキィン！と、金属を斬る不快な音が耳をつんざくも、少女は表情一つ変えずに、何事も無かったように刀をしまう。
「成る程な…そりゃあそうだ。だがな、それとお前の目的の意図が読めねえ。此処が刑務所なら襲撃して世間に名を馳せ、仲間を集める、一石二鳥のやり方かと想定してたが、病院じゃあなあ…」
「ハァ～～……もう、茶毘ってクール振って偉そうな口叩いてるから頭良いと思ってたけど、トガのこと言えた口ではないんじゃないの？」
「あ？燃やすぞテメェ…」
「おいおい喧嘩すんなよ！…で、漆月は此処に来て何するつもりだ？一般、家族との血縁からも拒まれてるこの厳重な隔離施設、仲間にするって選択肢が仮にあったとしてもだ！病が治ってねえ病人なんざ足手まといだろ？そんな正気とも思えねえ…いや、お前は元から正気じゃねえか…だとしても、無意味なことはしねえだろ？」
スピナーの意見は至極真っ当だ。
病棟に来たのは良い、此処が悍ましい施設病院であることも理解した。しかし、此処へやって来た理由が仲間に引き入れるという選択肢は明らかに低い。
ギャング、マフィア、敵組織の人間、これだけ聞くと悪の支配者と謳歌する人間は多くの使える人間を仲間に引き入れるだろう。
ただし此処は病院――刑務所とは訳が違うし、完治した人間がいない、ある種の意味で捉えた監獄に等しい場所だ。

「そうねぇ…表面上で捉えれば、だけどね♡」

そう言いながら、錆びついた扉を開ける。

悠々と、何食わぬ顔で彼女は荒地を踏みにじりながら、目的地である隔離病棟――『長期療養型刑務所病院』を目指しながら歩いていく。

「チッ…だがまあ、逆らったらそれはそれで色々と面倒だしなぁ」

茶毘の怠い言葉に、スピナーも返事こそはしないが、首を縦に振り頷く。

漆月は珍しいことに、自分自身の寝首を刈りに来ても問題ないと言ってはいるが、但しそれと同時に「お前らの命や身の保証は取らないよ」と言っているので、裏切り行為や反逆が、喜ばしい結果になるとは思えない。

「ハッ、まあ良いだろ?アイツは無意味な行動はしない筈だぜ…アイツの行動に付き合うのも悪くはねえ…何よりも其れが仲間ってもんだろ?」

「お前、ヒーロー殺しの意思は?」

中に進めば当然、看護師や病院の先生はいた。

こんな人気のない場所に医者がいたことでさえ少しばかり驚きではあるのだろうが、ここが刑務所病院であるのだから、当然といえば当然だろう。

「うわッ、グロイなお前…」

明かりの灯さない影の回廊から、血生臭い臭いが充満する。

病棟に佇んでた医者や看護師の死体が、バラバラに転がり血が付着する。

たった数十秒遅れて来てみれば、もう彼女は惨殺ショーを繰り広げていたのか、一体何が起きたのかは不明である。

「し、漆月…!コイツらは一体…?」

「ん、なに？腰抜かしてんのスピナー？口止めに連絡網を途絶えさせんのは常識でしょ？
私、もう昔とは違って容赦とかそういうのないから――」
頬に冷たい返り血が滴り落ちる感覚に優越や快楽を覚え、血の海とかした廊下を歩き、前にいる肉の死体を踏んづけ前に進む。
まるで「死んだお前らは何も言えない」と言わんばかりに、眼中にないその瞳には、以前拠点をヒーロー達に荒らされる前までの彼女とは確実に違う。
「とまあコイツらのことは良いのよ別に――」
そう言いながら彼女は更衣室に向かい、ロッカーから女性として魅力的なナース服を取り出す。
「問題なのは、此処の隔離病棟に搬送されたある囚人を仲間に引き入れる――これが本来の目的で、直接的な関係には繋がらない」
「あっ…？どう言う…は？」
「ちょおッ!?」
荼毘は真剣な話を逃したりはしないものの、呆然と目を丸くする。スピナーに至っては顔を真っ赤に両手で顔面を覆い隠す。
「色んなネームドを持つ敵や、抜忍として珍しい部類が影に潜んでるのもある程度は網羅した――元々諜報活動や隠密行動は得意でね、更には殺生方法や暗殺の仕方も小さい頃先生に拾われたから書物や読書で知識を吸収したわ」
記憶が蘇ったと言うのは、単に物事や過去の現状、経緯だけが全てではなく、勉学や知識量も予め封印されていたので、彼女の記憶が開花したお陰で、その実力や強さは以前の彼女とは比にならないのは確かだろう。
そう言いながら彼女は自分の衣装を脱ぎながら、下着姿になる。肌が露出し、滑らかで柔らかな肌が曝け出していた。
ブラジャーや下着のパンツは黒色で、残虐且つ殺人鬼でもありながら、その妖艶な気に触れ、心が騒ついてしまうのは、現状が現状で仕方がない。
「んで、此処からが本番――本来なら黒佐波の代わりとして穴を補お

うと思ったんだけど…
私の予想だと幾つかこっちの戦力が削れちゃうのかしら？誰か…とはまだ不明だけど」
そのまま医療のナース服に着替えていく。
「今回私が仲間に引き入れるのはこの治療を受けてる囚人患者――ソイツは忍じゃなくて敵。
とある不幸な事故か、はたまた神様から見捨てられたのかしらね、今もこの病棟の近くにベッドの上で寝込んでるわ」
「まあ、忍は専用病院みてぇなのあるしな」
「昔ね、とある大病院を務めてた院長がいたのよ。三人家族――妻もいる、娘もいるお金に困らない裕福な家庭でね。でもそれはあくまでも表面上、中身はかなりドロドロの重いお話…
父親の院長は世間でも有名だったんだけど、後ほどニュースで明かされたのが数々の医療ミスを金で揉み消してた事が発覚――如何なる道理か不明だけど、自白したらしいわね。
中でも家庭内での内容、詳細は深く追うと不倫とかしてたらしい、まあ敵にも勝るとも劣らない下劣な人間であることは間違いではないわ」
お前が言うか？と口に出しそうな言葉をなんとか堪えた茶毘は、スピナーと供に沈黙に浸りながら話を聞く。
「母は病院の人間ではなかったけど…そう言えば娘が行方不明になったというのは聞いたことがあるわね――朝になってたら娘がいなくてパニック起こしてたらしいし、今も子供が何処にいるかも分からないんだって」
「で、その過去の事件性とお前の目的が何に繋がってる？」
「医療ミスを揉み消しにされたヤツが、今回の目的だとすれば？」
「ッ――」
全てが繋がったと言わんばかりに、茶毘は息を飲む。
まさか…だとは思うが、コイツ……
「敵ネーム『ダークマスター』、本名は『黒柴（こくしりゅうこ）　粒子』――

Ｄースクアッドの組織の一員。どう言う経緯で彼女が軍人としてあの危険犯罪テロ組織に入ったのかは不明だけど、少なくともそこらの有象無象よりかは遥かに格が違うわ。
ターゲットを捕捉して、躊躇いなく惨殺。命令とあらば拷問役としても重宝されてた彼女は戦績も高い、今の社会としては充分に危険すぎるわ。
個性を発動せずに対象を殺害できる腕から、他の者達に慕われてた…言うなればカリスマ性も含まれてたのよね。だけどそれも超常が始まってから解体も多くてね、忍に運悪くやられちゃった患者よ――」
しかし問題なのはコイツの身体能力は勿論――何よりも強すぎる個性である。
漆月曰く、『既に特異点は過ぎ、連合に入れば絶大な戦力を誇る』と評されていることから、期待は寄せても良いのだろう。

「さッ――話は後よ。先ずはスピナーと荼毘、今から患者の治療を施すから、アンタ達は手伝いなさい」

漆月の生真面目な言葉に、二人は耳を疑う。
薄々と予想は付いてはいたが、意外なことだ…
漆月が医術を身に付けていたとは、考えてもいなかった――
「お前、出来んのか？つか、初めて知ったぞ…お前が医療の知識に長けてるなんて」
「医療にも興味があったからねぇ…憑黄泉を実験に手術とか解剖とか、骨の関節を折ったり、血脈を計ったり面白いことやってたら、重い病気や癌とかじゃない限りは回復できそうよ」
何とも原点が酷いことか、医者が聞いてたら間違いなく顔面蒼白、ブルーベリー色に青ざめていただろう。
「良い!?治療は最先端なる技術と、的確な処置が全て！微かなミスは許されないわ!!
主にやるのは私――アンタ達はサポートに全力で徹しなさい！私

の指示に従えば猿以下でも出来る簡単よ！だから人手が必要なの、難しい作業じゃない、単純で私の言葉通り行えば良いだけ」
漆色の瞳は、闇の中に浮かぶ月の如く輝きを増し、強き眼差しを二人に浴びせる。
可笑しなことだ――全国指名手配にして、人間同士の血の争いを間近で観察するイカれた思想、死柄木弔に勝るとも劣らない悪意を持つ彼女が、人の命を救おうと全力を以って励んでいるのだ。奇妙奇天烈とは正にこの事を指している。
この姿勢と気迫の言葉から察して、嘘偽りはない――
「因みにアンタ達に、拒否権ないから――♡」
言葉の有無を言う前に、拒否権を取られてしまった二人は、渋々と彼女と付き合わなければいけない羽目になったのは言うまでもないだろう。

漆月達三人組が、誰にも知られる事なく密かに行動を起こしてその頃の同時刻――

ペタペタ、ペタペタペタペタ――素足で建物の間を走る少女は、息を荒げながら一心不乱に何かから逃げている。
――だれか…だれか！
「お前は本当に、どうしようもない奴だな」
――いやだ…もうもどりたくない……だれがたすけて……！
冷徹な声に、心が騒めく少女は、背後に迫る大人から逃げている。捕まってしまえば終わり…何とか隙を突いて、折角あの訳わからない迷路状の地下から逃げだせたのに…こんな所で捕まったら、下手すれば今度こそ…
――だれか、だれか…おねがいだれか…たすけて!!!

光の差す場所まで走っていくと、不注意なことに誰かとぶつかった。
「おわっ…？」
「いたッ…！」
相手も此処から人間が出てくるとは予想しておらず、自分よりも大きな背の高い人にぶつかってしまう。
ぶつかった衝撃の際に尻餅をついてしまったが、この際に生じた痛みなどどうでも良い。
「ゴメン、大丈…って、子供？大丈夫？痛かったよね？怪我はな…」
緑髪の少年は、少女に謝罪しながら怪我の安否を確認する。だが少女は外の世界も知らない為、大人に良い縁を持たない彼女は、疑心暗鬼の為に怯えた様子で後退りする。
「どうしたのかな…？もしかして迷子…「ダメじゃないか壊理――ヒーローに迷惑を掛けちゃあ…」ッ――!?」
壊理の体が一瞬すくむように震え、筋肉が硬直する。
聞きたくない…もう見たくもない…関わりたくもない、あの人がいま…自分の背後…近くに立ち尽くしている。
それと同時に、緑髪の少年の顔色もまた、暗雲に染まり汗を滴らせる。

「――帰るぞ、壊理」

其れは、サー・ナイトアイ事務所がマークしている対象人物、オーバーホール。

此処からが、本番のインターンが始まろうとしていた――

１６０話「芽生える因果」

　周辺地区のパトロールに赴く緑谷出久と通形ミリオ――街の巡回と、指定された範囲内で調査を進める二人組は、初日にしては思ったよりも順調。大した事件は見つからず、この通り昨日と何ら変わらない街並みの景色だ。
「緊張するなあ…」
「でもパトロールは職場体感でもやってるよね？あっ！敵連合の接触があるからトラウマでもあるのかな？」
「ああ、ヒーロー殺しのことですね…そう言う意味では…いえ、ある意味合ってるっちゃあ合ってますが…」
　ヒーロー殺し――忍をも殺害してきた彼の信念と悍ましさは軽く戦慄してしまうものだ。
　保須市にて凶器を振るい、自分達に悪夢を見せた最後の姿は、オールマイトに近い執念を感じさせるものだった。
　確かに…なんて言葉が出てしまう位に、職場体験の出来事は最悪だったし、脳無に続いてと災難な事が多かった。最悪、殺されてても可笑しくなかった上に、友人の飯田天哉の場合は一歩遅ければ人生に終止符を打たれていただろう――
　だがトラウマか原因で緊張してると言うと、実際にはそうでもない。
「諸事情で基本活動未経験で……サー事務所の下、初めてのパトロールなんですよ。だからソレで一番…筋肉が強張ったり、こ～…凄く緊張してて…」
「へぇ～、何処の事務所だったか解らないけど変わってんのね！」
　まあ、変わってると言えば変わってるだろう。
　何せオールマイトを鍛え上げた師匠にして、元雄英の教師を一年間務めてたグラントリノだ。
　否定はしないが、もし本人の前で言ったら腹部に蹴りを入れられゲ

口を吐かされそうなので、口が裂けても言いたくはないのが本音だ。
「解らないこととかあったらいつでも俺に相談して欲しいんだよね、と言っても基本的に小難しいことなんて余程じゃない限りあり得ないけど！」
　三年生の通形ミリオ先輩は、昨日のことと言い根は優しく経験技術が豊富な人だ。たった二年の実力差が大きく広がることも理解したが、個人的な悩みとして緑谷本人が拭えない点と言えば…
（どうして、オールマイトはミリオ先輩やサーのこと…僕に教えてくれなかったんだろう…？）
　オールマイトの後継についてだ。
　昨日の採用にて、雪泉と同じく印鑑奪取の条件を課せられた緑谷はサーに言われたのだ。

『やはりオールマイトの後継は、通形ミリオであるべきだった――お前を選ぶ理由が益々解らない』

　サー・ナイトアイの言ってた台詞、ワン・フォー・オールの後継者は本来、〝通形ミリオに継がせるべきだった〟と自負していた。
　その言葉を耳にした緑谷は、鈍器で後頭部を思いっきり叩かれたかのような衝撃を受けたのは、必然――
　どうして――そんな重要な話を、オールマイトは口に出さなかったのだろうか？言える機会などいくらでもあったのに、あの人は一言も別の後継者がいたことを話さなかった。
（そう言えば、オールマイトがサーと会うのは個人的に気不味いとか私情なこと言ってたし…それと関係が繋がってるのかな？
　何にしても、僕だってオールマイトの後継者なのに…）
　何にせよ、頭から離れない暗雲が纏わり付いてるにしろ、今やるべきことは街の安全確認とパトロールを含めた八斎會の隠密調査――幾ら自分がインターンに入れたからと言って気を抜いてる暇はないのだ。
「あっ、そうそう…そういやさ！ヒーロー名書いてなかったよねお互

い!!名前は？此処でヒーロー活動する前にネームド聞いておかないとさ！」
突然ミリオに声を投げられた緑谷は我に返る。
基本的にヒーロー活動をする上では、ヒーローネームで呼び合わなければならないのが決まりである。
ヒーローと個人は違う。緑谷出久は個人として――デクはヒーローとして、其々の顔がある。ヒーローである自分と、個人である自分は表裏一体の存在であり、必ずしも二面性を持っているのだ。
其れは、ヒーロー活動をする上では常識の範囲内だ。
「えっとですね、僕はデクです！」
「デク…ん？木偶!?良いのソレ!?」
「良いんです」
「一応確認するけど、漢字の方？」
「カタカナです」
まさかヒーローネームが木偶ならぬデクという予想外な名前が返って来たことに驚愕したのだろう、発音だけを聞き取れば確かに蔑称であり、勘違いする人間は少なくないだろう。
本人も昔は蔑称を幼馴染の爆豪勝己に名付けられ不満要素満載だったのだが、最近は割と本気で気に入っている。
「俺のヒーローネームは『ルミリオン』――〝全て（オール）とまではいかないが、〝百万（ミリオン）〟を救う人間になれるよう命名した！
レミオロメンみたいでカッコいいよね！」
レミオロメン――確かとある何処かのバンド名だったような気が…音楽大好きな耳郎とは違い楽曲に詳しくない上に、知識はそこまで広くはない。
どちらかと言えば、少々噂話で小耳に挟む程度で、曲に拘りはない。
（オールマイトの関連する曲は別）
「よし、じゃあお互いヒーローネームで呼び合おう。俺たちは今こうしてコスチュームを身に纏い、街に出ている。
つまり俺たちは〝ヒーロー〟だ！一緒に頑張ろうな！」
先輩の鼓舞する励ましに、胸元が熱くなる緑谷は、元気の良い声で

返事をする。
　それと同時に内心「もしミリオ先輩のような、人を笑顔にする人間が後継者として選ばれていたらどうなってたんだろう…」と自然的に思ってしまうことも…
　自分が後継者では無かったらどんな過酷な人生を送っていたのかは、想像もせずに――他人の夢を見る少年は、この後何を見るのだろうか…

そして、現在に至るわけだ。
一際目立つペストマスク、
冷静さと熱を含まない瞳、
写真に映っていた男、
雪泉が一昨日見たであろう八斎會の若頭、
一目見て直感で理解した――この男は間違いなく治崎だ。
雪泉の証言により警戒網を広げ、調査を進めるのは正解だったとも呼べるだろう、敷地近辺の監視はサー・ナイトアイ達だが、パトロールは学生である自分達…もし警戒網の外へ出ていたら雪泉と麗王二人に悪く遭遇してしまっていただろう。
　不幸中の幸いにせよ、余りにも唐突すぎる事柄に、動機が揺さぶられるような錯覚を味わう。
（コイツ…そんなッ！嘘だろ…いきなりかよ!!）

死穢八斎會・若頭――オーバーホール
　今回の目標であり、敵連合との接触があったと思われる危険人物だ。
「いやぁ、ウチの娘が突然ぶつかってすみませんねヒーロー」
　緑谷の内心混乱する心情などお構い無く、治崎は悠々と冷静さを装って語りかける。こういう敵こそ厄介と言うべきか、全く害意は感じ取れない。
「遊び盛りでケガが多いんですよ、困ったものです、其方こそ大丈夫で

すか？」
何食わぬ顔で、緑谷に微笑みかける治崎。
とても…指定敵団体の人間とは思えない彼に、何処か悍ましさを感じてしまうのは自分だけだろうか？
いや…もし彼が敵だと知らなければ本当に気付かないだろう――成る程、それなら雪泉でさえも普通に見逃してしまう訳だ。
「あ、ええっと…「まーたフードとマスク外れちゃってるぜ！サイズ調整ミスってんじゃない？ガバガバじゃん！」――!?!」
返答に悩み困ってた緑谷に、マスクを被せるミリオは遮るように言葉を挟んでくる。
何を――？と先輩の意図が読めない緑谷だったが、元々対象を観察して分析するのが得意だったという意味もあるのか、彼の平坦な顔を見て直ぐに理解した。
（そうか…今じゃ僕らと向こうはお互い何も知らない状況なのに…〝嘘だろ？〟の顔が表に出てたんだ！
怪しまれない様に振る舞わなきゃいけない…もし向こうが僕らのことを勘付いて警戒でもされたら、それこそ今回の仕事に支障が出る!!）
無難に且つ自然にやり過ごさなくてはならない――その為には何がなんでも堪えなければいけない。
「その素敵なマスク、ここじゃ有名な八斎會の方達ですね！」
「ええまあ…マスクのことはお気になさらず。衛生面とか、清潔とか色々気にする口でして……」
ヤケにマスクの事に関しては触れて欲しく無さそうで、言葉を濁すような曖昧な口調で視線を微かに逸らす。
そんな治崎は直ぐにある話に移り変わる――
「ところで、貴方達見たことろヒーローですよね？若い新人のように見えますが…初めて見たな…」
「そうです！俺たちまだ新人で…まだ慣れないことも多いんですよ。サッ、立てよ相棒！ボサッとしてたらいけないだろ？」
「――何処の事務所所属なんです貴方達は？」

相手がヒーローである以上、「ハイそうですか、お勤めご苦労様です」と潔く引き退る程、治崎はヤワではない。
警戒心を一切緩まず、迫真に問い詰めるような目に、視線をズラさず爽やかな笑顔を向けるミリオは、流石は三年生の経験者だ。相手からも、端から見られても怪しまれない素振りが一つもない、。
「所属だなんてそんな、学生ですよ！俺たちはてんで、まだまだ実力にも及ばないピヨっ子でして……オールマイトがいなくなってからヒーロー社会も色々あって、職場体験に回ってるんですよ。昼にはもう区画を回らないといけないんで、それじゃあ…！」
これ以上探られるのは不味いと判断したミリオは、不自然なく区切りある流れで即刻立ち去ろうとする。
緑谷も経験が浅いとは言え、流石にこれ以上対面しながら話す気にはなれなかったので、ミリオに続いて立ち去ろうと動く――
ガシッ――!!
……はずだった。

「行かないで……」

先ほどまで無言で俯いてた小さな少女。
よく見ると長い白髪に、巻貝のような角、苺色の瞳、なによりも…ボロボロのシャツと腕に巻かれた包帯が何故か無性に心を深くナイフで突き刺された錯覚に痛感してしまう。
「救けて……!!」
少女の声は震えていた。
恐怖に染まる顔、
汗を浴びた肌、
離さない手、
少女はまるで殺人鬼に捕まりたく無いと、心の底から願うように祈りながら、緑谷の腕を離さない。
「……ッ！」
立ち去ろうとした、本来ならオブラートに穏便に、且つ円滑に物事

を進めるのが定石だろう。
だけど、こんな…
こんな恐怖で震えてる小さな女の子に、「救けて」と求められれば――見過ごせるはずがない。
「あ、あの……この子、怯えてるんですけど？」
なるべく冷静に、心を抑えた声で治崎に語り掛ける緑谷は、苦笑いを必死に創りだす。
そんな緑谷少年に治崎は
「……叱りつけた、後なんで――」
声色が微かにブレる。
この時治崎は初めて、怪訝な表情を見せる。まるで一番探られたくないことを当てられたかのような、其の質問はしないでくれた言わんばかりの顔色に、空気の流れが変わる。
「おーい何してるんだよ相棒！その人に迷惑かけちゃダメだろ？」
平静な表情を装うミリオの内心は反面、実は焦燥に走っていた。
（不味い…余計な勘繰りはよせデクくん！これ以上は…）
しかしミリオの心の声など届かず…いや、届いてようと緑谷は辞めない。
この子が、震えながらも強く握りしめている。
デクから一切、離れようとしない――
「いやぁ、でも…遊び盛りって言う感じの包帯じゃないですよねコレ…」
「よく転ぶんですよ。いつも注意してるんですけどね…」
「いやいや、普通じゃないですよコレ…だってこんなに小さな子どもが声も出さずに怯えてるんですよ？」
「……人の家庭に自分の普通を、押し付けないで下さいよ……」
流れは留まることを知らず、悪化していく一方。

緑谷出久と治崎の間には見えない線を引かれてるような、何かしらの形で睨み合う。
表面上では冷静な返答で誤魔化せてはいるものの、現状は荒々しい波乱を巻き立てている。
「でも、人の家庭には其々事情が付き物だよね」
(デクくん、これ以上はやめるんだ！明らかに詮索を嫌がっている…これ以上刺激を与えれば益々シッポを逃してしまう！無難にやり過ごすんだ…！)
これ以上探るのは明らかに危険すぎる。
予想外な展開とは言え、これは非常に不味い…そう判断したミリオは心の中で緑谷が留まることを祈る。
(いや…違う！ダメだ先輩、逆にその方が怪しまれる――確かに相手は詮索を嫌がってる…でも、コスチュームを身に纏った人間が、怯えた女の子を前に見過ごす訳がない…！)
意思疎通――言葉では出さなくとも、相手の目や呼吸、微かな作動、感覚で相手の心情を察する二人は、テレパシーとまではいかないが、ある程度は伝え合うことが可能だ。
「この子に、何したんですか？」

ヒーローは、目の前にいる困ってる人間を困ってる人間を困ってる人間を、「救けて」と涙流して求める女の子を、無視したりなんか絶対にしない絶対にしない――

ミリオの行動も正しい…だからこそ、緑谷出久の行動も充分に正しいのだ。
怯えた小さな少女の頭を、優しく撫でながら、恐怖心を打ち消すようにがっしりと抱きしめる。
真剣な眼差しが、治崎を睨む――
「フゥ…やれやれ、これだからヒーローはお人好しと言うか…人の機微に敏感ですね。分かりました――」

「!!」

降参でもしたかのように、諦念した治崎はため息を吐く。

「ではお恥ずかしいですが…家庭内に関して人目に付かない場所で…こう、お話ししましょう」

治崎は呆れたような物言い口調で、人目が立たない場所を模索する。そんな様子を他所に、二人はお互い顔を見合わせ息を呑む、

これは…誰もが予想だにしなかった展開だ――

「最近、娘のエリについて…悩んでたんです。それで少し冷静さが欠けたというか、つい厳しい物当たりする口調になってしまって…」

足を踏み入れた場所は、人気のない薄暗い裏路地だった。空気が悪く、清潔症の治崎からすれば、拷問紛いに近い最悪な場所だろう。しかし人目を避ける為なので、やむを得ない。

「子育て…ですか?大変ですね…」

娘、と言っていたことはつまり、エリと呼ばれる少女の親が治崎である可能性は格段に昇ったのだが、サーから娘がいるなんて報告は一切聞いていない。

エリの悩みと、震えた少女の怪我した体を見るからに察して、虐待に近いことは推測できる。

「ええそうです…特に近頃の幼い子どもは特に難解でしてね…」

そんな治崎は、後ろを振り向かずに薄い手袋を脱ぐ。

「自分が何者かになる・なれると――本気でそう思っている」

刹那――凄まじい殺意の矛先が二人に向けられる。

濁ったドス黒い殺気、只ならぬ歪な気配、死を錯覚させる現実味のある敵意。其れ等は限りなく二人を惧れと絶望の淵へと沈めるに等

しく、鳥肌が立ち止まらない。
緑谷はまだしも、表情こそ出してはいないが、当てられた殺気にミリオも動揺を隠せない。
「ッ――!!」
これ以上はマズイ――そう確信したミリオは緑谷の腕を引っ張ろうとするも、その前に行動を移した者がいた。
「えっ…？」
ペッタ、ペッタ、ペッタ――素足の音が、静寂な空気を破る。
掴んでた緑谷の腕を離し、治崎の下へ駆け寄るのは、先ほどまで怯えていたエリだ。
「あ、エリ？…ちゃん？」
突然、かけ離れた少女に動揺する緑谷。しかしエリは何も言い返さない。その顔色は、まるで何かに諦めたかのような…いや、まるでこれ以上はやめて欲しいと言わんばかりに――
「なんだ？もう駄々をこねるのはやめたのかエリ？」
静かな声で尋ねる治崎に、エリは無言のまま首を縦に頷く。冷や汗を流す少女は、心の底から湧き上がる恐怖を無理矢理圧し殺してるかのようにも見える。
「いつもこうなんですよ…すみません悩みまで聞いて貰って、ご迷惑をお掛けして…それではお仕事、頑張って」
短くそう告げると、治崎はエリを連れたまま闇に溶け込むよう、奥へと歩み進める。
「ちょっ…何で――「これ以上の深追いはダメだデクくん」…！」
納得いかない緑谷を制するミリオの表情は、何処か険しかった。あの無敵とも思える先輩の表情は、初めて見た。
「気付かなかったかもしれないけど、もしあのままだったら完全に殺られていた…殺気であの子を釣り寄せたんだよ…」
向こうにその意思が無いのなら、殺意を浴びせ、恐怖心を煽らせれば自然と食い付いて来る。

治崎の敵らしい一面が垣間見えた瞬間である。
「とにかく今は、サーに報告を入れよう。流石に今回の件は偶然とはいえ…」
何より治崎にエリと呼ばれる娘がいた――という事実が一番の衝撃であり、これだけで大収穫でもあるが、余り喜ばしい雰囲気でないのも確かである。
タイミングを示し合せるように、空模様が怪しく染まり、ポツリポツリと、小降りの雨が降る。
緑谷の表情も、拭い切れない暗雲へと募らせていく。

此処が何処の場所に当たるか分からない…だけど、随分と歩かされたように思えるのは、やはり同じ背景と道を延々と歩き続けてるからだろか、実際は２０分間無言で歩き続けている。
「クロノ、最近の若者はこう…病んでるな。外の空気に触れてみれば、汚染された空気にどいつもこいつも…有象無象に広がる病人ばっかりだな――」
「言葉から察してご機嫌斜め…といった所でしょうかい？随分とご立腹な様子だ…」
「ああ、だから風呂の用意頼む――それと…」
不愉快そうに顔を顰める治崎…オーバーホールは、ツカツカと靴の音羽を立てながら、通路の奥に立ち塞がる扉に視線を向ける。
その側には仮面で顔を覆う構成員が、気不味そうに頭を下げている。
「すいません若！このガキ…！ちょっと目を離した隙に直ぐ逃げやがっ――」
構成員の必死な弁解を遮るように、治崎は問答無用で
「ゴミの掃除もしとけ」
肉体を弾け飛ばした。
見るにも無残、原型は勿論――血肉や骨までも残さず、壁にはベットリと異臭漂う血痕が付着した。

「英雄気取りの病人共が…!!」

血も涙もないとは正しくこのことを指している。

顔には僅かな蕁麻疹が沸騰するよう発症し始め、クロノに抱えられたエリは、見たくもないと言わんばかりに目を瞑り、両手で耳を抑える。

「エリ、いい加減に我儘は止せ。お前の行動一つ一つが人を殺す、罪深い人間となぜ気付かない？

お前は必ず、人を殺してしまう呪われた存在なんだ――」

クロノはエリに巻きつかれた包帯を丁寧に解き、腕に付かれた傷痕が露わになる。鋭利な刃物で何回も刻まれたその痕は、まるで自分が呪われた存在だと証明付けるような、戒めに近いモノ。

エリの顔は、絶望のどん底へ連れ戻され、希望そのものが潰えたような諦念に近い表情を、鮮明に曝け出していた。

彼女はもう「救けて欲しい」とさえ願わず、自分がこの世に生まれたことを、ただただ怨むかのように、宿っていた微かな希望は死んでいた――

「お前は計画の核だ。鬱陶しいヒーローと忍の手品なんて、お前の力があれば全てを虚無と化せる。

お前は、理を壊す存在――全ての原理を変えることが可能なんだ。だからもうこれ以上俺の手を煩わせるな」

厳しくも、熱がこもらない冷酷な言葉を浴びせ、病室に似せた椅子へ座らせ、手足を拘束する。

端から見れば異常――我が娘をこんな、人体実験地味たように扱い、さも当然と言わんばかりに息を吸うよういつものアレを行う。

「オーバーホール、死柄木から電話」

小さなぬいぐるみから発せられた言葉に、治崎の動きは静止する。

後ろを振り向くと、本部長――『ミミック』が端末を差し向けた。

「この前の案件の返事、聞かせてやるってよ。漆月は不在だが構わな

いか？だってさ」

躍進、不穏、暗躍――静かに着々と、物語は加速する。

１６１話「焦燥」

緑谷出久・通形ミリオがパトロールに回り、治崎と接触した場所とはかけ離れた区画。
慣れない土地に目を移しながら、捜査網の外で大きく街を巡回する雪泉と麗王。忍学生とは言え、善忍と悪忍が隣り合い、任務に励むというのは、些か珍しい光景だろう。
「次は彼処の信号を右に回りましょうか、そこから先は暫く真っ直ぐ進んで問題はないでしょう」
「はい、そうですね。解りました」
二人とも善悪の立場や初対面がどうであれ、根は優しく真面目なので、こう言った似た者同士が惹かれ合うのは必然なのだろう。
何一つ嫌な顔を出さずに、物事に真剣に取り組む姿勢は、立派な忍とも呼べるだろう。
「あ、あの……麗王さん」
すると、雪泉が顔を伺うように尋ねてきた。「はい、何でしょう？」と、微笑と供に言葉を返す。
「麗王さんは、その…悪忍、なんですよね…？どうして、あの事務所を御志望に？」
「ああ、その事ですか」
そう言えば、自分が何故この事務所のインターンに所属しているのか、まだ彼女には話していなかったなと思いつつ、口をもごもごさせる。
「そうですね…何処からお話ししましょうか？経緯…ふむ、強いて言うならばサー自身、私を指名した…と言うのが正直な答えですかね」
あのサー・ナイトアイ自らが？
麗王の言葉に驚愕を隠せない雪泉は、目を丸くする。悪忍である彼女を、サーが直々に？
あり得ない――幾ら忍が善忍と悪忍、手を結び未来を変えようと批

評を受けてるのは確かだ。
「私は悪忍ですが、サーは兎も角オールマイト自身と直接対面したこともあれば、救われた恩があるのです。
直接的な関係こそほぼ皆無に近いですが、私を見込んでくれたのなら、あの方の理想も含め、期待に応えたいのが本望です――」
柔らかな微笑に、優しさが伝わる。
これも何かしら繋がった縁と言うモノなのだろうか…
「成る程……如何なる経緯かは存じませんが、それでサー・ナイトアイさんは悪忍である麗王さんを…」
「そもそもの話、善忍と悪忍とは善悪の区別が分けられた存在…立場や状況が違うだけで、忍の道や志しは皆同等ですよ――個性によっては反逆者、敵連合の思想や理想、行動に感化される忍も近々増加してるのも事実ですが……」
麗王の言ってることは尤もだ。
忍の善や悪の口論は立場や状況、任務によって幾らでも変わる。中には悪の中に宿る正義を貫く者もいれば、嘗ては自分達と同じ道筋を通っていた人間も、何らかの事情で悪にならざる者だって存在する。
世の中全ての悪が、一方的に責められる存在だとは、口には出し難いものなのだ。
「忍グレや、敵と徒党を組む者達…何より敵連合――」
忍の存在が明らかになったあの日――神野区の死闘。
雲雀と爆豪の奪還に成功したものの、オールマイトは平和の象徴としての最期を迎えた。
元の原因を探れば、連合による大胆な犯罪行動、何より組織を統括し、裏で操作していたオール・フォー・ワンに大きな元凶がある。
もし敵連合さえいなければ、…きっとこうなることは無かった。林間合宿で何が起きたかどうこうは、詳細は知らない。だけど、彼らの浅はかな行動で、自分達の守り通した忍の歴史や秩序に、ヒビを入れたその行為に関しては、粛清せねばならない――
「ええ…彼らの集団行動に感化され、心動かされた者達は皆、自分達が何者かになれる、自分達も大義や偉業を成せる反逆者として、名声を

買い注目を呼び集めれると思ってるのでしょう。
ステインだけでなく、異能解放軍デストロの書籍も出回ってる位ですから」
デストロ…？聞いたことのない名前だ。
「抜忍…又は力を培い忍術を持つ忍では無かった者達の行動も、目に余る事件が多いのも難解ですね…」
最初は日陰に住まい、不良並の悪質行為が目立っていたのだが、最近になっては今じゃ誘拐殺人、強盗、テロまで起こす犯罪行動が大きく肥大化に加速している。
「何としても、問題のある行為は私達が取り締まらね――」
ヴーッ！ヴーッ！ヴーッ！
途端――会話を遮るかのように、端末の音が鳴る。
着信？このタイミングとなれば、サー・ナイトアイだろうか？そう疑問に思いながら画面を開くと、案の定サー事務所から連絡が入った。
「…もしもし、此方麗王。現在雪泉と共に指定された区画を回っております――如何なされましたか？」
穏やかな表情とは一変、気高く凛とした顔立ちに変わる。
連絡腰の相手に対しても尚、態度と礼儀を忘れない彼女を見て、学生という子供を被った大人なのだと、肌で感じ取れる。
「はい……えっ!?…そう、ですか。畏まりました。直ぐに其方へ駆けつけに参ります」
軽く頭を下げながら電話を切る。
何やら困惑気味な様子が伺えるが…彼女の反応から察して恐らく喜ばしい結果では無いのだろう。なんて漠然と想像を膨らませていると――
「雪泉さん戻りましょう…サー・ナイトアイから連絡が入りました…緑谷さんとミリオさんが、治崎と接触があった模様です」
――雪泉の心臓が、脈を打つように揺さぶられた。

捜査網から外れた区画を回っていた為、ミリオと緑谷の二ペアよりも遅く、サー達と合流した。
報告を受けてから直ぐに小降りの雨が降り、次第にその強さは増しては全身がずぶ濡れだ。麗王は鎧を見に纏ってる（客観的に忍なのに色々と目立つのは禁句）為、特にどうという訳でもないが、雪泉の方は少しスケスケで、浴衣と厚い布で縫われてるので問題はないが、もし布の厚さが薄ければ、真っ白な肌と下着が露わになっていただろう。何ともご褒…けしからん。
「遅くなり申し訳御座いません、ただ今戻って参りました…！」
若干雨によって空気が冷えたのか、吐く息が白くなり、急ぎ足で事務所に戻って来た為、発汗した汗が雨と共に流れ、区別がつかない。
「二人共、お勤めご苦労様だ」
濡れた二人の女性に労いの言葉を掛けなから、サーは資料を整え、パソコンのキーボードを打ち込んでいく。
「あの……治崎と接触があったって…」
「事実だ。ミリオの報告によると偶然の事故…とは言え、それなりの多大な進展も見受けられた」
「進展…ですか？」
淡々と、内容を伝えるサーの指は止まらず、硬い表情を一切変えたりはしない。
現在――ミリオと緑谷はコスチュームを着替えるべく、更衣室にいる。
「治崎に娘がいたことが発覚した――」
「――!?!」
衝撃の事実に、二人は息を詰まらせる。
雪泉は兎も角、あの麗王でさえも言葉が見つからない…と言った感

じで、目を丸くしている。
「名前は『エリ』と呼ばれる幼い子供だそうだ。容姿的には小学校低学年にも満たさないかとの疑いがある。
特徴や外見の容姿は緑谷が報告してくれた通り、現在ピックアップして調査に移っている」
「娘…ですか、初耳です」
「当然、私もミリオの報告が来るまで全く知らなかった……」
サーは現在「エリ」という謎の少女の戸籍を調べる為、独自で調査を図っている。序でにサー・ナイトアイ曰く、何かしら嫌な予感がするのと、最悪な未来を防ぐべく徹底的に死穢八斎會の悪事を止めるべく、チームアップの要請も送るらしい。
何しろ小さな組とはいえ、敵は敵――評価や報酬としては余り響はしないが、其れでも敵連合との接触があった組織と知っていれば、此方側に協力してくれるヒーローはマイナーも含めて存在するのは確かだろう。
「お前達も休んでおけ。これ以上の詮索は無理だろう…怪しまれては折角見せた尻尾を益々逃してしまう羽目になる」
「あの、そのエリさんっていう娘さんは……どうなったのですか?」
「……」
微かにサーの指が止まる。
まるで小石に挟まって一瞬だけ動きがブレたかのように――
「私も現場にいなかった為、詳細は不明だ。
ただ緑谷からの証言によれば、治崎から逃げてた娘が、突然大人しく引き返したらしい。ミリオ曰く、殺意を当てて態と釣り寄せた…とのこと。
目に見えない強引なやり手だな」
「なっ……」
雪泉は絶句した。
自分の娘に対して殺意を向ける…それこそ聞き間違いか耳を疑った。
家庭内の事情は人によって其々変わるにしろ、実の娘に対して殺意

を向けることなど、あって良い訳がない。
確かに相手は敵だ。だが、非情と忍の世界に背いてきた黒影でも、自分に殺気を当てたことなど、今までに一度だってなかった。
いや…そもそも、仮に娘では無かったとしても、こんなものは弱者を利用する悪質な手のやり方だ。況してや小さな年端も行かない子を相手に、脅しなど…清く正しい純粋な雪泉からは考えもしない出来事である。
「なら、助けに行った方が良かったんじゃ…」
「相手が本当に娘かどうか証拠がないのにか？」
「もし実の子でなければ尚更！誘拐ではありませんか!!その子は傷だらけで、怯えていたんですよね？だったら――」
「雪泉、お前も傲慢な考えをするんじゃない」
雪泉の口論に、厳しい口調でサーは鎮めさせる。重い言葉が空気に溶け込み、一気に悪化する。
「良いか、仮に娘で無かったにしろ血縁者の可能性だってある。政府や法が、貴様の浅はかな言動が世に通じると思うか？ヒーローや貴様が感情論で踏み入れて良い話しじゃないし、解決できる事件ではない。
今はまだ情報が足りなさすぎる、確実性や実行に移る人員に其れなりの計画を練る必要性だってある。今はまだ攻め時じゃないのだ」
情報が足りない。
証拠も揃ってない。
悪事も解らない。
何から何まで条件が揃ってないし、足りなさすぎる。
仮に全面突破をしたとして治崎を捕まえるにしろ、八斎會には組のヤクザだけではなく、幹部だって存在する。
無闇矢鱈に嗅ぎ付けば、手の届かぬ場所へと逃げてしまう。
様々な可能性が、阿弥陀籤の如く分岐し、未来の予想が付かない。

（私の個性なら、事前に見ておけば…接触は防げていた……）

そんな黒潰しされた結末を、サーは個性の予知で見据えることは可能だが、それと同時に其れなりのデメリットと個人的な悩みが存在する。

「知っての通り、我々はオールマイトじゃないし、彼の様な大義を成せる人間にはなれない。相手の行動を予測し分析を重ねた上で万全な準備を整えなければ、救える命は救えない。

志だけで救ける程、世の中は甘くないし、それが可能であれば大半の人間は今も生きていた」

――真に賢しい敵は、必ず闇に潜む。

不可視な闇を拭えぬ限り、敵の素性や悪事を暴く事不可能なり。

（勿論、陽花…君のような聖人君子にもなれやしないさ……そうだ、志だけで救えるのなら、陽花だって今でも安心して生き永らえ、妹と供に幸せな家庭を送っていたんだ。あの子達は死ぬべき存在ではなかったし、忍の皆んなが彼女を必要としてくれていた…）

陽花――サー・ナイトアイから言わせてみれば、ユーモアの才能に溢れ、人々の笑顔を照らしてくれる太陽の子だと自負している。

彼女がオールマイトのコンビを組んでた理由も当然納得出来たし、自分がオールマイトの相棒を務めたのも、陽花の後釜…と呼べるものではないが、逝去した彼女の為にとも含めて、オールマイトの側で働いていた。

（あの子は、如何なる状況でさえも…心を折ることを知らず…他人を救ってきた。可笑しな話だ…自分は忍なのに、他人の命を、幸せを第一優先に考え先行し、その人が一番掛けて欲しい言葉を、いつも掛けてくれる…）

弱者が虐げられればその者の代わりになって憤り、

生きる希望を無くした者に心の原動力を与え、

如何なる状況でさえも、相手が困っていれば何がなんでも救い出

し、
己の犯した罪を嘆く者に、優しい言葉を囁いてくれる、
市民や我々ヒーロー、敵に忍、そして剰え妖魔でさえも、救ってきた彼女は誰が何と言おうと善の鑑そのものだ。
(だが、過去を悔やんだって時間は帰ってこない。巻き戻せるなら誰だってそうしたい…けど無理なんだ。
私はオールマイトや陽花の様な人間にはなれやしない…だけど、せめて…明るく笑顔で、ユーモアに溢れた未来を作ることは出来る)

あの二人のような偉大な人間にはなれなくとも、その必要はない。
明るい象徴や穴は補えれば問題ないし、皆が皆――人々を笑顔に輝かせるユーモアのある人間として、努めれば良いだけの話。
確かにその中では不法や偽善と呼ぶに等しい、悪質なヒーローだっている。敵の買収やヤラセ、時に賄賂や不正行為、裏金に闇売買の経路など、世の中にはヒーローを気取った敵に等しい邪悪な人間だって存在する。
だけど、其れは世の中に佇むヒーローの軟弱した姿勢に原因が当たる訳で、そんな汚れた行為とは直接因果関係には当たらない。

「今回、エリと呼ばれる娘…深追いの詮索を禁じたのは私ではなくミリオ自身だ。まあ…勿論私が現場にいたらそうするし、彼は私の代わりに動いてくれただけ。
そうでもしなければ、万全な態勢も整えないし、取り返しの付かないことにもなる。今日はこれにてインターンは終了とする。二人共、改めてご苦労だった」
「……」
霧が晴れない…靄が纏った心に、雪泉はキュッと胸に手を当てる。
何故だろう…この妙な胸騒ぎは一体……

週明け――インターン初日、荒ぶる不穏な雨と供に日は去っていき、晴天な日差しが差し込む。
夏休み明け、秋の季節に移り変わろうとする月日の中でも、日光の暖かさを堪能出来るのは、気温が丁度良いからなのだろう。
「……」
インターン生徒はこの週間が一番多忙な時期で有る。
タダでさえ一般の授業の難易度が高めな上に、午後からヒーロー訓練が控えている。
にも関わらず授業後は寮に帰宅…と言う話にもなる訳がなく、事務所に戻ってインターンとしての活動を行わなければならない。

ハッキリ言おう――想像の倍以上の負担と疲労が半端じゃない!!

他にもインターンでは無いが、仮免取得に不合格だった轟と爆豪も酷く、仮免講習はスパルタだったと苦情を耳に挟めば、轟曰く、時々爆豪と千歳が揉め事を起こすそうで、そこをギャングオルカが仲裁（生温くはない）で強制的に鎮めさせるの繰り返しがあったそうだ。
だが問題の注目を浴びたとすれば、緑谷出久もそうだ。
登校から教室に入る緑谷にかけられた言葉は「事務所どこに入った？」「エロい女の子いなかった？」「良ければ私も入れて～」だのと、色々な声が上がったが、特に緑谷は自分のことやサー・ナイトアイの言われた言葉も含めて、話を聞く所ではなかったらしい。
生徒同士の会話ならまだしも、授業や訓練にまで支障（相澤先生曰く、両立出来ないのなら辞めさせる）が来たしてる為、何時までもこのままではいられないと判断した緑谷は、オールマイトに直接あって話をすることに決めた。
善は急げ――職員室にてオールマイトが不在だったので、ミッドナイト先生に訊ねたところ、どうやら外に出てジョギングを始めてるらしい。
引退したにも関わらず体を鍛え始めると言うのも、何だか妙な話だが…　取り敢えず会話をするべく直接駆けつけることにした。

「オールマイトおおぉぉ――!!!!」

そして現在。

ジャージ服で軽くジョギングを行う、痩せ細ったオールマイト…いや、この姿の場合は八木俊典と呼ぶべきか、脱兎の如く駆け走る緑谷に、吐血を吐きながら若干驚いた表情を立てる。

「緑谷少年がああぁぁ…来た!!!ゴホッ、何故私がここにいると?」

「ミッドナイトから聞きました!…その、貴方とちゃんとお話しがしたくて……

……聞きました……サー・ナイトアイから……」

「……何を?」

「惚けないで下さい…全部、知ってたんですよね?」

一陣の風が、頬を伝う。

木の枯葉が宙を舞い、空へと流れるように舞っていく…

それでも、オールマイトは足を止めることなくジョギング活動を続けてる。

「ワン・フォー・オールのことも、通形ミリオ先輩が後継の候補だったのも…そして、オールマイトのコンビを組んでたのが、『陽花』さんだって忍も…」

「――ッ」

時が止まるような錯覚に囚われた俊典は、止めなかった足を止める。沈黙が重く続き、口に出したくない言葉を、自身の苦悩を押し殺すように声を絞る。

「陽花くんのこと、何処まで聞いた?」

その声はとても重々しく、辛い感情を吐露しない様に隠し通ている。それでもその痛々しい声に、自然に彼の心情が伝わった緑谷は息を呑みながら言葉を紡ぐ。

「……てんで、詳しいことは聞いていません……ただ、陽花さんって人が、オールマイトのコンビとして手を組んでいたと言うのは聞きました。正確に言えば、話された…と言った方が妥当…

ホラ、オールマイトは留学先が海外で、日本にはいなかったと言うのはニュースでも語られていましたよね？帰国してデビューして、その功績から多くの市民に認められて平和の象徴に……

そんでふと思ったんです。オールマイトがいない間は日本はどうして膨大な被害が及ば無かったんだろうって…不思議に思ってたんです」

平和の象徴と謳われる前、オール・フォー・ワンに支配された日本は、平和とは呼び難い時代だった。

犯罪は勿論、オール・フォー・ワンの支配下として遣われた裏社会の人間が息を潜み、反逆者…或いは自分に仇なう脅威を排除するため、彼の息の根がかかっていた。

もしオールマイトが不在の今、仲間を集めるのは容易く、今頃死者は大勢…何より忍は壊滅するだけでなく市民ですらオール・フォー・ワンの思うがままの支配下となってただろう。

「陽花さんって忍が…日本を守り続けてたんですよね…？そんな大それたことを可能にする人間は、オールマイトを除いてそんなにいない…だから、陽花さんって忍がオールマイトとコンビを組んでたのは納得しましたし、その…驚きました」

その頃は忍の存在は秘密、故に雄英に入るまで知り得なかった事実なので、この事を隠してたことは仕方ない。

ただ…それでも本人の口からどんな人かは聞きたかった。

「……どう言う経緯で、彼女を知ることに繋がった？」

「…僕が、後継者に相応しいかどうかの話の時です…」

採用に値する価値があるか否か、見定めるべく緑谷を試したサー・ナイトアイの口から語られた言葉――

『仮にお前がオールマイトの後継者だとするのなら、コンビである陽花の話は聞いてるのか？彼女が、どういう経緯で日本を守り続け来たのか…お前が平和の象徴になれずとも、忍の象徴として幾重もの人間を明るい未来に照らせる人間になれるのか？』

心臓の鼓動が脈を打ち、鮮明に血液が循環する感覚さえ感じてしまう程、頭部に残る重い衝撃が、彼を大きく惑わせた。
知らない真実が、緑谷を拒み否定する。何も知らない少年にサーは、心底呆れながら「益々、お前が後継者に選ばれてる理由すら見つからない」と吐き捨てられた。
「そうか……それで？彼女の件も含めて、君に言う必要……あったかな」

「――あるでしょ!!!!」

オールマイトの言葉に、緑谷出久は激しく過剰の反応を映す。
焦燥、義憤、悲哀、様々な感情が溜め込んだ表情を曝け出す緑谷は止まらない。
「新事実ばかり突きつけられて！よく分かんないまま否定されて！オールマイトの事知ってたつもりでいて!!何よりオールマイトの意図が解らない!!!
秘密にする意図が分からないからモヤモヤする！何で教えてくれないんですか!?僕は単に貴方の背中を追い求め尊敬する一人のファンじゃない！一人の後継者として教えて欲しい!!!」
荒ぶる声は余りにも切なくて、己の苦悩を叫ぶ様に轟いた。
後継者を語る人間が、何も知らずにオールマイトの意思を継ぐことが出来ると言えるのだろうか？
オールマイトが隠し事をする人間と言うのは知っているし、現にワン・フォー・オールの真実が脅威なのも、所持する人間として秘密にするのは当然の義務だろう。
だが…何も言わないのも混乱を招く原因に繋がるのだ。
そう言う意味では、面会の時に遭ったオール・フォー・ワンの「真実を伝えない君が原因に当たる」というのは、些か否定できない事実だ。
「確かに…一理あるね。オール・フォー・ワンの存在を知ってるだけで

なく、神野区での激戦を経て…君た今だからこそ、潮時なのかもね…
　でもね緑谷少年、それでも私が隠し通した理由は、これは君の為にならないと判断したからだ。陽花くんの詳細は個人的に話したくないし、話すべきものじゃない……彼女以外のことなら話せるが、それでも聞くかい？」
「秘密にされるよりかは断然マシです」
「……呉々も、決して後悔するなよ…」
「――はい」

　こうして、隠された一つの真実が、オールマイトの口から発せられる。

　元々サイドキックを雇わない主義だった私だが、そんな彼の大ファンに根負けする形となって、１１年程活動を共にする。
　ヒーローの基礎知識、法律、経済面、社会の貢献する姿勢、其れ等の要素は素晴らしい物でもあったが、身体能力は及ばず、褒めるべき要素はなかったが、ブレーンとして私を支え、効率良く有意義に過ごしていた。
　その頃は当時、陽花くんと一緒に活動していたし、彼女曰く「二人よりも三人いた方が仕事が捗る」と言ってくれた。
　その言葉が救いだったのか、はたまたサー・ナイトアイに見込みがあると踏んだのか、スムーズに事が運び進んでたし、陽花くんの負担も軽くなった事で喜ぶ形になれた。
　そんな彼女が逝去したのは９、１０年前…これ以上は深くは言えないが、オール・フォー・ワンに殺されたよ。それだけ言えば充分かな。
　うん、それで…サー・ナイトアイにも責任を感じてるのか、あの時予知を使っていなければ、彼女の「死」は免れてたのではと、後悔の念を背負っていたよ。
　私だって日本に離れてたし、もし私が側にいれば陽花くんを救えたんじゃないかと、自暴自棄に走ってたよ。其処をグラントリノと小百

合様が全力で静止してくれたんだけどね。

そして前にも話したが、私がオール・フォー・ワンを倒してから丁度6年前…私の負傷に、サー・ナイトアイと相棒を解消した。

理由？確かに戦える形じゃないからと言うのは事実…価値観の違いさ。

呼吸器官はやられ、腹に穴を開け、致命傷を負いながらも何とか一命を取り戻した私がこれ以上無理強いしてまでも活動を続けることに、大きな反論をしていたよ。

象徴論…私が消える事で、世の中の人々は怯え続けなければならないし、継ぐに値する人間が見つかる確実性も低い、現実味のある話でも無かった…だからせめて、後継者が来るまで私は抗うつもりだったよ。

でなければ、新たな悪の象徴が生まれ出ずる可能性は高かったしね。その意味も含めて、膝を折る訳にはいかなかった。勿論サー・ナイトアイは話せば解るし、私の言葉は理解してくれた…でも、納得はいかなかった。

そんな私に、サーは予知を使って視てしまったからね……

『やめるんだオールマイト！貴方がこのまま行けば…陽花くんと同じ…言葉に言い表せない…惨たらしい死を迎えてしまう!!それだけは…嫌なんだ!!!』

嘗て起きた過去を、悔やみ苦しみ葛藤するサーの発言…私は一生忘れもしなかったさ。

私がこの先進めば、彼女と同じ死が免れないと…忠告を受けた。それでも私は、止める事が出来なかったよ。

そして未来の対立に巡り、ケンカが起きてコンビは解消…

今思えば、全てが狂ってしまったのは…陽花くんが死んでから全てが変わったよ。

大切なものを失った人間の観る世界が一変…なんて言葉はよく聞くけど、正に本当に其れそのものだったよ。
その後、陽花くんの後継者は結局誰も現れず…ワン・フォー・オールの後継者は通形少年と根津校長は薦めてくれたよ。
話は聞いたし、サーが一任するに相応しいと見込んだ人物だった。私も彼に託そうかな…なんて思って頃に――

――君がいた。

あの時、ヘドロ事件で爆豪少年を助けようと、無個性でありながら、他が為に命を賭して救おうとした、一人の少年に――

ごめんな、緑谷少年…君に大事な話を隠してて…

１６２話「廻る、抗う、運命の輪」

「オールマイトの…死」

隠された真実を吐露したオールマイトに、緑谷出久は息を詰まらせる。

オールマイトの決定打された死の宣言に、目の前が真っ暗に擦り潰される緑谷は、言葉を発することが出来ない。

今までは如何なる窮地をも脱し、信念と供に理不尽をその拳で打ち砕いて来た。

その分、ワン・フォー・オールの結晶の残り火が弱まると同時に、命の灯火さえ掻き消えて行くかのような…

生きて欲しい――オールマイトは死んで欲しくない。

平和の象徴は悪に屈さず、明日も笑顔で笑って生きて行く…でも、そんなのは生きて欲しい、そうであって欲しいという、人間の生み出した願望でしかない。

人はいずれ死ぬ――だからこそ命とは尊く、限りある時間を精一杯生きようとする。

幾ら人は死ぬと頭の中で理解してようと、それは具体性のない話であって、当たり前だからだ。

第一自分がいつ死ぬのかなんて、誰も知らないし想像するだけ無駄なのだから、仕方がないだろう。誰も自分に降り掛かる死なんて見たくもないし、望んでもいない。

しかし、だ――未来予知は他人の死を先見する事さえ可能にしてしまう。

況してや、己の死を先に知ることは、絶対的に回避は不可能なのだ

から。
人は死に方を選べるし、不意な死が現実に突きつけられることだってある。生きてる上で『死』の概念からは逃れる術は無い。
だが…
「オールマイトが、死ぬ――」
決定された未来の死が、現実として突きつけられる。
「それから後継者の件、君と出会い力の譲渡を緑谷少年に選んだとナイトアイに報告した。
勿論…納得行く筈がないし、彼と私との溝は益々深まるばかりだった…」
サー・ナイトアイは通形ミリオを選び、オールマイトは緑谷出久を…しかし――個性を持ち努力を重ねた人間と、無個性の中学生を選ぶのは明らかに話が違うし、分かち合うことはほぼ不可能と断言しても良い結果になった。
『無個性の中学生だと!?!何を考えてるんだ!そんな人間が務まる訳がない!!』
『その子は人を助けたがってた…あの子に出逢い、其れを見てしまった……見過ごせる訳がないし、私も無個性だったこと知ってるだろ?』
『貴方とは違う!!志しだけでは世の中人を救えない!!!後継者に相応しい人間など探せば幾らでもいるだろう!?何故よりによって無個性の子なんだ!!』
『確かに、後継者として相応しい人間など探せば幾らでもいるだろうさ。
でもね――無個性で、人を救いたいと志す人間も…立派な後継者の一人だと思った。
少なくとも、私はそう思っている』
例え志しだけで救えない世の中でも、

感情論でどうこう出来る世界でなくとも、
綺麗事で物事が通じる社会でなくとも、
――オールマイトは緑谷出久を選んだのだ。
確かに褒められた成績も無ければ、無個性の人間よりも日々努力を怠らず、無敵の個性を磨き上げた通形ミリオを譲渡した方が良いだろう。
だが、成績が全てで世の中が救えるのだろうか？
通形ミリオを譲渡しない理由もないが、緑谷出久を選ばない理由もなくなった。たったそれだけのことで、問題は志しと誰よりも救いたかってた緑谷出久。

これは――誰にも責めることも無ければ、責められる問題ではない。
誰が悪いかではない、誰も悪くない。

「その後、サー・ナイトアイは馬鹿げてると一蹴し、二度と連絡し合うことは無かった…
そんな彼は決して諦めず、後継者候補の通形少年の育成に専念した」
「待って下さいよオールマイト…！じゃあ、予知は？その…オールマイトが死ぬ未来は変えられないんですか!?後どのくらいで…」
急かすよう真相を問い詰める緑谷に、オールマイトは重い沈黙を漂わせ、口を開いた。
「……遠い未来ほど時間に誤差が生じるらしいが、そうだね。
ざっと、１１、１２年後だって――現に至るまで、予知した人間の未来を変えたことは一度もないそうだ」
サー・ナイトアイの予知は完全であり絶対である。
一度視てしまえば、二度とその線路を変えることは叶わないそうだ。仮に予知を抗おうとしても、結局は無駄でしかないらしく、サー本人もこの個性でよく悩んでいた。
一番衝撃を受けたのが陽花の「死」だった。

絶対無敵――オールマイトに匹敵する圧倒なる実力を持つ彼女でさえも、その予知を後に文字通り死んでしまったのだ。
変えられない未来に、死から逃れない二つの事実。
そんな事柄の経緯から、サーは「自分の予知が、その人間の死を確定にしてるのでは？」と、己の個性に頭を悩まし、塞ぎ込んだ。
自分の個性を使わなければ、何度でも死を変えることは出来る。幾らでも最悪な未来を覆すことが可能だと。
「１１、１２年後…じゃあ、今年か来年……そんな、嫌だよオールマイト……!!
貴方が死ぬ未来なんて…そんなの…!!」
認めたくない。
死なないで。
生きて欲しい。
確定された死の未来を、無理矢理拒む緑谷は、首を横に振る。
今まで何度か死を錯覚する場面を突撃してきたし、その最悪な死をも何度も覆してきたのに…なのにどうして、彼が死ななければならないのだ。
「覚えてますか？体育祭で僕、オールマイトと約束したじゃないですか！僕が来たことを、世に知らしめて欲しいって！まだ約束果たせてないよ……果たせるまで生きててよ…!!」
――『君が来た！ってことを、世の中に知らしめてほしい！』
「僕が来た！って言うところを、生きて見届けてよオールマイト!!」
尊敬する師匠が死ぬのを聞いて、居ても経ってもいられない緑谷は、目に涙を溜める。
潤んだ瞳は、オールマイトの死に対する否定を表していた。
「……緑谷少年、私ね…サーの予知を聞いて割とすんなり、自分の死を受け入れたんだ。
うん…不思議と後悔も恐怖の念も無かったし、終わり（ゴール）が見えたのな

ら、ただひたすら突っ走ろうってね」
オール・フォー・ワンを倒したと思い込み、後継の意思を全うしたのなら、もう良いんじゃないかなと。
確定された死に対し、恐怖の念は抱かなかった。
…不思議なことだ。人間…誰しも死を布告されてしまえば、驚愕、否定、畏怖――様々な概念が生じてしまうのに、其れ等全てを透き通るように、自分自身の死を簡単に受け入れてしまった。
端から見て異端者だと思われるだろう、少しは抵抗や躊躇いの感情が湧き上がるだろう。

「……あの子も天国に行った、師匠や先代達もあの世で待っている…そう考えると辛さがなくなり、痛みが和らぐ…だからいつ消えても問題ないように覚悟はしてたつもりだし、何度でも命を賭けることも出来た。我武者羅にゴールまで突っ走って、自分の責務を全うしたよ」
死相(終わり)が見えたのなら、悔いのない生き方を――せめて師匠や陽花くんに無様な死に様を見せない様にしたかった。
サー・ナイトアイの予知と神野区の激戦を経て、直感的に自分の死はオール・フォー・ワンとの死闘ではないかと理解した。グラントリノの発言で、薄々と答えは見えていた。
「でもね、死ねなかった…」
オールマイトは、痩せ細った身体を緑谷出久に振り向く。

「君がいたから――」

後継者である、弟子がいたから。
まだ伝えたいこと、教授するべきものが山ほど募っている。
緑谷出久というたった一人の後継者を育てる為に――
「君が小心者の無個性で、私の想いに応えてくれる日々が、何よりも嬉しくて、輝かしくて…！私に生きろと、囁いてくれたんだ…!!」

『無個性でも、貴方みたいなヒーローになれますか!?』

――思い出す。
『なりたいんだ…貴方みたいな…最高のヒーローに!!』
――君が私に応えてくれる日々が
『どいて下さいよオールマイト…!!』
――何よりも嬉しくて、暖かくて…
『雄英でなくたって、僕…ヒーローになるから!!』
――私に生きる意志を生ませてくれた。

「それにね、君のお母さんに『生きて守り育てろ』と仰って頂いた！半蔵様だって命を張ってでも私を庇ってくれた…！
――今更足掻くよ！もう死ねないんだよ！私は生きると誓ったんだよ!!」
平和の象徴としてのオールマイトは死んだ。
しかし、今こうして自分は生きている。
自分が単に、弟子を育てる師匠として生きてるのではない。
志村奈菜が、陽花が、緑谷出久が、半蔵が、そして…雄英の方達や、縁のある者達、緑谷の母にまで、生きる意味を、価値を、原動力を与えてくれた。
象徴として人々の柱となり、脚光を浴び続けたオールマイトは確かに死んだが、八木俊典はまだ生きている。
ヒーローとしての彼が引退しても、個人としての自分にはやるべき事がある。
単に育てるだけではない、自分もまた守られる側として…人間として生きながら、弟子を育てて行く。
今までヒーローとしての自己犠牲が強かった分、一般人としての感覚はほぼ薄れていたので、そういう物事の考えには行き着かなかったが、それで良いだろう。
「何度でも捻じ曲げてやるさ！最悪な未来など、この私の腕でね!!」
ムキッ！と瞬時にマッスルフォームに変化するオールマイトは、骨折してない腕を空気を殴るよう突き刺す。
何時だって――如何なる逆境を乗り越えた彼なら、或いは既に捻じ

曲げてる確率も捨てきれないが、何方にせよオールマイト本人は死ぬ気など毛頭ない。

（――そういう、ケジメさ…オール・フォー・ワン…!!）

オール・フォー・ワンは、弟子を独り立ちさせないオールマイトを嘲笑った。

先生という存在は、弟子を独り立ちさせる為に有る者だと。

皮肉だが正論――認めたくはないが、納得してしまう論理。

だが、まだ独り立ちさせる為の技量や力を身につけてない弟子を育むのも、師匠としての責務でもある。

何方が誤ってるか…？否――何方も道は違えてない。

善や悪の定義がどうであろうと、師匠として弟子を想うのは当然の義務なのだ。

（オール・フォー・ワン…きっと、お前は死柄木か、或いは漆月を私に殺させる算段ではあるのだろう？又は、私があの二人を止めようとするのを敢えて計算して……

例えお前の予想通りだったとしても、そう易々と筋が通ると想うなよ。これが計算の内であっても、私はあの二人を止める…）

今頃あの二人がどう悪事を企み、どう行動に移すのかは不明だ。

しかし、師匠の血縁者と陽花くんの妹の手を汚したくはない。これ以上の罪は重ねて欲しくないのだ。

尤も――漆月の幾重もの罪を重ねる行動が、オールマイトの想いを否定してることなど、誰も気付かず。知るのは精々オール・フォー・ワンだろう。

「オールマイト…僕も……」

グッと涙を堪えながら、声を震わせる緑谷は一歩前に歩み出る。

「僕も…オールマイトの死ぬ未来は見たくないんです…だから、僕も

！一緒に…貴方の最悪な未来を…捻じ曲げます!!」
今は有精卵でも、
今は孵化した雛でも、
今は半人前でも、
ただただオールマイトの背を見届けるのではなく、後継者の一人として、弟子として、共に歩み、背負いたい。
一緒になって最悪な未来を捻じ曲げたい。
ただ見てるだけじゃ、いつまで経ってもオールマイトの様な平和の象徴と謳われる最高のヒーローになどなれやしない。
だから…一緒に戦わせて欲しい。
例え、オールマイトが弟子を巻き込ませたくないと、枷になりたくはなかろうと、もう決めたことなのだ。
「…有難う。なるべく、君の手を煩わせない様にするよ」
何て表現をすれば良いのか、何処か曖昧で複雑な心情のオールマイトは、苦笑を浮かべた。

「…ん、アレ？でも待てよ……もう一度ナイトアイに会って予知使って見てもらえば、未来が変わってるかどうか解るんじゃないですか!?」
「いや、それは流石に都合が良すぎるだろうよ…先ほど前述した通り、ナイトアイとは喧嘩してる仲なんだぜ？そんな状態で顔出しなんて…」
「仲直りすれば良いんですよ、僕が駆け寄って見ます！死活問題ですよ？其れにサーの事務所で校外活動してる身ですし!!」
「待って緑谷少年、ナイトアイの気持ち考えてみて？」

……多少、焦燥に走り悩んだ少年の顔色は、少しは良くなったようにも見えるのは、きっと確かな事だろう。
小難しい…とは呼び難い大きな問題。緑谷出久の師弟関係は、完全には解決できていないものの、それなりに心の整理は何とか出来たようだ。

そんな少年がオールマイトの秘密を教えて貰っていた頃――事態は膨大していた。

半蔵学院の修学旅行先――名のある歴史や伝統を遺し、観光地として有名な日本都市の一つ、京都では…

「……霧夜先生…奈楽ちゃんとかぐらちゃんを処分って…」

「倒せ、という事になるな……上層部の追加命令だ。勿論、他のメンバーには伝達、そして補欠のあいつらにも俺から伝えておく。呉々も、忍商会には気を付けろ…アイツらは今では全国指名手配犯――現在確認されてる綺語道楽という男に、正体不明の幹部たちと鉢合わせになる可能性も高い」

荒れ果てた重い空気の流れと共に、上層部から下された非情な命令を前に、固唾を呑む飛鳥。

忍商会…木椰区ショッピングモールで両奈からある程度の名前は聞いたことがあるが、まさか此の期に及んで衝突するとは…人生とは何て理不尽で、慈悲もないのだろうか。

「あの子達のこと、分からないんですよ?そんな…あの子達を処分だなんて…」

「…善忍であろうとも、時に手を汚さなければならない時だってある……解ってると思うが、上層部の命令は絶対だ。良いな…?」

「……はいッ――」

心底辛そうに、己の善意を無理矢理にでも押し殺す飛鳥は、渋々と神楽と奈楽の処分命令を引き受けた。

「カァーッ!カァーッ!!」

輪廻を巡り回るかのように鴉は鳴き声を叫びながら、紅い目を輝かせ、飛鳥と霧夜を見下ろし品定めでもするかの如く凝視する。

――波乱と混沌に渦巻く現状となっていた。

また打って変わって場所は遡り、違う地区で活動するヒーローと校外活動生徒組（インターン）。その中には勿論、磨き上げられた腕と信頼を寄せつけられ、忍学生を一時的に雇い入れる事務所も存在する。
例えば麗日と蛙吹が選んだ事務所では――
「皆んなご苦労様ッ、凄いわね貴女達。一年生のヒーロー科、ねじれが連れて来た期待の新人さんだけじゃない、忍学生さんも充分に実力が整ってるし、見事な連携とあの子達に負けず劣らず素晴らしい動きだったわ」
ヒーロービルボードチャート現在番付Ｎｏ．９――ドラグーンヒーロー『リューキュウ』
ギャングオルカの上に並ぶ上位ランカーとして名を馳せ、多くの市民や相棒から期待の眼差しを向けられてるプロヒーローだ。
一応週間雑誌やファッション、ＣＭなどでも放映されてる為、かなり有名である。
「ふん、私にかかればこんなの造作もない…この美貌を司る完璧な私に、死角はないからな」
対して、リューキュウの賞賛を当然と言わんばかりに振る舞い言葉を返すのは蛇女子学園選抜補欠メンバー筆頭の総司。彼女の傲慢さに半ば苦笑しながらリューキュウは周りの状況と安全確認を取る。
リューキュウ事務所に所属するインターン生徒は雄英ビッグ３の肩書きを背負う波動ねじれ、ヒーロー科一年生の麗日お茶子、蛙吹梅雨、そして蛇女子学園からは総司、全部で四人だ。
蛇女子学園の生徒から申請が来たのには驚いてはいたが、ねじれが紹介して連れた二人とは面識があるそうで、様子を見ることにしたのだが、どうやら実力的な部分も含めて問題はないと判断したようだ。
「ふぃーー！こっちも指示通り動けました！」
「ケロケロ、こっちも…思ったより落ち着いて行動が出来たわ。採用有難う御座います。…ケロ」
商店街で大暴れしてた巨大敵グループの抗争を、総司と共に鎮圧した麗日お茶子、蛙吹梅雨も戻って来たようだ。

先ほど此処の商店街では、敵グループ同士の闇売買の取引が行われていた。公で目立つ場所では無く、人目の寄らない静かな影に潜んで闇アイテム、違法薬物の売買をしてた所、何かしらの原因で交渉が決裂したと推測されており、双方とも粗悪品の巨大化薬を使って喧嘩をしてたそうだ。

こう言った影では敵同士の触発も、オールマイトが消えた今では多いと聞く。持て余した個性を使って殺し合いなんてのは敵による特権みたいなものだが、当然其れを取り締まるのも、鎮圧させるのもヒーローの務めだ。

「おいリューキュウ。ねじれが相手をしてる間にグループの奴らをとっちめて薬物を押収しておいた。見ての通り証拠物はまだ使われてない…彼奴等は恐らくこれ等を取引してたんじゃないか？」

「あら、仕事が早くて助かるわ総司。そうね…見たところ、粗悪品のトリガーに、最近品種改良された新種のブースト薬…巨大化の薬に、後はドラッグと言った違法薬…お手柄ね。薬に関しては警察の仕事、後は大丈夫よ」

薬に関してはプロヒーローを何年も務めれば嫌という程に見てしまうものだ。特に品種改良された新種のブースト薬は忍側でも流通を働かせている品物で、近頃になってこの薬が急激に闇通路を挟んで売買が行われてるらしい。

まあ何にせよ、違法薬物と敵グループの連行は警察の仕事なので、此方の仕事は安全確認と怪我人の捜索の見回りで仕事は終了となる。

「ふふっ、これ程に有力な人材と実力なら、あの件に出ても問題ないかもね」

「あの件…？」

四人とも口を揃って首を傾げる光景に、クスッと笑うリューキュウ。

「ええ…オールマイトの元サイドキックからのチームアップ要請が来たの。内容は指定敵団体『死穢八斎會』の調査及び包囲――

もしかしたら、敵連合に繋がるかもしれない大仕事よ」

まわる、回る、廻る――ヒーローも、敵も、忍も、今を通して時の歯車が狂いながら、加速する。

１６３話「計画」

緑谷出久と雪泉達其々の学生がインターン活動を行ってる間、敵連合は密かに死穢八斎會と密会を交わしていた。
とは言ったものの、敵連合側は死柄木弔一人である。
「おいおい…交渉の件で話がしたいから来てくれと呼び出したクセして、中は随分と殺風景な事務所だな」
「ゴチャついたレイアウトは嫌いなんだ。話をするのが目的だ、衛生面と清潔が保てればどうだって良いだろう？」
部屋は汚れや埃一つない、清潔さと白い空間が保たれた構造だ。ガラス製テーブルに、暖かい緑色のふさふさソファ、壁には「死穢八斎會」の旗が飾られていた。
ソファの上座には若頭のオーバーホールが座っており、隣にはミミックが札束の紙幣を数えているのが見受けられる。
「地下はグルグルと３０分も歩かされた…時間感覚が狂っちまうよ…蟻が迷路を彷徨う錯覚…本当にヤクザの家ってどうなってんだ？こんな面倒な構造を建てたお前らの頭が疑わしく思えるよ」
「外では何時何処で誰が監視してるか解らないし、況してやお前は天下の敵連合のボス――全国指名手配犯の中では飛びっきり有名人だ。そんな危険な輩と交渉するのに外部からの詮索の遮断と情報漏洩を防止するのは当然だろう？其れに客が何を考えてるか分からないしな」
此処は八歳會住宅地区の地下に当たる応接間。
どう言う原理で迷宮化した地下が構造されてるかは不明――死柄木弔の交渉に当たる際、外出での遭遇は危険と案じたオーバーホールは、外部からの情報を遮断した状態を整えてる地下に呼び寄せた。
「地下は敢えて幾つかのルートを繋げてやってるのさ。こう言う些細なせせこましさも、八斎會が今日まで生き残ってるお陰なのさッ」
苛立つ死柄木に冷静で対応するオーバーホールの横で口を挟むミ

ミックは、数えてた札束から死柄木に意識を向ける。
「で、だ！先日の電話の件なんだが……」
――本当なんだろうね？条件次第ではウチに与すると言うのは。それと一つ、漆月が此方に来ない理由も序でに聞いておこうか」
「其れこそ漆月の件はどうだっていいだろ。アイツとは今コンタクトが取れない、期待を寄せてるのならやめとけ。
都合の良い解釈を取りやがって…」
ソファに座り込む死柄木は、土足でテーブルの上に足を乗っけながら、ご立腹な振る舞いで口を開く。
「お前らは敵連合の名が欲しい…俺たちは勢力を拡大したい…お互いニーズは合致しているだろ？」
「足を下ろせ汚れる」
「『下ろしてくれませんか？』と言えよ若頭。本来頭を下げるのはお前の立場だろ？」
挑発地味た態度に乗り出す死柄木に、汚れた行為に眉間に皺を寄せるオーバーホール。対する死柄木は物怖じせず堂々と我を通す。
「結論から言おう――まず敵連合は傘下にはならん。俺たちは俺たちの好きなように動くし、社会ぶっ壊すと言ってる俺たちがお前らの駒として縛られりゃあ本末転倒だろ。
五分…謂わゆる提携という形なら協力してやるよ。元々、そのつもりで話をする気だったしな」
「それがお前の条件か…」
次の支配者は自分と漆月であり、オール・フォー・ワンの後継者として選ばれた。其れなのに支配者になるであろう自分が相手の傘下に入るなど、其れこそ先生の名を恥じに晒す愚行だ。況してや誰かの下に就く気も無ければ、部外者に従われる筋合いは毛頭ない。
だが――お互い提携を取り合う形であるのなら、傘下に入らずとも物事は進める。
名が欲しいのなら、戦力が欲しいのなら、この結果に収まっても文句は無いハズだ。
「それともう一つ…お前の言ってた〝計画〟という話…その内容を俺

にも聞かせろ自然な条件だ。名を貸すメリットがあるか否か…そして提携する価値が存在するかを確かめたい…」
計画――以前、八斎會のオーバーホールとの面談に彼が口に出した言葉だ。
別に他人がどう悪事を企んでいようが知ったことでは無いが、支配者になると断言した彼の〝計画〟には耳を傾ける価値が有ると判断し、ご足労掛けてまで聞きに来たのだ。
其の計画が自分たちにどう影響を受けるのか、又は現代社会を壊す決定打になるに相応しいかを、確かめる。
「尤も――「おい、調子に乗るなよ」」
懐から何かを取り出そうとする死柄木の言葉を遮ったのは、白フードを着こなすペストマスクの男性。オーバーホールの側近と思われし人物は、銃口を死柄木の頭部に押し付ける。
其れと同時にミミックの身体からは巨大な筋力の付いた腕が現れては、死柄木の胸柄を鷲掴む。
「自由すぎるっしょ、色々と…」
死穢八斎會若頭補佐〝クロノスタシス〟――本名は『玄野　針』
「テメェクソガキぃ!!さっきから何様なんだこのチンピラがあああぁあぁぁぁぁぁーーーーーーーッッ!!!!!」
キョエエェェェーーーー!!と奇声を叫びながら強い眼力で死柄木を見下ろすミミック。
死穢八斎會本部長〝ミミック〟――本名は『入中常衣』
「……其方が何様だ?雑魚ヤクザの使い捨て前提の肉壁と、敵連合のオカマその命は等価値じゃないぞ。プラスこっちは腕一本分…更に付け加えればあの後、鎌倉を鎮めるのに何かと苦労したんだ。こっちは戦略拡散に謹んでるのに、減らされたんだぞ?多少は譲歩してくれなきゃ割に合わない」
ギラつき妖しく灯る瞳を輝かせながら、ゆっくりと掌を差し向ける。これ以上の接触は不味いと判断したオーバーホールは二人に退がる様に指示を出す。

「クロノ、ミミック、下がれ――折角前向きに検討してくれて来たんだ。最後まで聞こう、話の途中だったな」
渋々と承諾する二人は、仕方なく引き下がる。ペストマスクで表情は読み取れなくとも、余り宜しくないのは空気で察知できる。
どうぞ、とサインを出すオーバーホールの仕草に、死柄木は黙ったまま懐からある品物を見せる。

「これが関係してるんだろ？」

通常の銃弾のサイズの大きさの注射器。此れは以前、コンプレスと蒼志が撃たれた銃弾を回収した物だ。
「コイツを撃ち込まれた直後から、Ｍｒ．コンプレスは個性を…蒼志は忍術が暫く使えなくなった。個性を持つ人間だけでなく、忍術まで持つ人間の能力が使えなくなるコイツは何なんだ？
これでお前らは何を企んでいる？教えろ――」
個性を封じる抹消ヒーロー・イレイザーヘッドの個性の効果を表した様な、其れに近い現象。だが蒼志や他の忍の忍術を封じる力を持つ者はこの世にはいるのだろうが、個性と忍術を無差別に消す現象は今までに見たことがない。
一体、この品代物に如何なるものが秘められてるのか…計り知れない。だからこそ、奴等が此れで何を企むか話を聞きたかった。
因みにＭｒ．コンプレスと蒼志は一日が経って漸く個性と忍術を扱えるようになったので現段階では問題は無いが、まだ安心出来ると問われると首を縦には頷けない不安定な状況だ。

「理を壊すんだ――ヒーローと忍…二つの社会を決定的に破壊する」

オール・フォー・ワンは〝個性を奪い〟支配したと謳われている。
治崎…オーバーホールはそのやり方を少しブラッシュアップした形で着々と超人社会を支配する目論見だ。
「既に根は全国に貼り巡らせている。今もこうして少しずつ…少しず

つ計画的に順調に、準備を進めている」
「……此れを市場にばら撒いて、全国にこの存在を知らしめているって事か？」
「嗚呼、察しが良いな。話が早くて助かる。コイツはまだ粗悪品で未完成な品物だが…充分、大金を払ってでも使えるに値する価値ある物だ。超人社会である現代社会の真っ只中ではな」
「……」
「そうそう、話は変わるが漆月が来れない理由…多忙と言ってはいたが、実際は駒集めに専念してるんだろ？新聞を見ろよ」
パサッ、とテーブルに置かれた新聞を差し出された死柄木は、五指に触れない様に広げて記事を見る。
「隔離施設の敵監視病院の襲撃と脱走者一名――路地裏での焼殺、和歌山の凶悪敵大暴走の鎮圧、謎の怪奇現象殺戮事件、辻斬り…最初の件は間違いなくお前らだよな。ニュースでも取り上げられてたよ」
「新聞なんか読みたくても読めないんだよこっちは。最近は金欠気味だし、漆月の行動は一任してる…」
神野の事件後――其々が警察と忍の追っ手から巻くべく、拡散するように別々で行動をしているのは知っているだろう。
死柄木は護衛としてＭｒ．コンプレスと闇を側近に従え、他はバラバラ、スピナーと荼毘は滅多に顔を出さず、今確認できるのは漆月と共に仲間集めに専念し働いてることだ。
漆月とは離れる際に話し合いはしたものの、彼女は自ら別行動を取ると宣言をし出したのである。
『私は暫く弔とは別行動を取るわ。自分のやるべき事とか色々、思い出したし…仲間集めの事なら私に任せなさいな。
じゃっ、同じ後継者として無事を祈ってるわ――もし、力が欲しいなら、連絡して頂戴な』
今まで自分の側に寄るひっつき虫かと思い込んでいたが、一夜が明けてから別人のように変わった彼女を、死柄木は鮮明に覚えている。
彼女の自由を邪魔したくはないし、自ら考えて行動を移し始めてる今、無意味な行動を取らないと自負している。

信頼しているからこそ任せられる。
同じ後継者だからこそ信頼し合える。
彼女を認めてるからこそ託せられる。

「ただ…もし漆月を駒にしたがるのならやめとけ。お前じゃ絶対にアイツは扱えないし、漆月は俺と同じ後継者だ――先ず俺が其れを許さない」
掌のマスクから見える死柄木の眼差しは、異様な殺気を放っていた。
「随分と、抜忍を統括する筆頭を信頼してるんだな。大物の敵を次々と落としてるのは否定できないだろうが」
「これは忠告だぜ？過去の過程はどうでも良いし、必ずしも次にそうなるとは限らない。
少なくとも俺はアイツだけじゃない、他の奴等だって信頼してるさ」
自分の仲間も信頼できず、何が支配者だ。
誰も信用出来ない者に、支配者の素質はない。
上に立つ者として、信頼を寄せるのは当然の役割だ。
昔の死柄木は、脳無とステイン同等に簡単に見捨てていただろう。仲間を駒扱いする始末。だが今は過去の幼稚的な彼とは一線を画し、見違えるほどの成長を成し遂げた。
これも、オール・フォー・ワンの教育の賜物でもあるだろうが、なによりも驚異的なのは、死柄木は考えて行動を起こし、成長を促している。
今回の八斎會の交渉案件だってそうだし、護衛を付けずに相手の条件を鵜呑みにしたのも、何の問題も心配も無いからである。
相手は名声が欲しい弱小ヤクザ組織、同盟を組むのに対して自分を殺すのは計画的にとても不味い。だからこそオーバーホールを始め、組の者達は死柄木弔を殺せない。その段階を充分に理解しているからこそ、自分に銃口が向けられようと、胸柄を掴まれようと、子供の様に癇癪を起こさず冷静でいられたし、焦りさえ微塵とも感じなかっ

た。
「まあ、俺たちの事は良いさ…兎に角、計画は聞いたしお前が提携の形を呑むのであれば、交渉成立になる訳だが――その後、お前は俺たちに何をさせるつもりだ？当然、名誉が欲しいだけならあの時の話し合いで既に解決はしていた…今度はこっちが条件を飲む番なんだろう？」
「ああ、交渉の話は問題ない――次は……」

関西地方――江州羽市。
夜中の繁華街はいつになく賑やかで、東京とは違った雰囲気が漂っていた。
街並みを見渡せば飲食店や娯楽を嗜む店が多く並んでおり、匂いが充満し思わず空腹を感じさせてしまう。
この地区でパトロールに勤しんでるのはＢＭＩヒーロー・ファットガム事務所である。

「最近チンピラやらチーマーやら忍者やらのイザコザが多くてなぁ!!腹が減ってしゃアないわ!!」
鉄板ごと持ち上げたこ焼きを食べ歩く姿は何とも奇妙奇天烈な事だろう。風船の如く膨らみのある腹部は全てを沈めさせる様な印象深さが強く固定的だ。
「ここらのヒーロー事務所は武闘派欲しがってるし、忍欲しがってる連中も多いねん、環の紹介で一人、それともう一人は自分から申請してくれた、ホンマ助かるで！」
「いえ…その……私、余り都会の事に詳しくなくて……だから、ヒーローの事に関しても無知な部分が多いんですけど…ほ、本当に大丈夫…何でしょうか？」
ファットガムの激励に、オドオドと声を震わせながらパトロールに同行する夕焼。麗王と同じく雄英高校の郊外活動の説明を受けた彼

女は、インターンに参加するべく、声を掛け易かった環に掛け合ってみたのだ。天喰環本人も、ファットガムから忍学生を雇いたいとの事で、声を掛けて欲しいと無茶な難題を突き付けられたのだ。しかし夕焼が自分から申請してくれたので、環曰く「声を掛けずに助かった」と安堵の息を漏らす程だ。

唯でさえ人見知りが人一倍激しい環が、慣れない忍学生に声を掛けるなど、例えるなら大物敵を一人で相手にしろと表現する難易度だ。

「ええんやで！其れに切島くんに聞いたら君ゴッツゥ強い言うてるし、武闘派をも蹴散らすとか見掛け倒しにも程があるしなぁ!!わからん事は環が教えてくれるからノープロブレムや！」

「の、の～…ぷろぶれむ、ですか？」

「何で俺が…！いや、三年生は俺一人だけだし経験を積んでるのも……」

「後輩に教授するのも先輩の仕事やで！そのヘボメンタル直す良い機会や!!芭蕉ちゃんに切島くんもよ～ウチの事務所来てくれてあんがとな～！」

「あ、此方こそ…その、採用して頂き誠に有難うございます…」

「ウッス！俺、精一杯頑張ります!!」

インターン生はビック3の天喰環を含めて四人――切島鋭児郎、夕焼、芭蕉、以上がファットガム事務所のメンバーだ。

切島鋭児郎は最初、職場体験先のフォースカインドに申請を試みたのだが、向こうはどうやらインターンは受け付けてない様で、何よりも手一杯で雇える余裕すらないらしい。

勿論、リューキュウ事務所で郊外活動を行ってる麗日お茶子、蛙吹梅雨も、職場体験でお世話になったガンヘッドとミルキーの事務所は受け付けてなかったらしい。

「にしても夕焼ちゃん、内気な性格とかホント環に似てるなぁ～！将来このまま上手く行けばコンビ組んでやってけるんちゃうか!?」

「コンビ…ですか？私なんかが、そんな…」

「洒落にならないから冗談は止してくれファット…何よりプレッシャーや偏見が俺の心を吐血する…！」

二人とも気弱でネガティヴな性格をしているが、実力は二人共引けを取らないし、プロの世界でも通じる腕は持ち合わせている。其処はファットガムもお墨付きなのだろう。
「でも良いじゃないッスか先輩！俺はお似合いだと思うし、ファットさんの激励の言葉と聞こえます！」
「俺はミリオや君のような明るい性格じゃないから、前向きにはなれない…自分でも心の弱さをどうにかしないとって分かっていながらも…」
「そりゃあ俺だってそうです。林間合宿ではダチが攫われてるわ苦しんでるわで必死な時に駆けつけれなくて、そん時スゲェ悔しくて、何もできない自分に腹が立ってどうしようも無かったんすよ…
他の連中やB組とかの他クラスと開いた差を少しでも埋めたくて、その為には普段以上の経験値が必要なんだって！」
「あっ、其れ私も解ります…やっぱり、私って気が曇天したり弱くて頼りなかったり、いつも肝心な時に失敗したりして……役に立たない自分を何とか更生したいって意味合いも兼ねて、インターンに参加しましたから…」
仮免試験に於いてギャングオルカとの一騎打ち、蛇女子学園に侵入した憑黄泉、結局いつも自分より上の強敵相手には怖気付いたり、歯が立たなくていつも足を引っ張ってしまう傾向がある。
内心は穏やかで優しいからこそ、悪忍には向いていない、心が枷となり実力を発揮できない部分が数多い。自分で自分の弱さに気付いた彼女は、恐怖心や弱さを克服するべく、自分とは無縁であり不向きな戦闘向けのヒーロー事務所を志望した。
そうする事で、次にゴリゴリのパワー押しを始めた相手に対して対処する可能性が増えるからだ。
「喧嘩だぁ誰かァ!!」
パトロールの途中、突如悲鳴に似た叫び声が離れた場所から響き渡る。喧嘩…という物騒な言葉から察して、恐らく敵グループ同士の争いが起きたのだろう。
「噂をすれば…！」

どうやら此処からファットガム達の仕事に入るらしい――

「ちくしょう！ついてねぇ…折角これから一旗揚げてこうって言う時によぉ!!」

「警察やヒーローが集まる前にズラかるか！クソが…まさか俺達の縄張りに他の連中が勝手に商売してただなんてよぉ…!!今度会ったらブッ殺してやる!!」

二つの敵グループが、離れる様に街に散らばり退散していく。何方も違う方角に逃げており、警察が追跡を開始している。

「俺達抜忍チーム――『ファントムズ』が、闇商売を通して上層部や共に一泡吹かせてやろうと思ったのに…こんな所でブタ箱行きにされてたまるかってんだ！オイ――俺達一旦バラけて拠点を目指すぞ！」

彼方の敵闇商売人とは違い、抜忍チーム――ファントムズはオールマイト不在以降から、忍社会に攻撃を仕掛けようと息巻いてる元は善悪の忍だった者達だ。例えで表すなら愚連隊の存在に似てると推測してくれれば早いだろう。

闇のローブを纏い、悪魔のオカルト宗教地味た格好をしている5、6人の抜忍は、棟梁と思われしき人物の指示に従い、別行動を取り始めようとするが…

「やめとけよ雑魚共――」

突如、三人の背中に鮮明な激痛が走る。

刃物で斬りつけられた事で、足が止まり道端にすっ転んでしまう抜忍は、苦痛な声を漏らしてしまう。

「なッ――「次は筆頭のテメェを潰しゃあ上出来か」んだぁテメェは!?」

二刀丁を持つ殺伐とした褐色肌の女性に恐怖の念を抱く抜忍は、弱腰口調になってしまう。

「さて、民間人も見てる事だし…早く終わらすか」

刀を舐め、ギラついた瞳を差し向ける夕焼は、お淑やかな彼女とは違うもう一つの面を備えている。

やはり武器を持ってしまうともう一人の自分が移り変わってしまうのは仕方のない事だ。
「邪魔を…するなぁ!!」
ファントムズの筆頭は、死神の鎌に似せた大鎌を振り回し、空間を切り裂いていく。
(コイツ…適当に武器を振る阿保とは違って…空間に斬撃を残して斬りつける、トラップ系統の忍術持ちか……外の世界にゃあそう言うゴロツキもいると聞いたが…甘え)
戦闘面での彼女は血の気盛んで猪突猛進のイメージが強いが、内心は静かに物事の判断や観察をしながら、相手の懐を攻めると言った、戦闘慣れした動きが見受けられる。
「秘伝忍法――【カムイ・ルヤンペ】!!」
怪き斬撃の猛攻は、残された斬撃を意図も容易く相殺し、風圧を重ねた素早い攻撃で、相手諸共吹き飛ばす。
二本の刀による剣圧と、秘伝忍法による威力で、敵は成す術なくやられてしまう。
「がハッ――そ、んな…」
呆気ない、余りにも。
秘伝忍法を使われる前に、先を打たれてしまった。
その上、早い…行動に一瞬の無駄な動きがない。
熟練された腕と、何よりも異様な殺気。
「だから言ったろ三下、早く終わらすって。んと…誰だテメェは?」
取り敢えず名前を呼ぼうとしたのだが、生憎名前を知る前に倒してしまったので、結局分からず仕舞いのままになったが、別にどうでも良いので気にはしなかった。
「夕焼さん、此方も終わりました。その…凄いです、ね…先程とは違って性格がまるで別人…」
「おっ、芭蕉そっちも終わったか!」
芭蕉の言葉に振り向く夕焼は、活気な声を張り上げる。夕焼に斬りつけられた三人の敵は墨字忍法の応用で札に描かれた「縛」で拘束し、序でに残りの一人は何とか芭蕉一人でも実戦で完封出来た。

「一先ずこれで任務は完了でしょうか…？」
「いや、俺が見た時はコイツらのグループ内のメンバーは六人だったハズ…後一人見当たらねえな」
夕焼は観察眼が鋭いだけでなく、一度見た獲物や顔は直ぐに覚える傾向が強く、烏の特性に似た性質を持っているのだ。なので幻覚でも見ていない限り、見間違いという誤りは絶対にない。
「何処かに隠れたか、或いは逃亡してしまったのでしょうか…？」
「チッ…だがそう遠くには逃げてねぇハ――」
辺りを見渡すのを辞め、芭蕉に視線を戻した刹那――彼女の背後からグループの抜忍が一人、銃口を差し向けていた。
「危ねえぞ芭蕉――!!」
瞬時に彼女の横腹を蹴りで退かし、芭蕉の被弾を阻止するも、発砲された銃弾は夕焼を目掛けて放たれた。
「夕焼さ――」
ダァン！と、鋭く被弾された衝撃の音が木霊し、見事に夕焼は銃弾に命中してしまう。
「ッ――!!」
受けた衝撃に、思わず肺に溜まった酸素が吐き出されてしまう。不安定な体勢でそのまま倒れ込んでしまう彼女に、芭蕉の顔色は青ざめる。
「よっしゃあ！やりぃ…！八斎會の方から貰った銃弾が忍にも効いたようだぜ!!」
隠れ潜んでた仲間が、反撃の機会を伺っていたのだろう。実力はさておき、気配は完全に消えていた。なので敵の存在すら全く気が付かなかった。
「夕焼さあぁぁぁんッッ――!!!!!」

１６４話「募る暗雲」

夕焼と芭蕉の二組が別れ、別布陣のファットガムを始めた天喰環、切島鋭児郎の三組は、逃亡したもう一組の敵グループを制圧していた。

ファットガムの体脂肪により五人の内四人は難なく沈めさせる事に成功し、内一人はエッジショットに似た個性で何とか逃走したものの、環の個性『再現』により見事完封。

食べた物を体から再生させる個性、手をアサリに再現しノックアウト。負傷者を出すことなく見事に治めたのだが…

ダァン――!!

一発の銃声が、繁華街の夕暮れに響く。

放たれた銃弾は環の方角に狙い撃ち、肩を撃たれ仰け反ってしまう。

銃を持つ敵が視界に入らなかった為か、避けるタイミングすらなく見事に食らってしまう。

「サンイーター!!」

別の場所で抜忍グループを鎮圧した夕焼と同じく、環も八斎會から手に入れた闇アイテムの品物で撃たれてしまう。

「ハッハ!そらアニキ早よ逃げるんや!!」

一般市民の悲嘆と喚き声が瞬く間に埋め尽くし、市民の群衆に紛れ隠れてたもう一人の敵が銃口を差し向けていた。サンイーターこと環から、切島に標準を変えて引き金を引く。

「伏せろ烈怒頼雄斗!!」

ファットガムの忠告も既に遅し、二発目に発砲された銃弾が、烈怒頼雄斗の眉間を狙う。

烈怒頼雄斗に銃弾を避けれる様な機動性や素早さは兼ね備えていない。回避が出来なかった烈怒頼雄斗は、成す術なく諸に敵の銃弾を

受けてしまう。
ガキィン――
但し、其れは硬化さえ無ければ成り立つ話。
瞬時に個性を発動して体をガチガチに硬めた烈怒頼雄斗に銃弾など無意味も同然。
「弾けた…!?」
相手が銃弾を弾くことなど知らなかった敵にとって、このパターンは最悪だろう。特に大したダメージが残ってない切島は、直ぐ様体制を整え、標的を定める。
「捕らえます!!」
漢気魂を燃やしながら、熱く滾る烈怒頼雄斗――動き出す。

同時刻――烈怒頼雄斗が機動したタイミングと同じく、抜忍グループの確保に赴いた芭蕉と夕焼の二人組は…
「よっしゃあ!オヤッさんの仇打てたぜ!やっぱ忍にも効く銃って流行してたのか!!」
オカルト宗教の格好をした物騒な輩は、拳銃を掲げては歓喜の声を上げる。
最初は芭蕉の方を狙っていたのだが、夕焼が蹴り飛ばしてまでも身を呈して彼女の身代わりになる事は予想外だった…しかし、自分を慕ってた筆頭を蹴散らした彼女一人を重傷に合わせたので、結果オーライと言うヤツだ。
「夕焼さん…!しっかり!!」
倒れ伏せてしまった夕焼に駆け寄る芭蕉は、自分の鈍感さと失態に自分を呪いながら、罪悪感を覚えてしまう。
「おい、なんだ…人、撃たれたぞ…」
「ちょっ、マジ?敵騒ぎ?」
「最近噂になってる敵紛いの忍とか?」
ザワザワと澱む空気の流れ、中には携帯で写真を撮ろうとする好奇心な輩も見受けられるが、そんな野次馬達に構う暇もなく、芭蕉は彼

女の体をさする。
「しっかりして下さい…！そんな――」
「おいテメェらどきやがれやぁ！見せもんじゃねえんだぞ!!」
抜忍の一人が、忍術を発動し、自分の影が具現化しながら脅しを取る。映し出された己の影を、手足の様に自由自在に操作し攻撃する忍術。常闇踏影の個性『ダークシャドウ』に近い部類の似た能力だ。
自分の影が鎌を持ち、見境なく攻撃を繰り出す抜忍に、今まで他人事として様子を伺ってた市民は、今度こそ悲鳴を叫びながら逃げて行く。
「夕焼さ…「いっつつ…」――!?夕焼さん!!」
「んぬ…!?」
倒れ伏せてた夕焼が、ムクリと体の上半身を起き上げる。
突如、何ともなく起き上がった彼女に芭蕉も思わず驚嘆し、抜忍も動揺を隠せず、素っ頓狂な声を漏らしてしまう。
「って、思ったより痛くなかったな」
「ビックリした……もう、驚かさないで下さい!!」
発砲された弾の威力は強かっただけで、銃弾その物の実物は決して殺傷力は高くない。
良く見ると撃たれた箇所に血は流れていないし、大した傷も見受けられない為、ダメージはほぼ無いと断言しても良いだろう。
「畜生がぁ!!騙された…！折角大金払ってまで買った代物なのによォ!!」
オカルト宗教の衣装に身を包んでる抜忍の男は、悔しがる様に地団駄を踏む。どうやらあの男性は裏商売から入手した闇アイテムを手に入れ、其れを夕焼に使用したのだろう。
だが結果、彼女の様子を伺うに見て何とも無い模様…恐らく効果の無い偽物か、将又粗悪品か、何方にせよ抜忍にとって喜ばしくない結果なのは確かだろう。
「おいタコ！テメェよくも――」
口調荒ぶる夕焼は二刀丁を差し向けながら、勢いを殺さず間合いを詰め、秘伝忍法を発動しようとする――が。

「ッ!?」
　此処で夕焼は初めて、今自分の体に異変が生じてる事を理解した。
（秘伝忍法が、使えねえ…!?今までんな事無かったのに…）
　秘伝忍法――【イペルスイ・パシクル】で直ぐに撃沈させる試みだったのだが、そもそもの話秘伝忍法さえも発動出来ないという異常事態に、彼女も内心は焦りでいっぱいだ。
　特に体に負担や変化は、忍術を扱えないという点を除いて見受けられないし、何も感じない。
「離れろやぁ!!秘伝忍法――【シャドー・ウィッチ】!!」
　蠢く影の腕が、ゴムのように伸縮自在に伸びる。鞭の如くしなる強烈な薙ぎ払いに、夕焼は回避を遅れ、腹部に攻撃を食らってしまう。
　肺の酸素が勢いで口から吐き出してしまい、地面を擦る音を遺しながら、距離を離してしまう。
「チィ…ここは一旦バラけるしかねェ！」
　一先ず逃亡の選択肢を選んだ抜忍は、二人に背を向けて我武者羅に走り出す。敵わない…とは思っても居ないが、増援を呼ばれたら間違いなく勝てないだろう。そう判断した敵の行動は正しいだろう。
「追いかけます!!夕焼さんは無事ここで…」
「大したダメージじゃねえ…オレも後を追いかける。それと聞きてえ事が増えたしな」
　安静に待機することを勧めるも、首を横に振る夕焼は偉く不機嫌のようだ。先程、秘伝忍法が使えなかった事と関係が直接結び付いてるのだろう。被害を受けた訳では無いが、気になるのは確かだ。
　暗殺や破壊活動を主に働く忍にとって、況してや戦闘に於いて忍術が扱えないのは致命的な点だ。
　相手が忍術を封じる術を持っているのなら、相当強力なモノだ。
　――二人は逃走を図った抜忍を追いかけるべく、全速力で駆け走る。

繁華街は賑やかな雰囲気と活気的な空気が自慢の場所だ。
地区の構図や道のりは思ったよりも複雑で、無我夢中で走っていると、何処が何処に繋がっていてるかなど、地元の人間でなければ分からない。
不幸なことに、抜忍グループは此の地区に足を踏み入れるのは初めてなので、街の構造に関する知識はかなり疎い。
「はぁ……はぁ……クッソ……」
敵を撒くべく全速力で走り続けた為か、体力の限界を迎えた抜忍『影郎』は息を切らしながら流れ出る汗を拭う。
夏を明けた秋、涼しい日が来ると言うのに今となっては真夏のような暑さだ。
「流石に、体力の限界が……「よぉ…!」――ぬぉあ!?」
しかし、ヒーローにとって時間も敵も待ってくれないように、逆もまた然り。ヒーローも忍も、時間さえ敵に味方をしてくれる者などいないのである。
そう言った意味合いの立場では、不平等では無いだろう。
此処まで追い詰めた夕焼と芭蕉の二人は、息は上がっておらず、体力による疲労も見受けない為、一目見ただけで実力による歴然の差が垣間見えるのは、言わなくても察せるだろう。
忍学校に在籍し日々鍛錬を積み重ねてる者と、日々怠けてる者との差は天と地の様に開く。
「ったく…一丁前に銃ブッ放してきた癖して、逃げるだけがお前の取り柄かよ」
「もう、絶対に逃がしません!!」
追い詰めた、追い詰められた。
よく見れば此処は人気のない通路…此処では人質や脅しの手は一切使えない。姑息で陳腐な考え方だが、逃げ果せる以上は手を汚す際に躊躇する暇はないのだ。
「畜生…!こんな所で捕まってたまるかよ!!」
男は悔し混じりの声色で、影を立体化させる。モンスターの外観をした悪魔の影は、鎌の形に変化し見境なく振り下ろす。

だが、動きは上忍と呼ぶには不足な実力と、何よりも大雑把で動きに無駄の多い攻撃動作――それでも確かに鍛え上げた強さと秘伝忍法の使い手から察して、忍社会に貢献してた元忍であるのは確かで、恐らく上層部から見放され、貢献出来なかった忍だろう。

「秘伝忍法――【ブラック・サイズ】!!」

研ぎ澄まされた鋭利な黒鎌は、夕焼目掛けて凶器を振るい下ろす。影の攻撃は、実物に対する攻撃に干渉可能な為、常闇踏影の個性と同じ原理と考えるのが妥当だろう。

「おらぁ…!!」

抜いた刀で影を捌く夕焼は、影郎の秘伝忍法を相殺する。

幾ら自分が現状、秘伝忍法を扱えない身だからと言って、必ずしも相手を倒せない訳ではない。

目にも留まらぬ速度で、相手の猛攻を押し返せば問題ない。そう判断した彼女は臆することなく、影に立ち向かう。

「…ッ!?秘伝忍法なしで数攻めとか…マジか!!」

単純かつシンプル。

倍以上の手数で攻めれば、不利な状況から脱せるし、逆転だって可能だ。口で言うのは簡単だが、実行するにはそれなりの鍛錬と筋力、何よりもそれに見合う強さを携わってないと、到底成し遂げれないものだ。

それでも体力の消費が激しい上に、属性や相手の能力次第で逆境を乗り越える事が出来ないこともある為、絶対という保証はない。

(落ち着け俺…!影その物、攻撃を食らっても俺に影響が出る訳じゃねえ、距離を保ち攻撃さえ諦めなきゃ簡単に…)

「お覚悟!!」

「ッ……?!!?」

ただ、仲間がいれば如何なる苦労を和らぎ、簡単に逆転を狙える。

夕焼ばかり意識を集中していた所為か、芭蕉の存在に気付かなかった影郎は、ガラ空きの背中に攻撃を許してしまう。

身を守るべく影を引っ込めようにも間に合わないし、仮に秘伝忍法を中断し身の守りに徹しても、夕焼と芭蕉の二人同時に攻め入れば、

影の耐久力も落ち、忍術を強制的に解除されてしまう為、どう足掻こうとこの状況を脱する事は不可能だ。
「秘伝忍法――【大蛇折法・弾】」
的確に素早く、大筆の刃で『弾』の文字を描き、槍で突く動作を行う。文字通り、墨字で描かれた文字が弾の如く敵を射抜く。
文字の効果を発揮した鋭い衝撃が、肩を貫くかのように鮮烈な痛みが襲う。
「ぬぐぁ……!!」
素っ頓狂な声を吐きながら、路地の壁に背中を打ち、意識が朦朧としてしまう。やはり抜忍生活を送り、訓練を受けていなかった所為か、容易く忍学生に倒されてしまい気を失う。
対する二人は何とか上手い具合で連携を繋ぎ保ち、敵を翻弄し戦闘意識を途絶えることに成功した。
「はぁ…はぁ……なんとか、出来た……」
「よっし、でかした芭蕉！」
「いえ別に私なんてそんな…夕焼さんが食い止めてくれたお陰で、無事に終わりを迎えることに成功しました…」
噴き出た汗を拭い、一息付く。
活気で男勝りな口調で喋る夕焼も、満面な笑みで芭蕉の成果を讃え、本人は謙虚そうに振る舞いつつも、内心は嬉しさを隠せない。
きっと、自分も肝心な時でもきちんと動けるんだと今を以って理解したのだろう。気の弱さは治っていないが、以前よりはマシになったのも事実だ。
「にしてもこの悪党……何か小細工でも仕掛けたのか知らねえが、奇妙だぜ」
「？何がですか？」
「さっきコイツに銃を撃たれてから秘伝忍法も忍術も使えねえままで、碌に調子が良くならねえ…気分が悪いとかそう言う類いじゃねえのは確かだが、忍術を封じるってのがどうにも引っ掛かる」
「忍術を封じるって、其れ何だか少し怖いですね……私達の能力が使えないってこと…あっ、でも確かによくよく考えれば其れ致命傷です

ね」
　忍術、遁術、秘伝忍法が扱えないと言うことは、自分をも上回る強敵を前に、ただ殴る蹴る、武器を巧みに扱う術でしか対処出来ないという訳である。
「問題は確かにそうだけどよ、何よりコイツの忍術を観て察するに、忍術を消すなんて言う効果が結び付かねえ。普通、忍術は個性の様に一つしか能力を扱えない筈だ」
　個性が一人につき一つ（オール・フォー・ワンと脳無を除き）である設定上、忍術が一人につき一つである条件は絶対だ。
　因みに夕焼の多重人格は忍術とは無縁であり、特殊な体質上の為、何ら不自然ではない。
「俺の推測だが、嫌な予感がするぜ……一刻も早くコイツに色々と聞き出してえが、この通り気い失ってる以上問い詰めも出来やしねえ…」
「まあまあ、落ち着いて下さい…ね？あの方だって好きで気絶したかった訳じゃないですし、原因を探ればそうさせた私にも非が…」
「オメーは悪くねえよ」と溜息混じりに言葉を発しながら、夕焼は武器を鞘に納める。
「……あ、アレ？此処は…何処で、私何を…」
「あっ、そっか夕焼さん…武器を持つと性格が変わりますけど、逆に武器を納めると元に戻るんでしたよね」
　と同時に素の性格に戻った彼女は、先程まで起きてた過程の記憶が抜けてしまう。キョロキョロと辺りを見渡し目を丸くする彼女は、自分に起きた事柄の詳細を知らない。
　逆に刀を握れば抜けた記憶は元に戻るので、もし事情の説明を要求された際は、危害を加えない武器を持たせるのが一番効率が良いだろう。
「あぁ……私、また…酷いことを……申し訳ありません芭蕉さん……それと、倒れてるこの人…もしかして…!?」
「大丈夫ですよ夕焼さん!!その人は抜忍、危害を加えて来た悪人ですので悪くありません！寧ろその…夕焼さんのお陰で助けて貰いまし

たし…感謝してます…」
記憶がなければ当然、この抜忍が自分達に危害を加えた者とは知らないので、もう一人の自分が暴走し無関係な人間を巻き添えにしてしまったと言う考えに辿り着くのは不自然ではない。
芭蕉は彼女に追って詳細を説明すると、胸を撫で下ろし安堵の息を吐く。
「それなら…良かったです……私はてっきり、またもう一人の自分が勝手に暴れたものかと……これでもし迷惑を掛けてしまう所存なら、本末転倒ですから…」
仲間内で多少迷惑を掛けてしまうのは心苦しいが、市民にまで被害を産んでは、折角事務所を紹介してくれた天喰や、引き受けてくれたファットガムに申し訳がない。
「取り敢えずこの抜忍グループはどうしましょうか…？私、里の者として外部からの侵入から守る際には、敵を縄に縛って村の長老に引き渡してたのですが…」
「あっ、其れで良いと思いますよ。移動牢式（メイデン）の様な頑丈な拘束具は手元に有りませんが、この際敵はもう気絶してますし丁度良いかと…一先ずファットガムさんと合流して、後の事は任せておきましょう」
夕焼は里暮らしなので、都会や現代社会の情報に関しては疎いのは仕方ないだろう。そもそも任務による抜忍狩りでは討伐ｏｒ捕縛の何方か（忍が公になった以上、討伐は殆どない）で、捕縛した抜忍は必ず上層部を通すのが決まりとなっている。
逆に、捕縛を敢えて処分してしまえばそれなりの処罰も下されてしまう為、不殺を重視しながらの戦闘は今以上に厳しいだろう。
「一先ず、ファットガムさん達の所に行きましょう。もう向こうの方も終わってるかもしれませんし」

一方、闇アイテムの密売グループを捕まえたファットガム一行は、切島の活躍もあってか無事に事態の収拾に成功した。負傷者や死人、

被害を出さず最小限に止まらせたインターン生徒の躍動は、初日にしては大きくデカイ。
「おっ、二人ともようやったわ！お手柄やで!!」
抜忍グループ６名を無事、警察に引き渡したＢＭＩ事務所。二人の功績を褒め称えるファットガムに、夕焼と芭蕉は褒め慣れてないせいか、頬を赤く染める。
どうやら、恥ずかしがり屋も含めて二人は何処か似てるみたいだ。
「すげぇ…ファットさん一人で敵を殆ど沈ませてたのに、夕焼先輩と芭蕉は二人組で抜忍全員を捕縛したのか!!俺なんて一人だぜ…」
「切島くんも二人も優秀だ…それに比べて俺は……先輩でありながら……何たる失態を…」
「環、今回のはしゃーない。お前の実力は折紙付きや。其れに個性が使えんくなったんのも、コイツが関係してるかもしんないしな」
普段はよく天喰に茶々を入れるファットガムも、思い出した様に迫真な顔立ちに変えながら、懐からプラスチック製のチャック付きの袋を取り出す。よく麻薬を保管する際に使うモノだ。中身は小さな注射型の銃弾が何個か入っている。
「何ですか？それ…」
「環に撃ち込まれた銃弾、切島くんが撃ち込まれる前に未然に個性で防いだお陰で無事な品物が手に入ったわ。他にも敵グループやら抜忍やにこれに似せたもんが数個入ったったけど、警察に鑑定して貰ってる」
「撃ち込まれた……？」
「そうや。その所為か、環の個性が使えんくなったんや。環、お前まだ個性使えんか？」
ファットガムが様子をを伺うように顔を覗かせると、本人はコクリと小さく頷いた。
「確かに、あれから個性を使おうにも全く使えないし…体調の変化に生じてはいないから、恐らくイレイザー・ヘッドの抹消に似た効果だと思うけど、それにしては長すぎる…」
イレイザー・ヘッドの個性は強力だが、それなりに完全に個性その

ものを消すことは不可能だ。
　そもそもの条件が「個性を発動し、瞼を閉じる迄の間」なので、長時間続く訳でもないのだが…
　いや、大体個性の効果なら多少は仕方ないのだが、何分闇アイテムで個性を消すなんて言う事例は今までに無い。
　個性を活性化される「トリガー」や、使用者を「巨大化」させるアイテムならなくも無いのだが…
「其れって…夕焼さんと同じ現象じゃ……」
「なんやて…？」
　茫然とする芭蕉のポツリと溢れた言葉を、ファットガムは決して聞き逃さなかった。
「今の話本当か？」
「えっ、あ…はい、その……実は……」

「夕焼ちゃんも環と同じコレ埋め込まれて、個性ならぬ忍術使えなくなったってオチか…こりゃあ益々胡散臭くなってきたな」
　芭蕉から追って詳しい話を聞いたファットガム一行に、他の一同は唖然とする。
「そんな…相澤先生よりヤベェじゃねえか！あの人確か忍術までは消せないとか言ってたし!!」
「俺は…忍学生と深く交えたり、こうして協力関係に身を結ぶのは初めてだから上手くは言えないけど…これって君達にとっても致命的のはず…君らはコレの事、知らなかったのか？」
「忍術を消す弾は聞いたこともありませんね…今度、小尾斗教官にも時間が有れば聞いてみますけど…私達悪忍は、大抵こう言った裏の品物は座学で知ることが多いので、実物は見たことありませんけど……個性と忍術を消す闇アイテムは、少なくとも……」
「そ、そんな恐ろしい物が都会では流行ってるのですか…？ああ……都会とは私が思ってたよりも残酷で、闇に染まり黒いものが漂って…」

「夕焼先輩、都会は未知の領域じゃないッスよ」
萎縮してしまう夕焼に、隣で切島が苦笑しながらツッコミを入れる。
「けども気ィ引き締めて、コレ調査した方が良さそうやな。少なくとも、相当ヤバイもんやと思う。長年警察の手伝いしてたり仕事に手ェ付けてたから解かる。直感やけど」
個性だけでなく忍術までと来た。
本来なら個性は個性のみ、忍術は忍術のみに固定し、両方に影響を及ぼす事はあり得ない。
ファットガムは忍社会に関しては無知な部分は多いが（その分、邪険扱いしてないのも含めて）、昔は警察に似た仕事に手を出していたので、長年の勘が言っているのだろう。少なくともファットガムは警察の仕事に詳しいので、薬物や違法アイテムの取締も頻繁に行っていたので、間違えは殆ど無いと断言しても良いだろう。
（個性の活性化やら巨大化やらは、超常にしては普通に出回ってるし、大体が粗悪品として乱用されてる…
個性の活性化は衰弱した個性の救済アイテムを元にして作られ、政府からも認められてるからこそ厳重な管理や関係者以外の人間が手を出すことを禁じてる…
せやけど何や？個性を消すっちゅーアイテムは、長年警察に関わってた俺でも今日で初めて耳にしたわ…なぁんか益々、怪しいなぁ）
心に張り付いた暗雲は、簡単に拭うことも晴らすことも出来ない。張り付いた不穏の根が張り巡る。
考えたくは無いが、後々に自分達の調べてるコレが、大きな大事件へと向かっているのではないかと、不穏な予感が過ぎてしまう。
（こればかりは用心した方がええのかもなぁ…）
真に賢しい敵は闇に潜む――
これから先の未来など、誰も知らない。
何が起きて、何が待ち受けるのか、それを知る術は自分達には存在しない。
事態を収拾した後、事務所で仕事を終え解散するものの、一度心に

募った暗雲は、全員易々と晴れそうにもなかった。

１６５話「ＴＨＥ・ミーティング」

昨夜の事件から一夜明けた翌日の朝、テレビニュース番組の放送やＹａｈｏｏ！のニュースページは殆どインターン生徒による活躍が、記事として埋め尽くされていた。

特に評判良く注目が集まってるのが、リューキュウ事務所とＢＭＩ事務所の記事だ。

昨夜起きた敵同士の喧嘩や、敵グループと抜忍グループの商売による揉め事で世間を騒がせていた事件の事だろう、中には写真付きで現場の背景が良く見える。

リューキュウ事務所はＮｏ．９の肩書きもあってか、ニュースで噂が流れるのは其処まで珍しくもないのだが、人気や実力、成績を誇るリューキュウがビック３を除いたヒーロー学生を雇うこと事態がとても珍しい上に、早くも期待の新人サイドキック確定との噂話が流れてる為、街でも話題になっている。

ＢＭＩ事務所に記事が上がるのはかなり珍しい方だろう。

リューキュウ事務所と比べて低いのは勿論、知名度が其処まで高くないマイナーヒーローなのだ。ビック３の天喰環が在籍していれば多少人気は上がるものの、全国に名を馳せるような褒められた成績は遺されていない。

環がファットガムの経営する事務所に入ったのも、そう言った知名度や人気にも関わってるのだろう。（失礼極まりない言い方だが）

お陰様で雄英のクラス内でも噂話で盛り上がり、爆豪本人は苛立ちの余り歯軋りを起こしながら唯々ガンを飛ばすだけだ。（視線が物凄く痛く、狂犬地味た何かを感じるとは、口が裂けても言えない）

しかし切島や麗日、帰吹の三人が通常の学生以上の苦労と努力を重ねてるのは事実で、インターンと学校の本業の二つを両立させるのは至難の業…口では安易に出せても、いざ実行するとなると想像の数倍

以上は大変なのだ。
　また爆豪と轟も、日を重ねるに連れて怪我も多く、仮免補修を受けながら学業とヒーロー化に向けた訓練は、インターンを受ける人間と同じ苦境ではないだろうか？（更に言葉を付け加えば、皆よりも一足もふた足も遅れてるので、精神的にも焦りが芽生えてしまう）
　そんな日常もあっという間に終わりを迎えようとし、本格的なインターンの活動が始まろうとする。

　数日後――急遽、インターン学生の生徒を含めた学生と、指名されたヒーロー事務所が、指定された場所へ収集を招かれる。
　指示を出したのはサー・ナイトアイ。どうやら以前話してたチームアップの要請と、今回敵連合に関連付く事件に関してなど、報告することがあるのだろう。
「すげぇ!!!何じゃこりゃ!?」
　尤も、雄英高校の一年Ａ組の生徒達には何も言い伝えられておらず、ビック３を除き、今の現状を理解出来ずに驚愕する。
　第一発声者の切島鋭児郎は、緑谷、お茶子、蛙吹の心の代弁者として叫び声を張る。
　ビック３や自分達ヒーロー事務所を構えるヒーローとサイドキック、そして同じく自分達と同じ志望して雇って貰えた忍学生達。此処までは大体想定内だ――…しかし、集合場所には見慣れないヒーローが何十人も呼ばれ、此処に集まっている。
　見たことのあるプロヒーローや、知名度がイマイチ低いマイナーヒーロー、全部で２０名近くだ。
　Ｍｒ．ブレイブ、クサギリマン、ロックロック、ショップマン、ソフトクラフト、エアーマン――緑谷出久なら全員知っているのだろうし、通常なら興奮してサインを申し込む所だが、立場と身を弁えているので、そんな遊び心は全く無い。
「あっ、グラントリノに相澤先生もいる！」
　神野区以降、顔を合わせていなかったので久しい気分だ。以前は通

話の際に断られてしまったので、グラントリノの下で活動は出来なかったのが少々残念でもあったが、まさか当のクラスの担任である相澤先生も呼び出されていたと思わなんだ。
「おや、皆さんお揃いのようですね」
凛…と物静かな気高いお嬢様の声が四人の耳朶を打つ。
「あっ、麗王さん！」
「そういや麗王先輩って違う事務所のインターン生徒なんッスよね?!」
人混みの中、麗王の存在に気付いた四人組は軽く挨拶を交わす。情報すら伝えてくれなかったので、突然の事で取り乱れてしまったものの、彼女のお陰で何とか平静さを保てた。

「おいおい、誰かと思えば見知った顔ぶれがいるな？」

少しボーイッシュな声に自然と反応し振り返る四人に、内一人の緑谷の表情はブルー色に青ざめる。
「これはこれは、天下の雄英生徒がこんな所にお集まりだとは…これは益々雲行きが怪しいくなりそうだ」
秘立蛇女子学園選抜メンバー筆頭、雅緋だ。
蛇の紋章、見覚えのある忍学生服、ボーイッシュな雰囲気を漂わせる顔立ちは既視感がある。
「おっ、見かけない生徒だな。何処の事務所のインターン生徒だろ？」
「ちょっ、切島くん!!服、服見てよ！相手の服！」
興味深く相手を観察する切島に、とても気不味そうに服の袖を摘む緑谷は、小声で切島の耳に呟く。
「服…何処かで……ん？あれ!?蛇女の生徒ッスか!?!」
「芭蕉と総司の二人と面識が有ると聞いたから、顔出しに来て見れば、気付かなかったか……ソイツを除いて」
呆れ口調で深い溜息を吐く雅緋は、手を額に当てる。
自分は雄英生の制服を見て直ぐに解ったと言うのに、対する向こうは緑谷出久を除いて気付かなかったようだ。

「うわぁ～…！新しい蛇女の生徒!?スっごく爽やかと言うか、王子様というか…イケメンだぁ!!」
「雰囲気や冷静そうな部分は、確かに轟ちゃんを思い出すわ。ケロケロ」
「まあ、よーするに漢らしいな!!」
「ぐっはぁあぁぁぁ…!?!!」
　三人の無邪気で神経を鑢で削るコメントに、心の中で吐血した雅緋は、精神的に相当致命的なダメージを抉られた様子だ。案外女らしくない自分を気にしていたらしい。
「貴様ら…人が一番気にしてる悩みを無神経に…!!」
「てか胸さえ無かったら本当に漢にしか見えなかったぜ！まるで女性の体に美男の顔を取っ付けたような…」
「ぐばぁぁぁぁ…!!それ以上は……かはっ…辞めろ……」
「切島ちゃん、やめてあげて。何だか先輩が可哀想でならないわ」
　どうやら雅緋のライフポイントはゼロに尽きたようだ。
「そ、それにしても…ど、どうして貴女が……」
「ん？ああ、そう身構えるな。私は知人に紹介して貰っただけさ。サー…ナイトアイと言うヒーローから承認は貰ったし支障はないぞ？其れに学炎祭のことで気に悩むのなら水に流そうじゃないか。とは言っても、あの頃は少し荒んでたしな…直ぐに距離を埋めれる問題では無いのも確かだし、強要はしないが…」
　どうやら雅緋はまだ学炎祭の事に関して雄英（特に緑谷）との距離を感じてるようだ。だがそれは緑谷自身も同じこと。
　幾ら事情が事情でも、そう簡単に打ち解けれないのは致し方ないこと。ヒーローと忍の思考や成り行きは基本的に違うし、似ている共通部分が有っても、考え方や生き様が変わっているのは否定出来ないのだ。
　因みに雅緋は何処の事務所にも所属しない特別枠として、今回の件でインターンの参加許可が下りたらしく、特別勢力としてヒーローと忍学生の助力として加担するらしい。
　雅緋に推薦するよう申し込んだのは雪不帰であり、蛇女の許可を通

したのは小尾斗教官だ。（本人は嫌々だった様子で、「女の群れ供と少しでも離れたい」と愚痴をこぼしながら呟いていた光景は、今でも覚えている）

「なぁ緑谷、あの超絶なイケメン女子と何処で知り合ったんだ？確か仮免取得の際には居なかったよな？」

「ああ、うん…あの人雅緋さんって言うんだけど、話すと凄く長くなるから今はちょっと、空気的な流れでもね」

緑谷出久は、飛鳥とは違って敵と見なし、危険と確信した人物相手に心を開くことは無い。

それもそうだ。先ず忍との価値観や死生観が異なるし、生まれも境遇も、心も体も何もかもが違う。誰とでも敵味方関係なく直ぐに前向きになって心を開く人間ではない。

其れがヒーロー学生にとっては普通で、当たり前で、常識の範囲内。だから自分達とは異なり違う部分を持つ雅緋も敢えて多くは語らないし、何も言わない。

「これは…雄英生だけかと思いきや、こんな所で蛇女の筆頭とご対面とは……不穏な風でも吹くものですね」

氷の如く冷え切った声が、背中に浴びせられる。

気配がなかったので振り返ってみれば、雪泉が扇子を口元に当てながら雅緋を見つめる。

「あーッ！雪泉ちゃんだ!!久しぶり～！」

「ケロ、私たちは学炎祭の見学以来、会ったことがなかったわね。今思えば確かに久し振りだわ」

「雄英生の皆様、お久し振りで御座います」

お茶子と蛙吹の二人に、挨拶を交わす雪泉は、ぺこりとお辞儀をしながら微笑を浮かべる。

過去の険悪した雰囲気とは違って、今は穏やかで柔らかい笑みを浮かべる事が出来ている。昔の彼女とはまるで別人のようだ。

「なんだ、月閃の筆頭もいたのか…まさか善忍エリートの忍学生とご対面になるとは、思いもしなかったよ」

「其れは此方の台詞です。今更悪忍どうこう言う権利はありませんが

…半ぞ…コホン、王牌先生からの話によると、蛇女子学園は雄英生に対し何の見境もなく処殺しようとしてたとか…」
「それは焔達率いる過去の蛇女のことを言ってるのか？生憎、あの頃とは違って、生まれ変わった蛇女はお前の知ってる蛇女ではない。赤の他人が知ったような口を利くな」
「赤の他人とは少し可笑しいですね？私達は夜桜さんを始め、美野里さんや四季さんも今となっては転校の形で雄英高校のB組所属、少しでも彼ら彼女らに危害が及ぶのであれば無視出来ない存在です。雄英生を傷付けたことに変わりはないのであれば、貴女方とは既に無関係の忍学生では無いのですよ」
　売り言葉に買い言葉。
　善忍と悪忍がお互い顔を合わせば、見えない何かでプラズマ的な視線が、鍔迫り合いを起こしている感覚だ。
　こう言うのを犬猿の仲と言うのだろう。雪泉は麗王に対しては誰にも変わらない姿勢で接していたのに、雅緋と言った悪忍はどうやら態度が変わってしまうらしい。
　尤も、余り深い交流も交えていないので、無理もないのだが…
「二人とも少し落ち着いて下さいよ！これから会議が始まるんスよ？此処で喧嘩してたら追い出されちゃいますって!!」
「け、決して喧嘩では……いえ、切島さんの仰る通り、すみません転校少し私情が出てしまってました…」
「此方こそ済まない…迷惑を掛けまいと心掛けていたのだが……善処する」
　切島のフォローもあってか、二人は冷静さを取り戻し、距離を離れる。こう言った仲間をまとめたりフォローに入る姿勢、誰とでも敵であろうと味方であろうと前向きに接せる所が、少年の素晴らしい長所だ。チームを纏め、士気を上げるのに適した人材は、サイドキックとして欲しがる事務所は数百は挙がるだろう。
「――お待たせ致しました皆様、今回はとある案件に関してお呼び集まり、誠に有難う御座います」

雑談が飛び交う会議室に、一際目立つ声が辺りを一斉に鎮めさせる。
声の主はサー・ナイトアイ。両隣にはサイドキックのバブルガールと、ムカデの形相をしたセンチピーダーが並んでいる。
今回の案件と言えば、以前リューキュウが話してた「敵連合に大きく関わる事件」の事だ。
「死穢八斎會という小さなヤクザ組織が何を企んでいるか、知り得た情報の共有と共に協議を行わせて頂きます。内容の詳細は順を追って話しますので、皆様は席にお座り下さい」

会議室――サー・ナイトアイの事務所で開かれた協議。これだけ各地方から呼ばれたヒーローを前に、ただならぬ案件でないのは、皆まで言わなくとも自然と解る。
「そう言えば流れで忘れてましたけど、先生もいたんですね！どうしてここに？」
「ん？何でって…協力を頼まれた以上、断る訳にも行かない。事情は予め聞いた、そんでもってお前らに話さなきゃいかんことが有る」
「話す??」
相澤先生の元に駆け寄るお茶子に、対する相澤は案の定、表情を変えない。しかし、先生の口から気に掛かる発言が出たのは気のせいだろうか？話とは一体…なんて考えてるうちに、各人員は席についていく。
「ファットさん、俺こう言うの全く分かりませんよ!?考える柄じゃないですし…良いんスか？」
「えっと……私もこう言うの一度も経験した事ない上に、上手く話せないのですけど…」
「心配すんなや切島くんに夕焼ちゃん。今回、悪い奴らが変な事企んでるから皆んなで煮詰めましょのお時間や。それに今回、ＢＭＩ事務

所のウチらに大きく関わるで。まあ、全員一人も欠かせない重要人物っちゅーことやから」
特に、夕焼と天喰環は今回の会議として超重要な役割人物だ。話せなくとも、此処に居ること自体が重要なので、皆の前で難しいことを話す訳ではないので心配無用だ。

「えー、先ずは我々サー・ナイトアイ事務所は約二週間前から、死穢八斎會という指定敵団体の独自調査を進めておりまして、キッカケはレザボア愚連ドッグスと名乗る強盗団の事故から発生しました」
「警察は事故として片付けたものの、腑に落ちない点が多く追跡を開始。私、サイドキックのセンチピーダーが、ナイトアイの指示の下、追跡調査を進めておりました」
サー・ナイトアイ事務所の調べによると、ここ一年間の組外や裏稼業団体との接触が急増し、組織の拡大・金集めを目的としている事に目を付けた模様。
「そして更なる調査を進めた結果――死穢八斎會の若頭・オーバーホールが、敵連合の二人と接触したと判明。
一人は分倍河原仁、敵ネームは〝トゥワイス〟。一人は竜胆沙知、忍名は〝龍姫〟。
尾行を警戒され、これ以上の追跡は叶わなかった物の、警察の協力を得て調査を進めた所、現場には二人の血痕が残ってた事から、組織内で何かしらのトラブルが発生したと確認」
「んでだ、連合が関わる話なら…っつー事で俺や塚内にも声が掛かったんだ」
以前、緑谷がインターンに参加するべく試しにグラントリノと連絡したものの、警察の塚内と供に敵連合の捜索に当たってると聞いたのだが…今の発言で辻褄が合う。
道理で八斎會の件でグラントリノが在籍している訳だ。
因みに、当の塚内本人は連合の一人が人気の無い深い森林地帯で目撃したと情報が入り、其方へ当たってるそうだ。

「龍姫と言いやあ、死塾の元中等部…あんまし目立った形跡は無かったが……まさか小僧に続きアンタまでも迷惑掛けちまうとは…」
「えっ？」
グラントリノの謝罪の念を込めた言葉に、雪泉は目を見開く。
敵連合の中に、死塾月閃女学館中等部が所属していた…という事実に、驚嘆の色を隠せない。
雪泉たち黒影の孫弟子五人は、死塾月閃女学館の中等部に所属していた訳ではない。しかし、自分の学園の下には当たるとは言え、善忍から敵連合に赴いた忍がいたことを、雪泉本人は知らなかったのだ。
この形で、初めて知り得ることになるとは、予想もしなかったのである。
「――続けて」
「はい！警察の調査はこれ以上の詮索は叶わなかったのですが…とあるＢＭＩ事務所のファットガムさんの証言により、ＨＮを通して皆さんに協力を求めた訳でして…」
ＨＮ――ヒーローネットワークを略称した呼び名である。
プロ免許所属の人間だけが使えるネットサービスは、全国のヒーローの活動報告を閲覧、便利な個性のヒーローに協力を申請したり出来る特別なネットワークのことである。
「ちょい待ちな、ＨＮを通して協力に至ったんなら、忍がいることはどう説明するんだ？
現代社会がどうとかはさておき、忍が…況してやガキがプロの協議会に出席してる事自体が可笑しくて仕方ないぜ」
此処で不満そうな訝しげな視線と供に発言をしたのはロックロック。どうやらヒーロー社会にも多少、忍の存在を善く思ってない人間がいると聞く。このヒーローもその内の一人に入るのだろう。
肉倉と名乗る士傑とは違い、善悪両方の忍に不満を抱いているらしい。
「おい黒人。大層偉そうな口を叩いてるが、忍が此処にいてはいけない理由が何処にある？私たちはプロに認められたからこそ、この場にいることが許される。私の実力はプロをも凌ぐ華麗な才覚の持ち主

…少なくとも私が此処にいること自体が感謝されるべきでは？」

「その自信は何処から湧いてくんだか…忍ってのは上に雇われる従者だ。敵の組織から雇われてたスパイでしたーなんて話しになったら、其れこそ排斥するべきだろ。

それだけじゃあねえ…ガキと言いやあ雄英生もだ。天下の名門校とは言え、神野や襲撃に当たった連中が居て良いのかよ？いや、肩書き背負ってるだけのお荷物になるならゴメンだぜ？」

総司の反論も、唾を吐き捨てる

…どうやら、忍学生云々だけでなく、ヒーロー学生のことに関しても不満を抱いていたご様子だ。

物言いは厳しめな部分が見受けられるが、強ち間違いでもない。

先ず敵連合に目を付けられ、何度も襲撃を許す警戒態勢と安全の無さ。不安要素ばかりが募る上、払拭出来ていない時点で、子供達に危険が高くなる。

逆に目を付けられ、自分たちの作戦や行動に支障が出てしまうのでは、これから始まる会議が台無しになるのは、御免なのだろう。

「ぬかせ！全員ともスーパー重要参考人やぞ!!」

しかし此処で不穏な空気を破るファットガムの褐声が室内に響き渡る。

「芭蕉ちゃんと夕焼ちゃんのお陰で抜忍グループの確保、そして切島くんが身を呈して動いたお陰で有益な情報が手に入ったんやで!!もう飴ちゃんあげるだけやない、大阪料理全般お気に入りフルコース奢らせたる位、大いに働いた若者四人に拍手や!!」

「ノリが…キツイ……」

ファットガムのノリについていけない環は、顔面を暗くしたまま俯くばかり…他の三人は首を傾げるしかないのは、何故自分たちの活動が、今回の件で大いに役立ったのか判らないのだろう。

確かに敵グループと抜忍グループを捕まえた事は、ニュースとして目立ってはいるし、社会奉仕として充分役立ったのは理解したが、それが死穢八斎會の案件に繋がることが解らないのだ。

「八斎會は以前、認可されていない薬物の捌きをシノギの一つにした

疑いが有ります。そこでその道に詳しいヒーローに協力を申請したのです。それがＢＭＩ事務所、ファットガム」
「昔はゴリゴリにそう言うモンを専門的にブッ潰しとりました!!そんで芭蕉ちゃんと夕焼ちゃんの二人、烈怒頼雄斗のデビュー戦！先ほど前述した抜忍と敵グループを押収した所、今まで見たことがないブツが環と夕焼ちゃんに打ち込まれた――
――〝個性〟と〝忍術〟を壊すクスリ」

それを聞いた一同は、息を詰まらせる。
動揺隠せず、一斉に驚嘆の声が上がる。
「個性と忍術!?」
「忍術ってアレか、忍が使う異能だろ？」
「異能って、まあ間違いじゃないけど…それって忍の能力が制限されるってことか？」
「其れ滅茶苦茶致命的じゃない??」
「そんなモノ、聞いたことないぞ？本当なのか？」
個性だけでなく、忍術…忍の扱う力を無効化にし、制限を設ける異様…いや、狂気としか呼べない薬物は、その場の空気を凍えさせるのに充分だった。
「えっ、環…大丈夫だよな??」
小学生の頃から付き合いの良い親友のミリオが、信じ難い顔で尋ねるが
「大丈夫だよ。よく寝て朝起きたら使えるようになった。ホラ見て、牛の蹄だよ」
「朝食は皆んな大好き牛丼かな!?」
手を牛の蹄に再現する。
この様子だと恐らく個性や忍術の概念が消えるという訳ではないので、危険であることに変わりはないものの、一応現段階では将来に支障はないだろう。
「回復できるなら安心だな」
「しかしそんな物騒なブツが出回るとなると…抜忍や敵にとっては有

益な品物ですね。これが裏で多く知られてると考えると、私たちの今後の調査や活動に多大な影響を及ぼしますし、一概的に安心とも呼び難いですね」
「それなんやけど…」
　ホッと安堵の息を漏らすロックロックの発言に、難しい顔で警戒する麗王。今後ともこう言った自分たちの行動を制御する形の品物が、沢山市場に出回れば、事態は悪化し、能力の無効化を受け、弱体化しかねない。
　そう考えた麗王の言葉に、ファットガムは続ける。
「警察に聞いたら、本人達はこんな品物は知らん！ってな。大金払ったものの何の効果も無いとかどうとか…惚けてる様子でも無かったし、寧ろ何の役にも立たんっちゅーてたから、これを察するに恐らく…――」
「何も知らされずブツを流してたと？」
「せや！被害を受けた件も指を数える程度しかないから、恐らく最近で間違いないかもな！」
「とすると…恐らく、そのブツは単なるサンプル品という可能性が有りますね。闇市場に粗悪品のアイテムを流出する件も不自然ではないですし、薬の効果を試す為の…」
「なんかスゲー次元の話してて頭がちんぷんかんぷんだ…」
　違法関連の取引に詳しいファットガムに、知識が広大で幅広い麗王、二人の会話はプロからすれば理解できるものの、石頭の切島には解らず仕舞いだ。
「んで、環と夕焼ちゃんの打たれたブツの解析と二人の体調を調べた所、個性因子と忍の持つ血液の細胞が傷付いてたことから、個性と忍術と言った特殊能力を壊すだけ！他は何の害意もなかったんやが…
　中身のモノはメッチャとんでもないモン入ったたわ。これは正直胸糞悪いで」
　表情豊か、性格も穏やかなファットガムの顔は、段々と険しい表情に変わって行く。

「人の血と細胞がメッチャ入ってた」

辺りの空気が淀み、重力が増す。

弾丸の仲間は何と、人間の血と細胞が詰め込まれた人工的な…つまり、その弾丸は人の個性由来から発生したもの…一度思考を働かせてしまうと、悍ましさや悪寒が止まらない。

「ひぃッ…!?」

「まるで別世界のお話しみたいね…」

「ほ、本当にそんなモノが出回ってるんですか?」

「な、何て怖ろしいことなのでしょう……」

こんな非現実的な話を何も知らない学生に話したら、至極当然の反応だろう。

それもそうだ、見知らぬ薬物を検定に回した結果――銃弾の中身が人間の血液と細胞が詰まってましたなんて、幾ら超人社会の仕組みとして作られてる世界でも、納得など出来やしない。

「そんで流通経路を調べた結果、中間商売組織と八斎會との交流が発覚。隅から隅まで調べるとメッチャ経路が縮小されてたり、証拠隠滅とかされてるから、裏ではゴッツこんなのが日常茶飯事として行われてるねん」

以前のリューキュウ事務所が取り押さえた敵組織もそんな感じだ。巨大化する粗悪品、忍にも有効な活性化剤。麻薬を始めた違法薬物ばかり…そういうシノギを始めてる人間の多くは、裏稼業で金を巻き上げているのだ。

「しかし、死穢八斎會が何故人間の個性を由来に流したのかは不明な点が幾つか有りますね。単に自分に敵対する者を弱体化するにしても、それだけでは理由を繋げることには…――おや?」

八斎會の企みが見えず、個性と忍術の能力を破壊する弾を、捌く動機が見えない雪泉は、顔を顰めるも、隣に座ってる緑谷の異変に気付き、思考を止める。

「……そんな…まさ、か……あの、包帯はそう言う……いや、でも、こんなことって、それじゃあ…」

「あの、緑谷さん?·顔色が随分と悪いようですが…大丈夫ですか…?具合が悪いのなら無理をしなくても……」
滝のように汗を流し、全身を水で浴びせた容姿、顔色は気味が悪いほどに悪化し、見てるこっちも気分が害されていく気分だ。
「そして死穢八斎會の若頭、治崎廻の〝個性〟は【オーバーホール】対象の分解・修復が可能。壊し、治す個性に、娘のエリと呼ばれる少女…個性を破壊する弾」

――ドクン…!!!!
それを耳にした途端――緑谷出久とミリオの心臓は、互いにシンクロするよう大きく脈を打った。
ただ、少なくとも…今の頭の中に思い浮かぶ光景は、小さな少女の腕に巻かれた包帯と、緑谷出久だけが聞いた少女の「助けて…」と、救済を求める弱々しい声。
少女は…一体、どれほどの苦痛と絶望を与えられたのだろうか。
それこそ、人生を振り返った中で想像も付かないエピソードが、隠されてるだろう。

「娘のエリと呼ばれる少女の個性は現段階では不明…ですが、腕には夥しく包帯が巻かれており、とても怪我とは呼び難いものだったと…」
「まさか…なんて悍ましい…」
「……これは、予想外以前に、考えも出来ません……まさか、エリと呼ばれる少女は、そう言う…」
サー・ナイトアイの説明に、リューキュウと麗王は悟りきったように
「……読めてきた。成る程、悪忍の私が言うのもなんだが、随分と非道な行為をするんだな、敵も」
「……」
総司も皆まで言わずとも理解し、雅緋は黙ったままフツフツと怒り

を沸騰させながら、沈黙する。
「えっと、つまり…？」
「何…何の話ッスか!?」
対する芭蕉と切島も解らず仕舞いで、雪泉も困惑の色を浮かべてる。彼女も、絶大な惨劇など想像も付かないのだろう。
「お前らさ、もうガキはいらねえだろ。これ位解れよな…」
理解に悩み苦しむ学生に、ロックロックは心底、呆れたように溜息を零す。

「――つまり治崎は、自分の娘の身体を銃弾に変えて、世界中に売り捌いてんじゃね？って訳だ」

分かり易く、直球な言葉。
誰もが聞けば、簡単に想像が付く悍ましい光景。
エリと呼ばれる少女の腕に包帯が巻かれてるのも、八斎會から見知らぬブツが発見されたのも、個性や忍術を破壊出来るのも――
――全てエリの身体から搾取されてこそ、成り立つのだった。

「んなッ――!?!!」
「ヒッ…!!」
「げぇ…！」
学生にはこの内容は厳しいだろう。
先ず次元が違うし、仮に考えが行き届こうと、そう易々と実行出来るものじゃない。
人間の体の細胞を取り出し、銃弾に埋め込むことで個性の効果を発動させる…確かに、発想だけを切り取れば誰もが考えも付かないアイディアだろう。だがそれと同時に、深い血塗れな闇の部分も確実に大きいと言えるものだろう。
真に賢しい敵は闇に潜むとは、よく言ったものだ――

「……」

一方で、八斎會の真相を知った雪泉は…

「……」

あの時もし自分がいち早く治崎の素性を知り、止めることが出来れば…娘のエリは少しでも早く救われていたのでは？

救いの手を差し伸べた少女の手を、掬い取れなかった少年二人の悔恨は大きいものだろう。しかし、シチュエーションや状況を知らないとはいえ…自分は、気付かぬ虚ろに塗れた笑顔に騙され、益々と悪を野放しにしてしまった…

其れが例え、サー・ナイトアイやサイドキックであるセンチピーダーに、バブルガールが責めなかったとしても、今回の件に関しては自分は無関係とは言えないのである。

況してや純粋且つ、大真面目な彼女からして、責任を負うなと言う方が難しいだろう。

今もこうして治崎は娘を利用し商売を行なっている。

弱き少女を、平気で金儲けに扱う鬼畜な所業。

エリは希望を持たず、絶望に支配されている。

雁字搦めの恐怖で縛り、支配している。

其れは…黒影お爺様に拾われ、豊かに平和に暮らしてた、愛情に満ちた家族とはかけ離れた……血生臭い地獄絵図。

そんな胸糞の悪い話を聞かされて、彼女が平気でいる訳でもなく――

「……私は今、これ程以上に憤りの感情を覚えたことはありません…」

――これまでにない義憤が、彼女の心の原動力となりて、彼女自身を突き動かす。

体を小刻みに震わせ、拳を強く握りしめ、殺意を抑える。

今こうして冷静を保てるのがやっとで、止まらない憤慨を無理矢理に押し殺す。

そうでもしないと、自分が可笑しくなりそうな程に程に――

「そもそもよぉ、サー・ナイトアイ事務所に所属してるガキどもが、早くその娘を保護に回しゃあ事態は防げたんじゃねえのか?! 何でテメェらは何も出来なかった! 況してや相手が治崎と分かっていながらよぉ!」

「良い加減黙らんか! 聞いてて鬱陶しいぞお前! 其れが出来たら最初っからそうしてる、民間人もいる公衆の前で娘諸共危険に晒す羽目になるんだぞ?

そうなる状況じゃなかったから、こうなったんだろ?」

「皆さん、どうか静粛に」

ロックロックの厳しい物言いに、我慢の度を超えた雅緋もまた反論する。空気が悪化する流れを治めるセンチピーダーに、サー・ナイトアイは頭を下げる。

「その件に関しては私が責任を負う。手を出すなと命令を下したのは私だ――何より情報も証拠もない以上、下手に勘繰るのは危険だと、私が判断したからであって、二人の少年を責めないで頂きたい。二人とも娘を救出しようと最善を尽くしました」

緑谷出久はリスクを背負い、その場で保護しようとし――通形ミリオは、先を考えより確実に保護できるよう…

「今この場で一番悔しいのは、この二人です。それが私たちの目的となります――」

１６６話「エリちゃん援けようぜ」

死穢八斎會の組織、治崎の娘である被害者エリを、必ず救い出す――これが一番最低でも守らなければいけない目的だ。

その他にも、主犯格である治崎廻率いる犯罪に手を染めた組織の従業員、奴等の野望を阻止するのが、最大限の目標である。

何方にせよ、一筋縄ではいかない案件ではある上に、敵連合と手を組んでるという事実が発覚されてる以上、並みの仕事ではないのは察しが突くだろう。

「今度こそ必ずエリちゃんを必ず救い出します!!」

不甲斐ない己を悔恨しながら、やっとの思いで声に出す二人の眼差しは、鋭く真剣だった。弱きを援け、強きを挫くのがヒーローであるのならば――八斎會の魔の手からエリを援け、治崎率いる敵に立ち向かう。

「ケッ、ガキが一丁前に粋がるのも勝手だけどな、治崎という若頭はその子を隠しておきたかった〝核〟の存在なんだろ？其れが何らかのトラブルで外に出ちまった…ガキんちょヒーローに見られちまった…!!」

緑谷とミリオの気迫ある意気込みに、ロックロックは舌打ちをしながら言葉を吐き散らかす。

「これがどんな意味を表すか…もう同じ本拠地に置いとくと思うか？もし俺が同じ立場なら少なからず別の場所に移す！攻め入るにしろ、被害者の娘が〝いませんでした〟じゃ話も糞もねぇ…何処にいるのか特定できんのか？」

言ってる事はご尤も。

小さな女の子が酷い目に遭わされ、保護する対象を救い出すにしろ、その目的が実は居ませんでしたでは作戦も話もあったものじゃない。

その辺に対する対策と、具体的に何処に隠すのかが特定出来なければ、エリを援けるなんて夢のまた夢だ。
「問題は其処です。奴ら八斎會の組織が何を何処まで計画を企ててるか不透明な以上、一度で確実に叩かねば反撃のチャンスを与えかねません。
――其処で、八斎會と接点のある組織・グループ及び八斎會の持つ土地を可能な限り洗い出しリストアップしました。皆様に集まって頂いたのはこの為です！」
日本各地――リストに記されているヒーロー事務所のピンポイントは、よく見ると八斎會周辺地区の近くに在するヒーロー達だ。
サー・ナイトアイはきっと「八斎會の周辺地区に事務所を立てたヒーロー達は、土地に詳しい為、拠点となり得るポイントを絞って欲しい」と言う意図なのだろう。
そうする事で、ゼロの確率を上昇させたいのだろう。
「随分と慎重でまどろっこしいなぁ！それでもオールマイトの元サイドキックか!?そないな事してる間にエリちゃん言う子が今頃酷い目遭わされて泣いてるかもしれへんやろ!?」
「我々はオールマイトではない!!そして勿論、『彼女』みたく聖人君子にもなれやしない!!!
予測と分析でより確実に、１００％に近づかなければならない」
自分たちはオールマイトではないし、彼のような唯一無二の存在になどなれやしない。
どれだけ努力をしたって、報われないのが世の中だ。
努力をしたから、自分たちが結束を固めても、オールマイトには行き届かない、それが現実だ。
でなければ、今頃はエリも救われてるし八斎會の企みは当に掴んでるし、今頃は敵連合の在り処だって知れている。
そうでもないから、オールマイトではないからこそ、せめて自分達にできる最善を全力で尽くし、全うし、完璧な作戦を遂行しなければならない。
「確かに、なんて言葉が口から漏れちまう程にナイトアイの言ってる

ことは事実だ。焦る気持ちは解らんでもないが早まっちゃあいけねぇ…もし下手に大きく動いて捕らえ損ねた場合、火種が更に大きくなりかねん。ステインの時だってそうだ、結局連合のＶＰＲになっちまってるしな」

保須市事件――ヒーロー殺し、忍殺しのステインに関しては完全に敵連合の策中であり、オール・フォー・ワンの掌の上で転がされていた。

況してや敵連合との何らかの接触が有った以上は、警戒するのに越したことはないのだ。

「況して、相手が個性と忍術を破壊するッつー弾を流してるってことは、勿論奴等も俺たちヒーローの迎撃に備えてブツを所持してるのだって可笑しくねえしな」

「そんなん考え過ぎやろ!!そんなこと言うてたら身動き出来へんで!」

「でも相手が異能破壊弾を手にしてるのは厄介ね…八斎會の居場所も含め、例の薬の対策も必要なんじゃないかしら?イレイザーのように人が個性を発動してる訳でも無いのでしょう?」

「あっ、それなんですけど俺からも話があるんです」

此処で、相澤先生たること…イレイザー・ヘッドは恐縮そうに手を挙げる。

「皆さんこの件のブツ、ご察しの通り俺の個性に似てるんですが、実際は違うんです。

俺のは破壊ではなくあくまで抑止…制御するだけで、攻撃をしてる訳じゃないんですよ、其れに個性は消せても、忍術までは消せません」

林間合宿――敵連合開闢行動隊と名乗るメンバーの内、蒼志という抜忍と一騎打ちになった時、抹消の個性を使っても消えなかったことから、忍に対して有効ではないのは、明らかになっている。

「つまるところイレイザー・ヘッドの上位互換やんけ!・益々危険だわ!!しかもそんなもんが世界中にばら撒けられてるとか何処の都市伝説やねん!!」

確かに、想像するだけでゾッとしてしまう。

イレイザー・ヘッドの抹消でさえ敵に回すと厄介なのに、対して異能破壊弾は忍にも効く上に、更には生産可能…これを常人が聞いても信じてくれないだろう。
「個性は消せても忍術は消せない…片方のみが絶対条件に対して、裏で出回ってるブツは両方消せる…下手すれば超人社会に再び大きな穴を開けかねませんね…」
能力の制限、忍が表に現れた以上、闇市場でこの情報を噂として吹き込めば、八斎會は確実に市場を独占出来るだろう。
金の亡者、支配権、名誉、なるほど…随分と計算されたことだ。
「そして個性や忍術を消されるのを防ぐのを含めて此処で提案なんですが…サー・ナイトアイ。貴方の個性で全員の予知を見れば、最悪な予想は確実に近い状態で防げれるのではないでしょうか？」

イレイザー・ヘッドの言葉に、「その手があったか」と一同は心の中で呟く。
幾ら相手が凶悪で能力を壊すクスリを所持していようが、予知を見て防ぐ作戦を開けば、此方にとってとても有効だ。個性を壊されるのなら、それを防ぐようにすれば良いし、そもそも異能云々関係なく今回の目的も無事に遂行することだって可能だ。
相澤先生の何時も口に出す〝合理的〟なプランだとも言えよう。

「それは――出来ない」
――だが、サー・ナイトアイは其れを拒絶する。
「出来ないって、どう言うことなんです？」
「私の個性――予知に関しての性能ですが、発動したら２４時間、丸一日のインターバルを要します。
そして一日に一時間一人しか視ることが出来ません」
サー・ナイトアイの個性『予知』は、一日に一時間、一人対象でしか視ることが出来ない。その後は２４時間のインターバルを要するこの個性は、万全無敵のようで実際は違う。

発動してから一時間の間、他人の生涯を記録したフィルムを見ることが可能。テレビの録画再生としてではなく、一コマ一コマの僅かな動きと周辺環境が脳裏に映されるのだ。
「私の個性は決して誰もが甘んじるような万全個性では有りません」
「いや、万全ではないのは兎も角、出来ないことはないでしょう。予知を見るだけで多かれ少なかれ充分役立てますし……」
イレイザー・ヘッドの至極真っ当な正論に、サー・ナイトアイは苦虫を噛み殺すよう、辛抱しながらある言葉を口に出す。
「私の個性は、予知を視た途端…全ての未来が決定事項として変えられない…何度も未来を変えようと試した所、変えられた未来は一度も有りません」
「…？」
「もし予知の対象として視られた人間に、無慈悲な死が待っていれば、どうしますか？」
とても、言いたくはない。
こんな何度も味わって来た辛くてにが苦しい想いをしたくはない。
だけど…全員の安全も含めて、どうしても言わなければならないのだ。
「私の個性は決して頼られるモノじゃない…勝利と目的達成の確立を最大限に上げて…それでもって時、いざという状況に使う、謂わば駄目押し――その時に使う個性なんです」
「はぁ!?おいちょっと待てや言ってる事が分からねえぜサー・ナイトアイ!!死だって有限な情報だ!!そうならねぇ為に策を講じることだって出来るぜ!?」
聞いてて埒が開かないと判断したロックロックは、指をさしながら捲し立てる。
端から見れば、「都合も確率も悪いから使いたくありません」と言ってるようなもので、一部の人間を除けばサー・ナイトアイの個性に納得がいかない模様だ。
「良いか？未来を変える権利は皆んな平等にあるんだよ!!俺を見てみろ幾らでも回避してやるぜ!!」

「――ダメだ」
占いとは違う。天気予報のように予想が外れることはない、百発百中の未来予知は、危険要素が高すぎる。確定された死を防ぐことは出来ない以上、闇雲に見るべきではない。
一同は顔を顰め、困惑、戸惑いの色が映し出される。
これ以上の言葉は意味がないと判断したロックロックも、諦念したのか何も言わなくなった。
「……とりあえず、今は〝困っている子がいる〟これが最も重要よ。私たちが今ここで騒いだって何の打開策にもならないわ」
リューキュウは眉一つ動かさず、冷淡に発言する。そのお陰か、静寂で重苦しくなった空気の流れが変わり始めた。
「そうだ、無理なもん要求したってどうしようもねえ。個性のことを知ってるのは本人なんだ、あんま責めないでくれ。リューキュウの言う通り、被害者の娘が何処にいるか、八斎會のこと含め、そこから詮索を始めるべきだ」
「娘の居場所の特定・保護――可能な限り角度を高め早期解決を目指します！どうかご協力宜しくお願い申し上げます!!」

ＰＭ７：００――協議会を終えた頃、外はすっかり夜暗く、街灯が真っ暗な街を明るく点々と照らしている。
「そんなことがあったのか緑谷……」
大人のプロヒーローではない学生達は、これ以上の議会は大人達のみの話があるので、参加しなくても良いとのことで、忍学生の彼女達も揃って、事務所に置いてあるテーブルに座っている。
「悔しい…な……！」
切島の悔恨と悲痛に混ざった声が、嫌に胸に突き刺さる。
少年も同じだ――緑谷出久の境遇は同情するし、自分を重ねてしまう部分がある。
責任感の強い切島は、林間合宿の際に爆豪と雲雀が拉致されたと聞

いて居ても経ってもいられず、先走る言動が有った為、今回の件に関しては雪泉に次ぐ理解者だろう。
現に通形ミリオも、此処まで深刻な顔をするのは親友の環でさえ初めて見たのだから。
「でも…悔しさで言えば雪泉さんも…」
恐る恐ると口を開く芭蕉は、控えめな口調で彼女の様子を伺う。
「いえ…まあ、悔しくないと言えば嘘になりますが……お二人方に比べれば全然……其れに、私は忍の知識はさておき、ヒーロー稼業や敵の事に関しては無知な部分が多かったですから…」
無知は罪――とはよく言ったもので。
其れでも余り名の広がってない弱小ヤクザの肩書きと、特に世間では余り騒がれてない指定団体なので、雪泉だけでなく他のヒーロー達も知られてないので無理はない。
特に雪泉の状況ではほぼノーヒントで何の手掛かりもなかった上に、打開策はほぼ皆無だったので、彼女までもが気に悩むことはないのだ。
尤も、気にするなという方が彼女にとって酷であり無理であるが――
「あっ、と…それと蛙吹さんにお話が…」
「ケロ、私…？」
突然自分を指名された蛙吹は、雪泉の申し訳なさそうな表情を見て首を傾げる。
「その……この間、神野区での救出に赴いた後、雄英で起きたお話、轟さんから聞きました」
雪泉は席を立ち上がり、頭を深々と下げる――
「あの時、先輩の身でありながら身勝手な行動と、ご心配をお掛けして申し訳有りませんでした――」
彼女の謝罪と言葉の重み。
以前、蛙吹は神野区で爆豪と雲雀の救出活動に赴いたのを聞いて、

自分で止められなかった不甲斐なさと、大切な友達を危険な目に遭わせてしまった事に深く気に悩んでいたのだ。
あの頃は半蔵は勿論のこと、全員ともあの場で謝罪をしたものの、当時は雪泉が居合わせていなかったので、謝る機会が無かったのである。（あの後、轟は雪泉に謝るよう連絡をした）
「雪泉ちゃん……」
「今思えば、冷静ではなかった…なんて言葉は単なる言い訳に過ぎません。雄英生の皆さんは私達にとっても誰一人欠けて欲しくない大切な人達ですから…
だから自分の行動が原因で、貴女達を困らせてしまったのなら、謝らない訳にはいかなくて…あの、本当にすみませんでした!!」
彼女は人一倍責任が強く、彼女が泣いたと知った時は己の浅はかな行動と、困らせてしまったことに関しては頭を下げなければならない。そもそも、先輩の身であるのなら後輩達を止めるべきだ。それを自分の感情論で動いた結果、万が一死傷者が出てしまっていては責任を負う所か、顔向けすら敵わないだろう。
「良いのよ雪泉ちゃん。貴女が其処まで深く気に掛けて、謝ってくれるなんて驚いたわ。大事に至らなくて良かったし、逆に違う言い方をすれば私達のことを思ってくれる気持ちは、素直に嬉しいもの――だから顔を上げて」
褒められた形跡でもない。
本来なら叱られるべき結果だ――それでも蛙吹梅雨はニコッと笑顔を作る。其れはあの時、梅雨刻に濡れた雨のような涙ではなく、雨雲から晴れた晴天のように。
「…!有難う御座います……!!」
彼女の優しに思わず目頭が熱くなる。
自分の行いは後悔してないし、自分が正しい道だと判断した結果、その道を進んだまで。
処罰を受けようと、何をされようとその覚悟も出来ていた。そう言う己を顧みず、大義を成そうとする所は黒影とソックリだ。
だが――自分の行動が正しいと信じてた道に、大切な人が泣いてい

るのなら、困っているのなら、それ相応の責任と謝罪をしなければならない。自分だけが全て正しく、何も悪くないと言うのは偽善以前に、以前の自分と同じだ。

雪泉と蛙吹のほんわかとした雰囲気の中、区切りを見計らってた芭蕉は、何か思い当たったかのように

「そう言えば、雅緋さんはどうして…今回の件でインターンに？」

質問する。

其れに反応した雅緋は「ああ、そう言えば言ってなかったな」と呟きながら口を開く。

「今回、ある上忍のコネで上手く参加させてくれたんだ。敵連合との接触絡みの事件と聞いてな」

焔達が所属してた蛇女と、雅緋達の被害は膨大だ。

一度は踏み台に、二度目は悪夢に晒されるなど、最早黙って見過ごす訳にもいかない領域にまで達しているのだ。そもそも雅緋の目的は敵連合の壊滅と確保も目的であるので、一石二鳥とやらだろう。

「アイツらは確実に潰さねばならない……どれだけ虚仮にすれば気が済むのやら……」

私怨ではない、純粋な怒りと煮え滾る闘志が、肌に痺れるほど伝わってくる。

蛇女の生徒が無意味に惨殺され、名誉も地位も泥を塗られ、剰え憑黄泉という害獣と深い関わりを持つ。この理由だけで雅緋が動くのには充分過ぎる。

「お前ら通夜でもしてんのか」

などと雑談（殺伐で、悲しみと物静かさに浸った空気で）をしていると、半分呆れ混じりの声が聞こえた。声の主はＡ組担任の相澤消太。今は学外の場なので、イレイザー・ヘッドで通さなければならない。

「先生…あっ、イレイザー・ヘッドでしたっけ」

「ああそれで良い。……しっかし、面倒なことになったなぁ…忍学生はさておき、担任の俺から話があったのに…」

「話って、さっき言ってたあの？」
そういえば、と――麗日は会議が始まる前、担任と話してたあの時の事を思い出す。
些細で僅かなやり取りだったが、確かに「話さなきゃいかんことが有る」と言われた。きっとその話をしに、自分達に用があったのだろう。
「今日は君たちヒーロー学生のみ、インターン中止を宣言する予定だったんだがな…」
「ええ!?今更なんで!?」
切島の台詞は、一年Ａ組全員の心の声であった。
代弁者として声を張り上げつつ、何故今更インターン中止を宣言するのかを訪ねる。
「敵連合と関わる可能性があるって話を聞かされたろ？何度も襲撃許す訳にはいかねえし、話は変わってくる」
これ以上、敵連合との接触は避けるべきだし、何度も接触を許してしまっては、警察もマスコミも黙っていられない。
あの時はオールマイト脱退で何とか担任教師としての面は保たれたが、少しでも奴等との接点が有るのなら、未然に防ぐべきだ。雄英の失態と、敵の襲撃は益々許されない形なのだ。
「ただなァ…緑谷、お前はまだ俺の信頼を取り戻せていないんだよ。後序でに爆豪と飛鳥とで喧嘩してたしな」
信頼――相澤の言う言葉の意味を理解するのに、其処まで時間は掛からなかった。
雪泉と蛙吹のやり取りもあってか、神野区で許可なく独断で行動した事を言ってるのだと、直感で理解した。
『正規の手続きを踏み、正規の活躍をして信頼を取り戻してくれるとありがたい』
緑谷は相澤先生に言われたことを脳裏に浮かべ
『今度こそ必ずエリちゃんを必ず救い出します!!』
相澤消太は緑谷の気持ちを汲み取り――互いの心を繋ぐ。
「残念なことに、ここで止めたらお前はまた飛び出してしまい、無茶を

やらかすと俺は確信してしまった…」
　此処で緑谷出久を止めてしまえば、また同じ事を繰り返してしまう。
　また謹慎にでもされたり…いや、教師の免許を剥奪だけでなく、雄英全体に大きな問題も起きかねないだろう。
　其れはとても危険的で、先生としてもその結果は合理的ではない――
「だから俺が見ておく――するなら正規の活躍をしよう」
　するなら〝合理的〟に――生徒の意を汲み、肩に手を置く。
　掴み損ねた手はエリにとって、必ずしも絶望だったとは限らない――少女と出逢わなければ、こうなることすら叶わなかったかもしれない。
　俯いていたって仕方がない――前を向いて行く。相澤先生にしてあげれることは、励ますことと許可を出すことしか出来ない。
「それと雪泉…だっけか、アンタにも話をしておきたくてな…」
「もしかして、ですが…神野区の…」
「ご察しの通りだ…話が早くて助かる」
　…やはり、いや仕方がない。
　月閃と雄英が協力関係を築いてる上に、自分があの場で止めれなかったことを咎められるのは必然。
　況してや自分一人で突っ込むのはさておき、一年生達を危険な目に巻き込んで良い理由など、何処を探っても存在しないのだから。担任の相澤先生が話をするのも、想像付くだろう。
「俺の監視不届き…ってのもそうだが、アンタがあの場にいたのなら、せめて止める位のことはして欲しかったな…」
「…大変、申し訳ありませんでしたッ…その、私は先輩として其れに似合う相応しい行動を取れず、剰え危険な目に遭わせ…――」
「皆まで言わなくて良い、本人が自覚してるのなら良かった。もしアンタがその事に何も責任を感じてない奴だったらどうしようかと考えてた」
　相澤の台詞の最後ら辺はとても嫌な想像しか浮かび上がらないが、

先生の話に耳を傾ける。
「反省と責任や負い目を感じてる人間に深追いしたり追い討ちしたりする趣味はないんでね。それでもやっぱりアンタには責任取ってもらう」
「責任…ですか？」
弱々しく、でもって勇気を振り絞って声を出す。
「アンタが胸を張って、緑谷を始めた雄英生（コイツ等）を俺と共に守って欲しい。俺からの願いはそれだけだ――」
ポンと、軽く肩に手を置いて、励ますように言葉を添える。
相澤の責任を取れという願いに、雪泉は呆然としたまま目を丸くする。
――てっきり、厳しめな処罰を受けるものかとばかり考えていた。相澤先生は厳しいと聞くし、轟焦凍とのたわいないメールのやり取りで、「いつも除籍処分の威圧が凄まじい」と評されている位だ。
共に、生徒を守る――自分が側にいるからこそ、誰かを守ることが出来る。神野区でしてあげなかったことを、今度はこのインターンで皆を守る。
生徒を安全に守り抜くことで、此処で初めて相澤先生からも認められ、信用を取り戻す。
「雪泉、少なくとも八斎會の的確な居場所が解った後、戦闘は避けられない。戦いの場に身を投げるという事は、守り助ける場を与えられたのと同じ――自分の命も含めてな」
相澤の言葉は、雪泉の心に深く突き刺さる。
まるで凍てつく氷に杭を叩き込まれたような錯覚だ。忍にとって一寸先は死――例え公に存在が明かされたとしても、その生業は変わらない。
だから、初めて忍ではない人間に「自分の命も含めて全員を守り抜け」と言われて、不思議と嬉しくて、つい心が温まる。

「約束だぞ、アンタが責任を感じてるのなら、な」
「はい!!」
「――解れば良い」
気合いと気迫の篭った声に、相澤は心の中で安堵の息を吐く。
どうやら、先生の話すべきことは終えたようだ。
「蛇女のアンタ達は…とやかく言う気はないし、その分信頼はできん」
「それで結構…簡単に人を信用する奴は背後を刺されやすい。それで良いそれが良い、私達はお前達が活躍できるのなら喜んで悪者扱いだって受けれるさ――もう、昔とは違うんでね」
相澤先生からすれば、蛇女は完全に殺伐とした悪いイメージが固定されている。雅緋も昔の頃とは違って別人のように変わり、前までの余裕のない彼女とは全く違う。
「すげぇ…やっぱ雅緋先輩漢らしくて…ヒーローよりカッケェんじゃねえかって思っちまいやした!!俺イレイザー・ヘッドと一緒に一生付いて行きます!!」
「だから漢呼びはやめろおオオオオオオオーーー!!!」
「おい、サラッと何言ってんだお前…一生は辞めてくれ」
最後は皆が笑って、冷たくて暗掛かった雰囲気は、明るく希望を持つようになった。
そうだ…自分達が今此処で挫けてメソメソしていては、エリちゃんを救うなんて夢のまた夢なんだ。
「ねえミリオ知ってる?落ち込んで後悔してたって、仕方ないんだよ!」
「ミリオ、一緒に頑張ろ。俺も側にいるから」
「ねじれ、環…」
落ち込んでるミリオに、優しく声を添える二人は、伊達にビック3を名乗っている訳ではない。
仲間が、親友が落ち込んでいたら、言葉を投げるのは当然だ、
「ああ…!!」
鼻を啜りながら、悔恨を抑えつけ、今はエリの救出を優先的に考える。救けると一度心に決めた以上、もう後にも戻れないし、この先ど

んな苦難が待ち構えていようと、今の義憤に満ちた状態なら、どんな化け物が来ようと怖くはない。

一度は挫折し、心折れ、負い目と悔恨に心が潰されかけた。
それでもやはり人は前を向いて行かなきゃいけなくて、過ちや後悔を嘆いていたってしょうがないのだ。

こうして、本格的に波乱のインターンが幕を上げる。
此処にいる皆んなが、それぞれの想いを胸に秘めながら、決行日が来るのを待ち望んで――

１６７話「神白教官」

協議会を終え、呼び出された個々のヒーロー達が事務所へ戻った後、サー・ナイトアイはグラントリノと話があると言い、二人だけは別の場所で残っている。
時間が時間だからか、外は真っ暗で、街灯の光だけが点々と夜行を照らしてくれる。
「成る程、緑谷を差し向けたのは…私とオールマイトの仲を取り持つ為だったと。道理で、少年が私の事務所に…」
「いやまぁ、キッカケの一つにでもなるんじゃねェかと思ってな！歳食うと要らねぇ事ばかり…お節介が過ぎたか？」
「いえ、そんな事は有りません。十分に感謝してますし、貴方が認める程だ。理解できなかった私でも、オールマイトに近い狂気によく似てると思います」
事務所内での採用試験とは別に、本人の前では口に出さなかった真実を、言葉に表すサー・ナイトアイに、グラントリノの口角が自然と釣り上がる。
「過去を振り返っても仕方ない。後継者を選んだのはオールマイト本人だ。そして背負られた弟子もまた、師匠の気持ちに応えるべく努力を重ねる。こう言う陳腐な台詞は俺の性にゃあ似合わねえが、アイツを見てると昔の俊典を思い出しちまってなぁ」
「グラントリノはオールマイトが学生時代の頃から既に…確かに、貴方の言葉には説得力がある。今も認めない私でも、思わず首を頷けてしまうほどに…」
サー・ナイトアイの元相棒とは違って、グラントリノは昔からオールマイトを平和の象徴に育て上げるべく、指導していた身だ。雄英の元教師だったことも含めて、一つ一つの台詞はどうしても説得してしまう。年上、年季、何から何まで経験者として上だからこそ、どうしても納得してしまう。
「しかし、心掛けでは平和の象徴にはなれやしない…」

「陽花はよく言ってたな、「心なくして行動は移せない」って。心は人を動かす原動力だと…心掛けでも良いじゃねえか。それが人をより強く前に進ませてくれる。お前も俊典も奈菜も、一番大好きな言葉だったろ？」
「彼女の言葉一つ一つは、とても優しく太陽のように暖かく包み込んでくれる。言って欲しい言葉を投げかけてくれる、誰もが愛すべき人間だった。私も彼女の優しさや厳しさには尊敬の念を抱いております。しかし、先ほど協議会でも述べたように、私や私達は彼女のような聖人君子にはなれやしない。
　もし彼女のようになれば誰もが平穏に…いや、もう忍の世界など存在しないでしょう」
「お前さんの言ってることは分からんでもないし、予知の件で負い目を感じてるのも否定しない。
　アイツは、誰よりも真っ先に他人の幸せを思いやる女の子だ…だからこそ、平和を望み、『忍の世界を終わらせたかった』」
「……はい」
「忍の世界が終われば、無闇に争う必要もない…妖魔と戦うこともない、善忍と悪忍で殺し合いをしなくても済むと…今はそんな血生臭くはないが…」
「陽花は私やミリオと同じく、遥か先を見据えていた。
　これもまた、彼女が見た色なのでしょうか――？」
「陽花曰く、鍛えれば少し先の未来が見えるって言ってたし、お前の良き理解者だったもんなぁ。ただ、流石にそこまで先の未来は見えないだろう…きっと、長年の勘と優しさだろうな」
「実に彼女らしい」
　思い出すだけで微笑ましく、暖かく、優しく、愛情溢れた女の子。
　誰もが理想として、憧れるであろう最強の忍。勿論、その最強の仕掛けや種も重要人物しか知らないのだが。
「そういえば…オールマイトの後継者ばかり気に留めていたので忘れがちでしたが、忍社会では陽花の後釜として相応しい人物はいるのでしょうか？」

「アイツは両姫を後継者にしたかったそうだが、今となっちゃあ分からねぇ…今度小百合と会ったら聞いて見る。半蔵も黒影も忍の世界に不在な今、オールマイトのように纏めて支える柱がいない。象徴不在な今、俺たちと同じ戦力で穴埋めをするんじゃねえか？まっ、忍のやり方なんてどれも非効率的だけどな」

そう言ってグラントリノは苦笑する。

オールマイトの後継者が緑谷に対して、陽花の後継者は…本来ならば両姫であった。

オールマイトや志村奈菜の関係者とは殆ど無縁に近い。

始りの出逢いは、両親が殺され、妖魔に襲われていた所を陽花が救けてくれたそうだ。

陽花に救われた人間は、彼女を慕う。

其れはきっとオールマイトに近い何かがあるのだろう。彼女が現場に駆けつけてくれるのはとても嬉しい、幸せだ。存在そのものに安堵してしまう。

褒めやかし過ぎてるのではない、事実だ。

「彼女に相応しい後継者が、現れると良いですね――」

エリちゃんの居場所が解るまでの間、インターン生徒は待機となり、学業に専念する形に収まった。

またインターンに関しては一切の口外を禁止とされている為、友人だろうと内容を話した時点で強制的にインターンの参加は取り消されるそうだ。

緑谷はさておき、切島鋭児郎、麗日お茶子、蛙吹梅雨の三人は特に需要と言う訳でもなく、役割は薄いと相澤先生に断言された。そもそもの話、自分の意思で参加してる訳ではないので、無理に危険な場面に身を置く必要性は何処にもないと仰ったのだが、三人は身を引くことなく是が非でもエリちゃん救出と、意気込んでいた。

制止の言葉も闇雲に消され兼ねない…そう判断し捉えた相澤は、敵

連合の目的に触れる手前での活動は許可をするらしい。
つまる話、皆がエリちゃん保護に奮い立つ。
其れは忍学生も同じことだ――

「だぁッ――…!!」
秘立蛇女子学園。
汗と血と涙の結晶が染み渡る修練場に、雅緋の気迫溢れる声が空へと響く。通常の訓練でも、常にやる気と集中力を高め、熱心に取り組む彼女でも、今回は一味違う。
「――――」
雅緋の的確な一撃の攻撃を、さらりと避けていく相手に、思わず心の中で舌打ちをする。
(どんな動きをすればあんな滑らかで簡単に捌かれるんだ…!!)
珍しいことに、対戦相手はなんと小尾斗教官。
カグラの称号を持ち、今は蛇女の教官として忍学校を養成し守り続ける役目を担っている。
女性嫌い、陰湿で根暗で口を開けば罵詈雑言だらけの教官も、いざ戦うとなれば沈着冷静。爬虫類の捕食者のように獲物を見定める。
雅緋の隙も油断もない剣技に、小尾斗はさも余裕そうに避け切っている。
「フンッ」
余裕の序でに鼻で軽く笑うと、小尾斗教官は反撃の体制に入り、武器を振るう。
「ガッ――!?!」
首筋に鋭い痛みが走り、思わず手の動きが止まってしまう。木刀が振るわれた事で、首筋に直撃した雅緋は苦痛に悶えながら、激痛が起きる首に手を置く。
「くっ…あぁ……」
「情けない。俺より力の有る奴が、俺に負けてるのはどう言う事だ。これが生身の実戦だったら6回は殺されてる」

苦痛に悶える雅緋に今度は毒舌でじわじわと相手の精神を毒に浸していくのは、小尾斗教官の得意とする鬼畜な所業だ。
雅緋は息を整えながら、痛みを無理やり押し殺し再戦を申し込む。
「もう一戦、願いします!!」
覇気の篭った声が響き、小尾斗は面倒くさそうな顔を立てながら、木刀を握りしめる。
だが…対して雅緋は真剣――何の変哲も無い木刀を相手に、漆黒に染まった剱での対抗。
カグラと忍学生と言う優劣の差に対して、多少のハンデが必要なのは百も承知だが、何も知らない者から見れば小尾斗教官の方が不利に見えるだろう。
しかも驚くべきことは、雅緋が秘伝忍法を使用してるのに対して、小尾斗は木刀だけ。秘伝忍法を使わず、剣技のみだ。
しかしこの剣技もまた驚嘆すべきなのが、普通に武器を振ってるだけなのに、剣の軌道がまるで生きる蛇のように滑らかに変化し、予測不可能な攻撃が繰り出されることが脅威なのだ。
其れこそまるで個性や忍術を発動してるのではないかと疑いをかけたくなるが、当の本人は忍術すら使用してないので何とも言えない。
小尾斗はカグラの称号こそは背負っているものの、単純な強さは選抜メンバー内の紫は愚か、選抜補欠の芭蕉よりもやや劣り、学園内の忍学生の下忍と同レベル。
にも関わらず、ただ剣技を極めただけでこれ程に天と地の差が開くのは、其れなりの経験を積んだからなのだろう。
尤も――女性嫌いの小尾斗が雅緋の訓練に付き合うこと自体が稀であり、滅多に見ない光景なのだ。これでは明日は雨ならぬ槍が降ってきそうだ。
「遅い、鈍い、雑、全ての動きや経験値が欠けている――着いてくことすらままならんのか強者主義者が」
弱者が強者に葬られてる…というのはこのことか。
弱肉強食の世界が全てだと言い張る雅緋に対し、小尾斗は強肉弱

食、価値観が真逆だ。
女嫌いは勿論、強者こそが絶対と口先で言い張る人間は、性別問わず反吐がでるほど嫌悪を示すらしい。
「いえ…今日で全部、小尾斗教官をも上回ります…!!」
――どうやら、減らず口を叩く余裕は残ってるそうで、思わず不敵な笑みを浮かべてしまう。
雅緋にとって、腕力も肉体の強さも弱い小尾斗教官が、自分をここまで滅多打ちにするなど、昔の自分でも想像付かない現象だろう。
死穢八斎會の周辺地区をヒーロー達が調べてる間、待機状態の雅緋達は、この短期間でより己を磨くことに専念している。
未知なる敵、情報も少ない今、実力を高めて損はないだろう。
「今日も雅緋、頑張ってるなぁ…」
岩陰で、こっそりカメラを撮影するのは、親友の忌夢。どうやら雅緋の努力や汗水垂らす青春？（表現は合ってるのだろうか）をカメラに収めるらしい。
「ボロボロにされるのは癪だし、小尾斗教官を一発ブン殴りたい所はあるけど…我慢しよう……雅緋の揺れる胸、不敵な笑み、汗を流しながら戦う姿…綺麗だなぁ……えへへぇ、下着になって戦えばもっと良いんだけど…」
前言撤回――親友ではなく変態だったらしい。

街の地区から隔離された女学園。
秋の季節にも関わらず、白雪が積もり、ほぼ一年中雪祭り開催が出来ると断言しても良いほどだ。
此処は――死塾月閃女学館。
エリートとして選ばれた忍女学生のみが通い集うお嬢様学校だ。代々歴史に残るこの学園は、戦国時代よりも前に建てられたことから、忍の歴史としては最古に渡り、全国の中でトップに値する評価を誇っている。

入学するのに厳しい分、忍学校を卒業した後は優秀な一人前の忍として活躍することになるだろう。
それでも今の月閃の選抜メンバーは二人、雪泉と叢の2名が今日も訓練に励むのだったが…
「あっ、雪泉ちんじゃん！」
「やっほー！久し振り！」
「皆さん、元気そうで何よりです」
……何故か、三人は月閃に戻ってきた。
「み、皆さん!?」
朝練として叢と一緒に訓練を受けようと（本人は同人誌の即売会「全年齢対象」にでる為漫画を描きたかったが無理矢理引っ張ってきた）してたのだが、朝の校門で三人が登校してる姿を見て、思わず驚嘆。
いや、来て欲しくない訳では無いのだが、神野区という大事件の後にこうやって顔を合わせて再開するのが不思議というか、簡単に言えば寮のままで月閃には戻らないのかとばかり考えていたのだ。
その前まではごく普通だったのだが…
「どうして…えっと、寮制になった今では外出は…」
「担任にも校長にもちゃんと申請して許可も貰ったし、大丈夫だって！」
「そうそう、其れに今日は教師の不在人手不足な月閃を指導する新しい「せんせー」が来るって話でしょ？」
ああ、成る程。
もうこの話は既に知れ渡って…というより、恐らく雄英の根津校長辺りが三人を呼んで話したのだろう。
正確には美野里さんの「せんせー」というのは新しい教官だ。自分たちをより強く、一人前の忍に鍛える為の…
「大方想像は出来ました。初日、初めてお会いになる事も含めて挨拶はしておかなくてはなりません。だから早朝に…」
幾ら雄英高校に転校（任務の都合上）したからとは言えど、彼女ら三人の本部は死塾月閃女学館である。

忍の存在が明らかになった今、その影の印象は少し薄れてはいるものの、月閃女学館の居場所は忍学生を除いて知られていない。
「どんな方、というのは聞いてはおらぬのじゃが……校長曰く、死ぬ気で頑張って励むと良いって言われましたが…」
最初っからいきなりハードル高めの言葉に、不安が過ぎる。
「でも美野里達はあの事件もあってあんまり外にはでちゃ駄目なんじゃ…」
いつ何処で誰が彼女達の素性を監視しているか不明な以上、無闇に…いや、頻繁に月閃に戻るのは宜しくないだろう。
こうやって聞くと監視ストーカーの被害者の発言に聞こえるが、超常社会の今、写輪眼だの千里眼だの扱う忍がいても可笑しくない世代なので、警戒に越したことはないし、少なくとも雄英は厳しい警戒態勢に慎まないと駄目なのだろう。
「恐らく私たち向けの言伝ですね其れ…」
一体どんな輩なのだろう…

一通り朝の訓練を終え、久しく皆と一緒に並んで教室へ入っていく雪泉達五人は、誰もいない空き教室に足を踏み入れる。
此処は選抜メンバーの五人のみが選ばれた特別教室――クラスの人数は勿論五人。教師や教官を除いた選抜メンバー以外は立ち入り禁止とされており、用や相談等は許可を得てからでないと入れないシステムになっている。
謂わば職員室のようなものだ。
自分たちだけの教室は、静かでありながらも、五人全員が揃う光景に、懐かしさと嬉しさがこみ上げてくるのは、自然な流れだろう。
そんな和む空気の中、教室の扉が開かれたことで、一陣の風が吹かれたように流れが変わる。
入って来たのは見慣れぬ大人…月閃の教師陣の中では見かけない

顔なので、先ず在籍してた人間ではないのは確かだろう。
女性は自分達を見渡すと、軽く一礼してから教壇の前に立ち、漸く綺麗な唇を動かす。
「初めまして皆様――本日から死塾月閃女学館の教官を務めて頂く『神白』です、どうぞ宜しく」
教室に入り、教官がやってくる時間は丁度と言っていいタイミングだった。チャイムの五分前ピッタシ、教室に入ってくる姿勢は相澤消太に近いデジャヴ感がある。
「貴女が、私たちを指導する新たな教官……」
雪泉は思わず息を呑みながら、彼女の容姿を見つめる。
綺麗な肌、純白で汚れ一つ残さない白髪は短いハーフアップ、熱の篭らない瞳は冷たくとも美しい。
隅から隅まで綺麗な清潔さを保つ容姿は、言うなれば容姿端麗。カグラの称号を持つ女性は大抵美しいが、神白教官の場合は女性すらも尊敬を抱き、見惚れてしまう。
美しい…いや、綺麗と言うべきか、クールで物静かな印象が更に彼女に魅力を与えてるのだろう。あの雪泉でさえも、思わず見惚れてしまっていたのだから。
「スッゲー美人じゃん！やっば、これシズエが見たら絶対発狂するって!!」
「半蔵おじいちゃんのような人じゃなくて良かったね！」
「おぉ…漫画のキャラクターデザインにピッタリ…よし、次のヒロインはこの人をメインに…」
「皆さん静かにして下さい！教官がまだ自己紹介したばかりでしょう?!」
三人の雑談に注意を施す夜桜は、大分様になってるようで、いつになく自信が高い。雄英で培われたリーダーシップや長年長女として蓄えたお母さん気質は、今も衰えていないらしい。
「……」
当の本人は黙ったまま視線を向けてくる。非常に気不味い雰囲気

が、場の空気に重さを増していく。
「あ、あの…！私は――「死塾月閃女学館選抜メンバー筆頭の雪泉、黒影の孫にして止めどない才覚を備える、優秀な忍学生ですね」えっ…!?」
いても経っても居られず、席を立ち上がり自己紹介をしようとした矢先、沈黙してた彼女の口が再び開けば、先に自分のことを知っていたそうだ。
「他にも雪泉と同学年の叢、二年生の夜桜、一年生の四季と美野里。内三名が任務の都合により雄英高校への転校――貴女達の詳細は予め目に通しておいたのでお気になさらず」
静かで綺麗な声は透き通っており、荒ぶる心や雑念を振り払うような心地良さを感じるのは、気の所為では無いのだろう。
「まあ尤も…雪泉、貴女はカリスマ性もあってか中等部の忍学生でも知らぬ者は早々いないと聞きます。学炎祭でより注目を集めた貴女を知らない者はほぼいないと断言しても良いでしょう」
淡々と言われるとなんてコメントを返せば良いのか悩む雪泉は、ただ苦笑を作るしかなかった。
ニューチューブで放映されていた為、彼女の名前や顔は忍社会では割と知名度が高く噂されている。無論、黒影の孫というのはカグラや腕の立つ忍しか知り得ない情報でもあるが…
「私が来たことで、以前の担任教師とは変わった訓練内容に変更致します。勿論、異論は認めません。今日からより一層厳しい毎日が送られますが、頑張って」
淡々とドライな口調で、バッサリとそう言い捨てた。
普通は「宜しいですか？」と異論を受け付けたりするものなのだが、流石は教官、生徒の反論には聞く耳持たずだ。
「あの…具体的にどんな……」
「最初に始める訓練で説明します。折角なので、貴女達三人もこれを機に訓練を受けましょう」
どうやら三人も強制参加らしい。
薄々と気付いていたが、カグラクラスの教官になると、教師とは

違った厳しさがあると言うか…
とは言ったものの、雄英に在籍していると言う形なので、流石に毎日訓練を強いる訳でもないらしく、今日だけだそうだ。
「はい！美野里から質問！」
元気よく明るみの質問に、神白は軽く「どうぞ」と言葉を発する。
「神白ちゃんは…「ちゃん付けは無しで」…神白教官はどうして月閃の教官になったんですか？」
自己紹介としては余りにも早く短い台詞だったので、美野里が質問をする。そう言えば名前だけしか聞いてないし、どうして突然教官が今日自分達の指導に回ったのか…気になる点は幾つか存在する。
「最初に挙げるのは上層部からの命令です。もう一つは個人的に興味が湧いたから…」
二つ目の理由を口に出すと、何処か少し笑ったような気がして、胸を躍らすような物言いだった。
個人的に…という言葉に少し引っかかりながら、その微笑んでる顔はとても可愛らしい。
「理由は、今の所それだけです」
上層部からの命令、個人的な興味…恐らく本部分は上層部に当たるだろう。そう言えば近頃、違う忍学校にはカグラが教官となって忍生徒を鍛え上げてるらしい。
なので、神白教官が月閃の教官に就いたのも不自然ではなく、エリート校と優秀な忍学校と考えて、寧ろ妥当だと考えるべきだ。
神白教官の好きな事、嫌いな事、もっと具体的な内容を知りたがっていたが、彼女に「其れは今となっては関係ない」と軽くあしらわれ、気になる内容もほぼ聞けず仕舞いに終わったのは語るまでもない。

「はぁ……」
訓練を終え、自室に戻る雪泉は疲労に悩みながら溜息を吐く。全身が悲鳴をあげており、骨にまで染み渡る激痛に、インターン当日はきちんと動けるのかどうか心配になってきた。

どれもこれも全部、神白教官の異常なメニューのお陰（所為）だ。
先ず最初に行われた修行の訓練内容は、1回でも良いので神白教官に攻撃を当てること。それを終えた者は休息を与えるという、序盤からは余り厳しいとは呼び難いものだった。
しかも、神白教官は軽く動くだけで攻撃は繰り出さないし、武器も持たないので体に当てるのを防ぐ術がない。
こう聞くと何とも無いように聞こえるのだが…
『では此処に50体の傀儡を動かしますから、貴女達は傀儡に攻撃を〝当てない〟ように、そして傀儡の攻撃に当たらないようにしっかりと私に攻撃を当てて下さいね。あっ、因みに傀儡を一体への攻撃、破壊をした場合、または傀儡に攻撃を当てられた場合はその回数により私の秘伝忍法で貴女達を殺さない加減で攻撃します』
……何が凄いかと言うと、今まで一度も受けたことが無い、斬新でハードな訓練を何なく受けさせていくスタイルだ。しかもその上罰が容赦ない。
傀儡を破壊する訓練は入学初日でも受けたし、傀儡の攻撃に当たってはならないというのも頷ける。
忍学校卒業試験では、傀儡の攻撃を受けた時点で忍の採用試験は不合格となり、結果的には社会に出ることも叶わない、今までの時間と労働が無駄となり泡となりて消えてしまうのだ。
だが…これ程の数を相手に逃げ回る（カグラ）教官に攻撃を当てるのは、かなりハードルが高い。しかも間違えて傀儡に攻撃を当ててしまい、破壊してしまう危険性を考慮すると、中々にヘビーな内容だ。
その訓練を終えれば次に出された課題が――
『次は私がひたすら木刀で貴女達を攻撃しますから、上手く受け切って忍耐力を鍛えて下さいね。気絶した後は目が覚めてから訓練開始として襲いますので、悪しからず』
受け身の訓練である。
攻撃を躱す回避術を身につけるのならまだしも、カグラの太刀筋を敢えて食らって無理矢理忍耐力を鍛えろという無茶振りには、悍ましさを感じた。

美野里は「ごめん神白ちゃん。何言ってるか美野里、全然分かんないや」と、何故かニコニコしながら煽りモードに突入してしまったのは今でも覚えている。

他にも忍術強化として忍術を長時間扱う訓練（夜桜、四季、美野里は強化合宿で経験済み）、無駄な動きを無くす訓練…とにかく、無事に帰れる保証はないと言うのが、今日を以って初めて知った。

『明日からは学校だけでなく環境や地形を利用した訓練も加えていこうと思いますので、今日のところは挨拶がてら終了としましょう』

……いや、挨拶がてらって何!?!

またもや一同が、心の中で口を揃えた瞬間だった。

「うぅ…流石は教官、訓練内容が人一倍厳しく、宣言通り厳しい毎日が送られそうですね……体が保つかどうか…」

特に厳しかったのは木刀による受け身の訓練。

手加減してるとはいえ、一撃食らっただけで意識が吹き飛ばされそうになってしまうので、我武者羅になって耐え抜くしかなかったのだが、問題なのが其の訓練がいつ終わるのか、という合格基準がイマイチだった。

本人に質問をしたら『気分で』と言われた時は酷かった。実はこの人滅茶苦茶怖い人じゃ…いや、もう既に怖い人なのだが、とにかくいつ終わるのか分からない訓練をやらされるのは、とても悍ましい。

「雪泉――」

すると、背後から自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると書類を抱えてる教官が、此方に近付いてくる。どうやら自分に用があるらしい。

「はい、何でしょうか？」

「この後、お時間は宜しいでしょうか？」

「時間、ですか？ええ、今日はインターンには参加しなくても良いので全然…どうかしたのですか？」

雪泉は首を傾げながら尋ねると、彼女は瞼を閉じて軽く深呼吸をする。

瞼を開けると同時に、柔らかな口が動き出す。

「個人として、貴女にお話ししたいことがありますので…良ければ、一緒に語らいでもしませんか？」

１６８話「神白教官②」

「私が、月閃の教官に？」
　カグラ会議の準備中――書類を纏めてた最中にそう頼まれた神白は、不思議そうに目を丸くする。
「はい、これは上層部には内緒…極秘としてお願い申し上げます神白さん」
「何故、私に打診したのか、教えてくれませんか雪不帰」
　意外な事に、神白に願いを申したのは雪不帰だった。
　沈着冷静――雪の如く美白の肌、白とは対照の漆黒の忍装束を見に纏い、何処までも深い黒の瞳、その中には微かな希望と願望の純粋な白が混ざっていた。
「私がカグラ会議の準備、その他妖魔絡みの任務が山積み盛り沢山、多忙な身である私に願いをする意味が解りません。私が暇ではない事を貴女がよく知っているでしょう」
「ええ…そうですね。承知の上での宣言です」
「では尚更、何故私を当選したのです？私以外にも他に教官として相応しい人間は多くいる…月閃といえば貴女の母校だ。寧ろ貴女が率先して動けば良い、違いますか？」
「……」
　流石だ、神白はやはり手強い。
　戦闘以前に、口論で彼女に敵うものは滅多に存在しない。都合が悪いという安易的な理由は解るのだが…だからと言って引き下がる訳にはいかない。
「雪泉をご存知でしょうか…？」
　彼女の口から、少女の名前が挙げられる。
「勿論、黒影の孫にして期待の新人…学炎祭で半蔵の忍学生と闘ったと…今年の月閃は随分と活気が宜しいようで」
「はい、だからこそ…どうか妹の雪泉を鍛え上げて欲しい。そして、その仲間たちも」
　雪不帰の口から、誰もが聞けば耳を疑うであろう言葉が吐き出され

た。
雪不帰の妹が雪泉…いや、正確には義理の方だろう。雪不帰と雪泉は血は繋がっていない。しかし黒影の弟子として拾われ、共に修行に励んだあの頃は、まるで姉妹のように仲が良かった。
最初は忍に対する嫌悪が有り、打ち解けも出来なければ、中々心を許すことも出来なかったのだが…
「妹……ああ、成る程。読めました」
雪不帰の表情と、口数の少ない台詞から察した神白は、静かに首を縦に頷く。納得してくれたようで何より…
「だったら貴女が会いに行けば良い。その様子だと、どうせ再会すら交わしてないのでしょう？」
「其れは出来ません」
神白の問いかけに、雪不帰は首を横に振る。
もし、再会するのに「気不味い」なんて言葉が出れば話は終わりにするのだが…
「カグラ四天王のリュウを探しに参ります」
「リュウさん…ですか？」
これは流石に予想外だったのか、神白は驚嘆の声を口に漏らし、目を丸くする。意外だ…まさかこの時に限って、いや…丁度良いのかもしれない。
近々カグラ会議が開かれる中、可能であればリュウには出席して欲しい。もう此処の所、7年以上も行方を眩ませている。
「解りました。リュウさんの件に関して、貴女が出るのなら好都合…まさか自ら率先して貴女が動くとは、これまた予想外に…
然しながら――私を選ぶ理由は何ですか？」
月閃に知り合いがいて、その子達の為に鍛えて欲しいのは理解した。
雪不帰が月閃の教え子にならない理由も納得した。
そもそも月閃は古き時代から今も生き続ける古参の忍学校――エリートでありお嬢様学校として知れ渡ってるあの学校は、確かに自分と釣り合うだろう。

しかし…だからと言って態々自分を選ぶ理由は、まだ明かされていない。どうして自分を教官として指導して欲しいのかを、明確にしなければ出来ることもできやしない。
「貴女だからこそ、ですよ。両姫と共に並び立った貴女は、実力は尤も高く、私の知る中で一番に相応しいと思ったまでです」
「成る程、他のカグラより私が実力的に上だと見解したからですか。信頼、単純、軽はずみな動機、なんて聞き飽きたシチュエーションや言葉を使うよりかはまずまず……」
神白は瞼を閉じて考える仕草を取る。
彼女を説得するのはかなり難しい…並の軽い気持ちや理由で彼女に物事を頼める程、簡単ではない。
今回のは理由としては少し単純ではあるが、自分の中で一番に適任だと判断したのが彼女だったからこそ頼んだ訳で。
「――良いでしょう。私も断る理由はない。担任の教師が辞退して指導の人手が足りないんですよね？選抜メンバーを指導するのは並の教師では務まらない」
思ったより早く、了承を得たようだ。
彼女は真面目ではあるが、少し…いや、大分と言って良いほどの変わり者なので、もし頼み事を一蹴されてしまったらどうすれば良いのか…とばかり不安が募っていたが、その心配もないようだ。
「それに死塾月閃女学館は誰もが認めるエリート女学園…妖魔の出現率が上昇してる今、下手すれば妖魔衆が姿を現わす可能性も…」
「現時点で明かされてるのは、まだ陸ノ座――蒼牙鬼のみですが…」
「充分ですよ。一体解っただけで大きな進歩、益々上々…このまま私たちが勝ち続けることを大事に考えましょう。
今私たちに出来ることは、数が多くとも限られてるが…しかし然りとて、充分に価値がある」
妖魔衆の情報は全くの未知と謎が深まっており、情報が伝達と共有が敵わないのが悩ましい種だ。妖魔衆を倒しても、陸の犬神が倒された後に新参者の蒼牙鬼という妖魔が姿を現した。
このまま放っておけば下の順位もまた増えて行くだろう。何とし

ても、止めなければならない。
「話は脱線しましたが、私も月閃に関しては少し興味がある。全くないという訳でもなく、かと言って熱量の高い執着心は持ち合わせていない…
仕事の都合も多量あってより厳しさと多忙になりますが、引き受けましょう」
書類の束を抱え直し、彼女は雪不帰の願いを引き受けた。
彼女の承諾に、雪不帰はもう一度――
「有難う御座います…」
深く頭を下げ、礼をする。
こうして、神白は教官としてフリーで月閃の選抜メンバーを指導する身となった。

死塾月閃女学館――屋上
外は夕焼け色に染まり、日の沈みと共に今日という一日が去って行く感覚を、静かにゆっくりと堪能する。
「此処で見渡す景色は綺麗ですね。夜は星空が見えそうだ」
展望台用の横長い椅子に腰を下ろしながら、冷えた空気を吸う。月閃の屋上はよく月が綺麗に見えて、雪泉はよく一人で屋上にいることが多い。
「其れで、話というのは…」
「雪泉、貴女は雪不帰という女性を知っていますよね？」
「なッ――ええッ!?」
突如繰り出された彼女の質問に、驚愕の色を出してしまう。
どうして今になって『あの人』の名前を、彼女が…黒影のもう一人の弟子である雪不帰の名前を、知っているのだろうか？知人と言う線もあるのだが…あの人の名前が急に出てきたことで、動揺を起こして

しまった。
「ど、どうして…あの人の名前を…」
「やはり…貴女のこの動揺っぷりを察するからに、マトモに再会を交わしていないようですね」
神白は溜息混じりに言葉を零す。だが、表情は冷徹のまま無表情、何も変わらず淡々とした口調だ。
雪不帰と別れたのは自分が今の選抜メンバーと出会う前の頃、雪不帰が黒影に拾われてから一年が経ち、大分仲が深まった中、彼女を保護する者が見つかったらしく、黒影が引き渡したそうだ。
別れの言葉も告げないまま去ってしまったので、印象には残っている。今も雪泉の心の片隅に、溶けない氷のように残っていたのだ。
悲しくも有ったが、また何処かできっと出逢えると――然しまさか、今も生きていたとは…喜びの感情が湧き上がると同時に、驚きが強かった。
「ふ、雪不帰さんは…元気でしたか…？」
「初め出逢った頃と比べれば全然明るい方ですよ。今も元気です」
そういうのは再会してから話すべき事なのだろうが、生憎彼女にそんな躊躇う感情など湧いてこなかった。
「しかし、どうして雪不帰さんの話を…？もしや私の話を聞いてたり…」
「深い内容は聞いてませんが、彼女は貴女のことを妹と呼んでましたよ。家族としての縁をまだ信じて、貴女達を是非鍛え上げて欲しいと…」
「そうだったのですか…」
神白の言伝に、雪泉の目頭は熱を増す。
潤う目に、涙を溜めながら、彼女が生きていた安堵感にホッと一息、胸を撫で下ろす。
そして何より…自分たちの為にと、神白教官に自分達を指導するよう申し込む姿を想像し、嬉しさで心が膨らむ気分だ。
座り込む雪泉の隣に、神白はそっと優しく腰を下ろし、言葉を添える。

「彼女は今、訳が有って貴女とは会えません。ですが、必ず会える日は来ます。貴女が生きてる限り、彼女が生きてる限り…大丈夫」
二人が生きていれば、何度だって再会を果たす事が可能だ。
人間生きてさえいれば…
「良かったです…私、黒影お爺様が亡くなられた後、葬式にもこなかったから、てっきりもう……噂も全く聞きませんし、どうしてるのか、消えてしまったのかとばかり…」
「彼女はそう簡単に死にませんよ。私の親友が繋いでくれた絆は、そう簡単に斬れやしない。そして救われた本人も、生きることを…貴女達の再会を望んでいると思いますよ」

優しく背中を撫でて、彼女に優しい言葉を投げかける。
思っていますよ、なんて他人事の言い方かもしれない。
知人であるとはいえ、家庭内に首を突っ込むなと言われるかもしれない。
でも、神白の言葉は嘘偽りのない、本心を吐露したまでに過ぎない。
「有難う…御座います、神白教官…」
「いいえ、どう致しまして。私はカグラ――そして今は貴女達の教官だ。一人の生徒に対して真剣に向き合い、語らうのは当然の義務ですから」
彼女の心が落ち着くまで、神白はゆっくりと、雪泉の頭を撫で下ろす。とても清らかで、触り心地の良い髪の触感に、ふと昔の頃を思い出す。
『神白ちゃん本当に有難う…!!ずっと、私の親友だからね！神白ちゃんは、私の初めての友達だから――』

あの頃――まだ学生だった時代、友に頭を撫でられた自分と、今の光景が重なり合う。
忘れられない思い出、狂おしくなる感情、昔の自分からは想像の付かない、抱き心地。

今も身長は大して変わらず、あの人の方が高かったけど、こんな気持ちだったのかな。なんて物思いに浸りながら、感情に乏しい己は、ゆっくり口角を釣り上げて、思わず微笑んだ。

漸く心を落ち着かせた雪泉は、その後に彼女とのたわい無い会話を嗜んでいた。

「それで…最近は大変と言いますかその、学業とインターンの両方を成立させるのが厳しくて、よく電車の中で眠気が襲って来てしまうんですよね」

「学業と校外活動の両方を成立させる、か…流石は死塾月閃女学館を率いる選抜メンバーの筆頭だ。その名に恥じぬ行いと、積極性のある精神は、今後とも経験値として活かせるでしょう」

神白は相も変わらず表情に変化は訪れないが、それでも悪い気分でもないらしく、雪泉の会話に耳を通している。

忍学校の学業は、座学だけでなくヒーロー科のように一段と厳しい修行が忍学科には有る。その上でインターンに励む忍学生は、実はそんなにもいない。

「それでその……少し、愚痴…というより、悩んでることが有ったりするんです…」

インターンの詳細、八斎會含めた内容は禁句となっており、口外してはならない決まりになっている。

それ位の規則はきちんと理解してるし、其れを彼女に打ち解けることは出来ない。

…しかし、この拭い切れない暗雲をどうにかして晴らすのは、やはり内容を伏せた上で相談するのがベストだろう。

「もし……自分がもっと早くことの事態に気付いていたら、止められた元凶を、止めることが出来れば……自分が早く相手の事を知っていれば…そんな後悔をしてしまう。そんな場合は、神白教官はどうします？」

内容を伏せた上で悩みを相談すると言うのは結構難しいもので、言

葉を選んだり考えながら話したりで上手く伝えられない。
まだ雪泉はオーバーホールの正体に気付けなかった自分に負い目を感じ、責任を持っているようだ。
対策出来なかったあの過去に負い目を感じてもしょうがないだろう。だけど雪泉はそう簡単に自分は何も悪くないと、考えられないのだ。どうにかしなければ――そんな想いばかりが、彼女の心を締め付ける。
「別に――」
あっさりと、言葉を切り捨てられた。
「私は元々一人で抱え込み、無茶をするのが好きでしたから。だけど、隣で一緒にもっと無茶をしたのが楽しかった。
貴女には互いを分かち合う者と、励めば良い」
だが其れは決して「どうでも良い」、なんて放ったらかしにするような投げやりの言動ではない。
「どうすれば良いか…どうしようもない。過去を変える術も、後悔が生まれた時点で成す術がない。
過去をどうすれば良かったと延々と語っても時間が進むだけの空虚だけしか残らない。
だから――一旦、過去の可能性は全て破り捨てましょう」
彼女の言葉には、心が吸い込まれるように納得する。
其れは同情や励ましの言葉ではなく、真に迫るような、此方をジッと見つめ向き合う彼女の一つ一つの台詞に、心が響いてくる。
「この先に後悔や挫折、時に死に追い詰められることは大人になってからも理不尽にやって来ます。
一般社会の些細なミス、プロのスポーツ選手の敗北、この通り世の中はネガティヴや挫折など、過去にどうすれば良かったかと想い悩み、苦しむ人間は山ほどいる」
これは人間が通過する極自然な当たり前のことであって、通過点を過ぎた後、振り返っても其処には足跡の記憶があるだけで、どうすれば良いのかなんて考えが愚行だ。
「この際に言っておきましょう。

人の努力は万能ではない――何故なら、努力をしても事足りない場面に突入することが多いから」
それこそ、神白の言葉はとても厳しかった。
普通の人間は、多少努力は自分の身にはなる…また、経験は活きると言うが、彼女の言葉にはどれも意外性が有り、心によく響く。
「どれだけ鍛錬を重ねても、敵わない敵は存在する。努力は報われないことが、現実では多く存在する。
努力は結果として報われなくとも、己自身の慰めになると言うのは、綺麗事。幾ら綺麗事を並んでも絵空事でしかない――それでも、人は努力をするしかないんです。人間は、努力するしか取り柄が有りませんから」
例え無駄だとしても、結局人は努力をしなければいけない生き物だ。
そのように、またこの先同じ後悔や挫折、悩んだり苦しんだり辛かったりしても、前に進むしかないのだ。
人間としてやれるべきことはこれっぽっちだけど、やらなければいけない。
「じゃあ…どうすれば良いんですか…？どうして私達にこのように…」
「何を今更――簡単です。仲間と共に生きていけば良い。ただそれだけです」
仲間と共に…
「雪泉、貴女は努力をして世界を滅ぼす大魔王を一人で討ち勝てますか？一人で何から何まで生きていけますか？世界の犯罪者にされて尚、一人で逃げきれますか？
それと同じです。人間一人の力はほんの小さな破片に過ぎない…だからどれだけ多くの努力を重ねても報われない。
しかし、誰かと一緒に何かを励めば、可能性は増えていく」
ＲＰＧのラスボスも、仲間がいれば大魔王を倒せる。
皆んなの協力があれば、生きていける。
世界の犯罪者にされようと、志を共にする者がいれば逃げ切れる。

エリを救いたいと想う、同じ志を持つ人間がいれば、救けることが出来る。

「私が貴女達に厳しい訓練を受けさせるのは、貴女達に生きて欲しいから。でなければ、雪不帰の頼み事を今すぐに破り捨ててますし、こうして会話なんて成立すらしてませんでしたよ。

これから先の事を考えた、私なりの準備です」

これから先も厳しい訓練が待ち構えてる。

神白の訓練は、飛躍的に実力を伸ばすモノ――どれも身につけて役立つ合理的な修行だ。

勿論、彼女だって幾つかの訓練を成し遂げ、今があるのだから。

「貴女が何を体験したのかは存じませんし、強引に詮索する道理はない。しかし――貴女が望むものがあるのなら、思いっきり無茶をしなさい」

欲するものがあるのなら、望むべきものがあるのなら、掴み取れ。ただ口だけで吐く綺麗事ばかりを並べ、何も実績を残さず、ただただ嘆くのは怠慢に過ぎない。

失敗しても良い、やるべき事をやり通せ――失敗だろうと無駄だろうと、使命を全うしろ。

「有難う御座います教官…！」

小さな短い感謝の一言には、沢山の有難うと、吹っ切れた言葉。

どうやら、彼女の心に悩みは吹き飛んだ様子だ。

全てを言葉に表さずとも、感じ取れた神白は「そろそろか…」と心の中で呟き腰を上げる。

「もう、すっかり空が暗くなりました。今日も綺麗な月で、ここで見渡す夜空はとても幻想的だ――ここは、良い場所ですね」

気が付けば外はすっかり暗く、夕日は既に沈んでいた。

街から隔離された忍学校は、自然に愛され余分なものがない。

「では外もすっかり冷え込んできましたし、話は終わりで良いですか？まだ話したい事が有ればどうぞ」

「いえ、流石に教官の時間をこれ以上割いてまで話すことは特に、ないですね。その…凄く、励みになりましたから…」
「そうですか――」
雪泉の意思を確認し終えた神白は、短く言葉を発すると背を向け、屋上扉に手を掛ける。
淡々と冷徹な印象が強く、無愛想に見える彼女を当初、厳しい教官だと思い過ごしていたが、今を確認して、彼女の優しさに触れた雪泉は、感謝の言葉しか出ない。
例え、教官として上の者が下の者の悩みを聞く立場に回ることだと、理解していても。

教官が扉から姿を消すと、雪泉は手を胸に添え、瞼を瞑り
「エリさん…必ず、貴女を救けますから――」
決意を胸に抱いた――

１６９話「死穢八斎會」

　インターン生徒に待機命令を出してから数日後――深夜の１１：３０から一斉送信で情報が送られた。
――死穢八斎會邸突入、被害者（エリ）の救出保護決行日――
八斎會の調査に赴くヒーロー達、忍達の端末から届いた通知に、緊張感が増す。
とうとう…ついに、この時がやって来た――
どれほど待ち侘びたのだろう…たったの数日間、だがしかしそれでも少年少女達にとっては充分に長いもので、その間にエリがまた異能破壊弾を精製してると想像するだけで、胸糞悪さが倍増してしまう。
相手は血も涙もない、非道なヤクザ――小さな組でも、大きく警戒する必要がある。
その気になれば超人社会を変え、危機的な状況に追い込ませる事が可能なのだ、個性破壊弾の他に、何か隠してることもあり得なくもない。
「ついに…決行の刻が訪れた…」
端末を開き、一人口に零す雪泉は、携帯画面を睨みつける。
外見は少しボロボロで、神白教官にこっぴどく指導を受けた形跡が残っている。
だが…僅かな短期間でも、充分に価値のあるもので、それなりの成果は得られただろう。
「待ってて下さいねエリさん、私は必ずや…貴女を救いましょう」
今思えば、自分はこんなにも変わったのだなぁと、心の中で呟く。
黒影お爺様が亡くなり、正義の後継者になることを望んだ自分は、余りにも純粋過ぎた。
悪こそ滅ぶべき存在であり、弱者も、悪と繋がる善も死ぬべきものだと決めつけていた。だが、今となってはもう過ぎた話で、現代（今）の私は、小さな女の子を救う善忍だ。

黒影の弟子でもあり、月閃を導く選抜筆頭。
インターンに於いても、何処へ赴こうと、忍の業を背負う限り、その誇りは永遠に張られ行くものだ。
「――黒影お爺様…教官が言ってました。努力は万能ではない…と。
己が研鑽した力は必ずしも、全てに於いて通じるとは呼び難く、役立つとは限らない。
必ず成功する保証は何処にもなく、嘗て私達がお爺様の理想を叶えるべく、絶対的な力で悪をこの世から無くすことを誓ったあの夢は、努力を重ねようが叶えれるものではない、幻想だったと…今なら充分に理解できる」
黒影お爺様も病室の寝床に伏せていた頃は、自分たちにそう言いたかったのではないか？
嘗て忍として道を誤め、抜忍として追われていた自分と同じ境遇にはさせまいと――月閃入学の刻、全盛期の頃だった自分の所業を話したのは、自分が理想を叶える後継者ではなく、間違った正義に偏るのを防ぐため、自分の首を絞める愚行を阻止するために、腹を括って話したのだ。
だからこそ、学炎祭を通し、神野区を終え、インターンに参加して改めて理解した。

自分の培ったこの力は、己の全うすべき使命の為に存在し、誰かの笑顔を作り、誰かの幸せを守り、誰かの未来を明るく照らす。
誰かの為に、善を成す力なのだと――

「はあああぁぁ?!!本拠地にいるぅうぅ!?」
決行日の朝一――インターン所属の者はサー・ナイトアイ事務所に集合し、ミーティングを行うことだった。
数日間丸々いなかった学生達にとってはちゃらんぽらんではあるものの、プロヒーロー達の仕事のお陰で漸く乗り込める時期になった

のだが…

サー・ナイトアイの調査によると、本人はそのまま何処かへ逃亡を図らず、別の基地へ移動することもなく（そもそも八斎會邸以外存在しないことが判明）、ただただ本拠地にいたそうだ。

これはサー・ナイトアイ自身の証言により実施された、嘘偽りのない真実だ。

「しかし良く分かったな、プロが八斎會の関連施設近辺を調査していたにも関わらず…どうやった？」

「先日、近くのデパートで構成員が女児向け、天誅ガールズ♡と、モーレツプリユア１０！シリーズのフィギュアを購入してた際に予知を使いました」

「なんやそのギャグ展開!!ちゅーか今の聞いて俺の脳が震えたんやけど!?どー言うこっちゃ！なんで女児向けやねん！世界が広いとかそーゆーもんか?!」

「そうですね、あの年頃でもそう言う趣味を持つ人間はいる…大抵の大人、勿論私もですがリゼロのレムやごちうさのチノをチョイスするのが妥当…ほら、序でに私も買っちゃいました。今作はリアリティが実現されてて大変興味深い…」

「そう言う問題ちゃうやろ？」

この時、サーに対して全員の脳が震えた。

具体的にどう言葉を発せば良いのか分からないが、こんなサラリーマンな格好をしたオッさんが美少女フィギュアをマジマジと眺め…いや、フィギュアに対するオタクの性質は分からなくもない。人の趣味や好みをどうこういう権利は少なからず自分達にはない…のだが、自分達があれだけ必死に八斎會の調査に全力を尽くしていたのに、この男はフィギュアを買いに行ってたのだ。

敢えてもう一度言おう――脳が震えた。

「どうして美少女フィギュア買った際に予知を使って、八斎會の居場所を暴いたんだ？話しがブッ飛んで頭が回らないのだが…」

主に脳が震えたせいで――とは口に出さなかった。
「八斎會の構成員の言葉に引っかかりがあった…本当にプリユアと天誅ガールズが好きなら、１０年前のプリユアの名前が出る筈もなく――」
「アレだけ人前で予知使うの躊躇ってたのに良いのかよ！」
「言った筈だ、これは奥の手…いざという時の為に使う最終手段。そのお陰で八斎會の本拠地にエリちゃんがいる事も判明――」
その他――令状の作成、若頭が家にいる時間帯も把握、八斎會のリストも、一通りの準備、必要不可欠な要素は全て整えた。
後は奴等の本拠地に乗り込み、被害者のエリちゃんの安全な確保と、八斎會の構成員の身柄を取り押さえるのが目標だ。
「漸く万全な準備が整った――今日より警察と共に八斎會に突入!!」
策を練り、より成功に近い確率へ上げ、今日を以ってエリの救出が決行された。

八斎會邸宅――幾つもの地下室が造られた迷路屋敷。
地下の構造は届出をしてないし、オーバーホールの個性で成り立ってるので、サー・ナイトアイが予知を使う前までは知る由もなかっただろう。
「若、何処に行くんスか？」
和室へと入ろうとする治崎に、死穢八斎會『四天王』の一人――切裂竜燐は愛用のペストマスクを装着しながら、問いかける。
煌めく竜の鱗は日の当たらない廊下でも輝きを放ち、キラキラと光る鋭利な鱗は、触れただけで裂かれそうだ。
「ちょっとな、親父に挨拶してくる。準備は終わったか？今日の朝一は随分と騒がしい…」
「何時だって何処だって、若の夢を叶える為の準備はしてるッスよ俺たち。その為なら命を投げる行為だって躊躇わない」
「そうか、良い心がけだ」

竜燐の言葉を聞いた治崎は軽く頷くと、襖を開ける。点滴を打ち込まれてる老人は、瞼を開けず、ただただ植物人間のように眠っている。病院でよく見る備品が揃っており、ベットの上で伏せてる老人に優しく、声を出す。
「悪い、親父…今日は一段と騒がしくなりそうだ」

死穢八斎會本拠地の玄関前――警察署から協力の了承を得て、数百人の警察官が邸宅を囲い、ヒーローは勿論、忍と言った学生、三勢力が一つとなって結託し、本拠地の前で構えている。
「八斎會の構成員、主に重要な人物の個性を洗いざらいリストアップしました。攻め入る前にチェックを、個性で駆使されてしまえば捜索は難航してしまう」
全員に手渡された個性一覧を見渡しながら、聞いたこともない個性がチラホラと伺える。
この先、エリの救助を妨害する輩は必ず増える。だからよりエリ救出の可能性に近づく為に、警察も少ない時間と労働を強いて資料に纏めることが出来た。
警察や探偵業のようなことがら…隅から隅までやることは山積みであり、手続きが必要であり面倒な部分もある。因みに警察に関してはヒーロー学科でも教えてくれないので、新人ヒーローはかなり大変だったりもする。
「あの、すいません塚内さんはいないんですか?グラントリノさんもいませんし…」
全員がリストに目を通す中、緑谷が控えめに手を上げて発言する。
「ああ、塚内なら連合の件でな…向こうの捜索で動いたと情報が入ったらしい。グラントリノも付き添いと調査の手伝いとして加担しに行ったよ」
塚内とグラントリノは、黒霧が動いたと情報が入り、其方に出向してるようだ。

黒霧という組織内での最重要人を捕らえれば、捜査も捗り此方側は重畳。逃げ道を外堀から埋め、連合を捕縛。ワープゲートが希少な上に対策も難航するので、滅多にないチャンスだろう。そう考えると、特殊部隊のグラントリノと塚内がいないのも頷ける。

「成る程…そうだったんですね！」

もしかしたらだが、八斎會と共に敵連合を一網打尽！なんて展開があったらと想像すると胸が弾む。刻一刻も早く、奴等の居場所を突き止めて、捕まって欲しいのが緑谷の本音だ。

「ヒーローと忍、多少は手荒になっても仕方がない。少しでも怪しい挙動や反抗の意思が見えたら、直ぐに対応を頼む！」

相手は仮にも今日まで生き延びた極道者――油断は禁物、己の責務を全うすること。

「じゃあ、令状バーッと読み上げて行くから、速やかに対応をお願いします！」

警察官のリーダーが、深々と頭を下げ、玄関前のインターホンへと歩み寄る。足音を立てないよう、此方側に気付かれないように――

「それにしても、初めてだな――善忍と共に任務に当たるだけでなく、ヒーローや警察と一緒か…なんとも複雑でもあり、不思議な気分だ」

「同感ですね、当初の私でも想像つかない事でしょう…悪忍と共に任務に当たるなど、昔の私だったらどうかしてた」

インターン活動の待機命令を出されてる中、数日間こっぴりみっちりと教官にしごかれた二人は、横に並び立っていた。

僅かな数日間でも、大海原の一滴ほどでも、努力を自分のモノに出来ただけまだマシで、力は付いてる方だろう。

雪泉も同じく――だが彼女にとって教官に鍛えられた数日間は、何週間分もの鍛錬を積んだと自負しても良いだろう。

神白教官の言葉を、雪泉は思い出す。

『良いですか、自分よりも上の存在と対峙し闘うことは貴重な時間です。普段貴女達が独自に行う修行よりも効率が良く、私の修行を受けるだけで一日に一週間分の実力が付くと想定しなさい。

独自で実力を高めるよりも、上の者との戦闘は己の強さを飛躍的に

伸ばします。だから、私は貴女には特別、更にハードな修行を与えるので、どうか頑張って』

とは言っても、至難の訓練が神白との手合わせ。

秘伝忍法も容赦なく使ってくるし、と言うか寧ろほぼ反応が取れなかったというまでがある。

彼女のスピードには全然追いつかないし、秘伝忍法も食らってしまうし…兎に角、徹底的に滅多打ちにすると言わんばかりの猛攻な訓練を受けられた。これが選抜筆頭でなければ、天に召されてただろうとさえ考えてしまう。

「ケッ、何でも良いけどよ、本当に忍学生連れ込んで大丈夫なのかよ。善忍や悪忍を信じる警察もどーかしてるぜ」

舌打ちをしながら、忍学生に悪態を吐くロックロックは、大変ご機嫌斜めである。其れは勿論、雪泉や雅緋だけでなく、近くのヒーローにも聞こえるような声の音量で。

「随分と、私たちは嫌われてるんだな」

「ったりめーだろ、テメェら信じて背中を刺されるなんて御免だね。直ぐに署に放り込まれろってんだ」

「嫌なこと言うやっちゃな…もうそういうの関係ないってテレビでもゆーてたろ？本当に感じ悪いなぁお前さん」

雅緋と雪泉への棘の刺さる言葉を吐き散らすロックロックに、横で環にカジキを食わせてるファットガムがムスッとした反応で反発する。

「フン…！まあ良いさ、今回の任務で何の害もなく、足手まといにならないなら忍への見方も変わってやるよ。

其れにだ――相手は敵のみしかいねえ八斎會。今日まで陰でコソコソと怯えながら生きてきた日陰者に、社会の陰でコソコソ仕事を働くコイツらともお似合いだろう」

八斎會は今日まで生き延びた弱小組織――ヒーローの解体から逃げ果せただけで、実際はマトモに闘り会える訳でもないと断言するロックロック。

チャイムが鳴った刹那――

「なんなんですかぁ――？」

轟――!!と豪快な破壊音と共に、呑気なセリフが耳を打つ。
玄関が拳で破壊され、警察官の数人が吹っ飛び、拳が壁を抉り壊す。
――は？
と、全員が唖然とする真中、もう片方の拳が壁を壊し、今度は目前の忍学生に拳を打つ。
「クッ――!?!!」
玄関から突如現れた巨漢の拳を、麗王は咄嗟にレーザーブレードを抜いて受け止めるが、屈強な拳はそのまま彼女を押しのける。
ペストマスクを被る大男は、更にもう一撃と拳を振りかざす。
「なッ――にいいいいいい!!??」

まさか玄関で待ち構えてるとはいざ知らず、更に一言加えればチャイムを鳴らした瞬間に相手が攻撃してくるとは、想像も付かなかった。
「ったく、迷惑なんスよねぇ…朝っぱらからこんな大人数で～…」
「力也だ！八斎會の幹部――『活瓶力也』!!おいおいオイオイ誰か早くコイツを止めてくれェ!!」
死穢八斎會・八斎衆鉄砲玉――活瓶力也
個性――『活力吸収』 体に触れた相手の活力を吸収し、体のサイズを大きくするパワーファイターな個性。
活力を吸われると弱体化してしまい、大きくなるに連れてパワーも強力になるので、真正面からの殴り合いはかなり不利である。
「おぉ？何、俺の個性知ってんの？つか忍と組んでるってやっぱりマジか、よく見たら美少女もいんじゃん、ははっ！おっぱいデケェ!!」
嘲笑を浮かべながら、間合いを拳でひたすらブン殴り、暴虐の限り

を尽くしていく。
「よし！吸ったから少し元気が湧いて来たぞぉ～……！もぉ～こんな朝っぱらから…何の用ですかぁ!!!」
渾身の拳を、銃口を向ける警察官に振るう。
此方も対抗するべく構えるが――
「どけッ――邪魔だ」
空中を飛び、警察官の群を飛び越える総司は、華麗な動きで鎖鎌を巧みに扱う。
「おいおい金髪嬢ちゃん！エロい身体してんなぁ俺と一発ヤらせろよおぉ！」
「下衆が――身の程を弁えろ」
総司の熱の籠らない冷徹な言葉と共に、首を鎖で巻いて行く。矛先として振るわれた拳は、総司に直撃せず――
「ここは私たちリューキュウ事務所に任せなさい」
突如として巨大化したリューキュウが、力也の拳を受け止める。
巨大化――正確には発現型と言えよう、四足歩行と巨大な翼を広げるドラゴンに変身したのだ。
「彼はリューキュウ事務所で対処し、貴方達の後を追います。皆は引き続き仕事の方をお願いします」
そのまま、総司が地面に着地し、鎖鎌を思いっきり下に振り降ろすと――
――ズドォン!!
「がぁハ――ッ!?」
顎を打ち、地面に倒れ伏せる。
起き上がろうとする力也をリューキュウが押さえ込み、完全に抵抗出来ない状態にさせ、身柄を拘束する。
「サポート回るよ！」
「ケロ」
「はい！」

ねじれ、お茶子、蛙吹の三名はリューキュウのサポートに徹し、総司はリューキュウと同じく抵抗する暇を与えないよう全力を尽くすまで。
「もうよぉ分からんから早よ行け!!乗り込むでカチコミや!!」
「いきなり幹部のお出ましとは…私達を妨害する気満々だな…!」
ファットガムの横で悪態を吐く雅緋は、皆と同じく流れに沿うよう動いて行く。
「雅緋、芭蕉」
ふと、そんな殺到とする人波の中、力也を抑える総司の声が、耳に届く。
「しくじるなよ――」
短く、でもって力強く頼もしい総司の言葉が胸に届く。人混みが激しい中、雅緋だけでなく芭蕉にも想いは伝わり、自然と心が熱くなる。
「ああ――!
「はい!有難う御座います総司さん!」
後輩に、同年期に、期待と共に仕事を託された二人の心は熱く灯火が点く。ここまで言われて、益々失敗は許されない。
プレッシャーではない、己の内から噴き上がる使命感が、より強く二人を衝き動かす。
「蛙吹さんに麗日さん、ねじれさんも…感謝します――!!」
リューキュウと総司のサポートに徹する三人に視線を飛ばしながら、雪泉は滑走の如く八斎會邸へと足を運ぶ。
こうなった以上、正面から動いてサーから渡された地下ルートのマップを真っ直ぐに突っ走るしかない――

地下ルート――暗くジメジメとした廊下を歩きながら、治崎は訝しげに眉をひそめる。
「思ったより、早いな…」
「これ、大人数が一斉に押し寄せて来てやすね。同じ方向に、全速力で――つまり、行きたい場所が決まってる、多分ここの地下室のことも

バレてやすね…見つかったらおじゃんですぜ」
若頭補佐クロノは、天井を見上げながら呟く。
地下ルートがバレてもなお、声のトーンは変わらず、冷静なままである。
「いつかはこうなると想定してた…だが、準備が整った今は此処も時期に必要と無くなるし…
「俺は此処にはいない」「アイツらが勝手に暴れた」そう言うことにしておくか…その為に育てた駒がいるし」
治崎は側に置く人間を選定すると、マスクを着用させた側に人間を置き汚い仕事をさせる。汚れた人間にマスクを付けるのは、同じ空気を吸いたくないからであり、信頼ではなく駒としての証明である。
「死穢八斎會鉄砲玉、そして死穢八斎會四天王――」
十二人の駒が刺客として奴等の行方を阻む。
アイツらが時間を稼ぐその間、エリ諸共――全て運んで隠し通す。
鉄砲玉――即ち己の命を顧みないヤクザの世界ではよく使われる者のこと。敵対者を問答無用で殺し、最悪の場合はその場で命を堕とすこともある。
それらの死すら顧みず、オーバーホールの為に命を捧げ、邪魔者を徹底的に排除する。
その中で屈指の実力として選ばれたメンバーが四天王。
奴等もまた、全力で侵入者を排除するだろう。
或る者は――煌めく鱗を研ぎ澄まし
或る者は――二本の黒刀を携帯する、短髪な青髪の幼女
或る者は――体が黒くゴム質で造られたかのような、表情が読めない大男
或る者は――ひょっとこの面を被り、踊り狂う男
賽は投げられた――

１７０話「八斎衆・鉄砲玉」

八斎會邸の敷地内に足を踏み入れると、騒ぎに駆けつけた構成員達がぞろぞろと溢れ返り、一言でこの状況を表すなら〝混沌〟が妥当だろう――

顔付きの悪い、ガラの悪い、目立ちが悪い、凶悪と呼ぶに等しい大人たちと揉め事になってしまう。

「なんじゃあテメェらぁ!!何処の組のモンだ？おぉ!?」

「何が令状じゃあ！人様の敷地内に入って喧嘩売っとんのかぁ!?」

「だから警察だって言ってるでしょ！捜査なの！大人しくしてて下さい!!」

波瀾万丈――大人しく門の前で出動準備をしてた緊迫感と静寂さは、今となってはただ混乱導く緊迫感だけが押し寄せてくる。

構成員達の顔を見る限り、迎撃…と言う訳でもなく、かと言って知らない素振りをしてる様子も伺えない。

「これ…怪しい素ぶりなんてレベルじゃないですよ…！」

「勘付かれないんじゃなかったのかよ!!オイオイ益々不安になってきたぜ俺ぁよぉ!!」

「せやな…それどころか向こうはウチ等が勝手に乗り込んで喧嘩売りに来たと思っとる!!子分達は知らされてないんかこのこと？」

組の門達による総出、明らかに壊滅的な行動。

もっとやりようによっては待ち伏せや個性を駆使した連携、足を引っ張るなら幾らでもあるのに…

「それどころか活瓶力也を除いて幹部が姿を現さないのもどうか……恐らく計画の核であるエリちゃんを連れて証拠隠蔽と逃走を図る気だ…」

「問題は何処から情報が漏れたか…が、かなりの謎。一体全体どうなって…」

サー・ナイトアイの言葉には一理ある。環の言い分は誰もが口に出

したかった言葉でも有る。
何処から情報が露出したのか？
何故、奴等はまるで見計らったように此方の行動が読めたのか？
何時から自分たちの計画に勘付いたのか？
考えれば考えるほどに謎は深まるばかりだが、取り敢えず今言えることは、構成員達は治崎と幹部が証拠隠蔽と逃走することを知らされていない。
あったとしても、もっとスマートなやり手があったからだ。
恐らく子分達は捨て駒――責任を玄関の者達に擦り付ける気なのだろう。
「何にせよ酷えじゃねえか！子分に責任押し付けて逃げ出そうなんて漢でもなんでもねぇよ!!」
烈怒頼雄斗の怒号が飛び弾む。
切島鋭児郎は何に対しても情が勝り、熱くなる熱血漢――体育会系だ。相手の事情は知らないにせよ、結束を固めた者同士、まるで切り棄てるような治崎のやり手に思わずカットなる。
「……」
だが当然――忍にも時と場合によっては、死穢八斎會のように捨て駒として扱われる身分が有るので、ご尤もな意見でも口を閉ざしてしまうのは、自覚があるからだろう。
実際に自分達が一人前の忍となって、そのような粗末に扱われても、文句は言えない仕事が忍なのだから。
「…ええ、そうですね。上の者が下の者に罪を擦り付けるなど言語両断――責任転嫁も甚だしい…！」
しかし唯一此処で反論出来たのは、氷風を巧みに扱い加速を上げてる雪泉だった。
「だからこそ――何処まで逃げ果てようと、必ず罪は償わせます」
覇気の篭った声は冷気を発しており、なお彼女の心に憤慨の灯火が点いてるのは、皆も察せるだろう。

切島と同じく、情に深いのは雪泉も同じなのだ――
「止まれ――」
刹那――サーが制止の声を掛けると、一同の動きが止まる。
何も変哲のない、墨筆で描かれた八斎會という墨字の張り紙、花瓶に生けた花、何の仕掛けもない場所だ。
「どうかしたのですか？」
「私の見た予知は、此処に隠し通路がある…花瓶を退かすと…」
小さなスイッチが現れた。
牡丹のような赤い円形のスイッチを押し、床の仕掛けを両手で押す。ガガガ…と聞き慣れない音が響き、思わず目を見開く。
「まさか…　八斎會の屋敷にこんな仕掛けが…まるで私たち蛇女と同じカラクリ仕掛けの忍屋敷みたいだ」
「届出のない地下の構造も含め、私たちの常識を覆すことばかりが起きますね…警戒しておいて損は無いと言うものの、私達でも気付きませんでしたよ」
調べれば仕掛けには気付けたのだろうが、生憎此方は時間に制限が有り、少しの立ち止まりも許されない。
だからこそ、サーの予知のお陰で無駄な時間を省き、最低限の速さで追いつける。
「仕掛け扉を開けた先に八斎會の構成員が待ち伏せてます。バブルガール、センチピーダー」
「了解！」
サーの予知は絶対だ。
装置を起動し、地下通路の入り口が出てこれば、後は待ち伏せしてる構成員が個性を駆使して邪魔をしてくる戦法。
此れは忍学校の侵入や、上層部でもよくあることだ。
「テメェらあああああーーーー!!!」
数名の構成員が、文字通り出入り口から飛びかかる。
やはりサーの予知の宣言通りの結果となり、予め準備をしてた相棒

の二人は遅れを取るはずもなく。
「『センチコイル』」
伸縮自在の両腕は直ぐ様、敵意を向ける構成員を二人を巻いて、上下に激しく揺さぶる。
バブルガールは掌から泡を放出し、男が手に持つナイフを躱し、背後に回って腕を拘束し、泡を目に当てる。お茶子と同じく武術を身につけてるのか、その動きに無駄はない。
慣れた動き、即座に対応可能な連携で、迎撃者を拘束する二人は、流石はサー・ナイトアイが見込んだ相棒だ。
センチピーダー――個性『ムカデ』
ムカデっぽい外見をした異形型の個性。気配を巧妙に消したり、腕を長く伸ばして相手を巻きつけることも可能。敵の戦意を削るのを得意とする。
バブルガール――個性『バブル』
露出された肌から泡を放出する個性。人様の目に当てるととても目が染みるので、地味に痛い。
「サー!3人を大人しくさせますので!警察が保護した後、私もセンチピーダーと一緒に合流します!」
目に泡が入ったことで自然と涙が止まらない構成員は、悲鳴を叫びながら、バブルガールの武術で腕を固められる。身動きしても抵抗できず、戦意が削がれてるようだ。
「我々は足を止める訳にはいかない――刻一刻も早く、治崎が逃げ果せる前に!!」
エリを救う。
その目的が、この場に赴く全員の心を起動し、心の原動力として突き動かす。
焦りも有る、だが選択肢は見誤らない。
心に余裕がないかと聞かれても、曖昧な返事でしか言葉に返さないが、兎に角自分たちはエリを救わなければならない。オーバーホールを始めた構成員達の身柄を確保するのも、同じく大事な目的でも有るが。

「おい何だありゃあ!?」
途端――ロックロックが訝しげな目で目前の通路を見やる。
サーがマッピングした通路の其の先は、唯の壁――其の先に道というモノが存在しない。
「行き止まり…?どういう事だ?このルートで間違い無いんだよな?」
「ええ、予知で視たルートは確かに此処で間違いない。私の予知に間違いは存在しない」
「じゃあ何で壁があるんだ!?一体どうなってやがる説明しろナイトアイ!!」
正規のルートの筈なのに、其処には見覚えのない壁が隔てており、一同は困惑する。中には一名――ロックロックが怒号を飛ばすも、ミリオが動き出す。
「俺、見てきます!」
ミリオが先頭に立つと、其のまま壁に向かって走っていく。ミリオの個性は『透過』――個性を鍛え、無敵と呼ばれる個性の彼ならば、壁の向こうを調べる事は可能。
因みに今はヒーローコスチュームを着用してる為、ミリオは裸にならず、原材料は今まで切った髪が使用されているので、効果的に大丈夫なのだろう。
(隔たれた壁……通路の先はやっぱり…!)
壁を通過すると其処には、未知なる通路が繋がっていた。
つまり、この壁は障害…自分達を少しでも足止める為の時間稼ぎ。通路はあった、しかし壁が隔ててるとなるとこの仕業は恐らく…
「サー!調べたところこの先に通路が繋がってます!壁は恐らく俺たちへの妨害…治崎の個性によるものかと!」
治崎――オーバーホールという個性は、分解と修復が可能の死柄木弔の上位互換に値する部類の個性だ。
触れただけで対象を破壊し修復する個性なら、この立ち塞ぐ壁の原理も納得が行くだろう…いや、推測すればこの地下全体そのものが治崎の作ったルートなのでは無いだろうか?

「成る程、治崎の触れたモノを分解して修復ってなんなら、一度壊して治して壁を作ることも出来るもんな。ケッ…小賢しい!!」
「完全に来るなって言ってるようなもんやんけ!」
治崎の仕業だと理解するとロックロックは舌打ちをする。小細工で足止めを食らってしまうことすら癪に触るファットガムも、思わず拳を握りしめる。
「だったら俺らの出番だな!!緑谷!」
「――うん!!」
厚い壁を前に漢気のある声で名前を呼ぶ切島に、緑谷は頷く。
壁は厚い。
コンクリートで固めた地下の壁は並の暴行では歯が立たない。
ならば壁をぶち破るには、パワーファイターがベストだろう。
「烈怒頑斗裂屠――!!」
「シュートスタイル――!!」
硬化された渾身のボディーブロー、
放たれたワン・フォー・オールの足技、
拳と足の連携は、隔つ分厚い壁を破壊し、困難を突破した――
「おぉ、やるじゃねえか」
「お手柄です緑谷さん、切島さん」
後方で二人の活躍に褒め言葉を漏らすロックロックは意外そうに、雪泉は扇を口元に当てる。
「この調子でどんどん頼むで――」
途端――次の光景にファットガムの声が途切れてしまう。目の前の光景に、一同は思わず息を呑んでしまい、怪訝そうに目を細める。
「これは…?!!」
壁を壊した世界は、とても異次元地味た光景となっていた。
壁が、天井が、通路が、形というありとあらゆる物体そのもの、地下ルートの構造が、歪んでいた――
「な、何なのでしょうかコレ…ミリオさん?」

「違う！俺が様子を見に行った際にこんなのなかった！」
　芭蕉の恐る恐るの問いかけに、ミリオも訝しげに表情を歪ませる。一体これは…これも、治崎の個性による原理で成り立ってるとは思えず、原因は治崎本人ではないとの疑いがあるが…
「これは間違いねぇ…入中だ!!本部長、入中による『ミミック』の個性――!!」
　率先する警察官は、声を貼りながら銃口を通路の端っこに捨てられた人形に差し向ける。
　そのゆるふわとした人形は間違いなく、本部長が常に入り込んでたソレだった。
　側には薬剤らしき部品がカラン…と転がっている。
「こ、これ全体を操って…？」
「いや、だとすると屋敷に入った途端、通路を変えれば良い…だが其れをしないということは、出来ないという事……
　其れに加えて、ヤツの個性は此処まで強力じゃない、精々冷蔵庫程度しか形を変えれない筈だ…一体どうやって？」
「かなりキツめのトリガーを使用すれば、出来なくもないんやないかなぁ…」
　ファットガムは間抜けの殻となった入中の人形の近くに歩み寄ると、転がってた薬剤注入器を手に持つ。
「やっぱり…これ個性を強制的に活発させるトリガーやで。八斎會はこう言った違法薬も取り扱ってる…
　こりゃあいよいよ本格的に気合入れると益々逃してまう！」
　本来なら弱小個性、戦闘とはほぼ無縁の個性も、トリガーを使用する事で此処まで厄介な個性へと成り変わる。
　因みに以前、芭蕉と夕焼が対峙した際に切島と出逢ったチンピラも、トリガーを使用して相当な凶人に成り果てたそうだ。
「伊佐奈が使ってた違法薬物か…！全く、こんな所で時間を食いたくないが…壁を一々壊してモグラみたいに正規ルートを通っても、遅い…」
「そ、それじゃあ……永遠にこのまま……？」

「いや、其れは無い――」
弱気な夕焼に、ファットガムが口を開き否定する。
「このブースト薬はキツめの効果の分、持ってもそんな３０分もかからへん。しかし効果切れを望んでもその頃に逃げられたらアイツらの勝ち…ここは障害を切り抜けて正面突破するしかないで!!」
薬物乱用取締として活動してたファットガムは、一眼見るだけで薬の持続時間や危険な量など、嫌にでも感覚が脳に染み付いている。昔、武闘派だった頃はよくトリガーを使用した敵とも鉢合わせにもなったりしたものだ。
「だ、だけど……入中はあらゆる物質を変化自在に操ることができる…じゃ、じゃあ…このまま生き埋めに…!」
「いいや――今ならまだ間に合う筈だ」
「？」
夕焼と同じく弱気な環が声を震わせネガティブ思考に回巡した所を、雅緋が抗議する。
その顔は、いやに冷静で落ち着きがあって、最悪な想像を働いてもなお、表情は微塵たりとも変わっていなかった。
「もし其れが可能なら、最初っから私たちを押し潰せば良い――入中とやらも、全体を操るのが難しいからこそ手間取っている。さっさと通路を変形し、無限迷宮に変えた後に圧殺すれば良いものを…今私たちが平然としてるのがその証拠だ――」
もし簡単に地下通路を操り、全てを書き換える能力なら、今すぐルートを作り変えれば良いのに、敵は自分たちに攻撃を仕掛けない。
恐らく、この地下全体を操作するのが極めて困難だからだろう。雅緋の推測は的を得ていた。
皆の死角から、壁に目が現れる。
(成る程…あの白髪の生娘……どうやら思考能力が上なだけに闘いに於ける勘が長けてるのだろう…忍とやらがどれほどの強者かと予め聞いてはいたが…これはかなり厄介だ、早急に消さなければ!!)
本部長――入中は雅緋を敵視しながら操作に戻る。
冷蔵庫程度しか扱えなかった入中にとって、地下全体を操作するの

は不可能。可能だとすれば自分の視界に映り、近くにある場合のみ。
範囲外の遠隔操作が出来ないのがその証拠を裏付けており、また地下の構造を動かすだけでトリガーを使用してるとはいえ相当な体力と筋力を消費するのだ。
「イレイザー、奴の個性は消せないのか？」
「すいません、俺の抹消は本体を見たものを消すだけで、能力そのものを見ても消せやしません。それにさっきからずっと発動してますが…効果なしのようです」
つまり、イレイザー・ヘッドの個性は今の状況では全く効果がない…
「俺、透過の個性で最短ルートを真っ直ぐに突き進みます!!どれだけ道を歪ませようが、目的さえ分かっていれば俺の個性の前でミミックは意味を成さない!!」
「ルミリオン――!!」
歪み形が少しずつ変わっていく地下を、すり抜け目的地へと進んでいく。そんなルミリオンの背中に投げるサンイーターの声でも振り返らない。
だが…
「環、俺やねじれがいない今…後は任せた――!!」
最後にルミリオンは言葉を残し、壁に吸い込まれるように消えていった……
「ミリオ…
そうだ、ミリオは何時だって止まることを知らない。
余計なお節介焼きで、誰よりも暑く、一番に無茶をする。
どんな時でもお前は俺の……
（――壁をすり抜けた…!?しかし其れは幾ら何でも防ぎようがない…!!）
ミリオの透過を前に、自分の個性が通じないミミックは、心の中でそう叫ぶ。だが、決して表情は歪んでいない。
（だが結果的にはたったの一人…オーバーホールにクロノ…そして懐

刀に四天王が待ち構えてる…どの道ムダだ、アイツ一人じゃ敵わない！それよりも、私の役目は…コイツら邪魔者の排除――!!）

刹那――集団に纏まってたヒーロー、忍、警察の一塊になってる床に、パックリと穴が空く。

「なッ――!?!」

落とし穴――そう気付いた時には既に遅し。

落下していく感覚を味わいながら、一同は成す術なく落ちていく。何処まで落ちるのか…しまった、という焦燥に身を焦がしながら、直ぐに着地する。

「チッ――!!」

落下の際にイレイザー・ヘッドは瞬時に捕縛用の帯を投げつけたものの、天井の壁は防がれ何とか復帰…という展開には持って行けなかった。

「チッ…おいおい此処は何処だ!?」

「落ちた分だと約一階層分…落下死させれるほどの深さじゃないか…」

「お前ら全員無事か?!」

広間に落とされた一同は、辺りを見渡し全員の無事を確認する。

どうやらミリオを除いて全員無事なようで、警察は少数なため上に残された様子。

「目的から大分遠ざかってんじゃねえか！どういう事だよ良いように利用されてんじゃねえか！」

「落ち着いて下さい、一先ず冷静にならなければ益々相手の思うツボです…！」

ロックロックの更なる悪態に、雪泉は冷静さを装う声を投げる。

ミリオこと、ルミリオンが目的地へ赴いてるとはいえ、安全かと問われると首を横に振るうだろう…

無茶な判断だと言われても仕方がない、だからこそ一刻も早くミリオに加担しエリを保護しなければならない。

「取り敢えず出口を探さなければ…此処は見たところ入中自身が作り上げた部屋ではない、元からあった部屋…密室でなければ確実に…」

この部屋から脱出する扉を探す雪泉に――

「おいおいおいぃ…空から国家権力の犬と猫どもが降ってきたぞぉ…？」

不気味な声が、全員を静止する。

聞き慣れない声主の方向へ視線を振り向くと――

「不思議なこともあるもんだぁ――!!」

一人は刀を片手に持つ金髪な青年、

一人は坊主頭の柄悪い大人、

一人は顔をスッポリ青い隠すスケアクロウをモチーフにした不気味な男、

死穢八斎會――八斎衆・鉄砲玉が三名、幹部が早くも立ち阻む。

「チッ、よりによってこういう時に幹部のお出ましかよ…!!」

「良いでしょう、罪を償わせる良い機会だ。凍てつく氷で貴方達の悪意を粉砕しましょう…」

敵意に此方も憤慨。

ファットガムも雪泉も、俄然闘る気の様子…今こうしてる暇ではないのだが、相手が敵意を剥き出し立てる以上、此方の目的に害が及ぼすのであれば、無視するわけにも行かず、闘うしか道はない。

（…落ち着け、折角ミリオが俺に想いを託したんだ…皆んなを守り、安全を保護する…その為に先ず俺が真っ先に前へ――）

環は心の中で、先ほどミリオに言われた言葉を思い出す。

皆んなを任せた――そうだ、自分がしっかりしないでどうする、この調子じゃ皆んなを守り抜くことなんて…！

サンイーターたること、環が一歩前へ踏み込もうとした途端、自分より先に前に出た者に、制止の腕が入る。

「下がってろ――貴様らは先にミリオの行方を追って目的地へ行け」

逞しくも、気迫孕んだ声が、皆の闘気を落ち着かせる――

「コイツらの相手は、私一人で事足りる!!」

先手を打ったのは、蛇女を代表する選抜筆頭――雅緋だった。

１７１話「蛇女の誇り」

「こんな時間稼ぎの三下…私一人で充分だ」
率先して先立ったのは蛇女子学園の筆頭――雅緋。
鞘に納めてた黒刀を抜き、反対の左手から黒炎を纏う。長年古く使われた相棒の黒刀は、今日も一段と輝やきを増し、煌めいている。
黒き炎は、深淵を表したかのように、メラメラと燃え揺らぎ、熱を増す。
「ちょっ、雅緋先輩…！そんな、一人で相手にするなんて…」
「そうッスよ！雅緋先輩の実力は知らないッスけど、此処は全員協力して戦った方が無難ですって！」
芭蕉と切島の言葉も意に介さず、雅緋は此方を振り向かず、闘志を孕めた瞳を差し向ける。
こうなった以上、此処に忌夢がいたとしても、説得するのは極めて困難だろう。
「其処のガキどもの言う通りだ、さっさと協力しろや…全員ブッ殺してやっからよ」
だが、殺意は此方も負けておらず。金髪の青年はギラつく目を大きく見開き、刀を差し向ける。
「雅緋さん、相手の挑発に乗るつもりはありませんが…闘うならせめてもう一人いても…」
「いや…さっきも前述したが、私一人でコイツらを相手にするのは事足りる…コイツらを倒したら直ぐに追いつく、何の問題もない」
「あるんだなぁ其れが――!!」
「ッ…!?」
此方が動く前に、率先して雅緋に刃を向ける金髪の青年は、何の迷いもなく斬り殺しに掛かって来た。
流石は治崎が選別した鉄砲玉と呼ばれるネームドが付けられるだけあって、雑念や躊躇いの概念は一切存在しない。

「雅緋気を付けろ！ソイツは『窃野』だ！八斎會の幹部――コイツ相手に武器は使えない！」
窃野トウヤ――個性『窃盗』
視界に入る者が身につけてるモノを、瞬時に手元にテレポートする個性。但しサイズは限りており、大きいものを窃盗できる訳ではないので悪しからず。
「チッ…んだよ、個性バレてんのか。まあ良いや、どーでも――暴れ易くなるだけだ!!」
「ならねえぞ、刀捨てな――」
窃野が個性を実行し、雅緋の武器を奪おうとした刹那――相澤は抹消の個性を発動させ、窃野の個性を封じる。
「――ッんだこれ!?個性が、使えねえ!?!」
自身の手を見返しながら、何度も個性を使おうと試みるが、結局何も変哲は起きず、相手の武器を奪うことは叶わなかったようだ。
（個性の抹消、壊理の劣化版か…！そういうヒーローが存在するとは聞いたことがあるが…まさか、乗り込んでくる敵がよりによって…いやだが、関係ない――）
個性が使えないことで悪態を吐く窃野を横に、丸坊主頭の男は冷静ながら思考を働かせる。
懐から銃を取り出し、即座に反応――相手に銃口を向ける。
――個性を消す、敵に回せば厄介極まりない相手だが、そんなものは俺たちにとって何の意味もない。
若の邪魔をする者は、何者であろうと阻む――その一点のみ――!!
個性を封じられようが、此方には武器がある。
個性が使えないなら武器で抵抗しろ、武器が使えなければ殴殺しろ、体で抵抗し手足が捥げようと、命尽きるまで忠義を貫き通せ――彼ら三人には紛れもない純粋な覚悟がある。
だからこそ――鉄砲玉と名乗るに相応しい、マスクを付けてる証拠がより色濃く表している。
「無駄やで！刀や銃弾は俺の体に深く沈むだけや――大人しく捕まってた方が身のためやぞ!!」

しかし武器だろうが体で抵抗しようが、ファットガムの個性による脂肪の前では無意味――許容範囲にもよるが、基本的に今目の前の敵として立ち塞がる三人はどの道ファットガムには通用しない。
「五月蝿えなぁー・そう言う脅しは命の惜しい奴にしか通じねえ――俺たち相手に効かねえんだよ!!」
例え無駄だと解っていようが、鉄砲の弾の如く真っ直ぐ、ただ標的を仕留めるかの如く突っ走る。
人は自然と自分の命欲しさに保身や命乞いなどを求める為、命に換えてもと意識があったにせよ、無意識に自分の安全を優先してしまう体に作られてる。
無駄だと分かれば自然と諦念してしまうのも人間としては不自然ではないが、詰んだと理解しながら抗う鉄砲玉の三人は、ある意味驚嘆させられる部分がある。
相澤が個性を消してるため、警察達は銃口を向け、
ヒーロー達も戦意を剥き出し、
数も戦闘もステータスで見れば断然此方が上、
窃野を始め、彼らは時間稼ぎ要員――今こうして自分たちが立ち止まってる時点で、相手の思うツボなのである。

「立ち止まるなと言っただろう――!!」

一触即発の空気の中、覇気が含まれた声が威圧する。
気付いた時には既に遅し、窃野と丸坊主頭の男が手に持ってた武器は、雅緋の黒刀によって跡形もなく斬り壊される。
「窃野トウヤ、『宝生結』、『多部空満』、三人は私に任せろと宣言した筈だ――何度も言わせるなよ」
そして、何も微動だにせず暇そうに立ち尽くす多部の手前で着地をすると同時に――
「うぎッ――」
頭部を殴り、体ごと壁へ吹き飛ばす。
カウンターする素振りや、攻撃の動作すら見当たらない多部に何処

か不気味な不快感を覚えながら、対する二人を睨む。
　吹き飛ばされた多武はノックアウトしたのか、伸ばせたまま起き上がらず、そのまま気絶してしまったようだ。
「雅緋さんそんな…ッ」
「待って下さいって！相手は三人いるんスよ？プロも居た方が確実に――」
「おいおい、私じゃ実力不足と言いたいのか？生憎だが…お前達が想像するよりかは断然的に上だ。心配されるものじゃない」
　雅緋の言い分は尤もだ。
　確かに人数が少数いることに越したことはないものの、結局行動する戦略が削れてしまうので、実力が備わってる雅緋一人が完封した方が、遥かに効率が良いのである。
「スピード勝負、一秒も無駄に出来ない現状、立ち止まってる暇はない――立ち尽くすな、動け、走れ、行け!!私が此処に残る意味を考えろ！」
　雅緋の一喝に、場の空気は緊迫感を増す。
　他の鉄砲玉も突っ込むものの、蚊を叩く程度の力加減、刀だけでなく体術に対しても多少は練り上げてる雅緋に、三人（内一名は既にダウン）では勝機がない。
　いや、そもそもの話、鉄砲玉にとって物理的な勝負などどうでもよく、問題は如何に時間が稼げれるか――精神面での勝負の争いごとなら、自分たちがこの場に佇んでること自体の結果が奴等の思惑…壊理や治崎が逃げ果せてしまえば、コイツらの勝ちになる。
「けど先輩ッ！」
「随分な心配性だな雄英の生徒は――だが安心しろ、こんな悪党である私を心配する必要性はどこにも無い。お前達だってそうだろ、悪忍を心配するヒーローや善忍が何処にいる」
「「雅緋さん…」」
　雪泉と緑谷は、口を揃えて同時に声を重ねてしまう。
　意外だ…真っ先に立って自分たちを先に行かせる彼女の精神面にも驚きはあったものの、自分が悪忍だからと、皮肉ではあるがそこま

でして自分達に託してくれるなど、当初の頃とはえらい違いだ。それこそ見間違えるほどに――

「しますよ！仲間がピンチだってんのに、心配しねえなんてそんなの漢じゃねえ!!」

だが漢気溢れる切島はそうはならず、熱く燃える漢は吠える。

拳を強く握りしめながら、硬化の個性でガチガチに皮膚を硬め、ギチギチと硬化した物同士が触れ合う際に生じる音が、耳に響く。

少なくとも、例え相手が男だろうと女だろうと、誰かを一人残して闘わせるなんて選択肢は出来ない。

其処にヒーローも敵も、困ってる人がいたら放っては置けない。それが、切島鋭児郎の目指すヒーロー像であり、烈怒頼雄斗なのだ――

――また、あの時みたいに取り返しのつかない結果にならない為にも。

「やれやれ…お人好しにも程がある…」

自分が悪忍という聞こえの悪いレッテルを上手く活用して、皆を先に行かしたかったのに…余計に煽る形となってしまったらしい。

馬鹿なのか…いや、バカで結構――小難しい考えなど捨てて、目前の人間を救う。

それが、切島鋭児郎なのだろう。

昔の自分なら飛鳥に似ていて不愉快だと一蹴するのだろうが…生憎そんなことになるはずもなく、忌夢の件もあってか、今となってはそんな事は言える口でもない。

「本当に――全くだ」

やや呆れながら、イレイザー・ヘッドは抹消の個性を再び発動する。

「ッ！――まぁ～…た、テメェ!!」

そろそろ良いタイミングだろうと、窃野が雅緋の武器を奪おうとした刹那――再びイレイザー・ヘッドの抹消によって、それは無慈悲に砕かれてしまう。

「一応多部の方も見といた――俺が瞬きする前に戦闘不能に陥れれ

ば、難なく済むだろう」
　三人の個性を抹消し、個性を発動し続けてるイレイザー・ヘッドは、そのまま皆に先を行くよう指導する。
「お前ら、先行くぞ。
　雅緋なら大丈夫、アイツに任せて目的地まで一気にゴーだ。其れにアイツの言ってる事はご尤も…とても合理的だ」
「えっ！良いんスか!?」
「お前らヒーロー学生だったら教育者として俺も付いてやるのが常識だろうが…忍学校のルールはイマイチ解らん。
　だが少なくとも、アイツは悪忍としての覚悟を決め――その場に残ることを決めたんだ。三年のアイツはビック3にも勝るとも劣らず、インターンの特別枠として選抜されたんだ。俺はアイツの腕を信じる」
　其れは、以前に協議会を終えた際に会話を交わした時の、イレイザー・ヘッドとは思えない顔立ちと台詞だった。
「ほぅ、悪忍の私を信じてくれるのか」
「アンタの事は信用してないし、正直ウチの生徒に怪我負わせようとした張本人だ。半蔵さんや霧夜先生からその話は聞いてる――だが、其れは過去のアンタを知ってたからで、今のアンタはそうじゃない。
　何より、今は任務中の身だ――共に目的を達する為に此処にいるのなら、信じる他ないだろう」
　仲間も、生徒も信じれないで任務は達成出来ない。
　過去の因縁よりも今は人助けと治崎の捕縛が大事。
　任務中の身は、皆志しを共にする戦力であり仲間。
　信じないことは、その人を否定しかねないのだ――
「だから、結果と生徒を守ることで――俺の疑惑を晴らしてほしい」
　背中を向けながらそう呟いた。この部屋の出口扉を開け、一同は雅緋を取り残しゾロゾロと部屋から出て行く。
「待ちやがれぇ――!!ふざけんじゃねぇぞ、協力し合えや！俺達はま

だ動けるんだよ!!!」
部屋から消えていくヒーロー、忍、警察の三勢力に憤りを隠せない窃野は、声を張り上げながら隠し持ってた一丁の拳銃を差し向ける。
だが――
「貴様も何度も言わせるな、お前が動けるのなら私一人で充分だとな――」
黒刀は拳銃を跡形もなく文字通り斬り刻まれ、使い物にならなくなってしまった。
(コイツ…さっきから目に見えねえ速さの剣戟で的確に武器だけを壊してやがる…! 刀の使い方に慣れてやがる――)
窃野は確信した。
少なくともコイツは只者ではない――能力を使わず、自分達を圧倒する彼女の単純な戦力に、思わず舌打ちをしてしまう。
「悪いが、早めに仕上げとして眠ってもらうぞ――!!」

「本当に一人で任せて良かったんスか!?」
続くようにイレイザー・ヘッドの後を追う切島に、振り返らずともコクリと頷く。
「……アイツらのルールっつーのか? ヒーロー学生と同じ扱いかどうかは知らねえが、流石に一人はマズイんじゃねえか?
さっきまで忍の奴らを叩いてた俺が言うのもなんだが…」
ロックロックも突入前の辛辣な対応とは違って、何処か心配そうに後ろを振り向く。
まさか三人の幹部を前に一人で対峙するとは思ってもいなかったのだろうか、多少言いすぎた罪悪感が残っているらしい。
「心配しなくとも、俺はアイツの判断に賛成――合理的だと思ったまで。忍とヒーローは本質に於いても違うし、協力体制になったとはいえヒーロー学生と同じ扱いを受けるとは限らない」
悪忍が命を賭けてまで市民や仲間の為、社会に貢献をする行為は、全般的に見て殆ど評価が良くなるのだ。

普通の人間や良い人が良い行いや人助けをするのは当然であり当たり前だ――しかし悪忍が善良な仕事や任務を全うするとなると違う。

聞こえも良ければ見方も良く、評価が一段と変わる。

例えで言うのなら、一般人が良いことをするよりも、不良が良いことをするのとで大きく違うのと同じ、インフレーションが違う。

言い方は悪く口には出さないが、雅緋を始めた悪忍が先陣を切って活躍することで、信用も上がれば市民や仲間を守った人柱として高く評価が付く。

雅緋が其れを知ってか知らずかは関係ないが、どちらにせよ幹部を三人、一人で相手にするのは何かしらかなり合理的で効率が良い。

「私怨としては兎も角、任されたのならやり遂げるのも、漢としての務めだぞ烈怒頼雄斗――」

「相…ッ、イレイザー・ヘッド…!!」

多少、納得させる為にも敢えて此処は同意するよう説得性のある言葉を添えてあげる。

「俺!やっぱ一生ついていきます!!」

「だから一生はやめてくれ…」

……多少、緊迫感は減らせたのか、謎のコントが始まったのは予想外だった。

一方、壊理を救うべく足を運ぶサー・ナイトアイ一行からかけ離れて行く一部屋の個室――既に鉄砲玉と呼ばれる三人の幹部はボロボロだ。

「クソ…!!まだ個性使えねえ…気持ち悪い感覚だ…!!」

壁に背を付けながら、自分の個性が発動できずに苛立つ窃野。一方で雅緋は怪我といったそれらしい外傷は見受けられず、結果は圧勝という形は皆まで言わなくとも解るだろう。

「お前たちは私たちの足を引っ張る時間稼ぎ要員なのだろうが、残念だったな――私が来たことで杞憂に終わったようだ」

三人並んで壁に倒れてる鉄砲玉を前に、雅緋は見下ろす。
今回の勝負――あくまで肉弾戦ではなく、三人にとっては如何にどの位時間を稼げれるかが問題だ。
勿論、邪魔者を排除するのが治崎にとってのベストな結果なのだろうが、歴戦とした雅緋を前に始末しろと言うのは難しい上に無理なことだろう。
先ず自分達は単なる駒でしかない、だからこそ全員の始末は不可能でも足止め程度にならなると思っていたのだが…
「お前たちのように、時間稼ぎが出来れば良いと思ってる甘ちゃんな連中と、何がなんでも斬り捨てる覚悟を持つ者とでは、覚悟が違う――そこがお前達の敗因だな」
「よく言うなぁ…お前が俺達とペチャクチャ話してる時点でお前の足止めもしてるってのによ。まだ死んでねえ、終わってねえよ」
雅緋に対し噛み付くかのように視線を飛ばす窃野は、体がボロ付きになろうが、殺意は決して衰えはしない。
「……足止めはさておき、お前達が私に敵わないと知っても尚、立ち向かう勇姿は敵でありながら賞賛に値する。ただ、それだ――」
「――ッ」
瞬間――雅緋の言葉を遮るように、窃野が我武者羅に突っかかって来る。突然、何の突拍子もなく飛び込んできた相手に思わず声を途切らせてしまう雅緋は、殴りかかるもしゃがんで避けられてしまう。
そのまま窃野は雅緋の懐に潜り込む。
「つッ――!?」
苦痛の声を漏らす雅緋は、表情を歪ませ窃野を睨む。
一体、何をされたのか分からないまま、視線を移す。
「…はは!褒め言葉として受け取るぜ雅緋。お前は強い、確かに時間稼ぎで済むと考えるより確実に殺した方が良い、目標は高く持つもんだよなぁ…其処の所、ちゃんと分かってんじゃねえか。
けどな、まだ勝負は終わってねえよ。言ったよな?何度も言わせんな、俺はまだ死んでねえ」
窃野は口角を釣り上げながら、不敵な笑みを浮かべる。

「お前はこの勝負、いつから勝ちだと錯覚してたんだ？
お前は今、ゴミみてぇな人間と戦ってんだからよ――マスクの下に何隠してるから分かったもんじゃねえよ」

雅緋の血が頬に伝わりながら、マスクから刃物が現れた。
（コイツ…！こいつこいつコイツ――!!まさか、マスクの下にナイフを仕掛けてたのか…?!
並みのチンピラがやることじゃ…いや、そう言うことか!!）
予想外な光景に、雅緋は心の中で動揺を隠せない。
マスクの下にナイフなんて、普通じゃ考えられないし、用意周到…にしてはかなり行き過ぎだ。
そうだ――コイツらは己の命を顧みない、忍に似た存在。だからこそ、常人では考えられない行動を簡単に仕掛けて来る。
雅緋だって敵と認識しながら闘っていたわけで、如何なる汚い手を使おうが、姑息な手段を使おうが、目的を達成する為に犠牲を厭わない神経を持つ人間こそ、鉄砲玉として相応しい。
なるほど…唯の敵やチンピラという訳でもなく、文字通りヤクザの人間だ。
油断してた訳ではない――忍も時に姑息なやり手を使うこともあるが、まさか自分がそう味わう立場になるとは思いもせず。
「おっ、漸く小汚え男の個性が効果切れのようだ――!!」
今までずっと発動し続けてた宝生は、露出された肌から結晶を生やして行く。カラフルな宝石のような結晶は、何とも美しいものだろう――だが、見惚れてる場合ではない。
「チッ――しまッ」
「嬢ちゃん、俺たちはゴミだからな――相手がガキだろうが女だろうが、若の邪魔をする奴は徹底的に嬲り殺す!!」
無数の結晶は体を覆い、腕は結晶を重ねて肥大化する。
一撃食らえば、下忍でも無事では済まないだろうと直感するインパクトが伝わる。

「お前は俺たちのこと分かってんだろ!?戦場は殺すか殺されるかだ――お前が殺さないってことは、殺せねえって事だよな!?良いご身分だぜぇ!!」
そう言いながら、服の中に忍混んでた拳銃を取り出し雅緋に射撃をふる。全部武器は壊したと思っていたのだが…どうやらまだ隠し忍んでたらしい。
本当に準備が万全だ、まるで本当に侵入者を殺すが為だけに使われてるようだ。
「俺たちゃ元々人生捨てた身だ!!一回死んでるようなもんで、今になって死を前にしても恐怖もなんもねえよ!!
借金まみれになった俺が飛び降り自殺を図った時――ヒーローにキャッチされた時はまあ絶望したもんだ！死ぬことさえ許されねぇ、貧民街で暮らしながら残飯漁る日々が地獄だったしな!!」
窃野は自分を自虐し、己の醜さを嘲笑いながら捲し立て、雅緋に当たり散らす。
「なぁお前には分かんねえだろ?俺たちみたいに、生きる価値すら無くし、見出せない人間の心境なんてよぉ!!!」
「そんな生きる価値のねえゴミをよぉ――若頭は再利用してくれる！」
窃野の言葉を他所に、宝生の拳が雅緋の顔面目掛けて殴りかかる。
「ゴミにもプライドってもんが有るんだぜ?期待されちまったら、応えないとなぁ――!!!」
ドガァァァン!!
破壊音と衝撃が一室を震わせる。幾ら雅緋が選抜筆頭とはいえ、火力の高い重撃を食らえば一たまりもないだろう。
「――ッ?」
だが、殴った際に何かしら違和感を覚えた宝生は、訝しげに眉をひそめる。
「知ってるさ――」
「なにッ…?」
違和感の次は、平然とした声が耳に届く。

殴られながらも何の変哲もない声色…いや、そもそも殴られていない？何かしら結晶を齧るような錯覚が、拳に直接実感する。
「私は悪忍だ、世の中の嫌われ者…日陰者、日向に当たれない私たちは、影に潜み陰で暗躍する――お前たちの経緯がどうであれ、私は少なからず悪の道理を知っている。立場や事情は違えど、同じ悪としてな――」
よく見ると、巨大な大蛇が結晶を噛み砕いている。
翠色の鱗、爬虫類な瞳、大蛇がそのまま生命を宿し動いている。
其れは、雅緋の腕から現れた――
「だからこそ名乗ろう――雅緋、悪の誇りを舞い掲げよう!!!」
理由や経緯は違えど、プライドを持つのは自分も同じだ。今こそ――蛇女の誇りを掲げる時が来た。

１７２話「八斎衆・ビハインド」

今、目の前にいる敵は――倒せない訳じゃない。
どれだけ窮地に陥っても、どれほど困難な立ち位置になろうが、あの時に比べれば。

幼少期の頃に体験した、妖魔という化け物に襲われた時。
蛇女子学園を襲った憑黄泉との死闘。
両姫を殺め、死を錯覚したイザナギとの出逢い。
あの頃に味わった、反吐が出る恐怖と絶望に比べれば、八斎衆との戦闘はそこまで苦ではない。

（私は――今までずっと生かされて来たとさえ錯覚してしまうほどに、多くの者達に支えられた）
そう思ってしまうのは仕方ない。
トラウマと呼ぶ悲劇――過去の恐怖を見返すと、自分は今味わってる苦難な立場、状況、苦しみを調和することが出来るのだ。
それと同時に、自分が生きてること自体が奇跡でしかないと、錯覚もしてしまう。
もし、父や母が助けに間に合わなかったら？
もし、憑黄泉との戦闘で私一人だったら？
もし、イザナギと両姫が出逢わなければ？
過去の回想が、もしもの可能性を芽生えさせている。
でも幾ら考えてもそんなのは無駄でしかないと――頭の中で理解していながらも、結局はそう考え込んでしまう。
その際に自分が思うことは、私はいつも誰かに支えられて生きてるのだと実感した。
母が庇ってくれたから、
仲間がいたから、

両姫がいたから、
全ての繋がりが、私を生かしてくれる。誰かがいつも側で、支えてくれた――時に焔と言うライバルと出逢えたことで、誤ちに気付き、歯止めの効かない私の暴走だって止めてくれた。
私は今まで、誰かの繋がりに興味や関心など持たず、ただひたすら強さのみを磨き、鍛錬を重ね積んで来た。
だからこそ、今になって思う――どれだけ努力を重ねても、時によって足りない部分や実力が通じない時だってあるのだと、痛感させられた。
伊佐奈に支配されていた頃の私だったら、限りなく忍の道に背き、破滅の道へと歩んでいただろう。
仲間の大切さ、己の未熟さ、忘れられた過去の記憶――一番大切なものを気付かせてくれたのは、いつだって志を共にする者だ。
(私は蛇女子学園を代表するリーダーとして、誰よりも率先し、皆を導いて来た――だが、それは昔自分がそう思って来た事柄で、今となっては違う)
役目や立場、仲間や生徒を導くという考えや使命は変わらない。
だけど何とかしなければと思いながら、いつも自分を支えてくれたのは仲間たちだった。
背中を押して、私に力をくれる。
綺麗事や精神話を下らないと嘲笑ってた自分が心にするのは何だが、本当のことだ。
でなければ血界突破は成功していない。それどころか、最悪な過去の中で、自分が殺されてても可笑しくないのだから。

だからこそ――今度は自分が誰かを支える番だ。

忌夢…お前はずっと意識のなかった虚無の私を、介護してくれた。
そうだ、いつだって何処だって私を支えてくれてたのは、友人や仲間たち仲間たち――有り難う。
次は私が皆んなの支柱として誰かを支え、繋がりを活かす――だか

ら、お前達も後のことは頼んだぞ。
私は、お前達を信じてるから――
「ほう…！これはまた奇妙奇天烈な能力だ――腕が生きた蛇に変化するとは、驚かせてくれる!!」
パキビキ――結晶が亀裂を生じる音を感じながら、宝生は不敵な笑みを浮かべる。
腕が大蛇に変貌し、生きた爬虫類が結晶を噛み砕いてる光景は、確かに奇妙奇天烈な光景だ。個性ですらそんな類のモノは見たことがないし、自分の腕力を口で受け止める顎力と頑丈さには殆ど脅かされる。
「絶・秘伝忍法――【ヨルムンガンド】!!」
雅緋の叫びと共に、大蛇は唸りを上げながら宝生の結晶を噛み砕き、結晶に覆われた腕に噛み付き、そのまま体が伸びていく。
この忍術は嘗て――血界突破の暴走の際、イザナギに対し使用した絶・秘伝忍法だ。
「うぉッ――!?!」
体が浮遊し、己の体重（全身結晶を覆い）を持ち上げる蛇の底力に驚嘆の声を漏らす。そのまま部屋全体を暴れ回るかのように、縦横無尽に壁やそこらへとぶつかり、宝生の意識を途絶えさせようと、空間のペースを埋めていく。
「おいおいおいおい――ッ!?!」
流石の窃野もこの意味不明な大蛇にはお手上げのようで、自分の武器も全く歯が立たない上に通用しないことに驚嘆する。
「お前…一人で完封って…そう言う事かよ!!」
悪態を吐きながら、身体を屈めヨルムンガンドの猛威から身を守っている。
このままじゃ本当に直ぐ自分も戦闘不能になってしまう。
命に代えてもとは言ったものの、余りにも呆気ない終わりは迎えたくない――一秒でも一分でもより長く相手の足止めをするのが先決なのに、それすら叶わず、相手に重傷も負わせず敗北するのは、認め

ない。

そう言った意味も含めて、雅緋は時間稼ぎ要員と認識してた鉄砲玉の幹部に絶・秘伝忍法を発動したのだろう。

出し惜しみは良くないとはこのことを表している。より早く鉄砲玉を片付けるべく、雅緋が取った行動は正に合理的――正当な判断ともいえよう。

「おい多部!!飯の時間だ起きろ――この蛇食い散らかせ!!」

気絶し倒れ伏せてる多部に、窃野は喉を振り絞り大喝する。青年の声に反応した多部は、失ってた気を取り戻し、体が反応する。

其れに気付かずヨルムンガンドは、そのまま宝生を壁ごと貫通させる勢いで――

バクンッ!!!

――突進するも、窃野の呼び声に反応した多部が起き上がり、ヨルムンガンドの首を一瞬で食いちぎった。

「なッ――」

雅緋は絶句した。

ヨルムンガンドは謂わば絶・秘伝忍法――そんな強力な忍術を、たったの一口程度の感覚で、多部はヨルムンガンドに重傷を与えたのだ。

「蛇、うまッ!」

最初に口に出した彼の言葉は、味の感想だった。

巨大な蛇を相手にサイズに似合わない口で食いつき、巨大なナニカに食われたような痕が残ってる辺り、どう言う原理なのかは不明だが、多部相手にヨルムンガンドとは相性が最悪なようだった。

マスクで隠してた口は、さっきので布ごと食いつき、飲み込んだ様子で、恐らく凡ゆる物を食い尽くすことが出来るのだろう。

「シャアアアアアア――――!!!」

千切られたヨルムンガンドは、頭部は残しながらも、最後の踏ん張

りとして多部に襲いかかるが――
「フンッ――!!!」
ヨルムンガンドから離れる事に成功した宝生が、両腕で頭蓋骨を砕くように、渾身の一撃をお見舞いする。
ミシリ…と骨が軋む音と、蛇の断末魔を残しながら、残された頭部は息を引き取った。
「ハッ――ハハはははは!!良いぞ多部！最後の晩餐はご馳走でなくっちゃなぁ!?その蛇を女ごと食い尽くせ!!」
一瞬で立場が覆り、窃野は安堵の息とともに胸をなで下ろす。
多部は窃野の声を聞き取りながら、食い千切られた蛇の断面から食い尽くそうとする。
多部空満――個性『食』
凡ゆる万物を食い尽くす個性は、基本的に何でも食べることができる。有機物だろうと無機物だろうと、食えるものは何でも咀嚼し飲み込んでしまう。消化液も常人より遥かに上回り、食べた後は直ぐに消化されてしまう。
「一瞬で全てを食らう歯と顎！そして直ぐに消化する胃袋！多部は個性が発現してから一度も満腹になったことはないんだぜぇ!?
其れに若に拾われる前まで犯罪を起こさなかったのは、人を食うことでも味を認識しちまうからだ!!
けど今の俺たちはゴミだからな、汚れ役買うのは何ともねえ！だから多部は人を食う事に何の躊躇いもねぇのさ!!」
多部のこの個性は、人間やアスファルトさえも食い尽くし、あろうことか死体や証拠物を食うことで隠滅することも可能なのである。凡ゆる物を瞬時に溶かす消化液と、頑丈な胃袋のお陰で人体に影響はなく、様々なものを口にしても無害ではあるものの、一部弱点がある。
常に腹が満たされない…と言うのは兎も角、味を認識してしまうのが難点だ。
当然人間の血肉は口にしなくとも良い物ではないし、アスファルトや泥だって言わずもがな。だが、多部が治崎に拾われ、八斎會の鉄砲玉に認定されてから、嫌いなものや未知なるものに対する味への概念

は消えていた。
だから――治崎が人間を食えといえば食すし、壁や地面を食えと言われれば勿論、ゴミを食えと言われたら喜んで。
狂人であり、ある意味廃人――人を殺すことを躊躇わず、人間としての尊厳さえも当に捨て、自分の全てを治崎に捧げてる光景は、誰もが想像すればゾクッとしてしまうだろう。
「うまッ!うまッ、うまッ、うまッ――!!」
肉の断面からヨルムンガンドの頭部を再生させようと試みるも、多部の常人ならぬ暴食に、再生が追いつかず、距離はどんどん詰めようとしてくる。
(コイツ…!幾ら何でも早すぎるだろう!?そもそも巨大な蛇を瞬く間に…そうか、多部の個性は知っていたが、ここまで脅威になりうるとは…!!)
しかもこれが、違法薬物の個性を急激に活性化させるトリガーを使用してない状態で、このブーストしたような活発性――流石の雅緋も引いてしまう。
(取り敢えず黒炎で炙って――ヤツの動きを止めるしか…もう一度気絶させるまで!!)
雅緋の掌は黒炎を生み出し、拳に纏わせる。
邪悪な黒き業火をそのまんま多部に食らわせ――
「ッ!?」
ることはしず、近づく殺意に異変を感じた雅緋は、横から殴り掛かる宝生に気づく。
「オラぁヨッ――!!」
宝生の重々しい結晶の殴打は、雅緋と拳を打ち合わせる。
結果は――雅緋の拳に悲鳴が入り、皮膚が、骨が、筋肉が、激痛を上げる。
思わず歯を食い縛る雅緋は、火力を上げるも、宝生には通じない。
「結晶で腕を重ねてるからな、熱を遮断してて通じねえんだ!!まあ仮に熱くなるにせよ、火傷しようが腕一本使い物にならなくなろうが――若の為なら喜んで捨ててやるよ!!お前を排除できればな!!」

宝生結――個性『結晶』
露出された肌から無数の結晶を生やす個性。時に熱に対応する防熱用の結晶や、氷に対抗するなどと言った、自己防衛として使える。
因みに結晶は全て本物とは異なるオリジナルなので、宝石ではない。
宝生はそのまま更に結晶を増やし、腕を強化する。
結晶と結晶の隙間から、新しい結晶が生えて行き、その過程を通して肥大化する。伸ばすことも可能なので、そのまま長く強化された結晶腕で雅緋を壁に打たせる。
「ガァッハ――!!」
成す術なく背を壁に打ち込まれた雅緋は、肺から酸素を吐き出され、苦痛の顔を浮かべる。
其れでも腕はまだ動けるし、刀は存在する。黒刀なら炎は通さなくとも、結晶を一刀両断する事は容易い。雅緋の剣戟ならそれが可能――
バッ――!!
なのだが、雅緋が刀の柄に触れようとした途端、腰が少し軽くなる。
いつも納めてた刀の鞘は消えており、嫌な予感を肌で感じ取りながら、心当たりのある人物へと視線を送る。
「三対一を望んだのはお前なんだぜぇ雅緋イ!!ハハッ、俺たち三人を甘く見過ぎたなぁ――自分の実力を過信評価し過ぎたんじゃねえか!?良いザマだぁ!」
嘲笑いながら捲し立てるのは窃野トウヤ――なんと彼の手には、雅緋が長年使ってきた愛用の黒刀が収まっていた。
そのまま鞘を抜き取り、自分の新たな武器として扱う辺り、非常に厄介さが増した。
「私と……したことが…!一人一人を相手にするあまり…気を…!」
注意や警戒は怠らなかった。
だから今まで刀は奪われなかったのだが…それも此処までの様子で、自分の武器さえも取られてしまった模様。
「スゲェ…良い刀だなぁ!悪いな雅緋――こんな素晴らしい宝刀を俺

みてぇなゴミが使っちまってよぉ～…けどまっ、奪われたら奪い返せば良いから何の問題点にはならんか」
雅緋の黒く輝く宝刀に、窃野は思わず生唾を飲み込みながら、品定めをする。
この実質の良い刀、手に持つだけで伝わる重圧感、歴戦を潜り抜けたのが、身を通して良く伝わる。
窃野は元々拳銃や刀に対しては無頓着であり、詳しく知らないものの、雅緋の黒刀には流石に興味が唆る。
「バクン!!」
そして、再生力が間に合わなかったヨルムンガンドの腕は消え、多部は残さず完食――何とも微笑ましさの欠片もない多部の食事は、「次はお前」と言わんばかりに獲物を定める。
(流れるような連携――油断はしてない、だが…多部が復活した事で有利な立場が形勢逆転となって…!皆に負担を掛けさせたいとしたが…詰めが甘かったか!)
心の中で悪態を吐きながら、雅緋は近づく二人を見下ろす。結晶で体が埋め尽くされてる雅緋は、宝生に拘束されながらただただ見つめる事しか出来ない。
油断も隙も一切見せていない雅緋は、彼女の思う通り、多部の復活によって自分は段々と追い込まれていた。
個性一覧から見ればそこまで強力とも呼び難いが、チームワークとして結束を固める事で、雅緋に一矢報いることが出来たのだ。
川のように自然と流れる連携、相性の良さと個性で足りない部分を補い、自分より上の敵に立ち向かう。

其れは――自分たちが選抜メンバーとして戦っていた姿と、同じものだった。

「お前たち……どの道、私を殺した所で何の意味にもならんぞ……警察が後を追ってくる…お前たちはどの道終わりだ…」
「嗚呼、知ってるよ――だからなんだ、それがどうした?」

「なぜ……お前たちは忍でもないのに…自分の命を…そこまで捨てようとすることが出来る？常人とは思えないがな……」
雅緋の台詞に応答する窃野は、目を細めながら此方に近づき雅緋の武器を自分の武器として構えを取る。
「あのな、一つ教えといてやるよ――俺たちは確かにゴミだが、ゴミなりに固い絆で結ばれてんのさ」
固い絆――其れは、雅緋と忌夢の二人、そこから結ばれていく紫や両備、両奈へと紡いでいく、決して斬れない糸と同等なもの。
昔の雅緋にはなかった、だが今は結ばれてる――窃野、宝生、多部も雅緋達と同じく、誰にも斬れない絆で、固く結ばれているのだ。
「多部（或る者）は――個性による人格もあってか、社会に誹謗され捨てられた。
窃野（或る者）は――大好きだった恋人に裏切られ、多額な借金を背負い込み、個性を使わず毎日死ぬほど働きながら、泥水を啜る日々。
俺（或る者）は――金の亡者に目を付けられ道具のように利用され、生成した宝石が使えない贋物だと知った途端――お前は要らぬ人間と罵られ、否定され、徹底的に打ちのめされた」
皆が皆、色々な事情や過去を背負い、八斎會に集っていた。
最初は孤独で一人だった――仲間もいない、ブラックな仕事で社畜として生き永らえながら、気付けば自分が生きてる価値のない人間だと知り、この世に不必要だと知った途端、生きる目的や意思を失った。
路頭に迷い、ゴミとして紛れながら貧民街に足を踏み入れ、現実に打ちのめされていた時――
『お前、行き場がねえのか。
だったらウチに来い――お前は、此処でくたばるような人間じゃない。俺が拾ってやる、お前は決して無価値な人間じゃない』
「だから嬉しかった――全てを失った自分達は、治崎と出逢い、生きる意味も目的も生み出して、金もない家もない、行き場を無くした自分

たちを拾ってくれたことが、俺たちの救いだった!!」
何も知らない自分達に手を差し伸べて、自分達の価値を見出してくれた。
若頭――治崎だけだ。
自分たちの価値を生み出してくれたのも、生き甲斐を感じさせてくれたのも、全てがあの人のお陰で手に入った。
当然、そんな治崎に忠義を尽くすのが極道としての生き様で、治崎になら自分達は使われても良いとさえ思った。
ずっとあの時の恩を返したくて、あの人の為に役立ちたくて、少しでも若の為になれるのなら、微かな力でも希望にお応え出来るのなら――自分達は喜んで非道になる。

だから自分達は、マスクを付けるようになった――

「残虐非道?上等!無様?腑抜け?上等!俺たちは最初っから一回死んでるようなものだ――!!
お喋りが過ぎたな、さぁ死ね!!せめて悪忍と呼ばれ、誹謗を受けた者の情け!一回で直ぐに楽にしてやるさ!!」
宝生は最大限に結晶を生成し、一気に肥大化させる。
恐らくこれが最大最高火力――まともに食らえば命に保証がないのが鮮明に伝わってくる。
「其れが…お前たちの誇りか――成る程、理解した」
雅緋は何かを悟ったように頷くと、軽く息を吸い
「私もお前達の誇りに応えよう――同じ悪として、誇りを持つ者同士!!」
血を吸収していく。
自分が流した微かな血…此処には忍の血は無いものの、代償は付くが、背に腹は変えられん。
雅緋の髪色が黒く染まり、頬には血管がくっきりと浮かび上がる。
背には堕天使ルシファーを連想させる。六つの羽を広げ、黒く渦巻く炎を纏わせる。

「まだこんな芸当が…!!だが忘れたか、俺の個性じゃ熱の耐性が…「お前達の誇りは賞賛に値する!!」ッ――!?」

ビキビキパキッ――!!

結晶が砕けていく、何重もの結晶を次々と破壊していく雅緋に、宝生は困惑の顔色を見せる。

「飯!!食う食う食う食う食う食う――!!!」

雅緋が再びヨルムンガンドを発動したのだと判断した多部は、口を大きく上げながらガチガチと噛む不快音を奏でる。

「来いよ雅緋ぃ!!お前の抵抗も、俺たちの連携で「お前達の絆とやらはしかと見た!!今の仲間達を連想するよ!立場や経緯は違えど、同じ固く結ばれた絆を持つ者として!!!」あぁ…!?」

雅緋は全力で声を振り絞りながら、宝生の結晶を粉砕するかの如く、拳を何発も入れていく。

触れる度に空間が揺れる衝動に、宝生は耐えきれない。

「ぬぐぅぅ…!!若――済まぬ…!!!」

数秒で重圧な結晶の要塞を、文字通り破壊――守るべき宝石が全て無くした宝生は対抗する術もなく術もなく

「絶・秘伝忍法――【妖魔を罰せしＰａｒａｄｉｓｅＬｏｓｔ】!!!」

迸る地獄の業火を浴びせながら、宝生は吹き飛ばされる、

飛んで行く先は応戦しようとする窃野、多部の二人――避ける時間もなく、気付いた時には黒炎に伝染し、仲間と共に全員壁に打ちのめされた。

一石二鳥ならぬ、一石三鳥――雅緋は直ぐに血界突破を解除して、元通りの姿に変貌する。髪の色は白へと戻り、頬の血管は何事もなく消えてゆく。

「悪は善よりも寛容だ――お前達も同じだったんだろう。

敵としても、誇りとしてもお前達は、蛇女の誇りを舞い掲げるに相応しい〝人間〟だったよ」

１７３話「刀と盾ならぬ矛と盾」

「はぁ…はぁ……取り敢えず、逃げられないよう拘束はしといたぞ」
何とか八斎會の鉄砲玉三人の幹部を打ち倒した雅緋は、鉛玉のように重く沈む体を動かし、蓄積された疲労の体に鞭を入れる。
脂汗を脱ぐい、チラリと横目に視線を送ると、気絶してる八斎會の三人は目元を布で覆い隠され、マスクは取り上げられ口元が露わにされていた。
「お前達にとって思い入れがあるか否かは知らないが…これ以上武器を隠されたりでもしてたら、引き受ける際に抵抗でもされて警察に支障が出かねない…悪く思うなよ」
探って見た結果、凶器になりそうな武器は一つも見当たらなかった。窃野に関しては一応服の中と言った念入りなボディチェックもして見たが、結局何もなかったので、まあ結果的には良しとした。
「どの位時間が経った…？思ったよりも時間を食ってしまったな……私が生きてる内でもせめて、アイツらの助力にならなければ…」
微かな時間とはいえ血界突破の発動、鉄砲玉とはいえ彼らの脅威な連携、其れ等は確かに雅緋に大打撃な体力を削っていた。
朦朧とする意識の中、気を確かにするように引き締めて、足に力を入れる。
「遅くなってしまったが、其処で寝転ぶ訳にもいかない――私はまだ、動ける」
遅くなってしまっても、せめて追いつかなければ。
その一心と、自分はまだ此処で倒れる訳にはいかないとの使命感が、雅緋を労働者のように無理矢理奮い立たせていた。
「私はまだ終わっていない…闘いも……勝負は此処からか――」
サー・ナイトアイ一行が部屋を出た扉に目を送る。

先程行われていた戦闘は、序盤に過ぎず――良くも悪くも結果は八斎會の幹部三名を無力化することに成功。
（これでも、奴等は単なる捨て駒か……総司達は合流出来ただろうか？）
落とし穴にハマった結果が三人のいる個室へ繋がっていたのだが…別ルートや穴に注意して上手く鉢合わせれただろうか？
などと思考を巡らせながら、足に力を入れて一歩一歩と進んでいく。
（……ダメだな、上手く体のコントロールが…やはり、血界突破の代償が思った以上に響くし、連続では使いにくいな…消耗が激しい……）
血界突破――憑黄泉戦ではかなりの疲労が蓄積されていたし、今のに比べればまだマシではあるものの、反動に慣れる訳でもなく。
「追いつかなければ……」
重い重い体に喝を入れ、扉を開けた――

一方――雅緋に後を任せ、先に決められたルートを真っ直ぐに突き進むサー・ナイトアイ一行は、順調と言った形で進んでいる。治崎との距離の差は把握出来ずとも、ミリオが先に出向いて足止めをしてると考えれば、距離は遠いとも言えない。
「妙だな…」
ふと、訝しげに口を開いたのはイレイザー・ヘッドだ。その言葉を耳にした雪泉は、不思議そうに小首を傾げる。
「何が…ですか？」
「此処の地下、入中とやらの妨害が全くない――見ての通り、地下の構造が全く変わっていない」
イレイザー・ヘッドの指摘に、一同は気付く。
入中の個性『ミミック』により、地下の構造を操作することで、歪んだ形になる。其れは勿論、一眼見ただけで簡単に見解出来るほどに、分かりやすい。
だが――此処から先は全く変化はなく、自分たち侵入者を妨げるよ

うな様子は全く伺えない。
「確かに変ですね…私たちに何の支障もでないというのは宜しくとも、それはそれで不気味で、何か向こうにも策があると考えても可笑しくないですね…」
「恐らく取り残された警官の方に意識を向いたか…何方にせよ、地下全体を操れるって訳でもなさそうだ。雅緋の推測は案の定、正しかったってことが証明付けられたな――」
入中による個性の操作が見受けられない限り、此方の様子が見えていないか、見ていないという説が浮かび上がる。
少なくとも、地下全体を把握し全て操作可能な訳ではないらしい。
其れが可能なら、自分達を圧殺して仕留めれば追われる心配はないのだから、その仮説が正しく機能してるのは本当のようだ。
「なら今の内に――」
「待て」
此処でサー・ナイトアイが立ち止まり、制止の言葉が投げられる。何か可笑しな点が在ったのか、彼は眼鏡をクイッと上げて、訝しげに見つめる。
「可笑しい――此処に上へ上がる階段が一本線となってたルートのはずが…二つの道に分けられ階段となっている…」
『!?』
サーの発言に一同は目を大きく見開く。
正規のルートだった階段が二つに分けられている…しかも、ミリオと別れる前は、治崎の分解と修復によって隔てた壁が障壁として邪魔をしていたのだが、今度は――ミミックによって作られた偽物のルート。
しかも何方か片方が本物、しかも予知で視たルートが分裂されたような形となってるので、これを見破れる術は持っていない。
「おいおい今度はルートが分断されてんのかよ!!予知ならこれもお見通しじゃねえのかサー・ナイトアイ!!」
「私が視たのはあくまで構成員の一人による未来！私たちが来たことで即座にルートを作り変えたと考えれば、予知でさえもどうにもなら

ん!!」
　まさか、自分達の妨害を他所に違うダミーのルートを複製していたとは、想像もしなかったのだろう。それならば自分達を圧殺しないのも、妨害が来なかったのも頷けるし、窃野達三人を全員で相手にしていたら、僅かな時間稼ぎでもっと複雑なルートに作り変えていたのだろう。
「こりゃ一体どうすれば…!」
「どうこう悩んで足を止めてるうちにまた構造を作り変えられたらたまったもんじゃねえぞ！何か此方も策はねえのか!?」
　自分達が道に悩む――それだけで既に時間を稼いでるのが、入中にたっての思惑なのだろう。
　自分には力が無いので、代わりに幹部や四天王をぶつけて殺し、戦力を確実に削るといった策士ほど、厄介な者はそういない。
「二手に別れるか…？」
「いやそれこそ相手の完全なる思うツボ…かと言って少数で行けば…」
「此処に銀がいれば確実に効率が良かったのですが、彼女が不在の今、悩みますね…」
　少数で行けばピンチ、大人数で行けば時間のロスも掛かってしまう。
　壁に潜り地下と同化する個性は余りにも厄介で、イレイザー・ヘッドがずっと個性を発動し続けても消せないのは、恐らく壁に這いずりながら、監視しているのだろう。
「ならば、半々に別れるかどうか…に、いえ…それこそ向こうの思うツボ。サー・ナイトアイ、此処で予知を視るのはどうでしょうか？」
「いや、それはダメだ。以前にも申したようにアレはダメ押し…今はまだ潮時じゃない」
　今こそ潮時なのではないか？と雪泉は心の中で思ったものの、これ以上反論はしなかった。本人が嫌がってるのは一つの理由に含まれてるのだが、1日に一回しか使えないというリスクが高い為、幾ら出し惜しみをするなと言っても、自分のピンチを回避する為に使えない

とも考えてしまえば、何とも言えなくなる。
自分の個性は自分が良く知っている――なので余計な事は口に出さないようにする。
「んじゃあ壁をぶち壊しながらってのはどうです!?違うダミーだったとしても、これくらいの薄い厚さなら簡単に隣に繋がれますよ!」
「おお、良い案やな烈怒頼雄斗!」
先程、治崎が駆使した壁を壊したことを振り返った切島の発言に、ファットガムは「でかしたで!」と声を張る。
確かに、これくらいの壁なら難なく隣へ行けるだろう…そしてパワーファイターは二人いる、つまり切島と緑谷のグループで二手に分かればなんて事もない。
「この先――鬼が出るか邪が出るか…ですね」
一同は構えを取り、階段を登り詰めようとした――

「……さて、ダミーのルートに四天王の『崎子』と『柔増』を配置した…ゴミどもの様子はどうだ?」
別の偽物のルートを作り終えた入中は、落とし穴へ繋げた三人の鉄砲玉の様子を伺いに赴く。他の連中の居場所は大体頭の中で予想(正規ルートへ真っ直ぐ進んでる為、そのまま戻りに行けば奴等もいる)出来てるので、どの位の足止めが出来たのかを探りに行ったのだが…
「ッ――!?!」
入中の視界に広がる光景は、信じられないものだった。
拘束具で縛られながら目隠しされてる三人は、気絶をしていた。酷い傷痕に、死体、又は気絶してる者は誰一人としていない。
つまり、奴等は何の結果も残せず素早く、簡単にやられてしまったのだ。
時間的には約五分…だが、それでも充分に早すぎる…
「何をしてるんだこのゴミどもがあぁぁぁあぁぁぁーーーーーッッッ

!!!!
!!」
キエエエエ!!と常人離れした憤りの奇声を荒げながら、入中は目を充血させる。
「オーバーホールに恩があったんじゃないのかぁ!!?何でテメェらは誰一人殺せず無様に…!!しかも救われないテメェらに衣食住も与えてやったのにぃ!!――いや、可笑しい…コイツらは確かにゴミだが、それなりに能力としては使えた……なのにコイツらの失態は一体……」
憤慨に満ちた入中は捲し立てながら、再起不能の三人に罵詈雑言を浴びせるものの、此処で何かに気づく。
幾らなんでも、能力が使える上に三人の連携はゴミでありながら驚異的なものだ…それらを簡単に駆使できるヒーローはいるにしても、それを可能に変えたのは誰なのかと。
先程は全員を一気に足止めにしようとしたが、その結果がこれとなれば…
「チィ――!!」
恐らく、三人を簡単に無力化できる人間が集団に紛れ込んでるか、或いはそれ以上の連携で決めた確率も充分に考えられる。
ならば後は簡単――より確実に戦力を削り落とせば、奴等の連携や脅威は消え失せる。
その為には――邪魔者を一人ずつ減らしていく。

ズボリ――聞き慣れない不快な音が鈍く聞こえた刹那、イレイザー・ヘッドの横から突如、柱状の壁が勢いを増して押し寄せた。
「ッ――!?!」
何の突拍子も、何の予兆もなく、突然襲い掛かって来た奇襲に、イレイザー・ヘッドは対応できず、そのまま穴を開けた壁に入れられてしまう。
「イレイザー!!」
「すいません…!どうやら――」
――無理そうだ…
間に合わない、時は既に遅し。

強化繊維で生み出された捕縛用の帯を投げるも、そのまま穴へと押せられ、結局窮地を脱せれない。
麗王と雪泉が素早く武器を取り、操作されてる壁の突起物を破壊しようにも、やはり時間が足らずのようで。

――先ずは貴様だ！お前は俺たちにとって厄介な人物だ!!

入中の狙いは正しいと呼べる行動で、個性を制限させるイレイザー・ヘッドを一人にさせ、鉄砲玉や四天王へ送り込ませるというやり方は、とても計算的で効率が良い。
「させへんで!!」
ドンッ――!!
誰かに強く押され、衝撃を受けた感覚を味わいながら、横へと視界がズレる。
「イレイザー！お前はよコイツの個性消せ!!」
原因はファットガム。
偶々、近くにいた彼はイレイザー・ヘッドを押し退けたことで、自分を犠牲に何とか助けることに成功した。
だがそれと同時に、ファットガムが代わりに壁の穴へと消えていく。
「すまないファット!!」
「気にす――」
最後の最後に言葉が途切れ、穴の中へと押し込まれ、姿を消してしまった。
ドォン！という衝撃音と共に、雪泉と麗王の二人によって振るわれた武器で変形した壁の柱を破壊するも、結果的には一人…いや、二人の戦力を失った。
「ファットガムまで…！畜生!!また、一人…」
切島の悔恨が混ざった声が虚しく響き、表情を歪ませる。
雅緋に続いて次はファットガム、自分をインターンとして雇ってくれた彼には感謝もした。

そんな自分を選んで迎え入れてくれた彼を此処で…
「あれ…ファットさんの近くにいた芭蕉さんは…？」
夕焼の言葉に気付いた一同は辺りを見回すも、彼女の姿は何処にも見受けられない。
いつから居なかった？いや…さっきまでは此処にいた…となると。
「まさか――!!」

ゴロゴロゴロ――バタン！
小さく狭い洞窟のような通路を転がりながら、漸く何処かの部屋に出されたファットガムは、ムクリと起き上がる。
「…なんや、此処？」
何処に繋がってるのかは全く不明だが、薄暗い部屋にドラム缶が部屋の端に転がってる辺り、使われていない古い倉庫部屋だと見解して良いだろう。
埃や使われていない様子はない上に、使い古されてはいるが、汚れてはいないようだ。
「なんやよう分からん所に飛ばされたなぁ…」
ファットガムはポリポリと頬を掻きながら、小声で独り言を呟く。実際にサー・ナイトアイからは手短な最短ルート、地下全体を把握してた訳ではないので、先ず自分達が何処まで遠かったのかすら不明だ。
「むむむ…！」
「ん？なんや？」
自分より下から苦しくもがく声が聞こえたので、意識を声の主に向けると、其処には自分より小さな体をした少女が、ファットのお腹に沈んでいたのだ。
「芭蕉ちゃん何してん!?てか君なんで此処に!?!」
「ぷはぁッ…！はぁ…はぁ、すいませんファットさん…私」
取り敢えず呼吸が出来ずに苦しんでた彼女を出した。漸く息を吸

えることに何とか一命?を取り留めた彼女は、肺に酸素を補給しながら、息を整える。
どうやらファットガムがイレイザー・ヘッドを庇う際に、彼女も同じ考えだったらしく、行動が完全一致した形として彼女も此の倉庫に送られたそうだ。
「まあしゃーない、それより芭蕉ちゃん気ィ抜くな。入中がそう容易くウチらを隔離させて戦力分散させるだけとは考えられへん。もしかしたら雅緋みたく次の刺客が来てる可能性はジューブンに――」
警戒しながら芭蕉に細心の注意を施す間中――ドン!と一歩足を踏み入れた大きな音が、個室に木霊する。
視界が余り晴れてないので気付かなかったが、人は既にいた。
ファットガムと芭蕉の視界に入った男は、金髪の髪を後ろにたなびかせ黒いペストマスクを着用した少し大柄な男。
丸太のように太い腕、全てを粉砕する強靭な拳が、迫り来る。
(無駄やで――どんな敵も、衝撃を沈めるだけや!!)
ファットガムは瞬時に防御の体制に入るよう腹部を剥き出したまま力を入れる。どんな衝撃や刃物も、自分の腹の中に静まる個性は、衝撃吸収に似て非なるもの。
ファットガムの個性による詳細は頭の中で覚えているので、彼女は瞬時に巨大な墨筆を敵に向ける。
(ファットさんが衝撃を沈めてるウチに、この男の戦意を――!!)
殴ってる間に畳み掛ける戦法なのだろうか、コミュニケーションを交わさずとも、己が共に役割を理解し果たそうとする意思疎通は、とても強い物だ。

――ボボボボボボボボ――!!!

「!?!」
――だったのだが…僅かな数秒にも満たない速度で、何連撃もの殴打が炸裂。反撃の余地も与えず、そのままファットガムを吹き飛ばすように勢いを乗せ、渾身の一撃が彼を退ける。

「ぐおぉッッ――!!」
口から思わず血を吹き出したファットガムは、苦悶の表情に歪んでいた。反撃すら与えられなかった芭蕉は「えっ…?」と、恐る恐るファットガムに視線を向ける。
ヒーローコスチュームは、殴られた箇所がほぼビリビリに破れ、早くもダメージが入ったファットガムに、呆然とする。
衝撃や刃物さえ簡単に沈めてしまうファットガムを、ああも容易くダメージを与える光景は、インターンに入ってから一度も見たことがない。彼女は嫌な冷や汗を滴らせながら、彼を簡単に苦痛に歪ませた張本人に意識を向ける。
「俺は思うんだ――ケンカに銃や刃物は不粋だって。
持ってたら誰でも勝てる、そういうのはケンカじゃないし、卑怯な手段を使った勝負はケンカじゃない。
その身に宿した力のみで殺し合うのがベストなんだ…分かるかな?そういうところだぞ緑髪の女」
その男は突如、ジャブのように拳を振りながら己の価値観を口に出し、彼女に拳を向ける。
「忍って思うんだ。どうしてお前らは武器や毒なんか使わなきゃ人を殺せないんだ?其れは簡単――お前らが卑怯者で、ケンカも出来ない弱腰だから。
俺は軟弱者や卑怯卑劣なヤツは吐き気がする、だからお前らは絶対に勝ててるんだ。
つー訳で女、武器を捨てろ。己の拳のみで対抗し、俺に勝負を挑め。俺は正々堂々とした真っ向勝負をする人間が大好きなのさ、此処に来た時点で既に勝負は開始してる。そこのデブを見習え」
この男の名は『乱波肩動』
死穢八斎會八斎衆・鉄砲玉の一人、幹部にして単純なパワーファイターは、林間合宿に襲撃して来たマスキュラー、黒佐波を連想させる。
「ファット…さん!!」
「ゲホッ、ゴホッ!気にすんなや!」
彼女の切羽詰まった声に、咳き込みながら応答に答えるファットガ

ムは、芭蕉を安静にさせるよう無理に気を貼る。
「おら女！さっさと武器を捨てろ！俺は喧嘩したいんだよ!!武器を使った闘いはフェアじゃない!!」
「ッ――!!」
流石の彼女も、彼の身勝手な傍若無人っぷりに嫌気が刺したのか、人を傷付けることに躊躇いが芽生えるも、何とか押し殺しながら武器を振るう。
対する乱波は彼女に呆れながら、肩を竦める。
ガキイィン――!!
「えっ…？」
突如――自分の攻撃が弾かれる感触が手に伝わる。
何もなかった空間は、瞬く間に緑色の何かが乱波をドーム状の如く包んで行く。
まるで鉄…いや、全てを弾き守り通す要塞。
「フム、衝撃を沈める個性を持つヒーローはファットガムか、そして其方の緑髪の清楚な少女は…ヒーロー学生か、いや…忍か？ヤツは武器を持ってるな…成る程」
静まる声が聞こえると、乱波の隣に並び立つのは同じくペストマスクを付け、目を瞑る男。
この男は『天蓋壁慈』――乱波と同じく、死穢八斎會八斎衆・鉄砲玉の一員だ。
「私は乱波、お前の嫌う卑怯者とやらの攻撃を防ぎ、お前はこの場の侵入者どもを一掃するよう排除する。
私とお前の個性の相性は良好、これ以上叶う者はいない」
「待て待て、俺は武器を持つ卑怯者とは闘いたくないからな。デブだけを殺すぜ？」
「案ずるな乱波、お前の力量ならオーバーホール様を除いて誰にでも勝てる。つまり、この少女が武器を手にした所で我らには勝てまい」
「成る程！それは盲点だったぜ!!」
天蓋は誇らしげと余裕を保ちながら、乱波は納得したように拳と拳を打ち合う。

「なんやよう分からんコントが始まっとんな……ちと痛手を食らっちまったけど、こりゃ引き締めんと本当にヤバい相手やな」
「……」
「…？どしたん、芭蕉？」
「硬かった…」
「??」
「刃が一切、通らなかった…そして向こうは…ファットさんの衝撃を沈めないほどの力量と、銃のような速さ…」
芭蕉は黙々と、小さな声で独り言を呟きながら、苦虫を噛み潰したような顔で、相手の二人組を睨み付ける。
これは彼女でも直ぐに実感したのだろう実感したのだろう――この二人組、一筋縄ではいかない上に、先程の幹部三人とは違う。
「察しが良いな少女よ…そう、凡ゆる攻撃を防ぐバリアの盾、全てを粉砕し破壊する拳の矛――我々は矛と盾!!抜かりのない我々に、もはや敵なし!!」

刀と盾ならぬ、矛と盾――最強の矛にも盾にもなれる切島を具現化したかのような二人組のコンビは、確かに一筋縄ではいかない。
ファットガムの脂肪吸着でさえも、沈めきれないラッシュと破壊力、芭蕉の攻撃でさえも傷一つ付けさせないバリアは破る術もなく。
性格は反対だが、相性は良好、個性も強力な上にとても鉄砲玉とは思えない実力だ。
「まさかこのまま…私たち…二人に……」
「ッ…!!」
相手の弱点を補い、二人の連携と実力の高さに思わず怖気付いてしまう彼女は、体を震わせる。
天蓋と呼ばれる男はともかく、乱波と呼ばれる男の連打撃は凄まじく、常人が食らえば簡単にミンチになるだろう。
自分が血塗られた肉塊になると想像するだけで、身震いが止まらない。

「気い引き締めろや芭蕉――!!」

途端――黒色に塗り潰されてた彼女の思考は、ファットガムの葛藤により不安に積もった靄が晴れる。

「何のために雅緋が残した!・総司の言葉をもう忘れたんか!?二人が託した想いを無下にするな!!此処で戦意喪失すればそれこそ敵の思うツボやで!如何にどう素早く敵を制圧できるかが勝利の鍵やで!」

敵を倒す前に自分の心が先に折れてしまえば、勝てる相手にも勝てやしない。追い詰められたから?だったら形勢逆転をすれば良い、失敗は挽回してフォローし合えば問題ない。

此方は脂肪吸着、墨字忍法――二人の組み合わせもまた強力なものだ、勝機は此方に無い訳では無い。

「フッ…喜べ乱波よ、向こうはまだ勝つ気でいるらしいぞ?」

「解ってくれたか良いデブだ!!」

沈着冷静と傍若無人、冷と熱を混ぜ合わせたような性反対な二人だからこそ、惹かれ合う性質があるのだろう。駄弁る余裕すらあるようだ。

「そう、ですね…!!此処で私が怖くて動けないじゃ…あの時と同じ、何一つ変われないまま――」

『スプリンガーのヒーロー事務所は何処ですか?』

また――あの時みたいに、

『どうして…教えてくれないんだ』

目の前の恐怖に目を逸らしてしまう、弱気な自分のままじゃダメだ。

自分は学生以前に忍であり悪忍――腐っても選抜候補メンバーの一員、此処で怖気付いて何も出来ませんでしたでは、後を託してくれた二人に申し訳ない。小尾斗教官に今度こそ怒られてしまう。他の皆んなにも合わせる顔がない。

「せや、芭蕉ちゃん。さっさとこのザコ三下ぶっ飛ばして、皆んなの所

戻るぞ!!!」
相手が矛と盾ならば、此方も矛と盾で対抗するまでだ――

１７４話「気分は絶好調！ウキウキ乱波くん!!」

「まさか総出で私たちを妨害して来るなんて…大人しくしていれば良かったのに――正気とは思えない」
サー・ナイトアイと離れてから物の数分…何とか三人の構成員を鎮静化する事に成功した相棒の二人、バブルガールとセンチピーダーは拘束された三人の身柄を警察に引き渡していた。
「正気だよ。今捕まりに行ってるヤツは皆、正気であってイカれちまってる…大人しくしてたらオーバーホールに殺されちまうし、イカれてなきゃ態々アンタら公務員に個性を向けて妨害なんてしねえしな」
「オーバー…治崎のことね」
てっきりこの組の者達は忠義を尽くして、治崎と名を呼んでるのかと思ったのだが…違うようだ。態々敵ネームで呼ぶのはそれなりの訳があるのだろうか、それとも単なる偶然か…
「そうさ、組長が倒れて実権を握り始めてから使うようになったあだ名さ…
組長は昔気質の極道を重んじて、この時代にあって極道が生きる道を模索していたんだ」
敵とは違う。
八斎會は侠客であらねばならない。指定敵団体という酷い呼ばれ方に未だに憤慨し、自分達のような寄り辺のない、行き場を失った人間を拾ってくれる慈悲深いお方だ。
組長と盃を交わし、忠義を尽くす――八斎會の組の者達は皆そうやって礼儀を重んじ、恩を感じた。
「俺たちが惚れたのは組長で、オーバーホールじゃねえ。アイツは敵紛いな名を名乗り…敵を取り込み……独断で組の意向に沿わねぇシノギに手ェつけてよ。権利を掴んではやりたい放題し過ぎだぜ全く…!!」

構成員の一人が悔し混じりな悲痛の声で、治崎に愚痴を零す。
聞いた話や様子を見るに、恐らく彼等は恐喝、又は脅されて強制的に自分達を殺せと命じたのだろう。
でなければ殺される――壊理の世話役も含め、治崎の癇癪に触れて怒らせた構成員の犠牲は後を絶たず、犠牲者の皆は組長の背中に付いて来た者ばかりだ。
「そんな組長は何の発端か突然、気を失った。植物状態としてモノ言えぬお体になったのも絶対に…！」
「おいおい落ち着け…熱くなり過ぎだ！そりゃあお前の気持ちも分かるけどよ、アイツだって昔から組長に慕ってたんだ。気に入らねえのは兎も角、オーバーホールの仕業とも言い難え…」
「じゃあよ、アイツの個性なら病気や怪我も治せるだろ!?何で組長を治さねえんだ?!病気で突然体が悪化したのを良い理由にきっと…」
…どうやら今度は、お仲間同士で物の言い合いをし始めた。
床に伏せた組長、
治崎の陰謀、
彼等の言動、
気になる点は幾つかあるし、向こうにもそれなりの事情があるらしいが、少なくとも嘘は吐いてないというのは見解した。
「嫌ってる割に、彼が捕まるとは思ってないんですね」
「そりゃあそうだ。八斎會は知っての通り、解体が進んでから弱小ヤクザと呼ばれてた…だが、オーバーホールがいる今の組は強え…故に、アイツが取り込んだ敵に、アイツ等も含めてな…」
アイツ等？
その言葉に大きく違和感を感じたバブルガールは、眉をひそめながら首を傾げた。
「まあ…何にせよ、正気じゃねえってのは後先考えねェ人間のことを指すのさ。そういう人間は…強えんだよ」

場所は変わって、地下の倉庫室。
分断されてしまったファットガムと芭蕉に待ち受けていたのは、八斎會の鉄砲玉幹部二名――乱波肩動、天蓋壁慈。
天蓋は手を額に置き構えを取っている辺り、恐らくこの空間ごとドーム状に覆うバリアの調整、或いは発動するかによって関わっているのだろう。
特に深い意味が無かったにしろ、ポージングが目立つというのは確かである。
「おい天蓋、バリア解け。楽しくなって来たんだ、俺はフェアな殺し合いがしたい。そんな俺にバリアなんぞ必要ないんだ、邪魔だ出れねえんだ」
「私欲に溺れるな愚か者――オーバーホール様の言いつけを忘れるな。相性は良好、我々のコンビネーションは素晴らしくも侵入者の撃退には向いている。
あのお方に命令された通り、確実に処理す――」

ドガガガッ――ガガガガガガガァン!!!

途端――天蓋が鬱陶しくて堪らないと言わんばかりの乱波は、申し立てる彼の口を黙らせようと、矛先を味方の天蓋にさし向ける。何の兆しもなく振るわれる拳を、瞬時にバリアの個性を発動することで、己の身を守りながら攻撃を防いでみせた。
「何のつもりだ…欲に飢えた獣よ、敵は彼方だ。何故私に攻撃を仕掛けた？」
「ごちゃごちゃ五月蝿えんだよテメェは。コンビなんてオバホが勝手に決めた事だろッ、んなもん律儀に従う気は毛頭ない。俺はそれより殺し合えればなんだって良い」
「……」
天蓋の問いかけに、何とも破茶滅茶な理屈だろうか…乱波の物騒な返事に彼は呆れながら深いため息を吐いた。

これ以上、彼を留めていればコンビが悪くなるだけでなく、下手すれば〝侵入者を処理する〟というオーバーホールに与えられた使命を全うできずにやられてしまい兼ねない。
「……解った、好きにしろ――処理出来るのならやり方は問わん。それとオバホじゃない、オーバーホール様だ。何度も言わせるな、何度言ったらその誤った名前は治せるのだ」
最後の背後らへんの声は冷たい威圧と、呆れを通り越した憤りの声色が含まれていた。
窃野、宝生、多部とは違って、乱波は治崎に対する使命感や忠義は微塵もない。どういう経緯で八斎會に加入したのかは不明だが、少なくとも滅私奉公なガラでもない。
「解ってくれたか良い引きこもりだ!!」
やった!と歓喜な声色を出しながら、バリアが解かれていくと、直ぐ様ファットガムに意識を傾ける。
調子の良いステップ気味な乱波は、途端に硬い地面を足で蹴り、距離を詰めていく。
「ッ――!?!!」
間合いに入った乱波は、何の見境もなく殴打の嵐を叩き込み、衝撃の破壊音が途絶えることなく倉庫部屋に響いていく。
一つ一つの重圧な拳は、一撃食らうだけで常人が骨折してしまいそうな勢いで、乱波一人で幹部三人の窃野、宝生、多部を合わせた戦力を上回っていた。
「ファットさん――!!」
「ぼ、しょう…!!俺に構うより…バリアのヤツ……!」
暴虐の限りを尽くし、荒ぶる殴打の勢いを増していく乱波の攻撃を食らいながらも、ファットガムは芭蕉に手短に言葉を返す。
先ずこの乱波という男の個性は不明――そして天蓋と呼ばれる男の個性も不明。つまり、二人とも個性登録をしていない裏社会の人間だ。
弾丸の速さと凡ゆるものを粉砕する拳、
要塞を連想させる硬さと凡ゆるものを防ぐ壁、

正しく矛と盾――厄介な上に敵としても願わくば出会いたくもない人物の組み合わせだ。
唯でさえ乱波を相手にするだけで骨が折れるのに、いざ彼の戦意を喪失させようにも危うくなればバリアを出してくるはず。安全圏に立っている上に、個性の詳細が不明であり、どれ位の威力でバリアが破壊されるのかさえ調べようにも簡単に出来やしない。
隙のないコンビ――誰かを狙うにしろ、また片方の人間が其れを補う。天蓋を狙うにしろ乱波の猛攻を凌ぐのは極めて至難の業。
ならば、盾役を担うファットガムが乱波の注意を引きつけ、芭蕉が天蓋を対峙すれば良い話。
「は、はい…ッ!!」
芭蕉は勢いのこもった返事をしながら、天蓋に視線を向ける。
恐らく、天蓋の個性は見た感じバリアを張る個性――ならば、それ以外の攻撃は仕掛けて来ないはずだ。
生憎、乱波の意識は完全にファットガムに向いている。自分が天蓋に攻撃を仕掛けることも気付かないだろう。
「なら…今がチャンス…!」
好機を逃さない。
墨筆を握りながら、彼女は彼の死角になるよう空間に「斬」の文字を記す。そして其れを天蓋に向けて墨字忍法を飛ばす。
斬を撃ちこむ事で、斬撃となり勢いを付けて天蓋に飛ばす戦法なのだろう、彼は乱波とファットガムの戦闘を眺めているだけだ。
「墨字忍法――【蛇折法・斬】!」
墨字で書かれた斬の文字は、そのまま垂直線を描いて標的に狙いを定める。
ガギィン!!
「ッ…!」
しかし、そう上手く物事が上手く進まないのが現実。
斬撃を弾く音、
傷一つ付かないバリア、
凡ゆる物質さえ通さない壁、

「フム…私も随分と舐められたものだ。まさか貴様に意識を向けていないとでも？」
瞑ってた瞼を開けて、芭蕉に視線を送る天蓋は、やれやれと言った口調で肩を竦める。乱波とファットガムの激しい闘争を眺めていたので、てっきり此方の存在には注意してなかったと思ったのだが…
「乱波の間合いに入った者は、なす術なく無様に死ぬだけだ。ヤツの速度に対応出来ず、やられるだけで木偶の坊に突っ立ってるのがその証拠…」
虎や獅子の間合いに入った人間が何の術もなく食い殺されるように、凄まじい速度と破壊力が高い一撃を何連撃も叩き込めば、態勢は怯み、力が入らず殺られるだけ。
謂わばゲームでいう羽目コンボ、脱出する術はファットガムには持ち合わせていないのが現段階で言える状況だ。
「ならば私は貴様の死角からの攻撃を注意するだけ。そう難しいことではない」
仮に――ファットガムが何かしら奥の手を隠そうとバリアの自分がいる。そんな天蓋を鬱陶しく思う人間は必ずや現れる。乱波が一人に意識を集中してるのであれば、天蓋に攻撃を仕掛け易いし、邪魔が入らなければ効率が良い。
だがしかし其れは――天蓋自身も想像できる範囲内の答えで、乱波が彼女に何の興味も示さないのが一番の理由だろう。もしあの獣が彼女に敵意を向けているのなら、先ず天蓋に攻撃を仕掛ける暇はないし、乱波が其れを許さない。
「そして貴様の力量では我の要塞を砕くこと…それ不可能なり。私の個性は乱波でさえも壊さないのだからな」
天蓋壁慈――個性『バリア』
集中力や精神を高めることで、空間からバリアが生まれる。相手や自分を閉じ込めることも可能で、範囲は限られている防御型だ。円場とは少し違った個性であり、瞬時に大きさや範囲、硬度を変えることも出来る。
「う…ッ」

芭蕉は声を小さく零しながら、焦りが生じる。やはり天蓋には物理や忍術が通じない上に効果はないようだ。
となれば、やはり乱波の死角を狙うべきか――？
「やっぱり…あの人をどうかしないと……でも、危なくなったらバリアを出してくるし…」
「オラァ――」
「えっ!?」
ドバァン！と今までで激しい衝撃波の音が、耳を貫く。
どうやらファットガムの方も体力が来てるらしく、口から血を吐き出す光景が、彼女の目に焼きつく。
「ファットさん!!そんな…私！」
「防御が得意？全然受けきれてないぞ？おいおいまさかへばってんのかデブ、お前が戦えねえなら今度は緑髪のチビを殺すぜ？」
乱波は興醒めしながら、親指を彼女に向けてクイッと合図を出す。まだ意識を保てるファットガムは歯を食いしばりながら――
「乱波くん言うたか君――俺の脂肪吸着でも衝撃が受けきれないって初めてやで？つまり打撃が効いたんは乱波くんで数年振りなんや」
ピタッ――と、時が静止したかのように、乱波の動きが硬直する。先刻まで興味が失せてた彼の魂は、再び揺さぶられる。
食いついた事に何とか安心したファットガムの口角は自然と釣り上がる。
「受けきれてない？アホ抜かせ！お前の腕が上がらんかどうかずっと試してたんや!!
俺も昔はゴリゴリの武闘派やってたんやで？だから――勝負や」
ゾクゾクと乱波の体が震え始め、ファットガムは、覚悟を決めた――
「お前の腕が上がらんくなるか、俺が先に死ぬか!!矛と盾の闘い！勝負と行こうや乱波くん――!!!」

「やっぱりお前は良いデブだぁ――!!!!」

気分爽快――今日も調子は絶好調！ウキウキ乱波くん!!!

我慢の限界を迎えた乱波はそれこそ、本物の獣の如くファットガムに食いつき、自慢の拳を振るう。

目にも止まらぬ速度を更に底上げし、ファットガムに己の全てを叩き込む。

――ドドドドドドドドドドッ!!!!

「ッッッ――!!??!」

想像を絶する激痛が、体全身を爆破させるように迸る。

計り知れない、経験したことのない痛みが、体の全てに叩き込まれ、大量の血反吐を吐く。

「ファットさんどうして?!!なんで自分をそんな…!!」

なぜ、相手を挑発してまで自分がより悪い状況へと追い込ませたのか…芭蕉にとっては知る術は勿論、理解すら出来ない。

本当に乱波のスタミナを切らす為に踏ん張るつもりだろうか？いや…無理だ、打撃や刃物を脂肪に沈めるファットガムは、限界に近い。このままいけば数分も経たずに死んでしまう。そんなこと本人が一番解っているはずなのに…

「振らなきゃ…筆を……助けなきゃ…早く、あの人を止めて……」

芭蕉の心は段々と暗く沈んでいく。

震える膝を止めながら、兎に角ファットガムを助けることだけを…天蓋は無理、しかし危険だと判れば乱波を包む。

いや、良いんだ――乱波を包めばファットガムへの攻撃も止まる。ならば自分の行動が最善手。

（は、早く――）

「おい、へばんなよデブ。今、肩が温まって来たからな――そろそろギア上げていくんだから、失望させんじゃねえぞ？」

彼女が文字を書き始めようとした時に、乱波の声が高く聞こえる。

瞬く間の数秒で、ファットガムの服はボロボロに破け散り、腹部には乱波に打ち込まれた拳の痕がくっきりと鮮明に曝け出していた。

流石のファットガムも、虚勢を張れるような余韻は微塵たりとも残っていない。
「あ…ああ……あぁぁあ…!!」
――ファットさん…もうあんなに…!
既に満身創痍、無事とは呼べないほどに傷は深く、吸着は殆ど出来ていない。苦悶に満ち溢れた顔のファットガムは、白目を向きながら態勢を維持することが彼のやれるべきことだった。
(ファットさん…私今、助けます!!)
筆を入れて、空間に文字を描く。
〝斬〟と書かれた忍術を、乱波の背中に向ける。例え天蓋に防がれようと、今ファットガムへの攻撃を止めれば死ぬことはない。そもそも衝撃を沈めるファットガムの容量を上回る乱波の馬鹿力は、忍を殺すのにさえ適応できる力を持っている。
邪魔をされた後、怒りの矛先を自分に向ける可能性だって低いわけではないのだ。

「ガァッハ――!!」
「おいおい嘘だろ!?まだ勝負は始まったばかりだぜ!?まだ動けるよな?!」

その頃――体力に限界を迎え、意識が朦朧とするファットガムの膝は折れそうになる。
足は震え、前面打撲、許容を超えたダメージ、もう致命傷にさえ至ってるファットガムに、乱波は眉をひそめる。
まだ戦えるだろ?
頑張れ、耐えぬくんだろ?
俺の腕はまだ上がるぜ。
余裕と底知れぬ相手の強さに、遠のく意識が更に遠ざかっていきそうだ。
(どんな個性やこいつ…!俺の脂肪吸着がもう殆ど意味を成してない……久方どころか初めてやこんなん!!)

乱波肩動――個性『強肩』
肩が強い単純で地味な身体能力を生かした個性。肩の回転が尋常じゃないほどに回り、予想外の乱打を叩き込む事が可能。

（せやけどな…さっき俺は盾言うてたけど、それ大間違いやで）
ファットガムは耐えながら心の中で乱波と天蓋に言葉を吐き捨てる。声には出していないので、二人にも芭蕉にも聞こえていない。
（俺の脂肪吸着はな…お前が今まで俺に与えた衝撃全部が吸着して沈んでるんやで!!沈めて抑えるのにエネルギー使うし脂肪はガンガン燃える!!
防御は薄くなるし燃費悪くなるが――蓄積された衝撃は、凡ゆる盾をブチ壊す!!!!それこそ要塞だろうと何だろうと!!）
ファットガムの個性から察して、ダメージを受けても平気な防御型と推測するのが妥当だろう。だがしかし、実際にファットガムは盾を捨てて矛にもなれるのだ。
なれる……のだが――
（けどなぁ、コイツのパワーと次に衝撃を与えるスピードがあまりにも早すぎて、盾がどんどん削れるだけでコイツに衝撃をブチかます反撃の余地がない!!あかん！時間さえあれば…！）

しかしまさかそれを知ってか知らずか――芭蕉が乱波の動きを止める時間を作ろうと、攻撃を仕向けてるとは想像が付かなかっただろう。

焦り、怖れ、嫌悪、目の前で無惨に叩きのめされてる光景を目にする芭蕉の目には、うっすらと涙が溜め込んでいる。
実を言って、芭蕉は乱波のような傍若無人は好きではない。
性格が受け付けないという点も有れば、彼を怖ろしいと見てしまうからなのだろうが、其れは彼女との性格が反対だからだろう。
嫌い――という点はないが、敵でありながら不覚にも惹かれてしまうのは、彼が単純に強いのと、己の命すらも顧みない恐怖の欠片もな

い点だろう。其れに関しては、賞賛に値する。
彼女は、天蓋に向けて使用した忍術を、今度は背を向けてる乱波に使用する――

「……えっ？」

しかし、忍術が発動しない。
〝斬〟と空間に書いたはずなのに、それを大きな墨筆で振るうだけで文字の効果が発揮できるのに、何も起きない。
ただ目の前に映るのは、乱波が一方的にファットガムを滅多打ちにしてる殺伐とした光景だけが、嫌にも目に入ってしまう。
「どうして…？どうして…！？」
何故、忍術が発動しない？
しかもこの段階…まさか、異能破壊弾を撃ち込まれたのか？いや、銃声の音は聞こえなかったし、この場に滞在してるのは四人だけ。死角から破壊弾を撃ち込まれるのは考え難いし、まず受けた衝撃も感じない。
勿論、天蓋自身が打ち込んだ可能性もない訳ではないが、確認したところ彼が銃を持ってる形跡も、撃った形跡もない。
となれば――理由は簡単。
彼女の未熟な精神が、気の弱い心が、忍術に影響を及ぼしたと考えるのが自然だろう。
芭蕉の忍術は、天蓋と同じく精神を研ぎ澄まし、集中力を高めることで文字の効果を発揮させることが可能で、今でも時々失敗してしまうことはあるが、まさか今に至って失敗するなんて……
ファットガムが死んでしまう焦り、
己の未熟さと精神の弱さ、
乱波という圧倒的な強者への怖れ、
頭の中では分かっているのに、心が其れを許さず、現実を拒む。
「そん……な！！どうして…こんな時に…！」
思わず目頭が熱く、涙が自然と流れ滴る。

己の不甲斐なさ、役目も果たせない失態、頼りない自分、弱い心が今を邪魔する、全てが自分の原因で、弱さが今の悲惨を招き入れ、何より自分でも解決できない自分自身に、苛立ちが止まらない。

泣き崩れそうになり、心が折れていく彼女を遠目に天蓋は…

(ああ、可哀想に…もうダメだ。彼女はもう立ち上がれない…)

鉄砲玉でありながら、意外にも芭蕉を慈悲深い目で見守っていた。

元々天蓋は月神宗教の一人として、とある教祖様に支えてた仏の身だ。彼が八斎會の新顔であり、治崎に拾われたのは、単に乱波の喧嘩癖を押さえつける為に招き入れたに過ぎない。

勿論、自分が他の人に必要とされてることを知った教祖様も「行っておいで、君を大切に想う人の役に立つんだよ」と、優しく悟ってくれた。

(彼女は優しすぎた…忍の身でありながら、優しさが返って己を弱くさせ、心に未熟を生み出した……そして彼女もこれから死ぬのだ。願わくば、救ってあげたいものだ)

敵でありながら八斎會の誰よりも慈悲深く、人の道に外れながら心情深いのは、芭蕉と似た者であり、優しさと心想いな共通部分があるからだろう。

だが、任務に私情を持ち込むほど天蓋も甘くはないし、自分を必要として迎えてくれた治崎に感謝をしてる天蓋は、だからこそ侵入者を排除しろと命令を下した彼の為に殺すのだろう。優しさも又、時に戦場で役に立つのである。

「私……どうしたら……」

頭の中が全て罪悪感に圧迫され、己の弱気に苛立つ中、懐から一枚の札が落ちる。

「――?」

ふと札を拾った芭蕉は、天蓋に気付かれず紙を見る。

「あっ……」

「おい!!まだ死ぬなよ!?始まったばかりなんだ!折角殺し合いを分かち合うヤツが俺の前に来てくれたんだ!!頼む!もっと俺に殺しの味を曝け出してくれぇ!!」
唸る拳、乱打の嵐、間合いに入る者全ての原型を壊す乱波は、獣の如く吠える。
肩の調子も良く、勢いと感情が昂ぶる余り、ペストマスクの口元が破り裂けてしまう。拳の残像さえも見えてしまい、ただただ目に映る物を殴り殺す乱波の乱撃を、ファットガムは――
(もうあかん……無理や…!衝撃は充分溜まった…けど、時間が稼げれへん!!このままやと冗談抜きで……)
死ぬ――そう錯覚した途端。
「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

ファットガムと乱波の間に割り込むよう、芭蕉が身を乗り出してきた。
「なァッ――!?!」
「何ッ?!!?」
誰もが予想しなかった展開。
ファットガムは勿論、天蓋自身も予想だにしない彼女の行動に、冷や汗が生じる。
彼女は確かに心が未熟な上で忍術は発動しなかった…成せる術がないとはいえ…なぜ?身を投げてまで?
心が揺らぐ天蓋はふと、ある事に気付いた。
(あの女…武器は何処に!?)
自慢の墨筆は何処にもない。
いつの間に?いや…そもそもいつから?
彼女の監視と、乱波の様子、二つを眺めてて彼女の様子を見逃してしまったのか?
「ッ……そうか!」
天蓋は彼女の目論見を、直ぐに見破った。

我武者羅に乱波目掛けて突っ込み走る芭蕉は、とても冷静で弱気な性格とは思えない程の雄叫びをあげながら、弱い拳を向ける。
喧嘩慣れた手でもなく、乱波と比べれば何とも貧相で、正面から殴れば直ぐに折れそうな細い腕。
(総司さんや雅緋さんは覚悟を決めて此処に来た――例え相手が誰であろうと…!)
――そして、総司は託してくれた。
続いて雅緋も、総司の想いを紡ぎ、一人で時間を稼いでくれた。
そして残された自分は、ただ怖くて何出来ませんじゃ、話にならない。
――私が此処で何も出来ずにどうするの!!!!
その心意気は弱かった彼女とは違い、心強くて頼もしく、芯を持つ覚悟。伊達に蛇女の選抜補欠でなければ、そんな地位で満足する彼女でもない。
彼女も蛇女生徒の一員であり、蛇女の誇りを背負う人物なのだから。

「おッ…おぉ!?」
気分爽快――ファットガムを殴り続けてた乱波は勢いを止めず、自分の目前に現れた芭蕉を見て最初こそ驚くものの…何の武器も持たずファットガムを守るように身を投げ出した彼女に、僅かに口角が釣り上がる。
だが、女だからといって殴るのに躊躇わない乱波は、拳を彼女に向けて――殴り殺す。

――ドドドドドドドッ!!!!

「ッ…!?があぁッ!い、…ッッ!!」
「ぬおぉッ!?!」
案の定、彼女は乱波の殴打を躱すこと叶わず、そもそも避けきれず、

予想通り殴られてしまう。
強烈な一撃の数々が、彼女に想像を超える痛覚を叩き込んでいる。
だが、乱波は俄然と驚愕し、目を大きく見開く。
（コイツ……！武器を持たない上に、吹き飛ばされない!?ミンチになってない!!）
乱波の拳はお世辞抜きで、とても強力だ。
常人が手加減した乱波の拳を食うだけでミンチになってしまい、11歳の頃はよく大の大人やゴロツキを重傷に負わせ泣かせていた。
だがしかし今はどうだ？
情弱だと、弱腰で武器を使う事でしか己の強さを誇示できないと見なしていた彼女は、武器を捨てまで闘うどころか、常人と違って簡単に殺されない。
闘いに、痛みに、何もかも逃げない根性――乱波の敵意の導火線に火が点いた。

「お前――良いな!!!」

全開フルスロットル、乱波は闘争心を激しく燃やしながら、思いっきり大きく拳を振るう。
先程までの卑怯者という見方を完全に捨てた乱波に、嫌悪はない。
ガギィン――!!
「ッ……?!!」
だが、乱波の拳は彼女に当たることは決して無かった。
聞き慣れた鋭い金属音が鼓膜を振動させ、満身創痍の芭蕉はゆっくりと倒れ伏せた。

「――天蓋!!!お前!!!」

正体は決まっている、天蓋壁慈しかいない。
今までに聞いたことのない憤慨に満ちた声色を発しながら、天蓋に吠える。

彼女と自分の殺し合いを邪魔されたのだ、乱波が怒らない訳がない。対する天蓋は物怖じせず冷静だ。
「上を見ろ乱波よ」
「？」
何を言い出すかと思えば、と言われた通りにバリア越しから上に視線を送ると――
ギイィン!!
遅れて攻撃を防いだ音が、乱波の耳を貫いた。
バリア越しには、芭蕉の墨筆が突き刺さっている。いや…突き刺さってるという表現は語弊か、正確には彼女の武器を防いだといえよう。そしてそのまま墨筆は誰の力もなく、突然天蓋の方向へ向かって飛んでいく。
勿論、解りきった攻撃など食らう筈もなく、安易にバリアを発動して防いだまで。
「どうだ乱波、此奴は武器を持たずと思わせてからのこれだぞ？私は卑怯な手段を使う少女から身を守り…いや、救ったまでだ。もしあのまま私がバリアを発動しなければ、貴様は敗北していたのだぞ？
その、卑怯者にな」
倒れ伏せた芭蕉に視線を戻すと、よく見れば彼女の体には「防」と記された札が何十枚も張り付いていた。乱波の計り知れない重い乱打を食らってもミンチにならなかったのは、この札が身代わりになったのだろう。だとしても、ダメージはあった――つまり、彼女が予め用意してた札の効果を持ってしてでも、乱波の攻撃は全て防ぎきれなかったのだ。
「……」
倒れ伏せ、気を失った芭蕉を、乱波は何も言わずとただ見つめていた。
――卑怯者？
たしかに。銃や刃物を扱うヤツは皆んな弱腰で、生身で相手に勝てないから道具に頼ろうとする。
拳では勝てない、じゃあ銃や刃物を使って勝とう、何なら食物に毒

を盛ってやろうと考える間抜けは飽きるほど見てきた。
しかし、コイツはどうだ？
武器を使ったにしても、コイツは身を投じてまで俺に勝とうとした。俺のパンチは大の大人でも号泣するし、札で身代わりになってたにしてもこの緑髪は最後まで退かなかった。
そもそも、自分が殺されてしまうと分かっていながら突っ込んだのは…俺を仕留めるため？生身や拳では俺に勝てないのは勿論、デブを助ける事も含めてなのだろう。じゃなきゃ背後で殴り掛かれば良いだけだ。
なのに敢えて間合いに入ってまで俺に勝負を挑んだのは……自分が万が一殺されても、今度は俺を仕留めようとしてたのか？
自分が死んで、俺を倒そうと？先ほどの引きこもり野郎に武器が振るわれたのも…天蓋すらも倒すため？
よく見れば、大きな墨筆には札で「回転」と文字が書かれていた。
芭蕉は八斎會邸に乗り込む前から、予め準備をしていたのだ。
先の闘いで何が起きるか分からない以上、彼女は札に念を込めた墨筆で、文字を書いていた。
それが今の闘いで生かされたのである。勿論、頭がパニックになってたので、準備してた札を忘れてしまってたのは咎められてしまっても文句は言えない。

何たる気質…コイツ、弱腰で弱気な性格だと、この中で誰よりも弱いと思っていたのに、現状――誰よりも覚悟や勝利への執念が上だった。
助けたかったにせよ、守りたかったにせよ、道理は何であれ、普通の人間やか弱いヤツは、此処までしない。
「チビ…」
俺は、誤解していたらしい。
弱いから卑怯な手段を平気で扱う。今までの奴らがそうだったし、少なくとも緑髪のチビは、道端に転がってるチンピラとは訳が違う。コイツには紛れもない執念と、芯がある――ただ気がかりなのは…一

体何が彼女をそうさせたのだ？
喧嘩や人を傷付けるのでさえ躊躇いそうなヤツが、何をそこまで……

――此処まで彼女を〝強く〟した？

此処で初めて芭蕉は、強者だと認められた。
選抜メンバーや補欠の仲間たちでさえも、強いと思われなかった…そんな小動物のような彼女は、狼をも噛み殺す獣に、強者に〝強い〟と思われた。
「何がともあれ、無意味だな――計算された戦法は鉄砲玉として賞賛する…しかし、如何なる策も、我の防壁の前でなす術なく倒れるまで」

「無意味やないで――」

『ッ…!?』
天蓋の言葉を遮るファットガムの台詞に、天蓋と乱波は意識を向ける。てっきり気絶して倒れてたのかと思っていたのだが…どうやら、違うらしい。
「まさか、芭蕉ちゃんに助けられるなんて思ってもなかったわ…って言うのも凄い失礼やけど、ホンマあんがとな!!

――お陰で良い矛になれたわ!!!!」
其処には、肥満なファットガムの姿は何処にもない。
脂肪は燃やされ、屈強な筋肉が見える彼は、まるで別人のようだ――盾を捨てたファットガムは、強靭な矛となりて、二人に矛先の拳を向ける。

彼女が紡いだ想い、今度はファットガムが背負おう。
そして彼女の代わりになって、矛盾の勝負に決着を付ける――

１７５話「芭蕉・オリジン①」

衝撃を溜めた腕は、迸る爆竹音を引き立てており、矛先を天蓋と乱波の矛盾コンビに差し向ける。

ファットガムが蓄えた衝撃全ては、乱波の猛威たるや拳によるもの。直で解る――此れは不味い…と。

「天蓋バリア解けェ!!」

そんな天蓋のバリアに乱波は憤慨を発しながら拳で何度もバリアを叩き込む。金属を殴る音が響くものの、亀裂が生じる気配は毛頭ない。獣の如く吠える乱波を他所に、天蓋は恐怖の顔に染まっていた。

「無意味どころか…まさかその為に…!!」

天蓋は全てを悟ったかに語りながら、ファットガムの片腕で抱えられてる芭蕉に視線を送る。彼女は既に気を失っており、ボロボロ…満身創痍だ、

先ほど萎縮してた彼女とは思えない予想外な行動は、普段取り乱れない天蓋さぇ驚嘆すべきものだった。

天蓋壁慈――宗教の人間でありながら、多少人間の心情は心得てるつもりだ。メンタルケア…と比べれば程遠いものの、基本的に人間の絶望、快楽、悲惨、不安、其れ等の感情を顔で一眼見れば大方、解るものだ。

少なくとも芭蕉がそうだ。

彼女は完全に己の弱さと未熟さで現実を打ちのめされ、恐怖で心が折れていた――そう言う挫折する人間はこの世に多く存在するし、いない方が少ないのはよく知っている。

だから彼女のことはもう強敵としては見ていなかった…だが、彼女は死地に自ら足を踏み入れ、見事に有利な転機を迎えたのだ。

「私は侮っていた、あの少女を……！いや盲点だった…！奴は忍…常人とは訳が違う!!我等の常識を覆すのはヒーローのみならず…!!」

脆弱で、力量も、精神も、全てに於いて惰弱だと軽く見ていた自分が阿保らしい。
油断をしていないと言い聞かせながら、彼女の優しさと甘さを見て強敵にすらならないと悟っていた。しかし其れが油断であり自分達の隙を見せていた…
コイツは弱い、勝てない、そう思わせていた時点でこの少女には既に勝機が有った――自然と侮ってしまっていたのだ。

人間は自分より下の者を見たり、弱いと判断すると軽く油断や隙を生じてしまう生き物だ。
頭の中で気を緩むなと言い聞かせても、何から何まで手を出す術は相手に備わってないと知ると、何だかんだで勝てると思ってしまう。
――彼女の最大の武器は、弱いことだ。
弱者とは、基本的に人間の価値観によって作られているが、共通する部分は物理的な法則も含めて力が足りないことだろう。
実力不足、力量不足、技術不足、種類によって弱さとは様々存在するが、彼女の容姿と甘さ加減を見て大抵の人間は「コイツなら勝てる」と自然的に錯覚してしまうのだ。
天蓋のバリアを壊せず、乱波のような喧嘩に強い訳でもなく、そしてコンビや連携で対峙されると難しくなってしまう…そんな彼女をダメだと見解した天蓋と、無視してた乱波が良い例えだろう。
忍の世界では強さが全て――しかし、敢えて弱さで相手を仕留める事が出来るのは、彼女自身の最大の武器であり、長所でも有るだろう。
「緑髪の少女…!!人畜無害な顔を立てながら…我等を一気に畳み込もうと…!その為の特攻だったのか!?!!」

だとしたら其れは最早脅威だ。
鉄砲玉の自分達が言うのはなんだが、忍でありながら、危害さえないと心の底で許してしまった自分に、あそこまでの戦法は、天蓋ですら理解できない。

何が彼女を変えた？
あの一瞬で何があったのだ…？
ファットガムの作戦もなしに？
懐の中に用意してた札を使ったのは理解できる、しかし問題は其処ではない――絶望に身を染めた彼女がなぜあの勝ち目のない現状に抗うことが出来たのかが不明な点だ。
これが連携…？いや、それにしては息が合っていなかった…
感嘆と恐怖、敬服と驚嘆が絵の具でぐちゃりと混ざったかに見えてしまうのは、決して言葉では言い表せない覚悟なのだろう。

しかし、天蓋とは裏腹に芭蕉はファットガムの作戦には気付いていなかった――どちらかと言えば、芭蕉の他人を思い遣る優しさと、お節介な所が原因だろう。
彼女はそもそも、ファットガムの個性が脂肪を燃やして最強の矛に使えるなんて詳細など、知らなかったのだから。

（私は……うまく、やれたかな……）

全身に走る痛みに苦しみながら、彼女は気を失ってもなお、夢の中で問いかける。
意識が薄らぎ遠のく中、二人の面影が映像のように流れ出す。
玄関男の活瓶を押さえてる総司、窃野、宝生、多部の三人を一人で相手にする我等のリーダー。
二人が命を賭してまで託してくれた想いを、蛇女の誇りを、自分も全うすることが出来たのだろうか？
私は、とても弱いから…いつも鈍臭くてドジで、肝心な時に忍法を失敗してしまったりと、役に立たないのではと、小さなことで悩んでしまう私が、皆様の役に立てたのだろうか？

――芭蕉はずっと、己の心の気弱さを悩んでいた。
誰よりも、何よりも、人を殺すことでさえ躊躇ってしまう彼女が何

故、悪忍の道を選んだのか。
理由の一つとしては、自分の忍家系による伝承が挙げられるし、悪忍となった家系から善忍への進路は難しい上、先ず無理だ。そういった意味では彼女が殺生を好まなくとも、悪忍になってしまうのは納得だし、先ず芭蕉の墨字忍法による家系は貴重で珍しい。
跡を絶やさない為にも、家系を築き血を継ぐ事は必要不可欠なのだ――一人っ子として生まれた彼女は忍を辞めさせる事は出来ないし、況して争いごとが嫌いな性格だ、大変酷な話である。
だがそんな彼女は別に辛くはなかった。
親の言う事はすんなり受け入れたし、自分が文句を言った所で親が聞いてくれる筈もなければ、自分の我儘で先代の祖先たちに迷惑をかけたくないという気持ちもあった。
特に趣味といえば俳句を詠む事と、習字が好みなお淑やかなだけが取り柄で、家族が喜ぶのなら悪忍になっても良かったのだと思う。
だけど訓練は過酷で、オマケに墨字忍法が一向に伸びなかった時は、自分は忍に向いてないのでは?と、後ろ向きになった気持ちは何度も味わった。
いつも…いつも悩んでたなぁ私。
墨字忍法はとても難しくて、活用する範囲が広い。文字が沢山あるだけそれなりの忍術が存在する…けど、雑念を振り払い、平常心を保ちながらではないと、一流の墨字忍法の使い手にはなれない。
だから心を落ち着かせる為、字を良くする為、暇な時間であればよく習字をしてたり、俳句を詠んだりと心を保っていた。
それでも一向に上手く伸びず、失敗をしてしまうのは、単に自分の実力が足りないからだろう。
だから嫌な訓練にはちゃんと従ってたし、弱い自分を強くする為に、何度も厳しい修行を毎日こなしてた。
だけど忍の修行って、本当に厳しいんだ。
私の根性が足りないかもだけど、土遁や水遁はお馴染みだけど、他にも色々…大きな武器を振り回したり、墨字で念じた文字を活用するって結構体力が必要だったりするんだよ。

技術的な面も含めて、忍の道は険しいって口にするけど、本当にその通りなんだ。
勿論、やっぱり辞めたいとは思ったし、仮に怒られたとしても当然の反応なんだろうなぁって思った。
それでも辞めなかったのは…今までの経験を無くしたくはなかったからで、此処で諦めてしまったらきっと…今までの苦労を裏切ってしまうようで、結局辞めずじまいだったんだけどね。

そんな私が、本当の心の奥底で挫折したり、惰弱さに打ちのめされたのはあの日からだったんだ――

中学の頃、進路が近付く秋ごろの季節。
私は勿論、他の忍学生も基本的に自分が忍家系だという存在を悟られてはいけない。
情報漏洩や流出先の経路は跡を追えば上層部が嗅ぎ付いて来るだろうし、情報先の発端を追跡すれば忍資格を剥奪されるのは口に出さずとも率直で理解できるだろう。

そんな私が、一般人の学生に紛れながら一人、下校の帰る途中――私は一人で物事に浸っていた。

(進路先はどうしようかな?悪忍学校、何処にするべきか…やっぱり一番無難なのが蛇女子学園かな?彼処は、志望動機の書類を提出すれば難なく入れるし…でもその後が…
それとも男女共学?となれば黒鳥学校、それとも蝶姪学校…)
うぅーん…と、悩みながら真剣に進路を考えてた時だった。

『あのー……すみません…其処の貴女』

ふと野太い静かな声が、上から聞こえた。
忍び寄る影、聞き慣れない声、自分に投げられた質問、自然に振り

向くと其処には
『道をお尋ねしたいのですが……』
自分を覆う大きなナニカが、此方を見つめていた。
身長は3メートル半か、首には巨大なラジカセが流れており、愉快な明日の天気予報が流されていた。
全身をボロいマントの布で被りながら、此方を見据えて口を開く巨漢に、思わず後退りする。
『スプリンガーのヒーロー事務所は何処ですか？』

その声は、とても重々しくて殺意が籠っていた。
瞬間にただならぬ殺意と憎悪が、彼の体から放たれて…私は思わず声を押し殺しながら両手で口を押さえていた。
「ひっ…あ、あぁ……の……」
尋常じゃない殺意、並ならぬこの男は、紛れもない敵だ。
忍は気配に敏感な上、そういった訓練を受けてるので、相手の力量や敵意を感知する為の術を身につけていても可笑しくはない。
だが――此れは芭蕉自身が生まれた人生の中で、今までに味わった事のないドス黒い気配だった。
こんな常人離れした気を発せられて、冷静ではいられないし、頭の中で我慢しろと言われても、どうしても体が反応して震えてしまう。
何時迄も答えないことに、少々嫌気が刺したのか、巨漢は赤い目をわずかに細める。
『……何で、教えてくれないんですか？』
男の声に重力が増した。
どうやら不機嫌になったのだろう…道案内とはいえ、この男は間違いなく尋常じゃないし、仮にこの巨漢を敵だと捉えるのなら、ヒーロー事務所に態々何をしにいくのだろう？
だけどそんな事を考える暇もないし、かと言って彼女も上手く舌が回らない。
迫り来る圧迫感、圧倒的絶対的な強者の前に、私はただただ震えて

萎縮することしかできなかった…
ただ――怖い、怖い、この人が怖い。
恐怖心でいっぱいで、心に余裕が保てなかった。
『――オイ、どうして……教えてくれないんだ……』
不快を通り越した怒りは、とうとう巨漢の限界を迎えたそうで、殺意と怒りを孕ませた眼光を芭蕉に差しむける。
当然そんな威圧が込められた眼を合わせれるはずもなく、反射的に眼をそらしてしまった。

パキッ――!!

建物の亀裂が生じる音。
ビルの建物は次々と嫌な音を立てながら亀裂を生じ、指で引っ掻くかのように、ビルに指で引っ掻いた痕が遺る。
男は完全に眼を細め、訝しげに眉を潜めながら、少しずつ建物を崩壊していく。
私はこんな時でさえ何も成し遂げれない…善忍になる必要はない上に、忍術を使って何とかこの苦難の状況を脱する試みさえもなく、ただ兎のように体を小刻みに震えるしか…
此処が公衆の前だから、どの道忍術を使うのは気が引けるにしろ、何も動けない私が、簡単に恐怖心に支配されてしまってる私が、どうしようもなく情けない。
悪忍としての道を進むなら、自分の苦行は自身で解決しなければいけないのに…
そもそもの話、何故か今日に限って警察もヒーローも不在というのは流石に引っかかったりはしたのだが…パトロールに出かけてるのか、偶々その場に居合わせていないのか、何方にしろ絶体絶命なのには変わりはない。
建物の破片がパラパラと落ちていき、建物全体にヒビが入っていく。もう助からない……そんな時だった。

『待ってください!!』

颯爽と自分の目前に立ち現れた一人の女子中学生が、自分を庇うように前に出る。

巨漢の男の動きが停止し、突如として現れた中学生に視線を落とす。

『あっちの角曲がって!大通りの左に2キロくらいで其処の事務所があるよ!!』

ピンク色の素肌をした女子中学生の子が的確にヒーロー事務所を教えると、巨漢は暫く黙ったまま、微かに頷いた。

『……有難う』

殺意も怒りも治り、軽く礼の言葉を添えながら――

『――全ては主の為に……』

最後に意味不明な発言を残しながら、二人に背中を見せて去っていった。特に大きな事件騒がれることはなくとも、その後にスプリンガー事務所がどうなったのかは不明。周りの人間が見てた市民たちは、一触即発の出来事に警察を呼んだそうだ。

賢明な判断といえよう…しかし、警察やヒーローの調べによると、器物損害としては兎も角、その敵の出身地は愚か、消息すらも不明な為に、お手上げになったそうで、大してこの時間は事故で終わりを迎えたそうだ。

放心してた私を、中学生の女の子が「大丈夫だった?!怖くなかった…?」と、心配そうに尋ねてきた。

顔は…見たことがないし、制服も違うので他校で間違いはないのだが、彼女の瞳は潤っていて、それでもってうっすらと涙を浮かばせていた。

あの女の子も、すっごく怖かったんだ……

『怖かったです……あ、有難う御座います……!うっ……うぅ…!』

嗚咽を漏らしながら、何か抑えてた線が切れたかみたいに、突然涙

が溢れ出した。恐怖の縛りに解放された反動だろうか、もしあのまま彼女が来なければどうなっていたか…

それ程にあの男から放たれてた気は異質で、いつ殺されてても可笑しくない危険的なケースだったのだ。

ホッとした彼女も、自分と同じように涙を流していた。

『良かったぁ…!!君が一番怖かったよねぇ!だってあんな怖い人に道尋ねられてさぁ…しかも今の危なかったもん!!』

二人揃って泣き崩れ、彼女は私の頭を何度も撫でながら慰めてくれた。学年は自分と同い年か年上か、もしかしたら年下なのか…それは知る由はないものの、兎に角嬉しかった。

生まれて初めて、誰かに助けられた訳だし、今の世代の中でヒーローに助けられた人間はこういう事を体験するのだろう。

救われた心地を実感しながら、嬉しさと同時に心の中でまた何処か、気弱な自分が生まれたことに、靄が張り付いたき気もした。

よくよく考えると、自分はこれから悪忍になろうとしている自分が、どうして他人に…況してや一般人に救われているのだろう。

そう考えると、益々自分が悪忍として生まれてきた理由が、段々と解らなくなってきた。

それもそうだ。

悪忍とは冷酷非情、惨忍かつ強さこそ全て。そんな自分に悪忍らしさはあるのだろうか?

穏やかで情に深く、優しさと弱さに満ち溢れてる…そんな自分が、悪忍としてこの先やって行けるのだろうか?否――答えずとも結果は見える。自分は限りなく死ぬだろう。

甘い考えでは忍の道は乗り越えられない、現代社会の影に生きる者は、同じ影に潜みし者に遅れを取る。

(私は…一体……)

家に帰ってからも、この心に募った靄は張り付いたまま離れない。まるで粘りついた霧が、こびり付く感触だ。とても爽やかにはなれやしない。

その日以降――ずっと上の空になっていた。自分がどんな悪忍に

なりたいのか、明確な目標すら見つからず、気付いた時には自分はただ漠然と悪忍になりたかったんだと殊更気付かされて、私と言う存在は悪忍の世界では必要とされてないのではと、自分で自分を否定しがちになってしまう。

そんな事が一ヶ月も続けば、自主の特訓でも全く成果が出せず、一週間丸々と墨字忍法が使えなかった時は本当にどうしようもないと思ってしまった。

救われたことに後悔はない――ただ、自分が悪忍として余りにも情けなくて、親の期待には応えられるのだろうかという気持ちで既に心がいっぱいになって、自分が忍として生きていける未来すら想像が付かなくなってしまった。

人はネガティヴになってしまうと、負の連鎖が続いて根暗になりがちになってしまう。だから人は段々と他人を信用しなくなるし、反復動作に近い意味で、自分がダメな人間、使えない、役立たず、中傷の言葉を自分に添えてしまい、納得してしまう。

ポジティブな人間とネガティヴな人間の圧倒的な差が広がってるのはそういうのだろう。

でも、そんなダメな自分が変わろうと、明確な意思で悪忍になろうと思えたのは、あの頃の出逢いだったから――

いつも通り、一人で下校し真っ直ぐ家へと帰る道中。

何の変哲も無い街中は、平和の象徴のお陰で今日も安心しな日常が送られる。

あの日――大きな漢は何が目的でヒーロー事務所を訪ねたのかは不明だが、現時点では全く話題にすら触れられていない。

……やはり、あの頃がどうしても気掛かりになってしまうのは、心残りとそれなりに堪えたのだろうか。

などとまたマイナス思考に偏っていると…

「何じゃあお前!?!何処の学校のモンだぁ、あぁん!?」

何やら物騒な大声が聞こえた。
揉め事だろうか、複数人の学生が少人数の学生を寄ってたかって文句を吐いてる絵姿が映っていた。
幸い周囲の人はあんまり居合わせてなかったので、其処まで騒めくような雰囲気には流れなかったが…
(なんだろ…?)
建物の物陰に隠れながら、その様子を伺うことにした。隠れ方や足音を立てない動作は、流石は忍の訓練をしてるだけあってか熟練されてはいる。
「いや、せやからなぁ…浜茶も反省してるんや。儂の顔に免じて許してくれや」

1人の中学生が怯えてる横で、自分と同じ緑髪の女の生徒が、何の表情も立てずに何やら謝ってるようだ。
黒のセーラー服…というのは現代となっては滅多に見ないものだが、彼女の衣装は殺伐としており、裂け目が生じている。
「巫山戯んじゃねえ!!何をしに来たかと思えばよぉ…仲間を連れて来てアタイらに恥かかせようってか!?金を用意しろって言ってんだよ!」
「いや、どう考えてもあんな大金普通の学生が稼げれるもんじゃないで。それにコイツも悪気があった訳じゃないし、黙ってるのも可哀想思うてな、だから許してくれって、なぁ?」
「じゃあ悪気があったら何しても良いのかよあぁん!?!」
聞いた話だと、集団グループの不良の1人が、偶々同じ学年の不良グループに絡まれたそうだ。
1人になってる所を付け狙ったのか、詳しくは存じないが…自分一人の所為で仲間を困らせたくないと泣き悩んでた所を、自分達を救けてくれた命の恩人に相談したそうだ。
その子は「了解や」と何の躊躇いもなく答えて、不良達を説得してくれてるらしい。
「つかテメェ誰だ?あん?女だからって舐めてると痛い目みるぞ?」

「……『日影』やけど…名前聞いてどうするん？金を用意するのは無理やで」
日影――と呼ばれた女性は気怠けそうに呟くと、囲んでた不良はニタニタと気味悪く嘲笑する。
「だったら代わりにテメェがアタイらの袋叩きにされなぁ!!」
「パンパンパンって、ビニール袋で儂らを叩いて何になるん？」
一触即発の空気の中、何処か抜けた発言に聞いてた自分でさえも思わずずっこけそうになってしまったが、彼女は決してふざけてないのか「ほんで？」と首を傾げる。
「て、テメェが殴られるんだよおぉぉ!!!」
調子が狂ってしまった不良グループのリーダーは、金属の釘バッドを掲げて地面に叩きつける。
瞬間――無数の釘が地面から生え、針山地獄のように突き上げていく。
「どうだぁ?!半殺しにされる覚悟は持ったかい!?」
「いや凄い個性やなぁ…けど、普通に公衆の前での個性使用って、違法だって春花さんが言ってたなぁ」
「違法だぁ？んなもん知らねえよ!!」
興味もなさそうに淡々と呟く日影は、怯えてた不良の女子学生を背中に抱えながら、上空に飛ぶ。
鍛え上がられた脚力と、あの手慣れた動き…ヒーローとは違った身の動かし方に、思わず見惚れてしまう。
「悪いけど…やる気ならワシも手加減せぇへんで？穏便に済ませたかったけど、そっちがやる気なら…」
「だったら掛かって来なよ!!尻を振ってるだけの豚じゃなくてさぁ!」
ケラケラと笑いながら個性を発動して日影を狙う不良達――助けなきゃと思った途端。
「ええで、但し後悔すんな」
その言葉を吐き捨ててから、不良達が簡単に薙ぎ倒されたのにそう時間はかからなかった。

一本のナイフに仕込まれた武器…訓練された動きは軍人やヒーローとは一線を画すようで、まるで狩りを愉しむ蛇のようだった。

「大丈夫か？」

不良の女子一人に安否を確認する日影に対し、学生は「ありがとう…！このご恩は一生忘れない！また…借りができちまったみたいだよ…」と何度も頭を下げていた。

同じ不良にも慕われて、あんなにもカッコよくて…

「凄い……あの人…」

見ていた自分も見惚れてた余り、感嘆としていた。

素晴らしいパフォーマンス、誰一人として犠牲者や怪我人を負わせず、あんな怖い人たちをさも何ともない様子で蹴散らした彼女は、自分が悪忍として、強さとして、目指す理想に近かった。

冷酷非情ではなくとも、恐怖の概念さえも感じない彼女の無表情と、如何なる困難やトラブルでさえも物怖じしない精神は、彼女の憧れとなっていた。

（何だろ…あの人を見てるとすっごく心が温まるというか、落ち着いて…さっきまでのモヤモヤが何ともないみたいに軽くなって…）

不安と不甲斐なさで心が折れかけてた彼女は、今となっては嘘のようだ。何かしらの躍動感や、彼女の憧れと尊敬、何よりも自分には決して備えてない強さを、自分が目指したかったそうなりたかった要素が全て注ぎ込まれてるようで…

（私も…あの人みたいになれるかなぁ…？）

もし、彼女みたいな忍になれたらきっと…一流の忍になれるのも夢じゃない。あの人のような強い忍になれたら、ダメな自分を変えることだって出来るんじゃないか？

そう考えれるようになった自分は、とても先程まで気を落ち込んでた彼女とは同一人物とは思えず、逆に此処まで変われたのが不思議に思えてしまう位に。

そうして、悪忍になる為に高い目標を心掛けた彼女は、悪忍としてかなり有名な私立蛇女子学園に通うことを決意する。

其れが、芭蕉と日影との出会いになるなど、当時は想像さえもしていなかった――

１７６話「芭蕉・オリジン②」

私が蛇女に入学してからの月日は、今思えばあっという間だった。
時間が流れるというのは早いもので、一年３６５日というのは、長いようで短い…そんな感覚だ。
蛇女子学園は悪忍の中でも歴としたエリート学校で、入学者は一年生だけでも何千は超える大規模だそうだ。
悪忍学校としてはかなり珍しく、１万の学生が所属する忍学校はそう多くはない。しかしその分選抜メンバーとして選ばれるのが五人なので、改めて蛇女子学園のハードルの高さに驚嘆してしまう。
その中でも選抜補欠メンバーも五人、空席なので狙うなら一先ずは補欠から、という手は有る。
一万人の忍学生の中で候補を含めた選抜の座が僅か１０人の少数で決められてると考えると、とても乗り気…というよりも、気力が自然と抜けてしまう。
選抜メンバーは謂わば忍学校の代表人だ。
学校の顔立ちを保つのも含め、プライドや実力は高いし、学園の恥を晒す行為は決して許されない。
過激で厳しい立場に身を置かれ、周りから選抜の座を狙われ、実力や地位を維持し続けるのは並の忍学生では決して無理だろう。
「すっごい…此処が蛇女の本拠地…」
深い森林地帯に校舎が備わってるなど、思いもしなかったが…道理で善忍には気付かれない訳だ。
更にこの森林地帯はかなり危険で、道中は毒を持つ蛇や虫は勿論、蛇女の改良種である邪想草と言ったものまでが配置されており、一般人を立寄らせない険しい道に設置してあるのだ。
立ち入り禁止区域に指定しているのは基本、上層部のツテで回ってはいるが、此れは忍云々関係なく立入を禁じざるを得ないと感心してしまう。

そんなこんなで山に入ってから数時間、漸く蛇女子学園に到着した芭蕉は、本拠地の蛇女…聳え立つ天守閣を見上げながら呆然としてしまう。

念願の蛇女に入れたのが嬉しくて、つい浮かれてしまいガチだが、決して気を緩めてはいけない。

「ええっと、案内書通りに行けば…良いんですよね？」

蛇女子学園のパンフレットを見つめながら、指をさしたり周りの景色を確認したりと、繊細によりよく確認を取っている。其れは無理もない――何しろ蛇女子学園の校舎は忍学生が多いため、其れなりに敷地の規模が大きく、訓練所も含めると、大学よりも大きいのだから、まるで迷路だ。

パンフレットの地図を広げながら、熱心に場所を探して数十分後、ようやく蛇女の校舎に入ることが出来た。体感時間で言えば小一時間位なのだが、慣れない敷地と校舎に戸惑ってたり、感心してたりと見学してたからだろう。

一通り、学校内での説明を終えた一学年生は、即座に訓練所へと足を運ばせる。何でも入学式やらガイダンスといった行事はやる暇がないとの事で、教師による蛇女の校則を話せば即座に蛇女の生徒として訓練に励まなければならないらしい。

本来なら座学を終えてから、忍の訓練を開始するのが学校内での流れなのだが、蛇女子学園に入ったばかりの新人という理由で、先には蛇女を代表する選抜メンバーや上級生を紹介するそうだ。

その中では一学年全員が強制参加なので、何百を超える生徒を前にたったの四人の上級生が稽古を付けるのだから、緊張する分、俄然やる気が出るものだ。

因みに選抜メンバーが四人なのは、過去に選抜内の一人が卒業した為か、空席となっているらしい。

その空席を埋めるべく、全学年で空白の選抜メンバーの一人を抽選するそうだ。選抜メンバーに入る為の試合が開催されるので、一年生は勿論、先輩方も気合が充分に入っている。

「一年生の諸君、入学おめでとう。鈴音先生から話は聞いてるだろうが、初日から我々選抜メンバーが今日一日中に稽古を付ける。貴重な時間だ、至らぬ点や解らないことは私たちに聞けよ」

選抜メンバーの一人は、ひと塊りになってる一学年の集団を前にそう告げる。

容姿は褐色肌と強気な性格が印象強く、背中は7本の刀を所持している、目つきが冷たい先輩だ。

ポニーテールを揺らがす彼女の名前は『焔』――選抜メンバーの二年生であり、気高い雰囲気を漂わせている。強気で時に冷たくとも厳しいが、実力は自分たちと比べれば天と地の差が開くほどに、別格だ。

他にも後ろで待機してた三人が軽く自己紹介をしていく中、私はある学生の名前を聞いて茫然としてしまう。

「春花さんと同じく、三年の『日影』や。ほな、よろしゅうな」

日影――かつて、悪忍になれるかどうかと悩み明け暮れてた自分に、希望を持たせてくれた女性だ。

対面して言葉を交えた訳でもなく、窮地な状況下で助けてくれた訳でもなく、ただ彼女の強さや魅力に惹かれ、憧れた、自分にとっての理想とする存在。

「まさか……日影さんが、悪忍だったなんて……」

最初は夢かと思ったけど、現実だった。

嬉しいと喜ばしい感情は湧いたが、当初は衝撃が強かった余り、その時は本当に口を開けたままポカンとしてしまってた。

だが思い返せば確かに日影が悪忍になっても可笑しくない点は幾つか存在する。

学生なのにも関わらず、あれほどのアクロバティックな動きや、滑らかな動作、蛇の如く獲物を仕留める目つき、ヒーロー希望者とはまた違った異質な強さを彼女は備えていたので、そう考えると何かしらの合点は付く。

まさか自分が悪忍としての道を歩むきっかけの一つとなった人が、

志望した蛇女子学園に所属していたなんて、誰が予想できたことか。想像できるわけがない。
「でも…これって……」
だがそれと同時に気付いた事…それは、自分の未来へ歩む力を与えてくれた彼女と、身近にいられること。それが自分にとってどれだけ幸福なのか。
日影本人にとっては身に覚えのない出来事でも、自分としては大変嬉しいものだし、感謝すらしている。
――これはきっと、運命なのかもしれない。
なんて恋愛小説でありきたりな台詞を言いがちではあるが、少なくとも自分にとって、この出逢いは奇跡にも等しい。僅かな出逢い、大したことのない事柄、それでも自分が目指したい目標へ向かって行けるのは、彼女がいたからだ。

選抜メンバーの全員が軽く紹介を終えた所、私は迷わず日影さんの所へ行って稽古をつけて貰った。
私以外にも殆どの生徒が集まっており、大した話は出来なかったものの、彼女と一緒になって訓練を受けて貰えたのはとても嬉しかった。
本人は全く感情を露わにしないものの、そもそも上級生の立場な上に、自分たち大人数を相手にするのは大変だから、鬱憤してたのかもしれない。
それでも僅かだが、言葉を交わしてお喋り出来たのは、蛇女入学初めての思い出だ。

これからこの先、日影と出逢う日は増えていくのだろうか？少なくとも同じ学校で住まうのだから、逢おうと思えば逢えるのだろうが、彼女は自分達と違って選抜メンバーの人間なので、そう簡単に話し合えるとは限らない。
「はぁ…日影さん、今日も素敵だったなぁ……」
それでも芭蕉にとって今日一日会話できただけでも満足してるよ

うだ。頬を紅く染め上げ、表情は柔らかく緩んでいる。
彼女の中に芽生えてた小さな懸念の眼差しは少しずつ、自分の中で大きく成長し大きくなっていく感覚がする。
「クールな所とか、冷静な表情とか……あと無邪気な顔立ち…あぁ、凄いなぁ日影さん。私がそうなりたい人が、まるで鏡として現れたみたい…」
などと、夜を照らす月明かりの下、斜断化した草原に腰かけた芭蕉が恋した乙女のように独り言を呟いてると。
「呼んだ?」
不意に暖かな感情に浸っていると、尤も愛おしい声が耳を打つ。自分以外にも夜を外出してるとは思わず、振り返ってみると、其処には確かにいた。日影先輩が――
「あっ、えっ?!ひ、日影先輩…!!い、一体いつから…?」
「今来た所や、今日の夜は丁度ええ風が吹いてるしな。ちょっと当たろうかと思ってな。そしたらあんさんがブツブツ呟いててな。ワシの名前を呼ばれた気がするから声かけたんや」
ああ成る程…と心の中で納得しながら頷く。
全部聞かれてた訳ではないし、小さい声だったのでよく聞こえなかったそうだ。何がともあれ、本人に対しては聞かれたくない本音だったので、良かったと胸をなで下ろす。
「そういや今日、わしの稽古付けて貰ってた子やな。名前聞くの忘れてたわ…えっと」
「あ、そういえばそうでしたね…」
大人数を一人で相手にしてた上に、名前を教える機会すらなかった為、日影が彼女の名前を知らないのは無理もない。それでも、あの人数の中で自分のことを覚えててくれてたのは、かなり嬉しい。
それもそのはず、日影にとって自分が気にしない、又は興味のない物は何であろうと全く覚えない上に直ぐ忘れてしまう性質なので、彼女の顔を覚えてたのは確かに喜ばしいものだろう。
「わ、私は芭蕉と申します……えっと、その…こ、これからも宜しくお願いしまする!!」

「しまする？」
「……ごめんなさい日影先輩、今のは忘れてください」
そして緊張してつい言葉を噛んでしまうのも、芭蕉の特徴的な部分だ。顔を真っ赤にしながら俯く芭蕉に、日影は小首を傾げる。
「あーっと、芭蕉さんか。どうや？蛇女の様子は…言うてもアレか、まだ初日だから慣れるの大変やと思うけど」
「あっ、お気遣いありがとう御座います……確かに敷地や校舎が広くて覚えるのは大変ですけど…こんなの全然、苦じゃありませんから」
蛇女子学園は大きな学園なので、中には一学年の生徒は迷うことがあるらしい。因みに日影もよく学校内に迷ったことがあるので、新学年の生徒達の心情は痛いほどに察せれる。
中でも教室に入るのに遅刻した者はペナルティの追加もあり、一時期は大変だったのを日影はその身に染みらせている。
「そうか、芭蕉さんは真面目で頑張り屋さんなんやね。どんなに厳しくても大丈夫やと思うよ」
その心を持っていれば。
感情はなく、心の声が小さい日影にしては、ヤケに優しくて珍しい台詞だ。
「ひ、日影さんがいるから…俄然、頑張れるんです……」
「ん？」
「あ、いえ…何でも御座いません…」
小さな声で呟いてたら、隣に座る日影が反応したようで、咄嗟に何事もないように首を横に振る。
「あの…日影さん、良ければ今夜、少しお話でも……」
「ん？あー、ええよ。わしも今日は特にやることないし、詠さんのもやし話に付き合うよりかは断然」
もやし話が何かは知らなかったものの、それから夢のような時間だった。敬愛する人と隣で話し合ったり、解らないこと、不安なこと、様々な声を日影さんは聴いてくれた。
「大丈夫やで、芭蕉さんは優しいからなぁ。わしにはないモンやけど、

きっと誰かに必要とされると思うでアンタは――」

日影も心の何処かで嬉しかったのだろう。

芭蕉の優しさが、かつて自分を拾ってくれた親代わりの、大好きな日向に。

髪の色、優しさ、心の落ち着くような暖かさは、冷徹で心のない戦闘マシーンと怖れられた日影の心を和らげていた。それは本人自身も気付かぬ程に、温もりが心地よく、懐かしささえも感じてしまう。

だからこそ、日影も芭蕉に優しく、かつて日向に言えなかった言葉を、出すことが出来たのだろう。

互いが互いに良い影響を与え、それが利益となり成長を施す。

人と人との繋がりは確固たるもので、時にその出会いは人の世界観や人生を変えさせる。

気が付かなくとも、無自覚でも、其れは影響を受けてる証拠なのだ。

日影の、たった一人の憧れの先輩が口に出した言葉が、なによりも嬉しくて、自分の心に残る大切な宝物だ。

貴女はいつも、私の心に元気を与えてくれる。

力の源として、明るく安らかな気持ちにしてくれる。

そんな理想な貴女が、何より大好きで、愛おしくて……貴女がいてくれるだけで、私…ここまで来れましたよ。

まだまだ未熟で、貴女に比べたら程遠い…だけど貴女みたいにどんな窮地や恐怖を前にしても、怯まずに堂々と前に出たい。

その一心が、今となっては此処まで貴女を求めるなんて、当時は思いもしなかった。

――日影さん、皆んな…私は、役に立てたかな？

強く、なれたのかな……いつも心が弱くて、どうしようもないダメな自分を変えたくて、ここまで成長した私は、蛇女の誇りを掲げれたのかな…？

願わくば、日影さん…貴女と肩を並べて一緒に、蛇女の誇りを背負

いたかったなぁ…でも、それは叶わない夢となり、貴女は私のいない場所でいない時に、去ってしまった。
どうして消えてしまったのだろうと、嘆いてたけど…でも、泣いてるばかりじゃダメですよね。
いつまでも怖くて、肝心な時に動けないじゃ、一流の悪忍になんてなれませんもの。弱くて何も変わってない私のままじゃ、日影さんに顔向けできない。

だから、私――強くなります。
弱くても、未熟でも、此処から…少しずつ前へ進んで、貴女とまた肩を並べれる日が来ますように。
蛇女の皆んなと一緒に誇りを背負って、一人の蛇女の生徒として…沢山の人達の役に立ちたい。

私は――蛇女の誇りを……そして、私の為に託してくれた皆んなの気持ちに応えたい。

総司さん、雅緋さん……私は、上手くやれたかな？

――私は…蛇女の誇りを掲げれましたか？

「敗因一つや!!この女を甘く見とった俺もお前らも!!!」
気を失い気絶してる彼女を片腕で抱き抱えながら、ファットガムは拳を強く握りしめる。
涙を流しながらも、男は吠える。彼女のお陰で紡いでくれたこの機会は、決して無駄にはしない。
そして許せなかった――彼女は弱いと見込みながら、上手く頼ろうとしなかった己の不甲斐なさ。
惰弱、格下、軟弱、全てにおいて彼女を見下してた二人組、自分にも他人にも憤りを隠せないこの感情。

全て芭蕉という女性を甘く、弱く、認めていなかった事実が、何もよりも許せず、勢い余って己を殴りたくなる。こんなにも頼りになって、自分の命すら顧みず、勇敢に立ち挑んだ彼女を、軟弱呼ばわりするのはあってはならない――絶対に赦されない。

「最大最高最防壁ィ!!」

「――無駄だ天蓋、バリア解け…破られる」

絶体絶命に直面し、危険だと見解した天蓋は、直ちに焦る衝動を無理やり押し殺しながら、バリアの硬度を最骨頂に強化する。

そんな天蓋のバリアも無駄あがき、焼け石に水程度でしかならないことを悟った乱波は、不敵な笑みを釣り上げる。

一触即発――痺れる空気が強く流れ込み、ファットガムも乱波も拳を強く握りしめる。

さぁ、最後の決着をつけよう。

結果が見えていようと、何であろうと、せめて借りはキッチリ返しておかねばなるまい――

「思い知れや――芭蕉ちゃんが掲げた蛇女の生徒の誇りを!!!!」

そして――魂を。

最弱によって動かされた賽は形勢逆転を成し、見事に最強の矛と盾を、文字通りに吹き飛ばす。

ファットガム――個性『脂肪吸着』

打撃や刃物等、脂肪で沈ませることによって衝撃を蓄え維持することが可能。但し許容量を超えてしまうと、ダメージとなり身体に影響を受けてしまう。

また、脂肪を燃やして吸着をなくすことで、蓄えた衝撃を放つことも可能なため、最強の矛にも盾にもなれる。

矛盾コンビによる闘い――此処で決着。

１７７話「なんだお前」

放たれた衝撃は、砲撃の如く吹き飛ばす。
矛を振るうように一直線を描き、拳を虚空に突き刺すと、想像を遥かに絶する衝撃波が、部屋一面を覆い尽くす。天蓋のバリアは跡形もなく破壊され、ガラス細工が割れたような爽快音が鼓膜を貫き、衝撃に当てられた天蓋と乱波の二人は成す術なく大きく吹き飛んだ。
「矛と盾の勝負、こっちの勝ちや!!」
ファットガムの逞しい勝利の宣言――とうに乱波と天蓋の二人組は気を失っており、聞こえてるかどうかさえ不明だが、一応勝負の決着だけはハッキリと伝えておこう。
「三下のザコと虚勢張って言うてたけど、これ芭蕉ちゃんいなかったら確実にお陀仏やった……それほどに」
この二人組は強かった。
凡ゆる欠点や弱点を、互いが補い弱点や死角をなくす――我々ヒーローが当たり前のことをやってるのを同じに、奴等もそれなりのコンビネーションで攻めてきた。
今回は偶々、運が良かったのかもしれない…しかし、もし下手して他の人間、又は入中から相澤を庇ったのが自分一人だけだったらと想像するとゾッとしてしまう。
意気投合するペアを敵に回すと恐ろしいというのが、改めて骨身に沁みて理解した。
「う……うぅ…ぁ……」
「おっ!芭蕉ちゃん目ェ覚めたか!?」
腕で安全に抱きかかえられてる芭蕉は、微かな呻き声を上げながら、全身の激痛に表情を歪ませる。
全面打撲、乱波の攻撃は下手すれば人間を簡単に殺めてしまう単純

なパワーだ。鍛えられた忍学生でさえアレを食らえばどうなるかは検討も付かないが、墨字忍法で予め防御用として用意してた札を貼っつけてでも、この威力。
もし何の策もなくただただ突っ込んでいたら、限りなく死んでた確率は極めて高い。
「あ、あの…私……眠って、た？」
「ちょいと気絶してたけど、凄いな芭蕉ちゃん。君がいたお陰で、俺は救われたんや。有難うなぁ…そんでゴメンな、こんな無理をさせて」
気絶から目を覚ますのは早いものの、流石は忍だ。
幾ら防御力を高めていたとはいえ、あの暴君の猛攻を受けてもなお、気絶から早く復活するのはタフネスというか…やわな鍛え方はされておらず、厳しい訓練を受けてきたのだと知る。
「私の、お陰…？」
「芭蕉ちゃんいなかったら確実に死んでた、そんでもって無理させた挙句、君のこと頼ろうとしなくて本当にゴメンな…！でも大丈夫やで、敵さんはもう倒し――」
たから。その言葉を告げる前に、ガラリと小石が地面に転がる音が微かに聞こえた。音が反響してる為か、ただの聞き間違いではない。
「ま……だ、だ――」
振り向き声の主に視線を送ると其処には、倒れてたはずの乱波が立ち尽くしていた。ボロ雑巾みたいな重傷で、見事に立ち上がってみせたのだ。
「え……？」
「はあぁ――!?!」
二人共一同、驚愕する。
芭蕉は微かに気を失った程度だったので、二人組が吹き飛ばされた過程は見てはいないものの、それでも壁にクレーターみたく凹んでたあの光景から、満身創痍で立ち上がるとは夢にも思っていなかったらしい。

特に一番に衝撃を受けたのはファットガムだろう。
乱波の一撃の打撃は強い――乱波が放った衝撃はゆえに２００発は超えるであろう猛威。溜め込んだ衝撃を一気に放出した上に、下手すれば食らった相手すらも目を覚まさない可能性だって低いわけでもないのに、天蓋のような盾役でもないのに、矛の乱波は血を吐き捨てながらも、立ち上がる。
「お前…嘘やろ!?矛役やんけ！何で攻撃特化のお前が立ち上がれ…いや、盾役のバリアによって衝撃が…！」
天蓋の最大最高最防壁のバリアによって、衝撃が緩和された可能性。それが頭に過ったファットガムは歯を食いしばる。
迂闊だった――バリアを壊しても、確実に敵の戦意を潰せる訳ではないと、何故解らなかった…
そもそも乱波がまだ動けること自体が驚きだし、もう奴の衝撃を吸着する脂肪も残っていない。盾もなければ、肉弾戦こそは得意なものの、乱波と比べれば雲泥の差だ。
「わ、私……まだ、やれ、ます……から…ファットさんは……下がって…」
「芭蕉ちゃん…？」
ケホケホと咳き込みながら、弱々しい腕を震わせ、体を抱え込んでるファットガムの腕を掴む。
口から血を流しながらも、少女は戦おうとする。
「無茶や！君もう本当に――」
「無茶して…当然なんです……私、いつも気が弱い上に……大事な時に動けなくて……そんなダメな自分のまま、変わらずには…」
「君…そこまで…」
震える声を精一杯に喉に振り絞りながら、訴えるかのようにファットガムの顔を見つめる彼女に、目頭が熱くなる。
そう言えば、自分の事務所に来る時だって――
『ほぉ、悪忍から志望が入るなんて結構珍しいなぁ！芭蕉ちゃん言うたっけ、こんなマイナーヒーローの事務所、入ろうとする奴結構少な

くてなぁ、丁度環っちゅーへボメンタルしてるビック3から一人、善忍の学生がおるんやけど、大丈夫か？』
『はい……！えっと、全然大丈夫です！』
　最初は君、すっごいオドオドしてたり気が動転しててて、優柔不断な面が結構あったよなぁ…まるで環と夕焼の二人を見てる気分になったわ。
『本当に…私たち悪忍って結構、偏見な目で見られたりするので、採用して下さるだけでも嬉しくてつい頬が…』
　小動物みたいでなんか和むなぁ…って誰でも思ってまうやろ？こんな子が悪忍だなんて思わへんし、逆に善忍ですって言った方が採用率高くなると思うんやけど、政府や国には嘘は吐けないので、流石にそれはダメである。
『けど芭蕉ちゃん、どうしてこんなマイナーヒーローの事務所選んだんや？』
『えっと……私、結構近接戦…じゃなくて、武闘派と行った肉弾戦は得意じゃないんですけど、ファットさんは経験あるんですよね？』
『よお知ってんなぁ、まー隠すことじゃないから一応ネットのプロフィール紹介で書いてあったりするんやけどな。よーは苦手克服か！』
　こんな人気の低いヒーロー事務所は、プロフィールを載せても余り目を通してくれなかったりするので、こういう世間で注目を集めガチなヒーローの世の中でも特に気に触ることはないのだが、自分を見てくれるのは何かと嬉しい気分だ。
『あ、はい！その…私っていつも気が弱くて、優柔不断な場面とか、勇気が足りなくて足を引っ張ったりとか……あと、危なっかしい人を前になると竦んでしまったり…』
『んー、忍っちゅー所の生活や仕事の場面はよーわからんしエッジショットに聞けば解る思うけど、たしかにそうなると危なっかしいというか…ヒーローだと判断ミスは勿論、選択を遅らせると人質とか死んじゃうケースって割とあるしなぁ』
　最近は僧坊ヘッドギアの強盗誘拐殺人事件の凶悪犯や、辻斬惨殺事

件のデス・マンティス、大量虐殺事件のムーンフィッシュなど、数えれば幾らでもいる。そんな凶暴な敵を前に躊躇や選択肢のミス、遅れた行動は自分の命を脅かしてしまうので、何にせよ彼女の弱気を治さなくてはいけない、という点に関しては一理ある。

『まあ戦闘の立ち回り全般、気の弱い所直すのはよー分かった。けど…それなら色々な事務所があるやろ？』

『あ、えっとですね…』

忍学生には、就活や進学等にある面接はない。

上層部が忍学校を卒業した者に、適当に名を呼んで、任務を与えるだけの話…駒の詳細など、強いか弱いかの優劣さえ知っていればそれで良い。

だが…此方もヒーロー事務所を構える身…なので、ヒーローとしてのルールに則って貰うべく、軽い面接をしているのだ。

『その……お恥ずかしながら、大きな理由ではないんですけど…私、好みの性格から何かと大阪に興味がありまして……』

――好み？

確かに大阪はそれなりに有名だし人気も良ければ活気も良いし、好みを挙げれば幾らでもあるので、検討がつかない。

『鉄板焼き……特に大阪の名物が大好きで、ファットさんもよく食べてるんだとか…』

あの時は面白い子が来たなぁ思うて採用したなぁ。

意気投合…はあるんやけど、彼女が弱い自分を変えたいと言った時から、大凡…採用は決まったもんやけど……まさか、この短期間で、よくここまで――

「ダメなんかやないで、芭蕉ちゃんはもう立派に強く――「そうだ女……勝負、しろ」ッ!?」

ほんわかとした暖かな空気の流れを、一瞬で凍てつく乱波の声。よろりよろりとフラつきながら、獣は痺れた拳を力づくで握り締める。

「女、名前……なんだ？」

「えっと……ば、芭蕉と、申します……」
突然、勝負しろと言った途端に名前を尋ねられた彼女は、正直に忍名を通す。素直に答えた彼女に
「そうか……芭蕉、覚えた。
奥に応急処置できる部屋がある――芭蕉とデブ、付いて来い。傷の手当てをしてやる」

乱波は吹っ飛んだ予想外な台詞を吐き捨てた。
『……えっ？』
危機感マックスの流れから、突然治療してやると言われた二人は、ポカンと口を開けたまま茫然としてしまう。
そんな状態が暫し数秒――
「罠やん」
ファットガムが口を開いた。
「アホか、俺が罠を張るように見えるのか？」
そんなファットガムの警戒に苛立つ乱波は声を低く荒げる。なんだこの妙なコントは…と思う矢先に――
「何の真似だ乱波よ!!どう言う了見で貴様、敵に塩を送るのか!?」
「…あァん？」
乱波の背中は、天蓋の怒声を浴びてしまう。
其れもそうだ――敵を始末しろと命じられたにも関わらず、任務は愚か、侵入者の治療など、敵としては余りにも虫が良すぎる。
天蓋も身体こそ動かせないものの、乱波を制止するよう全力を尽くしてる。
「貴様の暴走を止め、コントロールするのが我の役目！喧嘩狂い故に欲望を貪る獣が、何故ここにいる!?全てはオーバーホール様の為なのだ!!
侵入者を殺せ、嬲り殺しにしろ！貴様の役目は何だ?!」

此処まで憤りと気が昂ぶった天蓋は今までに見たことがない。仲間割れ…なのかどうかは知らないが、恐らく其れに近い部類だろう。若干、今の流れに困惑する二人を御構い無しだ。

ドォン――!!

乱波は天蓋に近づき――思いっきし腹部を踏んづける。

「ごふッ…!」と酸素を全部吐き出されてしまう天蓋は、トドメを刺されたと言わんばかりに直ぐに気を失ってしまった。

「つるせぇんだよ、黙れや引きこもりが……バリア張る余力も無ェんだろ？其れに俺を止めたかったら言葉じゃなくて行動くらいしてみせろ。あのガ…芭蕉はそうしたぞ」

白目を向いて伸ばせた天蓋には聞こえないと知りながら、乱波は悪態の言葉を放つ。

天蓋が喧嘩が得意で無いのも、バリアという防衛の個性を得意とする仏の使いというのは、オーバーホールからは聞いているし、よくペアにもなったりする。

しかし、喧嘩が出来ないから言葉だけでしか吠えないのは正直、うんざりしていたのだ。バリアを張れず、単に口だけで捲し立てられても鬱陶しいだけ。少なくとも芭蕉は天蓋とは違って行動で示したぞと、言葉を置いていく。

「さて、話をしようお前ら」

くるり、と正面に向き直る乱波は、高揚しながら声色を変える。どうやらファットガムと芭蕉の二人組がえらく気に入ったのか、調子が良さそうだ。

「生憎、俺も殺しはしたいが両腕折れちまってな…まともに腕が上がらねえ……」

「何が言いたいねん」

「喧嘩だよ、殺し合いだ。俺は地下格闘技からやって来た…知ってんだろ？個性フル活用、バリバリ違法だらけのファイトクラブだ。俺はあそこで育ったようなものだ」

地下格闘技――噂には聞いたことがある。

場所や詳細は不明だが、上層部や警察、法律でさえも認められてな

い違法を犯す地下格闘技場があるのだと。
殺し、武器、何でもござれ――金さえ払えば客だって簡単に入れる場所だ。乱波は１０歳になってから、親の反動で喧嘩の道にめり込み、結果的に彼は地下格闘技の人間として生きてきた。
其処には自分の個性や力をフル活用できる上に、大好きな喧嘩も喜んでやりたい放題…客も喜び自分も喜ぶ。乱波にとって地下格闘技場は正しく理想とする幻想郷――夢のような花園だ。
「ただなぁ…１２歳の頃からもう彼処も飽きちまったんだ。俺と戦う奴らの殆どが武器を使ったり、卑怯な手段を使ったりで、真っ向勝負を挑むヤツでも少し殴られただけでベソかいて泣き崩れ、命乞いをしちまう……生き甲斐だった彼処はもう、腐ったも同然さ…」
乱波はつまらなさそうに、自分の出でを語り、肩を竦める。
それでも他に行き場はないし、特に考え事や物事に没頭できるかと言われれば無理、難しいことを考える柄ではないのは本人でも理解できる。ならば下手に野垂れるよりも、衣食住を与えられてる彼処で生きていた方がまだ楽ではある。
……尤も、生きてる心地さえ感じられないが。
「分かるだろ？やりたいことができない辛さ…!!
命を賭すことでしか生まれぬ力！そのぶつけ合い！その身に宿した力のみで対抗する強さ！
だから良い…良いんだよお前たち二人！特に芭蕉、俺はお前が一番気に入ったァ!!」
昂ぶる感情を曝け出し、抑えられぬ衝動を解き放つ。
乱波肩動は、芭蕉を見つめる瞳は、正しく獣…獲物を見据えた狼だ。
「芭蕉――俺は卑怯な手を使うヤツは大っ嫌いだ。そんなヤツは誰でも勝てる、勝負や痛いことに逃げてるだけの保身に走る臆病者はな…
だが、お前は卑怯や汚い手を使おうと、俺を倒そうとするその一心が俺を此処まで追い込ませた…!!
お前はそこら辺に転がる有象無象じゃない、勝利への執念に己の命さえ顧みず殺し合いに身を投じるお前は実に良い!!卑怯ではなく、正々堂々と真っ向勝負を挑んできたその勇姿はなおよし!!!」

口角を釣り上げ、狂人は破顔う。
「再死合をしよう…!!傷を治せ…次は絶対に殺してやる!!」
その笑顔に若干、歪んだモノを感じ取れるが、それ程に彼女にご執心であり、気に入ったことを示しているのだろう。これを喜べば良いのかどうかはさておき…
「自分知ってるか?この後ヒーローや警察がごっつう来て捕まるだけや。君、ブタ箱行きやで?次なんてあらへんのや」
「煩え!今の戦いはドローだ!まだ誰も死んでない!コイツもお前も俺もまだ死んでないんだよ!!」
「なんちゅー滅茶苦茶な…なんで律儀にシップ則ってるんやお前…」
他の鉄砲玉の幹部とは違い、最初っから最後まで危なっかしい、嵐のような輩だ。
傍若無人――此処まで来ると何処か清々しさを感じてしまう。芯を貫くとか、己のルールに忠実なのだろう。潔さに関しては、感嘆とするものがある。
「す、凄い人ですね……」
「まあ、願わくば治っても大人しくしててくれれば幸いなんやが…あの性格から考えてまず無理やな」
乱波肩動の無茶振りに、何処か苦笑気味な芭蕉。彼女も満更でもなさそうで、乱波に気に入られてること自体、嫌な気分ではない様子が垣間見える。
「しっかし芭蕉ちゃん、短期間で本当に変わったなぁ。強くなったでホンマ――」
傍で身体を支えられてる芭蕉に、ファットガムの優しい言葉が放たれた。一体何を…と、彼女が口を開く前に、部屋の扉――ドアノブに手を置く乱波が問いかけてきた。
「おい、芭蕉――お前、デブが言ってたが、蛇女?が、どうとか言ってたな?なんだそれは」
「えっ?あ…えっと……私の今所属してる忍学校です……」
「組織じゃねえのか学校か!
そうか……なぁ、お前は選抜を代表するもんなのか?」

「選抜代表なんてそんな…！私はまだまだ未熟で、選抜候補ですし…」
「へぇ…」
先刻まで敵同士、殺し合いをしていたのに、今となっては軽く談笑するような仲となり、緊迫とした空気はもう何処にもない。
「じゃあ――蛇女は相当強え学校なのか……お前より上の奴らが沢山いるのなら、忍の世界も悪くねえのかもな」
乱波肩動はどちらかといえば、敵よりも悪忍寄りだろう。
芭蕉とは違って、殺戮に何の躊躇いもない、死地の上での命のやり取りには忠実に従い、己の命さえ顧みない。
雅緋と戦った三人の鉄砲玉とは違ってかなり個性的に強い方面だ。
「益々気に入った。惚れたぜお前の悪の誇りってヤツはよォ――また、お前と殺し合いてェな」

何がともあれ、乱波はとても嬉しそうに微笑んだ。（最後のセリフは物騒だが）
其れは肉食獣が時に見せる優しさに近いもの……あのバトルジャンキーな彼からは想像もしない台詞に、思わず胸が引き締まる。
「良かったな芭蕉ちゃん、見てみ？君、今までずっと弱いって、未熟だって自分を言い聞かせてたのに、今じゃ俺みたいなヒーローどころか、強敵さんにまで認められてるんや」
自分の傍で囁いてくれるヒーローに認められ、自分よりもずっと格上の存在に認められ、蛇女の誇りはより高く舞い掲げられた。
今まで自分に対する強さや成長は実感など湧かないが、蛇女の皆んなや、エリを救うべく身を削ってる皆の役に立てた実感が、突然に溢れ出した。
「何でしょう……私、とても…嬉しいです……此処に来て…皆んなの役に立てた実感がして…」
「せや、芭蕉ちゃんは皆んなの役に立ったんや。俺一人だったら絶対に太刀打ち出来んかったし、助けられたわ」
なんともほんわかな感じだろうか、まだ闘いは終わってはいないも

のの、それでも決着が付いたような流れだ。
　芭蕉は微笑みながら、ファットガムに支えられ、乱波の跡を付いて行く。因みに芭蕉が携帯していた墨札の「縛」で、気絶してる天蓋の身を拘束し、ファットガムが引きずる感じの絵柄は、何ともシュールなことだろうか。

　地下迷路を歩いてから数分後、一室の部屋に入ると中は殺伐とした医療室となっていた。
　鉄パイプ型の白いベッドが置かれており、後は丁寧に大きなダンボール箱が積み重ねられていたり、棚の中には包帯や薬品やらが収納しており、匂いもそれが原因か、消毒の独特とした香りが充満している。
「えっと、あったあった。これと後包帯だな」
　手慣れた動作で薬品やら包帯やらを取り出す乱波の絵面は意外性があり、物騒で口を開けば「喧嘩」「殺し合い」の言葉しか出ない単細胞の脳筋からは、想像も出来ない光景だ。
　いや、もしかしたら喧嘩の際に負傷して薬を使うのに慣れてるのかもしれない。
「芭蕉ちゃん、とりま今は休むでホンマ。此処で逆に無茶したところでわいら、お荷物になっちまうしな」
　宣言の際に「さっさと皆の所へ戻るぞ」なんて啖呵切ってこのザマでは、皆に顔向け出来ないものの、これだけの負傷で戻った所でやれることなど殆どないだろう。
　それに人員は幸いまだ向こうには沢山いる上に、イレイザー・ヘッド、そして環が側にいるので問題はないだろう。
「治ったら殺すからな！早く治せよ！」
「ホンマ無茶言うなや！つか生かせ！」
　前までは敵であったのに、このコントの流れや組み合わせも、芭蕉からすればボケツッコミの漫才コンビにも見えてしまう。
　そんな二人のやり取りに苦笑しながら、芭蕉は疑問に思ったことを

口に出す。
「あの…乱波さん。質問してもよろしいでしょうか？」
「喧嘩の質問か？」
「なんで質問＝で喧嘩へと脳内変換するんや。どうなっとんねん君の頭は」
「あっ、いえその…強ち間違い、ではないのですが…」
乱波のボケ、ファットガムのツッコミを終えて、芭蕉は少し言いにくそうに口を開いた。
「乱波さん…どうしてその、死穢八斎會の組に入ったのですか？」
それは尤もな疑惑であり、乱波の話を聞いてなお不思議に思った芭蕉の質問は、ファットガムの心を代弁していた。
「乱波さんは強い人と、闘いたい…やりたいことをしたいのが生き甲斐なんですよね…？だとするなら、乱波さんが八斎會にいるのがどうしても見えなくて…」
「同意見やな、君なんでこんな弱小ヤクザなんて言われてる組に入ったん？君の家事情は解ったし、そもそも知名度も高くないのに何で此処なん？」
二人の意見は正しいといえよう。
喧嘩好き、バトルマニアの殺し合いを好む乱波からは、殺伐としたイメージしか相性が合わない。
「そりゃあお前…俺がオバホに負けたからだよ」
乱波の声は嫌に静かで落ち着いていた。
「さっき言ったろ？俺が地下格闘技で飯食ってた人間だって。んで、偶々か、それとも俺の噂を裏で嗅ぎついたのか、突然俺の前にオバホが現れてな。是非ともウチの組に入れって言われたんだよ。まっ、当然勝負に委ねるわな」
「そ、それで……乱波さんは、負けてしまったと…？」
「いや、死んだ――秒殺されたよ」

その言葉が、二人の心臓を震わせた。
ドクン…！と、脈打つように、とても信じられない言葉が彼の口から出たものだ。
嘘…とは一瞬だけ思ったものの、生憎向こうは嘘もつけず、妙な所が真面目な男。まして お世辞でなくとも、嘘や冗談を言うようには見えないのだ。いや、乱波ならそんな嘘は吐かないし、する必要性はない。
「と、思ったら一瞬で元通り。目の前が真っ暗になったかと思いきやな…んで、約束は約束。俺は晴れて八斎會の組に入ったよ。
それでも俺は好きこのんで此処に入った訳じゃないし、その後にも俺は喧嘩を仕掛けた。殺し合い――結果は0勝5敗、5回殺されて5回生き返された。俺はオバホを殺すために此処にいる」
乱波の一つ一つの言葉に声が出ない。
勝負に負けて組を入ったのは解る、しかしあの乱波を前に意図も容易く…
「あの乱波さんを……瞬殺？」
「つかちょい待てや…つまりオーバーホールは…あの目にも止まらぬ瞬速と人間を軽くミンチにできるパワーを持つ乱波くんを…捌いてたっちゅーことか？」
正確には、打撃…ダメージすら与えられず、乱波は見事にオーバーホールに完敗したということ。
オーバーホールの個性は強力だからだろう…乱波の拳に触れて分解したのかもしれないが、それにしてはあのパンチを避けれるとは考え難い。
つまり、素の力で乱波の速度を上回り、オーバーホールの個性で乱波を殺しては蘇らせたと考えられる。
「治崎は何が目的なん？エリちゃん言う幼女を監禁して、変な薬を捌いてるんやろ？裏の話は聞いとるし、もうバレバレやけど…なんでそんな力を持ちながら、戦闘は部下任せで逃げるか隠れるかしてるんや

？」
「ふっ…無駄なことよ。そんな事を貴様らに話すと思うか？」
ファットガムの質問責めに、気絶から回復した天蓋は不敵な笑みを浮かべながら小馬鹿にするようは発言を取る。
「そもそも貴様らは敵以前に組織の秘密をバラす愚か者など此処には存在し――「ヤクザ者の復権だとよ」――なっ!?!」
存在した（いた）、乱波（愚か者）が。
「詳しい事は直に聞いてねえが、オバホとクロノが話してんのを偶然にも聞いちまってな、異能破壊弾を大量に闇市場に流出して世界中にばら撒くんだと「よせ！やめろ!!」――今の世代、ヒーローやら忍やらでごっちゃ混ぜになってりしたろ？その勢いの波を上手く利用して社会の支配者になるんだってさ「やめるんだ乱波!!」つまり、個性や忍術のない世界を作り変えるんだってよ。
俺は支配だの能力破壊だの心底興味ないが、ただまあデカイ事件だってのはバカな俺でも解るわなぁ…「頼む!!いい加減に口を閉じてくれ!!やめろと言ってるのが聞こえんのか乱波よ!!!」――その為に戦力と金が必要らしい」
全力必至に訴えかけ、言葉を遮ろうとする天蓋を無視しながら、乱波は治崎の悪事と計画をペラペラと喋りまくる。
正直、部下が簡単に口を割って話すとは考えもしなかったが、わくよく考えれば乱波は治崎を殺す為に此処に滞在し、忠誠心はほぼないので、秘密にする理由がないのだろう。
「それが終われば――実行の日はもうすぐそこらしい」

時間は少々遡り、別の地下室。
何処か、左も右も分からない別の場所にて――四人組が二手に分かれて対立している。

「……なんだお前」
その内一人、刀を持って豹変した夕焼は、自分と同じ刀を持った幼女に問いかけた。
「お初目に、かかります。私は『斬口崎子』――八斎會の四天王と呼ばれています」
又もや激突――夕焼と対立するは、凶器を持った七歳の幼女。

１７８話「八斎衆・四天王」

芭蕉とファットガムの二人組が戦場から離脱してしまってから直ぐのこと、取り残されたサー・ナイトアイ一行は冷静な判断で分断を図る。

「烈怒頼雄斗、麗王、環、夕焼は左側の階段を上がってくれ――デク、雪泉、イレイザー、ロックロック、警察の皆様は私よ方へ付いて来て下さい」

今にでも壁の波が背後から迫りつつあることを察しながら、短い時間で判断し、戦力を半分に分断させる。

生憎、壁を壊すのはデクと烈怒頼雄斗二人の役目なので、階段を上がって直ぐに壁を壊せば問題ない。

（――ちィ!!させるか…ダミールートの方で戦力を徹底的に潰してやる!!個性消しも厄介だが…！）

入中も心情から察して大分焦っている御様子で、冷静さを欠けていた。滴る脂汗を垂らしながら、鉛のように重いコンクリートを操作して妨害に専念する。

「らぁ！」

「そりゃよ!!」

二人の意気投合のコンビネーションで、拳と蹴りが炸裂し、壁を見事に粉砕。バラバラと瓦礫が落ちゆく音を立てながら、壊した壁の奥には……

――黄金の鱗が隔てていた。

「えッ…!?」

「なんだ、これ？」

デクと烈怒頼雄斗の素っ頓狂な声の音量は、思ったより身近でよく聞こえる。二人だけでなく、皆も凛とした綺麗な鱗に目が行ってる。

「不味いな…まさか此処で『切裂』の個性がやってくるとは…」

「切…裂……って、リストに載ってた？」
成る程、まさか入中の『ミミック』と、切裂の個性を組み合わせるとは思わなかった…
となると、恐らくヤツもまた近いだろうと推測が伺える。
「構いません――壊しま「ダメだ!!!お前の体が裂けるぞ！」ッえ？」
デクが破壊しようと試みるも、サーの怒号に似せた静止の言葉に、思わず体が竦んで、止まってしまう。
「ヤツの個性は凡ゆる物を切り裂く鱗だ！お前の生身の拳や蹴りでは簡単に裂けられ致命傷を負う！下手すればお前の足が真っ二つになっても可笑しくないんだぞ!!」
足が真っ二つになる。
シュートスタイルやオールマイトの個性を引き継いだ緑谷からすると、想像を絶するものだ。最早、絶望と恐怖しか存在しない、強個性も良いとこだ。
青ざめる緑谷を他所に、鱗壁の向こう側で切島が「へっ！」と頼りらしい声が聞こえた。
「だったら尚更、俺の個性が頼りになるな！俺の『硬化』はなぁ…最強の矛にも盾にもなれるんだ!!」
漢気溢れる烈怒頼雄斗は、強く拳を握りしめ、闘志を熱く滾らせる。
切島の硬化は防御にも長けてるので、歩く盾が使い方次第によって矛になると考えた方が妥当だろう。

「だから――お前も消えろ!!!」

不慣れなドスの利いた、荒々しい声色に、皆の動きは止まる。切島が声の方向へ振り向いた途端、壁が押し寄せ軌道を変える。
「なっ!?」
そしてイレイザーを排除しようとする戦法を同様に、今度は切島を壁の穴に放り投げようと試みる。いつのまにか、切島本人でもすっぽりと入れそうな穴が空いており、力押しで抵抗してみるも、実技試験でのセメントス先生と同じ結果として、成す術なく押されてしまう。

「切島さん!!」
「クッソオオおおおおおぉぉぉぉぉぉぉ!!!」
麗王の危惧な声色に、切島は猛威たる雄叫びを上げる。
そう、切島の矛と盾という弱点のないと思える彼には、突くと脆くなってしまう弱点が存在する。
其れは、圧倒的な物理的干渉、対抗できない理不尽な現象――硬くなってもどうしようもない原理だ。
外部からの攻撃は防げても、痛覚を遮断するわけでも、神経を通さない訳ではない。冷気や熱、電撃、様々な感覚は皮膚を通して働くし、増して筋力を上げてる訳ではないため、ゴリ押し技の対応は期待できないのだ。
(畜生…!このままか?このまま押されちまうだけなのかよ!矛と盾で、皆の役に立つって決めたのによォ……!!これじゃあ俺…お荷物になっちまってるじゃねえか!)
心の中で叱責混じりに叫ぶ烈怒頼雄斗は、悔恨と謝罪を入れ混ざった顔を浮かべる。
どうやら次にリタイアするのは、自分たちらしい…
「させません!」
これ以上切りがないと判断した麗王は、鞘に収めてたレーザーブレードを引き抜き、壁の波を縦横無尽に斬り裁く。
閃光の軌道が乱れる無駄も隙もない剣技は、見惚れてしまうほどに美しく、気高い。硬いコンクリートの壁を豆腐みたく斬り刻む麗王を鬱陶しいと肌身で感じた入中は、舌打ちをする。
(この女も邪魔だな……ならば、お前もお亡くなり願おうか!!)
再びもう一つの壁の波が押し寄せ、麗王の体を強引に押し付ける。物理的な干渉で、この勢いを殺すことは不可能なようだ。
「クッ…!こういう時こそ、銀がいれば何の問題もないのですが…!!」
幾ら自分が夕焼と共に雄英の生徒を全員まとめて相手に出来たとしても、無敵な訳ではない。
王者であろうと、楯突く者をねじ伏せようと、絶対的に約束された勝利があるなど、この世界には存在しない。

麗王もまた、何の術なくして、切島と同様に壁の向こう側へと放り込まられてしまう。
「烈怒頼雄斗！麗王さん！」
環の覇気のこもった圧は珍しく、メンタルの弱いサンイーターは瞬時に手を蛸の触手に変えて、二人を救出するよう試みるが…
ザクン――!!
肉斬る音が、鮮明に耳を鳴らす。
斬られた蛸の断面から血が溢れ、サンイーターは思わず顔の表情を痛みに歪ませる。
「なッ――んだ!?!」
「サンイーター!!」
既に刀を手に持ち豹変した夕焼は、獣の如く飛びかかり、サンイーターの蛸触手を切り落とした張本人に刃先を向けるものの…
「こーんなのさー、殴って殺せば良いんじゃねー？」
伸ばした声が、耳元に囁かれ、振り返るも遅し――数発の衝撃が横から襲いかかる。
「うおォッ――!?」
先手、数発の殴打。
訳も分からず攻撃を食らった夕焼は、なんとか吹き飛ばされた衝動を利用し空中を足で蹴り、見事に態勢を整える。
「――なんだお前」
不機嫌…というより、戦闘狂の眼差しを二人組に…特に刀を手に持つ幼女に問いかける夕焼に対し――
「お初目に、かかります。私は『斬口崎子』――八斎會の四天王と呼ばれています」
律儀に答える幼女――〝斬口崎子〟は黒いペストマスクと、赤黒い刀を二本、両方手に携帯しながら女の子らしい声を出す。瞳は血に染まったように赤く、母には何処か切り口やらの痕があり、髪はボサボサだ。年齢的には二桁もない…七歳相応の子供だろう。
「うぅ～～ん、ぼーくはー…『護武皮柔増』だよ～。崎子と同じく～…八斎會の四天王なんだーよーねーーー」

伸びた独特な口調はマイペース気味で、自分と同じ選抜メンバーの仲間である『牛丸』に似た喋り方だ。
「八斎會…四天王？」
鉄砲玉とは違う、聞いたことのない連中だ。
護武皮はリストには載ってたので、大方個性は知ってるものの、斬口崎子と呼ばれる幼女は不明…戸籍リストや名前すら知られていない、乱波、天蓋と同様に完全なる裏の人間だ。
抑も、斬口崎子と呼ばれる少女の名前自体が、敵ネームなのではとの疑いがある。
「はい、他の八斎衆の鉄砲玉とは違い、懐刀を含めた四天王は若頭・オーバーホール様の夢を追うことを許可された者」
「おーれたちーー、お前ら全員殺したーらさーァ、後を追って良ーて、言われたんだよなぁ～ー～」
他の鉄砲玉はあくまで足止め程度――しかし四天王は他の奴らとは訳が違う。
寄り辺のない人間を治崎自らが拾い、八斎會へと介入させ、治崎自身が認めた強者だ。故に、治崎の計画…野望を共に歩むことを許された特別な戦力だ。
「へぇ、下に出会った奴らとは格が違うって訳か」
「ゴミ共でももう少し時間が稼げれると思っていたのですが、なるほど…入中の妨害も含めてここまで来れたタフネスさは恐縮します」
「つ～まり～～、俺たちの出番…って～えー、わーけだねーーー」
乱波と同等の身長をした男は、言葉を伸ばしながらマイペースな口調で指を差し向ける。マスクは白のフクロウをモチーフにしており、体は一回りデカイ。
「テメェらがやるってんならよぉ…オレもやらざるを得ねえ訳だが…大丈夫なのか？ちびっ子のガキが一丁前に刀なんざ振り回してよォ」
「気を付けろ夕焼…あ、相手が幼女でも、油断は大敵…」
「先ずオメーはそのヘボメンタルどうにかしろよな！」
相手が幼女と油断してるように見えたのか、沈黙し続けていたサンイーターが口を開くものの、豪快に笑いながらガラスのハートをいじ

られた。
「ああ、心配はご無用。私は戸籍には入っておらず、オーバーホール様に尽くすまで…その為の死とあらば、喜んで」
などとやり合いをしてる真中、崎子は外見の幼女とは思えない口調で、予想外な言葉を口に出した。
「…あ？」
「私がオーバーホール…若様に拾われたのならば、そのご恩に応えるまで。如何なる結果であろうが、どうこうするにせよ、私は若様の為なら人殺しなど容易い…」
「崎子はねぇ～え～、びんぼーにんがぁ～、行きつく場所で育ったぁーーかぁ～～らねーーー。そこでぇ、オバホ様に拾われたからなぁ～」
「護武皮、何ですかその呼び方は…訂正しなさい」
「乱波の～マネーー、してみた～」

斬口崎子――戸籍リスト及び、名前も不明…謎に包まれた幼女は、四歳の頃に貧民街で暮らしていた。
元々は裕福な家庭で暮らしてたら、気優しい一人の女の子だったのだが、個性が発現してから彼女の人生の歯車は狂わされた。
家庭内でのトラブルが起きてから、両親に捨てられ貧民街へ置き去りに――後に治崎と出逢うのはまだ先の話。
「なぁ、お前…忍家系で育ったのか？」
「？貴女には関係ないでしょう？私たちは敵対…ゆえに殺し合いに身を投じた場所で、敵の家系を知って何になります？」
「ああ確かに関係ねえな、オレはお前と今日で初めて顔を知ったし…けどな、敵味方関係なく純粋に疑問があったからだ」
「…？」
「忍として育ってきた訳でもねえ小さな女の子が、どうして死ぬのさ

え臆せず、人を殺すことに何の躊躇もねえのかが知りたい」

小学生くらいだろうか、マスクも武器も捨てれば花が咲くような可愛らしい女の子なのに、どうしてこんな子供が殺人鬼みたく冷酷な残忍になったのか…

敵に対する意識、油断を引きつける、誘い込む訳でもない、夕焼自身が湧いた純粋な疑問である。

「夕焼、お喋りはよそう…！奴らの思うツボだ！」

「話した分だけ早く終わらせてやらぁ、だから少し黙ってろ」

環の忠告も突き飛ばすような吐き台詞は、夕焼にしては案外珍しいものでもある。好戦的で猟奇的な性格と雰囲気を漂わせてる彼女からは想像もつかないが、闘い以外に関しては割と聞き分けも良い。

「なんでテメェはそうなった。そこのゴム野郎はどうでもいい、ただお前がどうしてそんな人間になったのか…」

「其れを聞いて、貴女に…または貴女方に得する事でも？」

「ねえよ――難しいこと考えるのなんて今のオレには性に合わねえし……ただお前が治崎に拾われて、テメェがそうなるように、人を殺して虐げるようにしたのなら――

オレは治崎を全力でぶちのめす。ブタ箱入れるだけじゃ済まねえ程にな」

夕焼の気迫は、何処か威圧的で、暴力な部分を曝け出していた。

雄英と対立した時に見せた好戦的なバトルジャンキーとして見せてた笑顔は何処にもない。いつも刀を握れば１８０度性格が回転する夕焼は、珍しく怒りを露わにしていた。

「救世主への侮辱ですか？何も知らないくせに…親に捨てられ、命の危機から救われた私は、ただご恩を返してるだけですが？」

「本当に治崎ってやつが心優しい救世主なら、態々お前を人殺しに加担させたりしねーよ。ヒーローが人を助けて人を救えって命令すんのか。それと同じだよ」

壊理の体の一部を利用して、異能破壊弾を世界中にばら撒いてると知った時点でたかが知れてる。
仮に奴がそうであって、彼女を救うにしろ、普通なら手を汚すような人殺しにはさせない。そもそもの話、娘を都合の良い道具として利用しながら、血の縁がない人間を助け、人としての道に歩ませるとは考え難い。

「お前は利用されてんだよ。こういうのを洗脳って言うんだぜ？お前に恩を売っておきゃ、いざという時には利用しやすいだろ」

答えは簡単でシンプル――利用する為に恩を売ったに過ぎないのだ。
消極的に考えても、如何なる理論を説いても、彼が誰かを救うメリットなど、考えられない。
自分の娘を下らない野望、悪事や金儲へと私欲を満たす人間が、人を助ける道理が見当たらない。ならば治崎にとって彼女を助ける理由は、戦力を増やして己の利益となるように仕向ける。するとどうだろうか、立派な忠誠心を持つ駒の誕生だ。
窃野、宝生、多部の三人組も例外ではない。
「なるほど、考え方に関して貴女の仰る理論は正しい…しかし、それを私に話して何になる？」
「お前が誰一人とも殺してねえなら、まだ充分に希望はあるだろうが。お前が武器を下ろして投降さえすりゃ…まだ道はある。治崎が隠れてる、または逃亡を図ってることくらい此方もお見通しなんだよ」
「お断りします――見ず知らずの赤の他人の話を聞く道理こそ、私たちには何処にもない」
僅かな一縷の望みも、無機質な彼女の冷酷さに無慈悲に打ち砕かれてしまう。
もし人を誰も殺してないのなら、其処からの説得も可能だったし、小さな子どもを相手にするのは少々野暮だから。
しかし――治崎の忠誠心は本物で、相手に何をどう言われようと、

殺戮兵器と化した幼女の心は動かない。
「そぉ～～言うーーこと～なんだよ～ねー。犯罪者～にさぁ、和解～とーかさ、説得～とか？そん～なの古いってぇ。そんな時代は白亜紀から絶滅して～るんだァーよ」
相も変わらず喋り方が独特で、伸びた口調はいい加減に喧しいのだが、右から左へと聞き流す。
「そうか、やっぱり聞いてくれねえか…」
出来れば潔く降参して欲しかった。刀を持った夕焼は確かに凶暴で気が荒々しいが、内心は優しくて、それこそ豹変する前の彼女と同等で変わらぬ性格の持ち主なのだ。
「だから言ったんだ…これ以上の立ち話はよせって…」
「皆んなの所へ戻ってくれるなら時間ロスは削減できるだろ。ちゃちゃっと終わらせりゃあ良いだけの話だ」
隣で溜息混じりに愚痴を零すサンイーターに、夕焼は鼻を鳴らしながら不敵な笑みを浮かべる。
「何を惚けた事を仰ってるのです？私達に勝てることを前提で話を進まないで貰えますか？」

黒い鋼の刀が、夕焼目掛けて振るわれる。
あの一瞬で間合いを詰め、躊躇もなく殺しにかかる彼女の動作は、間違いなく手慣れている。
小さな幼女からは考えも付かない歪な速さと動き。夕焼は体の軸を捻らせなんとかして狂刃を躱すものの、刃先が肌を掠めて傷口が付いてしまった。
「ッチィ――!!」
微かな刃の痛みが走り、思わず歯を食い縛る夕焼は、舌打ちをする。褐色肌に付けられた刃の傷口からは血が滴り流れ、痛覚が働く。無駄のない動きと、鍛錬された身のこなしは、とても七歳とは思えない。
「相手がガキだ、大したことない、武器を持ってるだけ…そう思ってるおつもりでしょうか？」

「テメェもいつまで良い気になってんだよ、ガキ」
誇らしく崎子がそう告げると、夕焼も台詞を吐き捨てながら、不敵に笑う。
パキィン――!!
折れた嫌な金属音が木霊する。
左手に持ってた崎子の刀の先端部分の刃が、折られたのだ。あの時夕焼は、躱すと同時に振り下ろされてない武器を狙って、凶器を完全に破壊しようと目論んでいたのだろう。バランスと態勢が上手く合わずに、先端部分だけ欠かせてしまったようだ。
「……なるほど、これはこれは…盲点だ。まさかあの態勢で反撃が出来ると…下手なヒーローよりかは断然、強敵だ」
「ね～ねーー、これもう殺って良い流れ～？ねぇ、もうお喋りィ～終わっーたーのー？」
「ええ充分よ護武皮、私の斬撃と貴女の打撃……2組コンボなら確実に仕留めれます。尤も、ヘマさえしなければですがね」
斬撃と打撃。
これはまた奇妙な組み合わせだ…乱波と天蓋の矛盾コンビのように、互いの弱点や欠点を補う訳ではなく、猛攻――攻撃特化に発達したコンビだ。
「夕焼…！あの子は俺が惹きつける…だから護武皮は俺が…」
「いや、お前はさっき蛸の足斬られたろ。あっちは体の部位をゴムみてえに伸ばして打撃を与える野郎だ…刀持ちはオレに任せな」
だが、此方はファットガム事務所で研修を重ね続けてきた二人組だ。簡単にやられる玉ではないし、
切島もいない、鋭利な金色の鱗壁を破壊する術は、緑谷達には持ち合わせていない。
戦力分散の策は、まんまと入中の思惑通りとなってしまったらしい。

共闘――勃発

１７９話「動く」

「いっくよおぉ～～!!」
呑気な護武皮の放たれた言葉と共に、拳の嵐が二人を襲う。
離れた遠方から発せられる拳は、常人では不可能であって、護武皮のみが可能な柔拳だ。
伸びる腕、迅速な猛攻、強打の連打、乱波程とはいかないが、それでも充分に驚異的である。
「ゴム…!」
人間業とは思えない伸び代、軽く数十メートル以上は伸びるだろう質の良い腕は、軟体動物の蛸や烏賊のように滑らかで、骨の関節がないように見える。
「た～んじゅ～んなパワーってさーぁ、王道だよ～ねーー!!」
マイペースな口調に似合わず、やってることは滅茶苦茶。縦横無尽に拳と腕の残像を埋め尽くし、至る方向から激しい攻撃が迫ってくる。
まるでヨルムンガンド、はたまた部屋を埋め尽くす居合の鞭。
護武皮柔増――個性『ゴム質』
自身の体が質の良いゴムで出来ており、関節はバレリーナみたく柔らかい。骨は柔らかく、筋肉は強靭、衝撃は半分に流すことも可能で、ダメージを軽減しながら相手に打撃を与えれる。
「おいおい…邪魔だなコレ…!!こんな奴の攻撃を避けながら戦えってか!牛丸みてぇなやり方だな」
伸びる腕をなぎ払い、元に戻しては攻撃の動作の繰り返し。サンイーターだけでなく、夕焼にも被害が出てしまうので、分が悪い点では厄介な強敵だ。
「取り敢えず…蛸で動きを止める!!」
「させませんよ!」

右腕を蛸の触手に変換するサンイーターに、崎子は狙いを定める。地を足で蹴り、距離を縮ませる。振るわれた刀はそのまま蛸の触手へ吸い込まれる。

（ムダだ、俺の個性は複数再現可能…！蛸の足に蟹の甲羅を覆わせ…）

だが――サンイーターもそれに対しては対策は万全。柔らかい蛸の足に、硬い甲羅を覆わせることで、斬られることを防ぐのだ。同じく二の轍を踏む気は更々ない。

「混成大夥――【キメラ・クラーケン】!!」

蛸の触手、蟹の甲羅と先端部分の鋏を再現し、空間を支配する。無数の触手は、瞬く間に成長し、サイズを大きくする。正しく――海に住まう怪物を連想させる。

天喰環――個性『再現』

食した物を体の部位として再現する個性は、複数再現可能、サイズ調整可能。同時に発動する事も可能。同じ物を短期間で食す事で熟練度も上がり、性能もよりよく上がる。

――ザグン！

だがしかし、クラーケンの足を崎子はいとも容易く簡単に斬り捨てる。

「何ッ…!?」

蛸の触手を斬り捨てられたことで、肉の断面から痛覚が働き、思わずたじろいでしまう。再現した部分は、物理的なダメージにはならないし、致命傷には至らないが、痛覚が働いてしまうのが、個性のデメリット。

しかし甲羅状で覆われた蛸の触手――クラーケンを前に出ても、豆腐のように捌いていくとは、想定外な結果だ。

「蛸は刃物による調理に限りますねェ！複数、生き物を再現する個性には少々驚きましたが…なんてことはありませんね！」

素人とは思えない鍛えられた動作、達人の域に達する領域。凄まじ

い剣捌きは敵でありながら流石といった所か、無駄な動きがない。
「あのガキ…！舐めてた訳じゃねえが本当に子供かよ…忍みてえに動きやがって!!」
斬口崎子――個性『裂き斬り』
刃物を持つことでのみ発動が可能の条件付き個性。硬い物やコンクリート、斬れ味問わず万物を斬れる個性は、驚異的であり、全てを豆腐のように斬り捨てれる。
「どれだけ個性で対処しようと、多少はこれで防げる」
攻防に長けた個性は、使用者によって大分変わるものだと、改めて思う。攻撃特化に長けた彼女が、攻撃の使用によっては、相手の攻撃すら自分の刀で身を守れる。
「だったら守ってみやがれ!!秘伝忍法――【カムイ・ルヤンペ】!!」
高速な剣技が売りの基礎たる秘伝忍法、カムイ・ルヤンペの威力で武器破壊を狙う。幾ら敵とはいえ、子どもは簡単に致命傷を受けてしまう。一桁の小さな女子に秘伝忍法を扱うのはどうかと思うが、先に自分が殺されてしまえば本末転倒。
本人を狙わず、なるべく敵の武器を壊せば、少なくとも相手の戦力はガタ落ちだ。
「ふっ……！」
しかし其れを、ギリギリの間合いで体の軸を捻らせ、回避を試みた。青い髪が激しく揺れ、体を数回転しながら着地。夕焼は舌打ち混じりで追撃をかます。
「今の避けんのか…益々、忍臭えな」
「若様から体術に関する教授を受けたので、問題はありません。少なくとも、サンイーターと名乗るヒーローよりも貴女が厄介だ」
食した物を再現するサンイーターにとって、崎子の個性とは相性が良い。斬撃だけの個性なら、貝、蛸、蟹、等で拘束と防御を高めて翻弄することは可能でも、耐久度と硬質を無条件で斬ることが出来るのは、サンイーターからすれば不利がある。
一方で夕焼は遠野の選抜メンバー筆頭の実力もあってか、身体能力は高い一面もあり、二刀の剣技に関しては飛鳥と同等かそれ以上。

それでも七歳の幼女が夕焼と渡り合えるのは、ある種としての異常事態だろう。

「どおぉ～～～した～のぉおぉ～～ーーー!!!サン・イーターーーーー!!!!」

「ッ…!ッッ……!!!」

夕焼とは一方で、ゴムのように伸びた腕を鞭のように巧みに扱い、強打を食らわせる護武皮と、防戦一方で強いられてるサンイーター。戦況は護武皮の方が有利な状況下に置かれている。

破裂の音、ヒビが入る音、痛ましい効果音が鼓膜を揺さぶり、思わず挫折をしてしまいたくなる。

(貝の殻、蟹の甲羅を混ぜた衣も…次から次に粉砕していく…!そしてこの予測不可能な攻撃を蛸の足で衝撃を緩和してもダメージが…!!攻撃をしようにもさせてくれない…!)

護武皮のゴムと拳術を組み合わせたコンボは、サンイーターの想像を遥かに上回り、攻撃手段に移ろうにも中々隙が見受けられない。

今まで三下やチンピラを相手にしてたからか、経験は学生よりも上だったにしろ、この場ではそれすら無意味。

文字通り手も足も出ず、このまま身を守ることだけが精一杯。ビック3と名付けられながら、こんな三下のような安っぽいチンピラ風情にやられている。

(折角、ミリオや他の皆んなが託してくれたのに…!!こんな奴らに足を引っ張って…!時間稼ぎ要因にあしらわれ…!!)

焦燥が、メンタルの弱い環の心を蝕む。

一つ一つの打撃は乱波に比べれば軽い方だが、それでも充分にインパクトはある。ゴムの特性を活かした柔軟な対応と猛攻の嵐、予測不可能な動作に対処できない部分を突かれてしまう。

(どうするんだ…!考えろ……考えなきゃ…!)

サン・イーターの個性は下手すれば本当に頂点を狙えるに近い強個性。生き物の部位を再現し、その特性を活かす個性は、異形型と言った動物系の個性よりも何倍も有意義に役立つものだ。

その特性や能力を敢えて活かせないのは、能力者による使い方だろう。理解してるにせよ、いざという時になればヘマをこいたり失敗してしまうのは、中学時代からしょっちゅう、天喰環の欠点だ。

――下級生の大衆の前では碌に声も出せない。転校して来た時だって最初のスタートラインから躓いて、個性のテストだって良い結果も出せなくて…

「強い個性もってたらさーーぁ、出させねーよぉーに、すりゃー良くねー??」

残像すら見える速度で伸びた腕は、空間を埋め尽くし、もう何処から何処へ来るか分からない。体力の消費は激しく、燃費も悪い。

このまま防戦を続けていけば間違いなくジリ貧になって嬲り殺される。そして距離も遠く、間合いに入ることすら敵は許してくれない。

サン・イーターの状況は、確実に詰みともいえよう。

――いつもこうだ、俺は…俺は……

己の弱さが情けない。

ビック3の称号なんて、所詮は聞こえのいい飾り。いや…本人からすれば緊張感を昂らせる蔑称なのだろう。

それでも、環が今日まで此処へ来れたのは……

(環、お前の方がスゲーよ。俺は周りの皆んなから遅れてるから、人の何十倍も頑張れば良いって訳。でも、環の個性は俺よりもスゲーからさ)

そうだ、ミリオ――お前が…

(俺、知ってるんだぜ。お前は才能があってさ、皆んなを楽しませる明るくて優しい奴なんだって!)

「んん…?」

――お前が、いてくれたからなんだよな。

俺の憧れは、お前だけだよミリオ。

オールマイトや他のプロヒーローよりも、どんな凄いヒーローよりも、俺にとって一番輝かしい…それこそ太陽が霞むほどに。

サン・イーターの蛸の触手部分が膨れ上がり、触手の数が増して行く。

「なん……っだあああぁぁああぁーーーーーそれぇェ!!!!!」

触手に何度も殴打を繰り出し、破裂音の鳴るパンチが響く。痛覚は働くものの、こんなの何ともない。

今、皆んなが戦ってる痛みに比べれば――

「拘束――【海の暴君――蛸蟹地獄】！」

蟹の鋏で護武皮の拳を相殺。威力と硬度を極限に高め、可能な限りで行動を広げる。

「さっきよ～り～もぉ～～固えええぇーー!!!」

「護武皮…！お前の個性は確かに強い!!でもな、俺はお前よりも、誰よりも強いヒーローから、俺を褒めてくれる友人がいた!!!」

ドォン!!と、鈍い痛みが頭部に走る。

蟹の鋏を利用し、護武皮の体を挟み、蛸の触手は腕を封じるように絡みつく。蛸の吸盤を利用し、身動きをしても簡単には剥がれない。勿論、普通なら此処で崎子が蛸の触手を切り捨てるのだが…

ギィン！ギギィン!!

火花散る刀の打ち合いが、ＢＧＭを奏でている。

崎子と夕焼が、互いに斬り合っている。とは言っても、崎子も夕焼も跡を引けない形で、粘っているようだ。崎子を、夕焼が妨害している。

「護武皮…！」

「邪魔、させねぇよ!!」
先ずは、一人を倒すこと。
ファットガムに教えてもらった事は、先ず敵の戦意を喪失させることだ。相手が単体に限らず複数ならば、片方を落とすことで連携を崩すことができる。特に二人ならば尚更、話が早い。
立場を如何にどう自分達の有利な方向へ傾けれるかが、勝利の鍵だ。
「テメェにも矜持ッつーもんがあるんだろ?!ホラホラ、治崎のクソ野郎の恩を返すんだろ!?」
「……!!」
焦燥、憤怒、私怨、夕焼は妨害を駆使しながら敢えて煽り口調で崎子の心を煽ぐ。確かにステータスも含め、テクニックや体術はお手の物だ。とても七歳の小学生が会得できるものではない。
しかし、精神面ではまだまだ浅い――自分が思い通りにならないと深く調子が狂ってしまう辺り、まだまだ幼い部分が抜け切れていない。
頭では理解してても、本人にとっては理解してるつもりでいる。
余計な事に突っかからないと解っていながらも、いざ自分を拾ってくれた恩人に対して侮辱を受けると憤る辺りは、実に人間らしい。

斬口崎子は、両親に捨てられた。
理由としては個性の原因でもあるが、其れは単なる補助に過ぎない。根本的な部分は両親がキッカケだ。
気に入らないことがあると直ぐに暴力を振るい、泣いたり笑ったりすると取り敢えず水浴に顔を突っ込ませる。
虐待、世間でいうDV――癪に触ったりすると蹴飛ばされ、泣きじゃくったり些細なことで笑顔になると母は髪を引っ張り何度も床に叩きつけ、挙句に風呂場の水浴に顔を沈めさせられ、人形のようにボロボロにされていた。
『何で言われたこともやれない』『ヘラヘラ笑うな』『何を泣いてるんだ

お前は』『なんでこんな子供に生まれたんだ』『口応えするな』
父や母からは罵詈雑言を吐けられ、味方になってくれる人はいなかったし、教育は勿論、一度たりとも外へすら出させて貰えなかった崎子にとって、家族とはこの世の地獄だろう。
だからか、もう泣いたり笑ったりする事が、出来なくなってしまった。
そんな子供が四歳になった頃――相も変わらず父から暴力を受けてた頃だった。
手が滑って食器を割ってしまったので、父はえらく機嫌が悪くなり、それを察した自分は護身用にと包丁を手にしてしまった。
前に一度、母から殺さない加減で背中を包丁で刺された事があったので、父にも同じことをされない為に台所のを取って身を守るように向けたことがある。
それが父親の逆鱗に触ったのか、鬼のように怒り出し、髪を掴もうとしたのを、崎子は一心不乱に手に持ってた包丁を振り下ろした。

――そして、父親の腕を切り落としたのだ。

溢れる大出血、落とされた片腕、激痛にもがき苦しむ憎き父。初めて、親が苦しんだのを見た崎子は、頭が真っ白になった。
何が起きたのだろう?どうして、包丁を振り下ろしただけで簡単に…それこそ、水を切るように何の力もなく…
後に、それが私の個性だと知るのに時間はかからなかった。

個性による詳細は当時は不明だったものの、不気味だ、危険だと解った両親は遠く離れた貧民街へと捨てて行った。
自分の命を脅かす事となると、人間は攻撃的になるのではなく、排除しようとする。自分達では手が付けられないからだ。
下手すれば私が逆上して殺されると見解したのだろう、親に捨てられるのでさえ何も感じなくなってしまった。
未知なる外の世界は、余りにも汚れていて酷い臭い。

腐ったバナナの香りが充満し、泥水が溜まってたし、見知らぬ老人や汚れた少年が泥遊びをしてる光景は、何とも…

初めて外に出た瞬間が、親に捨てられた刹那――私は糸が切れるように、何をすれば良いのか、考えるのをやめてしまった。

自分はこれから何をどうすれば良い？

何を主に生きていけば良いのだろう？

子どもが親の世話なく生きて行けるだろうか？

個性云々の問題ではなく、両親がああなってる時点で、私の人生は詰んでるようなものだ。

捨てられてから三ヶ月になると、私の体は汚れていた。

全身が酷い臭い、髪はボサボサ、泥で全身が汚れていて服もボロボロ、誰も助けは来ないし、このまま何もせず何の意思もなく生きている。でもそれは生きてるのではなく、腐敗したまま生きながら死んでいるのだ。

誰かに声を掛けられることもなく、ただしゃがみこんだまま座ってたり、何をどうすれば良いのかも分からず、無教養な自分がやれる事などたかが知れてる。

「ほら、あ～ん。なさって？」

優しい声に従いながら、言葉の赴くままに口を開けると、冷たい野菜が口の中に広がる。

入れられたものを咀嚼すると、何ともまあ良い食感だろうか。

「ふふ、もやしは美味しいですか？」

女性がそう問うと、私は何も動じないまま首を傾げる。美味しい、という意味が解らず、そもそもこれが美味しいのかどうかさえ解らない私を、綺麗な女性は「えっと…」と考える仕草を取る。

ふんわりとしたクリームの柔らかな金髪、お嬢様のような口調、黒いセーラー服を着こなす清楚で綺麗な女性は、よく貧民街でもやしの

配給を行なっている。
どういう理由かは存じないが、何でもこの貧民街ではよく寄付をしてるんだとか。
お金がなく、小さな子どもや大人、お年寄りにまで何の利益も求めずに食料を配るのは、正直凄いと思う。私の両親でさえも口を開けば「金、金、金」のワードしか口に出さないのに…
何も出来ない、何も動かない私を見た彼女は、そこからか他の皆んなとは別に私だけよく話しかけに来てくれた。
「美味しいっていうのは、ご飯を食べた時にやってくる幸せですわ…♪特に好きなものを指しまして…」
「……」
「…お嬢さんは、何も感じないのですか？」
「わたし、ね。何も考えられないの」
思わず声を振り絞ったわたしの言葉を、女性は聴いてくれた。
「笑ったりね、泣いたりするとね、お父さんとお母さん怒るの。何をどうしたら怒らないのか、考えてね、頑張ってもね、もうだめなの。結局すてられるの…もう何をして良いのか、何をすれば良いのかわからなくてね」
「……」
「だからね、考えたり泣いたり、笑ったりするのやめたの。また蹴飛ばされちゃう、殴られる、また水浴に顔を突っ込まれたりしちゃって死んじゃうのだけが怖いの」
また殺されかけちゃう。
心が全く動かなくても、何故か暴力を振るわれるのだけが怖くてどうしようもなかった。
トラウマを植え込まれた人間が拒絶反応を起こしてしまうのは、自然の摂理とも呼べよう。
それを、女性がぎゅっと抱きしめてくれたのは、今でも覚えている。
「大丈夫ですよ、もう何も心配なんて要りませんからね…大丈夫、大丈夫だから…」

あの時だけだったな、初めて心が暖まったのは。
優しく包み込むように抱擁し、頭を撫でてくれたのは。ボサボサで汚れた髪を、優しく撫でてくれる感触は、生まれて初めて味わう。
「明日もまた、私が腕をかけたもやし料理を配りますので、楽しみに待ってて下さいね」
彼女はそういうと、駆け足で何処かへ去っていった。
それだけが大きく脳の中で記憶に残り、ただただ彼女の言うがままに待っていた。
だけど、私は彼女と会うこともなかった。

夕暮れ刻――何事もなく平然と呆けていた時だった。

「おい、お前一人か？」
突然、何の突拍子もなく声を投げられ、振り返ってみれば青年が一人、黒いマスクを装着して訪ねてきた。
私は言葉を発することもなく、ただただ頷いた。
「親はどうした、こんな汚いところで何してる？」
「お父さん、お母さん、知らない。わたし、捨てられたの。お前の個性は人を殺すから、不気味で危険だからって」
個性――『斬り裂き』は、万物を全て条理を無視して斬り捨てる、一歩間違えれば完全に危険視される個性は、親に捨てられたと聞けば大体は納得できるだろう。
「そう、か……」
青年は考える仕草を取り、数秒の間が空く。
此方をジッと真っ直ぐに見据える瞳を、彼女は何も動じず目を逸らさず、ただ見つめ続けていた。
「よし、解った。お前、俺の組に入れ――俺がお前を再利用してやる」
丈夫な手袋をつけた手を差し伸べ、彼女の手を求める。唐突な勧誘に、思わず首を傾げる少女は、何が何やらと理解が出来てない様子だ。

「簡単な話、お前を拾ってやるってことだ。俺も昔は組長（親父）に拾われた身でな……親がいなくて寄り辺が無いんだろう？だったら俺の組に来い。名前は？」
「き、斬口崎子……」
そして、私は汚れたボロボロで非力な腕を動かして、手を掴む。それを優しくぎっしりと、掴み返す男――治崎は私を拾ってくれた。

こうして私は貧民街から抜けた八斎會邸で衣食住を与えられ、ある程度必要最低限の施しを受け、私は八斎會の構成員の一員となった。
そこから死に物狂いの鍛錬、彼の方に仕える為に何度も血反吐を流し、私はただただ自分を拾った方の恩を返すが為に――

「邪魔を――するな!!!」

憤慨を露わにする幼女は黒刀を大きく振りかざす。
泣かない、笑わない、そんなもの必要ない――でも、怒りはある。小さい頃から、抑圧的に怒りを出さなかった彼女ではあるものの、やはり刺激を受けると反発してしまう辺りが、実に子供らしい。
「お互い様だろう――オレも、お前も。立場の違いってやつだ」
「…！貴女、目が…」
よく見れば、夕焼の瞳は紅桜色に染まっている。
見ていると美しくも、魅了的で、何処か危うさを感じる其れは、本能が危険を知らせていた。
「ガキ相手には申し訳ねえが…直ぐに終わらさなきゃダメなんだよな。サン・イーターも時期に終わる。
オレが直ぐにこの戦いを終わらせてやるからよ」
巨躯な鴉の化身が、翼を広げ、此方を眺めている。
夜叉の如く獣の牙を剥き、威圧感が増す。
二刀の刀は獲物を仕留める爪そのものだ。

「秘伝忍法――【イペルスイ・パシクル】!!」

「……ぐっ!?」

バキィン――!!と、破壊音が崎子の耳をつんざく。

咄嗟の構えも無意味、防御も攻撃も、体術さえもこの女には通用しない。

(こいつ…さっきよりも動きが数段に上がって…?!)

内心隠せない動揺は、心を震わせる。

もう考えることなど出来ないと、殺戮兵器に変貌したであろう彼女は、冷や汗を垂らしながら焦燥を浮かべる。

「忠告聞いときゃあ良かったんだよ――よぉく覚えとけ、オレの名は夕焼、遠野天狗ノ忍衆だ!!!」

時は遡り、突入直後――地下

「騒がしいな…ちゃんと役に立ってるのかアイツらは…」

暗い通路を歩む治崎は、不機嫌そうに眉をひそめている。自分が今日日この日の為に仕上げた鉄砲玉と四天王。その恩を今返してもらわないと困ると言わんばかりの対応に、側近のクロノは口ごもる。

「あんま言いたか無いですが、八斎會は終わりですかね」

「組長と俺さえいれば八斎會は死なない、何度でも復活できる。これさえあれば、計画は完遂する」

懐に忍び込ませていたケースを取り出しながら、確認を取る治崎は、眉をひそめる。

「完成品と、血清さえあれば、極道を再び返り咲かせることが出来るんだ。今回の件も好事家にとっちゃ良い話のネタになるし、ヒーローと忍が恐れる薬は、奴らの好む響きだ。喜んで出資してくれるし、巷で噂になってる忍商会との協力の形で丸め込み、市場だって独占、戦力確保も夢じゃ無い」

聞こえの良い道具、壊理の異能破壊弾は全国を震わせ、国家転覆を狙える素晴らしい品物だ。
それこそ、今までの兵器が役に立たなくなる位に――
「という訳で、少しは働け出向組」

通路を過ぎると、四人の影が重なり合う。
何処かで見たことのある影は、次第に明らかになってくる。
「はーい♡」
緊張感のない可愛げのある女子中卒者、トガヒミコ。
「僕らに任せなよ、全員殺せば良いんでしょー？」
二つの大鎌を背中に収めながら、血に酔う少女、鎌倉。
「……」
壁に背中をくっつけながら、治崎を睨み、沈黙を通す龍姫。
「任せなー・オーバーホール」
声色が良く、気分は爽快、口調は真逆のトゥワイス。

出向組――敵連合のメンバーが、牙を剥く。

１８０話「出向組」

夕焼と環、同じく切島と麗王の二人が離れたその頃、残りのサー・ナイトアイ一行は、迫り来る入中の妨害を対処しながら――

「圧殺されるぞ！粗挽きハンバーグにされちまう!!」

抗っていた。

怒涛に迫る天井、壁、地面からの圧力なコンクリートは、次々と自分達のスペースを埋めていく。このまま入中の攻勢を許せば、あっという間にぺしゃんこになるのは目に見える。

「ロックロック！」

「お前なぁ……！自分の落ち度なのに随分と偉そうじゃあねえか！元はと言えばあんたの失態だって言うの忘れてねェよな!?」

サー・ナイトアイの指図に苛立ちを覚えるロックロックは、悪態を吐きながらも手を翳して壁に触れる。

「【本締（デッドボルト）】！」

ロックロックが力強く叫ぶと、圧縮しに来る壁の動きが停止し、固定されてしまう。ガチガチと、硬質音が響き、文字通りロックされる。

錠前ヒーロー・ロックロック――個性『施錠』

触れたもの（生物除く）その場に固定する。しかし余りに強大な力や広大な面積に対しては範囲が限られている。

「秘伝忍法――【霜氷・王扇】！」

ロックロックの正反対では、大量の冷気を纏い扇を振るう雪泉は、迫り来る壁を対処する。

白い霜が降り、踊り子のように華麗に舞う動きは、幻想的であり魅力的だ。白い霜はやがて氷となりて、天井や地面を支柱で支え、触れた壁を氷漬けにする。

（もし、入中と呼ばれる男が壁を操ってるのなら、少なくとも氷までは操れないはず……！）

雪泉の心中は、正に入中の個性を射ていた。
入中常衣が個性で操作できるのは精々、自分が擬態した物質のみに働く効果であって、違う物質を操作するには、雪泉の氷に入らなければならないのだ。
そして入中は迂闊に外には出れないし、此方が見てるのを悟られてはならない。
イレイザー・ヘッドが抹消を発動しながら監視を続けてる以上、消されてしまえば終わりだ。
そして何よりもミミックによる個性も長くは持たないのだ。
(これ以上維持し続けるのは至難の業…!!一刻の猶予を争う今、何としてでも侵入者を排除しなければ!!!)
入中の状態は限界を迎えており、後数分足らずで強制的に戻らされてしまうのは、トリガーの効果が切れつつあるのだろう。
だが、如何なる状態であっても、彼のやるべき行動はただ一つ――侵入者を排除することだ。
残り一つの方面にある壁を上手く利用し、ダメ押しのゴリ押しで試みるも、デクのシュートスタイルで文字通り粉砕されてしまい、愚鈍の土竜のように掘り進められてしまう。
この先の侵入を許すことは、決して許されない。
そのプレッシャーと、彼らの抵抗が、益々入中の余裕を鑢で削り落とし、圧がかかって冷静さを欠けてしまう。

入中常衣――死穢八斎會の本部長であり、他の鉄砲玉や四天王と違うのは、治崎とは付き合いが長いという理由もあるのだが、何よりも慎重さと貴重面な点が挙げられるだろう。
図体のデカい厳ついオッさんという第一印象からは考えられないが、入中は器量が小さい上に情が優って私怨に囚われる人間だ。
それでも凡ゆる方面から対策を練る万全さや、些細な事柄に気を配るのは、敵でありながらも賞賛に値するだろう。
(もう二人のガキは、アイツらが相手をしている…!!残る侵入者を今ここで仕留めなければ…!進む足が遅くとも、何としてでも…!!)

外道に堕ちた今だからこそ、立ち止まるのは許されない。
出せる鉄砲玉はもう尽きた。
四天王は分断した侵入者を仕留めてる真中。
頼れるのは、自分しかいないのだ。

（…？いや、待て！この通過地点は……！！）

気を察した入中は、絶望的な状況の中で、一縷の希望を瞳に宿らせる。

「イレイザー！まだ見つからねえのか！クソッたれ、俺の本締も強度ＭＡＸ――これ以上は無理だ！なんたって、ファットガムさえいればこんな事にはならなかったのになぁ!!」
悪態序でに嫌味を吐き散らかすロックロックの言葉を流しながら、極力視界を広げ、見渡すも一向に解除されない。
（間違いなく、俺たちを監視しているのは確かだ…！ファットガムの件だって、ピンポイントで俺を狙っていた…！それなりに緻密で技術が必要な個性…何も見ずにあそこまで正確に狙うのは至難の業だ！）
入中の咄嗟に出した圧殺策も、自分たちの進行に煩いを持ってるからだろう。何にせよ入中の行動策は、自分たちと治崎の距離が近い、幹部がいないことを指している。
（ただ、問題なのはこれ程に視てるのに、一向に個性が解除されてねぇ!!何処だ…？奴は一体…）

疑問と不安ばかりが頭を過る刹那――突如として迫り来る壁が一瞬で引いた。

『なっ…?!』

圧縮と密室状態に陥ってた状況とは一変し、広大な通路が呆然と広がっている。いきなり圧殺策を中止した入中の行動に、困惑と新たな

疑惑が思考を埋め尽くす。
「何だ…急に…!!」
訳がわからず、ただ辺りを見渡すことしか出来ない一同。――だが、考えさせてくれる時間を与えてくれない。
「うぉ…?!また来るぞ!!」
ロックロックが叫ぶも遅し、今度は天井や床の上下からコンクリートが阻み隔て、勢力を分断させる。
それは彼のみとは限らず、続けて警察一同とサー・ナイトアイ、雪泉が一人、緑谷と相澤の2組、計四勢力がバラバラになり、厚い壁が邪魔をする。
「分断を今更…一体どういう…」
一人、ポツリと取り残された雪泉は、周りへの警戒を怠らず、気を引き締める。てっきり残された幹部はもういないと思ってはいたが…此処へ来ていきなり手段を変えるとなれば、考えられるのは次なる一手が来ると想定した方が妥当だろう。
「今度は勢力を分断か?動きやすくなったは良いが…圧殺ができないと解ってやり方を変えたのか?」
「それを補って余りあると言う事だろう…」
拍子抜けた声を漏らす警官に、サー・ナイトアイが言葉を足し、状況を確認する。自分達が分断されたということは、雪泉と同じく答えは――次なる一手が来るという兆しだ。
「気を付けろ!次なる一手が来るぞ!!」
予め警告を入れるサー・ナイトアイの大声は、反響して良く聞こえる。雪泉、デク、イレイザー・ヘッドの三名は充分に聞き入れるも、ロックロックはつまらなさそうに「ケッ…!」と悪態を吐く。
(何が気を付けろだ…一体誰の所為だと思ってんだか……)
ここの所、愚痴と悪態だけしか吐いてないロックロックだが、それでも敵との遭遇と予期せぬトラブルの連発に、こうして愚痴を漏らしてしまうのは、致し方ないのも否定できず。
「やっホ〜♪」

況して、天井から鎌を持った少女が愉しそうな声色を発しながら、降りかかってくるとは夢にも思っておらず。
「なあぁ…!!?」
驚嘆な声を張り上げてしまうのは、当然の帰結――
「初めましてえぇ～～!!ゴクドーでぇす！」
両手で二つの鎌を手に持つ少女――抜忍の鎌倉は色っぽく頬を染めながら見下ろし振りかざす。
間一髪で其れを避ければ、床は二つの鎌に刺され抉られる。もし反応が遅れていればお陀仏だったと想像が出来るだろう、血の気が引くのを感じながら、拳を強く握りしめる。
「テメェは…!!敵れ…――」
敵連合――そう叫ぼうとした途端に、背後から何者かが手で口を覆い隠し、遮る。「シ～…」と、静める合図が耳を打ち、背筋がゾクリと体を震わせてしまう。
「今はトガも鎌倉ちゃんもゴクドーです。二人揃って、いいえ…全員悪者なのです」
ザシュッ!!と、背後からナイフが突き刺さり、悶絶するロックロックは、成す術なく意識を失った。

「ロックロック！どうした!?」
相澤の懸命な呼び掛けに、一切応答しないロックロックに不審を抱くイレイザーは、冷や汗を垂らしながら何度も叫ぶ。
少なからず、サー・ナイトアイの忠告通り、次の一手が既に講じられたのは確実だろう。戦力を分断したのは一人一人を確実に潰す為にせよ、違和感が拭えない。
「イレイザー退いて下さい！」
緑谷はシュートスタイルで足蹴りで、入中が隔てた壁を粉砕。重々しく強い衝撃が、壁に伝わり、壁の崩壊が始まる。
瓦礫を踏みながら土煙を振り払うと、二人の視界はとても奇妙な光

景が広がっていた。
　血の跡が床にべったりと広がるロックロック、そして焦燥と困惑そうな顔で此方に反応する、もう一人のロックロック。
「おぉ、お前ら!!」
「ロックロ…ええ、二人?!どういうこと!?」
　少し見ない間に、何故か二人に増えてたロックロックに、今度は此方が困惑してしまう。先程までいた鎌倉も、いつの間にか姿を消している。
「さっき偽物が突然現れて…!恐らく、八斎會のリストに載ってねえ敵だ!注意しろよ…まだ何処かに潜んでるかもしれねえ…」
　緑谷に寄りかかるロックロックを他所に、イレイザーは倒れ伏せたもう一人のロックロックの体を調べてみる。偽物が気絶してるにせよ、警戒を怠ってはならないのはお決まりで、傷口を調べて見ると…
「……ん?」
　倒れてるロックロックの傷口は、血で塗られていた。
　しかし問題なのは…傷口が、刃物によって付けられた事――ロックロックの個性は先程見たとおり、そして刃物を取り扱う武器は所持していないハズ。
「ところで、緑谷は無事か?」
（…ッ!まさか――）
　況してや、公共と仕事の場で本名を語るヒーローはいない。ロックロックが、デクを緑谷と呼ぶことはないのだから――
「はい、えっと僕達はなんとか無事で――「デク!!ソイツは偽物だ!!!」えっ…?」
　イレイザーの警告も既に遅し、素っ頓狂な声を張るデクの肩を、ロックロックは強引に掴む。
　何事かと抵抗する間もなく、懐から血に濡れたナイフを取り出す、偽物。
「なァ…?!」

悉く――奴らは自分たちの邪魔をしてくる。
イレイザー・ヘッドは偽物を睨みながら、個性の抹消を発動する。
ドボン――!!
結果は一瞬。対象の個性を抹消することで、泥の飛び散る音が弾き、異常な光景が目に広がる。
ロックロックが覆われた泥となり、デクに顔を見せる正体は――トガヒミコ。
「トガヒミコ!?!」
「うわあああぁ!!会いたかったよ出久くん!覚えててくれたんですね!そうですトガです、トガヒミコ!!こうして再開するなんて、仮免試験以来ですねェ!!」
狂気の破顔を浮かべながら、頬を血の色に紅潮するトガは、怯むことなくナイフを振るうも、咄嗟に防衛体制に入った緑谷はトガの腕を掴んで制止することを努める。
「だが、ここで仕留めれば却って組織の体制は崩れる――終わりだ渡我被身子!!」

死穢八斎會との繋がりがあったというのは事前に報告が有ったものの、敵連合とは相性が悪い、揉め事が起きたことからイメージ的にも敵対を示してるかと推測が掛かっていたが、どうやら予測は大きく外れたようで…
「終わりじゃないよ~」
上から陽気な声が降り注ぐ。
咄嗟に上に視線を送ると、鎌を二本取り出し血の渦を巻いている。黒く淀んだ血は、まるで汚物を溜め込んだように毒々しく、余りにも危険だ。
「鎌倉…!!」
当然、敵連合と徒党を組むのなら、忍だって欠かさない。死柄木の采配か、はたまたオーバーホールによる手筈か、どちらにせよ最悪な事態に変わりなし。

黒い渦を利用し、そのまま溜め込んだ量の血を、鈍器を振り下ろすように叩き振るう。
「秘伝忍法――【血鎌旋風・毒嵐】!!」
血に毒を混ぜ合わせた秘伝忍法を、イレイザー・ヘッド目掛けて猛威を振るう。
触れただけで肌が焼かれ、侵食し血液を凝固する致死性の毒は、触れるだけで危険となり、厄介な荒業だ。しかしイレイザー・ヘッドも忍への対応は予測を兼ねて対策を練っていたので、そう易々と殺られるタマでもなく、特殊繊維で作られた捕縛の帯を尖った天井に巻きつき見事に回避を試みる。
そんなイレイザーを追尾するよう、鎌倉は勢いを乗せたまま秘伝忍法を活かして鎌を横に薙ぎ払う。
天井に放たれた赤黒い竜巻は、コンクリートの壁を汚色に変え、汚泥状に変化してしまう。
(鎌倉…噂では聞いたことがあるが……まさか、血を毒に…!!俺の個性抹消が効かないんじゃ、デクが危険すぎる!!)
自分では対処を取るのはさておき、まだ学生であるデクに鎌倉は難易度が高すぎる。身体能力も外見に似合わず高くて厄介な敵だ。早急に対策を練らねば跡形もなく毒死してしまう。
イレイザーは突起物で出来た起状の岩を的確に包帯で巻き、体の重心を任せて難なく回避に成功。
「お…わわっ!!」
天井を毒嵐でぶつけた衝撃が重かったのか、デクは今にも崩壊しそうな天井を見上げながら、瓦礫の餌食になる最悪な予想が脳裏に浮かんでしまう。
「デク!離れろ!!」
崩壊する天井に、此方も体が揺さぶられ、落下してしまうイレイザー・ヘッドは、今にも心臓目掛けて突き刺そうとするトガの腕を包帯で固定する。
「もぉ……折角いい所なんです、邪魔しないでくれません?」
仏頂面で睨みながら、此方に体重を持ってかれるトガは、何とか体

術を駆使してイレイザーの振るう拳を躱し、ナイフで肩を斬りつける。当然、プロヒーローゆえに身体能力が高いイレイザーは、何とか対応出来たものの、掠めてしまい肩が刃物で抉られてしまう。
「ぐぅ…っ!!」
肩から鋭い痛みが鮮烈に襲い掛かり、出血しヒーロースーツが赤に染まる。幸い傷は浅いものの、下手すれば肩が動かなくなってても可笑しくはない。
デクから離れたのは良いものの、事件が解決した訳でもなく…
「チッ…!!」
イレイザーはトガを捕縛しようと包帯を投げ飛ばすも、入中の個性によって其れは遮られてしまう。
壁という壁が四方八方全てを防ぎ密室へ、かの流れるような連携…間違いなく死穢八斎會と敵連合は手を組んでると断言して良いだろう。いつのまにか抜忍の鎌倉も姿を眩ませていた。
「イレイザー!!」
一先ずイレイザー・ヘッドの安否を確認するデクは、駆けつけながら脳裏に浮かぶトガの狂気な破笑い顔を掻き消す。
(……敵連合が八斎會を手を組むメリット、単に戦力を増やすって目的ではないようだ、何よりも…敵の実力は又もや未知数…)
本当なら、もう此処で敵連合と関わってる以上は止めるべきだろう。
雄英の生徒は極力、連合との接触を避けるべき…
ちゃんと視ておく、
中断する役割を担う自分、
生徒の安全の確保、
今回エリの安全な身柄の確保と死穢八斎會の確保による任務を受けたのも、大半が生徒に関わる仕事だからだ。心苦しいばかりだが、幾ら責任を負うにしろ、緑谷達にあれだけの事を言ったにせよ、今は場が悪すぎる。
(一旦圧殺策を捨てて開いたのも恐らく、連合と俺らを戦わせる為か…)

状況が慌ただしくとも、決して冷静さを欠けないイレイザー・ヘッドは、納得しながらも肩を抑えながら心の中で舌打ちをする。
予想は付いてるだろうが、勿論――敵連合のメンバーがトガヒミコや鎌倉だけではないのは事実だし、当てられたのが二人だけではないのは少し考えれば解るだろう。

「……はぁ、はぁ…」
イレイザーとデクから何とか非難する事に成功したトガは、裸体のまま予め用意していたタオルで顔を拭きながら、「ふふっ…♪」と、色っぽい嬉声を漏らす。
「弔くんの言う通り、ちゃんと出向して良かったぁ…♪」
愛しい愛しい、血に濡れた少年と再び出逢えたのだ。
当時は嫌々で乗り気はしなかったものの、まさか自分が新たに恋した少年に出逢えるのは奇跡に等しい…もはや運命と呼んでも過言ではないだろう。

「先ほどの揺れは一体…？」
一方――鎌倉の秘伝忍法による大きな振動は、雪泉の方にも伝達する。厚い壁で隔てられ、秘伝忍法で壊せば造作もないのだが、生憎向こうの安全確認が出来てない以上、下手に破壊すればその影響では負傷しかねない。
「サー・ナイトアイからの警告は聞こえたものの、その後は何も起きず…」
周囲を警戒し見回しながら、小声で呟いたその矢先――彼女の身に何が起きるかは、言うまでもない。
「あれ？誰かと思ったらアンタって月閃の大先輩じゃん!!」
背後から、聞き慣れない声が反響し、咄嗟に振り向けば――
「初めましてぇ～!!雪泉先パァイ…♪」

両手に龍の籠手を装着し、武闘の構えを取る龍姫。隣には彼女の身長を上回る大柄な男、傍若無人の乱波肩動。壁に穴

嬉々として舌舐めずりする彼女、充分殺る気に満ち溢れてる乱波の前に、雪泉はただ一人。

「……龍姫、死塾月閃女学館の中等部に泥を塗り、況してや人殺しに加担するお前を、私は赦さない」

義憤を燃やし、正義の眼差しを向ける雪泉は豹変――凍てつく眼圧が、龍姫を睨む。

１８１話「連合ズ」

「おい喧嘩女、状況的に考えてコイツは侵入者、ぶっ殺して良いんだな？俺は早くお前とも喧嘩したい」
　対峙する視線に黙視してた乱波は、居ても立っても居られないご様子で隣に佇む龍姫に物を問う。
「そそ、ちゃちゃ～っと終わらせたらお前とも殺り会うから、先に仕事だけ終わらせよっかね、喧嘩狂い」
　視線を外さず口角を釣り上げながら愉快そうに話す龍姫は余裕の表情――二対一では腕に自信があるのか、卑怯な手ではある上に汚れ役としては適任だが、雪泉が侮れないのも確か。
「……」
「んで、雪泉先輩だっけか。ずっと黙っちゃってどうしたの？そいや神野区以来ッスねぇ～…なぁんてさ。ウチが此処にいるなんて意外でしょ？学校の見学以来ですよねぇ私たち、あの時は正義正義だのヤケに強調してた部分もあるけど、感動の再開なんだし…」
「……」
　口を閉ざしながら鋭く睨む雪泉に、龍姫は饒舌に捲し立て、彼女の心を揺さぶる。
　二人は此処で初対面という訳ではなく、中等部の忍学生が死塾月閃女学館の見学の際に、一度だけ会った事がある。それもそのはず、雪泉は高校に入ってから折り紙付きの忍学生、期待の新人として有名だったので、顔も名前も覚えられる。
「前は夜桜って学生と戦ったんだけど鉄みたいなのが邪魔入ってさ……おーい、なんとか言ったらどうなの？一言二言喋ったらどうなん――」
「月閃を裏切った中等部が、弱小と称された極道の場で良い気になるなんて、随分と落ちましたね貴女。ハッキリ言って興醒めです」
　雪泉の放った言葉は余りにも凍てついて、厳しくもあり、一切の熱がこもってない。軽蔑に似た冷ややかな目線。

煽ったつもりが逆に返された気分に若干、龍姫は気に入らない感情が溢れ出る。
「へぇ……！見ない間に随分と、口達者になったんスね」
「事実ですから。貴女は昔はとても良心的で、可愛げのある、後輩になるのかと期待はしていましたが……」
でも、そうはならなかった。
死塾月閃女学館の入学希望は多く、蛇女を始めた悪忍学校と比べれば瑣末なことであるが、それでも見学しに来た学生の顔や名前は、可能な限り覚えている。龍姫もその内の一人だ。
「どうやら浅はかな考えでした。貴女の家柄を調べては見ましたが…」
口を開き言葉を続けようとした刹那――豪快に巨大な拳が振るわれる。
今まで黙り通してた乱波肩動は、我慢の限界を迎えたのか、雪泉を目掛けて殴り通す。
「ごちゃごちゃ言う前に、喧嘩しよう雪女!!」
殴られ体制が崩れる雪泉は、そのまま乱波のお人形――重圧感を曝け出す凶暴な拳を、縦横無尽に殴り続ける。
「ッ――!!!」
乱波の間合いに入ってしまえば終わりだ、後は肉片…ミンチになるのがオチというもの。
「ハッ…！何だよ、月閃女学館の大先輩が一人の鉄砲玉に負けるなんて、私いなくても良かったんじゃね？」
何度も破裂音と殴られる少女を眺めながら、心の底から蔑む視線を送る龍姫は、悪高く笑っていた。
なにが選抜メンバーだと、余りにも呆気ない上に結局は口だけ…
「ええ、貴女がいても居なくても私たちのやるべきことは変わりませんから――」
もう一人の雪泉は、乱波の背後にたった今――立ち尽くしていた。

それこそまるで霞が明け、突然ぬらりと姿を現したかのように…忽然と。
龍姫は言葉を途切らせ、ふと背後から投げられた冷徹な声に振り向く乱波。
「秘伝忍法――【黒氷】…」
凛…とした立ち振る舞い、まるで歌舞伎の如く流麗とした動きで型を構え、両手から氷を生成。巨大な一柱ほどある氷柱を、乱波に叩き込む。
その氷を文字通り粉砕しようと、相殺を目論むも、拳はダプン！と汚泥が弾けた音が聞こえ、そのまま肩へと貫き抉れていく。
「ッ…!!?」
何か誤作動でも起きたのか、と言わんばかりにマスク越しで驚嘆を浮かべる乱波は、龍姫と共に殴られてた雪泉に視線を戻すと、其処はただの氷の破片――雪泉が忍術で発動した氷の像、即ち氷の人形だ。
パリン…！とヒビが入れば直ぐ様に、ガラス細工のように崩壊し、粉砕。
「秘伝忍法――【氷旋風――塵】」
両方の扇を広げ、旋回する。
氷破片と風の威力を活かした、旋風術――至近距離を詰め、打撃が襲いかかる前に、倒せさえすれば何ら問題はない。
中心部――腹部に寒烈な衝動と氷の風が、吹き荒れる。
自分よりも上背の高い巨漢の乱波は、手も足も出ずに体ごと壁の方向へ吹き飛ばされる。
パァン!!物言わぬ乱波は腹部に風穴が空き、あっと言う間に体が泥の塊へと変貌し、溶けてゆく。
これは…トゥワイスで造られた偽物だ。
「……!!?」
時間としては数十秒も経たない、ほんの数秒の出来事。
対応・反撃・連携、其れ等さえ雪泉は許さずに見事にコピーとして造られた乱波を何の労も出さず倒したのだ。
「やはり、神白教官の訓練が役に立ったというものでしょうか…」

ファットガム、芭蕉が大苦戦した乱波をああも容易く葬る雪泉は、至って平然としている。
神白教官による訓練は、微かな日にちで絶望的な訓練を受けていたが、そのお陰で今となっては如何なる境地に陥っても、大抵は冷静に挑むことが出来るし、秘伝忍法の精度も向上している。
「後は…いつまで突っ立っているんです？龍姫…貴女は月閃が気に入らないんですよね？目前の敵を前に、何も動かないんですか？」
凛…とした立ち振る舞い。
扇を口元に当て隠し、目を細めては龍姫に問いかける。…正直、噂には聞いてはいたが、乱波がこんなにも容易く…いや、トゥワイスが複製したコピーは脆いので、致し方ない。コピーとして作られた分身は柔く脆い部分がデメリットであり、補うとすれば攻撃が当たらないように考慮するのがベストなのだが…
それにしては、もし生身の体なら既にダウン必須はあり得なくはないのかもしれない。
「わーってんだよぉ!!!こちとら好きでヤクザに入った訳じゃねぇしな!!」
熱く滾る怒りは、怒号として染め上げ、両手を構えてエネルギーを充填させる。分厚く重量感増す籠手は、夜桜を連想させる。

「秘伝忍法――【ドラゴン・ズロア】!!」

双龍の化身、彗星の如く発せられた発光体の龍は、口を大きく開け、生きてるかのように雪泉目掛けて襲い出す。二体の龍を前に雪泉は何も臆することも動揺をすることなく、無表情で無表情で――
「秘伝忍法――【樹氷扇】」
扇に氷と風を纏わせ、それを舞踏として巧みに操る。自身を中心に渦回る氷の竜巻は、冷気が吹き荒れる。
【ドラゴン・ズロア】によって放出された二体の龍は雪泉の遁術属性・氷に触れることで、自身が水色の氷へと成り変わる。
この忍術は、他者が扱う遁術の属性をそのまま自身の属性と化す、

属性変色だ。
しかし、二体の龍は雪泉の方向からズレていき、風に流されるまま渦の流れに呑まれ、彼女が回り、踊る方向へ加速するだけ。
そのまま扇で薙ぎ払えば、彼女とは全く関係のない方角へ飛ばされ、氷の双龍は壁に衝突し爆破を起こす。
「…!!秘伝忍法――【竜闘気・破翔】」
秘伝忍法が無にされたことで多少苛立ちが湧き溢れる龍姫は、何とか心を抑え、両手から闘気を放出。
まるで離れた龍が合体する形で、合わさった龍の大きな口からブレスが放出されるような絵面だ。
「秘伝忍法――【氷鏡・反天】」
一つの氷を作り出し、鏡の如く秘伝忍法を反射するこの忍術は、簡潔に言うならば反射だ。耐久値による限度はあるものの、氷が全てを吸収した後に相手にそのまんまの威力で攻撃を反射する忍術は、神白との訓練で自ら編み出した忍術だ。
龍の闘気を吸収し、そのまま跳ね返した先、対応に遅れた龍姫は防ぐことも出来ず、爆破する。
「ッ――?!ごぁ…!!」
爆破の煙が巻き上がりながら、ケホケホと咳き込む彼女は、雪泉を睨み返す。当の本人は冷たい視線を浴びせてくるだけだが…
(ちぃっ…!コピー乱波がやられたのが不味かった上に、ここまで戦力に差が広がるなんて…雪泉、想像以上に強え…!!)
元々、死塾月閃女学館を束ね、代表とするリーダーである為、当然といえば当然なのだろうが…
幾らオーバーホールから〝侵入者が来るから排除しろ〟と言われたとはいえ、情報が少なすぎたと言う意味もあるのだろうが、雪泉が来るのは本当の意味で計算外だったのだ。
敵連合のメンバーは基本的に相手の情報を知っていながら、襲撃を行っていた。
しかし、今回は何の情報もない、戦力も少なめ、そんな状態で侵入者を拒めというのは、龍姫からすれば無茶にも程がある。

況してや雪泉はあの短期間で見間違えるほどに強くなった強くなった――冷静に考えて龍姫の勝機は限りなく低いといっても過言ではないだろう。

「……ッ！」

そんな恨めったらしく睨む龍姫を他所に、何かの異変に勘付いた雪泉は――

「龍姫さん上――危ない!!」

突拍子のない彼女の忠告に、龍姫は反射的に上を見る。するとまるでプレスでもするかのように、上から大きな壁が迫り来る。

「なっ……！」

このままでは押し潰される。

そう悟った龍姫は、秘伝忍法――【ドラゴン・ズロア】を範囲内で地面に放ち、爆破の衝撃を利用し、倒れながらも何とか回避を試みることに成功した。もしコンマ1秒でも遅ければ、雪泉の忠告がなければ、確実に肉片飛び散るミンチになっていた所だ。

こんな事が出来るのは入中以外考えられない。

「龍姫さん…」

入中の壁が彼女と遮断し、距離が隔てられた。

雪泉の咄嗟な反応は流石というべきだろうが、敵に塩を送り塗ることには変わらないだろう。それでも雪泉は無視出来なかった。

幾ら相手が敵として闇に堕ちても、それは決して〝死んでいい〟という訳にはならないからだ。

昔の自分なら「裏切り者がこうなって当然の結果だ」とでも吐き捨てていたのだろうが、もう昔のような未熟な彼女ではない。

忍として甘いかもしれない…月閃の顔に泥を塗り、剰え無意味な人殺しさえ厭わない彼女には、甘いかもしれない…

しかし、今の忍社会が激しくなった今、抜忍の殺害は安易ではない。

分かり合えないから、悪だから滅ぼす――そんな安直でシンプルな

問題でもない。
　そんなことを続けてたら、それこそ昔の自分は愚か、ヒーロー殺し・ステインと同じやり方だ。
「裏切りも、徒らに力を振る舞うのは許されない……しかし、それでもせめて、彼女の理由さえ聞ければ、解決できる道も……」

「はぁ……はぁ……」
　肩で息をするように、全身の筋肉が強張り、荒呼吸をする彼女は汗を拭いながら、天に吠えるように口を開く。
「おい入中テメェどういう事だぁ!!あのままだったら私が死んでたんだぞ!!!」
　あのままでは龍姫は殺されていた…充分に危険であり仲間に危害を与える行為は、連携が取れてないどうこうの問題ではない。
　そんなことはバカな猿でも知能のない脳筋でも解りえること…それを何の躊躇いもなく勢いを活かしたまま龍姫を潰そうとしてた、と言うことは…
　入中は確実に龍姫も仕留める気だったのだろう、解ってて行動を出したのがその証拠だ。
「こっちだって嫌々でやっててもちゃんと言われた通り仕事はしてるだろ…!!願い下げだってのに心折れてまでもやってんだ!!だったらそれに見合うようにお前も協力しろよ!!」
「……」
　龍姫の逆鱗は収まらない。
　怒りの叫びは入中にも届いたのか、彼は壁から顔を出し――
「何をピィピィと…死ぬ覚悟位は出来て当然だろ？お前は忍だったんだ、他の忍ができてお前に出来ないはずはないだろうが。
　駒がやられ役を被るのも、当然の務めだ――」

そう、つまらなさそうに、見下すように言葉を吐き捨てた。

「……は？」

入中の心許ない言葉は、声は、龍姫の思考を停止するのに充分すぎるものだった。

そんな…特に理由もないに等しい理由で…いや、理由にすらなってない動機で、そんなさも当然かのように、自分を殺そうとしたのか？

龍姫にとって、忍の世界や家柄の後継は、彼女にとって悪夢に等しく、絶望的だ。生まれた時から生涯を決められ、跡継ぎという鎖が自分を縛り、蝕み、人形と化す。

私はそんな風にはなりたくなかった…母は子供を産むための家畜道具、父は子供を教育という名の訓練を強いる鬼畜。私は嫌なものを押し付けられることが、どれだけ非人道的なのかを知っている。

だからこそ……ようやく自分の居場所を見つけたのに……

「おい！龍姫ちゃん無事か!?」

「…！」

絶望に浸っていると、ふと仲間のトゥワイスの声が上から聞こえた。

「あっ、見つけた！」

「無事だったようですね、大事に至らなくて良かったです！」

トゥワイスに続き、トガと鎌倉の声も聞こえる。此方を覗き込む雛のように顔を出している三人は、今の状況的には相容れず、呑気なことだ。

「お前ら…どうして……」

「どうしてって、助けに来たのです！」

えっへん！と誇らしげに、でも何処かに微笑んでるトガに続き、鎌倉は自分で指をさしながら言葉を紡ぐ。

「僕がね、ここの壁をバッサバッサと切り続けてなんとかモグラみたいに進んでたんだぁ。でね、龍姫ちゃんの声が壁越しにも届いたから、上手く見つけれたって訳！」

入中に対する葛藤が、還って龍姫の存在位置をマーク出来たのは、大きな功績だろう。よく見ると、トゥワイスの頭部には白布の頭巾で巻かれている。恐らく、スーツに傷が付いたのだろうか、破けば人格が揺らいでしまうのは、全員が知っている。

「仁くんも美紗子ちゃんも沙知ちゃんも辛いよね。だってマグ姐のこと責任を感じてるのって、仁くんと沙知ちゃんで、美紗子ちゃんにとっては嫌いなヤツ、殺したくてどうしようもなくて、ずーっと耐え忍んでたのに、ねぇ……」

トガは近寄りながら、龍姫の腕を掴んで、語ってくれる。

今まで血と色狂い、狂気の殺人鬼とは到底思えない彼女のギャップの違いに混乱を招き抱かねないが、それはとても、的を射ていた。

「いつまで我慢しなきゃいけないのかな？私たちずっと耐えて、折れて、下げて、協力してあげてるのに…その当の宛先がどうしようもないと報われないなんて…悲しいねェ…」

我慢をする。

たったそれだけと、人間は簡単に片付けてしまうが、人によっては其れはある種として恐怖にもなり兼ねない。

いつまで我慢をしなければならないのか、極限状態の中でも続けなければいけないの――雑念が邪魔をし、欲望は膨らみ、衝動は抑えられない。

自分たちがこれだけ、敵と判っている相手の元で、極道として使われているにも関わらず、何故ここまで自分達は拒絶されなければいけないのだろうか？

「どうしてだろうね？私たちは何処へ行っても除け者扱いされて、誰にも受け入れられない。普通になれれば普通になりたいのに、皆んなにとっては私達の普通は違うんだよね。じゃあ普通って何だろうね？何一つ不自由のない世界で生きたいのに、それすら許して貰えないなんて、生き難い世の中だねぇ…トガはとっても辛いです苦しいです悲しいです…」

「トガ……」

「其れって……〝絶望〟だよねぇ～…」

ナイフのように尖ったトガの鋭い目線は、丁度――入中常衣と目が合った。

「ハァ…?!八斎會と協力するだって…!?」

事が起きたのは、死穢八斎會と組む前の出来事に移る。

敵連合のアジト…と呼ぶには貧相で、カビ臭く、荒れ果てており、ボロボロだ。以前の神野にいたバーとは大違いだ。オマケに現段階では黒霧以外のメンバーが全員揃っている。

「ああ!何度も言わせんな、向こうの計画には充分な旨味がある。トガ、トゥワイス、龍姫、鎌倉、今日からお前らはヤクザだ!」

死柄木の意外な発言に、空気が騒めく。

てっきり昔のように、気に入らない物は壊していこうと、破壊衝動と幼稚的な癇癪を起こすかと思いきや、八斎會の計画に飲み込むとは、これはまた如何に予想外な出来事だ。

誰もが、八斎會をどう潰すかとばかり考え込んでいたのだから、特に鎌倉はそうなのだろう。

「おぉ〜☆四人とも採用おっめでとーう!パンパカパーン♪♪しっかし向こうも視る目があるねぇ、有能で敵に回すと恐ろしいのを選んでくるとはこれはまた直球だこと」

ただ一人、漆月を除いて――だが。

彼女のイヤに落ち着いたテンションと、何とも場違いなノリは、今となっては黙っていて欲しい所だが…

「つまんねぇ冗談だな…面白えよ死柄木!」

「なぁ、ヴィランのトガとトゥワイスはさておきさ、私達は漆月の了承とか必要ないのか?」

「ん?私は関与してないよ其処の所。いやね、人選は弔に任せてるからさ。だってそんなのメンドーだもん…あっ、その代わり人手欲しい時はちゃあんと連絡取るから、何も心配しないでね」

基本的にヴィランと抜忍は別々に別れてるのではなく、混合にしており、平等的にメンバーを人選するそうだ。その役割の中に、漆月は入っていないらしい。
「黒霧は持っていかれそうになったが…何とか粘ったよ。其れに移動手段が貴重なのは勿論、アイツはそれなりに別件で仕事に用があるしな。仮にやるとしてもやれねぇよ」
「そう言う事言ってんじゃなくってよぉ！お前…なぁ、死柄木。マジで可笑しくなっちまったんじゃねえか？昔みたいに、殺せって指示出してくれよ！まさかあのイカレマスク野郎共に感染されちまった訳じゃねーだろうな?!?!」
死柄木の肩を全力で鷲掴むトゥワイスは、懸命に叫びながら、納得いかなさそうに声を張る。
受け入れたくない、自分達が極道としてだけだなく、治崎の手を組むなんて、仲間を殺した敵と組むなど、出来る筈がない。
「アイツはマグ姐を殺したんだぞ!?!コンプレスの片腕吹き飛ばしたんだぞ?!!」
壁にもたれかかって置かれたマグネットアイテムはもう誰も使わない。大事な仲間の遺品として置かれてるのだろう。いつもよお姐口調で、皆んなを支えてた彼女はもういない。
コンプレスは悲しみ、辛みを表現したマスクを被りながら、ブローカーに義手を装着されている。
「死柄木!!俺だって…俺たちだってなぁ、人間なんだぞ…?!」
ぐしゃぐしゃと、自分のマスクを曝け出すトゥワイス。素顔は３０歳過ぎのボーイッシュな顔立ちで、額には傷口が目立っている。縫われた傷口には、とても…とても重く悲惨な過去があった事を物語っていた。
トゥワイス自身がマスクを脱ぐという行為自体は、滅多にない事であり、自殺行為に等しいとも言われてる。そんな彼がイヤな事をしてまでも、訴えかけるというのは、其れほどに責任を感じているのだ。
「死柄木だけじゃなくてさぁ、漆月…お前は何とも思わないのかよ…」
「思わないって、何が？」

「…あー、そうだった。お前はあの場所にいなかったからな、そら関与しないわな…!!」
……幾ら彼女が巫山戯てるからと言って、流石に今の段階では腹が立つというか、一回だけブン殴ってしまいたくなる。まだぶりっ子だったりおちょくったりされるよりかは全然マシだ。
だが龍姫の仰る事も事実で、漆月はあの場にいなかったのだ…だから怒らない、何も感じないんだ。
茶毘やスピナーも例外ではないものの、二人に何かを頼んだ所で何も進歩はないだろう。
「なぁ死柄木、お前言ったよな?気に入らないものは全部壊せって…だから、社会やルールも何もかも壊すって、息巻いて…それで…」
「……」
「矛盾してるぞ死柄木…!私はな、アイツらが気に入らないんだよ!!なのに、なんで気に入らない奴と協力しなきゃならねぇんだ!!これじゃあやってること忍の連中と変わらねえだろ!!」
何よりも上の命令に従うというのは、嫌いな任務をやれというのは、彼女にとっては酷な話だ。
皆んな、誰もが忍のように命を投げ捨ててまで任務を遂行したいとは思わない。誰もが忍のように、心を強くなることは出来ないのだ。
龍姫は確かに口調や性格は荒っぽく、強がりな一面はあるが、誰よりも内面はとても弱く、臆病なのだ。
だから、彼女は普通の忍には、なれやしない。なりたくない――なってしまえば、自分を捨ててしまうような気がしたから。
「ああそっか…それとも、私は…マグ姐を死なせたようなもんだし…死んで当然か…」
自虐な笑みを零す彼女に、死柄木は何も言えず――
「それで、死んで当然だから自分も他の有象無象みたく捨て駒になっちゃえ〜って?オマエにしては随分と面白いこと言うようになったじゃない?
漆月的にわぁ〜、弔きゅんの言ってること、理解できるなぁ〜♡」

そこで間が悪いように、漆月が口を挟んできた。まるで自分達の邪魔でもしたいかと言わんばかりに。

「……おい漆月、ちょっと黙ってて貰えねぇか？いい加減にしろよ…」

「ちょっ、おい暴力はよくねぇぞ!?」

「黙ってろよスピナー！テメェには関係ないだろ！」

「あっはは♪関係ないだって、ない訳ないじゃん。じゃなきゃスピナーも茶毘もこうして集まってないッつーの。そういうさ、関係ないとかの言い訳って聞き飽きたというか、ダサいよね。全面的に」

「ッ…!!?」

「自分は好き放題やりたくて、いざ自分の命が危険になると怯えて現実逃避なんて…忍とは違っても悲劇のヒロインなんて今時流行ってないんだっ――」

「黙れッッてんだろ――!!!」

堪忍袋の緒が切れた龍姫は、漆月の胸倉を掴んで、憤りの感情を激しくぶつける。龍姫はこの日この刻初めて、漆月に対して矛先を向けた。

「戦場にすら出てないお前には解らねえだろうけどなぁ!!こっちはもうウンザリなんだよ!!!誰が好きでイヤな事をしなきゃいけないんだ?!解らねえからそういう事を簡単に言えんだよな!!」

「……」

ケラケラと笑ってた漆月も、今になっては真顔であり、素の顔立ちだ。龍姫の怒りも、まるで目ではないと言わんばかりに。

一触即発の空気に、皆も静まり返ってしまう。

「僕や龍姫ちゃんはさ、ヒーローとか個性社会とは違うんだよね。忍ってホラ、人間としては認めて貰えないし、生まれた時から全ての未来が決定されてるから」

静まる中、弔に語るよう口を開いたのは鎌倉だ。彼女は積もれたダンボールに腰をかけながら、その眼差しはヤケに真剣だった。

「顔も知らない、縁もゆかりもない、そんな上の連中の命令を無理矢理にでも聞かなきゃいけないっていうのはさ、何というか…僕や龍姫

ちゃんはさ、嫌なんだよね。
僕としてはまだ仲間の為になら命を賭ける事もできるけどさ、それが出来ない人間だっているんだし、況してや顔は知ってるけど仲間を殺した奴らと一緒にいろなんて言われるのはちょっと納得し難いというかさ、正気じゃないよね――流石に」
忍は大名や主、特別な扱いと上層部の人間の命令を聞く存在だ。生業として生きるのは暗殺、諜報、破壊、数えれば多いものの、それが今になっても続いている。
死と隣り合わせである忍の歴史は、進むにつれて現代社会では事実を受け入れられないのは、そう少なくはない。
忍の家系として育って来た者でも、流石に全員が納得するとは限らないのだ。
だから、鎌倉も龍姫も忍に反乱や憎悪を募らせている。今の社会がどうしても気に食わないのだ。
「だからさ、弔くんには解らないんだよ――僕らの気持ちなんて、なにもかも」
その時、死柄木が見た鎌倉は、不用意にもこの場に似合わない笑顔を曝け出していた。
彼女が見せたその笑顔は余りにも見ていて辛く、押し殺すような、作り笑い。本当は、一番嫌いなものを壊したがって、殺したがって、死柄木と一番相性も、方向も同じなのに、彼女は我慢でもするかのように、苦笑ではない笑顔で、振る舞った。
「ねぇ弔くんと漆月ちゃんにとって、私たちは何なのでしょう?」
此処で、トガが抗議をし始めた。
「私は連合とは居心地が良い…忍ちゃんとも仲良くなれました。ステ様がきっかけで、私は様々な社会を知り、私は私のやりたいように、生きやすい世の中に…出来るものならしてみたいと思うのです」
トガヒミコは、今は楽しくとも、必ずしも生きやすい世の中になった訳ではない。中学時代の頃に、同級生の生徒を刺したあの時から…いや、もしかしたら幼少期の頃から、親から見捨てられた時から、ずっとずっと、生きにくかったのだろう。

「ねェ、何の為に辛くて嫌な事をしなきゃいけなの…？」
トガは、くるりと回り踊りながら、折り畳みのナイフを出して、死柄木弔の首筋に当てる。
寸止め…皮膚に食い込んでる訳ではないが、少しでも動かせば脈は簡単に切れるだろう。表情は何処か辛く、悲しさを物語っていた。
いつもの猟奇的で、狂気な笑みを浮かべる彼女とは、程遠い…
「……そうだな…」
すると死柄木は自分の手を覆う掌を掴んで離し、素顔を見せた途端、トガはゾッとした。
「俺と、お前たちの為だ――」
笑っていた――不気味で優しく、人の神経を鑢で擦り削るような、歪でありながら、殺意のない健やかな笑みを零していた。
木椰区ショッピングモールで見せた、あの歪と異常な笑顔とは違う、其処には怒りも殺意もない、たた…慈悲深く優しい笑顔に、四人は絶句した。
「向こうは連合の機動力を削ぎ、且つ――有用なお前らを懐柔したいんだろう。外堀から取り込んで従いたいんだ。
ハナから対等なんて考えてもない、アイツらは俺たちを追い詰めて、全滅させてから自分たちが名を馳せたいだけだ。俺たちのことなんて、何とも思ってないんだよ」
死柄木は知っていた、自分たちにとって八斎會とは分かち合えない、敵であることを――それを知った上で四人に命令をしたとあれば…
「つまりだ。トガヒミコ、トゥワイス、鎌倉、龍姫、お前たちは信頼されてるんだよ弔に。君たちが、偉業を成し遂げれると…」
此処で、黙っていた漆月が口を開き、龍姫の手を払う。
「英雄は、皆から美声と賞賛を讃えられてるから成り立つんじゃない

…偉業を成し遂げたからこそ英雄と呼ばれるんだ。
名誉や名声を幾ら貰った所で、それは単なる感想を受け付けてる身でしないんだ…だから、先生も英雄と呼ばれるんだよ」
素の状態の漆月は先ほどまでのお巫山戯とは違い、淡々と冷静に物語っている。
「そんな英雄に、君たちは選ばれたんだ。つまり、偉業を成し遂げ、敵連合の英雄として一歩輝けるステージに立つ権利を得られたんだよ。これ程、光栄なものはない…誰もが、英雄になれる訳じゃないからね」
「俺たちが…？英雄…だって？」
「トガヒミコ、確かにきっかけはヒーロー殺し…または忍殺しのスティインだよ。彼の報道が、全国に放たれ、熱を当てられ感染した…じゃあ、次にスティインのような英雄を成し遂げれるのは君たちなんじゃないかな？」
「次が…トガたち…？」
「そして根本的なことを言うなれば…スティインはキッカケに過ぎないんだよ。本当の原点は…私たちが今も生きて、此処に集まった、その原点はね――〝絶望〟なんだよ」

――絶望。
生きる希望も、社会の信頼も、人間の精神から始まり、現代でもごく自然に発症するものだ。
「私も弔もね、今に絶望してるんだ。明日の未来なんてどうでもいい、生きてることに希望を見出してないからね。だから、社会に生きられない、希望を嫌い、平和を恨み、幸せに苛立ち、普通に飽きてしまい、未来に失望する。
もしスティインの熱に当てられたのが皆ならば、今頃超人社会は崩壊し、先生の出る幕でも無かっただろうね。そう…始まりは絶望、なんだよ」
漆月の言葉は、この場の全員が納得してしまうように、的を射ていた。彼女はまるで、生徒の一人一人に教授をするように、腕を広げ、意

見を主張する。
絶望しているからこそ、ステインの熱に当てられた。皆が今に、過去に、未来に、絶望しているからこそ、こうして敵連合が結成されているのだ。
「誰もが絶望するんだ。皆は君たちを異端者と見なし、拒み、軽蔑するだろう。でもね、君たちが普通なんだよ。
人が悪意に染まるのも、破壊をするのも、殺すことも、絶望するのも、実はメッチャ普通なの。それこそ人が生きて人が死ぬのが自然な位に、簡単で当たり前のことなの。
それを拒むのは、皆が君たちのことを理解できていないから、理解できないものを考えれないから、未知に慄き、疑い、過剰に反応してしまう…それが、平和に生きてる人間なんだ。異常のない、悪意のない世界こそ、異常なんだよ」
人は常識で考えられないことを常識で考えようとしてしまう。そして自分の常識が通用しないものは避けてしまい、拒んでしまい、逃げてしまう。
「だから君らを受け入れない、批判しては小石を投げながら罵詈雑言を浴びせるんだろう。君たちが今此処に集まっているのがそれを証明付けてるんだ。
マグ姐もそうだったんだろう?普通とは思えない人間を笑う人間がいる事に、絶望した。だから破壊を望み、殺しを平気で行い、今に絶望しているからこそ壊したくてどうしようもない…皆は理解できなくとも、仲間ならば、理解は出来るんだ。だからこそ、マグ姐の死に絶望を抱き、許せないんだろう?」
この場の仲間だからこそ、同じ絶望を、悪意に染まった人間だからこそ、納得も理解も出来てしまう。緑谷も飛鳥も、理解できるはずがないのは、それもまた当然なのだろう。
「絶望は、悪は、衝動は、歪みは、感染するんだ。トガヒミコ、トゥワイス、龍姫、鎌倉…寧ろこれはまたとない好機なんだよ。八斎會なんて平和ボケした連中に、自分たちの絶望を解らせてやるんだ。
それが可能な力を持ってるから、弔に信用されたんだよ。勿論、私

も信頼してるよ。お前たちのやり方で、必ず戻って来な」
絶望と崩壊は、隣り合わせだ。
漆月という絶望に、死柄木の崩壊、二人はとても息が合い、頼もしさすら感じてしまう。
想像つかなかった。
自分達はそこらの一般人が犯罪者になって、ただ漠然と波に乗せられた人間で…それなのに、選ばれた人間なんて言われて。
悪意に染まった人間の見方をしてくれる漆月はまるで、その人間に言って欲しい言葉を投げかけてくれる。
「漆月…」
茫然と突っ立ってる四人を前に、死柄木は彼女を見つめていた。何だろう、自分がリーダーとして人を纏めるのは当然の義務なのは承知の上だが、彼女がここまで人を纏め、収める姿は初めて見た。
これが、漆月なのだろうか……

「……うっ…?!」
途端、脳に微かな衝撃か走り、頭痛が起きる。
吐き気が催しながら、弔は誰にも気付かれないように、嗚咽を漏らす。

『ごめんね転狐、あのねあの時私…』
『ホラ転狐、おはぎが好きだろう?美味しいもの食べるとな、悲しい気持ちが吹っ飛ぶんだ』
『泣かないの、おばあちゃんまで悲しくなっちゃうよ…?』
『ヒーローはな、家族に絶望を齎すんだよ…!!だから、傷つけるんだ!!』

『やめろ…！転狐…!!』

『死ねええええ!!!』

あぁ…誰の記憶だろうこれは…俺が映っている…？これは、俺の記憶か？

なんで今になってこんな、訳わからない映像が断片的に流れて…

「……いや、良い……」

どうせ、漆月の言う通り、俺は絶望してるんだ。どうでも良い…何もかも。

今はただ……

「気に入らないものは、全部ブッ壊す」

それだけだ。

そして今に戻る四人は、一気団結し、結託する。

「死柄木…漆月、お前らは俺たちに信用してくれるって言ってた。どんな方法でも良い、やり方は問わねえ…好きなようにやって戻って来いって…」

「それってつまりさ、僕たちが八斎會に一泡吹かせることを信じてる、僕たちはこんなところではやられない、偉業を成し遂げて戻ってくる…死んでこいって言う訳じゃないもんね。僕たちには、それが出来るんだ。何も怖いことなんてないよね！」

トゥワイスと鎌倉は、漸くを以って二人の言葉の真髄を理解し、頷

く素振りを見せる。
「なら、簡単だな。俺は俺であるために――」
「私は私の思うままに――」
「僕は嫌いなヤツをブッ殺し――」
「私は、私の望むままに――」

絶望は膨らめば大きく、衝動は感染し、悪意は紡いで大きくなる。四人の絶望、悪意、衝動は、個々人よりも大きくなり、それはやがて八斎會に一矢報いる刃となるだろう。
頑丈で、折れることを知らない、諸刃とは違う、人の心を抉る刃は、既に研ぎ終わっていた。
「なんっっっだこのイカレガキ共!!!」
敵連合の四人を前に見下ろす入中は、理解できない連中を気色悪そうにしている。
それは漆月が言ってたように、理解できないからだろう。だからこそ、四人を殺すことも、死ぬことも、何も感じないし躊躇いもない。
「これだからヤクザは絶滅寸前になるんだよ!!」
「もうやってられねぇなこの茶番!!だからお前らはいつまでたっても弱小なんだよ!!」
「そーだそーだ！組長が出ていないって事は、組長だって大したことないんでしょー?!」
ここで鎌倉の発言にピクリ…と、入中が過激に反応を示す。
「なん…だって…?」
「鎌倉ちゃんの言う通り、どうせきっと寝たきりの組長さんがしようもなかったんでしょうね」
鎌倉に続き、トガヒミコの煽りに完全に乗せられた入中は、頭の血管が切れた。
「キィエエエエエエエエエエエエ――!!!」
入中の怒りを抑える堪忍袋の緒どころか、袋ごと破れたことにより、暴走を始めてしまう。

部屋全体が奇声に包まれながら、彼方此方と壁や天井が激しく変形を繰り返す。

――やりたいようにやるだけだ。

気に入らねーモンはブッ壊せ。

「随分と荒れ果ててやがる…これだから単細胞ってヤツは！」

どうせ尋ねても拒否される。

「入中の兄貴はキレやすいッスなぁ!!」

それなら今は勝手に好き放題やらせてもらおう。

今なら解る――そうだ、俺たちは、私たちは、僕たちは、今に絶望している。だからこそ、絶望は様々なことを可能にし、原点だからこそ強く伸ばしてくれる。

さぁ、八斎會の奴らを、絶望の深淵へと叩き落とそう――!!!

「全・員・圧・殺!!!」

１８２話「絶望に落ちろ」

時は遡り――敵連合の拠点から一時期離れた四人のメンバーは、治崎が人選した通り、案内人のクロノスタシスに呼び出された。
「弔(上)くんからの命令で仕方なくやって来ました…トガです…」
「僕は鎌倉でぇす、昔は悪忍やってて今は抜忍現在進行形でやってまーす」
「……」
「久しいなトリ野郎！テメェ絶対に許さねェぞ!!宜しくお願いします…」
案の定、四人の顔は芳しくなく、不満と苛立ちがほぼ感情を混ぜ合わせているだろう。全員とも、歓迎を迎えられるような雰囲気ではない。
「すいやせんオーバーホール、遠いルートからなんで、遅くなりやした」
「いやいい、気にするなご苦労…」
「おいお前ら連合か！忍もいるのか良いなよし喧嘩しよう!!」
「抑えろ乱波…!!」
「うわーいー、かーませー連合だーッ、よっろしっくねぇ～」
若頭のオーバーホールを始めた、クロノスタシスを除き、見渡せば個性的な八歳會の幹部の面子が勢揃いだ。誰一人欠けることなく、連合のメンバーを迎えている。
「この前のマグネの件は済まなかったな、俺も出来れば彼は殺したくなかった。死柄木からは聞いている、龍姫とトゥワイスが大変ご立腹だったとな…過去のことを流そうとは無理には言わないが…話は聞いただろう？俺たちは協力関係に当たってる、出来れば普段通りに接して欲しい」
「はぁん？彼じゃねえよ…彼女だ!!それと鎌倉ちゃんもプッツン来てたんだよ無視すんな!!!テメェ、最初に会った時もそうやって上っ面繕ってたよなぁ！

で、何したら良いの？」
「何だコイツ…」
トゥワイスの反語に冷静に突っ込む窃野は、腕を組みながら眼を飛ばす。
「組の者同様、我々の指示に従ってくれれば良い。その為にも先ずは個性、忍術の詳細を教えてくれ。恥ずかしい話、俺たちには忍はいないし、雇ってもいない。よりお前達の存在を知るべく、なるべくコミュニケーションを深めれば幸いだな。そうなれば、個性同士だけでなく、個性と忍術の連携も上手く行けるだろう？」
オーバーホールは簡潔に話を纏めて結論を出す。
つまるところ、情報交換して互いの連携を深め、より知り尽くすことで連合の反逆を阻止する対策も兼ねてるのだろう。
「結局やることは忍の奴等と変わらねえのか…そうやって上から目線で指図するのが私は嫌いなんだ。良い機会だ覚えとけ鳩野郎」
「なら死柄木の指示に従ってるお前は何なんだ？あまり強くは言いたくないが、言ってることが少し矛盾してないか…？」
「アイツは……！」

――指図ではない、仲間だ。
そう言いかけた彼女は、歯止めが悪くなったのか、つい口を閉ざしてしまう。
「ですが、なぜ私たちの個性や情報を教えなきゃいけないんですか？」
そんな時にふと龍姫の隣で黙ってたトガが口論し、オーバーホールに尋ねる。
「もしもの時があるだろう？ヒーローの襲撃だけじゃない、如何なる場合に於いても万全な対策を練って…」
「じゃあもしもの時になったら教えます。私たちはまだ余り貴方達のことは好きじゃないんで。それに仕方なく従ってるだけです、そこのところちゃんと理解してま――」
「キィキィうっせんだよクソアマぁ!!!聞かれたことは素直に応えりゃ

良いんだよ!!テメェらヤクザ舐めてんじゃねえぞチンピラ供がぁ!!!!」

火山噴火の怒号が飛ばされた四人は、声主の入中に視線を集中する。小さなぬいぐるみで、大人しくしておけばキューティクルでマスコットキャラの立ち位置に出来たものの、野太いオッサンの声色と気の荒さで一気に台無しになってしまう。

「あーやっぱ無理だね！折角こっちが協力しようって仕方なく来てやったのにそんな対応するんじゃ交渉決裂だぜ?!」

「てか、可愛い見た目してんのにコイツこんなヤツだったのか…」

入中の態度に〝対等〟と〝協力〟の欠片も感じないと断念したトゥワイスは首を横に振りながら拒絶の反応を見せる。龍姫は入中に若干、何かしらの意外性とドン引きをしている。

……やはり、死柄木の仰る通り、対等なんて最初っから思っていないのだ。

「俺の個性は『二倍』――凡ゆる物を二つに増やす!!その為に必要なのは明確な〝イメージ〟！想像力を働かせなきゃ出来立てで動くゴミの塊が増えるだけ、人で言う身長・胸囲・足のサイズ等の多くのデータが必要になってくる！しっかり見てしっかり測って初めて、一つを二つに増やすんだ！

本物と唯一違うのは耐久力で、モノによっては異なるが一定のダメージが蓄積されちまうと崩れちまう！二つ目に増やしたヤツは耐久力がクソ雑魚だ！そして一身上の都合により俺は俺を作れない!!!」

「「……」」

協力しないと真っ先に断言したトゥワイスは、急遽己の個性をペラペラと捲し立てる。

これもまた反語なのか、何方にせよ仲間たちに冷たい視線を浴びせられたトゥワイスは、冷や汗を滝のように流す。

「ふぁっ!?!待て待て違うチガウ！今の言葉は俺じゃねえ！いつもの調子とは違って…」

「お前、自分から無理って言ってたのに…」

「なんだか私がバカみたいです」

「つい口が滑っちゃったってノリ？」
しかし必至に否定するトゥワイスを前に、三人は呆れた様子でいる。それもそうだ、特にいつも口調がややこしく、支離滅裂な言動が多発的に見受けられるので、いつものペースだと真っ先に信じ込んでしまうのは無理もなく。

「私の個性は『変身』――摂った血がエネルギーになるので変身時間と摂取量が比例します。コップ一杯で大体1日くらいですね、一度に色んな人の血を飲めばそれだけ色んな人にもなれちゃうのです！
服も含めてですけど、それだと元々着てた服と重なっちゃうんですよね。裸んぼにならなきといけないので恥ずかしいです」
「私は『龍脈』忍法――地面に流れる龍脈を吸収して、エネルギーを飛ばしたり拳に流して殴打撃食らわすことで、相手に痛手を与えることが出来るんだ！
因みに遁術は無で、様々な属性に触れることで、その属性効果に変わるんだ。何も効果ないエネルギーを相手にぶつけた場合は爆破が生じるから、飛ばす爆破みてーなもんだな！」
「僕は『溶血』忍法――僕は自分の血を忍術で使うことで相手をドロドロのスライムみたいに溶かすことが出来るんだ！酸性が強ければ早いし体力消費しちゃうけど、酸性が薄ければ燃費は悪くないよ。でも血の量も摂取しないとメッ！だからね。
最近は個性応用を考えてて、すこーし毒の効果も出てきてて、僕が出す血が毒になって触れただけでじわじわと体力を削らせることもできるんだ♪酸性と毒を混ぜた溶血は、ホラーも真っ青だよ!!」

残りの三人も、先程までの彼と同じく、自分の情報を勝手に吐いてしまう。いや、正確には誰かが意図的に吐き出してるのだろうか、トゥワイスならさておき、三人が同時に、偶然に情報を教えてしまうのは、明らかに可笑しすぎる。
「なっ?!ゼッテー可笑しいだろ?!」
「3回も同時に重なる偶然って、一周回って感嘆しちゃって凄いけど、

そうじゃないもんね…？じゃあ何これ…」
唐突の驚愕は、段々と不安へと変わっていく。怪奇現象も良いところ、気味が悪いほどに不自然だ。
「そうか、解った」
「もう一つ、教えてくれ」
すると、オーバーホールの座るソファの背後から、全身を黒く染め上げたマントを羽織りながら、不気味で顔が隠されたペストマスクの男が質問をする。
「死柄木を始め、メンバーから裏切りの予定は聞かされたか？」
八斎會の連中を騙し、自身の利益に走ること、反逆の恐れを無くすためなのか、男の質問に固唾を飲む。
理解した、恐らく先ほどの「つい言葉を喋ってしまった」という不可解で不自然な現象を引き起こしたのは、この男だろう。個性の詳細も知らなければ、説明は出来ないが、直感で理解した。
裏切り――その言葉に、何故か胸が引っかかるような違和感を覚えてしまう。
ふと、四人の脳裏にはある言葉が思い浮かんでしまう。
『どんな方法でも良い、必ず戻って来な』
漆月のあの言葉は、「裏切れ」と言ったのだろうか？果たしてそれは、「裏切り」に含まれているのだろうか？もし、裏切りと判断されてしまった場合、自分たちはどうなるのだろうか？
……いや、違う捉え方をすれば、生きて帰って来いという解釈もできるだろう。
四人は口を揃えて声を出す。
「いいえ」
「ううん」

「いいや…」
「Ｎｏ…！」

――個々は己が解釈した真実を述べた。
「……よし、オーケーだ。これにてお前らはウチの組の一員として迎えよう。
ただ組の者になったからと言って、全国指名手配犯のお前らを外に出すことも、自由にすることも出来ないな。
お前ら四人とも地下の居住ペースで過ごすんだ、指示があるまで待機。ゆっくりしてくつろいでくれ」
さっきのは面接とやらだろうか、八斎會の組織に入る為の試験に合格した四人は、今日から死穢八斎會の一員として過ごすことになる。
だが逆に、八斎會の一員になった以上、外への連絡を遮断し、万が一にも裏切りを測らない為の地下の檻、八斎會邸はシェルター化したと例えて良いだろう。
「軟禁かよ!!」
「え～、自由が良いです」
オーバーホールの指示に異論がある四人は、とても不満そうな顔立ちだ。幾ら上の立場とはいえ、いや…上の立場だからこそ気に食わない。どうしても、信じてくれないようだ。
だがその分、全国指名手配犯だからと言われてはぐぅの音も言えないのが実のところそうなんだが。
「いつまでもそんな態度じゃ許されねぇッてこったよ」
横入りするように、入中たること、ミミックは深い溜息を吐きながら、よちよちと短い人形の足で四人の元へ歩み寄る。
「解ったら言うこと聞きやがれ落ち零れこのチンピラ供が!!良いか？俺たちはヤクザだ、裏社会を牛耳り全てを支配するヤクザなんだ！テメェらの居食住だって与えてやるッッッてんだ、甘い汁啜れるんだ、寧ろ感謝するんだよテメェらはよぉ!!!」
「ッ…!!」
ミミックの横暴な物言いに、龍姫が過激に反応を示す。歯軋りを立

て、怒りがふつふつと湯気を立たせるように、沸騰する。もし、今ここで協力関係を築かなければ、確実に殴り飛ばしてたところだ。

怒りを抑えろ――ここで無闇に暴れてしまえば、オーバーホールに何をされるか分からない。組の者同様扱いとなれば、場合によっては処分されることもあるだろう。

極道とは、そう言う世界だ。

「俺たちの目的はチンピラサークルとは違う!!ヤクザの復権、床に伏せ動けぬ組長の宿願、裏社会の支配者、それらを果たして超人社会を我が手中に納める!!!

弱小なんて呼ばれてたがなぁ、それは時期にしてドンデン返し――計画さえ完遂すれば全てが上手くいく、何もかも!!

それに比べたらテメェらの目的も夢も生き方も何もかもが甘ったるいんだよ!!!計画も金も実行性もない貧乏供はさぁ、黙って俺たちの言うこと聞いてりゃあ良いんだよォ!!!!」

繽紛たる言葉遣いは激しくエスカレートし、血管が視覚出来るほど眼に浮かぶ。これ以上放っておいたら耳が痛くなりそうな位、耳障りで、存在自体が目障りだ。

「て…めぇ…!いい加減に……!!!」

黙って聞いてれば好き勝手言いたい放題。

我慢する理由もない龍姫は、拳を振り上げようとした途端、誰かに腕を掴まれた。それも、痕が残るような猛烈な痛みが伝わって――

「あー、ゴメンねぇ本部長の入中さん。たしかに僕ら、素直じゃなかったみたい」

龍姫をいち早く静止したのは、意外なことに鎌倉だった。

強く、腕を掴んで、悟られぬように微笑む鎌倉は、入中に謝罪を述べる。

「そうだよね。折角、僕らに居食住を与えてくれたり、八斎會に入れさせてくれてるのに、ちょっと我儘言いすぎたね。気をつけるよ」

たはは…と、必死に辛さを隠し通す鎌倉の表情は、笑顔なのにとて

も苦しそうで、殺意を抑えている。
いや、衝動を抑え、殺意を押し殺してるんだ。でなければ、自分で自分を保てないから。
「……ふん、分かってんなら最初っからそうしろ。少なくともそれが普通だ、良いか？ヤクザを見下すなよッ、糞ッたれが…」
何とかクールダウンし落ち着いた入中は、鎌倉に眼を飛ばしながら、唾を吐き捨てるよう台詞を飛び散らかす。
つまらなさそうに、トボトボと歩きながら自身の仕事へ戻るようだ。
「……鎌倉…」
龍姫は、心配そうに鎌倉の表情を覗き込む。
彼女がここまで、必死になって笑顔を作って、嫌なことを押し殺そうとするのは、滅多にない。
それが敵連合のアジトに続いて今日で二度目、況してやまだ自分の腕を強く握り掴んでいるのだ。
彼女の表情を覗き込むと、鎌倉は目を潤いながら、唇を噛み締めていたのだ。
「我慢…そう、我慢だよ……耐えろ、耐えろ……アイツらのように、虐めにだって耐えてたんだ……あの時と、同じ、だよ……」
殺意、憤慨、憎悪、絶望、衝動、全てがシェイクされて混ぜ合わさったその歪んだ顔は、彼女の過去に何かが起きたのだと、周囲の仲間に悟らせていた。
「お前…虐めって……」
「…あっ、ゴメン！龍姫ちゃん強く握っちゃって本当ごめん！痛かった？えへへ、ごめんね？ちょっとボーッとしてて自分の世界に入り込んでたよ」
何時迄も握り続けてた事に気付き、我に返った鎌倉は手早く離して謝罪する。
誤魔化す素振りを見せても流石に遅いだろうが、それでも彼女はヘラヘラした笑顔のままだ。
因みに、鎌倉はさっき「虐め」と言ったが、龍姫は其れを知らない。

何故なら教えてないから、という至極単純な理由にすぎないし、勿論トゥワイスもトガヒミコも彼女の過去は知らないし聞かされていない。

但し、死柄木と漆月を除いて――になるが。

「でも、大丈夫。それに、前は取り乱しちゃったから……これくらい、マグ姐が味わったあの痛みに比べれば、大した事ないんだよ……」

此処に来て彼女の過去が明らかになるのは誰にも予想はしなかった三人、鎌倉は作り笑いを徐々に黒く塗り潰していく。

知っている――本当は鎌倉が誰よりも一番に我慢して、耐えて、堪えて、忍んで、ずっと自分を抑えていたのを。

仲間想いで、仲間には優しくて、仲間の為に働いて、そんな彼女が、誰よりも八斎會を憎んで、今こうして殺したいのに、それを表に出さず、悟らせず、ずっと我慢しているのだ。

此処で私が怒ったところで逆効果は愚か、鎌倉の苦労も潰してしまう事になる。自分の浅はかで身勝手な行動が、自滅に導くことは誰もが望んでない結末だ。

「……鎌倉……」

唇をキュッと締めるように、龍姫は俯く。

何もかもが自分勝手なのに、隣で鎌倉がずっと耐えていたのに…そんな事にすら気付かずに、一人で怒ってて、頭に血が上って、つい迂闊な行動を起こそうとしてた事に苛立つ龍姫は、なんとか冷静さを保つ。

(私は、まだまだ子どもだな…)

姉御肌なんて言ってるくせに、強がって意地を張って、でも本当はまだ子どもで、死ぬことが怖くて、過激に相手に反応してしまう。自分勝手…は良くないと頭で分かってしまうにしろ、自分でも単細胞だと言うのは自覚しているのか、己の不甲斐なさと、忍耐力のなさ、仲間に迷惑をかけてしまう言動に、申し訳なさが込み上げてくる。

――くそッ！危うくあの時と同じ、マグ姐の時みたいになっちまうところだったじゃねーか!!

…いや、違う。マグ姐の死を無駄にしちまう所だった、が…妥当か

この場合。

『大丈夫よ龍姫ちゃん、貴女は自分のしたいことをすれば良いのよ。此処に居る皆んなは、一人たりとも貴女を責めないんだもの――貴女のしたいことを、やりたいことを、自分で選んだ道を普通じゃないと、嗤う人間が可笑しいのよ』

敵連合に入ってから、直ぐにはメンバーには馴染めなかったけど、マグ姐が声をかけて、話の相談相手に乗ってくれたんだっけ。

『私にも友達がいてね、普通じゃなことを、普通に生きられないことを嗤うのが許せないのよ。可笑しな話よね、誰もが皆の思う普通にならない子がいるって言うのに、他者の気持ちを何も知らずに馬鹿にして、嘲笑ってるんだもの。

そんな世の中を壊すことを、リーダーである死柄木がいるから、貴女達を代表とする指導者として動いてくれる漆月ちゃんがいるから、私たちはこうして集まることも、素敵な出逢いを果たすことも出来たのよ』

ああ、言う通りだよ。

私のことを気にかけて、語りかけてくれたアンタが好きだった。皆んなはお前を愉快犯とか、殺人鬼とか言ってるけど…私もアンタを嗤わないよ。

それなのに、あの日を境に――

『……先に、手を出したのはお前らだからな?』

死んでしまったから。

私さ、許せなかったんだよ…やっぱりどうしても、マグ姐を殺したあのクソ野郎を、それを率いり幹部に位置付く奴らも、何食わぬ顔でヘラヘラしやがって…

「そんなヤツは、許せねーよな……」

「我々を虚仮にする者――許すまじ!!!!」
入中の悽絶な叫喚は、圧縮されつつある地下に大きく反響した。まるで地下洞窟で目一杯大きな声を叫び上げたように、入中自身の声が、擬態が、地下が、火山の如く憤慨したように振動し、歪み形を変えていく。
言葉では言い表せない、不安定で無固定的な形、今でも立ち尽くす事も難しく、バランスが取れない。
「気の小さい人ほど怒りやすいってのは正しくこの事――怒って注意が散漫してしまうんです。意識が削がれ、致命的な重傷を負う。ふふっ、こう言う人ほど単純で脆いんですよね」
身軽さと体術を学んでるトガに、回避性能に何かしらと長けてるトゥワイス、忍というステータスで身体能力を補助している二人、四人は軽々とミミックの個性を躱していく。
天井、床、壁、ありとあらゆる方面から自分を狙って来るのは見えている。もし相手が手練れであれば、流石に厳しいだろうが、怒りに全てを支配されてる入中は、ただただ発狂し奇声を叫びながら、乱暴で、粗く、不的確に、圧迫を繰り出す。
「あっはは♪ようやく、余裕の皮が剥がれたねおじさん、楽しかった？僕らを従えてた気になってたのは。ねぇ、今裏切られてどんな気持ちなの？ねぇ、今ってどんな気持ち？」
「鎌倉あああああぁぁぁぁぁぁぁッッ!!!!たかが!!たかが道具の分際でぇ!!!この八斎會に刃向かいやがってからにいいいいいぃ!!!!テメェらぁ!!ど玉カチ割られる覚悟は出来たんだろうなあ?!!何れ社会を裏社会を支配し牛耳る俺たちに、そんな事が許されると思ってるのかあぁぁぁぁ!!」
耳障りで、鼓膜が激しく揺れそうな叫喚は、地下全体に響いては、何処から声を出してるのかさえ解らず、居場所が割れない。
「テメェらは黙って俺たちの良いように利用されりゃあ良いんだよ!!!!我々を、八斎會を虚仮にするのは万死に値する!!!お前らのようなチン

ピラが!!八斎會に…俺たちに逆らうなど!!!全てを裏で支配するこの俺たちにいぃぃ!!!!」
「じゃあ、なんで今は支配者になれてないの？」
「…は？」
　大規模な音量に対し、鎌倉は冷静に言葉を返す。たった一言に、入中は言葉を失い、瞬きをする。
「全てを裏で支配する極道かぁ、確かに大きな夢があって素敵だね！しかも其れを堂々と人前で、裏切られながら大きな声を出して、支配者になるんだーって言ってるんだから、説得力の欠片もないのに、一丁前に子どものように喚くんだから、本当に支配者になれるんだね！」
「……!!」
「でもさ、支配者になれるのなら、なんで今までなれてなかったの？その気になれば僕らや弔くんに漆月ちゃんだって今頃、手駒として扱ってたんだよね？
　っていうか逆に、そうなっていないと可笑しいよね？」
　鎌倉は、次々と的確に、入中の心を抉っていく。
「あっ、それだけじゃないか。裏を支配するって事は、超人社会…ヒーローも敵も、忍も支配してないとおかしいもんね！
　それを可能にするのが八斎會なんだもん、凄いすごい。オールマイトよりも凄いんじゃない？
　じゃあ…今僕らがこうして裏切ってるのも可笑しいよね？だって、僕にとって支配者になるのが弔くんと漆月ちゃんの二人なのに、全く逆らおうぜーって思わないもん。寧ろ居心地が良いよ。
　でも、現段階で計画も何もかも狂わされてるってことはさ、支配者になれていない、なる資格がないんじゃない？」
「はぁ…はぁ……くっ!!黙れ…黙れ黙れ黙れ黙れぇ!!」
「それともぉ…支配者になりきってる、支配者気取りかな？悔しいなら人前に出てきて何か一つの反論でもしなよ。支配者になるんだ、この先の計画が遂行すればって、君らの憶測と可能性と妄想のお話じゃん。妄想を垂れられてもこっちが困るんだって、あれ？これなんかデ

ジャヴだね??
あっ、けど支配者になれるなら、僕らの裏切りも暴走も、簡単に止めれるよね。
じゃあさっさと止めて見せなよ、僕らの絶望は――もう、誰にも止められないけどね」
後は、僕に任せて皆んな。
入中が完全に僕に注意が向いている今なら、誰もが簡単にコイツの場所を見つけられるよ。
それに、ここまで怒りを湧き上がれば、攻撃も個性も荒ぶり、冷静な思考判断が狂うはずだ。

これも、漆月ちゃんが言ってたなぁ…

『いるんだよねー、物騒な世の中になった今、必死こいて無我夢中で、とにかく必死になって高みに昇ったつもりでいて、見下ろしている連中って…
ああ言うのって、自分が突き落とされるビジョンが見えてないんだよ。計画に動こうとする奴は、そうやって利用されて、絶望に落とされる事が解らないからね。だから、好機なんだよ――解らないからこそ、対処できないんだ』
『…漆月ちゃんはさ、僕らにどうして欲しいの？弔くんの言ってることもだけどさ、八斎會に行って、僕らになにをさせたいのかなって…』
『ん？特になにも強要はしないよ？言ってなかった？〝お前たちのやり方で必ず戻って来な〟って』
『それはそうなんだけどさ、漆月ちゃんのあの言葉は、どう言う意味が込められてるのかなって…何か裏があるんじゃって考えちゃって…』
『はぁいぃ？あの、すいません……裏なんてありませんけど…』
（なんか思ったよりテンション下げめに言われた……）
『だって戦力は下げられたくないじゃん？それに弔も言ってたじゃん、お前らを信用してるって。それだけじゃダメなの？』
『ダメじゃないけど…もしかしたら計画とか考えてるのかなって思っ

てて…』
『……』
『それに…計画を練っていないと、具体的で現実味ある計画を立てないとさ、アイツらに何かされた時とかに…』
『成る程ね、今の鎌倉は極限状態の不安に陥ってるんだ。まるで怯えた鼠の５０倍みたいだね、電流でビリビリと不安を煽られちゃってるんだね、一周回って可愛いよお前』
『例えが解らなくもない…』
『逆に聞くけど、何で計画がないとダメなの？』
『…えっ??』
　此処で初めて、鎌倉は拍子抜けな声を漏らす。彼女の、余りにも意外な、予想外で、でもって此方も困惑してしまう問いに、脳が働かない。なにも、言えないからだ。
『だって私たちってさ、好きなものを壊したり、好きな時に殺したり、好きなように生きて行くんでしょ？
　計画なんて唯の手段と効率上げじゃん、ていうか計画が必ず完遂できるなんてあるわけないじゃん。決められた事をそのまんま実行して行く機械類の人間でしょ？なんで計画なんて練らなきゃならないの？
　私はさ、龍姫にも言われたけど弔達の側にいなかったからさ、八斎會と触発して具体的に何が起きたのか解らないし目撃してないよ？だけど、私達が好きなように生きて行くってこと自体は変わらないし、私は曲げるつもりはない。これほど、面倒じゃないことってないからね』
『う、うん……漆月ちゃんって、記憶？が、戻ってから別人になったけど、面倒くさがりやってのはハッキリと解ってるよ…』
『そうそう、だってメンドーじゃん。計画なんてルートを絞ってそこから的確にやっていくのって…だからさ、計画なんて辞めちゃうんだよね。
　でも、計画がある奴が、ない奴に勝るなんてのは唯の詭弁だよ？人によるけど…例えでいうなら、競馬みたいなもん。賭け事と変わらな

いよ』
（計画がギャンブルの類になってるのは初めて聞くなぁ…）
『じゃあさ、計画が狂わされたらどうするの？また違う計画を出すの？作るの？予め用意してた計画がまた壊されて、また出しては壊されての繰り返し？うん、ループだね回りくど～い♪だからさ、私は計画を立てるよりも…壊す方が好きなんだよデストローイ!!!』
　とは言っても、嫌いなだけで彼女も何かしらと、自分が緻密に立てた計画を遂行したことは、一度だけある。
　それが――『善忍中学校』がキッカケであり、其処から始まったのだ。彼女が本格的な危険性を魅せたのは。
　感情高ぶり、滅茶苦茶にいう。
『計画は単なる手段でしょ、一々そこに一縷の望みをかけてないの!!私達は絶望してるんだから、希望なんてないんだから、思った事をそのまんま実行すりゃあ良いの。
　計画も目的もない奴ほど、本当は強いんだよ？だって、計画も目的も望みも見えない奴は未知だからね～。考えが見えない敵ほど厄介ってあるじゃん？未知なる力に、みーんな虫けらみたいに潰されちゃうんだから。ほら、アレだよ…殺したいと思ったその時に、そいつはもう死んでるも同様って有名なヤツだよ…本当にそれと変わらないの』
　計画を一から作って成功するのは、出来て当たり前で、未知なるトラブルを前に計画は崩れてしまう。だけど、計画も目的も何もない奴は、未知なる理不尽にもなれれば、凡ゆるトラブルにも好きなように対応できる。
　彼女はそうやって生きてきて、その結果が今となっては全国指名手配犯になってるのだから。今もこうして生きてるのだから。
『だーかーら、鎌倉も出来るって。自分が思った事やったら、案外出来てるもんだよ？それに、私と同じ忍学校を潰したんだから、大丈夫だって。なんなら駄目押しとして絶望と悪意の美学でもやっちゃう？』
『……』

ああ、凄いなぁ漆月ちゃんは。
前とは別人のように、こんなにも遥か先を見据えて、破茶滅茶苦茶な事を言ってるのに、聞こえが良くて、心が洗われて、不安を振り払えて…
僕は、明確な憧れや夢がなかった。
友情はあっても、なにかを目指す大局な理想がなくて、ただ嫌いな奴を壊して、殺して、消して、潰して、それだけで満足してたから。
弔と同じような道に進めば、きっと大丈夫なんだって、何処か安心してて…でも、今はなんだか少し違う。
初めて、彼女のそばに居たいと思えてしまう。
僕を此処まで見て、ここまで居心地が良くしてくれて、素晴らしく狂おしく、漆月ちゃんの役に立ちたい、絶望に浸っていたいと思ってしまう。
そう、君や弔くんが先生に憧れてるように、今まさに君に憧れを抱いてるんだ……

今までこれほど、僕と向き合って話してくれるのは、由希子を除いていないから――
『じゃあ…訓練でも、してみよっかな？／／／』
僕は照れ臭そうにそう言うと
『あっ、無理。地味でダサいし……今時流行らないもん…』
『えぇっ?!?』
斜め上で言葉のボールを投げ返された。

ねぇ、入中。
僕は、僕らはちっともお前らなんか怖くないよ。
個性がどうした、金がどうした、目的がなんだ、計画が狂ったら案の定、猿の物真似のようにキィキィ吠えるだけ。
定期的で、固定的で、単純で、扱い易い。

「だから今ので分かったよ――八斎會も、オーバーホールも、入中(お前)も、全然ッ――大したヤツじゃないんだよ!!!」

そんな奴に、不安になる事なんてないんだよ。

「鎌倉ちゃんの言う通りですよね、思った事を言ってくれる親友が側にいるのって素敵♪」

次にトガが横槍を入れ、言葉を突きつける。

「なのに、蹴落とすか道具としか見ていない貴方達って本当に可哀想。そんな世の中に生きられなかったんだね悲しいねぇ。

上から見下ろしてる人間ほど、弱くて何処かへ隠れるんです…ゴクドー、かっこ悪」

二人の聞きたくもない、耳を塞ぎたい一心の言葉の連続に、入中の神経は、意識は、心は、怒りという文字に吹き飛ばされた。

「ッッッッッッ????????ーー??ー????ーーーー??????????ーー!!!!!!!!」

言葉の原型すら留めない声は、喉が潰れてしまいそうな程で、最早煩いを通り越して、不愉快で不快感しか残らない。

部屋に轟く声が、ヒーローに位置を示してくれる。

「今の会話なんだ…?喧嘩でもしてんのか?」

警察の幹部が、辺りを見回し警戒しながら、探している。どうやら入中の声が大きすぎる為か、彼の発言しか聞き取れてないそうだ。

「恐らく…八斎會とは手を組んだ…が、信頼し合う仲って訳でもないようだな」

冷静に分析をしながら、抹消を続けるイレイザーに、隣の雪泉が気配を感じ取る。

「其処…!!!」

咄嗟に、秘伝忍法の【黒氷】を放つ雪泉に続き、デクは飛んでいく

【黒氷】を、ワン・フォー・オールのフルカウルを駆使して追い抜き、入中の居場所を割った。
「はあああぁッ…!!」
腹の底から気合を乗った声に、壁に蹴りを入れる事で粉砕。中にダメージが入り、隠れてた体が現れる。
「良くやった…お前ら!!」
体を見せれば後は簡単、個性の抹消を使えば使えば――トリガーの薬を使ってても、個性を消す為問題ない。
壊理の劣化版ではあるものの、視るだけで充分だ。
「しまッ――!!」
落下――この高さから落ちてしまえば、無事では済まないだろう。抵抗しようと、どう足掻いても助からない。
「ごめんなヤー公、俺たちはやっぱ好きなようにやらせて貰うわ。俺たちは、お前らの道具じゃねーしな」
ふと、トゥワイスの言葉が耳朶を打つ。
横に振り向けば、四人は高笑いしながら手を上げて、見下ろされる。
今まで利用価値として、手駒として見下ろして来た人間が、今度は見下されてた人間に見下ろされ、絶望へと向かって落下していく。
「オ、まえ・らあああああァァァァァーーーーッッッ!!!!」
屈辱、恥辱、憤慨、殺意、様々な感情を覚えながら、雪泉が先ほど放った【黒氷】にあたり、氷が体を埋め尽くす。
「くぁ…ッ?!」
冷たい。
次に入中が覚えた感覚がこれだ。体を凍らせるように、とてもつもなく寒く冷たく、1秒でも早く解除されたい気分に陥り、怒りの熱が段々と引いていく。
「どうやら利用されてしまったな、我々もお前も連合に…」
静かな声が聞こえたと思えば、頬に鈍く重い、痛覚が働いた。判子をモチーフにした5キロの印鑑は、食らえばひとたまりもない。一撃

で気絶した入中は、意識を途絶え、デクに氷ごと捕まれ安全地帯に避難する。
「だが、本部長・入中常衣――確保!!残る八斎會のメンバーもわずかなはずだ！」
結果的に良いとは言えないが、一先ず一難去った…とでも言えようか、動き妨害する迷宮は、ようやく終わったのだから。

「ミリオに早く追いかけるぞ！もしかしたらオーバーホールと交戦してる確率は高い！」
サー・ナイトアイの言葉に、メンバーは全員頷いた。

１８３話「スター・シールド・ウォーズ」

八斎會の本部長・入中常衣の捕縛に成功した警察とヒーローサイドとはかけ離れた別場所、擬態により分別された麗王と切島の二人ペアは、逸れた者と合流するべく、見知ぬ地下を駆け走る。

地下が迷宮になってしまった以上、マッピングは役に立たないし、ルミリオンのように透過でスイスイと壁を越していくことも出来ない。

「切島さん大丈夫ですか…ッ？」

「大丈夫ッス！俺、見た目通り体力に自信あるんで!!そんでもっねエリちゃん救う為ッスもん!!」

迅速に走り駆ける麗王の背を、求めるように突っ走る切島は、なんとかと言った形で付いてきてる。

切島は力自慢だけでなく、体力を始めた身体能力によるパーソナルステータスは極めて大きい。スタミナは問題ないし、足の速さは個性なしでも中の上――雄英で毎日訓練を通してきたからか、忍の速さも無事に付いていけている。

「そうですか…それなら良かったです。それに、入中の個性が原因で地下の構造が複雑な以上は、下手に気を抜けませんからね」

形がグニャリと歪み、原型を留めてない辺り、粘土のように操作した痕が見受けられる。

トラップにしては繊細で、遠回しな戦法だが、悪くはない。こう心の中で呟いている暇はないが、麗王自体、忍の活動はともかく、ヒーローとの共同戦線は初めてなので、敵との戦闘も全くと言って良いほどに無経験。だからこそ、多種多様な相手の行動や戦法に、感嘆となってしまうのは、元々お嬢様育ちな上に、学ぶべき教授に取り組んでたからなのだろう。

角に曲がるにつれ、部屋に大きなホールが広がっていた。

此処までで入中の個性によって操作された痕跡は見えないので、恐らくダミーのルートから別の本ルートへと繋がったのだろう。確かサーに聞いた話だと、大広間に構成員は通らなかった筈だ。
「よし！このまま突破して皆んなと合流するぜ！待ってろ皆んな!!」
切島は燃え滾る言葉と共に、地に足の蹴りを入れ、全速力で突っ込んでいく。
しかし、麗王の本能が、それを拒絶した――
「止まりなさい切島さ――ッ」
刹那。言葉が途切れると共に意識が朦朧とし、感覚は狂い、視界はぼやける。それは、切島も同じことだ。
「なッ…?!」
突然襲い掛かる摩訶不思議な狂った感覚に、二人は思わず吐き気を催す。まるで船酔いや車酔いの人間と同じく、感覚を共有しているみたいだ。
「あァ～～ひゃっひゃっひゃ!!ういいいいィーーーッッ!!酔っ払っちまったかパンピー供ォ！」
天井から、能天気で高揚してる声が耳を打つ。
二人が同時に顔を上げると、そこに居た――八斎會の幹部が。

「俺もだよ!!足元が覚束ねえだろ?千鳥足たったらた～♪ってなぁ!!だから俺は道は歩かねえ、上にしがみ付いて歩いてんだぁ～らよっとぉ♪」

死穢八斎會八斎衆・鉄砲玉――酒木泥泥
個性――『泥酔』酒を飲み、相手の平衡感覚を奪い、感覚を狂わせる事が出来る。
『汚泥』と書かれた焼酎瓶を持ちながら、酒を浴び乱波飲みする。アルコールの匂いが充満し、酷い匂いが鼻に焼き付いて仕方がなく鬱陶しい。
「クソ…が、気持ち悪ぃ…！」
「ぷっははぁ!!ガキってのは未成年だからなぁ、酒が飲めねえし大人

の味わいは解んねえだろう?!どうだ?二日酔いに見舞われた気分はＹＯＨ・チェケラ!!犯罪的だぜぇ～♪」
　地面に倒れながらも、何とか立ち上がろうと試みる切島だが、酒木の泥酔は思ったよりも凄まじく、腕に力が入らず、酔いによって脳がグラつく。
「これは…また厄介な個性…ですね……」
　ビームサーベルを地面に突き刺し、杖代わりする麗王は、酒木を睨む。獅子による王の眼差しも、どこ吹く風か、酒木は空になった焼酎の一滴を飲もうと必死だ。
　朦朧とする中、暗闇の中で煌めきが生じる。
　ぼやけた視界を擦り、再び視界が広がると、今度は見えた。まだ形や正確な色、空間は歪んで的確には見えないが、尖った鋭利な刃が、煌めいて二人に襲い掛かるのを。
「あぶ…ねぇ!!」
　切島は筋肉を無理やり引き締めながら、硬化を発動して麗王の前に立ち塞ぐ。
　何を――？と問う前に、その疑問は瞬時に解消する。
　ギャギィィン！と鳴り響く金属の打ち合う音が反響し、切島はゲホッ！と嘔吐する。体を強制的に無理して動かした反動もあるのだろうが、なによりも腹部に食らった衝撃が、トリガーを引いたのだろう。膝を折る切島は、息を荒くしながら、唾液と混じった血を口から流す。
　数個、金色に煌めく刃は吐き出した切島の液状な嘔吐物に落ち、半分は腹部に突き刺さってる状態だ。
「な…んだコ、れ…？」
　硬化した筈なのに、それでも切島の腹部に突き刺さるコレの正体は？何処かで見た事が……
「へぇ、貫かねえのか。お前の個性良いな、凄く良い」
　すると、今度は落ち着いた声が静かに響き渡った。
　暗闇の廊下から、金色に輝く物体が揺らめいている。それはやがて近付いて来ると共に、姿や形は明確なものになっていく。尤も、まだ

泥酔の効果が続いているので、ハッキリと完璧に見えてる訳ではない。
「だが、それだけ…個性が秀でてるってだけだ」
死穢八斎會八斎衆・四天王――切裂竜燐
個性――『鱗刃』一つ一つの鱗が頑丈且つ、強靭な切れ味を誇っている。触れるだけで肉が切れるので、取扱注意。
竜の異形型が暗闇の廊下から姿を現し、立ち上がれない二人を嘲笑し、鼻で笑う。
「あぁん!?んだよ殺せてねーじゃん!!酔っ払ってんのかテメェはヨぉ!!」
「それはお前だろ酒臭え」
「あっ、俺かああぁぁぁ!!」
酒木は空になった焼酎瓶を切裂に投げつけ、其れを払いのける。アルコールの匂いが漂ってる上に、酔っ払いの相手と会話なんて、切裂にとっては不快のコンボで攻められてる気分なのだろう。
「なるほど…精神を揺さぶる敵と……うっ、…凶刃を兼ね合わせた敵…ですか……これはまた…」
厄介な組み合わせだ。
その言葉は口に出ず、嘔吐物が口から出るのを必死に抑えて口元に手を当てる。泥酔感覚を味わう機会は一度もないため、未知なる経験ではあるものの、全くもって喜ばしくない体験だ。
(訓練すれば何とかなる…という訳にはいかないのは百も承知ですが……平衡感覚の訓練は……)
疎かにしてたつもりではない。
ただそういう機会が全くないのと、乗り物や激しく動くものに対して何も感覚が働かないため、強制的に酔いを激しく起こさせる酒木相手に、直接致命傷を喰らう訳ではなくとも、深手な不利を背負わされてしまってるのは否定できない。
「お前と俺は若の言いつけ通りに動きゃあ良い…いや、お前だけは豚箱行きか、ここに残って侵入者を殺さなきゃいけないしな」
「うっせーぞトカゲ野郎!!俺の個性のお陰で役立ってるんだぜ?アッ

ピッピィィ～～～!!♪♪」
「幾ら侵入者を処分するが故に、個性を機能するべく酒を飲むとはいえ重症だな…こりゃまともに会話したら敵わんな…」
酒臭いだけでなく、どうやら脳の方も重症的に酔ってるらしい。これ以上は時間の無駄だと見解した切裂は会話を止める。
「入中が辛うじて作った駄目押しのルート…俺らにぶつけるのがたったガキ二人か」
ピキピキと鱗が逆立つ。
こうして自分の鱗を取りやすくする事で、投げナイフやダーツのような使い方が出来るのだろう。
「じゃあ早く仕留めなくちゃあ…なぁ!!」
豪快に腕を振るい、鱗を飛ばす。
研ぎ澄まされ、爛々と金色に輝く鱗の弾丸はそのまま切島の方角へ飛んでいく。普通ならば、これ位の攻撃は無理して受け止めようとせず、回避を試みれば容易いのだが…
後ろには麗王がいる。オマケに泥酔状態で下手に体を動かしても気持ち悪くなるだけだ。
足元がおぼつかず、ふらふらと体がよろけてしまう状態では、地面にひれ伏したまま起き上がるのが困難になってしまい、返って危険な状況に逆戻りするだけだ。

「う、おおおぉぉおおおぉぉッッ!!」

だからこそ、切島は盾として全力で攻撃を受け止める事しか出来ない。
猛烈な雄叫びと共に、再び体を硬化して仁王立ちする。自らが盾となり、麗王を守る。現段階で彼にやれることは精々それくらいだ。
本当なら切裂本人に近付いてブン殴るというシンプルイズベストな行動が一番なのだが、酒木の個性によって体が揺さぶられてる以上、簡単にはいかないのだ。
ザク、ザク、ザク――!!

「ッッ…てぇ!?!」
今度は確かな痛覚が切島を襲う。
肉が突き刺さる不快な音に、切島は表情を酷く歪ませる。今度は鱗を弾くことは出来ず、そのまま腹部に突き刺さってしまった。内臓にまでは行き届かなくとも、切島には充分な痛手を与えただろう。硬化すらも切り裂く個性は危険だ。
「俺の個性は研いで磨けば殺傷力が増す…さっきはダメでも、今のは効いたみてェだなぁ!!」
次にまた数十枚の金色の鱗が、放たれる。
これ以上、切島が守り続ければ死に至る。彼の危険性を察した麗王も踏ん張り体を動かすも、泥酔によって上手く体が機能しない。
まるでジェットコースターに立たされてるような感覚で、感覚がいつもと違うというのは、何とも気分が悪いものか。
「ッ――!」
ふと気付くと、麗王目掛けてナイフが投げられる。
それを咄嗟に躱したものの、頬を掠めたためか、皮膚が切れてツーっと血が流れ滴る。
「これは…」
「あひゃひゃひゃひゃ!!体がガチガチに硬ェガキは俺じゃ倒せねぇからな!!おまえみたいな甘ちょろいお嬢様にゃあ俺が丁度良い!!」
唾を飛び散らしながら汚い笑い声を上げる酒木に、獅子の如く鋭い眼光を放つ麗王。王としての威厳が失われながらも現在、彼女は一矢報うべく、吐き気を殺して武器を杖代わりにして立ち上がる。
(成る程、酒木の個性は相手の平衡感覚を奪う精神系の能力…逆に、それ以外は戦闘向きの肉弾戦はてんで得意としない…
となれば武器を使わざるを得なくなる…しかし、切島さんの硬化では刃が立たない…そこで、攻撃が通じれそうな私を狙う…と)
麗王も万全で自由に体を動かせる状態で酒木と戦えば、勝負は目に見えるだろう。しかしそうならないのが、プロの現場であり、忍としてもヒーローとしても、必ずぶつかる困難な壁だ。
最初っから簡単で、上手くいく戦闘など存在しない。

「ういぃ～～……切裂ィ！しくじんじゃねえぞぉ!!」
「誰に向かって口利イてんだテメェ！海外に売っぱらうぞ!!」
自分の鱗を次々と飛ばしては、また鱗を生やして飛ばすを連続で繰り返す切裂は荒っぽい口調で言葉を返す。
切裂からすれば「其れはこっちの台詞だボケ」だろう。顔色を伺えば、訴えかけてるのが一目で分かる。
「……私が、そう易々と殺されるように見えますか？」
グッと吐き気を抑える麗王は、飛んでくるナイフを武器で弾きながら、呼吸を整える。
精神を静かに保ち、冷静を装う。
王の威厳…だけではなく、戦闘に関して尤も必要なのは冷静な判断と行動力だ。其処に真価が問われている。
何もこの状況が不利になっただけで、打開策は存在する。
此処で簡単に朽ちてしまえば、それこそ王としての資格は無い。それだけじゃなく、仲間に合わせる顔もない。
麗王はレーザーブレードを両手に持ち、大きく振りかざす。
端から見れば隙だらけで、攻撃をして下さいと言っているようなものだ。
「おぉん!?なーにやってんだこの金髪ちゃぁん！」
指と指の隙間に挟んでたナイフを、そのまま投げ飛ばす。鋭利な刃物は、そのまま彼女の体へ飛ばされ、案の定突き刺さってしまう。
忍装束が破くも、ぐぅの音も上げずに悲痛の声を出さない。

（勝負は一瞬…この一撃で仕留める…）

目を閉じ、精神統一を図る麗王は、泥酔の効果で外れないようにしっかりと標準を合わせる。
刃物によって突き刺さろうと、関係ない。忍による武器でもなければ、極普通の武器だ。
「獅子とは…気高き王であれ――確実に獲物を仕留める獅子は、動じないのです」

「…？」
麗王の言葉の意味が読めない酒木は、首を傾げるも、特に気にしない様子で懐からナイフを補充する。
「貴方が私の平衡感覚を奪おうと、泥酔に落とそうと、獅子は決して揺るがないのです」
「なーに駄弁ってんだぁ!?!本当に酔っぱらっちまったかぁ!!」
レーザーブレードはそのまま天井に突き刺さってしまい、まるで地面から天井の幅を認知出来なかった人間が、つっかえたような愚かな絵面だ。
（地面に突き刺さって抜けなくなっちまったんだな、アホが。死ぬぜ――服がダメなら、脳に直撃してやらぁ）
決め手――ナイフを投げとばそうとした刹那。
天井から伝わる大きな振動に、思わず手を止めてしまう。酒木はその振動に気付くも、何がどのように振動が起きたのか、今此処で伝わってるのかに気付かない。
「ん…なんだ？」
入中の個性だろうか？はたまたフロアの戦闘が激しいのだろうか？最初は、そんな浅い認識だけで済ませていた。
しかし次の瞬間――酒木に重い衝撃が乗せられる。
「それはそうと酒木さん――くれぐれも天井（足下）にご注意を」
麗王がそう言い終えると、訳もわからず天井からビームサーベルが斬り裂き、酒木は垂直に攻撃を食らってしまう。
「秘伝忍法――【ライトニングブレード】!!」
一筋の柱とも呼べるレーザーブレードは重く、まるで竹刀で一本取られたような感覚は、部活で行う剣道とは大違いだ。マスクは割れ、脳に刺激ある痛み、天井が破壊され、そのまま蜚⊠のように叩きつけられる。
ボガアァン！と凄まじい破壊の効果音が生じ、近くにいた切裂はその衝撃に思わず意識を逸らしてしまう。

「酒木!?」
何の予備動作もなく、突然倒れこんだ酒木に、つい名前を叫んでしまい、攻撃を止めてしまう。
唐突な出来事につい混乱を招いてしまったのだろう、切島を相手にすることで集中していたせいか、はたまた簡単に倒されるとは思ってもいなかったのか。
「おっ――らあああぁぁぁぁぁぁ!!!!」
隙を見た切島は一瞬の好機を逃さず、余所見していた切裂目掛けて猛威に走る。
吐き気と覚束ない感覚に見舞われながらそれでも精一杯、拳を強く握りしめ、相手の顔面めがけて振るわれる。
「烈怒頑斗裂屠!!」
「ッ!ごァッ――?!」
硬く漢気溢れる情熱の拳は、そのまま切裂の頬にめり込み、殴り飛ばす。
痛恨…とまでは行かずとも、硬化で頑丈に長けた拳はダメージを与えれたのではないか?そんな事を心の中で言い聞かせながら、硬かった頬の感触を、もう片方の手で押さえる。

当の酒木は何が起きたか…いや、なぜこうなってしまったのか理解に及ばず「あり得ねぇ…」と呟き、其れを最後に意識は途絶えてしまった。
種は簡単――酒木がナイフで攻撃に夢中になり、麗王がレーザーブレードを態と天井に突き刺す。
一見普通に見れば、大振りしようとしたら武器が抜けなくなってしまったと、漫画で見るありがちな展開なのだが、決してそうではない。
彼女の武器は伸縮自在――天井に突き刺すことで、伸び代のリーチを相手に悟らせなかった。
すると後は簡単だ、伸びたレーザーブレードをそのまま振り下ろせば良いだけの話。後はその流れで今に行き着いた。

天井の壁を利用する事によって、相手はまさか痛恨の一撃を食らうとは思ってもいなかったのだろう、何にせよ意図を読まれなくて良かったと、安堵するべきだろう。
「個性は強力とはいえ…自身も酔いに溺れていては、足下掬われてしまいますよ……脳が働かなかった、のでしょうね……何にせよ、一人撃退…」
八斎會の酒木泥泥を見事鎮圧に成功した麗王は、まだ泥酔の効果が振り払えずにいる。
恐らく酒木の個性は平衡感覚を奪う個性ではあるが、倒したからと言って簡単に直ぐ元に戻る訳ではないらしい。時間回復を望むしかないだろうが、まだ酔いの感覚が残ってしまうのは戦闘としては不利である事に変わりはない。
「後は残るは一人…二対一ですね……」

不利な状況から一転し、形勢逆転なるだろうか？

１８４話「ガッツだレッツだ烈怒頼雄斗！」

正義の鉄拳と言わんばかりに、切島の拳は切裂の頬に直接減り込む。いや、減り込むというのは少々語弊だったか、正確には殴り飛ばしたのが妥当だろう。

何せ、切島の硬化による打撃を以ってしても、切裂には重傷は与えれず、肌がぶつかった衝撃で体制を崩しただけなのだから。

（硬え…！全身を覆う鱗のせいで、衝撃が伝わらねえ…!!）

何度か対人戦闘を交わしたから理解できる――切裂竜燐に、自分の個性が通じていないのだと。

鱗による殺傷力は、切島の硬化を関係なく皮膚を傷つけ、殴打の拳も全く手応えがない。

殴った時の衝撃による反動が、返って自分の拳に襲いかかり、微かに表情を歪ませる。人間は人を殴る際、躊躇いや情けを捨てた全身全霊の打撃を与えようと、骨に伝わって痛みが生じるのだ。其れを切島は硬化によって完全に痛みを遮断し、ノーリスクで殴ることが出来るのだが…今初めて味わった感触は、人が人を殴る感覚に近くとも遠からず、拳の皮膚が鮮明に痛覚を浴びていた。

「おい、痛えじゃねえか」

次に感じたのは、切裂のドスの利いた言葉だ。

刃物のように鋭い眼光で切島を睨み、そのまま蹴りで横腹を叩き込ませる。

強烈な一撃が、切島に痛みの感覚を与える。

「ッおあぁ!?」

何の増強系でもない、ドーピングなしの蹴り。だが其れは切島の硬化の状態を以ってしても、ダメージを与えているということになる。

「ぐぁ…!!」

その勢いに流され、切島はつい態勢を崩して倒れ込んでしまう。肺

の酸素が吐き出され、同時に嘔吐物が吹き溢れそうになるのを必死に押し殺す。
本来ならこれくらいは踏ん張る事が出来るのだが、泥酔による効果が残っており、元々の実力を遺憾なく発揮出来ないのだ。
「切島さん!!」
大きな火力を上げた重い一撃を見事酒木に食らわせ、戦闘不能にした麗王は、秘伝忍法の反動と泥酔の効果によって、体の体制が可笑しくなる。
「どうやら…酒木を倒した所で、奪われた平衡感覚が戻るという訳ではない……倒しても尚、悪影響が続くとは…」
戦闘不能に陥っても、相手に悪影響を持続させるのは実に鉄砲玉らしいやり方だ。酔いの効果が切れる効果時間も不明なため、打開策はないだろう。
安静にする暇も余裕もない中、かなり厳しい闘いになるだろう。
「しかし、与え続けられるよりかはマシ…刻一刻が迫ってる中、切島さんに加勢しなければ…」
レーザーブレードを杖代わりにして立ち上がる麗王は、息を切らしながら明確に切島の元へ駆け寄る。

「おらああぁーーーッッ!!テメェ、いい度胸してんじゃねえか!!皮剥かれて臓器売られる覚悟は出来てるんだろうなぁ!!?」
激情してる切裂は、倒れ込む切島目掛けて、何度も蹴りを食らわす。切島は身を硬めながら、相手の攻撃を必死に耐え抜くので精一杯な様子だ。あの切島が、珍しく押しに負けている。
「ごぁ…!!コ…イツ……俺と、同じ…個性か…?」
蹴られながらも、相手の個性に何かしら疑問を抱いてた切島は、つい言葉を零す。
硬化をしている切島が、切裂の単純に殴る蹴るだけで痛手を負わせるのは、考えられない。筋肉が緩んだ隙を突いたり、硬化以上のパワフルでヘヴィーな攻めはともかく、とても切裂がそうだとは考えられ

ない。だからこそ、考えられるとすれば――鉄哲と同じく自身の個性と類似していれば、何も可笑しくはない。
「あぁ…？あー、個性か…お前は大方、体をガチガチに硬めて特攻かます肉弾戦を得意とする個性か。
にしても俺の刃物が通らねえなんて、根性と頑丈な個性は認めるが…俺の前じゃ意味がねえな!!
だってお前は俺の――完全なる上位互換なんだからさッ!!」
切島の漏らした言葉は、切裂の個性を当てていた。
切裂の個性は『鱗刃』――ただ刃物と化した鱗を自身で剥がして武器にするだけではない。全身が鱗を覆うのであれば、全身が鋭利な刃物を浴びたトカゲ――即ち、全身が武器であり凶器なのだ。
そして頑丈な鱗は砕きにくく、全身を浴びていれば自らが盾にもなれる。つまり――切裂竜燐の個性は…いや、『存在そのもの』が、矛と盾なのだ。
其れは切島鋭児郎や鉄哲徹鐵をも凌ぐだろう。
「なぁ、どんな気分だ!?自分の個性で誰かの役に立てる気分は？最高だろうなぁオイ!!体が硬くなるだけで、自由に使えるだけで、お前は充分に恵まれてるってのに、ヒーローなんて病気に浸って良い夢見て、正義ぶりやがってよぉ!!!!そんな烏滸がましいテメェらを今まで目ぇ瞑ってたのに、今度は若の計画を潰そうとするんだ。ちょっと身勝手過ぎやしねえか!?」
ドカッ、ズカッ――!!
何度も足で切島の頭に蹴りを入れるも、腕で頭部を守る。凡ゆるものを切り裂く強靭な刃物は、硬化の個性を無意味にする。
「それを踏まえて『若と俺の夢』を邪魔しようとするんだ――大概にしろよなぁオイオイおい!!!」
「ゆ……め…？」
「もう時期、個性も忍術も…いや、能力という概念そのものが消え失せる！俺たちの念願が叶えれるんだもう直ぐ!!それを、お前らが来たことが邪魔だって言ってんだよ!!!」
言葉の意味が解らなかった――だけど、其れは最初だけ。痛みに堪

えながらも、切島の頭に過ったのは、エリという小さな子どもだ。
まだ見たこともない、だけど協議会で話し合った内容が、直感で切裂の発言に繋がった。
「何でこんな、邪魔をされたくねぇッて時にテメェらがやッ――「はあぁぁぁ!!」ッ――!」
今度は拳に力を入れて、頭蓋骨を殴り殺そうとした刹那――麗王の獅子の咆哮に似たけたたましい叫びが、注意を逸らす。
レーザーブレードを握り、宙に飛びながら目掛けて此方に斬りかかる彼女に、攻撃の対象を変える。
「なんだ?酒木の個性が切れたか!?」
何ともない様子で此方に攻撃仕掛ける麗王に、若干表情を歪ませるも、直ぐに冷静さを保ち、腕の鱗を逆立てる。
ピキピキと音を立てながら、腕をブレード状の凶器と化し、相手のレーザーブレードを防ごうとする。
(いや、切れようが強がってようが関係ねえ!如何なる侵入者は排除する。其れが俺たちに課せられた任務――殺す順番も関係ねえんだよ!!)
ガギイィン――!!
金属同士が打ち合った音が、鼓膜を激しく揺るがす。レーザーブレードに自分の全体重を乗せ、押しに入る麗王。切裂はガラ空きになってる麗王の腹部めがけて、もう片方の拳を振るう。
突き刺すように、拳が腹部に入ると、麗王は思わず苦悶の表情を歪ませ、吹き飛ばされる。
床に擦れるように吹き飛び、頬の皮膚がめくれそうになる。摩擦による熱さ、髪も汚れ、衣装も汚れてしまう。
「おらぁ!!」
「がッ……!」
次に、倒れこんでる麗王の腹部に蹴りを入れる。
ザクッ!と肉を抉る嫌な音が、鼓膜を震わせ、心臓の脈を打つ。切裂は言うなれば全身が狂器と捉えれば、足による蹴りも、深傷を負うことになる。忍装束から、赤い鮮明な血が染み込み、続けて何度も蹴

りを入れる。
「テメェらが何者かになれるなんて、小せえ夢を描いてる時点で病人なんだよ!!お前らが若を止める？八斎會を止める？其れ自体が間違ってんだよ!!」
　最後にトドメの一撃、脳天を貫くように勢いを付ける。殴ると蹴るだけで、簡単に人を殺めることが出来る切裂は、そのまま麗王を殺すべく――
「待ち…やがれ!!」
　ことは出来なかった。
　勢いをつけて足を後方に掲げた切裂の足を、切島が手で鷲掴み、制止する。掴まれたことに、一瞬の不快感が溢れ出る切裂は、視線を向ける。
「…なんだテメェ、邪魔するんじゃ――」
　ふと、視線を向ければ――切島の手はガッチリと足首を掴んだまま、己を睨みつけている。其れ自体に何の違和感も抱かないだろう、しかし切裂はふとある事に気づく。
（…硬え…？しかも、血ィ、流れてねぇぞ？）
　これだけ力強く握り締めれば、掌に裂傷が響き、血塗れになるだろう。だが掴まれたという感覚だけが強く残り、後は何も残らない。血の一滴さえも見当たらない。
「……れが……まえの、……たかった……かよ…」
「……？」
　弱々しく、声が掠れて上手く聞き取れない切裂は、訝しげに眉をひそめる。声が小さく、細く、掠れてる切島は、精一杯腹に力を入れて、声を振り絞る。
「――それがお前のやりたかった事なのかよ!!」
　掴む足首をひっぱり、態勢を簡単に崩してしまう切裂は「しまった」と初めて動揺する顔立ちを見せ、咄嗟に乗っかられることを判断したのか、腕を交差して防御の姿勢に入るも、切島はボロボロな体に鞭を

入れるよう立ち上がり、顔面目掛けて拳をかざす。
「お前が叶えたい夢ってのは、誰かを傷つけなきゃ成せねえのかよ!!ふざけんじゃねえぞ!!!」
如何なる敵にも其々やむを得ない事情は幾つかあるだろう。
人間誰しも、産まれた時から敵になることを宿命付けられたわけじゃない、何かしらの理由があってそうなったのだ。
自分でもどうすれば良いか分からず、無闇に相手を傷付けてしまう。それが己自身に傷を負うことも、切島は知っている。
相手がどうだとかは知らないし、敵をやってるくらいなのだから、多かれ少なかれ事情はあるだろう。
だけど――小さな女の子を平気で傷付けてまで、それは成し遂げなければいけないのか？
治崎を重んじ、忠誠を誓い、盃を交わした相手でも、その娘が傷付き、涙を流してるのを平気で見捨てて良いのだろうか？其れは、あってはならないことじゃないか？
そんな胸糞悪い事を聞かされて、黙って居られるような玉ではない。切島鋭児郎は、烈怒頼雄斗としても黙って見過ごすわけにはいかない。

「お前のやり方は――漢らしくも何でもねえ、卑怯者だ!!」

漢なら、胸を張って前へ進め――もう、困ってる人間を前に、動けない自分を乗り越えろ。

「が――ハッ!!」
ガチガチに硬められた拳が切裂の顔面に炸裂し、地面に叩きつける。後頭部に走る衝撃と、脳が揺らぐ錯覚に見舞われ、意識が吹き飛びそうになる。
殴られた際に、思わず肺の酸素が吐き出されてしまい、頭がぐらついてしまう。
（こいつ――何でだ!?!何で傷が一つも……）

これだけ殴れば、裂傷しても可笑しくはない。寧ろそうなってないと不自然だ。鱗が人にキズを与え、下手すれば致命傷に繋がるだろう。其れなのに、切島には傷らしい痕はおろか、血の一滴も…どういう事だ?さっきまでは、血だらけで苦しんでいたのに…出会って間もないが、こんな単細胞な筋肉バカが、演技をするとも考えられない。

「小さな女の子を泣かして、何も思わねえお前は、漢じゃねえ――!!」

ガチガチと、金属が擦り合うように似て非なる音が反響する。これは、切島自身の体で発生してる音で、形は変わらぬものの、ヒビが入っていく。

「俺が合宿訓練を通してよつやく使えるようになった――!!もう、お前の攻撃は効かねえぞ!!!」

凡ゆる攻撃を全身で防ぎ、防御を極限に高めた烈怒頼雄斗――その名も必殺【安無嶺過武瑠】。

絶対倒れない盾となり、鉄壁となり、要塞と化す。

凡ゆるものを粉砕し、壊し、刃物と化す。

(そうだよな、此処で俺が倒れてちゃ…エリちゃんだけじゃねえ、皆んな頑張ってるアイツらも、爆豪やダチにも顔向けできねえ…

そうだよ、ここでやられて倒れてる俺は俺じゃねえ――)

絶対無敵の状態になった切島は、熱く燃え滾る瞳を差し向けながら、言葉が脳裏に浮かぶ。

『倒れねえヤツが、一番強えだろ――』

爆豪勝己が俺に言ってくれたあの言葉。

ダチが…お前がくれた、たった一つの声、俺が考え抜いた答えの結果がコレだ。

そういや、体育祭の騎馬の時…お前は俺と手を組んでくれたよな。アレ、実はさ…結構嬉しかったんだぜ?こんな地味な個性でも、俺を

採用してくれたんだって。
偶々、有利な個性だったからかもしれねえ…けどな、そのお陰で俺も強くなれるんだ。
「俺を見ろおぉぉ!!!」

此方へ真っ直ぐ突っ込んでくる切島…烈怒頼雄斗に、切裂は立ち上がり、鋭い眼光を放つ。
ギラギラと怪しく不気味な殺意の眼力は、威圧的で、憤りが含まれている。そんな切裂は何も反論せず、懐に手を突っ込む。
「ゲホ…ゴホ…!…な、にを……」
している――そう声を振り絞ろうとする麗王は、ボロボロな体を無理やり動かし、戦闘の体制に入るも、彼の手に持つ道具に、目を丸くする。
アレは――個性活性化のトリガー
瞬時に悟った麗王は、全速力で走り切裂の背後を取ろうとする。酒木の個性の影響はまだ残ってるものの、付与続ける敵が戦闘不能になったからか、症状は回復しつつある。
まだ足元が少し不安定だが、忍の重心バランスを上手く工夫して、カバーをすれば問題ない。光のレーザーブレードを伸ばし、斬りかかるよりも先に、切裂は
「だったら何だよ――」

自分の首元に、違法薬物のトリガーを注入した。
カラン…と、空になったトリガーは力無く手元から落下し、音を立てる。
「しまっ――」
間に合わない。
いやそれでも…せめて一撃は食らわす事は出来るだろう。そう判断した麗王は、そのまま一矢報おうと、大きく振りかざし、力任せに

光の刃を振るう。

だがそれは、いとも容易く弾けてしまう。

「効かねえよ…」

硬質な鱗は、更に斬れ味と硬度が高まり、パキパキと音が鳴る。筋肉が強張り、血管が浮かび上がり、みるみると体は変貌を遂げる。

レーザーブレードは、切裂の肌を通さず、そのまま払いのけると、彼女も勢いに流されるように押されてしまう。

「なんだ…?!」

安無嶺過武瑠状態の切島は驚嘆し、ガチガチになりながら目を丸くする。

体がみるみると大きくなり、ペストマスクは突き破れ、全身の鱗は逆立ち、爬虫類のような大きな口は開かれる。瑠璃色の瞳を輝かせながら、トサカ、腕、背中はブレード状になり、爪は伸び、人型から四足歩行の獣に変化をしていく。

入中から貰った違法薬物のトリガーは、かなり効果が高く、個性を伸ばしてくれるようだ。本来なら粗悪品や効果が悪いのもあるのだが、どうやら当たりらしい。

「グオオオオオオオオオオーーーッッ!!!!!」

人という形を捨て、化け物の如く竜へ変貌した切裂は、野生の獣のように切島を睨む。涎を垂らしながら、舌なめずりをし、四足歩行で歩み寄る。

「コッチモ…無敵…ダ……ヴァルルゥ…!!」

トリガーによって強制的に覚醒した切裂は、ファンタジーな物語に現れる、ドラゴンのようだ。

まだ、闘いは終わらない――

１８５話「なりたかった」

切裂竜燐の個性は、〝人を傷つける〟個性だ。
そう、幼い頃から両親から周りの人間に、嫌という程現実を突きつけられた。
切裂の父親の個性が『竜』で、母親が『鱗』の個性。父が異形型なので、息子の彼が異形型の姿なのも頷けるだろう。
小さい頃は、誰だって夢を見るものだ。
個性があったら何をするか、何になりたいか、そこで幼児達はヒーローという職業に憧れを抱く。
そりゃそうだ、弱気を助け、強きを挫き、悪に立ち向かう勇姿は、見ていて気持ちが良いし、何より評判だって良い。だからその大人達を見ていれば、誰もがそうなりたいと、願ってしまうのは不自然ではない。

だから、俺は最初はヒーローに興味があった。
偶々、父親が俺のために借りてきたＤＶＤの、ヒーロー特集ってものがあって、小難しいことは分からないけど、でも…彼ら彼女らが役立つ場面は、見てて魅かれるものがあった。
敵と立ち向かい、市民を救い出し、個性を駆使して困難を打ち破る姿は、カッコいいと思えたし、こう言うのを通して人は、夢や目標を持つのだろう。
それが自然であり普通である事を、幼少期の頃から植え付けられた。

でも現実ってのはそう上手くいかないもので、況してやヒーローになれるか否か、何者かになれるかは個性次第で決まる。
それこそ、生まれた時から勝ち組か負け組かが既に決定打されるよ

うに。
『痛いよぉ…!!切裂くんが個性で僕を虐めるよぉ…!!』
偶々、しつこくて煩い奴が俺にちょっかいを掛けて来たから、俺は腕を振っただけ。
暴力はしてないし、虐めてもない。オマケに個性は生まれた時からずっとそうで、故意でも悪意も無かったし発動さえしていない。それなのに、被害者面した子どもが喚けば、悪意も何もない普通の子である俺は、悪者にされてしまう。
『切裂くんがよっちゃんを虐めた〜』
『可哀想、切裂くん酷いことするよねぇ』
『お父さんとお母さんってどんな人なんだろうね?』
そして悪い評判が付け込まれ、風評被害に遭う俺は、そりゃあもう問題児扱いされてたさ。何も悪いことだってしてない、たまたまそういう個性だっただけで、良し悪しが決まる。

『切裂くん!どうしてそんな酷いことをするの?クラスの友達でしょ?』

知らねえよ。大事な生徒なら、俺のような人間は叱られて良いのかよ。何で『そんなことになってしまったの?』だなんて聞いてやくれない。
評価や印象ってのは、一度付け込まれれば深くなり、誰も見てはくれなくなってしまう。
『どうしてお前は人を傷付けたんだ!』
『先生やご両親から苦情が来たのよ!?なんて事をするの!!』
何でそんな事を言うの?
今までずっと、俺の側で支えてくれた親は、俺に罵詈雑言を浴びせてくる。なんで、俺の味方にはいてくれないの?
何か事情や理由があるのかって、心配して聞いてくれないの?
俺が何を言おうにも、〝言い訳〟だなんて言葉で全部片付けてしまう。

そう、両親は俺のことなんて何とも思っていない。
それは小学に続いても同じだ。
『先生ぇ～！切裂くんが悪いんです、この子が僕達に虐めを強要しました』
『近寄らない方が良いぜ、アイツは触れたものを全部傷付けちまうんだ』
『先生！切裂くんが僕に暴力を振るってきましたぁ！僕は何もしてません！』
個性による差別はどんどん続く。
お前らは知らないだろうけど、こういう個性による虐めってのはリアルな話、割りとある方だ。中には〝個性障害者〟なんて、望んでもない輩もいる訳だしな。
人は何もしなくても、悪者扱いされるんだ。
ちょっとやそっとのキッカケで、人は大きく変わる。況してや俺みたいな人間が特にな。
『君のようなクズは、敵向きなんだよ』
『こりゃ進路に響くなぁ…親御さんと深く考えた方が良い…』
『どんな悪い事をしたって、全部アイツに責任転嫁すりゃ信じちまうよな！』
悪い人間に耳を傾ける人間など、誰もいない。
人は自分の私欲に眼が眩み、いざ非があれば、悪者に汚名を被せる。
俺のような人間は、周りの人間から都合がよく、俺が何を言っても信じてくれやしない。
そりゃそうだ、悪者の弁護や言い訳など誰が聞く？
聞いたってどうしようも出来ないし、況してや人の命を救えは出来ても、心は救えないんだ。
俺は、ヒーローなんかとっくに諦めちまったんだわ。
人を傷付ける人間は、ヒーローなんかになれやしない。
手を差し伸べた人間の手を触れた所で、キズが付くだけ。

生まれた時から俺は、そうならざるを得ない運命だった。
バカげてる？ああ、そうかもな――でも、もしこんな個性がなければ俺は、どうなっていた？
もし、オールマイトのような個性だったら一目置かれるだろう。
エンデヴァーなんてＮｏ．２がどうとかほざいてるが、あんなのでも充分に強い。
ただ漠然としてた夢は簡単に潰え、なんの目的もなくただただ世を徘徊する俺は、異常者なのだろうか？

精神的に疲労が蓄積されたのか、心の中で誰かにすがることも許されず、誰かに助けを求めれない俺は、とても小さな声でポツリとこう呟いた――

『個性なんて…なくなってしまえば良いのに……』

いつからか、たった小さな一言が、自分自身の心の中で大きく渦巻いていった。
そうだろう？
個性なんてものを持つから人は夢を見る。
個性なんてものがあるから争いは絶えない。
個性なんて不要物が、人の人生を決めつける。
そうだ、全部個性が悪い。
漫画やアニメで出てくる能力に、大きく憧れる人間なんて子どもだけ――実際にこんな迷惑なものを持っていると、人は後悔するのだ。
これが植え付けられたならまだしも、望んでもなく生まれ持っていれば尚更だ。

『なぁ、お前…俺の仲間にならないか？』

だから嬉しかった――俺に仲間ができたことが。
人生で初めて、仲間と呼べる御方に出逢えたことが、何よりも嬉し

かった。
『お前は俺とよく似ている。他の連中とは違って、個性のことをよく理解出来てる。メンバーが足りないんだ、夢を遂行するにも計画と金が必要…よし、お前ウチに来い。今日からお前は俺の仲間だ、切裂…お前の力が必要だ』
若は、オーバーホールは、俺を受け入れた。
こんな俺を必要としてくれた。
初めて俺に仲間ができた。
俺はもう孤独にならない。

俺は生まれて初めて――希望を手に入れた。

オーバーホールの計画は、簡単に言えば個性のない世界だ。
個性なんて存在そのものが異常であって、病気の発生源だ。
個性に苦しみ、悩み、争いが絶え間無くなる。
小さな夢に心酔し、
己の病気に溺れ、
何者かになれるなどという戯けた夢を見る。

そんなこと、あってはならないのだ。

俺の中に渦巻いた思想は、実現化するように肥大化し、止められなかった。
若に手を差し伸べてくれた、あの日からもう俺は…

俺は――オーバーホールの駒となり、矛と盾になる。
あのお方は…若は、俺に『一緒に夢を叶えよう』と言ってくれた。俺の夢と若が叶えたい夢は、同じらしい。
仲間のみならず、同志というヤツだ。共感すべき理解者で、俺の救い手だ。

そうだ、俺は若頭の為に……!!!

その為の犠牲なら惜しまない、どれだけ汚名を被ろうが慣れっこだ。

エリさんの体をどう扱おうが、今まで拾ってきた駒をどう扱おうが、全てが若頭の思うがまま。

それを邪魔する輩を、排除するのが、俺の役目、課せられた使命。

俺は音本とクロノ以外の、あんな使い捨て供とは違う。若頭の野望を果たすことを許され、共に歩むことを赦された。

凡ゆる犠牲を出し、大極な理想を遂げる為に、あれやこれやと根回しをしてようやく、その宿願が実り、果たす時が来たのだ。それを邪魔するということは、俺たちの生き方を、やり方を、願いを、阻むということだ。

困ってる人間を救えず、目先の利益でしか動かない連中が、今になって都合が悪くなると動き出しやがって。

そんな身勝手で、私欲に溺れてるお前らと、最初っから現実と大極な理想を叶える俺たちとでは、格が違う。

もう誰にも止められない。

この計画は絶対なのだ。

失敗は許されない。

此処で俺たちが止まれば、失敗してしまえば、もうどうすれば良いのか解らない。

だからこそ、命を賭けることだって容易い。

鉄砲玉とは違えど、自分の命すら賭せない人間が、大極な理想を成せるなど出来るわけがない。

もう、治崎の為なら俺は――

「グオオオオオオオーーーーーッッ!!!!」

獣に勝り劣らずの咆哮は、凶暴化した竜のようだ。

大地を轟かせる雄叫びは、全身を痺れさせ、圧倒的な恐怖を植え付ける。

こんなのまるで化物だ。幾ら個性を活性化させるとはいえ、此処までの脅威を発揮させるとなれば大したもので、薬漬けでこうにもなるなど、現実的な思考では考え難いだろう。

「トリガーによる摂取は危険性、中毒性が高いと聞きますが…此処までとは……」

人間という皮を脱ぎ捨て、立派な化物に成り果てた切裂の瞳は、ドス黒くて、怨念が宿っている。誰かを切り裂き、肉を抉る快感を欲するような獰猛な目玉は、見ているだけで背筋がゾクリとする。

「んなろぉ!!負けねえぞォォ!!!」

安無嶺禍武瑠の状態を維持したまま、真正面から突っ走る切島は、とても真っ直ぐだ。小細工が出来ず、単純な事柄に大きく長け得意分野とする彼は、猪突猛進する。

そんな切島に、切裂は野生の肉食動物のように、飛びかかる。

「うおォッ!?!」

「グァアルルルウゥ…!!」

体を片手で抑えつけ、そのまま鋭利な爪を剥き出し、切島に爪の斬撃を食らわす。激しい金属音が鳴りながら、安無嶺禍武瑠の切島に、血を流させた。

「グァアっ…?!」

「切島さん!!」

このままでは野生動物に襲われた一般人のように殺されてしまう。そう見解した彼女は、レーザーブレードを伸ばし、切島に夢中の獰猛化した切裂に刃を振るう。

更に硬質化された鱗の前で、簡単に押し通せるとは微塵にも思っていない。だが、動かずにはいられない。

「秘伝忍法――【ＺＤグラデーション】!!」

鮮やかで、見惚れるような美しき剣捌きは、黄金の軌跡を描き、星型のように残す。ゾディアック聖導会の勲章を映し出したように、綺麗な紋章は、無数の斬撃で鱗を削ぎ落とす。

中には砕け、破片が散らばり、削ぎ落とされていく鱗に、切裂は意識を切島から麗王に変える。

生憎、自我が残ってないからか、それとも意識を保つことに精一杯だからか、冷静な判断は取れていないそうで、簡単に此方に振り向いた。

「グォアアアアアアアアアッ!!!」

猛烈な雄叫びを上げながら、四足歩行で突進し、食らいつくさんとばかり襲ってくる。

「秘伝忍法の効果が辛うじて通じたようで良かったです…ですが、此処からが本番……」

此方に突っかかってくる敵をどうにかせねば、折角注意を向けさせた意味がなくなってしまう。この先をどうするか…凡ゆる攻撃を防ぎ、喰らえば致命傷は免れないであろう、個性が活発した敵をどう対処するかが重要な問題だ。

飛び掛かり、一直線に向かう切裂を前に、麗王は軽くステップでも踏むかのように、最小限の動作で躱す。

(冷静な判断が出来てないのが、トリガーによる代償ですか…)

この世界の殆どは、メリットと同時にデメリットが存在する。

例えば入中常衣の使用したトリガーは、自分の個性を活性化させるものの、活動時間が短いもの、中には粗悪品で良好な物ではないものすら存在している。

今回の切裂竜燐が使用したトリガーは、個性が活発になる分、思考力の低下だ。冷静な判断は愚か、正常な思考さえ利かない。

単純な動きはともかく、でもとてつもなく厄介。コイツをこの場で倒せというのは、中々に無理がある。

「せぁッ!!」

渾身の連撃を何度も叩き込む麗王は、1秒に数回の剣戟を叩きつけるも、歯が立たない。鱗は硬く、まるで鎧を装着した獣のようだ。追

撃を構そうにしろ、反撃してくる竜の右爪に、咄嗟に攻撃の手を止めバク転して避ける。金髪にしなる長髪を掠め、微かに切られた髪は、宙を舞う。
「切島さんの回復には少々時間がかかるはず…後はこのまま私が時間を稼げば…」
そうすれば、まだ打開するチャンスはある。
そう錯覚した麗王は、思わず全身に違和感を覚える。
「痛ッ…!?これは――…」
金箔に輝く粒が、彼女の体に所々付着している。いや…正確には小さな鱗が、麗王の体を突き刺しているのだ。よく見れば、忍装束が血に染まっていく。
「なっ…!!」
バカな――鱗は投げられていないはずだ。
それらしき動作も見当たらなければ、ただ突っ走り食らいつくだけだった…なのにどうして…？一体いつから？
だが、その考えも束の間――麗王は切裂に体を掴まれてしまう。
「ぐッ――?!しまッ…」
「ガァルルルァァァ!!」
大きな体で、両手で麗王を捕まえた切裂は、そのまま体を握り潰そうと、力を込める。ぎゅうううぅと締め付ける嫌な音が鮮明に聞こえ、表情を歪ませる麗王は、歯をくいしばる。
このままでは非常にマズイ…体に付着した鱗が押し込まれるように、血肉の中に入っていく裂傷な痛みを味わう。
「ゴルァァァ!!ガァァァァァ!!!」
このままでは意識ごと持っていかれそうになる。
味わったことのない痛みに、肉が、血が、骨が、体の全てが悲鳴を上げる。
（マズイ…!このま、ま……では……）
思わず、体の筋肉が言うことを聞かなくなる。
このまま…押し潰されてしまう……

――私は……

『ねぇねぇ、お姉様！一緒にお花のかんむりを作りましょ？』
『初めまして麗王様！今日から私がボディーガードとして、一族から派遣された銀嶺です、妹様も、宜しく御願いします！』
『お姉様！大丈夫？立てる？転んじゃったの…？痛い？』
『私は、ずっと麗王様の味方ですから。もし、危険とあれば必ずや貴女様を守ります』
『お姉様！一緒に立派な忍になろうね!!』

『妹のことを思って自分を責められる君は、ヒーローにも負けない、立派な忍だ。もう大丈夫、私がいるよ――』

彼女の脳裏に浮かぶのは、愛おしかった記憶。
一つ一つが、かけがえのないページで、忘れられない思い出。
姉の自分とは違い、何もかもが優秀で才能に満ち溢れた妹。
忍家系にして、代々麗王財閥家を守り続けた一族の末裔である親友の銀嶺。
そして、私と銀と、妹と3人で遊ぶ光景は、とても穏やかで幸せで…何もかもが満ち足りていたあの頃。あのままずっと平穏に暮らせたなら、どれだけ幸せで、どれだけ悲しまなかったか。
――どれだけ、あのままでいて欲しいと切実に願ったことか。

でも、そんな平和は続くはずがない。
平和のない世界など存在しないように、形あるものが必ず壊れるように、人が変わるように、あの日常は簡単に、呆気なく、血みどろにして壊れたのだから。

妹が、私のお父様とお母様を殺さなければ、永遠に幸せな平和が続いていたのに。剰え、銀嶺の父と母にすら手を掛けた彼女は、もう私の妹ではないだろう。

それなのに…もう、大切な妹でも何でもないのに……なんで、こんな時に限って……

走馬灯。

己の死を突き付けられた時に、人は数少ない確率で走馬灯、パノラマ記憶を体験する。

基本的に１７～２１歳未満で起こる現象である。

唐突な死…とまでは行かないが、今見えたと言うことは、無意識に無自覚に、自分の死を直前に認めてしまったのだろう。脳や自分の意識内では違っても、本能が告げてるらしい。

私は…なんの、為に……!!

そうだ、何の為に忍になったんだ。

あの時言ってもらったじゃないか…オールマイトに。自分が殻に閉じこもり、塞ぎ込んで、引きこもりになって、現実から目を背き、心に余裕がなくなった私に、優しくしてくれたじゃないか。

神ノ区の時だって、一体どれ程の苦痛を浴びせられようと、それでも他が為に拳を突き上げて来たじゃないか。

平和の象徴として、立ち続け、勝ち続け、守り続け、皆を笑顔にさせてくれた。

そんなオールマイトがいなくなった、穴を埋める。

心を助けてくれた彼の気持ちにも、あの時の恩を返す為にも、仲間や皆んなの為にも――今此処で負けてはいけないのだ。

「離しやがれえええええええ――!!!」

竜にも負けない、熱のこもった雄叫びが、意識を呼び覚ます。力を入れてた腕が緩んだのか、激痛が軽くなり、切裂は麗王から切島の方角へと意識を向ける。

烈怒頼雄斗の体力が戻ったのか、再び安無嶺禍武瑠の状態に戻し、

猪突猛進の如く突っ込んでいく。
さっきと同じなのに…それでも、切島は諦めない。
足に力を入れると、地面に亀裂が生じる。そのまま踏ん張った脚力を利用し、高く飛びかかる。
硬い拳を握りしめ、そのまま拳を翳して

「何でなんだよぉ!!!」

真っ直ぐそのまま

「そんなに強え個性が、俺よりもずっと強い個性もってんならさぁ!!なんで――」
熱い魂の底から叫びながら
「ヒーローにならなかったんだよ!!!」
拳を突き出し、顔面を殴打する。
硬化したとはいえ、安無嶺禍武瑠という最骨頂の硬化に高めても、皮膚が切られ、肉が露わになり、骨に痛みが伝わる。
ズキズキと血が流れると共に発症する痛みは、何度味わっても慣れないもので、硬化してなお痛みを味わうというのは、大阪での敵対時だけだろう。
もし、切裂竜燐が誰かに声をかけられたら。
もし、治崎ではない誰かが救いの手を差し伸べたら。
もし、ヒーローや周りの人間が彼に気付いてあげたら。
もし、切島のように懐の広い、心が優しい少年だったら。
もし、そんな孤独な彼を別の誰かが理解してくれたら。
凡ゆる〝もしも〟の可能性が湧いてくる。
その〝もしも〟が叶えていれば、彼も八斎會の一員にならずに済んだのに。彼の心だって、存在だって救われたのに。
個性という概念そのものが、超人社会が、彼を苦しめた。
「ガウッ――ハ…!!」
どれだけ皮膚が割れようと、痛みが走ろうと、その拳を止めない限

り、諦めない限り、折れることはない。
強くてカッコよくて、理想とするヒーロー像は、決して折れない人間だ。

切島の拳に応えたのか、彼の漢気溢れる魂の叫びに心が折れたのか、ドス黒くて獰猛化した瞳に、小さな白い光が生じた。
もし、治崎ではなく切島鋭児郎のような人間と出会ってたら、きっと……
掴んでた麗王の手を離してしまい、切島の勢いを乗せた拳が炸裂し、体のバランスが不安定になり、蹌踉めく。
「感謝します――切島さん…いいえ、烈怒頼雄斗!!」

麗王は彼に一目見やり、短く感謝を告げると
秘伝忍法――【ライトニングブレード】!!

光輝くレーザーブレードを強く握り締め、自身の持てる力全てを振り絞るように、巨大な白く光り輝く剣が、振り下ろされた。

１８６話「ルミリオン」

激戦の真中――切島と麗王が、酒木と切裂の二人を相手にしているその頃、率先して先頭を切った通形ミリオは見事に目的地に到着した。

「少し…お話をしても、宜しいでしょうか……？」

いや、正確には〝保護対象のエリを連れた治崎〟に追いついた、と表現するのが妥当だろう。

「君は一体……」

治崎は鬱陶しそうに目を細め、鋭い目付きでルミリオンを睨む。何故、彼が此処へ来れたのだろうか？

「……可笑しいな、そう簡単にここまで通れるような道のりじゃなかったんだが…」

鉄砲玉にヒーローと忍達が動き出してから、故にたったの2分しか時間は経っていない。雑魚とはいえ鉄砲玉は勿論、四天王に本部長の入中もいる。そう簡単に、しかもこんな短時間で此処へやって来るのは不可能だ。

そんな正体不明な輩が、今こうして自分の前に立っている。

この現時点で明らかに可笑しい点しか取り残されていないのは目に見えている。

「だから、近道してきました…!!」

「……はぁ、近道…ね。事情を知った途端にヒーロー面する学生さんが、近道をしてまで今ごろ俺たちに何用だ？まさか、助けに来ましたなんて、ご都合主義な事を抜かすんじゃないだろうな？」

治崎の言葉はとても冷たく、以前に見せたあの温和な顔付きは何処にもない。寧ろただただ冷酷で、化けの皮が剥がれた敵の顔だ。ペストマスクで口元までは見えなくとも、欺き笑う表情が自然と伝わって

くる。
「…ご都合主義、かもしれない…アンタに言われた通り、それは何も言い返せないし、反論する余地もない……けど！それでも俺は助けに来た!!もうこれ以上、彼女が傷付く姿は見たくない!!」
例え見て見ぬ振りをする偽善者だと罵られても、それでも少女の手が届くのなら。彼女を助け出すことが出来るのなら、あの時自分たちが対処出来てたのなら、直ぐにしてやりたい。ずっと心に貯まってた一心だ。
「別に見てはいないだろう、少なくとも…こいつにとってお前はヒーローなんかじゃない、ただの夢見る病人だ」
とてもつまらなさそうに言葉を吐き捨てる治崎は、ミリオを前に背を向ける。
「この際だ、解らないようなら教えてやろう――死ぬって事だよ」

刹那――ミリオの体が不自然な動きをする。
自分の意思に問わず、足を中心に軸を不規則に回り始め、腕や脚の動きが変わる。これは動く…というより、動かされてると断言した方が良いだろう。変な動き…というより、これはまるで〝踊り〟だ。
「ッ――!?!」
不意に自分の意思に無関係で、訳の分からない現象に困惑を隠せないミリオは、立ち止まったまま踊りを強いられてしまう。
(何だこれは?!)
「やっぱBGM付いてた方が格好がつくよなぁ!!」
心に募る不安と未知への恐怖を芽生えさせるミリオの心の叫びを遮断するように、別の何者かの声が轟く。カチッとボタンを押すと、何ともまあ巫山戯たことか、日本舞踏のBGMが愉快に流れ出す。
「おいしょ～のしょっとぉ!!さっ、お前もヒーローやエリちゃんなんか忘れて一緒に踊ろうぜ！俺っちとよぉ！」
ミリオと同じく鏡でも映し出してるかのように、自分と全く同じ動きで踊りを披露するひょっとこ面の男は、愉快そうに笑う。赤い

ひょっとこ面は勿論、水玉模様の白い頭巾で頭を隠し、ペストマスク代わりの面で顔を隠し、江戸時代の衣装に身を包む男の名は――『踊里子号』。戦闘中に踊るという、これだけ聞けば巫山戯てるかもしれないが、これでも死穢八斎會の四天王に選ばれた、元・鉄砲玉だ。あの幹部の中から見事に四天王の地位を獲得したのだ。

「何だ…この個性…┆体が勝手に動いて…!!」

「あぁ～無理無理ッ♪一度俺っちが踊り始めて〝個性〟に掛かっちまったら、踊りを辞めるまでは止まらねぇ～よぉ！つ・ま・り、お前の意思で体を動かすことも、踊りを辞めるのも出来ねーの!!死ぬまで踊り続けて貰うかんな！」

踊里子号――個性『誘う踊り』

自身が踊りながら、対象の人物に個性を発動することで自分と同じ踊りを強いる事が出来る個性。相手の意思問わず、自分が踊りをやめない限りは踊り続ける。

(踊里…┆よりによって厄介なヤツと出逢ってしまった…!!この術に掛かったら俺が抜け出すのは相当困難…┆クソ!!目の前にエリちゃんがいるのに…こんな奴に構ってる暇なんてないのに…┆)

心の中で舌打ちをしながら、憤慨の表情を顔に出す。

やっと治崎に追いついたのに、

エリちゃんを助けに来たのに、

此処まで来たのに、皆んなが託してくれたのに、

――何で此処で立ち止まらなきゃいけないんだ!!

ミリオの心の叫びと同時に、ガチャッ！と銃の引き金の音が鳴る。音に注意が傾いたミリオは、咄嗟に息を吸って個性を発動する。

ダァン！ダァン!!と二発、発砲音が轟く。

しかし放たれた銃弾はミリオの体を透け、そのまま壁に衝突する結果に終わった。

(今度は…何だ!?)

発砲音の鳴り響いた銃声に振り向くと、拳銃を持って銃口を此方へ向けている黒ずくめの男が一人、闇に紛れるように聳え立っていた。

全く気配に気付かなかったものの
「貴様、一体どんな個性だ」
此方が声を出す前に、先に質問を投げられた。
当然答える義務もないし、まして敵に自分の情報を明かすなど愚の骨頂だ。
「俺の個性は『透過』！発動中はあらゆるものをすり抜ける!!!』
そんなミリオは、バカ正直に質問に対して率直にかつ簡潔に述べた。ハッ…！と気付いた時にはもう遅い――「なに…が…？」とポツリ呟くミリオを前に、黒ずくめの男は納得したかのように「成る程…」と頷いた。
自分の意思とは無関係に、何故か質問に対する答えが口から出てきてしまった。其れは決して、口がつい滑ってしまったなんて笑い事や事故では片付けれない現象。其れを引き起こす現象こそ、コイツが原因だろう。
「だから入中を始めた、死穢八斎會の四天王の猛攻にすら掻い潜ったのか。透過なら地下の迷宮は関係ないと…厄介過ぎる個性だ。早急に排除しなければなるまい」
死穢八斎會・懐刀――音本真
個性『真実吐き』
問いかけられた場合、相手は強制的に本心を語らせる事が出来る。時に本人すら気付かない弱味を個性で真実を引き出すことも可能。
この個性の活躍で、敵連合の四人の個性や詳細を知る事が出来たのだ。ある種、尤も厄介にして敵に回すとかなり厄介だろう。懐刀とはいえ、前線を張って戦える身ではないのも裏付けているが…
「人に真実を語らせる個性…！昔は詐欺師をやってたそうだね……そんな君が前線に立つなんて…タイプじゃ…ないよね…！」
「舞踏しながら話しても格好や説得力が付かないぞ？止まってから話してはどうだ？まぁ…踊里の術に掛かった時点で、体は止まらないがな」
「よっしゃあぁぁぁーーー!!そのまま疲労困憊で死に晒せぇ!!もっとハードにいっちょやっかぁ!!」

踊りながらでは冷静に分析するミリオを鼻で笑う音本に、更に踊りのペースを早め、動きを早くする踊里。日本の和を主張したＢＧＭと、今の現段階による状況で完璧に空気に合わないのが、この空間そのものが歪んでると言えよう。少なくとも、巫山戯をしている暇すら腹立たしいのに、こんな奴らに邪魔され、折角追いついたエリと治崎が離れてゆく姿はとても堪え難いものだ。
「故に――私は他の使い捨ての駒共とは違い、四天王と同じく若の野望に寄り添う道を許された!!」
そのまま銃口をを向けたまま、引き金を引き発砲音を鳴り散らかす。ダァンダァン!と、鼓膜がつんざく音が反響しながらも、ミリオは透過を辞めない。
「して…お前の個性は無限に続くのか?後はどのくらいだ?そう長くは続かないだろう?」
「個性の発動中は酸素を取り組めないし、凡ゆるものが体を避けてる訳だから、時間は有限で最小限に限られている。……っ?!」
又もや、強制的に喋られた。
どうやら口を噤んでても、音本の個性の能力上それは不可能らしい。どちらかと言うと詐欺や罪を犯す敵より、警察向きの尋問に向いてるのだろうが、個性を武器としずに尊重する以上は難しいだろう…
それにしても質問をされた以上、必ず喋らせる個性とは、なんたる脅威な事だろう。隠してた情報、弱味を簡単に引き出されてしまうというのは、精神的に来るものだ。
「ふむふむ…大方、お前の体力によるタイムリミットが来てしまえば、強制的に解除される身だと。
踊里が個性を発動してる中、激しい動きで体力に酸素は激しく消費されるだろう。となれば、お前の活動限界はもう目に見えてる…そうだろう?」
「ッ…!そう…だ!」
答えたくなくても、答えてしまう。
「ふむ、となれば君はこうしてエリさんの奪還に赴いたつもりが、彼女にトラウマを植え付ける事になるのだな。折角自分を助けに来た

ヒーローが、殺されてしまった、では…エリさんも報われまい……」
「な…にが…!!」
ペストマスクで顔は隠されてはいるが、声色としては嘲笑的になっているのが、肌で感じ取れる。我慢の限界に達したミリオは、激しい感情に見舞われ、声を荒げる。
「何がトラウマだ!!あの子が苦しんでるのも、あの子が恐怖を感じて報われないのも、全部全部お前たちのせいじゃないか!!!それに野望だって…?実の娘を利用して、何が野望だ!!」
「……は?〝娘〟…?――――ああ、そうか…成る程…ふむ」
ミリオの爆発した荒々しい口調に、物怖じせず音本は何故か首を傾げ、肩を竦める。まるで「は?お前何言ってんの?」と、小馬鹿にするように。
妙に娘というワードに対して疑問に感じた音本は、頭の回転が早いのか、直ぐに理解したようだ。
「君がこうして、危険を犯してまで此方へ出向いたと言うことは、少なくともエリさんに負い目を感じてる…そうなんだろう?物事を円滑に進むべく、あの子を見捨てた…違うか?」
「そうだ――」
音本の一つ一つの、心を抉る質問が、ミリオを苦しめる。まるで言霊の弾丸が、ミリオの心を撃ち抜くよう確実に。
「邪魔な物は不要だ。君はそうやって、不都合なことは全て切り捨てて来た。だからこそエリさんと遭遇しても、君は見過ごすことを決めたのだろう?そう言った人間は、情を捨てなければ成し遂げれない行動だ…」
否定は出来ない。
言ってることは、価値観や考え方次第では間違ってはいないのだ。だからこそ、拒む事が出来ないからこそ、逃げられない選択肢に精神が鑢のように擦り削られるのだ。
「それを踏まえ…我々の前に姿を現して、ヒーロー?助けに来た?はぁ??小さなごっこ遊びも此処まで来ると甚だしい!此方こそ、我々の野望を何だと思っている!!」

音本の声はイヤに大きく、荒ぶっていた。銃を乱射させ、一発当たらないのも含め、何よりもこんなヤツに自分達の計画を邪魔されたのかと思うと、腸が煮え滾る。
「そんな程度の低い覚悟で、夢を見ているとは…幸せボケしてる人間も、此処まで来ると哀れ！ヒーローなどと妄想に浸れるのがどれだけ憐れなのか!!何も知らないガキが、一丁前に説教垂れなど、笑止!!!」
其方のお遊びに付き合ってる暇など無いと言わんばかりに、罵詈雑言のマシンガントークは止まらない。此処まで激情する音本は珍しいが、それほど治崎に心酔してる証拠だろう。

「エリさんを蓑にして、自分が楽になりたいだけの臆病者が、ヒーローとして、いいや…人として必要されるのか？」

体は踊里が既に揺さぶっている、ならば後は簡単。
心は脳と同じ、少し揺らすだけで――人は簡単に止まってしまうのだから。
「見よ、踊里…！行ってしまう、若が行ってしまう！私は若の野望に、若に必要とされているのだ!!」
心酔というよりも、これもまた一種の洗脳に近いものにも感じ取れる。単なる信頼とか、主従関係とか、些細な事柄では無いのだろう。
「ついて行かねばなるまい！共に歩み、成就の喜びを分かち合うのだ!!我々が、八斎會の選ばれし者共にその義務がある!!さァ！さァ!!さァさァさァ!!!!」

「「逝けよ――邪魔者!!!!」」
音本の銃弾に、踊里は日本舞踏を巧みに使った誘う踊りを披露しながら、包丁を投げる。隠し包丁と言うのだろう、服に隠してあった包丁を数本投げつけ、銃弾に当たらないよう的確に狙いを定める。
「踊里…お前の個性には弱点がある――」
だが、ミリオはまだ止まっていない。
物理的な意味ではない、心はまだ折れていないし、止まってもいな

い。ミリオは思いっきし一呼吸、息を大きく吸って酸素を取り込むと、個性を発動し、床に落ちる。
「ぬっ…?!」
予想外な発言は勿論、床に溺れて行くかのように落下していくミリオに、初めて驚愕の声色を浮かべる踊里。
（お前の個性は確かに厄介…だが！発動するには条件があるように、この踊りの個性を解除するにも方法はある――お前は、自分が見た対象…または、相手からお前が見える場合、踊りの効果が発動する。早い話、片方のいずれかでも、お前が個性の発動条件を満たしていれば強制的に踊らされる、そうだろ？）
踊里の個性は誘う踊り。
だがそれは付与効果ではなく、強制的に踊らせる個性で、相手が自分の踊りを見たのと、自分が相手の踊りを見た、そのどちらかでも条件を満たしていれば、簡単に術にハマってしまう。普通ならその状況を打破することは不可能に近い、困難を極めるだろう。
しかし、ミリオは不可能を可能にする事ができる。それが、透過による個性だ。透過は発動中、凡ゆるものがすり抜け、聴覚や視覚、呼吸さえもすり抜けるという危険が伴うものの、それはつまり…踊里の存在そのものも透けて見えない事になる。
当然、踊里からも地面に透過して消えたミリオを見ることはどう足掻いても不可能だし、そうなれば…踊里の個性は強制的に解除されざるを得なくなってしまう。
「【ファントム・メナス】!!」
これぞミリオの必殺技。
壁、天井、床、凡ゆる四方八方の死角を突いて、防御不可能な点を攻めていく。ミリオは当然目を瞑っているので、踊里が踊っていようと、一度個性を看破すればどうってことはない。
予測不可能、目にも留まらぬ打撃の猛攻に、音本は拳銃を握ってた手、後頭部、溝、膝を――踊里は前頭部、背中、腹部、肩、脚、首を

打たれ、痛覚に神経が悲鳴をあげる。
「そうだ…俺…いや、俺たちはあの子に悍ましい業を背負わされていると知った！あの子にとって残酷な言動を見せてしまった！」
思い出すだけで腹が立つ。
『気付かなかったかい、殺意を見せつけてあの子を釣り寄せた』
あんな小さな子が、自分よりも俺たちが傷付くのを防ぐため、自ら助けの手を放棄して…地獄へ戻ることを選んだんだ!!あんなにも優しい子が――…!!
通形ミリオは、弱いことを受け入れてきた男だった。個性が元々弱小類だったからかもしれないし、皆から笑われてきたからかもしれない。しかし、自分の弱さを受け入れてきたからこそ、励む事ができたのだ。
心も同様、彼にとって弱味とは隠すものではなかった。
「ば…かな!?俺の踊りでスタミナは消耗したってのに…こいつ、何で動けるんだよクソッタレぇ!!」
「ヒーローになる為に、この個性と一緒に皆んなが笑える未来に向かって、ずっとずっと頑張ってきたんだ！いつも体がもたない位の鍛錬を重ね通してきたから…!!」
踊里の個性は確かに、相手の動きを封じるだけでなく、スタミナ…疲労を出すための、厄介な個性だ。一見ふざけてるように見える個性でも、此処まで来ると悍ましさも感じる。
だけど、ヒーロー訓練では体力の消耗が激しいのなんて慣れっこだ。いつも、体力が底をつくのなんて当たり前…でも、そんなヒーローだからこそ、乗り越える事が出来るのだ。
――弱さは前提！俺はもう揺れない!!
「あの子が笑えない未来なんて…そんなの絶対許せない!!!!!」
さぁ、最後の仕上げだ。
ミリオは全身全霊を以って、二人の敵に止まらぬ猛撃を繰り返す。体の全身による骨にヒビが入ったのではと錯覚するような、何が起きて、何をされて、どう攻撃を封じれば良いのか、どう防げば良いのか。

何の打開策もなく、手も足も出ずに、そのままなす術なく敵はやられるだけだ。

「治崎!!」

距離はそこまで遠くはない、掛け声と共に治崎が振り返るも…

「…?」

誰もいない。

いや、いるとすれば…薄っすらと見えるのは倒れ伏せた踊里と音本の二人組だけだろう。肝心の通形ミリオが見えないことに、小首を傾げるも、突如として気配が背後に回る。

「ッ…!!」

咄嗟の判断で気付いた治崎は、ミリオのフルスイングな腕を見事に回避したものの…拳が微かに頬を掠め、僅かな痛みが傷口に残る。

また足を透過することで、序でに足蹴りでエリの体を透き通し、クロノの顔面で足の甲の透過を解除し、クロノだけ顔面に蹴りを入れることに成功。

個性の繊細なコントロールによる神捌きは、常に個性を把握してるミリオでないと成し得ない所業だろう。

「ッた…?!」

強烈な足蹴りが顔面にクリーンヒットし、そのまま抱きかかえてたエリを離してしまうクロノ。それを何とかキャッチして奪還することに成功したミリオは、守るように、大事そうにエリの体を包み込む。

「…な、んで…来ちゃったの…?だめ、だよ!!あの人に殺されちゃうよ!!」

震える声を、精一杯振り絞り、自分よりミリオのことを最優先に心配するエリに、ミリオは力強く「大丈夫…!」と答えた。

「もう決して君を見放したりしない…見過ごしたりしない…!!君を悲しませたりしない!!!

俺が君のヒーローになるから!!」

力強い信念は、誰よりも真っ直ぐで——心優しいミリオの声が、エ

リの心を和らいでくれる。

「……汚いな…お前…」

殴られた頬を、拭う素ぶりを見せる治崎は、ただただ此方を強く見つめるミリオを、睨み返して…

１８７話「連合暗躍」

「汚いな…お前」
　ポツリと呟かれた言葉は、殺意と憤慨が冷徹に込められていた。一般人が聞けば寒気がするような、エリちゃんに至っては脳髄に百足が這いずるような不快な感覚が堪らなく働いているだろう。今でも抱きかかえてる幼女の震えは止まらない。
「戻って来い壊理、殺されちゃう？この期に及んで何を言い出す？何度言ったら分かるんだ…これだから物分りの悪いオマエは…手が焼ける…」
　ミリオの拳を掠っただけで、頬に蕁麻疹がブツブツと膨れ上がる。汚らわしい…と言わんばかりにゴシゴシと服の袖で拭い落とそうとする治崎の潔癖症は、ペスト医師と呼ぶに相応しいものである。
「オマエは人を壊す、そうやって生まれたんだ」
　壊理と関わった人間は限りなく死ぬ。
　それが親だろうとヒーローだろうと構成員だろうと、関係なく。
　助かる人間など存在はしないし、例外もない。
　それは、彼女自身が身を以て知っている。
「だ、ダメ…！やっぱり…逃げて…！」
「大丈夫――聞かなくて良い!!」
　大きな、覆しようのない絶望を体験している壊理は、ミリオに逃げるよう促すものの、ミリオは力強く、温かい言葉で掻き消すものの、効果は無いと言うに等しいだろう。
「いつも言ってるだろう？解らんのか？お前の我儘で、俺が手を汚さなくちゃいけないんだよ…
　――お前の行動一つ一つが人を殺す、そうやって生まれた…呪われた存在なんだよ」
　どう足掻いても覆せない、しようがない現実が、彼女の心臓を射る

ように突き立てる。

「どうして自分の娘にそんな酷い事が言えるんだお前は!!!」

黙って聞いてれば。

実の娘を脅し、黙らせ、恐怖を、絶望を与える治崎に、ミリオの怒りが爆発した。我慢の限界を迎えた青年は、荒ぶる感情を昂らせ、抑えてた理性を一瞬だけ解き放した。

だが当の治崎は訝しげに眉をひそめるばかりか、小首を傾げて

「…?ああ、そうか。そうだったな、そう言う話だったな――一つ、訂正しておこう」

全ての事情を知ると

「――俺に子などいない」

真実を告げると共に、手を地面に触れ、一瞬でコンクリートの地面が広範囲に分解した。

「ああ、ありました」

一方、各地でヒーローと忍側と、死穢八斎會が激戦を交わしてる中、一通り沈静化し目立つことなく忍、ヒーロー、警察から逃げ延びた敵連合は取り上げられた連絡手段の端末を、保管された部屋から取り戻す。

治崎達に軟禁されて、外の連絡手段が出来ないままずっと地下で暮らしていたので、出向組として戦場に赴いた四人は取り返す時間すら無かったのだ。(ヒーロー達が乗り込んだと言う緊急事態が発生した為、イヤでも取り戻せなかった)

「よっしゃあ!これで漸くゴミみてぇな吐き溜めた蟻の巣から脱出出

来るな！シャバな空気を腹一杯になって吸ってみてぇぜ!!」
「囚人かよお前は、ったく」
悪ノリではっちゃけたトゥワイスのテンションに、ツッコミを入れる龍姫は苦笑を浮かべている。
八斎會やらで何やかんやあったものの、四人の距離がこうして近づき、親近感がより湧いたのは、言わなくても感じ取れるだろう。
「まっ、もう此処には用はねんじゃねーか？って事でどうする？此処で皆んなでオフパコでもする？」
「でもでもさ、治崎が連れてた小さい女の子も気にならない？僕はまだまだ仕返して滅茶苦茶にしてやりたい気が収まらないんだけど…斬り刻まなきゃ気が済まない…的な？」
「ひゃっはぁ！無視かよ鎌倉ちゃんマジ悪魔！」
「でもまだ拭いきれない点は幾つかありますよねぇ…緑谷くんのボロボロな姿をもっと見てみたいってのもありますけど…

今はそれ以上にオーバーホールくんに吠え面かかせてやりたいんですよね」
惚けた顔とは裏腹に、残酷で澱んだドス黒い感情が顔に現れる。これが、彼女の本来の素顔なのか、はたまた連続失血殺人鬼の顔なのか、只ならぬ怒りが彼女を染め上げたのかは解らない。
「…ん？アレ…連絡一件、４分前から入ってる」
ふと、そんな殺意の孕んだ空気の中、鎌倉の一言で全員が彼女に意識を向ける。
「４分前って、俺たちがこの部屋に入る２分前だよな？誰だよ、死柄木か黒霧か？」
「ううん、漆月ちゃんから…」
「何でしょうかね？」
「取り敢えず出るね？」
不在着信として一件残っているのを、端末で軽くタッチして連絡を繋げる。生憎、ここの部屋は地上に近い上に、何故か電波が繋がっている。恐らくこの地下迷宮の中、治崎が構成員を集める為に、そうい

う構造にしたのだろう。そうなれば、自分達の連絡手段を封じるべく、四人全員の端末道具を取り上げたのも頷ける。
トゥルルル！という電話の着信音のコールが一回なると、直ぐに向こうから電話が繋がった。
「もしもし、鎌倉だけど…漆月ちゃん？」
『おー、見込んだ時間にやって来た。勿論私の声に決まってるけど、久し振り過ぎて忘れちゃった??』
そういうつもりではないのだが、と心の中で講義をしながら、「えっと…どうしたの？」と答える。
ぶっちゃけた話、鎌倉はこのタイミングで彼女が掛けてくるとは予想外だったのか、少々困惑した声色を浮かべている。
『いやーあのさ、突然で悪いんだけどちょっと頼みがあってさぁ～…』
「頼み事？あっ、僕達の方もちょっと気になる話があるんだけど…」
『は？あのさ、そういうの後にしてくんない？こっちだって京都にやって来たのに何が悲しくて雑魚の拷問してると思ってんの』
「え…？」
拷問？
いやいや、一体何をしてるのさ？と返事をする前に耳を澄ませば、グツグツと何かを煮る泡立つ音と、男性の呻き声が僅かに聞こえる。
鎌倉が返事をする前に、電話越しの向こうで漆月が口を開く。
『んっとね、頼み事って言っても大した問題じゃないんだけど、八斎會の組長っているでしょ？あの寝たきりの』
「え、あ…うん。アレ？でもどうし――『だから八斎會の雑魚に聞いたんだってば』……」
――てそれを知ってるの？と聞く前に、漆月は鎌倉の言葉を問答無用で遮っていく。
『連絡出来てるって事は、アンタ達もどーせ八斎會の連中を上手く出し抜いたんでしょ？だったら尚良しってことで…
そこでアンタ達四人の考えは、治崎に吠え面かかせてやろうって作戦を企ててるんでしょ!?』
「「「「!?!!」」」」

今度こそ、この場の全員が喉を詰まらせる。近くで聞いてた三人も、漆月の声はきちんと聞こえてるし、スピーカー機能で内容を聞くのだって、なんて事は無いのだ。
しかし何よりも驚きなのが…ついさっきまで自分達がどうやって治崎に吠え面をかかせてやろうかと考えていた真中、況してや彼女はこの場にもいないというのに、どうして四人の考えが分かるのだろうか？
『分かる分かる～…解るよ？気に入らないものは壊したい主義の弔と同じように、やっぱりそう言った上から見下ろす連中を絶望に引きずり落としたいよねぇ…そんな貴方達の為を思っての頼みなんだけど。
そこでトゥワイスは「どうしてオメェ俺たちの考えが分かるんだよ！エスパーかよスゲェーな！大した事ないね！」って言う!!』
「ふぁっ!!?!!」
「何驚い…お前今マジで言おうとしたのか!?!」
自分が言おうとするよりも、先に台詞を取られたトゥワイスは、目を見開いて素っ頓狂な声を叫んでしまう。この反応を見る限り、図星らしい。
「漆月ちゃん漆月ちゃん、トガ達も可能であればその願いを叶えてあげたいんですけど…その寝たきりの組長さんが何処にいるのか、分からないんですよね」
『ん？』
「悪いな、恥ずかしい話だけどよ…ウチら連絡手段は勿論、地下室に軟禁されててあんま情報とか絞り出せてねーんだよ…」
『あっ、いや…知ってるよ？』
「は？」
知っている？何故、彼女がそれを知っているのだ？
『いや、だってアイツらゴクドーがウチらの仲間を殺しておいて、無警戒なままオマエらを野放しにする訳ないじゃん？
うん？幾ら弱小雑魚どもの組でも、今でもこうして解体されずに生きてんだから、同じ敵の存在だったとしても心を開くなんて、逆に想像できないでしょ？』

「いや、ちょっと考えれば解るかもしんねーけど…」
『そーこーで！軟禁されてた可愛い仲間達の為に、私も一肌脱いであげるって訳よ。
　んーっとね、八斎會の組長の部屋の地図は写真で送るから、通話切ったらＬＩ○Ｅの個チャで送るから、確認よろ』
「う、うん……あ、あのさ！通話切る前にちょっと聞いてもいい？」
『むにゃ？』
　通信を切ろうとする雰囲気を感じた鎌倉は、ちょっと焦り気味に彼女を引き止めるものの、何とか話を閉ざさず会話を続ける事に成功した。その事に胸を撫で下ろしながらも、他の三人はずずいと端末に近寄る。
「ちょっとどころか俺はメッチャくちゃ聞きまくりてーけどな！何ならスリーサイズもｙｏ!!」
「写真の件と言い、ウチらの事といい、どうしてお前が詳しく知ってんだよ？」
「ちょっと監視されてるのかなって不安になったので、トガも一応聞きたいです。そもそも組長をどうするつもりなのですか？それ、まだ聞いてなかったです」
　流石に電話の要件で組長だの地図だの、頭が追いつかない言葉をマシンガンでぶっ放されれば誰だって驚くだろうし、疑問しか残らない。
『あー、他の二人の意見はともかく、トガの質問はちゃんと答えなくちゃね～…拉致して欲しいの』
「拉致…？」
『そそ！一応さ、ちょっとある事思い付いたし、色々と試したい事があるのよね～…
　って、か…！勘違いしないでよね！／／／べ、別にあんな植物状態のご老人なんて…す、好きじゃないんだから／／／ふ、ふん！／／／』
　何故ここでツンデレというものが発生したのか、理解出来ないが、取り敢えず彼女的に何か組長に要件があるのだろう。どんな理由から知らないものの、彼女の頼み事とあれば特に拘る理由は無い。

『組長の事に関してはね～、調べてる時に前々から気になってたんだよねぇ～♪だってだってぇ、治崎くんって…横暴というかぁ、ちょっと身の程知らず？というかぁ、一番目立ってるじゃない？

オマケに弔きゅんに聞いた話だと、組長は一回も見てないとかぁ、全部計画や指示は自分で企ててるって感じだったしぃ？組長が全く動かないのも可笑しいな～って思ったんです～♪

そこで、不満と不安と疑問と謎が残ってる八斎會を、あ～～んなことや、こ～～んな事まで調べまくったのら～♡』

今度は憎たらしくも可愛らしいメロメロボイスだ。彼女が何を考えてるか解らないが、此処に荼毘がいるなら「気持ち悪いのとクソうぜぇから辞めろ」と罵詈雑言を吐き散らかしそうだ。

『って、八斎會の会なのに会長じゃなくて組長とか阿保丸出しだなぁオイ!!!!!つー訳だから宜しくな！

それと治崎や他の奴らにちょっかい掛けてぇ気持ちはわからねぇでもねーけどよ、先に寝たきりの老いぼれジジイを優先しろよ。黒柴と護衛の憑黄泉が今も向かってっからよ！あっはははは!!』

「黒柴？」

次にドスの利いた荒ぶる口調に変貌し、何の予兆もなく突拍子に声色が変わっていくのを他所に、聞き覚えのない名前が飛んできた。

黒柴…？聞いたこともない、初めて耳にする名だ。

『あーそっか、忘れてた。八斎會のトラブルだのいざこざで紹介できないままだったね。でも荼毘とスピナー、弔はちゃんと知ってるから、自己紹介はまた後ほどって事で』

丁度戦力集めに専念してた敵連合は、トゥワイスと龍姫がオーバーホールを連れて来てしまった為、組織同士が敵対関係を生んでしまったのが原因だ。

その殺伐とした空気の中で、漆月が初めて自分で仲間を得たのは大きいし、戦力や経歴も申し分ないものなので、死柄木からすれば朗報な上に、不機嫌な感情は和らいだそうだ。

見た目は兎も角、護衛の憑黄泉が付いてるのなら、一目で見て直ぐに分かるだろうし、思ったよりもかなり気が効いている。

いや…もしかしたら護衛というよりも、敵連合のマーキングとして意味を成り立つ為に、憑黄泉を同行させてるのかもしれない。その可能性も捨てきれないだろう。
「あ、うん…分かったよ。あっ！言い忘れてたんだけどさ、さっきの気になる話があってさ…」
『うん？あー言ってたね、どったの？』
「八斎會邸の地下室で、小さな女の子を見たんだよね。この前言ってた治崎の計画…の核の子だと思う…
最近巷で噂の個性と忍術が消える事件って出てたじゃない？あの子の細胞から摂取して、血清と完成品の薬を作ったとかどうとか」
『へぇ～…細胞の摂取、薬、ねぇ…さっすがはヤクザ。人体実験なんて非常識かつ非人道的なことを平然とやってのけれるなんて、ソッコーに痺れる憧れるゥ!!
――んで？よーはその核の子を取りに行くってこと？良いんじゃない？流石にその子供だの核だのまでは情報が不足というか、多分出してないね戸籍や個性登録。だからこちとらもお手上げなんだよねぇ～…〝薬〟は持ってるけど』
「えっ!?持ってるの?!」
『うっせぇなオイ!!』
鎌倉の驚嘆な叫びに、ブチギレられた漆月につい恐縮気味になってしまう。
『あー、一応前に荼毘との待ち合わせの時に敵の商売やり取りあって、上手い具合に双方ぶっ殺して売買してたのを取ってさ。最近噂になってる薬とほぼ一致してるものが出回ってて…ただ、完成品と血清ってのはよー分からんちんだし、そんな大事なもんを大量生産してはないと思うから、私の持ってるもんとは別モンの可能性大だとわたしゃ思うんですよ』
漆月の知ってるのはあくまで能力を消す弾丸の事だけだ。しかも完全に消える訳ではなく、最低でも一日、最高で二、三日間の個性の抹消状態の時間が続くというだけで、完成品と血清は鎌倉と連絡するまで知らなかったのだ。

大方どうしてそんな中途半端なものを売ってるんだという疑問には至り、サンプル品なのだろうという目星は付いてたのだが、完成品と血清が既に完成してたとは。
『そいじゃ、長話してると警察やヒーローとか忍とか？追ってくるだろうし時間も時間だから、何か分からないことあったら相談しに来な？まっ、忍やヒーローはさておき、警察なんて引き立て役に負ける絵面なんて想像できねーけど。それはそれで絶望的だよね』
プツ！と無造作に向こうが連絡を切り、四人はお互い顔を見合わせる。
「どーする？先に爺さんの方にしとくか？」
「にしても漆月のやつ、えらく頭がキレるよな。そんなタイプだったか？それも記憶ってのが関係してんのか」
「何がともあれ、私たちに出来ることはしましょ？直接オーバーホール君達に手を下せないのは癪ですけど…漆月ちゃんがそう言うのであれば、従いましょう？」
「あっ、ＬＩ〇Ｅから通知きた。えっと……ふひゃ…！／／／」
通知にタップして漆月の個人チャットルームに入ると、宣告通り一つの写真が送られてきた。写真に写っていたのはコンクリートの壁に、真っ赤な鮮血で彩られた八斎會邸、組長へのルートだった。
赤い鮮血につい、頬が赤くなってしまうトガと鎌倉とは反面に、龍姫とトゥワイスは血の気が引いていく感覚がした。

「ふっふふっふふ～～ん♪」
一方で連絡を終えた漆月は、無造作に端末を台の上に置き、そのままグツグツと泡立ち煮えたぎる鍋を、おたまでかき混ぜていく。
彼女が何をしているのか…など、一目で見れば分かること。ピンク色の可愛らしいエプロンを着こなしたまま、透き通る水色の長髪を一つのヘアゴムで束ねてポニーテールの髪型に変えており、微笑みながら料理を愉しんでいるようだ。

「んふ♪ふふふ～～ん、ふんふふっふ～ん♪♡」
端から見れば、案外可愛らしくも見えるだろうが、彼女のバックグラウンドに映る光景を見れば、それが歪だと見解するのに時間は掛からない。
「ん～…!!んんん～～～っ!!」
壁になぞられた滴る血の回路図と、八斎會の構成員の一人。治崎に渡されたペストマスクは既に取り奪われており、口は真っ白なタオルで縛られて封じられている。
服はともかく、首と胸元辺りに赤ん坊のよだれかけを掛けられており、真っ赤なマジックで「赤ちゃんで～す♡」と彼女が執筆した文字が鮮明に写し出されている。
腕には無数にナイフで傷つけられた痕があるだけでなく、左の片目の方はくり抜かれた痕があり、血が流れて止まらない。
彼女が鎌倉に言った通り、確かにこれは拷問だろう。
「ふふ～ん♪ジャジャーン！か～んせ～～い♪」
漸く出来たのだろうか、アツアツの鍋を混ぜ終えると、歓喜な声を明るく上げる彼女は、大変満足そうだ。
鍋を覗けば、其処には真っ白でホカホカな水気を含んだ米が湯気を立てている。
雑炊…ではなく、所謂お粥というやつだろう。料理の手順もとても簡単で、病人にとっても食べれる優しい料理だ。
「ねー、憑黄泉。この鍋持ってて」
彼女はふと忌々しい名前を呼ぶと、真っ暗な暗闇の中から二足歩行の人型をした憑黄泉が「ガァ…！」と声を上げて駆け寄って来る。赤い羽毛を全身で覆われて、背中には雅緋の武器に似せた七支刀を納刀しており、鳥類特徴の鴉の翼が広がっている。
そんな忍の天敵とも呼べる憑黄泉は、漆月の言葉通りの指示に従い、高熱度の鍋を素手で手に持つ。
それを金属製のスプーンで軽く掬って、彼女は自分の口元に運び一口。
「はむっ♪んん…うんうん、美味しいけどやっぱ塩味が足りねーな」

彼女の手作り料理を前に、名も知らぬ構成員の一人は涙と血を流しながら、震えが止まらない。
漆月は台所に向かって調味料を探していき、頑なにに口を封じられた構成員に語りかける。
「お粥とかうどんって、病人には優しい料理だと思うのよね～、オマケにチョーゼツ面倒くさがりな私でも難なく料理できる簡単な手軽さ、流石だねぇ♪アンタもそー思わない？」
あったあった、と塩を手に持つ彼女は、鍋に振りかけながら男に問うても返事はない。それくらい、彼女でも分かっている。
「寝たきり組長のこと教えてくれたから、アンタだけは特別に許して解放してあげるよ！お礼に私の愛情たっぷりな料理を…たぁ～んとお食べ♡」
塩をかけ終え、そのままスプーンでゆっくりと掬って男に近づかせる。彼女の一つ一つの歪で異常で、理解不可能な理不尽すぎる行動に、構成員は目を力強く見開きながら全力で首を左右に激しく振る。
「ほらほら、遠慮しないでって！アンタらにとって拷問だの何だの、日常茶飯事で問題ないんでしょ？いや、寧ろ私の方なんて生易しいくらい？
でもさ、拷問ってば凄いよね。人を苦しめるために色々な器具を駆使するんだからさッ。その中でも私が思うに、尤も怖い凶器って身近にある物だと思うの。さっきのこのスプーンだって、目ん玉くり抜いた時、それはもう想像を絶する恐怖と絶望に支配されて、ねぇ??」
何が生易しいものか。
いやそもそも…拷問が生温く生易しいのなら、拷問なんて呼ばないだろう。そんな事、彼女でも充分に承知のくせに、無駄な謙遜を使って人の神経を逆撫でしていく。
況してや身近な器具や道具で、拷問用具にするというのは、何とも皮肉が効いてる事だろう…どれだけ豪華な道具を揃えるかより、日常品として使われてるものの方が、恐怖と絶望…その分トラウマを植え付けやすいからだ。
「だーかーら！そんな痛みと拷問に耐え抜いた僕ちゃんに、ご褒美し

てあげるってこと♪はい、あ～～ん♡」
湯気と塩味の効いたお粥のスプーンを、そのまま口の方ではなく…くり抜かれた目ん玉をクリップで無理やり開けられた状態で、運んでいく。
「んんんっ!!!んーーーーっ!!!!!んんんんんんんん!!!!」
止まらない。
止まらない。
止まらない。
自然と激しい絶叫をタオル越しで叫びながら、大粒の涙を滝のように流していく。
もう、彼女が何をしやらかすのか解っているから、だからこそ何をされるのか分かってしまうから、余計に恐怖が襲い掛かってくる。
「まだいっぱいあるからね～…あーーん♡」
「んんんんんっ!!!!んんんんんーーーーー!!!!!!!」
ぐちゃり。
嫌な音が小さく聞こえたと同時に、蹌き呻き苦しむ絶叫が、ただただ暗闇に包まれて行った。

１８８話「通形ミリオ」

治崎の手に触れられたコンクリートの地面は、瞬く間に崩壊を始める。砂の粒状へと繊細に割られ、分解されて行く景色は、何と言う幻想的な光景だろう。

そう端から見れば息を飲み、喉を詰まらせるような、芸術に似た何か。死柄木の崩壊に似た個性ではあるが、実際は少し違う。

一瞬で分解されたコンクリートの地面は、凡ゆる茨のように、無数の棘状へと修復され、矛先をミリオに向ける。

長年の個性による鍛錬と修行、サー・ナイトアイの指導もあってか、熟練された動きでミリオは透過を発動し、上手く致命傷を避ける。これだけなら簡単だ。

だがしかし、此方には安全に且つ無事に保護すべき対象の幼女、エリを抱きかかえている現状は、かなりの難易度を高めている。彼女を巻き込まない為にも、出来るだけ被害を受けさせないようにしなければならない。

「お前…この子ごと!!!」

「すり抜ける個性は自分のみ適用か…お前の個性は厄介だが…人質には弱い」

怒号を孕ませたミリオの声色にピクリとも動じず怖気ず、淡々と相手の実力を解析する治崎は、修復序でにミリオが通っていた道を壁で封じた。

通形ミリオの個性は無敵ではあるが、決して万能ではない。すり抜けの個性はあくまで自分のみ適用し、触れているエリや他の人間、物は適用されないのだ。

だからこそ、一方間違えれば保護すべき人質を死なせてしまう危険性は極めて高いのである。

「これで壁も作った、かなり分厚い壁だ。もうお前は来た道を帰れないし、俺からは逃げられない。

――ああ、それとコイツを修復できるのは俺しかいない。万が一にでも傷つけて見ろ？救うべき正義のヒーローの名が泣くぞ？」
「ッ…!!」
「それに…だ。心配しなくとも俺は相手を分解した後に直ぐ修復さえすれば、元通りになる。その分、絶え間ない苦痛を味わうことになるが…エリはよく身を以て知っている。何十回死んだと思う？」
「こ……いつ……!!!」
「理解できるか？ソイツの苦しみを、人殺しのそいつの痛みも苦しみも絶望も、理解できるか？見捨てたヒーローさんがよ」
「……ッッ!!!!」
治崎の挑発紛いな発言に、段々と表情は強張り、憤りが昂ぶって行く。
解っている…本当は、治崎は態と相手を煽って冷静さを欠かせようとしているのも、それで自分に致命的な重傷を喰らわせようとしているのも。
ミリオは常に冷静な判断に伴い先を見据えて行動を取っている。そこを突くというのは、治崎も出来る人間だ。個性にかまけた三下ではない。
「クロノ」
「ええ、分かってやす」
ムクりと上半身を起き上がらせ、蹴られた顔面に手を当ててるクロノは、懐から銃を取り出し、引き金を引く。
「コイツを打ち込まれりゃ、おじゃんですぜ」
クロノの発言からして、恐らく異能破壊弾が詰め込まれてるのだろうう。
クロノは死穢八斎會の若頭補佐の立場だ、治崎が尤も信頼を寄せてる一人でもある。何より個性が厄介なので、願わくば早急にカタを付きたい。
「壊理を抱えてる腕を狙え間抜け」
「間抜けて…あんな精密な個性の使い方されるとは思ってもいませんよ…」

治崎の余計な一言に、クロノは苦笑紛いな声色で――
「まっ…相当、鍛えてきたんでしょうね」
――標準を定め、二回発砲する。
サンプル品とはいえ、一時的にも個性や忍術と言った異能を消すのであれば消費は避けたい。
大量生産できる訳でもなく、時間もかかるため、数に限りがある。なので、なるべく最小限で抑えつけ、相手を無力化する。それが出来れば勝ったも同然。
(玄野…!今の一撃でも気絶は難しかったか…出来れば一回の蹴りで倒したかったけど…!
それより向こうの狙いは多分、俺の無力化だ。じゃなきゃあんな大規模な分解と修復の真中、銃を取り出す訳がない!)
治崎の個性は強力だが、それ故に連携となれば話は難しくなる。玄人野の個性は遠距離には向いておらず、近距離戦向きだ。それも含めて銃を取り出してるのが、その仮説を裏付いている。
治崎も同様――今すぐにでも分解と修復の個性で追い詰める事は可能だが、それではミリオが飛び回る上に標準が定まらない。その上、クロノの破壊弾を水の泡にする可能性は大きいので、下手に動くのは愚策だ。
(だからトゲトゲは来ない!!)
冷静な判断と思考力、何よりも頭の回転の速さは、流石と言った所だろう。壊理や自身を諸共、マントで隠すように体を上手くズラす。
「…っ!ヒーローのマントって、唯のカッコつけだと思ってやしたが、そうやって使うんすね」
妙な所で関心しながらも、見事に銃弾の2発を外してしまうクロノは、相変わらず顔を隠しながらも表情や感情が伺えない。
決して舐めてる訳ではないし、油断も手加減もしていない――個性に頼らずとも、こう言った手慣れた武術や鍛錬を重ねてる人間を、いつも側で見てきたから。
ドフッ、とマントが放り置かれると、モゾモゾと蠢いている。あの大きさから推測して、壊理と判断して間違いないだろう。

「クロノ！」
そう判断した治崎は、一秒でも早く補佐の名を呼ぶものの――
「――がっ……！」
それと同時に銃を手にしてた腕を、透過を駆使して殴り、手放してしまう。ガシャッ！と軸を回転しながら床を滑っていく銃に、ミリオの猛攻を避けながら手にしようとするも、腹部を蹴られて凶器から離れてしまう。
「すいやせんオーバーホール！こっちは避けるだけでも手一杯でっせ！」
クロノの情けない声に、思わず舌打ちをする治崎は、クロノを囮にして壊理の人質を優先する。
（いや、良い！クロノがそのまま惹きつけ役として囮になっていれば、その隙に壊理を……）
「そう言う奴だよな――」
ふと背後から、先程までクロノを相手にしてたミリオの声が、より近く聞こえた。まるで真後ろの近距離にでもいるかのように。
そんなハズは…と振り返ると同時に手を向けると――ついさっきまで、ほんのさっきまで抵抗していたクロノは、既に倒れていた。
「おい――もう……」
倒したのか？そう咄嗟に、今思っている言葉をそのまま口に出してしまう治崎を前に、ミリオは強く握りしめた拳をそのまま
「――お前は!!!!」
顔面に向けて、ブン殴る。
治崎の手を透き通り、拳の表面を個性解除する事で、すり抜けた上で相手に打撃を与えることが出来る。

常軌を逸し、常人離れした神業に、そのまま握り拳を頬に減り込まれる治崎は、流れるように思いっきし床に頭を打つように倒れて行く。
「ヒーローがマントを羽織るのはいつだって！痛くて辛くて苦しんでる人を、優しく包んであげる為だ!!決して飾りでも気取りでも何でもない!!!」
これまでフツフツと溜まっていた憤りが、火山の噴火の如く吹き荒れる。一つ一つの熱く、震える声に、マントから顔を出して覗く壊理の表情が、少しずつ変わっていく。
「相手をよく見て次の行動を予測する予測する――一介のヤクザや弱小だなんて思えない身のこなしに、強力な個性！お前は強いよ治崎、たしかに強い!!!」
個性も、動きも、予測も、何から何までに単なるチンピラや雑魚敵とはかけ離れた強さとポテンシャル。
何よりミリオの動きに対応できるその技術は賞賛に値すべきものだろう。ただしそれは単純なる強さでの話、だったそれだけのこと。
「でもね――俺の方がもっと強い!!!!!」

一気に跳躍で高く飛び、そのまま頭部を思いっきり殴りつける。
ゴンッ！と嫌に際立つ音は頭蓋骨に頭を響かせ、以前連合のマグネに鈍器で殴られたあの痛みが鮮明に蘇る。
「ッ……！ッ……!!」
それだけならまだしも、まだまだミリオの猛攻は止まらない。
治崎が行動しようとする前に、予測して対策を繕う前に、ミリオの圧倒する猛攻と、透過という個性を組み合わせたコンビネーションに、対応どころか、手も足も出ない様子だ。
頬、頭部、肩、溝、膝、脚、腕、手首、胸部、様々な部位を一つ一つ、本気で込めた拳を入れられ、全身にズキズキと痛みが迸る。
「……っ！」
それを遠くで見つめてたエリの表情は、少しずつではあるが、晴れ

やかなものになって行く。
先程まで…今に至る前までは、絶対に勝てないと思っていた。あの治崎に、簡単に人を殺し、人権を掌握する悪魔に、叶わないとさえ思っていた。
これまでに自分が我儘をして、または些細なトラブルの失敗さえも、自分の部下を殺すような人間に、誰一人としてあの男に勝った姿など見たことないから。そうやって、治崎には誰にも勝てないと、そう考えながら、恐れながら生きてきた。
だけど、今目の前に映る光景は、壊理の縛られた呪いの常識を、次々と打ち壊していく。
あの治崎の攻撃や個性を捌いていき、尚且つ現状自分に被害が及ばないようにと最新の注意と配慮をしながらも、こうしてあの治崎を圧倒しているのだ。

『俺が君のヒーローになるから!!』

あの時、ミリオが壊理にかけた言葉に、勇気をもらった幼女は、少しではあるが、強くマントを握る。
『もう決して君を見放したりしない…見過ごしたりしない…!!君を悲しませたりしない!!!』
その言葉が、エリの心に光の灯火を与え、表情も段々と希望の色に変わっていく。
無理だ、出来ない、倒せない、そんな絶望を打ち砕いていくかのように、今まさに彼女の心境は、段々と変わりつつあるのだ。

「もう指一本この子に触れさせやしない!!二人まとめて倒してやる!!
――お前の負けだ治崎!!」
勝利を断言したかのような宣言と同時に、鈍い痛みと共に脳が揺さぶられる。朧げになりつつある意識から、微かに脳裏に浮かぶのは…
『お前、寄る辺がねェならウチに来い小僧――名前は？喋れるか？』
組長だった。

あの時は両親も頼れる親族も居なくて、ずっと一人で外で歩いてた所を、目をつけた組長が俺に声をかけたんだ。
聞かれるままに、俺は答えた――
『治崎　廻…』
「気安く呼ぶな…その名は捨てた!!!」
極道に入ってからもう、組長が眠りについてから、既にその名は捨てた。だからこそ、捨てた己の名を補う為に、汚れ仕事をするが為に、〝オーバーホール〟と名付けたのだから。

「……はぁ……はぁ……若…!」
一方その頃、治崎と通形ミリオが奮闘してる真中、暗闇の廊下を這いずく張る男が一人。
「若…!歩…まねば…!!と、もに…」
其れはつい先ほど、踊里と共にミリオの行く手を阻むも、無残に気絶させられてしまった男、音本真だ。
ヨロヨロの体に鞭を打ちながら、死に物狂いで体を引きずる男は、涙を流し爪が剥がれながらも、せめて主人を守らんとするばかり、歩を止めない。
完膚無きまでに打ちのめした音本は、成すすべなく失神して十数分は意識混濁で動かぬようにした。手加減せずの本気の猛攻を食らえば、一溜まりもないだろうに、それでも音本が意識を失わずに動けるのは――治崎に対する強い理念と信頼、何よりも繋がる絆だろう。
音本は幼少期の頃、個性を使って他人の心を探り当てていた。特に表情を立てながら妄言を吐くような人間を中心に。
本音を問い出すと、人はいつも嘘をついていた。
なぜ嘘で繕うのかを問い出すと、人は狼狽え、音本を避け、やがて遠ざかって行った。
人間の半分は嘘で出来ている。

簡単だ――人の心は弱くて脆く、嘘で繕い保身を手に入れて、身を守るからだ。其れを証拠に、音本に探られても遠ざからない人間はいなかったし、全員どれもこれも、嘘だけを吐き続けてきたから。
だからこそ、いつも人間は真実に弱く、心が弱く脆いからこそ、信頼も信用も出来ず、疑い探り合い、本音を吐かずに嘘を繕い生きている。
そんな周りの人間に呆れ、時には憤り、やがて全てが嘘まみれだと知った時は、自分自身も嘘を吐くようになっていた。
それが詐欺師になった理由で、特に権力や金には大した貪欲など持ち合わせていない。
ただ、音本は…信頼しあえる本物の仲間が欲しかっただけだ――
そんなある日、八斎會の若頭と呼ばれる治崎は、竜燐とクロノを護衛にしながら勧誘をしてくれた。
彼の本心は…
『俺の仲間になってくれ音本、お前がいてくれると心強い』
――何よりも、隣り合う仲間だから。
「若が私を…!!!」
だからこそ、歩まねば――!!
涙と流し、枯れる声を張りながら、音本は爪が剥がれて血が流れる指に力を入れながら、這いずくばる。
「――音本!!!」
偶然か、それとも仲間だからか、混戦の真中に音本の存在に気付いた治崎は、仲間の名前を呼び、一つのケースに入っている完成品を投げ飛ばす。
音本の死角、気配も存在も認識していなかったミリオは反応に遅れてしまう。

ケースをこじ開け、銃の中に完成品の弾を入れた音本は、ミリオを標準にして捉える。

「――撃て!!」

――斎は投げられた。

１８９話「追跡」

『オメェは極端すぎんだよ、何事もな』
治崎が組として正式に働いてから、拾い元である組長はいつも呆れながらも口を揃えてそう言っていた。
『また、他所のシマで喧嘩したんだろ。派手にやらかしたそうじゃねえか』
『ウチの組に勝手に入って喧嘩を売ってきたんで、返り討ちにしてやりました。死んでも解らないような馬鹿には生温いものでしょうよ』
『……』
当時の死穢八斎會はまだこれと言った裏の名は馳せてなく、知名度も低い弱小ヤクザだと罵られていた。
組長が元々、温和で争いを好まないだけで、総動員で動けばそれなりの実力と成果を発揮することなど、態々口に出すまでも無かった。
それを良いことか、本当に無知なバカなのか、八斎會の組にちょっかいや冷やかしをする輩が目に余る。
なので治崎はそんな愚鈍な連中を見せしめのアピールとして、矯正したまでのこと。
『……なぁ、お前が俺に恩を返したいって気持ちは分からないでもねぇ…けどな、何度も言うがお前はやり過ぎなんだ。ちったぁ頭を冷やせ…それにお前、薬に手を出してるそうじゃねえか』
『…っ』
『……俺の見てねえ所で、違法の薬物売ったりしてよ。良いか、心のない外道に付いてくる輩なんざ居ねぇ…暴力と金を貪る奴なんざ、チンピラと同じだ』
解ってる、そんな事。
治崎は眉をひそめながら、心の中でそう呟くと、苦虫を噛み殺したように表情を歪ませる。

（それでも、組長…俺は、アンタの為に……）
恩義を感じてる治崎は、組長にだけは情が深い。幼い頃、こんな病気とも呼ばれてた自分を拾ってくれた治崎にとって組長とは、正しく命の恩人とも呼べるものだ。
汚いやり方だろうが、姑息だろうが何にせよ、自分の命を救ってくれたかけがえのない組長の為なら、命だって張れる。
組長のああいう仁義を重んじる姿勢や思い遣りに、他の構成員達は惹かれたのだろう。治崎もその一人ではあるが、その中でも彼は特に異端で、文字通り度が過ぎている。

『東堂組のもんが解体された』
あの時だってそうだ。
ヒーローの活動によって、東堂組が解体されたと知った組長は、何処か寂しそうだった。
確か東堂組は八斎會とは代々から長い歴史、縁のある極道だったそうなのだが、つい数週間ほど前にプロヒーロー達によって見事に解体させられたと聞く。
『こちとら、ただただ肩身が狭くなっていく一方か…』
『そうですね、このままじゃ何れ八斎會が潰されるのも時間の問題……新たな革命が必要だ。なぁ親父…前に話した壊理の件、少しは考える気に――』
『オメェはまだそんな事言ってんのか、この前シメられたばっかだろうが、分かんねえのか。人の道に逸れちゃあお前、それこそ侠客終いよ。心のねぇ外道に、人は付いていきゃあしねえ…その根本的な考え方を見直せ、あの娘は道具じゃねえ、人間だ。たった一人の女の子だ、お前だってそれ位は言われなくても知ってるハズだ』
治崎の計画は、壊理の体を使った超人社会の新たな改革――その要たるや壊理の個性を薬品として闇市場に売り捌き、上手く活用して八斎會をトップに成り立たせる。
その為には人体実験や細胞の摂取、人体を使った非人道的な手段

は、あからさまに常軌を逸していた。
況してや、壊理は組長の孫に当たる存在――確かに組長と血の繋がった孫娘を異能破壊弾にするのに、賛成する人間などいないだろう。
だが、治崎にとってはそんな得体の知れない孫娘なんかよりも、組長の方が一番大切だ。
だからこそ、壊理の体や事業など心底どうでも良いし、どうなろうと知ったことではないのだ。
だからこそ、そんな非人道的なことを平気でやってのけるんだ、治崎という男は。

結局、組長は分かってくれない。
自分の考えを、このままじゃ何も為せず肩身が狭くなりながら、ただ時間と共に潰されるだけだ。
組長の部屋から出た治崎は、頭を悩ませながら、眉をひそめる。組長は確かに恩義で優しく、だからこそ他の構成員もそんな組長に惚れ、後を追うように背中に付いてきた。
その中でも自分は、親のいない誰も繋がれなかった俺に、唯一手を差し伸べてくれた。
どうしても、どうしても恩を返したい…このままじゃ何も返せないまま、八斎會が潰されるのを黙って見てろだなんて、そんなこと絶対にさせやしない。
『何でだ…本当は解ってるんだろ…？もう腹を括らなきゃいけないんだ……何時迄も意固地に甘い考えじゃ、どの道八斎會は潰されるだけだ……！』
嘆くように、愚痴を零しながらも、治崎はふらついた足取りで戻っていく。
前に壊理の個性を調べさせて欲しいと言われたあの段階から、自分は彼女の個性を武器として、薬として闇市場に流せば、八斎會の知名度と名誉、何より立ち直れると確信していた。

壊理の個性とはそれほどに貴重価値のあるもので、素晴らしい能力だった。
それを以前話したら、半殺しにされた。
多少は如何なる反論も受け応えるつもりではいたが、初めてだった。アレほど冷徹に、無慈悲な目を受けたのは、生まれてから一度もなかったのに…
傷の痛みより、心による衝撃が一番に重々しかった。自分の意見を、まるでゴミでも見るかのような目線を浴びせられたのは、生まれて初めてだった。
『そうだ…ヒーローだ。ヒーローが…組長をあそこまで追い込ませて……』
『まーた、悩んでるッぽいスね、治崎』
自問自答のように、独り言を呟いてる間中、横に入るように聞き慣れた相棒の声が耳に届く。
『クロノ…』
『まぁ見るからにこの前見たく半殺しにはされてないようで。今回はどんな話をされたんですかい？』
『ああ、東党組が解体されたって聞いてな…もう時間もないのに、八斎會が潰されるのも時間の問題だってのに…組長のやつ、全く話を聞いてくれない……もう、甘い考えだけじゃやっていけないんだよ…!!』
治崎が心を許してるのは、クロノスタシス――玄野針だ。この頃はまだ切裂や音本といった仲間と言える者はおらず、頼れるのは玄野だけだった。
『まぁ、ヤクザといえど…実の娘ですからねぇ。弱小ヤクザが復権して、支配者になるってのは現実味じゃありませんが…壊理さんはそれを可能にしてくれますし……言いたいことは解るッスよ？』
『クロノ…こうなりゃもう強行突破しかない。壊理の個性を使うぞ。アレを目にすればきっと親父も解ってくれる筈だ…それに、こういった科学的な実験は昔から得意だろお前…』
『まっ、そうですねぇ…治崎の頼み事とあらば、断る理由は無いッスよ』

組長より俺の頼み事を聞いてくれるクロノは、なんやかんやで長い縁を持つが、こういう時はとても頼もしく見える。
『頼んだぞ…』

こうして出来上がったのが、個性も忍術の概念も消すことが可能な異能破壊弾なのである。
数に限りはあり、一気に大量生産出来る品物では無いが、それでも充分に強力な価値が見出せるだろう。
最初は試作段階に突入し、そこから破壊による個性の効果維持の検証、ここまでは順調だっものの、問題は持続性の長さだった。当初は一日二日の日程時間が限界で、完成品と呼ぶには程遠く、持続の効果維持を永遠に保つのには大いに苦労した。
それなりの知識と技術、時間との労働を経て、漸く完成品が完成したのだ。
『漸く完成しやしたね』
『ああ、随分と長い時間を掛けたが…やっとの思いで完成品が誕生した…これで個性や忍術といった能力は完全に消滅する』
『まぁ、問題なのは五発精製するのに1ヶ月かかるってのが大きなデメリットですけど…』
『チンケな独学と然るべき環境が整ってないからだろ、金や目的が順調に達成さえすれば大量生産も可能になる。
駒が増えればこう言った医学に詳しい奴も自ずと現れるだろうし、何なら複製可能な個性を持つ奴がいてくれりゃ幸いだな』
あと少し…あと少しなのだ。
自分たちが裏社会の支配者となり、凡ゆる社会を牛耳り支配するのは。もうあと少しの辛抱なのだ。
『見ててくれよ親父…俺は、必ず組長のアンタに、恩を返すから』

「音本…!!撃て――!!」
発砲命令を下す治崎に、涙で視界がぼやける音本は、投げられた完成品のケースを乱暴にこじ開け、拳銃の中に入れる。
拳銃を構えた音本は瞬間――躊躇した。

何処を!?何処を狙えば良い…?!
完成品の異能破壊弾を装填し、構える音本の内心――困惑色を浮かべては、動揺と焦燥が激しく瞬発的に昂ぶった。
八斎會の幹部の中、完成品の存在を知っているのは入中を除き、音本と八斎會四天王のメンバーだけだ。
この弾の重要さと貴重さは計り知れない故に、無駄撃ちは出来はしない。精製するのに一ヶ月以上もかかると言われてるこの破壊弾、普通なら当てられても、この弾の重みを知ってしまえば、どれだけ狙いが良くても外れてしまう危険性が必ず存在する。それが1%という僅かな可能性でさえも、許されない。
しかも相手は凡ゆる有機物や無機物問わず全てをすり抜ける能力だ、異能破壊弾の標準を合わせても、個性を使役する時点でほぼ無理。況してや此方の存在に気付かれてる以上、限りなくアウト。
かと言って若頭補佐は気絶をしており、頼れる状況下じゃないのは見解できる。
どうする?
どうする?
どうする?
どうすれば良い?考えろ、冷静になれ、考えるんだ。

頭の中で錯乱するように、意識が混濁する音本は、心の中で必死に喝を入れ、冷静さを取り戻そうと激励の言葉を送る。
かくなる上…いや、よくよく考えれば…一つだけ、確実に当てれる方法が唯一存在するのは…

考え悩み、導き出した答えは――壊理に標準を向けること。

「音本おぉぉぉーーーーッッッ!!!!!」

憤慨と覇気を孕ませたミリオの雄叫びが木霊する。

標準を向けられた当の壊理本人は、銃口を向けられると、抵抗する姿もなく、耐え忍ぶように身を守る。

怯えながらも、涙を流しながらも、何かに耐え忍ぶそれは――逃げ出す事をせず、抵抗もせず、ただただこの世の理不尽を受け止めるようなそれは、幼少期の女の子にしては余りにも残酷で、直接目の当たりにしたミリオだからこそ、正義感たるや心の憤りが止まらない。

知ってしまったからなのだろう…痛みと恐怖によって刻み込まれてしまった絶望なのだと――ミリオは理解した。

そんな少女を守るように、ミリオは先ほどの怒号の顔とは一転――優しく微笑んだ。

「もう、大丈夫…!」

少女に投げる声は、とても落ち着いていて、聞く者に安らぎを与えてくれる。それは、通形ミリオの理想のヒーロー像としてのあるべき形であり、ルミリオンとしての姿。

――もう、痛い思いはさせないから!

通形ミリオがヒーローを目指すきっかけは、幼少期の齢四歳の頃だ。親と一緒に買い物の帰りに橋の上で歩いてたらたまたま個性が発現してしまい、すり抜けたことで川に落ちてしまったという事故から始まった。

四歳未満の子が何かしら原因の交渉によって個性が現れる、なんて

事は今の世代早々珍しい事ではない。
不幸な事故によって幼いまま命を落としたという例も、ニュースを聞けばそう少なくはないものだ。ミリオもその類で、川で溺れかけていたのだ。命の危機に見舞われているところを、水難救助のヒーローが登場して、助けてくれた。
世間で放映されてるようなニュースと比べて、対して目立った大きなものではないが、少年にとっては死を直面し、恐怖を覚えた瞬間だった。
怖い物知らずの人間が恐怖を覚えた刹那――それと同時に自分には明確な夢ができた。
『俺、ヒーローになって救ける!』
ヒーローになって、沢山の人々を救う事。
誰もが夢見る職業に、熱意に火が点いたミリオは、夢を語る時はさも楽しそうに興奮していた。幼い頃だからだろうか、健気な男子という印象がより深く伝わってくる。
父親に『俺たちの個性は一歩間違えると簡単に死んでしまう』と言われた時のショックは大きかったけど、それでもヒーローになりたかったのは、それほどに憧れが少年の背中を押してくれたからだろう。
楽しいこと、辛いこと、苦しいこと、悲しいこと、沢山の思い出や感情を通しながら、個性と向き合っていく姿は、正しく通形ミリオがヒーローになる物語だ。
そう、なる物語だっだのだ。
ドスッ――という嫌に静かに響いた音は、聞くものに戦慄を味わせた。
「病人がぁ……!!!」

忌々しい声が、嘲笑する。
今までミリオが積み上げてきた弛まぬ努力と、恵まれた才覚が崩れたことを、心の底から蔑み嗤う其れは、その場の空気が汚染していく不快な感覚だ。
「個性なんてものがあるから…忍術なんてものかあるから…!!人は夢を見る。何者かになれると錯覚し、現代社会に次々と疫病を流行らせる!!お前らという病人が、次から次に病気を撒き散らすんだ!!そして精神に疾患を抱えるんだ!!」
一つ一つの言葉は、
「笑えるな!その子を救おうとした結果が、ヒーローになるという夢から目を覚めて、何者にもなれない現実がお前を突き刺すんだ!!そしてエリも結局、俺の言った通り存在そのものが誰かを傷つける呪われた存在なんだ!!!」
何者にもなれない、という言葉ほど残酷で考えさせられるものはない。
まだ何者でもないはマシだ。今はなくともこれから先は望み次第では何者にでもなれるのだから。
然し、何者にもなれないというのは、憧れや職業に、トップクラスにアイドルにも、人気者も、人間にさえもなれやしない。況してやヒーローとしてＮｏ．１に近いと称された、あの頃の…１７年間の努力をもってしても、もう何者にもなれないのだから。
「よくやった音本!!お前のお陰だ…!!本当によくやってくれた…!!」
「やった…若、若の役に…立てた!!」
音本がいなければ、あのまま手も足も出ずにやられていた。
この場に音本が出てくれたお陰で、無敵と思わしきミリオは、今では無個性の人間同様だ。
個性のない人間など、一般人に過ぎないのだから。
「そしてお前が長年培ってきた努力もたった今――無に帰した!!」
勝負は決まった。

掌をコンクリートの地面に触れ、分解と修復の応用で棘状で刺し殺すだけだ。普通の人間には、何もできやしないのだから。

タッ――!!

地面を蹴る足の音、跳躍したのだろうか、ミリオが動き出す。しかし幾ら動いたところで意味など成さない。

無個性の人間が、ヒーローになどなれないのだ、なんて思ってるそばから、今まで倒れ伏せてたクロノスタシスが放り投げられるように、此方に飛んできた。

「ッ…!クロノ…?!」

単なる悪足掻きか、攻撃する手を一旦中止し、何とか身体でキャッチをすると、何処かへ放り捨てるように、横へと受け流す。

が、その僅かな一瞬の隙が命取り――目前に現れたミリオは、躊躇いなく腕を粉砕するよう、拳で殴り飛ばす。

「ッ…!!?!」

ボグ!!と、不吉で嫌な音が、今度は大きく響き、打撲を受けた腕は拳大とまではいかないが、腫れあがるように目立っていた。

悶絶するような痛恨の一撃と、地肌で触られたことで病気でも起こしたかのように、ブツブツと蕁麻疹が浮かび上がる。潔癖症による症状だろう。

「そんな…若!!」

あり得ない――優勢から再び形勢逆転されそうになる治崎の顔色に、音本の声色が曇る。

この青年、個性が消されても尚…抗い続けようというのか…??

「相手の動きをよく見て判断する……治崎――俺はまだ何も終わってないぞ!!!俺は依然、ルミリオンだ!!」

個性をなくしてもこの青年は、未だに威厳も尊厳も失わず、ヒーローとしての責務を全うする。

個性を消されても、どんな状況下でも、ヒーローは常にピンチをブチ壊して行くのなら――ルミリオンは正しくヒーローの鑑だろう。現に救い守るべき少女のために拳を握り、叱咤しては憤るその勇敢な姿勢は、一言で言えばこれこそがルミリオンなのだろう。

個性が消えた？
だから何だという、それでもこの１７年間の努力は消える訳ではない、個性にかまけてた訳でも無い。
ヒーローになる――その一心で此処まで登り詰めたのは、夢が彼の心を導き、理想と信念が彼の心を支えてくれたから。

（ありえない…これは夢だ――非現実な幻覚だ…!!）
脱力で気が抜ける音本は、拳を強く握りしめ地面を殴る。心底悔しがるように、でもって目の前に広がる光景を認めたくないと言わんばかりに。
個性が消えて何故抗える？
なぜ若と此処まで対等に渡り合える？
この男はなぜ絶望しない？
無敵かと思えた個性は失ったハズ、若に触れれば即死は免れないという恐怖をその身で味わい、バックには壊理さんがいるにもかかわらず、なぜこの男は此処まで抗えている？
寧ろ守りながらの攻めは至難を極めるものだ、傷つけまいという枷を背負い、本領さえも発揮できないのに…

――なんだこいつは!!!!

ミリオが追いついて１５分が経過をし、八斎會四天王と懐刀、補佐を一人で倒し、異能破壊弾を打ち込まれて五分が経過。
再び参戦しながらも応戦に答える音本の助力もあって２対１、そして壊理を傷つけずの戦闘はミリオにとっては圧倒的不利な状況。更には無個性な状態で――
壊理を守り抜いたのだ。

だが、そんな状況下で個性発動時のように無傷という訳にも行か

ず、満身創痍という言葉が適切だ。
脚は腹部に治崎の個性で応用した棘状のコンクリートが刺さっており、出血している。コスチュームもほぼボロボロで、視界が朦朧とする。意識を保つほどがやっとで、疲労と怪我の蓄積により、当の本人は既に限界を迎えていた。
「……!……!」
壊理本人も、止めどない涙こそ溢れ出るばかりだが、何より辛いのが、自分を助けてくれるミリオが見るだけで痛々しく、心が引き裂かれそうだ。
「ヒーローになりたかったか……？それとも、壊理を救いたかったか…？ルミリオン……」
一方、治崎は体全身に酷い蕁麻疹を引き起こしながら、息遣いを荒くし、ボロボロな体を支えバランスを保つ。今にでも横たわりたく、体を直したい欲求を押さえ込みながら、血を流す。殴打による腫れ上がりも酷く、骨も何本か折れている。
圧倒的有利な立場でさえ瀕死に追い込まれてるこの状況、環境と仲間がいなければ確実にやられていたということが安易に思い浮かべれる。
「どっちもだ…!!さぁ、来い――治崎ィ!!!」
「だからその名は捨てたと言っただろうがァ!!!」
二人の覇気を含んだ怒号が衝突する。
ミリオは当の限界を超えている、もういつ倒れても可笑しくないその状況下では、確実にミリオが殺られる可能性は極めて高いだろう。
――頼む、皆んな!!!!!
ミリオの心の中で叫ぶ願いが叶ったのか、それとも呼応したのだろうか――二つの破壊音が、壁を壊し戦場に轟いた。
壁を壊し、救助に追いついた緑谷出久の姿と――横から乱入するように、個性を活性化した切裂を剣で押しつける麗王と、拳で殴り飛ば

す切島の姿が、目に見えた。

１９０話「変身」

治崎と対峙する前のこと遡り――入中を拘束した事によって生き迷宮が終わり、絶え間ない地震は嘘のように静まり返った。
だがこの静寂な空間が返って気味悪く、後味が悪くなる感覚が走る。
「生き迷宮は終わったは良いが…これじゃ前後が分からねえ。クソッ、滅茶苦茶にしやがって…」
薄暗く鎮まった空間の中で一人の警官が悪態を吐くように愚痴を呟く。思ったより時間を稼がられてしまい、焦る気持ちが昂ぶる。
「エリちゃんの方角は元より把握しているが…入中が構造を操作した為か、障害物も多く、通路が遮断されている」
サー・ナイトアイは構成員に触れ未来予知を発動した為、方角や正規ルートは頭の中で把握している。
しかし入中が構造を変動させた事によりそれもまた困難と成り果てた。正に爪痕を残すとはこの事だ。
「おい入中！この迷宮を元に戻せ！」
「…ぬ…ぅぅぅ～～…っ!!ぅぉぉ…ぅぅ～～っ!!!」
一人の警察官が拘束した入中に戻すよう要求するが、本人は血走った目で身体を痙攣している。涎を垂らしては正気がないように見える。
憶測だが薬の効果切れによる反動…副作用が働いたのだろう。そもそも入中の個性『擬態』は冷蔵庫程度の狭い容量でしか満足に自由に操作することしか出来なかったハズ。
それを粗悪品…ではないものの、厳しいブースト薬で浸り続ければ副作用が働き何かしらの症状が起きても可笑しくはない。
所詮は薬で無理矢理個性を強化しただけで、薬が切れれば彼は手も足も出ない。そして迷宮をどうにかどかす事も出来ないし、そんな意思などないだろう。

「もう入中にそんな余力はない…ファットガムの見立てた通りか……
それだけじゃあない…！此処にはまだ、トガとトゥワイス…鎌倉に龍姫もいる！敵連合がいる以上…確認できた今、無視することは出来ない！」
何処かに潜んでいる。
次にいつ何処から攻撃が来るか分からない以上、迂闊に行動を起こすのは危険だろう。無視できないのは事実だが、かと言って敵連合と対峙している時間も余裕もない。
今は治崎を追うのとエリの保護…そしてミリオの救助…少なくとも今回の目的はエリの保護が最優先となっている。
「悪を見逃すなど以ての外…なのに。然し今は…！」
選択肢が思考を揺さぶり左右する。
エリを優先すれば最悪逃げられる可能性だってある。折角尻尾を掴めたのに、それをみすみす逃してしまうのは宜しくない。
「…トガ？鎌倉…！」
雪泉の苦痛な声色に反応を示した入中は、敵連合のメンバーの名前を聞いた途端に自我らしきものを取り戻す。
そういえば…と、死穢八斎獪と敵連合は繋がっていた――であれば入中が把握している可能性も低くはない。
「トガ！トゥワイス！龍姫に鎌倉あんのガキどもおぉぉ～～…!!!見つけてドタマカチ割ってやらあああぁぁぁ!!許さねえ！許さねえ許さねえぇぇ！あのクソカス共めがぁぁぁ!!裏切りやがってえぇぇ!!!」
鎮静の後の真逆な激怒、昂ぶる興奮した様子に思わずピクリと反応してしまう。
「…他のメンバーは？連合はこの後何をする？何処にいる？」
「知るかぁぁ!!アイツらは裏切りやがったんダァ!!探せ！必ず見つけ出して内臓引っ掻き回してやらあぁぁぁ!!!ぶっ殺すブッ殺すブッコロス!!!」
サーの質問に過激な怒りを曝けながら、怒声を叫ぶ。
この余裕のない荒ぶる表情…冷静さの文字も当て嵌まらないかけ離れた様子…演技とは思えないこの反応は間違いなく本当の事なの

だろう。
　裏切り、殺す…彼の言葉から察して仲間という形で協力関係を築いていたが、何かしらの意図が裏切りへと招き、入中はハメられたのだろう。つまり、連合の良いように利用されたにすぎない。
「嘘は吐いてないようだ…他のメンバーもいない…四人だけという事か。ただ薬の効果か…将又元からか、かなり気性が荒いな」
　襲ってくる気配がない以上、味方になったとも考え難いし、恐らく逃げの一手を講じたと考えても良いが、油断は禁物。
「先生！私達はこのまま進むべきでしょうか？」
　緑谷の言葉に、相澤は暫し沈黙をする。
　助けに行きたいのは山々だ…然し、イレイザー・ヘッドは言った。連合にまで目的が及ぶのであればそれまでだと。
　そして最悪な芽が出てしまった…連合が絡んでしまった以上、下手に動くのは生徒の危険を晒すのと同じ。幾らインターン活動とはいえ度が過ぎている。
　ＵＳＪを始め、蛇女、ショッピングモール、林間合宿、神野区と…特に緑谷出久は余りにも事件に絡んでいる。それも運命の悪戯なのか、それもまた誰かの手によって回ってるのかは知らないが。

「何馬鹿なこと言ってやがんだ――!!」

　此処で静寂を突き破る怒声が響き渡る。
「進め！連合の方は無視しろ！そっちは警察に任せりゃ良い…俺たちの最優先事項は何だよ!?刻一刻と時が迫ってるんだぞ!?」
　ロックロック――トガヒミコに背後を鋭利な刃物で刺されながらも、何とか意識は回復したようだ。
「確かにそれが最善か…」
「それにな、入中の拘束で誰かしら残らなくちゃいけねぇ…俺はトガとかいう小娘にやられちまったせいでとんだり跳ねたりはキツイ…！どの道負傷者が行ったところで足手纏いになるだけだしなァ…」
　鎌倉とトガヒミコの奇襲が最悪、命を落とすことにならなくて不幸

中の幸いと呼ぶべきか。傷が深いわけではない、然しどっち道戦闘として最前に立つのは到底出来そうにない。
「分かったらさっさと足を動かせ!!此処で立ち止まるっつーことは…治崎を益々逃しちまうッつーことだ!ミリオも相当信頼されてるが無敵じゃねえだろ…?
ここまで来たらあと一息だ!皆んなが稼いだ時間を無駄にするんじゃあねえぜ!サー!イレイザー・ヘッド!デク!そして…雪泉!お前らが行くんだよ!!」
「ロックロックさん貴方、私を…」
「…別に、貶したくて悪態を吐いてた訳じゃあねぇんだぜ。俺ぁただ不安ばっか胸に募らせてたからさ、人ってのは未知なる物には人一倍敏感で、不安ばかり考えちまう生き物だ…」
――俺には四つ下の妻がいる。
去年の暮れには念願の息子が生まれた。
雄英とはいぇガキはガキ、神野区の事件以降で忍の存在が公になり、お前たち忍の存在が俺たちにどのような影響が、そして俺たちヒーローと上手くやっていけれるのか…
この活動でお前たちが上手く動けれるのかの反面…子供だからこそ何かあったらと考えると不安になっちまう。
心配だったんだよ――何から何までよ。
だが…蓋を開けてみりゃどうだい?
どいつもこいつもお前ら…俺たち大人より立派にヒーローしやがってよ…!!
「必ず戻ってこいよ…今度は小さな子供を連れてな!!」
「…ッ!はい…!!必ずエリちゃんを救けます!!」
そして――サー・ナイトアイ。
後はお前だ、ちゃんと…責任を持てよ。

「よっこらしょ…しっかし寝たきりとはいえ、組長思ったより重いな…」
一方――漆月が教授したルートを文字通りに渡り、何とか無事に寝たきりの組長を背負う龍姫は、その重さに愚痴を呟く。
人間は大人一人背負うだけでも2、3人は必要だと聞く。例え食事を摂らず痩せ細っていたとしても変わらない。
「でも、組長がオーバーホールくんにどう吠え面をかかせてやるのでしょうか…」
トガはエリちゃんを横取りするのが最適だと思ったのですがねぇ」
トガヒミコは元から死穢八斎獪が気に食わない。
いや、彼女だけではないだろう。トゥワイスや龍姫、鎌倉も同じ気持ちだ。だからこそ穴の貉として意気投合も出来た、入中を追い詰めることも出来た。
だからこそ四人でどうやって嫌がらせをしてやろうかと考えていたが…思わぬ所で漆月の指示が出て、四人は現状困惑。
正直、この寝たきりの老人に利用価値があるとは思えないのだ思えないのだ――だからこそ、彼女が何をしでやらかすのか判らない。
「そろそろ出口だぞ！」
薄暗い岩場を穴掘りのように個性を発動して通路を確保していくのはＭｒ．コンプレス。
彼は死穢八斎獪で治崎が指定したメンバーでもなければ、片腕は治崎に分解されて犠牲となった為、義手ではない片方の手で必死になって出口へと繋いでいく。
そんな彼が何故此処にいるのかと問われれば、無論…トゥワイスの二倍の個性が成り立っている。
トゥワイスの個性は二倍に増やす個性。
デメリットは多々あるものの、同じ人間を倍にして増やすというのは中々に強力でシンプルな響きだ。そしてその二倍を発動するにはイメージが必要で、その場に本物がいなくてもその場で増やすことが可能なのだ。
因みに本体のコンプレスは闇と同じく死柄木の護衛として側に付

いている。
そうこうしている内に、ぽかりと太陽の日差しが射し込む。
まるで刑務所から脱獄した際に地中から脱出するような王道たる演出のように見えるかもしれないが、少なくとも四人からすれば正にそんな気分だろう。アメリカンや海外の脱獄する映画の主役にでもなってる気分だ。
何しろ治崎達の監視が解かれ、久しく外の空気を吸うというのは格別だ。何十日間も外の空気を吸えず、太陽の光も浴びれずで本当に刑務所に留置された気分でもあったし、気分転換には快適と言った所だろう。
「よっしゃあぁぁぁ！やっと外に出れたぜぇ！もっとジメジメしていたかったさぁ！」
トゥワイスも見ての通り気分爽快といった様子だ。
…然し、喜ぶのはまだ早い。それにまだ終わっていない――寧ろ此処から始まったのだ。
「此処に新入りが来てるって言ってなかったっけ？」
「え？新入り？何の話だ!?」
「言ってましたねぇ！漆月ちゃんが信頼して向かわせてるって事は、オーバーホールくんみたいなヤな奴じゃないって事ですよねぇ！」
「そのヤな奴を連れて来ちまって悪かったな」
トガヒミコの歓喜とした声とは裏腹に龍姫は機嫌悪そうに愚痴を吐く。何しろ治崎を連れてきたのは自分とトゥワイスだ、責められても可笑しくない立場なのだから。
ちなみにＭｒ．コンプレスは腕を吹き飛ばされ義手に替えてもらったばかりの頃を基にして作ったので新入りの話は聞かれてない。
「お待たせしました――貴方達五名がマスターの仰ってた敵連合の面子でしたか」
ふと、冷静で息を殺すような声が五人の耳を打つ。
特にトガと鎌倉は声をかけられただけなのに、何故か自然と武器を構えてしまった。そう、それほど全くを以ってして気配さえ感じ取れなかった。

「お初目に掛かります。私は黒柴粒子と申します――貴女様方達の情報はマスターから重々聞きました…こんな形でお初の挨拶とは奇妙な形に……私は漆月の補佐、右腕として指令を受けています」
生真面目で何処か紳士さを漂わせるものの、女性として魅力と大人びた感じだ。
黒く艶がかった伸びた髪に、真紅の瞳、凛々とした美形の顔立ち…にも関わらず、軍人の衣服に重圧感を増すようなブラックコート。然し表情には一切の熱がこもっていない…まるで、氷の機械人形みたいだ。
「はっは！また可愛いレディーじゃあないか。男共の連合から心機一転で嬉しいねぇ」
「おほぉっ！またもやスゲェ！カッケェ姉ちゃんじゃねえか!!…おっぱい」
「おい、本音漏れてんぞ」
トゥワイスの反語だと頭の中で理解していても、つい突っ込みせざるを得ない。然し、珍しく鎌倉が固唾を飲み込み深刻そうに冷や汗を流しながら物静かに見つめてるだけ。トガは一旦折り畳みナイフをしまう。
（……気付かなかった、この人にも…そして、憑黄泉ちゃんにも）
黒柴粒子の背後に、左右に揃い並び立つ憑黄泉。恐らく蒼志のパターンと同じ彼女専用の憑黄泉なのだろうか。
一匹は指揮官軍たる彼女に習ってるのか、迷彩服とマシンガンの銃を抱え、ヘルメットも被っている。
もう一匹は…何だろう、今までに見たことのないケースだ。右腕は重火器キャノン砲、左腕はメタルクローになっており、尻尾はチェーンソーとなっている。頭部はメタルコーティングでもされてるのか、鎧のように金属製でカバーされている。
正に軍に特化した殺戮兵士のようだ。
「…ねえ、その腕章ってもしかして…『Dースクアッド』？」
神妙そうに尋ねる鎌倉に、彼女は無表情のまま目を瞑りコクリと首

を縦にして頷く。
「D…スクアーロ？」
「Dースクアッド――元はアメリカ陸軍米により…スペインやイスラエルとかの支援で訓練されたって噂もあるけど…実際にあの組織は表では自警団としての民兵として集まったと言われてる…けど、僕ら悪忍は授業でこう言った裏の話を聞かされることがあるから解るんだ。
　裏では戦争や破壊活動、強制拉致や拷問を平気で躊躇わず行う国際テロ…超危険組織として指定されていた…ハズ。
　今は超常現象もあって日本は勿論、海外ではグレーゾーンに位置する…んっと、つまり簡単に言えば敵より一線を画すヤベー奴ってこと!!」
「滅茶苦茶じゃねーかよ！流石だぜ漆月！」
　ヤクザもヤクザだし、全国指名手配犯の自分達が言うのも畏れ多いが、国際テロを手駒にするのは正直言って中々見かけないし、そういうのは縁やゆかりでもなければ仲間に引き入れるなど滅多に起きたりはしない。
「あれ、でも…その組織って前に潰れたとか言ってなかったっけ…」
「博識ですね鎌倉様、ええ…仰る通り、『裏切り者』さえいなければ――」
　最後のトーンが低くて何を言ってるのか分からなかったが、四人は特に気にする素振りを見せなかった。
「それよりも時間が惜しいです…早く組長を我々に…」
「…？何する気なんだ？」
「ちょっとした見せ物をお作りするために…それに、マスターからの新たな指示が」
「漆月から？人使い荒いなぁ…あーでもアイツから頼みごとなんて滅多にないし何も言えないけど…」
「この後に私と共に至急、京都に来て欲しいと。半蔵学院に焔紅蓮隊…そして忍商会が着々と動いてる今、少しでも貴方達が赴けば肩の荷が下りるかと…」

京都？半蔵学院はそこにいるのか…そして焔紅蓮隊に忍商会まで…そして敵連合の中核と化した漆月。なるほど、これは想像以上にできあがってるみたいだ。
「んじゃあ俺たちは俺たちでまだやりてぇことあるし…」
「？」
トゥワイスの意味深い発言に眉をひそめる黒柴に、他の３人も頷く。
「組長で何をするかは知らねーが、後は頼んだぜ」
「トガたちはもうちょっと、オーバーホール君に嫌がらせをしたいので！」
「落合は此処で！」
「え？これ俺も行く流れ？ここは女軍人ちゃんと一緒の流れでよくない!?俺は逃げる事と欺くことが取り柄なのに!?」
次に龍姫にトガ、鎌倉と次々に動き出す。
そんな彼等彼女らを見届けながら…
「…組長、お前は贄だ。絶望の種だ――安心しろ、お前には一切の感情さえも与えん」
胸ぐらを掴み、顔を近づけながら言葉を吐き捨て、憑黄泉に向き直る。
「Ｄ－７６、クラッシュ、行くぞ。時間だ」
聞きなれない名前は恐らく憑黄泉の名前だろう。彼女の言葉に答えるように頷き、そのまま周囲を厳重に見渡しながら護衛の役目として同行する。

場所は打って変わり、治崎によって分解と修復によって新たに作られた閉ざしていた壁岩は見事に粉砕し、氷の破片が岩の破片と混ざって散っていく。
それと同時に、別方向で新たな破壊音が。
壁を突き破り、レーザーブレードで突き通していく麗王と、拳で殴

り飛ばす切島、そして吹き飛ばされる竜鱗の姿。
「なっ…ん、だと…!?!」
あと少しで追い詰めれたのに、更に追い討ちをかけるように増援がやってきた。
更に大いに信頼を寄せていた竜鱗が、無残な姿で吹き飛ばされていく。
一度に起きた情報量がバカみたいに多くなり、情報処理が追いつかず、混乱を招いてしまう。
「「治崎イィィィーーーーッッッ!!!!!」」
デクと雪泉の、溜まりに溜まった怒りの感情はこの瞬間、声に乗せて爆破する。
緑谷の近接戦を得意とする拳、雪泉の凍てつく扇子、拳と扇子が治崎に正義の鉄槌を成す。
「ぐがっっ?!!?!」
雷鳴に打たれた様な激しい激痛が走り、死の錯覚を味わうかのような現象に、激しく表情を酷く歪ませる。
まるでこれまでにない痛みの感情を浴びせられたように、そして大きく吹き飛ぶ治崎。
「ナイトアイ!確保を!!」
デクと雪泉に続き、イレイザー・ヘッドにナイトアイも追ってくる。
「ルミリオン…お前!」
「み、んな…!」
側近の三人、部屋に一人、そしてボロボロの治崎。
そして後に続く麗王に烈怒頼雄斗…そして瀕死状態のルミリオン。
更には無傷なエリ。まさかこんな状況を殆ど一人で作り上げるとは…
「えりちゃん…無事です…!後は、治崎だけ…!!」

「よく…ここまで持ち堪えた…!!」
ヒーロー活動…インターン生徒なんてレベルではない。命を懸けてよくぞここまで持ち堪え、一人で大きな苦難と対峙した…そしてミリオは打ち勝ったのだ。己の苦行な壁を、治崎という最悪な輩を。
「こ…のっ!!」
吹き飛ばされながらも反撃をしようと地面をバンバンと叩きつけるように触れるも個性が発動しない。恐らくは個性が発動しないのだろうか、まるで個性破壊弾を食らったような吐き気を催す感覚に、蕁麻疹と共に激しいマグマのような苛立ちが腹の底から煮えたぎる。
「便所に吐き溜めされたクソ痰カスどもがあぁぁぁぁっ!!!しつこすぎるぞ病人どもぉぉ!!!」
抑えきれない怒りを孕ませながら声を発する。
「いい加減にぃ…」
「このまま畳み掛けろ!!ルミリオンが作ったチャンスを無駄にするな!!」
イレイザーの葛藤が鼓舞するように、一斉になって畳みかけようとする。デク、雪泉、サー、麗王、切島、イレイザー、六人が一斉になって勢いよく走り出す。
元凶たる野心、治崎に牙をむく。

「起きやがれクロノおぉぉぉーーーーーっっっっっ!!!!」

刹那――イレイザー・ヘッドが何かを察知したのか、雪泉を突き飛ばす。
「雪泉!離れろ!」
「えっ?」
そして、倒れ伏してたクロノの頭部から、見慣れぬ刃物が伸びてくる。擦り傷とはいえ、皮膚を切り裂き、血を流していく。
「ふぅ…長針が刺したモノは動きが遅くなる。二人まとめて串刺しにするつもりでしたが、さすがはヒーロー…プロは一味違うッスね」
刺されたイレイザーはスローモーションのように動きが鈍く遅く

なり、クロノは何事もなかったかのように平然と立ち上がる。
「バカな！クロノは俺が…」
「ああ、だから修復した！ルミリオン…お前はヤケにクロノを警戒していたからな、だから、俺が治せることを忘れてたんだろう？」
目覚めに時間は消費したものの、漸く復帰した。
然したしかにクロノはやられていた…あのままもし復活さえさせなければ本格的にヤバイだろうと長年のヤクザとしての勘が働いたのだ。
修復できる時間があるとすれば、クロノを倒して治崎の方へ吹き飛ばしたあの瞬間が好機に転化するチャンスだったのだ。
「そしてこれ以上お前らの好きにはさせん!!お前らのやる事全て、結果も過程も何もかもが無駄となる!!俺の手でなぁ!!」
イレイザーヘッドの個性の効果は長く続かない。
瞬きして仕舞えば、抹消の個性は強制終了されるのだ。
そしてイレイザーが瞬きをした瞬間、地面からは針地獄のように無数の針が生えていく。
一斉に畳みかけようとした者たちの侵攻は、一気に止まる。
「こんな奴らに俺の計画を台無しにされてたまるかってんだ…！
なぁ、音本…竜鱗、嫌だよな？こんな奴らに邪魔されて、俺がこんなところでつまらない終わり方をするなんて…嫌だよなァ!?」
個性によって意図的に気絶した音本と竜鱗を巧みに此方へ引き寄せる。
「音本に竜鱗…よくやってくれた！お前らは俺の誇りだ、真なる仲間だ!!お前らの苦しみ…個性によって雁字搦めに苦しめられた同胞だから、俺はお前らに誇りを持てるんだ！
だからこそ、お前らも…お前らは、俺の為に死ねるだろう??」
治崎は音本の顔を掴み、二人同時に分解して修復する。そして瞬く間に修復され一つになった治崎と音本は、更に竜鱗も分解をしては修復し…三人が一つとなる。
三昧一体とは正にこれのことだ。
「ルミリオン…お前はたしかに強かったよ…俺よりな。だが…俺の個

性を更に上手く活用すればなんて事はない」
「嘘だろ…治崎…」
「あ、なた…仲間のみならず自分をも…」
悍ましい…歪な形が作られていく。
まるで治崎が治崎ではなくなるように。
仲間の残骸が露わになるように、倒れた仲間を取り込み吸収し、形が異形と為す。
「全ては無に帰すのだ、諦めろ。これが現実…夢から覚めた酷くて残酷なお前らの現実を受け入れろ病人供――さァ、覚悟しろ。エリを返してもらおうか」
死闘は此処からまだ続く――悪夢は終わらない。

１９１話「見えない希望」

「最高に気分が悪い…」
異形に変貌し、人としての姿を消した治崎は苛立つように呟き言葉を吐き捨てる。
「だが――さっきよりかは幾分マシになったな」
４本の漆黒色の腕にワイバーンを連想させる両翼は、悪魔の羽の様に広がり、ペストマスクは上下に裂けて鳥の嘴の形になっている。
「そんな……こんな事が…」
雪泉は絶句する。
竜燐と音本を個性の分解と修復によって自身へと取り組むという異端にして異次元的な光景に、声が震える。
それは彼女のみならず、この場にいる全員が息を飲む事だろう。
「てめぇ…！仲間じゃ……ねぇ、のかよ！」
切島の怒りを沸騰とさせる声は、聞けば誰もが心中お察しすることだ。元々正義感が人一倍強い彼にとっては、曲がったものや歪んだものは許せない性質だ。
だからこそ、部下を捨て駒扱いするのは勿論、仲間を平気で殺す治崎に頭に血が上る。
「あァ、仲間さ。俺にとってかけがえのない…な。だからこそ、お互い助け合うんだろう？」
それをさもどうでも良いかのように簡単に片付けてしまう治崎。ヤクザと言った裏社会や闇を抱えた組織にとって、命のやり取りは些細なもの。何よりも極道にとっては尚更だろう。
命を捧げる誠実さ忠誠…誠意があって当たり前の業界に暮らす住人。そう言った意味でもお互いが理解などし合えるはずが無い。
「それにな、俺はこれでも結構抑えてるんだぞ？潔癖の癖が強くてなァ…触られると頭に血が上ってつい…な。冷静じゃ居られなくなるのがガキの頃からの悪い癖だが……」

ゴキゴキと肩を鳴らしながら、異形と化した治崎はエリの方角を見つめる。
「…よく見れば、イレイザーや先程の側近が居ませんね…今の攻撃で分断されたのでしょうか…」
個性抹消さえあれば、変貌した後の治崎相手でも全員で掛かれば勝機はあった…然し、それは治崎の個性によって跡形もなく希望は分解された。
状況としては最悪。
怪我を負ったミリオに保護対象者のエリ、イレイザーが居ない上に戦えるのは5人だけ。他対一にしてこの圧倒的な不利の差が広がるのは、やはり治崎の絶え間ない技術と鍛え抜かれた強さ、そして絶対的なる個性。
死柄木のように五指に触れ、ヒビを割らし粉々にする個性とは違ってただ触れただけで一瞬で分解し、自身を回復させる修復能力は、明らかにハイスペックすぎる。下手な敵は愚かプロでさえ大苦戦する相手だろう。
「個性を消すモノに興味があってね…クロノにＶＩＰルームへと案内してやったよ!!」
エリに続き、見ただけで個性を消すことが出来るイレイザーヘッドに大変興味が湧いたのだろう。
個性を消せるという事実があるのなら誰でも良いし重宝される。殺さず生かしておく必要があると判断した治崎はクロノに生け捕りを命じた。
「何より…悲しい人生だったなぁルミリオン――お前が…壊理や俺に関わらなければ――『個性を失う』なんて可哀想な事にならずに済んだのに、心地良い夢が見れただろうになァ……無個性」
『…!!』
治崎の放った言葉が、この場にいる全員の頭に重く鈍器のように叩きつけられる。

「ミリオ…先輩?」
信じられなかった。
異能破壊弾は聞いた話だと一時的に能力を制限するものだと聞いた。
秘伝忍法や個性を封じ込める、両方の能力に通用するというのは、ヒーローと忍の混合社会ではとても珍しく、見ない例だ。
然しそれが…永遠に失うというのは、聞かされてない上に衝撃すぎる事実だ。
それを、通形ミリオに打ち込んだとなれば…それが真実ならば――ルミリオンは正真正銘、無個性だ。
「……」
そんな緑谷は、嘗ての自分と重ねる。
『無個性でも…貴方みたいなヒーローになれますか!?』
中学時代、憧れだった平和の象徴オールマイトに出会った懐かしいあの日が…
あの時、ヒーローになんかなれないと嘆いてた過去の自分が、ミリオと重なる。
「個性を失っても尚…粘り続けるその根性…惚れ惚れするよ。だが悲しいなぁ…その結果がまさか――仲間を巻き込み全員死ぬなんてなァ」
完成品として床に転がり落ちてた弾を拾い、懐にしまった途端――足で地を蹴り4本のうち2本の腕が床に触れる。
その瞬間、地殻変動が起きるかのように地面が一瞬にして棘条へと変わる。
「皆さん!!」
雪泉は意図を察したのか、すぐ様扇子を地面に叩きつけると、氷が発生し治崎の分解と修復を生かした技を相殺する。

サーナイトアイはエリを抱き抱え、ミリオをフォローしながら回避していく。
治崎廻はエリ目掛けて突進している。
治崎にとって他の者など適当に始末すれば良いし、第一優先がエリなのだ。
だがそれは同時に…エリを守ってるサーやミリオに危害が及ぶという事も、証明されていることになる。
「治崎…！邪魔はさせません!!」
麗王は光輝くレーザーブレードを構え、障害物を斬り捨てながら治崎の腕にブレードを食い込ませようと一撃放つ。
「ッ！小娘が……俺の邪魔をするな!!」
然し、そのレーザーブレードは弾き返されてしまう。
仰け反った彼女は、一瞬の驚きと疑惑に思考をした埋まれながら、治崎の腕を見る。
「まさか…！竜燐の…個性を！」
部下の腕で個性を発動するだけでなく、部下の個性をも扱う事が可能なのだ。オール・フォー・ワンに似た性質か、取り込み個性を使うに関しては、奪うという共通点が極似しているだろう。
「察しが良いな…これでお前らはもう、俺に触れられないぞ！お前らの汚らわしい手で、俺に触れることすら叶わない!!」
勝ち誇るかのように嘲り笑いながら、腕を振るうと同時に鋭くなった鱗を投げ飛ばす。数枚煌めく金色の鱗が麗王の身体を貫こうと襲いかかる。
（流石に何度も同じ手を食らうほど、未熟ではありませんよ…!!）
身体の軸を中心に回転しながら回避をする。
麗王や切島は竜燐の強さを知っている。個性活性化のトリガーを仕組まれてた頃なら尚更だ。
だから、既に粗方動きは読める事が出来る。
「チッ……!!コイツ忍か？　ルミリオン程では無いが、悪くないな…流れを読むかのように……成る程、お前が竜燐を…」
治崎は一瞬で理解した。

恐らくこの金髪の女性が竜燐を瀕死に追い込ませたのだろうと。答えてないはずなのに一瞬にして竜燐の個性だと分かるや否や、簡単に攻略されてしまった。
「なら、こんな使い方はどうだ？」
「おおぉぉぉ!!!麗王先輩、俺も手伝います!!」
「これ…は――烈怒頼押斗！近付いてはダメです！貴方とは相性が悪すぎる!!」
嫌な予感を察知した彼女は、増援に来る切島に制止の声を投げる。
「仲間を見捨てる奴なんて漢じゃねぇ!!今救け…」
「話を聞きなさい！治崎は――」
「そんなに死にたいなら望み通りにしてやろう」
すると、1度大量に削げ落ちた鱗を分解し、そして修復。さすればそれは、槍にして鋭利な塊と成り果てた刃物…黄金の剣の完成だ。
「こんな事も出来るのさ、これは…竜燐にはなかっただろう？」
「全てを斬り捨てる剣…まさに、万物を斬ることが出来る……切れ味が落ちなければ良いですね…っ」
「砥石なんざ要らないさ、俺が何度でも研ぎ澄ましてやるんだからな」
もう一丁と言わんばかりに、更にそれを3本生成し4本の腕で4本の剣を手に持つ。まるで昆虫…とまではいかないが、4本の腕を巧みに使い、剣を振るうそれは完全に人間離れした光景だ。
流石の麗王も一筋縄では行かないだろう。決して治崎は剣を得意とせず、どちらかと言えば不慣れ、更に付け加えれば素人。
にも関わらず治崎が圧倒するのは、個性の創意工夫にして厄介な能力とそのハイスペックな技術。
それが麗王を追い込ませる原因だろう。
「麗王センパイ――!!」
(流石にこの数は厳しすぎる…！防御をしてもブレードが斬り落とされるだけ、避けるだけで精一杯…!!)
防御しても無意味となり、避けても治崎の鍛錬された戦闘技術は忍とも対等に渡り合う。
乱破に傷を負うことなく圧勝したのも頷ける。

「クソ…これじゃあ、あの時見てぇに何も出来ねぇまま……助けれねえまま……!!」
「何方にせよ終わりだ――お前らは邪魔だから…先に消しとくか」
過去の重み…過去のトラウマが脳裏に過ぎりながらも、切島は必死に心を耐え忍びながら、拳を握る。
分かっている――今の自分じゃ先輩を助けるどころか単なる足手まとい…そしてこのまま突っ込めば死ぬということ。
死ぬのは怖い――それは生物の理論上、感情を持った者は仕方ない事だろう。だが、紅頼押斗は言ってたではないか…誰かが死ぬほうがよっぽど怖いのだと。
「俺…は……!」
凶刃が麗王の体と、切島の首を狙い、振るわれる。
反撃をしても無駄、防御も無駄、逃げること許されず。
絶体絶命とは正にこの事――
「秘伝忍法――『黒氷』!!」
凛とした声が、轟くと同時に氷山の一角を表す大きな氷が治崎目掛けて迫り来る。
「氷…!」
声主と共に見て直ぐにこれが雪泉の攻撃だと言うことに気が付いた。振るおうとした剣は、黒氷を捌くように細切れにする。
「鬱陶しいな…邪魔が次々と……」
「皆さん此処は引いてください!!下手に回るよりも先に、エリちゃんを守ることが先決でしょう?ルミリオンさんが手負いの今、介助して2人を安全に避難させるのも、務めです!ですから、此処は私たちに任せて!」
雪泉の適切な判断と台詞に、2人は我に返る。特に切島は手負いの先程の焦りに過去の事も含めて完全に冷静さを欠いていた。そんな熱を冷ます雪泉は流石というべきか。
それと同時に標的は雪泉へと変わることにもなる。
「お前は…やっぱりあの時の……」
「ええ、お久しぶりですね……貴方が極道どころか…こんな因縁めい

た繋がりになるとは、思ってもいませんでした」
それは……お互い真逆な存在だからこそ…対極な存在だからこそかもしれない。
大義を貫き、善だけの理想を作ろうとした者。
個性を壊し、対局な理想を成し遂げようとする者。
――黒影(祖父)に育てられた雪泉
――組長(親父)に拾われた治崎
ある種として善悪の対となる存在としても、放っておくは愚か、無視するなんて事はないだろう。お互いが、黙っているような関係では無いのだ。
「初めて遭った時から只者ではないと薄々感づいていたが、俺の勘が当たったか。然しこうして俺の障壁になる事までは、予想外だったよ!!」
「それはこちらの台詞…!!これ程に強大な悪だったとは……もっと早く、貴方のこと知っておくべきでした!!!」
地面に叩きつけた際に生じた凍てつく氷柱を、煌めく竜の剣が綺麗に、それこそ水面を切るかの如く容易く脆く、切り捨てられる。
それを雪泉は地面を滑るかのように治崎の振るわれる竜の剣を紙一重で避けていく。
少しでも触れれば傷を付けられ、直撃すれば致命は免れない。
ならば、腕そのものを使えなくすれば良い――
(向こうは指先一つ触れるだけで簡単に分解し、そして修復で自身のダメージを回復させる個性…それに加えて幹部の能力まで…ならば、腕を使えなくすれば…!)
オーバーホールの個性は厄介だ。だがそれさえ完璧に封じれば無力化したも同然。
ならば、腕そのものを凍らせ行動の制限をかける。
それを可能に出来るのは雪泉ただ一人だろう。次に備えて考え、予測する攻撃も、ルミリオンやサー・ナイトアイだけじゃない。
彼女もインターンで学んだ、はるか先を見据える行動。

「『雪泉！お前は次はどのような攻撃手段を繰り出す!?』」
「貴方の脅威な腕を封じるべく、凍漬けにし行動に制限をかけて畳みます!!――えッ…？」

だがそれは、己の口から簡単に打破されてしまう。
「なるほど…そうか、雪泉とやら…お前もルミリオンと同じ脅威となる存在……早々に消しておくべきか」
雪泉は信じられないという険しい顔で、自分の手で口を押さえ込む。自分の意思ではなく強制的に喋らせる…その個性はただ一つ――音本真の個性だ。
４本腕の中の一つの腕…掌に口が付いており、それが音本の個性の役割として活動している。
思ったこと、真実を吐かせる個性にこの様な使い方があったとは…個性様々だと痛感させられる。
相手の作戦や行動さえも、音本の個性を使えば丸裸も同然…考えが読めないのなら向こうから吐かせれば良い…何たる事だ。

――これでは策略では治崎には通じない。
「良い考えだ！確かに俺の個性は手で触れた物の対象を分解し修復すれば済む話…それを封じる力を持つお前――だが、音本の真実吐きの前ではそれも単なる愚策」
それこそ敵の前で策を語るバカと同じ。
雪泉の氷を警戒しつつ、翼を広げてこの空間を浮遊する。
「いや、そんなもの関係ない――」
グシャリ！と、不意な方向から弾丸らしきものが腕に投げられ骨が折れる音が鮮明に耳を打つ。
「サー…!!」
「こいつは幹部の個性を使える他にも地形変形も厄介だ！私と雪泉で距離を詰めつつ手数を封じよう!!
烈怒頼押斗と麗王はルミリオンとエリちゃんの安全を!!」

正体はサー・ナイトアイ。
５キロの押印を装備しながらしなやかに敵に素早く的確に投げるその腕力と洞察力、観察眼はプロヒーローとして賞賛に値する。
「させるかよ」
だがそんなもの、一度受けた致命傷のダメージを分解し修復すれば何ら問題ない。
考えは悪くない…だがそれが治崎にとって何ら影響が及んでいないのも事実。
「他人の個性を壊し浸ってる人間が、個性を消されることを恐れると言い…随分と傲慢なんだな」
「人間は傲慢さ――だが、お前たちよりかは幾分マシだと思うが？」
「永遠という銃弾は実は完成されていて…それを隠すためにコソコソと逃げていたわけか…そして、それをルミリオンに使用したと…
よっぽどルミリオンが怖かったか!?!」
「どけ、邪魔だ」
ほぼ至近距離に近づき、それを臆せず物怖じしないサー・ナイトアイは、ルミリオンの件もありかなり憤怒な様子。それを物ともせずさも雑音のように不愉快な顔立ちをする治崎は、雪泉の氷と竜燐の鱗を腕に纏う。
今度は中々壊れないように。
「お前なぁ…これ結構痛いんだぞ？」
分解をする…という事は一度バラすということ…ダメージは回復しても尋常じゃない痛みが体を、脳へと伝達して襲う。
治崎は４本の腕を巧みに使い、サーを分解しようと切羽詰まる。それを全て紙一重で躱し捌くサーも、中々な神業だ。
「動きが…コイツ……」
直ぐに違和感に気付いたのは、ルミリオンとの戦闘を通してだ。あの男は相手をよく見て動きを予測しつつ次なる一手で猛攻を果たす強者だった。
ならその技術を託したのは？独学ではなく教えを説いた者がいるならば？

それは全て糸を引くように直感で理解した。
「お前が師か…良い弟子を持ったなお前」
それは自身を窮地へ陥れた者への敬称か、素直に賞賛の言葉を送る。
――ミリオ。
お前は私の教えを、私を信じてくれて…本当に強くなった!!そんなお前を誇りに思う。
だからどうか、今はお前とお前の大切な、守りたいモノの無事を…!!
様々な状況で経験を蓄積したミリオは、戦闘、救助、困難苦難…それらとも全て完璧と言えるほどに強く逞しくなった。
「サー!!危なッ――」
雪泉の危険を伝える声。
予測をしつつと言っても流石に腕４本相手では捌くのに限度がある。幾ら躱しては動きを予測し行動に移したとしても、それが追いつくかどうかは別にある。
「助けます!!」
その腕を踵落としで何とか腕をサーに触れないようにデクが増援で治崎の攻撃を逸らす。
「チッ…一対三か…だが何来ようと…無意味、無理、無謀!!」
翼を広げて竜の鱗を飛ばし、雪泉はそれを扇子の風と氷を駆使して、緑谷とサーの安全として身を守る。
「いいえ、治崎――私たちのチームプレイと連携ならまだ勝機はあります!」
「今度は絶対に…エリちゃんを、皆んなを助けるんだ!!」
ワン・フォー・オール２０％――
「諦めろ、イレイザーがいない今…ジリ貧になるだけ…そして全員死ぬだけ…俺の言った通りになるだけだ」

「だからそんなことには…絶対させない!!勝って、助ける――もう二度と、手を離さないんだ!!」

絶対悪には絶対正義。

その心だけは、どんなに打ちのめされても絶対に…捻じ曲げない。

１９２話「救う人、救われる人」

　治崎との死闘たるや混戦から壁に隔たれた別途の薄暗い通路。そこには平伏せられるように倒れてる男性と、その男の背中に腰を下ろす人影。
「う…うぅ…」
「アンタの事はよォ～ッく知ってやすよ抹消ヒーロー・イレイザーヘッド」
　目隠しをされ、倒れ伏せてはイレイザーヘッドと、死なない程度に加減して損傷を与えたクロノスタシス。
「メディア嫌いのアンタとはいえど、壊理の研究過程でアンタの個性を参考にしてやしたからね。それでも表で流される報道も無いんで、データそのものが貴重なんですが……良かった、裏ルートでアンタの情報を買えて」
「……ッ！」
「あー無駄です無理無理、アンタは今カタツムリ並みの動きしか出来ません。尤も…殺そうと思えば今すぐ殺せるんですけど、こうして殺さず隔離したってことは生かす価値があるッて事ですし？彼にとって壊理然り、イレイザーヘッド然り…個性を消すことそのものの能力は、治崎にとって大いなる魅力的な力なんですよ」
　体が思うように上手く動かず、まるで1秒が1分とも一時間とも、長く感じるように動きが遅く、ナマケモノより遅く言葉通りカタツムリと同格の遅さだ。
「時間経過を待っても無駄です、短針で刺したんで一時間はそのままの効果」
　玄野　針――個性『クロノスタシス』
　時計の針のような頭髪を直線上に伸ばして刺すことで効果を発揮。受けたものの動きを遅くする。但し自身が停止した状態でなければ針を伸ばすことはできない。

「彼はね、一度決めたら止まる事は出来ないんですよ」
淡々と冷たく呟く玄野は、自身のペストマスクを取り、素顔を晒す。美形にして何処か渋さがあるが、それがまた若さとの顔立ちで美形として見える。
玄野は治崎との付き合いも長く、補佐と呼ばれるだけの事はある側近だ。
「どこまでしってるか分かりませんが…壊理ね、組長のお嬢さん何ですよ。
目的の為なら何であっても使い、果たす。オーバーホールッて男は、そういう人間なんです」

一方で、イレイザーヘッドとクロノスタシスとは別に、ルミリオンと壊理を安全に保護するように身を挺しながら二人の側から離れない切島と、レーザーブレードで壁を四角形に斬り捨てる麗王。
どうやら何とか治崎の個性によって妨害されずに避難できそうだ。
「壊理ちゃん待っててくれよ！直ぐに安全な所へ連れてくからな！」
先の戦闘で手も足も出なかった悔やみを何とか隠すように、切島は壊理を少しでも元気付けようと声を掛ける。仮免許試験で出た試験のＦＵＣで経験した人命救助がここで生かされる。
「……」
それでも壊理の表情は決して晴れる事なく、自責の念で暗雲の如く積もっている。
こうなってしまったのも全て自分のせい――自分が関わって来てしまったものは皆、不幸になってしまう。殺されてしまう。
それは壊理が嫌という程、その光景を見せられてきたからだ。
現に、自分を守ろうと言わんばかりに、真っ先に飛び込んで身を挺したルミリオンが動いた結果、無個性となり彼を傷つけてしまった。
どんだけ認めたくなくても…「自分の行動や存在が人を傷付けてし

まう」という結果に基づいて成り立ってしまう。
だからこそ…今自分がここで、ヒーローや忍達に保護されることも…この人達でさえも…傷付けてしまうのだと。

針地獄の如く、コンクリートの地面から無数に生える分解修復された障害物は、視界や移動範囲を制限させる。
（なるほど…破片となった地面は俺が触れたことにはならない…か）
対峙する三人を前に冷静に分析しながらも、治崎はそれぞれ一人一人を分析しながらも且つ、相手の動きを良く見て次の行動に移す。
（緑髪の男は…パワーとスピード特化といい…身体能力が高い…
雪泉は二人に比べればマシだが、予測と分析が出来てる…オマケに氷と風……風に舞った氷の破片は、触れれば凍り付けと…範囲が広くて厄介だ）
治崎は戦闘に於いてよく頭が回る。
緑谷出久は身体能力が高いだけで、動きの線が見えやすく、オマケに行動も読めやすい。
だがそれを雪泉の忍法によって自然とカバーに入る。凍り付けにされた状態で観察からの行動に移るその過程を妨害してくる可能性がある。足を凍り付けにされたら身動きは出来ないし、かと言って手を封じられれば驚異の個性が使えないとあっては一気に形成逆転されてもおかしくない。
早急に雪泉を消すのが良いのだが…治崎はそんな単純じゃない。
（いや、１番厄介なのは…ルミリオンを育てた師だ…）
数キロもある印鑑を時速６０キロで投げつける驚異的な神業を披露するサー・ナイトアイを前に、治崎の目は鋭く噛み付く様に睨みつける。
師を超えたにせよ、無個性になってもなお壊理を守り、態勢を維持

し続けたルミリオンを育てた男だ。
一度味わった徹を二度踏む様なヘマはしない。
先に消しておくべき存在は――サー・ナイトアイ。
「雪泉は治崎の手を――緑谷は治崎に触れるのを注意しながら援護を!!」
「はい!!」
「良いのか?連携とはいえ…俺の前で策など語っても」
「予知を使わなくとも、先程の幹部の個性を使用したのを見て、どの道お前に策は通用しないだろう」
ならば分かりきったままでも良い…今自分たちにできる最善の選択肢を選び、進まで。でなければ全滅は免れない…
数個の投げつけられた印鑑を前に、治崎は左下腕から伸びた指を一瞬で触れて分解修復を行い壁を作る。ボゴン!バゴン!と破壊の効果音が鳴りながらも、治崎はもう一度盾となった壁を分解し、今度は雪泉と緑谷の方向へ針が伸びる様に構築される。
「私たちを…!」
「でも…僕らの前じゃ意味がない!!」
シュートスタイルを駆使し足で針壁を破壊して治崎に近づく。竜燐の個性に触れたら終わりの治崎の分解の手が４本。
圧倒的に緑谷としては治崎との相性は最悪――然も動きが読めてしまう様では向かってくるだけそれこそ鉄砲玉と同等。飛んで火に入る何とやら、無茶無理無謀の自殺行為。動く的だけ。
「その言葉、そっくりそのまま返そう」
瞬間――緑谷が壁を破壊するのを読めてたのか、足で蹴り終わったタイミングを見計らい、絶妙なタイミングでツルのように黄金の鱗を再構築して緑谷の脚部を突き刺す。
「あッ――がっ!?!」
「デク!!」
「緑谷さん――!!」
一瞬の隙が命取りとはこの事で、大きさは然程大きくはないもの

の、穴が空いては自慢のシュートスタイルは出血と筋肉の破壊をさせてしまうだけ…
「お前らのような旨みはよく知ってるよ――コイツの動きは単純で読みやすい…幾ら早かろうと関係ない」
パキパキと何かが割れるような音を奏でながら、４本の腕を地面に着け、地面を一気に分解する。
足場がなくなり、掠めたところを雪泉は風を使い浮遊を上手く維持する。風がまとわり氷の破片が宙を舞う。
「秘伝忍法――……!!」
「巨大な氷柱か…同じ手は食らわないぞ?」
模倣するように、治崎は巨大な一角の塊を、雪泉へと向ける。驚異的なサイズに、思わず此方も黒氷で対抗してしまう。本当ならば樹氷扇で分解した土を一気に吹き飛ばし治崎の個性で応用した攻撃を防ごうと思ったが…良からぬ方向へ進んでしまったようだ。
「くっ…!!サー!!」
(これは…一見私達を仕留めてるように見えて…本題は私か)
サー・ナイトアイは治崎の狙いが自分だと見解すると、覚悟を決めたかのように、体を駆使して治崎の猛威に振るわれた腕を捌いていく。
掌に触れなければいいので、そこさえ忘れなければある程度最小限で抑えれる。
(緑谷と雪泉も…その気になれば殺せたろうに……二人はあくまで分断し私を率先して殺す……成る程。ルミリオンが苦戦する相手だ、個性にかまけた腑抜けではないようだ)
「お前が師なら…ただでさえ無個性になったルミリオンでも厄介だッてのに…もう二人に邪魔されながらでは効率が悪い」
緑谷は右足の損傷と、雪泉は巨大な一角の塊を黒氷で相殺しながら耐え抜いている。つまり…一対一の状況を作り上げるこの形成が欲しかった。
治崎は相手が邪魔をするのであれば決して見くびったりはしない。全力で排除するのみ。その為には手段は選ばない。

「そして雪泉に使った分、地面は不安定…お前の動きに制限を掛け、俺は竜燐の翼で浮遊しながら円滑に事を進める。これは…お前が視えた未来か??」
「私は何もかも全て未来を視てる訳ではない、いつだって見据える先は――笑顔溢れるユーモアのある明るい未来。壊理ちゃんの泣いてる姿、苦しむ姿は、視るつもりもそんな未来にする気もない!!」
だからどうか…ルミリオンが命を懸けて守り通した少女を……私にも懸けさせてくれ。
全力で守り通す…ほんの数秒だろうと――

ザクッ――

だが、それは本当に本当のほんの数秒で
「お、え…?」
「な…んと……」
いつだって現実は不平等で残酷だ。
「ッ――サー!!」
肉が抉れた音、幾ら遥か先を見据えるサー・ナイトアイでも…分解をする際の予測はできても、標的にされて仕舞えばそれすら無意味で、ルミリオンと比べても、師の方がずっと簡単で
「言った通りになるだけだって言ったはずだ――もう邪魔だ」
腕や足、腹部に黄金の鱗とコンクリートの地面で再構築されて無数の棘がサー・ナイトアイをこれでもかと言わんばかりに、滅多刺しにされていた。
「サーーー!!!」
「そんな…!!ナイトアイ!!」
緑谷の悲痛の叫び、雪泉の蒼白とした震える声。

それらも御構い無しに猛威を振るう治崎は、切島と麗王、ルミリオンの方向へと突っ走る――

「こうなったら…ルミリオン先輩だけでも早く先へ!!」
「こうなる以上、私達も己の使命を全うするまで…私たちでも時間稼ぎにはなります。早く――!!」
「みん…な……」
此方に危険が及ぶと理解するのは早く、切島は無敵の烈怒頼押斗になり、麗王はレーザーブレードで構えを取る。
満身創痍のルミリオンと壊理をこれ以上傷付けまいとする、二人の後ろ姿は勇敢――でも何処か無謀なようで、勝機の未来は余りにも薄すぎる。
死んでも止まらない治崎は、きっと殺す気で挑んでも止まらない。

「…もぅ…良いです……」
ふと、ルミリオンの近くで震えた弱々しい小さな女の声が、鮮明に聞こえた。
「ごめんなさい……私のせいで皆んなが…死んじゃう…殺されちゃう……ごめん、なさい……!!」
涙を流しながら、少女は皆んなに謝罪をしながら、己を責め立てる。ずっと蓄積した負の概念が、自分の行動によって他人が傷付いてしまうという概念が、彼女を縛り付ける。

致命傷を負ったサー・ナイトアイは、朦朧とする意識の中、己の死を前に治崎に触れた。
(伝えなければ…これから先に起こる未来…それが一体何か…どう治崎を捕まえるのか……打開策を…次の……一手を…)
サー・ナイトアイは絶命する前に個性を使用した。
予知は全面チームアップの会議でも述べた通り、発動するのには大

きなリスクとインターバルが必要となる。
だから、最後の出しっぺとはいえど、確定した未来だけでも伝えなければならない…これからこの先、何が起こるのか。
未来予知で視てしまった未来は変えられない、確定のものへとなってしまう。では一体なぜか？
それは本人が何度も試したからである。だが――結果は変わらず。
見た未来と全く異なる行動を取っても、長くて数分の後に帳尻を合わせるように、元の流れに戻されてしまうのだ。
余分なカットを挟み込むだけ、そこから未来が分岐することは無かった。
これは自分がこの個性を発動することで、その人の未来が決定付けれれると知り、オールマイトの死を未来予知で視て以降、彼は他人の将来の予知を辞めた。
だから、サー・ナイトアイは治崎との戦いでも使わなかったのは、最悪な未来を決定づけてしまうのを恐れるため。
それは…全員が殺され治崎が壊理を連れて逃げ果せてしまうという、バッドエンドな最悪な未来。
それでも逆に、未来を視ることで治崎が捕まり壊理が救われる未来もあるのなら、一か八か…最後の悪あがきとでも呼ぶべきか、予知を使い治崎の未来を視た。
それは敗色濃厚の中、一縷の望みをかけて希望がありますようにと――
サー・ナイトアイが見た予知の未来…果たしてそこには何が映ってるか――
「ッ…!!!!」
サーは絶句した。それは…
全て真っ黒に塗りつぶされた未来。
更にそこから過去へ戻ると…

雪泉も、緑谷も、切島も、麗王も、ルミリオンも殺され、壊理ちゃんは絶望の顔で連れ去られ逃げ果せてしまうという、尤も最悪な未来が、恐れていた、見てはいけない未来を――視えてしまった。

「何を言ってるんだ…エリちゃん！気にしなくて良い…大丈夫…！まだ、何十人もの人間が君を…助けるために…動いてるんだよ！此処は…二人に任せて早く安全な――」

「でも…何十人ものの人が…私に関わったら、その人達も死んじゃう…殺されちゃう……」

「そんなことない!!君は…そんな事考えなくても良いんだ、だから――」

諦念し諦めるように絶望が覆うエリを必死に励ますルミリオン。そして次に防戦一方でなんとか治崎を食い止めてる切島と麗王。

分解して修復を行う障害物による針も、烈怒頼押斗では通用せず、麗王は軽い身のこなしと華麗なる剣捌きで対抗する。

（チッ…流石に他の奴らとは違って守り続けられても拉致があかない…これ以上粘られて増援が来てもややこしいだけ…こうなったら）

苦虫を噛み潰すように苛立つ治崎は舌打ちをしながら、腕を掲げて――

「『エリ！これで良いのか!?お前のせいでまたまた死ぬぞ!?これが望みか？本当にこのままで良いのか？エリ!!』

忌々しい掌から呟かれる声が、この場の空気を嫌に凍り付かせる。

麗王も、切島も、ルミリオンも、音本と呼べるだろう掌に注目してしまう。

「『言ったはずだ！お前に関わって来た奴らは皆死んでしまう！そういう呪いを生まれ持ってしまった存在なんだ!!これが現実、いつまでも病気に浸ってるんじゃあない!!!』」

耳が痛くなるような声と共に、壊理の脳裏には焼き焦げた様にこび

り付くトラウマが、フラッシュバックを起こして蘇る。
自分が脱走する度に殺される世話係の構成員。
何度も分解されては修復を繰り返される生き地獄。
自分の安全のために命を懸けてでも、笑顔を絶やさず庇ってくれたお兄さん。
鮮明に蘇る度に心臓が握り潰されそうなほど痛くなり、苦しくなり、発狂して泣き叫びたい程の恐怖が、全身を駆け巡る。
「この野郎…！エリちゃんに何てこと――…」
「思わない――」
憤慨を噛み締めながら吠える切島の声を遮断するように、壊理が答えた。気がつけば体が勝手に動いており、治崎の方向へ足を運んでいる壊理。
「壊理…ちゃん！」
脚を損傷しながらも応急処置用に携帯していた包帯で止血を終えた緑谷。
「壊理さん！早くルミリオンさんの元へ――…！」
巨大な塊を全て破壊し終えた雪泉は、いち早く状況を知り戻れとの声をあげる。然し今の精神を追い詰められてる壊理には馬の耳に念仏だ。
「『なぁ壊理、コイツらが俺に勝てると思うか？この状況…ルミリオンなしで、子供達で何とかなると、本気で思うか？』」
「…ッ、思わない……」
その言葉に、一同は言葉を失う。
そしてその言葉を発してしまう壊理本人も、心が折れるように痛く感じる。
真実吐きによる個性は、相手の行動や作戦のネタを明かすだけでなく、こう言った精神的な攻撃方法もあるというのはルミリオンと音本の戦いで実証済みだ。
「『じゃあお前はどうするべきだ？』」
「……も、どる……」
正常な考えができず、真実や心に思った本音を、吐き出してしまう。

本当は戻りたくない…でも、戻らなきゃいけない。只でさえ精神を被虐的に追い詰めてしまっているのに対して、治崎は傷に塩を塗るように、更に追い詰めるように、言葉を使い、逃げ場を無くし、精神を弱らせ抵抗も脱走もしないように此方側に誘き寄せる。

目的のためならば手段を選ばない――狡猾で残酷なやり手だ。

「でも――その代わり…この人達は見逃して……」

その反面、壊理は自分を捨て他者の安全を最優先に選ぶ。例えそれが救われるのなら…己をも顧みない。

「皆んなを…元通りにして…!」

自分の命よりも、いや…己を犠牲にしてでも、他者の事を考えられる壊理。こんな状況、泣き叫びたくて、でも保身に走るような情さえ無くすほどに追い込まれた少女は、ある意味異常だ。

そして彼女を異常にしたのも治崎である。

「何をバカな事を…壊理さんは早く…ルミリオンさんのところへ……」

「そうだよな――お前は自分のせいで他人が傷付くよりも、自分が傷付く方がずっと楽だもんな」

そして壊理がそうならざるを得ないことも、他人の命を優先するような心優しい事も、熟知している。

「ッ!貴方という人は…!!だま――」

「まだ分からないのか雪泉とやら、お前らはコイツを救うべく命を懸けて動いてるんだろうが…そもそもそれが大きな間違いだ。

ルミリオンならまだ望みはあったが、奴で芽生えた淡い期待が砕かれ、コイツにとって最も残酷な仕打ちをしてることに――」

こうなる様に全てを仕組み、調教し少女の心を犠牲にする治崎が残酷な仕打ちとは、これ程皮肉が効く言葉はないだろう。

「お前の正義も、お前らも、何一つ求められちゃいない――」

そして高らかに見下ろしながら、雪泉の正義も、ここに居る皆の存在ごと、全て否定するかの様に言葉を吐き捨てる。
「何だよ…それ…!!」
苛立ち義憤に溢れる緑谷の声は、重々しく、治崎を睨み付ける。
「ならば聞こう、ルミリオンが無個性になったのは誰のせいだ？その師が死んだのは誰のせいだ？
ぜーんぶ…エ――」
「悪いのは貴方でしょう…!!そうやって、小さな子に罪を擦り付けて…極道ともあろう者が聞いて呆れる…！」
緑谷だけでなく、雪泉も食いつく様に、これまでにない義憤と正義感が、折れる事なく彼女を突き動かす。
「壊理さんは何も悪い事なんてしてないでしょう!?何故、被害者が加害者扱いされなきゃいけないんですか？
無個性にしたのも、サーをこんな目にしたのも、実行したのは貴方です!!この子には何の罪もない!!」
「罪はないとは…両親を消した奴に対して随分とした言い様だな」
「現に…まだ私たちは生きている…貴方がどれだけ強くても、私たちが死んでない以上は、まだ――」
「そうだよ…!!余計なお世話だとしても、壊理ちゃんが泣いてる以上――ヒーローは綺麗事を実践するお仕事さ!!
だから！お前の言った全員が死ぬだなんて未来変えてやる！僕らが全員生きて壊理ちゃんを助ける!!」
二人の目はまだ死んでない。
不屈の闘志、諦めという言葉など辞書にない二人は、どれだけ現状に打ちのめされようと、この子を救うために動き出す。
現に緑谷は何処か林間合宿のマスキュラー戦を沸騰とさせる。
「諦めが悪いとこうも救われな――」
ビシリッ――
ため息交じりに心底呆れる治崎の言葉が、天井の亀裂と共に途絶え、全員の視線が重々しい音に注目する。
それは数秒も経たぬ内に、破壊された。

ドゴオオオン――!!と豪快な破壊と共に、外から発する太陽の日差しが照らされる。
それと同時に大きな影が覆い、人影もチラホラと見える。
「アレは…?」
落下してくるのは、玄関の前でリューキュウ事務所に取り押さえられてた八斎會鉄砲玉――活瓶力也、だが最初に一眼見た時と違い、Mt．レディと渡り合える程のサイズに変化している。
そして力也の首元にかぶり付き、体を抑えてるリューキュウと、力也の首元を鎖鎌で巻いてる総司、波動を飛ばしてる波動ねじれ、他にも蛙吹梅雨に麗日お茶子もいる。
「ケロ…!」
「えっ、ちょ…デクくんなんで彼処に…?!」
「せめてもの…これが蛇女の誇りだ!!その脳内にしかと埋めておけ!」
「ドンピシャ!!」
運命は、違う方向へと加速する。

１９３話「救われる人の力」

これは八斎會に突入しリューキュウ事務所が活瓶力也と対峙してから４０分前の事。
玄関前で難なく取り押さえることに成功し、警察の協力もあってか移動牢式に収める事ができた。既に敵は気絶してるためか、抵抗する様子もなく微動だに動かない。
「少し遅れましたが私たちも行きましょう！活瓶力也が気絶してる今、気を失ってる内に隔離させて下さい！」
リューキュウの適切な指示と対応のお陰か、すぐ様に取り掛かる敵取引係の警察たち。
活力吸収は相手に触れてる事と、吸息をする事で始めて活力を吸い取り巨大化する事ができる。正面突破を目論むヒーローと忍達の前にしては中々に相性が良かったか…総司の鎖鎌を用いた武器の前では、触れる事が出来ないため、彼女が先陣を切って活瓶をいち早く抑えたのはかなりデカイ。
「然しインパクトの割にはあっけなかったわね」
リューキュウが指示を出してる中、ポツリと率直に愚痴を零す蛙吹。その横で「フッ…」と鼻で笑うは総司。
「所詮は三下……然しながら我々に臆せずの命を賭して奮闘しようとしたその心意気は認めてやろう…まぁ、私の美貌にトチ狂い性欲を剥き出してしまうのは些か仕方ない…目を瞑ってやろう」
長髪をふわりと華麗に払いながら、余裕と言わんばかりにプライド高い姿勢を振る舞う。
「個性凄く厄介なのに直ぐ制圧できた…やっぱり前にニュースで取り上げられてた巨大化敵の鎮圧の事件の成果が生かされてるんやね！」
「中も荒れてるみたいだよ、急いだ方が良いよ！」

華麗と相性良好のチームプレイに胸が踊るお茶子に、戦の混声に溢れかえってる門の方へ指を向ける波動ねじれは、先へ進むことを促す。この先彼女達は何が待ち受けてるか分からない…だからこそ、仲間のピンチに一秒でも早く駆けつけなければならない。
況してや本人の希望とはいえ、インターンに死人が出るなんてそれこそ最悪だ。
「ケロ…ッ」
そんな時にふと蛙吹が弱気な声を出してはガタリと倒れこむ。
「梅雨ちゃん!?」
蛙吹の急な変化に、お茶子が駆けつけに来る束の間――
「なん…だ…?急に体に力が…入らん……」
同じく、先程まで強者の余裕と振る舞い麗しくしてた総司も、鎖鎌を持つのもやっとで、膝を地面に下ろしてしまってる。
「この現象は…そんな、まさか!?」
蛙吹や総司だけではない、周りの警察官達や敵受取係も体調が悪くなり、バタバタと力無く倒れてしまう。幸い命に別状がある訳でもないが、この不可解な現象が何たるか、リューキュウは直ぐに気付く。
「活瓶力也!?いや…彼は気絶してる、その上触れてなければ個性は発動しない…」
まるで活力が抜き取られたかのように、次から次へと感染するように倒れてしまうリューキュウ事務所と警察達。
「イテッ…なんだこりゃ」
気絶してた活瓶がピクリと反応し、気絶から眼を覚ます。移動牢式がギチギチと破壊するような嫌な音を立て、それと同時に力也の体が少し大きくなってる様にも見える。
「そんな!?触れてないのに何故?!」
誤情報を捕まされた?
嫌、そんなはずは無い。確かに戸籍登録に個性の詳細は既に登録されているし、戦闘の時も触れずに周りの人間の活力を吸収などしていなかった。仮に出来てるのなら出し惜しみせず使ってるだろうに…とてと力を隠してただなんて見えやしない。

「おぉー…来てますわぁ～来てますわぁ～…入中から貰ったトリガーが今になって漸く効いてきたァ～…今じゃ呼吸するだけで、吸ってるぞ！活力を!!」
バキィン!!と割れるような音が際立て、体の大きさが止まること知らず大きくなっていく。
「凄く元気になってきたあァァ――!!!」

どうやら、まだまだ戦いは終わらせてくれないらしい。高ぶる衝動にウキウキと駆られながら、渾身の拳を振りかざし、街を荒らす。
今じゃ一撃だけで一家丸々殴り潰し、此方側が弱体化してる上に向こうがパワーアップでは一気に勝機が薄くなる。これぞ形勢逆転とやらなのだろう。
こうしてそれが過ぎて役４０分後――まだ奮闘は終わらず、活力瓶は凡ゆる暴虐の限りを尽くしている。幸いヒーロー学生と警察、総司と言った学生組は無事だそうで、波動ねじれは一人で何とか注目を引き立てている。
リューキュウまで活力を奪われ、何とか踏ん張るだけで精一杯だ。
「あー…めんどくせぇ…」
「にゃんにゃん…にゃん…」
「酒飲みテー…」
「…お餅たべたい…」
やる気のない脱力感ある声だけが投げられ、怠惰的に寝転んだり尻餅ついたりしてしまう始末だ。リューキュウは皆を守るように背中の翼を広げて盾になっている。幸い此方側に危害を加えず波動ねじれに注目が傾いてるのが救いだが…彼女はどの位持つだろうか…。
「ねじれちゃん!!」
「はっはぁーー!!」
何度も波動を飛ばすも全く効いてない様子で、ペースを下げることなく何度も激しい暴走を続けるばかり。
幾重ものの建物の被害や損傷が大きく、民間人も避難を余儀なくさ

れている。
「おい、薬が切れた。そこのお嬢ちゃん、お尻触らせてくれよォ!!」
「ムゥーーッ!やだ!」
波動ねじれ――個性『波動』
自分の活力をエネルギーに変えて衝撃波を放つ。そしてその波動はねじれているため速度はない。
「クッ…まさか、この私が……こんな、ところで…」
リューキュウの影に守られながら、脱力感と活性を失われたことに、己の怠慢に腹が立つ。
幾ら個性による影響とはいえど、常に完璧を振舞ってた彼女が活力が吸われた事で、何も出来ない体を動かすこともままならないような失態。それらは常に誰もが美しく完璧で居続けた総司にとってはとんでもない残酷な仕打ちだ。
(考えろ…!体が動かない…から、なんだ?! 戦場の死地で、活力がないから、動けないじゃ…そんなの戦いじゃ通らない…!そんなもの、意味がない…!!)
頭の中で分かっていても、体が言うことを聞かない。
そもそもの話、プライド意識が高い総司にとって、失態やこの体たらくは勿論のこと、何よりも守られていることだ。
無様な姿を曝け出し、完璧主義と常に言い張ってる自分が誰かに助けられ守られてしまってるこの体たらくが、総司に冷静さを欠かさせ、苛立ちを込み上げさせていく。
彼女の完璧主義としての思想は、誰かに救われる事や守られることは違反する。
(もし、焔だったらどうする…?雅緋だったら……)
此処で頭に過ぎるのは、嘗て蛇女の選抜メンバーとしてライバルと認めた焔。次には今も蛇女を支え、憑黄泉討伐者の雅緋。
何故二人が浮かび上がったのか…なんて考えることすらバカバカしく思えてしまう。
「がんば…ろうよ……」
「何ッ…?」

隣で弱々しい声が、総司の耳に伝わる。声主に振り返ると、息を荒げながら、何とか立ち上がろうとするお茶子。
もう既に活力は吸い取られ、立てる気力さえ湧かないのに、己を鼓舞するように、小さな言葉をポツリと呟く。
「デク…くんや、ねじれ先輩に……他のみんなも…先に行って必死に頑張っとる……エリちゃん助ける為に動いとんのに…ウチらだけ動けないって……そんなの…」
震えながらも何とか奮い立たせるお茶子は、顔色が悪くなりつつも、それでも喉を絞り出して声を出す。
「ケロ……お茶子ちゃんの言う通りだわ…。折角皆んなが危険を冒してまでも動いてくれてるのに、私達だけ何もできないままじゃ…エリちゃんにも皆んなにも…顔向けできないわ…」
お茶子同様にグロッキー状態だった蛙吹も、体に力が入らずとも、薄れる意識の中で何とか喝を入れる。
「……心意気は良しとして…策はあるのか?この体たらくではマトモに応戦にも駆け付けれない…私が言うのもなんだが、普通の戦闘では勝ち目はないぞ」
「あら、普段は弱音を吐かない総司ちゃんが珍しいわ…ケロケロ…」
「…それ以上言うならばもう口は聞かんぞ蛙吹とやら」
完璧主義な総司も、活力を吸われてる影響もあるのか、美や完璧主張を通す余裕はないし、先陣切って正面突破は難し過ぎる。そんな余力もなければ、無茶を通せば体が動かせなくなってしまう。
このままねじれに任せ、リューキュウに守られながら、少しずつ活力を戻す方が、安全性を保ちながら、何とか鎮圧することは出来るが、これ以上の時間ロスは望ましくない。
かと言って考えなしの連携体制でも、逆転狙いが水の泡になる事もある。
今彼女らは、慎重に事の選択を選ばなくてはならない天秤に掛けられてるのだ。
「麗日さんに皆んな!!」

ふと、自分達を呼ぶ聞き慣れた声が、三人の耳に届く。いや、麗日達だけじゃない、リューキュウやねじれにもその声は聞こえた。
「あれ…っ!?デクくんなんで…!!」
「応援を呼びに来たんだ!あっちの十字路の真下に目的がいる、プロが戦って足止め中だ!!直ぐに加勢を!!」
其処にはあるはずがないであろう緑谷出久。
だが本人の説明と意図も分かり、状況が読めたリューキュウは、僅かに残った体力を振り絞り、活瓶目掛けて突進する。
「皆!彼の指示通りに!!」
「イテッ」
突進し体をぶつけるリューキュウ、そのまま活瓶の腕に噛み付き、活瓶はリューキュウの翼を鷲掴み引き離そうと試みる。
「ウラビティ!!」
「りょ…了解です!!」
「ム…?」
引き続きお茶子は、僅かながらに回復しつつあるだろう活力を常に消費しながら、活瓶の体に触れて、無重力化状態にする。
「フロッピー!!」
「ケロッ…!」
「オ…?」
長い舌で活瓶の両腕を拘束するように素早く巻きつける。活力が抜けながらも繊細に舌を使うポテンシャルの高さは賞賛するものがある。
「総司!」
「…っ!言われ…なくとも…!!」
「おぉ…!?」
リューキュウの命令に、悔し混じりに歯を食い縛りながらも、鎖鎌を扱い活瓶の首に巻きつける。
不覚――完璧超人を貫き通し、圧倒的な技術と実力で鉄砲玉やその他の構成員を一掃するつもりだったのに…鉄砲玉とはいえ幹部。幹

部とは言え鉄砲玉――だが総司にとって完璧であるのなら、相手が誰であろうとも叩き潰す。
それが悪忍らしくとも彼女なりのプライドもあるのだろう…だからこそ、自分の思い通りにならなければ苛立ちや悔やみも含まれ、時には折れる事もあるだろう。
嘗て爆豪が戦闘訓練で心が折れたかのように――自分の思ったことを常に当たり前のように出来る、なんてのは実戦してみようとすれば相当に難しいのだ。
怒りの感情を上乗せするよう、思いっきり十字路の真ん中目掛け、地面に叩き落とそうと勢いをつける。
「ネジレ!!私ごとありったけを!!」
「うん!」
「おいおいオイオイまてまて待て待て!!」
あれ程猛威を奮ってた活瓶も、形成逆転と言わざるを得ないように、手も足も出ずに翻弄されてしまう。
青空を背景に見えるねじれは最大出力の波動をリューキュウの背中に直撃し、のし掛かる勢いと重さが増す。
「何で動けるんだよ女共おぉぉ!!?」
活力を吸った人間は立ち上がる事すら困難。
気力だって抜け落ちるのに、何故…況してや女達だ。どうして女相手に自分がこうもやられなければならないのか。

『毎日言われてるから――』

全員がこう口にする。
「更に向こうへッて――」
「命懸けで取りに行けとな――」

そして地面は崩壊し、地下に広がる修羅場のような戦場へと落下していく。
それはまるで奈落のような、地獄の入り口とも呼ぶべきか、針山地

獄のようだ。治崎が分解修復した跡が残っており、幸い落下する場所に障害物はない。
そして大きな勢いと共に、鎖鎌で地面に叩きつけ、ボディプレスで活瓶に勢いを活かして地面にぶつける。
「ッッッ――――!!??」
声にならない悶絶な勢いに、失神する活瓶力也。
そのままぐたりと大の字に倒れ伏せ、戦意を無くして気絶する。幸い命に別状はないようで、呼吸は安定している。
「デクくんどうして此処に…？」
「ケロッ…じゃあさっきのは…」
地下に来てみれば、何故か先ほどまで十字路に居たであろう緑谷出久の姿が見える。
暗疑を晴らすべく上を見ようとするも束の間――
ドゴオオオン――――!!!
と、轟く破壊音によって意識は其方へと傾いてしまう。土煙の中からは人影が二人、地面に倒れ伏せてるのは一人。
「よっしゃあぁぁあぁ!!開通突破だ、やるじゃねえかサンイーター…!!」
「ハァ…ハァ……ファットから貰ったカジキ…食べておいて正解だったよ…」
多少切傷が荒く血が滴り落ちてる夕焼と、右腕をカジキマグロに変化しビチビチと跳ねるように動かすサンイーター。殴られた跡や、目には殴られたかのような腫れた跡…恐らく戦闘の際に負った傷だろう。倒れはしてるのは、カジキマグロと夕焼の助けもあった為か、吹き飛ばされた護武皮。戦意は失ってる為か、立ち上がる気力もなく気絶している。
「アレは…夕焼とサンイーター!!」
リューキュウ事務所のメンバーと同時に、夕焼とサンイーターの二人組も息ぴったりで合流した様だ。
「もう一人のガキは壊した壁辿ってきゃ居る!!大人しく眠ってるから誰か拘束頼んだ!!」

ガキというのは崎子の事だろう。現に今彼女はぐったりと壁にもたれかかり、刀はへし折られていた。
「それよか今…どーなってんだ!?ありゃ治崎か…？写真と随分違ぇし禍々しくなってんじゃねえか!!」
壁を壊してやって来てみれば、変貌を遂げた治崎と言い、ナイトアイの悲惨な重症といい、活瓶やリューキュウ達が居るといい、破茶滅茶な展開に頭の整理が追いつかない夕焼は叫ぶ。

「……ねぇ、あの混沌としてる死地の穴に俺も入れって事？鬼畜かな??」
一方で、十路地に大きな穴から覗き込むは敵連合。
黒柴との会話を終えてから、トガの思惑通りに行った現状…Ｍｒ．コンプレスは大困惑していた。
「そそ、んで核ってのがアレよ」
「アレッて…子供か。まさかだとは思うけどその核を取るためにあんな地獄みたいなところへ行って帰ってこいとかじゃないよね？おじさん仲間想いだって信じてるよ？」
「大丈夫だ！その為に強力な奴も増やしといた！」
「おいトゥワイス、トガ。状況どーなってんだ、ア？俺アコンプレスと闇と一緒に集合場所に行ってガキども殺して爆豪と雲雀を攫うんじゃねえのかよ」
「ちょ待って!?そういう問題!?!てか黒佐波増やしたのは心強くて良いんだけど…いや良くないよ！じゃなくて!!俺の片腕の復讐でもあるよね!?俺増やしてあんな場所行けってんの!?無理無理無理！おじさん戦闘要員じゃねえのよ?!なのに何で如何にも秒殺しそうなメンバーがゴチャゴチャいんのよ！てか黒佐波めっちゃ久し振りだけどそれ随分前というか終わってる事じゃん！」
「安心しろ！お前も黒佐波もコピーだ！コンプレスだけじゃ勝ち目もねぇし難しいだろうし酷だろうから強力な助っ人増やしたんだろ！早くしてくれ人が来ちまう」
「んで？俺は何すりゃ良い？小せえガキ殺せば良いのか？死柄木の指

令とちげぇんだが…？」
「まず下にいる小さな子供以外全員ぶっ殺してくれ!!後で説明するから！しねぇさお前は死ぬんだよ！」
「出久くんは殺しちゃメッだからね」
「此処も既にプルスケイオスしてた!!?!!」
　コピーで増やしたＭｒ．コンプレスと黒佐波に口論するトゥワイスとトガ。因みに黒佐波が何故林間合宿の時のままなのかというと、それはトゥワイスが最後に計ったデータがその時だからであり、イメージ通りに作った黒佐波が、その時のままだからである。
「乱波も良いんだけど雪泉先輩に瞬殺されたからねー…アンタの腕に期待するよ黒佐波。帰ったら私と漆月と殺し合いして良いから」
「本当か龍姫!?よっしゃあ！俄然殺る気出たぁ!!オイ行くぞコンプレス!!アイツらも全部俺の獲物だ、一人残らず殺しといてやるよ!!」
「マジで!?ねぇーもう本当に怖いって無理無理無理!!お前もアイツらもイカレてるよサイコパスすぎるでしょ!!少しでも優しさ感じちゃってた俺が馬鹿だったよ!!」
　大混乱の如く修羅場と化した戦場に足を踏み入れる敵連合が乱入。黒いマスク越しでもヒシヒシと伝わる強者の笑みを浮かべる黒佐波に、嫌々と首を横に振りながら叫び声を出すコンプレス。
「敵連合…!?」
「オメェらリストに見ねえ奴らだな!!それも良しまた一興!!歯ァ食いしばれ、久し振りに血沸き肉踊る壮絶な戦いをしようじゃねえか!!!」
「もう何が何やら…！」
「お茶子ちゃんあれ!!」
　活力の限界と共に冷や汗流すリューキュウに、拳を握りしめて満面な笑みを浮かべ殴りかかる黒佐波。コンプレスはいち早く此処を脱出したいが為に壊理を狙う。
　破茶滅茶な展開が続くばかりの現状に、蛙吹が指をさして意識を其方へ傾ける。
「ッ…!!?サー・ナイトアイ…!!」

悲惨な目に迎えたサーナイトアイに、悲痛な声で叫ぶお茶子。

「どいつもこいつも…鬱陶しい…ふざけんなゴミ共が――」

大混乱な戦場へと成り果てた事に更に悪態を吐く治崎は、地面に触れて大分解と修復を繰り出し、穴の空いた天井へ登っていく。勿論、壊理は忘れずに抱えている。

「あーっ！畜生!!後少しだってのに！」

悔し混じりな声を叫ぶコンプレスを他所に黒佐波はこんな時でも戦闘を楽しみ、多対一という不利な状況下で戦っている。

「これは…！ナイトアイを保護しないとマズイぞこの傷は…！」

「わーってるよサンイーター！お前が連れてくかにしろ！この野郎…マジで早えし強え…!!一撃一撃で体ごと吹き飛ばされそうだ！」

「むーっ!!早く吹き飛んじゃってよー!!!」

「二刀流に波動か…!!波動使いは俺と少し似てるなぁ…！面白ぇ！お前らもちゃんと味わって殺してやるからな!!な!?」

此方も此方で手一杯で、ナイトアイを保護する事も難しそうだ。プルスケイオスとは、随分と皮肉が効いている。

そうこうしてる間に治崎はエリを抱え込み、天井へと登り逃げ果せようとしている。

「「治崎!!!」」

緑谷と雪泉の怒りの叫びが、交わりシンクロする。

割れた地面の更に下を分解・修復して上へ上へと登りつめる。それはさしずめ地獄から天へ舞い戻るように、放置していれば数秒後に確実に逃げられてしまう。

それだけは、何があっても起きてはならないこと。

「エリさんを返しなさい!!!」

「させるかぁぁ!!!」

雪泉は氷と風を巻き起こし、最大出力で距離を縮ませ、緑谷は手を

伸ばし、ワンフォーオールを利用し大きく跳躍する。
「ッ…!」
ふと地上へと登りつめる瞬間、バサリと上から破けたボロ布のマントが、治崎の横へ落下するように舞っていく。
「これはルミリオンの…巻き上げられたのか…全く、気色悪い……」
「あっ…お兄さんの……」
これは治崎と戦ってたルミリオンが、エリに優しく包んでくれたマント。全身を覆うような布マントは何処か温もりがあって、心地よく感じる。
『ヒーローがマントを羽織ってるのはいつだって！痛くて辛くて苦しんでる人を、優しく包んであげる為だ!!決して飾りでも気取りでも何でもない!!!』
そのマントを、手を伸ばして掴み取った。
意識して掴んだわけではない。
ただ――私は…
ミシッ!!と嫌な音が、ミシミシと治崎の体に鳴り響く。
「なッッ!!!?」
ふと、体に異変が起きた治崎は、痛みもない不思議な体幹を覚えながら、記憶の片隅にあった組長との会話が蘇る。

『治崎、お前…俺の娘覚えてるよな？』
『ああ…結婚で揉めてウチと絶縁した…』
『あれはその娘の子だ…あのバカ、子供を捨てておった。旦那が死んだ、この子は呪われてるってよ…ある日、旦那があの子に触れようとしたら消えちまったらしい』
『消える…そういう類の個性…？娘の個性まではよく知らなくて…』
『どちらの家系にも全く類似しない個性が発現したんだ。突然変異つってな…呪いなんかじゃねえよ、ごく稀にそう言ったことはあると聞く。能力の詳細も使い方も分からねェし、本人にも自覚がないんだとよ。だが消滅したってケースに関しては、治崎…お前に似てる』

『俺と…?』
『世話ついでにあの子の個性調べあげてくれや。そういうの得意だろお前?』
組長と会話を終え、サンプル品として壊理の個性を使うよう、モルモットを検体として使ってみた。
『ッ!?俺と似てるなんてとんでもない、修復、治癒…直すとかじゃない、これは下手すれば…簡単に人を殺せる…こいつは、恐ろしいな』

壊理――個性『巻き戻し』
触れたものを巻き戻し、暴走すれば周辺のものを巻き戻し、或いは消滅させてしまう。戻す力が少なければ大した影響はなく、大きければ大きいほどに年齢を始めた全てが巻き戻され、最悪生まれる前へ…つまり消滅してしまう。
治崎に個性を使い巻き戻したことで、悍ましく歪んだ姿をした治崎は元の姿へ、音本と竜鱗は引き剥がされるように離れ、気絶してる二人は落下する。
初めて脱出を試みたあの日、ルミリオンやデクと出会ったあの日、この男から結局逃れられないのだと――彼女は諦めた。
自由もなくただただ身を切られ
意味もなく訳も分からず悲痛な思いをし
何度も叫んでも助けてはくれやしない
使い方すら分からない知らない恐ろしい個性、そんなものを生まれて持ってしまった自分が悪いのだ。『呪われている』――そういう宿命なのだと、受け入れる他無かった。
ルミリオンの行動が、ヒーローとしての叫びが、魂が、彼女の心を揺らしたのだ。
「もういいのに…」
自分を救わんと傷ついていく姿が、その人達の苦しむ顔が見たくなかった。何より辛かった…。
「死んで欲しくないのに…!!」
でも…この人たちは死んでも諦めない。

新たに芽生えた想いが――「救からなくては」という強い思いが、彼女を覚醒させる。

１９４話「無限∞」

救われないと思っていた少女は、決死の覚悟で飛び降りる。
空高く上昇する形状を保った岩から、少年少女目掛けて飛びつき、救いを求める。
今まで、救いを求めた所で、不幸な人間が増えるばかりだと思っていた。
行動が、いや…存在自体が人を簡単に殺める個性で、そんな呪いの力を持ってしまった自分が悪いのだと、ただただ責め立てていた。そうでもしないと、この呪いの運命に格好や理由が付かなくなる。そう思えなければならない程に、少女は追い詰められていた。
『エリ、何度言ったら分かるんだ。これ以上俺の手を汚させないでくれよ…お前の行動ひとつで簡単に人の命は落としてしまう』
治崎は、いつもこう言い聞かせていた。
『ジッとしていろ、まだお前の細胞が足りないんだ』
『お前の個性は、人を簡単に殺してしまう…呪われてんだよ、存在自体が』
『じっと部屋に居るんだぞ?また、誰かが壊されたくないだろ?』
心を抉り、不安を煽り、精神を追い詰め、余裕や安堵の息を掻き消すかのような、一つ一つの治崎の言葉は呪縛のように彼女を縛り付け、そして逃げ出すという選択肢を無くし、なすがまま治崎の言いなりに聞かせる光景はさしずめ洗脳と言った方が妥当だろう。
だからもう、心を閉ざして救いという希望を夢見るのは諦めた。
もう誰も救けてくれる人間なんていやしない…いや、仮に居たとしてもその人が巻き添えを食らって消されてしまうだけ。
だからあの時――少女は、緑谷出久の手を離し、完全に脱走を諦め

た。

諦めるほか、無いのだと。

でも違った――治崎から逃げられないという事実を突きつけられ、完全に諦めていたのに…。

『俺が君のヒーローになる!!』

通形ミリオに

『悪いのは全部貴方でしょう!!』

雪泉に

『誰も死なせない!!君を救ける!!』

緑谷出久が

この場に赴く全員が、少女を救わんと動き出し、命を賭けてでも手を差し伸べてくれる。

もういいのに…でも、本当は救われたいけど、勇気がなかった。

もう一回、賭けても良いのかな？

だってまた殺されてしまう…自分のせいで誰かが不幸になり、それが連鎖として繋いでいく。

現に通形ミリオは無個性となってしまった…エリを救おうとしたから。

脱走を図ったらエリ担当の世話役の人が殺された。

自分を救けようとするために、サー・ナイトアイは怪我を負った。

まるでこれでもかと言わんばかりに打ちのめそうと、誰かが不幸になってしまうのなら、自然と心は折れて閉じこもってしまう。

だからもう良い…救いなんていらない…なのに。

それでも、死んでも不幸になっても、怪我を負っても、まだ自分を救おうとしてくれる人達がいる。

だから、勇気が必要だった。

救われても良いという、救われる者の勇気が。

そして少女は一歩前へ前進し、救いの手に飛び込み、ガッシリとし

がみつくよう緑谷出久を抱き締める。
後ろからは気絶した竜鱗と音本が横を通り過ぎるよう落下していく。
「掴んだ!!」
「デクさん!よくぞ…!!」
雪泉は此方へ落下してきた音本を捕まえ、確保する。距離の差があるため、竜鱗はそのまま落下していき地面へ大きく衝突する。
掴み取ったエリを、力強く…でもって優しく包み込む。
――もうこれ以上…この子に辛い思いなんてさせない!
あの時離してしまった手を後悔しながら、これ以上死んでも離しまいと、無意識により強く握ってしまう。
ギュイィィン!
「ッ!?」
その瞬間。
体全身に変化が起こる。
状況が状況に深刻でそれどころではなかったが、先程まで治崎との戦闘で負った体の痛みが嘘のように消え去った。
エリを掴んだ途端だ、いきなり痛覚が遮断など、神経が狂ったとしか思えないが…。
それどころか、治崎に負わされた重傷も、貫かれた脚も、傷口が塞がってる…というより、最初っから無かったかのように。
「これは……!」
「返せ!!!!」
次の瞬間。
緑谷が不思議そうに小声を呟くのも束の間、治崎のこれまでに聞いたことのない焦燥と怒号を感じさせる声が、二人の意識を治崎へ向ける。
エリを奪われたことで、その焦りが色濃く出ており、地面を分解して修復の過程、鋭い岩が緑谷を襲う。
「させません!!」
それを雪泉が氷のクナイで相殺させる。

「邪魔をするなぁぁ!!!」
雪泉に妨害されたことで、頭に血が昇り、益々苛立ちを色濃く顔に出す。何としてでも取り返さねば…その一心で岩を更に分解・修復し今度は針状の岩が伸びるように迫り来る。これでは何度破壊しようと修復で補い、標的めがけて仕留めることが出来るのだ。
「二度も同じ轍を踏むか!!!」
全身全霊を振り絞り、幾重の岩棘が埋め尽くす。相殺しきれないその量は余りにも、まるで死が迫り来るようで。
(埒があかない…取り敢えず反撃を!!)
このままやられる位なら、せめてエリちゃんを助けてでもと、緑谷はシュートスタイルで習った空中蹴りを、力一杯こめて振るう。
デクが全身全霊に振るった足蹴は、虚空を描き、姿を消した。
「ッ……??」
反撃をした途端に、緑谷出久の姿が突如として消えたその現象。まるで瞬きした瞬間に点滅したかのように、音もなく突然消え出した現象に、治崎は目を疑いながらクエスチョンマークを浮かばせる。
だがそれも数秒も満たさない僅かな、瞬間的とも呼べる一瞬で理解する。
ドゴオオオーーーーーン!!と、鼓膜を突き破るような大轟音が鳴り響き、地下が崩れるほどの衝撃波が、治崎を襲った。
視界全開に広がる無数の岩が、棘が、死が、まるでさも文字通り一蹴するように、跡形もなく粉砕されたのだ。
「デク…さん!?」
消えたデク
とてつもない大破壊
目を疑う超常現象
流石の雪泉も声色を変えてしまうだろう、衝撃波の余波を受けながら、体全身が電流を浴びるようにビリビリと伝わるこの威圧感と緊迫感、何よりも強きオーラともよぶべき気配を、肌身で感じてるのだから。
では消えた当の本人は何処へ行ったのか?

「え…？」
　大空に飛んでいた。
　それこそ雲掴めそうな程の位置にまで飛び、コミックでありそうな展開。蹴りをしたら大空にまで飛んで宙を漂ってますだなんて、到底信じられない話だろうが、事実である。
（そんな…!?なんだこれ!?!いつものシュートスタイルみたく、それこそ２０％で調整したのに…まるで、こんなの…１００％で調整ミスした時のような威力!?!）
　オールマイトのニューハンプシャースマッシュ乃様に空中移動した緑谷は、冷や汗を垂らしながら上から街を眺め、脂汗が毛穴という穴からぶわりと流れてくる。
　爆豪勝己の時の様なコントロールのブレ、そしてマスキュラー戦で見せた様な１００％並みのパワー。
（だけど…痛覚を感じない…？そいや、さっき治崎から受けた攻撃も…って！それどころじゃない!!落下する！この高さなら落下死して…いや、ワンフォーオールを駆使して…でも、それだと衝撃が強くてエリちゃんが!!）
　それこそまるで懐かしき入試試験の巨大仮装敵との戦闘が昨日のことの様に思い出す。確かあの頃はワンフォーオールの出力調整が上手くできず、一発殴っただけで木偶の坊になり、落下してきた緑谷をお茶子が助けてくれたのだ。
「デクさん!!私の氷に乗って！」
　下から僅かながら、雪泉の声が聞こえる。
　それでも当の彼女は腹の底から大きな声を発してるのだが、距離的に考えて小さく聞こえるのは致し方ないだろう。
　波のように、扇で振るわれた氷が海波のように形を作りだし、緑谷はそれを上手く着地する。氷で多少滑りがあるものの、問題ない。
「雪泉さん…！有難うございます！」
　治崎の安否より、緑谷とエリの安全確認と保護を優先するあたり、

彼女の判断や行動の速さも中々なものだ。
轟のように氷の出力の調整や、瞬発力も申し分ない。
「エリさんは…無事でしたか。あの高さ、あの威力の中でよく…」
本当に、なんて呟いてしまうほどに。
例えるなら少女が暴走列車にしがみついてるようなイメージと変わらないので、何とかしがみついてるエリは流石というべきか、幼女にしてはかなり耐えてる方だろう。
一先ず二人が無事なことに安堵の息をつき、ホッと胸を撫で下ろす。

八斎會地下ルートでは、緑谷の圧倒的な破壊力を持つ蹴りで治崎の猛攻を一蹴した衝撃に、一同は静まっていた。
「今の衝撃は…？」
「いやぁこうなるぜ？何の準備運動もなしに特攻強いられたらおじさん、死んじゃうわ…やっぱ戦闘なんて柄じゃねえし…況してや多対一で子供捕まえろとか…無理ゲーすぎんだろ…」
活力を失い青白い顔で優れないリューキュウは、複製で作られたＭｒ．コンプレスを地面に叩き潰し、二倍で増やされたコンプレスはドロリと泥へと形状変化し姿を保てず散ってしまう。
「お？なんだぁ？さっきの奴強えのか？スゲェ音鳴ったぞ!!」
一方で――波動、夕焼の二人は黒佐波に防戦でその場を拭いで波動で
来た。波動で波紋を打ち消し、拳を刀で防ぐのは素人が真似できるようなことじゃない。
「デクくんは…？」
ゴツゴツと瓦礫が落ちてゆく中、お茶子は視界が悪い中辺りを見回す。流石に距離と位置的に悪いため、大空へ吹き飛んだ緑谷がどこにいるか把握できないのも無理ないだろう。
だが、土煙が巻き起こる中にうっすらと見える人影が

「ッッ!?治崎!?!」
それは、片腕が使えずに頭に血を垂らした治崎が重傷を負いながら立ち上がる姿。
緑谷が放った一撃を直撃しなくとも、その衝撃波だけで簡単に人を脆くさせるのは驚嘆に値するだろう。
だが、絶望は痛みなど物ともせず折れて使い物にならない腕輪分解して修復する。
「あぁ…ダメだ壊理…これだから触りたくなかったんだ…!!使い方も能力も教えてない…だめだダメだ駄目だ壊理!!何度言ったら解る!?お前は俺のモノなんだ…所有物は大人しく俺の言う通りにさえすれば良いのに…!!」
憎悪を募らせた声を発しながら、空を一瞥した後、ゆっくりと此方へと振り向く。治崎に警戒をするリューキュウ組。
マトモに動けない四人ではとても、危険であり死のリスクが高すぎる。
「オヤジの宿願を果たすためにお前がいるんだ壊理…取り返さなければ…その為には――力也、柔蔵、今度はお前らの力が必要だ」
治崎は捲し立てながら、ゆっくりとゆっくりと、気絶して倒れてる活瓶力也と護武皮柔増に近づき、手を伸ばす。
「治崎…?何をする気だ!?」
相手の怪しい動きに吠える総司は、鎖鎌で構えるも、戦う活力はほぼ失われており、マトモに動くことは愚か、武器を扱えるかどうかさえあやふやだ。
「心配しなくていい……アレは今、君たちを標的とは見ていない……」
そこで致命傷を負った瀕死のサー・ナイトアイが、弱々しくも口を開く。
「ケロ…喋ったら…」
「気にするなフロッピー…君たちにも話さねば……私が見た未来を…」
「予知…使ったん!?」

「奴は…治崎は、緑谷と雪泉、エリちゃんを追って地上へ出る……そして、緑谷出久と雪泉は殺される――最悪な未来が視えて…しまった…」

それはつまり、緑谷出久と雪泉の死は免れないという意味合いでもある。覚悟を決めて奥の手を使ったとはいえ、この禁断である個性を使ってしまったことに後悔はある。

だからこそ、最悪な未来でも、最小限の被害に治らなければ…せめて、せめて…

「それを聞いて黙っていると…」

「リューキュウに同感だな…じゃあ、私達がそれを阻止すれば…」

「ムダだ…私の視た未来は絶対に起こりうるもの…! いや、それに君らの状態からして…奴に立ち向かい挑んでも…勝てないだろう……」

「なんや…それ……勝てないから私ら黙って見てろ言うん？」

酸素が取り込めなくなってきたのか、意識が朦朧として頭痛がおきながらも、恐る恐る声を出すお茶子はそのまま口を開く。

「だからって何もしないのはちゃうやろ!?未来なんて何かせなあかんやろ!!絶対だから黙ってデクくんや雪泉さんが死ぬのを見てろって？エリちゃん連れて治崎が逃げるのを指くわえて待ってろ言うん!?!可笑しいやろ!!!

どんな未来でも、ウチらヒーローは助けなあかんやろ!?!」

例えそれが覆せない呪われた運命でも

決定打された未来が待ち構えても

どんなピンチな状況下でも

ヒーローだから動かなければならない。

そんなもの、結局只の言い訳で、何の解決策にもならないのだ。そんなところで足を止めていては、これから先生き延びてもずっと後悔する。

それは、死ぬことより辛くて苦しくて、そんな人間がヒーローだなんて心の底から言えるのかと問われれば、首を横に振ってしまいそうだ。

「……フロッピー、彼方の壁の向こうにミリオがいる、側には麗王に烈

怒頼雄斗もいる…頼む。
ウラビティ、総司、リューキュウ…私を上へ…奴のいるところへ…」
麗日お茶子の正論の言葉に、歯を食いしばりながら、日が差す空を見上げて目を細める。
未来を捻じ曲げる…本当にそんな事が可能なのかは分からない…。何度も試して、何度もその未来予知の決定打に打ちのめされ、そして…個性そのものを閉ざしたサー・ナイトアイは、せめてとばかりに三人に申し立てる。
今、目の前で治崎がより禍々しく醜い化け物へ成り果てる姿を見つめながら、固唾を飲み込み、最悪な未来へと向き合う。

「はぁ…はぁ…有難う雪泉さん、でも此処にいたら…」
「何れ治崎が壊理さんを狙う以上、一人で抱え込むより二人の方が安全です。私も尽力致します…とはいえ、デクさん…先ほどのパワーは体育祭の時に見せた…」
サー・ナイトアイ達からシフトして緑谷達は現状、何とか無事に地上へ降り立つことができた。
雪泉のお陰で安全に着地できたとはいえ、何故１００％の出力でも足が壊れなかったのか、そして音本と竜燐を取り組んだ治崎との戦闘の際に負った傷が、何事もなかったのようになくなっていたのか、分からない事は多く絶対とは言えないが…
「ねぇ、さっきの傷も治ってたし…１００％の出力も耐え抜いた…痛みさえなかったのに…まるで嘘のように…
これって、君の力が関係してるのかな？」
緑谷はゆっくりと少女の顔を見つめる。
絶体絶命と言わざるを得ない状況下、機転が利いたのはエリに触れてからだ。それ以降この現象が続いてると考えれば、彼女の個性が関係してるのは明白だ。
「エリさんの個性は、個性を破壊すると…そう言われてましたが…」

「ううん、あくまでそれは仮の個性で、本当は壊すに似た個性か…あるいは…」
「そうさ！壊理は巻き戻す個性!!使い方がわからないんだろう?!!壊理ィ!!」
　地下からは憤慨に似た怒号が飛び、大地が揺れるとボコボコと破壊されていく。それが治崎だと知るや否や、咄嗟に壊理を抱えて距離を置く。
　ありとあらゆる巨大な手が次々と出現し、まるで地上によじ登るかのようにその手は、地を触れていく。
「アレは…治崎??」
　地下から姿を現した治崎に、雪泉は目を疑う。
　巨大な身体をした活瓶らしき面影に、胸の中央には護武皮のマスク、そして全身から無数に護武皮の手が生えており、巨躯が口を開けたその先には、上半身だけ姿を保った治崎がそこにいた。
　護武皮柔増、活瓶力也を吸収した姿がアレと呼ぶべきだろう。圧倒的な大きさと雰囲気は、下手なプロヒーローや三流の忍なら、腰を抜かしてしまうほどに。
「人間を巻き戻す個性…それが壊理だ。使いようによっては猿にまで戻すことすら可能だろう…使い方も知らない其奴をそのまま抱えていれば、そのまま消滅するぞ」
　治崎の言ってる言葉は本当だ。
　だから壊理の個性で、融合した治崎を巻き戻した。
　だから壊理の個性で、実の父親を巻き戻して消してしまった。
　だから壊理の個性で、異能破壊弾として個性も忍術も分け隔てなく巻き戻せた。
「触れる者を全て『無』に帰して巻き戻す…其奴の個性は人を簡単に消せる最も残虐で危険で、もう呪われてんだよ!!
　だから――俺に渡せ！分解して修復するしか止める術はない!!」
「絶対に嫌だ!!」
「お断りします」
　治崎の威圧を物ともせず、二人は断じて言葉を切り捨てる。

「そっか、足が折れた瞬間に…痛みよりも早く、折れる前に戻してくれたんだね。なんだ――とっても優しい個性じゃないか」
「…！」
今まで黙って聞いてた壊理が、顔を上げて大粒の涙を流す。
ずっと…治崎の言う通り、存在自体が呪われていて、こんない個性なんか無くなれば良いと恨んできたのに、そんな風に優しく言われたことなど、生まれてきて一度もないから。
「力があるから悪いのですか…？巻き戻すから呪われてるんですか？いいえ、違います。だって壊理さんは、こんなにも小さいのに関わらず、私たちの安全を願い、一人で抱え込んできた…そんな彼女は呪われてなんかいない。貴方の物でも所有物でもない。
彼女はこの世界で生きる、たった一人の小さな可愛らしい女の子です。何度でも言いましょう治崎、この子は貴方の道具でもないし呪いなんかじゃない」
力があるから？
個性が危ないから？
簡単に壊してしまうから？
そんなの関係ない。どれだけ強い力を持っても、それでも心が優しくて綺麗なら、呪われてなんかいない。
「そうですか、つまるところ常に戻り続けているのですね。ならば私の術を覚醒しても…壊理さんといることでそれが常に維持し続けられると。デクさん」
「うん、体感で分かった。つまり１００％を…僕は体を常に全身が壊れる程の痛みを出し続けていれば…」
「ここは二人で挑みましょう。いくら巻き戻しがあるとはいえ、一度でも治崎に触れてしまえば…それこそ彼女に触れて分解修復してしまえば…」
「だから、二人でエリちゃんを守って戦う!!」
ワン・フォー・オール　１００％フルカウル
忍術覚醒＝氷王の雪泉
「力を貸してくれるかい？エリちゃん!!」

「貴方のその腐った性根と、鬼畜な所業…全てを凍てつく氷の王は貴方に絶対なる裁きを」

１９５話「善悪の恩情」

――――〝超常〟――――

かつて、突如として人々にもたらされた謎の変異。超常黎明期だった頃は奇病や人外、化け物として恐れられ、個性を持つ者は迫害を受け、忍からは処分対象された。

一方、ある一説では未知のウイルスがネズミを介し世界へ拡がったと言われている……が、明確な論拠がない。

無数にある超常にまつわる推論の一つに過ぎない。

また、とある推論では……憑黄泉神威が生み出した病の副作用、または有り溢れた力で人間に超常が降り注いだという言い伝えもあるが、それも明確な理論も根拠もない。

超常黎明期の大混乱の中、いち早く統括し、忍の処分から個性を持つ人間を守り抜き、大いなる信頼と人望を掻き集めた伝説の逸話、オール・フォー・ワンの都市伝説がネットや掲示板、風の噂などで広まった。

オール・フォー・ワンだけではなく、超常によって起こされた戦争、Ｄースクアッドを始めた超常による国際テロ、処刑執行者という正体不明、未知なる殺人鬼達の言い伝え。

どれもこれも、個性という存在が発達してから、世界が轟き、普通という現代からかけ離れた日常は壊され、個性という存在が世界の構造を変えた。

「お前らも壊理も何も分かっていない…力の価値を、使い方を…!!〝個性〟を伸ばす事で飛躍する。
俺は研究を重ねて壊理の力を抽出し、到達点にまで引き出すことに成功した。無論…子孫を残していけば、個性が混ざり合い強力な…俺のように危険な個性が生まれる…。個性って言うのは凡ゆる理によって定められている。
そして、それを壊すのが壊理の個性さ」
単に肉体を巻き戻すだけでなく、もっと大きな流れ…即ち、種としての流れ。変異が起こる前の形へと巻き戻し、個性が発現する前に戻す。それは個性に留まらず、忍術までも…その術としての存在そのものを消す事だって出来る。
そういった意味では、忍に対抗できる力と言っても過言ではない。
「個性因子を消滅し、人間を正常に巻き戻す個性――個性や忍術で成り立つこの世界を壊す!!!理を破壊する力が…壊理だ!!」
ファイナルフォームへとチェンジした治崎は、巨躯から伸びる無数の手で街中の住宅地を触れていき、瞬く間に分解していく。
「わわっ!?ちょちょちょ、ケーサツ!?ヒーロー早く来て!?」
「うわあああぁぁぁ!!?」
「ママぁ！怖いよぉやだよ!!またヴィランが…!!」
「華子ぉ!!いやぁ…いやぁぁぁ!!!」
家は崩壊し、砂塵の如く霧状の如く塵となり、台風のように宙を舞い、形成していく。
住宅内には無関係者の民間人がチラホラ見える。
昼食の料理を作っていた男性シェフ
テレビを鑑賞してたごく普通の女子大学生
何処かで見覚えがあるだろう、抱き合いながらその場で怯える親子
「分かるか!?何にも知らん馬鹿ガキ共が、感情論で動いていい品物じゃあない!!壊理は最高傑作なんだ!!!」
そんな住宅街に轟く住民の悲鳴がＢＧＭの代わりとなり、治崎は瞬く間にそれらを全て攻撃として鋭利な棘を作り出し、それを緑谷と雪泉に全力で矛先を向ける。

「その価値も分からんガキ共に、利用できる代物じゃあなィ!!!」
そして背中、脚、溝、肩、腰、凡ゆる部位から護武皮の拳が迫り来る。予測不可能、縦横無尽、ゴム質により近距離から遠距離までに肉弾戦を持ち込める個性。
それに加えて触れたものを活力吸収、または分解修復を上乗せしありと凡ゆる作用を発生させる。
「価値?代物?」
パキィン――――
然し、それは凍てつく音ともに瞬時に空気が冷え浸る。
まるで…一瞬にして世界が南極大陸に、それこそ雪積もる世界のように、空間が青く染まり、温度が急変する。
「なっ――」
治崎が放った護武皮の腕を、的確に凍り付け、一瞬にして全て崩壊。強すぎる氷は、凍り付けしたものを崩壊させてしまう危険性がある。
氷王の雪泉――いや、氷王だった雪泉は続け様に、氷によって触れられた部位から感染するように氷結化が進んでいる。
「な、んだと!?!!」
治崎は続け様に氷によって感染された部位に触れるも…
「っ!?!!な、分解できない!?!!」
いや…それどころか、触れた氷にまた…感染が!!
分解修復をしようと試みるも、分解される前に氷が感染し、個性機能が働かなくなる。
これぞ…覚醒を超えた雪泉の秘めた忍術。
(そうか…!なら、氷に感染してない箇所に分解し修復すれば…!!)
無事な手で無事な体の箇所に触れ、全てを分解し修復すれば、氷も元に戻るし解除する。
頭の回転が早い治崎は直様試そうと行うも――
ドッッッッ――――!!!!
重撃な一撃が、人中に炸裂する。
壊理を担いだ緑谷が、治崎の巨躯を空へと殴り飛ばし、壊理が飛ばされないように背中で優しく支える雪泉。

あれほど巨大な体を空中に殴り飛ばす緑谷のワン・フォー・オールは、体育祭の比ではない。
これ程の強力な一撃は轟戦はもちろん、マスキュラーに放っ１００％、火事場の馬鹿力によって放たれた１０００００００％とでは、天と地の差が激しく広がるほどに、圧倒的すぎる。更に放たれた衝撃により余波が放たれ、凡ゆる邪魔者を近づけさせない。

「がぁぁっっ…はッ…!!!」

活瓶と分解修復によって融合された巨躯な体躯とはいえ、全てが治崎の体の一部、神経も通っていれば痛覚も働くし、未知なる部位による動作も自然と覚える。
だからこそ――壊理の巻き戻しを発動しながらも常に体が耐えきらない程のパワーを出し切ることで、治崎には想像を超える痛みが、伝わってくるのだ。
「出久くん…強」
「あれ…治崎か？つか、なんだよアレ…緑谷ってやつ、こんなに…？マスキュラーを倒したのってやっぱ…」
「つか…黒佐波は？」
一方、安全圏とは言えないが、避難地で傍観の立場だったトガと龍姫がポツリと呟いた。
トゥワイスの声に鎌倉が反応して大穴を覗くと其処には――

「おい…オイぃ…誰かと思ったら…テメェ…雅緋かよぉ……」
大蛇に噛み潰された黒佐波の体が、溶けていたところだ。
「抜忍・黒佐波か!?脱走したのか…いや、捕獲した今はいい。及八斎會の幹部三名は気絶し捕縛してある!!」
体がボロボロになりながらも、絶・秘伝忍法『ヨルムンガンド』を発動し救援に駆けつけた雅緋は流石というべきか。蛇女の筆頭だからこそのタフネスさか。
ヨルムンガンドに噛み潰された黒佐波はべちゃり！と体が溶けて

泥化する。どうやら黒佐波でも、トゥワイスが複製で出した耐久値には敵わないらしい。
「雅緋…!そう、無事だったのね…なら!貴女はイレイザーヘッドの救出を!そしてウラビティと総司はサー・ナイトアイを連れて先に!
体に固定されたトゲは抜かず!慎重に且つ安全に救急車に!!」
リューキュウに竜翼で飛ばされた二人は、ぽっかり空いた大きな穴に飛ばされて、向かって行く。
「……この貸しは大きいぞ、私が運ぶまで死ぬなよ!ナイトアイ!!」
「早く…デクくんところへ…!!」

大空に放たれた治崎を、天を駆けるが如く、緑谷が担いでた壊理を雪泉が担ぎ、空を飛ぶ。
風と氷を扱い、治崎との距離を詰めていく。
(壊理さんに触れてるだけで、意識や肉体が内側に引っ張られるように……これが、巻き戻し――)
改めて巻き戻しの個性を肌身で感じ、その超常過ぎる個性に思わず固唾を飲む。
成る程…人間一人を簡単に消滅させる個性…何もかもを無に巻き戻す個性は確かに強力で、余りにも恐ろしい。非力な少女でも、黒影の孫を一人簡単に消せるのだから。
治崎の言葉に同情する訳ではないが、彼女の存在が世界をひっくり返し、理を破壊し新たな秩序を齎すといっても過言ではない。
強すぎる力は善意にも悪意にもなる、それは嘗て半蔵と敵対してた純粋すぎた雪泉が、一番よく知ってたから。

『雪泉…お前また喧嘩したそうだな』

巻き戻る最中、記憶が蘇り回想する。
これは小学生の頃だ――叢、四季、夜桜、美野里が帰って来た中、一番遅く帰ってきた雪泉は、ランドセルを背負いながら玄関の元で不貞腐れたように俯く。よく見れば喧嘩した後の傷が残っており、絆創膏が貼られている。
『……』
『学校から電話が掛かって来た、美野里も叢も心配してたぞ。一体何があったんだ…？』
呆れてはいない、怒ってない訳ではない、だが…喧嘩した内容によっては変わる。
電話からは口喧嘩が始まったといい、先に手を出したのは雪泉だと聞いた。彼女は元々暴力的な行為は好ましくない。然し唯一の点を除けばの話。悪いことになると頭に血が登り、見境がなくなるのが主に雪泉が引き起こす喧嘩の原因なのだ。
この前は「ヒーローより敵の方がカッコいい」という男子の話し合いを聞いて突っかかり喧嘩となり、その前は「何人かが弱い者いじめをしてた」から、その悪事を許せなくて勝手に突っ込んだ。
後者の方は雪泉の友人ではないとはいえ怒る気にもならなかったし、かと言って前者の様な事は注意が必要だ。
『…家族のことを、悪く言われた……』
ぎゅっと両手で帽子を掴んで深々と被り、俯いたまま見上げようとしない。
『お前の家にお父さんもお母さんもいない、親なんていないくせに生意気だって…お前の家族は本当の家族じゃないって…悪く言われたから…』
其れは前に雪泉と喧嘩した子達が、雪泉の事を良く思わず喧嘩を売ってきたのだろう。手を出してしまったのは雪泉だ…然し、喧嘩をふっかけたのは紛れもないいじめっ子たち。かと言って雪泉に敵う訳ではないのだが、それが帰ってより苛立ちと悔しさを増す。
だからこそ売りことばに買い言葉で言ってしまったのだろう。
『叢も…夜桜も…四季も…美野里も……そして、お爺様も、大事な家族

なのに……悪く言われて…だから…っ、だからっ…!!』
雪泉にとっては耐え難いものだったのだろう。頬を膨らませながら、ポタリポタリと大粒の涙を一滴ずつ床に落とす。
事情を把握した黒影はキョトンとした顔立ちで雪泉の話を聞きながら、納得した様だ。
撒いた原因…と呼ぶべきか、喧嘩をしてしまう雪泉から始まったのだろうが、だからと言って喧嘩でも限度がある。雪泉も本当はもっと我慢してたのだろう、でも…今回ばかりはならざるを得なかったという訳だ。
『そうか、雪泉…お前は、俺たちのために…』
『ごめんなさい…喧嘩してごめんなさい…困らせて……ごめんなさい…ずっと我慢してたのに私……』
『良いんだ…大丈夫、よく…我慢してきたな、雪泉は…』
両親が殺されて、孤独になって、本当は凄く苦しいのに、泣き叫びたい程悲しいのに…それを踏まえて更に我慢しようとしたのだ。
『家族を守ろうとしてくれて、有難うな――』
黒影はそっと小さな身体を抱き寄せる。
お爺様は元々肌が冷えてるけれど…でも、どこか温かい。温もりを感じて、心地よささえ感じてしまう。

善だけの、光だけのある世界を望んだ黒影の腕の中には、眩くて美しい光を抱えて――

苦しみから耐え、悲しみを我慢し、一人で抱えた少女は、嘗て力だけで全てを変えようとした。
変革、善だけの世界…言うなれば破茶滅茶な話で、今思えばぶっ飛んでる。正直エリの巻き戻した状態で、本来引き出せない限界を超えた覚醒や、あり得ない忍術の強さを持つ雪泉は、その気になればそれなりに社会や秩序を乱すことは可能だろう。
だがそれは所詮借り物に過ぎない…故に、雪泉が望んだ絶対的な力

…もし、立場や状況、環境…時間軸が違えば、純粋過ぎた雪泉が壊理の力に魅入られてしまってたのなら、治崎と同じ末路になっていたのかもしれない。
力とは飽くまで力…それは、善にもなり得て悪にでもなり、そして――悪意でしかない。
どれだけお膳立てしようと、言い訳を垂れようと、幾らでも理不尽になれるのだから。
(お爺様、見てますか…？私は今、正義を…守るべき者の為に悪と闘っています。嘗ての私なら、ただただ刃を悪に向け殲滅の意に駆られていた…然し、今はどうでしょう…？)
誰かを守りたい、
守る為の戦い、
正義としての使命、
嘗ての雪泉は何方も望み、正義を志して貫いてきた。その筈なのに、今と昔ではこうも見方が違う。まるで別人のようで、不思議なものだ。
私怨や憎しみによる感情論で動かされてる訳じゃない、ただ守るべき背中を、救われるべき光を背負い、雪泉は天を目指す。

(私は――黒影様と同じように、飛鳥さんの信念である刀と盾のように……私は、正義を貫けていますか？)

誰もが認めれる、正義になれてるだろうか。
ヒーロー殺しステインの時とはまた少し違った感覚だ、似てるようで何処か違う…この微妙な違和感が残りつつ、気持ちは全く別だ。
「大丈夫、私は一人じゃない…そして、エリさんも一人じゃない…」
もう、やっと一人じゃないんだ、エリは。
泣いていたら、苦しんでいたら誰かが守ってくれる。救われても良いんだ、守られても良いんだ。
「治崎っ……お覚悟!!!!!」
紅白色の瞳は、まるで刃物のように鋭い視線を飛ばし、絶対零度の

氷が彼女を守り、敵を凍てつかせる。
絶対零度（正義）は溶けることを知らない――
これぞ、零帝の雪泉と名乗るに相応しいだろう。

大空に吹き飛ばされた治崎は、死すら生温い強烈な拳で吹き飛ばされ、未だに冷え凍る空気に肌の寒さを感じながら、朦朧とする意識の中に記憶が流れ込む。
『出来た…これが完成品。試作品を通して作るのに道のりが長かったが……これを見せれば組長はなっとくしてくれる』
地下研究所で、個性因子の細胞を試験管に詰め込みながら、それを眺める。
八斎會は此処まで生き延びたとはいえ、ヤクザという界隈が解体されていく中、肩身が狭まり、弱小と呼ばれ、やがて消えてしまう。潰れるのも時間の問題――親父はああ言ってたが、きっとこれさえ見てくれれば納得してくれる。
『完成品を作るのに1ヶ月…充分な研究機材と適切な環境がない状態とはいえ、研究費用によって金が潰えるのは随分と手間が掛かったが…取り敢えず、完成品が作れただけでも大きな成果だ』
五体満足とまではいかないが、それでも完成品が作れたという事実が、その性能が、余りにも魅力的なものだろう。
『そして…次に血清品…これも完成品を作る過程で生み出したもの…この二つを市場にばら撒けば、市場を独占し、八斎會は必ず復活する』
それこそ、失敗はあり得ないと言わんばかりか、寧ろ成功する事に疑いのカケラもない治崎は、だからこそこれまで長い月日を掛けて研究に没頭していたのだ。
完成品と血清を作れば後は組長に報告するだけだ、この成功品を主

にデータを元に複製を開始する。後は金と時間の問題だけになる。
『先ずは研究過程で精製した未完成品を幾つか世に出し存在を匂わせる。鬱陶しいヒーロー芸を無力化できる、それに食いつき欲しがる者が必ず現れる』
早速組長に報告する治崎は、何処か胸を弾みながら生々と語り尽くしていく。
『飢餓感を煽ったところに完成品を高値で売り捌く、個性を完全に消滅できる代物だ――そしてある程度出回ったら今度は巻き戻しで個性を復活させられる血清をチラつかせる!!』
ヒーローサイドには銃と弾を
敵サイドには血清を
『エリの肉体が元であり、俺の個性を利用すれば独占体制で市場を支配できる!!そうすればヤクザが…八斎會が再び日本を裏から――』
『治崎』
治崎の言葉が、組長に遮られる。
『ダメだと言ったハズだ――あの子を…人を何だと思ってんだ…』
組長はこれまで以上に治崎に見せたことのない憤慨の顔色を沸騰させる。声が震え、聞けば身震いしそうな程に強く、威圧を含んだその声は、今まで治崎に何度も見せた怒りとは比にならなかった。
『お前、何度も言ったよな。あの子は道具でも何でもない……治崎、忘れたとは言わせねぇぞ』
外道な人間には誰も付いてこない
常に仁儀を押し通せ
古い習慣があるとはいえ、組長の懐の広さや人道的な人間性に惚れ込んだ人間は数多い。勿論、治崎もその一人。
だからこそ、違法薬や身勝手な理由で他者を傷つけ、あろうことか実の孫娘であるエリの肉体を利用して世界中に売り捌こうなど、鬼畜の所業でしかない。
そんなことを、大事な孫娘を商売道具に利用されて、黙っておられる親など何処にもいない。

『治崎、ウチの考えに背きてぇなら…お前、もう出てけ』

褒められるとは思っていなかった、それは想定内。

多少の反対は出るのも、情が厚い組長なら仕方がない。

だが、破門されることまでは想定外な返答で、何処か治崎の心に亀裂が生じる。

――あぁ、違う。違うんだよ組長……俺は、アンタの為を想って…アンタに拾われてから、ずっと恩を返したかっただけなんだ。

あの日からずっと、ちっぽけで、何もかもが空っぽの病人だった俺に、唯一手を差し伸べてくれたのは、組長だけだったから。

『違う、拾ってくれたアンタに報いたいだけなんだ――』

この個性を産まれ持ち、忌み嫌われてた自分を、1人だった俺を拾ってくれた親父に感謝してるから…どうしても、恩を返して報いたい。

『いいから…黙って見ててくれよ、組長(オヤジ)』

組長は恩人だ――英雄気取りの病人どもが組長を隅へと追いやった。

計画が軌道に乗って俺たちがでかくなったら、修復するよ――楽しみに待っててくれ、組長…。

俺が、八斎戒も組長も救うんだ――

その為に使えそうな駒も増やした

忍がヒーローと共存しやがった

八斎戒と組長の夢を潰そうとする目障りな病人がいる

組長の為に全てを捧げ、恩を返す。

自ら組長を昏睡状態にさせ、寝たきりの植物状態にさせた癖に、組

長の夢の為に黙らせ都合の良い解釈で野望を果たそうとする治崎は、異常にして異質。
矛盾にして狂気、正気の沙汰じゃない。
それこそ、何方が病人かが見分けもつかない程に。
「どいつもこいつも大局を見ようともしない!!!そして自分が何者かになれると――そう本気で思ってる現代病共が、組長を追い詰めた!!!」
全てを分解し、全回復させ体勢を取り戻す治崎は、活瓶の個性によって住民の活力を吸収し身体の大きさを変え、護武皮のゴム質な皮膚を更に強度を増してなるべく衝撃の耐性を増す。
分解、修復、活力吸収、ゴム、全ての個性をフル活用し2人を殺す魔の手を作り出し、全身全霊を込めて二人を排除する。
殺意
願望
執念
治崎は出し惜しみなく全ての機能と技術を活かし、完膚なきまでに捩じ伏せる。
「俺が崩すのはこの〝世界〟!!その構造そのもの!!目の前の小さな正義だけの…感情論のヒーロー気取りが――古くから伝えられた伝統と秩序ばかりに縛られ、鬱陶しい手品(忍術)で他者を傷つけ愉悦に浸る都合の良い忍(愚か者)が、たった一人のガキしか救えない正義気取りがぁ…!!」
凡ゆる全てを否定し、一瞬で分解させる個性を発揮し、巨大な手を作り出す。
「――俺の邪魔をするなあぁぁ!!!!!」
たった1人のガキしか救えない人間が、秩序、構造、異能、革命さえも引き起こし、全てを覆し理を壊すエリを手渡して堪るものか。それだけじゃない――今までの過程や研究として潰えた努力、1日も欠かさず組の復活と組長の為に鍛錬を続けたあの血と汗の結晶を、こんな奴らに全部ダメにされて堪るものか。
「俺の前から消えろ――!!!」

「デクさん――今です!!」
「ッ…!!?」

雪泉のその言葉に、治崎は一瞬だけ思考が停止する。
気配で察知し振り向くと、いつの間にかデクが背後を取り拳を構え、此方へ向けている。
それも――壊理を背負って。
(ッ…!!?瞬きした瞬間に背後を…?いや、そもそも壊理は雪泉が……)
背負っていた筈なのに、視線を外してもないのに…何故、緑谷出久が背負ってる?まさか…本当に――
目にも追えない速度で?
そんな事が可能なのか?
有り得ない、不可能だ。
「お前は必ず…ダメージが蓄積したら分解して回復する」
一瞬で全てを分解し、一瞬で修復させる個性はとても強力で、死柄木の上位互換とも呼べる希少な個性は、とても魅力的で使い道も多ければ限りなく強い。
だが――オールマイトから託されたワン・フォー・オールを、フルに１００％機能を発揮出来れば、それは正しく全盛期のオールマイトに近いレベルで、渡り合える。
前までは、譲渡されてからは個性を使う度に木偶の坊となり、非合理的で、誰かに心配されるばかりだった。
でも――今はまるで…本当に、憧れたオールマイトの様に、それこそ爆豪勝己が勝つ姿に憧れたように
「目の前の小さな女の子１人も救えないで――皆を救えるヒーローになれるかよ!!!」
圧倒的な力で、理不尽を壊し、逆境を乗り越え、敵の持つ悪意を尽く粉砕するように、翻弄する。

何度も炸裂する拳は、空間を震えさせ、鼓膜を揺るがす音が何重も響き、融合で作り上げた巨躯を悉く壊すようにすり減らし、吹き飛ばす。

「ねぇ、ナイトアイ…デクくんと雪泉ちゃんが殺されるって本当ですか…？」

リューキュウ事務所のメンバーが壊して作った大穴から、地上へ戻ったお茶子は、ナイトアイを支えなが蒼き大空を見上げてポツリと呟いた。

「殺されるどころか、2人とも無傷な上に…寧ろ治崎は…なんだ、あの闘いは――」

完璧主義者の総司も、固唾を飲み戦いを見守りながら、本音を零す。

まるで別次元――話にならない、言葉で表せない…いや、言葉で現せれるのかさえ有耶無耶な程に、滅茶苦茶な戦いだ。

神ノ区にて悪の象徴オール・フォー・ワンと平和の象徴オールマイトが戦ったあの激戦区の出来事を沸騰とさせる。

「ああ…確かに、私が見た未来は、苦しみ藻掻く緑谷出久と、跡形もなく殺される雪泉…2人は殺された――そんな未来を観た。然しこれは…この未来は……」

知らない――とでも言いたげなそうに、眉をひそめて困惑な顔色を立てていた。今まで未来を見た者は如何なる手段を用いても変えること叶わず、覆すことなく、決定打された未来がそのまま現実と化した。

だがサー・ナイトアイが見た予知の結果は、完全に違った。

まさか――本当に未来が…変わったのか？

そして、治崎のマスクが衝撃の波に乗り、破けて宙を舞う。

勝負の行方に、変更された未来に、どうやら終止符が打たれたよう

だ。

１９６話「終了」

「廻…？遅い…何だこの地震は…」
一方、イレイザーヘッドとクロノスタシスにて。
地上の激戦により揺れが生じて、八斎戒の地下ルートにまで響いてくる。イレイザー・ヘッドを捕獲し、個性によって動きに制限を掛けた。
今のイレイザー・ヘッドはカタツムリ位の鈍い動きで、それこそスローモーションの状態だ。得意な戦闘武術も泣いている。
（まさかだとは思うが…廻、お前が負けるわけない…よな？）
顰めっ面で倒れ伏せてるイレイザー・ヘッドに視線を戻し、一瞥する。治崎との付き合いが長い玄野は、誰よりも治崎を信用している。若頭補佐と呼ばれる所以か、志は治崎と同じく同志。
――私は知っている。ずっと見てきたから…お前が組の尊厳を守る為、ガキの頃からずっと、異常なまでに努力を惜しまなかったこと。どんな汚れ役を買おうと、組長の為に人生を捧げたお前を、俺はずっと背中を見てきた。
「もし廻が敗北した場合は…」
せめて完成品と血清だけでも――二つをポケットにしまいながら、短刀を抜く。
（コイツの世話をしてる余裕なんてなかったんだ…!!）
目隠しされたイレイザー・ヘッドは、動きが鈍く目隠しされた布を解くのもやっとな時間がかかってしまう。だが玄野には関係ない。
これからイレイザー・ヘッドの背中を滅多刺しにするのだから。
右も左も分からず、視界が遮断されてる暗闇の中は恐怖とも言えよう。
（――全ては組の為に、廻の為に――!!）

明確な殺意と、柄を強く握りしめながら殺意を込めた短刀の刃先をイレイザーヘッドの背中めがけて振るおうとする

ボボォウ――!!

「あッッつあぁ…!!!」

だが、その殺意込めし願い――虚しく届かず。

黒き炎が玄野の腕を焼き焦がすように黒炎が襲ってきた。腕を抑えながら藻掻く玄野は、その張本人に自然と意識ごと視線を移す。

「リューキュウに頼まれたから来てみたものの、成程…間に合って良かった」

多少ボロボロになりながらも、黒炎を飛ばしたのはただ1人、蛇女の筆頭――雅緋。

掌の黒炎を纏いながら、刀を下ろす。

「熱いだろうが弱火だ…これでも大分手加減してるんだ――大人しく我々に捕まって貰うぞ」

雅緋だけでなく、通路からバタバタと足音が何重にも重ねて聞こえてくる。どうやら警察が駆けつけに来たようだ、武装した警官が何十人も来て、速攻で移動牢式で拘束する準備に取り掛かる。

「その声は……」

「目隠し…そうか、メディアを嫌うお前が目を封じられると…その上にクロノの個性か。　相性が最悪すぎるな…」

玄野が捕まるのを光景に、雅緋イレイザー・ヘッドの目隠しを取り、外傷チェックを行う。今のところは視認できるとして肩辺りだろう。出血してる部分を、常に持ち歩いてる包帯で縛り、傷口を抑える。

「すまない…教師とはいえプロヒーローの俺が……」

……いや、流石にクロノスタシスの個性を受けた上に目隠しをされてしまえば抗う術がないというもの。しょうがないだろう。

「いや、大丈夫だ。イレイザー・ヘッド!地上で治崎が暴走してる今、お前の目が必要だ。私が側にいる、安全は保証する――」

「雅緋…ああ、助かる」

八斎戒襲撃にて幹部三名との戦闘と言い、クロノスタシスと言い、雅緋のお陰で最悪な事が起きないように未然に防げている気がする。

イレイザー…いや、相澤消太としても雅緋や蛇女の皆は死力を尽くして我々に全力で協力し、目的へと向かっている。
以前までは信用に値せず、危険視し、多少忌み嫌ってはいた。それもそうだろう、我が生徒達に危害を加えようとした者達に印象を悪くするのは自然の流れ――だが……
(生徒の安否といい…こうして俺の救助に赴くといい……有言実行してくれるな)
窃野、宝条、多部の相手をしてた雅緋に「だから、結果と生徒を守ることで――俺の疑惑を晴らしてほしい」との発言、其れを引き受けこうして生徒を守り抜きながら、先生をも救った雅緋には、畏れ入る。
「生徒を守れと言いながら、治崎に分断されて俺が取り残されるなんてな……ざまぁない、だが――お陰で助かった」
「リューキュウと共に行くぞ!!」
イレイザーヘッドを担ぎながら、そのまま来た道を戻りリューキュウの元へ向かう。
刻一刻と猶予を争い迫り来る中、1秒も無駄には出来ない。

噂をする中――空高い青空の下、激戦を繰り広げた治崎との決着が幕を閉ざすように、緑谷の一撃が治崎の意識をノックアウトする。
マスクが破け散り、大柄な巨躯を力いっぱいに振り絞り、真下へ振り下ろす。
住宅街の被害は最小限と言えば嘘になるが、元々治崎が分解と修復し荒んでしまった為、元も子もないだろう――なるべく被害を出さないような範囲で吹き飛ばす。
「うぅおおおぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーッ!!!!」
腹の底から轟く雄叫びを上げるデク――戦意を失った治崎は為す術もなくその巨大な体ごと街へ叩き落とされる。

白目向き、意識が途絶え、戦意失った治崎は立ち上がることすらない。

……なのだが。

「お……やじ……」

無意識に、組長の名前をポツリと呟く。

その無意識たる現状、手が動き出し、僅かに体に触れた――

「ッッぁあああああーーーーーー!!!!」

無意識領域による治崎は吠え、巨大な体を分解し、全てを分解してしまう巨大な手を作り出す。それは正に巨人の手――絶望を覆い尽くす支配を表す魔の手。

たった一つの手が、とても大きく、どこか歪さを際立てていた。

「治崎――」

倒されても尚、何度も己の前に立ち塞がり、敵として阻もうとするその有様――雪泉はそんな治崎を見て何処か自分と似た境遇を見出してしまう。

治崎は善悪がどうであれ、目的が何であれ、自分の野望や理想のために、全てを捧げここまでやってきた。そして、緑谷や雪泉達を追い詰め、ヒーローのみならず忍にまで1人で対抗した。

その男の不屈の執念たるや信念は――敵でありながら賞賛に値する。

自分も同じだったろう…いや、同じだろう。

善悪がどうであれ、黒影おじい様の為ならば何だってやろうとした――それが例え行き過ぎた正義であっても。

学炎祭で黒影おじい様の為に忍の歴史に名を遺し正義を証明しようとするように、悪を殲滅し光だけの世界…黒影が望んだ世界を見せてあげようとしたように、自分も純粋だったあの頃は狂っていた。

その純粋な心にして狂ったような信念は、そこに倒れ伏せても尚立ち塞がる治崎と影が重なる。

――思えば、アレは冬の1月の真冬。

両親と他界した葬式の頃、静かに雪が降り帰り道のこと。
『けん、けん、ぱ！・けん、けん、ぱ！』
心に多く募る虚しさと寂しさ、両親が失ったという悲しみ。其れ等を少しでも和らげようとしてた中、おじい様と出逢った。
『お前も…1人か？』
ふと、聞き覚えのない老人の声が背中に投げられた。振り向くとそこには、黒い傘をさしながら、何処か悲しそうに此方を見つめるおじい様の姿。だが当時の私はおじい様とは初対面――強いて言うなら頬に傷がある事しか知らなかった。
『両親は…亡くなったのか？』
当時、黒影お爺様は自分の娘やその夫が悪忍によって惨殺されたと知っているのに、質問をしてるのに何処か辛そうにしていた。
『これから…どうするんだ？』
『……分かりません、ただ両親と同じように忍になりたいと思っています』
幼い頃の少女の声は、何処か寂しそうで温もりのない冷えきった声色だった。無理もない――あの頃は大好きだった両親が、善忍として大きく誇りを持ってた忍が、死んでしまうというのは、齢４歳児にしては酷すぎる。
『……そうか、なら――死んだ両親の理由を知りたいか？』
そこからが、黒影お爺様との出逢いだった。
運命が引き起こした奇跡とも言えようか、もし黒影お爺様と出逢わなければ、忍として拾われなければ…きっと選抜メンバーの四人や一緒に切磋琢磨できる仲間達とは会えなかっただろう。
それこそ、一般人であればそれはそれでその時に選んだ道のりもあるし、友達こそ作れるだろうが、今のような幸せや、生きてる心地は感じず、只々亡くなった両親に対する喪失感や虚無感が延々と続いていたことだろう。
だが今はどうだ？黒影おじい様と出逢い、忍としての過酷な修行を受けたのも、まだ叢達が来る前に雪不帰という少女と一緒に暮らした

のも。

黒影おじい様――貴方が私を拾ってくれなければ…今頃灰色の、それこそ孤独に苦しみ寂しさに埋もれ、貴方の温もりも何も無くどうなっていたか分かりません。

貴方が居てくれたから、私は1人じゃなくなった。

叢雲さん、夜桜さん、四季さん、美野里さん、雪不帰さん、飛鳥さん達半蔵学院の皆様、轟さんや緑谷さんを始めた雄英高校の皆様、神代さん、貴方達という素敵な方々と出会えて、私は1人じゃなくなった。

もう――孤独にならなくても、悲しまなくても良い。

1人で涙を流さなくとも、友というかけがえのない存在が、心を支えて寄り添ってくれる。

だから――

「黒影お爺様あああああああぁぁぁぁぁぁーーーーーーッッッ!!!!!

そのご恩を、報う時を。

治崎廻は一言で言えば努力家だった。

こんな残虐非道な事をして、努力家というのは無縁に等しいものだが、元はといえば自分を拾ってくれた組長の為に全てを捧げてきた。その為の努力なら惜しまずに使うし、遊ぶ暇などがあれば少しでも組長に恩を返すほどに、治崎は純粋だったのだ。

小さい頃、両親がいない治崎はどういった経緯かは覚えていないが、組長に拾われたという事は、悲惨な人生を歩んでいたのだろう。いや…本人からして悲惨かどうかまでは定かではないが、少なくとも

孤独であった。
『より辺がねぇならウチに来い――名前は？喋れるか？』
過去のことなど覚えていないのに、組長との出逢いだけがなぜかこびり付くように記憶から離れない。
人間の記憶というものは、ある程度不必要な情報などは処理して忘れるように出来ている。
脳の容量など人間が百年生きて百年分の記憶を有しても問題ないとさえ言われる程に優れてる。
今までのことは覚えてないのに、組長との出会いだけが記憶に残ってるということは、治崎にとって命の恩人であり、孤独だった自分を救ってくれた掛け替えのない存在というのは、小さい頃の治崎にとっても言わずも知れている。

治崎が潔癖症になっていたのも、性格による問題でもあったが、それを作り上げたのは幼稚園の頃に読んだ個性の絵本や『個性で為人を判断するのはやめよう』などが原因だろう。
幼い頃から生まれ持ったオーバーホールという分解と修復の個性は、強力すぎる所以に人から遠ざかれ嫌煙扱いされていた。
それもそうだ、修復だけ見れば優しい個性に見えるが、分解という個性はそれは末恐ろしく、一歩間違えれば人殺し。
個性なんて正体不明、超常と呼ばれるコレは治崎にとっては呪いであり、病気そのものだ。
一部、中国から主に頻繁に個性という超常を生まれ持った人間は、科学では証明されず、医療やその時の最新技術をもってしても治療出来なかったとさえ言われてる、不治の病。
今となっては当たり前のように受け入れられているが、治崎にとっては病気そのものだ。
況してや個性を持っていながら、何もせず人から忌み嫌われ、誰も見向きもせず判断する人が周りにいれば、嫌でもそうなってしまう。
竜燐がそうであったように、治崎も望んでもなく生まれ持ってしまった個性に苦しめられていた。

でもそんな組長は、知らなかったとしても手を差し伸べてくれた。
今まで誰にも手を差し伸べられたことなんて、産まれて一度もないのに…それは家族の愛情や、親の温もりに近いもので、輝いて見えた。

寝床、食事、養育費まで全部払い、面倒を見てくれる組長には感謝してもしきれないし、当時の治崎も何も最初っから歪んでた訳ではなく、今いる八斎戒による構成員達だって、治崎に優しくしてくれたし、治崎自身もこんな自分を受け入れてくれる大人達にも感謝していた。

中学に至り、一年生になってから日が浅い頃に、治崎は問題行動を起こした。
クラス内による暴力の問題事件、それが治崎が起こしたと知った時は、流石の組長も学校に足を運ばざるを得ない状況でもあった。小学生の頃はある程度、嫌がらせを受けても無表情で、やり返しもしなかった治崎が問題を起こすというのは、組長にとっては考えられない線だが…
面談も終えて、その日の下校の雨…組長に「何で手ェ出した？」と書かれた。
治崎曰く「お前の家族は敵野郎」と言われたそうだ。
組長からすればよく言われる罵声…大人に上がり、社会に溶け込めばそう言われるのは自然なのだろうが、治崎にとっては我慢できなかったのだろう。それも雪泉と同じく優しくて純粋だったのか、厚い温情がある所以か、自分を受け入れてくれた組の人達や親父を悪く言われて許せなかったそうだ。
自分のことをどう悪く言われようが構わない、小学校の頃もそうだったし、慣れていた。
だけど……家族のことまで馬鹿にするのは、蔑むのは、治崎の堪忍袋の雄が切れるというもの。寧ろ此処で手が上がらない人間など、それこそ恩知らずと言われてしまうほどに。
『成る程…それでお前、居ても立っても居られずケンカしたのか…極道がカタギに手ェ出しちゃあいけねェよ…』

その声に怒りは無かったが、厳しかった。
それもそうだ、その頃の八斎會は弱小という由来もあるが、解体が進んでから肩身が狭いこともあるし、問題行動を起こすのは危険なのも分かるが…元々組長は無意味や私怨で一般人には手を出さないのと、薬や人身売買などは組に違反する事だったのだ。
だから、組の門下…屋根の下に住んでる以上は組の掟も守らなくてはいけないし、暴力で解決するのは組長が嫌う事なのだ。
『けどなぁ…治崎』
だけど、それでも組長にとっては嬉しい事だったのだろう。
『面子、守ろうとしてくれて…ありがとうよ』
ゴツくとも分厚い手の皮が、治崎の髪に触れ、くしゃりと頭を撫でる。組長にとって、仲間を大事に想ってくれる治崎の心が、想いが、嬉しかったのだろう。

「組長いいいぃイィィィーーーーッッッ!!!!」
だから、あの時言ってくれた言葉が、誰よりも、何よりも嬉しかった。

無意識により起こりし行動は、治崎を活性化するように、最後の力をありったけに振り絞り、巨大な手を作り上げ、雪泉と緑谷を押し潰すように、勢い強く腕を振る。
零帝の皇剣が先か、治崎の最後の一手が先か、両者のどちらが決まるか――だが、何方が強いかなどの決着は付かなかった。
我慢の限界が迎えたのか、今まで体を強張らせて抱きついていたエリの個性が暴走を始め、視可できるエネルギーのような無固定な波動が、雪泉や緑谷のみならず、治崎を飲み込んでいく。
エリの巻き戻しが強力すぎる為か、飲み込まれた治崎は融合した活瓶力也、護武皮柔増を分離させるのみならず、三人の蓄積したダメージでさえも巻き戻して回復させてしまった。
それでも途絶えた意識は回復できない為か、気絶している。
「治崎！確保しました!!」

そこで全速力で駆け走り、体術を駆使して腕を拘束したのは麗日お茶子。お茶子は治崎の手に触れないよう細心の注意を払いつつ、地面にひれ伏させている。
「同じく、活瓶力也と護武皮柔増を確保!!早く三人を移動牢式で移動させろ!!」
愛用の真紅に染まった鎖鎌で二人を捕縛した総司は、大穴に向かって大きく声を叫び出す。
大きな穴から這いずるように出てきたのは、リューキュウ事務所に雅緋達。そして警官達も付いている。
「状況は?」
「ナイトアイは後方にいます、周辺住民には避難を呼びかけました!治崎はデクくんと雪泉ちゃんが!!でも二人とも様子がおかしくて…ここの周辺の温度が低下して…」
冷気が濃くなっているのか、お茶子の吐く息も白く、纏わりつく冷気に触れてるだけで痛みが走る。
「うぐっ!?ぁあぁぁぁあぁぁぁーーーっっ!?」
「〜〜〜〜〜〜っっっっっ!!!」
緑谷と雪泉が、言葉にならない激痛の叫びが鼓膜を震わせる。壊理による巻き戻し、その暴走のせいか、止まる気配は微塵も無い。

嫌!!止まって!!止まってよ…!!この人たちが死んじゃう!!!

エリは何度も心で叫びながら訴えかけるも、個性は留まらず、更なる進行が加速して二人を消滅させるまで巻き戻そうとする。エリ自身の意思など関係なく、個性は暴走し続ける。
それもそうだ、使い方も分かってないエリが巻き戻しを止めたりするなどかなり至難の業ともいえよう。
『壊理――お前は呪われた存在なんだよ』

止まってよ――!!!!

壊理は涙を流しながら、何度も何度も訴えかける。それこそ無意味だと言うのに、その願いが虚無のように何も起こらない。
「2人が超パワーアップして治崎を倒してから…急に倒れて…苦しみだして!!」
「クッ…遅かったか?」
「いや…まだ間に合う…」
お茶子の言葉に絶句する雅緋。そんな彼女にそっと手を添えるは、捕まってた所を助け出したイレイザー・ヘッドだった。
気付いた雅緋は、すぐ様に見せるようにイレイザー・ヘッドの頭を上げて視界を映させる。
(すまん緑谷…雪泉!・俺が見ておく…!!)
抹消の個性で、エリの個性を強制的に消すことで、巻き戻しによる個性の暴走は止まる。何も相澤の個性は単に戦闘戦によるだけでなく、こういった暴走する個性を止める為の役割も担っているのだ。
「!」
抹消したことにより、エリの個性は停止する。
少女の願いが届いたのか、巻き戻しによる個性は呆気なく止まり、少女は糸が切れたかのように気絶する。
個性は体力に伴い使うことで体力が消耗する。しかもこれだけ小さな女の子だ、これだけ個性を発動して気を失うだけでも不幸中の幸いだろう。
「と、止まった…?」
初めて体験する巻き戻しによる強い衝動を受けながら、雪泉は息を切らして少女を見る。
「こ、これで…無事に任務…」
緑谷の途切れる言葉を紡ぐ声に、ハッと我に返る。
そうだ――八斎戒の構成員は逮捕し、目的の核であるエリは救出する事に成功…。
これで、漸く終わったのか。
長きに渡る死闘は、一日の僅かな時間を掛けて終わったのだ。

「被害者がいないか確認を！救急車ありったけ呼んで!!それと敵連合のメンバーが近くにいるかもしれない…捜索を!!」
次々と飛び交う声は、警察やヒーローなどが指示をしたり活動に行っている。
負傷者は担架に運ばれ救急車に乗せられたり、移動牢式によって連れてかれる八斎戒のメンバーなど、こうして見ると任務が終わったのだと実感する。
勿論、ミリオも救急車に載せられたし、麗王や切島も無事だ。
「おかしいな…確かに構成員は全員だが……あと一人、八斎戒の組長が居ないぞ？」
「一応、医療器具のような道具があるが…移動させのか？とにかく隅まで調査しよう」
ただ1名、組長が居ないというのは不思議だが、どの道地下ルートの八斎戒邸は調べなくてはいけないので、やるべき事は変わらない。

「エリちゃん、気絶してから発熱が…」
「私の氷で何とか熱を下げられないでしょうか…？」
「とりあえず病院へ運ぼう」
個性の暴走による副作用や、興奮作用による体温上昇かだろう。どの道救急車で運んで適切な処置や治療を受けるしかない。
「緑谷…」
ふと名前を呼ばれた事に反射的に反応する緑谷は、声主の方向へ意識を向ける。
「ナイトアイ!!」
重傷を負いながらも、体が貫かれたナイトアイは、酸素マスク越しで緑谷に話し出す。
「……私の見た未来とは違う未来…どういう理屈かは分からないが、お前は私の願いを現実に…起こして見せた……お前は未来を、捻じ

曲げた――――ありがとう」

これは――一人の少女を助ける物語。

「ナイトアイ！僕、言いそびれたことがあって…オールマイトが生きるって！合わせる顔がないって…だから!!…だから、必ず会いましょう！会って、話を!!だから、頑張って!!!」

運ばれていくナイトアイに必死になって言葉を放つ緑谷に、静かに目を瞑るナイトアイは、何処か落ち着くように、最後を悟るように、瞑る。

必死で興奮気味な緑谷の肩に、雪泉がそっと手を添える。

「怪我人が多い今、手放しで喜ぶ状態ではないですが…今はそっとしましょう…ナイトアイが重傷な今、私たちは…」

「うん…そうだね……ごめん」

――ＡＭ９：１５分にて終了――

高速道路にて、分厚い黒の装甲を纏いながら走り出す護送車。その中には八斎會組員が１５名乗せられている。

いずれも重傷で、警察たちは脆棚の敵病院へと輸送されている。然るべき治療を受けてから、治崎は今回の件といい騒動を起こした為、タルタロスに連行されるようだ。彼処にはオール・フォー・ワンを始め、マスキュラーに、ムーンフィッシュ、ヒーロー殺しステインに、伊佐奈など、極悪人達が収容されている死すら生ぬるい監獄だ。

「所持品は押収済み、件の弾丸のほかに報告には無いカプセルを確認し…」

「ん？なんだ…トラックの上に人影が…」

警察が取り調べを受けてる中、警察の運転手は何かに気づいたようだ。トラックの上に人影など、余程の肝が据わってるのか、どちらにしろ只者では無いだろう。

だが、そこで見たのは…いや、見てしまったのは……

「なぁ…将棋ってさ――要するに玉を奪れば良いんだよな？」

敵連合の首領、死柄木弔――他にも荼毘や闇、Ｍｒ．コンプレスも付いている。

「死柄木さん、ゲームの次は将棋にハマりまして？私もこれが終わったら是が非でも相手になって欲しいですわ♪」

「そんな単純なのじゃねえけどな」

「はいハーイ！トガちゃんの言ってた通り来たぜ、うん！お疲れ様、じゃあ後は漆月ちゃん所に行って合流して、その後俺らも終わり次第京都に向かうから！」

まだ、終わってくれそうにないようだ。

１９７話「次は俺たちだ」

「八斎會から最寄りの敵病院へはこの高速に乗るのが一番早い。連絡ありがとね、トガちゃん有能でおじさん頭上がんねぇや」
ゴオォと高速道路を走る自動車の音が風とともに吹き、トラックに揺られながら、Ｍｒ．コンプレスは無表情な仮面をつけながら最新型の端末で連絡を取る。
横切る一般自動車など気にも止めず、まだ横目に見る運転手からは息が詰まりそうな程に心臓の鼓動を打たせながら、走ってることだろう。そりゃ天下の全国指名手配犯で名を騒がせてる敵連合、嫌という程に噂を立て犯罪行為を繰り返してるそれらは、市民も他人事のようには言えなくなってるのだ。
『連絡は仁くんの指示です。私は出久くんに見惚れていたので、寧ろ其方の手を煩わせてすみません』
「片方ねェけどな」
連絡腰からはトガのクスクス笑う声に、もう一つは「戦え！」だの「逃げるんだよ！」など支離滅裂な男性の声が聞こえる。これはトゥワイスによるものだと理解を示すのに時間はかからない。
『暫く警察の動きを見てましたので…彼処にはヒーローの他にも手練れな忍達もいるって龍姫ちゃんや鎌倉ちゃんが言ってたので、下手に動くのは危険だと判断して見守ってましたけど…というか一部始終見てたので可能性は極めて高い方です』
同じく鎌倉や龍姫は回収した荷物を持って次の準備に取り掛かってるようだ。次に京都へ行く移動手段になるような道具もなければ、自動車など免許はおろか講習を受けたこともない子供達なので無理だろう。
トゥワイスは元々学生の頃、職場の関係もあって原付は当然、ト

ラックなどの大型免許や普通自動車の免許など持っているので、もし自動車さえ盗めれば楽なのだが、生憎スーツに包まれてない現状、情緒不安定と支離滅裂で精神を酷く追い詰められてる軽い鬱病にもなっているので、還って危険を犯してしまうため、無理をするより落ち着くまで安静にしながら避難していた方が無難だろう。

『核の子は手に入れられませんでしたが…完成品が其方にあると考えられているのです。警察が極道達を捕まえてるなら、武器や所持品など押収して取り調べを行うでしょうし…まぁ、手放さなければの話ですが』

当日になるまで核の子や異能破壊弾の完成品や血清品は見せてもらえなかった。逆に見せない…と言うことは、自分たちに見せてしまうのはかなり危険なリスク、または治崎にとっても不都合で起きて欲しくない事が実現してしまうケースが高かったからだ。

治崎にとっては四人を雇い、あのまま手放して警察諸共捕まって連合の機動力と戦力を削ぎ落とすことで好都合な使い道を選んだつもりだろうが、それはどうやら大きな過ちだそうで、四人は見事に治崎の思惑を破ったのだ。

『それに…なかったとしても、アイサツはしておきたいでしょう?』

最後のお別れになるのだから――

「おいおいおい!!まさかあれは――…敵連合　死柄木弔!?!」

護送車の敵受取係の運転手は、気が動転しそうになるも大きな声で叫ぶ。

トラックの上に悠々と立つのは今では敵連合の首領・死柄木弔。まるで警察の動きが分かっていたかのように、先読みするように、警察の前に立ち塞がっていた。

「おいトカゲ!フラついてんぞ俺酔いやすいんだ、ちゃんと運転しろ

ボケ!!」
何時になく珍しく、怒り喚くのは荼毘。
意外な事だが、乗り物には弱い彼は、今じゃご機嫌斜めな様子で、口も悪い。
「トカゲはダメだスピナーだ!!グラセフとマリカーで鍛え上げた俺のドライビングを信じやがれってんだ!!」
「何キレてんだうぜェ!!」
「お前がトカゲなんて言うからだよ!!」
トラックの運転手は伊口秀一たることスピナー。どうやらトカゲと呼ばれるのは余程堪えるのか、嫌がる様子で頑なに否定する。
「…にしても本当にこれで良いのか?警察を襲うことが本当に〝真のヒーロー社会〟ステインの意思に沿うのか…俺は逡巡しているのだ!!」
「…必要な犠牲さスピナー、警察だって時間が動かなきゃ何もできない集団……あんまヒーローと変わらねえよ、それと運転頼むぜ」
警察は世論ではそれなりに批判が多いが、其れはヒーロー殺しの意思には沿わないだろう…何事を成す事に無関係なヒーローと忍以外に手を出さない彼が聞けば、青筋を立てていた事間違いなしだろう。それに乗せられるスピナーも、やはりステインファンと言ったところか、死柄木弔の言葉に乗せられるしかない。
「気持ち悪い…さて、早く片付けるか…闇も手伝え」
「承知致しましたわ」
掌から蒼い炎が燃え上がり、揺れる。
真ん中にいた闇は、コクリと頷きながら書物を広げたまま一歩、前に出る。相変わらず笑みは絶やさず、余裕そうだ。
「来るぞ!!」
警察は瞬時に危険察知したのか、呼びかけるように声を張る。荼毘が攻撃を仕掛けてくることが目に見えるからか、然し運転手は車を避けようともせず
そのまま勢いよく迫り来る蒼炎に飲み込まれてしまう。
「…ん?」

炎を放ったのは兎も角、何かしら実感がない。
炎で一旦視界が遮るとはいえ、感覚で分かるのは茶毘も場数を歩んできたからだろう。
進行する車とともに風が切り、やがて炎が消えゆくと其処には、砂に覆われたパトカーが炎を遮断していた。
「敵連合!・社会に仇なす悪鬼の徒!!」
パトカーの助手席から飛び出すように現れたのはサンドヒーロースナッチ。本名は日河原砂塵――個性は砂を操る個性であり、体が砂塵となっている。そこそこ有名なプロヒーローだ。彼のお陰で敵制圧も犠牲者を出さずに市民を守り抜いた記事などがよくメディアに取り上げられてる、知らない者が低いと言われるほどに、知名度が高い。
「ヒーロー!・そりゃいるよなぁ、怠い!!」
上からケラケラと笑う死柄木は随分と余裕そうで、逆に感心している。
別にバカにしてるわけじゃないし、現状厳しく強化されたヒーローの姿勢、鑑みて護送車にボディーガードとしてヒーローを雇ってるのは目に見える。
「んだアイツ…」
「スナッチですか…でも護送車には彼一人、忍の気配はありませんわね。雇えなかったのか、そう言う規律か、人員が足りなかったのかしら…彼、一人しか居ませんわね」
「よし…スピナー!・減速!!」
相手の手数は少なく、警備が薄い。
オマケに相手するのがヒーローと警察のみ、ならばやる事は簡単だ。死柄木の指示通りに、トラックが減速するとパトカーの距離が縮まり、それが狙いなのか、死柄木はパトカー目掛けて飛び込んでいく。
「射程距離!・態々近づいてくるとは、好都合!!」
スナッチは射程距離範囲内に入ったことを知ると、上半身を砂塵にし、死柄木の差し向けた凶器の手を封じ、拘束する。
「五指で触れて崩壊させる個性!・ならば砂塵は掴めまい!!」

「……天敵ですね」
個性による相性が致命的に悪い。
死柄木は触れたものは崩壊するが、それは実物をきちんと五指で触れてる事が条件で、空気や砂塵、水といったものは崩壊できない。それが正に現状を物語っている。
然し死柄木弔も何も考えいない訳ではないし、況してや自分と相性が悪いなどと言うのは、個性を見て直ぐに見解した。
…態と、捕まりに行ったのだ。
掌のマスク越しでニヤリと不気味な笑みを浮かべながら、嘲笑う死柄木弔は、上手く計算通りに事が進んでいる。
「あらあらぁ…捕まってしまいましたわねぇ…」
「有名人じゃねえか、個性割れてると不利だよな」
「死柄木は視線誘導の囮、俺たちの出番だ。ショーを始めようぜブラザー」
死柄木は視線を集める為の囮。
主犯格が自ら前に出ることで、視線は自然と彼に誘導し、注目を浴び集め、無視など出来ずに捕まえさせる。手がいっぱいなスナッチは無防備、後はガラ空きだ。
ならば後方に残った仲間たちが、やってくれる。自然の流れのように、後ろ三人の実力を充分に発揮させ、状況を打破する。
「パトカーフワリ空中浮遊!」
マジシャンのように丁寧に礼儀正しい仕草をしては、圧縮した何かのビー玉をパトカー目掛けて投げ放つ。
瞬間――文字通り、パトカーは何かの衝撃を受けたかのように、突然浮遊してしまう。
「この通り、タネも仕掛けもございやせん」
正体は圧縮を解除した事で、ビー玉から巨大な岩が現れ、跡形もなく吹き飛んでしまう。
スナッチもその衝撃に思わず体が大きく揺さぶり、その振動につい捕まえてた死柄木を離してしまう。
「弔さん、援護しますわ!」

次に闇は札を地面に二枚貼ると、そこからは黒色に染まった漆黒の茨がツルのように伸び、空中で足場が不安定な彼の道を作り出す。安全に着地した死柄木はそのまま護送車へと突っ込み、窓ガラスに触れて割れさせる。
「させんわ！この…!!」
「貴方達は勝手に死んでて下さいまし♪」
次の瞬間、片方の茨のツルは、跡形もなく空中に落下してきたパトカーをスナッチや運転手ごと跡形もなく、叩き潰し、右往左往に蹂躙し破壊する。
砕け散る車の部品、運転手の悲鳴、真っ赤な鮮血が、空中の間に全てが起きる。
見事に砕け散ると共に、死柄木が相手してた護送車の方も、運転手を崩壊させてハンドルを奪い曲げさせ、転倒させる。
そして最後には茨ツルは死柄木の体を掴み、彼に被害が出ないように安全に隔離させる。後は転倒した護送車の勢いが止んで、乗り込むだけ。
「グランドセフトオート!!」
某１８禁指定された過激なゲームのセリフなのか、ハンドルを強く回転しながら、ゲームのセリフを吐くスピナー、大分様になってるようだ。

「くっ…うぅ!!」
先程の闇による忍術の攻撃を食らった影響か、スナッチは横転し、運転手の警官を抱きかかえている。
「貴様ら…！なんたる鬼畜の所業!!」
スナッチは憤慨を纏わせた声で震えながら、下半身は肉が抉れて多量出血しており、警官は黒い茨ツルを直撃で喰らったせいか、言葉には言い表せない酷い傷を負い、意識ともに呼吸も途絶えている。
近くに自分が付いていながら、警官どころか敵に良いように利用され、蹂躙されるのは、長年ヒーロー稼業を務めた彼にとって、屈辱でありこれ以上にない実態だ。

「砂化で免れたかぁ…残念だったな！目の前の警官一人も救えねえでみっともねぇ、ヒーローは人命優先しちまうって聞いてたんだけどな」
ぼぼぅ！と発火する炎の音が聞こえ、我に帰るスナッチ。背後から忍寄るは、悲惨な現状に打ちのめされてるスナッチを、さぞ嘲笑い蹴落とすかのように冷笑を浮かべる茶毘。
「……貴様、茶毘と言ったか。ここ最近、各地でヒーロー焼死体が相次いで見つかると記事にもなってるが、蒼志か貴様…何方だ？」
「お、もう俺の噂が立ってるのか、嬉しいね」
「遺族の気持ちを考えたことが無いのか!!!」

虎の如く、砂によって造形した猛虎が、茶毘を襲う。下半身が無くなり、守るべき警官が死に絶えた尚、最後まで悪に屈することなく立ち向かう姿勢はヒーローの鑑とも言えよう。
ボゥ！と瞬発力が高い炎を防ぎ、茶毘ごと砂で包み込もうとするスナッチは、憤慨と私怨も含めた攻撃を乗せる。
「効かんわ！貴様ら邪悪に屈するなどあってたまる――「ハイ、さよーなら」ッ」
瞬間、今度はＭｒ．コンプレスが腕を出しては砂と炎を含めたスナッチを圧縮する。
言葉が途絶え、たった一つのビー玉と成り果て、圧縮されたその中は想像を絶するような地獄絵図だろう。
砂は火を鎮火させる効果はあるが、個性だって身体能力の一つ…何時迄も個性が続くはずがなく、況してや下半身が無くなり体力も削られている。オマケに炎は防げても熱を感じないわけではないのだから、苦痛も熱さも感じる。
つまり、スナッチは今…脱獄不可能な灼熱地獄に閉じ込められ、死ぬまで燃え続けているということだ。
火刑――即ち火を扱うことによる死を意味表す言葉に相応しい。火を浴びると例え気絶してしまっても火による熱さや痛みによって強制的に意識を復活させ、また火に焼かれての繰り返し…死ぬまで永

遠に続くそれは、地獄の業火のように苦しみもがき、地獄に相応しく残酷な死を迎えることだろう。
　茶毘に伏すとは、随分と皮肉が効いている。
「あっちち！砂って燃えねえよな…」
「砂化の状態だったにもかかわらず闇の攻撃で下半身が失われてたの見る限り、個性発動する部位が限られてんだろ。どの道出血多量や炎に抱かれて死ぬだろうな」
「なんだったら私の忍術と茶毘さんの個性を合わせて、火あぶり柱～、なんてのも面白そうですわね♪」
「…お前、昨日何の本読んでた？」
「全国で起きた処刑方法です、個人的には鉄の処女とこれ、ファラリスの雄牛が好きですわねぇ♪」
「…トガと同じくお前もイカれてんなぁ」
「何言ってるんですか、社会に仇す私たちがマトモだと格好付きませんよ？そこは狂気っていうんです♪」
「闇ちゃんが言うと妙に説得力あるねー、確かにマトモな敵って居ないもんなぁ」
「狂気ねぇ…俺も確かに狂ってるって自覚はあるけどなぁ……やっぱ性格とかが色濃く出るんだろうな」
　そんな圧縮されたスナッチの断末魔など聞こえないのか、三人は談笑しながら背を向け後にした。

　ガガ…ガガ…と、金属音か何かが鈍く動く音が物静かな高速道路で不気味に驚いている。
　何かを蹴飛ばし、押されるようなこの音の正体は、直ぐに分かることだろう。
「なぁにが『次の支配者になるのは俺だ』だよ、負け犬」
　厳重に拘束処置された治崎を、ゴミでも見るかのように拘束台ごと蹴飛ばす死柄木弔の姿。音の正体はこれで、死柄木は目的とお別れの

ために、治崎とこうして再開を交わした。もっとも、穏やかな形ではないにしろ、死柄木は治崎を見下ろし、気絶から回復した治崎は半ば目が死んでるように何処か正気を感じないのは、八斎會として終わりを迎え、敗北してしまった虚無感によるものだろう。
「……俺を殺しに来たのか、死柄木」
「いいや？俺はお前が最もイヤがるような、嫌がらせをしに来た」
思うがままに事が進み上機嫌な死柄木はとても饒舌だ。子供大人のような感じではないのだが、こう…言いたい事が山ほどあるのだろう。
「俺はお前が気に入らない、嫌いだからだ。偉そうだし、後こう…上から目線だしな」
パツン!!と何かが破裂したような、それに似た擬音が治崎の腕から鳴る。一瞬の出来事、だが瞬時に痛みが激しすぎて顔を歪んでしまう。音の鳴る正体に振り向くと
「――俺も」
嘗て、治崎によって片腕を分解されたＭｒ．コンプレスが義手を見せながら、素顔を表す。腕が突如として消えている…恐らく圧縮による個性だろう…このような使い方もあると見ると、下手すれば頭を圧縮すれば一撃で相手の命を獲れる、致命傷を与えれる個性だ。
「私も…♪」
次にコツコツと足音を立てながらやってきたのは、満面な笑みを浮かべながら死柄木の隣に並び立つ闇。何やら最新型の端末の液晶画面を、此方に見せるように向けている。
「あー…っと、なぁ…コレ箱二つあるけどどっちが完成品？まぁいいや、一応せっかくだし有り難く両方もらっとこ」
死柄木は手始めに保管されていたカプセルと弾丸を、五指で触れないようにして調べている。
一つは完成品、もう一つの箱が血清。異能破壊弾を手に持ってるのは死柄木達なので、血清品の方はいらないのかもしれないが、万が一ということもあるし、何方かが分からない以上はどの道持って帰らなくちゃいけないだろう。

こういう時、ドクターがいるとどれだけ助かるか、痛感するほどに実感できる。
「返せ……」
「……」
治崎の鋭く噛みつくような、威圧を含んだ声を聞いた死柄木は、大変つまらなさそうな顔をして、完成品と血清品を闇に手渡すように押し付ける。糸を読み取った闇は、巨乳の谷間に箱を二つ忍び込ませ、次にポチポチと指で液晶画面に触れて何かを操作している。
「あのなぁオーバーホール…個性を消したがってる人間がさぁ、個性に頼ってちゃいけねェよ…」
悠々と立ち歩み、少し前屈みになって指で腕に触れた途端、ビキッと亀裂が生じる音が鳴る。
ビキビキと枯れ葉を握りつぶすように亀裂が走り、腕が粉々になっていく。
「!!
!!」
死柄木の崩壊は以前よりも速さを増している。其れは死柄木個人が心身共に個性も成長してることを証明付けている。数秒もすれば全身に回って粉々になってしまう。
「崩壊が全体に伝わる前に、切り離さなきゃな?」
スッ…と懐からは映画にも出てきそうな大型のサバイバルナイフを取り出し、崩壊していく腕目掛けて、刃を振り下ろす。
ザグッと肉を斬る不快な音がこびり付き、出血は止まらず溢れ出てくるばかり。
「よしっ――これでお前は晴れて無力非力の無個性マンになったわけだ」
死柄木とコンプレスによって、治崎は両腕を失った。
治崎の個性、オーバーホールは強力過ぎるあまり、使い勝手もよく触れただけで個性を発動できると言った強力っぷりを見せていた。
だが、それはあくまで触れた前提での話――今のように両腕を切断し失うことによって、個性の制限、そして発動をなくす事が出来ると言った致命的な弱点も存在する。

死柄木の言葉に大変、皮肉が効いている。

そこで指鳴らしが合図だったのか、闇は端末を操作しながらこちらへ近付くと、画面に表示された映像を、治崎が見える範囲の距離にまで近づける。

「こ～れ、何か分かりますでしょうか？」

「ッ!?!!」

そこに映っていたのは、端末の映像に写されていたのは、俄かには信じがたいが…寝たきりの組長が写っていた。

「お、やじ…??」

急激に、心臓が嫌に脈を打ち、高鳴る。

寝たきりの組長は相も変わらず、目を瞑ったまま表情を微動だにしない、植物状態になっている。

勿論、組長がなぜ映像に流れ出てるのかは不明として、そこから紙袋を被った憑黄泉が左右に一匹ずつ現れる。

その憑黄泉二体が持ってるのは、サーベルナイフとアサルトナイフ、凶器を見て治崎は全身の血の気が鮮明に引く感覚を味わう。

闇や死柄木が今、自分に何をさせようとしてるのか、皆まで言わなくとも直感で理解した。

「おい…？何の真似だ…!?!組長は関係ねぇだろ?!!」

「これは事前に撮ってる映像ではなく、ビデオ越しですので…最後のお別れとして何か掛ける言葉はありますか？」

「ハンカチでも持つか？あ、悪い――両手無かったわな、失敬失敬、おじさん片腕なくしちゃってるから、多少同情しちゃうぜ。自分でやっておいてなんだけどさ、此処からが最高のショーになるんだし…な？」

「組長に何しやがる!!!今すぐ離せ!!!離しやがれゴミども!!!」

「お前もゴミだろ――騒いでたってやることは変わらねえぞ？」

血走った目で、これまでに聞いたことのない怒号と焦りっぷりに、ニタニタと悪質な笑顔を浮かべる死柄木は、端末に向けて指をクイッと回す。

「言っただろう?俺はお前に嫌がらせをしに来たって――尤も、お前らが潔く俺らと対等に仲間に入ってくれたら、後悔なんてしなくても済んだのになぁ」
映像には組長と憑黄泉の二体、この二体は以前トガ達元出向組が黒柴と打ち合わせして合流した時の、彼女のボディガードを勤めてた憑黄泉である。
そんな三人の前に、映像の端から新たに現れたのは、黒柴粒子。D―スクワッド組織のリーダー格にして、漆月の右腕の一人。
『此方、黒柴粒子――敵ネーム『ダークマター』現在、八斎會の組長の処刑を実行する。殺れ、お前ら』
人間の言葉を理解している憑黄泉。
元々そういう風に訓練を強いられたのか、単に懐いたのか、原因は不明だが妖魔である憑黄泉は彼女の命令に頷き、凶器を首に当てる。
「よく見とけよオーバーホール、気に入らないものを壊される光景ってのをさ」
「やめッ――!!!」
次の瞬間。
液晶画面に表示されてる映像は、迸る血液で画面いっぱいになった。
首を切断され、アサルトライフで体全身を撃ち抜いていく銃弾の嵐、その発砲音。
脳内に焼きつかれるように、治崎は目の前で自分を拾って助けてくれた命の恩人の死を、残酷な形で見せられた。
「……」
今、自分はどんな顔をしてるのだろう。
そんな考える事でさえ、治崎の心に余裕はなくなり、死柄木に触れられたように、心が崩壊していく。
「はい。これでお前を支えてた信念というのも、原点というのも、たった今失いましたとさ――お前に味方をしてくれる奴も、仲間も、努力も、全部ぜんぶお前の手には残らなくなっちゃったな?なぁ、オーバーホール…」

コツコツと歩み寄りながら、治崎に語る途中で笑いをなんとか押しこらえてるも、所々に嘲笑が漏れてしまってる。
自分の思い通りに事を運ばせ、嬉々とする死柄木は、治崎と目を合わせる。
「お前が費やしてきた努力はさぁ！全部俺のもんになっちゃったよ!!」
そして勝ち誇った満面な、個性以上に恐ろしくて凶暴な、悪意を曝け出した笑顔を治崎に向けて、見下ろし、高らかに宣言する。
「これでお前は実の命の恩人を報いるどころか、仇で打つ形になって、組長は元に戻らず俺たちの良い玩具にされて――本っっっ当に惨めなもんだぜオーバーホールぅ!!
これからお前は呸える指もなく、ただただ眺めて生きていけ!!頑張ろうな!?
生きることは劇的だろう？死ぬよりかは全然良いだろう？大丈夫――お前が生きてることは、俺たちの踏み台となった証として証明されて行くんだからさ、せいぜい無個性としての余生を過ごしてろよ、な？」
死柄木の一語一句の言葉にもう声が出ない。
命の恩人である組長に恩を返したかった、元はと言えばたったそれだけの事なのに…その為だけに手を汚してまで次々と計画を進め、努力を重ねてきたのに。
こんな奴らに緑谷や雪泉と同じく計画を壊されて、挙句に個性があるにもかかわらず無個性にされてしまって、誰よりも異能を無くす世界を夢見た治崎に、因果応報の如く自分に返って来て、夢が叶った時に組長を治すつもりだったのに、その組長が目の前で殺されて、もう修復すら不可能で――ありとあらゆる理不尽な悪意が、治崎の心を崩壊し、腹わたから煮えたぎる憤慨と憎悪、悔恨、悲哀が、全て全て全身に駆け巡り溜まって行く。
『面子――守ろうとしてくれて、有難うよ』

ふと頭の片隅に掘り起こすように、回想された記憶、それは嘗て自分に暖かい手で頭を撫でてくれた、組長のあの時の笑顔。そんな笑顔でさえも、今じゃもう元に戻らない。

オーバーホールという、分解にして修復の個性があるというのに、両腕を失った事でもう復元は不可能なのだ。個性があるにも関わらず無個性で、然も散々壊理を呪いと呼んでいたのに…まるで此方が呪われてるみたいじゃないか。

たった一つの家族…八斎會という居場所。

其れの復活はもう叶わず、今日の1日によって完全なる崩壊に追い込まれ、治崎にとって死刑宣告に等しい程に、終わりを告げていた。

この世界における大体が、原点というものを持ち超常が現実となった今を謳歌している。

先代の英雄達や、闇に生きし敵達も同等で、其れは変わらない。

だが…原点というものを壊された時、人はどうなってしまうのだろう??

「おーい!死柄木、闇、Ｍｒ．！警察がそろそろ追ってくる!早く車に戻れ!!茶毘はもう戻ってるぞ!」

高速道路の中心で、火災と転倒した自動車のなか、スピナーの声が静まった空間に声が聞こえる。

「さて、最高のショーも終えた事だし俺たちはトンズラさせて貰うか…お後が宜しいようで」

「では御機嫌ようオーバーホールさん♪そして永遠にさようなら、踏み台役になって下さり、有難う御座いますね。大変、良い眺めが見れそうです」

Ｍｒ．コンプレスも闇も、凡ゆる負の感情とただならぬ想いに顔が歪んで行くのを見届け、死柄木は背を向けると懐にしまっていた掌を顔に付ける。

静寂と炎に包まれた高速道路を歩む中、死柄木はふとある事を思い出す。

『――次は、俺と漆月だ!!!』

あの廃工場で治崎と衝突したあの出来事。
何方が支配者になるか、仲間になるか、治崎の傘下に入るかとの交渉にて、死柄木が放ったあの言葉。
「訂正しておこう…」と小声でつぶやきながら、死柄木は高らかに
「次は――俺たちだ」
そういうと、次の瞬間――背後からはただならぬ治崎の、聞いたこともない断末魔が静寂を突き破り、ＢＧＭになるかのように、今の死柄木達の姿は、正しく支配する側となった。
これにて、長かったようで短いような…そんな八斎會との因縁は完全に終わりを迎えた。

１９８話「明るい未来を」

緑谷達が死穢八斎會と戦っていた頃、とある山間部にて敵連合捜査課の塚内警部と同じく、グラントリノに大きな動きがあった。
「この数日の間に目撃情報が集中した…連合で最も厄介なお前さんさえ捕らえれば、後は芋づる式って訳よ」
「グッ…!?」
深い森林地帯。
足裏をジェットで噴出する個性は、スピードを生かしたパワーを発揮し、敵連合の一人――黒霧を無力化し捕らえることに成功。
全身は刃物で傷が開かれ、服には多少の穴があり、縛られた形跡が残されていた。
因みに其れ等の傷はどれも、塚内警部達やグラントリノが付けたものではない。
「気を付けろ！頭と両手周囲にもワープゲートを出せる、そいつの拘束は難しい!!」
塚内警部の警告を背に、グラントリノは一息吐く。
思った以上に苦戦はしなかった。どちらかといえば呆気なかった…と言うのが妥当だろう。それ程にあっさりと、黒霧を無力化出来たのは、見た時から傷跡があったからだろう。
個性を発動させれば厄介なのに変わりはないが、それでも不意を突いて攻めれたのは大きな成果だ。
「いやはや…目立って…しまい、ましたか……折角、漆月が記憶を取り戻したというのに……此処でゲームオーバーになるとは。……私も随分と人気者になったそうで……」
地面に伏せられながら悪態を吐く黒霧は、名残惜しそうに自身の終

わりを悔しそうに呟く。
　警察官達が移動牢式を黒霧に嵌めながら、厳重体制を維持し続け、黒霧を制圧。
「是が非でも死柄木弔と漆月に手土産…言うなれば力を与えるべく、付き添うおつもりでしたが…どうやら貴方達の弛まぬ努力により、それも徒労に終わったようで…。
　ところでグラントリノに塚内警部…ここら辺に野獣が出ると噂があったのですが…ご存知ありませんか？」
「……詳しくは署で聞こうか？」
　これ以上悠長に話を設けては、またワープゲートを使って逃げられてしまう危険性が充分に高い。
　気になる事、聴きたい事は色々あるが、まずは黒霧をタルタロスに連行しなければ話は始まらない。

　だが次の瞬間、突如として地震が襲いかかる。
「ッ!?何だ!!?」
　森全体が揺らぎ、小鳥達が空を飛ぶ。
　静寂だった森は一瞬にして騒めき、何の予兆もなく起きたその地震の発生源は近くにあると直感で理解する。
「グラントリノ、塚内警部…彼の方が育てていたのは何も死柄木弔や漆月だけではないのですよ……
　オール・フォー・ワンの忠実なる僕がその一人…その名も」
『黒霧、覚えていてくれ――この先、もし僕が居なくなってしまったら…弔を守れるのは君だけになる。漆月も独り立ちした時、弔達ばかり護衛は任せられない。となれば君1人では不安で心許ないだろう。ならば、彼等を頼るといい』
　オール・フォー・ワン率いる残党――ギガントマキア。
　キガースの神話に語られた巨人の戦士が、森をなぎ倒し顔を出す。
突然現れた巨人に、警察部隊は直ぐ様彼に拳銃を向け警戒態勢に入

る。そんな集団を蟻のように見下ろしながら巨人はこう言った。

「全ては――主の為に」

八斎會邸付近――朝の住宅街はヒーローとの抗争があった為、被害は目に見えている。

大きな穴、家屋倒壊、軽傷者など、被害は出ているがこれでもアレだけの出来事が起きたにも関わらず、朝一で被害が最小限に留められているのは奇跡的だと、事情聴取や調査をしていた警官が言っていた。

分解して融合し巨大化した治崎との戦闘で、軽傷者5名で家屋倒壊が4棟…普通に考えればもっと莫大な被害が出ており、最悪死人が出ていても可笑しくはないのにもだ。

被害を予め最小限にし、治崎を再起不能に陥れた緑谷と雪泉の成果は賞賛に値するものだろう。

しかも軽傷者5名はどれもかすり傷程度で、外傷的にも殆ど深くもなければ、後遺症が遺ると言った結果がないのが不幸中の幸いと言ったところだろう。

巨大化敵の制圧だけでも骨が折れると言うのに、被害をここまで大きく出さないというのは、プロヒーローでも中々に出せない結果だし、何よりも巨大敵との戦闘にそこそこ慣れてる波動ねじれも「でっかいのは難しいんだよ！」と言う程に。

さて、八斎會との抗争による被害の話はこれくらいとして――一方、抗争後に傷ついた者達は最寄りの大学病院へと搬送され、忍も含むヒーローや学生は皆、入院して安静を取るように言われていた。

「えー、一応隅々まで調べましたが…緑谷出久さん。腕以外は何処も異常ありませんでした」

「あ、ありがとう…御座います……」

「因みに聞くけど、その異常な腕…一体どうしたら…てか何があってこうなっちゃったの君…」
「あ、えっとこれはその…というか他の皆さんは…？」
腕の骨にヒビが入っており、未だに後遺症が残っているその腕に疑問を抱える医師は、未だに凝視している。
治崎との戦闘で負った傷はエリの巻き戻しによって修復され、全回復した緑谷だが、どうやら無茶を通して歪んでしまった腕までは、巻き戻すことは出来なかったようだ。
その気になれば出来るのかもしれないが、コントロールが困難なエリが下手してもう一度あの個性を使えば、それこそ猿に巻き戻されるか消滅されるかだろう。
あの個性を浴び続けてなお、回復で済み、相澤先生の抹消で取り返しのつかない事態にならなかったのは、不幸中の幸いだ。
「俺が見ていたよ」
「相澤先生!!大丈夫なんですか!?」
「おい、ここ病院だぞ。無闇に声デカくして騒ぐな、あと俺は１０針抜いた、問題ない」
問題ないと言える方が逆に心配だ。
「ほら、来い」と手招きする相澤に、緑谷は後を着いていく。医者からは安静にと言われてる以上、無理に動かすのはやめておいた方が良いだろう。
「大事なところで居てやれなくて済まなかった…」
「いえいえ…それで…他の皆は？」
「ああ、芭蕉は全身打撲に裂傷が酷いが命に別状はない。雅緋も顔面にヒビが入ったものの、後に遺るようなモノではないということ、ファットガムと天喰は骨折が何ヶ所か…
切島は裂傷が酷いが治療を受ければ直ぐに治るそうだ。麗王は腕や腹部による裂傷…どれも浅いから直ぐに治るだろう。丁度、専属の方々も見舞いに来てるそうだし面会してる当たり、大丈夫だろう。夕焼は何処も損傷がないらしい…本人曰く、生れつき治癒能力が高いってことで、致命傷を受けなければ軽傷辺りは大丈夫なんだろう」

何方も被害はかなり背負ってるようだ。
だが相澤が気掛かりになってるのは、天喰と同じく行動を共にした彼女がなぜ、無傷でいたのか。
彼女の技術が高く、戦闘面でもかなり上手だったとしても、天喰だけが怪我をして彼女に外傷がないというのは、俄に信じられないものだった。
夕焼が強いというのはそれこそ、通形ミリオ達と同じく、麗王と夕焼で実戦を積んでるので実力は見ている。
更に天喰曰く『斬口崎子』との戦闘で、怪我を負っているにも関わらず、他の者と比べて治癒能力が高いという点は、医者も「是非医学の研究に！」など申し出する位だその後夕焼は綺麗に丁重にお断りした）
「ロックロックも幸い内蔵を避ける形で刃が刺さっていたからか、大事には至らなかったようだし、雪泉は緑谷同様にエリちゃんの個性で巻き戻され、負っていた傷は回復済み…治療は特になく皆の安静を待ってるよ」
となれば全員とも命に別状がないという結果。
それに安堵の息を零す緑谷に、相澤は話を続ける。
「まぁ、雪泉の場合は安静を待ってるのもそうだが…今は…」
「…？」
「いや、時期に分かる。
それよりだ、話戻すぞ。エリちゃんはまだ熱も引かず眠ったまま…安全性も鑑みて今は隔離されている」
「隔離…ってことは、面会も出来ないんですか…？意識が戻ってからでも…」
「お前が得たあの子の情報を考慮した上での結論だ、人を巻き戻す個性をコントロール出来ない以上、何かの弾みでまた発動してしまえば、俺以外に止める術がいない。下手に何かしら個性が無意識に、または突然個性を発動してしまえば、俺が見てない時に事故が起きたらそれこそ責任は取れない。だから隔離させた方が良いって話だ」
幼い彼女は精神的に負荷があり、肉体的にも体力が小さいのと消費

が激しい。これ以上下手に彼女と接触するのは望ましくないだろう。
「お前は全身を絶え間なく大破壊し続けることで接触し、雪泉は常に肉体を超えた忍術を発動し続けることによって、保っていた…そうだろ？」
「はい…」
「そんな方法を取れる人間はそういないし…居たとしてもあの子がそれを上回る出力で発動したというのならば、未知数な上に精神的にも今は、これが合理的だと思う。あの子の為にもな…安心しろ緑谷、隔離と言っても一時的にだ。彼女の心の負荷は壮大だし、体力が戻りつつ落ち着いたら、面会も可能になるそうだ」
　そもそもの話、自分を大破壊し続けるだなんて発想は思い付いたとしても実行しようとするには相当な勇気が必要だ。
　痛みが消える前にと言っても、破壊し続けるだけでも並の人間…いや、手練でも人間は無意識に力の出力にセーブがかかってしまう。それすら通り越して限界突破なんてするんだから、そんな生徒を持った相澤としてはクレイジー過ぎるものだろう。
「また、巻き戻しによる個性…建物や地面には作用せず人にのみ…だったことを考えると、調整の訓練も気軽に行えるものじゃない…まぁ、それが可能であってもなかろうと、エリちゃんの容態を見る限り、彼女の個性には頼れないという意味だ」
「え？それってどういう…」
「お、着いた。雪泉、遅くなってすまないな」
　病院の廊下にあるソファーで、腰を掛けながらテレビモニターを見つめながら、心臓の鼓動を抑えてる雪泉は、相澤に声をかけられ２人の存在にやっと気づく。緑谷も今気がついた。そうか…彼女はもう既に待機してたんだと思いながら、相澤の言葉に不安が過ぎる。
「いえ…大丈夫です……気分を和らげる為にとテレビを少し…ですが……」
　雪泉はチラ見とテレビモニターにもう一度視線を向ける。緑谷は小首を傾げ、相澤はそれどころでは無いと廊下の扉にある「手術室」に体を向けている。

テレビモニターには薄らと『京都にて抜忍発生！破壊活動による損傷、活発する抜忍による被害は後知れず…』と映されている。もし緑谷がこれを目にすれば、飛鳥達のことで心配になるだろうが、そんな事を考える猶予などどの道与えてくれやしない。

「お前らも受け入れるんだ。酷な話だが…覚悟はしてくれよ。丁度、彼も到着したところだ」

扉を開けたその先は――

「オールマイト…！リカバリーガール！」

痩せ細ったトゥルーフォームのオールマイトに、リカバリーガール。２人の顔にはどこか、覚悟を決めたようで、何処か悲しげな色も見える。

「バブルガールにセンチピーダー…という事は…」

雪泉は意を決したように悟る。

彼女は先に、相澤先生に話を聞かされた為、緑谷のように突然を言い渡されず何とか覚悟を決める時間があったが、それでも直面されると、辛いものがある。

「何で――「私が呼んだの…」バブルガール…？」

「だってサーはいつもオールマイトのこと…」

「泡田…」

薄らと目に涙を浮かぶバブルガールに、センチピーダーは優しく声を添えながら、ハンカチを渡す。

もう皆まで言わなくとも凡そ、目星が付いたであろう…緑谷の顔色はますますと悪くなる。

「手の施しようがなく、正直…生きているのが奇跡的で不思議な程に…」

「こうもなってしまっては治癒では何ともならんよ…」

医者の言葉に続いてリカバリーガールも諦めるように首を横に振る。残された時間は、そう長くはなく――逆に言えばもう少ししかな

い。そういう事だ。

ピッ――ピッ――

静寂な病院の治療室には、心電計の音が無機質に鳴り続けている。
呼吸マスクを装着し、失った左腕、空洞化した腹部には大量のチューブが繋がれていた。
彼は目を瞑ったまま、微動だにせずただひたすら静かに、己の死を待ち受けるばかり。
「ナイトアイ…！」
慣れ親む声に、サーナイトアイは微かに目を開ける。朦朧とする視界には、痩せ細ったオールマイト…懐かしきコンビが目に映る。
「オール……マイト……死で…漸く会う気に……？」
「返す言葉が見つからないよ…私は君に、酷い事を……」
負い目を感じたオールマイトは、喧嘩し別れを告げた後の事も含め、罪悪感に押しつぶされそうになりながらも、申し訳なさそうに謝罪する。
「ナイトアイ！ダメだ…生きて!!」
「随分とかしこまってるじゃないか……私は別に…貴方を恨んじゃいない……それどころか、貴方にはただ、幸せでいて……いつまでも笑っていて欲しかっただけなんだ……陽花くんが死んだ後もあなたは……理不尽や…残酷な現実に…いつも正面から向き合い……1人で支えてきた…そんな貴方には……彼女の分も含めて…幸せでいて…欲しかった……だけなんだ…」
「そんな事ない!!私一人ではない、君がいたから何度でも立ち直れたんだ!!私一人だったら、とっくの昔に挫折してる…彼女がそうしたように…君も抗ってくれ!!これまでの償いをさせてくれ!!」
「償いなど…私も多くの人間に迷惑をかけてきた……」
サー・ナイトアイはオールマイトに予知を使ったことで、殺される未来を見てしまった。そして、予知により見えてしまった未来は、永

遠に変えることは出来ない。
それが本人が痛いという程に分かっていても、何度も未来を変えようと手を尽くした。
だがそれは…そんな努力など意味が無いと言うように、結局変えることは叶わなかった。
「未来は変わらない…だが、そんな絶対という存在を……緑谷と雪泉は打ち砕いてくれた…」
「私たち…？」
「変わることがない…変えられない…その考えがいつも…常に頭の片隅に……あったんだ。
だが…今日見たあの絶望の未来は……2人とエリちゃんのお陰で未来は変える事が出来た……」
今まで見てしまった未来は変わらなかった。
治崎によって2人が殺され、エリが治崎の手によって逃げ果せられる残酷で最悪なバッドエンド――だが、それを綺麗に塗りつぶすように、未来は変わっていた。
「思うに……エネルギーなんじゃないかな……」
サー・ナイトアイはこう考えた。
己が強く望む未来…疑念の余地が入らない強いヴィジョン――望む願望たるエネルギー…
それは緑谷や雪泉だけじゃなく、ミリオや雅緋、天喰や夕焼、ファットガムや芭蕉、全員が全員――強く1つの未来を信じ紡いだことで、そのエネルギーが結果となり、放たれた結果なのではないかと。
まるで機械仕掛けのように、一つ一つの行動さえもが約束されたかのように。
「未来は、不確かで……不安が沢山ある……でも、あって当たり前なんだ……そんな不安のなか、貴方は考えを改めてくれた……私はそれで充分救われた……私がいなくなった後は…陽花さんに会いに行くよ…もしかしたら雪泉…黒影も一緒にいるかもしれない……」
「サー…ナイトアイ……」
ただ――思い残すことがあるとすれば。

「サー!!ナイトアイ!!」

勢いよく開かれた病室の扉から、愛弟子の声が響く。

看護師から「まだ動いちゃダメですよ!!」と止められながら無茶をして此方へ駆け寄る辺り、彼らしいと言うべきか…だが、ナイスタイミングかもしれない。

「ミリオ先輩!」

「ダメだよ生きて!!死ぬなんてダメだ!!」

「ミリオ……辛い目に遭わせてばかり……師である私が…もっとしっかりしていれば……」

「そんな事ない!!貴方が教えてくれたから!俺は強くなれたんだよ!!貴方が教えてくれたからこうして生きてるんだよ!!!

お願いだよ!!俺にもっと教えてくれよ!!死んじゃダメだって!!」

大粒の涙を垂らしながら、訴えかけるように叫ぶミリオ。

そんな彼にサーは腕に力を入れて、無理矢理にと最後の力を振り絞る。

ああ――ミリオ、許してくれ。

最初はただ…器として引き入れただけだったんだ。

だが、私を慕い信じてくれるお前が、いつも背中を追い求め笑顔で照らすお前の姿が――いつしか私の誇りとなっていた。

振り絞った最後の力で、ミリオに触れて個性を発動する。

未来予知――人生最後に使うこの場面、師であるならば弟子を信じて未来を見届けよう。

それが、師としての責任であり――役目だ。

「……大丈夫だミリオ――お前は…誰よりも立派なヒーローになってる……」

頬に触れた手は、ミリオの涙でいっぱいに濡れていた。それでも、そんな愛弟子の涙さえも、美しく清らかで、光が灯っている。

「この未来だけは、変えては行けないな…だから、笑っていろ――」
「う…っ!!うううぅぅ…!!!」
最愛の師の言葉に、声も出ず嗚咽と共に涙が止まらない。
最愛たる師匠――サー・ナイトアイの死に、泣き崩れるミリオ。
緑谷も、雪泉も、オールマイトも、この現状に思わず涙がこぼれてしまう。
オールマイトに至ってはコンビを組んでたほどだ。
また、陽花のように大切な人が消えてしまうというのは、裂ける程に痛苦しい。
「元気とユーモアのない社会に、明るい未来はやってこない……だから、胸を張って笑顔でいてくれ――」

それを最期に、サー・ナイトアイは言葉を終え、心電計の音が完全停止を鳴り示した。
ミリオの号泣たる絶叫だけが、この病室を埋めつくしていた。

サー・ナイトアイ死去――これにより、インターンの幕は下りた。

焔紅蓮隊編
１９９話「初めての忍務」

東京という場所は、小規模でありながら活気溢れ、関東地方平野中央部に位置しており、東京湾に面する都市である。
広域的地方公共団体と指すこの場所は、政治、経済、文化の中心であり、大企業が殆ど集中する都市は、流石は日本政治の本拠地であり、政治の代表と言っても過言ではないだろう。
無論、有名なヒーロー事務所や凄腕の特上忍などが集まるのも必然であり、政府と関わる以上は当然とも言えよう。
かつては江戸として呼ばれたこの東の都市も、過去の伝統も相まって人々から愛されている。
東京には無数の住宅街や２３区もの地区、世界最大の都市と呼ばれており、ありとあらゆる大企業や政治、政府が関わるのは少し考えればわかること。

――だからこそ、東京本拠地にて上層部が集っていても何ら不自然ではない。

全忍最高上層部拠点、東京新都庁――幾つもの支部を構えてる上層部の基地は、外見からすれば大企業の本社や警察本部などが在り来りだろう。東京は都会にしてビルや建物などが無数に聳え立ち並ぶ故、上層部の反逆や襲撃を防ぐため、基地等は転々としている。

東京新都庁　全忍上層部本部――会議室
冷房も効いてる為か空気は涼しみ、数名の上層部が円卓のような机

に腰を掛け面を合わせている。
「……オール・フォー・ワンに次ぎ、憑黄泉か…こうも世間を揺らがすことがあろうかて…のぅ？」
　時は遡り、まだ神楽が京都で姿を現す前の事――上層部師範、８０代後半の上層部が、ため息を吐きながら、被害規模や忍の存在が公になったことに、痛手を受けたかのように苦い顔をする。
「まあまあ、雷堂さん――過去のことは致し方ありませんわ♪それに、何も悩ましいことばかりではありません。寧ろオール・フォー・ワンが捕まって素直に喜ぶのが我々なのでは？」
　面を向かってお気楽そうに物腰が柔らかく、他の上層部とは違って穏やかに話すのは『姫彪』――なんと、驚くべきことに外見の年齢は２０代前後か後半という、上層部の人間にしては若々しく、何より殺伐と辛辣とはかけ離れ、慈愛に満ちている。
　深い青色の長髪は綺麗に下され、綺麗なドレスコートを着こなしている。
「……何を言う、忍の存在が公にされ、憑黄泉が世に放たれた今…充分此方が痛手を受けている」
　明王――姫彪と同じく最高上層部にしてそれなりの高い権力を持つ８０代後半の白髭を生やした御老人が、怪訝そうな表情を立て、不快なため息を吐く。
「……え？何言ってるんですか明王さん？」
「……ん？」
「雄英高校では既に公になってるではありませんか――『私が半蔵学院の方々に雄英高校に在籍するよう手筈を整え、依頼をしたのは私自身』ですもの…忘れたとは言わせませんよ？」
「……そういう問題ではない、全国に何百年もの隠し通してきた忍が公となったのだ…そもそもの話、半蔵学院と協力態勢になったものの――漆月を捕まえられてないではないか。オマケに忍学生が１名拉致されたとも聞く、失態に続き成果がない!!貴様の見込み違いではないか？」
「随分とネガティヴな事を仰るのですね雷堂さんは。ヒーロー殺し、

元い忍殺しのステインに抜忍の黒佐波は捕まえれたじゃないですか？それって、寧ろ半蔵学院や死塾月閃女学館の戦績を褒めてもいいですし、認めても宜しいかと――少なくとも、成果がない…とは、ない事ではないのでしょうか？」

喚き散らす雷堂など、赤子の泣き叫ぶ声のように可愛らしく、クスッと一蹴するように笑う女性は、忍上層部にしてはかなりまともな発言であり、駒扱いする忍に対してはヤケに思い入れがあり、慈悲がある。

無理もない――姫彪は『国家最高上層部忍養成機関内閣特務機密特殊部隊管理官兼個性特務自衛隊中将第２部隊隊長』としての大規模な名を与えられた、陽花や雪不帰に引き負けない才覚を持っている。

何よりも彼女に雇われた忍は損害を出さず、ほぼ犠牲者が出ていないと言っても過言で、遣われる忍も彼女にならと志願をするほど、厚い人望に長けており、軍人や指揮官としての能力は申し分ないと言っても良い。下手に軽い女だと甘くみると、酷い手傷を追うことになるだろう。

「ぬぅ……」

「まぁまぁ…話を戻しましょう――今回は今年に起きた大事件のおさらい…基いこれからの再発予防と言ったテーマでしょうか。

何処から語れば良いのやら…なんて程に今年は色々ありましたからねぇ～…」

「雄英高校が主に…な」

「まぁ…確かに――然し蛇女子学園という悪忍育成機関も今年は随分と騒ぎが起きてますし、何やら運命めいたものを感じさせられちゃいますねぇ♪」

「……お主、楽しんでるであろう？真面目な会議だぞ？」

「いえいえ――真面目ですよ♪」

何処からどうにも巫山戯てる――なんて口に出しそうな位、緊迫感としてる中、常に自分のペースを保ち続けてる女性は、流石は修羅場を潜り抜けてきただけの事はあるか、まるでこれまでの大事件がさも「どうでもいい」と言わんばかりに。

「あ、蛇女子学園と言えばぁ…『道元』はどうしてるんでしょうかね？」
　その言葉に明王は僅かに顔を顰める。何やら反応を示したようだが、表情は立てないでいた。
「……大方、奴を欲しがってる大企業や裏で繋がってた者共が匿い、或いは息絶えてる可能性もある――現在も行方不明であり、消息が途絶え目撃情報は皆無に等しい…見つけ次第処罰をすると、既に全忍に耳に入ってるはずだが…？」
「あ、いえいえ！そういう意味じゃなくてですね…」
「…？」

「脳無となってタルタロスで一生を過ごしてる道元は、どんな気分で一生を過ごしてるんでしょうかッて意味です♪」

『ッ!!!!』
「何!?!」
　その場の一同が、驚嘆し息を詰まらせる。
　威厳を保つ明王でさえも、彼女に目を見開いている。
「きっと何の考えもなくただただ無感情思考停止で、廃人の如く余生を過ごしてるのかしら…？あ、でも彼が脳無となってる以上はオール・フォー・ワンと無関係ではない事を指してるわけで…何があって脳無に変えたんでしょうかね？」
「待て！初耳ぞ？何処でその情報を――!!」
「自力で調べましたから、個人的に――♪」
　調べれるものなのだろうか、確かにタルタロスにて申請許可やＤＮＡ鑑定をすればそれなりに調べ上げられるのだろうが、何も草の根運動のように一から全ての脳無を鑑定するのは効率が悪いし、それで道元が元になってるとはとても考えにくい。
「道元は元々、妖魔の精製…売買と言ったビジネスなど所詮は一部の

計画でしかなかったそうです。そう――それ以上の目的があって彼は蛇女のスポンサーという隠れ蓑を利用しながら、伊佐奈の様に野望を企てた……彼が忍の階級がどうであろうと、敵連合が戦力を欲していたのならば、いえ…彼を無闇矢鱈に殺害、或いは脳無とまではいかなくとも幾らでも再利用はできたハズ……思考が停止してしまえば、妖魔も作れないどころか操り人形で終わってしまう――つまり、オール・フォー・ワンにとっては都合が悪く、且つ裏切られ利用されてしまう危険性もあった……

だから――じゃないですか？」

「……何処までそれを――それ以前に、何処から…」

「だからこそ――私が最高上層部に適し、貴方達の知らない情報を得て提供することで、ここまで登りつめた事に大きく賞賛しているのでしょう？

それに――何なのでしょうかね、道元の企みって…」

「……幾つか問題点があるな、不都合であれば道元を始末すれば奴らにとっても良かろうに――態々脳無に変えるなど…」

「それがあるんですよ――だって、忍が脳無になるってある意味彼で初めてじゃないですか」

その言葉に、空気が凍りつく。

どうして今までそんな事に気付かなかったのだろうと思わせるほどに。

「いえ…ひょっとしたら……もう既に彼の様な脳無という人形も作られているのかもしれません♪」

「お主…何処まで知っておる？勿体ぶらずに全てを話せ!!」

「これは推測でしかありませんけどね――幾らオール・フォー・ワンと言えども彼だって完璧超人ではありません。現に脳無格納庫の環境や脳無の在庫数、製造の場所としてはイマイチ…裏で協力者がいるとしましょう――個性を与える彼が、一から全て肉体に耐えれるように肉体改造や医療的な手術をしたとは思えません。現に微かですが…私の部隊が脳無を一体、雑兵程度ですが発見し捉えてます。

問題なのは、彼らが被検体であること――忍の肉体がベースとなっ

た状態で、個性を与えられれば改造しても肉体が持つかどうか。彼が脳無として現れた以上、それが可能という証明……然しぶっちゃけ本番で、急ごしらえで改造して世に出されたとも言い難い…危険すぎる上に効率もやり方も悪い…そんなやり方を狡猾なオール・フォー・ワンがするとは思いません……何回かの人体実験、または既に作製された脳無がいる――と考えれば、脳無とは私達が思ってる以上に何か裏があり、忍の能力を持った脳無…それに極似した類がいる可能性はゼロではないと」

「脳無に似た者……か、今後とも現れると考えれば、過ぎた事とはいえそれなりに重要な鍵を担いそうじゃな…」

「保須市にてエンデヴァーやＵＳＪで戦った黒い脳無には、どちらも再生型の回復系個性と素のパワーが他と比べて違う点…白や緑はプロヒーローで対抗できる事を考えて、生態系にも興味深い点がいくつも有り、同じ個性が複数あるのも調べました……おかしいですねぇ、超再生や筋力増加、他にも見ない個性は希少価値があると言うのに複数所持してるなんて…同じ個性が奇跡的に出た、なんてのは偶然にも話が出来すぎてますし…って、これは警察方に提供すべき情報ですね。まぁ、現に忍術と個性を併せ持ったタイプは例外を除いて今までに見てませんからねぇ……」

　例外とはオール・フォー・ワンか。話が脱線してしまってるが、彼の様に併せ持ったタイプはまだ見ていない…調べ上げた中では道元のような忍から脳無になったタイプは見ていないのだろう。

「それに殺処分は低いと思いますよ、彼は騙し壊して奪う性格……何よりも死柄木弔という連合のリーダーがいるなか、無闇に消すより此方側で人形兵士にする事で利益に繋がる……彼のやりそうな手口ですね」

「待て、奴が捕まったのであれば脳無の作製や出現は無いのではないか？」

「……いいえ、先程も申し上げた様に私が派遣した部隊に脳無が確認し捉えたと言いましたね？それはつい三日前の出来事なんですよ。オール・フォー・ワンが掴まってから二週間経つ事を考え、その線は

無さそうです」
「……隙もない女よのぉ、姫彪」
「上の人間として立つ者としては当然でしょう…♪何より、貴方達に切り捨てられるのも嫌ですからねぇ～」
「結論を出せば、今後とも警察と同じく脳無の調査及び…連合の在り方を探る…以前と変わらんが…」
情報を知れただけでも成果は大きい――可能であれば道元の野望とやらも追求して行くとの事だろう――
（まぁ、あのおじ様の野望なんて、本当は知ってますけど…流石に此処で発言するのは不味いですねぇ…）
実際に彼女にとってはこんな会議自体本当はどうでもいいのだ――惚けている女に見えて、底が知れない女は、ある意味オール・フォー・ワンと同じ策士的な者…。
でなければこれ程有益な情報をポンポンと出さないだろう…現に彼女は他にも数十個の情報を隠してる。
彼女にとって情報とは武器――それを手放すか、核心として突くか、売るか、脅すか、全て彼女の自由であり独壇場。
伊佐奈と忍商会によって蛇女に介入したのも、関係なくはないのだ。

「さて…話を戻して……此方は現在、隊員ともに動かしてはいますが全国は特に問題ありません。また隊員からは敵連合の接触なしとのこと――現に憑黄泉も未確認ですね」
「これだけ捜査を広げて未だに捉えれないとは、笑えぬ話よ。成程、ＵＳＪ襲撃によって名を高めた奴らもまた、考えて成長している…。こんな事を言うのもなんだが、このままでは奴らに成長を与えるばかりになる……な…」
「敵さんもバカではないですからねぇ、ここだけの話…オール・フォー・ワンには未だに残党がまだ何処かに息を潜めてるそうですよ。そう言った裏からの救援があっても可笑しくないですし――」
「どの道捕まえれば分かること…秩序を乱し者には罰を――じゃな」

「何だか黒影の事を思い出しますねぇ、陽花も私から見れば秩序を乱してるように見えますが…」
「お主の言い分は分からなくもない…然し我々に有益があったのも事実じゃ――幾ら完璧超人とはいえ、敵に回すと恐ろしき者よ…」
「……」
女性はその言葉に口角を吊り上げながら、何処か不敵に笑う。
まるで――自分なら止められてたかも、なんて言うような表情を悟られないように。
「……彼女、妖魔の巣も潰し回ってましたもんね」
「桃はどうだ？お主、軍人なのだろう？何度か対面した事はないのか？」
「そんな頻繁にでは無いですよ。口を開いても無視されるか無言を置き通すばかりで…コミュ障と上手くやるのってどうすれば良いんですかねぇ？今度対話術を磨いていきたいものですよ」
「抜忍になりつつ、孤独から軍などに下りおって……いや、奴を扱うには余りにも…手が余る」
抜忍の桃は、国家機密の妖魔殲滅特殊部隊軍人少尉の座に付いている現状、簡単に切り離す事はなかなかに難しく、１人手放すだけで比べ物にならない程に戦力に差が開く。
気に入らないもの、秩序を乱す者は簡単に消せる――然し、それと同時にデメリットやリスクが生じる。上層部も頭を悩ますことはあるが、愚かにも思いつきでは出来ないのだ。
それこそ独裁者なども作らないように。
「……あ、そう言えば…妖魔の巣で思い出したんですけどぉ、どうなったんですかね？『妖魔と手を繋ぐ少女』を目撃したという彼処は…♪」
「……今は、彼処に割ける戦力はない。無害である以上、暫し様子見だ」
「それも可笑しいんですよねぇ…妖魔って人を襲い、喰らい、壊して殺す、醜う～い醜うぅ～～い化け物じゃないですか？人々の平穏と安全を脅かし、貪る悪意です。
そんな妖魔の巣が大人しており、何の音沙汰もないだなんて、不自

然すぎると思うんですよ、
　最近妖魔達の活動も頻繁なりましたし、マークしても可笑しくありませんけど」
　妖魔の巣は基本、立ち入り禁止区域や海岸、洞窟など国家政府が禁止区域に指定している殆どの場所に妖魔の巣が存在されている。
　況してや普通の人間が立ち入っていい場所ではないのは言うまでもなく、更に妖魔の巣へ赴くには上層部達の許可、或いは承認や依頼などによって立入が許可されている。
「……」
「言いたい事は分かりますよ、陽花の死後から彼女の様な有能な忍が消えてから任務に手一杯の忍達。彼女も元々余裕のない生活でしたが、オールマイト同様に穴を補いオール・フォー・ワンや天竜衆に向けて対策を練ってましたからねぇ～、其処を気に留める余裕も無かったのは致し方ありません」
「……何が言いたい？」
「コレを受け付ける抜忍に、任務を与えるというのは、効率が良いと私は思いますの」
「抜忍に？」
「ええ、確かに反社会的且つオールマイトが消えてから抜忍の活動は活発になり、我々に対する過激で攻撃的な面が色濃く出ました。
　しかし、抜忍が任務を受けてはならないという決まりはありません。世界中に狙われど、追っ手が来ようと、この任務で有象無象を匂わせ近付ける……敵連合の彼女達に動きがない…とも言い切れません。危険なのは承知ですが、それを踏まえて任務を出すというのは戦力を割けずかつ、此方は捜査を続けて抜忍という反乱分子を少しでも消化するのは、我々にとっても悪い話ではないと思いますが……ね？明王さん♪」
　今の抜忍はテロリスト行為の様に、一般市民に手を出せば街を攻撃するなどと言った分にまで発展している。大体が個性を持て余した敵と手を組むというのはあるのだが、真に賢しい闇深き抜忍は潜伏し盤石をひっくり返す様な大事件を起こそうとする輩も少なからず存

在する。
　そう言った抜忍達を探し出すのも、任務という都合良いもので利用するのも、上層部なのだ。
「報酬金は８５００万か…悪くはないが、随分と大きく出たな」
「本当なら危険度によって報酬を上乗せ出来ますけど…何ぶん情報が余りにも少な過ぎますからねぇ～……天竜衆なんかがいたらざっと６００億の額は出せますけど、そう上手くいきませんから…ねぇ？」
「……やはりお主、遊んでおるだろ？」
「いえいえ、そんな滅相な♪」
　明王の威圧の声に、怯える様子もなく、ヘラヘラとお嬢様の様に嘲笑う女性は底知れず、「では任務の書類などは会議後、発行しますね」と言いながら机の上に置いてある熱い抹茶を啜る。
「んー…やはり私、ブランドに似合う紅茶が欲しいですわ。渋くて何だか私の方には合わないようで」
「この場の何十人が年寄りの中、良い歳したお主だけは違うからの、飲み物でグダグダ言うな、せめて珈琲にしておけ」
「キリマンジャロとかが恋しいですよねぇ……それと、良い歳って、貴方誰に向かって言ってるの？雷堂」
　今まで物腰が柔らかく、如何なる対話でも余裕を崩さなかった彼女は、笑顔こそ絶やしてないものの、声に威圧が入り、鋭く見開いた目が上層部を射抜くように睨みつける。
「ッ！貴様!!歳が下の女子の分際で!!儂に向かって呼び捨てどころか、その物の言い草!!いつから貴様が儂より偉くなった!?!」
「損害を出し犠牲者増え、なお効率悪く有能な忍達を消費してる無能が、よく大口叩けますねぇ～…一度吹き飛ばされたいのかしら??」
「お主ら辞めんか、雷堂も悪気はない…責め立てるな……会議の場だ、醜悪な会話を見せるな見苦しい…」
　場を制圧するように声を出す明王に、不機嫌そうに睨む雷堂と、ふぅ…と溜息吐き「皆さま、お見苦しい姿をお見せして申し訳ありま

せん♪」と開き直る姫彪。
「ならば余裕、或いは承諾してくれる忍を優先に任務を出すか…大方、何方も従う者など…」
「私としては心当たりがあるのですよ、私たちの任務に答えてくれそうな方々が♪」
「……？誰だ？」
「蛇女にて危険視されてた伊佐奈を捕らえ、抜忍でありながら忍学校を救った――焔紅蓮隊が」

『私達に任務が…?!』
焔紅蓮隊が拠点としてるアジト内で、五人の声が大きく響いてくる。山奥の森林に覆われた洞穴のような巣窟は、住むには良さそうなペースになっており、日常品として扱うタンスやテーブル、飾りや私物など必需品など備え、模様替えすれば中々様になるようで、殺伐とした無愛想な空間と比べれば、リフレッシュされて緩和されたことだろう。
「ああ…つい数日前に上層部が話し合い、伊佐奈の件を認めてお前たちに特別、カグラに近づくであろう任務が下された。然し強制的ではなければ、お前たちは抜忍――必ずしも従えという義理はない。どうする？」
テーブルの前に座りながら、軽く湯気立つ緑茶を啜りながら、任務の詳細を話すは鈴音。
久しく見るであろう事か、蛇女の教師を務めながら、今もなおリハビリを受けている。神ノ区のオール・フォー・ワンにてほぼ忍として

戦場に立つのは不可能であると医者にも言われているし、それこそ焔達五人相手でもマトモに戦えないだろう……だから、蛇女の身でありながら、こうして抜忍である焔達を前にしても襲う気配も攻撃的な気配も微塵たりともない。

彼女は今、座学として蛇女の生徒達に知識を与えている。知識もまた、如何なる戦場でも役に立つ。

「鈴音先生が来たかと思えば…いきなり任務だと!?よっしゃあぁぁ!!今日はついてるな!詠のくじ引きの券と良い、上層部からのお墨付きの任務といい…カグラに近づけるって、こんなに美味い話は滅多にないぞ!!」

確かに、なんて言うほどに、今回の焔紅蓮隊は余りにも幸運を呼び寄せている。努力の賜物のお陰か、ジリ貧と言えど、窮屈な生活をしていたからか、その成果は大きいと言えよう。

「いやったあぁぁぁ!!抜忍になってからの初めての任務ね!!これで成功したら報酬金貰えるわけでしょ?それなら野草生活とはおさらば出来るわ!!あ、何なら今月の諦めてた限定フィギュアも買えるって訳だから……」

「未来さん?お金の無駄使いはさせませんわよ?私がしっかり管理して……もやしが何百袋買えるのでしょうか?」

「なんで詠お姉ちゃんはお金の使い方がもやしに方向転換しちゃうのよ!!」

「しっかしまぁ、これで暫く地獄のアルバイト生活に苦しまずとも生活費は稼げたんちゃう?春花さんも何回も面接落ちてるし」

「まぁ、申し訳ないとは思ってるし反省はしてるわ。けれどこんな好機が訪れるなんて…棚からぼたもちどころかショートケーキまで付いてきてるわ♪」

焔紅蓮隊の一員は大変、機嫌が良かった。

伊佐奈の件からの後は、蛇女の追っ手が来ることは少なくなった。それは勿論、多忙という意味もあるし、今となっては神ノ区の事件後というのもあって、中々抜忍討伐の任務には回らないのだろう。というか多分、向こうの事だからスケジュールが埋まりすぎて相手にでき

ないという理由が大半だと思う。
それも紅蓮隊にとっては充分な利益が増している。
抜忍として狙われている身としては、真面目にアルバイトをしてる中でも蛇女の追っ手に見つかり、何度も狙われかけてる事もあったし、隙さえあればと突っかかってくるのも少なくはなかった。主に頻繁に起きてたのは『旋風』という因縁のある忍が特に焔に対してしつこく狙っていたが、今となってはもう関係ない話だ。
「それにしても鈴音先生…怪我、大丈夫なんですか？」
「ふ…っ、私も元とは言え教え子に心配される身になったか……まぁ、今回受けた任務は余りにもスケールが大きすぎたしな」
都市伝説扱いされたオール・フォー・ワンは、蛇女の座学にはないが、それでも悪忍の中ではチラチラと噂は立っていた。雑談スレやネットなどで一般人が都市伝説的な話を知っているのだから、別に忍達が知らないのは可笑しい事ではない。
未来なんかは蛇女に居た頃は暇さえあればパソコンを使ってネットサーフィンなどしていたし、ハッキングに対しはプロ並みだから、実は彼女はその都市伝説の話も知っていたりする。ある意味紅蓮隊の中では知識があるといっても良いだろう…珍しく。
「私のことは気にするな、でなければこうして態々足を運んでお前達のアジトに赴く理由などないだろう。私も忍を引退しきれてはないが…それなりに少しでも自分が何か役に立てることはと、己のやるべき事は全うしているつもりだ。戦闘だけが全てじゃないぞ」
流石は母校とはいえ、私達を育て上げただけの事はあるな、と焔は僅かながらに口角を釣り上げる。
脳の殆どが筋肉質で、春花からは「脳筋」「猪突猛進」など言われてる焔にとっては戦闘以外で役に立つことなど、数えるほどしかないが、そう言った姿勢に尊敬を向けるのは、やはり蛇女にいた頃も憧れが強かったのだろう。
「それで鈴音先生…その、任務ってどんなのなの？」
ここでちょこんと恐る恐る手を挙げたのは未来。
居ても立っても居られないのか、少し興奮気味だ。いや…久しぶり

の任務な上に無名に等しい（伊佐奈の件で実は名前は少し上がってる）自分たちに任務など、どんな内容なのか気になっているのだろう。
　それもそのはず、確かに戦績が良かったにしろ、内容によってはハードルも高ければ、低ければそれなりに…な感じでもあるだろう。最も、鈴音先生が直々に来てこうして任務を下すのなら、余程の事なのだろうが、詳細を知らなければ幾ら喜んでも話にならないのは確かだろう。
「ああ、そうだったな…大事なのは任務内容だ――お前達、この前話した妖魔の話は覚えているか？」
「覚えるも何も…私達は道元が復活したであろう怨楼血に酷い目に遭わされた…忘れたくとも忘れられないし、そもそも忍として志す以上、忘れるものじゃあない…」
「なら話は早い…その妖魔達が住み着いてる巣窟の駆除…というべきか、調査に当たって欲しい」
「調査…？妖魔討伐じゃなくて？」
「それに近いと思って貰っても良い。今回指定された妖魔の巣、どうにも情報不足な上に、前々から上層部が派遣した忍達に調査を向かわせたものの、生還者が殆どいない…生きて帰った忍が一人、その証言によると――『妖魔と手を繋いだ少女がいた』とのことだ」
『!?!』
　鈴音の衝撃的な内容の告白に、一同は固唾を呑む。
　妖魔とは、忍の血肉が集まった事で生まれた化け物であり、伊佐奈や道元の野望には必ずと言って良いほどに妖魔というワードが出ている。況してや焔だって直に怨楼血と戦っている。
　他にもどの妖魔がいるかなど知りもしないが、少なくとも手を繋ぐだなんて平和的なことが、受け入れ難い。
「報告を聞いた上層部は速やかに武装や戦力を万全に整え、報告者と共に迎え行ったようだが、その後の消息は不明……中で何が起きてるかは分からないし、連絡が途絶えた今もなお詳細は不明だそうだ」
「妖魔と手を繋ぐ少女…確かに聞いたことありませんわ…」
「最悪、その少女が妖魔を使役していれば、やってることは道元や伊佐

奈と変わらんしなぁ……何が目的か知らんけど、野放しにはしておけんし…」
「嗚呼、妖魔は私たち忍の敵だ――それに、丁度いい…カグラの称号を持つ忍が、妖魔と戦えるのだろう？まだカグラでもない私たちが立ち挑めるとは、絶好の機会だ!!」
　詠は訝しげに首をすくめ、日影は自慢のナイフの手入れをし、焔の闘争心は燃え上がる。
　どうやら任務に不満はないようだが…
「で、でもさ…その妖魔と手を繋いでた少女って…妖魔の巣からは出ないのかな…」
　と、此処で弱気にも声を震わせるのは未来だった。
「あら、未来さん…怖いのですか？」
「ち、違うわよ詠お姉ちゃんのバカ!!…その、妖魔の巣にいるなら、外の世界に出て私達を襲ったりしないのかなって…確かに聞いてる限りだと向こうが怪しいけどさ…なんかここまで聞くと逆に不自然で……」
　確かに、なんて思えるほどに未来の発言は的確だった。
　襲われてしまうのなら外に出て避難所を見つければ良いものだ。それなのに忍が向かっては消息が絶え、妖魔の巣から出ないということは、理由があるのではないかと思う。
「よく気付いたな未来。そう…先程申したように情報が少なすぎる…勿論可能であればその理由も調査してくれれば助かるのだが……なぜかその妖魔の巣から、妖魔が出たということも、少女が出たという情報も、全くないのだ――」
　その事に、またもや全員とも黙り込む。
「だから上層部は十年前から今もずっと放置してたのだ…いや、正確には観察と言ったほうが良いか？
　私たちが妖魔討伐として巣窟に向かっても失踪者が増えるだけ…然し其方が危害を加えて来なければ？」
「…襲わなければ良い、逆に襲うことが私達によるデメリット…だから、情報も少ないし危険視もされてなかった訳なのね」

そこで春花は理解した。
情報が全くない上に、これほど異常な任務なら…情報が不足してるのなら、彼女達が外に出てる可能性は極めて低いものだと。
然し人員を割く暇もない今、こうして何処にも所属してない自分たちが選ばれたという訳か……と。
「ああ、上層部も無所属のお前達に任務を与えてる以上、失敗に対してもそこまで気にしないようだ。情報さえ持って来れれば上出来だそうだ……少数精鋭のお前達に、未知なる妖魔の巣を攻略するのは至難の業だからな」
「なるほどねぇ…だから妖魔の殲滅も入ってるけど、巣窟の調査がメインってわけね」
「いや、厳密に言えばそうなるが…それも単なる可能であれば…だそうだ」
「…？つまり⁇」

「今回の任務は――妖魔と手を繋いだ少女を捕えろとのことだ」

２００話「妖魔の巣」

忍務に指定された場所は、焔紅蓮隊のアジトから離れた森林地帯。空が木々の葉を覆い、殆ど空の太陽の日差しを遮断しているせいか、晴天だというのにどこか薄暗さを感じる。それでも完全にというわけではなく、多少とも光が漏れているため、懐中電灯や光を使う小道具は今のところ必要ないだろう。

小鳥のさえずりが静寂な森に響き渡り、僅かな旋風が森の木々を撫で揺らす。その森林地帯の最奥部にて、ぽっかりと空いた暗い洞窟が見える。

周辺には『ｋｅｅｐ　ｏｕｔ』と記されたロープが散乱しており、荒らされた形式がある。それが迎え撃った忍部隊なのか、はたまた妖魔の巣窟の主か、第三者による無関係な人間が適当に荒らしたのか、真偽は不明だがこの際はどうでも良いだろう。

「着いたな…ここか。書類の詳細といい、洞窟の特徴といい…間違いなさそうだが…」

地図を見ながら目的地に辿り着いた焔紅蓮隊は、書類で手に入れた写真と見比べて間違い無いと判断する。

元々世間や表では『最悪な心霊スポット』として出回っており、暗い洞窟と言い、洞窟の外見が蛇が大きな口を開けてるような特徴と言い…蛇の口に一度入った獲物は二度と出てこれないような事から、蛇喰巣窟と呼ばれている。

「なんか…怨楼血が口を開けてるように見えるね…」

「なんか嫌なこと思い出しちゃうわねぇ…でも、よくよく見ればそう見えなくはないけど…自然に出来た洞穴とも思えないし、妖魔の巣窟ってみんなこんな感じなのかしら」

今回初めて妖魔の巣窟に挑むので、どのような妖魔が待ち受けてる

か、中の洞窟がどのような構造になってるか、未知なる部分は多いが、ここに来た以上、死を覚悟した危険が待っているという事だけは確実だ。
「しっかしまぁ…妖魔との戦闘経験も少ないわしらが選ばれるっちゅーのも、それはそれで珍しいもんやな。幾ら母校の蛇女の件といえど、もっと名前が高い抜忍達でも良かったんちゃう？」
「いきなり弱腰か日影？せっかく任務が出回ってきたんだ、しかも報酬金が最低でも８０００万！その上任務の内容次第によって上乗せだぞ?!億は考えても良いと言ってるくらいだ。下手な考えで任務を受けさせる訳でもないだろう？」
「日影ちゃんの言ってることも分かるけど、それもそれで今更だし、引き受けちゃった以上は…ねぇ？でも、今の世代…他の抜忍達が活発に且つ上層部に過激的な反応が色濃く出るのもあって、私たちの戦績を見込んで頼んでる訳だから、期待には応えてあげましょ？」
「そうよ！春花様の言う通り！８０００万かぁ…こんなにお金あったらフィギュアとかネトゲとか、ゲーム買いたい放題よね…えへへ、えへへ…♪」
「無駄遣いは私が許しませんわ！……ところで、やはり８０円の間違いではないでしょうか？未だにこんな多額の賞金など信じられないのですが…」
緊張などどこ吹く風か、報酬金の話で盛り上がっている。
焔は肉を腹が裂けるほどに食べたいだの、春花は試作品の最新型の傀儡と薬品の材料を買いたいだの、未来は娯楽に浸りたいだの、詠なんかは当時報酬額を聞いた時は眩暈がしたそうだ。
「いや８０円て…どんな任務よ…。妖魔を倒すってだけでも重労働よりもキツイ命懸けの仕事なのに…ブラック企業すら泣き出しちゃう位よその鬼畜度」
「なんでもええけど、はよ洞窟入ろ。このまま雑談してたら日が暮れてまうで」
日影の言葉に我に帰る未来達は、すぐ様に視線を洞窟の暗闇へと向ける。

そうだ、と言わんばかりに軽く頷くと「では行くぞ」と焔が先頭に立つ。光を一切感じさせない暗闇の洞窟からは、やはりと言うべきか…何かしら獣や妖魔特有の匂いがこびり付く。
一応焔は嗅覚頼りに暗闇の中でも活動することができるが、やはり視認が出来れば動きやすいのもあるためか、刀を抜いて発火させる。
懐中電灯や木に炎を付けて松明のようにするのも良いが、この先妖魔が待ち構えてる以上、いつでも戦闘態勢に入れるようにするにはこれが一番理に適っているだろう。
「詠達も何か異変を見つけたら教えてくれ、この先は慎重に進むぞ」
「よ、詠お姉ちゃん…なんだか怖いよ…」
「大丈夫ですわよ未来さん、私達が付いてますから♪」
「あらあら、未来ったら…こんな時でも子供っぽさを披露するなんて可愛いわね♪」
「そいや今もそうやけど蛇女での寮生活ん時だって部屋の明かり消したり一人では寝られないって言ってたしなぁ」
「一々余計なこと言わなくても良いわよ!!!」
こんな時でも一切の緊張もなく、ブレることもないとなると流石に頼もしさを感じると言うべきか、忠告しながらも後ろで騒いでる仲間達の声を聞きながら、半ば呆れる焔は先へ進む。
「しっかし…一本道なのはさておき、本当に何もな……ん?なんだ、これ…」
「ちょっ…どうしたの焔!?」
急に立ち止まる焔に、一同は警戒を高める。焔は怪訝そうに地面から奥へ目を配ると、少々困惑したように口を開いた。
「…学校……??校舎の中か…?これ……」
その言葉の意味が分からなかった。
だが、皆も焔の横になるように、前を覗き込むと…確かに岩で出来てた洞窟内には、古びた校舎内のように、木材や壁によって構築された空間が広がっていた。
窓ガラス、黒板、無数の机や教壇。他にも図書室のように沢山の本が置かれてる本棚など、他に鉄格子の檻など学校とは縁離れたものも

あるが……どこか母校である蛇女を想像させてしまう。
　おかしな話だ、妖魔の巣窟と聞いたので、洞窟内だから真っ暗闇でゴツゴツした洞窟かと思えば、未知なる知らない学校のような校内の空間が広がっているなど、誰が想像つくのだろうか。それとも此処は元々学校だったのか？
「これ…学校？随分と古いですわね…何十年も前のように、大分経ってるように見えるのですが…」
「でも、誰も住んでるようには見えへんし…地図に載ってたら此処がどう言うところかってのも詳細あるやろ？」
「摩訶不思議ね、妖魔退治と少女の捕獲に行き着いた妖魔の巣窟が、学校の校舎内だなんて…中までの構造は不明だって言ってたけど…これにはちょっと驚きね…っ」
　使い古されてる割には、埃は被ってるかそこまで酷くはない。普通、ここまで誰も使っていないのなら多少なりとも埃が被るはずなのに、まるで誰かが手入れをしているみたいに、所々清潔が保たれている。それはやはり、此処に誰かが住み着いてるのだろうか。だとするなら、今回のターゲットである妖魔と手を繋いでたという少女の可能性が高いだろう。
　人の気配もない上に、誰かが住み着けるような環境下でもないのは、一目瞭然だ。
「でもどこの学校なんやろうね。単なる普通の学校なら兎も角として、檻があったり手錠や鎖があるってのは中々、普通どころじゃなさそうやけど」
「となれば忍学校…？でもそんな所がなんで妖魔の巣窟になってるんだろ…」
　言われてみれば確かに、なんて口が出てしまうほどに。
　学炎祭か襲撃に遭ってしまったのか、単に何らかの理由があって潰れてしまったのか、理由は不明だが忍学校が妖魔の巣窟になってると言うのは、これまた随分と奇妙なことだ。
「…なんだか廃校の肝試ししてるみたい……妖魔退治と目的の子を探すって忍務なのに、なんでこんなにソワソワするんだろ…」

「……妖魔と手を繋いだ少女って、案外幽霊って可能性もあるかもね」
「ゆ、幽霊?!!な、ななな何言ってるのよ春花様!!?」
「廃校って聞くと、何となくそういうの想像しちゃわない？実は幽霊でしたーってオチとか、何かと納得できると思うけれど」
「てか幽霊って触れるんか、ワシも触ってみたいもんやな」
「お、おい春花！真面目に探索するぞ!!変なことを言うな!!」
「あら…未来を怖がらせようとしたのだけれど……まさか焔ちゃん…」
「い、いや私はお化けなんて怖くないぞ…？ほ、本当だぞ??何だったら妖魔同様に叩き斬れば良いだけだしな！」
「焔ちゃん、なんだか可愛いですわね。そんな一面があったなんて、一年長くいる中で初めて知りましたわ」
「わしもや、てか妖魔と幽霊って関係性としてどうなん？気になるわ」
　未来が元々怖がりというのは、蛇女にいた頃から知ってはいたが、どうやら焔もオカルトやホラーに関してはてんで弱いようだ。妖魔は兎も角として幽霊が怖いなどという一面を見せるのは、男勝りな焔にしては乙女な部分がある。
「妖魔は忍の血が集められた膿のような化け物としか聞いてないからな……とはいえ、歩き回っても全然出てこないな…」
「そうですわね、廊下を歩いたり教室があったり、学校時代を想起させますが…妖魔も見当たりませんし……ん？」
　ふと詠はある物に釘付けになるように視界に留まる。詠の異変を察した焔は「どうした？」と詠の視線の先を向ける。
「あれって…人が倒れてる？忍装束が…！」
「本当か!?行くぞ！」
　視線の先には、長い廊下の先に忍装束が血みどろになって伏せている。人が倒れてるのだろう、生きてるかどうかはさておき、五人はその元に駆けつける。
「おい！しっかりしろ！その傷は一体……」
　焔が忍装束に触れた瞬間、冷たくて軽いものが手に伝わる。
　それは、もう大分時が経っているためか、酷い死臭を漂わせ、白骨

化した忍の遺体が横たわっていた。
「ひっ!?」
「酷いわね……しかも頭蓋骨が砕けてる…殴られた後みたい……白骨化するほどってことは、もう大分昔から…」
「こりゃえらいこった…衛生部隊か、忍務に駆けつけた忍さんか…どちらにしろ酷い有様やで」
「やっぱり此処に妖魔が…」
名も知らない忍の遺体に再度、此処の危険度を思い知らされる。妖魔討伐に赴くとなれば、カグラに近い忍かカグラか…どちらにしろ上忍である以上は自分たちよりも階級も立場も年齢も上な忍だろう。
いざこうして死した者を目の前にすると、流石に言葉が出ない。
「……先へ、進むぞ。みんな、心して行くぞ」
焔の声に怯えも恐怖もない。
ただ、いつものように戦場に赴く戦乙女のような凛とした声色は、微熱を籠り、暖かな感情はない。
いつもの真剣な時の焔だ。いや…今以上にと言って良いだろう。
探索して早々、死体を見つけるとは…弔ってあげれないのが残念と言うべきか。
上層部の情報通り、ほとんどの忍が行方不明となってるとは予め聞いていたし、死んでるケースが殆ど高いとは想像も付いていたが、人間なんでも想像してたものが現実として突きつけられると解っていたとしても動揺を隠せないでいることがある。
「さて…鬼が出るか蛇が出るか……」
妖魔の巣窟とはその名の通り、妖魔が巣食っている住処のこと。一体の妖魔でさえ未知数な上に、一体どれほどの妖魔が此処にいるのか。
暗闇の中でも多少灯りが点いてるのか、灯火が付いている。今にでも点いてるのもまた不気味だ。お陰で視界が明るくなったにしろ、それは妖魔自身もこの暗闇を徘徊するのに必要なのかもしれない。
「此処は敵陣…油断なく――」
進もう。そう言おうとした途端、数メートル先の廊下の左側から影

が蠢く。
『ッ！』
一同は目を丸め叫びそうな声を息を殺して止める。
廊下の右側から姿を現したのはまぎれもない妖魔だ。
体が茶色と黄色の縦長に、まん丸とした球体な目玉が飛び出ており、ギョロリぎょろりとあちこちに視界を巡らせている。体はまるでエクレアのようになっており、どこか甘い香りがする。お菓子の形をした妖魔というのも初めてみるもので、手や足は白いクリームのようになっている。
「妖魔…！」
ぎょろりと向けられた目玉が焔達の視界に入り、彼女たちの存在に気づいて此方へ振り向く。
どうやら気づかれたらしい…どの道妖魔は対処すべきことに変わりはない。焔達はそれぞれ武器を構え迎撃の準備に入る――が。
「……ぎち…みちゃ…」
妖魔特有の声をポツリと漏らしながら、なんと、焔達を見つめてもなお、また辺りをぎょろぎょろ見渡しながら、奥の廊下へと視線を向けると、焔達に背中を向けて何処かへ行ってしまった。
「えっ…？」
最初に声をあげたのは未来だった。
いや、たった未来のこの一言は他の四人の声を代弁したと言っても良いだろう。
意外という言葉では片付けられない程に、妖魔は忍達を見て無視した。それどころか殺意も敵意もなく、何故か妖魔特有の血生臭い腐臭さえもなかった。
「あれ…妖魔よね？私達を見ても襲わなかった？」
実は焔達は既に妖魔を討伐したことがある。
忍務上ではないのだが、いつも抜忍でも鍛錬を欠かさないようにと修行をしていた場所に偶然妖魔が湧いて出たことがある。
その時は一か八かで妖魔を倒すことに成功したし、充分危険な橋を渡ったなということもあるが、基本的に戦闘を繰り広げた妖魔達の殆

どが、自分たちに敵意と殺意を剥き出し害を成した。
だが今の妖魔はどうだ？
敵意も殺意も、害意もなく、まるで通行人に軽く挨拶をするようにただただ何処かへ行って姿を消してしまうだけ。
拍子抜けという訳ではないが、妖魔は人間に害意をあだなすといわれたばかりに、自分たちを見ても何もしてこなかった妖魔に、とにかく驚きが隠せないでいた。
勿論、焔達だって妖魔を倒したと行ってもほんの数匹、指で数えるだけ。偶々好戦的ではない妖魔だったのかもしれないし、自分達の関係が分からないのもあるのかもしれない。
「罠か？」
「アタシ等を誘ってるってこと？んー…でも、あいつにそんな知能はなさそうだけど…」
知能の高い妖魔ならやりかねないが、態々する必要性が感じ取れない。況してや此方が妖魔の巣へ来ること自体知らない妖魔達が打ち合わせをしたとも考え難い。
何やらこの妖魔の巣窟は、普通ではないようだ。
「どうする焔ちゃん？相手に敵意がないのなら…やっちゃう？」
「んー……」
焔は考えた。
妖魔の掃討も任務に含まれてる以上、確かに相手が妖魔である以上は討伐するのが筋…然し、敵意のない妖魔を下手に刺激させれば却って何が起こるか分からない。
危険は付き物だというのならそれまでだが、わざわざ攻撃してこない妖魔に対して此方が危害を加えるというのは、気が引けるというか、必要性がないと感じるべきか。
偶々温厚なだけで、敵と見てないだけで、その気になれば此方を殺しにかかる可能性は決して低くないのだ。
「…後を追うか。此方に攻撃を仕掛けてくるのならいつでも返り討ちにできるよう態勢を怠らなければ良い。何より、妖魔は私達の敵だ。
温厚な奴とは言えど、ここに来て派遣された忍達が奴等に殺された

のも事実――様子を見てから判断しても遅くはない…かもな」
「珍しいな焔さんがそんなに考えるなんて、明日は槍が降りそうやわ」
「普段は猪突猛進で考える前に体が動いたーみたいなこと言いそうなのにね」
「お前たち酷くないか…？」
日影はほぉーと感情はないが感心しており、未来はつい本音を零してしまう。そんな二人の発言に眉をひそめる焔を横目に、詠はそんなやりとりを見てふふっと微笑んでいる。
「決まりね♪悪いけど…道案内くらいの役割はあの子に果たして貰わなくちゃね」

此方に振り向く素振りもなく、妖魔はある程度長い廊下を右や左や真っ直ぐに進んでいく。
周りを見渡すとどこもかしこも教室や本棚だらけで、方向感覚が狂いそうになる。
妖魔自身が何を目的として動いてるかもわからないし、単に何も考えずに動いてるのかもしれない…野生動物に似た何かを感じさせる。
「ねー…なんか同じ景色ばかり見てるせいで、どこまで歩いたかわかんない…なんか同じ所をぐるぐる回ってるような…」
「何か収穫があれば良いのだけれど、期待できそうにないわね…かと言い他にも違う妖魔と合流されたら面倒だし…未来はああ言ってるけれど、このままじゃ私達、迷子になって脱出さえ困難になりそうね」
ここまでトチ狂うような構造は、間違いなく忍学校に似ている。母校だった蛇女にも似ているし、迷路のようなこの校舎内は恐らく蛇女より…まるで迷宮のようなダンジョンだ。そしてそんな校舎内を彷徨くのが妖魔と聞くのだから、此処がどれだけ危険なのかはもう十分に理解ができるだろう。
「迷路のような巣窟に、徘徊する妖魔…そして妖魔と関係してる噂の少女……思った以上にハードルの高い忍務ですわね。上層部が派遣

した忍達が生きて帰ってこられなかったのも、忍務が未だに果たせてないのも、領けますわ」
ふぅ…と溜息を吐きながら冷静に物事を整理し考える詠に、一同は納得するが、気が遠くなる一方だ。
「お、動き出した…さて、見失う前に再び此方も…」
先ほどの妖魔が動き出し、尾行するようにと動こうとする焔。次の瞬間――
「…ねえ、貴女達。何してるの…？」
聞き覚えのない、知らない声が5人の耳を打つ。
『!?』
紅蓮隊のメンバーのどの声でもない、透き通った声に一同は驚き、声主の方向に反射的に意識を傾ける。
「きゃっ!?」
「ひっ！」
詠も未来も思わず可愛らしい悲鳴を上げてしまう。無理もない、今までここに来て、紅蓮隊を除いた者に声を投げられたことなどなかったのだから。
「…人間？」
廊下からすぐ右後ろに見える教室から現れたのか、そこに立っていたのは白衣を纏った少女だった。
容姿的に一目見て、服は春花の忍装束と同じく薬剤師か研究員が着こなしてるものに近い、多少ボロボロにもなっている。
淡い金髪は長く、両耳が隠れるほど長い右の前髪は三つ編みされている。眼鏡を掛けた少女の肌は透き通るように白くて、純粋で美しい。ハワイアンブルー色をした綺麗な瞳、美人と呼ぶに等しい女性は、無表情で此方を見つめている。外見的特徴からして眼鏡をかけた白衣の金髪少女といったところか、未来と似た身長の為、自分達と同い歳か、年下の幼い子供だと判断できる。
（コイツ……声をかけられるまで気付かなかった）

脈打つ心臓を抑えながら、焔は固唾を呑む。
声を掛けられた事には驚いた…然し、焔は気配に敏感で、意識を持った者に対する視線などは肌に触れるように分かる。だから、騙し討ちや不意打ちなど焔には通じないし、総司もこの手を使っても通用しなかった程にだ。
そんな触覚にも特化した野生的な面もある焔でさえもこの少女に声を掛けられるまで気付かず、驚かせたのだ。
「まだ子供じゃない…!?」
「遭難者…ですかね？」
「びっくりしたぁ…口から心臓が飛び出るかと思った…」
「未来、幽霊ちゃうと思うでアレ」
幼い子供を前に、勝手に言葉が飛び交う。
日影は多少驚きはあったものの、感情を表に出してない事から冷静な判断もできている。
「生き残り…いや、まさか……噂の…？」
焔はふと、忍務の内容に「妖魔と手を繋いだ少女」というワードが自然に結びついた。
現に妖魔と手は繋いで無いが、妖魔が巣食ってるこの場所に、生身の人間が平然とここにいるのは不自然すぎる。
考え事にめり込む焔や、他の四人の対応…いつまでも返事がこない事に、少女は不愉快そうに怪訝な顔立ちをする。
「…ねぇ、貴女達。私が質問をしているのに対して、勝手に自分達で話をして無視しないでくれるかしら？」
彼女の言ってることはご尤もで、そう言われると此方側も彼女のことを放っておく訳にはいかない。
「お前こそ此処で何をしている…？此処は立入禁止、危険区域に指定されているが…」
「……」
焔は敢えて此処は自分達が忍であることは明かさず、相手の正体を探るように言葉を使う。元悪忍且つ、忍務によって通常の学生に紛れこんだり、一般人になりすましたことなど当たり前で、バイトをして

る身とすれば、そう言った正体を明かさない接し方には自信があった。
だが、そんな焔の発言にまたもや少女は不快そうに染め上げる。
「……最初に質問をしたのは私なのに、質問を質問で返すのはどうかと思うのだけれど。それだと最初に下した私の『貴方達が何をしているのか』という質問は、永久に闇に葬られると思わない？」
正論ではあるが、何処か曲がっているような…いや、間違ってはいないし正直彼女の言ってることが正しいのだが。
「それとも、沈黙をするということは何かしら言えない事なのかしら……人間が来るなんて久方ぶりだし、迷い込んだにしては、何かを探ってるように見えるのは気のせいかしら？
そもそも立入禁止だの、危険区域に指定されてると言うのなら、貴女達が此処にいる時点で既に可笑しな話だし、矛盾しているわ――逆にそんな場所に貴女達がいること自体、まず不自然な事だと客観的に見て思うのだけれど」
とてもドライな言い方ではあるが、彼女の一語一句は全て間違っていない。
どうやら見た目に反して頭がキレるようで、焔達に不審や警戒されてしまってる上に、何処と無く鋭い。
然し「人間が来るのが久方ぶり」という発言からして、恐らく任務の詳細に載ってた少女で間違いはないだろう。
「ああいや…何、私達は忍務というか、仕事というか、調査…うん、此処に行方不明者がいるって聞いて、救出探索に来たんだ」
咄嗟な言い訳を思いつきながら焔は静かに語り出す。
強ち間違いではない、実際に行方不明者が出てるのは事実だし、調査するための探索は勿論のこと、できれば少女の捕獲を救出と例えて行動に出れば、嘘ではなくなる。
屁理屈なようにも聞こえるし、少女を捕獲して何をするかは分からないが…。
「救出、探索……ね。それにしては、限度があると思うけれど」
「？」

少女のポツリと溢れた言葉に、焔は小首を傾げる。
「でもアンタ、随分と小さいのにこんな所にいて大丈夫なの？その、此処は凄く危険だし、後その……化け物が徘徊してるみたいだけど、平気なの？」
「貴女も私と大して変わらないと思うけれど」
「はぁっ?!!な、何!?アタシが小さいって訳!?なんかムカつく！」
「未来、言い出しっぺは貴女なのに…というかこんな所で変に争ってる場合じゃないわよ？
それに、私達は質問に答えたわね。それじゃあ今度は私たちから…貴女はこんな所で何をしてるのかしら？」
憤慨する未来の頭を撫でて宥めながら、春花が質問を行う。彼女の言動からして礼儀はさておきとして、質問に対して無視したり、質問返しをしたのを見た限り、自分たちの質問にも答えてくれる。
彼女が忍務の目標かはかはさておき、話が通じるのであれば、此方の理屈には乗ってくれるだろうと判断した。
「私？……それを、何も知らない貴女達に答える義務があるのかしら。ましてや土足で他人の家に踏み込む貴女達に」
「い、家？随分と変な例えをするのね貴女…」
意外な言葉の返し方に、春花は目を丸めて少し引いている。
彼女の発言的には此方も「私達は答えたでしょ」と言いたかったのだが、妖魔の巣を家呼ばわりする彼女に拍子抜けしてしまう。
「……何が変な例えなのかは分からないのだけれど。
でも…そうね、貴女達は私の質問に答えてくれたし…状況と平等性を鑑みて私も答えるのが筋というものかしら？それなら、貴女達の疑問に答えるべきね。
率直に答えると…私が自分の家で何をしてもどうだっていいでしょう？くらいかしらね、返答とすれば」
「ね、ねえ…さっきからアンタ、家って言ってるけど…何者なのよ？」
自問自答をしながら、考察と正論を重ね、自分の家で過ごしてると語る彼女に、未来は益々不審を抱く。それは皆も同じこと。

「私？私は妖魔よ？」

だが次に発せられた少女の言葉は、思わない真実を解き放ち、全員の心臓を鷲掴むように、揺らがす。

「妖魔!?この子が…？でも…」

「俄かに信じ難いですわ……ですが、自分を妖魔と名乗ると言うことは…本当に？」

「人間の形をした妖魔とかいるんやな」

「ちょちょっ!?でもアンタどう見ても人間でしょ!?」

訳がわからない。

と言わんばかりに、四人は混乱の真っ只中にいる。それもそうだ、自分から妖魔と名乗る人間など見たことがないし、況してや今まで見てきた妖魔と違い、何処からどう見ても人間だ。

「妖魔だと…？いや、でも…お前から発する匂いは……」

「……っ」

妖魔と名乗る少女にリーダー格である焔も動揺は隠せなかった。然し、彼女からは何処と無く普通の妖魔と匂いが違うし、何より喋る妖魔など見たことがない。

そんな五人の様子を見ていた少女は、とても不快そうに睨みつける。

「…そう、貴女達はやはり、侵入者…私達の敵なのね…」

少女は低い声でそう呟くと、数歩後ろへ下がり暗闇へと溶けるように消えていく。

まるで、敵意を向けるその眼差しは、何かを決したかのように、だがとても冷たく、余りにも冷徹だ。

「おい待て！まだ話は終わってな――」

「みぎゃあぁぁぁ!!!」

消え行こうとする少女を制するべく止める言葉を投げる焔に、先ほど尾行されていた妖魔がいつのまにか此方に向いており、雄叫びを上げながら牙を剥き出し、不安定な形をした腕を振り上げていた。

「なっ!?こいつ…!」
「焔さん!危ない!」
完全に虚を取られた焔は、迎撃をしようにも反応できず、先に妖魔の鋭い爪が襲いかかる。
が、それを間一髪の形で詠が大剣で攻撃を防ぐ。
焔の前に立ち、妖魔の振るった腕を食い止める詠に続き、日影は素早く妖魔の死角にまで移動し
「ぶっ刺し!!」
ナイフを脳天に貫くよう、ナイフで串刺しにする。
ぶしゅぅっ!と弾け噴く赤鮮血、妖魔は嫌がるように苦痛の叫びを上げた。
「ぎゃあぁぁ!ばあぁぁ!!」
「なんや…こいつ?」
日影の攻撃が効いてるのは分かるし、手応えはある。
だが…妖魔が悲痛の叫びを喚きながら嫌がる様子は、少ない妖魔との戦闘では初めて見る光景だった。
大抵は獣の如く、痛覚を与えれば刺激を受けるように此方に反撃を仕掛けてくるというのに…
「秘伝忍法――『ＤｅａｔｈＫｉｓｓ』!!」
などと考えさせる暇はなく、苦しむ妖魔に春花は投げキッスをすると、ハートが具現化し、それが大きくなるにつれて相手に向かって大爆発を起こす。
「ーーーーーーッッ!!!!」
大爆発と共に、肉体が四散した妖魔は、断末魔を上げて消え去った。
妖魔にしてはそれほど強くはなかったが、かといって呆気なさもある。手応えというより違和感が強い。
「なんか…思ったより大したことなかったですわね…一匹だけとはいえ、私達の実力でも対処出来ましたし…」
「わしが言うのもなんやけど、あの妖魔にちょいと酷すぎる事したかもしれんなぁってくらい、そんなに凶暴じゃなかったわ」
「何言ってんのよ詠お姉ちゃんに日影!!相手は血も涙もない妖魔よ?

敵よ！それなら慈悲なんて無用よ!!」
　大剣を下ろす詠は指先を唇に当て、日影はナイフをしまいながら、多少嫌がる妖魔に何かしら思う事があり、未来は大きな声で喚く。春花も詠と同じ意見だろう。
「でも…私たちが戦った野生の妖魔の方が手練れではあったわよね…不意打ちで倒すのならこんな呆気なくも分かるけれど……って、焔ちゃん？」
「…いや、あの妖魔…本気じゃなかった。というか、動きが他の妖魔と違って戦い慣れてない…素人みたいだった」
　焔は険しい顔立ちで顎に手を当てながら、消えゆく妖魔の残骸を見届ける。焔は戦闘ではセンスの塊というのもあって、勘が鋭く相手を見る目は一家言あると言っても過言ではない。
「他の妖魔には獰猛さと肥溜めた血生臭い臭いが鼻をつんざくほどだ。未だに慣れないあの邪悪な気配…然し、先ほどの妖魔は敵意もなければ、本当に害意がない」
「で、でもでも！焔を襲ったじゃない！それなのに何処に害意がないなんて根拠が…」
　未来の反論に焔は口を固く閉ざす。
　たしかに害意や殺意はなかった…。敵意は多少あったにせよ、未来の言った害意がない根拠が説明できないし、自分も詳しいことは分からないので、何も言えない。
　そもそも、妖魔は人間を襲い忍の敵だという風習があったのにも関わらず、これではまるで自分達が妖魔の敵であり、危害を加えてる危険分子のように見える。
　敵といえば、少女も確か自分達を見てそう呟いていた…妖魔が徘徊する中で少女が無事なのも、同類だからなのだろうか？
　同じ仲間なら襲われる可能性も危険性も大きく低くなるし、同族争いをしたという噂は聞かない。
　ならば、少女が妖魔である可能性が高いのは否定できないだろう。
「考えても仕方ないな、よし皆んな――アイツを追うぞ!!」
　考えても拉致が開かないし、なによりこういうのは得意ではない…

考えるよりも体を動かす焔からすればここでうじうじと考え悩むより1秒でも早く体を動かして少女の後を追う方が賢明だと判断した。
その選択肢は間違いではないし、なによりもし少女が敵ならば場合によっては…いや、それは流石に急かしすぎてるだろう。

どうやら、まだまだ暗闇の迷路を彷徨う必要があるらしい――

２０１話「この私、美怜と…」

謎の少女の行方を追うべく、暗闇の迷宮を掻い潜りながら先へ先へと進む焔紅蓮隊一行達。
先ほど一匹の妖魔を倒してから、ここの迷宮とも言える妖魔の巣窟の様子は変化を示していた。
まず殆ど見なかった妖魔達が、戦闘の騒ぎを嗅ぎつけてきたのか、複数の妖魔達が襲いかかるようになってきた。最初は複数の群れで攻めてきたことに多少無理があるだろうと思っていたのだが、連携を組んで上手く対処し、複数の妖魔達もなんとか討伐することができた。
妖魔の巣窟にして、生きて帰って来れた者がいないと聞いてはいたが…これでは拍子抜けだ。
「ふぅ…此処に来てから妖魔達の動きが活発してきたな。大した強さを持ってるわけではないが…油断は禁物だ。お前たちまだ動けるよな？」
指で刀を挟み、三爪の刀にこびりついた血を振り払いながら、焔はふぅ…と溜息を吐く。
焔の戦闘スタイルはいつ見ても印象が残りやすく、両手の三本爪はまるで竜の爪を連想させる。
木材でできた地面の廊下は血に溢れ、妖魔の残骸が足元に転がり、それは軈て靄の如く消えてゆく。
妖魔の死は、血も骨も残らずに塵と化して消えてしまう。だから妖魔に死体が無いのも、妖魔に未知なる部分が存在するのも、検体が採取できないから。

大体が妖魔の捕獲になるが、それでも精々雑魚の妖魔くらいで、屈強な妖魔など論外だ。研究過程で妖魔が暴れて死者が出たというケースもないわけでは無い。
「ええ焔さん、私は大丈夫でしてよっ！」
詠は愛用の大剣を大きく振り払い、妖魔に深い傷を抉る。
二足歩行の竜形妖魔は「ひぎゃあぁ!!」と悲鳴を喚きながら、絶命し息を途絶え倒れ伏せてしまう。
「ほな、まだ前に戦った野生の妖魔の方がジューブン強いわ」
日影はナイフを使った近接戦を得意とし、蛇の如くしなやかに動きに無駄なく妖魔の致命的な部分を刃物で切り、倒していく。
普段の妖魔ならダメージが通るか分からない時もあるし、こんな簡単にあっさりと倒れてしまうようなヤワではない。
「これだけヤワだと、余裕が持てちゃうところだけど…」
最新型の機械型の傀儡を操りながら、妖魔を殴り倒す春花。元々肉弾戦も有効な春花は、トリッキーな戦法を得意とする。
加虐心昂ぶる春花は、随分と余裕そうだ。
「でもでも！私達よりずっと上の忍達の死骸を見ると少し不思議よね…もしかして、私たちの方がずっと優秀だったり…？」
呪いの光弾を撒き散らしながら、妖魔に距離を置いて相手の体力を削っていく未来の遠距離戦法も上手くいっている。
ここまで上手く行くと逆に恐怖心が煮えたぎる。
本当にこんな簡単に上手く行くのか？
ならば何故、上層部に派遣された忍達は確かな情報も持ち込めずに？
不安要素が高くなる一方だが、そもそも焔は考えるタチではないので、幾らそんな事で悩んでたって、考えてたって仕方ない。
先に進む道以外に選択肢は無いのだから。
その後は何度も集団の妖魔が攻めてきては、倒すの繰り返し。芸が無いように見えるが、何故妖魔達がこうもいきなり自分達に危害を加えてきたのだろうか…。

先ほど前述した通り、偶々好戦的では無い妖魔だったのかもしれないが、それにしてはタイミングが絶妙すぎる。
記憶を辿れば謎の少女が「貴女達も敵なのね…」と断言した時、妖魔達は自分達に突然、害を与えるようになった。
つまり、妖魔達がいきなり此方を探り、群れで行動するようになったのは、自分達を敵とみなしたわけか？
だとするなら、少女が意図的に妖魔達を襲うのも、筋が通る。
「……」
「焔さん、やはりあの子の事が気掛かりで…？」
「嗚呼、まぁな…概ね、アイツが妖魔を使役してる可能性は高いと考えると…問題はアイツが何を目的としているのか、だな」
妖魔の巣窟を家と呼び、妖魔に襲われず平然と今も生きてる彼女は明らかに異質だ。
妖魔を利用する…にしては、確固たる証拠はないが、それでも考える限りだとこれくらいしか思い浮かばない。
かと言って少女が妖魔を利用して忍を殺してる…にしては、些か不明な点も多ければ、何処か違和感を感じる。
「次会った時は取っ捕まえよ！そっちの方が早いんじゃない？」
「この先何があるのかまだ分からないけれど、あの子に用があるのは事実だし…そうねぇ、出来れば静かに済んでくれれば此方としても助かるのだけれど」
「春花さんにしては珍しいなぁ…普段はお人形にするとか言っとるのに」
「……」
何やら春花は思い当たる節があるのか、考える仕草を取りながら考察している。
確かに、普段の春花はマッドサイエンティスト――加虐に快楽の感情を昂り、愉悦に浸る彼女はドSにして凡ゆる傀儡を操る者。そんな彼女なら迷わずそう言った敵対する者を人形にして遊んだり実験などをしているのだが…
「春花、どうかしたか？何かわかった事でも…」

「…ちょっとね、よく考えたら不自然な事があるのよ」
不自然？
一体何が…という返事を待たず、春花は先に語り出す。
「さっき私たちと目が合った妖魔がいたでしょ？焔ちゃん達も薄々感じてるとは思うけれど、もしさっきのあの子が妖魔を使役してるのなら、どうして始めっから侵入者を殺さないのかしらと思って」
その言葉に、何となく違和感の謎が少し解けたような気がした。
今までは妖魔を倒す目標とか、少女を捕まえるとか、色々と考えがあった為上手く物事を整理出来なかったが、言われてみれば確かにと思えてしまう部分もある。
「最初は偶々、好戦的ではない妖魔かと思ったのだけれど…それだと侵入者である私たちを殺すように最初っから命じていれば、遭遇した時に直ぐに始末するように襲うことも出来たはず……それに私たちを襲ってくる妖魔達にも、野生の様な殺気や害意が見られない……やっぱり此処、普通じゃないわ。必ず何かあるの」
「じゃあつまり…本当は最初、私たちを殺すつもりではなかったって事？」
そんな馬鹿な、なんて疑問が頭の中に埋め尽くす。
妖魔は忍の敵だ――それなのに、何故…忍や人間を前にしても殺さないのだろうか？
だから春花も普通じゃない事に、益々疑問が漂っていたのだ。
もしかしたらすると、自分達が思ってるよりかは…いや、自分達は何か思い違いをしていないのか？そう思えて仕方がないのだ。
「未来の言う通り、そう仮説を立てなきゃこの不自然な現象に説明が付かないわ。あの子の言う『家』というのも、強ち間違ってはないのかもね。変な風に捉えちゃってるし…あの子が本当に妖魔だとしたら、それこそ私たちを殺せば良いだけの話……それをしないにしろ、理由があるのなら、まずは殺すよりも吐かせることが大事だと思うの」
「あら、コソ泥さん達に話すことって何かあるのかしらね――」
先ほど聞いた声主の少女は、いつのまにか春花のすぐ近くに佇んで

いた。
「っ!?!」
「お前は…!!」
　反射的に距離を置き、少女から離れる春花の反応は素早く、そんな彼女や皆の驚嘆な声に眉ひとつ動かさない少女は、クールに冷静に、冷淡に言葉を発する。
「騒がしいと思ったら、やはり貴方達は妖魔を殺す侵入者なのね……他人の家に土足で踏み込んで、可愛い妖魔達を殺して…逆に貴方達こそ何が目的なのか、こっちが聞きたい程なんだけど」
「…気付かなかったわ、本当…気配を隠すのにここまで特化してるなんて、鈴音先生以来だわ、私に虚を突いたのなんて」
「ていうか、妖魔が可愛いって…えぇ…」
「あら、騒々しいところも含めてとても可愛いわ。小さい妖魔に至ってはいつも私に甘えてくるし、懐いてくるもの……愛嬌が沸くわね」
　彼女のぶっ飛んだ発言に未来はドン引きする。
　春花に至っては未だに心臓の鼓動が早く脈打ち、息を乱している。多分、ビックリしたというのも含めて荒げてるんだと思う。
「お前は一体何者だ。まず、名を名乗れ」
「あら、先に名前を尋ねる時は、自分から名乗り出るものでしょう?それに何者か…による質問は、さっき答えたはずよ。妖魔だと――」
　焔の問いかけに少女は面白おかしく笑う。
　妖魔と名乗る少女にしては、かなり知性的で、彼女のペースに呑まれて此方の調子が狂ってしまうようだ。
「それも…そうだな。私は焔、こっちが詠、日影、あっちにいるのが春花、そして未来――自分たちの正体を伏していながら、名乗らなかったのは悪かったな。私達は喋ったぞ、お前は?」
「……私が言っておいて何だけど、こそ泥さんにしては素直で聞き分けが良いのね。良いわ、約束に免じて答えてあげる――私は美怜よ」
　美怜――その二文字だけの名前は、外見もあるのか名は体を表すと言うべきか、人間らしい。どちらかと言えばこの二文字だけが彼女の名前とするのなら、妖魔というより忍寄りでもあるが。

「美怜…か、分かった。ならば問おう――お前は妖魔を使役して忍達を殺してるんだろう？何が目的でそうしてるのかって話だ」
一歩前に出て、威圧を含めた言葉を吐く焔に、少女は意外そうに目を丸くする。
「妖魔を使役する…？…考えてもみなかったわ、そんな事が可能なのね。外でも、そう言う事ができる妖魔、或いは人間がいるのかしら？それはそれで興味深い話だけど」
話が通じなかった――と言うよりも、予想外な返事が返ってきた。
彼女はまるで興味深そうに、今の発言にクスリと微笑んだ。
「嘘をついて適当に誤魔化してるのか？忍達が殺されたのも、現に上から報告が入っている!!人に害を成すのであれば、容赦しない!!」
「先ずそもそも、そこから話が間違ってるのだと思うけど。どうして話が合わないことに私の発言が嘘になるのか、理解不能ね。私が貴方達に嘘を吐いてどうするのかしら、その根拠は？なぜ嘘だと言いきれるの？確証もしない事に難癖や虚言だと言い張るのは、辞めた方が良いと思うわ。コミュニケーションに置いて其れは尤もトラブルの原因を作りやすい例よ」
ご尤もな正論で何故か論破された。
ここまで清々しく言われると、紅蓮の熱と覇気を纏わせた焔も、次第に水を浴びるように冷静なるというものだ。
「それに貴方達の忍…というのも、侵入者の多くが口を揃えてよく吠えるわね。目的？自分の家で静かに暮らすことに目的なんてあるのかしら？それに死んで逝ったシノビ…侵入者だって、先に危害を加えたのは其方でしょう？私達は何もしてないと言うのにね」
「何…？」
「どういうこと…？でも妖魔って人に危害を加えるんじゃ…て言うか、妖魔を使役してないってことは、じゃあ妖魔達が突然襲いかかってきたのは何!?アンタの指示で動いたんじゃないの!?」
「少なくともあの子たちは何も…恐らく、私のことを守ろうとしたのかしら。とてもいい子達ね、自分から私を守ろうと身を張ってくれるなんて」

「という事はつまり…」
あの妖魔たちは、少女を守ろうとしていただけ。
少女の身に危険が生じた、または敵だと認識した妖魔は、少女を守る為に戦っただけ。
焔達は其れを、襲いかかってくる妖魔ということで、殺したという形になる。
妖魔を倒すのが忍としての役目だが、こう実感すると流石に罪悪感が押し寄せてくる。
「あの子たちは思考能力が欠けてるから、言語も話せないし何を考えてるのかさっぱりだけれどね。でもあの子たちだって害を与えられなければ普段は大人しいし、何ならここにきた人間と遊ぼうとする友好的なのも居たわ。偶に侵入者がやって来て殺されちゃうのがあるけれど…それも随分と昔だし、侵入者の事を覚えてる妖魔なんて居るのかさえ疑惑だわ」
それこそ彼女の放つ一つ一つの言葉が信じられないような事実を吐き出して来た。
先程、こそ泥には話さないと言っていた癖に…。などという考えはさておき、友好的な妖魔などいるのだろうか？そんなこと有り得ないと言うのに。
「でも結局わしらに話してくれるんやね、こそ泥さんには話さないって言ってたのに」
「あら、久しぶりに会話をしてくれる人達がいるもの…つい喋りすぎてしまったかしらね。それに貴方達が何か思い違いをしてるような様子だったから、誤解を解いた方が賢明だと判断したまでよ――これ以上、私達の家を荒らして欲しくないし」
「家…ですか、貴女はここでずっと暮らして…？」
「そうね、産まれた時からずっと――兄さんと暮らしているわ」
兄さん？まさか、もう一人いるのか？
美怜の言う兄さんがこの巣窟にいるとすれば、一体…美怜は自分を妖魔と語っていたが、匂いを嗅ぐ辺り妖魔の気配はしない。
それにどういう経緯かは知らないが、少女が産まれた時から妖魔の

巣で暮らしてるというのならば、兄もそうなのだろうか？そんな物事を考えていると――

――ズン！ズン！と地響きが鳴り、体が竦む。

何事か、そう武器を構える５人の前に現れたのは――

「な…!?」

「これは…!!」

「妖魔？」

「何……これ……」

「っ!!」

自分たちの背の３倍ほどは有るであろう、巨体な図体を持つ妖魔が、少女の背後から現れる。

闇を覆い、鉄製の仮面から此方を覗き込むように見つめる妖魔は、先程までの雑魚妖魔達とは気配も放たれる強さも明らかに違い、この場では別格の存在感を放っていた。

「僕達ハ、妖魔ダ」

機械的なカタゴトで、それでいて何処か生気を感じる。何よりも、妖魔が喋った。

「よ、妖魔が喋った!?!てか何この妖魔!!?」

「私達も貴女達も喋るじゃない、妖魔が喋ることに、一体何が不自然なのかしら…ねぇ？兄さん」

「全然似てないじゃない!!」

確かに、なんて思えてしまうほどに未来の喚き散らかす言葉は、皆の心を代弁してくれた。

だがこの尋常じゃない気配、強さに敏感な焔の鼻が痺れるほどの匂い、間違いない…焔が今まで戦ってきた、どの敵よりも、最高のライバルである飛鳥よりも、強い。

「改めて自己紹介をしましょうか――この私、美怜と……ベルゼ兄さんよ」

「ココハ、僕達兄妹ノ大事ナ家ダ――ミレイヲ傷ツケルヤツ、僕ガ許サ

ナイ。ミレイ、悪ク言ウヤツ、僕ガ許サナイ。
ミレイ、コイツラドウスル？戦ウ？」
焔は悟った。
間違いない…コイツだ。忍達の殆どは、コイツに…兄と呼ばれるベルゼ兄さんとやらに殺られたんだ。
実戦しなくとも肌で感じるようなこの威圧感は、並の妖魔と訳が違う。
筋骨隆々たる肌黒い肉体に、鋼の鉄鋼製で顔面を覆うマスク、異常な程に闇の覇気を纏う妖魔は、これまで戦った妖魔とも訳が違う。ここまで武者震いするのは、怨楼血と同等か…それ以上か。
道理で可笑しいと思った。手練な忍が何故殺されたか…全ては、コイツの仕業という事になる。
「待って、ベルゼ兄さん」
「……分カッタヨ、ミレイ。ダケド気ヲ付ケテネ」
だが、そんな異質な妖魔を少女の美怜は、優しく声をかけて手で制する。そんな妹の言葉に従い、妖魔は頷くと数歩下がって立ち尽くす。
彼女は、妖魔を従えていた。
「さて、これで信じて貰えたかしら。私達は妖魔にして兄妹であって、ここの家に住んでいるということを」
そんな事を言われても、頭が追いつかないというのが本音だ。兄妹と言っても姿形が似てるという訳では無いし、知性的な美怜に対して、喋ることは可能だが知性と言うよりも闘いに特化したような兄、まるで正反対なようで、でも確かに意思は通じあっている。
「……まさか、こうまで見せつけられると…」
詠は絶句し
「認めざるを得ないって感じやなぁ」
日影は簡単に飲み込み
「……洗脳してるって、訳でもなさそうね」
春花は紛れもない真実に認めてしまう。
「ではこちらの番よコソ泥さん達。貴方達侵入者は、一体何を目的と

して私達の住処に足を踏み入れ、何も危害を加えない妖魔を殺すのかしら。まぁ、侵入者であるこそ泥に、マトモな人間がいないのは想定済みと考えて、敢えて質問をするわ」
美怜は物事を進めるように、冷徹な声で話を進める。
その気になれば幾らでも此方を殺せるにも関わらず、対話を望辺り、争いは避けてがっているのだろうか？好戦的ではないにしろ、質問された以上は答えなければならない。
「私達忍は…妖魔を殲滅するのを真っ当とする。妖魔は忍を害し、殺し、破壊する化け物――そう聞かされたんだ。お前達のところは違うのか？
そんな私達は、此処で行方不明者が多数出たのと、妖魔と手を繋いだ少女が出たと聞き、此処に調査しに来たんだ。場合によっては人に仇なす妖魔は倒せと言われてるが…」
「……妖魔が、忍を害する？貴女達が仕掛けてきた訳ではなく、妖魔自らが……ティオ・ティアボリクスと呼ばれた研究者が告発した憑黄泉という妖魔のことかしら、それとも本当に外の妖魔はそんな事を…？…一体どういう原理で…」
逆に少女の方が疑わしいような顔を立てながら、ボソボソと独り言を呟く。まるで妖魔が自分から忍や無関係な人間を襲うことに有り得ないと言わんばかりに。
それこそ、焔達が美怜が妖魔と仲良く過ごしてる事に信じられないように。
「それが真実だと捉えると…忍からして妖魔は天敵であり排除する対象…今までの侵入者達が私たちを見て殺そうとしてきたのも、私達に敵意があったのも……成程、概ね理解したわ」
美怜は自問自答やら考察をすると、1人で納得したように頷く。何やら1人で勝手に解決したように見えるが、此方としてはさっぱりだ。
忍務の内容に少女を捕獲しろとの訴えがあったが、それは敢えて伏せておくことにした。何となくだが、もしそれを公言したら、ベルゼという妖魔の逆鱗を触れるようだったから。

多分、今この場で絶対に怒らせてはいけない相手だ。下手すれば一掴みで体が潰れてしまいそうな程の握力は、自動車や大型トラックなら簡単に粉砕出来るだろう。

「では、焔たち。貴女達は此処で引き返しなさい――そうすれば妖魔を殺したことも、土足で他人の家を荒らしたことも、全部見逃してあげる」

だが次に放たれた美怜の言葉に、一同はまたしても驚愕する。

「み、見逃す!?何言ってんのよ…私達は」

「ええ、妖魔を倒すのが忍としての存在だものね。ならばそれに敵対する妖魔も抗う為に忍を倒すのは普通の判断ね…でも、争いをするだけ無駄よ?戦争や抗争を巻き起こす火種の多くが、利益や平和を望む物に対し価値観が合わない者との衝突から始まる。

貴女達の話を聞く限り、害を仇なす妖魔を倒すのが宿命なのでしょう?それなら無害である妖魔まで手を出す必要は無いわ。これで争う理由は無くなったと思うけれど」

「ああ、お前の言う通りだよ美怜……確かに、なんて言葉がつい出てしまうほどに。だが、忍が殺されてる以上、行方不明者が出てる以上、害を成してない…なんて事にはならないんだよ」

確かに美怜の言う通り、争う理由はなくなった。

雑兵の妖魔たちが弱いのも、殺意も害意もない妖魔を倒す必要はなくなった。だが、忍が殺されてる以上は、放っておく訳には行かない。大方、そこのベルゼ兄さんという妖魔が主犯なのだろう。この妖魔は、余りにも危な過ぎる。

「――ミレイ、コイツラミレイノ事、悪ク言ウ。困ラセテ「ベルゼ兄さん、静かにして。まだ対話は終わってないわ、落ち着きなさいな」ア…ウァ、ゴメン…ミレイ」

「分かれば良いのよ兄さん、まだ待ってて…ね?」

感情昂るベルゼ兄さんを、で一瞬で制する彼女の気迫は流石と言うべきか、ベルゼは勿論、見ていた焔達も一瞬、肝を抜かれるような感

覚を味わった。
「さて、話を戻すわね。貴女はさっき妖魔が忍に害を仇なす時点でと言ったけど、平等的に考えて貴女達の行為も許されないわ。それに忘れるようだからもう一度言うけど、先に、仕掛けて来たのは貴女達よ？勘違いしてるようだけど、私達は昔から此処にくる侵入者たちに毎回妖魔たちを殺されてるのよ？人の家に勝手に踏み込んで荒らして、その挙句殺して、それならコチラも身を守る為の自己防衛はしておくべきでしょう？それとも何かしら、何も罪を冒してない私達は化け物という理由だけで黙って殺されろとでも言うのかしら？だとしたら貴女達……

――逆に殺されても文句は言えないわよ？」
最後に声を振り絞る美怜の言葉は、威圧が含まれていた。まるで心臓に鎌を当てられるかのような、居心地の悪いような感覚。
「くっ…!!」
「私達は何もそこまで言ってるわけじゃ…」
理解した。
美怜達は本当に何も悪くないんだ、むしろ此方が悪者になってしまってるのだ。
先に手を出したら負けな理論は何処へ出ても通じるように、こんな状況でも通じてしまうのだから怖いものだ。
然も聞いている自分達でさえも罪悪感が湧いてしまうほどに。何しろ見逃してあげてると言ってる上に、これ以上殺生を働くとすれば、美怜からすれば「お前たちは一体何様だ」とさえ言われても文句は言えない。
冷や汗を流す焔、詠や春花も同様に流石にここまで言われてしまえば反論もできない。そんなつもりでは、と戸惑う未来を目にした美怜は彼女との距離を詰めて歩み寄り、近距離で語り出す。
「……ねえ貴女も、分かってる？ベルゼ兄さんだって別に、忍だからって理由で殺してるわけじゃないわ。今みたいに何度も見逃してあげ

てるのよ？貴女達の忍という存在に、襲われながらも、何とか堪えて。
それでも振り返らずに、皆で一蓮托生するかのように、集団になって数の暴力で武器を振るってくる…話し合いをしても無理なら、殺られる前に殺るしかないわ。これでも私たちはかなり甘く平和的な交渉をしてるのだけれども。

本当なら今ここで、ベルゼ兄さんにグチャグチャに嬲り殺されても可笑しくないのよ？」
未来の顔を見ながら、両方の口角を低く釣り上げる少女に、未来はまるで自分の心臓を鷲掴みにされ、生死を掌の上で転がされてるような錯覚に陥る。
「それでも貴女達がここを立ち去らないというのなら、私たち兄妹の平穏を脅かすというのなら……追い払ってしまいましょう？ねぇ、兄さん」
「ソウダネミレイ、ソレガイイネ!!」

美しく妖艶な笑みを浮かべる少女、美怜に――圧倒的なる影のの如く濃い闇を纏うベルゼ兄さん。
焔紅蓮隊が対峙するのは――妖魔と人間の兄妹である。

２０２話「ベルゼ兄さん」

「春花、未来！お前たちは距離を取って遠距離攻撃！詠と日影は妖魔の動きに注意しろ!!」
相手の殺気に敏感な焔は、距離を取って各仲間たちに指示を出す。殺気というのは語弊で、正確には闘気だろう。
ベルゼという妖魔は拳を握り締めながら打ち合い、攻撃態勢に入っている。
春花も未来も軽く頷き距離を置き、近接戦を得意とする詠と日影は相手の動きに注意を払って、見極めながら攻撃の態勢に移る。
「下ガッテテ――ミレイハ、戦ワナクテ良イカラネ」
「有難う、ベルゼ兄さん」
かく言う相手は、ベルゼ兄さん1人で妹の前に立ち尽くし、美怜は兄の言葉に微笑を浮かべながら、数歩下がる。
妹想いある兄は、妹を守る為に1人で焔達の相手を臨む。妹は兄の言葉に頷き、戦闘には加わらない。
闘う相手はたったの一人――だが、先程までの妖魔と訳が違うこの妖魔に対しては、気を抜くことなく全力で闘った方が良いだろう。また、素性が知れない美怜と闘わなくて済むというのは、焔側にとっては幸いな事である。
「妖魔に頼ってる辺り――随分と口だけが動くだけじゃないか!!」
「あら？兄妹の言うことは互いに聞くものでしょう？」
焔は弾丸の如く一直線に地面を蹴り跳ねて、妖魔ベルゼに一矢報いようと六爪の剣先を胴体に切り刻む。
炎を纏いし熱き刀は、熱を通し、火傷を負わせる。学炎祭後も更に修行を極めた焔達メンバーの実力は、以前よりも更に上がっているだろう。そんな爪痕を残す攻撃を前に、ベルゼは斬られた胴体を痒そうに指でポリポリしながら

「妖魔術――【魔王ノ拍手】」
次の瞬間――バチィン!!と両手を打った衝撃が、爆音となり轟く衝撃波は目前にいた焔を襲う。
「ぐっ?!!がぁぁぁっ?!!」
一瞬にして何が起きたか分からず、全てが破壊されたような感覚は、脳を麻痺させ感覚さえも鈍らせ、衝撃による肉体への負荷は、直撃なくとも一瞬で深手を負う。
「焔ぁ!!」
「焔ちゃん!しっかりして!」
未来は焔に叫びながら、遠距離射撃で呪いの光弾を連射していく。ＡＩＭ、サバゲー、視力が優れ、銃撃戦での経験が豊富な未来は、動く的を百発百中当てれるのは当然と言って良いほどで、全ての弾丸はベルゼに被弾するも、何ともなさそうに兄は侵入者を排除しようとする。意識が朦朧とする焔を後に、他にも春花の順従たる傀儡が殴りこむも、其れを素手で受け止める。
「もろたで!」
「好機ですわ!」
春花の傀儡を素手で受け止めてるベルゼを、日影と詠は隙を突き、無防備な体に短剣と大剣…二つの刃物の武器が肉を突き刺す。
手応えある質量感、ズブリと嫌な音を立てては鮮血が走るものの、大きな悲鳴を上げる事はなく、ベルゼはゆっくりと此方を振り返る。
「なっ…抜けへん――」
こりゃアカン。
そう悟った日影は武器を抜き取ろうとするも、ベルゼは筋肉を強張らせて突き刺さったナイフを敢えて抜けないように固定する。
「これでも食らいなさい!秘伝忍法――『ニヴルヘイム』!!」
日影に狙いを付けたベルゼから意識を逸らすように、詠は秘伝忍法『ニヴルヘイム』で片腕から重火力を誇るボウガンでベルゼの顔面を集中砲火するように、狙いを付ける。
火薬特有の匂いが周りに充満し、土煙が巻き起こる。
「……」

――だがそれを、ベルゼはもう片方の手で顔面を守り、手で全ての攻撃を塞いでいたのだ。
プスプスと焦げたような焼き音を立てながら、火傷など被っていた片手は、また復元する。
「なッ――直撃したハズですが…」
ベルゼの人体外れたスバ抜ける耐久力に、詠も絶句する。苦痛の声もあげず、そのまま顔面の直撃を防いだ手で詠を握り潰そうと手を動かす。
「させるか――!!」
そして詠の前に素早く駆け立ち、守るようにして六爪でベルゼの手を弾く。どうやら意識は回復したらしい。それにしてはまだ早い方だろう、朦朧とする意識の中、無理矢理己を奮い立たせ、体制を立て直しては六爪でベルゼの片手を防ぐ。
(ぐっ…!重い……妖魔の攻撃をまともに防いだのはこれで…初めてかもな…!!)
妖魔との戦闘自体、対して数も少ない為仕方ないとはいえ、ベルゼの手を防ぐためでも精一杯。焔は歯軋りを立てながら、何とかこの状況…死者を出させまいと必死に耐え忍ぶ。
「……守ッタ?」
ベルゼは不思議そうに首を傾げながら、手を伸ばす腕の筋力を決して緩めない。それよりも、焔が詠を守ったことに少し驚いたような様子さえ微かに窺える。
焔が直ぐに回復して立て直した事に対してなら理解できなくもないが、様子ぶりからしてそうでもなさそうだ。
「仲間を守って悪いかよ!!」
そのままありったけの力を振り絞り、六爪でベルゼの手を弾き返す。腕が吹き飛び弾かれる感触を味わいながら、焔はその隙にと仲間達に振り向く。
「焔さん…!傷は…」
「無事だ!詠…いや、お前たち一旦引くぞ!!」
焔の一声に、一同は一瞬だけ動きが止まる。

あの焔が撤退命令を出すという事は、それ程危険な相手なのだろうと、理解するのに時間は掛からない。
少し闘いを通した程度だが、ベルゼは全く本気を出していない。かと言って今ここで無理に突進するのは駄策だ。
ならば態勢を立て直し、策を練って闘いに入った方が生存確率は高くなる。
皆からは「らしくない」と言うような印象を受けたのだろうが、我等がリーダーの言葉に潔く信じて行動する。
「僕達ノ家カラ出テイケ――!!!」
ベルゼは腕の筋力を強張らせ、一発虚空を殴るように拳を振るう。なんて事はない、その振るった拳から発せられた衝撃波は、焔達に更なる絶望を押し寄せる。
放たれた衝撃波は、廊下の壁や床をバキバキと破壊していき、足場も壁も全てをなぎ倒し吹き飛ばしていく。その衝撃波は、撤退を余儀なくされる焔達に襲いかかり、そして成すすべなく吹き飛ばされる。
「うぉっ!?!」
「ひゃっ?!」
「あかん…!!」
「きゃあッ――!!?」
「ちょっ――!!」
撤退をして正解だっただろう。距離的にもベルゼから遠ざかるように置いていた為、衝撃が緩和されたとはいえ、もしあのまま闘いを続けていれば、致命傷は免れなかっただろう。
元より、これ程の圧倒的なるパワーは素の実力とも言えよう…ＵＳＪで雄英高校の生徒や半蔵学院の忍学生３名を苦しめた脳無や、平和の象徴オールマイトを沸騰とさせるような、シンプルで次元を通り越した超パワー。
成程…情報を持ち帰り策を練る忍達が――況してや上層部が認め派遣した忍達が手も足も出ず、この妖魔の巣窟から帰らない者と成り果て、今もこうして情報さえ掴めないのは、全部あのベルゼ兄さんが元凶だったんだ。

たった1つ、垣間見えたその圧倒的なる実力に、焔は痛感させられる。もしベルゼ意外にそれ以上に強い妖魔が此処にいるとすれば、それこそ此処での調査も殲滅も断念せざるを得なくなるほどに。
「お前たち、無事か――!!」
「ええ、大丈夫よ焔ちゃん。それより早く撤退して立て直した方がいいわね。流石に考え無しの真正面からの戦闘は無謀…自殺行為ね」
仲間の安否を確認する焔に、春花は何とか傀儡を駆使して未来と自分を抱えさせながら、愚痴を零す。
今までの妖魔とも、これまで闘ってきた敵とはレベルが違う――油断も隙も無かったのに、ベルゼの登場によって簡単に崩される。
動きは単純で、見極めれば…とも思っていたが、あれ程の馬鹿力を前に見せられては、下手に行動をするだけ命取り。此処は還って作戦や態勢を立て直す事が最優先だ。
勝利と闘いが全てである焔にしては、珍しくマトモな行動をしたとも言える。らしくないと言えばそうなのだが、今は指示も行動も考えて引くのが一番だろう。
逃げるは恥と言うが、今回ばかりは相手の戦闘力が余りにも高すぎる。下手にプライドばかり拘るより、此処は引いて仲間たちの命を守るのが先だ。
詠も、日影も、未来も、春花も、そして…歯を食いしばりながら撤退する焔達に――ベルゼ兄さんはこれ以上追撃しなかった。
それはそれで不幸中の幸いだと言うのに、焔の心の中では何処か納得がいかないのか、騒めく胸を抑えながら、闇の中へ消え去った。

「……大方、忍にしては中々の手練れね。ベルゼ兄さんを前に無駄な奢りもないし、連携としては申し分ない…。危険だと判断すれば下手なプライドで無駄な戦闘は避けて撤退する指導力。今まで出逢って

きた忍という連中とは一味違った……

けど、あの焔という忍……一見何も考えなしの猪突猛進型の人間かと思ったけど、ある程度思考能力はあるようね。判断としては悪くはないけど、ベルゼ兄さんを相手に飛び出しすぎなのは愚策。それでも仲間達に的確に指示を出したり、深追いする事なく情に流されるわけでもなく従う辺り、棟梁なのは一目瞭然。成る程ね、彼女ら四人も考えて動いてる上にあの人を信じて行動をするという事は、それなりに信頼とカリスマ性があるという事……。

数年ぶりのコソ泥さんにしては、そこそこやるじゃない」

一旦、引けの一手を使った紅蓮隊の後ろ姿を眺めながら、少女は黙々と考察を行う。

美玲と呼ばれる少女は、知的好奇心の塊だ。

些細な疑問や興味を持つものには非常に敏感で、知識を得る行為に欲が満たされる。況してやこんな不条理な世の中ならば尚のこと。

今まで家に侵入し、荒らしてきた忍達とは、何処か違う。先ず自分の命のために仲間を売らないし、美怜を狙わずベルゼ兄さんを相手に闘っていた。雑魚とは言えどこの家に住む妖魔達を殺したことに変わりはないが、忍の根本的な存在理由を知れば、彼女らが妖魔を倒さなくてはいけないという理由も、理解は示した。

(……外の世界には焔達の言った忍としての掟や常識があり、妖魔は必ずしもこの家のように穏やかな個体がいる訳では無い…か。だから忍達は妖魔が無害であることを知らない……

それとも、この家が特殊なだけなのかしら?となれば、侵入者達が碌に対話をすることもなく危害を加えるのも、妖魔が無害であることにさえ理解に及ばないのも筋が通るわね)

美怜は知っている。

妖魔とは元々、そこまで人間に害を成す存在ではないというのを。彼女からすれば野生の動物と大差がないレベルだったのだろう。

昔、書物で読んだことがある――虎や獅子は、人間を傷つけてる訳ではなくじゃれてるように見えて、人間としては害を為して殺されかけるという自然の中では割と聞く説。

それに美怜は生まれて一度も、外の世界へ旅立った事など一度もない。だからこそ、外の世界に住まう忍の常識に疎く、迫害を受けやすかった。
「……はぁ、困ったものね。外の世界に住む妖魔は。此方としてはとんだ風評被害よ、迷惑千万ね」
三つ編みの髪を指で弄りながら、悪態を吐く。
こんなデタラメで、外の連中のいざこざのせいで此方の有意義な時間と空間を、余所者に荒らされたり害を成すなど、不快不愉快極まれり。
少女は「ベルゼ兄さん」と呼び振り向く。
「焔…っていうあの連中、普通じゃなかったわね。兄さんもそう思う？」
「……ウン、ソウダネ。ミレイノ事ヲ狙ワナカッタ――アノ子達、動キガ慣レテルネ」
「ベルゼ兄さんも解るのね」
ベルゼ兄さんの返答に、少女は満足そうに掌を打つ。
これは「知能の低いベルゼ兄さんが、果たして何処まで思考能力が発達しているか」という実験だ。少女は知的好奇心が強く、それでいて実験に対しては最早趣味である。そして実験が検証されたことに、美怜は嬉しそうだ。
別に兄の体を実験で改造したり、従うように改造をだのという様な行き過ぎる狂った研究者ではないので御安心を。
因みに名前のない怪物だったベルゼ兄さんに名前をつけたのも美怜だ。名前の由来は『ベルゼブブ』――蝿の王という名目で付けた。
「それにあの子達、『私と同じように』能力まで使ってたわ。アレが忍術と言うのかしら？だとしたら…私は……」
何故美怜は今まで1度も、自分を妖魔と疑わず、人間とも考えなかったのか。どうして、外の世界からやって来る連中もいたにも関わらず、忍の扱う能力が忍術なのかさえ微かな疑惑を掴んでるのか。
其れは――知る術がなかったからに過ぎない。
外の世界から人間に情報を聞こうとしても、対話を望んでも、妖魔

と居るだけで、この家に住んでるだけで、ベルゼ兄さんの妹だからと言うだけで、殺されかけたから。
話にすらならないと言ってもいいだろう…汚い言葉を投げかける忍、彼女を化け物と呼ぶ忍、殺さないでくれと命乞いする忍。中には忍ではなく一般人と言うべきか、本当に迷い込んだ人間が居たが、ある若き研究者を除いて逃がし事もあった。
だから――美怜達にとって焔達のように自分を殺そうとせず、彼処まで対話が出来たのは、実は彼女達で初めてなのだ。
今日で「妖魔が忍の敵」「妖魔は人間に害を成す」などと言った妄言にも等しそうなその真実は、彼女の知らなかった事実である。
敵としてならば、せめてティオ・ディアボリクスが遺したであろう研究資料に載ってた憑黄泉くらいか、それしか敵としての情報は思い付かない。
因みに妖魔の研究者――ティオ・ディアボリクスという人物に関しては研究資料がこの巣窟の教室に、物心が付いた時から発見したので、少女は直接会った記憶はないが、人物名自体や内容は覚えている。
「なら逆に外の妖魔は一体何をそこまで忍に害を与えるのかしら、何を目的としてるか、どういう理由で？同族である妖魔は共食いするのか、彼等に意思はあるのか、言語は話せるか、理解できるか……あぁ、考えれば考えるほどに未知が広がる…外の世界は、本当にどうなってるのかしら」

そして其れ等を解明したいと求める自分がいる。
これが少女の欲求であり、未知なる存在を知る行為こそ、彼女の言う研究なのだ。
「……やはり、殺さなかったり拷問に掛けなくて正解ね。まぁ拷問に関しては兄さんが目的としてやってたんだけども……兄さん？」
此処でベルゼ兄さんの様子に美怜は気付く。
普段はあのまま侵入者を執拗に追い、帰るまで追っていくにも関わらず、兄さんは此方に振り向き、対話を望んでいるようだ。
「ミレイ、ミレイ――話ガアルンダ」

「あら――何かしら、兄さん？」

ベルゼ兄さんの強い衝撃から何とか逃げ延びた焔達は、息を切らしながら、廊下を歩いていく。
大した怪我も致命傷もなく、軽傷ゆえに妖魔ベルゼからも追ってくる気配はなく、無事撤退する事に成功できた焔紅蓮隊は、何とか生き延びる事ができた。
「はぁ……はぁ……な、何なのよあの馬鹿力…し、死ぬかと思った……あんな化け物が、徘徊してるっていうの？ううん、あの妖魔が本当にあの子と兄妹なの…？」
「命からがら撤退できたとは言え、次はどないするん？正直あのベルゼ兄さんっちゅー妖魔、わしら5人で勝てるかどうか分からへんで」
汗びっしょりにして生きた心地のしない未来は呼吸を何とか整えようと集中し、日影は冷静でありながら次の対策を考える。この中で自称感情ない日影は沈着冷静と言うべきか、動揺せず一番に状況を打開しようと考える。勿論、考えるよりも言われて動く方が彼女としては性に合うのだろうが、日々心身ともに成長してる日影は、ただ言われて動くだけの戦闘マシーンの存在ではない。
「ええ…秘伝忍法もまるで歯が通らないですし…」
「だけど倒せない…ってことでもないんじゃないかしら？焔ちゃんでも妖魔の攻撃は弾き返したし…少しでも情報が持ち込めただけでも充分価値があるし、話し合って作戦を立てるのも…って焔ちゃん？」
詠は妖魔の攻撃が通じなかった事に多少困惑と微かな絶望を残し、春花は諦念せず打破できる状況を考える。そんな間中、春花は焔の様子に違和感を感じる。
心此処にあらずと言ったように、春花に呼ばれても反応せずそのま

まボーッと虚空を見つめていた。
「焔？」
「ん？あぁ、春花か…お前達、怪我は…大丈夫だよな？」
「大丈夫だけど…どうしたの？様子が変だよ？」
　漸く呼び掛けに反応した焔に、未来は益々不審そうに目を丸くする。撤退を出した事にも意外ではあるが、其処は生死を分けた状況の中では仕方ないだろう。然し、その後の様子もどこか自信というよりも覇気が消え去ったかのように、靄付いている。
「いや…別に……」
「焔さんらしくないで。戦う時までは良かったのに、ベルゼ兄さんって妖魔に戦慄でも覚えたん？」
「あぁ、いや…そういう訳ではなくてな。たしかに強かったのもあったし、私達を簡単に殺せそうなくらい、そんな絶望感を一瞬で見せられたが…」
　焔にしては珍しく弱気で、それでいてベルゼや美怜と出会ってから少し様子が変だ。
「ちょっと焔…？どうしたのよ…？らしくないわよ？そんな弱気になるなんて…」
「弱気になってたか？…はっ、確かにらしくないな私。いや…な、あの美怜ってヤツ。よくよく考えたら私に少し似てるなと思ってな」
『?!!?』
　考えもしない予想外な焔の発言に、未来は勿論のこと、日影、詠、春花は仰天する。自分達の実力に打ちのめされてるのかと思いきや、意外な言葉が返ってきた。
　焔と美怜が似ている？
　考えれば真逆だろう、熱血で暑苦しい焔とは他所に美怜は冷血で物静かな沈着冷静のある人物だ。いや、それ以前に焔自身の口から他者と似てると公言するなど、らしくないと言うよりただただ驚きだ。
「……兄妹。……妖魔だからという理由だけで黙って殺されてろ……か…」

その言葉が頭の中で焦げ目のようにこびり付く。
焔は悪という道に関しては博識であり、それなりの定義や美徳を持っている。だからこそ、美怜に何処か納得や同情が湧いてしまうのだろう。
ただ悪だからと言うだけで差別や批判を受ける事に焔は慣れてるし、そう言う弱腰の相手など散々見飽きてきた。それと同じように、美怜もベルゼもただ妖魔として生きてるだけで、殺されなければならないのだろうか？
確かに妖魔は人類の敵だ――然し其れは、妖魔が人間に危害を加えたらの話で、逆に何も罪を犯してない妖魔を、そこまで執着して処分すべきなのだろうか？
そんな行為が、カグラ同行以前に自分達に誇りがあるというのだろうか？
いや…何よりも、焔自身として何処か心の中で引っかかるのは、兄妹という事だろう。

焔は元とはい善忍家系で育っており、継ぐ者としてはたった一人っ子。だから妹や弟はもちろんの事、兄や姉など血の繋がった兄妹がいる訳では無い。だからこそ、兄妹という絆はああなのか――嘗て自分の人生を狂わせた小路と、兄の復讐の為に蛇女にやって来た旋風を思い出す。
小路が如何に屑とはいえ、妹の旋風とは血も繋がっており、あの兄妹の存在は焔に大きな影響を与えていたのも確かだ。
だからこそつい思い出してならない――美怜とベルゼという兄妹が、小路と旋風を何処か連想してしまうのを。
（やれやれ、私も随分と甘くなったものだな。昔の私なら、そんなもの関係なく切り捨てていたのに）
嘗て蛇女にいた頃の焔ならば、迷わず標的を仕留めるような残忍

だった。命令とあらば、例え親だろうが子どもだろうが老若男女問わず斬り捨てる。其れが忍だというのも、嘗て半蔵学院との超秘伝忍法争奪戦の時にも吐き捨てていた。
　然し、今となっては自分は随分と変わったのだと思う。飛鳥に影響を受けたのもそうだし、伊佐奈との戦いを交えて、己の目標も信念も新たに生まれた焔にとって、美怜のような自由気ままな在り方に、少し嫉妬に近い願望も現れてるのだろう。
　彼女の言う言葉に反論をしなかったのも、正論だからであるからだ。
「……もう少し、あの美怜とやらの話を聞く必要があるかもしれないな…それに……」
『本当なら今ここで、ベルゼ兄さんにグチャグチャに嬲り殺されても可笑しくないのよ？』
　理由がどうであれ、せめてあの元凶の妖魔は野放しには出来ない。ベルゼは確かに正当防衛で忍を排斥し、平穏を守り続けてきたのかもしれない。それを決してするなとも言えない。
　だが、美怜と話し合うにしても先ずはあの妖魔をなんとかしなければならない。妹にとって兄の言葉は聞くものだと言うが、端から見れば兄の妖魔など暴力装置。
　それさえ止めれば、穏便に事を済ませることも出来れば、何とか情報は貰えるかもしれない。
　何よりもしまたあの妖魔を放置し続けていれば、また此処にきた忍や人間など被害が出てしまう危険性もある。
　少なからず、自分達が敵であると見られてる以上、争いは免れない。
「済まない皆んな、ちょっと良いか？」
　その為にも、先ずは仲間達と共に態勢を立て直さねば。

２０３話「警告」

迷宮のような妖魔の巣から、更なる奥地へ進んでいくに連れ、数々な罠が作動し、焔紅蓮隊一業を襲う。
足を踏み入れ探索を行ってから罠らしき罠などなかったというのに、あの兄妹から離れてからいきなり作動するようになった。
「詠！日影！無事か!?」
後方の仲間の安否を確認するよう焔は叫ぶも
「ご心配なく!!」
「ほっ、はっ、と――」
詠と日影は作動する罠を突破していく。
両壁から吹き矢、上からはギロチンをモチーフにした断頭の刃が降ってくるというギミックは、どっからどう見ても侵入者を排除する為のものだろう。蛇女に居た頃よりも、此処のトラップによる性能は高く、幾ら鍛え上げてきた紅蓮隊とも言えど、マトモに喰らえば致命傷に繋がりそうな程に。
詠は大剣を盾に吹き矢を防ぎ、日影はナイフで振るい落としながら、上から降ってくるギロチンを難なく躱す。そしてそこから飛んでくる矢を躱したり落としたりと、兎に角忙しい。
「焔ぁ！前から来るよ！」
未来の鬼気迫る忠告に焔は前面を見やると、前からは醜い竜の石像から火炎放射が吹き溢れる。
ボボゥ！と燃え盛る炎を前に、焔は六爪を大きく振るい立て、吹き溢れる火炎を一時的に遮断。焔には炎と言った熱さにはそれなりの耐性も備えていれば、炎などはほぼ効かないが、仲間たち全員に襲うのであれば、未来の傘で盾として踏ん張って貰うしかない。

「未来！ガードしてくれ！春花は横から来る岩を止めててくれよ！」
「長くは持たないから…！なるべく早くね!!」
右側の廊下からは巨大な丸岩が此方に襲いかかってきてたのだが、春花と傀儡が協力して岩を止めてくれている。
春花は傀儡を使役してるだけの傍観者のように見えるが、実は意外とヒットアンドアエイとトリッキーな戦法を扱い、肉弾戦を得意とする。
それでも次々に押し寄せてくる岩に、今でも押して相殺してるのがやっとだ。これ以上この時間を続けられてしまえば、ペシャンコになるよりも先に腕がもげてしまいそうだ。
「よし、抜けたで！」
「春花、詠、日影！直ぐに未来の後ろに回れ！」
全員が罠を抜けたことを確認すると、後は未来を頼りに後ろについて行きながら炎を掻い潜るだけ。
無事に火炎放射器の石像から抜け出し、次の道へ進む廊下を見ると、ひとまず安堵の吐息を漏らす。
「ふぅ、やっと抜けたか。妖魔の巣には何が出るかは分からんとは思っていたが…罠まで機能してるとはな」
これまでに遭遇した罠は一筋縄では行かなかった。
床から槍や針が飛んできたり、死角になる廊下の曲がり角に行くと毒矢が飛んできたり、終いには視界もそこまで良くない為か、廊下には電流や底なし沼、滑り床、更には落とし穴に傀儡まで設置されている。
妖魔を呼ぶ鈴もなれば、物や背景に紛れ溶け込む妖魔など、限りなく侵入者を徹底的に排除する為の罠だと鮮明に伝わってくる。
「罠があると言うことは、元々普通の校舎では無かったということ…やはり忍学校か」
罠を掻い潜ってた中、廊下には檻やら手錠に繋がれた鎖やら、更には白骨化した死骸が転がっていたのを考えてみると、間違いはないだろう。あくまで推測ではあるものの、妖魔の巣にしては随分と細かく校舎内はしっかり再現されている。

然し、忍学校が妖魔の巣と化したのであれば、何が原因でそんな現象が起きたのかが気になるところだが、今は其れを考えても意味がないだろう。

時は遡り、仲間と一緒に態勢の立て直しを含め、美怜とベルゼ兄さんについて、焔は今回の忍務で話し合っていた。

「お前達、今回の忍務について話し合いたいんだが…良いか？」

其れは、引き上げるか戦うかの二択。

今回の忍務は妖魔の殲滅に近い、調査を含めた少女の捕獲という命令事項であった。

場合によっては処罰をしても構わない…というように、対処は忍達に任せるという内容だった。其れは五人全員とも記憶に残っているし、忘れたなんて事はない。

だが……

「正直、忍務の事を考えると私たちが無理をして続けなくても良いと思うんだ――」

焔の言葉に、流石の四人は目を丸くする。

まさか焔から、こんな事を言われるとは思ってもいなかったのか

「焔さん、本気で言ってるん？」

と、感情ないと自称する日影は驚き

「焔…?!どうしたのよ…らしくないじゃん!!」

と未来はそんな焔に少しだけ、叱責するかのような言葉を投げる。

「勘違いするなよ、別に私は怯えてるとかそういう意味じゃない。私の意見としては、どちらかと言うと忍を殺したベルゼという兄の妖魔は放っておけないし、美怜という女について聞きたいこともある。然し、幾つか理由がある」

其れは、仲間たちの意見も尊重する事だ。
鈴音も言ったように、今回の忍務失敗で咎められる事はないと言っていた。今まで善忍悪忍という上層部に雇われてる忍は、失敗こそ死を意味表し、況してやいかなる命令も命を以ってして果たすという義務感や使命感があった。
だが今の焔紅蓮隊は久々の忍務とはいえ、失敗してしまえば殺されるというケースは少なくない…というよりも、元より追われてる身なので殺されないというのは少々可笑しな話だが、それを咎められる事はないだろうという話である。
なので、焔達が引き上げて今回の妖魔の巣について、情報を出すだけでも、寧ろ上層部はより紅蓮隊の功績を称えるだろう。
今まで生きて帰った忍がいないと言われてた妖魔の巣から、情報を持ち帰ったというだけでも賞賛に値する。
其れは良いことだ、然し焔からすれば……撤退ではなく負け犬同然のような扱いとなる。
妖魔との戦闘経験が少ない上に、カグラにもなってない半端者の学生が、そんな高難易度レベルの忍務を達成できるのは非常に困難というのは分かっていても、焔はそうなる決断も考えていた。
此処で下手に自分のプライドで仲間達を危険な死に追いやらせ、自分の判断ミスのせいで仲間を死なすより、仲間たちの意思を尊重して全員で決めた考えの方が、焔の気分もそうだが効率が良いし、撤退すれば仲間たちの生存率は一気に上がる。
信頼してない…訳ではないのだが、今回ばかりは流石に厳しすぎる。弱音ではない――抜け忍とはいえ忍という志しを持ってる以上、命を懸けてでも使命を全うするのが焔流だ。
だが、自分の想いが必ずしも思い通りになるとは限らない…だからこそ、時には諦めも肝心なのだ。
苦渋ではある……だが、仲間を背負うというのも、リーダーとして判断をするというのも、そういうものだと近頃、成長を通して感じたのだ。
次にもう一つは美怜のような平和的な解決策だ。

彼女は自分たちが妖魔を殺し、荒らした侵入者にも関わらず、見逃してあげると言っていた。
嘗て刀を交えた飛鳥のような甘ちゃんではない…アレは警告だ。
見逃すということは、つまりチャンスをやるということ。これ以上見逃した好機を、出ていかなかったのにも関わらず更に足を踏み入れるものならば、殺すという遠回しのメッセージ。
美怜はそういう算段もあって語ったのだろう…でなければ、態々と自分から訪ねに行って見逃さない訳ではない。
自分たちを殺さなかったり、追い出そうとするだけで済ます辺り、本当に戦いを起こして欲しくないという想いが強いのだろう。
でなければ、もし荒らして欲しくないのなら力付くで殺せば、直ぐに済む話だ。
其れに…妖魔が襲わないというのであれば、自分達が態々危害を加えてまで攻略する必要はない。
そう考えると今回の忍務は無理して続ける意味がないと思えてきたのだ。何より理由や経緯がどうであれ、あの二人が兄妹である事に変わりはなく、況してや自分達がやってる行いは、何も知らない兄妹の仲を切り裂こうとしているのだ。
忍務を遂行する上でのメリットは、上層部からより良い評価を受けるのは勿論のこと、ベルゼという妖魔の被害に遭わずに済むという事だ。
理由はどうであれ、忍を幾重も殺したベルゼの被害は尋常じゃない。ならば、ここで倒す事で今後とも忍が命を落とすことも、迷い込んだ人間が被害に遭うことも今後はなくなる…そう行った点では、ベルゼは倒さなくてはならない存在になってしまう。
だからこそ、焔は今回の忍務…とても一人で勝手に選択を決めるのは、余りにも重すぎるという話だ。
「んー…確かに焔ちゃんの言うことは一理あるわねぇ。態々見逃してあげるって話してるのに、それを無下にすれば…今度こそ逃れられない死の戦場――下手すれば私たち全員、此処で命を落とした忍達の一人になるんだし、焔ちゃんにしては大分考えた方なんじゃ…」

「一々一言余計だぞ春花!!私は…」
「ええわかってるわ。だから私の意見としてはあの子…美怜ちゃんは勿論、あの妖魔も放っておけないって事だけ言っておくわ」
　此処で春花は意外な事に、忍務を続行することを選ぶ。
「確かに生存的に考えれば逃げの一手が一番なのだけども…でも、美怜ちゃんの事が気になるし、あの妖魔だって人を殺す事に躊躇いが無かったわ。アレは、慣れてる動き」
　美怜がどれだけ優しい言葉を並べようと、本当は人を殺す事に躊躇いがないベルゼを、確実なる善や正当防衛だとは言い難い。
　罪悪感があるのならば、話し合って解決は出来るのかもしれないが、そもそも話し合いすら難しいと判断した春花は、実力行使でしか解決できないと考えた。
「せやなぁ、わしはどっちでもええし逃げるも闘うのも焔さんの好きにすればええけど。でも逃げたところで上層部がまた此処に忍務を出さないって可能性は低いと思うで」
　日影の言ってる言葉は尤もだった。
　例え今回の忍務で失敗したとして咎められないてしても、焔紅蓮隊とは違う別の忍達が此処へ向かい、被害に遭うケースは低い訳ではないのだ。
　最悪、兄を従えさせる妹を殺せということもあり得る…そうなれば、今度こそあの美怜っていう少女は冷酷無慈悲で、此処にきた忍は勿論、一般人にさえ危害を与えかねない。
　そうなれば、焔紅蓮隊の責任にもなる。
「私は…出来ればあの兄妹とは仲良く平穏に暮らしてほしいと思うことはありますが……日影さんの言葉で思いました。これは、私たちは無視できない忍務だなって」
　詠は最初、逃げの一手を考えた。
　意外なことではあるが、詠だって何も無意味に争いをしたい訳ではない。美怜の言う通り、何事もなかった事に、穏便に済ませたいのであれば、此方も応えたいという意思が強かった。
　しかし、また此処が別の忍に荒らされては、兄に殺される可能性は

捨てきれない。そうなれば見逃した自分達に非があるし、上層部に説得は無理があるだろう。
妖魔を見逃せなんてことを、融通が効くわけでもないし、話を聞いたとしてもそれを守る保証はどこにも無い。
だからこそ、せめて自分達で終わらせなければならない…あの兄妹の暴行を。
「そっか…私たちのことを考えてくれたんだね焔は…でも、大丈夫。確かにあのベルゼって妖魔は怖いし、あの生意気な美怜ってやつの言ってることは、悔しいけどつい納得しちゃった…。でもこのまま引き下がるのなんてわたし達らしくないというか…うん、なんかこのまま黙ってられない！」
未来は何というか、真っ直ぐだなと思う。
子供らしいといえば「ムキーッ！」と怒って喚き散らかすのだろうが、それでも自分達の為に戦う事を望んでくれるだけでも、充分に有難い。
何方も意見は纏まり、結果としては…
「よし…っ　決まりだな。このまま探索を続けて、ベルゼと美怜を何とかするぞ。特にあの妖魔は…多分、まだ徘徊してると思う。匂いが遠のいたり近付いたりしている、注意を怠らず気を引き締めて行くぞ！」
どうやら皆の意見は纏まった様だ――こうして賽は投げられた。

そうして今に至るわけだが、奥に進めば進むたびに方角が分からなくなっており、偶に同じ場所をグルグルと回ってる様な錯覚にさえ陥ってしまう。
美怜やベルゼが自分達の住処を、此処を家と言うには余りにも広大すぎて、逆に把握しているのかとさえ問いたくなってしまう。
古き校舎だからこそ、今のような半蔵学院みたいな恵まれた環境構造の面影もなければ、より薄暗さも相まって殺伐とした感が増してい

る一方だ。
（……そう言えば、偶に見るこの拷問部屋の様なものだが、これもアイツら兄妹の仕業なのだろうか？）
流石にこの家をベルゼが一人で作ったとも考えられないし、美怜のような細くて幼い小さな体をした少女が、建物の構造をどうにか出来るわけじゃないのは、充分に想像が付くが、それにしては家に白骨化した死骸をそのままに置いておくのは、家としてどうなのか…さえ疑わしく思う。
妖魔と名乗るのだから、臭いは気にしないにしろ、見る側としては余り心地よくはない。
「焔さん、妖魔の匂いはどうなん？」
「此方を探るように徘徊してるが…私たちの存在を認識できてないのか、今のところ遠のいてる」
妖魔の前に、まずは少女を探した方が賢明な判断かもしれない。いや、実際にそうだろう。
美怜はベルゼがいるからそれを使役…と言うよりも、兄に頼って追い払おうとして話が通じない。ならばベルゼが居ない今なら、少女に逢うのが好機であるだろう。
尤も、自身を妖魔と名乗る以上…彼女が攻撃を仕掛けてくる可能性もあるが、そこは臨機応変に対応するしかない…と言うのが現実的だろう。
暫く先の廊下を進んでいると、見慣れない一本道の廊下が見えてきた。薄暗さにしてはどこか異様な空気が流れており、教室や窓、ロッカーや下駄箱、それらの学校の雰囲気とはかけ離れていた。
「なんだ……これ」
然し、焔が固唾を飲み込み呟いた声は、そんな学校から離れた景色ではなく、壁に映された遺跡のような壁画だった。
その絵は魅力的でありながら、まるで幻想に包まれるかのような神秘さは、妖魔の巣にしては余りにもかけ離れた空気。見てるだけで、歴史を覗いてるような感覚が研ぎ澄まされる。
黒き竜が、護身の民達と争い血を流す戦争の絵。

黒き竜が、醜い化け物を縛り、使役している絵。
黒き竜が、妖魔と人を惨殺したような地獄絵図。
どれもこれも未知と理解に及ばない不可解な絵ではあるものの、その絵に何処か惹き付けられるような、魅力さえあるのは、芸術的なものも関係しているかもしれない。
特に大きな８枚絵は印象的なものもあった。
――悪魔の角を生やした巨軀たる邪神の絵。
――黒き月の邪竜が、太陽の女神と護身の民と対峙する絵。
――巨大な烏が、古き人々を守り村を覆う絵。
――不気味な箱が、人と妖魔を食い荒らし、禍災を起こす絵。
――全てを喰らい尽くす暴食の魔物の地獄絵。
――大空を舞い、支配する神龍の絵。
――天を翔け、神をも喰らう獰猛な狼の絵。
これは…忍と妖魔の歴史なのだろうか？
それとも昔の人間が描いた芸術なのか…何方にしろ今の焔達では理解できない絵ではあるが…
「アート…？昔の人が描いたものかしら…妖魔の巣にもこんなものが…」
「ねえねえ見てみて焔！これ!!」
関心に浸る春花や詠、唯一芸術性やら絵の意味を理解できない日影の隣で、未来は叫ぶ。
未来の声に反応した焔は、言われるがまま指差す絵を見やる。
「なっ!?これは…??」
絵を見た焔は絶句した。
学校に擬態した四足歩行の巨大な蛇が黒き竜に縛られ、人を無差別に殺し、血の海に、村を壊滅させる絵。
その大蛇の絵は粗質ではあるが…それでも直感で、何よりも既視感があって瞬時に理解する。
これは…怨楼血だ。
嘗て道元が復活させたあの怨楼血…あの妖魔や道元のせいで、蛇女

はメチャクチャにされたのだ。
その怨楼血が何故絵として記されてる？いや、そもそもさっきからいる黒い竜は何なのだ？
まるで、黒い竜が妖魔を使役してるような…妖魔を使役し、殺してるその姿は、人間で言う奴隷のようだ。
「これは…怨楼血か…？」
「悪趣味にしては…とても只の歴史の絵とは言い難いわね」
最初は神秘的な絵が古くからあったのかと思った。
然し、怨楼血の絵を見て変わった。
これは…全て実現されたものなのだと――この絵に記されたものは、妖魔と人間の歴史なのだと。
聞いたことがある、怨楼血は何百年も前から存在が確認され、災厄を振り撒き多くの人間が命を落としたと言われている。ならば、その悲劇を描き写されたものが、この壁画ではないか？
何なのだこれは…然も怨楼血の歴史には黒い竜の事など聞いていない。ある黒い竜は怨楼血を槍や牙、爪で傷つけて、ある黒い竜は縄で首を締め付け、ある黒い竜は指をさして命令を下してるように見える。あくまで絵面からの把握なのだが、それにしては何とも…

「貴女達…まだいたのね」

などと絵に集中してた焔達に、聞き覚えのある少女の声が一本道の廊下から響いた。
「美怜…!!」
「まさか、罠を掻い潜り無傷でありながら…ベルゼ兄さんの猛攻や追跡から逃れるなんて……本当、貴女達には興味が湧いてきたわ」
本を片手に持ちながら、此方をジッと見つめながら状態や様子を観察する少女は、何処か感心している。
「あ、アンタに聞きたいことがあるんだから!!お、大人しくしなさい！そうすれば、命だけは取らないわ…っ！」
「未来、それ逆効果ちゃうん？返って警戒を高めさせちゃうだけやで」

「で、でも…アイツは私たちのことを警戒してるんだし…どっちにしたって…」
「自分達の立場を漸く理解したのかしら？警戒して怠る事はないでしょう？…それに、聞きたいことについては、私からもあるから」
脅す未来の姿は何処か説得力というか気迫が欠けており、日影は相も変わらずダウナーな声で彼女の頭を撫でながら無気力そうな顔でつぶやく。そんなやり取りを見て微笑を浮かべる美怜は、警戒してると言っていながら何処か余裕そうではあるが…
「聞きたいこと？家を出て行けと言いながら、今度は聞きたいことがあるだなんて…随分と忙しいのね貴女」
「いきなり顔も知らない侵入者が入ってきたら誰だって嫌がるでしょう？それとも外の世界では他人が勝手に家に入ることが当たり前なのかしら？それはそれで縄張り争いが起こりそうな気もするけれど……っと、話が脱線したわね。取り敢えず、貴女達も私に聞きたいことがあるって様子を見た限り、この家にまだ用ありなのでしょう？私も貴女達に聞きたいことがある…お互い一時的とはいえ目的が一致してるというのなら、今は立場を置いて話し合いをするべきなのかしらね」
お互い会って間もない。にも関わらず、美怜という少女は警戒を緩めず、距離を置いて対話を望む。
思ったより好都合…それに、此方としても願ったり叶ったりだ。ここまでは予期せぬ順調――ここからだ。
「なぁ…どうしてお前は最初に私たちを殺さなかった？そもそもこの壁画は何だ？それと廊下にあった拷問やら罠やら…あれは全部お前達の仕業なのか？それと……お前は本当に妖魔なのか？お前からはベルゼのような匂いがしない。何より…」
「……一気に質問が多いのだけれど。まぁ良いわ。でもその代わり」
質問攻めする焔に美怜は眉をひそめるも、そのあと薄っすらと微笑を浮かべながら歩み寄り

「――悪いけど貴女達、この娘借りるわね」

焔を抱き締めると、壁に手を触れた途端――床が開き美怜と焔は仕組まれた床の絡繰によって、姿を眩ませた。

「なっ⁉」

「悪いけど、一対一で対話を望みたいの。安心して、何もしないわ」

彼女のゆるりとしたその身のこなし、警戒は怠っていないと言うのに、まるで通学路を歩むように、母親を抱きしめるように。

少女は動揺する焔の耳元で囁きながら、こそばゆい感覚と落ちてく感覚に囚われながら、二人は姿を消した。

「焔⁉」

「焔ちゃん⁉」

未来と詠はてなんとか手を伸ばすも、その手は届かず…いや、美怜に拘束されてる以上は無理があるだろう。

体を掴めず、距離も届かず、四人は焔の名を叫ぶも、それすら虚空に掻き消えるように…。

２０４話「化け物は死ね」

「焔あぁぁぁ!!」

落ちてく焔に、四人は必死に手を差し伸ばすも、虚空を切るように届かない。

床が抜け落ちていく感覚を味わう焔は、この状況を打破するべく体に力を入れるものの――

（ッ!?何だこいつ…!!力が…！）

腕に力を入れて、彼女の腕から脱しようと試みるも、その焔の筋力を封じるように、少女は彼女の脱出を許さない。

つまり、この美怜という少女は焔を拘束できる程に力があるという事だ。

見た目は細くて気弱な少女なのに、意外にもタフな体質に正直其方に驚きが優ってしまいそうだ。

「動かないで、それにしても意外と力があるのね…貴女」

「お前に言われたくない!!」

動けば動く度、少女の腕に力が入りより締め付けられる。焔の必死な抵抗に、少女は冷笑を浮かべるのだから、本当に得体が知れなさすぎる。

彼女の行動には突っ込みたいところはあるが、美怜としては単に自分の欲求に動いてるだけである。

家から出て行って欲しいのも、話を聞いて知識や研究を行うのも、全部彼女が「そうしたいから」という欲望に従い動いてるまで。

だから春花の言葉には反論はしなかったし、寧ろ自分達の家なのだから他人に言われる権利はないとさえ思っている。

そうこうしてるのも束の間に、焔と美怜はそのまま地面に落ちてい

く。
地面に直結していくも、痛みはない。寧ろ柔らかい感触が跳ね返り、衝撃を緩和してくれたようだ。
「…ここ、は…」
「薬品の匂いがするでしょう？一応、寝心地は良いのだけれどね」
白いカーテン、木製のタンスには薬品らしき容器、そして自分達のクッション代わりとなってくれたベッド。周りを見渡す限り、ここは保健室だろう。
他にも幾つかベッドがあるのを見た限り、間違いではなさそうだ。
「仲間たちは…」
「手は出してないわ、安心なさい……ま、ベルゼ兄さんと遭遇さえしなければの話だけど。仲間たちには悪いけれど、貴女とだけお話ししたいの。あの子たちも興味深い研究対象ではあるけど、指揮取る棟梁の貴女との対話が、一番効率が良いと思って敢えて一対一の状況に作り上げたの」
仲間たちからの質問攻めも考えれば、相手にどの情報を与えて良いのか、メリットとデメリットを選別しなければならないし、また話が上手く進まなくなるという予想と仮説を立て、筆頭である焔とのワンツーマンの会話であれば、効率よく進めるからだ。
そしてその予想は現実となり、実際に焔の仲間は個性的な一面もあり、美怜の求める質問にほど遠く、話が脱線してしまう可能性も極めて高い。そう考えると、美怜は出会って少ない短期間で相手を相当に観察し、考察してると断言できる。
「……さっきのもそうだが、今までの罠も…お前達の仕業か？」
「質問に対する答えの続きと行こうかしら。ええ、そうよ――私達…と言うより、私が罠を起動させたのだけれどね」
やっぱりか…そう焔は心の中で愚痴を吐く。
ベルゼや知能の低い妖魔が、こんな高密度な罠を起動させてるとは思えない。
可能であるのならば、頭の回転も知性が高い美怜がするのは必然と当てはまるだろう。

「どうしてこんな事を……」
「初めから罠を起動するとしたら、私が家を回っても寛げないでしょう？だから貴女達が発見してほとぼりが冷めるまで罠を起動させて置こうと思ったのよ。その間に読書でもしようと思ってね……」
「違う、そう言う意味じゃない――何故、態々罠を作動させる必要があった？」
「分かり切ってる癖に…決まってるじゃない。貴女達のようなコソ泥さんを、侵入者を排除するためよ。対策は付き物でしょ？」
「お前のその罠が、人を殺したとしても良いと言うのか？」
「他人の死に、貴女達人間は何をそこまで情に熱くなるのかしらね。こうでもしないと侵入者は諦めずに進むでしょう？生半可な罠なんて、なくても変わらないもの。徹底的にするのなら、これくらいは鉄則よ」
　人を殺さずにと甘い言葉を垂れながら、罠と言いベルゼと言い、春花が先程話してた通り…人を殺すことに躊躇いというものがない。
　最初に殺さないのも…きっと…。
「成る程な…春花の言う通り、お前達は人を殺すことに躊躇いがない…と言うわけだな」
「ふふふ……躊躇いですって？貴女、面白い事を言うのね。躊躇だなんて人間的な感情を問うなんて…。
　……警告をしたにも関わらず、コソ泥さん達がノコノコと土足で家を荒らすのなら、私達も手段を選ばないし、それで死んだとしても私達にどうしろと言うのかしら？尤も、こんな罠で殺される人間がいるのなら、ベルゼ兄さんに挑んでも勝ち目なんて無いと思うけれど」
　美怜にとって罠とベルゼ兄さんに比べたら、圧倒的にベルゼ兄さんの方が上なのだろう。いや、当然か…いくら一般人を簡単に殺し、忍でも傷を負わざるをえないような絡繰仕掛けの罠だったとして、この家の所有地であるこの兄妹が自分の罠で死に至るなど、考え難い。
　そういう点では、罠で殺されてしまう忍が、ベルゼという妖魔を倒すことなど不可能に近いだろう。
（美怜……やはりコイツ、厄介な相手だな……まるで日影のように、蛇

や昆虫の如く心という概念がないような……今まで沢山の人間を見てきた中、こういう論理的な奴は初めて遭遇する…）

感情や心がないという点では、彼女は忍としては才があると思う。人を殺す、或いは傷つけるというのはどの人間であれど、多少躊躇いや加減をしてしまうようになっている。

非情になりきるという点や、焔を始めた悪忍は他者を傷つける事に何とも思わないものの、それはあくまで忍務に過ぎない。

脅かす敵という存在だって、余程のイレギュラーを除けば慢心や躊躇、無意識にブレーキを掛けてしまうもの。美怜には其れが無い。

論理と理屈、そして根拠を元に明確にしているからこそ、其れが成せる。

彼女にとって、道徳など誰かが作ったモノでしかないのだから。

「ではなぜ、あの時侵入者と判断した途端に殺さなかった？お前はたしかに現実的で理屈が通じてる……だがお前は人を殺す癖に、見逃したりこうして私と会話して殺さない辺り……お前の考えが読めない」

「あら？殺されて欲しかったの？それなら首を吊るなり黙ってベルゼ兄さんに嬲り殺されるなりすれば良かったのにね」

「お前…!!」

「……冗談よ。私が人を殺さないというのは、貴女達に選択肢を与えてるだけ。幾ら悪気がなかったと言えど、黙って帰ってくれるなら態々殺さなくても良いし、それに知らずに迷い込んだ人間を殺してしまえば、怨みを買われて此方の巣を荒らされてしまう方が後味も悪いし、結果的に私たちに非がある事になる……争いを避けるためにも、このように無益な殺生は働かないこと。ベルゼ兄さんにもお願いしてるわ」

一般人など、偶に不良と呼ばれる連中が好奇心や軽い気持ちで足を踏み入れてしまうケースは多少あり、そう言った敵意も何もない人間は自分達を見て化け物だと吠えるが、非力な人間にはベルゼに敵うはずもなく、妖魔の兄であるベルゼはそう言った人間を出口まで追い返しするのだ。暴力的ではなく、親切に。

そう言った点では他の妖魔と比べて温厚ではあるし、其処に悪意も

ないと思う。
「それに…人を殺す事によってメリットやデメリットが生じる。これは尤も大事――例えば…私たちに何の利益もなく、ただ家を荒らし話も聞かずに殺そうとする人間には、到底メリットがない。対話すら望んでくれない人間にはどう足掻いても死ぬまで止まらない…なら、そう言った人間はベルゼ兄さんが勝手にやってくれる。
逆に貴女達焔を含め、対話が可能で有益な情報が出に入るのであれば、殺すより生かした方が此方もメリットがある…自分から有益な事を潰すなんて、考えなしの人間がする愚行よ」
人は死んでしまえば元には戻らない。
戻らなければ口を開くこともなく、屍と化して二度と口は開かない。死人に口なしとはこの事。
だがそのお陰で焔達は生かされてるし、美怜にとって外の情報を聞き出せたのは、これまでにないメリットだ。随分と皮肉が効いている。
今までは捕まえた忍から言語を教えてもらったり、多少の知識を得た程度。尤も…忍が情報を売らない代わりに、美怜は違う情報を引き出しては、成長していったのはいうまでもなく。
因みに勝手にやってくれるというのは、ベルゼ兄さん本人の意思であり、妹を危険な目に遭わさない為に自ら体を張って侵入者を排除している。なので、美怜の意思は関係ない。
そう言った意味では、ベルゼという妖魔はかなり異端だ。家族愛が強く、妹をとても大切にしているのだと直に分かる。
「……お前は、ちゃんとしてるんだな」
「生きる為にはこれくらい当然でしょう…。その中で尤も貴重なのは情報よ――この世に生きる人間の殆どは情報という知識によって生かされてる。他愛ない情報や文化、言語や作法、文字や絵など全ては、情報によって具現化されたもの。其れを如何にどう上手く利用し、身を守り、駆使して生きるか……でなければ、淘汰されるのは知恵を持たない弱者の方。生きるには、知識を搾取するのよ」
どれだけ力があろうと、知恵がなければ宝の持ち腐れ。自身の力を

どう使えば良いのか知らない人間は、持っていたとして価値が見出せない。
生と死の間における判断、生きる為に何が必要か、何から何まで知識というものが自分達の味方になってくれる。美怜はそれを痛感するほど知っている。
知的な少女だからこそなのか、凡ゆる侵入者を前に殺されず、生き延びれた訳だ。
焔自身、ここまで倫理的な相手は生まれて初めて見る。焔もそれなりに生きるという美徳は心得ているが、ここまで対話したのは初めてかもしれない。その美怜の言葉に、自身も何処か納得できる部分もあれば、共感できるのもある。
だからこそ、焔は何も言わないし、否定する気は毛頭ない。
「まぁ、それに…貴女達は私を見ても危害を加えようとしなかったし……」
「？何か言ったか？」
「何でもないわ、気にしないで」
小さな声が聞き取れない焔を、美怜は流す。
「…そういえば聞きそびれてたが、お前…情報を引き出すとかどうの言ってたな？それも、お前達が殺した忍からか？」
「ええ、試しに捕虜として捕まえて情報を引き出そうとしたの。けど…忍という侵入者は直ぐに暴れるし危険だからってベルゼ兄さんが元々この家にあった檻に入れて、拷問させてたわね」
「拷問…ッ！」
「ああ、勘違いしないで。ベルゼ兄さんとて無害になったりいう事を聞けば逃してあげるとも約束した。でも…皆んなせっかちなのかしらね、それともプライドが高いのかしら？私を見ても殆ど殺そうとする輩が多くてね、ベルゼ兄さんの力加減も難しいし、簡単に始末されたわ。
……兄さん曰く人間は昔妖魔を作る際に、こういうことをしてたって言ってたわ。その風習が遺伝子に刻まれてるのか、或いは知識

があったのか、本能によって従ってるのか、何故かそうするようにしてる。私は拷問なんて趣味はないし、聞いてても耳障りだったからやめてと言ったんだけどね」
慈悲的な意味ではなく、単に迷惑だからという辺りが冷血だなと思った。
拷問とは言っても痛めつけるのを趣味としてではなく、美怜の質問に答えるか否か…元々自分達を傷付けようとした人間を殺そうとしてたのを、美怜がせめて知識だけでもと縋る結果、ベルゼと美怜の考えが混ざり合い、こう言った形になったそうだ。
拷問にしても、道具で痛めつける訳ではなくベルゼ自身が執行するそうで、拷問にかけられる人間の大半が元々ベルゼが殺そうとした忍だったので、まだ殺されず情報さえ吐いていれば、無害であれば、いくらでも生還できたという事。
一見拷問という悪趣味なワードで騙されがちだが、これは同時に救い…チャンスを与えられていたという訳だ。
「……妖魔を作る、か。ベルゼはそうやって拷問した忍の血を集めて妖魔を生み出してるのか？」
「研究資料ではそう書かれてたけど、間違いではなさそうね。別にそんなことしなくても妖魔を生み出すことは出来るけど…」
「…何？」
「あら、もしかして知らないのかしら？外の世界で妖魔は敵だ殺せと言ってるくせに？ふふ…あのね、妖魔は自分達で同類を増やせれるわよ？」
「…ッ!?」
何…だと？
どういう事だ――今の言葉で思考がフリーズする。
妖魔とは、忍の血が集まることによって生まれる膿のような存在。そう鈴音先生から聞いたし、カグラの多くもそれで犠牲となっている。
なのに、妖魔が妖魔を生み出してる？繁殖か？いや、そんな事聞いたこともないし、出来るとするのなら鈴音先生も最初にそう言ってる

だろう。
「妖魔達だって、人間がいなくても互いに態と血を流させて溜まった血から妖魔を生み出してるの。この目でちゃんと見たし、生まれた妖魔は凶暴でもなく純粋だったわよ？
だから私、考えたの――貴女達の言う害を与える妖魔とは、人間の血によって生まれた妖魔の個体か、妖魔同士によって生まれた妖魔か…環境や状況、生まれた経緯によって原因があるのかとね…あくまで仮説だから立証も難しければ根拠も弱いし、実際にそうだとは言わないけれど、可能性はある。貴女がそれを知らない限りだと、人間の血によって生まれた妖魔がベースではなくて？
貴女がさっき言ってた通り、心当たりはあるのでしょう？」
これはとんでもない情報を掴まえた。
美怜は情報は命とも言うべき程に世に必要と言ってたが、正にその通り――妖魔が妖魔を生むというのであれば、どんどん被害が広がるばかり。
それに人口妖魔を作り出した伊佐奈とも面識がある。伊佐奈だけでなく、道元も怨楼血を始めた妖魔を作り出し、政府や軍に売り払おうとしていた野望もあったのだから。
尤も、その道元のせいで自分は抜忍となり、伊佐奈のせいで旋風を始めた若き忍の芽を摘まれ、雅緋達を苦しめた。
「……ねぇ、今度は私が質問して良い？さっき貴女達は壁画を見つめていたけど、何か知っているの？」
今度は美怜が質問を尋ねてきた。
彼女の口調からして、壁画を見つめていた焔達に疑問と興味を抱いたのだろう、彼女が態々質問するのは何かしら理由があるのだろうか、答えることにする。
「いや……私も初めてあの絵を見た。但し…怨楼血は知っている。あの絵に描かれた怨楼血……最初はただの歴史的な絵画かと思った。だけど、怨楼血という妖魔を見て見解した――これは普通の歴史ではないと」
「おろち…？怨楼血、そう…日本神話に纏わる妖怪…大蛇のことね。

そこまで怨楼血という妖魔に執着する辺り、何か訳ありなのかしら？」
「訳も何も――怨楼血には散々な目にあった!!道元によって超秘伝忍法書を悪用されては召喚され、危うく仲間達や蛇女も崩壊されるところだった!!お陰で私達は抜忍になったわけだしな」
焔の異様な圧の声に、美怜は不思議そうに目を丸くする。
カッとなった焔の心境は無理はないにせよ、流石に美怜には強く当たれない。
「……貴女、とても感情的になりやすいのね」
「悪いか…いや、済まない。流石にお前にキツく言っても変わらないしな…熱くなりすぎた」
「いいえ、人間らしくて素敵だわ。それが貴女であって、想いに熱意と情熱を携わる貴女は、私にはないものを持っている。それだけ感情的になるという事は……因縁があるのね。成る程、それなら貴女が妖魔を敵視するのも、少しは理解出来たわ」
「少しか…いや、まぁ良い。私は怨楼血という事しか知らんし、それ以外は本当に何も知らん。お前は何か知ってるのか？」
「流石の私もこればかりはどうにも…生まれた時からあったものだけど、何を意味表すのか…ただ、ベルゼ兄さん曰く特に8枚の大きな絵は、神魔を意味表すと言っていたわ。
他にも神魔という絵は複数あって、それらは全て自分たちよりも遥か上…とも言ってたけど」
神魔？
聞いたこともない…やはり、此処は自分たちの知らない情報が溢れているようだ。
神魔についても気になる…何というか、此処にきてから疑問ばかり抱いてる気がする。
考えるよりも体で動くタイプの焔にしては、もう此処のところ頭が働きっぱなしである。いや、美怜が余りにもストイックに物事を進めたり知的で話すのも多かったりと、兎に角情報を頭に殴るように叩き込まれてるのだ。

「…っと、今回のことを踏まえた上で貴女の疑問はある程度答えたつもりだけど、他には用はあるかしら？私も特に聞きたいことはないし…」
「ああ、最後に一つだけ…お前は本当に妖魔なのか？ベルゼとお前からは匂いが違う。私は鼻が人とは少し違い特化してて、気配や強さには敏感なんだ」
「……貴女がそこまで拘るのなら、やはりそうなのね」
「…？」
首を傾げる焔に、美怜は彼女の瞳を真っ直ぐに見つめて口を開いて断言した。

「この私…美怜は、貴女達と同じ忍である可能性が極めて高い――」

「なっ――」
美怜の単刀直入に言う淡々とした真実に、絶句する。
先ほどまで自分を妖魔だと謳ってた少女は、突如忍だという可能性を示唆する。
「焔、貴女がなぜ嗅覚という五感に特化してるのかは不明だけど…ベルゼ兄さんと私の匂いが違うと言い、人間の形や容姿をした私と異形な姿をした兄さん。似つかない上に知能も違う辺り、薄々と勘付いてはいたけど、やはり私とベルゼ兄さんは違う種…妹である私は忍で、ベルゼ兄さんは妖魔に当たるのね」
彼女が何を根拠に、何を想い、忍であると言い出したかは分からない。
薄々と勘付いてたと言う辺り、美怜は前々からベルゼとは違う存在である事を察していたのだろう。知的で利口な彼女なら、あり得なくはない。
ただ少なくとも、認めたくなかったのか…或いは根拠が足らなかったのか…何にせよ、美怜が只の人間ではなく忍であると言うことは、

大きな情報だ。
……不思議なものだ。
忍とは妖魔と敵対する存在であり、況してや忍は妖魔を滅ぼす為に存在している。一方で妖魔は忍の天敵であり、唯一抗える存在。
その相反する分かち合えない存在が、兄妹として生きており、妖魔にも懐かれてると言うのは、洗脳でもない限り荒唐無稽にも思えるような内容だ。
「……始めに聞いたときは妖魔だと答えたのにか？」
「貴女達が忍でありベルゼ兄さんに対抗できた。それなりに身体能力も高く、更には特殊能力…例えば貴女みたいに火を扱ったりね、そう言った人間を見て自分に近いと思ったのよ。いいえ、寧ろ確信にまで至ったわ。
そして忍が使う特殊能力を、忍術と言うのでしょう？」
「なら…お前はどうする？忍なら、お前は…」
「……私は、兄さんと一緒に暮らすわ。ここは、私とベルゼ兄さんの棲家――立場や種が違えど、家族であることは変わらない。変わろうと思わない…」
お前は、私たちと此処を出るか？
そう言いかけた言葉を喉に引き止めながら、美怜の言葉を真に受ける。
「外の世界はとても魅力的で、追求しようとも思うけれど…あいにく、兄さんとの約束でね。外は危険だから出るなって言われてるの」
外の世界は危険だと言う認識を植え付けられた美怜は、兄の言う通りにして家に留まっている。
現に忍という輩が自分たちを傷つけ殺そうとしてるのだから、危険なのは当たり前だ。其れに、此処は侵入者さえいなければ平穏に暮らせるし、穏やかに過ごせる以上に越したことはない。
だから、美怜は外の世界に出れないのは残念ではあるが、それはそれで仕方がないと割り切っている。
何より兄妹の言うことや約束は守るように心掛けてるのだ。これもまた、ベルゼと美怜の兄妹の絆を表してるのだろう。

「しかし……」
「これで要件は済んだかしら？私はそろそろ引き下がるとして…貴女も引き下がりなさい。お帰りは彼方――仲間と一緒に棲家に帰って平和に暮らしなさいな」
「引き下がれるわけないだろ――」
美怜のクスッと微笑んだ微笑に、焔は彼女の言葉を斬り捨てる。
此処まで来て、仲間たちと団結したのに引き返せ？冗談じゃない…此処まで来て引き下がれる訳がない。
「……はぁ、まだこの家に用があるの？」
「…悪いが仕事なんだ」
「コソ泥さんは口を揃えて皆んなよく言うわね、仕事だから仕方ない…って。家を荒らして殺すのを仕事なんだと言うんだもの、本当に殺されることに憤慨を持たれるのが不思議な程に。因みに言っておくけど最終警告よ、仲間たちに伝えなさい…このまま先に進んだら今度こそ絶対に殺すわよって」
美怜から放たれた殺害宣告。
出逢って間もないが、彼女の性格と言動から察して冗談ではない…本気だろう。
これ以上先に進めば何かあるのか？
「この先に何かあるのか？」
「罠だけが待ってるわ。でもね、その罠を突破されて仕舞えば、もう貴女達を殺すトラップは意味を成さなくなる。だから、この先に進めばもう侵入者を逃さないし、排除するって言ってるの」
「お前……」
「……前にね、此処の仕掛けを突破した忍がいたの。全ての罠を掻い潜り、傷だらけの血塗れで、仲間を失って…ベルゼ兄さんがそんな忍を殺そうとした時にね、言ったの。
『もう許してくれ』『仲間も失い傷も深くて戦えない』『命だけは助けて下さい』って、泣きながら命乞いをして、土下座までしてきたわ。当時の私はね――その人の言葉を信じたの。
今まで誰かを信用したことがなくて、信じることによって結果は変

わったり、無益な敵対関係をしなくても済むのでは…ってね。
実際に行方不明者が出てるというから、その情報も手に入ったことだし、だから私は許したわ。その忍を――それで、結果どうなったと思う？」
「……ん、待てよ？生還者か…？そう言えば一人の忍が重傷を負ってそこから……まさか――」
鈴音先生が言うには上層部はその妖魔の巣について、たった一人の忍の生還者により妖魔と少女が手を繋いでると言う情報が手に入った。
そして其処からの話では確か、大勢の忍が派遣され…
「今度はね、大勢の仲間を引き連れて来たのよ。一度看破された罠は難なく攻略されて傷を付けることかなわず、何も意味を成さず、ベルゼ兄さんが迎える前に直ぐに来てしまったわ…。
然も皆んな優先的に私を狙って殺そうとするの。私の容姿が人間なのと弱そうに見えたのかしらね、泣いて命乞いしてた忍は、勝ち誇った笑みで、皆んなこう言ってたわ…
『化け物は死ね』『化け物は死ね！』『化け物は死ね!!』皆んな口を揃えて武器を降りかかって来たわ。それが兄さんの逆鱗に触れることを知らずにね……誰一人骨も残らず死んだわ」
その真実に、焔は心臓が突き刺さるほどに痛感する。
信じた人に裏切られ、殺される――その経験を通した焔と美怜が重なると、他人事とは思えなくなり、過去の自分を沸騰とさせてしまう。
『もしかして君…僕に恋をしたりして？』
小路というたった一人の下衆な悪忍によって、信じてた人に裏切られ人生を狂わされた焔。
命乞いをする忍に何とか信じて許した結果、裏切られて殺されかけた美怜。
……少女は、感情表現や心情に疎いものの、きっと美怜も大きな憤慨を煮えたぎらせただろう。
ベルゼが多少忍に嫌悪するのも、何となく理解した。

…どんな気持ちだったのだろう、裏切られてしまった少女は。
美怜はきっと、根は悪いやつではないんだ。
同じく…自分や詠、日影、未来、春花と同じように、陽に当てれずに日陰でしか生きることが出来なくなってしまったのか。
そう考えると、本当に何方が悪なのか…分からなくなってしまう。
「それでも焔、貴女は他の連中とは違うわ。
此処まで会話が出来たのも、有意義な時間を過ごせれたのも…これだって一応感謝してるもの。
私の言葉を踏まえた上で、もう一度深く考えなさい――後悔のない自分の正しいと思う選択を。
それを終えて、何方に転がると言うのなら、運命に従うまで…。私は帰るから、貴女もそろそろ仲間たちと遭遇したら?あっちの出口から行けば仲間たちと合流できるはず」
美怜は人差し指を向けて焔に丁寧に説明しながら、焔の返事も待たず「じゃあね」と言い闇夜へと消えて行く。

「……信じた結果、裏切られた…か。はは、まるで昔の私だな」
一度は小路、二度目は道元。
此処まで他者に利用され、裏切られた焔からすれば、美怜のことも他人事のように聞こえなくなる。
「焔ぁー!いたら返事してよー!」
「焔さーん!」
何処からともなく、仲間が自分の名前を叫んでるのが聞こえて来た。距離的や声の反響的に考えて近いだろう。そう判断した焔は、一先ず仲間と合流することを先決する。
幸い、ベルゼ妖魔に遭遇しなくて良かった…もし四人があの妖魔に遭遇してたら、生存率は急激に下がるだろう。
仲間の無事に安堵の息を吐きながら、焔は駆け足で仲間たちの元へ合流を果たす。

信じた結果、裏切られた二人の運命はや如何に…??

２０５話「穴の貉」

焔から離れてしまった紅蓮隊の四人達は、薄暗い廊下を歩きながら注意深く探索を進め、我らが筆頭を探し歩き回る。
「焔ぁー！いたら返事してよー！」
「焔さーん！」
大声で叫びながら焔の名を叫ぶのは未来と詠。声が思ったよりも反響していく。
「詠ちゃん、未来…焔ちゃんを探す気持ちは解るけれど、大きな声を出したら妖魔達に勘付かれるわよ？」
「で、ですが……」
「それでも今までの妖魔達ならまだマシやけど、流石にあのベルゼ兄さんっていう妖魔は別格やしなぁ……追い返すか殺すみたいな事言ってたし、なるべく目立った動きは辞めた方がええかも。あんなのと出くわしたら今の状況じゃ厳しいし、最悪死ぬで」
「じゃあどうすれば良いのよ！」
春花と日影の言ってることが尤もだと、本当は頭の中でわかっていても、そうせざるを得なくなる。況してや未来はヤケになるかのような口調で苛立つ。
ソワソワしてる所為か落ち着かない様子なのは、焔が美怜に捕まり離れてしまった事による不安が心に余裕を無くしてるのだろう。
「春花様や日影だって、どうしてそんなに落ち着いて居られるの!?」
「落ち着いてなんかないで。わしは感情ないけど、焔さんがあの美怜って言う女の子に捕まって何とも思わないほど、薄情じゃないしなぁ、ただ今焦って探したところで返って危険を招くのは良くないしなぁ」

「未来、少し落ち着きなさい。幾ら焔ちゃんだってあの子を前にして簡単にやられたりはしないわよ。
第一、日影ちゃんの言う通り…此処は下手に焦っちゃダメ。焦るな、不安に思うな、とは言わないけど…気持ちを抑えなさい。今の私たちが何処にいるのかだって分からないのよ？」
春花の発言に、流石の未来も反論はできない。
解っている、頭の中では今の状態で探してもマトモな思考が働かず、焦燥と不安に駆られて余計に自分達の身に危険が降り注ぐことくらい。
それでも未来としてはやはり難しいのだろう。感情的になるのが激しいからこそ、こう言った状況は宜しくなくなる。
「だって……」
「それに…私たちのリーダーを信じないでどうするのってなるしね。今まで焔ちゃんだって何度も危険な目に遭って来たけど、ケロッと戻ってきたじゃない」
未来をお人形のように楽しみ、揶揄う主従関係の春花も、こう言う肝心な時こそ心の癒しとして落ち着かせてくれる。
元々母性が高く、更には幼く周りの言葉に感化されやすい未来との相性は、思ったより抜群なのかもしれない。
そう考えると、春花がいてよかったと本当に思う。
因みに春花の目の前で「母性的だね」なんて発言は死罪になるので、呉々も発言には気をつけたほうがいいと言うのは皆まで言わなくともお分かりいただけるだろう。
「さっき、美怜さんが押した仕掛け…触ったら先程の場所に行けるかと思ったのですが…何も反応しませんでしたわ。地道に探すしかないのですね…」
「しかも此処迷路みたいな仕掛けやからなぁ…罠に妖魔もてんこ盛りだなんて、過去最高に一番苦しい状態やね」
「それを日影ちゃんはドライに言っちゃえるから、笑えないんだけどねぇ…」
思ったより状況は宜しくない。

まるで美怜達の敷地内に入った途端、彼女の掌の上で転がされてる様な気分だ。偶然にも遭遇したり、巧妙な罠と言い、難攻不落と言わんばかりに厳しい現状であろう。
「下手に私たちが動けばすれ違う可能性もあるし、かと言ってこのまま動じずだと…「おーい…!お前達無事か!?」って、思ったより幸先は悪くないみたい」
廊下の右側から声が発せられ振り向くと、暗闇から走り駆け寄る焔に、全員の意識が一点に集中する。
見た限り傷跡やら争った形跡がない辺り、美怜の言ってた「話し合い」というのは嘘ではなかった様だ。
「焔ぁ…!!良かった、無事で…!!もう、心配したじゃない!!」
泣きじゃくりながらポカポカと、痛くない拳で胸に当ててくる未来は、いつになく幼い子供の様だ。ずっと溜め込んでた不安が一気に溢れ出たのだろう、噴火するかのように止めどない大粒の涙が流れていく。
「良かった…これぱかりは少々不安でしたが……」
未来のように過剰ではないが不安と心配が募り溜まった詠は、肩の荷を降ろしてホッと胸を撫で下ろす。
「まっ、焔さんならってわしは信じてたで。感情ないけど」
「そこは一言余計よ日影ちゃん。でも…あの子に殺されたってなったなら…流石に私も動揺を隠せないけど」
二人のコントを見た限り、三年生組は肝が据わってると言うか冷静であると言うか、余裕がある。リーダーが不在になりながらも、動揺せず焦らず冷静でいる辺り、忘れがちにはなるが上級生たるものを感じ取れる。(日影の場合は性格上もあるが)
「本当にアイツに何もされてない焔?と言うか、あの美怜ってヤツはどうしたの?」
「……嗚呼、アイツなら引き下がるって言ってたよ。お前達も引き返せって言ってな」
これだけ侵入されながらも警告をして引き下がったり、何度も引き返す機会を与えながら殺さないのを見るに、美怜は焔紅蓮隊に何か思

う節があるのだろう。
　勿論、美怜からすれば「研究対象」「殺す事に利益が潰れる」と言った返答が来るのだろうが、今回ばかりこれ以上先を進めば衝突は免れないだろう。
「…美怜とは、戦わなかったの？」
「…ああ、アイツの話を聞くに争いは好んでない事が分かった。それに、それなりに収穫もあった」
「相手や自分にも厳しい焔ちゃんが見逃したり、交戦しない辺り…何か訳ありなのかしら？」
「まぁ…うん、今回の忍務についてお前達に話しておこうと思って。落ち着いて、よく聞いてくれ――」
　焔は良くも悪くも、自分にも他人にも厳しい人間だ。
　元々善忍家系で過酷な環境下に置かれてた影響もあるのか、蛇女に在籍していた時は特に…何と言うか、戦場に熱く、誰よりも冷酷無慈悲だった。
　当時は仲間さえ利用価値があるか否かに過ぎず、でも決して心を許さなかった訳ではない。
　そんな焔が落とし穴で美怜と共に落ちたと言い、ベルゼの事と言い、流石にそんな甘いほど焔は落ちぶれてはいない。
　だから、次に放たれた焔の言葉に、全員が耳を疑う。
「今回の忍務は、少女の捕獲は無しだ――理由がどうあれ、失敗にしたい」
　常に忍務に命懸けで、誰よりも厳しい焔が、初めて折れた――それは、焔自身が美怜との対話を経て最善の方法を考え抜いた上での答え。
「ちょっ…嘘でしょ焔…?!」
「何かあったのかと思ったけど、これはまたとんでもない事を言いだしたわねぇ…」
　未来は勿論、流石の春花も動揺を隠せない。

当然だ、あの焔が戦いもせずに忍務を失敗に放棄するなど考えられもしない。
次に日影や詠が言葉を発せられる前に、焔は弁明する。
「ただし……兄であるベルゼはどうにかする。お前達と話し合って妖魔を何とかする、という点は変わらないが…美怜を捕獲して上層部に、なんて事はしない。それだけだ」

あくまで今回の忍務は「妖魔と手を繋いだ少女」というメインで、妖魔と関わりのある少女を捕まえろというのが目的だ。
その中に妖魔の掃討や調査が含まれてはいるが、しない事に失敗は変わりないだろう。
だが、それだけで済むという事ならば…此処で断念という話にはならない。それはつまり――兄は別である事を表している。
「理由を聞かせてくれるかしら?」
「勿論だ――」
理由を迫る春花に、焔は冷静に頷く。
これから先…いや、焔紅蓮隊が忍の世界で生きるためにも、今後の活動としても、とても大きく変わりゆく事になるだろう。
だからこそ、話さねばなるまい――美怜について。

「成る程ねぇ…そんな事が…」
あれから起きた美怜との対話を全て洗いざらい吐き出した焔の言葉に、四人は静まり、何処か納得する。
焔達と同じ忍の可能性が高いこと
侵入者を信じた結果、裏切られたこと
兄と共にこの家での共存を受け入れること
これ以上の侵入は敵と見なすこと
妖魔は自身で仲間を増やすことが出来ること
有力な情報、彼女の境遇、兄妹の絆、ザッと纏めればこんな感じだ

ろう。俄かに信じ難いものだが、焔は美怜が無闇に嘘を吐かない事を知っているので、信じていいと思っている。
いや…そもそも美怜に信頼を寄せなければならないのに、彼女の言葉に疑いを持ってしまうのは、些か失礼な気もする。
「確かに…これだけ情報が揃えれば上層派としても大きく賞賛致しますし、失敗したとしても咎められることはありませんわね…
……それに、あの二人は短時間とはいえ、とても利用しあってる仲ではなく…本当に仲が良さそうでしたもの。其れを裂くと言うのはやはり罪悪感というか、心が痛みますわね…」
「けどそれは、また別の忍に忍務が行き届き…被害が遭うだけになる。それはどんな経緯であっても変わらないのはさっき話し合ったでしょう?」
「そうよ!それにアイツは焔を落とし穴に嵌めたのよ!?確かに美怜も一緒だったし、結果傷は負わなかったけど…もし何かあったら遅いし、私は美怜の捕獲失敗は反対したい…かな」
詠は美怜とベルゼの兄妹の仲を引き裂くような真似をしたくないと穏便な方法を考え、春花は断固として以前話し合った結果を変えず、未来はどちらかというと美怜の事をよく思ってないようだ。
何だろう…まるで雲雀が蛇女に転入してきた時のような、そんな嫌悪感を漂わせている。
「嗚呼、それまでは良い。ただ春花のことも含めて思ったんだ…もし私たちがだ、ベルゼを倒したとしよう――

その後、美怜はどうなる??」
最初は、捕獲をする考えだったのでそのまま上層部に引き渡そうとした。だが美怜の話には矛盾はなかったし、外の世界も知らず、忍である可能性も極めて高く、更には道元や伊佐奈のように妖魔を利用した悪事がある訳でもなかった。
ならば…美怜を捕まえるメリットは?
確かに情報を引き出し集めることにはメリットになるが、果たして彼女は吐き出すだろうか?

自分達はまだ良い方だ――美怜からすれば興味深く印象を受け、オマケに自分達に思う節がチラホラと見えた。
第一、忍とは全く関係なく静かに、平和に暮らしてた美怜を、疑心暗鬼のごとく信用をなくし、裏切られた美怜が悪党だとはとても思えない。
いや…人を殺す罠をさもあたかものように設置してる時点で、防衛とはいえ悪党ではないとは言い切れないが、周りの敵に比べればまだマシだろう。
何の罪もない少女を上層部に引き渡してしまう――果たしてそれは自分達の意思でやってるのだろうか？
裏切られ、迫害を受けた少女を上層部に売ることに、自分達は忍だと誇れるだろうか？
学炎祭…いや、蛇女に乗り込む前…それこそアルバイト生活に明け暮れた時のこと、何度も今の生活に忍としての誇りがあるかと考えた時は少なくない。
……不満がないわけでは無かったし、寧ろ抜忍だからこそ自分達の生活や忍の道に、何度も悩み苦しみ、モヤついた心が晴れず、生き甲斐というものを無くしていた。
その中で焔達は、かなり手酷く汚れた忍務をする事を避けていた。
裏の世界で必要とされ、それなりに大金を得れるとしても、生活面が補充されるだけで、悪忍らしいと言えばそうなのだが、そこに誇りがあるとは思えない。
それと一緒だ――美怜が正当防衛で悪意もない以上は、焔達が敵と見なすことは無いし、彼女に害を与える気もない。
「アイツは…そうならざるを得ない状況になったんだ…不可抗力、とは言わないが…死にたくない、生きるためにした行為なら、私は美怜を悪の中の悪とは思わない。
私たちだって同じだ、悪忍の道を進み…日向に生きられない……」
焔は信じた教師に裏切られ、小路を半殺した結果――親に勘当された。
詠は産まれが貧民街という恵まれない環境下、金持ちの所為で救わ

れず、憎悪を募らせて。
日影は嘗て自身を育ててくれた日向の面影を重ね、感情知らず、戦闘マシーンの道を歩み価値を見出し。
未来は嘗て自分を虐めた連中に復讐する為に、善忍としての家系を捨てて悪忍の道に。
春花は最低な父親に、溺愛し歪んだ母の愛情を受けながら、心が壊れた人形と化し。

美怜は産まれた時からベルゼと共に迫害を受け、信じた忍からも裏切られ殺されかけた。

焔も、詠も、日影も、未来も、春花も、そして…美怜も、悪という道にしか進めれない…同じ穴の貉なのだ。
「そもそも私達は抜忍だ――今更上層部や忍の世界の常識に縛られるつもりはない。
だから…美怜を捕まえないというのも、私たちからすれば自分達の意思で決めた事なんだ。決めた以上は、悔いがないようにしたい――だから、お前達にも決めておきたいと思うんだ…どうだ？」
他の常識に縛られず、常に己の考えに傲慢で誇りを持つべきだ。
胸を張り、不条理な世界を生き抜き、自由であるべきだ。
何処か解放戦線のような異能解放に近いようで、でも決して悪戯や私服を満たすような事はしない。
自由だからこそ、自由であるべきだ。
抜忍とはいえ忍を志すなら、忍務に対し絶対服従？
バカバカしい、ではなんだ？
上の人間が道元や伊佐奈のような外道な人間がいたとしても、同じことを言えるだろうか？
焔はそこまで誇りのない忍務に従う気はないし、其れが自分達の為になるとも思わない。
忍は己を顧みないとは言うが、其れは欲望や生死に関わる話…根本的な話であり、在り方の話。

だから焔としては、出来れば多くが納得してくれると有難い。まぁ、あくまで焔の本願に過ぎないが。

「私は、焔さんの意見に賛成ですわ。私も同じ気持ちでしたから…忍という常識に縛られず、自由であり、誰かの命令ではなく自分達の意思で決めるというのは、抜忍になってから決めてましたから」

詠は微笑みながら焔に歩み寄る。

流石は2年生組の同級生であり、話が早い。詠は元々、そうなっても良かったという感じだろう。詠もお金持ちには非情ではあるが、仲間や誰かの幸せ、同じ恵まれない境遇を受けてきた者には健気で優しい。詠も美怜達に思う節があるのだろうか、彼女はどこか同情を浮かべているようだ。

「できれば…あのベルゼっていうお兄様とも穏便に済ませたいですがね…」

それは可能であれば焔もそうする。

本来、ベルゼは忍を虐殺した妖魔だ。危害がないという存在ではないし、どちらかと言うと通常の妖魔との範疇を超えている。

「ここんところ話し合いが多いんね。わしはどっちでもええよ、まぁ…美怜さんも生きる為にした事って言うなら、否定出来ひんしなぁ」

日影は感情とともに判断も苦手だが、否定する気はないそうだ。確かに此処に来てから話し合っている機会は多いが、今回ばかりは仕方ないと言えるだろう。

「…焔ちゃんにそう言われると、私も嫌だとは言えないわねぇ。元から美怜ちゃんを上層部に引き渡しても、碌に口を吐かないってのは見え見えだけれど、そのまま上の人間が美怜ちゃんを処分なんて言うのを考えると、後味悪いし…あの子自身が救われないんじゃね…」

春花も分かってくれたようだ。

それに何処か、嘗て小学時代に心が壊れかけた自分を想像したのだろう。あの子が自分達のせいで報われないというのは、結果としても自分達からしても宜しくない。

「私は…分かんない。でも、兄を失ったら…私達を恨むんじゃない??

だってさ、美怜にとっては大事な兄なんでしょ？もし倒したら、私達に復讐するかもしれないんだよ…？」
未来のいうことはご尤もだ。
美怜は冷徹で日影と同じく感情的にはならず、淡々としている。そんな彼女にも心はあるし、表現力はさておき感情はあると思う。
況してや侵入者の排除だって兄に全てを任せてたくらいだ、暴走や復讐をされてもおかしくは無い。
だがそんな未来の心配もどこ吹く風か、焔は不敵な笑みを浮かべる。
「それでも良い――美怜が私を恨むというのも、復讐をするというのも、全て受け入れる。
悪は善よりも寛容だ――どんな者も受け入れる…」
嘗て蛇女にいた頃の自分がよく使ってた言葉だ。
善は窮屈で差別的でしかなく、不法や間違ったものは容赦なく排除する。だが、悪は如何なる者も受け入れる。
それがたとえ元善忍だろうと、違法行為をした者も、傷つけた、殺した、様々な事情や過去を持つ者を、受け入れ居場所としてきた。
ただ、美怜の憎悪や復讐が自分達だけでなく他に向けられるとなれば本末転倒…ならば。
「……もし、可能なら――美怜は私が相手をする。私が責任を持って、美怜の想いを受け止める」
それはつまり、美怜が兄を失いその憎悪や復讐を、焔生涯受け止め背負うということ。
其れは正に、焔と旋風のような関係――焔を殺そうとした旋風に、殺しにくる旋風を全力で相手にしてくれたように。
「焔…」

「安心しろ未来、お前達にはなるべく迷惑をかけない」
あくまで美怜が暴走した場合の話…もし、彼女がそのまま家に留まることを決めるのなら、これ以上は追求しない。
だが何がどうあれ、忍を殺しすぎた妖魔を倒すことには変わらない。詠のように穏便に済まして…なんてことは此方としても望みたいが、ベルゼはそうしないだろう。

大事な妹を守る為なら、
愛する妹のためなら、
大好きな妹のためなら、
――全てを捧げる兄だ。
それなら、美怜の意思に従うか美怜の為に殺すか…どちらにしろ、平和的な解決は願えないだろう。

「だからお前達…頼む、少しだけ力を貸してくれ」

２０６話「分かち合えないのよ」

「そう、やっぱり貴女達はこの選択肢を…闘うことを選ぶのね」
暗闇が濃くなる迷宮の廃墟と化した妖魔の巣の最奥部、大きな広い部屋には本棚やテーブル、ソファなどほかの部屋と比べ、比較的に安全な場所に、美怜とベルゼ兄さんは立ち尽くしていた。
「ミレイ、皆ンナガ来タヨ――僕達ノ家ヲ荒ラシニ来テル泥棒ガ」
「ええそうね、態々見逃してあげてるにも関わらず…自ら争いを選ぶだなんて…本当に、忍は妖魔を殺すのが好きなのね。
二度の忠告も無視して三度目に及んで足を踏み入れるだなんて……本当、仕事に忠実なのね貴女達」
そして自分たち妖魔の兄妹の前に現れたのが、紅蓮隊の５人の少女達。筆頭焔を中心に、詠、日影、未来、春花も既に忍転身を終えている。より危険な罠を掻い潜りながらも、ほぼ無傷でここまで到達した焔達には、ある意味驚嘆される。
「もう仕事とは違う……忍務に関してはもう諦めるよ」
「……だとしたら、貴女達は死を選ぶ為に忠告を破ったとでも？いいえ、焔。貴女には貴女なりの考えがあってこの選択肢を委ねたのね。なら、どの道闘いは避けられない…という事かしら」
「まずお前達に話したいことがある、なぁ？詠」
焔は軽く一瞥すると、詠は軽くこくりと首を縦にして頷く。そんな彼女に美怜は目を丸くする。
「あら、貴女が？一体何の用かしら？」
「美怜さんにベルゼさん、私達は確かに貴女達の家を土足で踏み込んで、勝手に荒らし、機嫌を損ねてしまったことは深く謝罪致しますわ…。

ですが、もうこれ以上美怜さんもベルゼさんも…争わない為に私達と一緒にここを出るというのはどうでしょう…？」
詠から放たれた言葉に、未来や春花は勿論、美怜でさえも目を丸くする。侵入者とはいえ、今の立場は敵対関係…望みが叶うとは思えない発想だ。
「詠お姉ちゃん!?何を言って…」
「私たちが何を言ってるのか、だなんて恥を承知な上での事です。私たちは上層部に依頼されて此処を訪ねてきました。たしかに美怜さんのいう通り、引き下がって争いをしないという手も考えました…然し、それではまた他の忍達がまた此処を荒らしに来る可能性も少ない訳ではありません。
それは、美怜さんやベルゼさんにとっても、好ましくないことではないでしょうか？」
これは、焔達が話し合った内容のことだ。
幾ら自分達が此処から引き下がり忍務失敗という形になったとしても、自分達の代わりの忍など沢山いる。
正直、このままでは争いは絶えないまま…更には美怜にとってもベルゼにとっても、悪印象ばかり目立ってしまうというのは此方も良い気分ではない。
「ですから…もし貴女達でさえ良ければ…」
「詠お姉ちゃん！確かにそうだけど、幾ら何でもお人好しじゃ…」
「詠ちゃん…流石にそれは無様としか…」
「うっふふ…面白いことを言うのね貴女」
『!?』
詠の発言に驚愕する未来を他所に、春花は呆れるも、それを黙って聞いてた美怜は面白おかしく冷笑を浮かべる。
「確かに無様ね、お人好しにも程があるわ。足を踏み入れたとはいえ私たちに殺されかけながらも、何度も忠告を無視して殺される事を分かっていながら、敢えて私達を説得をしようだなんて…お人好しにしては無様で、でも他の忍達とは違う。
こんな人は産まれて初めてみたわ、しかも…妖魔を殺す事を生業と

してる忍が、ベルゼ兄さんさえも引き入れようだなんて……本当に面白いわ貴女。ねぇ、兄さん？」
「ウン、ソウダネミレイ――デモ、僕達兄妹ハコノ家ニ住ム事ヲ決メタンダ。僕達ノ大事ナ家ハ、誰ニモ渡サナイ」
冷笑を浮かべ、言葉交じりに笑いを出す美怜の隣に、ベルゼは無感情で無機質な声で淡々と告げる。
ベルゼ兄さん自身、別に感情がないというわけではない。どちらかと言うと美怜よりも感情的になることが多いだろう。然し感情はあってもそれを表現することが難しいのがベルゼという妖魔であって、銀製の鉄マスクを顔に覆ってるのではあれば尚更だ。
「やはり…解ってもらえないですか……」
「ええ、そうね。貴女達は忍であり、私達は妖魔である以上…立場が違うのであれば分かち会えない…いいえ、分かち合うことは出来ないのよ。それが可能であれば、今頃ベルゼ兄さんは忍を殺したりはしない」
そんな事が可能であれば、今頃妖魔によって殺された忍は救われている。いや、死ぬことさえなかった。
それは逆もまた然り――美怜とベルゼ兄さんも忍達が分かち合おうとすれば、もっと早ければ、迫害もしずに済めば、争わなくても済んだのだろう。
「でも…そうね、詠…と言ったかしら。それでも貴女の言ってることは一理あるわ。
貴女達が退けても、また別の忍が襲いかかってくる可能性はあるし、静かな平穏を望むのであれば、詠の言う通り此処を出るのが得策なのかもしれない」
「…ッ！でしたら…!!」
「だけど、私もベルゼ兄さんも此処から離れるわけにはいかないの。それに、コソ泥さんがそう言って外に出しては何があるか解ったものじゃないわ。誘き寄せて私達兄妹を惨殺…なんて事にはなりかねないし。
私の身の危険をベルゼ兄さんは望まないし、ベルゼ兄さん自身も誰

かに受け入れられるとは考え難いわ。
何よりも…たった一つの兄妹――私はベルゼ兄さんと一緒に暮らして生きてきた。だから、家から離れる訳にはいかないの」
何よりも、美怜には忍への信頼は欠けており、疑心暗鬼が満ち溢れてる。信頼に値しない…と言ったところか、詠の言葉には一理あったとしても、それを機に家を出るつもりは毛頭ないと言う。
兄妹の語らいも、ここまで来ると何処かお互いを縛りあってるようで、でも…其処に愛を感じてしまうのは、純粋だからだろう。疑いも嘘も、何処にも感じられない。

嗚呼成る程――確かに、立場の違いだ。

「でも、アンタは自分を忍って言ってたじゃない…？」
「例え私の正体が忍だとしても、妖魔である事を選び生きる事にしたの――兄妹である事を、変わろうとは思わない。それは宣告したはずよ」
ダメだ、全く引き下がらない。
それどころか、反論の余地もない。
自身が忍と分かっていながら、妖魔の敵であると知っていながら、兄に育てられた妖魔と一緒に、共生を選ぶ。
それは、今この発言をしながら全く反応しないベルゼ兄さんも見た限り、分かっていたらしい。
妹の美怜が、自分とは違う存在である事を。
それでも、妹も兄もお互い一緒に生きる事を選ぶと言うのは――それ程に強固たる絆で結ばれているのだと。
「わ、私は…！焔達がこう言ってるけど、焔を落とし穴に入れた事とか、その他色々…許してるわけじゃないからね！」
此処で居ても立っても居られないのか、未来は一歩足を踏み入れて吠えるように叫ぶ。
でも、その表情は憤慨も混じってるようで、どこか悲痛な顔も浮かべる。

確かに焔を罠に嵌めたのは許せない、言ってはなんだが未来は焔のことを尊敬しているし、入学して間もない頃からよくお世話になったりもした。自分に自信がない時だって、喝を入れてくれたら慰めたりもしてくれた。

そんな焔に危険を陥れるような行為は許せない…でも、こんな兄妹の二人を目前にしてしまえば、殺したいとも思ってない。

だけど、ベルゼ兄さんを殺して美怜に恨まれ、焔達に危険が及ぶと考えると其れも許せない。

彼女の心境は、戸惑いつつ苛立ち、闇雲の如く彷徨ってるのだ。

「……貴女達がしてきた事に比べれば、随分とマシ…いいえ、解剖せずに無事に見逃してあげてるだけ優しいと思ってほしいわ。ここまで批判されるなんてね、貴女達のしてきた事を考えれば、より私達の方が遥かに筋が通ってると思うけれど」

「それでも…」

「…まぁ良いわ。貴女には貴女なりに気に入らない事や譲れないもの、拘りがあるのかしらね。

どっちにしろ、二度の忠告も無視して殺されることを覚悟してまで此処に来てるのだから、今更その話を出すのは愚かだと思うけれど」

これだ、未来はこういう反論さえも出来させないのが気にくわないのだ。虐めてきた連中とは違い、こう…悔しさ。

「そ、それでも…私にだって守りたいものがあるのよ!!!その守りたい焔をあんな風にされたら、気にしたくもなるでしょ!!!」

「貴女、少し煩いわね。耳障りだわ、声を抑えなさいな」

「アンタにだけは言われたくないわよ!!!」

そんな激情する未来の声に不愉快そうに眉をひそめる美怜。相性は最悪のようだ。というより端から見れば美怜が煽ってるようにしか見えなくもない。

「じゃあ…美怜ちゃんはこれから、私たちが闘うとして…お兄ちゃんが殺されても、同じことを言えるの？」

「あら、勝負の予測はさておき…既に勝っている気でいるのね。ベルゼ兄さんに手も足も出ずに逃げ惑う事で精一杯なのによく言うわ」

売り言葉に買い言葉――春花の説得さえ冷笑を浮かばせて言葉を叩き潰す。
「待て、その話に関しては…恨むなら私を恨めよ。話し合いをし出したのは、私だ」
「貴女も勝つ気でいるのね…しかも恨むだなんて、それこそ人間的な感情を押し付けるなんて、聞いてて笑ってしまうわ」
「……言っておくが美怜、お前も今までの忍と見くびらない方が良い。私たちは他の善忍や悪忍とは違う、追放された抜忍――上層部や忍の常識にも縛られない、紅蓮隊の誇りを、悪の定めを、しかとその目に焼き付けてやるよ!!」
「…!」
六刀を引き抜き、早くも戦闘態勢に入る焔。
彼女の威圧に、少し驚いたように目を丸くする美怜を他所に、ベルゼ兄さんは一歩前に出る。
「下ガッテテ危ナイカラ……美怜ハ、戦ワナクテ良イカラネ」
「……有難う、ベルゼ兄さん」
それも束の間の一瞬――美怜は直ぐに気を取り直し、一歩下がり安全…とは呼び難いが、争いに参加しないようにそっと、身を呈する兄の背中を、妹は優しく見守る。
「お前達!気を抜くな、これまでの敵とも半蔵の連中とも一味違う…!相手は一匹といえど、全力で行くぞ!!」
一瞬の油断は命取り。
其れは妖魔との戦いや忍との死闘とも限らず、野生や自然界ではよくある話、日常茶飯事。
久方ぶりの強敵とはいえ、格が違うベルゼは、まだまだ底が知れていない。
知れない上に負けられない以上は、ただひたすら全力で対処するだけ。

「グオオォォオーーーーッッッッッ!!!!」
大地を轟かすベルゼの咆哮が、獣のような雄叫びを叫び心臓を震え立たせる。
全身の身の毛が取り立つような錯覚を感じながら、臆することなく五人は武器を構える。
この咆哮が刀を抜く合図となるならば、もう後戻りも説得も不可能。
「行くぞ!!」
焔の掛け声の合図とともに、他の四人は散るようにベルゼの方角へ前進へと向かって行く。
先程力の差を見せつけられたにも関わらず、動じずに掛け走ってくるのは、何か策が有るのだろうと、観察者で有る美怜は考えた。
(何方も遠方攻撃を有する忍がいるのに…距離を詰めるなんて、一体何をする気なのかしら?)
「未来、詠は右翼!日影は背後!春花は左翼!」
軽く短く事を伝え、四人は指示通りにして動き出す。
それだけで、後は各々の得意な戦術でベルゼを相手にすれば良いだけ。何、少し力を借りるだけ――無理をして勝ちに行かなくても、体力を削るだけで、錯乱するだけでそれで良い。
一塊から散り行く忍が己の方向へと近づいてくる事に、ベルゼは直感で思うがままに、拳を未来と詠の方角へと振るう。
単に数が多い方が倒しやすいのと、殺す数が増えると言う思惑だったのだろう、然しそれは大きな間違いだと言う事に気付かされる。
放たれた拳は虚空から放たれる衝撃波によって、直撃は免れてもダメージは免れないだろう。だが、未来はそれを傘にして盾代わりにする。
「んぐぐっ…!!幾らなんでも馬鹿力過ぎるでしょ…っ!!」
「ですが、そのお陰で隙が出来ましたわ…!」
腕が千切れそうな程に押し寄せる衝撃波を、上手く横流しするよう

に腕に力を入れる未来。盾として直接受け止めるのではなく、水のように横に流す動作…受け流しの構え。これは前に鈴音先生に教えてもらった作法だ。
そして二度目の拳が放たれる前に、詠の大剣が大きくベルゼの左腕を深く突き刺し叩き落とす。
「なっ――」
然しそれでも詠は驚愕してしまう。
気品溢れるお嬢様のような詠…それでも紅蓮隊の中では焔に負けず劣らずのパワーファイター――故に重量感溢れる大剣を軽々扱える少女はメンバーの中では一、二を争う程の筋力を誇っている。大剣で叩き落とすつもりが、ベルゼの腕は一向に落ちることは無い。
「グバァッ――」
ベルゼはその金属製のマスクの口元をガシャンと金属音を鳴らして口を開け、詠の大剣を粉砕しようと口を武器に近づける。
「グベッ」
それを、春花の傀儡が阻止する。
機械的な傀儡の重い一撃がベルゼの顔面に大きく直撃し、体制がズレる。バランスが崩れてしまうせいか、そのまま殴られた方向に押されるように身を傾けてしまい
「ほな覚悟しいな!!」
春花はそのまま怪しい色をした液体の入った試験管を投げ、ベルゼに触れると液体が体に降り注ぐ。
日影は背中に蛇の如く傷を刻み込み、そのまま頭を地面に叩きつけるように、日影は愛用のナイフをぶっ刺すように、ベルゼの脳に短剣を突き刺す。
そのまま頭を打ったベルゼに、詠は気を取り直して腕の着いたボウガンでベルゼの顔面を狙う。
だが決して深手を与える訳ではなく、新たな一手――爆薬ではなく、煙玉の役を担う視覚による妨害。
視界を奪われたベルゼは直ぐに立ち上がり、腕を振るおうとするも、詠に抉られた傷から出血が噴く。だがそれも虚しく妖魔の再生機

能により、傷は少しずつ修復を迎え――
「アレ、痛イママ――ナンデ？」
ない。
何やらジュウジュウと肌が溶けていくような錯覚に陥る。いや、実際に傷口は黒く変色し、軈て血は少しずつ固まっていく。
これは手…酸性による消化、しかも強烈な酸性液は、妖魔の体さえも溶かすとは驚きだ。然し再生が働かないのは別の問題である。
「コレ――毒？」
一体いつ何処で…？
煙玉に毒ガス成分が含まれてる訳でもない、ならば一体どこで？先程の春花とやらが投げつけた試験管に毒でも混じっていたのだろうか？
その正体が日影の短剣に塗られた毒ということも知らずに――
「そのまま蜂の巣になりなさい!!」
煙で充満されてる状況下において、銃撃戦も忘れない。
妖しく光る弾は、呪いの光弾。
銃による弾は基本的に小さいのがお約束だが、忍術によって生まれたその光弾は、嵐の如く襲いかかる。
大規模なスケールをした光弾は、頭、胸、腕、腰、足、様々な部位に的確に乱射される。未来は眼帯をつけてはいるが、これでもサバゲーや聖地巡礼宜しく、視力は割と言い。なので煙によって撒かれても、視界が悪くなろうが変わらない。
「ウガァァ!!」
それをベルゼは拍手1回――【魔王の拍手】で辺り一面を吹き飛ばす。その放たれた衝撃波は、未来の【ヴァルキューレ】を意図も容易く相殺し、遠くながらも意識が吹き飛ばされそうな感覚は、きっと妖魔術による効果だろう。
煙が一面、晴れると――
「秘伝忍法――【魁】!!」
焔が六爪でベルゼを四方八方に熱の通った刀で肉を抉り廻る。火

傷を負いそうな灼熱の刀に刻まれた体、思ったよりダメージが効いている。……が、倒せると言った確信にまでは迫らない。

「……あのベルゼ兄さんをここまで」

傍観していた美怜は、兄が追い詰められていながらも冷静に状況を分析する。コンビネーションや連携など悪い点はなく、無駄な動きがない上に磨き上げられてのは、今まで家を襲ってきた侵入者の中では中々いない。

それでもまだベルゼを倒すには届いてないものの、以前力の差を示した時と比べて、大分改善したとも言えよう。

（銃火器、毒、銃、傀儡や試験管…成程、ね。あの子達も一人一人が有象無象のような連中ではなく、筆頭である焔に負けず劣らずと食いつくように実力がある。何よりベルゼ兄さんの知能が低いとはいえ…懸命な判断が下せるし、場数を踏んでるわね）

それでも沈着冷静、動じず揺れる事なく、兄が翻弄されても考察を辞めない美怜の精神は、鋼の意思に似たものを感じる。

（だめだ…全然深いダメージを終えてない…!!もっとだ、もっと攻撃を加えなければ…っ!!）

対する焔も既に察していたのだろう、ベルゼを見た感じパワーこそあってもスピード勝負ではてんでそこまでで、素早い動きに対応しきれない箇所がある。

そこを突いて行くのは得策ではあるが、妖魔特有の再生能力と言った治癒が高ければ、焼け石に水――ジリ貧になるままだ。

（……まだだ、余力を残してる以上は、まだ炎月花は抜けない――）

背中に滞納してる七本目の紅い刀、それは焔の最後の手段と呼ばせる我が忍家系に伝わる宝刀だ。決して無闇矢鱈に下らない勝負のために鞘を抜くものでもない。

ベルゼが本気を出した時こそ、それを使う事で初めて価値が見出せる。

「……ウン、思ッタ以上ニヤルネ皆ンナ――ジャア、コレハドウカナ？

――妖魔術【暴食ノ時間ダヨ】」

次の瞬間、兄の雄叫びに闇の波動が脈を打つ。
鼓膜をつんざくような音量の叫び声、妹の美怜も思わず耳を閉じてしまう程の大音量――だが、兄が命懸けで妹を守ろうとするベルゼに比べれば、美怜にとって闘いとしての煩さは、不快ではなかった。
ベルゼに取り巻く闇がより一層濃くなり、拳に闇が凝縮される。それはまるで、ボクサーグローブのように、拳を武器として扱う。
「なんだ…あれは?……っ!?」
ふと、焔の纏った炎が闇に吸い込まれ消えて行く。まるで不形の闇に引力でも持つように。
「……あれ、毒消えたんか?」
ベルゼの凝血してた毒も闇に吸収されることで、解毒的な役割を担い、日影の短剣に塗られた神経を狂わせる毒も、解毒されたかのように消去されてしまった。
「…ベルゼ兄さんに暴食の時間をさせるなんて、何年振りかしら」
暴食の時間は、火、氷、雷、風、凡ゆる遁術を闇が吸収し、闇を肥大化させ威力を強める術だ。勿論、毒や光、閃などと言った遁属性などありと凡ゆるもの分け隔てなくだ。まるで其れ等の現象さえも捕食するかのように、正に暴食――。
そのためこの妖魔術に食えない遁術は存在しない。逆に物理では無効化として意味を成さないが…ベルゼ兄さん相手に果たして何処まで持つか、またはベルゼ相手に小細工なしの実力勝負など仕掛けて生きて帰れるか、そこら辺の方面に疑問を傾けた方が良いのかもしれない。
「思ったより効いてないね…」
「でも、攻撃は通じてますわ」
「まだまだ先が思いやられるなぁ…」
「この先って、生きるか死ぬかの二択でしょう…!」
闇濃くなるベルゼが放った一撃を、皆は回避して避ける。それがまた凄く、先ほどのパワーよりも一段と上がり、地面が抉れる程の重圧感は、オールマイト級の脳無よりも強化されてるのかもしれない。

そう断言しても過言ではないほど、更にハードルが上がった。

「腕を切り落とすか、頭を狙うか…まだ万策尽きてはない…ここからもう一手間かけて叩きこむぞ…!!」

どうやら、まだまだ終わりそうにないらしい――

２０７話「守るために…」

妖魔に育てられた少女は、妖魔の巣にいた。
赤ん坊の頃――布で覆われた状態で、美怜という名前が記された名前の紙が添えられ、ポツリと転がるように少女は妖魔の巣にいた。
魑魅魍魎とした妖魔が徘徊する巣の中で、四足歩行で右往左往這いずる赤ん坊は、訳が分からず暗闇を彷徨う。
唯でさえ赤ん坊が、生身の子供が化け物の巣窟に居るだけで、悍ましさ故に受け入れ難い現実であろう――少女は妖魔に襲われる事無く、這いずり回っていた。
それだけでも、生存さえ奇跡と呼ばれるこの状況は、奇跡以外にどの様な言葉がお似合いか。
「うー…あー…？」
「…ウギ？」
そして、少女は妖魔と出逢う――暗闇を歩み回りながら、この妖魔の巣の支配者である、名も無き妖魔に。
其れは後にベルゼ兄さんと呼ばれ、赤ん坊との奇妙な兄妹物語が誕生するのは、また先の話だろう。

「ガアアアア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ーーーーッッッ!!!!!」
空気を、大地を震わす雄叫びは鳴り止まない。鼓膜が破けそうな咆哮に、暴れ狂うベルゼとの闘いは正しく嵐の中で強敵と戦うのと一緒だ。
戦況は余り喜ばしくない。何方かと言うとチマチマと微弱なダメージを与え、防戦一方に近い死への回避の試行錯誤、ほぼ体力を削る行為に等しいだろう。
燃費も悪く、オマケに体力が底をついてしまえば死を迎え、後は負の連鎖が続く様にチームは崩壊。
荒れ狂う衝撃波
耳障りな雄叫び
暴食の時間
この三大要素が今の現状を物語るのは言うまでもなく、況してや通常の妖魔とは違って、再生能力も優れてるベルゼは、屈指の実力を誇る妖魔だ。
焔の炎も、日影の毒も、春花の放つ試験管の中に入った液体も、ドス黒い闇が触れるだけで捕食される様に消えてしまう。
ベルゼの能力――【暴食ノ時間ダヨ】は、この戦況を一気に不利にさせる。
忍にとって遁術…謂わば属性とは優れた武器にして料理でいう調味料。
遁術を駆使した忍術の殆どが秘伝忍法として扱われ、其れ等を得意とする忍は、危機的な状況を打破する為にある必殺技とも言える。そのたった今、危険的な状況下で其れを無効にしてしまうのであれば、詰みになってしまうのは子供でも推測は容易い。
だが…それでも食い繋ぎ、秘伝忍法なしでも抗えてるのは……自身の戦闘スタイルは勿論のこと、己の忍術を自在に、そして忍術なしの修行訓練も積んでいたからである。
そもそも森の奥深く、洞窟暮らしをしてる焔達は自然の厳しさにも耐え抜いてるからか、割と秘伝動物の能力を活かしてることも多い。
「私と未来さんの秘伝忍法は通じます!そのまま火力攻め致しますわ

！」
「絶対にギタギタにしてやるんだから!!」
秘伝忍法――【ニヴルヘイム】に【ヴァルキューレ】は遠距離射撃の爆撃特化が優れ、主に視覚の乱れや火薬による嗅覚の錯乱、衝撃による体の自由への抵抗、反撃の余地を与えないという点は有利だろう。ベルゼの身体にダメージを与え続けてる点では、二人の行動はとても優秀な働きをしている。
現に詠と未来の此の秘伝忍法には遁術はなく、無属性のままでベルゼに大打撃を与えれる。それでも無尽蔵のように蓄えてる体力を削るにしては、いつ底が付くのか計り知れない。
時間が延々と続くような、同じ作業に秘伝南方による長時間の使用に身体が痺れるような、筋肉に悲鳴が走る。だが、紅蓮隊が戦いを続けている時、変化が起きる。
「ウグォ…ッ!?」
バキィン――とガラスが破裂したような音が鳴る。それと同時にベルゼの口から僅かながら悲鳴のような、初めて聞く苦痛が漏れた。
見れば、腕や肩の何ともなかった黒い肌は、血と筋肉繊維が露出されており、肩にはオレンジ色の球体が、腕には禍々しく開いた人間の口が現れる。
「ッ…!?なんだ、アレは…?!」
焔は目を丸くしながら、ベルゼの身体に起きた異変に素っ頓狂な声をあげる。
血飛沫を迸りながら出血し現れた傷口、オレンジ色の球体は今も脈拍のように鼓動し、破けた腕の皮膚からは口がまごまごと動いてる。まるで忍転身が破られた際に本当の自分の姿を映し出すように、ベルゼ本来の姿が曝け出したかのような…尤も、今までの妖魔には見られない現象だった。
しかも、驚くべきことに破壊された部位は再生することなく、そのまま深刻にダメージを負っていく。
「ベルゼ兄さんが…初めて傷を…?」
これには妹の美怜も驚嘆を隠せなかった。

まるで初めて見るかのように、美怜は遠くながら兄の傷口を凝視する。ベルゼの本来の姿形、そして再生機能が働かず部位破壊されたまま元に戻らない事に対し、美怜は自分の知ってる妖魔の生態系に、新たな謎が生まれる。

本来、妖魔とは再生機能を備えており、其れは超人の治癒力の何倍もの効果があると捉えていた。人間にも傷を負えば自然治癒をする様に、妖魔にとっては人間の比にならないレベルでの細胞分裂を繰り返し、失われた部位や組織を修復する機能を持つと仮設していた。現に資料にもそう生態系が書かれていたし、ベルゼは通常の妖魔より異端であり――妖魔の巣を支配し、上位に属する妖魔。

上位級なのである。

だからこそ、再生機能も身体能力も通常とは比べものにならなかった。所謂親玉的な存在――そんな兄のベルゼが見たこともない容姿を晒し、傷は一向に治らない。其れは通常の妖魔からも見受けられなかったし、初めて知り得た事実だ。

抑も、兄をここまで追い込めた忍がそこまで居なかったからという点もある。

皆んな美怜を傷つけようする不埒な輩は、嬲り殺されたから。

だから…焔達がここまで兄と戦い抗えたのも、ベルゼがここまで苦戦を強いるのも、今回が初めてなのである。

「痛イ…治ラナイ……デモ、美怜ノ為ニ、戦ワナクチャ……美怜ヲ、守ルンダ……ダカラ、僕ガ…頑張ラナクチャ……ダメナンダ…」

腕と肩に力が入らず、妖魔術による濃い闇が消えゆく中、ベルゼは痛みよりも美怜の事を優先に考える。

自分よりも妹のことを第一に考え、妹を守るために命を削ることを厭わない兄に、美怜は勿論、詠は少し痛感してしまう。

……やはり、いい気分ではないのだ。大切な家族を、愛する妹を身を削ってまで戦う兄の勇敢な姿勢に、自分達が其れを壊そうとしてい

るのは、やはり辛い。
「……ッ」
其れは、未来も詠と同じく表情を悲痛に歪ませる。
最初は自分達を、焔を危険な目に遭わせたベルゼや美怜のことは好ましくなかった。
だけど、今こうして目の前で見せられると、どうしても良いものではない。ベルゼの声色から察して痛覚はある、感情もある…そして、妹を守ろうとしている。
たった一人で、可愛い妹を…命よりも掛け替えのない大切な美怜を、ここまで身を呈して守ろうと必死に戦っているのだ。其れは今に限った話ではなく、今までずっと――ずっとずっと、ベルゼは美怜を守り戦い抜いてたのだ。
誰かを守りたい…その一心は、経緯や理由はどうであれ、焔の為に戦い守ろうとする未来と、妹の為に戦い守ろうとするベルゼは、一緒であり、守るという行為は共通している。
だからこそ、他人事のようには思えずつい同情してしまう。
「ベルゼ兄さん…」
美怜の言葉に、二人は反応し少女に視線を移す。
すると、美怜の表情も、何処か悲痛な顔をしている。感情や精神論に大きく無縁そうな彼女が見せる以外な一面は、二人に大きな印象を与えた。
――……何故だろう、感情なんて自分には無いと思っていたのに。
妖魔である化け物の私には、感情なんて人間的な表現、そんなもの不必要だと思ったのに。
どうして、こんなに胸が締め付けられる様に、こんなにも苦しいのだろう。
今まで数々の侵入者と戦いを通しても、傷を負っても、もう何も感じなくなったのに…どうして、兄さんの姿にこんなにも感情的になってしまうのだろう。
其れは自分が忍だから？
兄さんが自分の事より私を優先してくれるから？

兄がこれから、死を歩んで行こうとしてるから？
こんなにも、焦燥的になり悲観的になってしまうなんて…前までそんな事、無かったのに……――

少しずつ、時のように止まった少女の心は動き出す。其れは――少女自身が変わり始めている証拠なのだろう。

「妖魔術――【駄々こねっ子パンチ】!!」
腕をブンブンと振り回して突撃するベルゼは、暴走列車の如く安易に敵を近づけさせない。
端から見れば、名は体を表すかの如く、駄々っ子のように見える光景は、何処か半蔵学院の選抜メンバーである雲雀を連想させる…が、巫山戯てるようで実際に効果は覿面。少しでも近づく敵は殴り殺される運命だろう。
振り回す度に、超大型扇風機みたく暴風が発生し、近づく事さえままならない。
この状況下で【ヴァルキューレ】や【ニヴルヘイム】の遠距離射撃は、的を狙っても弾が逸れ、秘伝忍法による攻撃を寄せ付けない。
「これじゃあ…攻撃もまともに当たれません…!」
ベルゼの腕力は、本気を出せば雨雲を吹き飛ばし晴天に変えれる程の怪力を備えている。
オールマイト級でなくとも、ＵＳＪ脳無のように超パワーによる物理的現象によって引き起こされるのは珍しい事ではない。何より驚異的なのは、その天気さえも簡単に変えれるパワーが、自分達に矛先を向けられている事に大きな危機感を持つべきだろう。
人を簡単に殺せる拳が、歯車のように回り差し向けてくるのは、正しく迫り来る殺戮機械そのものだ。
「詠と未来!今度は地面にありったけの秘伝忍法を当ててくれ!!」
そんな危機的な絶体絶命の中、焔の声に二人は我にかえる。
ベルゼに当たるのではなく地面に？そんな疑問が頭の中に浮かぶ

も、一先ず指示通りに二人は顔を見合わせ、秘伝忍法を発動する。そんな焔の指示の意図に気付いた美怜は、殊更焔の考えに関心を抱く。
（成る程…考えたわね。ベルゼ兄さんに近づけず、攻撃さえ当てれないのなら……）
「絶・秘伝忍法――【ラグナロク】!!」
「絶・秘伝忍法――【ハンブルク・ツークンフト】!!」
二つの極大な秘伝忍法が、ベルゼ付近の地面に狙いを定める。大嵐の如く風を纏い、ベルゼの放つ衝撃波の余波に負けずと覆う旋風は、そのまま地面に突き刺して行く。
未来はステップで距離を置き、スカートの下に忍んでいた無数の火力重火器――ガトリングガンを大量に放ち、最後の締めには爆撃機による兵器でトドメと言わんばかりに、最大火力の銃弾をぶちまける。
そう――近づけず、距離も詰めれず、攻撃さえ当てれないのなら、反撃を与えれる場を作ればいい。
強大な秘伝忍法により、地面は大きく大爆破を引き起こし、足場をなくした大柄なベルゼを空中へと跳ね飛ばす。その衝撃により、足場さえつけれない。現場や状況を利用した咄嗟な判断は、英断である。
体の自由を一瞬だけ揺らぎ、隙を作れば…後は此方のものだ。
「往生しいや…!!絶・秘伝忍法――【おおよろこびぃ】!!」
追尾し狂乱に覚醒する日影は、有りったけの体力と精神力、力を振り絞りより素早く、蹂躙するよう短剣によって体を滅多刺し、刻み込み、ぶち飛ばす。
「グ…オオォ…?!」
覚醒による忍術と絶・秘伝忍法は効いたのか、再び苦痛に歪む声がベルゼの口から漏れてしまう。
コブラのように毒牙で相手の体に噛み付き、毒を注入するその姿は正に蛇そのもの――尤も毒と凶暴性に優れた日影だからこそ為せる凶暴な秘伝忍法。
空中に浮かぶ標的の為に全力を発揮して狩に臨む姿は、野生のコブラを沸騰とさせる。
容赦のない攻撃こそ、コブラとしての生態系の特徴を現しており、

多彩な毒や致死性の猛毒を扱う日影にとっては、彼女ほどコブラに似合う蛇など存在しないだろう。
　ベルゼも反撃こそは可能であるが、空中に放り出され、慣れない状況により隙が生まれては動作が鈍る。特に空中に漂い落下をする時などは、空気の抵抗や原子により、微単位ではあるが地面に着地するまでのタイムラグが発生する。それでも通常の一般人からすれば大した事のない時間差ではあるが、素早さに重視し特化した日影からすれば、充分に攻撃の隙を作ってくれたと言ってもいいだろう。実際に、スピード重視に於ける点としては、焔よりも日影の方が速く、紅蓮隊メンバーの中では一、二を争う程だ。
　パワーとスタミナに特化し、スピードはそこまで速くはないベルゼとは、相性が良いのである。
　バキィン――!!
　今度は胴体の部位が破壊される。
　露出されたのは円球の口、鋭利な歯が生えており、マゴマゴと動いてる姿は不気味と生理的な不快感を与える。
　胸元は垂れたように筋肉がただれており、まるで目のような模様をしており錯覚を与えてるようだ。
「ガァァァァ!!!妖魔術――【戦慄の始まり】!!」
　我武者羅に拳を放ち、乱打する。
　戦慄さえ覚えるほどの狂乱たる破壊の拳は、日影を殴り殺す為に放たれる。
　勿論、足元がおぼつかないのは日影も同じ事。幾ら素早くとも、移動さえ出来なければ無理。
　回避しようにも大規模な破壊の衝動は、避けられるものでも捌き切れるものでもない。何度も放たれる拳は、日影には触れられなかった。
「ッ…!?」
「あれは…傀儡?」
　傍観してた美怜は、その傀儡が誰のものか直ぐに見解した。
「ふぅ、何とか危機回避出来たわね…それにしても、あの姿が本来の姿

なのかしら…？」
冷静に対処しながら、日影の身を守るのは春花。
傀儡を使役し身代わりの盾になることで、日影の致命傷を避ける事に成功。それでも、防御を固めたにも関わらず直撃した傀儡は文字通り、粉々にされてしまった上に、攻撃できる手段がなくなったのは痛手だが…それで良い。
後は自分の役目を終えて、棟梁にバトンを渡すまで――
「秘伝忍法――【Ｄｅａｔｈ×Ｋｉｓｓ】」
背後に居た春花に死角を取られてるベルゼは防ぐことも反撃をすることも体の向きを変えることもできず、春花は具現化したハートを投げキッスで飛ばし、接触した途端に大爆発が起きる。
バキィン――!!
今度は背中の部位が破壊される。
露出されたのは、骨だった。とは言っても昆虫のような外骨格に、人間の骨がモチーフにして彩られている。
筋骨隆々とした肉体の容姿を誇っていたベルゼは、段々と醜悪な妖魔の姿へと変貌していく。
其れこそ以前にも前述したように、忍転身が破られ、己のあるべき姿に変貌していくように。
元々あった姿が破壊され、外見とは違う内側の容姿は、正に本来の姿を映し出しているようだった。
尤も――部位破壊された現状の姿が本来の姿とは断定出来ないし、元ある姿形こそが本来の姿だったのかも定かではない。
そう言った意味では、ベルゼという妖魔も…いや、妖魔自体の存在もまだまだ謎が深いとも言えるだろう。底が知れず、解明されてない謎に興味がそそられる…が、美怜程のような探究心を備えてるかと問われるとそうでも無い。
後は頼んだわ――焔ちゃん!!」
春花はバトンを渡すよう宣言すると――いつの間にか、下から一直線に狙いを定め、七本目の鞘を握りしめてる焔が突っ込んできた。

「秘伝忍法――【紅】!!」
瞬間――紅く光る一線が、ベルゼの顔を横切るように切り付ける。六爪とは違い、たった一本に込められた熱き紅の刀――宝刀『炎月花』は奥の手だ。頃合を見計らい、全力を出す瞬間を見極めた焔は、決意と共に熱く炎を滾らせる。
ガシャァン――!!
すると切り付けられた金属製の顔を覆うマスクは、その衝撃により吹き飛ばされる。
『――!!』
露出されたベルゼの顔に、一同は息を呑んだ。
「ウ…ァ…アァ……」
「そうか、それが…お前の素顔か――」
隠されたベルゼの顔が明るみになり、焔は表情どころか眉ひとつ動じず、炎月花の先刃をベルゼの顔に差し向ける。
ベルゼの顔は、一言で片付ければ蝿のようだった。
昆虫特有の大きな赤い複眼に、蟻の様な顎、猛獣の様な獰猛とした肉食系の口に、鮫のように何百本も備えた鋭利な歯、蝶のように蜜を吸い取る事に特化したような長い舌。
まるで複数の昆虫と猛獣を混合させたような顔だった。全て、明かされたベルゼの姿に、傷だらけで再生が不可能な体を震わせながら
「ミ、レイ…ミレイ…」
妹の名を呼び――
「ドコ…?ミレイ……ドコニイルノ…?ミレイハ、無事…??」
――妹の心配をする
まるで目が見えないかのように、血を噴き出しながらも、手負いでありながらも、真っ先に声が出たのは…ベルゼが口に出したのは妹の事だった。
「……っ」
痛々しく、これだけ手傷を置いながらも、目が見えなくなりながらも、妹の安否を確認するベルゼに、全員の心が益々痛まれる。
…自分達がやったのは分かる。

そんな妖魔を見て、心配するだなんて、心が痛くなるなんてどうかしてるのは百も承知。
なのに……何故、こうも…言葉に表せないような、心が締め付けられるのだろう。
詠は分からなくもない、他の四人とは違い可能であればベルゼも美怜も争うことなく穏便に事を済ませ、兄妹の平穏を脅かしたくはないと主張していた位だ。
「…ッ、ええ…ベルゼ…兄さん。私は、無事よ…ここに、居るわ…安心して…兄さん…」
あの美怜でさえも、表情は悲痛に染められている。
兄の本来の姿に驚いてる訳では無い、身を削り自分の命を殺してでも、目が見えなくなってしまっても、自分のことを優先に考えてくれる兄の優しさと、そんな優しくて大好きな兄の苦しんだ痛ましい姿に、心が締め付けられてどうしようもないのだ。
美怜自身も、ここまで苦しく思うとは、思ってもなかったのだろう。
そんな妹の声を聞いただけで――
「ッ…!良カッタ、ミレイ…無事ダッタ!良カッタ、ミレイが無事デ――本当ニ、良カッタヨ…」
「ッ…!!」
心の底から安心し、喜んでるベルゼ。
妹の声が聞いただけで安堵の息を吐き、妹が無事なだけで、全身の痛みなどさもどうでもいいかのような、忘れてしまうかのような、何ともないようにベルゼ兄さんは振る舞う。
「やはり…私もう……これ以上は…絶えられません……」
口元を手で覆いながら、目の前の光景に心の底から痛む詠は、潤う目から微量の涙を零す。
これ以上は戦わせたくない――元はと言えば、ベルゼだって妹を守るために戦ってただけなのだ。たった一人、大切な妹を守るために…ずっとずっとずっと、独りで戦い抜いて来たのだ。
これ以上野放しにすれば、他の忍もベルゼ達にも危険が及ぶというのは分かっている。

頭では分かっていても、嫌だと首を横に振るのは感情によるもの。
「私も……さっきまで倒す気でいたのに、こう…兄妹の前を見せられると…何なんだろうね……」
未来も何が正しくて何が悪いのか、分からなくなってきた模様だ。現に未来の顔色を伺うに察して、喜ばしい現状ではないことは確実だ。
殺しも不殺も、理由がどうであれ情が湧いてしまうのは可笑しくない。
殺し屋は勿論、忍の世界だけでなく現実世界だって、仕事とはいえ生き物を殺すことに躊躇いのない人間は少数だ。
処分される犬や猫、ヒヨコや食用として出される豚や牛にだって、人間は情を湧いてしまう事だってある。
こうなることは運命――致し方ないのは分かっていても、感情というものが拒むようにそれを阻害する。
「詠ちゃんに未来！しっかりしなさい！貴女達までそんなのでどうするの!?今1番辛いのは尤も他でもない、焔ちゃんなのよ…？いいえ、それだけじゃないわ、あの妖魔が美怜ちゃんを守ろうとするように、焔ちゃん…ううん、私達にも守るべきものがあるでしょう？」
そんな弱々しい詠と未来に、春花は喝を入れる。
そう、これは感情論で生死を選んで良い問題では無いのだ。ベルゼは忍を殺しすぎ、そしてこれからも殺そうとする。自分達が侵入者である以上、説得など不可能。
ならば…戦う他無いのだ。
本当は、分かち合えるものなら分かち合いたい――例え妖魔を匿う事になろうと、どんな結果であろうと、自分達に誇らしくあれるのなら、その選択肢も悪くないのと思った…。
本当だったら、忍の血を繋がる美怜と妖魔のベルゼが共存し、分かち合えてるように、自分たちも分かち合えたのなら…なんて、夢物語を見てしまってる自分か居る。
それもまた、春花の心が心をゆっくりと、縄や蛇のように縛っていく。

「そうやね…わしが言えたことじゃないけど、それも踏まえて戦う覚悟をしたんやから。わしらが此処で後を引いたら、ベルゼ兄さんにも失礼やで……」
日影は表情こそ変わらないものの、それでも…他人の気持ちを考えれる辺り、大分前進したとも言えるだろう。昔の日影は冷徹で、それこそ相手の気持ちを考えるなんて馬鹿らしいと見下ろしていた。
だけど、今の日影は何となく解る気がする――それも嘗て自分を、蛇女に入る前から強く育ててくれた、日向の事が何処かベルゼ兄さんと重なったからなのか。
だからこそ、他人事とも思えない。

「ミレイ……ゴメンネ!!」

意を決したように紅蓮に染め上げられていく焔に、狙いを定め、突進する。
そんなたった一匹の妖魔に敬意を評し焔は、全力を示す。
「ベルゼ…哀れみなどない。真剣に、忍や妖魔だなんて種族関係なく、相手をしよう」
己の全てをかけて――
焔は、皆の為に。
ベルゼは妹(一人)のために。
焔の心は痛感されるものはある――だが、哀れみなどない。それこそ日影が言うように失礼に値するからだ。
どんな結果になろうと、どのような経緯であろうと、ベルゼは大切な妹のために戦ったのだから。
寧ろ、誇りさえ感じられる。
焔は他人にも自分にも厳しく――種族や立場がどうであれ、強い者には大きく敬意を現す。
其れは――焔はベルゼを認めているからに他ならない。

この闘いは全て――大切なものの為に。

２０８話「謝罪と感謝と愛情と…」

渦巻く紅蓮の炎が暗闇の部屋を照らし、近付くだけでも火傷を負いそうなその熱燗たる闘志は揺らぐように燃え上がり、炎は止まることを知らない。

真紅色に染め上げられた髪をたなびかせながら、熱が籠った宝刀――炎月花は燃え盛る様に美しく、焼き切るかのような凄味を増していた。

「さぁ、戦ろう――お前も私も、お互い譲らないものがあるのなら…命を賭して戦おうじゃないか。

詠、日影、未来、春花…すまなかった……そして有難う。後は一対一でやらせてくれ」

元々、体力の温存も含めて本気の覚醒でなければベルゼ相手に到底敵わないと察した焔は、仲間に頼りベルゼをなんとか追い込ませた。危険な策というのは百も承知だが、そうでもしなければ此方が殺られてしまう程に、ベルゼという妖魔一匹は手強く、何よりも強すぎた。

正直覚醒を以ってしても敵うかどうかという、勝機が薄く見えづらい選択でもあるが…。

対するベルゼは視覚が封じられており、聴覚と嗅覚頼りで戦う他はない。そう考えるとベルゼが不利な様に思われるが、其れは此方も同じこと――

嘗ては仲間と共に…ではなく、強さを求め仲間は戦略の駒としか見えてなかった焔からして、仲間と共に強さと戦いに身を投じる彼女からすれば、これでも致命的な点にもなる。

一対一での妖魔との戦いなど、今まで未経験である焔からすれば、戦況的には不安要素が高い。

幾ら自分が覚醒してるとはいえ、ベルゼが負傷してるとはいえ、油断ならないのが忍と妖魔の戦だ。
「焔ちゃん…それなら私も……」
「そう、なら…後は任せたわよ。焔ちゃん――」
「!?」
そんな焔に加担しようとする詠を、春花は腕で制す。
「春花さん!?どうして…」
「詠ちゃん、これはきっと…焔ちゃんの意地なのよ。私達がもう限界に近くとも、一人で戦おうとするのは…私達が危険を冒してまで此処までの状況に持ってこれた事も含めてだけど、きっと…美怜ちゃんへの罪を背負うための、覚悟だと私は思うわ」
「あっ…それって…」
以前、話し合いの中で焔が『私が責任を持って、美怜の想いを受け止める』というあの時放った言葉に、大きな意味があるのだと理解する。
焔は良くも悪くも意固地が強い女だ。
自分の意思で決めた事には忠実で、それで居て曲げることを許さない。
だから蛇女に在籍し、道元が卑劣な想いで生徒たちや自分達を利用しても、抜忍になることを分かっていながら主君に牙を向けた。
だから伊佐奈が蛇女を支配したと聞いて、命を狙われることを理解していながら、本拠地に攻めて命に危険を晒しながらも己の意思を貫いた。
そして今――ベルゼも美怜の想いも受け止めながら、己のやり方で、忍道を貫く。
例え妹から恨まれようと、ベルゼという兄の命をこの身に背負いながらも――彼女は折れない。
それに恨み辛みで生きてきた人間だからこそ、美怜やベルゼが忍に対する嫌悪や否定的になるのは理解出来るし、恨まれる事など慣れっこだ。
そう…焔は何時だってずっと恨まれ、背負い、戦い抜いてきた。そ

れは彼女が悪忍として、悪の定めに、運命に、歩み生きていく業なのかもしれない。

「ミレイ――ゴメンネ!!」

何かの意を決したベルゼは、妹の美怜に謝罪を言いながら、腕に力を込めていく。

ベルゼ自身も、何かを悟ったのだろう…狂いもない、怒りもない、嫌悪もない、憎悪もない、純粋な気持ちで、ただ…妹を守るという使命に殉じて、焔に拳を向ける。

その想いを受け止めるかのように、放たれた重圧たる拳を、一本の刀で受け止める。

ガチィイン！という衝撃と金属が重なった音が響き渡り、火花が散る。やはり…手傷を負ってもパワーや実力は衰えておらず、腕に伝わってくる拳の重圧を感じながら、焔は歯を食いしばってソレを薙ぎ払う。

「があぁっ!!」

「フンッ――!!」

拳にはジュウゥ…っと焼き焦げたような音を引き立てながら、拳を薙ぎ払われながらも、構わずと次なる拳を差し向ける。

次に迫り来る拳を更に刀身で受け止めてはなぎ払いの繰り返し。拳ではなく腕を切り捨てようとする考えも分からなくもないが、あの怪力を誇る筋肉繊維の腕を刀に当てても、刀の本領は発揮できない。圧迫感のある腕に刀で斬りつけても、下手な角度では肉は減り込まず刀身が破損する。

幾ら戦国時代に伝わる天下の宝刀とはいえど、ここまで複雑に絡まれた繊維と剛力を誇れば分からなくはない。

その為、下手に追撃するよりも、隙を突く機会を狙って反撃した方が効率が良い。

「妖魔術――【魔王の――「今だッ!!」ッ!?」

そして、その隙を焔は見逃さなかった。

ベルゼが大振りに拍手――手と手を叩き合わせるその刹那が、反撃

の隙となる。焔はそれを待ち望んでいたのだ。
幾重もの攻撃が通じないのであれば、ベルゼは必ず妖魔術を扱う――それなら後は簡単。水が流れるように、自然に無駄な動きなくして、大火力の反撃の狼煙を上げるまで。
「絶・秘伝忍法――【紅蓮土跳撃】!!」
激しく燃え盛る紅蓮は勢孟の唸りを上げて、六本の刀が紅蓮と化し、灼熱の刀を纏っては斬撃を繰り返す。
掌が合わさる前に、紅蓮の一刺しにより刺しによる一突きで、体が後退する。そのまま肩部、腹部、頭部、脚部、様々な部位に灼熱の刀が襲いかかり、防御も叶わず紅蓮の炎に飲み込まれる。
「グオオォォォォォ?!」
まるで刀が焔の意思を宿すかのように、更なる剣戟と共に焼き尽くす紅蓮の炎がベルゼを飲み込む。バチバチと火花散る音を奏で、皮膚は蒸発し焼き焦げていきながら、灼熱の空間の中、ベルゼはそのまま絶・秘伝忍法によって生み出した隙を狙い、体を鷲掴む。
「なっ…?!コイツ……!!」
「ガァァッ!!」
バキィ!!
そしてそのまま殴り飛ばす。
突風吹き荒れる拳の衝撃波、それをもろに食らった焔は、幾ら覚醒状態によって身体能力が飛躍的に向上してるとはいえ、軽傷では済まな
い。
殴られた衝撃による鮮烈な痛覚、骨が折れるかのような感覚、頭から血がポタリポタリと垂れ流し、意識が混濁するも、炎月花を杖代わりに上手く態勢を整え埋もれた壁から起き上がる。
双方――引けを取らずに距離を置き、緊迫張り詰めた空気が静寂に包まれていく。
紅蓮の少女と大妖魔、何れの計り知れない実力を誇る強者同士の闘いは、凡ゆる雑念や有象無象を寄せ付けない。
「はぁ…!!」

炎月花を振るうたびに、紅蓮の炎は応えるように炎は産声を上げるよう燃え盛り、ベルゼは素手でそれを振り払う。
今度は焔の腕を掴み、折って再起不能にする事が懸命だと悟ったベルゼは咄嗟に手を伸ばすも、それを寄せ付けないよう細心の注意を払いながら、迎撃する焔。
何方も後を引かずで、体力も減りつつ傷を追いながら、何方も五分五分と言った具合だ。
況してやベルゼはほぼ視界が見えない状態で、感覚と嗅覚で探りあってるので、不利な状況で言えばベルゼの方だろう。
「…これ焔さんに加勢しなくてもええんかな。いくら手負いとはいえ、流石に無茶があるんちゃうかな」
焔達の戦いを見守る傍観者の日影がポツリと口を開く。いくら焔が自身で決めた覚悟とはいえ、彼女自身が命を落としてしまう事は本望ではない。仮に戦うなと言われても、仲間だからこそなのだろう…焔の危険を感じてしまえば居ても立っても居られないのは当然のこと。
「日影ちゃんや未来ちゃんの気持ちは分かるけれど、それでも私たちは見守りましょう…美怜ちゃんがそうしてるように…ね？」
すると春花は日影の肩に手を置いて優しく制する。美怜を振り向けば、多少辛そうにはしているものの、美怜は手を出そうとしていない。
其れは妹としての役目だからか、手を出す事を兄のベルゼが許してないからか、焔に危害を加えようとする気も、兄の勢力に加担する気配もない。
更に焔以外にも詠、日影、未来、春花にさえも見向きもしていない。
平等にして美怜を納得するには、手を出してはいけないのだ。そういう意味も含めて、焔は手を出すなと言ったのだろう。
「……美怜さん…」
何処か辛そうに表情を暗くする美怜に、詠は拳を握りしめ、胸元に当てる。詠は良くも悪くも真面目であり、金持ち（斑鳩以外）を除いて大体優しいお姉さん気質の人間だ。

幾ら忍務とはいえ、焔達が決めた最善の答えとはいえ、やはり兄を愛しく想う妹にこんな表情をさせるのも、戦わせるというのも、見てて良いものではない。
だからこそ想う…美怜の憎しみは、焔だけでなく自分も受け止めたいのだと。
もし美怜が焔を狙うようなのであれば、その時は…

荒ぶる拳の衝撃波、其れらも慣れたかのように順応し始め、裁き切る焔は炎月花を巧みに扱い僅かながら反撃を仕掛けてくる。
対するベルゼは無尽蔵な体力を誇っており、擦り傷程度は動作もない様子でいるが、攻撃の手を緩む気配は毛頭ない。双方、命を賭けた炎のリング上で殺し合いを続けている。
「…はぁ、はぁ……覚醒を持ってしても、倒せないのか…」
後一歩、常にギリギリのラインを強いて戦い、危機一髪の状態が今もなお続いている。だが其れはベルゼも同じこと。
幾ら妖魔の親玉でありながら通常とは異なるとはいえ、覚醒を持つ忍相手には一人だろうと分が悪い。況してや再生機能も失い丸裸にされたベルゼなら尚のことだ。
しかし、引く気配は微塵たりともない。
其れもそのはず、ベルゼは妹のために命さえも平気で厭わず顧みず、守り続ける兄なのだ。誰よりも妹を守り続け、世話をし育てたベルゼが、そう易々と引き下がることなどある訳がない。いや…死ぬまで止まらないのだろう。
正しく美怜の為に全てを尽くす守護者だ。況してや、洗脳でもない、利用し合う仲でもない――愛し合う大切な家族としての当然の責務。
其れは、何処か焔が仲間達を守る姿と似てるのだろう…だからこそ、焔はそれも踏まえてベルゼとの一対一を望んだ。
「ならば…最後の切り札で終わらせようじゃないか…!!」

これは一か八かの真っ向勝負。
焔は己の体内に蓄積され今も茫々と燃え盛る紅蓮の炎を、更に蓄え溜め込んでいる。
体内の水分、炎に対抗する体質の限界、体力そのものを莫大に燃やすエネルギー…嘗て伊佐奈と対峙した奥の手、覚醒を超える秘術を自らの手で扱おうとしているのだ。
コツは今でも忘れずに覚えている…もうあの力が無いのなら、今再び死地の戦場で編み出せばいい。
愚かにして単細胞、だがそれが焔という強者を求める忍の少女である。追い込まれればその度に強さを秘めて行くその性質こそ、彼女が蛇女で最上位に位置する所以だろう。
「はあああぁぁぁぁーーーーーッッッ!!」
そして燃え盛る爆炎の竜巻を発生させる。これぞ絶・秘伝忍法『蓮』だがその威力は覚醒を上回る。
近寄る事すら許さず、爆竹みたいに火花を散らかし、延々と渦巻く炎は、六本の刀を回しその度に竜巻が激しく鼓動する。
炎の竜巻、その中心の渦となる炎を浴びるベルゼは、一息吸い
「妖魔術――【最後の晩餐】」
己の命を脅かす暴食の術を発動し、焔の爆炎を大きく吸い込んでいく。

「なっ――んだと…!?」
限界を超えてまで発動した紅蓮の炎、その覚醒を上回る威力を発揮した絶・秘伝忍法を、掃除機のようにいとも容易く吸い込んでいき、瞬く間に延々と燃え続ける炎は、ブラックホールのように簡単にベルゼの口へと飲み込まれてしまった。
「ガァァァァァァァァァーーーーーッッッッッ!!!!」
何も奥の手を隠してたのはベルゼだけではない。
狂乱の雄叫びを吠えながら、一心不乱に此方へと捕食するよう目掛けてくるベルゼに焔は内心舌打ちをする。
まさか、本気以上の秘伝忍法を駆使しても歯が立たないとは…。

ベルゼの妖魔術――【最後の晩餐】は、凡ゆる攻撃や秘伝忍法を制限なく無尽蔵に食い散らかす危機的な術だ。
それが例え自身より格上だろうと、覚醒であっても、個性であっても、その気になれば地球のマントルさえも貪る危うい術は、全ての忍術を前にしては無力――万物の餌に過ぎない。
この充分に脅威とも呼べる妖魔術は何も万能ではない…これは、貪るという術に特化したものであり、発動してしまえば自身の命さえも貪ってしまうのだ。
急激に体力の燃費が激しくなり、常に何かを口にしなければ死してしまう。正に今のベルゼは飢餓状態で有り続けているのだ。
通常、人間が餓死する時間は最低でも絶食して二ヶ月。空腹状態を過ぎてからブドウ糖を消費し、脳は消費量を減らし、プロテインを消費しては筋肉が衰えるなどの効果が現れる。
しかしベルゼが発動した暴食の時間はその比ではない。凡そ２００倍以上、通常の人間なら数秒で死亡するその危険な術を、ベルゼは発動し自らの命を貪りながら戦いをつづける。
それもまた、美怜のことを想っているからである。
今のベルゼは激しい空腹と、唾液が止まらない食欲、全てを食い尽くす衝動に身を焦がれながらも、全力を持って焔と戦おうとしている。
「……お前で、初めてだよ……ここまで、私が追い込まれるのは――」
そんなベルゼを目の前に焔は、己が捕食される側の蛇でありながらも堂々と仁王立ちをして炎月花を構える。
ソッと目を瞑り、全ての神経を研ぎ澄ます。
…まだだ、まだいける。
そうだ、ベルゼは自身の命を危険に晒しながらもここまで真正面から受け止め向き合い、戦おうとしている。
信念
責務
敬意
ベルゼがこれ程本気で戦ってるのだ…きっと、それに比べれば覚醒

した私では力不足なのだろう。
己の限界を超えても、真・覚醒には至らずベルゼにも手が届かない。
ならば…死んでしまうかもしれない、そんな気さえも通り越す程の情熱と闘争の炎を、命ごと燃やし尽くそう。
そうでもしなければ不平等だ、ベルゼに対する不敬である。
だからこそ…今まで歩んだ戦いを思い返せ。

『私は、色んな仲間たちに会えて、恵まれて……そして強くなれた。正義とは何か、色んなことが知れた。

――だから、勝負だよ焔ちゃん!!』
嘗て、蛇女子学園として、悪忍として飛鳥と対峙した蛇女最後の戦い。
『誰がいつ本気ではなかったって言ったよ…？本気だったぜ？最初っからよ！』
嘗て、半蔵学院の助太刀として助力に駆けつけ、本気でぶつかり合った爆豪との記憶。
『やってみろよ!!雑魚がああぁぁ!!』
嘗て、復校した蛇女を支配し私利私欲に溺れた伊佐奈との死闘。
凡ゆる記憶の回想が、全身の血を騒がすよう沸騰していく。
嗚呼――私は何がなんでも負けられない。
最強の友の為にも
仲間のためにも
生きる為にも
悪の定めを歩んだ軌跡が炎の灯火となるように――彼女の背中を押してくれる。
その真紅の髪は、軈て灼熱の如く更なる紅へと染め上げていき、炎が唸る度に爆破が発生し、爆破と炎の紅蓮が、より薄暗い部屋を太陽の光のように照らしてくれる。
それは深い闇を連想させる暗黒を主張するベルゼとは対極であり、常に紅蓮隊の象徴として掲げられている。

真紅に染まる炎月花もまた、焔に呼応するよう爆炎を纏わせる。
「やっと…辿り着いたぞ……今度は、自身の手で…!!」
そして、炎すら支配し頂点へ到着する炎帝と称する爆炎――爆炎の焔へと登りつめる。
それは嘗て、伊佐奈との戦いで一度きりに使い果たした爆破の炎。生への執着とその心、強く願う心は秘伝忍法にも忍転身にも影響を受け、力の源となってくれる。
「あれは……覚醒を超えた…何?」
書物でしか知り得なかった覚醒の遥か先を行くその姿に、美怜は未知なる遭遇に驚嘆の息を漏らす。
風神の飛鳥
零帝の雪泉
堕天の雅緋
今の若き忍学生にも覚醒を超えた超常的な実力を備えた者達が携わっている。
焔は前々からその素質はあった…だが、それを上手く引き出せなかった。其れは嘗て、蛇女子学園にいた頃、炎月花を抜けないあの未熟な頃と同じように――
「お前の命が朽ちるが先か、私の命が朽ちるが先か……恨みっこなしの真剣勝負と行こうかベルゼ――」
「…ホ、ムラ……」
お互いの尊厳も、意地も、情念も、今ここで決まる。
そして……たった今初めて、ベルゼが焔の名前を呼んだのだ。其れは、もう焔を充分に認めたからなのか、はたまた語ることがあるからだろうか…だが、其れは後に回し…
「はあああああああああああーーーーーーーっっっっっ!!!」
「オオオオオオオオオオオオオオーーーーーーーーッッッッッ!!!!!」
二人の魂の叫びが空間を轟かせ、生・秘伝忍法【覇赦炎・紅蓮王】と妖魔術【最後の晩餐】が衝突する。空間が割れてしまう程の衝撃波は、

遠くいる詠、日影、未来、春花、そして美怜でさえもその場で止まることで精一杯の様子だ。
　爆炎から巻き起きた際に生じる焦げ臭い匂いが充満し、爆破と共に炎を発生させる焔に、その爆炎さえも飲み込んでいくベルゼ。もう既に限界は迎えているというのに、引けを取らない辺り、二人とも何処か似た者同士と感じさせられる。
「グギ…ギギィ……!!」
　全てを飲み込んでいくベルゼは、少しずつ焔の体へと貪り尽くしていく。こうしてみると、覚醒を超えた真・覚醒を前にしても抵抗できるベルゼに僅かな動揺はしたものの、ベルゼ自身もまたタイムリミットが刻一刻と近づいてきている。
【最後の晩餐】を発動しながらも、連鎖をする紅蓮の爆炎の前では吸い尽くすばかり。
　生・秘伝忍法を駆使してでもそれすら抗えるベルゼは、やはり異端にして強敵。今まで戦ってきた雑魚敵妖魔とは天と地の差が広がり、ベルゼが妖魔の筆頭として支配権を持っているだけのことはある。
「ゴバアアアアアアアーーーーーーッッッ!!!」
　計り知れない爆炎の渦、それらを吸引する肺活量に底知れぬ食欲の沼、暴飲暴食とは正にこの事で、貪り尽くしながらもなお、暴力を辞めない。
【最後の晩餐】に【駄々こねっ子パンチ】で炎さえも跡形もなく吹き飛ばす。真・覚醒を以ってしても倒れる気配はなく、後一歩の所で手が届かない。
（なるほど…！一度吸い込まれたら能力の効果さえも発揮せず消化されるのか…!!）
　紅蓮と爆炎を混ざり合わせた炎帝と称する炎は、飲み込んだ後も燃え続け、命尽きるまで爆破を引き起こす。にも関わらずベルゼの体内からは炎は消えている…成る程、ブラックホールとはよく言ったものだ。最後の晩餐とも、言い得て妙といえる。
「ホムラアアアア!!ボ、クハ…!!」
「……ああ、有難う」

ベルゼの心も、言葉も全て理解した焔は、全身の血と筋力を一瞬でフル活動させ、瞬発力と火力を主に意識し、目にも止まらぬ速度で炎月花で斬りつける。

「生・秘伝忍法――【蛇王・炎帝牙蓮華】

皆が息を呑みながら見守る空間、刹那の瞬間に焔は皆の意識外からベルゼを袈裟斬りにした。

斬られた部分は灼熱たる紅蓮の爆炎を浴び、血は彼岸花が咲き誇るみたく血飛沫が花びらの如く舞う。

【最後の晩餐】が、如何なる秘伝忍法さえも食い尽くすのなら、食えない速度で抵抗すれば良い。尤も、そんな簡単な話ではないが…只でさえ生・秘伝忍法問わずそんな技術は一朝一夕で身につく様なものではなく、相当な鍛錬と努力が必要になるが…。

「――はっ……」

況してや、静止した筋肉を一瞬で激しく動かす事で、脱力した後に筋肉や全身が硬直し動くことすらままならないのだが。

倒れ伏せてしまう焔に、他の一同は彼女の元に駆け寄る。

「焔ぁ！」

「焔さん…！」

「焔ちゃん!!」

詠、日影、未来、春花の四人は慌てて倒れた焔に駆け走るも、焔は四人に構わず直ぐに意識をベルゼの方へ向ける。

まだ…戦いは終わ――

「ベルゼ兄さん…！」

すると此処で、今まで沈黙して傍観してた美怜が兄の元へ駆け走っていく。見てみると兄のベルゼは血を流しながら地面に倒れ伏せていた。斬られた事による影響か、元々限界を迎えていたのか、将又…あれが最後の引き金になったのか……上手く詳細は知らないが、勝負

の決着は付いたようだ。
「焔…！大丈夫…？立てる？」
「未来……すまない、私はもうこれ以上戦えそうにない……」
無茶を通り越し、挙げ句の果てに体力を全て振り絞った結果、木偶の坊となり、情けなさを感じながら、未来と日影に担がれる形となる。
「美怜ちゃん……ベルゼさん……」
詠のポツリとした言葉に、焔を始めた他の者達までも、二人の方角へと目を見開く。
同時に、頭の中で実感が湧く。
ああ…遂に、終わったのか…と。其れはこの忍務による内容も含め…ベルゼという兄の終わりも…。
倒れるベルゼは、地を這うように妹の声が聞こえた方角に体を向け、美怜は兄の元へ駆け寄ると、そっと膝を下ろした。
「……ミレ…イ……ミレイ…」
「……ベルゼ兄さん、今までよく頑張ったわ……本当に、ほんとうに……」
美怜が始めて見せる悲痛に染めた顔色に、何処か辛そうで悲しみを含めた声色は、聞いてるだけでも心が痛くなる。
そんな美怜に、ベルゼは体が少しずつ消えてゆく間中、訴えかけるように美怜と向き合う。
「ミ…レイ……ゴメン…ネ、ミレイ……ボク、モウシンジャウケド……ズット、一生ミレイヲ守ルッテ、決メタノニ…約束、シタノニ……守レナクテゴメンヨ…ミレイ……」
パラパラ…と、桜吹雪のように体が朽ちては灰となり少しずつ消えてゆく。其れは、妖魔が戦いに敗れた時に見せる死が訪れる時。
「ゴメンネ…ミレイ……ゴメンナサイ、ミレイ……」
「……ベルゼ兄さんは、いつだってどんな時だって…一番大切な時にずっと守ってくれていた。そして、孤独な私の味方でいてくれた。周りから蔑まれても、殺されそうになっても、兄さんは胸を張って、命を懸けて、私を守ろうとしてくれた…そして、ベルゼ兄さん。貴方が居たから、私…一人じゃなかったのよ？私が今この瞬間を生きてるの

は、兄さんがいたからなの。
だから謝る事なんてない、自分の死に悔いなく誇りを持って良いわ…だってベルゼ兄さんは、私の世界一の兄さんなんだもの」
だから、大丈夫よ…そう告げる美怜の言葉に、一語一句に、ベルゼは心から安堵の息を吐く。
「アリ…ガトウ……ミレイ…ボクノ、妹デイテクレテ…有難ウ……ボクト一緒ニ居テクレテ、アリガトウ……ズット、ゴメンネ……」
有難うという感謝。
御免なさいという謝罪。
この矛盾した二つの言葉は何方も本物で、その二言で全ての想いが詰まっていた。
例え妖魔であっても、人間であっても、兄妹の道を選び家族を大切にし愛し合っていた。だから、例え自分が醜い化け物で、周りから蔑まれる対象になっても、自慢で可愛い妹でいてくれた事、大切に思ってくれていた事。
それが嬉しくて、幸せで、暖かくて、いつも支えになってくれてたから、だから妹の美怜には感謝を込めて有難うとそう告げる。
妖魔であり家族だからこそお互いが縛り付けていたことを、美怜が望んだ「外の世界を知りたい」事に対してその幸せを叶えれなかった事。自分がいたせいで、忍達からいつも危険に晒してしまったこと。
ベルゼ兄さんにとっての幸せや喜びは、美怜がしたいこと、妹の楽しい一時、彼女の喜びや幸せが、ベルゼにとっての生き甲斐であり、掛け替えのない力の源。
だからこそ、美怜の自由を不自由に変えてしまった自分が申し訳なく、妹の幸せを叶えたくても叶えれない自分は、美怜に謝罪を告げる。
「ミ…レイ……生キテ……命ノ在リ方ヲ、知ッテ……」
そして、この兄の死を乗り越えて、どうか自由に羽ばたき生きて欲しい。それが、ベルゼ兄さんからのお願い。
「モウコノ先、ボクハミレイヲ守レナイ…デモ……ミレイハ、自分ノ幸

セヲ手ニ入レテ……自分ノシタイコトヲシテ……其レガボクノ、一番ノ幸セダカラ……」
「……分かったわ、ベルゼ兄さん……此方こそ、今まで有難う……」
べったりと血が付着した手を美怜の頬に触れながら、兄として優しく、暖かく、愛に溢れた想いで、妹にそう託す。
下半身が消え、体も消え、残るは頭と上半身のみを残し、刻一刻と血も骨も残らず消えてしまう。
もうこの僅かな瞬間だけでも、ベルゼは妹を励まし、幸せを第一に臨む。本当に、此方もお人好しにも程がある。
そして美怜は、ベルゼは、お互い共に深く抱きしめ
「そして…さようなら……大好きよ……」
「…バイバイ、ミレイ……ズット大好キダヨ……」
別れの言葉を告げた後、ベルゼの体は桜吹雪の如く、散る。
腕に残っていた体も、顔の温度も、腕の感触も、先ほどまで其処に居たというのに、一瞬にして消えてしまい虚無と化す。
ただただ目の前に広がるのは、ベルゼが流した血の海と、たった一つ…兄さんがいつも愛着を持って被っていた金属製のマスク。
「……ベルゼ……」
「本当に……ベルゼさんも美怜さんも、お互いを大事に思い合って……これしか、やはり方法は無かったのでしょうか…」
兄を殺され、失い、亡骸を前に膝を下ろしたままジッとしている美怜の背中を見つめ、罪悪感を感じる紅蓮隊。
幾ら能書き垂れようと、あの美しくも愛し合っていた兄妹の仲を裂いたのは、焔達なのだから…。
だからこそ焔は最初に「恨むなら私を恨め」とも言ったのだが…。などと感傷に浸ってるのも束の間、美怜は立ち上がり此方に振り向く。
「……兄を失う、覚悟は決めていたけれど…思った以上に悲しいわね。まさか、感情など持たないと思っていたこの私が、ここまで感情的になるなん……あら？貴女達、どうして泣いてるの？」
美怜は感情こそ乏しいせいか、無表情でありながら目を見開き、紅

蓮隊を不思議そうに見える。
　涙？そう思いながら焔は頬を触れるも濡れた涙の感触は何処にもない。それが自分ではない事に気付く。
「そんなの……幾ら私たちが決めたこととはいえ、肉親を失ったんだもん……私も、倒すって息巻いてたけどさ…あんなの見せられたら…そんな気持ち、失せちゃうよ……それに、あんただって泣いてんじゃん…」
　焔を危険な目に遭わせようとした事は許さなくても、美怜もベルゼもお互い生きる為に、家族のためになら、否定はできない。いや、寧ろ…あそこまで兄妹の愛情を見せつけれてしまえば、倒してやるだなんて気持ちになれやしない。
　未来は悪忍ではあるが、家系は善忍…根は悪い人間ではないのである。
　未来に指摘を受けた美怜は、自身でも気付く事なく無意識に大粒の涙を流していたそうだ。ゴシゴシと腕で涙を拭く。
「美怜さん…私も、焔ちゃんだけでなく、美怜さんの想いは私も受け止めます……ですからその、焔ちゃんだけを恨まないで下さい…!!私たちがベルゼさんを殺した事は否定しませんしその通りだ思います…ですから…」
　詠は涙を流しながらも、必死になって訴える。
　詠は知っている――家族の愛とはどこまでも深く醜いくらいに美しく、例え身を犠牲にしてまでも誰かのために尽くそうとする愛情。
　其れは、身を切り売りしてまで自分にお金を残してくれた両親と、身を犠牲にしてまで妹のために尽くしてくれたベルゼという兄と、重なるから。
「…詠だったかしら、貴女は何か勘違いしてるみたいね。私は別に貴女達を恨んでなんかいないわよ…？」
「……えっ？」
　だが美怜の予想外な発言に詠はもちろん、焔も未来も春花も…日影でさえも驚いた様子だ。
「確かに…兄を殺したと捉えても間違いではないわ。現に兄さんも貴

女達を殺そうとしたし、お互い様ではあるけれどね…。
寧ろ興味深いとさえ思ったわ、体感した事ない感情の奔流とその衝動……これが、貴女達人間の習性であり、悲しいという感情なのね…人は大切なものを失い初めて、その価値を知ると聞くけど…成る程、健康の有り難みなど、病気にならねば分からないとはよく言ったわ」
淡々と興味深そうに話す美怜に、焔は目を丸くする。
初めてだ……今までは戦い血を流し、ある時は傷つけたことで恨みを買われるばかりだった。
特に蛇女にいた頃は選抜の座を狙う者もごまんと居たし、選抜の座に就いても休む暇もなく標的にされては恨みや殺意ばかりが焔に矛先を向けられていた。
しかし、兄を殺してもなお興味深いと言わんばかり、寧ろ恨みも殺意も向けないのは、生まれて美怜で初めてなのである。
「美怜ちゃん…こんな時に言いたくないけど…動物みたいな事を言うのね…」
「あら。私たち生物は、遍く動植物かその中間に分類される筈でしょう」
「取り敢えず美怜さんは悪い人っちゅうより変わった人って事やな」
「日影ちゃんに言われたらお終いな気もするけれど…でも、意思の疎通って意味では、そっちの方が厄介かもしれないわねぇ…」
「生育環境の違いに由来する情報の不足が解消されれば、特に問題は無いと思うけれど」
「はぁ…」
どうやら日影以上に厄介かもしれない。
日影の場合は小難しい考えはせず、葛城のように当たって砕けろ精神で一直線だ。然し美怜の場合は頭の回転を常時フルスロットル回転しながら論理的でおまけに感情による起伏が低いという共通点。
お互い馬が合いそうなのも含め、頭がこんがらがってしまいそうだ。
「その……言いにくいんだけどさ、悲しくないの？兄が亡くなったこと…」

「…ベルゼ兄さんを殺した貴女達がそれを言うのかしら」
「ご、ごめん…！でも…美怜、泣いてたのに直ぐに違う話をして…何というかこう…淡々としてたり……上手くは言えないけど、あっさりしてるから…つい…」
「…思った以上に悲しかったと先程も前述した筈よ。ここまで喪失感が大きいとは思ってもなかったし、やはりベルゼ兄さんの死は私にとっても大きな形だわ…けれど、ベルゼ兄さんは納得していたから」
「納得…？」

「ええ。ベルゼ兄さんが亡くなった今、私がこの家から離れて本来在るべき生き方を選ぶ事を――」

それは、死の間際に呟いた『命の在り方を知ること』『美怜のしたいこと』ベルゼ兄さんが話してくれた希望にも等しい長い。
其れもまた兄に言われたからだけでなく、自分の意思で決めるべきこと。
「ベルゼ兄さんは、貴女達が自分を倒せたのなら、それで良いと言ってくれたのよ。貴女達に、託してくれたのよ？」
其れはあの時、焔達がベルゼと初めて出逢い、追い払った後の出来事だった――

『ミレイ、ミレイ――話ガアルンダ』
『あら――何かしら、兄さん？』
ベルゼに「知能の低いベルゼ兄さんが、果たしてどこまで思考能力が発達しているか」の実験を終えてから、ベルゼの様子が変だと思いながら呼びかけに答える美怜とのシチュエーションに、ベルゼはこう答えた。
『モシモ、僕ガイナクナッタラ…美怜ハ外ノ世界ヘ行ッテモイイカラネ』
『……えっ？』
まるで息が溜まるかとさえ錯覚する程に、その言葉は衝撃が大き

く、そして同時にベルゼ兄さんは焔達が自身の命を脅かす強敵で在ることも勘付いていたのだ。
『キット、アノ子達ナラ美怜ノコトモ…』
『待って兄さん、一体全体どういうつもりかしら？確かに私は外の世界に関しては興味があるけれど、今まで一度も弱気になった事なかったじゃない？まさか…』
『ウン、デモネ。アノコ達ハ、美怜ヲ見テモ悪ク言ワナカッタ、仲間守ッテタ。皆ンナガミンナ、大事ニ思イ合ッテル…。
僕ガ死ンダラ、美怜ハ一人ニナルデショ？ダカラ、アノ子達ガ僕ヲ倒セタナラ、美怜ハ皆ンナト一緒ニ外ヘ出テ、幸セニ暮ラスノヲ、僕ハ認メルヨ』
もし自分よりも焔達が上ならば、焔の言ってた『外へ出ないか？』と口には出してないものの、その小さな望みは現実味となるし、実際にあの頃から既にベルゼは焔紅蓮隊の全員を認めていたのだ。
逆に自分たちを倒さないようであれば、大切な妹を自分以下の生半可な連中に渡すわけにはいかないし、それなら自分が化け物でありながら彼女を守っていた方が賢明だ。
『……そう、ならば私も見極めさせて貰うわ。彼女達が、兄さんの信頼に値するか否か…手始めに棟梁と軽い談笑でもしましょうか』
『デモミレイ危ナイヨ』
『どっちなの…まぁ良いわ。確かに、あくまで推測だものね、もし危険だと判断すれば直ぐに引くわ』
こうしてベルゼは彼女と約束したのだ。
この戦いで焔達が勝ったのなら、美怜は自分の好きなように生きて行くことを。

「だから…私はこの家を出て共に外へ出るわ――もし貴女達でさえ良ければ私を迎えてくれないかしら？

――新しい仲間として、家族として…焔紅蓮隊へ」

２０９話「それから日常へ…」

焔達とベルゼ兄妹との戦いを終えてから、焔紅蓮隊の基地と称する森林奥地の洞窟で、新しく家族として仲間に加わった美怜と共に洞窟で暮らしていた。

一人が仲間に加わるだけでも、今までとは大分賑やかになったもの…なのだが。

「このプラスチック製の四角形はなに？少し借りるわよ、コレに刺さってる黒いのはなにかしら？」

「あーーっ!!ちょっと美怜！だめ！保存してないのにＵＳＢ抜いたら…」

ブチッと抜いた音に、何故かパソコンの画面が停止した。それと同時に未来の激しい絶叫が響き渡る。

「あーーっ!?!私の１５万するパソコンが逝ったーーー!!?!」

「何これ、動かなくなったわ…つまらない……」

遂に故障（元々古かったのもあるため）してしまい、嘆く未来を他所に、心底興味を無くしたようにＵＳＢケーブルをポイっと捨てる美怜は、悪魔か鬼畜のようだ。

賑やかになり過ぎて少し騒音地味たようにカオス化？となっている。

「美怜ちゃん…未来が泣いてるわよ…」

「そう。あら春花、貴女の持ってる薬物調合書の本借りるわよ。家にあった本にも調合書はあったけれど、外の世界の知識は新しくなってるから、照らし合わせ序でに読ませてもらうわね」

今度は春花の手に持ってた書物に興味を示したのか、微笑みながら物触して分厚い本に早くも熱が入っている。どうやら美怜にとって春花の薬は大変興味を唆られるそうだ。

「って未来のパソコンにもう興味なくしてるし…良いけど、本当に本を読んだり色んな事に興味を持つのねぇ…初めて会った時から知的好奇心が溢れてる子とは分かっていたけれど…」
「あら、知識を得る行為は全て研究よ？況してや前の家は限られた空間だったし、全ての書物は読み通したもの。
　それに貴女の薬学にはとても興味や探究心が刺激されるわ…貴女は良い趣味を持っているのね…。然も私の知らない科学や薬物の知識も沢山あるんだもの、興味が尽きないわ」
「そ、そんなに…?!ある意味…美怜ちゃんにそう言われると嬉しくなっちゃうわぁ。それに私が発明した薬の魅力を誰も分かってくれなかったし…美怜ちゃんが初めてかも♪」
「ふふ、春花…貴女ってとても面白いのね、見てて飽きないわ。案外私達は趣味が合うと思うわ。
　そうね、今度調合した薬で野生の妖魔にも飲ませてあげましょう？上手く活用すれば今後とも有意義な研究発展や未知なる知への開拓も夢じゃないもの。
　問題は然るべき研究発展が可能な環境が整ってないのが残念だけど……まぁ、前の家も精々注射器や軽い薬物位しか無かったし、今と比べれば然程変わった変化はないから高望みできるものではないのも事実ね。取り敢えず春花と同じくらいの知識を身につけて助手位になれれば順調かしら」
「あかんわ、美怜さんと春花さんが手を組んだら間違いなく阿鼻叫喚やで。全力で止めなわしらまで巻き込まれるし」
　聞いてて早々耳が痛くなる混沌とした会話に、あの日影でさえも手に頭を押さえつけて呆れている。
　マッドサイエンティストの春花に、知的好奇心が旺盛な美怜…良くも悪くも相性は抜群であり、頭脳明晰という点では二人は息が合う。
「大丈夫よ、未来に薬を飲ませれば良いし…♪」
「春花様…?!」
「へぇ…被検体が居たのね。それならより効率よく研究が捗れるわ♪」

「ちょっとぉ!?!二人揃って鬼なの!?この悪魔！」
「安心しなさい、毒物に関してはそこらのモルモットやらを捕まえて実験するから。…毒といえば、この森にも毒を持ったマムシを見かけたわね…今度毒を抜いて薬物序でに武器として保管するのもありね…抗体を作るもよし…ふふふ、やるべきことが多くて嬉しいわ♪」
「はぁ……本当に幸せそうで何よりだこと……まぁ、気に入ってくれたのならいいけど…」
「ありがとう…♪」
「いや、褒めてないし！」
未来と美怜のやり取りも、まるで子供同士が冗談で談笑しあってるようで暖かく、ほんわかとした空間が漂っていた。
…美怜は新しい家に引っ越してからも、不服はなく楽しそうに過ごしている。春花の薬の話といい、未来との揶揄いといい、本人は何不自由なく面白そうに話し合ってるのを見て、早くも馴染めている様子だ。

事は数時間前に遡り、美怜から仲間に引き入れてくれという願いに焔達五人は予想外と言わんばかりに、鳩が豆鉄砲を食らったような顔で目を丸くする。
「仲間にって…ええ!?!アンタ、此処を守って生きていくって言ってたじゃないの…?!」
「ええ、でも…ベルゼ兄さんが死した今、空き家になったわ。住んでいた兄と妹は、居なくなってしまったもの。そして、この家は何方かが欠けてはならない…兄妹が居てこそ、成り立つものなのよ」
ベルゼ兄さん亡き今、この家は美怜だけのものとなり、そして兄を失った彼女からはもうこの家には用はない。
兄のいない、妹のいない家は、攻略打破された妖魔の巣となりこれ以上止まる理由も彼女には無くなったわけだ。

この家は、ベルゼと美怜が居たからこそ家として成り立っていた訳で、片方がいない此処は家ではなくなった。
「つまり、美怜ちゃんは此処での役目を終えた…と、解釈して良いのね？」
「そうね。兄妹というものは、時に互いを縛り付け合うものだもの…ベルゼ兄さんも、その事は理解していたわ」
愛が重ければ束縛し、縛り付けるという事象は人間関係でも多い問題だ。ベルゼと美怜も、お互いを大切に思い遣り愛し合っていたからこそ、互いが縛り合い、今の形になっていたのだろう。
「縛り付け合う…ね、美怜ちゃんの言ってる事は大いに理解できるわ…」
母の異常に歪んだ溺愛に縛り付けられた春花は、どこか皮肉が効いたように目を俯ける。だからこそふと思う…美怜とベルゼのような、純粋に愛し合う家族を見て嫉妬と羨ましさが心を募らせてしまう。
もし、自分もベルゼのように父や母に恵まれていたら…そう考えると、どこか複雑な心境になってしまうのは否めない。
「……それに、未来…と言ったかしら？……有難うね、兄さんのことを肉親と呼んでくれて。それについては感謝するわ」
「な、何よ急に…調子狂うじゃない……アンタは強いのね、私たちが言うのもなんだけど…復讐しようだなんて思わないなんて…私の知ってる人達はそう言う事に関しては復讐心を持つのに…」
「似た境遇に遭ったからと言って必ずしもそうなるとは限らないわ。況してやベルゼ兄さんが託した上に私達も覚悟の上で殺し合いをしたんだもの…恨むだなんてとんでもないわ」
それにベルゼ兄さんは妹を守るという義務と引き換えに多くの命を奪むて来た。幾ら悪いのが忍側とはいえど、殺し合いという場に置いてベルゼが死なない保証はないし、兄が死んだからと言って逆恨みする様なメンタルは持ち合わせていない。
「それに私の正体が忍であり、自分の存在に興味を持ち始めたの……忍としての本質に、この不条理で理不尽で、矛盾だらけなこの謎多き世界にも……だからこそ、貴女達でさえ良ければ迎え入れてくれない

かしら？」
「……」
焔は暫し沈黙を長くした後、真っ直ぐ少女の瞳に向き合う。少女も揺るがない、純粋な眼を逸らす事なく、互いに向き合う。
「…私は問題ない、寧ろお前が言わなければ兄の命を背負い、お前と向き合う覚悟は決めていた。お前の兄を倒した私自身のケジメと責任の義を持って…」
「……それは貴女自身が私を仲間に引き入れたいのか、ベルゼ兄さんの死に負い目を感じているのか、どっちかハッキリして欲しいわね」
「決まってる、両方だ――」
美怜を焔紅蓮隊の家族として迎え入れる事も
大切な兄であるベルゼをこの手で殺めた事も
何方も譲れない本当の気持ちで、代え難い理由。片方だけで成り立つわけでは無い。
「両方…？」
「何方か一つを選べ、なんて選択肢は持ち合わせていない。何方も変え難い事実で、譲れない理由…だから私は、お前に恨まれようとどんな目で向けられようと、受け止める覚悟は出来ていた。
知ってるか美怜？悪は善よりも寛容だ――どんな物でも受け入れる」
窮屈で差別的で、綺麗事だけを受け入れる善とは違い、一つだけでなく全てを受け入れる。それは焔が蛇女に在籍していた頃から腐るほど覚悟を決めていた信条だ。
一つの理由だけでなく、凡ゆる理由も受け入れるのも、また悪忍としても寛容な心意気としても必要な事なのだ。
「ふふ……貴女も詠と同じく面白いこと言うのね。貴女にも益々興味が湧いて来たわ…。それに貴女達のような不自由のない自由さと、凡ゆる常識に縛られずにいる貴女達はとても魅力的ね…。
ベルゼ兄さんの死に対して、貴女達が責任や負い目を感じる事はしなくても良いのだけど…そこまで言うのなら仕方ないわね。
なら責任として私を楽しませ、対話をし、受け入れなさい。それが

私をこの妖魔の巣という鳥籠から広い外の世界へ連れ出した責任と、兄さんを倒したと言う罪を背負う貴女達の責務と摂理…これで、良いかしら？なんてね」
「ああ、その罪と責任を受け入れよう――そして、ようこそ…焔紅蓮隊へ」
こうして奇妙な妖魔と忍の兄妹のお話は幕を閉じ、一人の少女は焔紅蓮隊として新たな仲間に加わった。

それから美怜の案内（元々家主として覚えていたからか）の元、時間は大して掛からず無事なんとか妖魔の巣から脱出した焔達。洞窟から出てみれば、外の景色はもうすっかり暗く染まっており、梟の鳴き声が静寂の森を静かに支配していた。
それから焔紅蓮隊の拠点へ戻る事も含めて、忍務に赴いてからは数時間が経過しており、たどり着いた時にはすっかり夜となってしまっていたのだった。
こうした経過を通して現段階に於ける。時間にしては遅いわけではないが、夕日が沈んだ頃合いからして１９時半過ぎと言った所だ。
紅蓮隊の基地に到着した美怜はそこから今に至って興味深そうに、それこそ興味の対象があるものを手当たり次第探り触れるその姿は、さしずめ何も知らない純粋な女の子供のようだった。
誰とでも馴染め打ち明け、微笑んでる美怜を見て思わず頬が綻んでしまう。
「思った以上に馴染んでるじゃないか美怜。楽しそうで何よりだな」
愉快そうに会話する美怜に、焔が気にかける様に声を掛ける。幾ら美怜を受け入れたとはいえ、蛇女に在籍していた時は皆どこか殺伐としていた雰囲気もあった為、転校（春花が遠回しに）して来た雲雀でさえも周りに馴染むどころか、会話さえ覚束なかったというのに…。その点、美怜は平等に仲良さそうだ。

「ふふ…凡ゆる生物が生きていく中で最も適しており、尚且つ生きることに特化したものは『適応』よ？環境や状況に適応し、順応し、進化する生物こそ、現実に於いても社会においても生き延びやすいもの。生物として優秀に適してる証拠だと思わない？」
「なんというか、理学的だなぁお前は……」
「否定しないわ、事実だと自覚しているもの。それに貴女もそんな所に突っ立ってないで、こっちに来て話に混ざりなさいな。貴女との対話もしておきたいもの、皆んなで一緒に混ざりましょう？」
テーブルの上で円卓のように囲いながら、楽しそうに話す美怜は焔を誘うように手招きする。
馴染めたどころか対話を望むのを見た辺り、不服どころか満足そうだ。コミュニケーション能力も非常に高く、彼女の話も聞いてて飽きないものばかりだ。
「ふふ♪皆さん楽しいお話の途中で申し訳ありませんが、お食事の時間ですよ～♪今日は忍務が終わってから作ったので、いつもより夕食の時間は遅いですが……」
「お！待ってたぞ詠！すまないな…お前も疲れてるというのに…」
「いえいえ、食事の調理担当は私の仕事ですから…♪それに、焔ちゃんが一番心身ともに疲れてるのは事実ですし」
話の途中で食事の用意が終わり、円卓のテーブルの上に湯気が漂う皿がことりと置かれる。湯気が漂い、香ばしい香りが鼻をくすぐり、一気に空腹感が襲ってくる。
全員とも腹を空かせており、待ちわびたように出された食事に目を通す。
日影や春花は箸などを出し、未来は飲み物をコップに入れていく。
「美怜ちゃんもお口に合うと良いのですが…」
「調理…へぇ、貴女…料理も出来るのね。食材を調理し本来の素材より美味しくする過程…素晴らしい技術を持ってるのね。
だけど、これは何かしら？この…スープに浮かぶ緑の草は」
「これは野草です♪あぁ、ご心配なく…ちゃんと食べれるので、味は保証しますわ♪」

焔紅蓮隊定番の夕食は野草のスープ添え。
前は野草のスパゲッティと言いながら、湯気が出た野草炒めが出たりしたものだ。ニックネームの付けどころはさておき、結局は野草だけだという。
だが味は中々行けるもので、見掛け倒しとはこの事だが…初めて見る美怜はどんな反応をするのか…
「中々美味しそうじゃない、有難う詠。それでは頂くわ」
どうやらその心配も杞憂に終わったようで、本人は気にしてないらしい。野草にさえも顔を嫌がらずに美味しそうに呟く美怜に、詠は益々顔を綻ばせる。
「まぁ！そう言って下さるとうれ…あら、美怜さん素手で食べるのは行儀が悪いですわ。ほら、箸を使って」
「…？私には手があるもの、わざわざ使わなくても…」
「だーめ、ほら。あーんなさって？少しお熱いですので息をかけて冷ましますね」
「ん…分かったわ」
箸で野草を掴みながら、食べさせる二人は何だか姉妹というよりも親子みたいだ。
素手で食べようとする美怜には何処か野生児を感じさせる。
「ぷぷーっ！アンタ、箸も持てないのー？」
「さっきも言ったように今まで素手で食べてたもの。箸なんて使った事ないわ」
「うっ…なんかそうやって素で返されると……バカにしたつもりなのに…」
未来からすれば煽ったつもりでいたのだが、美怜には効かなかったようで通じていない。未来と美怜は妖魔の巣で会った時から衝突し合う事が多い。
相性にも問題があるし、未来が短期なのもあるが、流血沙汰にならないだけまだ可愛いものだろう。
「美怜さんはいつもどんなもの食っとったんや？外の食事にすら疎いっちゅーことは、食料とかどないしてたんやろ」

ここで疑問に持った日影の問いに、未来も打って変わって興味が湧いてきたそうだ。
「あ、それ私も聞きたい！素手で食べてたんだから、木の実とかかな？詠お姉ちゃんと同じ野草でも食べてたりするの？」
「食料はベルゼ兄さんから貰ってたわ」
「ベルゼさんは美怜さんのお世話が本当に好きだったんですのね、妹の為に食材を探しに行く…なんて素晴らしいのでしょう…！」
「いいえ、正確にはベルゼ兄さんの体の一部を貰った…と、言った方が正しいわね」
――えっ？
美怜の放った衝撃の言葉に、或る者は凍りつき、或る者は思わず吹き出してしまう。
「ちょっと!?吹き出しちゃったじゃない!!」
「失礼ね、正しい事を証言したまでよ。批難されるなんて、況してや汚いのは貴女の方じゃない」
吹き出しては怒鳴る未来に、煩そうに眉をひそめる美怜は、不愉快そうに表情を曇らせる。
いや、こんな事を食事中に話されたら誰だって未来の反応を取ってしまうのは致し方ないだろう。
「あ、あの…美怜ちゃん。それって一体どう言う…わ、私…言ってる言葉は分かるのに、理解しがたいものでして…」
「ベルゼ兄さんが妹の為にと自分の体の一部を引き千切って私にくれたのよ。美味しかったわ…♪新鮮な生き血に噛むたびに口の中に迸る肉の味…ふふ、例え貴女達がその場に居たとしてもあげないわよ？」
かなり戦慄を覚えた。
それを嬉々として語る美怜に、流石の詠も開いた口が塞がらない。他の四人…あの肉大好き主義者の焔でさえも引いているのだから。
「なんか…やめよこの話……流石に行儀が悪いもの…」
「先に話を振り出したのは日影でしょうに…」
「ほ、ほら美怜さん！箸を持って食べましょう？お代わりもあります

し！」
「私、箸が持てないのよ。これ、どうやって使うの？」
「えっとですね…ほら、ちょっと指失礼しますわよ？」
「賑やかだなぁ…」
いつもと変わらなかった食卓も、紅蓮隊の空間も、美怜が一人介入しただけで華が咲くように彩り、より賑やかに明るくなる。
彼女一人の存在感がここまで効果を発揮するとは思ってもいなかったのだが…まるで彼女の存在が、焔紅蓮隊の原動力にもなってるみたいだ。
そう言った意味では、ベルゼは本当によく一人で妹を守ってくれたものだ。ベルゼがあそこまで妹を大切に思い遣れるのも、美怜と一緒にいるだけで幸せそうだったのも納得がいく。
（お前の妹は、私達が守って行く……だから、もう安心してくれ……）
殺した側が思うセリフではないのは百も承知。
だが――ベルゼは覚悟の上で、そのうえで私達に託したと言うのなら、責任は持たなくては行けないし、守りたいと思うのもまた悪いことではない。
仲間なら、家族なら、それ位は当然だろう。
綺麗事？上等だ――罪やベルゼの想いも背負うと言うのはこう言う事で、況してや自分たちに託された以上はそれに応えるのもまた、兄の弔にもなりそれが救いでもある。
逆にベルゼはこれ以上妹の為に血で自身を汚すことも、罪を被ることもしなくて済むと言うのなら、ベルゼは救われたと捉えても過言ではない。
多くの死者はベルゼを許すなとも言ってるかもしれない、許されざるを得ないかもしれない。だからこそ命を以って罪を償ったとなれば、これ以上語ると言うのは野暮というもの。
ベルゼも何も、悪の中の悪という訳ではないのだから――
（問題は明日、鈴音先生にどう説明をすれば良いかが問題だが……ふむ、どうしたものか）
鈴音先生には既に連絡を済ませておいた。

明日の早朝には彼女が来るだろうし、今は忍務を終えて遅いと言う事も含めて、安全と万端な準備も含めて今日は休もうという結果となった。
……いや、どんな結果になろうと私達が望んだ事であれば、悔いはない。美怜を上層部に引き渡さない…これは下手すれば自身達がより上層部からして危険因子と判断される可能性はあるが、元々抜忍として命を狙われてる以上は警戒する事にも変わりはない。

そうこうしてる内に食事はあっという間に過ぎ、各々は疲労もあってか明日の為にもと就寝の時間を迎えた。
体力や精神力も随分と磨り減ったのもあって、皆は熟睡をしている。
…一人を除いて。
「……んん?」
夏を終えてから涼しくなったというものの、夜になると少し肌寒くなってしまうのは拭えない。
寒さでつい目を覚ましてしまった焔は、眠たげな目を擦りながら退かしてた毛布を手に取る…が――
「ん?美怜は?」
五人分の布団しかなかったので、詠と一緒に(詠が一方的に誘い)寝ていた美怜がいない。詠自身はそれに気付かずぐっすりと眠っているようだが…美怜と寝る時などは「甘い香りがしますわ♪」と甘い香水器が抱き枕になったような気がしていたらしいが、寝ている彼女は気付いてない様子だ。
「外にいるのか?」
ふと少しだけ不安になった焔は、颯爽と洞窟の出入り口に向かう。外からは月の光が照らし、夜空は綺麗な星で埋め尽くされている。森林地帯のここは都会や建物などない分、より空の明るさを感じる。これもまた大自然ならではだろう。

そうこうしてる内にと出入り口の近くには足を伸ばしながら尻をついて座り込んでた美怜が静かに読書をしている。
「こんな所にいたのか…相変わらず研究とやらに熱心なんだな」
「あら、焔じゃない。ふふ…中々寝付けれなかったの。文字を読んだり物事に集中すれば眠気も来るかと思ったのだけれど…環境が変わったせいか、中々に眠気が来ないのかもしれないわね。まぁ、その内慣れれば貴女達と同じ生活リズムに戻るでしょうけど…」
栞を挟みパタンと、春花に借りた薬物調合書を閉じる。分厚い本、借りたばかりだというのに半分もいってるのだから、美怜は本当に読書が好きなのだろう。
「まぁ、お前自身もあの家にいたんだし…いきなり引越しとなれば直ぐには難しいだろうな…」
「そもそも貴女達との睡眠時間も違うもの……まぁ、今日は刺激的な出来事が多かったのもあるし、貴女達がベルゼ兄さんを相手に一人も犠牲者を出さずに倒したのだもの…動いてない私と貴女達とで当然の結果だと思うけれどね」
「……お前は、本当に私達を恨まないんだな…」
「その話は終わったはずでしょう?」
「いやなに…そういう事じゃなくてだな、お前で初めてなんだ…前にも、とある悪忍の兄を半殺しにして、妹に恨まれ復讐をされ続けていた時期があってな…兄妹とはいえこうも違うんだなって改めて思い知らされた」
「貴女にもその様な過去があったのね…だから最初に恨むだなんて感情を押し付けてたの…それなら納得ね」
小路と旋風――あの兄妹は何方も焔の人生に置いて変えてしまう程の影響力を与えたものだ。特に小路に至っては影響という次元を超えて狂わされたと言っても過言ではないほどに。
一方で旋風は焔の人生よりも雅緋達が突き動かす原動力にもなった。そう考えるとあの兄妹とは避けては通れない何かがあったのかとさえ思えしまう。見えない何かの力に…。
「美怜も程々にしろよ?寝不足になって…では、朝が辛いだけだろう

し…私はもう寝るが…」
「待って焔、貴女と丁度話がしたいと思ったのよ」
　戻ろうとする焔を、美怜は腕を掴んで制する。
「なんだ、トイレか？それとも喉が渇いたのか？」
「此処に来たから基本的な生活ペースと事情は説明を受けたし覚えているわ。そっちの問題は心配ないの――」
「んじゃ何か？お腹が空いたのか？それなら明日までに」
「貴女はまず人の話を聞きなさい、その勝手な決めつけは致命的な点に繋がるわよ？」
　顰めっ面で叱る美怜に、焔は少しバツが悪そうに美怜の話を聞くことにする。少し冗談のつもりで言ってたのだが…いや、こういう時はきちんと話を聞くべきだろう。
「話ってなんだ？」
「春花や未来、そして貴女からも忍の世界や条理については聞いたわね。凡そ理解は示したし、同時に私達の家に侵入者が多く来たのも合点が行ったわ。そして今になって貴女達が此処へ来たのも、貴女達が私を捕えろという忍務を受けたのも……この世界には個性と呼ばれる忍の力に似た超常――超能力を扱える人間が８割もの人口で締めているのも…とても魅力的で、時に本の常識と違う点もあって、中々興味が尽きないわ…」
「そうか…それで？」
「……貴女が、いいえ…貴女達がどうして抜忍になったのかについて」
「？それなら話しただろう？私は…道元と呼ばれる学園のオーナー…分かりやすく言えば主を斬ったことで、抜忍にされた…。まぁ、怨楼血を復活させたアイツを許すわけにはいかなかったとはいえ、何とか食い止められたからいいものの…本当に散々な目に遭った…」
「ええ…だからこそ、私はその点について可笑しいと思うのよ」
　美怜の返答に、焔は一瞬で目を覚ました。
　何…だと？と、言葉を吐く前に美怜は話を進める。
「妖魔を倒すことが忍としての役目…その妖魔を復活させた道元とやらは大きな罪と責任を持つ事になる。それはそれとして…妖魔を倒

し蛇女の生徒たちの犠牲者を一人も出さずに救い出した貴女達が、どうして抜忍として罰せられたのかしらね？プラスマイナスゼロと考えれば、問題ないと思うけれど？」
「……それは、道元を斬ってしまった罪は重いからで…」
「そもそもの話、その時点で可笑しいのよ。反乱という罪は大きなものだけれど、忍としては一人でも妖魔を倒せる者が欲しいのでしょう？それなら貴女を罰する方が上層部側からしてデメリットだと思わない？それをあたかも使い捨てにして、貴女達を殺す様にさえ命じてる……ねぇ、本当に上層部は妖魔殲滅が目的なのかしら？私からすれば余りにも愚行で、その上に効率が悪すぎる…」
　美怜の口は止まらない。
「寧ろ逆に考えれば、道元とやらの野望を決死の覚悟で食い止めた貴女を賞賛するのが成り行きではなくて？それとも妖魔よりも主君が大事なのかしら？だとしたら変ね？焔が止めなければ被害は大規模でより損害を生み出していたにも関わらず……幾ら上層部といえど、それくらいは予想できて当たり前…いえ、遥かに想定できる内容だというのに…まるで何ともない様に貴女を抜忍にした」
「……何が言いたい？」

「今の忍の世界には妖魔殲滅とは違う、裏の目的が存在するって話よ。この不条理な世界には、大きな矛盾に謎が広がるばかり…そしてその矛盾は、嘘と真実を表すもの」

「!?」
　その話に、焔は心臓が射抜かれたような衝撃を受ける。まさか…自分たちよりも忍の知識が少なかった彼女が、自分達との会話を得た知識だけで、美怜自身はその答えに辿り着こうとしていた。
「妖魔殲滅が忍の目的…それも本当に上層部の狙いかさえ、不明ばかりね…。
　妖魔の存在自体が忍学校を卒業した者にのみ知らされること、その間は善忍と悪忍の抗争が絶えないこと、妖魔が生まれるケースが忍の

血によって生まれること、そして忍の目的が妖魔を倒すこと…
　私考えたの――だとするのなら、そこで幾つか可笑しな話が生まれてくると」
「おかしな…はなし？」
「まず、妖魔の存在が公に明かされてない…これ自体が大きな異常事態を来たしてるわ。妖魔によって忍が殺された数も被害も得体が知れず、忍の死者が今も妖魔によって続出されてることが事実なのであれば…尚更ね」
「どういう事だ…？」
「……生き残った妖魔はどこにいるのかしら？知能の低い妖魔が、人々に見つからずに公にさえ報道されない…これ自体が大きな意味を持ってるのだと私は思う」
「それは…妖魔を明るみになる事で、表社会や公共に大きな混乱を招くからだ。そして妖魔討伐の忍務が行き届くのも、その処理によるものだろう…」
「なら、なぜ今も妖魔が無くならないのか説明が付かないでしょう？況してや妖魔の目撃ケースさえ一般人からもないというのなんて、余りにも可笑しいも思わないかしら？いいえ…正確には知っていても他言しない者がいる。何にせよ、妖魔の存在を他言してはいけないんだものね」
「……」
　美怜の証言に、焔の心は少しずつ揺れて行く。
「次に妖魔の存在を他言してはいけない…これにも私は罠があると考える。確かに不確定要素もある妖魔を下手に公共に話すことは混乱を招くこともある。それについては納得が行く…と、思わせる口実だというのもね。
　逆に言えば、上層部はあの危険な妖魔という魔物を放置してる事になるんだもの。それだけでなく忍学生にさえ教えてはいけない決まりなんて……これもまた問題視される大きな点ね」
　忍学生が未熟な実力で妖魔を倒しに行く事を禁じてはいる。それも焔が説明した通り…現に両備も両奈も妖魔を教えられてないから

こそ、両姫の仇が妖魔ではなく雅緋だと誤解を生み、結果的に争いを生む形となった。
だが美怜の目は誤魔化せない。
「まず妖魔を倒すことを本当に考えるのなら、忍を一人でも多く妖魔殲滅に当てはめれば良い…。それを卒業するまで善悪の忍同士で無益に争わせる…学生とは言えど、善忍と悪忍が争う必要なんてあるのかしら？いいえ…そもそもの話、争わせる余裕なんてあるの？忍の数なんて無限にあるわけでもない…限られているのに、あたかも平気で使い捨ての駒の如く非効率的で消費が激しいやり繰り…妖魔殲滅が遠のいてさえ感じるわね」
「あっ……」
そうだ、と焔はここである事に気がつく。
蛇女にいた頃の焔は、善忍こそ私達の天敵であり悪忍としての宿命だとばかり考えていた。
だが抜忍となりアルバイト生活が地獄の様に始まってた間中、鈴音先生に言われるまで忍の本業が妖魔殲滅だとは知らなかった。
学生を卒業するまで教えない決まりにしろ、どうして…
「「では何故、初めっから目標を妖魔にしなかったのか――」」
此処で焔と美怜の台詞が重なる。
驚く焔を他所に、美怜は口角をゆっくりと釣り上げて微笑を浮かべる。
「あら、重なった…焔、もしかして貴女も薄々感づき始めたのではなくて？」
「いや…まだ……」
「そう、なら続けるわよ。幾ら未熟な忍学生を妖魔に当てず実力を育てるとは言えど、善忍と悪忍の抗争をして命を落とす者が増えるのは承知のはず。…いえ、善悪同士で命を落とす位なら妖魔と戦うべきではないと、私も最初は考えたのよ。でも…それで善忍と悪忍をわざわざ争わせる必要性なんて、それこそ何処にも感じられないわ。そもそ

も弱い忍を教育してこそ忍養成機関が成り立ってるものだし。
妖魔とは関係なく忍同士をぶつけ合せて命を落とす……貴重になれるだろう戦力を雛に孵化させる前に根を摘む行動。本末転倒ではなくって？それこそ妖魔を倒す前に、妖魔が脅威になりそうなものを敢えて減らしてる様にさえ感じられるわ」
焔達の抜忍に道元の野望、妖魔の存在、忍の目標、善忍と悪忍の抗争…この不条理だらけの要素を、美怜はパズルのピースの如く埋めていき、整理をして、砂浜でゆっくりとお城を立てる様に、推理して行く。
「なら結果論として言わずとも、妖魔の存在を隠す真似はしなくたって良い…する必要性がなくなるわけ。では、なぜ妖魔の存在を敢えて隠してまで、卒業してからいきなり教える形となったのか…ふふふふ、未熟な忍学生を下手に妖魔討伐に向かわせること以外に、何か他の事を隠してると思わない？それとも、違う思惑があっての事かしら？」
「……だとしたら、それは私たちに知られてはマズイことになるのか？」
「可能性は無いわけではないわ。でも大方、人の隠し事なんてバレてはいけないから隠すのでしょう？最初っから隠す必要なんて無ければ、こんな遠回しなことしなくても良いだけのこと…違わない？」
「…なんだか、美怜の話を聞くと…まるで…」
見えない糸で自分たちは動かし踊らされ、妖魔殲滅とは程遠い…何かに向かっている気がする。
「……ねぇ焔、話の途中で悪いのだけれど、確認させてもらうわね？貴女達は蛇女という学校で忍同士と戦ったりはした？」
「ん？あ、ああ…基本訓練だが、時に命を落とす様な過酷な修行を受けていたよ。医務室に運ばれてきた忍も後を絶たないくらい…」
「そう…そして、焔達は怨楼血が復活するまでこの事を知らなかったのね？妖魔が生まれる現象も、妖魔の存在も…」
「そうだが…話が見えないぞ？お前は、何をいきなり…っ」
美怜の質問に答えた焔に、美怜は確証たる微笑みを見せた。

「なら、可能性は確定にまで上昇したわ――上層部は、私たちに何かしようとしてるってね」
「何…っ!?!」
一体どうして、今の会話で美怜が確証にまで至るほどになったのか、先が読めない。
「妖魔が生まれる現象は、忍同士の血によって生まれたと言ってたわね？そこには善忍と悪忍による抗争…そこから妖魔が生み出される。これだけでも忍同士の抗争さえ辞めさせれば妖魔は生まれないのに…では、どうして蛇女には妖魔が生まれなかったのかしら？忍同士が訓練で争い血が溜まるケースなんて、沢山あったはずよ」
「…はっ！確かに！」
蛇女は悪忍の中でもトップクラスに入るほど有名で名が知れた学園。入校希望者はごまんといる上に半蔵や正しき善忍よりも、蛇女の生徒はかなり数多く存在する。
どうして気付かなかったのだろう…忍同士の血が妖魔を生むのなら、蛇女の訓練で血を流すあの場所でも妖魔が湧いても可笑しくはなかった。なのに…何で？
「つまり、善忍と悪忍の抗争の中でのみ妖魔が生まれる現象が発生する。では…それは一体何故かしら…ね？」
「…そういえば、お前の家にも…」
「ええ、妖魔同士で同類を増やしていたわ。でもそれは…互いに傷を出し合ってこそ成り立ったのだもの。そもそも妖魔さえいなければ増やすことができないし…で、私達の家に住んでいた妖魔は好戦的ではなく、人を傷つけようとさえしなかった。何方も温厚、そしてベルゼ兄さんは妖魔を従えることができる上位者――さて、ここから本格的な推理といきましょうか。
温厚な妖魔が生み出した妖魔は変わることなく遺伝子が引き継がれたかの様に温厚で、貴女達の知る妖魔は至って好戦的で凶暴…最初は、家にいた時の考察では環境による問題だと考えていたけれど、ある意味その条件に当てはまるわね」
「オマケにベルゼを除けば戦力もそこまで高いわけでもない…でも、

外の世界の妖魔達が凶暴ということは…善忍と悪忍の…人と妖魔が生み出した個体に差が出るというわけか？」
「それも当てはまるわね…でも、それだけではないでしょう？善忍と悪忍は相反する存在。貴女の話を聞く限り、善忍と悪忍は互いを敵と見なし殺し合いをしていた…では、そこから生まれてくるものは憎しみ…。
　つまり妖魔達が凶暴なのも、妖魔が生まれる本当の現象は??」
「…っ！まさ…か！いや、それだと私達は…!!」

「憎しみに埋め尽くされた忍の血が妖魔を生み出したのであれば、彼らが凶暴になるのは当然の理――つまり、妖魔が生まれる原因は、善忍と悪忍による抗争」
　蛇女で忍の血が大量に溜まるにも関わらず妖魔が生まれないのも、美怜の家に住み着いてた妖魔が凶暴ではなく穏やかだったのも、妖魔が生まれる本当の現象も…

　憎しみや敵対によって彩られた、ドス黒い血。

「忍学生を卒業するまで妖魔を教えてならないのは…学生が知ってしまえば、善悪が争う必要がなくなってしまうのを悟られるから。いいえ…争わせる事が出来なくなってしまうから。隠す事も、違う思惑も、どちらも二つとも絡んでくるわね」
「そ、それじゃあ私達は一体、何の為に戦ってきたんだ!?半蔵との戦いも、一体…私達は、何をもって戦ってるんだ…??」
　雪泉達が悪忍を憎み復讐心でいた事も、焔達が悪忍として善忍を倒すべきという想いも、全ては作られた思想にして妖魔を生み出す原動力だったのだ。
「それはこっちが聞きたいほどね。逆にどうして…今までこの事に気がつかなかったのかしらね…それが不思議に思えるくらいに。
　…その答えは、貴女達の強い感情や信念が、敢えて視野を狭め考えを固定させ、そう思わせなくするようにしていた…とすれば、無理も

ないわね。それだと貴女達も含め、何も知らない忍も…勘付いてる忍も、今までのことが全て否定されてしまうからだものね」
図星。
美怜は何から何までお見通しなのだろうか？外の知識に疎かった美怜が、焔達が知識を与えただけで、ここまで上りつめた。
「焔、貴女が教えてくれたのよ。妖魔のことも、忍の世界も。だからこそ、私もここまでの答えに辿り着けた…そう考えると、本当に貴女達と出会えたのが幸運……いいえ、それもまた運命なのかしらね。ベルゼ兄さんが託してくれた相手が貴女達で良かったと思えるわ…♪」
美怜は心底嬉しそうに、推理が解かれていく事による快感と開放感に至福を満たしながら語っていく。本当に末恐ろしい妹だこと…。
「さて、ここまで来れば分かるわね焔…。だとすると、妖魔がより効率よく的確に殲滅に近づける方法…それは、忍の争いを無くせばいい。これこそ、尤も理に適った方法だと思わない？いいえ…寧ろ平和的で殺伐としないわ」
「待て美怜！確かにお前の言い分は分かる、でも…！忍には妖魔以外にも人々の影として求められているんだ…表では流せない仕事、何より影で人を支え生業とし…」
「今の世代、ヒーローという職業があるのだから忍に頼らずとも良いと思うのだけど。今は何やらごちゃごちゃと騒がしいこともあるし、忍とヒーローが手を組むだなんて最近な事が増えてるだろうけど、妖魔以上に人を脅かすことって何かしら？」
これではっきりした。
本当は忍など、この世に存在しなくても済むのだと。少なくとも、忍同士の抗争は、禁忌と呼ぶに相応しいほどに、してはいけない事だと言うのも。
「…そもそも、妖魔の存在は思想によって形や個性が作られるの。ベルゼ兄さんは暴食の罪を元にして生まれたから…そうね、旧約聖書のキリスト教の悪魔…蝿を基にして生まれている。怨楼血も同じね、日本神話における大蛇を基に生まれた…妖魔には、ソースが必要なの。そして妖魔達は欲求を満たす為に行動をする、これはティオ・ディア

ボリクスが見つけた書物ね」
「ティオ・ディアボリクス？」
「ええ、書類や日記によって存在だけは知ったのだけれどね。彼は上層部から危険人物として全国指名手配犯され忍から逃げていたそうだけど…彼は人間や妖魔を実験して凡ゆる真実に辿り着こうとしていた…まるで私とそっくりね。もしかして、ティオ・ディアボリクスは知ってしまったからこそ危険人物扱いされたのかもね。こればかりは仮説に過ぎないけれど…」
猫は好奇心で死ぬ。
ティオ・ディアボリクスは重大な真実に到達してしまったからこそ、忍達も知らない妖魔についての成り行きを書類として残していたのでは？そしてそれを、あの家に住んでた美怜は知ってしまった。
「血は養分、絶叫は子守唄、色欲は鎮魂の役目…妖魔は三大欲求を満たそうと感知して生きている。そしてその血は何も忍だけではなく妖魔でも満たせれる……これで分かったかしら？妖魔という存在事態は、別に危険なわけでも無いの。寧ろ環境が優れていれば、有益な獣として人々に利益を齎せることも可能だそうよ？大昔、人々を守る為に妖魔を生み出した一家があったらしいわ。『天咲家』という忍家系にね…」
それが陽花と漆月と同じ家系を表しているのは、流石に知る術はないそうで。
「つまり妖魔は本来なら貴女達が思う程、必ず滅ぼせなんてものではないの。まぁ、流石に人間を良く思わない妖魔がいるのも事実ね、そう考えると妖魔殲滅という目標は、否定こそできないわね。少なくとも、害意のない妖魔までは殺さずとも済む話だし」
「…お前は、物知りなんだな」
「知識は刀にも盾にもなるのよ？それこそ自身の身を守ることも、仲間を守ることにも繋がるの……無知は罪という言葉は、知ろうとしないことを指してることだと私は思うけどね」
刀と盾という言葉に、どこか飛鳥の顔を思い出す。
最強のライバルにして、最強の友達。

常に死を隣り合わせに、悪を蝕む太陽のような彼女に、ある意味救われた焔は、少し顔を俯ける。
「話を戻すわよ。妖魔の存在を公から隠し忍学生にも敢えて教えず、善忍と悪忍を憎しみ合うように争わせ、妖魔殲滅という聞こえの良い言葉で忍に目標を示し、非効率的で忍の消耗を激しくさせる上層部…
これだけはハッキリと理解できたわ――上層部は、貴女達忍と妖魔に何かしようとしている」
それは妖魔殲滅とは程遠く、何か違う思惑が絡んでくる。
それは一体何なのか？
「…妖魔にも？」
「ええ、彼らを生み出してまで忍が戦うんだもの。では…上層部は妖魔にも何かをしようとしてる。わざわざ忍にだけ何かしたいのなら、妖魔と戦わせる義理はないわ。でも…その思惑に妖魔が絡んでくるとなれば、倒すべき対象を私達は調べる必要がある。そう思わない？対話さえ望もうとせず、見つけ次第殺そうとする…だからこそ、妖魔の謎は多いばかりでなくて？貴女が倒してきた妖魔にも、もしかしたら会話ができた妖魔がいたのかもしれないわ」
そう考えると、焔達が妖魔について詳しく知らないのも無理はない。いや…だが妖魔が喋ることなど、知能の低い妖魔が果たして…
「私はベルゼ兄さんだけが人語を喋れるような特別枠だとは思っていない。会話が出来るのであれば引き出すことで有益な情報が掴めるだろうし、場合によっては……ふふ、今までは私個人による分析に過ぎなかったけれど、貴女達と出逢って仮説が裏付けられたわね」
「もし…妖魔と私達を争わせるのが目的だとすれば…ただただ犠牲が産むばかり…」
「それどころか忍の少子化現象に高齢化も進んでいくわね。そしてやがて…妖魔殲滅を目論むどころか、忍が殲滅する日が近づいて来る…そして忍が消えてしまえば妖魔に抵抗できる者達はなくなり…今はより混沌と壊滅的な惨状となるのは確かね。まっ、私は名も知らない誰かの言いなりになんてなるつもりはないから、私は紅蓮隊の方が性に合ってるわ。

ベルゼ兄さんもそうだけど、私は何者にも縛られずに生きていく…そこに善も悪もない…自由な発想こそ、明日を切り開いていくのだとね」

「……」

「そういえば前述した時に倒されなかった妖魔はどうなるのかについてだけど…もし本当に容赦なく人を襲う化け物だとすれば、自制も効かずに公に場を出て被害が出てしまっても可笑しくないし、幾ら上の人間がお膳立てだの言い訳を並べても、知らない人間が居ないというのは些か不自然ね。

そこで私考えたの…知能が低い妖魔は何者かによって敢えて隠されてるのではないかと。こればかりは流石に考え過ぎかもしれないけれど、その容赦なく人を襲うと言われてるその妖魔が、忍にだけ狙いを定めるかのように集中して攻撃するのには裏がある筈よ」

言われてみれば、と此処で焔は考える。

妖魔を処理するにしろ失敗したにしろ、人を容赦なく襲うのが妖魔なのであれば、なぜ今まで公共の場で襲われずに居た？

そもそも、あれほどの凶暴な妖魔がどうして忍にだけ狙うのか？忍は妖魔を倒すことが目的として存在してると言った。

だからなのだ――今まで妖魔が忍だけを狙っていたことも、一般市民でさえも妖魔を見かけないのも…

そう上手く思考や思想を誘導させられていたことを、不自然に思わせずそれが自然だと考えさせていたことも。

「疑問なんてない、寧ろ忍が妖魔を倒すのが当たり前であり、妖魔は当然のように現れる。そういう思想を固めた概念を植えつけられ、あたかもそれに不自然さえ感じさせない…人は其れを奴隷根性と呼ぶ。成る程、忍は駒や手下などと呼ぶけれど、奴隷とはとんだ皮肉が効いてるわ。

では…妖魔はなぜ一般市民と忍の見分けがつくのかしらね？ベルゼ兄さんでさえ、見分けが付けれなかったというのにね。それなのに、人語を喋れない見かけ次第破壊活動を繰り出す妖魔が、どうしてかしら??」

焔はもう口を開かない。
美怜はどこまでも知的に溢れ、探求し、真実を追い求める。それが、彼女の欲求であり突き動かす衝動。
「……ねぇ、妖魔を従わせてる者がいると考えれば、この事象も考えられるのではなくて？」
「それが私たちが真に倒すべき敵になるのか？」
「あくまで推測に過ぎないけれどね…妖魔の生態に、貴女達の知らない知識や私が得た知識、そのどちらもない新たな生態系や真実があるとすれば、仮説の可能性は消えることにもなるけれど……でも何となく辻褄が合うわ」
確かに、なんて思ってしまうほどに。今までの美怜の仮説や真実、推理は全て辻褄が合う。
「そこで問題よ焔…これまでの事象も考えて、妖魔を従わせては忍達を争わせ、妖魔と忍の殺し合いという舞台を作り上げ、盤上から見渡しそういう仕組みへと誘導できるのに適したものって、何か分かる？」
そこで焔は、我に帰り全てが気がつく。
美怜がたどり着いた答えに、焔は全て点と点が繋がるように、彼女もまた美怜と同じく奴隷根性から放たれるように口を開いた。

「…上層部!!」
「そう、正解よ。上層部が私たちに何かしようとしてるのが確かだと証明できてる以上、その可能性はあるのも事実となる…。まだまだ謎と不安定要素があるけれど、ここまでチェイスできたのであれば上出来じゃないかしら？
まぁこんなもの、ちょっと観察さえすれば簡単に分かることなのに…やはり内側では気づかないことも、外側の私からすれば見方が違うから分かりやすくなるのかしら？何にせよ、こればかりは焔紅蓮隊に入ってる以上、放っておくわけにはいかないものね」
美怜もここまでくると早くも頼もしささえ感じてくる。流石はベルゼざ自慢するだけの妹だ。本当に、忍務で美怜を渡さないと決めて

正解だった。
「…いや、道元や伊佐奈のように腐った上の存在が居たんだ。居ない事が不自然だというのもたった今思い知らされた…。美怜、一人でここまで……推理や仮説でも話してくれて感謝する」
「私は思うべき事、真実を話したまでよ」
「もし上層部がそうだとすれば…いや、でも待てよ……上層部は妖魔が同類を増やすことをどうして話さなかったんだ？知らなかったのか？それとも……鈴音先生からは話は聞かされてもないしな…」
「……その鈴音とやらが誰かはさておき、私の家は侵入者である忍が情報を持ち帰ることは出来なかったわ。そして妖魔についての生態系も、あの家だけは誰も知らなかった。それってつまり私の家を知らなかったから、その知識について触れれなかったのではなくって？上層部の考えが不明な以上、下手に動くことも出来なければ謎ばかりが深まるし、考察が山というほど浮かんでくるけれど…これ以上の追跡は現段階では難しいわね」
「それでも大きな進歩だ、このことは詠達にも…」
「待って、これは二人だけの内緒にしておきましょう…？」
「…？どうしてだ??」
「下手に情報を与える事は致命的な点にも繋がりやすいし情報漏洩になる危険性も高いわ…それに…あの子達はまだ研究対象だし」
「研究対象ってお前なぁ…まぁ、お前の場合は調べたいって意味なんだろうけど、アイツらは口は堅い。おまけに疑いなんて…」
「疑ってるわけじゃないの、単にあの子達はまだよく分からないだけ…情報は有限よ。詠はどこか母性的というか、過保護というか、ベルゼ兄さん味を感じるけれどね…ふふ、気に入ってもらえてること自体も嬉しいし、こう見えても貴女達のことは信頼してるのよ？じゃなきゃ付いてこないもの…」
　そこまで言われると何処か照れくさくなるが…気に入ってもらえてよかったのは此方も同じだ。
「さて…と。すっかり夜も遅くなったし、私も眠たくなってきたわ。やはり複数の問題を解きほぐしていく作業は知的好奇心を掻き立て

られるわね、これもまた醍醐味というもの…。私は寝るけれど、このことは他言無用で…また、何かあれば話はするから…ね？」
「お前がそこまで言うなら分かったよ…私もこの事は誰にも言わない。それに…お前がどう考えてたり、何をしようとしてるのかも見てて分からないことだらけだ私は…」
「あら、人の気持ちなんて誰もわからないし…分からないからこそ面白いのではなくて？その未知に興味を示すものもいれば、畏怖する者もいるけれど…」
「…やっぱりよく分かんないな」
「それでこそ興味が示すというものよ…昔、河豚に毒があると理解していながら毒の除去も知らずにどんな味か食べてみたいと思う欲求と同じように」
「凄い例え方だな…」
「まぁ何にせよ、ここは興味が尽きないことばかりが連鎖的に起こりうる…だからこそ素晴らしい。
　私はね焔、この不条理な世界の謎を解明するだけでなく、貴女達と共に目的を歩むつもりでいるわ。
　だから…目的と共に貴女達のことや外の世界の常識、知識、情報も吸収していくつもりよ。改めて、宜しくね――」
　ニコッと満面な笑みを浮かべた美怜、それは彼女が偶に呟く「感情がない」と言ってた日影に似た無感情とは正反対の、明るい笑顔。それは本当に嬉しそうに、楽しそうに、そして…ベルゼ兄さんが望んでいたその笑顔は、本人でさえも自覚がなく、それでも闇夜の中でも美しいくらいに輝いていた。
　そんな彼女が見せた一瞬の輝かしい笑みを向ける美怜にムギュッと、つい反射的に焔は紅蓮隊のアジトへ戻ろうとする後ろ姿を抱きしめる。
「っ？焔…？どうかしたの？」
「ああ…此方こそ改めて宜しくな、美怜――私は、これから先はお前の命も背負って守っていく…」
　それは、自分もまたベルゼが役目を全うしようとしていたように、

焔もまた純粋に美怜を大切に想いやる。
嘗て悪忍として蛇女に在籍していた冷酷無比の絶対強者と比べ物にならないほどに柔らかく、満面な笑みで言葉を返した。

焔紅蓮隊の日常は、より明るく希望に満ちていく。
そして少しずつ、京都へと赴く日もまた近づいていく――

２１０話「まさかの再開」

早朝――日の出が登り太陽の光と共に、小鳥のさえずりが森の何処からか聞こえてくる。
焔紅蓮隊の朝は早い。小鳥の鳴き声を目覚まし代わりとして目を覚まし、朝の準備を抜かりなく行う。
「んん…」
ふと深い眠りから覚めたかのように、眠たげな目を擦りながら、焔紅蓮隊の年少たる美怜は眠気を何とか推し堪え、枕の上にあった眼鏡を装着する。
「あら、お目覚めですか美怜ちゃん？」
既に朝食の準備に取り組んでいる詠は、母親のように明るい笑みを浮かべながら沸騰した鍋から箸で茹でた野草を皿に乗せていく。どうやら焔も日影も、未来も春花も起きているようだ。
「貴女達、随分と早いのね……今何時かしら…」
「この時間帯は朝の５時半、私たちは兎も角、美怜ちゃんは少し厳しかったですか？焔ちゃん達は朝からランニングや軽いトレーニングをしてますし…美怜ちゃんを起こさないようにと気遣ってくれてたんですよ？」
「起きて早々に体力を発散させるなんて……随分と脳筋なのね……起こされてやれと命令されても嫌だと断固拒否させて貰うけれど」
「あはは……美怜ちゃんは体を動かすのは苦手ですか…？」
「体を過激に動かせたりするのは苦手なのよ…健康管理として走るのは体に良いと聞くし、そういう目標があるのなら無理しない程度に行えるけど…生憎此方は長年インドア派で身体を動かす暇があれば本を読んで知識を深めていたものでね、体育会系との相性は悪いと思う

わ」
思うというよりほぼ確実と断言しても良いだろう。
美怜は愛読家――体を動かすより知識を得ることが有意義だと思っている。
何だったら、なぜこんな事までする必要性があるのかと質問を投げかける位だ。
「詠は調理担当だから、無理に付き合わなくても良かったのかしら？」
「無理だなんてそんな…私も焔紅蓮隊の一員として怠ける訳にはいきませんし、その分の努力は惜しまないつもりですわ♪」
「ふぅん……貴女は焔のような脳筋と言うよりも、努力家なのね。余計なお節介焼きが大好きな、無駄に世話焼き上手で苦労性を抱え込むお人好しの努力家…と言ったところかしら？」
「お節介焼き…でしょうか？と言うよりも随分とした言いようですわね……」
「妖魔であるベルゼ兄さんでさえも受け入れようとしたり、敵対同士である兄妹を倒したくないだなんて…お節介焼きやお人好し以外になんて言葉が当てはまるのかしらね？ふふっ…幾ら上層部の言うことが絶対とはいえ、忍務に私情を挟み、あの場で兄さんを倒したくないだなんて、かなり異質だわ…」
「…私達は元悪忍であり抜忍とはいえ、忍としての志は捨てていないですし、かと言って何者にも縛られる気はありませんわ。其れは美怜ちゃんもご存知でしょう？」
「ええ、そうね。だからこそ私は此処に居る…寧ろ其れで良いわ。それが、貴女だものね詠」
洗い物も終わり、調理も終えた詠に美怜は語らいながら冷笑を浮かべる。
詠は何処か美怜と似てる部分が多い。
性格や思考はさておき金髪といった外見的容姿や、誰にも縛られず己の意思や自由に忠実、志を持ち歩むべき道に進む。
そして詠と同じく案外食欲が旺盛だったり、笑顔とは真逆のドス黒いナニカ、意外とパワータイプな事も、毒舌にして饒舌な口振りも、彼

女二人はとても似ている。
　詠に限った話ではなく、春花との共通点も多かったり、日影のように感情表現が苦手、相手の感情や心理を読み取る点も苦手な場面も存在するため、案外焔紅蓮隊達の個性が寄り集まったような少女なのだ。
「まぁ暗い話はやめて、ご飯の支度をしましょう！そろそろ焔さん達が帰って来る頃でしょうし」
「今の何処が暗い話なのかはよく分からないけれど…まぁ良いわ。丁度食事が出来上がったのだし。……ところで、詠が持ってるその透明色の箱は何かしら？」
「ああ、これは貧民街の方々への配給物ですわ。食べれる野草は沢山あるので食材の費用は気にしなくても済みますし、これでも足りない方ですが…」
「ひんみんがいの…？どうしてまた？」
「貧民街は私の生まれ育った故郷なのもありますし、沢山の方々から恵まれ救われたのです！それに、貧民街には食料すら手に入れる事が難しく、飢えに苦しむ子供達もいますの…最近はバイト三昧でまともに支給できなかったので、久々にと…」
「…それは、貴女が故郷に恩返しをしたい気持ちも含まれてるのでしょうけど、それをする義務が貴女に課せられてるのかしら。
　そもそも、詠にとってその子供達とは何かしら関係があるの？血縁？それとも友人がいるのかしら？」
「いえ、そう言う訳では…」
「だとしたら何故、そこまで見知らぬ他人の為に善意を尽くすのか…益々不可解だわ。食料だって有限、他人に渡すよりも自分達が独占する方が遥かに生き延びやすくなると思うけれど？」
「……美怜ちゃんには分からないかもしれませんが、貧民街の人達は皆んな過酷な環境に身を置かれ、誰にも手を差し伸べられず蔑まされ、ひもじい思いをして生きているんです。
　ですから、同じ境遇者である私にとって見捨てるなんて真似は出来ないんですよ」

詠にとって貧民街とは、言うなれば故郷であり何もなかった自分に親切にしてくれた救いの場でもある。
昔は孤児院などにも通ってはいたのだが、嘗て自分にあそこまで優しくしてくれた恩者の為にも、こうして慈善活動をしているのだ。
それで少しでも、恵まれない者達が救われるのなら、自分の身も安いものだと。
「ふぅん…それは貴女の言うエゴなのかしら。利益など齎さない無意味に等しい行動のようなものを感じ取れるけれど、其れが貴女のしたいことであり其れで得をするのなら、良いのかしらね。何にせよ、貴女の性根は余計なお節介を焼くのが好きだものね。詠のその行動のお陰で私が生きていられる…受け入れられてると考えると、荒唐無稽な貴女の行動も、強ち間違いと否定するのは浅はかではあるわね。まぁ、何にせよ私達に迷惑が掛からない程度なら問題視されないし、良いんじゃない？やはり私にはよく分からない心境だわ」
「そうですわ！今度貧民街に行きましょう！美怜さんもきっと、考えを改めてくれますわ！」
「考えが改まるかどうかはさておき…」
「おーいお前ら、今戻ったぞ！」
などと会話をしてるのも束の間、洞窟の入り口から焔の声が耳朶を打つ。
振り向くと、汗水垂らしながら爽快そうにしてる焔が帰ってきた。後ろから空腹で倒れそうな未来、クールに無表情で淡々とペットボトルの水を飲む日影、タオルで汗を拭きながら一呼吸する春花、何方も訓練から戻ってきた様子だ。
「あら皆様、お帰りなさいませ、朝食が出来たところですわ♪」
「やったぁ…！もうお腹ペコペコだよぉ…早く詠お姉ちゃんの料理食べたーい!!」
「あら美怜ちゃん起きてたのね。どう？昨日はよく眠れた？」
「ええ、思ったよりも。それにしても貴女達はよくこんな朝早くから体を動かせるわね」
「どうだ美怜？お前も紅蓮隊の一員なんだし、これからトレーニング

でも始めるか？」
「結構よ、私は体を動かすだなんて柄なタイプじゃないもの。ある程度、パフォーマンスや体の動き方さえ学べば上々だから」
「それだと儂のようなタイプやな」
帰って早々に会話が弾み、賑やかになる。普段もそれほど静かというものではないのだが、一人仲間が増えたというだけで、やはり環境と共にコミュニケーションも増える。
特に美怜は誰にでも壁を隔てることなく会話を深めるタイプなので、こうして騒がしくなるほどに賑やかしくなるのは必然なのかもしれない。

それから軽い談笑を交わしながらの食事は、有意義であり愉快な気分だった。朝食は相も変わらず野草のお浸しに野草で出汁をとったスープなど、野草づくしだった。
野草ばかり出る食卓に、美怜は「肉や魚は？」との事から、詠から「贅沢過ぎます！」とのことで、それに対する美怜は「何処が贅沢なのか具体的な話を…」などから会話がエスカレートし、今となってはあの詠が頭を抱え込んでいる。
「で、ですから！お肉や魚といった食物は高価なものでありまして…!!もやしでさえご馳走なんですよ!?最近はもやしの値段でさえ上がっているのです！もやしだけなんです、庶民の味方は！」
「でもそれは貴女の価値観よね？寧ろ肉や魚は人体の血や骨となり力の源になるのよ？確かに此処の環境を鑑みた辺り、金銭的な余裕がないのも野草ばかりが出るのは納得したわ。
けれども、だからと言って野草と言ったものばかりでは体は改善されず、肉体的にも栄養的にも失調を引き起こすことだってありうるのよ？そのせいで戦いで本来の実力を発揮できず、死んでしまったなんて話になったら、責任は取れるのかしら？」
「それは只の言い逃れに過ぎません！良いですか？私は貧民街でも小

さい頃から贅沢などせず、野草やもやしだけで今こうして生きており…」
「貴女が体験したからと言って皆がそうなるとは限らないわ。それなら野草やもやしと言ったアレルギー反応を持つ人間がいたら同じことを言えるの？
　贅沢などせずといえば、そこに妖魔も入らなければ可笑しいわね？妖魔も私からすれば食べ物にもなるから、貴女達も妖魔の血肉を貪り、贅沢をしないようにしなければいけなくなるけど」
「それとこれとは話が別ですわ!!?それに美怜さんがイレギュラーなだけであって！」
「あら、貴女も大概イレギュラーよ？況してや幼少期に空腹を凌ぐ為に土を食べてお腹を壊したなんて、逆に病気を貰わないだけ頑丈だと思うけど？
　そもそも平等性と貴女の言う価値観を照らし合わせれば何ら不変はないし、話を別とするのなら私達は肉や魚を食す権利はあるわよね？何にせよ、貴女と私と他の子達とではお腹の造りが違うものね。貴女が言うのを簡潔にまとめれば…『私は野草食生活出来たのだから皆んなもそうしろ』と押し付けてる様にも見えるけど…」
「ぬうううぅわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー!!!あ、ああ、あんまりですわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
　あの詠が半泣きしながら頭を抱え込んで喚いてる。こんな言い合いで負かされた詠は生まれて初めてみた。美怜はそのまま綺麗に平らげた後、湯気が立った野草のお茶をズズズと啜る。
「詠お姉ちゃんが泣いてる!?」
「日影さん…未来さん……贅沢って…何なのでしょうか…？」
「あかん、詠さんが壊れてきてる。美怜さんちと言い過ぎやで」
「？私は事実を述べたまでよ？それより話は続くわよ。そもそももやしが庶民の味方という定義について…」
「美怜ちゃんって、やっぱり私と似てるというか…絶対にS寄りね……これ以上オーバーキルしないの」
「？おーばーきる、とは何かしら？未来のいうネット用語というやつ

？」
「そ、そーだ！朝食も終えたことだし訓練でもするか!!」

これ以上この空気はマズイと判断した焔は、リーダーとしても役を立つべく考案する。
美怜は確かに誰とでも馴染みやすいとは言った…然し其れは良くも悪くも存在する。ぶっちゃけ美怜はどちらかといえば秘立蛇女子学園の選抜補欠メンバー、芦屋と同じく会話になると何かしらのトラブルを招き起こす要因にもなる。昨夜のように彼女の知将っぷりは感嘆を通り越して頼もしさを感じてはいるのだが、こうして話し合いになると喧嘩や言い争いになってしまうのである。
芦屋と違う点があるとすれば、美怜は悔しいことに真実であり間違ったことを言ってるわけではないのだが、芦屋は単に胡散臭い宗教の話をして訳のわからない地雷を踏んでしまうからである。
そう言った意味では、芦屋より美怜の方がかなり厄介な気もする。
「……貴女は戦うことだけでは物足りず、暇があれば訓練と…どこまで脳が筋肉で侵されてるのかしら」
「何だと!?暇があれば修行する事に何が悪いんだ…?!」
「その思考自体が既に脳筋のそれと同じと言ってるの…はぁ、悪いけれど私はそう言った類に興味はないの。そもそも訓練を経てどのような効果を得られたというの？そもそも訓練の内容は？」
「効果はあるさ！例えば４８時間火渡りレースとかで熱による耐性が身についたし、蛇女に居た頃は水遁の術を５００時間もやらされたり…」
「効果は愚か、時間さえ無駄にする生産性の薄い訓練ね。益々興醒めしてきたのだけれど…」
特に焔と美怜は正反対な部分が色濃く出ている。
考える暇があるのなら訓練に慎む焔
訓練する暇があるのなら研究に慎む美怜
相反する思考と性格は、正しく熱と冷という温度差を表現している。何方も欠かせないものではあるが、訓練が嫌いと言う美怜の主張

は何処か蛇女選抜の引きこもりを連想させる。
「ていうか、アンタは戦えるの？自分のこと忍だって言ってたけど…」
「試しにこの大鎌で貴女の首を刈って見ましょうか？」
「ちょっ!?嘘でしょ?!
!?」
「あら、冗談よ？」
「やっぱりアンタって可愛くない!!」
　美怜は武器格納庫に閉まってあった黒とピンクの色合わせた大鎌を持ち、未来の首に触れる。美怜曰く、あの家でもしベルゼ兄さんが居ない時に侵入者と出くわした際に護身用として持たせていた忍武器だ。
　重量感は詠の大剣と同じで、何方かと言うと見かけによらずパワーファイターな部分が色濃く出ており、敵連合の抜忍・鎌倉や死塾月閃女学館の四季も武器は鎌を扱っている。
　美怜が言うと冗談が本気で聞こえたりするので、分かりづらい。
「でも武器を持ってるって事は、忍と闘ってたりしたの？」
「いいえ、私は生まれて一度も戦った事ないわ。何やかんやと、ベルゼ兄さんがやってくれたから。尤も、私の場合は観察を得意とするし。中にはいつの間にか死んでた忍もいたわ」
　その侵入者である忍達が、抵抗もしない美怜を傷つけられなかった事自体が驚きでもあるものの、彼女自身が生まれて一度も戦ったことが無いのであれば、この先不安が残らないといえば嘘になる。
　焔自身、たしかに守るとは言った――然し其れはあくまで自身の範囲内にいる場合と、仲間が危険に晒された時にのみ。
　永遠に庇い守り続けるほど焔もお人好しではない。自衛の身を身に付けるためにも、やはり訓練は必要不可欠なようにも見える。
「美怜、今の話を聞いた限りだとやはりお前には訓練をしなくちゃいけないと益々感じさせられるのだが…」
「絶対にしない――とも言わないけど。私はまだ貴女達のことをよく知らないの…入って早々にいきなり過激な訓練をさせ、死んでしまっては元も子もなくってよ？
　お生憎…私はまだ、死にたくないの」

「死なない為にも最低限の努力は必要だろう？やはり此処は焔流訓練の…」
「そもそも死なない為の最低限の努力が必要であれば、何も訓練だけじゃなくても良いわよね？そこまで貴女が肉体労働を強いることへの拘りがイマイチ理解不可解なのだけれど」
「理解なんてしなくて良い！訓練を通せば分かる！」
「貴女はまずコミュニケーションを磨くことをオススメするわ。ほら、頑固で硬い節を磨ぎほぐしてこれでも読みなさいな」
「…なぁ美怜、喧嘩売ってるのか？誰が『言語を学ぼう！』だなんてこんな年頃に読むと思う？」
「ふふ、失礼。でも貴女はまず対話をもっと励んで行った方が賢明よ？話し合いを通すことで、学ぶ事も知識を得ることも、そして敵の戦闘力や情報を仕入れる事だって可能だもの。そう考えると、此方の方が平和的じゃなくて？」
「こらこら、焔ちゃんに美怜ちゃんもそんなに熱くならない」
　口を開けば時に口喧嘩になってしまうのも、美怜が来てからの影響が大きいだろう。と言うか、美怜が無意識に地雷を踏んでるようにも見えなくもない。
　それを本人は悪しきとも思わず、面白がってるのだから何方かと言うと彼女なりに面白半分で相手を怒らせてる事が多いだろう。勿論、無意識ではなく意図的に。彼女の性格からして、相手の反応を見るのが楽しいからというのが妥当である。
「思った以上に堅物なのね、焔」
「詠に負けずの毒舌だなぁ？よし、美怜には今度滝修行に重りを付けよう」
「初心者殺しにも程があると思うけど？」
　勿論突っ込みも欠かせない。然しながら、焔からして美怜は忍としての才覚はあると見込んでいる。
　焔達の意識を掻い潜るかのような忍込みや、相手の裏を掻い潜る頭脳明晰さ、焔をも簡単に拘束する単純なパワー、そう言った意味では美怜は悪忍寄りでもあり、潜在能力を秘めている。本人が能力を飛躍

的に引き延ばそうとしない無気力さが焔としては残念な気持ちであるが……

「お前達、相変わらず様子は変わらないみたいだな――」

瞬間、凛とした声色が六人の耳を打つ。

聞き慣れた声に五人は反射的に意識を声主の方向に振り向ける。

『鈴音先生!!』

五人は馴染みのある恩師に顔色を輝かせる。再会したのが昨日とはいえど、やはり嘗ての教師と会えるというのは喜ばしい気持ちになれる。

「…ふぅん、あの人が例の」

昨日の話で薄々と彼女の事に触れてた美怜は、淡々とはしているものの、多少興味深そうに見つめている。

焔達を此処まで育て上げたのが彼女であれば、その腕っ節は相当なものと想像は安易が付くことが出来る。

「昨日の連絡で失敗に終わったと聞いたし、内容は簡潔に聞いたが…お前が噂の妖魔と関わっていた謎の少女……か」

「お初目にかかりどうも。私は美怜――とは言っても、貴女からして焔に連絡が行き届いてるのなら、名乗る必要もなかったかしら」

初めての対面に、鈴音先生は不思議そうに美怜を見つめる。こんな幼い子供…とは言っても未来と同じくらいなのだろうが、妖魔によく襲われずに生きていられたものだと改めて感じる。

対する美怜自身は特に動じる事も特別な感情を抱く事なく、冷笑を浮かべている。

「紹介するよ美怜、この人が私達を育て上げた元担任の教師だ」

「美怜…と言ったか。焔からの話によれば、妖魔を使役せずとも同類と見られ襲われずに生き延びられていた事、奇跡と呼んでも過言ではないその事実は耳をも疑う事実ではあるが……まさか、焔自身からこ

の子を保護するだなんて聞いた時は、流石に度肝を抜かされたぞ。何がともあれ、お前が黒ではない事は承知した。然しながら、抜忍としての道のりは険しいぞ？それでも、お前は生きていけるか？」
　美怜の捕獲忍務失敗は、既に上層部の耳にも届いており、報酬金はなし。更に情報提供はほぼない事になってある。美怜曰くあの家の情報はなるべく隠密にして欲しいとの懇願であり、鈴音先生自身も焔達の全ては聞かされていない。
「あら、世の中の厳しさなんて現実的に鑑みて弱肉強食と大差ないと思うけど？社会においても、今にとっても、野生的であり環境の違いがあるだけで、生きるという事自体の道のりは険しくとも神秘的だと思うけれど。
　それとも、こんな見ず知らずの私を心配するだなんて…貴女もお人好しなのかしら？」
「ちょっ！美怜!!幾らアンタが口悪いからって鈴音先生に失礼でしょ…!!」
「…今のどこをどう失礼だと思うのか説明をお願いしたいのだけど」
　未来の注意も美怜は小首を傾げながら無表情で淡々と物語る。やはり、相手が誰であっても自分のペースを乱さないという点は、マイペースさに尊敬さえも覚えてしまうが…鈴音先生は案外機嫌は損ねていないようだ。
「ふっ…初対面にしては随分と哲学的に語るのだな。その減らず口が出てくる様子だと、大丈夫そうではあるな」
　だが美怜の態度に対し不機嫌そうな顔は見せず、寧ろ安心そうなのを見た限り、嘗ての蛇女に在籍していた焔や、妖魔への復讐心で満ち足りてた雅緋を連想させたのだろう。
「然し、焔紅蓮隊よ。上層部曰く美怜の捕獲失敗及び引き渡さないという点に於いて、お前達の評価と信頼は落ちえながらも、多少なりマークはされるようだ。
　妖魔と関わりが深い少女と何かしら手を組み悪さをしないかを測るためらしい。まぁ、忍務失敗により命を落とさないというだけまだマシな方だろう」

「ふぅん…たった一度の失敗だけで忍を始末するだなんて、随分と酷なのね忍という存在は…」
「それが忍の掟だ。忍務の失敗は死を意味表す。それこそ忍の背負い し業であり、宿命……だからこそ、常に命懸けで挑めばならんのだ」
「でもそれって忍だからと拘る必要性なんてあるのかしら。寧ろ忍の数は限られてるし、態々使い捨ての駒どころか燃費も悪いよう扱い方は、流石に無能とでしか呼べないけど。
それに命懸けですって？ふふ、死に急ぐ…の、間違いではなくって？」
「美怜……」
鈴音の忍の掟や在り方に、美怜は鼻で笑い飛ばす。
美怜のこの様子…昨夜の忍に対する考え方や信頼のなさ、真相を探るような目付きと一緒だ。
「…余り調子に乗らない方が良いぞ。お前が納得するもしないも勝手だが、上層部の怒りを買えば、標的となり死を急ぐ結果となる。痛い目に遭うどころか、火傷では済まさないかもしれないぞ？」
「あら、竈に焚べられるのは何方かしらね？寧ろ標的にされるようなことを指し示す上も相当な問題があると思うけど…それこそ、態とらしいように」
鈴音先生も決して上層部の言いなりとはいわないが、忍の現実を誰よりも噛み締めてる鈴音からして、美怜の考えはあまり良く思わないのだろう。だが美怜はそんな彼女のことなど気にもせず、売り言葉に買い言葉だ。
「まぁ、何にせよ私達の評価が地に落ちても、また登り詰めれば良い。それだけのことです。
それに美怜からも教えられましたから…評価や結果だけでは私たちの経験に得などしない…と」
もし美怜を上層部に売ってしまえば、確かに報酬と共にそれなりの名声を馳せてはいただろう。
然し其処に誇りはあるのだろうか？
決して後悔などしないだろうか？

胸を張って焔紅蓮隊として生きていけるだろうか？
そんな迷いの中、美怜とベルゼ兄さんという奇妙奇天烈な兄妹が教えてくれた。言葉ではなく、心で。
ベルゼは例え自分の身が危険に晒されようと、終わりが見えていても、決して妹を売らず、妖魔だろうと人間だろうと関係なく、己の意思を貫いてみせた。
己の意思に、傲慢だった。
ならば、自分達も考えた意思によって傲慢であるべきだろうと。それが例え忍の世界からでは間違いだと見えたとしても、自身が決めた決意を、曲げる理由にはならないと。
だからこそ、評価が落ちようと上層部から危険視されようと、予め予想は出来ていたし、想定内の反応だと淡々に思えた。
「…随分と成長したなお前達。忍の世界では評価や結果が全て――だが、抜忍でありながらカグラとしても善忍や悪忍と同じく妖魔を倒すという使命を忘れずに志すお前達は、常に自分が正しいと判断した意思に、行動を取れば良い」
「鈴音先生…妖魔についてなんですが…「ええそうね、自分の意思で行動する。その事に関しては概ね賛成ね」美怜…」
焔の言葉を遮るように、美怜は発言しながらも袖を掴む。一瞬、此方を一瞥し口角を釣り上げる。
その様子を見た焔はハッと気づかされ、昨夜のことを思い出す。
『これは二人だけの内緒にしておきましょう…？』
二人だけしか話してない情報を、他者に漏らさないという約束。それを思い出した焔は固唾を飲みながら「いえ、何でもないです」と口を閉ざす。
「私は忍の活動は停止した身…教師として生徒達に教授する事やサポートをする事しか出来ない私だが…それでも、教え子達であるお前達ならできるさ」
「そう言えば貴女、教師だったわね。それなら座学として貴女から知識を得ることは有意義な時間が作れるわね。抜忍という状況下でなければ、教え子になりたいくらいだけれども」

「ある程度の知識はまた今度教えるさ……それともう一つ、焔達にどうしても同行して欲しいことがある」
「…？何でしょう？」
鈴音の申し出に、焔達は小首を傾げる。
忍務失敗の通達だけでなく、他に何か用があるとして、それが何を指し示すのか…将又忍務でも来たのだろうか？
「忍務ではないのだが、前々から事情聴取をしたい者がいてな。お前達も一応関係者でもあるし、私たち蛇女や他の忍学校も、忍商会についての行方を追っている」
「忍商会…聞いたことが…」
「通行手段は整えてある。付いて来い、お前達も行って損はないだろうし、次に行けるのは何ヶ月か、最悪一年は掛かる」
「んぇっと、面会的なの？事情聴取って忍の専門分野だけど、態々私たちが呼ばれるって事は、何処にいくんですか？」
未来の純粋な疑問に、鈴音は小さく口を開いた。

「脱獄不可能、処刑囚が集まり収監される監獄――タルタロスだ」

「タルタロス…!!」
その名を聞いた五人は、険しい顔立ちになる。
噂だけしか聞いてないが、彼処に集まるのは悪忍すらも生温い罪人達が収監される監獄であり、死んでも可笑しくない、親族すら見放された極悪人が集う場所。
いつ死んでも可笑しくはないし、面会すら厳しくセキュリティも厳重、監視塔や軍事に纏わる対人用兵器も備わっており、外部からの情報を極力遮断してる事から、正に難攻不落であり脱獄不可能、二度と帰ることも出来ないことから奈落の意味が込められている地獄の門だ。
そんな場所に一体何をしにいくのだろう…
「タルタロス、神話では奈落という神の名を冠するものね。その囚人達やらが収監される所に呼ばれるなんて…貴女達、やっぱり面白いわ

…」
「いや、心当たりなんてないんだが…」
「付いて来い。上層部にも既に通してあるし、タルタロスとて時間は厳重されている。私が直々になってこうして出迎えたのもその為…直ぐに行くぞ」

それから通行手段を用いて小一時間後、橋を除いて海だけが監獄周辺を覆う孤島。タルタロスへと足を踏み入れ手続きを行い、透明なガラスで覆われた面会室へと向かう。焔達が足を踏み入れたその場所に、囚人番号７９００９０と記された囚人が車椅子ごと厳重に体を拘束され、待ち構えていた。
「おいおい、こりゃ一体全体何のつもりだ、あ？只でさえ精神的に発狂するような豚箱に閉じ込められて、面会があると言われてされるがままにしてみれば、とんでもねぇ嫌がらせじゃねえか」
嫌味ったらしく、それこそ嫌悪を示すような罵倒を吐き捨てる男の声に、焔は瞬時に理解した。
勿論、五人の顔色は険しくもなるし正直、二度と逢いたくなどないとさえ心の底から思っているほどに。
「また、こんな所で会うなんてな。お前には丁度いい死に場所じゃないか――伊佐奈」

ガラス越しに映る懐かしき因縁の敵――其れは嘗て母校を支配し、剰え私欲に溺れた、救いようのない悪の中の悪。顔の半分が鯨という異形な姿を曝け出し、鼻の上には炎月花で刻まれた一線の傷跡と火傷痕を残した、伊佐奈だった。

211話「交渉」

タルタロス――特殊拘置所敵収監獄刑務所。
此処に集められた囚人は、一般的な犯罪や少年院、通常の刑務所とは違う国内最高峰の刑務所であり、一度収監されたら二度と外の空気は吸えないとさえ言われ、一生を其処で終える死の拘置所。
殺すことすら生温く、親族に見捨てられ、死刑宣告、将又死ぬことすら許されない者達が集う場所は、正に奈落と呼ぶに相応しいだろう。
厳重なセキリュティに加え個性を発動しようとさえする者の脳波をバイタルチェックし、発動される前に軍事用の機関銃や物理的兵器、レーザーなど非人道的な方法で囚人を殺害するその管理体制のお陰で、脱獄者はゼロ。
内からのみならず、外側からのセキュリティや監視、対戦争軍事用兵器を用いることで外からの情報を始めた脱獄の協力者などの迎撃も万全である。
過去にタルタロス内で試しに個性を発動し脱獄を試みた囚人は後を絶たず、拘置所内で囚人が死ぬことも可笑しくないとさえ言われている。
常にベッドだけしかない殺風景な部屋でモニターに監視をされながら一生を探す囚人は、人ではなく檻に閉じ込められた獣にほぼ近いものだろう。
もちろん、面会をする人間も殆どの物好きでもない限り来るわけもなく、面会でさえも手続きやら何やらで厳重に取り扱われており、最低でも一ヶ月そこらか、アポを取らなければならない。
面会する者がどのような人物かの情報整理は勿論、数多の上層部や警察に審議を通し始めて、面会が可能になるのだ。
当然リスク的な面も考慮した上もあるのだが……

「タルタロスは本来、一般市民は愚かヒーローでさえも面会を断られる場面もあるそうだ。外からの情報を極力避けることも含め、基本的に事情聴取やらでもない限り、私達に通してくれる道理はない」
鈴音先生が先頭として歩きながら、他の六人は足を運び付いてくる。看守は無表情ながらも「変わった者達だな…」と一瞥しながら、周辺警備の人達も見張りとして距離を保ったまま付いて行く。
「成る程ね、この世界は個性という超常社会で成り立ってる訳だもの……その規格や秩序に縛られ、外れてしまった者達が抑圧の反動によって社会を恨み、破壊する者がいても可笑しくないものね。だからこそ、そんな重罪犯を管理する為にもこう言った施設が必要なのね。そんな施設に万が一少しでも情報、或いは脱走のキッカケとなる種を蒔いてしまえば、此処に収監されている死刑囚が世に放たれてしまう…それを防ぐ為も含めて面会さえもしてくれないと。実に結構――徹底されてるわけね」
美怜は興味深そうに回りを見渡し、それこそ小さな子供が玩具や遊園地のアトラクションに目移りするかのような純粋な瞳を輝かせている。こんな死すら生温い、生きることすら許されないような死刑囚が集う場所で愉快そうな顔を浮かばせるのは、美怜くらいだろう。
「ここタルタロスは面会を以っても時間は厳重されてるので…そこは悪しからず」
「そう…それは残念ね……試しに色んな死刑囚ともお話がしたいのに…」
「あ、アンタのそういう向上心って…本当に凄いわよね…死刑囚と話したがるのって美怜くらいじゃない？」
「ありがとう…♪」
「だから褒めてない！」
看守の簡潔に纏めた説明に、美怜は軽く落胆する。
死刑囚なのであれば、別にいつか死ぬ前に雑談を交わしてみたいと思うのは、知的好奇心によるものだろう。
死刑囚がどんな生活を送り、どのような経緯や理由で殺人者になったのか、そもそも何故そこまで人を殺すことに拘るのか、考えてしま

うだけで美怜にとっては研究対象として会話を望みたくなってしまうのだ。さしずめそれは、モルモットにどのような薬を与えればどのような効果が生まれるか、というような実験的なように。

「おらぁ!!此処から出せぇ!!早く外へ出してシャバの空気吸わせろおぉおぉぉ!!!」

ガンガン!と突然、囚人が荒ぶった様子で壁を殴り喚いている。近くにいた詠が「きゃっ!?」と可愛らしい声をあげながら、一同は其方の方に意識を傾ける。

「黙ってろ犯罪者!!――おい、囚人番号４５６９３２を直ぐに拘束しろ」

「了解。ありゃ確か…血狂いマスキュラー…個性発動なしで分厚い壁を凹ませるとは…」

殺人快楽血狂いマスキュラー。

嘗ては敵連合開闢行動隊のメンバーとして林間合宿にてヒーロー学生やプロヒーロー、そして忍学生の殺害に参入した有名な敵だ。

看守の厳しい声色と同職のメンバーに軽く報告をしながら、死刑囚はセンサーにより反応し、椅子から金属製の拘束牢式に捕まり、無力化させる。

「早く暴れさせろおぉぉ!!血が見てえぇんだよぉおおぉぉ!!血いいぃぃ!!見せろやあああぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

無力化になりながらも、発狂するかのように喉を奮わせ大声で喚く大男に連なるように、他の囚人達も喚き出す。

「うるっせぇぞ!!俺も早く出させろ!!土踏ませろや!!」

「あああぁぁぁ……早く、はやく薬が欲しいぃ…吸わせてくれぇぇ!!」

「もうあれから２０年…せめて外に出させてくれよおぉぉ!!」

ある者は機嫌が損ねて怒り出し。

ある者は薬物乱用によって発作が止まらず一生灰色の人生に放置され。

ある者は長い年月に一生同じ変わらぬ生活に精神が狂わされ。

ある者は「やれやれ…」と呆れながら髪を掻く。
「タルタロス…私も初めて足を踏み入れたが……凄いな。蛇女とは違った極悪な空気が流れてる」
「分かっただろう焔、これが私達と奴等の違いだ。同じ悪でも、志や誇りが違えばこうなってしまう。
これも良い機会になるだろう――」
「ええそうね、貴女の言う通りだわ鈴音――彼等はそもそも人間ですらない。人間とは違う…と言えば、忍である私達もそれに該当するのでしょうけど。
彼等はこの窮屈な秩序や社会の常識に外れてしまい、人として生きられなかった者達…さしずめ、人間としての尊厳や誇りを当に捨て、獣であることに欲望の沼に落とされた憐れな存在。
即ち人の姿や形をした、理解しきれない、理解してはいけない悪意の塊は、人の皮を被ったナニカだもの。
快楽主義者にして徹底的なる破壊主義者――彼等彼女等が大いなる被害を生み出した凶悪犯だからこそ、人として扱われないのね」
人として扱われないというのは、忍にとっても敵にとっても同じこと。
忍というのは美怜が言ってた奴隷根性のように、人として見られず鉄砲玉、或いは駒として扱われ、平気で命に危険が及ぶ仕事や暗殺、破壊活動を行う。
一方で敵は己の個性を発動し、快楽や欲望に溺れて犯罪を生み出す。通常であれば、改心する可能性も見込み、刑務所当で管理されてるのだが…生き過ぎた敵は、もはや人でさえ無くなってしまう。
人を傷つける事に喜び、罪悪感すら湧かず、良心もなくせば悪意だけを募らせる、そんなものを人とは呼ばないし、人間に対して大きな無礼でさえある。
そもその話、同じ人間であるのならばこんな不遇にして地獄のような待遇はさせない。
「ふ、ふーん…で、でも!そんな凶悪犯が捕まったってことは、所詮その程度だったってことでしょ?そ、そそ、それなら私達でもどうにか

なりそ…「肉めええええん!!」にゃあぁぁ!?こ、今度は何!?!」
未来が少し余裕そうな態度を見せた矢先から、未来の近くにあった扉から不気味な叫び声が響き渡る。それに驚いた未来は扉の方面に意識を傾ける。
「肉っ!!肉っ!!肉めええええええええん!!綺麗な肌に血の良さそうな香りをもってそうな肉めぇぇぇぇん!仕事!仕事!仕事させてええ!!」
体を這いずりながら此方の存在に気付いた死刑囚が、口を大きく開けながら舌でベロベロと扉を舐め回している。
気味の悪い不気味な声色と光景は、見たものに不愉快な感覚を与える。
あれは脱獄死刑囚――ムーンフィッシュ。
嘗てはマスキュラー同様、敵連合開闢行動隊に参入し、爆豪勝己、轟焦凍、美野里をああも容易く追い詰め、ヒーロー学生に忍学生を蹂躙したプロを凌駕する実力者。
殺人に快楽を覚え、欲望に身を溺れ、救いようのない場所にまで堕ちた人ならざる者。
「こ、怖っ!?何よアイツ!!」
「貴女達は同じ悪…とは言ったけど、私達とは違った上の世界にはこんな者達がいるのね。はぁ……死んでも良いような人間がいるのなら、せめて実験体にしたいわね。
中々に良さそうなサンプル体もいそうだけど…」
「美怜ちゃんの発想もその発言も十分に危険だと思うけど…そんな事したら美怜ちゃんまでタルタロスに収監されちゃうわよ?」
「それは困るわ。死にたくはないと言ったけど、此処で収監されるのは生きてるとも呼べないもの。生きながら死んでるという意味では、死にたくないって発言も間違いではないかもしれないけど」
同時にタルタロスに収監されてる者は、人間としての尊厳を捨てた囚人達に人権などない。
自由もない、
権限もない、

快楽もない、
希望もない、
全てに於いて許されない囚人は、生き永らえては死んでいる。そういう意味も含めて、地獄であり奈落と称するのは皮肉が効いている。
「そう言えば、此処に忍が収監される事はないの？」
「嗚呼、最近は敵連合に関わる者は別件として此方に輸送されるか考えてるそうだが…私達の所にも特殊拘束所が存在するそうだ。恐らく其方に行くのだろう…此処でも唯でさえ、凶悪な犯罪者…特にオール・フォー・ワンを始めいつ何が起きるか解ったものでもないからな。なるべく犯罪者は減らして欲しい…というのも、此処での意思だそうだ」
確かに、これ程名のある凶悪敵を収監しているのなら、いつ何処で何が起きるか解ったものではない。
看守からしても何千何万もの囚人を相手に細心の監視とチェックが必要なので、増えるだけ負担だけしか残らないのが事実。
そう言った意味では、忍と敵を両立に監視させるというのは酷すぎる話だ。分別させた方が効率が良いし、一緒くたにさせないのも直感で納得できる。
「儂等も一歩間違えれば、こんな豚箱行きなんやろな」
日影は無感情に浸りながらも、彼方此方で喚く囚人達を一瞥する。
もし自分達が道元の野望通りに動く傀儡であれば、タルタロス行きになっていただろう。
現に蛇女に襲撃した赤脳無、緑脳無に、道元脳無も今此処、タルタロスに収監されてるのだから。
「さて、そろそろ着いたぞ。此処でお前達に頼むのは他でもない…忍商会についての情報聴取を行なって欲しい」
「忍商会…あの、鈴音先生。私達は敵との遭遇経験なんて稀で、全くと言って良いほどに縁がありません…あるとすれば敵連合の死柄木弔を始めた少数の人間…私達と面識があるんですか？」
「何を言う焔、敵連合だけではないだろう？」
鈴音の不敵な笑みに、焔達は眉をひそめる。

美怜に至っては何が何やらといった様子なのは致し方なく、状況が余り呑み込めてないようだ。
「まあ時期に見れば分かるさ――」
そして扉が開かれ、再会を果たす。

「死に場所だぁ？バカ言え、俺はまだ諦めちゃいない……此処から出て必ず、お前らをねじ伏せてやるよ。力づくでもなぁ」
そして現在に至り、伊佐奈…基キュレーターは訝しげと苛立ちに表情を染め上げながら声を荒げる。
「貴女、随分と怨みを買われてるようだけど…知り合い？」
「知り合いも何も、蛇女を乗っ取ろうとした屑だ。コイツのせいで
一体どれほどの犠牲者を生み出した事か」
美怜の問いに、焔もまた苛立ちの表情を浮かべては、額に青筋を浮かばせる。
成る程…忍商会から情報を引き出せというのは伊佐奈のことを示していたのか。
「はっははー犠牲者ねー それをお前らが言うかぁ!!妖魔には犠牲はつきものだろう？じゃなきゃアイツらが危険視される訳がねぇ。
妖魔の存在なしに忍が語れないのなら、俺のやってる事は何も非道的な事じゃないだろう」
伊佐奈はそんな焔を小馬鹿にでもするように嘲笑い、ギシギシと体を揺らす。
「それで、何をしに来たんだよお前ら。ん？鈴音がいるって事は…あぁ、そうか。概ねソイツに俺を合わせに来たんだろう。じゃなきゃ抜忍のお前ら如きがそう簡単に此処に来る訳ないもんなぁ…？」
「……」
図星。
どうやら腐っても元スポンサーにして出資者をしていた訳ではないようだ。

「ねぇ焔、やっぱアイツから聞き出すなんて無理なんじゃ…」
「単刀直入に聞こう。お前、忍商会と関わりがあるそうじゃないか――奴等は何処にいる」
「んぁ？あー…魔門…ごほん、組織の事ね。ふぅん、成る程…理解した。お前らが次に狙ってるのは忍商会って訳だ。
　まさか、あの大規模な闇組織を烏合の衆どもが滅ぼす、なんて夢見てるんじゃねえだろうな」
「ああ、そのまさかさ。知ってるのなら吐いてもらうぞ」
「で、俺がお前らに話す道理はねえだろ。何よりお前らは俺に何をしたか覚えてるか？あ？そんな奴等に話す気が無いことも想像できねえなんて…どんだけ脳みそ腐ってんだ？」
　売り言葉に買い言葉。
　自分をこんな窮屈で息苦しい拘置所へ入れ込んだ焔紅蓮隊への憎悪は想像を絶するほどで、ましてやこうして惨めな姿を晒されるだけではなく、面と向き合う事でさえこれ以上にない罰なのだから。
「貴女！自分こそ何をしたのか解ってないのですか!?これだから金持ちは…」
「黙れ貧乏人。お前らが大人しく俺の言う通りにさえすれば、お前らが黙って殺されれば、俺は今頃野望を実現できたんだ…!!そうだ、そうだよ…妖魔をばら撒き、金を稼ぎ、名のある敵どもを手駒にできた…それなりの努力も惜しまず手を汚してきたというのに！全部全部テメエらが台無しにしたんだろう？
　大人しく情報でも吐き出すかと思ったか？バカが、幾らてめぇら如きの馬の骨が忍商会に敵わないとはいえ、教える訳ないだろ。やっぱりバカとは話が合わねえ」
　幾ら敗戦した伊佐奈とはいえ、このタルタロス内では情報を引き出すのは非常に厳しい模様。
　もしこれが忍世界であれば拷問するなりして吐き出せたものの、能力使用禁止、況してや近づく事でさえ許されないこのタルタロスでは、存分に情報を引き出すことが厳しくなっていた。
「ねぇ、看守さん。傀儡で吐き出しちゃうことって許される？それと

も一発くらいは顔面殴ってもいいでしょう？」
「ダメです――その場合直ちに面会を中止にします」
春花は冷静そうに装いながらも、憤りはどうしても隠せない様子だ。看守は冷静に落ち着かせるべく返答をし、春花は思わず舌打ちをする。
これ以上ボロクソ言われて黙って引き下がるようでは、紅蓮隊の名折れと言うものがある。
「……ねぇ、貴方。名前、伊佐奈というの？」
と、此処で今まで黙って観察してた美怜が口を開く。
「美怜？」
「あ？なんだこいつ？」
焔も伊佐奈も、首を傾げては眉をひそめる。
「まぁ、私も舟に乗っかった者とはいえ無視するのも後味悪いし…折角の機会だもの。少し私に対談させて？」
焔の表情を伺う美怜に、焔は悩む。
確かに美怜は頭脳明晰であり沈着冷静――反論の余地さえも許さず、誰とでも打ち明けるコミュニケーション能力の高さは賞賛に値する。
しかし、伊佐奈との面識はおろか、情報さえろくに知らない美怜が、果たして情報を引き出せるのだろうか？
そんな疑問を抱きながら、焔は仕方ないと髪を掻く素振りを見せる。
「流石に拷問とか脅しは無理だろうから、それなりに骨が折れそうだけども……」
「まぁ…良いけど、無理はするなよ？」
そう言いながら、焔は一歩下がり、美怜は一歩前に出る。
「初めまして伊佐奈、貴方の事はよく知らないけれど…こうして初対面の死刑囚と対話をするというのは、些か新鮮な気がするわ」
「……お前、リストには見なかったな？紅蓮隊の情報にはお前は見てないし…かと言って蛇女の生徒って訳でもなさそうだ。
となれば、新参者か？へぇ、俺のお誘いは断ってるのに、こんな何

処その誰かも知らない馬の骨を仲間にするだなんてな」
「あら、何処その誰かも知らない私をどうして一眼見ただけで馬の骨と判断できるのかしら？私、焔達にも私自身の実力なんて披露した事は一度もないけど？」
「っ……」
　伊佐奈の煽りも物怖じせず、感情を取り乱すどころか、面白そうに笑みをこぼしながら反論する。
「もしかして貴方、自分以外の人間は弱いと言いたいのかしら？だと変ね、今の状況と会話の推測からして、貴方は焔達に敗北したのでしょう？それとも敗北してもなお弱小と言いたいのかしら？なら、敗北した貴方はそれ以下で、発言的にも状況的にもどう抗っても貴方が弱者である事に変わりはないのだけど」
「マジで何なんだテメェ…？人の神経を逆撫でするようなガキだな…？」
「あら失礼、でも御免なさいね？貴方の様なプライドが高すぎる化け物には聞くに耐えない真実だったかしら？」
「あ〝ぁ…??」
　バケモノ呼ばわりされる事に、ピキピキと青筋を浮かべる伊佐奈は、更に不快感を昂らせる。
　詠に続き、この女まで自分を人間扱いせず、見下ろしているのか。
「…ねぇ貴方、忍商会について知ってることを話して貰えるかしら？貴方がどのような関わりをしたのか、忍商会が何処にいるのか…知ってる限りの知識で話してくれればそれで良いのだけど」
「聞いてなかったガキ？俺はお前らに話す道理なんざないって…「ええ、確かに貴方にとって私達は敵であり貴方が嫌悪を示してるのも、対話を望んでないのも見解できるわ」…話が早え、なら…」
「――でも話さない道理もないでしょう？話す道理がない根拠にはならないし、其れは貴方の感情論でしかならないわ」
「なっ…!!」

其処で伊佐奈が始めて見せる焦りと困惑の声色に、美怜は相も変わらず面白おかしそうに笑みを釣り上げる。
「ねぇ…そもそもの話、プライドも関係なく敗者は大人しく腹を割って話をすれば楽だと思うのだけど。何を其処まで頑なにに否定的になるのか、其方の方が理解し難いわ。
犯罪者である貴方に黙秘権なんてあるとでも思ってるのかしら？だとしたら、勘違いするに甚だしいと思わない？此処に収監されてる人の皮を被った獣達に、人権なんて無いのよ」
「忍の駒供が、よく吠えやがるな…？人権だぁ？テメェらみてえに妖魔を、忍同士で争うことしか能も取り柄もないゴミ供が俺を見下すんじゃねえ!!失せやがれ!!」
「でも貴方はその取り柄もないゴミ供にやられてしまったという訳よね？結局、貴方は口を開けば私達よりも下の存在であり底辺を這いずる負け犬と証明してしまってるだけなのだけど。其処のところはちゃんと理解してるかしら。
成る程、確かに貴方もよく吠えてるわね…これが負け犬の遠吠えってやつかしら？ふっふふ♪」
「なっ…！がっ…!!」
伊佐奈は他人を見下ろし、何不自由のない人生を幼少期に歩んできた元御曹司の息子。そして敵組織を立ち上げるものの、解体され忍の上層部としての役割を担っていた。
だからこそ、他人を卑下し見下す伊佐奈など、美怜からすればこの上なく相性は最悪すぎる。
「寧ろ貴方の方がよっぽど負け犬に相応しいわ。普通の人間や私達は、こんな所に閉じ込められていない。
でも今の貴方はどう？惨めな姿を晒し体の自由さえも許されず拘束され、２４時間３６５日永遠と死ぬまで監視をされ檻の中で生きていく…ねぇ、自分が人間ではないことは自覚できてるかしら？貴方にはその認識力が欠けてると今の会話で体感できたと思うけど…どう？身をもって噛み締めた？」
「おああぁぁああぁぁ!!!!!!」

ガシャガシャと体を激しく揺さぶり、拘束を振り解こうとする伊佐奈は、これまでにない感情を暴露させながら悍ましい憤慨の顔立ちで掴みかかろうと体を動かそうとする。
「美怜！あんまり相手を刺激したら「これで良い、順調よ」なに…？」
「おい看守！紅蓮隊は一先ず置いといていい！あのガキをこっちに来させて殺させろ!!!!」
あれほど凶暴に怒り荒れ狂う伊佐奈は初めてだ。看守は厳しい言葉で感圧しながら機械的な拘束をより一層強めていく。
「貴方が楽に情報を吐き出しさえすれば良いと言ったのに、それをしなかった貴方こそ、怒る道理はないのではなくて？寧ろ私が黙って聞いてれば、『大事な家族』を罵倒する貴方こそ此処まで言われることを自覚できなかったのかしら？だとしたら、貴方こそ脳みそが腐ってるとしか言いようがないわ。
其れに貴方、確か前に言ったわよね？『妖魔の存在なしに忍が語れないのなら、俺のやってる事は何も非道的な事じゃないだろう』って。確かに、良かれ悪かれその意見には賛成…忍の存在に妖魔が絡むのはよくある話だものね」
「……何が、言いてえ？」
「なら私たちが忍商会を倒そうとする行動も、非人道的ではないわよね？寧ろ、有益になるわけだもの。貴方が忍目線に存在を語らせるのであれば、忍商会という組織を壊滅させることも忍の存在は語れないのではなくて？」
「…っ!!!!」
言葉の裏を掻かれたことに、更に絶句する伊佐奈。
妖魔を生み出し、組織に売りさばき、忍が止める事が存在証明であれば…忍が妖魔を買収した組織を壊滅させるのも自然の理。
「……これで、貴方が話さない道理はどんどん減っていくわけだけど…」
「話すわけねえだろ、クソが」
だが、頑固として譲るわけにはいかない。
そもそも、交渉術という項目で敵から情報を引き出すというのは、

警官でさえ殆ど頭を悩ませるものなのだから。
「確かに、お前はバカとは違って頭が回るし、俺の妖魔を組織に売って、それを忍が止まる事で世の中の常識に沿ってた詭弁をぶち壊しやがった――だが、それが分かっただけ。お前らに教えたところで俺にメリットがなければ、デメリットでしかない。そしてお前らにはメリットしかない。
なぁ、嫌な奴にメリットを与えるバカがいないことは、お前でも分かるよな？チビガキ」
メリットとデメリット――有益と負担。
それは、情報を渡すことで相手が得をすること、情報を渡すことで不利益が生じること。
焔紅蓮隊に情報を引き渡すことで、焔達が得をしてしまうというのは気にくわない。かと言って焔達に情報を渡してしまうことで忍商会から何をされるか解ったものではない。
此処がタルタロスとしてどれほどの厳重なセキリュティがあるとはいえ、一部…とある海外では麻薬王奪還の為に難攻不落の脱獄不可能の監獄を襲撃したというケースがある。
必ずしも何が起きるかは、わからないのだ。もし情報を渡して焔紅蓮隊の所為で忍商会に不利や負担が生じてしまえば、恨まれ口封じのために殺されてしまう事もあり得なくはないのだ。
「この後に及んでお前というやつは…「ふ…うっふふふふ…♪確かにそうね、メリットとデメリットを持ってこればそうなるわよね」美怜？」
「幾ら此処、タルタロスが難攻不落の地獄の門と呼ばれる鉄の要塞でも、超常は何が起きるか分からない…だからこそ、デメリットとしては忍商会にとっても貴方にとっても、何かしらの不利益が生じてしまうというのは事実ね。貴方が話したがらないのも、薄々と理解できるわ」
「そうか、なら――「いいえ、関係ないわ。私たちは下がらない」…なんだと？」
それでも引かない美怜に、伊佐奈は目を丸くする。

時間も迫る中、そろそろ厳しい状況下…それでも彼女は笑みを絶やさず冷笑を浮かべている。
一体なんの策があるというのだろうか？
「私たちが情報を引き出し得をするのが私たちのメリット、そして情報を吐くだけで貴方にはメリットがないし、寧ろ忍商会にとって情報を漏らされてしまうというのは、どっちにしろ貴方に目の敵が行ってしまう…タルタロスに襲撃をかましてしまう可能性も考慮し、そして精神的に嫌悪を指し示す私たちがメリットを得るだけでデメリットでしかないと考えると……

貴方にもメリットが出てくることも、ない事もないわ」
その言葉に、焔達や鈴音は勿論、伊佐奈も信じられない顔をする。
「貴方はさっき言ったわよね。私たちでは闇組織を壊滅することは出来ないって。貴方には根拠がどうあれ相当な自信があるのよね？」
「……そうだとしたら？」
「だとしたら良いじゃない私たちに情報を渡しても。私たちが忍商会と対峙して、私たちが敗北して死ぬことは、貴方にとってこれ以上にないメリットだと思わなくて？」
「なっ――」
それは、余りにも衝撃的な言葉だった。
それは、此処にいる全員がただひたすらに驚かされるばかりだっただろう。
「貴方は私たちの事が憎くて許さないのでしょう？貴方は私たちを殺せない…でも、貴方の代わりに忍商会と私たちを会わせて殺し合いをさせ、私達が死ねば貴方にとっては喜ばしいメリットになるのではないかしら？」
「お前、自分の言ってる事が分かってんのか…？態々負け戦をしに行くってような…」
「でも、それはあくまで憶測の話よ。私達が確実に忍商会に負ける保証はないし、かといって私達がその組織に勝つ保証もない…簡潔にいうなら勝機の根拠がないカジノに挑む命の駆け引きという奴ね。で

も、確かに状況的には貴方と私たちとでメリットとデメリット…両方が揃ったわ」
　これが美怜の狙いだった。
　伊佐奈が有益と負担を出してくるのを待ち望んでいたし、想定内でもあった。
　伊佐奈にとってデメリットでしかないのなら、交渉術でメリットを作らせれば良い。
　更に言えば美怜の言ってる言葉に、間違いは何処にもないのだから。
「…確実なるお前らの敗因が無いんじゃ、メリットにはならねえんじゃねえのか？」
「そればかりは信じてもらわないとね。でも…貴方にとってそんな配慮は無縁ではなくって？貴方、さっき言ったわよね？私たちは馬の骨で、組織を壊滅させることなんてあり得ないって。
　貴方が確実なる敗因を求める行為自体、私達が忍商会に勝ってしまうという考えが芽生えてしまってる証拠にもなるのよ？それって、さっき言った言葉はなんら意味をなさなくなるのよ。それは、少なからず私達の実力を認めてしまう事になるのだから」
「こ……の、ガキ……」
　だめだ、もうこれ以上後戻りはできない。
　まるで人間の体に大きな蛇がゆっくりと巻きつし、品定めされ飲み込もうとするアナコンダのような、捕食される不快な体感を覚えてしまう。
「これは単なる面会でもない、情報徴収でもない…これは、命のやり取りという戦いなの。
　さぁ、始めましょう？貴方の思惑が勝つか、私たちの思惑が勝つか――これは、戦えない貴方が忍商会という組織を利用して私達を葬るか、それすらも覆すかの弔い合戦なの」
　此処はタルタロスの面会だというのに、まるで美怜と伊佐奈が見えない盤上でチェスでもするかのような光景だ。看守や焔紅蓮隊、鈴音でさえも目を疑うように錯覚してしまう。

「それと此処まで言って敢えて言わないということは、貴方が私たちの実力を認めその脅威性に怯え教えられないと言う事になってしまうのだけれど…貴方がもし、私達が脅威に取るに足らない単なる雑魚ならば、言っても問題ないのではなくて？忍商会からしても、顧客をタルタロスに送った私達に多少なりとも怨みはあるのだろうし、そう考えると貴方にはデメリットがないようにも思えるのだから…。
序でに教えてくれないかしら？こうして自分の手で殺すことも出来ず他人頼りに涙目で悔しそうに指を咥えながら、私達が活躍して毎日朝日を浴びながら生きていく姿を見るのって、どんな気分なのかしら??」

「クソガキがああああぁぁぁぁぁ!!!そこまで死に急ぎテェなら教えてやるよ!!!!死んでも死にきれねえくらいになああぁぁぁ!!!」

こうして、タルタロスの面会を終えた焔達は、バイタルチェックや手持ち検査と言った作業の手続きを終えて難攻不落の特殊拘置所を後にする。
「焔紅蓮隊…特に美怜、お前達には感謝する。お陰である程度忍商会の情報は手に入れた。幸先は良好…これから忍側も対策ができる。本当に良くやったお前たち」
「いえ、私たちは特に…もし美怜がいなかったら情報を引き出すなんて無理でしたから…」
「まぁ、私も生まれて初めて死刑囚と会話できたんだし、何方に転んでも興味深い研究でもあれば、良い体験だったと思うわ」
「本当に美怜ちゃんはよく言ってくれましたわ…♪ふふ…よしよし♪」
「んぶっ…」
賞賛される美怜に、詠は美怜を抱きしめ豊満なる胸を顔に押し付け

る。顔に柔らかい巨乳が挟まれ思わず口を閉ざしてしまう。
「ほんと、よく美怜ちゃん初対面の伊佐奈にあそこまで持ち込まれたわね…見てて半分ヒヤヒヤしていたもの」
「アレはね、プライドが高すぎるの。どれだけ真実や善意で垂れ流しても、ああいうのは聞きやしないし、自分のことを最優先にする。だからそのプライドと相手の私欲を敢えて利用し、火をつけたってわけ。相手を批判することで面白い反応が見れたのもあるけど、効果覿面だったようね」
だから美怜は無駄に煽りと批判を浴びせ、伊佐奈の思考能力を怒りで低下させ、確固たるプライドと私欲を利用し情報を引き出した。
まさか初日でいきなり聞き出せるとは、内心そこまで高望みしてなかった鈴音も、感心している。
「交渉術というのも忍にとっては必須なスキルだ。拷問なしでよくぞ彼処まで…」
「まあ半分、伊佐奈という人物に多少なりとも不快感を覚えたから、言い返してあげたまでよ。それに……今なら、何となくベルゼ兄さんの気持ち、理解できるから」
美怜にとって今の家族は焔紅蓮隊であり、伊佐奈にあのように好き勝手に言われて美怜も我慢ならなかった…という点では、美怜も感情というものを理解してきたのだろう。
ベルゼ兄さんがそうだった。
美怜を見た忍が罵詈雑言と汚い言葉を浴びせる事に許せなかったベルゼ兄さんのように、焔達を悪くいう事に放って置けなかった美怜は、やはり姿形は似てなくても兄妹らしさを感じる。
「美怜…あんた…」
「私もお荷物というばかりにはいかないでしょう？役に立てたのならそれはそれで光栄だし悪い気分ではないわね」
「美怜ちゃん…!!今日の夕飯はもやし鍋にしましょう!!」
美怜の頭を撫でながら嬉しそうに語る詠に、春花は指で美怜の頬を突っついたりとしている。
微笑ましい光景に、思わず焔は頬が緩む。

「美怜、お前…成長したな」
「そう？私がどのくらい成長したのか自分ではよく分からないけど…素直に受け止めておくわ」
「今日は本当に感謝するばかり…助かったぞ焔紅蓮隊」
こうして移動手段を用いりながら、タルタロスからどんどんと離れて行く。
僅かな面会時間で、長いような時間感覚ではあったものの、こうして焔紅蓮隊はより結束を固めていく。
京都まで、もう僅かな日数が迫っていた。

２１２話「紅蓮隊日常２」

焔紅蓮隊一同、タルタロスの面会を終え森林地帯に着いてから、鈴音は焔達にもう一度感謝を伝えると、別れを告げた。
少々名残惜しい部分もあったものの、抜忍としての自分達の立場的には甘えてる猶予もなければ、先生の時間も考えて余り長居は出来ないのだろう。教師としては忙しそうだなという思いが伝わってくる。
「然し、忍商会の面々も大分顔が割れたな。とりあえず名が上がった奴らをマークすれば良いわけか」
「そうねぇ、でも問題は何処にいるかって話よねぇ…取り敢えず挙げられる点とすれば、京都と千葉、神奈川くらいだけれど…」
道中、六人は一塊になりながら歩行を進めながら今後の忍商会に対する対策を考えていた。
忍商会業績ｎｏ．１『魔門』
忍商会裏サポートアイテム売買製作会社社長『亜門』
忍商会闇金融機関違法商売『佐門』
今のところハッキリしてるのは此の位で、それ以外は壊滅したと聞いている。
「ねぇ、貴女達はその『忍商会』っていう大きな組織を随分と敵視してるけれど…直接的な関わりはあったのかしら？」
「いや、そう言う訳ではないんだが…伊佐奈のような輩も含め、そういった組織があるせいで大勢の腐った人間が、妖魔を通して国の兵器として使われてるのなら、阻止する他ないだろ。悪事として働くのであれば、それもまた止めるのが私達だ」
「ふぅん…前に未来に借りたヒーロー殺し・ステインとやらの書物やいんたーねっと、とやらで挙げられてた記事に似てるわね」
ヒーロー殺し・ステイン

別名、忍殺しとも謳われ敵という犯罪者にして、贋物と見なされた英雄気取りを惨殺。
内再起不能に陥れた数も多く、一部からシンパシーを産まれたことから、彼のような非人道的でありながらも己の信念を貫くその姿勢に、熱を当てられた者は少なくない。事実、赤黒血染もまたタルタロスに収監されていたのだから。
道理や心理は何であれど、抜忍として社会の枠から抜けてしまった者としては、打つべき者を把握してる事に何処か通じてるものを感じる。
「保須市…そういえば、アイツも敵連合に関わってたんだったな。私達が居た時は遭遇さえしなかったが…」
「私達は脳無と戦ってたし仕方ないよ。それにその頃まで関係性とか分かんなかったしね」
「のうむ…とやらも随分と面白そうな感じがするけれど、貴女達の経験って本当に修羅場ね。行き着く過程がほぼ戦いばかり……私ももっと早く貴女達と出逢っていれば、面白い体験が出来たかもしれないのに」
「いや、今の話を聞いて何処に面白味感じてんのよアンタは…」
他愛ない会話を交えながらも、やはり何処か楽しそうだ。
未来と美怜は妖魔の巣でも述べていたが、相性としてはそこまで良い訳ではないが、其れはあくまで性格上。美怜本人は楽しんでるので、ただ戯れてるように見えるし、未来自身は美怜の悪ふざけや冗談を本気で受け止めてるのもあるため、こうして少しの事柄でも掌突し合うのだろう。
「そう言えば…京都と言えばそろそろですわね」
と、此処で詠が思い出したかのようにパンと掌を叩く。
「詠さん?そろそろって…」
「あぁ…後四日だっけ。京都の旅行か、詠が商店街のクジで運良く一等を当ててだな。
商品が京都旅行チケット6枚分という事だったんだ、五人で一人余ってたから誰かを誘おうか悩んでいたんだが…美怜もいるし丁度

数が揃った訳だから心置きなく行けるな」
「あーそういえばそうやったね」と思い出したかのように呟く日影。これは以前、時間系列で言えば神野区崩壊事件が起きてから一週間が過ぎた頃合いで、復興作業のアルバイトの帰りに商店街で買い物した際クジ引きがあり、詠が運良く見事に一等を引き当てたという何とも幸運なエピソードがあったのだ。
（＊詳しくは特別編の『巡り巡って誰かのために』を参照）
「ふぅん…そんな事が。詠、お手柄ね。貴女にそんな豪運が備わっていたなんて…一等を引き当てる確率ってくじ引きの場所にもよるけれど、大勢の人が当たる中よくそんな…」
　これには流石の美怜も賞賛を称えてるそうだ。尤も、自分が京都に行けるという感謝の労いもあるのだろうが、確かに一等を引き当てるだなんてのは早々滅多にないことだ。
　ソシャゲのガチャや祭りの店舗にもあるクジ引きというのは、大体確率は大きく低く、その中で当たるというのは事実自慢しても良いレベル。…祭りのクジ引きなどではよく悪質としてわざと一等賞が入ってなかったり裏で組との繋がりがあると言った犯罪絡みもあるのだが、それでも充分に褒められるべき点だろう。そこもまた詠が贅沢をしない、高望みをしないというガチャではよくある欲を出さないという言葉が使われてるのだろうが、そう考えると詠は贅沢をしない分、幸運に恵まれてるのかもしれない。
「えへへ、美怜ちゃんに褒められると謎の安心感がありますわね…」
「然し京都…京都ね。紫式部の源氏物語や清少納言の枕草子と言った数ある有名な文学作品のある国風文化の結晶の土地…。ふふ、とても素晴らしい土地へとご紹介してくれるのね。やはり貴女達に付いて行って良かったわ…こうして外の世界へ出て、沢山の文化や知識を吸収していけるもの。書物で読んだ頃と今とでは内容や文化も進んでるだろうし…良い機会ね」
　美怜は前に居た家…妖魔の巣では腐るほど本があり、当然歴史に関わる本は勿論、こう言った地域の歴史も目を通していたので、外の常識は分からなくとも、昔ながらの情報は頭に入っているので、そこら

辺は心配無用だそうだ。
「京都といえば八つ橋もあるわよね、私食べたーい！」
「やつ…はし？」
「アンタ知らないの？そう言えば外の世界のことあんま知らないものね…ふふん、八つ橋ってのはね、甘いお菓子の事よ！餡と生地が合わさってとっても美味しいんだけど…」
「甘いお菓子…ですって…？！」
其処で珍しく美怜が目を大きく見開き食い付いてきた。未来は勿論のこと、他の四人も珍しそうに驚いてる様子が一目見ただけで見解できる。
「そう、八つ橋……前に本で読んだことはあるわ。元禄二年に誕生した江戸時代中期の干菓子として聖護院の喫茶で販売を始めた茶菓子として…甘いお菓子だったのね。読んだだけで実物もどのような菓子かも不明だったけど…」
何やらブツブツと独り言を呟いてる様子で、今までに見せたことのない態度に少々面を食らう。
「もしかして美怜ってお菓子、好きなの？」
「寧ろ好きになれない理由が考えられない位は」
それって滅茶苦茶好きって事じゃん！
そう、美怜は大のお菓子好きなのだ。口にしたことも滅多にないのだが、以前家に侵入してきた忍から菓子を取って食べたことがある。
こうして聞くと略奪搾取の鬼畜少女と思われるだろうが、このサイコガールにそんな言葉の意味など通じるはずもなく。
「そもそも頭を使うのにも糖分摂取は必要不可欠、そして日々研究をする上で思考を重ねるのも必然。
私ほどお菓子に対して適応してると思わないかしら？」
「おかし食べ過ぎて糖尿病にならなきゃいいけどねっ」
「大丈夫よそれくらい…ふふ」
美怜にとって糖分など力の源でしかない。
此処でふと思い付いたのが、美怜が甘いお菓子が好きなのであればそれを機に上手く彼女に言うことを聞かせれば良いのでは？

然しそれ位になると相当なる金が必要となるので、その考えは見事に儚く散ることとなるのは言うまでもなく。
「……ねぇ、八つ橋以外にもどの甘いお菓子があるのかしら？とても興味があるのだけど」
「それなら京あめとかあのんとか…京都名物とか調べたらもっと沢山あるんじゃない？」
「本当に美怜ちゃんは甘いお菓子に目がないのですね、何だか子供らしくて微笑ましいですわね」
「子供だからお菓子を貰えるのなら大人である拘りは必要ないし、寧ろ大人であるにも関わらず精神的な面から子供である事なんて、そう珍しいものでもないんじゃないかしら？」
美怜の言う通り、社会全体としても世の中には子供大人と呼ばれる類の人間は存在する。
成人を迎えたにも関わらず子供のような一面があれば、子供のような幼さを曝け出す者も、社会に出て通用しない人間も、基本的にそう言った者は少なからず存在はしている。
勿論、雄英高校襲撃者の主犯にして初期プロフィールの頃の死柄木弔なども挙げられる。
「ふむ…私で言う肉、と言ったところか」
「貴女は正に見たまんまね。イメージ通りというか、貴女が野菜やお菓子が好きという発想は思いつかないもの」
「やっぱりお前喧嘩売ってるだろ？それともこの流れで訓練でもするか？」
「取り敢えず貴女は頭に登った熱を冷ます為に滝打ちしなさい。修行しながら頭を冷やす、合理的で一石二鳥よ？」
「夏が過ぎた涼しい季節の滝打ち修行舐めるなよ？」
などと歪み合い、軽口を叩き合うほど、今となってはそんな違和感さえも感じないほどに親しくなった焔と美怜。
焔も強者と認めなければここまで対等として見る事など滅多にないこと…肌身で感じ取れてるのだろうか、それほどに焔自身も美怜を認めてると解釈しても良いだろう。

「あ、伊佐奈との件で忘れてたけどウチらこれから仕事とかしなきゃだからアジトに戻ってから準備したりとかして出てくけど…美怜は留守番できる？」
「ベルゼ兄さんと一緒に過ごしてたあの家でいつも本を読んでたし大丈夫よ。それに今日は『人間の心理と肌荒れ』を一冊丸々読むつもりでいたし」
「なにその絶妙なニュアンスの本…笑えるのだから笑えないのだか…そんなに本を読んでて飽きたりしないのなら別にまぁ」
　その本は一体どこの誰が購入したのかは追求しないとして、美怜が大人しくしてくれるのなら此方としては安心出来るだろう。下手に動き回り、抜忍狩の追跡者に居場所がバレたり命を狙われるよりかは…と、此処で一つ心配事が…。
「もし私たちのアジトに襲撃者とか来たらアンタ対抗できる？」
　未来の言葉に、他の四人もハッと我に帰る。
　たしかに美怜は家族の一員であり、守と誓った…しかし、自分が不在の時に、もし手が届かない場所で何かあれば、美怜は果たして一人で何とか出来るだろうか？
　詠、日影、未来、春花の四人は言わずとも、美怜の事は深く知らないことも含めて謎も多いミステリアスガール。ましてや彼女が戦う姿など想像付きにくいし、護身用に忍としての武器があるにしても扱えるかどうかと聞かれてもハッキリとは答えにくい。
　そんな心配ごとも吹き飛ばすかのように美怜は
「ああ、その事に関しては心配しないで。一応、殺しの術は学んでるから」
　などとさも当然のように答える。
「美怜ちゃんって…人を殺したことあるの？」
「ないわよ？前にも言ったけどそういうのはベルゼ兄さんが全部やってくれたし」
「戦場は思い通りに行くとは限らないんだぞー…？」
「ふふ…ねぇ、なんでベルゼ兄さんと一緒にいて、侵入者たちに命を狙われながら平然と生きていられるか知ってる？

私だって何も逃げてばかりではないのよ?そりゃ、ベルゼ兄さんがいつも庇ってくれたり、手を出さないようにと守ってくれたのも事実だけど…何も兄さんは常に側にいた訳でもなく、離れた具合を見計らって隙を突こうなんて輩もいたものよ。それでも私は生きている。私の腕くらいは信じてくれないと、この先お荷物という訳にも行かないでしょう?」

そこまで言われると妙に説得力というか、信頼性というものを感じる。

「それならまぁ、頼んだぞ?」

「安心なさい。せいぜい洗い物や家事くらいはしておくから」

「さてと、皆んなも居なくなった事だし…」

あれかれ一時間後、アジトに戻るなら支度を終えてバイトに向かった紅蓮隊を見送り終わった美怜は、息吐きながらと図書館でもありそうな分厚い本に目を通しながらページをパラリとめくって行く。

本は大好きだ。

頭の中でイメージがついたり、知らない情報を知識を吸収したり、それが真か嘘か、なによりも静かな空間で読書に嗜むのは居心地が良い。鳥のさえずりに、木々の揺れる葉音、そして暖かな陽射しは、心も頭もリラックスできる故に、自然に囲まれた状態でのソレは、家にいた時よりも何倍も読書という趣味を最大限に楽しませてくれる。

…実はこれ、美怜としては焔達のトレーニングに匹敵するほどの価値がある。例えばとか、そういう意味合いではなく現実味として。

イメージトレーニングに、脳を整理し活発するように働くという行為こそ、美怜を強くしている。

(やはりこの時こそ一番リラックスできるわね…陽射しを浴びる事で精神的にも衛生面でも良いと聞くし…)

家にいた頃はずっと引きこもりという訳ではなく、体を清潔に洗うために家の外の側にある川で水浴びをした事がある。
その頃は外の景色を眺めながら水に浸かり小鳥や空を見上げては心地いいと感じたこともあった。
流石に冬の季節は拷問と呼ぶくらい厳しかったので、最悪だったしドラム缶くらいあれば部屋に持っていき火を点けて（古典的なやり方だが、摩擦で火をつけて）沸騰させた状態で浸かるという方法も考えたのだが、そんなもの家にあるわけがなく、心臓麻痺を起こしてしまうのではないかというくらい憂鬱だった。
「…そういえば、焔達は普段お風呂とかどうしてるのかしら」
昨日は入らなかったにせよ、此処の近くには川があったし恐らく何らかの方法はあるだろうと楽観的になりながら、再び読書に集中を戻す。
…まぁ、尤も二、三日とも風呂に入らなくとも問題はないのだが流石に衛生面や不潔になるのは喜ばしくないので上手くやれるだろう。
「思ったより面白かったわねコレ。次は春花の新しい薬の調合本でも読んでみようかしら」
などと読書を終えた美怜はパタンと分厚い本を置き戻し、一息吐く。心理学は好きだ。
人間の心や想いという事に関して配慮が欠けてたり、理解に悩む美怜にとって、参考書にでもなったのだろう。
実際に書かれてる事が違ったとしても、知らないよりかは知る方が良いし、真実と異なる場合であればその真実を知れるだけ有難いもの。
「…気づけばもう昼なのね。小腹も空いたし…そういえば昼食について何も話してなかったわね」
単に忘れてただけだろうし、バイト中の焔達も多分心配してるのだと思う。特に詠に関しては間違いなくそうだろうし、変なところも含めてお人好しな部分が多いあの連中からしてその推測は間違いではないのは確かだ。

「まぁ、何もなければそれでも我慢するだけで良いのだけど、流石に心配された挙句何も食べてないってなれば余計に気負いするのも宜しくないから…仕方ないわね」
先程焔にも言った通り、お荷物になる気はないと断言したのだ。子供にしろ何にしろ手助けされなければ何時迄も状況打破出来ないひ弱なヒロインという訳にもいかない。
美怜は護身用の大鎌を軽々しく振り回しながら、肩に担いで外へと歩み出る。

外に出れば生い茂った草木や葉がありながら、美怜は細心の注意を払いながら奥へ奥へと森林の奥地へと足を運び出る。
念のため、道印となるように塗色の薬品を零しながら足元を矢印にして散策を続ける。
勿論迷い込まない為のも含めて、時間経過で色は消えたり抜忍狩に情報を盛られることもないので危険性は低い。
本当なら忍が扱う色米を使えば良いのだが、流石にアジトにはなかったので仕方なく春花から借りた薬の調合を行ない実権も兼ねて使う事に。
「蜂や毛虫等はいないようね…取り敢えず蛇はなんとか捕まえたけど」
片手に絞め殺した蛇を手に持ちながら美怜は食料調達を行なっていた。
詠と話してた時に「お金がない」と言ってたり、焔達も「肉が食べたい！」とも言ってたりと苦しんでいたのもあり、食費も掛らず尚且つ肉も食べれるという両立した意見を求めた結果としてサバイバル形式で食材を探す事にした。
此処ら辺の土地に詳しくないのもあるが、これを期に知るのも良い機会だと前向きに考えた結果として外へ出て狩を行なっている。
焔達にも留守番はしておけと言われたし、外に出る事で万が一抜忍狩に遭う可能性もあるが、美怜は実際に狙われる危険性は低いと感じている。

焔達は抜忍で、命を狙われてるという話は既に耳を通してる…然し、伊佐奈の件で知ってるだろうが美怜自身上層部や抜忍狩は彼女を知ってるとは限らない。
それもそうだ、つい最近仲間に入ったばかりのメンバー、況してや戸籍記録もない上に顔や写真、情報すら無に等しいほどの人間は裏社会の人間と同じく謎が多いのだ。
一眼見ただけで彼女が焔紅蓮隊の仲間だと知る術は持ち合わせてないし、鈴音とやらが情報を渡したにせよそうでないにせよ顔そのものまでは分からない上に、上層部に派遣された忍も流石に無闇矢鱈に一般市民に手を出すことは殆どないだろう。
あったとしても返り討ちにするなりアジトへ連れて拷問なりすれば良い。
そして対抗術や打開も既に頭の中では分かっているので、後は実践あるのみ。
「このキノコ良いわね、食用として使えるわ。カエンダケは危険だから手袋で毒の調合にも使って……薬草も大量。思った以上の収穫ね」
高望みせずとも「食料さえ取れればラッキー」程度の美怜としてはかなりの収穫だ。
毒キノコは抗体や研究、迎撃や殺しとして使えるし、薬草は応急処置などにも適応し、蛇やリスは食料に向いている。
「あら、丁度良いお目当てなものが見つかったわ」
と、此処で草むらを掻い潜ると、お目当ての獲物が見つかった。正直、いない可能性も考慮していたが予感は的中。
美怜は舌なめずりをしながら大鎌の柄を握りしめる。
此方には気付いてない、今こそ好機。美怜は集中力を極限に高めて、足音を立てずに狙いを定めて獲物の首を刈る。

空がオレンジ色に焼き焦げた夕焼け頃、焔紅蓮隊のアジトへと最初に帰ってきたのは春花だった。
「はぁ〜…今日もバイトクビになっちゃったし…流石にこうも7回も

連続でやられるとキツイわよねぇ…」
　コンビニのバイトとして雇われていたのだが、接客の際に中学生にちょっとしたサービスを提供（客観的に見ればセクハラとしか見えない）していた為、それを店長に見つかり即刻叱られクビにされてしまったという話だ。
　バイトと言えば、家庭教師やファーストフード飲食店の店員、交通道路の誘導係など、それぞれのバイトを始めてみるもどれも全てクビにされてしまった。
　家庭教師の仕事の時は少し暑かっただけで胸元のボタンを開けたら中学生のウブな男子が鼻血を出したり、交通誘導の際にサービスとしてお尻を向けたら何故か車が勝手に一直線に走り事故を起こしたり（運転手が釘付けになり余所見運転をしてしまった為）、ハンバーガーショップに至っても今回と同じように女子の免疫に弱い子を揶揄ったら店長に首を掴まれなど、今思い返せば黒歴史ばかりだ。
「あ、そう言えばバイトで忘れてたけど美怜ちゃん…食事はどうしたかしら…」
　ふとここで我に返った春花は疑問を浮かばせる。
　此方は食事に関してはバイトで出してくれるので食事に関しては思い浮かばなかったが、流石の彼女も空腹で機嫌を悪くしてるのかもしれない。
　此処は帰ったら慰めるなり何なりしようかと思いながら、アジトへ戻ると
「あら春花、お帰りなさい。バイトって結構時間がかかるのね」
　アジトの出口で焚き火を起こし、猪や鹿を焼きながら薬草を潰して調合してる美怜が優雅に焼かれた肉を齧りながら研究に没頭していた。
「思ったより全然大丈夫だったじゃない…！」
　お詫びに何をしようか考えながら、香ばしい肉の匂いに空腹感を刺激される春花を他所に、美怜は美味しそうに肉を頬張る。
「空腹を空かせて野垂れてた方が貴女的には良かったかしら？」
「いやそういうわけじゃないけど…心配して損したというより…」

「煮え切らないわね、まぁ良いわ。折角だし貴女も疲れて空腹にやられてるだろうし…肉でも食べて腹を満たしなさいな」
　ほら、とサバイバルナイフで肉を切りながら火で肉面を炙り、じゅうじゅうと肉汁が火に注がれては呼応するように燃える焚き火の光景に、口の中が自然と唾液で溢れていく。
「こ、これ…美怜ちゃんが…⁇」
「ええ、それに昼は蛇を焼いて食べたわ。中々にどうして、見た目と違ってとても美味しかったわ。毒を抜いて毒薬として血は保管してあるし調合素材も問題なく調達できたわ。今度抗体の作り方とか教えてね」
　はいこれ、と焼き上がった肉の塊をフォークで刺して春花に差し向ける。絵面的には食べ物を差し出されて食らいつくような程精神が保てない訳ではないのだが、いざこうして出されると野草生活が続いてた分、目前の欲望に目が絡む。
「じゃ、じゃあ遠慮なく…♪」
「ああそれと、バイトで稼いだお金で甘いお菓子一つ頂戴な。これは交渉ね」
　…どうやら美怜は本当に交渉術が上手いようで、食べてから約束されたことで肉の味はしたが、バイトでクビ連発した春花は何処か罪悪感に浸ってしまったせいで、美味しさが半減したような気分に陥った。

「これ、美怜ちゃんが…？」
　そしてそうこうしてるのも束の間、詠、未来、日影、焔の四人が帰ってきてから、目前の異様な光景に思わず固唾を飲み込んでしまう。
「私も最初はびっくりしちゃったわぁ…家事は終わってるし食用も用意してるし、オマケに私が書いた調合のレシピも全部レポートで纏めてるんだもの。幾ら時間が多いとは言え、ここまで来ると生活的にも楽になれるし」

「私は生憎バイトとやらは受けれないし資金も稼げないから、私自身出来ることをやったまでよ。ああそれと春花、こっちの薬品Ａは出来上がったから１５分程でＢの方も見てくれる？レポート通りに出来てるはずだから」
　春花と美怜は薬の実験研究に没頭で、二人して早くも共同作業に励んでいた。
　この山から採れた多様な植物を薬として調合する事により、マッドサイエンティスト以前に科学者としての本性が疼いたのだろう、美怜は淡々とこなしながら集中を高めている。
「奪ったとかじゃないよね…？」
「あら、素敵な考えね。奪い殺すのは実に生物的らしい…今度そうしてみようかしら？」
「ちょっ!?悪忍並みに性質悪いじゃない!!」
「冗談よ、外に出て下手に問題を起こすのは私としても喜ばしくないもの…常識がないとはいえ、貴女達の最低限のルールとやらには従うし安心なさい」
「サラっと非常識的なことを発言しちゃってない？」
「常識だなんて他人が当たり前だと言わせるように作った唯の価値観でしょう？本音を言えば盗みを働くのも悪くないと思ったのよ。まぁ、盗むことでそれなりに問題が発生するのなら、穏便に済ませば良いだけのことだし、そして山で採れた彼等はお金もかから無いから…良い貢献をしたと思ってるわ」
　独自の倫理観を持つ彼女に少し慄けを感じてしまう未来に、日影と焔は興味津々そうに収穫した食材やらとに目を付ける。
「なんやこれ、芋？」
「猪の他にも干して吊るしてあるリスに…魚か？川で捕ったのか！後は蜂か？これは一体何に使うんだ？」
「油で揚げて食べるのも良いと思うのだけど、漢方薬として使うことにしたわ。ああそれと日影、そのキノコは間違っても触らないで、毒で皮膚感染して死に至るから」
「そんなもんまであるんやなぁ……じゃあこれは何の為に採ってきた

んや？」
「研究の為よ、それとこれを上手く武器に塗りたくって戦闘を有利にさせるのもアリかもね」
「それほぼ死ぬんじゃ…」
「あら、私達が武器を振るう相手は殺されても問題ない相手ではなくって？生きる為に何かを殺すと言うのは、人間が当たり前のようにしてる事じゃない」
「そ、それとこれとは違うと言うか…」
「何がともあれこんだけ食材があれば暫くは食い凌げるし、野草やらもやしばかりにならなくても済むぞ!!
　あぁ、早く肉が食べたい!!私は我慢できん…美怜、此処の辺りで採れたんだよな？」
「リーダーに誉められれば私も上々かしら…ええ、ここの森林地帯を漁ってみたのだけど思ったより収穫出来たのは此方として思わぬめっけ物だわ」
「もやし以外にこんな…こんなご馳走を頂いて宜しいのでしょうか…?!今夜はもやし鍋にしようかと思ってたのですが…！」
「なら丁度良いじゃない、もやし鍋に肉を詰めて食べましょう。肉ばかりでは体にも良くないし、野菜を摂取するのも人体に必須な事だから」
　詠にとって贅沢は敵であり、豪華なものに目が絡むのだが、自然の恵みというのであれば許容範囲らしい。何せよ、以前蛇女の修学旅行にては豪華なご馳走の前でタッパーに詰め込んでいた程なのだから。
　六人飯を囲うように盛り上がり、暖かな篝火に照らされながら食卓を楽しむ。
　美怜が来てからというもの、こうして過ごす日々が楽しいとさえ思えていくのは紅蓮隊の生活に色が付き始めてきてるからなのだろう。
　こんな日がいつまでも楽しく続けていけば続けていけば――……

滋賀県・霊仙山にて、彼女達も微かな進歩を進んでいく。
高い座標にして空気が冷たく、生い茂る筈の草木は枯れており、干ばつとしており絶好とも呼べる景色も今となっては台無しだ。
霊仙山に今は誰一人としていない筈なのに、其処には確かに人影が二つ其処にある。
「まさか…此処に来て漸くと言うのに…ここまで歯が立たないとは…」
一人は蒼い短髪に沈着冷静を装い、嘗ては蛇女子学園に在籍し、今となっては潰すために憑黄泉を送り込み、漆月の為にと仲間集めに励んでいた彼女は、思いもよらない障壁と出くわした。
この地に潜む凶悪な敵に出くわした蒼志は、成す術なく地に伏せている。
彼女の忍装束は既に半壊し、肌の露出やら下着やらが見受ける手負いの蒼志を前に、威圧を放つ大柄な獣人は苛立ちと悲しみに表情を染めている。
「『魅影』!!グルウゥゥ……!!何故だ…っ!なぜこんなにも弱すぎる抜忍を仲間と見るか…魅影殿!!
処刑少女共とではなく、有象無象の破壊衝動の仔虫など…何故にだ……!!!」
獅子と狼という混合した天災を齎す獣人は、蹂躙するかのように、蒼志の刀を踏みつける。
獄獅狼の体は蒼志によって放たれた蒼炎を浴びながらも火傷一つすら負わず、無傷で佇むばかり。
「魅影…?一体何を……」
初っ端から、幸先は雲行き怪しく混乱。
蒼志を前に立つのは悪の象徴・オール・フォー・ワンが隠し通した

友にして、漆月たること天咲魅影を守り育てた教育者、周辺防衛の一人。その名も『獄獅狼』。
ギガントマキアと同じく、主の為に全てを捧げた、忍にとっての破壊者であり、最も忍の象徴・陽花の実力に近い者だ。

真紅京都編
２１３話「そうだ、京都へ行こう」

見慣れぬ山外は外の空気が澄んでいるものの、温度は地上と比べて低くありつつ、息を乱しながら自然と汗が流れ出るのは、山を登ることに体力を消費するからだろう。
「ふぅ……此処なら暫くは行方を眩ます事ができるでしょう…」
蛇女から大きくマークを付けられた蒼志は、蒼い髪をサラリと払いながら一息吐く。
神野区一件後、オールマイトという平和の象徴が無くなってから既に月日が経っている。集団で動くより拡散して警察や忍を始めたヒーローの目を逸らす為とはいえ、流石に何度もこの生活を続けるのは酷というものがある。
尤も健気に仲間集めに励んでるのは荼毘と蒼志のみで、時代遅れの天然記念物たること死穢八斎會と一悶着あってから、慎重に行うようになった。
荼毘はゴミ掃除と言わんばかりに幾つもの焼死体事件が相次いでると聞いてはいるが、偶に同じ抜忍のチンピラグループから「あれアンタがやったんだろ!?」と変な噂が偶に立つのはどうにかして欲しい処だ。因みに其れを本人に伝えたら「知るか」の三文字で返された。
荼毘曰く女は嫌いとのことで、蒼志や他の抜忍女仲間とコミュニケーションを避けてるようにさえ見えている。
あの面倒な黒佐波とも多少なりとも会話を交えていたにも関わらずだ。
っと、そんな事はどうでも良いとして…蒼志は追跡や痕跡を途絶えるために一目にもつかない山岳地帯に目を付けた訳だ。
野宿というのも気が引ける話だが、後は死柄木や漆月が大きな事件を起こすか何かしてくれれば良い。

他人任せなのは百も承知、若頭オーバーホールの言葉通り、金がなければ計画を動かせない。そして自分達には資金が圧倒的に足りずにいる。
ならば贅沢するよりも、こうして金を費やないように努力しながら追手を眩ませ、仲間集めを行うのは非常にベストだ。
他の仲間達がどう過ごしてるのかは気になるが…
「……さて、蛇女を潰せなかったのはかなり惜しいですが…流石に漆月に憑黄泉を寄越せとは言いづらいですし、というか憑黄泉っていつ漆月の管理下になったのでしょうか？」
神野区一件後から憑黄泉という存在を知ったのはそう遠くはない。そもそも妖魔を使役していたという事でさえ初耳なのにも関わらず、さも当然のようにあの化け物は敵連合の支給物資となっていた。
脳無はまだ分かる。
初期からオール・フォー・ワンの手により改造を施されたという人間の形をした玩具。自立思考を持たず、命令通りに動く順従なる下僕。
複数個性を持つという事自体驚かされる自体なのだが、超常の真中こう言った事例もあるのかと楽観視しているし、幾らでも説明が付く。
だが、憑黄泉はどうだ？
一体何処で管理を行い、どう行方を絡ませ、どう言った形で漆月との接点があるのだろうか？
(そう言えば、憑黄泉は私の命令通りにするようにしたとも言ってましたよね…そこの構造的には脳無と変わらないのでしょうか？何しろ、調整や管理が必要と言った理由があれば、我々連合に負担を掛けまいと憑黄泉に任せないのも納得…)
まぁ、流石にそんな事が可能であれば此方も苦労はしないというもの。
それよりも仲間集めに励まなくては。
今は戦力が欲しい上に、まだ見ぬ破壊衝動に駆られた抜忍も少なくはないだろう。

下忍以下の実力に伴わない三下雑魚や、オーバーホールを始めた仲間になる気のない輩も集めるわけには行かないので、此方がきちんと見極めなければならないのだが…
「…気配がない辺り、追っ手は大丈夫みたいですね……取り敢えず寝床や食料など確保したいですが…」
「――お前が世を騒がせてる抜忍の一人か」
などと安楽していた途端、ドスの効いた不慣れな声が何処からともなく鮮明に耳を打つ。
「――ッ?!誰!?」
反射的に背中に携えてた宝刀の鞘を抜き、刀身を輝かせながら警戒態勢に入る。
気配は無いし万全、視界には何処にも敵は映らない、にもかかわらず声はたしかに聞こえた。空耳にしては、心臓が嫌に高鳴っている上に悪寒がする……だが、其処はかとなくして枯れた木々から影を揺らしながら歩み寄ってくる異形な姿をした大男が姿を現わす。
「俺は獄獅狼――友に全てを捧げ、新たな救世主の為に再び全てを捧げに来た……忍を滅ぼし者の一人よ」
ギラリと並ぶ凶器に等しい鋭利な歯を見せ、黄色の狼と獅子を合わせた混合の顔立ちに、毛深く鍛え上げられた肉体は、地獄から這い出た狼。秘伝動物のケルベロスを持つ蒼志とある種、本物に近い冥府の番犬だ。
「匂いで解るぞ…貴様、『魅影』と幾重も接触しているな?奴が生かすのは利用価値ある同胞か、殺害マークを付けてるもの…グルル……追っ手から逃げてる様子を見た限り、血の匂いがない辺り、紛れもなく魅影の味方だろう?」
魅影?
先程からこの化け物は何を駄弁ってるのだろうか?敵意はないようにしろ、この威圧感と圧倒的な存在感からして油断ならない。
「俺は…神野で友が消えたことに只ならぬ憤慨と悲哀を感じた……同時に、俺は待っていた。新たな次世代を担う魅影のお迎えを。
平和の象徴無き今を体現した時、必ずや俺の力が必要だと友から言

われ、時期に処刑台（シスターズ）達も解放されるだろうと…」
「貴方、友やらシスターズやら言ってますが…分かるように教えてくれませんか？さっきから独りで勝手に話してるだけで見えないのですが…」
「故に、貴様のことは重々噂に聞いてるぞ…グルルルル…魅影と同じく、忍社会に反乱を齎し志す者だろう？
その名も蒼志……貴様との出逢いもまた、破壊へ導くための命運だとして、貴様に其れほどの価値があるかどうか」
「…はい？さっきから何を…」
「貴様という存在が果たして魅影の名を語るに相応しいか、仲間と呼ぶに価値のある実力があるか、貴様が何をもたらし何を語り、俺を説得できるか……さぁ、試そうか。

貴様は俺に何を見せてくれる？」
どうやら相手は闘る気の様だ。
このままでは不味い…然しそう易々と流してくれる様な雰囲気もないあたり、此処は闘うしかないのだろう。向こうがその気なら此方も応じるまでのこと。
だったのだが…

「弱い……この程度の実力で魅影の為に捧げようなど…!!使い捨ての駒でなければ納得がいかない…!!グルルルルゥゥァァァァァァ!!」
憤慨を燃やしながら吠える獄獅狼に、不愉快な気分が昂ぶる蒼志は、額に青筋を浮かべながら、激痛に身をよじらせて何とか這い上がる。
「さっきから黙って聞いてれば…一人語りで偉そうに……！」
（この大男にムカつく理由は多々ありますが…にしても明らかに可笑しすぎる…異形が彼の個性ではないのですか？忍術は扱ってない…にも関わらず、複数の個性を発現している…!!）
一つ、角が生え筋力や炎を浴びても瞬時に再生を促し筋力増強を施す『鬼』という個性

一つ、素の力とは違う個性による『パワー』
一つ、『空間を裂ける』個性
一つ、身体の硬質とは比べ物にならない『ダイヤモンド』化
一つ、口から赤色の熱線を吐き出す炎系統の個性を超えた『破壊炎熱線』
軽く戦闘を交えただけでこれ程の個性が挙げられている。
複数個性の所有者を考えるとオール・フォー・ワンに脳無だけだと思ったが…
「ハッキリ分かった…貴様は何もない空っぽな抜忍だ…そうだろう？では何か？貴様の存在意義が何か示すことは出来るのか？貴様は何を残せた？」
何故か獄獅狼は、自分達に対して大きな存在意義を唱えている。その言葉が蒼志の心を抉っていく。
「全く…鬼門島の封印が解かれた今、『匂い』からして首吊り樹海が此方へ来るというのに……あの不届き者共に制裁を加えなければならないのも、また友の為たる使命であるにせよ……奴らと遭遇していれば殺されないだけでも幸い……」
「…ええ、そうですよ…！私は何も齎せない……あのクソ女に見向きもされず、連合でも貢献できず、蛇女を潰し損ねて、あぁ…私は確かに、何も為せれない弱者故の末端…!!ヒーロー殺しがその場にいれば粛清対象者認定の選抜補欠ですよ…!!」
それでも、自分が連合へ赴いたのは…圧倒的なる実力を示してあの憎き女を越えるため。
ヒーロー殺し基忍殺しと謳われたステインの意思などはどうでも良い。荼毘やスピナーは後継とかどうこう言ってたが、そんな話は心底どうだって良い。
「だからこそ…!!漆月率いる敵連合で私は強くなれると…!!そしてもう二度と誰にも見向きもされない弱者から、強者に変わるのだと…!!!
非道にならなければ、屑にならなければ世の中は生きてはいけないと…!!!そう、今まで信じて生きて来た…!!」
「……」

「それを見ず知らずのテメェが…!!知ったような口でしゃしゃってんじゃねェよぉぉぉ!!!!」
蒼志が誰にも見せた事のない一面を曝け出すのは、ある意味この場面が初めてだろう。
ステインも言っていたが、人は死を前に初めて本性を現すと語っていた。蒼志も同じなのだろう…抑圧されたその礼儀正しさと冷徹そうな見た目からして、爆発的に激しく怒りを燃やすその光景は、正に蒼炎。
「……それが、貴様か。成る程…」
「だぁから…何を勝手に納得したように…」
「魅影とは貴様の言う漆月の事だ――」
その言葉で一瞬、喉が詰まるよう思考が停止した。
それこそ、激しく酸素を取り込み全てを焼き尽くす炎が、一時停止するかのように揺らぎが止まる。
「…へ？」
「俺は奴に人を殺す技術と実力を極限に高めさせ、オール・フォー・ワンの後継者になるよう守り育てて来た。
全ては忍という世界を壊すため、それから新たな支配者として君臨するため、だがそれは単なる手筈に過ぎん……だからこそ、高尚たる夢を実現させるためには、女王を支える強き兵が必要だ。
そして、貴様は強き兵か…魅影を支え夢を共に歩むに相応しいか試していたのだ」
強き兵だけなら獄獅狼や脳無、憑黄泉だけで充分だ。
名高い実力を兼ね備えた忍なら分かる、然し蒼志と出逢いながらも納得はいかなかった。
「だが…貴様の言う非道にならなければ生きること叶わず、屑になろうと手段は選ばないのであれば…それを強さと認めるという説は一理あり――そして僅かながらに貴様に可能性を感じた。

貴様が魅影と共に歩むに相応しい人材かどうかを」
獄獅狼は悪意のある笑みを初めて見せた。
グルルゥと喉を鳴らしながら、狂気の爪を蒼志の頬に触れる。
「だから、もう少しの間だけ…一ヶ月間貴様を鍛えてやろう――そして貴様が実力を身につけ、俺が認めるようになれば……その時は蒼志、我が忍社会を滅ぼす同胞と認め、俺はお前の力になろう。貴様が危険に晒された時、呼び出したい時、全て応えて見せようぞ――その後は他の連中にも同じことを繰り返すが…」
「鎌倉や闇、龍姫に私と同じことを味わせると？」
「当然――使い捨てではなく共に歩む仲間であれば。貴様らはまだ知らぬだろう…カグラを名乗り始めた強豪ばかりが存在する事を」
忍社会を壊す行為は、それ即ち世界中のカグラからマークを付けられ、会敵することも意味現す。
世界ｎｏ．１現段階で忍の象徴に近きリーダー　黒月
カグラ四天王　リュウ、マナ、金剛、白虎
死塾月閃女学館教官、神白
カグラではないが、現在行方を絡ませてる抜忍、桃
代表的な例は挙げたものの、それ以外にも充分危険視するカグラは多く存在する。そんなカグラ達でも、獄獅狼の行方はおろか、迂闊に手も出せないでいるとのこと。
そして此方に敵意のある抜忍達もまた同じ義理の事。
「俺を超えろとまでは言わず、負かせろとも言わん…だが、今の貴様らではこの先荷物となり、魅影の足を引っ張る。それは夢叶わず首を絞める行為…それだけは断じて許さん。
貴様らが本当に魅影の為にと戦えるのなら、これくらいは当然だろう？」
「はぁ……つまり、私は暫くの間は貴方と一緒でなければいけないと？追っ手とかはどうすれば良いんです？」
「俺が駆除する――要らぬ心配はするな。再び見極めよう…全ては、我が夢のため、主人の為、そして……悪しき混沌の世界の為へ」

神楽とは遥かなる山頂。
深淵たる海溝、絶頂まで高く極限まで深い。
神楽とは戦神の化身、平和の使者。
震えるほど強く、慈愛のかけらもない…。
神楽とは…
神楽とは…対妖魔に特化した究極の強者。
全ての忍は神楽に憧れる。
それは高き山脈であるから。
それは広き海原であるから。
神楽とは…
神楽とは…短い命の華が、妖魔を滅して咲き乱れる。
神楽とは…戦いの中で閃く一瞬の光。
数多の光に閃乱カグラが咲き誇る…。
神楽とは…これから始まるは儚くも美しい神楽の物語である。
真紅の忍達と神威、そして神楽が合間見えるとき、一体何が起こるのか…。
神楽とは…
神楽とは…憑黄泉神威の対となりて、闇夜に紛れし怨念を討ち払う太陽の権化。
狂気と厄災を破りし神にして、『百妖夜行』を止めし者。
山吹く悪しき病魔の竜から人々を護りて、原罪を滅ぼせし宿命。
嗚呼…邪悪な闇が眼を覚ますなら、慈愛の朝日が差し昇り、月と太陽の血争う百戦乱舞巻き起こるなり。
神楽とは…全てを照らす光なれ、数多の影は地に還り。
何処に光が帰る時、新たなる対の影が産まれけり。
光と影は対となり、輪廻の如く転生せよ。
新たな命が生まれるは、此処に想いが生まれ来る。
共に歩けや共に廻れ、光と影があるならば。

森羅万象として常世に廻れ、光と影よ。
廻れ時世、戻りきよ。
神楽とは…神威とは……。

これは、神楽に纏わる古き伝承の逸話。
太陽の神が現れし時、人々の平和は訪れ心を浄化する。
悪しき妖魔を滅しては、憎悪浴びし月神怒り荒ぶりて、邪悪に歪みし竜は姿を現し百妖夜行が舞い踊る。
全ての妖魔を滅し時、やがて命は潰え地に還り、輪廻の螺旋に宿るなり。
これぞ閃乱カグラ――少女達の宿命、尊くも儚き集結の華々である。

闇夜の道を颯爽と駆け抜け、延々と続く竹や雑木林を過ぎ去って行く。
満月が照らす今宵、冷え切った空気が肌を痛めつけ、たった一人の少女は小さな幼女を大事そうに抱え込む。
「居たぞ、追え!!」
男性の剣幕する声が背中から聞こえるも束の間、ダァン!ダァン!と銃声が鳴り響き、服や皮膚を掠める。
「チッ…!追っ手か…どうして忍商会の者達が突然と姿を現して……」
掠めた皮膚から赤い血が滴り、痛みを堪えながら背後から迫り来る影を睨みつける。歯を食いしばりながら、守り逃げ果せる事しか出来ない自分に苛立ちが込み上がる。

「…『奈楽』ちゃん、大丈夫?」
「…っ!はい、大丈夫です。心配いりません」
そんな想いも、柔らかな幼女の優しき声に心が洗われる。
オレンジ色のフードを被る少女、奈楽はニコリと微笑みながら心配そうに尋ねる幼女を安心させる。
そうだ、自分の使命はあくまで命尽きるまで守る事…守護者にして生まれついた宿命だ。
戦うことで万が一危険に晒される事となってはならない。
「大丈夫なら一発ヤらせても良いよなァ!?!」
途端に、頭上から野太い声が浴びせられ、上を振り向けば筋骨隆々とした巨漢が拳を大きく振りかざしている。
振るわれた拳を避け、片手に迫り寄る手を蹴りで払いのけ、追っ手から攻撃を許さず走り去る。
「あぁ、クソ…!やるなぁアイツ…」
「そのまま追え『邪淫乱闘』!この先は京の都…強行手段は難しくなる!!早くあの子どもを保護せねば!」
「わーってますって、そいや奈楽とかいう小生意気な雌は殺処分スか?」
「現時点ではな!佐門様からも邪魔する者は排除しろと言われたろ!」
「ちぇっ、あぁー…生ハメで強姦してやりてェなぁ、勿体ねぇ」
「鬼畜の性分とはいえ私情と仕事を弁えろ新人!!女など幾らでもいるだろう!!!
全く…止まれ其処の馬の骨!死を以ってその無様な死体の醜態を曝け出せ雌餓鬼!!」
銃に口を当てて罵声を浴びせると、引き金から放たれた銃弾は醜悪な魔物のような異形の姿をした弾が、自動追尾し奈楽を狙う。
「全く…鬱陶しい!!」
これは避ける事は不可能…蜻蛉の如く軌道を変えて意志があるかのように永遠に狙ってくる。
この忍法は少々厄介…

「ミギャアあァァーーッ!!」
「ふっ!はっ…!」
背中を喰らおうとする異形の弾を、体の軸を回転させ上手く回避し、蹴りで弾を消し飛ばす。
もう一つ放たれた弾はバク転し自動追尾する弾の脳天を狙うようかかと落としで叩き潰す。
「そして一瞬の隙を俺は見逃さない」
其処で仮面を身につけた男は、空洞になってる右目を飛び出し狙いを定めて圧迫するよう地面に叩きつける。
まるで柳生が放つ鬼の眼のように瞳術を扱う青年は、避けようとする奈楽の行動を許さんと言わんばかりに、息の根を止めに掛かる。
「がっ…?!」
何とか躱そうにも避けきれず、頭を殴られた奈楽は意識が飛びそうになりながらも、幼女をより強く抱きかかえては態勢を上手く整え背後を向けて目的地にまで逃げて行く。
頭から血が流れ視界が邪魔になるのが鬱陶しいが…仕方ない。
…いや、目的地があったにしろ逃げ続けねばなるまい。
何処へ行こうと安息の地などない。
「渋とい…っ!」
倒れず仕留め損ねた奈楽に舌打ちをする瞳術遣いは、苛立ちながら怪訝そうに睨み付く。
情報通りとはいえど…護神の民は忍や他の人間とは違う古くから生き残った種族。そう易々と殺させては貰えないらしい。
「守ります――この命に代えても」
その為に…その為だけに、自分はこの世に生まれてきたのですから。
逃げ続ける奈楽、そしてその背後を追い求める忍商会の幹部が三人の影。まだまだ京都に着くには時間が大きく掛かり、このままだと他

の幹部達と合流する危険性も高くなるだろう…が、例えそうなったとしても、この命に代えても守らなくてはならない。
それが、自分に課せられた使命なのだから。

そして朝日が差し登り、物語は始まり、加速する。
「よーし!忘れ物はないな?行くぞお前たち!!」
紅蓮隊のアジトである洞窟から姿を現わす筆頭を始め、後から付いてくる五人に焔は元気よく確認をする。
「食料のタッパーともやしは最大限に詰めましたわ!」
「お菓子は三百円までにしたよ!」
「わし、京都行った事ないんやけど必須なものってないんやろ?」
「本やノートパソコン、雑誌や本…春花、研究器具はちゃんと欠かさずあるわよね?」
「はいはい、ちゃんと持ってるわよ美怜ちゃん。全く…旅行でも研究したいだなんて…こう言った日ぐらいは羽を伸ばしてみたら?」
それぞれが胸を弾ませながら意気揚々と旅行を楽しみにしているのが目に映り、本当に詠が京都の旅行券を当ててくれた事に改めて感謝する。
美怜の研究器具に関しては最初こそ辞めておけと制したのだが「京都先で何が起きるか分からない、用意は万全にしておくべき」と聞かず暇な時間さえあればやるつもりだそうだ。
「よっし、じゃあ行くぞ!」
こうして、紅蓮の少女達もまた京都へ赴こうとする。その先に待ち受ける混沌たる戦場が待ち構えてるともいざ知らず。

２１４話「ＴＨＥ・新幹線」

東京駅はどんな季節やどの時間帯に於いても充満と人混みで溢れている。
特に秋頃に近いこの季節なんかでは修学旅行やらが近付いてくる頃だろう…蛇女なんかでは合宿に温泉旅行などがあったし、他校でも旅行先が京都で合宿なんて展開はそう珍しくもない。
途絶えることを知らない東京駅より人混みで溢れてる中、焔紅蓮隊は離れることなく一団となって集団行動で駅の改札に留まる。
「よし！お前達ついに待ちに待った念願の京都旅行だ!!今までバイト生活やら野草生活やらで窮屈な日々だったが…切磋琢磨し合い、詠のお陰でこうして京都へ行けるんだ。
今日から思いっきし羽を伸ばして旅行を満喫するぞ！」
集団を纏め活気良く語る焔に、未来や春花は何処かとても嬉しそうだ。
「油取り紙に、映画村！楽しみなのいっぱい～！中学校以来よね～!!」
「他にも美怜ちゃんが喜びそうな京都名物とかも沢山あるだろうし、今からでも待ち遠しいわぁ～♪」
観光地、名物やらで溢れてる京都という地は歴史とともにとても有名だ。回る場所も多いし和を主張とし重んじる情景は正に忍である自分らとも落ち着く行き場でもあるだろう。
「ん？詠、貴女どうしたの？そんなこの世の終わりみたいな顔をして。あれだけ京都を楽しみにしてたのに…」
そんな楽しそうな雰囲気の中、美怜がいち早く異変を感じたのか、様子が可笑しい詠に一同も不思議と首をかしげる。
「み、皆さん…どうやら……京都へ行くには新幹線を使って行くそうです…」

「何を今更…と言いたいところだけど、そう見たいね。あれが新幹線…中々パワーでヘヴィーな機械的移動車なのかしら。昔は機関車などで移動してるのが多いとあったけど…時代ともにこうも変わるのね」
「そうです!!その新幹線に問題があるのです!!」
　詠は恐ろしく怯えてた様子から一変、険しい顔立ちで捲し立てる。
「なんと…!聞いたところによると新幹線は２００㎞ものスピードを出すんだとか!!そんな速度で移動するだなんて危険すぎます!スピード違反にも程があります!!」
　…どうやらこの金髪美少女、新幹線に乗ったことがないらしい。
「詠さん、新幹線乗ったことないんやな」
「その新幹線を超えるほどのスピードをハヤブサは持ってるそうね。何がともあれ、こんな公共の場を設けてる新幹線にスピード違反も無いのだから、心配する分だけ無駄だわ。精々人身事故だの飛び降りによって遅延することを考慮だけしておきなさい」
「うわ…なるべく考えるだけしたくないのに妙にリアリティあるのズルイ…」
　因みにハヤブサは時速３００キロのスピードを出しているという世界最速ギネスにも記録されてるらしい。ロシアなどの実験データでは３６０という世界最速を覆す記録を更新してる為、美怜からすればあんなものなんだと頭の中でイメージしている。
「然し美怜ちゃん…!もしかしたら何かしらの事故があって爆発するかもしれないんですよ!?」
「仮に爆発するケースがある新幹線を人に乗せてること自体、その人間の神経を疑うのだけど……根拠もない妄想を垂れても阿保な目線で見られるのは貴女だけよ」
「アホ!?私そこまでポンコツですか!?」
「これがギャグならそこそこ面白い路線で行けると思うわ」
　完全に揶揄い上手の美怜さんと化してる。
「ぬわあああぁぁぁぁ?!!」
　と、此処で突然と焔が言葉にもならない絶叫を喉から発した。

「今度はなんや？」
「そ、その…新幹線の切符がない!!」
「えええええ!?!」
焔の思いもよらない発言に、未来もまた絶叫して叫び出す。
周りからの変な目線が集中して色んな意味で痛くなる。
「恐らく隠れ家に置き忘れたか…それとも途中で落としてしまったか…くっ！私としたことが…!!」
この京都旅行は焔紅蓮隊の疲れを労う意味も込め、美怜の歓迎会としても含めた旅行だというのに、こんな事では自動的にキャンセルにする他ない。
切符がなければ京都も満喫出来ない上に、京都先による待たせてるガイドにも申し訳ない。
「それじゃあ京都には行けないってことになるなぁ」
「やだやだやだ!!映画村は!?八つ橋は!?油取り紙は!?」
「うふふふふ…♪残念ですが、切符が無いのでしたら仕方ありませんね…京都旅行は諦めましょう！」
「嬉々として全然残念そうじゃないのは何故かしら？」
「ふぇ？全然そんなことありませんよ～？」
まだ新幹線が危険物だと認識してるのか、美怜の指摘を流すように微笑む詠は安堵の息を漏らしてる。
「私はちゃんと切符を持ってるわよ？こんな事もあろうかと自分で管理してたの」
「あら春花奇遇ね、私もよ。他人に任せるより自分で管理してた方が安全保証もあるし、誰かさんが失くしたせいで私が行けなくなるだなんて嫌だもの。やはり自分の管理下の方が安心できるのもあるし、持ってて正解だったわ」
なんとこの息の合うマッドサイエンティスト二人組、焔の眼を盗んで二人共自分達で管理して保持していたそうだ。
二人の手元にはたしかに京都行きの切符を持っている。

「えぇっ!?美怜に春花様狡い!!」
「狡くなんかないわよ?ねぇ、美怜ちゃん?」
「そうね、相手の切符を盗んだとかならまだしも…ただ自分達で管理してただけなのに非難されるなんてね」
そう言われると何も反論できなくなる…いや、分かってる。こんなもの唯の我儘で、非情な現実を嘆くだけの醜い足掻きというのは。
だとしても、黙っていられずにはいられないというのが人間の性というものだ。
「まっ、と言うわけで京都旅行は私と美怜ちゃんの二人で一緒に行くことにするわ♪皆んなの分も楽しんで来るから」
「取り敢えずお土産位は買ってきてあげるけど…未来は油取り紙で良かったわね?」
「八つ橋は?というかやっぱ置いてけぼり前提の話なの?」
「いやダメだ!焔紅蓮隊は家族同然――六人揃って行動するのが基本だ!!」
嵐のように飛び交う雑談の間中、焔は首を横に振り春花と美怜の二人の行方を拒もうとする。
「焔、幾ら自分の過ちに負い目を感じてるとはいえ私と春花に京都旅行を行かせないというのは見苦しいわよ」
「そうそう…それに態々京都に行かないというのも酷じゃない?」
「いいや、打つ手はある!切符がなくて座席に座れないのなら…!!」
座れないのなら?と皆が心に思う事を、焔の放たれる次の言葉で全員が絶句する。
「新幹線の屋根に乗ればいい!!」

その一言に、文字通り全員とも眼を丸くし言葉を失う。あの美怜でさえも驚嘆してそうな顔で正気を伺っているのだから。
未来は手で頭をガシガシと掻き、日影は手で頭を抑え、春花は度肝を抜かれたような顔立ちで、詠は正気かという目で凝視する。
「…あかんわ焔さん、その発想は流石にぶっ飛びすぎや」

「焔ちゃん…幾らなんでも新幹線の屋根の上は…」
「毎度無茶はするけどさぁ…幾ら何でも限度ってものがあるよ焔ぁ…」
「……正気ですか焔ちゃん？」
「貴女はどうしてこう…やる事が殆ど修業に直球するのかしら。どんな思考回路に至ったらそんな考えになるの？脳筋にも程があるんじゃないかしら…」
「煩い！それに考えてみろ、新幹線でさえ中々に乗れない私達だ、屋根の上で修行なんて更に早々滅多にない！正に最高の修行場所だと思わないか!?
　京都の移動に修業ができる…一石二鳥というやつだ!!」
「修行って言葉にそんな利便性あったかしら？」
　美怜の冷静なツッコミも意に介さず、焔の瞳は熱く炎の如く燃えたぎる。
　そんな焔の情熱さに一同（美怜を除き）は「ああ、ダメだこりゃ」と諦念する。この時の焔は完全に頭に熱が昇り、何を言っても修行の方向に猪突猛進してしまっている。
「屋根の上で修行…時速２００キロのスピードで安全装着もなしにとなれば相当ハードね、冷静に考えたら切符無しに乗れるって考えは魅力的だけど、そこに修行だなんて無茶振りをする辺りから貴女らしいといえば貴女らしいけども…」
　新幹線の屋根の上などジェットコースターを安全装着無しで二足歩行で立ってるような超人的なものだ。下手すればプロヒーローでさえもそんな危険的ジャンルに手を染める事はないだろう。
　風速２００キロもの風圧が押し寄せては上手く体を動かす事はおろか、バランスが崩れれば吹っ飛び命の保証もないのは皆まで言うまでもなく安易に推測可能な事だ。
　然しその危機的状況を敢えて修行と言い張るのだから、困ったものだ。
「まあ何でも良いけど、私と春花は切符を持ってるし新幹線の中で寛いでるわよ。修行に付き合う道理もないし、切符を持ってるのにこん

な無茶振りに付き合わされるなんて罰ゲーム以上の何かだろうし」
「今回は私も美怜ちゃんと同じくって事で、中で待ってるわ」
　この時こそ春花と美怜の境遇に羨ましいと思った事はないし、詠も屋上より中にいた方が断然マシだと思っただろう。
「やはりダメですわ!!新幹線の上で修業だなんて…這いつくばるだけならまだしも、そんな危ないことをしたら新幹線が爆発しますわ!!」
「心配するな詠!お前はもっと新幹線を信じろ!!」
「焔、突っ込んで良いかしら？
　貴女はまず切符を忘れたことを反省しなさい。それとその修行とやらが原因で新幹線が停止して京都に行けないなんて大惨事になったら怒るわよ」
「……」

　新幹線の中というものは思ったよりも快適で、春花は学生時代に利用し事があるので珍しくもないのだが、美怜からすれば全てが初めての景色…ただただ子供のように周りを眺めてる。
「詠が物騒なことを呟いたりするし新幹線というものがどんなものかと思ったけど…凄いわ、断然的に過ごしやすそうね。窓もあるの、外の景色も眺められる…絶好の機会ね」
「席に座りましょう、この切符の札は…私と隣の席ね。上に荷物を載せれるから、しまってから座りましょうか」
　何十人者の人が席に寛ぎ、中には飲食物をテーブルに乗せたりと開放的で便利な機能を使ってたり、家族同士なのか談笑しながら席に着くもの、来て早々に眠ったりする客などが大勢と新幹線の中にいる。
　この安全的な光景を詠に見せてやりたいものだ。
「春花は新幹線に乗った事があるんだったわね、そう珍しくもないの？」
「珍しくはないけど滅多に乗らないわねぇ…まっ、元々そういう機会にも疎かったし。詠ちゃんも電車くらい乗ったことはあるけど、あの

子都会や今の世間の事を詳しく知らないから大目に見てあげてね？」
「私は構わないわよ？ああ言う反応を見てるのも悪くなければ、どちらかと言うと面白くて好きだし」
「揶揄うのもいいけど程々にしなさいね？」
　席に着きお互いが寛ぐ間中、屋根の上では今も焔達が過酷な訓練に身を投げてることなど御構い無しに、軽い雑談を交わしながらパンフレットを開き楽しく会話をし合っている。
「ねぇ春花、この八つ橋を始めた宇治抹茶スイーツはどのお店が美味しいのかしら…？沢山店があったり同じ品物も出てたりで目移りするのだけど…」
「そうねぇ、私はこの杏密という店がオススメかも。口コミとかでも結構評価も高いし」
「口コミ…？そう、ならそっちにしようかしら。そうそう、金閣寺や清水寺にも観光で観に行こうかと思うのだけど…こういうのって中は見物できるの？」
「う～ん…流石に無理なところもあるわよ？それに景色を眺めたりするってだけでもそれはそれで楽しいし」
「晴天の青空を見ると鬱病に患った人間の心理が和らぎ癒されるように、外の景色や美しい情景に心動かされる人間は少なくないと言うものね。中の物触が出来ないのは残念だけど…まっ、実物を見ると言うだけでも大収穫だし、仕方ないわね」
「ホント、美怜ちゃんは好奇心旺盛な子ね。詠ちゃんやお兄さんが妹だと思う気持ちも大切にしたい想いも分かるし、何だか子供みたいよね」
「ふふ、有難う。私は自分のこの幼稚体型には特に気にしてないけど、貴女からその言葉が出ると言うのも珍しい気もするわ」
「そうかしら？」
「ほら、詠に妹がいても不思議ではないけど、春花に妹とは何となく想像が付きにくくない？」
「ねぇ美怜ちゃん、それは一体どう言う意味で言ってるのかしらぁ？」
「さぁ…？一体どんな意味なのでしょうね？」

高速で移動し通過していく新幹線の中を座席で寛ぎながら談笑する二人の会話は、やれ方向転換がぐるりぐるりと回ってて会話が飽きないでいる。
春花は年齢的には１８歳ではあるが、見た目と性格的な差があり何処か母性的な熟女を感じさせる。尤もそれを気にしてるのが春花であり、美怜はそんな春花でさえも揶揄い面白がってるのだから怖いものなしだ。
「……ねぇ美怜ちゃん、ちょっと聞いてもいいかしら？」
「？何かしら、改まって」
京都の事ではなく別件の話と想定した美怜は、パンフレットを眺める目を声主の春花に向ける。
「美怜ちゃんは…生まれた時から彼処で生きてきたのよね…？」
「そうね、思い立った時にはベルゼ兄さんに助けられて生きてきたわ」
「それで、貴女のお兄さんと美怜ちゃんは全く違う存在だった…そこで忘れがちだったけど…両親の事についてどう思ってるの？」
何となく真剣な雰囲気ではあるが、美怜が子供らしい部分に二人っきりというシチュエーション、そして子連れや家族が多いこの状況下で、無意識につい親について思い出した節があったのだろう。
ついつい、お姉さんらしい自分ではなく、弱々しくも何処か本性を現したような一面を見せる春花は、美怜の頭に手を置く。
「…別に、何とも思わないわ」
「そうなの？逢いたいとか、両親はどうしてるんだろうとか…」
「確かに、兄さんが妖魔と発覚し私という人間がこの世に存在している以上は成人男性と女性が私の親として存在していたのは事実。
でも私はさっき話したように思い立った時は兄さんに育てられて生きてきた。親のように子育てしてくれた兄さんを家族だと疑わなかったし、今となっては顔も名前も場所さえも知らない親についてどう思うかだなんて無駄だと思ってる」
「……直球ねぇ」
流石に無駄だなと思ってると切り捨て断言する美怜に、春花は少し引き気味だった。それもそうだろう、それを淡々と事実を述べてるの

だから。
「オマケに今生きてるかも不明だし、仮に生きてたとしてもそれを知る術なんてないし、私のことを知ってるかさえあやふやだわ。やむを得ない事情だったのか、私の事を要らないと捨てたのかどちらかでしょう。そしてその理由もわからなければ、その根元である根拠さえ掴めなければ知ることもできやしない…だから無駄だと思ってる。
…ただ」
「ただ…？」
「私のこの…美怜と名付けてくれた事だけは感謝してる」
それは、彼女からは予想外の返事だった。
「名前というのは存在を意味現してるわ。名前がなければそれは、存在しないのと一緒…兄さんに名前も呼ばれず、自分のことさえも知れず……私は何者にもなれなかった。でも、両親が私のことをどう思ってるのかは分からないけど、私に名前をつけてくれたことは、凄く感謝してる。今言えることは、それだけよ」
名前がなければ、呼んでもらえる名前がなければ存在を為すことが出来ない。
それはいても居なくても変わらないような、そんな朧気な存在。
両親のことは知らないし、今は知るすべも知ろうとする気もないけれど、でも…自分を愛してくれる兄さんが名前を呼んでくれること、家族に名前を呼んでくれること、それ自体が感謝するべき事なのだと美怜は感じているのだ。
名前は自分が生まれた場所で何故か美怜と名前が描かれていた事から、美怜と呼ぶようになったのだ。
「…やっぱり美怜ちゃん、見た目は子供なのに考えてることは大人ね。それに比べて私は中身はまだ子供なのかしら」
「どのラインが大人か子供から分からないけど…悩みでもあるの？貴女が家族のことについて話すだなんて意外だし」
どうやら美怜の目は本当に誤魔化せないようだ、本当に伊達眼鏡じゃないかって突っ込みたくなるほどに。
「…美怜ちゃんの過去を知ってて、私の事だけ知らないってのも不公

平よね。私の家はね…」
春花の口から語り出たのは両親の事について、家族の束縛や家庭内の環境。
そして自分が鈴音に目を付けられ蛇女に通うまでの過程を、美怜に本音をぶつけるように零した。
焔達にもあんまり話さない自分達の内情を打ち解けたのは、雲雀と美怜の二人だけだろう。
「……そう、貴女のバックにそんな過去があったのね。だから蛇女にいるのも、傀儡の才能があったのも…貴女が誰よりも束縛を受け人形自身にされてたから、なのかしらね」
「そう言えば忍術の開花って、個性ともう一つはその人間の本性を現してるものね。皮肉にも違いないわ…」
「それにしても、どうして今になってその話を出したのかしら」
「迷惑だったかしら？」
「いいえ、純粋に疑問を持っただけ」
それも知的好奇心なのだろうか、いつだって彼女を突き動かすのは目先に映る謎を解き明かそうとする欲求。それが彼女の源なれば、致し方ない。
「…ちょっとね、美怜ちゃんが羨ましく思えちゃったのかも」
「羨ましい…？」
「そっ…」と素っ気なく俯くように返事を返す彼女は、少し照れくさいのも含めて中々もどかしいのだろう。
「それと同時に美怜ちゃんと一緒に通じるものもあるし…私はね、美怜ちゃんのお兄さんのように暖かく真っ直ぐな愛情を注がれた事もなければ、あの家にいるだけで中身が腐るように歪んだ母親の溺愛に束縛されてしまってた事…似た非なる形だけど、私と美怜ちゃんってそんな感じがするのよ」
春花の言葉に大凡理解した美怜は、納得したように相槌を打つ。
兄に真っ直ぐな純粋な愛情を注がれた美怜と
母の歪んだ溺愛に中身が腐り行かれた春花
そして、家族という存在が心も体も縛りつけるというその境遇に、

共感を持ち合わせてしまうからこそ、話さずには居られなかったのだろう。
「春花、ちょっとこっち向きなさい」
「んえ？」
突然とこっちを向けと言われた春花は言われたままにすると
美怜が少し座席から立ち上がり、春花を抱きしめる形で頭を撫でていた。
一部、視界に入る周りからも一瞬視線が集まるのも束の間、突然の行動に思わず息を飲む。
「みっ…?!」
「どうかしら、こうするの…気持ちいい？」
「気持ちいいって…」
気持ちいいというより動転してしまう気持ちが大き過ぎてそんな事は言ってられない。
「私はね、ベルゼ兄さんによく幼い頃からずっとこうして貰ってたわ」
美怜は耳元で囁きながら、ゆっくりと落ち着いた口調で、それこそ母親が子供の頭を撫でるように抱擁を施す。絵面的には逆な気もするが、それは触れてはいけない。
「私が初めて文字を覚えた時、数字の問題を解く事ができたとき、他の妖魔の子達と仲良しになれた時、本を読んで知識を身につけ兄さんに教えてた時、いっつも兄さんは正面から優しく抱きしめてよく頭を撫でて貰ってたわ…」
『エライネ美怜、凄イネ美怜。僕ハソンナ楽シソウデ頑張ッテル美怜ガ好キダヨ』
兄さんはいつも独りだった自分に沢山の愛情を注いでくれた。些細なことでも、美怜が何かを成し遂げた時、笑顔で楽しそうにしてる姿や一生懸命に物事に対して集中してる時など、いつもこうやってあやしてくれてたのを思い出す。
もうそんな風に当たり前のように愛情を注いで尽くしてくれた兄は今はもういないけれど…
「春花、貴女が一体何を通じてどんな気持ちで親の愛を受けたのか、過

酷な環境に身を置かれた心情は、当事者でなければ分からないし、本当の愛情というのも私では判別付けることは出来ない…けど――」
一区切り終え、改めて顔を見合わせる。
「新しい家族なら、此処にいるわ」
それは美怜自身が心の底から焔紅蓮隊のことを家族だと心の底から信頼を寄せ、愛してる証拠のもの。
「過去は消えない、変えられない。そして元には戻れない…でも、これからの愛情や想い出は沢山作れるわよ。それが可能なのは、今生きてるからこそできること。
まぁ尤も、私は貴女の母親ではないし…親限定という話なら流石に難しいところではあるけれど…」
「……美怜ちゃん、何だか大分大人になってない？」
「そう？自分の変化なんて気付かないけれど…貴女が言うのであればそうなのかしらね」
美怜は相も変わらず日影のような乏しい感情をした顔立ちで小首を傾げる。こういう可愛らしい面は子供らしいのに…不思議な子だ。
それが美怜という少女の個性なのかもしれないが…。
「まさか、美怜ちゃんに慰めてもらうだなんて思ってもなかったわ」
「あら、慰めて貰えて良かった？なぁんてね、でも…事実を述べたまでだから。
……それに、貴女の気持ちも分からないでもないから」
最後は少しだけ小さな声で呟くと、美怜は微かに微笑んだ。それは自分が無表情だと感情がないだのと言ってた彼女とは未比べ物にならないそれは、何処か日影のような面影が重なる。
「……私の両親は、最低なクズだった…でも」
「殺してないのでしょう？何度でもやり直せると思ったから、手にかけなかったのでしょう？そう、親心がある時点で貴女はやっと人形から人間に戻れたって訳ね」
「もしも…今の私と再開できたら、上手くやれるのかしら…」
「分かりもしない未来なんて、分かるはずがないでしょう…けど、貴女がしたいようにすれば良いわ。そして信じて進めば良い…人間って

いうのは、信じたいと思う道に歩んでいく生き物だから。
貴女が両親に会いたくないと思えば会わなくても良いし、再開したいと思うならすれば良いわ。其れに関して、誰も貴女を責めることなんてないし、それこそ何かが減るもんじゃないんだし。
私からの意見だと、家族や親がどうであれ特定の人物に拘らなくても良いと私は思うけどね」
親は血が繋がっていなければいけないか？
家族が同じ志を持つ仲間でダメだろうか？
兄が妖魔であることはいけない事か？
美怜の話を聞いてると、ふと常識的な考えに疑問さえ思いついてしまうほどに。
「はぁ～……やめね、湿っぽくなっちゃった！私らしくもない、こういう辛気臭い話より、明るい話でもしましょっか！ほら、折角の旅行なんだし」
「そう。なら未来の言ってた映画村って所なんだけど…」
…有難うね、美怜ちゃん。
直ぐに切り替えが早い美怜を横目に見つめながら、再びたわいない雑談を交わす。
きっと、兄と今まで過ごして来た彼女だからこそ春花にだけは言えた事だろう。勿論、両親の愛を受けながら貧困育ちで他界した詠とも話し合えると言えばそうなのだが、何というか詠の場合は重すぎるので躊躇ってはいた。
然し彼女のように敵対することも壁を作ることも、贔屓する事もなく真正面から本音を言える少女だからこそ、此方も思うように隠す事なく喋ることが出来る。
（新しい家族…か――）
それは同時に、ベルゼ兄さんからも卒業したという意味合いが込められる言葉に、成長を感じるもののあの妖魔のことを思い出す。
あの妖魔はどうして、そこまで美怜のことを固執していたのだろう。もしベルゼ兄さんが見境もなく人を殺す妖魔なのであれば、美怜はとっくの昔に死んでいただろうし、こうして新しい家族としてで迎

える事もなかったわけで。
――お兄さんには、感謝しなくちゃね。
紡いでくれた兄のお陰で、こうして焔紅蓮隊には新しい家族の一員が増え、そして美怜もまた自由に外の生活を謳歌する事が出来る。
そう考えると、改めて美怜の兄は本当に強くて、誰よりも妹想いで、本当の本当に世界一の兄だと痛感させられる。
嗚呼…もし自分が本当に辛くて耐えられなかった時は、側に誰かがいてくれる。
それは母の着せ替え人形として、誰にも心を開けず閉じこもり、孤独のまま壊れてしまってた自分からは、想像もつかない程に恵まれてるのだなと。

その頃、新幹線の屋上では
「いやだあああぁぁぁ!!おっぴろげはもう嫌だあああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
とてつもない未来の絶叫が、風速２００kmと共に木霊し阿鼻叫喚が繰り広げられていた。

２１５話「ＴＨＥ・新幹線２」

「でね、焔ちゃんは蛇女に入学してきた頃は野蛮というか、誰彼構わず上級生や選抜候補メンバーをまとめて倒しちゃったのよ。当時の焔ちゃんはかなり棘があったわねぇ、何というかじゃじゃ馬というか、喧嘩好きというか…」
「あの活発溢れる猪突猛進の焔からしてそれくらいやりそうな事もあるけど…今と昔でそんなに違うのかしら」
「そうよ？いきなり私に喧嘩を吹っかけて来たり、冷静沈着、自分以外は敵だと認識してたり、善忍って聞くだけで額に青筋浮かべるような嫌悪感があったりね。過去の焔ちゃんが美怜ちゃんと会ったらまた違ってた未来になってたのかもねぇ」
「へぇ……そう聞くと少しは面白い対話が出来そうね。尤も…昔の私も人間不信が多かったり、忍は全て敵と認識してた辺り、通じるものもあるけれど」
「まぁ、焔ちゃんは家の事情だけに仕方がない事もあるけれど…他にも詠ちゃんはお金持ちを憎んでたり、日影ちゃんは感情のない殺戮マシーンとして育てられたり、未来は虐めっ子を復讐為る為に善忍から悪忍の道に進んだり…」
「皆んな色々な過去を背負ってるのね。日影が感情表現に乏しかったり、感情が無いと断言してたから失感情症という奇病に患ってるのかと思ったのだけど…環境によってそうならざるをえなかったと考えると、私と似たような境遇なのね。
　でもよくそんな日影が世に犯罪者として回されずに上手く生き残れたわね」

「昔日影ちゃんは中学の頃に地下の違法バトルファイトクラブで小銭を稼いで生計立ててたりもしてたらしいわよ。
　あれだけ蛇のように俊敏な動きになれたり、忍家系でもな肉弾戦で優位に立てたのも個性使用有りの違法上等、地下闘技場にとんでもない凄腕がいたんですって。確かえっと…ラッパーだったかしら？」
「育手…という訳でもなさそうね。詠は貧清だから貪欲なる金持ちは妬みも含めて安易に想像付くわ」
「いやぁ詠ちゃんの場合は妬みというより怨みみたいなものね…お金持ちのせいで親が～って発言もしてたし」
「因縁めいた繋がりがある辺り、詠は想像以上に過酷な人生を送ってるのね。未来は…虐め？あの子程なら忍ってだけでもやり返せそうなのに」
「ほら…善忍は規律とか守らなくちゃいけなかったし……私怨による忍法の使用はご法度なのよ」
「態々悪忍になるくらいなら先に害ある障壁は潰しておいて損はないのに…よく分からないわね忍のルールとやらも。未来が中途半端なだけだったか、まだ善忍としての夢を持ってたのか…何方にしろ半端だったという訳ね」
「半端って……」
「あら、私何か間違った事言ったかしら？」
「間違っちゃいないけれど、美怜ちゃんって人の怒りの琴線を地雷のように踏んでいくわよね」
「それならそれで研究として収穫ものね、人って生き物は相手の反応を見て学習するものよ。これを言ったら怒る、これを言ったら喜ぶ…それを熟知することで人の感情や心理は理解していき、データとして記憶に残るのよ」
　少しだけ楽しみを交えながら、春花と美怜は蛇女の頃の話を列車内で懐かしそうに物語り、美怜はそんな春花の蛇女エピソードに興味深そうに話を聞いている。
　あれから新幹線が出発して一時間近くが経過する。高速列車に乗り揺られながらも時間が経つというのはなんやかんやで早いもので、

物事に集中したりコミュニケーションを交えていると圧倒いう間に経つというのが殆どだ。
　体感時間は人とは異なるものの、何もしない事よりも何かをしてる事の方が時間が経つのを早く感じる体質で出来ている。
「あ、美怜ちゃん。そろそろ新幹線が止まる頃だから、少し此処で待っててくれる？」
「別に構わないけど…何処へ行くの？まだ京都に降りるには時間があるようだけど」
「新幹線が一度止まるのよ、そしたら焔ちゃん達の様子見がてら声をかけようかと思って。次の駅で止まって座席が空いてれば切符なしでも席に座れそうな感じだし、あのまま放っておくのも流石に不味いだろうしねぇ」
「そうね、私は別に焔達が屋上で泣き叫ぼうと知ったことではないけど…流石に棟梁ともあろうリーダーや仲間が命懸けの修行で本当に呆気なく吹き飛ばされて死んでしまいましたじゃ、色々と後味悪いものね」
　今のところ新幹線も止まる事を知らず、当然のように疾走している。もし焔が加減なく秘伝忍法を連発したり、未来の銃が火を噴くであればほぼ屋根に違和感を持つ者もいる。
「まっ、ウチのリーダーだからそこら辺は考えて…」
「考えてたら新幹線の屋根の上で修行だなんて馬鹿な真似やってないわよ」
「……それもそうね」
　そりゃそうだ。
　と我に帰る春花に、美怜はため息を吐きながら雑誌に手を伸ばす。
「じゃあ戻ってくるまで春花が読んでた雑誌借りるわよ」
「嗚呼、序でに喉も渇いたし自動販売機で私や焔ちゃん、日影ちゃんに未来の飲み物買ってきてくれる？勿論、美怜ちゃんは好きなものを買ってきていいわ」
「詠が抜けてるけどあの子はいいの？」
「もやし汁持ってきてるらしいから大丈夫よ」

「もやし…汁？」
なんだそれは。
いや…そう言えばアジトで詠が調理の際に何かしてた気がする。水切りをしてたのかと思ってたのだが、ひょっとしたらもやしを水で煮詰めた飲料水なのかもしれない。想像すると少しアレだが、詠の好物がもやしなのでまぁ大丈夫だろうと思考回路に着く。
「それじゃそろそろ着く頃だし、留守番よろしくね♪」
「任せなさいな。取り敢えず自動販売機という所で飲み物を買えばいいのね」
そう言いながら春花は座席に立ち上がり、財布から千円札を取り出す。本来焔紅蓮隊は文字通り貧困…何なら無一文の時もあったが、春花が何とかクビになりながらも食いつないでギリギリ貯めれたお金だ。
最近は自動販売機の値段も高いものもあるので、念には念をと札で渡す。
そうこうしてる内に新幹線の速度が徐々に落ちていき、軈て駅に停車すると完全に速度が停止した。
その頃合いを見計らい、春花は開かれる扉と共に迅速に外へ出て、気配を殺して気づかれないように屋上へと移る。
「……ん？あれ、そういえばこの新幹線次の行き先が確か…」
ふと、列車内で待機してる美怜は思いついたかのように呟きながら車内の地図を見つめる。
次に到着するのは…。

「焔ちゃん皆んな調子はどう～？」
様子見がてら春花が見にいくと、案の定焔、詠、日影、未来の四人が屋上にいた。
…居たにはいたのだが、様子が可笑しい。
焔は申し訳なさそうな顔で、日影は呆れたように首を傾げ、未来と詠は…何だろう、何て表現すればいいのだろうか。

「あはは！私は忍の国のお姫様！ラプンツェルなの!!あはははは―ーっ!!」
「うふふふ、私はもやしの国のお姫様ですの～…♪も・や・し・も・や・し・♪」
一言で言うなら狂ってた。
笑顔でくるくる回ったり、お姫様だと主張してるのを見た限り、相当やられたようだ。
そうなると、それを引き起こした張本人の修行バカたること焔の申し訳なさそうな顔も見解できる。
「……ねぇ、焔ちゃん。あの二人に何させたのよ…」
「いや、正直反省してるんだ!!手足を縛って風速を耐え抜いたり、実戦形式を行なったり…そうしたら服が裸ておっぴろげになったりと…」
「あんな辱め…上忍クラスでも顔を真っ赤に染めてもうてるで。恐ろしいわ」
辱め？
何それ、超興味があるのだけど…と内心はゾクゾクと興味の刺激を唆られる春花は、何とか堪える。
「そ、じゃあ次の駅で皆んなで新幹線に乗りましょう？」
「でも春花さん、切符はもう風の彼方へ消えてもうたで」
「？いや、何の話かしら？」
簡潔に話を纏めて聞くと、詠と未来が過酷すぎる修行に涙を流し、情けないと呆れながらポケットの中にあるハンカチを取り出そうとした際にとんでもないものが入っていた。
それが、焔紅蓮隊四人分の切符だったのだ。
どうやら本人曰く確認してあるものだと思ってたらしく、懐に手を入れれば入っていたとか。
そしてその際に風圧が強くて切符が日影の言葉通り風の彼方へ飛ばされるのだから笑えない話だ。
そしてお詫びに修行で返すと言うのだから、美怜からすると「頭が痛くなる」と言いそうだ。
「普通に考えてやっぱりお馬鹿さんね焔ちゃん…」

「貶すな春花！わ、私だって充分に反省してるんだ…」
「まあ何でも良いけど、次の駅まで大人しく待ってましょ？今見たら自由席のところ、思ったより空いてたみたいだから」
「春花さん、無理やで」
「へ？」
「この新幹線、次の行き先が京都やから無理や」
　何とこの新幹線、次の行き先が京都であるためもう停車しないとのことだ。そして既に動き出してしまってる新幹線に、２００kmもの速度のある状況下で列車に潜れる筈もなく。
「そ、それじゃあ私も屋根の上!?」
　なんて事だ。只でさえ切符もちゃんと持ってたにも関わらず、何が悲しくて屋根の上で時速２００kmもの速度ある新幹線の風速を浴びながらいけないのか。
　美怜の仰った通り、罰ゲーム以下の何かだろう。
「ま、まぁいいじゃないか春花。美怜が車内で待機したるとはいえ、初期焔紅蓮隊が揃ったと思えば…」
「…こうなった以上は致し方ないけど、絶対に修行はやめなさいよね？この二人にトラウマ植え付けちゃって正気じゃないもの」
「うう…分かってる。京都まで大人しく待ってるさ…」
　こうして、春花も結局京都まで屋根の上で過ごしながら待機してるのだとさ。

「自動販売機…これのことね」
　一方で、列車内で留守番を任せられた（尤も次の停車まで来られないだろう）美怜は車内の中を歩み進み、周りを観察しながら自動販売機の前まで到着した。
「爽健美茶、烏龍茶…天然水に、あら…？これは…こーら？これは何かしら。他にも珈琲…多種多様に飲み物が存在するのね」
　生まれてこの方、初めて自動販売機を利用する。
　外の世界へは出てきたものの、街中を歩くことなどほぼ滅多にな

く、あるとすれば詠と一緒に貧民街へ出歩いたこと位だろう。
因みに貧民街へやってきた時、腐ったバナナの匂いで相当キツかったそうだ。尤も、詠からすれば香ばしい匂いらしいが。
新幹線の中にある自動販売機は飲料水の種類が多ければ少ないものも存在する。
そう言うのは新幹線にもよるのだが…。
「取り敢えず指定された通りは買えたし…と言うよりも次の停車が京都だからどの道春花が戻ってこないのは言うまでもないけれど」
気付いたのが遅かったとはいえ、御愁傷様としか言えない。
自分だったら余計なことはせずに第一優先するのだが、ああいう世話を焼いたりする所を見た辺り、春花も何やかんや母親的なポジションが強いようだ。
「土方さん、早く飛鳥先輩の所へ戻りましょーよ!!」
「こら風魔さん!はしゃぐのは良いですが車内では走らないでください!他の乗客様に迷惑がかかりますよ!」
「ん?」
騒がしい…と思い横目で目を遣ると、茶色の長髪女性がオレンジ色の短髪をした活発的な女性へと注意してるのが伺える。
恐らくあのオレンジ色の髪をしたお茶目な子が風魔と呼ぶのだろう…どうでも良いが、第一印象として猿っぽいなというのが感想だ。
理由?何となくという大雑把な訳だ。
「うぁ…っ」
「きゃっ…!」
などと余所見をしながら歩いていると、前方の方に体をぶつけてしまう。幸いにも相手が転ばずにいただけで良かったが、意識が逸れて注意不足だったのは此方に非があるだろう。
「むにゃ…ごめんなさい……」
「いえ此方こそ、私も注意が足りなかったから。大丈夫かしら、怪我はない?」
相手の様子を伺いながら怪我の安否を確認する辺り、そこまで非常識に染まってはいないようだ。

水色の短髪をした少女は何処か眠たげな表情をしており、うとうとと睡魔に襲われてるように見える。
「貴女、眠たそうにしてるけど…こんな所で寝てたら流石に迷惑よ。まぁ…ぶつかった私が主張する事ではないけど」
「うん…大丈夫……ありがと…」
美怜の声は聞こえてたようで、少女は軽く言葉を発すると自分の座席に戻ろうとするように前へと歩を進める。
少々危なっかしい様にも見えるが…
「……個性的な人間ばかりね」
溜息を吐きながら、再び辺り一面を見渡すと、どの乗客も容姿や人柄なのが色濃く出ているのが伺える。
例えば美白な肌色をした金髪少女と、ドラゴンの様な顔立ちをした男性や、黒い短髪の少女と緑色のフードを被った火傷跡の男性、猫耳をした女性が一人、低身長の老人がなど、よく観察すればどれも興味深そうにも見える。
特に異形系の個性なんかがそうだろう。異形系はそれぞれ分類されており、発動型や常にその状態を維持してる等の個性など別れている為、まだまだ解明されてない個性の部類なども存在する。
などと呑気に乗客を観察していると、またしても騒々しい空気が乗客の中から流れ混んできた。
「ふえぇぇん！デコピンはやだよぉ…!!」
「ぐぬぬぬぬ…まさか、この俺が負けるだなんて…!!」
「あっははは!!柳生ちゃんと雲雀ちゃんの負けだね！」
否が応でも耳に聞こえてくるので、意識は自然とその乗客集団へと向けられる。
集団になってる乗客は、見たところ学生なのだろうか、白い学生服を着てる五人の少女が愉快に楽しげにトランプでババ抜きをしているのが目に見える。
そう言えば、あの風魔とか土方、そして眠たげな表情をした女もあの五人と同じ制服を着ていたなと記憶を辿りながら思い出す。
五人座席の後ろにもう四人の学生がいるのを見ると、計九人の学生

が修学旅行で満喫するのだろう。
「皆さん、余り騒がない様に…他のお客様にも迷惑が掛かりますよ」
そんな騒がしい集団の中、凛とした声が耳を打つ。
どうやらあの集団の中ではとてもまとも…故に物静かな黒髪ロングのお淑やかな女性は動じずに読書を嗜んでいる。
「あ、他のお客様といえば…屋根の上から声が聞こえてくる様な…」
「えぇ?そんな声聞こえてましたかね?菖蒲は葛姐のことばかり気にしてて仕方ありませんでした!」
「おいコラ!こんな所でアタイにセクハラしようとするな!普通に怪しい目で見られるし斑鳩の言う通り迷惑になるだろうが!!」
「葛城さん、一言だけ言わせて下さい…貴女がそれを言いますか?」
(焔達の事ね…まぁ、勘付く人もいるには居るのね。それにしてもあの子達も随分と面白そう…何処と無く焔達五人と面影が重なるわ)
脳内で焔が無茶無理な修行を無理強いさせてる絵面が安易に想像付く美怜は、賑やかそうな学生を横目にそのまま自分の席へと戻ろうとする。
(……学生ね、私も学校に行けてたら、常識や倫理を身に付けれたのかしら)
ふとあの学生集団を見て純粋な疑問が脳内にこびりつく。
あれだけ愉快そうに、仲間の輪に入り楽しく談笑する姿を見て美怜は心がないと思う自分に、僅かなあったかもしれない未来を妄想してしまう。
今までベルゼ兄さんの保護として身を守られ、育てられ生きてきた事に何ら不満は無かったし、寧ろここまで立派に守り育てくれた兄には親の様に感謝をしている。
然し、自分が捨てられずあの様に普通の人間として、学生生活を送る未来もあったのではないだろうか。
そうしたら友達や感情の疎い自分も、笑ったり泣いたり、怒ったり悲しんだりする事が出来るのではないか、そう考えてしまう自分が何処かに存在する。
――だけど。

「まっ、今の私にはどうする事も出来ないし。仕方ない事だわ――だからと言って死ぬわけじゃないもの」
　そんな起こりもしない非現実的な妄想を延々と長く浸る程、美怜は甘くはないし、切り替えが早く簡単に切り捨てやすい。
　憶測は必要だ。
　然しながら、心底この先役立つ考察などはどうでも良いし、正直言って無駄でしかない。淡く抱いた好奇心は、自分の理性で無理矢理砕き、元の座席に座って購入したコーラの蓋を開けて喉を潤す。
「んっ！刺激が強い…これが、炭酸の強さ…そしてこの口の中に広がる独特な甘さ…中々いけるわねコレ」
　生まれて初めて飲んだコーラは、どうやら刺激が強かった様です。

「ねぇ、貴女達…バカなの？」
　そして京都の駅に新幹線が停車し、充分にグロッキーな未来と詠、申し訳なさそうに反省する焔、無感情な日影、呆れた春花、この五人を冷たい目線で飛ばしながら呆れそうに言葉を呟く。
「いや…面目無い……修行をやったらトラウマを植え付けてしまった…」
「無理な修行や過度な訓練は精神的なストレスや障害を産む可能性もあるから、充分に考慮した上での修行じゃないと本末転倒よ。
　というか純際に疑問なのだけれど、よく最後ら辺は物音立てずに過ごせたわね？」
「最後は反省して静かに京都に着くまで待ってたそうよ。まっ、確かに焔ちゃんって無茶と危険を修行の最適化と認識してるから。これでも言う事を聞いてくれただけで大分利口になったんじゃないかしら？」
「まっ、わしは悪く無かったけどな。ただ詠さんと未来さんはすっぽんぽんになりそうやったし。公共の場では無茶があり過ぎるわな」

「だからだわ、焔が意図せずに危険な死地へ飛び込もうとするのも…こういうのを、ドMって言った方が適切なのかしら？」
「お前たちバカにし過ぎだろ!?というかドMじゃない！私はお前達の為と思って…」
「あら、焔。貴女はいつから私たちのお母さんになったのかしら？」
「……」
「むぎゅぐぐぐぐ……」
　美怜の挑発にまんまと乗せられる焔は思いっきし美怜のほっぺたを摘んで伸ばしてゆく。思ったよりも柔らかく伸びがよく、何だかんだ可愛く見えてしまうのが小動物らしさを感じさせる。
　焔は単細胞ではあるし、脳筋で猪突猛進、オマケに口から出る言葉は修行、訓練、鍛錬のパワーアップ用語。
　危機を乗り越えてこそ一流だの、ヒーローはいつだって逆境を乗り越える、とも言うけれど。
「お待ちしておりやしたぁ、あんさんら6名が京都の観光者ですね？」
　駅で六人が騒いでいると、聞き慣れない声が耳に届く。振り返ると老けたおじさんがニッコリと微笑みながら此方へ尋ねてくる。
「あ、はい…そうですが…」
　律儀にも一般市民を相手にする焔は野蛮で男勝りな口調とは一変し、丁寧に話し出す。
　公私混同はしない主義であり、我を貫くにせよ他人に対して堂々と荒々しい性格を剥き出しにする程の女ではない。
「この人…誰？」
　新幹線の屋根の上で修行で死にかけた未来は、恐る恐ると相手を尋ねる。対するおじさんはニコッと和らげな笑みを浮かべて落ち着かせる様に振る舞う。どうやら未来が子供らしい見た目をしてるからか、怖がらせないように優しく語り出す。
「えぇ私は京都観光地ガイド案内人の『光山優』と申しますんで！話は聞いておりましたんで。いやはや、間違いじゃなくて良かったぁ…！」
「……」

がははと豪快に笑う人柄の良さそうな大人を前に美怜は沈黙をしながらじっと観察をする。
「ガイド人なんて初めてやわ、まあ旅行する事自体滅多にないもんやしなぁ」
「私も…それにしても随分と豪華な服なのですね。お金持ちなのですか？」
「詠ちゃん。基本このガイド人してる人ってボランティア活動が多いのよ」
「そうなのですか!?!そ、それでは是非とも貧民街の観光地ガイド人を雇う事は…」
「詠、貴方個人でやれば？」
「あっはっは！随分と個性豊かで賑やかですねぇ御嬢さん方々！私は基本的に身だしなみを良くしてるからですよぉ。昔はこうロックとか、ファンシーなのとか結構流行ってたり好きだったりしてたんで。そんな富裕な家庭って訳じゃあないですよ…
…あ、旅館先まで距離があるので、軽く観光地を探索がてらしてからホテルに行きましょうか」
旅館まで距離があるのでそれまでは自由に探索をしながら…だそうだ。勿論旅館先に着いた後も自由行動に含まれるのだが、基本このガイド人が付いてる期限は帰る日までらしい。
太っ腹というべきか、何方にしろ気前の良い優しい男性で良かったと思う。
「それにしても六人とも学生でしょうかあ？今この時期は学生は学校に登校してる頃でしょうし…」
「あら、貴女には私と未来が大人に見えるのかしら？周りからも幼稚体型だと思われて見てるのに？」
「美怜、アンタ超失礼じゃない…？」
「何が？」
「あっははは！いやはや喧嘩する程仲が良いとはよく言いますなぁ！」
「あら、意外と貴方って観察眼に長けてるのね。正解よ」

「いやアンタはどこからどうしたらそんな自信満々な返答が出来るのよ?!」
「でも美怜ちゃんと未来ちゃんって確かに似た者同士な上に仲良いですものね。何やかんやで小説を読ませてるくらいですし」
「あ、あああアレは参考程度で…というか詠お姉ちゃんお願い小説の話はやめて…」
何やらトラウマか何かでも残されたのだろうか、急に未来は忍の家のラプンツェルの話題を出されるのを避けてるような反応を取る。
…と言うのも、美怜に読ませた結果『恋愛とは?』を始めた文章の構築、終わりのライン、その他諸々指摘を食らった為にゲッソリしてしまったのが本音だ。例えるなら小学生の低学年の子供が読書感想文を親に見せる時と同じような感覚だろう。
別に指摘をくれる事自体は嫌いという訳ではないし、何方かと言えば意外な返事になるかもしれないが、美怜にはとても感謝してる。
そのお陰で以前よりも物語の構築度や、背景や心理を描く事が出来たし、登場人物一人一人の過去や背景を細く執筆する事が出来たので、割と協力的だったのは心の底から嬉しかった。
超絶大ファンな紫からも高評価の嵐はあるものの、具体的なアドバイスは無かったので有難い。
然し、後々と哲学的な質問をされるたびに萎えてくるのだ。
『恋愛とは何か貴女は知ってるの?』『恋は唐突にと言うけれど、どの展開も複数同じく重なることが多いわね?』『そもそも貴女は具体的にどう物語を書きたいのかしら』『貴女は読者に何を想って、何の作品として伝えたいのかしら』『この女性は一度失恋してから恋に走ったのだけれど、恋をする相手は誰でも良いの?それなら其処に妖魔も入らないのは可笑しいわね?』
みっちりしごかれ、かれこれ５０問以上の質問や訂正箇所があり、一時期美怜が鬼のように見えた。
てか何よ妖魔も恋愛対象って、どんな物好き!?
彼女は読書好きだからと参考程度に見せた結果、倍以上にしごかれたと来たものだから、作品としては嬉しいが、心は鑢のように削られ

るのは言うまでもなく。
　因みに美怜と一緒に一話を投稿したら三倍以上の高評価を貰えたので、意外にも非難することは出来ない上に割とメリットの方が勝るのだ。
「未来の作品はマンネリ化があれど決してくどくないし、インパクトはあったから大いに有りだけど…足りない部分があったからそこさえ補えばもっと良い作品を出せると思うわ」
「ふ、ふん…そんなに褒めても何も出ないからね！」
「そんなつもりは毛頭ないのだけど」
　作家と脚本に似た関係なのだろうか、案外悪くはない様子だ。
　未来は何かしらと感情的になり、起伏も激しくよく美怜と衝突するため、良かれ悪かれ相性は宜しくない。
　未来は小馬鹿にされるのは勿論、真に受けてしまうため美怜の揶揄いや挑発にまんまと乗せられたり、笑われたりしてしまうのでどうにも…。というか美怜自身は面白くて仲が良いと本気で思い込んでるのだから敵わない。
「先ずは軽く昼食摂りましょうか。飲食店を探すので行きましょう」
　観光ガイドはパンフレットを見なくとも土地には大分詳しいので、飲食店が多くある場所を目指すように進んでゆく。
　案内人の後を追うように、焔紅蓮隊は進んでいくのであった。

「……」
　カツ、カツ、カツ…。寂れた、一才物音がしない廊下をただ歩んでいく。手に持った真紅に染めた手紙を指で摘む様に持ったまま、歩む速度を落とさずに真っ直ぐと。
　扉を開けば、ただ広い空間が広がっていた。壁なんてものは存在せず、外と部屋を隔離してるこの部屋は、超防音窓ガラスで壁一面覆われていた。
「お待ちしておりました――天咲魅影」

異様に落ち着いた、ノイズが走ったかと錯覚する声色。歓迎する様に、腕を広げながら、愉快に椅子に座り、会議室の豪華な机の上にＰＣディスクと書類が散らばった環境で、彼は楽しそうに胸を弾ませていた。

「ようこそ、京都棚窯区域ビジネス支部５６へ。ご足労なさったコトでしょう。さぁ、ゆっくりと寛ぎ下さい。貴女と是が非でも、こうしてご対面したかった――さぁ、約束通り取引を始めましょう」

２１６話「奈楽を追う者」

「で、話は何？　　一通の手紙をこの私に送るって、相当な悪趣味なのね」

人前に見せる余裕綽々な態度は一変し、常に真顔で無表情。アレだけ常に悪意に満ちていた顔も、今となっては殺意を飛ばしている。

私が何故此処に訪れたのか…どうして京の都で、忍商会をマークしてた私が、こんな場所で道草を食うように、大層なビジネス企業のビルに、全国指名手配犯の私が此処に立ち尽くしているのか…全てはコイツの元凶だ、と擦り付けて置こう。

「クックック　、お褒めの言葉として受け取っておきますよ。天咲魅影」

黒い社会人の整えたスーツ、悪魔のように細長い指と邪悪で禍々しい手、両頬が人間の手の様に形成されており、頬から派生された親指は人間でいう両目部分に当たる空洞を無理矢理埋め込み、指先は口元や顎に固定するようにガッシリと触れられている。口歯は常時微動だにせず露わとなっており、其れ以外は不要と言わんばかりに顔は何もない。強いて言うなら親指で抉られてる左目部分が、真っ赤な光により瞳だと強調しているのが印象的だろう。不気味、不可思議、理解不能と呼ぶに相応しい整形された顔は、見た者に不快感を抱かせる。

「私の住所、誰にも明かしてないんだけどなぁ…最悪、野宿してたりもするし」

「死柄木弔はお元気ですか？最近、新しく味方を手なづけたようですが…まあそれは後々、未来で語られるとして……改めて、『おはようございます』――貴女が無事に記憶を取り戻せたことを、大変嬉しく思いました」

「あっは、態々知った上でお気遣いするなんて、良い性格してるね。ええ、おはよう。漸く全てを思い出したから、だからこそそのタイミングを見計らって、私宛に赤い不吉な手紙を送ってくるアンタに、久々

に不安という絶望を覚えたよ……それで？要件は？」
「天咲魅影、要件をお出ししたのは私ですが、そう急かすさず。過程を重んじて着地点に到達するのも、会話の成り立ちに置いて必須です。ソレに、大方予測は付いてるのでしょう？」
「……かぐら、いえ…神楽のコトでしょう？」
　御名答――そう答えると、指を組んで謎の男性は語り続ける。
「京都で神楽と護神の民の目撃情報が入りました。１００年に一度復活する、ヒノカミ。いち早く復活すれば、我々も貴女の身も危うい状態なのは明白。それに、既に『クドラウム』もこの件で行動されております」
「……一応言っておくけど、私アンタらの事は詳しく知らないんだけど。精々アンタ達が天竜衆だって事くらいしかさ。先生も、アンタ達の誰かに手を貸していたのでしょう？」
「先生…ええ、彼は素晴らしい頭脳と未来への分析能力を持っておりました。故に、彼の黄金時代は正に魔王と呼んでも過言ではない、支配者として凡ゆる権利を得ていた。生殺与奪も、財力も、力も、真理も、地位も。だからこそ、彼の様な人間が天賦の才覚を持っていた事に非常に残念で有りません」
「ふ～ん…なんで？」
「彼は自分以外の者は一切信頼しておりません。我々も、彼とのコンビであった『エリザベス』も、所詮は切り捨てる駒でしかないと。彼は凡ゆる未来、全ての未来の障壁となり、不安要素を取り除く為なら最終的に支配された者の救いなど御座いません。そのスケールが大きいか小さいか、その瑣末な問題が、未来や個人に大きく影響を及ぼすのは、貴女もご存知のはず」
　彼は恐らく先生のことは認めている…だけど、口振りからして協力者では無さそうだ。
「嗚呼、勘違いの無い様に言いますと、私自身彼の行動ややり方をどうこう言う資格も意思も御座いません。賢い者が愚かな者を騙し、力の有る者が力の無き者を屈服させ、都合のいい様に利用するのは大人のやり方ですから。問題は彼が誰かを信頼してるか、心の底から誰かと

本気で苦楽を共に歩むことができるか、それが有るか無いかの違いだけですよ」
「…同じ憑黄泉の癖に、随分と人間らしい考えをしてんのね。嗚呼、アンタは変わってるんだね。ある種、特異点な存在か」
「話を戻しましょう。神楽が復活し、より過程を踏まえることで京都は半壊滅状態に陥ります。私が上手く忍を派遣させ、忍務を飛ばしてますが…大方、犠牲は絶大でしょうね」
「……何が言いたいの？要するに私にかぐらを殺せって命令でもする？」
「トンデモナイ、其れが本心だとして万が一にも貴女の身に何かが起きれば、我々もどうなることかと…」
コイツは、コイツだけは予測が付かない。
ある種予測できる私でも、コイツの判断にだけは…知識量が上回るのもあるだろうが、ソレよりもコイツは不確定要素が強すぎる。

「私の要件は別――私の仲間になりませんか？」

は？

今度こそ、私は素っ頓狂な声が漏れた。

「死柄木弔、その他を始めた仲間を手放し――私の隣に並び、新たな人生をスタートするのです。その分、貴女には安寧の地、権利、財力、求める者を与えましょう」
「……それが、アンタが私に手紙を寄越して、こんなご立派なビルに連れ込んだ要件なのかしらん？悪いけど、私はアンタの手には…――」
「ええ、そうでしょうね。これだけを聞いた、普段の貴女なら断るでしょう…ですが貴女は以前、記憶喪失の時とはいえど、偉大なる母君を出現させましたね？」
「ッ……」

彼の声に、焔の顔が思い浮かぶ。
窮地と死への焦燥と、大いなる絶望…過去の断片的な記憶により、心理的に刺激を与えたことにより、顔を出した、私の…。
「矢張り、今もコントロールは難しいのでしょう？ソレは必ず、貴女自身呑みならず、周りの仲間や人間達を巻き添えにしてしまうでしょう。アレほどご立派な偉大なる母君…別次元の存在である神と人間が並ぶなど、器として選ばれた貴女呑みが許される!!」
そう、唯一の悩みはコイツの牙が、何れ組織に…弔や仲間を殺してしまう危険性は、１００％に近い段階で存在する。然もあの時、記憶はなかったから上手く言えないが…コイツに意識を持っていかれたら、終わりだ。
「要件はソレだけでは御座いません。貴女が我らが偉大なる母を使役可能になる術、身につけさせましょう。丁度良いタイミングで貴女と協調を結んだ会社にマークしてたのですよ」
「キッツモ…アンタの能力が、邪眼とか千里眼とか言われても可笑しくない位、清々しく変態だわ」
「私は、常に貴女達を見守っておりますから、ね…。悪い話ではないハズです。勿論、退屈だってさせません…実は、もう一人仲間に加えたい輩も検討しておりまして…貴女が良く知る人物ですよ」

簡潔に言えば、コイツは自分の仲間になる代わりに弔達を手放せ。じゃないと憑黄泉神威は、仲間を殺す危険性が高いのだと。コイツがどうして、天竜衆という立場におりながら、私を仲間に企てたいか…恐らくこれも、上述した様に私の身に何かが起きれば、お互い消滅してしまう危険性も高いから、というコトになるのだろう。
嗚呼、全くもってコイツは…オモシロイなぁ。
「人間なんて１００年近く、直ぐ死ぬ存在。故に貴女も、絶恵勇希も、結城守も、誰も彼も人間は貴女達とは側に寄り添わず、拒絶され、分かち合えなかった者達だ。私の今の技術でなら、新たな転身により常時不老を留めるコトも可能…。決して悪い話ではないハズです」
「……」

「他にもまだ有ります。偉大なる母君でなければ、いずれこの世界は……――」

「――断る」

コイツの言葉を遮るように、私は高らかに悪意の籠った満面な笑みで、そう答えてやった。

場所は離れ、お昼過ぎた京都府の繁華街。

往来する人の数々はそこまで激しくなく、況してや騒音に溢れてる訳でもなく、和も相まってか微かな静かさも含まれており、過ごしやすそうな街中は人々の憩いの場として理に適って居た。

「でも何だか嬉しいなぁー！私たち忍学生にも修学旅行があるなんて！」

相も変わらず明るく曇りなき明るみのある飛鳥の声は、自然と心が安らぐような気分にさえ陥る。

彼女達は忍学生であり、幾度となく修羅場を潜り抜け、剰え死地を乗り越えたこの少女が、まるで何処にでもいる一般市民の学生とさえ錯覚してしまう。

そう言った意味では、ある種として忍の才能はあるのかもしれない。

「忍学生も学生だからな、修行する時は修行する――楽しむ時は楽しむ！何事もメリハリだ」
半蔵学院忍学科の担任教師である霧夜も何処と無く楽しそうな感じを見る限り、教え子達を欠かす事なく修学旅行に行かせる事が出来て心の底から嬉しいのだろう。
特に飛鳥、雲雀、柳生の三人組なんかがそうだ。
林間合宿にて敵連合の襲撃を受け、柳生と飛鳥は重傷、雲雀は爆豪と共に拉致されたと聞く。そんな大事件があったにも関わらず、こうして京都の旅行へ全員揃って行くのだから、本当に人生は何が起きるか分かったものではない。
「そう言えば霧夜せんせー、雄英の皆んなはどうしてこれないんですかー？」
ここでのんびりと可愛らしい小動物らしい雲雀の声は、疑問そうに霧夜に投げかける。
「漆月を処罰する為と、雄英生の安全を確保し守る上、最高峰である金の卵の巣に紛れて学業と修行に励むのがお前達だ。態々向こうが此方のカリキュラムに合わせる必要はないし、何かと物騒な事件が起きてるからな。
今となっては漆月の処罰から敵連合の捕獲と処罰に訂正されているのもまた大きな変化だな」
今は忍の存在が明らかになり、オールマイトという平和の象徴が悪の抑止力が無くなった今、急激に犯罪回数が増えている。
雄英生も迂闊な外出は控えられてるとすれば、半蔵学院と共に合宿など何処かで噂が流れるだろう。そして雄英側にも情報を提示する事なく修学旅行に行く事で、更に情報漏洩を防ぎ、内通者をあぶり出し、襲撃を許さず完璧に合宿に取り込めるという事だ。
「でも結局ウチら半蔵学院が狙われないのは、最高峰より最高峰してません？やっぱ雄英よりも半蔵学院の方が優れてるって事ですよ」
自慢げに語りながら八つ橋を頬張るのは半蔵学院選抜補欠メンバー筆頭の風魔。
飛鳥と同じく名のある善忍家系の名門家に生まれながら、何故か飛

鳥とは対極として血筋のことは嫌ってる傾向があるのは内緒だ。
「いやでも、蛇女に侵入されちゃったそうじゃないですか？菖蒲達その頃は学校にいませんでしたし…」
「いやいやいや、アレは向こうが悪忍だからこそ姑息な手を使って攻めてきたのが悪いんですって。ヒーロー科のようにああいうゴテゴテなシステムだから複雑で隙が出来ちゃうんですって。其れに超秘伝忍法書を除いて襲撃してきたのはゼロじゃないっスか？」
「もぉ、態々旅行にまで来たのにそんな話しないの」
何やら風魔はあんまり雄英側には余り宜しくない印象のご様子だ。恐らく憧れの大好きな先輩が雄英に佇んでるからが大きな理由なのだろう…。
「そうだぜ、京都に来た以上は満喫しないと…なぁ？斑鳩！」
「そう言いながら厭らしい手つきで尻を揉もうとするのをお辞めなさい…！全く、京都に来た以上は情緒に関心を…」
「関心なら持ってるぜ…舞妓さんのおっぱいやお尻をモミモミと…♡」
そして漫才コンビ化さえしているこのやり取りも馴染めてるだろう。
金髪の葛城に、黒髪清楚の斑鳩は、三年生になっても変わらない。不審者そうなエロ親父風なスキンシップに、軽々しく手を払い身を守る斑鳩、何処へ行っても変わらずにいると、謎の安心感がある。最早お約束でさえある。
「あぁん！葛姐様！それなら是非菖蒲にもセクハラしてください！何ならも、ももも揉んであげましょうか!?」
「菖蒲さん、貴女も落ち着いてください…」
興奮状態に陥ってる菖蒲を制するように肩を持ち、何とか止めようとするのは土方。斑鳩のような規律と正義を貫くその姿勢に、蒼天のような心広い彼女は、ある種としてヒーロー向きであり、斑鳩も彼女に対しては大評価を押している。
そして葛城に対してヤケにアタックを仕掛けるのは菖蒲。実は仮免取得を受ける前に緑谷が半蔵学院で足技を伝授した張本人でもあ

り、一応雄英志望者でもあった。
「全く…騒々しいな。これじゃアイツらといる場所と変わらないじゃないか…ふむ、ポリポリ…この千枚漬け中々いけるぞ」
口の中に放り込み、咀嚼音を立たせながら静かに貪る柳生は、相変わらず表情を変えることなく冷静さを保っている。
流石は天才児でありクールな少女は、京都の観光程度ではしゃぐ年齢ではないそうだ。…尤も、雲雀との遊園地デートならば鼻血放出で一人部屋でテンションマックスで舞い上がってるに違いないが。
「ん…？なんか…こっち、来るよ？」
此処で今まで無口だった青髪少女の清明は、眠たげな顔立ちで指を指す。
清明の謎の勘や予知夢はよく的中する。皆が清明の言葉通りに振り向くと
「はぁ……はぁ…　クソッ！アイツら、本当にしつこいな…２４時間ずっと追い続けてくるのか…?!」
ボロボロになりながらも疲労困憊とした様子で幼女を抱いてる女性が、息を荒くして膝を下ろしていた。
「わっ…！凄いボロボロ…大丈夫ですか!?」
まず先に声をあげたのは飛鳥。
流石は仮免取得で人命救助で培っただけのことはある。迅速に身に駆け寄ろうとする飛鳥は、怪我を負った女性に近づいて行く。
「お前達…その気は、善忍か…!?」
「え、どうして私達のこと忍と知って…」
次の瞬間――
「マジでいい加減にしろよ奈楽テメェ――」
商店街に破壊の轟音が鳴り響く。
団子屋の店が突き出された拳によって大きく破壊され、粉々に吹き飛ばされると同時に、奈楽に拳が振るわれる。
「クッ…!!」
それは間違いなくあの巨漢の筋骨隆々な拳。

まさか街にまでと思って居たのだが、どうやら思った以上にイカれてた様子で、繁華街に逃げ込んでも意味がないようだ。
「はぁっ！」
そして振るわれた拳を、距離を取り飛燕で防ぐは斑鳩。
鋭い太刀が、屈強な拳を受け止める。
「あァッ…？」
「重い…!?」
弾き飛ばされた斑鳩は、体制を維持したまま地面に足を擦らせる。突然の出来事に何とか対応できたとはいえ、状況に追いつけない後輩達は勿論、住人達も悲鳴をあげる。
「誰だぁ？今俺のパンチに刃物で止めた野郎は…？」
建物を壊し、顔を覗き込むは忍商会第十座位の邪淫乱闘。顔は炎を連想させる覆面で覆われており、以上に先端部分の鼻がもっこりと膨らんでいる。
「斑鳩先輩！大丈夫ですか？」
「ええ、大丈夫です飛鳥さん――そう言う貴方こそ…一体何者です？」
「お？何だこのエロい嬢ちゃん。めっちゃ可愛いじゃねえか!!俺の逸物と電車ごっこしねえか!?!バブミーランドのボッ○ーマウスにしてやるってな、はは♪取り敢えず邪魔するならせめてデケェおっぱい揉ませろ可愛子ちゃあぁん♡」
開始早々、葛城以上にやばいイカれた抜忍が現れ、同時に日本語ではあるのだが日本語ではない（というか日本語に失礼の領域）淫語を発する狂人に、頭が痛くなる斑鳩はまるで「葛城以上」の汚物を見るような目を飛ばす。
「君たちは一体…其れにそいつは…忍商会か!?」
傍観していた霧夜は、心配するように奈楽と幼女を見つめながら、邪淫を凝視する。
あの肩にある１０の数字は、間違いなく商会側の証。恐らく第三支部の者達だろう。まさか京都で姿を現わすとは…しかも、何故か幼女と奈楽と呼ばれる女性を追って。
「ア？やっぱお前ら忍か、ガキって事は学生か。ははっ！コイツぁ面

白い巡り合わせだ、そうだろ兄貴ィ？」
嘲笑を浮かべる邪淫の言葉に、次に不意を打たれるのは、突如として現れる長い舌。
「なっ!?」
黒く唾液で粘り、蛇の如く追いかける太い舌が、奈楽を襲おうとする。それを防ぐように、葛城は長い舌を蹴り飛ばす。
「ったく、次から次へとキリがねぇぜ!!」
足蹴りをしたのは葛城。
流石は半蔵学院の上級生にしてそこそこなバトルジャンキーのある事だ。素早い対応に、迅速な立ち回りを経験で活かしてるだけのことはある。
「じょ、じょうだね、邪淫……じゃ、じゃじゃまばっか、してぐりゅ……うっじょーじー…にゃ、にゃぷび…ぎひ、ひひ」
建物の陰から不気味そうに立ち歩く兄気分の『両舌部露』は、ボロ布マスクに不快な目と口元を描きながら、破れかけてる穴から舌をデロりと伸ばしている。
こう見えても第6座の地位を確立している。
「わ、わわわ…！なんなんスかこの如何にも狂ってるようなヤバイ連中！どう見ても普通じゃないですよね!?」
「私たちも先輩に応戦し…」
「いいえ、此処は葛城さんと共に食い止めますわ」
応戦しようと駆けつける柳生と土方を制する斑鳩は、飛燕を強く握りしめながら、居合の構えを取る。
どうやら葛城も言うまでもなく戦闘態勢に入っている。
「然し斑鳩に葛城…！アイツらは他の抜忍やチンピラと訳が違う……」
「安心してください霧夜先生。勝てずともその場凌ぎに時間稼ぎにはなります。その間にその子達を離して下されば彼等も身を退かざるを得なくなります！」
「まっ、アタイはコイツらが誰であろうと構わず蹴り飛ばしてやっけどな♪」

二人の頼もしい返事に、霧夜は言葉が詰まる。
確かに斑鳩と柳生は仮免を取得してるし、状況のケース的に上層部からの忍務無しに抜忍との戦闘が可能である。条件があってるので、別に戦闘する行為に止めはしない。
ただ相手は得体の知れない、況してや隠れてた忍商会側の姿を現しただけでなく、全国指名手配犯のリスト的に幹部級であるのは特上氏の以上の大人達が知っている。
「分かった…ただ無茶はするなよ…それと、危なくなったら身を引け…」
霧夜にとっては苦渋の決断だろう。
相手が格上であり、忍の運命に沿うならば、こう言うケースは珍しくない。
然し、飛鳥の事と言い…その決断こそが過ちでは無いかというのが頭に過ってしまうのだ。
「お前達！俺は避難誘導を行う、その間その子達を安全な場へ行かせてくれ!!」
「わ、分かりました…！」
否が応に答える間も無く担任の言葉に頷く飛鳥達は、素早くこの場から立ち去ろうとする。
「だからイかせる訳ねえだろ孕めオラァ!!」
大きな拳を繰り出すも、同じく斑鳩の飛燕によって止められてしまう。
「テメェらの相手は、アタイらだけでジューブンだ!!」
「ガキ共ぉ…許しを請うても着床行きの膣内おっ射精は免れねえぞ？」
嵐のような猛烈な戦い、火蓋が切り落とされた――

２１７話「話が合わない」

半蔵学院の選抜メンバーの斑鳩と葛城、それに対する忍商会の幹部、邪淫乱闘と両舌部露が衝突する前の時間帯。
午後に差し掛かろうとする午前１１時頃、半蔵学院と違って遠く離れた京都の繁華街。
木製の飲食店やお土産等が売られてる商売店などが活気盛んに行われており、同じ様な景色がズラリと並んでいるように見えるのは京の都ならではの情景だろう。
「これが、八つ橋…？何て美味しそうなの……私はこの瞬間を待っていたのよ……」
商店街の茶屋に横長い椅子に腰かけた美怜は、珍しい品物を見定めるように、欲しがってた子供の玩具を与えられたかのように、表情が疎い彼女は高揚を隠しきれず、念願の八つ橋を見つめる。
「幾ら何でも大袈裟過ぎよアンタ…」
「お菓子を目の前に大袈裟と呼べる貴女の思考回路が羨ましいわ」
「何ですってぇ!?!」
対して横に座り腰かけてる未来は、相変わらず美怜に突っ掛かる。確かに金銭的にお菓子を買える余裕はなく、駄菓子屋と言った１０円そこらの安いお菓子を買うのでさえ躊躇うほどの自分達にとって、八つ橋もそうだが食料となるものは重宝扱いだろう。
「折角アンタが八つ橋食べたいっていうからお店紹介したのに…」
「仕方ないじゃない、私はお菓子を前にはどうしてもこの湧き上がる衝動と欲求が抑えられないもの。理性で抑えるのでやっとな訳で――それと私は別に貴女を非難してる訳でもないのよ。寧ろ京都に行ったことのある貴女だからこそ選抜した訳だし」
未来はよく美怜の安い挑発や売り言葉を買ってしまう等、子供癖やトラブルメーカーな素質が高いものの、美怜は気にせずフォローに入

る。
　美怜はどういう訳か、お菓子と言った類は基本的に全て心の底から手を伸ばし、食したいという欲求が湧き上がるそうだ。
「八つ橋も良いけど、アンタ杏蜜って所に行きたいのよね？それなら映画村の近くにあるから、回ってから行く？」
「そう、貴女も映画村に行きたいって駄々こねてたものね。丁度目的の場所があるのなら私も全然構わないわ」
「駄々こねてないから!?アレ普通に切符がないって事で京都に行けないから嘆いてただけだから!!」
　駄々を捏ねてた事に変わりはなさそうでもあるが、美怜は深くは詮索せずに「そういう事にしておくわ」と片付けた。
　何しろ京都の旅行は未来も蛇女に入る前の一般学生の時は修学旅行として行ったは行ったのだが、当時はイジメ問題もあり殆ど独りぼっちだった為、良い思い出がない。
　そんな中、紅蓮隊と一緒に京都の旅行に行けるのは、未来としても充分に価値のあるものであり、思い出作りとして絶好の機会でもある。
　こういう純粋さと子供らしい一面を見ると、偶に悪忍とは思えなくなるが、実際彼女の家系は善忍だったので、根っからが悪い訳ではないのは彼女との付き合いがあれば理解を示せる。
「美怜は結構お菓子好きそうだけどさ、どうしてそんなにお菓子に拘るのよ？アンタが家に住んでた頃は、お菓子とか無かったでしょ？」
「そうね、ベルゼ兄さんからよくお肉を貰って食べてたし、貴方達の言う食料はほぼ壊滅と言って良いほどに不足していたし、人間が食べれるものなんて奪う事以外にあり得なかったわ」
「奪ったって…本当に悪趣味ね……」
「あら人聞きの悪い。死んだ人間は食べ物すら口に出来ないわ、それを私が食べる事に一体何をそこまで悪く思われるのかが疑問ね。
　それに、お菓子に関しては自分でもよく分からないの」
「分からない？」
　美怜の意外な返答に、未来は思わず目を丸くする。てっきり私が単

純に好きだとか、お菓子は甘くて美味しいからとか幼稚的な感想かと思いきや、予想の斜め上の発言に小首を傾げる。
「……例えば、詠はどれだけお金を所持していようが貧困になろうと、もやしだけは絶対に欠かせないでしょ？焔もお肉に目がなかったり体を動かす肉体的な鍛錬を積まないと気が済まないでしょ？それに似た事柄ね。
　でもいざ好きなのかと聞かれると、特に理由はない…或いは、個人的に好きなものだからと、個々人にのみ存在する拘りや性格を現した好みがあるの。それを人は個性と呼ぶのだけど、私は其れをリビドーと呼ぶ事にしてる」
　個性というのは超人社会の約八割が所持してる個性を指差しており、超常的な能力を人々は個性と呼ぶ。一方で性格的な個性のことを、美怜はリビドーとして呼んでいる。
　其れはもちろん、単語や肉体的な意味と精神的な意味を隔て分別する為に過ぎないが、どうしてそこまでしてお菓子が好きなのかは、美怜もよく分からない。
　ただ見てるだけで、匂いを嗅ぐだけで、名前を耳にするだけで、自然と欲求が昂り、理性では抑えられず欲望が煽られる。
「私のリビドーではあったとしても、具体的な理由や根本とした意味は私にも分からないの…自分自身のことはよく分からないと聞くけれど、こんな気持ちなのかしらね。今までずっと、唯の気まぐれだと思っていたけれど」
「んー…なんか美怜の話って偶によく分かんなくなるよね。専門用語があったり、長ったらくて頭に入ってこなくなるというか…」
「…簡潔に言えば私の性格がお菓子が好きなのだと表してるけれど、どうしてお菓子が好きなのかは具体的に不明ということ」
「あ、成る程ね」
　説明要求された事に、理解を示さない未来に悪態吐きながら説明するも、本人は気にしてない様子で納得される。
「貴女は…どんなことが好きなのかしら。確かネット小説の執筆だとか…」

「それはまぁ…そうね。後はｆｐｓとかサバゲーとか、他にも二次作品の嗜み程度…かな」
「多種多様にあるのね、好きなことが多いのは良いことよ」
「そ、そう？」
美怜に褒められると、つい照れ臭くなってしまう。
美怜から褒められることなど滅多にないし、歪み合う（未来が一方的にだが）仲でも、そう素直に真っ直ぐ言われると、やはり歯痒くなってしまうのは否定できない。

「あれー？アイツってもしかして中学の時に一緒にいた地味めの空気な子じゃない？」

遠くから聞こえた懐かしい声がふと耳に届いた瞬間に、未来の背筋は一瞬にして凍りつく。
声主の方角へ振り返ると此方を見つめながら、ニタニタと薄笑いを浮かべる高校生らしき女性が２人、小馬鹿にするように指を指してるのが伺える。
「あ、やっぱりあの子じゃん！えっと名前なんだっけ？」
「空気扱いし過ぎて名前忘れちゃったわ！存在感薄かったけど揶揄いがあって面白かったよねー」
知っている、ゲラゲラと耳障りに笑うアイツらの汚い声。
１日たりとも忘れもしない、私を無視した虐めた連中の顔。
そう、アイツらは学生時代の頃に私を虐めて面白がり、剰え何もしてないのにも関わらずコイツらは、平気で人の心を傷付けようとする。
でも…どうしてアイツらがこんな所に？
「未来？どうしたの、知り合い？」
彼女の様子が可笑しいと見解した美怜は、珍しそうにしながらも何処か心配そうに声を掛けてくる。
冷や汗が浮かび、自然と過去の恐怖心により震えが止まらなくなってしまう未来は、トラウマが掘り返されるようになり、身を投げ出し

そうになってしまう。
「ウチら京都の高校に通ったんだよねー、なに？アンタも常盤高だったっけ？」
そうか、常盤判高校の進路を希望していたのか。確かに虐めた連中の何人かは県外に高校の受験を希望していたのはちらほら見受けられたが、選りに選ってこんな時に鉢合わせするだなんて思ってもいなかった。
「つかさ、折角久し振りに再開したのに無視とか酷くなーい？ねぇ、私らのこと忘れたとか言わないよねー？」
酷い？
酷いだって？本当にイカれてるのか？
自分のことを散々無視して、嫌がらせをして、その挙句此方がなにも言わずに耐え忍んでると無視をされて嫌だと主張する。
つい頭に血が上って機関銃で乱射したいほどだ。
……本当だったら、寧ろこの再開を機に虐めた連中に復讐するのが、未来が悪忍になった理由だ。
躊躇う必要なんてなく、思うがままに暴れたら良い…。だけど…そんな事をして、本当に良いのだろうかという考えも過ぎる。
私たち焔紅蓮隊は元々悪忍であり、忍の世界にとっても私達のようなのは存在するだけで許されざるを得ないもの。
それでも焔達は皆、他の悪党とは違って私利私欲に力を使わないようにしている。
其れは、自分たち焔紅蓮隊に誇りがあるから。今もし目の前で自分の私怨でコイツらを殺したら、焔達に顔向けなんて出来るのだろうか？
いや、出来ない。どんな経緯であれど、そんなものは言い訳にしかならないし、コイツらが腐っててもこんな奴らに手を出せば、それこそ紅蓮隊としても名が廃る。
「ねぇ、何とか言い…」
私を嘗て虐めてた女の一人が、うざったらしかったのか頭に血が上り手を出そうとした瞬間。

ガシッと腕を掴む音が、目の前で止んだ。
怖くて震えて、瞑ってた目を開くと、そこに美怜がいた。
「ねぇ、ちょっと。貴女、今未来に何をしようとしたの？」
いつになく真剣で、真っ直ぐと恐れる事を知らずに殴ろうとした女性の腕を、ギチギチと締め付けるほどに。
「は？何アンタ、部外者なんだから邪魔しないでよ！」
「お生憎…此方は無関係者じゃないの。その腕は何？この子を殴ろうとしたわよね？関係性がどうであろうと、殴られようとしてる人を見て無視なんて真似は出来ないわ」
其れが関係者であるなら尚のこと。
美怜は突き放すように腕を払い押しのけ、思わず女性は後退りしてしまう。
「…ああ、ひょっとして貴女達のことね。未来の言ってた学生の頃に悪質な虐めをして名が広まり、自分が王にでもなった気でいながら莫蓙を掻いてた動物以下の連中って。酷い言われようで、相当恨まれてるのね貴女達、今の今まで殺されなかっただけ幸運だわ。名前まで知らなかったけど、随分と頭が悪そうね」
「琴弾…アンタまさか…!!!」
未来はそんな話を美怜には一度たりとも口に出してはいない。虐めの問題はさておき、そのような口の悪い噂などは広げていない。確かに色々と義憤に募ることは沢山あったけれども。
「あら、冗談よ？ふふ…でもその反応を見た限り自分が加害者でありながら、虐めをしていた事、そして厭がらせをしていた自覚はあるみたいね。だからそんな焦った反応を取るのでしょう？」
「なっ…!!」
虐めてた連中二人は、美怜の言葉にまんまと嵌められた。
彼女は観察眼と頭の回転が速いためか、傍観していた辺り未来に何かしら関係があり、それが悪い方向なのは目に見えていた。虐めも春花から話を聞いたくらい…普段言い返す未来がグゥの根も言えずに

怯えていた様子を見れば、思考回路は自然と答えに至る訳だ。
「…貴女達、一体どうしてそんなことをするの？楽しい？この子は明らかに嫌がってた様子だったし、対話を望んでいないのに一方的に話して精神的に追い詰めて困ってたじゃない。
障害って知ってる？虐めって犯罪なのよ？貴女達のような犯罪者は、個性で悪戯に力を振りまくような存在と変わらないのよ？」
「だったら何よ…」
「私はちゃんと見てたから、第三者の目撃者として証言しても良いわ。警察に。
何もしてない怯えてた女性を殴ろうとしたり脅して罵声を浴びせて恐喝してたなんて、通報を受けて掲示板に貼られたり、自分の地位を失うのは怖いでしょ？」
未来を守るように目の前に立ちながら、自分を虐めてた連中を言い負かし、少しずつ言葉で追い詰めていく美怜が、何処かかっこ良く見えてしまう。
「…そ、そんなんじゃ…私達はただ…ねぇ？」
「そ、それに今のだってそんな…」
「あら、何？じゃあこの子を虐めても良い理由があるの？法律や犯罪だって如何なる所業でも許されない世の中、特定の人物に虐めをしても良い理由が？それって何かしら？
未来が何かしらの原因で貴女達が虐めをし始めたと言う明確な理由が存在し、誰もが納得できる答えなら、この子もそれなりに謝らなければいけないけれど…」
虐めは多くが加害者が絶対悪として語られるが、中には虐めを受ける側にも問題や責任があるという話も少なくはない。もし未来が何かしら恨みや虐めを作る、納得できるような内容であれば五分五分として双方が謝るべきなのだろうが…この場合は…。
「ああ、因みに『冗談だった』『そんなつもりじゃ』『ムカついたから』は無しでね。ちゃんとした明確で確固たる理由で教えてくれる？」
「……」
「呆れた…貴女達、バカなの？」

心底呆れを通り越し、目を細めて嫌悪の表情を示す美怜の顔は、ある意味珍しいものだ。
その顔色には何処か、少しだけ義憤を燃やしたようで、不機嫌そうな顔を顰める。
「もういいわ、貴女達との会話なんて精神的な負荷と時間の無駄でしか生じないし…未来、一緒に行きましょう。此処にいても何も収穫なんてないわ」
「あっ！ちょっ…!!」
強引半ばに腕を引っ張られる未来は美怜の力になるがされるがままに動かされる。
美怜は知的好奇心が旺盛な故に、興味を示すものにはとことん頓着する。然し逆に言えば興味が失せたもの、或いは興味のないものは無価値として見向きもしなければ、執着付かない。
何方かと言えば見捨てるに近い部類だろう。そして興味尽きた者にはとても冷徹で、対話さえも望もうとしない。
美怜が興味を尽きるというのは、謂わばそういう意を表す。
「ちょっ、アンタ力強くない!?」
「それにしても未来、貴女って人付き合いが著しく悪いのね。頭が悪い云々以前に、口を開けば精神的に苛まれるような不快感は、流石に私も対話なんて望めないわ。というか、話しても無駄というものね」
珍しく不機嫌そうな口調で淡々と告げながら、美怜と未来は此方の後ろ姿を呆然と眺め立ち尽くす虐め連中二人組みから距離を開く。
「……そりゃまぁ…ズタボロにして殺してやりたいって思った程だし…」
「なら殺せば良かったじゃない。不快に耐えるより、潰した方が身のためよ。というか、貴女には力があるのだから黙らせる事だって可能ではなくて？」
「……春花様に言われたのっ！其処に悪忍としての誇りがあるのかって…」
「……誇り、ねぇ」
そして大分距離を置き映画村の近辺で手を離した美怜は、未来の言

葉に立ち止まる。
誇り――其れは言うなればベルゼ兄さんの死の間際に放った言葉。
妖魔だろうと忍だろうと種族問わず、兄としての使命を全うし、その命を以って妹を守り通した死に様は、誇れるものだった。
最後の最後まで兄として、妹を愛し、側にいて育ててくれたその所業は、如何なる強戦士も名誉を与えるだろう。
「な、何よいきなり手を離して…」
「目的地には着いたんだもの、それともずっと手を握って欲しかったの？」
「そういう意味じゃないけど…」
「…ねぇ、未来にとって忍って何かしら」
「へ？どうしたの、藪から棒に…」
「春花から聞いたわよ。貴女は虐めの復讐の為に、嘗て善忍としての道を捨て悪忍になったと…やっとの懇願で悪忍となって、目的のために力を付けたのに、復讐をしなかった…そしてその理由が悪忍としての誇りと来て思ったのよ。貴女の言う忍とは何なのかって」
今思えば美怜からすれば他人の言葉に人生が傾けられてるようで、芯というか明確なる理由や目的がないように見える。
然し其れはあくまで美怜自身としての観察なので、他にも理由や別の目的があるのかもしれない。
忍になったからには、無理にまで家系として継がれて死地の世界に足を踏み入れなければならないと言えばそれまでだが、態々善忍を捨てることを両親が承諾（実際は反対してたのかもしれない）したのだから、少なくとも他の忍家系よりかは恵まれてた方だろう。
「…いきなり真剣になるじゃない」
「私はいつでも真剣よ？それに、あの連中を潰すのに誇りがあるから殺せないは、ただの綺麗事ではなくって？貴女を自殺にまで追い込めようものでも、同じ意見を出せる？」
無理だろう。
実際に虐めの問題は深刻で、中には個性がないだけで虐めを受けてた中学校もあったらしく、社会でも環境によって深刻さが増してるの

は問題視されてる。
「アンタの言ってることは正しいよ。そりゃアイツらを許す気なんて更々ないし、それでもいざ顔を見ると吐き気と苛立ちと、恐怖とトラウマで頭が可笑しくなることもある…それなら確かに消しちゃえば何でもないもんね……でも、それだと意味がない」
「意味がない…とは？」
「私は虐められたから、悪忍になって復讐しようとして強くなった。でも…その強さは虐めの復讐なんかで済ませていいのかなって…ううん、そんなちっぽけなアイツらなんかの為に使っても良いのかって。
それだと私があんな奴等を相手にしたら、同じ立場になる。私はアイツらと同等になりたい訳じゃないし、そんなつもりもない。
だから考えたの…抜忍になってから私はどんな忍になりたいのか…
焔や仲間のみんなを守りたい忍になるんだって」
「ッ…」
復讐とは言わば、やり返しという意味にもなる。
自分が虐められたから、此方もやり返すと言うことは、自分も加害者となり奴等と同じ人間になる訳で、更に付け加えればアイツらが犯した罪が、目立たなくなってしまう。
何より美怜は、未来の言葉に絶句する。
其れは嘗て、自分の愛しくて育ててくれた兄と重なるからだ。
未来は仲間の為に力を使い、ベルゼ兄さんは妹のために力を使った。まさか、未来の口から兄と似た事を発するとは予想だにしなかったのだろう。
「でも…殺す事に関して、あり得ないことだけど…もし焔や仲間が万が一にも傷付けられたら、本当にただじゃおかないよ。
…っていうか、美怜があんなに熱くなってアイツらに思いっきし言ったのだって感謝してるんだから。寧ろスカッとしたというか…有難うね」
「…春花にも後で言うけど、訂正するわ――貴女という心強い守り銃

士、誰よりも心強く直向きなその心に敬意を示すわ」
美怜は微笑を浮かべて未来に告げる。
訂正…それは、未来のことを半端な忍だと見ていた己の誤ち。
彼女は自分の想像以上の強みを持ち合わせていたようだ。
「な、何よ急に…は、恥ずかしいから…っ！／／／」
「恥ずかしい…？どうして褒めてるのに恥ずかしがるのかしら？」
「うぐっ…そういう所は日影とそっくりね…」
こう言うのを照れ臭いと呼ぶことを、美怜はまだ知る由もない。

ドゴオォォン！と、ふと遠方から爆発からような轟が、二人の意識を向けさせる。
「何今の…？」
「遠くからでも分かるような破壊音ね、事故か将又故意による何らかのトラブルか…どうする、未来？」
恐らく何かしらの犯罪絡みだろう。
ここ最近、平和の象徴が無くなってから犯罪率は上昇し、今もなっては何と６％も出てるという前代未聞の始末。下手すればこの先は超常黎明期より過酷になるのは目に見えるだろう。
「焔からの指示はないけど…此処は後回しにして行ってみ…」
「おぉ～い！お嬢ちゃんお二人さん方や!!」
ようとした時だった。不意に案内ガイド人の光山優に呼び止められたのは。息切らしながら走る６０代おじさんに呼び止められ、意識を別方向にむける。
「何やら敵による犯罪絡みが出やして！危険なんで皆んなを集めて避難致しやしょう!!」
「やっぱり敵なんだ……う～ん…」
本来ならそんなもの、要らぬ心配なのだが一般人の前で「私たち戦えるんで大丈夫です」なんて口が裂けても言えぬ真実だ。
何よりガイドとしても人命救助やら身の安全を守り優先するのも立派な仕事ではあるので、断りづらい。
何よりも焔達はそのことを知ってるのだろうか？

「分かったわ、それじゃ焔達を呼び集めて…」
「待ちなさい、ねえ光山。貴方はどうしてさっきのが敵の犯罪絡みだと知ってるの？」
「ここ最近敵の犯罪件数が多いんですよ!!ていうか、器物破損とやら傷害やらで言うまでもなく犯罪でしょうよぉ！ほらほら、仲間も集めて！」
　美怜の質問に答える暇もないと焦り気味に返答するガイド人に、二人は仕方なく仲間を呼び集める。
　幸い、連絡手段が出来たのが唯一の救いだ。
「折角映画村まで来たのに…これじゃ満喫出来ないじゃない…」
「そうね、全くもって未来の言う通りだわ。お詫びの品として八つ橋を奢りなさい」
「こりゃ運が悪いと言うかなんて言うか…あぃ？八つ橋ですかい？そんならまぁ大丈夫ッスけど…」
　後々に連絡して此方に収集するように指示を促した未来と美怜は、とても不満そうに顔を顰める。
　これは無理もない、然しだからと言って無視するのも些かどうかと思う。
　美怜としては態々此方が首を突っ込む必要性は高くないと判断したので、満喫できれば問題ないと考えていたのだが、此処を離れなければならないという事情に、台無しさが膨らんでしまうのは咎めないだろう。
「それにしても純粋に疑問に思うのだけど、よくあんな早く私達を見つけたわね？」
「いやぁ偶々近くにいて良かったです、私も丁度飲食店を探してまして…」
「ふぅん、そう」
　何やら素っ気ない態度を取る美怜が失礼そうにも見える未来は、肘で突いて「少し失礼じゃない？」と小声で呟く。
「何処らへんが失礼なのか私には分からないわ…」
　やはり倫理観に欠けてる美怜にはそう言った人様への常識に配慮

が欠けてるのだろう。悪気がないからこそ、本気で怒れる気にもなれやしない。

一方、半蔵学院は奈楽ともう一人の幼い子供を保護するように守りながら、避難するように忍商会の幹部から逃げて行く。
「あの人達は一体なんなの…?!忍商会って何…?」
「貴様ら、そんな事も知らないのか。奴らは歴史に残る前組織では抜忍供に商業を営んでた闇組織だ」
今では想像がつきにくいかも知れないが、嘗ては忍の社会からはみ出され零れてしまった救われない、行き場も失くして路頭を彷徨い死に抗う忍の救済処置としてサポートアイテムや武器を売りつけていた組織だ。
当然、違法行為なので犯罪絡みは数えただけでもキリがない。
「嘗ては鏖魔が組織を創立してから年月はかなり経つが…奴らめ、今まで行方を眩ませていたというのに、どうして我々に目星を…」
だが、問題なのがその忍商会がなぜ二人を狙うか…が重要な鍵となる。ただ現場を見られただの、商売を邪魔して怨みを買われたにしては此処まで大規模に起こす必要性が感じられないし、あの邪淫やら両舌やらも人前で平然と破壊行動を起こしてるのを見た限り、得策ではないにも関わらず一切の躊躇いがない。
こんな二人のためだけに自らをも危険を犯すリスクを背負うなど、正気の沙汰ではないにしろ何か裏がある。
「避難するにしたって、何処まで行けばいいの?」
「奴等を蹴散らし殺すか、目の届かない所にまで連れて行けばいい」
「なんかサラッと怖いこと言ってないですか!?」
「何を驚いている。学生とも言えど忍なら当然の摂理だろう?それとも上の許可なしでは戦えない辺り、所詮は単なる手駒か…」
「なんでそんな偉そうなんですか?」

奈楽の毒を吐くような偉そうな立場に、風魔は不愉快な感覚を味わう。
風魔は基本的にこういう人間はあんまり好きではない。況してや助けて、守ってあげてるにも関わらず、感謝の感の字もないとは、礼儀知らずにもほどがある。
「そういえば、貴女はなんで私達忍のことをそんなに詳しく知ってるの？何者なの？」
と、此処で先ほど聞きそびれた内容の質問に、彼女はこう答えた。
「自分は奈楽――護神の民、転生の球を守りし者であり、神楽様と供に憑黄泉神威を討つべき存在だ」
其れは忍の歴史上で英雄としての名を轟かした肆奈川の孫の孫である。

２１８話「邪見」

護神の民――其れは巫神楽三姉妹が住まう村を指す。
小規模な村の集落ではあり、決して裕福な訳ではないものの、常に居心地の良い大自然の中に囲まれた集落は好ましいものだ。
遠野と同じく村の存在を他に言い渡すことは許されず、小百合を始めたカグラの称号を持つ者でなければ足を踏み入れる事は許されない程に他を寄せ付けない程の厳重に警戒を払っている。
村には掟が存在し、其れを破れば村から追放、最悪は命を以って償わなければならないのは、厳しい以外に言葉が見つからない。
「良いかい奈楽や……お前は護神の民の中でも、転生の珠である神楽様を復活するまで永遠に見守り続ける役目として選ばれた」
祖母の言葉に、幼少期の奈楽は黙ったまま耳を傾ける。
基本的に護神の民達は村の集落で外部からの脅威や危険を退けることを除けば、やることは基本的に農作物やら儀式、日常的な生活を送るだけだそうだが…その住人達の中でも、転生の珠を見届ける役目は、大人達が言うには一族としても名誉ある誇りだとか、神に選ばれた素質だとか、様々な偉業だと大それた事を言うが、当時の奈楽からすれば「親が喜べば良いし、自分が役に立てるのなら」程度。
そしてもう一つ、護神の民達は基本的に転生の珠から復活した神楽という神と共に憑黄泉神威を始めた神魔を滅ぼし、再び転生の珠に戻れば次の代が見届けるという輪廻として永遠に続けていくこと…
その中でも奈楽が選ばれたのにはもう一つ…其れは、先祖代々ともに栄光のある一族として名が高く、肆奈川という護神の民が何と、あの憑黄泉神威を退けたという。
護神の集落、１５０年前に憑黄泉神威が多くの妖魔を連れて村を襲ったという。

皆が知る妖魔とは違い、憑黄泉神威が連れた妖魔は皆、禍々しい暗黒の邪気と、血走った紅い目を向け、神楽というたったひとりの少女を殺す為に、全員が村を全滅に追い込ませたと聞く。
当時の巫神楽三姉妹や村の住人もやっとな思いで凶暴化した妖魔を倒せたものの、憑黄泉神威には勝てなかった。
あれはもう、妖魔と一緒くたにしていい問題ではない…そんな神の領域に達した化け物を、肆奈川は命を賭して退けてくれた。
多くの妖魔が軍となり襲撃する怪奇現象を『百妖夜行』と言い、其れは８００年前から名付けられ、以後自分たちはいつ襲撃に来るかも分からない妖魔の大軍と憑黄泉神威に向けて、備えなければならないのである。
それが護神の民の宿命であり、神楽の為に全てを捧げるのは、当然の理――そして憑黄泉神威を討つのもまた、使命なのである。

「護神の民？」
聞いた事も教わったこともないワードに、飛鳥は勿論のこと、その場にいる全員は小首を傾げながら、斑鳩と邪淫達の距離を置き疾走と足を早く動かす。
「ふん、お前達忍学生如きでは知る由もないだろうな」
「ムッカ…！で、でも霧夜先生や斑鳩さんならきっと分かるもん！二人とも今は居ないけれど…」
「其れにお前達は精々奴らの足止め程度の役割を果たせば上出来だ。私とかぐら様さえ守ってくれればそれで良い」
随分と上から目線な物言いに風魔は更に嫌悪感を増すものの、それを宥めるように土方が側で肩を置く。
飛鳥にどれだけ皮肉を言おうと、相手に対して敵対心や嫌悪を指し示さないのは長所なのではないだろうか。
「そういえばあの大きなおじさんと、舌の長い変な男の人…あの二人

は何なんだろうね？敵さんなのかな？」
「忍商会ってそう言えば…あー！思い出した！両奈ちゃん達蛇女の生徒が今探してる連中のことだよ！」
　木椰区ショッピングモールで緑谷と一緒に買い物を楽しみながら、アイスクリームを買おうとした時に店員に成りすましてた両奈と偶然遭遇し、事の経緯を知ったことを記憶から呼び覚ます。
「妖魔を売買したり、抜忍救済の裏サポートアイテムの売却をしてるんだよね？」
「そうだ、主に抜忍達に武器や薬品を売り捌き、一部の闇市場では独占してるとも噂されてる…お前、知っていたのか」
「ううん、噂だけしか聞いてなかったから…でもそうなると、確かに奈楽ちゃん達を狙う理由が見つからないよね。何かやらかしたの？」
「自分は一部、襲撃してくる害意を振り払ってるだけだ。余計な事柄に首を突っ込むつもりは毛頭ないし、忍商会が自分たちに目を付けたのでさえ問いたいくらいさ」
　だが奴らは問答無用で兎に角、奈楽を除外して神楽だけを狙う。
　外の世界では極力信用しずに自身の力で使命を全うするつもりだったが、まさか邪魔どころか命を狙ってくるとは。
　その為に、神を護る為に自分がいるとはいえ、理由も分からずに突っ込んでくるとなると鬱陶しい事この上ない。
「そんなもの決まってる――其れが貴様に課せられた業だからだ」
　刹那――鋭い殺意の声が全員の耳を打ち、紅い拳の眼が飛んでくる。
「チッ…！邪見か!!秘伝忍法――『六道転砲』!!」
　対する奈楽は苦虫を噛み殺した様に舌打ちをしながら、足に巻きついてた小さな球体を、どう言った原理からか、巨大な鉄球に変貌し、それを大砲の如く蹴り飛ばす。

巨大な拳の眼と、巨大な鉄球が衝突し、空気と共に耳鳴りの轟音が鳴り響く。
衝撃波に双方は吹き飛びながら態勢を立て直す。
「奈楽…護神の民よ。そんな貴様も唯の人間に戻る方法がある、そして襲われない方法で平和的な手法…それは、貴様が大人しく神楽を我々に渡せば良い。どうだ穏便だろう？」
「目が腐っているのか、自分が神楽様を手放すわけがないだろう!!」
「嗚呼、知っている――そして貴様が今の今に至るまで延々とその子供に付き添ってた事も、大人の言いなりに生きてた世間知らずな事も」
「…読めた、そうか。情報の出所は貴様というわけか、『邪見心傷』」
「ん？…ああ、それは貴様の勝手な妄想で納得してくれて結構。我々ビジネスマンは、余計な事柄や社内での情報漏洩は厳禁でね」
端から見れば意味不明な会話のやり取りも、二人組の会話を見た限りだと目に見えない線で通じ合ってるように見える。
「あ、あの…さっきから何を話してるんですか…？」
「おいお前、アイツから自分と神楽様を守れ。これは命令だ――」
「あの、さっきからマジでいい加減にしてくれません？なんですか、その上から目線は？人に物を頼む時も偉そうで、いざ守られても感謝の言葉も無いなんて、常識ないんですか？」
困惑しながら疑問を投げかける飛鳥に、自分を守れと命令する奈楽。そんな彼女についに我慢の限界を迎えた風魔は、若干キレ気味で言葉を荒くする。
普段サボリ魔で補修ばかりやらされてる風魔も、流石に頭にきたようだ。それが尊敬する飛鳥に対してなら尚更だ。
「其処の子供の言う通りだ、金もない報酬もない奴の命令言葉など唯の雑音だ。
所で君たちもなるべく我々の事柄には巻き込んで欲しくないのも本望…邪魔さえしなければ君たちだけでも避難すれば良いし、逆にその子達を捕まえるのを手伝ってくれれば、好きなだけ金をやろう。幾ら欲しい？５億？１０億か？これでも安すぎる方だが…」

「そんなの渡すわけないでしょ……！奈楽ちゃん達から離れて！」
　穏便に交渉を得ようとする邪見に、黙って見てた飛鳥は憤慨の声で反論をする。
「…？意味がわからん。君たちがこの子らを庇う理由など皆無に等しい筈……それとも上層部からの命令は…見た感じなさそうだな。
　ふむ、ならば問おう。何故に利益もなくその子らを守る必要性がある？やり取りを見た辺り、知り合ったのもつい先程であり、そして事情も分からないのであろう？」
「確かに私はこの子達のことを知らないけど…でも、あんな風に追いかけて、態々危険な目に遭わせて、それで奈楽ちゃん達を渡せって、どれだけお金とか沢山積まれても絶対に渡さない!!」
　雄英に居た影響を受けてるのだろう、曲がった悪意や歪んだ思想を持つ輩を人一倍許さない飛鳥は、ある種としてヒーローに近いものを連想させる。現に、言葉巧みの交渉で奈楽や神楽と呼ばれる二人を此方に引き渡そうとするなど、理由も知らなければ渡す道理はない。
「そういうことだよおじさん！お願いだから、雲雀たちの言う通りここを引いて…!!」
「何を馬鹿な…ん？お前、その眼……そうか、君も瞳術使いの…噂に聞いてはいたが綺麗な華眼だな。護衛や側近はいないのかい？」
「…？」
「嗚呼、そうか。成る程。君は落ちこぼれな上に無理矢理忍になった感じか。そういう忍社会の犠牲者は影に多く存在する…同情するよ」
「おい貴様、馴れ馴れしく雲雀に近付くな。これ以上雲雀に何かしようものなら、俺が相手だ」
　ヤケに雲雀に対して謎の好印象を受けた邪見は、元から雲雀のことを知っていたのか、それとも華眼として有名なため、他の忍から情報は入手していたのか、珍しそうな顔で見つめている。
「何だこいつ…ああ、君は抜忍の鎌倉くんに手も足も出ずに敗北を喫した少女か。亡くなった妹君のために強くなると豪語しておきながら、誰も守れず何も守れず…全く、とんだ失笑ものよ。妹君もこんな姉を持ってさぞあの世で嘆いてるだろうに」

「なん……だと？」
　どうして望の事をお前が知っているんだ。という疑惑の想いよりも、蔑まれることに怒りの導火線に火が付いた。
　例え相手が言葉巧みによって相手を錯乱、或いは神経を乱す為の話術だとしても、今の言葉は無視出来ない。
「人は心の中を言い当てられたら直ぐ怒る！然し私も君達の駄弁りに付き合う暇はない。渡さないというのなら少々痛い目を見させてから奪えばいいか」
「飛鳥、雲雀達と奈楽を連れて逃げろ。コイツは俺が相手をする」
「柳生ちゃん!?でも…」
「俺のことをどれだけ悪く言おうと構わない…所詮、貴様のいう雑音だからな。だが…望に関して触れたことは、聞き捨てならない」
「ほう…で？ならばどうする？どうさせたい？『はいスミマセンでした』か、『もう二度と悪く言いません』と言えば良いか？」
「――望に対して頭を伏させて謝らせる…!!」
「そんな言葉の選択肢は何処にも無ェよガキ――」
　柳生の番傘と、邪見の禍々しい眼の拳が衝突する。
　柳生個人としては、この邪見という男は少々どころでは済まない程に、大分怒りの線を踏み切ったご様子だ。
　雲雀達と共に奈楽を連れて逃げろと話す柳生に、飛鳥と雲雀に補欠組のメンバーは言われるがまま奈楽を連れて避難するしか無い。
　無いのだが…
「柳生ちゃん！雲雀も戦うよ!!」
「来るな雲雀！コイツは思った以上に強い…刻一刻でも早く目標から遠ざけるんだ…！」
　雲雀は心配そうに応戦を試みようとするも、柳生がそれを否定する。
　確かに敵の狙いが奈楽とかぐらを狙ってると知った以上は遠ざけるのが基本…然し、一人相手で難しいのであれば応戦して二対一で戦うのが良好。
「来たら真っ先に貴様を潰すぞ」

更に其処から煽るように邪見は雲雀に対して只ならぬ殺意を差し向ける。
恐らく雲雀でも戦えないし、勝機は確実に低い。
そうだ、忍商会の面々は言わば上忍以上の忍達が相手をする強豪揃いの世界だ。其れを飛鳥は林間合宿にて黒佐波との対峙を経て経験している。
「良いから早く行け!!」
バチバチと番傘から破けるような嫌な音を奏でながら、彼女の絶叫に似た言葉に思わず背筋がゾクリと震える。
「わ、分かった…!その代わり、無事に避難させたら直ぐに戻るから!!」
そう言いつつ、奈楽と共に距離を開けるように走り逃げ行く飛鳥達に、一瞬安堵の息を吐くも、気を引かずに邪見を睨みつける。
「本当に良いのか?雲雀くんや飛鳥くんとまだ協力していれば、勝機は確実に上昇していただろうに…」
「雲雀を殺すと脅してた貴様がよく言えたものだな…」
「ん?ああ、アレは嘘だよ。そうやって言っておけば近づかなくなるだろう?故に彼女の思考と心は恐怖で混乱していた…そこで君が逃げろと言えば仲間想いの彼女も自然と言うことを聞いてくれる…貴様はただ彼女を巻き添いにし傷付けたくない一心で放った言葉だろうが、お陰で誰にも邪魔されずに確実に殺せるよ貴様を」
混乱や恐怖に心が募る人間の心理は、脅しや命令には自然と聞いて動いてしまう傾向がある。
心理現象を話術などで巧みに操る邪見は、心を揺さぶることに特化し隙を作り致命的に痛撃を与えることが殺しにとってもかなり有効なのを、悪忍として生きてた頃から学び身に付いたのだ。
「俺は…この命に代えても雲雀を守る。お前が忍商会の人間だろうと、誰であろうと…傷つけるやつは許さない――」
「お前が死んだら許すも許さないも何も、元も子もないだろう?そこまで考えが行き届かなかったか?よっぽど雲雀という少女に過激な好意を見せてるようだが……そうまでして、妹の代わりが大事か」

瞬間――凄まじく伸びる邪眼は、鉄槌に似せた大きな握り拳を作り、縦横無尽に振り回す。
空間そのものを殴打するかのような隙のない攻撃に、柳生は何とか防御で身を守りつつある。
「そうだよな。お前は結局悲しみと穴の空いた心を埋めるがために、雲雀くんという妹に似てるだけな理由で彼女を溺愛し、妹の代用とし、結果としてそれが傍迷惑なことさえ気が付かず、お前は欲望と身勝手な経緯で彼女を守ってるだけだもんな」
「……ッ!!!!」
コイツは何処まで人の心を虐げれば気がすむのだろうか。そう心に芽生えてしまうほどに、邪見は的確に柳生の心を見抜く。
だが柳生は奥歯を噛み殺しながら、沸騰する怒りを溜め込み忍耐する。邪見の狙いは、言葉で柳生を誘い込み、隙を生じた所で縦横無尽な暴虐な邪眼の忍術で滅多打ちな腹積もりなのだろう。
「雨の日に初めて妹に似た雲雀くんを見てどんな気分だった？蛇女や敵連合に拉致された時はさぞ自分の弱さに打ちのめされただろう？
彼女と一緒に居れた幸せは妹を忘れる事が出来ただろう？
そこまでして雲雀くんを守りたいのなら、今すぐ戻ってかぐらを渡せば、穏便に済むんじゃないか？それを態々闘ってまで俺を阻止しようなど…で？現状は防戦一方でしか渡り合えないお前が俺をどうするんだ？時間を稼ぐにしろ、逃げ道なんて神楽を渡す事以外は何処にもないというのに」
確かに、なんて言ってしまうほどに納得がいく。
僅かな手数で分かったが、この瞳術使いはまだ本気を出していない…相手の能力やどのような攻撃を仕掛けてくるか分からないと言ったアドバンテージが効いてるのもあるが、それは忍の世界としてなら当たり前――更に付け加えれば相手は大人であり上忍以上の実力を秘めている…到底、1人で勝てるという話は、柳生が入学時から天賦の才を持っていたとしても厳しいだろう。
「よく口が回るな…!!」
「失敬、つい喋りたくなるんだ。俺は人を殺す際は、蔑むことを趣味と

しているんでね。殺しに拘りがあるプロが世の中にいるように、俺もその類の人間であることを」
番傘で上手く弾き返すも、それを物ともせずに眼球の撤退を下す邪見は、仮面越しから低いニヤケついた笑い声を含み、相手に攻撃の隙を与えない。
「随分と悪趣味な奴だな…！秘伝忍法――『薙ぎ払う足！』」
これ以上防戦一方ではいずれ削られジリ貧になるだけだと悟った柳生は、巨大な烏賊を召喚させ、凍てつく足を乱暴に振り回す。
「召喚獣か、秘伝動物とのシンクロが強ければ可能な術……だがな、そう言う旨みを持つ忍供を俺『達』は幾度となく殺してきた」
此方へ振り回す足を、拳の眼鉄球を数倍の動きで相殺を試みる。
「秘伝忍法――『釈迦食毒殴拳』」
紫色の毒々しい色合いをした邪眼は、より荒々しく足を殴り続ける。召喚獣自体にダメージを与えようと、対して致命には繋がらないが、これほどの破壊的な威力と毒を持った危険性な忍術は、見たものを不快にさせる。
「てやっ！」
「っ！」
秘伝忍法を終えた途端、瞬時に氷のクナイを敵に投げつける。鋭く黒いクナイは氷を纏わせ、無慈悲に相手を貫く。
「幼稚なことを…っ!?」
刹那、柳生は一気に相手の間合いを詰めて、懐に潜り込み番傘に仕組まれた剣で心臓部を目掛けて突進する。
先ほどの秘伝忍法やクナイは単なる隙を作るための作戦に過ぎず、一度距離を詰めれば相手は対応に順応できずに遅れをとる。腐っても、忍学生だけで留まるような輩ではないと言うこと。
「せやっ！」
「っと！」
上手く体の軸を中心に保ち、回転して急所をずらし、腕に擦り傷が付いてしまう。
外してしまったものの、良い線まで行けてる辺り、以前よりかは大

分成長しているようだ。そして此処で留まる程、柳生もヤワではない。
　相手を追撃するように、秘伝動物の烏賊を一部召喚し触手のみで相手を拘束し、速やかに戦闘不能にさせようと鑑みる。忍術の応用は、以前雄英高校の圧縮訓練にて個性応用の実践で試した。
（よしっ！このまま相手に攻撃する隙を与えず…）
「個性の応用か…考えたな！だがな、そんなもの俺を前に意味ねェよ」
　ドゴッ！と、膝で腹部を蹴られた柳生は、口から思わず唾液を零し、肺に溜まった酸素が一瞬で吐き出されてしまい、転がるように吹き飛ぶ。
「ふむ、学生とはいえ仮免は取得してるのか…内容はどれも薄っぺらだが、お前のような金の雛鳥は後々と敵に回すと厄介だ…
　先ほど痛めつけて神楽を回収すると言ったな？あれは嘘だ――お前を今すぐ此処で殺す」
　小さな芽も、己の脅威になり得るのであれば早々に摘むのが良好。
　敵を油断せず速やかに殺すこと…相手は油断も隙も見せてくれない上忍の忍が相手にする抜忍…だからこそ、そんな闇の世界で今に至るまで生き続けてきた彼は、躊躇も情けもない。
　邪見はそのまま伸縮自在の眼で柳生の体を巻き付き、そのまま眼の先を拳に変えて、顔を見定める。
「不味い…！体が…」
「しかも粘着質も塗布しているからな俺の忍法は…中々抜け出せないだろう？確実に殺すために生み出した術だ」
　今となってはそれほど致命傷を負う相手ではない…だがこの天才児は成長すればカグラになる可能性も高い。
　そして何れ自分をも脅かす存在となれば、黙ってるわけにもいかないだろう。
「死ね――」
　彼が死の宣告を呟いた時――
「『忍兎でブーン！』」
　雷豪な突進と共に、この場の緊張感を和らげるようなキューティク

ルな声が、二人の耳に打ち、忍兎曇に乗った雲雀と忍兎が、邪見目掛けて衝突する。
「あがっ!?」
油断も隙もなかった邪見は此処で初めて、外部からの攻撃により無防備に雲雀の忍術を喰らい、跡形もなくなすすべも無く、吹き飛んでしまう。
街の商店街の建物にぶつかり、瓦礫と共に埋まり、邪見の忍術は解除され柳生の拘束を解いてしまう。
「ばかな…雲雀!?」
「助けに来たよ柳生ちゃん!」
其処には親友の危機に心配した雲雀が一人だけ、駆け付けに来てくれた。

場所は打って変わり、京都の繁華街にて奈楽とかぐらを始め、下級生達を逃し時間を稼ぎ足止めをしていた斑鳩と葛城もまた、忍商会達と奮闘していた。
「くっ…!飛燕を以ってしても、傷一つ付けられませんか…!」
「ハッハァーーッ!!そんな上品な攻撃タァ唆るじゃねえか!後で一発ヤらせろよぉ!!」
身軽な動きで常に回避と反撃のスタイルで邪淫に何度か鳳凰の斬撃をお見舞いするも、屈強な身体を力ませ無理やり殺傷力を押し殺す。
対する邪淫乱闘は豪快に拳を振り回し、街や家屋など御構い無しに破壊を続け、斑鳩を付け狙う。
「その不快な言葉、やめて頂きませんか…?それに、何故小さな子供に、あの女性を付け狙うんですか…!?」
「んぁー…?別に理由なんてどうでも良いだろッ、どうせお前らも知ったら喉から手が出るほど欲しくなるだろうしよっ!」
「っ…?」

言葉の意図が分からない斑鳩に、邪淫は炎柄のレスラーマスク越しから邪な笑顔を作り浮かべる。
会話をするだけで不快感に煽られる邪淫とは、性格的に置いてかなり相性が悪いのは端から見ても分かるだろう。
「おらよっ…!!」
一方、葛城は両舌の顔面に勢いのある蹴りを披露する。葛城は蹴りを主にしたパフォーマンスを得意とし、肉弾戦でも他の追随を許さない。そんな葛城の足技を、軽々しく避けながらアクロバティックな動きで回避する両舌は、未だに忍術を使わない。
「なんか消化不良だな…日影みてぇな軽々しい動きしてんのに、全然反撃してこねぇ…!」
「……」
悪態を吐きながら舌打ちをする葛城を他所に、両舌は顔に被った麻袋越しから口をもごもごさせながら無言で見つめて来る。正直、一言で両舌を表すなら、「不気味」ほど似合うものはないだろう。
喋り方の時も只者ではないと勘付いてはいたが…相手の能力も分からない上では、戦いづらいものがある。
相手が何かしようと目論見があるのか、反撃さえもしてこない辺り、何かあると考えるのが妥当だろう。だが頭を使った頭脳戦を得意としない葛城にとって、こういうまどろっこしい敵はやや嫌いな傾向もある。
「おいテメェ!勝手に仕掛けておいてやる気がねえならとっとと失せやがれ!!」
「くっちゃくっちゃ」
葛城の叱責にも似た怒号を飛ばすも、両舌は何やら口の中の物体を舐めてるのか、汚い唾液混じりの音を際立てる。正直、葛城も珍しく額に青筋が入ってるのが目に見える。
「どうしやすか両舌の兄貴ィ…?コイツらガキとはいえど多少ともやりますし。コイツら案の定商売の邪魔してやすよね?もうぶっ殺して後追うしかなさそうなんじゃ…」
「…ん、まって…連絡、きた。嘘月から…」

「妄語の兄貴は別件の忍務でいねぇんじゃ…?!」
「か、かか、帰って、すぐに、かぐらの捕獲…全力、尽くすって」
何やら向こうで会話が始まったようだ。
斑鳩と葛城の二人は、恐らく外部による仲間からの連絡に応答してる様子だ。もし増援が来るとなれば、いよいよ黙ってはいられない。
「お前達無事か?!」
「霧夜先生…!」
避難誘導を終えた担任の霧夜は、生徒の無事を確認する。
丁度、両舌と邪淫と戦っていた二人としては心強い味方でもある。こういう時こそ、担任が頼れること他ないだろう。
「あ、あー…霧夜、きちゃったじょ……」
「貴様ら…!忍商会の者か!こうして公の場で姿を現わすとは…随分と肝が据えてるようだが、逃すまい…!!」
「クハハッ!おっさんやる気みてェだぜ兄貴ィ!」
「んぁー…う、嘘月から…邪淫は下がれって…そ、それに綺語からも連絡きた…い、いったん引く…これ、大事…」
「マジかよ、兄貴の言うことなら無下にする訳にゃいかねーな」
恐らく嘘月と呼ばれる兄貴分は随分と親しまれてるようで、何かしら尊敬に似た眼差しがあるのか、血に飢えた邪淫もすんなりと納得してるみたいだ。
「待てお前達!」
「んーぅっ!!べっ!!」
霧夜が制するように声を貼るも虚しく、両舌は溜め込んでた口から、麻袋から破けた口元から嘔吐物を出す。
唾液混じりに出されたのは煙幕――両舌の忍術『スモークタン』によって、一気に視界が封じられる。
「くっ!」
「忍商会サポートアイテム、『ジェットブラスター・機動オン!』」
邪淫は懐からキューブ状の四角形の物体を取り出し、スイッチを押すと、突如として身体にジェット機が纏わりつき装着。
両舌は邪淫の肌に触れないよう服を鷲掴み、上空を飛び、瞬く間に

何処かへと消えゆく。
「ケホケホ…霧夜先生!!」
「……お前達、取り敢えず飛鳥達と合流するぞ。場合によっては…俺は生徒の安全の確認後、少し席を外す」
一般市民の避難後、伝達として上層部から直ぐに本拠地に来るようにとの指示が出されており、生徒の確認後に東京に戻らなければならない。
随分と酷な扱いではあるが、忍教師とはいえど仮にも忍社会の住人…致し方ないだろう。

『此方、綺語道楽…此方も問題ありません。現在滞りなく観察を続けております…其方はどうです?兄貴…?』
「嗚呼…問題ない。忍務を終えた今、特急で京都に向かってる。何か分かったら直ぐに連絡しろ」
『あ、そう言えば…両舌と邪淫からですが…何やら例の子供の捕獲をする際に忍学生と対峙した模様で…』
「…で?ソイツらはどんな奴らだ?」
『担任もご一緒だった模様で…半蔵学院とか言う連中だそうですが…兄貴、その…心中察しますが…大丈夫でしょうか?』
「ほぉ…半蔵学院か……」
嘘月は連絡用の端末を耳に傾けたまま、片手に持つ太巻きを大きく頬張り喉を通してから
「安心しろ――問題ない。ある程度、苦戦するようなら俺が全部片付ける。かぐらの捕獲も、奈楽の処分も、邪魔者の排除も。一応、邪淫を動かせるようにだけはしておけ、ウチの貴重な切り込み特攻隊だ」

『へい！分かりました兄貴！ではまた何かあれば連絡を…！』
連絡を終え、端末から電話を切られると、嘘月は赤いスカーフを口元に隠しながら
「随分と…ド派手な忍務がやってきやがったな」
大きなバックを肩に担ぎ、面倒そうに溜息を零した。

２１９話「柳生と雲雀と、邪見心傷」

泥のように粘り付くような泥沼に少女が一人、その場に立ち尽くしていた。
払っても拭っても消えることのない汚泥の塊の人形が、暗闇の中で罵声を浴びせてくる。
『亡くなった妹君のために強くなると豪語しておきながら、誰も守れず何も守れず…全く、とんだ失笑ものよ。妹君もこんな姉を持ってさぞあの世で嘆いてるだろうに』
軈て黒の泥人形は次第に形を創り出し、汚い声で泥を付けるように、一人の少女、柳生を嘲り笑う。
「違う…黙れ！」
そんな彼の言葉など聞かなくても良い、言葉で惑わそうとする下劣な男に、柳生は番傘で暗闇の泥人形を切り裂く。
切り裂かれた人形は簡単に真っ二つになり、暗闇の泥沼に落ちたと思えば、ドロリと跡形もなく原型を残すこともなく崩れては消えてゆく。
『よっぽど雲雀という少女に過激な好意を見せてるようだが……そうまでして、妹の代わりが大事か』
次に背後から、呆れるように人の形をした泥人形の言葉が、柳生の心を深く抉る。
違う、そんなつもりじゃ、言葉が喉に引っかかるも、自分が自分で妙に反論できなくなってしまう。
『そうだよな。お前は結局悲しみと穴の空いた心を埋めるがために、雲雀くんという妹に似てるだけな理由で彼女を溺愛し、妹の代用とし、結果としてそれが傍迷惑なことさえ気が付かず、お前は欲望と身

勝手な経緯で彼女を守ってるだけだもんな』
「黙れええええええ!!!!!」
否定の言葉とは違う、拒絶を引き起こす絶叫に、喉を震わせながら、縦横無尽に汚泥の塊を叩きつけるように振り払う。
違う、妹の代用品ではないという事実よりも、この男の言葉が鬱陶しく、耳にするだけで頭が張り裂けそうな程の声に、乱暴に、自分を打ちのめすように泥沼から生えてくる不気味な人形を斃して行く。
『雨の日に初めて妹に似た雲雀くんを見てどんな気分だった？蛇女や敵連合に拉致された時はさぞ自分の弱さに打ちのめされただろう？
彼女と一緒に居れた幸せは妹を忘れる事が出来ただろう？』
其れでも、現実逃避をしても、真実からは逃れられない。
妹を亡くし、代わりに雲雀という望に似た彼女と出逢い、自然と惹かれてしまった自分は、何も反論できない。
全て真実だから――何も言い返すことも、否定する資格もない。
だってそうだろう？
今まで望の為に忍になり、日々精進していた自分は、あの交通事故を境に心の半分が死んでしまったのだ。
だからその悲しみを忘れない為に、眼帯をした。四季からは鬼ノ眼と呼ばれる瞳術を取得したが、そんな物の為ではないというのは、当の本人がよく理解している。
それでも…目の前に、雲雀という望に似た少女が目の前に立っていた。
あの時――入学式の雨の日に、雲雀という少女と出逢ってしまったから、いつの日か少しずつ笑うようになり、そして…雲雀と一緒にいることに、幸せを感じたのだ。
それ以降からは、コイツの言う通りだ。
雨の日に雲雀と出逢ったことで望に対する死の悲しみが薄れ行き、幸せを感じてきた。
蛇女の春花の罠に転校され、敵連合にはＭｒ．コンプレスに拉致され、二回も彼女を失った時は、怒りで我を忘れそうになった。でもそれは何よりも、自分が弱くて不甲斐なかったから。

そして…いつも側で自分を慕ってくれた雲雀に、自分は幸せになってしまい、その心地良さに妹の死を忘れてしまったから。
「巫山戯るな！俺は望のことなんか1日たりとも忘れたことだって…!!」
そして、憎いコイツを…邪見心傷を切り捨てた時――今度は鼻にツンとした鉄の匂いが上り詰め、同時に目を大きく見開く。
「は…っ？」
「酷いよ…お姉ちゃん……」
それは確かに、邪見心傷ではなく…交通事故で亡くなった、妹の望だった。
虚ろな目と口の端から血を零しながら、助けを求める手を伸ばしながら、地に伏せ泥沼に消えゆく妹に、柳生は嘘だと首を横に震わせながら、必死に手を伸ばすと、ベチャリと其れは泥となり、柳生の手が汚れてしまう。よく見ると、その黒い泥沼は、血の沼となり、べったりと柳生の手は真っ赤な血に染まる。
「あ、あぁ…」
「酷いよ柳生ちゃん…」
次に放たれた言葉は、聞き覚えのある声だった。
「雲雀もそうやって、切り捨てるの？」
其れは、最初に罵声を浴びせてきた邪見を切り捨てたはずだった泥沼が、雲雀の形をしていた。
望と同じく口から血反吐を吐き、綺麗な華眼は真っ赤な血に染まり、軈て目は潰れるように真っ黒に染まり、穢れて行く。
「ち、違う俺は…!!!」
「違わないさ。そうやってお前は自分の気に入った人間を単なる代用品とし、傷付けられれば怒り荒ぶり、そして死んだ事に悲しみを持っては幸せを感じて哀しみを忘れての悪循環…お前は、幸せになっちゃいけない人種なのさ」
そうして今度こそ、邪見と呼ばれる男が面白そうに笑いながら、柳生を蔑む。
「そんな自分がどうしようもなく嫌ならば、妹を忘れてしまった事に

対し、償いたいのなら…お前の持つその武器で、自分の心目掛けて貫ければ楽になれるぞ」
そうして男は、自分の手で胸を軽く叩く。
それが心だと言わんばかりの動作は、心臓を目掛けて射貫けとジェスチャーで訴える。
「お前の人生なんて、氷のように冷たく、生きてたって良いことなんざ起きないさ。同時にお前はよく頑張ったよ…安心して楽になれば良い」
何故かその男の言葉に、今度は拒否反応が起きなかった。
其れこそ、望に対する償いだと思えば…自然と抵抗もなく楽に行えた。
番傘を自分の心臓部分に当てた時――
「柳生ちゃん！助けに来たよ――!!」
暗闇と血の汚泥の沼に囚われた少女に、一筋の希望の光が差し込んで行く。其れは救いでもあり、目のハイライトが消えていた柳生の瞳から生気が宿り、悪意を囁いていた邪見も、死骸となり少女の心を惑わしてた雲雀と望と思わしき泥沼の人形も、霧散して消えて行く。

「ひ、ばり？」
心の傷…邪悪な眼に囚われてた柳生は、我に返り、助けに来てくれた雲雀に振り向く。
どうして…？確か飛鳥達と一緒に奈楽とかぐらと呼ばれる少女を安全に隔離させるよう避難誘導をしていたはず…
「一緒に逃げろみたいなこと言われたけど、やって来ちゃった！」
悪そびれた様子もなく元気いっぱいに声を張り上げる雲雀の笑顔には、先ほどの虚ろに塗れた顔とは比べ物にならない程に、輝いていた。
「どう、して…」

「其れはね、柳生ちゃんのことが心配で…」
「違う！どうして俺を助け…いや、俺は飛鳥達と一緒に逃げろと言ったはず…なのに…何よりも俺は雲雀を危険な目に遭わせたくないだけなのに…!!何で来たんだ…!?」
「柳生ちゃん…あのね、雲雀のことを大事にしてくれるのも、奈楽ちゃん達を安全に逃がすために、一人で食い止めようって言う気持ちは凄く嬉しいんだよ？でもね、雲雀はちゃんと闘えるし、何よりも柳生ちゃんが危険な目に遭ってたら放っておけないよ！だって、仲間でしょ？」
「そうじゃない…！オレなんかを…助けなくたって…」
望の代用品にしてたという微かな気持ちが、その真実が、罪悪感として柳生の心を押しつぶすように圧を掛ける。
そしてその言葉に初めて
「どうしてそんな事を言うの!?雲雀はただ純粋に、柳生ちゃんのことを心配してるだけなのに!!
ううん、それだけじゃない。柳生ちゃんだって雲雀のことをいつも心配してるでしょ？それと同じように、雲雀も柳生ちゃんの事が大切なんだよ!?」
怒りにも似た感情が、声として乗り、怒号を飛ばす。
大事にしてくれるからこそ、それが嬉しくもあり彼女の優しさなんだと。
自分だけが守られてばかりじゃなく、自分でも誰かを守れるような人間になるのだと。
柳生は其れを、否定しようとしたのだ。
何時迄も泣き虫で弱い雲雀ではない、蛇女や月閃との学炎祭に、神野区を通して雲雀の心は強くなる。
「雲雀だって…俺が強いことを信じてないから…信じれないから、来たんだろ…？俺一人、こんな奴を相手に…」
「柳生ちゃんが強いのは分かってるし、今も信じてるよ!!でも…相手は今まで雲雀達が戦って来たのは忍学生や敵連合の人達で、それ以上に外には危険な忍だっているんだよ？」

雲雀の言葉は尤もだ。
外の世界…つまり、忍学校を卒業、または上層部から処罰を受けても尚、生き延びてる抜忍も存在する世の中、決して学生レベルで上忍以上と渡り合うのは、忍学生による抗争の比ではない。
抜忍狩の黒佐波もその一人であり、そして彼以上に危険な忍も存在する。
「それでも…いや、其れを含めて俺は……」
「ゴチャゴチャ煩ェぞテメェらあああぁぁぁ!!」
雲雀を守る――そう言葉を告げようとした矢先、忌々しい声を荒げた邪見が、瓦礫から復活する。
仮面から見える一つの覗き穴とも呼べる邪眼の目は、既に充血しており、柳生の鬼ノ眼に近い見た目をしていた。
「バカップルも大概にしろよ…!!なぁ?オイって!学生風情が随分と偉そうに邪魔してくれたな?!誰が誰を助けるって?俺らの商売カタギ、邪魔しやがってからによ…!!」
苛立つ声色してから察するに、仮面越しからは只ならぬ憤慨に満ち溢れているであろう邪見は、拳を強く握りしめながら瓦礫を退かし、起き上がる。
「全く…とんだ厄日だ!なんだって一体、かぐらの捕獲をするが為にも奈楽が邪魔で鬱陶しければ、お前らのような何の因果関係もない餓鬼どもの忍ごっこに付き合わせなきゃいけねぇんだ?その挙げ句、仲間だの守るだの俺の前で駄弁りやがって…ここまで殺意が湧いたのは久しいよ!!」
かぐらを捕獲しろと言われ、忍務に赴けばどうだ?
奈楽が邪魔で捕獲はできない。
半蔵学院に邪魔が入り更に追跡が難しくなり、
その挙げ句邪魔者を消そうと思えば蛆のように湧いてくる。
邪見は仕事に対してスマートに忍務をこなし、余計な事には挟みたくないのがモットーだ。
それなのに、何の恨みも買ってないのにも関わらず、忍務を邪魔するかのように行く手を阻む。

これに怒りを露わにせずして何になる？
「柳生ちゃん！傷は痛い？大丈夫？」
「俺は大丈夫だ…それより雲雀は下が…っ！」
刹那――瞬間的に、瞬きする間もなく邪見から放たれた邪眼の拳に対応できず、諸に腹部に衝撃が走り、殴られた勢いにより吹き飛ばされる。
「がはっ!?」
「柳生ちゃん!?」
「やるなら二体一とか最初っからしろよ。というか俺を相手によく一人で戦えるだなんて啖呵切れるな、ええ？おい」
怒りにより頭が沸騰してる邪見の苛立ちは収まらない。
「なぁ、そこのガキの言う通りだよ。お前らはたかが学生…そして俺や他の連中は修羅場を潜り抜けてきた同胞達は…テメェが思い描くようなチンピラじゃないんだよ。
いつから俺らを前に守れるだとか、勝てるだとか錯覚してんだお前？」
「柳生ちゃんを虐めないで！これ以上は…」
「これ以上何だ？誰に向かって口を利いてるんだ？子供はまず大人に向かって謝罪すら吐けないか？
そもそもだ、お前らは誰を相手にしてるのか本気で分かってるか？お前らの行動に、俺達の名が汚されることが喧嘩を売る行為ってのが分からんか？
忍ごっこのちゃんばらで遊んできたテメェらが、本気で俺らを潰せるなんて妄想がどうして出てくるんだ？」
威圧を含み、歩むたびに覇気を纏わせる邪見は、先ほどのように温厚と穏便な性格では済まなくなった。
「兄貴がいねぇからって調子に乗るなよ雌ガキ!!お前ら全員死ぬんだよ！一人残らずな!!」
其れは組織としてのプライド

自分達が格下に本気で舐められてるという自覚
敵を前に守るだの助けるだの宣う仕打ち
それが冷静な邪見という男に、怒りの炎を燃やしてしまった結果だと言う事。
「…っ！」
雲雀は臆する事なく、何とか固唾を飲み込み、圧されない様に歯をくいしばる。
柳生ちゃんにはいつも助けてばかりでいられる…蛇女が攻めてきた時だって、ＵＳＪでの脳無との戦いや、林間合宿で鎌倉と対峙した時…いつでもどこでも柳生ちゃんが必ず助けてくれた。
なら、今度は自分が守る番…!!
華眼と邪眼が対峙したその時――予想外な事が起きた。

プルルル！と、邪見の懐から端末の着信音が鳴る。
「えっ？」
「あぁ!?何だよ今度はよ!!次から次へと本当によく邪魔が入るなクソが!!…道楽からか…」
仲間からの連絡に、邪見は悪態を吐きながら最大限に警戒態勢を維持し、雲雀と何とか態勢を戻そうとする柳生を凝視しながら連絡を取る。
「おいどうした綺語道楽…今は折り込み中だ。序でにクソ生意気なガキに鉢合わせて胸糞悪いってんのに…
あ？一旦戻れだと？巫山戯てんのか!?まだかぐらは捕獲しちゃいねぇ!!
…なに?!妄語の兄貴が…?そうか、立て直しも大事だな。解った、すまんな怒鳴ったりして、俺の怒りは忘れてくれ」
憤りだった邪見の声色も、次第に弱まりつつ端末の着信を切る。
端末を乱暴に懐に潜らせ、邪見は喰い殺すかのような目付きで柳生と雲雀を睨みつける。
「…命拾いしたなクソガキども。もう神楽の行方が追えない以上、貴様らに割く時間はない――一度体制を立て直し、また挽回する。その

後、自由に殺してやるよ」
「待て…!クッ…」
「柳生ちゃん!一旦ここは引こう?雲雀達も皆んなと合流しなきゃ!それに、今の状態じゃ返り討ちどころか…下手すれば…」
殺される。
先ほど垣間見た邪見の実力に、柳生も雲雀も対応できなかった。幾ら雲雀が不意を突き邪見を吹き飛ばしたとしても、それは本当の偶然で運良く攻撃を与えれただけ。
それもほんの一撃。致命的な傷を負わせれない辺り、忍としの実力も折り紙付きなのだろう。オマケに向こうは何故か自分達の情報に対して偉く詳しかった。
筒抜けの状態の一方、此方側としては戦力も数も能力も全てが未知数…解りきってることが雲雀と同じく瞳術使いであり、何らかの特殊な能力を持っていること。
そして雲雀の判断は適切な対応である。
此方の目的はあくまでかぐらと奈楽と呼ばれる身柄不明の少女二人を守ることであり、勝負に勝つ事ではない。
忍には負け戦を強いられる時、時間を稼ぐといった戦術的なやり取りが必要な時もある。
ヒーローも同じ事――市民を守る為に敵と交戦することはあるものの、法律や上層部がその職業に対して個性の使用権利を与えてるだけであり、倒す為にあるものではない。
それでも客観的に見て犯罪者を倒してるように見えるのは、鎮静としての役目…何よりそうまでもしないと止められない相手だからである。
死穢八斎會を考えて頂ければ、直ぐに理解を示せるだろう。
故に、冷静でありながら仲間のことを考え、状況的にも順応な対応が出来る雲雀は、ある種としてリーダーに向いてるとも言えるし、母親の言ってた「次期として忍家系を継ぐ当主になって」という願いも、割かしら遠くないのも事実。
だからこそ、邪見も初めて雲雀を見て悟ったのだ。

コイツは軟弱に見せかけた曲者であり、弱者の仮面を付けてる大物であると。自分と同じく、穏やかな性格と仮面で装い、素性を見せないやり方で人を殺してるからこそ見抜ける青年の業。
もう一つ、邪見は出来れば雲雀と戦うことは、不利な状況を産むことも考えていた。
何しろ華眼を一番よく知る邪見は、彼女の忍家系が戦国時代から何枝も別れて家系が連なってることを知っている。
彼女は知らないだろうが、遠い親戚がウチの忍商会の幹部…邪淫の前任者が『華無し』に殺された。
そんな彼女に傷を負わせば、黙ってられない連中が増えるのもそうであれば、恨みを買われ佐門含めた自分らのメンバーに迷惑をかけることを躊躇ったから。
だが――かぐら捕獲の際に、柳生という邪魔者の始末を阻止され、挙句に助けに来たともなれば、もうそんな理屈などどうだっていい。
だからこそ邪見は雲雀がどんな人物であろうと、柳生諸共殺すことを決め、躊躇という概念を断ち切った。
雲雀もまた、相手が得体の知れない何かだからこそ、警戒を高めて身を引くことを優先に考える。
これが当初、ドジで訓練によく失敗してた泣き虫とは考えれないほどに、神野区の一件を通して比にならない程に精神面が強く成長した。
だがそんな現状に納得しないのが柳生である。
雲雀の言ってることは正論であり、本来ならば相澤先生にも教えてもらった「応戦を呼ぶのも重要な仕事だ」と言う言葉通りに動くことが大事だろう…。
それでも我のプライドが許さないのだろう。
何より今の柳生は冷静でいられない…だがそれもまた邪見の狙い通りであることは、誰も知る由もない。
「お前達無事か!?」
「あれは…霧夜先生!!」
「チッ…次から次に本当によく邪魔が入るな…オカルトめいたことは

信じないタイプだが、こりゃ運勢が最悪だ」
　更に騒動に感知し駆け付けに来た担任の忍教師である霧夜を始め、斑鳩に柳生もとなれば、邪見の待遇も大分変わる。
　此処は深追いせず撤退するのが最善であり安全なる手――
「俺が憎いなら殺してみろ、無論俺はお前らを殺す――この屈辱と舐めきった根性、滅多打ちに潰してスクラップにしてやるよ」
「待て!!クソ…待ってろ、俺は必ずお前を倒す…この受けた傷は、次に何倍にしても返してやる…!!」
　お互いが憎み睨み合い、唾み合う。
　犬猿というよりも比較的に絶望なまでに相性が悪すぎる。
　人の心に傷を負わせ、地雷を敢えて踏む邪見はどの相手でも悪いのだろうし当然なのだが、柳生のように深い穴の傷を所有する者の怒りの幅は底知れない。
　遠方で霧夜が攻撃を仕掛ける前に、邪眼を飛ばし、長く伸びた目をロープ代わりにしてこの戦場から身を引くようにして遠くへと姿を絡ませた。

（……然し、華眼を持つ忍に神楽か…９００年前の歴史が、再び稼働してんのか？これは偶然か、はたまた必然なのか？何がともあれ、早急に邪魔者を駆除しながら神楽を捕獲しなきゃな…）

　邪見は知っている。
　華眼の歴史のみならず、雲雀の家系に神楽が関係していることを。
　そして…
（…よくよく考えれば、殺すのは不味いか？亜門様が喉から手が出るほどに欲してたんだよな、アレ）
　移動をしながら家屋の屋根を飛び回りながら思考回路を巡らせた結果
「まあ、神楽さえ手に入ればもう関係ねえよな。亜門も魔門も、敵連合も…陽花でさえも石ころ同然になるんだから」

「柳生！傷は…」
駆け付けに来た霧夜と共に、斑鳩と葛城も血相を変えては柳生の容態に顔を曇らせる。
「出血が…手酷くやられた様ですね。急ごしらえですが、少し傷口に火を炙りますね、ハンカチで咥えてて。葛城さんは直ぐにでも飛鳥さん達を追って下さい！救護は私達がやります！」
「すまねぇ！柳生、お前もよく頑張ったな！んじゃアタイは飛鳥達を追いかけるよ」
学生とはいえど、上級者を相手に生きてるだけでも大したものだ。学校で訓練を積んだ忍が上層部に派遣し、外の世界へ出た忍は善悪と抜忍問わずに強豪ばかりだ。
大人の忍社会新入でも、外の厳しさに順応できずに殉職した、或いは辞職したと言う話は珍しくもない。そしてそんな忍達を食い物として糧となり、強さを身につけてるのが世を乱し、秩序を壊し、自由を謳歌する抜忍達。
僅かな間とは会え、重傷でも生きてるだけで有難いものだ。
「柳生、アイツは誰だった？」
「……邪見、と名乗ってた…気にくわない奴だが…手強かった…」
「邪見だと…？悪口は？」
「悪口…？何のこと？」
「まさか、雲雀も柳生も…相手は本当に一人だったのか？」
霧夜は神妙そうな顔立ちで雲雀と柳生を見つめている。どうやら邪見と呼ばれる男を知ってる様な口振りだ。
「どういうことですか…？霧夜先生…？」
「邪見心傷にもう一人、ペアの銃中悪口という抜忍がいる。常に忍務

では二人ペアとして一緒に行動してるはずなんだが…」
「詳しいんだな、霧夜先生」
「アイツらは上層部からも敵連合と同じく全国指名手配犯だぞ？そんなゴロツキは世界中を探せば幾らでもいる。
何よりも…あの二人は殺し屋の中でも有名でな――単騎のみならず、双方が相手であれば手が付けられない…となれば、飛鳥の方角か？」
「となれば今度は飛鳥ちゃん達が…!!」
「これは…次から次に事件が鳴り止まないですね…！」
妙な胸騒ぎがする半蔵側は、刻一刻と次々に事件の嵐がやって来る。
どうやら彼女達は、思いもよらない出来事に首を突っ込んでしまってるらしい。

避難をする様に全速力で走り渡る飛鳥を筆頭とし、続いて風魔に土方、菖蒲、眠たげな清明、そして多少傷が見られる奈楽に今も眠りながら抱きかかえられてるかぐら。
「はぁ……はぁ…此処まで来れば大丈夫なんじゃないかな…」
「情けないぞお前達。もうこんなので虫の息か？今の忍は随分と脆弱なんだな」
「だから!!助けられてるってのにどうして感謝のかの字も出ないんですか!?てか、今でも息苦しそうにしてる飛鳥先輩を目の前にしてよくそんなこと言えますね!?なに、この人ひょっとして人の心無い？前世では鬼か悪魔だったの？」
「で、でも…私達の、忍の存在を知ってたり…傷があるのに一切の疲れも見せてないって、相当、だよね……」
相も変わらずな奈楽の失礼極まりない発言に食いつく土方は今にでも胸ぐらを掴みそうな勢いだ。
一方で、飛鳥の言うことも尤もである。

1日中走り続けておきながら、一切の疲弊を見せない彼女は得体が知れない。忍商会と呼ばれる組織に狙われたり、かぐらと呼ばれるか弱い少女を守ったり、自分のことを護神の民と名乗る彼女は、謎が多すぎる。
「それにしても柳生ちゃん…大丈夫かな…雲雀ちゃんも付いて行っちゃったし……」
「あの雑魚なら死んだだろう。腐っても邪見は殺し屋の中ではかなりの凄腕と聞く…学生程度でやられる程ヤワな相手じゃないはずだろうしな」
「ちょっと！幾ら何でも柳生ちゃんの悪口を言いだすのは許さないですよ?!」
「真実だ。弱者は自分の力量を見誤り、そして己の弱さに気付かなければ認めない。アイツほど弱者という言葉が似合う女は初めてだ」
「アンタさ…本当にいい加減にしないと……」
「おーい！お前らー!!」
柳生の罵倒に心中お怒りの風魔が拳を強く握りしめ、奈楽に殴りかけようとした刹那、姉貴分の頼りになる葛城の声が聞こえた。
葛城は元気よく手を振りながら、此方が無事であることを確認すると安堵の息を零したようだ。
「葛姐!?」
「いやー、飛鳥達に追いつくのにメッチャ疲れたよアタイは…霧夜先生がよ、取り敢えず集まれって言われたからさ。其処の奈楽にかぐらって子もできればご同行願いたいんだが…」
「待って、柳生ちゃんは!?柳生ちゃんは無事なの…?」
「ああ！アイツなら雲雀と斑鳩に霧夜先生が付いてる！今委員長が傷の手当てしてるし、心配無用だぜ」
ホッと安堵の表情を浮かべながら、胸をなで下ろす飛鳥を他所に、風魔はニタニタしながら奈楽を見つめる。
「あっれれぇ～？柳生先輩は死んだとかほざいてましたけど、弱者は力量を見誤るって言ってましたけどぉ…見誤ってません？」
「いいや、見誤ってなどいないさ。単なるまぐれだろう」

そう、正に本当にまぐれである。
奈楽の判断は間違ってないとも言えるし、運も実力のうちと言うのであれば間違いではあるものの、限りなく柳生一人では勝機はゼロに近いとも呼べるものだった。
奈楽は実力などを見抜ける目を持っており、瞳術ではないが彼女ほどになれば力の差や力量など見分けるのは造作もない事なのだろう。
「それと同行についてだが、断る。自分は忍と共にはいられないし、貴様らを信用に値はしない」
「じゃあどうして私たちの避難を信じてくれたのですか？」
「思い上がるなよ貴様、お前達は都合の良い駒…そして奴らの肉壁となるが為の時間稼ぎ要員として利用しただけのこと…神楽様の為ならば、如何なる犠牲は致し方ないからな」
今度こそ風魔がキレそうになるも、奈楽は此方の返事を聞くことさえ待つことなく一人で幼女を抱きかかえたまま何処かへと飛び立った。
「ムッキーー!!本当にあの子何なんですかね!?自分はうちは一族だー!とか何とか言ってさ！」
「風魔ちゃん…護神の民って言ってたよ…それにしても、奈楽ちゃんって子がどうして忍商会に狙われてるんですかね？」
「その上、デカブツからはアタイらがアイツらのことを知ったら喉から手が出るほど欲しがるそうだしな…そう考えると、あの奈楽ってやつの周りが全員敵のように見えるのも、無理ねえよ…」
他人を信用できずに孤独であり続ける奈楽を、飛鳥は最強の友達である焔を思い出す。
確か蛇女にいた頃の焔は、仲間や絆などに吐き気を催し、綺麗事にはとことん親の仇のように敏感に敵意を示す彼女と、奈楽が重なってならない。
そう言った意味では、今の焔は大分変わったといえよう。
「……取り敢えず、霧夜先生のところに戻ろう…」
その言葉に、全員とも首を縦に頷くしかなかったのである――

「へくちっ！」
――などと、飛鳥が考え事をしてる一方で、同じく京都に来ている焔は思わずくしゃみをする。
「焔ちゃん、大丈夫ですか？」
「ああ…風邪という訳ではないのだが……誰かが噂をしてるのか？急にくしゃみが出てしまってな…」
「ほな、噂してると言ったら誰なんやろな。雅緋さんとか？」
「あ～、それはあり得そうね。何たって焔ちゃんのこと認めてるみたいだし。訓練の誘いでも話してるんじゃないかしら？」
「一応、抜忍って設定なのに加えて悪忍や善忍も抜忍は処罰するみたいな話だったから、中々難しいと思うよー？」
焔紅蓮隊はと言うと、半蔵学院が忍商会との衝突事件のことなど知らぬのも無理はなく、どこ吹く風かすっかりと商店街を歩きながら光山と呼ばれる観光ガイド案内人の後ろを歩み進んでいる。
合流した後、なるべく事件発生地から距離を置きながら宿泊施設を目指している。
昼食も何とか済ませ、そろそろ夕方になる頃合いだ。宿泊亭に一旦荷物等を置いたり、宿の手続きなど済まさなければならないので、早いとも言えばこの時間帯が普通なのだろう。
「皆さん、もう少しで宿に着くんで！疲れてると思いやすが、もう少し頑張りやしょう！」
「私たちは大丈夫だけど…美怜はしんどい？全然身体動かしてないからキツイでしょ？」
「いいえ、私は何処かの誰かさんと違って無駄な体力を消費したくないだけだから」
「ほう、その何処かの誰かさんの前でろくに体を動かしてないやつは

よっぽど運動嫌いなんだろうな」
焔の眼が笑ってない辺り、確かに自覚があるようだ。
「まあまぁ…あ、そういえば宿泊亭に露天風呂の温泉があるそうですよ！」
「久し振りの熱々風呂ねー！しかも外の景色を眺めながらの温泉とか最高ねー！」
「それに食事も豪華だと聞くし…改めて無理して京都に行った甲斐があったわねぇ」
未来は温泉が楽しみなのか、いつもよりかなり元気そうに明るい顔ではしゃいでるのが見受けられる。虐め連中の件で引きずることなく、こうして明るくなったり美怜との口論でそこまで喧嘩沙汰にならないのも、彼女が居たからこそのだろう。
「…ねえ、光山。聴きたいことがあるんだけど、貴方さっき彼処の街で爆発の騒動が起きた時に敵による犯罪絡みと言ってたけど、どんな事が起きてたの？」
「はえっ？」
突然、京都の旅行やら温泉やらのイベントで盛り上がってた会話を、何の関係性もない話題を吹っかけられて驚いてしまう。そもそもどうしてそんな事を今聞くのだろうか？
「ヒーローや警察が彼処で駆けつけてる以上、犯人が捕まえてようが逃亡してようが、事件位は知っててもも損は無いと思って聞いてみたのだけど…知ってる？」
「そりゃわかる訳ねえですぜぇ!?何たって今の今に至るまでずっと一緒に居た上に、ニュースを確認する憩いの時間なんざ無かったんで分からねえッスよ…？」
「何かしら知る術を持つ手段はないの？」
「あいやそれはー…てか、知ってどうすんですかえ？」
「知っちゃダメだった？京都で事故や犯罪が起きたのなら誰でも情報くらいは知りたがると思うけど。自分の身を守る為にも、そういう護衛の術は必要ではないかしら」
美怜はヤケに食いつくように言葉を語り掛ける。彼女の言ってる

事はごもっともだが、幾ら正論でも現状出来ないのであれば仕方ないのが現実である。
「美怜ちゃん、困ってるでしょう？幾ら外が危険でも、私達がいるし大丈夫よ」
「危機感もその程度で済まされる貴女達の思考回路が実に羨ましいわ…案外、ちょろいとか思われてない？」
「ちょっ、美怜ちゃん!?」
春花に対しても毒舌を吐く美怜の言葉遣いに、流石の春花も驚嘆の声をあげる。
未来に対してなら口喧嘩もよくある事なので分からなくもないが…何が気に入らないのだろうか。
「…美怜？」
彼女の異変にいち早く勘付いた焔は、彼女が何かしら思う節があることを気付き始める。
美怜はよく人を見る眼がある――奈楽の様に力量による差の見極めとは違い、観察眼も長けてる美怜は何かしら気になる部分があるのだろう。
それとも元々興味を持つものに対しては知るまで、又は納得するまで聞いてるだけなのかもしれない。
「もういいわ、春花の言う通り迷惑を掛けてしまうのは良くないものね…聞くのはやめておくわ」
「最初っからそうすれば…と言うか、美怜ちゃんが気になることに対して納得するまで知りたがるのは分かるけれど…」
「私は気になる物、興味あるものは研究対象として知り尽くすまで徹底にするけれど、流石に迷惑だと思われるほどなら程々にするわよ。これでもまだ抑えてる方なんだし…」
美怜も少しずつ常識が付いてきたのだろうか、相手を思い遣る事が出来たそうだ。
「あっへへ、そう言ってもらえると助かります…あ、もう着きましたよ！此処ですぜ宿泊亭の温泉旅館は！」
大きな木材建築の建物が聳え立ち、如何にも旅館らしい宿泊施設が

立派に建っている。
何十分も歩かされ疲弊した自分達にとって、正に理想郷其の物といっても過言ではない。
「やっとだー!!ねね、明日からまた自由に京都の街を満喫しても良いんだよね？」
「そうッスね。今日は長旅とご足労掛けてまでお越しして下さった事ですし…今日はゆっくりと体を休めて明日からまた自由に京都の街を楽しみましょう！」
光山の優しい笑顔に、未来は嬉しそうにはしゃいでる。
京都の旅行では殆ど楽しめなかった反動も大きいのだろう、光山が案内をし、受付係の人と軽い手続きをしてるのを他所に、焔は美怜に声をかける。
「美怜、ちょっと良いか？」
「どうしたの焔？」
「ちょっと気になる事があってだな…お前、ヤケに探ってたじゃないか」
「…気のせいよ」
その言い方にも何かしら引っかかる節がある上に、小声なのも妙だが…いや、辞めておこう。
これ以上下手に動くのは美怜からしても不都合でしかないのだろう。彼女は、既に何かしらの違和感に勘付き始めていたのだから。

邪淫乱闘、両舌部露、邪見心傷、この三名の忍商会の幹部と交戦を終えてから、既に1時間が経過していた。
ヒーローやら警察が調査した結果としても、何者かの敵か忍が襲撃をしたと述べていた事から、忍商会の存在は知らされる事なく今後とも警備体制を強化するとの結論で時間場は収束した。

勿論、忍商会に関しては霧夜が後に上層部に掛け合い報告するとの事ではある為、更には忍が何十名か派遣される事もあるだろうが…それでも不安が拭えるわけではない。
「お前達、先程の闘いではよく生き延び、耐え忍んでくれた」
「あっはは…何だかそう言われると照れるものがありますね…」
「飛鳥、オメーは何も戦ってはないだろ」
「うっ…すみません……」
「いいえ、それでも飛鳥さんは奈楽さんやかぐらさんを指示通り避難してくれてましたし…勿論、風魔さん達もよく頑張りましたし」
「ついで見たいッスね…まぁ私らはともかく、こんな眠たい中よく頑張ったと思いますよ晴明さんの場合に至っては」
「すぅ…すぴ……」
飛鳥と選抜補欠は特に戦闘を交えた訳でもなく、結果的に銃中悪口とやらと出くわす事も無かったため、心配してたのも杞憂に終われたものの、油断は禁物だ。
そんな中でも清明は未だに立ちながら眠りについているのは、大物とでしか呼べない。
「さて、お前たちを京都の宿泊亭に連れてから私はこれから上層部の所まで行き報告をしてくる――もしまた何かしら騒動や問題が起きれば連絡してくれ」
「わ、分かりました…」
折角の修学旅行だというのに、全く満喫出来た心地がしないのは気のせいではないだろう。
現に葛城と斑鳩は無傷…これと言った外傷は見受けられないが、あの天才児である柳生が手酷くやられたとなると、あの邪見心傷と言うのはそれを遥かに超えてると言う事。然もあの男を前に手も足も出なかったという真実が、余計に心にくるものがある。
「柳生ちゃん…」
心配そうに見つめる雲雀に、柳生は無口のまま巻かれた包帯を見つめる。
未だに消えない傷跡は、まるで戒めと言わんばかりに残されてお

り、今でも邪見の声が脳内にこびり付く。
あの忌々しい罵声と汚い言葉は、よほど柳生の心を抉ったとも言えよう。
「柳生ちゃん！元気だそうよ、雲雀はもうさっきの事気にしてないよ？ほら、柳生ちゃんもいつもの柳生ちゃんに戻ってさ、また旅館でいっぱい楽しもうよ」
「雲雀…あ、ああ…済まないな……」
いつもなら側に支えて雲雀の愚痴を聞いたり、訓練で失敗した時の悩みを聞いたり、同僚になってから変態葡萄頭の峰田の性的煩悩の手から守り続けてきた柳生だが、今回は邪見の一件もあってか、逆の立場になっている。
「…そ、それにほら、温泉もあるし！」
「温…泉…？」
雲雀のピンポイントな言葉に、柳生はハッと我にかえる。
そう言えば温泉旅館にこれから泊まるのだから、露天風呂があるのは当然と言えば当然だし、寧ろ柳生にとって修学旅行の楽しみの中に温泉が入っているのは
「ひ、雲雀の裸体…！背中流し…!!」
雲雀と一緒にお風呂に入れる事だろう。
どんな時でも、いや…今の状態は多少気持ち的に雲雀にベタベタくっ付く感じではなかったが、お風呂というイベントも忘れていたのも兼ねて、彼女の欲情が煽られる。
「そ、そうだな…！疲れを癒し流すためにも、温泉は丁度良いだろうしな…!!」
何とか気持ちを取り戻した柳生に、雲雀は内心ホッとする。今まで慰めてもらってた雲雀が、今度は慰める側になると考えると、何とも不思議な気分だ。
それでも、各々がこうして無事に生きてるだけでも充分だ。まだ己の実力が上の世界に通用しないと言う落胆は大きいものの、それは自分達の成長に必ず通じる。
現に、飛鳥に柳生、雲雀は雄英で既に何度もプロが相手にする仕事

の経験を積んでいる。
今思い返せばＵＳＪの脳無、蛇女との超秘伝忍法奪還戦での焔や怨楼血、学炎祭での雪泉や、ヒーロー殺し、期末試験の大道寺との激戦や、林間合宿で死闘を繰り広げた黒佐波、特にこの中でたった一年間の中でここまで濃い修羅場を潜り抜けてるのは、断トツで飛鳥だろう。
そう言った意味では、彼女が皆の筆頭とした選抜メンバー筆頭なのも頷ける。
だが後に起こる京都での戦場は、それすらも覆す戦争となるだろう。
言い忘れていたが、この闘いは結果がどうであろうと、大災害を招くことになる。
それは神威の目醒めとなりて、超人と忍社会の破滅の歯車が動き出す。今はその予兆に過ぎないのである。

２２０話「まったりと温泉で」

京都の温泉旅館は内装こそ和を主張とした風装が整っており、複数人でも寝れる部屋のペースが空いていた。
大きな液晶テレビに、ちゃぶ台テーブル、生け花が整えられており、疲れた旅人を少しでも癒すが為に作られた空間は、心身ともに疲れが溶けていくような気分だ。
「取り敢えずあんさん方六人はこの部屋で…あっしは向こうの５６４号室なんで、また何かあればいつでも連絡下せえ」
ガイド人の光山優はそう言うと、頭を深々と下げて自分の部屋に戻って行った。
当初は喋り方の癖が強いだけのおじさんかと思っていたが、思った以上に優しい人で、此方としても距離感なく接しやすいのが印象的だ。
「はぁー、なんか京都に着いただけでも一日過ぎるのがあっという間ねぇ」
「荷物は此処に置いといて…この後の予定はどんな風なの？」
未来は羽根を伸ばすように背筋をピンとあげ、美怜は荷物の整理をしながら焔に今後のスケジュールを確認する。
外の世界は勿論のこと、旅行自体に何の経験もない美怜からしては基本的にどのように動けば良いか分からないのは致し方のないこと。と言っても、美怜に限らず全員とも筆頭の彼女に任せてるので、美怜の質問は全員の問いかけを代弁してくれたものでもある。
「一先ず今は自由時間だ。その後は夕食時間で、食事を済ませたら温泉に入るってのが、今のスケジュールだな。
此処の旅館はそこそこ接客やサービスも良いし、申し分ないだろう」
「ほな、わしらが蛇女に居た頃の温泉旅行思い出すなぁ」
日影はふと蛇女に在籍していた頃を思い出す。

蛇女でも毎年何かしらの合宿イベントがあり、今年は選抜メンバー全員で温泉旅行に行ったのだ。
選抜補欠メンバーは焔達とは違った合宿先になっており、日影と一緒の旅行先でなかったことに芭蕉が残念がってたのも覚えている。
「蛇女…私も一度で良いから学校を拝見したり、体験入学でもしてみたいわね」
「あっはは、でも訓練嫌いな美怜じゃ退学になっちゃうんじゃない？」
「効率の良い訓練なら、別にやれるわよ」
意外にも、訓練が出来ると彼女の口から放たれた事には多少驚いたものの、美怜自身が闘える姿が付きにくい。
焔紅蓮隊に入ってから一度も訓練はおろか、武器を持って戦う姿も見てない為、果たしてこの先戦場で生き残れるか不安要素が高い。
「そう言えば、未来と美怜…少し仲が良くなったんじゃないか？」
「ふぇっ!?そ、そうかな？」
「あら、私は誰とでも仲が良いわよ？」
「だからその自信は何処から…って、美怜の場合は本気でそう思ってるから、否定できないのよね」
最近は未来としても、美怜を受け入れつつありながら、彼女の思考が理解できるようになってきた。
日影のように「感情がない」とは違い、配慮の欠損もあれば自分がそう思ってる答えに対して、謙遜などない。
いや、鈴音先生が言う「情けと容赦」に辞書がないと断言するように、彼女には謙遜なんてものは存在しないのだろう。
それこそ謙遜など、彼女からして何の得にもならないのだから。そして本気で偽りなく、自分と仲良しだと言い張る美怜に「そんなわけない」と否定する気にもなれやしない。
それが照れ臭くあろうと、美怜を見てるとそれすらもバカらしく見えてくるから。そう言った点では、美怜といると調子が狂う反面、素直になれる良い機会でもある。
「でも確かに、美怜ちゃんと未来ちゃん前よりから仲良しに見えますわ。何だかもう一人妹が出来たみたいで、見てる私も微笑ましく感じ

ますわ♪」
「よ、詠お姉ちゃんも…あんまりそう言うと恥ずかしいから～…！」
「そう言えば未来は詠のことを姉と呼ぶけれど血縁者なの？姉妹にしては似てるようには見えないけど…」
「いいえ？ですがその…お恥ずかしい話、蛇女に在籍していた頃に一年生として新しく入った未来ちゃんに、お姉ちゃんと呼んでほしいってお願いから始まったんです。私、貧民街暮らしで一人っ子だったので…妹が欲しくて…未来ちゃんはほら、可愛いい妹さんみたいで、側にいるだけで心が安らぐ気がして…」
「ふぅん…そう。でも、詠の気持ちは分からないでもないわ。ベルゼ兄さんと私も、そんな感じだから。
　私が姉というのも些かイメージや実感が湧かないし、兄さんからもよく妹として大切に接してくれたから、私が妹のように見えるのはそう言った影響もあるのかもしれないわね」
　どうやら妹として見られてることに不服はないそうで、少し嬉しそうに見えるのは気のせいではないだろう。
「こほん、夕食まで時間はあるし…お前達、何かしたいこととかあるか？折角だからこれらで遊ばないか？」
　押入れにあったのか、焔が引っ張ってきたのは誰でも遊戯ができるトランプやらオセロ、将棋などがあった。
　トランプなどは誰でも遊べる初心者向けだし、オセロは頭脳を強いた中級、将棋に至っては上級と、利用者を退屈させないための娯楽も用意してある。
「意外ね、貴女のことだからてっきり貴重な自由時間は訓練に当てようとか言い出すかと思ってたわ」
「ふふ、甘いな美怜。私は楽しむ時は楽しみ、訓練する時は訓練する！何事もメリハリは大事だからな！これでも蛇女に居た頃は幹事を務めてもいた」
「じゃあ新幹線の件に関してはどう説明するの？」
「いやほら…アレは時間を有効活用しようとだな…」
　見苦しい言い訳に興味を示すはずもなく、美怜は面白そうにオセロ

やらトランプ、将棋などを物色する。
美怜は要領が良いので、ある程度説明を覚えればやれることが出来るというのが強みだ。
「トランプ…花札とはまた違ったものね。この白黒ゲームや駒を使ったテーブルゲーム…やり方はどうやるの？」
「それなら私が教えるわ」
娯楽に興味の火が付いた美怜に、優しく丁寧に教える春花。そうこうしない時間の中、美怜は一度きりの説明を受けて全て覚えたと言うハイスペックな学習能力により、手間かかる事なくあっという間にゲームの内容や流れを覚えたのであった。
「じゃあ私からね！ふふん、美怜勝負よ！」
「ええ、どうぞ。受けて立つわ」
未来は早速美怜に勝負を挑んだ。
美怜のことは見くびってはいないというとそうでもないのだが、覚えたて早々な彼女が、果たして熟知してる者と対戦すれば、勝機はまだ確実に未来の方が上だ。
対する彼女は何もかもが初めての未経験者故に、こうしてルールを覚えたばかりにしろ、相手が子供らしい未来にしろ、馬鹿に出来る相手ではない。
そもそも未来からして勝負を吹っかけたのも、小さな話ではあるが美怜に見返したり、勝負に勝ちたいという想いがあるのは確実だ。
対するゲームはオセロ、トランプのババ抜きでは苦手な上に勝負でもほぼ確実に負けてしまう恐れがある為、観察眼に長けてる美怜では勝機が薄い。かと言って将棋の場合は元から苦手とする為後回しに…実は美怜からして初めてではあるものの、将棋といった戦略的な部分はかなり得意そうなのでやめにしたというのが一番の理由だが、未来の勘もまぐれではない。
その結果、オセロでなら五分五分だと判断した未来は、勝負に身を投げたのだが…
「……」

「ねえ、いつまで待たせるつもり？未来…貴女の出番なんだから、さっさと決めて頂戴」
予想はどんでん返し。
今オセロの殆どが白になっている。真っ白けとも言えるほどに、黒が置ける場所は殆どなく、美怜は暇そうに眉をひそめる。
未来も知略的な部分があり、オセロに対しては詠やら良い勝負になれたほど得意ではあったのだが、この女、予想外な展開を引き続ける。とても初心者とは思えないほどに。
因みに白は美怜、黒は未来だ。
「ひょっとして未来、貴女実はオセロのルール知らないの？」
「はぁ!?あんまり調子こくとぶっ飛ばすわよ!?それに、今考えてるんだから急かさないで！…んっと、あ…じゃあここよ！」
バチンと、決まったように黒を配置し白から黒へと塗りつぶす。
「どーよ！これで形勢逆転よ！」
「じゃあ私は此処に白を置いてっと…」
だがそれも束の間の喜びというやつか、美怜は読めたかのように決まった場所に白を置き、未来が頑張って黒に変えた円盤が、一瞬にして逆戻り。
ポカンと未来の口が開いたまま塞がらない。
「そして未来の置ける石はないから…再び私のターンね。じゃあ此処に置いて…はい、全部真っ白け。
完全勝利と言ったところかしら、黒一つもないし、これで未来の負けね」
「嘘だあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーっっっ!!!」
嘆く未来に美怜はすんなりと勝負を終えると、円盤を片付けていく。基盤上が白になった今、美怜は未来に語りだす。
「ところで未来、貴女オセロは苦手な方なの？自分の苦手なゲームを他人にするのは考え難いけど…」
「うっさいわね!!これでも結構自信あった方なのよ!!」
「流石美怜ちゃんね、未来もそこそこ良い線は言ってたけど…」
「良い線？寧ろ未来の場合は単純過ぎだけど」

「どういうことよ…？」
「オセロは単に頭を使って円盤の色数を競い合うだけじゃないの。相手の思考や動きを読むことも大事。貴女にはそれが無かった、それだけでこの差ということ。
例えば…黒が置ける配置がAとB、C、Dがあったとするわよね？そこに有利な配置がBだと判断した場合、貴女はここに配置されたら相手がこうすると言う考えが無かったのよ。私はちゃんと読めてたから、貴女がこうしたら私が此処に置けるようにと考えてたわ。
逆に残ったA、C、Dがあったとして其処に置くことで相手がどの対応をするのか…其処を模索してから始まらないと相手の思い通りにしてやられるわよ。
オセロや将棋もそうだけど、当たり前の様に決まった手腕があるのなら、そもそもの話ゲームにすらならないもの。
角を取られない、斜めから攻めるという手法は嫌いではないけれど、単純すぎるわね」
ぐぅの音も出なかった。
と言うか、本当に初心者なのかと思わせるくらいの初心者殺しだった。
ババ抜きではポーカーフェイスが出来なので、それが仇となって敗北続きは花札勝負でもよくあったが、まさかこんな基盤上での争いでも相手の心理を探れるとなると、ひょっとしたら美怜は大物なのかもしれない。
「で、でもそんなに考えてたら日が暮れるよ…？」
「そこは経験と慣れね。でもさっきの場合、AとDは確実に角を狙われるし、どう足掻いても相手の思うツボになるから消去法的に考えてこの2組は論外。
残るCで如何にどう戦略突破をすれば良いかになるわけ。まぁ、Bから上手く攻め込めば逆転出来なくはないけど…先読みを怠った貴女が負けるのは必然ね」
美怜は頭の回転が早い上に、考察と観察眼に長けてる彼女が頭脳を使えばこれほど発揮できるのだろう。

もしこれが戦闘面で役立てば、猛将の焔とは違って頭脳や策略で相手の戦意を崩すいわばブレーン的な役割を担える知将として化けるだろう。
「流石やな、儂は何言っとるかようわからん」
「それほど頭良いなら、寧ろ戦闘でも役に立つんじゃない」
「一応、春花の言う通りそのつもりでいるけれど…策略で相手の戦力を削るという発想は割と好きね。
特にハンニバルの戦記は読んでて大好きよ。意外な戦法、相手の思惑や思考を見抜いた戦略的な策略は、見てて飽きないもの」
「確か相手の敵人数が７万の兵に対して、５５００兵で軍を打ち破ったとも有名な話ね。
美怜ちゃんらしいと言えば美怜ちゃんらしいけど」
「美怜！今度こそ勝負よ!!絶対に負けないんだから!!」
「良いわ、どうせ私が勝つのでしょうけど」
悔し混じりに突っかかる未来を軽くあしらうように不敵に微笑する美怜、やはり喧嘩するほど仲が良いというのか、はたまたいつもの見慣れてる光景なのか。

などと言いかれこれ三戦も続けたものの、結果としては美怜が全勝無敗という形に収まった。
それだけならまだしも、最後の方では美怜から「ハンデを付けてあげる」と言い、皮肉にも未来が勝たせれるように美怜の角を四つ、未来の黒で配置して勝負するも敗北。
此処までくると美怜は無敵なのではないかと思う。
「なんで勝てないのよ!!」
「だから単純すぎるのよ。言われてから直ぐに上達するとは思ってもいなかったけど、ハンデを付けても私に勝てないのは明らかに未来が弱い証拠に他ならないわね」
「ぐはっ!?」
トドメを刺されたと言わんばかりに、未来は吐血する。
美怜からすれば無自覚かつ真実を吐いたまだなのだが、真実とは残

酷ともいう。
　美怜の刃の言霊が、未来の心臓を抉った。
「未来ちゃん!?」
「美怜さん大人気ないなぁ…と思ったけどどうなんやろ」
「勝負という項目において態と負けるのは相手に対して失礼でしょう?」
　こういう時だけ失礼だと思えるのか、と内心焔達は愚痴をこぼす。
　美怜と過ごして大体分かってきた事が、彼女は真実なら容赦なく相手に吐き捨てるという事である。
　真実は時に人を傷つける残酷なもの…と一部の人間は異を唱えるが、美怜からしては真実を言わない事が無礼だと認識してるのだろう。それでも美怜も傷付けたいという意図的な思惑は感じ取れないので、其処は了承している。
「あの～すいやせん。お忙しいところ申し訳ないですが…そろそろ夕食の時間になっておりやして…」
　ふと襖から礼儀正しくお辞儀をするように、丁寧に頭を下げる光山に一同は「あぁ」と、壁掛けの時計に目を配る。気づけばもう既に夕方を終えて7時にまで回っていた。
「おっ、もうそんな時間か。よしお前達!遠慮なくご馳走にありつくぞ!今日は久方振りの肉や魚が遠慮なく食える!」
「も、もやし料理はあるのでしょうか!?」
「京都での名物料理といえばにしんそばや鍋料理に天ぷら丼もあるとガイドブックとかでは見たわ。もやし料理に関しては何も記されてないわね」
「やはりもやしは貧相だからですか!?庶民の味方であり、お財布にも優しいもやしが何故…」
「詠、世界遺産な訳でもないのだからないものを出せと言われても困るのは店側の方よ。というよりも、もやしがなくても生きて行けるんだし悲観的にならなくても大丈夫。
　ところで、食後のデザートには甘いお菓子はあるのかしら」
　どうやら何方も何方で食い意地が凄い。

二人とも嫌いなものがある訳ではない（美怜に関しては不明）のだが、単純に好きなものに対する食材への愛情が異常な程に強いものがあるだけである。
「詠さん別に京都に来た時くらいはええやん」
「というか、日影は好きなものはないの？貴女の場合、趣味や好みを聞いたことがないんだけど」
「儂は別に好きなものなんてなんもないし、趣味も特になぁ…」
「ふぅん、日影の事はあんまり知らないと思ってたけど、知らないというよりも謎が多すぎる感じかしら。それにしても、好きなものも趣味もない日影は無個性に近い方なの？」
美怜は余り日影と関わったことがない。
と言うよりも日影の場合感情がないからか、美怜からして会話を交えたとしても長く続いたり短くなったりと変わることも多く、彼女自身が殆ど何も無いため、研究するにしても限りがあるのだろう。
流石に好きなものも趣味もないとなれば、もう何も追言することはないのだが。
「そう、なら嫌いなものは？食べれないものとかもないの？」
「嫌いなものもないなぁ、食べれんものもないし、食っていければ問題ないよ」
「成る程ね、そう」
会話終了。
端から見れば「そうなるよね」というような組み合わせ。然し美怜からしては単純に研究を終えた気でいたのだろう、収穫はあったらしい顔ぶりが僅かながらに見受けられる。
「すまんね、儂は感情がないから美怜さんの面白そうな事も話せなくて」
「ん？別に、面白くないとは一言も言ってないわ。日影は日影で面白いし、寧ろ貴女のように感情表現や心理に疎い人種は珍しいから」
「そうなん？いや、言われてみればそうやね」
流石に日影のような人が何十人何百人もいると考えると、批難してる訳ではないが恐怖には感じる。

日影のような変わった人間が側にいる事自体が美怜からしても面白いのであれば、退屈しないという意味で役立ってはいるのだろう。
因みに春花は未来で実験して作成した薬品を、日影にも飲ませて反応を見ようとしたことが過去に何度もあった。傍迷惑な話である。
「それに日影の事は分からなくもないから…」
と、小声で微笑を浮かべる。
美怜は毒舌口調もあって誤解されがちだが、彼女は日影と同じく心理的な面で疎い部分もあれば、感情表現が苦手というのも共通しているからである。
美怜の場合は日影と比べ感情はあるにしろ、配慮的な思考や心理的描写が疎い辺りではウマが合うのでは無いだろうか。
相手の気持ちが分からないから、美怜の発言は棘にもなれば人を容易く傷つける。
日影も同じで、相手の気持ちが分からないから、忌夢に対してボクサーパンツだの揚げ物事件だのが起きて、因縁を付けられるのだ。
「ベルゼ兄さんも、もし笑顔という感情があれば私も何かしら変わってたのかしらね」
兄は心はあっても感情が無かった。
喋り方で察せれるが、無機質で機械的のように淡々としているベルゼは、孤独ながらも妖魔の巣窟で誰も感情を示唆してくれるものは誰一人いなかった。そんな状況下で美怜が育っていく過程を考えれば、感情表現が乏しいのも頷ける。
環境下によって人間の心理が大きく現れるのは、今も昔も変わらないのだろう。
過去にベルゼは美怜に何かを伝える時も、あんまり日本語を話すことが難しかった兄はジェスチャーやら何やらで美怜に訴えていたので、元々の知能指数は低かったのもあり仕方ないだろう。
「そいや眼鏡のお嬢ちゃんは、兄さんがいらっしゃるんですか？」
「それを赤の他人である貴方が聞いてどうするの？」
「あぁいや！すいやせん、家事情に首突っ込んじまいまして……機嫌を悪くされたのならあっしからも礼を…」

「ちょっと美怜ちゃん、光山さんに対して失礼すぎない？」
流石の春花だけでなく、詠や未来も薄々と勘付き始めてきたのだろう…美怜は明らかに光山に対する態度が違う。
彼女自身、親密な人間以外に対して素っ気ないのなら致し方ないのだろうが、鈴音との対話でも全く冷たくあしらってはいなかったので、何か思い当たることがあるのではないかと探ってはいるものの、相変わらず彼女の考えが分からない。
「別に、ただ単に兄のことはあんまり話したくないだけ」
それを聞いて一同は納得する。
自分たちがやった事とはいえ、流石に死去した兄に対して他人に何かを話したくはないのだろう。
そう考えると今の対応は致し方ないだろうし、光山も悪気はないのだから、双方とも結果としては何も悪くない。
だが、焔としては其れでも異様に何も話さない事に違和感を感じた。
美怜は焔にあの夜、妖魔と忍について打ち明かしてたこともあったので、彼女が何も理由なく冷たい対応をしてるとは考え難い。
恐らく、何か考え事でもしてるのだろうか、表情的には嫌悪感などもなく無表情だ。
春花に対して厳しい口調で話したのも、恐らく考察してる最中に邪魔されたことを意味表してるのだと、焔は長年の勘で悟る。
他人を信用できないという項目に置いては、焔も美怜も大きく共通してるのだから。
「ささっ、着きましたよ。此処が飯処です。
あっしはこれにて失礼させて頂きやす…どうぞ、お気楽になさって下さいやせ」
長い廊下を歩き終えてから5分後、漸く部屋から香ばしい匂いが鼻孔につんざく。
それと同時にただならぬ空腹を感じては、詠に至っては腹の虫が鳴った。
「おっし！念願のご馳走だ！お前達、遠慮なく食べろよ!!」

「やったー!・わっ、マグロの姿焼きまるであるじゃない!!」
「わ、私もう空腹で気絶しそうでしたので……」
皆が待ちに待ったと言わんばかりに歓喜の声を上げていく。部屋を見れば、和食を始めた肉野菜の大盛りや、マグロ頭の照り焼き、刺身に大鍋、豪華なご馳走が長いテーブルに置かれている。
只でさえ野草生活で苦渋な貧乏生活を送ってた焔紅蓮隊からしてみれば、これはこれで有難いものだ。
美怜が来てからある程度食生活もマシにはなったが、それでもアジトを転々とする事もあれば、環境下においては中々食料も取れない可能性もあるのでこうしてマトモな食事に当てられるのが素直に嬉しくて仕方ないのだ。
というよりも、ちゃんとした料理にありつけるのはいつ以来だろうか?蛇女の寮ではかなり裕福な食生活を送れたので、離れてから半年間の殆どが野草生活と考えると、人間追い込まれれば何でもありなんだなと改めて実感する。
「ねえ光山、貴方は食事に参加しないの?」
此処で珍しく、美怜が小首を傾げて光山に疑問を投げかける。
「あぁ、基本ガイド人は別居として食事に当たるんですよ。まぁそれに、旅行人の思い出作りに他人が介入するのはご法度と言いやすか…てか、お嬢ちゃんはあっしのこと怒ってないですかね…?」
「怒る…?何を?」
「いやさっき、兄さんの話を振って…というよりも前々から当たりが酷かったのもありやすが…」
「嗚呼、別に怒ってないわよ。それと当たりが酷かったというのも、やっぱり周りからそういう風に見られてるのね…善処するわ」
まぁ、その内わかるわよと心の中で呟きながら、微笑を浮かべる。美怜からしては珍しく素直な回答で、光山も内心ホッとしている。
何かしら怪しまれてる美怜の疑念も、単なる勘違いで良かったのも含め、彼女との距離感も縮まって良かったと吐露してるのだろう。
「美怜も反省することってあるんだ」
「自分でも気付かない事なんてよくあることよ」

未来が茶化す様に突っかかるも、美怜は平然としている。もうこのやり取りも慣れてるようで、未来もそれ以上口に出さないでいた。
「み、皆様！もし食べきれないのでしたら、遠慮なく残してもいいのですよ…？」
そう言いながら詠は荷物から透明な弁当用のプラスチック製パッケージをテーブルの上にポンと出す。
どうやら詠は余った食材を保存して後々に食べるつもりでいるらしい。長く京都に滞在する訳ではないものの、貧乏性による為か、残った料理を破棄する位なら、せめて自分たちの胃袋に収めようと言わんばかりに用意したらしい。
「安心なさい詠、私が全部平らげるから」
と言いながら、目の前に置かれてるご馳走に目を輝かす美怜は無表情と冷静な顔立ちを整えているが、内心は未知なる料理を貪りたい欲求で満たされている。
小柄で細い見た目ではあるが、美怜はかなり食欲旺盛であり、残してる絵面は見たことがない。

軽く挨拶を終えると食事は嵐の様に騒がしく、それでもって残すことなくガツつき見事に平らげた。
黒毛和牛を贅沢に使った肉料理にありつく焔は、高級な肉を口にして大歓喜な声を上げれば、詠は豪華な料理に口を運べば「美味すぎて失神しましたわ」などと言いテーブルに顔を突っ込むような奇行もあり、一同は笑いながら食事を満喫していた。
日影は無表情ながらも中々お目にかかれない料理に黙々と口に入れ、未来はマトモな料理を口いっぱいに頬張っては号泣し、美怜は見たことも食したこともない料理に興味を引かれつつ味を堪能し頬張っている。
唯一、一般常識のようにマトモなのが春花くらいだろう。大人のような振る舞いに、取り乱す事もなく幸せそうな笑みで特上の刺身を箸で摘み、醤油に漬けて食べていた。
結局、あれだけ多かった料理は余す事なく見事完食し、詠が備えて

いた弁当用のタッパーに食材が入ることはなかった。
とは言っても、食中毒でも起こされたらたまったものではないし、これはこれで良かったのかもしれないという、何とも複雑な気分でもあったが、皆満足そうにしている。
『ご馳走さま!』
一同、食事の挨拶を終えると軽く談笑し合いながら満腹感と共に余韻に浸っていた。
腹が満たされれば残るはお風呂だろう。
まだ光山からの連絡もない以上、此処にいるべきなのだろうが…
「そう言えば、トイレって何処にあるのかしら」
「あ、私もお手洗いに行きたいですわ」
尿意でも来たのだろうか、美怜がふと呟く。
それに乗じて偶然にも詠も美怜と同じく声を上げる。どうやら二人ともトイレに行きたい様子だ。
まあお手洗い位なら特に問題ないだろう、焔は軽く説明し終えると詠と美怜はすぐ様廊下に出て便所に向かった。

「はぁ〜…それにしても凄かったですわね…私、生まれて初めてマグロの頭、食べてみましたわ…」
「私は全てが生まれて初めて食べたものばかりだったけどね。あの鍋という調理法は良いわね、昔ながらの料理作法が現代でも生かされてるというのは好印象……伊勢海老というの?あれも中々、かなりいけるわ」
詠も美怜もかなり食欲旺盛であり、二人とも兎に角鱈腹食べた。この容姿端麗な二人の胃袋はどうなってるのか、どうしてアレだけ食べてもお腹がぽっこり膨らまないのか、食べても太らないスタイルのなのだろう。
全女子が羨ましがる肉体構造である。
「あ、そういえば光山さんは何処にいるのでしょうかね…?別室で料理を食べてるみたいですけど…」

「あんなの嘘に決まってるでしょ」
「えっ…？」
　美怜のバッサリと切り捨てる言葉に、詠は言葉を詰まらせる。
「知ってる？この旅館、相当人が満員で空いてる部屋なんて何処にもないのよ。それに私みたけど、アイツの手荷物から菓子類の携帯食料を見つけたわ。チラ見だけどね、アイツが一人で食べていたらとっくに私達の食事処に顔を出してるはず…それをしてないのがその証拠」
「え、美怜さん…？いきなり何を…」
「でもこの時間になっても来ない上に視線を感じない以上は、今は不在と言ったところかしら…凡そ、何かしらの要件でもあるのでしょうけど」
　話が突拍子すぎる美怜に、詠は話の展開が分からずにいた。
「そう言えば詠は光山と会ったことはある？」
「いえ、会ったことはありませんけど…美怜ちゃん、さっきからなんの話をしてるのですか？」
「そう…有難う。お陰である程度、立証できる内容が整えたわ。
　ん？何の話かって？まだ具体的には言えないけど…そうね、あの案内人の光山について考察してたところ、と言えば納得いくかしら」
「い、いつから怪しんでたのですか…？」
「最初っから」
「えぇっ!?そ、それは流石に尚早過ぎませんか…?!」
　出逢って早々に怪しんでるのでは、益々期待が下がる一方でもある。何だか美怜の勘違いではないのだろうかと思う反面、妙に説得力がある。
　美怜は決して騙し討ちをする事が出来ないと言わんばかりに隙がない。
　そう言えば旅館の女将さんも「満員で忙しい」と言っていた。まぁ…一人部屋一個分は空くように予約を入れてるのもあるだろうから、自室にいる可能性も捨てきれない訳ではない。
　唯美怜が言ってたように、まだ確証性のない証拠と情報が集まってない中、下手に動きを出して仕舞えば向こうも隙やら見せるわけには

行かなくなる。
美怜はそれを考えた上で泳がせてるのにすぎない。
「それを立証する為の情報はちゃんと集めて整理してるからその辺は大丈夫よ…そういえば、隣の部屋騒がしいわね。
学生達が京都行きの電車にも乗ってたけれど…」
「修学旅行でしょうか？」
隣の部屋からは聞き慣れた声が飛び交うようにして廊下から漏れるように聞こえてくる。
この聞き慣れた声色は電車で聴いたのと一緒だった。
「太巻きよりやっぱ細巻の方が良いですよね～」
「ん…ん…っ」
「あんなことがあった後にご馳走が出るっていうのも少し調子狂っちゃいますけどぉ…菖蒲はこの鍋にうどんとかきしめん入れて食べてみたいと思うんですよぉ～!!」
「晴明さん、居眠りするか食べるか何方かにして下さいね」
電車に乗客してた学生達と聞いて理解した美怜は、修学旅行という概念そのものに上手く理解はできなかったのだが、ざっくり言えば学校による旅行イベントなのだろうと解釈し、素通りしていく。
因みに詠は半蔵学院の選抜補欠とは対峙した事がないので、風魔一同の補欠メンバーの声を聞いても知らないのは言うまでもなく。
「美怜ちゃんは学生になりたいと思ったことはないのですか？」
ふと此処で、詠が修学旅行の事に関して疑問に抱いたことを美怜に投げかける。
美怜は元々あの妖魔の巣で兄に育てられた孤児…そんな彼女が外の世界に羽ばたく事で、彼女は学生に興味がないのかと尋ねた。
詠からしてもし美怜が自分達と同じ蛇女にいたのなら、きっと蛇女の学生服が似合うのだろうなぁと思ったりもする。
科学者を連想させる白衣の姿も似合うのだが、きっと蛇女の制服もより妖艶な美しさと甘い危険な香りがするのだろう。
「そうね、学業には興味があるわ。数式、科学、現代文から古文に海外の言語…更には歴史や現代の経済学や地理まで、全てが魅力的な学業

に満ち溢れてるわ。あぁ、勿論忍の研究や教育論もね…
ただ興味があっても憧れても、なれないものは致し方ないわ。それをいつまでもありえない妄想を現実にしろと願っても意味なんてない。
だから…鈴音とやらでも誰でもいいから参考書程度のものは欲しいと願うばかりね。知恵は万代の宝とも言うでしょう？」
美怜はとてもドライでそう返事を返した。
電車の時も、もし自分も生まれた場所が違ったのであれば学生としての生活を満喫できたのだろうと想像を膨らませていたが、返ってくる返事と答えは同じ事。
それに、美怜からして今の生活も悪くないと思っている。
ここ数日間ではあるが、焔紅蓮隊との生活は悪くない。
自然に触れ、自由に物事を考え、好きなように読書を楽しみ、家族と対話を重ね、楽しみが増えていく。
きっと、今の生活の方が前の家や学業よりもずっと楽しいだろう。そう考えると無理に学校に転校などしなくても良いと判断している。それに部屋でも話していたが、過酷な訓練について行ける訳でも無いし、したくも無い上にやらねば死ぬだけなのなら、アジトでのんびり過ごす方が合理的だ。
「そうですか…もし美怜ちゃんが学生になりたいのであれば、蛇女に転入する話も出てくるかと思ってたのですが…」
「聞いた話によると、抜け出すだけで殺されるそうじゃない。裏切り行為と見なされるのだっけ…？悪いけど、そう言う暗黙のルールに則るつもりはないのよ。
それに生きる術を持つ為の鍛錬ならいざ知らず、態々頭の悪いやり方で修行をやらされても時間のロスだし、そんな所より貴女達と過ごす方が断然的に充実できるわ」
詠も可能であれば…というより、出来る限り美怜は紅蓮隊と一緒にいて欲しいのだが、もし彼女が蛇女に行きたいのであれば、拒む事は出来ない。
彼女が彼女らしく自由に生きる事を望む詠からして、離れてしまう

のは心が裂けるほど苦しいものであるが、そんな微かな懸念も、美怜の言葉でバッサリ一刀両断し、内心ホッとする。
　正直、未来と同意見だが蛇女と彼女とでは合わないので、行かれて仕舞えば最悪ついて行けなくて死んでしまうケースも考えなくはない。まだ彼女の実力が不明な以上、断定するのは浅はかではあるが、現段階の見た感じとしてはそう感想が出るのも仕方のない事だ。
「頭の悪い効率…そうだ、今度新しい薬を開発して貴女達に飲ませれば、効率の良い仕事と訓練ができるのではないかしら？善は急げね、早速実験に取り掛かって…」
「美怜さん!?そんなことしなくて良いですからね!?!」

　食事を終え、美怜と詠が部屋に戻ってから３０分後、光山が戻ってきたらしく温泉へと案内された。
　本人は後から入浴する（大体は女性が入浴してる中、同じ時間帯で入るのも色々まずいという主張が本音）とのことで、焔紅蓮隊の六人は先に露天風呂の更衣室で衣類を脱いでいる。
「風呂だ風呂！露天風呂なんて温泉旅行以来だ!!さぁ、お前達も遠慮なく湯船に浸かって旅の疲れを癒すぞ！」
「ここのお風呂の効能って、豊乳はあるのかな…？」
「未来、幾ら自分の胸が餃子の皮だからって温泉の効能が何でも豊乳が含まれてる訳ではないのよ？」
「春花様！そんな無慈悲なリアリティを突きつけないで！」
「ふぅん…お風呂ね、結局は週に一回しかドラム缶の湯船に入らなかったから、割かしら新鮮な気ではあるわね」
　各々は駄弁りながら衣服を脱いでいき、透き通るような女神の肌を露出する。
　焔は日焼けした褐色肌に、下着を脱ぐと地肌の白い柔らかな色肌が

露わになり、日影は無口無言無表情ながらも衣服を脱いでは、タトゥーの印が眼に浮かぶ。
つるぺたでお子様な体型の未来と比べ、春花は大人の身体つきに、詠と美怜は同じ透き通る白肌だ。綺麗なクリーム色の金髪と、淡い金髪が重なるように、二人は隣同士で裸体となる。
「ふぅ…」
「あら、美怜ちゃん眼鏡を外すと結構印象が変わるのですね…？」
「そう？自分でもよく分からないけど…眼鏡を付けるだけで見た目の印象が知的に変わるというのは聞くけれど…本当なのね」
詠の言う通り、眼鏡を外した美怜は割と新鮮なように見える。
ハワイアンブルーの瞳は猫や蛇のような鋭くも隙のない眼をしている。
眼鏡は基本的に外す事は少なく、以前風呂に入った時に眼鏡が曇ってしまったので、次に入る時は外そうと思って見たのだが…なので、皆の前で眼鏡を外したのは初めてである。
「眼鏡を外しても意外と美人ね…」
「そう、褒め言葉として受けておくわ」
相変わらず謙遜という言葉に無縁な美怜は、固唾を呑む未来の言葉を軽くあしらう。
というよりも、美怜自身は見た目やら服装やらファッションやらにはまるで眼中にもないと言わんばかりに興味がない。
なので、どの基準で何処から美人なのかも分からないし、何処らへんがそう思わせるのかも分からない。強いていうならそれほどに魅力ある女なのだろう。
詠と違って貧乳で体型も未来と似てるにも関わらず、この大人のような色付きと妖艶溢れる魅了さは、一体何処から来るのだろうか。
恋や魅力というのは、ある種として科学では証明されないのかもしれない生理現象の一つなのであろう。
露天風呂の扉を開けると、そこは正しく桃源郷…外の冷たい空気と温泉の熱い湯気が漂い、夜空の景色と和を主張とした温泉に、目が絡むほどに理想的な憩い場であった。

「おぉ、凄いな…!!なんていう開放感と大きな広さだ！泳げるほどの面積じゃないか？」
「中には大きな体をしたお客さんもいるそうだから、そう言う人にも向けてかなり敷居を大きくしたんですって」
Ｍｔ．レディほどの巨体とまではいかないが、そこそこ通常の二倍や三倍の身長を持つ個性の人間でも入れるような大浴場となってるらしく、シャワーや桶も様々な大きさやらデザインやらと変わったものもある。
どのお客でも平等に安らぎを感じさせる為に…らしい。
「んっ…熱いわね。大体４５℃くらいかしら」
美怜は人差し指を温泉の湯に触れ、ゆっくりと足指から湯に浸かる。
温泉特有の匂いが鼻につんざき、熱い水が肌を刺激して信号が脳に送られる。
「ほな、熱いくらいなんともないやろ」
シャワーを浴び終えた日影は、そのまま何ともない様子で熱い湯船に浸る。クネクネとした動きはまるで蛇のようだ。
「はあああぁぁぁぁ～～♪疲れの後のお風呂はさいっこうねぇぇ～…♪」
未来も羽を伸ばすように背筋を伸ばし、ザボンと肩まで湯船に浸っている。
同じく詠も春花も最初は熱がりもしたが、次第に慣れていった。
「然し、シャワーにシャンプーもボディソープ…？というのもあるのね、良い香りが今も髪に染み付いてるわ」
紅蓮隊の風呂はドラム缶に水を入れ沸騰させ、それに浸かるだけだったので、そう言った石鹸や洗剤などに触れなかった美怜も今回の旅でまた思わぬ発見をした。
漸く慣れてきたのか、肩にまで湯船に浸かると、未来と美怜を除き、大きな桃が二つ、ぷかりと湯船に浮いている。
白い湯気が邪魔でこう…女性のさくらんぼが見えないのが難点だ。
「そう言えば詠ちゃん、また胸が大きくなってない？」

「ふええ!?き、気のせいですよ春花さん…!」
「そう?なら未来!その大きな果実を収穫よ!」
「はい!春花様!!」
そう言いながら一体何のノリが始まったのか、春花閣下の指令に、未来は敬礼をすると手を大きく広げて詠の豊満な胸に手をつける。
「きゃあぁ!?///み、未来さん!?///」
「だ、ダメです春花様!!大き過ぎて収穫できませんでした!!」
「何をしてるの未来!!全く…こうなったら私が…」
詠の大きな果実が揉んだりするだけで揺れるが揺れる。水面までもが脈を打つように波を立て、未来と春花の悪ふざけに詠は赤面をする。それを見てる焔は呆れながらも苦笑し、日影は相変わらず無表情。
「男性が発達した女性の臀部や胸部に興味や性欲を示すというけれど…春花も未来も詠の胸にあそこまで執着を持つのはなぜ?」
「ああ、アレは単なるおふざけだし気にしなくてもいいぞ?」
美怜が神妙そうに首を傾げながら、真面目そうに考える美怜を横に焔は口を挟む。
こういうおふざけや遊び半分に関して、美怜は日影と同じく関心もないだろうと焔は思ったのだが…
「百聞は一見にしかず…ね」
立ち上がってはふわりと髪を払うようにしながら詠に近づき
「女性をも魅了する貴方の胸、少々味わせてもらうわね。失礼」
「み、美怜ちゃ…きゃあぁん!?///」
有ろうかとかなんと、絶対しないだろうと考えられる美怜が、春花や未来に続いて美怜までもが詠の胸を翻弄するように触り出す。
思わぬ乱入に未来も春花も一瞬目を丸くして見開いた。
「ふむふむ…つんつん、ぷにぷに…♪ここはこうして…」
「ちょ、ちょっと美怜ちゃん…///　そ、それ以上は…っ///や、らめ…ぇ…///」
しかもこの女、女性を喜ばせるテクニックでも持ってるのか、優しく胸を撫でたり触ったり、先っちょを突いては下乳を持ち上げたり、

様々な点に触れては相手の反応を見ては研究するようにセクハラをしている。
「成る程ね、詠の反応を見た限り女性は胸を触られると性感帯でもあるかのように、快感を得ると。
　そして触ってみたけど凄いわね…流石は母性の象徴とも呼べる胸部は、見かけのみならず心地良くて気持ちが良い…病み付きになるのも頷けるわ」
「まさか美怜までがセクハラに手を出すなんて…」
　この手のことはしないと考えていたのは焔だけでなく未来もだろう。余りにも突拍子過ぎて呆然としてしまうのは無理もない。
「私は知識を得る研究ならある程度のことはするわよ？別に胸を触っても減るもんでもないし」
「美怜ちゃん！／／／　恥ずかしいのであんまり触らないでください!!／／／」
「恥ずかしい…？何故？胸を触ること、触られることに一体何をそこまでして…感情が昂ぶって混乱してるのかしら」
　だから美怜に女性の羞恥など、常識が通用するわけでもなく。
　然しやめてと言って素直に聞いて辞めてくれる辺りは、優しさも伝わってくる。

　ガララッ！と、突然露天風呂の扉が開いた。
　おふざけをしていたからか、人が来る気配など全く気にもしていなかったので、今の騒ぎを聞かれたかという内心どうでも良いようでそうでもない心情が僅かながらに生まれ出る。
「いやーっ!!すっごく大きいお風呂ですねー！わっ、しかも絶景ですよ!!」
「んー…本当だね…」
「あら、あの子達」
　ぞろぞろと四人の人影が見えてきたことに、美怜は電車に続いて廊下で聞いた食堂部屋の声主を思い出し、触られるこうして三度も聞いた彼女達の声と偶然の出会いに、目を開く。

「ん？なんだ美怜、知り合いか？」
「知り合いというよりも…見たことある四人が偶然にも何度も見たことあって…」
「ん…ん？あれー…あの子、紅蓮隊の人だったんだ…」
　眠たげな表情をした青髪の子、晴明が何かを悟ったように呟いたと同時に
「飛鳥せんぱーーい!!早く早く！こっちですよぉ、大きくて景色も綺麗ですよ!!」
　その言葉を聞いて、残り五人は脈を打たれたかのように、一斉にして意識を傾けた。
「風魔ちゃん早すぎるよー！って、雲雀ちゃん走ったら危ないよ!?」
「大丈夫だいじょー…あいたっ!?ふえええぇん…柳生ちゃぁん！頭打ったよ～～…!!」
「ああ～よしよし！泣くな雲雀大丈夫だ…！やっぱり俺が居ないとダメだな、雲雀は」
「い～っしっしっし！こりゃ絶景だねぇ！戦いの後は、やっぱり傷跡や疲れを癒す時だよ…なぁ、斑鳩？」
「どさくさに紛れてセクハラしようとするのはやめなさい葛城さん！それに、風魔さんに雲雀さんも騒がない！他の人様達も見てらっしゃるのですよ…？迷惑かけてしまいます」
　更に伸びるように人影が五人、出てくる束の間、歓喜な声を上げて大浴場に足を運ぶ飛鳥、斑鳩、葛城、雲雀、柳生の五人達。計九人の学生がこの場に現れた。
「お、おい…飛鳥だと…？」
　聞き間違えるはずもなく、こうして目の前に映る懐かしい最強の友達との再会を果たした焔に
「えっ…？もしかして…わぁ、焔ちゃん!?」
　学炎祭を終えてから再会をした飛鳥。
「あら、もしかして詠さん達も京都へ…？」
「斑鳩さん！お久しゅうございます…!!」
　焔に続き、憎しみの連鎖と因縁を終えた斑鳩と詠に

「おっ、日影じゃねえか!!嬉しいね、こうしてまた会えるなんてさ。学炎祭以来か？」
「葛城やないか、せやな。まぁあの後も色々あって、今はのんびり楽しくやってるよ」
「へぇ…柳生、アンタ達もきてたんだ。もしかして修学旅行？」
「さぁ雲雀！今から背中を流してやるからな！な、なんなら前の方も洗ってやろうか？」
「無視すんな!!!!!」
「あー！春花さん久しぶりだね！元気にしてた？」
「ふふ、雲雀も相変わらずね。私は勿論元気よ♪」
葛城と日影、未来と柳生、雲雀と春花もまた再会を気に旧知の友のように語り合う。そんな彼女達選抜メンバーを横目に

「なんだか面白いことになってきたわね」
「ですねぇ～、菖蒲としても元蛇女の方々と会うのは初めてですから」
美怜と菖蒲は微笑を浮かべながら彼女達の喜び合う再会を見守っていた。

２２１話「少女達の語らい」

焔紅蓮隊と再会を果たす少し前、空腹をすかした半蔵学院のメンバーと補欠は違う部屋に分かれて夕食を済ませてから、各々は旅と共に忍商会と遭遇した傷と疲れを癒すべく、温泉へと赴く訳だが…

「おっ！飛鳥お前まーた胸が大きくなったんじゃねえのか!?見ないうちに成長したなんて、久々のおっぱいだー!!」

「ちょっと葛姉!?絶対に服脱ぐ時とか着替える時に胸を揉むんだからぁ!!」

流石は日常茶飯事とも呼ぶべきか、葛城のセクハラ行為は通常運転。豊満な胸をまさぐられ揉まれたりといやらしい手つきで飛鳥の胸を堪能するその姿、男子ならば悩殺されるだろう光景が更衣室で繰り広げられていた。

「葛姉様!!それなら今度は菖蒲の胸を是が非でも揉んでください！あっ、勿論揉むだけじゃなくてセクハラなら何でもオーケーですけどね！」

「いや、アタイは久しぶりに飛鳥の胸を堪能したいだけだから…遠慮するよ…」

久しい飛鳥へのセクハラに熱が上がる葛城の暴走を冷却するように、羨ましそうな眼差しを向けながら葛城にセクハラをしてほしいと懇願する菖蒲。

葛城はセクハラするのは大好きだが、して欲しいと願ったり厭らしい声を上げない女性に対してはてんでセクハラはしないのだ。

女性の嫌がる矯正を聞いて始めてセクハラ心に火が付くというもの…セクハラをしても無反応だったり喜ばれたりするのは葛城の性分ではないと同時に、マネキンやら人形やらを相手にセクハラする虚

しさが残る…彼女はそれが大の嫌なのだ。
だから飛鳥や斑鳩といったセクハラして良さそうな女性には目がないのである。
そして斑鳩と飛鳥は思ったのだ。そんなもん知るか、と。
「んー…ん？あれ、誰か、先客がいる……」
「そりゃ京都なんだし温泉に何人か人がいても可笑しくないんじゃない？」
眠たげに目を擦りながら衣服を脱ぐ清明に、ケラケラと笑う風魔。普通はそうなのだが、発言自体に何処か意味深があることに土方は多少の違和感を覚えた。
清明は怠そうな格好と眠たげな表情からして害意のない芭蕉に似た小動物らしさを漂わせているが、実際は重火器を使用した狙撃手だったりもする上に、予知夢なども使えるため金の卵としてはかなり有能ではある。…本人にやる気の意思がないのがたまに傷だが…
全員とも裸体から温泉用のバスタオルを身体に巻き、いざ湯船へと行かんと扉を開ければ、ムワッとした湯気が立ち昇る。
見れば六人ほどの人影が温泉ではしゃいでる光景がうっすらとシルエットとして映し出されていた。

露天風呂の温泉に束の間の休息を取っていた焔紅蓮隊の前には、学炎祭や林間合宿の病院の見舞いを終えてから短い月日を経た半蔵学院のメンバー達が、裸体をバスタオルで隠しながら自分達の前に姿を現した。…若干、見たことのないメンバーもいるが、勘が当たるとすれば半蔵の選抜補欠メンバーだろう。
尤も超秘伝忍法書争奪戦で忍学科の半蔵学院に奇襲をした際は姿などなかった為、そもそもの話選抜補欠メンバーの存在自体があった事に多少の驚きもあったりはしなくもない。
蛇女にも補欠メンバーがいるのだから、成り行きで考えれば当然といえば当然なのかもしれないが…

「焔ちゃん達も京都に来てたんだー!!学炎祭の時といい、本当に縁があるよね私達!」
「ま、まぁ…詠が一等賞の京都の旅行チケットを京都の福引で当ててだな…それにしても、以前観に行った時は病室のベッド上で満身創痍のボロボロだったのに、今じゃ間違えるほどに平和面してるんだもんな」
「ムカッ、ふーんだ!これでも一応仮免取得出来るくらいにはなったんだからね!」
「寧ろ取れてなかったら鼻で笑うところだ、超秘伝忍法書の争奪戦や学炎祭の件もあったんだ。それに、私以外にやられるなとも言ったしな」
　然し其れも昔の話、今は半蔵学院と焔紅蓮隊の因縁など等に無く、今となっては昔殺し合った仲でも今は最強の友達同士なのである。現に温泉という憩い場で言い争いなどなく、殺伐どころかほんわかとした雰囲気で旧知の友のように談笑を交わすその光景は、とても嘗ては殺し合ってたなど幻想にも思えるものだろう。
「それにしても詠さんは凄い幸運なのですね…一等なんて、普通狙おうとしても早々、当たりませんし…」
「私なんて全然…私だけひもじい思いをしても良い、他の仲間達だけでも恵まれたらと思ってのことでしたし…」
「あら、謙虚なんてしなくても良いのに。運も実力の内というでしょう?そのお陰で私達紅蓮隊は京都に行けてるのだものね」
　斑鳩と詠の対話に挟むように、横から何ともなさそうに公言する美怜は、無表情ながらも詠にくっつくように口を開く。
　そして見たこともない少女に、斑鳩も目を丸くする。
「あれ…?えっと、その方は…詠さん達のお知り合いなのでしょうか…?」
「知り合いというより、新しい家族と言うのが正しいのかしらね」
　美怜の発言に、半蔵学院のメンバーは驚嘆の声を上げ、焔はニヤリと口角を釣り上げる。
「ええっ!?焔ちゃんに新しい仲間が増えたの!?!わぁ、何だか可愛い子

だね！」
「ふっふっふ！そうだ飛鳥！お前たちが平々凡々な日常を繰り広げてる間に、紅蓮隊は新しい仲間が増えたんだ！
　もう今までの紅蓮隊とは一味違うんだからな!!」
「ねぇ、紹介するのはさておき人を出汁に使わないでくれるかしら？」
　目を爛々と輝かせる飛鳥に、さぞ気持ちが有頂天に昂ぶったのだろう。焔はふははと高笑いしながら、美怜の身体の両肩を掴んでヒョイっと詠から剥がすように飛鳥の前に持ってくる。
　不服ではないものの、焔の自由奔放な性格に困り果ててるようにも見えなくはない。
「もう焔ちゃんまるで我儘な子供みたいなんだから…あっ、私は飛鳥って言うの！これからって訳じゃないけど、覚えててくれたら嬉しいなぁ♪」
「飛鳥…ふぅん、まさか新幹線の中に乗客してた貴女達が焔達との知り合いだったなんて、想定外なこともあるものね。
　私は美怜、どうぞ宜しく」
　新幹線の中で飛鳥達を見かけてはいたのだが、まさか彼女達が焔達と知り合ってたという事実自体が初耳なので、正直なところ美怜も多少なりとも驚きはあったのだ。
「そっかぁ、美怜ちゃんって言うんだ…ってあれ？新幹線の中で会ったっけ？」
「気にしないで、一方的に貴女達を見たって理由だし」
　飛鳥達は美怜のことを気にして無かったので、彼女のいう通り一方通行で知っていたことになる。
　美怜は記憶力が著しく高い上に、人間観察を行う習性がある。印象の低い人間を覚えてるのいうのであればさておき、飛鳥達は印象が強かったので割と覚えられた。…尤も、忍ぶ側の人間が印象強いというのも可笑しな話だが。
「美怜さんと仰るのですか…私は斑鳩と申します。其方の変態行為を行う野蛮な方が葛城さんで…」
「うぉい!?紹介雑すぎるだろ!?」

「雲雀は雲雀だよ！それでこっちが柳生ちゃん!!」
「ふぅん…焔達の知り合いということは…旧友の仲なのかしら？それとも蛇女の知り合い？」
「まぁその辺は話すと長くなるからまた後で話すとして…それにしても飛鳥達にも選抜補欠のメンバーがいたんだな。前に学校に侵入した時は姿や気配さえも感じなかったが…」
「あの時菖蒲達は遠いところで強化合宿してたんですよぉ～！それに蛇女の生徒は両備さん達しかお会いしたこと無かったので、抜忍となった元蛇女の選抜メンバーとこういう形で逢えるのはなんだか新鮮な気もしますね」
菖蒲達半蔵選抜補欠は、雄英高校Ｂ組だけでなく現役してる蛇女の選抜メンバーと対峙したことがある。
内容は飛鳥達や緑谷達と受けたのとは多少異なるが、一筋縄ではいかなかったのは確かで、半蔵補欠の皆んながこうして無事に仮免取得に成功したのも奇跡的なものだろう。
「でも凄いよねぇ、焔ちゃんは昔は仲間なんて不要だ！とか言ってたのにさ、今じゃ仲間が増えちゃうくらいなんだもん。
そういう意味では焔ちゃんって、最初の頃と比べて変わったよね」
「ふ、ふん…！私だって成長くらいはするさ！それに…」
美怜のことに関しては伏せておこう。
此処で話せば長くなるあまり温泉の湯船で逆上せてしまう事も考慮していたのだが、単純に妖魔と人間の兄妹というエピソードはかなり大きいものであれば、誰が聞いてるかも分からないのに公の場で世間話のように軽々しく口にするものでもないからという気持ちもある。
美怜も敢えて自分から語らない辺り、そういう事なのだろうと直感で理解する。
「おいお前、雲雀に対してあんまりベタベタするなよ」
「ベタベタ？こうかしら？」
「きゃあっ!?ちょっ、美怜ちゃん！」
ニコニコと笑顔を差し向ける雲雀と、面白そうに瞳を見つめる美怜

に嫌気が刺したのか、柳生が輪に入って口を挟むものの、美怜は首を傾げながら胸や尻、体をベタベタと手で触れていく。
「そ、そういう事じゃ…！あ、いやそういう事でもあるが…ええい！雲雀から離れろ！」
「あら、何も強引に引き剥がす事ないのに…それに貴女の表情からして何がそんなに気に入らないのかしら？」
「いきなり雲雀の胸や体を触る事ないだろう…！ひ、雲雀の体は、お、俺が守る…！」
「柳生ちゃん！鼻血を出しながら言っても説得力がないよ!?」
「……ああ、そういう事ね。貴女…雲雀が誰かと仲良くすることに嫉妬を覚えては、彼女に対して束縛と独占を強いてる訳ね」
　ふぅぅん…とニヤケながら指を唇に当てながら全てお見通しした美怜に、柳生は図星を突かれたようにピクリと身体が反応する。
「彼女の瞳が気になったから調べてただけだけど…そう…。私は同性愛に関して口を挟むわけでも咎める訳でもないけれど、余りにも激しいとかえって嫌われてしまうわよ？」
「うぐっ…！そ、そんなことある訳が…」
「ひょっとして、これが雲雀のボディーガードなのかしら？華眼の持ち主の大体は側近とかがいたりして仲間からも重宝されるものなのだけど…」
「うん…？ぼでぃーがーど…？」
　心中突かれたことに眉をひそめる柳生など御構い無しに、美怜は興味津々に雲雀に接近する。
「…貴女、華眼の子でしょう？瞳を見れば分かるわ。歴史の古文でしか見たことないけど…一部によれば、憑黄泉神威という驚異的な神魔をも窮地に追い込ませたと言われる９００年以上も昔に存在した古の瞳術…
　余りにも希少価値が高すぎるから、忍でありながら大名の如く重なる影の従者が山ほどいると聞いたのだけど…」
「え、えっと雲雀は…」
「華の様に美しく、その瞳に魅入られたものはどれほど屈強な人間だ

ろうと妖魔であっても簡単に屈服、或いは蹂躙できるんですって。同時に多くの人間が喉から手が出るほど欲するんだもの。
ねぇ、貴女は何を持って忍になりたいと決めたの？その華眼を駆使してどれ程の戦法を身に付けたの？何なら、その術で誰かに試してくれるかしら？私、貴女の忍術を見てみたいんだけど…」
美怜は爛々としながら雲雀に質問攻めをする。
光山に対してもそうなのだが、初対面の焔達でさえも興味こそあれど然程執着はなかった美怜が、あそこまで熱心に雲雀に執着するのは初めてだ。
流石の雲雀と美怜には答え難いのか、それとも単に迷惑なのか、反応に困っている。
「おい、いい加減にしろよ貴様…！雲雀が困っているだろう?!」
「困ってるから…何？貴女とは無縁でしょう？」
「何だと!?」
「私は純粋に雲雀に聞きたいことがあるから聞いてるだけ…雲雀自身が言うのならさておき、貴女は雲雀の所有物ではないし、貴女の客観的な価値観による感情論でしょう？
それなら、私が雲雀と仲良くしようと話そうといいじゃない。そう言う言葉は、彼女の身に危険が生じた時に使いなさい」
気に食わないが正論である。
美怜は柳生と雲雀の関係性をそこまで理解していないし、そもそも仲良しの所を見る機会など滅多にないだろう。
「それにこれは単純に私自身の問題でもないし、下手すれば貴女達の身に起こる危険性も考慮しての話よ。
華眼は余りにも特徴的だから、彼女の一族を狙うもの、怨む者、妬む者もいて可笑しくないのよ。
それ程に、彼女の力は絶大…一部、文章には２００年前にティオ・ディアボリクスの研究のために誘拐され人体実験を受けたと言う経歴が残ってるわ。
ほかにも、忍ニュースの歴史で聞いたけど…４０年前に華眼の一族の暗殺を図っていた抜忍がタナトスに送られたそうよ」

華眼は妖魔の巣…もとい、美怜の家にあった書籍でもその歴史と功績は記されていた。
戦国時代でも大いに活躍し、百妖夜行をたった一人で犠牲者を出さずに制した程の者。それを味方に欲する者は後絶えず、敵連合の死柄木に華眼の存在を唆し、手に入れる様に隠密に裏で操作していたオール・フォー・ワンも気に入っていた程のもの。
強すぎる力は、同時に誰かに狙われる証拠にもなりうる。
因みにタナトスとは世界各国の中で最高峰とも呼べるほどの超厳重セキュリティによって管理されてる極悪忍死刑処置特殊拘束監視場のこと、監獄である。
死すら生緩く、生きることでさえ罪があり、存在さえも否定される最悪な忍の集い場。タルタロスが個性を管理する監獄であれば、タナトスは忍を管理する監獄であり、敵連合の抜忍も捕まれば其処へ行く設定となっている。現に連行されるのは犯罪の重さに加えた懸賞金の高さである。
黒佐波、戦姫衆の神姫、呪王、忍商会第五支部長の僧絽門、他にも名を馳せ悪徳を積んだ鬼畜の抜忍が老若男女問わずごろごろと収監されてる阿鼻叫喚の地獄が存在する都市伝説がある。
更に面会はなく、国による死刑や科学者による忍術の考察、効果や性能、罪状の調べやらで存在そのものが国にとって忙しいものだ。
それそのものが都市伝説だと大して気にも止めない者も数多く存在するほどに、情報が一切ないのである。
なのでタナトスに収監された囚人は、既に死亡報告として上がっており、存在を匂わせず、誰にも知られずに処刑…或いは衰弱死する。

「つまり、雲雀のせいで沢山の人が傷ついちゃうってこと…？」
「その可能性もなくはない…だからこそ、貴女がその華の瞳をしてるのでさえ私も思わず息を呑んだのだし」
「み、美怜ちゃん…幾ら何でも考えすぎじゃ…」
「でも考察と予測はするべきよ。
考えずただ漠然と対策もなく馬鹿の一つ覚えみたいに迎え撃つよ

り、しっかり可能性や考察をした上で行動し、策を取るのは鉄則…
　それに判明されてないことも多々あるみたいだし」
「そういえば…雲雀さんって基本的に戦う時は秘伝動物や肉弾戦でしかしてませんもんね…」
　雲雀の忍術、華眼は未知なる術として存在しており、太古の時代から受け継がれてきた忍術でも、未だに解明されてない謎も多く存在している。
　知的好奇心の美怜に調べるなという話の方が酷である。
　然し華眼の術を扱えるのは愚か、この瞳術のせいで無意識に皆んなを洗脳してるのではないかという疑惑もあった。
　現に雲雀の華眼のせいで、敵連合からも爆豪と同じく捕獲対象にされてたのだから。
「まあまあ…！折角の温泉なんだしさ、考えるよりも今は満喫しようよ！」
「う、うん！そうだよね！」
「…まぁ、一理あるわね。私も嫌がられても困るし…」
　此処で場の雰囲気を良くしようと話をふっかけた飛鳥に、雲雀の顔色が元に戻り、美怜も潔く話を引っ込ませる。
　個性豊かなA組と一緒くたになっていると、こうして場の空気を読んでは方向転換を変えたりしたものだ。
　…尤も、爆豪相手には通じるわけもなく。
「でも温泉と言えば林間合宿のことを思い出すなぁーっ！あの時は夜景より洸汰くんが峰田くんの覗きを止めてたところが印象強かったけど」
「懐かしいねー！もっと合宿楽しみたかったもん」
「楽しむ事より過酷な訓練が7割だったがな」
　林間合宿の時も露天風呂が設置されており、自然の恵みに囲まれながら疲労困憊の日々が永遠のように続いていたものだ。
　入浴時間では性欲の権化である峰田実がよく覗き行為をしようと図ったり、木椰区ショッピングモールで購入したドリルなどで女子の裸体を覗こうと血涙共に励んでいたが、それも杞憂に終わったのは何

ともまぁ傍迷惑な思い出もあったものだと心中思う。
「そいやアタイらは三年扱いなのと半蔵学院としての生徒だったから行けなかったんだよな。聞きそびれたけどどんな内容だったんだよ？」
「話せば長くなるよー？」
初日からピクシーボブの土流によって作られた魔獣の森を掻い潜ったり、朝早くから夕方までびっしりと強化訓練を受けたりの分刻みのスケジュール。
そして予期せぬ敵連合の襲撃事件。
襲撃してから林間合宿は中止としての結果となり、一週間を満喫することは出来なかったが、それでも学生が相手にして良いレベルじゃない程に個々人が強敵だった。
「そうだ、飛鳥！学炎祭が終わって再開してから宣言しようとしたんだが…今度こそ決着を付けようじゃないか!!」
「もー…焔ちゃんって会ったら直ぐにそれなんだから…」
「…とはいえ、私たちが京都に来たのはあくまで憩いの休息として、旅行を満喫し羽根を伸ばすのが目的。
況してや此処で争うというのは野暮というもの…また何れ、だ」
然し脳筋と猪突猛進などの蔑称を言われてる焔も無作為に闘いを挑むほど戦闘狂ではない。
況してや風呂などという休戦する憩いの場で争うなど論外な上に、自身の流儀に反する。
休むべき時に休み、戦う時に戦うのが焔の流儀だ。
「焔ちゃん…」
「それに、お前が病院で床に伏せてた姿は私は一度たりとも忘れてはいない…私との決着も付けずに他の誰かにやられた、なんて私は許さんからな」
「あれはやられたんじゃなくて気を失ったというか…アレでも敵の幹部は倒したんだけどね…」
「あ、でも忍ニュースでもやってたよ！元々蛇女でも話題になってた抜忍狩りの狩人がやっと捕まったんだって！その記事が載ってたの

時系列的に考えたら見舞いに行った時と同じだから…」
「ひょっとしてそれ黒佐波のこと？確かに今まで戦った敵より一番強かったけど…」
　一方、世間ではマスキュラーやムーンフィッシュ、マスタードの逮捕が報道されたものの、黒佐波は世間の裏では大物として扱われ、殆どの忍に知れ渡っている。
　忍記事などでは黒佐波の抜忍狩りの行方不明、死亡事件の他にも無差別失血死事件や、器物破損多数件、失踪事件など数多くの抜忍がこういった犯罪歴を遺している。
　未来はこう見えても情報収集及び、インターネットを経由して利用した忍の情報を掻き集めている。
「何!?じゃあ飛鳥はソイツと戦って負けたのか…？」
「いや勝ったんだよ!?アレでも腕に後遺症が残らなかっただけ奇跡なんて医者に言われたけどね…あはは…」
　蛇女の卒業生の何人かが黒佐波に挑んだ者達がいたが、全員帰らぬ者となり、悪徳を積み重ねた危険人物を飛鳥がたった一人で終止符を打ったというのは大きな功績だ。
　因みに余談だが、その功績を闇から聞かされたマグネは、マスキュラーを単独で撃破した緑谷と同じ超危険人物と見なされ、殺そうとしたところをスピナーに止められたのはまた別の話。
　最強の友であり、ライバル関係に当たる焔の闘心は益々紅蓮の炎のように高く燃え上がる。
「まっ、こうして今もピンピンしてんだ！さっすがは自慢の後輩だ！」
「そうですね…上層部でさえも頭を悩ませてた抜忍を…こうして改めて聞かされると我々三年生も精進せねばなりません」
「ほーん…わしはあんま情報とか新聞とか読まんけど、そういうことがあったんやな」
「寧ろ日影さんが教科書以外の何かを読んだところを見たことがありませんわ…」
「そんなに功績が良いの？ふぅん…流石は焔が認めるお相手なのね。それ程の評価が値されたにも関わらず、飛鳥の名が上がらないのは些

か疑問が湧くわね…」
　まさか此処に来て過去の戦績が今に評価されるとは夢にも思わなかったものの、昇格試験で全て合格ラインギリギリに到達してた彼女が今じゃ上忍が相手にする手練れを倒したのだから、こうして褒められると素直に照れてしまう。
「まぁ？飛鳥先輩に比べれば蛇女の生徒なんてモブですからねモブ！よもや次元が違うんですよ！」
「はぁ!?何こいつ、感じ悪！」
　飛鳥の戦績に鼻が長くなり、小馬鹿にするような物言いをする風魔に、まんまとひっかかる未来。
「ちょっと風魔さん…」
「大体ほら、肩書きなんて関係なく飛鳥先輩って真が強い真面目で善忍の鑑だと思うんですよ。
　だって雄英にも認められ、忍殺しステインと遭遇したにもかかわらず生き残り、試験ではあの大道寺先輩すら退け、終いには敵連合との襲撃を乗り越えたんですよ？それに比べて元とはいえ蛇女相手に遅れを取らないって話です！」
　飛鳥に危害を加えた者は勿論、悪印象が強ければ敵対的な目線を向けてしまう。
　それは憧れの人間が他人に虐げられるものだからなのか、飛鳥に過大なる好意があるからこそだ。
　そんな風魔に良からぬことを悟った土方は心配そうにして止めに入っている。
「あら、随分と生意気な子がいるじゃない？それなら…「ふふ、ふふふ…貴女、随分と面白いことを言うのね？」って、美怜ちゃん？」
　こういう生意気な子供には灸を据えたくなる性分なのだろうか、春花の加虐心が疼いてしまう。先程温泉では争わないという話し合いが出たにも関わらず…そんな話の間に美怜が薄ら笑いを浮かびだす。
「はい？何が面白いんです？元とはいえ蛇女の生徒が飛鳥先輩達を襲って、今となっては何ともなさそうな現状が面白いとでも？」
「ねぇ貴女。蛇女がどうとか、飛鳥達をどうこう言ってるけど、まず貴

女のその自慢げな話し方自体がナンセンスなのよ。
　蛇女との抗争がよほど気に食わなかったのかしら、それでも私たちに棘のある言い方は妙に説得力に欠けるけど」
「そりゃそうですよ！あと少しで廃校にされて、飛鳥先輩達とサヨナラするところだったんですよ？フツーに考えて仲良くなれるはずが…っ」
「それで？自分は一体何をやれたというの？」
「……は？」
「思ったことを言うだけなら誰だって出来るわよ。私はつい最近焔紅蓮隊に加入したばかりだから具体的な過程や貴女達の事柄は知らないけれど、味方を過大評価して他者を貶めてるだけで、第三者からして見れば何とも滑稽なことこの上ないわね。
　そんなに嫌いなら、対立時にでも貴女が止めれば良いだけのこと…違う？」
「あ、アンタねぇ……!!」
「それが出来なかったから、ただ悔しがって鳴き吠えるのは伊佐奈と同等よ。まぁなんでも良いわ。今のではっきり分かったから、私…貴女のこと興味ないみたい。
　好きな人、尊敬や憧れの人物が酷い目に遭ったことで邪見扱いするのはさておき、態々他者にまで言いぶるような頭の悪いやり方は好きではないもの。
　其れに飛鳥が話したように、此処での言い争いは野暮というもの…はい、今回この話はそれで終わり。仲間同士ならまだしも、貴女達と私達とでは他人関係だしね」
　美怜にとっても風魔にとっても、お互いの関係は相性も含めてかなり最悪とも言えるだろう。
　だが風魔もわかっている、今回ばかりは美怜の言ってることは何一つ間違いではないのだと。
　奈楽のように他人を見下ろし罵声を浴びせるのとは違い、彼女は様々な視野と自分の立場を踏まえた上で口論した。
　だから美怜にとって他人同士でありながら自分達に危害を加えた

連中と仲良くしろという精神構造がないのは承知してるし、無理強いもしていない。
何より美怜にとって、自分の家族に棘…というよりも、変な言い方をされては黙って見過ごせるほど冷たい女でもない。
「もぉー…喧嘩はダメだよ!?風魔ちゃんもそんなこと言わない！過去のことはほら！お風呂と一緒に水に流そうよ！」
「流石は爆豪の喧嘩仲裁役だな」
「むむっ！柳生ちゃんそれ一体どういう意味ぃ～？」
常に喧嘩トラブルメーカーを引き起こす爆豪を鎮める役は飛鳥と切島が大きい。いや、殆ど切島なのだが、飛鳥が入学してしたばかりの頃、斑鳩と葛城のまだ心の開いた距離感に対しても、喧嘩はダメだと言い張る程なのである。
「ふん、まあ良いさ。私達に今更過去のことをどうこう言われようが、私達が目指すべきものは変わらない…
飛鳥、この京都旅行が終わればまた決着を付けようじゃないか!!
私は悪の中の悪を討つ…お前の忍道も含めて、私達が勝つ！」
「勿論！私は、影になってでも皆んなを守る…それが私にとっての忍の道だもん!!次こそ絶対に焔ちゃんに負けないんだから!!」
そして、そんな彼女の正義を認め、心の底から賞賛し、ヒーロー殺しが認めたのもまたこの上ない事実。

「悪の中の悪を討つだとか、皆んなを守る為の正義だとか…本当に何を言っちゃってるのかしらあの子達…」
湯気が濃くて全く視界が見え辛いが、盆の上に酒を啜りながら飛鳥達の会話を耳にする女性は、そのまま小瓶をコップに注ぐ。
「殺した者が正義、騙した者が成功者…どんな世の中だってそれに勝る心理はない…ふふ、久方振りに見てみたけど相も変わらず平和ボケした彼女達、寧ろ変わってなくて安心するわぁ…♡」

一人、邪悪な笑みをこぼしながら酒を愉しむ彼女は口角を釣り上げる。

青い髪は髪止めでポニーテールにし、透き通った水色の髪は温泉に浸かり、誰にも気付かれずに優雅なひと時を過ごす漆月は、夜空に輝く星と満月を見やる。

「そして、敗北した者が悪…ふふ、そりゃそうでしょう♪理屈や真偽がどうあれど…勝ったものが正しい。

佐門ちゃん達の監視がてら丁度良い旅館を見つけて住んでたのにあら不思議！まさか飛鳥ちゃん達に焔ちゃん達に会えるなんて、運命…因縁めいたものが巡り合ってるわね」

過去に行き過ぎた正義を貫いた雪泉と似た理論ではあるが、彼女の言う正義と悪は少々意味が違う。

例え敵であろうと犯罪者であろうと悪忍であろうと、間違った理論や思想を振りかざす者、間違いだと謳われる者でも、勝者になれば簡単にそれが正しいと証明されることになる。

敗者が悪とは、積み重ねた努力や結果…そしてその過程や正しい証明や賞賛が一瞬にして瓦解し、踏み台にされてしまう者のこと。

漆月にとって彼女らの正義だの悪だのの語らいは、心の底からどうでも良いと思っている。だって大したことないから、今の彼女にとってそんな言い争いは幼稚な言葉遊びでしかないから、どうせ忍になった殆どの連中なんてショボい理由だから。

取引が決裂してから悠に5時間後。京都棚窯区域ビジネス支部56、秘匿特別会議室から無事戻ることが出来た漆月。

『…理由をお聞きしても宜しいでしょうか？』

『私は誰かの指図を受ける気はない――お願いはされても、他人の命令を受ける位なら、私は傲慢に生きてなんてないわよ。どうやらアンタは私のことを知ってる風に言ってた様だけど、ちょっと期待外れねェ……』

『其れは大きな誤解です。私は貴女を支配する気も主従関係を築き上げるつもりは毛頭無い――其れは今の契約内容を聞いた上で理解してるハズです』
『知ってるよ。憑黄泉神威はきっと、コイツは…顔を出せば私の意識も何もかも無常理に無関係に、全てを死へと追いやると…。ええ、その通りね。そのせいで仲間も、弔も死ぬかもね――だから？』
だから何だ？
死んだら其れで終わりで、唯の肉の塊となり、言葉を発せなくなるだけだ。マグネも八斎會の組長も、肉片となって死んだだけだ。
『死んだら其れで終わり、これで良いじゃん。まさか、私が本気で仲間の死を恐れてるって言うの～？　あのね、私はそこまで仲間に情が湧いて臆してるだとか、そんな希望は持ち合わせて無いんだって。だって私達は全てに絶望してんだもん。私たちはさ、きっと本来産まれちゃいけなかった存在なんだよ。いつ死んでも良くて、いっそ死にたいと願って、死ぬことがどれだけ幸せなのかさえ、其れほどに歪みまくった生き地獄を浴びてるんだよね』
『だから仲間が殺されても、望んでいたこと…仕方のないこと、だと？天咲魅影――其れは貴女の感想に過ぎません。主観と結論を結びつくのは、何れ大きな致命点を招き兼ねません』
『それはそれで絶望的ィ～♪　後さ、感想に過ぎないって言うか、予測論で言うならアンタも同じじゃん。私は確かにまだコイツをコントロール…使役は難しいよ。だけど、私がこれから使える様になれば問題ない。それに憑黄泉ちゃんだっているしね～♪』
『……天咲魅影、其れは確かに貴女の脅威的な強さの一つです。我々が幼かった頃の、憑黄泉を増殖させ、簡単に使役可能。他者から見れば厄災そのもの…ですが、貴女もご存知のはず。憑黄泉を産むのは体力だけではない…貴女の命も削っているのだと。いずれその生命は、神魔を宿す器によって回復するにしろ、何度も使い続けることは不可能。言うなれば、適合もしてない人間が、無理矢理移植された複数の個性を使用してる様なものです。知ってますか？大人が赤ん坊一人を産むのにどれだけの苦痛とカロリーを消費し、時間を掛けて疲弊す

るのか。それを貴女は時間という過程を吹き飛ばし大の大人分の大きさを誇る憑黄泉を生み出すコトで、麻酔なしでトラックに跳ね飛ばされるような激痛、急激な体調変化による酔い、他にも症状はｅｔｃ…一匹生み出すだけでもやっと、そして成熟期段階に至った憑黄泉も、蛇女子学園の雅緋率いる忍学生達に討伐された…況してや古い時代とは違い、時代を重ねるに連れて産まれてくる忍は、濃厚な忍の血筋を継ぐことで強力な次世代が産まれております。その憑黄泉も絶対に倒されないという保証はない――つまり、自身の能力に酔ってる場合でも御座いませんし、貴女の未来が約束された勝利も、偉大なる母君を自分自身で使役するよう等の努力も、取り返しが付かなくなっては、死んでしまえば、全く持って無意味に等しくなるのですよ?』

『そうかもね、アンタの言う通りかも。それでも断る――真面目な話、私は楽しみたいんだよね。自分の未知ってやつに、自分の手で犠牲が生まれる悲鳴、死の声、断末魔、恐怖、憎悪、其れらを触れて、味わって、経験して、そこから私は支配者に登り詰める。努力なしの約束された未来なんて、つまんないしさ。其れに、仲間を裏切る位なら私が殺されるし、私の立場でも裏切り者は殺す。アンタは汚い大人のやり方だからさ、だからこうやって甘い言葉で私を釣るんでしょう?』

『……理解できませんね、矢張り。何故?天咲魅影、貴女が私と契約を結べば全てが叶うと言うのに。効率よく支配者の玉座に就き、貴女の計画も都合よく効率良くコトが進むのに…』

『だから、其れ自体が意味ないんだって!アンタの言ってることは理解できても、これ以上他人に育てられたり、命令されたり、指図を受ける位なら、死んだ方が全然良いの!!アンタにとってはさ、私を仲間にしたいって思惑は、きっと他の連中よりマシなのかもしれないけど、仲間を手放す位なら自分の手で殺すっつってんだよ!!分かったかこの辛気臭ェ黒霧もどきがよぉ!!……すいません、ちょっと、感情が優ってしまって…」

『……誠に遺憾でありながら、残念で他ありません。私は貴女の事を個人としても大変気に入っておりましたし、貴女となら私の生を分かち合える存在だと確信しておりましたが……。了解です――交渉決

裂、どうやら私は貴女のことを知ったつもりでいた様だ。本当に記憶を失って尚、良い意味でも悪い意味でも成長なされましたね、それに貴女の感情に右往左往する姿は、『ヴァニタスコロニー』とそっくりだ』

『……そいや、アンタの名前聞いてなかったわね。差出人が不明だったから、どんな輩かと思って来てみたら、憑黄泉だったんだもん。そりゃ驚くわよね』

『失礼――私の名は……』

（交渉は決裂したけれど、代わりに違う契約を結べたのは良いわねェ…。まあ、契約っつ～か、ある種の協力関係？然しまぁ…、今回の取引の件は終わったから良いとして、そろそろ見せしめとして忍商会の誰かを潰そうかなーって考えてた所、あの子達が来るのは想定外ねぇ。ふっふふ、もし彼処でいち早く隠れるのが遅かったらそれはそれで絶望的な展開が見られたのかしら？

何にせよ、佐門ちゃんの狙いが神楽なのも、神楽を狙う理由も大方予想はつくけれど…問題は佐門ちゃんがそれで何をやらかすか、なのよねぇ…そこだけがどーしても分かんない）

漆月は黒柴と出逢ってから、その前からも既に忍商会の幹部達の動向を監視していた。

あの時の同盟を結ぶ形はあくまで相手の出方や情報収集を探る為の単なるハッタリに近い脅し…相手の疑心暗鬼な部分を見れただけでも収穫なのだが、彼の気を発する悪意の味からして自分に何かを隠してるというのは決定的な証拠となった。

（きっとあれよね、神楽を利用して先生…ううん、それ以上の力を手に入れる為よね？

だとして彼がその動向に至る目的と理由は何かしら、何か重要そうな気もするけれど……まっ、最悪私一人で真正面から行ってもいっか）

どうせ殺せないし、なんてさも絶対的な自信があるように、彼女は

小瓶の酒を飲み干し、そのまま両手を広げて空に掲げる。
「待っててね、私の愛しい弔♡　私の物語が始まるには、もう少しだけ時間が必要だけど…ふっふふ、沢山の花を摘み取って、踏み台にして、絶望の高台を見下ろして…私たち好みの世界に染め上げましょう♡」

其れは多重人格のようなリビドーとは違う…彼女の本当の素性。

誰よりも悪意を好み、絶望を愛し、闇に好かれ、そして軈て憎愛の元へ悪意は募らせていく。
今は誰も漆月を見てなくても、躍々は支配者として彼女の後について行く者達が自ずと現れる。
そう、彼女は既に支配者として歩み始めているのだから。

２２２話「京都の夜」

露天風呂から出てきた半蔵学院の忍学生達と焔紅蓮隊の一同は、濡れた裸体をバスタオルで拭きながら、各々は爽やかそうに京都の浴衣へと更衣する。

温泉の湯船は心身共に疲れを癒す効果があると言うが、どうやら間違いではないそうだ。

何処から何処を見てもあの山この桃、正に桃源郷。禁断なる果実が実り、動くたびに揺れるのはなんと幻想的か。

「やっぱり皆んな胸がデカイわね…ぐぬぬ……私もそれなりに努力してるのに…」

「あら、何の努力をしてると言うの未来？」

ただ、あの山この桃全てが小さいロリッ子系統の美少女二人を残しては。

「へ？そ、そりゃあ…毎日牛乳を飲んだりキャベツを食べたり……最近はネットとか調べてバストアップできるような方法も模索してるけれども…」

「で、その結果未だに成長してないと…。努力した結果、成果も出ないのでは結論からして効果が無いのではなくて？

と言うかキャベツや牛乳が豊胸になること自体初耳よ」

昔と比べて爆乳に対する憎悪や妬みは一段冷めたものの、努力してるにも関わらず胸が一向に大きくならず、尚且つ自分や美怜だけ貧乳というのは納得がいかない。

何と不平等な事なのだ。

「ねぇ！美怜も周りの人達が胸が大きいのに私達だけこの仕打ちは惨めだと思わない!?」

「思わない」

「即答!?」

まるで興味なし、と言った具合で美怜はクールに答えながら、浴衣

の紐を巻くのに他の人の巻き方を観察しながら行動する。
「じゃあ逆に聞くけど胸が大きくなった事で貴女には何のメリットがつくのかしら」
「えっと…皆んなと同じ胸の大きさだと楽だし、それに自分より多数の方に傾いちゃうのは仕方なく無い…？」
「成る程、自分の持たざる者に対する妬みから生まれた感情を解消する為と…よくある原理ね。理解したわ」
「じゃあ美怜はどうして胸が大きくなりたくないの？」
「思ったことがないし、発達する胸部は肩こりや疲労が増す上に身体的にも何かしら邪魔になるケースもあるからよ。
　私はありのままの自分でいれることに感謝してるし、寧ろスタイリッシュな方が身軽な上にラフで良いと思わない？」
「うーん…そう言われるとそうなるの…かも？」
　飛鳥を始めた巨乳の人達がよく口にする言葉が大体「肩がこる」だの「良いことない」だの、持つ者がよく言う僻みと解釈してたが、同じ持つ者同士の言葉は妙に説得力がある。
「ファッションとか見た目とかのセンス…というの？そういう類のものの詳しい知識は持ち得てないけれど、アレを見なさい」
　指差した方角に目をやると、そこには…
「きゃあぁぁぁ!?ちょっと葛ねぇ!!着替えてる最中に胸揉まないでよぉ!!」
「何言ってんだい！折角恋しい後輩の柔肌視れたんだ!!それにこの湯船から上がり火照った裸体で浴衣に着替えるシチュエーションが最高なんじゃねえか!!」
　葛城というセクハラマシーンが、飛鳥の柔らかな胸や尻、太ももなどをまさぐり揉みしだいてるセクハラ行為が眼に映る。
「葛城という猥褻行為を受ける標的になり得るわ、セクハラをされる可能性が極端に上がると分かった上で踏み込んで、それでも胸が大きくなりたいと言える？」
「ごめんなさい、なりたくないです」
　未来、豊胸の夢潰えたなり。

いや、というよりも具体的でしっくりとした例が挙げられて反論さえ起きる気も消失した。
自分もセクハラや猥褻行為は受けたくない、逆に臀部や胸部が発達すれば葛城というエロ親父を模倣にした性的欲求者から標的にされると考えて仕舞えば、いやでもそう答えたくなってしまう。
もちろん、そう言う輩は迎撃すれば良いだけの話だが、態々されるのが嫌だと分かった上でなりたいものなどそういないだろう。
それにメリットなど他人の目と自分の持たざる者という不満を抹消するための欲求など、何とも小さいものだ。
「発達した臀部や胸部は男性を誘惑するという例はよく挙がるけど……女性も誘惑してしまうのね。未来が待ってた漫画の百合展開という描写に殆ど似てるわね」
「いや、アレは葛城が例外中の例外だと思う……」
セクハラ親父の葛城の煩悩は峰田実に引けを取らないものだろう。流石に覗きを好むような性的犯罪に走るわけではないが、それでも女性からして傍迷惑なのに変わりはない。

入浴を終え、更衣室から出る半蔵学院の忍学生達に焔紅蓮隊のメンバー達は、番号が記された部屋へと赴く。
焔紅蓮の部屋番号は５６０、そして半蔵学院の部屋は５６１である。
「あれ、焔ちゃん達の部屋って私たちと近かったんだ」
「お前たち…隣部屋だったのか…？」
これもまた以外な事に、なんと部屋も隣同士。
只でさえ京都の旅行で遭遇するだなんて偶然にも幸運な上に、今度は部屋まで隣同士と来た。
今の今まで気付かなかったのが不思議なくらいだ。
因みに選抜補欠は５６２であり、霧夜先生は５６３とのこと。
「偶然がこんなにも重なるなんて凄いですね…これも何かの縁でしょう！そうだわ、もし宜しければ今晩は全員でお話しするというのは如何でしょう？積もりつもった話も沢山あるでしょうし！」

「そりゃええな、次いつ会えるか分からんし」
詠の名案に、日影や他の人達も納得した様に首を縦に頷く。
前にも話したが、半蔵学院と焔紅蓮隊が再開したのは予期せぬことに、林間合宿で負傷した飛鳥、柳生のお見舞いに行ってからだ。
あの頃は状況的にも懐かしき再開に会話を弾ませるような雰囲気でもなかったし、飛鳥でさえもあの時に目を覚ましたのが運が良かった程なのだ。
言いたい事、話したい事、聞きたい事、山ほど募らせる事柄が、少女達にはあるのだから。
「あ、賛成ー！私焔ちゃん達に美怜ちゃんのこともっと知りたい!!」
「まぁ、アタイらも学炎祭の時に助けられたしな！」
「そうですね…私もこうして、詠さんとお話できるのも光栄ですし。後は…霧夜先生がいつ戻ってくるのかが気掛かりですが…」
詠の提案に目を輝かせる飛鳥と葛城に、斑鳩は賛成こそするが、頭の中にある片隅に、担任の霧夜先生が靄の様に気になっていた。
別に先生の身に何かあったのかという危惧は少なからずありはするが、特上忍クラスのあの先生に他者からの遅れは取られないという信頼はある。なので別に其れに関しては何ら心配もしてないし、問題はない。
問題なのは、東京へ急遽駆け出した担任がいつ戻ってくるのか…それに明日の指示は聞いていない。
修行だなんて事は無いだろうが、どうにも奈楽やかぐらの件に忍商会の件と、上に報告をしに行く事に、何やら無性に胸騒ぎがするのだ。
もしかしたら、新しい忍務が下される可能性もあるため、しっかりとそこら辺は承知しておく必要があるのは確かだろう。
「どうしたの貴女？難しい顔をして」
早くも斑鳩の険しい表情を察した美怜は、顔を伺う様に声をかける。
話し合いに参加するのが気不味いのか、はたまた抜忍とは会話をしてはいけないのか…予想できる箇所はどれも漠然としかならい程度に頭の中で思い浮かぶが。

「いえ…霧夜先生が帰って来ない以上、次に私達が明日どのような予定が入るのか…が気になりまして…」
「霧夜…？嗚呼、半蔵の教師か。何処か遠出でもしてるのか？」
「いえ、それが奈楽とかぐらと呼ばれる謎の少女達に、忍商会という組織の件で…」
焔の問いに答える斑鳩に、紅蓮隊は全員驚嘆な顔を見せる。
「忍…商会ですって…？」
まさか、自分達が探してた組織がこうして此処でその名を放たれるとは思ってもおらず
「これは…棚からぼた餅どころかショートケーキまで付いてきてるわね…。そう、伊佐奈から貰った情報が、奇しくも此処で出てくるなんて想定外なことも起こるものね」
「半蔵の皆んな、忍商会と遭遇したの…!?」
奇想天外な事に興味深そうに冷静な微笑を浮かべる美怜と、動揺を隠せない春花達。
「そ、そうだけど…」
「どう言う奴らだった!?敵の数は!?どの支部だった…!?」
「え、ええっと…」
鬼気迫る焔に、飛鳥は思わず尻込むように勢いに任され目を丸くする。蛇女のメンバーが忍商会の行方を追ってるというのは、以前の木椰区で知った事だが、まさか焔紅蓮隊も闇組織を追っていたとは知らなかった。
「待ちなさい焔、いきなり情報を聞き出しても混乱ばかりするだけ。聖徳太子じゃないんだから。
此処は取り敢えず冷静に、少しずつ、情報を収集して共有するのが大事よ。順番を並べて聞き出すのもまた、諜報や情報収集に置いて欠かせない要素よ」
両肩を掴み勢いよく聞き出す焔を落ち着かせるように、美怜が彼女の肩に手を添い、一先ず態勢を整えさせるように促す。
「感情が高ぶるのも、動転する気持ちも分からなくもない…でも、勢い勝る強い感情は、時に視界を阻み、真実から遠ざけてしまう恐れがあ

る…その為にも、私達が落ち着き、一つ一つの情報を大事にしましょう。それに…仮にその話が本当だとしたら、もし此処で話を聞いてる組織の人間がいれば…いいえ、こんな無警戒態勢な公の場でそんな話をしてれば、何処からか駆け付けてくる危険性もあるのだし」
「そう…だな。いや、済まない…私としたことが…」
焔は蛇女を抜けてから、感情が勝る部分が多い。
脳筋というよりも情が大きく優ってしまったのだろう…よくよく考えれば、寄り辺も行き場もない人間を放って置けなかったり、悪にならざるを得ない生徒たちの拠り所になったり、悪の美徳や伊佐奈の様な腐敗した人間を許さなかったりと、情に深くなったのは確かだろう。
昔の焔なら、冷酷無慈悲な場面が強かった…そんな彼女が感情的になれたのも、死の美としての戦いだけでなく、最強の友達である飛鳥の要因も大きい。
「取り敢えず…お部屋で話しましょう。これはひょっとしたらだけど…場合によっては私たちと貴女達が手を組む場面が訪れる可能性も考慮しなければいけない案件かもね」

「…なんで、テメェが此処に居やがる？漆月」
深夜帯、誰一人とも居ない殺風景な街中で、訝しげに漆月を睨みつける男性に、彼女はニパッと目を見開く。
「あらぁ、これは道楽ちゃんじゃない！金閣寺以来かしら？あの時は

初対面ながら突然殴られそうで思い出すだけでも身震いしちゃう♡」
「アホ抜かせクソ女が――」
態とらしい台詞を吐きながら垂れる彼女に、眉間に青筋が浮かぶ。その気になればいつでも避けれた癖に、さも演技らしいような物言いでよくそんな言葉が吐けたものだ。
「し、心外ですね……く、口を開けばクソ女て…漆月、哀しいです…哀し過ぎて涙が…」
「お主のそういう意味不明な演技はどうでも良いんじゃ…そうやって惚けて話を変えようなどという魂胆は」
「魂胆というかそういう習性が出ちゃってるのよね～、多分佐門ちゃんと似たようなものよ」
「ん…？似た……？」
意味深な彼女の発言に眉を顰める道楽に、漆月は続けて言葉を発する。
「ちょっと佐門ちゃんとお話がしたくて京都に戻ってきただけ♪」
「マスターに会わせる筋は無い――出てけ、あのお方は多忙の身だ」
「それって神楽を捕獲する為なのと、ある目的を成就させる為の準備とか？」
「ッ!?貴様…何処で其れを…!!」
「いやぁ気付くでしょ？無鉄砲な切り込み隊の邪淫ちゃんに両舌ちゃんだっけ。街で暴れ狂ってメディアに注目浴びせる事で世の中はアンタ達の存在が示された…
今も警察やヒーローは敵または抜忍による破壊衝動だなんて片付けてるけど…ふふ、実際に世の中の日陰者、闇に紛れ込む者が公に姿を現わすのを恐れてる癖に、いきなり出しゃばったりしたら誰もが不安に過ぎるでしょう？
となれば考えられるのは目的がなければ動くことはない…で、アンタ達が始動したと言うことは既に下準備は整えてあり、ある程度目的の為に動き出したことになる。
そしてそのトリガーとなるのは誰か？観察してて分かったわ、神楽と奈楽ちゃんが目的なのも。

そして間が悪い事に、其処で半蔵学院の子達が邪魔をしてしまい、神楽の捕獲は失敗になったと…」
「いつから見ていた…？」
「あっははー！そんな怖い顔しないでよ、別に取って食おうだなんて思ってないんだしさ♪それにしても、商会の子達って大した事ないのねぇ～…たかが半蔵学院の子ら相手に苦戦するなんて」
「あ…？」
ピキピキと額に青筋を浮かばせる道楽に、漆月は構わず口を開く。
「だって、そうでしょう？伝説の忍の孫、飛鳥ちゃんならさておき…他の子らは大して私達日陰者との実戦経験もなければ外の世界を体験した事だってない。
そんな連中相手に簡単に蹂躙できないようじゃ、そりゃ奈楽ちゃん相手に手こずるのも無理ないわー」
「……」
「でさ、本題なんだけど…神楽ちゃんを捕獲したとして…アンタ達が何をして、その後に何を目的に動き出すのか興味が湧いたわけ♡
まさか、神楽ちゃんの力を利用して次の支配者になるのは俺だー、なんて戯言を垂らす訳じゃないわよね？」
「貴様…ッ!!」
悉く人を虚仮にする彼女の言葉に、元々頭の血管が切れやすい短気な道楽からすれば相性は絶悪。
況してや元々佐門から動きが怪しければ殺せと言われていた。彼女は神楽の捕獲を知ってる上に、不安要素が高すぎる。此処で消して置いて損はなければ、後々と大きな障害となる。
「連れてけ」
頭に熱が登り、怒り狂おしそうになる道楽に、冷静な声が背中に投げられる。
「マ、マスター!?何故此処に…?!」
それは自分達忍商会の幹部の主人、佐門が自ら出向いたのか、夜の街角にて二人の方角に歩み寄ってくる青年は、無表情だ。
「神楽の件は知ってるんだろう？ソイツにバレたらどの道、話さな

きゃ何してくるか分からねえ。
どの道バレるにしろ時間の問題…丁度、俺もお前について話しがしたかったんだ。あぁ…忍ニュースで話題になってた憑黄泉が敵連合と関わってるとか、色々と…な」
「あら、初対面の時とは裏腹に以外と話が通じるのね、超意外過ぎてニヤニヤが止まらなくなっちゃう」
「気持ち悪いこと抜かすなクソ女、というかお前は正体が不明すぎるんだよ。
あの後、俺もお前について個人で情報調査をしていたよ。戸籍登録、出生、能力、学歴…どれも探ったが全部闇の様に何も見えない……と、言うよりも正確にはお前が自分自身で消してるんだろう？執拗なまでにお前に関する情報が全て遮断されてるし、上層部がお前という存在に勘づき始めてるその前の情報は、何も残ってない。何も犯罪や上層部に狙われてもない奴を追いかけ回すほど上は腐ってない…それが証拠だ、違うか？」
「あれ、ひょっとして私のこと気になって調べてくれたの？だとしたら嬉しいなぁ～♡でもちょっとストーカーされてる気分があって気持ち悪いかも♪」
「俺たちの監視をしてたゴミがどの口ほざいて言ってんだ」
忌々しそうに睨みながら言葉を吐き捨てる佐門に、漆月は自分の事を探ろうとする事に対してあしらう様に言い返す。
忍商会は組織としては勿論のこと、闇市場だけでなく資金管理の他にも裏情報など探るインターネットに関する情報も殆ど網羅していると言っても過言ではない。
現に漆月はヒーロー殺しの接触からその前の生存や抜忍としての罪などは明かされておらず、殆どの者が当たり前のように彼女を目標にしている。
「取り敢えず付いて来い。此処じゃ他の忍に勘付かれる恐れがある」
「場所は？」
「廃墟の工場だ、ちと遠いが…まあ別にいいだろ。道楽、お前もう下がれ、引き続き神楽の捕獲に慎め」

「へい、分かりやした。おいテメェ、呉々もマスターに手ェ出すんじゃねえぞ」
「随分と親しまれてるのね、自分がピンチの時に肉壁になれる様懐柔でもしてるのかしらん？」
「駒は王を守る為に存在する…そして、俺が王だ。コイツらが俺に忠誠を誓うのも、俺の安否に敏感に気にかかるのも当然の義だろう？」
ふぅん、王…ね。
つまり佐門も大方、忍無き無法者の王、即ち支配者になると言うわけだろう。
ある程度予想は付いてたものの、此処まで的中してしまうと味気ないものでもあるが…どの道、避けては通れない道のりになるのは間違いない。
「成る程ね、良い教訓だわ。私も次からそうしようかしら？概ね、女王を守るには兵が必要だし？」
「お前が女王？笑わせるなよ、たかが蛇女如き潰した程度で満足してる様な小物がか？」
「……」
佐門の言葉に、漆月は黙り込む。
その表情は今までに見せたことのない冷え切った顔立ちに、そのまま静寂するような空気の流れ。
別に満足などしてはいない。
アレは単なる踏み台の為のステージ…確かにあの頃の自分は記憶もなければ、ただ形ある命の破壊と死の有様に満足していた。
小物…そう言われても仕方がない程に、あの頃の自分は何も知らなかった…
だが今は違う。それどころか過去のことを思い返す度に悔しみだけが残る。
どうして、あの時もっと大勢の人間を殺せなかったのか。
どうして、あの時少年少女達の心も信念も折らせれなかったか。
どうして、あの時もっと『コイツ』の使い方をしっかりしていれば。
否――それは全て物語が始まる為の下準備に過ぎない。

先生が記憶を封印したのも、成長を促す為の段階に過ぎず、また憎悪と己に悔いを覚えさせる為である。
ぬる過ぎる自分に挫折を覚えさせる為、弱者側の立場や価値観を身につける為…そうすることで見えなかった視野が広がる。
「過去の歴史や犯罪の事実が消えないように、一度付けられた汚点は落ち難い……そうね、私も此処で一発何かしないと舐め腐られたままだものねぇ…」
なら、これから自分がやろうとしてる悪業の為には、仕方なく誰かが犠牲になるしかないよね。
犯罪を帳消しにする免罪符という訳ではないが、このまま自分があの頃のままだと思われてるのは正直気に食わない。
実力も見れず過去の事実にだけ揚げ足を取る馬鹿なら遅れを取るに足らないが、佐門の様に「敵意と悪意を剥き出し、更に此方を探りながら自分をも越えようとする外敵が現れた」となれば、動かざるを得ないだろう。
そう思いながら、悪意を心に溜め込み漆月は佐門と共に闇夜の世界へと溶け込み、どこ吹く風か闇の景色と共に溶け込み消えてゆく。

２２３話「忍の支配者とは」

「本当はあんまりボロけた工場で話すのも好きじゃなくてね…俺の庭である裏カジノの方がしっくり来るんだが、それだとかなり遠出になっちまう…」

カツン、カツン…と足音を立てながら、真っ暗闇な廃工場に佐門は明かりを点け、視界が一気に色鮮やかに映り出す。

使われてない工場には血痕やチェーンソーに使い古された椅子、物騒な品が殺伐と雑に放り出されている。

「鉄の匂いがするけれど…此処事故物件？」

「そう…大分使い古されてるからな。今じゃヤクザや裏社会の人間が拷問用にって事で使ってる。

全盛期、オールマイトが居座りヒーローとしての職が輝いてから、裏社会の人間…所謂極道という天然記念物達が解体され始めてから此処を使ってた人間もいなくなっちまったが…道楽が見つけてくれたんだ。それに廃工というのもあってか、幽霊が出るなんて噂が流れてるのも良い効果だ…お陰で警察やヒーローを近寄らせない魔除け程度になってるのが救いもんだ」

幽霊やら事故物件やら、怪奇現象があると知れば大体は手を上げてしまう。殺害事件などによるものならまだしも、解明できない未知なる幽霊やらと相手にするほどこの国は暇じゃないし、どの世代でもまともに取り合うものも居ないだろう。実際にデマではあるが、人を寄せ付けない嘘としては良い効果を発揮してくれるのは、闇に潜む人間

からして都合が良いものだろう。
「そう…で？何処からどこまで話してくれるのかしら佐門ちゃんは。かぐらに奈楽ちゃんの件と言い、支配者の話と言い……私の前であんだけ大口叩いたんだから、まさか大それた計画はありませんでした、なんて事言わないでしょうねぇ？」
本題に移ろうと吹っかける漆月は、腕を組みながら呆れたような表情で佐門に言葉を投げつける。
挑発地味た台詞ながらも、無表情に…いや、冷え切った顔立ちで佐門は一つ呼吸をして口を開いた。
「…忍の象徴、陽花という女を知ってるか？」
然し唐突にも、佐門の口から放たれたのは、血の繋がった彼女の実の姉。カグラの頂点として君臨した最強のカグラが名を挙げられた。
「嘗てこの国に存在し、たった一人でこの国を守り抜いたという。いや…守り抜いたのかはさておき、まだオールマイトが平和の象徴として名を馳せられてない時の話だ…。
公には明かされてなかったが、ウチの第五支部長である僧絽門が陽花の手によってタナトスに収監された…裏じゃ割と有名だ。今の世代、知らない奴の殆どがガキくらいだろう、カグラになった奴は全員名を知ってる、亡き忍の英雄さ」
今話してる相手が、その妹だという自覚も知識も本当に更々無いのだろう、喋り立てる佐門に漆月は無表情で其れを聞いている。
「そう、昔はな？この世界にも忍としての頂点…いや、支配者がいたんだよ。ある意味、陽花は支配者みたいなものだ。
無敵、最強、唯一無二…そう言わざるを得ないほどに数々の逸話を残し、後々と語り継がれるアイツは、いつしか抜忍の殆どが恐れ戦き、中にはアイツと遭遇しただけで自首をするなんて奴もいたらしい。
地獄だったよ、次々と組織や闇の住人が、太陽の光によって消滅されるその光景、死へと近付くカウントダウン……生まれた時から化け物なんて異名を持つアイツに、一体全体どう勝つのだろうと」
支配者、なんて言われても可笑しくないだろう。
別に陽花は他人を拘束したり、尊厳や自由を脅かしたい訳ではな

い。皆んなに認められ、支えられ、信頼し、縋れる存在が彼女だった。だがそれは見方によって支配者と呼ばれても可笑しくないだろう。
世を脅かす数々の悪を監獄へと送り出し、人々からより信頼を受け、そして彼女の意思を尊重、或いは受け継ごうとし彼女のためにも戦おうとする姿は、何処かオール・フォー・ワンに似ている。
弱者に慈悲を、強者には容赦を――そして、善も悪も彼女の強さを認めた。
次第に彼女の後ろを追い、認め始め、敬い、尊敬な眼差しを向けられる……彼女の戦績と実力、忍の象徴に恥じぬ風格は、誰もが認める世界Ｎｏ．１の忍だ。彼女のお陰で抜忍による犯罪件数が減ったのは間違いないし、オールマイトの代わりとして本当に申し分なかった。
中には日本に潜伏してたオール・フォー・ワンの手先まで相手にするほどに。
太陽の如き戦に舞う姫君は、潤しく華やかに美しく、邪を寄せ付けない彼女は、輝かしい英雄そのものであった。
「だがそんな奴もこの世にはもういない…そして、神野区で姿を現しては裏を支配し、暗躍し続けた悪の象徴オール・フォー・ワン。俺の爺さんがよく話してた伝説の支配者…当時ガキの頃だった俺にはよくわからなかったし、単なる脅し話しに過ぎなかった…
だが現実は小説より奇なり――実在してたんだよ。そりゃそうだ、アイツがいたから俺たちの組織はショボかったんだ。アイツに全部、支配者としての席を取られたままだったんだ」
「で？先生がタルタロスに送られた今、オールマイトが平和の象徴として死んで、陽花もいない今…表も裏も支配者がいないって話？まさか、アンタがオーバーホールちゃんと同じような思惑をしてるだなんてねぇ？」
早い話、支配者という席が空白の中、一体誰が支配者になるのか。所謂覇権争いの事だろう。勿論、忍としての支配者になるのなら、陽花と同等かそれ以上の功績や戦績、そしてカリスマ性が必要になってくるだろう。

別に珍しい話でもない。
裏ではこういう支配者による争いは後を絶えない上に、その中でもオール・フォー・ワンを始めた伝説の忍や支配者たちを知る者にとって、敵連合は邪魔でしかない。
「察しが良いな…話す手間が省けて助かったよ。だが、今の世の中、No．1として座を与えられたエンデヴァーを始め、忍とヒーローが手を組み着々と社会の秩序を保ち守ろうと抗っている。
その点、支配者になるには裏も表も全てを超越しなければならない。
分かるか？忍側とかヒーロー側とか、そんな分け隔てる壁さえも、もう悠長には言ってられないんだよ。今まで通りの支配者じゃダメだ、上に立つにはそれを超える程の偉業を成し遂げなければ、支配者にはなれないんだ」
世に蔓延り、個性の名の下に犯罪に手を染める敵
忍社会に不適合で、切り捨てられた忍
どちら側も、支配者として君臨しなければならない。
陽花とオールマイト、オール・フォー・ワンと言ったような状況じゃダメなのだ。
支配者は、常に一人でなければならない。
「…アンタの精神論は分かったわ。大方正論ね…陽花もオール・フォー・ワンも超える程の支配者でなければいけないって訳ね。あの二人が出来なかったことを、自分がやろうと…私と同じ考えをしてたの超意外。
私もね、実を言えば先生なんて踏み台でしかないのよ」
其れはつまり、自分を育ててくれたオール・フォー・ワンも、自分が支配者になるための単なる踏み台としか思ってないということ。
だって、そうだろう？
結局先生はオールマイトに敗北し、更には自分に後継を選んだ…そして、自分は如何なる者も踏み台にし、高らかな支配者として見下ろす人間であることを先生なら分かってる筈。
それに…そうでもしなきゃ支配者にも絶望の象徴にもなれやしな

い。
「オールマイトだろうと、オール・フォー・ワンだろうと、陽花だろうと、其々の偉人も歴史の人物に過ぎない…
まっ、人間の価値や歴史なんて死んで初めて残るものだからねぇ。
支配者には縋れる人間が必要で、行き場のない人間を寄せ付け自分を支持する者がいてこそ、初めて覇者としての価値が見出せるもの」
「ああ、それに今の世の中…奴らが手を組むのも俺にとっては好都合だ。圧倒的な存在に押し潰される側は死を待つのみ…
支配者となるには、その決定打を決めるに忍とヒーローの殲滅…二つの秩序を同時に破壊できるんだ。そう、今が絶好のチャンスなんだ…忍だのヒーローだのと綺麗事のように平然と語れる世の中だ。そういう意味では、手を組ませ同時にヒーローと忍社会を壊すキッカケを作ってくれたオール・フォー・ワンを始め、敵連合には大きく感謝してる。
成る程、偶に見る連合に憧れる抜忍がいるのも理解できるよ」
敵連合は退ける度に戦力を増やし、社会に打撃を与えているのは言うまでもなく、彼らの存在が大きいものだろう。
ＵＳＪ襲撃から彼らの存在が示され、蛇女襲撃により忍に対する宣戦布告、ヒーロー殺し、又の名を忍殺しステインによるシンパシー、そして林間合宿による雄英と忍学生による信頼の打破、そして神野区でのオール・フォー・ワンの実在とオールマイト引退…現在では死穢八斎會の掌突絡みに、漆月による忍商会との冷戦…次はどのような結果が生じるか。
「御託はいいわ、どうせ感謝なんてしてないでしょうに。アンタからは憎悪と恨み、敵意の匂いがプンプンするのよね。
そんで？現在混乱としてる時期、支配者になるには丁度良い頃合いを見計らってその波に乗るって意図は分かったけど……何を根拠にしてその自信があるのかしらねぇ？支配者になるだなんて、馬鹿のひとつ覚えみたいに…」
「その鍵が神楽にあるんだ」
「神楽が…？へぇ、なんで？」

此処から神楽の名が出る事に、多少なりとも興味が湧いた。
神楽とは、妖魔を滅せし日ノ神であり、謎も未知な部分も計り知れない程に大きな存在。
社会とは無縁な神楽が鍵となるのは一体…
「神楽とは、妖魔を滅する事を主に活動し、一定の成長を遂げ覚醒の後に、奴は大規模な妖魔と道連れに転生の玉の形を迎える。
奴が千年以上昔から存在し、度々神楽としての記録が残るのも、奴が自滅してでも不滅なのはその証拠…
そう、妖魔の天敵にして嘗て憑黄泉神威と大きな戦争を繰り広げた日の神だ。
それで、だ――俺が目に付けたのはアイツの…転生の玉の事だ」
「転生の玉…？それって確か奈楽ちゃんを始めた護神の民が祭り上げてて、誰かが側に居なきゃ本来の実力を出せないって代物よね？まだ未開な情報が多数あるって話で、あんまり注目されてないけど…」
「護神の民が守り続けてるのは、神楽の復活の為だけじゃない…尤も奴らが警戒しなければならないのは、神楽がその状態になってる時の事なんだ。
アイツは殺されてしまっても、転生の玉に戻るだけだからな。そんな奴を滅することが出来るのが、その転生の玉にあるんだ」
転生の玉となった状態は、人間でいう謂わば胎児の状態…当然、何も分かるはずもなく、況してや手や足が動かせない。
だからこそ、護神の民は手足が動かない神楽を守護するためにも、全てにおいて守り抜かなければならないのだ。
そうして選ばれるのが、神楽の側近として転生の玉を守る護衛役…それが奈楽の番になったというわけだ。
「転生の玉を利用すれば、神楽と同等の力を手にすることが出来る――忍社会やヒーロー社会を大きく覆し、秩序をも破壊できる程の力を手にする事が出来るんだ」
ゆっくりと、佐門は掌を広げながら、全てを支配するようにギュッ

と掌を握りしめる。
「転生の玉には、莫大なる力が存在する。人間がそれを利用すれば、無個性の人間から弱個性の人間でさえも簡単に全国を支配する権利を与えられる程に、驚異的な代物だ。
そして俺はティオ・ディアボリクスが遺した数少ない貴重な研究材料の資料からその情報を知った――つまり、俺にしかその情報は知らない」
遠回しに言えば、転生の玉を利用する方法や過程は佐門にしか分からず、そしてその方法も今動き出した佐門なら知ってるのだろう。
その準備は整えてあり、今が絶好なるチャンスだからこそ、多少な危険も顧みないのだろう。
また、漆月に打ち解けるのは、流しても問題がないという絶対なる自信があるからだ。
「……随分とご丁寧に教えてくれるようだけど、もうちょっと具体的に教えてくれるかしら？一体全体、どうやって神楽ちゃんの転生の玉を利用して、支配者になるのか…その過程内を教えてよ」
「教えるかよ、それを知ったら本末転倒だろうが……馬鹿な誘い言葉に乗るか。
因みにティオ・ディアボリクスの資料は無いぞ。俺の頭にしかインプットされてないし、その資料は燃やして捨てた」
「へぇー…アンタも勿体無いことするわね。今じゃティオ・ディアボリクスの文献や研究資料なんて闇市だと低価格じゃ２０００万、場合によっては億は下らないのに…残念だわ…
大好きだったのに…ティオ・ディアボリクスが遺した研究資料や情報を、私が徹底的に再現して再び世に混沌を期たしてあげようと考えたのに…♡」
変態かお前は、なんてつい言葉が出てしまうほどにこの女は異常。
控えめに言ってイカれ狂ってる。
涎を垂らしながら悪事を妄想する彼女に、佐門は少しだけ引く。
「京都のお土産に文献くらいは持って帰ってあげようとしたのにねぇ…

まあでも、確かに神楽の転生の玉は不明点が多い分、そこに着眼するのは中々やるじゃないの♪小物だと思ってたのに、ちょっと見直したわ♡」
「そうかよ……一方で、お前はどうなんだ？」
「ん？」
今まで傍観者として感心していた漆月に、佐門は訴えるように質問を投げる。
「お前も見た感じ…オール・フォー・ワンの後継者として支配者になるべく華を咲かせようとしてるみたいだが…お前にはその計画はあるのか？
お前達の情報は裏では色々流れてるし、魔門からの融通で顧客の情報は貰ってる…
蛇女の襲撃を始め、世にお前が連合と繋がってると示唆されてから、お前達の組織は徹底的に稼働し始めた…
忍殺しステインに、鎌倉、蒼志、龍姫、闇、黒佐波、どれも良い駒にしては黒佐波を落としてるみたいだが…そして以前の憑黄泉による蛇女の襲撃…事件性ばかりでは確かに国家テロに引けを取らない上に、ここまで忍と敵の結束力を見るに他を抜いてるのは一目瞭然…
だが、結果としてお前は何がしたい？忍や敵の仲間を集め、戦力を増し、古代より伝わる憑黄泉という妖魔がいながらも、お前は何を企んでる？生半端な破壊がお前の目的じゃないのは俺でも分かる」
結論からして、漆月が何を考え何を目的としてるのか、全く検討が付かない。
予期せぬ出来事からアクシデントとして時間を発生させるのは上手いものの、それがどの様な悪影響が及ぼすにしても、支配者としての道のりは程遠い…。
戦力拡大にしては理由としては弱いし、国が潰れる世のカグラは甘くはないし、トップヒーローだって上手く対抗できている。
況してや憑黄泉という凶悪な妖魔を従えてるのであれば、利用方法は沢山あるハズだ。
「恐らく、今までは死柄木弔という子供大人がリーダーとして振る舞

い指揮してたのだろう？
まだ死柄木弔ならば、成長する悪意としても驚異な上に望みはある…で？お前はどうなんだ？
お前自身が何かしら世を動かす事ができたか？
お前一人で何か仲間の為や組織としても貢献することは出来たか？それが支配者としての道のりを歩めたか？
お前という個の存在が、世に何を知らしめた？
ただ悪戯に生半端でステインに忍の存在を唆し、仲間集めの役割でしか生かせなかったお前が今更何をやれる？

お前に一体どのような価値があり、何を成せるんだ？」
それは、明からさまな挑発に近い…いや、彼女自身の存在理由と価値を否定するような罵倒な質問。
戦力拡大としての役目を担っても、現状として敵連合に入りたい輩は案外少ないものだ。
タルタロスでオール・フォー・ワンが言ってた通り、混沌に乗じて自分が何かをやれると考え動く者、オールマイトという平和の象徴が無くなった事で、抑圧された敵による破壊衝動の活性化、更に抜忍と敵による結束力、仲間になりたい犯罪者がいたとしてもチンピラや下忍以下の雑魚程度――上手くいかないのが世の現状というものだ。
「…つまり、佐門ちゃんは私が支配者としての器が何処にもない上に、相応しくないってことかしらん？」
「理解してくれて助かる、まあそう言うことだ。
ただ俺とてお前のような得体の知れない奴を放っておくのも、寝首を狩られる可能性だってある。
厄介なだけで無視できない、支障に来す危険性がある以上、お前を野放しにしたくなくてな――今此処でお前を殺す」
瞬間、袖の中からトランプのカードを掌元に移し、数枚地面に投げつける。
地面にトランプを放てば、其々のカードから光が放ち、軈てカードから得体の知れない何かの影が蠢いていく。

姿を現せば、鼠と狐の混合な獣顔に、体は白布に覆われており、白布からは楽団でよく見られる法螺吹きラッパを銃口として差しむける。

「死ね――」

プーッ!!と甲高い音が鳴り響けば、目に見えない空弾が、漆月の腹部を狙う。

然し彼女は動じる事もなく――

「前――」

冷静で表情を一つ変えず、挑発を受けても怒りを露わにせず、何処と無く嘲笑とする顔を見せながら彼女がそう呟くと、何処からとも無く黒紫色の影が彼女の前に立ち塞がる。

「ッ!?」

パァン!と肉体が弾け飛べば、腹部に穴が空き、青黒い体液と血肉を撒き散らすのは、何故か妖魔である憑黄泉だった。腹部に穴が開けられたのにも関わらず、絶命せず口から血液を嘔吐する憑黄泉の生命力は相も変わらず凄まじく、彼女を…漆月を守るべく肉壁となって佐門から身を守ったのだ。

一体全体何処から現れ、何処に待機しており、いつから漆月の側に居たのだろうか？

「そして不意打ち狙いで私の頭をヘッドショットと…遠距離戦法による銃戦は銃中悪口ちゃんかしらん？」

そして予知してたかのように、彼女が僅かに頭をずらすよう体の軸を中心に回れば、銃口の発砲音が鳴り響く。

二、三発、火薬特有の硝煙な匂いが微かに臭うものの、彼女に当たる事なく見事に全弾外れてしまう。

気配は消していた…にも関わらず、まるで先読みされたかのように、其処に撃たれるのが解っていたと言わんばかりに。

(アレが、憑黄泉…!!敵連合と何かしら関係性があると忍ニュースでは騒がれていたが…やはり此処にも…!!)
「おい、何外してんだ阿保――!!お前の腕はスナイプと同等なのだろう!?」
　内心焦りつつ虚空に怒号を飛ばす佐門に、闇深い天井の上から降りてくる銃中は、申し訳なさそうにしながら黒帽子のハットを抑え銃を彼女に向けたまま警戒態勢を解かないでいる。
　スナイプ――雄英高校の三男教師にして、スナイパー系統による銃撃戦で引けを取らないと言われている。
「申し訳ありませんマスター…!!気配は完全に絶っていたのですが…」
「当てられなきゃ無意味だろうが……と、言いたいが、撃つ前から分かっていた素振りを見るに……コイツ…」
　どうやら一人で蛇女を潰したと言うのは嘘偽りないようだ。
　…いや、正確には敵連合の支給物体、オール・フォー・ワンがパトロンとして支援してた脳無二体もいたお陰なのだろう。
　学生とは言えど、忍学校を単騎、少数人数で潰せるのは学炎祭を使わない限り早々いない。
　居たとしても亜門くらいだろう。
「あっはは♪分かってるって！佐門ちゃんが鼻っから私を信じてないのも、私と手を組まないのも、最初っから私を殺そうとしてたのも。
　悪口ちゃんの他に数名…両舌部露ちゃん、白水瞋恚ちゃんが此処にいるのも…♡」
　言い当てられた事に、僅かに冷や汗が流れ出る佐門は、内心舌打ちしながらもドラム缶から水がポタリポタリと流れては、見る見ると形を作るように小さい体が現れ、漸く姿を見せる白水瞋恚。
　壁が溶け始めると途端に、巨大な舌が押し寄せては壁を破壊し、瓦礫を舐めしゃぶり、舌で巻けば口に放り込む両舌部露。
　隠れても無駄だと察したのだろう、佐門の他にも三人の幹部が表に出る。
「おいいいいいいいいい!!!気配は完全に絶ってたぞ?!思っクソバレてん

じゃねえかぁ!!?あぁん!?なんでもってこんな小娘如きによぉ!!!」
目を大きく見開きながらキイィィィ!!と発狂する白水は、充血した目で眼圧を飛ばす。
銃中だけでなく、白水に両舌まで彼女に知られてたのなると、何かしらの忍術によるものなのではないかと考え込んでしまう。
「ば、ばれたぁ…??お、おでたち、気配…かんぜーんに、けせ、け、けせりゅう〜…のに、ィ、どうちてぇ…??」
「麻薬取引売買成績トップ1の『下口陰呑』ちゃんに教えてあげましょうか?それが私の体質。
私が幼い頃から今に至るまでに体験した過去の影響のお陰か、アンタ達のように気配が絶ってても、自然と気付いちゃうのよ。これが本能というのかしら」
「答えになってねえ…つまり、忍術によるどうこうの話じゃねえって事か…オマケにウチの面子も丸分かりと…情報は保護されてるし、全員とも名前を捨てた身なんだが」
「御名答!ふふ…何なら目を瞑ってでも、攻撃なんて避けられる今じゃ私に傷をつけることなんて、大人数でも一苦労するんじゃない?
其処は私の情報収集力の賜物ってやつよ!」
両舌部露――本名、下口陰呑は現代に置いて麻薬売買を始めた闇市場を締めており、忍商会の中では群を抜いている。それでも他国や嘗ての名を馳せた連中に比べれば中の上程度の存在なのだが…。
それでも裏社会に生きる住人の素性を調べるというのは相当骨が折れるだろう。
それを何の表情も口振りも変わる事なく、平然と言うのだから、彼女の実力は折紙付きで本物で間違いないはずだ。
「だったらこれはどうだ…?秘伝忍法――『式神召喚　二刃』」
刹那――掌をコンクリートの地面に叩きつけ、発光すれば否や、巨大な龍を模倣した大蛇が二匹、何重にも生える鋭い針状の牙を並ばせ、眼球のない頭を猪突猛進の如く勢いを増して漆月へと狙いを定める。
彼女は一呼吸した後、目を瞑り、トーン…と地面を軽く蹴れば宙に

舞う。二匹の蛇龍は大きく口を開き地面に食らい付き、空ぶってしまう。
本来ならば獲物を食い殺すほどの追尾性能があるのだが、タイミングが絶妙だったのか、運悪く地面に食らい付いたまま、地面を破壊し喰い殺し損ねたようだ。
「馬鹿め、飛んで火に入る夏の虫愚か…飛んで的になる秋の蝿…という訳か……狙いは良好…！
『マスターの前ででしゃばり過ぎたクズ以下のゴミ虫が、死んで詫びろ』」
銃を口に当てながら、罵詈雑言の汚らわしい言葉を吐き捨てれば、銃の引き金を引くと、化け物のような銃弾が悲鳴と悪意を浴び、彼女を標準にして狙い定める。
「っ～♪」
目をカッと開けば、手を禍々しい鱗と装甲、獣や竜に似せた鋭利な鉤爪へと染め上げ、悪意ある生きた銃弾を爪に食い付かせ鷲掴んだまま、他の銃弾へと投げ飛ばし相殺させる。
無様に消し炭にされた銃弾に続き、今度は両舌部露の巨大な長舌と、白水瞋恚の体から放たれた茨城な水を飛ばす。
「ウチの商売舐めんじゃねえぞおおぉぉぉ!!!!こんのクソ女がああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
唸りを上げた粘つく酸!性の強い長舌と、３５００。も熱された超沸騰熱水に加えた鋭い斬れ味を持った水圧な茨城水、その二つの凶器な忍術が彼女の命を潰さんと言わんばかりに狙うも、それすら虚無と化すように
「アンタらさぁ……流石に三下過ぎるでしょ、セリフとか色々と…」
空中で体の軸を捻り、上手く誘導した攻撃を避け、水圧も長舌も彼女に当たることなど決してない。
擦り傷も、飛び散る水の一滴さえも肌に触れることなく、彼女は優雅に地面へと着地する。
「言っとくけど…先に手を出したのはアンタ達だからね――」

そして指をパチン！と鳴らせば、彼女の背後にある壁は悉く破壊音と共に衝撃波が空気へと流れるように伝わり、土煙が巻き起こる。
視界を邪魔する土煙さえも薙ぎ払い、彼女の増援に駆けつけたのは、五体の憑黄泉。
一体目は鳥類特徴の赤い体毛に鴉の黒羽、背中に七支刀を滞納している憑黄泉。
二体目は迷彩服にマシンガンを構え、ヘルメットを被ってる為素顔は不明の憑黄泉。
三体目は鎧のように金属製でカバーされている、サイボーグ型の憑黄泉。右腕には重火器キャノン砲、左腕はメタルクローになっており、尻尾はチェーンソーとなっている。頭部はメタルコーティングされている。
四体目は巨躯な身体に、拳と大砲が混合した重砲拳、獣と竜が混合した顔、煮えたぎる熱の脈が鼓動を打つ憑黄泉。
五体目は大きな翼を広げ、脚部が大きく特化したワイバーン型の憑黄泉。
どれもこれも一癖も二癖もある、異常な程の威圧感を放つ憑黄泉達ばかりだ。五体の憑黄泉は、彼女の護衛となる様に側に近寄り、佐門達に敵意の目を輝かせながら、迎撃体制に入っている。
「憑黄泉が五体も…!?蛇女の時に一匹出たという…」
「肉壁となったソイツも含めて六体……脳無の様に制限ストック付きという訳でもないのか？そうポンポン出せるものじゃあないだろうこの化け物共は…」
然も、全員とも漆月に懐柔…順従していやがる。
抑もの話、憑黄泉とは非常に危険であり、忍の天敵にして、本来なら人間や忍、妖魔にさえも懐かないとさえ言われており、況してや敵連合が憑黄泉を使役してるという事実さえ異常なのだ。
洗脳や催眠は効かず、華眼を始めた瞳術さえも無効、ほぼ不可能なのにも関わらず、それを六体同時に彼女の言葉や意思一つで動き出すというのは、余りにも荒唐無稽と言わざるを得ない馬鹿げた現実話。

だが然し、これが現実――目の前のリアルこそ絶望なのだ。
「あはっ…☆びっくらこいちゃった？そりゃそうよねぇ…古代より生きた月黄泉の遣い…大昔から恐れられた妖魔が実在しちゃってるもんねぇ…!!
言っとくけど、この子達はアンタら幹部級じゃ大人数になってやっと一匹仕留めれるかどうかのレベルよん♪そんなモンスターが五体、流石に計算もできないバカだって絶望の一言で言っちゃえるほどに分かるわよね？」
勝てない。
殺せない。
無理だ。
頭の中で一瞬にして諦念の言葉が延々としか出てこない。
そして負けると解る馬に金を賭ける博打が存在しない様に、佐門も流石に引き止めを感じ始めている。
「さぁて、どうする？言っとくけど憑黄泉を倒した所で私がいれば無意味だし、此処で大人しくアンタらが無様にケツ振って逃げるのなら、見逃してぇ…あ・げ・る♡
ほら、どう？私は優しいでしょう？支配者気取りの可愛い子供な佐門ちゃんを、支配者にもなれない器も欠けらもないなんて小馬鹿にされた漆月ちゃんが敢えて見逃してあげてる、だなんてさ☆」
それは要するに、お前らは眼中にも無くなったから、殺す意味も理由も何となく無いから、怖いなら帰っていいよという舐め腐った道理。
だが…邪魔になる可能性と目的の支障になるばかりと、先に障害物を消そうと招いた思惑が、返って脅威を呼んでしまった。
確かに、もう昔の漆月としての面影は何処にもなく、今じゃ顔立ちも風格も違う。
たった一人、悠々と立ちながら決して未知なる敵に怯える様子もなく堂々とする彼女の気迫と余裕な振る舞いに、そんな彼女の危険に駆けつけ、彼女の為に戦い彼女の為に身を削り、漆月の言葉に服従する憑黄泉達の姿は、正に女王と兵士だ。

成る程、支配者としての片鱗は、確かにあるようだ。
「これでもまだ産まれたばかりな下位級だけど…このボルケーノくんは中位級だから、佐門ちゃんと十悪業会のメンバー全員でも相当手が焼けるんじゃ無い？」
「ヴォロロロロ…ヴルル…」
ぺたりと、まるで抱きつくように漆月はボルケーノと呼ばれる憑黄泉の腕に密着する。
ボルケーノくんは口からフシューっと、蒸発して熱された煙を吐き出す。灼熱の様な霧が霧散しながらも、もう片方の重砲拳を彼女に傾けば、漆月は軽く足を蹴り、重砲拳の上に乗っかって座る。
「テんメェ…何者だぁ??憑黄泉といやぁ都市伝説でしか噂にされてねぇ危険な妖魔だろうが!!そんな化け物がどうやってテメェなんかに従ったっていうんだぁ!?あぁん!?」
「やめとけ瞋恚…今は部が悪過ぎる…此方もカードも戦力としての差も歴然……真っ向から挑んでも勝ち目はゼロに等しい…」
「ち、ちかも…てのひら、ばれてりゅ……おでたち、まだ…あいつのこと、しらなさちぎ…ぎちひひ、ひぎぃ…」
憤慨する白水瞋恚に、手で制しながら佐門は撤退を考える。
悔しいが、これが現実…そして彼女の言う通り、自分も含めて十悪業会の面子でも流石にこれは割に合わない。
それに今の今まで、これだけ殺意と忍術を扱い殺しに掛かってるのにも関わらず、彼女は一切反撃はして来なかった。
初期プロファイルによれば、彼女は体術はそこそこで、二刀を扱い意味不明な黒い霧を発生させたと聞いたが…誤情報を捕まされたのかと疑問に思う程に、以前の情報が役に立たなかった。
オマケに彼女は本気を出してない、憑黄泉一匹ずつによる潜在能力と戦闘力も未知数、彼女まで戦闘に加われば勝ち目はゼロ、更に敵連合のメンバーが加入でもしたら？
想像するだけで気が遠くなるほどに、現状勝機は間違いなくゼロだ。

「さて、ご挨拶はこれくらいにして…まだ私を監視してるのが二人だけど、アンタらじゃないみたい。ふふっ…♪

嗚呼、そうそう…神楽の転生の玉を教えてくれて有難う♪そいやアンタも私のこと聞きたいことあったんだっけ？この子達のこと」

ふと漆月は京都の夜の街で、佐門と再会した際に憑黄泉について色々聞きたいことがあると話してた記憶を思い出す。

別に教えても良いけど、どちらかと言えば教えずに隠していると言うのも好きなのだが、それでは芸が無い…なので。

「あのね、憑黄泉を産んでるのは私なんだ――♪」

だから、どうせならもっと驚く様な阿保面が見たくて、爆弾発言を言ってしまう。

「……は？」

それは余りにも突拍子で、

非現実的で、

意味が分からなくて、

脳が理解を追いつかず、いや寧ろ拒んでるのかと言わんばかりに、佐門だけでなくこの場の全員が目を丸くして黙り込む。

「ワイバーンくんは今日の朝に産まれたよ、クラッシュくんとD－76くんは黒柴が来て3日後かな…？ボルケーノくんは二週間前、八咫烏くんは4日前…うん！全員私の可愛い我が子達だ♡

そんな可愛い子供達は、マザーの言うことを聞くのは当然の儀じゃね？」

「……嘘だろ？」

「あっははは！バカじゃ無い？事実よ！

だってそうでしょ？じゃあさ、憑黄泉が現れたのはいつからよ？そして憑黄泉が敵連合との繋がりが示唆されたのは？

確かに蛇女に起きた…けど、それを可能に出来るのは、時系列的に考えて、『神野区の後、記憶を取り戻した私が憑黄泉を産んで蛇女に襲撃を出した』って言えば、流石に説得力があるんじゃない？」

そして、記憶を取り戻した彼女こそ――

「私は天咲魅影――陽花、天咲光芭の妹だよ」

憑黄泉神威を宿す、最高最悪な、産まれた事そのものが罪だと投げられた、悲劇で絶望に彩られた少女なのだから。

「……お前、もしかして…上層部に狙われてた子供って…!!!」

「嘘月妄語…十悪業会のメンバーの筆頭だっけ?あの人が元善忍なのに、アンタら側についたのも、私情で私を殺せなかったからだっけ?

何ともまぁ運命、因縁めいたものが渦巻いちゃってるわよね」

嘗て、まだ忍商会として活躍する前のメンバーは、善忍悪忍としてそれぞれ社会に奉仕してただろう。

勿論、天咲魅影を殺せという司令は、全国から既に受け始めていたのだ。だから…各々のメンバーや他それぞれの忍は、全員彼女を殺さなければならなかった、殺す様に命じられた、殺そうとしていた。

死んだと思われていた最悪な少女、それが今生きており、目の前に現れている。

本名も、憑黄泉も、召喚できるのは憑黄泉神威を宿す少女しか他ならない。

全て辻褄が合うし、説得力もある――だからこそ、今目の前にいる彼女は、計画性も支配者としての器もない邪魔な生娘から、世界をも脅かす過去最悪な神魔の遣い手、絶望の象徴に成り代わったのだ。

「教えてくれって言ったから教えたのに、鳩が豆鉄砲食らった様な顔しちゃってさぁ、受けるなぁオイ!!

何そんなにビビってんだよ!それでもチ○ポ付いてんのか!!あぁ!?ってすみません…またリビドーが……鬱だ…死のう…」

「…神魔を持つ者の、個性か…!!」

そして漆月の多重人格…間違いない、コイツは本物だ。

成りすましだとか、そういうチャチなもんじゃない…間違い無く、嘘偽りなく、漆月は天咲魅影だ。

リビドーと呼ばれるのは、どう言った状況下も不明な時に、欲望が

昂り、衝動が起きる、いわば性格的な個性のこと。
然しこのリビドーと呼ばれる現象が発生するのは、神魔が宿してる証であることを指す。
見抜き方は、その人柄の個性とは全く相容れない、無関係な個性が判明した場合により、神魔が宿っているのである。
例えば、美怜の様に知的好奇心と研究意欲に熱心なのが彼女の性格なのに、お菓子が大好きという個性が出てるのは、リビドーの他ならないのだ。そしてそのリビドーは欲求を満たさねば情緒不安定となり、精神が苛まれ、内に眠る神魔を制御出来ず、暴走する危険性が高くなる。
つまり、簡潔に言えばリビドーとは、神魔の個性の話だ。
「私は多重人格…そしてこの人格とは、喜怒哀楽の表情を性格に出したもの、そして其れ等は全て悪意から始まる!!
私はね、人間の悪意を吸って、その悪意による感情を内に秘め、人格が顔に出ちゃうのよ。
ちょっと話が変わるけど、臓器移植を受けた人間が夢を見たり、好みや人格が変わったりする都市伝説があるけれど、あれに似たもんよね」
憑黄泉神威は多重人格であり、常に口調が不安定だ。
喜びの悪意、怒りの悪意、哀しみの悪意、楽しい悪意、様々な感情を持った、沢山の人間の悪意から吸い取ったその影響が、人格に影響を及ぼし、結果として多種多様な喋り方になるのだ。
「そして、憑黄泉はそんな悪意が大好きだ…だから、この子達はそれを満たすために悪意を食い、人間を殺し、悲鳴を上げ、残酷な絶望を愛するんだ…
はてさて、これで私もアンタもお互い秘蔵にしたいカードを出し切ったんだし、撤退するなら見送ってあげるよん♪
それに私のことを言ったとしても誰一人として信用しないだろうしさ♡」
悪意を爛々にした笑顔を見せる漆月に、益々苛立ちと嫌悪感が漂ってしまう。

「てめぇ……!!」
「ふふ、食い殺す様な瞳で睨むだなんて、相当怨まれちゃった…まっ、昔からそういう環境で育って生きてきたから、今更どう向けられようが構わないけどねぇ。
私は高見の見物でもしてるわ、今アンタらを殺したら面白くないでしょ？
だって、支配者となるなら、女王は、強者はいつだって、生かすも殺すも全て自由なんだもの♡」
嘗て先生が言っていた。
支配者となるのなら、生かすも殺すも掌の上で利用し転がせばいい…好きなように生かし、好きなように殺し、そうして自分好みに作り変えて行けばいい。
「戻るぞ……今の話が本当なら、もう邪魔だとか言ってられる状況じゃねえ…仕切り直しだ、何かこう…策を練らないと…」
「あっ、最後に一つ良い？
佐門ちゃんって、思ったより全然大したことのない〝小物〟なのねぇ…雑魚キャラじゃん」
ブチッ…!!
ふと、何かが切れた音がした。
黙っておいて、不本意とは言え大人しく尻尾を巻いて逃げたふりをして、計画を見直し立てていこうとしたばかりに、彼女のさり気無い煽りが、佐門の青筋を切れたてる。
「てめぇ……殺される覚悟は出来てるんだろうな??」
「殺せたら、今こんな風に尻尾巻いて逃げてるなんて発想ないわよね？」
忍商会と敵連合は、たった今…今日を以ってして完全なる敵対関係となり、半蔵学院と焔紅蓮隊に引き続き、忍商会と敵連合の戦争の火蓋が静かに切り落とされた。

２２４話「かぐらとは」

「成る程ね…貴女達が遭遇した忍商会は三人…どれも手練れな忍と対峙できる幹部と言ったところかしら」
　女子会と言わんばかりに、補欠を含めた半蔵学院メンバーと焔紅蓮隊は、一部屋に集まり、其々が体育座り、半安座、割座をして寛ぎ、その中でも知能策略家とも呼べる美怜は、顎に指を当てながら考察を深める。
「私と葛城さんは邪淫乱闘と両舌部露と呼ばれる抜忍と闘い、柳生さんと雲雀さんは邪見心傷と呼ばれる方々と戦ったものの、まるで歯が立たなかったのは何とも歯痒い結果ですわね…」
「し、仕方ないよ…だって向こうは今の今まで誰にも悟られず、色んな忍からの目を掻い潜った指名手配犯でしょ？そう気を落とすことなんて…」
「何言ってんだい！アタイらは全く手を抜いてなかったんだ、それなのに向こうは闘った感じ小手調べだったし、その上逃がされちまった…せめて情報だけでも手に入れたら…!!」
「俺も…雲雀を守ると誓ったのに、あんな体たらくではな……何も言えない…」
「もう柳生ちゃん!!気にしなくて良いって言ってるのに!!」
「…ねぇ、反省会なら後にしてくれる？今更過去の事を愚痴って今何か出来る事ってある??」
　外の世界に通用しなかった――その事実が余程堪えたのだろう。
　斑鳩は勿論、バトルジャンキーとも呼ぶに等しい、強さを求める姉御肌の葛城や、邪見に酷く心を滅多打ちにされた柳生も、悔恨の念が口から溢れる。
　無理もない、彼らがそんな簡単に倒れて仕舞えば、今まで彼らを相手にした忍は今頃生きていた。
　それ程に奴らは修羅場を掻い潜り、暗躍しているのがその証拠。
　故に、美怜は眉をひそめながら後にしろと根強く答える。

「然し、名前だけで分かるのでしょうか…？其方も忍商会のことは殆ど無知なのですよね？」
「そうね…ただ、面白いことに私の推測が正しければ…ある程度の忍の事は予想できそうね」
「今ので分かるの!?」
土方が神妙な声で尋ねると、美怜は目を瞑り考え込みながら、自信という概念こそ満ち溢れてはないものの、ある程度はと軽く答える。
勿論、全てが全て分かるはずもなく、三人と闘い神楽を狙ってることを除いて情報量は足りなさすぎるものの、それでも予想がつくと言う時点で驚きものだ。
「あくまで推測よ？そうね、先ず貴女達が口に出した三名の幹部の名前がそうであるとすれば…敵の数は少なくとも１０人はいる…態々部下やら従業員を連れてこない辺り、幹部が直々に動かなければならない目的があるとすれば、神楽という存在自体を狙う理由は私たちの考える想像を範疇に越える事を想定して動かなければならない…」
「どうして１０人って分かるんですか？」
「『邪淫』乱闘、『両舌』部露、『邪見』心傷…この三つの言葉は十悪業という仏教の戒めを意味表してるの。
淫乱、二枚舌、邪な見方、不正な心として意味成してるのだけど…あの三人と言葉の意味、何か思い当たる節はあるかしら？」
他にも『妄語』『偸盗』『瞋恚』『悪口』『綺語』『殺生』といった悪業があり、１０つの悪を十悪業戒と呼ぶ。
「そういえば…私と闘ってた際も、卑猥な言葉責めをしていましたわ…多少意味がわからない言葉もありましたが…」
多少意味が分からないと発言する辺り、まだ救いがあると言うか純粋と言うか、穢れてない方だろう。
もし淫乱な言葉を彼女が理解していたとしたら、風紀委員の名折れというものだろう。
「二枚舌って…そいやアタイんところも、舌が二枚ともあったな！」
「邪で不正な見方…そうか、俺の事をよく知ってたのは恐らく…」
葛城も柳生も、何処か思い当たる節があるのか険しそうな顔立ちを

浮かべる。どうやら美怜の推測は間違いないだろう。
「貴女達の反応を見た限り可能性は高いわね…。その幹部達が公で暴れ、世間に公表される危険性や素性がバレる情報漏洩もあり得るのにも関わらず、杜撰だ行動に目立つような動き……見返りがないのか、将又敵のブレーンが阿保なのか、それすらも計画に支障のない見え透いた行動なのか……」
「計画と言えば、かぐらちゃんが関係してるとかどうとか…」
「かぐら…カグラ?カグラってあの忍の最高称号のか?」
「うん…何でもかぐらちゃんって呼ばれる子を執拗につけ狙ってたり、かぐらちゃんを守ってる奈楽ちゃんが邪魔だとか…
　私達にも何も教えてくれなくて」
「かぐら?忍商会は確かにかぐらと呼んでたのね?」
「う、うん…」と相槌を打つように軽く頷く飛鳥に、美怜の表情は一層と険しくなる。何やら心当たりでもあるのか、不思議そうに焔は顔を覗かせる。
「美怜、何か心当たりでもあるのか?」
「……もし、彼らの狙いと貴女達の言葉が誠なら…いいえ、だけど神楽を狙って何をしようとしてるのかしら……確かに、世を揺るがす事実は変わらないけれど…」
　何やら一人でブツブツ呟きながら考察を始める美怜に、端から見てた飛鳥は何処か緑谷出久を連想させてしまう。
　彼女の場合は知略家というイメージが強いので性に合うのだが…
「美怜ちゃん?」
「情報がまだ不安定過ぎるし明確な理論や根拠も見当たらない…他に何か情報はあるかしら?かぐらというワード自体が大き過ぎるもの。流石に今のだけじゃ現段階で推測するのは難し過ぎるわ」
「…確か幹部の邪淫と呼ばれる方が『私達がかぐらを知れば、喉から手を出したくなるほど』みたいなことを…」
「それだけ?」
　美怜が確認するように尋ねると、斑鳩を始め他の連中も首を縦に頷く。流石の美怜も今のだけでは推測できないようだ。

「ねぇ、美怜ちゃんはかぐらちゃんの事を知ってるの？口振りと様子からして何か知ってるみたいだけど…」
「……そう、ね」
一瞬、美怜は時計をチラリと軽く横目で見ながら、襖を見たり気配を探るように周りを見渡す。
「……ねぇ、貴女達の他に関係者はいない？今のところ此方を探る探知系統の忍はいないかしら？」
「？どうしたの、急に？」
「かぐらの情報は、本来禁忌なの。と言っても、情報自体が珍しくもあれば、それを付け狙う賊…情報屋やかぐらの存在を追う者も少なくないの。
話を聞くのであれば、貴女達にもそれ相応の覚悟と警戒は必要になってくるわ」
あの美怜がそう言うのだから、恐らくを以ってして間違いないだろう。それにあの忍商会が動き出すほどだ、先ず敵もかぐらを知ってる者と見なして間違いないだろう。
一同はお互いを見つめ合い、何かを察するようにして悟り、頷いた。
「…本来、かぐらとは…日ノ神カグラという、太陽に纏わる神の名を表してるの。一部の地域では、日の神を讃えるための儀式や祭典などが開かれてるわ。
その発生源となるのが、護神の民という名前の村の集落から始まったの。恐らく、かぐらが生まれた場所になるわね」
「護神の民…そう言えば奈楽ちゃんも前に言ってたね。護神の民だって」
慌ただしかった記憶を辿りながら、奈楽が自分達に説明してたのを思い出す。斑鳩に葛城は知らなかったので、ある意味初耳である。
「そう、恐らく奈楽はかぐらを守る転生の玉の守護者の役に選ばれたのでしょうね。神を守る民だもの。村による采配やお守り役などがあるのも不思議ではないわ」
「それでもまだかぐらちゃんと忍商会の関係性が見えないですね…」
「ただ、かぐらは転生の玉から復活した際、幼い子供として姿を表す

の。そこから先、彼女が成長を遂げるのは赤珠を摂取する必要があるの…赤珠には妖魔が体内によって蓄積される結晶…所謂エネルギーの塊と想像してくれて良いわ」
「うへぇ、妖魔の体内にある塊を食べちゃうんですかっ!?ちょっと気持ち悪いですね…」
「あら、人間だって尿路結石や石、歯や髪などが生成されるという稀に奇妙な現象だってあるのよ?そう驚くものでもないわ。
っと、話を戻すわね。そうしてかぐらは成長を迎え、覚醒し、凡ゆる妖魔を殲滅させていくの。所謂、妖魔を倒すために生まれたようなものね。
全ての妖魔を倒すのが役目…何度か、憑黄泉神威に敗れて転生を繰り広げたみたいだけど」
「…よく知ってるなお前?」
「家に本があったのよ。神楽の本は、他の参考書よりも珍しいものだったし、ティオ・ディアボリクスと同等に貴重で価値のある情報だったから、何度か読んで記憶にあるの」
焔紅蓮隊から見れば「何となく納得できる」とした顔をするのだが、その貴重な参考資料やら神楽の情報を保管してあると聞く半蔵側からは美怜が得体の知れない忍として見られてるのは言うまでもないだろう。
「私やベルゼ兄さん達の天敵という大きな印象も受けたし、マークはしてたのだけど…そう、そもそもかぐら自体がこの世に姿を現したのね。
であれば、かぐらを狙うのは自分達の戦力拡大か、或いは妖魔を滅する力を利用したテロ行為による悪事か…将又商売目的か……もう少し明確な理由もない限りは、流石に警戒態勢を整えて強化すること以外、今のところ成す術は限られてるわね」
「流石に伊佐奈の奴もかぐらの事を知ってれば悪事に手を染めようとするだろうし…タルタロスでもアイツ自身口から語られてない以上は知らない可能性もありえるか…」
「動き出したのが今日で初めてというのであれば、伊佐奈は間違いな

く知らされてない……彼が多くを語らなければという路線も考えたけど、今まで闇に潜んでた組織がかぐらを理由に動き出したのなら、忍商会自体がその情報を元から隠していたというのが正しい見方かもしれないわね。

全国指名手配犯が公でいきなり暴れ出すなんて、普通じゃないもの」

「だぁぁぁ!!もう菖蒲は何が何やらさっぱりですぅ!!今考えたってやっぱり難しいんじゃないですかね?!」

「でも考察は必要よ。私たちが忍商会を追ってるという私怨交じりな理由もそうだけど、妖魔を簡単に滅するほどの神に、それを死守する護神の民、そして神楽を狙う忍商会が動き出したという流れであれば、間違いなく何かある」

そしてその間違いなく何かある以上、無視できない。

だからこそ可能な限り考察はするべきなのだ。

それでも菖蒲の言う通り、現段階では考察したところで何も出てこないのであれば、解らず仕舞いなのだ。

「…そう言えば、かぐらは何処なの?」

話や考察で熱中していたのだが、その肝心のかぐらや奈楽が何処なのか、気になり出した美怜は半蔵のメンバーに問う。

「かぐらちゃんと奈楽ちゃんは…奈楽ちゃんにも同行を希望したんだけど、周りの忍達とは付き添うつもりは無いって…」

「あれ本当に何なんですかね、折角飛鳥さんの寛容な心を込めて聞いてるのに!!」

「そう…でも無理ないわ。貴女達も奈楽やかぐらと出逢ったのも今日で初めてでしょう?

そんな誰かも知らない見ず知らずな人間に付いていこうだなんて考えは、余程の考え無しの馬鹿でしかない限りあり得ないわ」

葛城も言ってたが、忍商会にほぼ一日中毎日付けられて、追われてた身だ。そんな彼女が他者を信用するなど余程の場面や経緯がなければ説明が付かないし、周りが敵だと見える奈楽の心境的に同行は厳しいだろう。

「けどそれなら逆に危ういんちゃう？奈楽とかぐらっちゅー子達が狙われてるなら、今も商会側に付けられてるのとちゃう？」
「いえ、そうでもないわ。悪いことばかりではないのもまた事実…これを見て」
日影の至極真っ当な意見は尤もだ。
忍商会がかぐらを狙ってる以上、いつ何処で襲われるか不明だし、また街中でも暴動を繰り広げるのを見た限り、今も奈楽の身が危険なのと、かぐらを奪取されてる可能性は極めて高いほうだ。
だがそんなマイナスばかりではないと美怜はチャンネルを変える。
『えー、現在。京都の棚簿故に謎の敵、または忍と思わしき輩が公共の場で暴動を繰り広げてた模様。
上層部より警察はより警戒態勢を高め、ヒーローを派遣するとのこと。また善忍を始めた忍達もヒーローと協力体制に慎み励むと述べられております。
犯人は未だに不明、目撃者によると現段階では二名が行方を絡ませてるとの事であり、捜査を行っております。続きまして――』
旅館に設置してあるテレビのモニターには、ニュースキャスターが淡々と今日起きた京都の騒動事件を告げている。
写真や場面を鑑みて、間違いなく斑鳩と葛城が忍商会を食い止めてた場所で間違いないだろう。
「これは…私達がいた場所！」
「このニュースと何が関係あるってんだい？」
「私たちがいた場所とそう遠くないの。未来も覚えてるでしょ？あの場面を――」
話を振られた未来は一瞬だけ目を大きく見開き、あの時のことを思い出す。
過去に自分を虐めてた連中から遠ざかるように避難（美怜が一方的に連れて行った）した場所で、街が爆発した光景を思い出した。あの時は結局、光山優に心配され、駆けつけに行く事が出来なかったのだが。
「アレって、忍商会達の仕業だったのね…！」

「ええ、半蔵の言う情報が正しければ、辻褄が合うわ。それに問題なのは公の場で姿を現した以上、警戒警備が強化される上に彼等の行動も下手すれば抑えられる可能性がある。
更に付け加えれば、彼等の行動パターンも推測の域に達せれるとしたら、未然に防ぐ手もあるわ」
つまり美怜が言いたいのはこうだろう。
公共の場で姿を現した以上、下手な騒動は余計に忍商会自らの首を絞める事に繋がる。そうなれば奈楽の襲撃もかぐらの争奪も安易ではなくなると。
「うーん…じゃあ今は大丈夫、なのかな？」
「公の場に出た以上、隠す必要がないならって事で騒動を起こす可能性は捨てきれないけれど、態々警備を強くするって警報が流れてるのに、それでも学習能力がないように無闇矢鱈に暴れる馬鹿は居ないでしょう？可能性がある時は、無茶をしなければかぐらを奪えないと思った時」
「結局振り出しに戻るんじゃないですか！」
「かぐらと奈楽の身の危険が低下しただけで、誰も絶対に安心できるなんて一言たりとも言った覚えはないわ。
どの時点でも狙われてる以上、危険が孕んでるのは確か…それで？奈楽もかぐらも何処にいるのか全く分からない挙げ句、手掛かりもない以上私達に何をどうしろと言うの？
だから現状尤もベストなのは…様子を見る。これに限るわ」
そもそもの話、奈楽やかぐらという人物が何処のいるのか分からない以上、下手に動くのは返って危険を招く。
既に飛鳥達は商売敵…早い話障壁として見られてる。闇に生きる住人が、その商売を邪魔され恨みを買ってしまえば、自身の身がどれだけ危険な状況に晒されてるのか安易に想像がつくもの。
焔紅蓮隊も例外ではなく、少なくとも伊佐奈という交易商売、客を潰した以上、厄介な目で見られてるに違いないし、そうでなくても警戒しない事に越したことはない。
ならば一先ずは状況を把握する為にも、事態の変化を観測する為に

も、待機して様子を見るのがベストだろう。
現に半蔵学院のメンバー達も、霧夜先生からの指示がない以上、下手に動くのも不味い。
「さて、この話はこれで終わりね。お疲れ様、お開きと行こうかしら」
「ええ!?今のでもう終わり!?」
あっけない、と言わんばかりの雰囲気を作り出すように、美怜はパタンと掌同士を合わせると、未来は目を丸くしながら驚嘆の声を叫ぶ。
実際に未来だけでなくその場の数人は彼女の言葉で同じだろう。
「あら、これ以上考察することなんてある?寧ろ此方としてはかなり収穫があったじゃない。
忍商会が京都に潜んでいた、かぐらを狙っている、それが分かっただけ重畳……そして、姑息や汚い手、手段を選ばない残虐非道な連中が、かぐらのみ敢えて生かして奪おうとする以上、逆にかぐらを傷付けられないことを裏付けてるのも分かったし。
それに、仮に何か分かったとして、忍商会という組織を潰すのだって今の所現実味がないわ」
「おいおい待て待て、私達は相手が敵うとか敵わないとかの問題なく、忍商会を打破すると決めてるんだ。今更弱腰になんかなれるかっ」
「そう思うのなら貴女はそうで良いわ。私は勝ち目のない馬に金を賭けようとは思わないし……ただ、情報や相手の素性を少しでも知るだけでも、戦況は大きく変わるわ。
焔のように、常に勝たなければならないプライドさえ捨てれば、だけどね」
忍商会相手に自分達が勝てる保証は不明だ。
何しろ相手は幾多の修羅場を潜り抜け、死の美を交え、生き残った闇の住人達。そんな犯罪者達を相手に、まだ学生という子供な自分達と渡り合えるかといえば、勝てない確率も捨てきれない。
自分達の想いがどれだけ強かろうと、それを台無しにするように、理不尽というものは襲う。
ただ、現実味がないと言っただけで絶対に勝てないと言わない、勝

機が薄いとも口にしない美怜は、どこか飛鳥達や今の仲間達に想うところがあるのだろう。現に焔と軽口を叩き合う程度に心に余裕があるように見える。
「うん…でも、美怜ちゃんの言う通りだよね…私達が今それを知って、どうにかにしなくちゃってもどかしい気持ちがあっても、無闇に探して結局分からず仕舞いでしたって言うのも、効率が悪いし……待つのも大事ってなると、精神的な修行になるのかなぁ？」
「あら、飛鳥は随分と物事を良く見て捉えてるのね。良い心掛けだわ。序でに私達のリーダーにも「視野を広めろ」って言ってくれるかしら？」
「何を言ってるんだ美怜！私はいつでも視野が広いだろ？お前達もそう想うよな？」
「「「……」」」
　然し返ってくる言葉が見つからず、ただただ鉛のように重たい沈黙が続くのは、その場の空気から察せれるだろう。
「焔ちゃん、もう少し視野を広めた方が良いんじゃない？」
「やめろー！お前にだけは言われたくないんだよ飛鳥ぁ!!」
「まっ、ウチのリーダーはこんなものだしねぇ…所で雲雀、久し振りの懐かしき再開も含めて、一緒に夜のお遊びしましょう？♡」
「待て！雲雀は貴様みたいな不埒な輩に渡さん!!」
「柳生ちゃんも春花さんも落ち着いて!?ねぇ、美怜ちゃんからもお願い!!」
「あ、丁度良いわ雲雀、私も貴女の事について気になる事があったのよ。お互いの交流を深めるためにもコミュニケーションを取りましょう？」
「あっはは！雲雀さんはやっぱり大人気ですねぇ～…それじゃ菖蒲は葛ねえ様と熱い夜を…♡」
「うわっ!?お前は風魔達と一緒の部屋で寝るんだろうが!!夜這いなんかするんじゃねえ!!」
「葛城が逆セクハラされて嫌がっとるわ。セクハラするのは好きなのに…何なんやろ。明日は槍でも降りそうだな」

「日影も美怜も相変わらずねぇ～…それにしても、半蔵の補欠メンバーと言ったら総司達もいたけど、今頃あの子達元気にしてるかしら」
「個人的には千歳さんが気になりますわね…同じ貧民街育ちでも、私達の故郷も良く思ってませんでしたし……それに、私達が居た頃もかなり心を塞ぎ込んでましたから」
「全く…皆さん直ぐに騒ぎ出して…」
「あっはは、まぁまぁ良いじゃない斑鳩さん。今日は無礼講ってことで、折角焔ちゃん達とも会えたんだし、もっと募る話はいっぱいあるんだしさ」
不穏な空気から一変、解放されたかのように楽しげに、それこそ女子会のパーティーのように、明るく活気な空気に、傍観者である飛鳥はそんな幸せな光景につい微笑んでしまう。
これから、もっとこう言うのが増えれば良いな。
これから、ずっとこんな幸せな時間が続けたら。
誰よりも人一倍に他者の幸せや思い遣りのある飛鳥にとって、一番幸せなのは誰かの笑顔を見ること、守ること。
そんな彼女達と、まさか決別する時が刻一刻と迫り来るだなんて予想だにしないだろう。

２２５話「一旦、全部、絶望に、染めて」

特急列車で京都から東京に着地した霧夜は、急かす想いを胸に留めながら、〇〇地区の〇〇〇会社と称した聳え立つ高層ビルへと速足で駆け走る。

善忍東京本部の高層ビル…此処にはいつも苦い思いしかしてない為、常に何が起きるか、どの任務が下るのかはある程度腹を括らねばならないのが、胃に痛い。

此処に訪れたのは以前、林間合宿襲撃後による雲雀が敵連合に拉致された後の責任者として出席した時以降だ。どうにかしてオールマイト引退に伝説の忍・半蔵の決死の行動によって起きた忍の存在による明るみ、更に一人でも実力の付いた忍を社会に派遣させる一心もあり、霧夜の処分は何とか免れたのだが、やはり正直言って良い思い出が一つ足りともないのは、致し方ないのかもしれない。

「国立半蔵学院忍学科、霧夜――ただ今戻りました」

数十人もの上層部の人間が並ぶ中、広い居間の中心に正座で頭を下げる霧夜に、一同の上層部は口を開く。

やはり高圧的な空気の中、ただ一人ポツリと取り残された自分の周りを囲む偉人達、いつでもこの状況には慣れないものだ。

薄暗い部屋の中、幾本もの立てられた蝋燭の灯火が揺らぎ、上層部達を照らし出す。

「霧夜よ、態々呼び出してすまないな……京都での忍学生の学業に励んでいると言うのに」

「いえ、勿体無きお言葉…誠に有難うございます…」

上層部の一人が口に出した労いの言葉に、感謝を述べる霧夜。

実際、霧夜の事をどう思ってるかは知らないが、少なくとも心に思ってない言葉でも、言ってくれるだけ有難いと思えてしまう辺り、

自分もまだ忍なのだと殊更意識させられる。
「呼び出したのは他でもない…知っての通り、京都ではかなり物騒な事件が起きている。
突如として闇に潜んでた忍商会の明るみに、神楽と呼ばれる子供とそれを守護する奈楽…更には表沙汰にはされてないが、京都に妖魔が二体現れた。不測な事態に加え、世界各地で妖魔が現れてるのは知っておるな？」
やはり、全てお見通し…か。
そう心で吐露しながらも、上層部達に情報が伝わってることに、表面上では冷静さを装ってはいるが、驚いている。
忍商会に関してはメディアでは何かしらの破壊行動を引き起こす敵か忍の何方か…など曖昧な結果を伝えてはいるが、裏では既に情報が取れてはいるし、邪淫乱闘も両舌部露も忍達から既にマークされている。
但し、唯一霧夜がこの場で初めて耳にしたのは、妖魔が二体京都に現れたという事だ。
「はい…然し、妖魔が現れたとの報告は初耳でして…」
「ふむ…であればまだ被害が出ていないという事か……何方にせよ民間人に被害が出ず穏便に事を済ませれば重畳。
忍として妖魔を見かければ見境なく処分して構わん。故に、京都では三度となく事件が相次いでる……霧夜よ、お主も始め、半蔵学院及び選抜補欠メンバー、計９人の忍に忍務を与える」
「なっ…!?」
上層部の発言に、流石の霧夜も絶句する。
今回の件、只でさえ忍商会の組織を止めることさえ上忍…外の世界で修羅場を潜り抜けた者達が向かうのが妥当。人員も割けており、忍の人材や人手不足なのは今のご時世仕方がない。
オールマイトの脱退、半蔵の明るみにより、犯罪率が日々上昇してる今、忍の風評は勿論のこと、今まで以上に手厳しく忍務の日々が続いてるのも百の承知。
然し、さりとて然しだ――敵連合との接触だけでなく、飛鳥達にま

た危険な目に合わせろと言うのだろうか。
抑も飛鳥は半蔵学院の選抜メンバー筆頭にして、同時に連合からも命を狙われてると聞く。
仮免試験に合格したからと言って、大人の世界で対峙する敵を、態々相手にしろと言うのか。幾らなんでも無茶振りすぎる。例え忍だとしても学生の身……月閃や蛇女とは訳が違う。
それだけに留まらず、今度は選抜補欠メンバーと来た。
一年生の新顔達でありながらも、彼女達の実力は仮免試験に合格できる程の実力はあるものの、正直修羅場を潜り抜けたことさえない生徒達に、忍商会の相手が務まるとは考え難い。
そして妖魔討伐による忍務…忍商会に加えて妖魔殲滅など、流石に今回ばかりは無茶な一線を超えている。
其れを忍の社会に生きる上忍達ではなく、卒業もしてない忍学生相手にこれほど無茶な忍務を背負わせるのだろうか？
「刻一刻と猶予を争う事態なのだ……妖魔に関しては未だに詳細こそ不明であるが、何人かの忍が調査に当たってる。
なに、お前達だけでなく他の忍達にも既に忍務は与えている…全員とも二つ返事で引き受けてくれたよ」
「然し…！幾らなんでもこればかりは…流石に無茶が過ぎるかと……それに、半蔵学院の忍学生の中には敵連合の接触、及び拉致された者もいます。穏便に済ますにしても…」
「分かっておる。
それに情報によれば敵連合は現在、死穢八斎會との抗争後、姿を眩ませておると聞く。暫くは潜伏し、穏便に行動をしてるのではないかのぉ。現に、彼奴等もブレーンを無くした今、行動に制限がある。連合と商会の接触も現在見かけない…であれば、今こそ猛攻を叩き込み、制圧するのが一手。一網打尽じゃ」
可笑しい…妙に引っかかる。
一見、仰る事は分からなくもないのだが、それを機にした理由にはならない筈。
何より本当に京都に上忍達が来るのだろうか？いや、時間が起きて

から事は動き出すもの。ひょっとしたら今は京都には何十人ものの忍達が調査に回ってるのかもしれない。
「霧夜よ、これは命令じゃ。酷なのは百も承知…第一、忍が我々の命令で動くのは至極当然なり――それが例え半蔵を始め忍の存在が明るみになろうと、根本的な道理は変わる事なし。
仮にだ…もし今回の件、手を抜けば大規模な被害が続出するだろう。どの道、生きる為にも忍務を受けなければなるまい」
「……つまり？」
「今回の件、妖魔や忍商会の件もそうだが…かぐらについて…可能な限り話をしよう。そうすれば、お主も納得するだろう」

「マスター…只今戻りました」
忍商会との触発を後に、黒い靄を纏わせた彼女――黒紫粒子は冷血な静かな声で現状報告するかの様に現れた。
現れた黒紫に低い唸り声を鳴らす憑黄泉のワイバーンを腕で制しながら、漆月は振り返りもせずに軽く相槌を打つ。
「どうだった？向こうの本拠地は何か知れた？」
「残念ながら特に…警備として幹部が二名配置しており商会のサポートアイテム、並びに忍商会全体の組織について…可能な限り最善は尽くしましたが…」
「あーあー…無敵の個性持ってるのに勿体なー…折角元軍人の上にポテンシャルもあッたから買ってあげたのにさァ…」
心底残念そうに聞こえるが、内心では割と分かり切っていた様で、特に期待をしていたとか、そういう訳ではないらしい。
精々何かしら得さえしていればラッキー程度、相手は腐っても今の世を生きてきた手慣れの強者達。自分ならまだしも、他の連合メン

バーが相手では楽に勝てる保証はないだろう。
「…確かに、私は破壊や暗殺だけでなく、近接戦闘と隠密行動には非常に長けているのですが、その内の一人がサポートアイテムをかなり濫用しておりまして…苦渋な判断ですが、逃げの選択を選びました」
「あぁ、今ので納得した。アイツが居たのね、そりゃ分が悪いわ」
漆月はどう言う訳か、裏社会に生きてる大体の忍や敵の素性を手に持っている。凡ゆる面に置いて隙が無く、予め情報を頭の中に入れてから相手を転がす戦略は、何処と無くオール・フォー・ワンに似ている…が、然し記憶が戻ってからの漆月にしてはヤケに知りすぎている気もする。
「そう言えばマスターは裏社会の人間の素性まで詳しいのですね。以前、私のことも前々から知っていたかの様な口振りでしたが…」
「自称2代目のあの娘に頼んだからね～…普段、いえ。本当なら裏社会の人間の名前なんて明かされないけど、それさえも簡単にインターネットや情報収集力で集まれちゃうんだから、本当に今の世の中は便利だわ～」
成る程、つまり協力者がいたのか。そう心の中で納得する様相槌を打つ黒紫は、同時に2代目と名乗る人物に不思議な感覚を味わう。
だとしても、一人一人の素性などは戸籍記録や出産、個性リスト等念入りに調べなければ解らないモノだと思うのだが。其れさえも可能にしてしまうとすれば、ハッカーか政府の人間なのか。
まだまだ彼女の事に関しては解らない事だらけで、決して掌の内を見せようとはしない。それが例え敵であっても、仲間であっても。
今にして思えば、敵連合のメンバーと離れてから漆月は仲間に自分の気持ちや本音を言うことも少なくなってきた。其れが単に信頼してるからか、はたまた本当は仲間とさえ思わず駒なのか否か、彼女がどんな気持ちなのかさえも不明のままである。
「それに、面白い奴も商会に紛れ込んでたみたいだし…これは高みの見物よねェ…。
所で、ミストルティンはどう？」
「えぇ、手筈通りに動いています。然し宜しかったのでしょうか？折

角妹に逢えたというのに、彼女にあんなことをさせて…」
「は？何？私のやってる事が愚策だって言うの？」
「いえ！そんなつもりは毛頭ないですよ……ただ、本当に上手くいくのかと…」
　ミストルティンに伝えた仕事の内容としては、ある種として敵連合に大きな貢献を担い、または同時に危険なリスクが付くモノだ。正直、うッかりして失敗する…と言うよりも、向こうの厳重なセキュリティを突破できるのかという疑問が湧き上がる。
「安心なさい。あの娘達はね、元々私を模して造られたようなモノ。クローンッて訳じゃないけど、脳無の原理と同じ仕組み。」
「脳無…えぇ、詳細は聞きました。私は療養中でしたが、ＵＳＪ襲撃からして存在が認知された改人脳無。
　元々異形系の敵という浅はかな認知でニュースに流れていたモノでしたが…今となっては」
「複数存在する謎の敵。敵連合の切り札と言われてるけど…ふふ、真なる切り札とは複数存在するモノ。この子達も充分な切り札とも言えるわ。それに、脳無はもっと前から存在してるわ。ただ先生と黒霧のお陰で隠されていただけ」
　脳無とは、個性を複数与えられた改人として名前が知れ渡ってはいるが、詳しい詳細は不明だ。況してや脳を露出させながらも心も意志もない化け物。そんな改人が処刑執行人達と一緒というのだから、もっと何か…隠された秘密があるのだろう。
　一方で漆月の言ってた切り札である憑黄泉は脳無と同じく複数存在しており、生態系含めて謎多く、故に複数の能力を所持してるという。
「然し漆月を模して造られた…という事実は俄に信じ難いモノですね。彼の方からは不快感しか湧き上がらなかッたですが…」
「元々忍を殺す為だけに改造された子達だもん。そして忍を徹底的に殺すためには妖魔をも凌駕する程の肉体を、少しの善意も寄せ付けない様な精神を、そうして彼女達はマスターピースになれた訳」
　超常黎明期。陽花を失くしてからの日本は深刻な程にオール・

フォー・ワンの魔の手は染まり、より根深く支配を広げていった。
然し先生には忍の手駒が存在しなかった様に、全ての忍はオール・フォー・ワンの敵だった。
それもそう。何せ抜忍だろうと弱味を付け込もうと、大体の忍は人間を辞めている。弱味を握られても、圧倒的な実力を見せ付けようと、自身の配下に当たる敵を注ぎ込もうと、結局は消化不良戦。
単に駒としての戦力は減り、時間は潰え、自分の計画を狂わせるだけの厄介なモノ。例えるなら自爆装置を抱えた見返りを持たない人間が特攻してくる様なもの。
もし、そんな忍を専門に殺せる様な使い用のある道具があれば？忍を仲間に出来ないのであれば作るのはどうだろうか？
製造には脳無を通して知り合いのドクターがいる。
忍の死体やサンプルを提供し、より素晴らしい傀儡はできないだろうか？
そう言った発想と、ドクターの知的好奇心によって造られたのが、人ならざる、人の形をしたバケモノだという訳だ。
「そして私の中に眠る憑黄泉を鍵として、姉妹の様に造られたッてわけ」
幼い頃に憑黄泉を召喚させる特訓を受けていた漆月は、無駄に産み出された憑黄泉をサンプルに研究が行われ、憑黄泉による四姉妹の人体実験を行われた。
…とは言っても、末妹の子はよく覚えてない。私の中では三姉妹しか居なくて、もう一人は存在しなかったと思うけど…。
ミストルティンから聞いた話だと、灯台という処刑少女なのだが、全く記憶にないのだ。
こればかりは記憶障害とか、オール・フォー・ワンの個性による『記憶操作』という『記憶食い』と『種』や『電流』を組み合わせた個性とは全くの別物。
本当の記憶がない、ということは…恐らく私はその頃は……
「……まあ、その話は追々と話すわ。話すにしても、憑黄泉の生態とか色々話さなきゃならなくなるし…。かなり面倒な事になる」

憑黄泉の生態系はある程度把握してるとはいえ、それを無知な人間に話しても脳で全て一から十まで理解できるのかと言われれば難しいだろう。
更に憑黄泉という存在自体が禁忌にして、忍以外が知れ渡ってはならない情報だ。無闇矢鱈に公開するのは危険だ。
此れは善忍とか悪忍とかどうこうの話じゃ無い。命を狙われてるから問題ないと言う意味でもない。
いつ何処で誰が聞いてるか分からない以上、下手に口を滑らせてしまうのは愚策。
佐門に対してはあれだけ話はしたが、処刑執行人となれば少々話は別となる。余程の事がない限りは大丈夫だろうが、ドクターに対する情報への行き先にもなってしまうからだ。
「所でマスターは何を調べていたのですか？半蔵と焔紅蓮隊…でしょうか？私は面識が無いため、如何程の実力が備わってるかは不明ですが」
「あぁちょっとね、気になるニュースとか色々…。ああ、そうそう！それにさっき弔から連絡が来たわ。八斎會との交渉が済んだから、今一度集合して話がしたいッてさ。アンタはまだ合わせるのには実が熟してないから…その間別の仕事を頼もうかしらね」
漆月は端末の電源を入れて、連絡用のチャットを見返しながら答える。死柄木が死穢八斎會若頭、治崎との交渉を終え、皆の安全確認も兼ねて報告事項があるとの事。
大方、弔の考えなら一時的に此方の戦略を貸し出した後は、八斎會を利用して欺き、漁夫の利計画でも始めようとしてるのかなと予想がつく。
弔は誰の言いなりにもならない。
先生でさえも、今は離れて独り立ちしようとしてるこの頃に、誰かの傘下に成るなどはあり得ない。そんな弔がもし、交渉成立として八斎會に与するというのなら、何か裏がある。
裏があるからこそ、心の底から折れて身も心も献上するとは考えられない。ちょっと考えれば解ることだ。

「別の仕事…ですか？」
「そう。ちょッと厄介だけど…音声テープで届けるわ」
あの漆月が態々録音した音声テープで届けてまで語る程なのだから、何かしら重要な任務なのだろう。
事実、この任務が壊れゆく常識へと変貌し、漆月がより悪の象徴へと輝く前身に、飛鳥を徹底的に精神的に追い込ませ、独り立ちさせる羽目になるとは思わず、それは遠い様で近い様な未来。
「了解です。私はマスターに救われた身ですから、と言っても…あの場には荼毘とスピナーがいましたし、ある意味彼らも命の恩人でしょうか…？」
「そう思っても良いけど、特に荼毘は気にしないんじゃ無い？アイツ、どういう訳か女が嫌いらしいから」
あの時、犯罪者隔離施設の病棟による廃墟と変わらない、生と死を彷徨う植物状態の自分を助けてくれた。
その経緯や理由がどうであれ、救われた命…その為にも漆月に、新たな主人に尽くそうと誓った。
それに聞いた話によると自分のいた軍隊組織は壊滅したらしい。組織の仲間や手下は全員死刑…時たまにタルタロスに送られたとも聞く。それも残りの情報や犯罪による隠蔽された事件…多すぎる犯罪リストを洗う為に生かされた捕虜の様なモノだろう。
何方にしろ、連合以外に居場所が無くなった自分としては、生かされてる以上、まだ自分を必要としてくれてるのなら好都合だ。
それにしても荼毘が女嫌いというのは何気に初耳だ。人によッて特定の人種を嫌う者がいるのは分かるものの、ならば漆月と一緒に同行してたのは何故だろうか？
「命の恩人といえばもう一つ…あの時は言い忘れてたけど……アンタが意識不明で入院してた重罪犯が集う長期療養型刑務所病院――『邪空想病院』。とある大病院の院長が医療ミスでアンタを植物状態のまま犯罪者病棟隔離施設へと追い込ませたんだけど、アレね…間違いじゃないんだけどねェ…追記で言っちゃえば大分変わるのよ」
「…と、言いますと？」

「アンタを野放しにしたくない…プラスαに加えて、医療ミスによって資金が発生される事から、あの病院は正に棺として充分な役目を全うしていたわ」
　医療ミスによって資金が発生される？と言う点に大きく困惑の芽が生まれる。まだ金を利用して失敗を消し世間に公表しないと言う点は大きく理解できる。
　だが敢えて失敗した事により金が増えると言う点は大きく意味が分からなかった。例えるなら、まるで誰かが失敗を望み、それに大金を注ぐかのように…。
「だけど其れは必ずしも裏話があってェ…実は大病院の院長には協力者…強いて言うなら友人関係を結ぶ医者がいたのよ。其れも院長……で、その院長がアンタの医療ミスに大きく興味を持って、口封じとして敢えて金を握らせてたの。半分…黒柴粒子そのものが重要だったのかしらね。それも、身体が動かない仮死状態のアンタを」
「……何を、言ってるのですか？」
「早い話私たち連合のドクターが、アンタを狙ってたわけ。彼処の大病院も元々、ドクターが買い取ったものだし」
　良からぬ新事実が、心臓に突き刺すように露わとなる。
　連合のブレーンとして円滑に物事を進め、裏の支配者として名を馳せたオール・フォー・ワンの右腕にして、先生の治療と共に脳無の製造に携わる重要人物、ドクター。
　未だに死柄木弔と漆月を始め、音信不通故に連絡手段もなく、全てが殆ど謎に包まれてる人物。
　そのドクターが黒柴を狙っていた、という身近な事柄に表面上は上手く冷静さを保てているが、動揺は隠せない。
「何故…私を？」
「上手くは言えないけど、先生もドクターも脳無を作るのには丸太となる被検体が必要で、その為にも犯罪者の素体はうってつけなのよ。そして国際テロリストとして有名なアンタが不慮な事故で植物状態になってました…と、聞けば死体好きなドクターも喜んでアンタを欲しがるワケ。まっ、小さい頃に私はドクターから脳無を借りてテスト

をしてたこともあったから、その際に詳細を知ったんだけどね」
成る程…だから邪空想病院の居場所を漆月は知っていたのか、と内心納得するも、一歩間違えれば自分自身も利用されてるか、或いは先生の手によって改人に成り果ててたと考えると何とも難しい話だろうか。
「…マスターは、幼少期から先生やドクターとはお付き合いが長く？もし話しても良いのなら、マスターの幼少期の頃の話など是非ともお聞かせを…」
ドクターという人物に多少の嫌悪感が湧き上がるが、場合によっては考えさせられるものもある。
もしその脳無とやらのサンプルが、元々漆月の為にとあれば、理由はどうでアレ救われた身としては多少なりともマシな理由になる。…とはいえ、正当化にはならないし正直な所良い理由にはならないが。気持ち的な問題だ。
そんな黒柴に「私の幼少期ィ…？」と問われ小首を傾げながら、暫し沈黙が続いた後…。
「……私はね、幼い頃から疫病神だと罵られ、生きる事を許されず毎日迫害を受けてたわ」
だからこそ、悍ましい過去を口から出すというのは、通常の人間であれば相当な覚悟と勇気が必要だろう。
況してや、記憶になかった彼女からしてあの頃の自分は、反吐が出そうなほどに悍しく、抹消されたいものだったから。
彼女の真剣な表情とこれまでにない口振りに、黒柴の視線は固まる。これは…仲間にさえ明かしたことのない情報だ。
「とある超有名な門家に生まれてね、最初の頃は良かったわ。そう…最初の…今となっては吐き気のする下らない日常……親代わりとなった姉が毎日私を守り育ててくれた」
だけど、姉が死んでから独り身となった妹は、忽然と裏切るように、上層部の人間が雇った忍達が総出で刃を剥き出した。
「だけどね、そっからよ。『天竜衆とオール・フォー・ワン』がお姉ちゃんを殺してから、事態は一変。私の事を知ってる上層部は邪魔だと

思ったのでしょうね。女子供とか関係なく私に罵声を浴びせ、殺意を向け、挙句に始末しようとした。不思議なもんよねぇ…あれだけお姉ちゃんを酷使してたのにも関わらず、いざ都合が悪くなれば守り育てた姉の想いを踏み躙るように蹂躙し、妹を殺そうとするのだから。

怖いわよねぇ…お姉ちゃんは何でも言うこと聞いた。辛いもの、現実の目の当たりに出来ないもの、それでも姉は…ある相棒と共に苦楽を切り抜いた。そして、認められた。全てを純粋な力で――だけど、そんなものはその場凌ぎにしかならない。私と言う個人は別…最初っから、私と言う異分子を省きたくて仕方がなかった……だから、姉は殺されること自体が必然的な状況へと追い込まれた。

これが、あくまで序盤のお話…♡」

「何故、マスターは自分の姉が殺されたと言うのに、そんなに嬉しそうなのでしょう？」

苛立ちと同時に、不思議そうに首を傾げる黒柴。漆月は腕を組みながら「さぁ？何ででしょうね？」とスッとぼける様に言葉を濁す。

普通、家族を失えば怨嗟か復讐心に燃え上がるのだが…彼女からしてそんなものは、些細なものでしかないのだろう。

「毎日が地獄だったわ…今思えば、あの頃の自分が何度も死を経験したから今があるのかしら。

裸足で逃げ、小石を投げられ、悲惨な暴力や仕打ちを受け、爪も剥がれ、土や木、残飯を食いながら途方に暮れ、絶望的な毎日の中、貧民街を彷徨ってた私に手を差し伸べてくれた人が居たわ」

『誰も君を救けてくれなかったね、天咲魅影くん。可哀想に、生きてるだけで世の中の嫌われ者となり、誰も彼も君を受け入れてくれる者は誰一人とて居なかった』

何の危害も、害意も感じない男は、手を差し伸べる。

『善忍が救けてくれるから、悪忍は善よりも寛容だから！

でも、君だけは誰も救けてくれなかったね。君だけは誰も受け入れてくれなかったね？

何故、誰も君に手を差し伸べてくれないんだろう？
安心しなさい、何も悪くない』
そして、手を頭の上に置き撫でると、男はそっと優しく抱きしめてくれた。
背中に手を当て、優しく、我が子のように撫でて落ち着かせようとする。
先程までの仕打ちとは打って変わって、地獄のような生活の中、初めて救けてくれた。
初めて、手を差し伸べてくれた。

それが死柄木にとって、そして私にとっての先生
嬉しさの余り、頭の中が真っ白になって、訳わかんなくなって、でも最後は思いっきり泣いた。
涙が止まらなかったし、優しさの有り難みが本当に解ったよ。

「健康の有り難みなど、病気にならねば解らない。人は失くして初めてその有り難みに気付き、感謝する。
だけど…私にとって先生は姉の仇……恨むのが筋なのでしょうけど。ふふ…今となっては別に復讐とか、私怨とかどうでも良い。あるのは、先生を踏みにじりたかったのに、それを台無しにされたという憤怒に、本当の意味で涙を流したわ」
だから、あの時…先生を奪ったアイツらは許さないと――感謝の恩を返すために、全てを奪い支配しようとしたのに、それを台無しにした平和とやら、希望とやらに、心底腹が立った。
「だから、『コイツ』は私を選んでくれたんじゃないかって最近になって思うのよね。私と言う個の存在が、どう言う形で在れど産まれた瞬間から歪みを持ってるんだって。
私も、弔も、先生も、そして…佐門ちゃんも、陽花も――」
そもそも、歪んでなければこうはならない。
イカれてなければ社会に追い出されてなどいない。
環境が、人が、感情が、心が、全てを狂わせるのなら、最初っから

歪んでいた自分は紛れもなく狂ってるのだろう。
だからこそ、面白くて楽しい。
「…自身を育てた姉を、救いの手によッて殺されたと言うのに……マスター、貴方様は何処までも歪んでるのですね」
「黒柴粒子。世の中にはね、そんな常識さえ通用しない輩なんてごまんといるのよ。アンタ達が思ってる以上に、世の中さえも酷く歪んでるわ…いえ、平和という概念があるからこそ、必ずしも異分子というものは存在するの。
私はそんな平和や希望、世の中の幸せや光に当てられない化け物なの。アタシだけじゃないわ…ふふ、今もまだまだ沢山いるわよ？忍の社会という型に外れたならず者なんて…♪私はね、そんな生きてる事でさえも許されない人間が大好きなのよ」
其れは自分と同じ類の者を見て同情できるからか、
それとも同胞として、仲間として迎えやすいからか、
イカれた者同士で話が通じるからか、
過去に先生が支配していたように、支配するのが容易いからか、
否――彼女にとってそんなものはどうでも良い。
本当はそう言う人間が側にいるだけで、コイツも私も楽しく喜ぶからだ。
だから私は色んな人間の悪意が大好きで、幸せを壊そうとする輩、私欲を満たそうとする者、今を変えようとする人、人間という皮を被った化け物も、私は万遍なく受け入れる。
「じゃあ今どうするべきか？私達がするべき事は？
平和の象徴や忍の象徴が不在の中、今をのし上がろうとする抗争が生まれ、平和という概念が憎しみや争いを産む要因となる。それを絶望の種としましょう…現段階では絶望の種により犯罪も抜忍も急激に増えている……少しずつ、平和が壊され絶望に汚染されていく。それでも、絶望という状況下を抗おうとする者が生まれるのは必然。
じゃあ、一旦全部絶望に染め上げましょう――一人残らず、何もか

も全て」

今この瞬間に生きとし生きる全ての生命に対する宣戦布告。

全てを根絶やしにせんと言わんばかりの語らい。

子供の絵空を見上げるような童心に帰るような。

無茶無理無謀な、でもって反逆者には欠かせない心。

背景に描かれるのは、京都で今も楽しく旅館を満喫する半蔵学院のメンバー達。

同じく嘗ては超秘伝忍法書の争奪戦に、伊佐奈を潰した紅蓮隊。

女学館の寮内で、平和な学園生活を送る月閃女学館の生徒たち。

苦楽を共に過ごし、悪の誇りを掲げんと修行に明け暮れる蛇女子学園。

先程撤退しながらも、金閣寺に戻り作戦を練るべく幹部を集め会議を開く佐門達忍商会のメンバー。

雄英で楽しく、夢を追い続け、日々努力をして過ごす金の卵達。

脱出不可能なタナトスで、生という実感を捨て完全拘束と監視を繰り広げられ、拷問や死刑等が行われる罪人達。その中には黒佐波は身体全身を特殊な繊維の布と金属、目隠しを受け、四肢を固定され自由を奪われてる始末。

同じく特殊拘置所で赤外線のセンサーに数々の設備で監視を続けられながらも、今か今かと不敵な笑みで何かを待つオール・フォー・ワン。

そして…憑黄泉に殺されかけた紫を『助けた』と思わしき純白な印象を持つ妖魔が、何処かへと向かっている。

死んだと思わしき両備と両奈の姉にして、そんな彼女を救い出した名もなき登場人物、杏奈と両姫。

全てを飲み込む真っ暗闇な夜空の上で光る満月にて、円卓会議を始めている天竜衆。

同じく最高上層部にして若手、深い蒼色の長髪をたなびかせた姫彪と、その隣を歩む黒いボロ布のコートを羽織る謎の人影。

日本に帰国するべく飛行機で小説を嗜む女性は、現最強のカグラに

して、エンデヴァーと同じくｎｏ．１の名を継ぐ新たな忍の象徴の卵。
街中で今も談笑を楽しむ学生達や、商談に赴くスーツのサラリーマン、女性同士が笑顔で話し合う日常の光景。
「後はもう一人のリーダーが全部壊してくれる。だから、全部壊して、全部絶望に染め上げる。
全てが干からびた荒野から、生い茂る天国の様な花畑になるように、アンタにも約束してあげる。
望む物も、夢も、希望という名の絶望も、全て手に入る。生涯、忘れられない想い出になると思うよ」
戯言？上等だ。
「そう、私達は抜忍も敵も命を賭けてでも、戯言を実践する存在よ」
飛鳥達を始めた忍達が、命懸けで忍の道を極めるのなら
漆月達を始めた忍達が、命懸けで己の私欲を極めるのだと
振り返ってみよう…今まで漆月と関わり、時に敵対した者達はどうだった？
鎌倉は嫌いなモノを壊したいが為に、たった一人で忍学校を壊滅に追い込ませ、抜忍という道を選びながらも己の私欲を選んだ。
蒼志はとある人物に認められたくて、振り返って見て貰う為に、忍の道に反してでも、蛇女としての誇りを捨てでも己の目標を選んだ。
龍姫は家族のしがらみや雁字搦めに抑圧された社会、忍の掟を破り、抜忍という修羅の道を選んででも自由を謳歌する道を選んだ。
闇は不明だが、一部の話によると彼女の家系は禁忌として忌み嫌われ、呪いの代償として愛もなくこの世に産まれてきてしまった…死柄木弔の破壊の衝動と思想に魅入られ、彼女も破滅の道を選んだ。
黒佐波は目先の欲望に忠実で、血と破壊と闘争の為に自ら忍の道を破り、己の欲望の為に私欲を選んだ。
それは敵とどう違うのか？
犯罪者であることに何の躊躇いがあるか？
己の欲望に、夢に、私欲に、全て忠実に実行する者は愚かだろうか？

愚かだからこそ、素晴らしいのではないか。

「そして全てを支配して頂点に立つことで、漸く始まるのよ」

オール・フォー・ワンも同じだ。

伝説の支配者となって漸く、オールマイトと渡り合っていた…いや、先生からしても支配者のトップに立つ事自体、ほんの過程部分に過ぎなかった。

問題なのは、支配者になってこれからどうするのか。

殆どは絶望の因子や種をばら撒き、超常黎明期を超えた混沌な世の中に陥れるのも一つ…漆月は更にその先を考えている。

「もう一つの世の中を作ってやりましょう。私達が、支配されてきた者達が、抑圧に縛られ、自由も権利も失われた私たちが、絶望の中で笑って暮らせる世の中に♡」

彼女の邪悪な笑みに、どこか禍々しい死神の様な、黒い悪竜の顔が浮かび上がる。それが彼女に今も取り憑いてる神魔なのだろうか…彼女の笑顔と憑黄泉神威の顔が重なった。

見惚れる様に、御伽噺を聞かされた小さな子供のように、黒紫は放心としていた。

此処まで、いや…これほど今の世の中を壊したがり、それこそまるで小さな子供が授業参観で夢を語らうような、荒唐無稽にして実に愚直…でも、何故だろう。

心の底からこの女ならやれそうだなと信じてしまっている自分がいる。

彼女の言葉は悪意や絶望、憎悪を募らせる者の心を、許すように落ち着かせる。

ひょっとしたら…なんて根拠がなくても考えてしまう。

嗚呼…成る程。彼女にとって支配者だの血筋だのさえも、あら可笑

しいと一笑いするほどにどうでも良くて、本当の本当に人の絶望を愛し、世の中の秩序も、人々の下らない幸せも、全部壊して、漆月の色に染め上げていくんだ。

「それが…それこそが私…漆月の、いいえ……『原罪の魔女』なのだから」

２２６話「憑黄泉とは、私とは…」

温泉の宿泊亭で一夜を過ごし、たわい無い女子会に近い会話を交えながら、一段落着いた後は各々のグループは部屋へと戻っていった。
最近の生活はどうだったか、焔達のバイトはどうしてるのか、貧民街でのヒーローショーは何にしようか、雄英高校の生徒達は相変わらずだ、そんな笑いに交えた談笑は、日々の疲れと共に積もったお話を嗜んでいた。
可笑しな話だ…焔紅蓮隊の皆んなは抜忍であり、元は蛇女の悪忍…嘗ては半蔵学院と超秘伝忍法書に渡る死闘を繰り広げていた自分達が、今となっては旧知の友人の様に、それこそ歪み合い、時に憎悪や罵詈雑言を吐いていた自分達は、今となってこんな風に楽しく会話を弾ませれるのは、飛鳥を始めた半蔵達が、和解と手を取り合うのをキッカケに始まった。そう考えると何だかほのぼのとした感じがする。
「それじゃあ、そろそろ夜が来たし…寝よっか」
「ええ、然し…霧夜先生の帰りが心配ですね…本部に赴いたとなれば帰りは早くて明日の早朝…若しくは…」
「そいや、ガイドの光山さんもおらんなぁ……もう部屋で休んどるんかな」
「５６３号室だったわね。一応部屋に入っても良いけれど、後から私達が怪しまれるのを考慮すれば、迂闊に忍び混むのは危険ね。入った痕跡が残ってしまうとマズイもの」
「危険て…でも、確かに勝手に侵入しちゃうのは失礼というか、場合によっては不法侵入で怪しまれるし…って、侵入する事前提なの!?」
「な、なんか余計に悪忍っぽいよ美怜ちゃん……」

半蔵学院には霧夜先生と、焔紅蓮隊には案内人の光山優が不在の今、何方とも今後の予定を組み立てる人間がいない以上はどうする事も出来やしない。
こうなれば、一先ずは部屋に戻って休むのが良好…。

「原罪の…魔女…？」
処は変わり、場面は漆月達へと移り変わる。
「嗚呼…これは、一種のコードーネームみたいなもの…妖魔を使役、と言うより、妖魔、又は神魔の能力を操る者、所持してる者に対して、人はそれを魔人と呼ぶの。
古くから伝わるコレは禁忌として扱われ、新たな自分を名乗る者……古代ヨーロッパより悪魔と契約した者をキリスト教社会の破壊を企む背教者という、新種の魔女という概念が生まれ出ずり、大迫害を受ける者の存在として忌み嫌われる者さ……ってまぁ、海外では妖魔のことを悪魔と呼ばれてる事が多いから、一部妖魔を倒す存在を退魔師やエクソシストなんて呼ばれてるのもいるけれど、現代日本に沿って忍と呼ぶのが妥当よねぇ」
妖魔、又は神魔を使役、或いは扱う者の別称を魔人と呼ぶ。男性は魔人、女性は魔女と分かれており、忍の社会に沿って魔人名を持つ者は限りなく重罪として指名手配犯へと認知される。
魔女狩りとは必ずしも過去の出来事ではなく、現代でもアジアやアフリカを中心に行われている事があり、多くの女性が「魔女」として暴行や追放を受けているという記録が残されている。
古代以来、何らかの超自然的な手段で他者を害することのできる者は異端者として気味悪がられており、ヨーロッパにおいてこの信仰はラテン語でマレフィキウムと呼ばれる害悪魔術として認知され、全国において妖魔（悪魔）の扱う魔術と似てることから、妖魔術として繋がっていた。

漆月のバックグラウンドに、生まれた時から憑黄泉神威によって取り憑かれた彼女の生き様は、正に魔女と呼ぶに相応しいだろう。
一部、魔人名を名乗るのは一種の礼儀作法とも呼べる者で、同じ魔人同士で名を語る事が流儀にもなっている。
「それに、この子達は少なくとも他の妖魔とは一線を画す存在…そこいらの妖魔と一緒にされちゃあ困るわ。
こう見えてもかなり頭脳は高い方だし…力よりも知恵が優ってる部分があるもの」
「…妖魔自体、私個人として遭遇した事は無いので、区別が付くかは、不明な点が幾つも存在しますが…其れにしては、どの個体も青紫色の外色、という部分は共通してるように見えますね……？」
「良いところに気がつくじゃない♪有象無象な下級妖魔とは違い、独自に進化と共に統一された憑黄泉は、他との区別を付ける為にあるものなのよん♪」
例えば、蟻という昆虫が触角を持ち合わせ、群れた仲間との信号を送る、数多くの種類が存在するように。犬という哺乳類の動物に複数の犬としての種類が多く存在するように。憑黄泉とは体色が共通されており、姿形と言った容姿は無限に存在する。
「憑黄泉の特徴はなんたって竜人と青紫色の体色が特徴でねぇ…ＤＮＡでも刻まれてるのかっていう位、雰囲気や外見に何かしらの特徴が共通してるのがポイントなのよ。
そして…この子達は人間の悪意、絶望、悲鳴を激しく好むの。通常の妖魔には、そう言った好みは存在しない」
漆月と同じく、悪意や絶望、悲鳴を好むという共通点からして、彼女が生み出した子供と呼ばれるのは強ち間違いではないのだろう。にしては、人間が妖魔を直接的な意味で産めるというのは、実感が湧かないというか、想像が付きにくい。
「通常の妖魔は、ただただ造られた思想や概念によってそれに準じ、忍同士の血によって集まった膿の存在……忍が妖魔を倒すというのが昔も今も変わらない構造…だけど、憑黄泉は別、忍同士によって集まった血では決して生まれやしない。それがまず通常の妖魔と憑黄

泉と呼ばれる妖魔の違い…」
「つまり、通常の妖魔は今の常識と何ら変わらず、憑黄泉という妖魔はマスターが仰った悪意の感情によって産まれたって訳？」
「そう!!けど…昔は本当に妖魔の構造と変わらない、全く小さな妖魔だったけど…ふふ、憑黄泉とは常に進化して成長を遂げる存在。だからこそ彼らが強いのも、妖魔と別格なのも通常とは違い、知能が高いから。
通常の妖魔は赤…奴隷を意味表し、憑黄泉は青…貴族を意味表すの。つまり、完全なる上位互換なわけ」
妖魔の血が赤い事、赤珠が有り、赤い忍同士の血が集まり生まれたことから赤を主張し、熱く燃える様な闘争心と殺伐が溢れてる事、憑黄泉より酷使され扱われてたことから奴隷という意味が込められた。レッドネックという貧相な意味も含まれるのだろう。
憑黄泉の血が青い事、身体の内部に青の血晶が有り、人間の悪意や憎悪、絶望が集まり主となる母体より産まれる事から青を主張し、静脈の如く青い血が通ってる事から、貴族という意味が込められた。ブルーブラッドによる貴族一門の習慣の事、妖魔を労働力や道具など奴隷として扱う有様、青き竜より別名ブルーブラッドラゴンと呼ばれている。
一部、忍よりも先に憑黄泉が忍術や妖魔術と言った特殊能力の奇術を生み出した、所謂忍術の祖先と言う説もある…が、ティオ・ディアボリクスも確信が無かった為、有耶無耶とされていた。
然し憑黄泉神威が生み出した憑黄泉の個体には必ず能力が秘められているので、関係性は高いとも言えれば、憑黄泉と忍は何かしら妖魔とは異なり重要な鍵を担っているとも言えるのは、確かであろう。
憑黄泉とは、それ程までに、比較にならない程に、忍や人間と大きく関わりを持つ、謎の生命体なのだ。
「…中には天竜衆という、大昔…憑黄泉が野に放たれてから、親元を離れて独自で成長を促した個体が集まった組織図も存在するけれど…流石の私でもセンサーには引っかからないわ。見事に掻い潜ってる…」

一方で、天竜衆とは憑黄泉神威が大昔に生み出した何の変哲もない憑黄泉が、何百年という年月を経て、過酷な環境及び忍に駆逐される事なく、親元を離れて独自に大きく成長を遂げた個体が同胞を集めて組織化した衆団である。その知性応用さと実力から、雲隠れならぬ神隠しの如く、消息を完全に隠しながらこの地球上…或いは何処かに隠居しているとのこと。密かに忍の全滅へと策略を動かしているらしいが、それはまた先のお話。

「其れにコイツらは、なるべくしてなった…いいえ、正確に言えば人間のせいでこうなってしまったの。

平和を願う想いが、争いを無くそうとする正義感が、人々の悪意のない幸せが、コイツらを…そして、憑黄泉神威を生み出してしまった。

それさえ否定してしまうのなら、忍が滅ぼされるのも致し方ないこと…いえ、現象なのよ」

どういう意味なのだろう。

何処か漆月の言葉も、いつになくこれだけは真剣で、まるで人間の善意によって必然的に彼等が生まれたと言わんばかりに。憑黄泉という妖魔が生まれる事も、存在してることも、それさえも何の罪も悪意もないと言わんばかりに。

「憑黄泉の存在は、人間の罪を現す……大昔、そのせいでカムイ村は全員皆殺しにされてしまった訳だしねぇ…それもまた、罪滅ぼしや、無かったことにしたかったんだろうけど。ふふふ、人が背負う罪なんて、消えるはずがないのにね。

それこそ、墓場にまで持っていく事になるのに…」

全てを思い出した彼女だからこそ、今にして言える言葉。記憶とは人間其の物を、人格と共に著してると聞くが…。確かにその通りだ。もし記憶さえあれば蛇女戦でも二体の脳無に頼らず憑黄泉を出現させて全滅を目論む事だって出来た。あの時、そう…あの時すべて全て思い出していれば…。

だから、せめて…独断行動を取る黒霧にも連れて行きたかったのだけど…

『漆月…記憶が戻った、とは？』
『言葉のまんまよ黒霧、全部思い出したわ…アンタのことも、先生やドクター…殻木のこと、姉の事…獄獅狼のこと…何かも全部』
記憶と共に、時は遡り…神野区の一件後、オール・フォー・ワンの活躍により全員が何とか逃げ果せたあの日の出来事。
一人で廃墟となった…現時点で敵連合がアジトとして使用してるあの場所で、漆月は黒霧を呼び話し合っていた。
死柄木より、力を欲する為に動き出すと言い出した黒霧は、独断行動でとある野人の噂を駆けつけ仲間集めに慎んでいた。そんな黒霧を漆月は呼び止め現在に至ると言う。
『まさか、弔の側にずっとお守りしてたアンタが、あの『マスターピース』の手掛かりだったなんて……灯台下暗ね』
『……？』
黒霧でさえ知らないマスターピースという言葉に、何処かしら自分の知らない何かを知ってるというのは、些か不思議な何かを感じる。
『黒霧、アンタ私と一緒に行動しなさい。弔が集めた戦力を此方が貸し出すというのは多少なりとも抵抗があるけれど、アンタの場合はあくまで先生の言いつけによって動かされたいわばボディーガード…そんなアンタの個性がワープゲートという貴重且つ移動手段が安楽な今、効率的に事が進むわ』
敵連合の情報は既に警察やヒーロー、忍達には大きく知れ渡っており、貴重な個性であるワープゲートは神野区にてエッジショットより対策されてる。
何より厄介だと扱いされてる彼が狙われてるのを知りながら、独断行動させるのは余りにも無謀故に危険すぎる。
『せめて私が産み出す妖魔も側に付けておきなさいな…アンタの個性の応用で人を殺めたりできる…けど、其れはあくまで身を守る為の手段に過ぎない。

元々戦闘向けの個性じゃないアンタを野放しには出来ないわ』
思い当たる節があるのか、それとも漆月の企みの中で黒霧の協力が欲しかったのか、彼女は片目をつむりながら提案を出す。
後にこれが処刑執行者達の迎えと言いたかったのだろうが、その前に黒霧が口を開く。
『気遣い感謝致します…然しながら私とて敵連合の一人以前に、死柄木弔の命ずるままの傀儡。
今無きオール・フォー・ワンの組織、私達は弱い。余りにも弱すぎる…戦力拡大と同時に警察を始めたプロヒーロー、忍達から逃げるには、今まで以上に困難を極めるでしょう』
『私だったら平気でそれが可能だって言ってるのよ。アンタは元々、私と一緒の監視下にいなかったから詳しく知らないだろうけど…』
『ええ、だからこそ私の為に漆月の足は引っ張りたくない。せめて私一人でも、戦力を増やすことも出来なければ、個として何の意味や役割を果たせない……ですから、私をどうか、信じて下さい漆月。
貴女がもし、支配者として新たに君臨するのであれば、他者を信頼するのもまた役目かと』
黒い靄を揺らしながら、眼球とはかけ離れた表情が察せれない眼は、確かに真がある。
…正直、此処で反対してさっさと私の側で手足として働いて欲しいってのが本音なんだけど。弔に何を言われるか…まぁ、それはそれで有りと言えば有りだけど。
『……良いでしょう。では、アンタの言うギガントマキアを連れて、そこから処刑執行者達を連れて、私のところに来なさい。それが最低限の約束…』
『畏まりました。必ずして、魔王と魔女の…貴女達の望むものを手に入れてきましょう』

「結局、今のところ音沙汰無しかぁ……」
こうして脳裏に蘇る回想が過ぎ去り、今に至るわけなのだが。それ

でも処刑執行者の妹達の一人、ミストルティンが帰ってきたのは大きい。今は彼女にしか出来ない別件を果たして欲しいということで、彼女は現在不在の身ではあるが……

「？何のことでしょうか？」

「ああごめん、こっちの話…」

黒柴が此方の考え事に首を傾げながら尋ねてきた。

結局、黒霧は姿を現してない…となれば、恐らくまだギガントマキアを探してるのだろうが…それにしても、先生のボディーガードとして密かに隠してた上玉に、ギガントマキアがいたというのは初耳だった。

先生は百年も存続してる言わば生きる都市伝説…魔王として恐れられた悪の象徴のコネクションは余りにも多い。海外にまで彼の友人が潜伏してるというのだから、それを全て掌握するのはかなり時間が掛かるし、情報屋も雇えば費用も馬鹿にならない。

それでもオールマイトが現れ、平和の象徴として謳われる今、彼の手先は殲滅に近いと言って良いほどに大打撃を受けたのも確か。それでも、まだ密かに息を潜めた者がいるのは事実で、況してや日本に残党がいたというのは意外だった。

「一先ず黒柴は引き続き忍商会側の方を見張っててくれるかしら。アンタの軍人による実力なら、それなりに調べることもできるだろうし……あぁ、勿論タダとは言わない。この子を連れていきなさいな」

漆月はパチン！と指を鳴らし一眼見る。

すると、翼を広げながら二足歩行で黒柴の元に歩み寄る憑黄泉が一匹。

「憑黄泉のワイバーン君をアンタにプレゼントするわ。私の意思や采配一つ、自ら母の為に我が身を捧げる絶対なる忠誠心があるの。

黒柴、好きなようにこの子を活かして見せなさい。きっと、アンタの役に立つわ」

翼竜タイプの憑黄泉は、口を大きく開けながら漆月の言葉通りに動き出す。

「……マスター、私は個人としても申し分なく充分に闘えます。それ

故に助力など私には…」
「能力『飛行』を特化させ、新しく『ブレス』『赤外線』『隠密』『ステルス』『毒鉤爪』の複数の能力が判明してるわ。たった一つや二つやら忍術しか持てない私達じゃあ、これ以上頼もしいのは居ないでしょう？」
「…ッ!?複数能力所持!?」
「言ったでしょ、他の妖魔とは違うって…つまりはそういうこと。元々、この子は飛行型の憑黄泉だった。だけど独自に成長を促し、自ら妖魔術を生み出した…謂わば、憑黄泉とは能力そのものであり、進化そのもの！人間は個性を複製することは出来ても、オリジナルで作り出すことは不可能!!だけど其れを可能にするのが憑黄泉！
それに、忍の忍術もオリジナルで作り出すのはかなりの年月が必要…それを帳消しに、新たに開花させてくれるのも憑黄泉！」
以前、蒼志に貸した憑黄泉の一匹、トガッちちゃんの能力は『忍法吸血』と呼ばれ、血を吸った者の忍法を扱えるというコピー型の魔術。他にも『ヴォイスパワー』という超咆哮に、憑黄泉という素の身体能力に加え『肉体強化』の身体能力を一時期向上させる魔術、更に『滑空』という魔術、『耐氷増強』と氷の遁術に長けた忍対策の魔術を兼ね備えていた。
「弔や仲間がせっせと動いてるんだもの。私達もそれなりに下準備はしておくべきでしょうし…。其れに、私を憎んで争ってくれるなら本望…♡より計画が順調に進めるわぁ…♪」
こうして、私の軽いおさらいはこれにて終了。
後は弔達との合流の際に、合わせてやれれば良いのだけど…。

そして、各々の過程を通してから翌日。
この日から、半蔵学院と焔紅蓮隊が対立するのは、霧夜先生が戻り、忍商会が根本的に動き出してから…。

２２７話「かぐらと、忍商会と、妖魔と…」

「あんさんら…本当に良かったんですかい？お友達と一緒じゃなくて…」

早朝の翌朝、起床してから朝食を済まし、半蔵学院達と別れを告げてから旅行の案内人である光山と共に各地の観光スポットへ廻る予定になっている。

光山は此方の様子を尋ねながら、興味深そうに聞いてくる。

「嗚呼、長いは無用だ。それに、アイツらも元々学校の行事で旅行に来てるんだ。邪魔したら悪いしな」

「そうねぇ、どうせまた会えるだろうし。次は敵同士かもだけど…」

「追われてるんだものね私達、残念だわ…雲雀にもっと華眼のこと聞きたかったのに…」

焔は腕を組みながらそう答える。

本来、自分達は詠の福引によって運良く京都の旅行に来れているだけで、飛鳥達とはまた違った形で此処に滞在しているのだ。

昨日の再会も、予期せぬ偶然な出逢いだったので、語らいこそ多かったが、決して再開を機に一緒に旅行を満喫する、という上手い話にはならないのだ。

更に善忍教師である霧夜先生も時期に帰ってくると聞く。そんな状態でのんびり過ごしていれば、もし敵対してたと発覚されれば闘わなければならない。

抑も霧夜先生の実力自体、未知数な部分が多い。以前、半蔵学院へ奇襲を仕掛けた際は何とかなったものの、相手は特上忍……何が起きるか分からない。

「あっはは、半蔵学院の皆さんと仲がええんですねぇ!!あっしも昔が恋しくなりやすねぇ～……」

「ねえ、光山。ちょっと良いかしら」

「あい？」
昔の自分を思い返しながら懐かしみ、恋しく思う光山に美怜は表情一つ変えずに口を開いた。
「貴方、昨夜は何処に行ってたの??」
それは、誰もが気になってた事実。
昨夜――夜食を終え、露天風呂に浸かった後から行方を絡ませてた光山。夜間帯、深夜とまでは無かったが、流石に連絡もなしに姿を消すというのは、余りにも妙だった。
「あぁ、仕事の一件で、急ぎの用事でしたから…。本当は声をかけたかったんですが、流石に入浴してる最中に声なんてかけらんねえですからねェ…。端末で連絡さえ出来れば良かったですが、あんさんらの番号、分かりませんでしたし…」
というか、端末なんて高価な物は所持していない。なので光山が連絡を入れれないという点は仕方ないとして…。
「まぁ、わしらも別にそこまで深く探る真似はせえへんけど…」
「確かにそうね。所で光山、貴方出身って何処なの？」
「えぇ？いやいや、そこは流石に企業秘密ですよォ～…あっ、でも強いて言うならあんさんらが来た東京ッて所は一度でも良いから行ってみてぇもんですねぇ…!!此処の京の都とは違って面白そうじゃないですかァ！」
「そうなの？焔？」
「いや、何故そこで振る…？」
「私は詠の貧民街を除いて都を堪能した事ないから、貴女達の方が適任じゃない？」
「バカ言え、私達はバイト生活故にアジトを転々としてるんだ。そんな事急に言われてもだな…」
東京の最奥深い森林地帯に蛇女を構えていたし、遊ぶ暇など無く毎日修行を送る日々ばかりが続いてた為、そもそも自分達の出身である長所や短所など答えろと言っても反応に困るというのが正直な感想

だ。
「ねぇねぇ！次は何処に寄ってくの～？」
「おぉっと、次はですね……」
一夜明けてからは結局の所、忍商会の動きはない。
やはり京の都…人が公で姿を現してるからか、目立った動きが取れないのだろう。そう言った意味では、まだ平穏ではあるのだが…

同じくして、担任の連絡指示により、半蔵学院のメンバー達は京都の旅館で霧夜先生を待っていた。
焔紅蓮隊が一足先に出た形となったものの、何時迄も自分達も嘗ての好敵手達を相手に感傷に浸ってる場合ではない。京都に来る以前、学生でも時には羽根を伸ばす…とは言っていたが、長年…とまでは行かないのものの、何かしら嫌な予感がする。
其れは、数々の不条理や理不尽を通してきたからか、其れとも単なる気紛れか…どちらにせよ、霧夜先生が戻ってくるとはいえど良い気分ではない。
緊張。
ぎこちない雰囲気を晒しながらも、ピリピリとした空気が心を不安定に傾ける。
「霧夜先生、結局昨日の夜には戻って来なかったね……」
「時間もそうでしたが、上層部達との話が長かった…とかでしょうか…」
だとすれば、其れは相当重要な忍務となるだろうに。
無論、単に新幹線の時間に間に合わず…と言う形もある。どちらにせよ過去の事だ。来れなかった以上は其れなりに理由があって当然だ。
だからこそ、自分達にどんな忍務が下されるかだ。
折角学生なりの気分で満足していたのに、奈楽という護神の民に忍商会がきた途端にこれだ。

飛鳥的にはどうしていつも自分の周りではこうもトラブルが頻繁に多発するのだろうかと悩ましく思う。
初めて雄英高校で転校したと思ったら早々に敵連合に遭遇したり、蛇女子学園との超秘伝忍法書による争奪戦が起きたり、学炎祭で本校の存亡が懸かり乗り越えたと思ったらヒーロー殺しに遭遇したり、林間合宿で敵連合に襲われ雲雀と爆豪が拉致されたり…実は自分達の存在が争いの種を撒いてるのではないかという錯覚さえ感じてしまう。
「そんなナーバスになんなって!!いつまでもジメジメしてっと、またおっぱい揉んで悩みを聞いてやるぞ〜??」
「本当葛ねえこういう時ブレないよね!?!」
厭らしい手つきで此方を見つめるセクハラ親父と化してる葛城に、飛鳥のツッコミが響く。
こんな場面でも笑顔よく平常運転なのは、恐らく…いや、きっと自分達を励ましてくれてるのだろう。こんな状況の空気の中、何とかしようと思い切って踏み込む葛城は流石というべきか。
「大体よ、霧夜先生が戻って来るまで待つしかねえなら、今どう考えたって仕方ねえだろ。少なくともアタイは廊下でバケツ持ちながら逆立ちされるよかマシだね!」
「威張って言う事ではありませんが…まあ、葛城さんは授業中のお眠りが目立ちますからね…」
「あっはは!昔は斑鳩とアタイはよく立たされてたよなぁ〜、懐かしいぜ」
二年前の話なのだろうか、葛城と斑鳩は同期で同じ三年生。
飛鳥は入学してからすぐ、二人が喧嘩をしていたという事は知っていたが、そこまで不仲で廊下に立たされてるとは思っていなかった。
「ゴホン!もう、昔の話は良いでしょう?」
「菖蒲は葛姉様の話聞きたいですぅ〜!!昔は関西弁が好きだと聞いて、一時期練習してた時があったんですよ〜?」
「菖蒲…お前、それ何処情報だ??」
そしておテンパ故に葛城大好き後輩の菖蒲の誤情報ならぬ謎情報

に葛城は呆れた目線を飛ばす。
菖蒲のことは嫌いではないが、セクハラ関連に大きな問題点があり反射神経レベルで距離を取ってしまう。どちらかと言えば苦手に近い部類だろう。
「す～…す～……」
「清明ちゃんに至ってはずっと寝てるよね～…」
清明が寝ている辺り、予知夢でも見てるのか、単純にまだ寝たいから寝てるのかは不明だが、殺伐とした予感でも的中しない辺り、今のところ安全だとも言えるだろう。
こんな状況でも平常運転でいられる個々のメンバーを見る辺り、流石というべきか。肝が据わってる。
と、少女達が仲良く談笑してるのも束の間、唐突に其れは起きた。
ドロン!!と煙が巻き起これば、辺り全員がその煙臭さに咳払いをしてしまう。

「お前達、済まない…遅くなった――」

煙から人影が現れ、全員の耳に霧夜先生の声が聞こえてきた。
「ゲホッ!ごほッ…!霧夜先生のこのドロン、久し振りに見た気がする……」
「今まで半蔵から離れてたからかもしれんが…なッ…!」
飛鳥の言葉に柳生も同意するように言葉を付け足す。霧夜先生曰く、個人の拘りなのだろう、確かに煙幕を出した登場は忍らしさがあるものの、周りが咳払いをしてしまい、目に染みるのはデメリットだ。
「お前達、全員いるようだな……学業による京都の旅行、満喫してる所済まないが、上層部からの命令が入った…」
「霧夜先生…!あの、という事は……今回も……」
「嗚呼、今回お前達も目の前を体験しただろう…忍商会達の騒動――世間から公表されている…。元々、問題のある反乱組織と言っても良い…奴等の目標も含め、京都に滞在する忍商会を捕獲、或いは倒せ…との事だ」

やはり、と言っても良いほどに、飛鳥達の表情が曇る。いや…分かっている、薄々とこんな結果が出てきてしまうというのは。然も忍商会とは斑鳩に葛城、柳生が抗戦してるのだ。奴等としても半蔵学院が目の敵となってる今、京都にいる時点で抗争は避けられない。

「捕獲…？という辺り、少し引っかかりますが…」

「良いところに気が付いたな、土方。そうだ、本来なら漆月や敵連合の抜忍同様に始末するのが得策ではあるのだが…あくまで奴等は忍商会という組織の手足の一部に過ぎない…まだ不明な関係者や顧客、聞き出す情報が多過ぎる為、捕獲と言う件にされている。勿論、場合によって始末しても問題ないとも言われてるが…」

成る程、と土方は相槌を打つように首を縦に振り頷いた。土方は斑鳩も認める風紀と秩序を守るに相応しい善忍に在るべき存在でもある。

成績や座学も優秀なので、期待の星とも呼ばれている。

「忍商会については私達は存じておりませんが…どんな組織なのでしょうか？」

と、此処で斑鳩が霧夜に質問をする。

半蔵の中でも凡ゆる面において成績が優秀な斑鳩も、忍商会に関しては不明な点が多いらしい。でなければ闇の組織とも呼ばないだろう…

「基本的に違法商売や薬物、人身売買、妖魔の取引、裏サポートアイテムや武器の密売など、数多くの悪行を生業として生きてる闇の組織だ。そうだな…例えるなら忍のヤクザ的な集団だ。

一時期、大昔は路頭に迷う忍達の救済組織として成り立っていたが……取締や抜忍の協力関係の事から、いつしか奴等の行動なども悪化していき、現代に至るわけだ」

本来、忍達が手にする武器などは忍サポート会社などが懸命にしてメンテナンス、或いは作成などしている業者が多い。勿論、夕焼のような里育ちの者達にも独自で武器を修理などしている者達も存在するが…飛鳥達のような隠れ里出身ではない者達は、こうしてサポート会社に頼むと言うのが筋である。

それを裏で違法やら抜忍にやら売買してるのが忍商会。昔は忍性戒という、戒めろという意味が込められ暗躍していたのだが、名のある神楽達が闇組織を潰し周り、名は変わったとも聞くし、又は嘗て伝説の忍として語られた鏖魔が亡くなってから名が変わったとか、諸説はあるが未だに不明らしい。

「ち、因みに今回の件、風魔達も……？」

「無論、出し惜しみなく…という点も有り、お前達にも飛鳥達と同じく忍務が下されてる」

「えええぇーーー!?!!いやいやいや、私らアレよ?!選抜候補メンバーよ!?飛鳥先輩達ならいざ知らず、実力不足じゃないですかやだーー!!然もそんな上忍達が受けるようなのをピッチピチの一年生がやれと!?」

「雲雀達もぴちぴちの一年生だけどね」

雲雀の謎の説得力ある言葉にぐぅの音も出なくなってしまう。何せ雲雀は入学してからというものの、幼稚な性格や忍としての才覚も感じられなかった上に、成績もかなり悪いというのも目立っていた為、こうして雲雀に言われると何も言い返せなくなってしまう。

いや、雲雀が弱いだの言うわけではない…断じて。

(……そう、私も其れが気になっていた…。何故、態々半蔵補欠のメンバーまで忍務を下すのか。余りにも荷が重いこの忍務、明らかに可笑しすぎる…)

勝機のない無茶振りな忍務、まるで死にに行けと言わんばかり。負け戦だと分かっても強要させるようなこの内容…。信じてないとは言わないが、霧夜は人を見る目がある。

だから、流石に半蔵補欠はまだ実力不足な上に経験も足りない…まだ蛇女補欠なら互角だろうが、それを飛躍したように大きな壁が現れる。

「忍として下された命令を担うのは絶対だ。異論は認めない…況しては、上層部の意向であれば尚のことだ」

風魔の俄然嫌がるあからさまな表情に、霧夜は無情に情けを押し殺しながらそう告げる。

実際に霧夜自身も上層部に抗議したが、結果として返ってきた答え

は同じだった。
「其れに…何も今回の忍務は忍商会だけではない」
『えッ…?!
!?』
次に放たれた霧夜の言葉に、一同は驚嘆の声を漏らす。
只でさえ忍商会という組織を相手にするのでさえも苦しいというのに、それを上乗せすると?
「京都にて妖魔の襲来…二匹の妖魔討伐。そして、忍商会を付け狙われてる奈楽と、もう一人の幼女…かぐらを捕獲しろ、との事だ」
無情の次は容赦のない残酷な命令だった。
妖魔討伐ならさておき、奈楽が守っているかぐらを、あの小さな女の子を、捕獲しろとの事。
流石にぶっ飛んだ命令には、飛鳥達は聞き捨てならない。
「捕獲ッて…!霧夜先生!あの子はまだ子供ですよ!?それなのに…何で……」
「今はそれしか教えられない。忍商会を倒せというのも、奴等より先にという線もあるだろうが…何方にせよ、忍商会も奈楽も、争いは避けられない…と、言うわけだ」
「どうして……そんな……あの子達が何かしたんですか…?罪のない、追われてる二人を捕まえろなんて…そんなのまるで…」
やってる事は忍商会と同じではないか。
いや、実際には三巴になったものだ。忍商会の打倒とかぐらの捕獲、一方で奈楽達は追っ手から逃れ、忍商会は奈楽を殺し、かぐらを捕獲しようとしてる。
一体、京都全体で何が起ころうとしてるのか…いや、何が起きてるのか。それ程、かぐらという少女の存在は大きいのか?
だとすると、尚更…其れ等を忍学生に振るというのは幾ら何でもおかし過ぎる。
「…以前、邪姪と呼ばれる方が、言っておりました…。かぐらの存在を知れば自ずと喉から手が出るほどだと……」
あの淫乱な大男の言葉が脳裏をよぎる。
つまり、忍商会がかぐらを狙う理由は、我々の範疇を超えた何かが

あるからか…昨夜に美怜が言っていた。
かぐらを捕まえるのに今まで闇に隠れていた忍商会が動き出したと…つまり、動き出したからには何かがある。そして其の何かがある以上、かぐらは延々とつけ狙われるのだと。
その何かとは、上層部が知っているから危惧しているのか、将又かぐら其の物が我々の認識を超える存在なのか…。
処分ではなく捕獲という辺り、上層部の命令と忍商会と同じ行動なのが妙に引っかかるのだが…
「これ以上の事は俺からは何も言えない…。旅行は一時中止、忍務に当たってくれ。以上だ――」
困惑、不安、疑問、様々な念が漂う中、飛鳥達は黙然とするしか無かった。
忍務が下された以上、私達は嫌な忍務も当たらなければならない。例えそれが、どんな非情な仕事だろうと、それを全うするのが忍だ。
「…ひょっとしてだけど、奈楽ちゃん達は、こうなる事を見越して、雲雀達から離れたのかな…?」
「雲雀…?」
雲雀の発言に、柳生は目を丸くする。以前、美怜は見ず知らずの自分達と同行するのは考え難いと言ってたが、ひょっとしたら其れも含めて飛鳥達から離れ、独りでに行動を始めたのかも知れない。
「ううん、昨夜…美怜ちゃんから聞いた時はたしかにって思ったんだけど…そんな見ず知らずの雲雀達なら、どうしてあの時、忍商会から狙われてた時も、雲雀達からも逃げなかったんだろうって。
寧ろ、雲雀達が奈楽ちゃんとかぐらちゃんを忍商会から守ってたのを本人達も望んでたのに、いざ向こうが撤退したら奈楽ちゃん達も逃げるように離れてったでしょ?それって、まるで奈楽ちゃん達がこの後、雲雀達が捕獲するのを知ってたのを見越してたように思えるんだ」
もし本当に飛鳥達を信じることが出来ないのなら、何故忍商会から狙われてた時も、そのまま半蔵学院のメンバーからも逃げなかったのだろうか。

奈楽が単にその場凌ぎで利用していたのならいざ知らず、見ず知らずの人間を信じれない…という点は弱い部分がある。あの場に焔紅蓮隊が居なかったので、美怜の答えも間違いではないのだろうが、其れにしては今回の件と言い、流石に都合が良すぎてる。

となれば、奈楽自身も知っているその何かが、他者に触れてはいけないからではないか？

だとすれば、奈楽の誰も信用ならない単独行動も、飛鳥達からの保護も拒否したのも、全て辻褄が合う。

「確かに、菖蒲達が忍商会から身を守ってたら多少は信頼出来ますよねぇ……でも、向こうが拒否をするって考えれば、雲雀さんの言ってたことも筋が通りますよ!!」

「じゃあなんだ？奈楽がアタイらから離れたのも、独りで行動してるのも、誰にも知られちゃいけない何かがあるって訳かい？」

美怜も話してた通り、神楽とは世の中を揺るがす程価値があると言っていた。そう考えれば、もう忍だの自分達の感情などどうこう以前に、とんでもない領域に足を踏み込んでいるのかもしれない。

上層部も負け戦というよりも、それ程大きすぎるから、多少力の強弱あれど、神楽の捕獲による戦力を傾けて欲しいと願ったのかもしれない。

「そう考えるのが妥当でしょうか……」

「俺たちはかぐらの事は知らないし、知る術がない…理由がどうであれ、忍務が下された以上はやるしかない」

気持ちは晴れないが、今自分達に出来ることは、やるべきことは以下の通り、忍務の内容を全うするまでだ。

これまでにない最高難易度の忍務となるが…上の人間には逆らえないのが忍だ。

況してや学生である自分達なら尚のことだ。

「取り敢えず、手分けして探しましょう。忍商会が動き出せば、奈楽さん達がいる可能性も大きいです」

「成る程ねぇ…確かに、アイツら街並みで平気でかぐらの為に身を晒してまで迫ってたもんなぁ。それに痕跡集めに専念してる可能性も

あるしな」
「じゃあ俺と雲雀で捜索する…補欠のお前達も見かけたら連絡してくれ」
「そうッスよね～…柳生さんのいう通り、無理に戦わずに先輩達に連絡する方が一番得策ですよね」
「……」
各々が話し合う中、納得のいかない飛鳥は悩ませた表情を浮かばせる。
本当にこれで良いのだろうか…？
まだ奈楽達のことは知らない…だけど、何も知らずに上だけの命令で、忍商会と同じようにかぐらを捕獲しても良いのだろうか…？
「わ、私も……探してみるよ…」
人一倍正義感が強い飛鳥だからこそ、今回の忍務はこれまでにない程に辛い。
漆月を処分せよ、という未だに成し遂げてない忍務に続き、かぐらの捕獲に打倒、忍商会。そして京都に滞在し身を潜む妖魔…。
流石に一筋縄ではいかなさそうだ。

２２８話「日影と美怜」

忍務を下された飛鳥達とは裏腹に、一方で焔達６名は、旅行案内人のガイドより、離れた観光地へ訪れていた。
東山区の地域では、清水寺を始めた世界遺産の文化だけでなく、八坂神社や地主神社など観光スポットでも名高い有名な場所に回り、今から二時間は指定された範囲内で好きなだけ自由に巡回して良いとの事だ。
「今回のペア、わしと美怜さんか。珍しい組み合わせなもんやな」
「ええそうね。私も日影のこと、よく知らないし…良い機会だと思うわ」
お互い感情表現に疎い分、何処か共通する二人組はある意味面白い組み合わせだろう。最初はこの二人で大丈夫か？という大きな懸念が生まれたが、日影も春花と同じ三年生故に、選抜メンバーでも何処か抜けてはいるが、根はしっかりとした人間だ。
コミュニケーション能力、思考や判断が長けてる美怜とも相性が良いのかもしれない。
「お前たち…あんまり周りに迷惑をかけるなよ？」
「心外やわ焔さん。わし、今の今までに人に迷惑かけた事なんて一度もないで？」
もし其れを忌夢が聞いてたら、額に青筋を浮かべ血管を三本くらいブチ切れていただろう。
無自覚無感情日影でも、一般人にまでは手は出さないが…以前、日影が忍学生になる前はひょろっとひょんな事から何故か地下闘技場のバトルクラブで肩慣らしの運動をして警察にマークされた事があるので、一概的に大丈夫とも言い切れない。
「ふふ、安心なさい。私が誰かに迷惑かけた事なんて一度もないわ…

ねぇ？未来」
「そ、そうね……私は、あんたの事信頼してるから…」
一方で、詠とペアを組んだ未来はぎこちない表情で首を縦に頷く。昨日、嘗てのいじめっ子達から身を庇い、手を出す事なく論破した彼女は頼もしささえ感じた。
誰にも迷惑をかけなかったし、同じペアを組んでいたからこそ、美怜も分かってて問いて来たのだろう。
「分かった。それじゃあ、二時間後にまた現地に集合だ！呉々も迷惑掛けず、目一杯楽しむぞ!!」
焔のリーダーらしい掛け台詞に、全員とも首を縦に頷く。現地には待機場所としてスタンバイしている光山優も手を振っている。現地の場所を分かりやすくする為だそうだ。
こうして見れば、何処か学生気分に戻ったような気分だが、旅行自体珍しいものなので、悪い気はしない。

◇

「ほぉ～…此処が清水寺かぁ。わし初めて見たわ」
清水寺を巡回しに来た日影と美怜は、崖の急斜面に張り出すように聳え立つ寺院に圧巻していた。
元々京都の中でも知らない人間など存在しないと言われるほど有名な観光スポットで、参拝客が多く噂が後を絶たないと聞く。
「清水寺から眺める京都市街は絶景だそうよ。然も崖の上を支える柱では釘を一本も打ってないのだから、本当に魅力ある本堂だわ」
感心そうに巨大な寺院を眺める美怜も、大変機嫌が良さそうだ。美怜もファッションやらスタイルやらに興味がないと言いつつ、景色やらには興味があるそうだ。
いや、京都自体そもそもの歴史を漂わせる文化そのもの、それを接触すると言うのに大きな価値があるのだろう。彼女からしてこれまでにない経験や想い出になるのなら、幸いだ。
「でも不思議ね。日影の喋り方からして、京都なら行こうと思えば行

けるのではなく？」
「そりゃわし、関西出身やけど…昔は孤児院育ちでそれどころやなかったしなぁ」
「孤児院…？日影、貴女孤児だったの？」
「わしが物心付いた時から、孤児で育ってたんや。皆んなから感情がない、蛇や虫みたいッてよく気味悪がられてたわ。感情はないけど、物凄い居ずらくなってな、飛び出た」
日影は孤児院として育てられた過去がある。
周りからは異端だ、特殊だ、病気だ、と批難し誰からも仲良く出来ず、独りだけの時間を過ぎて来た。
毎日が退屈で、灰色のような、刺激もなくただただ嫌な思いばかりするつまらない日常。
「せやけどな、そんな時にわしを引き取ってくれた女がいたんや。日向ッて呼ぶんやけどな。その人がわしを引き取ってから、盗賊団に入ったんや」
「盗賊…？日向……何やら、興味深い話ね。凄く…そう、忍をする前は盗賊団の一人として生きてたのね」
「せやな。日向は軍人並に強かったそうやし、わしの戦いの半分は日向を真似たもんやさかい。それくらい、あん人は強かった」
「強かった…？抑も、その肝心の日向は、どうなったの？」
「死んだ」
日影の容赦のないたった一言に、一瞬だけ美怜の目は大きく見開き丸くする。
日向は強かった。
日影は勿論、盗賊団の人員でさえも彼女を尊敬し、背中を預けるほどに、日陰者や荒くれ者達の理解者だった。その中でも日向は日影を嘗ての自分と重ね、初めての理解者であり、本当の家族のような温もりを感じていた。
「ある時、敵との抗争で亡くなってな。何でも相手がシマ荒らしで縄張りを広げてたみたいなんやわ。
それだけじゃなく、子供から大人までバッチリ違法の薬物を売って

てな。それにキレた日向がある程度の人員を集めて抗争したんやけど…全滅した」
　これだけ聴くと極道物の抗争みたいなものだが、日向達は元々薬や身売りなど許さない、仁義に外れた道理は許さない主義だった。全滅と言っても、完全に敗北した訳ではないし、日向達は全員強かった。
　相手も何人かは死に、最後に残った一人が運良く生き延びたとのこと。争いによって流された血は多く、一般市民による犠牲者は出なかったが、それでも日影達にとって失うものが多過ぎたのだ。
「だから、貴女は日影…なのね」
　忍とは本名や素性を隠す為の偽名。
　基本、飛鳥や鎌倉など時代名を取った物もあれば、風魔や柳生など歴史上に存在した人名などを使う忍も存在する中、春花や日影など完全にオリジナルな者も存在する。
　個々其々、忍名とはもう一人の己を現す名前であり、大きかれ小さかれ、確かに名前に価値が存在するのだ。
「まっ、相手がどんな奴から知らんし、捕まってるのか今も平然と生きてるのかは知らんけど…多くの仲間が涙を流してたわ。そんくらい、皆んなから親しまれて、尊敬できる人やった。それに比べて、わしは涙を流しても、たった一粒の涙しか流せんかったしな」
　感情がないから、悲しいという
「そうやって、わしは途方に明け暮れてから、半グレや不良達を締めて、鬱憤晴らしに地下闘技場まで足を運んで、結局わしは日向のような人間にはなれんかったけどな。だから、あの時みたいに道元に良いように利用されてたのかもしれんしなぁ…わしにも、感情があればもうちょっとは変わってたのかも知れへん」
　まぁ、今更どうこう言ったところでなんも変わらんけど…などと心の中で呟く日影は、嘗ての自分と今を重ね、美怜に愚痴を零す。
「ねぇ、日影」
「ん？なん――」
「そうやって、自分勝手を重ねるの？」
　ふと、美怜から受けた言葉に、日影はキョトンと小首を傾げる。

「私も感情表現が疎いから、よく周りから誤解されやすいし、未来ともよく争いの火種を生んでしまうから、多少なりとも貴女の理解者にはなれるけど…誰が貴女が日向のようになって欲しいと言ったのかしら」
「…誰も言っとらんな」
「でしょ？貴女がそうしたいのなら好きにすれば良い…だけど、貴女が日向になる必要性が何処にあるの？
日影がどんな道を生きてきたか、私には理解に及ばない物だけど…だからこそ、日影なのでしょう？」
日向と日影は相反する存在。
義務ではなく信念を、そして信念であれば言い訳言葉を重ねない。だから、日影が変に考え込むのはよせと、美怜なりの遠回しの、気遣いの言葉なのだろう。
「利用されたのなら、反撃をすれば良いわ。舐められたコブラは、その毒牙を以って獲物を執拗に狙い定めれば良い。それに私は、無感情と言いながら人間味のある貴女が、とても魅力的に見えるわよ？
感情を知らないのだって焦らなくて良い、ゆっくりと自分なりの未知なる存在を追求していきましょう、お互いに…♪」
美怜は感情表現が疎いと言いながらも、何処か未知なる存在に胸を踊らせている姿は、まるで小さな幼女が欲しいものを待ち望んでいるような、微笑ましいものだった。
「…せやな、美怜さん良いこと言うなぁ。わし、思わず涙が出てしまったわ」
「日影、それは貴女が欠伸をしたからよ」

◇

清水寺から眺めた景色は絶景で、京都市街を一望出来る高台は何度見ても景色に目を奪われてしまう。
参拝者が後を絶えず、人気スポットとして有名なのも大いに頷ける。

「これでもし、カメラなんて機材があれば最高だッたんだけどね」
「意外やな、美怜さんの将来の夢はカメラマンか撮影とかか？」
「残念ながらそこまで固執して興味があるわけじゃないわ、ただお気に入りの絶景を形として留めたかっただけ。他に意図はないわ」
満喫出来たのか、機嫌の良い美怜とその隣を歩む日影は清水寺を後に清水坂を下っていく。
石畳の坂沿いはいつになく賑やかで、左右に商店街の店が開けば、人混みが多く、雑談の声が絶え間ない。
「……そう言えば、こういうお店ッて基本どんなのが売ってるのかしら」
「着物や日用品に、和菓子や茶葉とか売ってるんちゃうかな」
「…お菓子、ですッて？」
此処で美怜がピクリと反応する。
あっ、と口を開けたまま日影は自然と美怜の欲情スイッチを押してしまったらしい。
お菓子に目がない美怜が、和菓子などと聞けばリビドーが働いてしまうのは当然の帰結。況してや、貧相な食事ばかりの紅蓮隊の日常はもやしや雑草ならぬ野草ばかり…お菓子も充分に豪華なものと言えるだろう。
「日影、早速調査にあたりましょう。気になる菓子類は全部、私が独占して頂くわ」
「美食會かいな」
この世の菓子は全て私のだ、と言わんばかりの強情さ。目がないとはいえ、此処まで欲深いのは初めて目の当たりにする。
とはいえ、お菓子自体日影も嫌いではない。好きと主張する程でもないが、食べて不味いとか甘いのが苦手という訳でもないので、普段空腹ばかりな日影も腹の足しになれば程度の気はあったので、詠さんのもやしみたいやな、と内心呟きながら渋々と美怜に着いて行くことにした。

「抹茶プリンに、此処にも八つ橋が……正に至福の瞬間ね」
「わしには至福の瞬間ってものがよう分からんわ、感情がないからのう」
「なんて勿体無い事かしら。感情がないというのも、それなりに不便なものね」
　商店街の店の中に入り、菓子類と言った美怜の好物を物色しながら目を輝かせる美怜を隣に、日影はマイペースな口振りでボケ～ッと突っ立っている。
　八つ橋は京都名物でも美怜がかなり目を置いてる品だ、相当に気に入ったのだろうと窺える。
「おっ！そこのお嬢ちゃん良い目してるね！蜜柑味の八つ橋に抹茶プリン！序でにプリン味の八つ橋もどうだい？」
「あら、ご親切にどうも。それなら遠慮なくこれも試食序でに購入してみるわ」
　京都のスイーツ巡りに胸を踊らせる美怜が気に入ったのか、嬉しそうに声を弾ませる店員は笑顔で定番の大人気商品の包み紙を手にしながら商品を勧めてくる。
　顔がドラゴン系の爬虫類でありながら、黒と赤を連想させ、体躯も常人よりかは一回り大きく、ガタイの良い異形系の男性だった。美怜も一切の不快な表情を出す事なくご機嫌よく顔を縦に頷く。
「ん？あれ…お前さん…」
　ふと、商品を選ぶ美怜に暇そうにボケーッと眺めてた日影は、店員を見かけると眠たそうな表情を一変し声を掛ける。
「え？あっ…あれ？もしかして日影の姉御さん??えっ!?ありゃりゃ、珍しい!!こんな所で…」
　突然声を掛けられ目を丸くする店員は、声主の方向に振り向けば、驚嘆そうに反応を示した。彼の言葉から察して、日影と知り合いなのだろう。
「あ、やっぱり努羅莫や。久しいなぁ、地下闘技場の稼業から足洗ったんか？昔はそこそこ悪さしとったのに、今は京都の商店街で仕事するなんてやるやん」

「いやっはは……あの説はどうも！昔の姉御さんとは違って、大分表情が爽やかになったんじゃ…？」
渡河牙努羅莫、個性『ドラゴン』を持つ異形系の個性。口から火を吐いたり、強靭な鱗は鎧と化し、爪や牙は獲物を簡単に八つ裂きにする、正にドラゴンと表すに相応しいものだ。
旧知の仲の様に、再開を果たす二人の狭間で様子を伺う美怜は不思議そうに小首を傾げる。
「貴女達…知り合いなの？」
「ん？あ～…さっき話してた通り、わしは昔そこらのゴロツキを締めてたんやけど。地下闘技場とかで知り合ったんや」
「日影の姉御さんのお連れさんですかい？こりゃまた小さなお子さんで！しっかし最近、滅法姿を見せなかったんで、何があったのかと思いましたが…いやはや、こうしてお元気そうな姿を見れて喜ばしい限りッスよ！」
親しみ敬う努羅莫を見た限り、日影との関係性は大体に想像が付く。日影が忍学生になる前は、こうしてゴロツキを始めた不良や半グレ、地下闘技場の人間と闘い、己のスキルや技術を高め磨いてきた。そうして裏の人間…即ち、忍の視点から見て逸材と判断され、蛇女にスカウトされた訳だ。
忍学校でも着々、顔出しやら死塾月閃女学館の夜桜と闘った経緯などもあり、案外顔がよく効く。
然し最近…というよりも、蛇女が崩壊し抜忍となってから、毎日の忙しさに明け暮れ、バイトの面接やら仕事やら修行やらでそんな暇さえも無かったのだ。
「そいや今はあの地下闘技場はやってるんか？わしがいない間、結構変わってそうやけどな」
「地下闘技場は…燃やされちまいました。なんでも、ラッパーを追い求めた爆弾魔に燃やされちまった様で……」
「あー…ボマーのことか。んで、その肝心のラッパーちゅう男は？アイツ、結構強いやん。他のバトルクラブにでも移ったんか？」
「いや、それがですね！俺もその場に居たんですけど…死穢八斎會ッ

ていう極道の若頭がスカウトしに来たんですよ。治崎だったかな…そうそう、若手で相当な実力があったんですけど、ソイツに負けて恐らく極道の人間になったかと…」
「八斎會…聞いたことないなぁ、東堂組は聞いたことあるんやけど」
「そりゃ弱小ヤクザなんて小さな組で小馬鹿にされがちですからねェ……けど、あの一瞬の勝負の出来事は正直言って、弱小なんて規模じゃありませんよ…。下手すれば日影の姉御も…」
「そかそか、一応情報あんがとさん。まっ…あんさんがこうしてまともに職にありつけて働いてるだけ重畳やんけ」
「えっへへ、俺も日影さんに目ぇ覚められたもんで。あっ！日影の姉御さんも何か欲しいものがおありで？」
「いんや、わしは特に。美怜さんの買い物に付き合ってるだけや」
「ええ、清水寺の晴れ舞台を拝めた後に商店街に寄って来たの。良い経験だったわ」
「彼処は景色を一望出来ますからねぇ！お嬢ちゃんが気に入って貰えて良かったッスよ！」
美怜のご機嫌良さそうな声色に、店員も嬉しそうに笑いながら頭を掻く。と、此処でふと日影は美怜にある事を思った。
「そいや美怜さん、努羅莫に対してはやたらと普通なんやな」
光山優に対しては、何かしら信用しず怪しんでいたり、明から様に不穏な態度を取っていた。例えるなら、蛇女に転校してきた雲雀に対して受け入れはするが何処かしら不審に思っていた焔達の態度の、あの様な感じに似ている。
当初の日影は「一度裏切ったもんがもう一度裏切らないとは限らんもんな」と至極真っ当なことを言い、その時は別にその時と、臨機応変な対応をすれば問題ないという路線で行ってたので、特に気にする様子も無かったが…
「別に、疑う必要性がないもの」
それはそうなのだが、何処か対応の差に違和感を感じてしまうのは日影でなくとも気のせいではないだろう。
然し、何故美怜はそこまでして疑うのだろうか？

「あ!そうそう、京都といや昨日は結構騒動が起きてたみたいで…!何やら正体不明の敵か忍やらが街中を暴れてたみたいなんで、日影の姉御さんやお嬢ちゃんも呉々もお気を付けて…!!まあ、日影の姉御くらいなら、不覚は取らないでしょうが……」
「あー、その件な。ウチも耳には入れてるから、大丈夫や。ご忠告あんがとさん。あんさんも気ィ付けな」
「そうね。昨日に続き今日も、なんて可能性はゼロではないわ」
「街中の警備は結構強めてるらしいんで、余程の阿呆がいない限りは大丈夫だと願いたいですが…このご時世、オールマイトが居なくなって大変ですもんねぇ。
ヒーローに頼るのも良いですが、やっぱこう自分の身は自分で守るのが最善というか…あ、もし何かあったら連絡下さい!」
そう言って懐から名刺を取り出し日影に渡す。
社交辞令みたいなもので少し新鮮な気もするが、努羅莫は京都に引っ越してから随分と時が経つ。
なので不明な点があれば遠慮なく相談しろという意味なのだろう、ならば昔の腐れ縁という事でと、日影は軽く礼を言いながら名刺を受け取り、商店街で一通り買い物を終え後にする。
「結構気の利く良い人じゃない」
人を見る目がある美怜がハッキリと疑いなく口に出すのだから、本当に昔と比べて足を洗い、お天道様に顔向け出来てるのだろう。
昔はかなり気が荒く、賞金稼ぎとして地下闘技場でもそこそこ名の知れた悪名を背負ってたので、こうして改めて久しい再開を果たした後、知人が善良になってるのを見ると、何かしら満更でもなくなる。
「根は悪くないんやと思うよ。だからああして、生きていく道を歩んでいけば、ちゃんと更生できるもんなんや」
「ふぅん……そう。私はあの人の事、詳しく知らないけど、将来良い人になりそうね。
まあ、良い人という判定が何処から何処までかは分からないから、率直な感想でしかないけど」
「せやなぁ…お?アレは…?」

坂道を下り歩いていると、赤ん坊らしき幼女を連れ歩きながら、辺りを見渡すオレンジ色のフードを被った女性が目立つ様に遠くから見えた。
何やら誰かから警戒してる様子だ。
「何かしらあの子達…挙動不審に見えるけれど」
「あれ、何処かで見たことあるなぁ…」
誰やったっけ、と小首を傾げながら日影と美怜はそのまま坂道を下り、商店街を後にする。
何処かで会った様な面識もなくはないが、生憎日影はどうでも良い事や昔のことはよく覚えていない。なので、細かいことまでは覚えていないのだが、見たことのある顔立ちなのは間違いないだろう。
「あれがひょっとしてかぐらと奈楽とかだったりしてね」
「う～ん、どうなんやろ。わしら昨夜は聞いてもどんな見た目かは分からんもんなぁ。かと言って人違いだったら迷惑やろうし」

◇

「奈楽ちゃん？大丈夫？結構、疲れてるみたいだけど…」
一方で、商店街の騒めきと共に美怜と日影が去ってから、心配そうに顔を覗き込む幼女、かぐらは心配そうに奈楽に声を掛ける。
「はい、自分は何も異常はありません。そんな事よりかぐら様はどうか安静に……忍商会の者達がこの近くにいる可能性があります。呉々も自分から離れない様に…」
「しのびしょーかいって、なに？」
こてん、と可愛らしく首を傾げながら尋ねるかぐらに、奈楽は丁寧に説明する。
「忍商会とは、元々忍性戒という抜忍慈善生活サポートとして裏で暗躍をし、鏖魔が仕切っている闇組織です。

時代と共に変わり、今となっては忍社会を裏で破壊、革命を引き起こす為に密かに違法取引などをしており……」
「さぽーと…？いほーとりひきー？う～ん、難しいことはよくわかんないや！」
「すみません…自分の説明不足で……ではまず簡潔に言えば…」
「おーーい！奈楽ちゃあーん！何処にいるのーー!?」
大声で詮索しに来た学生が、此方に来る。
チッ、と間が悪い時に差し込む部外者に舌打ちしながらも、奈楽は周りの目線を気に声主とは反対方向にかぐらを担ぎ、遠く離れるように撤退する。
「ちょっと奈楽ちゃん!?どうしたのー?!」
「申し訳ありませんかぐら様。どうかご無礼の程、お許しを……かぐら様を捕まえる愚かな忍連中が、どうやら嗅ぎ回ってるご様子…。暫し遠く離れましょう」
お姫様抱っこをしながら、遠くかけ離れるように去っていく奈楽。聞いたことのある声は恐らく飛鳥、と呼ばれる忍学生であるだろう。
此方を詮索し出したとなれば、もう上層部から捕獲の命令が下されてるだろう…そうだ、かぐらが復活し、外を出れば自然とかぐらを付け狙うのは、どの世代でもそうだったと言い伝えられてる。
だからこそ、全ての人間からかぐらを守る為に、奈楽は他人を信用せず、誰にも必要とされず、距離を置き、孤独ながらも闘う。
「かぐら様…必ず、守ってみせますから……」
深く、かぐらを抱きしめながら、小さな声で奈楽はそう呟いた。

２２９話「嘘月妄語」

「やッぱり京都と言えば、神社参りも欠かせないわねェ…♪」
京都最古の歴史を持つ下鴨神社に行き着いた春花は、周りの光景を嗜みながら束の間の休息で一息付いている。
元々焔と同じペアで動きましょ、という話ではあったのだが焔の姿は何処にも見当たらない。
…と言うのも、焔自身お腹の調子が悪いと言う事で、先に行ってててくれとの事だった。昨日の食い過ぎなのか、偶然なのかは不明だが、どの道糺の森を抜ければ着くので、道に迷う心配はないだろう。
此処の神社は縁結びや美人祈願としても有名で、女子旅の中でもかなり人気だと言うほどのパワースポットとしても有名で名が知れている。
参拝する殆どが女性層が多いのも頷けるし、カップルを連れて…何て方々も少なくないが、今日は何かと物静か…。
そう、人っ子一人居ないのだ。今日に限って静か過ぎる…というのも、何かと変な感じではあるが…。
（幾ら平日とはいえ…旅行者もいるのに、どうしてかしら…？）
まるで最初っからそう仕込まれてるような、此処だけ神隠しにあったかのような、そんな疑惑の念がチラリと頭の中に過ぎる。京都で物騒な事件が起きてると、ニュースで放映され、旅行者が減ってるのではと推測したが、それにしては人がいないというのは余りにも可笑しすぎる。
「あっ…！春花さーん！」
そんな不穏な空気が過ぎる中、憶測していた春花の耳から愛らしい活力ある声が響き聞こえた。
声主の方向に振り向くと、其処には愛おしくも可愛らしい小動物を

連想させる幼地味た雲雀が元気そうに手を振る姿と、春花を見かけたことに小さく舌打ちをしながらそっぽ向く、クールな雰囲気と共に長い白髪ツインテールを揺らす柳生の姿だ。
恐らく二人だけのイチャラブ空間のデート最中に、自分を敵視？(又はライバル視)してる彼女と出くわした事により、雰囲気やプランがぶち壊された気分なのだろう。
春花の身としても同じ事で、表情こそ大人の色気に近いような、余裕そうにも見えるが、内心としては柳生がいることで此方としても仲良くする事に対して妨害されてしまう為、出来ればいて欲しくないというのが本音だろう。
「チッ…何でよりによって春花と当たるのだ…」
「あら、雲雀ちゃんにオマケ付きの柳生ちゃんじゃない♪こんな所でまた再開するだなんて…奇遇ね♪」
「おい、邪魔者のお前は引っ込んでろ春花。俺は今、雲雀とのデートで忙しいんだ」
「柳生ちゃん!?目的がズレてるよ!?」
柳生と春花は犬猿の仲だ。
未来と柳生との関係性とは違い、愛する雲雀を独り占めしたい二人にとって、両者共に邪魔者に見えてしまうのだろう。そんな板挟みにされる雲雀は、度々に悩んだり、時には怒ったりするが、出来れば仲良くして欲しいと願っている。
とは言え、半蔵学院での超秘伝忍法書争奪戦辺りから、衝突する機会が多いばかりか、二人が仲良くする場面など見たことがないのも確かである。
二人とも、嘗ての事は水に流した…と言うよりも、戦の果てで共闘し、和解したようにもあるので、昔の私怨を持ち出してる訳ではないのだが…。
「此処は女子旅でも大人気のパワースポットだものね…二人がこうして仲良く参拝してる辺り、もっと仲良くなれますように、ッて言う感じにお参りにでも来てたのかしら？」
「それもあるけど…春花さん、雲雀達ね…今、奈楽ちゃんとかぐらちゃ

んを探してるんだけど…見てない？」
「昨日話してた内容のことね？見てないけど…それが、どうかしたの？」
「春花達には関係ないんじゃないか？」
「関係なくはないわよ…？美怜ちゃんも言ってたでしょ？かぐらちゃんの話が確かであれば、到底無視できる内容じゃないし…というか、今の発言を美怜ちゃんが聞いてたら物凄く不機嫌になるわよ？」
あれ程真剣そうに物事を考える美怜の表情はそう見たことがない。いつもは無表情、時には揶揄う時に見せるヘラついた表情しか見せなかった彼女からして、それ程に重大性があると聞く。
というか昨日の内容からして無視できるものでもなかった。
「うーん…確かにそうなんだけど……でもね、今日霧夜先生が帰ってきてから、上層部から忍務が下されて……」
「忍務…ですって？」
聞いた内容によると、簡潔に砕けば…かぐらと奈楽を捕獲し且つ、敵対する忍商会を対処、並びに妖魔を討伐せよとの内容だった。
忍商会と妖魔はまだ分かる。
元々裏社会の闇に潜み、忍すら存在を悟らせずに生きてきた凄腕達…そんな連中相手が公で姿を現した以上、此方としても戦わずにはいられないだろう。
もう一つ、妖魔に関しても目撃例こそないが京都に潜伏してるという情報が確かであれば、被害が出る前に見つけ出し、討伐するというのも納得が行く。
然し、かぐらと奈楽の捕獲には流石に第三者である春花も怪訝そうに眉をひそめてしまう。
謎が多いからだろうか？
それとも忍商会と同じ理由があるのか？
将又、狙われてる忍商会から遠ざけるためか？
いや…第三目線はないだろう…もしそうなのであれば態々捕獲、とは言わずに保護する、という適切な表現の方が正しい。
それをさも獲物を狙うかのように、捕獲と下す辺り、何かあるに違

いない…。
「見てないのもそうだけど、よく考えればわたし達も容姿は見たことないわね…」
「えっとね…見た目はオレンジ色のフードに……」
「やはり自分達の身柄を狙うか」
ふと解説するように雲雀が説明しようとする刹那、雑木林から姿を現わす奈楽と、その背中に抱きついてくっ付いてる幼い女の子供が姿を現わす。
「ッ…!!貴様は…!!」
「こ、この子達が噂の奈楽ちゃんとかぐらちゃん…?」
早くも警戒態勢に入り、鋭い眼で睨みつける柳生に、意外そうにも目を丸くしながら二人を凝視する春花。
奈楽は呆れた表情で春花を無視し、柳生と雲雀の二人にガン飛ばす。
「薄々と予想はしていたが…やはり貴様ら二人も上層部の命令に従う駒か。
本当なら、そのまま姿を眩ませ逃げ果せたかったが…忍務が下された上に目撃例を他者に知れ渡られると此方としても困る…」
そう言うと、奈楽は瞬時に柳生の間合いを詰め
（ッ…!?はやッ――）

ドンッッ!!
!!

と鈍い衝撃音と共に、柳生の腹は奈楽の足蹴りを喰らい、唾液を僅かに吐露しながら、押し出された空気を吐くと同時に、後方へと後ずさりする。
「柳生ちゃん!?」
「手始めに貴様らを消してやろう。只でさえ忍商会の存在も厄介だと言うのに、付け加えて貴様らにまで追われるのも面倒だ。
余計な邪魔者や敵対者は、排除するに限る!!」
どうやら此方の様子を観察していたのだろう。

半蔵学院の面々も自分達がいずれ捕獲する事を悟っていたかのように、まるで最初っからそうなると知っていた素振りを見る辺り、どうやら自分達の想像以上に今回の忍務は非常に重大且つ謎が多過ぎる危険なものだと、直感で理解する。
「奈楽ちゃん、どうしていきなりその人を蹴っちゃうの？そんなの、だめだめだよ～！」
「ハッ……！申し訳ありませんかぐら様…然しながら此奴らは我々の敵…かぐら様を捕獲しようとする輩です。危害が及ぶ前に自分の判断でした行動、どうかお許しを…」
小さな子供の前に敬語になりながらも、謝罪をし膝に地をつける辺り、間違いなく美怜が話してた通り、重要そう…と言うよりも、話が本当であればかぐらと呼ばれるこの子は神様なのだ。当然の反応といえば当然だが、小さな子供の前に敬う奈楽の光景を見てしまえば、不思議と見慣れない光景につい躊躇ってしまう。
「う～ん？そうなの？それなら良いのかな？コマはくるくる～♪くるくる～♪」
こんな幼い子供の見た目をしてる上に、発言やら何やらと本当に小さな子供と変わらない辺り、本当にこの子がヒノカミとして祀られた日の神、神楽だとは思えないのだが…
「それなら此処は私が相手をしてあげるわ、雲雀と柳生ちゃんは増援を呼んでくれる？時期に焔ちゃんも来る頃だろうし！」
「で、でも……」
「ほぉ、雑魚一人増えたところで自分を止められると？貴様も同じ上層部の駒が、つまらん冗談を吐くものだ」
「冗談なんかじゃないわ。これでも私は抜忍の身…悪いけど、そう易々と倒される程、ヤワな鍛え方はしてないわ」
「なら貴様には尚更、自分達とは無縁だろう。其処を退け…いや、自分達に関わるな。粉々に砕け散るだけだ」
両者共に引けをとらず、目線で繰り広げられる敵意が向けられ、緊迫とした空気が冷たく流れ込む。
奈楽の言葉通り、本来なら部外者が口を挟むなど以ての外で、上層

部の命令も下されず、況してや抜忍でありながら忍商会とは違い、奈楽やかぐらを目的としてない以上は、邪魔者であり、同時に何の因果関係もない。縁もない以上、首を突っ込むなというのは正論だ。だが…

「何を言ってるの、無関係じゃないでしょうに。奈楽ちゃんが雲雀や柳生ちゃんに危害を加えるのなら、私も無視できないって話よ」

こんな風に、半蔵学院に危害を加えるのなら黙っていられない。

仲間というよりも、友達だから。

その意味合いもあれば、同時にかぐらや奈楽、この二人のことを放っておけないという意味も含め、春花は奈楽の前に立ち塞がる。

「そうか、なら手始めに貴様から粉々に――」

「――なるのはお前だ、奈楽」

その刹那、低い男性の声と共に、奈楽の背中から無数に鋭い痛みが迸る。

ドスドスドスッ…!!という肉を刺されるような音と共に、奈楽は目を丸くし、カハッ…!と口から血を吐き出す。

「奈楽ちゃん!?」

一瞬の出来事、隙さえ与えない突然の光景に、隣にいたかぐらも血相を変えたように焦りだし

「えッ…?ちょ、何!?」

困惑と理解の追いつかない出来事に言葉を漏らす春花の言葉は、皆の気持ちを代弁するのに十分過ぎるものだった。

「これ……は…」

「おいおい、拍子抜けだな…これくらいは避けてもらわな困る……だからこそだ、あまり強い言葉を使うなよ。弱く見えるぞ…」

声主の方に振り向けば、手で軽く砂利を弄ぶように上に投げ、掌で掴みながら、悠々と三人の方角で語りかける屈強な男が、赤いマフラーで口元を隠しながらそう呟いた。

ベンチに腰掛け、優雅に寛いでるのとは裏腹に、今の今まで一切気配と共に姿を現さず、存在さえ認識出来なかったこの男に、只ならぬ

恐怖に近い未知なるものを感じ取る。
「お前は……嘘月…妄語…!!」
息を切らしながら、背中の痛みを堪え、睨みつけるものの、嘘月妄語は軽く鼻で笑う。
嘘月妄語、懸賞金は２億８５００万。
忍商会という組織の中でｎｏ．２の実力を誇り、同時に佐門とは対等関係にまで登り、更には佐門からは信頼を寄せ付けてるのと同時に右腕として側近に置いている。
事実、気配や感知に長けてる漆月でさえも感じ取れず、更には罪状がほぼ目立たないことから、懸賞金は低いものの、それでも本来であれば軽く１０億超えとも噂されている。
（…今の、ひょっとしてだけど、唯の砂利を投げただけで、奈楽ちゃんに致命傷を…？）
この目で最後まで確認できなかったが、嘘月妄語と呼ばれる男のに手には砂利しか残されておらず、遠距離で奈楽にダメージの損傷を与えた辺り、春花の推測は間違いではないのだが……砂利を投げただけで人が傷付くのは、見たことがない。
「奈楽ちゃん！奈楽ちゃん!!」
「諦めろかぐら、ソイツはウチのメンバーに追われ、疲弊し体力も万全じゃない…俺の目的はお前だ。さぁ…付いてきて貰おうか」
悠々と歩み寄りながら、見下ろすように語る嘘月に、かぐらは涙目になりながら首を横に振る。
「どうしてこんな酷いことするの!?奈楽ちゃんは守ってくれてるんだよ？だめだめだよ!!」
「そうだな、確かに可哀想なものだ。お前を守る為に世界の全てから敵に回されようと、誰も守ってくれない…。
だから、俺が来たからには安心しろ、かぐら…お前が付いて来れば、奈楽は特別に見逃し、身の安全を保障する」
「…ほんとう？」
「嗚呼、本当だとも。それを拒んでたのは寧ろソイツだ。本来なら、惨殺され遺体すら残さぬよう処理されるべき事をしでかしたソイツは、

畳の上で死ぬことすら稀なのだ」
なんだろう、何故かこいつの言葉には何故か説得力があり、名前とは裏腹に嘘を吐いてるようには思えない。
圧倒的な強者のオーラと共に、同時にかぐらに見せる眼差しは、何処か優しい…。他の忍商会のメンバーとは圧倒的に違う素質が感じ取れる。
かぐらは幼いからか、子供だからなのか、疑う余地もなくその手を取ろうとする瞬間。
「悪いけど…流石に騙されないわよ…」
それを、春花が制する。
柳生と雲雀が信じ込まれるように呆然としたのも束の間、ハッと我に帰る。
それはかぐらも同じだろう、嘘月はチッ…と舌打ちをしながら、同時に鋭い目線を向ける。
「人が穏便に事を成そうとしてるのを、横槍入れて邪魔するか…成る程、オマケに柳生に雲雀という半蔵学院の者達まで…余計な邪魔しやがって…」
「穏便？奈楽ちゃんを真っ先に危害を加えておいて、何処に穏便さがあるのかしら？」
確かに、なんて思えてしまう程に、春花の意見はごもっともだ。
邪見心傷の時も穏便に事を進ませようとしていたが、結局奈楽を傷付けようとしていたし、嘘月猛虎がやってるのも、彼と同じ事だ。
「……丁度良い、お前…春花だな？お前も探していたとこだ」
「えッ…？」
意外すぎる妄語の発言に目を丸くし、疑問が芽生える前に、鈍い衝撃が腹部に突き刺される。
「ガッ…!?」
「泥を塗られた事に対し、ケジメを付けさせて貰おうと…な」
奈楽と同じく蹴りを入れ、軽く吹き飛ばされる春花に、妄語は凛とした振る舞いで、地面に擦りつけられ、打ち倒される春花を見下ろす。
「春花さん!?」

「おいお前！かぐらが目的じゃないのか!?」
「ウチは面子が命なんだ。お前らの話は聞いている…邪見心傷が世話になったそうだな？」
　やはり情報共有はされていたか、と内心舌打ちをしながら、柳生は苦虫を噛み潰したような苦渋な表情を浮かべる。
「…お前ら、蛇女との抗争で超秘伝忍法書を奪われたそうだな？然も寄りによって、殺し合いを重ねた相手と悠長に対話、仲良しごっこなど、半蔵学院の忍学生は地に堕ちたみたいだな。全く以って情けない…」
「なに…？」
「凛は妖魔との抗争に敗れ、蛇女に救われ教師となる上に、雲雀…お前は其処の女に利用され、超秘伝忍法書を奪われた挙句に蛇女に諜報活動として転校、更には敵連合に拉致される始末……そしてお前達を担当する忍教師の霧夜と来たら、何たる無能ッぷりだ。余り、泥を塗るような行為はするな」
「な、何なの貴方!?さっきから感じ悪いよ!?雲雀達のこと、なにも知らないのに…!!」
「だったらテメェも俺の苦労が分かるのか？」
「ッ…？」
　雲雀の反論も、威圧を含めた妄語の発言に黙り込んでしまう。
　邪見から聞いたのだろう、嫌な過去を掘り返すように、嘘月妄語は言葉を叩き込む。
「それと…幾ら仕掛けてきたのが邪見心傷とはいえ、俺の可愛い弟分を傷付けたんだ。それなりに、代償は払って貰うぞ」
　刹那、妄語は一瞬にして柳生の間合いを詰め、春花と同じく腹部に蹴りを入れようとするも
「食らうか!!」
　瞬時に脚力に力を入れ、跳躍し蹴りを避ける。柳生が愛用してる番傘で封じても良かったが、この男はどう見ても只ならぬ実力を誇っている…ガードが破られ、奈楽の二の轍を踏み蹴り飛ばされるオチになるだけだ。

「それ！」
柳生は番傘に仕込んであった刀の切れ端部分を取り、煌めく刃を差し向ける。
「甘えよ」
それを素手で鷲掴み、柳生の行動を一瞬にして制するように動きを止める。幾ら相手が強いとはいえ、素手で仕込み刀など持てば血が流れるだろうに…だが、流れない。
「なっ……」
「柳生ちゃん!!このーッ！秘伝忍法【忍兎でブーン！】」
右から柳生の増援として、雷を纏った忍兎を召喚し、筋斗雲に乗りながら一直線に突進して来る。
柳生一人相手に動きを封じられてる今が好機だと判断したのだろう。だが、それは間違いだった。
「だから甘えよ」
雲雀の秘伝忍法に動じず、妄語は力を入れ柳生の番傘を掴み振り回せば、柳生諸共、雲雀の前に盾にするように眼前に突き出す。
「わわっ!?!!」
「しまッ…！」
そしてこの至近距離でブレーキなどできるはずも無く、雲雀は止まらず柳生へと突っ込み、柳生自身も諸に雲雀の秘伝忍法を生身で食らってしまう。
「ガハッ…!!」
「や、柳生ちゃん!!ごめんね!?ごめんなさい…!!」
「…0点」
衝突し、地面へと転がるように倒れる柳生に、涙声になりながら彼女へ駆けつけ謝罪する雲雀。そんな二人を呆れた声で妄語は点数でも、まるでテストの実技みたく呟いた。
「連携がダメとは言ってないが、それでも強さを極めた者に対し、その流れる連携を簡単に崩される危惧がある。お前達、協力し合い連携する姿勢は嫌いじゃないが…仲間に頼りすぎだ。
秘伝忍法も使い時がある、動きを封じられた際はどうすればいい？

お前達は、常に修行に対し作業的な流れでこなしてないか？
周りを見ろ、愚直に突っ込むな、無駄に醜態を晒すな。
弱過ぎる…そりゃ落ちぶれる訳だ」
本当に、心底情けなさそうに呟きながら呆れる妄語に、反論さえできない二人。これでも妄語は本気どころか序盤の肩慣らしですらない。
盤上を見渡し、どう流れる事が適切で妥当か、どう対処すれば良いか、凡ゆる情報処理と整理を一瞬で頭の中で纏め、最短で最善な行動を取っている。
「それならこれはどうかしら!!」
背後から、蹴り飛ばした筈の春花が復帰し、此方へと攻撃を仕掛けている。死角となってるため、声でしか聞こえないが、直感で理解できる。
「ムッ」
然し振り向けば、それは春花ではなく、彼女が愛用してる傀儡だ。最新型の傀儡は機械型となっており、鉄製のグローブで妄語を殴りこむ。
スパァン！と強烈な一撃がめり込まれるも、妄語は片手でそれを制する。柳生といい春花の傀儡といい、素手で簡単に封じ込む辺り、実力は大道寺と同等かそれ以上のレジェンド枠だろう。
「はぁっ！」
そこで更に死角となってる部分で春花が液体の入った試験管を放り投げる。
何本か入った試験管を片手で数個掴み取り、それを相手へ放り投げ返す。薬品の匂いが鼻腔をつんざくものの、御構い無しに春花への対処を怠らない。
そして投げ返された試験管を避けつつ、春花はお返しにと蹴りを入れ、妄語は残ったもう一つの片手で彼女の飛び蹴りを封じ込む。
「貴方…中々強いのね…!!」
「中々？ほぉ、お前にしちゃ随分と自信があるようだが…」
「流石に私一人じゃ勝ち目はないみたいだけど…！それでも、時間稼

ぎにはなるでしょう！」
そして傀儡がもう片方の拳を、妄語の頭部目掛けて振りかざす、が…それを意図もたやすく簡単に避けられてしまう。
続けて二撃、三撃と打ち込むも、それさえ宙に舞う紙切れのように簡単に捌かれてしまう。
頭部では避けられてしまうと悟った傀儡は、今度は妄語の腹部に強烈な拳の一撃を入れる。
スパァン！と脳内に響く強烈な一撃が入る。これは間違いなく喰らった…何より、鳩尾部分だ。
両手が塞がれた状態で、避けられるはずがない。
「成る程な、体術を得意とし、アクロバティックな動きが可能なお前にしちゃ上出来だ」
だが可笑しなことに、嘘月は苦悶の表情どころか、痛覚が働いてないと言わんばかり、表情を一変せずに春花を見つめているばかりだ。
焦りもない、緊張感もなく、平静を装う変化のない表情には、余裕がある。
「だが、なんて事はないな」
すると掴んでた足を軽く捻るように動かせば、春花の態勢も簡単に崩してしまう。
バランスが崩され、そして横腹に軽い蹴りを入れれば、苦悶な表情で地面に擦るように吹き飛ばされてしまう。
「かっはッ…!?」
「こんな物か、伊佐奈を倒したとかいう連中の実力は。その程度か、半蔵を仕掛けた割にはこの体たらく…所詮唯の思い上がりの雑兵程度……つまらん。心底、つまらん」
咳き込みながらも噛みつくような鋭い視線を向ける春花に、嘘月の表情は眉ひとつ一切の変化を見せない。
冷徹、という文字に等しい程の冷たい眼圧を飛ばす嘘月は、ジリジリとゆっくり歩み寄り、追い詰めようとする。
腹部を良く見れば、半開きになったシャツ…春花の蹴った溝部分は硬い土でコーティングされていた。

まるで春花が蹴りを入れた部分のみ、的確に把握したかのように、攻撃を防いだと言わんばかりに。
「随分と……ごほっ！げほッ…！恨まれてる…みたいね、わたし達……」
「……」
「伊佐奈を倒された事…それに対しての怨嗟かしら…。だとしたら、貴方達にとっても、私達は敵と見なされてる…そう、判断してもいいかしら」
「これ以上、テメェらに掛ける言葉はねェ」
そう言うと、嘘月は背中に携帯し備わっていた鉄棒を引き抜く。
「忍商会サポートアイテム――『土竜槍』」
柄のスイッチを押すと、棒状だった武器は、先端部分から鋭利な純白の刃が、鉤爪のようにして現れる。
汚れや錆一つない武器は、正に武人が鍛えあげ、重宝されたものだと一目見て見解できる。
「春花さん！だめええええ!!」
「テメェらもだ。元々コイツらは蛇女…故に、敵対する存在だろうが。こんな奴ら相手に、何呑気に駄弁ってやがる!!」
春花を串刺しにしようと、土竜槍を掲げる嘘月に、危機を肌身で感じた雲雀は叫びながら嘘月妄語へとぐるぐるパンチで突っ込んでくる。
端から見ればふざけた格好なのだが、雲雀なりには真剣でいて、その威力はトラックや巨大な岩を吹き飛ばす程の効果を発揮する。
だが嘘月妄語は腐っても忍商会第三支部を纏め上げる副将。油断も隙もないのは確かであり、尖った鋭利な鉤爪状の槍とは反対に、柄の部分で雲雀の腹部を薙ぎ払う。
「ガハッ…!!?」
「雲雀いぃぃ!!」
「お前も眠れ」
すると今度は懐から火縄銃の形をした武具を取り出し、ガチャリ、と引き金を引けば、柳生目掛けて標準を定める。

「忍商会サポートアイテム『種花島』」
自分が狙いだと分かれば、一先ず防御に回る柳生は、番傘を広げ守備に徹底する。
この男、邪見心傷よりも遥か上の実力者だ。直感で伝わるほどにヒシヒシと強さが実感できる。
ダァンダァン！と耳をつんざき鼓膜を揺らす銃声が二発。硝煙の香りを漂わせながら発砲されれば、柳生の番傘を簡単に貫き、穴を開ける。
「何っ!?」
「防御貫通型、及び人体を貫くよう品種改良したサポートアイテム。ウチの組織はお前らの忍具やドーピング剤を始めたサポートアイテムの開発に成功している。
まッ…元々、紅蓮隊のような抜忍を始めた闇に潜む者たちに売買する為の商売だからな」
未来のような特級火力性の弾丸のようなものだろう。然も弾丸はどれも土…土遁の術に長けた忍と見て間違いない。
「遁術忍法――『御弾邪苦死』!!」
そして、今度は土遁の術を使って連射型のように叩き込む。砂利だけで奈楽に大きなダメージを与えたのだ。それがもし土の破片…いや、銃のような弾丸性を持つ土を向けられれば？
間違いなく生身であれば無傷では済まないだろう。どうにも、この男は常識とはかけ離れた戦いとポテンシャルを発揮させる。
「秘伝忍法――『六道冥界』!!」
だが、柳生に気を取られてる内に、背後から復帰した奈楽が嘘月目掛けて鉄球を蹴り飛ばし、勢いと衝動を駆けた巨大な球が、嘘月を襲う。
「ッ…!!」
偶々だろうか、奇跡的にも柳生に発砲し手を休めれなかった嘘月は、回避する間もなく奈楽の秘伝忍法に直撃する。
全身に伝わる衝撃に、表情は変わらないが僅かにダメージが入ったのだろう…目を瞑り吹き飛ばされる。

「ふっ…!!」
が、体制を立て直すように、吹き飛ばされながらもバク転を駆使して体制を元に戻し、遁術忍法――『御弾邪苦死』で奈楽の追撃を許さぬように反撃をかます。
土の弾丸による銃撃も、奈楽の秘伝忍法により後欠片もなく粉々に粉砕される。
「これで死ね!!」
「遁術忍法――『太巻無双』」
奈楽の最期の決めとなる、強烈な蹴りと共に駆り出される鉄球と、嘘月妄語の巨大な土の太巻が、衝突し、火花と共にお互い相殺される。
奈楽の蹴りを持ってしても、固められた屈強な土は粉々に出来ず、太巻をオマージュにするのは何処か引っかかる。
「はぁ…はぁ……」
「おいどうした奈楽。散々足掻いて俺に攻撃した結果、随分と息が上がってるじゃねえか、大丈夫か?」
「…ッ!こんなもの、クソ喰らえだ!!」
敢えて煽るように心配風に言葉を投げる妄語に、奈楽はより鋭い目付きで吠えるように言葉を投げ返す。
背中に走る激痛と、服越しだから分からないだろうが、血は流れており、砂利が身体の中に入り、ばい菌がこびり付く。
「なら終わりに…」
「秘伝忍法――『Ｈａｒｄｖｉｂｒａｔｉｏｎ』!!」
土竜槍を手に持ち、奈楽に投げつけようとした刹那、蹴り飛ばした筈の春花も態勢を整え、傀儡を操り突進する。
スキーボートのように乗りながら、傀儡は嘘月に向かって縦横無尽に殴り掛かる。
咄嗟に俊敏に避けながらも、前進性能に長けた秘伝忍法により、当たらずともせめて注意を引きつけることには成功した。
それでも槍を駆使する嘘月に、傀儡を刺す前に春花の蹴りによって弾かれ
「秘伝忍法――『薙ぎ払う足』!!」

柳生の秘伝忍法による召喚獣によって現れた巨大烏賊の氷の足に、嘘月も再び『無双太巻』で、柳生の足に対抗。
巨大な太巻が、烏賊の足を乱打し、烏賊もまた嘘月を薙ぎ払おうと全ての足を駆使して対抗。
「秘伝忍法――『忍兎でブーン』!!」
そして春花と柳生により全力で対抗している嘘月は、両腕とも塞がれており、残るは雲雀の秘伝忍法によって嘘月目掛けて突撃すれば、ダメージを繰り出せる。
「……成る程、同じチームでの連携はさておき、今の流れを駆使して三人で対抗…か」
まだ柳生と雲雀なら、先の戦を交えて理解はできる…が、嘗ての敵でありながら、交わる機会も少ない上に、連携による訓練などされてない春花と柳生…または雲雀との組み合わせによる対抗は、偶然にしては上出来であるだろう。
いや、四対一だ。自分が敵である以上、嘘月妄語を倒さなければ、という意志と目的が一致していれば、昨日の敵も何とやら、だ。
「行け!雲雀!!」
「余所見してる暇があるかしら!」
巨大烏賊と傀儡の止まない暴虐の拳、二つの秘伝忍法を太巻による乱打で対抗してる今、後方に下がった所で、巨大烏賊の範囲と春花の前進性能を生かした忍術では、意味がない…。つまり、回避は不可能。
「吹き飛べぇぇぇぇーーー!!」
雲雀が叫びながら忍兎で突進するも、嘘月は自身が窮地に陥ってる中でも動じず
「遁術忍法――『頭土蛙』!!」
雲雀目掛けて、両腕を防いでる中、対抗手段を残してる嘘月は、出し惜しみせずに雲雀に頭突きをかます。
鈍い衝撃音と共に、雲雀の額に打たれた嘘月の頭突きは凄まじく、これまでにない激痛が頭を襲う。
「ッッッ…!?!!」
声にならない悶絶とした駆け巡る激しい痛みに襲われ、額には血が

滲み出る。
頭蓋骨にひびが入ったかのような其れは、自然と目が潤い涙が止まらない。
「雲雀いぃぃ！」
「お前たちが休む暇もなく攻撃を繰り出した結果がそれか…下らねえ。これならまだ弟分達でも自然と勝てるだろうに、俺が過保護すぎたか？」
首を軽く跳ねるように傾げながら、溜息を吐く嘘月は、そのまま強烈な二撃を傀儡と巨大烏賊に叩き込む。
「くっ…!?不味いわ…！このままだと流石に…」
「クソ…！雲雀をあんな目に遭わせただけでも許さないというのにコイツ…!!」
攻撃を与える余地も隙間もない。
その上まだ本気を出してないだけでなく、奈楽が与えた攻撃も全くと言っていい程にダメージが残ってない。
歯軋りをしながら、己の打ちのめされてる現状に思わず血が滲み出そうになる。
「これで四人まとめて殺せば上々か。全く、かぐらを捕まえるのに手こずらせやがって…」
呆れたと同時に、手を煩わせる四人に心底腹が立ちながら、槍を構えようとした瞬間――
「秘伝忍法――『魁』!!」
灼熱の炎を纏った爪撃が、嘘月の背中を抉り斬る。
颯爽と現れ、不意を突き、遅れてやってきたのは、我が紅蓮隊の棟梁、焔だった。

２３０話「焔ＶＳ嘘月」

熱く滾る三爪の閃きと共に、烈火の如く燃える炎が、嘘月妄語の背中を激しく襲う。
ゴゥ!!と鈍くとも発火した音、灯火の様に明るく、それでいて触れた皮膚は火傷を負う。
「すまない春花！待たせた!!」
「焔ちゃん……！」
真打の登場。
我らが頼れる紅蓮のリーダー、焔の助太刀に、瞳に希望を灯らせる。
両手に得意の武器である六爪の刀を持ちながら、嘘月妄語の背中を斬り裂いた…筈なのだが。
（……血が、出ない？）
「遂に来たか……予定ではお前も一緒に道連れにしてやるつもりだッたんだがな…」
然し斬り裂いた服の中からは、背中一面とも土でコーティングされた土鎧。土により致命傷と共に焔の火遁を土で塞いだのである。
不意打ち狙いは忍の世界では序の口、更に強い敵程不意を突かなければ勝機が見えない輩を前にごまんと相手をした嘘月妄語にとって、油断も隙もない。
だからこそ、予め外敵から身を守る為に背中に土を張り巡らせていた。
「まだまだぁ!!」
「ッ」
焔の秘伝忍法『魁』はこれで終わりではない。
追撃を噛ませんと言わんばかりに、続けて、二連、三連へと目にも止まらぬ高速移動で相手を縦横無尽に翻弄とする秘伝忍法は、蛇女に

入学した頃から目にしてある。
「食ら――」
ドゴッ――!!
「ッ!?」
だが、続けて嘘月に三爪の焔撃を叩き込もうとするも、焔よりも遥か先により速く先回りし、頬に蹴りを入れる。
頬に伝わる重量感と共に迫り来る圧倒的な足蹴りにより、吹き飛ばされ、神社の鳥居に直撃し、半壊してしまう。
早い話秘伝忍法による強制キャンセル。初対面とはいえ、意図も容易く看破されてしまうというのは、これはまた衝撃的な事実だろう。
「大袈裟だな、そんなものは」
だが現実とはいつだって非常識と思える現象がリアルとして突きつけられるのは、今頃話す事でもないだろう。
息を咳き込みながら、ギラリと鋭い眼光を放つ焔を前に、物怖じせず距離を取る嘘月は、土竜槍を手に持ち、仕留めに掛かる。
「神楽様…!今のうちに……」
ボロ布のように土埃で身体が汚れていた奈楽は、抱き寄せるように小さな幼女を包み込めば、嘘月が視線を逸らしてる隙に逃げ果せようと地に脚を蹴り、走り出す。
「逃げられると思うなよ…!!」
そして奈楽の逃亡を図る事を悟った嘘月は、直ぐ様手に持ってる槍を奈楽の背中目掛けて投げ飛ばす。
「土還流!!」
投げ飛ばされた土竜槍は、意志を持つかのように奈楽目掛けて獲物に喰らいつくように、ブレる事なく飛躍する。
槍の先端部分が空を切り裂き、衰える事なく真っ直ぐ進む。
グサッ…!!
嫌な音が耳をつんざし、槍は無情にも貫いた。
だがそれは決して奈楽の身体ではない…。
「ナイス…ファインプレーよ…」
身体に痣が出ながらも、何とか春花は傀儡を利用して奈楽を庇う形

で守る事が出来た。傀儡はプシュプシュ…と煙音を鳴らしながらも、機能を停止させる。
そして貫いたからか、意志を持ってた土竜槍は同じく機能を停止しそのまま動かなくなる。
「チッ…！邪魔を……」
「秘伝忍法――……!!」
春花の邪魔に心の底から舌打ちをする嘘月に、完全に仕留め損ねた焔が跳躍し、大きな素振りで六爪を振るう。
「【隼】!!!」
炎を纏わせた六爪は、再び熱を浴び、駆け抜ける様に嘘月目掛けて切り裂き振るう。
咄嗟の事に回避よりも防御に徹した嘘月妄語は、両腕に磁石のように硬い土を纏わせ焔の秘伝忍法を瞬時に防ぐ。
硬い土を掘るように、六爪が抉り、炎は土により熱ごと遮断され、攻と防が掌突。斬り終わり、僅かな隙が生まれた事を見解した嘘月は、直様に土を大きく踏み込み、地面から氷柱のごとく、土棘を生やし串刺しを試みるが、それも空虚と化するように空振りに終わる。
焔はその隙を見せたと思わせてからの、大きく跳躍し、六爪を勢いを増して大きく同時に振り翳す。
「はあああぁぁぁーーーッッ!!!どうだぁ!!」
それを腹部に抉り、ガラ空きだった隙を狙われ、地に足を擦り付けるよう大きく後退するように吹き飛ばされる。
先ほどのお返しと言わんばかりの焔の機転を利かせた猛攻は、春花が奈楽を逃した功績も大きいだろう。
「……ッ！」
ガフッ！と口から僅かに血を流す嘘月。
此処で初めて、手も足も出なかった強敵に一矢報いることが出来た、そう希望を実感させるようだった。
「春花はアイツら二人を逃してくれたか…済まない、助かった！」
「焔ちゃんの方こそ…来てくれなかったら今度こそ全員とも終わりだったし……」

息を切らしながら、親指を立ててジェスチャーを送る春花のダメージは、雲雀や柳生と同じく酷く手荒だ。
三人とも学生級とはいえど決して弱くはない。
柳生と雲雀がどの程度の実力かまでは今となっては不明だが、春花も幻術やらトリッキーでアクロバティックな戦法を得意とし、敵を翻弄とさせる事に長けてるにも関わらず、嘘月妄語という男の足止めが命掛け。
後から登場した焔からして何が何やら…というのが現状だが…。
「…腐っても、どうやら半蔵の超秘伝忍法書を奪取した実力は、あるみたいだな。棟梁よ」
「貴様か…！春花やアイツらをここまで手荒く弄んだのは…」
「無論。お前にとっても俺は、倒さなくてはならない敵だろう？」
「何を…」
「焔ちゃん、気を付けて…。ソイツは忍商会の人間よ…！」
「ッ!?忍…商会…!!」
嗚呼、道理で春花や雲雀、柳生を狙われたという訳か。
となれば、あの二人組…先ほど逃げていった者は忍商会がマークして追いかけてる奈楽とかぐらの可能性は極めて高いだろう。
「漸く、待ち焦がれてた因縁だ。伊佐奈の件と言い、話して貰う事は山ほどある…が。先ずはお前を潰さない限りは、どうにもならんか…。此処に来る道中、人気がないのは、お前が人払いをさせたんだろう？」
「…無関係な人間を巻き添えにはしたくなくてな。それに伊佐奈など別に、俺個人としてはあんな外道はどうでも良い」
個人としてはどうでも良い…？
その台詞からして、忍商会としては無視できない案件だが、こいつ自身はどうでも良い、と言いたいのか？
いや…今考えるのはよそう。こういう考察は、美怜が一番に長けている。
「柳生ちゃん！大丈夫…？」
「ああ、そんな事より雲雀…お前の方は…」
「雲雀は何ともないよ！ちょっと、頭は痛むけど…」

ちょっとどころではない。
実際に脳天がカチ割り、頭蓋骨が割れたのではないかと錯覚さてしまうほどに酷く鈍い痛覚が今も鳴り止まない。
おでこに滲む血を流しながらも、それでもはにかむように安心させる雲雀は、嘗てドジで腑抜けで、何も出来ず失敗だらけの落ちこぼれとは打って変わったようだった。
そういうところもまた、雄英での過酷な教訓を受けたからこそなのだろう。
「華眼がありゃ、使えれば、こんな努力を積み上げてきた強者だって一瞬で無力化出来る。にも関わらず使わないということは、使えねえという事か…宝の持ち腐れ…。
警戒していた事に越したことはなかったが、同情はする」
「ッ!!五月蝿いよ!・さっきから貴方は何なの!?雲雀達のこと、何も知らないくせに!知ったような口振りで…!!それに、柳生ちゃんや春花さんを傷付けて、貴方の目的は何なの!?雲雀の事はバカにしても良いけど、皆んなをこれ以上傷付けないで!」
怒気を孕んだ雲雀の叫びは、焔や春花、柳生でさえも聞いたことのない、剣幕した怒声は初めて聞いた。
今まで会って無かったことも含め、柳生も生まれて初めて聞いた。
それ程に雲雀は心身共に成長した事になるのだろうが、嘘月妄語は肩をすくめて答える。
「…それを答える義務は、俺にはない。強いていうならこれも、組織としての取り立て…ケジメを付けに来ただけだ」
一人殺されたら三人殺せ。
組織として泥を塗られたら、相手の組織を潰せ。
仲間を傷付けられれば、躊躇なく殺せ。
闇の世界で生きる人間は、こんな血みどろと殺伐な空気で当たり前。
その当たり前の人間と、そうでない人間では相容れないのは当然の理。
住む世界が違うというのは、正にこのためにあると言っても良いほ

どに。
「ああそれと…俺は一人たりとも馬鹿にしちゃあいねぇ…!!どんな相手でも、俺は決して侮辱なんてしない。じゃなきゃ態々俺が弟分達を出さずに出るわけがないだろうが!!」
こうして忍商会のサポートアイテム『種花島』を懐から取り出し、銃口を雲雀に差し向ける。
それを見た柳生は、痛む身体に鞭を入れるよう奮い立たせ、雲雀を抱いて回避に専念する。
防御をしようにも、先の戦いで貫通され無謀だと知らされた柳生は良い判断を取ったと言っても良い。
「傷付けるなだと!?なら最初ッから忍など目指すな!!忍になった時点で、仲間も家族も危害が加えられると思え!
安堵なんざ、何処を探しても忍である以上存在なんてしねェんだよ!!」
「嗚呼、全く以ってその通りだ!!」
ゴウッ!!と轟く炎の音と共に、焔は横槍を入れるように六爪を巧みに扱い、嘘月妄語の邪魔をするように何度も何度も、斬り刻むように、空気を斬り裂く。
「春花!柳生と雲雀を逃がせ!その序でに他の連中も呼んでくれ!」
「ええ、了解よ!」
あの焔なら「私一人で充分だ!」と豪語していたのだろうが、ベルゼ兄さんの戦い以降、心身共に成長したのか、何処か冷静さを忘れず、仲間の救助要請を申し込む。
いや、それ程に相手が強すぎるからだ。
例えるならゲームで言えば、序盤のエリアで強い敵がインプットされ、最悪にもエンカウントしてしまったものだと考えるのが妥当だろう。
あの強い敵を相手に余裕の笑みさえ見せていた焔も、今回ばかりは真面目に死と向き合っている。
「タダでさえ奈楽とかぐらを逃されただけでも大きな汚点だというのに…これ以上でしゃばる真似を……するな!!」

すると嘘月妄語は手を地面に触れると、ゴゴゴゴゴ…!!と地震を鳴らし、両手で指をくねくねと動かす。
「土柱(つちばしら)――大御那増邪苦死(おおおたまじゃくし)!!」
地面から突如、によきりによきりと大きなオタマジャクシのような形ある土が、春花、柳生、雲雀を押し潰さんと言わんばかりに襲い掛かる。
ここまで巧みに土遁を扱える人間などほぼ居ない…故に、こんなにも自由に土の遁術を使える人間など初めてだ。
鈴音先生でさえも、こんな忍術を教わった覚えなどないし、２４時間以上もの土に潜る訓練をし、土遁を極めていた者でも、これほど熟練された忍は存在しなかった。
「おい…何だあれは!?」
「ちょっと嘘でしょ!?何でもアリなの…?!」
「ッ!!力を貸してくれ…!炎月花!!」
絶対絶命的な状況
そして七本目の刀を抜き取り、瞬時に周囲の空気と共に灼熱の暴風と紅蓮の炎が焼き尽くす。
「ッ…!?そうか、お前も確か覚醒持ちか…!」
そして凡ゆる六本の刀を宙に浮かせ、縦横無尽に土柱大御那増邪苦死を断頭するよう焼き斬り捨てて行く。
紅蓮の炎を纏わせた六爪の刀は、今や溶鉱の如く触れた物を火傷と同時に溶かすかのように、バターを斬るよう凡ゆる障害を紅蓮でばっさばっさと切り棄てる。
「行け!!走れ!!!」
焔の剣幕として震えた大きな叫び声が、三人が走り出す引き金となる様に、地を蹴り素早く走り出す。邪魔もされず、ダメージはあれど、それでも足を折られなかったよりかは幾分マシだ。
焔が時間を稼いでる内に、増援を呼び焔の救出に赴く。
「頼んだわよ、焔ちゃん!!」

◆

「……行ったか、アイツら…」
大御那増邪苦死の無限に思える土柱が漸く止んだ頃には、身体に土の細い破片が食い込み、体全身、血が流れてる焔は、固目を瞑りながら身体を起き上がらせ、仁王立ちしている嘘月妄語を睨み付ける。
「…今のはお前を本気で殺すつもりでいた。
それでもこれ程の猛攻を耐えれるのなら、恐らく弟分達が出向いてもお前を倒すことは難しい…か。
抜忍としての過酷な環境がお前を厳しくさせたのか、将又才覚があるか……成る程、半蔵が落ちぶれていたよりも、お前が半蔵をも超える実力があったからか…」
「お前…何で、そんな嘘を吐く?」
「…何?」
ピクリ…と、焔の声に反応する嘘月妄語は眉を顰める。
「あれ程の猛攻に、体術もあるお前なら、その隙に私を殺せることだって容易かった……
本気で殺すつもりなんて、最初ッからなかったんだろ?」
「…嗚呼、指を動かしながら蹴りだのなんだのと、一つのことに複数同時に行うのは中々に難しくてな。
お前も、秘伝忍法を発動してる真中、違う秘伝忍法を扱うのは無理だろう?それと一緒だ。俺はよく嘘を吐くが、その時はきちんと忍術を発動させている。俺がお前に嘘を吐く道理はないしな」
嘘月妄語はその名の通り、嘘を巧みに利用する。
忍術の詳細は不明だが、何故か絶対に騙されてしまう程に、言葉に重みや心理に影響を与える忍術だ。
本人曰く、何の意味もない忍術と言ってはいるが、それも嘘なのかどうかは真偽は不明だそうだ。
そして先程の忍術は、無数の土のオタマジャクシを出す代わりに、指を使わなければならない。
指を動かしながら、神経や意識を全集中しなければならない為、その際には一切の攻撃が出来ないのが難点なのだ。

「…そいやお前、ヤケに半蔵やら超秘伝忍法書に固執してる様だが…私達に恨みでもあるのか？」
「いや、無い。仮にあったとしても、どの道お前と俺が戦ってる以上、それ以外に理由がいるか？」
「…そうか」
納得したように焔は首を縦に頷けば、再び指に力を入れて炎月花を握りしめる。
強い敵程、宝刀――炎月花は応えてくれる。呼応するかの様に炎は激しく燃え、紅蓮の色は煌めき増していく。
嘘月妄語を相手に、ベルゼ兄さんと同等な程に、肌に緊張感が走り、灼熱な炎が身を焦がすように熱く燃え滾る。
「なら、これ以上言葉は不要だな!!」
紅蓮の炎を纏わせた炎月花を構え、迷うことなく一直線に走り出す。滾るこの鼓動…いつだって焔の心を満たすのは、強敵と戦う時だ。
だが、嘘月妄語は焔以上の何倍もの実力を備えている、忍商会での兄柱。
「土遁・土竜蹴り!!」
脚に幾重もの土の層を纏わせ、勢いよく強い一撃の蹴りを炎月花に入れる。
ガギィン――!!と金属を叩き斬る弾けた音が鼓膜を揺らがし、灼熱の炎に物怖じせず火花散らす炎月花と土竜蹴り。
空気が僅かに痺れれば、揺らいだかの様な錯覚が生じる。
「はあぁぁぁぁ!!」
そして六爪を自由に巧みに操り、嘘月妄語目掛けて振るわれる。
紅蓮の炎を纏った六本の刀を前に、嘘月は身体の軸を回転させながら、溝、脚、肩、頭、胸を目掛けて飛んでくる刀を避けていく。触れることも、当たることもなく虚しく空振り、舌打ちをする焔を余所に、着々と回避しながら破壊された春花の傀儡の残骸に突き刺さったまま残っていた愛用の槍を強く握り締め、抜き取れば、焔よりも遥かに上空へと跳躍し、槍を差し向ける。

「土蛙雨牙彫柳(つちあまがえる)!!」
上空に飛び、まるで雨の如く槍の刃先を縦横無尽に突き刺し、槍刃の雨嵐を降らしていく。
１００、２００もの無数の槍の斬撃を前に、焔はひたすら炎月花を振りまくり、紅蓮の炎と共に斬撃を斬り払う。それでも永遠に続くかのように放たれる突き刺す槍撃に、太腿、腹部、頬、肩を掠り、鋭い痛みと共に血が流れていく。
苦悶の表情を耐えながら、地面に着地すれば、何とか雨を免ぐように全力疾走で回避をする。
槍の雨が止んだかと思いきや、嘘月は着地したかと思えば今度は槍を大きく、激しく回転させ一直線に向かい出す。
「蟻地獄・六槍!!」
そして放たれた強烈な槍の一撃が、焔に牙を剥く。
咄嗟に炎月花で迎え入れる焔の判断は、大きなミスを犯す。
放たれたのは一撃では無い…何と、一個の槍刃が、まるで六つに分かれたかの様に残像が映り出し、一本の槍刃を炎月花が受け止め、残り五つの槍刃の残像は、肩を抉り、腹部を突き刺し、右腕の皮膚を掠め、脚を貫く。
「ッ?!!ガッ…はぁっ?!!」
強烈で激しい痛みが頭頂から足のつま先の全身に駆け巡るような錯覚と共に、痛みに感傷してる暇もなく、今度は頭部に鈍器でぶん殴られたかのような大きな衝撃を受ける。
槍で焔の頭部を叩き付け、円を描く様に反時計回りに振り、槍刃で焔の身体を突き刺すと同時に吹き飛ばす。
口から血を吐き出しゲホゲホ!と大きく咳き込み顔を上げれば、今度は、種花島で発砲し、土の弾丸が襲い掛かる。
血を流す体に鞭を入れながらも、骨が悲鳴を上げながらも、横に体を転がる様に回避しながら、それでも追尾するかのように発砲は止まらず、残りの六本の刀を操りながら土弾を弾き防ぐも、全部は防ぎきれず、何発かは身体を貫通する。
内蔵までもがやられるかのような感覚と、血が止まらない戦場。

（コイツ…！まるで、私に攻撃を与える隙すら作らせず……）

焔の覚醒が、何の意味も成さない。

嘗て、今までの敵…伊佐奈や怨楼血を相手に紅蓮の焔でも何かと通用はした。

然しベルゼ兄さんという大妖魔を除き、忍の相手でこれ程苦戦を強いられるのは、この男ただ一人である。

同じ忍としての男でも、小路とは違って何もかもが正面からの精々堂々とした闘いだ。

スタタタッッ!!と凄まじく距離を縮めていく嘘月は、全力疾走で走り抜け、槍を回転させる。

間合いを詰めさせてはいけない…回避するにも洗礼されたあの動きと獲物を確実に仕留めに行く集中力、回避も無理。防御も無理。

ならば…

「絶・秘伝忍法――【紅蓮土跳撃】!!」

激しく燃え盛る紅蓮は勢孟の唸りを上げて、六本の刀が紅蓮と化し、灼熱の刀を纏っては斬撃を繰り返す。

その余波に紅蓮の炎が轟々と揺らめき、周囲を焼き尽くす。

六つの刀を交わせ、突っ込む嘘月に一刺し、また一刺しと嘘月の身体を抉るように刀は突き刺していく。差し詰め、これには効いてるのか否や、僅かに表情を曇らせる嘘月は、衰えることなく突進し、紅蓮の炎を前にする。

灼熱の炎は触れるだけで皮膚を焼き、火傷では済まない程の熱量を誇り、近付いただけでも炙られる。

刀では無理でも、全身をも燃やし尽くす炎を前に、嘘月妄語も無傷では済まない筈…なのだが。

全身に紅蓮の炎を纏わせながらも、それでも焔の息の根を止めんと言わんばかりに、土竜槍を回転させる。

「何…!?絶・秘伝忍法を食らってしても…!!マズイ…!!」

「お前の紅蓮の炎を借りようか……――【徹火巻鬼（てっかまき）】!!」

紅蓮の焔の遁術によって生み出された、火遁の上位に当たる紅蓮の炎を纏わせた土竜槍が、焔の横腹を深く抉り、突き飛ばす。

止まらない激痛と、傷口に感じる火傷に、脳が破壊されんばかりの激痛が走り、ドーパミンによる脳汁が溢れ出す。
声にもならない絶句する苦痛を前に、嘘月妄語は静かに呟いた。
「焔よ覚えとけ…時に蛙は、蛇をも喰らう…!!」

231話「暗雲」

蛇とは爬虫類にしてヘビ亜目に分類された、四肢の無い肉食性の有る動物だ。俊敏な動きと獲物を執拗に狙い、牙やピット器官を用いて相手を仕留める狩りに長けた生き物である。

時に毒を、牙を、身体を、万遍なく巧みに扱い獲物を仕留める。特に驚きなのは獲物を丸呑みする才能さは、細く鞭のような身体からは考えられないだろう。

生業とする獲物は特に蛙などが多く、また両生類である蛙からしても天敵と呼ばれている。反撃する術なく、捕食される側は抵抗も虚しく呑まれる定め。

然し、時に捕食者をも捕食する蛙が存在する。

その名もアフリカウシガエル――蛙という多々ある種類の中でも図体がデカく、食欲旺盛。何よりも天敵とされてた蛇でさえも物怖じせず、捕食してしまうのだ。

そう、今まさに…アオダイショウを痛ぶり、確実に獲物を仕留めようと全力で潰しに掛かるアフリカウシガエルのように。

「がッ…!!ぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーッッッ!!!!」

紅蓮の炎を纏わせ、鉄性の刃物から伝わる灼熱、そして腕力を活かした土竜槍による忍法――【徹火巻鬼】は、強烈な一撃で、横腹を抉られ傷口に深い火傷を浴びる焔は、覚醒状態である紅蓮でさえも致命傷を負い、悲痛な叫びで天に吠える。

だが…

「…今の一撃で確実に仕留めるつもりだった。なのに、横腹…咄嗟に身を躱したか。成る程、伊達に抜忍生活を送ってる只の餓鬼では無さそうだ。幾ら蛇女が名門と言えど、外の世界では名誉も世間体も無意味と化す」

心臓目掛けて確実に息の根を止める気でいた。無論、手を抜いたわ

けでは無い。
だがあの一瞬僅かに身体をズラして避けた…あの速度に重度の攻撃の嵐…まともに避けれるはずが無いのにだ。
「見事だな、益々惜しい。そんな逸材が、抜忍か……世知辛い世の中なこった、全く」
今にも蹌き苦しみ、血液を流す焔を見下ろしながら軽いため息を吐く。いつだって、何処だって、些細な事柄で自分達を捨てるのは、上層部の人間だ。
今の糞ッたれた忍社会の犠牲者、と考えれば、若手なのに益々惜しい。だからこそ勿体無い。敵同士で終わることが。
然しだからと言って勧誘するほど落ちぶれては居ない。
「だが、これもケジメだ焔。その悲痛な叫びも、ダメージも、お前が嘗て他者にシてきた事だ。その中にきッと、傷付けちゃいけねえ奴も、酷え目に遭わせたんだろう?」
ザッ、ザッ、と駆け寄りながらしっかりと足を地に踏み締める。焔の血液で染まった土竜槍を、ゆッくりと構えれば、鋭利な刃物が獲物に向けられる。
「最期に言い残すことはないか?次は確実に仕留める」
「はぁ……はぁ……なァ、お前……何で、忍商会なんかに付いてる…其れほどの力が有りながら……」
「……良いぜ、頑張ったご褒美だ。冥土の土産に話てやろうか」
喉元に刃先が触れる。
足で腹を抑え固定しながら、嘘月が口を開こうとした刹那――
「焔ちゃんを離してェ!!」
聞き慣れた友だちの声が、鮮明に耳に届き脳を活性化させる。
聞き慣れない言葉が、再び邪魔をする。
背後からの声…気配の流れ、死角による攻撃は警戒心をゆるめてない嘘月には無意味。
流れるように此方も迎撃に入り、土竜槍を相手に差し向ける。

「焔ちゃんを離してえェ!!」
だが其れは、決して矛先が相手に当たることは無かった。
寧ろその逆、警戒心を緩めず死角のなかったはずの嘘月が、一矢報いたかのように刃先が皮膚に減り込み、血飛沫が上がる。
「飛鳥!!」
春花と雲雀、柳生の増援により紅蓮隊辺りか、よくて半蔵の面々かと期待してたが、まさか早々に飛鳥とは。最強の友だちという因果か、嘗て死闘を繰り広げた彼女が、助けに来てくれたのだ。
「ッ…!?!!!

悪忍が、交えるとでも?ある訳ねェ…そんな馬鹿げた話が…」
「貴方が一体どんな理由で、焔ちゃんを傷付けたのかは知らないけど、私にとって焔ちゃんは最強の友だちだから!!友だちを助けるのも、守るのも、善忍としての私にとって当然の役目だから!!」

嘘月妄語の言ってることは解る。
今でこそ平和の象徴が亡くなった現在、善忍も悪忍も分け隔てなく手を取り合い、大きな穴を修復する為に戦力を補うという点は理に適ってる…。とはいえ、焔達の今の立場は抜忍。そして元々は殺し合いを重ねた悪忍だ。そんな相手に庇うような真似、端から見れば異端だろう。
だが飛鳥にとって、焔は最強の友だちだ。そして、友だちという真実が、嘘月妄語の凝り固まった真実を打ち砕くように、脳を揺るがす。
あの、殺し合いを重ねたアイツが、友だちと言ったのか?

『ほら、幼馴染以前に…友だちでしょ私たち。仲間を助けるのも、友達を守るのも、当然じゃない?』

飛鳥の言葉が、嘗ての恋焦がれた想い人の言葉と重なり、心臓がドクン!と脈を打ち、乱れてしまう。
動悸のような衝動と、嫌な冷や汗が流れてしまう。
アレだけ優勢だったのが、何故か今となっては逆転されたかのような嫌な気分…其れ以前に、忘れたかった嘗ての想いが、自然と想起させてしまう。
「飛鳥…気を付けろ!ソイツは…「予定変更だ…」…何!?」
焔が忠告の意を唱えるのを遮る様に、嘘月妄語は冷静な声を下す。
「流石にこうも邪魔者と対峙すれば、時間と共に客足が戻り、警察やヒーローが来れば幾ら俺とは言えど無事じゃ済まない。故に、かぐらを捕獲する為が…台無しだ。此処は一旦引いた方が良さそうだ…」
「え!?ちょ、ちょっと……」
「待て…!逃すか…ッ!!」

飛鳥が来てから一気に形勢逆転したのか、これ以上邪魔者が入れば不都合故に不合理的だと感知したのか、槍を納めれば迷わず地面に潜る。まるで土竜が地面に潜るかの様な、其れこそ溶け込むかの様に土中に、流れる様に潜伏すれば、音もなく消え去った。
「取り敢えず…助かった、のかな…？」
緊迫とした筋肉の緊張が解れるように脱き、脱力感が襲う。刀を交えた訳ではないのだが、其れでもあの嘘月妄語という漢に何処か、大道寺先輩や黒佐波に引けを取らない、死線を潜り抜けた猛者の片鱗を感じ取った。
多くの命懸けの戦いを何度も繰り広げた飛鳥だからこそ、解る直感。然し安堵した束の間、焔は重傷になりながらも、何とか筋肉に力を入れて無理矢理立ち上がる。
「消え……た？クソ……！私とした事が…何たる体たらくだ……！」
「あッ…焔ちゃん！無理して動いたらダメだよ！」
焔の悔しげな声色に、飛鳥が駆けつけて来る。
別に焔の戦闘面も悪い訳では無かったが、相手が強過ぎた。唯それだけだった。
多対一でも平然としてられる立ち回りと、多彩なる攻撃手段、オマケに武器や忍商会特有のサポートアイテムによる乱用、加えて仲間同士の情報収集。
焔も幾重もなく壁にぶつかって来た。その度に乗り越えては、常に日々精進しながらも、強さに磨きを掛けていた。
これからもッと強くなる、その矢先に超えられない壁を前にした様なこの衝撃は、外の世界はまだまだという思い知りが、心の炎を曇らせていた。
「チッ…春花が呼んだ援軍は飛鳥1人だけか…とはいえ、何でよりによって…」
「???春花さん…？焔ちゃんが何を言ってるかは分からないけど、私は奈楽ちゃんとかぐらちゃんを追ってたら、なんか焔ちゃんとあの人が戦ってるのを見ちゃって…」
何だって？と眉を顰めながら飛鳥の話を聞く辺り、春花が増援を呼

んだ訳ではないらしい。
すれ違いだったのだろうか、何て奇跡的なタイミングだったのだろう。だが飛鳥が来なければ殺られていたのは事実とはいえ、最強の友達兼最強のライバルに貸しを作る事になッたのは、正直癪に触る。
「となれば春花さんは今、仲間を呼んでるッてことかな…取り敢えず逃げちゃったあの人を追いかければ良いのかな…其れとも、奈楽ちゃんやかぐらちゃんを追い掛ければ…」
嘘月妄語が何を行動に移すかは不明、然し放っておく訳にも行かないし、斯く言う奈楽やかぐらの捕獲を無視する訳にもいかない…。抑も嘘月と奈楽にかぐらの行方が知らない以上、どの道詰んでしまってるのだが。
「焔ちゃんは?どうしてあの人と闘ってたの?抜忍の人だったりして?」
「いや…嗚呼、そう言えば飛鳥は知らなかったのか…。さっきのアイツは忍商会の人間だ。あれ程の気迫と戦闘力、並の選抜メンバー筆頭どころじゃない……」
「えぇ!?あの人が……」
昨日に引き続き今日も忍商会による襲撃。
だが違う点といえば、一般市民による無差別な襲撃やら攻撃手段とは違い、嘘月と呼ばれる男は敢えて此処へ招き入れる、或いは知っていたかの様子で予め客退をし、被害を浴びせる事なく標的のみを仕留めに掛かっていた。
単に慎重になッただけなのか、仁義深いからか、理由はどうであれ、忍商会からして自分達は邪魔者としか見られてないようだ。
「そういえば飛鳥は奈楽とかぐらを追っていると聞いたが……」
「ああ、えっと…」
飛鳥は真実を吐こうとする口を閉じて、思わず口籠る。
霧夜先生から任命された、『かぐらの捕獲』…善忍呑みならず、全国と言っていい程に多くの忍が捕獲命令を下された。
尚、外部からは妖魔だの忍商会を討伐するだのという忍務を受けてる飛鳥にとって、此れを口に出して良いものか。

まだ忍商会は理解できる。焔紅蓮隊も忍商会に目を付けていると聞いた…であれば、利害の一致と言うことで、お互い目指すものが一緒であれば協力して闘える。
妖魔も上述と同じ例だ……然し、かぐらの捕獲に関してはどうだろう？
未知たる部分が色濃く出てるのもあるが、其れを聞いて焔がどう行動するだろう？
……いや、余計な考えは辞めよう。
忍の忍務を下手に校外にバラすのはご法度だ。雄英での生活をしていた飛鳥にとって、久しい感覚たる忍としての使命感。そんな口籠る飛鳥に、焔は首を傾げる。
「どうした？ひょッとして何か言えない理由でもあるのか？」
「あっ！ううん、何でもない！ただ…ほら、昨日に続いて今日も狙われてるのかなって思って…あはははは……」
何とか言い訳を垂れながら、上手く誤魔化そうとする飛鳥は苦笑いの笑みを浮かぶ。そんな飛鳥に不信感を抱きながらも一瞥する。
（……取り敢えず、飛鳥の事は置いといて…。何だ？抑も、奴等の動きが読めない…。何で、私達がいる所に奴が居たのか…）
客退けとして、敢えて此処に来た時に仕留める的な発言を嘘月妄語は喋っていた。其れは自分達蛇女…ではなく、忍達がよくやる手段だ。
忍商会、なんて呼ばれる闇組織の連中だ。其れ相応の動きが出来るにしろ、幾ら何でも的確すぎる。
何かこう、意図的な何かが…。

「えェ、嘘月の兄貴！まさか失敗してしまッたんですか!?」
『すまん、想像以上に邪魔者に目を付けられた。誤算だった……折角の客を退かしたのにも関わらず、だ。弟分等は？』

「一応、あの場に来ないのを鑑みて邪見や銃中の兄貴分達が街の見回りをしてたそうで…他の方々は漆月の監視に注意するべく拡散、引き続き貪欲や殺生の兄貴は基地の護衛でして…今手を出せるのは兄貴しか…」
『俺も引き続き探す事にしよう、お前は忍務を全うしててくれ』
「分かりやした」
端末が閉じれば、途端に舌打ちをしてしまう。
兄貴程の凄まじい実力を以てしても、矢張り半蔵学院や焔紅蓮隊がこうも邪魔立てするか。
餓鬼共の戦力なら、蚊に飛ぶに等しいものかとばかりに思えていたのだが…然し、雄英で教育を続けていた忍学生が居たとも聞く。そう易々と我々の思い通りに行かないというのだろうか。
「クソ…!矢張り人員が足りない以上は、どうにも…」
などと事態の修正が効かない事態に、益々苛立ちの念を込めていれば…
「おッ、いたいた。おーい!丁度お前を探してたんだよ」
聞き慣れない青年の声が、耳に届く。「アぁ!?」と邪見するかのような眼圧で睨みつければ、その人物を目の当たりに、一瞬にして怒りは曇天の如く濁ってしまう。
「お、オメェは…!!」
「よぉ、流石に顔割れてりゃあ気付くよなァ?綺語道楽」
不敵に笑い、如何にも初めまして…ではない邂逅に、心臓が握られるような寒気に襲われる。
顔面がツギハギで覆われ、黒いコートが風に揺られながら、掌を此方へ向け、ゆっくりと近づく青年の笑みは、嫌に悪意に満ちていた。
敵連合――荼毘。
燃死体事件の張本人が、どういう訳か忍商会との交渉に持ち構える。

232話「足手纏い」

「て、テメェ…連合の荼毘が、何故此処に!?」
漆月に続き、敵連合の傘下にして焼殺事件が相次ぎ、更には開闢行動隊の筆頭として後方指揮を担ってた荼毘がここに来て、綺語道楽を対峙する。勿論、面識は愚か完全に初対面でありながら、名前も明かした事もない。そう考えれば漆月の差金だろうか?
「おいおい、そう殺気立つなよ怖えなァ…。別に取って燃やそうッて魂胆じゃねェよクソ面倒臭え」
ハッ、と小馬鹿にするような嘲笑染みた笑みを浮かばせながら、掌を向けるのをやめない辺り、少しでも反抗の意を唱えれば蒼炎を発動し、炙り焼くつもりなのだろう。
……正直、荼毘の詳細は知らない。
本名共に、死柄木弔、黒霧、闇と同じく完全に裏の世界に住まう住民…。素性など精々焼殺事件位、其れ以外の情報は全くと言っていい程に何処をどう探しても全く見つからないのだ。
まるで虚空の雲を掴み取ろうという、何とも無駄な行為をしているかのように。
「漆月に続き、貴様とて連合がこうも儂の前に姿を現す…これが何の意図を指し示してるやら…。警戒しない方が可笑しいじゃろうて!!」
「ハッ…老いぼれ爺いも頭が回るモンだ…。じゃあ何だ?お前は此処で俺を殺すか?俺が蒼志を除いて街に被害が及ぶのは知ッてんだろ?愚策だぜ」
確かに彼の言う通りだ。
荼毘と蒼志は基本的に連合の中では広範囲攻撃が多く、街への被害も鑑みて今この状況で下手して闘うのは愚策…。自身の身がどうなろうかは知ッたことでは無い。

マスターへの忠誠…主に主人の為ならば平気で人も殺すし死んでこいと言われれば喜んで。然し其れは今使い捨てる時では無い。
「……漆月の差金か？」
「いーや、俺個人の話だ。案ずるなよ、其れでも副リーダーから話は聞いてる…じゃなきゃ忍の知識もねェ俺がお前を見つけれる訳がねェ。だが、副リーダーの考えなンざ俺個人の話としちゃ心底どうでも良い。
だからお前に話がある、そしてお前にしか頼めねえ…。簡単な話だ、そしてこれ迄にない程美味しい事はねェ。」
薄ら笑いを浮かべながら、邪悪な笑みを溢す茶毘は，心なしか笑ってるようにも見える。まるで小さな子供が期待に胸を躍らせるように…漆月とは違った別件なのだろうか、だとしたら話を聞くだけの価値はあるのかもしれない。
「……儂等に被害が及ぶのでありゃ拒む。其れでも良いのなら、話は聞こう…」
「おっ！良いね、志の無ェゴミ共よりかは幾分マシか。久方振りに連合以外に話が通じるやつが居るじゃねェか」

「焔さん、大丈夫か？」
時間の騒動が起きてから一時間が過ぎた頃合いに、焔紅蓮隊の面々が駆け付けにやって来た。
何でも春花達が未来と詠を見かけてから、後々と紅蓮隊の皆んなに連絡が行くように手配を施し、全員が駆け付けに来てくれたとのこと。
柳生と雲雀は一先ずより安全な場所へ避難し、いち早く彼女の安否

と回復に専念…との事。
かぐらと奈楽は残念ながら行方不明となり、捜索は再び振り出しに戻った状況とも言えよう。非常に宜しくない様子だ。
「嗚呼、クソッ！嘘月とやらめ、忍商会……この借りはいつか必ず倍にして返してやる…!!」
手も足も出ず、蹂躙され気圧された。
幾ら相手の場数や経験共に全てが上とは言え、焔にとっては言い訳以外の何でもない。それ故に妖魔との戦闘を交えて有頂天にでもなっていたのか、強力すぎる敵を前に僅かな挫折と屈辱が、焔を苛させていた。
「ダメだよ焔ちゃん、まだ傷が酷いんだし…」
「飛鳥、然し私は……」
「飛鳥の言う通りよ、怪我人はさっさと休んでなさい。これ以上無理に出張って下手な闘いをしても、死人が増えるだけよ。足手まといになるの、分かる？」
「なッ…?!!」
意外にも、此処で毒舌の如く言葉を吐き捨てるのは、冷静さを装いながら微動だにしない美怜だった。
流石の飛鳥も、まさか仲間がこんな事を言うとは思わず、焔は面を喰らったような顔で、春花も目を丸くしながら、詠は焔に対する辛辣な対応に、流石に表情を赤く、怒り色に染め上げる。
「美怜ちゃん!!今のは流石の私も聞き捨てならないですわッ!!」
「ちょ、詠お姉ちゃん落ち着いてよッ!!…ふががッ！」
あの詠が焔の代わりになって怒りの感情を露わにしながら、怒号を飛ばす。そんな詠に未来は兎に角抑えるので精一杯な様子。然も身長差もあって未来の顔が詠の胸に沈む様に埋もれてしまう。
「何を貴女はそんな風に感情的に怒ってるのかしら…？私、間違った事言ってる？其れとも何、これ以上手酷くやられた焔を馬車馬の如く働かせて、無理にでも戦わせるつもり？今私達がやるべきことは焔の手当てと共に人民周辺の情報管理、コレからの具体策を考えるのが先でしょう？」

「！」
「春花、保冷剤あるかしら？傷口に火傷の損傷があるし、横腹も酷い…後なるべくシートか何か敷いて雑菌が入らない様にカバーして。詠、貴女はボサッとしてないで裂傷部分を糸で縫って貰える？その後に地域周辺の市民達の聞き込み調査を頼むわ。他にも未来と日影は医療機関の方、頼める？」
　意外にも、美怜は慣れた様な感じで仲間達に的確な指示を出す。そんな彼女の突拍子な行動に全員はポカンと口を開けてしまう状況だ。
「焔、あのね。貴女が如何なる相手に勝てるとも、完璧超人だとも、微塵たりとも思ってないわ」
「罵声なのか褒めるかどっちかにしろ」
「嫌よ。其れに貴女が手酷くやられたのを見て、何も感じない程私は人間辞めてる訳じゃないわ。其れに、貴女はどうせ何を言っても止まらないでしょう？いえ、寧ろ言葉で止めれるのならラッキー程度、ね。だからこそ、誰かが無理にでも止めないと貴女は死に急いでしまう。体力も何もかも万全だった状態でも負けたのに、これ以上敵の詮索も情報の出処も無い以上、無闇矢鱈に動くのは愚策。
　今の貴女は足手まといな状態なの、だから今は安静に休みなさい。
　其れにコレは貴女だけの問題じゃないでしょう。一人で抱え込むより、全員で共有して次の打開に慎むのが先決でしょう？何でもかんでも一人でやろうとしないで貰えるかしら、悔しいのは貴女だけじゃない」
　美怜の真剣な眼差しは、いつも揶揄ったりするのとは違う。冴え切った瞳は彼女の眼差しに向けられる。
　美怜は言葉の感情に疎い。先ほどの言葉も美怜は本気で悪い言葉だと思っていなかった、寧ろ足手まといという言葉でさえも悪いとさえ微塵も感じない。
　其れが美怜としての、感情に乏しいという感覚なのだろう。だから詠の激情も皆んなの面食らった顔も、美怜からしたら意味不明でしかない。
　だが芯は真っ直ぐと仲間思いで、根は優しいのだろう。だが結果的

に焔には厳しめの言葉で制止し、無理にでも冷静にいさせるッて考えとしては、結果オーライだ。
「美怜ちゃん……凄いね、流石焔ちゃんが仲間にしただけはあるなぁ」
飛鳥は少しだけ、美怜と言う少女を深くしれた様に感心した表情を見せる。
「ほな、了解したわ。未来さん急ごうか、大将死なせたらアカンしな」
「え?あ、ああ…!うん、そ、そうね!」
日影は頷き先ほどの指示された言葉に動き、未来は未だに美怜がここまでしっかりとサポートできる事に多少驚きのままでいる。
「取り敢えず、探してみるわ…私も傷が酷いし…丁度良いかも…」
「み、美怜ちゃん……先程はごめんなさい、私そうとも知らずにまた…早とちりしてしまってて…」
詠は自分の早とちりで誤解して怒ってしまった事に対して、美怜に謝罪の意を込める。美怜自身が誤解を招きやすく、感情表現共に何かしら乏しい部分もあると言う。
其れに詠は幼い頃からよく早とちりに勘違いをしやすいタイプだ。斑鳩が鳳凰財閥とご令嬢と言うだけで金持ちだと解釈し、実際は養子で育てられ、金持ち全員が悪者ではないと知ったのも近いようで遠い話。見たモノ全てをそうだと認識してしまうというのは、詠の欠点的な性格ではあるが、美怜相手の場合は詠だけでなくとも誤解をしてしまいそうなのは無理もなく。
「?別に、謝らなくても良いわよ。不快に思ってないし」
ぶっきらぼうで熱の籠らない声色は、いつも通りの美怜だ。気にしてないと言えば其れまでなのだろうが、それにしては何処となく引っかかる気もする。
各々が移動して作業に取り掛かれば、美怜は焔に付き添いで看病をしていた。当然飛鳥も（と言うよりも、美怜が此処にいなさいと無理矢理止められ）美怜と同じく付き添っている。
美怜は懐に入れてた薬剤を持てば、ねっとりしたクリームを傷口に塗りたくる。
「いつッ…!!」

「我慢なさい。多少痛むけれど、効果は絶大だから。治癒性の高い薬草をふんだんに使った特効薬よ。医療系の施設が見つかるまでは、尻拭い程度にこれで安静にでもしてなさいな」
落雷に打たれて痺れるような激痛が、傷口から伝わる。悲痛な表情に歪ませながら声を上げる焔に、美怜は相変わらずの様子だ。其れにしても丁寧に慣れてる辺り、彼女も医療に関しては詳しいのだろうか？
詠が傷口を糸で縫ッたので、多少の裂傷は防げたものの、抉られた傷口はそうはいかない。
「美怜ちゃん…手慣れてるんだね。雲雀ちゃんと同じように、得意なの？」
「昔読んだ参考本がてら見様見真似でやっただけよ。私自身が傷つくことなんて精々、目が見え辛くて転んだ際に膝を擦り剥いた時しか、自分の手当てなんてしたことないし」
アレは確か廊下を歩いていた時だ。
灯火の明かりを付けていたにも関わらず、何もない場所で転んでしまったことがある。
視界が悪く…と言うよりも、目前の景色が朧気で、視力が悪かッた為、何度も転んだりしては膝を擦りむいてしまった事がある。本を見ようにしても中々読み辛く、困っていた時にベルゼ兄さんが私の為にと、視力矯正として有益な眼鏡を持ってきてくれたのだ。
一種の兄からのプレゼントのようなものか、眼鏡を掛けた途端に広がる冴えた景色は衝撃的なものでもあった。そのお陰で医療系の本を読み漁っては、自分の傷は自分で治したし、医療に興味を示した美怜は家に有り余る本を読破していった。
「見様見真似…お前、大丈夫なのか？」
「嗚呼、気にしないで。ちゃんと保証はしてるし間違いないから。読めば大体わかるし」
「美怜ちゃん凄いね…普通、読んだだけじゃ分からないと思うけど…」
此処まで来ると一種の才能のような物を感じ取れる。
爆豪勝己や八百万百のような、知的且つ天才的な面。

一度読んだら頭に入ると言う典型的且つ珍しいタイプ。
美怜は焔と真逆で、知的性能に長けている。焔が馬鹿で脳筋、というヘイト地味たことは言わない。寧ろ焔は座学に関しても蛇女在籍時はかなり上位ランカーの方に入っていた優秀な忍学生だった方だ。最近はアルバイトだの金銭的や食事等余裕がないためか、野生的且つ獰猛な性格に成り立つあるが、決して馬鹿なわけではない。アホな一面はあるが。
「其れより焔、喉とか声帯部分の傷はないかしら？大丈夫？」
「いや…そこは大丈夫だ……珍しいな、お前が其処まで気を遣うなんて…」
「馬鹿言わないで貰える？仲間を心配するのは当然でしょう。其れに、声帯部分が潰れてなければ支障はなさそうね、良いわ。飛鳥も丁度いることだし、良ければ話してくれる？」
現状的に情報が曖昧かつ断片的な美怜は、ふぁさ…と耳に掛かった髪を退かすように手で払いながら、氷のような冷たい表情で、真剣な眼差しで二人に問いかける。
飛鳥を呼び止めて態々此処で待機させたのも、少しでも情報収集に欠かせない人材だったからだ。
「えッと…私は来たばかりだから、全然…その時、焔ちゃんが倒れ伏せていたから、助けに来たの！」
「あんなの…私一人でもどうにか…」
「怪我人、貴女は今少し黙ってなさい」
美怜の珍しい威圧に、目を細め苛立つ表情に流石の焔も口を閉ざす。美怜があんな怒の表情を取るのも珍しく、真剣な情報収集の際に勝手に口を挟まれるのが激的に嫌なのだろうと見解できる。
「成る程、では質問するけれど…貴女は何で焔の場所に寄り付いたのかしら…？騒音は無かった…にも関わらず。春花からの増援？」
「あ、ううん！春花さんとは合ってないよ！奈楽ちゃんとかぐらちゃんを探してたら…あ、そういえば…確かに物音もしなかったのは何でだろ？焔ちゃんが本気で戦えば、嫌でも周りからも聞こえるはずなのに…」

其れどころか周辺からは物音一つ聞こえなかった、と言うのは余りにも不自然。焔も最初、音こそは聞こえなかったが、ただならない気配に、強者の匂いを嗅ぎ付いてきた訳でもある。
「音……相手の能力による物か、或いは影ながらの仲間による補助役か…何方にせよ隈無く此処を調査する必要性があるわね。所で焔、相手はどんな奴だッたのかしら」
「……嗚呼、それは……」
焔は今まで起きた事、相手の姿や能力等を細かに、ある限りの情報全てを美怜に伝えた。
すると彼女は考え込む仕草を取り、親指を顎に当てながら考察を働く。
「…嘘月妄語。妄語、という十悪業…嘘を平気で働かせる…情報戦での操作は彼の独壇場、と言った所かしら。それに踏まえて土の天才的な遁術。相当極めてないと匠に扱えない技術だと考えた限り、敵も一筋、二筋縄じゃ行かないわね。オマケに遁術以外による能力も未知、焔や私からの推測として嘘を吐く事による能力だけれど…だとしたら、余りにも統一していない…。恐らく、そう言った忍は付属性による忍、ね」
付属性。
例えば紫の場合は禍魂忍法という、かなり代々受け継がれてる希少的で有力な忍術だ。紫は禍魂忍術に加えて、陰という遁術が合わさっている。そう言った遁術と忍術の組み合わせに起きた強力的な忍術を扱う方向性。
他にも忌夢の場合は禍魂忍法を受け継がれておりながらも、才能や能力の開花に失敗、或いは充分に引きつけず、禍魂とは別に雷の遁術を使う事に専念した。そう言った方向性による問題だろう。
遁術と忍術が一体化してる飛鳥や雪泉、焔や雅緋のような忍もいれば、雲雀や柳生みたく、遁術と忍術が別に分けられてる忍も存在する。
はてさて、美怜は何方側なのか…。
「民間人を巻き添えにしたくない、となれば…斑鳩や葛城が受けたとなる被害は何だったのかしら？個々人の独断専行…或いは任務の方

向性変換？何方にしろ、敵側が奈楽やかぐらに加えて私達も標的にされてるのなら、身の回りの警戒態勢並びにより情報を蓄えないとね。嗚呼、飛鳥にもう一つ……

貴女、どうして奈楽とかぐらを探しに此処へ？偶然？それとも何かしらの根拠があって、との事かしら？」

美怜の問いかけに、僅かに心臓が揺さぶられる。

奈楽とかぐらの捕獲は言うべきだろうか？いや、先程も考え決めたではないか。言う必要はないと。

これは自分達の問題であり、抜忍云々以前に彼女たちを無理に関わらせる必要はないのだと。

「た、偶々だけど…どうして??」

「そ…いえ、もし根拠があるとすれば、敵が待ち伏せていたのも何かしら手掛かりになるのかと思っていたの。まるで敢えて罠を置いて的確に人払いをする用意周到性は、私達がかぐらと奈楽が此処に来るのを確定したかのような、そんな風に思えてしまうから」

美怜の思惑とは少し違ったようで、心臓の緊張が解けるが、問題はそこなのだ。

嘘月妄語の主張もそうだが、根拠もなしに人払いを済ませて敢えて人気のない場所に誘い込む…というのは、些か難しい。

「可能とすれば、敢えて人気のない場所に待ち構える事でかぐらと奈楽を待ち伏せし、狙った獲物を標的に仕留めるか…其れとも根拠があるか。そしてその根拠はかぐらや奈楽の行動を読めてる可能性がある。焔紅蓮隊や半蔵学院が狙いなら尚のこと、注意や彼等の行動に警戒態勢は必要よ」

獲物の居ない場所にトラバサミを設置し、キジを捉えるように。

鼠が檻に自分から入るのを待ち伏せるかのように。

そうやって、時間形式でのトラップならば説明は付くが…其れにしては何故此処を選んだのか。

此処は春花と焔が次の巡礼として観光に足を踏み入れようと話し合ってた場所に、こうも都合よく事が進むのか。これが意図的なもの

だとしたら、我々の行動が筒抜けてるという訳でもある。そうなれば放っておくのは非常に不味い。其れに人払いをするのにも時間共に根拠がなければ、幾ら罠を仕掛けるとは言えど、余りにも非効率。
なれば、奈楽やかぐらの居場所は知らずとも、何かしらの根拠があるか。
「いいえ、或いは初めから……」
非常に脳の回転が速い美怜は、無限にも広がる可能性を平行線…オール・フォー・ワンで言う凡ゆるシナリオや分岐ルートを想定して考え浸る。
どのルートが正しく機能されているか、どの未来が現実味として可能性が高いか、どれが無駄な分岐なのか…確定と不確定を分け隔て、僅かな可能性を考慮した上での行動を模索する。
考える度に脳が活性化し、思考回路を働かせる。彼女の頭の回転はフルスロットルだ。
「あ、あの…もうそろそろ良いかな…？私、柳生ちゃんや雲雀ちゃんのこともそうだけど、何よりかぐらちゃんや奈楽ちゃんを探さなきゃ…」
「……そういえば貴女、あの二人組を探していたのよね。忍商会から狙われてる二人…どの道無関係ではない以上、捜索すると言う手は忍商会とも何かしら繋がるし、損はないわね」
飛鳥はホッ…と静かに胸を撫で下ろす。
美怜が知略的且つ焔紅蓮隊の後方指揮官かつ副リーダー的な立ち位置だと言うのは、嫌というほど実感した。
焔が動かない場合に備えた臨機応変の対応に、冷静に物事を分析し判断するタイプは、蛙吹梅雨ちゃんを沸騰とさせる。確か彼女は期末試験実技の際もその冷静さや臨機応変たる対応、柔軟な思考により常闇踏影と共にエクトプラズム先生と対面した中でも合格したとさえ言われていた。それに加えて八百万百の様な知識豊富且つ物事を考え込む頭の回転の良さは、頭脳性に秀でてる雄英生達を連想させる。
だからこそ、自分の僅かな言動でも美怜にバレてしまう可能性があるのだ。

だが見た様子だと流石にこれだけでは探りは入れられない様で…全く、問題なさそ――

「じゃあ私達もかぐらと奈楽を探しましょうか、そうすれば自ずと忍商会との接触はかなり高くなるでしょうし」

――うではなかッた、全然。

美怜は頭の回転が良い上に、忍商会との接触や情報収集による合理性を鑑みて、二人組を保護する方が得策だと判断した。

「当てはあるのか…？私達、かぐらや奈楽という二人組を見た事がないんだぞ？」

「ざっと軽く話を聞いた限り、というよりも春花から奈楽とかぐらに関しての情報は聞いたわ。春花から再び外観的な特徴共に聞き出せば無問題よ。とは言っても地味でインパクトも特徴性も皆無であれば困難を極めれるから、全く問題ないと言えば嘘になるわね。そこは半蔵学院と共同で詮索すれば良いわ。その方が得策でしょうし…」

どうしよう、思った以上に厄介な話になッてきた。

「成る程…現状、私達がやれる出来事はこれ位か…手詰まりよりかは断然的にマシか……」

其れに釣られて焔ちゃん迄……。

想像以上にかなり、ハードル高い忍務だ。ひょッとしたら、下手すれば焔紅蓮隊の皆んなと、再び激突する…なンてあるかもしれないし、忍商会を斃す為に共闘、なんて展開も…不確かな未来が分岐点として別れている様に、どの展開に転がるかわからない。

其れは幾重もの修羅場や理不尽で予想外な展開の場数を踏んできた飛鳥だからこそ解る、いわゆる第六感が訴えてるのだろう。本能がそう告げている。

隠し事をしているようで気が引けるが、今はそれどころではないのだ。

そして、一方…奈楽とかぐらを探していた葛城と斑鳩の二組は、予想外な展開が待ち受けていた。

「なァ……お前ら半蔵学院の忍学生だろォ？怨みはねェけど、一旦殺されとけよ。邪魔なんだよ――」

「な、ンだよコイツ…!!」

「気を付けて下さい葛城さん！恐らくこの敵は…忍商会の者か、或いは最近活動してる抜忍か…!!」

人気のない京都の大橋にて、腕に爪痕の傷を負う葛城は、手で押さえ付けながらも相手を睨みつけ、斑鳩は宝刀――飛燕を抜く。

対する相手は手練れの抜忍…半蔵学院の忍学生に向けられた、野蛮たる裏社会の闇に潜む抜忍と対峙していた。

血の色に染まる紅朱色の獣毛に覆われた口の長い鋭い狼漢が、狂気の爪を差し向ける。

どうやら状況は冷静に且つ静かに、それでいて大胆に迫り来る様な修羅の予感は、凪となる海原に波が追い寄せるように、混沌が飲み込んでいく。

２３３話「悠久の狭間」

「なァ斑鳩、かぐらの捕獲についてお前どう思う？」
　賑やかに活気盛んな京都の商店街を見廻りながら、横目で語る葛城に、斑鳩は眉一つ動かす事なく淡々と言葉を告げる。
「別にどうも…上層部の命令として出た以上、従う他有りません。私たちは学生とはいえど忍としての一員。況してや来年は忍学生を卒業し、一人前の忍として社会に派遣される……綺麗事ばかりが世の中ではない以上、信じる他有りません」
　斑鳩の言葉は尤もだ。
　真面目さ故の性格なのだろう…これだけ大掛かりな忍務、更には最高上層部からの命令、達成すれば出世や忍のランクが上がるのは見え透いてはいるが、そんな我欲ではなくあくまで一人の忍として、その役目や責務を全うするのが当然という思考でいる。
　下された忍務であれば、応えなくてはならない。
「真面目でお堅いねェ斑鳩は…だけどよ、何か可笑しくねェか？幾らアタイらが忍だからッて、何も罪もねえ幼い子を捕獲しろッてのは…保護ならまだ分かるけどよ」
　いつものセクハラ親父の性格である葛城がいつになく真剣なのも、今回の件が只事ではないからだろう。葛城が基本的に真面目且つ勘が鋭くなるのは、いつだってそれ相応な修羅場が来る時だ。
　其れに…斑鳩の言葉通り、もし自分が忍務に背く、或いは失敗して仕舞えば両親を守る為の一人前の忍になる夢が潰えてしまう危険性だってある。だからこそ疑問に湧くのもある…何故、罪も犯してない幼女を捕獲する義務があるのだろうと。
　其れこそ、美怜の言っていた「想像の遥か先を越える何かがある」の

ではないかと。奈楽という者が命懸けで守り育ててきた神の子と考えれば、其れ迄なのだが…其れにしては理由が曖昧な気もする。第一妖魔を殲滅してくれるのなら、保護だけで充分ではないかと。

捕獲という物騒な件からして、何か裏があると葛城は踏んでいた。

「これ以上考えを纏めても仕方ないでしょう…私達が出しゃばっても、上の人間が聞くとは思えません。其れに…疑問に思わない人間は居ないでしょう…」

斑鳩も心がない訳ではない、寧ろ良心的だ。

疑問を抱くものの、かと言って私情で自分勝手に意を逆らッては良いものではないと考えている。

其れは嘗て保須市でのヒーロー殺し…又の名を忍殺しステインによる逮捕後、飛鳥と雪泉、雄英生達が入院したあの場で、飯田天哉に放った言葉と、彼自身の私怨行動と積み重なる。

だからこそ、考えても埒が開かないし、余計に心に迷いを生んでしまうだけ。そして生死を賭けた忍務に於いて迷い――それ即ち死を意味表す。

「兎にも角にも、私達は忍務を下された以上は…下手に考えてしまうより、確実に遂行することを…――」

「へェ…教育が成ッてンじゃん半蔵の忍学生さんよォ――」

「ッ!?斑鳩危ねえッ!!!」

次の瞬間、斑鳩の横に横切る紅黒い影が遮ったかと思いきや、突然空間を引き裂く鉤爪が、斑鳩の腹を抉ろうと振るわれる。いち早く殺気に気付いた葛城は、斑鳩を突き飛ばすように身体を挺して庇う。

生憎ギリギリな範囲で避けようにも掠れてしまい、肩から鮮血が流れていく。

「葛城さん!?」

「ッ――!避けた、か…ほォ。ヤワな鍛え方はしてないようだなァ…ン?」

鋭い痛みに表情を歪ませながら、歯を食いしばる葛城。紅い狼は長い口からニヤリと汚い笑みを浮かべながら、血に濡れた鉤爪を浴びるように煌めかせる。

血の騒動に周りに居た人達はあっと言う間に悲鳴を上げて逃げ果せて行く。正直、人質等取られずに民間人に被害を出させない効果としては良いのだが、其れにしてはこんな人気のある場所で凶器を振るうのは、忍商会を除いてイカれている。
「テ、メェは一体…何モンだ…!!」
「オメェらの様な人間を、殺してェと願う奴もいるモンなんだなァ…本当、人の死ッてのはツクヅク…唐突だと思わねェか？」
先程まで気配は感じなかった。
突然と発出する狂気孕んだ殺意。
敵意剥き出しの本物の害意。
恐らく…上忍が相手する敵か抜忍……いや、忍の気配から察して間違いなく社会に仇名す抜忍だろう。然も顔の面識もなく向こうが半蔵学院の忍学生だと知ってる以上、何者かが刺客として差し向けたか、或いは情報を得て何かしらの衝動に駆られた抜忍か…台詞から察して前者のように見えるが。
「葛城さん、此処は民間人の避難を――私が御相手を…」
「馬鹿言え、アタイがいなきゃ殺られてたろ。避難させる程、相手は抜かりもねェ、オマケにそう易々と逃して貰えなさそうだ…」
「面白れェ!!元々、殺し屋として稼業積んでた俺の血が騒ぐゥ!!!オールマイト亡き今、俺らの時代が少しずつ現役復帰ッてトコかぁ!!!」
抜忍――元殺し屋、抜忍元暗殺者のコードネーム、ハウンドドッグ。殺し屋として稼業を積む者の名前は、忍名と同じような意味と価値を現す。
本名を隠し、忍としての名前を現す者……一方で、暗殺者として忍の力を培い裏の世界で名を捨て別名で呼ばれる者…忍名の様な古風な者もいれば、洋風的な名前まで幅広く利点が効く。
紅き狼漢は、雄叫びを上げて鋭い鉤爪を晒し出しては、二人に牙を剥く――

「ふむ、其れにしても金剛の奴も乗り気じゃないわいのう。折角カグラ四天王として再会したんじゃ…。互いに酒を交わし、彼奴の活躍を聞きたかったが……酒臭い老い耄れ爺いとつるむ気は無いなどと……超が付く程に大生意気なマナならまだしも、最近の女子は儂等に強く当たる年頃なのかわいのう？」

京都の街中で豪快に酒瓶を飲み干しながら、独特な喋り方で愚痴を溢す老いた獣人は、酒を飲んでて饒舌なのか、独り言を呟いていた。

白く毛並みの整えた剛毛に、老体とは思えない程に屈強で鍛え上げられた肉体、酒臭い雰囲気を漂わせながら、歩むモノを一切近付けさせない強者の圧。

ホワイトタイガーを連想させる彼は、一言で言うなら『白虎』。

「然し、忍商会に続き…かぐらと護神の民……匂う、匂うわい。裏の匂いが…時間の香りがするわいのぅ……そしてこう言う裏には大抵、大物が絡んでる」

カグラ四天王が一人、白虎。

カグラ四天王の中でも龍を除き、忍としての経験も履歴も多く築いている、古参の忍でありながら、陽花から非常に信頼されている、陽花の想いを継ぎし者。

唯の呑んだくれとは違い、適切に物事の整理や裏の勘繰りをしながら、相手の動きを探る。そうやって個の最強の実力と、勘繰りたるや彼の嗅ぎつけによる捜査網の幅広さによる起点を活かし、そうしてカグラとして上り詰め、武道を極めて四天王へと登り詰めた。

「其れに踏まえて、まさかのＯＡＴの組織までマークされておると聞く…アレらは儂等忍やヒーローとは違い、グレーゾーン。一般市民達も、軍人が彷徨いて徘徊しておれば、心配して夜も眠れんじゃろうて

…」

ＯＡＴ――Ｏｒｄｅｒ　ｔｏ　Ａｎｎｉｈｉｌａｔｉｏｎ　Ｔｅｒｒｏｒｉｓｍへ　テロ組織の殲滅こそ秩序　〉国家直属の軍人であり、忍術や個性を持つモノ、分け隔てなく過酷な訓練と厳しい環境により、洗練された者達のことだ。ヒーローの様な人を殺さず、破壊を守り、人々に安心と信頼を寄せる存在。警察の様に個性使用の厳守を徹底し、法律や規則の下社会で正しく活動する存在。その何方とも当てはまらない、例外…特殊なケースに呑み起こる超常的で圧倒的な、国際絡みによる犯罪を殲滅する為に動き出す、謂わば個性や忍術の使用を国から許可を下された者達のコトを指す。

ヒーローは資格取得による免許証が無ければ、ヒーロー活動が不可能な上に、活動の下で初めて個性の許可を貰えることが可能であり、私怨による殺害は断じて許さられる者でも、裁くことも不可能だ。ヒーロー殺しにより兄を傷付けられ、保須市を選んだ飯田天也が良い例えだろう。だがＯＡＴは国が許可した上に、個々人の行動は全て国の意思によるモノとして、命令を実行する為ならばある程度の犠牲は厭わないと判断された組織。嘗てはＤ　―　スクアッドという犯罪軍事組織と戦争を繰り広げていたとも言われている。故にこの組織が動き出す事は滅多に無い。

（あの桃が第三部隊を務め、忍養成機関最高上層部の姫彪、そしてＯＡＴ第一部隊兼最高管理者、赤熊…特にあの鬼上官は、暴徒そのもの…過激過ぎる余り、彼奴が登場するだけで、被災は免れないと聞くわいのう…）

ならば何故これ程の大組織が神野やオール・フォー・ワン戦でも動かなかったのか…これには理由がある。

オールマイトが登場する為、市民達の不安を煽らせる行動はしておしくないという意見と、もう一つはとある地域が妖魔活動の活性化により、対処していたという話。その原因が元忍を名乗る者、妖魔を研究する女性、正体不明の輩が二人、危険分子が居たとのこと。その際には銀嶺と呼ばれる女性も付いていたらしい。

「個性も忍術も分け隔てなく、暴力により秩序を齎すか…。暴力から

生まれた平等、これも超常社会が生み出した異物、なのかのう……」
だが介入するとは言っていなかった。
となれば、儂等は早急にかぐらと奈楽の捕獲、そして忍商会の殲滅に、妖魔を倒すことを先決しなくてはのう。

「柳生ちゃん…大丈夫？怪我、痛まない？またあの時みたいに無茶しちゃダメだよ？」
「気にするな…それより、雲雀の方こそ……俺たち三人が相手をしても敵わなかった相手だ……他にもあんなのが何人も居ると考えると、非常に状況は最悪だ…」
お互い肩を支えながら避難する雲雀と柳生は、ボロボロになりながらも何とか大事に至らず、病院を探し回っている。
奈楽とかぐらを折角発見できたとしても、嘘月から守る為に戦ったとはいえ、結局は逃げられたという形に変わりはない。
自分達の行動は間違ってなかったにしろ、悔いはないにしろ、振り出しに戻ってしまったことは何とも歯痒い気持ちだろう。
特に邪見心傷には完全に目の敵にされている。京都に居るのが絶対である以上、下手に遭遇すれば　戦闘は避けられない。
「……雲雀達、ついこの間までは、京都での旅行だったんだよね……」
それなのに、と…言葉の続きが上手く出てこなかった。
今まで何度も窮地に立たされてきた。
蛇女子学園、ＵＳＪ、学炎祭、林間合宿、神野、其々の修羅場や未知なる遭遇は、必ず自身の成長と共に心身を鍛え、更なる一流の忍になる為の精進なのだと。
だが現実は…実際にはそのつもりで居ただけで、私達はまた肝心な時に役に立てない。
焔ちゃんに後を任せて、誰かに頼っては、逃げて、仕舞いには負けてしまうばかり。……いや、何よりも…

『華眼がありゃ、使えれば、こんな努力を積み上げてきた強者だって一瞬で無力化出来る』

華眼さえ使えれば、こんな窮地を脱する事が出来るのに、と思てしまう自分がいる。

今までは鍛錬や実技訓練で実力を磨いてきた。寧ろ華眼なんて無ければ、こんな毎日が辛い想いをしなくても済むだろうと思ったし、嫌な現実ばかり見なくても済むと思っていた。

敵連合に拉致されずに済んだだろうし、華眼があるだけで本当に自分と向き合ってくれてるのだろうかと不安が脳裏を過ぎる事だって…。

『良い？雲雀――貴女は何れカグラの棟梁となり、皆を率いる忍となるのよ。私達家族の…いいえ、鶺鴒様の血に、その眼に恥じぬ忍となりなさい。だから貴女は、雲雀なのよ』

華眼を手にする事で日々努力を積み重ねてきた兄と姉達は報われず、母からの期待の眼差しに毎日が押し潰されそうになり、何よりも御先祖様から引き継いだ華眼の力を一刻も早く身につけてなければと、心がぐちゃぐちゃになりそうな焦燥と不安が、埋め尽くされていく。

だから…鎌倉や嘘月のような、強敵に出逢う度に思う――もし雲雀が一人前で、実力のある、華のように美しく、個々を一瞬で無力化できる華眼を扱えたのなら、友達を守ることができるのだろうか。

その友達は、簡単に人の心を操ることが可能な雲雀の本心を、知ってくれるのだろうか？友達だと、仲間だと、信じてくれるのだろうか??

そんな不安が過ぎる時――

『……其れが、お前の臨みか？』

――え？

静寂な心の水面に、一つの波が立つ。

時が止まったかの様な空間――一瞬、空間が凍てついたかのように思えるその現象。

まるで空間そのものが、違う別の空間へと閉じ込められたかの様な。

隣に歩いていた筈の柳生ちゃんはいない。

まるで迷い家に閉じ込められたかのような、摩訶不思議な空間。

「な、何これ？雲雀が、華眼のことを考えていたら……」

一秒という時間さえ感じさせないその刹那は、余りにも唐突過ぎた。

何の拍子や弾みで、この様な結果を招いたのかは不明だ…然し、何故だろうか…今の雲雀からは、何処となく心の不安も、一縷の希望にすがるかのように歩を進めれば、白き純粋無垢な羽が落ちていた。

薄暗い冥界を連想させるこの世界が絶望だらけだと考えれば、この羽は僅かな希望が残された、パンドラの世界と考えると言い得て妙ではあるが、心が惹かれるその羽根は、何故か触れなければいけない気がした。その羽に手を伸ばし、柔らかな羽毛に触れると再び声が聞こえた。

『少女よ、質問に答えよ――』

すると――薄暗い漆黒の空間から、光の柱が差し込む。

白い羽毛が飛び散り、まるで桜散る吹雪の様に、神々しいその光と純白の羽毛は、視る者の心を優しく癒し、時に圧倒的なる光景に、これ以上歩むことが出来なくなる。

『悠久の時を越え、鶺鴒の子孫である貴様に問おう。お前は、何を成す為に其処に立つ』

姿は全く見えない…。神々しい其れは、まるで神様のようだった。純白と青を連想させる貴族風味のタクシードに衣装を包み、天照の如く輝く白き神鳥は、ジッと此方を見つめていた。

「ひ、雲雀は……」

正体不明の相手からの問いかけに、喉奥から声が上手く振り絞れない。威厳ある者の声は重圧と同時に、優しさを感じさせ、恐怖を感じさせない。

『……華眼が有れば願いは叶えれるか？華眼が無ければ幸せに生きていたか…？……お前は、鶺鴒と同じ道を歩むか』

「ど、どうして鶺鴒様の…雲雀の、ご先祖様のコトを……？」

『……少女よ、問いに応えよ。貴様は何を望む――』

どうやら、質問を質問で返してしまったみたいだ。

とは言え、此方の意見は聞く耳持たず、答えてはくれやしなかった。何やら明確なる強い意志を感じるソレは、一才の視線を逸らすコトなく、見据えていた。

「わ、分かんないよ…!!だって、華眼があれば雲雀は柳生ちゃんや春花さんを傷付けずに守れたかもしれない……華眼が無ければ、お母さんや、忍の為に頑張ってきたお兄ちゃんやお姉ちゃん達の努力も報われたかもしれないのに……」

『……少女の願いは、他者によって振り回されるその程度のモノと定義して良いのだな？』

え？

その言葉は、余りにも予想外で、誰もどの口でも言われなかった言葉だ。

『願いとは、個人の欲望と意思、信念…其れ故に生まれる奇跡…。其れを背負い羽ばたく雲雀は、何の為に空を飛び、何を求める。お前の人生は、全部他人の意見で左右される矮小な夢か――自身が望む安全

も、平穏も、貴様の願いであるか。其れも良いだろう…だが、忘れるな。悲惨な現実や、過酷な現状が、誤ちの道ではないコトを――お前自身の明確な願いが、巡り巡って訪れるコトを』

「…!!」

簡単に言えば、雲雀の願いは誰かの言葉によって左右されるモノではない。

夢も希望も、信念も願いも、誰かに言われたからではなく、自分自身で決めるコトだと。

鎌倉に殺されそうになり、嘘月によって見事に思い知らされたコトも、其れが必ずしも間違ってる訳ではなく、寧ろ自分自身の願いを叶える為の、過酷な道のりに過ぎないのだと。

楽な道、遠回りな道のりが、安全や平穏こそが全てではない…逃げてばかりでは、何の打開策にもならないのだと。

何も知らない相手なのに、まるで雲雀の全てを知っているようで、そして雲雀も何故か、不思議と初めてなのに、何処か懐かしく視てしまってる自分に、驚きが隠せない。

「……雲雀は、華眼が欲しいよ…。でも、それは凄く怖いコトで…周りからどんな風に観られるか、心の底から通じ合って信頼してくれるのか…仲間だと思ってくれてるのか、不安でいっぱいにもなる…。家族の期待に応えたい、でも雲雀にはそんなの気難し過ぎるッて、鶺鴒様みたいな人物になんかなれるのかって……。

でも、雲雀の本音……雲雀の願いは……華眼を手にしても、友達でいられる自分に、自分を信じて戦ってくれる友達や仲間の皆んなの為に、胸を張れる自分になりたい…!華眼がどうとか関係なく、雲雀の友達でいてくれる皆んなを守る為に、華眼を扱えるようになりたい!!」

雲雀の願い――ソレは、信じる大切な仲間を守る為に、闘いたい。そして華眼とは関係のない、心を通じ合える忍になりたい。

『…其れが、願いか？華眼という心理を弄び、人の心の内を暴き、意の

ままに操れる能力を持ちながら、他者への信頼…か。況してや、相手が望んでないにも関わらず、華眼で誰かを守るなどと、随分と傲慢な願いだ』

雲雀はジッと、覚悟を見据えた瞳で追い返す。

自分の心の内に秘めた本音は、飛鳥ちゃんや緑谷君たち、家族や、大親友である柳生ちゃんにまで話したことがないのに…まるで、何百年も昔から旧知の知り合いのように語り合う二人の関係は、９００年前の光景を浮かび上がらせる。

『見事だ――其れで良い。若き忍よ…お前の願いも、華眼も、誰が何と言おうとお前自身のモノだ。自分の願いに傲慢であれ』

すると――強くも優しい風が空間を追い出すかのように吹き溢れ、光の羽毛と共に、凡ゆる歴史の情景や、多くの人々が照らし出される。１００年前、２００年前、３００年前…刹那の夢に迷い込んだ雲雀を、現実へと送り返すように、脳裏には荒ゆる光り輝く光景が目に焼きついていく。

『ねぇ、○○○○○！○○が貴方の生贄になる為に産まれたのなら、親友である私が守らなくちゃ！その為には、隣の町に行って、私達の集落を襲う悪い人たちをやっつけにいこ!!』

『凄い…私の願い通りだ！○○○○○の力なら、この国を簡単に覆す程の力だって……。――ッ！……こんな代償…どうってコトないよ…友達を救うのなら、貴方の呪いなんて、痛くも痒くもないよ……』

『ねぇ、どうして…？どうして私は、友達を助ける為に、親友の○○をアイツらから守る為に戦ったのに…どうして、あの子は死ななきゃいけなかったの…？ねぇ！どうして!?どうしてどうしてどうして!?どうしてよぉ!!なんで……願いが叶ったのに…なんで、皆んな、私の居ないところで、死んじゃうの……私はただ……』

『ねぇ○○○○…私の願いは、私の意思は、間違ってたのかなぁ……』

『凄い…華眼を持つ私に、最強の大妖魔である貴方が味方なら百人力だね！憑黄泉神威を倒して、皆んなを纏めたらさ…また、端月に出逢って、鴇とまた再会しようと思ってるんだ！』

『鴇は…私のこと、ずっと恨んでるのかな…仲直り、したかったなぁ……。私、あの時どうすれば良かったんだろう……私のこの選択肢は、間違ってなかったのかな…』

『約束して……もし、私の子孫が…私と同じように華眼で困っていたら、問いてあげて……もう、私は…憑黄泉神威との闘いで…長くは生きられない…から……』

『ああ……せめて最後にもう一度…鴇と端月の三人で…一緒に、会いたかった…なぁ……ねぇ、○○○○…もし、鴇に会ったら、貴方が生きていたら……あの子のコトを…助けて…くれる？』

『ねぇ、○○○○…大好きだよ……』

『忘れるな若き大妖魔よ――大妖魔とは、願いを叶える奇跡の存在…。妖魔が恐れるのは死ではない…誇りを失うコトだ。真なる大妖魔は、人々の願いから産まれる、奇跡の存在だ。其れを忘れてしまえば、今の妖魔達が産まれてしまうのは必然…。だからこそ、誇りを持て。契約者の願いに傲慢であれ』

「ね、ねぇ！待って…！貴方の名前は――!?貴方は一体……！」

手を伸ばし、叫ぶように名前を問う。然し光輝く人型の神鳥は、まるで吹雪の如く眩い光が飛び散り霧散すれば、吹き溢れる歴史の情景と共に、悠久の間から消えて行った。

「そうだな…まあ、今はそんな悠長なコトを言ってられないがな…。其れに斑鳩や葛城の方も心配だ…上手く忍商会と出会さなければ良いが…」

時は一瞬にして現実に戻り、肩を担ぎながら病院へと足を運ぼうとする柳生。見慣れた京都の街並みは変わらず、現時点では先程とは何も変わらない光景。

「なあ、雲雀…聞いてるか？雲雀？…ひば――」

一方的に話してしまってるばかりで、会話のキャッチボールが返って来なかった事を不審に思った柳生は、確かめるように雲雀に問いかける。彼女の反応が無かったので、顔を見つめると。

「…あ、え――？」

泣いていた。

大量の涙の粒を頬に垂らしながら、さっきまで暗い雰囲気の様だったのに、瞳に希望を灯らせた雲雀の瞳は、潤っており、涙を流していた。

「お、おい雲雀！大丈夫か!?やっぱり何処か痛むのか?!頭、ぶつかって凄く痛かっただろ？す、直ぐに手当てして、病院で診て貰えれば大丈夫だからな?!だから…」

すると、柳生が何かを語る間もなく、身体に重みが生じる。

一人分の身体が、まるで此方に負荷がのしかかる様に、雲雀は柳生に抱きついていた。

「ひ、ひひひひ雲雀?!ど、どどどうしたんだいきなり抱きついて…!?そ、それは確かに嬉しいが……幾らなんでも…」

当然、何が何やら突然過ぎる行動に、頭の処理が追い付かずに混乱状態に陥ってしまった柳生は、赤面状態になりながら頭から湯気が出ている。普段は臆病で甘えてくる雲雀を宥めたり、可愛げにする柳生も、今回ばかりは雲雀成分が足りていなかったのか、シリアスな暗い雰囲気が続いていたからか、嬉しさが勝り目がぐるぐる状態だ。

「柳生…ちゃん……！柳生ちゃん……！雲雀は…雲雀は……」

あの時の情景を思い出す。

とある少女が、親友を守る為に、自分の命を投げ合ってまで犠牲に

して、願いを叶える為に力を欲した少女が移した行動は、自分の眼に映らない所で、守るべき親友が殺されていたという情景。
其れは自分の住んでいた集落は焼かれ、家族も、友達も、知り合いも、全員惨殺され、願いを叶える為に行動した結果、最悪な結果へと転がってしまった。その光景を目にしていた時、そのたった一人の少女は、雲雀に似ていたのだ。その子は華眼もなければ、小さくてひ弱で、忍ですらない子だ。一方でその親友は柳生ちゃんに似ていた。巫女の姿で、白い髪は下ろされており、凛とした清楚さに冷静な物腰の雰囲気は、まるで写鏡のように雲雀と柳生の関係性を示唆されていたものだった。
そんな仲の良い慎ましい二人の関係が引き裂かれる時、全てを失った少女は、まるで雲雀に問いかける様に、悲痛の叫びで訴えていた。
なぜ？どうして？
力を手に入れて、敵を倒したのに。
悪い奴らを倒したのに。
友達を救う為に、契約をしたのに。
安寧の為に、不安を取り除いたのに。
そして、雲雀の胸倉を掴んでその少女は言ったのだ。

『もっと、友達の側にいて…一緒に守りたかった……』

その後その少女は、大妖魔の力を手にした代償の呪いとして、五感全てを失い、無の人生を永遠の時のように過ごしながら、孤独に死んでしまっていた。大好きな家族も、愛する親友も、知り合いに弔うことなく、無惨に死んでいったのだ。
もし彼女の願いが力による暴力と制圧、絶対なる安寧と平穏を望むのではなく、雲雀の様な真なる願いであれば、何度も考え抜き、後悔のない願いを選んでいたのなら、きっと救われてたのかもしれないと。どんな結果になっても、変わっていたのかもしれないと。
きっと、アレは警告だったのだろう。

自分の願いが必ずしも正解だとは限らない。
華眼があれば全てが解決することはない。
華眼が無くても平穏や安寧は必ず訪れるとは限らない。
願いとは、誰かに言われたからやるのではなく、自分の意思で、自分の心の底から信じ念じられたモノ、こうありたいと思う願い、その奇跡を起こす為に自分がどう動けば良いのか。
雲雀はきっと、それさえも考えられてなかった。
恐らく、これは鶺鴒の血筋が受け継いだ華眼に起こり得る超常的な現象なのだろう。今までこんな事起きなかったので、動揺こそしたものの…なぜか、先程迄見たそれは他人事では無く、当事者の様に感じられたのだ。

「……うん、大丈夫…大丈夫だ…よしっ！うん！ごめんね柳生ちゃん。心配かけちゃったね…今までも…。
頑張ろう柳生ちゃん！どんな敵が来ても、雲雀は皆んなを守りたい！その為の雲雀の願いは、いつか…きっと、華眼と向き合って、柳生ちゃんや皆んなを守る為に、闘いたい!!」

靄ついた何かが払拭され、蒼天の如く輝いた笑顔は、涙を拭い、太陽に負けないほどの輝かしい笑みを含んでいた。
其れを見た柳生は、目を見開き硬直する。まるで衝撃を目の当たりにした様に、信じられなかったからだ。
たったあの僅かな一秒にも満たない一瞬で、雲雀が別人の様に変わったからだ。
そして、何故だか妙に、雲雀の後ろに微かな気配もした。
其れは、穢れを知らない純白な神鳥が、彼女を見守る様に重なったからだ。
「だから、先ずは身体を治して、そこからかぐらちゃんや奈楽ちゃんを探していこ！」
変わらない。
これはきっとご先祖様の強い意志や、引き継いだ能力の残火による

影響なのだろう。
真偽は不明だが、何方にせよやる事は変わらない。
自分が望んだ以上、全力でその願いを叶える為に、尽力致すまでだ。

そして京都のとある店の屋根の上で、そんな雲雀の健気さに微笑んでる、彼女と似たもう一人の少女は、クスッと安堵の笑みを浮かべていた。
屋根の上に誰かがいるとなれば当然、目立つだろうし注目を浴びれば、店主の人が怒鳴るだろう。
だが、誰も彼もその少女は見えていない。
『私の子孫は上手くやってるみたいだね！あの子ならきっと、鴇を救えるのかもしれない……そして、あの子の為に勇気付けて有難う――エーデル』

御先祖様はそう言うと、空高く見上げては、身体が薄らと透けていくのを感じた。

２３４話「ざわめく京都」

「これで良かったのか？漆月――」
京の都から遠く離れたボロいアパートの屋上。誰も使われてない古臭い寂れた廃墟だが、未だに撤廃されずに残されてる其れは、住処のない闇の住人からすれば雨凌ぎにはなれるだろう。
無気力な声を投げ掛ける茶毘は、髪をくしゃくしゃと掻きながら、京都の街並みを見渡す漆月に質問する。
「これで良い――私が前に出ると絶対に成功しないから、常に単独行動してるアンタに任せて正解だったわ」
「……俺らの痕跡がメディアに出ちまえば、ヒーローやサツが動き回っちまう。折角身を潜めてたってのに、更に引っ掻き回す気か？俺らが捕まる危険性が高ぶる…リスクが大きいだけじゃねえか」
「いや、其れはないわ。撹乱…そうね、私たちが京都に居るってことを敢えて世間に示すお陰でトガ、トゥワイス、鎌倉、龍姫が死穢八斎會に加入してる疑惑は薄まれる…。そしてアンタはアンタなりのやりたい事が出来る。悪い話ばかりじゃないけれど？」
「……やっぱお前、本当に理解できねえわ。態々俺を使って道楽に半蔵と紅蓮隊を潰すために裏の人間を出向けるなんざ……」
だが確かに悪い話ではない。
茶毘個人として、ヒーロー殺しの意思を全うする為にも、有力な人材が欲しかった。
綺語道楽との交渉内容…それは、敵連合の名義を使って抜忍やそこらの敵を使った殺しの依頼。対象は半蔵学院と焔紅蓮隊。当然そうなれば、ブローカーとしての役割だけを担う綺語道楽は、忍商会という組織自体地に足が付くことなく、サツによる捜索は敵連合のみに絞られる。

綺語道楽自体、最初は拒否する一択だったのだが…

『良いのか？お前らにとってアイツらは邪魔な存在だろう？敵の敵は味方ってな、俺らもお前らも邪魔者は消したいって望みは一緒だ。お互い手を汚さずして他を使えば良い。俺らの名前名義で言えば、力を持て余した有象無象はバカみたいに釣れる…悪い話じゃねえだろ？』

『……なるほど、おめぇ等さんの言う言葉は尤もだ。ここであっしが拒否しちまえば、四巴の戦争となるか。これ以上テメェらに邪魔をされても困る…』

綺語道楽は状況や意図が飲み込めた様子で、渋々頷いた様だ。

すると漆月はニコッ、と満々な笑みを浮かべて振り返る。

「理解できないから、私がしたいことも分からないのでしょう？だから誰も私の行動に対策なんて出来ない。対策できない無能は私の掌の上で転がされて、利用され、搾取されるだけ…♪それで？どの連中が釣れたの？」

「……『ハウンドドック』に『星のしもべ』、『緋剣』だそうだ。星の導きは知ってるが…残りの奴らは知らねえな」

「嗚呼…ハウンドドックは異形系の忍で、昔は殺し屋稼業積んでたんだっけ。狙った対象を絶対に逃さず姑息な手で狩り殺す童話の狼…で、緋剣は忍刀一本道極めた風流な抜忍…だったかしら。え、これだけ？」

「一応アイツなりに他集めて探ってるみてぇだが……」

「まあ流石にあり得ないでしょうね。忍商会も私達の名義を使って他の下手人をかき集めて排除に向かわせてるとは言え、かぐらさえ手に入れれば私達なんて簡単に裏切れる。少なくとも綺語道楽にとっても、殺せずともせめて足を止めれば良いという考え…。随分と舐め腐ってるわ…あのゴミハゲ」

口だけの約束はしたが、集めたのはそこまで強力な連中でもない。

寧ろ忍商会の幹部たちが出向いた方が充分強さを発揮し、半蔵と紅蓮隊を排除出来る実力は有るだろう。少なくとも嘘月妄語は別格だ。
あれだけ熟練に幼い頃から気配の察知、意識、殺意を受けて、敏感になった触覚。其れを悟らせずに私の背後を取ったアイツはとっても面白い。
となるとアイツには悪意なんて感情は持ち合わせていなかったという事になる…。
「スピナーと闇は？」
「到着までそろそろらしい…最近新しく入ってきた黒紫って奴、そろそろ教えてくれよ。今は何してやがんだ？」
「敵情視察に加えて仲間探し。私の下に加わる強力な抜忍探してるのよ。八斎會以降、仲間集めに必死になってた蒼志や龍姫もあの一件以降急に停止したしねぇ……其れに、面白そうな奴がいたら力づくで従わせるわ」
「そうかよ……闇とトカゲ野郎はどうすんだ？アイツら二人揃って態々呼ばせるのも理由があるんだろ？」
「あの二人は前線に立たして戦わせる。其れに闇は林間合宿ではラグドールこそ回収出来たみたいだけど、一人も殺さなかったらしいし、誰とも鉢合わせてもいなかったみたい。そろそろあの子にも活躍の場面ってやつを見せて欲しくてねぇ…あの子で何人殺せるかしらぁ…♪」
闇。
本名、共に能力も不明。
林間合宿ではラグドールを拉致した上に、誰とも鉢合わせなかったらしいが…。彼女曰く、本来は黒佐波と手を組んで敵陣に攻め込み生徒及び教師、プロヒーローを始めた忍学生の大量虐殺を目論んで居たらしい。確かに闇の能力なら黒佐波とのコンビネーションも抜群だったから。
然し黒佐波がそんな言う事聞くわけもなく、協調性皆無の脳筋は単独行動を測ったらしい。その結果タナトス行きなのだから自業自得な上に無様だ。よくあんなバカがカグラに捕まらなかったのだと不

思議に思うが、一応実力としては申し分ない。使い方が悪かっただけだと諦念しておく。
だから闇は後方で様子を見ながらラグドールの捕獲、そして生徒の排除を狙っていたらしい。
スピナー。
マグネと共に林間合宿に攻め込み、プッシーキャッツの一人、マンダレイと交戦したのだが、油断やら実力不足で拘束された所を黒霧に助けられた、ステインの熱に当てられたもの。
個性は使用してなかったらしいけど、異形系だから発動もクソもない…んじゃないかしらアレ。
然も緑谷出久と飛鳥を取り逃したという失態がある以上、その雪辱を払拭させる為にも、メンタル面において彼も同行させて忍殺しとやらに貢献させると良いだろう。
「ハッ、そうかい。そんで？結局俺は何をすれば良い？まさかそんなもんの為に呼び出した訳じゃねェだろうな？」
「嗚呼、安心なさい。アンタには超重要な役割を与えるから…♪決して、暇な仕事じゃない…」
ニタニタと悪意を張り繕って笑う漆月。
嗚呼、間違いなく面倒な事なのだろうと悟った荼毘は複雑な表情だった。長期戦にさえならなければ良いのだが…。
「弔には悪いけれど、護衛はコンプレスだけにして頂戴。八斎會が終われば、蒼志を除いた敵連合集合よ」
さぁッて、京都では一体何人の犠牲が伴うんだろう。多くの悲鳴が、絶えゆく命が、きっと私をより輝かしい絶望の未来へと変えてくれるはず。

斑鳩と葛城が、荼毘の集めた忍を焚き付けてから同じく、違う箇所でも交戦が始まっていた。
「ホッホッホッホ!!輝かしい星々よ!全てを終焉に導く紅蓮の残火を終わらせよ!!冥王の口角が弧を描いておるわ!!犠牲となるべき者こそ現代に生きしかせ忍きよ!宇宙からの啓示を受けしこの命、闇に覆われしこの地に裁きを与えん!!!」
浮かび上がる透明な水晶玉の上に座りながら、何やら宗教めいた言葉を撒き散らす老人は、街中のガラスを集結させては、液状と化して溶け合う様に肥大化させていく。
「民間人がいる中でこの行動…恐らく私達を知ってる者でしょうが、追っ手だとしたら悪趣味ですこと!!」
「詠さん、何やら星とか宇宙の話してるで。あれが俗に言う宇宙人ってやつかいな?」
「そんな事言ってる場合じゃないって日影!折角病院見つけたから焔を担いででも避難させようとしたのに…!!こんな厄介な奴に目を付けられたんじゃ忍もクソもないわ!!」
詠、日影、未来が衝突したのは、星のしもべ。
荼毘曰く元々目を付けていた敵の一人らしいのだが、どうやらこの三人にカードが当たったらしい。
彼ら彼女らの暗躍が働いてる事など梅雨知らず、詠はジグムンドで肥大化するガラス玉を撃ち抜くかのように連射する。幸い民間人は悲鳴を上げながら逃げてくれてるので、時間が経てば残るのは自分達だけとなる。人質の恐れもなくなるので、此処は防戦しながら隙あらば攻め入るのが基礎だろう。
詠と未来は遠距離で射撃を行うことで、磁石のように引き寄せられてるガラスを撃ち破りながら、何とか肥大化を阻止しようとするも、流石に何百、何千ものガラスを止めるのは無理がある。
「無駄な抵抗など醜態を晒すだけ!最早無意味と知れ!!いざ――」
『光明墜王』――　まるで其れは、惑星を模倣したかの様な巨大なガラス玉。詠や未来の忍術によって狙撃されても尚、肥大化された其れは、危険信号を察知させるかのように、脅威を孕んでいた。

間違いなく不味い――確信が頭を過ぎる。
「裁きを――!!」
指を動かす仕草、それに応じる様に三人へと向かい高速で投げつけてくる星のしもべ。言動は意味不明ではあるのだが、ガラスを操作する個性だとすれば、大した熟練度だろう。
然しそれも逆に無意味だと知らされるのは敵側の方であり――
「そんなの今更無意味ですわ――!!」
秘伝忍法――『ニブルヘイム』により、縦に振るわれる巨大な豪剣は猛威を振るい、粉砕の如くカチ割れる。ガラス細工は跡形もなく粉砕され、散らばり、巨大な攻めの一手も虚しく終わる。
「……ゴフッ」
だが所詮は名もそこまで上がらない敵。
況してや戦場では三対一…遠距離戦の要が居る紅蓮隊に加えて――
「奴さん、ガラスの操作は繊細でも気ィ抜けてたらアカンよ。わしも近距離戦得意やけど、一応ナイフ飛ばすし」
毒に塗られたナイフを投げつけ、急所を外した右肩に突き刺さっていた。敢えて殺さずに生け取りという形で事を済ませたかったのだろう…その気になれば簡単に殺せたであろう日影は、敢えて態と心臓や首元を狙わなかった。
「神経毒やから、死にはせぇへんよ。その代わり身体の自由は奪わせてもらうさかい」
そのまま個性使用の維持が続かれず、落下して地面へ衝突した星のしもべ。個性自体は強力だが、相手が悪すぎた様だ。勝負にもならず、力なく倒れ伏せる星のしもべに日影は駆け寄り情報を引き出そうとする。
「アンタ、誰に頼まれたん？ワシらのこと知ってて襲撃したんよなぁ？上層部の人間？それとも別の誰かか？」
「ごふ…っ！終わる…！終わってしまう!!貴様ら…！このままでは世界は破滅へと導く！京の都は死の海へと変えられ、この地は死の手に冒されよう!!」

「ダメや詠さん、未来、何言ってるか全然わからへん」
「う、うん…大丈夫だよ日影…私も全然、ソイツが何言ってるか分からないから……」
「ですが、追っ手にしては余りにも弱すぎますわ…いえ、単に相性による問題だったのでしょうけど……。となれば、私達を知ってる者達は限られますわ！」
　上層部の追っ手なら、世間に知れ渡すことは危険行為に等しい。忍らしく人の目に触れずに抜忍を殺さなくてはならない。にも関わらず、白昼堂々真っ向勝負と言わんばかりに真正面からの攻撃。
　雇われたと捉えるなら、焔紅蓮隊を狙う賊の者と考えても不自然ではない。
「どうする？取り敢えずしょっぴいて連れてく？」
「ううん…公で戦っちゃった以上、顔は割れてるだろうし…警察が駆けつけて来ちゃう可能性もあるから、此処は一旦引いて後のことは現地の人に任せれば良いと思うわ…！其れに神経毒で動けないんだったら好都合だし！」
「何より仮に連れて来て尋問しても、また意味不明なことばかり言いそうな気がしますものね…」
　言いそうな…と言うより、１００％意味不明な言葉しか呟いていない。日影が宇宙人か？みたいな疑問を投げて来たがある種理解不能な言葉を吐き散らし、会話が成り立たない辺り間違ってはいないだろう。
　何より今は焔を安全な場所へ避難させることが優先だ。あれだけの重傷…幾ら詠の裁縫で傷口を縫って止血してるとは言え、もし他にこう言った追っ手や忍商会と鉢合わせてしまえばこの上厄介ない。
　この場を後にして、詠、日影、未来の三人は焔達の居た場所に颯爽と赴いた。

　奈楽と神楽の行方を探るべく、探索行動に赴いてる半蔵学院の選抜

補欠メンバーの進歩は、余り宜しくはない。どちらかと言うと手詰まり状態だ。何せ肝心の奈楽と神楽は嘘月の襲撃により避難、そして忍商会のメンバーと鉢合わせたとて、連絡をするにしろ、昨日の襲撃に続き今日も同じように鉢合わせになる、などというベタな展開は望めないだろう。

「いやぁ、本当にいないですねぇ…いつ見ても京都の街が賑やかって感じで、とても見つけられそうにはなさそうですけどねェ」

「怠慢は止した方が良いですよ風魔、選抜補欠とは言えど立派な名門校である半蔵学院の名を背負ってるのです。確かに手詰まり状態故に、向こうが我々の顔を割れてる為、困難な道ですが、それでも諦めなければ…」

「……ん？」

「…？どうしました、晴明？」

いつも眠たげに目を細めながボーっとしてる晴明が、京都とは程遠く掛け離れた角度に視線をやる。

「何かありましたか？」

「ん、なんか……さっき、鳥の頭をした人影が……過ったような……」

「何寝ぼけた事言ってんの！ほら、飛鳥先輩の為にもしっかり探さないと!!」

「風魔さん!?さっき言ってた事と真逆ですよね!?!自分だけ棚に上げないで下さい！」

「でも晴明ちゃんの勘や予知夢って結構当たりますよね…鳥の頭をしたって、異形系の人達だと普通に街中にもいますよね…？」

「ん～……なんか、其れにしては雰囲気が変だったなぁ……」

「あ、菖蒲分かりました！ひょっとしたら忍商会の人達かもしれませんよ？ほらほら、善は急げです。手っ取り早く追いかけましょう！」

「私たちからすれば悪なんですけどぉ!?」

「ん、ごめん……でも見失っちゃった……」

見失ったのならしょうがない。

乗り気ゼロ、勝ち目がないと悟りながら髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き乱す風魔に、仕方がないとため息を吐く土方。

（というより……私と目が合ったような気が、するんだよね……）

其れが単に気の所為なら良いのだが…。

「ねぇ、アンタ達――半蔵の生徒でしょお？」

荒々しく投げられた声が、全員の耳を打つ。

繁華街で賑やかな京都の変わらぬ街中に、声を掛けてくる女性に目を奪われる。

如何にも監視員に似た警備員の制服に身を包む女性。一見穏やかさと柔らかい口台詞……だが雰囲気的にこの圧力――只者ではないのは確かだ。先程まで騒いでた空気が一瞬にして凍りつくのは、この場の全員が誰もが肌身で感じ取れる程に、実力差があるからだ。

「答えないってことは、図星って事でいいのよねェ？……あ、？」

「はっ、はいぃ!?わ、私達に何か!?」

物腰の柔らかい口調から一変、圧と共にドスの効いた声が聞こえた。つい自然と敬語口調が出てしまう風魔に、またもや溜め息を吐いてしまう土方。菖蒲は兎も角、あの晴明でさえも目を覚醒させながら、冷や汗を流して警戒態勢に入ってる程だ。

「やっぱり、半蔵の制服でしょお？見れば一発で分かるわよぉ――単刀直入に聞くけど、飛鳥って子は何処にいる？返答次第では実力行使も躊躇わねェけど…？」

不適な笑みを浮かべながら、不確定要素の塊とも呼べる女性の言葉に、全員が息を呑んだ。

２５３話「平和に向ける為の」

「いやぁ、悪いねェ！常闇くんに芦屋ちゃん。そっちの方手伝って貰っちゃって！四日目とは言えど、芦屋ちゃんは大分仕事に馴染んできたんじゃない？」

京都で不穏が蔓延る一方、九州付近でインターン活動に参加している常闇踏陰、芦屋の二人組。密売ルートによる敵退治の要請に、早くもデビューを果たした二人組に労いの声を投げるヒーロー。

「俺達は雄英、常にプラスウルトラを心掛けてる…とは言ったものの、貴方のご指導のお陰でもある『ホークス』。大いに景色を見渡し、状況を把握する。二日目の宵闇にて…俺たちに教授してくれたのは他でもない貴方だ」

「ふはは！６６６番目の使徒じゃぞ？これくらいこなして当然じゃ!!」

芦屋に関しては訳の分からない事を宣ってはいるが、これが平常運転なのでスルーしても良いだろう。というかホークスにとっては一種のこせいだと悟り特別気にも留めてない。

だが初日の芦屋は平静こそ装ってはいたものの、心臓が破裂するほどに内心穏やかでは無かったご様子だ。現に今も心の中で「Ｎｏ．３に褒められた!?やったー!!!」など、普通の女子高生のように喜んでる。

彼女は大層さも当たり前の様に豪語しているが、初日はホークスについて行くのが精一杯、精々ホークスの背を追う常闇に追いつくので息を切らす程の体力勝負。

現場にたどり着いた時は事件解決で、メンタルがズタボロだった。『自分、何のために呼ばれたの？』なんて本音が出てしまうほどに。

Ｎｏ．３ヒーロー『ホークス』

学生時代の頃から事務所を立ち上げ、２０代という年齢で有りながら、トップ５にまで上り詰めた若手実力者。
神野区にて参加不在なのは少々理由があったようで――
因みにインターン活動が始まり、最初に二人が訪れた時の反応はと言うと…
『俺は職場体験で経験があるが故に、ホークスとは久方振りの再会は良しとして…仮免試験で面識があるとは言え、蛇女補欠の者と手を組むとは…』
『わっはっは！流石はＮｏ．３とやらじゃ！見る目がある。神のご加護を持つこの我を選ぶとは…今なら特別に信仰としての御札をだな――……』
常闇は久しぶりなので良いとして、書類通りこの子はかなり特殊なケースの子だった。まあ、それが却って自分としては得をするものでも有り、好都合なのだが…。

などと常闇踏陰は兎も角として、芦屋は特殊な性格と圧倒的にヒローが多い中、其れに加えて同期の忍が誰もいないと言う肩身狭い中、一生懸命動いてくれてたのは本当によく頑張ってる方だと思う。然もホークスは速すぎる男という異名を持ち、スピード解決に関してはトップクラス。常闇が付いてるとはいえ、初日は芦屋でさえも付いていくのがやっとの始末。それでも四日目には何とか喰らいつく勢いで、粘り上げがむしゃらになって追いついた。選抜補欠という立場ではあるが、実力は目を張るモノがあるのだろう。
「常闇くんと芦屋ちゃんは仮免試験で面識があったってのは、昨日も言った様に調べてはあるから良いとして…本格的にヒーローの仕事に触れるのが初めて、尚且つ同期の忍が居ない中、きちんと仕事出来るのは賞賛できるよ。ひょっとして仮免試験だと連携プレーとかバリバリやってた方？」
「連携と呼べるかは判断を下すのに適するかは分からんが…ギャングオルカと抜忍役の子供、仮装敵の撃退に関しては芦屋や他の者達と共

に向かい協力した」
「え？お主あの時いたかの？」
「……」
「あっはっはっは!!君ら良いねやっぱ！俺が見込んだだけの事はあるよ！」
　芦屋のトンデモ発言に常闇が芦屋の顔を凝視している。とはいえ連携と呼ぶには程遠いが、協力体制として手を組んで目的の為に行動したと言う意味では、十分価値がある。
　笑いながら腹を抱えるホークスに、不満そうに苦虫を噛み潰した苦渋の顔を見せる常闇は口を開く。
「然し以外な事だ…職場体験で経験を積んだ俺ならまだしも、悪忍…それもホークス、貴方は全く接点が無かったのだろう？其れに加えて芦屋一人というのに改めて驚きだ」
「何をいう常闇、我は６６６番目の神の使い…善悪云々より我に興味を示し抱くのは当然のことじゃ！と言ってみたは良いものの…善忍と悪忍が少しずつ協力していく姿勢、矢張り我等と対なる存在がいれば、いざこざ…というか、トラブルが起きるんじゃかいかの？」
「いーや、その心配はもう時期なくなるよ。何せそろそろ平和条約が結ばれる頃合いだからね」
「平和…？」
「条約？」
　常闇踏陰と芦屋は全く知らんと言わんばかりに小首を傾げる。ホークスはけらけらとした表情で語り継げる。
「これ見なよ、ｙａｐｕｕニュース。各国からの賛否両論はあれど、これは全国に轟くビッグニュース――より平等に円滑に事を進める為、忍の歴史の大きな改革、更にはヒーローとの協力体制を見越した善悪イリニ条約――善忍と悪忍が手を取り合い、世に大きな貢献、平和を守る栄光の歴史的な瞬間さ。それを機に善忍と悪忍の戦争がなくなる、犠牲を無くす決定的な公表ってわけ」
　長きに渡った善忍と悪忍の戦争は終止符を迎え、増え続けた抜忍達の制裁、敵退治や人命救助に於ける活動をより活性化させる条約であ

る。オールマイト、半蔵が引退した真中、一時期は混乱を招いたものの、其れを収集させる為にカグラ達が動きだし、上層部達も批判と賛同を招きながらも、漸く平和に向けた政策に動き出したのである。
「これは秘密裏だけど、ゾディアック星導会と、三年前に創立された善忍のユースティア女学園が正式に参加するみたい。カグラ会議でも段々と進めてるみたいだしね」
カグラ会議――Ｎｏ．１の称号を持つ黒月
カグラ四天王、リュウを代理するユースティア女学園の聖従――ミカエル
ユースティアの聖従は善忍カグラの忍学校であり、陽花が亡くなった跡、かなりの活躍を担ったと聞く。
ミカエルは目立った活躍は不明だが、聞いた話によると全国指名手配犯の抜忍『ノヴァ』『ピサロ・ナイト』『燕獄』を単騎でタナトスに連行させ、歩く化け物と称されていた。なのに彼女がカグラの中で目立たなかったのは、気分屋であり極端にホークスと同じメディアに興味がないからだ。
因みに忍名が英名なのも、元々はユースティア女学園という高貴な者達の集まりであり、名前も其れに殉じた相応しい女神であれ、との祈りだそうだ。海外でも英名の名前もあるし、世界を見渡すホークスからすれば疑問にも思わない。
「おぉ！凄いのぉ…そんな条約があったとは!!いや、忙し過ぎて全然テレビとかニュースとか観れてなかったわ…あの鬼畜教官めェ、メニューが厳しすぎて帰って直ぐに爆睡してしまうんじゃ…」
「ふむ、ならば俺たちも芦屋を始めた悪忍達に対して、警戒ではなく…こう、胸を張って堂々と手を握る関係になりたいものだな。軽蔑的な目や、敵意な目線を向けていたわけではなかったが…それでも余り、馴染もうとしなくてすまないな芦屋。改めて俺たちも平和条約に向けて、より友好な関係を築こうではないか」
「な、ななな何!?こ、これは一種の友達関係というやつなのか!!?な、ななな、ならば…その、先ずは我の信者から始めるがよい!!!」
「やっぱり信者は欠かせんのか」

常闇踏陰は決して心や表情を面に出す事はない。一匹狼的な雰囲気はあるものの、実技試験では蛙吹梅雨と協力しエクトプラズムを打破したり、協力面は有る。然し蛇女子学園の一件があり、少し心の距離があった。それも今回の条約のニュース、後々多くの人達が平和に向け、争う関係ではなくなるのなら、自分たちヒーローと何ら変わらなくなるのだと理解した。ある意味、雄英生の中で自分から進んで友好関係を築こうとしたのは彼が初めて…いや、切島鋭児郎もまたその一人だ。少しずつ、隔てた心が解けていき、条約へと向かっていく。

芦屋は赤面しながら、矢張り素直じゃないからか、何故かカルト的な勧誘を勧める一方で、常闇は冷静にツッコミを入れる。

「…してホークス、そのユースティア女学園というのはどういった学校で？飛鳥達やB組の夜桜達とは違うのか？」

「創立も三年前…然も聞いたことがないの…善忍で有名なのと、忍スクールパンフレットでも、名のある善忍高校は見受けたが…」

「ユースティア女学園は何せ空中に存在する学園だからねェ。アメリカの天才女学者『メリッサ』が、凡ゆる脅威から退ける為、生徒の楽園を創り上げるために開発された空中都市――『エデン』。高貴な血族呑みしか入学は許可されてない学校…それに経験も満たされてないし、お嬢様クラスが沢山いるし、生徒もめっちゃ少ないから雄英としても向こうとしても協力の条件は満たさなかったみたいよー？まっ、要するに学校のスカウトでもない限りは無理ですよーって話！半蔵や月閃は昔から存在する伝統と風習、規則を重んじたエリートマンモス高校だけど、ユースティアは全国の正義を主張とし、平和を結ぶ為、密かに創立された新たなエリートお嬢様学園。独自の正義か全国を代表とする正義か、その違い。忍は騙し、壊し、殺すっていうダークな設定に対して、向こうは忍ってよりも執行者って言葉の方が正しいかな。各国の救済要請を受けては、紛争地帯や災害に赴き救いの手を差し伸べ、忍が存在しない国や地帯では武力行使として役割を担う……天使そのものだよ」

「???」

「芦屋、お前半分もついて来てないだろう」

ユースティア女学園は全国に派遣する為の育成機関であり、紛争により手酷く荒らされた国、海外でも協力申請が不可能な忍を派遣させ救済者を担う生徒達。例えば、他国に忍が存在せず、ヒーローの弱体化および減少化、争いが激しくなり血を流す救われない者達。そう言った救われない者達に慈悲を込め、救いの手を差し伸べる正義を冠する救いの象徴。当然それだけ厳しければ、入学自体の審査、入学後の規則も厳しく、学力だけで特定の点数を取らなければ即忍の資格を失われる。少しでも忍務に違反を受ければ退学処分となる。相澤消太の厳しさや、蛇女、月閃や半蔵が如何にぬるま湯だと感じるほど、厳しすぎる洗礼を受けなくてはならない。だが悪に対してとことん厳しく、敵対視する程の学園が条約を結ぶということは、其れほどに忍の界隈に対して大きな説得力を担ってるに他ならない。それもオールマイトが引退したからにより、考えが変わったからであり、それほどの実力行使を行う権限が学園にはあるのだろう。陽花のような強力な人材を育成させ、世界中に救いの手を出す為の、理想と楽園を主張する存在。

メリッサ・シールドとは、アメリカに住んでいる天才科学者であり、緑谷出久と同じく無個性の者。父に尊敬の念を抱き、日々努力を重ね続ける発明家。

ヒーローのサポートアイテムやコスチューム、他にも凡ゆる作品を生み出して来た彼女の功績は、栄光を浴びていた。

(ただ…不可解なのが、ミカエルちゃんって極度の悪忍嫌いな筈…それはユースティア女学園も理解してるはず……。いや、カグラ四天王のリュウが不在故に、実力の穴埋めとして入籍したからか。だとしても…胸騒ぎがする)

これは世に知らされてはいなければ、当然上層部もホークスに話してはいない。それも速すぎる漢だからこそ見抜けるモノ。

(ちょっとの間、アポ無し速攻であの子に会ってみるか――気が乗らないけれど…其れに、何かあるにしろ無いにしろ、トラブルが起きそうだな…)

考えても無駄。

そう判断したホークスはインターンとは言えど、スケジュールを確認、調整する。ミカエルは忍務『ヨーロッパ海で出現した大妖魔』討伐に赴き、任務終了後は会議に出張するだろう。
日本での妖魔討伐は世界各国の中でも屈指の指折りクラスだが、ミカエルに関しては海外出張が多い。
「どうしたホークス…何やら浮かない顔をしているが……任務のコトで気になった点でも？」
「いや、何…何でもないよ常闇くん！お兄さんもＮｏ．３だからさ、考えるコト、やること多過ぎるから偶に物事に耽ることあるんだよねぇ。っと、じゃあ後俺はあっちのルート見て回るから、そこで休んでて」
そいじゃ――と、軽く挨拶を交わす様に『剛翼』を使って空を飛ぶ。ホークスもヒーロー業界では名を馳せ、若い年齢とは言えど、正真正銘のヒーローだ。自分達には明かせない業務や、大人なりの仕事があるのだろう。
休んでて、と言われながら軽く缶ジュースを渡された。常闇はアップルジュース、芦屋はメロンジュースだ。
流石は好みまで用意周到…因みに芦屋の好みに関しては、生ハムから連想したらしい。
何故かと問うのであれば、胡瓜と蜂蜜を合わせた生ハムの試食をオススメする。
「善悪イリニ条約か……俺は兎も角、全然気にも留めなかったな…」
「ふむ…じゃが、悪忍と善忍とやらの違いはどうなるんじゃ？これで我々が問題なくヒーロー業界と手を組むにしろ、次々と忍学生がヒーロー学校と手を組むことになる…とかかの？」
「……俺は忍の在り方や、古の風習…掟だのは知らない…だが、この条約を結ぶ…平和を望んでいるのだろう？それも両方が。その気持ちをカタチに、国さえも変えるほどの変革…本当に普通の心じゃ不可能だと思う。其れを条約として結び、平和の為に進むということは、オールマイトが報われるのは勿論…もう悪忍が敵と同視するのは冒涜なのだとさえ感じる」

前までの常闇踏陰では絶対にあり得ない台詞だった。
彼がヒーローを目指す上で大事なのは心の在り方だと、幼少期から信じてやまなかった。
雄英高校に入学してから、一年とは思えないほどに濃厚に時間は絡んできた。初めて邂逅した敵、黒影の制御が難しく自身の闇に呑まれる感覚、そして悪忍としての何たるか。
様々な闇を味わい、知って、邂逅した常闇だからこそ言える言葉の本音。本当の悪者は、平和を望まない。誰かのために行動しようとは思わない。其れが立場上悪者的な主観だったとしても、それが本当に全て悪いコトだとは思わない。
そして平和条約――ヒーローと一緒に、善忍と悪忍が和解して平和を守ろうと望む夢の結合。なれば、これ以上悪忍に対して変な目線…と言うよりも、悪忍だからどうこう、なんて考えなど失礼だと思えてきたのだ。
それが歴史的に彼ら彼女らが人を殺めたとしても、罪を背負ったとしても、同じ目的を持つ同志に、軽蔑的な眼差しなど、自分の理想像にあるヒーローが廃るものだ。
「オレ、友達！」
「わ!?な、なんじゃ!?」
「オレ、芦屋モ友達！悪イ奴、平和望マナイ――芦屋、悪イ奴チガウ。忍モ俺達モ平和築ク！ソシテ、コレカラモイッパイ頑張ル!!」
唯一、あまり人の会話に介入しない黒影が、友好的に絡んでくる。黒影は暗闇な部分では性格は荒々しくなるが、心の持ち主が清らかであれば牙を向けることはなく、怒り、絶望、憎悪といった感情であれば、見境なく破壊衝動に貪られる。
現在は昼間なので荒々しい態度ではなく、大人しめなのはそうなのだが、飛鳥達でさえも余り会話に入らないのにも関わらず、芦屋に対してはかなり懐いてる様だ。
「黒影、嬉しい気持ちは分かるが芦屋が戸惑ってるぞ」
「オレ、シンコー…ヨク分カンナイ。デモ、友達ハ友達！大事ナノハ、心!!」

ドヤァ！と謎に決める顔。常闇もついため息を吐いてしまうが…そんな一連のやり取りを見ていた芦屋の口角が上に吊り上がり、声を漏らしてしまう。
「ぷっ――あっははは！なんじゃこのモンスターは、随分と面白いコトを言うではないか！何だか気に入ったぞ！」
「我――ダークシャドウ！神ニ牙ヲ向ケ、時ニ仲良クナル深淵タル邪神ノ使イナリ!!」
「何!?常闇、このダークシャドウとやら…信仰が分からないと言っておきながら邪神の使いと申しておるぞ!?というか、邪神の使いってなんじゃ？」
「辞めてくれ黒影、その言葉は俺に効く」
羞恥心が勝る余り、顔を背けたくなる黒歴史に身体が震えてしまう。中学時代、雄英に入学した後密かにヒーローネーム等を考えていた際に、『邪神の使い』だの、『深淵の邪神』など考えていた。流石に高校に入学し、梅雨時…職場体験前にミッドナイトの授業で受けたヒーローネームでツクヨミという名前に決定したのだが、このネームドを付けるためにも幾重もの積み上げられた黒歴史の名前が残っていたのだ。そして常に黒影が此方を見つめてるのだから、ネームドを隠そうにも常に全開的に見られてしまうのだ。芦屋も厨二チックさは感じるものの、何と言うかオカルト的な宗教要素が強いので、厨二要素と似て非なる者ではあるが…。
「まあ、その…なんだ――芦屋、お前はホークスが選んだ程の人材なんだ。共に夢に向かって、切磋琢磨する仲とも呼べれば、俺たちは同胞であり仲間…ならば俺たちが手を取り合うことで、和解の架け橋にもなれば、他の者達にも示しが付くもの…明日からも宜しく頼むぞ」
「ぬ、ぬぐぐぅ〝…　お、お主は直ぐにそういうコトを言うのじゃ…!!じゃ、じゃがまぁ…我も別にお主達に特別、敵視もしてなければ…我が信仰に…じゃなくて！きょ、協力はしてやらんでも……」
「…ン？」
素直な性格ではないのが損するが故か、口を尖らせながら赤面する芦屋を他所に、黒影が違う方向に視線を送る。

「む?どうした黒影よ…」
「アノ暗イ路地裏…二人組、俺達監視シテタ?何カ、変ダ――血ノ、悪イ奴ラノ闇感ジル!!」
「「何だと（じゃと）!?」」
ホークスが不在になって直ぐ、事件発生。
現場を発見した訳ではない上に、黒影の直感や触感、意思や気配で感じ取れるモノ。事件後なのか、事件前なのかは、結局のところ現場に行かなければ不明である。

人気のある廃墟の裏路地――武装をした迷彩服の戦闘員二名は、ガスマスクを着用しており、素顔は不明。肩の紋章には『D』という文字が刺繍されており、双方の髑髏と真ん中の狼の絵文字が特徴的なシンボルマーク。
何か調査か下調べでもしていたのだろう、お互い頷き合い、次の目的地へ向かおうと足を運ぼうとするが――

「何処へ行く――」

廃墟の屋上から飛び降りながら、頭上から奇襲を仕掛ける常闇踏陰は、深淵闇躯の状態…黒影を武装として纏わせながら、穿つ腕を伸ばし、頭部目掛けて振り下ろす。
「ッ――!!」
刹那、反射的に声主に振り向くと共に、抱えていたアサルトライフル――『ベレッタ――ＡＲＸ１６０』を連射。銃口を常闇の頭部に目掛けて狙い討つ。
（っ…!!?コイツ…この者――躊躇いなしに反応した瞬間に銃口を…！間違いない、殺し慣れてる者!!）
銃の発射音と共に放たれる硝酸の香りと、火花散る弾丸。深淵闇躯による防御を纏っていなかったら即死していただろう。マスタードのようなチャチで未経験な中学生とは、完全に次元が違う。常闇の穿

つ腕を掻い潜る様に、アクロバティックな身動きで、俊敏に回避していく。
「クッ……！」
「ッ…!!」
　着地し、直ぐ様追い討ちを掛けるように伸縮自在の闇を動かし追撃を仕掛けるも、真正面から此方へ突進し、相手から頭突きを喰らってしまう。虚を突かれたように、後へ下がってしまう刹那、武装した敵は常闇の腹を蹴り、袖から仕込みナイフで心臓目掛けて振おうと試みるも…
「ツクヨミィ！無事か!!くっ…こやつ、動きが上忍か!?玄人じゃ！」
　大車輪の纏う凶刃の風を吹かせ、背後で死角となっていた敵に痛手を浴びせ、吹き飛ばす。
　一方で背後から奇襲を仕掛けた芦屋も、気配を隠していたにも関わらずもう一人の武装の敵は手練れだったようで、掠めることもなく迎撃されてしまった。辛うじて上手く起点を利かし、ツクヨミを助け出したものの、芦屋と対峙した敵は、片方の腕が巨大化し、強引に壁を破壊しながら殺しに掛かる。
　壁を破壊することにより、破片が飛び散り、それを薙ぎ払うだけで鋭利な刃物を飛ばす様に、襲わせる。
「このッ――！秘伝忍法――『兇嵐陰絶輪』!!」
　禍々しい嵐が、巻き溢れる刃物のように武装した巨腕の敵の繰り出したコンクリートの破片を打ち砕かせ相殺させるも、捨身覚悟で秘伝忍法を浴びながら突進してくる。
「な、何じゃこやつ、っ!!」
「芦屋!!クソッ…！黒影!!」
　そしてタックルを受け、体勢が崩れた刹那、なんと敵は足払いで芦屋を転ばせ、身体を踏みつけ、巨腕で首を締めようと魔の手を差し伸べてくる。ツクヨミが意識を向け、注意を逸らした隙に、もう一人…吹き飛ばされた武装の敵は、アサルトライフルをツクヨミの後頭部を狙っている。恐らくヘッドショットで獲物を的確に、確実に仕留めるつもりでいるのだろう。一秒にも満たない隙が生まれれば、それは免

れることのない致命的な死を招いてしまうことに――。
「ツクヨミィ!!」
「ッ…!?!!」
だが、銃が放たれることはなく、常闇のダークシャドウは深淵闇躯を解除した状態で、建物の影を利用して相手を縛り付けていた。纏わりつき、身動きできず必死に抗う敵は、もがいており、ダークシャドウも引き剥がされない様に必死になって抑えている。
「くぅッ…!!芦屋ぁ!!」
「こんの…っ!ぬ〝あ〝あ〝ぁ〝!!」
重圧に抑えられてる芦屋は、幸い両手に持ってた大車輪で、巨腕を切り裂くように斬り込みを入れる。
ザクッ!ザシュッ――!車輪の刃が腕に斬り込まれ、鮮血が飛び散る様に溢れ出る。然し怯む様子もなく、緩む様子も伺えない。ガスマスクで表情を隠してるからか、相手が効いてるかさえ不明だ。確認のしようがない。
「おのれェ……ダークシャドウ――!!!」
「オォ…!オオォォォ――!!!」
己の内に湧き上がる怒りと共に、黒影は応えようとする。衝動により爆発する悪意、殺意、間違った闇の感情を抑え込み、一部力を解放する。ツクヨミの脳裏に蘇るのは、林間合宿の際に己の不甲斐なさと、未熟さにより、自身の個性である黒影を暴走させ、結果として障子や他の者達に多大なる迷惑をかけてしまった。
(もう…あの時のようには…ならんぞ!!)
黒影は心身に操作され、感情を根源とする闇の具現化は、一歩間違えれば大きく主従関係が狂い、覆してしまう。あの時は宵闇の夜とはいえど、黒影が暴走するのには充分すぎる程に、状況が適していたのだ。
それと同様に、障子目蔵を殺める危険性も、黒影にはそれを可能にするほどのポテンシャルがあった。
「グオオォオオォォォーーーーーッッッ!!!!!」

片腕で敵を一体拘束している間に、ビルの影による暗闇を利用して、闇を増幅。黒影にとって陰や暗闇、そういった光のない場所は、状況さえ整っていれば問題ない。もう片方の腕を巨大化させ、敵を吹き飛ばす勢いで殴り付ける。

邪悪で凶暴な一撃が、重圧な拳による暴力に、芦屋の首を締め殺そうとした敵を、跡形もなく殴り飛ばす。

まるでトラックにでも跳ね飛ばされたかのように、ズバコオオォン――!!と、破壊音と衝撃の音が反響し、芦屋は無事に何とか解放された。

「か、感謝するツクヨミ……!げほっ、ごほッ……!」

「嗚呼、礼には及ばな…ッ!クッ!此奴、まだ足掻き続けるというのか……!!」

無事に解放された芦屋は咳き込みながらも、何とかツクヨミの側に駆け寄り、助けてもらった御礼を交えるも、常闇は肝心の拘束されていたもう一人の敵に視線を送る。

ギチギチ…!鈍くて千切るような音。其れは黒影の腕から逃れようと、無理矢理にでも身体を動かす兵隊。

(通常――黒影に呑まれた者は、どう足掻いても無駄なだけ。オールマイト程や緑谷程のパワーによる怪力や、爆豪や轟のように光を根源とした個性、そして先輩であるミリオのような特殊な個性でなければ…いや!芦屋と対峙した奴は発動型の個性――ならコイツは身体能力を向上とさせる個性か?)

ツクヨミは冷静に分析し、頭を回し働かせ、迅速に最善の対応を鑑みるも、敵は脱出しようと試みる。

「なれば我がトドメを刺そう!ダークシャドウは闇、なれば我の秘伝忍法は寧ろ増幅に加えて無効な筈じゃ!」

芦屋は武器を構えて脱出しようと必死に足掻く武装した兵隊の敵に、邪気の念を込めて敵を一掃しようとする。先ほど敵を倒したことにより、二体一の良好な環境が整えたことにより、先ほどのピンチよりかは充分に良い状況になっただろう。

だが…
「ッ…!!」
ドンッ――!ドンッ――!ドンッ――!!
地震にも似た音が反響し、背後に目を遣る。それは先ほど、黒影の重い一撃を以てして、吹き飛ばされた敵が、首から血を流しながら追いかけて来た。
マスク越しにより、口から血を流しているのだろう。それでも尚、此方に目を付けた標的を死ぬまで仕留めようとする、巨腕の敵。もう片方の手も怪物の様な腕をしており、両腕で地面を殴り飛ばしながら、迅速に此方へと進んで来る。
「なん――ッだと!?!!」
ツクヨミは絶句を押し殺し、声を張る。
ＵＳＪ襲撃を始め、蛇女の生徒、職場体験、インターンでの数日間は敵との交戦も有り、入学の頃とは比にならない速度で成長を遂げていた。経験、友情、其れらは必ず糧となり、体育祭でも三位に上り詰めるほどに常闇踏陰という少年は強く、実力者だ。
だが今まで敵と戦った常闇だからこそ感じる狂気――それは死柄木弔のような、曇りなき純粋な殺意でもなく、漆月のような歪んだ悪意でもない。ムーンフィッシュの様な得体の知れない快楽的な殺意衝動でもない、

自分が死んでも相手を殺そうとする、絶望的な殺意――。
現に血反吐を撒き散らし、吹き飛んだ衝撃に加えて廃車にぶつかり、背中は大打撲した。激痛で立ってられるのもままならず、足も少々折れているにも関わらず、足掻きながら標的を仕留めるまで、激痛にも耐えて殺そうとする、異常すぎる執念。三流のチンピラは論外として、然もコイツらは喋ることさえしない。
生きてはいるし、芦屋の言う傀儡といったモノでもない…生きている人間であり、操られてもいない。
つまり、素でこれだということ――
双眸の敵が、二人を仕留めようと、苦しみに足掻いているのだ。

「だが――どんな状況下でも、諦めず、信頼する者が勝利を掴む」

だからこそ、そんな時でもお互い背中を預け合う者同士、芦屋は常闇と対峙した敵を、常闇は芦屋と戦った敵と、まるでバトンタッチで交代する様に、流れる連携で抗う敵を更に追い討ちを掛ける。

油断は一切しておらず、ホークスの言う『迅速で最善な行動を尽くす』ことを心掛け、一旦不利だと感じれば、交代して有利な方向へと運び出す。

芦屋の両輪から放たれる、紫刃の嵐――ツクヨミの二度目の、増幅したダークシャドウ。

紫刃の嵐を浴びた敵は、なす術なく斬撃を浴びて意識を失い、闇を浴びた黒影は、押し潰すかのように床へと叩きつける。

ズドオオオン――!!!

黒影の腕の重圧による地震と戦闘音、双方の敵は意識を途絶えて撃沈してしまう。

土煙が晴れた頃には、既に身動きなく気絶していた。

「よし――制圧完了だ」

「はあああぁぁ～～……いやぁ、疲れたぁ…。ツクヨミ、ナイスファインプレーじゃ!!」

「芦屋も、非常に助かった。流石はホークスに認められた６６６番目の使徒だ」

「あっはっは！そうじゃろそうじゃろ！もし信者になれば特別に、信者特典のクリアファイルにポストカードも付いてくるんじゃぞ♪特にツクヨミと我の仲じゃ、従信の中でも特別優遇してやらんでもないぞ！」

「仮免試験と同じ事を言ってるな芦屋よ…俺は覚えてるぞ。後そういうのはマルチ商法と誤解を招きかねん…」

ひと段落ついてホッとしたのか、「さて…どうしたものか…」と、常闇は倒れてる二人を建物の壁に並べて一瞥する。武装した二人の敵は起き上がる気配はなく、敵一体は携帯していた対敵用捕縛テープで

簀巻きにしてある。もう一人の異形発動系の敵は黒影が常に監視をするかの様に身体ごと巻きついている。
「一応、連絡はしておいたが…然し、此奴ら一体どんな訓練を受けて来たんじゃ？蛇女の生徒達もある程度鍛えられておるし、模擬試験でも生徒達と戦ったことはあるが…洗練された身動きに、迷いのない的確な責め――此奴ら、プロじゃった」
「いや…プロにも匹敵する武力ある者…見た目的に軍隊のようだが…幾ら俺らが奇襲を仕掛けたとはいえ、明らかに他の敵とは空気も違ってた…。抑も、コイツらは一体何のために？」
此処へ来たのだろう――そう言葉が口にする前に、対敵用捕縛テープが一瞬で千切れた。
呆然と、芦屋と常闇が意識を向ける瞬間――短剣の凶刃が、常闇の首を刈り取ろうと迫り、首筋に触れる寸前。
「ッッ!!!??」
理解に至る――然し其れは既に遅し。
気絶した敵は、気絶を装い、呼吸を止めて、反逆の機会を狙っていた。気配も、呼吸も、完全に気絶したフリをして、欺き、疑問と戦闘を終え、緊張が解いた絶好のチャンスを見逃さず。
芦屋が何か叫ぼうと口を開けるも、もう遅いのだ――。
「ツクヨミくん、芦屋ちゃん――これ以上はもう踏み入らない方がいい」
ザンッ――!!!その凶刃は常闇の首を、頸動脈を刈り取る事は叶わず、手放した短剣――対捕縛用に対処されたナイフは、一つの羽によって弾かれ、明後日の方向へ、壁に突き刺さりめり込んだ。
気絶の機会を伺い、騙し撃ちを試みた敵は、背中を刃物に近い一太刀で袈裟斬りにされる。
「ホークスぅ!!」

「ごめん、ちゃんと最後まで事務所に行かせて休ませるべきだった。これは俺の失態だ――今回ばかりは本当に申し訳ないね」
今度こそバタリと気絶し倒れ込んだ敵は、気を失い息をする。背中は武装した軍隊服ごと破られており、出血する。
ホークスは自身の剛翼の羽を積み重ね、太刀として、武器として用いることが出来る。
ホークスが赴く前に、直感と戦闘音を忍び込ませてた羽で、二人組の戦闘を察して駆け付けに来てくれたとのこと。
ホークスの羽は武器として扱えるだけでなく、音や振動、感覚の共有、其れらを通して自身に伝わるようになっている。だからこそ、常闇達の危険にも自慢のスピードでいつでも駆け付けることが可能なのだ。
「助かった…いや、済まない。パトロール巡回中、怪しい者たちを発見し――」
「うん、別に責めてる訳じゃない。ただ、君たち二人にはコレは過酷すぎる…見たところ、使い捨ての三流兵隊だしね」
「三りゅ…」
三流、然も使い捨て。
武力を駆使し、標的を仕留める為に命を削り、騙し討ちをする程の残虐な武装の敵が、使い捨ての駒。
だから平気で自分の命を蔑ろにし、激痛に走っても命令のために仕留める、殺戮の兵隊。
「君たちは先に戻ってて――ツクヨミ、特に君はヒーロー学生…コイツらと関わったら、君はヒーローとしての価値観も、感情も、主観も、全部血に染まるようになる。もう、戻れなくなる」
「何を言って…」
「芦屋ちゃんも、コレと関わって仕舞えば悪忍が如何にどんな存在なのか…格差で理解してしまう。君も平気で人を殺めることに躊躇いをなくし、間違った戦いを学んでしまう…」
「ホークス……その口振じゃと、お主…何か知っておるのじゃな？」
あれだけヘラヘラしてたあのホークスが、感情を殺し、冷徹で残酷

な眼差しを兵隊達に向ける。ホークスはＮｏ．３であると同時に、謎が深い。本名は公表するかしないかは、個人のプライバシーも考慮してある為、明かされてないのは勿論だとして、インタビューで取材を受けても多くを語っていない。トーク力が少ない、またはメディアを嫌うという意味ではなく、あしらわれてるような感じだ。
「ホークス、もし許可が有れば話して欲しい。情報共有、敵との備えに脅威を打破する為の予防と最善策、このような輩が集団組織で行動してるのなら、危険が孕んでるのは確かだ。俺たちの防衛のためにも、市民の為にも、どうか教えてくれないか？」
常闇の言ってる言葉は尤もだ。
危険な敵や噂になってる地区は、チームで情報を共有するのがベストである。
其れは正しい…だが。
「ツクヨミ君の言ってるのは理解できるし正解だね、けど…今回ばかりコイツらだけはダメだ。もし最悪、コイツらと関わることがあるのなら、即インターンは中止にする」
「なっ…」
「仮に知ったとするとして…君たちはこの二人組を倒したとして、それでも下っ端の構成員……それ以上の戦闘員がウジャウジャといる。君たちは学生であって、知らないことも沢山ある――それは仕方ない。でもね、知らないことが良いこともあるんだよ」
ホークスは淡々と言葉を紡ぐ。
「もし事実を知った時、ツクヨミくんに芦屋ちゃん――これは、胸糞が悪くなる。ただただ後味が悪く、吐き気を催し、救いなんて結末さえ存在せず、生きてる世界観が狂い、目を閉ざし耳を塞ぎ、立ち止まりたくなる…そんな、残酷な光景を目にしてしまう。ツクヨミくんはきっと永遠にヒーローになれず、其れどころか自主退学し、芦屋ちゃんはもう平和な学園生活さえ送れなくなる…大好きな信仰とか、それさえ自分から破り捨ててしまう…そんな、在ってはならない犯罪の歴史と事実が、コイツらにはある…」
ホークスが初めて見せる、怒りに近い言葉に、二人は固唾を飲む。

それを、あのホークスがそれを言ってしまう程なのだ。踏み入れてないけない禁忌の前に立っているかのように、怒りに触れる手前の神様が、最後に忠告をしているかのように。

「何より――君たちは…自分たち自身を、許せなくなってしまう」

含みのある言葉は、理解できなかった。

これは、大人でも踏み入ってはいけない、未知と狂気、殺意と血みどろな景色しか広がっていない。

「っと、なんか辛気臭い話しちゃったね！取り敢えずツクヨミ君と芦屋ちゃんはサイドキック達呼んだから一緒に事務所まで戻ってくれるかな？それと事務所に戻ったら明日の調査とか色々あるからさ」

その後はニカッとしたヘラヘラしてるいつもの表情に戻っていた。常闇と芦屋はそれを確認すれば、納得してはいないものの頷く。機密事項が多く、下手すれば学生が相手するべきものじゃないと悟ったのだろう。

「コイツらは後で警察に突き出すからさ、後処理はお兄さんに任せて、二人は深い友情とか深めておいでよ。あっ、デートとか組み立てちゃう？」

「ぶほっ！」

「ブッ!!きゅ、急に何を戯けたコトを抜かすんじゃこの阿呆は!!!」

「ジョーダン♪今日は事務所で待機しといて。俺もやること終わったら戻るから」

恋愛やらデートとやらのジャンルに免疫が低い二人は赤面して吹き出してしまう。芦屋に至っては激怒しながら怒声を上げる始末だ。先ほど、重い空気にしてしまった負い目を感じていたのだろう。ホークスは冗談で二人の肩の荷を下ろすように濁す。

「…まあ、そこまで言うのなら一旦戻ろう芦屋。師の言葉に従うのも、俺たちの――」

「ま、まさか本当にで、でで、デートを組むのか!!?」

「違うそうじゃない――芦屋落ち着け、一旦深呼吸しろ」

完全に誤解を招いたコミュニケーション。黒影はケラケラ笑い、芦屋と常闇の会話のキャッチボールにブレが生じた。

常闇と芦屋がプロヒーローのサイドキックと一緒に事務所へ戻る後ろ姿を見届けるのを確認してから、ホークスは改めて気絶した二人組に向き直る。

「なぁ、アンタら――誰の指図で、何の目的で此処へ来た？」

気絶してるであろう二人組に、声を投げる。

「…いや、今度こそ気絶してる。二人共重症…治療を受けたとしても脱獄を図るだろな……それに、盗聴器でも忍び込ませてるんだろ？だから、ツクヨミと芦屋ちゃんとの戦闘でも、連携をとることなく……『喋る権利』さえないってことか…？」

マスク自体が盗聴器となっており、いつでも自爆が可能なように使い捨てとして情報収集を駆け出された、特攻隊――『D―スクワッド』。それぞれ分隊が隔たれており、全員が自爆型という訳ではないが、彼らは国をも覆すテロリストであり、目的は不明。

ただ言えることは、Dスクワッドは現実でも公表されておらず、知られてしまえば取り返しが付かず、存在ごと狙われてしまう。

だからツクヨミと芦屋をこれ以上、居座って欲しくなかった。

「多方、子供を誘拐して、戦争の兵隊に育てる為の誘拐と情報収集を備えた輩なんだろうが……間違いなくタルタロス行きだ。だが悪く思わないでくれ、運が悪かった…そう思ってくれ。そして金輪際此処に近づくな――これを聞いてるアンタに言ってるんだよ『現行犯』、俺達は、アンタに関わるつもりは毛頭ない。余計な火が大きく回らないように、手打ちにしよう」

盗聴器を敢えて利用した、ホークスなりのメッセージ。

盗聴器を通した主は、何を思うのだろう。もしこれに問題があれば

自爆をされるが……時間が経っても作動しない。
「…作動しない、ってことは…了承したと受け取った。文字通りタルタロスに送る……」

本当に盗聴器がないのか、其れとも自爆機能なんてないものなのかは不明…あくまでホークス自体のもしもの可能性。
だがホークスがそんなことをするのは、エゲつない行為を意図も容易く行えるテロリスト集団なのだから。
この後は警察に連行され、タルタロスへと直行で送還される二人組。ガスマスクを外さなかったのも警察や付き添いのヒーローにも伝えてはいる。後の処理は専門家が行ってくれるだろう。
「Dースクワッド……今まで姿を隠してた国家テロリスト組織がなぜ此処に?……何だか、胸騒ぎがするな」
ホークスはポケットに入ってたブラックの缶コーヒーの蓋を開け、喉を潤していく。口の中に広がる苦い味が広がる。最悪、首を落として…なんて、殺す手段も考えてはいたが、それは辞めておいた。

殺してしまえば、宣戦布告と看做され、ホークスを始めた常闇踏陰、芦屋、サイドキックや事務所…いや、此処に住んでる地区の者達まで巻き添えを喰らってしまう。
何より噂でしか聞いたことがないのだが、Dースクワッドには手練れの選抜メンバーが存在しているらしい。数は四人…一人はタナトスに送られたと聞いた。
「……俺も、アイツらと変わらんのかね」
空を見上げ、苦い味を噛み締めながら、孤独にそう呟いた。

裏ストーリー　一章
1話「絶望の世界」

この世界は絶望で彩られている。
平等などない、差別で、暴力で、場合によっては人が人を殺すことさえ厭わない。小さな希望の芽も、強大な力の前では意図も容易く摘み取られるのだから、この世界は私欲塗れな世界なんだなと、考える程に実感する。
これは、齢四歳にして知った――世界の現実。

親のいない私からすれば、この世界に生きる希望すら見つからない。
小さい子供にとって親が全ての現実の中、頼れる人間がいない程、酷な物は無い。
両親が亡くなったのは今から約１０年前になるだろうか、事故のショックで詳細は覚えていないが、大人が言うには事故で死亡したと聞く。
まぁ、とは言っても記憶が曖昧だし、悲しみはしなかったが、それでも肉親である実の親がいなくなるのは、複雑な気分だ。
幼少期の頃など、今となっては記憶が曖昧だが、人付き合いと言った人間関係を築くのは得意では無かったことだけは、ハッキリとしている。
それもそうだ、友達作りや他人とのコミュニケーションなど、無知な自分からしてどう接すれば良いか解らないからだ。
暴飲暴食に浸る父親を前に、毎日怯えながら相手のご機嫌を伺う性格だったので、他人と関わろうにも癖が付いてしまったのだろう。
こう言った人間を浮かれてるのか、或いは無愛想と呼ぶのか、他人から見て私の存在はあんまり良い物では無かったのかもしれない。
いつも人の輪に入れず、孤独の中で生きる自分は――置いてけぼり

の人形のようだった。
外の世界は、平穏に暮らしてる人々がいるのに、私が生きてる世界だけは、暗い灰色のような人生だ。
とても、生への執着とか、命の在り方とか、自分が人間としての価値が一切見出せないでいる。

親もいない、友達もいない、頼る者もいない、生きる喜びもない自分が大袈裟すぎるって？
それは…普通の生活を送っていれば、つまらなくとも死にたくはないって軽いレベルで人生を歩めば良い。この先、〝いつか〟楽しいことが起きるんだから。
でも、ここでは生きる希望（ヒカリ）すら届かない、血生臭い絶望（ヤミ）の世界――そんな甘ったれた感情さえ、私達に赦してはくれない。

「おい、そっちは起きてるか？」

コンコン、と石で出来た壁の向こうからノックの音がする。
不気味なほどに薄暗く、鉄の匂いが僅かに充満する部屋に、男の声が聞こえる。
「ああ、志久万さん…おはよう、光里ちゃんも起きてるのかしら？」
「起きてるよー！」
「静かにしろッ、たく…幾らお前のようなチビッ子だからってな、こんな場所で大声出したら他の奴らに迷惑かけちまうだろ？タダでさえ此処は生き難い…」
「うっ…そりゃあそうだけど…って、チビっ子じゃないよ！私にはね、光里優良って名前があるんだから！」
隣からは、落ち着いた大人の声と、活発な女の子の声が聞こえる。どうやら今日も平常運転、特に体調や具合の悪い様子も見受けなく、問題は無いようだ。
静かな大人びた声が志久万さん、そして明るい女の子が光里優良――この二人は私よりも後からここはやって来た人間だ。此処での生

活は窮屈で、暗くて殺伐とはしているけど、協力し合えば案外、命を保つこと位は出来そうだ。
「そっちは元気そうね…私は今、起きたところ…守も無事よ…」
「そっかぁ…守くん、頑丈だけど、その分帰ってきた時の姿に身が持たないよね……」
「本当に…守には、申し訳ないって思ってるし…それに、感謝してもしきれないわ……」
「アイツ、小せえ癖に根性だけは一丁前だよな…悪くはねえよ、子供なのによ…まっ、後から入った俺が言うのもアレか」
守はぐっすりと眠っている。昨日は体力も精神も削られてて、疲労が蓄積して直ぐに寝込んでしまった。私も昨日のは酷かったけど、守よりもずっとマシの方だ。
私は寝顔の守の髪を撫でながら、一声かける。
「守、ホラ…起きて?もう時間だよ」
優しい声とは裏腹に、もっと寝てて安らいで欲しいという感情を隠しながら、彼の頭を撫でる。
頬に触れ、何度か声をかけると、瞑っていた瞼に瞳が見えた。
「ん…あ、勇希…?」
「おはよう、と言っても…最悪なお目覚め、だけれどもね」
私は彼の目の前でクスッと笑う素ぶりを見せてみた。こんな泥のような掃き溜めな世界だろうと、せめて彼の前だけでは笑顔で、明るみに接している。
これは、彼だけにしか見せないものだ。
なんたって、こんな残酷で無慈悲な世界の中、灰色な人生の中でも彼だけが、私の希望なのだから――
「あ、あ～…もう、朝なのか…」
寝ぼけた顔で、少年は気怠い声を発する。
そう、今日も最悪な一日が訪れた――寝ても覚めても、ここは絶望で彩られた世界。
守が起きた後、ツカツカと革靴が音を立てるのが聞こえる。
隣の部屋で、一つの足音が止み、もう一つの足音は私達の部屋に止

まる。

「おはよう諸君、今日も素晴らしい朝だ――さぁ、起きろ」

顔をマスクで隠した構成員が、荒げた声で扉を開ける。

大人は私たちに首と手足に鎖を繋げる、反抗してもムダ…私達に力があろうと無かろうと、歯向かう事は許されない――

「今日も作業は同じだ、しっかり働けゴミ供」

奴隷(私達)は今日も――道具としての一日を迎えるのだった

2話「これが日常」

事の始まりは中国軽慶市、発光する赤子が生まれたという奇妙なニュースが始まりの一つだった。
医者や科学者ですら解明される事なく、それ以降は各地で超常現象は発見され、原因も判明しないまま超常は日常へと変わり、架空は現実へと流れが変わる。
世界人口の約8割が何らかの特異体質を持つ超人社会。多くの者が漫画やアニメで言う空想の力や非現実的な能力を、『個性』と呼ぶ――
そんな混乱渦巻く世の中で、誰もが1度は空想し、夢見て憧れた1つの職業が、脚光を浴びている。
その名も――〝ヒーロー〟
弱きを救け、強きを挫く、悪と戦う正義の味方。庶民と平和を守る、誰もが知るであろう職業。
その対となるのが敵、力を悪事の為、私欲を満たす為、法律を破る輩は、そう呼ばれている。簡潔に言えば犯罪者、と言った方がイメージが付き易いのだろうか？
この世界は言わば、能力を持つ人間が普通に暮らしている、と言った方が分かり易いだろう。
「よしッ、特に異常はないな。
なら今日も平常運転、しっかり働けよゴミ供。ここじゃ外とは違ってお前らに人権なんて無えんだからなッ」
朝を迎え、起床すると最初に始まるのは点検だ。
また体調が悪くとも余程の重症がなければ休むことは許されないのだが、いつも慣れてるので気分は特にどうってことはない。

組織の従業員は、クルッと背中を見せて、そのままどこ吹く風か、作業に戻っていく。
「チッ、クソッたれが…あのまま四肢を切り裂いてやろうかってんだ…」
従業員の後ろ姿に愚痴を零すのは志久万。
彼の個性は『羆』――大柄な体躯に、熊のような風貌はいつ見ても悍ましくも、凶悪な猛獣を連想させてしまう。
特に如何なる猛獣をも殴り殺す豪腕と、伸びる銀色の爪は危険だろうというのが直感で伝わる。
因みにこの男、元はワイルドヴィランズの戦闘員で、キュレーターと呼ばれるボスの仲間だったそうだ。今は組織壊滅として逃亡したとのことで、運悪くこの闇組織に捕まってしまったらしい。
「ダメだよクマさんは優しいんだから、そんなこと言っちゃ！…それに、聞かれてたりしたら何されるか解らないし…」
愚痴を垂らす志久万に優しく声をかけるのは光里優良。
彼女の個性は…自分で言うからには『ヒール』らしい。何でも医者には見せて貰えず、個性登録による診断は受けてないため、名前が無いとの事から、志久万さんが付けたそうだ。
掌を発光させ、光の粒子みたいな物を放出させることで対象の傷を回復させてくれる、優しい能力…いや、個性だ。
小さいけれども、優しくも明るく振る舞う彼女を一言で表すのなら〝天使〟だろう。こんな血泥のような掃き溜めの世界でも、彼女の存在が、周りの人間を明るく照らしてくれる、言わば太陽のような存在だ。傍にいるだけで、つい自分も笑顔にさせられるのは、彼女の長所だろう。
「良いんだよ、お前だってイラつくだろ？あんな雑魚のような三下に良いように使われるのは。それに、何かされるにしろ、お前の個性で治してくれるじゃねーか」
「でもでも、クマさんが傷付くのは嫌なの！そりゃあ、私の個性なら、なんとかなるけど…」
彼女は小さいのに、こんな心すら失うような絶望の世界にいるの

に、希望を失わずにいるのは、きっと根が優しいからだろう。志久万さんが敵という犯罪のレッテルを貼っててもなお、明るみに接するのだから、こう言うのを無差別しない平等主義者と言うのだろうか、又は単に純粋無垢な単純な女の子なのだろうか。どちらにせよ、こんな監獄のような囚われの世界では、法も人権も、悪意も善意も関係ない。

そう言った意味では、自分たちは平等に暮らせてるのだろうが、こんな平等は願い下げだ。

「志久万さん、ストレスが溜まるのは解るけど、落ち着きましょう。それに優良ちゃんだって無理をしてるんだもの、個性に頼ってちゃダメ。聞くところ個性という能力は身体能力のウチ一つなのでしょう？」

「へぇへぇ、解ってるさんなこたぁ。ちょっとしたお喋りだ。俺だって別に好き好んで痛い思いしたい訳じゃあねえ、ただ鬱憤ばらしはしてえけどな！」

志久万さん。初めて来た時と比べ、今では表情が穏やかで、荒んでた心が綺麗に澄まされたようだ。前までは「俺に関わるんじゃねえぞ」なんて言ってたのが嘘みたいに。

ただ、粗暴な性格なのは相変わらずの様子で、荒っぽい口調は抜けていない。

「それに、可能性を捨てなきゃ幾らでも希望はある――脱獄するんだろ？だったら僕もやれることは全力でやり通すつもりだよ」

守の言葉に、皆の表情が明るみになる。

そうだ…まだ、終わった訳じゃない――脱獄するチャンスを探り、こんな胸糞悪い牢獄から出るんだ。

小さな光が、自分達の心の中に灯火が宿る。私たちはそう言い合うと、「じゃあまた」と言い残し、各々が別々の作業に入る。

私たちが何故、こんな囚人紛いなことをさせられてるのか、なぜ収監されてるのか…別に私や守、光里は志久万とは違って前科持ちではない。特に目立った騒動も犯してなければ、元はどうしようもなくつまらない人間…というのが私だ。

守は私と同学年で、小学校の頃、周りから受けてた虐めを守が助けてくれたことから、友達との繋がりを持てたのだ。其れは今でも私の心の支えとなってくれている。
灰色の人生…とは自分で豪語していたが、守がいなければ、本当に生きていても何の価値もない人間だと思い込んでたし、生きてても何の愉悦も感じなかったのだから、あの頃は自殺する人間の気持ちも同感さえした。

「でも、守がいるから…私はッ――」

〝生きたい〟そう、思えるようになった。
大袈裟だと思うけれど、守と出会う前の私は、生きるという事に関して無関心だった。趣味もない、友達もいない、家族もいない、ずっと一人の世界はまるで檻に閉じ込められた小鳥のように。
ここに収監されてからもそうだ。
遊び半分で揶揄って来る従業員を相手に臆する事なく、守は私を庇ってくれる。体を張って「気に入らないなら俺を殴れよ」なんて、大人でもない限り同年齢である子供が言えるとも思えない。少なくとも、自分だったら止める事はできても、盾になることは出来ないだろう。
その分私は痛い想いはしなくても済むのだが、代わりに守が酷い仕打ちに合ってるのをみると、心がズタズタに引き裂かれるように痛い。感謝はしてる。しかし、相手に逆らえないという抑制と、自身の非力さに、自分の醜さを呪いたくなってしまうのが、日常と化している。
守は「気にするなよ！自分から行っちまってるし」とは言っているが、正直見てて耐えないというのは確かだ。
「あっ、勇希ちゃんおはよう♪」
自分達の作業に入ると、不意に声が聞こえた。
「ああ、おはよう空ちゃん、それに冷奈ちゃん」
声を掛けたのが風立空、そして隣にいる物静かで優しい子が息吹冷

奈、この二人はちょっとした仲があり、三ヶ月前からここに収監された小学六年生の子達だ。
　年齢的には１６歳である私の方が歳上なので、入ってきた新人の子達の面倒を見ることが最近多くなったことから、友達になった。
「どう？ここの生活は慣れた？とは言っても、慣れろって言った方が無理があるけどね」
「うぅ～…全然…毎日が嫌になる、でも…その分勇希ちゃんに逢えるから、ちょっと楽しみだったり」
「うん……私…も、だよ……」
　天真爛漫で、どこかおとぼけた空とは反対に、物静かでマイペースな冷奈はゆっくりと頷く。
　風立空、個性は『風起こし』。個性を発動することで風を引き起こす、何処にでもいそうな個性だ。
　息吹冷奈、個性は『冷気』。息を吸って吐くことで、冷たい息を吹くことが出来る個性は、特に強力ではなく、精々扇風機上、冷房未満の涼しさで、大して威力は無い。相手を氷漬けと言った妖怪の話に出て来る雪女とは違う。
「でも、男子たちよりも私達の方がまだマシよ…大人は武器製作、男子は血を流す作業、私たちは…妖魔に体を舐められるだけなんだから…」
　私達の作業にはそれぞれ役目がある。
　それは、この組織――【忍商会】が定めた奴隷たちによる強制労働作業。忍商会…って言ってもパッとみあんまりハッキリとしないだろうが、私達はこの組織に攫われ虐待紛いの労働を強いられている。
　忍、と名付けるからには本で読んだ架空の存在と何かしらの関係があるのだろうか？という疑問はあるが、同じ囚人の人達に聞いても「知らない」の一言なので、恐らく知らされてはいないのだろう。
　それか、知られてはマズイことでもあるのか？どちらにせよ今のところは脱獄の計画に関係性は低そうなものだ。
　考え事をしながら、先ず最初は従業員達の指示通り、雑用を任せられる。特にこれは言われたことをやるだけなので、大した労働は必要

ないのだが…
「ガァァァァぁぁぁぁぁぁぁーーーーーッッ!!!」
「やめてくれぇ！痛い！い゛だい゛いだい゛!!!」
「あッあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あァァァあぁぁぁぁ!!!!」
「あばががががばあ゛あ゛あああァあばぎがぁばばあああーー!!!」
男子達の鋭い絶叫が、作業部屋に行き届く。
涙声、喚き声、絶望の声、それらの金切声はいつ聞いても心がザワつき始め、つい耳を塞いでしまう。
朝、夕方はいつも、男子達が拷問を受ける時間帯となっている。守からの話によると「妖魔と従業員が、殺さない力量で痛ぶる」らしく、拷問器具で声が枯れる程に血を流させているらしい。
何でそんなことを態々するのか、理解に悩み苦しむが、そもそもこの組織の人間は大抵イカれ狂ってるので、理解は出来なくても必然だろう。
「今日も、また始まった…男子達の悲鳴……」
空の声に「そう、だね…」と、心の痛みを隠すように返事をする。
因みに男子達だけでは流石に無理があるらしく、時折女性からも補充として拷問を受けることもしばしば…
大人なんかは武器製作と成果次第で拷問を受けるかどうかが決まると、志久万が教えてくれた。
私達のような子供とは違い、大人は体力もチカラもあるので、利用されやすいのだろうが、大人からすればこういう時こそ子供に戻れたらと切なく思う者も少なくない。
「でも……殺されたり…は、しない…よね？」
「恐らくは…多分。普通に従ってれば、だけどね」
怖がる冷奈に、私は頭を撫でてあげた。
ふさふさな髪の毛の感触が手に伝わり、相手の恐怖心を和らいであげる。
基本、私達は奴隷ではあるが、長持ちして利用したいのか、反逆を除いて殺処分されることは殆ど無い。
あったとしても、怪我や病気による長期間の休みで使い物にならな

いと判断された者に限るだろう。そもそもここではろくなモンすら食べれないので、体が衰弱してしまうのは仕方ないだろう。
「さっ、頑張りましょう。私達もこれ以上無駄話してると従業員に怒られちゃうわ。それに、私達の拷問は昼から…」

そう、女子達の悪夢はここから始まる。
男子達の悲鳴が止み終わると、雑用と供に作業は終了する。その後は食堂と呼ばれる大きく広い部屋で各自は食料を確保しなければならない。
ここでは老若男女問わず、囚人の全員が集まり食事をするのが決まりだ。どうして拷問を終えた後の朝食か、だって？そこは私にも分からないが、何か理由があるのではないだろうか？
そもそも、この拷問そのものに何の意味が有るのかは不明なのだが…
「うぇ…マズ……」
食堂の席の隣で、舌を出しながら本音を漏らしたのは守。食堂や休憩の時はこうしていつも守と傍で時を過ごしている。
食堂なので、今は光里や志久万も前の席で食事を口に運んでいる。
「だよなぁ、せめて飯くらいは満足に食いてえ」
「志久万さん…言っちゃ悪いけど、貴方が刑務所に連れてかれた後の食事も同じ事になってたと思うの」
「ああそうだな、俺は運良く逃げ果せたさ…まっ、その後がこんなザマだがな。けどな、刑務所ならせめてマシなもんくらいは食えるさ。
ここは異常過ぎる、見てみろ？この汚れたようなパンとスープが今日の朝飯だぜ？」
美味しくなさそうなパン、水で薄めたスープは、とても食料とは呼び難いものだ。パンを咀嚼し、冷たいスープと供に食物を喉に通す。そもそも、こんな物を朝食と呼んでも良いものなのか、疑わしく思えて仕方がない。
因みに興味本位で組織の従業員の食事を覗き込んだら、大層なご馳走を美味しそうに平らげてたのは脳裏に焼き付いている。

「昨日は…白米と水を合わせたドロドロのヤツだったから、まあまだ…いや、どっちも変わらないなコレ」
　こう言うのをお雑煮とも呼ぶんだろうが、そう呼べる物でも無かったし、毎日の食事は不味い上に自分たちにとっては愉しむ筈が、ただの空腹を殺す作業と化している。
「あっ、そうだ守くんちょっと待っててね」
　ヒョコッと小さな体で椅子から降りると、光里は守に近付き怪我の治療をする。優しい光が、傷口を覆い照らし、段々と傷が塞がっていく。
「あっ、有難う…」
「えへへ～♪どういたまして！」
「いたしまして、ね。志久万さんの怪我は治したの？」
「うん！本当は皆んなの分まで治療してあげたいけど、流石に出来ないかなぁ」
　そりゃあそうだ。
　光里の個性は確かに救助向けだし、応急処置には持ってこいの人材だ。しかし、その力は必ずしも無限とは言えない。光里だって人間だし、況してや小さい子だ（年齢を聞いたところ、同じ歳という事に大きく驚いたが）。そんな子に全員を治せと言った方が無理があるし、これは馴染み深い仲間だからこそ、光里はせめて二人だけでもと治癒してくれるのだろう。
「無理もないわ、私たちの場合は昼から…」
「あの気色悪い拷問か。あの妖魔ッつー意味不明なバケモンも謎だよなぁ。まー、こんな世代だ、何が起こったって可笑しくはねえが…」
「あんな化け物、見たことも聞いたこともない…そもそも、何で従業員達を襲わないのかしら？この前、脱走を図ろうとした人を殺してたし、凶暴そうな生き物が指示を受けてるのも謎よね。大体言葉は理解してるのに、一言も喋らないし…」
「勇希はよく考えてるなぁ、俺はもうずっと当たり前のように認識してたよ」
「守は昔から勉強が苦手だったもんね、難しいことや観察が不得意と

か…」
「いやサクっとバカにしてない??」
「私は勉強、小学校でしか受けたことないなぁ」
「優良ちゃん、私達がここに収監される前からずっと一人でいたもんね…」
あの時、ここに収監される時に隣の部屋の牢屋で小さな子が一人、全身キズでボロボロになってて、閉じこもるように縮こまってたのを見たときは軽く怒りで血が昇ったなぁと、昔の感覚を思い返す。
自分よりもあんな小さな子が、一人で寂しく牢屋の中で泣いてるのを見て、思わず従業員を殴り飛ばそうと考えが過った程に。
「うん、でも私何も悪いことされてないのに…何でだろ?」
「……」
優良の虚しい言葉に、志久万は険しい顔立ちで物事を考える。
まるで何かを見据えるような、それとも考察に浸ってるのか、真相は分からないが、思い当たる節があるらしい。
「そろそろ朝食の時間が終わりそうだな…残すのも勿体ないし、腹に入れとくだけ入れてまた作業に戻らなきゃ」
食事は不味くて食えたものではないけれども、こんな殺伐とした中でも四人の会話はどこか心が安らぐ。
今はどんなに打ちのめされても、希望を捨てなければ必ず脱獄できる。問題は脱獄の計画と、それをいつ実行に移すかがキーとなる。
「またキズが酷くなったら言ってね?私が治してあげる!」
光里は「えっへん!」と自慢げに頼ってほしいと言う面を浮かばせる。本当にこの子は、可愛くてどうしようもない。
ピーチ色の綿毛のような柔らかい髪を撫でながら、「光里ちゃんも無理しちゃダメだからね?」と優しく一言を添える勇希。
朝食を食べ終え、作業を終えたらまた昼食。
その後は女子が味わう屈辱と羞恥な悪夢が始まる。

3話「囚人と拷問」

首と手足を鎖で繋げられ、縛られる少女達は、まるで処刑の執行でも受けるかのような眺めだ。
ある少女は涙を流しながら吊るされ、ある女性は心が壊れた人形のような無表情を浮かべ、ある少女は毎日受ける拷問に精神を追い詰められ、それはそれはもう女性からすれば悪夢だ。
「よし、全員いるな。こっちも問題なしッと…」
人数を数え終え、問題が無いと知るや否やで仲間と連絡を取る従業員。私はそれを横目で睨みながら、奥歯を噛み締め、覚悟を決める。
昼に受ける拷問は、ある意味男子や大人よりも楽で、ある意味一番辛い。
少なくとも、健全で正気を保ってる勇希からすれば、最大の悪夢と呼んでも過言では無いだろう。
数分後になると、拷問を行う大広間のシャッターが不意に開き、その音を感知し敏感に反応する数人の少女が部屋に響く。
暗闇に染まる奥の部屋から、ノロノロと現れるのは、明らかにこの世のモノとは思えぬ異形の姿をした化物。
これが、妖魔と呼ばれるバケモノ達だ。
妖魔の姿を確認した少女達は、悲鳴を上げる。
泣きながら、体を動かそうにも手足と首が縛られてるから出来ないし、逃げることも抵抗することさえ許されない。
私もかれこれ何年もこの拷問を受けてはいるが、いつまで経ってもこの意味不明な拷問は慣れない。妖魔の悍ましい姿には時折、恐怖心を煽られるが、「せめてこんなバケモノ達に負けてたまるか」と、心の中で喝を入れて毎日耐えているのだ。
でなければ、本当に頭が可笑しくなってしまうし、逆にこれに慣れろと言われた方がずっと無理がある。

「ンジョル、ギギニィニ、ンベロォ……」
「ギ、チチ、アッアア…ァァァァァァ!!」
「シャ〜……キチキチ、グビャァ…」
ピラルクーの魚の形をしたり妖魔は、全身から人間の手足を生やし、吊るされた女性たちを見定めるする。
巨大な昆虫蝿は、唾液をダラダラと垂らしながら、歓喜の声を上げる妖魔。
６つの目を持つ蛇は、まるで巨大アナコンダのようだ。カッターのように尖ったトサカが生えており、口の中には老婆の顔が溶けてるように剥き出され映された、悍ましい妖魔。
次々と姿を現わす妖魔は、手当たり次第に女性達を見定めては、貪るように塗れた血を舐める。
滑り気のある舌が、体のあちこちを探るように舐め回し、奇声を上げ喜びひ浸る。まるで化物と言うよりも得体の知れない変態だ。
この拷問は他のと比べて基本的にダメージは無いが、それはあくまで物理的な問題。女性にとってコレは、精神的な疲労とダメージが残り、鑢で削られるような不快感が蓄積するだけだ。
「ひゃぁッ…んくっ、くすぐ…ったい」
数匹の妖魔が私を囲み、舌を肌に這わせて舐めていく。
これが可愛い猫や犬なら話は別だが、誰が好きでこんな奇形の姿をした妖魔にこんな事をされなければならないのか。
だが、この拷問では何も人を取って食おうとする訳ではないので、命に関わらなければ、他の囚人の男子たちでは「あの拷問を受けたい」なんて密かに言ってる人間も少なくはないが、私にとっては良いものではないと、無い胸を張って言える。
（ダメ…正気を保た……なきゃ、こんなの、どうってこと……！）
眼をキュッと瞑りながら、私は妖魔に受ける羞恥と屈辱を味わっては見事に耐え抜く。弱気を見せず、自分は大丈夫なんだと言い聞かせ、耐えていく。
妖魔の唾液が体のあちこちに滑るように付着し、ベトベトの不快な感触が脳に刺激を与えていく。本当に、この組織の人間は何がしたく

てこんなことをさせるのだろうか。少なくとも、何かしらの理由があるのは確かだ。こんな悪趣味なことをする為…とも考え難い。
「ああッ、ダメ…そこ、舐め…ちゃ！」
尻と足を貪るように舐める蛇形の妖魔。擽ぐるような、でもって痴漢よりもタチの悪い仕打ちに、もし拘束されてなければ抵抗しているのだろうが、縛られているので動きたくとも自由が効かない。
妖魔はニヘェと薄気味悪い笑顔を浮かべ、満足したらまた別の方向へ女性を選んでは舐めていく。
やはり、いつまで経っても慣れないものだ。いや、本能的が〝慣れるな〟と拒絶反応を引き起こしてるのかもしれないが、この際はどうでも良い。
「はぁ…はぁ……早く、終わらない、かしら……」
まだ始まってから数十分しか経っていないのに、もうやめて欲しいと切実に願う彼女は、息を荒げながら表情を曇らせる。
けど、コレを受けるのは女子だけで良かったかもしれない。
もしもこの拷問で守が居たのなら、顔を合わせ辛いし、そもそも見せたく無いのが本音だ。
（うぅ、気持ち悪い…!!どうして、毎日こんな仕打ちに……）
心の中でどれだけ愚痴を零しても、決して助けてとは言わない。この世界で救けてくれたのは、守だけ。他は誰も信用できない。
空や冷奈、光里も友達と面識が高いと言うだけで、救けて欲しいと思ったことはないし、先ずあの子達は自分よりも年下なのだから、守るのは自分の方だろう。
しかしこの拷問ばかりはどうにもならない。
ただただ、どうすることも叶わず、静かに終焉の刻が来るまで待つしかない。

「拷問の方は順調、穢れた血も随分と溜まりましたし、次の妖魔が大量生産出来ますね。

武器の生産も特に問題点はありません。どうですかね？デー門さん」
資料に目を通しながら、モニター室で一通りの事務作業の報告をする一人の従業員。相手は【忍商会】〝４支部〟筆頭――デー門。この組織とアジト、工場等の管理を担う忍の実力を持つ曲者だ。
「……売り上げはどうだ？」
「戦姫衆を始めた常連のお客様が買い取って下さって、お陰で売り上げはうなぎ上り！いやぁしかし人身売買、臓器売買と言った商売はしなくても宜しいのですか？この位ですと、新しい商法を出しても可笑しくありませんし、魔門様に亜門様も褒めてましたよ？」
「……そうか」
デー門と呼ばれた男は、まるで何の興味もなく言葉を返し、黒く分厚い書物を読む。
サタンやオカルト宗教のような容姿は、一言で言えば不気味、例えるなら魔術師。顔は隠されてるため、目が蒼く見えるだけ。
「コイツらを強制労働させてるのは、別に気まぐれじゃない。簡単に言えば、社会に出ても使えない役立たず――〝ゴミ〟だからだ」
デー門は深い溜息を吐き、本を栞で閉じると、テーブルの上に置かれてる資料を手に持ち目を通す。
「風立空――年齢９歳、元々父親は大きな会社でそつなく働いていたものの、会社が倒産し金の無い人生を歩むことになる。
金の無い事から家を売る羽目になり、惨めな人生を送るコイツは、将来見ても使えんだろう？ゴミ」
「は、はぁ…」
「息吹冷奈――年齢９歳、父と母が多大な借金を背負い、毎日が絶えない家庭内の喧嘩、度が過ぎた暴力、次々と壊れゆく家庭関係に、２億の借金を抱え込んでる。碌な両親じゃない娘が将来役立つ訳がない、コイツもゴミ。
荒田刀気――年齢１５歳、元々マトモな家庭を送ってはいたものの、一年前に両親が交通事故を起こし、親は他界。
金もろくにない、勉学や運動の成績は並以下、社会でも使えなさそ

うなゴミ。
蝶々瑠璃――年齢１６歳、クラス内ではそこそこ人気の誇る女子高生、ただひょんな事柄で彼氏と別れ、自暴自棄に走り、クラス内では虐めを受ける始末となった哀れな女もゴミ。
竹林月見町――年齢３２歳、昔はヒーロー科の生徒として将来はヒーローの役職に就く夢を見るも、無様なことにヒーロー資格の取得に落ち、留年するも合格ならずの使えん奴よ。就職先もほぼ決まらないままノコノコと息を吸うゴミ。
どうだ？コイツらはこの社会で使えるか？使えん役立たずなゴミがこの世に居なくなろうと、誰も悲しまん。だから、厳選して攫ったのだ。　そんな我が悪魔に見えるか？」
ここで常人ならば「お前は魔王だ！」と叫んでいるのだろう。この組織の人間も彼が非常には見えるものの、反論は出来ない。
「どいつもこいつも、使えんゴミ供バッカさ。人殺しや拉致ってのは、被害者にとっては悲しむだろうよ。だが、何の繋がりも人間として誰も悲しんで貰えない人間は、ソイツは死んでるようなもんさ。
居ても居なくても変わらんのなら、ゴミと同価値よ。
良いか？お前も組織の人間としてなら誇りに思え――俺たちが外道と罵られようと、人間としての価値を持ち、生きてることにな」
この組織で強制労働を強いられてる人間は、何も偶然ではない。
デー門自らがデータを通し、攫っても問題のない人間を厳選し奴隷として扱っているのだ。
この拷問を受けてる者は皆、現実に絶望し、未来の無い、生きる意味を失った者達が集まる、社会不適合者の溜まり場なのである。
志久万が何かしら不変だと察したのは、コレに近いだろう。
何よりも、魔門を含めた三人の筆頭とは違い、人身売買で引き取る際の金を支払わずに済むので、この方法が効率が良いのだ。
「そんなゴミが、都合の良いように上手く行くと問われるとそうでもねぇ。だから、長持ちして壊れるまで使うのさ。
在庫は幾らでもいる、今日もしっかり働いてこい」

そういうと、従業員はハッ!と敬礼をして踵を返す。
誰も居なくなった部屋で、優雅にグラスに入ったワインを飲みながら、拷問を受けてる少女達を、さぞ愉快そうに眺めている。
「肉体を痛ぶることで、負の感情と供に流れる血は穢れとなり、凶暴な妖魔を産む。そしてその妖魔を懐柔する為には女性の体で性欲を発散させる。
そうすることで妖魔は大人しくなり、後は我々が教育指導を怠らなければ主人の命令を聞ける殺戮兵器の完成だ」
これらの拷問は全て妖魔の生産に関わっていたものだ。
妖魔の生産方法は簡単。禍々しく負に染まった血を〝穢れた血〟と呼び、それを流し一定量の血を混ぜ合わせることで、妖魔は完成する。
デー門にとっては特に珍しいことでもない。人造人間やクローンだって今じゃ最新型の技術が有ってこそ生産が可能となっている。
構造は妖魔も同じで、特別な研究施設があることで人工妖魔の生産が可能となっている。
材料は穢れの血さえ、一定量で注ぐだけ。
次に問題なのは妖魔を使役する為の教育だ。
先ほど述べたように、穢れの血で産まれた妖魔は凶暴且つ残酷だ。そんな妖魔を指導するには、組織の従業員の力は欠かせない。
妖魔の興奮作用を和らげ、鎮ませるには、女性の肉体が適用している。妖魔には習性があるのか、無抵抗で大人しい女性を見つけると、襲わず肉体を舐めると言った、卑猥な行動を起こす。
かの〝妖魔研究学者〟――ティオ・ディアボリクスが初めて発見した実験だ。
性欲発散によりフラストレーションを解決することで、妖魔は大人しくなり、後は静寂状態の妖魔に従業員の教育を施すことで、懐柔し殺戮兵器として産まれ変わらせる。
これこそ、妖魔の生産方法なのだ。
「ただ、ゴミはゴミでも…使えるヤツはいるがな…例えば、アイツ」
部屋には一人しかいないのに独り言を呟くデー門は、モニター室に

映り、妖魔に舐めまわされてるか弱い少女に視線を移す。
「光里優良――年齢１６歳。ここに収監されたのは６歳、既に１０年間この地獄の生活を送らせてはいるが…
アイツは個性登録の診断を受けて無いとはいえ、能力的には治癒効果を発動させるのは間違いない。
ふふ、回復系のポジションを持つ人間は滅多にいないからな。雄英にはそう言うヤツが一人、ババアがいるが…コイツはデメリット故に、他人に負荷を掛けることなく怪我を治癒させることが出来る。コイツは重宝だ」
光里優里、名前のみが明かされており他は詳細不明。
両親の名前や血統すらも謎に包まれており、本人も知らないと言う。最初は大人に対して隠し事をしてるのかと思っていたのだが、こんな幼気な子が我々に嘘を吐く道理もなければ、調べたところ個性登録すら無いと聞く。
捨て子かは不明だが、何かしらと使えそうなので檻にぶち込んでやっといた。
「志久万も使えるな、いや…コイツには多少の同調はあるさ。なんたってワイルドヴィランズは中々名の上がった敵組織の一員。
上手く使えば我々の利益も上がる…クク、ここじゃあ法律や敵対関係なんて関係ない。犯罪起こす人間は、法やルールに縛られないからこそ、強者は常に自由の身を保つことが出来る」
薄く笑いながらワインを飲み干すと、「ただ…」と声を零す。
「絶恵　勇希――コイツは何者だ？」
絶恵勇希――年齢１６歳。光里優良と同じく家柄の詳細は不明。
何の変哲も無い女性、でもって社会に役立ちそうには無い、凡人だ。
容姿は普通、顔も悪くはなくどちらかと言えば美人には近い。黒いボブカットの髪型に、赤いリボンを付けてるのが特徴的だ。
一見何とも無いようには見えるし、もうかれこれ３年は経つが…
「コイツ、個性診断の資料では個性因子が無いと聞く…」

個性因子。
個性を持つ人間なら誰もが持つ細胞の様な存在だ。肉眼では視認出来ない血肉の細胞を持つことで、人間は個性という能力を発動させる。
また個性因子が無い人間は無個性、と呼ばれてる。これが超人社会が成り立っている大いたる原因だ。
個性因子が在っても、どんな個性を備えてるかは医者ですら解明不能とさえ言われている。
デー門の台詞を切り取れば、無個性の人間という範疇だけで大した害も無いので問題はないのだが…
「守と言うガキの話、本人の話を照らし合わせると…無個性という人間でもないようだが…」
何でも自身の流れる血を利用することが可能だとか。雄英高校に住まう教師に『血操』いう個性を持つ人間がいると聞くが、雰囲気ではそうとも言い難い…
況してや個性因子の無い人間が能力を使えるのだ。
「となると、忍の家系…と考えるのが妥当なのか?」
個性因子の無い人間が能力を使うのならば、忍と考えるのが自然の成り行きだろう。
だがアイツの話を聞くには両親は碌な人間では無かった人間と聞くし…ヤツの名前を照らして見るからには父母供に忍家系では無いそうだ。
流石のデー門も、こんな例外な事実に到達して困惑したそうで、調べてみる価値がある為、特別にヤツだけは殺さない加減で様子見だそうだ。調べたところ、個性因子の無い人間が能力を扱う痕跡は無いそうで、更には忍家系で無い人間が忍術らしい能力を発動したという話も聞いたことがない。
個性診断を再び受けてみれば、突然個性が発現したと断言できるのだが…
「俺のような人間がアイツを病院に連れて個性診断を願うなんて出来るわけがないしな」

そもそも、この組織で奴隷にしてる人間全ては、もうこの世に存在していないようなもの。戸籍は消され、名前は役立たない。どの道無理な話だ。

「今日も何もなければ…良いのだが…」

そう言った後、大事なやり取りを思い出したデー門はこの部屋を後に去っていった。

４話「絶望があれば、救いもある」

昼の拷問を終えた勇希は、精神的なダメージと疲労を残したまま、トボトボとフラつく足取りで牢屋へ戻っていく。
女子達全員が、卑猥と羞恥による屈辱な拷問を終えると、今度は夕方の部として男子達が拷問を受ける番に回る。
夕方の男子達が拷問を受け終わった後は、夕食を取り、就寝へと移り、今日という一日が終わる。コレだけ聞くとあっという間かもしれないが、私達には自由は無いし、ここの大人達からすれば奴隷は利用できる人形なので、用が済んだら放ったらかしなのだ。
「……」
精神的な疲労とダメージが蓄積したまま、覚束ない足取りで牢屋へ戻ると、守が壁際で何かをしていながら待っていてくれた。
「あっ、勇希お帰り…！」
帰ってきた事に気がついた守は、私に笑顔で「お帰り」と言ってくれる。青色で少しギザギザな髪型をした少年の明るい笑顔は、辛くて苦しい想いをした私の心を癒して、助けてくれる。
「うん、ただいま守」
だから、守の笑顔に応えて私も精一杯の明るい笑顔を浮かばせた。例え作り笑いでも、せめて今だけは…と、無茶をする。
「今日の拷問…また一層酷かったみたいだな…大丈夫？何か変なこと、されなかった？」
「うん、大丈夫…今日も舐められただけだから、問題ないよ」
そもそも全身を舐められること自体が変なことなのだが、それ以上の事はされてないので、取り敢えず問題ないとだけは言っておく。
「無茶するようなことが続いたり、嫌だったら代わりに俺が行くからさッ、だから一人で抱え込むなよ？」
「本当に大丈夫よ。それに比べて守の方が……ゴメンね、私が代わり

に行ってあげられなくて…私も、守の代わりになってあげたいのに…」
「いや、俺からすれば勇希が傷付く姿は見たくも無ければ想像だってしたくないし…俺はこう見えて頑丈だからさ！あー、虐めで受けた精神的な丈夫さが、こんな所で役立つなんてなッ、ハハッ！」
「守、そんなこと言わないで!!」
守にとって気遣いの言葉を言ったつもりが、余計に勇希の心を抉るような結果となった。
「貴方は道具じゃないの！小学校の時からそうだったけど…私は今でも充分、守に救われてるの…だから、これ以上無理をしてまで自分を傷つけないで…少しは、私も貴方の支えになりたいの…」
勇希は涙目で、息を切らしながら捲し立てる。守本人も、目を開き面食らった顔立ちだ。
そう、アレは小学校の頃…友達もいなくて、周りの人間と深く関わりの持たない私は、親が親だったのでいつも皆んなの輪から外れて一人で過ごしてきた。
他人と話すのは精々最低限必要な事だけで、深い交えは無かった。
そんな独りぼっちの私には当然、声をかけてくれる人間はいなかったし、異物を見るような視線が凡ゆる方向から突き刺すように向けられていた。
そんな自分はクラスで浮かれてたのか、虐めが始まった。
最初は軽い程度だった。
席に戻ろうとすると、女子から足を使って転ばせたり、男子達からのちょっかいは無視してれば耐えられてたし…
だけど日々を重ねる毎に、その虐めは次々と悪質なモノに染まり、私の心を蝕むように暗闇に包まれていった。
トイレの最中に上からバケツの入った水が流されたのは序の口で、男子達から囲まれては暴力を受けてたし、女子からは態と給食を床に落とされたり…（給食の残りは無かった）。
教師からは「お前に問題があるんじゃないか？」と、返答や問題に困ったものは解決する気は無いし、全部私自身に振り回す。

私にとって他人とは――敵に等しい存在だった。

でも、そんな私にいつも構ってくれたのが、守だから…

どんなに突き放しても、放っておいてよとぶっきら棒な口調で吐き捨てても、頑固で優しくて、私のことを気にかけてくれた。

「勇希…」

「覚えてる？私が小学校で虐めを受けてた時…靴箱の中にシューズが無かった時のこと、私だけ給食が無かったとき、男子達に暴力を受けてた時……全部、守が助けてくれたの…私は、一時も忘れたことなんて無いもの……」

シューズが無かった時は、自分のように必死になって探してくれて、見つけた時は手渡してくれた。

給食の時は私に半分よそってくれた。

男子達の暴力から庇ってくれた。

当初はどうしてこんなつまらない自分にここまで積極的に接してくるのか、不思議でしょうがなかった。

況してや、自分と関わるだけ他の人間から悪質な虐めの被害に遭うだけなのに…

でも、守は諦めなかった。

『僕も一人だから…それに、いつも一人の君が、とても寂しそうに見えたから…』

――だから、もし良ければ…僕と友達になってくれるかな？

その言葉を聞いて、一人になってた自分が馬鹿馬鹿しく思えて……守となら、友達になれるのかな？初めての友達として、心を開いて良いのかな…なんて。

今まで殻に閉じこもって、他人と避けてきた自分を、守が手を差し

伸べてくれたから――自分も変わろうと思えた。
そういう意味では、心を救ってくれた守は私にとってのヒーローで、憧れに近い部類のモノがある。
優しくて、明るくて、時に何処か抜けてて、でも…いつも私の傍に居てくれて……
「この世界は常に少数の人間や異端者が拒絶を受け、排除しようとする世の中なのに、守は私の味方でいてくれたんだもん…
そんな大切な親友が、アイツ等に酷い仕打ちを受けてるのを見て、私、耐えられないの……だからお願い、せめて…私の時だけは、辛いことや苦しいこと、弱音を吐いたりして？」
「…ごめん、俺…自分一人で精一杯で、せめて親友の勇希だけでも守ろうとしてて……余計に、勇希に重い荷背負わせてて…それに、気付かなくて…」
「ううん、良いの。私もその、守がいつも助けてくれるの嬉しいから…
ただ、人間誰だって無茶を通せば限界を迎える…そして限界を迎えて身体が壊れたら、アイツらはきっと…」
今度は守を廃棄処分と見なして殺処分されるだろう。
もしそんな事があったら自分はそれこそ耐えきれない…再びどんよりとした重い暗闇と絶望に支配され、生きる希望（意思）が消えるだろう。
「あー…それも、そうだけど…でも、ここ数年でこの調子でも全く問題ないしさッ、本当に大丈夫だから…な？」
そして問題がこれ。
守は至って普通の人間で、特にどうという訳でも無いのに何故、こんな拷問を何年間か受けても身体が壊れないのか…
拷問の内容は単純且つ残酷、鋸や槍、鋏、鈍器などで身体を甚振らせ血を流させると言ったどんな世代によるか分からない激痛を伴う拷問だ。
治療も大したことはなく、包帯巻いたり、酷い場合は軽い手当で終わる。
「だからこそ、不安なのよ…」
こんな事が何年も続いてるから、いつか身体が壊れやしないかと不

安が高まり募って仕方がないのだ。
何よりも、守はこう言った自己犠牲の精神が強い方だし、無茶をして振舞ってるのではという疑いも持ってしまう。

「おい、何してる」
ふと、牢屋の檻越しから大人の冷徹な声が響いた。
振り返ると従業員が鍵を開けて牢の扉を開け、親指をクイッと合図を送る。
「結城守、出ろ――今日一日最後の拷問だ。他の奴らも準備してる。後はお前だけだ」
「…ッ、申し訳、ございませんでした…今、行きます」
組織の人間には絶対に歯向かってはいけないのが、この監獄で生きる為のルールだ。口調も相手に敬意と感謝、口を慎むことを忘れず、道具として生きる様に調教を受けている。
「守…無理は、しないでね…」
部屋から出て行こうとする守の背中に、優しく言葉を投げる勇希。この言葉が、いつも守の言葉を癒してくれる。
「有難う、勇希…」
だから、精一杯の笑顔を作って、勇希の心を覆う闇を、明るく照らす。不安で押しつぶされない様に。

夕方の拷問はいつにも増して騒めきが酷い。
朝の拷問で、癒えていない傷が残っているので、その傷口に鑢で擦られるような、そんな感覚に身を焦がしながら今日も最期の拷問を耐え抜いて行く。
「よし、次はこれで行こう」
「あ〝　あ〝　あ〝　あ〝　あぁぁあぁがぁあ〝　あ〝　あ〝　あぁぁあぁーーーッッ!?!!」
身体全身に電流を流され、痺れる痛みが体に悲鳴を上げさせる。バ

チバチとした不快な音が、脳内にこびり付くように、強い刺激が送られる。
守は歯を食いしばりながら、この電流の拷問を耐え続け、苦痛にもがき苦しむ。
「これ終わったら次は金属バットで５０回な、その分悲鳴を上げ続けて終わりゃあ今日の拷問は終わらせてやる」
従業員はさぞ愉快そうに拷問を楽しみながら、電流を次第に強くしていく。
これは血を流すだけでなく、悲鳴を上げさせることが主体となっている為、チェーンソーで肉を削ると言ったジェイソン地味た物騒な荒事はしないが、こんなサンドバックにされる行いは既に暴力沙汰以前にリンチだろう。
けど、もし勇希が自分と同じことをされてると考えると、ここに彼女がいなくて良かったと僅かながらの安心は出来る。
「しっかしお前も気持ち悪いよなぁ、あんなつまらねえガキの為に一丁前に正義感を張ってよ。ここじゃあお前ら人間じゃねえんだぜ？下手な動きをしてない以上、俺らもとやかく言うつもりはねえが…」
「……」
「チッ、まただんまりか…まあ、良いだろう」
ここの組織下に支配されてる自分たちは謂わば消耗品の道具として見立てられている。
そんな従業員の手足である消耗品の自分達が、上の許可なく発言するのは禁じられている。なので、この言葉を聞いて少しでも反論さえすれば暴力を受けたり、最悪拷問が長引く可能性だってある。
ザックリ言えば、こういうタチの悪い大人は自分達のような頑丈な子供を虐めて痛ぶるのが趣味なんだ。
人間というのは、この組織下の人間だけでなく幾らでもいる。それが悪意だろうと形や意思が何であろうと…特に理不尽なのが、何の理由も事柄も無く、ただ痛め付けたかったというのが一番だ。そんな人間の思考は理解に到達出来ない。
そう言った意味では、人間や大人というのは末恐ろし生き物であ

る。
（はや……く、この拷問…終わらないかな…精神よりも物理的に一番苦しい…）
女子の精神的な拷問とは違い、血の匂いが充満する拷問は、物理的な痛覚が伴い、毎日が地獄のような生活を送る羽目になっている。
幾ら男子が強いとはいえど、自分はまだ子供…満足な治療も受けれず、道具のように役目を終えれば牢屋に入れられるような後始末。
痛みは我慢できるとは言え、それはあくまで一時的なもの。これを毎日のような酷い拷問を受けては勇希の言う通り体が壊れるのは時間の問題だ。
脱獄――それがこの凄惨な宴から抜け出す希望となるのだろうか、その希望は叶うことが出来るのか。
真相など、未来の自分達など、誰にも解るハズが無い――

街並から外れた誰も使われてない廃工場。
外の空気は乾燥しており、夜はいつになく静かで、不気味だ。況してやこんなボロ臭い工場の前に突っ立っているのだから。
「見張りの従業員も大したことなかったな」
手をパンパンと払う少女は、下等生物を見下ろすよう、蔑んだ視線を送る。
灰色の学生服に黒いスニーカー、尻まで垂れ下がった銀髪の少女は、目の下に隈がある。中学生にしては中々な美少女だ。
「これは…恐らくこの工場内の鍵でしょうか？」
同じく、見張りの人間の懐から盗み取った鍵を見つめる少女もこの女性と同期だろう。
表情は穏やかで、常に妖艶な笑みを絶やさないその姿は、他の人を虜にしてしまいそうだ。それ程に華麗で妖美な美少女なのだと、見れば納得するだろう。

「素晴らしいですよ『月光』さん――次世代の希望に相応しい教育をなされてる様で…中等部にも関わらず、貴女達二人は目を張る成長性が御座います。カグラ四天王のマナさんや、貴女達を救い出した不雪帰さんには感謝しか御座いません」
「ラ、ラファエル様!そんな…わ、私なんて…えへへ…♡」
月光を褒め称えるのは『ラファエル』と呼ばれる忍名を持つ、ユースティア女学園の聖従。善忍として、半蔵学院や死塾月閃女学館とは違う方向性の女学園。
三年前から創立された学園であり、元々は違う自治区の学園に身を置いて居たらしい。それでも人数による規模はかなりの少数だ。
淡い金髪に、聖堂を連想させる純白で高級生地を生かした制服…弓を用いて戦う姿は、正に光の天使だ。
彼女達中等部所属の身を置いてある二人としては、身の上な立場だけでなく、何から何まで尊敬の念を抱いている。特に月光は大変彼女に気に入られており、将来ユースティア女学園の入学を偉く推薦している。
「して、ラファエル様…如何いたしましょうか?」
「取り敢えず工場内はフェイント…地下がゴミど…ごほん、忍商会の巣窟となってる筈です。木を隠すには森…見慣れた建物こそ、人を隠すのに適しやすく、それでいて隠れ蓑として偽装を徹底にすれば、調査に足が付きません。小さい工場に人が収監されてる訳がない。そ空間やペースを操る忍術や個性を持つ人間がいるなら話は別ですが…
蟻のような巣穴になっているのであれば、少々骨は折れますが、手当たり次第探る他ありません。どの道、囚人の皆様を救うのが今回私達に与えられた緊急任務ですから」
(…今、ゴミって言ったな)
カグラ四天王のマナにも引けを取らない腹黒さを、閃光は一瞬だけ垣間見ながら、ユースティアのお嬢様は指揮を取る。ラファエルは基本的に後方支援、指揮を主に活動する者――秘忍の称号を与えられてはいるものの、実力としてはカグラと並べても可笑しくないほどに、

屈指の実力を秘めている。争いごとが好みでない温厚な彼女からして、善忍と悪忍同士のいざこざや、戦争には余り良い思いがないのだろう。
「作戦はどうする？」
「先ず扉を開けて、閃光さんが強行突破で目の前の敵を倒して下さい。肉弾戦は得意でしょうし、早く仕掛ければ貴女の独壇場。遠距離は月光さん、妖魔の相手は全て私にお任せ下さい。貴女達が不帰雪さんの弟子であり、妖魔を認知してるとはいえ、国家の犯罪組織に売買を行う邪悪な外道達…得体の知れないクｚ…失礼。何が起きるか未確定な以上、指揮者の私が責任を負いますから。貴女達が思う存分、自分達の本領を発揮してくれると、連携も取りやすくて効率が良いですから…」
「……」
ダメだ、この人所々本音が漏れている。
いや、正論ではあるのだが…なんかこう、優雅で血の争いなど知らなさそうな世間知らずのお嬢様が、口の汚い言葉を吐こうとするのは、余計に差があってこう…閃光としても引いてしまうし、月光も少しだけ冷や汗をかいている。
「で、ですが！こうしてラファエル様が私達の忍務に協力してくれるのは、心強いですし…カグラに近い、正義を象徴とする貴女様の実力を、側で観て…」
「月光さん…私は貴女に期待を抱いておりますからね♪」
そう言いながら満面な笑みを浮かばせ、肩に手を置く。
彼女は先ほど上述した様に、自身が信頼に於ける相手には、この上ない異常な愛情を差し向けることがある。月光は裁縫、世話焼きが上手な上に、細かい作業や事業をこなしてくれる。何より礼儀や礼節も合間っており、作法や口調、そして月閃の名門である優秀なエリートである彼女が大変気に入ったのだろう。
特に目上の人間が、優秀な人間や努力家、愛嬌のある人間を可愛がるという一面は社会でもよくあることだが、ラファエルはそれとは違った恋愛にも等しい重い何かがある。今の言葉だけで何故か空気

が重くなる。
閃光に対しては然程愛情表現は向けられてはいないものの、優秀な一人の忍学生であると評価を買っている。
「今回の忍務が終われば、是非とも御姉妹一緒にユースティア女学園にいらっしゃり、お茶会を開きましょう。そして今後忍高等学校の進路について、何処へ行けば良いかを徹底的に考え改め…」
「あ、あはは…えっと、有難うございます?」
苦笑を浮かべる月光の心境的には、複雑な気分だろう。
月閃の名門として生まれた彼女にとって、進路としては月閃入学は間違い無いのだろうが、高貴なお嬢様であるラファエルから異常と呼ぶに等しい愛情を向けられ、進路について対談される。
もし父上様や母上様に反対され、それを話そう者なら彼女も全武力と権力を持って対抗するだろう。彼女は本当にそういう人間だ。
嘗て彼女と提携を結んでた企業が、秘密裏で裏切り計画を立てていたことを探り、会社諸共軍事力を駆使してまで崩壊に及ばせるほど、彼女は実力行使を平気で厭わない執行官なのである。
「然し幾ら上官としての役割を担う貴女様がいるとはいえ、囚人達を無傷で地上に救い出す…というのは、ヒーローに近いやり方だな…。
フム、任務に従う以上やらざるを得ないとは言え、いざこうして考えると中々にハードルが高いが…」
「あら?あの閃光が弱音を吐くなんて珍しいわね♪」
「ち、違う!そもそも、囚人達の安全を確保したままこの組織を潰すというのが難しいと言ったまでだ!!」
「では…気を改めて参りましょうか…」
「鬼が出るか、蛇が出るか…」
組織の人間か、妖魔か――大凡の情報は雪不帰が雇った上忍達が動いて調べてくれたので、大体は調べが付いてるし、妖魔の売買行動も尋常ではないと聞く。
潰す機会が出るまではと、組織の情報取得に専念していたが、ようやく此処までの段階に到達したのだ。

「どうか、迷える子羊達に救いの神があらんことを……――」
一陣の風が吹き、綺麗な長髪がたなびく。三人は暗闇の廃工場へと足を踏み入れる。
この先は、生死が問われる命を賭けた闘いだ。安全は保証されないのは、覚悟の上だ。
これでこそ、忍の生業――

拷問を終え、全身に殴打を受けた痕が残る少年――結城守は疲弊が蓄積しており歩くことだけで精一杯の様子だ。
これで今日の拷問は終わり、次は夕食に移る。
空腹が止まず、朝食を終えてから昼の分は自分達にはなかったので、夕食となると有り難い。
食事も碌なモノが取れないし、満足の行く栄養すら取れないが、それでも空腹を満たすことだけが、食事の取り柄となっているので、食べないよりかは不味いのを我慢した方がまだマシだ。
「ただ、いま……」
ヨロヨロで戻ってきた守に、勇希は息を詰まらせ必死になって駆けつけに来る。
「守!!」
ギュッ!と、強く抱きしめる勇希。
正直、拷問を受けた後なので、ダメージが消えてないからこう強く抱き締められると、傷口が痛むので声を漏らしそうになるが、そこは何とか堪えた。
「守……大丈夫…?牢屋にまで凄い悲鳴が聞こえてきたから…
辛かったよね、痛かったよね……守…守…!」
勇希は声を震わせながら、彼女は少年の背中を優しく摩るように撫でる。目に涙を溜めて、彼を宥める。
疲弊で弱り切ってた守も、彼女の涙を見てしまうと、放っておけず頭に手を置く。

「大丈夫…勇希、俺は…問題ないよ、生きてるから…」
そんな彼女を優しく抱いて、落ち着かせる。
こんな非力で無力な自分に、ここまで心配されるなんて…昔一人ッ子で、周りから拒まれてた自分では考えられないモノだった。
他人から心配されるなんて、今まで無かったから…だから、ここまで必死に大切に思ってくれるのは、この世界でたった一人――彼女だけだから。
「それに…優良に治して貰えば、問題ないし…」
「貴方は道具じゃないの…操り人形じゃないんだから……そんな考えで自分を犠牲にするのは、やめて……」
彼女の正論にぐぅの音も言えなくなった守は、反論に困ってしまう。
自分の為に涙を流してまで心配してくれるのは嬉しいし、その反面彼女を泣かせたくない気持ちも山々なのだが…
だが他に言葉が見つからない以上、何と返せば良いのか…彼女は頭が良いし、冷静な分析や観察を得意とする彼女を説得するのは無理がある。
頭の良さで言えば自分よりも彼女の方が何倍も上なので、成績では天と地の差が開く程だ。
「じゃあ、どうするって言うのさ…他にどうしようもないだろ？だったらこうすしか…」
「だから私が代わって拷問を受けるって言ってるの…じゃないと本当に…」
結局またこう言う振り出しに戻ってしまう。
互いに大事に想う分、ややこしさを生んでしまうのは咎められないし、状況が状況だ。親友である以上、心配し合うのは当然だろう。
「とりあえず、飯…食いに行こ？話はその後でも良いしさ…」
「う、うん…そうね……そうしましょう…」
まだ拭えぬ気持ちもあるが、今は夕食を終わらせよう。
流れた涙を拭き、気持ちを切り替えようとした矢先に――
「んっ…？」

守が何かを感じ取ったのか、眉をひそめる。
「どうしたの、守？」
「なんか…様子が変だ」
何が？とまでは言わずとも、自然と格子状の牢から外の様子を覗き込む。
外は一段と騒がしく、揉め事を起こしてるそうだ。
ここの所は全く無かったのに…一体どこの誰が誰と揉み合ってるのか…と考えたのだが、何やら従業員の大人たちの悲鳴が監獄に響き渡っている。

「強え…あのガキども!!人間かよ…ぐふぅ！」
弱々しい大人の声が、まるで撃沈したかのように途切れた。
守と勇希の二人は互いに顔を見合わせ、目を丸くする。
「これで全員か…弱いな、幹部辺りがいると思っていたのだが…いや、確か幹部は陽花様が締め上げてタナトスに連行したと聞いたが…幹部の補充まではしていなかったのだな」
「こうして見ると、この組織は注意不足な上に警戒心は怠ってますね。私だったら副筆頭は付けておくけど…」
聞きなれない二人の声が次第に大きく聞こえ、先程まで暗く重い空気に打ちのめされてた二人の心に、希望の光が灯る。
あの大人たちが倒れゆく…と、言うことは？

ガチャリ、と鍵を開ける音が鳴り、ギギギィと不快な音が扉と供に響くも耳障りなどお構いなく、二人は身を寄せながら、扉が開かれた光の先を見る。
「二人とも、もう大丈夫ですよ――♪」
それは、月の光に照らされるであろう女神の微笑み。

5話「脱獄」

鍵で扉を開けると、地下へと続く階段が現れた。
灯りが無いから見えないが、その奥へと吸い込まれるような闇からは、間違いなく男性の悲鳴が聞こえ、三人の鼓膜を振動させる。
「酷い声だな…囚人達の悲鳴…で、間違い無いんだな？」
「……はぁ、随分と吐き気を催す物ですね。これは…矢張り二人だけに任せなくて正解でした。私も余りこういうのに耐性がないので、腹の底から怒りの溶岩がこう…沸騰するような……」
冷や汗を流す閃光に、囚人の悲鳴に胸糞悪く感じる閃光は、苦虫を噛み殺したような、苦痛の顔を浮かべる。
調べによると失踪者達はどれも戸籍不明、又は犯罪に手を染めた者、数々のトラブルを抱えた者が消失したと聞いている。恐らく縁の繋がりが薄い人間であれば、利用し易く誰にも負担を掛けずに済むと言う魂胆だろうが、そんなものはどうでも良い。
何より争いと醜い現実とは無縁だったお嬢様からすれば、こういう現実とは思えない地獄には憎悪と吐き気しか起きない。
「この先は妖魔との戦闘は免れません…二人は妖魔に関しては出来るだけ注意して下さい。無理はしず、従業員を優先して倒して下されば――」
「いや、私達も妖魔とは遭遇したこともあれば、今となっては妖魔にだって対抗は出来る。要らぬ心配は…」
「相手の戦力が解らない以上、妖魔であるなら下手に動くよりも囚人達の安全と組織内の人間を手っ取り早く始末するのが効率的です。私がデー門（ゴミクズ）と妖魔を相手にしますので」
「ん…しかし――って、もう隠さないんだな…」

「失礼、今のは空耳だと思ってください。何でも御座いません♪」
「閃光、私達だって中等部とは言え本来なら受けるべき案件ではない依頼…其れを我々が助力するのですから、従いましょ？ラファエル様だってそれなりに考えもあってのことだろうし…」
「そうか…まあ、確かに一理ある…」
「納得してくれると助かります閃光さん。それと、助言ありがとう御座います月光さん。やはり愛し合う者同士、息があいますね♪」
「あ、愛!?そ、それは…／／／」
「これはもう運命…矢張りこの忍務を終えた後は月閃からユースティア女学園に入学の進路変更を致しましょう。この忍務を終えた暁こそ、私達の証明であり、愛を深める親睦を――」
「その…考えに浸ってる所、誠に申し訳ないが……同性愛を語るより、先にやるべきことがあるだろう？」
　こんな、嵐の前触れだと言うのに、一切緊張する面を見せない三人のやり取り。乱れぬチームワークとは、これはまた立派な戦力としての証拠でもある。
　どれだけ実力を備えても、目前の戦狂に慄き本領を発揮出来ないケースは誰にだって存在するものだ。ラファエルだけなら兎も角、月光閃光の二人は中学生――そんな二人が危険な任務に挑むのだから、普通は不安を募らせても可笑しくは無いのだが…というか、同性愛を語る時点で肝が据わってる。それもこの胸糞悪い現実を少しでも払拭させるためのメンタルケア。そして二人の緊張を予め解す為の会話なのかもしれない。
（……それにしても、従業員の戦闘力は大したことはない。となれば妖魔を使役する可能性は間違いなく高いでしょう。小山の大将気取りのクズが、妖魔を使役する知識と技術を知っていたとして……勝てないと分かれば月光さんと閃光さんも妖魔との戦闘は欠かせない……幾ら彼女達が妖魔との戦闘経験がある若手実力者の中等部とはいえど、カグラでさえも下級の妖魔相手に命を落とすこともありますし…）
　月光と閃光は、留学先で修行を受けていた帰りの途中、運悪く妖魔

に遭遇した所を雪不帰が救い出したのだ。命の危険に晒されてた二人を救い出した雪不帰に、尊敬と憧れを抱き、彼女の側近として忠誠を誓ったのだ。

「ラファエル様?どうかしましたか?」

「いえ、少し考え事を…直ぐに向かいましょう――」

考え事に浸っていると、二人はいつの間にか鯖付いた頑固な扉の前に立っていた。声で我に返った彼女は気を取り直し、早々と駆け足で二人の元へと急ぐ

そこからはただただ突っ走った。

扉を開け、迅速に従業員達を見つけ次第バッサバッサと雑魚を薙ぎ払うように倒していき、気が付けば囚人が捕まってる牢屋にまで辿り着いた。

「迅速なる対応、適切な判断、建物の構造や救出対象の方々への配慮…御見事です二人共――」

「おい、囚人の鍵を早く渡せ」

「は、はいいぃぃ!!こ、これですッ、これですからぁ!!ど、どうか命だけはッ!!」

閃光の威圧に弱気になる大人の従業員は、命乞いをするよう鍵を手渡し、頭を地面に擦り付ける。忍学生とはいえ、中学生相手にボコられギャン泣きして頭を下げる絵面は、中々に珍しい物だ。

組織の人間も有象無象な者達ばかりで、拍子抜けだ。

自分達が強かった…という点で捉えてもいいのだろうが、相手が弱かったとも捉えれるので、どの道ここまで進めたのならば問題はないし、此方としては好都合だ。

「まあ、一応忍の本部に連行させなきゃいけませんし…命だけはご安心を」

「それに聞きたいことも山程ある。取り敢えず月光は追っ手の見張り

をしててくれ、何か怪しい動きや攻めに来たら迎撃を。不味いと思ったら私に報告してくれ」
「分かったわ。では、ラファエル様はどうなされるんです？」
「囚人達の解放を済み終えましたら、後は私が全て一人で負担いたします。ですが、囚人達がこれだけとは限らないはず…そこに転がってる生ゴ…従業員に聞いても、信憑性は薄そうですからね。根掘り葉掘り探し回るしかありません。それに小山の大将さえ潰せば無力化も同然――それまで月光さん…私とお供致して貰えますか？私一人とは言えど、何より無罪であるにも関わらず、奴隷として扱われてる者達の救出と安全が第一ですから。その為なら多少、私たちが犠牲を負うことは問題ありません」
　そう言いながら錆び付いた牢屋の鍵を開け、次々と囚人達を解放していく。最初に流れた断末魔に似た金切声とは違い、今は歓喜と嬉々の言葉が飛び交う。絶望から希望に一転した人間たちは涙を流しながら、喜びの声を上げていく。
「有難う…ありがとうございます!!」
「俺たち…自由なのか？もう、道具にならずに済むのか？」
「よっしゃあああぁぁぁぁ!!俺たち、とうとう救われたんだ!!」
「おねーさん有難う!!」
「はぁ～…有難や、有難や…」
　老若男女問わず、次々と解放されていく囚人達の笑顔に、自然と頬が綻ぶ。
　自分達は善忍であってヒーローでは無いのだが…こうして人助けをすると言うのは、悪くないものだ。
「…素晴らしい。これが笑顔、救われた者達の安堵と歓喜の声…これが、私達ユースティア女学園が齎す救いの手…嗚呼、神よ――どうか彼の者達に癒しを…」
　胸糞悪いこの残酷なアジトでも、囚人達を救うことで得られる安心感。それは腹の底から怒りと胃液が込み上げてくる事に必死に耐えながら、ラファエルもまた囚人達の閉ざされた牢屋を破壊する。月光が鍵で囚人達を、閃光は敵を拘束し縄で簀巻きにしながら、他の囚人

達を集めている。
「ふえぇぇぇん！お姉さん有難う…!!」
小さな女の子を解放し、優しい笑みを浮かばせる閃光。幼い子供を安心させる彼女の一面に、意外性を感じる柊はつい吊られて笑みを零してしまう。
「お嬢ちゃん…こんな若いのに……ひょっとしてヒーローか何かかい!?」
「ふふ…私達はそんな大それた者ではありませんよ。ただ…そうですね。この世には天使が存在しており、神は貴方達を見捨てなかった…そう解釈してくれれば問題ありません♪」
「よし…他は…」
ガチャンと、次に閉ざされた牢屋を開ける。
中には羆のような外見をした大柄な大人と、ピーチ色のふさふさした髪型の可愛い女の子が収監されていた。
「はい、これでもう大丈夫ですよ♪」
「わーッ！やったぁ！有難う!!」
「……」
活気良く元気に振る舞う少女、優良は頭を下げて礼を言い、羆の志久万は少女達を深く目視する。
「いえいえ、ご無事で何よりですよ。助けに来たからにはもう大丈夫です！私達が全力を持って救出致しますので、どうかまだ辛抱を――」
月光は頭を下げ、明るく信頼ある言葉を二人の心に届ける。志久万の模索するような視線など気にすることなく、月光は隣の牢に立ち止まり鍵を使って扉を開ける。
「二人とも大丈夫ですか？私たちが助けに来ましたよ――」
そこは、守と勇希が収監されていた部屋だった。

「第二、三フロア突破されました!!独房フロアにて侵入者が囚人達を解放しています!!」
一人の従業員のけたたましい叫び声が、アジト内の各フロアに響き渡る。多くの従業員は武器を持ち、また在る者は組織内の妖魔を呼び寄せ、一つのフロアで固まっている独房フロアへと足を運ばせる。
まさか…何の兆しも無く突然奴等が攻めに来るとは――いずれ此処の拠点がバレてしまう危険性も配慮していなかった訳ではないが、学生らしき人物が三名、ここまで進むとは想定外だ。
カグラの称号を持つ人間なら意図的に消していない限り、気配で察知出来るものを…
「ったく、ふざけんなよ!!こんなの、この様子じゃあデー門さんに俺たち焼殺されちまう…
んっと、商品用の妖魔も…出しとくか!!」
もう一つの独房部屋は厳重なセキュリティーで設置されてる為、妖魔がいつ暴走しても壊れないような細工になっている。
暗証番号を手早く入力し終えると、中から凶暴な妖魔がウヨウヨと、吐き気のする匂いを撒き散らしながら部屋から現れる。まるで蛆虫のように湧き上がるその黄味悪さは、身の毛のよだつ光景だ。
「侵入者を殺せッ――!!早くするんだ!」
たった一人の人間の言葉を理解した妖魔達は、餌の時間だと言わんばかりに奇声を上げながら、この監獄を徘徊する。

なんとか囚人全員を牢屋から出し終えた三人は、一息吐いて安心する。
最初の目的である囚人の安全の確保は出来たので、上出来ではあるだろう。しかしこうも簡単に捕まった人間達を解放できた後だと、返って逆に不安が募っていく。
「よし、これで全員だな…」
そんな不安を誤魔化すかのように、汗を拭う閃光。

「守！良かった…私たち、なんとか脱獄、出来たみたいね…」
「うん……本当に、夢みたいだよ……」
「あー！勇希ちゃんと守くんも無事だったんだ！良かったねー！」
「ホォ、ガキんチョも無事だったんだなぁ…俺より先に入ってる先輩だから当然か、ハハッ」
「志久万さん…守は不死身じゃないの……貴方より先に入ってるからと言って無事だと保証を取るのは止めて貰えないかしら…？」
「声怖ッ!!!」
　志久万のさりげない言葉に、勇希は冷酷な眼圧を飛ばす。血の通わない声は、いつ聞いてもゾッとしてしまうものだ。少なくとも守の事に関して小馬鹿にすると逆鱗を触れてしまうのは確かなようで、これで従業員と揉め事になりそうになったのを志久万さんが止めてくれたのだ。その頃から初めて大人の人間に心を開いたのである。
「まあまあ、志久万さんはこれでも僕たちにこうして気を使ってる訳だし…良いんじゃないか？」
「うっ…そ、そうね…御免なさい志久万さん。つい…」
　さっきまであれだけしんみりとしたムードになっていたのだから、彼女がこう言うのに関して敏感なのは咎められないだろう。
「まあ別にいい…それより、何だコイツら……」
　三人に向ける面とは一転、志久万は救助隊の三人を注意深く観察するに対し、光里は「どうしたの？」と小首を傾げている。
「あのガキ共、とてもヒーロー面してるようには見えねぇんだわ。いや…そもそもガキんチョだからこそか、こんな命を落としても可笑しくはねえ危険な場所に来ること自体が不思議でしょうがねえ」
「あー！クマさんまたそうやって…」
「いや、今回は真面目だ。この組織は厳重なセキュリティーを設置されてるかは不明だが…見たところ三人だけが救助として赴いた…
　普通は大人のプロヒーローが登場ってのがお約束。大人の付添いってのにも見えねえしな。見たところ、勇希と守と同学年じゃねーのか？」
　自分を助けに来てくれた人間が大人ならまだしも、こんな中学生か

高校生かも分からない子供なのだ。自分が元々敵としての人生を送ってきたので、こういうのに関してはかなり警戒心が強いのだろう。
「ええ、私と守の歳は変わらなさそうね…でも、助けてくれたんだし、その行為に裏があるとも思えないの。
　それでも、学生がたったの三人だけと言うのも些か不満な点も在るけど…あの人達に聞いてみたら？」
「やなこった、相手がヒーロー関連なら俺ぁまたお箱入りになっちまう。これ以上窮屈で労働と不味い飯の毎日が続くのは御免だぜ」
「皆さん!!注目、聞いてください!!」
　雑談の声で埋もれてる中、全員を纏めるよう清々しい声が支配する。純情可憐を一言で具体化したであろう月光が、手をパンパンと叩きながら大きな声で纏める。
「今から全員供、無事に外までお連れします！騒ぐ事なく、且つ速やかに、私達の指示に従って行動して下さい!!必ずや皆さんの安全を保証すべく、尽力致しますので!!」
　月光の言葉に一同は大きな賛美の声を上げ、部屋は一瞬で希望と歓喜に変わる。
「取り敢えず負傷者や歩けない者はいますか？問題なければ閃光さんと一緒に出口まで。月光さんは引き続き私と奥深くを探りましょう。尤も、この先が出てくるのは鬼が出るか蛇が出るか…ですが、どの道私の仕事はここの組織壊滅…貴女達二人は救出を主に――」
「承知した」
「畏まりました」
　どうやら解ってくれたようだ。多分、これで陣形や守備は安定として…非常な事態に臨機応変できるよう尽力するまで。一旦囚人達を安全な場所まで移動した後は、組織のボスを仕留める。この方が一般人が被害を受けずに済む。
　これが自分達に出来る最善の手段だ。
「……ねえ、貴方って」

ふと、聞き慣れた声が月光の耳に届く。振り向くと、先ほど牢屋に入っていたボロボロの少女が、鋭い目付きで従業員を睨んでいる。
「あの子は確か…」
閃光が従業員を拘束用の鎖で簀巻きにしてる間、勇希と対話してる従業員との様子に首をかしげる。
「な、なんだよ……」
「知ってるわ貴方…確か、私達を収監させて毎日道具のようにコキ使ってた大人でしょ」
弱腰になってる大人は、勇希に少し怖気付きながら距離が縮まっていく。何やら揉め事が起きそうな予感がビンビンに達している。聞こえた話によると、あの大人は守と勇希を良いように利用してた、所謂奴隷強調役の監視担当人だろう。
そんな大人が弱体化かつ無力化、況してや囚人達が脱獄した以上、下手に気を遣わなくても済むのだから、こうして怒りを露わにするのは無理もないだろう。
「……よくもまあ、私達を散々道具のように虐待してくれたわね…守をあんな傷物にしたのは、貴方でしょ…？」
男子達の受ける拷問は、基本は監視員の人間が袋叩きにするよう虐待紛いの拷問を受けさせ、血を流し、悲鳴を叫ばせるのが奴等の仕事だった。つまり、この大人は何年間も守に酷い仕打ちをしたという事になる。
「だったらなん……ぐぅッ!?」
「守に謝れ!!どれだけ守が辛い目苦しい目に遭ったか分かってるの!?いいえ、解らないでしょうね、だから貴方達は平気で他人を傷つけることが出来るんだから！例え如何なる理由でも、私は貴方達を絶対にゼッタイに許さないわ!!」
「勇希…」
これまで少年に見せたことない激情を露わにし、大人の胸ぐらを掴んで怒号を飛ばす。
正直、小学校に入って直ぐに友達になった守本人も、彼女の一面は見たことが無いらしく、こんな激しい怒りを他人にぶつけるのは今日

で初めて見た。
「お、おい…ちょっと落ち着け…」
「聞いてるの?!!守は私の全て!!!私の生きる意味そのもの!!!彼はいつも私を助けてくれた…他人が面白半分で私をハメようとした時、守がボロボロな身体でいつも身を呈して私を庇ってくれた!そんな彼を痛振って面白がってた貴方達にどれだけ殺意が湧いたか…!!」
閃光の制止の言葉も馬の耳に念仏。
何の意味もなく、彼女の激昂は止まることを知らず、息を切らしながら大人を噛み殺すような瞳を差し向けている。
流石の従業員もこんなにブチ切れられるとは想定外だったのか、口を開けたまま放心状態になっている。彼女は拳を強く握りしめ、殴ろうと取り掛かるが…
「はい、もうそこまでです。少し落ち着きましょ?」
「ハッ…!?」
彼女の掲げてる腕を掴んで止めたのは月光。優しい笑みを浮かべながら言葉をかける彼女に我に返った勇希は、心を落ち着かせ、平常心を保つ。
「ご、御免なさいその…私、つい…カッとなっちゃって……」
「いえいえ、貴女が怒るのも無理は有りませんし、それだけの事をこの人達がして来たというのが、行動を見てより実感しました。
ただ、その気持ちは貴女だけではありません。きっと、他の方々も憤慨に満ち溢れてるハズ…だから、一先ず落ち着いてここから脱出しましょう?」
彼女の柔らかな笑みに、つい頷いてしまう勇希。今思えば自分もここまで誰かに怒りをぶつけたのが初めてなので、自分自身でも驚きを隠せないでいる。
「流石は月光だな。誰かを宥めたり他人に気配りが出来るのが彼女の長所と言うか…」
この手や他人を抑制することに長けてる彼女は、こう言うのには慣れてるのだろう。これは乱れたチームワークを大切に、かつ纏めるのに適したエキスパートであるのだ。

(それにしても、あの勇希という女性…一見冷静で物静かな子に見えて、実はこんなに……いや、だからこそ、それ程にあの守ッて言う子を大切にしてる証拠なんだろうな)

誰かに対する怒りは、時に何かへの愛や優しさが含まれている。彼女はとっても根が優しくて、芯の強い勇敢な女性なのだろう。そこまでして守の事を大切に想う彼女は、それ程に強い繋がりがあると言うことだ。

「こんな腑抜けた三下相手に、抵抗できず無闇に傷付けられれば、誰だって腹が立つだろうが…今はお前達の救出が最優先だ。コイツらを含めたことは我々がなんとかする。だから何とか耐えて辛抱してくれないか?」

「ええ…お願い、します…それと、迷惑かけて御免なさい。こんな一大事な時だと言うのに私…」

「いや、良い。怒るなとは言ってない…だが、其れは後からでも遅くはない。な?流石にやり過ぎるのは良くないにしろ、怒る気持ちは分からんでもないからな…」

それでもコイツに何か言ってやらねばと言う、心残りに似た物が強かったのだろう。そう考えると彼女の行動も咎めることは出来ないし、皆んなも同じ気持ちだ。

「オイ守、アイツあんな風に怒るヤツだったのか?意外だな」

「いや、僕も初めて…だよ…」

近くにいた志久万は、肘で突きながら、守に声をかけるも、守本人も動揺を隠せないでいる。彼女に失望したとかそう言う訳ではなく、こんな弱っちい自分の為に怒ってくれるのが、妙に口では言い表せない物で、歯痒い気持ちになってしまう。

「ね、ねえ…ちょっと良いかしら?」

「ん、はい??」

一部揉め事を終え、囚人達全員が何とか纏めあげ、救出するべく月光を呼びかけようとした途端、不意に勇希から声をかけられ意識と供に自然と声主に振り向く。

「貴女はさっきの…」
「あの、助けてくれて有難う御座います…それでその聞きたいことがあるんですけど…」
「質問ですか、何でしょう？」
　清楚に振る舞うお嬢様は、勇希に明るみの笑顔を浮かばせる。災難や敵によって心が衰弱してる人間には、笑顔が一番だと聞いたことがある。癒しこそ心を救うと信じた彼女は、心理学に関しては一応微かな知識があったので、心細く、弱り切ってる人間には出来るだけ活気的な笑顔を見せている。
「他に増援や救助隊は…いないんですか？」
　自分達が少数で動いてるのに違和感を抱いたのだろう。こう言う質問をして来るのは考えてなかった訳ではないのだが、説得するのに時間が費やしてしまうので、出来れば安全な場所で話したいのだが…
「ええ、少々ご事情がありまして…私達三人だけというのは、とても心細いかもしれませんがご安心を――どうか私達のことを信じて下さい。詳細は後ほど話しますので、一先ずは安全な場所へ避難する様に閃光さんと一緒に……」
「ラファエル様!!」
　説明をしてる途中、月光の気迫の入った声が彼女の言葉を途切らす。
「前方から妖魔の群れが来ました――至急、戦闘態勢に入った方が…」
「おや、どうやら飛んで火に入る何とやらが…それも想定内です」
　恐らく囚人達を確保した所、守りを優先して固めてる自分達を攻めることで陣形を崩して囚人諸共、血祭りにする狙いなのだろう。
　そう考えると、自分達が釈放してる間に誰も攻めに来なかった道理が頷ける。
「うわぁぁぁぁぁ！化け物だぁぁぁぁ!!」
「妖魔…俺たち、食い殺されるのか!?」
「来るな、来るなぁぁぁぁ!!」
　希望から一転、有頂天から叩き落とされたかのように、大人達は絶望の悲鳴を叫ぶ。

巨大な肉食蝿、
アナコンダの化け物、
不気味な血の肉体で覆われた蠍と人間の融合体、
全身から人間の手足が生えたピラルクー、
四足歩行の鮫、
様々な奇形をした人工妖魔が、餌だ食事だと言わんばかりに一心不乱に襲って来る。こうなった以上、戦闘は避けられない。
「皆さん！危険ですから下がって下さい！私たちが対処致しますので!!」
月光は混乱する人達に聞こえるように叫びながら大声を張る。ラファエルは囚人達よりも前に立ち、迎撃に持ち込む。皆んなの安全を確保するには被害が及ばない距離を維持し続けなければならない。
ただならぬ恐怖で錯乱状態に陥る囚人達を纏めるのは難しいが、それでも月光は声を張り上げるのを止めない。
「挨拶は省略で――そして礼儀を以て光の祝矢を――」
妖魔達の群れに臆することもなく、冷静さを装いながら彼女は黄金の弓を翳し、掌から発する光を大きくする。其れは眩く、小さな光を弦に当て、弓矢を引くように腕を引く。
「秘伝忍法――『裁きの光矢・黎明』」
ザシュシュッ――と、無限の光の矢が、妖魔達の脳を、心臓を、胴体を、全てを貫き、眩い光が破裂。
煌めく光矢の破壊は、妖魔の絶命による証明――遠距離からによる武力は物を言い、一切の侵入を許さない。黎明差し込む光に貫かれる邪な者は、根源となる光の粒子が集まり、肥大化し、爆発を引き起こす。それを光の小さな球体から、何百本も再生し、弓矢を飛ばすことが出来る。
「ギャァァッ！」
「ミギャァァァ〝ァ〝!!?」
「紅茶を飲んでる御淑やかなお嬢様ではないことをお忘れ無く……伊達に忍などやっておりません。然し弱小個体とはいえ、油断は禁物ですね。閃光さん！早く囚人達を！」

一斉に有象無象の妖魔達から血が噴水の様に吹き溢れ、一瞬にして倒れ行く死体の妖魔達。血の海となり、なす術なく、手も足も出ずに凶暴な妖魔達は跡形もなく消え去ってゆく。
一撃でも喰らえば重傷を免れないこの妖魔の暴行…食う必要はない。ラファエル…『光凪楓』という少女に並大抵の妖魔は太刀打ちできない。
戦い慣れたセンスに、油断も隙も有らず、無駄な動きなく妖魔を倒していく姿は、正しく悪魔や魔物と戦う天使を連想させる。
「ギニャァぁぁァ゛ぁ゛ぁ゛ァ゛ぁぁぁぁーーーーッッ!!」
蜘蛛のような目を持つ化け物の猫は、獰猛な雄叫びをあげながら、脚力を使ってラファエルと妖魔の群れを飛び越える。
中々に大きなサイズなので、押し潰されれば命の保証は無いだろう。
「守!!」
こんな人波押せる混雑とした人間の塊の中で、守と距離を離してしまった勇希は、必死に声を叫んで少年の名を呼ぶ。
微かに声が反応するものの、全員が恐怖で声を叫び続けてるので、聞き取りにくければ、どの方向にいるかも解り辛い。
「おい!危ねえぞ!!」
志久万の叫びにようやく気付いた勇希は、自身を覆い被る影に上を見やる。
大人を丸呑みできるであろう大柄なサイズの猫の妖魔が、唾液を撒き散らしながら口を大きく開けて、勇希達を食い殺そうとする。
「あっ――」
直視して死を錯覚した少女は、硬直してしまう。
まるで、蛇に睨まれた蛙の如く、彼女は死の寸前まで身体を動かせなかった。
周りの嗚咽や悲鳴など意に介さず、少女はただ呆然と――
「誰の断りを得て私の後ろに立ってるんですか?」
怒りが顕となった天使の冷静と怒気を孕んだ声と共に、無数の光の矢が化け猫の身体を、縦横無尽に貫いていく。妖魔は断末魔を上げる

ことなく、白目を剥いて絶命。
然し巨大な身体が頭上から降ってくる…。このままでは押しつぶされてしまう。その刹那――ポン、と軽く押されただけだったが、少女にとっては少し触れたださでバランスが崩れたように後ろへ倒れていき、代わりに目前には、銀髪の少女が立っていた。
「失せろ」
その言葉を妖魔に投げた少女は、軽く拳を握り、殴打の嵐を起こす。
パァン!と、風船が破裂したような鼓膜を揺らがす音が、鮮明に聞こえ、それが間を空けずに繰り返される。
「――ッ…」
容姿に似合わず、目にも留まらぬ速度で繰り出される拳の嵐を前に、身体の原型を保てない妖魔は、完全にノックアウト。
最後の決め手として、蹴りで大柄な妖魔を、牢へと吹き飛ばし、手足も出せなかった妖魔は意識を途絶え、息を引き取った。
閃光は手を軽く払い、独り言を呟いた後、勇希に振り返る。
「すまない押し倒して。大丈夫か、怪我はないか?」
先ほど妖魔に向けた敵意とは裏腹に、優しい笑みをこぼす彼女に驚くも「あ、有難う…」と、少し頬を赤らめ差し伸べられた手を掴み、起き上がる。
閃光は月光とは違い、冷徹且つクールに振る舞う少女は、女の子らしさとはかけ離れており、どちらかと言えば男性に少し近いイケメンの面を持つ。
(ま、守以外に…初めて、救われた…)
勇希にとって他人とは敵であり、一切心を開かなかった訳だが、お嬢様に続き閃光と言い、自分の命を助けてくれた彼女達に、嬉しくてつい頬を赤らめてしまう。
「感謝致します閃光さん!さぁ、この調子で囚人達の守備を固めながら脱獄を――」
「分かってる…!」
殲滅の光の矢が雨の如く降り注ぎ、次々と押し寄せてくる妖魔達は断末魔を叫びながら、消滅を辿っていく。少しずつ歩幅を歩み進んで

いく。予想外なことに出くわしても、誰かが補っては挽回してくれる。
少なくとも、人工妖魔という有象無象が幾ら出てこようとも、この陣形を潰すのは難しい。このまま上手く行けば、トントン拍子だ。

アジト内で抗争が広がり、妖魔と忍が血を流し争う出来事が起こっている真中、暗闇の廊下を歩く足音が三つ鳴る。
「姫、どうやら私達以外に潜入者達が現れたみたい。公安の人か、表の人間かも…早く目的を回収しよう」
「ひぇぇぇ!ひょっとして、私たちのこと、バレちゃったんでしょうか?幾ら私達が『Dースクワッド』の選抜メンバーだからって…わ、私たちの存在って、滅んだことになってるんじゃなかったんでしょうか……」
「……」
ザッ、ザッ、と彷徨うかの如く、足音を立てながら徘徊するのは、月光と閃光、ラファエル以外の何者か。
肩には髑髏のマークに、Dという文字が刺繍された、軍隊の様な制服を着た子供達。
一人は長い白髪をたなびかせ、一人先頭に立って歩く武装した少女、後方からはフードで頭を覆い、顔をガスマスクで隠している少女。桜色の髪がパーカーのフードから相見え、無言で頷く。
もう一人は怯え口調であわあわ動揺しながらも、大きい荷物を背負って歩いている。青いキャップ付きの帽子はボロボロで、水色のポニーテールを揺らしながら、根暗そうに呟いている。
「目的は囚人達の確保……デー門は必要ないから殺せって。上からの命令…取り敢えず、第四支部の筆頭は率先して潰そう」

「お、大人って怖いですねやっぱり……で、でもでも、気が引けますね…ターゲットを殺すならまだしも、子供達を攫って軍人としての教育…うわあぁぁん！私、昔のことを思い出して泣いちゃいますよおぉぉ!!」

「……」

突然泣き叫ぶ青髪の子に、姫と呼ばれる少女は人差し指を彼女の唇に当てて、シーッ…という合図を送る。喧騒とした彼女は「あぅぅ…す〝み〟ま〝せん…」と、涙を拭きながら渋々と頷く。

「…一応、囚人達は捕まえられなくても、大将さえ殺せば半殺しで済む…もし何かあったら罰は私が受けるから、心配しなくて良いよ」

「…ッ！」

武装した白髪の言葉に、姫は首を横に振る。

どうやらこの少女は、囚人達を人殺しの軍人として攫うこの任務に酷く反対しているようで、姫はそれを否定する。

その否定とは決して任務の失敗に対することではなく、罰を受けることだ。一人で全てを背負わすことに、納得のいかない彼女は否定する。喋らない当たり、喋ってはいけない何かがあるのだろう。

「有難う…でも、私は大人の人達から嫌われてるから…汚れ役はなるべく一人で背負った方が良い――行くよ」

彼女達はＤースクワッド。

暗殺、破壊、暗躍を生業とした国家テロリストによる犯罪組織。

歴史では滅びたという事になっているが、それはあくまで１００年以上前の話…。

滅びた組織と自治区を拾った、Ｄースクワッドの『先生』が復権させ、秘密裏に暗躍を進ませていた。

彼女達はその中でも選ばれたエリート達。

特攻部隊にして、人を殺す事に特化した優秀な犯罪者達――だけど、三人とも瞳には希望なんてカケラもなく、あるのは穢れ汚れ、濁った、ハイライトなんてない、絶望の瞳をしていた。

6話「憤慨」

「何の騒ぎだ…」
事務室にて他のグループの筆頭と連絡を終えたデー門は、この耳障りな騒動に腹を立たせながら眉を顰めていた。
囚人達による揉め事にしてはヤケに大きいし、その分騒動から既に数十分は経っている。
部下が何かしらの失態をしたとは考え難いが、大至急の連絡も来てないので最初は軽く見ていた。しかしこの騒めく気配は収まることを知らず、今も争い事の音が耳に届いてるのが、実に不愉快だ。
（まさか…脱獄者？いや、それなら尚のこと俺に連絡を寄越すハズだしそういう風に教えはしている…
となると、妖魔が暴走でも起こしたか？）
この組織を立ち上げて約２０年以上にもなるが、特にこれと言った問題が無ければ、暴走というケースは一度たりとも起きた経歴は無い。
手放した…の理由が大きいだろうが、それなら部下の命令に従うし、どの道妖魔が逃げたり暴走したりなんて滅多にないのだから、この可能性は捨て切れはしないものの、低いだろう。
「全く、俺に連絡くらい寄越せ。囚人供（ゴミ）は使える癖に、アイツらが使えないのは可笑しいんじゃないか？立場が逆だろう立場が、くそッ」
少しの腹立たしさも、大きな憤慨に燃えるもの。まるで火に油を注ぐように、デー門の怒りは大変昂ぶってる様子で、正直少しでも触れたら大激怒しそうな雰囲気を漂わせていた。
悪態を吐き、舌打ち混じりに端末を操作し従業員に連絡を入れる。

しかし幾らコールを鳴らしても一向に出る気配が無いことに、デー門は益々眉間にしわを寄せる。
「……おい、出ないぞ。何でだ、3コール以内には必ず出るようにしてるハズだ……
…いや、待てよ？」
部下が連絡に出ないのは、幾ら何でも可笑しくないか？
揉め事にせよ、騒動がどうであれ連絡を入れれば必ず反応するハズだ。それなのに応答すらしない上に一人たりとも自分に連絡が行き届いてないのは、される前に潰されたのでは？
「じゃあ、一体誰が??」
連絡する必要が無いと判断したのでは無く、予めそう予想されてたかのように、連絡の手段を断ち切った者が居るとすれば？
囚人達の自由行動は無いし、反乱が有れば絶対に報告しろと教えはしているし、面倒な作業では無い。
なので幾ら奴等が強かろうと、決して脱獄など不可能なのだ…となれば、第三者の介入により、妨害され騒動が発したと考えれば、妥当では無いのか？
「……追跡やカグラもいなかったぞ」
デー門だって腐っても忍商会の四支部筆頭だ、上忍に派遣された忍の警戒網を広げ、監視してはアジトを転々としている。
中には此処は目立った行動は無いし、今でもカグラ級の異質な実力は感じ取れないので、恐らく最高称号を持つ忍が居ないのは確かだろうし、余程自信の有る実力者でも無い限り、自分の探知を無視して攻めに来るのは不可能だ。
「おいおい、勘弁してくれよッ!!」
……もし、気配を隠す能力に特化した者、又はカグラ未満の上級の忍が攻めに来てたら？
前々からアジトがバレてて、緩んだ警戒態勢の機会を伺い、今になって襲撃を起こしたと想定すれば、ありえなくも無い。

嫌な脂汗をかきながら、ギザギザの歯を食いしばり、掌から獄炎を巻き起こす。
デー門は背中に悪魔の翼を生やし、迅速に駆けつける。
この嫌な予感が的中してるのは言うまでもなく、後は時間の問題だ。ここがバレて商売や組織の情報漏洩に繋がるのは流石に不味い。
鼓動が速くなる心臓を手で押さえつけながら、翼を働かせ、暗闇の通路へ溶け込むように羽ばたいて行く。

「このまま突き進んでいきましょう――」
床は血の海に染まっており、ベチャリベチャリ…走る度に靴は血飛沫によって汚れ、歩みを停めずにアジトの奥へと駆け抜ける。妖魔の死骸は自然と消滅していき、灰のように塵と化して四散する。汗を拭いながら、ラファエルは月光に振り向く。
「月光さん、前方から5人の気配がします。お気をつけて――それと閃光さんの方は？」
「連絡を取ったところ、もう少しで出口に着くそうで――一先ずは安心ですかね…」
どうやら一般人は全員無事、守りきれそうだ。
これで後は迅速に外に開放して、閃光に続いて月光も、居るかもしれない囚人達を安全な場所へ誘導させてから、自分が組織の親玉を潰せば今回の任務は完璧な形で終わる。
と言っても、元々は組織が派遣した任務なのだが、生憎其れは自分たちに依頼したのではなく、雪不帰本人に隠密な形で指令を出したらしい…
「呪々！」
月光は相棒とも呼べる傀儡の呪々を駆使して、銃口を向けながら発砲する敵を、縦横無尽に殴り倒していく。
従業員達の声にならない痛みの嗚咽と断末魔が廊下に響き渡り、気を失う。

もしラファエルが弓矢を引けば、間違えて殺してしまいそうなので、月光に頼ったのもなるべく不殺にしてから、然るべき処罰を受けるべきだと判断したのだろう。
「月光さん、道を開いていく途中で寝かせた連中を回収してくれますか？呪々を使って頼めるでしょうか？」
「はい、ジュジュは傀儡として扱えるので、何ら支障はないですよ♪」
「了解しました。とはいえ長く続く経路も、終わりが見えてくれれば良いのですが……肝心の小山の大将気取りが見えないのが不安ですね」
アジトも殆ど壊滅へと追いやられ、妖魔の気配も消えていっている。問題は筆頭のデー門が不在…確認できてないという所だ。アジトを残して逃げたか、或いは外に出ているか…。
だが、何故か妙な胸騒ぎが起きる。
「……月光さん。もし、もしも…この先何か危険があると判断すれば、閃光さんの所まで戻り、一旦忍務は中断ということで帰還して下さい」
「え？ら、ラファエル様…一体何を…？」
「妙に胸騒ぎがするんです…ええ、今まで修羅場を潜り抜けてきたからこそ分かる。この直感に近い、緊迫とした重い空気――」

瞬間――空間に忍び寄る闇が濃くなる。
まるで死者の手が伸び、生者を彷徨い求めるかの様な、異様な気配…。先程まで無かった、妖魔の気配…瘴気が濃くなってきた。
「ラファエル様…！これは…っ！」
「まさか…いえ、仮にも第四支部――となれば、今までの妖魔は肩慣らしにすらならないとしたら…！」
『ク〝オ〝オ〝ォ〝お〝お　ォ〝オ〝オ〝ォ〝オオオォーーーーーーッッッ〝ッ〝ッ〝!!!!』
足跡が前の方向から聞こえ、化け物の喚き声が木霊する。

血に飢え、殺気を放ち、空間を震わせるような、痺れる空気――其れは轟く空間に亀裂を、聞くものに戦慄を覚えさせる様な、恐怖を生み出す喚き声。
闇から姿を現したのは、返り血を浴びたかの様に真っ赤な朱色に染まった甲冑と思わしき鎧装を纏い、緑色の角が一本生え、まん丸な眼玉をギョロリ、ギョロリと動かしている。
口が裂け、下に垂れる顎。口内には黒く禍々しい、女性の長髪にも似た触手が唸り、両手には巨大な骨で造られた金属と骨が混ざった歪な骨をした大剣を握っている。骸骨が無数に埋め込まれ、恐竜や巨大生物から採取したかのような異質さえ感じてしまう。
腕や脚は細くとも、大剣を軽々しく持つことから、筋力は非常に高いと見て間違いない。
異質と殺気、咳き込むような血の匂いで充満した邪悪な赤鬼。
大妖魔――赤鬼怒。

「よ、妖魔!?それもこの気配…!!」
「っ…!つい先程、現れた?この強さと気配…間違いなく大妖魔でしょう…!現れた、ということは…元々忍商会の者ではない――と」
忍商会は妖魔を精製する際、血を材料とし一定の量により生まれ出ると聞く。妖魔について詳しい生態、詳細は謎に包まれているが…仮に忍商会のモノだったとしても、危険すぎる。
コレは――不味い。
「月光さん――先程宣言した通り、閃光さんの所まで戻り報告を。今逃げている救い出した囚人達と一緒にセーフゾーンへ赴いて下さい」
「で、ですが…!」
「これは上官命令です――貴女は妖魔のことを知った気でいるだけの、ひよこにすらなれてない者です」
異議を唱えようとした刹那、彼女から毒舌が吐かれる。
其れはこれが緊急事態で有り、非常に危険な状況下であり、下手すれば全員全滅の可能性すら危惧されてることを示唆している。

「幹部も残ってる上に、この危険な妖魔を野放しにしてしまえば…間違いなく多くの犠牲が生まれるでしょう…だから早く逃げなさい。安心してください、ミカエルさんほどではないですが、私でも其れなりに戦えますから」

一番避けなければならないリスクは、全滅である。

忍が世の中で生き残っているのは、命を賭して戦場へ赴き、情報を持ち帰り、標的を仕留め、後世へと継承してきた賜物である。その中で多くの忍達が、生きたまま帰ることも生業としていた。

「ク゛キ゛ャル゛ッ!!」

気味の悪い声を上げながら、その巨躯からは予想されない俊敏な動きで、月光とラファエルの首を狙い、大剣を振り下ろそうと首を刈り取ろうとする。

月光が避けようとバックステップを行うも、体験の斬撃から放たれるのは、炎――ゴウッ…!と空間を燃やす業火を放ち、斬撃と共に飛ばす。相手がバックステップで後退したとしても、殺せる様に。

「私の相手は此方ですよ――」

だが、その炎の斬撃も、大剣も、決してラファエルと月光に届き、傷つけることは叶わなかった。

神々しく輝く光矢が、赤鬼の両腕に集中砲火し、射ぬかれた腕は、その衝撃により振るえなかった。

「…ッ!!はっ、はっ…!ラファエル…さ…」

「逃げなさい!!!早くしないと貴女の口が裂けるまで茶菓子を大量に詰め込みますよ!!??!!」

ちょっと独創的な怒り方に、一瞬思考が停止しかけたが、彼女の怒声と覇気により、我に帰る。

ぶわりと溢れる冷や汗、蒸せ返るような息詰まりに、心臓が破裂しそうな鼓動…そして、一瞬だけ錯覚した死――もしあの時彼女の迷うことのない選択肢、赤鬼に攻撃さえしてなければ、死んでいただろう。

光の矢は、無数に空間ごと破裂を連発させていく。破裂する度に血

飛沫が飛び、両腕がプラン…と揺れてしまうも、それを無理やり結合させる。妖魔は人間とは比にならない身体能力と治癒能力を持っている。人間や他の生き物も身体の構造が強ければ、其れほどに回復力、筋力、スタミナ、スピードも高くなる。

「…っ!す、すみません…!!必ず、連絡致しますから!!」

「ええ…私も不味いと思えば頃合いを見て帰還致しますから……」

涙が込み上げて来そうな、涙腺の刺激に耐えながら、背を向けて来た道へと戻っていく。

彼女の後ろ姿を見届けることは出来なくとも、死守することは可能だ――。

「一応、ミカエルさんには連絡を入れておきました……忍務中なので、邪魔をしては悪いと…なるべく私だけで終わらせたかったのですが…それに、もし万が一、助けに来てくれれば……」

尤も彼女の忍務に関しても詳細は聞いていないので、遠い地方だとしたら無理にも等しいだろう。

其れでも、彼女が来てくれたら心強い…幼馴染でありながら、心の底から信頼できる彼女が来てくれるならきっと……。

『え～？楓ちゃんなになに～？あれだけ優秀な後輩ちゃん達に威厳を示唆して学園の見本とかなんとか長ったらしいこと言ってたのに、結局助け求めちゃってるじゃ～ん！しかも私その時忍務中だよぉ～？そりゃもう、ゴリゴリの激務だよ？それなのに助けて～とか、こっちが助けて欲しいし～……あっ！やっぱり楓ちゃんにはお気にの子達の自慢になりたかった～とか、しょうもない理由で見栄張ってたんじゃ――』

うん、やっぱり助けなんて呼ばなかった方が良かったかもしれません。

今にでも脳裏に蘇るのは、彼女の反感を買うような煽り言葉。これが裏も表もない、彼女の純粋無垢な言葉だ。

だけど…腐っても実力で言えば黒月よりも強い、陽花と肩を並べるほどの実力を持つ、ユースティア女学園最強の忍。

メディアを嫌い、忍記者が取材をとりに来ても『怠い、面倒い』で

片付けてしまうほどの天才。
序でに今の想像でもイラついたので、今度再会できたら彼女の口にケーキをぶち込んでやろう。
理不尽と言われても、そんなのしらんがな、と言い返してやろう。
「何としてでも、私が一人で解決しなければ……せめて、未来あるあの子達の為にも――」
彼女は時折、口の汚い本音の言葉を吐きそうになり、怒りを抑え、月光のような優秀な忍学生には優しく、度が過ぎた愛を求める彼女でも、それでも…お嬢様でもあり、立派な一人の忍学生なのだから。

「走れ！出口はもう直ぐだ、後少しで全員救かるぞ！」
息を荒げながら、閃光は先頭に立ち突っ走りながら囚人達に励ましの声を送る。閃光は皆とはぐれないように気を遣いながらこっちだと指示を出しては走っていく。
これ位の量を走ることなど、何ら問題もなければ体力的に厳しい面は無く、造作もない。しかし囚人達の場合は話は別だ。
何せ全員とも忍でなければ一般人、元々ここは碌に満足できる食事を摂れなかったので、志久万やヒーローだった大人の人間も、体力が衰え衰弱し、少し走っただけで息が上がる。
「畜生がぁ…！少し走っただけで肺が苦しいぜ…はぁ、はぁ……昔ヤンチャしてた頃とは思えねえ位、無様だなぁ俺ぁ」
「熊さん頑張ろ…！後少しだよ……私も苦しいけど、皆んなと一緒に力を合わせて、頑張ろ…？」
「へへ…情けねえなあ。普通は俺のような大人がガキんチョを心配する立場なのに、今じゃ逆だ…」
それでも光里が笑えば、それに応じるよう必死に苦笑を浮かべて我慢をする。労働を強いられ疲労が溜まっていたからか、身体を動かす体力が残っておらず、皆は極限状態に近かった。

しかし結果的に言えば其れは光里も同じことだし、底が尽きるのは時間の問題だ。
(休息する時間なんて無い…其れに、デー門と鉢合わせをすればそれこそ絶望的だ。月光と一緒に連携を取れば撃退こそあり得なくもないが――)
デー門との対立に最悪な予想を過ぎる閃光は、苦悩を持ちながらもその考えは次の爆発で思考が停止する。

ドガアァァァン!!と、コンクリートが爆発したかのような衝撃的な音に、一同は目を丸くする。
背後――何もない一本通路の左が破壊され、閃光を含めた囚人達は足を止める。

「何だ?!!」

土埃により視界が悪くなり、異形な影がゆっくりと蠢く。まさか、デー門か?誰もがそう予想したが、視界が晴れ、影の容姿を見て閃光の考えは否定された。
「ヴォルルルル…」
巨躯な体は蒼い装甲で覆われており、まるで蒼い甲冑を装備している様だ。
手に持つ武器は此の世の物とは思えない骨で作られており、金属と骨が混ざった棍棒状の大剣は、真っ赤な血に染まっている。
顎は腰まで垂れ下がっており、口の中は緑色の触手で埋もれ、ウネウネと唸っている。
眼球は魚のように丸く、ギョロギョロと囚人達を探るように見回している。
天を突くように尖った角が二本生えており、蒼とは対照に地獄の熱を灯した赤き色。
足や手はその巨体に似合わず、控えめな小さいサイズだ。それでも大剣を軽々しく手に持つその筋力は、人間を簡単に嬲り殺す事さえ容

易いだろう。
異形…其れは先ほどの赤鬼怒と同じく〝鬼〟その者だ――
「何だと!?まだいたのか…!」
予期せぬ妖魔の奇襲に、心の中で悪態を吐く。
いや…誰も壁を壊して此方に接近するとは思っても居なかったのだろうか、そもそも別の通路があるとは、正に此処は蟻の巣窟、迷宮というヤツだろう。
「チッ!クソ…立ち位置もよりによって真逆な…距離もある…」
囚人の先頭に立つ閃光、波押す囚人達の背後に佇む妖魔。確かに立ち位置的には最悪だ。
「あ…ああ……」
一番後ろに居たのは、息吹冷奈。
控えめで大人しげな少女は呼吸をすることを忘れ、腰を抜かしている。風立空と同じ同学年の親友であり、先輩に当たる勇希を慕う女の子だ。
目の前でドロドロと涎を零す妖魔に、生きてる心地を感じない。蛇の如く睨まれ、蛙のように動く事さえ叶わず、恐怖により体が硬直してしまう。
「冷奈ちゃ――」
同学年であり、幼馴染の子が手を差し伸べ、無理にでも助けようとした刹那、血飛沫が飛ぶ。
スパァン――と、女の子の首が跳ね、べちゃりと壁に血が付着し、首からは血が噴き出す。
其れを目の前で起こされた空は、目を丸くし何が起きたか解らず棒立ちしてしまう。
蒼き鬼の妖魔は何の躊躇いもなく、さも息を吸うようにか弱い小さな女の子を惨殺した。
「い、あ……えっ?」
余りにも呆気なく、首を切られた息吹の体は倒れ伏す前にドシャリ

！と、汚泥を踏むように、妖魔は女の子の体を踏み潰し、風立空の前に現れる。
「ヴァルウゥゥ…!!」
獣の様な低い声、白い吐息、まだ数秒しか経たないその秒数は、まるで時を止められたかのように、何十秒間も長く時を感じてしまう。
「空ちゃん！逃げて早く――!!」
勇希は言葉を掛けるも、親友を目前で惨殺され、次は自分が殺される立場だと知った彼女の脳内には〝逃げる〟という選択肢が用意されていなかった。
ザバッ――と、物を切る音が聞こえた。
今度は横に薙ぎ払うのではなく、一直線を描くように一刀両断する。ピシリ、と嫌な音を立てながら、少女の視界は二つに割れた。臓物や血が溢れ、異臭が漂い吐き気が込み上げてくる。
「い、嫌だあああぁぁぁぁぁぁーーーーーッッッ!!!!!」
囚人の悲鳴が通路内で溢れ返り、混乱状態となる。
それに呼応するように、蒼い鬼は凄まじい咆哮を吠えあげる。まるで今から囚人達を処刑することを告げるかのように、ベットリとした血を付着させた武器を掲げ、何度も死体の血肉を叩き斬っている。
「次は…俺た――」
ザバッ！と、声が途切れては男の囚人の体は袈裟斬りにされる。何が起きたか、常人では目に捉えられない速度で振るわれた斬撃は、簡単に人間を殺めてしまった。
「荒田!!」
今度は守が声を張る。
荒田刀気――元々マトモな家庭を送っていた何気ない一般人である子は、次は俺たちか…逃げるぞ！と声を上げる前に妖魔によって無残に殺されてしまった。
「ヴァァァァあああ、ーーー!!」
「立ち止まるな逃げろ!!私が食い止めてる内に！」

シュッ――っと脚力を使って地面を蹴り、空中で間合いを詰める閃光は、マスクで目線を覆い隠している。
これはアサシンモード――この状態は本気の意味を指す。つまり、閃光は命を懸けてこの妖魔を止めることを告げていた。
「虎式武術――脚乱拳!!」
鍛え上げた脚力を使い、拳の如く素早く乱打する。足は拳の三～四倍の威力が有ると書物で読んだことがある。
拳を主体とする彼女は、留学先の白虎師範に武術を教授して貰い、脚力をも巧みに使えるようになったのだ。
「ヴイいゞ イゞ い？お前、不雪帰ィ …？」
「な、に？」
この妖魔の口から己の命を救ってくれた恩人――雪不帰の名を口に出した。
どういう事だ？
「違う…お前、雪不帰、ジャ、ななナイぃい――」
妖魔術――【木っ端微塵】
妖魔と人間の骨で作り上げた古き刀神は、邪悪たる気を注げ、縦横無尽に斬り捌いていく。
脚の力で何度も蹴り飛ばしていくが、閃光よりも妖魔の攻撃の数が上回り、簡単に迎撃されてしまう形となった。
「ぐぅ…ッあ!!?」
秘伝忍法も意味を成さず簡単に吹き飛ばされてしまい、壁に何度も衝突してしまう。
強い、一戦交えて直ぐに解ったことは、この妖魔は先ほどの人工妖魔や、怨念らしき妖魔との常軌を逸していた。
「脚に…血が……」
それどころか所々傷を負い、血が流れる始末。
どうやら只の妖魔では無いようだ…コイツがデー門とは思い難い。いや、下手をすればデー門よりも強いかもしれない。そんな錯覚さえ感じ取れる。
マスクが僅かに乱れ、視界がハッキリと見える。鬼の妖魔は余りに

も恐ろしく、直視してるだけで恐怖の余り可笑しくなりそうだ。
「ラファエル様と月光がいないだけでここまで差が……情けないな――…」

幾ら相手が手練れの妖魔とは言え、二人が不在とは言えどこの体たらく。
鍛錬や修行を積み重ねても、強大たる壁は確かに存在する。
忍学生は勿論のこと、裏社会で蔓延る忍達でさえ叶わないのが、この大妖魔達だ。カグラの称号すら超える、多くのカグラが知る中で最強の忍――陽花を始め、名のある称号を持つ忍でもない限り、勝機も生存もほぼ皆無に等しいと思っても良いだろう。

「オォ…忍？」
壁にもたれ、苦しむ閃光を見下ろす鬼は、嘲笑する。
「お、オオオ愚か……何知らズ、朽ち行ク命……人間、惰弱、める…ふぇん、生メれル……ルルル、るるルルルル、るル？」
どうやら知能は低いのかどうなのか、人語は上手く喋れなく、所々が幼稚的な言葉でしか発せていない。
「お、俺…蒼牙鬼――こ、ここ、此方…て、てて…手の鳴る方に…ま、まつ…り――」
大妖魔――蒼牙鬼。
悍ましく醜悪な姿を曝け出す鬼は、獣交えた声を発し、何度もガツンと大剣で地面を叩いていく。
「クッ…こんな大妖魔を相手に足止めになれるかどうか…危うい状況から更に叩き潰すような絶望感……どうやら、ここまでらしい…」
息が上がり、頭から血を流す閃光は傷口を抑えながらそれでも、最後の悪足掻きをしようと全身に力を入れるも――
「おマえ、後――」
妖魔から意外な言葉が発せられた。
蒼牙鬼はくるりと体を囚人たちに向けて――
「待て！お前の相手はわた――」

「み、皆んな――死ね。殺す、壊す」
妖魔術――【魂沌惨撃】
混沌ある死者の魂を込めた斬撃が、一線振るわれる。逃げていく囚人達は背を向けず走って行き、此方が攻撃してる様子さえ見えていない。
だが…
「お前たちしゃがめ!!」
閃光は喉が枯れる程の声を振り絞るものの、囚人達はその前に後ろを振り向く。
もう既に斬撃が振るわれているにも関わらず、大勢の囚人達は反射的に背後を見てしまい、既に避けきれない距離に達していた。
「危ねえ――!!」
しかし勘の鋭い志久万は、危険察知し自ら倒れるよう、隣にいた光里と目前にいた守と勇希を押し倒す。
「「きゃっ!?」」
「うわっ!」
ドサッと、倒れ間一髪で避け切れる事に成功した四人。しかし次の瞬間は血の雨が降り注ぐ。
真っ赤な液体が、四人の体を濡らせ、志久万は全身の毛皮越しからでもその気色悪い感覚に寒気を感じた。
「あ…あああ……そんな、皆んな……」
「嘘……でしょ?」
光里は涙を零し、絶望の声色で呟やく。
勇希も、目を丸くし今の現状を受け入れれず、脳が追いつかない。
「イヤあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ!!!!!」
見てしまった残酷な光景。
大半が斬撃により吹き飛ばされ、見るも無残に原型を保てないまま惨殺され、もう大半が上半身が切り飛ばされ、切断された下半身からは血の噴水が吹き上がり、真っ赤な血のシャワールートと化していた。そんな血の雨に、まるめ女神の光を浴びるかのように、生きてる心地を実感する蒼牙鬼は「ヴオォォォォォォォーーーーン!!」と喜び鳴

いている。
「そん…な、私は……」
守れなかった。
月光が、柊が、託してくれた想いを…皆の命を守り、外へ出そうとしたその希望は、非道な妖魔に成す術なく摘まれ、潰されてしまった。
「守れ…なかった……」

血飛沫を浴びながら、それでも震える手は止まらない。
自分の失態に己を自虐したくなってしまう。
それも無理はない、この大妖魔はかれこれ２００年近く生きる化け物――カグラを殺めた数は３４人。一般、忍を含めた虐殺は数百も下らない、文字通り生粋な〝殺人鬼〟である。
とても、閃光でも歯が立たなかっただろうし、月光との連携でも倒せなければ、八神柊がその場にいても同じ結果だった。
少なくとも…この妖魔は並みの戦いでは絶対に殺すことは不可能なのだから。

何たる理屈、何たる理不尽、暴殺の象徴である。

「クソ……――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーッッッ!!!」

閃光のこれまでにない激情は、弾ませる怒号は、長い付き合いをした親しい月光にも見せたことがない。
守れなかった不甲斐なさ、誰も救えなかった愚かさ、何よりも手も足も出ず簡単に虫の息にされてしまう己の弱さに呪いたくなってしまう。
「秘伝忍法――【猛虎襲・真打王】!!」
虎の化身が怒りの牙を剥き、忿怒の拳を何度も蒼牙鬼の身体に打ち付ける。その硬さは尋常ではない、まるで鉄を何百倍にも凝縮したような装甲は、カグラでさえも傷を負わせるのに一苦労掛かるだろう。

それでも閃光の強さは引けを取らないし、とある伝説の忍の孫でさえも対等に渡り合える強さだ。
それでも蒼牙鬼は何の表情を変えず、ゆっくりと閃光を見下ろす――
まるで小さく駄々を捏ねる幼稚園児を見てる感覚に近いその様子は、明から様に相手を舐め腐っている証拠だ。
「ガアアアあああああぁぁぁぁぁぁ!!!」
それでも閃光は止めない、止まらない。
こうでもしないと己の弱さと不甲斐なさで身も心も押し潰されそうになってしまう。それ程の衝撃を目前で体験したのだ。
確かに自分は忍だ――善忍とは言えど、時に任務の命令であれば如何なる道理であろうと他者の命を奪う汚れ仕事さえ担われてしまうのだから。
中等部とは言え、月閃直属の血を継いでいる以上、月光を除き他の生徒より一段早く覚悟を決めている。
それでも…それでも、この妖魔の悪行を許す訳にはいかない。
そもそも通常の妖魔とは違う、だからこそコイツだけは何が何でも討ち倒さなくては――
「お、お前モ…祭りの、供物か？」
そんな彼女に、淡々と質問を送る蒼牙鬼。
「黙れえぇぇ!!!」
「……」
人語の半分が余り良く聞き取れなかったのか、単に怒りで我を忘れる程の猛攻を出してるからか、上手く内容が耳に入らないが、取り敢えず何か駄弁ってることだけは解る。
「もウ良い、死ネ――」
ガガ…と、肩が動き出す。
死を意味するその亡者の大剣を掲げ、叩き斬るかの様に振るわれる。
「死ぬのはテメェだろうがぁぁ!!」
ドン――ッ！と、蒼牙鬼の巨躯に体当たりし、バランスを崩したの

は志久万。お陰で閃光は無事攻撃を喰らわず、死ぬことを免れた。
「ギギッ…？」
「お前は…」
「チッ、たく…んな胸糞悪いモン見せられて、俺だって黙っちゃいねーよ。ガキんちょが胸張って命賭けてるのに、大の大人が動かなくてどーすんだってんだ。お前だけでもコイツら連れて逃げろ――」
「はっ――？」
「間抜けな顔すんなよ、分かり易いように言ってやる。俺が時間稼ぐからアイツら頼んだってことだ…」
「お前…意味が分かって言ってるのか？死ぬんだぞ…？」
「そりゃあお互い様だろうに…けどな、ぶっちゃけ俺はもうヘトヘトだ…碌なもんが食えなかったし、体力だってほぼ無い。それなら怪我はしてるが体力があるお前なら何とか逃げ果せれるだろ？心配すんな、俺がワイルドヴィランズの人間だって聞きゃあ心配はねえだろ？」
「なっ――!?お前…が？あの……」
どうやら閃光はあの組織のことを知ったらしい。
キュレーターを中心にしたあの犯罪組織の一員が奴隷として囚われていたとは…
「よォし久し振りのシャバだ。何ヶ月ぶりかな、殺し合いの喧嘩するのはよ――嬉しくて泣いちゃうね」
「だめだよクマさん!!」
既に決死の覚悟を決め、腹をくくる志久万に制止の声を投げたのは光里――同じ牢獄で囚われてた小さな女の子である。
「クマさんいっちゃヤダ！死んじゃうよ!!」
「……」
それでも、志久万は止まらない。
彼女の泣き叫ぶ声、閃光は歯を食いしばり、辛く苦しそうに、表情を歪ませる。
ワイルドヴィランズ――正真正銘、外道たる犯罪者が集団として作り上げられた組織は割と有名で、前はオールマイトが壊滅させたと聞

く。
正義の誇りとして、当然ワイルドヴィランズとは我々の敵にも値するし、逃亡犯であるなら普通は捕らえるべきだろう。同情の余地は無いし、何も殺生は働かないが、庇う理由など何処にもない。
……だけど、見殺しには出来ないじゃないか。
コイツがどう言う経緯で自分たちを庇うような善人になったのかは知らないし、恐らく何からの理由で改心でもしたのだろう…
そんな元犯罪者を置いてくなど、自分には出来はしない。
幾ら任務に従う為に如何なる手段を使うのが忍としての常識だと頭の中で解っていても、逃す人間を盾に使うなど、あってはならない。
いや、そもそも妖魔を前に犯罪者とかそういう理屈さえどうだって良い。
「邪魔ヲを、ズルなぁァァーーーッッッ!!」

ザシュッ！と突き刺す音に、一同は総毛立つ。
志久万も声が途切れてしまい、空気は不気味に静けさを保つ。全員目を疑い、眼に映る光景に息を呑んでしまう。
誰もが終わった――と思った。
心臓が突き刺さり、血の噴水共に絶命してしまうのだと。だが、終わらなかった――

「間に合った……!!良くやったわ呪々!!」

志久万を庇い、押し倒し、急死に一生を得た志久万の前には、傀儡の呪々。月光が愛用していた傀儡が、ラファエルが彼女を逃げさせるように促してくれたお陰で、命を救うことが出来たのだ。
――最善を尽くした選択肢が、まだ犠牲を産んでいない命を、守ることに成功し、助け出すことが出来たのだから。

7話「Demon brother festival」

騒ぎが起きてから数十分。
デー門は役立たずの部下達が襲撃者に襲われ、囚人達の脱獄を図る者達を始末するべく、予想を立てて隠し通路を使い出口へと通っていく。
なに、工場の地下はアジトとなっており、構造もかなり複雑だ。この基地の把握は新人の従業員だって二時間は迷ってしまう仕組みとなっている。更なる地下は蟻の巣窟となっているのだ。
隠し通路は一本線で直接、出口に到達するようになっているので、そのまま真っ直ぐ進めば出口に出てくる者達を焼き殺せば問題ない。
相手がどんな強者だろうが、陽花よりかは何百倍もマシだ。嘗て第5支部を担う曽呂門が陽花に潰されたことでタナトス送りにされてしまったが…アイツが死んでくれたお陰で暫くは安泰となったのだ。それが、今では襲撃を食らう事態…直々に引導を渡してやろうと思い、通路を渡っていたのだが…
「秘伝忍法――『変身(トランス)・流星鉄球』!!」
軍隊を連想とさせる黒服、携帯武器やらポーチ、防弾防御に武装した白髪の女性は、純白な髪を無数の黒鉄な棘鉄球へと変身させ、流星の如くデー門に襲いかかる。
「…珍しい秘伝忍法、だな!!」
掌から炎の火焔玉を飛ばしていきながら、モーニングスターを相殺するように、的確に狙いを定めていく。鉄球は炎を弾き、熱が髪に伝

うことはなく、攻撃の嵐が止むことはない。
これを一発でも喰らえば無事では済まないと判断したデー門は、苛立ちに舌打ちをし、横へと飛び出す。
「秘伝忍法――【インフェルノ・ケイオス】!!」
反撃として掌から灼熱の獄炎を放出する。悪魔の姿をしたデー門は、怒りと微かな恐怖に嫌な汗を流しながら、手を休むことなく秘伝忍法を連発する。
デー門の忍法術は獄炎忍法。素の力では紅蓮の焔とでさえ対等に渡り合える上位互換の忍法は、万物を焼き払う地獄の業火。これならば、攻撃が幾ら飛んでこようと関係あるまい。

「……」

すると姫と呼ばれる女性が白髪の女性の前に庇うように立ち、手を翳した途端――眩い光が空間に終結し、地獄の業火を相殺する。摩訶不思議な能力は、原因不明にして解析不可能。今度は無数に浮かぶボール型のドローン機器が、紫色の光を放ちながら、電撃のレーザー弾を飛ばしていく。
「チィ…ッ!!我の秘伝忍法を、こうも…」
デー門の目前に佇むは、二人の侵入者――『Dースクワッド』
微かだが噂で聞いたことがある…嘗て超常黎明期より昔…日本による空襲や戦争が絶え間なく続いていた時代から存在していた、国家テロリストの犯罪集団。殺すことに特化しており、忍や敵とも違う新たな枠組――スクワッドとして、危険視された存在は忽然として活動が絶え、今となっては都市伝説として扱われた、歴史の闇。
それがどう言う訳か、自分たちに矛先を向けている。
因みにこの二名とも名前が不明――本名どころか、ネームドさえ明らかにされてない。
「ガキ風情が――調子に乗るなあ〝あ〝ぁ〝ぁ〝!!!」
とてつもない怒号を叫ぶデー門は、魔道書から魔法陣を発動させ、秘伝忍法を溜めている。

刹那、漆黒の通路は爆破と炎で全て飲み込むかの如く支配していき、通路の一本道は豪炎に満たされる。
コイツは、秘伝忍法を叩き込んでも無害だった。見たことのない術で次々と自分の忍術を相殺するこの女……忍術とも言えず、かと言ってチャクラとは違う…。個性とも違う、それはまるで――絶恵勇希という異常な存在に似た雰囲気を兼ね備えていた。
「【ディバインズ・フレア】…絶・秘伝忍法ならどうだ？」
翼で全身を覆い守っていたデー門は、翼を広げて煙状の通路に佇み人影が無いことを知るや否や、ふぅ…と一息吐く。
どうやら、今度こそ跡形もなく消し去ったようだ。
「とんだ時間をロスしてしまった…早く侵入者を始末しなければ、此処だけじゃなく我も危うい…」
時間は有限。
敵は未知数。
情報は無い。
部下は使えない。
幹部さえいれば問題はないこともないのだが、何しろ妖魔を製造する担当なので、売買ルートでもない限り幹部は派遣されないのが決まりとなっている（そもそも幹部と称する程の実力者も多くはない）。
それに幾ら相手が子供とはいえど、決して甘くはなかった。服は銃弾や刃物で破けられており、皮膚からは出血が溢れている。デー門も強さとしては申し分ない…にも関わらず、殺すこと…其れに特化したあの二人は洗練されており、とても強かった。手こずったとは言え、流石はあの有名で滅んだと言われたDースクワッド――得体が知れない。
だが、なんてことは…
ダァン！ダァン――!!
刹那、背後から何発もデー門の背中に銃弾が撃ち込まれた。

「ッ――!!?」

血反吐を吐き、威力の高い銃弾に思わず前のめりに倒れてしまう。焼ける様な痛みと、経験し難い未知なる激痛に、脳への痛覚が極限に働き、身体の自由が効かなくなった。

「な……にっ…!?」

ガハッ!と、酸素を吐き出される。

背中に重い足が踏み込まれ、首筋には銀白としたブレードがヒヤリと当てられる。

「バカだね本当……最後の最後まで油断するなんて。死体が残らないほどの火力を出したからといって、敵の数が未知であること、戦闘が終わっても気を抜くなって、教わらなかった?というか貴方…本当に第四支部長?偽物とかじゃないよね?」

心底、呆れた様に愚痴を溢しながら冷徹な瞳で蔑むのは、白髪の女性。燃やしたと想定した筈の二人は、全くの無傷で、火傷後もなく、暗闇から姿を現した。

「な……かはッ…ひゅっ……!」

然も舌が回らず、呂律が回らない。

身体に力が入らなければ、秘伝忍法も発動できない…掌から炎を出そうにも無理なのだ。まるで忍術を封じられたかの様に。

「い、いやぁ…やりましたねぇ……『体刃(たいば)』ちゃん!それにしても、廊下のコンクリートが溶けちゃってるほど焼けちゃってますよぉ……これ、もしまともに食らってたら私達、死体の焼き肉盛り合わせみたいになっちゃってましたねぇ……えへへへ…」

そして三人目に姿を現したのは、見たことのない女だった。ボロボロの帽子からはみ出てる水色の髪…ポニーテールは腰まで届いており、おどろおどろとした口調で、根暗そうに呟いている。

愛用のスナイパーライフル『セルフ・トーチャ』を抱き抱えており、銃口から硝煙の香りが漂う。

「助かったよ『黎子(れいこ)』――良いタイミングで撃ってくれたね、お陰で面

倒な事せずに楽に殺せるよ」
「えへへ…その、御礼を言うなら『多摩子』ちゃんに……貰った銃弾が役に立てて良かったです……『神経毒』『忍術封印弾』『猛毒弾』…これだけあればある程度、人って簡単に殺せちゃいますもんね……えへへへ、隠れてて御免なさい、大人ってやっぱり怖いですね……自分より格下だからって理由だけで、直ぐに殺そうとしちゃいますもん……私たちも現在進行形で殺そうとしてるので、あんまり強くは言えませんけど……」
待て、この女――一体何処にいた??
気配、姿、影さえも確認できなかった…まるで突然そこに現れたかの様に、急に存在を現した『黎子』と呼ばれる少女に、眼光を飛ばす。
「う、うわぁ……物凄い鬼の形相でこっち睨んでますよぉ!?つ、辛いですよね…？苦しいですよね…？大丈夫ですか？なんて……えへへ、へへ…そ、それもそうですよね……私達スクワッドのような底辺の、生きることすら烏滸がましい…何から何まで無価値なゴミ虫以下にやられちゃってるなんて…それこそ絶望的で、もう生きてることが恥ずかしくて、苦しくて、辛くなっちゃいますよね……あへへ…えへへ……」
……この腐れた言葉を漏らす根暗女を焼き殺したい衝動に駆られながら、憐れみな目で、自虐的な笑みを溢しながら目を逸らす彼女に、怒りが沸々と湧いてくる。
然もなんだ？色んな銃弾…だと？
「あ、姫ちゃんこそ有難う御座います！流石は私たちの姫ちゃんです！絶・秘伝忍法を簡単に消しちゃえるなんて…!!」
あの絶・秘伝忍法を消した？恐らく秘伝忍法を相殺させた、不可思議で未知な光の能力のことだろうが…あれは絶・秘伝忍法をも帳消しにすることが出来るのか？
いや、そもそもあれは一体なんだ？
「……」
「ほら、黎子――姫と話すなら基地に戻ってから。姫のことが色々とバレちゃうと私たちが『先生』に殺されちゃう…それは姫も望んでな

い、そうでしょう？」
「……」
「あ、あうぅ…す、すみ〝ませぇん〟…うわぁぁぁん！どうせ殺されるならこの大人の稼いだ資金を盗んで三人で死ぬ前にワックでお腹いっぱいご飯食べた方が良いですよぉ!!此処に来る前に『ワックドナルド』という初めて見るお店があったので、是が非でも死ぬ前に……えぐ、ひっく…！うわあぁぁぁぁぁぁ〟あ〟ぁ〟ん!!!」
泣きべそ掻きながら、大声で訳のわからんことを発狂しながら大声で喚く黎子とは裏腹に、こくこくと頷きながら姫と呼ばれる少女は手話でジェスチャーを送る。
「え？妖魔が上で暴れてる？かなり危険なやつ……基地が崩壊？分かった、なら脱出しよう。標的を殺してから…」
「ゲホッ!!ゴホッ…!!!」
デー門の口から大量の血と粘液が嘔吐される。どうやら猛毒がかなり早い段階で回ってる様だ。どの道コイツが死ぬことに変わりはない…毒で蝕まれ、みるみると死ぬのも遅くはないが…万が一のことがある。
徹底的に――標的を仕留める。それが、例え自身の手が犯罪に血を染めようと…
「…アンタはさ、私たちのこと下に見てたけど…知ってる？子供って、大人を簡単に殺せるんだよ。紛争地区で駆り出された幼少期の兵隊が、手練れの軍人を殺せたって……知らないか。忍術とか、個性とか、この世に溢れた超能力は、所詮人殺しを手助けるオプションにしか過ぎないんだよ。大事なのは過程とか、能力とかじゃない――明確なる殺意だ」
それを、私たちは子供の頃から、殺されるほどに覚えさせられた。
「じゃあね、幾らでも恨んでも良い――なぜなら、全ては無意味…何もかもが意味なんてこの世に存在しないのだから」
肉を斬る血飛沫、鈍い音が静かに響くと、通路にはデー門の想像を

絶する絶叫が支配した。

灼熱の炎が空間を焼き、息を吸うたびに肺が焼かれる様な感覚が、不快感を漂わせていた。

赤鬼怒とラファエル――地獄の赤鬼と、楽園の天使の殺し合い。赤鬼怒は血を垂れ流しながら、鎧は剥がれ落ち、皮膚が露出され、右眼が先ほど光矢の威厳によって潰された。

一方でラファエルの制服は既に焼き焦げ、頬には擦り傷…横腹には抉れた傷口が焼き爛れている。両者共に一戦引かず、血みどろな戦いが延々と続けられていた。

(これは…予想以上に手強いですね……腐っても、流石は大妖魔なるもの…。先程部位破壊した腕や顎がもう再生機能が働いている…)

大妖魔ともなれば攻撃が集中的に続かない限り、時間が過ぎれば再生を施すという厄介な身体機能がある。巨大妖魔のように、身体の規模やスケールが大きい場合は、大きさと実力に比例し再生機能が届かない場合もあるのだが…。

「ウ〝ォお〝ォォ〝おぉ〝……!!ちカ〝イ、チか〝い〝ソ〝ォ〝……!お〝、トうと〝ヨ……!キケ、ケケ…!!」

「多少、言語は喋れる様ですね…」

弟…というキーワードが聞こえた様な気もするが、混雑されたノイズの様に、聞き取りにくい汚い声だったので、判別出来なかったが…。

「キ〝ぬぬ〝ゥ〝!!ぬじゃらへ〝っ!…ン〝ォおぉ〝!!ま、ま〝っリ〝……お、ごッこ…!くキゃキ〝ャハ〝ッ〝!!」

「煩わしい…」

唾液がボタボタと床へ垂らしながら、奇妙な笑みを浮かべてケラケラ笑っている。赤鬼怒は何を余裕を持って笑っているのか、表現や心理、この大妖魔には読み取れない不可解な現象が存在する。

汚い穢れた笑い声、涎を垂らしながらケラケラと破顔う動作に、愉快感が煽られる。
「秘伝忍法――『星導のファロス』!!」
妖魔術――『熱灰道憎』
光を極限に集中させ、眩ゆい光源は熱を溜め込んでいく。光とは、言うなれば灼熱にも等しい炎と似た性質を持つ。炎は闇夜を照らし、周囲を暖めるように、光は電力や炎…太陽の光のように、炎の性質と似た本質を持っている。
灯台の光が、烈火の如く敵を射抜くと同時に、赤鬼怒は常軌を逸した大きな口から、大量の液体を嘔吐する。それは灰色のように薄汚れた、焦げ臭い匂いが漂い、吐瀉物は壁のように撒き散らし、『星導のファロス』なる光炎の矢を灰へと化す。凡ゆる強力な秘伝忍法も、武器も、能力も、全てを灰色の石化に変えてしまう。
光炎の矢は、形を保ち、パキパキ…と剥れる音を轟かせながら、無意味に、力無く崩れ落ちて行く。攻撃を読み取った防御技…からの全てを灰と石へと変化させる妖魔術を放った直後、自慢の巨骨大剣で一刀両断――ザン!!とした豪快に斬る音と共に、速攻で地面を蹴り飛ばし、間合いを詰める。猛撃を叩き込もうと、灼熱たる地獄の業火を二つの大剣に浴びせ込め、軽々しく扱いながら、縦横無尽に斬り刻む。
妖魔術――『鬼神・双炎無双』
「ッ…!!」
鬼神の如く、神速な剣捌きで空間に隙間無く、獄炎の斬撃を叩き込む。ゴゥ、ゴゥ…!!空気が震え、呼吸するだけで灼ける熱が肺を焼き尽くす。なので呼吸を閉じ、全集中…極限に意識を集中させ、タップステップな足取りで紙一重で避けて行く。それでも人間の身体というのは、避けるのに精一杯でも、回避不可能な位置からの斬撃は覆しようがない。
なので、一旦宙を舞うように思いっきり地面を蹴り、バク転する。華麗に宙を舞い、それは美しながら鳥のように、回避不可能な斬撃領域の範囲から外す。
「キ゛ケ゛ッ…!!?」

「避けようがないのなら、一旦離れれば良い――」
そこから構わず、回避と同時に光矢――トゥルムで眉間を狙う。それは決して狙ってやった訳ではなく、殺すのであればせめて脳天だろうと、そう解釈して光の矢を射る。
「ッッ…!!」
だが其れを、腕で払い除けた。
「何ッ…??」
赤鬼怒の行動に疑問が湧く。
今まで攻撃を喰らっても、決して防御しようとしなかった。まるで痛くも痒くもないと言わんばかりに、えげつない攻撃を被虐されても、攻撃の手を止まなかった。それなのに…角を狙った途端――急に防御をした。まるで狙って欲しくないと言わんばかりに…。
「…まさか、そういう事ですか…っ」
理解した。
恐らくこの大妖魔は不死身だ――幾ら攻撃した所で、この世から肉体が消滅するほどの猛攻を浴びせても、こいつは肉体を復元させて何度でも、何度でも何度でもやり直す。
だが、それは弱点を除けばの話――だが、まだ確証がない…。
ラファエルはそれを確認するために、再度光の矢を解き放つ。弦が僅かに揺れると共に、光で生成された矢が数本、角を集中砲火する。それを体剣で防ぎ、身を守る。
「……なるほど、理解しました…」
間違いない、この大妖魔はどう言う訳か鬼の角を折られるのを非常に嫌がっている。つまり、弱点は角であり、それさえ折ってしまえば無力化する事が可能と言う事だ。角以外ならどれだけ攻撃を受けても無意味となってしまうが、逆に角さえ狙って折ってしまえば造作もないこと。
「ウ゛ッ、ウ゛ぉあ゛ア゛ぁあア゛ア゛ぁ゛あ゛ぁぁぁ!!!!!」
けたたましい大怒号が空気を震わせ、空間を轟かせる。痺れる大咆

哮に、鼓膜が破けてしまいそうな音量…恐らく角を狙ったことが、返って逆鱗に触れてしまったようだ。
あれだけヘラヘラしてた赤鬼怒は、文字通り怒りを根源に露わにし、灼熱の炎が更に熱を浴び、熱量が上昇する。
「矢張り…正解ということですか！」
微温湯だった戦闘は、弱点証明…赤鬼怒の消滅の危機を理解した途端――状況は烈火の如く、地獄の業火と化す。
剣を軽く振るうだけで、廊下は灼熱の炎へと焼き尽くし、退路を防ぐ。触れるだけで火傷どころか、骨をも焼き焦がす大灼熱地獄…どうやら、地獄の赤鬼は、逃がしてくれなさそうだ。
選択肢を誤った？いいや、違う――もし此処で帰還してしまえば、折角救われた囚人達も、託した月光や、精一杯死守してくれてた閃光の努力を無駄にしてしまう所だ。
「どうやら…逃がしてくれなさそうですね…」
これは鬼ごっこではなく――お兄さんの遊戯。周りは炎の檻となり、周りを囲む。攻撃を退け反撃を行うか、地獄の炎へと弾かされ、消滅の末路へと行き届く、火ノ相撲となるか…発気揚揚、遺った！

赤鬼怒とラファエルとの鬼ごっこ遊戯が本格的に始動してから、閃光と蒼牙鬼との邂逅…最悪な結末を防ぐために、投げられた賽は、窮地に赴き最善たる行動に赴いた。
「月光！ラファエル様は…」
「それが…赤鬼みたいな妖魔と対峙してるわ…！忍務は一時中断――優先事項である囚人達を助けて逃げてって言う命令が……それに、此処にも大妖魔がいるなんて…しかも今度は青い方…?!」
「なっ……!?」
こんな化け物が、もう一匹存在して、しかも単騎で挑んでいると言

うのか？流石は上位の位置に属する優秀で、才能あふれるお嬢様なことだ。だが同時に流石は優秀な忍…と、思う反面――本当に任せてしまっても良いのか？助けに行かなければ危険なのでは？と、安心と不安の矛盾した思考が芽生えてしまう。

「ウギギ…！ギャバばぁぁ〝!!」

ゾワッと、ドライアイスを背中に浴びせられたような、寒気立つ声が聞こえた。殺気を孕んだドス黒い声だった。

目の前に、鬼の形相を表した蒼牙鬼が、大剣を握りしめている。

「く、くく、供物のおお〝オォ〝!!テ、てて、手助けヲおをぉぉ、するナあぁぁぁぁぁアアアアーーーーッッ!!!」

目の前で殺して良い、壊されるべき命に、救命しようと手を尽くす彼女に猛激怒する蒼牙鬼は、怒号を飛ばす。鬼の怒りの矛先を向けられ、平常を保てず、可笑しくなりそうな、吐き気をするような衝動を無理やり殺す。

「バッ――逃げッ」

志久万は苦虫を噛み殺すような焦燥の顔を立て、逃げろと促す。

だけど心の何処かで「無理だ、もうお終いだ」と呟いてる自分もいる。

先程まで逃げ切ることも叶わず、図体似合わずスピードは桁違い。見かけ倒しとは正にこのことを言うのだろう、兎に角この鬼から逃げ切るなんて話は、非現実的な話なのだ。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーッッ!!!」

虎にも負けない咆哮と供に、破壊と拳の連打する衝撃の音が、絶える事なく続いて行く。

重火器射撃で撃ち尽くす様な擬音に、蒼牙鬼の身体は停止する。後ろを振り向くと、背を何度も殴り続ける閃光が、血を流しながら手を休む事なく食い止めている。

「お前達さっさと逃げるんだ!!私が食い止めている！この命、お前たちの為にも…!!」

囚人達は予期せぬ妖魔衆の襲撃に成す術なく、虫ケラの如く無惨に殺された。だけど…まだ生き残りがいるのなら、せめて逃げ果せて欲しい。

最も最悪な事態に招き入れるのは、全滅だ――

誰一人も救えず、そして自分達も死ぬ事は、命を無駄に捨てる行為と同じ意味になる。ならば、せめて…生き残ってる人間だけでも…

「ア、アに者…い〝るゥ〟…お、オまエ〟！ち〟ね…っ！邪魔、ス〟るな〟あ〟ぁぁ〟ぁ〟ぁ〟ぁぁぁ――!!!」

蒼牙鬼への猛攻の拳は、銃弾の嵐として叩きつけられて行く。蒼く硬質化された装甲は決して汚れることも、凹むこともなく傷一つ付けられない点然し、それでも邪魔ばかりする閃光が煩わしく思ったのだろう。気に食わない邪魔者に腹が立ち、けたたましい叫び声で喚く。

乱打する殴拳を、一払いするかのように腕を振るえば、ガトリング乱射のように拳の嵐を叩きつけていた閃光が大きく仰け反る。その隙を狙うかのように、同時に巨大な骨の大剣を首元目掛けて振るいかける。

「秘伝忍法――『リフレクトミラー』!!」

閃光の叫びと共に、円を描いた写鏡は盾のように閃光と蒼牙鬼を隔て、振るわれた大剣は自身へと跳ね返るようにカウンターを喰らってしまう。

「ボギャッ…!!?」

リフレクトミラーによって反鏡された物理的な法則は、そのまま自信へと跳ね返り、勢いよく振るわれた斬撃は自身へと叩き込んでしまう。人を呪わば穴二つ――相手を恨むこと、相手への怨念は自分達へと返っていくように、呪術に関してある程度知恵が働き、呪いに関して勉学を通じた月光だからこそ編み出せる忍術。

「閃光！早くあの子達を…無事な人達を連れて逃げて!!」

「月光…！然し…お前だけアイツを相手にするのは……!!」

「分からないの!?死人が出てるのよ!!?あの人が私達を託してまで、命を賭けて妖魔と戦ってるのに…私達がそれを紡がなくては、意味がないでしょう!!?」

かつて無い程の憤慨に満ちた震える声と、彼女の真剣な表情は、腹違いと言えど、双子だと勘違いされることが多い姉妹仲だとしても、初めて見る激情。

月光だって充分に怒っている。

何せ折角…いや、遂に救われたあの人達…囚人達が、まるでさもゴミでも斬り捨てるかのように、特別何の意味もなく虐殺進撃を進める殺人鬼の蒼鬼に、怒りが湧いて来ない訳がない。

漸く救われたと、希望への渇望に満ちた瞳が涙を流し、生きる意味をやっと見つけ出した囚人達を、コイツは意味不明と体現せざるを得ないように、殺したのだから。

「…っ、すまない…!直ぐに、直ぐに戻るからな!!」

出口まではそう遠く無い。一旦囚人達を安全な場所へと避難させてから、直ぐに月光の下へと赴けば、まだ希望はある…。何より、今優先すべきことはコイツの討伐ではなく、忍務の根幹である囚われた人間の救出。それと同じく妖魔討伐も大事ではあるが…何より、無罪で苦しんだ人達を救出する方がより大事なのだから。

「ええ、任せて――その代わり、もし忍務から戻ってきたら、沢山着せ替え…ごほん、試作の衣装を着せちゃうんだから…」

…今、着せ替えという単語は聞かなかったことにしよう。

大丈夫――全員死んだ訳ではない。幾ら憎まれ口を叩かれようと、構わない。今最も優先し、死守せねばならないのは…この人達囚人の命であり…。

「皆さん!出口はもう直ぐです…!!あと少しですので…!!」

「し、死人が出てるのに…!これ以上どうなるっていうんだ…!?」

「なぁ、俺たち助かるんじゃないのかよ!!?」

「どうして私達…!こんな目にばっか遭わなきゃいけないの!!?」

閃光が先頭に走り、取り乱れ混乱する囚人全員を引っ張るように声をかけるも、目の前に映る現実を飲み込めず、現実を否定するかのように意を唱える者達は、段々と希望から絶望へと反転していく。

先程まで統制が取れていたのは、助かるかもしれないという、夢にまで見た希望の光だった。

それが今、目の前で人が簡単に殺されたこと、異形で気色悪い、理解不可能な化け物の存在に、囚人達は混乱してしまう。
「アンタ達は俺たちを助けてくれるんじゃなかったのか!!?人が死んでんのに…!アンタの言うことなんて信じられるか!!」
「ちょ、ちょっと皆んな落ち着いて…!」
「アンタも見ただろ!?君と変わらない子供が、無惨に殺されたんだ……!首が、と、飛んで…!!」
「何なのよおぉぉ!!私達が何したって言うの!!?」
混乱から憤怒へと移り変わり、絶望渦巻く中で段々と統制は消え失せ、破滅へと導くかのように、怒りと醜い言い争いへと渦巻いていく。勇希が何とか囚人達を落ち着かせようと声を張るも、それも帳消しにするかのように掻き消されてしまう。
「わ、私はただ…」
「勇希…」「勇希ちゃん…」
「其れに関して…甘んじて批難は受ける…だが、今直ぐにでも此処から脱出しなければ…!それに今こうして言い争ってる時点で!!あの化け物はお前達を…!!」
「それでもあの子達が殺されたことに変わらねえだろ!?それによぉ！助けが三人しか来てねえってどう言う意味だ!!?どうせ助けるなんて名目で、本当は俺達を騙してたんじゃねえのか!?あの化け物の味方で、俺達を殺させるための…」
「オイ――」
すると一人、閃光と月光に対して罵詈雑言を吐く中年の荒々しいおじさんの肩に、重くて痛烈な感覚が襲い、身体が強引に声主へと振り向かれれば、思いっきり胸ぐらを掴まれる。
「マジで良い加減にしろよテメェ、何様のつもりだ…???」
それは尤も、この囚人達の渦巻く混乱の中…冷静でありながら身勝手で醜い欲と本音を曝け出す周りの連中に、業を燃やすのは…月光のお陰で救われた志久万だった。
羆の威圧が、怒声が、眼圧が、先程まで捲し立てるように責めてた囚人は、冷や汗を垂らしながら萎縮し、ただただ棒立ちしてしまう。

「このガキンチョ共が俺たちを助けるために命張って戦ってたのが分かんねえか!?あ〝ぁ…!!?殺したのはあのクソ鬼で、コイツらは俺らを助ける為に命懸けで助けてくれたろ!?恩を仇で返す真似してんじゃねえぇ!!それとも何かぁ〝?おめぇはあの二人の代わりに化け物倒してくれんのか?肉壁になって少しでも俺らの手助けになるってか??そんな度胸もクソもねぇくせに、ガキ以下のようにピィピィ喚いてんじゃねえ〝!!テメェ大人だろ?だったらこう言う時こそ大人らしいことしてみせろクソハゲ…!!!下らねえ譫言吐いてる暇あんなら、その足動かせや!!受けた恩くらい、自分で恩を返せや!!!」

「あ〝…は、はぃ……はひゅ…」

志久万の正論に、ぐぅの音も出ずに完全に媚びるように恐縮する中年の男性。幾ら自分たちがパニックになり、正常な判断が出来ず、こう言った非現実な現象に戸惑うからといって、助けてくれた者達を非難するのは話は別だ。

「クマさん…!超かっこいい!!」

「……クソ共が醜い言い争いしてる間に、俺たち含めて全員殺されたって死に方が一番嫌なだけだ。あと腹が立ったのと……まあ、良い。それより早く逃げるぞ!」

それと、自分を助けてくれた嬢ちゃんの為にも――そう言葉を心に留め、カッコいいと言ってくれた光里の背中をポンと押しながら逃げるように催促する。

「すまない…いや、助かる!皆んな!先程宣告した通り、出口はもう直ぐだ!!辛いだろうが、もう少しでこの地獄のような惨劇も終わる!!持ち堪えてくれ!!」

元ワイルドヴィランズとはいえ、今となっては救出されるべき一人の囚人である志久万のお陰で、乱れ崩されかけた皆んなの心を一纏めにしてくれた。それにあの中で一番体力と根性があるのは、尤も他でもない羆の彼だけだ。その分個性による本質や迫力もあってより言葉の重みに説得力がある。それも月光のお陰で救われた、巡り巡った因果律なのだろうか。

殆どの人達が再び勇気を取り戻し、走り出すように一斉に閃光へと

続いていく囚人達。一時はどうなるかと思ったが、これで……――

「ヴォォッ…!!」

すると突然――先程まで月光と死闘を続けていた蒼牙鬼は、彼女のことなど気にも留めず、何ともないように大きく地面を蹴り、跳躍する。蹴られた地面は大きくクレーターのように凹み、囚人達の列や閃光を飛び越え、出口を塞ぐかのように立ち塞がる。

「……は？」

何か勘違いしていたようだ。

蒼牙鬼にとって殺す順番などどうでも良い――ただただこの虐殺な鬼ごっこにこそ自分たちの存在意義を創り上げる為のものであり、鬼の遊戯…つまり、虐殺進行こそ祭りの、己に課せられた宿命なのだと。

嗚呼――まさにこれは、この現象は、この鬼達による妖魔の行動は…『鬼さん祭り』だったのだ。

だから一々月光と真剣勝負だの、二対一だの、そんな誰かが勝手に作った解釈と戦法など、一々付き従う道理など、この蒼牙鬼にとっては一才どうでも良いのだから。

この姉妹がどう結論を述べようと、こちらもまた強引に自分自身の本質を、本能のままに従うまで。

妖魔術――『木っ端微塵』

巨柄な骨大剣を掲げ、低く構えてから斬撃の乱打を叩き込む。縦横無尽――撲殺、惨殺、殴殺、凡ゆる殺意を込めながら、勢いよく殴り付けにいく。

「がッ――は!!?」

無惨に大剣で嬲り殺すかのように、肉体を打ちのめされ、斬撃の嵐によって木っ端微塵に打ちのめされた閃光は、瞬く間に戦闘不能と言わんばかりに、血反吐を撒き散らし、忍装束は破かれ、重傷を負う。

「閃光ッッ!!??」

月光の絶叫が廊下に轟くも、虚しく消える。

ドサリ、と…力無く糸が切れた意思のない人形のように倒れてし

まった。対処が遅れてしまい、全身の痛みに苛まれながらも、何とか呼吸はしてる限り、生きてはいる。だがそれは先延ばしにされた延命にしか過ぎず、倒れていては殺される的になるだけ。

月光の判断は間違いではない――どちらかと言えば正しい選択をしただけのこと。その結果、コレを招いただけ。

誰かが悪いだとか、足を引っ張ったとか、そういう次元の話はどうでも良いのだ。

「ウ〝ぁあ〟ァ、お…やっト〝潰せ、せせ…た?こ、ここ、こちラ、手ノ鳴る〝、方へ……」

閃光が倒れ伏せたことを確認すると、頷く動作を見せながら、大剣を再び掲げ、首元目掛けて振り下ろそうとする。

「そんな…!」

「おい嘘だろ?!本気じゃなかったってのか?!こんなあっさり…」

「い、嫌…!ダメ…やめて!!」

勇希、志久万、光里の、希望が打ち砕かれた絶望の声色に、囚人達は更なる絶望へと突き落とされる。

最初っからこの鬼を倒すことなど、無理に等しい出来事だったのだ。

月光は全力で駆け走り、囚人達の列を掻き乱し、たった一人の血筋…同じ血縁の閃光を、妹を助ける為にも走り出す。

「む、ムた〝…あキ〝らメろ…お前ら、全員ち〝ネ!!アに者も、もウ直ぐ…来る〝!!」

赤鬼の兄、赤鬼怒がもう時期此方へと来る。挟み撃ちによる鬼ごっこの遊戯は、大妖魔である我々の勝利だと言わんばかりに、高らかに宣言する弟の蒼牙鬼――だがどの道間に合わない。

閃光の首をギロチンで跳ね飛ばすかのように、大剣という処刑の断罪が行われようとする。

「やめろおおぉぉぉ!!!」

だが其れは決して閃光には届かなかった。

「は…?え、守…?守?!!」

月光ではなく、結城守が、倒れ伏せている閃光の前に立ち塞がり、蒼

牙鬼の大剣を諸に食らってしまう。ザクッ――と、肉斬る音が響き、血の飛沫が噴き上がる。

鮮血は床のコンクリートに付着し、ベットリと広がっていく…そして、一人の悲鳴が赤黒い空間を埋め尽くした。

8話「パンドラの箱」

「守ッッ!!!」
血飛沫が宙を舞い、泣き叫ぶ声が辺りを絶望の色に染まらせていた。
鮮血は囚人服を朱く染め、色は広がり、守は口から血を流しながら床に倒れ伏せるよう、体を地面に打ってしまう。
「守…守ッ!しっかりしてよ……ねぇ!!」
勇希の瞳からは、涙の粒がポロポロと溢れ、止まる事を知らず、手を添える。
自分の囚人服の余った部分を千切り、傷口を抑えるよう止血を施す。小さい頃の保健の授業で習ったことが、此処で生かされるとは思ってもいなかったが…
「そんな、結城くんまで…!」
手で口を覆い、まるで現実から目を逸らす様に、目前の今を受け入れたくない仕草でも取る少女は、首を何度も左右にブンブンと勢いよく振る。
とても、これが目の前で起きてる惨状だとは思いたくないし、もしこれが夢ならば今直ぐにでも覚めて欲しい。
だけど、この世界に〝もしも〟なんて言葉は存在しない。それが有れば全員とも無事でいられるのだ。
「おい、おいおいオ〝イ〟…!!其れは…っ、ダメだろォ…!!小僧!!」
結城守の、決死の判断により身を挺して他者を守った結果の末路――背中はドクドクと血が溢れ、囚人服は真っ赤な血へと汚れていき、灼熱のような痛みが、絶え間なく守を襲う。
ヒーローでも、忍でもない一般人が、倒れ伏せた閃光を守る為に、自らを犠牲にしてまで壁となり、守ったのだ。
「オイしっかりしろ小僧!!お前が死んじまったら…オメェ…!!」

「だ、だめ……光を当てても回復しない…!!傷が、深すぎて…わ、私の個性が…っ」
　これ以上傷を汚れた床に付着させまいと、抱き抱えながら何度も必死に叫びかけ、光里は掌から発光させた癒しの光を傷口に当てるも、治癒は一向に進まない。光里優良の個性は、治癒能力にしては優秀な方で、多少の傷や出血は問題なく治すことは出来ても、肉体の多大なる欠損、深すぎる命に関わる重傷は治癒することが不可能なのである。
　守を治せないという自らの情けなさ、何より目の前で友人が苦しんで、死にそうなことに大粒の涙を流しながら、それでも治癒の発光はやめない。
「守！ねぇ守ったら!!」
「小僧！しっかりしろ!!まだ息はあるみてぇだ…なぁ、オイ!!聞こえるか?」
「守くん！死んじゃダメだよ!!ほら、私達がなんとかするから！ね!?」
　ポタポタと大粒の涙が零れ落ち、守の顔が濡れる。
　どれたけ呼びかけても、激痛に苦しむ少年の表情は崩れない。だけど、閉じてた瞼は開いたようだ。
「はぁ……はぁ……、ゆう…き?」
「守!!」
　呼吸は乱れ、朦朧とする意識を保ち、静かに少女の名前を呼ぶ守は、微かに目を開ける。
「しっかりして！守…ごめん、私が代わりに…貴方がこうなる前に…私が、あの人を庇ってれば…」
　とは言っても、今回の落ち度は誰の所為でも無い。
　閃光を庇って助けようとした結果、こうなってしまった事。誰が誰も責められる事では無く、状況としては最悪が重なった偶然。仕方のない事だ。
　だけど勇希はその事を〝仕方ない〟と片付けたくはなかった…自分を責めたりしないと、この悔やみ心の曇りが拭えない。気持ちの整理が付かない。

幸い少年の傷口は浅く、出血こそは酷いが臓器や骨には行き届いていないのが、唯一の救いだ。それでも袈裟斬りを受けたように、斜め右になぞるよう描かれた傷のラインは、見てるだけで生々しく痛々しいものだった。
「勇希……皆んな……よか…た……なんとか……ぶじ…で……」
「喋っちゃダメ!!貴方は重傷なのよ!?大人達から酷い拷問を受けて…それに、あんな悍ましい化け物にこんな傷をつけられて……」
自分の大切な人間が、親友が、大人に酷い仕打ちを受けるだけで無く、今度は妖魔に致命傷を受けてしまった。――絶恵勇希という少女にとっての、心の痛みは想像を絶するモノだろう。
この世の中、周りの人間全てが敵だった彼女に対し、唯一の味方でいてくれた彼がいなくなるのは、死ぬほど辛いことだろう。
「ギギ、ギギィ…ヴァルウゥゥ…!!」
深く血の色に染まった吐息が、勇希に当たる。
血生臭い、吐気を通り越す異臭が、鼻の奥につんざく。まるで血の油を何百年も溜め込んだような、反吐が出る匂いに喉が痺れそうだ。
「勇希ちゃん!後ろ…っ!」
「光里ちゃん、志久万さん」
今、自分の真後ろに立っている蒼牙鬼。結城守を、たった一人の大切な最愛たる親友を、滅茶苦茶にした蒼牙鬼は、今度は絶恵勇希に目をつけた。
「オイ!何してる!?早く逃げ――」
「二人共、守のこと宜しくね」
えっ？
彼女の返って来た言葉は、耳を疑うような意外な言葉だった。その言葉の意味が解らず、光里と志久万は困惑する。
「ああ…嗚呼……なんて、こと…こんな……」
閃光と守は辛うじて息はあるものの、其れでも一刻と死が近付いている事、自分が逃がせと言わずに一緒になって止めていれば…こんな結果にはならなかったのだろうか？月光は思わず涙を浮かばせながら、わなわなと震わせる。

勇希は三人に背を向け、顔を後ろへ振り向けば、光里に笑顔を見せる。
「私ね、あの妖魔にいい加減頭に来てたのよ……今こうして、私が平静で居られるのが奇跡なほどに」
表面上の笑顔の裏には、只ならぬ憤慨が燃えていた。よく見ると体は震え、手は強く握り拳を作っている。
今でも理性を保ててるのがやっとで、今すぐこの妖魔の喉首を噛み千切りたくて、もうどうしようもない程の殺意の衝動が、彼女を蝕んでいた。
「何、言ってるの?ダメだって!勇希ちゃんじゃ勝てないよ!!そもそも、あの人達でも…」
光里には理解出来なかった。
確かにあの妖魔には敵意を通り越して殺意と悪意を抱くのは自然だし、納得も理解も出来る。
怨むこと、憎むこと、憤ること、何も悪いことではない。大切な人を傷付けられたんだ当然だ。だけど…私情に心を支配され、挑むのは、果たして今やるべきことなのか?
それは、結城守が望んだことなのか?そもそもあんな化け物に勝つことなどあり得ないだろう。
否――冷静を保ててないだけで、本当は解っている。
守がこんなことする為に、庇ったわけではないことを。身を呈してまで彼女に仇を討って欲しいと願ってはないと。
ただ彼女が無事であることを、望んだだけだ…
だけど…こんなことをされて冷静になれるのならば、私情に心を呑まれる人間は苦労しない。
勇希の瞳は、鋭く狼にも引けを取らない眼光を放ち、妖魔を睨む。
…不思議な光景だ、忍ならまだしも一般人が恐ることなく妖魔に、況してや妖魔衆が睨まれるなど、蒼牙鬼本人も一度たりとも経験したことがない。
「よくも……」
「アギ?」

少女は低い声でポツリと呟いた。眼前にいる蒼牙鬼にも聞こえない、とてもとても小さな声で…

「よくも皆んなを…守を傷付けたわね!!

――ううあああぁぁぁぁぁぁぁーーーーーッッッ!!!」

瞬間、誰もが目を疑った。

蒼牙鬼の下顎が、ボトリと音を立てて落ちたのだ。滝のように溢れる赤黒い血が流れ、蒼牙鬼だけでなく、他の皆も目を丸くする。

いつからだ？

少女の手には血の色に近いピンク色の刃物の武器を握り持っていた。あのサイズ、武器の種類からしてブレードだろう。

「ギッ――!?!」

なんだこれは？

今、何をされた？下顎の部位から絶え間ない激痛が電流として駆け巡るかのように痛い。痛覚が働いている。

だって、目では追えなかったぞ？

「よくも、よくもよくもよくもおおぉぉぉ!!ぬあああああぁぁぁあぁぁあああぁぁぁーーーーーッッッ!!!」

無数の赤き閃光に、蒼牙鬼は切り刻まれるように、斬撃の痕を残しては痛手を負ってしまう。

自分が大剣を掲げる前に、彼女が先に手を出させまいと攻撃してるのだ。

「守に謝れ!!皆んなを傷付けたことも、頭を下げて謝罪しろ!!!貴方なんか…オマエなんかあああぁぁぁぁーーーーー!!!!」

二本の角を狙った瞬間、蒼牙鬼が初めて守りの態勢に入り、防御の構えを取った。まるでやめて下さいと言わんばかりに、大妖魔が一般人の攻撃を、防いでいる。

これは…余りにも信じ難い光景だ…周りの皆も唖然としてしまう

のは、この際無理もない。
「……何だ…あいつは……」
「あの子も…忍なの……？」
志久万と月光も、現実を受け入れられないと言った様子で、釘付けになっていた。確かに動きや武器の振り回しはがさつで下手だし素人寄りだ。だけど…あの立ち位置だからよくは見れなかったけど、あの少女、一体いつからあんな武器を持っていた？
個性か、或いは忍家系の子か…何方かは判断し難いが、この際はどうでも良い。
問題なのは、誰も手も足も出せなかった大妖魔を、彼女が圧倒していると言うことだ。
自分達が束になってもダメージを与えれなかったのに、あの少女は一人でああも容易く蹂躙してる。これは、余りにも馬鹿げた異常事態だ。
「……待て、何か様子が可笑しいぞ」
志久万は嫌な汗を流しながら、見守るように釘付けになっていた。嫌な予感…まるでこれからもっと最悪な事態になるかのような…ただの勘だ。だけどこの胸騒ぎ…彼女の激昂、大妖魔たる化け物が押されてる…これらの要素は不安を引き寄せていた。
そして、その不吉な予感は見事に外すことなく的中した――

「フゥー…フゥーー……」

息が荒々しく、白い息を吐く勇希の眼は段々と紅桜へと変色していく。何だろう？このドス黒い邪気の波動は…
まるで何かが、彼女の身も心も真っ黒に染め上げるような、気味悪い感覚…
何かに苦しむ彼女は、実を言えばもうマトモに動ける状態ではない。立っているのさえ奇跡で、蒼牙鬼に痛撃を与えるのさえ絶対にあり得ないのだ。

「……」
少女は腹を抱え、何かに蹌き、何かに耐え忍んでいる。
だけど…少しずつ彼女の姿は違う何かへと変貌を遂げようとしている。まるで蛹から脱皮したがる蝶のように…
精神が汚染し、朦朧とする意識、眩暈、頭痛、様々な発作が起こる彼女に
『お前ガ臨むモノを手にシタいのなラば…少しダケで良イ…箱を開けヨ――』

心の中で誰かが呟いた。
いや…声を〝かけられた〟という表現が正しいのだろうか、心の中でたった一つの、自分でも抱えれるような小さな箱がポツンと置いてある。
私は朦朧とした混乱する意識の中、無我夢中で手を伸ばし、箱を掴む。古く頑丈そうな、隕石が落下し衝突してもキズ一つ付かなさそうな得体の知れない歪な箱を、正気を失いかけてる勇希は開ける。
すると中には、黒く禍々しい邪気が、溢れ出した――

「グオオォォォーーーーーッッ!!」
ザン!
獣の雄叫びと供に、斬撃を振るう蒼牙鬼は、先程のお返しと言わんばかりに、攻めてこない勇希に大剣を振るった。
斜め右下に斬りつけた蒼牙鬼は、血狂った眼でもう一度自分を追い込ませた彼女に反撃を繰り返す。
溢れ出す少女の血を浴びながら、蒼牙鬼は大剣を振り下ろした。
「きゃはっ☆」

ガシッ！
突然――大剣が微動だに動かず、振り下ろす過程の途中で、自分の動かしてた腕は止まってしまった。
それと同時に、少女の微かな笑い声が聞こえた気がする。生まれて一度も、人間の笑い声を聞いたことがない蒼牙鬼にとって其れは、大変奇妙で不思議な声だろう。
「ウギギ…？」
少女の顔を、しかと見下ろす。よく見ると少女は邪悪な笑みを作り出していた。
紅桜色の瞳は不気味に輝き、黒の髪は白に変色し、ブレードを手に持つ右手は、巨大な刃に変貌を遂げ、左手は凡ゆる者を掴み取る亡者の手。この世の物とは思えぬ異形な手は、右手と同じサイズであり、全てを爪で裂くような獰猛な手をしていた。
囚人用のボロい衣服は消え、裸体とはなっているも、己の血が秘部を隠し模様が浮かぶ。
胸には悪魔の口、下半身は下着のパンツ、禍々しき魔の足、其れ等の人外混ざった異形な容姿は、嘗て人間だった勇希とは掛け離れた存在だった。

「ふふ……ふふふ……ははっ!!」
少女は笑う、嗤う、破顔う。
ただただ、嘗て勇希だった者ではない不気味な声で――
「アーーーッハッハッハッ!!キャハァァ!!」
ザシュッ、ザシュッ、ザシュッ――
肉斬る音は、蒼牙鬼を襲い、血飛沫が宙に舞う。赤黒い血は何百年も濁り溜まった穢れの血。閃光ですら砕くことの出来なかった蒼牙鬼の甲冑のような装甲は、そのラインをなぞるかのように、斬り裂かれる。
「ヴァァあァ゛っ!?アガァァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ァ゛ぁぁぁぁぁぁッッ!!!!!」

蒼牙鬼の想像を絶する叫喚。
以前の攻撃とは比べ物にならないその猛攻は、明らかに上回っていた。装甲は削れ、肉が見え、血を流す蒼牙鬼。
これは…明らかに可笑しい。コイツは人間なのか?そう疑わしい思想が芽生えてしまうのは、自然の流れだ。
「勇希……?」
血が広がり、苦悶に塗り潰された少年は、微かに見える少女の名を呼ぶ。守がこれまで見てきた少女の姿は何処にもない。人間の皮を捨て、化け物に成り果てた絶恵勇希。
顔や体は確かに彼女そのものだが、この血迷い狂ったような獰猛な容姿、言動、意味不明な言葉を叫び続ける彼女は、どう見ても今までの勇希とは違うし、こんな事は一度たりとも無かった。
「勇希ちゃん……」
「あのガキ…何がなにやら、どうなって……」
見たことも無い醜い化け物へ変貌した少女に、志久万は言葉を失い、光里は膝を折り、地面にぺしゃりと座る。こんな、こんなことってあるのだろうか?
「勇希さん…まるで、こんなの……〝妖魔〟じゃない…」
月光は絶句する。
今まで見たことのない光景、自分達でさえ大苦戦を強いられ、犠牲者まで続出させてしまったあの大妖魔を圧倒する少女の歪な姿、それらは確かに、その場の空気を沈黙させるのには相応しい。
これは…覚醒か?
確かに其れらしき気も感じ取れれば、そうでもないような…そんな答えに行き届かない曖昧な感覚…
「おぉ…あのか弱き偏愛の少女は、神を宿す器だったと言う訳ですか」
屋上の遥か遠く――忍商会第四支部のアジトとかけ離れた夜景のビルから、屋内の様子を見届ける人ならざる者。考古学者のコートを羽織る、首のない不気味な非現実性。そして虚な身体を代弁とする気優しい男性の顔を象徴とする絵画。

驚嘆な言葉を漏らす不気味な遺影は人の顔が写されており、作品である絵画は、絵の中で不思議そうに表情を動作として働かせている。
「多くの魔術者達は、苦難や試練…そう言った物語の葛藤や過去、作品に於ける必要不可欠な要素を乗り越え、ほんの一握りによる者が、希望(神秘)に至りますが……私の作品から導き出した答え――貴女が手にしたのは神秘ではなく、絶望(恐怖)でしたか」
――忍には、覚醒と呼ばれる物が存在する。
類い稀なる存在に宿る特別な力は、常忍よりも遥かに凌ぐものであり、有るか無いかで全てが決まる者も、時には存在する。
――飛鳥と呼ばれる半蔵の生徒には、真影。
――焔と呼ばれる蛇女の生徒には、紅蓮。
――雪泉と呼ばれる月閃の生徒には、氷王。
――雅緋と呼ばれる天竜衆に立ち挑んだ生徒には、深淵。

しかし、勇希と呼ばれる少女のコレは覚醒とは似て非なるモノ…

――絶望である。

そして少女の中には、妖魔が眠り宿っていた。
今まで数千年は眠れるであろう、閉じられた箱を、人間が、妖魔が、無意識に無自覚に、開けさせていた…
枷が外れた妖魔は、少女の心に呟いた。
宿主である妖魔は、少女の臨む破壊を、促せた。

絶恵勇希――この世に産まれた時から、少女には妖魔が宿っていた。
その妖魔は、他ならぬ有象無象の化け物とは違い、神として選ばれた災厄な存在。

その名も…神魔――パンドラ

祠の絵に描かれた、人や妖魔を貪り、災厄を降り注いだ神である。

9話「苦しみを背負う者」

パンドラの箱――

それは、ギリシア神話に纏わる〝災い〟を意味した不吉な壺、又は箱である。

神の怒りに触れ、神々が贈った災いは、美しい黄金の箱に詰め込まれ、全ての贈りものとして誕生した。

好奇心に負けた女性、パンドラはその箱を開けてしまった…中には悪と呼ばれる厄災が飛び出るように、人間の世界に飛び散った。

その事柄から、パンドラとは「開けてはいけないもの」「災いをもたらす箱」「絶望の象徴」などと謳われ、不幸を意味する言葉となった。

上述のように、神魔パンドラの中には沢山の災いが山のように埋め込まれている。

妬み、怨み、憎しみ、疫病、盗み、殺し、滅亡…数えたらキリがない程の悪を体内に溜め込み、己の箱を開けた者には大いなる災いを…開ける原因となった者に神の罰を下す。

嘗て、パンドラはある一種の大陸に生きる地上の生命を、無残に食い漁ったと言われている。

勿論、種別問わず生として有る者全ての命を――だ。

その被害は妖魔にまで及び、その大陸は枯渇問題も含め、殆どの命が絶滅に追い込まれたらしい。

パンドラは厄災を放出する危険な神魔である。その被害はいずれ大きな物となりて、人類や妖魔の滅亡の危機に達すると言った、信じ難いケースだった。

しかし、…全ての厄災を放出したパンドラはどうなるのだろうか？空となった箱は何の存在意義があるのだろうか。

神魔パンドラは、また災いを己の中に貯めることを考えた。
災いが己の存在意義であり、その為に生まれたのなら、厄災の神として延々と繰り返してやると。
しかし、パンドラは憑黄泉神威と神楽の、月と日の唖み合いの戦争に乱入し、身を滅ぼされてしまった。

だが神魔が死ぬことは無かった。
パンドラだけではないが、基本的に神魔は転生体として人間の体を器とし、眠りながら生永らえる事が可能らしい。
嘘か真かは判断は付きにくいが、少なくともパンドラは確かである。

絶恵勇希という少女の器に宿り、生永らえることに成功した。

「アッハッハハハハ!!キャハッ♪キャハハはぁァ!♪」
殺戮を遊戯の如く愉しみ、血を浴びる度に悦び奇声を上げる勇希は、太く巨大な刃を延々と振るい回す。
対する蒼牙鬼も負けずと対抗し、少女の露出された肌を、斬り落とすように武器を振る。
ザシュッ!抉る擬音を立たせ、お互いが生身で血を流し、飛び散り合い、傷を負う。
蒼牙鬼は不思議なことに、抉れた傷は再生し、倒れる気配はない。
だがそれは相手も同じことで、勇希本人も数秒で何度も致命傷と脳が壊れる程の絶痛を味わうハズが、狂った笑みを欠かさない。
そして抉れた血肉はブクブクと泡立ち、再生し、何事もなく攻撃という動作を繰り返している。
「どうしよう……勇希…ちゃんが……」
理性も、優しさも、人間味も無い、暴走する勇希。
見てるだけで頭がグラグラと揺らぐ光景に、光里は奥歯を噛みしめる。一般人とおもっていた彼女は、妖魔に引けを取らない凶暴な殺戮

機械となり、狂乱たる笑みを零す。
「み、皆さん…！落ち着いて、下さい…!!い、一刻も…はや、く……」
絶恵勇希よりも先に、生き残ってる囚人達の安全確保が優先と判決した月光は、絶望に打ちのめされながらも、涙と嗚咽を漏らしながら、状況を打破しようと試みる。
本当なら、勇希を取り抑えて鎮めさせるのが一番なのだが、生憎相手はカグラや秘忍でも太刀打ちするのが困難であり、現状として討伐が不可能に近い蒼牙鬼が暴虐の限りを尽くしている以上、下手に動けば細切りにされるビジョンなど直ぐに見える。尤も囚人達も精神が崩壊しており、発狂している。
「勇希、落ち着け!!自分を見失ったか?」
「キャアハッハハ♪アハハハハはははははーーッ!!♡」
見失った以前に、話が通じない様だ。
お互い無害そうに見えるが、双方供に得体が知れないので、なるべく刺激を与えないように落ち着かせる。
「勇希さん！自分を見失わないで下さい!!貴女がそんなことをする為に守さんは庇ったわけじゃ無いでしょう?確かにあの妖魔に憤りを覚えるのは痛感しますけど…でも今は――」
「きゃあっは!!」
刹那――鋭い刃物が、月光を斬り裂こうと乱暴に振るわれる。上手く其れを紙一重で躱す少女の美しい髪は、剣先に触れてしまい、ハラリと僅かに斬られてしまう。
(ぐっ…！なんて強さなの…!!今まで此処に囚われてた人間とは思えない力量…大妖魔を圧倒する桁外れのパワー…！この子は一体…!?)
常人外れの暴行、只ならぬ狂気、嗤い叫ぶ少女の声、直に体験して解る。彼女は〝彼女〟では無くなっている。
あの子の性格上、初めて会って小一時間しか経過してないが、無闇に他人を傷付けるような人間ではない事を、従業員に怒鳴り散らかした後から理解しているつもりだ。
となると、この妖魔の気を感じる歪な感覚は何だろうか?こんなの、今まで感じたこともない…でもって不思議と既視感があって…雪

不帰様に近い感じだ。

「ヴォルアあア゛ア゛ア゛ァぁぁぁ!!!」

勇希が月光に気を取られ、剣を振りかざし、背を向けてる真中、蒼牙鬼はその隙を突くように少女の背を斬り裂く。

ザン…!と不快な音を際立てながら、蒼牙鬼は続けて猛攻を繰り出す。すると少女はその悪魔の破顔い顔を一切絶やすことも変えることも無く、満面な笑みを向けて――

「キャアーーーはっはっはっ!!♡」

ズバァン!と、一閃。

蒼牙鬼の体を真っ二つに斬り裂くように剣を振るう勇希。その線に描かれた妖魔は、噴水の様に血を吹き、苦悶の声を上げながら態勢を崩す。

「ウゴァアああ゛…お、おぉぉん……」

弱々しい声を上げながら、戦闘を続ける蒼牙鬼も、見てるだけで生々しくてグロテスクだ。怯む蒼牙鬼に、勇希は角を掴んで持ち上げる。

これも中々に奇妙…と言うより信じられない光景で、自分の何十倍もの重力を誇りそうな体重の蒼牙鬼を、片手で簡単に、赤子を持ち上げるように軽々しく掴み上げ、思いっきり地面に叩きつける。

バァァン!!と破壊の大きな音に、一同は大きな振動ですくみそうになり、蒼牙鬼は口から多量出血する。骨は砕け、鮫の歯は何十本も折れ、目玉は潰される。

続けて、バァァン!バァァン!バァァァァン!と、何度も叩きのめす。幼児が乱暴に玩具を壊すような感覚で、狂気の嗤い声を絶やす事なく破顔いながら、今度は強引に腕をもぎり腹部を蹴り飛ばす。コンクリートの壁を何十枚も貫いていき、壁が壊れゆく音は絶えなくとも、段々と音が小さくなって行った。

自分達の戦闘とは余りにも掛け離れた馬鹿デカイ規模の大スケールな戦場に、釘付けにされてしまう。

もぎり千切った蒼牙鬼の腕は、ブンブン回しながら、やがて飽きたのか、細切れにし、その後は生命維持が叶わず、粉々の腕は灰の如く消えてしまう。
「す……ご…」
アレだけ無敵で、一矢報いることすら叶わなかった蒼牙鬼を、神魔の影響により暴走状態と化した彼女は、さも小物を葬る様に蹂躙し、一蹴。もう蒼牙鬼が襲いに来る気配は微塵たりとも感じない。
「キャはぁ☆」
次の獲物は…と、狂乱の瞳を怪しく輝かす少女は、月光を始め、囚人達に狙いを定める。
「っ…!待って下さい勇希さん!!大妖魔はもういません…それなのに……そんな…」
やはり暴走状態だからか、理性も心も何もかもが侵食された少女は、見境なく凶器を振り回し、延々と破壊活動を繰り広げる。
「マズイぞ…おい、そこの嬢ちゃん！一先ず生き残りの奴等だけでも…」
「解ってますが…ですが、ですが…!!」
閃光は志久万に担がれており、深傷を負っている為、戦闘不能。幸い息があるだけマシともいえるが、それもいつまで長く続くか…。
月光も蒼牙鬼に呪怨の塊と対峙し、余力は残っていない。
そもそも蒼牙鬼に痛手を与えれなかった自分達が、果たして大妖魔・蒼牙鬼を蹂躙した彼女に敵うのだろうか？
「ゆう……き……」
絶望のドン底に陥る真中、少女の名を呼ぶ弱々しい声が聞こえた。
今にも命の灯火が消えそうな少年は、呼吸することさえ痛撃を抱くのか、動けない身体に鞭を入れるよう、何とか立ち上がり、勇希に近づく。
「オイ何してる小僧!!危険だ逃げろ!!今の勇希はもう…オメェの知ってる勇希じゃ…」
「違…う、勇希は……むやみに……誰かを傷付ける、ような子じゃ……ない……」

「えっ…？」「なっ――」
「ゆう…きは……だれか…を、きず付ける…人間じゃ……ない……」
倒れない、少年は立ち上がる。
必死に友を庇おうと、眼は死なず、身体を引きずる少年は霞む意識を無理矢理振り払う。
「守さん…貴方は、本当に彼女のことを…それ程に……」
大切に、大事に想っているんだ。
自分の大事な親友の、豹変した容姿を見せられても尚、勇希で有ると信じる少年に、何故かと心が熱く光が灯る。
バケモノだと誹謗を受けても文句を言われない程に変わってしまった少女を前でも、人間と言ってくれる少年の心は、どれだけ優しく心が綺麗な水のように透き通ってることか。

もしかしたら…今まで長い付合いをしてた少年となら、彼女を救えるんじゃないか？元に戻すことが出来るんじゃないか？
この暴走状態には不可思議なことや原因不明な点が幾つも存在するが、発動したのに条件が有るのならば、必ず解除する事も可能なハズ。
恐らく、あの大妖魔に守が襲われてから、憤りの感情に全てを支配され、其処から彼女の様子は変になり、暴走した。
となれば、解除の原因は少年自身なのではないか？そう考えに至った月光は、少年の近くに寄り添う。
「守さん…彼女がこうなった事は、初めてではないのですか？あの子を元に戻す方法を、知ってるのでしょうか？」
誰よりも致命傷を負ってる、こんな心優しい一般人が、自分のように必死になって彼女を救おうとしてるのに、自分達はただ黙って見てるなんて選択肢は存在しない。
そんなのお断りだ――
「キャハハハ!!あっはははははは!!」
「ゆう……き……」
守の声に、勇希は反応する。

相も変わらずその凶悪な笑みは止まらない。ただ膨大な殺意と災厄の気しか伝わらないこの邪悪な気…果たして本当に守の言葉で勇希は止まるのだろうか？

「知らない……でも、あの子は…ボクや、ひか、りちゃん…しく、まさんと、同じ……このせかいで、くるしむ……おんなのこ…なんだ…」

其れを聞いて月光は息を呑み、言葉を失う。

必死に声を振り絞り、朧気な瞳でも、挫けずに勇希に寄り添おうと手を伸ばす。血まみれの手で、彼女の手を取ろうとする。

「だれ、も…あの子の、苦しみを…理解して、あげなかった……今も、そうなんだ……だれも、ゆう、きの手を…取ってくれる、人が…いなかった……」

絶恵勇希は幼少期から虐めを受け、親から疎遠され、虐待を受け、常に孤独だった。親戚の人からも穀潰しと忌み嫌われ、誰も信用する事が出来ず、ただただ…一人…誰からも救われなくて、ずっと一人で、誰にも見られない場所で、泣いていた…この世界で苦しんで、それでも生きようと必死になって、この世界で生きている女の子なのだから。

「だから……あの子の責任を…とり、たい……それは…ボクが、僕と一緒に…げほっ！生きてきた、あの子の…くるしみを…背負う為に…」

「守…さん…」

「だれも…あの子の、苦しみに…寄り添う大人が…いなかった……だれも、あの子を、助けてくれ…なかった…だから……」

誰もあの子の苦しみを寄り添い、理解する者がいなかった。

大人も、ヒーローも、周りの人間でさえも、あの子を助けず、寄り添わず嫌煙されていた。

そして今、一人で苦しみながら暴走をする勇希の行動に、責任を負う者がいない。それが例え周りから醜い化け物だと罵られようと、厄災を振り撒く忌子だろうと、理解不可能でありながら誰からも理解されずとも……隣で一緒に歩いてきた親友であり、友愛、紡がれた絆を結ぶ自分が、責任を負う。

「チビ…お前……」

「守…くん…」

――この世界であの子が苦しみ、絶望に身を堕としてるのが、化け物だと言われてるのが彼女なら、それは違う。
あの子は化け物なんかじゃない――真面目で、芯があって、どんな時でも友達のいなかった自分の味方で在り続け、一緒に苦楽を共に過ごして、時折箱を見ると大喜びして、ぬいぐるみが大好きで、笑顔が輝いてて…そんな、そんな他の人と変わらない、女の子なのだから。
だから、一人で苦しむ必要なんてない。
この世界が苦しみで溢れていて、今も尚苦しみ続けているのがあの子なら、その責任を背負うのは、この世界そのものなのだから。そして長く共に過ごしてきた親友が、負うべき役目であり責務なのだから。
如何なる時であっても、あの子だけが不公平で、勇希だけが苦しむ世界なんて…そんなのは、絶対にあってはならないのだから。

「ハッ……？」

そして、遂に勇希の頬に触れた。
真っ赤な血に濡れた手で、暴走した彼女を、優しく撫でるように、頬を優しく…それこそ、辛くて苦しんでいる子供に寄り添うかのように。

「ゆう、き――もう、一人じゃないからね…」

責任は、隣に寄り添う親友が一緒に背負うから。
人殺しになんかさせやしない――たった一人の親友の為なら、心を救う事だって、苦しみを背負う事だって、何だってする。それが対岸の火に飛び込むことより明確な危険が伴っていたとしても。
自分は特別なヒーローでも、世界の救世主でも、化け物に勝る力が無くても…
――たった一人の親友の…彼女の最愛たる親友で在り、どんな時で

も心から寄り添う、友達だから。

「もう、一人で抱え込まなくて…良い、からね――」

とびっきりの笑顔を魅せる守は、彼女を優しく抱擁した。
血まみれな身体でボロ雑巾になっても、意識を失う激痛に苛まれながらも、どんな過酷な状況でも…常に苦しみ助けさえ求めることの出来ない、心の箱に閉じこもってしまった彼女を、優しく包み込む。
抵抗しようにも、守は勇希を離さない。
肉が全てを包み、優しい声が、勇希の邪悪な心を払う。一つ一つの、温もりの含まれた言葉が、勇希の心を揺らがして行く。
…何故だろう、神魔のチカラを解放し、暴走状態に陥った勇希の瞳は、雨のように濡れ、自然と涙が頬を伝う。
「あ……だ…じ…あぁ…が……」
「ゆう…き……頑張…れ……ぼく、ここに…勇希と…ずっと、そばに……いるよ……」
次第と暴れ抵抗する彼女は沈静化しており、狂い嗤ってた少女の雄叫びは、少しずつ人間としての言葉を取り戻す。
「あ…ぁぁ…ぎ……」

絶恵勇希は、生まれた時から自分が不幸であり、絶望という牢獄の中で生かされ続けてると知ったのは、齢四歳にして知った。
この頃になると、超常現象という個性もあってか、夢を追う人間…個性をどう扱うかと目を輝かせる人間は多いだろう。
時に悩み、挫折し、立ち止まる事は大人へと近付く度に確信へと近づき、将来の目標に悩むのが、中高生にありがちな人生の壁だ。
だけど幼少期の子供は、夢に浸れる。
憧れを見て自分も目指す。

なりたい目標に走ろうとする。
だけど…自分の家庭だけは他のとは違った。
個性診断による調査の結果――〝無個性〟と医者は応えた。
…別に、無個性に関して落ち込んでる訳でも、不幸だと俯いてる訳でも無いし、世界人口の役2割が個性を持たない体質なのだから、自分もそんな人間の一人なんだなぁって解ったし、ショックも無かった。
目標も、憧れも無い自分は、他の子と比べて無欲な人間…まあ、関わってもつまらない人間だ。
其れは別に良い。だけど…自分でも恐る事が起きた。
ある日、偶々腕の皮膚を切ってしまった事があった。
何てことは無い、誰かに傷つかれたとか、そう言う虐めによる類ではないし、その頃はまだ健全だった。
…だけど、血が止まらなくてどうすれば良いか…唾を付けても治らないしドンドン出血が酷くて、見ている自分も流石に焦った。
その時、流れ出た血は段々と形状を保ち、刃物が創り上げられた。
ブレード。
これが個性ならば何て言われてたのだろうか…少なくとも悪者、敵向きだねと言われるだろう…
だけど、無個性な自分が能力を扱えることに訝しげに思った周りの皆んなは、彼女にドン引きした。
最初は遅れて個性が発現したのかと思い、医者にも診て貰った。だけど…結果は同じ――〝無個性〟。何の反応も示さず、医者や親は驚愕。
うん、そうだよね…そりゃあそうだ。
況してや自分は特殊な家系の血筋を引いてる訳でもない、なのに異端なチカラを持った人間と見られた時、周りは彼女を拒絶した。
まるで現実が自分を否定するように、打ちのめすように…親も気味悪がり、その対応は段々と悪影響を与えてはエスカレートしていき、止まる事を知らなかった。

……人間って凄いよね、こんな小さな子供相手に、異端だの異常だのと知れば否やで否定しようとする。

拒絶し、排除しようと…その上、自分は自己防衛だと言い張る所業。

まあ、父親は元々マトモな人間じゃ無かったし、個性とかそんなどうこう以前に教育や人間関係にとって悪いものだと、三、四歳の頃から理解した。

その理由も兼ねた上で、自分に物に対する興味、執着心も無ければ無欲な人間になったのも、これが原因だったりとか。他人の際にするなとは言うけど、事実は事実だ。綺麗事吐いてなんとか生きれるほど、自分のメンタルは強くない。硝子細工のように脆いんだなと、実感した日は数え切れない位だ。

虐めの方はエスカレートを増したり、暴力は親のみならず、同級生の男子達からも頻繁に行われた。

気に入らない、気持ち悪い、無個性か個性か分からない異端者、自分だって好きでこんな訳わからない体になったわけじゃ無いのにね。どうしてそんな簡単なことが解らないのか…

いつしか自分も壁を作るようになって、誰かの繋がりを畏れてたんだ……

情けないよね、世の中の理不尽に押し潰されてる人間なんて自分以外にもごまんと存在するのに…

ヒーローだってそうだ、別に命を救ったからと言って心を救ってくれるとは限らないし、他人の家事情に突っ込む暇など大人には無いのだから。

結局、自分は一人で生きて一人で誰にも知られず朽ちてゆく…理想と英断な答えだろう。

そんなある日、いつものようにサンドバックの様に、男子達に囲まれて暴力を受けていた時だった。

「おい！やめろよ!!」

一人の男の子が、輪に入って乱入して来た。

青髪がボサボサで、人一倍正義感が強い少年――其れが結城守だ。男子達からは忌み嫌われる様にうざったられ、私を庇って何度も殴ら

れ守ってくれた。
最初は何を馬鹿なことを…なんて、守られた人間が吐くような台詞じゃ無いけど、心の中では呟いた。その日は初めて誰にも殴られず、ボロボロになったのは守るだけで、名前も知らない私は冷たいようにこう答えた。
『どうして、私なんかを助けたの？つまらない私なんて庇っても、何も得なんてしないでしょ？関わるだけ傷付くのは自分だから、放っておいてよ』
……今思い振り返ると、凄く酷い事を言っちゃったなぁと、胸が締め付けられる様に痛くて苦しむ。
だけど、その頃は自分にはもう生きてて何かの幸せや希望と言う甘い言葉は、概念は、存在しなかったので、当然こんな言葉を発してしまうだろう。
『ううん、そんな事ないよ。君が目の前で傷付いてたのが嫌だったから…』
だけど、守だけは違った。
何度もなんども手を差し伸べたり、友達になろうと言ってくれたり、自分が拒絶する様な言葉を浴びせても、何一つ嫌な顔をしなくて…
そんな少年に、段々と心が緩やかになって、何処か温もりに近い感情を抱いて…
もしかしたら、本当にあの子と友達になれるのかな？
そんな淡くも小さな光が、初めて心の中で灯り、希望とか幸せという感情に興味を示した。
漸く、私は誰かを信用しようとすることが、他人と繋がろうとする心が芽生えた。
今まで突き放してた私の言葉を、少年は許してくれるだろか、守は何て言うのだろう？
『嬉しいな！じゃあ、これからもずっと友達でいようね、勇希！』

こうして、私は絶望の中で小さな希望を見つけたのだ。

１０話「ハッピーエンド」

私が守と友達になれてから、少しずつではあるが、つまらない退屈な日常は、少しずつ鮮やかに色付いた。

程度の低い陰湿な苛めの日常は変わらずとも、大切な友達と一緒に過ごすと言う極自然なことが、どれだけ貴重で自分を勇気付けてくれるのか、守と繋がったことで初めて知れた。

親は小さい頃から暴飲暴食ではあったものの、突然の事故で亡くなった。元々性格の悪い、酷く言えば死んで当然の人間だったので自然と悲しみはしなかった。

だけど当時は小さい体で、幼い頃の私は複雑な心境だったろうなぁ…

確かに今となっては周りから怨まれて殺されそうになるような、就職もしないで家で酒を飲むようなマトモな大人では無かったものの、頼れる人間が居ないというのは、とても辛い。況してや其れが自分の肉親であるのなら尚のこと。

母も父と同じく事故死――私も詳しくは覚えてないけれど、内容は聞かされなかった。周りの大人達からは誤魔化されるような言い回しだったし、いや…本当に知らなかっただけなのだろうか？

結局、親戚の家に引き取られた訳で、他所の家で過ごすも、余り居心地が良いかと問われるとそうでもない。

虐待を始めた暴力行為こそは無かったものの、基本的に相手にされない、まるで他人を見下すような視線は、とても友好的な関係では無かったことが伺える。

そりゃまあ、父親があんなんだから、誰だってそうなるよね…と、小さい頃はとにかく、納得して鵜呑みにするしか選択肢が無かった。

だから、他人との関わりを畏れ、コミュニケーションの低いつまらない地味な私を、虐めから助けてくれたり、友達で居てくれた守が大好きだ。彼と出逢い友達になれたのが、私の人生の中で初めての幸せである。

それと同じように幸せだったのが、守が私の誕生日プレゼントに、赤いリボンをくれた。

少し照れくさそうにしてて、頬を赤らめてた守に、私は思わず胸がドキッとした。それと同時に嬉しくて目頭が熱くもなった。

生まれてから一度もプレゼントなんて貰ったことのない私は、その頃はもうなんて言葉を発せば良いのか判らないほど、嬉しい意味で衝撃的だったのは覚えてる。

他人からはすれば小さな贈り物でも、今まで恵まれなかった私からすれば、これに勝る至福は無い。

守は、どうしてこんなに優しいんだろう？

自分の味方で、傍に居てくれるのかな？

友達でいてくれているんだろう？

幸せに浸っていると、ふとそんな疑問が自然と芽生えてしまう。小さい頃から親や他人の顔色を伺っていたからか、信頼と安心の無い生活を延々と積み重ねてたからか、頭を振り払いたくなる衝動を抑えながら、何度も思うことがあった。

別にして疑う事は悪しき事では無いと解ってはいるものの、守が何か企んでるなんて考えてしまう自分が嫌だっただけで、聞く勇気なんて私には無かった訳だし。

そんなある日、打ち明けて見た。

どうして自分にそこまで優しくしてくれるのか、友達になろうと思ったのか。

守は優しいし、時におっちょこちょいで、勉強は出来ない所も見受けられるけど、個性の一つだ。だからこそ、例えどんな結末だろうと、

何を言われようとも私は彼の言葉を受け止めることにした。
『それは…前にも同じ事を言ったけど…きっかけとすれば、君が羨ましいから…かも』
初めて守に救われた時とは違う、もう一つの理由。
〝羨ましい〟と言う私には不釣り合いな縁のない言葉に、眉をひそめた。
私の何処が羨ましいのか理解しかねない…つまらない以前に誰かに尊敬される点なんて一つも無いのに…
――なんて雑談を交わしてた時だ。

下校途中で見知ら男性の大人が二人組、此方に近付いて来た。

『やぁ、君たち元気かい？』
不気味で訝しげな声を孕ませていた。
黒スーツに何処か小柄で…もう一人は黒ハット帽子に黒スーツに包まれた…顔は良く見えない。それ以外い怪しい特徴が無い大人びた男性。
『え、えっと……』
勇希は困惑しながら、守に視線を向ける。相手も困った様子で、此方に視線を返すだけで、口をもごもごしながらどう応えれば良いのか迷っているようだ。
小学生でも言われてる通り、怪しい人間の質問には応答してはいけない、又は付いて行ってはいけないのが常識だ。
『君たちは健康体かな？具合はどうだい？』
顔を近づけて来る黒ずくめの体をした小柄な男の質問に、鬱陶しいと思いながら勇希は「え、えぇ…そうだけど…」と、茶を濁すような言葉遣いで、後退りする。
今思えば、この時から何も言わずに逃げ出せば良かったのかな…と、後々と考えてしまう。

次の瞬間――私たちの悲劇が始まった。

『じゃあ、問題ねえよなッ――!!』
ドプンと液体の音が鮮明に聞こえ、体は形を保たず溶け込むように不安定な形へ変貌する。
『ッ!?』
突然、穏やかな口調から殺意を含めた気迫の言葉と、目前の人間の体が固形物から液体へと姿を変えた大人に驚愕する。ドス黒い液体は地面に濡れた直様、守の方へと向かい束縛する。
『むぐぐッ…?!!』
『守!!』
守の体を縄で縛るよう、黒い液体は少年の体を侵食するように束縛し、顔らしき形態を作りながら、ケケケと冷たい薄ら笑いを作り上げる。
『調査済み、健康体、その条件さえ揃ってりゃあ問題はねーよなッ、てぇよぉ〜!』
『守を離して!!』
苦しみ蹌く守の姿を見て猛激怒した勇希は、血相を変え肩に掛けてた鞄を使って思いっきり殴りかかる。
しかし、ドプン!と鞄は濡れながら黒い液体を透き通る。流動体だからか、相手には何のダメージすら与えれていない。
『えっ…?』
『殴る元気が有るのか嘘吐いてない証拠だなぁ!感心感心!だけどなぁ、殴れる訳無エだろ流動的なんだからさァ!
俺は生まれ持った忍法で体が個性のような能力を常に発動してんだよ!!俗に言う異形型さ!!』
ケケケと爬虫類のように舐め回す視線を勇希に浴びせ、少女は恐怖の余り、硬直して動けなくなる。
まるで蛇に睨まれた蛙のように、無力な自分はひたすら蛇の腹に呑まれゆくような…
『さぁ、お前も回収だッ――デー門様がお前らを欲しがってるんだ。有り難く道具にされることを喜んでくれェってよぉ!!』

黒い影が此方に襲いかかった刹那――私の意識は途絶えた。

『よぉぉ～しよぉしよしよしよぉ～しぃ!!デー門様のデータ通り、捕獲完了!しっかし考えたもんだよなぁあ、身内でロクな人生送ってねえ野郎を奴隷のように手足を働かせるなんて、そうすりゃあ警察や忍、プロヒーローからの捜索も無いし、身内がいなけりゃ誰も心配なんてしない!

こんな簡単な作業で金を貰えるんだ、なぁ…?』

『途影、煩い。俺は近くで煩く喚く奴を捻り殺したくなるんだ。お前の薄汚い笑い声で俺のスーツに唾でも垂らしてみろ、その舌ひん剥いて妖魔の餌にする』

『出来んのかよ北栄、頭がガンダムミテェな金属してる阿呆がよ、よく言えたもんだぜってよぉ～』

『生まれつきだ、文句を言うなら俺の両親に吐け。尤も俺の家族は亜門様だけだ。それとその最期の独特な口調はやめろ』

大型トラックを運転しながら、隣でくっちゃべる途影に辛辣な言葉を吐き続けるのは北栄。

トラックの空っぽな荷台には勇希と守が横たわり、気絶している。縄やガムテープで口や手足を拘束されており、目が覚めても自由には動けないだろう。

『俺たちは亜門様を支え、供に裏社会を牛耳るべく再び上へ昇り詰めるんだ。その事を忘れるな、己の目的と私欲を混ぜるなよ』

『けどよ、俺たちは亜門様の幹部で、支部の筆頭ではないよな?デー門様が態々俺たちに金払ってくれてるんだぜ?大金貰って嬉しくねえ奴はこの世にいねぇってよぉ～』

『知ってる当たり前だ。それに大金ってお前…道元から色々貰ってるだろ。主に悪忍勧誘の件、確か秘立蛇女子学園だったけな。スカウト人だろう?』

『そそ、以前鈴音とか言う美女教師を雇ってたなぁ…!』

『鈴音…?半蔵の凛か!!まさか、アイツ…そうか、確か蛇女の隼総が

拾ったんだな。で、アイツは使えてるのか？』
『オッちゃんの話によるとな～ってよぉ。マンモス進学校の卒業生だぜ？確かアイツも半蔵の卒業生だろ？』
『あんまり話したがらないが…元々生まれ持っちまった忍術さ、仕方ない。あの忍術じゃ善忍としての善良なイメージが付かんからな。幾らお膳立てしようと信頼が駄目になっちまえば誰でも挫折する。人間の心は脆すぎる。一度付いちまった傷はそう簡単に治ることも、癒す事も、立ち上がる事もできん……
――っと、支部についたぞ、此処からは廃墟の工場まで登って後は完了だな』
目的地に辿り着いた二人組は、気絶してる勇希と守を起こさないよう慎重に持ち運ぶ。人間一人を抱えるのは意外と力が必要で、遺体だって運ぶのに数人の力が必要だ。
しかし幹部である二人なら人間一人を慎重に運ぶ作業など造作もないこと…汗一つ垂らさず悠々とアジトへ入っていく。

こうして勇希と守は、理不尽な運命を送り、奴隷として生かされるのだった。

絶恵勇希――彼女はこの世界に疎まれ、恵まれず、幸せを掴むことすらままならない…不幸な少女だ。
理不尽と価値基準で定められた現実社会、弱き者、異端者は蔑まれ、差別される。誰にも認めて貰えず、救われる手すら伸ばしてくれない。
そんな少女を救ったのが、結城守――
彼女がパンドラの暴走を発動しなかったのは、守が側に居てくれたからでもある。
もし誰かの支えのない、非力な彼女が現実に打ちのめされ絶望のドン底に到達してしまえば、それこそ今の超人社会は半壊滅的な致命傷を受けている事だろう。

そんな守が、側にいてくれる親友が居てくれたから、本来掴めなかった幸せを、繋がりを、保ち持つ事が出来た。
だからこそ、勇希にとって守とは感謝しても仕切れない、彼女にとってのヒーローでもある。

そんな少年を傷物にされ、滅多打ちにされ、少女は今まで冷たい牢獄に囚われどんな心境だったか…
きっと胸が裂くような、今にでも泣き叫び狂いたくて仕方なかっただろう。
でもいつだって人間は自分のことで精一杯手一杯、他人の心に突けこんで、心を癒してくれる人間なんて早々ない。其れが赤の他人なら尚更だ。仮に居たとしても、陽花のような聖人君子でも無い限り、誰も救けてくれやしない、それが現実だから。
幸せが訪れても、それを突き落とすように現実は彼女を絶望に貶める。パンドラが目覚め、勇希が暴走を起こし始めたのも、全ては人間が、現実が、世界が、彼女の中に深く眠る災厄を起こしたのだ。
本来、もしもマトモな生活を送っていれば、彼女が恵まれていれば、境遇が違っていれば、神魔は害を成す術無く穏便に、永遠の眠りに就いていた。
そんなパンドラの箱を、開けてしまった。
今まで長年蓄積された彼女の絶望、忿怒、憎悪、哀傷、数々の負の連鎖が爆発し、暴走を引き起こしてしまった。だからこそ、誰も彼女を責め立てる事は出来ない、それこそお門違いと言うものだ。

そんな絶望の中、孤独に嘆く少女を救ってくれたのは他の誰でもない、結城守だ。

それは、あの時からずっと…今も彼女を救おうと必死になってくれている。

そう…今も――。

『ゆう、き――もう、一人じゃないからね…』

『もう、一人で抱え込まなくて…良い、からね――』

『ゆう…き……頑張…れ……ぼく、ここに…勇希と…ずっと、そばに……いるよ……』

友が、少女を呼んでいる。

自分のように必死になって、どれだけ誹謗しようが冷たい態度を浴びせようが、少年は立ち止まらなかった。

だって、結城守は――絶恵勇希の親友だから。

たった一つの、かけがえのない友情の絆で、結ばれているから。躓き転んでも、立ち上がって少女の手を握ろうとする彼の勇姿。暖かく包み隠れたいほど、優しい温もり。いつも彼女の心が壊れない様、支えてくれたから。

絶恵勇希――少女（貴女）の隣にいつも傍にいてくれたのは、誰だろう？

答えはもう知ってるはず、だって…彼女にとってかけがえのないたった一つの繋がりで結ばれた、大切な友人なのだから――

「……あッ、」

守の血が勇希の穢れを浄化するように、血に触れた少女は失われた理性を取り戻していく。

狂った紅桜色の瞳は元の色に戻り、姿は裸体に近い凶暴な容姿からボロけた囚人服へ。まるで何事も無かったかの様に元に戻った少女は、さっきまで大暴れし破壊の限りを尽くしていた彼女とは別人だ。

「勇希！」
暴走が解除された少女に、素早く駆け込む月光達は、少女の安否を確認する。ついでに背中を斬られた守も含めて、様子を伺う。
「わた…し……」
「もう大丈夫ですよ…守さんが助けてくれたんですよ…っ。本当に、元に戻って良かったです……怪我はないですか…？」
心の底から良かったと安堵の吐息を吐く月光は、安堵の吐息を漏らしながら、涙を溜め込み満面な笑みを浮かべた。これ以上、被害を生み出したく無い、犠牲を産みたく無い、頭の中でいっぱいだった月光にとって、今までの時間はとても長い絶望に囚われていたであろう。1時間が何十時間もの錯覚に見舞われてた様な、神経が麻痺してるような感覚。
蓄積した疲労に、リミッターを解除した事で限界以上の体力を使い果たした彼女は、思い瞼を下ろした。
碌に体は使えず、四肢は動かせず、瀕死状態に陥ってる彼女は意識を失った。
呼吸はあるものの、彼女の容態は余り良くないのは目に見えており、熱も籠っている。看病さえすれば問題ないので、命に別状は無いだろうが…
「よかったぁ〜！良かったよぉ〜!!勇希ちゃんも、守くんも…!!!」
光里は涙を流しながら、大きな声で叫び、感動の余り打ち震える。志久万の隣で立ち尽くし、二人の安全に、元の勇希に戻ったことで心の底から安心する。
「良かった…勇希……」
守は勇希を抱きかかえながら、蓄積された疲労と強張った緊張、不安…初めて体験した死と隣り合わせの修羅場――全てを潜り抜けた守は、糸が切れたかのようにゆっくりと倒れゆく。それを、志久万は守と勇希と一緒に抱き止める。
「小僧……いや、守っ。さっきのお前……ヒーローなんかよりも、世界で一番、スッッゲェかっこよかったぜ」
責任を負う者。

この世界で苦しんでる人達。
自分や光里のことも含めて、この世界で苦しんでる人達であり、責任は世界が負う者だと唱え、無力でありながら見事に親友を救い出した奇跡を起こした少年に、感動さえ覚えていた。
ワイルドヴィランズの一員とはいえ…いや、もはやそれさえもどうでも良くなる程に、羆である彼にとって、守の言葉が深く突き刺さっていた。

何より、皆んなが紡いだ奇跡が、ハッピーエンドを編み出したのだ。

「後は…皆さんで脱出を……」
「ウ゛ォあ゛あ゛ぁあ゛あ゛ぁああアァーーーーッッ゛ッ゛!!!」
月光の言葉を遮るかのように、絶望に喚く鬼の叫び声が、空間を轟かせ支配する。
ズシリ、ズシリと重い足を踏み込みながら、此方へとやってくる化け物――血まみれになりながらも、ゆっくりとした重い足取りで近づいて来る蒼牙鬼が、吹き飛ばされても尚、此処までやって来たのだ。
「ヒッ…!?」
「オイマジかよ!?死んだんじゃねェのか!!?」
光里の嫌悪と恐怖に慄く声。
現実だと受容し難い展開に、戦慄する志久万。
最早ハッピーエンドなんてものが存在しないと言わんばかりに、悉く打ちのめしてくる蒼牙鬼に、言葉を失う月光。
囚人達も現状がついてこれず、現実逃避をせんと言わんばかりに混沌の渦に飲み込まれ、理性を失う。
何をどうすれば良い？何が正しくて何が間違いで、どう足掻いても生き延びられないのかと。
もう、無理だ――閃光と守の応急手当てと処置をしなければ、死んでしまう。勇希も気を失っており、現状打破は厳しい。
「う゛、ぉオ゛――おぉう゛ウぅ゛…い、だタ…つ゛、ォいイ、あノ餓

鬼…な、ニも〝の…?」
蒼牙鬼は弱々しくも痛々しそうに身体をよろめきながら、それでもみるみると再生していく身体。化け物だなんて言葉では収まりきれない、非現実的な個体に、もう投げる言葉も、戦う気力もない。
こんなの、もうどうすれば――

ボガアアアン――!!!

『!?』
出口付近で爆発が轟き、自然と無意識に震源の方向に振り向く。
扉ごと破壊され、土煙が巻き起こる。
これ以上、一体何が出てくるというのだ?なんて言葉が、疑問が浮かび上がる前に――

「いやぁ、楓ちゃんも無茶な要求するよねェ……折角大妖魔ぶっ倒した後でヘトヘトなのにさぁ、仕事の手助けしてくれって、前々から協力が欲しかったなら仕事の案件蹴ってたのに…ホント、自慢の後輩ちゃんの為〜とか言いながら、本末転倒しちゃってるじゃん」

土煙の影が段々と濃くなっていき、シルエットが浮かび上がる。この殺伐とした空間…緊迫と絶望の状況で、能天気で可愛らしい声が鮮明に、次第と大きくなっていく。
「お?人がいるじゃん!えっと…こういう時は、世間で有名なヒーローの言葉でも借りてみよっかな?なんて、あはは☆」
邪魔で鬱陶しい土煙を腕一つで振り払い、姿を現す。
ラファエルと同様の白いユースティア女学園の制服に、学園を主張とする紋章が肩に刺繍されており、淡い桃色の長髪に片方の白いリボンが巻かれている。穢れを知らず、それでいて純粋無垢な顔立ちのお嬢様。透き通る肌は吸い寄せられ、華奢な身体はアイドルやファッション雑誌でも取材されても可笑しくない程に、美しくて可愛らし

い。
一言で纏めると女神――そして現状、救いのなかった物語に手を差し伸べる救世主は、正に天使そのもの。
「私が来た☆」

イェーイ！と言わんばかりのピースサイン。
お嬢様といえどもこの世間知らずで、それこそノリとテンションで生きてるような、多少空気が読めてるのか読めてないのか、掴み所が分からない学生だ。
「あ、貴女は……っ!?」
「やっほ～☆元気してる～？なんて、流石に不謹慎過ぎか…はは。貴女が楓ちゃ…ごほん、ラファちゃんの言ってた優秀な後輩兼忍学生兼同性愛対象の面白いエリートちゃんかな？初めまして～！ラファちゃんと幼馴染の、『ミカエル』たること『彩楽園花（さいらそのか）』で～っす!!」
常に元気が溢れておりながら、キャッキャと楽しそうに会話をするミカエル――本名『彩楽園花』。本来忍名で通さなければならない礼儀であり、本名は出すことは禁止されているのだが…。
「えっ、あ…えっと……その、え？ラファエル様の幼馴染…っ、しかも、本名言っちゃってますけど……」
「ん？別に良いんじゃない？私が自分で勝手に言っただけだもん。あ、そうそう！もし私の名前が呼び辛かったらミカでもエルでも渾名で呼んじゃって♪様付けとか、そういうの辛気臭くて面倒でしょ？ねね、貴女の名前聞かせてよ！いずれ私達の可愛い後輩ちゃんになるかも知んないしい、あら？」
こんな破茶滅茶で、殺伐で、緊急事態にも関わらず、それをさも呑気な日常会話でも嗜むかのような空間にバグが生じてる気分だ。そんな気難しくて色々と掴みどころのない彼女に困惑していると、ミカエルがふと何かに気付いたかのように、倒れてる少女達を見やる。
「……これ…」
「あ、嗚呼…！そうです!!その…今、大妖魔が襲って…その、囚人が…

嗚呼いえ…っ！あの、えっと…」
「ウ〝、エア〝、ぁあ〝、あ〝、ァあぁあ〝、あ〝、ぁあ〝、ぁ!!!!!」
けたたましく轟く咆哮を叫びながら、此方へと殺さんと言わんばかりに襲いかかってくる蒼牙鬼。状況が状況であり、殺意と理不尽の塊が迫ってくる緊迫感。
濃厚過ぎた出来事に、何処からどう話せば良いか、脳の処理が追いつかず、ついついテンパってしまう。普段どんな時でも滅多に取り乱さない月光だからこそ、それ程に過酷な出来事だったのだ。
だがミカエルは一切取り乱すことなく、表情を変えることなく、優しく月光に言葉を添える。
「うん、大丈夫。ゆっくり落ち着いて？一回深呼吸して、落ち着いてからゆっくり、お話しして。言えること、断片的でも良いから、大丈夫！」
ミカエルは月光に満面な笑みを浮かべながら優しく悟るように、落ち着かせる。こういう時、忍やヒーローを助けてくれる者はおらず、常に責任や使命を全うせねばなるまい。そういった意味で、彼ら彼女らの存在が救われないのなら、それを救うのがミカエルを始めた、ユースティア女学園――天使の役目だと。
妖魔術――【渾沌斬撃】
怨念や悔恨…成仏されずに取り組まれた死者の憎悪と呪怨が込められた、重圧な大剣がミカエルの首元目掛けて降り注ぐ。
ゴギィ――ッ!!
『!!?』
それを、素手で掴んだ。
蒼牙鬼の武器、凡ゆる骨の構造たる大剣を、怨念を宿した大剣を、武器もなくただの素手で、然も後ろは振り向くこともなく掴んでみせた。
血の跡も、傷一つ存在せず、それどころか蒼牙鬼に振り返ることなく月光の話を真剣に、それこそ先生が生徒の質問や言葉を真摯に受け止めるかのように、優しい笑顔で待っている。
驚嘆の色に染め、この場にいる全員とも言葉を詰まらせている。

「言えないなら私から質問しよっか？その倒れてる子…二人とも傷が酷いね？取り敢えず応急処置する為には外に出なきゃいけないから、それなら早く外に出よっか？それで…肝心のラファちゃんはどうしたの？この人達はこれで全員？」
　ギチギチと大剣は音を鳴らし、蒼牙鬼が必死に大剣を戻そうと試みるも、離れないし引き剥がすこともできない。まるで自分達が苦戦を強いられたあの化け物のことなど、眼中にもないと言わんばかりに。
「あ、は…はい！あの…ラファエル様は私達の為に…その、もう一匹の大妖魔と戦ってまして……囚人達は何人か死んじゃいました…けど、その…守さんが身を挺してくれたお陰で、これ以上の犠牲者を出さずに…」
「……」
　大体…大凡、理解を示したミカエルは「そっか…」と、声を漏らすと優しそうな笑顔を、勇希と守に差し向ける。
「つまり、君は王子様で、愛すべきお姫様を守ったんだ。その結果、こうして皆んなを守ることにも成功した……うん、有難う。私の大好きな絵本の物語みたい。君は必死に頑張ってくれたんだね♪君やラファちゃん、皆んなが頑張ってくれたお陰で、ハッピーエンドに繋がったんだ☆」
　気絶して倒れてる勇希と守に、労いの意を込めて感謝する。もしこの人達が頑張ってくれてなかったら、きっと全員死んでいたし、間に合わなかった。
　ハッピーエンドなんてものが夢物語にしか過ぎず、救いのないバッドエンドが待ち受けていただろう。
「私さ、バッドエンドだとか、救いのない御話とか大っ嫌いなんだよね。寧ろ反吐が出ちゃうくらい…そういうの、好きじゃないからさ。きっと暴れちゃってたかも…かっこいいよ、素敵な王子様」
　空いた片方の手で、人指差しで守の頬を優しくツンツンする。彼女にとって、救いこそ自分の本質であり、大好きな結末なのだ。救いのない苦痛だらけの世界だからこそ、自分はこの地獄を救いたいと、本気で願ってるわけで。

「ウ゛ォエ゛ぁあア゛ぁあ゛ぁあア゛ぁ゛ッッッ――――!!!」
「ねェ、マジで五月蝿いんだけどさっきから――」
ミカエルという異常すぎる強さを兼ね備えた化け物に、化け物である蒼牙鬼が片方の手で頭部を殴りかかろうとした刹那――掴んでた大剣を振り払うように、大剣を通して蒼牙鬼ごと遠くへと吹き飛ばす。
たった片腕一本で、自身より何倍ものサイズと体重を併せ持つ蒼牙鬼を、赤子を投げ飛ばすかのように、バットを間違えて手を滑らせてしまって投げてしまった、そんなノリと雰囲気で、蒼牙鬼を思いっきりぶん投げる。
「これはもう救われたお話で、この子達は救われるべきなんだよ――アンタみたいなクソを煮込んだモブ役は引っ込んでてくれる？耳障りなの、どうせアンタみたいな雑魚、永遠に私に勝てないんだから」
ガチでイラつく…と小声を漏らしながら、憎悪と冷徹な眼差しを飛ばして、姿が見えなくなる程に飛ばされた蒼牙鬼を見届けた後、再び向き直る。
「助けは呼んでおいた、もう時期救護班が来るから…後はゆっくりと、救われてね？二人の後輩ちゃんも、よく頑張ったね、偉いよ」
自分達より少しだけ歳上の高校生なのに、大人のように優しく労を掛けてくれる。そんな暖かくて優しい言葉に、涙で頬が伝う。頭をよしよし、と撫でながら宥める彼女の優しさが嬉しくて、先程の惨劇も相まって、心がぐちゃぐちゃになってしまう。
「もぉ！泣かないの！ほら、早くしないと二人共死んじゃうかもしんないし！ほら、ここは天使様に任せなさい!!」
えっへんと高らかに自慢する。
お姉さんに任せなさい！と言わんばかりの主張と、胸を張って言うミカエルに、月光は言葉にならない声で頷きながら、出口へと赴いていく。囚人達も、この平和の象徴と連想させる彼女の登場に、歓喜と安堵を露わして、皆んなで勢いよく出口へと向かい、脱獄して行った――。

「よし、後は楓ちゃんを救うだけ……それにしても、忍務が『忍商会第四支部破壊』と『囚われた人質の解放』なのに、大妖魔が攻めてくるとか…これぱかりは楓ちゃんに同情せざるを得ないなぁ…。然も二匹かぁ…これを全部平行処理はハードでヘヴィーな忍務なことで…」

はぁ〜…可哀想に。

と欠伸をしながら眠たそうに、一粒の涙を指で拭う。これは欠伸によって出た涙であって、感動に打ち震えただの、そういう感情的な意味ではない。

「さーってと…これで取り敢えず全員逃すことが出来たし…っ、後は処理するだけかぁ」

ガララ…ッ！と土砂崩れのように崩壊した壁と、瓦礫で埋もれた蒼牙鬼は、どかしながら障害物を振り払う。完全に血に染まった瞳に、大激怒を露わさんばかりの、殺気と威圧、覇気を込めた蒼牙鬼は、壊れて破損した大剣を何処かへ捨てた。

「ウ〝ぉき〝キ〝ッ〝!!コ〝きキ〝キ〝ィッ〝――!!!」

「残念だけど、皆んな逃したよ。そして貴方はここを通れない――私が今進んでるこの退路に、足を踏み込むことは許されない。もうさ、あの子達は救われたんだよ。この地獄から解放されて、頑張って、ハッピーエンドを掴めたんだよ」

もしそれでも救われない何かが作動的に発動するのなら、それを止める。

理不尽や悪者が、この世界を苦しませているのなら…歪んだ正義や独立とした正義が、世界や皆んなを苦しませているのなら――狂気と破滅を打破して、神が託した天使が救われた世界線を守り抜かん。

「く、クク…供物!!捧げ…ッ!!コ〝、イつ〝…ッ、オ、オオまエ〝ッ〝!!えぇぇ!!邪魔、ス〝ル〝ナぁぁぁ――!!!」

「国語と道徳のお勉強でもする？これ以上でしゃばんなって言ってんの☆」

そして、歪んだ殺意や悪意は赦さない。

悪と冠する対象をとことん嫌悪する彼女は、妖魔と同時に極限に近い領域で『悪』が許せない。

死塾月閃女学館の悪忍に対する憎悪とは違うベクトルの純粋な憎悪――それは歪んだ正義が、生き過ぎた者だとしても…悪だと見做したものは、とことん厳しすぎる。
「後さぁ、もう喋らないでくれる？全然日本語も喋れてないしさ、何言ってるか全然わかんないんだよね☆序でに口臭いしギトギトの血と油が溜まってる感じで、肺が痺れて吐きそうなんだよね～…。だから息止めてくれる？どうせ私に一生勝てないんだからさ♪あ、言葉理解できる？分かんない？馬の耳に念仏かな？」
蒼牙鬼は言葉にもならない咆哮を叫びながら、跳躍して思いっきりミカエルに飛びつき、首元を狙って齧りつこうと大きく開かれた口で噛み殺そうとする。
「弱っ」
それを拳で思いっきり横殴りに、気合を込めたパンチで頬を粉砕し、壁へと打ち付けられる。
歯が立たないとはこのことで、蛙が踏み潰されたような醜い鳴き声を上げながら、血反吐を撒き散らして勢いを殺す。
「あ、この制服結構綺麗で高いから汚さないでね？」
生ゴミでも蹴飛ばすかのように、蒼牙鬼に触れないように、地面を蹴り、倒れ伏す蒼牙鬼に、足で触れることなく衝撃と地面を抉る瓦礫で吹き飛ばす。
「…ふーん、再生能力…あ、多分これあれか。特殊条件が必須な相手か。そいや楓ちゃんも結構苦戦してるんだよね。すぐ終わるかと思ったけど…それなら楓ちゃんの所に行ったほうが早いか――」
――それなら楓ちゃんの気配を辿って一直線で行けばいい。
「落ちてるものも使えば何とやらってね！それなら――」
かと言って蒼牙鬼を放っておけば、彼女達にも危害が加わってしまう…なら、蒼牙鬼の角を掴んで…
「真っ直ぐ突き進むのみ！待っててね楓ちゃん!!私がーー来たッ！ってやってみるね!!」
蒼牙鬼を鬼の棍棒だと言わんばかりに、角を掴んでは軽々しく持ち上げて、壁や障害物を破壊していく。

ドゴォン!!バガァァン!ボガァァァン――!!アジトが複雑な迷路だと言うのなら、態々迷路に付き従う道理はないように、ゴール真っ直ぐに向かって壁を破壊して突き進めば良いだけの話だ。

11話「虚無と非現実の邂逅」

「俺たち…今度こそ救われたんだぁ!!」
「やった…やったわ!最後の最後に私達救われたんだわ!!」
忍商会第四支部の廃墟として隠れ蓑に利用してたアジトからワラワラと現れたのは、奴隷として扱われた囚人達――絶望の檻で過ごしてきた多くの人達が救われたのだ。
安静たる夜空の下、歓喜の声が露わとなり、包まれていく。
「外の空気だ!夜空の光景…すげぇ、何年振りだろ…はぐっ、涙で前が…見えねえよ…っ!!」
「お母ちゃんに会えるっぺ!!お父ちゃんも心配してるっぺ!!俺、皆んなに心配ばかりかけちまって…親不孝でごめんよぉ…!!」
「本当に救われたんだ俺たち!やったぁ!!」
ある者は涙を流しながら嗚咽を漏らし、膝を折って泣き噦る者。
田舎風潮の学生、元サラリーマン、ＯＬ女性に幼い子供達まで、一部の犠牲者を除いて全員救われたのだ。
「後は救護班が来るまで待つだけね……本当に、こんな奇跡が…」
月光も漸く涙を止めて、安堵の吐息を漏らしながら、胸を撫で下ろす。緊張が解き外れ、強張った筋肉に蓄積された疲労がどっと押し寄せてくる。壁に背を向けて思わずズサリ…と、尻を床へと着ける。
「クマさんクマさん!夜景、すっごく綺麗だよ!!」
「本当に…生きて、脱獄出来た。すげぇ…色んな事があったがよ、こう…実感が……」
言葉に出来ない感動とはこの事を言うのか――望んでいた結末を迎えたことに、全員とも歓喜で満ち溢れている。
これで良い、これで…今度こそ、全員が救われて……。
「あり、なんか…どっと眠気が……」

「何だか、私達…疲れちゃった……の、かな……？」
その時だった――突如として全員がバタリと、気絶したかのように倒れ込む。
救われた囚人達全員が倒れ込み、眠りに就く。
「えっ…？み、皆さん…??」
然し――この場で唯一気を保ち、眠る事なく目覚めているのは月光呑み。確かに色々な事が起きては、疲労で何人かは倒れてしまっても可笑しくはなかったにしろ、全員が一斉に眠るのは可笑しすぎる。
まるで、自分達のよくやる『催眠』の類――
「まさか…まだ敵が…!?」
「いいえ――この物語は幕を閉じ、ハッピーエンドを掴み取った事実に変わりはありませんよ」
投げられた声に振り向く月光は、其れを見て絶句した。
目を丸く染め、驚嘆で声が喉に詰まり、理解不可能な現象を目の当たりにする。
月光は呪術の類を操り、精通し、博学者でもある。まだまだ未知な呪術は理解しきれてない部分もあるが、それでも中等部所属の身である彼女の立場的に考えて、優秀な部分であることには変わりはない。
なのでホラーサスペンスや怪談話というのには耐性があり、厨二病とヒーローやダークファンタジーが好ましい閃光とは大分違う。
「ッ――!!?!」
「おや、驚かせてしまい申し訳ございません――何せ人前で姿を現すのは久方振りで御座いまして…こうして貴下との初めての邂逅、謹んでお詫び申し上げます。私は天竜衆が一頭を担う『ミカヅチ』――」
月光の前に突如として現れたのは、考古学者のスーツを羽織る黒い霧や靄に近い物質として存在しない、言葉では形容し難いナニカが大事そうに遺影を抱えている。そして首元…つまり頭部は存在せず、遺影とも読み取れる絵画に映し出されてるのは、気優しい男性の顔が露となっている。そしてなんと、絵に写し出された登場人物とも呼べる男性の表情は動いているのだ。
分かりやすく言えば、デュラハン――西洋の化け物のような存在

だった。
　だが月光が驚愕しているのはもう一つ、その非現実性たる理解不可能な存在というだけで無く、気配を感じない事…つまり、殺気、敵意、悪意、戦闘による気力、全てが虚の如く感じさせないのだ。
　寧ろこんな歪で奇妙で、理解不可能で意味不明な、如何にもヤバい相手に対して、恐怖さえ抱いていない。寧ろ、何も感じなさ過ぎるのだ。
「身体の方は『ヴァニタスコロニー』であり、その代弁者となり語り手となってくれるのが私――『ジョナサン』で御座います。そう、私達は二人で一人と成り立ち、存在も認識も立証が可能とされ、お互いを通じて完成された『作品』なのです。ふむ、挨拶は省略といきたかったのですが…貴女のその言葉では具現化しきれない未知なる感情、分析不可能、理解不可能な存在を目の当たりにしたショックによる現状を観察し、予測を立てた結果このように自己紹介をさせて頂きました。私たちは以前、いえ…この世界に存在する凡ゆる者は何処かで遭遇したかもしれませんからね。それもこの私が作品として、様々な人達と触れたか否か――ですが…おっと失礼、更なる混乱を招いてしまいますね」
　礼儀正しく、心を休めるように落ち着いた声色で話しながら、ホラーテイストと恐怖と心霊現象が組み合わさった不気味な存在は、友好的に語りだす。
「あ、貴方は……い、一体…な、何ですか……？こ、この人たちが眠ったのも…なにか、関係が……」
「嗚呼、誤解なさらずに――私は貴女達と争うつもりも無ければ、敵対者（アンタゴニスト）でも御座いません。対話と無礼を申し上げに参りました。何せ今回観測されたこの物語は、本来到達不可能であり、存在しなかった分岐点、何より我々でさえも未知なる遭遇に出逢ってしまったのですから」
　声色による大きさも声の派生も何も変わらず、ただ同じ声質で語り継ぐ非現実と虚無を兼ね備えた傍観者は語り出す。
「先ず現状の不可解な現象を説明いたしましょう。これは私が眠らせ

ました。そうですね…『安楽な憩いの夢邂逅』とでも――人体に害を与えない程度に調整を効かし、『特定の人物以外』という概念をテクストとして意味を与え顕現させた試作品です。ふむ……幾分的確な作品を顕現に成功させた、と言えるのではないでしょうか？」

ホラ吹き貝を懐から取り出しながら、アーティストのように解説を始めるミカヅチ。

聞き慣れない『テクスト』、『顕現』だの、専門用語を使って混乱を招いてしまう。理解不可能故に追いついていけないが…もし想像していることが正しいとすれば……つまり、『道具に概念を与え、生み出した』と言う事なのだろうか？

それは…そこまでいけばもう、常軌も超常も逸している。

「次にご無礼による謝意を――今ここに」

すると今度は手榴弾らしき危険爆破物を懐から取り出す。嫌な冷や汗がぶわりと垂れ込み、心臓の鼓動が途端に速くなる。コイツ…！敵対者ではないと言っておきながら――

「御安心を、何故ならこれは危険物では御座いません。私の称賛と、今後の投資と思って頂ければ――」

それを閃光と結城守の方へと投げやる。下投げ投球により、栓を抜いた手榴弾に、反射的にしゃがみ込んでしまう。

そして――ボガァァァァン!!二つの手榴弾が爆破し、土煙が巻き起こる。

「ケホケホ…！一体何が……？あ、ら？」

煩わしい煙に咳き込みながらも目を開ければ、何だか蓄積された疲労とかすり傷が消えていた。よく見れば、担いでた閃光の深傷も嘘のように塞がれており、蒼牙鬼により受けた結城守の傷も、何事もなかったかのように、あの惨劇が嘘だったかのように消えていた。

「これは私自身が顕現に至るに成功させた作品…『癒しの爆弾（healing bomb）』とでも――ご存知の通り、私は凡ゆる作品を顕現させる事が可能です。貴女の持つ武器…呪々と呼ばれる傀儡もそうです」

すると突然、ジョナサンの背後から月光と全く同じ木偶と藁人形の容姿を兼ね備えた操り人形が、意思を持って動いている。自慢…とい

う訳ではない。これは脅しだ――対話をする、然し逆らえば貴女の持つ武器で、更には理解不可能な能力を使って、未知で貴女を殺す…と。いや、敵対者じゃないと断言したり、結城守や閃光の傷を癒してくれた…それは信頼を獲得させるためのものか？それにしても手の込んだやり方だ。

「話が脱線しかけましたね、申し訳ありません。探究者であり求道者たるもの、何より傍観者であるシナリオライターはこのように遍く作品や事象を解説しなければ御座いません。話が脱線してしまうというのは大変失礼な行為をいたしました――」

「貴方は…対話がしたいと、存じましたよね？それで…話とは……何ですか…？」

最大限に引き延ばした警戒心を解ける事なく、鋭い眼圧を飛ばし、冷徹な声を振るわせる。この…如何にも自分達が芸術作品だと言わんばかりの口振、暗号とも呼べる不可解な単語を語り継ぐ理解不可能な虚無の語り手に問う。

「ふむ、失礼――では私からの宣告と解説をご清聴下さい。先ず初めに、貴女達は新たな物語の分岐点に到達いたしました。それは現在進行形で行われている物語の裏舞台…それが神魔を宿す器と、一人の少年で御座います」

黒い手袋が指差すのは、気絶して安らかに眠りに就いている絶恵勇希と結城守の二人――まるで裏舞台の主人公だと言わんばかりの口振で。

「勇希さんと…守さんが……？」

「ええ、貴女達が彼と彼女を救ったのでは御座いません……この少年が貴女達を救ったのだと理解に至りました。もし少年がこの世に存在していなければ、もし神魔の器が少年を殺していれば、この世界は厄災と終焉を振り撒き、物語は始まることのない終わりを迎えていたのです――其処の少年こそ正しい選択肢と、我々を凌駕する未知を生み出した『教導者（イゲティス）』なのです。そう、遍く時空を過ごした我々の叡智でさえ分析不可能な、予測不可能の変数――であると」

結城守に付けられた価値の名を『教導者』――予測不可能でありな

がら、最悪な未来を予測不可能に変化させ、奇跡の到達点へと導く。見えない何かがチカラとして働いている、何か因果関係が働いている、超能力の類だと、そう認識することでオカルトが生まれるように、結城守にとってミカヅチは無視することが不可能となってしまった、注目しなければならない興味深い対象となったのだ。

自身に課せられた『傍観者』という立場さえも、忘れてしまうほどに。

『Ｄｅｍｏｎ（鬼）ｂｒｏｔｈｅｒ（さ）ｆｅｓｔｉｖａｌ（ん）（祭）（り）』の物語を覆し、皆んながハッピーエンドへと結び付く物語……私の予測と見守るべき題名としてはこの様な結果ではなかったのですが…ふむ、何事にも失態や予測とは違う裏切りは付きものです。仕方ないとは言え、収穫は御座いました」

「…何が、言いたいのですか…？」

「貴女達を襲った二匹のメルヘンは私が顕現致しました。構造を分析、理解、再構築、概念のテクストを与え、ミメシス――異界と現界へのパスさえ結合していれば、いつでも顕現させる事は可能ですので……然して、もう時期あの二匹は物語を終えるでしょう」

「は…？」

つまり、あの最悪な赤鬼と蒼鬼の妖魔は傍観者が作ったというのか？メルヘン…とかはよく分からないが、言葉の口振からして間違いではないだろう。

「嗚呼、ハッピーエンドを掴めなかった犠牲者については残念でしたね。この世界には遍く作品が脈を打ち、輝きを放ちますが……その多くの作品が輝きを放つ中、我々の知り得ない場所で偉大なる作品は失って行くのです。それを『しられなくとも良い作品』に降格されるのは、非常に悲しいことであり……いえ失礼、皮肉を言ってるわけでは御座いません。然してその犠牲には蒼牙鬼や赤鬼怒も含まれるのでしょうか？これに対するテクストをどう導き――」

「貴方の……」

「？」

「貴方の…貴方の仕業だったのね!!??あの地獄の惨劇を生み出したのも

…貴方が行わなければこんな…！妖魔を出さなければ…!!こんな事には!!!」
激情を露わにする月光は、華麗や優秀で柔らかな顔立ちとは違い、激怒する。頭に血が昇り、思わず胸倉を掴もうとするも――触れることができない。
身体が貫通して透き通ったのだ。
「!?!」
「まあまあ、落ち着いてください。不愉快を与えたのならば謝罪致します。然し誤解のなさらぬ様…確かにあの作品は私が顕現に至るに成功しましたが、それを指示したのは『クドラウム』と『アルカディス』ですから。それにどうやら私は貴女の怒り、葛藤、心情を理解しなくてはなりません――」
絵画に映る男性は、こんな激情を向けられてもなお、励まし宥める様に、気優しい笑みを浮かべて言葉を述べる。皮肉を通り越した語り手に、怒りを通り越して無感情になってしまう。
「貴女達は私の作品『Demon brother festival』に対する答えを、物語の結果として示してくれました。私は自らが『投げられた賽』となる少年に非常に興味を示しているのです。嗚呼…他の方々ならどう解釈するのでしょう?そう、理解しなくてはなりません――だからこそ、この少年が掴み取った物語の為にも、今後として彼を死なせてはいけないと…。本来ならば傍観者であり、シナリオライター…虚無の語り手が一人勝手に動き出すことは余り好きではなく、あってはならないのですが……こほん。だからこそ、こうして無礼への謝意を込めに来た訳でして…そうですね、なので今回は特別に一つ、貴女達が知りたがってる情報を教えましょう。まだ未解決な議題はお答え出来ませんが……そこは悪しからず」
「…貴女のことなんか、知りたくもない…でも…」
月光はミカヅチを赦さない。
皮肉者と罵声を浴びせたくなる位に、理解が難しく、蒼牙鬼や赤鬼怒と言った大妖魔を召喚させ、全員ではなかったが犠牲者さえ現れ

た。ラファエル様も殺されかけ、ミカエル様がいなければ今度こそ終わりだったのだ。
だけど…もしこれが、仮に頼まれた指示であったのなら…どうして自分達はこんな理不尽な目に遭ったのかと…
「今回の騒動は、どうして貴方は…何の指示で二匹の妖魔を使ってまで襲わせたのですか…？」
だがこれは同時に仲間達を売ることになる。ミカヅチの協力者…そうなれば芋蔓式という訳ではないが、一つの質問で無数のヒントが掴めそうだからだ。これを断るというのなら、それ程にコイツにとって知られたくないナニカがあると。これを上層部や不雪帰様に報告すれば、何か掴めるかもしれない。
だがミカヅチは何の躊躇いもなく答えようとする。
「聖域と崇高、『バステト』の確保の為です」
は？
それは余りにも理解不可能な答えだった。
「今回私が顕現致した『Demon brother festival（鬼さん祭り）』を通じて『バステト』による捜索を開始し、領域を占領する役目があの作品には御座いました。其れは『アルカディス（カグツチ）』の指示であり、彼女が抱いた理想のテクストを形にする為だったのです。貴女達で言う記号…即ち『妖魔の巣』と呼ばれるものでしょうか…我々は『聖域』と呼称しており……おっと、お互い価値観は違いますからね。『正解は自らの特権』です――間違いという言葉を投げるつもりも御座いません」
妖魔の巣となる以前が領域と表し、妖魔達が領域を占領する事により、妖魔（メルヘン）は妖魔の巣（聖域）を確保した――という事になる。つまり、蒼牙鬼と赤鬼怒は自らの聖域を確保するが為に、あんな残虐進行と言わざるを得ない占領行為を行なっていたのだ。
「遥か遠い昔…様々な国は戦争が絶え間なく続いておりました。西洋、和風問わず…何故だか存知でしょうか？国と領地の進展、他国や他所からの迎撃、平和を望む為の争い、欲の為に国や領域の奪い合い……我欲や保身、財政、ジャンルは複数御座いますが、貴女達が繰り

返してた歴史と同等に、彼らもまた自身の領域を得ることが最も重要で……まあ、これは『アルカ(カグツチ)ディス』が担当とする御話ですので私からは省略させて頂くとして……問題は自らが聖域を確保した後、作品は更なる崇高を目指す為に神秘と恐怖を手にするのです」

月光はこの質問に対して半分自責の念を込めている。

この者の聞きなれない単語、分析も理解も難しく、ヒントどころか何もかも不明点だらけの問題に、頭が痛くなる。

「二匹のメルヘンは自身の聖域を確保した後、主従関係に当たる他のメルヘンを増殖させ、信仰を深め、自分達メルヘンを偉大なる者へと仕立て上げる為なのです。

崇高とは――神秘と恐怖により存在し得る概念であり、高める事により作品は価値のあるモノへと昇り、上位者へと感応し、軈て神へと到達するのです。そう、これは『Ｄｅｍｏｎ(鬼)ｂｒｏｔｈｅｒ(さん)ｆｅｓｔｉｖａｌ(祭り)』が偉大たる崇高に至る物語でもあったのです。其れを貴女達は乗り越え、見事に自らの物語を掴み取り、現在に至った訳なのです。そして我々は失敗した…という訳です。聖域の確保も、崇高へ至る道も…嗚呼――『バステト』はあの場所には存在しませんでしたので、どの道我々は失敗した事実には変わりありませんから……」

では何か…？これは蒼牙鬼と赤鬼怒とやらの大妖魔が偉大な神になる為の物語であり、その過程で自分達は殺されてしまっていたと？それが当たり前だと言わんばかりに、寧ろそれこそがハッピーエンドだと言わんばかりに…。いや、コイツはそう言う意味や心理で答えてる訳ではない――そうなってしまうのもまた一つの結果論であり、物語の幸せは勝ちか負けか、価値があるか無価値となるかの違いにしか過ぎないのだろう。

そして物語と物語が衝突し、結城守という存在が予期せぬ方向へ導き、予測不能の変数となり、物語が迎えるのは現在ではない、誰もが予想だにしなかった新たな現在へ辿ったと。

それがミカヅチが導き出したテクストによる答えのだろう。だからハッピーエンドを迎えた事自体が、あり得ないと言わんばかりに首

を傾げてしまう。
「だからこそ一区切りに完結された物語の邪魔をしてはいけません――これはほんの私による微力ながらの謝意で御座いますが故に、無礼な振る舞いと言動、癇癪を起こしたテクストにどうか容赦を……」
「……」
結局分からなかった…だからこそ、月光は噛み締めた。
自分と相手の価値観と知識、それは歴然と言わざるを得ない差も広がっており、自分には知らない事が沢山あるのだと、痛感させられた。何故なら、殆ど理解する事が不可能だったからだ――それでも今回の件、あの蒼牙鬼や赤鬼怒が神になる為の物語なのであれば、妖魔とは…一体何なのだろうか？
自分達の知識はまだ足りないとでも言うのだろうか…？
「おや、そろそろ御別れの時間のようですね…」
すると複数の気配が此方へ向かって来ているのを感じ取る。ミカヅチは紳士な動作による仕草で軽くお辞儀をしながら――
「それではご機嫌よう――」
するとミカヅチは此方が静止を叫ぶ直前に、屋上から飛び降りた。直ぐにビルの鉄格子を掴んで、屋上から下を眺めるも、其処にはもうミカヅチは存在せず、身体のヴァニタスコロニーも、顔を代弁とした遺影のジョナサンも、何もかもが見えなかった――。
こうして自分達は、駆けつけに来てくれた救護班に回収され、生還者と共に病院へと搬送されたのだった。

12話「新たな平和の象徴」

「はぁ…はぁ……少々、と言うよりも…かなり苦戦を強いられますね……」

メラメラ、パチパチと焼ける空気と焚き付く音が耳朶を木霊する。熱された空気、放たれる煙は肺を埋め尽くし、人体に害を与える。況してやこれが妖魔の生成した炎なら尚の事危険だ。一体どのような効果を齎すのかも不明である。

「月光さんや閃光さんが上手く行けば良いのですが……」

朦朧とする意識、傷口が焼けるような痛みに、何度も気絶しかけてしまう自分は、何とか踏ん張りを効かして標的を睨みつける。

赤鬼怒は自分の弱点である角を狙われた事により大激怒を露わにしており、魚のような目玉を充血させており、歯軋りを立てている。嫌な音が連なり、精神的に嫌悪感を生じてしまう。

「ウ〝ァあぁあ〝ぁ〝…!!キ〝チチ、んウ〝おおオぉ〝!!」

妖魔特有の鳴き声を発しながら、二本の大剣を振り翳すと同時に跳躍し、首元を刈り取ろうと動き出す。

身体が痙攣し、思うように自由が効かず、意識が朦朧とし、視界が揺らぐ。

不味い――あれから防戦一方ではあるが、これ以上は戦えない。

撤退をしたくとも、燃え盛るリングがそれを許さず――空気を揺らし、狭まれた範囲内での戦闘…。場外へ逃げても焼け焦げて死ぬ、かといって防戦一方していれば場内で殺される…。嗚呼、鬼の遊戯による敗者の末路は命を以て死を選ぶ事なのか……。

「ッ…?」

だが、赤鬼怒の刃先が彼女の身体を掠め取ることは叶わなかった。

跳躍の途中、何かしらの異変を察した赤鬼怒は、意識を彼女から震源に気を取られる。
ゴゴゴゴ…と、地鳴らしのような豪快音に、段々と此方へと迫り来る何か…。赤鬼怒は感じ取れても、ラファエルは感じ取れなかったらしい。だが途切れそうになる意識も、次の段階で覚醒する事になる。
ボガアァァァーーーンッッ!!!
豪快な破壊音と共に、破壊された壁から現れたのは、ナニカに振り回されてるであろう、巨躯な蒼い装甲に身を包んだ蒼牙鬼。凡ゆる装甲は剥がれ落ち、肉片が飛び散り、再生と破壊を繰り返している。目玉は潰され、鮫のように幾重も映えた鋸のような鋭利な歯は剥がれ落ち、大量出血を繰り返している。
「お待たせぇ!私が来たぁぁぁーーーっっ!!☆」
掘り返され、破壊された壁から現れたのは、能天気でいつもお調子な、天真爛漫な声。いつも聞き慣れて、それでいて苛立ちを、時には可愛さを、安らぎを、様々な感情を抱かせてくれる声が耳を打つ。
蒼牙鬼を軽々しく振り回し、鬼を棍棒にと言わんばかりに、蒼牙鬼で目の前の姿を確認できた赤鬼怒をブン殴るように、豪快に武器として殴りつける。
赤鬼怒は避ける事叶わず、突然すぎる出来事に処理が追い付けず、殴られるまま物理法則に従って廊下の奥の方向へと吹き飛んでいった。
「お待たせ～楓ちゃん!待った～?」
高貴で白を主張とした学生服は返り血を浴び、白と赤を連想とさせた姿で、背中を見せながら、顔を後ろへ振り向き安否を確認するのは…馬鹿にならないほどの実力を誇る幼馴染のミカエル　――彩楽園花が来てくれた。
まるで某有名な英雄の真似をした登場を表して。
「うわっ!凄い傷だらけじゃん…!えっと、大丈夫?!ちょっといつもの感じでやって来たけど…てか、私のこと見える?」
「あ……ミカエル…さん…」
「うん!楓ちゃんのＳＯＳメッセ見て飛んできちゃった☆最初は『う

へぇ〜！楓ちゃんの鬼ィ…悪魔ぁ〜…』って思ったけど、流石に今回の忍務はちょっとキツかったかな？取り敢えず、意識はあるみたいだし…うわ、傷口が火傷の後で爛れてる…下手すれば気絶してもおかしくない重体じゃん…本当、頑張り屋さんなんだから」

頬に手を遣り、撫でるように優しく労うミカエル。慈悲を込めた言葉と、窮地と救いのない現実に光を当て、手を差し伸べる天使の象徴。次期カグラ四天王――空白の席、龍を埋める新たなカグラにして、その強さ――陽花と引けを取らない最強の忍。

「ミカエル…さん…」

「ん？どうしたの？」

「此処では忍名を通してと…入学した頃から仰ってましたよね??」

来てくれた安堵の笑顔が、段々と真っ黒な笑顔…圧へと変わっていく有様に思わず言葉が詰まってしまう彼女は、口をパクパクさせてしまう。

「まさか……月光さんと閃光さんに私の本名…仰っておりませんよね？いえ、貴女自身…本名を出す、なんて失態…ユースティア女学園の生徒として…忍を象徴となる模範の貴女が、そんなこと、するわけないですよね??」

「も、黙秘権を使いま〜っす……」

時すでに遅し。

思いっきり本名をぶちまけた彼女は視線を逸らして冷や汗を流す。幼馴染で力の差はあるとはいえど、楓を怒らせると末恐ろしい。彼女に何度か矢を放つ茶菓子を悉く口の中に入れられそうになったことがあった。これを聞いたらお菓子を食べれるなんてご褒美じゃん！となるだろう。だが毎食、然も腹がいっぱいな時でも甘い菓子を食べさせようとするからそれがトラウマなのだ。

「……とはいえ、助けに来てくださったことは素直に感謝いたします…その様子だと…」

「うん、月光ちゃんと倒れてた子も、囚われてた人達も助けたよ。ハッピーエンドになれたのは、楓ちゃんのお陰でもあるからさ」

それでも助けに来てくれた親友には頭が上がらないのは事実であ

り、今回の件は帰ったら大目に見るとしよう。それに先程、ミカエルが振り回してた大妖魔を見た限り、倒れてた子はとは閃光のことで、あの姉妹はもう一匹現れた大妖魔を相手に踏ん張ってたのだろう。そう考えると本当に後輩に当たる中等部とはいえ、よく頑張った方だと心の中で褒め称える。

「キ〝キ〝ッ！にチちイ〝い〝ィ〝…!!あ、アに者…っ！あニ者ァ〝ぁ〝……!!」

「お、オト〝…うトよ…っ！ク〝キャき〝ゃ、オ、ノれェえぇ〝!!」

そんな安楽とした二人の仲を引き裂くように、闇を主張とした空間の中、蒼牙鬼は何とか立ち上がり、赤鬼怒は吹き飛ばされた後、此方へ戻って来ては、ボロボロな蒼牙鬼と再開を果たす。

赤と蒼の兄弟鬼が再開を果たし、手酷くダメージを負った弟の蒼牙鬼を見ては、ミカエルを睨むように圧を孕ませた視線を飛ばす。

「あはっ☆なになに～？鬼さん同士兄弟で仲良しごっこ？仲間がやられて怒ってるんだ～？あはは、なんだか面白いなぁ～」

激しい怒りを露わに、炎が昂りを示し、弟の蒼牙鬼も立ち上がっては此方に敵意を向ける。そんな二匹に臆することなく「たはは」と気楽に笑うミカエルは余裕がある。

「皮肉にも今の私達と似てるね。大切な親友を傷つけられた私と、仲間を傷つけられた赤鬼さんってところ？あんまり一緒くたにされるのは嫌だけどさ、こうしてボロボロな楓ちゃん見るとそう認識しちゃうんだよね～☆」

「……」

ケラケラ笑いながら、さも普通の女子高生のように面白おかしいと言わんばかりに話すミカエル。この女の強さ…実力と気配を肌身で感じた赤鬼怒は警戒を緩ませず、凝視する。

「うん、だから別に怒ってもいいよ。アンタにとってはその青鬼は大切な存在なんでしょ？じゃなきゃ妖魔がそんな風に怒らないもんね。まっ、感情とかそんなの知ったこっちゃないけどさ……だから分かるよ。分かるからさ…」

するとミカエルは思いっきり拳を振り撒き、風圧を起こして揺らめ

く炎を消し去る。あの地獄の業火を触れることなく、唯の拳圧だけで…そして――

「親友を傷つけられた私の怒りも、理解してくれるんでしょう？」

とめどない殺意と憎悪、憤慨の感情を最大限に気配と共に飛ばし威嚇する。目のハイライトは消え、怒りを露わにした感情で、二匹を睨む。

危険を察知した赤鬼怒は巨大な燃え盛る双剣を振り翳し、蒼牙鬼は身体を丸め、巨躯と鉄壁の装甲を生かした鉄球と化し、駆け回る。

赤鬼怒が蒼牙鬼を地獄の業火に燃える大剣で、野球ボールのように打ち飛ばす。力量と物理法則により、碧丸の蒼牙鬼は威力と速度が上昇し、燃え盛る身体を駆使してミカエルに集中する。

「ふーん、今度は野球ごっこかな？」

攻めに来る迫圧な蒼碧の羅刹弾丸を、忍武器＝『ｋｉｒｉｅ―Ｅｌｙｓｉｏｎ』で弾き返す。桃色と黄金色を彩る槍と斧の機能を備えた重火武器を軽々しく振り回し、蒼牙鬼の装甲を跡形もなく剥がし壊しては、内面の筋肉を貫通し、ブシュウウッ――!!と血飛沫を飛ばし、無惨に薙ぎ倒される。醜い妖魔の悲痛の産声が響く。

弾き返されても尚、再生を繰り返す蒼牙鬼滅は下手すればｌｉｖｉｎｇ　ｄｅａｄ――蘇る不死者だ。肉体が再生するからこそ、容赦なく赤鬼怒は此方へ飛んでくる蒼牙鬼に再び剣戟で打ち返す。会話のキャッチボールならぬ、物理法則に従った殺伐なバットでボールを打ち返す構図と成っているのは、これ如何に何ともシュールな絵面だろうか。

「遊んでる訳じゃないんだけど」

これ以上は埒が明かないと判断したミカエルは少し体の軸をズラし、角度を変えてＫｙｒｉｅ―Ｅｌｙｓｉｏｎ　の槍刃が破壊と再生を繰り返す蒼牙鬼を、違う方角へと吹き飛ばす。

（やっぱり再生が凄まじい……私、バカだけどこう言うバトルのジャンルにだけは聡いんだよね。アレほどの実力でこれなら死んでる―

―そうじゃないってことは…）
「ミカエル…さん…！角を狙って下さい…!!それがきっと…奴等を倒す為の条件かと…!!」
「えっ？ツノ…？」
楓の意識を無理矢理奮い立たせ、絞るような声で叫ぶ楓――ラファエルの叫び声に、ミカエルはハッと我に返り小首を傾げる。
蒼牙鬼の角は此処へ一直線に殴り壊していく際に何回か折れたものの、結果として死ぬことはなかった…
「…あーね、なるほど。うん、大体分かった。取り敢えずやれる事だけ思いっきしやってみよ。試せるもんはどんどんやってこ――」
道理に納得したミカエルは静かな瞳を敵に送る。壁に埋め込まれながらも、瓦礫を退かしながらのっしのっしと此方へ歩み寄る蒼牙鬼。消えることのない燃え盛る大剣を勇ましく肩に担ぎながら、嘲笑とも呼べる邪悪な笑みを溢す兄に当たる赤鬼怒――片方だけでなく、両方の角を折ることで、条件が満たされる可能性は高いと推測される。現状、化物には化け物で対抗するように――『ｄｅｍｏｎ　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｆｅｓｔｉｖａｌ』と『ミカエル』という、規格外の化け物同士でぶつかり合うことで、渡り合い対抗を可能にしている。
後ろには倒れ伏しながら、意識を保ち友の背中を見届け、歯を食いしばる楓。目前には悪鬼を連想させた凶悪な赤鬼怒と蒼牙鬼の二匹――嗚呼、普通なら絶体絶命の状況なのだろう。
だが、忘れてはならない――
「よしっ！それだけ分かればジューブン！ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ラファちゃん！やれるだけの事はやってみる。何たって私は――」

新たな平和の象徴となるべく存在だから――

平和の象徴『オールマイト』――その意味は本物の英雄、紛う事なき最強のヒーロー。存在するだけで平和を齎し、約束し、凡ゆる強敵を拳で嬲り倒して来たアメリカンヒーロー。
それとは対なり、誰もが知る平和の象徴とは違うもう一つの、約束

された神々の女神。
ミカエルとは、神に似た者――その名に込められた概念は、約束された救い。救いもまた平和を齎し、存在だけで象徴的な強さを示すのなら、それはオールマイトに引けを取らない、立派な平和の象徴なのだ。
平和の象徴とは、必ずしも一人という訳ではない。だがそれは極めて限りなく少ないだろう。
少女もまた、この世界を担うに相応しく、それでいて小さくとも、陽花に引けを取らない才能溢れる、屈強なる忍であると。ただ彼女は忍と呼ぶには相応しくない――平和の為に祈り、平和の為に捧げ、平和を愛して、平和を望み、平和を願う――女神の象徴なのだ。
赤鬼怒と蒼牙鬼が行動を起こす前にミカエルは武器を手に持ち素早く動き出す。決してオールマイトや陽花のような俊敏さはない。パワーがそこそこ優秀で、古い時代に脚光を浴び、忍の世界に名を馳せた伝説の忍・半蔵とも肩にはならない、雄英や他の忍達より秀でてる。
赤鬼怒が前衛に立ち、大剣を振り翳す。一つは首元、もう一つは下から上へと斜めに斬り上げる斬撃。
それを阻止しようとするも、蒼牙鬼が赤鬼怒よりも高く跳躍し、頭部目掛けて拳を打ち込む。
「グギャァァ〝あァぁ〝ァ〝ーーーーッッ〝ッ〝!!!」
渾身の一撃。
どちらかと言うと武器を巧みに扱い、防御面に関して優秀な弟分に当たる蒼牙鬼なので、武術を駆使した拳術はない蒼牙鬼――だが大妖魔の拳の一撃など、一般人が喰らえばひとたまりもないだろう。
「――ふーん…で？それだけ？」
「――――」
頭部を真上から殴ったにも関わらず、ミカエルは何とも表情を変わらせない。いや、痛みはある。痛覚遮断されてる訳でも、ダメージを無効化にする訳でもない、表情を変えずに普通の笑みを浮かべている。

逆に蒼牙鬼の拳は亀裂を生じさせ、装甲が剥がれる――ミカエルは外見によらず、防御面が比較的に高い。
銃弾や刃物でも彼女を殺そう者なら、上位者クラスでなければまともに通じないだろうと言わんばかりに、下手すれば凶悪ささえ感じてしまう程に。
「まずコイツの角取るね」
そして何ともなさそうに斬撃を諸に喰らい、炎を浴びせられたにも関わらず、逆に大剣は刃こぼれを起こし、ビシビシと亀裂が生じては、形が崩れ行こうとしていく。
「キ〝ッ――!?」
信じられないモノでも遭遇したかと言わんばかりに、壊れた武器を二度見しては、呆気なくツノをもぎ取るかのように、強引にもぎ取る。根本が硬質化されており、角を取るには中々骨が折れるだろう、並のカグラでも相当な技術と力量が必要とされる赤鬼怒のツノを、まるで「ちょっと貸して〜☆」というノリと言わんばかりに剥ぎ取れば、もぎ取られたツノからは出血が流れ、赤鬼怒は語言化不可能な苦痛に悶絶する鳴き声で発狂する。
「うるさいなぁ――」
それを躊躇いなく、赤鬼怒の腕を掴んでは、着地しようとする蒼牙鬼へとハンマーの堅く叩きつける。壁へとぶちまけられた二匹の哀れな兄弟は、手酷く、荒々しく、壁へと撃ち込まれては白目を剥いてしまう。
「絶・秘伝忍法――『コスモ・ヴィクトリー』」
そしてもう一つ、彼女がカグラたる強さの秘訣は――忍術が別次元的な強さを誇るから。
突如、対象の赤鬼怒と蒼牙鬼、そしてミカエル呑みが空間に取り残される。
『ッ…??』
二匹は壁へと埋め込まれながら、まるで物体も空間も別の彼方へと移動されたかのように、暗闇が広がる。

だがそれは決して光のない暗黒の空間ではなく、白くて小さな点が無数に散らばっている。
その正体は星――つまりこの暗闇の空間は…
ミカエルは目を瞑り、小さな口で何かを呟けば、両手で祈りを捧げる――すると周囲からは眩しくとも直視し難い聖なる光が広がっていく。
コスモ――宇宙。そして宇宙規模に広がる空間から起こる裁きの光は勝利へと輝く意味を込め、断罪すべき悪鬼に聖なる光と裁きを下さん。

瞬間――絶え間ない大爆発が、理不尽さと共に存在ごと掻き消すかのような眩い宇宙の光と共に飲み込まれて行く。

気付いた時には現実世界…いや、そもそも自分達が錯覚していたのか、そういう比喩的な現象を目の当たりにされたのか、不明な点は多く存在するが、それを知ったところで蒼牙鬼と赤鬼怒にはどうでも良い話で、身体は既に崩壊され、肉体がバラバラに破損された二匹は、とてもグロテスクでグチャグチャに、形容し難い惨たらしい容姿へと変貌を遂げてしまった――。
それでもブクブクと血の泡が吹き出し、ゴポゴポと不気味で不愉快な音を立てながら肉を再生…どうやら身体を悉く木っ端微塵にしても肉体を弾け飛ばしても、死ぬことはないらしい。ｌｉｖｉｎｇ　ｄｅａｄ――そう呼ぶにも等しいほどに、死ぬことさえ許されない赤鬼と蒼鬼の哀れな末路。
「身体はグチャグチャにしても再生はするのね…だけどそれならもう抵抗なんて出来ないでしょ」
ミカエルは戦闘を交えて気付いた事があった。
肉体の破損、損失、それは必ず自己再生を働かせていく。然しそれは一定の速度であり乱れる事は一切ない。つまり肉体が、原型が保てない程に破損させ、破裂させれば再生している間は攻撃は不可能であり、神経が通っていなければ四肢が破損された中、千切れた腕や足は

機能を失う。
赤鬼怒も再生されていることから、間違いなく兄弟とも呼べる二匹の角を折っている必要がある。
ならば一旦赤鬼怒の角を取り、その後に蒼牙鬼の角を折れば、仮に非常事態が起きたとしても難なく対処できるし、天変地異さえ起きない限りは失態なんてしない。
「じゃあ終わりだね――まさかこの程度だなんて、次はもうちょっと頑張ってね～☆」
天真爛漫な笑顔を浮かべ、嘲り笑うように掌をひらひらと動かしながら、次の瞬間――ブツリッ、ブツン！　二本のツノが根本ごとくり抜かれれば、多量出血の血飛沫が飛び散る。
刹那――廊下にはただならぬ怒号と悲痛な叫び声が喚き、鼓膜が揺らぐほどの大音量が鳴り轟く。
そして赤鬼怒と蒼牙鬼は苦悶と悲痛の表情を浮かばせながら、身体はジリジリと灰燼と化し、焼き焦がれ塵となり、消滅の末路を辿っていく。
『お互いが完成された作品』と成り果て、立証されていた『ｄｅｍｏｎｂｒｏｔｈｅｒｆｅｓｔｉｖａｌ（蒼牙鬼と赤鬼怒）』は、両方が死して初めて存在の立証が不可能となり、この世から魂ごと消えてしまう。
元々都市伝説という抽象的だった謎と恐怖の概念が込められた大妖魔。つまり無価値な存在、御伽話（オリジナル）を『テクストとして解釈し、概念を込める』事により模倣技術（ミメシス）によって顕現に至った存在なのだ。
本来妖魔とは、忍の血が一定量溜まり、穢れとなって膿として出現した化け物の事であり、それは古来から伝承された妖魔としての在り方――皆が知っている妖魔としての存在だと。
だが月光と邂逅したミカヅチは最早超次元的な解釈と共に、忍や人間では到底辿り着けない超常や科学と呼ぶことさえ不確定な、超知識により妖魔を把握し、赤鬼怒と蒼牙鬼を召喚させた。
『領域』と『崇高』、『バステト』…それは今はまだ誰も知る由もない、人間では理解にすら辿り着けない未知なのだから。

「ふぅ～…いたた、流石に殴られるのは痛かったなぁ…斬られるのも痛かったし、熱かったし……って、それより――大丈夫!?かえ…ゴホン、ラファちゃん!!」
　服装は焼き焦げた後と刃物で切り裂かれた衣類、返り血を浴びた事により制服は完全にボロボロに汚れてはいるが、身体の方は特別目立つような怪我は見受けられない。耐久力はあっても痛覚や熱を感じるのは変わらないらしい。いや、そうでもなければ何も感じない状態が続くのだから、当然と言えば当然であり、人間を辞めた訳でもない。
　倒れ伏せているラファエルを介抱するように駆け寄り、上体を起こし、肩に担ぐ。
「ぐっ…!ええ…私はこの位……」
「いやいやぁ、気分を無視してまで此処へ来て本当良かったよ～……もし怠いなんて気持ちで此処に来なかったら限りなくバッドエンディング迎えてたもんね～…うぅ!楓ちゃんは本当によく頑張ったんだね!えらいえらい!学園に戻ったらお茶会しよ～ね☆」
「……本名、出てますよ。それに、怪我人相手に状況を確認せずいきなり担ぐのは愚策です…。骨折してる人間、または内臓系や神経、骨が弄るしくダメージを受けてる場合も想定し、重傷者に対して適切なケアをしろと……学園で習いましたよね…?」
「あ、あはは……えっと、軽口叩ける暇があるから軽傷ってことで、捉えても良いかなぁ～…なんて……。てことでギリセーフで良くない?」
「良くないです……ただ、その……
　――有難う、御座います……貴女が来てくれたお陰で、全てが救われましたから……」
　全てが終わり、廃墟と成り果てたこの状況下――それでも軽口を叩き合い、談笑でも嗜むかの様に笑い合う親友の二人。その笑顔は光よりも輝かしく有り、ボロボロな身体を担ぎながら、帰路へと足を踏み入れる。

こうして多少の犠牲者が続出したものの、結果として囚われてた多くの囚人達は救われた。
涙を流す者、
血を流す者、
諦めなかった者、
多彩な者達が、救われなかった人達による救済――ユースティア女学園の生徒二名、死塾月閃女学館中等部二名、重傷者二名、内二名軽傷。囚人達は女学園により一時期、救護班により匿う形と成り果てた。
こうして、この物語――『ｄｅｍｏｎ　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｆｅｓｔｉｖａｌ』という不吉な悪夢を打ち破り、裏舞台に待ち受けていた残酷な現実は幕を閉じた。

１３話「不可解な者達」

あの惨劇な一夜を明けたその頃、午後の２時――
昼間は太陽の日差しが強く、春の風が頬を伝い、満開した桜が風に触れ、散る。
春に吹く桜の風はいつ見ても美しく、春の季節だと大きな実感を持つ。大変悦ばしい事だろう、何時迄も暖かな季節に浸っていたい。
無造作に並べられてる桜の木は敷地の庭に埋もれており、生い茂った草原が広がっている。辺り一面、特に目立つ物は置かれておらず、ざっと５０尺は下らない広さ…この敷地に住む人間は豊かな暮らしを送り嗜んでるだろう。
家も立派な…と言うより、５階建ての館が敷地内の中央に佇んでいる。
それこそ、何処その財閥家かと疑わしく思えるその豪邸には数人のメイド、執事を従えており、当主とその家族、息子は暖かく何不自由なく豊かな暮らしを送っている。
その中で、息子を除いた当主の父親と、妻の母親、そして友人と思われしき数人の財閥家の当主達は、仲良く談笑を愉しんでいた。
「いやぁ〝あの子〟は偉いねぇ…礼儀正しく、頭脳も優秀…学園毎年一位なんですって？」
「是非とも、村雨にも会わせて頂きたい事ですな。ウチの家系は経営の道を歩んでおりましてね、最近は何かと気が荒くて困ってはおるが…」
「ですけど余り一眼に出たがらず、友好関係こそは皆無に近くとも私

達の跡を継ぐ為、日々精進してねぇ…よく立派に育ったわ…」
「やはり奥さんの教育が立派な証拠なのですよ、ウチも将来家系の跡取りとして…」
内容は、当主の息子が経営の道を進み、父親の会社の跡を継ぐ事で大いに喜んでるそうだ。
５０、６０歳の大人達が、メイドの差し出した紅茶を啜りながら、愉快そうに話を聞き盛り上がっている様子が伺える。成績優秀、頭脳明晰を誇る息子が名門の大学を卒業した事で、友人を集めて自慢話をしたかったのだろう。
因みに噂の息子は、一秒でも早く跡を継ぐべく、時間を有意義に使い跡を継ぎたいとのことで、両親は大変感心している様だ。
出来の良い息子を持ち、浮かれていれば喜びもする。本来親と言う者は、息子の苦手分野や、出来の悪い事に話題を吹っかけるのだが、なんと欠点何一つ無い完璧超人だそうで、振るにも何も言えないのだ。だから美徳部分や褒める点を述べることしか無い、金持ちや勝ち組の人間とは常人の考えとは違い、異なっているのだ。
「ただ、最近は書物を集めて読むことが好みだそうで…見たことのない古くて分厚い本がいっぱい棚に並んでるのよ。息子とは少し考え難い趣味だけれども…まあ、人それぞれよね♪」

――別館。
三階建ての広い部屋は、息子のマイルームとして勉学に励み、よく分厚い書物を一日中読んだり、英文で描かれた古代文明を難なく解析し読破している事が日常茶飯事。
巨大な本棚は身長の約二倍、脚立を使わなければ届きそうにも無い棚には一冊分のスペースが空いており、今息子の天夜は〝日本の神、神楽〟を熱心に読み上げている。
窓からは本館が見え、此処ではいつ誰が来るのかきちんと見渡す事が可能なので、何かと都合が良かったり。
しかし今はカーテンを締めており、日光の明かりが届かず、部屋は

薄緑のカーテンの影で薄暗くなっている。
壁に飾ってある時計の長針が１２時を指し、短針が１１時に到達すれば、鐘の音が鳴る。
ゴウン――ゴウン――!!
古くとも時刻を知らせる鐘の音が鳴り響き、分厚い辞書に似た本を閉じれば、部屋の扉に目を遣る。
「そろそろ時間か…」
クールな青年は、分厚い書物をテーブルの上に置けば、扉の前に立ち尽くす。何の変哲もない木製の扉に、ドアノブは金色の塗料で塗られた、ごく普通の扉――

『Ｒｅ――Ｃｏｄｅ：１３２６６６』

青年が暗号とも呼べる言葉を発したと同時に扉を開ける。
目の前に広がる光景は、個室から出る廊下ではなく、別館に於ける屋敷内でもない――全く別の、異質を孕んだ空間が広がっていた。
真っ赤な色に染まった空間、中心に佇む円卓のテーブル、床は大理石で生成されており、空中に浮かぶ椅子、そして椅子に座りながら優雅に寛ぐ何人かの同胞が姿を見せる。
「やぁ、丁度良い時刻に来てくれたじゃないかイザナギ（クドラウム）――夜分遅くだと言うのに、態々来てくれてすまないね。お取り込み中だったかい？偽りの家族と過ごしていたのかな？いや、今の君の姿は愛想良く『天夜くん』とでも呼べば良かったかい？」
イザナギ――天竜衆にして嘗て、両姫を殺めた張本人である彼の真の名はクドラウム。『実力』という意味、価値を担い、役割を持つ憑黄泉だ。
憑黄泉神威に仕え、神楽滅殺を目論む残忍非道な妖魔は、天夜と呼ばれる人間の皮を被り、人間としての日常に溶け込んでいた。
「巫山戯ろカグツチ（アルカディス）――別に好んで人間に成りすましてる訳じゃない…。木を隠すには森、より巧妙な文学と歴史を調べる為には人間としての生活に溶け込む方が合理的だと判断したからだ。俺が実力主義

者というのは全員が知ってることだろう…？」
カグツチ――天竜衆にして人間の容姿と美貌を兼ね備えた妖艶な女性は、とても妖魔や人成らざる者とは思えない。化け物だと知らなければ誰もが見惚れてしまうだろう。
腰まで届く美しい純白な長髪をたなびかせ、黒い西洋ドレスを羽織る、容姿端麗を備えた女性はご令嬢みたく、ご機嫌よく微笑んでいる。黒のドレスと白を主張とするイメージカラーは、相反する白と黒として彩られており、とても魅力的だ。
真名は『アルカディス』――『理想者』という価値、意味を担っている。
「まあまあ、落ち着いて下さいクドラウム。彼女も貴方の事情を察しての発言ですので――貴方にも貴方の世界観が有り、生活があり、事情がございます。何かしら此方の不手際で貴方に不利が生じてしまえば此方としても申し分ない…と言うテクストとして解釈してくれれば」
ミカヅチ（ヴァニタスコロニー）――洋風を連想とさせる考古学者のスーツを羽織っているのが特徴で、身体は黒霧のように靄っていている。首もなく顔もない。但し抱えてる肖像画に似せた遺影は、ミカヅチの顔と呼べる者であり、ヴァニタスコロニー自身ではない。それは月光との邂逅でも説明付けられている。
遺影に映る優しい人間の顔をした中高年の男性は『ジョナサン』――つまり、ヴァニタスコロニーとジョナサンは別の存在であり、然して二人揃って初めてミカヅチと呼ばれる。簡潔に言うなれば、本体と顔は別の存在であり、『虚無』と『語り手』により、初めて『傍観者』としての価値、役割を担当――。ジョナサンと呼ばれる遺影の肖像画は、絵画だというのに、まるで目の前の知人の様に顔や表情を動かし、とても気さくに優しい笑顔で語りかける。
「……ジョナサンに免じてそう言う事にしておこう…」
不服そうな顔を浮かべながら、人間の皮を破り捨て、姿を現すクドラウムは、苦虫を噛み潰したかのように苦渋な顔を浮かべながら席に着く。ジョナサンは天竜衆という組織内では仲裁役に立つことが多

く、議題を交え重ねる中で言論の衝突や価値観の相違、会話の進行が進まないと言った感じの際にはこうして立ち回る事で物事を円滑に進める、語り手として重要な役割を担っている。
「……そいや『イザナミ(エリザベス)』と『スサノオ(教官)』は？」
「エリザベスは自身の領域にてやるべき事があると…教官は……」
「お待たせしました――少々遅れてしまい申し訳御座いません……クックック…」
大柄な巨漢がシルクハットを被り、機械的な頭部が印象的なククノチ。真名は『ジャッジ』――『審判者』という価値、意味を担う者。ジャッジが口を開きクドラウムに言葉を紡ぐ中、違う方角から空間ごと扉のように開かれ姿を現すのは……。
黒い社会人のスーツを羽織りながら、腰に太刀を滞納している。両頬の『手』によって顔を隠す様に形容し、親指で両眼を抉るように塞ぎ込んでいる。言葉で言い表すには惨たらしい其れは、まるで両目があると主張しんばかりだ。
不吉な笑い声を喉から鳴らしながら、アルカディスとジャッジの空いたスペースの空席にゆっくりと席を下す。
スサノオの真名は『シンヴォレオ(教官)』――『契約者』という価値と役割を担っている。
「遅かったじゃないか、矢張りビジネスとやらは大変なのかい？ボクは『領域』を読み解き、聖域化してばかりだからね…君達の人間社会に溶け込んで何かしら交渉やら知識を得る為の擬態やら、色々と興味深く感じてしまう性分なんだ」
「ええ、『道元』とのビジネス関係で少々時間を取られまして……アルカディス、貴方の頼んでた『怨楼血』の文献と顕現の技術を教授をしたまでですよ」
「おお！本当かい!?それは助かるよ！――いやはや、流石は頼りになる同期だよ。もし『怨楼血』が受肉した時、どう呼称するべきだろう…ボクが代表として解釈するべき特権だからね。この恩はまた何かしらの形で返すよ。それにジョナサン――君にも無理を言って悪かったね。『ｄｅｍｏｎ　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｆｅｓｔｉｖａｌ』をボ

クとクドラウムの頼みで態々使わせてしまって」
「いえいえ、貴方達のテクストを形として代行したまでの事ですよ。それに聖域に紐付けた、模倣技術（ミメシス）による巨大メルヘンの顕現……いつ観測するにしても実に興味深い題材ですね。嗚呼、貴女があの『作品』を手に渡る瞬間が待ち遠しく思います。然し、同時に我々の代わりに道元が顕現させるとなると…手に渡るのは彼の方なのでは？その点については問題はないのでしょうか？」
　歓喜に満ち溢れたアルカディスは、乙女のように頬を紅潮と染まらせる。他の人成らざる異形を主張した天竜衆とは違い、この通り人間味がある。彼女が実は人間であり、或いは魔女でしたなんて嘘を吐いても真実として通じるくらいだ。
「ええ、全く以って問題ないかと――何せアレは道元程度では扱える代物ではありませんから。とはいえ、本来ならばアルカディスが聖域と共にミメシスによる顕現…そしてパスを繋げるべきなのですが…数多の企業との接点を多く持つ私が起点作りに適してるのはご存知の筈。あくまで私は頼まれた事を実現したまでですよ。何せかなりの値が張っておりましてね……クックック――」
「……」
　道元だけでなく名のある財閥企業、上層部、より多くのコミュニケーションや企業との連携取引、そう言った部分で裏で暗躍しながら、独自に研究と分析、ツールを広めている教官はクドラウムと同じく人間社会に溶け込む事に特化した社会人と呼んでも良い。
　クドラウムの隣に居座り、沈黙を通してるのは、爬虫類と鳥類を混ぜ合わせた不可思議な天竜衆。
　ジャッジは円卓のテーブルの上に置かれてある紅茶に口をつけて飲みながら、口を開く。
「まあ良い…それでは彼女を除き、全員ともこうして揃ったのだ…会議と行こうではないか……確か、緊急収集を招いたのは尤も他でもない、ジョナサン…だったな？」
「はい、この様にアルカディスに聖域を張って貰い、皆様方にこうして

時間を割いてまで集まって頂き深く謝罪を申し上げます。これより私が出す議題、つまり今回起きた事件について――結論から申し上げますと『パンドラ』が観測されました」

『!?』

その言葉に一同は驚嘆の表情を浮かばせ、暫し沈黙する。

「観測…？それは現象により起こりうる知覚的概念なのか？物理的に顕現された神魔ではないと言う事か――？となれば…それを示唆するのは神の器がこの世に存在したという意味を現していると？」

すると此処で声を上げたのはヤギハヤ。真名は『アルテスタ』――『芸術者』という価値、意味を担う者。タクシードで清楚な高級品の服を着こなしながらも、顔は二つ存在する。骸の竜…それが双葉のように分かれている悍ましい恐怖と、芸術と神秘を連想させる美徳、相反し相容れない属性を兼ね備えた不気味な両面宿儺の天竜衆。

左の顔は鬼や竜、悪魔を連想させた口、右の顔は真ん中に眼玉が開かれており、ジョナサンを凝視する。

「はい、元々アルカディスとクドラウムによるテクストの指示を受け、形を成すために『ｄｅｍｏｎ　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｆｅｓｔｉｖａｌ』を稼働させました。領域の確保、我々が手にするべき『崇高』、そして『バステト』の確保――嗚呼、先に申し上げますとバステトは発見されませんでした。という残念なご報告だけ…。その際に巻き込まれた一人の少女に、神の魂が宿っておりました」

「それがパンドラか……オハバリ（ブルート）、また厄介な神魔がこの世に器を憑代として生まれたみたいだよ？」

「……よりによって災厄の箱か――アレは危険過ぎる。古代の神官が遺した遺産が、『無明の神』を通じて顕現された禁忌……――ん？だが待て、それが発見されたとあらばこの世界は終焉に導くであろう程に、厄災が振りまかれる筈…今回観測されたのは神秘なのか？それとも恐怖…？」

此処でアルカディスが横に眼を遣りながら「やれやれ…」と溜息を零しながら視線を送る。

全身が漆色に染まり一才の光を感じさせないダークな天竜衆。唯

一、瞳とも呼べる両目は白い為、彼にも瞳があることは確認できる。彼の名はオハバリ。真名は『プルート』――『管理者』の価値、意味を担う者。
背中には一太刀の邪悪で禍々しい剣を滞納させており、純白な瞳――白眼である。三本のアホ毛とも呼べるトサカが主張しており、全てが謎に包まれてる、これもまた不可解な天竜衆だ。

「恐怖でした。然しそれはたった一人の少年により、恐怖を手にした彼女は元の姿に戻ったのです。通常では絶対という法則と呼べるに等しくあり得ない現象を――」
「ほぉ……」
ジョナサンの言葉に一同は食い付くように聞き取る。
「神の器が恐怖を手にすれば死ぬまで永遠に戻らない筈だが…？つまり法則を巻き戻す者、それすら打ち破る異端者が存在したと言うことか？」
「何者ですかソイツ――我々が手に入れた神秘と恐怖…崇高までは至りませんが、それでも多くを手にした我々の存在や価値さえも観測されない未知なる存在なのです？領域に辿り着いた者を無効化にする…と解釈しても可笑しくない現象を引き起こした少年の名は？」
沈黙を貫いてた鳥類と爬虫類を混合させた天竜衆――『カカビコ（アヴァリス）』に続き、顔面が天秤と黒子を連想させる天竜衆――『ワダツミ（リチュアルズ）』は丁寧な口調と不気味な声で問いかける。
カカビコ＝真名をアヴァリス――『欲望者』を冠する者であり、ワダツミ＝真名をリチュアルズ――『儀式者』を冠する者である。
「少年の名を結城守――然して神秘も恐怖も観測されない、無価値に等しいものだと解釈しておりましたが……神魔の恐怖を駆使していた少女を、何の超常現象も所有しておらず…駆使する事なく元に戻したと考え、私は彼を不可能を可能にし、奇跡を引き起こす、正しい選択肢へと自ら導く『投げられた賽』――つまりは、『教導者（イゲティス）』であると解釈したのです」
個性も忍術も所有せず、覚醒にすら至らない…つまり、無価値であ

る存在と認識。其れはこの世で言う無個性、覚醒にも至らず、超秘伝忍法書さえ所有してない、何の価値もない無意味を冠する存在。それが結城守だった――然しそれは誰もが予想だにしない奇跡を引き起こした。その奇跡を紐解き考察するに至り、奇跡と呼ばれる根源は……。

「……それが真実だとしたら、恐らく浄化者か？穢れを取り除き、神秘と恐怖も観測されない…空白の崇高を手にしていると？」

「変換された価値…または神魔の器となっている者か……それとも我々の知識すら及ばない『失われた神』と呼ばれる類か？それも代償無しで…？或いは『バステトと同じ古代の神官が遺した不可解な存在』なのか？」

「……ふむ、分かりました。取り敢えずその者は我々が見守りましょう。もしその話が本当ならば『パンドラの抑止力』ともなり、寧ろ我々の探究を邪魔される事なく進められます。聞いている分には、我々に不利などころか混沌を塞ぐ…所謂『鍵』とも捉えれます。危険分子でないと観測はされますが…同時に未知が多い分、我々と同じ不可解な存在である事に変わりは御座いません――ならば見守るべきかと」

クドラウムとジャッジが怪訝そうに眉を顰め、議論を重ねる中、教官は指を組みながら一つの結論を出す。

パンドラの箱が開かれたなら、開く前に鍵を閉めれば良い。絶望が外へ振り撒くのなら、全部の厄災が振りまかれる前に箱を閉じて鍵を締めれば良い。つまり、少年はパンドラの鍵となるのだ。ならば下手に動いて刺激を与えるより、分析、理解を深める為に見守ることを先決するのが英断とも呼べるだろう。

「正に『お互いが完成された作品』――で御座いますね」

「じゃあよ教官、俺はパンドラの器を殺さなくて良いってことか？」

「ええ、リチュアルズの儀式を通じて器と神を引き剥がし、封印の役目を与えるつもりでしたが……我々もまた神に対して非常に興味深い研究対象の一種でも御座います。無理に焦らずともこれから議題を交えて解決策を編み出していけば良いでしょう――我々はまだその予測不能な変数である『教導者』、神の器に関しても未知が多過ぎる。

先ずは観測を通じて知っていくことから始めましょう。その存在について確認出来たのも『ジョナサン』のお陰でも有ります」
「寧ろ儂も興味深いわい……畏敬と神聖――人智を以てしても理解されない、崇高された存在こそ神を模るモノ…神の怒り、絶望、穢れ、負を象徴とした恐怖を打ち消す少年…それも何の対価も犠牲も無しに……人に戻す不可思議な存在。我々と同じ領域の、不可解な者であるのなら、奴の存在がどう世界の解き明かされない謎を解明するのじゃろうな？」
教官に珍しく同意するリチュアルズは、何やら結城守という不可解な存在を大きく気に入ってるようだ。
人間は神を理解できず、神もまた理解を示されない不可解な存在――崇高であると確信している。だが神は人間を理解できるのか？否――理解する必要はないのだろう。何故ならどう足掻こうと神とは崇拝され、信仰されるべき存在で有り、人間が神の前で取る行動などたかが知れている。だが、神でさえ理解不可能な人間を何と呼称するのだろう？それもまた神であるのだろうか？結城守と呼ばれる予測不能な変数は、神にどのような影響を与えるのか？
だからこそ、興味深い。
「良かったじゃないかプルート、厄介な神を相手にせずに…と言うよりも、君が亡くなってしまえば異界の門を管理、世界のバランスを保つための管轄者がいなくなっては最高の成果を生み出すことは不可能だからね。とはいえ、ボクもその少年について興味を抱いたのは事実だ――そもそも、少年と神の器とはどのような接点があったのか…因果関係や感情の根源とも関わりがあるのかもしれないね。何より言ってしまえばジョナサンの言う様々なテクストが窺える。これをどう答えとして導くのか、どのような表現をすれば良いのか……」
「……バステト皇女、古代の神官、『ノアの方舟』、予測不能な変数である『教導者』、『偉大なる母君』、『太古の福者』、『廃墟のマジシャン』、『ｍｅｇｉｄｏｒａｏｎ』、『礼拝を冠する氷の聖杯』、こうして傍観的になると解決するべき議題が多くあるな…」
「ええ、世の中には我々が知り得ないモノ、現象……新たに発見される

謎、この世界は興味が尽きることなく湧き起こる…それもまた実に興味深い事です」
「『礼拝を冠する氷の聖杯』は私に任せたまえ――それにもう少しでアレが受肉する…素晴らしい芸術作品が顕現されるのだ。嗚呼、是非ともその時は貴下達に小さな成功を祝って貰いたい……」
「各々の感想は良しとして…これで緊急の議題は解決したと見做して問題ないね？それなら解散と行こうじゃないか――」
「ええ、その前にアルカディス――少々お時間宜しいでしょうか？少し気になる点が…」
「ふむ？教官が珍しい……怨楼血の件かい？」
「いえ、それとは別の……――」

「ん……」
疲れ切った体が鈍く重い。
瞼を開けると見知らぬ白い天井が広がり、内心困惑する。最初に心の中で思った言葉は…
（此処は、何処なの？）
昨夜から一夜明け、疲労が溜まり、眠り果ててしまった少女――絶恵勇希は、ソッと目を擦る。
腕には点滴が繋がっており、栄養補給され、体力を回復させている。となると此処は病院だろうか？もう何年間も太陽の光が届かない薄暗く寒い牢獄で地獄のような毎日を送られていたので、治療を受けているという知るだけで特別な感情が心に温もりを与える。
「…ッ！そうだ、守!!」
点滴に繋がり、包帯を巻かれた少女は、自分の身に置かれてる状況よりも友人の守を先に心配する。

何処だろうと部屋を見渡しながら、守を探すも姿は見えない。それどころか部屋には一人の女性が彼女の声に気付き振り向いた。
「おや、お目覚めのようですね」
勇希の声に反応した女性は、冷たくとも緩やかで優しい言葉をかける。容姿を見て少女は息を詰まらせた。
美白とも呼べる雪のような肌、瞳は炭の様な漆色、白と黒を一層強くさせた衣装、春の季節だと言うのに黒の扇子を胸に当てる女性を一言で表すのなら、仙姿玉質がお似合いだろう。
スタイルや身嗜みは人攫いに会う前から余り気に掛けた事は無いが、この女性を見て自分も見習いたいと思ってしまったのは、必然的だろう。
「ここは…？貴女は……誰？守…は？」
「突然、見知らぬ場所へ連れては混乱するのも致し方ないでしょうが、落ち着きなさい。御安心を…守さんは無事です。
私は雪不帰、此処は病院ですよ」
病院――となれば、この点滴も治療を施してるのも頷ける。起きるまで看病してくれたのだろうか？だとすると、悪い大人では無いことは明らかだろう。
「よく、生きて外へ出てこれましたね――」
生き残った小さな希望、勇希と言う少女に差し向ける瞳は、とても心地良い、心の底から安心する優しい眼だった。

特別編

特別編「病院に行こう」

期末試験を終えた雄英生と忍学生達は、林間合宿に向けて木椰区ショッピングモールで、必要な品物の買い出しをしてる最中である。
期末試験の実技で赤点追試になった5名も、相澤先生による合意的虚偽でなんとか合宿には行けるものの、普通の合格者とは違い、並みの神経では到底成し遂げれない程の地獄が待ってるそうだ。
しかし、林間合宿とは無縁の者には関係ない。

ここは緑の雑草が生い茂った丘。
夏の日差しが差し出し、太陽の光に当たり熱く感じる。
そんな熱さもなんのその、桶に水を汲み、立派なお墓に水を掛ける。
水々しい音が耳を打ち、心が清らかになるようだ。
後はお線香を焚き、花を添え、お供え物を置き合掌する。
お供え物は、お爺様の大好きなイチゴ大福だ。

「黒影お爺様…私、雪泉は…仲間と供に忍の道を精進しています」

雪泉は丘の上でただ一人、愛しきお爺様のお墓参りをしていた。
特に今日は特別の日でも何でもない、ただ月に一回はこうしてお参りに来てるのだ。
とは言ったものの、ここへ訪れたのも学炎祭以来になるが、そこまで月日は経っていないので、久しぶり…という訳でもない。
「観てますかお爺様?学炎祭が終わってからというもの……色んな事が起きたんですよ?
夜桜さん達は雄英高校のB組に転入(一時的に)したり…雄英生の方達と供にヒーロー殺しと遭遇したり……」

漆月を始めとしたオールマイト打倒を目論む敵連合への対策を兼ねて、彼女達三人が雄英の側にいることで、生徒達の安全が少しでも保証される。また、漆月を討伐する戦力向上の為でもあるらしい。
半蔵学院に続き、月閃女学館が選ばれたのは、エリート校の肩書きとそれなりの実力を買ってるからだろう。
ヒーロー殺しの時は本当に肝が冷えた。
敵はヒーローが相手をし、抜忍は私達全忍が相手をするので、敵相手に死角は無いと思っていたのだが…一人相手では確実に仕留めることの出来ないレベルだった。
油断してた訳では無いのだが、相手の手慣れた動き、鍛錬された身のこなし、それらが忍を圧倒していた。

何よりも、正義を追い求めたイかれた執念。

「けど大丈夫です…私には夜桜さん達がいます。それだけじゃない…私には友達がいる…だから、何があっても怖くはありません」
学炎祭が終わり、雄英生達の事も考え直し、轟焦凍とも仲直りした。
そう言えば、夜桜さん達は雄英高校のイベントで林間合宿に行くそうだ。
具体的な内容は三人は解らないと言っているし、本来なら保護者に話を付けるのだが、生憎私たちは親のいない、黒影お爺様に引き取られた身。
無論、黒影様とは他界し、半蔵は先生としては戻ってこない。
なので、リーダーである自分が夜桜さん達の保護者としての役割を担うので（筆頭の務めなので）、重々承知した。
「さて、一通り掃除も終わりましたし…後は……――おや？」
どうするか。
そう考えていると、少し遠く離れたお墓に雪泉は目をつけた。
ここは黒影以外のお墓が並んでいるが、墓に記されてる名を目に通した途端、雪泉は気になる事でもあったのか、駆け寄ってみる。
「これは……」

ここの丘にある墓は、月閃女学館に関わり名を持つ忍達の墓だ。
月閃を卒業した者や師範に至るまで、お墓が並べられている。黒影は男性でもあれば、師範と言う訳でも無いが、雪泉達を鍛えてくれた師匠故に、血の繋がった家族だ。
何より黒影の名は半蔵に負けず劣らず有名で名高いので、特別に墓を建ててもらったのだ。
雪泉が目に通した墓は――

――猗華月

死塾月閃女学館の初代選抜筆頭の善忍だ。
忍界の噂では聞いた事がある。幾多ものの逸話を残した忍で、一騎当千の実力を持つ善忍だそうだ。
とは言うものの、かなり大昔の頃だったので、恐らく月閃女学館が建設された初期なのだろう。詳細は不明だ。
半蔵学院は１９１９年に設立されたと聞いたが、月閃はそれよりも遥か先昔のことだ。
「私達の大先輩に至る偉人……」
どんな人物なのだろうと、少し興味が唆られる。
自分たちもいずれ立派な一流の善忍になり、天国のお爺様に見せてあげたい。そして、人々の笑顔を守れる、清く正しい正義の忍へ。
これから己を磨く為にも、月閃女学館を卒業した先輩たちとも遭って話を聞きたいものだ。
「今度、半蔵様にお話を聞くのも良いかも知れませんね、この方がどんな偉人だったのか…」
一流の善忍を目指すのなら、話を聞いて損は無いだろう。
それに、彼女が名のある英雄として相応しいことは学校側でも語られてはいるものの、どのような善忍だったのか、詳細は一切教えて貰っていない。
半蔵は雪泉達がまだ一年の頃、王牌として雪泉達忍学生に厳しい訓練や修行を教授してくれたのだ。

しかし今年に入り、ある理由で半蔵学院に学炎祭を持ち込んだ結果、王牌の正体が半蔵だということが判明したのだ。
なぜ気付かなかったのだろうかと思ってはいたものの、そもそも半蔵自身姿を表すことなど滅多に無いので、当然といえば当然だし、まさか伝説の忍が自分たちを育て上げたことなど、誰も予想付く筈が無く。
況してや半蔵も月閃女学館の教師として在籍していたので、もしかしたら知ってるのかもしれない。
「っといけない、そろそろ戻らないと……」
本当は選抜メンバー五人皆んなと一緒に行けば良い話なのだが、夜桜達三人は　Ｂ組と一緒に林間合宿に向けてショッピング（Ａ組とは違う場所）に行ってるのでまず今日は無理だろう。
叢は自分と同じ三年生なので、問題はないが、個人的に一人でお墓参りをしたいと言う意味もあるので、黙って一人で行ってきた。
黒影の血を引き継ぐ実の孫でもあるためか、何故か一人でお爺様のお墓参りに行ってしまうのは、黒影の孫だからだろう。
こうして少したわいの無いことを喋り、お供え物を取り帰って行く（虫や動物が集まるといけないので）。
「さて、今日は叢さんとどのような訓練を…前に夜桜さんの話を聞いた訓練を参考にしましょうか…？それとも……」
普通の忍学校なら教師に従い、訓練や授業を受けるのだが、生憎、王牌先生はもう月閃女学館の先生ではない。
他の、先生の補充がない為今の月閃には担任教師すらいないのだ。
そもそも月閃女学館は名誉あるエリート校、半蔵と同じく規則正しい忍学生しか入ることが赦されないため、学生の数も少ない。
今はリーダーとして先生の代わりを担って自主訓練をしている。
訓練を考えたり、生徒一人一人の特徴や個性的な体力、能力面を考えると中々に難しい。
そう言えば、近頃月閃女学館に月閃家の中等部学生が二人、そして名門家の中等部学生が一人やって来るとか。
しかも名門家の中等部学生が教師の代わりを担ってくれるらしい。

聞いた話だと、かなりの凄腕な忍学生らしく、教師…というよりも教官という言葉が妥当と言った所で、指導をしてくれるらしい。
ほんの息抜きでしかないのと、先輩たちとの交流を早く深めるのに丁度良いという、何とも閉まらない理由らしい。
教師と教官は違うものの、中学生相手に…と考えると少し浮つくような気持ちも無いわけでは無い。上層部たちの決断だそうだ。
実際、自分たちよりも遥かに実力を備えてる、カグラに近い学生だそうだ。
一体どんな人なんだろう…
なんて考えていると――

「おい、雪泉…だよな？」
「ひゃっ!?」
後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。
振り返るとそこには
「あれ？と、轟さん!?どうしてここに？」
雄英高校一年Ａ組、轟焦凍がいた。
そもそも考え事をしていたので、気配すら気付かなかった。
「いや…偶々道歩いてたら、見覚えのある後ろ姿があったもんで、声かけてみたんだ。墓参りか？」
轟はヒョイっと手入れされた墓に目をやる。黒影之墓と文字が彫られており、線香の匂いが鼻にこびりつく。
そういえば、婆ちゃんの墓参り行ってなかったなぁ…と頭の中で考えを過ぎる轟。
「あ、はい…それにしても奇遇ですね、轟さんは何か用事でも？」
「ああ、今日は母さんの見舞いにな……」
今日は日曜日。
体育祭が終わり、母親と遭ってケジメを付けた轟はこれから暇な時は必ず母親に逢うようスケジュールを決めている。
特に日曜日は学校も休みなので、お見舞いに行くのは好都合だろう。

それと同時に、今日はA組全員（自分と爆豪以外）林間合宿に向けて木椰区ショッピングモールへ準備品を買いだしている。
自分はある程度暇な時間があれば買いに行けるので、今日じゃなくても問題はなかったし、特に合宿に拘りもないため、最低必要な品があれば充分なので、買い出しに行かなくとも、自宅にあるだろう。
因みに轟の家はかなり豪邸（八百万程ではない）なので、最低限困らない。
「お母様…お病気なのですか？」
「別に人に話すもんじゃねえ」
エンデヴァーが原因で母親が入院してることは緑谷と飛鳥以外秘密にしている。
そもそも、家庭内の事情を聞かれるのは余り好かない。
「すみません、私としたことが……人の家庭の事情もあるのに……」
「いや何、気にすんな。別に謝るもんじゃねえよ」
物分かりの良い雪泉は頭を下げるも、轟は気に病む事なく黒影之墓の前に腰を下ろす。
「折角だし、俺も挨拶しとくよ」
「いえそんな！…しかし……」
「別に困ることじゃねえだろ？世の中の礼儀ってやつだ。それにお前の家事情知っちまった以上、無視するのも良くねえ」
轟は軽く合掌し、目を瞑る。
不思議なものだ。月閃女学館の選抜メンバーの他の四人なら何ら可笑しくもないし、見慣れてるので何も思わないが、いざ月閃とは関係ない、ましてや轟焦凍と言うヒーロー学生が、お爺様のお墓参りをしてる光景は、見慣れてないせいかどこか新鮮な感じがして、内心嬉しいようで少し照れくさい。
「よし、これで後は……雪泉は終わったのか？」
「ええ、はい。掃除も終わりましたし、花も新しく手入れしましたし、やるべきことは終わらせました」
轟も軽く挨拶を終えると、荷物を肩にかけ直し、立ち上がる。
「そうか、悪いな。供え物もなく手ぶらで…」

「いえいえそんな！気を遣わずに、お爺様もきっと喜んでると思います」
「それなら良かった」
轟さんは優しいな…と内心呟く雪泉は、思わず笑顔が綻ぶ。
学炎祭までは考えられなかった二人の関係は、今ではこうして話し合うことすら出来る程に仲が良くなっていた。
今思えばヒーロー殺し・ステインと闘った時も、轟と雪泉の連携は上手く取れていた。
路地裏という狭い場所での戦闘場に於いて、重傷者がいた為大規模な秘伝忍法を使用する事は出来なかったが、それでも初戦でステインを追い詰めれるほどに上手く渡り合えたのだから、ある意味二人の相性は良いのかもしれない。
「さて、そんじゃあ俺はそろそろ行く。悪いな、時間取らせて」
「あっ、いえ…その……」
ボーっとしてた彼女は突然、轟に声をかけられ、あたふたとぎこちない返事を返す雪泉。
轟は背を向け鞄を肩に担ぎ、帰ろうとする矢先。
「あ、あの！」

――言わねば、有難う。という感謝の言葉を。

「わ、私も宜しければご一緒します!!」

雪泉の思わぬ言葉に轟は

「――は？」

彼女に振り向き、目をまん丸にしながらポカンと、呆然と突っ立っていた。
（えっ！あっ、わ、私…何を言って!?私はただ、感謝の言葉を述べたい

だけでしたのに…！）
内心パニックに陥った雪泉は、頬を赤くしながら動揺する。
表面上では違う発言をし羞恥心で顔を赤く染めるものの、内心はなぜこのような事を？と混乱していた。
（そ、そう！これは…先ほどのお礼です！それに、お爺様にだけ挨拶をさせて、私が何もしないというのにも問題があって…）
なんて自問自答を繰り出す雪泉は、無言のまま心の中で呟いていた。
「いや、別に来なくても……」
とここで轟は声を上げるも雪泉も引かずと言った形で、先ほどの宣言を撤回する事なく意見を述べる。
「いえそんな訳にはいけません！折角の機会ですし、それに轟さんだって…」
「俺は勝手にやっただけだ……それに流れ的には普通だろ？」
「なら、私も轟さん風に言えば、流れ的に普通なのでは？」
どっこいどっこい。
似た者同士は惹かれ合うからか、話が終わらない。
しかし、暫く顔を見合わせていればやがて笑いが込み上げて来た。
「分かったよ…勝手にしろ」
轟は観念したのか、一見ぶっきらぼうな言い方に聞こえるも、素直じゃないのか背を向け、母親のいる病院へ向かう。
よくよく考えれば、雪泉の言ってることは尤もだし、もし自分が彼女の立場なら同じことを言ってるだろうと思うと、強く否定は出来ない。
そうやって考えると悪い気持ちもしないし、雪泉のような真面目な人間なら別に問題ない。
「ふふっ――有難う、轟さん」
雪泉は小声で感謝を述べると、スタスタと轟の横に隣歩く。
それはまるで、旧知の友人のような、恋人のような風景だ。

「轟さんは蕎麦が好きなんですか？」
「ああ、なるべく熱くないヤツ…冷えてる方が結構好きだ。蕎麦関係なく熱いのは基本好きじゃねえ…お前は？」
「私も熱いのは余り得意ではなく、況してや猫舌ですので……私は小豆入りのカキ氷が好物ですね」
「カキ氷好きってのも意外だな。夏以外でも食うのか？」
「ええ。よくお爺様と一緒に食べてましたし、冬でも美味しく食べられます」
「冬って、そんな食って腹壊したりとかしねえのか？流石に冬にかき氷は季節外れだろ。寒くねえのか？」
「すみません…私、寒いと感じたことは一度もないんです。
カキ氷もあのキーン！とした頭痛も感じたこともないのです……」
「マジか、やっぱ忍術と関係してんじゃねえのか？」
病院へ向かう道のりのなか、たわいの無い談話をしながら歩いていた。
雪泉は三年生、雄英高校として派遣される訳でもなく、卒業試験に向けて鍛錬を積んでる彼女は、雄英生達とは中々に会えない。
だからこそ、限りない時間の中でも、少しでも互いのことを知る為に、こうして会話を楽しんでいる。
轟も昔から他人と関わってこなかった為、会話自体あまりしない物静かな少年なのだが、体育祭以降、少しずつ緑谷を初めとした他の人に接するようになった。
「そうなのでしょうか？」
「俺の個性は知っての通り『半冷半熱』。右は氷、左は炎を出せるんだが……
氷出せるっても限度がありゃあ耐えきれる体による制限もある。
体温調節の為に熱を使えば問題ねえが…使えばって意味で、熱を出さなきゃ耐久値も減る。個性に見合って体に耐え切れる耐性持って

んだが……訓練でもしたのか？」
「いえ、そうですね……確か忍術を限界ギリギリまで使用して修行していた時もありましたから……多分、幼い頃からそれなりの耐性があるのでは？」
「こりゃ随分と大雑把な説明だな…俺もそれなりに訓練してたんだけどな」
轟は幼い頃から父親の野望とも言える「オールマイトを超える」為に、個性が発現してからというものの、毎日厳しい鍛錬を重ねて来た。
自分を庇ってくれた母親にも手をあげる父親に胸糞が悪くなるも、これまでの経験経緯は全て今の轟自身の強さとして直結している。
炎は１０年間も使ってなかったので、それなりにコントロールも難しく、熱に慣れないのは仕方ない（微熱なら調整可能）が、氷に対しては自信がある。
雪泉は幼い頃、悪に両親を殺され途方もなく暮れていた時に黒影に拾われ、善忍になるべく修行を積んできた。
当時は、両親を殺めた輩に復讐するべく力を付けてきたが、ある日をキッカケに、復讐という私欲を満たすのではなく、絶対正義の世界へ変えるために日々精進して来た。
修行は轟と同じく忍術が発生してから付けてもらった。
「で、ですが！轟さん、体育祭では凄かったですよ？私にはあれ程の大規模な氷は出せません」
雪泉の忍術は風と氷を操る氷風忍法。
忍術…としてはなく、個性と捉えれば氷風と呼ばれるもので間違い無いだろう。
雪泉の黒氷は、あれ程の大規模な氷を出せるわけでもなく、出来たとしてもそれは黒影並みの実力が無ければ到底辿り着けないだろう。
「いや、アレは偶々相手が良かったからだ。もし爆豪や緑谷クラスなら、完封出来ねえし、簡単に攻略されちまう。
繊細なコントロールに、左の調整も出来ねえと…どんな個性を持っても鍛錬された奴には意図も容易くやられちまう」
初見殺しとしては丁度良いが、建物や一般市民による被害や、自ら

の視界を遮らすのは愚問。
「はぁ…雄英生は色々なことを考えておるのですね。
強さだけを追求しても、物事は上手くいかない…という事でしょうか？」
「そりゃあそうだろ。知能犯なんて呼ばれる敵もいるわけだし、相手がヒーロー殺しみてえなやり手だったら簡単に殺られちまう」
「そ、それは解ります……」
多対一と個性を考えて圧倒的に立場が不利な状況を、経験の差と強さで穴を埋め、己の限界を超えたステイン相手に、二人は簡単に攻略された。
強さも大事だが、強さだけに目先を囚われてはいけない、という意味だろう。
「まあ今もこうして生きてるんだし、良いんじゃねえか？
死ななかったよりかはマシだ」
「はい、そうですよね。
轟さんや緑谷さんも一年生ですのに、私たちと劣らない強さ……それもやはり、目指す目標があるからなのでしょうか？」
「一年生って、そう言えば雪泉は何年生なんだ？」
「ああ、そう言えば名乗っただけで学歴は話してませんでしたね…
私は三年生です」
「三ね……」
三年生という言葉にピクリと反応した轟は、雪泉を二度見する。
視線を浴びる雪泉も、目を丸くし「どうしました？」と口を開く。
「三年生……」
てっきり二年生かと勘違いしてた轟は、雪泉が自分と二つも上だった事実に衝撃を受けたのか、思わず内心取り乱れる。
まだ一年差が開いてもどうと言うことはないし、一年生という予想もあった。
しかし、まさか三年生だとは思わなかったのか、見た目で判断していたようだ。
轟焦凍の身長は１７６㎝に対し、雪泉の身長は１６７㎝、そもそも

轟の方が身長が大きいので、雪泉が一二年に見えるのは致し方がないが、三年生と再認識すると色々と頭の中で思い浮かんだのが

（――俺、色々と失礼なこと言ってねえか？）

初対面は学炎祭（雪泉は体育祭を観ていたので、実際に知っていた）で、双方の校舎に存亡がかかっていた為、特に気にしてはいなかったが、今改めて思い振り返ると、自分は色々と失礼だったのではと、今更ながら考えてしまう。

況してや向こうは敬語ゆえに上品が良い。

彼女はああ言う性格なので、下級生に対しても恐らく口が綺麗なのだろう。

「轟さん？」

急に立ち止まった轟に疑問を浮かんだのか、雪泉はソッと顔を覗き込むかのように伺う。

「いや、悪い。まさか三年生だとは思わなくて…なんか、すまねえ」

「どうして謝るのです？」

「だって考えてみろよ…俺一年なのに先輩に対して偉そうなこと言ってたなって…」

いざ直接口に出すのは気恥ずかしいが、隠すわけにもいかないので、轟は少し視線を逸らしながら正直に述べた。

すると雪泉は轟の心情を察したのか、フフフと可愛らしく笑い「その事で悩まなくても宜しいのに…」と言い返した。

「けどよ…」

「大丈夫ですよ轟さん。別に気にしていませんし、今まで通りのタメ口で結構ですよ」

「……良いのか？」

「はい。私たち忍学生は先輩や後輩関係なく接していますし、轟さんは普通にいつもの轟さんのままで良いんですよ？気を遣わなくても良いんです」

雪泉はニコッと優しい笑顔を見せた。

月のように明るく、闇夜を照らす光は、とても美しく、思わず見惚れてしまう。
まるで氷の全てに包まれてるような錯覚、頬が綻ぶ、あの笑顔。
轟は、そんな彼女の笑顔を見て、ふと脳裏にある思い出が蘇る。

それは愛しくて、想い焦がれた、母親の笑顔。

まだ個性が発現する前までは、父の英才教育もなく、よく母親と一緒に公園に連れてって貰った。
砂遊びや、遊具などで遊んだり、ボール遊びもした。
あの時までは、普通に暮らすことが出来たんだ。
まだ、父親に恨みも無かった、純粋だったあの頃。
雪泉の笑顔が、お母さんが見せてくれた笑顔と重なる。

「――ッ」

そんな雪泉の笑顔に見惚れてた轟は、思わず唇を噛み締める。
あの頃みたいに、戻りたいと思ってしまう自分がいる。
もし父親がああではなければ、もしかしたら、きっと母親と一緒に過ごすことが出来たのではないか？
しかし、どれだけ過去の記憶に想いが焦がれようとも、時間を巻き戻す術はない。
例えそれが超人社会だとしても、この地球上、世界そのものの常識を変えれる個性なんていないだろう。
だからこそ、今まで遭わなかった母親に、ちゃんと面を向かって、話していきたい。
過去へ戻ることも、過去を変えることも出来はしない。
しかし、これからの未来を作り出すことは出来る。
「ど、どうしました轟さん？」
「あっ、ああ…悪い。ボーッとしてた。
そろそろ病院だ、母さんに変な気を遣わなくて良いからな。と言っ

ても、雪泉なら心配ないか」
「あら?先程は来なくて良いと顰めっ面で仰ってたのに…ふふっ」
「誰が顰めっ面だ」
あの時無駄にお母さんの見舞いに抵抗しなかったのは、もしかしたら雪泉が母親と似てるからなのかもしれない。
顔や髪も違うし似てはいないが、雰囲気や優しさ、そして…全てを包み込んでくれる氷のような、個性的な印象は、彼女と母親が積み重なる。
轟は心にモヤを付きまといながら、焦がる想いで病院へ向かった。

病院の中は嫌に混雑していた。
診察時間を終えようとしてるのに、待合ロビーは会計などを待っている患者たちでいっぱいだ。
右腕に包帯を巻く牛頭の患者、チューブで鼻や腕に点滴を受けてる患者、車椅子に座ってる足を骨折した患者、頭に包帯を巻く鮫のような患者。
どこもかしこも患者だらけで、白ナースの受付係りは忙しそうだ。
「はぁ、一般病院は私たち忍専門病院と変わらないんですねやっぱり」
「そうか。俺は忍の通う病院なんて知らねえから、俺たちと変わらないって事実そのもの今知った」
「昔はお爺様のお見舞いに通ってたのですが…抜忍でしたので、普通の病院ではなくちょっとした特別病棟で…
ただ、違う点が存在するとすれば、個性的な方がいない…ですかね」
特に異形系の個性を持つものを見れば尚更だ。
鮫、牛頭、蛇、カメレオン、まだ人間の外見をした方が多くいるが、やはり異形となると、まるでＳＦ系の世界観に溶け込んでるかのように思えてしまう。

「雪泉のところにはいないのか？異形方の姿をした忍学生」
「確か三年生の熊糜と呼ばれる方が熊のような大柄な体型に腕だけが熊だった気が…」
「いるんだな異形系の忍も。それも個性じゃなくて忍術って呼ぶのか？」
「そうですね。忍術と個性を判別するのは個性因子云々関係なく、実際はヒーローと忍を解り易く、且つ一緒にさせない為らしいです」
ヒーローと違って忍は特殊な体質で出来ており、個性とは違った能力である。
まだ忍医療専門家も個性因子と忍の血や細胞と何が違うか、謎が解明されていないらしい。
ただ専門家の話によると、個性そのものが謎に包まれており解明されていない為、個性因子と忍術による細胞は近い部類で、個性の亜種などではないかという例が上がっている。
その信憑性は高く、忍による特殊な能力が遺伝子と交わり、個性という特殊能力が生まれたのでは？という説も上がってる。
実際個性が発現したのは、近いようで遠い過去、超常黎明期という戦争時代。
しかし、忍はもっと遥か昔に存在していた。
戦国時代、それよりももっと昔とさえ言われており、忍術が発生した理由は定かではない。
よって個性の発現もまた、忍と関わってるという線が持ち上げられてる。
「てかこの時代、ヒーローがいる世界、忍も隠れてる必要は無くねえか？」
「そう言う訳にはいきません。実際ヒーローには出来ない事だってあります。
ヒーローが成し得ないことを、我々忍が影で任務を遂行する…つまり、我々はヒーローのお手伝い…と言ったところでしょうか？」
「成る程な…また忍には成し得ないことを、ヒーローがやってやるって訳か。

お互い協力関係に当たって、社会を守っていく……
クソ親父もそうして来たのか…」
「クソ親父?エンデヴァーさんのことですか?」
轟は「ああ…」と少し表情を曇らせると、エレベーターの前に立ち止まりボタンを押す。
一階に止まってあったので、二人は乗り込み病室階へと急ぐ。
「轟さん、親の前でもそう言ってるのですか?」
「当たり前だろ」
「と、轟さんの家庭内での事情は詳しく存じませんし、学炎祭みたく酷く言うつもりも有りません……
しかし、実の父親に対しては、口が悪すぎでは?」
「あんな屑、クソ親父で十分だ」
「お父さん…は?」
「先ずその時点で論外だ」
お父さんという常識的な呼び方など、轟焦凍には存在しない。
雪泉は「う〜ん…」と表情を悩ませていると
「パパはどうでしょうか?」
「……パ――?」
轟の顔は一瞬にしてフリーズした。
「それか…〝ダディ〟なんて呼び方も……」
「……ダ……?」
次々と予想外な呼び方を言い表す雪泉に、轟の表情はどんどん険しくなる。
それに気付いた雪泉は「あっ、す、すみません!」と深く頭を下げる。
まあ、雪泉は幼い頃から両親のことが大好きだったので、轟の家庭とは違う彼女には考え難いものだろう。
そんなやり取りをしていると、上昇する階級がボタンと同じ数字で止まったので、扉が開くと同時に足を動かす。
下と比べると随分と物静かで、マスクを掛けた看護師さんが廊下を歩いてるほどに人が少ない。

微かな消毒液の匂いが鼻につんざき、前に職場体験でヒーロー殺しと遭遇し、怪我を負って入院させられたあの日を思い出す。
轟の表情は先ほどとは違い、緊張しているように見える。
初めて来た時と比べればそこまでだが、やはり緊張する。
いつ来ても慣れないものだ、ましてや今日は雪泉もいる。
横目で見つめる雪泉は、不思議そうに見つめていた。
親のお見舞いでなぜ緊張するのだろう?と疑問に思いながら小首を傾げる。
しかしそんな束の間もなく、病室の扉の前に立ち止まる。
ここが、轟の母親がいる部屋だ。
手に僅かな手汗が流れながら、そっとドアを開ける。

「母さん」
扉を開くと、ベッドの上に座ってたお母さんが窓を見つめていた。
窓から見えるのは、木の枝の上に親の小鳥が、息子の小鳥に餌を与えてるのが見える。
「あら、焦凍」
振り返る母親は、やわらかな笑みを浮かべ、瞳が僅かに見える。
長く白い髪はまるで雪のようだ。
そしてその絶え間ない優しい笑顔が、先ほどの雪泉と面影が重なる。
それに続き、少し入りづらそうなのか、ドアから轟に続き雪泉も入ってくる。
「ん?その子は?」
「ど、どうも初めまして…」
少し頬を赤く染め照れながら病室に入る雪泉。
他人の親とは接したことが殆ど皆無な為、どう接すれば良いのか分からない。
「俺の友達だ…逢いたいって言ってたもんで、付いて来たんだけど

……ダメだった？」
普段とは違う優しい口調、母親は驚き目を丸くするも、首を横に振り「ううん、良いのよ」と再び笑顔を取り戻す。
可笑しなものだ。
母親の見舞いに、友達を連れて行くというのは、些かどうなのかとこの期に及んで思えてしまう。
まだ親戚なら解らなくもないが、轟の左目に煮え湯を浴びせた母親の見舞いに行くなどという者はいないらしいので、まず有り得ないだろう。
ただ、姉は母親の世話があるので週に何回かはここへ来てる。
「どうした母さん？」
「いや、ううん…焦凍のお友達かぁ～って、考え事してたらなんだか嬉しくて…
そうよね、もう焦凍も高校生だもの」
いざそう言われると、それはそれで気恥ずかしくなる。
雪泉もこういうのは慣れていないのだろうか、頬がまた赤く染まる。
「は、初めまして轟さんのお母様…。わ、私は、雪泉と申します……。
突然、上がり込んでしまい申し訳ありません…その……」
「あら、そんなに堅くならなくても良いのよ？焦凍の友達ね。初めまして、轟夫人です、態々来て下さって有難う」
「ああ、いえ…そんな……」
母親の名前は轟冷。
元々、エンデヴァーとは恋愛結婚とは違い、彼女の個性に目をつけ、金と名誉で丸めて結婚を無理やり強いられた。
母親は焦凍のようにニッコリとした優しい笑顔を見せる。
そんな明るく太陽のように照らしてくれる笑顔に、雪泉は思わず見惚れてしまう。
――これが、お母さん

幼い頃に雪泉の両親は亡くなってしまった。
だから母親の笑顔も、父親の笑顔も、もう見ることが出来なくなってしまった自分は、悪という存在を怨み、悪が蔓延る現実を憎んで来た。
だから、もう笑顔なんて必要ない。
もう、親の笑顔を見ることが出来ない。
そう、思い込んでいたからこそ、轟母の笑顔を見ると、まるで幼い頃の自分に戻ったようで気がしなかった。
黒影お爺様とはまた違った、明るい笑顔。
しかしいつの日か、その笑顔すら忘れてしまっていた…
五年前、突然ボロボロで帰ってきた黒影お爺様は病院の床に伏せ、安静にしなければならない危機的な状態に陥り、雪泉たち黒影の弟子が五人、ようやく月閃女学館に入ってから一ヶ月後に亡くなったのだ。
その悲しみに明け暮れ、途方もなく街を彷徨っていたのも覚えてるし、いつしか笑顔を作ることも、見ることすらも忘れてしまっていた。
「この子は、同じクラスの子？」
「いや、他校の友達…」
「他校…雄英となると、士傑高校の生徒？」
「違う…まあ確かに雄英に負けず劣らずエリート校だけど…」
士傑高校。
雄英と同じ評判も良く、負けず劣らずの名門校。しかしその分、授業と訓練もあり、毎日が厳しいと聞く。
それより上なのが、最高難関とも呼べる雄英高校なのだが、それでもごく僅かな差。
士傑もハードルが高い。
実際は雄英と士傑はライバル関係にもなっていると聞く。
「まあ何でも良いわ。それに、焦凍が友達を連れてくるなんて、本当にビックリ。
雪泉さん、とても良い子じゃない。焦凍、折角こんな気優しい友達がいるんだから、大切にしないとダメよ？」

「うん、解ってる…」
親の目の前だと、やはり恥ずかしい。
焦凍はそもそも羞恥心という感性に薄いが、母親の前となると、気がムズムズしてしまう。
雪泉は自分のことを〝気優しい〟〝良い子〟と褒められ、思わずスカートの袖をキュッ…と握ってしまう。
「あっ、母さんなんか飲み物いる？」
「ああ、それなら冷蔵庫の中にあるわ。私は良い」
「そっか…雪泉、お前はなんか飲むか？」
「いえ、お気になさらず…私は結構です」
結局轟は一人、冷蔵庫の中にある飲み物「牛さんヨーグルト」を手に取り、ストローで紙パックの飲み口を開ける。
小さい頃はよく母さんが買ってきてくれたのを飲んでたことがある。
ただ、お母さんが入院してからは全く飲む機会もなく、いつしか忘れていた。
そんな懐かしさに浸りながら、ストローを擦り飲む。
「あ、あの…お母様、申し訳ありません……轟さんのお見舞いだというのに、手ぶらなままで…」
「良いのよ、私に気を遣わなくても。その気持ちだけ受け取っておくわね、有難う。とてもお利口さんなのね雪泉さんは」
「うぅ…」
またしても赤面してしまい、俯いてしまう。そんな雪泉を横目に見る轟は「さっきの俺みてえだな」と小声で呟いた。
墓参りでの自分も確か同じことを言ってたな、と思い返しながら、自分と雪泉はやっぱり似た者同士なんだなと再認識してしまう。
「もしかして、焦凍と雪泉さん…
〝付き合って〟たりとかするのかしら？」

「ブッ――」
「んなっ!!??」
母親の想定外のぶっ飛んだ言葉に、雪泉は一気に顔を林檎のように真っ赤にし、轟は飲んでたヨーグルトを吹き込んでしまった。
ケホケホ、と咳き込む轟は「何言ってんだ?」と視線を送る。
「あら、だって…私の為にお見舞いに来てくれたりとか、それに雪泉さんとは見たところ仲良さそうだし、こんな可愛い子早々居ないわよ?」
「か、可愛い……」
時々四季や美野里から可愛いと言われる事はあるが、それはあくまで身内…況してや同じ屋根の下で過ごす仲間だったので、そこまで気にしなかったが、いざ他の人に、況してや親に言われるとどうも恥ずかしい。
しかも付き合ってる…と来たものだ。
恋人……と見られていたのだろうか?
そう思うと体が火照ってしまう。それも蒸気が出てしまう程に。
「違うって、普通に友達だよ……」
「あら、そう?ならごめんなさい」
轟は照れ隠しするように、一先ず飲み終えた牛乳ヨーグルトをゴミ箱に捨てる。
天然で恋愛感情に疎い焦凍も実際、いざ面向かってそう訊かれると羞恥心をくすぐられる。
恥ずかしくない訳ないじゃないか。
「二人とも、学校はどうなの?」
「わ、私は日々精進しております…」
「俺は…普通。今度、林間合宿に行くんだ」
「そうなの…?合宿の準備は出来たのかしら?」
「まだ……けど、そんな直ぐに行くって訳じゃないから大丈夫」
「そう……雪泉さんも、焦凍と同じヒーロー科の生徒なの?」
「い、いえ…私はごく普通の生徒です…」
忍学生という存在を他人に悟らせない為に、雪泉は月閃女学館の生

徒とは言わなかった。
轟家は一応、忍とはゆかり縁のあるもので、客を装ってよく家に招き入れた。
しかしそれはあくまで、轟焦凍をより強く、エンデヴァーを超えさせる為のもの。
彼にとってもまた、上層部と同じく大抵の忍は焦凍の成長を促す為のそこいらの踏み台、または道具としか思っていない。
しかし、焦凍自身、父親の心情も本心もどうでも良いわけで、母親を道具扱いしてる時点でたかが知れていた。
「悪い…ちょっとトイレ行ってくる」
轟はふと立ち上がり、ドアを開け病室から立ち去るように背中を向けて歩いて行った。
そんな彼の後ろ姿を、ただじっと見つめていた雪泉に、母親の冷は「有難うね…」
と、雪泉に優しく声をかける。
振り返る雪泉は「ああ、いえいえ！お気になさらず」と首を軽く横に振る。
「ううん、そういう意味じゃなくて…まあ、その意味もあるんだけど…」
「？」
「私が言いたいのはね、あの子の友達になってくれてって意味なの」
「友達……ですか？」
「うん、そう…友達。
あの子、私がいた頃は友達なんていなかったから」
昔はとても気弱で優しい性格だったあの子は、父親のことがあって他人と関わらないように生きてきた。
当初はそれと同時に、他人と関わって来た経験が薄いので、友達付き合いも、どうしたら友達が作れるのかも分からなかった。
一番は人見知りが激しく、誰かに声をかけるのでさえ躊躇う程だった。
友達が作れないどころか、個性が発現し英才教育を受けるように

なってから、ろくに遊ぶことすらもままならず、毎日厳しい絶え間ない訓練を強いられてきた。

兄と姉が外で遊ぶ光景を、羨ましそうに窓から眺めてる焦凍――炎司(あの人)を止められなかった自分の弱さ。

「だから、今でもあの子に申し訳ないと思ってる……」

それは、消えない記憶。

恐怖と絶望に切り刻まれた、あの忌々しい記憶。

夜、台所で夫人の母親、焦凍からすれば祖母に当たるだろう、母と電話で話していた時だった。

その時は精神的に追い詰められており、息子達が成長すると共に、日々が過ぎ去って行くと供に、あの子達が炎司に似てきてることに焦燥と不安を抱いていた。

もし、あの子達が炎司になったら…どうしよう。

そんな時に

『お母さん?』

少し扉が開いたその間から覗き込むように、焦凍が心配そうに声をかけてきた。

尿意で目が覚めた焦凍、様子のおかしい母親を心配して声をかけたのだろう。

その時、母は全てを聞かれてたことに焦りと怒りで思わず、沸かしてた煮え湯を、忌々しい左に浴びせてしまった。

幸い、失明までは至らなかったものの

火傷の痕が今もこうしてこびりついているのは確か。

「そんな……ことが……」

雪泉は戦慄していた。
あの轟焦凍に、そんな過去があったなんて、思いもしなかった。
道理でエンデヴァーに対して嫌悪的な反応を取っていた訳だ。
雪泉が知っていたのは、無理矢理英才教育を受けさせられていたことに腹が立っていたこと、エンデヴァーが気に入らないという点だけだったので、いざ母親から言われると、どうにも……
「って、あの子から聞かれてなかった?それもそうね…人に話すような内容じゃないもの……」
母親はてっきり知ってるものかと思っていたものの、焦凍が自分の口から「母に煮え湯を浴びせられた」と言うのも想像が付かない。
況してや、轟焦凍が母親のあの行動に大きな怒りを覚えていたのなら、言いふらしてたこともあるだろうが、焦凍が気にくわないのは父親なので、母親は追い詰められていた為、悪くない。
それでも、悪くなくとも大好きだった息子に傷を負わせてしまってことに、大きな後悔と同時に罪悪感も存在していた。

しかし、消えなくとも、吹き飛ばすかのように、その想いを振り払ってくれたのもまた、我が子なのである。

「もう、一生逢えないんじゃないかって思ってた……」

けど、来てくれた。
10年間も閉じこもったこの、鳥籠のような病院。
決して病院が不便だとか、そう言う意味ではない。
焦凍に酷いことをして、謝ることすら出来ず、父もろとも、縁を切ってしまったかのような感覚。
それが、ずっと心残りで辛かった。
けど、そんなあの子が私に会いに来てくれた。
それが、どれだけ幸せなのか……

「ごめんなさい…って、謝ることも、出来ないんじゃないかって……」

母の目には薄っすらと涙が浮かんでいた。それもそうだ。
１０年という時間はとても大きい。
普通の家庭なら子供と一緒に過ごし、健やかな息子の成長を見届けるのが親の義務。
しかし、それすらも叶わない、出来なくなってしまったことは、心が引き裂かれるほどに辛い。
それと同時に、自分の見えない場所で、焦凍が傷付いてたら、泣いてたら、そう考えると精神が心を揺らぎ、安定させる為に看護師に呼んで貰ったこともあった。

「だから、あの子が胸を張って会いに来てくれて、とても嬉しかった。血に囚われることなんてない…〝なりたい自分になろうとしてる〟焦凍を見れて、嬉しかった…」

直に会って色んな話をした。
雄英のことも、オールマイトのことも、学校襲撃の事件も、体育祭のことも、何から何まで全て。
空いてしまった時間を簡単に埋めることは出来ない。
それでも、時間を作ることはできる。
僅かな時間でも、母と会い、少しでも思い出を増やすことは出来る。
「お母様は…病気じゃないんですよね…？」
確認するように、ソッと優しく訊ねる。
黒影お爺様の時は、重傷と病気を患っていたので、家庭内でのトラブルでただ入院をさせられたとは思ってもいなかった。
「うん…まだ精神的な問題があるから、退院は出来ないし…それに……」
先ず父親がいる以上、例え退院出来る体に完治したとしても無理があるだろう。
あの人に会ったら、折角治りかけた心の傷も、また開いてしまう。
「あ、あの……もし…宜しければ……また、会いに行っても良いですか

？

最初はその…轟さんに借りがあったので……今日は偶々観に来たのですが……」

彼女の言葉に、ポカンとした母親は、直ぐに笑顔を見せて

「ええ、いつでも来て。もし私で良ければ、お話になるから」

そう答えた。

雪泉の頬が綻び、心の中で思わず本音を呟いた。

（――轟さんが、羨ましいなぁ）

こんな優しくて立派な母親がいてくれて。

祖父の黒影とは負けず劣らず、優しくて良い人だ。

思わず、月閃女学館としてのリーダーの立場も忘れてしまいそうな程に、心が落ち着く。

これが、母親なんだと、再認識した。

「……」

そして、用を済ませた轟焦凍は、相手に悟られることなく、ドア越しで背中にもたれかかり、黙っていた。

母の見舞いを終え、病院の外へ出た時はもう夕日が差していた。

オレンジ色の光が全てを照らし、白い病院もオレンジ色に染まってるみたいだ。

「今日は有難うな雪泉、母さんも喜んでた」

「いえいえ、轟さんの方こそ…」

帰宅中。

最初は母に友人を連れていくのもどうか？と思い当たる悩みはあったものの、何事もなく無事に済んで良かったと思っている。
しかし、唯一轟と雪泉との関係性で変わったとすれば

「有難うな、母さんの話に付き合ってくれて」
「えっ？あっ――」

聞かれていた。
その事に気付いた雪泉は、口をもごもごとさせ答えない。
気不味いのか、彼の悲惨な過去を聞けば誰だってああなるし、何故轟自身が父親を憎んでいたのか…今なら分かる。
轟も、過去の話には触れたくない主義だが、相手が母親だったからなのか、そこをとやかく言うつもりは毛頭ない。
それに、母親も気になっていたのだろう。
愛する息子に火傷を負わせ、挙句入院させられ、１０年も息子もあっていなかった親の心情を考えれば、ガス抜きとして雪泉に話すのも理解できる。
「俺のことは気にしなくて良い。別に母さんは悪くない…全部クソ親父が悪いんだ。
……尤も、会ってケジメをつけなかった俺もアレだけどな」
轟焦凍自身、時折思うことは、どうせならもっと早く母親と会ってケジメを付けていればと悔やむ想いだ。
「過去のことを悔やみ、嘆いても仕方ありません……もし、そんな事で大切なものを奪われないのなら、私だってそうしてます」
亡くなった両親の辛さ。
雪泉も知っている。
大切なものが失われる心の痛み。
「私は…飛鳥さんがいたからこそ…変わることが出来た……
昔の私だったら、多分…ヒーロー殺しに粛清される側の人間だったと思います」
正義を追い求めた結果、純粋過ぎたあまり歪んでしまった己を映し

出したようなヒーロー殺し。
自分たちは生かされたものの、昔の雪泉や轟であれば、完全に殺害対象とされていたのだろう。
そう考えるとある意味、飛鳥さんに救けられたと捉えても良いだろう。
「ああ、学炎祭……たしかにあの時のお前結構吹っ切れてたもんな」
「はい、そのきっかけを下さったのが…あの人ですから……」
平和の象徴オールマイト。
テレビによく出演し、マスコミやメディアからも注目が偏り集まるあのヒーローは、絶対の人気を誇るし、幼い頃の雪泉も、よくテレビを観ていた。
当時は黒影のことを知らなかったので、憧れという尊敬に近かったのがオールマイトだった。
しかし、黒影に拾われてから自身の観てる価値観が違えば、尊敬する人物も変わったのか、必死に追い求めていたのはオールマイトではなく、黒影の背中だった。
しかしまさか…絶対正義を成し遂げる自分たちが悩み、学炎祭の前夜祭から帰って来て、ヴィランを装ったオールマイトが来ることなど予想がつくはずがなく、驚嘆と混乱の真っ只中、彼が自分の誤った道を直す、きっかけを作ってくれた。

だから、今こうして自分たちは笑うことが出来るのだと。

「そっか……俺もさ、昔はこんなんじゃなかったんだよ…」
「？母親に会いに行く自分とは違ってた…？ということですか？」
「ああ…昔の俺だったら母親の見舞いは勿論、雪泉のこと、友達なんて言わなかったし、俺は誰とも友達にならなかった…
正直、父親の復讐で頭がいっぱいで、邪魔なもんだって思った。
笑顔も忘れちまってた」
そして、憧れも。

友達なんて、父親の復讐にとって邪魔な物でしかないと決めつけてきた。
左を使わず、母さんの力だけで体育祭を優勝し、今後は一切使わない。
そう決めていた。
なのに……
『君の――力じゃないか!!!』
緑谷出久という少年の、轟焦凍を救おうとした叫び。
「何も知らない癖に、他人の抱えてる悩みを滅茶苦茶にぶっ壊してさ……
緑谷のお陰で、俺も変わる事が出来た」
震えた腕。
折れた指。
内出血が酷い姿。
自分だって勝ちたい癖に、負けられない癖に、余計なお節介なのに……
轟焦凍を救おうと、我武者羅にぶつかって来た。
「体育祭でのあの、緑谷さんが叫んでたのは…そう言う意味だったのですか……」
全国生中継だったあのセリフは、最初は理解出来なかった。
勝手に煽って勝手に自爆しただけだと思い込んでいた。
しかし今になれば、あの勇敢で頭のキレる人間が、そんな無意味な行動は取らないと理解できるし、何よりも焦凍を救おうとした、勇敢なる行動だと今なら理解できる。
「ふっ――」
「何か可笑しかったか?」
「ああ、いえ…別に轟さんのことを笑ったんじゃなくて…その…

本当に似てますね私たち――」
ニコッとはにかむ天真爛漫な笑顔。
過去に、悪を憎み滅ぼそうと公言してた彼女とは思えないほどの、可愛らしい笑顔。
「お互い真逆な所もあれば、共通点もあれば…境遇まで似てる……ここまで来ると、少し不思議な感じがして…」
「そういやそうだな…」
轟焦凍という少年は、緑谷出久という少年に――
雪泉という少女は、飛鳥という少女に――
救われた。
しかも、体育祭で緑谷出久に勝ち、学炎祭では飛鳥に勝った。
お互い似た者同士もここまで来ると笑いがこみ上げてくるのも、些か無理ではないし同情する。

「もうすっかり夕日が沈んじまってる…それに帰る道、お前向こうだろ?俺はこっち」
「ああ、もうこんな時間…」
夕日が沈み、空は薄暗くなる。
帰る途中、分かれ道になってるのを見て、少々名残惜しそうな表情を浮かべるも、仕方なくと各々の帰る場所に足を運ぶ。
「あっ――待ってください!」
ふと、何か思い当たった雪泉は、轟の方面へ走って行く。
幸いまだ距離は離れていないため、直ぐに呼び止めることに成功した。
雪泉は鞄から携帯を取り出すと
「轟さん、もし宜しければ連絡…交換しませんか?」
微笑みながら、携帯を開く。
雪泉の携帯はスマートフォン、最新型という訳でもない。
轟は「良いけど…」と自分もポケットの中から携帯を取り出す。
轟も同じくスマホで、異なるといえば電化製品の機種だろう。彼の方が最新型だ。

「もし、困ったことがあれば連絡して下さい。もしかしたら力になれるかもしれませんし、悩み事や相談も聞きますから…ね？」
「分かった。ありがとな雪泉」
轟は少し微笑むと、スマホ画面を開き、連絡を交換する。
友達か…他校と友達になるなんて考えもしなかったな…と、内心思う轟。
しかしよくよく考えると、飛鳥達も元は半蔵学院の生徒なので、別に今更珍しくもないのだが、あの三人は雄英の教室にしっかりと溶け込み、クラスの生徒と馴染んでいるので、そんな違和感はなかった。
（そういや忘れがちだが、アイツら元は任務の都合上でこっちに来てるだけなんだっけ…協力体制…任務が終われば離れるんだよな…）
なんて思いながら、連絡交換を完了すると、雪泉は満足そうに「ではまた！今日はお休みなさい」と一礼しくるりと背中を向けて帰って行く。
そんな彼女の背中を見て轟は
「おう、もし困ったことがあったら連絡入れる…今日は有難うな」
そう告げたまま、背中を向けて帰宅路を歩きながら帰って行った。
今日という平凡な一日を過ごした轟と雪泉の距離感は、ほんの僅かかもしれないが、近くなったようだ。

そして、二人は知る由もない。
この後林間合宿を終えて直ぐに、敵連合に拉致された爆豪と雲雀を救うべく協力し合うことを――

特別編「巡り巡って誰かの為に」

お金が有れば何でも手に入る。
金という力は膨大な物、時に人を狂わせ、剰え人の命さえも左右する事になる、魅力的で恐ろしいものだ。
人身売買や臓器売買を含め、金で人を買うことが出来る世の中は、歪にして気味が悪い。そう考えると、人生の多くが金によって支配されてると言われても過言では無いのだろう。
しかし、金を憎めば、時に救われることだってある。お金があれば飢えを満たすことも、雨水を凌ぐ家を手に入れることも、欲しいものだって簡単に手に入る。医療で人の命だって救える。
お金は使い方次第で、人を苦しめることも、救えることだって可能なのだ。
そう考えると、お金という紙切れや小さな硬貨は、世の中に無くてはならない、生きる上で欠かせない物だと、認識させられる。

そう――お父さんとお母さんが、自分の命を切り売りしてまで…私を残してくれたように…憎むことはあっても、否定することは出来ないのも事実である。

これは〝詠〟という、私が蛇女の悪忍に入学する前の、忍名が付けられる前のお話…

私が齢四歳の頃、初めて自分は周りの人間と一緒では無いという現実を知った。
産まれた時から貧しく何も無く、お金に困り貧民街で育った私は、何も無いことが普通だと思っていた。
とても家とは言い難いボロい住居は錆びた鉄の板で何とか作られ、電気も水道も通ってない家が普通だと思ってた。

食事は1日に一回のみで、具のない味噌汁と漬けた野草を食すのが普通だと思ってた。
ごみ収集所に行き、珍しいものが無いか探したり、食料を確保するには野草を摘み取ったりするのが普通だと思ってた。
そんな自分の中にある普通という常識は、お金を持つ人間からすれば汚れた異端者に見えるだろう。
其れもそのはず…持つ者と持たざる者の価値観は違う。
私はお金を持つ人間を前に信じられなかったことも、衝撃を受けたこともあった。
何故、人は自分達とは違いここまで恵まれ裕福な生活を送ることが出来るのかと…明日食う飯を調達しず、金という紙切れや硬貨で全て丸く収める大人達を前に、当時は軽い眩暈も起きた。
別にキッカケは大したことはない。四歳になった自分は遠い場所にさえ出なければ問題ないのと、いつも仲良しでいてくれる幼馴染がいたから、余程のことがない限り心配はされなかった。
貧民街…乞食谷戸とも呼べる貧しい街の外に出て、違う地区がどんな世界なのか見たいという好奇心が勝ってたので、友達と一緒に観に行っただけだ。
隣町だったので大した距離もなければ、特にどうってことはない。少し恵まれてる位が予想つくハズだったのだが…予想の斜め上を行って受け入れ難い光景でもあった。
それと同時に、恐怖心も抱いたりした。
大きなビル、屋台、綺麗な服を着こなす自分達よりも身長が高い大人たち、他にも様々な物があったが、何も知らない自分からすれば全て異常に見えるのも致し方ない事だろう。

そこで、ふと思ったのである。
これが人間として普通の生活ならば…私たち貧民街に住まう人間は、どうなのか…と。
異常か？
穢れか？

不潔か？
何故、同じ国内に住む自分達だけが貧しく飢えに苦しまなければならないのだろう…と、幼少期の頃に悩んでた自分は、幼馴染にして唯一信頼ある友達と何度も話し合っていた。
あの子はとても気が優しくて、どんな時も側にいてくれた。
遊びやお出かけ、食事や就寝まで一緒だった。
私のお父さんとお母さんは自分を育てるために、お金を稼ぐのに精一杯で不在が多かったから…だから、近所の隣の家に住まう私はあの子と両親によくお世話になって貰ってた。
貧しくて、空腹に苦しんでも、決して不幸とは思わなかった。
幼馴染である友達が、私と一緒にいてくれるから…ずっと一緒だったから…その友情がある限り、そして両親の愛情がある限り…どんなに貧しく厳しい環境に身を置かれても我慢できたし、不幸せとは思わなかった。

あの子が突然消えることになる前までは――
幼馴染の子はある日、別れの言葉も告げず、何の予兆もなく、忽然と姿を消したのだ。
無論…私は焦りもした、軽く悲鳴を上げれば探したりもした。
人攫いにあったのか、何処かへ出かけたのか、何かあったのか、次々と連鎖的に発想が広がり、不安と恐怖が繰り広げる妄想と供に止まらず、泣き叫んだりもした。
どうして居なくなってしまったの、何で消えちゃったの、そんな答えに辿り着けない疑問を延々と自問自答してたりもした。
唯一、考えられるキッカケが有るとすれば、其れは両親に関係があるのではないか、と…幼い自分は率直で理解した。
一週間前、あの子の両親は事故に遭って死んでしまったのだ。
何でも車に跳ねられたとか…大人の人達が口に出していて、幼馴染の子は断然否定していた。
けれど、両親の死因に納得がいかず、現実を受け止めきれない彼女は心に自信が無くなり蓋をするようになった。

安いゴミ袋で顔を覆い隠し、弱気な自分を隠してるようで仕方なかった。周りの子供からは「ゴミ袋」「貧乏人」「ダサい」なんて悪質な言葉を投げかけられても、私は絶対に笑わなかった。

寧ろ…

「見てみて〜！村雲ちゃん！」

私はゴミ収集所に集められてた〝もやし袋〟をテープでくっつけ、仮面のように多い被り、村雲(あの子)とお揃いになったりした。

勿論、私も周りの子供からも罵倒を受けたりもした。けれど、私はそれが惨めだとは思わなかった。

友達なら、守ってあげれば庇ったりも出来る。一緒に笑いあって泣きあって、バカにされたり笑われたりもする。

私の中の友達とは、そう言う意識が確かに存在していたから。

だからなのか、あの子は皆んなにバカにされても、私と一緒にいる時は震えなかったし、私の前だけ素顔を見せてくれたりもした。

あの子と私は、唯一信頼しあえる、とっても大事な友達だったのだ。

だからこそ…突拍子で消えてしまったのは、今でも受け入れ難いし、心残りもある。

悪忍として、そして抜忍になってからも決して忘れたことが無い。

私はあの子がいなくなり、小学校に入ってからよくバカにされてきた。

未来さんほどの悪質な虐めは受けていないが、お金がないのと、貧乏人という理由だけで、友達も作れなかった。

「アイツ、遊園地に一回も行ったことが無いんだぜ」「あの子ってなんか、ゴミ臭いよね」「給食すら出ないんだって、可哀想だよな」「どんだけ貧乏人なんだよ」

なんて、陰口は日常茶飯事のように言われ続けてたりもしたし、貧困という物がどれだけ今の現実を痛め付けてるのかが理解できる。

お金がない、たったそれだけで人は生きる世界も立場も変わる。恵まれた子供ばかりで吐き気もしたし、時に苛立ちもした。

それだけならまだ良かっただろう。小学校を入学して間もない頃、両親は私を置いて消えてしまったのだ。

幼少期の頃からお父さんとお母さん仕事で不在が多かったが、村雲ちゃんの両親が消えてから、家族のプライベートや私の世話もあってか、仕事を離れて教養に専念するようになったのだ。
友達が消えてしまった悲しみもあれば、家族とまた有意義に過ごせる事にほんのりとした幸せを感じるも、小学校に入学してからは絶望のどん底へ突き落とされた錯覚に見舞われた。
どうして、お父さんとお母さんは消えてしまったの？
私と一緒に暮らすのが、本当は嫌だったから？
あの頃の幸せは、全部嘘だったの？
自然と涙が溢れ、一晩中泣き嚙ってたのは今でも覚えてる。その日以降、私は憎しみという感情を強く抱く事になった。
親は私を捨てた、その事実が私の憎悪の導火線に火を点け、恨みをバネに独りで生きてきた。
だが三日後に私は知らない大人に声をかけられ、児童養護施設である孤児院に連れていかれた。
恵まれない子供、親に捨てられた者、虐待を受けた者、ひとり身になった者が呼び集められ、私は唐突な出来事に頭の整理がつかなかった。
後々と聞いたのが、孤児院とは親のいない、又は何かしらの理由で教養を受けれなかった児童が集められる施設だそうで、私を引き取ってくれたそうだ。
…正直私は孤児院が建てられたことも、入る身に覚えもなかったが、当初は知識も世渡りも浅かったので「そうなんだ」で物事を丸く収めていた。
小さな子供や、怯えた子供、少しお調子者の子や、私と同い年の子もいたし、見たところ小さな子供の殆どが貧民街出身だという事に気付いたのだ。
それなら確かに私もこの施設に入れられるのも不思議では無いし、何となく物事に納得する部分もあった。
私が知ってる中では貧民街の近くにはこのような施設は無かったのだが…

「はぁ～い児童の皆んなよく聞いて、今日はこの施設を建ててくれたお姉ちゃんがまた逢いに来たよ～！」
孤児院で私たちの面倒を見てくれるおばさんの一声に、子供たちは歓喜の声を上げ集まるように動いていく。
施設を建ててくれた？ということは、私達恵まれない人間の味方なのだろうか？と、私はついつい好奇心に釣られて一人、片隅に座りながら黙々と聞くことにした。
「わぁ～久し振りね皆んな！元気にしてたかな？」
颯爽と現れた女性に、私は息を呑んだ。
なんて…可愛らしくて、綺麗なのだろうか…と。
薄い紅髪に、白肌はまるで太陽の光だ。大人の女性の魅力という物なのだろうか、容姿も整えており美形の言葉では足したり無いほど、その女性は完璧だった。
「あまざきお姉～ちゃんだー！」
「ねーねー！おねーちゃん、あのねー！ネネね、あやとり出来たんだよ！」
「僕の個性見てよ！ファイヤー！」
「ぼ、僕の個性も見てみて…」
「ねーねー、お手玉やって！」
男女問わず、嵐のような言葉に彼女は一切顔を歪めず、お淑やかに「はいはい、待っててね。順番は守らなくっちゃ、良い子にはお菓子あげるから待っててね？」と、まるで本物の妹と接してるようで、アレが姉というものなんだな…と何故か感心させられた。
「何よ……あの人…」
でも、何だろう…釈然としなかった。
何というか、心の靄が染み付いて、納得出来ないというか…恵まれた人間が私達を相手にしてる光景は中々に見ないので、何か裏があるんじゃないかと疑わしく考えていた。
そんな私の憎悪に近い眼差しに勘付いた彼女は、私の顔を見るや不思議そうな様子だ。
「あれ？あの子はだぁれ？見ない顔だけど…」

一人一人の子供も優しくあやす女性は、近くにいたおばさんに声をかける。
何やらヒソヒソ話をしてるようで、何やら無性に苛立った。陰口や陰湿な言葉を聞いてるからなのか、何故かと不審に思ってしまう。
そんな私に気を配ったのだろう、近づいて来て声をかけて貰った。
「こんにちは月夜ちゃん♪」
天真爛漫な笑顔に、思わず頬を赤く染めてしまうも「…何？」と、小学生には似合わない反抗な声を張る。
「君、独りだから…寂しいのかなって思って、声をかけちゃった♪それに見ない顔だし…あっ、ここはこんにちは、じゃなくて初めまして…だったわね、うっかりうっかり♪」
コツン…と、優しく自分の頭に拳骨を入れる仕草に、「何だ変な人…」と批判的な主観で彼女を見つめていた。
「どうしたの、独りじゃ淋しいよ？こっちに来て皆んなで遊ぼ？」
だけど…何故か、心を許してしまいそうな…とても明るくて優しくて、綺麗な水のように透き通った言葉が、私の憎悪を浄化してくれるような、そんな神秘的な気分になってしまう。
「月夜ちゃんは何をして遊びたい？あっ、絵本読む？それともお腹空いた？けど今日の夜は凄く美味しいお菓子があるから楽しみにしてると良いわ♪あっ、じゃあおままごとでも遊ぶ？」
聞けば聞くほど泣き叫びたくなるような、思わず…何故かと甘えたくなってしまいそうな綺麗な声に、抱きしめて縋りたいような衝動を抑え殺し、私は憎しみに染まった私で彼女の差し伸べる手を振り払う。
「もう放っておいてよ!!!!!」
私の天に突く怒鳴り声に、部屋にいる子供たちは愚か、おばさんや彼女自身も面食らった様子で、私は部屋に走って逃げ込むように飛び出して行った。
「あ～…ごめんね天咲ちゃん…あの子、実はね…まだ貴女のことを知

らなくて…」
「月夜ちゃん…怖かった…おねーちゃんは怖かったー？」
おばさんと音練ネネちゃんの声に、彼女は「ううん、大丈夫だよ？」と言葉を返す。
「でも…そうだね。放ってはおけないかな…何かあると思うし、それに…あの子見たことないもん……」
何よりも、あの憎悪に染まった眼を、私は沢山見て来たから…
忍や敵、妖魔…数々の存在を私は幾度となく見て来たから、相手の悪意や敵意は、手足のように肌で感じ探り取れる。
「私からも注意深くするように気をつけ…」
「あー良いんです！私も、何も知らずにズケズケと…入り込んじゃったかなって――」ヴーッ！ヴーッ！
携帯の着信音に気がついた私は、端末を耳に当て、着信相手のリカバリーガールの話に耳を通す。
「えっ?!桃ちゃんの意識が戻った!?良かったぁぁ～…あの子、妖魔の巣で生き残れた子供だもんね…良かったよ……隣にいた傷だらけの子は？
ダメ…だったの…そっか……うん、わかった、直ぐそっちに行きます。はい、有難う御座います」
私は直ぐに電話を切ると、手早く荷物を持って搬送病院先に出発する準備を整える。
「ゴメンね皆んな、お姉ちゃん急用が出ちゃって…いつもより早いけどお姉ちゃん行くね？」
え～！まだ遊びたい！なんて反対や駄々をこねる子供の言葉に苦笑する私は、おばさんになんとか説得させて貰うことにして、足早と病院に駆けつけに行く。

あの女性が孤児院から離れて一ヶ月後、月夜(私)は、何気なく何時ものように学校から帰ったある日、私は孤児院のおばさんから大事な話があると言われ、ワンツーマンの状態でおばさんの部屋に入れて貰った。

何だろう？ここに呼ばれたのは、あのお姉さんに反抗的な態度を取って叱られて以降、一度も呼ばれた覚えはないし、問題行動は犯してないはずだ。
しかし次に発する言葉に私は世界が一変するような、衝撃の事実が吐き付けられた。
「えっ？お父さんとお母さんは…私のためにお金を？」
なんと、信じられない事に私の両親はお金を残す為に他界したのだ。
私を残して失踪したのではない…私の為に、命を切り売りしてまでお金を稼ぎ、将来のためにお金を残してやりくりをしていたのだ。
最初は信じられなかった…けど、何処か気がかりな部分も有ったのも事実…
何故、何の性懲りもなく孤児院は私を迎えたのだろうか？何故、私以外の子があの女性に親しみを込めて姉と呼んでたのか、何となく理解した。
私の両親は切り売りしたお金で、孤児院に預けて貰ったのだ。それもかなりの大金らしく、将来と言うよりも、高校に進むまでの莫大なお金が用意されてたらしく、私は軽く失神しそうになった。
まだ小学生の私が、親の死因が私のためにの切り売りなんて、普通の人間は受け入れますか？いいえ、無理でしょう…特に、両親を愛し、そして憎んだ私なら尚更です。
もう一つ気がかりだったのが、何故…今になって話したのか…だ。
最初は話せば傷付けるかもしれないという憂慮だった、天咲光芭というお姉さんに反抗的な態度を取り、きちんと向き合い話さねばならないと決心したらしい。
その全ての事実を聞かされた私は、泣いた。ただ泣いた、ひたすら泣いた。
現実の理不尽に打ちのめされ、大好きで私の為を思って残してくれ

た両親の愛情を、私は憎しみで燃やし、恨みで踏み躙り、行きてきたのだから…私は歪んでる。
「両親に…せめて、謝りたい……」
御免なさい。
大好きな二人を恨んでゴメンなさい。
憎み嫌って、ごめんなさい。
全部、間違ってた…
でも、遅かった…
何もかも遅かったのだ全て…
お金は不自由のない魅力的な存在だと、憎み嫌い、贅沢と金持ちは敵だと認識していた。
金があれば何でも手に入る。
食料も、道具も、命さえも…でも、お金で買えない物だって確かに存在する。
それは、消えてしまった命。
死んでしまった命は二度と元に戻らない、蘇生なんて漫画な展開など起こりえない。散った命は回帰しない。
私は…ただただ後悔と挫折に心を折らし、部屋の片隅で自分の弱さを隠すように座り込む。
私は…なんでこんなに情けないのだろうか…生きてることに恥を思う…
なんて自虐的な言葉で現実逃避をしていると、又してもあの人がやって来た。

確か、天咲光芭というお姉さんだ。
今度は何十個もの大きなダンボールを一人で抱え込み、見かけによらず力自慢で強いお姉さんなんだな、という印象も受けた。
「何が入ってるの〜?」と中身を急かし開けるや否やで、沢山のお菓子が積み込まれていた。
見たことのない菓子類に目を輝かせる子供達、普段の私なら、好奇心に釣られて覗きに行くのだろうが、生憎今はそんな気分じゃない。

私は独りになりたい気分だったので、外へ出て私のお気に入りの場所でズッと座り込んだまま外の景色を眺めていた。
空は漆黒の色に染まっており、点々とした綺麗な星が輝かしく、貧民街でありながらいつ見ても美しい光景だ。
「わぁ～！お星様綺麗だね～！」
ふと後ろから声をかけられ、私はビクッ！と反応する。
声の主は天咲光芭さん、お上品な笑顔に彼女は「隣、座るね？」と私の承諾を受けず、座り込む。
跡を追っていた？いや、それにしては気配も無かったし、足音すら聞こえなかった。
「何の…様ですか？」
私は両親の本当の死を目の当たりにした苦悩を隠すように、ぶっきら棒な口調で言ってみた。
「ん？いやぁ、月夜ちゃん今日も元気ないな～って。ここは君のお気に入りなのかな？ふふ、何かあったんじゃないかなって心配して」
「別に…何とも無いですよ？」
「そんな事ないよ、何ともない人間が元気も無く外に出るなんて滅多にないよ？子どもは正直だからね～、見ただけで解っちゃうんだな～それが！」
彼女の言葉は、やはり私の心を落ち着かせてくれる様で、まるで声そのものが孤独たる私の心を撫でてくれれような錯覚に陥る。
不思議な気分だ…両親や村雲ちゃん以外に、こうして優しく積極的に接してくれるのは、彼女で初めてだ。
「……どうせ話しても、理解なんてしてくれませんよ……只でさえ、貧しく何もない人間と…裕福で育った貴女が…私のことなんて…」
「……」
私の弱音に、お姉さんは何も言わない。
ただ真面目に、何も言わずにジッと耳を傾ける。
「私はお金が無くても…両親と一緒にいれるなら…それで良かった……どれだけ貧しくても、お金が無い惨めな人間でも…お父さんとお母さんの愛情があれば、辛いことも貧しさによる苦しみも…耐え忍ぶ

ことが出来た……」
　でも、私の大好きなお父さんとお母さんは…死んじゃった。
「信じてた両親を…恨んで生きてきたのです……私を置いて捨てたんじゃ無いかって…そんな事なかったのに……私はお父さんとお母さんの苦しみを理解せず…自分の命を削り切り捨ててまで……私のために残してくれて……それを今日知って…何をどうすれば良いのかもう…解らなくて……」
　いつのまにか私は弱音を吐き続け、止まる事を知らなかった。
　気付けば自然と口は動き、私の愚痴も本音も、全て彼女の前で漏れていた。
「命の切り売り……そっか、だから月夜ちゃんだけ私は知らなかったんだね…」
「何の…ことですか？」
「君の両親も…忍性戒の犠牲になったのか……命の切り売りなんて…あの闇組織が頻繁的に行われてるから…可能性は大きいな……」
　忍性戒は最近、オール・フォー・ワンと名乗る悪の象徴と供に問題事件を起こしてる極悪な組織だ。
　人身売買や臓器売買など日常茶飯事に行われ、況してや殺し屋から人攫いによる被害も絶え間ないと聞く。
　因みに第五支部、第四支部と思われるアジトは陽花が自力で探り当て、二つのグループを潰したと言う。
　個性を持つ人間は大方、オール・フォー・ワンが買い占め個性を奪いまくってると聞くし…
「ううん、何でもないよ月夜ちゃん」
　初めて、でもほんの僅かな…刹那に等しい言葉だが、このお姉さんから尋常じゃない怒気を見た気がする。
「だって、皆んな私が救けた子達なのに、君だけは見覚えなかったから…忘れたって線も考え難いし…新人さんかな？って思ってね、気になってたんだ～」
「え？た、救けた？貴女、何を言ってるんですか？」
「えっ？何って…あの子たちは皆んな私が貧困と災害、虐待に人攫い

の被害まで遭ったのを私が救けた子達だよ？」
その言葉に私は鳥肌が立った。
別に悪い意味では無いのだが、本当にそんな人がこの世に居たことに驚きを隠せなかった。そう言えば、この孤児院を建ててくれたのも、彼女のお陰だと聞くし…
「もしかして聞かされてなかった？てっきりもう噂で知ってるものかと…」
そんな聖人君子がいたのか。
逆に彼女はなぜ、そこまでして赤の他人である私たちを…？意味が、理解出来なかった。
「そんな…ことして…何の価値になるんです？赤の他人を助けても、何の意味もないのに…貴女には貴女のやるべきことがあるんじゃない…ですか？」
私の見てきた恵まれた人間は自分のことで精一杯だ。
況してや、孤児院に聞いた話だとお金を寄付してくれてるんだとか、その金額は３０００万円、とても得するような行為だとは思えなかった。

「そんな事ないよ。赤の他人でも、誰かの為に人を助けることは決して無価値じゃないよ！誰かの力になることは、巡り巡って自分の為になるんだから、私は誰かを助ける行為が無意味だとは思えないかな
明るく、元気よく活発に彼女はそう断言した。
そんな笑顔に似せた彼女の微笑みは、女神のように美しく、息が詰まった。
「君は凄い子だなぁ…こんなに小さくて、可愛い子が大人のことにしっかりしてるなんて。もしかしたら君の方が、お姉ちゃんに向いてるのかもね♪」
よしよし、と優しく頭を撫でてくれる。
そんな彼女の手には温もりが篭っていた。
なんて、暖かいんだろう…優しくて、憎しみの感情が溶けていくよ

うな、お日様の光に照らされ包まれてるような優しい感触に、思わず目頭が熱くなる。
「お父さんとお母さんが残してくれた命…ちゃんと大事にしなくちゃね。辛かったね、苦しかったね…でも、よく耐え忍んだね。君は強い子だ、でももう安心して良いんだよ。
人は孤独にならない為に、誰かが背中を押してくれるから、支えてくれるから…もう、これ以上苦しまなくても良い、悲しまなくても良い、貴女が両親を思う心さえ忘れていなければ、貴女の心の中にお父さんもお母さんも、生き続けることが出来るんだから」
生き続ける…
そんなこと、考えもしなかった。
私が両親への愛情と想いを忘れぬ限り、両親は消えない、死なない、何時迄も生き続けることが出来る。
当時の自分は、いや…だからこそ解らなかったのだろう。

貴女を思う両親の情が、糸として結び繋きで命を救うことは、荒くれた現代社会ではヒーローでも忍でもない限り、殆ど有り得ない光景なのだから。

「う、ふえぇ…え…」
私は嗚咽を漏らし、自然と大粒の涙が零れ落ちた。
嬉しさと、孤独の開放感、悲しみと憎しみが浄化され、私は彼女の…天咲光芭さんの行いを、偽善とは見れなかった。
「うわあああぁぁぁぁーーーーーーー!!!」
「よく頑張ったね…君は優しくて強い子だ、凄い子だ…泣きたい時には泣けば良い。愛する誰かを失って泣くことは、自然の成り行き…きっと涙が枯れた頃には君はもっと強くなってるよ」
まるで妹をあやすかのような居心地は、自分が本物の妹になったようだ。
抱きしめて、我武者羅に泣き続け、彼女に目一杯甘えた。
「でもね月夜ちゃん。この世界は必ず、独りでは生きていけない。人

は孤独を好む物もいるけど、孤独では生きていけないの。だからね、お姉ちゃんからのアドバイス――仲間を探すの。
貴女の為に命を張れる、預けれる、貴女を大切に思ってくれる仲間を、探し当てるの――其れはきっと、貴女の背中を押して、支えとなり強くしてくれる。どんなに辛くても苦しくても、決して一人じゃなくなる」
1足す1が2になる答えは数学の定理だ。
だが、世の中単純な物事では成り立たない…数字が違うこともある。
1足す1は、2ではない。仲間の数だけ強くなれるのだ。
「仲間…」
「なんて、月夜ちゃんの場合は…友達かな？」
彼女はニパーッとした爛漫な笑顔でいつまでも私の頭を撫でてくれる。
「どうしたら、私もお姉さんみたいになれるの？」
「えっ!?あ～…それは……言えない、私が忍だって事はバレちゃダメなんだ……カグラ…は？ううん、其れもダメだよね？どーすれば良いんだろう私嘘つくの凄く苦手なのに……忍の子供なら言えなくもないけど…悩むなぁ…俊典くんが居てくれたら助かるんだけどなぁ……」
私の純粋な疑問と眼差しに、急に冷や汗を流しテンパる動作をしだした彼女は、ぎこちない言葉で何やら独り言を呟いている。
私は小首を傾げながら、お姉さんの瞳を真っ直ぐ見続ける。
「…もし、運が良ければ、きっと私みたいになれるかな？でも、それは危険な諸刃の剣の道のりでもあるし、時に挫折し呆気なく散ってしまう命でもあるし…」
「？」
「ま、まあ兎に角！月夜ちゃんは本当に自分の進みたい道を見つけたら、その道へ進むと良いんじゃないかな!?ホラ、時が経つにつれて人の心は変わったりもするから、今すぐに決めつけなくても良いんじゃ…ない？」

何とも拭いきれない言葉だろうか…
それとも、人には言えない事情があるのだろうか？
私はお姉さんが去って行ってからも決して曲げず、自分が不幸せでないことを実感できた。
それから月に一回は必ず彼女と逢うことができた。
時にもやしの話でざっと1時間費やした事もあったし、遊戯も付き合ってくれた、宿題で解らないことはサッと解けた。
本当に、お母さんのようでお姉ちゃんのような存在だった。

けど、年月が経ち驚愕な事実が明かされた。
天咲光芭は、不幸な事故で死んでしまったのだ。
児童でここまで育ててくれた子供達は勿論、私も何度も泣き叫んだりもした。
そもそも、あんなに逞しくて立派だったお姉さんが、不幸な事故に遭うなんて話も受け入れられなかった。
きっと、誰かに殺されたんじゃないかと言う予想も頭に過ったりもした。
それから暫くして児童施設は、資金も無くなり底がつき、鳳凰財閥によって解体し撤去された。
元々、不法地帯に児童施設などは以ての外と言われ、多くの子供達が反対するも聞く耳持たず、お姉さんが作ってくれた施設は廃墟されたのだ。私はそんなお金持ちの財閥を恨んだ。
あの人が残してくれた私たちの思い出の施設は、金持ちに呆気なく壊され、あろうことか鳳凰財閥は「恵まれない海外の子供達に資金を…」などと、国内の私たちを無視して救わなかった。
高級ホテルで食事を嗜み愉快そうに、高らかに宣言する大人の隣に、私と歳が似てる子も見かけた。
其れが、鳳凰財閥の娘だと理解するのに時間はかからなかった。

「私は……」

マスコミが喝采する真中、目の前がクラクラする現実を奥歯で噛み締め、拳を力強く握り締める。
「天咲さん…貴女は言いましたね……人は巡り巡って、自分のためになるって、私は…」
こんな貧民街で汚れた私に愛情を注いでくれた貴女の力になりたい。だからせめて、貴女の好意や思い出を踏みにじったお金持ちを葬り去ることは…

――私は、貴女の為に役立ちたい。

この命、せめて…貴女の為に使えるのなら…本望だ。
こうして私は、アテもなくどうするか悩んでた頃…丁度、大人に声をかけられた。
「良い眼だ…おい、お前」
憎悪と憤怒に瞳を燃やしてた私に声をかけてくれたのは、４０過ぎたおじさんに、漆黒の色に塗りつぶされてるトカゲの二人組みが私に寄り添って来た。
「おいおい良いのかよ、こんな訳の解らんヤツを連れてってよぉ～…？」
「気にするな〝塗影〟――蛇女は善悪問わず寛容だ。例え一般人だろうと忍として教養すれば価値は見出せるだろう」
「チッ、ホントは金に困らない為の勧誘なんだろう〝道元〟よぉ～。俺っチは蛇女研究所の施設を建てる為に土地の様子を見に来ただけだってぇのによぉ～…」
見知らぬ二人組みは何やら話し合ってる様子で、私からは何の内容なのか当時は理解できなかった。
詳しいことは本拠地の蛇女に連れて行かれ、詳細を聞かされた。
私は何も抵抗せず、首を縦に頷き蛇女に入学することを承諾した。
蛇女の奨学金は、あの人が私にそうしてくれたように、施設こそはないものの、市役所のポストに寄付金３０万円を仕入れ、恵まれない子供たちに私が振る舞ったお手製のもやし料理をパックに詰めて配

給したりもした。
そしてお嬢様と出会って、蛇女と半蔵の戦いが繰り広げられ、敵連合の漆月が攻めに来て…
蛇女は崩壊、追っ手や私たちの後釜が刺客として送られ、伊奈佐と死闘を広げて…今思えば、この一年は本当に衝撃深いことばかりが多発している。

私は、生涯忘れられないだろう。
天咲さん、私…詠は――仲間と供に今を生きていますよ。
私の側には、かけがえのない仲間が、私の背中を守り、押して、支えてくれます。
皆んなの頼りになる我らがリーダー、焔ちゃん
感情が無いと自称する、とても優しい日影さん
時にドジをしたり、子供らしくて可愛い一面を持つ、妹のような未来さん
誰よりもしっかりとしていているお淑やかな春花さん
私を含め、焔紅蓮隊は個性的なメンバーが多くいますが、其れでも皆様と過ごす毎日はとても有意義で、辛い時も貧しさに飢える時も、ずっと一緒です。

私は、この世に産まれて不幸せとは思わない。
今は、凄く幸せなのですよ――私は、貴女に救われたから。

街の商店街。
紅蓮隊は全員とも今日のバイトは休みだったものの、金銭が余り財布に残ってない為、特に有意義な1日を過ごせるとは言い難いものだった。
しかし、今だけは少しだけ違う。
このほんの一時の瞬間だけは…
「詠！おばちゃんから貰ったくじ引き券を無駄にするなよ！」

「詠さんならいけるでー、がんばれー」
「詠お姉ちゃん！狙うは一等賞よ！」
「詠ちゃんならいけるわ、自分の運を信じるのよ！」
くじ引き。
なんて事はない。偶々屋台で肉まんを頼んだおばちゃんからくじ引き券を貰っただけのこと。
少し離れた場所にくじ引きがやってたので、運試しとして挑戦してみたのだ。
景品は残念賞がトイレットペーパー
一等賞が旅行券
二等賞が綺麗な壺
三等賞が電子レンジ
四等賞が紫色の熊のぬいぐるみ
五等賞が菓子類の袋詰
「神様仏様…もしいるのなら…仲間たちに一時の恵みを…私は恵まれなくても良いんです……せめて、仲間たちだけでも、裕福たる幸せを……」
己を顧みず、誰が幸せの為に、くじを引く。
強く握りしめたくじ引きのレバーを勢いよく回し、小さな球が転がり始める。
出た色は…

「おめでとうございまーす！金の一等賞が出ました!!」
くじ引きを開催してる運営者の声に、五人は大歓喜の声を張り上げ肩を組み合う。
全員が輪となるように、抱きしめあいながら喜び合った。
「でかしたぞ詠ぃ～！」
「ほな流石やな詠さん」
「やったぁ～！詠お姉ちゃん凄いよ一等賞なんて！」
「やっぱり、詠ちゃんの強運には敵わないわね♪」
一人一人の眩しい笑顔が、私の視界に映り、自然と涙が溜まる。

私もなぜだか幸せな幸福感に満たされ、思わず鼻水も出そうになる。
「見てみてー、旅行先は京都だって！私小学校の修学旅行以来行ってないもん！」
「油取り紙に、八つ橋に映画村…旅行としては正にうってつけね♪」
「そんなええんか京都、鹿に乗ったりするところなんか？」
「いや…鹿には乗れないぞ日影…もしや京都行ったことが無いのか？」
「詠さんも行ったことないで…ん？どないしたん？」
四人の飛び交う声に耳が入らない私は、ふとあることを思い出す。
京都は勿論私も行ったことがない。少しは行ってみたい…という気もなれたのだが、お金が無くて修学旅行なんてろくに行く機会は無かった。
けれど…

――誰かの為にすることは、巡り巡って自分のためになるんだから

あの人が私に言ってくれた言葉を、ふと思い出したのである。
私の努力や、仲間を想う力は、自分のためにもなる。
今だけでなく…今までの戦いも、そうだった。
「こんな所でも…私を励ましてくれるんですね…天咲さんは……」
側にいなくても、背中を押してくれる。
何故だか自然と胸が暖かくなる心地がして、喜ばしい。
「おーい、詠お姉ちゃんどうしたのー？」
「えっ、ああ…何でもありませんわ！さっ、皆様の邪魔にならないように行きましょう？」
「だな、抜忍狩も厳しくなったと聞いたし…私たちもズラかるぞ」
焔紅蓮隊は、今日も気高く前向きに、忍の道へと精進して行く。
私たちの忍の道に、終わりはない。
カグラになるまで、私たちは絶対に死ねない。
これが、私…詠のもう一つ隠された原点。

私は貧しくても、仲間と供に忍の道を舞い殉じます！

特別編「誰も知らない脇役は、今を以って主人公格となりました」

何時だって何処にだって物語には、活躍を担うヒーローが存在する。
強敵に立ち挑み、弱者を助ける、誰もが憧れるようなカッコいいヒーロー。
悪業を積む輩を懲らしめる正義の味方や、己を顧みない自己犠牲の精神を持つ人、中には己の評価など見返らず信念に従うダークヒーロー的な輩も存在する。
ヒーローにも定義が存在しており、人の数だけ多種多様なヒーローが存在する。
他を助ける者、悪に挑む姿、誰かを守れる背中、そう言った要素がヒーローとしての懸念や憧れが生まれる原因であり、また同じくして恨みを買う悪も増え続ける要因にもなり兼ねないだろう。
特に超人社会の今となってはヒーローという存在が職業として存在しており、何時しかヒーローという輝かしい存在は日常化するように珍しくもなく当たり前の世の中になってしまった。
現代でヒーローに憧れる人間は幼い子供も含めてごまんといる。特に超常が現実となり、個性を生まれ持った者なら誰でも影響を受け、ヒーローになりたいと願う人間に対して、逆にヒーローになりたくないと心から思う人間の方が異常であろう。
多数決が決まる世の中、超常になっても少数派が除外されるのは過去も今も変わらない辺り、人間性としては変化がないのだろう。
物語には主人公が存在し、凡ゆる困難に打ち勝ち、逆境を乗り越え

る者こそ、誰もが憧れる現在は、誰もが同じ主人公になれる世界となっている。
勿論、ヒーローという概念が職業という形に収まったとはいえど、道のりは険しく、一歩間違えれば犯罪者扱いとされる。
公安直属のヒーローが敵に堕ちたという話は珍しいものではあるし、そう易々と起きる事でもないからこそ、印象が強いのもある。
中にはヒーローに憧れた結果、敵に堕ちたということも聴く。そういう意味では、正義という存在が悪を生み出したと言われるのは、皮肉が効いてる。
主人公やらヒーローが存在するからこそ、ライバルやら敵やらが存在するのも必然であり、それは物語に於ける『役』ならでは欠かせない要素だろう。

だからこそ、そんな物語には脇役だって存在する。
名前も明かされない、誰にも注目を浴びず、ただ平々凡々な日常を送る脇役が。
其れは表の世界でも裏の世界でも、脇役というのは存在する。
裏の世界といえば忍もそうだ。
近年、神野区半壊後、平和の象徴オールマイトというトップヒーローが正体を明かし引退してから、益々世の中は困惑と犯罪率が上昇し、嘗て都市伝説扱いされてた影に住まう住民の『忍』は、公共に姿を現し、巨悪の根源である悪の象徴オール・フォー・ワンとも対立した。
一説によれば忍の存在は妖魔という公共には出せない未知な危険生命体を処分する為だの、政治や国家の命令によって隠密行動に出てたなど、現実で報道されるような不思議な報道やら公に出せない現象などは忍が暗躍していたというケースが存在するが、国民やヒーローも半信半疑なのは言うまでもなく。
またトップヒーローは別として、並みのヒーローでさえも知り得ないと言うのは、やはり上の人間が厳選をしているのだろう。
そんな忍達にだって名前も知らず、ただただ死して華の如く命を散

らす輩なども存在する。
名前すら明かされず、誰にも見向きもされずに、ただ使命に従って朽ち果て行く命は、何とも虚しいことだろう。
誰にも見向きもされず、物語にも登場すらしないモブのような空気と同じ、精々主要人物の立場を盛り上げるような脇役は必要なのだ。
此れは本来ならこの物語にも登場すらしない脇役の存在が、名前も現れない少女が、ある平々凡々な日常から一変――この物語の新たな主人公になるお話。

「グギャアアアアーーーッッ!!!」
昼下がり、都会の公共の場で場違いな獣の咆哮が轟く。
血に乾いた化け物の喉声は、獲物を求めて舌を舐めずり、混乱に陥り逃げ惑う人々に目を付ける。
「ダメだ！ヒーローでも倒せないなんて…!!」
「ねぇ、こっちに向かって来てるよ!?」
「誰か！他にヒーローはいないのか!?」
次は我だと知れば、傍観してた人々も一瞬にして事態の重さに気付き、自分の命が脅かされると知れば否やと、悲鳴をあげれば広がるように集団の人間は面白いように化け物から離れるように引いていく。
対する化け物からすれば、ご馳走の塊が蠢いてるだけなのだろう、嫌がり命乞いをする人間の悲鳴など雑音でしかなく、涎を垂らす9個の血眼を輝かす狼は、品定めをしながら人々へと近づいて行く。
「あっ！」
此処で逃げ遅れた男性の小さな子供は、押し寄せる一塊の集団による行動で転んでしまったのだろう。
幸いにも踏みつけられなかっただけマシではあるが、結果として人の集団から外れるようになり、化け物の狙いは一番近くにいた少年に眼をつける。
「グルルルル…」
「ひっ…！や、やだ…こないで…!!」
毛深い漆黒の毛皮に身を包まれ、背中から何本もの異形で骨のよう

な腕を生やし、長い舌を地面に垂らしてる化け物の名は妖魔。
そして妖魔とは想いの強さによって具現化され、生命体として現界に留まり生永らえている。
狼の神話や逸話、エピソードなど幾らでもあるだろうが、怨念やら殺意やらが漂うのを見た限り、忍の憎しみによって血塗られて生まれた妖魔だと言うのは、此処に妖魔について知識が深い紅蓮隊とやらの新人がいれば安易に想像が付けるだろう。
「グルルオォオアァァァァーーーッッ!!」
そして威嚇するように咆哮し、大きな口を開き獲物を喰い殺そうとしたその刹那――

ボボゥ！と化け物の顔は激しい炎に燃え上がる。
「グギャッ!?」
突然の発火、予備動作もなく何の予兆もなく、突然妖魔の顔が発火したことにより、幸いながらも少年の命は何とか助かった。
勿論、此処で死ぬと涙と嗚咽を漏らしてた少年も眼を疑った。
「えんで、ぅぁー?」
炎という現象に、ピンチな時に駆けつけてくれる存在であれば誰もがそう思うだろう。現に少年の抱いてるぬいぐるみは、現在Ｎｏ．１ヒーローのエンデヴァーである。
然し其の妄想は一瞬にして砕かれ、現実とは程違うことを知らされる。
目の前には少年を守るように、そして集団の人々を守るように一人悠々と妖魔の前に立ち塞がる。
年の頃なら十代前半。燃える炎の色をした赤い髪をなびかせ、その手になぜかマッチ棒を持った、少年ほど幼くはないが、小柄な少女がヒーローのように立ち尽くしていた。
「何時迄も転んでたら危ないぜ、逃げな坊や」
冴えた声色に、クールな男口調で此方を見つめる少女の顔は、こんな恐ろしい出来事だと言うのに、まるで窮地の危機から人々を救うヒーローだった。

「う、うん…！有難うお姉ちゃん!!」
涙を流しながら礼をする少年に、逃げてた老若男女の集団は釘付けになるように唖然とその光景を目に焼き尽くしていた。
助けに来たのがエンデヴァーではないにせよ、この場で誰もが助けを呼ぶ中、その場に殉じて現れる姿は、ヒーローと呼ばれても過言ではないだろう。
「グギャアアアア!!!ギィイイィ!!」
火傷を負いながらも自身に攻撃を浴びせ、獲物が逃げた事に対する怒りが、妖魔の思考を埋め尽くした。
…だが、妖魔の顔は火傷だけを負いその場で妖魔特有の治癒効果が発現しないことに、怒りながら多少違和感を感じてる。
「あ、危ない！」
尽かさず妖魔は全速力で少女を切り裂こうと腕を降ろすも、少女は何とか避けようと試みる。
然し動作が分かったとしても身体が対応して付いて来なければ意味もなく、体を掠めた少女の抉られた傷口から鮮血が迸るように噴き上がる……かと思いきや、少女の体は蒸発した。
「ガルッ…?!」
人々も、そして流石の妖魔も驚嘆の声を漏らす。
今確かに手応えはあった…にも関わらず、少女は遺体を残す事も血を流す事もなく、ドロンと煙と化して消えた。
忍の扱うような転移？いや違う…これは一体？
「それは俺の陽炎だ。どうだ？幻想を見れた気分は、最っっ高に最悪な気分だろ？」
いつのまにか声は背中から聞こえ、少女は妖魔の背中に攻撃する事なく、ポンポンとあやすように背中を叩く。
その一連の動作と、いつのまにか意識が範疇の外にいたことに、妖魔は反撃するよりも驚きと警戒に後退りする。
何より切り裂いたはずなのに、少女の体に傷も血もないのわを見た限り、幻覚系統の個性か忍術だろう。マジ警戒ってやつだろう。
「グルル…」

高圧的で攻撃的な獰猛さが印象的だった妖魔も、今では彼女をすっかりと強敵と認識し、命のやり合いにただならぬ緊迫感を漂わせていた。
逃げてた人々はいつしか傍観者となり、妖魔は今となってはＲＰＧ物語の敵となり、そして少女が主人公のように盛り上がっている。
「ふっふっふ、俺の能力『魔術師の火遊び（リアルフレイム・マジシャン）』はな、マッチが燃えてる間だけ好きな幻覚が見れるんだぜ？お前がヤったと想い込んでたのは、俺が作り出した幻だったって訳さ」
因みに補足するが、こんな名も得体も知れない少女、実は幻覚系統の能力だと全国各地の中でも一番の高密度な能力である。
月閃中等部の姉妹に当たる呪術を得意とする美少女や、士傑高校の生徒と比べて他の追随を許さない程である。
それほど高密度で、それこそ幻想を現実に映すこの少女は、妖魔からすれば完全なる脅威だろう。
「降参するなら今だぜ？俺は勇者のように優しいからな。何なら俺のパーティーメンバーに加えて、俺の僕になるなら許してやるぜ？」
その言葉にピキリと妖魔の逆鱗に触れる。
完全に舐められてる挙げ句、情けをかけられただけでなく、奴の言いなりになるなど奴隷になりたい訳ではない。
野生の妖魔とはいえ、コケにされてると知れば否や、警戒と共に敵対心を高めて、全力で襲いかかる。
「力の差も解らないか、哀れな化け物め…ならば、灰にしてやるぜ!!」
すると少女はマッチ棒を何本か取り出せば指に挟み、着火すると共に妖魔に投げつける。
「さぁ、激しく燃え上がれ――『神魔炎獄陣』!!」
すると妖魔の地面から、不気味なコードが記された魔法円陣の紋章が浮かび上がる。
瞬く間に、大炎柱が妖魔を埋め尽くし、地獄の業火すら生緩いと連想させるほどに高圧な炎を前に、妖魔は抵抗することも虚しく、なす術なく、抗えることさえ叶わず、ただただ悲鳴ばかりを叫ぶだけ。
「ほら、最高にキメられる一本だぜ？」

ピンと指を弾くように、更に着火したマッチを一本投げつければ、後は終焉だ。
仕上げと言わんばかりに、大炎柱に炎を投げつければ、火力に油を注ぐように、大爆発を起こす。
奇跡的にも、誰にも被害に遭わなかったことは幸運とも言えるべきだろう。
誰もが盛大な拍手を送り、傍観者による一斉な感謝の喝采、そして助けられた少年の「お姉ちゃんありがとう！」という言葉。
居心地の良い状況に、どこか嬉しい気持ちを隠すように冷静でクールに振る舞う少女。

――そこで、マッチの火が、消えた。
「あー……消えちまった……」
都会の一角。人通りの少ない路地の隅に、少女は燃え尽きたマッチ棒を投げ捨てた。
名残惜しそうに燃えかすを見つめながら、だんだんとその口元がニヤけていく。
(それにしても、今回の妄想は今までとは違って我ながらクオリティ高かったな……「神魔炎獄陣！」って、あーやべぇ、かっこよすぎだろ俺!!こんなのヒーローなんかよりよっぽどスゲェだろ!!)
我ながら上手く行った！と心の中でガッツポーズを決めながらも、ネーミングセンスが厨二病な辺り、ダーク系統やファンタジー要素に大いなる憧れと願望が強いと見受けられる。
(実はこの後、密かに溜め込んだソウルを女に話して奇跡やら魔術やらに振り込んで…)
そこまで行ったらもうフロムゲームの世界観なのだ少女よ。
今までの出来事は全て彼女が見てた妄想を願う幻覚であり、それをみて満足そうにしては愉悦に浸っていただけである。

この通り妖魔という化け物も、街への被害もなく、況してやエンデヴァーの人形を抱きかかえた少年が母と一緒に手を繋いで歩いてる平和的な現実が陽射しと共に照らされる。
(次はハーレム物が良いな……男性は俺にトキメキ、女性は俺にイチャラブ…あーやべ、いっそのこと現実になれば良いのに)
注意、一つ警告しておこう。
この人物は少女であり、男性ではありません。
そしてだらしなくニヤケ顔を晒しては、涎が垂れそうな勢いで盛大に幻想に浸かろうとしてる少女は、ある種脇役と言うよりも変人や変態の部類に入る方だろう。
こんなだらしそうな顔をしながらボーッと突っ立ってる少女など、誰も気にも止めなければ誰も見てくれやしない。
「けど、夢は夢…現実は現実ってな……」
街角から出れば繁盛してる人波に、赤髪の少女は自虐めいた薄ら笑いを浮かべながら、歩いていく。
ただ歩いてるだけなのに、まるで世界から隔離されたように、沢山の人が行き来してるのに、まるで一人で道を歩いてるみたいだ。
(そう、現実の俺は…いつだって非力なもんさ)
陽炎も使えない。
神魔炎獄陣も使えない。
妖魔も倒せない。
「イテッ……!」
「うわっ!?」
ボケーっと考え事をしていたからか、ガタイの良い男性とつい思わずぶつかってしまう。
前方を見て注意すれば気付けただろうし、向こうの男性も同じく気を付けていれば回避していれただろう。
「あっ、あの…す、すすすすみません…ごめんなさい!!そ、そのつい気付かずにぶつかってしまったというかですね、ハイ…その、決して意図的にやったとかそういうチンピラ紛いなことはしてなくてですね……」

「お、おう……何だコイツ…いきなり喋り捲るじゃねえか…」
ガタイの良いチンピラ男は普通ならここで「何しとんじゃあ!!」とか、骨折したフリして慰謝料請求して脅したりするのだろうが、会って早々にいきなり早口で謝ったり喋ったり、萎縮して怖がる様子を見せられれば、興が冷めたというか怒る気にもなれやしない。
というかその半分、ちゃんと前を向いていた男性は「というか、全然気付かなかったわ…」と愚痴をこぼしながら何処かへ消えてゆく。
注意を払っていたにも関わらず、突然目の前に幽霊が現れたかのようにぶつかった少女に、驚いていたという気持ちの大部分が大きかった。
対する赤髪の少女は…
「けっ!何だよぶつかっておいて気味悪がりやがってあのオッさん…!!絶対に童貞だろ、謝りもしねーで…肉団子の腐臭油塊野郎が…」
これをもし先程の男性が聞いていたのなら、血相を変えて血眼に変えて半殺しにかかりに行ってただろう。
命を救われたという奇跡的な思いがありながら、歩いていく。
それ見たことか。
少女の口調は普段なら俺口調が激しい男勝りではあるものの、いざ人を前にすると対人恐怖症なのか人見知りのシャイなのか、口調が別人のように変わり怯えた口調でしか話せなくなる。
人ともマトモに話せない。
ヒーローなんて勇気などない。
陰キャで陰口多い臆病者。
其れが自分だ。
先ほどの妄想も、自分がこうなりたいと願う妄想に過ぎず、本来の自分はあんな感じではない。
そしてどういう原理か、この少女はまるで空気のように存在が薄く、認識さえしてくれない。
あのチンピラだって、今横に通り過ぎたサラリーマンだって、今は横へと回避したが自転車だって、全くと言っていいほどに誰も見てくれない。

其れこそこの少女を現実とは違う孤独という世界に隔離するように、少女は孤立する。
だがそんなのは今に始まった事でもなく、寧ろ其れが日常と化したし、それに対する疑念など持ち合わせてない。
生まれてこのかた、誰も少女なんて見てくれないのだから。そして、それに対して哀れみや悲しもない。
あるのは自分が如何に楽できるか、現実逃避して夢に浸れるか、それすらが優先事項であり、自分の生き様となっている。
正に脇役と呼ぶに相応しいものである。
「さーってと、次は何処を漁ろうかなぁ……偶には山に入って満喫するのも悪かねーか」
そう言えば最近山に入ってないな、と思いながら気分転換にと目に入った景色にある山を目標にして足を運び出す。
どうして山を登るのか?そこに山があるからさ!と登山家はよく言ったものだ。
山は大好きだ。
自然に囲まれ、邪魔するもの誰もいず、穏やかに安心して暮らすことができる。
好きなだけ妄想をすれば良いし、静かな空間は正に孤独を愛する彼女にはうってつけだろう。
(唯、虫が鬱陶しいんだけどな。でもマッチで振っても下手すれば火災放火招かないし、煙を出しても近辺の人に不審がられるのも嫌だし…いや、捕まりはしねーけど)
警察が来たとしても存在が薄すぎる自分を見つけるなど、例えるなら透明人間を相手にしてるようなものだ。
だが流石に命を脅かすような悪業や、責任の取れない迷惑行為を働くつもりはないので、気晴らしに探索として行くことにした。
因みに普段の拠点は何とか集めたお金を払ってネカフェで寝泊まりしている。
彼処は天国だ…最早もう自分の根城だ。そして妄想で呟いてた厨二的なネーミング技は、借りた漫画などが影響を受けている。

なんとこの少女、ホームレスなのだ。
お金もない
家もない
食料もない
家族もいない
友人もいない
文字通りこの少女は本当に孤独でありながら一匹狼であり、自由奔放で、ある種として誰にも縛られない存在。
世の中にはある役割を持つ人物が存在する。
例えば物語には主人公やライバル、ヒロインに悪役など存在し、そしてこの世にはヒーローと敵、善忍に悪忍、抜忍、そして妖魔が存在する。しかし、この少女は忍でもなければヒーローでも敵でもない。
もう何者ですらないのだ。
然し人間というものはしぶとい上に信念やら想いやら、自分の想いはある程度現実になるようで、生きようと思えば本当に何でも出来た。
存在感が非常に薄いというのは些か、デメリットがあるように見えるもののこれのお陰で犯罪絡みの遭遇は０回であり、動物でさえも自分の事に気付かない者もいる。
なんと、コンビニのセンサーでさえもだ。
ここまで来たら霊体化できると言った方がまだ説得力もある。然し少女にそんな特殊能力は存在しない。
そうこうしてる内に、山を登ると深く生い茂った森林が、陽射しを守るように木々が天を覆いかぶさる。
此処なら丁度鬱陶しくて眩しい太陽に邪魔されなくて済むし、鳥の囀りが気持ちよく、人気のない場所は理想の居場所だった。
（あー…後はよ、食料とかあればなぁ……流石にマッチで幻想を見ても腹れる訳じゃねーし……というか、別に具現化できない事でもないけどな）
今更っとトンデモナイことを心の中で呟いたのは気のせいかもしれない。

涼しい場所に虫さえも存在しないこの場所は、きちんと火の不始末さえ出来れば問題ないと知り、暫くは此処に留まることに決めた。
そう思った途端に少女は周囲を見渡すとある物を目撃する。
「ん？何だこれ？」
寝床を確保しようと、森を探索して３０分が経った頃。
少女は広場のような何もないスペースの茂みに、ポツリと、一つの花束と墓が見えた。
「これ知ってるぞ、墓だよな？え、え？何、花束？嘘だろ？死人がいるのか、此処？」
安全だった場所が実は死人が出た事故物件的な場所だと知れば、背中に冷たいものが唆る気分に陥る。
（いやいやいや…!!けど花が添えられてるって事はやっぱり…こんな所で寝られるわけねーだろ!!）
例えるなら墓場を寝床にする馬鹿は居ないだろう。
それと同じ理屈であり、幾ら所有物ではない土地だからとは言え、勝手に入って自分の寝床にしようとは言えど、そんな場所で寝ようとは誰も思わないだろう。
（けど折角良い場所見つけたのに勿体ねーな…しゃーね、またふらりと旅をしながら拠点を何処かに置くか…）
そう思いながらも立ち去ろうとする少女の足が、ふと突然止まり出した。
「……」
少女は墓を凝視する。
よく見れば墓は一つだけで、花束が添えられてるだけ…こうして見ると此処で誰かが亡くなったのは目に見えるし安易に想像が付く。
少女は自分が馬鹿であることは自覚してるし、いざ虐げられても何も思わないくらいには。
然しふと少女は考えてしまう。
「こんな静かな場所で、一人でずっと眠ってんのかな」

こんな柄でもないのに、人とも碌に話せたこともないのに、他人に気遣いなんてしたことが無いのに、此処に来て初めて興味を惹かれるように、その墓の前に座り込む。
「俺は全然、墓とか知らねーけど…見た感じだと沢山石碑が置かれてるよな。それなのにこんな所で一つだけポツリと置かれて…まぁ供養してくれるだけマシな方かも知んないけどさ」
もし自分が死んだら墓さえ立ててくれず、誰に供養されずに寂しく死んでるんだろうなと考えると、確かにこの亡くなった者はまだマシなのだろうが、自分と比較してはいけない。
「……ってことは、家族が居たんだよな？てか居るんだよな？ここで亡くなった人がどんな人かは知らねーけど…流石にこう、深く考えちまうと無視していくのも後味悪いよなぁ…」
少女は犯罪絡みには遭ったことは無いが、敵による事件に巻き込まれた現場を見たことがある。
最後に見たのはヘドロ事件だった。
爆破を発する少年が悶えながら抗う様は流石に息を詰まらせた。自分は他人にこそそこまで頓着や執念めいたものが湧き出る訳ではないが、かと言って苦しんでる人間を前に何も思わない人間など、それこそ頭が狂ってるとしか言えないか、鮮明に覚えている。
その時、ヒーローの警告など無視して我武者羅に突っ込んだ少年の姿は今でも忘れない。
「ああいう奴こそ主人公として輝けるんだろうけどさ」
名も知らない主人公の想像に、嘗て助けを求める顔をしてたと泣きじゃくりながら人を救える人間こそが、リア充というか世の中を回していくんだろうなと勝手に想像しながらも、マッチを一本取り出す。
「コイツがどんな人かは分からないし、多分…愛されて生きてたんだろうな。俺にはそう言うのよく分かんねーけど…だけどなぁ」
此処で一人寂しく死んでしまって、誰にも見向きもされないと考えると、何処か自分と重なってしまうようで、無視することもできなかった。
「…あーもー！しゃらくせえ！俺はこんなウジウジと考え込むような

性格じゃねーだろーが!!
まぁやった試しはないけどさ…これも何かの縁だ。偶には俺の行いも、誰かの役に立つのかな」
独り言を呟きながら、少女はマッチを更に9本出して、合計１０本マッチの炎を燃やして、花束の方へと投げつける。
瞬間、ボボゥ!と炎が燃え盛り、少女は口にする。
「無念に散り、今を漂う思念よ――人と共に今こそ甦れ。それが俺の願いだ」
一歩間違えれば放火魔であり、罰当たりな行動だろう。
然し少女は無表情に似た冷静な顔色で呟き、炎が燃え盛る中をただただ見つめてるだけ。
「あれ?ひょっとして寿命足りねえのか?それなら、もう１０本入れれば足りるかもな」
そう言いながら少女は更に１０本のマッチを燃え盛る火に投げつける。
後先考えずに実行するバカとはこの事で、今この少女は蘇生を行なっている。
死者の復活――普通こんな事はあり得ない上に、それこそ陽花に並ぶに近いほどの実力者でなければ叶うことなどあり得ないだろう。
されど、現実は小説より奇なり――

周囲を見渡しても、暗闇が広がるばかり…
声を叫んでも誰もおらず、誰も答えてくれず、どこまで行っても誰もいない…。
そんな孤独に見舞われた寂しい闇の世界で、ずっと夢を見ていた。
生前の記憶なのだろう、どれも覚えてる夢だった。
其れは自分が終わりを告げる最後の晩餐を後にした出来事。

『お姉ちゃん！忍務頑張ってね!!』
『気をつけてね、姉さん…』
『カグラに実る前に摘まさせて貰ったわ、この雑草供が…陽花と言う阿呆に憧れた鬱陶しい蝿よ…』
『両姫は最後まで！諦めなかったぞ!!戦場で背を向けず、投げ出したりしなかった!!命尽きるまでもお前に一矢報いた！最後まで己の意思を…ぐっ…！貫いた両姫が強い!!
そして…意思も情念も何もない、貴様は…！両姫に負けたんだぁ!!!』
これが最後の出来事…あの日の悲惨な出来事を後に、また新たな夢が現れる。
其れは自分が死んでしまった後の、愛する可愛い妹達の夢…。
訃報を知らされた二人は式場でぐっと涙を堪えていた。死んだことを知らされてからわんわん泣いたあの二人が、泣かずに姉の跡を継ぐよう立派な忍になることを誓った妹達には、何処かホッと胸をなでおろした。
だけどそれはあくまで表面上、二人は式が終わっても再び泣き続け、家でもずっと一晩中泣き続けていたのだから。
声も枯れ、目は赤く腫れあがりながらも、声が出ないにも関わらず泣き続けた二人に、自分も思わず泣き崩れてしまってた。
そして二人は後々と雅緋という悪忍が両姫を殺したという誤情報を捕まされ、復讐する為に蛇女に転校をすることを決めたのだ。
それをあの世で見守ってた彼女は、思わず口を閉ざして口を抑える。
なんという事だろう、あの時…イザナギを退けた雅緋ちゃんを…しかも、姉の為に命を捨ててまでも復讐しようと決めてしまってる。
その時は、兎に角嘆き泣きじゃくるしかなかった。
大切な妹達が、自分の死の為に自ら危険を冒してまで間違った方向へ行こうとしている。
その現実がどれだけ辛い事だろうか、何度も「辞めて！」「それは違うよ！」と訴えても、死者の声なんて聞こえない。

忍として命を賭してまで闘おうとしても、間違った道に進ませるのは違う。
それでも二人の復讐は歯車の如く止まらなかった。
こうして二人は、誰にも止められる事なく、止まること知らず、月閃から蛇女子学園へと転校するのは時間の問題だけだった。

次に見た夢は、妹の二人…両備ちゃんと両奈ちゃんが、私が妖魔に殺されたことを知ったこと。
紅蓮隊と呼ばれる抜忍に、妹達の復讐が無くなったこと、伊佐奈に立ち向かう勇敢な妹達の姿。
焔紅蓮隊の皆さんのお陰で、雅緋ちゃん達のお陰で、妹達が健やかに、今も立派な忍になることを目指していること。
軌道修正した二人の姿に、姉は思わず心の底から安堵の息を漏らした。
それなら、見守りながらゆっくりと眠りに就こう…そうしたその時、今度は複数の夢を見ることになった。
「これは…？」
幾つかの夢…というより、見たことのないその光景は、後に起きる未来の出来事であり、其れは未来を指し示す未来予知。

其れは遠い未来に巻き起こる、世界の終焉。
最悪の神魔、憑黄泉神威を始めた、脅威たる神秘の災害。
外の世界から迫り来る、７つの神魔がこの世界を発見し、多くの命が犠牲になろうとしていた。
歩く厄災…ただ存在するだけで、歩くだけで、その場にいるだけで、私達の世界を破滅へと導く、非現実的な未来は、確かに存在しているのだから。

『理解した――この物語は誰かが創造するのではない。全ては作流的に必然と起こりうる創作であり、我々の意志など虚無に等しい存在な

のだと。お前達の物語は幕を閉じ、アカデミアはたった今終焉を迎えた。英雄と魔術師の積み上げた奇跡は滅び、我々も消滅の末路を辿り、残されるは星の骸だろう。

この世界のルールによって、お前達は生徒であり、教師であり、英雄であり、魔術師で有り、神楽であった――』

次に写されたのは、息を飲む奇妙で恐怖に心臓を掴まれた光景だった。

外の色は紫に覆われ、崩壊された外の光景、そして…雄英高校の教室には、忍学生の生徒達五人と、ヒーロー学生…教師、そして…正体不明の歪なナニカ。

考古学者の古いコートを羽織り、身体は全て漆色に支配され、首が存在しない。代わりに両手に掲げながら、子供達に訴えるように話してるのは、遺影の額縁に収まっている絵画。映るのは真っ赤な血のインクで染まった、鳥と骨の悪魔。閲覧するだけで不快感と精神的な嫌悪感を示す其れは、かの有名な芸術作家が記した作品の一種とも呼べるほどに、恐怖と審美が繕っていた。

『お前達の誰もが幸せに夢見るアカデミア、そういう物語だった。その咲き乱れる奇跡の閃きたる痕跡も、全て無に介される。評価、感情、理想、構成、作品、ジャンル、意思、全ては破壊され、虚無に還らん。忘れるが良い、然してこれこそが始まりなのだ。終末への物語、未来に待ち構えるのは崩壊と理不尽な不条理と絶望、果てしない色褪せた物語。どう足掻いても、お前達の存在価値は地に落ち、無に等しく、終えた物語の未来は永遠の虚無。続くことも、始まることも、終わりもない、全てが朽ちた――』

『其れは違うよ!!』

ただ、その場で叫んだのは…半蔵学院の忍学生の筆頭者だった。

『どんなに苦しくて、残酷で、言葉に出てこない物語になったとしても

…！誰かが作った破壊を辿る物語だったとしても…無くならない！皆んなが築き上げてきた絆も、想い出も、全部無意味になんてならない…!!例え、そうなったとしても、私達がどんな評価だなんて、関係ない――私達は私達だもん…。『アタナシウス』――傍観者である貴方だからこそ、本当は分かってるんじゃ、ないのかな？』

『雲雀達が居なかったら、救われない未来もあったかもしれない…でも、無意味じゃない。忘れることもない!!雲雀は皆んなが大好きで、この気持ちだけは絶対に消えることなんてないんだもん!!雲雀達が今まで過ごしてきた苦楽は、そんな布告された世界にも、未来にも、そして…自分にも屈しない!!』

『俺たちが生きてる世界が、誰かが作った破局だと言うのなら…そんなの願い下げだな。足掻いても良いと言うのなら、とことん暴れてやる。オレは…オレ達は諦めが悪いからなっ』

『そう、だから…私達の物語は、私達で切り開くんだ――仮にその選択肢しか無かったとしても、私達の物語が終わりに近付いて来たとしても、新しい物語を私達で創り上げて、破局を乗り越える未来を創る為に、闘えば良いんだよ。其れがきっと私達の願いであり、想いであって、残酷な未来を作り変えるんだ――』

それは、言葉が喉に詰まる程に魂に響き渡り、世界の滅亡が近付いても尚、立ち向かうその勇姿は、正に…いや、正しく物語の主人公だろう。雄英の生徒達も口を揃えて、其々が意見を出している。だけどもう色彩と空気を伝う音が段々と掻き消えていく。

すると、アタナシウスと呼ばれる不気味で、正体不明のナニカは、悪魔のようで真っ赤なインクに染まった恐怖の概念が、健やかな笑顔を見せて、何かを語り、消えていった。

夢を見終わった後、彼女の身体は途端に燃え上がる。

足先から少しずつ、体に登り、やがて全身に回る。

困惑しながらも、不思議と熱さは感じられなかった。

そんな時だった――彼女の足元に、摩訶不思議な魔法陣による紋章が浮かび上がったのは。
そして、目の前に炎と共に現れるのは、妖魔を超えた気配…これは…
『儚くも尊き少女よ、たった今…我の器が貴公の復活を欲として叶えた――有無は聞かん。強欲の神魔の名の下に、黄泉から現世へと引きずろう…二度目の人生、しかと噛み締めよ』
烏をモチーフにしたペストマスクの顔をした魔術師のような妖魔は、手を伸ばし、彼女を眩い光へと連れて行く。
燃え盛る炎に灰になりながら、あの世から常世へと連れ去られる。

草原と燃え盛る炎と墓に、次第に女性の体が現れる。
「お、おぉ…?!」
見たことのない光景に唖然としながらも、次第に炎が治りつつも、女性の体は原型を蘇らせて行く。
白いワンピースの服に、大きな帽子、露出された白肌に、頭の上には天使の輪っかが浮いている。
軈て目を瞑ってた彼女の目は、少しずつ開けていき、息を吐くと共に珍しそうにこちらを見つめている。
どうやら蘇生の議は成功したようだが…こんなとんでもない美少女を前に正直驚いている。
「此処は…」
彼女は辺りを見渡しながら声を零す。
確か忍務で抜忍狩りの黒佐波――『禍風空吾』と闘った場所だ。そして雅緋ちゃんと忌夢ちゃんと出逢って…そして、イザナギに殺された場所…。
そして目の前には、自分の命を蘇らせ、一人暗闇の黄泉の世界から、常世の世界へと灯火で導いてくれた一人の少女が珍しそうにこちらを見ている。

「…蘇らせてくれたのは、貴女？」
「…へっ!?え、ええっ!?あ、ははは い…！そ、そうです私ですよ…？ていうか、幽霊か？俺のこと見えるのか…？」
慎重に尋ねる彼女の問いに、何故かテンパる少女。幽霊でもないのに何故ここまで、此方に気付いてることに驚いてるのか、此方が不思議だ。
「貴女…名前は？」
「あ、え…えっと……あ、杏奈…です、はい…」
「そう、杏奈ちゃんね…こんな事、なんて感謝の言葉を伝えれば良いのかしら…」
彼女は自分の手を握ったり開いたり、生への実感を感じると、にこやかな満面な笑顔でこう言った。
「お姉ちゃん…生き返っちゃいました…♪」

どうやら、両姫は二度目の人生を歩むようだ。
そしてこの時点で、何者でもなかった脇役の、何の変哲も無い物語にさえも登場しなかった少女は主人公となったこと――そして両姫もまた、新たな主人公として杏奈と共に生きていく事になるのは、今になって始まった物語である。

特別編「傍観者だったお姉ちゃんの二度目の人生に、新しい妹が出来ちゃいました♪」

「本当に、本当に生き返るだなんて、夢にも思ってなかったわ…！」
今まで傍観者だった両姫はあの世からこの世へと舞い戻り、姿形も生前の頃と変わらず、こうして二度目の人生を手にした彼女は、驚きよりも歓喜の方が勝っていた。
対する杏奈と呼んでた自称存在感の薄い陰キャは、やはり死人を復活できたんだなと考えは間違いではなかったが、正直墓に眠ってた死人が超絶美人でしかも麗しい上にスタイルも抜群で文句なしこの上ない美少女に、困惑が混じっていた。
（うっそだろこんなに美人だったのか!?いや、悪い気はしねーけども…!!）
気まぐれの縁とは言え、今まで彼女が旅をしてきた中でもこんなにも超絶美人な上に胸も大きくスタイルも良い女性は人生今まで一度たりとも見たことがない。
というか正直な話、ドストライクな好みだ。
「有難う…!!」
などと相手の容姿に見惚れてたのも束の間、両姫は彼女に飛びつき思いっきり強く抱きしめる。
「ふぐぉっ!?な、なななっ!!」
人生生まれて初めて、妄想ではなく現実として超美少女に抱きつかれた彼女は、驚きつつも内心心臓がバクバクと鼓動が早まっている。
体に豊満で重量感溢れる胸やら、女性特有の良い香りやらが彼女を包み込むようで、興奮の方が勝りそうな気もしなくはない。
「貴女が誰だか知らないけれど…私に二度の人生を送ってくれるんで

すね…ああ、貴女のお陰で、また両備ちゃんや両奈ちゃんに会う事が出来るわ…」
　対する両姫は彼女の心境など何のその、背中を撫でながら今この瞬間と、彼女が自分を生き返らせてくれた事にただひたすら感謝しかなかった。
　然も、無数ある忍の遺体が存在する中、自分だけが復活しても良いものなのかという若干の想いもあるものの、彼女がくれた二度目の人生に、兎に角嬉しくて仕方がなかった。
「貴女、杏奈ちゃんって言うのね。両姫を生き返らせてくれて、本当に有難う♪」
「あ、へっと…い、いえいえ……その、正直…何処その誰かは存じませんが…あ、はい……こ、こんなクソ雑魚ナメクジがこ、こんな美しい女性の役に立てて光栄というかですね……自分も半信半疑だったんですけども……」
「そんなに謙遜しなくても良いですよ♪」
　杏奈はやはりコミュ障とやらで上手く話せず、テンパりながらも言葉を紡ぐのがやっとで、根暗で被虐混じりな言葉を返す彼女に、両姫は一度の人生で杏奈のような人間と会話したことがないので、珍しい事も含み、愉快そうに笑みを零す。
　因みに常に孤独だった少女、杏奈がなぜ自分の名前を知っていたのかと言うのも其れ程大きく語られる物ではないが、物心付いた時から既に自分の名前を知っていたそうだ。
「でも…どうして両姫の事を知らないのに、私を蘇らせようだなんてしたのかしら…？」
「ふぇっ!?あーえっとですね、はい……それにはマグリナ海溝よりも深そうで実は浅瀬のようにそんなに大それた理由でもないような、当たらずとも遠からずに近い理由がございましてですね…」
　この陰キャは一体何を頓珍漢なことを言ってるのだろうか。
　そんなコミュニケーションが絶望的に、それこそお面を取られた叢や、女性と会話する緑谷少年に並ぶテンパり具合で杏奈は事の経緯を説明した。

「んーっとですね、つまり自分の寝床を確保しようと旅して、偶々山で探索していたら私の墓を見つけて、物思いに耽りながら、慈悲を込めてこの世界に呼び込んだと…」
「あ、は、ははははい…お、お気に召さなければすみません…つい……そ、その…後押しで言うのも悪いですけど…こんなお美しい上に若い貴女様がですね、人生を台無しにされたことも、正直私としては許され難い事実というか……そ、その……決してなんたら戦争の英霊を召喚したいとか、そういうのじゃないんですよ…」
　若干漫画の世界の話が出てきてるものの、何とか話の詳細を伝えた杏奈は、相手が優秀で性格的にも優しいお陰で、通常の相手なら会話することでさえ難航するものの、両姫だからなのか、話が上手くスムーズに進んでいる。
「そもそも、復活の儀式や死者の蘇生だなんて…巫神楽三姉妹や小百合様の力が無ければ出来ないのを…一体どうやって…？」
「す、すみません!!こんなクソ雑魚ナメクジがやったって言っても信じてもらえないですよねすみませんすみません…!!」
「ううん！疑ってるわけじゃないの！ただ…普通に考えて死んだ人間を生き返らせるのって、相当な術とか、優れた能力を持つ者じゃないと出来ないのよ…だから、杏奈ちゃん一人でそれを成し遂げたと言うことは、相当な手練れな術者か才能のある者か……だから疑問に思ったのよ」
「えっと…それはですね…えっと、ですね…わ、私のマッチ棒に…原因が御座いまして…」
　すると彼女はマッチ棒を一つ取り出し、炎を付ける。
　焔や轟のように赤でもなく、蒼志や茶毘のように蒼くもなく、雅緋のように黒くもない、紅桜色をしたピンクに近い色をした炎が、悠々と炎を揺らがしている。
「こ、このマッチ棒で…貴女様を復活しました…はい……」
「え、え…？そ、それだけで??」
　流石にあの優秀な両姫も困惑せざるを得ない形となる。
　たかがマッチ棒だけで人を蘇生させるなど、それともそれ自体に効

力があるのか、将又彼女の能力なのか…死者の蘇生という能力は相当希少価値があり、デメリットなしではあり得ないものとなっている。
「に、２０本使いました…!!」
「数が…関係あるのかしら？」
「えっと…多分年齢的な問題か、実力的なものか…普通なら一本だけである程度のことはか、か、可能なんですけど…いや、物事を叶えるのに一度に２０本も使ったのは人生で初めてですけどね…へ、へへ」
そう言いながら、彼女は付けたマッチ棒を持って周囲を見渡す。
「し、死者の蘇生だけじゃなくて…こ、こういうことでも使えるんです…えっと…それ！」
すると何処ともなく草原にマッチ棒を投げつけ、彼女は目を瞑って何かを願う。
確かここはイザナギや憑黄泉と死闘を繰り広げた場所…であれば、妖魔との血痕が残り、血の溜まり場ともなっている。
「取り敢えず、俺の僕よ出て来い!!」
すると投げつけたマッチは激しく燃え上がり、その場になかった筈の血が、蒸発するように燃え上がる。
両姫は目を疑った。
彼女は月閃の中でも優等生であり雪不帰と肩を並べ、更には陽花の弟子入りさえもしてた彼女は、初めて目を疑う光景を目にする。
炎がやがて縮まるように消えゆくと同時に、炎の中から見たことのない形をした化け物が二匹、現れる。
一つは小さな体をした鳥のような妖魔。然しその妖魔という名とは程遠く、まん丸な白い目に、ちっこくて可愛らしいアヒルのような小柄な妖魔が、ぴょんぴょんと跳ねながら此方へと近づいてくる。
対してもう一匹は驚きのあまり声が詰まった。
白く二足歩行な上に、既視感のあるシルエット…これは、憑黄泉だ。
然しながらなんと、禍々しい気配は何処にもなく、綺麗で純白な体色に、甲殻と瞳のない竜は、不思議そうに辺りを見渡す。
「あれ、一匹だけだと思ったけど…なんかヤベーのが出てきた」
「杏奈ちゃん!?妖魔を召喚することもできるの!?」

「妖魔？なんだそれ？」
何とこの馬鹿、妖魔という存在すら知らなかったようだ。
妖魔を生み出すというのは、忍商会などが主に活動してる事、そして忍同士の血によって生まれることはあるが、能力で生命を作り出すというのは、それはもう流石に神の領域に踏み込んでいる。
「いや…何というかですね……その、偶に変な化け物は見たことありますよ？けど…襲って来なかった辺り……というか召喚というか、性格的には誰かの強い思念を材料にして生まれ…うん、生まれたんですよね……だからその…はい……」
強き思念は死して原型を保てなくとも、周囲を漂い続けることがある。例えば両姫のように未練があれば死者を復活できるし、先ほどのように妖魔との血や争いによってその思念を炎で具現化する。そしてマッチは薪としての役割を、彼女の血の炎で創造を働かせる。
それが杏奈――強欲の罪を課せられた能力だ。
「んでコイツは前に化け物と遭遇した際に身を呈して守ってくれたからなー、折角の機会だしと思ったんだけど…っていつのまにかタメ語に!?すいません！け、けどこれで信じてもらえたでしょうか…？」
信じるも何も目の辺りをすれば納得せざるを得ない。
此処では憑黄泉とイザナギとの戦いで妖魔の血痕が残っていた…その血を材料にして妖魔を創造したのだろう。
確かにこの二匹から害意も敵意もない…なんだろう、まるで陽花さんと一緒にいた華楽のような人間の味方となる妖魔と同じだ。
「てかお手伝いを増やしたのにいつのまにか二匹…これが一石二鳥ってやつか」
見ると不思議な光景だ。
小柄なアヒルは彼女の足元にトタトタと近寄り、足元に抱きついている。対する憑黄泉に似た白い竜は、彼女の側に近寄り、順従な感じで低い喉声を鳴らしながら、側に近寄り体に頬を擦り付けている。
どうやら、彼女の能力…相当強力なようだ。こんな能力、両姫も陽花も見たことがない。
「グル…」

「あら？」
　すると白い竜は両姫に気付いたのか、此方へ側に寄り添って来る。するとそして…彼女の手を掴み、頬を摺り寄せる。
「あらあら…私にまで懐いちゃったの…？」
　本当に不思議なことだ。
　憑黄泉とは存在そのものが禁忌であり、彼女自身も何度も憑黄泉と死闘を繰り広げたことがある。然し色が白に変わってるだけで、この憑黄泉に似た妖魔は、両姫には好意的な意思を強く感じる。
　恐らく味方…この子は、悪い妖魔ではない。
「両姫はスタイルも良いし優しいしおっぱいもデケーからな！エロ可愛で悩殺されちゃったんだろ～？」
「ふふ、杏奈ちゃん聞こえてますよ？」
「はひっ!?じ、地獄耳かよ…」
　彼女に聞こえない声量で独り言を呟いたのだろうか、両姫には筒抜けなようで、彼女は思わず手を口に当てる。
「す、すみませんごめんなさい…!!そ、その率直な感想とは言えど…」
「怒ってないから良いですよ？それに…杏奈ちゃんって物凄く凄い能力を持ってるのね～。個性かしら？それとも忍術？」
「お、怒らないんですか？いや、お、俺…いや、わ…私の能力は上手く分からなくて…
　取り敢えず、ま、マッチで燃やして自分の想像してたのを作り出す、または召喚する能力でして…」
（杏奈ちゃん、それ下手したら世界中の誰よりも相当凄い能力じゃ…）
　両姫の知る中では、陽花を入れても相当な実力者であることが想像できるし、今まで出会った中でもそれほど高度な能力者など見たことがない。
「でも…マッチ棒が必要なんですよね？それだけで死者を復活させたり生命を創造するにしては余りにも…」
　強すぎる。
　例えるなら、ゲーム等で平等を期すための能力値やデメリットを全

部無視したチート的な仕様。
当然そんな物などこの世には存在しない…彼女なりにデメリットがあれば、実はこの蘇生自体も制限時間等が課せられてる場合もある。
「……」
真剣な表情で彼女の考察をする両姫を前に、杏奈は
(…何だろ、この両姫ってやつ…俺みたいなこんな陰キャを前にしても、全然不気味がらないし…寧ろ笑顔で優しく接してくれるし、怒らないし…俺のこと信じてくれるし…こんなに話したことも初めてだし…ひょっとして、滅茶苦茶良い奴なんじゃ…?)
生まれて初めて人に心を開き始めてきたのである。
今まで他人不信な上に、メンタルも弱く現実逃避が日常だった彼女は、両姫という心安らぐ女性に、少しずつ心を許してきている。
「ねぇ杏奈ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」
「な、何だよ…?」
心を許した杏奈は、普段の口調に戻りつつ両姫の質問に反応をする。
「そのマッチ…使い続けるとどうなるの?もし、デメリットや不利益な事がないとなれば…それこそ…」
本当に神の所業だ。
しかもそれこそ可能であれば、陽花さんや今まで無念に朽ち果てた忍達も復活する事が出来るかもしれない。
然し両姫が考えたデメリットは、杏奈の答えによって背筋を凍らすことになる。
「ん?使い続けると死ぬぞ俺」
其れは余りにも唐突で、何の緊張感もない死の宣告。
マッチに幻想、死期の訪れ…正にマッチ売りの少女と名付けられるだろう…
自分が死ぬと分かっているのかとさえ逆に疑わしくなる程に、杏奈の言葉は本当に唐突だった。
「えっ!?し、死ぬ…?!其れは本当なの杏奈ちゃん!?」

「ああ、だから普段は1日に一本は必ず幻想を見ることにしてるんだよ。大きすぎる願いや莫大な理想を実現するには、それなりに命の対価が必要なわけで、出来ないこともないけど俺の命が幾つあっても叶えるかどうかも分かんない望みだってあるから、使いようによっちゃ難しいけどなー」

本当にそれこそ、自分の死に無関心で、死ぬと分かっていながらそんな欲を満たすために幻想など見るなど幾ら何でも馬鹿げてる。

其れはつまり、彼女は日が経つにつれ、欲望の火を消費するに連れ生命を削ってるわけである。

そして…見ず知らずの両姫のために、２０本ものマッチという名の杏奈の生命を犠牲にしたのだ。

一本でさえも大事で重要なことなのに、それを彼女のために、自分の命を生贄に捧げたのだ。

「杏奈ちゃん!!!」

「は、はひっ?!!!」

両姫の珍しくとも怒気の孕んだ声色に、流石の杏奈も身体が浮くほど驚きのリアクションを取る。

「もう二度と必要不可欠な時以外はマッチを使っちゃダメ!!!助けられた私がいうのも何だけど…いいえ、だからこそ！杏奈ちゃんが私たちのせいで死ぬだなんて…そんなのダメよ!!」

そんなことを聞いたら断固として彼女に欲望や妄想を具現化させる能力は使わせたくない。

然も本人は勿論、両姫も、彼女が今の経緯に至るまでどれ程のマッチを使ったか把握出来ないし、其れに彼女がいつマッチを消費して死ぬかも分からない…死は遠くとも近い状態にあるであろう杏奈を前に「陽花さんや今まで無念に倒された忍を復活させて」だの云々は言ってられない。

両姫は善忍であり、人優しい人柄だ。そんな非人道的な行為などするはずも無く。

「な、ななんで…そんなに怒ってるんだよ……そ、そんなこと、言わなくたって良いだろ…!!お、俺だってこう見えて結構…我慢してるん

だぜ…？何も持ってないから…一応最低限なことを望んでるだけだし……両姫のことだって！見ず知らずで気まぐれの縁でこうしたけど……それだって本当に可哀想だなって思っちゃったから…つい……な、何もない俺だって…俺なりに頑張ってるんだよ……」

「何も、ない？」

よく見れば彼女は確かに服こそ個性的で、ブラックコートに少し厨二的なデザインが仕上がってるが…その割にはボロボロで埃やら土で汚れたりなど、洗ってない辺り本当に手入れなどしてないのだろう。

彼女には何もないのだ。

雨水凌ぐ家も無い

裕福に暮らす金も無い

碌に食事さえも有り付けない

そんなことでマッチを消費し続ければあっという間に安楽死する。

最初は抵抗心もあった。

使い続ければ死ぬのなら、なるべく妄想さえもしずに可能な限りと…然し偶に思うのが「生きてて何が良いのだろう」ということ。

オマケに存在感が余りにも薄すぎて、それこそ幽霊のように気づいてもらえない彼女は、孤独になりたくなくても孤独にならざるを得ない程なのだ。

プラス性格的に陰キャで他人に話しかけるのでさえ悩むとなれば、もう積んだも同然。

死ぬのは怖い…けれど、死ぬのならせめて自分がやりたい事に注ぎ込んで死ぬのが良いのでは無いかと思った。

自然死も他殺も事故死も怖い…だけど、苦しむ事なく幸せに死ねるのなら、それが一番な望みなのかもしれないと。

「杏奈ちゃん…そう、そんなに追い詰められてたのね…」

事の事情を理解把握した両姫は、杏奈を抱きしめたまま胸に顔を押し当てる。

「ふごっ!?りょ、両姫…?!」

「もう大丈夫よ杏奈ちゃん…もう一人じゃないから…貴女に助けられ

た両姫お姉ちゃんは、杏奈ちゃんを見捨てたりしない…!!
　これからは一緒に側で支えるから、辛い時や苦しい時は両姫がちゃんと、慰めてあげるから…悩みがあるなら相談して？二度の人生を送らせてくれたんだもの…貴女の力になりたいの…」
　慰めるように、背中をポンポンと優しく叩きながら豊満な胸で顔を包み、全てを抱擁する母性的な両姫を前に杏奈は
（す、すげぇ…!!胸がデカイし可愛いし綺麗だし良い香りするしナイスバディで超絶レアなお姉さん系の女性にこんなことしてもらえるなんて…!!こ、これはこれでアリだな……へ、ふへへ…）
　心の中で欲望丸出し発言な上に、両姫の涙堪える心配をよそに涎が垂れそうなほどのゲスい顔で胸の中の香りを嗅ぐ杏奈。クズである。
　もしこれを妹の両備が目撃してれば、今頃額に青筋浮かべてスナイパーライフルでヘッドショットを決めていただろう。
　そのまま「わ、分かったよ…」と返事をしながら胸の感触を堪能する辺り、葛城や峰谷に似たセクハラ魔を感じさせる。
　彼女の場合、しようとするよりされる側の、モテる系主人公のような感覚なので非がないのも憎き感が拭えない。
「そうだ、杏奈ちゃん！それなら両姫お姉ちゃんと一緒に暮らさない？」
「ふぇっ!?い、いいいんですか!?」
「ええ勿論♪もし杏奈ちゃんが迷惑でなければだけど…」
「いえいえそんな迷惑だなんて滅相な…!!ぎゃ、逆にこんな、赤の他人にそこまでして貰って良いんですかね…？」
「あら、さっきも言ったじゃない。お姉ちゃんは杏奈ちゃんの力になるって。其れにその事を言うなら私は杏奈ちゃんに蘇らせて貰っちゃったし…もう赤の他人じゃないわ。それに、緊張すると敬語でテンパっちゃうのね、可愛いわ♪」
　可愛い？生まれて初めて言われた褒め言葉に赤面する杏奈も、何やかんやと乙女なのだと実感が伝わるだろう。
「そ、それはまぁ…今まで拠点にしてたのがネカフェくらいだったし…お金集めるのに必死だったから…」

寧ろ盗みも働かずに道端に落ちてるお金をかき集め、それを消費してネカフェに通うなど悪い人でもないことを知れば、本当は根は良い方なのかもしれない。
ドスケベ心を除けば。
「じゃあ決まりね、お姉ちゃんの家に行きましょう♪」
「ちょ、ちょちょ…！わわ！」
そのまま腕を引っ張られ、付いていく杏奈に、後ろから二匹の優しい妖魔が跡を付いてくる。
「というかコイツらは?!!」
「勿論、家族として歓迎するわ♪人に害を仇さない妖魔なら…私達の味方よ♪」
一匹は戦闘にすらならないものの、家事のお手伝いさんだと思えば可愛いマスコット的だろうし、もう一匹の憑黄泉に似た白い妖魔は此方の為に戦ってくれるのなら心強い。
下手すれば杏奈の護衛としても戦えるし、周辺の警備隊としての役割を担えれば暫くは安全が確保できる。
「キュー！キュー！」
「グルル…ギャァ!!」
人語は上手く話せないようだが、二匹の声を聞いた限りだと喜んでるようだ。そのまま二匹はご主人の後ろに付いて来る。
こうして、両姫と杏奈の二人の共同生活が始まったのである。

「なぁ、両姫…？両姫……さん？」
「うん？何かしら？」
「そのさ……さっき言ったじゃんか？俺と両姫は…その、赤の他人じゃないって……」
「ええ、それはまぁ…杏奈ちゃんが成り行きの縁で今はこんな形になってるけれど…此処まで来て他人って訳にはならないでしょう？それともやっぱり迷惑だったかしら…？」

「そ、そうじゃないんだけどよ……その…」
何やらモジモジとハッキリしない様子に、首を傾げる両姫。何かと問おうとするも、彼女の口が早く開きだす。
「こういう…両姫と俺みたいなのって…なんて言う関係になるんだ？」
彼女の言葉に両姫は「あぁ…」と相槌を打つように掌を叩く。
つまり他人でなければ自分達はどういう関係なのか、どういう仲なのか…と言うのが分からないと言うことだろう。
確かに助けられ、杏奈に居場所がないから家に連れて一緒に暮らすとはいえ、事情を把握して早々にこういう展開になるというのは、杏奈で無くても動揺を隠せないだろう。
それに杏奈からしても他人でなければ自分と両姫の様な仲を何と呼べば良いのか、純粋な気持ちで分からないのだ。
何も持たなかったからこそ、知らないのだ。
「う～ん…そうですね、確かに杏奈ちゃんとは他人ではないけれど…友達、というのは少し違う気もするし…仲間に近い部分…う～ん……あ、そうだわ！良いこと思い付いちゃった♪」
何かを閃いた両姫は、ニッコリとした母性を感じる緩やかな笑顔で
「杏奈ちゃんは両姫お姉ちゃんの、新しい妹って事はどう？」

「はひっ??」
発言する両姫の言葉に、杏奈はぽかんと口を開いて暫く目をまん丸にしたまま立ち尽くす。
仲間に近いのであれば親友か、さては命の恩人か…その程度の予想をしていたのだが、斜め上を過ぎ去った。
「ちょ待てよ!?俺はお前とは血の繋がりもなければ今日初めて出逢ったんだぜ!?それなのにそんなポンポン姉妹とか設定作っちゃって良いのか?!」
「ううん、それは違うわ杏奈ちゃん。血の繋がりが有ろうとも無かろ

うと、お互いが何かしら通じるものがあれば、其れは家族とも言えるのよ」
血の繋がりこそ全てではない。
其れはこの世界の何処かでも、そう言った血や家族としての絡みに逢う者も多いだろう。
然しながら、どれだけ否定しようと血の繋がりは拒めないし、其れに姿や形が違えど何か通じ合えるものがあれば、それはもう家族とも呼んで良い者なのだと、両姫は自負している。
「うぐ、それはまぁ確かに…け、けどよ…俺が言えた口じゃないけどさ…妹達が居るんだろ？どう説明するんだよ…？」
だが杏奈が言うのも尤もだ。
両姫が納得しても、両備や両奈が納得するとは思わない。まぁ…両奈の場合は姉の両姫としては、特に気にしてないのだが、反抗期が強い両備からすれば大きな反感は間違いなく買うだろう。
それでも姉が何とかするし、そもそも命の恩人に対して少なくとも無礼な働きをする程、両備は子供ではない。……杏奈がゲスい顔さえしなければ、の話だが。
「それくらいお姉ちゃんなら大丈夫よ、だって…お姉ちゃんは世界一のお姉ちゃんだもの！」
「ごめん、ちょっと何言ってるかよく分からない」
さて、そうこう他愛ない話をしてる間に、いつの間にか両姫の家に到着した。
これ程の麗しい美人だ、一体どんな高級マンションやら住宅地に住んでるのだろうかと少しだけ胸を弾ませたものの、杏奈の眼前に広がる光景は、ごく普通の一軒家だった。
良くも悪くもなく、至って平々凡々…
「何だかこうして再び戻ってこれるなんて夢見たいだわ…♪ふふ、変わらないわね…この家も」
「…てかさ、俺が言うのも凄く烏滸がましいと思うんだけどさ…姉が死んだことになってるのに、いきなり妹達に逢うのって流石に不味くないか？」

死んだ姉が突然「お姉ちゃん生き返っちゃいました～♪」なんて説明しても、怪しまれるか気が動転するか、少なくとも信じてもらえる可能性は限りなくゼロに近い。
両奈なら半信半疑だろうが、そもそも死人が蘇ったなんて事実をいきなり突き付けても、困惑するだけだろう。
「あ、確かにそうよねぇ…お姉ちゃんがいきなり復活しちゃいました～…だなんて、妹達はビックリするわ」
「考えてなかったのかよ?!!」
両姫は優秀で才能溢れる貴重な人材ではあるものの、生まれ付き天然な為、こう言ったボケが含まれてる所がある。
純粋だからか、心が優しいからか、何方にしろ考えてなかった様子だ。
「サプライズ的な意味で登場したら喜ぶんじゃ…」
「いや喜びより驚きで最悪心臓発作起こしても俺は責任取らねーぞ…?」
そんな天然な両姫に突っ込みを入れる阿呆な杏奈は、ある意味両姫とは息がピッタリ合うお似合いコンビである。
「それに妹達が家にいるなら、やっぱ今何も考えずに家に上がるのは混乱を招くんじゃ…」
「多分両備ちゃんと両奈ちゃんは蛇女の学校で寮生活してるから、お盆でもなければ帰省することはないんじゃないかしら…?」
「お盆ってなんだ?」
「杏奈ちゃん……」
何も持たない杏奈は、同時に大きな世間知らずでもある。とは言うものの、一人で生きていくのでさえたかが知れてるのに、両姫と出逢うまで世間知らずでも何とか生き延びてる少女は割りかしら凄いのでは無いだろうか。
「し、知らねーんだよ!それにさ、妹達が居ないってなら、暫くは大丈夫そうだけど……ほ、本当に俺なんか家に上げても大丈夫…なんだよな…?知らない奴の家に上がるのってこう…抵抗感があるというか…」

他にも、食事はどうするのか
寝床のペースはあるのか
プライベートに触れてしまわないか
こういう時に慎重且つ丁寧な対応なのは流石であるべきだが、もうちょっと違う方向で慎重になって欲しいものだ。
「ああ、そうよね…知り合ったばかりの人の家に上がるのって緊張しちゃうわよね。大丈夫よ、お姉ちゃんと一緒にいれば何とかなるわ！」
「姉というワードはそこまで便利性が高いのか…？」
今この瞬間に杏奈の思考回路には『両姫＝お姉ちゃん＝万能！』という式図が出来上がったのである。

家の中は思ったより質素である。
木材特有の床下や階段、何処にでもある玄関の靴入れのタンスに、奥は扉やら和室やら、リビングなどが見られる。
何処にでも存在する平々凡々な家は、思ったよりも心が落ち着く。
「へぇ、良い香りするな」
家に入ってから開始早々にセクハラ発言をするこの頓珍漢な阿呆はもう少し弁えた方が身のためである。
そんな杏奈に両姫はクスッと微笑みながら「さぁ入って入って」と促していく。
どう言う訳か、二体の妖魔は人街に下りた時は杏奈と同じように気配を消して隠れながら付いてきたらしい。
特に小鳥のような可愛げのある妖魔は連れても問題はなさそうだが、人前に見せれば新種の生き物だの珍種だの宇宙からの鳥だの変な噂が立つので、隠れてたのは正解である。
「それにしても本当に懐かしいわ…本当に此処へ再び戻ってこれるなんて。両備ちゃんや両奈ちゃんも居ないって言うのは、少し寂しい気もするけれど…」
「何だよ、寂しいんじゃねーか。というか両備と両奈ってどんな奴な

んだ？随分と自慢してる上に親しんでるみたいだけど…」
杏奈は此処で想像を膨らます。
きっと二人とも姉に似て性格も良くお淑やか、名前的に双子であり、仲良く姉のことを親しむ可愛げのある誇らしい妹なのだと。
想像力が豊かな杏奈なら色んな妹キャラを想像できる。
例えばお嬢様口調で気高くとも美しさを重視してたりとか、元気いっぱいで幼馴染に出てきそうな姉っ子の活発女子だったりとか、他にも熱血系統のスポ根だったり、クールな冷静キャラ…恋愛系統の漫画を読んでたら誰もが想像するだろう理想の妹キャラだが
「両備ちゃんと両奈ちゃんはねー、姉妹揃ってドＳとドＭと言った方が早いかしら～？」
「はえ？」
だが現実は小説より奇なり。
杏奈のお花畑のような甘い想像も、両姫の口から出る真実に悉く打ち砕かれる事になる。
「まず両備ちゃんは…幼い頃はよく家事の手伝いをしたり私の為に絵を描いたり、勉強も優秀な子で文句はないんだけど…両奈ちゃんを虐めるのが好きだったり、罵声を浴びせたり鞭で両奈ちゃんを痛め付けたり…」
「最初めっちゃ良いのにいきなり変わりすぎて逆に何があったんだよその両備ってやつ…ヤベー奴になってるじゃねえか…」
至極真っ当な意見である。
「両奈ちゃんは天然でよく両備ちゃんに虐められたり、犬の真似が上手だったり、皆んなから虐められる事に喜んだり、兎に角元気で明るくて、優しくて良い子なのよ♪」
「なんかもう聞いてるだけで滅茶苦茶過ぎんだろ…一体何がどう言う経緯でこんな美人でマトモな天然長女から妹達がＲ１８に走るんだよ…」
「あ、後は小さい頃からよく天ぷらになりたいって言ってたわね～、懐かしいわ～」
「天ぷら？え、なに？転生したら何故か皆んなの天ぷらになってたっ

て事？え、天ぷらになりたいってナンデスカ？」
最早この姉妹の事柄など凡人などでは理解し難いものである。
取り敢えず杏奈の頭の中では姉妹は危険人物として解釈され、なるべく会いたくないという気持ちが一層強くなった。
然もそれをのほほんと物語る姉も大概である。
「そう言えば雅緋ちゃん達とは上手くやっていけてるかしら…？蛇女に雅緋あり、その影に忌夢ありなんて言われてるあの二人組…何処か両備ちゃんや両奈ちゃんに通じるものがあるのよね。誤解は解けたし大丈夫そうだけど…」
「もう良いよ！話聞いてるだけでも頭パンクしそうだよ！どんだけ登場人物出てきてんだよ!?え、なに？ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥか？ってくらいさり気なく登場人物増えてんじゃねーか！しかも全員なにかしら個性的そうだし！」
更に付け加えて色々な話を聞いた。
三姉妹で親戚に引き取られたこと、姉妹揃っての七五三、初めて学校に入学した時、親戚にバレないように密かに家に帰宅したこと、呪王という無差別殺人鬼との闘いに陽花と出会えた事、月閃で不雪帰と出逢えた事、沢山のエピソードを懐かしそうに語る両姫を前に早くも杏奈は「超絶リア充じゃねえか」と愚痴をこぼす始末だ。
「はぁー…やっぱり両姫は良い子ちゃんな上にマジで現実を疑うレベルの超絶リア充だなー。俺からすれば眩しすぎて目が焼けるくらいだ」
「蒸発するの間違いじゃなくて？」
「何でもいーわ、ようは俺とは真逆の人間なんだなって事。俺はどちらかと言うと一人が好きだったしな。まぁ…両姫のようなお人好し相手ならギリギリ暮らす事はできるし、本音を言い合える仲ってのは割と悪かねーけどさ」
陰キャには陰キャなりの生き方があるとでも言わんばかりに、杏奈は自分と両姫との差に目が眩んでしまう。
自分はどちらかというと他人に好かれる傾向はないし、お人好しというより楽な方向へ進んで面倒な事は全部投げ捨てる性格だ。

オマケに彼女とは違って話す内容でさえも頭を悩ませば、仮に誰かの輪に入りたくても誰にも気付いてもらえない透明人間領域の影の薄さと空気な存在、何から何まで両姫とは正反対なのだ。
もし両姫が天使であれば、杏奈は悪魔であり、
もし両姫が光であれば、杏奈は影である。
「ふふ、杏奈ちゃんは色んな事を考えてるんですね」
「俺の妄想領域舐めんなよ。今日なんて狼の化け物を神魔炎獄陣で焼き払って皆んなからヒーローとしての一躍を買った位なんだぜ?」
其れを堂々と言えるのであれば、もう人とのコミュニケーションは問題なのではないかとさえ疑わしく思えてしまう。
家を上がり、リビングに入れば何とか電気代に水道やガスは使われていたので、取り敢えずお茶を沸かしながら両姫は気分良く料理に取り掛かる。
杏奈はなにも無いと言っていたし、先程からお腹を空かせていたのを知っていたので、軽く炒飯でも作ろうと腕に賭けて作ろうとしていた。
「キュッ、キュッ」
「ん?」
可愛らしい鳥の鳴き声に、両姫は声がする方向へ振り向くと、小鳥の二足歩行をした妖魔が沢山の服を抱えながら此方を見つめていた。
「あら、杏奈ちゃんの妖魔ちゃんじゃない…どうしたの?」
「キュー!・キュッ、キュッ!」
言葉が喋れない辺り、何とも言えないが、この汚れた服は杏奈の衣類だ。どうやら洗濯を出すための服なのだろうが、この子の目の訴えでは恐らく洗濯をするのに何処に出せば良いのか分からず仕舞となり、家主である両姫なら知ってるのではないかという結論に至った結果、両姫に助けを求めてるようだ。
「ああ、洗濯なら彼処の籠に入れておいて下さいね。ふふ、それにしても立派なお手伝いさんで偉いですね♪」
まるで家事のお手伝いをしてくれる妹達を見ているかのよう気分だった。

「そう言えば…名前がないと凄く不便ですね……」
お手伝いさんというのも間違ってはないものの、どちらかと言えば名前で呼びたいのもあれば、折角こうして一緒に暮らす仲間なんだから、名前くらいはあっても良いと思う。
「そうね…キューちゃんなんてどう？」
鳴き声やその可愛らしいキュートさに思わずペットみたいな名前を付けてはいるが、悪くはないだろう。
キューちゃんは小首を傾げながら、名前を与えられたという実感が湧かず、そのまま洗濯物を籠に入れて主人の方へ行ってしまったようだ。
対する杏奈とはいうと…
「へぇ～…両姫の家でもゲームはやるんだな」
テレビの下にある物入れを調べてみると、ゲームキューブやらＰＳ２やらが入っていた。
今の時代と比べれば大分レトロではあるが、それでも名作やら沢山あるこのゲーム、悪くはない。
因みに姉は見てるか手伝う程度で、基本は両備と両奈が家で仲良くするのと息抜きのために購入した娯楽である。
「グルル…」
「お、そっちは何だ？へぇ～…バイオにＳＩＲＥＮ……こっちはホラゲーメインか、で？えっと…マリパーにピクミン…お、デジワー３じゃん。どれも中古のゲームショップで見たことあるから大方知ってるぜ。ＰＳ４とか５とかがないのが辛いけどな」
放浪の旅をしていた頃は、よく電化製品という場所を見つけて探索していたものだ。
最近はフロムゲーやら画質の良くダーク系統なゲームに魅了された杏奈は、ここいらでそれなりの妄想を働かせてる。何気に幻想を見る為の教科書的な役割としてよく通っていたものだ。
「キュー、キュー」
「お、何だ？もう終わったのか？」
ラフなワイシャツ姿で娯楽器具を物色してた杏奈と、僕の白妖魔

に、キューちゃんが帰ってきた。
「お、そうだ。折角だし二匹とも両姫の手伝いしてたらどうだ？というかその方が楽になると思うしよ、にひひ…俺ってば優しいな」
自分は楽をしコキを使う辺りゲスである。いや、両姫の胸に顔を埋めて完全に厭らしい顔をしてた辺り元々ゲスではあったが。
そして二匹とも杏奈の言葉に従うように、両姫の元へ行き手伝いをすることにした。

「も～…杏奈ちゃんダメですよ？気遣いは嬉しいけれど、二人をパシリに使ったりしたら」
「良いじゃねえかよ、その為の僕なんだし。というか、この炒飯滅茶苦茶うめえな！やっぱ料理もできるなんて、天才というか才能マンだな」
「料理は作り方さえ覚えれば作れますよ、それに手伝ってくれて助かったわ。有難うね、キューちゃんにマコくんも」
「ん？キューちゃんにマコくん？」
出来上がった炒飯を食卓で囲み二人仲良く食しながら、杏奈は知らない二匹の名前に眉をひそめる。
「私が名前を付けたんですよ、折角こうして一緒に暮らすんだもの。名前がないと不便でしょう？」
「そんなの一号二号って決めれば良いんじゃね？」
この女、妖魔をエヴァか何かと勘違いしてるのだろうか。扱いが雑で酷い有様だ。
「杏奈ちゃん、この子達もちゃんと生きてるのよ？然も杏奈ちゃんの為にちゃんと動いて働いて、尽くしてくれてるのよ？愛情は注いであげても良いんじゃないかしら？」
「そ、そりゃまぁ…」
因みにマコという名前は、昔近所の人が飼ってた三姉妹によく懐いて仲良くしてた犬の名前が由来だそうだ。

今マコとキューちゃんはテレビのニュースを不思議そうに見つめながら、仲良く鑑賞している。
「勿論、杏奈ちゃんもこれからは新しい妹として迎え入れるつもりよ♪」
「結局、決定事項になったんだな…」
そして妹になる事を拒まない彼女も満更ではなさそうだ。
杏奈は孤独を好み、影に浸りながら誰にも悟られず生涯を過ごそうとしていた。
だがそんな彼女を孤独という殻から手を差し伸べたのが両姫である。
二人はいつしか実家で暮らす事となり、まったりとした時間を過ごしながらお互いを知り合って、生きてゆく。
いつの日か、ゆっくりと心の整理が付いた時――両備ちゃんや両奈ちゃんに紹介しよう。